結界師への転生

片岡直太郎

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
結界師への転生

【Ｎコード】
Ｎ３６３１ＤＯ

【作者名】
片岡直太郎

【あらすじ】

◆ふと目が覚めると、異世界に転生していた久保たもつ（３４歳）。転生先は「結界ＬＶ１」のスキルを持った６歳の子供。しかも身分は「奴隷」。最悪で苛酷にしか見えない状況から脱出し、次から次に降りかかってくる厄介ごとに翻弄されながら、前世からの夢であった「平穏な暮らし」と「美女に囲まれたモテモテライフ」を叶えるため、彼は今日も全力で奮闘するのであった。

●一部バッドエンドがありますが、最終的にはハッピーエンドにな

るよう、物語を構成していきます。

●作者のリアルの仕事の都合で、週二回更新（火・金）します。

★【コミック⑦巻発売！】

２０２３年９月２２日にコミック版『結界師への転生⑦』が幻冬舎バーズコミックス様より発売されました！　フェリスとルアラの登場巻。二人が可愛らしく描かれていますので、是非ご覧ください！

巻末にはオリジナルＳＳ「好きこそものの上手なれ」も同時収録されています。

★【コミック①～⑥巻発売中！】

『結界師への転生』の世界が、装一様の手で見事に表現されています。重版もされまして、感謝の言葉もございません。巻末にはそれぞれ、書下ろしのＳＳが収録されています。

★【絶賛コミカライズ中！】

２０１８年１０月１２日より幻冬舎のコミックブースト様（ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ？ｃａｔｅｇｏｒｙ＝１４）にてコミカライズされました。作画担当の装一さまにより、拙作の世界観がわかりやすく、美しく表現されています。

★【書籍版、発売中！】

双葉社、モンスター文庫様より一巻～五巻が絶賛発売中です。小説版でしか読めないエピソードが多く収録して、大幅に内容が充実しています。ＷＥＢ版での誤字・脱字、辻褄が合わない点につきましては、こちらで修正しております。

★ブックマークが３０，０００を突破しました。ありがとうござい

ます！　ただし、ＷＥＢ版はあくまで「下書き」。是非、書籍版を読みなされ！

第一話　プロローグ（前書き）

＊初めてお読みになる方へ

こちらのＷＥＢ版はあくまで「下書き」です。辻褄の合わない場面、誤字、脱字等は、書籍版で補完しております。是非こちらをお読み下さい！

第一話　プロローグ

助けてくれ、助けてくれ、助けてくれ―。

俺は久保たもつ。３４歳。ここはトイレの個室。今の俺はヤバイ状況にある。マジでヤバイ。

俺はプログラマーをやっている。いわゆるＩＴ戦士というやつだ。この仕事、ラクじゃない。

ある程度仕事ができるようになると、いくつものプロジェクトを掛け持ちさせられ、納期に追われる毎日。余裕のあるスケジュールが引かれる（もっとも、余裕のあるように見せているのだが）ことはなく、ひたすら残業と徹夜を繰り返して作業に没頭する。そんな業界だ。

今日も俺は火だるまになったプロジェクトに苦しめられている。そして、デスクの電話が鳴る。

「久保さん、僕は限界です。辞めさせてください」

退職を電話一本で済まそうとする行為はどうよ?と思われるが、意外とそんなヤツは多い。しかし今はマズい。抱えているプロジェクトの納期が明日なのだ。電話の彼はメインプログラマー。彼なくしては最早、明日の納期は完全に間に合わない。

有効な打開策はない。ここは一旦、心を落ち着けなければならない。俺はフラフラとトイレの個室に入り、大きなため息をつく。

一体なんでこんなことになるんだ?どうすんだよ?あー休みてぇ。ゆっくり休んだのはいつ以来だ?定時に帰宅したのはいつだ?休みたい、とにかく休みたい。女子とデートしてぇ。ＩＴ業界は女にモテるんじゃなかったのか?全く寄り付かん。社内の女どもはみんな死んだような眼をしてるじゃねぇか。一体何なんだ?本当にもう誰か、助けてくれ、助けてくれ、助けてくれ―。

ゆっくりと、俺の意識が遠くなっていく。

第二話　奴隷

男の大声で目を覚ます。

ああ、トイレで寝ちまったのか。わかったよ。起きるよ、うるせぇな。

突然大きな手が俺の胸倉を掴み、持ち上げる。何だ、一体何なんだ。慌てて目を開けると、そこにはひげ面の大男がいた。

「よし、生きてやがんな！奴隷の分際で俺様の手を煩わすんじゃねぇ！！」

ヒゲは乱暴に俺を馬車の中に投げ込む。痛ぇじゃねぇか。マジで一体どうなってるんだ？

馬車の中には数人の子供がいた。大体５歳から１０歳くらいだろうか。みんな目が死んでいる。どうやら男は俺一人で、あとはみんな女の子のようだ。この状況を確認するべく、一番年上の女の子に話しかけてみる。

「あの～ちょっとよろしいでしょうか？」

焦点を定めない虚ろな目をしていた少女が、目だけをこちらに向ける。

「死ねばよかったのに」

何言いやがんだこのガキ。あまりに予想外の答えが返ってきたから、絶句しちまったじゃねぇか。

「死ねば、楽になれたのに。楽に死ねる、最後のチャンスだったかもよ？」

何ちゅう物騒な言葉を吐きやがるんだ。固まっていると不意に馬車が止まる。

「オラァ！ガキども！！メシだ！！降りてこい！！早くしねぇとメシ抜きだぞ！！！」

あのひげ面が大声で喚き散らしている。子供たちはビクッと体を震わせて、オロオロと馬車から降りていく。そして俺も、それにつられて馬車を降りた。

与えられたメシはクソ不味かった。一口食べてオエッとなるレベルで、あれは人間の食べるものじゃない。子供たちは作業のごとく、淡々と食べ物を口に運んでいる。俺は残りのメシを、さっき話した女の子に全てくれてやった。

先ほどまで雨が降っていたと見えて、あちこちに水たまりができている。その中でも俺の近くにある水たまりは、かなり大きなものになっている。その水たまりを眺めていると、水の中に子供の姿が映っていた。

俺の動きに合わせて水たまりに映る子供が動く。右手挙げて、左手挙げて、右手下げる。

・・・これは、俺？

どう見ても5～6歳にしか見えない子供になっていた。一体、なんで、どうしたんだ!?

固まる俺を後ろからひげ面がつまみ上げる。

「オラァ!メシの時間は終わりだぁ!さっさと乗れい!このウスノロがぁ!!」

またしても乱暴に馬車に放り込まれる。マジで怪我をしそうだ。

ガタガタと動く馬車の中、俺は蹲りながら必死で現状を整理する。何で子供になってるんだ?ここはどこだ?仕事はどうなった?

「食べないと、買い手がつかないわよ?」

不味いメシをあげた女の子がつぶやく。

「どういうこと?」

「男は体が大きくないと、兵士にも、鉱山にも売れないって奴隷商人が言ってた。さっき馬車から落ちたとき、怪我でもしたの?怪我や病気だと処分されちゃうかも」

「いや、怪我は大丈夫」

「そう?ご飯を食べなかったから、ひどい怪我をしているのかと思ったわ」

唯一の男の子である俺を、心配してくれていたらしい。その後、こ

の少女からいろいろな情報を得ることができた。

・ひげ面は奴隷商人
・馬車の中の人間は全員奴隷（もちろん俺を含む）
・女の子の奴隷は、基本的に娼婦もしくはメイドになるが、稀に冒険者になる人もいる。
・男は兵士か鉱山などの肉体労働になることが多い。
・奴隷の将来は所有者によってすべてが決まる。変態や殺人狂に買われて廃人や死体になることもあるらしい。

この少女曰く、5～6歳の男の子が奴隷に売られるのは珍しいとのこと。男は働き手として貴重であるため、少々家が貧しくても、たいていは村の人たちが協力して育てるものらしい。

で、俺はというと、馬車の中に投げ込まれた後はひたすらに泣きわめき、ふとした拍子に頭から外に転落したのだそうだ。そして、冒頭のひげ面とのご対面に相成ったというわけだ。

「明日の朝には王都に着くみたい。私はもう寝るわ。きっと、私が自由に寝られるのは、今日が最後だと思うから」

「逃げないの？」

「バカね。逃げたところで魔物の餌になって終わりよ。私は餌になって死ぬのはイヤ」

マジかー。モンスターがいるのか、この世界。

しばらくすると少女はスヤスヤと寝息を立て始めた。よくこの揺れる馬車の中で寝られるものだ。どうやらほかの少女も寝ているらし

い。

どうやら俺は転生してしまったらしい。子供の体で、しかも、奴隷という身分で。

結局俺は、朝まで眠ることができなかった。

第三話　奴隷商

王都に着いた。

王都は高い城壁に守られており、東西南北に設置された関所から出入りするらしい。俺たちは「西門」から王都に入るようで、ひげ面が鎧を着た門番と何やらやり取りしている。

「奴隷商人でございます！証明書はこれですぅ！」

「うむ、では、積み荷を確認する。・・・何だ、子供ばっかりだな。よし、通れ」

西洋風の鎧を着た、金髪イケメンの兵隊だ。何かちょっとイラっとする。

ガタガタと馬車は石畳の王都を進む。外を覗いてみると、そこには多種多様な人々が行き交っていた。そう、いうなれば、コスプレ会場。鎧姿の兵士、貴婦人のようなドレスを着た人、神父、コックのような服を着た人・・・などなど。俺が今着ている硬い生地で作られたシャツとハーフパンツは、かなりみすぼらしい格好のようだ。本当に奴隷なんだな、俺。

どうやらこの世界は西洋風らしい。金髪や銀髪が多い。ちなみに俺はというと、黒髪である。ここだけは前世の特徴を引き継いだらしい。

しばらくすると馬車が止まり、俺たちは外に出された。大きな商会

風の建物が見える。どうやらこれが奴隷商の店らしい。店の奥から、小ぎれいな格好をした初老の男性が現れた。どうやらこの人が、この店の店主らしい。

「ガイムよ、帰ったか。ご苦労だった。女の奴隷は汚れを落とし見栄えを良くせねばならん。井戸に連れていけ。入念に磨くのだ。男は・・・。今から儂が市で売る」

「では旦那様、奴隷権を移植させます」

ガイム＝ひげ面が俺の腕を取り、何やら呟いた。すると手の甲が一瞬だけ光った。

「これでこのガキは旦那様の所有になりました。じゃあ残りのガキは井戸に連れていきます。おい！グズグズするな！俺についてこい！！」

ゾロゾロと女の子たちは移動していく。不味いメシをあげた少女は、俺の姿を見ることなく、淡々とガイムの後に付いていった。

「では、来なさい」

旦那様、と呼ばれた男性が歩き出す。俺もそのあとを歩いて付いていく。

これはもしかしたら、逃げられるんじゃないだろうか？この人の多さだ。見たところこの旦那は戦闘力は高くなさそうだ。やるだけやってみようか。

旦那は全く俺を振り返らない。これはいけそうだ。少しずつ旦那と

距離を取る。いい感じに、距離が開いてきた。チャンスだ、と思った瞬間、俺の体に電流が流れ、激痛が走る。

「ああ、奴隷魔法で縛っているから気を付けるように。儂と一定の距離が空くと痛みが走る。逃げだしたり、殺意を儂に向けたりすると、凄まじい激痛が走ってしばらくは動けなくなる。嘘だと思うなら試してみるといい」

必死で首を振る。あれ以上の痛みが走るのか・・・ありえねぇ。完全に詰んでるじゃねぇか。

旦那から距離が離れないように必死でついていく。旦那は比較的ゆっくりと歩いているようだが、こちらは子供だ。歩幅がまるで違うので、かなり速足で歩かねばならない。マジでキツい。

ちょっとヤバイと思ったその時、旦那の足が止まる。どうやら「市」についたらしい。

第四話　奴隷市

市はすでに沢山の人で溢れかえっていた。

売買予定の奴隷は、俺を含めて８人。皆、若い。目を引くのは、筋骨隆々の男が二人と、アイドル並みの美貌を備えた美少年。そして猫の獣人もいる。かなりいい体をしているので、この人も戦闘向きなのだろう。子供は俺一人だった。

旦那は、市の関係者と話をしている。どうやら俺の開始値を決めているようだ。

「１０００Ｇから始めてくれ。なければ下げても構わない。服は・・・そのままでいい。とにかく売れればいい。売れなければ・・・処分してくれ」

・・・完全に価値がないんですね、俺。まあ、何もできない子供は普通買わんよね。売れなければ処分って・・・これはいよいよヤバイかもしれない。

いきなり腕を取られた。痛い痛い！ズルズルとひきずられていく。子供なんだからもっと優しく扱えよ！

気づいたら、舞台の上に引っ張り出されていた。

「まずは１番、男！６歳！１０００Ｇから始めます！」

あれだけ騒がしかった客席が静寂に包まれる。誰も俺を買おうとは

しない。

舞台の上から客席がよく見える。誰も俺と目が合わない。そりゃそうだ。俺を見ていないのだから。大半の客は、俺が出てきた入り口を見ている。興味はすでに俺の後に出てくる奴隷に移っているのだ。その他は、手元のメモを見ているか、隣の客と話をしているかのどちらかだ。全く俺に興味を持っていないのだ。

「では、９００Ｇでは？・・・８００Ｇ！・・・７００Ｇ！」

カウントダウンが始まる。きっと、この値段がゼロになった時、俺の命は終わるのだろう。訳のわからんうちに転生して、いきなり奴隷落ち。最後に見る景色が奴隷市とは・・・。

ぼんやりと客席を見ながらそんなことを考える。その時、一人の老女と目が合った。小柄だが、強い意志を感じさせる目。しかし、彼女は俺から目を離し、隣の、髭を蓄えた白髪の男性と話を始める。

「では、５００Ｇ！これが最低価格になります！・・・どなたもおいでではありませんか？？」

完全に、詰んだ。

「よろしいですか？では、１番終了！」

腕を取られて、舞台から降ろされる。相変わらず乱暴だ。振りほどいて逃げたいが、とてつもない握力で俺の腕を取っている。最早、逃げることもできないようだ。

乱暴に部屋の中に連れ込まれる。俺、ここで死ぬんだな・・・。

「こちらがお求めの商品になります。バーサーム夫人」

客席の老女がそこにいた。

第五話　購入者は侯爵夫人

バーサーム・フォン・エルザ。御年６０歳の侯爵夫人である。バーサーム家は代々、魔術に優れた当主を輩出することで有名であり、２５０年前のヒーデータ帝国との対戦においては数多くの武功を立て、ジュカ王国を勝利に導いた立役者でもあった。その功により平民から侯爵に取り立てられ、現在に至る。

・・・とまあ、これが俺の落札者の簡単な経歴だ。彼女に引き渡される時、市の人が教えてくれたのだ。

「あ、ありがとうございます」

一応は命の恩人だ。お礼は言わないといけない。

「ご主人様と呼ぶのだ」

バーサームさんの隣にいた、白髪の男だ。一体誰だ、このオッサン。

「私は、ファルコという。バーサーム家で魔導士をしている。同時に、エルザ様の護衛でもある。お前は、エルザ様の慈悲によってバーサーム家の奴隷になったのだ。喜べ。」

「ありがとうございます。ご主人様」

「バーサーム夫人。この度は誠にありがとうございます。早速ですが、この奴隷の所有権変更手続きを行います」

いつの間にか奴隷商の旦那が近づいて来ていた。恭しくエルザに一礼をすると、彼女に向かって呪文を唱え始める。それを聞いてエルザも旦那に手を差し出すと、エルザの手が光る。そして、俺の手も光を発する。

「これでこの奴隷の所有権はバーサーム様に変更されました。奴隷の買戻しも承ります。その節は是非、ご用命ください」

売れなければ処分、と言っていたので、買戻しの話は社交辞令だろう。

「いえ、おそらく買戻しをすることはありません。ですので、この子の所有権の変更は、私の一存でできるように。あ、あとこちらのファルコも管理者として登録して頂戴。この子を縛る効果は……付けなくて結構です」

「畏まりました。それでは」

また、エルザの体が光る。どうやら手続きは完了したみたいだ。

「ご主人様、この奴隷の名前はいかがいたしましょう」

「そうね・・・リノス。リノスと名付けましょう。じゃ、ファルコ。あとはお願いね」

エルザは踵を返して馬車に乗り込んだ。どうやら、馬車の中には護衛の兵士もいるようだ。馬車を最敬礼で見送るファルコ。俺もそれに倣って馬車に頭を下げる。

「では、お前を屋敷に連れていく。その前に」

井戸の前に連れていかれ、強制的に裸にされる。そして頭から水をぶっかけられること3回。懐から大きな布を出して俺に渡し

「体を拭け。その布はお前にくれてやる。好きに使え」

暑くもなく寒くもない気候だが、いきなり頭から水をかけられたので、かなり寒い。固い布だがないよりはマシだ。ガシガシと体を擦り、汚れと水を一気に洗い流す。

服を着るとファルコは「クリーン（浄化）」と呪文を唱える。すると、服の匂いや小さな汚れがなくなった。洗浄魔法というもので、多少の汚れであればきれいにしてくれる魔法らしい。

「ではリノス。ついて来い」

さすがに従者は徒歩で行くらしい。途中、湖に浮かぶ巨大な城が目に入り、しばし呆然としてしまった。

「あれは国王陛下がおわすジュカ城だ。よく見ておくがいい」

西洋風の城だが、何しろ巨大すぎる。聞けば、難攻不落を謳われる有名な城なのだとか。城壁の中では農業も行われており、城壁が突破されない限り飢えることがない。しかも湖には橋は1本だけであり、必然的にそれは王城に延びている。確かにこれを力技で攻め落とすのは無理そうだ。

「あの・・・何で俺を買われたのですか？」

「なんだお前、自分のスキルを知らんのか。まあ無理もないか。お

前には「結界スキル」がある。まだＬｖ１だがな。我がバーサーム家は政敵も多い。エルザ様の護衛のため、お前の結界スキルを活用しようと考えたのだ」

ええ？俺、魔法を使えるの？？キョトンとする俺を見てファルコは、

「魔力の使い方を学べば、相手のスキルを見ることが出来る。「鑑定」というやつだ。お前も魔力はそこそこありそうだから、鍛えがいがある。奴隷だから結界魔法だけでもいいんだが、せっかくだ、色々な魔法を覚えてもらおう。覚悟しておけよ？」

獰猛に笑う白髪の老人を見て、やっぱり俺の寿命は長くなさそうだと、肩を落とすのであった。

第六話　7歳になりました

7歳になった。中身は３４歳のままなのだが。

バーサーム家に奴隷として購入されて一年。俺は結界師となるべく、日々修行に明け暮れている。

大体、結界師というのはレアジョブだ。なかなか持ち手がいないのだが、何故か人気は低い。理由は、防御専門職だから。戦場で先陣を切って突っ込むわけでもなく、高い統率力が必要なわけでもない。言わば、とても地味な職業であると言える。

結界師は基本的に、王様や当主の傍にいて弓矢の物理的攻撃や魔法などの攻撃から守るための魔法結界を張るのが任務なのだ。従って、動けない。極端な話、トイレにも行けない。ただひたすら、解除の命令があるまで結界を張り続けるという精神的にとても疲れる仕事なのだ。

結界を張ると当然、ＭＰを消費する。ＭＰが枯渇すれば結界は消える。超一流といわれる、国王専属の結界師でも、１２時間が限界なのだという。従って、結界を張るタイミングと解くタイミングを見極めるのが難しく、運用を間違えれば主従そろって討ち死にというのも珍しくない。

で、現在の俺はどんな修行をしているのかというと

「ファイヤーボール！」「バースト！」

ファルコさんの魔法の攻撃に対して、ひたすら防御結界を張って耐えしのぐ、というものだ。

最初は結界の張り方どころか、魔力の扱い方自体もわからず、かなり苦しんだ。さすがにそこで終わってしまっては５００Ｇが無駄になる。無駄、と言っても、５００Ｇとは日本円にすると５０，０００円である。バーサーム家にとっては、痛くもかゆくもない金額であるのだが。

ファルコさん、いや、師匠の教え方は雑なようでツボはしっかりと押さえていた。教えるのがとても上手だったのだ。

「体の中に流れる血を意識しろ。その中に熱を感じるだろう。それが魔力だ。その熱を体の外に出すイメージをしてみろ。イメージが大切なんだ」

こうして魔力を体の外に出す稽古を続けること2か月、ようやく俺は「低結界」をマスターすることが出来た。

「2か月で「低結界」を修得するとはスジがいいな。子供だけあって、修得が早いのだろうな」

ウキウキの師匠であった。しかし、その喜びが仇となった。テンションＭＡＸで攻撃を繰り出してくる師匠の魔法。「低結界」ではあっという間に砕かれて魔法の餌食となる。師匠は「火魔法」が得意とあって、最初の頃は全身火だるまになることもよくあった。いや、ほぼ毎日であったと言っていいだろう。ちなみに、師匠のスキルはこんな感じだ。

ファルコ（魔導士・５２歳）

ＨＰ：１８４
ＭＰ：３９５
火魔法　Ｌｖ４
水魔法　ＬＶ３
風魔法　ＬＶ３
土魔法　ＬＶ２
雷魔法　ＬＶ１
治癒魔法　ＬＶ３
鑑定魔法　ＬＶ２
生活魔法　ＬＶ２
肉体強化　ＬＶ３
詠唱　ＬＶ３
ＭＰ回復　ＬＶ３
威圧　ＬＶ３

一般的にＬＶ３に到達すれば一流である。ＬＶ４に至っては超一流。ＬＶ５に至っては神級と呼ばれ、修得している人はＬＶ４に至る人の中でも１％程度である。つまり、一億人に一人くらいの割合でしか、そのレベルには到達できないとされている。師匠のスキルは火魔法が高いのだが、その他の魔法のレベルも高い。ＭＰも多く、回復も早いので、日中全力で稼働しても、一晩寝ればＭＰは完全に回復する。

従って師匠は暇なときは嬉々として俺に魔法をぶつけてくる。さすがにＬＶ２程度の魔法だが、たまにＬＶ３の魔法をぶつけてくる。ケガをすれば治癒魔法で治してくれるが、最近はそれもしてくれなくなった。自分の傷は自分で治せ、というわけだ。しかも、結界を張りながら治癒魔法をかけろ、などとすばらしい無茶を言ってくれる。それができると、「移動ホスピタル」となるわけで、戦略的にとてもプラスになるのだと言う。その理屈は俺にもわかるのだが、

如何せん俺のＭＰは少ない。必死で防御しても結局は魔力切れで吹っ飛ばされてジ・エンドというのが最近までのパターンである。

ちなみに、魔力切れを起こすと、とてつもない睡魔に襲われる。結局は睡魔に負けて気絶し、魔力が１Ｐ回復したところ（約５分）で無理やり起こされる、というのを繰り返していたのだ。

現在の俺のステータスは、こんな感じだ。

リノス（奴隷結界師・７歳）
ＨＰ：３８
ＭＰ：１２２
結界魔法　ＬＶ２
回復魔法　ＬＶ１
生活魔法　ＬＶ１
詠唱　　ＬＶ１
鑑定魔法　ＬＶ３

同じ７歳の子供と比べれば破格のステータスである。一般的に、ＨＰにしろＭＰにしろ、１００を超えれば一人前の世界なのである。ＭＰが少ないのは、師匠と比べたらということだ。大人顔負けのＭＰ値はあるが、毎日ＭＰが０になるのだ。どれほどハードな修行であるか、想像ができるだろうか。

何故か、鑑定魔法のレベルがすごく上がっていた。師匠の魔法がいつ発動されるのかを必死で探っていたら、魔力の流れが何となくわかるようになったのだ。今ではほとんどの人間のステータスがわかるようになっていて、嬉しい誤算である。

鑑定魔法は極めると、その人のステータスを把握できることはもち

ろん、自分のスキルも隠すことが出来るそうである。それだけでなく、一定のエリアにいる人間の人数、動き、果ては敵か味方かまでわかるようになるらしい。

このスキルは、バーサーム家を設立した初代当主が持っていたそうで、現在では伝説の魔法と言われている。是非是非、マスターしたいものだ。

第七話　8歳になりました

8歳になった。バーサーム家の暮らしにもかなり慣れた。

奴隷という身分、最初はかなりひどい扱いを受けることを覚悟したのだが（師匠の訓練は虐待そのものだが）、予想以上に暮らし向きはいい。

侯爵家というだけあって、城の立つ湖のほとりに広大な敷地を有している。しかし、住居となる屋敷自体はそんなに大きくない。普段エルザ夫人が過ごす母屋の他に、使用人専用の建物があるくらいだ。使用人といっても、意外に多くはなく、メイドが4名と執事が1人、そして師匠のファルコという構成である。

母屋は二階建てで、一階が玄関ホールと応接室とダイニング、キッチン、そして風呂とトイレがあり、どちらかと言えば来客用のスペースだ。どの部屋も広く、調度品も一流だ。ダイニングなど、100名は収容できるんじゃないかと思うくらいの広さだ。ここでパーティーなども開かれるらしい。

二階は住居スペースで、エルザ夫人の私室もここにある。十いくつかの部屋があるが、使われていない部屋も多い。

「当家は侯爵家です。奴隷といえどバーサーム家の一員ですから、相応の格好をしなさい」

エルザ夫人の命令で、俺の普段着は執事と同じようなスーツ姿なのだ。実際、かなりカッコイイ。修行着も支給されており、夜はパジ

ャマもある。食事もきちんと3度あり、さすがにエルザ夫人と同じものとはいかないが、それでも食糧事情はかなりいい。毎日きちんと、パンとスープ、シチューらしきものが出てくる

夫であるバーサーム侯爵は城に常駐しており、執務室で寝泊まりしている。執務室といってもかなり広く部屋数も多く、風呂やトイレもあるらしい。それだけでなく、いくつかの部屋を与えられており、そこに多くの侍女や部下たちと共に暮らしているのだそうだ。

その昔は最強国として名を馳せたジュカ王国だが、内部は腐敗しつつある。現王である、ジュカ・ヨーク・ファン４世は３８歳という若さでありながら、暗君であると専らの評判であり、後宮にこもりっぱなしで、ほとんど政務を顧みることがない。自身の傍に美女を侍らせて、朝から晩までヤリまくっているらしい。

しかし、今年１９歳になる王太子、ジュカ・ヨーク・オルレンは大変に聡明な人物であり、王宮内は既にこの王太子が政務を執る体制が着々と整いつつある。

エルザ夫人はこの、オルレン王太子の家庭教師であり、言ってみれば彼の育ての親みたいなものだ。当然、王太子の彼女に対する信頼は厚く、折に触れて彼女は王宮に赴き、王太子の相談相手となっている。そして、夫であるバーサーム侯爵は王太子の右腕として、政務を補佐する立場に立っている。

要はこの国は、王太子と、その彼を育てたバーサーム夫婦が背負っていると言って過言ではないのだ。その結果、何とか国としての体制は保っているものの、バーサーム家の失脚を狙う家も多く、実際に刺客を送られたこともあるのだという。

普段は師匠・ファルコが護衛についているため、刺客の類は問題なく排除されたのだが、王宮内にいるバーサーム侯爵と同時に狙われた場合、護衛の数が足りない。そのために結界スキルを持つ俺が、奴隷として買われたというわけだ。

貴族社会とは派閥の社会である。ジュカ王国は、王太子を筆頭とする派閥が最大勢力を誇っているものの、王弟であるヒーラ公爵や王国軍のカルギ将軍もそれぞれ派閥を持っており、油断がならない。それらの派閥に正面から対応できる体制が急務というわけだ。

バーサーム家に来た当初は、朝から晩まで師匠との修行だったのだが、最近は、師匠との修行の他に、「行儀作法」や「読み書き」といった教養の時間も設けられるようになった。

さすがに、中身は３４歳である。読み書き、算数はあっという間に修得した。だって言葉は日本語だし、文字はローマ字なのだ。ちょっと頭の中で漢字変換が必要だが、きちんと句読点があり、読むのに不自由はない。

「もう少し結界のスキルを上げて、このままこの家の執事になれたら、平和な暮らしなんだけどなぁ」

ぼんやりとそんなことを考えながら、俺はベッドに入る。もちろん、そんな甘い考えはすぐに崩壊するのだけれど・・・。

リノス（奴隷結界師・８歳）
ＨＰ：４５
ＭＰ：１４３
結界魔法　ＬＶ３（師匠の火魔法（ＬＶ３）は効かなくなった！）
火魔法　　ＬＶ１（小さな火の玉が出せるようになった！）

水魔法　ＬＶ１（水が出せるようになった！）
回復魔法　ＬＶ１
生活魔法　ＬＶ１
詠唱　ＬＶ２
鑑定魔法　ＬＶ３
行儀作法　ＬＶ１
教養　ＬＶ３（二ケタの掛け算をやったら付いていた）

第八話　エリルお嬢様

暑い夏が終わり、過ごしやすい秋の季節になった。俺は9歳になった。

日本と同じようにこの世界でも四季はある。夏は暑いし冬は寒い。電化製品などは皆無だが、この世界では魔法があり、大抵の暑さや寒さは魔法でカバーができてしまう。

執事の姿も、かなり板につくようになっていた。今ではバーサーム家に訪れた貴族を、玄関から応接間まで案内する役目もできるようになった。もっとも、古くから仕えている執事のワイトンが折に触れて俺にアドバイスをくれたり、さりげなくフォローを入れたりするお陰で、どうにかできるように見えているにすぎないのだが。

そんなある日、師匠との特訓の最中に来客があった。もっとも、かなり乱暴な登場だったのだが。

師匠が放つ3つの「ファイヤーボール」が高速で俺に向かってくる。ＬＶ４にもなると、込める魔力に応じて、大きさ、距離、威力が自由に調整できるようになる。師匠が放ったファイヤーボールは、かなりの魔力が込められている。ほぼ、本気の一撃である。

三方向からバラバラに飛んでくるファイヤーボールに対して、分厚い結界を張る。その直後、大爆発が起きる。広いバーサーム家の庭（たぶん東京ドームと同じくらいの面積）でなければ大惨事になるレベルの威力だ。俺の全力で張った結界が破られそうになるが、何とか耐えきった。その直後

「甘い」

バリンと結界が砕け、脳天に衝撃が走る。一瞬意識が飛びそうになるが、なんとかこらえる。慌てて後ろを振り向くと、木剣を振り下ろした女性の姿が目に入った。

「ずいぶん丈夫な結界を張るけど、まだまだムラがあるわね。後ろがガラ空きよ」

「エリルお嬢様！お戻りになられたのですか！」

「久しぶりねファルコ。あなたは変わらないわね」

お嬢様？ひょっとして、エルザ夫人の娘？いや、それにしては若い。孫か？

「リノス、ご挨拶をしないか。こちらは、バーサーム・フォン・エリル様だ。エルザ様の姪御様に当たられる」

俺はすぐさま片膝をつき、手を胸に当て、頭を下げて

「これは失礼を致しました。奴隷のリノスでございます。」

「ずいぶん行儀作法が上手ね。私より上手かも」

「1年ほど前から、執事のワイトンに付けて作法を習わせておりますからな。既に読み書きは習得済みですし、算術もできるようです。」

「まだ子供じゃないの!?結界が張れて、算術もできるって・・・」

お嬢様はしばらくポカンと口を開けて俺を見ていた。ゆっくりと頭を上げる俺と目が合う。お嬢様がキッと俺を睨む。おお、意外と胸がデカイ。

「ファルコ、この奴隷のスキルは?」

「火・水・土・風の魔法がＬＶ１、結界魔法がＬＶ３。詠唱も短縮できますし、回復魔法も使えます。他に鑑定魔法もＬＶ３ですので、かなり高い防御力になりますぞ」

「この奴隷はいくつ・・・９歳!?９歳でＬＶ３が二つって・・・。」

ドン引きのお嬢様。そりゃ毎日死にかけながら魔法使ってたしな。そこいらの奴隷とはワケが違いますよ。何せお払い箱になればそのまま処分されちゃいますから、必死にもなりますよ。

「・・・で、この奴隷、剣術の方はどうなの?」

「いや、全くですな。ここに来て2年、ひたすら儂と魔術の特訓をしておりましたから」

「け、剣の対応を教えていないのは不手際ね。何も戦いは魔術だけじゃないでしょ?」

「まあそれはそうですが・・・。儂は剣は使えませんが、全く不便を感じたことはないですぞ?」

「ファ、ファルコは特別よ。さっきもこの奴隷の結界を見たけど、後ろから攻撃したら簡単に砕けちゃったわよ？きちんと剣の対応を教えるべきよ」

「そうですな・・・。まあ、リノスにとってもいい機会でしょうから、今後は剣の対応も教えていきましょう」

何かしれっとハードル上がってませんか？？？

「その奴隷の相手は、私がしてあげてもいいわよ。その前に、叔母様にご挨拶に行ってくるわ」

一体何者なんだこの女？ここは一丁、鑑定してみるか。

バーサーム・フィル・エリル（免許皆伝剣士・２４歳）
ＨＰ：３８７
ＭＰ：７７
剣術　　ＬＶ４
肉体回復　ＬＶ４
肉体強化　ＬＶ４
生活魔法　ＬＶ１
行儀作法　ＬＶ１

バッ、化け物だ。免許皆伝じゃねぇか。ＨＰが完全に師匠を超えている。そりゃ結界が壊れるよな。待てよ？この女が相手っていうことは、剣でフルボッコ確定ってことじゃねぇか！

目の前が真っ暗になりそうになる。ポン、と俺の肩をたたく師匠。満面の笑みを湛えてやがる。この世界の人間はドＳばっかりか！

その後、師匠からエリルのことについて詳しく教えてもらった。

エリルはエルザ夫人の妹の孫に当たる。生まれてすぐ子供を亡くしているエルザ夫人にとってエリルは、我が子同然に目をかけて育ててきた。本来、貴族の子女は礼儀作法や教養を学ぶことに生活の大半を費やす。しかし、エリルは子供の頃から剣に興味があり、しかもその才能を持っていた。それをいち早く見抜き、エリルに剣を学ばせたのは、他ならぬエルザ夫人なのだ。

だが、エリルが12歳となり、結婚した後はしばらく疎遠になったのだが、16歳の時、子供がなかなか生まれないエリルに業を煮やした嫁ぎ先は、エリルを離縁した。そうなると後は屋敷に押し込められるか、どこかの後妻に入るのが一般的なのであるが、エルザ夫人は迷うことなくエリルを、ジャク王国の剣聖、ガンボールに弟子入りをさせたのだ。そこで激しい修行の末、入門僅か8年にして免許皆伝を受け、めでたく帰還を果たした、というわけだ。

ちなみに、この世界で成人は12歳である。平均寿命が50歳なので、必然的に成人や結婚適齢期は低年齢化する。しかし、12歳で結婚して16歳で子供ができないから離縁っていうのはすごい。というより、あまりにも強すぎたために亭主と合わなかったのだろうというのは、師匠の推測である。

「叔母様、ただいま戻りました」

「ずいぶん早かったわね。ジャク王国からここまで半年はかかると思っていたけど、まさか2ヶ月で戻ってくるとは思わなかったわ」

「はい、一刻も早く叔母様の下に着きたくて、日中ずっと馬を飛ばしていました。乗る馬、乗る馬、虚弱体質の馬ばかりで、思った以

上に時間がかかりました」

「まさか、一日中馬を飛ばしていたの？」

「ええ、そうしたかったのですが、日暮れになると馬が倒れてしまうのです。そんなことが１０回ほどありましたでしょうか。」

「・・・大変だったわね（馬が）」

「でも、もう心配ありません。叔母様は私がこの剣で守ります。ファルコさんは心置きなく王宮へ行っていただけます。叔父様と王太子殿下の警護が強力になります」

「ああ、そのことなのですが、今は比較的落ち着いていますから、しばらくはこのままにしておこうと思います。」

「ツっ！でっ、では私は・・・」

「いいのよ。あなたがここにいてくれるのであれば、それはうれしいことです」

「では・・・しばらく叔母様のお屋敷でお世話になります。聞けば叔母様、ファルコさんが奴隷を鍛えているのだとか。」

「ああ、リノスね。あれはとても優秀でね。既に結界が張れるのですが、読み書きと算術もかなりできるのです。寧ろ執事として・・・」

「いえ、叔母様、剣術を教えるべきです！男は力が必要です。魔術だけでは守れるものも守れません」

「そうね。では、あなたからリノスに剣術を教えてもらえるかしら。ただし、あの子は結界師として育てることが第一です。そこを忘れないでちょうだいね」

「はい」

エリルは心の中から溢れる喜びを感じていた。リノスは強い。これからどれほど強くなるのかが分からない。リノスと一緒に修行を積めば、それだけ自分も強くなるのだ。この機会を逃す手はない。明日からリノスをどう鍛えてやろうか。そんなことを考えながら、彼女は部屋に向かうのだった。

第九話　まあ、合格らしい

「エクストラファイヤー！」

「うりぁうぁぁぁぁぁぁっ！！」

周辺一帯を焼き尽くす巨大な火の玉が俺に向かって放たれる。しかも、鉄をも溶かす超高温が凄まじいスピードで向かってくる。その後を、これもとんでもない速度で剣を構えた女が突っ込んでくる。

「全結界」

俺は右手に剣を持ちながら左手を掲げ、素早く結界を張る。俺の周りを完全に覆いつくす球体の結界。透明なボールの中に俺がいる状態だ。

結界を張ってすぐ火の玉が着弾する。凄まじい轟音と灼熱。周囲の草木が燃えるどころか蒸発してしまっている。全身に衝撃波が走る。体が飛びそうになるが、何とか耐えきった。そう思った直後、煙の中から凄まじい速度で剣が突き出される。エリルだ。

ガキィィィィン！！！

数百枚のガラスが一気に割れるような音がする。突き出された剣は結界で受け止めたが、すぐにそこからヒビが入り、崩壊する。それを予想していたかのように、エリルの目にもとまらぬ斬撃が俺の脳天に向かって振り下ろされる。

その直後、俺の右手の剣がエリルに向かって振り下ろされる。狙うは腕。腕ごと剣を叩き落す。しかし、エリルはなんと剣を手放して両手を広げ俺の斬撃を躱す。一瞬、俺の体勢が崩れる。それを見逃すエリルではない。素早く空中の剣を掴み、そのまま必殺の斬撃を俺に打ち込む。

バシィ！！

エリルの剣は、俺の目の前で止まっていた。エリルが剣を止めたのではない。体勢を崩した直後、俺が薄い、しかも丈夫な結界を張り直したのだ。

「ちょっとファルコ！どうして魔法で攻撃しないのよ！」

「無理ですよ、お嬢様。一度結界を張っちまったら、もう崩すのは難しいですから」

「チッ！」

忌々しそうに俺を睨み、渋々剣を収める。

「まあ、いいんじゃないの？」

「ああ、儂もそう思います。まあ、合格ということだリノス」

「あっ、ありがとうございます。エリルお嬢様、ファルコ師匠」

膝をつき、頭を下げる。いつもより丁寧にお礼を言う。

「うりゃあ！！」

いきなりエリルが斬りかかってくる。全く反応できなかったが、彼女の剣は再び俺の目の前で止まる。俺は結界を解除していないのだ。

「全く、油断も隙もないわね。可愛げってものがないのよ、あなたは」

「可愛らしさを出してしまいますと、私の命がいくつあっても足りません。エルザ様のお許しなく、この命を他の方に差し上げる訳にはまいりません」

「最近、本当に大人のような口をきくようになったわね。忌々しいわ」

「まあまあお嬢様。儂でさえ破れぬリノスの結界をお嬢様は破ったのです。誇っていいですぞ」

「これだから男は嫌いなのよ。何もわかってないのね」

すたすたとエリルは自分の部屋に帰って行った。

「あーでも、この模擬戦はもうできないな。この屋敷が砂漠になってしまうからな」

屋敷からかなり離れているとはいえ、周囲は砂と岩とクレーターだらけだ。もともとはだだっ広い野原だったのだが。

エリルが俺の修行に加わるようになってから、過酷さが増した。師匠の魔法、しかも、ＬＶ４の全力の火魔法が降り注ぐのと同時に、エリルの斬撃にひたすらさらされるようになったのだ。

しかもこの二人の息がピッタリなのだ。確実に俺の結界の弱点を突いてくる。エリルも最初こそ木剣を使っていたものの、「調子が狂う」との理由で、早々と真剣を使ってくるようになった。お陰で何度結界を割られ、切り刻まれたかわからない。何度か致命傷を食らい、あと一歩遅れたら完全にあの世行き、という場面もあったのだ。

しかも、師匠からは常に結界を張っておくように命じられ、寝ている時も結界を張り続ける毎日を過ごすことになったのだ。当然、結界を張るとＭＰを消費するのだが、熟睡すると回復力は落ちるものの、確実にＭＰは回復するということがわかったのだ。とはいえ、完全に意識を失えば結界は消える。それを見張るために深夜、抜き打ちでエリルが俺に斬撃を打ち込む、というトチ狂ったとしか思えない修行も行われていたのだ。救いといえば、この時だけは手加減をして、木剣を使ってくれたことである。当然俺に打ち込まれる力は、全力であるのだが。お陰で何度顔面を割られたことか。

こちらとしても必死である。安眠が妨害されるのだ。しかも大怪我付きで。死に物狂いで取り組んだ結果、熟睡しながら結界を張り続けるコツを掴むことが出来た。副産物として何故か、気配探知と魔力探知の能力を得ることが出来た。今ではエリルだけでなく、師匠も襲撃してくるようになったが、気配探知か魔力探知に掛かった瞬間に、無意識に結界を張ることが出来るようになっているので、二人の襲撃の被害は実質ゼロである。

こんなことをしていたので、三人で修業を始めた当初は、すぐに俺のＭＰがカラになってしまうことがよくあった。そこで師匠は俺に、ほぼ無理やりに、自分のＭＰを吸い取るスキルを習得させた。そのやり方は師匠らしく、とても効率的なものだった。何と、腕に炎をまとい、そのまま俺の胸ぐらを掴んだのだ。

「熱いか？この炎も魔力でできているのだ。熱けりゃ儂からＭＰを吸い取るのだ！そうすりゃ炎は消えるぞ？ハッハハハ！！」

・・・すぐにスキルはゲットできた。それだけでなく、回復魔法のスキルも上がったのだった。

エリルもエリルで、俺に真剣を与えたかと思うと、それで模擬戦を行うようになった。二人の攻撃を躱し、フルボッコにされた後に、である。当然最初はエリルの斬撃をいやというほど浴びせられたし、激しい筋肉痛にも苛まれた。俺としても痛いのはイヤなので、必死で剣を躱すことを覚えた。

あれから１年、１０歳になった俺は、かなり二人の攻撃を躱せるようになり、死を覚悟するような傷を負うことはなくなりつつあった。

ちなみに、今の俺のステータスは、こんな感じだ。

リノス（奴隷結界師・１０歳）
ＨＰ：７７
ＭＰ：２１３
結界魔法　ＬＶ４（師匠の火魔法（ＬＶ４）は効かなくなった！自分の思い通りの結界が張れる！）
火魔法　ＬＶ２（大きな火の玉を発射できるようになった！）
水魔法　ＬＶ２（大きな水球を発射できるようになった！）
土魔法　ＬＶ１（簡単な穴を掘ったり埋めたりすることができるようになった！）
回復魔法　ＬＶ３（重度の火傷や傷を完全に治癒できる。ついでに病気も治癒できる！）
生活魔法　ＬＶ１

詠唱　ＬＶ３
鑑定魔法　ＬＶ３
剣術　ＬＶ２
ＭＰ回復　ＬＶ２
気配探知　ＬＶ２
魔力探知　ＬＶ２
魔力吸収　ＬＶ１
肉体強化　ＬＶ１
回避　ＬＶ２
行儀作法　ＬＶ１
教養　ＬＶ３

１０歳にして、王宮の結界師と同レベルである。良い師、効果的な修行のお蔭で奇跡のような成長を遂げたが、良い子はゼッタイにマネしない方がいい。

「まあ、儂が教えることもほぼなくなってきた。従って、お前には儂の修業からの卒業実習をやってもらおうと思う」

「卒業実習ですか？？」

「そうだ。お前、三日後にルノアの森に行って魔物を狩ってこい」

マジかよ。魔物の巣窟じゃねぇか。俺、本当に死ぬかもしれない。

第十話　初陣

ルノアの森。ジュカ王国の北東に位置する、広大な森である。そこは魔物の巣窟と化しており、多くの種類が生息している。

魔物については、王国が調査の上、その強さや魔力、そして過去に国に与えた被害などを考慮して、SランクからEランクまでランク分けされており、ルノアの森にはAランクからEランクまでの幅広い魔物が生息する。しかも、森の最北に位置するルノア山脈から西のジュカ山脈にかけて、数多くのドラゴンが生息しており、とりわけルノア山脈はかなり標高が高いため、ここを越えてバイトス公国に至るのは非常な困難を伴う。従って、バイトス公国との交易はあるにはあるが、山脈を迂回するルートを通るため、実際に交易がおこなわれるのは年に一度、新年の祝賀を祝う使者に商人が同行して来た時に行われる。

そんな森の前に、俺は立っている。なぜかエリルも一緒だ。俺が森に向かう前日、いきなりエリルも同行すると言い出したのだ。

「強力な魔物に出会う可能性もあるのよ？リノスの警護も必要でしょ？」

かなりすったもんだがあったのだが、エリルは強引に押し切った。

そして当日の朝、無理やり馬車用の馬を引っ張り出してきて、俺をエリルの後ろに乗せた。

「しっかりつかまってなさいよ！」

そう言うと、いきなり馬を全力で走らせた。王都の、貴族屋敷が並ぶこの地区で馬を全力で走らせることはない。例外的に緊急の早馬の場合はその限りではないため、下手をすると何かの緊急事態が起こったと思われてもおかしくない行為である。たまたま早朝だったため、人がいなかったのが幸いしたのか。さしたる混乱は起こらなかったのだが。

バーサーム家からルノアの森までは、徒歩で約5時間の道のりである。俺はまだ子供でもあるため、時間がかかろうということでかなり早朝に出発したのだが、エリルの馬移動のおかげで、３０分程度で到着してしまった。あまりにも乱暴に馬を扱うために舌を噛んでしまい。エリルに見つからないようこっそり治療したのはナイショの話である。

「さあ、大物を狩るわよ！」

「お嬢様、魔物を狩るのは私ですが」

「リ、リノスが倒せない魔物に出会ったら助けてやらなきゃって意味よ」

「ええ、そうならないように、頑張ります」

魔力探知で森の中を探ってみる。まだまだＬＶが低いため、探知できる範囲は狭いが、結構な数が森の入り口付近にいる気配を感じる。どれも小さな魔力なので、ゴブリンか何かだろうか。

魔物、というだけあって、どんな小さい、弱い個体でも魔力を持っている。一説によると、この魔力が魔物を構成しているとも言われ、

魔力が強ければ強いほど、より強力な魔物になるのだそうだ。

周囲の魔力を意識しつつ、森の中に入っていく。奥に進むと薄暗くて視界が悪い。普段から結界を張りっぱなしなのだが、ちょっと結界の強度を上げておこう。

道に迷わないよう、慎重に森の中を進む。エリルはキョロキョロと周囲に目を向けっぱなしだ。迷子になっても知らないよ。

「何か拍子抜けね。何も出てこないじゃない。魔物に襲われて大乱戦を予想してたのに」

一体アンタ、どれだけ戦闘狂なんだよ。

魔物が襲ってこないのは、おそらくエリルが原因だ。何しろ免許皆伝の腕前だ。襲い掛かった瞬間にエリルの剣の餌食になる。魔物も本能的にわかるのだろう。ゴブリンあたりをサクッとやっつけて帰ろうと思っていたのに、残念至極である。

ゆっくり歩を進めていくと、奥から大きな魔力を感じる。立ち止まって、目を凝らして見てみると、二つの赤い光が見えた。その直後、

「グモオォォォォー」

バカでかい牛が現れた。３メートルはあろうかという巨体に大きな角が生えている。

「カッ、カースシャロレー!?」

目を見開いて驚くエリル。そんなにヤバイ生き物なのか？

「普段は森の奥深くに生息しているのに、何で森の入り口近くまで出て来てるのよ！討伐しないと・・・。こいつは硬い皮を持っているから、剣も魔法も通じない相手よ。Ｂランクの魔物だからアンタには無理よ。後ろに下がってなさい」

エリルが抜剣しながら俺の前に立つ。巨大牛は前足で地面を蹴りながらすでに臨戦態勢である。

「りゃぁぁぁぁぁぁぁ！」

一瞬のうちにエリルが動いた。剣を上に向かって跳ね上げる。狙うはカースシャロレーの首だ。

ガキィィィン！！

金属がぶつかるような音が起こる。エリルの剣はカースシャロレーの首を傷つけはしたものの致命傷には至らない。一旦距離を取るエリル。しかしその瞬間、今度はカースシャロレーが動いた。

エリルにも劣らぬスピードで、エリルに角を突きつけながら突撃してくる。

「引っかかったわね！！」

カースシャロレーの眉間に向けて、必殺の突きを繰り出すエリル。

パァン！

何かが弾けるような音がした。カースシャロレーの動きが止まる。

しかし、エリルの剣も眉間を砕けずに止まっている。俺の結界を砕く威力のある突きを受け止めるとは、この牛の防御力はハンパない。

「リノス、逃げなさい。あなたじゃ無理よ」

「ええと、逃げる前に一つ、試してみたいことがあります」

俺は左手を大牛に向ける。そして大牛を結界の中に閉じ込める。

「カースシャロレーを結界に閉じ込めておいて逃げるのね！やるわね！」

「しっ！ちょっと静かにしてください！」

俺は注意深く結界を操作する。大牛は俺に突撃をしようとするが、結界の中に閉じ込めているので身動きが取れない。しかし、このまま暴れられ続けると、結界が壊れる可能性がある。ちょっと急いだ方がいいか。

暴れている大牛の動きが止まる。瞳孔が開き、口が大きく開かれていく。しばらくすると大牛の瞳から光が消える。

「ふぅ～。どうやら成功したようです。ちょっと操作が難しいですね」

「・・・一体、何したの？」

「ええ、結界の中の空気を抜きました。さすがに空気がなければ窒息するんじゃないかと思ってましたが、やっぱりでしたね。でかいので、真空状態を維持するのが大変でしたけど」

「空気を抜いたって・・・」

剣を持ったまま呆然と立ち尽くすエリル。その隣で俺は、このバカでかい牛をどうやって持って帰ろうかと考えを巡らすのであった。

第十一話　狩った魔物を運ぼう！

「ちょっとこの牛は、持って帰るのは無理ですね」

3メートルの巨牛を前に俺はつぶやく。

「でもファルコ師匠に倒した証拠を持って帰らなきゃいけないですし・・・どうしましょうか」

とりあえず何とか切り落とすことができる部位だけでも持って帰りたい。

「その必要はないわ」

エリルが腰にぶら下げている袋を取り出し、俺に手渡す。

「その袋に魔力を通して、「アプト」と唱えてみなさい」

言われるがままに魔力を通し、「アプト」と唱える。すると、目の前の巨牛が一瞬で消える。

「え?え?どうなってるんですか?」

「これは「無限収納」よ。バーサーム家に伝わる家宝の一つで、使用者の魔力に応じてどんなものでも無限に収納できる袋よ。私は魔力は少ないけど、リノスのＭＰは無尽蔵だから大抵のものは収納できるわね」

自分のステータスをチェックしてみると、ＭＰが３０ほど減っている。

「出すときは袋の中から牛を出すイメージすれば出てくるわ。お屋敷に帰るまでその袋、持っておくのよ。落としたり失くしたりしたら・・・わかってるわね？」

コクコクと頷く。怖ぇよ、エリルお嬢様。

森を出て、再び馬に乗って帰路につく。さすがに朝のように全力で馬を飛ばすようなことはなく、ゆっくりのんびりと屋敷までの道のりを帰った。

行きはエリルの腰に掴まることで精いっぱいだったが、帰り道は随分と余裕がある。エリルの腰に掴まっていると、意外にきれいな肌をしていることがわかる。外見は１０歳とはいえ、中身は３０代。スケベ心がムクムクと持ち上がってくる。

「本当にあんたって気持ち悪いわね」

うぇっ！俺の心を読みやがるのか！？

「１０歳でそれだけのスキルを身に付けるなんて、人間離れもいいところだわ」

エリル曰く、１０歳でＬＶ４のスキルを持っていること自体、ありえないことなのだという。

本来、ゼロからスキルを身に着けようとすると、真面目に修行しても５年はかかるのだという。そこからさらに５年ほどの修行を経て

ようやくＬＶ２。さらに上のレベルに至るには、そこからさらに１０年の歳月が必要とされる。さらにＬＶ４に至るには２０年、ＬＶ５は３０年の歳月がかかるとされている。つまり、全くスキルのない状態からＬＶ５に至るのには、約７０年の修行が必要になるのだそうだ。

稀に、スキルをもって生まれてくる者もいる。それはいわゆる「才能がある」ということであり、そういう者はスキルの上昇も比較的早いとされる。ちなみに、エリルも「剣術ＬＶ１」を持って生まれてきている。

そのエリルでさえ、一時は修行を休んでいたものの、ＬＶ４になるまで約２０年の歳月がかかっている。もっとも彼女の場合は剣聖の下で修業を始めてから飛躍的にスキルが伸びたのだという。実際ＬＶ２からＬＶ４までかかった期間は８年間である。

こうして見るとエリル自体も人間離れしているのだが。エリル曰く、「死にかけるとスキルは上がりやすい」のだそうだ。剣聖の下での修業が、どれほど過酷なものであったのか、容易に想像できる。

しかし俺とても、毎日毎日死ぬほどの修行をしてきたのだ。火に焼かれ、爆発に巻き込まれ、吹っ飛ばされ、真剣で切り刻まれてきたのだ。骨折など何度したかわからない。自分でも生きているのが不思議なくらいである。

「そりゃ私だって、何回も死にかけてます。だからスキルが上がるのが早いのかもしれません」

「そう？倒れたら直ぐにファルコが治療していたから、死ぬようなことはないと思ってたけど？」

いや、致命傷ですがな。完全に意識が飛んでたでしょうに。

俺がどれだけの怪我をし、治癒を重ねてきたのかを、噛んで含めるように説明して、ようやくエリルは納得してくれたのだった。

屋敷に着くと昼過ぎだった。俺たちが帰還したと聞いたファルコ師匠が、満面の笑みで屋敷から出てきた。そのあとから、エルザ夫人も姿を見せた。

「おーおーもう帰ってきたのか！ちゃんと魔物は狩れたんだろうな？ゴブリン1匹などと言いおったら、承知せんぞ？」

「リノス。ご苦労様でした。怪我はなさそうね？」

「はい、ご主人さま。大きな怪我を負うことなく帰還しました。師匠、ちゃんと魔物を狩ってきました」

「お嬢様に手伝ってもらったのではあるまいな？よし、では見せてみろ！」

「ファルコ、ここではなくて、庭の方がいいわね」

「そうですな。屋敷の前で魔物の死骸を出すわけにはいきませんな。よし、庭にいきましょう！」

そして、庭で狩った巨牛を取り出す。

「こっ、これはカースシャロレー！？」

「そうよ、私でさえ動きを止めるのが精いっぱいだったのに、リノスは一人で倒しちゃったのよ」

「カースシャロレーの動きを止めた？リノスは一人でそれを倒した？」

呆然とする師匠。後で聞いた話では、カースシャロレーを見たら全力で逃げろというのが一般的な常識なのだそうだ。討伐には王国軍が出動するレベルなのだそうで、これが群れをなして町を襲うと、強固な城壁を持たない町などは、あっという間に蹂躙されてしまう。それどころか、ひとつ対応を間違うと、軍隊ですらその勢いに飲まれてしまい、国が亡ぶほどの大災害になることもあるのだという。

「二人そろって化け物、失礼、凄まじい力ですな」

「化け物はリノスよ。私は全く歯が立たなかったのよ。まだまだ修行が足りないわ」

「それにしても、二人ともよく戻ってきました。ご苦労様でした。しかし、こんな大きな魔物、どうしましょうか？」

「叔母様、カースシャロレーの肉は絶品なのです。是非皆で食べましょう！」

エリルがとんでもないことを言い出す。エリルの剣でさえ弾いてしまう強力な皮を持っているのだ、解体ができるわけがない。

しかしそれは杞憂だった。カースシャロレーは肛門の周囲は皮が薄く、そこから皮を剥いでいき、あっという間に解体されてしまった。

メイド長兼コック長であるワラサさんと、その配下のメイドたちの手際の良さが職人レベルだったのを特筆しておく。そして、カースシャロレーの肉は、俺が前世の時代から見ても最も美味な味であったことを特に記しておく。肉も、内臓も、特級品の旨さであった。

第十二話　平穏な？日々・・・

ルノアの森で巨牛を狩ってから、俺の環境は少し変化した。

一番の変化は、部屋が替わったことである。模様替えをしたのではない。使用人用の離れの部屋から母屋に一部屋を与えられたのだ。

これまで屋敷の執事を勤めていたワイトンが、王宮に住むバーサーム侯爵の下に行くことになり、替わって俺が執事代行の職に就くようになったのだ。

いよいよ王太子の政権を盤石なものにするため、バーサーム侯爵は多忙を極めている。これまでは２週間に一度は屋敷に帰って来ていたが、現在では数か月に１度程度にまで減ってしまっている。そのため、身の回りを世話をするために、敏腕執事であるワイトンが王宮に投入された、というわけだ。

侯爵は既に６０歳を超える年齢である。平均寿命が５０歳のこの世界での６０代は、かなりの老齢である。エルザ夫人ともども、末永く息災であることを祈るのみである。

元、ワイトンの部屋は豪華である。広さはそう変わらないが、ベッドなど、天蓋付きである。映画以外で初めて見た。

さすがにベッドやシーツなどは自分で交換しないといけないし、基本的に身の回りのことは自分でやらないといけないのだが、これまでとは生活スタイルが一変した。

何故、こんな好待遇になったのか。理由は簡単である。俺の仕事が、執事代行以外にもう一つ増えたのだ。今の一番の仕事は

「屋敷全体に結界を張る」

基本的に殺意などの邪念を持った人間が入れないように結界を張っている。そのために、ご機嫌伺いに来た、とある貴族の使者などは門の中に入れず、門に一歩入った場所から激痛を訴えて動けない、という出来事もあった。

この使者、バーサーム家の動向を探りに来たスパイでもあったらしい。もっとも、わざわざ邪な心を隠しもしないでやってくる段階でスパイ失格なのだが。

「結界ＬＶ４」はかなり使えるスキルだった。俺だけでなく、他の人にも結界を張ることが可能なのだ。しかも遠隔操作が可能という優れものである。その結果、現在はエルザ夫人、バーサーム侯爵に俺の結界をかけている。近いうちに王太子にも結界をかける予定だ。さすがに、奴隷である俺が王宮に行くわけにもいかず、王太子がお忍びで王宮の外に出る必要があるのだが、なかなかその機会がなく、延び延びになっているのが現状だ。

また、修行内容もかなり変わった。これまで屋敷の庭であったものが、ルノアの森になったのだ。

基本的にエルザ夫人の護衛は、師匠、エリル、俺、の三人がローテーションを組んで行っている。師匠は、俺に対しては特に教えることはない、といって放任主義に徹している。お陰で俺は執事代行の仕事もこなせるようになっている。しかし、エリルはルノアの森に行きたがる。従って、俺が休みのときは、必然的にエリルに森に連

れていかれることになる。

ルノアの森は苛酷だ。一番の脅威は、エリルの食材への興味だ。

「ねぇ！このキノコ美味しそうじゃない？リノス、焼いてみてよ！」

「この果実キレイ！絶対に美味しいわよ！」

剣聖の下ではかなり粗食であったそうで、もともと「食べるの大好き」なエリルは巨牛の一件以来、食道楽に拍車がかかるようになった。

必然的に俺が調理を担当することになる。まあ火魔法が使えるのと、水魔法が使えるため、調理をすることは問題ないのだが、一番の問題は

「毒味役も兼ねている」

ことであった。エリルは俺が「美味しい」という食材しか食べない。当然、俺が食べて何ともない食材であることは言うまでもないことだが。

お陰で、最初はかなり毒物や麻痺毒のあるモノを食べた。ルノアの森の毒を持った植物の恐ろしいところは、無味・無臭なのだ。咀嚼して、飲み込んだ段階で毒や麻痺が有効になるようで、歩き出そうとした瞬間に血を吐いて倒れる、体に異常な湿疹が出る、体が痺れる、というようなことが何度もあった。ある時などは、目の前に大量のゴ〇ブリが湧いて出て、思わず絶叫して錯乱したこともあった。

そうした時はひたすら回復魔法をかけまくる。そんなことをしているうちに、こうした毒や麻痺に対する耐性が付くようになった。症

状は軽減されたのだが、なるべく、無味・無臭の食べ物は、顔をしかめてさも不味そうな顔して、吐き出すようにしている。

魔物も随分と狩った。さすがに、カースシャロレーのような魔物はあれ以来一度もお目にかからないが、バカでかい蜘蛛や大きなカマキリなど、かなりの種類を倒している。たまに肉薄されて強力な攻撃を受けることもあるが、今のところ俺の強力な結界のお陰で、戦闘における被害は皆無である。

気が付けば冬が終わり、春が来て、暑い夏が過ぎていった。俺は１１歳になっており、もうすぐ１２歳になろうとしていた。あと少しで、成人だ。

リノス（奴隷結界師・１１歳）
ＨＰ：１１２
ＭＰ：６３９
結界魔法　ＬＶ４（自分の思い通りの結界が張れる！他人にも結界付与が可能）
火魔法　ＬＶ３（炎の大きさや発射スピードが操作できるようになった！）
水魔法　ＬＶ２
土魔法　ＬＶ２（穴を掘ったり埋めたりすることがかなり早くできるようになった！）
回復魔法　ＬＶ４（欠損部分も治癒できる！）
生活魔法　ＬＶ１
詠唱　ＬＶ３
鑑定魔法　ＬＶ３
剣術　ＬＶ２
ＭＰ回復　ＬＶ３（３時間程度の休憩でＭＰが全回復する）
気配探知　ＬＶ３

魔力探知　ＬＶ３
魔力吸収　ＬＶ３
肉体強化　ＬＶ２
回避　ＬＶ２
行儀作法　ＬＶ１
教養　ＬＶ３
麻痺耐性　ＬＶ２
毒耐性　ＬＶ２
精神耐性　ＬＶ２

第十三話　ハイ、喜んで！ご注文承りました！

「リノス、ご主人様がお呼びです」

突然、エルザ様からお呼びがかかった。ハテ、何の用だろうと思いを巡らすが、何も思い当たることはない。しかし、エルザ様が俺を呼ぶ時は、必ず何らかの意味があることが多い。無暗に俺を使う人ではないのだ。

「ご主人様、リノスでございます」

コンコンと部屋の扉をノックし、到着を告げる。一呼吸の間があって

「入りなさい」

失礼しますと、エルザ様の部屋に入った俺は、予想外の出来事に絶句してしまった。何とそこに、王太子殿下がおられたのだ。殿下と目が合う。俺は我に返り、片膝をつく。

「こっ、これは失礼いたしました。ご無礼、ご容赦下さいませ」

「ああ、そんなに畏まる必要はない。今日はお忍びだから。立ってくれ」

「ハッ、恐れ入ります。それではご無礼致します」

「この度はリノスに、殿下が内々にお願いしたいことがあって、この屋敷にお渡りになりました。是非、あなたの力を貸して差し上げ

てちょうだい」

「勿体ないお言葉です。王太子殿下、ひいてはご主人様をお助けできることならば、何でもさせていただきます。不肖の身ですが、全身全霊を以て務めさせていただきます」

「本当に彼は１２歳かい？ここまで教育が行き届いているバーサーム家が恐ろしいね」

そう言って王太子殿下は俺を見る。この人、顔は笑っているが、目は笑っていない。こういう人物は要注意だ。敵と見なした人間には容赦がない。だからこそ俺はこの人に、過剰なまでの忠誠心を見せる。まあ、今のところ敵に回る気はサラサラないのだけど。

「本題に入ろう。君に頼みたいのは、黄金鳥だ。数は１００羽ほどだ」

黄金鳥・・・。ルノアの森の奥深くに生息する、黄金の嘴と羽を持つ首長鳥だ。一説には黄金を餌にしているとされ、その身は豊潤で柔らかく、鶏肉の中では最高の味わいを持つとされる。一個体自体はＦランクに分類される魔物であるが、警戒心が強く、しかも逃げ足が恐ろしく速く、その速度は光の速さに達するという。逃走に入った黄金鳥を捕まえるのは、ＬＶ５の神級の人間でも不可能とされる。その上その肉は足が速く、死んでから5分後には腐敗が始まり、１時間後には完全に腐ってしまう。そのため、黄金鳥の料理が食卓に上るのは皆無である。たまたま運よく見つけて狩る、というのが一般的で、一説には死期を悟った黄金鳥は、群れから離れて森の入り口付近に移るとされる。黄金鳥が狩られると、すぐさま解体されてその場で食べられるか、運よく「無限収納」を持つ者や、空間魔法の術者がいれば、腐敗をさせずに持ち帰ることもある。その時は

何十万Ｇの値段がつけられるのだという。そんな幻の鳥が１００羽である。かなり無茶な注文である。

「私の摂政就任に際して、就任式を行うことになった。その後、各貴族や諸国の使者を招いて晩餐会を行うことになっている。そのメインとして、黄金鳥の料理を出したいと思っているんだ」

「期限は2週間後だ。それ以上は待てないんだ。どうだい、やってくれないか？」

「これは殿下の御威光を示す絶好の機会なの。これが出来るのはリノス、あなたをおいて他にいないわ」

確かに、狩るのが極めて困難な黄金鳥を、しかも１００羽揃えるということは、それだけでとんでもない戦力を保持していることを暗に示すことが出来る。抑止力として見せるのは、打ってつけだろう。

「師匠ではダメなのでしょうか？」

「バカ者。儂が行けば数羽は狩れようが、大量に狩るのは無理だ。数羽狩ったところで逃げられて終わりだ。群れを見つけたところで、儂の火魔法では丸焦げになって終わりだ」

「師匠で無理ならば、弟子の私はさらに難しいと思いますが」

「得意の結界魔法があるだろう。黄金鳥の群れを見つけて、そいつらをまとめて結界で縛ってそのまま連れてくればよいのだ」

無茶ぶりも甚だしい。まず警戒心の強い黄金鳥の群れを見つけること自体が困難だし、仮に見つけてもかなり広範囲に結界を張らなけ

ればならない。結界がバレた瞬間に黄金鳥は消えてしまう。師匠の方法は、難しいだろう。う～ん、どうしたものか。

「大丈夫よ。リノスだったら何とかするわ。殿下、大船に乗った気持ちでお待ちください。黄金鳥１００羽、必ずお手元にお届けします」

エリル！いつの間にこの部屋に入ってきやがった？今、何ていったんだ？他人事だと思って勝手なこと吹いてんじゃねぇぞ！！

「うん、それを聞いて安心したよ。でも、腐敗した状態で持ってくるのはやめておくれよ」

「当然ですわ、殿下。バーサーム家には、「無限収納」がございます。その袋に入れてしまえば、腐ることはありませんわ」

「うん、私もそれがあるから先生に頼もうと思ったんだ」

「殿下、先生はおやめ下さい。エルザとお呼び捨てください」

「いや、私に真摯に意見をしてくれるのは、先生とバーサーム侯爵ぐらいだ。自分への戒めでもあるんだ。やっぱり先生と呼ばせてくれ」

「勿体のうございます」

俺以外の人たちの間で、穏やかな談笑が始まる。もう注文はお済ですか？俺に残された選択肢は、「ハイ、喜んで！」と返事をする以外残されていなさそうだ。

第十四話　黄金鳥をゲットせよ！

王太子殿下の無茶ぶりから二日後、俺は黄金鳥を狩るべく屋敷を出た。出発の前日、俺は再びエルザ様の部屋に呼び出された。

「今回は大変な任務を与えますが、何としても成功させてほしいの。頼むわね、リノス」

完全に退路を断たれた後、エルザ様から3つの装備品を与えられた。一つは下賜、二つは貸与、なのだが。

貸与されたのはバーサーム家の家宝だ。一つが言わずと知れた「無限収納」。もう一つが「千里鏡」。望遠鏡のようなものであり、魔力を通すと、魔力量に応じて遠方の景色がみられるというもので、それこそ俺の魔力では千里先まで見える代物だ。

そして下賜されたものは、黒色のフード付きのローブだ。以前俺が狩ったカースシャロレーの皮をなめして作ったものらしく。とても薄い生地だが、防刃性と防魔法性はかなりのものになる。俺の１２歳の成人のお祝いにと、エルザ様がわざわざ作らせたのだそうだ。もっとも俺には結界があるので使用することはないだろうが、ただの奴隷ごときにここまでの心配りがありがたい。エルザ様が手ずからくれた逸品である。大切にしようと思う。

ちなみに、千里鏡も試しに覗いてみた。湖の対岸にある屋敷に狙いを定めて魔力を込めると、運よく使用人同士が逢引している現場を見つけることが出来た。大チャンス！とばかり魔力をさらに込めてみたが、やりすぎたらしく、ピンク色の芋虫のような物体が見えた

かと思えば、同じような物体がぶつかり、グチャッと潰れていく場面が見えてしまい、思わずギャァ！と悲鳴を上げてしまったのは、ナイショの話である。

黄金鳥が狩れるまで、俺は帰還しない。狩の最中はＭＰをかなり消費するだろうとの師匠の助言により、現在かけている屋敷とエルザ様、バーサーム侯爵、王太子殿下の結界を解くことになった。さすがにそれでは危険、とのことで、俺が戻るまでの間は、師匠と共にエルザ様も王宮に入り、バーサーム侯爵の執務室で過ごすことになった。エリルは、当然屋敷の警備である。

屋敷を出た俺は、まず北門の城壁に向かった。城門の兵士に無理を言って城壁の上に上がると、そこからルノアの森がよく見える。

森に向けて丁寧に魔力感知を行う。黄金鳥は魔力こそ低いが、群れで行動しているので、小さな魔力が密集しているはずだ。そう考えながら探っていると、見つかった。城壁の前を流れる川を渡って、北東に約２０㎞。ルノア山脈の麓に魔力の塊がある。ゴブリンやオークの集落かと思ったが、どうも彼らの魔力とは質が違うようである。おそらくここであろうと当たりをつけ、俺は城壁を降りてルノアの森に入った。

森に入ってすぐ、人の気配を探知する。これはエリルだ。追いかけてきやがったな。

このまま撒こうとも思ったが、あとが面倒くさいので待つことにする。

「お屋敷の警備を放り出してしまって大丈夫なのですか？」

「大丈夫よ。メイドたちはあれでも優秀なのよ?まず、お屋敷で何かが起こることはないわ」

「本当ですか?」

「アラ、あなたが来る前までは、メイドが鎧を着て叔母様の警護をしていたのよ?だから大丈夫よ。それより黄金鳥よ!多めに狩って、私たちも食べるのよ!」

やっぱり食い気か・・・。仕方がないので、エリルも連れていくことにする。

エリルを連れて行ったのは、結果的に大成功だった。何せ、魔物が出るなり問答無用でブッた斬るのだ。その殺気と威圧感で、魔物の方から接触を避けるのである。コイツもかなり強くなっているようだ。

MPを節約する必要があるので、結界の運用も最小限だ。もっとも、結界を活用することは全くなかったのだが。

森で一夜を明かし、朝から注意深く歩き続けること数時間。ついに俺たちは黄金鳥の群れと思われる小さな魔力が集まる場所に到達した。あとは黄金鳥の姿を確認するだけだ。

警戒心が強い鳥とのことなので、万全を期してちょっと遠目から群れを観察する。エリルと共に木に登り、千里鏡を使って覗いてみる。

・・・いた!黄金の嘴と羽を持つ鳥が何十羽と木々の間に犇めいている。しかし範囲が広い。これを結界に閉じ込めてしまうと、他の魔物も巻き込む可能性がある。さて、どうしたものか・・・。

思案に暮れていると、一羽の黄金鳥がこちらに向かって飛んでくる。どうやらエサを探しているらしい。注意深く森の中を見ている。

「黄金鳥よ！！早く捕まえましょう！リノスが風魔法で落として、その下で私が止めを刺すわ」

「静かにしてください。そんなことしたら群れに気づかれますよ」

むーんと頬を膨らますエリル。おお、ちょっと可愛い。

俺たちに気付くことなく黄金鳥は近づいてくる。エサに気を取られている間に、素早く黄金鳥に結界を張る。退避行動を取る時に結界に衝突して死なれては困るので、鳥の形きっちりに収まる結界を作る。そして鳴き声が漏れないよう、結界を厚くしていく。そのまま俺たちは木から降りて、黄金鳥を閉じ込めた結界を手元に引き寄せる。

逃げようと必死にもがく黄金鳥。しかし体が動かないのでどうすることもできない。俺は少しずつ結界を薄くしていく。すると、黄金鳥の鳴き声が聞こえ始めた。

「キェーッ！！キエエエエエエエエエーッ！キキキェーーーーー！」

どうやら仲間に危機を知らせているらしい。これが群れに聞こえては不味い。俺は再び木に登り、群れを観察する。今のところ、群れに変化はない。まだ仲間が捕まったことを知らないようだ。

「ねぇ、この鳥どうするつもり？先に食べちゃう？それとも、この

鳥に群れまで案内させる？」

「いや、逃げられたら追いかけられませんよ。私に考えがあります」

黄金鳥の魔力を探る。先ほどの飛んでいる時に纏っていた魔力とは違う。どうやら魔力の質を変えることで仲間に情報を伝えているらしい。そうであれば、仲間に、ここが良い場所、素晴らしい場所だという情報を伝えれば、仲間の黄金鳥が集まるのではないか？そう考えた俺は、結界の中を黄金鳥が、居心地のいい空間になるよう作り変えていく。

温度や匂い、明るさや音、様々な環境を変化させ、あらゆるパターンを試してみること3時間。ついに黄金鳥の鳴き声が変わった。

「ピーヨロロロロロロロー。ピピーヨロロロロロロー。ピリリリリー」

よし、随分とリラックスしている。いや、リラックスしすぎているようにも見えるか。ともあれ、黄金鳥の「好み」は分かった。あとは仲間がこの声を聞いて飛んでくるかだ。

「お嬢様、黄金鳥の群れを呼びます。私がいいというまで、他の魔物が来たら撃退してください。お願いしますね？」

エリルは茫然と黄金鳥を見ている。結界の中でトロンとした目をしながら、嘴から涎を流しながら鳴き続けている黄金鳥にショックを受けているようだ。しばらくして俺の視線に気づいたエリルは、剣の柄に手を添えて臨戦態勢を取る。そして俺は、黄金鳥の結界を薄くして、鳴き声が遠くに響き渡るように調整をしていく。

結界内の黄金鳥が鳴き続けること数十分。ついに群れの一部が動い

た。おそらく斥候部隊なのだろう。数羽の群れがこちらに向かって飛んでくる。そして、鳴き続けている黄金鳥の近くに降りてくる。その瞬間、俺はそれらの黄金鳥を素早く結界に閉じ込めて、鳴き続けている鳥と同じ環境を作る。しばらくするとこの黄金鳥たちも

「ピーヨロロロロロロロー。ピピーヨロロロロロロー。ピリリリリー」

と鳴き始めた。数が多いのでかなりの音量だ。しばらくすると今度は、群れの大半がこちらに移動してるのが感じ取れた。こうなってはこちらは大忙しである。片っ端から結界に閉じ込めて環境を作る、という作業を繰り返していく。どのような結界を作るのかがわかってしまえばイメージがしやすい。ほぼ流れ作業だ。黄金鳥はまさか仲間が捕らえられているとは思わずに、気持ちよく鳴き続ける仲間を観察している間に、気が付けば自分も捕えられていく。そうして俺は、瞬く間に数百羽の黄金鳥を捕らえた。

さすがに群れを全滅させてしまうと、種の絶滅を招きかねないので、およそ１００羽は逃がしてあげた。夢から覚めた黄金鳥は本当に一瞬でいなくなった。キラリと光ってスッと消える。そんな見事な逃走劇だった。

そしてエリルは捕らえた黄金鳥を早速試食し始めた。首を落とし、血を抜き、羽を毟る。ものの数分でそれを完了させ、俺に丸焼きを作るように催促してきた。言われるがまま俺は黄金鳥の丸焼きを作る。調味料は何もないのだが、食べてみるとマジで美味い。ジューシーで、濃厚な旨味が口いっぱいに広がり、いくらでも食べられた。俺とエリルは、黄金鳥の鳴き声の中、数十羽を瞬く間に平らげたのだった。しかも、嘴の中に金を含んでいる個体もあり、ゲットした金はありがたくいただくことにした。

結界に閉じ込めた大量の黄金鳥であるが、さしもの「無限収納」も生き物は収納できず、今回はこいつを使うことはできなかった。お蔭で俺は、数百羽の黄金鳥を運ぶハメになったのだ。鳴き声がうるさいので、眠らせる。その間にエリルは一旦屋敷に帰り、荷馬車を仕立てて戻り、黄金鳥を全て運び込むという離れ業をやってのけた。一度歩いた道は絶対に忘れない特技があるとはいえ、屋敷との往復、しかも森の中を荷台付きの馬で走るという悪条件にもかかわらず、わずか8時間で輸送を完了させたエリルを、俺は心から尊敬したのだった。

幻の鳥が数百羽も運び込まれたバーサーム家と王宮は大騒ぎとなり、俺は晩餐会まで黄金鳥の世話に四苦八苦することになる。

当然ながら、晩餐会は大成功に終わり、王太子殿下とバーサーム侯爵は、大いに自らの権威を高めることに成功したのだった。

ちなみに、王宮内において黄金鳥を調理する際に見つかった金については、その半分がバーサーム家に下賜された。そして、エルザ様は迷うことなくその全てを俺に下賜された。その数、１１２個。日本円にして約１億円である。１２歳の奴隷であるにもかかわらず俺は、大金持ちになったのであった。

第十五話　大人になったらいろいろあるのよ

１２歳になった。俺もいよいよ成人である。

こちらの世界では、１２歳の誕生日は盛大にお祝いをするらしい。

しかし、俺は奴隷である。そんな祝い事とは無縁である。

とはいえ、メイドのお姉さまたちからはお祝いの言葉を贈られ、腕によりをかけたご馳走を、わざわざ俺のために作ってくれたのだ。

これはさすがの俺も感動した。彼女たちに泣きながらお礼を言った後、完全にツボにはまってしまって泣き止めず、なかなか料理に手を付けない俺に業を煮やしたお姉さまたちから怒りの鉄拳も振る舞われたことは、ここだけの話である。

ある夜、エルザ様の食事が終わった頃を見計らって、王太子殿下が突然お見えになった。この殿下の登場はいつも出し抜けだ。多忙で王宮をなかなか抜けられないためか、暇ができると思い立ったかのようにバーサーム家を訪れる。もっとも、エルザ様が不在の時はお見えにならないため、一応、エルザ様の在宅は確認しているようだが。

摂政就任以来、この殿下のお渡りはかなり少なくなった。余程政務が忙しいのだろう。そういえば、ここ最近、バーサーム侯爵の姿も見かけない。

殿下の就任式は盛大だった。王都は着飾った王国軍１０万が厳重な警備を敷いていたので、些か緊張感の半端ない物々しい雰囲気でもあったのだが。

「いや、久しぶりだね。君が成人を迎えたと聞いて、祝いの言葉を贈りに来たよ」

「もったいのうございます、殿下。この奴隷にそのようなお言葉をいただくなど」

「いや、私にとって君は恩人だからね。このくらいのことは当然だよ」

摂政就任の晩餐会では、生きた状態の３０羽の黄金鳥を見せたのだ。幻の鳥が生き生きと鳴き、飛び交う様子は、参加した人々のド肝を抜いた。当然それは、俺が巨大な結界を張り、その中を黄金鳥が気に入る雰囲気に作り替えていたためにできたことであるのだが。

「リノス、私からも祝いを贈ります」

エルザ様から一枚のカードが渡される。

「西門へ通じる関所への通行手形です。これからは自由に街に出入りすることを許可します」

王都は約１００万人の人口を抱える巨大都市である。西門を中心とする西地域は庶民が居住する区画であり、商業地域と住宅地域が存在する。俺が最初王都に連れてこられたのも西門であり、俺を仕入れた奴隷商も西区域だ。東側地域は貴族の屋敷が並ぶ区域であり、北門と南門付近には王国軍関係者の屋敷が並ぶ地域だ。

貴族屋敷に通じる北門と南門には関所が設けられ、東地域へは許可書がないと通行できない。当然王都の東門は、最も堅牢な作りにな

っており、余程の慶事がない限り基本的に開かれることはない。最近では、殿下の摂政就任式が行われた時に開かれた。これでも約２０年ぶりだったという。

「リノス！今度儂が街へ連れて行ってやろう！」

ご機嫌の師匠である。師匠が遊びに行くというと・・・アレか。もう、１２歳で大人の階段を登っちゃいますか？？

「ただし、門限を設けます。日暮れまでには必ず屋敷に帰ること。それ以降の外出は、必ず私に許可を取るようにして頂戴。ファルコもエリルも、わかったわね」

二人は何とも言えない顔をしている。まだまだ俺はお子ちゃまでいたいのだ。

「私は王宮の大手門から外に出たことがない。この屋敷とて、門の外には出してくれそうにないだろうから、自由に動けるリノスは、うらやましいな」

確かに、殿下は基本的には外出できない。湖を渡ってバーサーム家の屋敷に来ることも、かなりきわどいのだ。もっとも王宮は１０万の兵士が余裕で収容できるくらいに広いので、本来は、わざわざ王宮の外に出ることもないのだそうだ。

「そしてリノスには、もう一つ仕事を任せたいと思います。当家の宝物庫の管理です」

歴史あるバーサーム家には数多くのお宝がある。特に初代バーサーム公が着用していた武器・防具は国宝級であり、凄まじい力を秘め

ていると言われる。

「宝物庫の開錠方法は、あとで伝えます。かなり複雑だけれど、貴方なら大丈夫よ」

「バーサーム家の宝物庫の管理者か。彼ならば、まず盗まれることはないだろうね。適任だ。しかしそれでは私の祝いが無駄になりそうだ」

「そんなことありませんわ。殿下のご慈悲が無駄になるなどあるはずがございません」

「うん、先生にそう言ってもらえると安心するね。いや、祝いというより、バーサーム家に対してのお願い、かな？」

また無理難題を仰せになるのだろうか。どうせ拒否権はないだろうし、結局やることになるのだろうが。いや、バーサーム家と言ったよね？俺は関係ないってことかな？

「当家に対してお願いなどと・・・。遠慮なくお命じ下さいませ」

「リノスの奴隷身分を解放して欲しい。」

おおっ！俺の身分を解放してくれるとは！！殿下、アンタはエライ！

「そしてリノスをバーサーム家の養子に迎え、その後に宮廷結界師として私の下に寄越してほしい」

・・・は？バーサーム家の養子？宮廷結界師？一体何がどうなっているんだ？

「リノスの結界師としての実力は超一流だ。魔力量も人並み外れている。リノスにはこの国の『大いなる盾』になってもらおうと思っているのだよ」

「ありがたいお話でございます殿下。しかしそれは、私の一存では決めかねます。一度、主人と相談の上、お返事をしたく存じます」

「まあ、急がないので、返事はゆっくりでいい。いきなりリノスを王宮内に迎えるわけにもいかないからね。早くても2年は先になるね。その間、侯爵と先生でよく話をしてみてほしい」

「畏まりました」

「新しい宮廷魔術師の名前はもう、決めてあるんだ。「バーサーム・ダーケ・リノス」どうだい、いい名前だろう?」

ご満悦の王太子摂政殿下。この話、俺の意志が全く反映されていないのですが、大丈夫でしょうか。平穏に暮らせる人生がいいんだけどなぁ・・・。

リノス（奴隷結界師・１２歳）
ＨＰ：１６８
ＭＰ：８５９
結界魔法　ＬＶ４（自分の思い通りの結界が張れる！他人にも結界付与が可能）
火魔法　ＬＶ３（炎の大きさや発射スピードが操作できるようになった！）
水魔法　ＬＶ２
土魔法　ＬＶ２（穴を掘ったり埋めたりすることがかなり早くで

きるようになった！）
回復魔法　ＬＶ４（欠損部分も治癒できる！）
生活魔法　ＬＶ１
詠唱　ＬＶ３
鑑定魔法　ＬＶ３
剣術　ＬＶ２
ＭＰ回復　ＬＶ３（３時間程度の休憩でＭＰが全回復する）
気配探知　ＬＶ３
魔力探知　ＬＶ３
魔力吸収　ＬＶ３
肉体強化　ＬＶ２
回避　ＬＶ３（結界がなくてもエリルの攻撃は躱せます！）
行儀作法　ＬＶ２（洗練された動きができるようになりました。マドモワゼール？）
教養　ＬＶ３
麻痺耐性　ＬＶ２
毒耐性　ＬＶ２
精神耐性　ＬＶ３

第十六話　１４歳の転機

成人から2年、俺は１４歳になっていた。

いよいよ俺は、王宮結界師として仕官することになるらしい。現在の王宮結界師が近いうちに引退することになるのだ。

バーサーム家では俄かに慌ただしさが増しつつある。エルザ様が王宮に行くことが増えたのだ。先日など何の連絡もなく5日間も帰らなかった。さすがに心配になって王宮の大手門まで何度も迎えに行き、警備の兵士に笑われたくらいだ。

見かねた兵士が大手門の傍にある小門を開いて見せてくれた。大手門から真っすぐに王宮に向かって広い大きな石でできた橋が掛けられており、橋の遥か先に見える王宮は美しかった。

王宮に入ってしまうと、なかなか外には出られなくなるだろう。そう思った俺は、暇を見つけては西地区に出かけていき、様々な商店を物色している。

色々と珍しい食材や武器や防具があり、なかなか楽しい。黄金鳥で稼いだお金が手付かずであるので、買おうと思えば大抵のものは買える。しかし、今の俺にはほとんど必要ないものばかりだ。ちょっとレストラン風の店で飯を食うくらいだ。

奴隷商も見に行った。店の中は見ることができなかった。気配探知で探ってみたら、２０人ほどが中にいるようだが、誰が誰かはわからない。一緒に連れてこられた女の子たちはどうしているだろうか

？生きていれば、みんな成人しているはずだ。

一時は疎遠になりつつあった森への狩りも、最近は行くようになった。もちろんエリルも一緒だ。何だかんだで一緒に修行した仲間であり、俺にとっては姉のような人である。王宮に入るとエリルともなかなか会えないだろう。自由な時間があるうちに、思い出を作っておきたかったのだ。

・・・その日は、エルザ様がいつものように王宮に出かける日であった。エルザ様と護衛のファルコ師匠乗った馬車を見送るとエリルが狩りに行きたいと言い出した。

久しぶりに大物でも狩りましょうと、運動がてら、森に行くことにする。ここ数年で俺も馬に乗れるようになった。まだまだエリルの腕には敵わないものの、かなりの腕前になったと自負している。

二人で馬を並べて北門に向かって移動する。門を出て橋を渡るとすぐ森である。馬に乗れないときはよく、エリルの背中にしがみついていたものだが、最近はそれもなくなった。今、後ろに乗せてくれとお願いしたら、エリルは乗せてくれるだろうか？

そんなことを考えながら、気ままに狩りをつづけること数時間、気が付けばお昼だ。

「お腹がすいたわね」

「今日は私が作ります。街で小豆と砂糖を手に入れました。ちゃーんと塩もあります。お嬢様、楽しみにしておいてください」

「は？何を作る気？時間がかかる？いやよ、お弁当を出してよ」

ぜんざいを作ろうと思っていたのだが、拒否られてしまった。仕方なくお弁当を出して食べ始める。

「ぜんざい？甘いの？へぇー美味しそうね。じゃあ早めに出発しましょう。お屋敷に帰って作ってよ！」

せっかく出した小豆らを無限収納に入れていく。この無限収納と千里鏡は狩りの時の必須アイテムだ。すばらしいアイテムである。

お屋敷に帰還するべく、馬に乗って移動する。森の出口付近に来ると不意に馬が立ち止まる。その直後、

「ドーン！」
「ドーーン！！」
「ドーーーン！！！」

何かが爆発する音が聞こえる。エリルと俺は顔を見合わせ、森の出口に急ぐ。森を抜けてすぐ、俺たちの目に飛び込んできたのは、王国軍によって完全に北門が封鎖されている光景だった。

またしても爆発音が起こる。音の方向に目を向けると、そこには、おびただしい数のワイバーンが王宮を襲っている姿が見えた。

「ワイバーン！？何で！？王宮が、王宮が危ない！！」

驚愕の表情を浮かべて絶叫するエリル。王国軍が北門を封鎖しているのはこのためか。しかし、王宮に攻め込まれているのはまずい。

呆然とする俺たちに、北門を封鎖している王国軍の中から一人の兵

隊がこちらに向かってくる。

「リノス殿とエリル殿ですね。王宮は我らが占領しました。我が主がお二人をお呼びです」

第十七話　王都反乱

「せっ、占領？まさか、王国軍が反乱を起こしたというの？」

「反乱、とは乱暴ですな。王国の未来を憂う者たちが、国を正しき道に戻すために起こした、崇高な行動であるというのに」

「首謀者は誰？まさか、カルギ将軍が・・・」

「貴方とおしゃべりをするために来たのではありません。我々が真に求めるのは、その結界師殿です。リノス殿、あなたは主より丁重に王宮までお連れしろと厳命されています。エリル殿、主はあなたもお連れしろとお命じになりましたが、「生きて」とはお命じになりませんでした。抵抗する場合は、非情なる手段を取ることもさし許す、と。首を持ち帰ればそれでよい、とも仰いました」

「私は奴隷の身分です。あなたも主人の命を受けておられるのであれば、私も主人の命なくして他者の招きに応じることは出来ません」

「ご心配なく。お連れするのは、バーサーム夫婦の所です。身柄は我々で拘束しています。奴隷は主のもとに帰らねばならないのでは？確か・・・日暮れまでには帰れと命じられているのではないですか？」

「あなた方がご主人様の身柄を確保している、その証拠をお見せ願いたい」

男はフッと笑い、従者であろうもう一人の兵士から布包みを受け取

り、それを無造作に俺に投げた。

布包みを開けてみる。入っていたのは・・・二本の腕。ひじの部分から切り落とされた二本の腕だった。俺にはその腕に、見覚えがある。

「まっ、まさか！」

「ご推察のとおり、大魔導士ファルコの腕です」

血で汚れてはいるが、服の柄は師匠が身に着けていたローブと同じものだ。そして何より、手にはめられている指輪が、師匠の愛用品である「ドクロの金指輪」だったのだ。

「きっ、貴様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

素早く抜剣したエリルが男に斬りつける。高速の斬撃だが、男はいとも簡単にそれを躱した。かなりの手練れだ。俺はその男のステータスを鑑定する。

ルクア・マドイセン（剣豪・４１歳）
ＨＰ：８２２
ＭＰ：１０３
剣術　　ＬＶ４
居合い　ＬＶ４
肉体回復　ＬＶ４
肉体強化　ＬＶ４
回避　　ＬＶ４
高速剣舞　ＬＶ３
心眼　　ＬＶ４

呪い　　ＬＶ２

エリルを超える化け物だ。エリルの高速の斬撃を、抜剣もせずに躱し続けている。

「剣筋はいい。しかし惜しいな。もっと修業を積んでいればもう少しまともに戦えたろうに」

マドイセンが剣の柄に手をかけた瞬間、エリルは斬られていた。

「・・・やはり、結界を張られていましたか。破れぬことはないが・・・時間の無駄ですね。よろしい。エリル殿、あなたも丁重にお連れすることとしましょう」

「私が、いやだと言ったら？」

「バーサーム夫婦とファルコ師、そして摂政殿下が死ぬだけです」

「フッ、ファルコは・・・でも、叔母様たちと摂政殿下は、リノスの結界に守られているわ！貴方たちでは殺せないわ！」

「餓死させます」

「は？」

「水も食料も与えず放置すれば、自ずと死ぬでしょう。いかに結界が強力とはいえ、飲まず食わずでは数日と持ちますまい。私と共に主のもとに来ていただければ、あの者たちには苦しまぬ楽な死が。逃亡するのであれば、激しい苦痛に苛まれながら死を迎えることになります。私はどちらでも構いません」

「それでもあなたは人間なの!?国家の大功労者に何ということを!!あなたを道連れにしてでも・・・」

「お嬢様、マドイセンさんの言う通り、一緒に参りましょう」

「なっ!リノス!あなたはこんな奴らの軍門に下るというの!?」

「ご主人様と摂政殿下が心配です。何よりファルコ師匠は両腕を切り落とされています。早く師匠の下に向かわねば、本当に死んでしまいます。」

「・・・わかったわ。」

「さすが結界師殿は話が分かる。さあ、参りましょうか。主がお待ちかねです」

「一つだけお願いがあります。我が主人と、我が師匠、そして願わくば摂政殿下に会わせていただきたい」

「ええ、それは構いません。必ずご案内いたしましょう」

北門を入ると、馬車が用意されており、俺たちはそこに乗り込んだ。急ぐわけでもなく、ただ淡々と馬車は王宮の大手門に向けて走り始めた。

馬車の前後は多くの兵士で固められているが、中は俺とエリルの二人きりだ。エリルはずっと外を見ていて、俺を見ない。かける言葉が見つからず、エリルをじっと見る。

・・・エリルは泣いていた。俺に気付かれぬよう、声を殺して泣いていた。俺は思わずエリルの手を握った。

「大丈夫です、お嬢様。敵の狙いは私です。私の身柄との交換を条件に、ご主人様の命を助けるのです。反乱軍の首謀者と話をしてみましょう。やれることを、やりましょう」

「うう・・・リノス・・・。ヒック、ヒック、ヒック」

堰を切ったようにエリルの目から涙が零れ落ちる。痛いくらいに握りしめるエリルの力が、その悲しみと悔しさの大きさを物語っていた。

馬車はゆっくりと大手門に向かって走り続けた。

第十八話　王都反乱②

エリルの手を握りながら俺は馬車の外を見る。

一見するといつもと変わらぬ貴族屋敷が立ち並ぶ風景だが、一つ異質なことがある。それは、血の匂いがすることだ。

各屋敷の前には、王国軍、現在は反乱軍の兵士が警護に当たっている。おそらく摂政殿下派の貴族屋敷は襲撃され、抵抗する多くの者が討たれたのだろう。反乱軍に王都が占領されているのにもかかわらず、王都東地区の貴族屋敷区画は、静寂に包まれていた。

およそ1時間をかけて大手門に着く。既に日が西に傾きつつあった。馬車を降りると、大手門の前は民衆と兵士で大混乱になっており、すさまじい罵声と怒号が飛び交っていた。

そんな中、王城の屋根に止まっていたワイバーンの一部がこちらに向かって飛んでくる。そして咆哮を上げながら大手門の前に降り立った。あれだけの喧騒が、嘘のようにシンとなる。

それを合図に、大手門の上に数人が現れ、そのうちの一人である、銀髪の大男が叫ぶ

「聞け！民衆よ！我はジュカ王国元帥、シゲア・カルギである！この度、我ら王国軍は、政治腐敗の元凶たる国王とその側近を廃し、新たな王国を建国することとした！腐敗し、堕落しきった国を滅し、真の強国に生まれ変わるのだ！真の強国に生まれ変わるために必要な物は、血だ！流された血によって国は強く生まれ変わる。まずは

この国の腐敗の元凶となった者たちを血祭りにあげ、強国への一歩を踏み出そうぞ！」

兵士から歓声が上がる。それを合図に、大手門の左右の壁の上に多くの人が現れた。どうやら兵士に引きずり出されているようだ。男性女性、子供たちまでいる。どの人も豪華な衣装を纏っているので、おそらく、王宮内にいた王族なのだろう。狂ったように叫び声を上げている貴婦人もいるが、兵士に殴られて、大人しくさせられている。その中で、兵士に押さえつけられながらも、ひときわ大声で叫び続ける男性がいた。

「誰かカルギを殺せ！殺すのだ！朕をこのように！！許さん！誰ぞ！討て！トスカ！サイオ！何をしておる！！この者たちを討つのだ！！」

おそらく、これが国王なのだろう。でっぷりと肥った、ブタのような体。品性の欠片も感じない欲望が丸出しの顔。しかも素っ裸だ。そして、その傍らには、これもまた一糸まとわぬ裸体を晒している４人の少女がいた。おそらく同衾中に襲われ、そのまま大手門まで連れてこられたのだろう。少女たちは足を閉じ、体を捩じり裸体を隠しながら、じっと俯いている。

そんな国王を侮蔑しきった目で見ていたカルギは、おもむろに右手を上げた。すると兵士は無造作に王族たちを城壁の下に突き落とした。絶叫と悲鳴が交錯する。地面に叩きつけられた人々は、ある者は死を迎え、ある者は意識を失い、不運なものは身動きのできない怪我を負った。その人たちをワイバーンが貪り食う。王宮の屋根に止まっていたワイバーンもこちらにやってきて、貪り食っている。まさに阿鼻叫喚の地獄絵図だ。

再び城壁の上に人々が並べられる。おそらく、反対派の貴族たちなのだろう。倒れて動けない人もいた。その人たちも、カルギの無慈悲な合図で地面に突き落とされる。そして、全員がワイバーンの餌食になった。

そこら辺に血と肉片をまき散らして、ワイバーンは再び王宮の屋根に飛び立っていった。そして、大手門が開かれ、中からバーサーム侯爵、エルザ夫人、両腕を失ったファルコ師匠、摂政殿下の４人が連れ出された。

「結界師、リノスはいるか！いるのであれば、こちらに出てくるのだ！」

「リノス殿、我が主がお呼びです。あなたの御主人もおいでです。どうぞお進みください」

ニヤニヤと笑いながら俺に話しかけてくるマドイセン。一瞥もくれることなく静かに、俺は進み出る。後ろからエリルも付いてくる。

「おっ、おおぅ、エリルではないか！これは僥倖！おっ、お前は儂がもらう。げっ元帥、エリルは儂がもらう。文句ないであろう？ほんによい体をしておる。その乳、その尻。体中を舐めまわしてやるわ。ヒヒヒヒヒ」

カルギの隣にいた、細身の男が下卑た笑いをエリルに向ける。エリルは「クソ公爵・・・」と睨みつけている。どうやらこの男が、王弟であるヒーラ公爵のようだ。

「お前がリノスか。こやつらの結界を張っているのは、お主か？斬ろうと思ったが、全く斬れん。良い腕だ。気に入ったぞ。お前は今

日から我が傍に仕え、我らの盾として働くのだ」

「わかりました。しかし条件があります。我が主人とバーサーム侯爵、エリルお嬢様、とファルコ師匠、そして摂政殿下を解放していただきたい。それが受け入れられるなら」

「身の程をわきまえんかぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

カルギが激高している。

「奴隷の分際で付けあがりおって！お前は捕らわれの身なのだ。我が命に従うか、死か、そのどちらかしかないのだ！大人しく従えば、お前の命だけは助けてやる。それだけのことだ！こやつらは、殺す！」

結界を張っている3人は縛られて、跪いてはいるが、目立った外傷は見られない。心配なのはファルコ師匠だ。血は止まっているようだが、ガックリとうなだれたままピクリとも動かない。気配は消えていないため、ギリギリのところで生きているのだろう。一刻も早く回復魔法をかけねばならない。一応、師匠にも結界を張っておく。

「お前には聞かねばならぬことがある。バーサーム家の宝物庫の解除方法を言え」

「では、せめて師匠ファルコの傷の手当てをしていただきたい。師が死ねば、私は喋りません」

「やはりお前は自分の立場をわかっておらんのだな。おいシェン、やれ！」

すっとカルギの隣に、男が現れる。それは、俺も予想だにしなかった、意外な男だった

第十九話　王都反乱③

「なっ、なぜあなたがそこにいるのです?」

動揺を隠せない。本来いてはならぬ人が、よりにもよって王国軍の鎧を着て、カルギの隣に立っているのだ。

「なぜ!どうしてなの!なんであなたがそこにいるのよ!」

エリルもかなり動揺している。

現れたのは、執事のワイトンだった。物腰柔らかく、何事につけソツのない仕事ぶり。俺もこの人に何度助けられたかわからない。その有能ぶりは誰からも信頼されていた。だからこそ、王宮内のバーサーム侯爵の下に彼を派遣していたのだ。

「久しいですな、リノス殿、エリル殿」

「ワイトンさん、なぜ・・・」

「私はカルギ将軍の部下にして、王国軍諜報部隊の中佐をしております、シェン・ワイトンと申します。バーサーム家には、１０年活動を行いましたか。まあ、身分を明かしてしまったので、もう諜報部隊には居られませんが」

「ハハハ、ワイトン、心配するな。お前は2階級特進で本日から少将だ」

「ありがとうございます、元帥。いや、陛下とお呼びした方がよろしいでしょうか？」

「いや、元帥でいい。この王国の王はヒーラー様だ。しばらくは、な」

二人して笑い合う。こんなことが起こっていいのか。俺は平常心を保てないでいる。

「では、ワイトン。あの者に吐かせろ。できるな？」

「もちろんです。リノスよ、跪け」

突然俺の体が跪き、そのまま動かなくなる。一体何をした？

「リノスの奴隷管理者に私も追加しました。苦労しました。ここまで信頼を得るのに。彼が屋敷に結界を張ってしまったので私が入ることが出来なくなって、それで王宮でしか活動できなくなったのです。しかし、それが逆に幸いしましたが」

バーサーム家に対して邪な心を持っていたとは・・・。だからいきなり王宮に行ったのか。

「さて、リノスよ。答えるのだ。バーサーム家の地下宝物庫を開錠する、合言葉を答えよ」

「・・・あ、ぐっ、こと・・・」

「答えるのだ、リノス」

「ア、イ、コ、トバ・・・ハ、ワ・・・カリ・・・マセン」

「答えよ。バーサーム家の地下宝物庫を開錠する、合言葉だ！」

「ア、イ、コ、ト、バ、ハ、ワ、カ、リ、マ、セ、ン」

「騙したのだな！夫人！ええぃ！殺せ！殺すのだ！」

「リノス、結界を解除せよ」

俺の意思に反して、結界が全て解除される。その直後、俺の目の前の４人の体に剣が突き立てられた。動くことも、言葉を発することもできない。動け、動いてくれ、頼む！

「これでリノスの奴隷者としての所有権は私に移ります。ほどなく権限は元帥に・・・」

「ペアン」

小さな、しかしはっきりした声が聞こえる。エルザ様の声だ。口から血を出しながら、しかし、微笑みをたたえた顔で、エルザ様は崩れ落ちた。

その瞬間、俺の頭に「パキン」という音が鳴る。そして、頭がすっきりしていく。ああ、いつ以来だろうこんな爽快な気持ちになったのは。そして、体が動いた。

急いでエルザ様の下に駆け寄る。既にこと切れているが、エクストラヒールを続けてかける。傷はふさがったが、心臓は止まったままだ。ダメだ、ダメですよご主人様。

「もう、自由に生きていいのよ」

そんな声が聞こえた気がした。エルザ様だ。きっと、エルザ様だ。最後の言葉は、俺を縛る奴隷魔法を解除するものだったのだ。

俺はあふれる涙を拭おうともせず、師匠に、侯爵に、殿下にエクストラヒールをかける。しかし、誰も反応がない。どうしていいのかわからない。俺は茫然と立ち尽くす。

「叔母様の敵ィィィィーーーー！」

ものすごい速さで俺の横をすり抜けていく。エリルだ。大手門に向かって、全力で駆け抜けている。俺はハッと我に返る。そうだ、まずはここから脱出しないと。エリルを守らねばならない。

大手門に肉薄するエリル。援護射撃の魔法を打とうとしたその時、巨大な影がエリルの姿を捕らえた。一瞬、エリルの姿が消える。

目の前には、エリルの腹に噛みついている、巨大な首長竜の姿があった。１０メートルはあろうかという巨体。そして巨大な牙。エリルの目には、既に光がない。

そのまま首長竜はエリルを口の中に放り込み、ボリボリと咀嚼を始めた。そしてぐるん、と鎌首をもたげたかと思うと、口の中が赤く光り、強烈なブレスを俺に吐き出した。

反射的に結界を張る。しかしその威力はすさまじく。俺は王宮から少し離れた南門の城壁の上まで飛ばされてしまった。ブレスの炎は民衆の一部も巻き込んだようで、ブレスの跡には何もなく、その周

囲には焼け焦げた人間が数多く散らばっていた。

首長竜は、ファルコ師匠、摂政殿下、侯爵と次々にその体を食べ、最後に最も小柄なエルザ様を貪り食った。

「ハッハッハ！お前だけはまだ、エサを与えていなかったな。許せ。それだけではまだ食い足りんだろう？王宮内には兵隊が８万ほど詰めている。その兵隊たちを食べるか？１０人くらいであれば何ということもない。何なら、あそこにいる結界師も食って構わんぞ？ただし、かなり歯ごたえがあるがな」

ぶわっ、と上空に浮き上がる首長竜。

・・・俺の中で何かがはじけた。

「おンのれぇらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！！！」

いつ以来だろう、こんなに怒ったのは。いや、前世から見ても、初めてかもしれねぇ。とにかく殺す。俺の大事なものを、家族を殺しやがった奴らは、全員殺す。殺す殺す殺す

俺のＭＰを全て使うつもりで作った、最高硬度の結界だ。大手門が砕け、城壁が砕け、貴族屋敷が次々と砕けていく。そして王宮も次々に砕けていく。屋根に止まっていたワイバーンも全て巻き込まれていく。

結界の規模が小さくなればなるほど、建物を砕けば砕くほど、俺の力が増していっているように感じる。力が湧き上がってくる。いくらでもいけそうだ。もう俺は悪魔になっているのかもしれない。でも、それでもかまわない。俺の憎むべき者たちが全てこの世から消え去るのなら・・・。

結界は限界までいったと見えて、収縮しなくなった。結界を解いてみると、王宮のあった場所には、巨大な岩が出現していた。建物、人、調度品や生活用品、食料・・・あらゆるものを集約した、一つの巨大な岩である。

この日、ジュカ王国は消滅し、国家として歴史を刻むことは、二度となかった。

第二十話　カルギ元帥

シゲア・カルギ。６８歳。ジュカ王国軍の将軍であり、「元帥」の称号を持つ歴戦の戦士である。

「お爺様のようにおなりなさい。軍人たるものは、決して負けていけません。敗北は死です」

大好きなお婆様は毎日、こう言い聞かせた。敗北は死・・・。子供心に、この言葉は強く残った。

カルギが生まれたシゲア家は代々、王国騎士として国王に仕えてきた家系である。カルギの祖父は、ルノアの森から大量発生した魔物を、少数の精鋭部隊を率いて見事に討伐を果たした英雄である。

そんな祖父がカルギは大好きだった。大きな体をゆすりながら豪快に笑う愛嬌のある一方で、一たび剣を握れば鬼神のごとく敵を打ち倒していく。そんな祖父の膝に抱かれ、照れくさそうに語る自身の武勇伝を聞く時間が、何よりも好きだった。

そんな英雄も、人生の終焉を迎える。病を得、屈強な体は見る影もなくやせ細り、苦しそうな咳をしながら病床に伏せる祖父。そしていよいよ臨終というその時、カルギに優しく微笑みかけながら、「強く生きよ」と言い残してこの世を去ったのだ。

あの強かった祖父でも死ぬのだ。わずか６歳だったカルギは、「死」というものを異常に恐れるようになった。

死なないようにするためにはどうすればいい？そんなことを考える毎日が続いた。そして、祖父の1周忌が行われたその日、カルギは祖父の遺言を思い出した。

「強く生きよ」

お爺様は弱かったのだ。お婆様は敗北は死と仰った。弱かったので死んだ。だから、強くなければならない。強ければ、死ぬことはない。わずか7歳のカルギは、そう決意した。

王立学校に入ってからのカルギは、常にトップであり続けた。剣をふるえば上級生にも負けず、魔物狩りでの模擬戦では、誰よりも魔物を狩った。

加えてカルギには、一つの才能があった。人を育てるのが上手だったのだ。一目見ると、この人は自分の役に立つのか立たないのかが、何となくわかった。役に立つ、と判断した人間に対しては、様々に手を貸した。自分よりできる人間に対してはその才能を褒め、そしてそれを身に着けようと努力する。一方で、自分よりできない人間に対しては、できるようになるまで何度でも手を貸し続けた。

気が付けばカルギは、王立学校の中で押しも押されもせぬ存在になっていたのである。

そんなカルギに、一人の同級生がいた。その名を、バーサーム。後のバーサーム侯爵である。

代々高名な魔術師を輩出してきたバーサーム家は、武力を基本とするカルギのシゲア家と「王国の両翼」と称される家である。しかし、このバーサームの坊ちゃんは、魔術があまり上手くなく、ましてや

剣術などの武力はからっきしだった。猫背で姿勢が悪く、ヒョロヒョロと痩せた青い顔で、本ばかり読んでいる男だった。

カルギはこのバーサーム家の坊ちゃんを、歯牙にもかけなかった。自分にとって役に立たない、そう本能は教えていたからだ。

成人し、王国軍に入っても、カルギは順調に昇進していった。１５歳の時などは、結婚を申し込む家が数十家に上った。対してバーサームの坊ちゃんは王宮に勤務し、カルギと同じ１５歳の時に、同じ侯爵家の六女と結婚をした。侯爵家、といっても六女であり、社交界で何度か見かけたものの、キッと睨むような、意志の強そうな目をしたこの女は、カルギの好みではなかった。青白いヒョロヒョロの男と目つきの悪い女、これはこれで似合いだと、仲間内で笑い合ったのだ。

１７歳で父となり、その後、昇進を重ねるにつれて側室と子供が増えていった。対してバーサーム夫婦はようやく子供を授かったものの、赤子はすぐに夭折した。カルギはこれも、弱い親から弱い子が生まれたためだと解釈したのだった。

ある時、隣国のヒーデータ国境軍が越境し、近隣の町から略奪するという事件が起こった。すぐさまカルギは軍を率いて向かい、見事な統率力でヒーデータの軍を壊滅させたのであった。

この武勇は近隣諸国に鳴り響き、カルギの名声はさらに高まったのであった。

軍団長となってからのカルギは、王国軍の教育にのめり込んだ。一人が強くてもいけない。強い兵士は強い国につながる。国が強くなれば滅ぶことはない。そう、「死ななくなる」のだ。

カルギの教育は、よく言えば効率的、悪く言えばスパルタであった。さすがに全軍とまではいかなかったが、自分の直属の部下に関しては、かなり厳しい訓練を課した。例えば、少数の部隊を編成し、ワイバーンの巣から卵をとってくる、といった、死ぬ可能性が極めて高い訓練を実施した。当然、ワイバーンの餌になる者も出たが、不思議に死ぬどころか怪我さえしない者がほとんどであった。

結果的にこうした苛酷な訓練は、兵士の質を飛躍的に向上させた。そして、カルギの軍団＝王国最強軍団として国内で認知されるようになった。

一方で、持ち帰られた魔物の卵は、カルギ家の食卓に並ぶことになった。ある時、森の川の中で首長龍の幼生体と思われる魔物を発見した。魔物自体は簡単に討伐できたのだが、生命力が強く、なかなか絶命しなかった。戯れに屋敷に連れ帰り、この首長龍に教育を施してみた。教育といっても、言うことを聞けば褒めて水と食料を与える、言うことを聞かなければ、絶命する寸前まで水と食料を与えなかっただけのことだったのだが。

首長龍は獰猛と言われているが、この教育は意外に成功し、カルギの命令に忠実に従う魔獣となった。それからこの、「魔物教育」に興味を示すようになったカルギは、訓練の一環で持ち帰られたワイバーンの卵をふ化させ、幼生体から徹底して自分の従魔となるよう教育を施すことを生きがいとするようになった。

後宮に籠って政務を顧みない国王に対しては、自分の妻を後宮の最高責任者たる女官長として送り込み、そこから上奏を行った。閨房での国王は、何の疑問も持たず、妻から伝えられる上奏に対して無条件で承認を与えるのであった。

カルギの上奏はすべて許可される―そうした評価は、最終的にカルギを王国軍の頂点に押し上げた。「元帥」の称号を与えられたカルギは、これからの洋々として開かれた未来が訪れることを、何の疑問も持たなかった。

一方で、侯爵を襲爵したバーサームは、王宮内において秘かに勢力を拡大しつつあった。魔術も、武力も適性のなかった彼であるが、事務作業に対しては天才的な才覚を発揮した。夥しいほどの書類を迅速にかつ丁寧に処理し、非常に効率的な法令を考え出す。気が付けばバーサーム侯爵は、王国内の財務と総務を一手に引き受ける、大宰相となっていたのである。

国王を押さえているカルギには、そんなバーサームの台頭は目の中に入らなかった。しかし、バーサーム侯爵は妻を幼い王太子の家庭教師として送り込み、次期国王の教育を担うことになった。

それから数年、ある時、王国軍の増員を巡って、カルギとバーサームは対立したことがあった。

「王国軍はもっと増兵するべきだ。ヒーデータは我が国の倍の兵数を保有している。このままでは、ヒーデータに攻め込まれれば壊滅する」

「ヒーデータは一昨年の凶作以来、兵站に余裕がありません。侵攻は無理でしょう」

「それならばむしろ好機だ。ヒーデータに攻め込み、領土を拡張するべきだ」

「ヒーデータに攻め込んだところで、占領地を維持できません。王国の兵站も限界があります」

「何をバカな！食料などは周辺から奪い取ればいいのだ！」

「領民の支持無くして国は運営できません。まずは王国の国力を高めるのが得策です」

「・・・侯爵の意見に賛成だな。増兵は見送りだ」

会議を打ち切ったのは王太子だ。他の閣僚も同意してしまっている。自分の意見が通らない、初めて感じた屈辱であった。

王太子が摂政に就任してから、ますますカルギの言は遠ざけられるようになった。この世は強いものが勝つ。強いものが弱いものに勝って欲しいものを奪う。そんな簡単なことがなぜわからない。カルギの焦燥は深まるばかりだった。

バーサーム家には優秀な結界師がいるらしい。カルギはこの結界師を用いて他国に侵略する作戦を立てた。しかし、あっさり却下された。

「リノスに結界を張らせて他国に侵略するのは無謀だよ。リノスのMPが切れたら終わりだよ?第一、一部の地域を占領してどうするんだい?リノスは王宮において、王宮守護の結界師として用いるよ」

バカな。攻める手があるのになぜ攻めない。戦いのイロハも知らぬヒヨっこが勝手なことを言いおって・・・カルギの怒りは頂点に達しようとしていた。

ある時ふと鏡に映る自分の姿を見た。髪は白髪になり、祖父の面影によく似てきた。思えば祖父の年齢を超えている。あと何年生きられるのか。この国は危うい。なんとかしなければ。そう思ったカルギは、決断を下した。

弱きものが、国を弱くする。ならば、その弱きものを取り除かねばならない。

行動は素早かった。日頃から兄の国王を蔑んで憚らない王弟は、あっさり王国軍に加わった。そして、王宮内にエルザとファルコがいるという報を聞くや、八万の王国軍は、カルギの手足のごとく行動を起こす。

占領作戦は思った以上に順調に成功した。反対派の貴族や王族や王妃、側室たちが次々に捕らえられている最中も、国王は年端もいかぬ少女達との行為をやめることはなく、結果的に全裸での連行となったのである。

最大の障害は大魔導士のファルコであったが、こちらは、マドイセンに始末をさせた。いきなり腕を斬り落としたため、さしもの大魔導士も魔法を発することができず、致命傷に近い傷を負わすことにはなったか、ほぼ被害もなく捕らえることができた。

邪魔な存在はすべて消すことができた。この結界師も殺さねばならないだろう。大魔導士と結界師を失うのは痛かったが、それは何とでもなるだろう。強くなるのだ。強くなれば死ぬことはない。自分も、国も。そう思い、自分の未来を想像し始めたカルギが見たものは・・・崩壊していく建物だった。

「リノス、やめろ！跪け！跪け！」

隣のワイトンの絶叫が聞こえる。何故？その原因を考える間もなく、
カルギは建物の波に呑まれ、意識を失った。

第二十一話　激闘！首長竜

「ふぅー」

ゆっくりと息を吐く。巨大岩となった王宮をじっと見る。かなりのMPを込めて結界を張ったのだが、全く減っている感じがしない。むしろ、頭も体も、絶好調だ。少しずつ、気分が高揚していくのがわかる。

「ゴルァーァァァァァァァーーーーーーー」

突然、俺の脇腹に衝撃を感じる。見ると、首長竜が俺の脇腹に食いついている。そのまま長い首を左右に振る。俺の体が空中を踊る。そのままさらに首の動きを加速させた。

当然、首長竜の顔は、俺の体もろとも商人街の建物や西側の城壁にぶつかり、街を破壊していく。そして俺を銜えたまま飛び上がり、かなりの速さで飛行しながら大きく首を振る。城壁と街の破壊に拍車がかかる。そのまま北門の城壁を越え、俺の体を地面に叩きつけた。それに飽き足らず首長竜は、倒れている俺に向かって強烈なブレスを吐き出したのだった。

大爆発と共に、周辺一帯が煙に覆われる。俺の姿を探す首長竜。煙の中から現れた俺は、全くの無傷だった。

当然である。俺は薄いが、最高硬度を誇る結界を張っている。首長竜ごときの攻撃を通すほどヤワではない。

それでも、狂ったように俺の頭を噛みまくる。おそらく俺の体は噛みきれず、必殺のブレスも通用しないと認識した首長竜は、俺を頭から持ち上げようとしている。俺を無理やり飲み込もうとしているのだ。

しかし、首長竜の動きが止まる。俺は首長竜の口から頭を出して距離を取る。そして、魔力を込める。

「ギギギギーーーーバキッ、バキッ!!パキィィン!!」

素早く首長竜がすっぽり入る結界を張ったのだ。そして結界をそのまま圧縮する。最初こそ耐えていたが、やがて限界が来たと見えて、龍の鱗が粉砕されていく。

「ゴルァアアアア!!!ゴルァアアアアアア!!ゴルァァァァァァァー!!!」

必死の叫び声を上げる。何とか脱出しようと体を動かそうとするが、俺の結界はビクともしない。尻尾、後ろ足、前足が潰れていく。

「よくもご主人様たちを!エリルを!師匠を!殿下を!食らいやがってぇぇぇ!お前だけは許さん!街も丸ごと破壊しやがって!お前は殺すっ!しかし、楽には殺さんからなぁぁぁ!!!!」

「体の半分が潰れちまったなぁ。これは殿下の痛みだ、よく味わえ!」

首長竜の声が消えたのを合図に、俺は竜を全回復させる。当然欠損部分も回復させる。傷と痛みが一瞬で無くなったことに驚いた竜であったが、再びその瞳には憎悪の光が浮かび上がる。

「ドン！ドン！ドン！ドン！」

竜の四本の手と足がそれぞれ爆発し、飛散する。竜の凄まじい叫び声が響き渡る、俺は手を緩めずに、両目、角、牙を順に爆発させていく。

「クルアァァッ！クルアァァッ！クルアァァッ！クルアァァッ！」

「目も見えず、鼻も効かず、痛みだけしか残らないだろう？師匠の痛みだ、じっくり味わえ！」

再び竜が動かなくなる。俺は回復魔法をかける。一瞬で傷が治癒される。

まだまだ俺は満足しない。今度は竜の頭の部分の結界を解除し、残りの部分の結界の温度を上昇させる。生き物の中で最高硬度を誇る竜の鱗が真っ赤に灼熱し、その体を焼き尽くしていく。首だけ動かして、必死に逃げようとする首長竜が哀れである。

「クルアァァァン！クルアァァァァーン！クルアァァァァァァアーーーーーン！！」

「「クルァァァーン」か、面白い鳴き方をするな。うん？お前泣いてんのか？」

首長竜は涙を流しながら必死で逃げようとする。もはや竜は俺を見ていない。ひたすら逃げようともがいている。

黒かった首長竜の鱗が真っ赤に焼けただれている。そして俺は三度、

首長竜に回復魔法をかけて、すべての傷を治癒していく。

竜という生き物は、誇り高き生き物であるとされる。しかし、目の前の竜は、涙を流し、怯え、ひたすら逃げようとする哀れな生き物だ。もはやこいつは、竜ではない。

「今のはエリルの悔しさと痛みだ。どうだ?痛みがないってのは至福だろう?最後に、ご主人様たちの苦しみを味わって、死ね!」

竜の全身を結界で多い、その中の空気を抜き、真空状態にしていく。水中でも生息可能な首長竜であるが、さすがに空気がない状態では生きられない。しばらくは何とか耐えていたものの少しずつ苦しみはじめ、体が震えてきたかと思えば、徐々に瞳孔が開いてくる。最後に目がカッと開かれたと同時に体がビクンと震え、龍の目から光が失われた。

「はぁ、はぁ、はぁ、ざまぁみやがれ!」

首長竜が完全に息絶えたことを確認し、ゆっくりと息を吐く。さすがに今度は限界までＭＰを使った気がする。眠いし、けだるい。

「仇は、取りましたよ」

そうつぶやきつつ俺は、ゆっくりと草原に倒れていき、深い眠りについたのであった。

第二十二話　最後の命令

目が覚めると朝だった。一晩中眠り続けたらしい。

目の前には、昨日倒した首長竜が倒れている。目を剥き、口を大きく開けた凄まじい形相をしている。

「竜」と名の付く生き物の肉は美味であると言われている。しかし、ご主人様、師匠、エリルたちがこいつの胃袋に収まっているかと思うと、到底コイツの肉を食べる気にはならない。俺は首長竜に結界を張り、その中の温度を一気に上げていく。見る見るうちに竜の体が真っ赤になり、そして溶けだした。ドロドロのマグマのような状態になっていく。さらに温度を上げる。結界の中は数千度になっているだろうか。しばらくすると竜の体は蒸発し、完全になくなった。

俺は空に目を向け、静かに手を合わせた。

さて、これからどうするか。まずは、バーサーム家の屋敷に向かうことにする。

北門から王都に入る。鉄壁を誇る城壁も首長竜が暴れたことで、かなり損傷している。それだけでなく、家屋の被害もかなりひどい。おそらく怪我をした人も多くいるのではないか。

俺は貴族屋敷が立ち並ぶ東区域に足を向ける。昨日はエリルと一緒にこの道を通ったのだ。そんなことを思いながら俺はバーサーム家の屋敷を目指す。

昨日の騒乱の影響か、兵士は一人もおらず、全く人の気配もしない。人の気配を探ってみるが、何も感じない。本当にこの区域には誰もいないようだ。

建物への被害はほとんどなかったらしい。いつものような街並みだ。しかし、人の気配が全くしないので、かなり違和感のある雰囲気ではあるのだが。

しばらく歩くと、バーサーム家の屋敷に着いた。いつもと変わらぬ門があり、もう少し待っていれば、メイドさんたちが「お帰りリノス」と出てきてくれそうな気がする。

門は簡単に開いた。そして、屋敷の中に入る。

玄関から数メートル先から、何もなくなっていた。ご主人様の部屋も、師匠の部屋も、二階の俺とエリルの部屋も、全てなくなっていた。玄関ホールの右側にあるダイニングと、その隣の厨房だけが原形をとどめていた。

俺はダイニングに向かう。昨日、あんな騒乱があったとは思えぬほどに、いつもの通り整頓され清潔さを保っている。ここが無事だったのは幸いだ。なぜならここにバーサーム家の宝物庫があるからだ。奴隷時代にエルザ様からは、バーサーム家に万が一のことがあった場合や、侯爵とエルザ様の二人の帰宅が連絡なく7日以上に及ぶ時は、宝物庫から収納物を全て持ち出せ、と命令されていた。俺は、主人の最後の命令を実行することにしたのだ。

宝物庫の入り口は、暖炉である。

当然、冬にパーティーが開かれる際は、この暖炉は大活躍する。大

勢の招待客に暖を提供することはもちろん、この中で焼かれるローストビーフは、バーサーム家の名物なのである。

その暖炉の側面には、小さなガラスがはめ込まれている。よくよく注意してみないとわからないくらいに小さいガラスだが、そこに魔力を通すと、暖炉が動いていく。コイツの優れものは、許可された人間の魔力でしか開くことが出来ず、許可のない人間の気配を探知すると開かないという優れものだ。

俺はそのガラスに向かって魔力を送る。実際俺も宝物庫に入るのは初めてなので、ちょっと不安であったが、音もなく暖炉は動き、その下からは、人ひとりが通れるほどに狭い階段が現れた。

階段を降りると、すぐに入り口が閉ざされる。その先にある部屋、そこが宝物庫だ。生活魔法の「ライト」を発動し、辺りを明るくする。宝物庫のドアには、ドラゴンが大きな口を開けている彫刻が施されており、俺はその口に顔をよせ、合言葉を口にする。

「扉よ、開け。「ワカリマセン」」

ガチャリ、と開錠される音が響く。俺は注意深くその扉を開けた。

中に収納されていたのは、二本の剣と銀色のローブだった。

俺はそれを「無限収納」に収納する。

再び階段を上る。登り口の壁に、小さく光るガラス玉がある。そこに魔力を注ぐ。再び暖炉が動いて、俺はダイニングに戻る。

ふと気になったので、ダイニングの奥にある厨房に向かう。厨房に

は食器が整然と整頓され、全く乱れはない。地下に貯蔵されている食料も、全く乱れはなくそのままだった。それらの食料と食器、料理道具などすべてを、俺は「無限収納」に入れて屋敷を後にした。

もう人は住めない状態ではあるが、一応俺は、屋敷に結界をかけておいた。８年間も過ごした「我が家」なのである。どうしても、他人に触れられるのがイヤだったのだ。

俺は、西門に向かって歩き出す。首長竜とかなり暴れたので、被害は甚大だ。商人街や住宅地のほとんどが被害を受けているだろう。負傷者がいれば回復魔法をかけて回ろうと思ったのだ。

しかし、王都内は誰もいなかった。全く生き物の気配がしないのだ。

北門に向かって歩を進めるが、誰もいない。しばらく歩いていると、北門の外に人の気配を感じる。急いで北門を出て、気配のある方に向かう。

そこには、５０名ほどの市民がいた。ケガをしている人もいる。武器を携帯している人もいる。おそらく昨日の騒乱で、王都の外に避難をした人たちなのだろう。まずは、けが人を治療しなければ。

「みなさん、大丈夫ですか?怪我をしている人は私が・・・」

「うわぁ！」「ぎゃぁあ！」「ひぃぃぃぃーーー！」

俺が近づいていくと、何故かパニックが起こる。腰が抜けてしまっている人もいる。全員が、何故か俺を凝視している。俺の後ろに、何かあるのか?

振り返ってみると、そこにはいつものようにルノアの森があるだけだった。

不意に俺の傍に矢が落ちる。振り返ってみると、男たちがものすごい形相で俺に弓を向けている。

「ちょ、ちょっと待ってください！」

「うぁあああああ！来るな！来るなぁぁぁぁぁ！！！！！」

狂ったように矢が放たれる。あまりの光景に驚いた俺は全力で、ルノアの森に向かって逃げた。

第二十三話　そして僕は途方にくれる

ルノアの森の奥深く、俺は木々の間から見える、真っ青な空を眺めている。

ああ、いい天気だな。絶好の洗濯日和だ。季節は秋。暑からず寒からずという絶好の気候。さわやかな風が森の中を駆け抜ける。ああ、いい風だ。家の中での読書もいいけれど、都会の喧騒を離れ、こうした森林浴も悪くない。何て静寂な空間なのだろう。平和だな・・・。

そんなことを考えている俺の目には、涙が光っている。もう少し、現実逃避の時間が必要なのだ。

いきなり人に襲われた。何もしていないのに、だ。先様が落ち着くまでルノアの森で時間をおこうと思っていたら、森に棲んでいる魔物まで俺から離れていく。どんどん奥に移動していくと、どんどん魔物が逃げていく。しかも、みな全力疾走だ。

俺の周囲には一切の気配がない。静寂そのもの。一切気配のない森の中って、結構怖いんだぜ？いや、本当に。一体俺に何があったのか。とりあえず、ステータスをチェックしてみると、何だかエライことになっていた。

リノス（大魔王・１４歳）　ＬＶ∞
ＨＰ：４９８５９
ＭＰ：６２８７４
結界魔法　ＬＶ５

火魔法　ＬＶ５
水魔法　ＬＶ５
風魔法　ＬＶ５
土魔法　ＬＶ４
回復魔法　ＬＶ５
生活魔法　ＬＶ２
詠唱　ＬＶ５
鑑定魔法　ＬＶ５
剣術　ＬＶ５
ＭＰ回復　ＬＶ５
気配探知　ＬＶ５
魔力探知　ＬＶ５
魔力吸収　ＬＶ５
肉体強化　ＬＶ５
回避　ＬＶ５
行儀作法　ＬＶ２
教養　ＬＶ３
麻痺耐性　ＬＶ５
毒耐性　ＬＶ５
精神耐性　ＬＶ５
黒魔術　ＬＶ５
呪い　ＬＶ５

軍神・知神・大魔神・鉄人・鉄腕・結界神・闘将・知将・名伯楽

・・・どないなってんねん？「奴隷結界師」が「大魔王」になっとるがな。物騒なスキルが付いているのと、ふざけた称号までついている。いつから俺は野球選手になったのだ？

職業が大魔王になっていたので、思わず自分の姿を確認した。水に

映る俺の姿に変化はない。しかし、驚いたのは、自分のステータスを確認しようとしたら、いきなりステータス画面が目の前に現れたことだ。鑑定ＬＶ５の影響らしい。その上、俺が知りたいと思うもの全ての情報が表示される。他の探知能力もカンストした影響で、「マップ」も表示されるようになった。

「マップ」は５０Ｋｍ圏内の全ての生物が表示される。敵意を持つものや憎悪を持つ者は赤で表示されるらしく、俺の周囲５Ｋｍは真っ白だが、その外は真っ赤になっている。

物騒なスキルと言えば、呪いＬＶ５である。早速鑑定してみると

「全ての生物から忌諱され、邪悪なるものを引き付ける。ステータス上昇補正５００％」

レベルめっちゃ上がるけど、皆に嫌われまっせ～というスキルらしい。どうやら俺に誰も寄ってこないのは、このスキルのためらしい。

俺のスキルは非表示にもできる。つまり、他者からの鑑定を妨害できるのだ。しかしこの「呪い」だけはどうしても隠せなかった。

剣や槍、弓矢などの物理的攻撃や魔法による攻撃は一切通用しないし、毒や麻痺も全く効かない。つまり俺にはどんな攻撃も通じないということになる。

しばし呆然として空を見る。なぜか涙があふれてとまらない。

しばしの現実逃避ののち、一度、心を整理してみる。ちょっと、自分の境遇を考えるのはよそう。別のことを考えてみよう。うん、そうしてみよう。

そこで、バーサーム家の宝物庫にあった品物を鑑定する。こいつがまた、ドえらいものだったのだ。

「無名剣」
少量の魔力を流すことにより、その持ち主に最もふさわしい剣に変形する。持ち主の最も優れた才能を最大限に引き出す。

「プローブルローブ」
着用者を常に清浄な状態にするローブ。呪い、毒、麻痺の攻撃を完全に防御する。着用者が流血している部分を完全に回復する。

このローブ使えんじゃね？

早速プローブルローブを着用してみる。呪いスキル、全く消えず。しかし、着用してわかったのはこのローブ、服や体の汚れを浄化してくれ、常に清潔な状態にしてくれるのだ。つまり、風呂いらず、洗濯いらず。挙句には負傷すると治癒してくれる効果もあるため、病院いらずのローブでもあるのだ。旅のお供の必需品！バーサーム家の初代様は素晴らしい。

せっかくなので、「無名剣」を手に取ってみる。持ち主に最もふさわしい、才能を最大限に引き出してくれる剣になるとのこと。試しに、剣に魔力を送ってみる。

説明には少量とあったが、結構な魔力を持っていかれる。普通の武器屋で売っているような鉄の剣だが、魔力量に応じて発光してくる。そして一瞬カッと光ったかと思うと、俺の手には一振りの日本刀が握られていた。

時代劇でよく見る、黒い鞘に入った日本刀。かなり軽い。注意深くゆっくり引き抜いてみる。

何とそれは、真っ赤な波紋を持つ、見るからに禍々しい刀だった。

この刀を鑑定してみると、

「―――」

肉体ではなく、精神を切り裂く剣。斬られた対象は、長時間地獄の苦しみを味わい、最終的に狂死に至る。防御不能

・・・これ、あかんやつですやん。いきなり呪いの剣を作ってしもとるがな。よくよく見ると、

「作成は一回限り。解除は所有者の死亡」

うわぁぁぁ。ダメだダメだ～。少ないチャンスをモノにできてねぇ～。

取りあえず、この剣に名前を付けよう。精神をぶった斬る・・・「鬼切」（おにぎり）でいいや。

刀の名前を考えていたら、腹が減ってきた。刀の銘が食い物の名前になったのは、空腹が原因ではない。たまたまだ。そういえば、昨日の昼を食べてから何にも食べていない。とりあえず、メシを作ることにしようと考えた俺は、その準備を始めるのだった。

第二十四話　ぜんざいを作ろう

腹が減った。色々考えることはあるけれど、まずは腹をいっぱいにしないと。

ずっと考え続けていたので、体が糖分を欲している。せっかくなので、エリルに食べさせようとしていた、「ぜんざい」を作ることにした。

バーサーム家から拝借した大鍋に小豆を入れ、水を張る。小さいファイヤーボールを入れるとすぐに沸騰する。しばらくして水を捨て、もう一度水を入れて沸騰させる。とりあえず、渋抜きはこのくらいでいいか。

さて、これからが本番。小豆をじっくりコトコト煮込んでいく。土魔法でかまどを作り、集めた薪に火魔法で火つける。弱火に調整して、じっくりコトコト、じっくりコトコト・・・。

暇だ。猛烈に、暇だ。

暇に任せてステータスチェックをする。気が付いたのだが、俺は「雷魔法」は取得していない。理由は、師匠が教えてくれなかったことと、俺が雷が嫌いだからだ。

とはいえ、せっかく大魔王になったのだ。雷が扱えないのはいかがなものか？「大魔王のクセに雷も扱えないの～？ヤバーい！ウケるぅ」何て言われたら、俺は生きていけない。

せっかくなので、練習してみる。師匠は魔法はイメージが大切だといった。雷をイメージする。ピカっ、ゴロゴロゴロ～。ピカピカッ、バリバリバリ～。

・・・全くできん。何にもでねぇ。空、一点の雲無く晴れ渡っております。地味にヘコむ。

雷ってどうやったら鳴るんだっけ？確か、雷雲が必要なんだよな？

俺はコの字型の結界を張り、空に浮かべる。ちょうどちゃぶ台のような形だ。そこに水魔法と火魔法で水蒸気を発生させる。地面には火を出して温める。そして、結界のふたの部分には氷魔法で温度を下げる。しばらくすると、雲が黒ずんでくる。そしてその数分後、

ピカッ！パリパリ～

小さな雷を発生させることができた。何となく、原理は分かった。ステータスをチェックしてみると、「雷魔法ＬＶ３」が付いていた。いきなりＬＶ３ってどうなってんだ？

せっかくなので、雷をブッぱなしてみる。至近距離は怖いので、なるべく遠くに落とすことにする。かなーり遠くの方に・・・落雷っと。

ドッシャーン、バリバリバリ～～～～

まっ、マジで焦った～。一瞬目の前が真っ白になった。至近距離に落ちてんじゃねぇのか？？音が半端なかったぞ？

一応俺の体には被害はない。雷の威力を確認したかったけど、鍋の

様子を見ないといけない。これでも水が減ってくるので、こまめに水を足さなければならないのだ。

ステータスをチェックしてみる。すると、「雷魔法ＬＶ５」が付いていた。

大魔王、半端ねぇな？二回雷起こしたらスキルをカンストしやがった。ああ、だから大魔王って強いのか？

そんなことを考えていると、ついに小豆が柔らかくなってきた。そろそろ鍋から上げるか。

ゆで汁を捨てつつ、小豆を別の鍋に移す。ここで砂糖投入！ばあちゃんが作ってくれたのを思い出しながら、目分量で砂糖をいれていく。そして、塩を一つまみ。

そこに再度水を入れ、沸騰させる。弱火にして約１０分、ついにぜんざいが完成した。

・・・甘い。美味い。腹が減っているのもあるけれど、我ながらなかなかの出来栄えだ。美味い美味いと食べていく。食べていく。食べていく。

・・・腹がいっぱいになったな。だいぶ残っちまったな、どうすんだこれ？

調子に乗って鍋いっぱいに作ったので、かなり余ってしまった。しかし、あって困るものではないので、「無限収納」に入れておけばいいだろう。どこかで餅が手に入るかもしれない。その時は、餅入りのぜんざいで楽しめるではないか！

久しぶりの満腹感を楽しみながら、これからのことを考える。ステータスが上がったとはいえ、一匹も魔物が襲ってこないのは、異常だ。今の俺は本当に、全ての生物から忌諱される存在らしい。おそらく、人間もそうなのだろう。だとすれば、俺はどうやって生きていく?今の手持ちの食料がなくなったら?森の植物を食べて生きるということも可能だろうが、どこまで持つのだろう。考えてみるが答えはでない。

考えつかれた。このままでは落ち込んでしまいそうだ。考えを変えなければ。まあ、せっかく大魔王になったのだ。ここはひとつ、アレをやって気分転換といこう。

俺は立ち上がり、ポーズを決め、

「お前も、蝋人形にしてやろうか~!グハハハハハハー!」

・・・すまん。見逃してくれ。一度やってみたかったのだ。いかん、地味にヘコむじゃねぇかコレ。

ボトッ!

俺の後ろで何やら音がする。振り返ってみてみると、そこには白い子狐がいた。どう?蝋人形に、なる?

第二十五話　いらっしゃいませこんにちはー

子狐は俺をじっと見据えて、震えている。いや、そんなに怖がらんでもええがな。おっちゃんはやさしいんやでぇ。と思ってはいるが、何といっても俺は大魔王だ。それは相当に怖いのだろう。

こんな子狐を食べようとは思わない。殺気も感じないし、殺気を殺したとしても、おそらく俺には勝てないだろう。まあ、こんなかわいい子狐に倒されるのなら、むしろ本望でさえある。でも、一応結界は張らせてもらうが。

放っておけばそのうちどこかに行くだろう。まあ何だ。大魔王以外にもドえらいステータスが、俺は山盛りだ。取りあえず、子狐の恐怖心を取り除くため、レベルの高いステータスと称号を片っ端から隠していく。

それに、何といっても白い狐だ。商売の神様かもしれない。取りあえず、お供え物をしてみるか。「無限収納」の中に入っている皿を出し、そこに今作ったぜんざいを入れて、子狐の前に差し出してみる。

「よかったら、食べな。口に合わないかもしれないけど。どうぞご利益がありますように」

パンパンと子狐に向かって柏手を打つ。子狐はキョトンとしている。俺が傍にいたら食べたいものも食べられないだろう。俺は踵を返し、そっと子狐から距離を取る。気配探知で探ってみると、恐る恐る近づいてきた子狐は、スンスンと鼻を鳴らして匂いを嗅ぎ、そのまま

ガツガツと食べているようだ。何だ、腹が減っていたのか。

足りなければお代わりあるぞと言おうとした時、俺の下に凄まじい速さで向かってくる生物がいる。どうやら人間が三人、向かっているらしい。色が赤なので、完全に敵対心を持っているようだ。

しばらく待っていると二頭の馬が近づいてくる。そして、何の躊躇もなく俺の前に突撃してきた。

ガィィィン!!

俺の結界が馬を止める。よく見るとその馬には角があった。ユニコーンか?うぉっ、俺の結界に傷をつけてるじゃないか!これは同じ場所にあと２００回くらい突撃されたら結界を破られるかもしれないな。

そんなことを考えていると、別のもう一人が俺の背後から

「もらったぁぁぁぁぁ!」

と馬上から斬撃を繰り出してくる。遅い。あっほみたいに遅い。結界を使うまでもなく、俺はやすやすとその斬撃を躱す。

「死ね!」

気が付くと背後にいたはずのユニコーンがいない。いや、ちゃんとわかっている。頭上だ。

後ろを見ると、馬に羽が生えている。そして目を血走らせた、まだ若い男が俺に剣を突き立てた。これも恐ろしく遅い。楽勝で躱す。

「禍々しい妖気を放っている割に、姿は人間なのだな。お前は何者だ？」

「やはり、大魔王とありますわ、殿下。魔王に間違いありません」

天馬に跨る男の後ろに、もう一人女が乗っている。妖艶さを漂わせていて、怪しさ満点である。俺が大魔王であることを見抜いたところを見ると、鑑定持ちか？三人のステータスをチェックする。

ヒーデータ・シュア・セアリアス（王族・１６歳）　ＬＶ１４
ＨＰ：１０２
ＭＰ：４７
剣術　　ＬＶ２
肉体強化　ＬＶ１
回避　　ＬＶ１
行儀作法　ＬＶ１
呪い　　ＬＶ２

ビスト・ザイ（帝国騎士・１６歳）
ＨＰ：１２２
ＭＰ：３９
剣術　　ＬＶ２
肉体強化　ＬＶ２
回避　　ＬＶ２
呪い　　ＬＶ２

ピャオラン（妖狐・４８７歳）　ＬＶ４７
ＨＰ：７１２
ＭＰ：１０５４

幻影術　ＬＶ４
回復魔法　ＬＶ３
火魔法　ＬＶ４
誘惑術　ＬＶ４
人化術　ＬＶ４
精神魔法　ＬＶ３
鑑定　ＬＶ４
呪い　ＬＶ３

お一人様、ちょっと異質ですね？坊ちゃん二人は大したことはないが、「呪い」持ちである。三人ともあまりまともではなさそうだ。類は友を呼ぶってか？

天馬がゆっくりと地上に降りる。

「スキルはいくつかありますが、どれも低いものばかりです。我々でかかれば楽勝ですわ」

「大魔王がなぜそんなに弱いと言える？これだけの禍々しい妖気を放っているというのに」

「おそらく、生誕して間もないのですわ。まだ覚醒前のようですわ」

「フッ、フッフッフッ。いいぞいいぞ！俺はツイているな。まさか覚醒前の大魔王に巡り合えるとは！コイツの首を持ち帰れば、俺は間違いなく次期皇帝だな！」

「ヒャッハー！コイツはめでたい！！殺しましょう！今すぐ殺しましょう！！」

久しぶりに人と話が出来ると思ったらこれか。全くロクでもないやつらばかりだな。うん？女が詠唱を始めている。この次期皇帝だとか何とか抜かしている坊主の後ろからこっそり攻撃しようとしていやがるな。さすが女狐。まあ、俺には効かんのだろうけど。

すると、女の肩に何かが落ちた。よく見ると、さっきの子狐だ。

詠唱中だったためか、女はかなり驚いて子狐を地面に叩きつける。

そして、

「殿下！殺してください！」

「ダバ、やれ」

天馬の角が子狐の腹に突き立てられる。ブシュっと血が流れだす。

さすがにこれは見過ごせない。俺は

「バースト」

と子狐の周囲に中規模の爆発を起こす。敵が一瞬ひるんだ隙に俺は子狐の下に行き、素早く回復魔法をかける。すぐに傷はふさがった。子狐は不思議そうな顔をして自分の腹を見ている。

俺は子狐の前に出る。こいつら三人は、お仕置きが必要だな。

「フッ、フフフフ。お前の魔法はそんな程度か？それでは話にならんぞ？大人しく、死ね」

天馬が角を立てて突撃してくるが、当然のごとく俺の結界に阻まれる。そしてその直後、セアリアスの斬撃が俺の首に、そしてピャオ

ランの巨大な火の玉が俺の頭をめがけて放たれる。

俺は左手でセアリアスの剣を叩き折り、右手でピャオランの火魔法を水魔法で消火した。そして同時に、ピャオランにＬＶ５の火魔法、「灼熱弾」を放った。極限まで圧縮された炎のため透明であり、大きさは３センチくらい。そんな火の玉が超高速で飛んでいくのだ。この至近距離からは躱せない。馬から身を乗り出していたため、ピャオランの左手と左足が蒸発する。本人は足と腕が消えたと思うだろう。その瞬間、傷口から炎が立ち上る。こちらからは、左手と左足から炎を噴き出しているように見える。

「ええっ？あっつ、うぎゃあああ！」

熱さと痛みがあとから襲ってくる。思わずピャオランは馬から転げ落ちる。

「ゴアァァァ！」

角を突き立てていた天馬が、俺の頭に噛みついた。俺は「鬼切」を抜き、天馬の首を刎ねた。確かに手ごたえはあった。だが、天馬の首はつながったままだ。一瞬の間をおいて、天馬の様子が変わる。

「ヒ、ヒ、ヒ、ヒヒヒヒーーーン！！！！」

と鳴き声を上げて暴れ始めた。セアリアスは何とか体勢を立て直そうとするが、馬が言うことを聞かない。

「ゴウァ！ゴウァ！ゴウァ！ゴアァァァ！」

およそ馬とは思えない鳴き声を上げて、体を激しく揺らす。セアリ

アスは馬から振り落とされ、地面に体を叩きつける。

「この、ダバめがぁ！」

セアリアスは天馬に思いっきり石をぶつけている。子供か。

「後ろもらったぁ！ヒャッハー！死ねぃ！」

背中からザイが斬りこんでくる。知っとるわい。ザイに背中を見せたままで、左手でザイの剣を掴む。そしてそのまま剣をへし折り、ザイの鼻っ柱に、強力な裏拳をぶっ放す。たたらを踏んでザイは後退した。

「おっ、おのれー！調子に乗りおって！貴様は全力でなければ倒せぬようだ。ザイ、抜剣を許可する」

セアリアスとザイが背中の剣を抜く。ほうと思わず声に出してしまったほどの美しさをたたえた剣だった。

「我がヒーデータ帝国に伝わる名剣だ。これで貴様は終わりだ」

何がどう終わりなのかよくわからんが、取り敢えずヘラヘラ笑いながら小さな声で「コロスコロスコロス」と呪文のように呟いているザイがうっとうしいので、問答無用に灼熱弾を発射する。一瞬でザイの左腕が蒸発し、左半身から炎が噴き出す。悲鳴を上げながら地面を転がるザイ。雉も鳴かずば撃たれまいに。

俺がザイに気を取られている隙に、セアリアスが斬りかかってくる。コイツも問答無用に「鬼切」でブッた斬る。

「うっ、うわぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーー！！！！」

「でっ、殿下あぁ！！」

叫び声を上げて森の中に消えていくセアリアス。その後ろを馬に乗り、器用に右手だけで操りながら追いかけていくザイの姿があった。その先には、多くの魔物がいるのだが・・・。まあいいか。

妖狐の姿がない。マップで探してみると、ヒーデータに向かって絶賛逃亡中のようだ。せっかくなので、覚えたての雷魔法を試してみることにした。妖狐を狙って、雷撃を放つ。妖狐が死ぬまで追いかけ続ける雷撃だ。名付けて「稲妻誘導」。マップで見ると、頑張って躱しているが・・・あっ当たった。それでも何とか避け続けている。まあ、頑張ってくれい。

第二十六話　あらまそー大変だったのね

俺は再び子狐の下に向かう。

「大丈夫だったかー？お前もえらい災難だったなー」

「助かったのでありますー」

子狐が喋った。何だコイツは？

「お前さん、喋れんの？」

「こう見えても２００年は生きているのでありますー。狐は２００年生きると、妖狐に転生して、人語があつかえるようになるのでありますー。転生する時に、功徳を積みながら生きた狐は白狐に、悪行を重ねた狐は妖狐に転身するのでありますー。先ほどいたピャオランは、有名な妖狐で、我々の仲間が行方を追っていたのでありますー」

「へぇ～。そんな功徳を積んだ白狐が、なんでこんな森の中に？」

「はいー。もともとはジュカ王国に神の眷属として派遣されていたのでありますー。我々白狐は、派遣された国々で信仰を集めて、そこで神として祀られるのが仕事なのでありますー。頑張って信仰を集めようと色々なご利益を授けていた時に大魔王が現れたので、王国を捨ててこの森に避難したのでありますー」

「国を捨てて避難したって、それ、大丈夫なの？」

「・・・大丈夫ではないのでありますー。しかし、本当に怖かったのでありますー。かなり奥の方まで逃げたのですが、まさかそこに大魔王がやってくるとは思いもよらなかったのでありますー。」

「あっ、ああ。ごめんなさい」

「見つかっては殺されると思ったので、気配を完全に断って、木の上から様子を観察していたのでありますー。しかし、いきなり立ち上がって怒りの呪文を唱えられたので、驚いた拍子に、落ちてしまったのでありますー」

あ、「蝋人形」か。あれは忘れてほしい。

「これは殺されると覚悟したのでありますが、まさか大魔王が吾輩に、あんなに美味しいお供え物をして、崇めるとは思わなかったのでありますー。しかも、行方を追っていたピャオランまでがわざわざやってくるとは幸運でありました。ヤツの能力の大半は奪ったので、もうヤツは何もできないのでありますー」

「やっぱりピャオランはそんなにあくどい妖狐なの?」

「傾国、と呼ばれる妖狐でありますー。人をたぶらかし、災いを振りまき、国を亡ぼすようなことを何度もしてきたのでありますー」

・・・妲己みたいだな。

「吾輩にお供えをし、ピャオランを討伐したので、貴方は呪いのステータスを下げることに成功しているのでありますー。もしよければお礼に、呪いのステータスを消すこともできるのでありますが、

いかがでありますか？」

「おおそれはうれしい！ただその前に、この呪いのステータスってのを教えてくれ」

「呪いのステータスは、同族を殺してしまうとついてしまうのでありますー。貴方であれば人間でありますー。殺した時の状況や怨念にもよるのでありますが、罪悪感がなく、楽しみながら殺人を犯すようなものは、ステータスの上昇が早いと言われているのでありますー。大体・・・」

呪い
ＬＶ１　人殺し（１人以上の殺人）
ＬＶ２　殺人鬼（１０人以上の殺人）
ＬＶ３　悪魔（１００人以上の殺人）
ＬＶ４　魔王（５００人以上の殺人）
ＬＶ５　大魔王（１００００人以上の殺人）

「この呪いのステータスを下げたり、除去したりするのが、神官でありますなー。戦争が終わった後などで、神官が兵士たちに祈りを捧げているのをよく見るでありますが、あれが呪いのステータスを除去している姿でありますー。あと、教会で洗礼を受けると、呪いのレベルがあがりにくくなるでありますなー。ただし、人間がどうにかできるのは、ＬＶ３までであります。たとえ神官の最高位である教皇でも、ＬＶ３が限界でありますので、大抵の神官はＬＶ２くらいまでが精いっぱいでありますなー」

「では俺の呪いスキルは・・・ＬＶ４か。お前さんにお供えしたから、ＬＶ下がってるな。お供えパワーすげぇな・・・。確かに、大魔王がお供えするなんざとんでもない行為になるんだろうな。なる

ほど、お前さんなら、今の俺の呪いを消せると？」

「白狐になると、加護がつけられるので、ＬＶ４まででしたら、消すことは可能でありますー」

「では、お願いしたい。ぜひ、お願いします」

「ただし、一度、貴方の記憶を辿らせてほしいのでありますー。その年齢で大魔王に至るまでの殺人を犯すなどは、聞いたことがないのでありますー。邪な者であれば、呪いの除去はできないでありますからー。」

「わかった。それで結構だ」

「それでは、見るでありますー。・・・結界の解除をお願いするでありますー」

おおう、忘れていました。

「うーん。ほう、そんなお生まれで。ほぉ～奴隷とは・・・。え？そんな！？ええ？ほうほう、何とまぁ！あらあら、うふふっ。へぇ～うわぁ～。うんうんそれは・・・。は？え？え？いや、八万？？そんな、ええ？ちょっ・・・うぇぇぇー」

ふぅぅぅーとゆっくり息を吐く子狐。

「それは大魔王が付いてもおかしくないでありますなー。これだけのスキルの上昇、称号も納得でありますー。よくわかったでありますー。最後に、貴方が、これからやろうとしていること、また、やりたいことは何でありますかー？」

「願わくば、平穏な日々を送りたい。理想を言えば、ハーレムに囲まれながら、平和な暮らしをしてみたい」

「・・・正直な方でありますなー。よろしい。呪いの除去、行うでありますー」

呪いの除去は、一瞬で済んだ。何が変わったのかは自分では全く分からないが、子狐曰く、全く別人の雰囲気になったそうである。

「そういえば、お前さんの名前を聞いてなかったな。私は、リノスだ」

「ええ、記憶を辿った時にお名前は把握しましたでありますー。我々白狐は、基本的に名前はないのでありますー」

「じゃあ何て呼べばいいだろう？お前さん、じゃちょっとね」

「基本的には、信仰を集めて神として祀られ場所が呼び名になることが多いでありますなー。〇〇国の神様とか、〇〇のおキツネ様とかでありますー。よかったら、吾輩の名前を付けて欲しいのでありますー。名前を付けられると、神の眷属としての地位が少し上がるのであります」

名前ねぇ・・・。キツネ、キツネだったら・・・。

「では、「ゴン」で」

「・・・再考はないのでありますかー？」

・ゴン
・ゴン太郎
・ゴン兵衛

「三つのうちのどれか一つ選べ」

「・・・ゴンで結構でありますー」

そんな残念そうな顔をするな、ゴン。またお供えするからさ。そういえば、ピャオランは人間に化けていたけれど、ゴンも人間に化けられるのだろうか？

「できるのでありますー問題ないのでありますー」

人化してもらったゴンなのだが、その、何というか・・・

「顔が狐のまんまじゃねぇか！却下！」

実際ゴンは人化はあまり得意ではないようだ。白狐になりたての頃、子供たちの遊びがあまりにも面白そうだったので、仲間に入ろうとしたら袋叩きにあったらしい。理由は簡単で、単に人化するのを忘れて、キツネの姿で飛び出したからなのであるが、これはゴンの黒歴史の一つであるため、リノスにはナイショの話である。

「ところで、神の眷属といっていたけれど、ゴンの神様というのは誰だい？」

「我々の神は「九尾の狐」でありますー」

やっぱりか！万年を生きる妖狐だったよな？それじゃ、ゴンももし

かしたら九尾の狐に至る可能性があるかもしれないってことか。

「まあ、吾輩は落ちこぼれでありますからなー。たとえ神階に達するとしても、あと１００００年は最低かかるでありますから、どうぞ気長にお待ちいただきたいであります！」

そんな先まで、俺が生きてるわけねぇだろ。

第二十七話　あらまそー本当に大変だったのね

「ヒンッ！ヒンッ！ヒンッ！」

ゴンとのほのぼのとした会話を遮る叫び声が聞こえる。俺が「鬼切」で斬った天馬だ。

目を固く閉じ、小刻みに震えている。息も荒い。そのうち、耐えきれなくなったと見え、ヘナヘナとへたり込んでしまった。

「ヒィン・・・ヒィン・・・ヒィン・・・」

耳がペタンとなり、涙を流しながら震えている。放っておくと、このまま死んでしまいそうだ。

「ユニコーンペガサスでありますかー。珍しい個体でありますなー」

不意にゴンが声を上げる。え？何それ？レア物なの？

「ペガサスは希少生物でありますが、ユニコーンは割かし個体数は世界中に多くいるでありますー。しかし、ペガサスとユニコーンの特徴を持つユニコーンペガサスはめったに生まれないでありますなー。吾輩も１００年ほど前に一度見たきりでありますー。もっともその時は生まれてすぐに死んでしまったのでありますがー」

「へぇ～そんな珍しい個体ってことは、神様の使いとかじゃないよね？」

「それはないでありますなー。あくまでユニコーンとペガサスという、本来は交わらぬ種が交わってできた突然変異のような個体でありますー。この馬に乗っていた男が確か、ヒーデータ帝国の王族だったでありますから、もしかしたら帝国の宝物の一つかもしれないでありますー」

オイオイ、それじゃこの馬が死んでしまったらヤバイんじゃね？ちょっと、回復魔法を・・・っと、精神がぶった斬られているんだよな？だとしたら、回復させるのはどうすればいい？

「帝国の持ち物なら返しておくことに越したことはないな。殺してしまうと、あとが面倒くさそうだし。ただ、この状態を回復させるとなると、何の魔法になるんだ？」

「錯乱状態からの回復は、ＬＶ４の回復魔法、エクストラヒールでいいのでありますが、この刀の効果は、それではダメでありますー。ＬＶ５のアルティメットヒールでないと無理かと思うのでありますー。アルティメットヒールは、心臓や脳などの命を繋ぐうえで必要な内臓が傷ついていなければ、死後１時間程度であれば復活させることができるのでありますー。この馬が精神を斬られてまだ時間が浅いので、修復は可能であろうかと思うのでありますー」

なるほど、「鬼切」は精神を殺してしまうのね。我ながら恐ろしいものを作ったもんだ。それでは試しにやってみるか。「アルティメットヒール！」

ユニコーンペガサスが青色の光に包まれる。しばらくすると、まだ目は閉じており、肩で息をしているものの、苦しそうな雰囲気はなく、比較的落ち着いている様子のユニコーンペガサスの姿がそこにあった。俺はその馬に近寄り、

「大丈夫かい？」

と声をかけた。馬の目がうっすらと開かれ、ブルルルと弱々しく嘶いた。

「水が欲しいと言っているでありますー」

ゴン、お前この馬の言葉がわかるのか！さすが白狐だけある。俺は感心しながら、水魔法で大量の水を出してやる。馬はゴクゴクと喉を鳴らして水を飲んでいる。

「ブルルル」

また馬が嘶く。おい、ゴン、何ていってるんだ？

「助けていただいてありがとうございます。本当に死ぬところでした、と言っているでありますー」

「君はユニコーンペガサスだね？もしかしたら、ヒーデータ帝国の持ち物じゃないかい？もしよければ帝国に返還するけれど・・・」

馬の動きがしばらく止まる。そしてまた、力なく、ブルルルル、ブルルルルと嘶いた。

「帰りたくない、と言っているでありますー。帰れば殺される、と言っているでありますー」

聞けば、この馬は４歳になるらしいが、何故か成長が遅く、なかなか体が大きくならないらしい。ポニーのような大きさなので、戦場

に連れていくのはもちろん、人前にすら出されるのを憚られているのだとか。そこで、先ほどの王族が自分の馬として無理やり乗り回しているのだという。

その王族の扱いもかなり乱暴で、何度となくこの馬は失敗を重ねてきた。その都度鞭でブッ叩かれたり、酷いときには剣で斬られたりしたこともあるらしい。そういえば王族がこの馬を「ダバ、ダバ」と言っていたが、あれは単に「駄馬」と言っていただけなのだろう。まあ、わかってはいたが、かなり頭の出来は悪そうな男である。

そんな時、隣国のジュカ王国でとてつもない妖気が発生するとともに、連絡の一切が絶えた。偵察に行かせても馬がどうしても王国に入りたがらない。あらゆる手段を講じている最中に、俺を襲ったバカどもが討伐を勝手に決めて、実行したらしい。しかも、ジュカ山脈はドラゴンの巣窟である。ほぼ確実に死ぬルートであるが、このバカどもは全く意に介さず最短ルートを全力で駆け抜けたらしい。途中何度かドラゴンに襲われたが、妖狐・ピャオランの幻術と誘惑術で何とかうまくまけたのだそうだ。

全く休憩も取らず、食料も水も与えず、ぶっ通しでこの馬は俺のところまで走り続けた。馬上の三人は走りながら食事をしていたらしいので、どんだけ俺を殺したかったのか、その程度がわかろうものである。しかし、殺意だけでは俺は殺せない。若さゆえの過ち、では済まされないバカっぷりである。まあおそらく、この作戦はピャオランが主導したものなのだろうが。

この馬を帝国に返せば、確実に厳しい現実が待っているのは、簡単に想像がついてしまう。さて、どうするべきか・・・。

「取りあえず、全然メシを食べてないんだろ？ニンジンでよければたくさんあるから、好きなだけ食べな。水も好きなだけ飲め」

「無限収納」から大量のニンジンを出す。馬は最初は戸惑っていたが、少しずつニンジンを食べ始めた。ゆっくり、咀嚼しながら、味わって食べているようだ。しばらくすると、馬が食べるのをやめ、小刻みに震えている。ゴンに様子を確認してもらう。

「こんなに美味しいものを食べたのは初めてだ、と言っているでありますー。こんな出来そこないの自分に慈悲をいただいて、うれしいと言っているでありますー」

そんな大げさな、とも思ったが、ニンジンと水ごときでここまで感謝されるとは、この馬どんだけひどい生活をしてきたんだ？なんか可哀想になってくる。

「出来そこないって、そんなことはないだろう。俺の張った結界は、どんな攻撃でも傷一つ付けられないものだ。でも、君の角での突撃は俺の結界に傷を作った。誇っていいと思うよ」

「本当は怖くて怖くて仕方なかったけれど、ここを切り抜けないと殺されると思ったから、全力で体当たりした・・・と言っているでありますー」

「妖狐を一瞬で行動不能にしたのを見て、次は自分が殺されると思ったので、取りあえず噛みついた。あれは申し訳なかった、と謝っているでありますー」

俺と戦っている最中も、馬上のバカはかなり乱暴に馬を扱い、俺の知らないところでこの馬は、相当の痛みと苦しみに耐えていたらし

い。

「そうかー。そうとは知らず、すまなかったね。ヒドイ攻撃をしてしまったね」

「・・・本当に、死ぬかと思った。この世の地獄を見た、と言っているでありますー」

「でも一番辛かったのは、自分の主人に見捨てられたことだ、と言っているでありますー」

あんなバカでも、主人として取りあえず認めていたのだ。割かしいいヤツなんだな。

「別にいいんじゃないか？見捨てられて。さっきのバカは君の凄さに気付かなかったんだよ。実際、君の戦闘力は高い。主人よりもはるかにね。その上、その美しい毛並み、何より目がすごくきれいだから、外見もすごくいいと思うぞ」

「・・・うれしいと言って、泣いているでありますー」

馬は俺の腕に顔をすりつけ、ブルルル、と嘶いている。さて、これからこの馬をどうしよう？

「見たところ調教魔法や奴隷魔法がかけられていないので、厳密に言うと、帝国の持ち物とは言えないのでありますなー。主人もこの馬を放棄しているのでありますから、拾った者が自分のモノにしても問題ないのでありますー。いらなければ、街で売ればいいのでありますー。かなりの値段になるのでありますー」

売るのはちょっとかわいそうだろう。

「この馬も、貴方なら背中に乗せてもいい、と言っているでありますー」

じゃあ、せっかくなので、ありがたくその厚意を受け取ることにする。この馬の大きさであれば、俺の体にちょうどピッタリだ。さて、それではこの馬を何と呼ぶか？ユニコーンペガサスというのは、何だか長ったらしいよね。ゴンにこの馬の名前を聞いてもらう。

「・・・ダバ、だそうでありますー」

いいわけないよね、その名前。では、俺の方で新しい名前を付けようか。ユニコーンとペガサスということで・・・

「お前の名前は、「ブライト」だ。天翔るペガサスと凛々しく立つユニコーンの血を継ぐ者としてふさわしい、雄々しい名前だろう？」

「・・・このユニコーンペガサスは、メスでありますがー」

それを早く言わんかい。前言撤回。ええと・・・。

「決めた、お前の名前は「イリモ」。「イリモ」と呼ぶ」

ブルルルル。とイリモは嘶く。どうやら気に入ってくれたようだ。てゆうか、本当に大丈夫だよな、ゴン？ちゃんと俺の話、通訳してるんだろうな？

実は、ユニコーンペガサスの成長は遅い。これは個体数が少なすぎて、正確な情報が把握されていないために起こった誤解である。本

来、普通の馬であれば４歳は、人間でいえば２０歳程度である。しかし、ユニコーンペガサスの場合は、人間でいえばまだ１２歳である。まだまだこれから、リノスもイリモも成長するのであるが、それはまた、別のお話。

第二十八話　臭いものには蓋をしない

ユニコーンペガサスが手に入った。いや、仲間になったと言った方がいいだろうか。早速、この「イリモ」のステータスをチェックしてみる。あ、ついでに、俺のステータスもチェックしてみると、役職名が「大魔王」から「結界師」に戻っていた。よかったよかった。

イリモ（ユニコーンペガサス・４歳＝人間年齢；１２歳）　ＬＶ１９
ＨＰ：８９
ＭＰ：１００３
結界魔法　ＬＶ１
ＭＰ回復　ＬＶ１
気配探知　ＬＶ３
魔力探知　ＬＶ３
肉体強化　ＬＶ３
回避　ＬＶ１
教養　ＬＶ１
麻痺耐性　ＬＶ３
毒耐性　ＬＶ３
飛翔　ＬＶ２

おおう！ＭＰが半端ない。探知系の能力が優れているので、どちらかと言えば斥候向きのスキルだ。攻撃するのであれば、頑丈な肉体を使っての突撃くらいしかないため、間違ってもこの馬が前線に出ると生きては帰れないだろう。むしろ、前線から一番遠い所での情報収集に使った方が効果的だ。まさに、大将が乗る馬そのものである。

ついでに、狐・ゴンのスキルも鑑定した。こんな感じだ。

ゴン（白狐・２１３歳）　ＬＶ３９
ＨＰ：１５９
ＭＰ：８７９
結界魔法　ＬＶ３
火魔法　ＬＶ３
回復魔法　ＬＶ４
生活魔法　ＬＶ１
詠唱　ＬＶ３
鑑定魔法　ＬＶ４
ＭＰ回復　ＬＶ１
気配探知　ＬＶ３
魔力探知　ＬＶ３
教養　ＬＶ５
麻痺耐性　ＬＶ２
毒耐性　ＬＶ２
精神耐性　ＬＶ３
加護　ＬＶ４
人化　ＬＶ２
隠密行動　ＬＶ５

教養と隠密をカンストしているので、さすがというべきか。こっそりご利益を与えることを考えれば、隠密行動のカンストはむしろ当然と言えるだろう。回復魔法のスキルも高いので、軍師としての役割なんかは適任だろう。

さて、「大魔王」からようやく普通の男の子に戻った俺。そこで一旦、王都に戻ってみることにした。その話を皆に提案すると、ゴンがこんなことを言い出した。

「王都に行くのであれば是非、王国軍本部に行きたいのでありますー」

どうやら王国軍本部の地下には、カルギ将軍の趣味である「魔物調教」の部屋があるらしい。しかも最近ではその規模を拡大しているそうで、何よりカルギの、「卵を人工ふ化して雛の状態から育てる」という手法は、一歩間違えば大惨事になる可能性があるという。現在保存されている魔物の卵が孵化し、それが逃げだすと、魔物によっては幼生体の段階でもかなりの被害が出る可能性があるらしい。かなり多くのワイバーンの卵をふ化し、調教していることは、王宮を占領した時の戦いを見ればわかる。もし、その他の魔物をまだ持っていたら?さらに強力な魔物を育てていたとしたら?そう考えると、今のうちにつぶしておく方が得策だろう。

取りあえず、マップで検索をかけてみる。・・・いた!魔物の反応が1匹。どうやら地下にいるようだ。

「今、俺の探知で調べると、確かに魔物が1匹いるようだ。これは排除した方がいいな」

「吾輩の探知では見えないでありますー。さすがでありますなー」

うふふ、見えないものを見ようとしてもダメなのだよ、ゴン君。

イリモに跨る。翼が邪魔になりそうだったのだが、これは小さく折りたためることが出来、一見すると翼の存在は分からないようになる。その機能性?に感心しつつ王都を目指す。ゴンは俺の背中に乗り、顔を俺の肩から出している状態だ。イリモの乗り心地は抜群によかった。体は少し小さいが、スピードが抜群に速い。まるで風に

乗っているみたいだ。また、手綱を使う必要が全くない。俺が右に行きたいと思えば右に行き、左に行きたいと思えば左に行ってくれる。実に優秀な馬である。

「イリモが乗馬がとても上手だと褒めているでありますー。とても走りやすいと言っているでありますー」

エリルに教え込まれた乗馬スキルがこんなところで役に立った。乱暴な乗馬術で馬に負担をかけていないか少々気になっていたが、どうやらエリルの教えは正しかったようである。

森に逃げ込んだ時はかなりの時間をかけて移動したのだが、イリモにかかれば、ほんの小一時間程度で森を抜けることが出来た。

北門から王城に入る。既に日は傾きつつある。急がねば。前日に大魔王が降臨し、大騒ぎになったところなので、城内には誰もいない。これはラッキーだ。カルギの魔物が強力であった場合、王都の建物や市民にさらなる被害が出ることになるだろう。市民がいなければ、被害は建物だけでおさまる。臭いものに蓋をするのではなく、膿は全て出し切った方がいいだろう。今がチャンスだ。

王都軍本部に着く。門やドアには鍵は掛かっていなかったが、カルギの執務室には厳重にカギがかけられていたが、火魔法で溶かして焼き切る。その部屋の奥に、地下に通じる階段が隠されていた。コイツには結界魔法がかけられており、それは地下室全てに及んでいた。しかも探知されないように効果を付与されていた。これをかけた結界師はかなりの手練れであることはもちろんだが、かなりの魔力を消費して、大変だったであろう。おそらく宮廷結界師なのだろうが。

しかし、俺にかかれば解除は簡単である。宮廷結界師に敬意を表して、探知不能効果は残しつつ、入室の結界だけを解除した。そして、地下室に向かう。魔物がいるのは地下二階であるようだ。

地下一階部分は、魔物を収納するスペースだった。恐ろしく広いスペースに沢山の檻が並べられている。しかも、結界に効果が付与されているのか、何故か明るい。おそらくここにワイバーンを収納していたのだろう。驚くことにここにはもう一つの入り口があり、それはなんと、刑務所につながっていた。重罪を犯した犯罪人や粛清の対象となった人が、この通路を通ってワイバーンや首長竜の餌になっていたのだろう。

いよいよ地下二階に向かう。ここでは卵をふ化する場所であり、おびただしいほどの卵が保存されていた。これが全て羽化することを考えると、ゾッとする。全て焼却処分とした。

魔物がいるのは、その隣の部屋だ。扉に鍵はかけられていなかった。俺はゆっくりドアを開ける。

まず見えてきたのは、巨大な檻だった。ここだけは何故か暗い。しかもご丁寧なことに、この檻全体にも結界が張られており、触れると強烈な電流が流れる仕組みになっていた。一体どれだけヤバイものを飼っているんだ。取りあえず結界を解除する。

薄暗く、奥の方はよく見えない。俺は「ライト」を出して周囲を明るくしようとする。すると、檻の奥から声が聞こえた。

「グッ・・・グァ・・・」

近づいて見てみると、そこには想像を絶する生き物がいた。「ドラ

ゴンの幼生体」である。

第二十九話　梅檀は双葉より芳し

「グア・・・グアアア」

弱々しい声で鳴いている子ドラゴン。よく見ると体中傷だらけで、血が出ている個所もある。状態はかなりひどい。放っておけば、そのまま死んでしまいそうだ。

「「ククルカン」でありますかー。これは珍しいでありますー。風魔法を操り、天候を操ると言われる種族でありますなー。羽は羽毛のように柔らかく、温かく、肉は非常に美味でありますため、幻の食材として伝説になっているドラゴンでありますなー」

ドラゴンの肉は美味であるというのはこの世界の常識だが、ククルカンの肉はその中でも特に美味であると言われており、食べると万病に効くとも言われているらしい。

体表は緑の鱗で覆われているが、数年すると脱皮する。脱皮すると体表は赤く変わり、羽毛のような羽が生えるのだという。数あるドラゴンの中でも最も知能が高く、成龍は最強クラスになるのだという。なるほど、そんな貴重なドラゴンを育てて自分の戦力にしようとしていたのか。さすがはカルギ将軍、恐ろしいことを考えたものである。ジュカ山脈からドラゴンの卵を取ってきたのだろうが、それにしても無茶をしたものである。いったい何人の兵士がドラゴンの餌になったのやら・・・。

「このドラゴン、どうするでありますかー。まだ幼生体ではありますが、肉はかなり美味だと言われているでありますから、このまま

ドラゴン肉として食すのもよいでありますー」

さすがに子ドラゴンを殺して食べようとは思わない。この子ドラゴンに邪気は感じない。一度、ステータスを鑑定してみる

ラース（クルルカン・６歳）　ＬＶ８　大怪我
ＨＰ：３／１１２
ＭＰ：５／８１
風魔法　　ＬＶ１
肉体強化　ＬＶ１
飛翔　　ＬＶ１

きちんと名前がついている。さすがに幼生体らしく、スキル的には大したことはない。しかしさすがはドラゴン、そこいらの人間では捕まえることすら難しい。それにしても、ＨＰもＭＰもギリギリだ。どうやったらこんなことになるのか。・・・っと思っていたらＨＰが２に下がった。「大怪我」とあるので、治癒しないと一定時間が経つとＨＰが減っていくのだろう。

邪竜には見えないので、一度回復させてみることにする。一応俺とゴンには結界を張っておく。このステータスならば、抵抗しても瞬殺できるだろう。倒れている子ドラゴンに、エクストラヒールをかける。白い光に包まれること暫し、子ドラゴンの傷は回復した。

「ガ・・・ガガ・・・」

「水が欲しいと言っているでありますなー。あと、かなりの飢餓状態でありますー」

早速水を出してやる。無限収納から出した、ちょっと大きめの桶の

ようなものに水を入れてやるが、首を突っ込んで必死に飲んでいる。続いて食料だ。基本的にドラゴンはなんでも食べるらしいので、とりあえずパンや果物、余っているぜんざいなどを出してやる。それらを片っ端から平らげていく子ドラゴン。よく食う。

「ガッ、ガァァァアー。ガッ、グルァァァァ」

「助かった、死ぬかと思った、と言っているでありますー」

ふう、と一息ついた子ドラゴンは、俺たちに気づくとパタパタと背中の羽を動かして空中に浮かんだ。

「ガゥー、グルァァァァー」

「誰だお前たち、僕は絶対にお前たちの言うことは聞かないぞ、と言っているでありますー」

「いや、俺たちは君の敵の敵だ。敵を倒したら君を見つけた。ひどい怪我を負っていたから、回復魔法で治したんだ。君と敵対する気はない。ただ、俺たちや関係のない人間に危害を加えるのであれば、全力で倒しにかかるけどね」

ゴンの通訳を聞いて、キョトンとなる子ドラゴン。ふわふわと飛んでいた状態から、地面に降りてきた。よく見るとまだまだ小さい。赤ちゃんサイズだ。

聞けば、ジュカ山脈でたまたまそこで訓練中の王国軍が、この子ドラゴンの一族のテリトリーに入ってしまったらしい。直ぐにテリトリーを出れば特に手出しをしないのだが、どんどん奥まで進軍してきたのだという。そこで、斥候と威嚇を行うことになり、一つの社

会勉強のつもりでこの子ドラゴンも同行したらしい。しかし、侵入した部隊は意外に強く、また、死に物狂いで抵抗したため、一旦応援を呼ぶことにしたのだという。そのスキを突かれ、一番弱かったこの子ドラゴンが集中攻撃され、撃墜されてしまった。そしてその身柄を拘束されて、この王国軍本部に護送されたのだという。斥候と威嚇とはいえ、ドラゴンに遭遇してそれと対等に渡り合い、あまつさえ子ドラゴンを捕獲して逃げおおせたのだ。カルギの兵の強さはハンパではない。

幼生体とはいえ、誇り高きドラゴンの一族である。この子ドラゴンは必死で抵抗したらしい。水も、食料も与えられず、飢餓状態に置かれながら、看守の命令を拒み続けた。ちなみに、与えられた命令は、腹を見せて「伏せ」のポーズをすること。毎日、若いワイバーンを連れてきて、そのポーズをさせる。ワイバーンは水と食料を与えられる。そんな光景をほぼ1週間見せられたのだという。

ここ2日は看守も来ず、いよいよ飢餓状態が極限に達し、命の危険を察知した子ドラゴンは、玉砕覚悟で檻をぶち破ろうと突撃を繰り返したらしい。しかし結界に阻まれて力尽き、絶望に打ちひしがれているときに俺が来た、というわけだ。

「お前さんはすごいな。エライ。さすがドラゴンの一族だ」

心から褒めてやる。すると子ドラゴンは、堰を切ったように泣き始めた。

子ドラゴンを抱いて外に出ると、辺りはもう真っ暗になっていた。イリモも無事だ。子ドラゴンを見ると一瞬目をギョッとしていたが、次の瞬間、平静を取り戻していた。頭がいい馬なのだろう。

子ドラゴンを抱っこしながら、これからのことを聞いてみる。彼は言った。

これから、ジュカ山にいる一族のところに一人で帰る、と。

第三十話　これからと深秋の夢

「うーん、このドラゴン一人で群れに帰るのは、無理でありますなー」

「そうだよな。まず、森を越えられないな。特に夜に森に入るのは、自殺行為だ」

俺とゴンの意見は一致していた。気持ちはわからんでもないが、今の彼のスキルと状況を考えると、無策で森を越えるのは不可能に近い。

子ドラゴンはグルルルルーと呻いている。何となく、自分でもわかっているのだろう。

「もう日も暮れた。これからのことは明日、考えよう。夕食にしよう。俺はリノス。結界師だ。よかったら君も来るかい？」

「グガガガ・・・ギャース」

「匿ってもらって申し訳ない。名前はラースだ、と言っているでありますー」

ラースを抱っこし、ゴンを背中に乗せて王国軍本部を後にする。そしてそのまま、バーサーム家に俺は向かう。

バーサーム家にかけた結界を解除し、ゴンとラースを中に入れる。イリモは遠慮して入ってこない。仕方がないので、土魔法で芝生の

庭の上に簡単な馬小屋を作る。夕食の人参と水を出して与えると嬉しそうに嘶いた。とっても居心地がよさそうで安心する。

部屋に戻り、俺は厨房に向かう。ゴンとラースは何やら二人で話をしているようだ。

さて、何を作ろう？無限収納の中にはジャガイモが大量にある。今日は一つこいつを使って、コロッケを作ってみよう。

鍋にお湯を沸かして、ジャガイモを入れて、塩を一つまみ入れる。保存用にもほしいのでちょっと多めに作る。ジャガイモを湯がいている間に、玉ねぎをみじん切りにする。そして、フライパンで色が透き通るまで炒めていく。水分を飛ばしながら塩と胡椒で味付けして、中身の具はこれで完成。

ちょうどジャガイモがいい感じにゆであがってくる。火魔法で手の温度を上げる。こうすると火傷をせずにサクサクと皮がむける。そして大きなフォークで潰していき胡椒と塩を加えて混ぜ合わせる。

水魔法と風魔法を応用して、冷風を作ってさます。その間に油を火にかけて用意し、卵を割ってとき、タネを楕円形に作る。作る。そして小麦をまぶしていき、パンでパン粉を作りながら、卵にタネを通して、パン粉を付ける。

そして油に通す。とても香ばしい匂いだ。コロッケを揚げながら、俺は野菜を出してサラダを作る。

しばらくすると大量のコロッケが出来上がった。そしてサラダとパンを用意して、夕食が出来上がった。

ゴンもラースもどんどん食べている。ラースはさすがに先ほどある程度は食べているのだが、ガンガン食べている。二人ともおいしそうだ。俺も食べてみたが、やはりおいしいコロッケだ。パンに挟んで食べると、さらにおいしさが倍増であった。

食後のデザートはぜんざいだ。これで作った分は全てなくなった。また作らなければならない。

さて、今後のことであるが、ラースはどうしても群れに帰るという。俺もゴンも賛成である。特に俺たちは行くところがなく、また、この無人の王都にいてもある意味どうしようもない、というのが現状である。森で狩りをしつつ、ラースを群れに送り届ける。ダメならダメでその時考えよう、王都は壊滅したが、ジュカ王国にはいくつかの都市がある。そこに行ってもいいだろう。場合によっては、山を越えてヒーデータ帝国に抜けてもいいだろう。それはジュカ山についてから考えよう。

俺は、この考えをゴンに話した。

「そうですなー。吾輩もそのお話に賛成でありますー。早速ラースに伝えるでありますー」

グググググ、キュィキュイとゴンがラースに伝える。こんな鳴き声で通じてるんだろうかと不思議に思うが、通じているのだ、これが。ラースがコクコクと頷いている。そしてラースはググゥ～と泣き出し、パタパタと俺の胸に飛んできた。泣き虫な奴だなぁ。

「グッグゥ～グルアァ」

「また、甘いの作って、って言ってるでありますー」

ハイハイ。サツマイモもたくさんあるので、今度は大学芋を作ってみよう。あれ、俺はいつからこいつらの料理人になったんだ？

気が付くとラースが寝息を立てて寝ていた。こうして寝顔を見るとなかなかかわいいものである。確かに、これまでかなり過酷な状況に耐えてきたので、ゆっくりと寝られるのは、久しぶりのことなのかもしれない。

「グヴァ～グヴァ～」

・・・寝言言ってやがる。ゴンに聞くと

「・・・ママ、ママ、って言ってるであります！」

俺はしばらくラースを抱きしめていた。前世の母親はどうしているだろうか。いいなお前は、ママがいて。俺はこの子ドラゴンを必ず里に返してやろうと決めた。

ベッドのある部屋が全てなくなっているので、寝床はダイニングの床だ。床にテーブルクロスを敷き、毛布の代わりにテーブルクロスを重ね、それをかぶって寝る。ゴンはソファーのクッションの上に丸まって眠ることになった。結構いいやつで高いんだぞそれ？何とも贅沢な奴である。

俺はラースに腕枕をして眠りについた。龍の鱗で怪我をするといけないので、俺は自分の体に結界を張り、そのまま深い眠りに落ちた。

・・・その夜、夢を見た。

いつものバーサーム家。いつもの俺のベッド。ああ、ちょっと寝過ごしたか。俺は慌てていつもの執事服に着替える。

一旦下に降りて顔を洗って、ご主人様にご挨拶をしないと。

部屋を出ると、階段の下からメイドの一人が「リノス早くっ！」と声がする。ああ、わかりました、すみません。と階下に降りる。

玄関ホールに出ると、エルザ様とエリルが並んで立っていた。ああ、ご主人様、お嬢様、おはようございます。お嬢様、今日は随分早起きですね？どうされました？

すると、玄関の扉が開き、ファルコ師匠が姿を見せた。朝はいつもご機嫌が悪い師匠がとても楽しそうだ。なんて珍しい。驚いたことに、その後ろからバーサーム侯爵と摂政殿下も姿を見せる。あれ？今日は何かパーティでもありましたか？

「リノス」

不意にエルザ様の声がする。

「ハイ、ご主人様」

「ご苦労様でした。一言お礼を言いたいと思ったのよ。本当によくやってくれました」

そんな、なんと勿体ない。そんなことを言われるようなことをしておりませんよ、と思いつつも俺は首を垂れる。

「儂は、お前があんなに強くなっているとは思わなかったぞ。ハハ

ハさすが我が弟子だ」

「彼なら大丈夫でしょう。もう十分やってくれました。本当に感謝します、リノス殿」

「バーサーム家の当主として、心から礼を言います。本当に、ありがとう」

みなさんどうしたんですか？確かに俺は・・・？カルギを、王国軍を、首長龍を・・・？あれ？

「リノス、貴方はもう、自由に生きてちょうだいね」

そんな、ご主人様。

「リノス」

エリルの声がする。

「ハネっ返りの私と一緒にいてくれてありがとうね。本当に、貴方に出会えてよかったわ」

見たこともない、満面の笑みを湛えるエリル。おい、エリル、そんな顔をしないでくれ。いつものように眉をひそめながら話しかけて来いよ！

「ああ、もう時間ね。そろそろ行かないと」

皆がぞろぞろ外に出ていく。メイドたちも一緒に出ていく。俺も一緒に行かないと。

不意にエリルが振り返る。そして、

「私のこと、忘れないでね。私はあなたのこと忘れないから」

光の中に、エリルは消えていった。外に出てみると、そこには誰もいない。みんなどこに行ったんだ?ご主人様!侯爵様!師匠!殿下!お嬢様!・・・エリル!!

ふっと目が覚めた。まだ夜明け前のようだ。

俺はフラフラと立ち上がり、厨房へ向かった。そして、大きな寸胴鍋を用意して、ぜんざいを作り始めた。心を込めて。

ほどなくして、ぜんざいは出来上がった。美味い。本当に美味い。最高傑作だ。

俺はその鍋を丸ごと、抱えるようにして厨房から外に出た。イリモもまだ眠っているようだ。

立ち上る湯気、俺は空に向かい、手を合わせた。

「お嬢様、貴女に食べさせたかったぜんざいです。沢山お召し上がり下さい。ご主人様、侯爵様、師匠、殿下もよかったらお召し上がり下さい。皆さんのことは、決して忘れません。これまでありがとうございました。そしてエリルお嬢様、貴女のことも、絶対に忘れませんからね」

驚くほど美しい朝日が、きれいに俺を彩った。

第三十一話　小旅行

「よーし！朝飯できたぞー」

まだ寝ぼけ眼のゴンとラースを起こす。イリモは早くに起きてきたので、早めに水と人参を食べさせる。持っていくと、顔を俺にすりつけてきた。何ともかわいい馬である。

朝は卵焼きと野菜、そして焼いたパン、時間があったので、ジャガイモをスライスして油揚げにしたフライドポテト、デザートには、これも合間を見て作った大学芋を提供した。何だか美しい朝日を見ると妙にヤル気がわいてしまったので、フライドポテトと大学芋は大量に作り、ぜんざいと共に無限収納に収納しておいた。

さて、そろそろ出発だ。気配探知にもマップにも人影は映っていないので、ラースは外に出していても大丈夫だろう。そして俺は、マップを使い、ラースの一族と思われる、「クルルカン」を探す。注意深く見ていくと・・・いた。ジュカ山脈の中腹に数十頭の群れがいるようだ。

ここから森を抜け、ジュカ山脈まで至るのに約5日。そこから登山で1日の行程のようである。イリモの翼を使えば1日で行けるのだが、あいにくとイリモの飛行時間は2時間が限界であり、それでなくとも前日、バカどもを載せて俺の下に来たときは6時間も飛行させられたのだという。

本来ならとっくに気を失って不時着しているのだが、そこは妖狐が無理やり飛ばせたらしい。無理に無理を重ねているので、ここでさ

らに無理をさせる訳にはいかない。回復するまで待つかどうかを聞いてみたが、イリモはラースを送り届けるべきだと即答した。歩いていく分には全く問題ないという。そのお言葉に甘えはするが、イリモのことも考えて今回は、かなりゆっくり目の行程を組んでいる。

森の中は、順調に進むことが出来た。嬉しいことに、森の魔物が襲ってきてくれる。俺のスキルは、カンストしているものやＬＶの高いものは隠しているし、ＨＰもＭＰも１００と表示させている。まあ、見る人が見たら、何じゃコイツ？と訝しがられるだろうが、そこは魔物、割かし強いＣランクからＢランクの魔物が襲ってきてくれた。

当然、ほとんどは俺が瞬殺したが、たまにＥランクの大ネズミなどが出ると、ラースがパタパタと飛んで行って狩ってくる。それを美味そうに食べながら自分のおやつにしていた。

ラースは、普段はパタパタと飛んで俺たちについて来ているが、何かの拍子にスッといなくなるので、最初はかなり驚いた。まあ、マップがあれば問題なく居場所は把握できるが、獲物を追いかけてかなり遠くに行ってしまい、気が付いたら誰もいませんでした状態になってしまい、オロオロするラースを救出したりした。

そんな気まぐれなヤツであるが、疲れると俺の下にパタパタと寄って来て「抱っこ」をせがみ、抱っこをした俺の腕の中でスヤスヤと昼寝をする。そんなちょっと微笑ましい一面も見ることが出来た。

幸いだったのは、森に入って二日目の朝に、久々にカースシャロレーが複数現れたことだ。朝飯を食おうとしていた時に、森の中５０メートル先にそいつらはいた。俺が捕らえようと思っていたのだが、突然イリモがカースシャロレーに向かって突進していく。巨牛の方

もイリモに向かって突進する。まさしく、ユニコーンペガサスとカースシャロレー、馬対牛の一騎打ちが見られることになった。結果はイリモの圧勝で、彼女の角に眉間を貫かれた巨牛は、あえなくその命を散らせた。残りは3頭いたのだが、そのうちの2頭はイリモの角の餌食となった。そして残りの一頭はその光景を見て、脱兎のごとく逃げ出したのだ。

あとでゴンに聞くと、あのイリモが倒したカースシャロレーは全員雄であり、逃がしたのはメス牛だったらしい。どうやら雄3匹がメスを取り合いしていたようで、しかもその雌は既にお腹に子供を宿していたらしい。牛の世界にもバカはいるもので、要は牛の恋路を邪魔した牛が、馬に貫かれて死んだということである。

「惜しかったでありますなー。カースシャロレーは雌が美味でありますのにー」

ゴン一人だけが悔しがっていた。

巨牛はなんと、ゴンが見事に解体してくれた。人化し、俺から借りた鉄の剣を器用に使って見事にバラバラにしてしまった。何でも狐時代、肉屋の軒下で暮らしていたことがあり、肉を解体し、さばいていく場面を毎日見ていたそうである。ちなみに食い気のあるゴンは、肉屋だけでなく魚屋にも居候していたことがあり、肉も魚もおろせる腕を持っているらしい。今度はオークの肉を捌いてもらおう！意外なところで頼もしいヤツである。

ただ、狐の顔をした人間が全裸で淡々と牛を解体する場面は、かなり不気味である。夜中に見るとまず、トラウマになること間違いなしなので、ゴンの肉の解体は日中のみというルールができた。

二日目の昼以降は、肉料理が増えた。雄とはいえ、カースシャロレーである。美味しさは半端じゃなかった。昼がバーベキュー、夜が焼き肉という生活が三日も続くことになる。さすがに肉はもう、しばらくはいいだろう。

夜は俺の結界内で就寝である。気温も湿度もちょうどいい感じに設定していたので、全員熟睡であった。やはり、ラースは腕枕がお気に入りのようで、毎晩それを求めてきた。一度断ったが、泣いて怒っていた。しかたなく腕枕をして寝たが、本当に泣き虫なドラゴンである。今後が大丈夫だろうか。

そして森に入ってちょうど5日目、少し日が傾きかけた頃、ようやく俺たちは森を抜けた。いよいよ、ドラゴンの領域に入る。

第三十二話　分かれ道

ルノアの森を抜けると、見えてきたのは緩やかな丘だった。秋も深まっており、すでに辺りは暗くなってきている。おそらく、クルルカンの住む群れまでは、約1日の登山が必要になる。さすがに夜間の登山は難しい。どうせ急ぐ旅ではないので、本日はここで野営をすることにする。

無限収納からジャガイモと玉ねぎ、カースシャロレーの肉、調味料を取り出す。今日は腕によりをかけた肉じゃがだ。森の中で採取したキノコを入れてみる。毒はないのでいけるはずだ。醤油がないが、塩で何とかしよう。日本酒ではないが、何か甘い酒があったのでそれをみりん代わりに使う。砂糖と酒を加えて最後に塩で味を調える。

その間、パンとサラダを用意する。卵が残り少なくなった。今日食べてしまおう。卵焼きをちゃっちゃと作る。

「グググァーグググァー」

「肉もー肉もー、と言っているでありますー」

肉好きのラースのために、昼に余った焼き肉を出してやる。塩で食べてるだけなのだが、本当においしい。魔力が肉を美味くするのか？機会があれば調べてみたい。

俺、ゴン、ラースで食卓を囲む。ラースの喰いっぷりは見ていて気持ちがいいくらいだ。嫌いなものはなく、なんでも食べる。おそらくこいつの味覚は、「大好き」か「好き」しかないのだろう。肉じ

ゃがをペロリと食べ、お代わり。確かにおいしかったのだが、俺たちの分を食いつくす勢いで食べている。フライドポテトなどは皿にてんこ盛りに出したのを一口で食べてしまった。ゴンが恨めしそうな顔をしている。そんな顔しない。お兄ちゃんなんだから。

・・・またゴンに、フライドポテトをつくってあげよう。

食後のデザートは大学芋だ。こいつはゴンにもラースにも大好評で、ここ数日のデザートはいつもこれだ。焼き芋のようなものも作ってみたのだが、二人のリクエストはいつも大学芋だ。特にラースはカリッカリのものが大好きのようで、いつもそれをリクエストされる。

俺はぜんざいだ。やっぱりあんこはいい。小豆は動物の餌に使われているため、この世界ではとても安価で手に入る。もし、もち米が手に入るのであれば是非、おはぎを作ってみたい。

他人が食べているものは美味しく見えるらしい。ラースが寄ってきた。仕方なく少し上げると嬉しそうに食べている。一体こいつの胃袋はどうなっているんだ?

満腹になり、あとは寝るだけだ。イリモを傍に呼んで結界を張る。ドラゴンの生息地なので、ちょっといつもより厚めにしておく。

ラースはイリモの上に乗って遊んでいる。この旅の間に、この二人は随分仲良くなった。最初はちょっとビビっていたイリモだが、そこは姉の風格だろうか?見事にラースを操っている。ラースが手綱をもってイリモを走らせているが、イリモがラースを落ちないように気をつけて走っているのだ。小さいドラゴンがユニコーンペガサスに乗って疾駆している。シュールな光景である。見る人が見たら卒倒する光景なのだろう。カメラなどの映像を記録する装置がない

のが悔やまれる。

さて、そろそろ寝ようかとなった時、俺のマップに反応があった。とんでもないスピードで山を下ってきている。その数5。おそらくドラゴンだろう。俺とゴンの間に緊張が走る。

マップにはこのドラゴンは黄色で表示されている。俺たちに危機感を持っている証拠だ。おそらくドラゴンの斥候部隊だろう。そう考えているとすぐに、ドラゴンは姿を現した。

・・・でかい。本当にでかいドラゴンだった。１５メートルはあるだろうか。結界から漏れる薄明りに真っ赤な鱗が映える。おそらく、ククルカンだろう。

俺は立ち上がり、生活魔法のライトを出す。辺りが照らし出される。ドラゴンたちは丘の中腹に降り立っている。俺はラースの姿が見えるよう、ラースを抱っこする。

一匹のドラゴンが動いた。その瞬間、ものすごい咆哮が上がった。大地を揺るがす咆哮。耳がキーンとなる。

「ラース！といっているでありますー！！！！！！」

こんな状況でも通訳してくれるゴンが頼もしい。

おそらくラースの母龍で間違いないだろう。直ぐに俺たちの至近距離にやってきた。首の後ろに二枚の羽と背中に二枚の羽を持つドラゴン。ちょっと鑑定してみる。

ナキテス（クルルカン・３０４歳）　ＬＶ５４

ＨＰ：１０００２４
ＭＰ：９６５４
風魔法　ＬＶ５
結界魔法　ＬＶ３
ＭＰ回復　ＬＶ３
気配探知　ＬＶ３
魔力探知　ＬＶ３
肉体強化　ＬＶ４
竜魔法　ＬＶ４
回避　ＬＶ４
教養　ＬＶ４
麻痺耐性　ＬＶ３
毒耐性　ＬＶ３
飛翔　ＬＶ４
天候支配

・・・さすがドラゴン、強い。全てのステータスが高いレベルになっている。ドラゴンは１０００年生きると言われているが、このドラゴンはまだ、若い方なのだろう。人間で言うと３０代か。

俺たちの至近距離にナキテスと表示されているドラゴンは降りてきた。

「ギャギャギャギャギャーー」

ラースが俺の腕を飛び出して、母龍のところに飛んで行った。母龍の顔の周りを飛び回るラース。本当にうれしそうだ。

「ゴウゴウゴウーグルルルル―」

雷鳴のような音が鳴る。母龍もラースとの再会を喜んでいるのだろう。

しばらくすると母龍は、クルリと尻尾を巻き付け、とぐろを巻くような形を作った。その真ん中に空いた穴にラースはすっぽり収まった。母親の背中にグリグリ、スリスリと顔を押し付けている。

「ゴウゥゥゥゥ。グゴゲガガガガー」

「子供を助けていただき、連れ帰ってくれたことに感謝する、と言っているでありますー」

よかった。本当によかった。

「このお礼は、後日改めてとも言っているでありますなー」

「ああ、それには及ばないと伝えてくれ。」

「これからどこに行くのだと聞いているでありますー」

「できるなら・・・この山を抜けて、ヒーデータ帝国のクシャナに向かいたい」

この山を突っ切るとクシャナなのだ。ここから一番近い町になる。

「ゴゴゴゴグォー」

「承知した。この辺りは我らが領域。他の領域の種にも、そなたらには手を出さぬよう言っておこう、と言っているでありますー」

「十分です。感謝します」

そんな母龍と会話していると、ラースがパタパタと俺のところに飛んできた。そして俺の胸にしがみついた。

「グルァ、グルァ」

「離れたくない、と言っているでありますー」

ラースの爪が食い込むほどの、強い力で俺の腕をつかんでいる。俺はラースを抱っこする。母龍が、すみません、と謝ってくる。

「いや、いいんですよ。小さいころはみんなこんなもんですから。ええ、ラースは確かに寂しがり屋で泣き虫ですが、結構強いところもあるんですよー」

そんな会話を母龍としていると、ラースが静かに寝息を立て始める。いつもこうすると、すぐに寝るのだ。

しかし、気が張っているせいか、ふっと目を開けて俺を見る。俺の姿を確認するとまた、ラースは俺の腕にしがみつく。

「ああ、大丈夫ですよ。ラースはすごかったんですよ?捕らわれても一切敵の言いなりにならなかったんです。そう、1週間も水も食料も与えられない中で。それどころか、その捕らわれている場所から全力で逃げようとしたんですよ」

再びラースの瞼が落ちていく。そして、寝息を立て始める。しばらくするとまた、ピクッと体が動き、再びラースが顔を上げる。俺の顔を確認して、また俺の腕にしがみつく。俺はラースをぎゅっと抱

きしめる。

「ええ、私が見つけたとき、ラースは大怪我をしていました。・・・怪我は完全に治療しました。その後、一人で群れに帰ると言っていたのですが、さすがにそれでは危険なので・・・。いいえ、とんでもない。私たちこそ、とっても勉強になりました。途中、自分で大ネズミなんかを狩っていたんですよー」

ラースが安心したような顔をする。徐々に瞼が落ち、そしてまた寝息を立て始める。しばらくするとラースの体が重くなった。熟睡したのだ。

俺はラースを再び母龍のとぐろの中に返した。とても幸せそうな顔をしている。俺は知っていた。寝ているときに、何度も「ママ、ママ」と寝言を言うラースを。やっと、やっと、大好きなママに会えたのだ。よかったな、ラース。

幸せな顔をしているラースの顔をイリモがチラリと舐めた。これまでいい遊び相手であり、いいお姉さんだったものな。イリモも喜んでいるみたいだ。

「では、そろそろ。と言っているでありますー」

ラースを抱えたまま母龍はゆっくりと空に浮き上がった。そしてそのまま遠くの空に消え、その他のドラゴンも、その後を追うように飛んでいった。

ラース、よかったな。きっとお前は立派なドラゴンになる。できるだけ長生きをして、ラースの雄姿を見たいなと思いながら俺は、ゴンを背中に乗せ、イリモの上に跨った。

今宵一晩をかけて、この山を突っ切る。目指すはヒーデータ帝国だ。

第三十三話　いいわけ

ジュカ山を駆け抜けること数時間、山の遥か下に街が見えた。間違いない。あれがクシャナだ。

ラースの母龍が言った通り、ドラゴンの襲撃は一切なかった。１匹だけ俺たちの上空を飛ぶドラゴンを見かけたが、おそらくあれは偵察のドラゴンだろう。大きな問題もなく、スムーズに山を越えられた。

ゆっくりと山の崖を下っていく。イリモの翼があれば、落ちることがない。スルスルと落下し、俺たちはなだらかな丘の上に降り立った。よく見ると、クシャナの町の門は閉じられている。門番もいない。おそらく夜中は町全体を締め切るのだろう。仕方がないので、朝を待つことにした。

大きな木があったので、その下に結界を張り、体を休める。

ジュカ王国ではなく、ヒーデータ帝国に来たのには訳がある。ジュカ王国内にはバーサーム家の政敵が多くいるのだ。王都の周辺の領土はほとんどが、反バーサーム派である。バーサーム領は王都から馬で２日の場所にある。王都とバーサーム領の間にあるのが、エリルに欲情していたヒーラー公爵領である。さすがにそこを抜けていくのは、殺されはしなくても、厄介ごとに巻き込まれそうな気がしたのだ。逆に、ヒーデータ帝国は、割合バーサーム家とは懇意であったらしい。帝国の宰相とバーサーム侯爵は意外と話が合うのだとエルザ様から聞いたことがある。そう言うこともあって、俺は帝国への道を選んだのだ。

実はこのヒーデータ帝国に抜けるルートは最初、イリモが嫌がった。何しろ角と翼が生えているのだ。それはもう、当然目立つ。今までは人の目に触れないこともあって、比較的自由にのびのびと動いていたが、ここから先は嫌でも人の目に触れる。もともとヒーデータで生まれて育ったイリモだったが、かなりの虐待をされてきたこともあり、この国にいい思い出はない。あんな帝国王宮に戻るのは真っ平ごめん、と強く思っていたのだ。

そこで、俺の結界の出番である。結界ＬＶ５はさらに機能性が充実している。何と、結界内の人物の姿・形が変えられるのだ。俺にはユニコーンペガサスに見えるが、他の人には、ただの馬に見えているというわけだ。さすがに体格を変えることはできないが、翼と角を隠せば、ただの小柄な馬である。その条件を出して、ようやく了承されたのだ。

ちなみに、この結界魔法はバーサーム家の屋敷にもかけてある。外見は大きな木。樹齢何千年かと思われる太い幹を持った木である。さすがにこれを切り倒そうとするバカはいないだろう。たぶん。

朝日のまぶしさに目が覚める。もう少し寝ていたかったが、この状況では難しい。俺は起き上がり、結界を解除する。当然、俺たちにかけてある結界はそのままだ。俺もゴンも、攻撃を受けない硬い結界を纏っている。

門番が出てきた。眠そうな目をして立っている。俺はイリモを引き馬にしつつ門に近づく。俺たちの姿を見た兵士は一瞬、ビクッとなった。

「おっ、お前たち、どっから来た?まさか山を越えてきたのか?ジ

ュカからきたのか？」

「はい、ジュカ山を越えてきました。大変でしたー」

「え？山を越えてきた？ちょっ、ちょっと待ってろ！！」

一目散に門の中に戻っていく兵隊。早くしてくれよー。こちとら忙しいんだよ。

しばらくすると、５０代と思われるイカつい顔をしたおっさんを連れて出てきた。おっさんは俺を一瞥して

「まだガキじゃねぇか？いくつだ？１４？何しにここに来た？それより、お前の名前は？」

「私はジュカ王国、バーサーム侯爵家にて執事代理を務めております、リノスと申します」

「ジュ、ジュカ王国？？バーサーム？？お前嘘言ってるんじゃないだろうな！？」

「いいえ、嘘ではありません。バーサーム侯爵家、エルザ様にお仕え致します者でございます。ジュカ王国が崩壊し、ルノアの森を抜け、ジュカ山を越えて、命からがらやってまいりました。もし、この街に入ることが叶わないのであれば、別の道を進みます。どうぞ遠慮なく仰ってくださいませ」

「まさか、そんな、こんなガキが・・・。いや、失礼。ここでは何だ。中で話を聞かせてくれ」

こうして俺は、クシャナの町に入った。

通されたのは、兵士の詰め所であった。その中の司令官室。どうやらこのオッサンは街の防御隊の司令官のようだ。

「ジュカ王国は本当に崩壊したのか？いろいろと手を尽くして調べているんだが、情報が錯綜しているんだ。お前さんの知っていることを話してほしい」

「おそらく、そちらが得られた情報とそう変わらないと思いますよ？」

「では、大魔王が降臨し、巨大竜を使役して王都を攻撃し、魔王自ら王宮を崩壊させて、国王以下全ての人間を全滅させた、というので間違いはないのか？」

あー首長龍を使役したのは俺ではないのだけれど。まあ、概ね話は合っているかな？

「大魔王かどうかはわかりませんが、王国軍の将軍であるカルギ元帥が反乱を起こして王宮を占領したのは事実です。その後、首長龍が現れて街を破壊したのも事実です。私は王都を逃れ、森に入ったところで冒険者と出会い、彼らと行動を共にしてひたすらルノアの森を逃げました。道に迷って彷徨っていたら森を抜け、気が付けば山の中に入っていました。その時に冒険者とはぐれ、ここまで何とか来た、というわけです」

「ふむ。ジュカ王国であれば高ランクの冒険者は多くいるな。そんな奴らと出会えたのは幸運だったな。しかも、ジュカ山ではぐれたのか。あそこはドラゴンの巣窟だ。よく怪我一つなしで山を越えら

れたな」

「冒険者の方がドラゴンと対峙しているときに、私を馬に乗せて逃がしてくれたのです。馬に任せて夢中で駆けたので、どこをどう走ったのかは覚えていません」

「まあ、そうだろうな。おそらくその冒険者たちはドラゴンの餌食になっている。わかった。お前のことは一応帝国の王城に報告せねばならん。すまないが、王城から指示があるまでこの街に逗留してもらうことになるが、それでもいいか？」

「そうですね。それならば致し方ありません。ただし、馬を連れていますので、あれが休める場所でないと・・・」

「それなら兵舎の馬小屋を使うといい。餌もあるから、自由に与えていいぞ。お前はこの本部の空き部屋を使ってくれ。将校用の部屋だから、そこいらの宿屋よりもいい部屋だぞ」

案内された部屋は、狭くはあったが、きちんとベッドもあり、机、トイレや洗面台までであった。確かに、宿屋に比べるといい部屋なのだろう。

「この建物の敷地内は自由に歩いてもらって構わないが、敷地内からは出ないでくれ。食事はきちんと提供するし、用事があれば外の兵に言ってくれ。一応お前は客人だが、停戦国の人間、しかも高名な貴族の家臣なのだ。俺が言いたいことは、わかるな？」

「もちろんです。寧ろ、手厚いもてなしをいただき、感謝しております」

「手厚い・・・か。まあ、ゆっくりしていってくれ。なぁに、三日もすれば王城から返事が来るだろう」

俺は司令官に許可を得て、イリモを厩舎に入れ、その後、与えられている部屋に入り、ベッドの上に倒れ込む。かなり言い訳がましくなったが、特に疑問を持たれなかったのでホッとしている。ゴンも疲れているようだ。

さて、この帝国ではどんなことが起こるのか？不安がないと言えばうそになる。ただ俺は、平和で平穏な暮らしがしたいだけなのだ。願わくば、どこかの街で家を持ち、ゴンやイリモと共に静かに暮らしたい。そう思いつつ、俺は寝不足のせいもあり、まどろみの中に落ちていくのであった。

第三十四話　帝都からの招待

「待たせたな。帝都から使者が来た。ちょっと時間をもらっていいか？」

ようやく来たか。と俺はベッドから降りて司令官についていく。当初は三日と聞いていたが、実際にかかった時間は一週間である。お陰で実にのんびりとした時間を過ごさせてもらった。メシは三食きちんと運ばれてくるし、兵士も必要以上に話しかけてこようとはしない。司令官も忙しいのか、ほとんど姿を見かけることがない。俺がやることと言えば、イリモに餌をやるくらいのものだ。そのイリモも、のんびり寛いでいるようだ。

そろそろ暇を持て余しつつあったところに、この報告である。なかなかいいタイミングだ。

「ヒーデータ帝国騎士団のセオーノと申します」

黒髪で、かなりガッシリした体格を持っている。物腰は柔らかいが、精悍さが目立つ風貌だ。

「リノス殿、我が帝国宰相であります、グレモント様が貴殿に直接会って話がしたいと申しております。お手数ながら我々と帝都に同行いただきたい」

俺は自分の身分を執事代理と名乗っていたのだが、そんな人間に対しても、丁寧な対応をしているところを見ると、俺を丁重に案内せよとの厳命を受けているのだろう。

俺はその提案を承諾し、ゴンを背中に乗せ、イリモに乗って帝都に向かった。セオーノ率いる帝国騎士の護衛は完璧で、実に訓練がよく行き届いていた。

クシャナから帝都までは馬で1日の距離だ。途中小休止を取る。護衛の一人が鑑定スキルを持っているようで、「結界師と聞いていたが結界スキルが見えない」と言っていた。彼の鑑定スキルはＬＶ１のため修練が足りないと同僚に怒られていた。一応、結界スキルはＬＶ２を表示させるようにしよう。

そうした小休止は何度かあったが、基本的には、ほぼ丸1日走りっぱなしである。休養十分のイリモは問題ないとしても、長時間の馬での移動に慣れていなかった俺は、結構疲れた。

日が傾き、夜の帳が降りる頃に帝都に到着した。帝都には城壁はなく、山の上にあった。ジグザグの山道を登り、登りきり、森を抜けたところに都があるのである。言ってみれば山頂を削り取り、そこに都を作っているような感じだ。

城門をくぐり、帝都に入る。しばらく街を進むと、大きな建物にぶつかる。そこで馬を降りて建物の中に案内される。

そこはジュカ王国の王宮を思わせるような豪華な作りだった。てっきり城の一部かと思ったが、何とそこはホテルだった。俺と同じ執事服を着た紳士が恭しく俺たちを出迎え、俺を部屋まで案内する。部屋はとても広く、まさにＶＩＰ待遇であった。

「明日の朝、迎えに参ります。それまでゆっくりとお休みください」

セオーノは俺に一礼をして、その場を後にする。その後、ホテルから食事を提供されたが、何とローストビーフであった。バーサーム家を思い出す。その他、出されたパンやスープも美味しいもので、俺は大いに堪能した。

「かなり我々を警戒しているのでありましょうなー」

食事が終わり、デザートを食べ終わり、まったりした時間を過ごしていると、ゴンが小声でつぶやく。

さすがに料理に毒を入れてはいなかったが、わからないように俺たちには監視が付けられている。この部屋の両隣に二人ずついる。その上、天井にも二人いる。忍者みたいだ。護衛なのかもしれないが、帝国はかなり俺たちに気を使っているのだろう。

ヒーデータに入ってからは結界を一度も解除していない。このまま解除する気もないが、しばらくはこのままでいよう。

驚くことにこの部屋にはシャワーがあった。どういう仕掛けをしているのかは知らないが、この世界に来て初めて見た。ベッドもフカフカでよく寝ることができた。

朝、セオーノが迎えに来る。外に出て見ると遥か先に宮城が見える。ジュカ王国と比べると規模が小さいが、基本的に宮城は皇帝が住む場所であり、外交や食料などの行政機関は宮城の周りにあるらしい。

てっきり行政機関のどこかに案内されるのかと思いきや、宮城に案内されてしまった。どうりで道が広いわけだ。山の上とは思えないほど、整備された広い道である。

宮城の門をくぐると、セオーノはここで待つという。代わりに中から執事然とした紳士が現れ、俺を案内した。宮城内はまるで迷路のようになっており、「マップ」がなければ間違いなく迷子になっているだろう。

応接室のような部屋に通されてしばし待つ。この部屋も数名の者が監視している。天井にもいる。ご丁寧なことだ。

そんなことを思っていると扉が開き、頭が禿げ、口ひげを蓄えた老人と、ローブで頭を隠した魔法使いらしい男が入ってきた。老人が俺の前に立ち、

「貴殿がリノス殿か。私はこの国の宰相を務めている、グレモントという。遠路よくおいでくだされた。ささ、まずはお掛け下さい」

グレモントの後ろに控えた魔術師が、何やら耳打ちをする。

「ほう、その年で結界ＬＶ２をお持ちか。教養スキルも高い。どうやら本物のバーサーム殿のお方のようだな」

魔術師が俺を鑑定したらしい。やはりダミーのスキルに引っかかってくれたようだ。

「左様でございます。バーサーム侯爵家で執事代理をしております、リノスでございます。宰相閣下、そのようなお言葉ではなく、どうぞ、お呼び捨てください」

「いや、そうはいかぬ。奴隷の身分でありながら、バーサーム殿が養子にしようとまでされた人物だ。あのお方には世話になったのでな。そんなお方の身内を無下にはできないだろう」

俺が奴隷だということも把握している。情報収集能力が優れているのか、と思いつつ俺は、恐れいります、と頭を下げておく。

「さて・・・貴殿からの報告は聞いた。ジュカ王国の王都は本当に壊滅したのだな？生存者は？・・・なるほど、現在は無人の都か。国王陛下は？侯爵殿は？・・・そうか、皆、亡くなられたのだな」

「左様でございます。従って現在は空白地帯のようになっておりますが・・・。帝国はジュカ王国に侵攻されますか？」

「いや、そうもいくまい。仮にも大魔王が降臨して、大規模な王都一つを壊滅させたのだ。寧ろその大魔王の行方を追うのが先決であろう」

「では、帝国は王国に手は出さない、と？」

「バーサーム殿とカルギ将軍が消えたのだ。遠からず王国は内戦状態になるだろう。それに巻き込まれるのがイヤで、貴殿は帝国に来たのであろう？まあ、その件は良い。しかし、惜しい人物を亡くした」

「我が主、バーサーム侯爵でしょうか？」

「いや、公とカルギ将軍の二人だ。王国はあの二人が支えていると言って過言ではなかった。カルギ将軍の率いる部隊に帝国軍は一度も勝てなかった。その将軍を侯爵殿は上手く抑えながら国内外の均衡を絶妙に保っていた。今後、あのような天才的軍人と政治家は出ないであろうよ」

「私は詳しいことは存じませんが、国王陛下は我が主とカルギ将軍閣下に、大きな信頼を置いておられたと聞いております」

「あの国王陛下は房事にかまけて政務を顧みなかった。隠さずともよい。皆が知っていることだ。しかし、あの国にはそれが逆によかったのだ。下手に国王が政治と軍事に手を出していれば、とっくにあの国は蹂躙されていた。帝国がやらずとも、周辺国がやっただろう。天才二人に全てを委ねたのが、あの国をここまでにしたのだ」

あんなブタ国王にそんないいところがあったとは・・・見方が変ると違うものだ。

「しかし、侯爵殿の死去は惜しいな。あのお方が生きておれば、あの国は立ち直れただろうに。何せ3日間寝ずに働く方だからな。部下を採用する時に「72時間戦えますか?」と真顔で聞いていたそうだからな」

クックックツと笑う宰相。なるほど、だからあまり屋敷に帰ってこなかったのか。ある意味、侯爵も化け物だったのだ。

「それにしても、貴殿のような人も珍しい。王族でもないのに、成人前の子供にわざわざ使者を遣わして帝都に招待するなど、ない、とは言わんが、かなり珍しい珍事だな」

「私は14歳になります。既に成人しておりますが・・・」

「12歳で成人としているのは、ジュカ王国くらいのものだ。帝国をはじめ、近隣諸国はどこも15歳で成人なのだ。あの王国には成年前の女性を後宮に入れてはならぬ、という初代国王の遺言があってな。もっともそれは、年端もいかぬ子供を人質に取るなという意

味なのだが、先々王がどうしても若い子女を側室にと望まれたのだが、その遺言のため後宮に入れることができなかったのだ。そこで、成人を１２歳として思い人を後宮に入れたのだ。先王の時に改めればよかったのだが、先王は自分の体に鞭打つことがお好きな王でな。それがために早くにお亡くなりになり、現王になったのだが・・・。王はお爺様の血を継がれていたらしいな」

ジュカ王国の国王は、ロリコン⇒変態⇒ロリコンの系統のようだ。全くロクでもない国王らである。

第三十五話　帝都からの招待②

「うむうむ。摂政殿は有能だったな。これも惜しい人を亡くした」

宰相閣下との会話が続く。俺が呼ばれたのはジュカ王国の様子を聞くだけだろうか。もしそれだけなら、もうすぐ話も終わるだろう。ホテルに帰ってどうするかな、と思っていると、宰相閣下の顔が変った。

「さて、貴殿を呼んだのは他でもない。一つ、聞きたいことがあったのだ」

ほう、一体何だ？難しいことはわからんよ。

「他でもない。バーサーム家の魔導士、ファルコの行方は知っておるか？」

「ファルコ師匠！？ファルコ師匠をご存じなのですか？大魔導士ファルコは私の師匠です。生憎と・・・」

「そうか、やはり亡くなったか。どのような最期を迎えたのか、知っていたら教えてくれまいか？」

俺は師匠の両腕が切り落とされていたこと、胸を剣で貫かれ、首長竜に食われて死んだことを話した。

「ファルコらしくない最期だ。あのファルコの腕を切り落とすとは相当の手練れだな。やはりジュカ王国に手を出さなくてよかった。

倍の兵数を有するとはいえ、おそらくジュカ王国に侵攻すれば、我々は壊滅していただろう」

「恐れ入りますが、どうしてファルコ師匠のことを？」

「ファルコと私は幼馴染でな。そうだ、ファルコはヒーデータ帝国の人間だ。幼いころから魔術に秀でていてな。魔法大学を卒業するころには、ほぼすべての属性の魔法は扱えるようになっておった。特に火魔法は帝国魔法使いの中でもトップクラスでな。将来を嘱望された魔法使いだったのだ」

「その大魔導士がなぜ、ジュカ王国に？」

「それは・・・皇女様の部屋に夜這いをかけてな。何とか阻止はしたが、警護の兵が数名死んだのだ」

・・・師匠、アンタ何やってるんだ？

「それだけであれば、何とか有耶無耶にすることはできたのだ。何と言っても、帝国始まって以来の天才魔術師だからな。しかしファルコは当時、魔法大学の教官をしておったのだが、あまりにも指導が厳しくてな。自分は回復魔法が使えるので、怪我をすれば治癒すればよいという考えであったから、情け容赦なしでな。あまりにも厳しい授業であったため、魔導士を断念する若者が激増していたのだ」

わっ、わかる～。師匠の教えを受けたことのない人にはわからないけど、マジでキツかった。本当に死ぬ一歩手前まで攻撃するんだから。子供でも情け容赦なかったんだから・・・。その後、エリルが来てフルボッコ・・・。

あの地獄の日々が蘇る。涙が出てきた。

「帝国内では、ファルコの評判は芳しくなかった。優秀な魔導士であることは認めるが、人格が最悪という評価だった。そこにきて皇女様への夜這いだ。有耶無耶に出来ぬのはわかるだろう」

ですよね～。完全に死刑になっちゃう路線ですよね。

「ファルコについてはさすがに命を奪うのは憚られた。しばらく牢に繋いでおくことにしたのだが、ヤツめ。牢を破り、再び皇女様に夜這いをかけおった」

ええっ！？二回も？？師匠、あんたマジで何やってるんですかー！

「侍女のとっさの機転で皇女様は難を逃れたのだが、問題はファルコだ。帝国では討伐軍まで編成されたのだ。そんな時にアイツは私の屋敷に逃れてきたのだ」

また、ややこしいことを。

「ファルコを引き渡そうとはしたのだが、アイツは他国に逃れたいなどと言い出してな。私にとってもファルコは幼馴染で、できれば死んでほしくはなかったのだ。そこにたまたま居合わせたのがバーサーム殿でな。侯爵殿の計らいでジュカ王国に逃げることができたのだ。侯爵殿とはそれ以来懇意にさせてもらっていたのだよ」

そんなこと俺に言ってしまって大丈夫なのか？と思ったが、宰相たる者が自分の立場を悪くすることを軽々しく言うわけはない。つまり、そのようなことを言っても誰も何も言えない程度の力を、この

人は持っているということだろう。

師匠は都落ちの際、とんでもない三文芝居を演じたらしい。討伐軍を前にして宰相に斬られ（もちろんフリなのだが）、「うぐぐぐぐ・・・俺の幼馴染、グレモントに致命傷を与えられるとは！！」と言って苦しみながら消えたらしい。そんなことすりゃバレるんじゃないか？とも思うが、そこは宰相閣下の手腕で何とかしたらしい。そういう意味でもこの閣下は優秀な人材なのだろう。

そんな話をしていると、一人の男が部屋に入ってきて、宰相閣下に耳打ちをする。なに？まことか？と驚く閣下。一体何事かと思っていると、

「皇帝陛下が貴殿に会うそうだ。ご苦労であるが、私と謁見の間に同道してもらえまいか」

イヤとは言えませんね。大人しく閣下の後ろについていく。迷路のような通路を歩くこと数分、バカでかい扉の前に着く。

「しばらくそこで控えていてくれ」

宰相閣下は先に入出する。しばらくすると扉が開き、中に入るよう促される。かなり広い部屋の奥に玉座が見える。進んでいくと兵士が立っている。ここで止まれ、ということなのだろう。

俺は膝をつき右手を左胸に当てる。

「お初にお目にかかります。ジュカ王国、バーサーム侯爵家に仕えます、リノスと申します。麗しきご尊顔を拝し、歓喜に堪えません」

とりあえず、紋切り型の挨拶を述べ、首を垂れる。宰相閣下の面を上げよ、の声で頭を上げて皇帝の顔を見る。

精悍な顔である。少々老いてはいるが、若いころはさぞ、と思わせる顔立ちだ。口ひげを生やしているためか、そんな印象を受ける。しばらくすると、皇帝が口を開く。

「・・・たびは・・・・・く・・・・った。・・・であ・・・・く・・・・が・・・い」

あんだって?聞こえねぇよ?もう少し声張ってくれよ!

宰相閣下を見てみると、ドヤ顔で頷いている。いや、頷いてんじゃねぇよ。声がきこえねぇっつーんだよ!

「爵位も持たぬ貴殿に謁見を許されるのは異例中の異例。陛下の直接貴殿にお尋ねになりたいとの御意である。ご厚恩に感謝し、詳らかにお答えするがよい」

と宰相閣下のお話があり、その後、宰相閣下からこれまでクシャナの詰め所で聞かれたことや宰相閣下に先ほど聞かれたことを質問をされ、同じ内容を答えた。もちろんファルコ師匠の話はオフレコである。皇帝は俺の話にうむ、うむと興味深く聞いていた。

「・・・ぎ・・・た。・・・・が・・・・って・・・・い」

やっぱり皇帝陛下の声が聞こえにくい。宰相閣下はよくあの声が聞き取れるものだ。何か特殊なスキルを持っているのだろうか?そんなことを考えていると、閣下に退出を促されて俺は謁見の間を出た。

この後、宰相閣下は政務があるとのことで俺は、案内役の侍従にその身を預けられた。また後日、宰相殿の屋敷に招待をしてくれるようだ。

宮城（きゅうじょう）からまっすぐホテルまで戻ってきた。既に時刻は正午を回っている。それにしても疲れた。とりあえず、昼飯を食うか。

第三十六話　そんなご無体な！

昼食をとっていると、来客があった。帝国騎士団のセオーノだ。宰相閣下が明日の夜に個別に食事に招待したいとのことである。断る理由はないので、承諾しておいた。ちなみに、昼に食べたのはビーフシチューである。肉がほろほろと崩れ、実に上品な味わいだった。ヒーデータ帝国にはカレーやデミグラスソースもあるのだろうか。俺はこの後、ほぼ毎日このビーフシチューを食べることになる。

「暇でありますなー。」

ゴンがあくびをしながらつぶやく。確かに暇だ。せっかくなので帝都観光をしてみたいのだが、相変わらず俺は監視下にある。勝手に外出してもいいものかどうか迷う。まあ、物は試しに

「それにしても、すばらしい都だなー。是非一度、この素晴らしい帝都をみてまわりたいものだー」

完全に棒読みだったが、とりあえず監視に聞こえるくらいの声で言ってみる。あっ、隣の監視の一人が動いた。しばらくすると、セオーノがやってきて

「これから何かご予定はございますか？なければ帝都をご案内しますが・・・」

早っ！何かご予定もクソも知っているだろうと思いつつ、その申し出をありがたく受けておいた。

帝都の繁栄ぶりは想像以上だった。ジュカ王国の王都は、商人街、住宅地などと明確に区分が分かれていたが、帝都はその辺はあまり頓着しないらしい。商店街のような店が密集する場所があるかと思えば、その裏が住宅地といった感じだ。いい意味で機能的な街並みなのだろう。王都は石造りの家々が圧倒的に多かったが、帝都は、特に一般市民の住宅は木造建築である。何となく前世の日本と同じ雰囲気がする。

うれしい発見もあった。何と、コメが売っていたのだ！当然もち米もあるだろう。帝都でもコメや小豆などの豆類の大半は家畜のエサになっているので、値段がべら棒に安かった。久しぶりに米の飯が食べられるかもしれない。王都で流通していた金貨は、帝都でも使えるとのことであったので、暇を見つけたら買いに行こう。

あと、シャワーの秘密もわかった。魔力結晶という、魔力が石化したものを使用しているのだという。火・水・風・土・雷などの属性を持ち、それぞれを組み合わせて作っているのだとか。さすがにセオーノは職人ではないため、詳しい構造は聞けなかったが、これもいい収穫だった。

護衛という名の監視付きなので、あまり物は買えなかったが、日常着るシャツとズボン、下着類、あとは食事会用に着ていく礼服と靴を購入した。礼服はさすがにオーダーメイドだったが、明日の昼までに作るという。その心意気がうれしかったので、その店でワイシャツやネクタイなども購入しておいた。

次の日も帝都観光だ。劇場や大学、帝国軍本部などを見せてもらった。軍事に力を入れつつも、文化的、教育的レベルもかなり高い国であるようだ。

昨日注文した礼服を受け取り、宰相閣下の屋敷に向かう。ゴンはいつものようにお留守番である。

「今宵は私的な食事会だったのだ。何もそのように畏まる必要はない」

そう言って笑う宰相閣下だが、本人はきちんと正装している。無理に礼服を作ってよかった。

閣下の隣には、美しく着飾った夫人が同席している。イサラ、というそうだ。年齢は・・・さすがにレディーに聴くのは憚られた。年は取っているが、気品のある貴婦人、といったところだろう。

自己紹介もそこそこに、なりゆきのままに晩餐会が始まる。宰相閣下は、俺がバーサーム家の養子になる予定だったとか、皇帝陛下に拝謁したのだとかを夫人に説明している。俺は苦笑いを浮かべながら料理を堪能する。

「遅れて申し訳ない」

そう言って、一人の青年が入ってきた。かなりいい服を着ている。剣もかなりのものを持っていると見た。早速鑑定してみる。

ヒーデータ・シュア・ヴァイラス（皇族・２１歳）　ＬＶ１９
ＨＰ：１０９
ＭＰ：５７
剣術　　ＬＶ２
肉体強化　ＬＶ１
回避　　ＬＶ１
行儀作法　ＬＶ３

皇族が来やがった。一体こいつは何者だ?何しに来たんだ?厄介ごとのニオイがする。まあ、宰相閣下の屋敷に呼ばれた段階で、ある程度の覚悟はしてきたのだが。

「こちらのお方は、ヴァイラス殿下だ。皇帝陛下のご次男にして、皇位継承権第二位の方であらせられる」

俺は立ち上がり、膝をつこうとする。

「よしてくれよしてくれ。そんな固っ苦しいことはよそう。ちょっと君と話をしたかっただけなんだ。楽にしておくれ」

見たところ、聡明さが顔に出ている。ジュカ王国の摂政殿下のごとく、目は笑っていない、という雰囲気ではない。鷹揚なお方のようだ。しかし、なぜ皇帝の次男がここに来ているのだろう。宰相との関係は・・・?と訝る俺に

「実のところこの、ヴァイラス殿下は我々の孫でもあるのだ。なに、娘のシェリエが後宮にお仕えしておってな。そこで陛下と・・・な。まあ、こちらの殿下は身内みたいなものだ」

孫!ははぁ、だから今の宰相閣下の地位があると。

「貴殿には一つ、頼みがあるのだ。嫌なら断ってもらって構わない。頼みというのは他でもない。実は貴殿に皇族の警護を頼みたいのだ」

聞けば、皇太子は現在、健在ではあるが病弱であり、引っ込み思案で穏やかな性格であるとのこと。これ自体には問題ないのだが、問

題はその妹、ヴァイラス殿下の姉に当たるリコレット第一皇女なのだという。この皇女様は気が強く野心家であり、どうやら兄宮の即位に合わせて自身もその後ろ盾になり、帝政を牛耳ろうという動きがあるらしい。

当然第一皇女一人では何もできないが、そこは貴族社会である。こうした軽い神輿を担ぎたい者も意外に多く、特に貴族の次男、三男のいわゆる冷や飯食いの人々から、秘かに支持を集めているという。

そんな第一皇女が最近、裏で行動を起こそうとしているらしい。要は、自分の弟宮や妹宮などを襲撃しようとする動きがあるのだという。おそらくそうした脅しを仕掛けて、じわじわと皇族を自分の派閥に組み込んでいこうとの算段なのだろうが・・・何とも浅はかである。

ただし、そうしたバカどもは何をしでかすか分からない。また、身分が皇族なだけにタチが悪い。皇帝にはすでに老境に達し、往年の覇気はない。自分の子供の粛清は望まれておらず、穏便な解決を望んでいるのだという。

「本来は僕が臣籍になってこのグレモント公爵家を継ぐのが一番なんだけど、兄上があの様子ではね。いつ倒れるか分かったものではない。せめて兄上に男子ができてからじゃないと、僕も身動きが取れないんだよ」

実際、このヴァイラス殿下にも周囲の者が襲われるといった被害が出ているそうだ。

「貴殿にお願いしたいのは、このヴァイラス殿下と以下、三名の皇女様の警護だ」

うん？俺をルノアの森で襲ってきたバカがいたが、確かそいつもヒーデータの皇族だったはずだが？？やはり森の中で死んだのか。

「たしか、皇族にはもう一方、殿下がおいでではなかったですか？」

「・・・さすがバーサーム家に仕えていただけあるな。隠しても仕方がないようだ。三男のセアリアス殿下は現在、幽閉中だ」

ほう、あのルノアの森を切り抜けたと。

「ジュカ王国の異変を聞きつけてすぐに、自身の配下と家庭教師を伴い、皇帝陛下の馬に乗って魔王討伐に向かったのだ。はっきり言って暴挙だ。こう言っては何だが、夜陰に紛れて庶民を殺傷しているという噂まである、少々問題のある殿下だったのだ」

確かに、「呪い」のスキルが付いていましたよね。

「八方手を尽くして捜索したところ、ルノアの森で錯乱状態で発見されてな。現在は治癒魔術師が毎日回復魔法をかけておるが、いつ回復されるのやら。殿下の配下は直接魔王と闘い傷を負っているが、命に別状はない。この者も幽閉中だ。家庭教師については行方が分からない」

おお！やはりイリモは皇帝陛下の馬だったか。角と翼を隠す結界を張ってよかった。あの殺人狂どもはまだ生きているのか。まあ、俺以外治癒はできないだろうし、幽閉が解かれることはないだろう。

「話を元に戻す。そういうことで、貴殿には皇族の警護を請け負ってもらいたい。少なくとも、皇太子殿下に男子が生まれ、ヴァイラ

ス殿下が臣籍になるまでの間は、お願いしたいのだ」

「しかし、私は結界ＬＶ２ですが」

「警護は皇族が外出する時でいいのだ。宮城内（きゅうじょうない）は宮廷結界師がお守りする。バーサーム家では、一日中屋敷の結界を張っていたのだろう？お陰で屋敷に遣わした帝国の使者が結界に阻まれてしまい、大いに恥をかいた。それはさておき、私は、貴殿のその腕を見込んで頼みたいのだ」

「わかりました。事が事ですので、ちょっと考えさせてください」

「難しく考える必要はない。結界を張る商会か何かを作ればいいのだ。皇族の警護は受けてもらわねば困るが、それ以外の仕事は、貴殿の気に入ったものを受ければいい。もちろん、金は払う。そうでなければ、軍が貴殿を勧誘に来るのだ。何せ、結界スキルを持つものは貴重なのでな。軍に帯同し、各地の戦場を転戦する生活がしたければ、それもいいだろう」

絶対いやだそんな生活。俺は平和に平穏に生きていきたいだけなのだ。結局その日は返事を保留して帰路についた。屋敷を出る際、ヴァイラス殿下と二人きりになった時、

「お爺様は、本当は君をグレモントで雇いたいのだよ。それはそうだろう。お爺様とて敵は多いからね。お爺様があそこまで執心する結界師だ。僕も傍にいてくれるとうれしいな」

宰相と殿下、二人してやんわりと俺にご無体な話をしてくる。またしても俺は、疲れた体を引きずるようにて、自分の部屋に帰った。

第三十七話　お引越し

宰相閣下の提案を受けることにした。意外に悩みはなく決断できた。閣下との夕食会から帰った次の日から、俺の部屋に軍人と貴族が訪ねてくるようになったのだ。しかもかなり高圧的な態度で。

「我が家の結界師になれ！面倒を見てやる！」

「我ら飛龍部隊に加えてやるのだ、ありがたく思え！」

断っても断っても、次から次へと勧誘がやってくる。ある軍人などは、ホテルのロビーで抜剣したのだ。さすがにそれはマズいので、瞬間的に剣を折り、戦意を喪失させたのだが。

そういうこともあって、俺は商会を立ち上げることにした。その名も、「ダーケ商会」。さすがに自分の名前を商会名にするのは恥ずかしかった。そこで、亡き摂政殿下がバーサーム家の養子に迎えられたときに名乗れと言われた、「ダーケ」の名前を拝借したのだ。

続いて、俺の住む家を探す。騎士団のセオーノが付いてきていたので、ついでに不動産屋を紹介させた。本人はすごくイヤそうな顔をしていたが。

その不動産屋から紹介された物件は三つあった。イリモがいるので、条件として馬小屋がある屋敷を条件にしたら、三つしかなかったのだ。一つは、宰相閣下の屋敷の近くにあり、バカでかい敷地を持つ屋敷だった。何でも大商人のご隠居が住んでいたそうだが、さすが

にこれは一人で管理できないのでお断り。

続いて、帝国騎士団員が多く住む地区にある物件は、石造りでかなり頑丈そうな家だった。悪くはなかったのだが、高圧的な軍人の態度がトラウマになっていたので、これもお断りとした。

最後に案内されたのが、王都の端っこにある家である。近くの森に湧水もあり、畑もある。馬小屋もついており、二階建ての建物は、一階が応接間、玄関ホール、ダイニングとキッチン。二階に部屋が四つあるという、バーサーム家の屋敷を小型化したような造りをしていた。かなり昔に皇族が住んでいた屋敷らしく、敷地面積は広い。取り敢えず、地平線の彼方までこの家の敷地らしい。しかも、これが月１００Ｇなのだ。日本円にして１００００円。理由は簡単で、ここ数年この森から魔物が出るようになり、あまりにも物騒なので借り手がつかなかったのだ。当然俺には結界があるので、何の問題もない。一応、魔物除けの魔石を置いて守ってはいるが、不動産屋としては早く片づけたい物件だったのだ。

交渉の結果、１０００Ｇで売ってもらえることになり、俺は１４歳にしてめでたく一国一城の主となった。

宮城（きゅうじょう）まで歩いて1時間もかかるが、イリモに乗っていけば２０分弱で行ける。まあ、許容範囲だろう。

その後、家に運び込むベッドやシーツなどの日用品を揃え、そして食料を大量に買い込む。もちろん、米と小豆は大量に買い込んだ。もち米も売っていた。狂喜して買ったのは言うまでもない。大豆やインゲン豆のような豆類も豊富に売っていたので、購入する。調味料も豊富に売っており、俺の料理のレパートリーが増えそうだ。

病院や整体院などもあちこちにあり、この街は住人に優しそうだ。

全ての準備が整うまで約二週間。その後、速やかにホテルを引き払う。思った以上に料理がおいしいホテルだったので、ここには折に触れて通うことにする。そのお礼も込めてチェックアウトの時は、チップを弾んでおいた。

ホテルを引き払い、新居に移ろうと街を歩いていると、遊郭街が騒がしい。どうやら女と兵士がモメているようだ。

「どうして私たちが捕まるんだい！何もしてやしないじゃないか！！」

「黙れ淫売女ども！お前たちは世を乱し、風紀を乱す極悪人どもだ！帝国の治安回復のため、お前たちを捕らえるのだ！さっさと歩け！」

「ちょいと！アタシ達は皇帝陛下の許可を得てここを運営しているんだよ！アタシたちを捕まえようってんなら、皇帝陛下の許可はあるんだろうね！」

「見たところ兵隊たちもアタシたちの世話になってるんじゃないのかい！よくそんなことが言えるね！」

「だっ、黙れ黙れこの淫売どもめ！皇帝陛下の御意を得るまでもない。これはリコレット第一皇女様のご命令だ！ここの遊郭街は滅せねばならぬのだ！！」

遊女たちを連行しようとする兵隊と、それを止めようとする関係者、そして野次馬で辺りは騒然としている。そして、遊女たちの髪を掴

み、引きずるように兵士たちは俺のところにやってきた。

「小僧、どけ！！」

「先ほど、遊郭街を滅すると仰ってましたが、こんな手荒なことをしなくてもいい方法がありますよ？」

「ああん？何だと？？」

「このままこのお姉さんたちを全員捕らえるのでしょ？大変じゃないですか。そんなことしなくても、自然にこの遊郭街が無くなる方法がありますよ？」

「面白いことを言うガキだ。何だ、言ってみろ！」

「皆が通わなければいい」

「ああん！？何だと？？」

「『傾城傾国に罪なし　通う客人に罪あり』という言葉が私の国にあります。要は、そのお姉さんやお店には罪はないのです。そこに通ってくる客が悪いのです。客が通わなければ、自然と遊郭街はなくなります。だから、通わなければいいんですよ。あなたたちも含めて」

「ッ！このガキィ！！」

兵士が剣を抜き、俺に斬りつける。そんなスローな剣術では俺に通用しない。一瞬のうちに兵士の剣をたたき折る。

「これ以上、無法を通すのであれば、今度は剣ではなくあなた方の首が飛びますよ？」

片手に炎を纏う。さすがに魔術師とコトを構えるのは不利と見たのか、兵士たちは引き上げていった。

ふとマップに赤い点が表示された。俺の斜め後ろにいる。チラリと視線を送ると、大きな馬車が止まっていた。

「アンタ！やるじゃないか！！アタシャ胸がスッとしたよ！！よくやってくれた！」

「あいつらいつも難癖付けてくるから気に入らなかったのよ！金も払わないでさ！」

お店の関係者と思われる太った小母さんに肩をパンパン叩かれる。痛い！痛いよ！その一方で、谷間をあらわに豊満な胸を俺の腕に押し付けながらお姉さんからお礼を言われる。

「お前さん、気に入ったよ！アタシャこの先の「ミラヤ」って店をやってるアキマってもんだ。付いてきな！」

アキマと名乗った太った小母さんは、ズンズンと街の中に入っていく。俺はオッパイお姉さんに腕を掴まれながら、引きずられていく。イリモも俺につられて付いてきている。彼女はちょっと戸惑っているようだ。逆に、背中のゴンは嬉しそうで、ハアハア言っている。呑気な狐だ。

店に着くとアキマ小母さんは、中から一枚のカードを持ってきて俺に手渡した。

「それを見せるとウチはタダで遊べるからね！本当は一回だけなんだけど、アンタは今年いっぱいはタダで遊ばせてあげるよ！」

「まだ、なんでしょ？お姉さんが教えてあげるわね」

「いや、その子の相手は私がするよ！アタシたちのこと「お姉さん」って呼ぶのがかわいらしいわね。アタシがやさしく教えてあげるよ！」

「ウチには色んな女の子がいるからね！アンタの好みの女の子を世話してあげるから任せておくれ！」

イヤイヤ、まだまだ成人前ですので・・・。お姉さん？達のあまりの勢いに押されて、這う這うの体で俺はその場を後にした。

このカード、いつ使おう？？

第三十八話　平穏な日々

「・・・そっ、そんな太いものが俺の体に入るんですか？」

「大丈夫、お姉さんに任せて。さあ、力を抜いて・・・」

「くっ、あっ、入ってくる、入ってくる・・・」

「ほーら、奥まで全部入ったわよ？今日が初めてだからしばらくは動いちゃだめよ？」

「おっ、お姉さん、体がアツイです！」

「しばらくすれば慣れてくるからねー。慣れればヤミつきになるわよー。じゃ、そろそろ動かすよー」

「ふっ、くっ、くあぁぁぁぁ」

・・・俺は鍼灸院に来ていた。前世の頃から針は好きだったが、まさかあんな太い針を腹に刺されるとは思いもよらなかった。

引っ越しも終わり、明日からダーケ商会の業務が始まる。王国軍と貴族たちには案内がいっているらしい。店の場所は、俺の敷地内と帝都の境目にあるところだ。新居を物色している間に、ちょうど手ごろな空き店があったので、そこを買い取ってそのまま使うことにした。イリモでの通勤１５分というなかなかいい感じの距離である。

開店準備も終わり、俺は身体のメンテナンスをするため、遊郭街の

門の隣にある鍼灸院に来たというわけだ。たっぷりと施術を堪能した。なかなか礼儀正しいところもあり、鍼灸院を出る時には、施術をしてくれた女性がわざわざ外まで見送ってくれた。若い女性だが、なかなかいい腕をしている。体が軽くなった。思わず

「うわ～本当に気持ちよかったです～。すっきりしました！」

「たまに体が求めるのよね～。またいつでもいらしてください」

街ゆく人が苦笑いをしている。ここは遊郭街の門の外。なんか変な誤解をされたのかもしれない。

・・・実際、結界屋を始めてみると、大当たりだった。基本的に週休二日制、９時から１７時ごろまでの営業で、お昼の１時間は休憩で閉店、店主の気まぐれで休日や営業時間は変動、というかなりの大名商売なのだが、一日平均１０件くらいの注文を受ける。注文するのは軍人、貴族はもちろん、商人も意外に多い。遠くの国まで荷物を運ぶのだが、道中は物騒のため結界師を欲しがるのだ。

いくらなんでも全ての注文にこたえることは出来ず、最初は断っていたのだが、ある日うまい方法を考えついた。

川から石を大量に拾ってきて、それを「魔石」として売るのだ。俺の結界は遠隔操作が可能である。そこで、注文者の希望する結界の強度、持続時間を聞いて、それぞれに結界を張る。その際に石を「結界魔石」として持たせる。むろんただの石ころなのだが、客はそれを完全に信じた。まあ、ＬＶ２ということもあり、最大で３日。強度も剣で五回ほど切り付けられれば割れてしまう程度のものにしているが、それでも需要は多く、この「なんちゃって魔石」は飛ぶように売れた。お値段も大体１００Ｇと、強気の価格設定をしてい

るのだが、それでも売れている。原価はタダなので、売った分だけ儲けになる。あくどい商売と言うなかれ。

王族からの依頼は、意外と少ない。ヴァイラス殿下が宮城（きゅうじょう）の外の行政府に顔を出すときに同行するくらいで、それもひと月に一回程度であるし、一番長くても、殿下の妹君が地方の町の行事に参加するために1日同行したくらいである。

お昼休みと業務終了後、休日は暇なので、絶賛帝都観光を楽しんだ。かなり広いので、なかなか全て回り切れない。いい武器屋と防具屋も見つけた。贔屓の八百屋などもできた。休日はホテルにランチに行くなど、なかなか優雅で贅沢な日々を送らせてもらっている。

引っ越し当初はかなり魔物がでたが、オークやゴブリンといった低ランクの魔物ばかりであり、難なく討伐した。現在は結界の影響もあり、魔物の姿は見なくなった。もう、家の結界は解除して、俺とゴン、イリモの結界だけでいいような気がしている。

料理のレパートリーも増えた。もち米を利用しておはぎを作ることに成功したのだ。ばあちゃんと同じとまではいかないが、かなり味的には近づけたと自負している。これはゴンが大喜びした。

米を炊いてご飯を食べるのはもちろん、それを利用してチャーハンを作ったり、焼きおにぎりを作るなどして、楽しんでいるし、たまには天ぷらやから揚げなど、揚げ物もどんどん挑戦している。こいつも、ゴンには好評だ。今、作っているのはプリンである。こだわりのカラメルソースを絶賛試作中である。

あの、遊郭街のお店にはまだ行っていない。さすがに恥ずかしいのと、夜は俺が家に帰ってしまうことが多いのだ。なぜなら、イリモ

が早く家に帰りたがるのだ。まあ、俺に変な虫が付かないよう配慮してくれているのと、屋敷の、かなり広い馬小屋が、快適に暮らしているイリモには恋しいのだろう。あと数頭はあそこに入れても全く問題がないので、イリモの代わりとして別の馬も買おうか思案中だ。やっぱり、イリモも休ませてあげないとね。

秋が終わり、冬が来て、ようやく春の息吹が感じられるようになった。商売の方は相変わらず順調で、注文が絶えない。石集めはゴンに任せているが、最近では石が少なくなっているとぼやいている。

そんなある日、地下に店を構える薬屋を発見した。人目につかない場所に店に構えているだけあって、物騒なものを売っていた。毒薬である。俺は、その中に意外なものを見つけた。「カッシュ」と名付けられたこの毒薬は、大量に飲むと心臓麻痺を起こす毒薬であると書かれていた。これを鑑定してみると、「塩化マグネシウム」と出ている。いわゆる「にがり」だ。

これを見つけた時はテンションが上がった。豆腐が作れるのである。前世の俺の実家は豆腐屋だった。豆腐屋の倅として、その作り方はじいちゃんと親父から叩き込まれてきた。それが嫌で俺は家を継がず、プログラマーなどという仕事をしていたのだが、じいちゃんや親父への恩返しのつもりで、俺はこの世界で豆腐を作ってみようと心に誓ったのだ。

また、この薬屋には、「媚薬」などというのもあった。自分の快感がそのまま相手に伝わって、双方気持ちよくなれる・・・というよくわからんものだったが、これに何故か、ゴンが反応した。

「淫売女を買って、その女に薬を与えて、モフモフをさせたいのでありますー。若くて、胸の大きい美女、白魚のような真っ白い、美

しい指で吾輩をモフモフしながら、その淫売女も吾輩と一緒に快楽の頂点に達する・・・素晴らしいのでありますー。夢があるのでありますー。ウヘヘヘヘー」

薬については、効果などを調整することが可能であるらしい。ゴンはさらにスケベな顔になっている。取りあえず、この薬屋で購入するものは決まった。俺は店主に薬の注文を告げる。

「すみません。バカにつける薬を下さい」

第三十九話　平穏な日々②

それからまた、数か月が過ぎた。

俺はいま、ゴンと共に朝飯を食べている。温かいご飯、卵焼き、豆腐に油揚げ、そして昨日の残りの肉じゃが、という純和風なメニューだ。

帝都でニガリを見つけてから、大豆を手に入れて早速豆腐作りをやってみた。やはり、爺ちゃんや親父の味はまだ出せないが、きちんと豆腐は出来上がった。豆腐が出来るとなると、豆乳、湯葉が自然にできる。そして、豆腐を油で揚げると、「おあげさん」が出来るようになる。

「おあげさん」はゴンのために作ってみた。やはり狐と言えば油揚げだろうと思った俺は、試しに作ってみたのだ。味付けのしていないおあげさんと、甘辛く味付けをしたおあげさん、二種類の油揚げを作って、食べさせてみた。

・・・ゴンは泣いていた。こんな美味いものは初めて食べたと言って泣いてくれた。そんな大層なものでもないのだけれど。

さすがに毎日豆腐を作るのはしんどいので、一週間に一回のペースで豆腐を作っている。醤油がなく、塩で食べているので、ここまでくると是非しょうゆも作ってみたい。

また、購入以来少しずつ続けていた、屋敷の改築がようやく完了した。大きく改築したのは二つだったのだが、意外に時間がかかって

しまった。

まず、作ったのは風呂である。当初は二階部分に四部屋あったのだが、その二部屋をブチ抜いて風呂を作った。王国も帝国も風呂という文化がなく、これを職人に説明するのに、かなり時間を要した。加えて、二階からの排水についても苦労したが、しかし、苦労した甲斐あって、総ひのきの立派な風呂が出来上がった。

続いて作ったのは、トイレである。この世界でのトイレは基本的に汲み取り式である。別に対応できなくはないのだが、俺は自分の家のトイレにはこだわりたかった。そのため、わざわざ一階のトイレを壊し、その部分を増築し、ひろいスペースにした。そして、近くの川から水を引き、それを利用して水洗トイレを作った。帝国の冬は寒かったので、温度に応じて便座が温かくなるようにした。便座部分に結界を張り、外温に応じて温度を変えるよう設定したのだ。

処理された汚水であるが、これはゴンが欲しがったので、再利用を任せている。

この屋敷に移ってからのゴンはお留守番が増えた。おキツネ様なのだから、帝都の人々にご利益を与えに行けばよさそうなものだが、帝都には別のおキツネ様がいる。そこにゴンが入っていくと、ウチのシマに何を手を出してくれとるんじゃぁ！と、諍いの元になるので、それはダメとのこと。

そこで、ヒマつぶしのために、屋敷の畑をゴンは耕し始めた。

さすがに狐の姿では農作業は難しい。従って、人化して農作業をしているのだが、最初はやはり、顔はキツネ体は人間、しかも全裸というかなり不気味な出で立ちだったのだが、ここ最近は人化のスキ

ルが上がり、「キツネによく似た人」に見えるようになった。それに気をよくしたゴンは最近、服を着て人間と同じような格好をするようになった。しかしまだ、帝都に人化した姿で遊びに行く度胸はないようだ。

その畑の肥料として、トイレで処理された水を現在は使用している。いわゆる肥溜めを作っているのだが、周囲からはわからないように作っており、間違ってそこにはまらないよう工夫も凝らされている。

ゴンの作る作物は、ジャガイモ、大根、白菜、トマトなど野菜が多いが、どれも美味しい。人間の近くで生きてきただけあって、知識も人間よりなのだ。甘いトマトの作り方を教えたら、必死で研究するようになった。もう、おキツネ様をやめて農家に転職した方がいいかもしれない。

それにしても、この一年は、激動の年であった。一年前の同じころ、俺はエリルと森で狩を楽しんでいた。エルザ様やファルコ師匠と日常の会話を楽しんでいた。そこからすべてを失い、ゴンやイリモといった新しい仲間を得てヒーデータ帝国の帝都に移り住み、仕事を得て、挙句の果てに自分の家も持てた。奴隷だった自分の人生を振り返ってみた時、今の俺の生活は大出来であると言える。

広くはないが趣のある家、広いトイレに風呂、仕事は順調、金銭的な不足は一切なく、まさしく順風満帆な生活だ。これがこのまま続けばいいのに・・・と俺は暮れ行く夕焼けを見ながら、のんびりとそう願うのだった。

しかし、俺は知らなかった。これから先に起こりうる厄介ごとを。これから先に待ち受けている面倒くさい未来を・・・。

第四十話　大魔王降臨

十五歳になった。二回目の成人だ。

特に誰にも誕生日を教えていなかったので、お祝いというのはなかった。例外的に、帝都で買い物をしている時、遊郭「ミラヤ」の女将さんであるアキマに出会い、いつでも遊びに来ていいんだよ！と催促されたくらいである。あそこまで手放しで勧誘されると、逆に行きにくいものだ。

そしてもう一つ、うれしいことがあった。俺が一度食べてやみつきになった、あのホテルのビーフシチューが作れることになったのだ。

かなりのハイペースで食べに行っていたため、シェフに顔を覚えてもらい、色々と話をするようになった。このビーフシチューを褒めまくったら、レシピとデミグラスソースを分けてくれたのだ。レトルト食品がない世界である。あのホテルの味をわが家で楽しめる・・・プライスレス！

仕事を終え、早速帰宅し、大鍋を出して材料とソース、そしてカースシャロレーの肉をふんだんに入れて作ってみる。何とホテルでは１２時間もかけて煮詰めているのだとか。俺もそれに倣ってじっくりコトコトじっくりコトコト煮込んでいく。

本当に１２時間煮込んだ。火魔法で調整しつつ、朝までかかってようやくあの、シチューが出来上がりつつあった。

事件はその時起こった。

ゴンが腹が減ったと言い出した。俺は、完成したビーフシチューを朝食にするつもりでいたのだが、さすがに俺も腹が減った。取りあえず、お揚げさんでも食べようとダイニングに行っている隙だった。

「ドォン！ガッシャーン！！！」

あと一歩、あと一歩のところまで完成しかかっていたビーフシチューが、見るも無残にその中身をキッチンにぶちまけていた。俺の時が止まる。

「ギャー、キャァァァァー」

何とハーピーがキッチンに侵入しており、ビーフシチューを狙ったが重すぎて飛べず、そのまま鍋をひっくり返したのだ。ここ最近は全く魔物の襲撃はなかったので、家の中の結界は解除していた。マップにも反応はなかった。魔物が飛んでいることは把握していたが、敵意は感じられず、対応はしていなかった。さすがに俺たちの食料を狙う魔物まで意識していなかった。

ハーピーは俺をあざ笑うかのような顔をして外に逃げた。腕と足が鳥の姿であり、胴体と顔は人間の女性の姿であるため、表情がよく読み取れる。絶対バカにしている。俺の中で、何かがはじける。

「おンのれぇぇぇぇぇぇぇぇ！！ぶっ殺してやる！！！！！！！！！」

ビーフシチューの残骸を乗り越え、こん棒を掴んで表に出る。ハーピーは屋敷の周りを飛んでいたが、俺を敵と認識したのか、鋭い足の爪で俺に攻撃を仕掛けてきた。

「ガチィン！！」

結界を張る俺にハーピーの攻撃は一切通用しない。俺は攻撃してきた足を掴み、そのままヤツを地面に叩きつける。叩きつける。叩きつける。

「ピギャー！ピギャー！！ピギャー！！」

何とか翼で空に逃げようとするハーピー。しかし俺はこん棒でヤツの翼を叩き折る。

「ピィィィィィィーーーーー！！！」

絶叫を上げて地面に叩きつけられたハーピーを、こん棒でひたすらぶん殴る。

「一体どれだけ時間かけたと思ってるんだぁぁぁぁ！！じっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコト煮込んでたのにぃぃぃぃぃ！！！」

頭、顔、羽、体、ありとあらゆるところをブッ叩かれるハーピー。最後にこん棒で野球のごとく顔面をフルスイングされて、ヤツは吹っ飛んだ。

ハーピーはまだ生きているようだ。しぶとい。力なく鳴き続けるヤツの下に向かおうとすると、マップに反応があった。振り返ると、数十匹のハーピーが森の中から向かってきていた。コイツの仲間の

ようだ。

ブッ倒されている仲間を見て、即座に俺を敵と認識したハーピーは、俺に攻撃を仕掛けてきた。しかし、何匹来ようが俺には関係ない。先ほどのヤツ同様、こいつらもブッ叩く。ブッ叩く。ブッ叩く。

「ピッ・・・ピィィィィ・・・」

手と足があらぬ方向を向き、動くこともできずに倒れる数十匹のハーピー。まだまだ俺の怒りはこんなもんじゃ収まらない。さて、どうしてくれようかと考えていると、さらにハーピーの群れがこちらに向かっている。上等だ。いくらでも相手してやんよ！

現れたのは数十匹のハーピーとそれを従える巨大なハーピーだった。巨大ハーピーはこの惨状を目の当たりにして、ものすごい鳴き声を上げた。それを合図に、周囲にいた奴らが連携して俺に攻撃を仕掛けてくる。

かなり高位の魔法使いや騎士であっても、この攻撃から逃れるのは難しいだろう。しかし、俺には関係ない。全員の羽を折り、他のやつらと同じようにフルボッコにしてやった。ハーピーたちの陰にうまく隠れるようにして巨大ハーピーは、風魔法を駆使して俺に攻撃をしてきた。上手な戦い方である。しかし、完全に俺に躱されて、足を掴まれる。

「ピィィィィ！！」

残った足で俺を蹴りまくるが、俺の結界に傷一つ付けることは出来ない。俺は足を掴んだまま、この巨大ハーピーを地面にたたきつけ、羽を折り、足を折り、最後に顔面にフルスイングを叩き込んだ。

辺りには百羽近くに及ぶハーピーの倒れる姿があった。俺はこいつらを結界内に閉じ込める。そして、全員に治療魔法をかける。そしてゴンを呼び、俺の言葉を通訳させる。

「傷を負っていては話が出来んだろうからな！お前らの仲間のことはいえ、人がじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコト煮込んでいたビーフシチューをメチャクチャにしやがって！どうするつもりだ！お前ら全員、ラクに死ねると思うなよ！！！」

気の強いハーピーが結界の中から俺に攻撃を仕掛けようと飛びかかってくる。俺はそいつを結界から引きずり出し、「鬼切」でそいつをブッた斬る。

「ピィィィィ！！！ピィギャァァァァァ１！！！！！！」

凄まじい悲鳴を上げてのたうち回る。

「こんなのはまだ序の口だ。お前らはこれ以上の苦しみを与えて殺してやる！食い物の恨みは恐ろしいぞ！」

「ピッ、ピィィ・・・」

ハーピーたちが戦慄している。中には失禁してしまった個体もいるようだ。

「ピッ！ピピピピピ！」

巨大ハーピーが何か言っている。

「とにかく怒りを鎮めてほしいといっているでありますー」

「ああん？この怒りを鎮めろだと！？どの口がそれを言いやがんだ！」

「私は、ジェネラルハーピーで、この群れの長だ。家族が皆殺しにされるのはなんとしても避けたい。仲間の一人がかけた迷惑については詫びる。何でも言うことを聞くので、皆殺しだけは勘弁してもらいたい、と言っているでありますー」

「テメエらは何もできねぇだろ！ぬうううう、この怒りを鎮めるには、やはり貴様らの血だ！血で償うほかはない！！」

「いや、それよりも、ハーピーにこの森を警護させればいいのでありますー。ハーピーはBランクの魔物でありますし、数羽でAランクでありますー。これだけのハーピーですと、Sランクでありましょうし、森の中の魔物を狩らせると便利でありますー」

ほう、労せず魔物の肉が手に入る可能性があると。

「それに、ハーピーの卵は美味でありますー。卵を上納させるのもいいでありますー」

「よし、その条件であれば命を助ける。受け入れられないのであれば、全員結界内で餓死させると言え」

当然、ハーピーからは即答で受け入れると返答があった。俺はそれを受け入れ、「鬼切」で斬られて苦しんでいたヤツに治癒魔法をかけて正常に戻してやった。

ゴン曰く、ハーピーはとても仲間を大切にする種族らしい。特に、ジェネラルハーピーは種族の中で最上位に位置するらしく、コイツが率いる群れは、まず、どんな生物も勝てない。言わば、この森の食物連鎖の最上位に位置しているのだそうだ。

「勝てるとするのであれば、大魔王くらいでありましょうなー」

ってことは俺は、大魔王かい？

ハーピーとしても、勝利を確信しての攻撃であったのに、魔法一つ撃つわけでもなく、ただのこん棒でフルボッコにされた挙句、一家全員がボッコボコにされたのだ。それはそれはビビッたのである。

基本的にハーピーは大切に子育てを行うらしく、三年に一回、五個程度の卵を孵し、丁寧に育てていくのだという。その他は、卵を産むには産むが、別に産まなくとも何ともなく、俺に卵を上納する条件はすんなり受け入れられた。

一応人質として、ジェネラルハーピーは屋敷で軟禁生活を送ることになった。屋敷内の立ち入りは許可のある場合以外は不可。行動も範囲が限定されるという条件だったが、ジェネラルハーピー自身には全く問題がなかったようで、むしろ俺の出すエサが劇的に美味いと気に入ってしまい、挙句の果てにイリモと仲良くなり、今では馬小屋に住み、女同士仲良く暮らしている。

ちなみに、ハーピーの間では、「じっくりコトコト」という言葉は

悪魔の言葉として認識され、俺がたまにこの言葉を使うと、ジェエネラルハーピーはもちろん、ハーピーたちも緊張して動きを止めるようになったのだった。

第四十一話　ゴンの憂鬱

雪がようやく溶け、春になった。

今、俺の周囲は歓声に包まれている。と、いっても魔物の歓声だが。

前年の秋に配下？にしたハーピーが卵を産み、そこから雛が孵化したのだ。ジェネラルハーピー以下、８４羽のハーピー全員が俺の屋敷の馬小屋に集まり、えらいことになっている。

ハーピーの卵の孵化は長い。およそ一か月かかるのだ。ちょうど年が明けてしばらくした後、ジェネラルハーピー、（現在はジェネハと呼んでいる）から家族を増やしたいと相談され、俺が了承した。今回生まれるのは四匹とのことで、卵を産み、孵化まで温め続けるまでの期間、四匹のハーピーが屋敷の馬小屋、ジェネハの住居で暮らしていたのだ。

大体ハーピーは群れで孵化までの期間、助け合いながら暮らすのだそうで。食事はもちろん、孵化までの期間は全体でフォローしあう。こうしたことが、ハーピーの仲間意識を強くしている所以なのだという。

四匹の雛はどれも元気そうで、雛たちが飛べる日までここで暮らすのだそうだ。

ハーピーたちももちろん働いている。毎日森から魔物を狩ってくる。主にオークなど肉がおいしい魔物が中心だが、果物もいろいろと狩ってくる。おかげで俺の屋敷は食料が豊富で余っている。余った肉

は、ビーフシチューがおいしいホテルに買い取ってもらっている。

たまに、ハーピーに飯を作ってやる。ぜんざいや焼き飯、から揚げ、天ぷらといったものだが、どれも好評だ。俺が飯を用意してやると、大喜びで巣に持って帰る。

「よーし、仲間が増えたお祝いに、俺がおはぎでも作ろう！」

「ピィィィー！！」

丸一日かけてバカでかい百個のおはぎを作った。当然、絶品の味に皆が大喜びしたのは言うまでもない。

皆が大喜びでおはぎを堪能していた時、キッチンの裏の井戸の傍に、祠ができているのを見つけた。ハテ？こんなものはなかったが・・・？と不思議に思い鑑定してみたところ、

「狐神を祭る祠。狐神に通じる力を持つ。ご利益あり」

と出た。ご利益があるとのことで、邪なものではないらしい。狐神とあるので、てっきりゴンが作ったのだろうと解釈して、そこに余ったおはぎと二種類のお揚げさんをお供えしておいた。

夜になり、ゴンにそのことを伝えると、見る見るうちに人化がとけ、ガタガタと震えだした。

「ついに来たでありますかー。やっぱり見逃してはくれなかったでありますかー」

泣き出すゴン。これは尋常ではない。一体どうしたと訳を聞いてみ

ると

「我々、狐神様の専属たる白狐は、三年に一度、狐神、おひいさまの下にご機嫌伺いにいかねばならないのでありますー。そこで三年間の暮らしがどのようなものであったのかを調べられ、良ければ位が上がり、悪ければ最悪、眷属の身分を取り上げられるのでありますー」

おおう、そんなシステムがあったとは。

「吾輩は大魔王を転化させ、妖狐ピャオランに一矢報いたのは評価されると自負しているでありますが、与えられた任地を放棄し、その後、ご利益を与えるわけでもなく、日々自堕落な生活をしていたでありますから、きっとお咎めを受けるのでありますー。怖いでありますー。おひいさまに仕える女官どもが意地悪でありまして、奴らに何を言われるのかを考えただけで、生きる気力が萎えるでありますー」

ほほぅ、いわゆる「お局」ってやつか。しかしゴンはこの屋敷で、立派に農業を成功させている。「甘いトマト」も作ることに成功した。それよりなにより、俺と魔物の通訳をして、多くの魔物の調停役を務めてきた。今の俺の生活があるのは、ゴンのおかげでもあるのだ。

「そういってもらえると嬉しいのでありますが、おひいさまには嘘は通じないのでありますー。すべての行動を見ることができる神通力をお持ちなので、吾輩のこれまでを見られると、絶対にお怒りになるのでありますー」

おいゴン、俺の知らないところで、何やったんだ？いやいや、言っ

てみろ、怒らないから。もしかしたら、一緒に対策を考えてあげられるかもしれないじゃないか。な?怒らないから、言ってごらん?

「・・・実は～」

聞いてあきれた。このバカ狐、俺が利用しないのをいいことに、遊郭「ミラヤ」の無料カードを使って、こっそり遊女を買って遊んでいたらしい。本人は人化の練習でと言い訳していたが、同じ男同士である俺にそんな言い訳が通じるわけはない。俺より先に大人の階段を上りやがった。ぬぅぅぅ・・・いかにしてくれよう?

「イヤ、ミラヤの女たちは芸達者が揃っているでありますー。吾輩など、何度フラフラにさせられたのか分からないのでありますー。あの手でやさしく背中をなぞられると・・・。ここはひとつ、ミラヤに行って気分転換を図るのでありますー。一緒にいかがですか?グヘヘヘヘー」

このエロ狐が。一体何回行ってやがったんだ!ミラヤの女ども、恐るべし。人化した白狐までも満足させるとは・・・ミラヤのカードは、無言で没収しておいた。

こういう有様のゴンであるため、おそらく厳罰は免れない状況である。本来は人に対しご利益を与える立場の専属が、あろうことか人からご利益を与えられて喜んでいたのだ。職務怠慢も甚だしい。

しかし、ゴンが厳罰に処されると、今の能力がなくなるのだという。そうなると、俺が困ることになる。これまでゴンには、通訳だけでなく魔物の常識や特性などを教えてくれる、いい百科事典であったのだ。ただの狐になるのは、かなり痛い。

「そのおひいさまの所には、一人で行かなければならないのかい？もし、可能なら俺が一緒に行って申し開きをしてやってもいいが・・・」

「その昔、同行者を連れて伺候した者もいるので、おそらく大丈夫だと思われるのですが・・・」

「が、何だ？」

「おひいさま付きの女官が、初めて見参した者に対して意地悪をするのでありますー。吾輩もかなり厳しいことを言われたので、吾輩以外の人にもあの思いをさせるのは、心が痛むのでありますー」

「まあ、お局さまってそんなもんだろ？ゴンはどんなことを言われたんだ？」

「挨拶の言葉も知らんと言われたでありますー。これでも二百年間人間の間で生きてきて、こうした公の場での挨拶には自信があったのでありますー。それを鼻で笑って、行儀の悪い狐と罵られたのでありますー。あの悔しさは、今でも忘れないのでありますー」

「それは酷いな。ゴンはどんな挨拶をしたんだ？俺も参考にさせてもらうよ」

いいでありますよーとゴンは居住まいを正し、オホンと咳ばらいをして

「本日はお日柄もよく、何よりとお慶びを申し上げます。昔から、人には忘れてはならぬ三つの袋があると申します。それはすなわち、堪忍袋、財布の袋、そしておふくろ・・・」

・・・結婚式の挨拶じゃねぇか。そりゃ、お局たちに突っ込まれるよなぁ。

第四十二話　おひいさま

「よーし、行くか！」

「ううう～行きたくないのでありますー」

嫌がるゴンを無理やり引きずりだして、俺は裏庭の祠の前に来ている。白狐たちの三年に一度の評価大会。行かねばゴンの能力がなくなってしまう。それだけは避けねばならない。

ゴンについての申し開きは、俺も全力を尽くすつもりだ。おひいさまがどういう態度に出るのかはわからないが、最悪、狐神と一戦も辞さない覚悟だ。

とはいえ、むやみにケンカを売る気もない。できるだけ穏便に済ませたいので、その対策も打ってある。おひいさまもお付きの女官も、女性だという。と、いうことは、やはり「お土産作戦」が有効だろう。前世では「お局」に対処するために、いろいろとスィーツなどを持って行って難を逃れたものだ。

そこで前日から俺は、必死でおはぎと油揚げを作った。この間、俺が祠にお供えしたおはぎと油揚げは見事に消えていた。おそらく、気に入ってもらえたと信じて、この二つを大量に作った。気に入らなければ、俺とハーピーたちと食べればいいだけだ。

二人して祠の前に立つ。一瞬、目の前が真っ白になる。気が付けば俺たちは、大きな屋敷の門の前に立っていた。

音もなく門が開く。中に入ると、日本家屋風の建物と玄関が見える。その玄関には、お雛様の三人官女のような恰好をした狐が座っている。俺たちが近づくと、

「お待ち申しておりました」

と丁寧に頭を下げ、しずしずと俺たちを案内する。ゴンは完全にブルッているが、そんな俺たちには一切気を使うこともなく、官女は俺たちを案内する。驚くべきことにここは俺のマップは反応しない。結界が張られているのだろうか。

ほどなく、大広間に案内された。部屋の奥は大きな御簾で覆われ、その前に、二人の官女が控えていた。俺たちは部屋に入り、官女の前に座る。

「おおおお、ジュカ王国に遣わした者が戻ってきおったわ」

「よくもまあ、戻ってこられたものじゃ。首は洗ってきたのかぇ？」

ホホホと笑いあう女官たち。いきなり先制パンチが飛ぶ。ゴンは完全に平伏してしまっている。かなりのトラウマがあるようだ。

「何やら、伴の者を連れておるな？作法も知らぬであろうが、名乗ることを許す。どうぞ、お名乗りあそばせ」

俺はハッ、と平伏し、口上を述べる。参考にしたのは歌舞伎の口上だ。

「一座、高ぅはござりまするが、不調法なる口上の以て申し上げ奉りまする。まずもって、いずれも様には麗しきご尊顔を拝し、恐悦

至極に存じ上げ奉ります。か様に候者は、ヒーデータ帝国に住まい致します、リノスにて候。本日は、これに控えおります白狐の伴をして参っております。口不調法者のため、不躾にもかかわらず参ってございます。お目まだるいことも多くあろうかと存じますが、なにとぞ宜しくお引き立てのほどを、お願い申し上げ奉ります」

「・・・ほう。これはまたご丁寧な。取りあえず、行儀作法は身に付けてきたようじゃな」

よし、第一関門クリア！ここで俺は畳みかける。

「手前ども、口不調法でございますため、不躾ながら我らで作りだしました食べ物を持ってまいりました。下衆・下民が口に致すもので恐縮でございますが、ご笑納くだされば、ありがたく存じます」

無限収納から大量のおはぎと油揚げを出す。官女たちから、おおと嘆息が聞こえる。

「先ごろお供えにあったものであるのぅ。あれは美味であった。それをこのように大量に・・・。うむうむ愛い奴よのう。うむうむ、我らに任せておれ。早速、おひいさまに取り次いでやるほどに」

驚くほどチョロい官女たちだ。御簾の前にいた官女たちは、御簾の方に向き直り、おひいさまおいであそばされましょうと、平伏した。スルスルと御簾が上がる。

・・・ドでかい狐がそこにいた。本当に九本のしっぽがあり、渦を巻いている。白というより銀色の毛色。神々しい雰囲気を醸し出している。ゴンはうへへへーと頭を床に擦り付けている。俺も思わず平伏する。

「ううむ。ジュカに遣わした者か・・・。仔細は聞いておるぞよ。本来であればそなたなぞ、妾の眷属には値せぬが・・・。それに控えるものに免じ、この度は許して遣わす。今後は励め」

へへへへーとさらに恐れ入るゴン。もう、小物臭が全開である。何とか許されたとホッとしていると、何やら官女たちがおひいさまに向かって頷いている。

「人払いじゃ。ここでは話がしにくい。両名の者は奥に参りゃ」

スルスルと御簾が下がっていく。別室に呼ばれるようだ。再び別の官女が現れて、俺たちを案内する。渡り廊下のところまで来ると

「私がご案内できますのは、ここまででございます。奥のお部屋は、この廊下を渡った突き当りにございます。お二人でおいで下さいまし」

と言ってスッと消えた。俺たちはしずしずと廊下を渡り、奥の部屋に向かう。

「いやー。官女たちにイヤミを言われなくてよかったでありますー」

「何とか乗り切ったな。お土産作戦も成功の一因だな」

「助かったでありますー。それにしても、おひいさまはいつ見てもお美しい。吾輩もあんなお姫様を女房に持ちたいでありますー。いいでありますなー。せめて三日でもいい・・・」

「なに言ってやがる。お前は眷属だろ。おひいさまを女房になんて

聞いてあきれるわ。うちへ帰って淫売でも買え！」

そんなバカな話をしていると、奥の部屋についた。恐る恐る障子を開けると、座布団が二つ敷いてある。そこに座ると、音もなく襖が開いた。奥にはおひいさまが鎮座していた。

「その方らを呼んだのは他でもない。実は一つ、頼みがあるのじゃ」

何か厄介ごとのにおいがする。

「先ごろお供えをしておった、「おはぎ」と「あぶらあげ」な。あれを・・・毎日、とは言わん。一週間に一度、妾にお供えをしてくれぬかぇ？むろん、タダでとは言わん。それなりの礼はするぞよ？」

「それはお安い御用ですが、取りあえずこのゴンは本当にお許しいただけるのですか？」

「うむ。そなたらのこれまでは全て見させてもらった。そなたも、八万もの人間を殺しては大魔王になろうというもの。同族とはいえ人間を殺せば経験値が上がる。八万もの人間を殺せば、その経験値は恐ろしいことになる。そなたのスキルが過剰に上がったのも、そのせいじゃ」

ほほう。なるほど。

「その大魔王を調伏したのは、その狐ではなく、そなた自身の心によるもの。それよりも妾は、妖狐・ピャオランを追い詰めたことに満足しておる。あの、クソッタレ外道のションベンタレは、妾を冒涜しおった。それだけでなく、妾の眷属を数匹討ちおった。そのピャオランが滅したのは、痛快じゃった」

なるほど。うん？今、ものすごい言葉が出なかったか？

「それゆえ、その者は許して遣わす。それよりも、おはぎじゃ！あぶらあげじゃ！あれは、一万年を超えて生きる妾でも、初めて味わう美味じゃ。あれを女官どもに渡すのは勿体ない。妾に直接、持ってくるのじゃ」

えらく食い気のあるお姫様だな。そのくらいなら全然オッケーですよ？

「おお！引き受けてくれるか。重畳重畳。これだけのものをもらうのじゃ、妾からはそなたに、「加護」を授けよう。ついでに、教養も上げてやろうぞ。うん？えらく称号が多いの。ちょっとこれは難しいが・・・これを・・・」

おひいさまの体が光る。そして俺に、「加護ＬＶ５」と「教養ＬＶ５」が付いた。

「加護は、他の者に自身のスキルを与え、奪い取ることができる。基本的に自分のＬＶよりも低いスキルしか与え、奪うことは出来ぬが、ＬＶ４から自分の同レベルのスキルを奪い、与えることができる。「教養」はレベルが上がると、他の種族と対話できるようになる。いろいろな種族と交流があるのじゃろう？持っておくと便利じゃ」

おお！なんと大盤振る舞い！

「ＬＶ５になると称号が付くが、そなたはいろいろなスキルが神級に達しておるから、それらが合わさって、独特のスキルがついてお

るのう。お陰で妾がスキルを与えるのも苦労したぞよ。おそらくもう、お主のスキルは妾では変えられぬであろうな。」

ほほう、称号にはそんな特性があったのか。うん？ゴンは称号は付いていないが・・・。

「この者は妾の眷属じゃによって、称号は付けておらぬのじゃよ」

なるほど。そういうわけですか。

「この者にスキルを付けたおかげで、妾のＭＰが随分と減ってしもうた。ああ、人にスキルを付けたり奪ったりするのは、かなりのＭＰを消費するから気を付けての。久しぶりに大量のＭＰを消費したので、疲れたわぇ。この度のスキルの付与はこれまでとする。千枝・左枝、他の者が来ても、そのまま追い返すのじゃ」

かしこまりました、と女官たちの声がする。いいのか、そんなことをして？

「ところでそなたたち、先ほどこの部屋に参る時、妙な言葉を口にしておったの。「いんばいかえ」とは、どういう意味か？」

これは・・・答えに困る。

「わっ、我々下々の者は、家に帰りまして、ゆるりと休息いたしますことを、「いんばいかえ」と申します」

「おお、左様か」

何とかうまくごまかした。そして、そのまま俺たちは屋敷に戻った。

すぐにおはぎと油揚げを作らないと。

・・・あくる日、おひいさまの下に、一人の来客があった。サンディーユという老狐である。

齢６０００歳を超える、おひいさまに次ぐ年齢を重ねた狐であり、その慇懃な姿勢と、学者然とした態度は、女官でさえ一目を置かれている。

おひいさまはこの、サンディーユが苦手であった。やれ、姿勢が悪いだの、言葉遣いが汚いだの、勉強が足りぬなど、折に触れて小言を言ってくる。いつの日にか、この老狐に妾の有能ぶりを思い知らせたいと常々思っているのであった。

「姫君には麗しきご尊顔を拝し、サンディーユ、恐悦申し上げます」

「老体の身の上、日日の出仕大儀であるのぅ。苦しゅうない、次へ下がって淫売買え」

その後、サンディーユは一週間寝込んだ。おひいさまは理由はわからないが、ふってわいた自由な時間を、しばし謳歌したのであった。

第四十二話　おひいさま（後書き）

おひいさま（狐神・１０１１２歳）ＬＶ９７
ＨＰ：１３５７９
ＭＰ：１８７４５
鑑定魔法　ＬＶ５
気配探知　ＬＶ５
魔力探知　ＬＶ５
教養　ＬＶ５
加護　ＬＶ５
結界魔法　ＬＶ３
空間魔法　ＬＶ４
回避　ＬＶ５
回復魔法　ＬＶ４

博学才穎、聡明英知、生殺与奪、名伯楽

博学才穎：教養ＬＶ５
聡明英知：鑑定魔法ＬＶ５
生殺与奪：加護ＬＶ５
名伯楽：気配探知ＬＶ５、魔力探知ＬＶ５、回避ＬＶ５

リノス（結界師・１５歳）ＬＶ∞
ＨＰ：４９８５９
ＭＰ：６２８７４
結界魔法　ＬＶ５
火魔法　ＬＶ５

水魔法　ＬＶ５
風魔法　ＬＶ５
雷魔法　ＬＶ５
土魔法　ＬＶ４
回復魔法　ＬＶ５
生活魔法　ＬＶ２
詠唱　ＬＶ５
鑑定魔法　ＬＶ５
剣術　ＬＶ５
ＭＰ回復　ＬＶ５
気配探知　ＬＶ５
魔力探知　ＬＶ５
魔力吸収　ＬＶ５
肉体強化　ＬＶ５
回避　ＬＶ５
行儀作法　ＬＶ３（ＵＰ）
教養　ＬＶ５（ＵＰ）
麻痺耐性　ＬＶ５
毒耐性　ＬＶ５
精神耐性　ＬＶ５
黒魔術　ＬＶ５
加護　ＬＶ５（ＮＥＷ！）

軍神、知神、大魔神、鉄人、鉄腕、結界神、闘将、智将、名伯楽、生殺与奪、博学才穎

軍神：剣術ＬＶ５　雷魔法ＬＶ５　風魔法ＬＶ５
知神：鑑定魔法ＬＶ５　回復魔法ＬＶ５
大魔神：黒魔術ＬＶ５
鉄人：精神耐性ＬＶ５　毒耐性ＬＶ５　麻痺耐性ＬＶ５

鉄腕：肉体強化ＬＶ５
結界神：結界魔法ＬＶ５
闘将：火魔法ＬＶ５　水魔法ＬＶ５
智将：詠唱ＬＶ５　ＭＰ回復ＬＶ５　魔力吸収ＬＶ５
名伯楽：気配探知ＬＶ５　魔力探知ＬＶ５　回避ＬＶ５
生殺与奪：加護ＬＶ５
博学才穎：教養ＬＶ５

第四十三話　残念な悪魔

ゴンと共におひいさまの屋敷から帰ってきた。

空間魔法の一種だろうか、ほぼ行った時間とあまり時間が経過していないように思われる。これはどういう魔法だろうと考えながら後ろを振り向くと、小さな祠の隣に、キツネの石像が両端に備えられた大きな祠が建っていた。おそらくこれが、おひいさま直通の祠なのだろう。早速、明日にでもご注文の品をお供えしておこう。

そんなことを考えていると、ハーピーが数匹、ジェネハのいる馬小屋に飛んで行った。おそらくヒナの餌を届けに来たのだろう。俺も様子を見に行く。

「ジェネハ様、今日のエサを持ってまいりましたー」

「また大ネズミの肉か。子供たちは肉ばっかりでもいかん。多少甘みのある果物も取ってくるのじゃ」

「はいー。了解ですー」

おおっ、ハーピーたちの会話が分かるではないか！単に「ピピィー」としか聞こえないが、何となくそれがこういう意味だろうと分かるのである。すげえな教養ＬＶ５は。

「今度またおはぎを作るから、それをまた持ってきてやるよ。あ、ぜんざいがいいか？」

ジェネハとハーピーがギョッとした顔をしている。おおっ、俺の言葉も通じたか？

「ご、ご主人様、どうして私たちの言葉が話せるのです？」

「ああ、何かその、ゴンが仕えている神様にスキルをもらったんだよ。俺の言葉、通じてるよな？」

「はい、十分通じています。ご主人様と直接お話が出来るようになり、うれしいです！」

「ご主人様、イリモです。私の言葉はわかりますか？」

「おお！イリモか！わかるわかる！イリモはきれいな声をしているんだな」

「エヘヘ、恥ずかしいですー」

魔物たちとの会話をしばらく楽しんでいると、これも何となくではあるが、彼女たちの過去が分かるようになった。さらに注意して彼女たちの過去を探ると、ハーピーたちが何故、この森に来たのかが分かった。

「ほう、お前たちは大魔王に会いに来たのか？」

「はい、お恥ずかしいことですが、大魔王を倒そうと思ってここまで来ました。とてつもない邪悪な気配を感じ、それを頼って旅をしたのです。恥ずかしながら我々は、仲間で戦えばどんな強敵にも勝ってきました。我々であれば勝てると思ったのです」

俺の気配を感じた瞬間、ジェネハは、「ああん？世界最強だと？誰に断って言ってやがんだ？私たちを倒してから言えよ！」というような感情を抱き、居ても立っても居られない感情になったのだという。確かに、呪いＬＶ５は邪悪な者を寄せ付けるって言われてたもんね。無理もないか。

「しかし、ジュカ山脈はドラゴンの巣窟。大魔王の気配にあと一歩というところで、どうしても山脈を越えられませんでした。仕方なしに、この森に逗留してた時に、ご主人様に出会ったのです」

なるほど、それで俺のビーフシチューを狙ってボコボコにされたのね。

「正直私たちは、人間風情の一人くらい何とでもなると思っておりました。しかし、家族全員が死ぬ一歩手前まで追い込まれました。あの恐ろしさは今でも忘れません。しかし、ご主人様には感謝しているのです。上には上がいるということを教えていただきましたし、傷を負った我々を治癒してくださいました。それだけでなく、住む場所を与え、時には美味しい食事まで提供していただき、こうして家族を守っていただいています。ありがたいことです」

お、おおう。まあ、気まぐれにしてるだけなんだけどな。

ジェネハ曰く、しばらくは自分たちのように強者と勝手に思い込んでいる魔物が来る可能性があるので、注意するよう提案されたのと、ハーピーたちも、そのような邪悪な魔物をできるだけ見張っていくと胸を張られた。そうなると俺は弱い。彼女たちのスィーツを作らざるを得ないことになった。

そろそろ気候が暑くなりかけた頃、ハーピーたちのヒナが飛ぶ練習

を始めるようになった。まだまだ飛べないが、必死で羽をバタつかせている。見ていてとてもかわいい。俺の癒しの時間である。

そんな時、俺のマップに魔物襲来の表示が出た。色は黄色なので、警戒しつつ俺のところに近づいてくる。ハーピーたちも集まり、魔物の襲来を告げてくる。マップには「ベリアル」と表示されている。しかも４体もいる。

「ベリアル」・・・悪魔とドラゴンを合わせたような風貌。かなり高位の悪魔である。一応結界は張ってあるが、ジェネハは仲間を従えつつ、上空で迎撃態勢に入った。俺も外に出て様子を見守る。

まず４体のベリアルは、結界に対して突撃を敢行した。しかし、俺の結界はヤワではない。当然のごとく彼らを跳ね返した。するとベリアルは４体が固まり、雷魔法のような魔法を体に纏い、超高速で結界に向かって突撃を行った。はじき返されても突撃を繰り返すこと１０回、俺の結界はついに破られた。

ベリアルたちが降りてくる。ハーピーはその速度に対応できない。そして、ドスン！と大きな音と地鳴りと共に奴らは俺の前に現れた。２匹は黄色、あとは赤と紫という色だ。体表の色は、ベリアルの能力か何かに関係があるのか？と考えていると、奴らに続いてハーピーたちが俺の周りに降りてた。そして、俺を警護する態勢を整える。

「グモモモモ、なぜハーピーが人間と共にいる？いや、そいつが大魔王か？」

「いや、違うぞ。あの人間から妖気は感じない」

「おいハーピーども！大魔王はどこにいる！素直に答えた方が身の

ためだぞ？グモッ」

「この人間は我々の主人だ。大魔王などいない。見つけたければあの山脈を越えていくがよい。もっともあの山脈は数種のドラゴンが生息していて、我らでも越えられなかったがな」

「何と！大魔王はいないだと！それにその人間が貴様らの主人だと！？何をバカな！人間ごときに、貴様らが敗れたというのか！」

「その通りだ。この、ご主人様に敗れた。それゆえ我らは命と引き換えにご主人様にお仕えしておるのだ」

「グモモモモー。ジェネラルハーピーである貴様も耄碌したということか！よかろう！大魔王が討てぬのなら、貴様らの主人を討って我々の名声を高めるぞ！最強種族が我々ベリアルであることを、思い知らせてやるのだ！」

・・・勝手に決めるなよ。自分の名を売るために大魔王を倒しに行くって、アホじゃないのか？身の程知らずも甚だしい。それより俺は、戦う気がないんだけどなー。などと考えていたら、ベリアルの一人が高速の火魔法を放つ。速い！避けはしたが、油断していると当たりそうだ。

「ジェネハたちは動くな！ヒナとイリモを守れ！」

俺は叫びながら屋敷とは逆方向に走る。ベリアルたちも俺を追いかけてくる。すぐにベリアルたちに囲まれてしまう。

「グモモー。我らのために死ね。ちょうど腹が減っていたのだ。腹の足しになろう。グモモモモー」

「ベリアルであるのは分かったが、名をお持ちか？名をお聞かせ願いたい」

「我らの名か。よかろう、死の置き土産として聞いておくがよい。我はベリアル一族の中でも最上位に位置するベルアルク・・・ぐえぇ！」

ペラペラとしゃべっている一番大柄なベリアルに結界を張り、そのままそれを縮小する。体中の骨を一瞬で砕かれてそのベリアルは絶命した。ごちゃごちゃうるせぇんだよ！

「き、貴様ー！！！！」

残ったベリアルたちが一斉に俺に高速のファイヤーボールを放つ。俺は氷の結界を張ってレジストする。ファイヤーボールを放った瞬間、ベリアルは空中に移動していた。俺はその中の一匹にめがけて高速のウインドカッターを放つ。透明で切れ味抜群、攻撃対象をどこまでも追いかけていく風刃がベリアルをズタズタにする。悲鳴を上げる間もなく、二匹目のベリアルは空中に散った。

その瞬間、俺はもう一匹のベリアルに抱き着かれた。そして間髪を置かず、そいつの口から至近距離で爆裂弾を放たれる。大爆発を引き起こすが、俺は全くの無傷だ。抱き着かれた体勢のまま、俺は周囲の温度を火魔法で急上昇させる。一瞬のうちにベリアルの体が炎を纏う。瞬間的に何千度という高温にしたため、ベリアルの体が真っ赤になる。もともと真っ赤だった体表がさらに赤くなっている。そのまま赤いベリアルは溶けてしまい、大地を焦がした。

残るは紫色のベリアルだ。とおもったら、その姿がない。馬小屋の

方からハーピーたちの悲鳴が上がる。急いで駆け付けると、ハーピーたちが鋭い足の爪を武器に、ベリアルに奮闘している場面が目に入った。幸い、一匹も怪我をしていなさそうに見えるが、ベリアルはそのハーピーを一掃すべく、火魔法の詠唱を始める。俺は無限収納から「鬼切」を取り出し、ベリアルをブッた斬った。

「グモオオオオオオー！！！グギャァァァァァァァ――――！！！！！」

断末魔の絶叫を上げ、紫ベリアルは、のたうち回っている。

「全員ケガはなかったか？ああ、そこ、羽をやられたか？エクストラヒール！」

戦闘で傷ついたハーピーを治癒してやる。彼女たちもすでに俺の家族みたいなものである。幸いにして致命傷を負ったハーピーはおらず、全員無事であり、ヒナたちも無事であった。

俺は、ホッと一安心する。すると、絶叫しながら苦しみ続けるベリアルが目に入った。最初は叫んでいるだけであったが、しばらくすると、何やら泣きながら言葉を喋っている。

「やめてー！！お願いだからやめて！！お母さん！！お母さん！！お母さん！！」

「このベリアルはまだ子供じゃな。しかもメスじゃ。年端も行かぬのに・・・哀れじゃな」

ジェネハは呆れたように呟く。

「うーん、何かこのベリアルを狂い死にさせるのは、良心が痛むでありますなー。この子は戦闘に加わっておらず、むしろ逃げようとしていたでありますからなー。一度、襲ってきた訳を聞いてもよさそうではありますなー」

何故かゴンがいつの間にか俺の傍に来ている。ええっ？面倒くさいなぁ。どうするかなー。

第四十四話　ペーリス

ヒーデータ帝国からはるか北東に位置する名もなき大陸。火山と森に覆われた人跡未踏の大陸がある。ここは魔物の巣窟と化しており、加えて、周囲の海にも強力な魔物が生息している。まず、人間がその海域に足を踏み入れると、生きて帰っては来られない。

多くの魔物を抱えるこの大陸には、大きく分けて三つの勢力が存在する。一つが、火山を支配する火鳥・煉獄魔鳥が支配する煉獄族、森の半分を支配するジェネラルハーピーが支配するハーピー族、そして、残った森と草原の全てを支配するのが、ベリアル一族である。

昔から煉獄族は火山以外の土地では生きられないため野心はなく、また、他の勢力も火山という過酷な環境では生きることが出来ないため、この一族との争いについては皆無であった。

問題はハーピーとベリアルである。この二つの勢力は、折に触れて諍いを起こした。その原因の大半はベリアルにあり、高位悪魔の誇りにかけて、この大地の王となる野心のために争いは起こった。

ドラゴンを小型化した風貌を持つベリアルは、その圧倒的な攻撃力とドラゴンの鱗に匹敵する硬い体表、ドラゴンほどではないにしろ、背中に背負った羽を生かした空中での機動力を活かして、大半の魔物を支配下に置くことができた。しかし、ハーピーはどうしても屈服させることができなかった。一対一では問題なく狩れても、連携攻撃を得意とするハーピーには、ベリアル自身にも大きな被害を受けたのである。

そこで、ハーピーの長であるジェネラルハーピーと、ベリアルの長であるベリアル王は１２０年前に停戦協定を結び、現在に至るのであった。

しかし、この大地に異変が起きた。恐ろしく禍々しい妖気がジュカ王国の方角から発せられたのだ。世界の王は我だ、と言わんばかりの高圧的な妖気だった。

これに反応したのは、ジェネラルハーピーであった。一族を引き連れて、この大魔王を自称する無礼者を討伐に向かったのだ。ベリアル一族は焦った。ハーピーの連携攻撃は自分たちも凌駕する攻撃力である。もしかすると・・・。という不安。もし、ハーピーが大魔王を討伐すると、この森の均衡が崩れる。配下の魔物がハーピー側に付く可能性が高いのである。

もっとも、ジュカ王国に至るためには、ジュカ山脈を越えなければならない。ここにはドラゴンがいる。さすがにハーピーたちもドラゴンを相手に無傷では済まない。しかし、仲間の一部を犠牲にすれば、越えられないこともない。ベリアルたちは苦悩した。

また、間の悪いことに、３００年に及んでベリアルを統治してきたベリアル王が死の床にあった。大魔王の対応と共に、王亡きあとの一族の長を決めねばならなかった。

ベリアルの一族は、強い者が王になる、というごくごくシンプルなものである。王になりたい者同士が戦い、勝利したものが王になる。

本来はそれでよかったのだが、今は大魔王への対策も取らねばならない。ここで一族の決闘で戦力を落とすことは避けたい。そこでベリアルは、王になりたいと願う者たちを大魔王討伐に向かわせ、そ

れに勝利した者を王とすることに決めた。

死を間近にした王には、一人の娘がいた。その名をペーリス。人間の年齢で言えば１０歳程度であるが、王の聡明さを最も受け継いでいた。

ペーリスは王の娘ということもあり、英才教育を受けて育った。戦闘技術や魔術など、基本的な事柄はすぐに身に付けることができた。しかし、この姫はむしろ、この世界の成り立ちに興味を示していた。なぜ、星は出るのか。なぜ、この作物は森で育ち、大地では育たないのか・・・など。むしろ学者肌の女性であったと言える。

父のベリアル王はその遺言として、次代の王に娘を娶らすと宣言した。これに手をあげたのが、三名のベリアルであった。即ち、最も力の強いベルアルク、最も魔力のあるセシウス、最も知恵者と呼ばれるサトリウスの三名である。

ペーリスは正直、この三人が好きではなかった。寧ろ王妃となり、窮屈な生活を強いられるのは避けたかった。しかし、父の命には逆らえない。それどころか父は、ペーリスに三名の大魔王討伐の見届け人となることを命じたのだ。

聡明なペーリスは直ちに父の意図をくみ取った。大魔王討伐は至難の業になるだろう。三名が全滅した時は一人で自由に生きよ、そう認識したのだ。

大魔王討伐に向かうその日、父のベリアル王は崩御した。悲しみを振り払うように、四名は大魔王討伐に向かったのであった。

旅は順調であった。襲ってくる魔物もいたが、全く相手にならなか

った。ペーリスでさえ、簡単に討伐できてしまったのだ。ベリアル三人は大いに士気を上げていたが、ペーリスは冷静に現状分析していた。

ジュカ山脈に生息するドラゴンが、大魔王討伐に向かったという話を一切聞かないのだ。もっとも高い知性を有するドラゴンが動いていない。これには訳がある。おそらくドラゴンが束になっても勝てない相手ではないのか、彼女はそう踏んでいた。

そのジュカ山脈を目の前にして、異変は起こった。何とジェネラルハーピーと大量のハーピーの気配を感じたのである。

これには異変があったに違いないと、ジェネラルハーピーの下に行こうとしたとき、結界に行く手を阻まれた。何度体当たりしても跳ね返されてしまう。これは全く予想していないことであった。地上最強を自負するベリアルが破れぬ結界、特に三名のベリアルはプライドを激しく傷つけられた。

そこで、三名は一丸となって結界を破ることにした。ご丁寧にペーリスを真ん中に、三名がその周りを固めて突撃するというものである。確かに威力は遥かに増大する。しかし、ペーリスにとっては迷惑以外の何物でもなかった。

「グモモモモー！よーし、突撃するぞー！！」

「おおっ！結界にヒビが入ってきたぞー！あと一息だ！」

「どうだ、ペーリス。俺たちの力はー！グモッ！！」

「やめてー！わかったからやめてー！」

ついに結界は破れた。そこには一人の少年と、ジェネラルハーピーを筆頭とする数十羽のハーピーがいた。そして、聞いてみて驚いた。大魔王はいないのだという。それどころか、何とこのハーピーたちが少年に敗北したという。あろうことか、この少年に命を助けられ、そのまま仕えているという。

一体何のためにここまで来たのか。ベリアルたちの落胆は大きい。しかし、ハーピーたちを敗北せしめたこの少年を倒せば話は別である。名実ともに大陸の覇者になることができるのである。ベリアルたちの心は踊った。

しかし、その考えは甘かった。少年は一瞬のうちにベリアルを葬った。もっとも知恵者であり、硬い体表を持つサトリウスを一蹴し、あまつさえ、その体を溶かしてしまった。

ペーリスは一瞬でこの人間には勝てないと判断し、退避行動を取った。しかし、逃げた先にジェネラルハーピーとその仲間がいた。必死で逃れようとするペーリスであったが、ハーピーの波状攻撃には手こずった。血路を開こうと、自分の持つ最大の魔法を放とうと詠唱している最中に、頭に凄まじい衝撃を受けた。ふと見ると、ベリアルたちを葬った少年が刀を振り下ろしている。斬られたのだ、と思ったその時、体中に悪寒が走った。

気が付くと倒れていた。そして、凄まじい激痛と共に、自分の両手、両足、両翼が、一つ一つむしり取られるように切り取られていく。あまりの痛みと恐ろしさに、ふとその傷口を見ると、何と無数の小さなネズミが傷口から自分の肉を食べているのが見えた。

「やめてー！！お願いだからやめて！！お母さん！！お母さん！！

お母さん！！！」

ペーリスは無意識に、幼いころに亡くなった母親を呼んでいた。

第四十五話　残念な勇者

紫ベリアルは絶叫し続けている。確かに他の個体と比べて、体は小ぶりである。ゴンやジェネハの言う通り、どうやらまだ幼いようだ。

魔物とはいえ、年端もいかない者を狂い死にさせるのは、俺自身も気が引ける。とりあえず、この紫ベリアルに結界を張り、抵抗力を奪ったうえで回復魔法をかけることにした。殺意を向けるなど、不穏な動きをすれば、その時は即座に殺してしまおう。

「よし、では治癒するぞ。アルティメットヒール！」

青色の光に包まれ、壊れた精神を修復する。光が消えると、紫ベリアルがぐったりとなっていた。

「おーい、大丈夫か？」

「・・・」

紫ベリアルはしゃべらない。取りあえず水を与えるが手を付けない。よく見ると泣いているように見える。俺は鑑定スキルで、この紫ベリアルを鑑定する。

ペーリス（ベリアルの王女・１１歳）ＬＶ１２
ＨＰ：１５４
ＭＰ：１１９
火魔法　ＬＶ２
水魔法　ＬＶ１

風魔法　ＬＶ１
雷魔法　ＬＶ１
回復魔法　ＬＶ１
ＭＰ回復　ＬＶ１
気配探知　ＬＶ１
魔力探知　ＬＶ１
肉体強化　ＬＶ２
槍術　ＬＶ２
回避　ＬＶ１
行儀作法　ＬＶ１
教養　ＬＶ３
飛行　ＬＶ２

俺は思わずほぅと声を漏らす。わずか１１歳で教養がＬＶ３もある。かなり賢いと見た。スキルもこの年にしては相当高い。王女とあるからには、かなり身分の高い魔物である。

「一応命は助けたけど、結界を張ってある。お前の行動は制限させてもらうぞ。ちょっとでもヘンなマネをしたら即座に命はないと思え。それにしても一体何なんだお前ら？いきなり襲いかかってきやがって」

「・・・」

相変わらず喋らない。俺は「鑑定」スキルをさらに使って、この紫ベリアルの過去を覗く。

「ふーん、ベリアル王の娘なんだな。親父さんに大魔王を倒した者と結婚しろって言われたのか。ほお、あの三人は・・・残念な奴らだな。・・・うん、その突撃はないわー。気持ち悪いよな～」

「ど、どうしてそれを!?わかるの?まさかあなたが大魔王・・・」

「ああ、まあね。大魔王は一瞬だけだ。なりたくてなったんじゃねぇ!」

「ううううう・・・」

小さな体をさらに小さくして泣き出す紫ベリアル。取りあえず結界を解いても問題はなさそうだ。

「まあ、俺たちに危害を加えるつもりがないのなら、このまま帰してやる。群れに帰りな」

「・・・帰りたくない」

「うん?」

「群れには帰りたくないです・・・」

「はあ?お前、ベリアルの王女なんだろ?そのまま群れに帰りゃ王妃様じゃないのか?」

「・・・王妃なんてなりたくない。それに父は・・・大魔王討伐が失敗したら、逃げて好きに生きさせるつもりで、見届け人にしたのだと思います」

「これからどうすんだ、お前?」

「私は色んなことが知りたい・・・。なぜ星は出るのか、どうして

作物は育つのか・・・。知らないことをたくさん知りたい。王妃になればお城から出られない。それは、イヤ」

・・・なるほど、教養ＬＶ３はダテではないと。

「まあ、それならそれで構わんとは思うが、しかしその姿ではなぁ。完全に小さいドラゴンだからなぁ。一人で生きていくならそれでもかまわんが・・・」

「さすがに、この子が一人でこの世界を生きていくには無理でありますよー」

「ご主人様、差支えがないなら、この子ベリアルを屋敷に置いてはどうであろうか？人間に見つかれば間違いなく討伐対象になるであろうし、この森の中でも、おそらく真っ先に狙われるであろう。この子の体力が持たぬでありましょう」

「うーん、まあ、俺は構わんが、このベリアル次第だな。どうする？将来的に何をやるかが決まるまで、しばらくこの屋敷に居るか？」

紫ベリアルはしばらく考え込んだあとで、小さくうなずいた。

「名前は・・・ペーリスでいいのか？お前さんが帰ってこないと言って、ベリアルたちが大勢で襲撃をかけてくるなんてことはないだろうな？」

「・・・父様が亡くなる時に、王を代行する人を選んでいるので、大丈夫だと思います」

こうしてペーリスは、俺の屋敷の居候になった。

しばらくは塞ぎ込んだままだろうとの俺の予想はあっけなく覆された。屋敷で俺が作ったメシを食い、その味に感動したペーリスは、料理の作り方をものすごいテンションで聞いてきた。そしてその後、徐々に自分でも料理をするようになり、俺のレシピをどんどん吸収していった。

もともと知的好奇心が強かったこともあり、色んな食材を調理していくようになった。そしてメキメキと腕を上げて、あっという間に我が家のシェフの座に収まった。

農業を担当するゴンとも話が合い、野菜の品種についてああでもない、こうでもないと議論する姿も見られるようになった。ゴンも教えたらすぐに知識を吸収して活用していくペーリスを、優秀な生徒として受け入れているようだ。

最近では屋敷の裏庭に花畑を作るようになり、色とりどりの花を育てるようになった。美しい花畑の中に、紫色の小型ドラゴンがゴキゲンで作業している姿は、かなり違和感があるのだが。

また、文字が読めるようになりたいという目標を持ち、夜遅くまで文字を覚え、本を読もうと格闘する姿も見られるようになった。お陰で屋敷の二階の空き部屋は必然的にペーリスの部屋になり、いつしか彼女も、我が家の家族の一員と化している。

そんなことをしているうちに、季節は冬になり、屋敷の周囲は一面の銀世界になった。気が付けば俺は１６歳になっており、成長期のためか、身長がかなり伸びた。それに伴って、髭も伸びてくる。そろそろ本格的な髭剃りを買おうかどうかを、夜寝る前に悩んでいると、一匹のハーピーから報告があった。

「ご主人様、森の奥で４名の子供が迷っているようです。いかがしましょうか？」

北のニザ公国との間に位置するこの森は、かなり深い。この冬ともなると稀に冒険者が森の中で遭難することがある。その場合はできるだけ助けることにしており、今回も警戒中のハーピーに偶然発見されたようだ。しかし４名の子供というのは珍しい。

「わかった。今すぐ向かう」

俺はイリモに乗り、森の中に足を踏み入れた。

マップで確認すると、確かに子供たちの反応が出た。１５歳くらいか？まだ若いようだ。ご苦労だがイリモには翼を使ってもらい、最短距離で子供たちの下に飛んでいくことにした。

ほどなく、子供たちの下に着き、俺は、声をかける

「おーい、大丈夫かー？」

４人は肩を寄せ合って大木の下で座っていたが、俺の声を聞いた瞬間、４人はガバッと顔をあげた。

「・・・猫？」

猫たちが鎧を付け、ローブを纏い、人間と同じ格好している。いわゆる獣人とは違う、でかい猫が人間の衣装を身に付けているのだ。

何じゃコイツは？

俺の姿を見つけた猫の一人が立ち上がる。どうやら女性のようだ。
そして足早に俺のところにやってきて

「遅い！遅いではないか！！一体何をしておったのじゃ！！なぜもっと早く迎えに来ないのじゃ！！寒い！寒いのじゃ！」

一方的にまくしたてられる。この寒さで気がおかしくなったのか？

おお、二足歩行ができて、人間の言葉が喋れるんだなと妙に感心していると、その後ろから鎧を着た猫が俺のところにやってきた。どうやらこいつは男のようだ。

「本当になにをやっているんだ全く。早く僕たちを暖かいところに案内しておくれよ。腹が減った。食事を頼む。うん？一人で来たのかい？何をやってるんだよ。それじゃ僕たち全員が馬に乗れないだろう？普通、他の馬も連れてこないか？全くダメだな君は。もういい、僕とシェーラはその馬に乗る。君はアマリアを負ぶれ。ユリエルは歩いて来るしかないな。おい君、ユリエルを見失うなよ？」

あまりのことに絶句する俺。一体、何がどうなってんだ？俺、助けに来たんだよね？どこをどうやったら、こんな会話になるんだ？

必死で頭の中を整理していると、鎧を着た猫の声が飛ぶ

「早く馬を降りろよ！僕たちが乗れないだろ！言葉が通じないのか！？」

「・・・お疲れ様でした」

「は？何？」

「お疲れさま。まあ、頑張ってくれや」

「おい、君、何を言ってるんだ？」

「俺はお前たちの家来でもなければ奴隷でもない。たまたま道に迷っているお前たちを発見して、助けてやろうと思っただけだ。しかし、やめた。お前たちにかかわるのは、ご免だ」

「何を言っている！僕を知らないのか！僕だぞ？僕を助けるのは、当たり前だろ？」

「あいにく俺には猫の知り合いはいない。一体どこの誰かは知らないが、人の善意を受けるのであれば、それ相応の対応をしろ。そんなものの言い方をしているヤツを助ける義理はない。頑張ってふもとの村までたどり着け。お疲れさん」

俺とイリモは踵を返して、元来た道を歩き出す。鎧猫は必死で走り、俺たちの前に立ちはだかった。

「僕を助けろ！僕はウィリスだ！勇者、ウィリスだ！！」

第四十六話　そのバカっぷりはもしや、ネタ？

「勇者？何だそりゃ？」

ウィリスと名乗る猫が、自分を勇者と名乗り始めた。単なるコスプレ集団ではないということか。

「そうだ、僕は世界を救う勇者だ。僕がいないと世界は亡ぶんだ！」

「はあ？世界を救う？」

「大魔王が復活したのだろう！その大魔王を倒せるのは僕しかいないんだ！世界を救う勇者なんだから、助けて当然だろう？」

大魔王は私です、という言葉を飲み込む。また厄介なヤツらを引き寄せてしまったようだ。しかし、腐っても勇者を自称する猫たちだ。そのスキルはどうなのだろう？

ウィリス（猫族の王族・１４歳）ＬＶ６
ＨＰ：３８／４９
ＭＰ：１４／１４
剣術　ＬＶ１

シェーラ（猫族の王族・１３歳）ＬＶ５
ＨＰ：３０／３８
ＭＰ：１０／１６
回復魔法　ＬＶ１

アマリア（猫族・１４歳）ＬＶ６
ＨＰ：２４／３５
ＭＰ：４／１７
回復魔法　ＬＶ１

ユリエル（猫族・１５歳）ＬＶ７
ＨＰ：２０／５１
ＭＰ：１３／１３
教養　ＬＶ１

・・・スキル低っ！相手にならないどころか、森の中でここまで生き残っていたこと自体が奇跡みたいなものだ。このスキルで勇者を気取るとは・・・。世間知らずかバカのどちからだろう。王族とあるから、前者か？いやどちらもか。

「お前らよくこの森の中で生きてこられたな。結構魔物多いぞ、この森？」

「・・・転移魔法陣に乗ったら、ここに着いた」

アマリアと表示された猫少女が答えてくる。転移魔法陣？そんなものがあるのか？どこにある？

「・・・私たちをここに運んだら、すぐに消えた」

何じゃそら？

「お主の家はどこだ？まずはそこに案内してくれ。村や町が近いのなら、そこでも構わない。この際贅沢は言わない。頼む」

ユリエルと表示された猫男が近寄りながら話しかけてくる。贅沢は言わないと言いながら、言っていることはかなりド贅沢なんだが。

「俺の家？断る。近くの村であれば、ここから歩いて一日の距離にある。むろん、大人の足でだがな。頑張って歩くんだな」

勇者とお姫様の顔が固まる。

「大魔王が復活したんだぞ！大魔王を倒さないと亡ぶんだぞ！僕じゃないと倒せないんだぞ！」

「うるせぇよ」

俺は手加減をしてＬＶ４の火魔法を放つ。雪が解け、森の一部が焦土と化す。

「少なくとも、このくらいの魔法が撃てなければ大魔王はおろか、この森を抜けることも叶わない。お前らこのくらいの魔法が撃てるか？撃てないなら早々に帰る方策を立てた方がいい」

「すごいじゃないか！喜べ、君を僕のパーティーに入れてあげるよ！さあ！僕らを警護して、大魔王の下に向かおう！」

・・・やっぱり、アホのようだ。どこをどういう思考回路を通ったら、こんな会話になるんだ？バカは怖い。

「俺はお前らにも、大魔王にも、世界の滅亡にも興味がない。それに、たとえ世界が滅亡するとしても、お前らに守ってもらおうとは思わん。お前らは、誰から大魔王討伐の依頼を受けているのか？」

全員が黙り込む。

「察するところお前らは勝手に勇者を名乗っているだけなんだろう？勇者ってのは他人から認められてなるものだ。自称・勇者なんて3歳の子供でも言えるじゃねぇか。自分の実力もわからずに大魔王討伐とか勇者とか、聞いてあきれるわ。勇者ごっこをしたけりゃ、自分の家でやれ。他人を巻き込むな」

「無礼者め、許さん！」

自称勇者が剣を抜いた。

「僕がせっかく守ってやろうと言ってるんだぞ！世界を救ってやろうと言っているのに、何で感謝しない！」

「お前を求めてない。お前のやっていることは「善意の押し売り」だ。はっきり言って迷惑だ。むしろ、お前らの下らない話にここまで付き合ってくれたことに、感謝しろ」

「貴様～！」

俺に向かって剣が振り下ろされる。俺はその剣をたたき折る。しかし、折れない。かなり丈夫な剣のようだ。

「ふっ、ふふふふふ。これはオリハルコンで出来た剣だ。我が国の宝剣だ。下郎の分際で僕に意見をするのは許せん、これで真っ二つに・・・ぐふっ！」

最後まで言葉を聞くまでもなく、俺の拳がウィリスの腹に突き刺さる。そして、その顔面を思いっきりぶっ飛ばす。

鼻血を出しながら吹っ飛んでいったウィリスは、大木に激突し、そのまま崩れ落ちた。

「うっ、ううううう」

「だから言っただろう。お前は弱いんだ。この森では、間違いなく死ぬ。」

「私たちの態度が気に障ったのなら謝ります。どうか、助けてください。せめて、ウィリス王子とシェーラ王女さまだけは、お助け下さい」

アマリアと名乗る猫娘が、必死に懇願してくる。どうやら、この娘には話が通じそうだ。

その後、このアマリアにこれまでの顛末を聞いた。教養スキルで色々と見ることもできたのだが、見たくないものまで見えてしまう気がしたので、敢えてアマリアに聞くことにしたのだ。

この猫たちは、ニザ公国の北側にある海を越えた、ピャオ国から来たのだという。この国は、猫が独自の進化を遂げて国を作り上げてきたのだそうだ。魔物が群れを成し、王国を築くのは珍しくはないが、この猫族は人間の文化を受け入れながら歴史を重ねてきたのだという。

この自称勇者たるウィリスは、当代国王の五男であり、シェーラはその妹にあたる。アマリアとユリエルは、それぞれのお伴として仕えているらしい。

数年前、ジュカ王国から立ち上った凄まじい妖気はピャオ国も把握し、大魔王が復活したと考えたらしい。当面、国に被害がない限りは静観すると決めていたが、この身の程知らずな王子様は、自分が討伐すると言ってきかなかったらしい。

それまでは、学問も武術にも怠けることが多かったこの王子様であったが、大魔王討伐を目標に掲げた日から真面目に学問にも訓練にも取り組むようになった。近臣たちは当初は安心していたのだが、この王子様はどんどん増長し、自信過剰に拍車がかかるようになった。そしてこの度、めでたく国の宝剣と鎧を盗み出し、妹と従者たちを従えてご出陣と相成ったというわけである。当然、国王の許可は得ていない。大魔王を討伐すれば、自分の行動が咎められることはない、とタカをくくっているのだ。絵に描いたようなバカっぷりである。

「戻ろうにも食料もなく、休むところもないので、このままでは死んでしまいます」

必死にアマリアが懇願してくる。俺は何も言わず４人に結界を張ってやった。一定の温度が保たれ、しかも、彼らに敵意を抱いたり、危害を加えようとする者たちは触れることのできない効果を付与した結界を。

「お前らには結界を張った。明後日の夜までは持つだろう。それまでに頑張って村までたどり着くんだな。ここからなら、西の方向だ。しばらく行けば川が見える。その川沿いに西に向かって歩くと、村に出る。腹も減っているのだろう。ここに食料を置いていく。パンと肉の燻製だ。それぞれ分担して持っていけば十分足りるだろう」

俺は無限収納から食料を取り出し、ついでに木で作った水筒を出し、

そこに魔法で出した水を注ぎ、小さいファイヤーボールを入れてお湯を作り出す。

「体も冷えているだろう。お湯もついでにやるよ」

俺の一連の動作を、アマリアとユリエルは目を見開いてみている。
そして、アマリアは恐る恐る俺から水筒を受け取ると、無言でゆっくりと頭を下げた。

俺はイリモを走らせて、その場を離れた。

「疲れた～。本当に疲れるね、イリモ」

「本当に驚きました。まさかあんな言葉をかけられるとは。私も久しぶりにイヤな気持ちになりました」

「だよなぁ。早く帰って、寝よう」

そうですね、とイリモは翼を広げ、大空に舞い上がる。空には満天の星。その美しさに、ささくれだった心を癒されながら、俺は家路を急いだ。

第四十七話　またまたご無体な話を！

「おはようございます。今朝の朝食は、パンとチーズ、スクランブルドエッグ、オーク肉の燻製、サラダです。パンにはお好みでジャムをつけてくださいね」

我が家のシェフ、ペーリス自慢の朝食だ。

ペーリスの勉強熱心ぶりは、驚くべきものがある。既に料理のスキルは俺をはるかに超えている。彼女のスキルをさらに伸ばすため、近いうちに一度、帝都に連れて行こうかと思っている。

一応、彼女には人に見える結界を張ってあるが、種族の関係でずんぐりむっくりな体のため、人が彼女を見るとかなり太った人に見えるらしい。一応王女なのだが・・・俺の結界スキルはまだまだ改善の余地があるようだ。

ちなみにジェネハは、馬に見えるように結界を張ってある。馬小屋に住んでいるので、必然的にそうなってしまった。

「いってらっしゃいませー」

ペーリスに見送られて、出勤する。商売の方は相変わらず順調だ。最近はペーリスにお使いを頼まれるのだが、その種類が実に多い。買い物をしているとすぐ、夜になる。お陰でこのところ、あのビーフシチューの美味しいホテルのレストランに行けずじまいだ。

店に到着し、カウンターの前に座る。俺の到着を待ちかねたかのよ

うに、商人と冒険者が数名入ってくる。ちゃっちゃと注文を処理しているところに、宰相閣下の使いがやってきた。今すぐ宮城に来いという。

取りあえず店を閉め、宮城に向かう。俺の到着を待ちかねたように、宰相閣下が入ってくる。目の下にクマができている。

「すまぬな、呼び出して。貴殿に頼みたいことがあるのだ」

「また皇族の警護ですか？」

「まあ、そんなところだ。とある皇族を、帝都の国境付近まで警護してほしい」

「国境付近というと、アーシリアですか？それともベルガンダですか？」

「どこでもいい、とにかく帝都の国境まで案内し、帝都から出ていくのを見届けて欲しいのだ」

なんだか随分ざっくりとした依頼である。

「いやなに、半月ほど前、チルの村で猫人族の王子と姫を保護してな。自らを勇者と名乗り、大魔王討伐をしていると宣言したのだ。それなりの装備をしておったので、取りあえず宮城で預かっていたのだが、出身のピャオ国に確認してみると、王子の自作自演だという。しかも装備品は王宮の宝物庫から盗み出したものだというではないか。ピャオ王が怒り、その場で国外追放を決めたのだ」

・・・あのバカ猫どもか。寄りにもよって宮城に保護されていたと

は。これはかかわりたくない。

「ピャオ国から使者が来て、王子一行の国外追放と装備品の受け取りに来たのだが、随分と暴れてな。ピャオの使者と宮城（きゅうじょう）の侍女数名に怪我を負わせおったのだ」

最悪の事態だ。死人が出なかったことが幸いだな。

「王子一行は取り押さえて、装備品は没収したのだが、運悪くその場を収めたのが、第一皇女のリコレット様だったのだ。大人しくしておればよかったのだが、よりにもよってリコレット様に暴言を吐きおってな」

最悪が最悪を呼んでいるなー。一体どんな暴言を吐きやがったんだ？

「・・・リコレット様に向かって、「父親の権威がなければなにもできないバカ女」と言い放ったのだ」

はい、死刑確定ですね。

「今は牢に繋いでいる。仕方がなかろう、我が帝国の姫君が冒涜されたのだ。リコレット様のお怒りも相当でな。先ほどまで「首を刎ねよ」の一点張りだ。宥めるのに苦労したわ。取りあえず我が帝国としても、この一行を国外に追放することにしたのだが、帝都内で騒ぎを起こされても困る。さりとて、兵を護衛に付けて国境付近まで連れていくのは憚られるのだ」

馬車か何かに乗せて、国境付近まで乗せていけばいいんじゃねぇのか？

「・・・リコレット様に対しても暴言を吐くのだ。当然、他の重臣や侍女たちにも言いたい放題だ。そんな者を兵士が警護すると思うか？最悪、我が国の兵に斬られかねん」

斬られればいいじゃないか？

「そうなると今度は帝国の評価が落ちるのだ。帝国の兵がピャオ国の王族を斬ったとなれば、それを口実に近隣諸国がどのような動きに出るのかもわからん」

「そんなに面倒くさい奴らなら、闇から闇に葬ればいいのではないのですか？」

「闇から闇というのは、明るみに出ていない時にするものだ。すでにピャオ国の王子が勇者を名乗って大魔王討伐に出ているという事実は、白日の下に晒されているのだ。とにかく穏便に、この国を出てもらうしかあるまい。そこで、皇族の警護の実績がある貴殿に頼むのだ。どこでも構わん、とにかくあの者どもを帝国国境に捨ててきてくれ」

・・・最後に本音が出てますね。なるほど、基本的に俺のスキルは低く見せている。結界師にその身を保護させながら国境まで奴らを運ぶ。奴らに俺が斬られる心配もないだろうし、俺が奴らを殺す可能性も低い。苦しいお立場、お察しします。

俺にヤル気は全くない。しかし、宰相閣下たっての頼みである。イヤとは言えない。取りあえず馬車は貸してくれるということなので、バカ猫たちを馬車ごと分厚い結界に閉じ込めて、国境付近で捨ててくることにしよう。また、さすがに着の身着のままで国境に放置するのはいかがなものかということで、馬車に食料等を詰め込み、馬

車ごと国境付近に捨ててきて構わないとの宰相閣下のお話である。

「それにしても、バカな王族ですね」

「いや、よくある話だ」

よくある!?この世界の王族はバカばっかりか?確かにジュカ王国の国王もかなりのバカだったが。

「王族は、行儀作法などは厳しく身につけさせられるが、世間一般の常識などはほとんど教えられない。その方面に過剰に疎いことがむしろ、自慢の一つにすらなるのだ」

ははぁ。だからあんなバカ猫みたいなものが出来上がるのだと。

取りあえず、バカ猫どものところに向かうことにする。部屋を出ると、若い貴婦人がこちらに向かってくるのが見えた。そのまま素通りするかと思いきや、その女性は俺の前で立ち止まり、じっと俺を見つめる。

「何か?」

「これ、リノス殿、リコレット第一皇女殿下である」

宰相閣下が慌てて俺に声をかける。ほう、この人が噂の皇女様か。見たところかなり賢そうな雰囲気だ。俺は慌てて膝をつく

「これは、知らぬこととでご無礼を致しました」

「あなたが噂の結界師ですか。私はリコレットと申します。そのよ

うな態度は無用ですわ」

無用と言われてもなぁ、と俺が戸惑っていると

「貴方は皇帝陛下の家臣でも、ましてや私の家臣でもありません。そこにいるグレモント宰相の家臣でもないのでしょう？私は貴方に何も施しをしておりませんから、そのような態度をとる必要はない、と申しているのです。他の王族はいざ知らず、私に対してはそのような態度は不要ですわ」

と言い捨ててさっさと行ってしまった。

「まあ、ああいうお方なのだ。我々とは根本的に考え方が違うのだよ」

宰相閣下と別れ、俺は兵士に案内されて牢屋のある地下室に向かう。

リコレット皇女の考え方は、ある意味で間違ってはいない。しかし、あの考えは帝国の体制を根本から否定するものだ。国内が動乱の時代であればまだしも、完全に帝国としての体制が成り立っている現在では、皇女の考え方は異端とされるだろう。非常に聡明な女性であることは認めるが、生まれてくるのが少し、早かったようだ。

そんなことを考えながら歩いていると、ほどなく牢屋のある地下室にたどり着いた。

バカ猫の王子と王女は、ご丁寧に個室をあてがわれている。その上、それぞれの従者も一緒に入っている。身の回りの世話をする者も一緒にいるのだ。牢獄にしては、なかなかの好待遇と言っていい。従者たちは迷惑この上ないだろうが。

「よー久しぶり。元気にしてたか？」

「あっ、お前はあの時の無礼者！何だ、この城の者だったのか。早く僕をここから出しておくれよ。大魔王は待ってはくれないんだぞ！揃いも揃ってバカばっかりだ！」

「・・・上手な自己紹介だな。とりあえず、お前ら全員国外追放だそうだ。俺が国境まで捨てに行く。早速行くぞ！」

「追放？どうして私と兄様ばっかりこんな目にあうのじゃ！」

「お前らが今置かれている境遇は全て、お前ら自身が作り出したものだ。お前らの考え方、行動がこういう状況を作り出しているのだ」

バカ猫四人が牢から出される。以前は剣を装備していたが、現在は丸腰であり、服も薄汚れたものを着ている。一見すれば王族とは思えないだろう。

そんな俺たちの後ろを、一人のフードをかぶった男が通り過ぎる。何気なくその男に注目していると、男は俺のすぐ近くの牢屋の前で立ち止まり、看守にカギを開けてもらい、その中に入った。そこに捕らえられている男に、俺は見覚えがあった。

ヒーデータ帝国第三皇子、ヒーデータ・シュア・セアリアスだ。

第四十八話　藪をつついて蛇を出す

牢屋の中のセアリアスは、眠っているように見えた。

魔術師が強制的に眠らせているのだろう。セアリアスの傍でエクストラヒールをかけ続けている。

「あの囚人は、一体どうしたんですか？」

白々しく看守に聞いてみる。

「ああ、あれはさる高貴なお方でな。かなり以前から錯乱状態にあって、ああやって魔術師が一日中回復魔法をかけ続けているんだ」

エクストラヒール自体がかなり魔力を消耗するのだが、逆に「鬼切」で斬られても一日中エクストラヒールをかけ続ければ命はとりとめるということか。

「回復魔法をかけるのか？おいシェーラ」

「回復魔法くらいなら私がかけてやろう。感謝するのじゃ」

バカ猫王女がセアリアスの所に行こうとして看守に止められる。

「なぜじゃ！回復魔法を手伝うだけじゃ！何故に止められねばならんのじゃ！」

「そうだぞ！僕たちが慈悲を与えてやろうとしているんだ！何でそ

れをありがたく受けない！本当にバカばっかりだ」

看守と揉みあう二人。取りあえずブン殴るかと思ったその時、セアリアスが立ち上がった。

「ぬあぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ローブ姿の魔術師の首を一気につかむ。そしてそのまま魔術師の首をヘシ折った。

「殿下！お静まり下さい！！」

慌てて看守がセアリアスの牢屋に近づく。

「ガアアアアー！！」

魔術師がカギをかけていなかったのか、セアリアスが牢屋から飛び出してきた。そして兵士の腰の剣を素早く抜き取り、兵士の胸に突き刺した。

「！！！！！」

声にならない声を出しつつ膝をついて倒れてゆく兵士。俺はセアリアスに向かって風魔法を放つ。その瞬間、セアリアスは風魔法を切り裂き、俺の風魔法を躱した。

「ヒャッハー！殿下！殺せー！殺してしまえー！」

よく見ると、セアリアスの隣の牢屋には、ビスト・ザイがいる。失った片手を牢に押し付け叫んでいる。こいつも完全に目がトンでい

る。

「殺せー！ころっ、ガハッ」

セアリアスは何のためらいもなく鉄格子の隙間からザイの喉元に剣を突き立てた。糸の切れた操り人形のようにザイの体が倒れる。その騒ぎを聞きつけてきた他の兵士たちと揉みあいになるが、セアリアスは一瞬のうちに彼らを斬捨てる。

「やめろ貴様！勇者の前でそのような狼藉は許さないぞ！」

バカ王子がセアリアスに向かって叫ぶ。クルリと首だけをバカ王子に向けたセアリアスの目の色がおかしい。どす黒い目になっている。その瞬間、セアリアスが動いた。今までの動きとは全然違う速さで俺たちの所に向かってきた。ちょっと油断していた。

一瞬のうちにセアリアスはバカ王子に近づき、剣を振り下ろす。

「ウィリス様！」

女猫のアマリアがウィリスを庇って斬られた。

「あっ、あああああ」

バカ王子たちは腰を抜かしている。辺り一面が血の海と化す。俺はこの殺人狂に向かってファイヤーボールを放つ。しかし、これもセアリアスは剣で切り裂く。ＬＶ３の火魔法をレジストしやがった。

「がぁぁぁぁぁ、はぁぁぁぁぁぁ、死ねぇ・・・死ねぇ・・・」

吐き出すようにうめき声を上げている。さっきからセアリアスの様子がおかしい。俺は鑑定スキルを使ってスキルを調べてみる。

ヒーデータ・シュア・セアリアス（悪魔・１９歳）　ＬＶ２６
ＨＰ：１０１／２０８
ＭＰ：４７／５８
剣術　　ＬＶ３
肉体強化　ＬＶ３
回避　　ＬＶ２
行儀作法　ＬＶ１
呪い　　ＬＶ３

「呪い」レベルが上がっている。そのせいで悪魔と表示されている。全体的にスキルレベルが上がっている。

少々狭いが、俺はウインドカッターを放つ。しかし、セアリアスは剣でそれを躱す。そして、俺たちに背を向けて逃げ出した。

「バカ猫ども！お前らはここから動くな！」

俺はセアリアスの後を追う。

地下室から出ると、セアリアスが警護の兵士に囲まれ、兵士に向けて剣を振るっていた。俺はセアリアスを素早く結界に閉じ込めてその行動を奪う。そこに兵士たちが折り重なるようにセアリアスを押さえ、捕縛した。

兵士たちに引き立てられていくセアリアス。おそらく、ヤツは間もなく狂い死にするだろう。

地下室に降り、バカ猫たちを保護する。さすがに牢屋に閉じ込めるわけにもいかず、こいつらの身柄は宮城に移されることになった。
バカ王子を庇って斬られたアマリアは、既にこと切れていた。アルティメッドヒールで蘇生を試みたが、脳天から背中にかけて斬られており、脳の損傷が激しく、蘇生はならなかった。他の者も心臓を一突きにされているなどしていたため、蘇生させることができなかった。

俺はアマリアを抱きかかえてバカ猫たちが収容されている部屋に運んだ。

バカ猫たちはさすがに落ち込んでいた。俺がアマリアを抱えて部屋に入ると、バカ王女がアマリアに近づき

「アマリア！アマリア！目を覚ますのじゃ！！お願いだから目を覚ますのじゃ！！」

「誰か、アマリアを生き返らせる者はいないのか！ヒーデータ帝国だろ？蘇生ができる魔術師がいるんじゃないのか？おい！早く魔術師を呼んでおくれよ！」

バカ王子が懸命に懇願している。

「アマリアは脳天から斬られている。ここまで脳が損傷していては、蘇生は無理だ」

「お前なんかに何が分かる！見ろ！アマリアに傷はないじゃないか！嘘を言うな！」

「アマリアの傷は俺が魔法で塞いだ。あれだけ大きな傷があっては、

アマリアがあまりにもかわいそうだ」

「誰か・・・誰か・・・アマリアを・・・アマリアを・・・」

バカ王子の声が涙声になっていく。その時、扉が開き、宰相閣下とリコレット皇女が部屋に入ってきた。

「一人の従者が犠牲になりましたか。あなた方王族に怪我がなくてよかった」

「フン、むしろあなた方が斬られればよかったのですわ。あなた方が勝手な思い込みで勝手な行動を起こし、あまつさえ他人を巻き込む。あなた方は王族という立場を利用して、単にあなた方の興味を満たそうとしただけに過ぎないのです。その結果、従者を失った。その涙は誰のために流しているの？本当にその従者のために流しているのかしら？あなた方のお遊びが続けられないのが、残念で泣いているのではなくて？」

容赦のないリコレット皇女の罵声が飛ぶ。宰相閣下は苦虫を噛み潰したような顔をしている。バカ王子とバカ王女は、涙をぬぐおうともせず、リコレット皇女を睨みつけている。

「さあ、出ていきなさい。本当はあなた方に生きる価値はないと思いますが、あなた方を斬れば、この城にも、この帝国の国土も汚れます。あなた方はこの国の疫病神です。一刻も早くヒーデータ帝国から出ていきなさい。亡くなったこの従者は、私たちの手で丁寧に葬ります。あなた方は、この者を弔う資格すらありません。リノス、とやら。すぐさまこの者どもを国境まで連れていってください」

俺は命じられるまま、無言でバカ猫どもを宮城（きゅうじょう）の外に引き立てた。

用意された馬車はかなり小さいものだった。積まれている食料も、必要最小限のものだった。俺は馬車を引くため御者台に乗り、イリモを連れて帝都を出た。

馬車の中での三人は、一言もしゃべらなかった。まあ、馬車を引いていたイリモがとんでもないスピードで走っていたせいもあるのだが。気が付けば、辺りは夕暮れになっていた。とても美しい夕日が、地平線に沈もうとしている。空を見上げれば満天の星が出ている。もう少しで国境だ。

国境近くの川の前で俺は馬車を止めた。取りあえず三人に数日間は持つであろう結界を張ってやる。

「この川を渡って半日ほど行くと村がある。まずはそこに行け」

「僕たちはどうしたらいい？」

バカ王子が口を開く。

「いろいろな人に会え、そして話をしろ。色んな生き方がある。それを学べ。一人じゃ生きていけないことに気が付け。お前たちは国の民に養われていた。何もしなくてもな。しかし、本来はそうじゃない。人のために何かをしなければ、人は何もしてくれない。それを学べ。それが、生きるということだ」

バカ猫たちは黙って俯いている。

「腹へったろ？これをやるよ」

俺は無限収納に入っていたおはぎを彼らに手渡した。

「その味、よく覚えておけ」

そう言い残して、俺はイリモに跨り、家路に向かった。

第四十九話　敏腕マネージャーの苦悩

とある山間の中に、ポツンと一つの館が建っている。あまりにも深い山の中にあり、人間どころか魔物でさえもたどり着けぬ場所であるため、この館の存在を知る者は少ない。

この館の主こそ、１００００年の時を経て生き続ける狐神、おひいさまである。そして、そのおひいさまの側近くに仕える老狐、サンディーユ。自他ともに認める、おひいさまの右腕とも指南役とも言われる敏腕マネージャーである。

最近のサンディーユの悩みは、おひいさまの偏食である。いわゆる「おのこし」の問題である。

一年ほど前からこの狐館には頻繁に貢物が届くようになった。リノスという、ジュカ王国に遣わした白狐が連れてきた少年が、「おはぎ」と「あぶらあげ」を献上してくるようになった。

最初こそ、下賤の者が食すものとして歯牙にもかけなかったサンディーユであるが、おひいさま以下、女官たちがあまりにも、これらの食べ物を美味い美味いと言って食している。時には女官同士で喧嘩になることもあったのだ。

ここに至ってサンディーユも、しぶしぶとこれらの食べ物を食してみた。そして、一瞬で虜になった。特に「あぶらあげ」がサンディーユの好みに合った。

リノスから届けられる「あぶらあげ」は大体、甘辛く味付けられた

ものと、何も味付けのない物の二種類である。おひいさまは甘辛いものが好みであり、対してサンディーユはノーマルなあぶらあげを好む。このノーマルあぶらあげは、酒のあてに抜群の相性であり、おひいさまの屋敷からあぶらあげを持ち帰り、晩酌のあてにするのを何よりの楽しみにするようになった。

ついひと月前から、「おはぎ」に変化があった。これまでは、豆のような歯ごたえのあるものであったが、それが歯ごたえがなく、まろやかな食感に変わったのだ。要は、リノス家のシェフに就任したペーリスが、リノスの話をヒントにもち米で餅を作り、あんこをこしあんにして「赤福餅」のようなものを作ったのであるが、この「新・おはぎ」をサンディーユは気に入った。

しかし、おひいさまはあんこの中の「餅」が気に入らないらしく、「新・おはぎ」が届けられるといつも、餅の上のあんこだけを食べ、そのまま捨ててしまう。サンディーユはそれが残念でならなかった。

むろんそれは、食べ物を粗末にしてはならぬ、という日ごろからおひいさまに口を酸っぱくして言っている「お行儀」にも反する。しかしそれだけでなく、この「新・おはぎ」は、餅とあんこの絶妙なハーモニーを楽しむものなのだ。口の中でねっとりと餅に絡みついてくるあんこ。それをつるりと飲み込み、そののど越しを堪能する。そこに言うに言われない趣があるのである。

さてそんなある日、いつものようにリノスから「おはぎ」と「あぶらあげ」が届けられた。いつもと違うのは、今日は「新・おはぎ」が三つも届けられていたことである。いつもは二つ。しかも、「新・おはぎ」の時は、おひいさまは一つしか召し上がらず、大抵は残った一つはサンディーユが持ち帰る。今回も、お持ち帰りのパターンである。

しかし、この日のサンディーユは、小腹がすいていた。そこにきての「新・おはぎ」である。取りあえず一つを口の中に放り込む。うまい。どうすればこのような美味いものが作れるのか。人間とは侮りがたいものだ。そう考えながら、無意識のうちについつい手は、二つ目のおはぎに伸びる。口の中に入れる。今度は味を確かめるかのように、咀嚼していく。やはり、美味い。これに合う飲み物は何であろうかと考えながら飲み込む。腹の虫も収まった。大満足である。

ふとみると、おはぎが一つしかない。あ、やっちまったか、という思いもないではなかったが、いつものことである。おひいさまは一つ、しかも半分までしか食べないだろうと思いつつ、おはぎとあぶらあげをおひいさまの所に持っていく。

いつものようにおひいさまは、甘辛く味付けられたあぶらあげを堪能し、おはぎに取り掛かった。今回は「新・おはぎ」である。しかも三個と聞いて、おひいさまは興味なく「左様か」と口にしながら大きく口を開け、中身の餅が顔を出すギリギリのところまであんこを食べ、その味を堪能する。

「サンディーユ、お代わりじゃ」

本来は「お残しはなりません」と小言の一言も言うところであるが、あまり言いすぎて「ええい、お代わりを持って来いというに！」と癇癪を起されると困るのだ。なぜなら、おはぎはもうない。サンディーユの腹の中に納まっているのである。リノスのところに使いをやれば持ってくるであろうが、今は間にあわない。

「おかわりじゃ」

「おひいさまに申し上げます」

「何じゃ？」

「あちらの庭でございますが、この間手入れを致しまして、木々が大変美しくなりましたな」

「庭？・・・おお、きれいになっておるのう。あちらの池の端にも木が植えられて、あれが何とものう」

おひいさまが顔と視線を逸らせている間に、サンディーユはおはぎをクルリとひっくり返した。

「おかわりのおはぎでございます」

再びおひいさまは大きな口を開け、おはぎのあんこを堪能する。

「やはりあんこは美味じゃのう。サンディーユ、お代わりじゃ」

これは困った。今度おはぎをひっくり返せば、餅が出てくるのだ。

「ううう・・・」

「サンディーユお代わりじゃ！・・・もう一ぺん、庭の木々を見ようか？」

その後、しばらくはサンディーユの小言はなくなり、おひいさまは伸び伸びと日々の暮らしを満喫したのであった。

第五十話　奴隷市、再び

寒い冬が終わりを告げ、暖かい風を感じる季節になった。

今日は帝都にペーリスと共に来ている。ここ数ヶ月、休日はペーリスと帝都散策をすることが多くなった。理由は、買い物とペーリスに料理を覚えさせるためだ。これまで俺が食べておいしいと感じた店にペーリスを連れていき、その味を覚えさせている。

ペーリスは俺の結界で人型に見せているが、最初はなかなか大変だった。何しろ、「グモモ」としか喋れないのだ。当然俺はわかるが、他の人はわからない。常に俺が通訳をしていたのだが、最近になってようやく、人語が話せるようになってきた。

人語の先生はゴンであり、その教え方が上手なのと、ペーリスの勉強熱心ぶりも相まって、驚くほど速く人語をマスターしていった。今では、カウンター越しの料理人に、その料理の作り方や包丁の入れ方、調味料などを質問し、さらに料理の腕を上げている。店の人からは料理好きな食いしん坊な女の子と思われることも多く、この間なぞは屋台の大将に

「お嬢ちゃん、食いしん坊もいいけど、少しは痩せなよ」

と言われてしまい、苦笑したこともある。ゴン曰く、ペーリスはかなりの美少女らしいのだが、いかんせん小さなドラゴンであり、体形は相変わらずずんぐりむっくりのままだ。それほどまでの美少女であるのなら、ゴンに人化を教えさせてみようかとも考えている。

帝都内で買い物を済ませ、どんどん無限収納に放り込んでいく。俺たちが行くと大量に大人買いをするので、店の人たちも割合に好意的に接してくれる。また、食材などはペーリスとゴンが職人レベルの目利きをするために、店の親方と何やら深い絆が出来つつある。かなり専門的な話をしているので、俺にはわからないのだが。

買い物が長引き、昼を過ぎてしまった。たまたま近くに高級そうなホテルがあったので、そこのレストランで食事をすることにする。地下のレストランに降りていくと、生憎と本日は休みのようだ。しかし、中は騒がしい。てっきりパーティでもやっているのかと思っていると、そこで意外な人物と会った。何と、遊郭「ミラヤ」の女将であるアキマだ。

「あらーリノスちゃん、お久しぶり！何してんのさ！」

「おかみさんお久しぶりです。いや昼飯を食べようかと思ってきたのですが、休みのようですね。女将さんはこんなところで何を？」

「決まってるさね！奴隷市だよ！」

普段レストランとして使われているこの場所は、今回は奴隷市の会場になっているのだそうだ。アキマは店の新人発掘のため、このような奴隷市によく顔を出すそうだ。今回も数名のダイヤの原石をゲットし、手続きのために外に出てきたのだという。

「もう目ぼしいものは終わっちまって、あとは犯罪奴隷だけだね」

犯罪奴隷・・・罪を犯して奴隷落ちした人々だ。基本的に軽い犯罪では奴隷落ちにはならない。重罪を犯し、ほぼ一生を奴隷として生きていかなければならない人々のことだ。大抵は、男は鉱山や兵士

として買われることが多く、女は遊女として買われることが多い。しかし、環境は劣悪で苛酷なことが多く、１０年以内に死亡する確率は９０％を超えるのだという。言ってみれば、死刑になる時間が少し延びたくらいの状態なのだそうだ。

「基本的にはロクなのがいないんだけどね！でもたまに親の犯罪に連座して犯罪奴隷落ちしている女の子もいるんだよ。せっかくだから見ていきなよ！もしかしたら、掘り出し物があるかもしれないよ！」

アキマは無理やり俺の腕を取り、部屋の中に入っていく。

部屋の中は薄暗く、逆にステージの上はライトが当たっているためか、かなり明るい。しばらくすると、司会の男性が現れる。

「みなさま、お待たせいたしました。それでは犯罪奴隷の売買を始めます。この度の市は、これが最後でございます」

「リノスちゃん、いいのがいたら買っちゃいなよ！その白い札を上げて希望額を言うんだ。財布の中身と相談して買いなよ」

どうやらオークション方式らしい。アキマと話していると、ステージ上に屈強な男たちが並べられている。

「人間の男・２５歳、猫の獣人男・１９歳、人間の男・１８歳、同じく人間の男・１８歳！５０００Ｇから始めます！」

司会者が大声を上げて商品を紹介していく。白い札があがり、「６０００Ｇ！」、「７０００Ｇ！」と声が飛ぶ。売りに出される奴隷は、数名まとめてという場合もあり、一人だけというものもあった。

開始値で購入希望者が現れなければ、どんどん値が下がっていく。最低落札価格は１０００Ｇに決められているようで、それでも札が上がらなければ、その奴隷はステージ上から降ろされていた。俺の嫌な思い出がよみがえる。

「落札されなかった奴隷はどうなるんですか？」

「うーん。次回の市に出すこともあるけど、大抵の場合は主催者側で処分されちまうね」

やっぱりか。俺もエルザ様に落札されていなければ、今頃人生が終わっていたのだ。今さらながらエルザ様に心の中でお礼を言う。

「それでは、最後の商品になります。羊の獣人女・１６歳！３０００Ｇから始めます」

頭の上にクルリと巻いた形のツノが生えている。髪の毛は銀色で、羊毛のように天然パーマがかかっている。よく見ると顔立ちは整っており、かなり美少女だ。胸と腰を布で隠しているだけなので、体のラインも丸見えである。両腕と足に羊の毛のようなものが生えているが、胸もそこそこ大きく、均整の取れた体だ。モデルもできるんじゃないかと思われるほどの美しさだ。

しかし、札は上がらない。アキマあたりが店で遊女として出しても問題ないと思われるが、アキマは眉間にしわを寄せているだけで、札を上げる気配はない。ステージ上の奴隷は、客の視線に耐えかねたのか、顔を伏せてしまう。しかし、後ろに控えていた関係者らしき男に頭を掴まれ、無理やり顔を起こされている。

「どなたかございませんか？正真正銘の生娘でございます。いかが

でしょうか?それでは、２５００Ｇでは?」

どんどん値が下がっていく。アキマに落札しないのか聞いてみると

「あの子は美人だけどダメだね。アタシの勘がそう言ってるんだ。あれは買っちゃダメ!」

そんなもんかと思いながら、俺は羊娘を鑑定してみる。

メイリアス（奴隷賢者・１６歳）ＬＶ３６
ＨＰ：９１
ＭＰ：１４５
錬金術　ＬＶ３
鍛冶師　ＬＶ３
薬師　ＬＶ３
ＭＰ回復　ＬＶ２
教養　ＬＶ３
呪い　ＬＶ３

自己韜晦

呪いＬＶ３・・・一般人から忌諱される。特に善人からは極端に忌諱される。
自己韜晦・・・全体的にスキル低下

スキル高っ!何じゃこの羊女??賢者って・・・。予想外のスキルの高さにしばし絶句する。

「出品者側から５００Ｇまで値引きすると申しております!ございませんか?ございませんか?」

俺は思わず札を上げていた。

それを見計らったかのように、後ろから数名の兵士が入ってきた。

「この奴隷市を解散せよ！今後一切の奴隷市をこの帝都で行うことは禁止する！早々に解散せよ！！」

・・・一体どうなるんだ？？

第五十一話　新しき仲間

「まったくロクなことしないね、アイツらは！ありゃ、リコレット皇女の兵士だよ。本当にもう、何なんだろうね！」

遊郭・ミラヤの女将、アキマさんはプリプリと怒っている。兵士たちはずかずかとステージ前まで進み、そこで関係者と何やら話をしている。残っている客は少なかったが、完全に場がシラけてしまった。アキマはもう帰るという。俺も一緒に帰ることにし、ペーリスを伴って部屋の外に向かう。

「ご主人様、今のは何をしていたのです？」

「ああ、ペーリスにはわからないかもね。奴隷の売買だよ」

「ドレイ？」

「お金で人間を買うんだよ。買われた人間は買った人間の言うことを聞かなければいけないんだよ」

「商品ですね？買った商品は自由にしていいのだと思います」

「ほー、いいこと言うね。この子の言葉、ウチの娘たちに聞かせてやりたいよ！」

アキマはそう言ってカラカラと笑う。部屋の外に出ると、奴隷市の関係者と思われる男が、俺に近寄ってきた。

「先ほどは失礼いたしました。お客様、ご購入の奴隷をお引き渡し致します」

どうやら今度奴隷市を帝都内で開催した場合は罰するが、今回に関してはお咎めなしらしい。俺はアキマと別れ、ペーリスと共にその男の後ろについていった。そして、ホテルの一室に通された。

しばらくすると、奴隷商と思われる小ぎれいな格好をした、恰幅のいい男が部屋に入ってきた。

「いやーこの度はありがとうございます。早速ですが、売買に入らせていただきたいと思います。お代金は・・・はい、これで結構でございます。それでは、奴隷契約に移ります。おい、連れてこい！」

羊の獣人が連れてこられる。先ほどステージとは異なり、ワンピースのような服を着ている。先ほどのは、体のラインをよく見せるために、あえて薄着にしていたのか。しかし、目の前で見ると本当に美しい。

「それでは恐れ入りますが、貴方様の血を一滴いただけますでしょうか？」

うん？血液？俺がエルザ様に買われたときはそんなことしていなかったが？

「奴隷契約は呪文でするのではないのか？」

「犯罪奴隷の場合は、購入者様の血液を頂戴して、血の盟約を結ぶことになっております。血の盟約を結びますと、奴隷は主人に対して一切の抵抗が出来なくなります。主人が犯罪奴隷に背かれること

はあってはなりませんからな。法でも定められておりますので、何卒ご了承くださいませ」

犯罪奴隷の扱いはなかなか厳しいんだな。

「血液につきましては、その魔道具をご利用ください。その先を指先に付けていただくと、ひとりでに血を吸い取ります。痛みもございませんし、傷も残りません」

渡されたガラス棒の先端を指先に当てる。棒はすぐさま俺の血を吸い取った。それを受け取った奴隷商は、何やら呪文を唱えつつ、俺の血を羊の獣人の掌に垂らした。獣人の掌が光る。

「これで奴隷契約は完了しました」

「契約の解除はどうすればいい？俺が死んだらこの奴隷はどうなる？」

「血の盟約を交わした奴隷ですので、持ち主が死ぬと奴隷も死にます。お気に召さない場合は、近くの奴隷商であれば契約の解除はできるかと思います。その際は是非、私共にお声がけください」

「わかった。あと、奴隷の解放というのがあるだろう。それはどうすればいい？」

「犯罪奴隷を解放するなどあまり聞きませんが、その場合は、神官様の許可が必要になります。

「神官？」

「左様です。神官様がその奴隷の贖罪を認めた場合のみ、犯罪奴隷の解放が可能でございます。ただし、それには途方もない金額が必要になりますし、何より、神官様に認められるような贖罪を行わねばなりませんので、かなり難しいと言わざるを得ませんな」

つまり、犯罪奴隷に落ちたら、ほぼ解放は無理だと。この獣人は一体何をやったんだ?

「その獣人は毒をこしらえて、多くの村人を殺したと聞いております。このふてぶてしい態度をご覧になれば、どういう者であるかはお分かりかと思います。どうぞ、取り扱いには十分ご注意くださいませ」

そう言い残して、奴隷商は足早に部屋を出ていった。残された羊娘は俺の目の前にやってきて跪く。

「ご購入をいただき、ありがとうございます。この後は懸命にお仕えさせていただきます。どうぞ何なりとお命じ下さいませ」

「う~ん、とりあえずここを出ようか?俺はリノスという。ところで、君の名前は何ていうの?」

「・・・ございません。ご主人様にお付けいただければうれしゅございます」

「いや、今まで名乗っていた名前があるだろう?その名前は何だい?」

「・・・メイリアスです」

「じゃあ、メイリアスと呼ばせてもらうけど、いいかな？」

「ありがとうございます」

「じゃあメイリアス、早速だけど、俺たちは腹が減っている。お昼まだなんだ。あ、この子はペーリス。ウチの料理長だ。メイリアスはお昼は食べたのかい？」

「・・・いえ、まだです」

「よし、じゃあメシ食いに行こう。ビーフシチュー食べに行くか？」

「行きたいです！」

「よーし決まりー！」

俺とペーリスの後に続いてメイリアスが付いてくる。外に出ると、先ほどの兵士がウロウロしている。ご苦労なことだと思っていると、思いがけなく声をかけられた。

「リノス殿、あなたも奴隷をお求めになりますのね」

馬車の窓からリコレット皇女が顔を出している。

「先ほどの奴隷市に兵士が入ってきましたが、あれはあなたの御命令ですか？」

「ええ。獣人とはいえ、年端も行かぬ者を金で売買するなど、するべきではありませんわ」

「同感です。皆が自主的に、人が人を金で買うことを辞めるようになればいいのですが」

「どの口が仰るのかしら?その後ろにいる獣人はあなたが購入されたのではなくて?年端も行かぬ者をお金で買って慰み者にしている貴方に、今の言葉はいう資格はなくてよ?」

「そうかもしれません。いや、本当は解放してあげたいのですが、犯罪奴隷でしてね。なかなか解放するのが難しいみたいなのですよ」

「犯罪奴隷を解放する?よくもそのようなことをぬけぬけと・・・」

「リコレット様の仰ることは、俺も賛成です。奴隷になるとものすごく不安ですから。そんな思いを、子供たちに味わわせるべきではありません。俺に言う資格はないかもしれませんが、本当にそう思いますよ」

「一体あなたは・・・」

「俺も元は奴隷ですから」

リコレット皇女は一瞬ギョッとした顔をした。言うべきことではなかったのかもしれない。まあ、何か事が起こったら、その時はその時だ。俺は二人を連れてその場を離れ、移動する。ほどなく俺たちはビーフシチューの美味しいホテルに到着し、レストランに入る。

「これはリノス様、ようこそおいで下さいました」

「今日はウチの料理長と新人を連れてきました」

「これはこれはペーリス様、ようこそおいで下さいました。新人様は・・・ッ！リノス様、そちらのお方は・・・」

「ウチに新しく入った人です」

「さ、左様でございますか。どうぞこちらへ・・・」

いつも丁寧な対応をしてくれるボーイがやけに落ち着きがない。ああ、メイリアスの呪いのせいか。取りあえずメイリアスに呪いの影響がでないように結界を張っておくか。

席に案内される。しかし、メイリアスは座らず、俺の後ろに立ったままだ。

「メイリアスも座ったら？好きなものを頼んでいいよ。ここのビーフシチューは絶品だよ！」

「ごっご主人様と同じテーブルで食事をいただくなど、とんでもないです！」

「いいよ。そこに立たれると何か落ち着かないな。取りあえず座ってくれ。これは、命令だ。あと、何か食べたいものはあるかい？嫌いなものは？ない？俺と同じものでいいな？じゃあビーフシチューを三つとサラダ、そしてオムレツを三つください」

ほどなく、注文した料理が運ばれてくる。

「さあ、食べよう。ペーリス、この味をぜひ盗んでくれ」

「任せてください！」

ペーリスはモリモリ食べながら、フーン、あ、トマトだ、などとブツブツ言いながら食べている。メイリアスも食べながら思わず「あ、美味しい」とつぶやいている。気に入ってくれたみたいだ。

「さて、メイリアス。本当は君を奴隷から解放するつもりだったけど、なかなか手間がかかりそうなので、しばらくはウチにいてもらうことになるだろう。君のことは追い追い聞いていくけれど、まずは俺とこれだけは約束してほしい」

ハイ！と食べるのをやめ、飛ぶようにしてメイリアスは立ち上がる。

「いや、座ったままでいいよ。食べながら聞いてくれ。そんなに難しいことじゃない。まず一つは、俺に嘘はつかないこと。辛かったら辛い、嫌なら嫌と言ってほしい。二つ目は俺が秘密と言ったことは秘密にすること。これは奴隷契約があるから大丈夫か。でも、奴隷契約が解除されても、それは守ってほしい。そして最後の三つめは、元気でいてくれ。悲しい顔をされたままだと俺も悲しくなる。だから極力明るくいてほしいんだ。できる範囲で構わないから」

ハイ・・・と鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしてメイリアスは頷いた。

ビーフシチューと料理を堪能して、俺たちはホテルを出てダーケ商会に向かう。そこにつないであったイリモと合流する。

「イリモ、今日から新しく仲間になったメイリアスだ。よろしくな。この馬はイリモだ。よろしく頼むな」

よ、よろしくお願いします。とおずおずとメイリアスは挨拶をする。

街を出るまでしばらく歩き、誰も居なくなったのを確認して

「メイリアス、まずは俺たちの秘密を明かそう。決して言ってはいけないよ」

そう言って俺はメイリアスにペーリスとイリモの姿が見えるようにする。

「ベッ！ベリアル！？それに、ユニコーンペガサス！？」

「ペーリスは飛んで帰れるな？メイリアスはイリモに乗れ。俺の後ろにしがみついていろ」

目をキョロキョロさせているメイリアスを無理やり乗せ、イリモは空を駆けた。後ろのメイリアスの胸が俺の背中に当り、ドキドキしながら家に帰ったのは、ナイショの話である。

第五十二話　坊やいらっしゃい、お姉さんが遊んでア・ゲ・ル

メイリアスを伴って家に帰ると、ゴンが出迎えてくれた。

「おや?その方は・・・随分高いスキルをお持ちでありますなー。うん?「自己韜晦」?吾輩も初めて見る称号でありますなー」

まあ、立ち話も何なので、屋敷の中に入る。メイリアスはおどおどしながら、俺に命じられる通りダイニングの椅子に腰を掛ける。

「さっきも言ったけど、メイリアスは奴隷の身分からは解放してあげたいんだ。ちょっと時間がかかりそうだから、しばらくはこの屋敷にいてもらうことになると思うが、遠慮なく使ってくれ。部屋はペーリスと一緒に使ってもらおうか」

「あの・・・私を解放とおっしゃいましたが、どうして私をお求めになられたのですか?」

「うーん、強いて言えば、何となくかな?深い理由はないよ。ただ、奴隷の身分のままだと不安だろ?俺も奴隷だったから、その気持ちはよくわかるんだ。メイリアスがどうして犯罪奴隷になったのかの訳は聞かせてもらうけど、大きな問題がなければ、解放したいんだよ」

「私は・・・多くの人を殺しました。死んだ人たちのために、私は死ななくてはなりません」

強い意志を持った瞳で、俺を見据えてくる。どうやらあまり多くは

語ってくれそうにはなさそうだ。仕方がないので、俺はメイリアスの過去を覗く。

メイリアスは、羊獣人の母親とドワーフの父親の間に生まれた。母親は腕のいい薬師であり、父親もまた、腕のいい鍛冶師だった。頑固一徹な父親と優しい母親の一身の愛情を受けて彼女は育った。幼いころより両親の仕事に興味を持ち、二人の手ほどきを受けながら日々を過ごしていた。

もともと才能が豊かだったメイリアスであったため、両親の仕事は順調にマスターしていくことができた。夢は両親の仕事を受け継いで、両親を楽にしてやることだった。

そんな彼女に転機が訪れたのは、１０歳の頃であった。国全体に疫病が蔓延した。突然高熱を出し、数日のうちに死に至るという恐ろしい病である。特に多くの子供がその被害にあった。国王は全国に触れを出し、特効薬の開発を命じた。当然その命令は、メイリアス一家にも届いた。一家は全力で薬の開発を行った。そして、特効薬の開発に至った。喜んだ王は、この一家に褒美を約束するとともに、全国民に向けて、この薬を無料で配布した。

そこで、悲劇が起こった。

特効薬を服用した子供たちの多くが命を落としたのである。すぐさま薬の服用は停止され、その原因が調査された。出された結論は、使用されている魔草にあるとされた。一定量を超えると毒となる魔草。その配合を間違えたために悲劇が起こった、そう結論付けられた。

その責を問われ、メイリアスの両親は処刑された。魔草を採取して

いた父、それを使用して薬を作った母、双方が罪に問われたのである。

本来ならばメイリアスも死罪となる予定であった。しかし、まだ幼いという理由で、メイリアスはある宮廷魔術師にその身を預けられた。そこで、命じられるまま様々な薬、魔道具の製作や錬成などを行った。こうした作業はＭＰを消耗する。毎日、気を失うまで続けられるこの作業は、メイリアスの身体に多大な負担をかけた。しかし、国民の生活を改善させる作業と言われていたこの作業はメイリアスにとっての贖罪であり、体をボロボロにしながら耐え続けた。

１６歳になった頃、命じられる作業のことごとくが全く出来なくなった。どれだけ工夫を凝らしてもできない。己の力の限界を感じつつも、メイリアスは懸命に頑張った。しかしついに雇い主である魔術師から見放され、無情にも犯罪奴隷として売り飛ばされたのであった。

「いろいろな作業をしていたみたいだけど、専門的でよくわからないな。わかりやすく教えてもらえないかな？」

「！？どうしてそれを！？」

「ああ、俺には何となくその人のこれまでがわかるんだよ」

「・・・主に三つです。硬度と切れ味を最大限に高める刃物と、全ての魔法を無効化する材質、そして不老不死の薬を作ることです」

「随分と高度な作業をしていたんだな。それは成功したの？」

「ある程度の目星はつきましたが、実現には至りませんでした」

「逆に成功したものは？」

「人の力を最大限に活かす薬です。痛みも疲れも感じず、フルパワーで動き続けることができる薬です」

「それって副作用とかはないのか？」

「薬が切れると、数日間は動けなくなります。最悪の場合は死ぬこともあります」

・・・失敗作じゃねぇか。なるほど、いいように利用されていたのね。おそらく両親の死も、企てられているような気がする。メイリアスに関しては、特に邪念などはなさそうだ。

「よし、取りあえず、呪いを解除してもよさそうだな。ゴン、お願いできるか？」

「あなた様でも解除できるのでありますがー」

「そ、そうか？」

ゴンに促される形で、俺が呪いを解除することにする。メイリアスに意識を集中し、呪いの解除をイメージする。頭の中に呪いＬＶ３が表示される。そこにＭＰをつぎ込んでいく。しばらくすると、呪いＬＶが２に下がり、そして呪いは消え去った。

「ふぅ。呪いは解除したよ。ステータスがまだ犯罪奴隷だな。やっぱり神官の所に行かないとダメみたいだ」

しかし、称号の「自己韜晦」が消えない。

「この称号はどうやって消すんだ？」

「吾輩は消したことがないので、わからないでありますなー。こういうことは、おひいさまが詳しいでありますー」

「またじゃあ、おひいさまに聞きに行くか」

そんな話をしていると、俺のマップに反応があった。かなり高速でこちらに向かって移動している。色は赤。確実に俺たちに対して敵意を抱いている。

俺は全員を促して外に出る。そして、それと同様にソイツは姿を現した。

「全く、余計なことをしてくれるわね。おかげで私が始末をつけなきゃいけなくなったじゃない」

現れたのは、禍々しい妖気をまとった、黒いウサギの獣人女だった。

「ポーセハイでありますかー。厄介でありますー」

ゴンが思わずつぶやく。

「ポーセハイは、幻術を操ることに長けた獣人族でありますー。こいつらは基本的に群れで行動するため、敵対すると群れで襲ってくるので、対応が大変なのでありますー」

「アーラ、今回は私一人だから安心していいわよー。アタシが用が

あるのは、その羊娘。その子を殺さないと、後が面倒くさいのよー。悪く思わないでね？」

「お前らがメイリアスとその両親を罠にはめて操っていたんだな？」

「あら、そこまでしゃべっちゃったの？ダメねぇ口の軽い女は。悪いけどあんたも死んでもらわなければならないわね。でも、ちょっと若くてカワイイじゃない？殺しちゃう前に、ちょっと遊んであげようかしら？」

「その前にちょっと確認させてくれ。このメイリアスは見たところかなりスキルが高そうなんだが、これはお前らが薬か何かでスキルを上げているのか？」

「勘のいいボウヤね。いいえ、犯罪をやらせたせいよ」

「犯罪？」

「同族を殺せば殺すだけ、人を寄せ付けない雰囲気を纏うけれど、その分技術の習得が早まるのよ。この子には多くの人の命を奪うことをさせたのよ。それは、この子が作った薬を使ってね」

「お前らの望みは世界を手に入れることか？それとも単なる殺人を楽しんでいるだけか？」

「その両方ね。どんな強敵の攻撃からも身を守る優れた武器と、不老不死の薬を作らせようと思ったけど、さすがにそれは無理だったのよね。まあ、ほぼ不死の兵士が作れそうにはなっているから、全く役立たずというわけではないけど、これ以上の成長が見込めないのは、生かしていても無駄だからねー。犯罪奴隷になればすぐ殺し

てくれるかと思ってたんだけど、まさかと思って来てみたら、全部しゃべっちゃってたとは予想外だわ」

「最後の確認だ。自己韜晦って何だ？」

「ジコトウカイ？何それ？」

「なるほど、バカなんだな。あ、そうそう、最後に確認させてくれ。お前は女か？それとも女装か？」

「・・・遊んでやろうと思ったけど、やっぱりあなたは殺すことにするわ」

「わかった。おいペーリス」

傍にいたペーリスが無言で俺を見る。

「悪いけど、先に帰って晩飯作っておいてくれ。コイツを片付け次第、すぐメシにしよう。美味いもん作ってくれよ」

畏まりましたーと言ってペーリスは屋敷に帰って行った。俺はメイリアスに向き直り、

「ゴメン、メイリアス。お前の服を買うのを忘れてたな。明日また、帝都に行って買いに行こう。悪いけど今夜は俺の服を着てくれ」

「なに余裕を見せているのかしら？私を油断させようとしているのかしら？フフフフ」

ポーセハイの体から殺気と妖気が放たれる。俺は悪魔のような笑み

をたたえて、ソイツと対峙する。

「俺は可愛げのない女はキライだ。俺に嫌われた時点で、お前の人生は終わってるぞ。今から死ぬ以上の苦しみを味わわせてやる。さて、どんな風にしてイジメちゃおっかなー」

第五十三話　えーのか？これでええのんか？

「私をイジメる？冗談にしては面白いわ。いいわ、身の程をわからせてあげる」

黒ウサギは、ピンク色のオーラを纏い始めた。手にはレイピアを持っている。

「うふふ、地獄の業火があなたを焼き尽くすわよ？早く逃げないと丸焼けになっちゃうわよ？」

俺はポーセハイを見据えたまま微動だにしない。

「アッハハハ、あまりの恐ろしさに動けなくなっちゃったかしら？」

「ご主人様、お逃げください！」

メイリアスが俺の背中にしがみついてくる。

「二人ともひと思いに殺してあげるわね？」

「さっきから一人でブツブツと、何やってんだ、お前？クサい三文芝居だな」

「は？」

「ああ、メイリアスには何もしてなかったな。ほらよ」

「・・・火が消えた」

「幻影が見えればそれなりに盛り上がるのでありましょうが、見えなければ、見るに堪えない姿でありますなー」

「ああ、見ていて痛々しい。つーか、イタイよお前。もう終わりか？お前はいろいろと面白そうだから、イジめがいがありそうだ」

既にこのポーセハイには周囲１０メートルの結界を張り、閉じ込めてある。そしてその中に、大量のゴ○ブリを発生させる。

「うわっ！何これ！いやっ！！」

思わずポーセハイは空中に逃れる。俺はその黒い翼を爆発させ、飛行能力を奪う。激痛に悲鳴を上げながら着地し、必死でゴ○ブリから逃げ惑う。俺は両足を爆発させ、その動きを封じる。大量のゴ○ブリに全身を蹂躙されながら、のたうち回るポーセハイ。

「いやぁぁぁぁぁ！ぎゃぁぁぁぁぁぁ！やめてぇぇぇぇぇぇ！！やめてぇぇぇぇぇ！！」

さすがにこの場面は見るに堪えないので、メイリアスやゴンにはゴ○ブリは見えないようにしている。彼らからは突然ポーセハイが錯乱しているように見えている。

俺はその光景を見ながら改めて、このポーセハイを鑑定する。

リヨナ（ポーセハイ・３７歳）　ＬＶ２９
ＨＰ：１８３
ＭＰ：１１６

幻影術　ＬＶ３
誘惑術　ＬＶ３
人化術　ＬＶ３
精神魔法　ＬＶ３
転移術　ＬＶ２
飛行　ＬＶ２

人を惑わすことが専門のスキルである。まともに俺と闘うと、お話にならないレベルであるが、この「転移術」に俺は興味を持った。

「なあゴン、転移術ってどういうやつだ？」

「空間魔法の一種でありますが、あまり活用できないスキルでありますなー。自分しか転移させることは出来ないでありますし、ＭＰもかなり消費するので、逃亡用の最終手段に使われることが多いでありますなー」

何だ。行ったところに好きに飛んでいけるんじゃないのかよ。

「それならば、まさしく結界スキルが使えるでありますー。結界を極めれば多くの人を転移させることができるでありますー。おひいさまの祠も、結界の一部でありますー」

何だそれ？早く言えよー。一度ゴンにスキルの詳しい説明をしてもらわなきゃいけないな。なんだか宝の持ち腐れになっているような気がしてならない。

そんなことを考えていると、ポーセハイの周囲の空間がゆがみ始めた。よく見ると仲間のポーセハイが転移してきているらしい。その中でもひと際、体の大きいポーセハイの転移が終わるや、大声で叫

ぶ。

「救援信号を頼りに来てみればリヨナ！一体どうしたのだ！！」

のたうち回っているポーセハイの結界の中身をクリアにしてやる。全身汗まみれになりながら、ぐったりとしてピクリとも動かない。

リヨナと呼ばれるポーセハイの周囲に8匹のポーセハイが集まっていた。なるほど、集団で行動するというのは、こういうことなのか。

「お前らコイツの仲間か？大人しく帰るのなら、コイツを連れて帰っていいぞ」

「何だお前は！リヨナのこの傷はまさかお前が・・・？ありえん！リヨナがここまでやられるなど！！」

「ありえようがあり得まいがそんなことはどうでもいい。早く飯が食いたいんだ。今日のところは見逃してやるから、とっとと帰ってくれ」

俺が喋っている最中に、一匹のポーセハイが俺に斬りつけてくる。斬りつけた瞬間に俺はそいつを結界に閉じ込めて、その中身の温度を急上昇させる。一瞬のうちにポーセハイは火に包まれ、消し炭のようになって姿を消した。

「ミヒジぃ！！・・・許さん、許さんぞ！！殺せ！！！」

でかいポーセハイが大声で命じる。残りの六匹は魔法の詠唱を始めた。それを察して俺は詠唱中のポーセハイに「灼熱弾」を放つ。ポーセハイたちの体に穴が開き、そこから一気に炎が噴き出す。奴ら

は何をされたのかも分からぬまま、その命を散らした。

「おいデカイの。お前にはいろいろと聞きたいことがある」

「くっ！ぬぁぁぁぁぁ！」

俺が結界を張ると同時に、でかいポーセハイは転移し始めた。断末魔の絶叫を上げながらそいつは姿を消した。

「転移・・・したのか？」

「ポーセハイが仲間を見捨てて逃げるとは、初めて聞いたでありますなー。おそらく、ご主人の結界の中から転移をしたので、かなりのダメージを受けたでありましょうなー」

「仕方がないな。あいつに聞くか」

俺は傷つき、倒れている女の下に近づく。後ろからゴンとメイリアスが付いてくる。ピクリとも動かなかった女だが、俺が近くに来るとゆっくり顔をあげた。

「今のデカイのはお前の仲間か？見捨てて逃げちまったみたいだけど」

俺を見る女がニヤリと笑う。その瞬間、閃光が走り、爆発が起こる。

「あぶねぇ！」

反射的に俺はメイリアスを抱きしめていた。モフモフの髪の毛と腕に生えた毛が心地いい。

振り返ってみると、そこには何もない、いつもと同じ草原があるだけだった。

「自爆したでありますー。まさか、自分で爆発するとは、初めて知ったでありますー」

ゴンが妙に感心している。よく見ると草原に一本の剣が落ちている。拾って鑑定してみると、

レザーソード：全ての物質を鋭く切り裂く剣。

ほう、切れ味抜群の剣と見た。剣身が美しい。

「それは、私が作った剣です」

俺が剣に見とれていると、メイリアスが独り言のようにつぶやく。

「かなり切れ味がよさそうだな。いい剣じゃないか」

「命じられていたのは、空気も切り裂く剣を作れと言われていたのです。しかしそれには膨大なＭＰを流し込まなければいけません。何とかしてＭＰを節約する術式を考えていたのですが、上手くいかなくて・・・」

ＭＰ？俺は有り余ってますけど？取りあえず、ＭＰを流し込んでみるか。ＭＰを剣に流し込むイメージをすると・・・おお、どんどんＭＰが吸われていく。まだまだ入りそうだ。どんどん入れて・・・

と、調子に乗ってＭＰを入れていくと、剣身が青く光りだす。メイリアスは目を丸くしてその光景を見ている。

およそ１００００程のＭＰを注ぎ込んだ時、剣のＭＰが満杯になったような気がした。気が付いてみると、剣が磨き抜かれた鏡のように美しい剣身になっていた。思わずメイリアスが「きれい・・・」と声を漏らす。再びこの剣を鑑定してみると、こんな内容が表示された。

ホーリーソード：全ての物質と空間を切り裂く剣。特に邪悪な物には鋭さを増して切り裂く

・・・聖なる剣が出来上がったようです。ええのか、これでええのんか？

無言で俺は剣をメイリアスに渡す。メイリアスは剣身を食い入るように見つめ、剣身を何度も何度も舐めるように見回していく。

「ど、どうやってこれを・・・？合金配合？いや、組み込む術式をクオッシュ方式に変更して・・・いや、式じゃなくて・・・あれ？ガムリ草が焼き切れてる？あれ？あれ？」

美少女が目を見開いて剣を見つめながら一人でブツブツと言っている姿は、かなり怖い。

「メイリアス、取りあえずその剣、むき出しだから鞘か何かを作ってもらえるかな？今すぐじゃなくてもいい。材料は・・・明日また買いに行こうか。腹が減ったな。メシにしよう！」

ハイ、と大切そうに剣を抱えるメイリアスと、お腹がすいたでありますーとあくびをするゴンを従えて、俺は屋敷に向かった。

第五十四話　ヤル気がないのに、ヤル気は出ません！

「おかえりなさいませ！夕食出来てますよ！今日はホリデードラゴンのお肉を使ったステーキです！」

ペーリスが元気に出迎えてくれた。ステーキを中心に、フライドポテト、サラダ、そしてスープも丁寧に作ってある。さらには、ガーリックライスまで。ペーリスの腕前が素晴らしい。

「ありがとうなペーリス！さあさあ、みんなで食べよう！」

「「「いただきまーす」」」

「い、いただきます・・・」

ほぼ無理やり座らされたメイリアスは、オドオドしている。

「メイリアスも食べろ。ペーリスの料理は本当においしいんだぞ」

メイリアスにサラダを取り分けてやり、ステーキの肉をだしてやる。最初こそ戸惑っていたメイリアスだが、少しずつ食べているようだ。俺もドラゴンのステーキを口に入れる。美味い！この肉のうまみが素晴らしい。みんなもガツガツ食べている。

ふとメイリアスを見ると、下を向いて震えている。

「どうした？食べられなければ無理しなくていいぞ？」

「グスッ。こんな奴隷の私に、こんなに美味しい食べ物を与えていただけるなんて・・・。なんだか申し訳ないです」

「お前はウチの仲間だ。奴隷というのはたまたまだ。気にしなくていい」

「この料理は全てご主人様が考えられたのですよー。今日は私が作りましたが、ご主人様が作ると、もっと美味しいですよ」

ペーリス、ハードルを上げるなよーと言いながらメイリアスを見る。申し訳ない、と言いながら彼女は出された料理を全て平らげた。

デザートのいちごを食べて満腹した俺たちは、しばしまったりとした時間を過ごす。その間にメイリアスをペーリスに部屋を案内させようとしたが、メイリアスがそれを断った。

「私は、ご主人様の奴隷です。ペーリス様のお部屋をお借りするのは申し訳ありません」

「でも、寝るところがないぞ？」

「廊下でも構いません」

「廊下って・・・。ペーリスもいいと言っているから、気にしないでいいぞ？」

メイリアスは黙って俯いている。

「折角でありますから、ご主人の部屋で寝かせてあげればいいのでありますよー」

ゴンが口を挟む。

「うーん、ちょっと待ってくれ。メイリアスには色々と作業をしてもらわなきゃならないこともある。だからしばらくはペーリスと同じ部屋を使ってもらえないか？用がある時は呼ぶから」

「メイリアスさん、ご主人様も仰っていますから。それとも、ベリアルと一緒に寝るのはイヤですか？」

とんでもないです！と首をブンブン振るメイリアス。どうやら何とか納得してくれたみたいだ。メイリアスが俺の隣に来られたら、間違いなく襲う。今ここでメイリアスを襲ってしまうのは・・・。ヘタレな男というなかれ。

その後は、ペーリスがメイリアスに屋敷を案内し、驚きっぱなしの姿が何とも面白かった。さすがに一般家庭の中で風呂があるのは珍しく、思わず「うぇぇぇぇぇー」と女子にあるまじき声を出してしまったのは、ナイショにしておこう。

次の日、店を早じまいし、メイリアスの衣服を買いに行った。店員に勧められるまま買ったが、かなりいいものを勧められたようで、かなりのお値段であった。まあ、金のことは心配いらないし、買った服がどれも似合っていて、とてもかわいらしかったのでよしとすることにする。

メイリアスについては、これまで行っていた研究を継続してもらおうと考えている。そのために必要な道具や材料も併せて買うことにしたが、かなりの規模になりそうだ。ペーリスの部屋自体もかなり広いが、それがまるまる潰れてしまいそうだ。さすがに道具の一部

はあきらめてもらったが、ここは屋敷の増築も考えねばならないかもしれない。

無限収納に入れてあるホーリーソードについては、メイリアスが全力で鞘を作るということで、これまた専門的な店に連れていかれ（連れて行けと命じたのは俺なのだが）、専門的な材料を購入することになった。何でも、かなり神聖な鞘を作るらしい。完成が楽しみだ。

遠慮深いメイリアスだが、ペーリスとはかなりウマが合うようで、二人はすぐに仲良くなった。二人とも教養ＬＶ３なので、お互いに知的好奇心を刺激し合っているようだ。

そして、俺とゴンは再びおひいさまの屋敷の前にやってきた。スキルのことを聞こうと思ったら、「そういうことはおひいさまが一番詳しい」と言われてしまったからだ。ゴンが一緒であればいつでも行けるそうなので、行ってみることにしたのだ。さすがに手ぶらというわけにもいかず、俺は両手に持ちきれないほどの貢物を抱えて祠の前に立った。屋敷の門の前に立つと、静かに門が開く。意外と自動ドアなのかもしれない。

玄関でおひいさま付きの女官、千枝さんと左枝さんに迎えられ、そのままおひいさまの部屋に案内される。今日はこの二人の女官の他に、袴をはき、袿を付けた狐も同席していた。

「おひいさまには麗しき・・・」

「固っ苦しい挨拶は抜きにしようぞ。よいよい。楽にせよ楽にせよ」

「そう仰っていただくとありがたいです。今日はお土産を持ってき

ました。よければお納めください」

そう言って俺は、あぶらあげ、おはぎ、ぜんざい、稲荷ずし、大学芋を差し出す。

「同じような物ばかりで恐縮ですが・・・」

「よいよい。ほほぅ。ぜんざいとな?どれどれ・・・美味いっ!この甘み!豆の歯ごたえ!やはり歯ごたえのあるものがよいう」

「おひいさま!」

窘められているが、どうやら気に入ってくれたみたいだ。

「拙者はサンディーユと申す。いつもおひいさまへの貢物、大儀である。おひいさまも女官たちもことのほか甘味を好んでの。そなたの貢物を皆、楽しみにしておるのじゃ」

「ありがとうございます。それでしたら、あぶらあげを辞めて、ぜんざいをお供えしましょうか?」

「ふむ。そうじゃな、ぜん・・・」

「いや!あぶらあげはそのままでよい。あれは酒のあてにまことに結構であるに!」

サンディーユが食い気味に割り込んできた。おひいさま、睨まない睨まない。

「かしこまりました。あぶらあげは火を通してパリパリにするとお

いしいですよ。あと、よければ稲荷ずしも是非、お召し上がりくださ
い」

「うむ。これは・・・なかなか・・・よい、よいぞよ。これもまた、
その・・・お供えを」

「畏まりました」

どうやらお土産は好評のようだ。大学芋は女官たちが気に入ってい
る。一度にお供えをするのは難しいので、ちょっとローテーション
でやろう。

「さて、本日お伺いしましたのは他でもございません。お尋ねした
いことがございまして」

「何なりと申してみよ」

「まず、結界スキルなのですが、これは転移ができると聞きました。
これはどのようにすれば・・・」

「おおそれは、特殊なものじゃによって、普通では発動せん。術を
結ばねばならぬ」

「術を結ぶ？」

「そなたらの言う、呪文というやつじゃの。サンディーユが詳しく
知っておる。教えてもらえばよい」

「おひいさま、早く貢物を食したいために、某にお任せになりまし
たな？」

「そ、そんなことは、だだだだだ断じてないのじゃ！ぶぶぶぶぶ無礼者め！」

ハッ、とサンディーユは畏まる。おひいさま、図星を突かれたのがバレバレですよ？

「あともう一つお尋ねしたいことがあります。私の仲間に「自己韜晦」の称号が付いている者がおります。これを解除したいのですが・・・」

「じことうかい？何じゃそれは？」

「オホン、おひいさま。５００年ほど前に解除に失敗したあれ、でございます」

「・・・ああ、あれか。あれは失敗・・・。いや、ししししし失敗ではないのじゃ！妾に限って失敗などないのじゃ！あれは成功したではないか！！」

「・・・某がお助け申して、事なきを得ましたな」

「サンディーユ、無礼であるぞ！！ええい、下がりおれ！それらのことは、このサンディーユに教えてもらうのじゃ！大儀であった！下がってよいぞ！！」

部屋を追い出されてしまった。俺たちはサンディーユに別室に案内された。

「さてさて、まずは結界術の結び方じゃが、これは難しくない。転

移したい場所に向かって、『おひいさまおひいさままいる』と唱えながら転移したい場所の名前を言いながら魔力を注ぐ。そうするとそこに転移点ができる。そこに足を踏み入れると転移できるようになる」

おお、早速やってみよう。

「続いて「自己韜晦」の解除であるが、これはかなり高度な呪いであってな。本人と術者が自身の能力の封印を願いながら自身の成長を抑制するものだ。術者と本人双方から呪いをかけておるので、解除が難しい。できぬことはないが、あまりやりすぎてしまうと、本人の脳が溶けてしまう。一番良いのは、本人が封印している成長を解除したいと思ったときに、加護スキルを発動するのが効果的じゃ」

「おひいさまが失敗したのは？」

「・・・無理やり解除しようとしたのじゃ。あと少しで取り返しがつかぬところであったわ。儂が、お助けしたのじゃ」

そのお助けの方法は最後まで教えてくれなかった。そんな話をしていると、部屋の外に女官の千枝がやってきた。

「リノス殿、おひいさまからのご命令じゃ。今後、お供えするおはぎは、豆の形があるものにすることと、あぶらあげは甘いやつだけでよい、との仰せじゃ」

「なっ！某の楽しみを奪いおって！某への当てつけか！」

怒るサンディーユを宥め、結局屋敷にサンディーユ用の祠が立つことになった。

メイリアスの称号解除は、彼女の意思次第・・・。さて、どうやっていこうか。そんなことを考えながら、俺はおひいさまの屋敷を後にした。

第五十五話　返す刀で返り討ち

「ご主人様、完了しました」

ご苦労と、俺からの労いの言葉を聞いて、ハーピーは飛び上がっていった。

夏の日差しが眩しい。遠くに目をやると、地平線の彼方が陽炎にゆれている。俺は夏の到来を感じながら、馬小屋を見る。

馬小屋では、冒険者の格好をした１０人の男がいた。俺はその男たちの前に、無言で立った。

事の発端は、休日であるこの日、昼飯を食ってまったりとしている時間だった。俺のマップに、真っ赤なマーカーが１０個ほど現れたのだ。全員に注意を呼びかけ、警戒態勢を取る。その集団は途中で３つのグループに分かれてやってきた。４名ずつのグループが二つ、そして二人一組のグループだ。

二人連れはまっすぐにこの屋敷にやってくる。あとの二つのグループは馬小屋と屋敷の裏庭に向かっているようだ。どうやら屋敷を挟み撃ちにする計画らしい。

俺の指示を待つまでもなく、ハーピーが不審者の来訪を伝えに来る。俺は動けるもの全員を動員するよう指示を出す。

こちらの準備が整い、不審者たちも配置が完了したと見え、二人が

俺の屋敷の玄関に立つ。

「結界師、リノス殿の屋敷はここか！」

俺は玄関まで不審者を出迎える。

「結界師のリノスですが、何か？」

「リコレット皇女がお呼びなのだ。我々と同行いただこう」

「リコレット皇女？一体何の用です？」

ピィィィーーーー！！というけたたましいハーピーの鳴き声が響き渡る。馬小屋の方から、うわー、ぐわッといった人間の悲鳴も聞こえてくる。驚いた二人組が外に出る。俺もそれを追うように外に出る。

「な！ハーピー！なぜハーピーがこんなところに」

「おーいお前ら。そいつらを殺すな。生け捕りにしろ」

「貴様は一体・・・」

「もしや魔族か！」

一人の冒険者が俺に剣を振るう。俺は軽くかわしてソイツに当て身を当てて気絶させる。その間に、もう一人の男もハーピーたちに抑え込まれている。その騒ぎを聞きつけて、裏庭の部隊もやってくる。そしてそのままハーピーたちになす術もなく抑え込まれた。

「で、リコレット皇女は、俺に一体何の用だ?」

男たちは答えない。

「全員ハーピーの餌になりたいようだな?」

「ま、待て。話す!」

玄関で俺に話しかけてきた男が口を開く。俺はそいつの前に足を進める。

「・・・グレモントの犬である、貴様が邪魔なのだ」

「俺を消してどうするつもりだ?俺が消えても何もならんだろう」

「お前が死ねばグレモントの結界が解除されると聞いた。だからだ!」

宰相閣下を暗殺しようとしているらしい。何とも物騒な話だ。

「グレモントは帝国の執政という立場にありながら私腹を肥やし、あまつさえ帝位を簒奪しようとしている。あいつは生かしておくことはできんのだ!」

ハーピーに抑え込まれながらも熱弁を振るうこの男は見たところ、かなり若いようだ。年齢を聞いてみると、２０歳だという。

「帝位って、帝国には皇太子がいるだろう。帝位を奪うのは難しいだろう」

「自分の孫のヴァイラス殿下を帝位に就け、自分はその後見となろうとしているのだ！」

なんだか言っていることがムチャクチャである。念のため俺はこの男の過去を覗き見る。

「おいおい、リコレット皇女は関係ねぇじゃねぇか。嘘つくなよお前」

男の体がピクッと動く。

「ハア？皇帝陛下は崩御されたのか？ほう、そのスキに宰相閣下を暗殺してリコレット皇女を新皇帝の後見に就ける？それでお前らが甘い汁を吸うってか？ロクでもねぇなお前ら」

「だ、黙れ！勝手なこと言うな！今の帝国では優秀な人材を活かしきれない！グレモントでは帝国が崩壊する！」

「で、お前らがその後釜に座ると。バカかお前。お前のスキルで宰相閣下の代わりが務まるか」

「グレモントの犬が！」

取りあえずこの襲撃者たちをふん縛る。あとあとが面倒なので、こいつらに結界を張り、ハーピーたちの記憶を消して、俺にやられたように記憶を書き換えておく。その後、そいつらを引き立てて俺は、転移ポイントに向かう。ちょうどいい。１０人乗っても大丈夫かどうかの、いい実験台だ。俺は転移を発動させる。行先は帝都にある俺の店だ。

問題なく全員帝都の俺の店に転移できた。俺はそいつらを置いて再び転移ポイントに乗り、宰相閣下の屋敷近くに設置したポイントに転移する。そして、屋敷に入る。

宰相閣下は留守だった。俺は事の顛末を宰相家の執事に話すと、このままこの屋敷にとどまるよう言われ、執事は宮城（きゅうじょう）に出かけて行った。そして、宰相家の者たちが、俺を襲った者たちを引き取りに俺の店に向かって行った。

ほどなくして、俺を襲った奴らが宰相家の者たちに連行されてきた。連行されるときに抵抗でもしたのか、全員ボコボコにされていた。

かなり長い間待っていたが、宰相閣下の帰りは夜になるという。俺は手洗いに行くふりをして、個室に入り、そこに転移ポイントを作って再び俺の屋敷に帰った。取りあえずペーリスに、今日は戻らないかもしれない旨を伝え、念のために結界を張りなおして、再び宰相家のお手洗いに帰る。転移ポイントを解消し、応接室に戻った。

宰相閣下が戻ってきたのは、深夜だった。かなり疲れの色が見える。

「お疲れのようですね」

「まあな。色々と問題が山積していてな。バーサーム候のような体と頭が欲しいわ」

「陛下が崩御されたそうですね？」

「！どうしてそれを！？・・・そうか、奴らが喋ったのか。バカな者どもだ。私を殺したところで、何も変わらんというに」

「彼らはどうなります？やはり死罪ですか？」

「奴らは伯爵、子爵家の三男坊や四男坊たちだ。家を継ぐ可能性は極めて低く、将来は冒険者になるか、商売でも起こすか・・・さもなくば、兄たちからいくばくかの金をもらいながら生きていくしかない者たちだ。奴らの家が救いの手を差し伸べるとは思われん。まあ、悪くて死罪、良くて流刑が妥当だろうな」

「でしょうね」

「その前に、奴らの首魁の名を吐かせねばならん。あとは、奴らの計画がどこまでのものを考えておるのか、それも吐かせねばならん」

「俺が聞いた話では、ヤツらだけの行動みたいだったですよ？」

「いや、貴殿への襲撃の内容を聞いたが、あれはかなり訓練されたものだ。おそらく首魁がいるのであろう。そして、壮大な謀反が計画されているような気がするのだ」

「吐きますかね？」

「・・・何としても吐かせねばならん」

「折角ですので閣下、俺も一度その者たちに会わせてもらうことはできますか？俺も聞きたいことがありますんで」

「・・・よかろう。付いてこられよ」

宰相閣下は屋敷の地下に降りる階段をゆっくりと歩いていく。地下までの距離が結構長い。そして、階段を下り、しばらく廊下を歩く

と突き当りに扉が見えた。

中に入ると、俺を襲った１０人がちょうど尋問を受けていた。全員縛られており、顔のいたるところに青あざを作っている。かなり激しい拷問が行われたようだ。

「どうだ？」

「いえ、まったく口を割ろうとはしません。自分たちだけの計画、との一点張りです」

「どんな手段を使ってでも吐かせろ。最悪の場合、殺してしまっても構わん」

「ちょっと待ってください」

俺は捕らわれている奴らのうちの一人の下に歩いていく。俺の屋敷で尋問したヤツとは違うが、こいつだけなぜか一瞬俺と目が合ったのだ。俺はコイツの過去を覗く。

「・・・クルムファル？」

男の体がピクリ動く。

「どんなヤツなんだ？」

「し、知らん。クルムファル様など、俺は知らん！」

「知らない人間に、様は付けないよね？」

「クルムファル・・・リコレット様の家庭教師だ。なるほど、お前たちの家庭教師でもあったな。そうか、黒幕はクルムファル伯爵か！」

宰相閣下の目が爛々と輝きだす。

「リノス殿、大手柄だ！これで帝国に跋扈する悪どもを一掃できる！」

「それはよかった・・・。リコレット様は関係なさそうですね？」

「いや、そうもいくまい」

うん？関係ないんじゃないのか？

「リコレット様にも責は負っていただく。あのお方は、死罪だ」

第五十六話　兄妹喧嘩

「しかし、証拠がないでしょう？」

「いや、これから証拠を揃えていくのだ。首魁の名が分かれば、それはたやすい」

そう言うと宰相閣下は足早に地下室を後にした。扉が閉まる際、後ろから

「クルムファル様は関係ない！関係な・・・ぐふっ！」

という声が聞こえたが、聞こえないふりをしておいた。

宰相閣下の館を出ると既に夜が白み始めていた。宰相閣下は一睡もすることなく再び宮城（きゅうじょう）に戻っていった。俺は店に帰り、そこから屋敷に転移する。中に入ると、ペーリスもメイリアスも起きて待っていた。イリモやジェネハも起きているという。俺は皆に休むよう伝え、風呂にも入らずそのままベッドに倒れ込み、そのまま眠りに落ちた。

目覚めたのは夕方だった。ちょっと早い夕食を取りながら、宰相家であったことを報告する。皆、特に心配してないみたいだ。俺であれば、多少の困難は何とかするだろうと考えているようだ。

「それにしても、リコレット皇女まで死罪っていうのは、ちょっと乱暴だよなー」

「仕方ないでありますー。皇女派を叩きつぶす千載一遇の機会でありますからなー。後々の権力闘争を起こさぬためにも、容赦ない粛清をされるでありましょう」

ふーん、そんなもんかと思いつつ、俺は一日ぶりに入る風呂を堪能し、その日は早めにベッドに入った。

明け方近くに目を覚ます。マップに反応があったからだ。マークは黄色。俺に対して警戒心を持ちながら屋敷に近づいてくる。人数は三人。取りあえずベッドから出て、服を着替える。早く寝たので睡眠は十分だ。

一階に降りると同時に、玄関のドアがノックされる。

「セオーノさん、久しぶりですね。一体何の御用でしょうか？」

「夜分に失礼する！帝国騎士団のセオーノです！リノス殿はご在宅か！お取次ぎ願いたい！」

「大変すまないが、我らと同行の上、宮城まで来ていただけないだろうか」

「宮城ですか？」

まさか、宮城に呼び出されるとは思いもよらなかった。セオーノの顔をじっと見る。疲れが色濃く出ている。俺はダイニングで寝ているゴンに声をかけ、イリモに乗ってセオーノの馬を追いかけた。

空が白み始めたころ、宮城の門に着く。中に入ると、今まで入ったことのないエリアに案内される。廊下は気味が悪いほど静まり返っ

ている。そして、大きな扉のある部屋に案内された。

中に入ると、宰相閣下とヴァイラス殿下ともう一人の男がいた。針金のように細く、目が泳ぎ、ブツブツと何やら呟いている。豪華な衣装を纏っているので、この人も皇族の一人だろうか。

「おお、リノス殿、待ちかねた。ささ、こちらへ」

宰相閣下の手招きで、俺は部屋に入る。

「宮城（きゅうじょう）に呼ばれたので何事かと思いましたが、宰相閣下でしたか」

「いや、急を要することがあってな。貴殿にはご苦労ではあるが、一つ頼まれてもらいたい」

「私で出来ることであれば、何なりと」

「ここにおわす、ヒート殿下、いや、間もなく即位されるので、ヒート陛下にそなたの結界を張ってほしいのだ」

この針金のような男が次の帝国皇帝？俺は驚きを隠しえない。

「兄上、先ほど話しましたリノス殿です。この者の結界は非常に丈夫です。グレモント宰相もこの結界で、どれほど命が助かったのかわかりません。兄上も早く！」

「なぜリコレットが余を弑するのじゃおかしいではないか常日頃からリコレットは余を助けると言い続けてきたではないかあれは嘘かいやそんな訳はないいやしかし宰相の言う通り誰かに謀られているのかもしれぬしかし父上は余の前でリコレットに余を助けよとお命

じになられておるそのリコレットに限って・・・」

ブツブツと一人で自問自答しているヒート陛下。俺は取りあえず、結界を張っておく。暗殺の類はこれで十分防げるだろう。

「いや、リノス殿、助かった」

「リコレット皇女の一派が、弓を引いたのですか？」

「リコレット様は今、部屋に軟禁している。問題はリコレット様を担ぎ出そうとする一派の動きだ。昨日、クルムファルを捕らえようと館に向かったところ、館はもぬけの殻であった。おそらく自領に逃げたのだ。しかし、クルムファル夫人の教えを受けた者たちを捕らえ詰問したところ、何とヒート陛下を暗殺する計画まであったのだ」

それで俺が呼ばれたと。

「クルムファル夫婦については現在、追っ手を向かわせている。捕らえられるのもそう遠くはあるまい。しかし、この計画に加担している者がどのような騒ぎを起こすかわからん。そのために、陛下の安全を確保せねばならなかったのだ」

「リコレットを呼べ！余が直々に話を聞く！」

ブツブツと独り言を言っていたヒート殿下が、突然声を張り上げる。ビックリするじゃねぇか。

「なりません陛下」

「何故じゃ？この結界師が余に結界を張ったのであろう？リコレットに余が弑される心配はなくなっているではないか。余が直々に聞いても、問題あるまい！」

「兄上、姉上と会われるのは私も反対です。姉上のあのご気性。激高すると何を言われるのか分かったものではありません。場合によっては兄上のお体に障ります。ですからなにとぞここは」

「父上は余に、人の話を聞きながら国を動かせとお命じになられた。それに余は、何故に妹に命を狙われるのかを聞いておきたい。この耳で」

「しかし・・・」

「この結界師がおれば、余の命は守られるのであろう？この結界師がここにおれば問題ないであろう？」

この陛下はかなり精神状態が不安定だ。このまま押し切ると逆効果になりそうだ。

宰相閣下はヴァイラス殿下に耳打ちをする。殿下も渋々ながら同意されたようだ。宰相閣下が部下に指示を出す。

「リノス殿、一つ約束してもらいたい。ここでの話は口外しないでいただきたい」

「いや、この部屋を出ていきますよ。あとは皆さんでおやりになればよいかと思います」

「そなたはここに居よ！この部屋から去ることは許さん！」

「いや、陛下に施しました結界は、私がここに居なくても問題なく稼働します」

「ならんと言うたらならん！もし、そなたの結界が破られるようなことがあれば、再び結界を張らねばなるまい！何？破られる心配はない？何故じゃ？絶対か？それは絶対か？それみよ、即答できんではないか！ここに居よ！余を一人にするでない！！」

あまりの剣幕に取り付く島もない。これだけ情緒不安定で本当に皇帝が務まるのか、逆に不安になる。

しばらくすると、兵士に囲まれてリコレット皇女が連れられてきた。彼女は部屋に入るなり俺を見つけて

「また貴方ですか？何故貴方がここにいるのですか！？」

「その者は余の結界を張っている者じゃ。余がここにいることを許している」

「私は兄上を弑い奉る気は毛頭ございません」

「では、何故クルムファルが帝国に、余に背く！しかも父上が崩御あそばされた直後にだ！」

「それは・・・私も存じませんでした」

リコレット皇女の過去を覗いてみたが、それは本当のようだ。

「まあ、そなたはそう言うだろうな！しかし、クルムファルは一体

何をしようとしていたのだ！何が不満なのだ！」

吐き捨てるようにヒート陛下は喚く。

「おそらく、帝国の体制に不満があったのではないでしょうか。帝国の全ての役職が、能力に関係なく貴族の手によって独占されています。一般の臣民にも優秀な人材が沢山おります。その者たちを帝国は生かし切れておりません」

「しかし姉上、帝国は大学を作り、どのような身分の者にも学ぶべき機会を与え、優秀な者は官吏に取り立てているではありませんか？」

「では聞きますがヴァイラス、帝国の宰相、将軍、財務卿、農務卿・・・その他主だった官吏の役職に、帝国の臣民はどのくらい登用されているのですか？」

「それは・・・」

ヴァイラス殿下が口ごもる。

「皆無です。皆無なのです。官吏として小間使いにはなれても、主だった仕事はできないのです。これからの帝国は、貴族も平民も、男も女も、能力に応じた仕事を与えられるべきなのです。一握りの貴族が国を牛耳るのは、間違っています」

「姉上は、帝国の体制そのものを変えよ、そうおっしゃるのですか？」

「リコレット！それは余が無能であるとの当てつけか？皇帝と言え

ども、優秀な臣民の中から選べと、そう申すのか？」

「いえ、そこまでは・・・」

「言うな！余は生まれたころから皇帝となるべく日々精進してきた。決して楽しい日々ではなかった。決してな！リコレットもヴァイラスも、そうやって日々精進を重ねてきたのではないのか！余は他の主要な職務に就いている貴族たちとて、決して楽しい日々を暮らしてきたのではないと信じる。臣民たちにも苦労はあろう。しかし、我々皇族も貴族たちも、臣民が苦しむ以上の苦しみを味わっている。臣民たちは、努力すれば、金を稼げば自由になれるのであろう？我々は努力しても自由は手に入らん。生涯不自由さの中で生きねばならんのだ。それを支えている物は何だ！帝国のため、帝国臣民のためという思いではないのか！」

ヒート陛下は肩で息をしながら、力なくその体を椅子に預けている。誰も口を開こうとはしない。そんな中、兵士の一人が足早に入出し、宰相閣下に何やら耳打ちをする。

「先ほど、クルムファル領付近で、クルムファル夫婦を捕らえようとしたところ、抵抗され戦闘になりました。帝国軍にも被害が出ましたが、従者は全員斬り捨てました。クルムファル夫婦につきましては、二人とも自害したそうであります」

沈痛な面持ちで宰相閣下はヒート陛下に報告する。

「クルムファルに加担した者どもを捕らえよ。リコレットについては余が追って沙汰を下す。リコレット、そなたは部屋から一歩でも出ることは許さん！連れていけ！」

ヒート陛下が最後の力を振り絞るようにして、大声で外の兵士に命じる。連行されるリコレット皇女を見ると、その目に大粒の涙を溜めていた。

第五十七話　弱虫皇帝の覚醒

「リコレットの処断だが・・・」

皇女の退室を見届けたヒート陛下が力なく呟く。

「やはり、毒杯をいただくか、さもなくば粛々と自決いただくのがよろしいかと」

「姉上にはお気の毒ですが、さすがに処刑というのは皇族としてはいただけません。やはりグレモント宰相の言う通り、毒杯か自決が妥当かと思います」

ヒート陛下は小刻みに手を動かしながら目を閉じてじっと考えている。

「余は・・・余は・・・リコレットの命を奪いたくはない」

「そうはいきませんでしょう、兄上。姉上は兄上に謀反を起こしたのです。反逆者を誅せずにこのままおけば、帝国として示しがつきません」

「父上は兄弟手を取って帝国を導けと仰った。父上の崩御から時を経ずして兄弟の間で血を流しては、父上に申し訳がない。そもそも反逆を起こしたのはリコレット本人ではあるまい？」

「そうは参りません、陛下。リコレット様の家臣、しかも家庭教師という立場の家が反逆を企てたのです。その責は免れません」

「そうです。姉上の考え方は、帝国の体制そのものを否定するものです。そのような御方をこのままおけば、後々の禍根となります」

「確かにそれも一理あるがしかしリコレットをここで処断するとリコレットを慕う者どもが反乱をおこしはしないかそうなれば帝国に内乱が起こるそうなれば帝国の力は半減するしかしリコレットをこのまま捨ておくわけにもいかぬさりとて父上の遺言を無視しては余の・・・」

また陛下が一人でブツブツと言い始めた。

「・・・しばらく考える。皆、下がれ」

「まことに恐れ多きことでございますが、何卒お早めにご決断を願います」

宰相閣下が恭しく一礼をして部屋を後にする。それに続いてヴァイラス殿下も部屋を出ていこうとする。俺もその後ろに従う。

「待て！結界師は余の傍を離れることは許さん！余の傍に居よ！」

まじかよー。こんなに精神が不安定な人と一緒にいるのはちょっと勘弁願いたい。困った俺は、宰相閣下とヴァイラス殿下に目で助けを求める。

「畏まりました陛下。しかし、その結界師殿は宮城結界師ではございません。従ってその者を陛下のご命令とはいえ、無為に拘束することはできません。従いまして・・・」

「わかっている！早く決断を下せ、そう言いたいのであろう！」

「左様でございます。何卒」

そう言って二人とも部屋を後にしてしまった。逃げやがったな・・・。

ヒート陛下は目を閉じて上を向いたまま微動だにしない。陛下の呼吸音だけが聞こえてくる。

「余を、情けない男だと思ったであろうな」

不意に陛下が力なく言葉を発する。

「いえ、そうは思いません。むしろ、とてもお優しいお方とお見受けしました」

「言うな。そなたがいなければと怯え、余に謀反を起こした者を処断できぬ臆病者であるよ」

「確かにそうかもしれません。しかし、その臆病さは人の上に立つ人間には必要な能力だと思います。色々な人から話を聞き、色んな事柄に考えを巡らせる。それは、陛下の才能だと思います」

「フン、わかったようなことを言いおるわ」

「ご無礼は承知の上で、申し上げております。陛下は誰よりもお優しい。それは陛下の周りの方々がそのようにお育てし、陛下自身にもその才能がおありになったのでしょう。大変に素晴らしいことと思います。私は陛下はそのままでよろしいかと思います。ただ、一

つ身に付けるとすれば、誠に僭越ながら、陛下には「強さ」を身に付けられるとさらによろしいかと思います」

「強さ？余にさらに武術に励めというか？」

「いえ、そうではございません。陛下はお優しいゆえに様々な事柄に思いを寄せることができます。一方で、様々な不安に苛まれることになります。そのためになかなか決断が下せず、後手後手に回ることもあろうかと思います。そうではなく、その不安に負けぬ心を身に付けられるとよろしいかと思います」

「余が、不安に苛まれているように見えるか？」

「はい。とてもお優しそうに見えますが、一方で頼り気がなく、いつもオドオドしておられるように見えます」

「結界師が・・・言ってくれるな」

「ご無礼は承知の上で申し上げております。人は強く心の中で「強くなろう」「負けてはならない」と思えば、強くなれるものです。僭越ながら私はもともと奴隷でございました。誰にも助けてもらえず、不安に苛まれておりました。幸い良い家に引き取られましたが、そこでも、いつ放り出されるのか不安でございました。私は毎日、心の中で「強くなろう」「不安に負けちゃいけない」と何度も呟いておりました。そうすると自然に、不安に苛まれなくなりました。これは私の師匠が申しておったことでございます。」

「強くなる、と心でつぶやく、か。そんな話は初めて聞いたぞ？」

「ええ、おそらく誰も教えてくれないと思います。私も、師匠以外

からこの話を聞いたことがございません」

ふむ、そうか、とヒート陛下はまた、何やら呟き始めた。よく耳を澄まして聞いてみると、

「負けてはならぬ、負けてはならぬ・・・」

と呪文のように繰り返し始めた。マジで大丈夫か、この人・・・。

約1時間ほどしただろうか。再び宰相閣下とヴァイラス殿下がやってきた。まだ陛下はブツブツと呪文を繰り返している。そんな陛下を見て二人は顔を見合わせながら、陛下の顔色を窺うように

「陛下、ご決断はなされましたでしょうか？」

「兄上、毒杯も、自決用の短剣もすでに準備が出来ております」

その言葉を聞いたヒート陛下の目がゆっくりと開かれる。陛下は俺たち三人をじっと見据え、ふうと息を吐くと落ち着いた声で、

「我が弟ヴァイラス、宰相グレモント、そして結界師殿、余は決めたぞ。これより、余の命を伝える」

俺たちは固唾を飲む。

「リコレットの命は奪わぬ。余はそう決めた」

「陛下！」

「兄上！」

二人が驚きの声を上げる。

「陛下！お気は確かでございますか！帝国に謀反を起こした者がその責を負わず、命をつなぐとは聞いたことがございません！」

「そうであっても、リコレットの命を奪うことは、ならぬ」

「兄上！そんなことをお認めになると今後、家臣は謀反を起こしたが、その当主はそれを知らなかったために無罪放免、ということがいくつも起こることになります。それでは将来の禍根は残るばかりです。やはり一罰百戒という言葉もございます。ここは・・・」

「ならぬ」

「グレモント宰相！兄上は何も分かっておられぬ！ここは我らで姉上に、毒杯か自決かを決めていただこう！」

「ははっ、そのように」

二人が部屋を出ていこうとする。

「そなたたち、待て」

落ち着き払った陛下の声がする。二人は立ち止まり、驚きの顔を陛下に顔を向けた。

「これは朕の命であるぞ」

「「・・・ははっ！」」

これまでとは全く異なる雰囲気を纏ったヒート陛下に圧倒される形で、二人は思わず頭を下げた。

後に「仁帝」と呼ばれ、長きヒーデータ帝国の歴史上で最も優れた治世を行った名君として名高い、第１５代皇帝、ヒーデータ・シュア・ヒート、覚醒の瞬間であった。

第五十八話　縁談

俺は今、貴族の礼服を着用し、よくわからない勲章をぶら下げ、きらびやかな格好をして皇帝陛下の前に立っている。しかも、周囲にはヴァイラス殿下をはじめ、宰相閣下以下、帝国貴族が正装して居並んでいる。喉がカラカラに乾く。背中に冷たいものがしたたり落ちているのが分かる。

事の発端は、数日前にさかのぼる。

「リノス殿に、頼みがあるのだ」

「またですか？今度は何ですか？」

ここは宮城の応接室。俺の前には宰相閣下とヴァイラス殿下が座っている。二人とも眉間にしわを寄せていて、何やら切迫した雰囲気だ。

ヒート陛下の裁定により、リコレット皇女の罪は問われないことになった。もっとも彼女は今でも部屋に軟禁されている。皇帝暗殺に組した者たちの取り調べが終わるまでは、やはり部屋に軟禁されることになったのだ。

「頼み、の前に一つ確認しておきたいことがある。貴殿には妻がお

ありかな？」

おありもなにも、今のところ独身だ。

「ならば話は早い。どうだ、結婚なさらんか？」

「はあ？一体誰と？」

「リコレット様だ」

「冗談でしょう・・・」

まさかの展開に頭が真っ白になる。よりにもよってリコレットと結婚しろなどと。どこでどうなるとそんな展開になるんだ？

「私は一介の平民です。それどころか、元・奴隷でもあります。身分的に釣り合わないでしょう」

「その件に関してだが、幸か不幸か、貴殿にはリコレット様を娶る資格がないわけではないのだ」

「どういうことです？」

「貴殿は、バーサーム家の養子に迎えられる予定であった。それを執行すればよい」

「後見人には僕が立つ。ヒーデータ・シュア・ヴァイラスの名において、その養子縁組が執り行われたことを認める」

「そんな勝手なことを・・・」

「いや、貴族とはこういうものだ。幸い、バーサーム公からの養子縁組については書簡がある。もっとも、儂への個人的な相談ではあるのだが、バーサーム家の封蝋が押されているし、手紙もバーサーム家の紋章入りのものだ。公式の書簡として世に出しても、問題ない」

「そもそもジュカ王家は滅びてしまって今はない。従って、ジュカ王家に遠慮することもない。君がバーサーム家を復活させるんだ。亡き侯爵殿も喜ばれると思うよ？」

「いや、逆に怒られそうな気がします」

「まあ、爵位のことは儂の方でうまく運ぶ。貴殿は身一つで宮城（きゅうじょう）に来てくれればよい。リコレット様との婚儀はその後だ」

「いや、私は受けるとも何とも言ってませんが・・・」

「これは、新帝陛下の御心でもあるのだ」

「ええっ？」

「僕たちが兄上、いや、陛下にこの話をしたら、随分お喜びになられてね。リコレットの嫁ぎ先にこれほどの適任はおらん、と言っておられたよ」

「そんな無茶な」

「それとも、君には心に決めた人でもいるのかな？」

「いや、別にそれは・・・」

「いないのであれば是非、承諾してほしいのだ。実を言うと、帝国貴族の中でリコレット様を嫁に迎える家はどこにもないのだ。さりとて、このまま宮城に留まられても示しがつかん。他国に嫁に出すにしても既に御年２３じゃ。どこぞの貴族や王族の後家であれば話はあろうが、帝国皇室の皇女が後家に行くでは・・・な」

「そこで、君に白羽の矢が立ったんだ。ジュカ王国は既にないも同然だけれど、バーサーム家と言えば、帝国にもその名を聞こえた名門家であり、ジュカ国の大宰相だ。帝国としても姉上にしても、これほどふさわしい相手はいないんだ」

「リコレット様がイヤなのであれば、屋敷の部屋に閉じ込めておけばよい。どうだ、今住んでいる館に、リコレット様が住まわれる屋敷を建てようではないか」

「このままだと姉上は、修道院に入って一生を送らなければならない。それは陛下が望まれていないんだ。君の傍なら、陛下の目も行き届くんだ」

「そんなことを言われても・・・」

「お話のところ恐れ入ります。新帝陛下が皆様をお呼びです」

三人そろって陛下の部屋に向かう。その間も二人から「是非！」と売り込みをかけられる。ここは陛下に直々にお断りの返事を入れよう。

「皆の者、大儀じゃ。まあ、座ってくれ」

陛下に促されて俺たちは席に着く。

「リノス殿、二人から話は聞いたかの？」

「はい、承りましたが、正直、気が進みません」

「まあ、妹のあの性格ではな。しかし余は、リコレットは皆の言うような強い女ではないと見ておる」

「どういうことですか？」

「あれは子供の頃から寂しがり屋での。なかなか一人では寝られぬ娘であった。一人にすると泣き出しての。おそらくあれは、一人になること、人に拒否されることを極端に嫌うのであろう。それが故に、人が離れていかぬように考え、振る舞っておるのだろう。余はそう見ておるのだ」

「それならばもっと人に寄り添うと思いますが・・・」

「皇女という身分がそれをさせなかったのであろうな。そのために自分の弱みを見せられなかった。リコレットがあれだけ能弁なのも、もともとの頭の良さもあろうが、おそらく、己の才覚を見せることで、人が離れていかぬようにしておるのだろう」

「そんなものでしょうか」

「余にも言いおったあの、突拍子もない考え方は帝国内では誰も支持しておらん。しかし、貴殿はその考えを認めたというではないか。それはリコレットに取り入るために言うたのではあるまい？」

「そうですね。ある意味では正しいと思います。ただ、今の時代にはそぐわないと思いますが」

「あれはそういう意味では頭が良すぎる。あれではなかなか男は惚れぬわ。しかし貴殿は、その妹の考えを理解し、共感をしてくれた。貴殿ならばリコレットに寄り添えよう。余がこの二人の話に賛同したのは、そういう考えもあってのことじゃ」

何だかよく見ている皇帝だ。この皇帝はもしかしたら、人の見る目があるのかもしれない。

「無理を言っておるのは承知だ。しかしそれでも余は、リコレットを貴殿に嫁がせたいと思うのじゃ。一度考えてみてくれんか？」

「ハァ・・・。しかし、リコレット様が嫌がるのでは？」

「なるほどの。では、まずは、リコレットと話をしてみるがよい。リコレットと貴殿がどうしてもイヤというのであれば、その時は余も別の方策を考えようぞ」

否応なしに、俺はリコレット皇女の部屋に案内される。

部屋に入ると、薄暗かった。昼間なのにカーテンを閉め、敢えて薄暗くしているのだろう。

「貴方も大変ですわね」

「ええ、大変です」

「私との縁談を命じられたのでしょう？お断りになって結構ですのよ？」

「リコレット様はどう思われているのでしょう？」

「どうも何も、私は逃亡はおろか死ぬことすらできません。私は自由を奪われた籠の鳥です。命じられるままにするしかありませんわ」

「そうですね。今の貴女は籠の鳥でしょう。これからのことが見えないのは、不安だろうと思います。俺もそうでしたから。奴隷になった時、自分の自由が奪われたと思ったとき、本当に不安になりました。リコレット様の気持ちは、わかるつもりです」

「・・・」

リコレットは俯いたまま何も答えない。俺はさらに続ける。

「確かに今は籠の鳥ですが、貴方には選択権がありますよ？俺との縁談はさておき、貴方には生きることと死ぬことが選べます。舌をかみ切れば死ねますよ？カーテンで首をくくれば死ねますよ？逆に修道院ですか？それでも生きられますよ？貴女には選択権があるのですよ」

リコレットは真っすぐ俺を見ている。

「俺のご主人様やそのご家族は、生きたくても生きられませんでした。でも、貴方は違う。生きたければ生きられるのです。死ねば全てが終わります。しかし、生きていれば、どんな形でも生きていれば、何かが起こります。俺は奴隷でしたが、生きていてよかったと思います。俺が奴隷になった時に想像した未来とは全く違いますか

ら。貴女も、生きてみてはいかがですか？誰にも理解されなかったかもしれませんが、貴方の考え方は、間違ってないと思います。ただ、時代が貴女に追いついていないだけで。誰かの助けになるという考え方は正しいと思います。その考え方ができれば、どんな世界でも生きていけるのではないでしょうか。そして、人は、貴女を助けてくれるのではないでしょうか。俺が言いたいのはそれだけです」

俺は一気に言い切って、席を立つ。

「失礼も顧みず、失礼を致しました。それでは」

足早に俺はリコレット皇女の部屋を後にした。そして、その足で陛下の部屋に向かう。部屋には陛下の他に先ほどの二人の姿もまだあった。

「リコレット様と話をしてきました」

「で、姉上は何と？」

「嫌なら断ってくれと。ですので、俺は自分の考えを申し上げてそのまま部屋を出ました。おそらく、リコレット様はこの縁談を受けないでしょう。陛下には、別の方策を考えられた方が、よろしいかと思います」

苦虫をかみつぶしたような顔をする宰相閣下とヴァイラス王子。陛下は薄笑いを浮かべながら俺を見ている。しばらくすると、侍従の一人が入ってきた。

「陛下、皇女様が・・・」

「かまわん。申せ。ああ、余に対して陛下は無用だ。まだ戴冠式を済ませておらぬからな」

「で、では、申し上げます。あの・・・」

「どうしたのだ？」

「リ、リコレット皇女様におかれましては、リノス殿との縁談を受ける、とのご伝言でございます」

・・・何でそうなるの？？

第五十九話　茶番劇

「えー」
「ええっ！？」
「ほうー」
「ええー」
「何とまあ」

屋敷に帰ってすぐに報告をした。リコレット皇女との結婚はどうあっても断りきれず、腹をくくるしかないと伝えたのだ。ペーリス、メイリアス、ジェネハ、イリモ、ゴン、それぞれ反応が違っているのが、他人ごとではあるが、ちょっと面白い。

「まずはリコレット皇女にこの館の秘密を、どこまで教えるかでありますなー」

「うーん、基本的にペーリスとイリモ、ジェネハは人間に見えるようにしてあるから、黙っているという選択もありだけどな」

「まあ、リコレット様の館を建てる時には、職人も来るでありましょうし、結界はしばらく解除しないのが良いでありましょうなー」

「様子を見て、それとなく話をしてみるよ。拒否されそうなら、その時は考えるよ」

「そしてまた明日、宮城（きゅうじょう）に行かねばならないとは、忙しいでありますなー」

「明日は俺の襲爵を認める宴があるのだそうだ。そこで、俺と皇女の結婚発表だとさ」

「じゃあ、明日はお昼と夕食はいらないですね？」

「そうだな。本当はペーリスの食事の方が美味しいんだけどねー。ああ、おそらく夜も遅くなるだろうし、戸締りをして寝ておいてくれ。メイリアスも寝ておいてくれよ」

「畏まりました。ご主人様・・・」

メイリアスは何だか悲しそうだ。ペーリスはなるようになると思っているのか、割と普段通りだ。ちなみに、ジェネハは逆に祝福モード、イリモは皇族関係者には良い印象を持っていないので、何とも言えない反応だ。

次の日の朝、ペーリスの朝食を食べた後、皆に送り出されて宮城（きゅうじょう）に向かう。到着するとすぐに別室に通されて、着替えをさせられる。帝国風の礼服に勲章を佩いていく。これが実に曲者で、何処に、何を、どの順番で付けていくのかが決まっている。それをしながら、簡単な打ち合わせ。予想以上の時間を取られてしまい、お陰で昼飯を食い損ねた。

準備が出来るとすぐさま部屋の外に連れ出され、迷路のような宮城（きゅうじょう）内を歩かされる。そして、兵士が警護する扉の前まで案内されると、俺を待っていたかのように扉が開かれる。そこには着飾った多くの紳士淑女が居並んでいた。

俺は案内役に先導されながら、その中を進む。そして、玉座の前に立たされると、これも待っていたかのように、ヒート殿下、ヴァイ

ラス殿下、そして宰相閣下を筆頭とした閣僚が姿を現した。皇帝陛下は崩御されているため、さすがに玉座は空席のままだ。

「バーサーム・ダーケ・リノス殿、ようこそ参られた」

宰相閣下が声を上げる。

「ははっ」

俺は軽く頭を下げる。

「この度は誠にお気の毒であった。貴殿がバーサーム家の養子となり、ゆくゆくは侯爵家を襲爵する身分であったにもかかわらず、ジュカ王国が崩壊するとは、悔やみの言葉もない。されど、長き旅を経て無事に帝国にたどり着き、あまつさえ、ジュカ王国にもたらされた災厄をつぶさに伝えた貴殿の功績は、我らの心を大きく打った。従って、バーサーム公がかねてから表明しておられた、候亡き後の貴殿の襲爵は、陛下の深い思し召しをもって、貴殿がバーサーム家の侯爵を襲爵することとする」

「ハハッ、ありがたきしあわせ」

「この後は、帝国内においてゆるりと過ごされよ」

「さて、余からバーサーム候に一つ、願いの儀がある。侯爵におかれては、我が妹リコレットを嫁がせたいと思うが、如何か」

周囲がざわつく。喉がカラカラに乾く。背中に冷たいものがしたたり落ちているのが分かる。俺は意を決して

「ありがたき思し召しでございます。謹んでお受けいたします」

おおーっと周囲の貴族から歓声が上がる。

「よくぞ申してくれた。我が帝国とジュカ王国は、長きにわたって交戦し、現在は停戦状態にある。先だっての大災害以来、王国内は混乱を極めて居るが、ジュカ王国との和睦は帝国の悲願とするところであった。この度、ジュカ王国家の中でも両輪と称される最も権威ある家に我が妹が嫁ぎ、誼を通じることができたのは、誠にめでたいことである。侯爵殿、病中の陛下に成り代わり、このヒーデータ・シュア・ヒート、心から礼を言うぞよ」

「新・バーサーム侯爵の帝国滞在に当たっては、このヒーデータ・シュア・ヴァイラスが後見となります。侯爵殿、何か不都合があれば、何なりと」

「ありがたきしあわせにございます」

「幸いここには、帝国の主な者たちが集まっている。皆で祝福をしようぞ！リコレットを呼べ！」

しばらくすると、美しく着飾ったリコレット皇女が入室してくる。純白のドレスを纏い、息をのむような美しさだ。

「リコレットでございます。以後末永く、よろしくお願い申し上げます」

見事な所作で俺に挨拶をする。さすが、第一皇女というのはダテではない。そこに宰相閣下が口を開く。

「お二人の婚儀を祝い、陛下よりバーサーム公には、帝国名誉侯爵の爵位を授けるとの仰せである」

「ははっ、ありがたきしあわせにございます」

「皆の者、余からもこの二人のこと、よしなに頼むぞ！」

そこにいた全員が首を垂れる。そして歓談の宴が始まるが、俺とリコレットはそのまま二人並んでその場を後にした。

「全く何なんだ？あの茶番劇は。冷や汗が止まりませんでしたよ」

「仕方ありませんわ。これでも私は第一皇女。その結婚なのですから、貴族たちへのお目見えは避けて通れませんわ」

「面倒くさいなー」

「貴方様も名誉侯爵とはいえ、帝国貴族の一員となったのですから、これからますますこうした行事は多くなりますわ」

「・・・何か失敗したかな？」

「それは、私との結婚という意味でしょうか？」

「いや、そうではありません。今まで割と気ままに生きて来られたから、これからはそうした自由は利かなくなるのかなと思いましてね」

「皇帝陛下主催の行事にだけ顔を出せばよいのです。そのような機会はそう多くはありません。貴族になったとはいえ、別に領地を持っているわけでもなく、ましてや私の伴侶ですから、あまり他の貴族からの招待は少ないかと思いますわよ？」

「そう願いたいですね」

「それに・・・お父上はみまかられました。この一年間は皇族は喪に服するので、皇帝陛下主催の行事はほぼ、ありませんわ。おそらく一年後の、兄上の戴冠式までは」

「それにしても、よく俺との結婚を承諾されましたね。断わられるものとばかり思っていました」

「貴方が私にそう決意させたのではありませんか」

「俺が？」

「生きていればいいことがある、そう申されたではありませんか。ならば生きようと思ったのです。生きていて面白いことが起こりそうな選択肢を考えれば、自ずと答えは出ますわ」

「元・奴隷の俺ですよ？」

「クルムファル先生は・・・。お亡くなりになってしまわれましたが、先生の教えは間違っていないと思います。人は人によってその身分を決められるべきではありません。人の自由な意志によって、その身分を手に入れるべきなのです。私は貴方が奴隷であった、という事柄は、貴方を拒否する材料にはなりませんわ。自分の意志で奴隷になったのではないのでしょう？」

「それはそうですが・・・」

「それに、クルムファル先生と私の考え方に即座に賛同したのは、貴方くらいのものです。それに、時代が私に追いついてない、などと仰る方は、面白いと思ったのです」

「そんなもんですかね？」

「むしろ、貴方様が大変ですわよ？これまでのことは全ての貴族が知っています。ただでさえ、皇帝陛下の政治に意見し、邪魔をし、あまつさえ、家臣が陛下に反逆を起こした、ハネっ返りの、行き遅れの姫を娶るのです。貴族たちからは好奇の目で見られるでしょう。でもそれは、貴方様が私との結婚を承諾されたのです。それは、覚悟なさってくださいませ」

「人から好奇の目で見られることは慣れていますし、ハネっ返りの姫君のお守りは、むしろ得意ですよ」

「・・・フフフ、頼もしいのですね。本当に私より年若い方なのかしら？・・・ふつつかものですが、これからもよろしくお願い申しますわ、旦那様」

「リノス、でいいですよ。リコレット様」

「貴方様、リノスは私の夫となる人です。リコレットとお呼びください」

「じゃあ、よろしくね、リコレット」

「それにしても、兄上たちとグレモント宰相の手腕は見事でございましたね。あんな茶番劇を、わずか数日で作り上げるのですから」

「全くだ。俺たちはこの会話が茶番劇にならないように、気を付けないといけないな」

ウフフ、ハハハと俺たちは窓に映る昼下がりの宮城（きゅうじょう）の庭を見ながら、笑いあったのだった。

第六十話　結婚と安住の地

俺とリコレットの結婚発表がなされた後、しばらくして先帝崩御の発表がなされた。皇族と貴族はその喪に一年間服することになり、華美な催しは差し控えられた。表向きは。

リコレットとの結婚は発表されたものの、実際はすぐに同居とはならなかった。

俺の屋敷に嫁ぐに際して、リコレットの居住スペースを確保する必要があり、ヒート殿下の思し召しによって、我が家を増築することになったのだ。その完成まで約半年、その間はリコレットが折に触れて遊びに来た。

俺が店に出ている時は店にやってきて昼飯を一緒に食べたり、買い物に出るなどした。当然その時はメイリアスが一緒であることが多く、二人の仲を心配したが、思いのほか馬が合うようだ。下手をすると俺をそっちのけで二人で笑い合っていたりする。

店が休みの時は、俺の屋敷に遊びに来る。ここではペーリスとの仲が心配されたが、これも杞憂に終わり、彼女は他の住人同様、一瞬でペーリスの料理に虜となった。その後、俺とペーリスから料理を学ぶようになり、この半年でかなりの腕前になってきた。天ぷらなんかは玄人はだしに作れる。

俺はというと、店はもちろん継続している。まだまだ冒険者や軍人、商人たちに結界の需要は多い。俺の顔は知られても問題ないと思っているが、ゴンのアドバイスもあり、店には俺が別の人物に見える

ように結界を張り、ついでにリコレットにも俺の傍にいる時は別人に見えるように結界を張っている。

そして、リコレットが家に通うようになって二か月程経った時、俺はリコレットに我が家の秘密を打ち明けた。

取り乱したり、激高される恐れもなくはなかったが、予想以上にリコレットは落ち着いていた。ゴンやペーリスに対しても、これまでと変わらぬ付き合いをしていきたいと言ってくれたし、ジェネハに至っては、きちんと挨拶をして、これからのことをお願いしたのだ。意外だったのは、イリモの姿を見せた時に、思わず泣きだしたことだ。

イリモがバカ皇子に虐待に近い待遇を受けていたことは知っていたが、それはリコレットの知るところでもあったらしい。彼女自身は何度も止めに入ったものの聞く耳を持たず、あまつさえ、彼女に対してバカ皇子は剣を向けたこともあるのだという。リコレットの帝都での評判の悪さは、ある意味あのセアリアス皇子から流されたものも多いのだという。

彼女は多くを語らなかったが、宮城内（きゅうじょう）での生活はかなり息が詰まるもののようだ。これまで自分に仕えていてくれた女官、近習はすべて排除され、全く新しい人々に入れ替わった。当然彼らはリコレットの監視である。それが嫌で毎日、宮城（きゅうじょう）を抜け出しては俺のところに通っていたわけである。無論、近習たちは俺も見張っていたが、特にやましいこともないので放っておいた。それどころか、彼らにおはぎなどいろいろな差し入れをやったら、逆に宮城内（きゅうじょうない）の動きを教えてくれるようになった。彼らも現金なものである。

そんなこんなで、館の増築は大雪の影響もあり、半年の予定が三か

月も延び、春ごろになってようやく完成をみた。

新館は、これまで俺たちが居住していた館の裏手に建てた。一階にメイリアスの工房と書庫を置き、二階には俺たちの居住スペースと風呂とトイレを設置した。この風呂の工事が思わぬ難航を極め、職人たちと何度も激論を交わした。その甲斐あって、総ヒノキの、素晴らしい風呂が出来上がった。これには俺も大満足である。

新館に荷物の運び込みも終わり、いよいよ新婦の引っ越しを待つばかりとなったある日、リコレットが俺たちに思いがけないことを言い出した。

「ぜひ、メイリアスもリノスの妻にしてあげてくださいませ」

メイリアスは顔を真っ赤にして俯いている。

「それはいいことなのでありますなー」

ゴン以下、館の住人たちは賛成のようだ。

「俺は別に構わないが・・・リコは本当にそれでいいのか？」

「メイリアスは心からリノスを慕っておりますわ。彼女の純粋な思いに私も心打たれたのです。ぜひ、お願いしますわ」

「リコがそんなことを言うのは、意外だな」

「メイリアスだからいいのです。他の女はやめてくださいませね」

「メイリアスはどうだい？俺と結婚してくれるかい？」

「・・・ハイ」

耳まで真っ赤にして小さく返事をするメイリアス。ヤバイ、可愛さが半端ない・・・。

「私は奴隷です。ですから、リコレット様が正妻で私は側室の立場で・・・」

そんなのだめよ！とリコとメイリアスの押し問答がしばらく続いたが、一応は名誉侯爵家ということもあり、リコが正妻という立場の方が対外的にも良いだろうとのゴンの勧めにより、リコレット・正妻、メイリアス・側室ということに決定した。もちろん俺は、二人を差別するつもりはなく、他の女と浮気をすることはなく、たぶんすることはなく、しないんじゃないかなと思いつつ、愛情を注いでいくつもりだ。それにしても、１７歳でいきなり二人のお嫁さんをもらってしまった。前世と比べると、出来すぎの人生であると思う。

喪中ということもあり、大々的な結婚式は出来なかったが、それでもヒート殿下、ヴァイラス殿下の二人が、大神官の前で俺たちの結婚の見届け人をやってくれた。さすがにこれにはリコは大感激で、式の最中はずっと泣いていた。もっとも式自体は、大神官の短い祈りと二人の結婚の意思の確認をしたくらいで、すぐに終わってしまったのだが。

「あー、メイリアスの結婚式をしてやってないなー」

「私はこれで十分です。犯罪奴隷にされて殺されなかっただけでも十分ですのに、大好きな人と結婚することが出来ました。これ以上を望んでは、バチが当たります」

俺は思わず、メイリアスを抱きしめた。

そんなこんなで、ようやくリコの荷物も運び込まれ、リコも館に落ち着き、俺たちの新生活はスタートした。

一緒に生活をしてみると、思いがけない発見が多くあった。

一番驚いたのが、リコとメイリアスが昼と夜とでは別人の顔を持っていたということだ。昼間は勝ち気で、歯に衣着せぬ物言いで、頭の回転の速さを存分に見せつけるリコが、俺と二人っきりになると、途端に大人しくなるのだ。どちらかというと受け身で、寂しがりやで、俺から離れようとしない。ハグとキスをしてやると、とてもうれしそうな顔をする。それでいて感度は抜群なので、俺は俺でかなり頑張ってしまう。一方のメイリアスは、昼間はつつましやかなのであるが、二人っきりになると、お互いがどうしたら一番よくなるのかを試行錯誤する。研究者の血がそうさせるのかどうかはわからないが、リコと比べると、かなり積極的だ。

嫁二人に関しては、全く不満はない。二人とも俺を癒してくれるし、お互いが認め合っているので、今のところ夫婦間の問題は皆無である。ただ最近、リコの寂しがりや度が増してしまい、俺とメイリアスが一緒にいる時に乱入されるのは、少々恥ずかしいのだが。両腕を使って腕枕をしながら寝ることが多くなっており、少々腕が疲れるのだが、贅沢な悩みではあるので、今のところ誰にも相談をしていない。

ゴン、ペーリス、イリモ、ジェネハ、そしてハーピーたち。みんな仲良く暮らしている。俺を含めて全員が、ようやく安息の地と時間を手に入れた気がしていた。

しかしそれから間もなく俺は、とんでもない事実を知ることになり、
そして新たな問題を抱えることになるのだった。

第六十一話　驚くことが、いっぱい

異変に気付いたのは、朝のことだった。

森に棲むハーピーが、いつものように卵をもってやってきた。普段はペーリスかゴンがそれを受け取るのだが、その日はたまたま庭にリコがいた。

「ピィーピピピピピー」

「あら、卵を持ってきてくれたのね？ありがとう」

「ピィーピピィーー」

「へぇ～今日初めて一人で運んできたの？偉いわね」

「・・・リコ、ハーピーと会話が出来ている？？」

「いえ、何となく言っていることがわかるのですわ」

この間まで、全く分からなかっただろうに。俺は慌てて鑑定スキルを発動させる。

ヒーデータ・シュア・リコレット（皇女・２３歳）ＬＶ３２
ＨＰ：６９
ＭＰ：１８８
水魔法　ＬＶ２
棒術　ＬＶ２

ＭＰ回復　ＬＶ３
教養　　ＬＶ４
行儀作法　ＬＶ４

教養スキルと行儀作法スキルが上がっている。そのうえ、レベルも一気に上がっている。これは一体何だ？

取りあえず、ゴン、イリモ、ジェネハ、ペーリスの鑑定を行ってみる。一部のスキルが上がっているものの、リコのような大幅な上昇は見られない。そして最後に、メイリアスを鑑定する。

メイリアス（奴隷賢者・１７歳）ＬＶ４７
ＨＰ：１４１
ＭＰ：３７５
錬金術　ＬＶ４
鍛冶師　ＬＶ４
薬師　　ＬＶ４
ＭＰ回復　ＬＶ３
教養　　ＬＶ４
行儀作法　ＬＶ１

自己韜晦

全体的にスキルが上がってますやん！ＬＶ３になってから２０年は修行を積まなきゃならないものを、１年足らずでクリアしやがった。どうなってるんだ？

「おそらく、ご主人と夫婦の契りを結ぶと、スキルが上がるのでありましょうなー。おそらく、加護スキルの効果なのでありましょう」

すぐさま俺は、おひいさまの下に飛んだ。当然、いろいろな貢物を用意して。

「何じゃ知らんかったのか？加護スキル持ちと夫婦の契りを結べば、対象者のスキルは上がる。無論、加護スキル持ちのスキルが高い場合ではあるがの。そなたはスキル持ちゆえ、色々な効果が付与されるかもしれんな」

「と、いうことは、やればやるだけスキルが上がると？」

「いや、夫婦の契りで上げられるのは一度きりじゃろうな。加護持ちはそうした特性があるために、自身の身持ちには注意せねばならぬ。誰でも彼でもスキルを上げてしまえば、世が乱れることにもなるからの。妾が三年に一度、専属たちを呼び戻すのも、奴らの身持ちも見ておるのじゃよ」

まじかー。俺と関係を結ぶとスキルが上がるなんて・・・。世間に知れたらえらいことになりそうだ。

スキルが上がったおかげで、メイリアスの研究も進んできているらしい。どんどんアイデアが湧き出してくるらしい。おかげで彼女は空き時間を見つけては研究室にこもるようになった。

その忙しい合間を縫って、彼女はホーリーソードの鞘を完成させた。何と、剣を鞘に仕舞っておけば、自然と刃こぼれなどを修復し、常に剣を手入れされた状態にしてくれるという優れものだ。当然彼女を抱きしめたのは、言うまでもない。

教養レベルが上がったリコは、ペーリスとジェネハと話をする機会が多くなった。何を話しているのか、気になるところであったが、

驚きの結果を生み出していた。何と、醤油を作り上げたのだ。俺の作る豆腐に合う醤油である。当然、我が家の料理のレパートリーは激増した。当然リコも、抱きしめまくった。

そしていよいよ先帝の喪が明け、ヒート殿下の戴冠式が行われることになった。俺たちも親族の一人として列席を許され、またしても着慣れない礼服に身を包み、リコと共に出席をする運びとなった。

着飾ったリコは実に美しかった。何せ、すれ違う貴族たちが振り返るのだ。「あのお方は誰だ？」「リコレット様だ」「ええっ！？」という会話があちこちで聞こえ、その旦那たる俺はちょっと鼻が高かった。

皇女として長い間宮城（きゅうじょう）にいたリコであるが、自分の身の回りのことは驚くほどよくできた。てっきりお姫様育ちで、箸より重いものを持ったことはないのだろうと思っていたが、自分のドレスは見事に着付けることが出来るし、裁縫も得意だ。これは、亡き家庭教師のクルムファル夫人の影響で、何でも一人でできるように教育されたのだそうだ。彼女の自立心は、こういうところから養われたようだ。

華々しい戴冠式が終わると俺たちは、新皇帝陛下から呼び出された。

「まずは、大儀であったの」

「さすが、帝国の戴冠式ともなると、すばらしい豪華さですね」

「まあ、見栄も多分にあるのでな。致し方あるまいよ」

「そんなものですか？」

「それにしてもリコレットは変わったな。何やら以前の刺々しさがなくなった気がするの」

「結婚したから・・・でございましょうか」

「うむ。そうじゃろうな。そなたの結婚は間違っておらなかったようじゃな。余の慧眼に感謝せよ？」

「そうでございますわね」

二人して、笑い合う。しばらくすると、皇帝陛下が真面目な顔つきになり、

「さて、こうして呼び出したのは他でもない。リコレットの家来たちのことじゃ」

昨年の反乱騒動以来、リコの家臣とお付きの女官たちは遠ざけられている。その上、反乱に関わった者は言うに及ばず、関わる可能性があるとみなされたものは全員、牢に繋がれるか、自宅で軟禁生活を送っているのだ。

「まだ宰相には相談しておらぬが、昨年の反乱騒動に関わった者どもを余は、全員恩赦を与えようかと思うのじゃ」

「兄上・・・よろしいのでしょうか？」

「既に反乱を企てたクルムファル伯爵は誅されておる。それに加担した者どもも伯爵と共に斬られておる。これ以上血を流すことは余も望まぬし、また余の即位直後に血を流せば、後の聞こえも悪い。捕らわれている者たちは身分は低いが、有能な者たちが多いと聞く。

リコレットは帝国は有能な人材を活かしきれておらぬと申しておったのを思い出してな。その有能な者どもを斬るよりは役立てたいと思っておるのだ」

「しかし陛下、その方々は釈放されたところで、何か仕事はあるのですか？」

「そのことじゃよ。リノス殿には亡きクルムファル領を任せたいと思っておるのだ」

「それは・・・無理があるのでは？俺はジュカ王国の人間ですし」

「いや、表向きは我が弟、ヴァイラスに統治させることにする。リノス殿とリコレットは、恩赦を受けた者どもをクルムファル領に送りこみ、そこで活躍の場を与えて欲しいのだ。もともとあの領土は旨味が少ない。魔物の出る森もあるからの。まあ、海があるので、そこから採れる塩が旨味と言えば旨味であるがの」

「そのクルムファル領というのはどちらに」

「帝都の北東、カサーム湖を越えたところじゃ」

「私たちの館からは、森伝いに東に進めば、クルムファル領につきますわ」

「どのくらいの距離になる？」

「帝都からでしたら、馬で飛ばせば一日。私たちの館からでしたら、長くて二日、馬で飛ばせば一日半というところでしょうか？」

「うーん、俺は領主とかそういう面倒ごとはあまり好きじゃないんだけどな」

「リノス、お願い。今捕らわれている者たちは、幼いころから私と共にあった同志のようなものです。彼らを救ってあげてやってくださいませ」

「とりあえず、面倒ごとは宰相に任せておけばよい。今は皇室家の領地じゃ。好きにやるがよい。そこで成果が上がり、皇室に献上できるものが出来ればよし、できなければそれでもよし。ただし、民衆の心が離れたり、反乱を起こすようなことをしてもらっては困る。まあ、リノス殿に限ってそれはないだろうが」

「それはわかりませんが」

「いや、我が妹リコレットをそこまで手懐けておるのだ。民衆を手懐ける程度、リノス殿の手腕をもってすれば、たやすいことであるよ」

「そんなもんですかねー」

「まあ、恩赦を出すのはもう少し後のことになる。おそらく、夏ごろになるかの。それまでリノス殿はゆるりと考えてくれればよい」

やんわりと言ってきているが、一応皇帝陛下直々のお話なのである。これが宰相閣下に相談されるということは、すなわち命令として発せられるということになる。一応、名誉侯爵となっている俺は、その命令には逆らえない立場にあるのだ。

とりあえず、陛下の下を辞した俺たちは宰相閣下の部屋に伺い、こ

との顛末を述べた。宰相閣下は頭を抱えながら

「また儂の仕事が増えるのか・・・」

といって嘆いておられた。俺は断ってもいいのだが、そうなるとその仕事が丸ごと宰相閣下の下に飛んでくるため、それだけはやめてくれと半泣きで懇願された。

帝都内の高級ホテルで一泊した後、俺たちは屋敷に帰った。その道すがら、上空を翔るイリモの上を、何か黒い物体が通り過ぎた。マップには特に何も表示されていないため、敵ではなさそうだ。

俺は気付かなかったが、その黒い影は俺たちの姿を見ながら呟いていた。

「うふふ、やっと、やっと見つけたわ・・・」

赤く光る瞳が、上空の俺たちを捉えていた。

第六十二話　志望動機と自己ＰＲをお答えください？

屋敷に帰るとすぐに、皇帝陛下からの提案を皆に話した。

全員の表情は微妙だ。今までの生活が変わってしまうのではないかという不安がまず第一に胸に浮かぶらしい。俺だってできることなら、今のような生活を続けていきたい。しかし、リコの家臣を放っておくとただでさえ、肩身の狭い思いをして生きていかなければならない彼らのこと、いったい何をしでかすか分かったものではない。何より、リコが悲しむ。それは俺としても避けたい気持ちはある。

しかし、どんな領地であることすらわからない点から見ても、これ以上は議論のしようがない。ところが、ここで思わぬ者が一肌脱いでくれた。ジェネハである。

森伝いに行けばクルムファル領であるということを聞いて、ハーピーに領地を見に行かせたらどうかと提案してくれたのだ。しかも、そこにはジェネハも同行するという。

「ヒナたちの飛行訓練もせねばならない頃であった。ちょうどよい」

この提案をありがたく受け、ジェネハと選抜されたハーピーは、一週間の予定でクルムファル領を偵察に行くこととなった。

「本当にご迷惑をかけますわ。まさかジェネハが行ってくれるとは思いませんでした」

「ジェネハなら、全く問題ないと思います」

俺はリコとメイリアスの三人で風呂に入りながら、今後のことを話した。当初は一人ずつ入っていたのだが、リコの寂しがり屋が暴走してしまい、必ず俺と一緒に入るようになった。俺としても、メイリアスをのけ者にしているようで気が引けるので、リコとメイリアスの二人平等に一緒に風呂に入るようになったのだが、メイリアスと一緒の時もリコが入ってくるようになった。その後は、極力三人で風呂に入るようになった。

リコもメイリアスも割と平気のようだが、俺は実はかなり喜んでいる。美少女と美女、しかも巨乳と貧乳という二つの魅力を持った女性と一緒なのだ。眼福の極みである。

彼女たちは当然俺が洗う。リコの肌は驚くほどきめ細かいし、メイリアスも肌は割かしきれいだが、何といっても彼女の羊毛の手触りが最高なのである。俺の体は二人が隅々まで洗ってくれるので、実は俺はお風呂タイムが一日で一番楽しみな時間でもある。

三人で風呂に入りながら、ジェネハたちのことを考える。おそらく、森の中で彼女らが負けることはほぼないだろう。問題はクルムファル領において彼女らが発見された場合、討伐軍が組織される恐れがある。そのため、彼女らには人からは見えない結界を張ることにした。

朝、出発前にジェネハたちに結界を張ってやる。皆俺に感謝しつつ、ジェネハ以下１０羽のハーピーは旅立っていった。

その日の夕方近くの時間になって、俺のマップに反応があった。黄色で表示されているため、警戒しながら屋敷に向かっている。数は一人。どうやら人間らしいが、魔物が人間の姿に化けているらしい。

その人間もどきが、館の近くをウロウロしている。ハーピーを偵察にやろうかと考えている最中に、突然その人間もどきは進路を館に取り、真っすぐに向かってきた。取りあえず全員に来訪者があることを伝え、どうやら魔物が人化していることも伝えて、とりあえず警戒しておくようにとも伝える。

しばらくするとソイツは玄関にたどり着き、ごめんくださいも何も言わず、いきなり屋敷の扉を開け、屋敷を物色し始めた。まずは応接間に行き、そこを物色。玄関ホールに戻り、そこを物色。そして最後に、ダイニングに通じるドアを開け、ようやくその姿を現した。

姿を現したのは、１２～３歳くらいの女の子だった。

女の子は俺を見た瞬間、「黒髪・・・」と呟き、ニヤリとした笑みを浮かべた。

「あなたがリノスさんですね？」

「そうだが」

「貴方と一緒に暮らすために来ました」

「！！！！！！」

リコが軽い殺気を放つ。メイリアスも完全に目が据わっている。君たち、まずは落ち着こう。

「あのペガサスですか？早すぎますよー。途中で見失っちゃって、ここを探すのに苦労しました。でも、たどり着けて良かったです。ずっとここに来ようって決めてたから、見つからなかったらどうし

ようかと思っちゃいました」

エヘヘと笑う女の子。隣のゴンを見るが、彼もよく知らない人らしく、首をすくめている。俺たちがポカンとしていると少女は、背中に背負った荷物を床に置き、ふぅーと息を吐くと

「やっと来れたー。あれ?この方たちは?リノスさんの・・・何?」

リコ、メイリアス、ゴン、ペーリスの目が半目になる。俺の中で何かがはじける。

「それではまず、自己紹介を三分以内でお願いしてよろしいでしょうか?」

「え?ジコショウカイ?私、ずっとここに来ようと思ってたんですけど・・・」

「弊社の雇用を希望されておられるということですね?この度は誠にありがとうございます。申し遅れました、私、人事部長のリノスでございます。こちらは、弊社の総務担当のゴン部長、そして、秘書のリコレット、開発部長のメイリアス、企画部長のペーリス。このメンバーで本日の面接を実施いたします」

「め、めんせつ?」

「それでは、いくつかの質問をさせていただきます。内容によってはお答えになりにくいこともあろうかと存じます。その際は遠慮なく仰ってください。それでは、貴方の自己紹介を三分以内でお願いいたします」

「ジコ・・・自分の名前の紹介ですか?えっと、私、フェリスといいます。ジュカ山脈からおりてきて・・・街に出て・・・」

「ハイ、三分経過しました。ありがとうございます。続いて次の質問に移ります。弊社を志望された動機は何でしょうか?」

「シボウドウキ?・・・ここに来た理由ですか?あの・・・独り立ちして・・・お世話になるのが・・・ええと、聞いたら・・・あの、お世話になりたいなと・・・」

「なるほど、ありがとうございます。それでは、最後の質問です。あなたが弊社に採用された場合、貴方にとってのメリットと、弊社があなたを採用した時のメリットをお答えください」

「メリット?あの・・・とっても勉強になるかなーって。・・・お屋敷広いし・・・いいかなーと・・・」

「はいありがとうございます。面接の結果につきましては後日、改めて通知いたしますが、誠に恐れ入りますが、一週間を超えて連絡無き場合は、残念ながら今回はご縁がなかったと思っていただいて結構でございます。本日は、ご足労を頂戴しまして、ありがとうございました」

「あの・・・置いて・・・もらえないんですか・・・?」

「先ほど申しました通り、通知で返させていただきます。本日はこれでお引き取り下さいませ」

女の子は目を丸くして驚いている。何か言おうとするが言葉が出てこないのか、口をパクパクさせている。しばらくすると、目をぎゅ

っと閉じて

「お引き取りって・・・帰れってことですか・・・？そんな・・・グスっ、グスン・・・」

泣き出してしまった。

「・・・食事美味しいっていうし、優しい人ばっかりだって言ってたのに・・・。だから人化のスキル頑張ったのに・・・。人語も覚えたのに・・・ラースのバカぁ～！」

「「ラース？？？」」

思わず俺とゴンがハモってしまった。ラースってあの、ドラゴンの、「泣き虫ラース」か？

「私、ラースの姉です」

「「えええええええええええー！？」」

取りあえず彼女を落ち着けて、話を聞くことにした。

彼女はラースの姉、フェリス。雌のクルルカンだそうだ。クルルカンは脱皮をすると、赤い鱗に包まれる。脱皮を終えたクルルカンは、群れから離され、一人で修行の旅に出される。大抵は山や森に潜み、そこで狩などして暮らし、約５０年経てば、再びジュカ山脈の群れに戻ることを許されるのだという。彼女もひと月ほど前に脱皮が終わったのだそうだ。

「で、修行の旅の最初の拠点として俺のところに来た、というわけ

か」

「できればずっと置いてほしいなと思っているんですけど・・・。だって、食べ物も美味しいっていうし、リノスさんはかなり強いから一緒にいれば安全だし、そうしなさいってママが・・・」

「はあ？お前んとこの親、一体どうなってんだ？」

「攫われたラースを助けてくれて、それを群れまで届けてくれたことは、パパもママも本当に感謝しています。パパはリノス君は人間にしておくのは惜しいって言ってました。龍族として、受けた恩は必ず返さないといけない。そうでなかったら、人間にも劣ると・・・」

何気にひどい物言いでないかい？

「だから、ラースの恩を返す意味でも、頑張ってここに来たんです」

「てゆうかフェリス、だっけ？何かできることはあるのか？」

「・・・特に、ないです」

話をしているとイライラするので、俺は無言で鑑定スキルを発動させる。

フェリス（クルルカン・２１歳）　ＬＶ２２
ＨＰ：３２４
ＭＰ：６０４
風魔法　ＬＶ３
結界魔法　ＬＶ１

ＭＰ回復　ＬＶ３
気配探知　ＬＶ３
魔力探知　ＬＶ３
肉体強化　ＬＶ３
竜魔法　ＬＶ３
回避　ＬＶ３
教養　ＬＶ３
麻痺耐性　ＬＶ３
毒耐性　ＬＶ３
飛翔　ＬＶ３
人化　ＬＶ３

・・・スキルめっちゃ高いですやん。

フェリスはクルルカンの中でも平均的なスキルだという。１２～３歳でこのスキルなら、ちょっとやそっとでは倒されない。５０年と言えば、どれかのスキルがＬＶ５に到達する期間だ。おそらく、どれかの能力を神級まで高めて初めて群れに加わることが認められるのだろう。

「まあ、かなりスキルは高そうだな。ところで、人化を解除すると、何かの能力は上がるのか？」

「いえ、同じだと思います」

「一回人化を解除してみてくれる？」

ハイ、と元気良く返事をして、フェリスは淡々と自分の着ている服を脱ぎだした。俺が目をむいている隙に、彼女はさくっと全裸になった。そして、体が真っ赤な光に包まれたかと思うと、赤い小さめ

のクルルカンが姿を現した。特にスキルの変化はない。

「ありがとう。人化してくれ」

再び彼女は普通の少女の姿に戻った。その瞬間、彼女のお腹がグルルルル～と鳴る。

「もしかして、腹減ってる？」

コクコクと頷くフェリス。

「ちょうどいい、俺たちもこれからメシだ。お前も食っていけ。ここに置くかどうかは明日決める。取りあえず今日は泊まっていけ」

ホッとした表情をするフェリス。まずは服を着てもらう。服を着ながら彼女は俺に一つお願いがあると言い出す。

「わたし、寝る時はリノスさんの腕枕で寝たいです！」

「リ、リノスの腕枕は私だけのものですわ！絶対に許しません！！」

リコが激高している。これは、フェリスの採用は厳しいのかもしれない・・・。

第六十三話　条件付きで採用します

俺の腕枕はさておいて、まずはメシを食うことにした。

今日のメニューは、チャーハンと山菜の天ぷら、野菜と肉の炒め物、卵焼きだ。そして、デザートには俺の力作であるプリンを出した。

「おっ、美味しい！こんなに美味しいもの初めて食べましたー。ラースの言ってたことは本当だったわ！」

予想通り、フェリスはよく食った。この二日間ほとんど何も食べていなかったせいもあり、山盛りにもったチャーハンをあっという間に完食した。このペースで食われると全ての料理が完食されてしまうので、俺は追加でから揚げを作る羽目になった。

デザートも完食し、それでもまだ食いたそうな顔をしていたので、無限収納にあったおはぎを２０個出してやると、それをペロリと平らげて、やっと満足した。

メシのあと、彼女からラースのことも聞くことができた。泣き虫ぶりは相変わらずらしいが、かなり頑張っているらしい。率先して狩りにも出ているらしく、このままいけば優秀な戦士になりそうだとのこと。ラースの脱皮が終わり、旅に出るようなら一度、会いたいものだ。

フェリスは、ラースから俺たちのことをほぼ、毎日のように聞いていたらしい。ラースと一緒にいたのは一週間かそこらであるが、内容がかなり誇張されており、その上、フェリスの妄想と期待と都合

のいい解釈と相まって、それはそれは神のごとき人物として俺は認識されていたようだ。

夜は、ペーリスの部屋に一緒に泊めてもらうことにした。風呂を沸かしてやると、風呂という物を初めて見るらしく、目をキラキラさせていた。

「お風呂はすごく気持ちいいですよー。一緒に入りましょう！」

ペーリスがいいお姉さんぶりを発揮してくれているので、あとは彼女に任せることにする。

俺たちも離れに戻って、風呂に入る。

「フェリス、どうするかなー」

「ご主人様はもう、決めておいでになるのでは？」

「うーん、ラースのお姉さんだからなー。無下にすることもできないんだよなー」

「しかし、あれほどの食欲であれば、ペーリスさんとリコ様が大変だと思います」

「うーん。フェリスにも、料理を覚えさせるか？」

「それが最低限かもしれません」

風呂から上がると、ゴンが俺たちの部屋にやってきた。夜にゴンが訪ねてくるのは珍しいことだ。

「あのフェリスという龍娘、条件次第ではここにおいてもいいかもしれないでありますー」

「ああ、俺たちもさっき話してたんだ。アイツよく食うだろ？料理させようと思うんだよ。あと、自分で狩りもやらせてもいいかもしれないな」

「そんなことより、もっと大事なことがあるでありますー。彼女がいれば、もしかしたらジュカ山脈を無傷で通れるかもしれないでありますー」

「なるほど！」

俺がジュカ王国に帰らないのは、帰りたくても帰れない理由があった。ヒーデータ帝国からの距離が問題なのだ。ジュカ山脈をぐるりと迂回するルートを取っているため、帝都からジュカ王国までは約二ヶ月の行程になる。行って帰ってくるだけで四か月もロスすることになるのだ。約半年間も館を空けるのはさすがに憚られるし、宰相閣下もいい顔をしないだろう。しかし、ジュカ山脈を越えれば、わずか数日。イリモを使えば最短で二日あれば着くことができる。これは非常に大きいのだ。

早速明日の朝にその条件を出してみることにして、俺たちはベッドに入った。

しかし、さっきからリコの様子がおかしい。一言もしゃべらないのだ。そんな様子を察してか、メイは自分の部屋に入っていった。

「・・・リコ？」

「・・・」

「リコちゃーん？腕枕は、いいのかなー？」

「・・・」

さっきから俺に背中を向けたままで何も答えない。俺は腕を彼女の首の下に入れ、腕枕をしてやる。するとリコはガバッと俺に向き直り、

「どうしてあの龍娘を屋敷に置くのですの？」

「リコは反対なのかい？」

「なんだか許せませんわ。あんなふてぶてしい態度を取るなんて。それに招待もされていないのに、食べたいだけ食べて、リノスにも世話をかけていますわ」

「まだ子供なんだから仕方ないだろう」

「それに、どうして腕枕などと・・・」

「ああ、あの子の弟を山に返すときに、腕枕してやったんだよ」

「私の他にも腕枕をしたのでしょう？」

「雄の幼い龍だよ。そうしないとなかなか寝なかったんだ。女性にはリコとメイだけだよ？」

「あんな小娘を屋敷に・・・あっ」

俺は有無を言わさずリコを抱きしめ、唇を奪った。

「フッ、ハッ、ハッ、私は、私は・・・」

「わかっている。腕枕は、リコだけにする。それじゃダメかい？」

「それでしたら・・・いいですわ」

「ありがとう、リコ」

瞳を潤ませ、顔を真っ赤にしたリコは本当にキレイだった。俺は再びリコを抱きしめた。

朝になり、ダイニングに行くと既にフェリスが待っていた。ペーリスは朝食を手際よく作っており、それを見たリコが手伝いに向かう。メイはイリモの世話に出ているようだ。俺とゴンはフェリスの前に座る。するとフェリスは立ち上がり、

「昨日は、色々と失礼をしてすみませんでした。お役に立てることがあれば何でもしますので、こちらに置いてください、お願いします」

ペコリと頭を下げる。

「わかった。座っていいよ。ウチは「働かざるもの食うべからず」だ。よって、何もしない奴はウチにはいらない。フェリスをここに置くにあたっては、二つの条件を付けたい」

フェリスがゴクリと唾を飲み込む。

「一つ目の条件は、ここにいるにあたって、フェリスには、リコとペーリスの手伝いをしてほしい。要は料理を覚えてほしい。沢山食べたいのであれば、森で食材を狩ってくることもしていいかもしれん。森の狩りはハーピーたちに任せているので、そいつらと共同でやるのもいいだろう。それがまず一つ目。二つ目は、これは出来なければそれでいい。実は、ジュカ山脈を通過できるように計らってくれないだろうか。あそこはドラゴンの巣窟で、ヘタに近づくとドラゴンに襲われてしまう。フェリスの群れが管理する場所だけでも、無事に通してもらえるよう計らってもらえないだろうか。それが二つ目だ」

フェリスは俺の顔をじっと見て、コクリとうなずく。

「狩りは得意です。そのために修行してきましたから。それに、ジュカ山脈の通過も大丈夫だと思います。私が一緒に居れば、きっと皆も手を出さないと思います」

「よーしわかった。じゃあ、好きなだけここにいていいぞ！」

「あ、ありがとうございばずぅぅぅえええええ」

泣き出してしまった。弟に劣らず、彼女も涙もろいらしい。

「皆集まってくれ！今日から新しい仲間になってくれたフェリスだ。みんなよろしくな！」

「よろしくお願いしますねー」

「よろしく」
「よろしくでありますー」
「よろしくー」

「びっ、びなざん、よろじくおねがいじまずぅぅぅう」

号泣しながら皆に挨拶をしたフェリス。しかし、用意された朝食はキレイに平らげてくれた。

「では、仕事に行ってくる。今夜はフェリスのお祝いにしよう。帝都で材料買ってくるよ！」

「では、砂糖をお願いします！」
「今日はお魚を買ってきてくださいませ。あと昆布と、エビとイカも」
「ご主人、ニガリもなくなってきているでありますー」

「了解、今日は店を早く閉めて帰ってくるよ。メイ、行くぞー」

俺とメイは、イリモに跨った。

今日の店は、開店直後に数件の依頼があったほかは、かなり暇な一日であった。俺たちはこれを機会に店でケーキを作ることにした。

無限収納に入れてある大量のハーピーの卵、小麦粉、砂糖、バターをはじめ、旬のいちごを市場で購入してコツコツと作り上げた。途中、火魔法の加減を間違えて危うく焦がしそうになったが、何とか閉店までにバカでかいホールケーキを作ることに成功した。

その日の夕食は、いつになく豪華だった。肉、魚、サラダなどがテ

ーブルの上に所狭しと並べられ、皆で舌鼓を打った。早速フェリスも狩りに出たようで、デカイ牛の化け物を八頭も狩ってきた。ゴンはそれを解体するのが大変だったそうだが、この肉も脂が上品でとても美味だった。

そして、デザートには俺とメイの力作のケーキを振る舞った。沢山のいちごを使用した豪華なケーキだ。皆、美味い美味いと喜んで食べてくれた。やはりハーピーの卵の味がいいためか、実に上品な仕上がりだ。あとで聞くと、ハーピーの卵は超高級品であり、王族でもめったに口に入らないものらしい。どうりでうまくできるわけだ。

フェリスの部屋については、ペーリスの部屋の隣、俺がもともと使っていた部屋を使わせることにした。基本的に人化したままでいるそうで、これも修行の一環なのだそうだ。そうなると毎日同じ服を着ているわけにもいかず、さっそく俺たちは次の日から、フェリスの服や狩り用の武器や防具、そしてベッドなど日用品を揃えに帝都に通った。

元々持ってきた荷物は、食料が大半で、私物はほとんど持っていなかった。俺たちの屋敷が見つけられなければどうするつもりだったのか。そんなこともあり、日用品を部屋に運び込むしりから必要なものが出てくる有様で、俺たちは数日の間、帝都に買い物に通うことになった。

フェリスが来て一週間、ようやく彼女の生活も落ち着いてきた。そしてその時を待っていたかのように、ジェネハたちが帰ってきた。そこで俺にもたらされた報告は、衝撃のものだった。

第六十四話　これからに向けて

「あの地は、とても人の住めるところではない」

帰還したジェネハの第一声がそれだった。実はクルムファル領は大きな問題を抱えていたのだ。

まず第一の大きな問題が、塩害だった。

ジェネハ率いるハーピーたちが上空から見ると、まだクルムファル領では雪が残っていたそうだ。ちょうど喉を潤そうと地上に降り、その雪を口に含んだところかなりのしょっぱさであったという。つまり、白く見える部分は塩だったのだ。領内の農地の大半が白くなっていたとのことで、かなりの塩害を受けていると考えられ、深刻な食糧不足の恐れがある。

第二の問題が、治安の悪化である。

領内では盗賊がいるらしく、近隣の港町が襲われているそうだ。これもハーピーたちが上空から見ると、その惨状がよく見えたそうだ。住民を助けようかとも思ったそうだが、盗賊の数は優に百を超えていたという。ほぼ、ちょっとした軍隊である。さすがのジェネハも、わずか十匹の手勢では分が悪い。今回は泣く泣く見捨てて帰ってきたらしい。

そして第三の問題が、漁業産業の壊滅である。

港町が襲われているとなると、そこに住んでいる住人、つまり漁師やそれに関わる人が殺害されている可能性が極めて高い。そうなると、漁業に深刻な影響が出る。たとえ、塩が名産と言われたクルムファル領であるが、農業と漁業を失っては、立ちいかないだろう。

「クルムファルの兵たちは何をしているのですか？」

リコは思わず声を荒げたが、すぐに思い出した。帝国軍との戦いでその大半が失われていたことを。当然治安は悪くなる。盗賊がのさばっているのは、当然と言える。

「もはや一刻の猶予もないな」

「すぐにでも、クルムファル領に向かうべきですわ！」

次の日、早速俺は宮城に出かけ、宰相閣下にこの件を伝え、早急にクルムファル領へ行きたいと願い出た。

「なるほど。しかし貴殿が行くにはちと間が悪い。もうすぐ恩赦が始まる。そうなった時、貴殿がおらねば誰が彼らを受け入れるのだ」

結局、クルムファル領には帝都から役人と兵隊が派遣されることになり、俺はしばしの間、帝都にとどめ置かれることになった。

ほどなくして、リコの家臣たちの恩赦が始まった。まずその第一回目として、俺を屋敷に襲いに来た十名が解放された。当然彼らは実家から勘当されており、身元引受人は俺だ。宰相閣下の屋敷まで奴らを迎えに行く。

「よー久しぶりー。元気だったか？」

・・・みんな一様に俺を睨みつけてくる。何だお前ら？ケンカなら買ってやんよ？？

「ビウス！パルタン！ポピア！無事だったのですね？ニーズは怪我をしているのですか？パーリオは・・・痩せましたね。ああ、ノキュ、ノキタ、ジャクン、ツージン、アーガも無事でしたか！」

「リコレット様！！」

むさくるしい男どもがリコを囲んで泣いている。アーガとかいう少年は今にもリコの胸に飛び込んでいく勢いだ。その胸は俺だけのものだ。触りやがったらただじゃ置かん！しかも、少々暑くなってきているので、奴らが若干匂う。その匂いをリコに移しても、俺はただじゃ置かない。

睨んでいる俺の視線を察してか、野郎どもはリコから離れ、俺のところにやってくる。

「リコレット様のご主人であらせられるか。私はビウス。幼少の頃より、リコレット様の警護をしておりました」

幼少の頃より、というところにちょっと力がこもっていた。もしかして俺に嫉妬してる？

「リコレット様をお救いいただいたのは、我ら一同感謝しております」

「いや、俺ではなくて、陛下にお礼を言うんだな。リコの助命を決断したのも、お前らに恩赦を決断したのも、みんな陛下だ。俺はただ、陛下の命令に従ったに過ぎない」

奴らの目からは、「リコぉ？俺たちのリコレット様を気安く呼んでんじゃねぇよ！」という意思がアリアリと見て取れる。まあ、リコはすでに俺のものだから、どう呼ぼうと俺の勝手なのだが。

「まあ、立ち話も何だ。せっかく外に出られたんだ。メシでも食いながら、今後のことを話そうじゃないか」

俺は奴らを引き連れて、近くのレストランに腰を下ろす。気前よく何でも好きなのを食えと言ったら、本当に好きなものを注文しやがった。遠慮というものを知らないのか、はたまた俺への当てつけなのか。

メシを食いながら話をする。どうやら奴らは宰相閣下の牢からは早々と出され、屋敷の中に軟禁されていたのだそうだ。きちんとメシは出たが必要最小限であり、肉などはほぼ出なかったという。全員

若い男子たちだ。皆、肉を注文し、ガツガツ食っている。本当に皇女様の側近なのだろうか。リコはというと、そんな奴らの姿をニコニコして見ている。

「さて、食べながら聞いてくれ。俺はこの度、クルムファル領の管理を任せられることになった。と、言っても勘違いするなよ？領主はヴァイラス皇子だ。俺は皇子の代わりに領地の整備に行くだけにすぎない。クルムファル伯爵夫人はリコの先生であり、お前らの先生でもあるんだろ？その先生の領国は今、乱れた状態にある。それを復興しに行く。ついては、お前らの中で、クルムファルに付いて行きたい者がいれば、一緒に連れて行って復興に手を貸してもらいたい。無理強いはしない」

全員が食べるのを止めて、俯いている。

「リコレット様も行かれるのですか？」

一番若い少年、アーガがリコに話しかける。

「もちろんですわ！」

力強くリコは答える。すると、数人が参加を表明してきた。

「この近くの宿屋に皆の部屋を取っていますわ。宿は一週間取ってあります。行きたい者は、一週間後にこのリノスの屋敷まで来てください。行きたくないという人や他にやりたいことがある人についてはそれを優先してください。私は決して責めません」

そしてリコは、こいつら共に金貨の入った袋を一人一人に手渡した。これまでかけた苦労と世話になった感謝の気持ちを贈りたいと、結婚する時に皇帝陛下から下賜された支度金を切り崩してせっせと拵えたものだ。大体、一人につき百万円相当の金貨を配っている。大盤振る舞いである。当然奴らは泣いていた。

メシを食い終わると、奴らは名残惜しそうに指定された宿屋に向かっていった。

そして、屋敷に帰り、ちょうど一週間後、あのむさくるしい奴ら共が現れた。しかも全員揃って。

「我ら全員、リコレット様の下でその生涯をささげる覚悟です。ぜひ、お供させてください！」

「ありがとう。ありがとうございます・・・」

リコは泣き出し、それを見ていたむさくるしい奴ら共も泣き出した。思わずリコの肩に手をやると、リコは俺の胸に顔をうずめて泣きだした。男たちが一斉に俺に殺気を向ける。その直後、メイ、ペーリ

ス、ゴンが奴らに殺気を放ったため、奴らは一様に目を伏せた。

宰相閣下からの指示がなければ俺たちは出発できないため、宿屋の宿泊を延長し、指示があるまで奴らには待機を命じた。その間奴らは装備を整え、食料を調達するなど、割と真面目に準備をしていたらしい。

男どもが去ったあと、しばらくして一人の女性が屋敷を訪ねてきた。

「まあクエナ、クエナではありませんか！」

彼女はリコの近習を務めていた女官であり、幼いころから彼女を育ててきた母親代わりのような人である。

「クルムファルは私が育った故郷です。そこに姫様がおいでになるのでしたら、是非私もお供させてください」

「貴方がそういうのなら・・・」

クエナ曰く、元々クルムファルは食料の生産は高くないため、基本的に塩を売った金で食料を調達してきたのだそうだ。しかし、領主が亡くなったため塩を売ることが出来ていないため、領内は予想通り深刻な食糧不足に陥りつつあるとのことである。帝国軍が駐留しているが、それにも限度がある。復興を急がねばならないだろう。

出発を待つ間、俺たちは救援物資の準備をしていた。それに合わせ

て、クルムファル行のメンバーを選定した。クルムファルには、俺とゴン、リコ、フェリス、そして十人の男どもとクエナを連れていくことにした。護衛にハーピーを５０羽連れていく。そのためジェネハはお留守番だ。ただし、ある程度メドがついたら俺たちは転移結界で家に帰ってくるつもりだ。

一か月後、宰相閣下からようやくクルムファル行の許可が下りた。季節は夏になろうとしていた。

出発の朝、男たちが俺の屋敷に集合する。全員、馬を準備している。リコとクエナは馬車で移動だ。その準備をしている時間を利用して、俺は野郎どもにハーピーたちを紹介する。

「ハーピー！やっぱりあの時の夢は、夢じゃなかったのか！」

うろたえる男どもに俺は

「こいつらは俺の部下だ。お前たちを襲うことはない。安心しろ」

と一喝する。動揺はすぐに収まった。そして野郎どもに馬車の準備を手伝うため、馬小屋に行くよう指示を出す。俺はゴンと行程について最終確認を行う。しばらくすると、一羽のハーピーが俺の下にやってきて伝える。

「ご主人様、完了しました」

ご苦労と労いの言葉を聞いて、ハーピーは俺の傍から飛び上がっていった。

夏の日差しが眩しい。遠くに目をやると、地平線の彼方が陽炎にゆれている。俺は夏の到来を感じながら、馬小屋を見る。

馬小屋では、冒険者の格好をした１０人の男がいた。俺はその男たちの前に、無言で立った。

「よーし、行くぞ！」

颯爽と俺はイリモに跨り、地平線に向かって彼女を走らせた。その後ろには１０人の男たちと１台の馬車。これが後に言われる「クルムファルの奇跡」の幕開けであった。

第六十五話　職務怠慢

草いきれがムッと立ち込める中、二人の男が立っている。二人とも額に噴き出る汗を拭おうともしない。ただ、無言で立っている。

男たちの目の前には、廃墟がある。いや、つい三日前にここに来た時には確かに町があったのだ。大きくはないが、活気のある町。腕っぷしの強そうな漁師の声があちこちから響き渡り、その魚を求める女たちの声、遊ぶ子供たちの声が聞こえていたのだ。

しかし、今、彼らの耳に聞こえるのは、風の音だけだ。生暖かい風に乗って、不快な臭いが運ばれてくる。おそらく、夥しい死体が、町の中にあるのだろう。

「どうするんだ？」

「すべて燃やせ」

短い会話を交わした数時間後、その町は灰燼に帰した。全ての作業が完了したのを見届けた直後、一人の兵士が近づいてきた。

「報告します。バーサーム名誉侯爵様、ご到着とのことでございます」

「・・・やっと来たか」

どちらともなく、言葉が口をついて出た。

「全軍撤収する！」

二人は踵を返してその場を後にした。

俺たちがクルムファル伯爵の屋敷に着いたのは、夕刻のことだった。海に沈む夕日の美しさに目を細めつつ、俺たちは屋敷の門をくぐった。屋敷に詰めている兵士に到着を知らせ、案内された広い応接室でくつろぐこと暫し、窓の外がすっかり暗くなった頃になって、二人の男が現れた。

「帝国男爵、ジョーノ・レイアルです」

「帝国騎士団北方軍副団長のオーシェです」

この二人が、これまでクルムファル領を管理していた行政と軍事の責任者だ。

「到着早々申し訳ありませんが、領地の引継ぎを始めさせていただ

きたい。詳しいことはこの書類にまとめてあります。ご不明な点は明日の昼までにお尋ねください」

ジョーノから渡された書類には、屋敷の見取り図、領地の地図と共に、屋敷の中に何が、どこに、どれだけあるのかの一覧表が付けられていた。俺はそれを一瞥しながら、

「ご不明な点だらけだ。まず、この領土の現状はどうなっている？財政の収支は？それらの資料が見当たらないようだが？」

「そうしたものは、元伯爵の執務室に全てありますので、ご覧ください」

「いや、まず、ジョーノ男爵とオーシェ副団長から見たこの領地の状況を説明してほしい」

「いや、基本的に我々は新しい領主さまが来るまでの屋敷の管理を任されていたもので、あいにくそうした詳しいことは把握しておりません」

「男爵の言う通りだ。我々はこの三ヶ月、前任のグラゴレイル男爵からこの館の管理を引き継いだに過ぎない。クルムファル伯爵の乱以降、この領土を管理していたのはグラゴレイル男爵だ。詳しい話が聞きたいのなら、男爵に聞きなさるといい」

抜け抜けとオーシェが答える。

「ジョーノ男爵。皇帝陛下から館の管理だけを任せられるわけはないでしょう?もし、本当に何も知らないのであれば、皇帝陛下並びに、ヴァイラス王子、宰相閣下に職務怠慢として報告しますが、それでもよろしいですか?」

ジョーノ男爵の顔が歪む。それを見たオーシェが

「この国はもはや未来がない。田畑は塩害で壊滅しており、盗賊が町を襲っているので、漁業も壊滅状態だ。先ほども、一つの町が盗賊によって壊滅させられていた。我々は今まで、この暑い中、町を灰にする作業をしてきたのだ」

「街を灰にしたですって!?」

思わずリコが立ち上がる。

「これはこれは、リコレット皇女。お久しぶりでございます。気付きませず、申し訳ございません。このたびはご成婚おめでとうございます。町には多くの死体が放置されておりました。それらを焼き払わねば、森から魔物が死体の肉を求めて出てまいります。そうな

らないための処置であるとご理解くださいませ」

「町を襲っている盗賊をなぜ討伐しないんだ？」

「我々３００の帝国騎士軍に対して、盗賊どももおよそ１００名ほどいるのだ。しかも森の奥深くに拠点を作っている。奴らを殲滅するには森に入り、魔物を駆逐しながら進まねばならない。そのような危険なことを騎士たちにさせることは出来ない」

「まずは、新しい屋敷の管理をされるバーサーム名誉侯爵のご到着、おめでとうございます。屋敷の中は自由に使っていただいて構いません。我々はこれをもって役目を終えました。明日の昼、帝都に向けて出発いたしますので、その後のことはお任せいたします。それでは」

ジョーノはそれだけを言ってスタスタと部屋を後にする。その後ろを追って、オーシェが部屋を後にする。

「不明点は明日の昼までに聞けといったのは、そのためだったのか」

「リノス殿、これでは我々は置き去りにされるのではないか！」

一番年長のビウスが怒りの声を上げる。

「それにしても、何という報告でしょう。あの二人はまともに領国を管理していないのですわ！」

リコもプンプンと怒っている。

「まあ、今から何を言っても始まらん。取りあえずメシにしよう。リコ、フェリス、無限収納から料理を出すから、適当に盛り付けてくれ」

リコとフェリスがちゃっちゃと料理を盛り付ける。リコのお付きであったクエナも一緒に手伝っている。あっという間に、応接室のテーブルにバイキング形式のビュッフェが出来上がった。

「さあ、みんな道中お疲れ様でした。腹いっぱい食ってくれ」

正直、ここまでくる道中は、全く問題なかった。俺たちの姿が見えないように結界を張っていたのも大きかっただろう。一泊二日の楽しいキャンプだったのだ。

「これだけの資料しかないのか。ヒデェな」

「完全に職務怠慢でありますなー」

食事が終わってしばし。後片付けはクエナに任せ、野郎どもは早速、自分たちの寝床の準備に入った。ついでに体をふいておけと、お湯を大量に桶に入れておいてやった。その間、俺とゴンとリコ、そしてフェリスは執務室に移動し、残された資料に目を通していた。金庫もあったが、中身は空だった。広い屋敷だが、必要最小限のものしか置いていないようだ。

唯一と言っていい役立つ資料は、この領地に住む人々の戸籍謄本だった。名前、年齢などはもちろん、住所や職業といった詳しい情報まで書き込まれている。それが職業別に分けられているのだ。これをクルムファル伯爵は自力で作ったようで、彼の優秀さが分かる仕事ぶりである。

その他は、この屋敷の管理していたものだろうか。伯爵宛の報告書などがあったが、全く役に立たなかった。その理由は、ほぼ、デタラメな報告書だったからだ。

クルムファルの荒廃については何一つ触れられておらず、耳あたりのいい情報だけがピックアップされている。その他は、伯爵やリコに関する噂話などが列挙されているだけで、見ていて不快になる物だった。どうやらクルムファル伯爵夫婦は、リコの教育には熱心だったが、部下の教育は苦手だったようだ。察するところ彼ら夫婦は、思い込んだら一直線タイプだったのだろう。

一応、俺のマップを使って、この領土を調べてみる。この領土は、この館の西側に大きな森があり、それを避けるように、海沿いにいくつかの町や村が点在する。先ほどの二人が灰にした町は、この館

から5キロほど離れた町だろう。人の反応が全くなかった。おそらくその街から逃れた人々は、帝都近くに点在している町や村に避難したのだろう。言うなれば、この館は完全に孤立した状態になっているのだ。

そして、森の中の一点に多くの人の反応がある。おそらくこれが盗賊のアジトだろう。それにしても魔物が多くいる森のまん真ん中にアジトを築くのだ。この盗賊は侮れないのかもしれない。

「この盗賊、意外に強いのかもしれないなー。頭目は知恵が回りそうだな」

「盗賊どもの油断したところを襲いに行くのは難しそうでありますなー」

「まあ、その作戦はないでもないが・・・とにかく今日はもう遅い、帰って寝よう」

俺は、この執務室に転移結界を張る。屋敷の野郎どもに戸締りをして寝るように言い、何かあれば転移結界を使って報告に来るように言っておく。イリモとハーピーたちはこの屋敷に留めおく。馬小屋はきちんとワラも敷いてあり、居心地は良さそうだ。クエナも俺たちの屋敷に帰ることとし、俺たちは転移結界に乗って、ヒーデータ帝国の屋敷に帰った。

二日ぶりの風呂を堪能する。メイにクルムファル領のことを話すと、

土の上の塩を溶かす薬品を開発してみると言ってくれた。ゴンとペーリスが育てている作物の成長を助ける肥料も開発しており、これらはクルムファル領でも役に立ちそうだ。

クエナはリコと一緒に寝てもらい、俺は久しぶりにメイとの二人っきりの時間を楽しんだ。やっぱりメイのキレイな、大きな胸は、とてもとてもいいものだった。

第六十六話　盗賊退治

目が覚めると、俺はメイの体にしがみついていた。羊の毛は実に不思議だ。冬は暖かく、夏は涼しい。しばらくメイの頭をなでながらその感触を楽しむ。しばらくこの時間を楽しみたかったが、今日はそうもいかない。後ろ髪を引かれる思いで俺は、ベッドから起き上がった。

ペーリスたちが用意してくれた朝食を堪能する。フェリスも物覚えが良いようで、いくつかの料理をマスターしつつある。オムレツなど、見事に作れるようになっている。今後が楽しみだ。

朝食が済んだ時を見計らって、メイが一本の剣を俺に手渡す。

「ご主人様はあまり人を斬ることを好まれません。そこで、軽く、それでいて硬い剣を作ってみました。機会があればお試しください」

「鬼切」と同じような日本刀のような造りであり、鞘から抜いてみると、漆黒の剣が姿を現した。枝を持っているかのように軽い。しかし、鉄の塊でもひん曲げるほどの硬度らしい。俺はこれに「黒刀」と名付けた。これからは、腰に「鬼切」と「黒刀」を差し、背中に「ホーリーソード」を背負って戦場に立とうと思う。

刀を腰に差し、昨日のメンバーを集めて再び転移結界に乗る。昨夜のクルムファル領についての報告を聞くが、特に問題はなかったとのことで一安心する。どこから持ち出したのか知らないが、帝国騎

士団が酒盛りを始めたようで、その声が深夜まで聞こえていたらしい。

昼過ぎ、ジョーノ男爵が俺たちのいる応接室に入ってきた。

「特にご不明な点もないようですので、これより帰還いたします。どうぞご武運を」

「道中、気を付けてな」

ニヤリと笑みを浮かべてジョーノは部屋を後にし、帝国騎士団は屋敷を出ていった。それを見届けた直後、俺は屋敷の人間全員を馬小屋に集める。

「全員戦闘準備をしろ。ピウス、パルタン、ポピア、ノキタ、アーガは俺と共に付いてこい。残りの男どもは屋敷の警護に当たれ。リコとクエナは屋敷で待機。あとは、フェリス、お前もお留守番だ。盗賊どもが襲ってきたら、リコたちを守れ。できるな？」

「ハイ！任せてください！」

「ハーピーたち１０名はこの屋敷の警護にあたれ。残りの４０名は俺と共に続け」

ピィーとハーピーたちは空に舞い上がった。

「一体どうゆうことなのリノス？」

リコが不安そうな顔で聞いてくる。

「俺が盗賊の親玉なら、帝国騎士団が撤退する時を狙う。大体、家に帰れる安心感で注意力が散漫になるからな。それに、撤退戦は難しい。アイツらにそれだけの練度があるとは思えん。それは盗賊どももお見通しだろう。撤退中に森の中から奇襲をかけ、部隊を分断してしまえば、勝つことは容易だ。しかし、俺たちはそこを叩く。盗賊どもも自分たちの作戦の成功を疑っていないだろう。そこに油断がある。そこを叩けば、少ない人数でも容易に勝てる」

マップを確認していると、盗賊たちが全員で森の中を移動している。俺はすぐさま、出陣命令を出し、イリモに跨った。

森と街道が見渡せるポイントに陣を張り、ハーピーたちを上空に待機させる。俺はそこにいた全員に結界を張る。しかも、色付きだ。これで武器や魔法で死ぬことはない。そして、盗賊は帝国軍に襲いかかった。行軍中の部隊の側面を突かれた帝国軍は大混乱に陥っている。俺はそれを見て、戦闘地域全体に濃霧を発生させる。

深い霧のため、帝国軍も盗賊たちも混乱している。俺はそのスキに乗じて森に入り、盗賊たちの背後に回りこむ。そして、濃霧を解除する。

「突っ込めー！！」

俺の号令一下、ハーピーたちと野郎どもが盗賊どもに襲いかかる。あるものはハーピーに蹴り倒されて戦闘不能になり、ある者は野郎どもに斬られた。

盗賊どもの装備は様々だ。着の身着のままの者もおり、騎士団の鎧を付けている者もいた。

帝国騎士団が態勢を立て直し、盗賊どもは完全に包囲された形になった。それでも、その包囲を突破して森に逃げようとする者も結構いた。そいつらは俺の「黒刀」でブッ叩かれ、即座に戦闘不能に陥った。

「うわっ！」
「ぐわっ！」

帝国騎士団の中から叫び声が聞こえる。その瞬間、騎士団の中から数名の集団が飛び出した。俺はそいつらを追いかける。追いかけながら、二人を「黒刀」でブン殴り、気絶させる。俺の前に走っているのは三人の男たち。その男たちの前にハーピーたちが数羽舞い降りる。

「くっ、くそー」
「お頭ぁ！」
「・・・」

どうやら一番体が小さい男が頭目のようだ。俺はそいつらに近づきながら

「お前ら、随分と暴れてくれたみたいだな。町を壊滅させるってどんな神経してやがんだ？」

「この国はもうすぐ滅ぶ！滅ぶんなら、好き勝手していい思いして死にてぇと思ったんだよ！！」

「俺たち農民たちは食い物もなく飢えているのに、漁師たちは腹いっぱいメシを食ってやがる。同じ国の人間なのに見捨てやがった！そいつらを殺して何が悪い！！」

何やら根深い問題がありそうだ。かと言って、町の人間を丸ごと殺してしまうのは、やりすぎだ。

「・・・もういい。まずはコイツらを殺さないと帰れない。あれを使おう」

頭目が袋から何やら出している。他の二人も同じようなものを出し、三人同時にそれを飲み込んだ。

「「「グッ、ガァァァァッァーーーーーー！！！！」」」

三人がみるみる大きくなり、三メートルくらいの熊のような魔物の姿になった。禍々しい妖気も纏い始めている。俺は頭目を鑑定する。

ルキアタ（悪魔・２１歳）ＬＶ４４
ＨＰ：２６６
ＭＰ：２２０
剣術　　ＬＶ４
肉体強化　ＬＶ４
風魔法　ＬＶ２
回避　　ＬＶ４
呪い　　ＬＶ３

ＨＰもＭＰも大したことはない。しかしスキルレベルがかなりのものだ。エリルやファルコ師匠を圧倒したマドイセン並みのスキルである。これは俺も本気を出した方がよさそうだ。俺は「黒刀」を鞘に仕舞い、ホーリーソードを抜いて構える。それを合図に三人は襲いかかってきた。

頭目は俺に対して剣を真っすぐに構えて突っ込んできた。あとの二人はハーピーに突っ込んでいった。最初こそ戸惑ったハーピーたちであるが、徐々に連携攻撃を繰り出していき、二人を圧倒していった。間もなく二人とも、ハーピーたちに両眼を傷つけられて光を失い、そのまま倒されて、ハーピーたちにとどめを刺された。

一方の頭目は、必殺の突きを俺に止められた直後、俺の腕を狙って剣を振り下ろした。それを躱し、剣を振るう。剣は頭目の太ももを切り裂き、右足が血に染まった。しかし頭目は全く意に介さずに俺

に攻撃を仕掛けてくる。肉体強化の影響か、痛みを全く感じていないようだ。それどころか、風魔法を使用して周囲の落ち葉を舞い上がらせて自分の姿を消し、その隙間から剣を繰り出してきた。

大抵の者であればこれで体を貫かれて死ぬのだろうが、気配探知ＬＶ５を持っている俺には意味がない。奴の動きは手に取るようにわかる。ご丁寧に俺の背後に移動して、突きを繰り出す。それを躱し、カウンター気味に俺も奴の喉元を狙って突きを繰り出し、その喉を刺し貫いた。

「自分の得意技で倒されるのはどうだ？」

しかし頭目は俺の剣に貫かれたまま、さらに剣を振り下ろしてきた。予想していない攻撃に俺も少し驚く。思わず剣を抜き、距離を取る。頭目は喉から血を流しながら剣を構え、これまでと同様に突きを繰り出してくる。どうやら本当に痛みを感じていないようだ。

俺はその突きを躱し、袈裟懸けに頭目を斬った。体を真っ二つにして頭目は地面に倒れ、ようやくその動きを止めた。

「これは、もしかしてメイリアスが作った薬でありますかー」

「ああ、そうかもしれんな。もしかしたらスキルも上げる効果があるのかもしれないな」

しばらくすると、ピウスたちと帝国騎士団を引き連れたオーシュが現れた。

「そいつらで最後か？」

「この真っ二つになっているのが、どうやら盗賊の頭目みたいだな。死体はどうするんだ？お前らが回収していくのか？」

「いや、我々にその余裕はない。ここに捨てていく。魔物が残らず食ってくれるだろう。ああ、こいつらの装備品はくれてやる。と、言ってもそんなに目ぼしいものはないだろうがな」

「よく知っているな？お前の知り合いか？」

オーシェは俺を睨みつける。そしてプイと背を向けて行ってしまった。死体を調べてみたが、５００Ｇほど持っていただけで、目ぼしいものは持っていなかった。このまま死体を捨てるのも何なので、こいつらの遺体は焼却しておいた。

森を出ると、帝国騎士団がいた。森の中に夥しい盗賊の死体を投げ込んでいる。さらに、生かして捕らえた盗賊も、問答無用で処刑しているようだ。

「何だ、帝都に連れて行かないのか？」

「そこまで連れていくだけの余力が我らにはない。盗賊は見つけ次第殺すというのが冒険者の中では常識でもあるのでな」

「しかし、貴様は冒険者ではないだろう、オーシェ副団長？」

ギリギリと音が聞こえてきそうなくらいに歯を食いしばるオーシェ。ふと見ると、帝国騎士団の鎧を着た兵士たちの遺体も並べられていた。その数およそ４０名。怪我をした者もかなりの数に上りそうだ。要は、全軍の三割が死傷しているのである。大敗北と言っていい戦果だ。

「こいつらの死体も魔物のエサにするのか？帝都に帰れば家族がいるだろうに」

「盗賊ごときにやられて死ぬ奴らに、帝国騎士の名誉の死は与えられん。従ってここに捨てていくのだ」

「こいつらが死んだのは指揮官の無能さが原因だろう。俺が背後から援軍に入らなければ、お前らは確実に殲滅されていた。オーシェ、副団長という職務を預かっているお前が、適切な指示を与えていれば、この敗北に近い惨状にはならなかった。にもかかわらず、お前は盗賊に横っ腹を突かれて動揺し、うろたえた。違うか？」

「・・・・」

オーシェはワナワナと震えながらじっと下を見ている。

「・・・兵たちの遺体を収容せよ。帝都まで一日の距離だ。それぞれ分担しながら引き上げるぞ」

吐き捨てるように命令を下し、オーシェは部隊に戻っていった。

「名誉侯爵殿、援軍、感謝いたします！」

部隊の準備が出来ると、どこからともなくジョーノ男爵が現れ、手を振りながら帝都に引き上げていった。

俺はそれに応えることなく踵を返し、ピウスたちと共に足早に館に引き上げた。

第六十七話　盗賊退治②

「帝国騎士団の面汚しですわね」

館に帰り、戦果報告を聞いたリコはプリプリと怒っている。

「まあ、もう終わったことです。我らは我らで、これからのことをやるだけです」

殊勝な言葉をピウスが言い、その場を収める。俺はピウスたちに休憩を命じ、クエナにお茶を出してもらうようお願いして、ゴン、リコ、フェリスと共に執務室に入った。

「もう屋敷に帰るのですの？」

「いや、実はまだ仕事が残っている。さっき倒した盗賊のアジトに、まだ反応があるんだ。しかも、魔物のね」

「倒しておいた方がよいでありますなー」

「是非、私をお連れ下さい！お役に立って見せます！」

盗賊のアジトには三つの魔物の反応がある。うち二つは大したことはなさそうだが、そのうちの一つは、かなり反応が大きい。取りあえずイヤな予感がするので、討伐することにする。

「では、これから行くのですか？」

「夕食を食べたら、な。リコはそのまま屋敷に帰っていてくれ。俺とゴン、フェリスは残った魔物の討伐だ」

「そうでしたら、私もここでお待ちしますわ」

「それじゃ、ピウスやクエナたちと一緒にいてくれ。危険なことがあったら、迷わず屋敷に逃げること。そして、日付が変わるまでに俺たちが帰らなければ、リコは屋敷に帰っておいてくれ」

「わかりましたわ」

夕食を済ませた俺たちは早速、イリモに乗り、盗賊のアジトを目指した。

森の中を歩けば1日の距離だが、イリモの翼を使えば、２０分程度で着く距離だ。フェリスは人化していても飛ぶことができる。さすがにイリモの速さにはまだ付いてこられないので、フェリスの様子を見ながら夕闇迫る森の上空を飛んでいく。

しばらく行くと森の中に小高い山が見え、その中腹に大きな屋敷が見える。その周りを取り囲むように、無数のテントや掘っ立て小屋が見える。どうやら盗賊の下っ端どもは、キャンプ生活だったようだ。

俺は気配を完全に消す結界を張り、館の中に入っていく。中は明るく灯がともされていた。館を入ってすぐの応接間に、大きな魔物の反応がある。まずはそこに向かう。そっと扉を開けようとしたところで、部屋の中から声が聞こえる。

「遅いわねぇ～。ああ～体がうずく～。早く帰ってこないかしらぁ

～」

俺は静かに扉を開けた。中に居たのは、絶世の美女だった。しかも、とんでもないエロい格好をした美女が。

２０歳くらいだろうか？たわわに実った豊満な胸をふるわせ、大事な部分は隠してあるものの、ほぼ裸と変わらない様子でソイツはいた。この姿はおじさんならば、たまらないだろう。

「アーラ、帰ってきたのね～おかえりぃ～。一人なの～？じゃあ、二人っきりねぇ。フフフ」

ヤバイ、俺の、ストライクど真ん中だ。しかしよく見ると、背中に黒い羽が生えている。肩にしがみついているゴンが

「あれは、サキュバスでありますなー。男の精気を吸い取る悪魔であります～。ご主人、目を奪われてはいけないのであります－」

余りのエロさにドキドキするが、心を奪われるわけではない。平常心平常心。サキュバスは腰をくねらせ、人差し指を口にくわえながらゆっくりとやってくる。昭和の臭いがするが、やっぱりエロい。

「盗賊どもは全員死んだぞ」

ビクッとサキュバスの体が震える。あっけにとられた顔をしていたが、眉間にしわを刻んだかと思えばいきなり激高しだした。

「男どもが全員死んだぁ？精気が足りなくなるじゃない！精気が・・・精気が・・・」

体から黒い霧が立ち込めてくる。俺はこのサキュバスを素早く結界の中に閉じ込める。

「お前の精気を吸いつくしてやるっ！」

体中から鋭い針がサキュバスから放たれる。何と俺の結界を破り、その一部がこちらに飛んできた。俺はすぐさま自分の前に結界を張ってそれを受け止めるが、残りの一部がフェリスに飛んで行った。

「フェリス！」

「・・・ぜーんぜん、大丈夫です」

フェリスの腕に数本の針が刺さっているが、その腕は竜の鱗で覆われており、貫通はしていないようだ。

「その程度じゃ、私の鱗には効かないですよ？」

「おんのれぇ！！お前のような小娘が一番嫌いなんだ！しかしお前は殺さないよ？男たちを引き寄せるエサになってもらうよ？」

「バカかお前。下らねぇこと喋ってねぇで、自分のことを心配しろ」

俺は結界が破られた直後に、さらに強力な結界を張る。ドラゴンのブレスでも悠々と耐える。俺のＭＰを３０００程つぎ込んだ、優れものだ。

「結界師・・・。これは私には破れそうにないわね。いいわ。アナタには抵抗しないわ。私のカラダを自由にさせてあげる」

そう言ってサキュバスは、一糸まとわぬ裸になった。

「いつでもいいわよ？貴方のお望みのままにご賞味ください？」

「・・・ご主人、このサキュバス、一日放っておくでありますー」

「何かあるのか？」

「一日置いてから考えても遅くないでありますからなー」

「・・・そうだな。一度、自分の心をリセットして対応したほうがよさそうだな」

「そんなこと言わないでぇ～。私をオモチャにしてぇー。あなたの、太くて、たくましい・・・」

・・・フェリスの教育上あまりにもよろしくないため、俺たちは無言で部屋を後にした。

「どうして殺さないんですか？」

「うん、一日あのままにしておくことにする」

「あ！一日何も与えずに弱らせて、それから殺すのですね？さすがです、リノスさん。でもあの魔物、どうして裸のままなのでしょうか？てっきり人化の術を解くのだと思っていましたが・・・」

「うん、まあ、その、何だ。あれも敵を油断させるための作戦なのだろう」

「なるほど！裸になって降伏すると見せかけて攻撃するつもりだったのですね！まるで黒龍のような狡猾さだわ！そこを見抜くとはさすがはリノスさんです！」

「ああ、うん、そうだな。ハハハハ・・・」

キラキラしたフェリスの目が俺の心に突き刺さる。俺は足早に弱い反応を示している魔物のところに向かった。

マップには地下にその反応が示されていた。屋敷の裏庭に地下に降りる階段があり、扉を開けると、中は真っ暗だった。俺は「ライト」の魔法を出して中を明るくする。すると、部屋の中には、古くなった斧や剣などの武器や、錆びた鎧があった。そして奥のテーブルの上には、鉄製の籠が置かれていた。そこに近づいてみると、背中に羽の生えたトラ模様の子猫が震えていた。

「何とこれは、ゲュリオンの子供でありますかー」

「ゲュリオン？」

「風のように速く走り、さらに飛行することもできるでありますー。風魔法を自在に操る一方で力も強く、グリズリーなど一撃で倒してしまうでありますー。成長すればおそらくこの森の最強に近い、Ｓランクの魔物でありましょうー」

俺たちはその籠に近づく。

「きゅう？」

俺たちの姿に気づいた子ゲュリオンはゆっくりと顔を上げ、眩しそ

うに俺たちを見つめていた。

「おい、大丈夫か？お前はここの盗賊たちに捕まってたのか？」

「きゅうー」

どうやら俺たちの言葉はわかるが、言葉が喋れないらしい。それでも何かを俺たちに伝えようと

「きゅーききゅーきゅー」

と泣き続けている。

「ちょっと待ってください」

フェリスが子ゲュリオンの前に出て、じっと見つめる。しばらくすると、

「この子は森の中ではぐれたところを連れ去られたみたいですね。そして・・・うん？母ゲュリオンが助けに来てくれたそうですが・・・うんうん。・・・返り討ちにあったそうです。それで・・・この子の目の前で皮を剥がれて解体されたそうです。・・・盗賊をやっつけるので、ここから出してほしいそうです」

「それはまた・・・辛かったなぁ。安心しな。盗賊どもは全員あの世に送った。敵(かたき)はちゃんと取ったから、もう、お前は闘わなくていいんだぞ」

「きゅー。きゅー」

「ありがとうございます、って言ってます」

「それにしてもスゲェなフェリス。こんな子供の言葉でもわかるんだな」

「いいえ。念話です。私たち竜族は思念で相手に言葉を伝えることができます。こんな風に」

『リノスさん、リノスさーん』

おおすげぇ。頭の中にフェリスの声が聞こえる。これは便利だ。

取りあえず、この籠をぶっ壊してこの子ゲュリオンを外に出してやる。外に出た途端、小さな羽をパタパタと動かして、俺の胸に飛び込んでくる。何この子、めっちゃかわいいですやん。

子ゲュリオンを抱っこしながら、もう一つの魔物の反応のある、隣の部屋に向かう。そこには一人の少女が倒れていた。

「何だこの子？」

とてもかわいらしい顔をした少女だが、頭の上に鹿のような角がある。獣人か何かだろうか。頬を叩いてみるが反応がない。取りあえずこの娘も抱えて屋敷を出ることにした。そしてそこに転移結界を設置し、俺たちは館の応接室に帰ってきた。

「おかえりなさいませ。どうされたのです？」

「とりあえず、この子ゲュリオンに何か食べさせてやってくれ。そして、この女の子をどこかに寝かせてやってくれ」

クエナがてきぱきと動いてくれ、準備をしてくれる。獣人少女は眠っているだけのようなので、ソファーの上に寝かせる。そして、最悪のことを想定して、この少女に結界を張る。

「一体どうしたのです？」

俺は屋敷であったことをリコに話した。

「まあ、それは、驚きましたわね。それではこの子たちはしばらく館で預かりましょうか。場合によっては屋敷に連れて行ってもいいかもしれませんね。ところで、そのサキュバスというのはどういう魔物だったのですか？」

それは、説明に困る。あのエロさ・・・ああ、いかんいかん。そんな俺を見かねてフェリスが口を挟む。

「ああそれは、裸のですねー」

「リコ！・・・その・・・今夜は、抱きしめたいんだが、いいか」

「もちろんですわ！」

かなり食い気味に返事をされてしまった。ポカンとする皆を引き立てるようにして俺たちは転移結界に乗り、館に帰った。

その夜、俺は、存分にリコを愛でた。

第六十八話　事情聴取とお仕置き

トク、トク、トク・・・秒針のように一定のリズムを刻む、優しい鼓動を聴きながら目覚めを迎えた。夜明け前の薄暗い部屋、ふと顔を上げると、そこにはリコの顔があった。昼間は凛とした知性をたたえた顔立ちだが、寝ている時の顔は、まだあどけなさを残した少女のようだ。そんなリコの頬を朝日がきれいに彩っていく。何と美しい光景だろう。俺は我が身の贅沢さを噛みしめた。

すると、リコの目がゆっくり開かれ、ぼんやりとした眼差しが俺を捉える。

「おはようございます」

「おはよう、リコ」

「ああ、もう朝ですね」

気だるそうに、シーツを手繰り寄せ、体を隠そうとする。俺はその手をとどめ、リコの体をまじまじと見る。

「きれいだ」

顔を真っ赤にして、恥ずかしそうに身をよじるリコ。俺はこの恥ずかしそうな顔をするリコにちょっとした萌えを感じる。俺は再びリコを抱きしめ、そして、ベッドから抜け出した。

朝食を済ませ、昨日のメンバーと共に転移結界に乗る。到着したク

ルムファル領主の館は、いつもの野郎どもの朝食の時間と重なってしまったため、かなりガヤガヤとうるさい。そんな連中を、クエナは甲斐甲斐しく世話を焼いてくれている。

「おはようございます」

俺たちを見つけたクエナが寄ってくる。

「どうです？変わりはありませんか？」

「ハイ。昨日の女の子はまだ目覚めません。小さいゲュリオンはミルクを少々飲みましたが、まだ食欲はないようです」

ミニゲュリオンを見ると、既にフェリスが念話で話しかけている。

「きゅうううう。きゅうぅぅぅぅ」

「あまりよく眠れなかったみたいです」

「ゲュリオンは群れで行動する魔物でありますからなー。独りぼっちという環境は辛いものがあるでありましょうなー」

「おい、お前の群れはどうした？巣のある場所が分かれば、群れに帰してやるぞ？」

「きゅうぅぅぅ」

ミニゲュリオンは力なく首を振る。

「・・・群れを追われたから、帰る場所はないそうです。・・・で

も、お母さんを傷つけた奴には、大きくなったら必ず倒しに行きたいのだそうです」

このミニゲュリオンの母親は、３０頭ほどの群れを率いていたリーダーであった。しかし半年ほど前、別の群れを率いる雄ゲュリオンとの戦いに敗れ、母ゲュリオンはこの子を連れて群れを追われた。しかもその戦いで、母ゲュリオンは翼の片方を食いちぎられたという。ゲュリオンにとって翼は、飛行する時に必要なだけでなく、平衡感覚もつかさどる役目があるらしい。群れを追われて以降母は、日々の狩りにも苦労をするありさまだったのだそうだ。見かねたこの子ゲュリオンは自分で狩に出た。そこを山賊たちに襲われ、捕まったのだという。

「こんな子供のゲュリオンを捕まえてどうしようと思ってたんだ？」

「おそらく皮をはいで売るか、食材として売ろうとしていたのでありましょうなー。ゲュリオンの肉が美味と聞いたことはないでありますが、そういう珍味を好む貴族は多いでありますからなー」

母ゲュリオンは傷ついた体を押して、盗賊のアジトまで追いかけてきたらしい。しかし、多勢に無勢でついに狩られてしまい、この子の目の前で解体されたのだという。まさに地獄絵図そのものである。

「・・・外に出るのが、怖い、と言っています」

「そりゃ怖いだろう。目の前で親を殺されてるんだから。でも、お前は生きなきゃいけないぞ。お前のお母さんより長生きして、幸せになることが、お前を苦しめたヤツらに対する敵討ちになる。それだけ辛い思いをしたんだ。もうこれ以上の不幸はないぞ。だからあとは上がっていくだけだ。お前のこの先は、幸せしかないぞ」

「きゅうううううううー」

ミニゲュリオンは泣き出した。フェリスがフォローを入れてくれているようなので、この場は彼女に任せることにする。そして俺は、いまだ眠り続けている少女の下に向かった。

スヤスヤと寝息を立てている。頭に鹿のような角が異質だが、それ以外は見たところ普通の少女だ。

「何だか不思議な生き物でありますなー。吾輩も、こんな生き物は初めて見たでありますー」

「鹿のような角が生えているから鹿の獣人じゃないのか？」

「鹿獣人の角はもう少し大きいでありますなー。このように短いものではないでありますー。しかも髪の色が青色ではないでありますなー」

「とりあえず、目覚めるまでこのままにしておくしかないな」

少女を残して、俺たちは再び、あのサキュバスの下に向かった。

昨日の部屋の扉を開ける時、一度、自分に気合いを入れる。今朝、あれだけの美しい身体と、萌える姿を見てきたのだ。美・エロ・萌えの三大要素を満たしてきた俺に敵はいない。たとえ胸がたわわであっても、ぷるんぷるんであっても、ふわっふわであっても、今の俺には通用しないだろう、たぶん。俺はそのようなエロ悪魔に負ける要素は持ち合わせていない、おそらく。あんなことや、こんなことをしてみてぇぜうへへへーといった妄想は完璧にコントロール

できるはずだ、きっと。

一気にドアを開ける。昨日のサキュバスは結界の中で、俺たちに背を向けてぐったりとしている。かなり暴れたのだろう。俺が自信をもって作った結界に無数の小さな傷がついている。あと一日、フルパワーで暴れられ続けたら、もしかしたらヤバかったかもしれない。といっても丸一日暴れられる体力と大量のＭＰがコイツにあれば、の話だが。

サキュバスに近づいていく。俺たちの足音に反応して、ヤツの体がピクリと動いた。

「・・・精気を、精気をちょうだぁいぃぃぃぃ」

顔を上げたサキュバスを見ると、完全な老女だった。シワシワの顔、たくあんのように垂れ下がった胸・・・昨日の俺の興奮を返してくれないだろうか。

結界を解除してやる。もちろん、反撃を考慮して俺たちの結界は解除していないが。

「精気・・・精気・・・せい・・・き・・・」

ガクリとうなだれてしまった。どうやら死んだらしい。老衰だ。

「サキュバスは男の精気がないと年を取るのでありますー。こやつも数百年の時を経て生きている魔物であればと思ったのでありますが、その通りでありましたなー」

さすがはゴンである。だからこそ、この館に１００人もの盗賊を集

めて、夜な夜な彼らから精気をもらってフィーバーハッスルをしていたのだろう。このエロ魔物もロクでもないが、その色香に迷ってしまった男たちも、ロクでもないものである。本当に、ロクでもない。男子の風上にも置けない奴らだ。恥を知れ！

「リノスさん、すごいですね！一日でこの魔物の生気を吸い取ってしまうなんて。ぜひ、私にも教えてください！」

「・・・君にはまだ早いのだよ、フェリス君。大人になれば、自ずとわかることだが、君は、こんな悪魔のような女になってはいけないよ？」

キョトンとした顔をするフェリス。よく見ると、サキュバスの体が灰になって崩れていっている。彼女らは死ぬと自然に灰になるのだろうか？であればまさに、「灰になるまで」だ。ある意味その心意気は見習ってもいいかもしれない。

館に帰ると、クエナが飛んできた。

「あの少女が目覚めそうです」

慌てて彼女の様子を見に行く。朝は全く無反応だった身体が、右へ左へと動き、寝返りを打っている。そしてしばらくすると、目がゆっくり開かれた。

「ううーん、よく寝たー」

どうやら快適な目覚めを迎えたらしい。

「おはようさん。どうだ気分は？」

「ハッ？誰？」

「俺はこの領地を管理しているリノス、という者だ。盗賊の館を討伐した時に、お前さんを見つけた。放っておくのも何だったので、俺の館に連れてきた。お前さんは一体何者だ？」

「さぁーね？」

何かふてくされているらしい。敵だろうか？取りあえずこの娘を鑑定してみる。

ルアラ（ポセイドンの皇女・１５歳）ＬＶ１９
ＨＰ：１５９
ＭＰ：７４
水魔法　ＬＶ２
風魔法　ＬＶ２
雷魔法　ＬＶ１
剣術　ＬＶ２
ＭＰ回復　ＬＶ１
魔力吸収　ＬＶ１
麻痺耐性　ＬＶ２
舞踊　ＬＶ３
歌唱　ＬＶ２

「ハァ？ポセイドンの娘？海の王者の娘ってか？」

「どうしてそれを！もしかしてもう、私のことがバレてる？いや、そんなことないはずよ！陸に来てすぐサキュバスと一緒になったんだから！」

「とりあえず、これまでのいきさつを話してくれないかな？」

「知―らない。勝手に調べれば？それより、お腹すいちゃった。何か食べさせてよ？」

「この女、斬りましょう」

フェリスが殺気を放っている。ルアラと表示された女は、フフンと鼻を鳴らしている。どうやら自分がポセイドンの娘ということでタカをくくっているようだ。これは、お仕置きが必要かもしれない。

「とりあえず、ミルクでも飲ませてやれ」

「フン、それでいいのよ」

運ばれてきたミルクを女は飲み干し、お代わりを要求する。都合３杯もミルクをお代わりして、ようやく落ち着いたらしい。

「とりあえず、お前は盗賊の仲間ではないのか？サキュバスと出会ったと言っていたが、何か企んでいるのか？ベビーゲュリオンもいたが、あれもお前の仕業か？」

「さあね？あなたはどう思うの？面白そうだから聞かせてくれる？いい暇つぶしになりそうだから」

フフンと鼻を鳴らし、ニヤニヤ笑う女。俺は無言で部屋を出る。

「可愛げのない女でありますなー」

「リノス、やっぱりあの女は斬るべきですわ」

「ポセイドンの娘だ。そうもいかんだろう。まあ、俺に任せておけ」

後で聞くと、かなり悪そうな顔を俺はしていたらしい。

しばらくすると、女のいる部屋から絶叫が聞こえてくる。

「なによこれ！何！出られないじゃないよ！出しなさいよ！出せ！出せ！」

「何だ、お出かけか？」

「出せ！ここから出せ！」

「俺の質問に答えたら出してやる。サキュバスとの関係、盗賊との関係、ベビーゲュリオンとのこと、この三つだ」

「・・・知らないって言ってるでしょ！」

「ならしばらくそこにいろ」

俺は再び踵を返して外に出ていこうとする。

「待って！お願い！ト、トイレに行かせて・・・トイレ・・・」

「答えたら、行かせてやる」

「ううう、お願い・・・」

「答えろ」

「・・・サキュバスは・・・ここに拠点を作るから一緒にやらないって・・・。だから、海にエサラハルを呼び寄せて・・・。盗賊たちはサキュバスが集めてきたから知らない。ゲュリオンも盗賊が勝手に連れてきたから、知らない。本当に知らないの！」

「エサラハル？何だそりゃ？」

「あー美味ではありますが、すぐ腐ってしまう魚でありますなー。鋭い歯で、何でも食べる獰猛な魚で、たくさんの群れを作るので、海で出会うと厄介でありますなー」

「ほう、美味なのか。一度、食ってみたいな」

「お願いだから、トイレ・・・」

「まあ、いいか。扉を出て左に曲がって突き当りだ。行ってこい」

俺は結界を解除してやる。その瞬間、女は猛ダッシュで扉に向かっていった。

「開かない！この扉開かないじゃないの！！」

「押すんじゃなくて、引くんだよ」

「あ、開いた！」

ジョバババー

俺たちの所にまで聞こえる程の大きな音で、女は派手に漏らした。

第六十九話　現状確認という名の、尋問

「いやぁぁぁぁぁー見ないでー！」

女は蹲りながらそれでもなお、あふれ出る水分を止められずにいる。お蔭で館の床が水浸しである。ある程度落ち着いたところを見計らって、クエナがテキパキと処置をしてくれ、汚れた床は瞬く間にきれいになった。

「そのまんまの服じゃ居づらいだろ。フェリス、悪いが下着と服を貸してやってもらえないか？」

「まだ買ったまんまの新品がありますが・・・その、斬らないのですか？」

「ああ、貸してやってくれ。頼む」

俺は下半身が濡れたまんまの女を、転移結界のある場所まで引き立てる。俺に無理やり引きずられながら女は怒りをあらわにする。

「覚えてなさいよー！絶対許さないんだからね！」

「何がだ？これはお前のせいでこうなったんだ。お前が、俺の質問に答えないから、１５歳にもなって公衆の面前でお漏らしなんかするハメになったのだ」

「・・・」

女は目にいっぱいの涙をためながら、俺たちと共に屋敷に帰った。

「お前を今から風呂に入れるが、熱湯は大丈夫か？」

「・・・」

「無言は肯定と受け取る」

俺はすぐさま風呂を沸かす。そして、フェリスは問答無用で女を風呂に引きずっていく。フェリス君、髪の毛を掴んで引きずっていくのは良くない。お父さんが見たら、腰を抜かすよ？

「やめてー！お願いだからやめてー！」

「うるさいわね！大人しくしなさいよ！ええい！ドン！ドン！・・・ドボォン！！」

「ギヤー！キャー！キャー！痛い痛い！！」

「大人しくしなさい！洗えないでしょ！うりゃぁ！うりゃぁ！」

「ギャー！助けてー助けてー！ごめんなさいー！！」

凄まじい絶叫がしばらく屋敷の中でこだまする。あとはフェリスに任せることにする。間違っても、フェリスがやられることはないだろう。フェリスが殺してしまう危険性はあるかもしれないが。・・・しばらくすると女は服を着替え、フェリスに伴われて、泣きながらダイニングに現れた。

「・・・言うこと聞きますから、もうヒドイことはしないでくださ

ぁい。本当に申し訳ありませんでした。・・・痛いぃぃぃ」

頭を下げて謝っている女の頭を後ろから押さえつけて、頭をテーブルにこすりつけている。フェリス君、それ以上やると死んじゃうから、優しくしてあげよう。

「この女を風呂に入れる時、着ていた服が破けてしまいましたが、どうしましょうか？汚物ですから、捨てませんか？」

「許可する。フェリス、まずはそいつを放してやれ」

乱暴に椅子に座らせられる女。去り際にフェリスが女の耳元で何やら呟く。女の体がビクッと震え、おびえた表情をさらにこわばらせる。フェリス、お前、何を言ったんだ？

「さて、質問の続きだ。お前は一体何しにこの陸に上がってきた？」

「ううううあの、その、ややややや屋敷では、あう、あう、あう、うエエエエン」

何故か泣き出してしまった。リコが机をバシン！と叩く。ビクッと体を震わせて、女はリコを震えながら見る。リコはフェリスに向かって顎をしゃくる。コツ、コツ、コツとゆっくりフェリスは女に近づいていく。二人とも無表情なので、不気味さと恐ろしさが半端ではない。

「イヤ、イヤ、イヤァァァァァ・・・」

「はい、フェリス、そこまでー。席に戻ってくれていいよー」

俺に一礼をして、席に戻るフェリス。席に戻る時も、一瞬たりとも女から目をそらさない。だから、やめなさいって。本当に怖いから、やめよ？

泣きながら震えている女の過去を俺は見る。

「・・・はあ？２１７番目？ポセイドンは何人子供がいるんだ？まだいるのか？・・・おおう、母親は人間なんだな？・・・ふーん、２１７番目だから親父に会ったのは一回きりかー。一応、メシは食わしてもらっていたと。ほーう、ちゃんと教育受けてんじゃないか。うん？歌と踊り？・・・お前海の神に歌と踊りをささげる巫女だったのかよー。ほう・・・バカ野郎、イヤじゃねぇよ。・・・お母さんの元いた陸が見たかった？・・・家出じゃねぇかよー。海の神様怒ってんじゃねぇのか？姿くらますためにエサラハルを操ったのか？で？・・・サキュバスと。・・・おおう、エロいな。ふんふん。エサラハルを大量に・・・操り切れずに暴走してんじゃねぇかよー。何やってんだよお前ー。しっかりしろよー。で、サキュバスは暴走しているのを知らなかったと。で？・・・海と漁村はエサラハルで占領して、自分たちは陸を占領すると。浅はかすぎるわー。うん、至れり尽くせりだったと。食って寝てばっかりじゃねぇかよー！」

俺の話を聞きながら、どんどん女の瞳孔が開いていく。そして、そのまま固まってしまった。

「ところでお前、海に戻らなくて大丈夫なのか？」

「だ、大丈夫です。一日一回水浴びをすれば・・・」

「これからお前、どうすんだ？エサラハルが操り切れないんだろ？帰れないんじゃないのか？」

「それは・・・。でも、海の城には帰りたくない。帰っても居場所がない」

「イヤお前、巫女なんだろ?きちんとお勤めを果たせよー」

「踊りは・・・いいんだけど、歌が、その・・・イヤというか、その・・・」

「どんな歌だ?歌ってみろ」

「イヤです!絶対にイヤ!みんな私の歌は気味が悪いっていうの!歌いたくない!」

バシッとリコが再び机をたたく。女は観念したように、泣きながら歌い始めた。

・・・歌って、演歌じゃねぇか。まあ、この年の女の子には、キツイかもしれないな。踊りってこぶしの振り方だったんだな。確かに、演歌はこぶしの効かせ方は大事だ。しかし、まだまだ修行が足りない。これでは歌っているだけで、演歌の味わいは出ていない。

「お前へタクソだな。俺もうまくはないが、こんな感じで歌うんだよ」

俺はコホンと咳ばらいをし、親父のカラオケの１８番を歌いだす。

「ン波の～谷間に～命のぉ花が～ふたつぅ～ン並んでぇ～咲いてぇいるぅぅぅ～」

「何ですか！今の気味の悪い音は！」

ペーリスとメイが同時にダイニングに入ってくる。リコもフェリスも固まっている。ゴンも唖然としている。女は目をむいて俺を見ていたが、突然俺に向かって土下座をやりだした。

「師匠と呼ばせてください！私が目指していた歌、そのものです！是非私に伝授ください！」

イヤ、ただ親父のマネをして歌っただけなんだが。マジかー。何気に親父はすごかったのか？

「芸の道はいばらの道。どんな苦労も厭わないか？」

「ハイ！死ぬまで付いて行きます！！」

・・・弟子が出来てしまった。まあ取りあえず、不肖の弟子である女、ルアラはしばらくはウチで預かって、最終的には巫女に戻らせることにしよう。

俺たちは再び転移結界に乗り、クルムファル領にある館に戻ってきた。気になるのが、漁村のことだ。クルフムファル領では農業は崩壊している。今、この領地の産業と呼べるものは、漁業しかない。その漁業が壊滅的な被害を受けているらしい。俺としては見過ごすことが出来なかった。俺とゴン、そしてフェリスとルアラは館から２０キロほど離れた漁村、カイリークの町に向かった。ルアラは飛べないため、フェリスが抱えて移動する。何度かルアラの悲鳴が後方から聞こえたが、聞こえなかったことにする。

カイリークの町は、石の城壁に囲まれた小さな都市だ。俺たちは門番にこの町の責任者に話がしたいと告げ、案内を頼んだ。かなり面倒くさそうに対応されたところを見ると、この領地の責任者に対して、かなりの不信感があるようだ。

町長の館はすぐに分かった。城門から入ると町が一望できる。その中の一番大きな建物が町長の屋敷なのだ。町は閑散としていて活気がない。人は住んでいるようであるが、人通りはほとんどない。ほどなくして町長の家に着く。出てきた町長は、人間の姿をしているが、皮膚が魚のうろこでおおわれている半魚人のような男だった。あとで聞くと、海人族というのだそうだ。

「海人族の族長のマルセルです。また領主が代わったのですか？あなたも、大変ですな」

「ええ、大変です。赴任した直後からこの領土には問題が山積みです。一つ一つ解決していかねばなりません」

「だといいのですが」

「とりあえず、この町の状況を教えてもらえないだろうか」

「話したところで、今の状況が変わるとは思えませんが」

「でも、頼む」

「我々海人族は海に入って漁を行う民族です。しかし、ここ二か月ほどの間、漁に出ることが出来なくなりました。理由は、エサラハルという魚です。これが大量に発生しまして、我々が漁に出ると鋭い歯で船と漁師を襲います。実際、数隻の船が沈められました。エ

サラハルは食べられますが、すぐに腐ってしまうため、持ち出しが出来ません。何とか我々は飢えずに済んでいますが、これが続くとなると、かなり厳しい状況です」

「そのエサラハルを駆除すればいいのか」

「夥しい数がいるので、それも難しいでしょう。それに、問題はそれだけではありません」

「と、言うと？」

「農地が荒れてしまって作物が取れず、農民が飢えています。我らの魚を提供しようにも、届いた時にはすでに腐っています。それがために、農民の大半が盗賊と化し、我々海人族の村や町を襲っています。先日も我らの村が襲われたばかりです。正直、我らは人族をあまり信用していません」

「わかった。それはもっともだろう。しかし、盗賊は全員討伐した。もしかしたら、農民の大半を討伐したかもしれんな。あ、これは俺の独り言だ」

「盗賊を全員討伐したのですか？１００以上はいたと思いますが・・・」

「ああ、全員討伐した」

「・・・」

「この領地の農業が荒廃しているのは俺も知っている。だからこそ、この漁業まで荒廃しては、この領土は本当に終わる。何としても食

い止めねばならん」

「・・・海人族がいる町や村の海全部がエサラハルに占領されている状態ですが・・・」

「まずはどんな状況か見せてくれ」

俺たちは族長の案内のもと、海に向かった。

「うわーこれはひどいことになっているでありますなー」

海の中が真っ黒になっていた。本当にエサラハルが占拠してしまっている。

「これだけいると、海底にサンゴなどがあったら壊滅しているな」

「ここは海底が岩盤なので、生物はあまりいません。沖に行けばイカなど豊富な魚が採れますが、この状況では沖に出ることが出来ない」

「エサラハルを見せてくれるか？」

族長は懐から糸を出し、その先端を海に投げ込む。するとすぐにその糸の先を咥えた大きなエサラハルが釣り上げられてきた。確かに鋭い歯を持っている。

「この魚、食べてみてもいいか？」

近くの漁民の家に行って包丁を借り、族長は見事な手さばきでエサラハルを捌き、瞬く間に刺身が出来上がった。食べてみると、確か

に美味い。この味に記憶はある。

「マルセル、と言ったかな？エサラハル、何とかなるかもしれないぞ？」

「ご冗談を。そんなことが出来るのなら、海人族は未来永劫あなた様に忠誠を誓うでしょうな」

「できるんだよ、それが。起死回生の策が、俺にはある」

俺は自分でもわかっていた。かなり、悪そうな顔をしながらこの話をしていることを。

第七十話　一大作戦、「大漁」

「恩赦を受けたリコレット様の近習が、全員いなくなっただと？」

「それどころか、帝都に住む貴族の次男、三男などもいなくなっているようです」

「一体、どうなっているのだ？」

「何でも、バーサーム名誉侯爵が経営するダーケ商会が、積極的に彼らを雇用して、侯爵の領地に送り込んでいるようです」

「あんなどうしようもない領地で何をするつもりだ・・・？」

宮城内では、そんな噂で持ちきりだったらしい。無理もない。事情を知っているのは皇帝陛下とヴァイラス殿下、そして宰相閣下だけだったのだから。

カイリークの町長であるマルセルとの話を終えた俺は、すぐさま帝都に取って返した。そして、宮城に向かい、陛下に直接、リコに仕えていた者たちに即、恩赦をしてもらえるようにお願いした。幸いそれはすぐに許可され、それぞれの者たちに通達が出された。その際に、リコの名前で、バーサーム名誉侯爵家で召し抱えてもよい。希望者はこの通達をもって三日後に遠征できる装備を整えて集まるように、という通知も同時に行われた。

宮城から退出した後は、ひたすら買い出しに行く。その時に、店の人々に恩赦の者たちに出した通達を伝えて置き、希望者は三日後に

指定された場所に集まるよう、知らせておいた。

大量の食糧、衣料、寝具、その他諸々の生活用品を無限収納に入れて、俺は屋敷に帰る。そして、丸二日間、俺たち一家は総出で弁当作りにいそしんだ。用意した弁当は約３０００個。それを7人で作り上げたのだから、我ながら大したものだと思う。

弁当の種類も三種類作った。もっと作りたかったが、人員的にそれが限界だったのだ。

それにしても、ペーリスを筆頭に、リコ、フェリスの働きは目覚ましかった。メイなども、抗菌作用のあるバカでかい笹の葉を見つけて、それを次々にハーピーたちに取って来させていた。ゴンも屋敷で栽培している野菜等の収穫にいそしみ、その間でルアラは泣きながら手伝いをさせられていた。

俺も遊んでいたわけではない。マルセルには三日後までに漁民たちを総動員してもらうよう手はずを整えたり、館のピウスたちにもいろいろと準備物の用意を頼んだりしていたのだ。あとは、ひたすら俺も料理の手伝いである。かなりのＭＰを消費したが、良い仕事が出来たと思っている。

そして三日後。まずは待ち合わせ場所に集まったリコの近習たちを出迎える。その数、１００名。兵士や役人もいたが、さすがに皇女だけあって、女性が多い。大半が女性だった。

こいつらはリコと共に、カイリークの町に転移させる。転移した先でリコから説明をしてもらい、準備を手伝ってもらう。

その後、帝都で噂を聞き付けた者たちを迎える。兵士や役人、獣人、

冒険者もいた。その数およそ１５０人。俺達は先にカイリークに転移し、集まった奴らはゴンに面接をしてもらう。「呪い」のスキルがないか、物騒なスキルを持っていないかだけの確認だったが、それでも、最終的には１００名まで絞られた。

ほぼ、全ての準備が整ったとき、１００名の希望者たちが転移してきた。

「皆、よく来てくれた！これから一大作戦を行う！マルセル以下、６００名の海人族の皆は、男は波打ち際でエサラハルの捕獲、女は捕獲されたエサラハルの解体。リコの家臣たちは城門および町の警護、その他の者は指示されたことに従ってくれ。ピウスたちは、最後に転移してきた奴らに付いてくれ。帝都からの転移組は、彼らの指示に従ってくれ！」

手際よく、集まった人間たちがグループに振り分けられる。

「今から行う作戦は、エサラハルの捕獲だ。腐敗までが早い魚だ。海人族は早く、迅速に魚を捕獲し、解体してもらいたい。そして、人族は速やかにそれを処理してもらいたい！死んだ直後から腐敗が始まる。時間勝負だ！よろしく頼む！これが成功すれば、間違いなく全員が仕事にありつけるだろう。今は不安かもしれないが、俺を信じてやってもらいたい！」

そして俺は、用意された一軒家に結界をかける。そこにはメイがいた。

「メイ、頼むぞ！」

「ハイ、任せてください！きっと大丈夫です！」

全ての準備が整ったのを見届けた俺は、カイリークの海が一望できる高台の上に立つ。太陽は登り切っている。波も穏やかだ。しかし、カイリークの海はかなり先まで真っ黒になっている。

「それでは、始めるぞ！」

俺は両手に白色の球体を作り出す。その中身は、俺が火魔法で何百発の爆発を起こしているものだ。その音と衝撃を完全に閉じ込めた結界を、俺は海の中に投げる。エサラハルの群れを囲むようにそれを投げていき、その群れの真ん中に、特大の結界を投げ込む。それが海の中に消えた直後、結界を解除する。

「ドォーーーーン！」
「ドォーーーーーン！！」
「ドドドォーーーーーーン！！！」

あちらこちらで数十メートルの水柱が上がる。俺は、海岸の上に結界を張ってやる。するとそこに爆発に巻き込まれて空中に放り投げられたエサラハルが数百匹落ちてきた。それをまとめてやり、魚を解体する女どものところに届けた。

女どもが魚を解体すると同時に、海には夥しい数のエサラハルが浮き上がってきて、しばらくすると海がエサラハルで満たされた。それを海岸で男たちがとどめを刺し、女たちのところに持っていく。女たちは素早くそれを解体して、用意された箱の中にそれを入れる。それをもって人族の男たちは、ある者はメイの下に向かい、ある者は、ピウスたちの下に向かった。上から見ていると、初めてとは思えないほどのスムーズな連携が取れていた。

俺は一旦海岸に出て、海に浮いている新鮮なエサラハルを結界を使って回収し、無限収納に収める。そして、ピウスたちの下に向かう。そこでは藁でエサラハルを焼く作業を至る所で行っていた。俺は大量の氷を生成し、ピウスに渡す。その後、メイのところに移動し、メイと一緒に作業を行った。

エサラハルを狩り始めて約2時間。浮き上がったエサラハルの3分の1を回収したところで、海に異変があった。バカでかい魚が数十匹現れてエサラハルを食らい始めた。

さすがに海岸にいるのは危険なため、ここで俺たちは昼飯を食うことにする。

「ピウス！エサラハルのたたきを出してくれ！」

藁で炙られたエサラハルの刺身、その上に、スライスしたニンニク、玉ねぎ、ネギをのせ、その上からメイとペーリスの苦心作である「ポン酢」を大量にぶっかけたものが運ばれてくる。

「このメシと一緒に食べると、最高だぞ！」

一緒にお櫃に居れたアツアツのごはんも出してやる。

「うん、うまい！」

「うまみが凝縮されているようだ！」

「アタシャこの味、好きだね！」

海人族にも好評のようだ。そこに、海人族から捌きたてのエサラハ

ルが届けられ、皆で舌鼓を打った。

海の方を見ると、見る見るうちにエサラハルは食いつくされていく。ものの1時間で、海を埋め尽くしていたエサラハルはその姿を消した。

「あいつらも食えるのか？」

「オルレインという魚でありますー。赤身の魚で、これも美味でありますー」

俺は再び爆裂結界を作り、海の中に放り投げて爆発させる。しばらくすると、エサラハルを食いつくしていたでかい魚が浮かび上がり、今度はそいつらが海を埋め尽くした。

「マルセル！あの魚たちも採ってもらえるか？」

「もちろんだ！おい、お前ら、行くぞ！」

海岸の男たちがすぐさま船の下に行き、出港する。今度は海人族たちがオルレインを実に手際よく回収していく。約1時間後、９０頭に及ぶオルレインは全てマルセルたちによって釣り上げられた。

「このオルレインも捌いてもらえるのか？」

「もちろんだ。俺が捌く」

マルセルがどデカイ包丁をいとも簡単に操りながら、瞬く間に解体していく。そのまま１０匹を解体すると、大量のオルレインの刺身が出来上がった。残りは俺の無限収納の中だ。しばらく、オルレイ

ンが食べられる。

日暮れ時になり、夕日が水平線の彼方に沈みかけたころ、ようやく一段落就くことができた。

「みんな、お疲れ様でした！見てくれ！海を！」

そこには、夕日に照らし出された、穏やかな海があった。

「俺たちの海が戻ってきた！」

「明日から漁に出られる！！」

「リノス殿、本当に海を取り戻していただけるとは思わなかった。感謝する。本当に、感謝する！！」

マイセルが力強く俺の手を握る。俺も、それに負けないくらい、彼の手を握る。

「よーし、今日は宴だ！みんな存分に飲んでくれ！食ってくれ！」

オルレインの刺身とその脂身を焼いたステーキ、エサラハルのたたきと刺身など、数種類の料理とごはん、そして酒を出して皆に振る舞う。兵士も、貴族も、冒険者も、獣人も、海人族も、男も、女も皆で料理に舌鼓を打っている。ふと見ると、海を見てひとり黄昏れるルアラを見つけた。

「おい、腹減ってんじゃないのか？お前も食え。あ、エサラハル食べると、共食いになるのか？」

大丈夫です、と言いながらルアラは俺が差し出したたたきに手を伸ばす。

「・・・おいしい」

「そうだろう?働いた後に食う飯は美味いもんだ。それが一緒に働いた仲間と一緒に食う飯だ。極上のテイストだぞ?」

「・・・でも、よかった。海が元に戻って。私、どうしようかと・・・私のせいで沢山の人が迷惑を・・・グスン・・・」

「泣くな。泣いたって過去は戻らねぇんだ。気が付いたときに直す、それでいいんだよ」

「ハイ、ありがとうございます・・・」

「まずは食え!食わねぇと力も出ないぞ!」

ハイ、とルアラは皆の輪に入っていった。

ふと、メイがいないことに気が付く。探してみると、俺が張った結界に居た。中で何やら作業をしているみたいだ。

「おーい、メイ。どうした?大丈夫か?」

「あ!ご主人様。大丈夫です。ちょっと出来栄えが気になって・・・」

「きっと大丈夫だ。ダメならダメでやり直せばいい」

「ずっと気になっていたんだが、一体何をしているんだ？」

マイセルと、その部下たちがやってきた。

「ああ、乾燥エサラハルを作っているんだ。こうすれば日持ちするし、いいダシがでる。この町の新たな産業になるかなと思ってな」

「乾燥・・・。なるほど、水気を抜いてしまえば腐らなくて済む、か・・・。そこには気が付かなかったな」

「まだ作りかけだがな。いい味に仕上がるといいのだが。なるべくそうなるように結界の中を調整しているが、まだ少し時間がかかりそうだ。ちょっと待ってくれ」

「エサラハルが商品として売ることが出来れば、この町は潤う・・・。リノス殿、いや、領主殿、感謝の言葉もない」

「いや、俺は領主じゃない。あくまで管理人だ。リノスでいい」

「リノス殿、我ら海人族は、いついかなる時でも、貴方の力となりますぞ」

「ありがとう。ところで、飯は食ったのか？飯食おう！そして酒も用意してある。今日はみんなで飲もう！」

「我らの酒も用意しました。是非、飲んでください」

「よーし！みんなで飲むぞー！」

この日、俺は記憶が無くなるまで飲んだ。そのためにある悲しい出

来事に遭遇することを、この時の俺は知る由もなかった。

第七十一話　二匹目のドジョウ（前書き）

魚の名前を書いているうちにちょっとごっちゃになってきましたので、ここでまとめておきます。

エサラハルはカツオ
オルレインはマグロ
ナイバーンはクエ

の設定です。

第七十一話　二匹目のドジョウ

目が覚めると、屋敷のベッドの上だった。前日はどのくらい飲んだのか。どうやってここに帰ってきたのかすら覚えていない。頭がガンガンする。二日酔いだ。顔を起こしてみると、誰もいない。いつもはリコかメイが、下手をすると二人の美しい顔がそこにあるのだが、今日は誰もいない。

俺は回復魔法をかけて痛みを和らげる。ちょっとふらつくが、何とか立てる。そのまま俺はベッドから降り、服を着替えて部屋の外に出る。

「リコ～」

リコの部屋に行ってみるが誰もいない。ついでに、メイの部屋にもいってみるが、ここにも誰もいない。俺は階段を降りてダイニングに向かう。しかし、ここにも誰もいない。

「ゴン～。フェリス～。ペーリス～。ルアラ～。誰もいないのか～？」

我が屋敷で誰もいなくなることは、今までなかったことだ。ムクムクと不安が心の中に湧き上がってくる。みんなどうしたんだ？どこに行ったんだ？

そういえば、外にジェネハとイリモがいるはずだ。俺は慌てて馬小屋に向かう。そこには、イリモがいた。

「イリモー。よかった。お前は居たんだな？ジェネハは？みんなはどうしたんだ？？」

しかしイリモは身をよじって俺から顔をそむける。

「イリモ？」

彼女は俺と顔を合わせようとしない。俺はしばし立ち尽くす。そして、弾かれるように転移結界に乗り、カイリークの町に移動する。海岸から騒がしい声が聞こえる。俺は全速力でその声の方に走っていく。

そこには人だかりができていた。その中心には・・・いた！リコだ！

「リコぉ～～～～！」

手を振りながら俺はリコの下に走る。ああ、この凛とした顔。真っ白い肌、まっ平な胸。リコだ、俺のリコだ。

「リコ～起きたらいないから心配したよー。よかったー」

「何を言ってって、くっさ！臭いですわ！お口の臭いを何とかしてくださいませ！」

目の前でリコに拒否られてしまった。大爆笑の中、俺は静かに口の中と体に浄化の魔法をかけた。そういえば、酒を飲みながらニンニクたっぷりのエサラハルのたたきを食べまくったのだ。そりゃ、臭うよね。

よく見ると、ペーリスもフェリスもルアラもいた。皆、ここの住人

に朝食を届けに来たのだ。俺は完全に寝ていたので、置いてこられたようだ。そしてメイは、乾燥エサラハルを作る結界のところに居て、乾燥具合と味をチェックしている。

「たぶん、この製法でいけば問題ないと思います」

早速メイは、海人族の女たちにこの結界の運用方法を説明している。

取りあえず朝飯が終わると俺は、全員を一度集めた。エサラハルは駆除されたとはいえ、もう一つの漁師町、トホツもエサラハルに海を占領されているという。ここは塩の産地でもあるため、早く駆除しなければならない。ということで、カイリークには俺が結界を張り、最小限の人間を残して移動することにした。

歩くこと二時間、トホツの町に到着する。全員に昼飯の弁当を配り、食べながら作戦計画を立てる。基本的には前日と変わらない。短い作戦会議の後、エサラハル駆除作戦は決行された。

全員が手慣れた動きでそれぞれの役割を果たしている。前日を上回るハイペースでエサラハルは駆除されていく。そして、そのエサラハルを捕食しに、さらに大型の魚が姿を現す。

「・・・ナイバーンだ！ナイバーンが出たぞ！！」

海人族が大騒ぎになっている。聞けば、めったに現れない幻の魚であるとのこと。数メートルはあろうかという巨体。何千匹のエサラハルを一飲みにしている。白身が絶品とのことで、１０匹ほどいるナイバーンも捕獲することにする。さすがの海人族もこの巨体の収容には手こずり、夕方近くになってようやく全てのナイバーンを捕獲することができた。

海人族が狩りをしている最中の俺は、乾燥エサラハルを作成する結界を張ると同時に、もう一つの結界の実験を行った。それは、結界内の微生物をなくしてしまう結界である。

かなりのＭＰを消費してその結界を作り、エサラハルを入れておいた。そして夕刻、それを結界から取り出し、食べてみた。正直、美味だった。缶詰の要領で作った結界だったが、どうにか成功したようだ。今回作った刺身やたたきは、ここに保存することにした。そして、解体できなかった数万匹に及ぶエサラハルも、ここに収納されることになった。

この日の夕食は、エサラハルのたたき、刺身とナイバーンの刺身である。ナイバーンの刺身はとてもとても美味だった。前日同様、飲めや歌えのどんちゃん騒ぎであったが、同じ轍は二度踏まない。リコたちは俺が用意した屋敷の転移結界に乗って帰ったが、俺はそこにとどまり、朝まで飲み続けた。途中、海に向かってマー○イオンの物まねを演じるという失態？があったが、それはナイショの話である。

朝、二日酔いを回復魔法で何とか回復させて立ち上がる。前日、メイがレクチャーした乾燥エサラハルの作り方が伝わっているかを確認していると、リコたちが転移してきた。そして、皆で朝飯を食べ、人族の兵士や冒険者たちの中でここに残りたい者たちを募る。意外に数十人の人間が手を上げてくれる。どうやら一晩飲み明かしたことで、海人族と仲良くなったようだ。

トホツの海人族の責任者と話をし、そこに１５名の人族を駐留させることにする。住居は海人族の空き家を提供してくれるという。そのお礼というわけではないが、この町にも結界を張り、邪心や邪念

を持つものは近寄れなくしておいた。

そして、カイリークの町に戻った俺たちは、「魚が腐らない結界」をここにも張り、無限収納に入れておいたエサラハルをそこに移した。その後俺は、残りの人族を連れて、クルムファル領主の館に転移し、その近くに彼らの住居スペースを作った。

住居スペースと言っても、俺の結界である。きちんと外から見えないように、マジックミラーのような造りにしておいた。中は狭いが、防御力を高めたのと、中身が一定の温度になるように作ったので、かなりＭＰを消費した。約１５０個のシェルターである。終わるころにはフラフラになった。

その間、野郎どもは簡易的なトイレを作るなどして、女たちは生活環境を整えるなどしてくれたため、驚くほど早く最低限の生活環境を整えることができた。そして最後の力を振り絞って俺は土魔法で井戸を掘り、その周囲を固く錬成し、井戸が使えるようにして、その日の業務を終えた。ゆくゆくは自分たちの住居を拵えると言っている者もおり、そういうやつらには住宅建築を任せてもいいかもしれない。

本日の弁当を渡し、衣料品や生活用品を丸ごとおいておく。一瞬取り合いが始まるかと思ったが、ピウスやアーガたちが列整理を行い、それぞれに必要なものを平等に分け与えていた。そういった意味で、転移してきた人族たちから一言の文句も出なかったのは、彼らの統率力のなせる技だ。リコが育てただけあって、奴らは伊達ではないようだ。

生活用品をいっぱいに抱えた女性たちがリコに礼を言っている。

「私に礼は及びませんわ」

「でも、リコレット様・・・」

「これをやってくださったのは、主人のリノスです。お礼なら彼に言ってください」

「リノス様、ありがとうございました。私たち、生きていく場所が見つかりました」

「よかったな。いい街にしていければいいな！いや、みんなでいい街にしていこうぜ！」

「ハイ！」

溢れるような満面の笑みだ。リコも満足そうだ。

その笑顔に見送られながら、俺たちは一旦屋敷に帰った。ＭＰを限界まで使ってしまった俺は、夕食も食わずに眠りについた。

そしてまた、朝を迎えた。

第七十二話　普段の生活とクルムファルのこれから

朝、起きるとまたもや一人だった。リコの部屋もメイの部屋も誰も居ない。また皆でクルムファル領に行ったのかと思いながらダイニングに降りると、皆が揃っていた。ホッと胸をなでおろしたが、何故か全員沈痛な面持ちだ。静かに、自分の席に着席する。

「おはようございます。朝食は食べられますか？」

「ああ、頼む」

ペーリスがドスドスとキッチンに向かう。他の女たちは皆、眉間にしわを寄せて考えている。

「みんな・・・どうした？」

しばしの無言の状態が続く。

「ここは、リノスに決めていただくしかないですわね」

「そうですね。クルムファルは一応リノスさんが領主ですし」

「一体何の話だ、リコ？」

「クルムファル領の今後のことですわ。確かに、漁業は持ち直すでしょう。しかしそれだけでは領民は、転移で送った者たちは、食べていけないでしょう。これから収穫の時期に入りますが、おそらく収穫の見込みはゼロでしょう。この一年は私たちで食料の支援はで

きるでしょうが、未来永劫とはいかないでしょう。領民が生活していく方法を考えていたのですわ」

「一応、荒れた田畑でも作物が育つ肥料は出来たのですが、塩を溶かす薬品はまだ、未完成です。申し訳ありません」

「メイが謝る必要はない。それについては俺も考えている。説明するからちょっと時間をくれ。まずは朝食を食べさせてくれ。そして、帝都の店も再開しなきゃならないからね」

「それについてですがご主人様、こんな石を作ってみました」

メイが大、中、小の薄緑色の石を取り出した。

「これにご主人様の魔力を込めていただければ、持ち主に結界が張れる結界石です」

ほう、と小さい石に魔力を込めてみる。すると石が赤く変色した。どうやらこれで完成らしい。試しに、ルアラにそれを持たせて軽くたたいてみる。・・・おお、ちゃんと結界が脹れている。どれどれ～とフェリスが叩く。見事に結界がぶっ壊れ、ルアラの顔面に右ストレートがヒットする。人形のように飛んでいき、気を失ってしまう。回復魔法をかけようと近づくと、股間からチョロチョロと流れるものを見つけた。俺は黙って回復魔法をかけてやり、風呂を沸かして、ペーリスとリコに後の処理を任せた。

「あれぇ？力を加減したつもりだったんですけどねぇ」

「さすがにドラゴンの力で殴ると、普通の結界では破られてしまうでありますなー」

その後、しばらく結界石のテストを行ったが、俺の「黒刀」を全力で振りぬいて初めて結界にヒビが入った。これであれば十分売り物になる。また、コイツの優れたところは、邪心や邪念を持つ人間には効果が出ないことだ。従って、盗賊の類がこれを活用するのは無理というわけである。ちなみに、大きい魔石が5日間、中くらいの魔石が3日間、小さい魔石で1日の効果である。

メイの作った結界石を持って帝都の店に向かう。開店すると同時に、たくさんの冒険者や商人が押しかけてきて、その日は大忙しだった。基本的に店番はメイに任せ、俺はひたすら結界石に魔力を込める作業をしていた。お蔭でかなりの在庫が出来、しばらくは俺が店に出なくてもよさそうだ。

俺がいない間にリコはクルムファル領に行き、現状の報告を聞いてきたらしい。特に大きな問題もなく、過ごせているらしい。漁師たちも久しぶりに漁に出たようで、新鮮なイカや魚、貝などが水揚げされたとのことで、またそれらを食べに行かねばならない。

そして夜、久しぶりにゆっくりと夕食を楽しみ、皆でプリンを食べながら、クルムファル領の今後について話をした。

「クルムファル領の今後についてだけど、一応俺の考えを言っておく。絶対じゃないから、気が付いたことがあれば言ってね。まず、農業だけど、これは田畑の上の塩を取り除かないといけない。それは俺がやってみることにする。そしてもう一つ、あのカイリークの町の近くに、ホテルを建てようと思う」

「ホテルって、あの帝都にあるような宿泊できるような施設ってことですの？」

「そうだ。あそこの魚は美味い。また、景色もきれいだ。そこに帝都から客を呼んで泊まってもらう。もしくは冒険者や旅人が泊まれるホテルでもいいかもしれない。そして、港を拡張する。あそこは、北方の交通の要所になる。あそこに船が止まることが出来て、宿泊する施設があれば、町は潤っていくだろう」

「そ、そんなことが果たして可能ですの？」

「できるかどうかはわからない。でも、やってみる価値はあると思うんだ」

「面白そうです！」

「私も、ご主人様の意見に賛成です」

「リノスさんがそういうのであれば、お手伝いします！」

概ね皆、賛成してくれるようだ。とはいえ、俺だけの意見では本末転倒なので、領内が落ち着いた頃に改めてクルムファル領の人間たちと話をすることにして、その日は寝ることにした。

俺とリコ、メイは離れにある風呂に向かうことにする。しかし、メイは一階の書庫に向かおうとした。

「メイ、どうした？」

「あ、ちょっと調べ物をしようと・・・」

「・・・せっかくだから今日は一緒に風呂に入らないか？」

「・・・よろしいのですか？」

「メイ、一緒に入りましょう！」

「・・・ハイ」

その夜、俺たちは久しぶりに一緒に風呂に入り、そのまま一緒の部屋に入った。

次の日の朝、三人でダイニングに向かう。朝からかなり汗をかいてしまったので、風呂に入ってきたためにリコとメイは顔が上気して、ちょっと色っぽい。俺はまだ、眠さと気だるさを残しながらテーブルに着く。いつものようにペーリスとフェリスが朝食の準備をしてくれる。最近では何故かルアラもその準備に加わっている。コイツは弟子にはしたが、この屋敷に住む許可は与えていないにもかかわらず、当然のごとく俺たちと行動を一緒にしている。ただ、フェリスの部屋に居候しているので、快適とまではいかない生活ではあるかもしれないが。

そして、俺とメイは店に、リコはクルムファルに出かけていく。俺は店番もそこそこに宮城に向かい、皇帝陛下と宰相閣下に会って、クルムファル領の惨状を報告する。

「・・・というわけで、何とか漁業は再開しましたが、農地は手付かずですし、収穫も見込めません」

「うーむ。そんなことになっていたとは・・・。儂の下に報告が上がってこなんだは、そういうわけか。まあもともとあの領地には、領民が食べていけるだけの作物は育たん土地だ。従って、帝国に納

める税は塩だけなのだ。塩も難しいか？」

「いえ、塩田は再開していると聞いていますので、それは問題ありませんが、とにかく食糧不足に陥る可能性が極めて高いです。まあ、当面は我々で何とかしますが、どうしようもなくなった時は、陛下と宰相閣下におすがりするかもしれません」

「まあ、その時は帝国も何らかの手は打とう」

「それにしてもリノス殿、そのホテル計画は面白そうだな。余もそのような魚、一度食してみたい。それに海も久しぶりに見てみたいの」

「陛下が帝都を離れるわけにはいかないでしょう」

「いや、たまには余とて、政務を離れて休息したいのだ。それに、クルムファルなら口うるさい閣僚共や女たちから離れて、気に入った女子とゆっくり過ごせそうだしの」

「陛下がお望みとあらば、私は吝かではありませんが・・・」

「陛下、困りますぞ。政務を疎かになされては」

「何を言う宰相。世継ぎを残すのも、余の立派な政務ではないか。後宮は窮屈でいかん」

「陛下！」

「今すぐにとは言わん。しかし、リノス殿のホテルが完成した暁には、余も見に行かせてもらうぞ。それはそうであろう。我が妹の婿

殿が建てた城のようなものだ。それを余が見分せずしていかがする？それも立派な君主の役割であろう？」

ぐうの音も出ない宰相閣下は無言で頭を下げた。

陛下のお墨付きをもらい、普段通りの生活が一週間ほど過ぎた時、店の休みを利用してクルムファル領に向かおうとしたその日の朝、屋敷に来客があった。

皆で朝食を食べていると、裏の玄関から声がする。

「ピウスです！緊急の報告があって参りました！」

意外な人物の来客に、俺とリコは顔を見合わせる。緊急の報告とのことなので、屋敷に入れ、皆が揃うダイニングに案内する。ピウスは俺たちに無断で転移結界を使ったことを手短に詫び、一気に言葉を吐き出した

「大変です。カイリークとトホツの町が魔物に襲われました！」

第七十三話　王座陥落

「カイリークもトホツも、リノス様の結界のおかげで被害そのものはありませんが、細かくヒビが入っており、再度襲われた時は、かなり危険であると思います」

そこそこ丈夫に作った俺の結界にヒビを入れるとは、なかなかのものだ。まあ、2～3回の襲撃であれば問題なく守り切れるだろう。

「魔物の規模は？どんな魔物が襲ってきたんだ」

「ゲュリオンです。約２００頭ほどいました」

「襲われたのはいつだ？」

「トホツが一昨日、カイリークが昨日です。この流れですと・・・」

「次はクルムファルの館か」

「はい、今日には仕掛けてくると思います」

クルムファルの館にはハーピーを５０羽連れて行っているが、さすがに森の王者であるゲュリオン２００頭と対するのには分が悪い。

「よし、わかった。俺が行く。ちょうど今日はクルムファルに行こうと思っていたんだ」

そしてペーリスとメイを留守番に残して俺たちは転移結界に乗った。

クルムファルに到着すると、まずトホツに転移する。町の責任者であるカールスに話を聞く。

「一昨日の昼過ぎに、城門の警備兵から魔物の来襲の連絡を受けました。城門を固く閉じ、女子供は避難させました。幸い、リノス殿の結界に阻まれて被害は出ませんでしたが、約１００頭のゲュリオンの突撃と風魔法はかなりの衝撃でした」

トホツの結界を見ると、少々ひびが入っていたが、特に問題はなさそうだ。一応修復をして、続いてカイリークの町に飛ぶ。

町の長であり、海人族の長でもあるマルセルに事情を聴く。

「昨日の昼過ぎに襲来されました。トホツのカールスから報告は受けていたので、態勢は整えたつもりでしたが、何せ２００頭ものゲュリオンです。城門を閉じて防御するしかありませんでした」

結界に行ってみると、かなり大きなひびが入っており。あと一息で崩壊するところだった。再度結界を張り直し。前回よりもさらに強化したものにする。

「何でゲュリオンが襲ってくるんだ？」

「おそらく、魚の匂いでしょう。先日大量のエサラハルを捕獲して、そこからたたきを作ったり、乾燥エサラハルを作ったりしていますので、その匂いが海風に乗って森の奥まで届いたのだと思います」

「と、いうことは、またゲュリオンは」

「おそらく態勢を立て直して、襲いに来ると思います」

俺は「マップ」を見る。注意して見ていくと、大きな魔力の塊が森の奥にあった。そこだけ真っ赤に表示されているので、これがゲュリオンだろう。カイリークの町からそう離れていない所にとどまっている。おそらく狙いはカイリークだろう。

「今度襲ってくるのならば、コイツらと戦わねばならないな」

「しかし、ゲュリオンの数が多すぎる。我らだけではとても・・・」

「大丈夫だ。俺に考えがある」

しばらくすると、ゲュリオンの集団が動き始めた。やはり真っすぐに南下してきている。狙いはカイリークだ。

「ゲュリオンだ!ゲュリオンが出たぞ!」

門番の叫びを聞いて俺たちは城門に移動する。城壁の上から見ると、でかいゲュリオンが横一列に並んでゆっくりとこちらに移動してきている。しかも、上空にもかなりの数のゲュリオンの姿が見える。よく見ると、一回り以上デカイ体を持つゲュリオンが先頭にいた。

「あれはゲュリオンキングでありますなー。さすがは森の王者でありますー。一番強い個体が先頭を切ってくるようでありますー」

俺は刀を装備して、城門から一人出る。ゆっくりとゲュリオンキングの所に歩いてく。そしてそいつに指をさし、指をクイクイと動かしてヤツを挑発する。

プライドを激しく傷つけられたゲュリオンキングは、俺に向けて猛ダッシュで突っ込んでくる。俺は「黒刀」を抜いてそいつの眉間を狙って突きを入れる。しかしヤツは真横に飛びそれを躱す。そして鋭い爪を持った前足で俺を切り裂こうと腕を振り下ろす。それを俺は体を躱していなす。

翼を動かしながらゴウ、ゴウと鳴き声を出すゲュリオンキング。体から緑色の霧が立ち上る。しばらくすると、無数の風魔法「風刃」が俺に向けて放たれた。俺は同じ風魔法を発動させて風刃をレジストする。

俺は再びヤツに突きを入れる。今度は顔を躱してよけにかかる。しかし、俺は突きを途中でやめ、そのまま奴の左前脚を狙って刀を振るい落す。

「バキィ！」

刀に手ごたえを感じる。

「ゴアァァァ！！！」

凄まじい叫び声。見るとヤツの左足が折れている。そのまま俺は、奴の頭をめがけて刀を振り下ろす。

「ギャゥオ！！」

ガクンとヤツの体が落ちる。流れるような動きで俺は奴の右前脚と両後ろ足に刀を振るう。両手・両足を完全に砕かれてヤツは地面に這いつくばった。

「まだやるか？」

荒い息をしながらヤツは俺に殺意を込めた目を向けてくる。どうやらまだまだやるようだ。俺はヤツに回復魔法をかけて傷を回復させる。

「さて、二回戦と行くか？」

襲い掛かってくると思いきや、ヤツは俺を睨んだままゆっくり後ろへと下がっていく。他のゲュリオンは固唾をのんで見守っている。そのまま逃げるのかと思いきや、ぴたりと動きを止めた瞬間、奴の姿が消えた。

気が付くと、奴の顔が俺の頭の上にあった。大きな口を開け、俺の体をかみ砕こうとしている。反射的に体を避けるが間に合わず、左肩に食いつかれる。

「ガキィィィーン！バリバリバリー！！！」

「リノス！」

「リノスさぁぁん！！」

「師匠！」

リコたちの悲鳴のような絶叫のような叫び声が響き渡る。俺は微動だにしない。しばらくすると、ズルリとゲュリオンキングの頭が俺の肩から滑り落ちた。

「キュァァァ・・・」

立派な牙は俺の結界に阻まれ、完全に砕けていた。口から血を出しながら声にならないうめき声を上げ続けている。俺は背中のホーリーソードを抜き、一閃する。ゲュリオンキングの両目を斬り、光を奪う。あとは背中の翼、両前足、両後ろ足を順番に斬り飛ばしていき、再びヤツは地面に這いつくばった。

「ずいぶん素早い動きだな。一瞬とはいえ俺の視界から消えたのは褒めてやる。さて、三度目の正直と言うからな。その素早さと突撃力でもう一度やってみるか。まあ、二度あることは三度あるとも言うが、頑張ってみろ」

再び回復魔法をかけてゲュリオンキングを治癒してやる。

最早コイツに戦意はなかった。尻尾を後ろ足の間に挟みながら、少しずつ後退し、ある程度俺との距離が出来ると、脱兎のごとく逃げ出した。

「バカ野郎、逃げてんじゃねぇよ」

俺は「灼熱弾」を放ち、ゲュリオンキングの右後ろ脚を奪う。突然後ろ足の一本を飛ばされたためバランスを崩してヤツは倒れる。その直後、飛ばされた足から火が噴き出し、同時に、奴の前方が大爆発を起こす。爆風で俺の近くに飛ばされてきたヤツは全身に大火傷を負い、瀕死の状態になっていた。

俺は三度ヤツに回復魔法をかける。

ゲュリオンキングは微動だにしない。俺はホーリーソードを鞘に仕舞い、「鬼切」を抜いてヤツの前に立つ。

「もう一回やろうか？今度はこれまで以上の地獄を見せてやるよ？」

「クゥアァァァァ」

両目を固く閉じ、腹を見せて降伏のポーズを取った。その体勢のまま俺はヤツに話しかける。

「なんだ、もうやらんのか？」

「お願いである。殺さないでほしいのである」

「お前、俺たちの村を襲っておきながら、今になって命乞いか？ちと、虫が良すぎるんじゃないのか？」

「・・・そうかもしれん。で、あれば一思いに殺してほしいのである」

そんな会話をしていると、１０匹ほどのゲュリオンが俺に向かって走ってきた。どうやら俺に噛みつこうとしているようだ。さっきの戦いを見てなかったのか？と思いつつ、コイツらを次々に「鬼切」でぶった切っていく。

「ゴアアアアアアアーーーーーー！！！」

「ギャオオオオオーーーーギャオオオオ！！」

「グオギャァァァァ！！！グギャァー！！」

１０匹のゲュリオンがのたうち回っている。その光景を見て、他のゲュリオンは完全に戦意を喪失したようだ。

「お前はゲュリオンキングと見た。引き連れているゲュリオンたちに降伏させろ。それが出来るのであれば、命は助けてやる。それが出来ぬのなら、お前らは皆殺しだ。こいつらのように狂い死にするか、お前が受けたような全身火だるまになって死ぬか、選ばせてやる」

ゲュリオンキングは立ち上がり、くるりと仲間の方を振り返ると、すさまじい咆哮を上げた。すると、上空にいるゲュリオンと森の中にいるゲュリオンが俺のところに集まり、全員が座って頭を下げて、俺に降伏の意思を見せた。

それを確認し、のたうち回っている奴らも治癒してやる。治癒が終わった瞬間から奴らは腹を見せたポーズをとり、微動だにしなくなった。これはこれで放っておこう。

「お前らは俺に敗れて、俺の配下となった。俺の命令は絶対だ。背くはもちろん、拒否の姿勢も、お前らの死を意味するからそう思え」

「・・・わかった」

ゲュリオンキングが群れを代表して答える。

「俺は配下の者たちを守る。どう守っているかは配下のハーピーに説明させる。まずは、なぜ、俺たちの町を襲ったのか、聞かせてもらおうか？」

「食糧確保のためである。海から美味そうな魚の匂いが毎日してくるのである。我慢できるわけがないのである。少々魚を取らせに行かせた者たちが簡単に撃退され、森の王の名にかけて一族全員を引き連れて攻撃しようと思っていたのが、このザマである」

「なるほど、見たところお前たちは猫のような風貌をしているので、もしかすると魚が好きなのか？俺の配下でいることを約束するのであれば、魚を分けてやってもいい。どうだ？」

「我らは降伏したので、ご主人の命令には従うのである」

「よしわかった。マルセル！エサラハルを分けてやってくれ。あと、たたきも分けてやってくれ」

「わ、わかりました」

夥しい数のエサラハルがゲュリオンたちに与えられ、彼らは我を忘れたようにそれらを貪り食った。

俺たちは一旦、館に帰り、ハーピーたちをゲュリオンの所に向かわせて、彼らに俺と配下であるハーピーとの関係を説明すると共に、彼らを館まで連れてくるように命じた。

しばらくして、２００頭のゲュリオンが館の前に現れた。俺の姿を見ると何故か全員が腹を見せて、俺に降伏のポーズを取った。森の王者と歌われたゲュリオン２００頭の腹が見られる機会は前代未聞だろう。しかし、ハーピーたちは一体、どんな説明をしたのだろう？

この日を境に、「森の支配者」が魔獣から人族へと変わった。

第七十四話　土いじり

「さて、こいつらをどうしようか？」

２００頭のゲュリオンの処遇を決める。取り合えず、ゲュリオンキングについては、クルムファル領主の館に人質としてとどめ置くことにした。残りの者たちは、基本的に館の周囲の森に住まうことになり、そこで狩りをし、狩った魔物の一定数を館に収めることとなった。当然、彼らに危害が加えられるようなことがあれば、俺が駆除する。おそらく、そういう事態にはならないだろうが。

ゲュリオンたちと会話ができる者が少ないため、しばらくはリコがこの館に日中は詰め、報告などを聞くことにした。後になってわかることだが、この森には多くの資源や果物があり、ゲュリオンたちはハーピーたちと協力してそれを狩る仕事に大いに役立つと同時に、情報収集能力にも優れており、俺たちの斥候兼前衛部隊として、大いに役立った。

そして、ベビーゲュリオンのことだが、その敵となる個体は見つけることができた。しかし、ゲュリオンの世界は強い者が勝つというシンプルなものであり、負けた者は何も言えないという掟なのだそうだ。従って、ベビーゲュリオンは強くなって討ち果たすしかない。

「ところでお前、名前は何というのだ？」

「名前？何であるかそれは？」

「なるほど、俺たちがお前を呼ぶときの目印みたいなものだ。ない

なら付けてやる」

しばらくゲュリオンキングの名前を考える。・・・面倒くさくなってきた。

「よし、お前の名前は、ゲーキだ。ゲーキと呼ぶ」

「わかったのである」

特に反対もなく受け入れてもらえた。あまり名前というものにこだわりがなさそうだ。

「そういえば、お前にも名前を付けてやろう。お前は・・・」

「ちなみにこのベビーゲュリオンは、メスでありますー」

「うえ?メス?ええと・・・お前の名前は、イトラだ」

「きゅうううううー!」

ベビーゲュリオンはうれしそうだ。後でゴンに聞いたら、ゲュリオンキングと同じ待遇をされたのが、うれしかったらしい。このイトラは、うちの屋敷に連れて帰ることにして、俺たちのペットにする。将来的に体が大きくなってくるだろうが、それはその時に考えればいいだろう。

ゲュリオンとの決着がついてしばらくして、俺は再びメイを連れてクルムファル領に来ていた。季節も秋めいてきており、本来であれば農家からは収穫の話が聞こえてきてもよさそうなものなのだが、小高い丘から見る耕作地は一面塩に覆われており、収穫どころの話

ではなかった。

なぜ、クルムファル領に塩害が発生したのか？それは、農作地にする古老から話を聞くことができた。

約三年前、突然海の水が川に向かって逆流を始めたのだという。それがあって後、満潮になると決まって川が逆流する現象が起きるのだ。当初は海の魚が川でとれるので農家も大喜びだったそうだが、農業用水がこの川の水を使用しており、その海水と混ざった水を使用していたために、気が付けば耕作地が真っ白に染まってしまったのだという。

ただでさえ作物が取れない土地であったのに、さらに収穫高が減る。そんな現状に絶望しつつ、農業に携わっていた者たちは、しばらくはクルムファル伯爵からの支援で何とか食いつないでいた。しかし、クルムファル伯爵の反乱により当主が討たれ、領内の兵士のほとんどが討たれた時に、サキュバスが現れたのだという。

サキュバスは村の男どもや留守役の兵士を次々に篭絡し、もともとクルムファル軍の本部があった森の中の屋敷に居座って、次々と略奪を行うようになったのだという。

「村の男たちのほとんどが出て行っちまったから、村にいるのは老人と女子供だけだぁ」

領主の館の北に位置するイマーデ村の村長は力なく俺たちに呟いた。

「館の北方は草原だらけで、ここを耕作地にすれば領地が飛躍的に発展しますのに・・・」

「イマーデ村、クルフェタ村、タイパン村・・・農業を行っている領内全ての村で、塩害が発生しているのと、男たちがいないので、復活するまでは厳しいな」

館に帰る道すがら、俺とメイは農作地への対策を話し合っていた。メイ曰く、農作地に発生している塩を取り除けばいいのではなく、問題は、土壌の中に蓄積されてしまった塩なのだという。一旦、塩害が発生した土地には作物は育たないというのがこの世界の常識らしく、村の人々がすぐに農作地を放棄したのも、これに原因があるらしい。

「作物が育ちやすい肥料は大量に用意できたのですが、この塩の田畑に効くかどうかは・・・」

「いや、それはまだ早い。まずは俺の作戦を試してからだ」

次の日から俺は、農作地の復興に全力を傾けた。

まずは、手の空いている男どもと村人たちを総動員して、イマーデ村の農作地の塩を除去するとともに、農作地に水を引いている川からの用水路を全て破壊させた。

その間俺は、土魔法で農作地に溝を掘っていく。同時に、その溝から流れた水を一旦プールする場として、巨大な穴をこしらえた。そして、塩の除去が終わった農作地に結界を張っていく。およそ2週間かけてその作業は終了し、それを見届けた俺は、結界の中に大雨を降らせた。

雨が大地に浸みわたり、そこからあふれ出した水分が溝の中に落ち、そのまま巨大なプールまで流れていく。それを続けること三日、そ

の間俺は土魔法でコンクリート以上の硬さに錬成した巨大な長方形の土塊を作り、それを海に投下して防波堤を作った。

雨がやみ、溝の中の水を貯めるプールが満杯になり、湖のようなものが出来上がったとき、俺はすべての結界を解除し、メイに命じて、彼女が作り出した肥料を耕作地全体に行き渡らせた。その後、湖から溝を掘り、たまった水が海に流れるようにしていく。

そして俺は川の上流に向かい、土魔法で穴を掘る。ここら辺には大量の地下水が眠っており、それを農業用水に活用できないかと考えたのだ。しばらく掘ると、水が大量に湧き出した。その周囲にも穴を掘り、湧水を探す。かなりの量の水が湧き出し、そこは湖のようになってきた。俺はずぶ濡れになりながら溝を掘り、最初掘った溝につなげていく。すると、もう一つの川が出来上がった。

「お前らー。農業で使う水は、新しくできた川から取ってくれー」

皆が、それぞれ思い思いに川から用水路を引いていく。メイの肥料散布も終わったようで、農地は黒色の土でおおわれている。

「これは・・・いい土じゃ。これならば作物が作れる」

「一度作ってみてください」

「しかし、ワシらの人数ではのう・・・」

「爺さん、俺たちが手伝ってやろう」

「・・・それならば、歓迎しよう。寝床は、空いている家を使って

もらって、構わん」

こうして、イマーデ村の農業は復興への道を歩き始めた。

その後俺は、クルフェタ村、タイパン村でも同じような塩の除去作業を行い、耕作地を復興させていった。途中難工事があり、二度ほど魔力不足でぶっ倒れた。その都度、メイには最低限のＭＰが回復するまでひざまくらで介抱してもらった。隠すことではないが、リコには内緒にしている。「私もやりますわ！」って言ってきそうな気がするのと、リコだとひざまくらのままになってしまう恐れがある。いや、決してメイとエロいことをしたわけではない。ちょっと、その、男心をくすぐることをしてくれるのだ。それをリコにやってくれとお願いしてやってもらうのは、興が覚めるのだ。ひざまくらは、奥が深いのだ！

ちなみに、サキュバスが住んでいた館については、領主の館として活用することにした。森の中は危険ではあるが、ゲュリオンたちがその周囲にいて館を警護してくれるし、ハーピーたちも森の中のほうが住みやすいとのことで、移転したのだ。

本来森の館から領主の館までは一日の距離であったが、ゲュリオンたちが使っている道を使えば、直線距離になるため、馬を使えば３０分で行ける。そのため俺は、森の館に通じる道は土魔法を駆使しながら苦労して作った。

そして残った、旧領主の館については既に活用方法を考えてある。

そう、ホテルとして活用するのだ。

第七十五話　いつの間にか、１８歳になってた

気が付けば、１８歳になっていた。気が付いたのは冬で、しかも年も押し迫ったころだった。

とにかく、この秋から冬にかけて俺たちは多忙を極めた。

まず俺であるが、クルムファル領の領国経営にはほとんどタッチせず、どちらかというと結界魔石の製作に没頭していた。なぜかというと、この魔石が爆発的にヒットしたのだ。店の方は冒険者を中心に数十名単位の来客で、それは十分にルアラの店番で事が足りた。一番問題であったのは、帝国軍や皇族、商人などから大量の注文を受けたことだ。下手をすれば万単位の注文が来る。それを対処するべく時間の大半を費やした。石運びにはジェネハたちハーピーにも大いに協力してもらい、本当に感謝である。まあ、驚くほど儲かったので、良しとする。

とはいえ、儲かった金の大半は、クルムファル領への投資で消えていったのだが。

問題のクルムファル領についてだが、農業の方はメイを筆頭に、ゴンとペーリスが担当してくれている。当初はどうなるかと思っていたが、蒔いた種からはきちんと芽が出ているし、生育状況も悪くないとのこと。水田も多くあり、問題はそこからきちんと米がとれるかどうかであり、それは経過観察中である。

漁業の方は逆に絶好調である。カイリークの町の近くに港を整備したため、そこに市が出来、かなりの賑わいが出てきている。エサラ

ハルの料理も好評であり、わざわざそれだけを食べに帝都からやってくる人も見られるようになった。塩田も復活し、こちらの方も順調である。

比較的漁業は税収が大きくアップしたため、農業の赤字を何とか補てんすることが出来た。

嬉しかったことと言えば、この魚料理や取引を目当てに来た客が、クルムファルのことを口コミで広めてくれたことで、少しずつであるが人口が増えてきている。農業を希望する者もおり、俺は休日はクルムファルに行き、土魔法で荒れた土地を農地用の土に変え、そこにメイの肥料を散布するという作業をしていた。

もう一つ嬉しかったことは、塩を生成する際に「ニガリ」が取れることである。これまでは薬屋を通じて買っていたが、今後はそれがなくなった。豆腐も作り放題である。

ホテルの準備は、かなり念入りにしているので、俺としては絶対の自信を持っている。何しろ、そこで働くのはクエナを筆頭とした、帝国王室でリコに仕えていた者たちなのである。当然彼ら彼女らは洗練された動きはもちろん、ベッドメーキングや掃除、気づかいや心配りまで超一流である。そこいらの一流ホテルをはるかに凌駕するサービスの達人たちなのだ。この人たちから一度サービスを受ければ、他のホテルには泊まれないだろう。

当然このホテルにも、水洗式のトイレと便座ウォーム、そして風呂にはこだわった。それらは俺の土魔法で錬成された物を使っており、ちょっとシックな出来栄えになっている。

一番苦労した下水の処理であるが、これも何とか土魔法を駆使して

土中に穴を掘り、それを固く錬成して一か所にまとめるようにすることが出来た。土の中を掘っていくのは難航を極め、一度魔力不足でぶっ倒れたが、メイのひざまくらの甲斐あって、どうにか完成させることが出来た。そこには、ファルコ師匠の「魔法はイメージ」という教えが大きなヒントになった。要はきちんとイメージが出来れば魔法は発動することを改めて認識させられたのだ。俺は本当にいい師匠を持ったし、今は心からその師匠に感謝している。

集めた下水は目下、ゴンの手によって農作物用の肥料に変えられている。基本となる下水ラインが出来たので、今後新しく建つ（あるいは、新築の）建物は全て水洗式にする予定だ。領内から汲み取り式のトイレをなくすことも、心ひそかに決めた俺の目標になっている。

ホテルの料理のメニューはもっぱらペーリスプロデュースの料理だ。リコの侍女の中で料理に興味のある者や、帝都で募集した者の中から十数名を選んで、ペーリスに料理のレシピを教えさせた。料理の味に関しては絶対の自信を持っている。将来的にはクルムファル領で採れた野菜と魚、そして肉を使った料理を提供するのが目標だ。

ホテル自体は職人を入れて細かい外壁の修理や中身のリフォームを実施した。領主の館ということで、政庁も兼ねていたためかなり部屋数は多かったのだが、バス・トイレの設置と居住性に重点を置いたため館の中身は全部リフォームすることになった。この世界は魔法があるため、職人にかかればものの1か月で全ての作業が完了し、現在では全く別の内装になってしまった。亡きクルムファル伯爵が見たら、腰を抜かすだろう。

ホテル自体は、年明けの二月ごろにオープンする予定だ。

これらの事業に加え、収税、財務、クルムファル軍や警察、警備、消防、裁判といった事柄をリコを中心に、リコの側近たちが実に頑張ってまとめてくれている。ピウスとアーガは軍の担当、パルタンとポピアは警察と警備、パーリオは抜群の計算能力を生かして収税を、ノキュは財務、ノキタは消防、ジャクンは裁判や訴訟を。そして抜群の事務処理能力を持つニーズとツージンは総務として、それぞれが忙しいときに助けに入る役割も兼ねている。これらの下に、帝都から連れてきた者たちを部下として付けている。全員、希望してその仕事に就いているので、モチベーションが高く、仕事の効率もよいようだ。貴族もいれば平民もいる、獣人もいるなど多国籍化しているのだが、これらを見事にまとめるリコの力量も素晴らしい。

屋敷内の料理は、忙しいペーリスに替り、フェリスが担うことが多くなった。彼女もペーリスに劣らず料理上手である。朝早く起きて俺たちの朝食を作り、昼は帝都に買い出し、そして、くたくたになって帰ってくる俺たちのために、夕食を作って待っていてくれる。俺たちの約束として、どんなに忙しくとも、できるだけ朝食と夕食は一緒に食べるということを約束した。そして、その食事タイムがそれぞれの報告と予定の確認の時間になっているのだ。

このところメイは食事が終わった後に研究室にこもることが多くなった。増加する農民の農具を研究しているのだという。かなり丈夫で使いやすいものを開発し、それを無料で提供しているので、農民からの感謝のされようは半端ではない。その上あの、美貌と巨乳である。男どもからの人気はとんでもないものらしい。しかし、メイの偉い所は、女性からも人気が高いところだ。常に謙虚でつつましやかな態度が、人々の心を開かせるのだろう。

そういうわけで、夜は自然とリコと一緒に過ごすことが多くなった。リコはリコでそれがうれしくてならないらしい。このところ、忙し

いにもかかわらず、彼女は常に穏やかである。とはいえ、リコが一緒にいられない時は、必ずメイが一緒にいてくれる。リコとは違い、夜は溜まっていたものをぶつけたくなるようで、いつになく彼女は積極的になる。結果的に、俺もリコもメイも、三人がうまくバランスが取れているような格好になっている。

そんなことをしていると、年が明けてしまった。年明けは休暇を長めに取り、それぞれが英気を養った後、俺たちは本格的にホテルの開業準備をすすめた。

港を整備して取引を拡大し、冒険者や旅行者の来訪もあり、彼らの宿泊スペースの準備が急務となっていた。取りあえず、住居用結界を張って対応していたのだが、所詮はキャンプである。きちんとした宿屋の建設の要望が多かったので、年の暮れから突貫工事で宿屋の建設を依頼していたのだ。この世界には新年を祝う行事は特にはない。国の一大イベントは皇帝の誕生日か皇族の結婚や出産、戴冠式くらいのものであり、わざわざ年末年始に休暇を取るのはダーケ商会くらいなものだ。しかし俺は、そこにはこだわった。ダーケ商会は帝国一のホワイト企業を目指すのだ。

突貫工事の甲斐あって、年始休暇が終わるころに宿屋は完成した。部屋数、約４０。ここには、海人族や農業から離れた女将さん連中が店を切り盛りすることになった。ここは税金さえ納めてくれれば経営には口を出さないつもりだ。

そしていよいよ、ホテルのオープンが迫ってきた。栄えある来客一号は、なんと皇帝陛下である。休暇を過ごすための行幸で、完全にプライベートということであったが、必要最低限の従者は連れて来ていたため、１６ある部屋が全部埋まってしまった。

陛下は、大人しくつつましやかそうな、美しい、というよりかわいらしい感じの女性を連れてやってきた。おそらくこの人が陛下が一番寵愛している人なのだろう。噂に聞くと、平民の出であるそうな。彼女の飾らない、純朴さに惹かれたのだと思うと、陛下のことが好きになった。

陛下は我々のサービスに痛く満足され、三日間の逗留を心から楽しんでくれた。従業員にも気さくに声をかけ、料理長が出す料理に舌鼓を打ち、皇帝の料理番をこのホテルに修行に来させるとも仰った。

逗留を終えて帝都に帰るその日の朝、ロビーで見送る俺たちに陛下は、

「来年の同じ時期にまた来るぞ。今後、余の休暇はここで取ることにする。部屋の調度品から皆の応対、窓から見える景色に日々の料理。どれも気に入った。できるなら、宮城をここに移したいくらいだの。いや、宮城を移しては、この趣が無くなってしまうか。ハハハハハ」

そう言って大満足の中、帝都に還御されたのだった。

結果的に陛下の行幸は大成功だった。ヒーデータ帝国皇帝が大満足されたサービスを受けようと、オープン以来ずっと満室の状態で、逆にクレームが出るくらいだ。しかし今のところ、サービスや料理についてのクレームは一件もない。しかしこの間、スタッフ全員で対策を協議する必要があるクレームが初めて寄せられた。その客は、チェックアウトの際、フロントで怒りの声を上げた。

「帰らなきゃいけないのに、ここの居心地が良すぎて帰れない。どうしてくれるんだぁ！」

第七十六話　新たな奴隷

俺は紙の山に囲まれた中で、カリカリとペンを走らせている。リコたちから上がってきた書類にサインをしているのだ。

税のこと、軍のこと、農村のこと、漁業のこと、そして領民からの陳情・・・などなど、あらゆる事柄に関して書類に目を通し、それにサインを書き入れていく。ようやく俺も領主らしい仕事をするようになった。

メイが中心になっている農業の復興は、思いのほかに成功している。秋に種をまいた大根、キャベツ、玉ねぎ、ホウレンソウ、ネギ、エンドウ豆は問題なく身を付けて収穫を果たした。味も実に美味しい。それに自信をつけ、農地ではいろいろな種類の野菜を作っている。どんどん人も移住してきている一方で、トラブルがないこともないのだが、何とかうまく対応できている。現在は、夏の日差しに照り付けられながらも水田には稲が生い茂り、秋の収穫が待ち遠しい状態になっている。

「さて、みんなに三つほど提案があるんだけど」

夕食時に俺は皆にこれまで温めていた計画を打ち明ける。

「提案の一つ目は、帝都にもう一つの店を出そうかと思っているんだ」

「店ですか？どんなお店を出しますの？」

「色々な食材を売る店だ」

帝都でも食料を売る店はあるが、米屋、八百屋、魚屋、肉屋と専門店ばかりだ。広い帝都の中で分散してしまっているため、一般庶民はかなりの労力を割いて買い物をしている。常々俺はスーパーマーケットのようなものを熱望していた。そして、ないならば作ってしまえばいいという結論に達した。帝都で一番不足しているのは、魚と野菜だ。新鮮な魚と野菜を売ることが出来れば帝都民にもよろこばれる。帝都の八百屋と魚屋は、希少価値があることをいいことに、かなりボッタクリな店が多い。以前から俺はこの態度が気に入らなかったのだ。

店の候補は決めてある。帝都の西、俺の今の店から南に５００メートルほど行ったところに、大きな倉庫がある。米屋の倉庫らしいのだが、現在は使われていない。しかし、きちんと手入れはされており、一般市民が多く住む地区のすぐ近くということもあって、以前から気になっていたのだ。そして、米屋もその倉庫を手放したがっていると聞き、交渉の結果予想以上の安価で購入することが出来た。

これを仲立ちしてくれたのは、遊郭・ミラヤのアキマだった。彼女は将来的にクルムファルに遊郭をオープンさせたいらしい。その相談のお礼ということで、この情報をくれたのだ。

「クルムファルでの秋の収穫が終わるタイミングで、開店させたい。店の名前も決めてあるんだ。「スーパー・ダーケ」だ」

何のひねりもない名前で、微妙な感じは否めないが、特に問題ないらしい。これに関しては問題なく承認された。

「そして二つ目が、クルムファルの街に遊郭を出すことだ」

さすがにこれはリコがイヤそうな顔をした。

「ミラヤのアキマさんから相談を受けてね。俺は許可を出そうと思う。ただし、未成年は採用しない、奴隷を使わない、仕事に就く・就かないは本人の意思を尊重する、という条件を付ける。どちらかというと俺は、アキマさんの店を文化人のサロンのようなものにしたいと思うんだ。だから外観も内装も上品で華やかなものにしてほしいとお願いするつもりだ」

てっきり反対するかと思ったリコだったが、何も言わず賛成してくれた。むしろ、フェリスやペーリスが、文化人が集まる場所を作るのはいい！と大賛成なのには驚いたが。おそらくリコも、文化人のサロンを作るということで、何とか納得してくれたのだろう。

「そして三つ目の提案は、新しい店の従業員として、奴隷を雇おうと思うんだけど、どうだ？」

正直言って、クルムファルの人間をこちらに回す余裕はない。さりとて、新しい店については、どうしても成功させたい。そのためには奴隷が一番いいと判断したのだ。しかも、明後日にその奴隷市が開かれるとアキマが教えてくれた。まずは、ここで奴隷を見たい。

「ついでに言うと、結界石の店も、できれば奴隷に任せたい」

「そうでありますなー。ご主人は領内の仕事に専念したほうが良いでありますからなー。店は奴隷に任せるのが、一番いいでありますー」

「他のみんなはどう思う？」

「私はそれでいいと思います。奴隷の方がよく働くでしょうし」

「リノスさんの方法でいいと思います」

基本的に反対はないようなので、明後日の奴隷市に参加してみることになった。

その夜、部屋に入ると、いきなりリコが抱きついてきて、俺の胸に顔をうずめてきた。

「・・・リコ？」

「奴隷を購入されて、どうするつもりですの？」

「別にどうもしやしないよ。ある程度店を任せることが出来たら解放してやったらいいんじゃないかな？」

「本当に？」

「どうしたんだい？」

「・・・リノスが気に入ったら、側室にするのでしょう？」

「しないよ、たぶん」

リコはガバッと顔を上げて荒い息で俺を見た。

「たぶん？じ、じゃあ気に入ったら側室にする可能性があるということですわね？いや別にダメだと言っているんじゃないんですのよ

？殿方は側室を持つものというのは承知していますましてやリノスは名誉侯爵とはいえ貴族ですから側室が一人というのも外聞が悪いことですしそれに私ももう年齢も年齢ですからそろそろ若い側室に・・・」

「リコ？リコ！落ち着いてくれ！」

俺はリコを抱きしめて背中をさする。

「あふっ、はっ、はっ、ふっ、だって・・・」

「俺はリコとずっと一緒に居たい。リコは俺と離れたいのか？」

「・・・ずっと、ずっと、一緒に居てくださいませ」

俺は再びリコを抱きしめ、お姫様抱っこで彼女をやさしくベッドまで運んだ。

二日後、俺はゴンとリコを伴って帝都にいた。

奴隷市に向かう道すがら、意外な人物と出会った。メイを出品していた奴隷商だ。

「これはこれは。ユーラ商会のマリスと申します。その節はお世話になりました。お売りしました奴隷は、問題はございませんか？」

「問題も何も、とんでもない拾い物だった。今では俺にはなくてはならない側近になった」

奴隷商は一瞬戸惑った表情をしたが、すぐに平静を取り戻す。そして言葉をつづける。

「今日は奴隷市へご参加で？そうですか、それならば、私共の店がすぐ後ろの建物でございます。まだ市の開始まで時間がございますので、よろしければ手前どもの店で奴隷をご覧になりませんか？」

せっかくなので、見せてもらうことにする。

店に入り、応接室に通されると、希望の奴隷を聞かれる。気立てがよく、察しのいい女性がいいと答える。俺たちが狙うのは、「教養」スキルを持っている者だ。店の管理をするのに、計算能力は必須だと考えているのだ。

「準備が出来ました」

マリスに案内をされて、別の部屋に向かう。そこは広い、大きめの椅子があり、その前はカーテンで覆われていた。俺たちが座ると同時にカーテンが開き、そこにはドレスを着た8名の女性が立っていた。俺は一人ずつ鑑定を行うが、意外にも「教養」スキルを持ったものが5名もいた。

その5名を残し、俺はそれぞれの顔を見る。人間が2人、ウサギの獣人が2名、猫の獣人が1名という顔ぶれだったが、人間たちには一切ヤル気が感じられず、目が死んでいる。ウサギの獣人は一人がまだ子供だった。そして猫の獣人は、かなりエロい。性奴隷ならコイツで決まり、と思わせるくらいのフェロモン全開で、潤んだ目で俺を見ている。

「この者たちは全員、性奴隷になることを承知しております。ただ

し、生娘は一人だけでございます」

「あのウサギの獣人か？」

「左様です。ちなみに、あの二人のウサギ獣人は親子でございます」

よく見ると似ている。どちらも聡明そうな顔立ちをしている。

「なぜ親子で奴隷落ちをしているのか、尋ねても？」

「この者たちは、さる貴族の妾とその娘だったのですが、母親が不義を働いたため、娘と共に奴隷として売られたのでございます。親子で奴隷というのは珍しいですな。売りに出ればかなりの高額で落札されることは間違いございません。親子で楽しめますからな」

ずいぶんこの親子を押してくる。おそらく、一番売りにくいのがこの二人なのだろう。できれば俺に売りつけてしまおうとの魂胆が見えてくる。俺は一息ついて、彼女たちに質問をしてみる。

「数字の１から１０。これを全部足すといくつになる？計算してみてくれ」

「「５５」」

「４０」

ウサギの親子が即座に答えを出した。もう一人の人間はやる気なく答えたと同時に、間違えている。

「どうやって計算したんだ？」

「1から9の半分は5です。5を9倍して10を足すと55になります」

ウサギ獣人の母親が答える。

「わかった。じゃあ、このウサギ獣人の親子を買いたいと思う。金額は？」

「500000Gでございます」

「高いな」

「二人とも計算ができますので」

「いや、変な計算をしているではないか。答えは合っていたが、計算は目茶目茶だろう。合ったのはたまたまだ。それとも、あの計算が正しいと証明できるのか？」

「いや、それは・・・」

「それにもう一人は子供で、まだ何もできないだろう？そこそこ使えるまでにこちらが養育と教育をせねばならんことを考えると、割高だな。しかも二人まとめてとなるとなぁ・・・」

「左様でございますか。仰ることもごもっともです。それでは・・・。250000ゴールドでは？いや、200000ゴールドでは如何でしょう？」

いきなり半値以下になるんかい。どれだけボろうとしているんだろ

うか。ここは強気に交渉してみるか。

「う～ん、二人とも教育し直すことを考えるとなぁ・・・」

「では、１００００Ｇで如何でしょう？」

さらに半値になった。ホンマに大丈夫かいな？隣のリコとゴンを見てみる。ゴンもリコも、このくらいが妥当だと考えてくれているようだ。

「・・・まあ、それでいいだろう」

「ありがとうございます。それでは早速購入手続きに進ませていただきます」

女たちは部屋を出ていき、俺はマリスに金を渡す。しばらくすると、服を着替えたウサギの獣人親子が入ってくる。

「よかったな。今日からこのお方が、お前たちのあるじ様だ」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

「・・・おねがいします」

そして、マリスは俺に向かって何やら呪文を唱え、俺の手を出すように言われ、言われるがままに右手を出すと、俺の手が光った。同時に、親子の手からも光が発せられた。

「これで、この二人はお客様の所有物になりました。もし今後、この奴隷に不都合なことがあれば買い取らせていただきますので、そ

の際はどうぞよろしくお願いいたします」

挨拶もそこそこに、俺たちは店を出た。

「お前たち、名前は？」

「ご主人様がお付けくださいませ」

「いや、今まで呼ばれていた名前があるだろう。差支えなければそれで呼びたいのだけど」

「・・・ソーニヤです」

「・・・アンジェです」

母親のソーニヤは２８歳で「教養ＬＶ２」を持っている。娘のアンジェは８歳で、「教養ＬＶ１」を持っており、娘はおそらく、生まれながらに教養の才能を持っているのだろう。

「お前たちには、店番を頼もうと思う。詳しい話は歩きながらしようか」

「・・・お母さんの計算は間違ってないもん！」

「アンジェ！・・・申し訳ございません、ご主人様」

「いや、アンジェの言うことは正しい。あれは金額をマケさせるために敢えて言ったんだ。ソーニヤのやり方は間違いじゃなくて寧ろ正しい。よく知っていたな。相当勉強したんだろうな」

「いえ、私はその・・・好きだったものですから」

「その才能を生かしてもらいたい。店が任せられるようになればお前たちを解放しようと思っている。だから、頑張ってもらいたい」

「私たちを解放してくれるの？」

アンジェの目が輝く。

「ああ、給料も払う。ただし3年は店にいてもらいたい。その後は継続して勤めてもいいし、他の仕事をして構わない。それまでは、頼む」

「「ハイ、ご主人様」」

二人とも何とか未来に希望を見いだせたようだ。

そんなことを話している間に、俺たちは奴隷市が開催されるホテルに到着した。

第七十七話　再会

奴隷市はかなりの繁盛ぶりだった。

会場の一番後ろに腰を下ろし、奴隷たちを眺める。今回はどちらかと言うと、性奴隷や兵士、冒険者のパーティーであれば需要が高そうな者たちばかりで、俺たちの購買意欲を掻き立てる者はいなかった。

しばらく休憩の後、犯罪奴隷の部になる。これは完全に冷やかしで見るつもりでいた。とはいえ前回はメイのようなとんでもない者が出てくる可能性がないわけではない。なかなかバカには出来ないのだ。

市が始まってしばらくした時、舞台袖が何やら騒がしい。どうやら女の犯罪奴隷が暴れているようだ。しばらくすると、三人の奴隷が舞台に引き出されたが、それを見て俺は驚愕した。

・・・猫人族のバカ勇者たちだった。

女の猫はずっと泣いている。そして他の男たちは暴行を受けたのか、顔が腫れ上がっている。三人ともボロボロの服を着せられている。

「さて、ナンバー１６番でございます。猫人族の男・１６歳、猫人族の女・１５歳の生娘、猫人族の男・１７歳！５０００Ｇから始めます！」

意外に反応がない。シンとした空気の中、一人の貴族風らしき男が

札を上げる。

「他にございませんか？ございませんか？」

「１００００Ｇ！」

思わずそう叫んで、俺は札をあげた。

「１００００Ｇ！他にございませんか？ございませんか？・・・それでは、１００００Ｇで落札です！」

市の終了を待たずに、俺たちは外に出た。

「リノス、どうしてあの猫人族を購入したのです？」

「リコ、覚えてないかい？あれは勇者を名乗って騒動を起こした猫人族だ」

「おりましたわね。まさか本当にあの者たちですの？」

「おそらく間違いない」

落札者が集まる部屋に向かう。しばらく待っていると、奴隷商と思わしき風体の男が俺のところにやってくる。

「この度はご落札ありがとうございました。早速、購入の手続きを進めさせていただきたく存じます」

そう言って男は別の部屋に俺たちを案内した。

メイの時と同じように、金を払い、俺の血液を提供する。その直後、あのバカ猫たちが連れて来られる。舞台で見たボロボロの服ではなく、男はシャツ、女はワンピースに着替えさせられていた。一列に並ばされ、腕や手に俺の血液を付けられている。奴隷商が呪文を唱えると腕が光る。

「これで、契約は完了しました。もし、この奴隷がお気に召さない場合は、買取を致しますのでその際は是非、ご用命くださいませ」

そう言って男は名刺のようなものを置いて部屋を出て行った。

「この度は僕たちをお買い上げいただき、ありがとうございました。今後は必死で務めさせていただきます」

「ちゃんとした言葉が話せるようになってるじゃないか、バカ猫ー」

猫たちがまじまじと俺を見る。

「あっ！あの時の無礼者じゃ！」

女の猫人族が声を上げる。

「どうやら俺は、つくづく厄介ごとを引き寄せるらしいな。まあ、お前らと会ったのも何かの縁だ。ここじゃ話がしづらい。外で話そう」

俺たちはバカ猫たちを連れ、外で待っていたソーニヤとアンジェを連れて、ホテルのレストランに入った。

「腹減ってるだろ？好きなものを好きなだけ頼め」

しかし、奴隷たちはかなり戸惑っている。仕方なく、俺たちが頼む料理と同じものを頼むことになった。

「それにしてもお前たち、一体何で犯罪奴隷なんかになったんだ？」

「領主とモメたんだ。その時に領主とその家来たちに傷を負わせてしまったんだ」

「うわ～それは～」

「だからそんなに傷だらけなのでありますなー」

俺と別れてからのバカ猫どもはかなりの苦労をしたらしい。村から村へ渡り歩きながら、ある時は人に騙され、ある時は魔物に襲われたりしながら、旅をしたのだという。そして、とある町にたどり着いたとき、大規模な魔物の討伐があり、バカ猫たちも半ば強制的に参加させられたらしい。そこで、剣の心得のあるウィリスはそこそこ活躍し、回復魔法が使えるシェーラは後方部隊でかなり重宝された。それが縁になって町に住むことになり、ウィリスは傭兵として商隊の警護などを行い、シェーラは怪我人の回復を行う商売を始め、そしてユリエルはその教養を活かし、町の子供たちに読み書きを教える寺子屋のようなものを作り、そこで先生をしていたのだという。

彼らには基本的に欲はなく、三人が暮らしていけるだけのお金があればいいということで、シェーラとユリエルはかなり安価で仕事をしていたらしい。その結果彼らは町の人から多くの感謝をされ、かなり充実した日々を送っていたのだった。

しかし、シェーラに目を付けた町の領主が、彼女を妾に差し出せと

言ってきた。当然三人共にその要求を突っぱねたが、領主はしつこかった。そして、その町を出る決意を固めて、旅に出ようとしたところを領主たちに捕まり、そこで大捕りものを演じた。結果的にウィリスは領主の従者に傷を負わせ、シェーラとユリエルも捕まる際に領主に怪我をさせた。それが罪に問われ、結果的に犯罪奴隷となり、帝都に売られてきたというわけである。

「人のために働いて、人に感謝される。すごく充実していたんだが、このザマだ。僕たちはよくよくツイていないらしい」

「あら、そんなことはありませんわよ？リノスに買われたのは、あなた方にとっては幸運だったと思いますわよ？」

「あなたは・・・」

「ヒーデータ帝国第一皇女のリコレットです」

「あっ、あの時の高飛車な女！」

「シェーラ！言葉を慎め！」

思わずウィリスが口を挟む。なかなかいいお兄ちゃんらしくなっている。

「ご主人様をリノスと呼び捨てにしておられたところを見ると・・・」

「そう、私とリノスは結婚したのですわ」

「けっ、結婚？え？何で？てっきり皇女様の家来になったものだと・

・・」

その後、俺はリコとの結婚に至った話を聞かせてやった。

「そんなことが・・・。それにしてもご主人様はすごいや。皇女様を妻に迎え、帝国の名誉侯爵になり、第二皇子様の領地を管理するなんて・・・。そんな人に僕は随分と失礼なことをしたんだな」

「それが分かっていれば、十分だろう。いい経験してきたじゃないか。ダメだったらやり直せばいいんだ。それにしてもお前、随分と成長したな。これなら大丈夫そうだな」

「本当に、色々と苦労をした。でもいろんな人に助けてもらった。ご主人様の色んな人と話せというのは、間違いじゃなかったですよ」

そうして皆で、デザートを堪能しつつ、今後のことを話す。

「お前たちに頼みたいのは、店の管理だ。ソーニヤとアンジェは、結界石を売る店だ。軍の関係者なんかも来るから、舐められちゃダメだぞ。そして、ウィリスたちは、食材を売る店だ。これは秋ごろに開店する予定だから、その準備もしてほしい。むろん、店同士で人手が足りないときは、協力し合いながらやってくれ」

皆、無言でうなずく。

「お前たちの住居は店だ。しかし、寝るためのベッドやその他の生活品をそろえるのに時間がかかるだろうから、今日から三日間はこのホテルに泊まれ。その間に生活品を揃えてくれ。もちろん、服も買ってくれ。金はゴンに渡しておくので、必要があれば言ってくれ。ゴン、頼むぞ」

「承知したでありますー」

そして、次の日からゴンに連れられた5人の奴隷は、帝都の街で買い物に走り回った。

結果的に、結界石を売っている店については、広さがないために、ここで暮らすのは断念することになった。一方で、倉庫には二階があり、ここを生活の場として使うことになった。5人が入ってもまだまだスペースがある。ただし、キッチンとトイレがないので、そこが悩みどころであったが、ウィリスたちが自分たちで材料を買ってきて作ってしまった。旅をしている最中に身に付けたとのことで、こいつは意外に頼りになるかもしれない。

早速、結界石の店はルアラから引継ぎを済ませたソーニヤ親子が営業を開始した。特に大きな問題が発生することなく、今のところ順調である。それどころか、俺の気まぐれで店が開かれないことが無くなり、特に商人たちの間で評判が良いようだ。加えて、ソーニヤがそこそこの美人である。いい寄ろうとする軍人や商人もいるらしく、なかなかの人気ぶりらしい。

ウィリスたちの倉庫は、今のところガランとしているが、保存スペースと販売スペースとに分け、その間に壁を作るなど、着々と準備が進んでいる。収穫された野菜や作物を倉庫の前で露店を出すようにして売っている。こうしておけば、開店までのいい広告になるし、事前に味を知ってもらえれば、開店時に沢山の客が来るだろうとウィリスが提案してきたのだ。俺はそれに乗ることにし、カイリークをはじめとする各村や漁村への転移結界を倉庫の保存用スペースの中に設置した。そしてその中にも、冷凍用と冷蔵用の結界を張り、鮮度が落ちないよう万全を期した。

売る量は少ないながらも、ウィリスたちの店は繁盛している。ありがたいことに、開店を早くするように言ってくる客も多い。これまで苦労した分、ウィリスたちは愛嬌を身に付けており、それも客が訪れる要因になっている。

これ以降、俺は彼らを「バカ猫」と呼ぶことはなくなった。

第七十八話　敵は本能寺にあり

「クルムファル領がとんでもないことになっている」

「どういうことだ？」

「北の草原が穀倉地帯に生まれ変わっている。米、麦、そして畑・・・見渡す限り作物が育っていた」

「まさか、あんなどうしようもない土地にか？夢でも見たのではあるまいな？」

「バカなこと言うな！ここに来る前にしかとこの目で見たのだ。間違いない」

「クルムファル領は、塩に加えて食物というカードも手に入れたわけだ」

「それだけではない。館を改良したホテルを中心に、クルムファルには多くの人が集まっている。人口も飛躍的に増えている。また、傭兵も多く召し抱えたという噂もある。我々が知っているクルムファルではないということだ」

「くそっ、忌々しい。これもみな、あのバーサームのせいか！」

帝都にある高級ホテルの一室にいるのは、ジョーノ男爵、オーシェ北方軍副団長、グラゴレイル男爵の三人である。三人ともクルムファル領の管理を任されていたが、現状を知るやすぐにそれを投げ出

したという共通点を持つ間柄である。実はこの三人は王立学校の同級生であり、いわゆる幼なじみの関係にあった。

彼らはまだ知らない。バーサーム家が「漁業」というもう一枚のカードを持っていることを。

「これ以上クルムファルを放置すれば面倒くさいことになりそうだな」

「いや、もう既に面倒くさいことになっている。我が領からもクルムファルに移住する民が絶えぬ。これ以上民の流出があれば、我が領は窮地に追い込まれることになる」

そう嘆くのはグラゴレイル男爵だ。ちょうどクルムファル領の北側に領土を持っているが、領土の半分を森に覆われ、山の中という条件も相まって、少ない平地に肩を寄せ合うようにして民と共に生きている。

「確かにグラゴレイルのあの狭い領土で民が流出すると、厳しいものがあるかもしれんな」

「・・・いいことを考えた。バーサームを追い落とし、そしてクルムファルの食料全てを手に入れる方法がある。僕たちであの領土の塩と作物を山分けしようじゃないか」

「さすがはジョーノ。今まで黙っていたのは、そんなことを考えていたのか！相変わらず知恵が回るな！」

ハッハッハ！と愉快そうに笑うオーシェ。三人の密議は、夜を徹して行われた。

三日後、グラゴレイル男爵は帝国騎士団北方軍団長、ラファイエンスと副団長のオーシェの下を訪ねた。

「珍しいな。男爵殿が私を訪ねてくるとは」

「いやなに、三日前、帝都に向かっていたところ森の中で盗賊に襲われてな。何とか襲撃は躱して難を逃れたが、明後日に私が領地に帰る際に帝都の森を通らねばならん。できれば騎士団に護衛を頼めないかと思ってな。なにも我が領土まで護衛せよとは言わん、森を抜けたクルムファル領の近くまで護衛してくれればよいのだ」

「盗賊？・・・そんな話は聞いていないが？」

「ならば調べてくれ。しかし、私の明後日の帰還は変更が出来んのだ。ジョーノ男爵が、我が領に視察に来られることになっていてな。私と一緒にグラゴレイルに行くのだよ。本来ならば警護を雇うのだが、何せ客人を連れている。万が一があってはならない。だからこそ帝国騎士団にお願いに来ているのだ。そこのところを考えてもらって、警護を付けてもらうことは出来ないか？」

「団長、自分からもお願いいたします。クルムファル領では、１００名を超える盗賊がおり、私が帝都に引き上げる際にも襲われました。精強な帝国騎士４０名を討ち取る者たちで、油断がなりません。おそらくその一部が帝都の森に潜んでいるかと思われます。ここは軍勢を出して男爵を警護しながら森の中を調べるべきです。」

「・・・まあ、男爵の警護と盗賊の探索であれば、兵を出してもいいだろう。１００ほど連れていけ」

「いえ、団長、できれば私の配下１０００名を連れていきたいと思います。部下たちの演習です。良い訓練の機会になろうかと思いますので」

「・・・わかった。しかし時間をかけることは許さん。多くて三日だ。それ以上の捜索は控えよ」

「ハッ」

「団長殿、ご配慮、感謝する」

こうしてオーシェは兵を動かす許可を得たのだった。

さらに三日後の昼過ぎ、ジョーノ男爵、グラゴレイル男爵を同道したオーシェ軍が帝都を出発した。

一行は順調に駒を進め、夕方には森の中、クルムファル領との境まであと少しというところで行軍は停止した。そしてオーシェは全軍に野営を命じた。

「まずはここまで順調だな」

「僕の作戦に抜かりはないよ。きっと明日の昼にはバーサームの首と胴は離れてしまっているよ」

「あの成り上がり貴族はこの俺様に、指揮官として無能などとぬかしおった。今こそその汚名をすすぐとき。ヤツに俺の戦いのやり方をじっくりと見せてやる！」

「おいおい、あんまり熱くなりすぎないでくれよ？」

「わかっている。俺はいつでも冷静だ」

「そう願うよ。では、ここで作戦の最終確認をしておこう。夜に紛れて僕たちはクルムファル領を進む。そして、夜明け前に森に侵入し、バーサームの館を急襲する。ヤツは館にいる。クルムファルに放った僕の斥候部隊が、昨日も館に帰る姿を目撃している。ヤツは殺す。そして・・・、館の人間も全員殺してしまおう。その後は帝都に引き返す。バーサームの首と盗賊の首、盗賊の方は、帝都のスラムから適当に人間を選んでいるので問題はない。それらをもってラファイエンス団長の下に行く。途中で盗賊に襲われて戦闘になった。そして盗賊はバーサームの館に逃げ込んだ。捕らえようと屋敷に踏み込むと、名誉侯爵殿は盗賊をかばい、俺たちに攻撃を仕掛けてきた。僕たちは仕方なく戦い、乱戦になった結果、屋敷内の人間にも被害が出た。実は盗賊の黒幕はバーサーム名誉侯爵だった、という筋書きだ」

「ああ、わかっている」

「事がなった後に僕が陛下にお目通りして、グラゴレイル男爵と共にクルムファル領を管理させてもらえるよう奏上する。そして、クルムファル領に入った僕たちは、全ての作物と塩を収穫し、それを山分けにする」

「しかし、そんなにうまくいくのか？ヴァイラス殿下が黙っていないと思うが」

「それがいくんだよ。バーサームは陛下の覚えがめでたいからね。

それを嫌う貴族たちも多いのさ。バーサームが反逆者となれば、ヤツを押すヴァイラス殿下も、ひいてはグレモント宰相の発言力も弱まる。それを狙って僕を支持してくれる、というわけさ」

「それがうまくいくとなると、我がグラゴレイルは潤うし、オーシェは出世のための資金ができる。なによりジョーノはクルムファル領が手に入るかもしれんな」

「ぜひ、そうしたいね。僕は陛下がほれ込んだというホテルとその景色を手に入れてみたいんだ」

「お前は子供のころからそういった変わった物を手に入れたがるな」

「何を言う！君にはわからんのだよ。あのホテルの価値というものが」

「お前たち喧嘩をするな！なぜかいつもお前たちの喧嘩はこのオーシェ様が仲裁役になるな。喧嘩は作戦完了後にしても遅くはないぞ」

「確かにな」

「そうだな」

「よし、そろそろ部下たちを招集する。ここから先は俺の役割だ。俺の手並みを見せてやる」

「期待していますよ」

「頼んだぞ！」

深夜、静寂を破って、野営中の帝国騎士団に緊急招集がかかった。訓練の行き届いた兵士たちは直ちに準備を整え、整列を完了する。それと同時に、オーシェが彼らの前に立つ。

「これから、夜間行軍を実施する。全員、実剣を装備せよ！盗賊の討伐に向かう。攻撃対象は盗賊共がねぐらにしている館だ。中にいるものは全員討伐せよ！」

オーシェは剣を抜き、それで東の方向を指しながら声を上げた。

「盗賊の首魁は、バーサーム！帝国名誉侯爵、バーサームである！続け！」

１０００名の帝国騎士団が、音もなく行軍を開始し始めた。

第七十九話　国に叛くのは「謀反」。国が叛くのは？

深夜、けたたましく屋敷の勝手口を叩く音で目が覚めた。クルムファルからの使者らしい。

「どうしたアーガ？」

「敵襲です。夜間探索のハーピーから敵襲来のサインがありました」

「わかった。すぐ行く」

俺とリコ、ゴン、フェリス、ルアラ、そしてイリモを連れて転移結界に乗る。館の中は騒然としており、ピウスが傭兵たちを集めて防衛体制を敷いていた。窓の外にはハーピーが集まっているのが見え、ゲュリオンキングのゲーキも外に控えているのが見えた。みな、俺の到着を待っていたようだ。

「きゅいいいいー」

館の第二の主人と化しているベビーゲュリオンのイトラが、パタパタと小さな羽をはばたかせて俺のところに飛んでくる。俺はイトラを抱っこして外に出る。そこにはハーピーとゲーキが控えていた。

「ご主人様、館からまっすぐ東の方向、森を出たところに、敵が集結しています」

「我々ゲュリオンも既に森の中に控えているのである」

「わかった。敵の様子を見てくる」

俺はイトラを胸に抱き、ゴンを背中に乗せ、イリモに乗って空に舞い上がった。

まだ夜明け前の薄暗い中、敵は森を囲むように陣を敷いていた。どうやら帝国騎士団のようだ。

「狙いはご主人の館のようでありますなー」

「そのようだな。森の中の魔物を討伐しながら進むのだろう。この様子じゃ、館に到着するまで数時間はかかるだろうな」

「そんなに早くでありますかー」

「そうだな、夜が明けると進軍してくるつもりだろう。それまでに、準備を終える必要があるな。しかし何故、帝国騎士団から俺は狙われるんだ？皇帝陛下の命令を忠実に実行しているのにな」

「不思議なこともあるものでありますなー」

「なあゴン、家来が国に背くのはよく聞くけど、国が家来に背くのは何て言うんだ？」

「謀反、とは違うでありますなー。吾輩にも、わからないであります」

そんな話をしながら、俺たちは館に戻った。

イリモから降りた俺はまず、上空に雨雲を作り、強い雨を降らせた。

これならば地面がぬかるむので、敵の進軍速度は遅くなるはずだ。
そして俺は、最悪の状況を想定してこの館を中心に結界を張る。これでリコたちが襲われる心配がなくなった。

「ピウス、お前は傭兵部隊を率いて館の正面の森に迎撃部隊を展開しろ。全員に魔物除けも付与した結界を張ってやる。攻めてくる敵に矢を放ち、石や魔法をぶつけろ。そして、ゲーキ、おまえたちゲュリオンは館の東西の森に潜め。魔物が出てきたら蹴散らしながら行け。ハーピーたちは森の中で待機だ。斥候部隊として敵に動きがあれば知らせてくれ。最終的にお前らも攻撃に移ってもらう」

俺は後ろを向いて、フェリスに指示を与える。

「フェリス。お前はルアラと一緒に空を移動して、カイリークとトホツのほうに向かえ。ルアラはトホツのカールスに、フェリスはカイリークのマルセルに、それぞれ海人族を集めて、集落の外に陣取り、帝国騎士団をけん制してもらいたいと伝えるんだ」

「「わかりました」」

「皆聞け！この戦いは俺がこの館に着いた段階ですでに勝利は確定している。あとは敵をいかに殲滅するかだ。ギリギリまで敵を引き寄せて一網打尽にする。俺が上空に花火を上げる。それを合図に、攻撃を開始してくれ！」

フェリスはルアラを抱えて飛び上がり、空の彼方に消えた。俺は雨を止ませる。それと同時に、それぞれが配置についていく。全ての戦闘準備が整った時、日の出を迎えた。

同じ頃、帝国騎士団も準備が完了していた。

「日が昇ってきたな」

「まさしく、我々の輝かしき未来を象徴するかのような見事な朝日だな」

ジョーノとグラゴレイルは眩しそうに朝日を見ながら呟いた。

「よーし、そろそろ出発する。お前たち、吉報を待っていてくれ」

馬に乗ったままで得意げにオーシェが声をかけてくる。二人は笑顔で彼を見送った。

「全軍、出発するぞ！」

「ちょっと恐れ入ります！」

行軍を開始しようとしたところ、思わぬ横やりが入る。忌々しそうに声のした方向を見ると、部下のクノゲンが馬を走らせて近づいてくるのが見えた。

「クノゲン、何だ！」

「この攻撃、しばらくお待ちください」

「何故だ！」

「森の中の進軍です。先ほどの雨で地面がぬかるんでおります。先頭の部隊が崩れますと、群衆雪崩になり、味方に甚大な被害が出る可能性があります」

「先頭の部隊が崩れるだと?何故、そう言い切れる?」

「長年、戦場におりました勘です。このままではあまりに敵の注文通りの展開になる恐れがあります」

「クノゲン、お前の爵位は何だ?帝国士官学校の何期生だ?」

「・・・自分は平民です。士官学校には通っておりません」

「そんな戦場の教訓ならイヤというほど学んでいる。お前の経験よりはるかに多い教訓をな。お前のその勘とやらはどのくらいの確率で的中するのだ?絶対なのか?」

「いえ、絶対とは言い切れませんが・・・。せめて、地面が乾くまでお待ちください。それに後方に海人族の部隊も見えます。背後を突かれますと我々は躱すことのできない痛打を受けることになります!」

「勘でしか考えられないお前に教えてやろう。海人族どもはただの牽制だ。魚を取ることを第一とする奴らが戦闘に加わるわけはなかろう。この戦いは日が昇りきるまでが勝負なのだ。我々は太陽を背にして進む。敵は太陽を見ながら戦わねばならん。この好機を逃すバカがどこにいる?」

「戦況はよく存じております。副隊長殿が戦場に出る前から戦場を駆け回っておりますので」

「黙れ!言わせておけば!指揮官はこの俺だ!この戦闘は俺のやりたいようにやる!お前の指図は受けん!」

そう言い捨ててオーシェは進軍を開始した。

屋敷の窓辺から、帝国騎士団の全ての部隊が森の中に入ったのを見届けた俺は、思わずつぶやいた。

「勝ったな」

「もう、戦いの趨勢を読んだのでありますかー」

「勝手知らない森の中、しかもぬかるんだ足元のまま軍を進めるのは自殺行為だ」

一方のオーシェも勝利を確信していた。敵は寡兵。多く見積もっても１００が精々だろう。一気に力押しで攻めれば陥落させることはたやすい。しかも、兵士たちには全員、ダーケ商会から買い取った結界石を装備させている。そのため、森の中で魔物に遭っても傷つけられることなく兵を進めることができる。現に前方では魔物との戦闘はあるようだが、問題なく駆除できている。バーサームは自分が作った結界石を装備した者に殺されるのだ。これほど滑稽な話はあるだろうか？オーシェは思わず笑みが漏れそうになるのを必死でこらえた。

気晴らしに周囲の森の風景を見る。オーシェの頭の中はすぐに、この戦いが終わった後のことでいっぱいになっていた。

その時、ふと乗っている馬の足が止まった。いきなり現実に引き戻されたオーシェは、不愉快さをあらわにしながら、前方の部隊を見た。部隊の進軍が止まり、馬たちが硬直している。進軍を止めるな

と言おうとしたその時、オーシェの耳に聞きなれない音が聞こえた。

マップで見ていると、帝国騎士団とピウスの部隊が肉薄してきている。あと5分少々で両軍がぶつかる地点まで来ている。おそらく、ピウスからは敵の部隊が見えているはずだ。俺は灼熱弾を空に向かって放つ。ドゴォォォォーンをいう凄まじい音が上空に鳴り響く。すると、左右に配置したゲュリオンが突撃を始めた。

戦端を開いたのは、ピウスの部隊だった。正面から堂々と攻撃していく。いきなりの爆発音で浮足立っていた帝国騎士団は完全に虚を突かれた形になった。帝国騎士団は結界石を装備しており、ピウスたちの剣や魔法は弾かれてしまう。しかし彼らは馬の足を狙った。馬たちは痛みと驚きのあまり暴れ、兵士を地面に放り出したり、兵士を乗せたままあらぬ方向に走り去ったりした。

その様子をハーピーたちは冷静に森の木の上から観察し、鳴き声を使って仲間たちに伝達し、俺に情報を伝えてくる。俺はすぐに魔石を無効化する結界を森全体に張る。かなりＭＰを消費したが、それでも、全体の１／３程度だ。全く問題はない。

一方で側面に展開した部隊は、その両方からゲュリオンたちの突撃を受け、ある者は吹き飛ばされ、ある者はゲュリオンの下敷きになった。当初は結界に守られて命をつないでいたが、突然結界が機能しなくなり、阿鼻叫喚の地獄絵図が展開された。正面の部隊も同様に斬られる者が続出し、部隊は大混乱に陥った。

オーシェは夢を見ているかの如き感覚に陥った。前方の部隊が小競り合いを続けながらゆっくりと退却を開始し、両側面からゲュリオ

ンの集団が迫っていた。

「あ、ああ、あああ・・・」

声にならない声を出すオーシェの横で、クノゲンの叫び声にも似た声が聞こえる。

「・・・団長！副団長！撤退しましょう！撤退です！」

「ああ、うわあああ」

「ええい！役に立たん！皆、撤退だ！森の外まで撤退する！総員撤退！」

オーシェの馬の轡を取り、無理やり馬を操りながら、クノゲンは撤退を開始した。

オーシェは固まったまま身動きが出来ない。思考が追い付かない。なぜ俺は逃げている？１０００もの騎士がいるのに。なぜ兵士たちは死んでいるのだ？結界はどうなっている？

オーシェは、クノゲンに引きずられるようにして撤退する。結果的に帝国騎士団は、その１／３を失いながら撤退を行っていた。泥と化した地面を馬の蹄がさらに抉ったことで、泥は更に深みを増していた。皆、慌てて撤退しているので、統制が取れておらず、馬同士がぶつかり、兵士が地面に投げ出されるということも頻発していた。

ようやく森を抜け、ジョーノとグラゴレイルの下に戻ってきた時は、オーシェの周囲にはわずか１５駒が従うのみであった。

「一体何だ！どうしたんだ！」

「おいオーシェ！何なんだこの有様は！説明しろ！」

信じられないという顔をするオーシェは、二人の質問に答えられない。徐々に兵士たちが森から撤退してくる。それを追うようにして、ゲュリオンの大群が森の中から姿を現し、上空には数十羽のハーピーが出現した。兵士たちに動揺が走る。

「森の中で我々は敗北しました。バーサーム軍とゲュリオンに完全に敗北しています」

荒い息でクノゲンが答える。

「これだけの魔物がいるなんて聞いてないぞ！」

「ジョーノ、あれを！」

グラゴレイルが指さした方を見ると、海人族の部隊が彼らの背後を固めようとしている姿が目に入った。

「完全に我々は包囲されましたな」

息を整えながらクノゲンは冷静に戦況を分析する。

「おい、どうすればいいんだ！全軍をまとめて、帝都かグラゴレイル領まで突撃するんだ！」

「この包囲を突破するのは無理です。大人しく降伏するしかないでしょう」

「貴様、それでも帝国騎士団の兵士か！」

「兵を無暗に死なせないのも戦いの基本です。降伏がお嫌ならば、自決なされませ。毒を煽るもよし、短剣で心臓を突くのもよし。短剣であればお貸ししますぞ？むしろあなた方貴族は、潔い自決が求められますがね」

「自決・・・」

グラゴレイルとジョーノは顔を見合わせた。

しばらくして、ジョーノ、グラゴレイル、オーシェは、クノゲンを使者として、三名の連名で降伏を願い出たのだった。

第八十話　戦後処理は面倒くさい

「あいつらか・・・」

降伏の使者であるクノゲンは降伏文章をピウスに持参し、それをハーピーが俺の下に素早く届けてくれた。その書簡に記された名前を見ながら、俺は舌打ちをしていた。自分たちが放り出した領地に復興の兆しが見えたからと言って、まさか軍を率いて奪いに来るとは思わなかった。

「まずは敗軍の将たちを引見しなければならないでありますなー」

「そうだな。本来はここに三人を連れてくるのが筋なんだが、あそこからじゃ遠い。ピウスの手紙にもある通り、俺が行くしかないな」

俺はゴンを背中に乗せ、イリモに乗って奴らの下に向かった。俺たちの姿を隠す結界を張り、上空から状況を見て回る。帝国騎士団はピウスの部隊とゲュリオン、そして海人族の部隊に完全に囲まれており、さらに上空には、帝国騎士団からは見えないが、ハーピーが飛び交っている。蟻のはい出る隙間もないほどに囲まれているのだ。俺はイリモに戦場から少し離れたところに降りてもらい、結界を解除して、奴らのところに向かった。

「ピウス！待たせたな！」

「リノス様、お待ちしていました。降伏した三名です」

ジョーノ、グラゴレイル、オーシェの三人が項垂れるようにして拘

束されていた。特にオーシェは顔面蒼白で死人のような顔をしていた。俺はそいつらをイリモの上から一瞥し、

「ここでは話が出来ん。この三人はホテルクルムファルで引見する。クエナに空いている部屋を使うと伝令を出せ」

ハッ！とピウスの配下の一人が返事をし、馬を走らせる。

「ホテルは基本的に満室ではないのでありますかー？」

「いや、最悪の状況を考えて、必ず一部屋か二部屋は空けてある。そうしないと、スタッフたちが回らないのだ」

そんな話をゴンとしていると、一人の男が俺の前に進み出る。

「帝国騎士団のクノゲンと申します。この度は我々へのご厚恩、感謝であります。本来ならば騎士団副団長のオーシェが応対せねばなりませんが、ご覧の通りの状況です。誠に不躾ではありますが、私を介添えとして同行させていただきたく、お願い申し上げます」

「ク・・・クノゲ、ン、勝手・・・な・・・ことを・・・する・・・な」

息も絶え絶えにオーシェが呟く。

「このポンコツ野郎じゃ話が出来なさそうだ。いいだろう、クノゲン。同行を許そう」

「ありがとうございます」

「ピウスはこの四人を連れていけ」

オーシェは一人で歩くことが出来ず、クノゲンに肩を貸してもらいながら連れられていった。

さすがに司令官が連行される場面は、兵士たちには衝撃的だったようで、動揺が走っている。俺は兵士たちの前に進み

「静まれ！全体気を付け！！」

一瞬のうちに隊列が整えられる。さすがによく訓練されている。

「クルムファル領を管理しているリノスだ。諸君たちは俺たちの館を攻撃した。そのために俺たちも防衛手段を取らせてもらった。亡くなった兵士たちには哀悼の意を表するが、これも戦場の習いだ。この戦いを起こした張本人たちには罪に問うが、諸君たちは命令に従ったまでで、俺たちに敵意はないと信じる。追って帝都に帰還の手続きをとる。指示があるまで待機せよ！」

俺はマルセルとカールスにそれぞれ騎士団の兵士を預かるよう指示を出した。兵士たちは唯々諾々と彼らに引率されてカイリークとトホツの町に向かっていった。

「フェリス、ルアラ、よくやったぞ」

「エヘヘ。大したことじゃないですよー。それにしてもリノスさん、すごいですね。すごいかっこよかったですよ」

「師匠、まるで神様のように眩しかったです」

「世辞はいい。お前たちは館に帰って、リコたちを警護してくれ。ゲーキもご苦労だった。戻って休んでくれ。ハーピーたちは引き続き空を見張ってくれ。その時はカイリークとトホツの騎士団が大人しくしているかも忘れずに頼む。何か異常があればすぐに知らせてくれ。ご苦労だった！」

皆が引き上げていく。俺は飛び立とうとするフェリスを呼び止め、

「館に着いたら、ハーピーとゲュリオンたちにぜんざいを作ってやってくれ。少し多めに作れよ？俺達も食べたいから」

「任せてください！では！」

「お姉さま痛いです！乱暴にしないでください！」

「うるさいわね！大人しくしてないと落ちるわよ！」

ギャアギャア言いながら二人は森の奥に消えていった。俺はイリモと共に、ホテルクルムファルに向かった。

「さて、一体なんでこんなことになったのか、訳を聞こうか？」

「・・・」

ホテルのスイートルームで始まった降伏の会談は、重苦しい雰囲気が漂っていた。三人共に顔面蒼白で俯いている。

面倒くさいのでこいつらを鑑定する。

「・・・大体わかった。お前たちはクルムファル領の収穫された作物を横取りするためにこんなことを起こしたんだな？バカな奴らだ。お前たちの下らない欲望のためにいったい何人の人間が迷惑したと思っているんだ。バカ、という言葉以外お前たちを形容する言葉を俺は知らん」

「・・・き、貴様などに、わかって、たまるか」

絞り出すようにオーシェが呟く。

「アホかお前。部下を見殺しにした挙句、死ぬこともできずにのうのうと生き残っている奴のことなど、知りたいとも思わん」

オーシェは殺意を込めた目で俺を見ている。

「お前たちが起こしたこの戦いの理由は、クルムファル領の収穫物の横取り。違うのなら違うと言え」

三人共に俯き、震えている。

「無言は肯定と受け取るぞ。それにしてもお前ら厚かましいな。自分たちが放棄した領地が復興したからその収穫物を奪う。どういう思考回路を通れば、そんな考えに至るんだ？死んだ兵士が哀れすぎるな。クノゲン、そもそもこの軍は一体何だ？よくこれだけの兵士を集められたな」

「我々は北方軍に所属しており、オーシェ副団長の旗下にある兵たちです」

「被害はどのくらいだ？」

「約、半数が死傷したと見ています」

「そんなにも兵を犬死させたのか。マジでポンコツだな」

「僕たちをあまり粗略に扱わない方がいいぞ。僕がその気になれば、君の身分をはく奪することなど、簡単にできるんだ」

「ジョーノ、脅しになってないな。大体俺は身分には興味がない。むしろそういう煩わしいことから解放されたいと願っている。身分はく奪？ハッ、こちらからお願いしたいわ！」

ジョーノは唇をかみながら俯いている。

取りあえず、この三名はホテルで軟禁状態にすることにし、その警護をピウスたちに任せた。俺は報告のため帝都に向かう。途中、カイリークとトホツの町に寄り、捕虜となっている騎士団の様子を見る。特に大きな問題もなさそうだが、やはり同僚が魔物に蹂躙されたのがショックだったのか、皆、暗い顔をしている。

兵士たちに飯を食わせてやってくれと、食料を置いておこうとしたが、小母さんたちに断られた。２００人以上いるのだが、美味いものを食わせてやるよ！という笑顔にちょっと感謝しながら俺は帝都に向かった。

夕闇が迫るころ、宮城に着き、宰相閣下に取り次ぎを願う。しばらく待たされたが、宰相閣下とヴァイラス殿下がやってくる。俺は今日のことを二人に報告した。

「帝国騎士団が？そんなバカな」

「それは本当のこと・・・なんだろうな」

「本当ですよ。まずは、兵たちを帝都に帰さなくてはいけないと思うのですが」

「それはそうだ。北方軍の軍団長はラファイエンス殿だ。彼にも知らせてやった方がいいだろう。誰か、ラファイエンス殿を呼んでこい」

王国騎士団の詰め所は宮城の中にあることもあって、思いのほか早く軍団長はやってきた。

「何と・・・オーシェが・・・。まさかそんなことを考えていたとは・・・」

軍団長はかなりショックを受けているようだ。銀髪をきれいにまとめた、ナイス・ガイの風貌をしているが、その顔に大きな影を落としている。

「わかりました。今回のことについてはこのラファイエンス、心からお詫びする。明日、私がオーシェとその兵達を連れて帰ろう」

「くれぐれも、兵たちに罰を与えないようにお願いします」

「もちろんだ。オーシェの命によって多くの兵が失われた。一番の被害者は兵たちかもしれんな」

ジョーノとグラゴレイルについても拘束されることになり、明日の朝、俺はラファイエンスと共にクルムファル領に戻ることになった。

城を出て、イリモに乗って屋敷に帰る。全員帰っているかと思いきや、まだ誰も帰ってきていなかった。そのまま転移結界に乗り、クルムファルの館に移動する。すると、リコ、ゴン、フェリス、ルアラがいた。

「ぜんざい、作りましたよー。みんなとても喜んでくれました」

「リコ姉さまにも手伝ってもらいました。姉さますごく手際がいいんですよ」

ここだけは平和な時間が流れている。俺はこれまでのことと明日のことを説明する。

「それは大変ですわね。私たちは今日はこの館に留まります。何が起こるか分かりませんですから」

「リコ、一人で大丈夫か？」

「フェリスやルアラがいるから大丈夫ですわ。いざとなればゴンもいますし」

「そうか、じゃあ頼むぞ」

俺はリコを抱きしめてから、屋敷に帰った。

ダイニングでペーリスとメイが待っていた。彼女たちの顔を見ると、昼から何も食べていないことを思い出し、急激に腹が減ってきた。何か作りましょうというペーリスの言葉に甘えつつ、久しぶりに俺も一緒にキッチンに立つ。メイも一緒に手伝ってくれた。今日の日

の話をしていると、あっという間にパンにスープにサラダ、黄金鳥のから揚げが出来上がった。この鶏肉も残りわずかになってきた。またジュカ王国に行ける日があれば、また狩りたいものだ。

ガッツリ食って満腹になった俺はメイと風呂に入り、そのまま一緒にベッドに入った。

第八十一話　見事なる手腕

唇に柔らかい感触を感じて目を覚ます。しばらくこのままでいたいと思いつつ、目を閉じたままその感触を楽しむ。ゆっくりと口の中に柔らかいものが入ってくる。俺はそれを存分に堪能し、目を開ける。美しいメイの顔がそこにあった。

「朝です。ご主人様・・・」

メイの体は温かい。少々肌寒くなってきたこの季節の朝にはちょうどいい。俺はメイを抱きしめ、もう一度唇の感触を楽しんでから、ベッドから起き上がった。メイも起き上がり、テキパキと服を身に付けていく。

「ああ、残念だ」

「どうされました？」

「メイのキレイな体が見られなくなった」

彼女はクスッと笑みを浮かべたまま無言で、再び一糸まとわぬ生まれたままの姿になった。朝日に映し出されたその姿は、芸術品のように美しい。思わず見とれてしまう。

「ご主人様・・・もう、朝です・・・」

困ったようなメイの顔。俺ははっと我に返り、メイを抱きしめて服を着替え、一緒にダイニングに降りた。

ペーリスの用意してくれた朝食に舌鼓を打ち、俺はイリモに乗って宮城に向かう。到着すると、城門を入ったところで１００名ほどの騎士が整列している。その傍らには、軍服を着た老将軍が馬に乗って佇んでいた。ラファイエンスだ。

「朝早くからすまないな。では、行こうか」

整った隊列を崩すことなく騎士団は進んでいく。俺はラファイエンスの隣でイリモを走らせる。

「馬を操るのが上手だな」

「いや、この馬が優秀なのですよ」

「見たところ小柄だが、なるほど、賢そうな馬だ」

イリモの角と羽は見えないようにしているのだが、それでも、この将軍にはイリモの良さが感じ取れるようだ。

「一つ聞いてもよいかな？」

「何でしょう？」

「オーシェたちはどのように敗北したのかな？」

「なぜそのようなことを？」

「いや、勝利から学ぶことは少ないが、敗北から学ぶことは多いのだ。今後の軍略に活きると思ってね」

「まあ、いいですが・・・」

俺は昨日の戦闘について説明する。ゲュリオンについては、たまたま襲われたということにしておいた。

「・・・なるほど。ぬかるんだ足元、しかも初めて入る森。自殺行為だな。おそらくオーシェたちは貴殿の正面からの不意打ちを食らい、動揺したのだろう。それで前衛が崩れ、撤退したが馬の蹄で掘り返された土が泥と化して足場を不安定にした。そこにゲュリオンの側面からの攻撃。よくオーシェは生きていたな」

「ええ、撤退の有様は聞いていませんが、見事な撤退だったと思います」

「オーシェは何か言っていたのかな?」

「・・・いえ、特に何も。顔面蒼白で呼吸が荒く話すこともままなりませんでしたので、クノゲンという男が、オーシェの代理を務めています」

「クノゲンか。あいつならば兵の扱いは上手い。なるほど、クノゲンが撤退の指揮を執ったのか。不幸中の幸いだったな」

一人でうんうんと頷きながら、寂しそうな顔で老将軍は遠くを見つめている。

「リノス殿、少々急ぎたい。馬を走らせても大丈夫かな?」

「ええ、問題ないですよ」

ラファイエンスはとんでもないスピードで馬を走らせ始めた。騎士団もその速度に問題なくついていく。俺もイリモもあわてて将軍についていく。

帝都からクルムファルの館まで徒歩で1日。馬に乗って移動すると半日の行程だが、ラファイエンスはスピードを落とすことなく、しかも休憩もなく馬を走らせ続け、わずか3時間で到着してしまった。

「将軍、あそこです！」

ようやくラファイエンスの速度が落ちる。ぶっ通しで走ってきたのにもかかわらず、ほとんど息を切らせていない。意外にこのオジサンとその部下たちはやるようである。

ホテルに到着すると早速、ラファイエンスはオーシェたちが軟禁されている部屋に向かった。クエナに聞いたところ、三人共に昨日からスープを少々口にしたくらいで何も食べておらず、ほぼ一睡もしていない状態だという。

スイートルームは厳重に警護されていた。俺はピウスに将軍の到着を告げ、扉を開けさせた。中に入ると、昨日と同じ場所に三人が項垂れるように座っており、クノゲン一人が瞑目して静かに座っていた。そして、その周りをピウスの傭兵が取り囲んでいる。

ゆっくりと部屋を見まわした後、ラファイエンスはクノゲンを見て頷き、そして静かにオーシェの前の椅子に腰を下ろした。

「オーシェ」

ピクリと体が動き、ゆっくりとオーシェは顔をあげた。やつれ切ったひどい顔をしている。そして老将軍の姿を確認したオーシェの瞳は大きく開かれ、体をワナワナと震わせた。

「あ・・・う・・・う・・・」

「喋らんでいい。昨日の話はリノス殿から聞いた。全くバカなことをしたものだ。なぜ、お前がこの戦いに敗れたか、わかるか？」

オーシェは俯いている。

「クノゲン、お前はわかるか？」

「・・・現状を分析せず、いたずらに軍を進めたからでしょうか」

「まあ、間違っているとは言わんが、それも違うな」

「閣下・・・」

「オーシェ、お前はこの戦いに敗れるべくして敗れた。その原因は、自分の独断で軍勢を動かしたからだ。欲にくらんで私に嘘をつき、自分で勝手に軍を動かしたその時点で、お前の負けは確定していたのだ」

やさしく、諭すような、しかし、言葉の一言一言に重みがあり、オーシェは泣きそうな顔になっている。

「閣下・・・私が付いていながらこの失態・・・申し訳ございません」

「そうだなクノゲン。オーシェを止められなかったお前にも責任はある。しかし、だ。よく兵を逃がしてくれた。おそらくこの様子では撤退戦はお前が指揮を執ったのだろう。決して褒められた行為ではないが、まあ、このオーシェの様子ではそうせざるを得なかったのだろう。よくやってくれた。撤退戦は、褒めてやってもいい」

「閣下・・・」

クノゲンは声を殺して泣いている。オーシェは俯いたままだ。

「オーシェ、クノゲン、帝都に帰ろうか。兵たちも帝都に帰してやらねばならん。お前たちの今後は、お前たちの思うようにすればよい。グレモント宰相は死罪か追放と言っておったが、私はそうは思わん。お前たちの処分は私に一任してもらっている。今回は温情判決を出したい。リノス殿、納得いかぬかもしれぬが、承知してもらえないか」

ラファイエンスはすっと立ち上がり、後ろに居た俺の方向に向き直った。

「このとおりだ」

ヒーデータ帝国北方軍団長が頭を下げていた。

「部下の不始末、この私が、心から詫びさせてもらいたい」

「・・・わかりました。お顔をお上げください」

「感謝するリノス殿。今後、この償いは必ずさせてもらう。何かある時はこのラファイエンスに言ってくれ。できる限りのことはさせ

てもらう」

「こちらこそ。戦いとはいえ、北方軍の兵士に多大なる損害がでました。亡くなった兵士に哀悼の意を表します」

「ありがとう」

オーシェもクノゲンも泣いていた。ひたすらに号泣していた。ジョーノもグラゴレイルも、この様子を顔面蒼白にして眺めていた。

「さて、ジョーノ男爵および、グラゴレイル男爵。あなた方は帝国貴族であり、私の部下ではない。しかし、罪は罪だ。あなた方は帝都に護送の上、私が身柄を預かります。今朝、帝都を出発する際に陛下から直々のご命令がありましたのでね。あなた方は、陛下が直接お話をなさるそうです」

ジョーノとグラゴレイルは力が抜けたように、ガックリとうなだれた。

軟禁されていた4人は、将軍によって再び拘束された。相変わらずオーシェは一人では歩けず、クノゲンに支えられての移動になった。

彼らが拘束されている間に俺はカイリークとトホツに対して、捕虜を解放するよう命令書を作成し、ラファイエンスに手渡した。そして、再び馬上の人となった将軍は、

「それでは、早速帝都に戻ります。リノス殿、また宮城にて」

そう言い残して去っていった。俺はその姿を見送った後、ハーピーにその追跡を命じる。ラファイエンスに限って再び攻撃を仕掛けて

くるとは思えないが、念のためハーピーと「マップ」で監視させてもらう。

しかし、その懸念は杞憂に終わり、ラファイエンスはカイリークとトホツに寄ると、町の人々に手厚く礼を言い、兵をまとめて引き上げていった。その間に放置されていた兵士の遺体もきれいに回収していった。

「見事だ。軍人たるものは、かくあるべきだな」

「ラファイエンス将軍は名将として名高い方です。実際、その手腕を間近に見ると、なるほど多くの人に慕われていることも納得できます」

「情で人を操る。俺たちも見習わなきゃな」

「そうですね」

俺は将軍たちが去った部屋でピスタらと共にそんな会話をしながら、二日間のこの戦いをねぎらった。

一週間後、ヒーデータ帝国皇帝、ヒーデータ・シュア・ヒートが座る玉座の前に、ラファイエンスが頭を垂れていた。

「で、二人の者は如何したのだ？」

「オーシェは退役しましてございます。一人で歩行もままならず、話すこともままならぬのでは、軍務はできません。退役後は直ちに、クエシェリナに送りましてございます」

「ふむ、クエシェリナか。南の暖かい地だの。あそこなら療養にはちょうど良いか」

「はい。おそらく治癒することは難しいでしょうが、静かな余生は過ごせるかと」

「で、もう一人は？」

「クノゲンも退役を申し出ました。しかしあの才能を逃すと帝国の脅威になりますので・・・」

「ジョーノやグラゴレイルのように幽閉したというのか？」

「まあ、そのようなものでして、さる信頼できる人物の下に送りましてございます」

「そうか。軍人は軍を追放してそれで済むが、貴族はそうもいかん。ジョーノ家とグラゴレイル家の後継ぎを決めるのは骨が折れるわ」

「お察し申します」

「それにしても、バーサーム名誉侯爵の手並みは見事だったの。余もそなたからの話を聞いて、久しぶりに心が躍ったぞ。近いうちに、名誉侯爵からも話を聞いてみるが、あれはあまり自分の自慢話をせぬからの」

「はい。あのお方とは絶対に敵対するべきではありません。そういう意味では、リコレット様を嫁がせられた陛下のご慧眼に感服いたします」

「いや、余はたまたまリコレットに合うと思ったから結婚を進めたまでじゃ」

「あのお方は、神に愛されております」

「ほう、神に、か」

「言うなればあのお方は、『軍神』でございます。ゆめゆめ敵対なされませぬよう」

「『軍神』か。それは頼もしいの。余とバーサーム名誉侯爵は義理とはいえ、兄弟じゃ。その心配は杞憂に終わろうぞ」

「ハハッ」

帝都にも、クルムファルにも秋が深まろうとしていた。

第八十二話　収穫とメイの覚醒

俺は今、汗だくになりながら小豆を煮ている。そして、その前ではペーリスがおはぎをせっせと作っている。

「ペーリス、大丈夫か？」

「あんこがもう少しでなくなりそうです！」

「わかった。ちょっと待っててくれ」

朝5時から始めたこの作業は既に6時間ぶっ通しで行われている。窓の外をふと見ると、遠くに大勢の人が見える。まだまだ作らなければ。その決意を新たに、俺はあんこの作成に取り掛かる。

よく晴れた秋の日。クルムファル領では、手の空いている者が総出で収穫を行っていた。特に水田に実った稲は黄金色に輝き、その生育の良さがにじみ出ている。

「おい、そっちはもういい。昼飯に行ってくれ！ピウスさんたちはそっちが終わったらメシにしましょう！」

朝から働きどおしとは思えない程の力強い声で指示を与えていくのは、元帝国騎士団のクノゲンだ。彼は今、クルムファルで傭兵たちの教育を一手に引き受けている。

オーシェとともに帝都に帰還したクノゲンは、その五日後、再び俺

たちの下に現れた。そして、

「私を、クルムファルで雇ってもらえませんか？あ、ここにラファイエンス団長の推薦状もあります」

そこには、「先日のお詫びにこの男を贈る」と書かれていた。すぐさま俺はクノゲンを採用し、ピウスの部下に付けた。クノゲンは瞬く間にその才覚を現し、新しく組織した傭兵たちに訓練と戦略を教え始めた。その統率力は見事で、今日の収穫でも彼の号令一下、傭兵たちの無駄のない動きで、次々と広大な田んぼの収穫が終了している。

畑はフェリスとルアラが中心となり、農家のおばさんたちに交じって収穫を行っている。カイサームから海人族の男性が手伝いに来てくれており、こちらもかなりの速さで収穫が終わっていく。

その収穫された作物の品質を管理しているのが、ゴンとメイだ。二人とも厳しい目で食材をチェックしている。そしてリコは、ゲュリオンとハーピーを指揮して、空と陸から魔物が収穫物に手を出さないよう目を光らせている。さすがに、Ｓランクの魔物であるゲュリオンとハーピーに手を出してくる魔物はいない。彼らに対応できないドラゴン辺りが来れば俺が出ていく予定だ。

クルムファルの姫たるベビーゲュリオンのイトラは、俺たちが作るおはぎとぜんざいの味見だ。気に入ったらしく、きゅいきゅいとうれしそうな声を上げている。

昼過ぎにようやくある程度の目途が出来、俺とペーリス、そしてイトラを抱いたリコは出来上がったおはぎとぜんざいを持って収穫場所に転移する。

「おーい、メシにしよう！デザートはおはぎとぜんざいだ！」

およそ１０００名近い人間が大歓声を上げる。

三日前から用意した炊き出し用のおにぎり、サンドイッチ、スープ、パスタ、から揚げ、野菜炒め、サラダ・・・などをバイキング形式で、いくつかの机を出しながら、それぞれに出していく。そこにおはぎとぜんざいも一緒に置く。瞬く間に皿が空っぽになっていく。そこにまた料理を補充していく。

警備を担当しているハーピーとゲュリオンにも昼飯を出してやる。彼らだけは交代を取りながらの食事となるので、人間より二品ほど多めに作ってある。

皆、ガツガツ食べてくれている。あちこちから談笑の声が上がっている。平和な光景だ。

「・・・まさかこんなことになるとは」

突然リコが呟く。

「どうしたんだ、リコ？」

「リノス、ご覧なさいまし。男も女も、老いも若きも、獣人も冒険者も、魔物も人間も、皆一緒になって働き、食事をし、笑いあっています。こんな姿が見られるとは・・・奇跡ですわ」

「何でこうなったのか、俺にもわからないが・・・」

「・・・もっと多くの地で、こんな姿が見られるといいですわね」

「そうだな」

俺はリコの肩をそっと抱いた。

しばらくすると、ゴンとメイが帰ってきた。

「おーご苦労さん。メシを食ってくれ！」

「ご主人様、ゴン先生と収穫物を確認してきました。全然、問題ないです！とてもいい出来栄えです！」

「そうか！よかったな。おい誰か、ウィリスを呼んできてくれ。あと、マルセルも呼んできてくれ」

しばらくすると二人がやってきた。

「ウィリス、収穫物はいい出来栄えだそうだ。予定通り明日からスーパーを開店する。昼飯を食い終わり次第、食材を運び込め。品物の配置はお前たちに任せる。明日は忙しくなりそうだから、早く寝ろよ」

「わかりました！お任せください！お客さんから開店はまだかとせっつかれてたんです。明日、間違いなく開店させます」

「そして、マルセル、お前はご苦労だが、これからカイリークに帰ってかつお節と削りかつお節、そして乾燥昆布らをスーパーに運び込んでくれ。そして、明日の朝、獲れた魚をスーパーに運び込んでくれ」

「わかった。任せてくれ」

ここ数ヶ月、乾燥エサラハルを使ってのかつお節と、乾燥昆布の開発に力を注いでいた。そしてようやく、俺の納得いくものが出来上がっていた。事前にウィリスの露店で売ってみたところ、大人気となり。今では売りに出した瞬間に売り切れるほどの人気商品だ。これのお陰で、我が家の料理はさらに美味くなっていた。今回は満を持しての販売なのだ。

俺が忙しくしている一方で、メイは多くの人に囲まれており、戸惑いの表情を見せていた。

「あの・・・みなさん、どうされたのですか？」

「メイちゃん・・・」

「「「「「「ありがと～お！！！！！」」」」」」

余りの大声にメイは目を丸くしている。

「あ、え？どうしまし、た？」

「儂らはこの土地はもうダメじゃと思っておった。しかし、メイちゃんが儂らの土地をこんなによくしてくれた。ありがとうよ」

「アタシャ、地面が真っ白になった時は途方にくれたんだけどねぇ。今じゃこんなに豊かな土地になっちまった。それもこれも、メイちゃんのお陰だよ」

「メイ様のこの農具、本当に便利です。収穫がこんなに早く済むなんて・・・助かりました」

「おねえちゃん、私たちを助けてくれてありがとう」

「ありがとうメイちゃん」「ありがとうね」「本当に助かったよ」

「またいろいろ教えてね」

多くの笑顔の中にメイはいた。すごく戸惑いながら、でもうれしそうな顔をしながら、笑顔で農民たちと話をしていた。

「よーし、メシが済んだら、残った作物を収穫するぞ！今夜は収穫したものを使って、宴会だ！」

「「「「「「「「「おーっ！！！！！！！！」」」」」」」」」

夕方までにすべての収穫を終え、俺たちは宴会の準備に入った。海に落ちていく真っ赤な太陽を見ながら飲む酒は抜群にうまく、海人族が用意してくれた刺身はおそろしく美味だった。そして、当然のことながら、収穫した米や野菜は絶品の旨さだった。俺は取って置きのカースシャロレーの肉と黄金鳥の肉を全て提供し、宴会の華を添えた。

どのくらいの時間、皆で騒いだろうか。騒がしい宴会の場を離れて、メイは一人、小高い丘の上から収穫が終わったクルムファルの大地を眺めていた。

「メイ、どうした？」

「・・・いえ、なんでもありません」

「あんまり夜風に当たりすぎると風邪ひくぞ。最近めっきり朝と夜が寒くなったな。もうそろそろ宴会もお開きだ。明日は開店するウィリスに手伝いに行かなきゃいけないから早く休んだ方がいいぞ。もうすぐ屋敷に帰るから、メイも一緒に帰ろう」

「私・・・このままご主人様のところに居ていいのでしょうか？」

「どうしたんだ？」

「私はたくさんの人を殺しました。でも、そんな私が沢山の人から感謝されています。本当にこれでいいのかと・・・」

「いいに決まってるじゃないか。メイ、この世の中で生きていくためには、二つのことが守れればいいんだよ。メイはちゃんとできているから、いいんだよ」

「二つのこと、ですか？」

「そうだ。一つ目は、人に迷惑をかけないこと。そして、二つ目は人を助ける仕事をすることだ。今のメイは誰にも迷惑をかけないで、一人で、たくさんの人を助ける仕事をした。十分だよ」

「・・・・」

「クルムファルのみんながメイに感謝していたけど、メイにとっては迷惑だったかい？」

「そんなことありません！でもちょっと戸惑いました。これでいい

のかと・・・」

「メイはこれからどうしていきたい？今みたいに、研究をして人の役に立つのはイヤかい？」

「私は・・・色んな人を助けることをしたいです。私の知識が、技術が、たくさんの人を助けられれば本望です。どんなことでもいい。どんな仕事でも」

「仕事ってそういうものだよ。どんな簡単な仕事でも、それが人の幸せの一部をつくっているんだ。メイはたくさんの人を助ける仕事をした。これからも、それを続けてくれないかな？」

「・・・はい。是非、そうさせていただきたいです！」

「おお・・・メイ、空を見てごらんよ。すっごくキレイだよ」

「・・・うわぁ」

空には満天の星々があった。冬の訪れを感じさせる冷たい空気が、さらに星の光を冴え渡らせていた。

「メイ、帰ろうか」

「は・・・っ、くっ、うううううう・・・」

「メイ、どうした！？」

頭を抱えてうずくまるメイ。俺は慌てて皆を呼び、屋敷に転移する。そして、メイの部屋に彼女を寝かせた。他の者たちは明日もあるた

めに早く寝るよう指示を出す。しかし、リコとゴンはどうしても看病するといい張り、三人で彼女を見守った。

メイは高熱を発して苦しんでいた。時折、「ごめんなさい」「ゆるして」と言ったうわごとを言いながら。そして、夜が明ける頃、ようやくメイの呼吸は落ち着きを取り戻した。

「リノス、もうお休みになったら。あとは私がやっておきます」

「熱も下がったようでありますし、もう大丈夫でありましょうー」

「いいや、もうすぐウィリスのところに向かう時間だ。このままでいい」

そんな会話をしていると、メイがゆっくり目を開く。

「メイ、大丈夫か？」

「ああ、頭が軽い。すごく頭がすっきりした気がします。さっき、頭の中にパキンと音がして、そのあとすごく楽になりました。ご主人様の魔法でしょうか、それともゴン先生の・・・？」

頭がパキンと音がした？頭が軽くなった？・・・俺が奴隷から解放された時と同じような感覚だ。俺は慌ててメイを鑑定する。

メイリアス（奴隷賢者・１９歳）ＬＶ５７
ＨＰ：２８２
ＭＰ：７５０
錬金術　ＬＶ５
鍛冶師　ＬＶ５

薬師　　ＬＶ５
ＭＰ回復　ＬＶ４
教養　　ＬＶ５
行儀作法　ＬＶ１

老成円熟、上医医国

老成円熟：錬金術ＬＶ５　鍛冶師ＬＶ５
上医医国：薬師ＬＶ５　教養ＬＶ５

「自己韜晦」の称号が消えている。それどころか、ほぼすべてのスキルが上がっていて、四つもスキルをカンストしている。どうやら、今まで抑えていた自分の成長が一気に解除され、その反動で溜まっていたスキルが上がったのかもしれない。しかも、二つの称号も獲得している。これは一体・・・？

後に、その深い教養と技術を駆使して多くの人命を救い、「聖女」と敬われると同時に、教育者として多くの優れた人材を育て上げ、後世にその名を刻む「大賢者・メイリアス」が覚醒した瞬間なのであるが、その事実をリノスも、メイリアス本人も、今は知る由もない。

第八十三話　フェアリードラゴン

「森の中をこんなにゆっくり歩くなど、久しぶりでありますなー」

「おいおい、遊びで来てるんじゃないんだから。お前も探してくれよ」

俺はイリモに乗ってゴンと共に、クルムファルの森をゆっくりと移動している。

確かに、こんなにゆっくりと森を移動するのはいつ以来だろうか。しかもゴンと二人だけというのもかなり久しぶりのような気がする。

秋の収穫が終わっても、俺たちの忙しさは相変わらずだった。猫人族のウィリスに任せたスーパーが大繁盛だったのだ。当初は一週間程度手伝えば客足も落ち着くだろうと考えていたのだが、結局、開店から三か月たっても依然として客足は衰えず、むしろ増え続けているのだ。

毎日、押すな押すなの騒ぎで、当然ウィリスたち三人では客を捌けない。従って、俺、メイ、ゴン、フェリス、ルアラがレジに入り、ウィリスとシェーラは客対応、計算ができるユリエルもレジに入って、ようやく客を捌き切るという有様だった。

それだけでなく、帝都のホテルからは昆布とかつお節が大量に注文され、忙しい合間を縫って納品する。場合によっては、結界石の店の勤務が終わったソーニヤとアンジェにレジを頼み、納品に向かう

こともよくあった。

当然、この母子には残業手当を支給している。ダーケ商会は、日本の労働基準法に準拠した経営を行っているのだ！

開店当初は無休で営業していたが、新年を迎え、正月休みを終えたのを機会に、一日だけ定休日を設けた。ウィリスは反対し、客からのクレームも多かったが、そうでもしないと俺たちの体がもたない。ウィリスと客には渋々納得してもらった。ただ、この忙しさを見かねたお客さんが接客を手伝ってくれるようになり、その中でも特に積極的で優秀な人には賃金を払って、アルバイトに来てもらっている。これがマジで大助かりなのだ。お蔭でここ最近は、俺たちが行かなくても、何とか店が回るようになっている。

そして、ようやく落ち着きを取り戻した俺は、クルムファム領を開発する際に、農業用水用に掘った湖を目指して進んでいた。どうやら、湖のほとりには、バニラの匂いがする木があるらしいのだ。

バニラがあれば、スィーツの幅が広がる。これは見過ごせないのだ。

きっかけは、ハーピーたちだった。たまたま彼女らの報告を聞いていた時に、翼からほのかにバニラの香りがしたのだ。聞いてみると、湖のほとりまで行ったときには、羽を休めるために大木の枝に止まっているのだという。俺にはその木に心当りがあった。確かに、湖の近くにはバカでかい木があった。それならば行ってみようという話になり、俺とゴンが散歩を兼ねて森の中を歩いているというわけだ。

その大木までは大して遠くはなく、イリモが飛ばせば３０分ほどでついてしまう。しかし俺は素早くそこまで移動する気にはなれず、

こうしてゆっくりと歩を進めているのだ。

森に入って一時間。魔物の気配はするが、全く襲われる気配がない。俺は魔物に嫌われているらしい。

「ああ、見えたでありますなー。あの木でありますー」

ようやくお目当ての大木についた。確かに、ほのかにバニラの香りがする。鑑定を発動させてみるが、どうやらバニラの木ではないらしい。

「おかしいでありますなー。これはただの木でありますー。どうしてこんな香りがするのか、吾輩にもわからないでありますー。ここはひとつ、メイ殿に見てもらってはいかがでありますかー」

そうだなと返事をして俺は、この木の枝を何本か折り、無限収納の中に入れる。

「そういえば、腹減らないか？」

「そうでありますなー。もうお昼を食べる時間でありますー」

「じゃあ俺が作ろう」

「ここででありますか？イリモ殿に乗れば、すぐに館に帰れるでありますー」

「いや、たまには森の中でメシを食うのも悪くないだろ？いい天気、美しい森、きれいな湖。こんな中でメシを食うのはとても贅沢じゃないか？」

「それはそうでありますなー。ご主人の手料理も久しぶりでありますからなー」

俺は早速、無限収納から米を取り出し、湖の水を使ってご飯を炊く。ここの水は良質の水であり、飲料水として十分すぎるくらいの美味しさがあるのだ。そしておかずには鯖の切り身を取り出し、炭であぶる。ジュージューと煙と匂いが立ち込めるが、野外なので気にしない。鯖の塩焼きが出来上がった。

炊き立てのご飯と鯖の塩焼き。もうこれ以上は何もいらない。俺とゴンはガツガツと食っていく。

「うまいでありますなー」

「だろ？鯖は塩焼きに限る。美味いご飯があればもう、なにもいらんな」

「ぐるるるるー」

背後から妙な音がしたので振り返ると、何やら奇妙な生物が、木の陰から俺たちのことを窺っていた。

色は薄い水色で、小さいドラゴンのような体躯をしている。背中には極彩色に彩られた蝶のような大きな羽が生えており、大木の陰から俺たちの様子をうかがっている。

「あれは・・・フェアリードラゴンでありますか？」

「フェアリードラゴン？」

「ドラゴンの一種でありますが、そんなに強くないでありますなー。力はありますが、ブレスは吐かないでありますし、強いて言えば、飛行の速さだけはあるでありますー。花を食べるドラゴンとして有名でありますなー」

「ふーん、害はないのか？」

「基本的に臆病なドラゴンでありますから、人を襲ったという話は聞かないでありますなー」

「ぐるるるるるー」

木の陰からとても興味深そうに俺たちを見ている。どうやらお腹が鳴っているようだ。

「お前もしかして腹減ってんのか？よかったらこの鯖食うか？」

俺は焼きあがった鯖の塩焼きを放り投げてやる。フェアリードラゴンはしばらくじっとそれを見ていたが、やがて意を決してそれを口に入れた。

「アキャッ、きゅあっ、きゅあっ！」

「おー食ってんな？遠慮するな、どんどん食え」

俺はさらに鯖を焼いてやり、ご飯で丸いおにぎりを作って投げてやる。フェアリードラゴンは美味そうに食べている。

「ほーれ、デザートのおはぎだ、ついでに食え」

「きゅあっ！きゅあっ！」

喜んでいるようだ。これだけ喜んでくれると作った甲斐があったという物だ。しかしよく見ると、フェアリードラゴンの背中の羽が一枚しかない。

「あれ？アイツ羽が一枚しかないぞ？」

「あれでは飛ぶことは出来ないでありますなー。珍しいであります」

「そうか、じゃあ治しておいてやるか」

フェアリードラゴンに結界を張り、そのまま俺のところまで移動させる。さすがにドラゴンは驚いて逃げようとするが、俺の結界に阻まれて身動きが取れない。

「あきゃっ、きゅあぁぁぁぁ・・・」

かなりおびえているが気にすることなく、エクストラヒールをかけてやる。すると、失われていた羽が復活し、頭にもあったのであろう角が二本生えて来ていた。

「ずいぶん傷ついていたんだなー。これで大丈夫だぞ。・・・てゆうかこいつ、メチャメチャかわいいな」

よく見ると、つぶらな瞳でとっても愛嬌がある顔をしている。

「そらっ。俺たちはもう帰るから、お前も気を付けて帰れよー」

結界を解除してやる。ドラゴンはキョトンとした顔をしているので、復活した羽をつまんでやる。ピクッと体を震わせ、思わず振り向くドラゴン。そして、自分の失われたはずの羽が復活したのを確認して目を丸くしている。

恐る恐る翼をパタパタと動かすと、ふわりとその体が浮きあがった。キョロキョロと辺りを見回しながら自分が飛んでいることを確認しているようだ。そしてハッとした顔をして頭に手をやって角を確認する。

「きゅわぁぁぁーん。きゅわぁぁぁーん」

泣き出してしまった。どうやら相当嬉しかったようだ。しかしさっきからこのドラゴンと全く会話できない。そもそもこのドラゴンは喋れないのだろうか。

「基本的にドラゴンは念話で会話するのが一般的でありますなー。フェリス殿のクルルカンのような知能の高いドラゴンは言葉を操るでありますが、このドラゴンは言葉を操ることは出来ないのでありましょうなー」

「そっかー。まあ、俺たちはもう帰るから、お前も群れに帰りな。今度は怪我するんじゃないぞ」

そう言って俺たちは館へと帰った。

「まあ、どうしたのです、リノス？」

「うーん、どう説明しようかな」

クルムファルの館に帰ると、出迎えてくれたリコが驚いている。それはそうだろう。俺の胸に極彩色の羽を持った小さなドラゴンがしがみついているのだから。

あの後しばらく歩いていると、いきなり胸が重たくなった。ふっと見てみると、さっき別れたフェアリードラゴンが俺の胸にしがみついていた。俺の気配探知に全く引っかからずに移動してきているのである。ある意味恐ろしい。

そのまま結界内に閉じ込めて倒してしまうこともできたのだが、このフェアリードラゴンがとにかくかわいいのである。じっと目を見つめ合う、目を見つめ合う、目を見つめ合う、目を見つめ合う、目を見つめ合う、目を見つめ合う、目を見つめ合う、目を見つめ合う・・・としている間に、館についてしまったというわけだ。

ドラゴンだけにものすごい力で抱きついているので、離れない。服を破れば離せそうだが、さすがにそれをするとリコが怒るだろうと思い、先ほどの会話と相成ったのである。

ゆらゆらと羽を揺らせながら、気持ちよさそうに俺に抱っこされているドラゴン。しかしその光景を見て

「ぎゃうあー！きゅぁぁぁぁぁ！！」

館の姫であるイトラが怒ってしまった。パタパタと羽を動かして俺の周りを飛び、ドラゴンを威嚇している。こちらも負けておらず、あぎゃ！あぎゃ！と威嚇し返している。どうやら俺に抱っこされる権利を互いに主張しているようだ。

「ハイハイハイ、二人ともおやめなさいな」

パンパンパンと手を叩きながらリコが近づいてくる。そして、うしろからフェアリードラゴンを抱き、すっと俺の所から離して、テーブルの上に置く。

「この際だから二人に言っておきます」

リコは俺の隣にやってきて腕を組み、

「リノスは、私だけのものですわ」

「きゅぁぁ・・・」

「あゃあ・・・」

三人の視線から火花が散っている。あの～皆さん、怖いから、やめませんか？

第八十四話　この子、ウチのペットにします！

リコたちがにらみ合っている間に、帝都からフェリスを連れてくる。フェリスはフェアリードラゴンを見るとギョッとした顔をした。

「こんな色鮮やかで、色彩豊かな羽を持つフェアリードラゴンは初めて見ました」

「そんなに羽が大事なのか？」

「フェアリードラゴンは、羽の色どりが多ければ多いほど多才なのです。この子はかなりの才能持ちのようです」

「この子に会った時、片方の羽がなかったんだ。それに、角も無くなっていたんだ」

「おかしいですね？我々ドラゴンにとって羽と角は命のようなものです。それが取れるなど・・・余程の魔物に遭ったのかもしれません。聞いてみますね」

フェリスがじっとフェアリードラゴンを凝視する。どうやら念話で会話しているようだ。フェリスの顔がどんどん険しくなる。

「バッカじゃないのアンタ！バカも休み休み言いなさいよ！」

いきなり激高したかと思いきや、フェアリードラゴンの角を掴んでブンブン振り回し始めた。ドラゴンは、あきゃーあきゃーと悲鳴を上げている。

「フェリス、そこまで！」

俺の声を聞いてフェリスは動きを止める。そしてドラゴンをポンとテーブルの上に投げ出し、再びドラゴンを凝視し、そして、ニヤリと笑う。なぜかイトラはめちゃ喜んでいる。

「きゅお！・・・きゅあー、きゅあー、きゅゅゅあー」

ドラゴンは頭を抱えて泣き出してしまった。おい、フェリス、お前一体何を言ったんだ？

「大丈夫です。ちょっとお灸をすえただけです。この子の話？ああ、聞かなくても大丈夫です。すっごく下らない話です」

「きゅあ、きゅきゅきゅきゅ、きゅきゅきゅきゅきゅきゅ？きゅきゅーきゅ、きゅーきゅー」

何やら必死に俺に訴えかけているが、あいにく彼女の話は俺にはわからない。

「フェリス、このドラゴンは一体なんと言っていたのですの？」

リコからナイスなフォローが入る。

「あー。すっごく下らない話です。まあ、リコ姉さまには一応お伝えしておきますね」

リコとフェリスが見つめ合っている。そして少しずつリコの顔が強張っていく。

「・・・リノスに言う必要はありませんわ。バカバカしい」

「でしょ？」

「きゅうー」

ドラゴンは羽がペタンとなり、ガックリと肩を落としている。なんだか、胸が締め付けられる。

「リノスさん、このドラゴンどうしますか？」

「どうするって・・・何がだ？」

「ステーキにするか、燻製にするか・・・シチューでもいいですけど」

「え！食べるのか？てゆうかお前もドラゴンだろ？共食いにならないのか？」

「同胞ではないので、共食いにはなりません。むしろ、私にとっては、エサにしてもいいくらいです」

「あぎゃっ！ぎゃっ！きゅあー」

何だかフェアリードラゴンが怒っている。フェリスはフッと息をつき、

「まだわからないようね。だからダメなのよ」

そういうとフェリスはフェアリードラゴンの角を持ち、外に放り出した。さすがにドラゴンだけあって、背中の羽を駆使して浮かび上がり、地面の激突は避けていた。フェリスは外に向かいながら服を一枚、また一枚と脱ぎだし、全裸になった。そして、フェアリードラゴンの前まで行くと人化を解除した。

「きゃあー、きゅあああああああ！！！！！」

クルルカンになったフェリスを見て、フェアリードラゴンは大声で叫び声を上げた。その瞬間、俺の胸が重くなり、気が付くとフェアリードラゴンがそこにいた。凄まじい速さだ。ドラゴンは俺の胸に顔をうずめて震えている。おお、なんと愛おしい。俺はドラゴンをギュッと抱きしめる。

「リノス、あんまり甘やかさない方が、よろしくてよ？」

リコが呆れたような顔をしている。

「俺には全く事情がわからん。ただ、このドラゴンが可哀想に見えてならん」

「きゅー」

一体何でこうなるのか？取りあえず、俺はこのフェアリードラゴンを鑑定してみる。

ﻚﻳ　ﺎﺠﻣﺎﺠﻭﺞ（フェアリードラゴン・７歳）　ＬＶ１０
ＨＰ：８９
ＭＰ：８７４
風魔法　ＬＶ１

回復魔法　ＬＶ１
ＭＰ回復　ＬＶ３
気配探知　ＬＶ３
魔力探知　ＬＶ３
肉体強化　ＬＶ１
竜魔法　ＬＶ１
飛行　ＬＶ５
精製　ＬＶ４
隠密行動　ＬＶ４

疾風迅雷

疾風迅雷・・・飛行ＬＶ５

何か名前がついているが、文字が読めない。これはどういうことだろうか。それにしても、わずか7歳でこのスキル。ＭＰが異常だ。それに飛行スキルがカンストされていて、なるほど、この素早さもうなずける。

ただ、このドラゴンと会話が成り立たなければ、どうしようもない。

「おいフェリス、念話ってどうやるんだ?」

「どうって・・・ただ頭の中で相手に話しかけるだけです。『リノスさん、リノスさーん』みたいな」

頭の中でフェリスに向かって話しかけてみる。全く反応がない。確か、念話は龍魔法と言っていたな。魔法というからには、魔力を使う。ということは、魔力に乗せて言葉を伝えているのか?とりあえず魔力をフェリスに向け、念じてみる。念じてみる。念じてみる。

『フェリスのお尻に毛が生えてるぞ』

「ええっ！うそ？」

・・・成功してしまったようだ。フェリスは念話だということに気が付かず、リコにお尻を向け、確認してもらっている。今のうちに確認してみよう。

『おーい、フェアリードラゴン、聞こえるか？』

『え？そのこえは？もしかして？』

『ああ、俺だよ。リノスという』

『リノス・・・わたしはシンジョ』

『シンジョ？』

『うん、かみさまからのつかいだっていわれてたのー』

『かみさま？』

『うん。おおきくなったらかみさまにつかえないといけないんだって』

『そんなドラゴンがなんであんな所にいたんだ？』

『うーんと、まいにちおべんきょうばっかりでつかれちゃってー。あそびにきたの』

『家には帰らないのか？』

『うーん、かえりたくないのー。それでおなかがすいたからたべものをさがしてたらすごくおいしいみずとおはなのあるとこがあったから、そこにいたの』

『じゃあなんであんな怪我してたんだ？』

『おうちをでるときにけがをしたのー。だからうまくとべないし、たいへんだったのー』

神様に仕えるために教育されたドラゴンか・・・。何だか厄介ごとの匂いがするな。

「おい、フェリス！このドラゴン神様の使いって言ってるぞ？」

「あーわかっちゃいましたか。・・・って、え？念話は？」

「ああ、習得した」

「さすが、リノスさんですね・・・。そうです、その子は龍王に仕える資質を持った神女です。１０００年に一度、ドラゴン族の間でその資格を持った子供が生まれると言われています。大きくなると族長となり、龍王様のお告げを聞く役割も担います」

「この子ここにいて大丈夫なのか？」

「だめですよ。この子が逃げたために、フェアリードラゴンは龍王様から見捨てられるかもしれません。本当にバカですよ、この子。

一族の未来を捨てて逃げたんです。龍王様にお仕えするとなると、その一族の繁栄は約束されたものだったのに・・・。確かに修業は厳しいです。私も修業は大変でしたし、神女たる者の修業は私たちの比ではないでしょう。しかし、この子はそこから逃げ出した。きっと帰っても、殺されるだけです。それなら食べられた方がマシですし、その方が一族にとっても、龍王様への言い訳も立ちます」

「そうか・・・。うーん、俺も勉強しなかったからなー。この子の気持ちはわからんでもないが・・・」

「ご冗談を。リノスさんのそのスキルは相当の修業をしたはずです」

「う～ん。俺の場合は生きていくために仕方なくだったからな。人ってそういうもんだよ？危機感を覚えないとやらないもんだよ？」

「危機感・・・。そうですね、この子にはそれがないでしょうね。それに、言うに事欠いて、リノスさんの所にずっといたいなどと言ってましたので、かなり厚かましいです。私に対してはケンカ売りましたしね。身の程も知らないようです」

「この子が怪我をしていたのは、何か魔物にでも襲われたのか？」

「神女は絶対に守らなければならないので、基本的に竜族の張った結界で過ごします。そこから無理やり出ようとして、翼と角を失ったのだと思います。天罰です。でも、よく生きてましたね。普通、羽と角を失ったドラゴンは方向感覚がなくなると言われていますが・・・」

『おいドラゴン、お前よく生きてこれたな』

『すごくたいへんだったのー。どこにいるのかわかんなかったー』

『メシとかはどうしてたんだ?』

『うーんと、エサのとりたちがすきなにおいをきにつけてー、おびきよせてたべてたのー』

『匂いをつける?お前匂いが出せるのか?』

『そうだよー。においのでるこなをつくれるんだよー』

『その粉、出してみてくれるかな?』

『いいよー』

フェアリードラゴンは、羽をパタパタと動かすと、机の上に黒い粉が積もってきた。匂いを嗅いでみると、バニラの香りだった。試しにその粉を舐めてみる。・・・バニラの味がする。このドラゴン、バニラビーンズを精製できるようだ。

『他にも、どんな匂いのする粉が出せるんだ?』

『いろいろできるよー。ここのおみずとおはなおいしいから、いいにおいのするものならだせるよー』

・・・こいつは、使えるかもしれない。でも、懸念がないわけじゃない。俺はフェリスに確認を取る。

「このドラゴン、殺しちゃうと龍王様が怒らないか?」

「怒らないとは思います。何せ、逃亡していますから」

「龍王はこの子を殺しに来るかな？」

「殺しにも来ないと思います。たぶん、興味を持たれないでしょうね」

「なら、家で飼ってもいいな？」

「こんな臆病者を仲間にするんですか？」

「仲間、というよりペットだな」

「ペット・・・。奴隷以下ということですね？リノスさんが主ですが、基本的に全員の持ち物、というわけですね？それなら私は反対しないです」

「リコもどうだろうか？このドラゴン、羽からいい匂いのする粉を作り出せるらしいんだ。もしかしたらリコの美しさを引き出す匂いのする粉を出すかもしれん。あ、そうなると、俺がもっとリコを好きになっちゃうな。それはリコの・・・」

「飼いましょう！」

即答だな。リコの目が怖い。

『お前、俺の所に居たいのか？』

『うん、すっごくおいしいたべものごちそうしてくれたし、はねもつのもなおしてもらったから、ここにいればまもってもらえそうだ

し、ごはんもたべられそうだからー』

『我が家は、働かない者、怠けるものは家に置かない。お前は俺の仲間の中で一番下っ端ということになる。俺はもちろん、俺の仲間の言うことを素直に聞くのならば、置いてやってもいい』

『うん、わかったー。ちゃんときくー』

『これからはご主人様と呼んで、絶対わがまま言っちゃダメよ？ちゃんとお姉さまたちの言うことを聞かないと、私がアンタを食べるからね？』

『ううう・・・わかったー』

『わかったー、じゃない！わかりました！』

『わかりましたぁー』

フェリスがものすごい顔でドラゴンを睨んでいる。フェリス、どう！どう！

「取りあえずコイツに名前を付けるかー。そうだな・・・お前の名前は、フェアリだ」

『わーい！』

『ありがとうございますって言いなさい！』

『ありがとうございまぁす』

フェリスがいい教育係になりそうなので、基本的にこのまま放置することにする。しかし、フェリスは全裸のまま怒っているので、かなりシュールな光景だ。

「どうでもいいがフェリス、まずは服を着てくれないか？それに、人化した体の出来栄えがもう一つだな。リコのようなシミ一つない肌、胸は小さいが、均整の取れた体を参考にすればいい。お前も、頑張れ」

「・・・リコお姉さま、服を脱いでいただいてもいいですか？」

「イヤです。こんなところじゃいやですわ」

「じゃあ、お風呂に入る時にでも」

「わ、私の裸は、リノス以外には見せないのですわ！」

「メイ姉さまとは一緒にお風呂に入ってるじゃないですか！」

「メ、メイはいいのですわ！」

「何で私はダメなんですか？一緒にお風呂入りましょうよー」

「イヤです！私の裸は絶対に見せませんわ！」

何やら女同士でヘンな会話になってきている。しかし、顔を真っ赤にしたリコはとてもかわいらしく、俺は今日の夜もリコを愛でようと心に誓うのだった。

第八十五話　ペーリスの人化

「それでは、やるでありますー」

「ゴン、頼むぞ」

深呼吸をしながらゴンは精神統一をしている。今のゴンは、いつもの人化した姿ではなく、本来の白狐の姿に戻っている。そしてその前には、緊張した面持ちのペーリスがいた。

「リノス、ペーリスのことで相談がありますの」

きっかけはリコからの相談だった。以前からペーリスに相談を受けていたのだという。

「もうすぐペーリスも16歳になります。帝都の大学に入学させてはどうかしら？」

「帝都の大学？」

「ええ。ペーリスはもっと沢山のことを学びたがっていますわ。それならば、大学に通うのが一番ですわ」

「それって入学するの難しくないの？」

「ペーリスの知識であれば問題ないですわ。ただ、魔物の入学が許可されるかどうかが問題ですわ」

「うーん、一応結界はかけてあるけどなー」

取りあえず、キッチンに居るペーリスをダイニングに呼んで話をする。

「大学には・・・行ってみたいです。色々なことを学んでみたいです」

「ペーリスにはいつもコック長として頑張ってもらっていますし、留守番ばかりで申し訳ないと思っていたのですわ。ペーリスが学びたいなら、是非、応援してあげたいのです」

「そっかー。じゃあ行ってくるといい。俺は賛成だよ」

「ペーリスがいない間は、私やフェリス、ルアラが食事を作りますし、畑の方はゴンがやってくれますから、ペーリスは勉強に集中するといいですわ」

「すみません・・・」

「ただ、もうすこし小型化したほうがいいかもな」

大学に行くとなると、基本的に服を着替えないといけない。さすがに俺の結界では毎日服を変えることはできない。まあ、できないことはないが、それを完成するまでにかなりの時間を要しそうだ。

「ゴン先生のように人化できればいいのですが・・・。大学に入るまでに習得してみようと思います」

「いや、ゴンからスキルを与えてもらった方が早いだろう」

「人化」のスキルはゴンが持っている。そのゴンに教えてくれと頼むと、

「吾輩の人化スキルはＬＶ３でありますー。ＬＶ３以上のスキルを与える場合には、おひいさまの許可が必要になるでありますー」

早速俺は、久しぶりにゴンを連れておひいさまの屋敷に移動した。

「おひさしぶりでございます」

「ほんに久しいのう。・・・そなたまた称号が増えたのう。そなたのスキルを見ておると、目がチカチカするわぇ」

うん？俺の称号？？慌てて俺は自分自身を鑑定する。

リノス（結界師・１９歳）ＬＶ∞
ＨＰ：５５８５９
ＭＰ：９２１１４
結界魔法　ＬＶ５
火魔法　ＬＶ５
水魔法　ＬＶ５
風魔法　ＬＶ５
雷魔法　ＬＶ５
土魔法　ＬＶ５（ＵＰ）
回復魔法　ＬＶ５
生活魔法　ＬＶ３（ＵＰ）
詠唱　ＬＶ５

鑑定魔法　ＬＶ５
剣術　ＬＶ５
ＭＰ回復　ＬＶ５
気配探知　ＬＶ５
魔力探知　ＬＶ５
魔力吸収　ＬＶ５
肉体強化　ＬＶ５
回避　ＬＶ５
行儀作法　ＬＶ３
教養　ＬＶ５
麻痺耐性　ＬＶ５
毒耐性　ＬＶ５
精神耐性　ＬＶ５
黒魔術　ＬＶ５
加護　ＬＶ５

軍神、知神、大魔神、鉄人、鉄腕、結界神、闘将、智将、名伯楽、生殺与奪、博学才穎、天下創世

軍神：剣術ＬＶ５　雷魔法ＬＶ５　風魔法ＬＶ５
知神：鑑定魔法ＬＶ５　回復魔法ＬＶ５
大魔神：黒魔術ＬＶ５
鉄人：精神耐性ＬＶ５　毒耐性ＬＶ５　麻痺耐性ＬＶ５
鉄腕：肉体強化ＬＶ５
結界神：結界魔法ＬＶ５
闘将：火魔法ＬＶ５　水魔法ＬＶ５
智将：詠唱ＬＶ５　ＭＰ回復ＬＶ５　魔力吸収ＬＶ５
名伯楽：気配探知ＬＶ５　魔力探知ＬＶ５　回避ＬＶ５
生殺与奪：加護ＬＶ５
博学才穎：教養ＬＶ５

天下創世：土魔法ＬＶ５

・・・土魔法がカンストされている。一体どういうこと？？ＭＰが大幅に上がってますやん！

「一つの魔法を使い続けると、成長が早いわぇ。そなたは何度も限界までＭＰを使って土魔法を駆使したのじゃろ？しかも加護スキル持ちじゃから、スキルが上がるのは当然じゃな」

自分のレベルが既に無限大と表示されているのにもかかわらず、ＨＰとＭＰも上がっている。この世界の基準がよくわからん。

おひいさま曰く、土魔法がカンストすると土を使って自分の好きな形に作り出すことが可能であるそうだ。暇が出来たら陶芸でもしてみるか。

気を取り直して、おひいさまに貢物を差し出す。今回は、これまでのものに加えて、新開発をしたカスタードクリームを使ったクリームパンも持ってきた。フェアリが作り出したバニラビーンズを駆使し、ハーピーの卵から作った一級品だ。

「ほう、くりーむぱんか。・・・悪くはないが・・・妾はおはぎの方がよいのぅ」

・・・おひいさまは和菓子党か。千枝、左枝のお付きの女官は美味い美味いと好評のようだ。とりあえずクリームパンは今後、女官用のお土産にしよう、そう思っていると、

「むむ！これは美味ではないか！うむうむ、これはよい。儂ゃ気に

入ったぞ！」

・・・サンディーユには好評のようだ。この爺さん、甘党かな？

「ありがとうございます。サンディーユさんには、新しいあぶらあげをご用意しています」

俺はカツオで取ったダシの中に、パリパリに焼いたあぶらあげを入れ、その上に大根おろしに醤油をかけたものを取り出した。

「こっ、これは！！お主、やるよのう」

一瞬で平らげてしまった。貢物も気に入ってもらったようなので、俺も本題に入る。

「実は、ウチにいる魔物に「人化」のスキルを与えたく思います。ゴンの人化スキルＬＶ３を与えてもよろしいでしょうか？」

「魔物には、スキルは与えられぬわえ」

「しかし、その者はおひいさまの貢物を作っている者です」

「ふむ。・・・ならば、ゴンにやらせてもよかろう」

よかった。許可が下りた。おひいさまはクルムファルの成功を既にご存知で、ことのほか喜んでくれた。そして、魚の刺身が食べたいので持ってくるようにとご注文をいただいた。その横でサンディーユが鼻の穴を膨らませていたので、この爺さんにも贈っておこう。

屋敷に帰ると早速、ペーリスを呼び、ゴンから人化のスキル付与を

してもらう。

精神統一をしてピクリとも動かないゴン。しばらくすると、ゴンの白い体表が黄色に輝きだした。そしてそれに合わせて、ペーリスの体も金色の光に包まれた。そして一瞬、まばゆい光が屋敷の部屋中を覆った。目を開けてみると、そこには倒れたゴンの姿があった。

「ゴン！大丈夫か？」

「・・・」

ぐったりとしている。どうやらＭＰを限界まで使って気絶しているようだ。ふと見ると、そこにはペーリスがいた。特に何ともないようだ。俺はペーリスを鑑定する。

ペーリス（ベリアルの王女・１５歳）ＬＶ２２
ＨＰ：２６４
ＭＰ：２２９
火魔法　ＬＶ３
水魔法　ＬＶ３
風魔法　ＬＶ２
雷魔法　ＬＶ２
回復魔法　ＬＶ２
ＭＰ回復　ＬＶ２
気配探知　ＬＶ２
魔力探知　ＬＶ２
肉体強化　ＬＶ２
槍術　ＬＶ２
回避　ＬＶ１

行儀作法　ＬＶ１
教養　ＬＶ３
飛行　ＬＶ２
人化　ＬＶ３

ちゃんと人化スキルは付いている。ウチに来て約５年、全体的にスキルが上がっているが、戦場には出していないため、劇的な成長はない。今後はペーリスも戦いの場に出すべきだろうか。そんなことを考えながら、俺はペーリスに人化スキルを使ってみるように促す。

「ええと・・・じゃあやってみますね」

ペーリスの体が紫色に光る。ずんぐりむっくりの体が、どんどん人体に近づいていく。しばらくすると完全に女性の体になり、そこには、紫色の髪の毛を持ち、とても均整の取れた体をした美少女が立っていた。

「おお！美しい！」

「すごい、ペーリスちゃんキレイ！」

「ペーリス姉さま、キレイ！」

俺とフェリス、ルアラから思わず声が漏れる。フェアリは目を丸くしている。ペーリスは全裸で、しばらくその体を眺めていたいと思ったが、リコから声が入る。

「まあ、カワイイ！さすがペーリスですわ！早速服を選びましょう。私の新品の服がありますわ。それを着てみましょう！」

「は、はい。よろしくお願いします」

手を引かれてリコの部屋に行ってしまった。ちょっと残念な気持ちもないではないが、リコに任せておけば安心だろう。そう思っていると、リコが飛び込んできた。

「ペーリスが倒れましたわ！」

急いでリコの部屋に行ってみると、いつものベリアルの姿をしたペーリスが倒れていた。どうやらＭＰが尽きたようだ。俺はＭＰを補充してやる。

「・・・ありがとうございます。ＭＰの消耗が予想以上に激しいですね。これはちょっと、練習します」

「ＭＰを限界まで使うと、ＭＰがアップする。最初はキツイだろうが、慣れるまで頑張ってみな」

「ハイ、頑張ります」

この日からペーリスの修行が始まった。最初こそ人化してすぐにぶっ倒れていたが、何度かそれを繰り返しているうちに、人化できる時間も長くなった。最初は人化しても全裸のままであり、キッチンに立つ時も裸のままエプロンをつけるという、ひょんなことから、男の願望を叶えてくれる形になった。

人化を続けること2ヶ月、新年が明ける頃になってようやく丸一日の人化ができるようになった。これにはリコが大喜びで、早速リコの服を着せて、帝都に買い物に出かけた。丸一日かけてとんでもな

い数の服、下着、アクセサリーを買ってきた。手ぶらで出かけたはずが、馬車に乗って帰ってきたのには面食らってしまった。

その買ってきた服を着たり脱いだりと、ペーリスはリコのいい着せ替え人形になっていた。やはりスタイルがいいのと美しい顔立ちもあって、何を着ても似合う。うらやましい限りだ。

そして、春の息吹が感じられる頃になって、大学の試験が行われた。日本の大学入試とは違って、ペーパーテストだけでなく、魔法の実技テストもあったらしい。志望者は５００人くらいいたそうで、人間と獣人が半々だったそうだ。そしてそこから、１００人くらいに絞られるらしい。

結果的に、ペーリスは合格した。しかもトップで。ペーパーテストも、魔法もダントツの一位だったらしい。ペーリスは謙遜し、合格できたことにホッとしていたが。

しかし、彼女は知らない。大学の教官がペーリスの才能に驚き、特待生として大学で丁寧に育てていこうと画策していることを。そして、あまりの美少女ぶりに、新入生の間で大評判になっていることを。

ペーリスの大学生活が、間もなく始まろうとしている。

第八十六話　新たなる始まり

俺は今、皇帝陛下を睨んでいる。不敬だ？んなもん、知ったこっちゃねぇよ。

突然陛下から呼び出された。ご丁寧に、俺とリコ宛に帝国王室からの招待状までつけて。何事やあらんと、夫婦揃って正装をして宮城に赴いた。案内された部屋は、いわゆる「対面の間」で、各国の代表を謁見する場所だった。

リコと二人、顔を見合わせながら待っていると、陛下が現れ玉座に腰を下ろす。そしてその横に宰相閣下とヴァイラス殿下、そして、かなりくたびれた様子のひげ面の小男が別の扉から現れた。

「バーサーム公に置かれては、ご機嫌いかがかな？」

宰相閣下の応対が妙によそよそしい。一体どうしたんだ？

「姉上に置かれては、ますますご機嫌麗しく、なによりです」

「え、ええ、貴方もご壮健でなによりです」

俺が完全にフリーズしているのを見て、ヴァイラス殿下がリコに話を振ってくれた。さすがはリコである。ソツのない答えをとっさに返している。

「義弟どの」

突然、陛下が口を開く。「義弟どの」なんて初めて聞いた。

「義弟どのを呼んだのは他でもない。内密に頼まれてほしいことができたのだ」

「内密に頼みたいこと、でしょうか？」

「うむ。詳しくはそこにおられる、ユーリー殿から聞かれるがよい」

「はじめてお目にかかります、ニザ公国で宰相を務めます、ユーリーと申します」

「バーサーム・ダーケ・リノスです」

「実は侯爵様に内密のお願いがございます。我らニザ公国をお救いいただけませんでしょうか？」

「ニザ公国がどうかされたのですか？」

「実は・・・」

ニザ公国は、ドワーフ族が治める国である。ドワーフと言えば何といっても優秀な鍛冶師の国であり、その技術を駆使して多くの刀や鎧などを作り出すことで国を発展させてきた。しかしここ数年、農作地が荒廃したため収穫高が激減しており、国家存亡の危機にあるのだと言う。

「何か天変地異があったのですか？」

「いえ、そうではありません。害獣です」

「害獣？」

「その・・・鹿が大量に発生しまして、農作物を食べてしまうのです」

「鹿？そんなの、狩ればいいじゃないですか」

「実は、我々ドワーフにとって鹿は神の使いとされております。従って、ニザ公国内においては、鹿を殺すことは厳罰に処されます」

「で、俺に何をしろと？」

「できますれば、我が国の農作地を復活できますよう、お知恵を借りたいと・・・」

「鹿を間引く以外ないと思いますが・・・」

「でしたら、それをお願いしたく・・・」

要は、自分たちが鹿を間引くと罪に問われる。だから他人にそれをやってもらいましょう、他の国の人間がやれば、「いやー知らない間に鹿の数、減っちゃってたよ、エヘッ」って感じになるってか？アホか、バカも休み休み言え。

「それならば別に俺じゃなくてもいいんじゃないですか？他に人はいるでしょう」

俺は皇帝陛下を睨みつける。わざわざ俺とリコに招待状まで送っておいてこの仕打ちは一体どういうことだ？そんな気配を察してか、

宰相閣下が口を開く。

「そこをあえて貴殿に頼むのだ。もう一つ、貴殿に頼みたいことがある」

「何でしょうか？」

「どうやらニザ公国の鹿の大量発生は、人為的になされた可能性があるのだ」

「人為的、ですか？」

「これまでニザ公国においてこのような被害が出たということは聞いたことがない。にもかかわらず、今年になって突然田畑の作物を食い荒らしている。なにやらニザ公国内がおかしい。そこで、貴殿には秘密裏にニザ公国内の様子を探ってほしいのだ」

「はあ・・・」

「義弟どの、ニザ公国とヒーデータ帝国は長い同盟関係にある盟友なのだ。済まぬが、力を貸してやってくれまいか？」

「陛下がそうおっしゃるのであれば・・・」

「うむ。それでは、ニザ公国には、バーサーム侯爵を遣わすこととする。ユーリ殿、よいかな？」

「ハハッ、感謝申し上げます」

ユーリ宰相は退出していく。そして俺たちは陛下に付いてくるよう

に言われる。付いていった先は、陛下の私室だった。そこには、以前陛下がクルムファルホテルに逗留された際に傍に居た女性が居た。彼女は俺たちの姿を見ると、退出しようとする。

「タウンゼット、よい。ここにおれ」

「しかし・・・陛下・・・」

「構わぬ。ここにいるのは皆、身内みたいなものじゃ」

タウンゼットと呼ばれた女性は、申し訳なさそうに元居た椅子に腰を掛ける。

「皆の者、タウンゼットが同席することを許せ。何しろ身籠っておるのでな」

「ええっ!?それは・・・おめでとうございます!」

宰相閣下も知らなかったようだ。とんだサプライズだ。さすがに宰相閣下は何かを察したらしく、したり顔で頷いている。

「なるほど、だからタウンゼット様が陛下のお部屋に・・・」

「うむ。後宮の女どもは嫉妬深いからの。タウンゼットの身にもしものことがあってはならぬ故、余の部屋に住まわしておる。後宮の女たちの間では、余がタウンゼットを昼となく夜となく傍に置いていると噂のようじゃ。ハハハハハ」

「と、いうことは、俺に結界を・・・」

「察しが良いの。済まぬが、頼みたい」

俺はタウンゼット様に結界を張る。サービスして、かなり強力な結界を張っておく。

「さて皆の者、そして義弟どの。本日呼び出したのは他でもない。あのニザ公国のことじゃ」

「陛下、別に俺が行く必要はないかと思いますが・・・」

「兄上、なぜリノスなのですの？その理由をお聞かせくださいませ」

「実はあの国に、魔族が入り込んでおるらしいのだ。そして、そやつらがどうやら国を混乱に陥れようとしているらしい。ドワーフ王から内々の密書が届いた。ニザ公国と我がヒーデータ帝国は、商業上の取引はもちろん、地理的にも我が喉元にあると言って過言でない。むろん、盾として扱う気は毛頭ないが、ドワーフ王にはいろいろと便宜を図ってもらっておるからの。余の個人的な感情ではあるが、助けてやりたいのだ」

なるほど、戦略上重要な国でもあり、そこが瓦解するといろいろと困るのか。

「リノス殿には、余からの公使としてニザ公国に行ってもらう。表向きは国内の農業改革の手伝いじゃ。なにしろ、クルムファルを復興させた実績があるからの。大歓迎で迎えられるであろうな。しかし、その一方で国内を混乱させている魔族を駆逐してほしい。放っておいては後々、我が帝国にも触手を伸ばすやもしれん。済まぬが、やってくれまいか」

「イヤ・・・とは言えないですよね？」

「リノス殿は余の義弟であり、ヒーデータ帝国皇帝の身内じゃ。粗略には扱われまい。そして、公国まで長い森を抜けることになるが、その際に鹿の状況も見てもらいたいのじゃ。その二つをやり遂げられるものは、リノス殿を置いて他にない」

「・・・わかりました」

「頼む」

陛下に懇願されて、渋々承諾させられてしまった。

早速屋敷に帰り、皆に報告をする。

「う～ん、鹿が急に大量発生するのは、考えられないですね」

メイが首をかしげている。

「ご主人1人で行かれるのでありますか？」

「イヤ、ゴンと・・・フェリスは付いて来てくれ。他は屋敷で待機してくれ。準備が整い次第、出発する」

その夜、俺が寝ようとすると、リコがベッドに入ってくる。今日はいつになく積極的で、リコから求めてくるのは珍しい。

「どうしたんだ、リコ？」

「・・・旅に出るのでしょう？私は連れて行っていただけないので

すね？」

「クルムファルのことがあるだろう？」

「そうですけど・・・。一人で寝るのは、イヤですわ」

「大丈夫。夜は転移結界で屋敷に帰ってくる。心配いらないよ」

「毎晩、一緒に寝てくれますの？」

「もちろんだよ。毎晩、リコを抱きしめるよ」

「必ず、必ず、帰ってきてくださいませね」

俺はリコを抱きしめ、背中からお尻の方をゆっくり撫でてやる。その指の動きに敏感に反応したリコは、俺にしがみついたままピクピクと体を震わせて息を荒くするのだった。

ゆっくりと、夜が更けていった。

第八十七話　同級生、クラリフォン・サエリ・チューリー（前書き）

ちょっと間話です。ペーリスの学園生活について書いてみたくなったので、作ってみました。すぐに完結する予定です。本編とは関連性はありませんので、興味がなければ読み飛ばしてください。

第八十七話　同級生、クラリフォン・サエリ・チューリー

僕は、クラリフォン・サエリ・チューリー。ヒーデータ帝国のクラリフォン子爵家の長男で、この春からヒーデータ帝国大学に入学した１６歳だ。

僕には気になる女性がいる。同級生である、ペーリスちゃんだ。

彼女を初めてみたのは、大学の入学試験の時だった。たまたま席が隣同士だったのだが、紫色の髪がとても珍しかったのもあるけれど、あまりの美しさに心が奪われてしまって、筆記試験を上の空で受けてしまった。これではいけないと、何とか気持ちを持ち直して問題にあたったけど、正直自信はなかった。

その後に行われた魔法の実技試験でも、僕は面食らった。まあ、僕だけじゃなく、試験官の先生たちも面食らってたけど。

魔法の実技試験は、自分が得意とする魔法を使用するというものだ。しかし、幼いころから魔法の修行を積んだ者の中には、２つ、場合によっては３つの魔法を使える人もたまにいる。実際僕も、風魔法と水魔法が使える。そこで試験が行われる前に、試験官の先生からこんな呼びかけがあったんだ。

「魔法が一つ使える者は私のところへ、二つ使える場合はサリオ先生のところへ、三つ使える場合はシューセ先生のところへ集まってくれ」

皆がバラバラと動き出す。僕は二つ使えるので、サリオ先生のとこ

ろなので、そこに行こうとすると、ペーリスちゃんは戸惑った表情を浮かべている。僕は勇気を出して話しかけてみた。

「どっ、どうされたのですか？」

「ええと・・・四つ使える場合はどこに行ったらいいのでしょう？」

「よ、四つ？？」

女性の前で大きな声を出してしまった。でも、仕方なかったんだ。本当にびっくりしたんだから。

とりあえず、試験官の一人に彼女が四つの魔法を使えると伝えたら、すっごく怪訝な表情をされた。そして、試験官同士が集まって話をした後、ペーリスちゃんだけが別の場所に連れていかれた。

そして、実技試験が始まった。複数の魔法が使える者はまず、自分の一番得意な魔法を最大出力で飛ばす。大抵そこで魔力が尽きるので、ＭＰ回復薬を飲み、しばらくして残りの魔法を出力するという流れで試験が行われる。

僕は得意の水魔法でＬＶ２のウォーターバレットを出した後、ＭＰ回復薬を飲み、休憩していた。その時、信じられない光景を目にしたんだ。

ペーリスちゃんのところから、巨大な火柱が上がっていた。あれはＬＶ３の火魔法のバーストのはずだ。まさか１６歳でＬＶ３の魔法を操るなんてありえない。思わず僕はＭＰ回復薬を落としそうになった。

試験官の先生たちも固まっている。そんな先生たちの様子も全く気にせずに、ペーリスちゃんは

「ええと・・・他の魔法も撃ってみていいですか？」

「え？回復薬は？」

「大丈夫だと思います」

そう言って次々と魔法を繰り出していく。しかもその全てがＬＶ２以上！水魔法に至っては僕のウォーターバレットよりも、さらに高速で威力の高いものだった。おそらくＬＶ３なのだろう。さすがに試験官も慌てだした。それはそうだろう。１６歳でＬＶ３の魔法が使えるのだ。僕も正直、信じられなかったもの。

しばらく試験官の先生たちに囲まれていたペーリスちゃんは、どこかに連れていかれた。きっと僕には及びもつかないスキルをたくさん持っているんだろう。でも僕にも一つだけわかったことがある。彼女は帝国大学に合格している。そのことだけは確実にわかった。

正直、僕が帝国大学に合格しているかどうかは微妙なところだと思っていた。でも、合格しなければ彼女に会う機会はほとんどないと言っていい。不合格なら僕は、クラリフォン領に帰らなければならない。そうなれば帝都に来られるのは、月に一回開かれる社交界の時くらいだ。でも、クラリフォンから帝都は遠いので、二月か三月に一度くらいしか来られないだろう。そうなれば、彼女に会う機会など皆無と言っていいのだ。

僕は初めて自分の意志で教会に行った。これまでは半ば義務として通っていたのだけど、今回だけは教会に行きたいと思ったのだ。そ

して、主神であるクリミアーナ様に、帝都大学に合格させてほしいと心から祈った。

祈りが通じたのか、僕は合格していた。生まれて初めてうれしくて泣いてしまった。

入学してすぐ、ペーリスちゃんは見つけることが出来た。あの髪の色だ。すぐにわかる。そして、その美しさでも・・・。

彼女は特待生として、僕たち貴族の子弟と同じ教室で学ぶことになった。男子学生は今のところ平静を装っているが、全員がペーリスちゃんを意識しているのはよくわかった。

驚いたことに彼女は、あの新興貴族であるバーサーム侯爵の身内の女性だった。バーサーム家と言えば、帝国と長く敵対関係であったジュカ王国の宰相を務める名家だ。ジュカ王国が大魔王によって滅亡させられた後、帝国に亡命してきた。現在の当主は養子とのことだけれど、陛下の妹君であるリコレット皇女と結婚し、帝国名誉侯爵の位を賜っているが、帝室と深いつながりのある家柄だ。

当然、僕たち貴族の人間たちにとってペーリスちゃんは、よい結婚相手だ。何しろ、バーサーム家とつながることができる。ということは、帝国帝室とつながりができるということなのだ。

でも、ペーリスちゃんはすぐにクラスの中で孤立し始めた。僕たちとは生活様式が全く異なるため、行動パターンが違うのだ。

例えば食事。基本的に僕たちは、大学内のサロンで食事をする。そこは貴族の子弟たちしか利用できない部屋であり、そこでは、自分が家を継いだ時のために、色々なつながりを作る役割も兼ねている

のだ。

しかし、ペーリスちゃんはそこで食事をとらない。いつも大学の芝生に座るか、図書館で食事をとっている。何より驚いたのが、その食事をペーリスちゃんが作っていることだ。食事を作るのは、侍女か奴隷のすることで、貴族の者がすることではない。そのことで彼女を嘲る女子学生もいたほどだ。しかし、バーサーム家では女性の誰もが食事を作るのだと言うし、あのリコレット皇女も、皆の食事を作るのだと言う。

僕はますますペーリスちゃんに興味を持った。

ある時、珍しくペーリスちゃんが教室に一人でいた。一心不乱に何かを書き込んでいる。ちょっと悩んだけど僕は、思い切って彼女に話しかけてみることにした。

「あ、あの、帰らないんですか？」

「え？あっ、すみません・・・」

「あ、何か僕、邪魔しちゃったみたいですね」

「あ、いえいえ、ちょっと夕食のメニューを考えていたら遅くなっちゃいました」

「夕食のメニュー・・・どんなものを？」

「グラタンを作ろうと思ってるんですが、ソースの味をもう少し改良できないかなと考えていて・・・」

「ソースの味、ですか？」

「料理っておもしろいですよー。塩一つ加減が違うと、味が全然違いますから」

「すごいですね」

「いえ、そんなことありませんよー。リノスさんが作る料理はもっと美味しいですから」

「え？バーサーム名誉侯爵も食事を作られるのですか？」

「たまにですけどね。でも、すごく美味しいんですよー」

「へぇ・・・。僕も食べてみたいな」

「じゃあ今度、何か持ってきましょうか？」

「ええっ！？いいんですか？」

「別にかまいませんよ？」

「あ、あの、僕、クラリフォン・サエリ・チューリーと申します」

「私は、ペーリスです。確か、魔法の試験の時に案内してくれた方ですよね？」

「覚えていてくれたんですか？」

「もちろんですよー」

こうして、僕とペーリスちゃんは友達（？）になった。しかも僕のために何か作ってくれるという。これはクリミアーナ様のご加護に違いない。今度、帝都の教会に行ってお祈りをせねば。

これからの大学生活が、とても楽しみだ。

第八十七話　同級生、クラリフォン・サエリ・チューリー（後書き）

ペーリスの視点：お弁当の残りでも持って行ってあげよう♪

第八十八話　ニザ公国の実情

ニザ公国。ヒーデータ帝国の北西に位置し、代々ドワーフ族が治める地である。森と山に囲まれた地であるものの、山から産出される鉱石を用いて作られる武器や防具は一級品であり、その取引から生まれる財が国を維持している。

ニザ公国の山々から産出される鉱石は多様だ。何といっても、豊富なミスリル鉱石を産出する山を所有しており、その他にも、金山、銀山、銅山を所有している。そのためにこの国では、世界唯一のオリハルコンを製造する技術を持っている。

つまり、この国が存亡の危機に立たされているということは、最高の武器や防具の供給源が枯渇すること意味し、世界に与える衝撃と影響は多大なものになる。これまで数百年にわたりこの国と同盟関係にあったヒーデータ帝国としては、看過できない出来事なのだ。

俺はこの国に出発する前に、かなり入念な準備を行った。というのも、公国内が飢餓状態にあるからだ。俺は、クルムファル領で収穫された大半の食料を集め、それを一旦帝国に買い取ってもらった。そして、その食料を支援物資として届けることにした。農地の荒廃を復旧したところで、すぐに作物が採れるわけではない。最低でも一年間は食いつなげる食料が必要になるからだ。

そして、それらを無限収納に入れ、出発した。当初は俺とゴン、フェリス、イリモで行こうと思ったのだが、メイとルアラがどうしても行きたいと言い出した。

メイの場合は父親がドワーフで、その出身地がニザであり、一度父親の故郷を見たいと思っていたことと、ドワーフの技術を学びに行きたいという思いからだった。メイについては、俺がニザに着き、転移結界を張った段階で連れてくることにした。そして、ルアラについては同行を許可した。もし、大量のシカと戦闘になった時に、俺とフェリスだけでは手に余りそうで、もう一人攻撃が可能な人材が必要だと判断したのだ。ルアラは森で魔物を狩らせてレベルを上げつつ、ニザに向かうことにした。

まず、俺たちは屋敷の西側にある森に入り、そのまま北西に進むことでニザを目指すことにした。その間には大きな谷があり、普通の人間には渡ることは不可能であるが、俺たちにはイリモがいる。彼女の翼で飛べば問題ないだろう。

実際、谷までの行程は全く問題がなかった。普段からジェネハ率いるハーピーたちが森の魔物を駆逐しており、全く拍子抜けするほど楽しいピクニックだったのだ。

大谷に着くと、俺とゴンはイリモに乗り、ルアラはフェリスに抱えられて大空に飛び上がった。そのまま谷を越える。途中、大きな鶏のような鳥が群れで俺たちを攻撃してきたが、全羽撃退し、無限収納の中に納まっている。スケアリーバードというらしく、連携攻撃で獲物を狩るそうだが、ハーピーたちと比べると雲泥の差であり、全く俺たちの敵ではなかった。

谷を越えると、様相が一変した。リークフェザーという植物があちこちに自生していたのだ。こいつは白い小さな花を咲かせているが、その茎と葉には極小の針が生えており、それに触れると麻痺してしまう。別名、「森のトラップ」とも呼ばれる冒険者泣かせの植物らしい。

基本的に俺には麻痺耐性があり、他もその植物で麻痺することは考えにくいが、一応結界を張って進む。しばらくすると、うれしいことにカースシャロレーの群れがいた。大喜びで全て狩りつくしたのは言うまでもない。

そして出発して三日、ようやく森を抜けた。そこには、広大に広がる耕作地があった。

「うわーこれはひどいでありますなー」

「本当ですね。まさかこれほどとは・・・」

「ううっ、ヒドイ」

目の前には、大量のシカが農作物を食い荒らしている光景があった。数百頭のシカが、辺り一面の農作物を片っ端から食べているのだ。

「ああっ！それはダメだ！」

「やめてぇぇぇぇ！！！」

絶叫が聞こえた方に目を向けると、高い壁で囲われた畑にシカが侵入し、畑に芽を出した作物の苗を食べている。その柵の周りで、ドワーフ一家が絶叫している。男と女は身体が小さく、中学生に見える。そしてその二人の娘だろうか、さらに小さい女の子が柵の周りを走り回りながら絶叫している。

「食べちゃダメ！食べちゃダメぇ！」

「もう許さん！」

父親と思わしき中学生が斧を片手に柵の中に入ろうとする。するとどこからか、大人びたドワーフが現れ、斧を持ったドワーフを羽交い絞めにする。

「やめんか！神の使いだぞ！」

「何が神だ！俺たちの作物を食い荒らしてるだろうが！！」

「この国ではシカを殺すと死罪だ！やめんか！」

「構わん！せっかく芽を出した作物まで食い荒らされたら俺たちは死ぬしかないんだ！飢え死ぬんだったら、殺された方がマシだ！」

羽交い絞めにした男を振り切って、中学生ドワーフは柵の中に入り、シカの背中に向けて斧を振り下ろした。いきなり背中を傷つけられたシカは驚いて飛びのき、中学生ドワーフをじっと見つめる。

しばらくするとシカは驚くべき跳躍力で柵の外に飛び出した。そして再びドワーフたちを凝視して、どこへとなく消えていった。

「ガミヒ、何ということを！」

「構わん！こうでもしなきゃ、奴らまた襲ってきやがる！」

「ガミヒ・・・」

中学生ドワーフは泣いていた。俺は無限収納から救援物資用に作った弁当と、クルムファルの収穫物の一部を取り出し、泣いている一

家の所へ向かう。

「よかったら、食べてください」

「!!!あんたは!?・・・冒険者か?そんな施しを受けては・・・」

「いいんです。こちらこそ、余りもので恐縮です。ところでここは、ニザ公国で間違いないですか?」

「・・・ああ、そうだ。ニザ公国だ。しかし不運だったな。今この国では食料はない。だから宿に泊まっても食事は出ないぞ」

「噂では聞いていました。俺たちは大丈夫です。食料はありますから。すみません、王宮に行きたいのですが、どの方角に行ったらいいでしょうか?」

「ああ、それなら、この道を真っすぐに行けばすぐに大きな町が見えてくる。そうすれば王宮はすぐにわかる」

「ありがとうございます。それでしたら、道を教えていただいたお礼に、よかったら、この食料をお受け取りいただけませんか?」

「・・・いいのか?」

「ええ、もちろんです」

「・・・すまん。感謝する」

ガミヒと呼ばれたドワーフは、俺たちからの食料を受け取り、礼を

言うとすぐに家の中に入ってしまった。

「ほんとうにありがとうございます。何とお礼を言っていいやら」

「気にしないでください」

「お兄ちゃん、冒険者なの？じゃああのシカたちを追っ払ってよ」

「ジャニ、滅多なことは言うもんじゃありません！」

「そんなにシカの被害は深刻なんですか？」

聞けば、シカが大量発生したのは二年前からなのだそうだ。それ以降、里に現れては農作物を食い荒らしていく。ニザ公国は小さい国だ。しかも山国なので国民が自給自足の生活ができる最低限の食料しか生産することが出来ない。そこに来てのシカの被害なのだ。国のダメージは計り知れないものがあった。

最初の一年は備蓄していた食料を放出して、何とか凌ぎ切ったが、二年目も同じ状況ともなると、打つ手が全くない。他国から食糧支援を受けているとはいえ、国民全員を食わせるほどの食料は集められない。それでも何とかこの冬は少ないながらも食料の配給があったが、ここ二週間はそれも止まった状態なのだという。ドワーフ王がヒーデータに緊急支援を求めたのは、こうした背景があったのだ。

この親子には、約一週間分の食料をさらに手渡し、俺たちは王宮へ向かう。途中何度も大量のシカたちが農作物を食い荒らしている場面に遭遇する。

「一体どれだけのシカがいるんだろうな」

「わからないでありますなー。人間たちが襲われていないのがせめてもの救いではありますなー」

「しかし、農作物が全て食い尽くされると・・・」

「人間を襲うことも考えられるでありますなー」

「そうなる前に止めないとな」

ほどなく俺たちは町に入り、王宮に着いた。町では、あちこちから煙が上がっている。おそらく、ドワーフたちの工房なのだろう。店も武器、防具などいろいろな看板を掲げた店があるが、その大半が閉店状態だ。

王宮に着き、俺の名前を告げると、警備の兵士は飛び上がって喜び、城内の兵士の大半が俺を出迎えてくれた。そして、広い部屋に通される。どうやら王族が使っていた部屋とのことで、調度品など実に豪華だ。ゆっくりする間もなく、宰相のユーリーが入室してくる。

「早々のご到着、感謝します。侯爵のお着きを心待ちにしておりました。王は明日の早朝に侯爵にお会いになるとのことです。本日はごゆっくりお寛ぎください」

「あの・・・ヒーデータより救援物資として食料を持ってきたのですが」

「何と！それはありがたい！早速受け取らせていただきたい」

「ええと、ここでは狭いですね」

「わかりました。それではこちらへどうぞ」

とても広い地下室に案内される。薄暗くて、不気味な部屋だ。

「ここは食糧を備蓄していた部屋です。ご覧のとおり、わが国には食料と呼べるものがありません。食料を支援していただくのは、何よりもありがたいのです」

俺は無限収納の中から、大量の食料を取り出していく。最初は目を丸くしていた宰相だが、やがてその顔は満面の笑みに変わった。

「こ・・・これだけの食料があれば、数か月は食いつなげる。バーサーム侯爵、本当に、本当に感謝する」

宰相は俺の手をがっちり握る。そして兵士たちを呼び、大量の食料を整理していくよう命じる。

「今宵は、我がニザ公国で取れた食料でもてなします故、存分にご堪能ください」

夜になり、俺たちの部屋に料理が運ばれてくる。山国だけあって野菜料理が中心だ。俺たちは取りあえず、出された料理を口に運ぶ。

「・・・微妙だな」

「何でありますかこの味はー」

「マズイですね」

「美味しくない・・・」

一口食べれば十分、という味だ。何というか、野菜の苦みやえぐみが取れていないのだ。下処理が全くされていないのかもしれない。

早速俺たちは転移結界を張り、ヒーデータの屋敷に帰った。部屋にはフェリスを置いてきた。人が来た時に俺に知らせることが出来る念話のスキルを持っているのがフェリスだけだったのだ。

俺たちはリコとペーリスが作る料理に感心しつつ、夕食を楽しんだ。そしてお留守番のフェリスには特製のお弁当を用意してもらい、そしてイリモにも、クルムファルで取れた人参を大量に持ってニザ王宮の部屋に帰った。

リコにはしばらくは王宮に泊まるかもしれないと伝えておいた。全く普段通りのリコの態度で了承してくれたが、心中は穏やかではあるまい。早くコトを片付けて、リコの傍にいてやりたいものだ。

外の馬小屋にいるイリモにニンジンを持っていく。

「助かりましたー。ここの食事は美味しくなくて困っていました」

もしかしたら、ドワーフの味覚は、俺たちとかなり異なるものなのかもしれない。

俺たちに与えられた部屋は、応接室のほかに、ベッドルームが三つもあり、それぞれに二つずつ高級そうなベッドがある。どうやら一つは王族用で、後は警護や侍女の控室のようなものらしい。俺は一番広いベッドルームを与えられ、フェリスとルノアはそれぞれの部屋で寝るようだ。応接室のソファーにはゴンが居座っている。

隣を見ると誰も居ないベッドが見える。夜、寝る時くらいは、リコかメイを連れてきてもいいなと思いつつ、俺は眠りに入るのであった。

第八十九話　公女からのお願い

目が覚めると、リコがいた。夢かと思ったが、正真正銘のリコがそこにいた。

現実を認識できず、じっとリコを見る。リコはゆっくりと俺のベッドに近づいて来る。

「朝ですわ。起きてくださいまし」

「・・・リコ？どうしてここに？」

「リノスが作った転移結界を使って、朝食を届けに来たのですわ。ニザの食事はお口に合わないのでしょう？ですから、朝食を作って持ってきたのですわ。今日はドワーフ王との謁見でしょう？謁見の最中にお腹が鳴って恥ずかしい思いをしないようにしませんと」

「ああ、ありがとう」

リコが持ってきたバスケットの中には、数種類のサンドイッチが入っていた。しかもまだ温かい。きっとリコは早起きしてこれを作ってくれたのだろう。そう考えると、うれしさがこみあげてきて、思わずリコを抱きしめる。

このまま押し倒したい衝動に駆られるが、ここは自制する。

「頑張ってくださいませね」

「リコのおかげで頑張れそうだ。ありがとう。助かったよ」

リコのおでこにキスをしてやる。嬉しそうな顔をするリコ。その笑顔のまま転移魔法陣に乗り、帝都へ帰っていった。

予想に反して、ニザの朝食は美味しいものだった。何でも俺が持ってきた救援物資を使って料理したのだという。クルムファルは水も土も肥料も、かなりいいものが使用されている。必然的に食材の味にも影響しており、クルムファル産の食材は帝都でも大人気なのだ。それらを使って料理すれば、大抵のものは美味しく出来上がるのかもしれない。リコの作ってくれたサンドイッチを食べていなければ、いくらかお代わりをしたかもしれなかった。

その後、ユーリーがやってきて、俺たちをドワーフ王のもとに案内する。小さいながらも贅をつくした謁見の間に現れた王は、小柄であるが、髭を蓄えた威厳のある厳めしい顔つきの男性だった。

「ニザ公国王、ニザ・デューク・エイモンである。バーサーム侯爵に置かれてははるばるよく参られた。そして膨大な物資についても礼を言わせてもらう。わが国もこれで持ち直すであろう」

「ハハッ。我が義兄であります、ヒーデータ帝国皇帝陛下は、貴国のこの度の惨状に心を痛めておいでです。何か他に出来ることがあれば、何なりと申されよとの言伝でございます」

「うむ、心強い。バーサーム侯においてはしばらく我が国に逗留されると聞いた。その間はゆるりと過ごされるとよい。また日を改めて、侯爵をもてなす宴を催したい。詳細については、追って沙汰をすることとする。この度は大儀であった」

それだけを言うと、ドワーフ王はさっさと退出してしまった。そして俺は、再び与えられた部屋に戻ってきた。

「何だか随分とのんびりしているな。早くシカを追い払えとか言われるかと思っていたんだがな」

「そうでありますなー。吾輩が見たところ、シカの被害は一刻も早く対処した方がいいと思うのでありますがー」

そんな話をしている間に昼になり、俺たちは部屋で昼食を取った。あらかた食事も終わり、イリモの様子を見に行こうとしていたその時、一人の女性が俺たちの部屋を訪れた。

「お初にお目にかかります。私、ニザ公国国王の息女、ニザ・コンシディーと申します。父が内々に侯爵様にご相談申し上げたいと申しております。誠に恐れ入りますが、父の部屋までお越しいただくことはできますでしょうか？」

見たところ、完全に中学2年生くらいの女の子だ。俺もドワーフ王にはいろいろと相談したいことがあったので、二つ返事でＯＫする。そして、コンシディーと名乗る女性に先導されて、俺たちはドワーフ王の部屋に向かった。

案内された部屋にいたのは、赤紫色の顔色をした国王だった。

「ふっ・・・驚いたであろうな？」

「これは一体・・・先ほどとは別人のようなお姿ですね」

「先ほど、謁見の間にいたのは儂の影武者だ。さすがに、ヒーデータ帝国の使いに影武者を会わせる訳にもいかんからな。ご足労願った次第だ」

「ここ一年、父上は病に侵されています。バーサーム候にご相談申し上げたいことは、父の病のことです」

「と、おっしゃると？」

「父の発病と時を同じくして、王族に病に倒れるものが続出しているのです。しかも、同じ症状で」

「どのような症状なのでしょう？」

「まず、体のだるさを覚えます。その後、体中に激痛が走るようになり、それが収まると、歩行が困難になり、手が震えるなどの症状が出てまいります。そして、徐々に衰弱していくという症状です」

「回復魔法では治癒できないのでしょうか」

「無論それは試しました。エクストラヒールをかければ、症状は改善します。しかし、しばらくするとまた、同じような症状を発症するのです。父には既に5回も回復魔法をかけておりますが、一向に症状が治癒される気配がありません。それどころか、回復魔法も今ではほとんど効かない状態なのです」

「なるほど・・・。で、私に相談というのは？」

「我々は、父をはじめとする王族たちのこの病は、何者かに毒を盛られたと考えています。バーサーム侯爵様におかれては、父に結界を張っていただきたいのです」

「結界、ですか。」

「父に悪意を持ったものを遠ざけ、なおかつ、悪意あるものが加えた毒を通さない結界をかけていただけないでしょうか。聞けば侯爵様は、ヒーデータ帝国の皇帝陛下の結界を担当されていると聞きました。その強力な結界をぜひ、父にもお願いをしたいのです」

「わかりました。結界についてはすぐに張ることにしましょう」

俺は、王に悪意を持つものを近づけず、なおかつ悪意を持って盛られた毒物を遮断する結界を張った。

「取りあえず結界は張っておきました。これで暗殺の類は防げると思います」

「ありがとうございます」

「ところで、シカの件なのですが・・・」

「それについては・・・、我々に任せてもらいたい」

国王が弱々しく呟く。

「何か、対策があるのでしょうか?」

「対策は、ない」

「では、どうするのでしょうか？」

「・・・この度の作物の被害は、おそらく鹿神様がお怒りになられているのであろう。我々ドワーフは鹿神様にお仕えしてきたという自負はあるが、なにかのお怒りに触れたのだろう。今は、ただ静かに、お怒りが解けるのを待ちたいと思う」

「父上！」

「コンシディー。シカたちは長年にわたり森に住み、我々を魔物の脅威から守ってくれていた。今、こうして作物を食い荒らしているからと言って、そなたの言うようにシカを殺しては、ドワーフ族は未来永劫、魔物の脅威に怯えて暮らさねばならなくなる。数年前に隣国のジュカ王国の如く、復活した大魔王のこともある。我らは鹿神様のお怒りを鎮めることを第一に考えるのだ」

「そんなことをしていては、国が・・・」

「大丈夫だ。そのことについては考えている。お主は心配するな」

「父上！もう一度お考え直してください」

「皆、ご苦労であった。下がってよい」

有無を言わせず会見を打ち切られる。よく見ると、王の手が震えている。体調はかなり悪いようだ。

王の部屋を退出した俺たちは再び、コンシディー公女の案内で城内を移動する。てっきり自分たちの部屋に案内されるのかと思いきや、

公女は別の部屋に俺たちを案内した。そこにはユーリー宰相と、フードを目深にかぶった魔法使いらしき人間がいた。

「ここにご案内したのは、侯爵様にもう一つのお願いがあるからなのです」

コンシディー公女が口を開く。その言葉を待っていたかのようにユーリー宰相が口を開く。

「貴殿も我が国の惨状をご覧になられたかと思います。シカたちの被害は最早看過できない所まで来ています。王はシカの討伐には反対されていますが、私もコンシディー様も、一刻も早くシカを討伐するべきであると考えているのです」

「俺にシカを討伐せよと仰るのですか？」

「いえ、侯爵様にそのようなことはさせられません。あくまでシカ討伐は、我々でやりたいと思います。侯爵様には、村の畑に、結界を張っていただきたいのです」

「畑に結界、ですか？」

「この王宮の裏手に、広大な畑があります。ここは王族、特に王が口にされる食物を育てている畑です。今のところシカの被害はありませんが、ここも襲われるのも時間の問題です。ここが壊滅すると、ニザ公国の田畑は本当に壊滅します。この最後の砦だけは守らねばならないのです」

「その畑に毒物がまかれた可能性は？」

「それはない」

フードを被った者が答える。声からすると男性のようだ。

「紹介が遅れて申し訳ありませんでした。この方はレコルナイ博士です。数年前から我が国に部下の方々と共に逗留していただいているのです。博士は、わが国の水を浄化する水を開発していただいた大恩人なのです」

「水を浄化する水、ですか？」

「我が国は鉱物資源が豊富です。それに、手前味噌にはなりますが優れた精製技術を持っています。鉱物を精製し、剣や鎧を作るのにはどうしても水が必要になります。これまでは精製に使用し、汚れた水は池や川などにまとめて捨てていたのですが、そのために我が国の水は汚れていました。しかし、博士の水を使えば、水が浄化されるのです。それどころか、匂いもしなくなるのです。お蔭で町や国の水辺が実に美しくなりました。感謝してもしきれないお方なのです」

「もともと我々は流浪の民だった。その我々を保護し、研究する場所まで提供いただいたこの国に貢献するのは当然のことだ。バーサーム侯爵、私は貴族が嫌いだ。しかし、この国を救うというのであれば話は別だ。侯爵様はクルムファル領を荒廃から救われたと聞く。是非、そのお力を借りたい。そして、シカが駆逐された後、我々と共に、ニザ公国を荒廃から救う手立てを一緒に考えていただきたい。厚かましいお願いであることは重々承知している。しかし、我々はやりたいのだ。伏してお願いしたい」

「いえ、大丈夫ですよ。俺も陛下から公国の復興に尽力せよとの命

令を受けていますから」

「ありがたい！」

早速皆で、王宮の裏の畑に向かう。ちょっとした家庭菜園のような畑だが、ここだけは作物の被害はなさそうだ。俺は、指定された通り結界を張った。そして、しばらくの間様子を見ることにしたのだが、すぐに問題は発生したのだった。

第九十話　まさかの敗北

「シカだ！シカが出たぞ！」

「作物を守れ！身体を盾にして守るんだ！！」

明け方、そんな声を聞いて目が覚めた。俺はあわてて部屋を飛び出す。すると、シカの所に向かう兵士たちを見つけ、すぐさまその後を追う。城の外に出てみると、そこには予想だにしなかった光景が飛び込んできた。

結界を張ったはずの畑にシカが入り込み、作物を食い荒らしていた。兵士たちは、まだ食われていない作物の上に覆いかぶさり、シカから食物を守ろうとする。しかし、シカたちはそんな兵士たちを軽々と放り投げ、作物を食い荒らしていく。

何より、俺の結界が問題だ。人間以外の生物が入り込めないように結界を張っていたのにもかかわらず、そこに数十頭のシカがやすやすと入り込んでいる。結界自体は破られたわけではなく、そのままだ。一体なぜ？俺の頭は混乱する。落ち着け、落ち着いて考えるんだ。

「終わりだ・・・この国は終わりだ・・・」

そんな兵士のつぶやきを聞いて我に返る。見ると、作物を食いつくしたシカたちがそれだけに飽き足らず、食い散らかした作物の残骸や葉っぱなども食いつくそうとしている。そして、瞬く間に畑は、土だけの大地になった。

呆然と見ている俺たちを尻目にシカたちは、高い城壁をいとも簡単に乗り越えて、森に向かって移動し始めた。途中俺の結界の境界部分に差し掛かった時、シカたちから稲光にも似た光が放たれ、そのまま結界の外に出ていった。よく見ると、群れの先頭には小鹿がおり、自分の何倍もの大きさを持つシカたちを森に誘導していた。

「そんな・・・こんなことが・・・」

後ろからそんな声がする。振り返って見てみると、城のバルコニーにコンシディー公女が、畑を見て立ち尽くしていた。俺の視線に気づいた公女は、俺に一瞥をくれて、すぐにその場を後にした。

「侯爵様、どうぞ、お部屋にお戻りください」

後を追いかけてきたと思われる侍女に促され、俺は部屋に帰った。

「ご主人の結界が破られたのでありますかー」

「うそでしょう?私が閉じ込められたとき、どうやっても出られなかったあの結界が、シカごときに破られたんですか?」

部屋に戻って報告すると、全員がひっくり返った。俺も、慢心していたわけではないが、自分の結界については自信があった。まさかシカに結界を越えられるとは、思いもよらなかった。

「俺の結界でもダメともなると、本当にシカを間引く以外、方法がないな」

「リノスさん、任せてください。私がシカたちをまとめて倒します」

フェリスはいつも元気だ。確かに、ドラゴンの力をもってすれば、シカの間引きは簡単にできるだろう。そんなことを考えていると、ユーリー宰相が現れた。

「侯爵殿、すまないがすぐに私と一緒に来ていただきたい」

「どうされたのですか？」

「王が倒れられたのです」

「えっ？」

「先ほど朝食を取られた後、立ち上がろうとしてそのまま転倒し、左腕を骨折されたのです。それだけならばよかったのですが、体中の痛みを訴えておられます。侯爵殿の結界の中でも症状が全く改善せず、むしろ悪化しているような気がするのです。申し訳ありませんが、王の結界を一度解除して欲しいのです」

「わ、わかりました」

今度は王様が倒れてしまった。毒物などは完全に遮断する結界を張ったのにもかかわらず、だ。一体この国では何が起こっているのか？全く思考が追い付かない。

ユーリー宰相に連れられるまま、俺は王の寝室に向かう。部屋の中でのドワーフ王はすでに治癒魔術師により回復魔法が施されて、ベッドに横たわっていた。俺は促されるまま、ドワーフ王に張った結界を解除する。

「私が不甲斐ないばっかりに・・・本当に申し訳ありません」

「バーサーム侯爵か。いや、貴殿のせいではない。儂の寿命だよ」

「城内の畑の作物も皆シカに・・・」

「それも聞いた。相手は神の使いだ。貴殿の結界が破られるのも仕方があるまい」

「ドワーフ王、私はやはりシカを討伐するべきだと思います。このままではニザ公国は崩壊します。私に、シカの討伐をやらせてください」

「シカを討伐することはならぬ」

ドワーフ王は力なく首を振る。

「国王様、なぜシカ討伐に反対されます！我々ドワーフには古よりシカを傷つけてはならぬという掟があるのはわかります。しかし今は非常時です。我々ドワーフが無理であるならば、バーサーム侯爵にお任せすればよいではありませぬか！それでしたら、ドワーフがシカを傷つけたことにはなりますまい！」

ユーリー宰相の必死の説得にもかかわらず、王は頑として首を縦に振らず、シカを討伐することはならぬ、の一点張りだ。

「国王様は・・・この国を亡ぼすおつもりか・・・」

「国を亡ぼすつもりは毛頭ない。おそらく、シカの大量発生は、鹿

神様の儂への天罰なのだ。儂は優れた武器や防具を生み出し、それで商いをすることで財を成してきた。儂はそれに執着しすぎたのだ。確かに国は豊かになった。しかし、ドワーフとして忘れてはならぬ心を忘れておったのだ。今の惨状は、その報いなのだろう」

「ドワーフとして忘れてはならぬ心とは、何でございますか！」

「世のため、人のためになるものを作り、そのために技術を研磨していく心だ」

「国王様！お言葉ではございますが、この国に生きているドワーフは皆、おのれの技術を研磨することに生涯を賭けております！優れた武器や防具を生み出すことの何が悪いのです！魔物から身を守れたでありませんか！敵の襲来を食い止められたではありませんか！」

「果たしてそれが、世の人のためになったのであろうか？我らが作りし武器で傷ついたものも多くいるのではないか？・・・まあよい。儂の命もそう長くはないだろう。儂亡きあと、鹿神様はきっとこの国を、元の大地に戻してくださるだろう。本来は儂が死んでお詫びせねばならぬのだが、あいにく死ぬための力すら儂にはない。皆の者、儂の命が尽きるまで、待つのじゃ。待つのじゃ・・・」

「国王様！」

いたたまれなくなった俺は、ドワーフ王の寝室を後にした。国王は頑としてシカ討伐の許可は出さないだろう。そうなれば俺は何ができるだろうか？そんなことを考えながら部屋に帰る。

部屋には既に、俺たちのための朝食が並べられていた。皆、俺の帰りを待っていたようで、料理には全く手を付けていなかった。俺は

皆に朝食をとるよう促し、俺も食べることにした。

すっかり冷え切ったスープ、固くなったパン、水気がとびつつあるサラダ、一つ一つの料理が不甲斐ない俺への罰のような気がする。そんな気分が滅入った中ではなかなか食事は喉を通らず、用意された食事の半分以上を残してしまうことになった。

しばらくすると、ユーリー宰相がレコルナイ博士を伴って俺の部屋にやってきた。

「すみません・・・私の力が及ばずに・・・」

「バーサーム侯爵が謝る必要はありません。侯爵の結界ではシカを止められぬ、この事実が分かっただけでも良かったのです。選択肢の一つが消えました。あとは残された選択肢を選んで実践してみるのみです。そしてそれがダメなら、また新たな策を考えればよいのです」

宰相を差し置いて、レコルナイはフードの中から饒舌に喋っている。

「博士の言うとおりだ。我々は、我々のできることをやる、それだけだ」

「何をなさるおつもりですか？」

「シカを討伐する」

「しかし、先ほど王様は討伐はしないと」

「そうですな。確かに仰られました。しかし、こう申しては何です

が・・・。国王様は、ドワーフ王のみが許されるオリハルコンの錬金を行うことは最早出来ません。あの重い黒鋼鉄の金槌を振るうことはできない身体になってしまわれた。したがって、王としての資格がないお方と言ってもよいでしょう。そこで、次期国王であらせられるご子息のガルトー様から、シカ討伐の御命令を発令していただきます」

「それで、私にシカ討伐に加われと？」

「いえ、侯爵様には、国王様から直々の要請を言付かっておりますので、それを伝えに来ました」

「直々の要請？」

「急ぎ、ヒーデータ帝国に帰還され、公国の惨状を皇帝陛下にお伝えいただき、その上で、救援物資の増援をお願いしていただきたい、とのことです」

「バーサーム侯爵が帰還されている間に、我々は公国の農地を回復させる。必ずやってみせます。そして、侯爵が再び公国を訪れる頃には、新たな作物が芽吹いている光景をご覧に入れてみせます」

レコルナイが胸を張る。俺はレコルナイの自信に満ちた態度より、何としても国民を救うという王の強い意志を感じ、そこに心を動かされていた。

「・・・皇帝陛下への救援物資の要請、承知しました」

「出発は、明日の朝にされるがよろしいでしょう。コンシディー様が貴殿を警護なされると仰せですから」

「コンシディー公女ですか?理由をお聞きしても?」

「シカ討伐の隊長にコンシディー様が任命され、明日の朝が出発なのです」

「なぜ女性のコンシディー公女が任命されるのです?」

「実はガルトー様も国王様と同じ病で臥せってておられるのです。しかし、国王様ほどひどくはなく、普段の生活には支障はありません。しかし、出陣となると話は別です。お体に障ってはなりませんので」

「しかし、女性が隊長というのは、その・・・大丈夫なのでしょうか?」

「コンシディー様はああ見えて、魔法が大変お得意なのです。討伐軍は、公国内にいる冒険者が中心の部隊となります。彼らは剣に覚えのある者が多く、コンシディー様の魔法と冒険者の剣、これがあれば討伐も速やかに進むでしょう。公国との国境付近までですが、コンシディー様の部隊に警護いただければ、貴殿も安全に帝国に帰れるでしょう」

「・・・お心遣い、感謝します」

「今宵はゆるりとお過ごしください」

「明日の出立に際しては、私の部下も同行いたします。回復魔法に優れた者で、きっとコンシディー様のお役に立つでしょう」

「さすがは博士、やはり頼りになります」

本音を言うと、今すぐにでも帝国の屋敷に帰りたかったが、俺自身に負い目があるのか、何故か今すぐ帰るとは言い出せなかった。仕方なく、今宵一夜をニザ公国で過ごすことにする。そして俺は屋敷に転移し、リコたちに事の顛末を放した。

「そうですの・・・。それは大変でしたね」

「ご主人様の結界を通り抜けるシカというのは不思議ですね。なぜシカが暴食に走っているのか、許されるのならば、一度ニザ公国に行ってみたいです」

「シカのこと、私も大学の図書館で調べてみますね」

「ごしゅじんさまーはやくかえってきてくださいねー」

この屋敷のダイニングは本当に落ち着く。何より、俺が帰ってくると聞いて、みんなホッとしたような表情をしたのが、何故かうれしかった。ずっとここに居たいと思うが、しかし、名残惜しくはあるけれど、俺はリコたちが用意してくれた夕食を抱えて、ニザに帰った。

夜、ベッドに入っても俺は寝付けなかった。なぜ俺の結界がシカにも、王にも効果を発揮しなかったのか、という疑問は当然ある。しかしそれよりも、ドワーフ王の決死の覚悟にも似た、悲壮な決意に対して何かしてあげられることはないだろうか。そんなことを考えてしまう。

色々なことを考えすぎたせいか、久しぶりに俺は眠れぬ夜を過ごした。

第九十一話　針のムシロだけどイヤミは言わせてもらうよ？

結局、俺は一睡もせずに朝を迎えた。どうやら他の奴らも眠れなかったらしい。

朝食を食べられる状態ではないので遠慮し、ハーブティーを飲みながら出発の準備をする。そこにリコが転移してきて、サンドイッチを届けてくれる。

「もしかしたらお昼ごろにはお腹がすくかもしれません、持って行ってくださいな」

リコにお礼を言い、サンドイッチを無限収納に収める。そして、全ての準備が整ったところで、コンシディー公女自らが俺たちの部屋に迎えに来た。魔術師らしからぬ、鎧姿での登場だ。

「ご準備は整いましたでしょうか？それでは、出発いたします。皆様は、国境付近までは警護いたします。途中、シカを見つけましたら討伐態勢に入る予定です。その時は警護が疎かになるかもしれませんが、ご了承ください」

手短に説明を終えて、颯爽と公女は部屋を後にする。俺たちはただ無言で、彼女の後ろに従った。

討伐軍ではまさに、針の筵状態だった。クルムファルを復活させた英雄が、シカ被害に苦しむニザ公国に乗り込んできたのに、それが何もできなかった。シカに結界を抜けられて作物の被害を拡大させ、

国王にかけた結界も機能せず、結局何の成果も出せないまま、すごすごと帝国に舞い戻るのだ。反感もひとしお、というところだ。

「・・・どんな英雄が来るのかと思えば、随分若い男なのだな」

「だから俺は最初から怪しいと思っていたんだ。あんな若けぇのがクルムファルを復興させただなんてな」

「聞くところによると帝国皇帝の妹の婿だって言うじゃねぇか。きっと、復興させたのはその家来たちなのだろうよ」

「それを自分の手柄だと過信してきたのか・・・。迷惑なやつだな」

「結局、公国に来て数日間、ドワーフたちの命をつなぐ食料を食い散らかしただけで国に帰るのか～」

冒険者たちの口さがない言葉に、反論する言葉がない。むしろ俺は、昨晩からずっとドワーフ王のことを考えていた。王が死ねば果たしてこの国は救われるのか？鹿神様とやらは、本当にドワーフ王の命と引き換えに、シカによる作物の被害を食い止めてくれるのか？何か方策はないだろうか。しかし、考えてみてもいい案は浮かばない。

「リノスさん、あの冒険者たち、斬りましょう」

「師匠、もうこの辺で、私たちは別の道を行きましょう」

女子二人の声で我に返る。冒険者たちは俺の話題に飽きて、別の話題で盛り上がっているらしい。

「あの女たち、どっちが先に侯爵の手がついたのかな？」

「イヤイヤ、もしかしたら女の方から迫ったのかもしれんぞ？」

「どちらも男好きのしそうな顔と体だな。特に尻が何とも言えんな」

「鬼よりも怖いリコレット皇女様にバレたら、侯爵殿が泣いちまう。みんな内緒にしようぜ？ハハハハ」

先頭を行くコンシディー公女は、俺たちに振り返りもしない。おそらく、冒険者たちの会話は聞こえてはいるのだろうが、それを注意するそぶりもない。隣の、同じく馬に乗ったローブ姿の者と何やら話をしている。おそらくこのローブ姿の奴が、レコルナイ博士の部下の一人なのだろう。

しばらくすると、行軍が止まる。コンシディー公女は馬を返して俺たちの下に近づいてくる。

「これより休息をとります。ちょっと早いですが、昼食にしたいと思いますので、侯爵様もどうぞ、お召し上がりください」

「いえ、私たちは遠慮しておきます。我々も食材はありますので」

「遠慮されることはありませんわ。お出しする食事は、もともとあなた様がヒーデータより持ってこられた救援物資。しかもそれはあなた様の領地で採れた作物なのでしょう？言わばあなた様のものを自分で食べるのですから、何にも問題はありませんですわよ？」

フード姿の奴が話に割って入ってくる。声の感じから行くとコイツは女性のようだ。

「ありがとうございます。そう言っていただければ助かります。しかし、お気持ちだけで結構です」

「そうですか。それでは我々は昼食の準備に入りますので、出発は2時間後を予定しています。それまではどうぞ、自由にお過ごしください」

俺たちはコンシディー公女から離れ、冒険者たちの声が届かないところまで移動して、休憩場所を作った。

「なんなんですか？あの冒険者たち！」

「全く礼儀ってものを知らないんですね！嫌いだわ、あんな男たち！」

女子二人はプリプリと怒っている。どうやら、俺の気づかないところで、かなり卑猥なことを言われていたらしい。冒険者の声を遮断する結界を張ろうかと提案してみたが、二人に強く拒否されてしまった。ヤツらに負けたみたいでイヤなのだという。

「森に入ればすぐに国境だ。あと少しだ。辛抱しろ」

彼女らを宥めながら、俺はコンシディー公女が率いる部隊を眺めていた。おそらくニザ公国がドワーフが作成した武器や防具を提供したのだろう。今まで見たこともないような武器や防具を装備している。しかもそれらはほぼ全てに魔力を帯びていた。肉体を強化する魔法が付与されているのかもしれない。

そんなことを考えていると、遥か先の森の入り口に、シカの群れが現れた。部隊は騒然となり、皆が慌てふためいている。そして、装

備を完了した者は我先に馬に乗って、シカたちに突撃していった。

とりあえず俺たちも休憩を中断して、部隊を追いかける。フェリスとルアラは徒歩なので、彼女の走る速さに合わせてイリモも走っているので、スピード的には大したことはない。

約１００名の冒険者が我先に突撃する様に驚いたのか、シカたちは森の中に引き上げていった。部隊はそのままシカを追いかけて森の中に入っていくのかと思いきや、森の遥か手前で何故か止まっている。近づいてみると、どうやら部隊の先頭で何かモメているようだ。

「何をバカな！シカなど見つけ次第片っ端から殺せばよいのだ！」

「この部隊の長は私です！私の命令なく勝手な行動を取ることは許しません！」

どうやら、先ほどの突撃は冒険者たちが勝手にやったことのようだ。

「大丈夫だお姫様。俺たちに任せてくれればいいんだ。ちゃんとシカを討伐してやるから」

「そうだそうだ。お姫様の言うことを聞いていたんじゃ、命がいくつあっても足りないからな」

ほぼ、収拾がつかない状況になっている。そんな光景を見て、フェリスが俺の足をツンツンと突く。俺は彼女らを見て頷き、イリモをコンシディー公女に向けた。

「お取込み中失礼します。シカが出現したということは、これからシカ討伐に入られると愚考します。我々はお邪魔でしょうから、こ

ちらで先に失礼させていただきます。もうすぐ国境も近いことですし」

「あ、ああ。お見苦しいところをお見せしました。申し訳ありません。これから我々はシカ討伐に入ります。侯爵様の警護はここで打ち切りとさせてください」

「ええ、それではご武運を」

「・・・お待ちください」

何故かコンシディー公女に呼び止められる。俺は再び公女の下に近寄る。

「こういうことをお聞きするのは恐縮なのですが・・・その・・・侯爵様はヒーデータ帝国の内乱を鎮められた方と伺います。それに、森の中での戦闘に長けてらっしゃるとの評判です。我が部隊が、森の中で戦うにあたって何か注意するべき点はありますでしょうか」

「注意するべき点・・・ですか」

「お姫様、侯爵様にそんなことを聞いても無駄だぜ？俺たちはドラゴンの征伐にも参加したことのあるパーティだ。森の中の戦い方は俺たちが一番よく知っている。俺たちに任せておけばいいんだ！」

冒険者らしき男が大声で怒鳴ってくる。俺は少し声を大きくして、

「ドラゴンを討伐した者がおいでになるなら、それは心強い。それならば、シカの討伐など朝飯前でありましょう。ただし、本当にドラゴンを倒した者であれば、ですが」

「何ぃ？どういう意味だ！」

「ドラゴンを征伐したといっても、色んなヤツがおります。部隊の後ろで震えている奴でも、ドラゴン征伐に参加したと言えてしまいますので」

「貴様などに何がわかる！」

「本当にドラゴンを征伐できるようなパーティであれば、獲物を見つけたからと言って無暗に動いたりはしない。自分の独断で勝手に行動するような奴は、皆無だ」

「貴様・・・死にたいのか？」

「おやめなさい！侯爵様、ご無礼をいたしました。これも全て、私の統率力のなさが故の失態です。どうか、お許しくださいませ」

「いえ、コンシディー様が詫びる必要はありません。そうですね。森の中の戦闘に際して、助言するとしますと・・・二つあります。退路を確保すること、足の速い馬に乗ることです」

「・・・それはどういう意味なのでしょう？」

「このシカ討伐は間違いなく失敗します。そうなれば、あとは貴方のお命が助かるか、助からないかが重要になってきます。あなたご自身を助けるためには、退路を確保し、速やかに戦場から離脱することが肝要です。ですから、退路を確保し、足の速い馬に乗る必要があるのです」

「フン、役立たずのムダ飯し食らい貴族の言いそうなことだ。オイみんな、聞いたか？これから戦闘、しかも、シカ討伐に行くのに退路を確保しろってよ！面白いじゃねぇか、なあ！」

「ギャハハハハー！本当だ。最初から逃げることを考えるなんてな！ギャハハハハ！」

冒険者たちの大爆笑に包まれる。コンシディー公女も俺にちょっとした軽蔑の視線を投げかけてくる。

「古より、統率の取れぬ部隊が勝利したという話は聞いたことがございません。まあ、私のこの懸念が杞憂に終わることを信じておりますが。どうぞ、ご存分に采配を振るわれませ。ご武運をお祈りしております」

それだけ言うと、俺はイリモを走らせ、仲間の待つ場所に戻っていった。そして、ヒーデータを目指して森の中を進んだ。

「コンシディー公女のシカ討伐は、失敗するでありますかー？」

「ああ、かなり高い確率でな。冒険者連中が好き勝手に行動しては、作戦も何もあったものではないだろう。シカたちもバカじゃない。１００名程度の人間など、簡単にあしらうだろう」

「あんな奴ら、シカにいいように振り回されればいいのよ！」

「さて、俺がするべきことはひとつだ。早く帝国に帰還し、陛下に救援物資の増援をお願いすることだ。あと、クルムファルの作物の収穫を早めてもいいかもしれないな。そこら辺はリコとメイに相談しなきゃならんな。と、なれば早く屋敷に帰る必要があるな。今す

ぐここに転移結界を張る」

「了解しました！」

フェリスが元気よく答える。

「・・・イリモ？どうした？」

イリモがピタリと歩みを止め、そこから動かなくなっていた。

第九十二話　幻想と真実

「・・・嫌な気配が、臭いがします」

イリモが呟く。その瞬間、俺の気配探知に強大な魔物の気配が引っかかった。マップで見てみると、俺たちが今いる位置から３０分くらいの距離にいるらしい。どうやらコンシディー公女たちの近くに出現しているようだ。しかもその周辺にはシカの群れもいるらしい。

「取りあえず、確認しに行くか」

「ええー？」

「またあいつらの顔を見るんですかー？」

女子二人は本当に嫌そうだ。

「いや、冒険者たちはどうでもいいけど、出現した魔物が気になる。イリモも気になっているようだし、確認はするべきだろう。野放しにして、ニザ公国や帝国に被害が出てはいけないからね」

「これは・・・ご主人様、急ぎましょう」

いつになくイリモが焦っている。俺はすぐに踵を返し、反応のあった場所に向かう。

・・・そこにいたのは、ユニコーンだった。漆黒の体に体長２メー

トルくらいの大きな馬体。そして金色に輝く角が眉間の間から生えていた。俺たちが見たのは、コンシディー公女がユニコーンの角に左足の太ももを貫かれる場面だった。

「ぎゃぁぁぁぁぁ！！」

公女の絶叫と共にユニコーンは首をもたげる。彼女は太ももを刺されたまま、ユニコーンの頭の上に持ち上げられている。そして、そのまま首を大きく振る。コンシディー公女の体が宙を舞い、地面に叩きつけられた。ピクリとも動かない公女。足から血が噴水のように流れ出している。かなりヤバい状態だ。

ちょうど公女が投げ飛ばされた方向を見ると、夥しい数のシカがいた。何をするでなく、じっとその様子を見ている。

よく見ると、ユニコーンの周辺には冒険者たちと、その馬たちの死体が転がっている。ある者は体に大穴を開け、ある者は顔を吹き飛ばされた状態で転がっている。おそらく、彼らは全滅しているのだろう。

ユニコーンはゆっくり俺たちの方向に体を向けた。ブルルと小さく嘶いたかと思うと、いきなり突撃を始めた。速い。一瞬で距離を縮められる。素早く周囲に結界を張る。

「ガッ・・・バリぃぃぃぃン！！！」

一瞬だけユニコーンの動きが止まったかと思ったと同時に、結界は粉々に砕けていた。そして、その衝撃で後方に吹き飛ばされる。

「ぐはっ！」

すぐにエクストラヒールを唱えて、体をすぐさま回復させる。イリモもフェリスもルアラも無事のようで、すぐに起き上がる。

「お前ら気を付けろ！かなり手ごわいぞ！」

「わかりました！」

「大丈夫です！」

フェリスはルアラを抱えて空中に浮かび、木の上に降り立った。それを見てユニコーンは、今度はイリモに向かって突撃を始める。イリモも負けじとユニコーンに突っ込んでいく。

「ガキィィィィィィン！」

凄まじい衝撃波が発生する。さすがに体格で劣るイリモはバランスを崩す。その瞬間、ユニコーンは黄金色に輝く角を、イリモの横腹に突き立てた。

「ヒィィン！！」

悲鳴を上げながらイリモはがっくりと膝をつく。彼女の横腹から噴き出した血が森の土を染めていく。

「ウインドカッター！！」

「アイスショット！」

間髪を置かず、フェリスとルアラの魔法が木の上から放たれる。

「キィィィィン」

その魔法はユニコーンの手前で弾かれるような形で消え去った。ユニコーンは荒い息をしながら一旦体を沈めたかと思うと、二人に向かって両前足を掲げた。その瞬間、ユニコーンの口から氷のブレスが放たれた。

「きゃぁぁぁぁ！」

「うわぁぁぁぁ！」

二人は体の半分を凍らせた状態で木の上から落ちる。彼女たちを助けに行こうとした瞬間、胸をユニコーンの角に貫かれていた。

「ぐはっ！」

胸から、口から、血が流れだす。ユニコーンは首をそのまま持ち上げる。体の力が入らない。

「こ・・・こんなことが・・・」

「あらあら、せっかくの英雄様が台無しね。もう少し活躍してくれたら格好よかったのに」

傍にフード姿の女が近づいてくる。こいつは、コンシディー公女の傍に居た女だ。

「お・・・おまえ・・・は。なぜ・・・ここに」

「うふふ、私はここで公女様たちを殺すために遣わされた刺客ですわ」

「そ・・・そんな・・・早く、レコルナイ博士に・・・」

「アハハッ、バカねぇ。そのレコルナイ様こそが、私を差し向けた張本人ですわよ？」

「何・・・だと？」

「貴方もバカですわね？そのまま帝国に帰っていたら命だけは助かったのに、わざわざ殺されに来るんですものね？」

「お前らは・・・何者だ？」

「うふふっ。まあ、天国で見ていらして」

「リノスさーん、こっちの方は全滅ですねー。回復魔法をかけてもダメです」

「全員、顔と頭と心臓をやられているので、難しいです」

「そうか。わかった。こっちは何とかなった。コンシディー公女が助かっただけでも良しとしないといけないな」

そこには、ぐったりとしたコンシディー公女をイリモの上に乗せようとしている俺と、その傍に近寄ろうとするフェリスとルアラの姿があった。

「なっ・・・何？何なの・・・？」

「公女様の状態がヤバかったからな。まともにやってちゃ間に合わないと思って、お前らには少し遊んでもらっていた。しかし、お前らポーセハイは本当にロクでもないな？」

「どうしてそれを！」

「お前の名前は、ウトニカ。２８歳の女か。ポーセハイは幻影術が得意だと思っていたが、お前は回復魔法が得意なんだな。子供の頃から一族の怪我を治癒し続けていたから、レベルが上がるのは当たり前か？」

俺はかなり前からこの女に鑑定スキルを発動している。女のことはかなり詳しく把握できた。

「・・・あなた一体、何者なの？」

「レコルナイの下に居るようになって１０年か。随分酷いことをしてきたんだな。人体実験の手伝いをしてきたのか？ポーセハイじゃない人間やほかの獣人は実験材料にしようってか？ユニコーンを転移させてきたからＭＰが枯渇しているな。残念だがお前は、ここで死ぬことになりそうだな」

「アッハッハッハ！私が死ぬですって？どの口がそれを言うのかしら？」

「お前ら転移で逃げるのにけっこうなＭＰを使うんだろ？それに、いざという時に自爆するにもＭＰを使うんだろ？今のＭＰじゃどちらも無理だろう？」

「何故それを！まさか、ミニーツ様が仰っていた結界師って」

「誤算だったな。皇帝陛下の結界を張っていることを知った段階で、警戒するべきだったな」

「殺して！何してるの！早くコイツを殺しなさいよ！」

ウトニカがユニコーンに向かって叫んでいる。しかし、ユニコーンは体をワナワナと震わせるだけで動こうとはしない。

「無駄だ。既にコイツは俺の結界の中に閉じ込めてある。コイツはイリモに欲情してやがったからな。きっちりお仕置きをしてやらないとな」

「さっきアンタ結界を突破してたじゃない！そのくらいの結界何で破れないのよ！」

「ああ、俺の結界を破った場面はお前らが見た幻だ。公女がユニコーンに襲われているのを見た段階で結界を張らせてもらった。しかしユニコーンってすごいな。あんな突撃力と水魔法を使うんだからな。そしてチンケだが、結界も張れる。これじゃ冒険者たちは太刀打ちできないわけだ。もしかしてかなりの上位種か？・・・まあいい。こいつもかなり人を殺しているようだからな。お仕置きだ」

俺はユニコーンに張った結界を縮めていく。

「ご主人！ユニコーンの角は万病に効く薬になるであります！これを損ねてはならぬでありますー」

「ほう、そうか」

俺はホーリーソードを抜き、ユニコーンに近づく。

「ガシャン！」

機械が壊れるような音と共に、ユニコーンの長い角がゆっくりと落ちて行った。

「ブヒヒヒヒーン！！！」

「痛い、じゃねぇよ」

俺はさらに結界を縮めていく。

「ブヒッ！ブヒヒン！！ブヒィ！ブヒィ！ブヒィ！ブヒィ！ピギャァ！！！」

断末魔の絶叫を上げてユニコーンは肉の塊になった。

「さて、ウトニカ。今度はお前の番だ」

俺は結界を強化して女の自由を奪う。そして手を伸ばして女のフードを取る。中からは黒いウサギ人族の女の顔が現れた。俺は女の頭の上に手を置く。

「ふっ、思った以上にフケてるんだな。ずいぶん苦労したのか？」

「くっ！うわあああ！なっ！なんで！」

「念のために、お前の能力は全て奪わせてもらった。『転移』はもう二度と出来ないぞ？」

「くっそー！ぬぅぁぁぁ！」

女の叫び声がうるさいので、結界内で強制的に女のＭＰを全て奪う。強烈な眠気に誘われた女は睡魔と戦っているのか、ぐったりとした様子になった。

「さて、こいつをどうしようか？」

「このまま眠らせたまま、人質とするのはどうでありますかー」

「まずはレコルナイとその部下たちを王宮から離さないとな」

「リ、リノスさん！あれ！」

フェリスの声がした方向を向くと、数百頭のシカの体が光っている。そして、群れの前に小さな小鹿が現れた。

シカたちは一匹、また一匹と次々と消えていく。消えていくたびに光の量は増大し、ついに目を開けられないほどのまばゆい光が辺りを覆った。

光の中から現れたのは、一頭の巨大なシカだった。

身体も大きいが、その体程も大きな角を生やしている。元々は白鹿だったのだろうが、体中に赤黒い斑点が浮き出ており、そして、体のあちこちに傷を負い、流血している部分もあった。シカはフラフラと前に進むが、ドウという音と共に膝をついて座り込んでしまっ

た。

恐る恐る俺たちはそのシカに近づく。

「これは・・・立派なシカでありますなー」

「ずいぶん酷いケガをしているみたいですね」

『ニンゲンよ・・・コンシディーの命を救ってくれたこと、感謝する』

頭の中に男の声が聞こえた。どうやらこのシカが念話で話しかけてきているようだ。

「あなたは一体・・・？」

『我は、鹿神だ。ご覧の通りの有様ゆえ、コンシディーを助けたくとも助けられなかった。そなたたちには感謝する』

「鹿神と仰いますか！なぜ、ニザの作物を食い荒らしたのですか？それにその傷は・・・」

『うむ。そなたたちであれば、話をしよう。作物を食したのは、民を守るためだ。それは・・・』

「鹿神様！あなたは・・・何ということを！」

鹿神の話を聞いて、俺も、ゴンも、フェリスも、ルアラも、全員が泣いていた。

第九十三話　真打は最後に舞台に上がる

「全て予定通り完了しました。ただ、バーサーム侯爵の横やりが入りましたので殺してしまいました。申し訳ございません」

「ああ、気にするな。どうせ救援物資を持って帰ってきたところで、彼が見るのは荒廃しきったニザの大地だ。まあ、その顔を見て見たかったという思いはあるがな」

「それに、召喚したユニコーンが倒されてしまいました」

「何？ユニコーンが倒された？」

「はい、角でバーサームを串刺しにしましたが、その時に剣で目をやられました。その直後に数百頭のシカの群れに襲われたのです。私も何とかシカから逃げていますが、ＭＰが枯渇しているので、何ともできません。恐れ入りますが、援軍をお願いできないでしょうか」

「わかった。全員を連れてそちらに向かう。おい皆聞け。今すぐ手を止めてウトニカの救援に向かえ。数百頭のシカに襲われているらしい。全員転移後、すぐに戦闘態勢に入れるように準備せよ」

「「「「「「「「「「了解」」」」」」」」」」

「転移してくるぞ。離れていろ」

俺たちは食べていたサンドイッチを無理やり口の中に押し込んで飲み込む。リコが朝、持ってきてくれたサンドイッチがこんなところで役に立つとは思わなかった。これでしばらくは空腹を感じずに戦えそうだ。

そんなことを考えていると、ウトニカの周囲の空間が歪み始めた。仲間のポーセハイが転移してきているのだ。

「ウトニカ、どうしたのだ！うわっ！」

「ウトニカ、どう・・・」

「ウトニカ、くっ・・・」

転移してきたポーセハイを片っ端から結界の中に閉じ込めてＭＰを奪う。そして最後にレコルナイが転移してきた。

「なっ、何だこれは！ぐあっ！」

転移してきた途端に俺の結界に囲まれ、ＭＰを吸い取られて動けなくなる。どうやらこれで全員が揃ったようだ。俺は一旦結界を解除して、倒れている奴らのフードをゴンらと共に片っ端から脱がせていく。そして、全員を一か所に集めて再度、結界を張り直す。

「全員揃ったか？王宮を騒がせるわけにはいかないから、全員ご苦労ながら転移してきてもらった。お前ら全員のＭＰは俺が奪った。そして、拘束させてもらっている。さてレコルナイ、お前には聞きたいことがある」

俺は歯の出っ張った隻眼の、痩せた針金のような男を凝視しながら、

鑑定スキルを発動する。

「・・・バーサーム！お前は・・・死んだんじゃ・・・なかったのか！ウトニカ！・・・ウトニカは・・・どうした！！ウトニ・・・！！！」

転移してきたポーセハイどもの目の前にウトニカはいた。両膝をつき、虚ろな表情のまま口をポカンと開け、その口からよだれを垂れ流し続けながら、焦点の合っていない眼で虚空を眺めている。

「ウトニカ！！！」

仲間の必死の呼びかけにも全く反応しない。

「この女の精神を弄らせてもらった。あいにくと黒魔術は初めて使うから戻し方がよくわからん」

俺は黒魔術ＬＶ４の精神支配を使ってウトニカの精神に侵入し、彼女のスキルである「思念」を使用してレコルナイたちをおびき寄せたのだ。このスキルはとても便利だ。かなり遠い相手にも情報が伝えることができるらしい。これはウチのメンバー全員に付与しようと思う。

「・・・それにしてもレコルナイ。ドワーフたちを抹殺することで、ニザ公国に代わってお前らポーセハイが武器や防具の供給源になろうってか？それに、お前らが作った毒薬の実験台にドワーフたちを使うことで、一石二鳥を狙っていたのか。マジでお前らロクでもないな」

「何故それを！」

「よく考えられた筋書きだが、やり方が気に入らん。ドワーフたちの技術を壊滅させるのではなく、何故ドワーフたちの技術を凌駕するように自分たちを研磨しない。下らねぇスキルばっかり伸ばしやがって！どうせお前らの一族は、世界中でロクでもないことをしてるんだろう！全員、お仕置きが必要みたいだな」

「ぬぐぁ・・・」

「きさま・・・」

転移してきた八人のポーセハイがうごめいているが、完全にＭＰが尽きているので動けない。この想像を絶する睡魔の中で起きていることは、褒めてやってもいいのだが。

「・・・ご主人、これからどうするのでありますか？」

「狂い死にさせる」

「え？何ですって？何か怖い・・・」

フェリスとルアラの顔が若干引きつっている。俺は「鬼切」を抜いてレコルナイを一刀両断にする。

「ぐぎゃぁぁぁぁぁぁ！！！」

断末魔の絶叫が上がる。

「いぎぃぃぃぃッ」

その苦しみに耐えかねたのか、レコルナイは思いっきり歯を食いしばる。

「ぎゃぁぁ・・・はぁぁぁ、あはっ、あはっ、はははははははーーーー」

精神をズタズタにされ、身の毛もよだつ状況が起こっている幻覚を見ているはずが、なぜか笑っている。「鬼切」の呪いを超越したのか。

「ヒヒャ、ヒヒャ！僕ちゃんはもう何もききませーん。無敵のボクちゃぁぁぁん！うひゃひゃっ。このお薬があればもうだいじょーびょー。ヒャヒャヒャヒャヒャー」

目をでろんと剥き、口から泡を吹きながら笑い転げている。完全に精神が壊れたようだ。

「一体これ、何なんですか！？」

女子二人は顔を強張らせていて、完全にドン引き状態だ。

「あー精神が完全に壊れたみたいだな。仕方ないな。あんまり触りたくないんだがな」

俺は笑い転げるレコルナイの頭に手をやって押さえつけた。そして黒魔術の精神支配を発動させ、コイツの「思念」スキルを使い、緊急事態の助けを呼ぶ信号を発信させるよう命令する。

「り、リノスさん、何やってるんですか？」

「ああ、コイツら自分の仲間に救援信号を送ることができるんだが、レベルによって範囲が違うんだよ。コイツが一番レベルが高いから、かなり遠くのポーセハイにも届くはずだ。もっと沢山転移してくるだろうから、お前らは全員離れておけ」

「ゴン、仲間が来る前に、結界で寝ている奴らのスキルを奪うぞ。手伝ってくれ」

「わかったでありますー」

次から次へとポーセハイたちのスキルを奪っていく。そして、全員のスキルを奪いきった時、レコルナイの周囲が歪みだした。

転移してきたポーセハイは、１００を超えていた。あまりの多さに、かなりの広範囲に結界を張り、中にいる奴らのＭＰを奪う。しかし、結界に入りきらない奴らも多い。当然そいつらは、俺たちに襲い掛かってくる。

「フェリス！ルアラ！後ろは任せた！やれ！」

「ハ、ハイ！！」

ちょっと現実逃避をしていたようだが、一瞬で帰ってきてくれた。俺は左手で周囲に結界を張りつつ、右手で向かってくるポーセハイたちにＬＶ５の風魔法「ゴッドウインド」をぶつける。夥しい数のポーセハイが体中を切り刻まれ、バラバラにされて地面にたたきつけられた。

「フェリス殿の上５、ルアラ殿、左３！」

ゴンが俺の肩の上で女子二人に指示を与えている。フェリスは持ち前の怪力でポーセハイたちをぶん殴っている。女子とはいえドラゴンだ。全力でぶん殴られると、頭が爆発したようにはじけている。ルアラもアイスショットを中心に水魔法で攻撃をかけ、ポーセハイたちを倒していく。

「どいてください！」

ポーセハイの集団に向かって、フェリスがブレスを吐く。奴らは一瞬でその姿を消した。

「人化した状態でブレスを吐くとは、すばらしいでありますなー」

ゴンが妙に感心している。

結局、捕らえたポーセハイは３０あまりで、転移してきたほとんどが俺たちの魔法の餌食になった。

「さてゴン、残った奴らのスキルを奪うか・・・まだ、残っているようだな」

フェリスが放ったブレスが焼き払った所に、ばかデカイポーセハイが転移してきている。片耳がなく、左半身が焼け焦げている。

「これは・・・」

「よー久しぶりだな、バカうさぎ。この間は逃がしたが、今回はもう逃がさねぇぞ？」

「お前は・・・メイリアスの時の・・・！」

「機会があれば一度会いたいと思っていたが、ここで会えるとはな？真打は最後に登場するってか？よくわかってるじゃねぇか」

でかいポーセハイは周囲を見渡す。そして笑い狂うレコルナイと呆然と虚空を見つめ続けるウトニカに目を止める。

「レコルナイ・・・ダンテ薬を飲んだのか・・・。ウトニカ・・・」

「レコルナイの精神を弄ってお前らに来てもらった。全員捕らえるつもりだったが、転移してきた数が多すぎて戦闘になっちまった。生き残ってるのはあいつらだけだ」

「な・・・ルワンの部隊の者たち！カシャの・・・！シンシャ！ムコマ！・・・他のやつらは・・・」

「１００人くらい転移してきたか。その中で残っているのがアイツらだ」

「な、何ぃ！他の者たちは・・・死んだ！？」

「さて、教えてもらおうか？お前ら一体何を企んでいる？黒幕はいるのか？」

「おんのれぇぇぇぇぇ！許さん！許さんぞ！」

でかいポーセハイは懐から薬のようなものを取り出し、口の中に放り込んだ。すると、そいつの体がみるみる巨大化していく。そして禍々しい妖気を身に纏い始めた。

「おい、フェリス、ルアラ、イリモ。ちょっと厄介そうだ。お前たちは離れてろ」

ハイと三人は上空高くに飛び上がった。

それと同時に、でかいポーセハイは俺に向かって巨大な拳を振るう。全体重を乗せた、渾身の一撃のようだ。しかし、奴の拳は俺には届かなかった。体に触れるちょうどギリギリのところで止まっているのだ。

「ガアッ！ガァァァァ！！」

「無駄だと言っているだろう」

俺は背中のホーリーソードを抜き、そいつの拳を切り落とす。それと同時に、残りの腕、両足を切断する。一瞬の静寂ののち、ヤツは体中から血を噴き出させて地面に倒れた。

「ガッ、ガァァァァ！！」

「大人しくしてろ」

何とか動こうとするポーセハイを結界に閉じ込め、ＭＰを奪う。そして、両手両足に最小限の回復魔法をかけて止血する。

「さてと・・・」

俺は再びそいつに鑑定を作動させる。

「・・・はああ？何じゃそら？？」

コイツの過去を覗き見ると、とんでもない事実が見えてしまったのだった。

第九十四話　大いなる勘違い

ポーセハイ。黒、もしくは灰色の耳を持つ兎獣人である。彼らの特徴を一言で語るとすれば、それは「家族」という言葉に行きつく。

彼らの家族意識は強い。従って、鉄壁の連携を誇る。彼らが身に付けているスキルの大半は、「家族を守るため」という意識が根本になっている。

例えば「転移術」。仲間の危機を察知した時、一刻も早く駆けつけて救援するためのものであり、「思念」スキルと共に、ポーセハイが一番最初に身に付ける必須のスキルである。

「回復魔法」、「幻影術」、「薬師」、「鍛冶師」などの彼らの代表的なスキルは全て、家族と一族を守るために身に付けてきたスキルだったのだ。

しかしポーセハイは常に二番手、三番手に甘んじていた。彼らの意識は常に「自分たちのため」「自分たちが必要なもの」であったため、彼らの用いるスキルや技術は、汎用性が限定されるのだ。

そのため、鍛冶などの製造や鋳造はドワーフの後塵を拝し、薬師にしても多くの優れた薬を作り出したにもかかわらず、他の人間や獣人にとっては劇薬や毒薬となる薬も多くあり、そうしたことが重なって、ポーセハイの作る薬はよく効くが危ないというイメージを持たれていた。

ポーセハイの長であるミニーツはそれが口惜しくてならなかった。

ポーセハイの技術力、医術、製薬学、魔術はどこよりも優れている。現にポーセハイ一族の命の多くを救っているではないか。何故他の種族たちはこの素晴しさが分からない？何故ドワーフやほかの種族が作ったものを支持するのだ？と自問自答を繰り返した。

ミニーツが出した答えは、ポーセハイが世界中の国々に赴き、そこで自分たちの技術や力を見せつけることで、ポーセハイの名声を高めようとするものであった。ただし、彼らの数にも限界がある。そこで彼らは１０名程度のグループを作り、グループ単位で世界を移動しながら、ポーセハイの名声を高める取り組みを始めた。

元々、「転移術」と「思念」スキルを持っていた彼らは、移動と情報交換のスムーズさもあって、あっという間にあちこちの国々で成果を出した。それは彼らの大いなる勘違いも含むのであるが、ともあれ、彼らは自分たちの技術が世界一であるという認識を新たにしたのだ。

しかしそれでも、「ポーセハイ」の名前を出すと、あらゆる国が彼らを忌諱した。「ポーセハイ＝諸刃の剣」というイメージは根深かった。

ミニーツは焦った。世界中で成果を出しているのに、何故自分たちは支持されない？理由が分からない。自問自答を繰り返すが、答えは出ない。きっと人間やほかの獣人たちがバカなのだ、そんなことさえ思うようになっていた。

そこに齎されたのが、ジュカ王国での「大魔王復活」の情報だった。世界に名を馳せたジュカ王国、その本拠たる巨大なジュカ城が一瞬のうちに岩塊となり、王国軍の精鋭１０万人近くが瞬殺されたとい

う。

ミニーツは心躍った。この大魔王の下にいち早く参じれば、ドワーフやほかの種族たちを出し抜くことができる。大魔王に自分たちの技術や知識を見せつけるのだ。きっと大魔王さまは、ドワーフや人間たちを滅ぼすおつもりだろう。その前に、自分たちが邪魔な種族を滅ぼしてしまおう。きっとお喜びになるに違いない。もし大魔王にその気がなくとも、事がなった暁には自ずと自分たちが世界一になる。一石二鳥だと。

ミニーツは、大魔王さまの邪魔になりそうな種族を先に壊滅させようと考えた。しかし、ミニーツは思わぬところで大怪我を負うことになる。成長が見込めない奴隷の処分に失敗し、その加勢に向かった時に、得体のしれない男に自分の片腕ともいえるミヒジとリヨナをはじめとする全ての部下を殺されたのだ。

その男の強さを見て、本能的にミニーツは逃げることを選択した。家族を何よりも大切にするポーセハイにとってはありえない、あってはならぬ行為である。その代償か、転移で逃げる際にＭＰが全てなくなり、片耳を失い、左半身に大やけどを負った。

部下を見捨て、そして、長としては働けない体になったミニーツであったが、ポーセハイたちは彼を責めなかった。むしろ、これ以上家族が死ぬことを嫌ったのである。

長として実際に一族をまとめていくのは他の有望な若いポーセハイに譲ったものの、ミニーツはその相談役として影響力を発揮し続けた。だが彼としては今一度、自分の汚名をすすぎたいという思いがあった。そのための作戦として考えたのが、ドワーフ族の抹殺である。

ドワーフの国であるニザ公国は、なかなかに入りにくい国であった。元々ドワーフの技術力は高い。そして、生み出された製品は、どのような種族も使用可能という汎用性がある。ポーセハイが入り込む余地はなかった。

しかし、科学者を自称するレコルナイとそのチームは、見事にドワーフ王に取り入ることに成功し、あまつさえ、王宮の中に研究室まで与えられた。レコルナイたちは公国内の水の汚れと臭いが自分たちの健康を害すると判断し、その水を浄化する薬品を開発しただけなのだが、それが望外の評価を得たのだ。

ミニーツをはじめレコルナイらのポーセハイは、ドワーフたちのレベルの低さをあざ笑った。たかが水を浄化する程度でここまで喜ぶのか、と。ドワーフはもはや敵にあらず、そんな思いを抱いていた時だった。シカによる農作物の被害が発生したのは。

ポーセハイたちはこれを絶好の好機と捉えた。農作物が全てシカに食いつくされてしまえば、ドワーフは自然に滅びる。しかも、国王以下、王族たちも全て病に伏している。自分たちはただ、傍観していればよい。国外へ逃亡する者は、国を出る前に始末してしまえばいい。ニザ公国が瓦解するのは、時間の問題であるかに思えた。

そんな時、同盟国であるヒーデータ帝国からバーサーム侯爵が特使として派遣されてきた。バーサームと言えば、帝国のクルムファルを荒廃から復興させたと噂される人物である。レコルナイは焦った。バーサームがニザを復興させるようなことがあってはならない。もし成功する算段があるのであれば、速やかに消さねばならないと覚悟していた。

しかし、予想に反してバーサームの策はすべて失敗に終わった。バーサームを国に帰すことにも成功した。公女のコンシディーが王の命を無視してシカ討伐に向かったが、問題なく排除された。全ては順調だった。レコルナイから緊急支援の信号を受け取るまでは。

報告では数百頭のシカに囲まれたとあった。ポーセハイの戦闘力は基本的に低い。そのため、大多数の獣を相手にするのは多くの人数が必要だった。ミニーツは一族全員に思念を送り、レコルナイを救援するように命令し、そして、自分もそこに転移したのだった。

「大いなる勘違いの連続だな、お前ら」

「ぐぅぅぅぅ・・・」

デカいウサギは体を必死に動かそうとするが、両手両足を切断されている上に、俺の結界に閉じ込められているので動けない。ただ、うめき声をあげることしかできない。

「まずもって大魔王はいない。お前らの目論見は完全に外れている」

デカいウサギのうめき声が止み、薄目が開かれる。

「そしてお前らの最大の間違いは、全ての行動が自分たちのためという点だ。それでは未来永劫、ドワーフには勝てん」

「きっ、貴様などに何がわかるぅぅぅぅ！！」

「お前らは、自分たちの技術や知識が世界一だと信じ、それを認められないことに不満を感じていた。違うか？」

「・・・」

「そして、その力を知らしめようと世界中に散った。成果は出したが、世間の評価は一向に上がらない。自分たちの実力が分からねぇ世界の奴らはバカだと思った。そこに大魔王が現れた。大魔王に自分たちの実力を見せつけて評価を得ようと思った。しかも、ドワーフの抹殺はバカうさぎ、お前の一族の中での評価を上げるために仕組んだものだろう？」

「そ・・・そんなことは・・・」

結界に閉じ込めてある他のポーセハイたちが動揺しているのが分かる。俺はそれには気にせず、言葉を続ける。

「結局お前も、お前らポーセハイも自分のことしか考えてねぇからそんなアホな考えに至るんだ。何故、他の人々の助けになろうとしない。世界一とか何とかは、人が評価をするものだ。人が評価してくれないのは、自分の責任だ。うまくいかないことを人のせいにするんじゃねぇ」

「きっ・・・貴様～！！」

「うまくいかないってことは、自分の考えと行動が間違っているからだ。上手くいくときは一発でうまくいくもんだ。それに気づかず、おんなじ失敗を繰り返したから、お前の大事な家族をここまで失ったんだ」

「・・・」

デカいポーセハイは震えている。どうやら泣いているようだ。

「お前らポーセハイとドワーフの違いを教えてやろう。人のためになるかどうかを考えているかどうかだ。ドワーフは、全ての人族、獣人たちに合うように、最大の効果を発揮するように考えてモノを作っている。彼らが評価されているのは、そこだ。それにしても惜しいな、チャンスはいくつかあったろうに、全くそれに気づかないんだからな。お前らが世界一になれないのは、その鈍感さなんだろうな」

俺はクルリと向きを変え、拘束されているポーセハイたちに向けて声をかける。

「お前らの考え方と行動が間違っていたから、今のお前たちのこの状況がある。この状況を改善するためには、考え方と行動を変えろ。もっとも、生きていられたらの話だがな」

ポーセハイたちの顔が歪み切っている。俺は再びデカいポーセハイに向き直る。

「ちなみに、そこで笑い転げているレコルナイが開発した水な？あれ、お前ら大成功だと思っているようだが、これも大いなる勘違いだ。とんでもねぇ代物だぞ、あれ。まあ、このことはドワーフ王の前で話さねばならん。せっかくだ。お前も一緒に来てもらうぞ？」

「ふっ、ふっふっふ・・・無駄だ。私はもうすぐ、死ぬ」

「何だと？」

「自分の命と引き換えに、自分の持つ能力を最大限に発揮する薬を

飲んだ。レコルナイも、自分の精神を完全に崩壊させて、痛みも恐怖も感じずに死ぬ薬を飲んでいる」

「お前の飲んだ薬はもしかして・・・」

「そうだ。メイリアスに開発させたものに手を加えたものだ。しかし、ダメだな。負けては意味がない。そういえば、メイリアスの親が開発した薬も、いいところまではいっていたんだが、ダメだったな。我々が手を加えなければ効果を発揮できなかった。まあ、強い薬にしたので、弱い子供が死ぬのはしかたな・・・」

「ぬうん!!」

ホーリーソードでデカいポーセハイを真っ二つに斬る。そして、笑い転げているレコルナイの下に行き、コイツも真っ二つに斬った。ふと見ると、中空をぼんやりと見ているウトニカの姿が目に入る。俺はゆっくりと彼女に近づき、無言でその首を刎ねた。

「その考え方が、激しく間違ってんだよ、バカたれが」

そう言い捨て、俺は剣を鞘にしまう。辺りは既に、夕暮れになっていた。

第九十五話　家族の敵は許すまじ

「まあ、どうしたのです！その姿は！」

リコが驚いている。三人のポーセハイを斬った後、返り血を付けたまま帝都の屋敷まで転移してきてしまった。道理でフェリスとルアラの顔が強張っているわけだ。俺はすぐに浄化の魔法をかけてキレイにする。

「すまないリコ、事情を説明している場合じゃないんだ。この女の子を頼む」

俺に抱きかかえられてぐったりと意識を失っているコンシディー公女をフェリスに渡す。リコはすぐさま自分の寝室に運ぶようフェリスとルアラに言い、一緒に離れに向かった。それを見届けた俺は、足早に研究室にいるメイの下に向かう。

「メイ、すまないが、ニザまで一緒に来てくれ」

「今からですか？」

「ああ、ちょっと緊急事態なんだ」

キッチンにいたペーリスに、もしかすると今日は帰れないかもしれないと告げて、俺とメイはニザの森に転移した。

「こ・・・これは」

斬られたポーセハイたちの死体がそのまま残っている惨状を見て、メイは絶句している。そして、結界の中に閉じ込められている４０人近いポーセハイを見てギョッとした表情をする。しかし、さすがはメイだけあって、すぐに平静を取り戻した。

「メイ、すまないが、鹿神様の様子を見てくれないか」

鹿神は蹲り、苦しそうな息を吐いている。メイはその傍により、恐る恐る鹿神の体をペタペタ障っていく。

「かなり強い毒に侵されています。これだけの魔力があるのに、自分で毒を浄化できないなんて・・・」

『ムダだ。我は、己の限界を超えて毒を抱えている』

「ご主人、ユニコーンの角がありますー。それで解毒剤は作れぬでありますかー？」

「そうだメイ、ユニコーンの角だ。これで何とかならないか？」

無限収納から黄金色の角を取り出す。

「こ、これはナイトユニコーンの角ですね！これなら・・・。どこまで効くかどうかは分かりませんけど、やってみます！」

「すまないが、頼む」

すぐさまメイを先に屋敷に転移させる。鹿神が苦しそうだ。様子が気になるので、俺は鑑定スキルを発動させる。

ティヨス（鹿神・８４１２歳）ＬＶ９１　猛毒
ＨＰ：３２１７／２７８８７
ＭＰ：　９４４／１１０１０
鑑定魔法　ＬＶ５
気配探知　ＬＶ５
魔力探知　ＬＶ５
教養　ＬＶ５
結界魔法　ＬＶ４
回避　ＬＶ５
回復魔法　ＬＶ４
分化　ＬＶ５
人化　ＬＶ４

博学才穎、聡明英知、名伯楽、一体分身

博学才穎：教養ＬＶ５
聡明英知：鑑定魔法ＬＶ５
名伯楽：気配探知ＬＶ５、魔力探知ＬＶ５、回避ＬＶ５
一体分身：分化ＬＶ５

ＨＰが２／３近く減っている。ＭＰもそろそろ枯渇しそうで、かなり危険な状態だ。あと数日は持ちそうではあるが、このまま放置すれば死に至ることは間違いなさそうだ。俺はダメもとで鹿神にアルティメットヒールをかける。しかし、猛毒の症状は消えない。死者すらも蘇らせるこの魔法が効かないのは理解ができない。症状の詳しいことをメイに聞いておけばよかった。

「ゴン、すまない。一旦俺はメイの様子を見に屋敷に帰る。すまないが、鹿神様とこのポーセハイどもを見張っていてくれ。結界が破

られることはないと思うが、危険を感じたら転移してきてくれ」

「お安い御用でありますー」

屋敷に帰ると、ダイニングに全員が揃っていた。

「メイは研究室か？」

「ええ、先ほど何かを抱えて離れに向かったので、そうだと思います」

「わかった」

俺はメイの下に向かおうとする。

「お待ちになって、リノス」

「どうしたんだ、リコ？」

「ニザ公国の出来事は、フェリスとルアラから聞きましたわ。大変だったことはよくわかります。ただ、一つだけ教えてくださいませ」

「何だい？」

「どうして女のポーセハイを斬ったのですか？リノスらしくないですわ」

確かに俺は魔物であれ何であれ、極力命を奪うのを避けてきた。特に女性に関しては基本的にフェミニストとして接してきた。リコをはじめとする、一緒にいてくれる女たちは、まさか俺が女の首を斬

るとは思わなかったのだろう。

「あの女は、メイの両親を殺した張本人だったんだ」

「どういうことですの？」

「メイの両親が作った薬に、あの女は毒に匹敵する劇薬を混ぜた。それがために多くの子供が死に、その責任をメイの両親がとるハメになった。あの女はメイの両親だけじゃなく、沢山の子供たちを殺した。だから、斬った」

「わかりました。それを聞いて安心しました。さすがはリノスですわ。フェリス、ルアラ、これでよろしいかしら？」

「ハイ・・・リコ姉さまありがとうございます」

「ありがとうございます」

「できれば人も魔物も獣人も殺したくはない。でも、俺の家族に手を出す奴は、俺も鬼になる」

そう言い残して、足早にメイの研究室に向かった。もっと言葉を尽くして説明してやった方がよかったのかもしれない。そう思いつつ、頭を切り替える。

「メイ、どうだ？」

「明日の朝までには、何とか薬は出来そうです。どこまで効くかは分かりませんが・・・。でも、この角は素晴らしいです。ユニコーンの角は万病に効くというのは、本当のようです」

「そうか。鹿神様の毒が治癒できれば、ドワーフ王の毒も治癒できるだろう。問題はドワーフ王だ。どこまで持ってくれるか・・・。すまないがメイ、薬を頼む」

「はい、頑張ります」

再び俺は、ニザの森に戻る。辺りを見渡すと、鹿神がいない。

「この先の大木の所に、自分の結界があるそうでありますー」

「そうかわかった」

鹿神の張った結界の中に居れば、しばらく命は長らえてくれるだろう。そう考えつつ、ポーセハイたちを見る。

ＭＰが奪われているので、全員眠っているようだ。先ほどまでとは打って変わって静寂が周囲を包んでいる。

「この機会に、こ奴らのスキルを奪うでありますかー？」

「・・・いや、今はいい。自分たちの行く先は、コイツらに決めさせてやろう」

「どういうことでありますかー？」

その質問には答えず、俺は土を掘り、斬った三人をそこに埋めて簡単な墓を作った。それが終わった頃に、リコが転移してきた。

「夕食を持ってきましたわ」

「・・・ありがとう。皆は？」

「全員休ませました。メイだけは、まだ起きていますけれど」

「・・・そうか」

俺とゴンは、リコが持ってきてくれた夕食を食べることにした。作りたてなのだろう。全ての料理が温かかった。春とはいえ、夜になるとまだ肌寒い。この温もりは本当にありがたいものだ。

「リノスが斬った女のこと、メイに話しましたわ」

「そうか。メイは何か言っていたか？」

「いえ、何も」

「ありがとうリコ。なんか俺からだと言い出しにくくてな」

「大丈夫ですわ。それにしても、これだけのポーセハイ、これからが大変ですわね」

「ああ、これからが大変だ。ポーセハイ、鹿神、ドワーフ王、そして農地の復興・・・。これらを解決していかなきゃならない。またリコに負担をかけるかもしれない。すまないな」

「私は大丈夫ですわ。ただ、リノスの体が心配です。くれぐれも、無理しないでくださいませね。コンシディー公女の意識が戻りましたら、また参りますね」

そう言い残してリコは、再び屋敷に転移していった。

「いい奥方でありますなー」

「そうだな。ゴン、うらやましいだろ？」

「・・・うらやましいでありますなー」

それから夜が明けるまで、俺とゴンは交代でポーセハイの見張りについた。そして明け方、メイが出来上がったばかりの薬を持って転移してきた。

「ユニコーンの角が持っていた回復効能を最大限に引き出しました。まだ誰にも試していないので絶対とは言い切れませんが・・・」

「いや、いい。ダメならダメで次の手を考えればいい。ありがとうメイ、よくやってくれた」

俺に頭をなでられて、メイは恥ずかしそうに俯いている。

早速、その薬を持って鹿神がいるという大木に向かう。そして、それはすぐに見つかった。

「おかしいでありますー。何もないでありますー」

「ゴンのレベルじゃ無理だ。この大木全体が結界になっている。鹿神様、どうぞこの者たちにも見えますように、お姿をお見せください」

大木の前に、鹿神が現れる。

「鹿神様、私の妻が作りました解毒薬です。効くかどうかはわかりませんが、一度、この薬をお試しいただけませんでしょうか?妻は薬師で、腕は確かです」

『そなたは・・・なるほど。その若さで神級の薬師、しかも称号持ちとは珍しいな。よかろう。そなたの作りし薬、試させてもらうぞ』

鹿神は大きな口を開けてメイの薬を飲み込む。

『うっ、ぐっ、ぐあああああああ・・・』

「鹿神様!」

うめき声をあげて、鹿神は蹲る。かなり苦しそうだ。

「メイ・・・」

「・・・」

メイは眉間にしわを寄せてじっとその様子を見ている。鹿神はドロドロとした緑色の液体を吐き出している。その時

『ご主人様、ご主人様、どちらですか?』

俺に念話が飛んでくる

『その声はフェリスか?』

『ハイ、フェリスです。今どちらですか?』

『今は、鹿神のところだ。珍しいな、フェリスがご主人様だなんて』

『いえ、滅相もないです。恐れ入りますが、屋敷まで戻ってもらえますでしょうか？コンシディー公女が目を覚ましました』

『そうか、わかった』

「コンシディー公女が目を覚ました。俺は屋敷に帰る。すまないが、ゴンは引き続きポーセハイの監視、メイは鹿神様を見ていてくれ」

「わかったでありますー」

「お任せください」

屋敷に転移すると、コンシディー公女が無理やり起き上がろうとしていた。

「血が少ないので、まだ貧血状態ですのに、起き上がろうとするんですわ」

「コンシディー様、無理しないでいいですよ」

「バーサーム様！これは・・・お見苦しいところを・・・」

「気にしないでください。ここは俺の家です。気楽にしてください」

「私は・・・一体・・・」

「覚えてませんか？俺が駆け付けたときには、ユニコーンの角に足

を貫かれていました」

「それは・・・覚えています。その後の記憶がありません。冒険者たちは・・・公国は・・・」

「冒険者たちは残念ながら全滅でした。ユニコーンは倒していますので安心してください」

「はっ！ウトニカ、ウトニカさんは・・・」

「俺が首を刎ねました」

「・・・え？」

「あと、レコルナイの首も刎ねました。その部下たちは拘束しています」

「な、なんということを・・・。あなたは・・・公国を滅ぼすつもりですか！」

ハアハアと息を切らして俺に怒りをぶつけてくる。

「コンシディー様、俺は既に腹をくくっています。あなたにも、腹をくくっていただかねばなりません。そのためには、体を元の健康体に戻す必要があります。しばらくはここで静養してください」

「腹を・・・くくる？一体何を・・・？」

「ニザ公国の復興は、私が責任を持ってやります。レコルナイとウトニカの首は、そのために刎ねたのです」

公女の眼が大きく開かれる。荒い息の中、その瞳にはかすかな殺意が宿っていた。

第九十六話　たねあかし

「俄かには信じられん・・・」

ニザ公国宰相、ユーリーはようやく腹の底から言葉を吐き出した。
その隣にはベッドに横たわるドワーフ王、そして、その傍らには青い顔をしたコンシディ―公女がいる。

俺の隣にはメイとフェリス、ルアラ。そして、一人の白髪の老人がいる。

「・・・やはり、鹿神様は、我々ドワーフをお見捨てでなかったのだな」

弱々しい声でドワーフ王が呟く。その頬には涙が伝っていた。

ドワーフたちは驚愕していた。それはそうだろう。敵だと思っていたシカが実は味方だったのだから。

レコルナイたちが作り出した水を浄化する水を、ドワーフたちは重宝していた。元々、鉱石の精製に用いられた水は汚れ、臭いが発生するために、ニザ公国内を流れる川の水質は悪かった。そのためこの国では、飲料水や農業用水については山の湧水を使用していた。
そのため、農作物を生産することには限界があった。

しかし、川の水がきれいになれば話は別である。わざわざ山まで湧水を汲みに行く必要がなくなるからだ。そしてさらに、その川の水を利用することで、耕作地を広げることができる。ドワーフたちは

狂喜した。

公国内で瞬く間に耕作地が開墾され、作物の種や苗が植えられた。そして、これまで草原であった大地が、見事に作物で満たされたのである。

この時、ドワーフ王以下、ニザ公国に住むもの皆が、この国の更なる飛躍と発展を確信していた。シカ被害が起こったのは、その時だった。

「鹿神様は、たまたま近くの農民がお供えした作物を口にされた時、この作物に毒が混じっていることをお知りになられました。そして瞬時に悟られたのです。これはドワーフを亡ぼす元凶となることを」

「しかし、川の水に毒が入っているならば、我々は死ぬのではないのですか?我々はこうして生きていますが?」

「ええ、その毒は即効性のものではなく、体内に蓄積していくものです。無論、毒水に侵された川の水を飲んだ者は当然ですが、その川の水を利用して作られた作物を食べても、体に毒が蓄積されていきます」

「それでは、わが国の民は皆、毒に侵されているというのですか!」

「いえ、民への毒の被害は、今のところ軽微であると考えています」

「どういうことでしょう?」

「公国は、まず先に草原の開墾に重点を置いたために、川の水を町中まで引いていませんでした。民は基本的にこれまで通りの山の湧

水を飲んでいたものと思われますので、毒の被害は最小限で済んでいるものと思われます」

「・・・」

「鹿神様は、作物が毒に侵されていると知り、これらを民に食べさせるわけにはいかないと思われました。そして、ご自身がその作物を食べることで、民が毒に侵されることを防がれたのです」

「あの数百匹のシカの群れは、全て鹿神様の御命令だと言うのですか！」

「いえ、ご命令ではなく、鹿神様そのものだったのです」

「どういうことですか？」

「鹿神様が分化なさり、群れを作られていました。あの一匹一匹が鹿神様そのものだったのです」

「バカな・・・」

「結局、国内は食糧不足に陥り、各国から食糧支援を受けることになりましたが、毒に侵されていない食料であったため、民への被害は最小限で済みました」

「ではなぜ、王を筆頭に王族の方々だけが病に伏せられているのですか？」

「私が結界を張った王宮の畑、あれは王族専用の作物を育てていたのではありませんか？しかも、その水は、川から引いていたのでは

ありませんか？」

「ツ・・・それは・・・」

「結局、毒された川の水を飲み、毒された作物を食べ続けた王族の方々に一番被害が集中したというわけです」

「我々貴族も、臣民同様に救援物資で命を長らえたので、その意味は分からなくはないが・・・。では・・・では・・・コンシディー様はどう説明するのです？見たところ、ご健勝に見えますが・・・」

「コンシディー様は生まれつき強い毒の耐性をお持ちです。そのために毒には侵されていますが、まだ発症していない段階でとどまっているのです」

「なぜコンシディー様だけに、そのような耐性があるのですか？おかしいではないですか！」

「宰相様の仰ることはごもっともです。これは、ご本人から説明いただいた方がよいでしょう」

「コンシディーには我の加護を与えておる。王家に姫が生まれた時に加護を与えるとサマーシェと約束したからな」

「サ、サマーシェ！？まさか、先々代王の皇太后さま・・・。あなた様は」

「ティヨスだ」

大きく目を見開いたユーリーは、がばっと後ろの壁に掛けられてい

る肖像画を見た。なるほど、少し若いが、ティヨスそっくりの人物が描かれている。

「公爵王様であらせられますか・・・。まさか生きて・・・」

ドワーフ王家は代々、男系家系である。女性が生まれるのは珍しく、これまで数千年の歴史を見ても、ドワーフ王家で女性が誕生したのは、このコンシディー公女を含め四人しかいない。

約１０００年前、ドワーフ王家に危機が襲う。当代ドワーフ王が、若くして死去してしまったのである。残されたのはサマーシェ王女ただ一人であったのだが、当時彼女は鹿神・ティヨスと恋におち、ニザの森で静かに暮らしていた。

しかし、状況が状況であるためにドワーフ王にはサマーシェが女帝として即位し、ティヨスは公爵という身分を与えられた。そして王宮に入り、その身分のまま女帝を補佐する立場についた。そのためティヨスは「公爵王」と呼ばれるようになった。

数年後に、この「公爵王」と「女帝」の間に子供が誕生し、その子孫が現在のドワーフ王につながるのである。現在のシカに対する姿勢もこのサマーシェが定めたものであった。

「あの当時は、森の中の魔物が手ごわくてな。我が森に住み、魔物を退治せねばこの国は蹂躙されてしまうところだったのだよ」

鹿神・ティヨスは顎髭をなでながら懐かしそうに当時に思いをはせる。

「このリノス殿が言われたことは、真実だ。もっと他に策もあったろうが、我にはこれしか思いつかなんだ、許せ。サマーシェが死んで後、二度と人の姿にはなるまいと思っておったが、どうしてもこれだけは謝りたかったのだ。王家の者たちを守るとサマーシェと約束したにもかかわらず、孫を、王をここまでにしてしまった。許してくれい」

「ううう・・・私が不甲斐ないばっかりに・・・もったいのうございます・・・」

ドワーフ王は涙を拭おうともせず、言葉を絞り出す。

「よい。よいのだ。しかし、あの毒は凄まじかったな。我も死ぬ覚悟を決めた程だ。その毒を体に受けてなお生きて、国のことを考えるそなたを、我は誇りに思うぞ」

ドワーフ王は泣き伏している。

「それにしてもリノス殿の結界も素晴らしいな。あれを抜ける時に、あれほど体にダメージがあるとは思わなんだ。あの結界で寿命が縮まったわ」

「ご冗談を」

「いや、体に傷がついたのは事実だ。あの結界は全力ではないのだろう?そなたが本気で張った結界は、神でも侵すことはできぬだろうな」

「ありがとうございます」

「さてドワーフ王、そなたにはまだまだやらねばならぬことが数多くある。ここで死んではならぬ」

「お、お言葉ですが、公爵王様。私の体は最早・・・あとは倅の・・・」

「いや、ならぬ。まだ生きよ。そなたの毒を治癒する薬はある。現に我もその薬でこうしてそなたに会えておるのだからな」

「王様、これに控えますは、私の妻のメイリアスです。妻が作りました解毒剤、なにとぞお召しくださいませ。ユーリー様、この薬を、病に伏している王族の方々にお配りください」

俺はメイが作った薬をユーリー宰相に渡す。

「それを飲めば、一時は苦しいが体内の毒を全て吐き出させてくれる。メイリアス殿は最高の薬師だ。安心して飲むがよい」

ドワーフ王は無言で、メイの薬を口に含んだ。

しばらく苦しそうなうめき声を上げていた王だが、メイの介抱もあって順調に毒を吐いていった。思った以上の毒をため込んでいたようで、かなり長い時間毒を吐き続けていた。お蔭で、寝台のシーツなどがとんでもなく汚れてしまっていた。

ようやく苦しそうなうめき声が収まり、王はスヤスヤと寝息を立て始めた。

「もう大丈夫だと思います。ただ、毒の影響で体の骨がもろくなっ

ています。しばらくは絶対安静が必要です。骨が元通りになるまで1年くらいかかりますが、それ以降は普通の生活に戻れるでしょう」

「ありがとう、メイ」

その光景を見て、ユーリー宰相は部屋を飛び出していった。おそらく、あの薬を王族たちに配りに行ったのだろう。

「コンシディー様も、どうぞお召しください」

渡された薬をじっと見つめていた公女は、ゆっくりと俺の顔を見る。

「シカの被害については、よくわかりました。でも、あなたがレコルナイ博士を殺害したのは話が別です。今のお話では、博士たちは故意にその毒薬を作ったのではないのではないですか?それでしたら、バーサーム様は罪もない人を殺したことになりませんか?」

俺はちらりとメイを見る。そして、深いため息をつく。

「これは・・・あんまり言いたくないことですし、気分が悪くなる話ですが・・・。いいでしょう、お話ししましょう」

驚いたような表情でメイが俺を見ている。そして、王の寝息がいつの間にか止んでいる。寝室の窓からは、紫の朝もやに浮かぶ街の景色が見えていた。

第九十七話　たねあかし②

「ところでコンシディー様。貴女様の母上様、すなわち、ドワーフ王のお妃さまはいかがされましたか？」

「母上は・・・3年前に亡くなりました」

「レコルナイたちが現れてすぐに、お亡くなりになったのではないですか？」

「そ、それは偶然というものです」

「お妃さまはある時、体調を崩された。色々な回復魔法や薬を試してみたが、なかなか回復しない。そこにレコルナイが薬を持ってきた。試しに飲んでみると、嘘のように体調がよくなった。違いますか？」

「・・・」

「しかし、しばらくするとまた体調が悪くなる。そしてレコルナイが薬を持ってくる。治る。しかし、しばらくするとまた体調が悪くなる。その繰り返しだったのではないですか？」

「も、元々母上は体調が・・・」

「真実を言えば、その薬は身体の病を増幅させる薬です。しかも、一定期間、痛みや苦しみを感じない麻痺の効能の付いた毒薬です」

「バーサーム様！」

「お妃さまは、最終的にどのような病で亡くなられたのですか？」

「そ、それは・・・」

「妃は、ティヤカは、体のあちこちから病を発して、手の施しようがなかった」

「父上！」

「国王様、コンシディー様、一般的にドワーフの寿命はどのくらいでしょうか？」

「大体、２００年は生きる」

「レコルナイたちの目的は、ドワーフ族の壊滅です。一度に多くのドワーフを葬るのは、毒を用いることが効果的です。しかし、ドワーフの寿命は長い。つまりそれだけ生命力が強いということです。そこでレコルナイは、お妃さまを利用した。何らかの方法でお妃さまに薬を与えて病を得させる。そして、回復薬と偽って毒薬を与える。そうやって毒の効能を確かめていたのです。言ってみればお妃さまは、実験台にされたのです」

「そんな、バカな・・・」

「しかもドワーフは女性の方が長生きすると聞きます。お妃さまに効く毒ならば、全てのドワーフに効くものと考えてよいでしょう」

コンシディー公女は茫然としている。そして震える手で、懐の中か

ら大切そうに梱包された紙包みを取り出した。開けてみるとそれは、いくつかの黒い丸薬が出てきた。

「まさか、博士とウトニカさんがくれたこの薬が、母上を殺した毒薬・・・？」

「ええ、間違いないと思います」

「おそらく、お妃さまを看病していたのはウトニカだったのでしょう。彼女は看病するふりをして、お妃さまの毒の効果を観察していたのです。それを知らないお妃さまは、ウトニカを毎日のように労い、感謝の言葉をかけていました。しかし、ヤツは心の中で笑っていたのです」

「まさか・・・」

「ヤツらの作った毒薬の最終実験として選ばれたのが、コンシディー様です。幸い公女は他の王族たちのように原因不明の病を発病していなかった。若い女性のドワーフがすぐに病に倒れ、亡くなれば、ヤツらの毒薬は完成だったのです。他のドワーフは間違いなく殺せますから。ですから、森の中でユニコーンに襲われた時、公女は胸ではなく、太ももを刺されました。ヤツらはおそらく、すぐに傷を治癒した後、化膿止めとか何とか言って、公女に薬を飲ませるつもりだったのです」

「うそ・・・うそよ・・・」

「お気持ちはよくわかります。しかし、事実です。おそらく納得は行かないと思います。ですからここで、一つ実験をしたいと思います」

俺はフェリスに命じてレコルナイの部下の一人を転移させて来させる。いきなり人が消えたかと思えば、しばらくして黒ウサギの獣人を連れて現れたので、王も公女も驚きを隠せないでいる。

「ご無礼をお許しください。これはポーセハイたちが使う転移術です。術式が分かれば簡単に使用できます。コンシディー様も、これで転移させました」

帝都の屋敷で、貧血で倒れる寸前だった公女を一旦魔法で眠らせて、その隙にニザまで転移したのだ。

「目が覚めたら王宮に居たのは、そういうことだったのですか・・・」

「さてコンシディー様。この黒ウサギに見覚えはありますか？」

「この方は、レコルナイ博士の下で研究をしていたリハンメルさん・・・」

「さて、リハンメルよ。お前は顔色が悪そうだ。何か病気ではないかと俺は思っている。この話をしたところ、コンシディー公女がお前に薬をお与えになるそうだ。ありがたくお受けしろ。コンシディー様、先ほどの薬を、この者にお与えください」

公女は黒い丸薬を取り出し、リハンメルに渡す。薬を見た瞬間リハンメルの体が一瞬動いた。そして、薬を与えるコンシディー公女の手も震えている。

「今すぐここで飲め」

「そ・・・それは・・・。私は病気ではないからして・・・」

「これは毒薬なのか？」

「ち、違う！決して毒などでは・・・」

「じゃあ飲めるだろう。副作用を起こすのであれば俺が回復魔法で治癒してやる。飲め」

「ううう・・・」

「飲め！」

男の手から薬を奪い取り、無理やり口の中に押し込む。

「うわー！ぐわー！いやだぁ！」

即座に男は薬を吐き出した。

「本当に、毒薬・・・なの？」

俺は吐き出された丸薬を布で丁寧に包む。

「念のため、妻に鑑定させます。メイ、この薬を調べてくれ。どなたかドワーフの方にも立ち会ってもらった方がいいかもしれませんね」

「この薬、調べてみます」

「頼んだぞ」

ドワーフ王は目を閉じたままじっと天井を見ている。コンシディー公女は茫然自失となっている。

「愚かな話だ。妻を殺した者たちを召し抱え、挙句に娘まで殺されそうになっていたとは・・・フッ、フフフフ・・・」

ドワーフ王の乾いた笑い声が部屋にこだまする。そして、その声はいつしか、泣き声に変わっていた。

その後、コンシディー公女が持っていた薬は、メイによって毒薬と証明された。ちょうど戻ってきたユーリー宰相立会いの下、たまたま地下牢に閉じ込められている盗賊に薬を与えたところ、たちどころに絶命したのだ。

森の中、俺の結界で拘束されていたポーセハイたちは、メイが実験をしている間に全員が拘束された。約４０名のポーセハイ一人一人に、転移術と思念が使えない結界を張るのは少々骨が折れた。その上で、自爆スキルを持っている奴については全員、そのスキルを奪っておいた。

メイの薬のおかげで、毒に侵されていた王族たちは全員、無事に毒状態から脱した。コンシディー公女も薬を飲み、毒物を全て吐き出したそうだが、あの時以来、彼女は俺たちの前に姿を見せない。鹿神様もあの後すぐに森の結界に帰ってしまった。しかし、俺たちにはいつでも会ってくれるそうである。時間が出来たら、お供えをもってあの大木に伺うとしよう。

メイには、ポーセハイの毒実験の直後から川の水の調査をしてもらったところ、かなり汚染されている状態であることがわかった。ドワーフ王はすぐに川の水の使用禁止令を出した。

メイはすぐさま、その川の水を解毒する薬品を作り上げた。メイ曰く、水質はすぐに改善されることはないが、毒物だけは中和しているとのこと。あとは自然に川が浄化されるのを待つしかないのだという。

その後、ドワーフ王の体調が小康を得て、ようやく顔色も赤黒い色から、やや青みがかってはいるものの、通常の顔色に戻ってきた頃に、これからの対策を本格的に話し合っていった。

一番の問題は、土壌汚染であった。クルムファルの如く、土に雨水を染み渡らせて汚染物質を取り除くことも検討したのだが、この毒はそんなに簡単ではないらしい。メイがいろいろと調査をしてくれた結果、二つの対策を行うことになった。

一つ目が、これまで農作地として使用してきた土地については、メイとフェアリが協力して行うこととなった。

何とフェアリの羽から生み出される粉が、耕作地の毒物を中和することがわかったのだ。屋敷で俺とメイが話をしている時、フェアリが「こんな感じのこなですかー？」と言って、羽をパタパタと動かし、粉を落としてくれた。メイが調べると、毒物を中和する成分であることが確認された。彼女の偉い所は、その粉がさらに効果が発揮できるよう薬品を開発してしまうところだ。

元々の農作地は汚染状態が軽かったため、メイとフェアリで何とかなりそうなのだが、問題は新しく開墾された農作地だ。

ここの汚染状態は酷く、それは王宮内の畑も同じであった。王宮内についてはすぐさま耕作を廃棄し、何らかの建物が建設される予定なのだという。残る広大な耕作地であるが、これについては力技で解決することにした。

つまり、元あった土地の上に盛り土をし、汚染された土地を土の中に閉じ込めてしまおうという戦略だ。幸いにしてニザは山国である。山の斜面を切り崩し、その土を利用して盛り土にするのだ。俺の土魔法を使用しつつ、ドワーフや他の冒険者たちも雇いながら進めていく段取りになった。今後予想される食糧不足はヒーデータ帝国が中心となって支援することになり、何とかニザ公国は復興の見通しを立てることができた。

とはいえ、俺もメイもまだまだニザから離れられそうもない。毎日屋敷から転移して王宮や現場に通う日々が続いている。ちなみに、俺の転移術については、ドワーフ王、コンシディー公女、ユーリー宰相しか知らない。まあ実は、俺の転移結界を使って移動しているのであるが、とりあえず今は秘密にしてもらっている。彼らとしてもいたずらに世間を騒がせたくないのだろう。

俺たちが初めてニザを訪れてから、二か月が過ぎようとしていた。ようやく復興計画もある程度決まり、これから本格的に取り組んでいこうとした矢先に、俺はメイと共にドワーフ王の下に呼ばれた。

「ドワーフ王、お加減はいかがですか？」

「うむ。まだ立てぬが、気分は以前とは比較にならぬくらいよい」

「それはよろしゅうございました。で、ご用とは何でしょう？俺も

ドワーフ王にお願いがありますので、ちょうどよかったです」

「ほう、儂の用事など、ただのお願いのようなものだ。さして重要ではない。バーサーム侯爵のお願いの方がはるかに重要だ。何なりと言ってくれ」

「すみません、非常に言いにくいのですが・・・」

「遠慮することはない。何なりと言ってくれ。儂に出来ることであれば、協力は惜しまん」

力強い言葉を聞いて俺は気持ちを新たにする。そして、深呼吸をして、意を決してドワーフ王を真っすぐ見つめる。

「お願いというのは他でもありません。捕らえられている４０名のポーセハイ、あれらを私の配下としてお譲りいただけませんか？」

初夏の蒸し暑さを忘れるくらいの張り詰めた空気感が、ドワーフ王の部屋に満ちていく。

第九十八話　ウサギさんこちら、手の鳴る方へ

「あのポーセハイたちを譲れ・・・というのはどういう意味であろうか？」

ドワーフ王の声が震えている。それはそうだ。自分の妻を殺し、娘を殺そうとし、さらには国を滅ぼそうとしていた奴らなのだ。王として、許せるわけはない。

「いえ、奴らを活用する術が見つかったのです。うまくいくかどうかはわかりませんが」

「まずは、話を聞かせてもらおうか」

「ポーセハイたちは、このままいくと間違いなく全員が死罪でしょう」

「いや、そうは考えていない。首謀者は厳罰に処すが、計画に加担しなかった者については、罪は軽くするつもりだ」

「それはおやめになった方がよろしいかと思います。ヤツらの家族意識は鉄壁です。あれ以上、奴らの誰かの命を奪うと、間違いなく奴らはニザ公国を、ドワーフ王を敵として認識するでしょう。そうなれば王は、常に命を狙われることになります」

「むむむ・・・」

「私の要求をポーセハイたちが呑めばそれでよし。呑まねば、その

時はドワーフ王様にすべてをお任せしたく思います。一度、私に彼らと話をすることをお許しいただけませんか？」

「・・・まあ、バーサーム侯爵に限って、我が国の不利益になることはするまい。よかろう。ポーセハイたちと存分に語られるがよい」

「ありがとうございます。ところで、王様からのお願いとは何でしょうか？」

「いやなに、バーサーム殿の妻である、そのメイリアス殿のことだ」

俺とメイは顔を見合わせる。

「妻が何か？」

「メイリアス殿をしばらく、公国で預からせてはもらえないだろうか？」

「どういうことです？」

メイの身柄を拘束すると言っているのだ。普通に考えれば答えはノーだ。メイがいなくなるのだ。あのエロい、いやもとい、濃厚な夜を過ごさせてくれるメイがいなくなるのだ。あのやわらかい、マシュマロみたいなおっぱいがなくなるのだ。許せるわけはない。

「メイリアス殿の薬師としての腕は素晴らしいものがある。我々ドワーフは長命であるのをいいことに、自身の体を気遣うということがあまりなかった。今回のように疫病などが流行るとも限らん。そのために、我らドワーフは新たな防衛策を身につけねばならん。それにメイリアス殿の腕を借りたいのだ」

確かに、公国内において薬屋はほぼ皆無だ。何か体の具合が悪ければ回復魔法で治癒するか、さもなくば、気合と根性で治してきたのだろう。しかし、今回のように魔法では治癒できない病が流行るかもしれない。そうなった時の対策として、メイの知識を活用しようというのだ。これは、言下に断れない。

「メイ、どうする？」

「私は別に構いませんが、ご主人様は・・・」

「う～ん、そうだな・・・」

結局交渉の末、メイは毎日転移術（実は俺の転移結界）を使って公国に赴き、ドワーフたちに薬の知識を教える。そして、夕方は必ず帝国に帰り、家族とともに夕食を食べること、週休二日制でかつ、お盆、年末年始休暇を取得させること、有給休暇を付与すること等、もろもろの条件を付けることで、ドワーフ王の願いを聞き入れることにした。

「ニザ公国にはずっと来たかったので、それが毎日通えると思うとうれしいです」

「ほう？我が国にそこまで興味を持つとは、何か武器や防具が好きなのか？」

「いえ、亡くなった父がドワーフだったのです。子供のころから父の鍛冶をよく手伝っていました。公国に来ることができれば、ドワーフの方々から色々な技術が得られるかと思ったのです。王様、空いている時間に、ドワーフの皆さんの鍛冶工房を覗いてもよろしい

でしょうか?」

「むろんそれは構わんが・・・。そなたの父の名は何という?」

「はい、シマヤ、と申します」

「シマヤ・・・もしかして、左腕に大きな傷の跡がなかったか?」

「どうしてそれを!」

「・・・そうか、シマヤは死んだのか。いい鍛冶師だった。そうか死におったか・・・」

「ドワーフ王と妻の父とどのような関係だったのでしょう?」

「儂の弟子だ」

「弟子??」

ドワーフ王はすなわち、世界一の鍛冶職人であるドワーフ族の頂点に君臨する鍛冶師である。当然その腕はドワーフ族の中でも群を抜いている。王は弟子を周囲に置き、自分の警護や雑務を担当させる代わりに、自身の持つ技術を伝え、弟子を育成してきた。メイの父親はその弟子の中でもトップクラスの腕だったそうだ。

「自分の弟弟子たちをかわいがる男でな。儂の仕事を弟子のひとりに任せようとしたら、シマヤめ、自分がかわいがっている弟弟子を推挙しよった。それを退けたところ、ちょっとした言い合いから刃傷沙汰になってな。シマヤの傷は、儂がヤツを斬った時にできたものだ」

・・・完全な子供のケンカですやん。いい大人が何をやってるんだ？

「そうか、メイリアス殿はあのシマヤの娘か。それならばきっと相当の鍛冶スキルを身に付けておろう。機会があれば是非とも色々な工房を覗いてやってくれ。そして、多くの技術を習得するがよい。そなたなら、できようぞ」

王は知らない。メイがすでに神級の鍛冶スキルを持っていることを。後に、ドワーフの持つ技術はたちまちメイに習得されてしまい、それどころか、彼らが考えもつかない方法で次々と新しい技術を生み出していくメイにドワーフ全員が屈服してしまうことを。それは、遠くない未来まで迫っているのだが、それはまた、別のお話。

数日後、俺は王宮の地下にある大広間に来ていた。収監されているポーセハイたちに会うためだ。

「よー。しばらく見ねぇ間に、ずいぶんとヤツれたな？バカウサギども」

王宮に捕らえられてからのこいつ等の生活は、かなり厳しいものだったようだ。皆、一様にやつれていて、元気がない。

「・・・我らに、何の用だ？殺すのであれば、早く殺せ！」

若いポーセハイが俺に、殺意を込めた目で睨みつけてくる。

「お前、名前は？」

「・・・チワン」

「チワン、見たところ骨のありそうな若者だが、バカであることは間違いなさそうだ。自分の置かれている立場を理解しろ。次に俺に殺気を放ったら、ポーセハイ全員を皆殺しにするからそう思え」

「・・・」

俺から目をそらし、地面を向いて震えている。

「さて、黒ウサギたち。お前たちは遠からず処分される。死ぬのか死なないのかは俺にはわからん。今日ここにお前らに会いに来た理由は一つ。俺にとっても、お前らにとってもいい話を思いついたのでここに来た。俺の提案を受け入れれば全員命は助かる。呑まなければドワーフ王がお前らを裁く。お前ら一族の命運は、お前らに決めさせてやる。そういうことだ」

ポーセハイ全員が俺を見つめている。俺はその視線を無視して話し始める。

「俺からの提案は、お前らを世界一にしてやれる提案だ。世界一はお前ら一族の悲願じゃなかったのか？それを、叶えてやろうというわけだ。ただし、俺は環境を作るだけでやるかやらないかはお前ら次第だがな」

「我々を世界一になど・・・」

チワンが呟く。

「努力次第でできるぞ？お前ら全員、どうやら回復魔法と薬師のス

キルを持っているな?あとは、鍛冶師か。幻影術を持っているのもいるのか?まあ、それはいい。そのスキルを活かせるということだ」

「我々はドワーフに負けたのだ。今一度、ドワーフに勝負を挑めというのか?」

「アホかお前。ドワーフの土俵で勝負して勝てるわけないだろう。別の土俵で勝負するんだよ」

「どういうことでしょう?」

「お前ら全員、医者になれ」

「医者・・・?」

「お前らのスキルで、病に苦しんでいる人たちを一人でも多く救うのだ」

「そんなことで、世界一に・・・」

「なれるんだよ、それが。お前ら今の自分たちは幸せか?」

「・・・」

「即答できねぇんじゃ幸せじゃないってことだよな?当然か、牢獄につながれてヒドイ生活してるもんな?」

「それはすべてお前たちに原因がある。知ってるか?幸せってのは、努力×運なんだよ。お前たちには恐ろしく運がない。ゼロだ。ゼロに何をかけても、ゼロだ。わかる?」

全員が眉間にしわを寄せて、若干引いている。いいですよ?それも覚悟できてますので。スベるの、大歓迎です。

「お前らは相当の努力をした。しかし、運がない。運っていうのはどうやったら上がるか知ってるか?知らねぇよな。運ってのはな。人のために何かを助けてやることで上がるんだ。人から感謝されることで上がるんだよ。お前らは自分たちのために何かをやってきた。人のことは全く眼中になかった。だから不幸せなんだよ。運さえ上げれば、お前らの評価はすぐに上がる。だからお前ら医者になれ。人間も、獣人も、ポーセハイも、皆の命を救って感謝されろ。そうすりゃ俺たちは寿命が延びるし、お前たちも世界一になる。どうだ?悪い話じゃないだろう?」

全員が絶句している。物音ひとつしない。

「まあ、いきなり決めろと言われても決められないだろう。一日やる。お前らで考えろ。そしてそうだな・・・。チワン、お前明日の同じ時間に、俺の所に報告に来い。看守にはその旨、伝えといてやる」

そう言い捨てて俺は部屋を後にした。

「あ、アイツら、別々の牢に収監されてんのか?そうなりゃ話し合いできねぇかもしれないな。まあいいか。どうにかするだろう」

一抹の不安が頭をよぎったが、大丈夫と勝手に思い込むことにする。

次の日、俺の前に現れたチワンは悔しそうな表情を隠そうともせず、

俺の提案を受け入れると伝えに来た。どうやってポーセハイたちが話し合ったのかは、敢えて聞かなかった。

ドワーフ王にポーセハイの決断を伝える。王は露骨に嫌そうな顔をしたが、ヤツら全員を犯罪奴隷とし、その主人を俺とすることを伝えると、何とか了承してくれた。

その後、ニザ公国の奴隷商が呼び出され、ポーセハイ全員に奴隷魔法を付与していった。何せ４０人近くもいるためにかなりの時間がかかり、終わったのは深夜だった。

フラフラになりながら王宮の俺の部屋に戻ると、メイがいた。

「帝都のお屋敷には、ご主人様が遅くなると伝えてきました」

「ああ、そうか。ありがとう。みんなはもう、寝たのかな？」

「はい、リコ様が先に休むと仰っていました。そして、ご主人様にお夜食を持たせてくれました」

見ると、バスケットの中に夜食が入っている。

「これ、一人分にしては多いな。もしかして、メイもまだか？」

「いえ、私は・・・」

「まだなんだったら、手伝ってくれ。俺一人じゃ食べられないぞこれ。残したらもったいないだろ？」

「・・・そうですね。では」

遠慮していた割には、結構ガッツリとメイは食べた。かなりお腹がすいていたらしい。

「メイ、風呂入るか？」

「・・・ハイ」

顔を真っ赤にして答えるメイは、とてもかわいらしかった。

体を洗い、二人で湯船につかる。王宮だけあって、浴槽も広い。王族は風呂でも侍女や家来が介添えするために、浴槽も広めに作っているのだそうだ。

「それにしても、不思議です」

「うん？どうした？」

「まさかポーセハイたちまでも、配下に加えてしまわれるなんて・・・思いもよりませんでした」

「メイは嫌かい？」

「いいえ。確かに両親の敵ではありますけれど、今ではむしろ彼らに感謝しています」

「感謝？」

「はい。両親が殺され、私も奴隷に落とされました。けれど、そのおかげで私はご主人様との縁ができました。こんなに幸せな日々を

送らせてもらっているのも、ポーセハイたちがいたからこそです。もちろん、両親の死は悲しいですが・・・。ですが、今は、私は彼らに感謝しています」

「メイ、お前は偉いな」

思わず隣にいるメイを抱きしめる。

「ご主人様こそ、素晴らしいです。ニザ公国の危機をあっという間に解決してしまわれました。私も頑張らないといけません」

「そっか。あまり無理しないようにな？」

「私は全然大丈夫です。まだまだ頑張れますから安心してください」

「・・・じゃあ、お言葉に甘えて、風呂から上がったら、頑張ってもらっちゃおうかな？」

「えっ？・・・ああ、フフっ。ご主人様・・・畏まりました。お任せください」

きれいな満月が、王宮を美しく照らしていた。

第九十九話　ドワーフ工房の見学

目が覚めると、シーツの波間に俺はいた。前日は、頑張りすぎた。あんなに濃厚な夜は初めてだった。それから数時間しかたっていないため、まだ気だるい。のろのろと体を起こすと、シーツの波の向こう側にメイの姿が見えた。

「おはようございます。ご主人様」

メイも気だるそうだ。虚ろな目でキョロキョロと周りを確認している。なぜベッドのシーツがこんなにもぐちゃぐちゃになっているのかが不思議なようだ。そして、昨日のことを思い出したのか、ハッとした表情を浮かべて、うつ伏せになって恥ずかしそうに顔を伏せる。

「おはよう、メイ」

朝日に照らし出されたメイの背中がキレイだ。

「メイは、背中もお尻も、きれいなんだな」

俺はうつ伏せのメイの傍に寄る。

「ご主人様・・・アッ、そこは・・・そんなとこ・・・イヤッ・・・ふうっ・・・アッ・・・」

シーツを思いっきりつかんで、声を殺すメイ。体が波打っている。

「メイは・・・ここか？これがいいんだな？」

「ああっ！アハッ！・・・リコ様が、転移してこられますぅ・・・」

「朝食はいらないって言わなかったのか？」

「一応・・・アッ・・・朝食を・・・もって・・・クッ・・・行くと」

リコが転移してきたとしても、俺はまだまだ止める気はない。

「おはようございます、リノス。メイ。朝食を持ってきましたわ。まあ、何ですか、二人して裸で。早く服をお着替えなさいな」

俺がメイの背中を指圧している姿を、ちょうど転移してきたリコに見られてしまった。仕方がないので、俺たちはテキパキと服を着る。

「やっぱり、リコとペーリスが作った朝食が一番おいしいな」

王宮の侍女に朝食はいらないと告げ、メイと二人で朝食をとる。サンドイッチとサラダとスープというシンプルなものだが、サンドイッチはいくつかの種類があり、スープも野菜たっぷりの健康スープだ。

「メイ、今日の予定はどうなんだ？」

「今日は午前中に王宮薬師のウーセン様と、今後について打ち合わせをするくらいです。お昼から時間があれば、ドワーフの工房を見に行こうかと思っています」

「そうか。俺もポーセハイたちのことをユーリー宰相と決めなきゃいけないんだ。午前中で終わるだろうから、昼から俺も一緒にドワーフの工房を見に行ってもいいか？」

「もちろんです！」

朝食を終え、俺たちは部屋を出る。ポーセハイの処遇については、早速にクルムファル領に護送することになった。俺はクルムファルに転移し、リコに相談する。

「わかりましたわ。それでしたら、各農村と漁村に、ポーセハイを数名ずつあずかってもらうといいのですわ。ホテルクルムファルの近くにある結界村も、かなり空きが出ています。残りはそこに収容すればいいのですわ」

「ではリコレット様、その結界村の管理は私が行いましょう」

名乗り出たのはピウスだった。

「うん？軍関係の仕事はいいのか？」

「クノゲンに任せておけば全てことが足ります。私よりもクノゲンの方が向いています。どちらかというと私も、回復魔法や薬草類に興味があったので、彼らと打ち解けることができれば、そこで学びたいと思います」

「わかった。よろしく頼む」

リコとピウスたちの迅速な準備により、ポーセハイたちは明日から

受入れができる体制が整ってしまった。これにはさすがのユーリー宰相も、ドワーフ王も舌を巻いていた。

「バーサーム侯爵は迅速さが、他の者とは群を抜いているな」

「まったくでございます。我々も見習わねばなりません」

「ところで、ウーセンからメイリアス殿が工房を見に行かれると聞いた。ならばニカンガの工房に行くとよい。奴は儂の古くからの弟子でな。技術はドワーフでも五指に入る」

「しかし国王様、ニカンガ殿は・・・」

「見るだけなら問題ないであろう。川を渡らねばならんが、行く価値はある。きっとヤツの鍛冶を見れば、メイリアス殿のことだ、自分も打ってみたくなるだろう。儂の金槌を持っていくがいい」

俺は金槌と紹介状を手に部屋に帰ると、メイは既に帰って来ていた。早速国王様からの話について相談する。

「ニカンガ様のお話は聞いたことがあります。ぜひ、行ってみたいです！」

目を輝かせながら返事をするメイにちょっと萌えながら、俺たちは早速工房に向かうことにした。

ルニホンは齢２５０歳になろうかという老ドワーフである。若い頃はその卓越した技術力で様々な製品を生み出し、ドワーフ族始まって以来の天才と言われた男である。現・ドワーフ王も、このルニホ

ンが手ほどきをしたほどだ。しかし、最近は耳が遠くなってきたこともあり、一線を退き、悠々自適の隠居生活に入っている。

このルニホンの日課は、毎日の散歩である。雨の日も風の日も、この川べりをゆっくりと歩き、季節の移り変わりを感じるのが何よりの楽しみになっている。

この日も川べりを散歩していると、向こう岸から見慣れない二人の人間が目に入った。

「ご主人様、川がありました」

「ええと・・・橋はずいぶん先にあるんだな。この川を渡った方が早いな。しかしこの川の深さはどのくらいかな?」

「そうですね・・・あっ、向こう岸に人がいますね。あの方に聞いてみましょうか?」

「そうだな。・・・おーーーい!すみませんが、この川の深さはどのくらいですかーー!」

「・・・何だ?向こう岸から人間が何か言ってやがる。・・・耳が遠いから聞こえん。おーーい!儂は耳が遠いから聞こえんのじゃ!他の人に聞いてくれぃ!!」

「・・・何か教えてくれてるみたいなんだけどな~。よくわからないな。・・・すみませーん!教えていただいてますが、ちょっと聞き取れませーん!!膝か、腰か、どのくらい深いか教えてもらえませんかーー!!」

「・・・野郎、まだ何か言ってやがる」

ルニホンは耳に指をさして大声で答える。

「儂ぁ、耳が聞こえんのだ！！！！」

「・・・そんなに深いのなら、渡れないな」

やっとの思いで、俺たちはニカンガの工房に着いた。思ったより大規模な工房で、いくつもの部屋がある。俺たちが通されたのはいわゆる「空き工房」のような部屋であり、そこには古ぼけた机の他に、色々な道具が壁に掛けられていた。

「ようこそお越しくださいました。ここは公国が設立した鍛冶工房です。私は、ここの管理を任されております、ナルニと言います。ニカンガ殿は今、精錬の真っ最中で手が離せないとのことです。まずは、私の工房からご覧になりますか？」

「是非、お願いします」

案内されたナルニの工房は様々な鉱石を溶かし、棒状に作り上げていく工程を担当するところだった。色々な鉱石を溶かすのにあたっての工夫などを説明してもらったが、俺にはチンプンカンプンだった。メイの方は目を輝かせて聞いていたので、これはこれでよかったのだろう。

そのうち、ニカンガの手が空いたという知らせがあった。

「では、ニカンガ殿の工房にご案内します。彼は鉱石の精錬から精製まで得意にしています。これから生成に入るようですので、もしよければメイリアス殿も何か作られてもいいかもしれませんね」

「ありがとうございます！」

ニカンガの工房は狭く、しかもかなり高温とのことだったので俺は遠慮し、この部屋で待つことにした。その間は、この工房で作られた製品を眺めながら時間をつぶすことにした。

「いやじゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

突然、怒号が響き渡った。驚いた俺は思わず、その声のする部屋に向かう。

部屋には目から下を髭で覆われた小柄な、しかし、がっしりとした体躯を持った男が何やらキレまわしており、それを必死で宥めるナルニの姿と、ドン引きしているメイの姿があった。

「ニカンガ殿、別にそのくらいいいではありませんか！」

「いや！断る！」

「ニカンガ殿・・・」

俺はメイにそっと耳打ちして、一体何があったのかを尋ねた。

「ナルニ様が私に金槌を貸してやってくれとニカンガ様に仰ったのです。しかし、ニカンガ様は断ると・・・」

「貴様ら、儂に金槌を貸してくれという。ということは、金槌で何かを打つのだろう?儂の金槌が削れるではないか!」

思わず俺は声を上げる。

「何と、世にもケチなヤツがいるもんだな!金槌で叩いたくらいでどれだけのものが削れるんだ!そんなところから借りる必要はねぇ。俺のを使え!」

気が付くとニカンガがズッコケていた。

「儂もかなりケチだと言われているが、儂以上にケチな奴がおったわい」

「俺はそこまでケチじゃないですよ?」

「隠すな。儂もお主も、道具を大事にしている者同士だ。自分の道具を傷つけるのであれば、他人の物を使う。儂はお主の考え方に深く共感するぞい」

「ニカンガ殿はいつもこの調子なのです・・・」

「ナルニよ!お主は物を大切にしなさすぎる!それではいい鍛冶師にはなれん!最近儂は自分の目も勿体ないと思っておるんじゃ」

「目が勿体ない?何をするつもりだ?」

「知れたこと。二つの目を二つとも使うのは勿体ない。どちらか片方だけを使うのじゃ。そして、その目が悪くなればもう片方の目を

使う。いい考えじゃろう?どうじゃ若いの、お主ならわかるじゃろ?」

「もう片方の目を使ったら、世間の人が誰だかわからなくなってそうですね」

「なるほど、片方の目を使わなんだら、そうなってしまうか!それは、やめるとしよう」

ニカンガとは変なところで気に入られてしまい、鉱石から製品を精製する技術を気前よく教えてくれた。それだけでなく、お土産に色々な鉱石もくれた。これにはナルニは驚いていた。ケチで有名なニカンガが人にものをやるのは、驚天動地のことらしい。

工房を訪問して数日後、ポーセハイたちのクルムファルへの護送が完了した。あとは農地問題を解決するだけになり、ようやく一息つけるかと思っていた俺に、再びドワーフ王から呼び出しがかかった。

「ニカンガから鉱石をもらったと聞いたが、本当であろうか?」

「ええ、気前よくくれました。どうもかなり珍しいことみたいですが・・・」

「ヤツはケチで有名でな。少々意地汚いところがある。そのニカンガが自分の精製した鉱石を人に渡すとは・・・いまだに信じられぬが・・・やはり、事実なのだろうな」

「そうですね。妻のメイリアスは、その鉱石を使って休みの日に何かを作っています。かなり純度の高い鉱石で、妻も感心しておりま

した」

「フム、それはよかった。・・・さて、バーサーム殿、今日貴殿を呼び出したのは他でもない。我が娘、コンシディーのことだ」

「コンシディー様はこのところお姿を見ませんね。どうなさっておられるのでしょうか？」

「今は蟄居中なのだ」

「蟄居？」

「自分から部屋に閉じこもり、外に出ようとしない。食事は採っておるようだが、食は細くなっておるようだ。日の光を入れず、薄暗い部屋で一日じっとしておるらしい」

「それはまた、何とも・・・。で、この私に何をせよと？」

「コンシディーを外に出してもらえないだろうか？」

今度はひきこもりの相談かい。この国はどうしてこうも次から次へと問題が発生するのだろう・・・。

第百話　ひきこもり野郎、出て来いヤァ！

「ほう・・・これは・・・」

薄暗い部屋の中、俺は思わず驚きの声を上げた。

ドワーフ王から頼まれたコンシディー公女の件は、はっきり言って俺には興味が持てなかった。ぶっちゃけ、この公国の最大懸念事項である農地復興とほぼ、関係がないからだ。

しかし、取りあえず様子を見るだけ見ることにする。俺は案内されるまま、コンシディーの部屋にやってきた。

部屋の中は豪華という一言に尽きた。贅を尽くした調度品が並んでいたのだ。カーテンが引かれているのか、部屋の中は薄暗いが、それでも、この部屋のある物の高価さと豪華さは認識することができる。

俺が与えられている部屋と同様に、この部屋もバス・トイレは完備しているようだ。コンシディーはどうやら、自分の寝室でひきこもっているらしい。

・・・これまた豪華なベッドの上に、コンシディーは居た。きちんと正座をし、その傍らには剣を携えている。何より驚いたのが、彼女の周りには結界が張られていることだ。

同じ結界師として俺にはわかる。これはかなり優秀な物だ。おそら

く自分が許した者しかこの結界を通ることは出来ない仕様になっている。これを破れるのは、ＬＶ４以上の魔法や剣術などが必要だ。彼女はおそらく、ＬＶ３の結界スキルを持っているのだろう。

「姫様は一日中このようにして端座されていまして、全く結界から出ようとはなさいません」

女官長は困った顔をしながら俺に耳打ちをする。

「この結界は一日中張り続けているのですか？相当ＭＰを使うと思うのですが・・・」

「いえ、誰かが入ってくると結界を張られます。それ以外は・・・」

「なるほど。ということは、寝る時は・・・」

「部屋にカギをかけて休まれます」

・・・塾居じゃねぇじゃねぇか。単なる「ひきこもり」だ。バカバカしい。

「国王様は、姫様がこのようなお姿になり、心を痛めておいでです。侯爵様の手で、何とか姫様を・・・」

「別にこのままでいいんじゃないですか？」

「は？今何と？」

「別にこのままでいいと思いますよ？生活に緊張感があって。こういうファンキーな人生も、アリだと思います」

「ふぁんきー？」

「お姫様がこの状態で、何かダメなことがありますか？」

「国王様が・・・」

「いや、モノは考えようです。ずっと部屋にいるのですから、安全は保障されます」

「それは・・・」

「部屋を出そうと思うのであれば簡単です。沢山の家臣で見張ればいい。そのうちＭＰが尽きて気絶します。その時に、この部屋から引っ張り出せばいい」

「ふざけないでください！」

コンシディーが剣を携えて、ベッドの上で仁王立ちになっている。

「私の気持ちも知らないで！」

「貴方の気持ちは、残念ながらわかりません」

「・・・」

彼女は俺を睨みつけている。

「ではなぜ、このようなことをなさいます？」

「・・・私は、罰を受けねばなりません」

「罰？」

「私は・・・博士の、レコルナイとウトニカたちの陰謀を見抜けず、母を殺しました。そして、鹿神様の御心も察せずに、討伐しようとしました。しかも、父上には国王の資格がないとユーリー殿に吹き込み、ガルトーの兄を唆して鹿神様の討伐命令を出させてしまいました。その上、私に従った冒険者たちも全滅させてしまいました。全ては私の責任です。私は罰を受けねばなりません」

「つまり、責任を取って、この部屋と結界に閉じこもっていると」

ゆっくりとコンシディーは頷く。

「コンシディー様がこの部屋から出るのは、いつになりますか？」

「わかりません。私が許されたと思えば出るでしょうし、そう思わなければ死ぬまで出ないと思います」

「おいたわしや、姫様・・・」

女官長は涙を浮かべている。

「ミンシ、これは私が、私へ科した罰なのです。あなたが悲しむ必要はないわ」

「姫様・・・」

「そうですよ女官長様。悲しむ必要はありませんよ」

「「えっ？」」

ミンシは俺を凝視し、コンシディーは座ろうとしている途中の姿勢で固まっている。

「きっと、お腹がすいたら出て来られます。取りあえず、帰りませんか？」

「侯爵様！」

「コンシディー様も、閉じこもるのであれば徹底的にやりませんと。だって、人が来るたびに結界を張りなおすんじゃ面倒くさいでしょ？」

俺はコンシディーにかなり強力な結界を張ってやる。

「ほら、これで誰もコンシディー様の結界には入ってこられなくなりました。ほぼ、無制限に稼働し続けます。これでわざわざ結界を張りなおす手間が省けました。わーパチパチー」

「さっきから何なのですか！バカにして！こんな結界！」

コンシディーは剣を抜いて結界に斬り付けるが、あえなく剣は弾かれる。そして目くら滅法に斬り付けていき、最後は剣が折れてしまった。

「私の剣が・・・」

「ね？丈夫な結界でしょ？安心してひきこもられませ」

「侯爵様、あなたは一体・・・」

「一応、私の本職は結界師ですので」

コンシディーは目を丸くして驚いている。

「さあ、我々は帰りましょう。・・・あ、そうだ、言い忘れてた。その結界、一つ問題がありまして・・・。食事がとれないのは我慢すれば事足りますが、お手洗いに行けません。以前私の弟子を閉じ込めましたが、我慢できずに粗相を致しました。みんなの見ている目の前で。そうならないように、お気を付けください。では」

俺は女官長を促して部屋を出ていく。

「待って！」

絶叫にも似た声が背中越しに聞こえる。

「どうしてこんなことをするのです！」

「どうして？自分に罰を与えたいのでしょう？それでは罰になっていないから、罰になるようにしたまでです」

「あなたにこんなことをされる覚えはございません！」

「自分が許されたと思えばこの部屋から出る、なんて言っていたが、それが一体何になる？単なる公女様の自己満足でしかないってことだろ？そんな下らない三文芝居に俺を付き合わすんじゃねぇ」

「ぶ、無礼な！」

「無礼はそっちだろう。国王様から言われて来てみりゃ、下らないご託を並べやがって。いいか？罪を許すのは他人だ。自分の判断じゃねぇ。自分のしたことが罪だと感じるのであれば、何故罪を償わないんだ。迷惑をかけた人の気が済むようになぜしないんだ？」

「だから私はこうやって！」

「誰かがそれをやれと命じたのか？そうすれば罪を許すと言ったのか？」

「それは・・・」

「誰も言ってねぇはずだ。言うわけねぇよ。そんなこと誰も求めてないんだからな」

「求めて・・・ない？」

「母上も鹿神様のことも、公女の罪じゃない。知らなかったんだからしょうがないだろう。冒険者たちは気の毒だったが、俺から言わせればどっちもどっちだ。司令官の言うことを聞かない兵隊たちの責任までは取れない。冒険者たちも悪いんだよ」

「それでは私の気がすみません！」

「知ったこっちゃねぇよ。それなら迷惑をかけないで自分に罰を科せ。お前の勝手な思い込みと振る舞いで、どれだけの者が迷惑してると思ってるんだ。罪を償うとすれば、今、迷惑をかけている人たちに償え」

コンシディーは唇をキュッと噛んで俺を睨んでいる。

「どうしてもひきこもりたければ、徹底的に不自由にしろ。粗末な服に身を包んで、暑さ寒さに耐えろ。食事も最低限にしろ。起きてから寝るまで座り続けて微動だにするな。人が来た時に結界を張るのではなく、ブッ倒れるまで結界を張り続けろ」

「だからって、私をこんな結界に閉じ込めるなんて、やりすぎだわ！」

「それが甘いと言っているんだ。肌に優しい服、寝心地のいいベッド、十分な食事、気を使ってくれ、何かと面倒を見てくれる女官長たち、国王様・・・。快適そのものじゃねぇか。罪を償うってのは不快の中に身を置くことから始まるんだ。当然それは、多くの人が不快だと認める環境だがな。それに耐える姿が、贖罪になるんだ。だから強力な結界を張ってやったんだ」

「・・・」

「公女、あなたがそこで粗相をするくらいまで耐えて、不自由さの中にあれば、みんなが納得します。それが嫌なら、これ以上人に迷惑をかけるのはおやめなさい。むしろ、人の助けになることをなさいませ」

コンシディーは泣いていた。俺は結界を解除してやり、女官長にその場を任せて部屋を出た。

数日後、俺はメイ、ゴンと共に、何もない、ただっ広い耕作地に立

っていた。目の前にはドワーフと冒険者たち、そして、帝国から追加で募集をかけた、貴族の次男・三男たち、全て合わせて数百人が揃っていた。

「よーし、では始める！まずは、この山の木を切り倒す！そして、切り出された木は、ドワーフたちの所に運んでくれ！ドワーフはその木を角材に加工してくれ！」

ワラワラと男たちが動き始める。その中に混じって斧を振うドワーフの女性が一人いた。コンシディー公女だ。彼女は毎日ここに通い、男たちに交じって耕作地の復興を手伝うことになった。しかも、自分の身分を隠し、俺に別人に見える結界を張らせて。これが、彼女が考え抜いた末に行きついた、「人に迷惑をかけない贖罪」らしい。ドワーフ王も俺も、何も言わずに彼女を見守ることにした。きっと彼女は、色々な人々と交流することでさらに成長していくはずだ。

夏が、すぐそこまで来ていた。

第百一話　飲んで食ってホッと一息

「やっと終わりましたね」

「あとは結果を待つのみだな」

ニザ公国の農耕地に盛り土をすることひと月、ようやくそれが完成した。しかも、山を切り開き、運び出した土を盛り土にしたため、結果的に耕作地が広がったのだ。

当然、使用する水は、新たに掘った湧き水を使用している。森の奥深くに大量の地下水が埋没しているのを発見したため、早速掘り出したのだ。

農水路を整え、畑に水を撒いていく。念のため、フェアリの毒物を中和する粉とメイが作った薬品を散布する。小さいフェアリードラゴンがパタパタと畑の上を飛び回る姿は、なかなか癒されるものがあった。

「ご主人様、終わりましたー」

「ありがとう。よくやってくれた」

「えへへ」

フェアリは、最初は舌足らずな念話を送って来ていたが、最近はかなりしっかりとした念話を送ってくるようになった。ペーリスやフ

ェリスたちお姉さまから人語も学んでいるようで、もうしばらくすると喋れるようになりそうだ。

俺はフェアリの頭をなでながら、メイの作った肥料が撒かれている光景を見る。瞬く間にそれが終わり、種が撒かれて、とりあえず俺たちの第一目標は完成したのだった。

「よーし、みんな、ご苦労だった！今日は宴会だ！飲んで食うぞ！」

「うおおお！！！」

野郎どもの歓声が上がる。やるべきことはすべてやった。あとの結果は天に任せるほかはない。その夜は帝都からリコたちも呼び、飲めや歌えのドンチャン騒ぎになった。

そんな光景を俺はぼんやりと眺めていた。

「どうしたのです？リノス」

色々な食材を運び、料理してくれたリコが声をかけてくる。

「いや、一つのヤマが越えられたなと思ってね」

「ご苦労様でした」

「このひと月、ご主人とメイ殿はよく働いたでありますからなー」

俺は、歓喜の輪の中にいるメイを見る。ここでも彼女は土や毒の鑑定、果てはドワーフと共に農具を開発するなど、文字通り八面六臂の活躍を見せていた。それだけに現場の人間からの信頼は抜群で、

メイの周りには多くの野郎どもが群がっている。

「本当に、メイはよくやってくれた。あとは、コンシディー公女もだな」

コンシディーはメイと同じように野郎どもに囲まれて、楽しそうに酒を飲んでいる。彼女も、現場作業はもちろん、もともとドワーフということもあって鍛冶スキルがあるために、メイとたちまち仲良くなった。今ではメイの片腕のような存在になりつつある。盛り土の作業がこれほど早く終わったのは、彼女無くしてあり得なかったのだ。

「そうでありますなー。コンシディー様は才能豊かな才女でありますなー」

「ああ、俺が王様なら何か、褒美を与えたいくらいだよ」

「でしたらリノス、帝都の屋敷にコンシディー様を招待してはいかがです？」

「そうだな、彼女の返事次第だが、屋敷で皆でうまいものを食うか！」

「「賛成です！！」」

フェリスとルアラが元気に返事をする。

「では、メニューをリコ様と考えますね」

「悪いな、ペーリス。勉強の邪魔にならない程度に頼むよ」

俺の屋敷で慰労会をするという話に、コンシディーは大喜びで賛成し、数日後、転移結界を使って彼女はやってきた。

色々と準備をする中で、俺たちだけでは勿体ないということになり、屋敷の庭を大解放し、我が家の主だった者たちを集めての大慰労会になった。

帝都からは、リコ、ゴン、メイ、ペーリス、フェリス、ルアラ、フェアリ、イリモとジェネハたちハーピー。そしてクルムファルからピウスたちと共に、ゲーキとイトラもやってきた。最近彼女は体が大きくなってきたが、愛らしさは相変わらずだ。その他、カイリークとトホツからカールスとマルセル夫婦とその家族たちも招待した。さすがにゲュリオンの姿を見るのが初めてのドワーフたちは、かなり動揺していたが、リコたちに懐いている姿を見て、徐々に安心していったのだった。

「みんなよく来てくれた！今日はゆっくり飲んで食ってくれ！」

用意された刺身、天ぷら、肉、野菜、グラタン、パスタ、スィーツ・・・などに舌鼓を打ちながら皆と談笑する。その中に見慣れない一人の青年の姿を見つけた。

「バーサーム侯爵様、本日はお招きにあずかり、光栄です！」

なぜか一人だけ正装しているので、メチャメチャ浮いている。

「君は？」

「私、クラリフォン子爵家のクラリフォン・サエリ・チューリーと申します。ペーリスさんとは、大学で同じで・・・ええと・・・」

「クラリフォンさんはとても料理に興味があるので、せっかくですから招待しました。普段着でいいって言ったんですけどね～」

「ああ、ペーリスの友達か。いつもありがとうね」

「とととととんでもない、こちらこそ、ペーリスさんにはお世話になっています！」

ガバッと彼は腰を折ってお辞儀をする。

「クラリフォンさん、リノスさんの料理もあります。ぜひ、参考にしてくださいね」

「あああありがとうございます！」

顔を真っ赤にして答えている。この青年は、あれだな。早速ペーリスに話を聞く。

「クラリフォンさんはすごく料理に興味がありまして、私のお弁当を参考に、色々と料理を考えているみたいです」

「へぇ～彼も料理をするんだ」

「料理をすることは見たことはありませんが・・・。ただ、夕食の残りものを詰めたものをたまに持って行ってあげています。そうだ！クラリフォンさ～ん」

名前を呼ばれた青年は飛ぶようにペーリスの所にやってきた。

「あちらで料理ができます。まだ食材が余っていますから、よかったら何か作られますか？そういえば私、クラリフォンさんが作った料理を食べたことなかったんですよね～」

「え？料理？僕！？」

青年は固まってしまっている。

俺はリコに目配せをする。

「クラリフォン様、今から私も追加で料理を作りますの。よければご一緒にいかがですか？」

「リ、リコレット様！そ、そんな、恐縮です！」

「まあ、そのように畏まらなくてもよろしいですわ。どうぞこちらにいらしてくださいませ」

「ハ、ハイ・・・」

ドナ〇ナのように、青年はリコに連れて行かれてしまった。頑張れ青年、俺は陰から応援するぞ！

しばらくすると、帝都からウィリスたちが転移してきた。ウィリス、シェーラ、ユリエルとソーニヤ親子だ。

「ウィリス！よく来たな！もう店はいいのか？」

「ハイ、本当に大忙しです。秋の収穫をお客様が楽しみにしてます」

「そうか。今日はゆっくり飲んで、食べていってくれ！」

「その前に、ご主人様にお願いがあるんだ」

「何だ？」

ウィリスの後ろから見慣れない猫人族の女性が姿を見せた。なかなか目力があって、しっかりしてそうだ。

「彼女はティーラ。冒険者をしていたんだけど、パーティが解散してしまって・・・今は店を手伝ってくれているんだ」

「ほう、その猫娘がどうした？正式に雇いたいのか？」

「それもあるけれど、できれば・・・彼女と結婚させてほしいんだ」

「結婚？」

「・・・ご主人様、私からもお願いするのじゃ。ティーラはいい人なのじゃ。兄様のお嫁さんにしてあげたいのじゃ」

「ああ、いいよ。全然。おめでとう！」

「ありがとうございます。ご主人様」

「おーい、みんなちょっと聞いてくれ！こいつはウィリス。帝都で店を任せている。コイツがたった今、結婚することになった。お嫁

さんはこのティーラだ！皆で祝ってやってくれ！」

「うおおおー！おめでとー！！！」

「なんだ！かわいい嫁さんもらいやがって！」

ウィリスは皆にもみくちゃにされながら祝福されていた。彼は泣いていたが、それがうれしさの涙であったのか、痛みによる涙であったのかは、敢えて追及しなかった。

宴もたけなわになり、皆、それぞれの家に帰っていった。屋敷に残ったのは、俺たちとコンシディー公女だけになった。

「じゃあコンシディー様、ニザまで送りましょう」

「私、夢を見ているんじゃないですよね？」

「どうされました？」

「こちらにお邪魔してからずっと不思議でした。人間、魔物、獣人、海人族、猫族、そしてドワーフ・・・これだけの種族が一堂に会して食事をするなんてこと、今まであったでしょうか？」

「・・・ないと思いますね」

「本来ならば敵同士になっていてもおかしくない種族もいます。その人たちとお酒を飲むなど・・・」

「リノスの所にいれば、そんな種族の問題は全くなくなるのですわ」

「リコレット様・・・」

「それが私の主人、リノスの最大のスキルなのですわ」

「こんな光景が、世界中のあらゆる場所で見られたらいいのに・・・」

「本当に、そうですわね」

「今度は、ポーセハイの奴らも呼んでやりたいな」

「そういえば、侯爵様に預けられたポーセハイは、どうしているのですか？」

「どうも何も、クルムファルで活動していますよ。思った以上に好評で、彼らが世界一になるのも、時間の問題だと思いますよ？」

コンシディーは不思議そうな顔をしながら、メイに伴われてニザへと戻っていった。

「・・・シューセより本部どうぞ」

「本部です、どうぞ」

「Ｃ－１８地点、人手が足りません。増援願います」

「了解。ニツグ、本部です。どうぞ」

「どうぞ」

「Ｃ－１８地点への増援をよろしく頼む、どうぞ」

「了解しました」

深夜のクルムファルに、黒い毛皮に覆われた兎人族が突然現れる。彼らは「念話」と「転移」スキルを活用して、医療活動を始めていた。各町と農村に配置されたポーセハイは、瞬く間に医術スキルを開花させ、住人にはなくてはならぬ存在になっていた。それだけでなく、人手が足りない場合は転移によって補い合い、かなり迅速で高度な医療活動が行えるようになっていた。

ミニーツの緊急招集に応じられなかった老人や子供、その母親たちもまとめて転移してきており、それらを合わせるとクルムファルのポーセハイは、１００名近くになっていた。

その人々も活用して彼らは、救急活動を行うよう試行錯誤を重ねていた。後にそれは実を結び、多くの住人から感謝されることになる。彼らは名実ともに「世界一の医療集団」となるのだが、それはまた、別のお話。

第百二話　真夏の夜の夢

「そういえば、リノスはもうすぐ２０歳になるのですわね？」

８月も終わろうとしていたある日、夕食を食べながらリコがつぶやいた。

「そうだな。俺ももうすぐ２０歳だ。２０代はいい１０年間にしたいな」

前世の俺にとっての２０代は暗黒の時代だ。仕事はない、ようやくありついた仕事は激務。家に帰れない、休めない、倒れられないという日々。女にはフラれ、気が付けば３０代という流れだった。ああ・・・思い出したくない。

「ニザの農地復興は既に収穫を待つのみだし、ここは一丁、俺の誕生日パーティといくか？」

「またパーティーでありますかー」

「ゴンは嫌か？」

「もちろん、賛成でありますー」

「私も賛成です！今度は私も料理します！」

「そうだな。今度はフェリスがコック長でやってみるか？」

「ええー私、食べられないじゃないですかー」

ダイニングが爆笑に包まれる。じゃあ俺が買い物に行って・・・などと、ああでもない、こうでもないとパーティの話で盛り上がる。

「リノスに一つ、お願いがありますわ。みんなも聞いておいてください」

突然リコが静かに話し始めた。

「どうした、リコ？何だい、お願いって？」

「リノスにもう一人、二人でもいいですわ。新たに妻を迎えてほしいのです」

「え？どういうこと？」

「リコ殿・・・」

「リコ姉さま！」

メイは涙ぐんでいる。しかし、リコの表情は変わらない。落ち着き払った態度で再び口を開く。

「これは・・・メイとも話をしていたことなのですが、リノスと結婚して三年。私もメイも・・・子供を授かることができませんでした。これから先もこのままではいけないと思います。そこで、新しい妻を迎えてほしいのです」

「結婚してまだ三年だろ？なにもそう急がなくても・・・」

「私はもう、２６歳です」

前世ならば全く問題ない年齢だが、この世界での平均寿命は５０歳である。もしリコに子供が授かったとしても、かなりの高齢出産になることは間違いなかった。

「王族や貴族は、妻を迎えて三年経って子供が授からなければ、新しい妻や妾を考えるのが普通ですわ」

「俺は、新しい妻を迎えるつもりはない」

「ご主人・・・」

皆がホッとしたような表情をする。

「リノス。この家は名誉侯爵家です。それにヒーデータ帝国皇帝の義弟に当たる家なのです。後継者の問題は、大切ですわ」

「いや、俺は貴族の家の問題に興味はない。俺はリコとメイ、そして、みんなが居れば十分だ。何の不満もない。十分幸せだ。これ以上を俺は望まない。子供ができないのならできなくていい。このままみんなで年を重ね・・・」

「リノス！！！！！！！！」

驚くような大声でリコが叫ぶ。水を打ったようにダイニングが静まり返る。

「貴方はバーサーム夫人に、そのご家族に、恩を感じているのでしょう？その恩に報いるのは、バーサーム家を存続させることではな

くて?貴方を養子にしようとしたのは、家名の存続を考えておられたのではないのですか?」

「確かに俺はバーサーム家に養子に入ることが決まっていた。それは摂政殿下のご命令で、俺が宮廷結界師として仕官するための方策だよ」

「グレモント宰相に送られた、バーサーム様からの書簡には、家名が存続出来てうれしいと書かれてあったそうです」

「・・・」

「貴族にとって、先祖から受け継いだ家名を後の世に伝えたいというのは、当然の願いです」

「わかった。では、俺が死ぬときに、養子を迎えればいい。そうすれば家名は残るだろう」

「リノス・・・」

「子供ができないのはリコのせいでも、メイのせいでもない。もしかしたら、俺に原因があるのかもしれない。だからリコ、メイ、二人とも自分を責めるのはお願いだからやめてくれ」

完全に場がシラけてしまった。皆、後片付けをして無言で自分の部屋に引き上げていく。メイは研究室へ、リコも自分の部屋に引き上げてしまった。

俺は久しぶりに一人で風呂に入り、一人、広いベッドで眠った。いつも誰かが傍に居てくれて、リコかメイの美しい姿が隣にあったの

だが、今日は右を向いても左を向いても誰もいない。俺はなかなか寝付くことができなかった。

朝になっても、リコとメイとは気まずいままだ。皆も、そんな俺たちに気を使って腫れ物に触るような扱い方だ。

試しに、ジェネハと、隣にいるイリモにリコのことを相談してみる。二人とも、新しい嫁を迎えることには肯定的だ。子供が出来なければ、新しい嫁を迎える。魔物の中ではこれが当然の常識のようだ。

ふと他の人の意見も聞いてみたくなり、俺は貢物と酒を持って、おひいさまの元・・・ではなく、サンディーユに面会に行く。彼は俺を・・・というより、酒と肴を見て、喜んで別の一室に案内してくれた。老狐と酒を酌み交わしながら、先ほどの相談をする。

「フム。儂から言えば、奥方は見上げた御方じゃな。なかなか言えることではない」

「そうですか・・・」

「しかし、そなたも変わっておるな。普通の男であれば、頼まれなくとも外に妾を作ろうとするものなのだがな」

「俺は今のところ嫁に対して何の不満もないですから」

「察するところそなたは儂に、新しい嫁を迎える必要はないと言うてほしいのじゃろうが、儂がそう言ったところで、何にも解決にはなるまい」

「まあ、それはそうですが・・・」

「リノス殿、おひいさまがお呼びです」

部屋の外から女官の千枝の声がする。さすがは狐神。俺の来訪を悟ったようだ。バレては仕方がないので、サンディーユに促される形で、俺はおひいさまの下に向かう。

「話は聞いた。なぜ妾に相談に来んのじゃ。水臭いのう」

「おひいさまには、解決方法がおありなのですか？」

「馬鹿者。解決するのはそなたじゃ。妾は奥方の気持ちがよくわかる故に、そなたに伝えようと思ぅたまでじゃ。奥方の気持ちが分からぬによって、そなたは悩んでおるのじゃろう？」

「はあ・・・」

「奥方は相当の覚悟を持っておる。考えてみよ。誰が好き好んで己の亭主に他の女をあてがうことなどしようぞ？それでも他の女を娶れというのは、何としてもそなたの子孫を残したいと思ぅておるからじゃ。その意思を覆すのは難しいわぇ。その覚悟と気持ちを斟酌したうえで奥方と話さねば、距離は縮まらぬぞよ」

「難しいですね・・・」

「そなたと奥方に子が授かれば、問題ないのじゃがな」

「おひいさまにはその神通力は・・・？」

「ない！」

即答かい！

「子授けならば、犬神じゃの？あやつはどこにおるかの？」

「ブランシュですな」

「それはまた遠いのう」

「どのあたりですか？」

「そなたの屋敷からは・・・馬で半年くらいじゃ」

「それは無理ですね」

「ともあれ、奥方の気持ちを汲んでやることが一番じゃ」

「はい、ありがとうございます」

わかったようなわからないような思いを抱えて、屋敷に帰ってきた。

リコとメイは相変わらずだ。丸二日喋らないのは、今までなかったことだ。二人とも俺を避けるようにして部屋に入ってしまう。そしてまた、俺は一人で風呂に入り、一人でベッドに入った。

そしてその夜、夢を見た。

誰かが俺を怒っている。エリルだ。久しぶりだな、エリル。何だ？何を怒っているんだ？まあまあ待ってくださいお嬢様。そんなに怒られてもわかりません。理由をおっしゃってください・・・。

俺は必死で話しかけるが、彼女の怒りは収まらない。左手を腰に当て、右手で俺を指さしながら怒っている。これは俺に論破された時に逆ギレしているスタイルだ。

エリルの声は何故か聞こえない。いつものエリルなら木剣を抜いて俺に斬りかかってくるものだが、なぜかずっと怒り続けている。

怒った顔のまま、エリルはビシッと真横の方向を指さした。それは一体何？そっちの方向には何もないよ？そっちは森だよ？エリル？？おーい、エリル―

エリルは両手を腰に当て、俺を睨んでいる。おいエリル、何だ？どうしたんだ？

・・・目が覚めた。エリルは一体何が言いたかったのだろうか？森の中を指さしていた？何かあるのか・・・？一度、森の中に行ってみるかと思いつつ、俺はリコとメイの覚悟と気持ちを考える。

リコは独占欲の強い女だ。そんな女がメイを嫁にするだけでも、相当な覚悟がいったはずだ。そこに来てさらに新たな嫁、というのは、リコにとって自分の存在を否定するようなものだろう。それでもあえて、というのは・・・。

ベッドで寝がえりを打ちながら考えても、やっぱり答えは出ない。
既に夜が白み始めている。

「・・・そうか。考えるんじゃなくて、感じるままに行動しろ、か。エリルの口癖だったな。ならば、敢えて俺がどうこうするべきではないな」

俺はベッドを出て、リコの部屋に向かう。部屋からは薄明かりが漏れていた。

ドアをノックする。返事はない。

「リコ、起きてる？入るぞ？」

静かにドアを開けて部屋に入る。リコはベッドに入ったまま、俺に背を向けている。

「リコ、考えたんだけど・・・俺は、リコの思うようにすればいいと思う」

「・・・」

「ただし、俺からは新しい嫁は選べない。リコのことが大好きだからだ。だから、新しい嫁はリコとメイが選んでくれ。二人が納得した嫁なら、俺は受け入れるよ」

「・・・」

「・・・リコ？」

リコの肩がかすかに震えている。

「・・・残酷ですわ」

「・・・」

「私にはそんなことはできません・・・。あなた様が好きな女性をお選びくださいませ。私にはとても・・・」

リコは涙声で、必死に言葉を振り絞る。

「リコじゃ選べないって?だからいいんだよ。しばらくは、リコとメイと一緒に居られるじゃないか。男はいくつになっても子供を作ることが出来る。別に今すぐじゃなくていいじゃないか。俺はむしろ、人に選んでもらった方がいい」

「どういう・・・ことですの?」

リコは起き上がってまじまじと俺の顔を見る。涙で目を真っ赤にしている。

「だってリコは皇帝陛下からの紹介、メイはリコが妻に迎えるように勧めてくれた。俺には結婚する気はなかったんだが、二人に勧められて、こんなに素敵な奥さんを持てている。だから、新しい妻も、リコとメイが選んでくれ。じっくり選んでくれ。二人の眼鏡にかなった人なら、俺は受け入れるよ」

「リノス〜」

俺の胸に顔をうずめて、リコは号泣している。俺はリコをそっと抱

きしめる。

「新しい妻の件、お願いしていいかな？」

リコは無言で頷いた。

「じゃあメイにもお願いしに行くか」

メイの所にはリコも一緒に行くという。俺はリコと手を繋いで一階の研究室に向かった。

メイは、机に突っ伏して寝ていた。俺とリコの足跡が聞こえたのか、俺たちが部屋に入るとスッと体を起こした。俺はリコと同じことを伝え、メイにもリコに協力してほしいとお願いした。

・・・メイも泣いていた。リコと同じように号泣していた。そして、泣きながら「承知しました」と言ってくれた。

「ところでお前たち、この二日間風呂はどうしてたんだ？」

「私は・・・お湯で体を拭いていましたわ」

「私は・・・浄化の魔法で済ませました」

「・・・じゃあ、今から風呂に入る？」

「「・・・ハイ」」

そうして、朝食までの数時間、俺は燃えに燃えた。二人を抱きしめながら二人への愛情を体中で表現しまくった。お蔭で三人とも汗だ

くで、髪の毛まで汗だくになってしまってもう一度、風呂に入り直すハメになったのは、ペーリスたちにはナイショである。

収穫の季節が、すぐそこまで迫っていた。

第百三話　終わりとはじまり

二ヶ月が経過した。

俺はめでたく２０歳になり、当初企画していた誕生会も盛大に行われた。リコから提案の有った新しい嫁の件は今のところ、何の進展もない。

俺は、鹿神の前に立っている。公国で採れた作物を、まず先に鹿神様にお供えに来たのだ。

鹿神はゆっくりと供えられたキャベツを口に運んでいる。俺の鑑定にも、メイの調査でも毒物の反応はなかった。しかし最後に鹿神様に確認してもらいたかったのだ。

「・・・美味い。いい味だ。毒もない」

「ありがとうございます」

早速俺は王宮へ向かい、ドワーフ王に報告に行く。王の回復ぶりは少しずつではあるが、確実によくなっている。今では杖をついてはいるが、立ち上がれるようになっていた。

「そうか・・・。それは、よかった」

「新しく生まれ変わった地で採れた作物です。王様もお召し上がりください」

生のままのキャベツと玉ねぎをゆっくりと口に運ぶ。

「・・・うまい。うまいな。野菜とは、このように美味いものだったのだな」

「きっと、もっと美味しい作物がこれからも採れると思います。色々な作物を育てていますので、毒がないことが確認できれば国民だけでなく、他国で売ることも可能になります」

「・・・バーサーム侯爵、貴殿に、心から感謝する」

ドワーフ王は体を震わせながら、俺に頭を下げた。

「そんな、頭をお上げください。これからです。ニザ公国の復興は、これからです」

「そうだな」

ドワーフ王は、窓の外に映る農作地を眺め、これからの公国の復興について考えを巡らしている。

「・・・そうか。誠に、大儀であったの」

俺は帝都に戻り、ニザ公国の復興について陛下に報告していた。当然、陛下の傍には宰相閣下とヴァイラス殿下がいる。

「さすがはバーサーム侯爵。クルムファルに続き、ニザ公国まで復興させるとは、その手腕、末恐ろしいですな」

「うむ。余の予想をはるかに超える成果を上げてくれた。何か褒美をやらねばならぬな」

「いいですよ、そんな～」

「聞けばリノス殿は、リコレットから新しい妻を娶れと言われているそうだな？」

「何故それを？」

「リコレットが余に言うて来おったのだ」

「はあ・・・」

「リノス殿は既に新しい妻は決まっておるのか？」

「いいえ。今のところ俺は全く不満はありませんので」

「陛下、後宮の女を・・・」

「ヴァイラス殿下、それはお断りいたします」

「そうじゃな。余もそれは勧められぬな。貴族も後宮の女も、バーサーム家の第三夫人になると聞けば、もろ手を挙げて売り込みに来る。そのあしらいが、大変だの」

陛下は天井を見てしばし物思いにふける。

「まあ、リノス殿が望まぬのであれば、余がどうこうすることはない。余とて、忙しいからの」

陛下が視線を向けた先には、かなりお腹の大きくなったタウンゼットがいた。彼女は表立って非難されたり、襲われたりすることはないが、それでも隙あらば彼女を廃そうとする動きはあるようだ。

「あと二月でお生まれになる。それまでの辛抱です」

「そうだの。ところで、リノス殿への褒美だが・・・。しばらく休んではどうか？」

「休み、ですか？」

「うむ。帝都のすぐ南にイグレックという地がある。そこに王室の別荘があるのだ。そこでしばらく休息するがよい」

「おそれながら、イグレック離宮へは皇帝陛下のご一族に限られますが」

「リノス殿は余の義弟である。しかもリコレットは、先帝陛下の娘にして、ヒーデータ帝国皇帝の妹じゃ。何の問題もあるまい？」

「で、ですが・・・」

「よい。よいのだグレモント宰相」

「ハハッ」

「クルムファルは・・・リコレットが管理しておるのか？ならば、リコレットが留守の間は、ヴァイラス、そなたが代わりを果たすがよい」

「わ、私がですか？」

「そなたもゆくゆくは領地を管理せねばならぬ立場じゃ。よい機会じゃ。学んでくるがよい」

「ハイ・・・」

「そうだ陛下、タウンゼット様をホテルクルムファルにお移ししませんか？」

「ほう、何と？」

「後宮の女性たちの動きを警戒するのであれば、ここから離れるのが一番です。ホテルクルムファルは、リコに仕えていた者たちばかりですから、タウンゼット様のお世話も問題ないと思います」

「なるほどの。あのホテルならば・・・安全かもしれぬの」

「それはよいが、タウンゼット様がクルムファルに移動なされる時に、襲われはせぬだろうか。それに・・・お腹のお子も心配だが・・・」

「それについては方法があります。俺の配下であるポーセハイが転移術を持っています。それを使えば、一瞬で移動できます。それに奴らは腕のいい医者ですから、何かあっても大丈夫だと思います」

「フム。それは名案だの。あそこは景色もよい、食事もよい。窮屈なこの部屋に閉じ込められておるよりも、遥かによい。タウンゼット、早速クルムファルに移るのじゃ」

タウンゼットは大きなお腹を労わりながら、ゆっくりと頭を下げた。

「子が生まれるまで、余が見舞えぬのは残念だが・・・」

「それでしたら、陛下のこのお部屋から転移できるように致しましょう」

「おお！それはよい。早速頼む！」

俺はリコに事情を話し、ホテルクルムファルに転移する。ちょうどスィートルームの一室は基本的に空けてあるため、そこを使うことにする。そして、ポーセハイたちが「本部」にしている結界集落にも足を運び、タウンゼットのことを頼みに行った。

あくる日、タウンゼットをクルムファルに転移させる。当然部屋には俺の結界を張り、温度も調節済みなので、部屋は快適そのものだ。世話係はクエナを筆頭とした三人が担当することになり、万全の体制が整えられていた。部屋の窓を開放して潮の香りのする風を受けたタウンゼットは、すでに顔つきが変わっていた。

彼女は生まれてくる子供のために編み物をするそうで、ロッキングチェアに腰かけ、穏やかな表情を浮かべながらチクチクとやり始めた。皇帝陛下は、早速その夜に転移してきたらしい。どうやら子供が生まれるまで、毎日ここで寝泊まりするつもりのようだ。

そして俺たちは、イグレック離宮で一週間の休暇を取ることになった。離宮というとかなり広いお城のようなイメージをしていたのだが、実際はちょっと大きめのお屋敷といったところで、川と庭がとても美しい場所だった。

基本的に食事は女官たちが用意してくれるが、食卓は俺たちの部屋からは離れた位置にあり、まさしくプライベートが完全に保たれた作りをしていた。ベッドも風呂も広く、調度品も超一流。まさに、王族の部屋と呼んで差し支えない部屋だった。

「すごい部屋だな」

「皇帝の別荘ですから、このくらいのことは当たり前なのですわ」

「私には場違いです・・・」

リコは落ち着いているが、メイは完全にビビっている。

「まあ皇帝陛下からのご褒美だ。遠慮なくこの離宮を使わせてもらおう。それにしても、美しい庭だな」

「聞いた話では、7代前の皇帝陛下はこの庭に女官を放って、捕まえるという遊びをやっていたそうですわ」

「ふ～ん。かくれんぼか。かなり広いから、捕まえるのが大変そうだな」

「いいえ。裸にした女官を放って、次から次へと襲ったそうですわ」

「・・・変態皇帝だな」

「まさか、ご主人様も・・・」

「メイ、さすがにそれは、やりたくない」

そんなことを言い合いながら、俺たちは部屋に入った。

実際この一週間、俺は頑張った。どこが休暇やねん、と思うほどにマジで頑張った。そして、俺たちは川の字で寝ながら、これからのことを話し合った。二人とも、自分のことは二の次で俺のことを真剣に考えてくれていることが分かったので、二人のことをますます好きになった。彼女らにも、俺の偽らざる気持ちを伝えたので、その点は理解してもらったつもりだ。

一方のクルムファル領では、ヴァイラスが悲鳴を上げていた。

「ちょっと待って！この書類が読み終わるまで待ってくれ！」

「リコレット様は読みながら報告を聞かれましたよ？」

「僕は姉上とは違うんだよ！」

「殿下、こちらの書類に目を通してください」

「殿下、来年の作物の生育についてですが・・・」

「殿下、ミラヤ・クルムファルの営業開始日ですか・・・」

「殿下、せっかくですから閲兵式を・・・」

「殿下」

「殿下」

「ちょ、ちょっと勘弁してくれ～～～～～！！！！」

彼は一週間で、５kgのダイエットに成功したそうだ。

しかし、俺もヴァイラス殿下も、そして当然リコたちも今は知らない。水面下で俺をめぐるいくつかの政治的な駆け引きが行われていることを。そして、その一つが動き出そうとしていることを。

「・・・やはり、バーサーム侯爵様ね」

「・・・では、ヒーデータ帝国に向かいましょう」

「私たちに会ってくれるかしら？」

「何としても、会って、話を聞いていただくのです！」

ある決意を秘めた二人が、ヒーデータ帝国に向けて出発しようとしていた・・・。

第百四話　ポセイドン王宮殿への訪問

ヒーデータ帝国の屋敷のダイニング。俺とリコの前にはルアラが座っている。

彼女はこの屋敷に来て約三年が経つ。ポセイドンの２１７番目の娘であり、言わば海の王のお姫様だ。しかも、海神に仕える巫女でもあった。それが家出してそのまま屋敷に居ついてしまっている。

俺もいつかはポセイドンに返そうと考えていたが、日頃の忙しさにかまけてしまっていたのと、ルアラの戦闘力が高く、ついついいろいろな場面で頼ってしまっていたため、先延ばしになっていたのだ。

しかし俺とても、ルアラを単なる助手として使っていたわけではない。これでも合間合間に神にささげる歌（演歌）の練習をしていたのだ。お蔭で今は、節回しと言い、コブシ使いと言い、かなり上手になった。もう、ポセイドンに返しても、立派に巫女として務めを果たせるだろう。そう思った俺は、ルアラに帰還の話をしているのだ。

「・・・正直言うと、イヤです。できるなら、師匠とリコ姉さまの所に居たいです」

「そうは言ってもなぁ・・・。お前はポセイドンの娘なんだし、海神の巫女だしなぁ」

「父上・・・ポセイドンにはたくさんの子供がいます。巫女ならほ

かの子供がやっています」

「う～ん」

「本当に私が必要なら、誰かが迎えに来るか奪いに来るはずです。でも、誰も来ませんし・・・」

「わかったわ、ルアラ。ここに居たいならずっと居たらいいですわ」

「リコ・・・」

「しかし、一つだけ条件があります。やはり、父上と母上にはきちんと説明をするべきですわ。父上はいいとしても、母上はどうかしら？ルアラがいなくなって、心配しているのではなくて？」

「・・・」

「一度、話をしてきなさいな。リノスも一緒に行ってやってくださいませ」

「俺も行くのか？」

「その方が、心強いですわ。ルアラにとっても、私にとっても」

「う～ん、わかった」

早速俺とルアラは、ポセイドンの宮殿に向かうことにした。宮殿は海の底にあり、ルアラは問題ないが俺は溺れてしまう。結局俺に結界を張って常に空気が充填されている環境を作って、海に潜ること

にした。

とりあえず、手ぶらで行くのも気が引ける。しかし、どんなものを持って行っていいのかが分からず、かなり悩んだ挙句、ドワーフが作る短剣をお土産にすることにした。理由はない。単なる思い付きだ。決して海の「探検」を「短剣」と掛けたわけではない。断じてない。

夜、カイリークの砂浜から海に入っていく。既に秋ということもあり、水温が低い。結界を張り直す。ルアラはというとドンドン海に潜っていく。ポセイドンの一族はどうやら自分の周囲に結界らしいものを張ることが出来るようだ。きちんと服を着たまま、ルアラは潜っている。

深度が高くなると水圧で潰されそうになる。ここでも結界を追加で張る。そんなこんなでどのくらい潜ったろうか？小一時間潜り続けてようやく、ポセイドンの城と思わしき建物が見えてきた。

・・・とんでもなく広く、大規模な宮殿だった。これ、東京ドーム何個分だろうか？とにかく建物がひしめき合っている。この建物全体に結界が張られているようで、ルアラは城壁の外へと進路を変える。しばらく泳いでいると、城門が見え、そして、そこには青白い顔をした人型の門番が立っていた。

「ええと・・・ルアラです。ただいま戻りました」

ルアラが門番に話しかけている。

「ルアラ？どなたですか？」

「ポセイドン王の２１７番目の息女です」

「少々お待ちください」

門番は俺たちをほったらかして、門の中に入ってしまった。そして、そのまま戻ってこない。

「遅くね？」

「・・・」

まだ、戻ってこない。

「マジ、遅くね？」

「・・・」

そして、戻ってこない。

「・・・帰っていいか？」

「・・・すみません」

しびれを切らして帰ろうとした時、ようやく門番が戻ってきた。

「お待たせしました。ルアラ様。ハイハイ、確かにポセイドン王のお子様リストに名前がありました。では、貴方がルアラ様であるという証明できるものはおありですか？」

「これです」

ルアラは肌身離さずつけているペンダントを門番に差し出した。

「ハイハイ、王室から発行されている許可証ですね。確認できました。ええと、取りあえず何か武器のようなものはお持ちではありませんか？あればお出しください。・・・この短剣ですか？王への貢物ですね？それはこちらでお預かりさせていただいてよろしいでしょうか？・・・ハイ。邪念は感知できませんでしたので、どうぞお通り下さい」

ようやく、俺たちは門を通過できた。そして、兵士のような格好をした男に案内をされる。

「何だか、銀行の中に入る時の手続きに似ているな」

「ギンコウ？」

「金が集まっている場所だ。いつ、誰が、何時に訪れるのかを前もって知らせなきゃいけないし、それを言っていなければ、門の前でそれを詳しく調べられる。場合によっては、身分を証明するものの提出を求められる時もある。何か怪しいものを携帯していないかを調べられて、ようやくそこに入ることが出来る」

「宮殿と似ていますね」

「そうだな。宮殿みたいな建物のような銀行もそういえばあったな」

そんな話をしていると、謁見の間のような広い部屋に通された。正面には玉座がある。

「しばらくここでお待ちください」

ポツンと俺たちは広い部屋に取り残される。しばらくすると、何やら高級そうな服を着た、小柄で髭を生やした男が現れた。

「・・・カルヤート様です。王の側近です」

ルアラが小声で教えてくれる。

「ルアラ姫、ようこそお戻りなされた。あと、ええと・・・その・・・何だ・・・その・・・〇×＊×〇◆殿もよくおいでなされた」

・・・俺の名前忘れてやがる。

「ヒーデータ帝国皇帝の義弟に当ります、バーサーム・ダーケ・リノスでございます。この度は突然来訪しまして失礼いたしました。以後お見知りおきをお願い申し上げます」

「ああ、そうそう！・・・ゴホン、バーサーム殿。今後もよしなに」

「ハハッ」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

・・・沈黙長くね？押しかけとはいえ、俺、客だよ？普通だったら何か世間話しない？貴殿のお仕事は・・・とか、皇帝陛下は・・・とか、ない？俺から喋る？爺さん、お前さんがそっぽ向いてるから話しかけづれぇよ。

「・・・すみません」

俺のイライラを察したのか、ルアラが小声で謝っている。そしてようやく、玉座の後ろの扉が開き、ポセイドン王が現れた。

・・・おっそろしいほどの男前だ。少女漫画に出てくる貴公子みたいだ。はあ～よくできとるな～。絵にかいたような男前とは、このことを言うんだろうな。リコを連れてこないで正解だ。

「二人とも、よく参った」

声も男前だ。これは女にモテるな。同じ男として、完敗だ。

「王様の２１７番目のご息女、ルアラ様がお帰りになりました」

カルヤートが恭しく王に説明をする。

「ルアラ？・・・ああ、うん・・・うん、うん。よく戻ってきたね。ゆっくり休みなさい。うん？短剣？・・・ああ、いい剣だね。ありがたくいただくよ。・・・これから奥に行かなきゃいけないんだ。また、何かあれば、カルヤートに言っておくれ」

そういうと、ポセイドン王はスタスタと部屋を後にしてしまった。お前、ルアラのこと絶対に覚えてないだろう？

またしても沈黙が続く。ここは俺たちが主導で話しないといけないのか？

「あの・・・ええと・・・」

「姫、何か？」

「あの・・・私・・・できたらこの、バーサーム様の所に住みたいのですけれど・・・」

「ええ、よろしいのではないかと思います」

ええんかい！

「いや、実を言いますとですね。このルアラ・・・姫は三年前に陸に上がられ、そのまま我が屋敷に逗留いただいております。聞けば

姫は海神様へお仕えする巫女だと伺いました。その巫女様がいつまでも地上においでになるのは、ポセイドン王にとって都合が悪いのではと思い、姫を説得してこちらに参っている次第です。その点は大丈夫なのでしょうか？」

「巫女？ええと・・・巫女・・・巫女・・・巫女・・・」

カルヤートが手元の資料をパラパラとめくっている。

「・・・ああ、海神様に歌を奉げる巫女ですな。そちらはすでに１１６名もおりまして、海神様からうるさくてかなわんから人数を減らせと言われておりますので、姫一人がおいでにならなくても問題ございません」

「ありがとうございます。できれば、母に会っていきたいのですが」

「ええと・・・ルアラ様のお母上・・・」

「いいです。自分で参ります」

「・・・一体何なんだここは？」

「たぶん、側室と子供の数が多すぎるんだと思います。さすがに管理しきれないですよ。２００人も超えてると。私も一回しか父には会ったことないですから」

「しかし、２００人も子供をこしらえるとは・・・すごいな」

ルアラは迷路のような宮殿の中を歩いていく。はぐれたら間違いなく生きてここから出られずに餓死するだろう。しかし、さすがのルアラも記憶が曖昧なところがあるらしく、折に触れて兵士や侍女を見つけて道を尋ねていた。

そして歩くこと1時間。ようやく俺たちはルアラの母親の部屋にたどり着いた。

「おかあさん、ただいま」

「しーっ、静かに！」

そこには、小さな男の子が絶賛お昼寝中の姿があった。

「お、お母さん、誰？この子？」

「ああ、ルアラかい。久しぶりだねぇ。誰って、お前の弟だよ」

「弟！？」

「今年で2歳になるよ。ユーシだよ」

「な、なんで・・・？」

「お前が地上に行ってすぐ、この子を授かったんだよ。見ておくれ、目元のあたりが王様そっくりだろ？」

「この子は・・・何番目の子になるの？」

「確か、５４３番目って言ってたね」

聞けばポセイドンには１０００人を超える側室がいるのだとか。王は毎日、それぞれの側室の部屋を回っているという。さすがの俺もルアラもしばし絶句してしまう。取りあえず、俺はこれまでのいきさつを話し、ルアラをこのまま屋敷で預かることを母親に話した。

「ああ、そうですか。それはそれはお世話になります。ふつつかな娘ですが、どうぞコキ使ってやってください」

聞けば母親は海女出身であり、海に潜っているところをたまたま外遊していたポセイドンに声をかけられたのだとか。王の余りの美しさに一目ぼれした彼女はすぐに側室となり、ルアラを生んだ。陸とは違って、何不自由ない生活であり、彼女は彼女でここでの生活を気に入っているという。

「すまなかったねぇ。アンタはてっきり巫女でやっていると思ってたから、こんなことになっているなんて想像もしなかったよ。まあ、いいじゃないか。アンタも自分の居場所を見つけたんだからさ。人間は自分の居場所を持つのが一番大事だよ」

ルアラの母親からは、いつでも宮殿に帰ってきてもよいと言われたため、俺はこの部屋に転移結界を張ることにした。

「また、弟の顔を見に来てやっておくれ」

そうして俺たちは、結界に乗って屋敷に帰ってきた。

「まあ、そうでしたの・・・」

さすがのリコも驚きを隠せない。

「でも、よかったですわ。ルアラが戻ってきてくれて。またいろいろと手伝って頂戴ね」

「ハイ、リコ姉さま」

「それにしても、ルアラは泳ぎが上手だったな。追いつくのがやっとだったよ。さすがに海女の娘だけあるな」

「母はその・・・泳ぎが苦手です」

「何で?プロじゃないのか?」

「いえ、アマなんです」

このあとルアラは、思いもかけない場所で、思いもかけない活躍をするのだが、それはまた、別のお話。

第百五話　新たなる火種と突然の来訪者

冷たい北風が草原を吹き抜けている。真冬の凍てつくような、刺すような冷気を含んだ風ではない。古老や勘のいい人であれば瞬時に、近いうちに春が訪れるであろうと感じさせる風だ。しかしこの草原には、そんなものを感じる余裕を全く持たせない雰囲気があった。

漆黒の鎧に身を包んだ騎兵と歩兵の集団が、ゆっくりと進んでいた。頭の先からつま先まで鎧に固められたその集団は、その不気味な出で立ちもあって、周囲に大きな違和感を与えている。

それだけでなく、北風に乗って運ばれてくる香りは、春を連想させるものではなく、鉄の匂いだった。そしてそこに血の匂いも混じっている。彼らがどのような集団であるのかを想像するのは、たやすいことだった。

小高い丘の上で、この軍団は徒歩を止めた。そしてその先頭にいた騎兵の一人がおもむろに兜を脱ぐ。風に煽られて、美しい金髪がひらめいている。

「あれか・・・」

「あの巨大な墓標。間違いないな」

隣の騎兵が呟くように答える。

「まずは進もう。襲われる可能性も十分にある。全員、緊張して進め」

「あそこを抑えると、注意するべきは西側だけになる。何としても抑えねばな」

そんな会話を交わしながら、軍団はゆっくりと丘を下って行った。

「ラマロン皇国がついに軍を動かしたというのは本当か？」

「ああ、一週間前のことらしい。破竹の勢いで軍を進め、王都に迫っているらしい」

そんな会話を交わしているのは、ヒーデータ帝国の貴族たちだ。およそ数年ぶりに臨時貴族院が招集されていたのだ。

臨時貴族院とは、帝国に侵攻や災害、疫病など国にかかわる大事が起こった時に召集されるもので、最近では、先帝崩御の際に召集されて以来だ。貴族というのはとにかく地獄耳である。自分の家が不利にならぬよう、また、何か利益になりそうなことはないかと日夜、情報収集に明け暮れている。全貴族が招集される貴族院は、彼らにとって打ってつけの情報交換の場であった。

そんな会議に、何故か俺も出席している。いや、見ている、といった方が適当だろうか。皇帝陛下が座る玉座の後ろの、カーテンの隙間から俺はこの会議を眺めている。

会議の内容は主に二つで、実にシンプルなものだった。

一つ目は、皇帝陛下にめでたく嫡子たる男子が誕生したこと。そし

て二つ目は、帝国の南に位置するラマロン皇国が北に向けて軍を進め、帝国の隣国を攻めたこと。帝国としてはその対応を考えており、もし、軍を出すのであれば、それぞれの家の役割も含めて通達する。これで終わりだった。

あっけないほどの早さで会議が終了してしまった。陛下が玉座から下がってくる。

「これはあくまで表向きの行事のようなものだ。リノス殿、これからが本当の会議だ。貴殿も出席してもらいたい」

「俺が出席するんですか？」

「是非、お願いしたいのだ。ラマロンの軍は、ジュカ王国に侵攻したのだ」

「ジュカ王国に・・・」

「あの国は大魔王降臨以降、内戦状態にあったのだがの。我らも様子を見ている間に、ラマロンが動き出したのだ」

これまで、ヒーデータ帝国とジュカ王国、そしてラマロン皇国は大国同士ということもあり、その昔はよく争っていたそうだが、ここ数十年は絶妙な軍事バランスを取り続けて均衡を保ってきた。それどころか、ジュカ王国はカルギ将軍の采配もあって、少しずつラマロン皇国の領土を侵食していた。

最初、ラマロン皇国が軍を動かしたと聞いた時、帝国のだれもが失地を回復しようとしているのだろうと考えたが、彼らは予想に反してそのまま北進を続け、ジュカ王国の旧王城に迫っているという。

ジュカ王国領がラマロン皇国に飲み込まれてしまうと、帝国は横っ腹を突かれることになる。それどころか、同盟国のニザも危なくなるのだ。見過ごすことのできないことであった。

「リノス殿はジュカ領の出身だ。その故郷に我らが軍を向けようとしておるのだ。この会議に出席してもらうのが、筋だと思ったのだ」

「はあ、ありがとうございます」

王国自体に思い入れはないが、王都にはエルザ様やファルコ師匠、そしてエリルたちと暮らした大切な思い出がたくさん詰まっている。ぶっ壊してしまったのは俺なのだが、そこに他人が土足で踏み込んでメチャメチャにされてしまうのは、俺としても気分が悪い。そんな俺の微妙な心情を察してくれた陛下の気遣いは、ありがたいものだ。

陛下に連れていかれたのは、またしても見たこともない部屋だった。そこには、陛下の他、各方面軍の軍団長が顔を揃え、そして宰相閣下とヴァイラス王子が列席していた。要はこれが戦争の可否を決める「御前会議」だ。

「さて、諸侯の考えを聞きたい。忌憚なく意見を述べよ」

陛下のこの一言から、各方面の軍団長が意見を述べていく。ラマロン皇国が軍勢を進めたのであれば、一気に南進してしまおうという意見。いやいや、まだ様子を見た方がいいという二つの意見が拮抗している。

「フム、これではまとまらんの。では・・・義弟殿、そなたの意見はいかがであろうか」

突然陛下が俺に話を向ける。二人の軍団長が、露骨に嫌そうな顔をした。

「ジュカ王国に侵攻した軍はどのくらいの規模なのでしょう？」

「おそらく、３０００くらいでしょうな」

宰相閣下が即答する。さすがにこの人は、すべての情報を掴んでいそうだ。

「で、ラマロン皇国の本国に温存されている軍勢は？」

「２０万くらいですな」

「問題はだな！」

俺の話を遮って、南方軍の軍団長が口を開く。

「ジュカに行くためには、ラマロンの国境沿いを進まねばならん。そこに5万の軍勢がビッシリと配置されておるのだ。まず我々はこの軍勢を蹴散らさねばならん。そして、そのままジュカのラマロン軍を討伐しても、今度は南からやってくるであろう本軍１５万と戦わねばならない。そう考えると、この度軍勢を動かすとなると、帝国のほぼ全兵力をもって侵攻せねばならんのだ！」

「だからそれでは帝国の守りが薄くなると言っておるだろう！」

「ならばこのまま指をくわえて見ておるのか！」

「・・・」

結局議論は元に戻ってしまった。そして、長い沈黙の時間が訪れた。俺は静かに沈黙を破る。

「・・・すみませんが宰相閣下、南方軍の兵力は、どのくらいなのでしょう」

「北方、西方、東方、南方・・・そして帝都防衛軍、それぞれ５万ずつを配している」

「では、帝都防衛の５万を我らにくれ！そして、貴族の傭兵を集め、我ら南方軍に合わせれば、１５万・・・とはいかずとも、１２、３万にはなるだろう。数の上では負けているが、勝てぬはずはない」

「そのような寄せ集めの軍勢で勝てるのか？相手は訓練された１５万の軍勢なのだぞ？」

「そのようなこと、やってみねばわからん！」

「敗れたら、帝国は滅ぶかもしれんのだぞ！」

「・・・諸侯、もうよい。今のままではよい策は出ないであろう。皆ご苦労だった。帰って休め。そして明日の夜、再び作戦会議を行おうぞ」

陛下の鶴の一言で、御前会議はお開きになった。

「う～ん、大変なことになったね。僕も、とりあえず作戦を考えてみるよ」

ヴァイラス王子とそんなやり取りを最後に、俺はやっと会議から解放された。

城を出ると、真夜中になっていた。俺は頭がクラクラする中、イリモに乗って屋敷に帰る。途中、イリモの翼を使って移動している時に、突然イリモが上空で止まってしまった。

「ご主人様、行き倒れがいるようです」

下を見ると、フードを被った魔法使いらしき者が倒れており、その傍らで、同じくフードを被った者が必死で介抱している様子が見て取れた。

「このまま放っておくのも何だし、取りあえず下に降りてみようか」

「ソレイユ！ソレイユ！起きて！お願い！起きて！」

どうやら女の声だ。ソレイユと呼ばれる倒れている者に必死で呼びかけている。

「大丈夫ですか？」

「ああ・・・ああ・・・あああ・・・」

叫んでいた奴は俺を見て何故か後ずさりを始める。どうやら怯えているようだ。

この場合どれだけ言葉を尽くしても誤解は解けないと経験上知っているので、俺は構わずに倒れている奴の所に行き、取りあえず回復魔法をかける。しかし、反応はない。

「水か？腹が減っているのか？」

無限収納にあるお弁当と魔法で水を出してやり、ついでにお湯も作ってあげる。

「これで様子を見な？」

そう言って俺は再びイリモに乗り、屋敷へと帰った。

「リノス、リノス、起きてくださいませ。起きてくださいませ」

リコの声で目が覚める。そういえば昨日は帰ってきてすぐメシを食って、風呂に入ってそのまま寝たんだ。ああ、すまん。寝過ごしたか・・・と思って目を開けると、きちんと服を着たリコが枕元に居た。くっ・・・今日はリコのきれいな姿を見逃したか・・・。ちょっと悔しい気分を押さえて、俺はベッドから起き上がる。

「早く服を着替えてくださいな。お客様です」

「客？誰だ？」

「ジュカ王国からの使者です」

「ジュカ王国？」

妙な胸騒ぎを覚えつつ、俺は服を着替えて応接室に向かう。そこに居たのは、昨晩見たフードを被った二人組だった。

第百六話　爆弾娘の爆弾発言

ソファーに並んで座っている二人の表情は、フードを目深く被っているために窺い知ることは出来ない。しかし、口元から察するに、二人とも女性のようだ。

部屋には俺の他にリコにも同席してもらった。

二人のローブ姿の女性は、俺の姿を見た途端立ち上がり、胸に手を当ててお辞儀をしている。どこかの貴族だろうか？かなり教育されているように見える。

「バーサーム・ダーケ・リノスです。どうぞお掛けください」

二人は優雅にソファーに座る。

「昨日は我々をお救いいただきありがとうございました」

「昨日行き倒れになっていたのは、やはりあなたでしたか。」

「はい。一週間、ジュカ王国からこちらまで、ほぼ休みなく移動してきましたので・・・」

ジュカ王国から帝都まで、南のルートで移動してくると約二週間である。それを半分の時間で移動してきたのだ。かなりの強行軍であったと言っていい。

「途中、ラマロン皇国の軍に見つからないよう森の上を飛んで移動

していました。そのために疲労困憊して意識を失ってしまいました。お恥ずかしい限りです」

「侯爵様のお助けがなければ、ソレイユ様は・・・。本当にありがとうございます」

「あなた様、これを・・・」

リコが一通の手紙を差し出してきた。きちんと封蝋が施されており、そこには印璽が押されている。彼女たちが持ってきたのだろう。見たところ、きちんとした貴族の公文書だ。

「拝見させていただきます」

俺は封を解き、手紙を読む。

「・・・何も書いてないな。もしかして、あぶり出しか何かですか？」

「・・・白。白のままですね」

「邪念もない。やはり、バーサーム侯爵様の下に来たのは、間違いじゃなかったわ」

二人の女は口元に笑みを湛えながら呟きあっている。

「一体どういうことです？」

「・・・失礼しました。我々はサイリュース。私は、ソレイユと申

します。お手持ちの紙は、水の精霊が作りしもので、邪念のある方が持つと色が変わります。我々は邪念のある方との接触は行いません」

そうしてソレイユと名乗る女はフードを取り、ローブを脱いだ。

・・・恐ろしいほどの美少女だった。頭の上には小さな白いツノが生えており、背中には白い羽が生えていた。そして、ローブの下の衣装が・・・エロい。小柄だが巨乳であり、そのおっぱいを強調するような衣装なのだ。しかも、ミニスカートをはいている。おじさんのドストライクだ。こんなのがキャバクラに居たら、俺は毎日通うだろう。

「アステスです。以後お見知りおきくださいませ」

ソレイユの隣に座っている女が続いてフードを脱ぎ、ローブを脱ぐ。ソレイユよりは年長か。しかし、目鼻顔立ちが整った美女であることは間違いない。彼女も巨乳であり、エロい衣装を身に付けている。

「あ、あなた方は・・・」

思わず声が上ずってしまう。ヤバイ、ヤバいぞ俺、平静になるんだ。平静になるんだ・・・。隣のリコが睨んでいる。顔はこっちに向けてなくても、睨んでいるのが分かる。

「・・・もしかして、サキュバス？」

以前、クルムファルで見たサキュバスと特徴が酷似している。ただし、あの時は全身黒づくめだったのだが。

「否定はしません」

「ソレイユ様！我々は・・・」

「いいのです、アステス。我々サイリュースとサキュバスは、元々は同じ種族でした。我らの先祖は生命力が弱く、種族を存続させるためにあらゆる手段を講じておりました。そこで、男の精気を取り込むことで生命力を高める方法と、精霊を使役して己の肉体を活性化させ、生命力を高める方法が編み出されたのです」

「で、男の精気で命を長らえたのがサキュバスで、精霊を使役する方法を選んだのが、あなたたちサイリュースだと」

「仰る通りです」

「で、そのサイリュースの方々が何の御用です？」

「単刀直入に申し上げます。我々をお救いいただきたいのです」

「それはまた、藪から棒な話ですね」

「・・・厚かましいお願いであることは重々承知しております。これは我々の一方的なお願いになります。まずは、我々の話をお聞きいただけませんでしょうか？」

聞けば、サイリュースは当初、ラマロン皇国内の小さな集落で生活をしていたのだという。しかしここ数年、ラマロン皇国は不作が続いていた。そこで皇国は森林を切り開いて耕作地を広げようとした。その手法として導入されたのが、森を焼いて耕作地を確保するというものだった。

「ああ、勿体ないですね。ニザ公国のように木を伐採して木材として売れば、そのお金で食料が買えたでしょうに」

実際、ニザ公国は切り出した木材を安く売ることで、莫大な利益を得た。耕作地は広がる、木が売れると一石二鳥だったのだ。

「しかも、広大な森を焼いてしまいましたので、我々の集落にも火の手が及んでしまいました」

小規模な集落だったので、皇国の方もそこまで気を使わなかったのだろう。

「何とか火を逃れることは出来たのですが、住む場所を失ってしまいました。仕方なく、我々が使役する精霊と共に、ジュカ王国に逃れたのです」

ジュカ王国内は内戦状態であったという。基本的に森の中を移動しながら精霊たちに自分たちの身を守らせ、移動していくのはかなりの困難を極めたに違いない。

「ようやく王都にたどり着いたのですが、とても精霊たちが生きていける環境ではありませんでした。しかし、王都の北方にある森の中は、精霊たちの環境に何とか適していましたので、そこに村を移すことにしたのです」

大魔王が降臨したと言われるジュカに移転するのは、かなりの覚悟がいったことだろう。しかも慣れぬ土地で一から村を作り直すのも、相当の負担だっただろう。

「しかし、ジュカの森はなかなか作物が育たず、我々は苦心しています。聞けばバーサーム侯爵様は、不作の土地を豊富な作物が実る地に変える方法をご存じとか・・・。できましたら、その方法を我々にお教え願いたく、参りました次第です」

「方法と言っても、その土地を見ないことには何とも言えませんね。そうしたことは、私の妻が詳しいのですが、あいにくと今はニザ公国に付きっ切りになっていまして・・・」

サイリュースの二人はガックリと肩を落とす。

「それに一週間ほど前、突然ラマロン皇国がジュカ王国に侵攻したようです。下手をすれば帝国と戦いになる可能性もあります。今すぐというのはちょっと・・・」

「皇国軍など、帝国軍に蹂躙されればいいのに・・・」

アステスが吐き出すように呟く。

「アステス、おやめなさい」

「まあ、集落を焼けだされたのですから、お気持ちは分かりますが・・・」

「それだけでなく、皇国の部隊は、ジュカ王国内の領主や兵士、そして何の罪もない領民たちを徹底的に殺戮しています。我々の集落も、彼らに襲われたら、皆殺しにされるかもしれません」

「なぜそんなことを・・・」

「おそらく皇国の精鋭である、マトカル将軍が率いているのです。彼らの戦闘は非情です。敵には情け容赦しません。お陰で、森の中まで血の匂いが漂ってくるので、精霊たちが怯えています」

「う～ん、あの森は俺も知っているけれど、確かに作物が育つ環境じゃなかったな。生えているキノコ類は毒キノコが多かった」

「よくご存じなのですね」

「ええ、あの森では色んなものを食べました。食いしん坊のお守をしていたのでね」

「侯爵様、こんなことを申し上げるのは失礼ですが、精霊たちを見くびらない方がよいかと思います。彼らは水・風・火・土といった、自然を支配しています。この精霊たちが味方に付けば、国はもっと栄えます。我々サイリュースは、その精霊を従えています。我々を助けるのは、精霊を助けることと同じ。無理を承知でお願いいたします。我々に力をお貸しください。我々を守っていただけるのであれば、相応の報酬をお約束いたします」

「報酬・・・ですか？」

「ハイ・・・。もし守っていただけるのであれば・・・私の体を差し上げます」

「え？」

「ああん？」

思わずリコがドスの利いた声を漏らしてしまった。落ち着け、リコ。

ソレイユは耳まで真っ赤にして俯いている。

「い・・・いきなりそう言われても・・・。ちょっと、考えさせてください」

突然の売り込みに俺も動揺してしまっている。取りあえずこの二人には帝都のホテルに宿を取り、そこで待ってもらうことにした。

「フェリス、ルアラ、お客様を帝都のホテルまで案内してくれ。俺の名前を出せば、満室でも大丈夫なはずだ」

「「了解しました」」

「あの二人のことは、リノスにお任せしますわ」

「リコ、そんなに怒らないでくれ」

「好きにすればいいのですわ。若そうですし、胸も大きいですし」

「いや、それは・・・」

「私はクルムファルの仕事がありますので、参りますね」

「待てリコ、待ってくれ。頼むから！」

足早に転移結界に向かおうとするリコの腕を掴む。

「きれいなお方ですわ。きっとリノスのことを・・・キャッ！」

俺はリコをお姫様抱っこして、離れに向かう。

「離してくださいませ！離して！」

「離さない！リコは絶対離さない！！」

俺は乱暴にリコをベッドの上に放り投げる。そして、荒々しくリコを抱きしめた。

「やっぱり、リコが一番いい」

「・・・ウソ」

「ウソじゃない。だって、リコの体にはシミ一つない、完璧な体だ。その可愛い顔とこの美しい体・・・リコが一番好きだ」

「・・・リノス」

俺は、夕方の会議の時間まで、リコを抱きしめまくった。

第百七話　仲直りとムチャ振り

本音を言えば、とても不安だった。

リコレットがサイリュースの二人を見たとき、彼女は素直に美しいと思った。金色の髪、真っ白い肌、そして大きな胸。それらを強調する衣装を身に付けているために、彼女らの魅力はより、強調されていた。この二人にリノスを取られるのであれば、仕方がないとも思った。こんなことは初めてだった。

実際、リノスは彼女らの姿を見て動揺していた。そして、興奮していた。

彼は隠し事ができない男だ。他の皇族や貴族たちには、見事な弁舌で煙に巻くことができるのに、ことリコレットに対しては、子供のように動揺を見せ、泣き言を並べることがあった。彼女は夫を尊敬しつつも、そんな子供っぽい部分も愛していた。

「遊び」のできない彼である。きっと彼は、どうしよう・・・と動揺を見せつつも、最終的には新しい妻として娶ることを自分に相談しに来るだろう。そうなれば自分は認めざるを得ない。事実、彼女らは美しい。冷静に見ても、彼女たちは聡明さが溢れており、きっとリノスの力になるだろう。反対する理由は見つからない。それに、リノスに新しい妻を娶れと言ったのは、他ならぬ自分なのだから。

リコレットは反射的に彼女らを娶るようリノスに勧めた。彼は動揺しながら最終的に申し訳なさそうに同意するだろう。そう考えていたのだが、彼は意外な行動を取った。

まさか自分を乱暴に抱きかかえ、ベッドの上に放り投げられ、獣のように襲ってくるとは思いもよらなかった。

こんなに乱暴にされたのは初めてだった。いつものリノスは、どんな時でも、自分に対してはとても優しかった。メイが羨ましがるほどに。

そんな彼の姿はどこにもなく、瞬く間に服を奪い取られた。しかも外はまだ明るい。そんな中で自分の姿を見られるのも、彼女にとって初めてのことだった。

恥ずかしさと恐怖で不安になっていたリコレットだったが、いざ彼は彼女を抱きしめると、打って変わって優しくなった。そのギャップのせいか、彼女はこれまでにない感覚で彼を受け入れた。そして、悟ったのだ。彼は、自分がいないとダメなのだと。

彼がなぜこんな行動に出たのかは分からない。しかし、一瞬でも体を離すことを嫌がるように自分に抱き着いてくる彼を見て、彼女はたまらない程の愛おしさを感じたのだ。そして、リコレットはリノスの分厚い胸の中で、何度も何度も愛を誓ったのだった。

・・・リコを存分に愛でた。思いは伝わったと思う。リコに一つ謝らねばならないことと言えば、体中にキスマークを付けてしまったことだ。でも、本当にリコが居なくなる予感がして、俺は正気を保てなかったのだ。そこのところは、勘弁してもらいたい。

「リコ、愛してる。ずっと傍に居てくれ」

「私も、愛してますわ。リノスの傍に、ずっといますわ」

「・・・家族になると、一番言わなきゃいけない言葉が、なかなか言えなくなるね」

「本当ですわね」

そんな会話を交わしつつ、俺は会議に参加するべく準備を始める。

結局、この日の会議も昨日と同じような状態になった。しかも間の悪いことにジュカ王国の王都が陥落したという報告も来ていた。

「わずか３０００の兵数で王都を陥落させるとは・・・」

「これではっきりしたな。ラマロン皇国はジュカ王国を本気で併呑しようとしているのだ」

「と、なれば我々はこの侵攻を見逃すわけにはいくまいな」

「諸侯、それではこれからの会議は、ラマロン皇国をいかに撃破するかに焦点を絞って論じよ」

「陛下、恐れ入りますが、ここはひとつ、バーサーム名誉侯爵殿に伺いたいのですが」

いきなりこんなことを言い出したのは、北方軍の軍団長であるラフアイエンスだ。

「何でしょう？」

「貴殿なら、どう攻められる?」

「俺の意見など・・・」

「いや、個人的に貴殿ならどのような策を取られるのかを聞きたいだけだ」

「そうですね・・・」

俺は腕組をして考える。敵は王都を陥落させて、ホッとしている状態だろう。狙うなら今だ。そうしないと、タダでさえ堅牢な王都がさらに堅牢になる。そうなると最早、打つ手が無くなる。しかし、大軍を率いてとなると・・・。

「私であれば・・・」

各軍団の軍団長たち顔が引き締まっていく。

「寡兵をもって王都を急襲します」

「ハッ!何を言い出すのかと思えば、寡兵をもって王都を急襲?バカバカしい!そんな子供だましの作戦、聞くに値せぬわ!」

南方軍の軍団長が腹を抱えて笑っている。

「いや、そうとも限るまい。大軍を動かせばそれだけ目につく。しかし、寡兵ならば森の中を抜けて行けばラマロンの目をごまかせる。バーサーム殿は結界師だ。途中で魔物に襲われる心配もあるまい」

ラファイエンスが雄弁に語る。

「・・・」

列席している軍団長は、一言も言葉を発しない。この部屋に一瞬の静寂が訪れる。

「フム。それでは、義弟どのに軍を率いてもらい、ジュカに侵入したラマロンどもを掃討するという案が最上ということかな？」

軍団長は誰も言葉を発しない。

「人払いじゃ。余と義弟どのの二人だけにせよ」

俺を除く全員が、蜘蛛の子を散らしたように部屋を後にしてしまった。

「すまぬの。これが帝国軍なのだ。嘆かわしいかぎりじゃ」

「ラファイエンスさまは何故俺にこんな話を振ったのでしょうね？」

「ラファイエンスは単に、リノス殿がどのような作戦を立てるのかに興味があっただけじゃ。まさか、我らの考えもせぬ作戦を立案するとは思いもよらなかったがの」

「でも、俺は軍を率いたことがないですよ？」

「クルムファルでの戦闘があるではないか。寡兵で大軍を破る。余もその話を聞いて血が沸き立ったわ」

ハハハハと陛下は楽しそうに笑う。

「リノス殿。ジュカが墜ちるということは、帝国は横っ腹に敵を抱えることになる」

「存じております」

「しかも我らはジュカ王国について不案内じゃ。何せカルギ将軍が一歩たりと我が軍を領内に通してくれなかったからの。そこでリノス殿、誠に恐縮なのだが、王都にいる３０００のラマロンを排除してもらえぬだろうか」

「そんな無茶な・・・」

「リノス殿には転移結界があるではないか。それを活用できれば、帝国との移動は楽にできるはずじゃ」

「つまり、俺にジュカまで行って転移結界を準備しろと？」

「そういうことだ。危なくなれば結界で帰ってこればよい」

「そんな簡単に行きますかね～」

「それを曲げて、頼む」

陛下が突然立ち上がって、俺に頭を下げた。他の諸侯を追い出したのは、このためだったのか・・・。

「へ、陛下、面をお上げください」

「頼む」

「わ、わかりました。わかりました。ジュカの王城に行き、転移結界を張ります」

「すまぬの。余も、世継ぎのアローズにできるだけ火種は残したくないのでな」

その後、部屋に呼び戻された軍団長たちに、先ほどの作戦が説明される。転移結界の話は隠したままだ。あくまで俺が寡兵を率いてジュカ王国に侵攻することが説明された。

さすがに、俺だけではいけないということで、南方軍の軍団長には帝都防衛隊が与えられて、総勢１０万の軍勢でラマロン皇国の国境まで進軍し、牽制することになった。

「バーサーム殿、国境のラマロン兵たちは儂が蟻の子一匹たりと通さんから、安心して行かれるがよい！」

ガハハと笑う南方軍軍団長。それを俺は冷ややかな目で見つめていた。

「・・・まあ、またそんな危険な任務を」

屋敷に帰って報告すると、リコが嘆息を上げた。

「皇帝陛下に頭を下げられては、俺も断る術がなかったよ」

「道中はやはり・・・」

「ああ。夜になれば転移結界を張って屋敷に帰ってくる。夕食は食べるから用意しておいてくれ」

「畏まりました」

「あと、俺と共にジュカまで行くのは、ゴン、フェリス、ルアラ、そしてイリモで行く」

「わかったでありますー。久しぶりのジュカ王国でありますなー」

「そしてフェリス、お前は一足先に立て」

「どうしてですか？」

「俺は南方のルートは取らない」

「ではどちらの？」

「ジュカ山脈を越える。フェリス、お前はクルルカンの群れに、俺の通行を許可するよう打診してくれ」

「お安い御用です！」

慌ただしく、出発の準備が始まった。

第百八話　戦いの準備ではやっぱり何かが起こる

帝都ホテル・・・。俺が帝都に来て初めて宿泊したホテルだ。以降俺はこのホテルを折に触れて利用してきた。そのため、ここの支配人をはじめとするスタッフのほとんどは顔見知りであり、かなりの無理も聞いてもらえる間柄になった。

そんな帝都ホテルのスィートルームの一室に、俺とリコは座っている。目の前には、サイリュースのソレイユとアステスだ。彼女たちに、俺がジュカ王国に向かうことを伝えに来たのだ。

「詳しいことは教えられませんが、取りあえず、俺がジュカに行くことになりました。行けるかどうかわかりませんが、できれば、あなた方の集落に行きたいと思います」

「侯爵様、本当に、ありがとうございます」

「それまで、こちらの部屋でお寛ぎください。あとは出来るだけ、外出する時はローブを着てお出かけください」

「ええ、わかっています。我々は元々ラマロンの人間ですから。帝国と戦争になれば私たちは敵国の人間になりますものね・・・」

そういう意味で言ったのではないのだが、まあ、大人しくホテルに軟禁状態になってくれれば、それに越したことはない。

ソレイユたちから、ジュカ王国にある彼女の集落を聞き出す。どうやら「ルノアの森」にあるようだ。それならばちょうど通り道だし、

俺の庭のような場所でもある。おそらく簡単に見つけられるだろう。

取りあえず彼女らには伝言のみを伝えて、早々に屋敷に戻る。そして俺は、屋敷に居る全員に「思念」のスキルを付与した。ポーセハイたちには「念話」とステータスに表示されていたが、俺たちには「伝達魔法ＬＶ１」と表示されていた。

「伝達魔法というのは、文字通り何かを伝える魔法でありますー。ＬＶ１は言葉、ＬＶ２は文字、ＬＶ３は見ている景色、ＬＶ４は状況、ＬＶ５は記憶が伝えられると言われているでありますー」

さすがはゴン、よく知っている。つまり、ＬＶ２でメールが送れて、ＬＶ３は画像、ＬＶ４は動画と解釈すればいいだろうか。意外とコイツも便利な機能かもしれない。

少々魔力を消費したが、俺的には全く問題はない。全員でちょっと遅めの朝食を取り、俺たちはそれぞれの仕事に取り掛かった。

リコはクルムファルに、メイはニザに転移し、ペーリスは大学に出かけていく。フェアリはお留守番だ。そして、俺、ゴン、イリモ、フェリス、ルアラは帝都に転移して、そこからクシャナを目指す。

本日の目的はクシャナに転移結界を張ることだ。帝都を歩いていると防衛隊の兵士がやけに多い。彼らとて、数日後にはラマロン国境に向かうのだ。当然、大半の兵士が動員されているために、帝都はいつも以上に混雑していた。

クシャナまで帝都からだと1日かかる。ちょっと帝都を出るまでに時間を取られてしまったので、到着がかなり遅くなるのではと心配したのだが、さすがはイリモである。わずか数時間で到着してしま

った。このところ彼女の体は大きくなり、普通の馬とそう変わらない姿になった。そのために走る速さが上がり、翼での飛行時間も、半日程度であれば問題なくできるようになっていた。

道中、何らかの襲撃を警戒したが、全くの杞憂に終わった。クシャナの町が見えてくると、イリモの翼で空に舞い上がる。眼下に見下ろす、夕日に照らし出されたクシャナの町は、なかなかの美しさだった。俺たちは町を通り越し、ジュカ山脈のふもと近くに降り立って、そこに転移結界を張る。そして、一旦俺たちは屋敷に転移する。

屋敷では既にリコたちが帰ってきていて、夕食の準備が整ったところだった。

皆でワイワイと、今日の出来事を報告し合う。リコのクルムファルは順調で、最近オープンしたアキマおばさんの遊郭、ミラヤ・クルムファルも、建設に一年半もかけただけあって洗練された外観と、その雰囲気によって「文化サロン」としての機能を果たしつつあるらしい。どうやら王侯貴族が頻繁に利用しているようだ。

こういう身分の高い人々は、なかなか気軽に庶民に会うことは出来ない。公式に会ってしまうとやれ身分だの礼儀作法だのが煩くて、打ち解けてゆっくり話をすることができない。しかし、こうした遊郭でサロン的な場所となると、その身分は無きに等しいものとなる。単にスケベ心だけでなく、こうした身分を越えての交流の場になりつつあるのは、うれしい限りだ。

メイの方も順調だ。作物も豊作であり、毒物も皆無だ。それどころか国王様からオリハルコンの精製の仕方を内々に教わっているという。色々とドワーフの鍛冶師と話をしていると、何となくオリハルコンの精製技術に気づいてしまったそうで、それを国王に話すと、

観念したように教えてくれたのだという。あまり国家機密に触れるのは心配だが、あの国王様に限ってメイを傷つけることはないだろう。今のところは放っておくことにする。

にぎやかな、いつもと変わらぬ夕食が終わり、それぞれが風呂に入って眠りにつく頃、俺とリコ、そしてフェリスは再びクシャナまで転移してきていた。

そこでフェリスにお弁当を渡し、彼女には先にジュカ山脈に出発してもらう。クルルカンに俺たちのことを伝えてもらうためだ。

フェリスの持っている「念話」は、範囲がかなり狭く限定的だ。ジュカ山脈のごく一部でしか通話ができない。彼女の飛行能力であれば、明日の朝方には群れに接触できるらしい。夜通しの旅になるが、ちょっと無理をしてもらう。

「じゃあフェリス、頼んだぞ」

「任せてください。必ず、許しを得ますから」

満面の笑みを浮かべて、彼女は山に向かって羽ばたいていった。

翌朝、朝食を食べ終わった頃に、フェリスから思念が送られてきた。

『ご主人様、ご主人様』

『フェリスか、どうした?』

『先ほど族長様と話をしましたところ、我々クルルカンの縄張りを

通る許可をいただきました。今後はいつでも、自由に我々の縄張りを通られるがいいというお言葉までいただきました』

『おお、それはありがたいな。フェリス、ありがとうな』

『いえいえ。お安い御用です』

『今から俺たちはそっちに向かう。おそらく昼過ぎには合流できると思う。それまで休んでいてくれ』

『わかりました』

『あ、リコがお弁当を作ってくれているから、フェリスの分も持っていくな』

『やったー！わーい！』

早速俺たちはクシャナに転移し、そこからイリモの翼を使ってジュカ山脈に入った。

しばらく進むと、上空に黒龍が一匹現れたが、俺たちに手を出すことはなく、かなり長い間観察されているようだった。黒龍と言えば狡猾と言われているが、意外に用心深い種族なのかもしれない。

そのまま何事もなく山の中を進む。イリモも疲れはなく絶好調のようだ。山を初めて見るルアラは興奮しっぱなしだ。黒龍を見て手を振る余裕すらある。お陰で俺の後ろはキャーキャーとうるさい。

パチッ、パチッ

パチッ、パチパチッ、パチッ

「・・・何か変な音鳴ってないか？おいルアラ、後ろで何やってるんだ？」

後ろで俺にしがみついているルアラを見る。

「何もしてないですよー」

「ああん？さっきから鳴ってるこの音、何だ？」

「わかんないですよー」

突然「マップ」が開く。見ると周囲が真っ赤に染まっている。

「敵に囲まれているみたいだぞ？」

「この音が敵の襲撃なのでありますかー」

「わからん。おそらく、襲撃しているんだろうが俺の結界に弾かれている。その音なのだろう」

「全然姿が見えないですね。とりあえず魔法を撃ってみましょうか？」

「やめろ。もし別のドラゴンの縄張りに当たりでもしたら、敵意があると思われる。一旦下に降りよう」

ちょうど草原のようになっている所にイリモを着陸させる。

パチッ

パチチッ

パチパチ、パチッ

パチチチチ

相変わらず音だけが聞こえてくる。

「確かに、小さい殺気は感じるでありますなー」

「ゴァァァァァァァァァ～～～～～！！！！！！」

不意に大音響が響き渡る。その瞬間、俺の周りに何かが落ちてきた。思わず咆哮のした方向を見ると、ちょっと小柄なクルルカン四匹が見えた。

「おお、クルルカンが迎えに来てくれたようだ」

「ご主人、見るでありますー」

俺のまわりには、数十頭の、背中に蝶の羽を生やした緑色の小型ドラゴンが気を失って倒れていた。

第百九話　本日の、説教部屋行きです！

四匹のクルルカンは俺たちの上空を旋回している。どうやら俺を迎えに来たのではなく、この襲撃者たちを撃退しに来たらしい。と、いうことは、俺たちは既にクルルカンの縄張りに入ったことになる。

「これは、フェアリードラゴンでありますなー」

「フェアリードラゴン？フェアリと同じ種族なのか？色が違うぞ？」

「間違いないでありますー」

取りあえず倒れているドラゴンたちを結界内に閉じ込める。そして俺は上空で旋回しているクルルカンに「思念」を送る。

『俺はリノスだ。お前たちの仲間であるフェリスから、ここを通ることを許可されている。族長の許可も得ていると聞いている』

『貴殿は我らが客人。その旨は承知している。安心されよ。我らが縄張りに許可なく入った者どもに予告なく攻撃を加えたことは許されよ』

『このフェアリードラゴンはどうするんだ？』

『我らが食す』

『その前に、奴らに何故俺を襲ったのかを聞きたいが、いいか？』

『・・・よいだろう』

四匹のクルルカンは大きく旋回して降りてきた。一匹が5メートルくらいある。それが四匹とはなかなか壮観な眺めだ。

「さて、コイツらを起こすか」

結界内に大音量でメタルロックを流す。ものの数秒で全てのフェアリードラゴンが飛び起きた。「アギャァ！」だの「キャァァァ！」だの、鳴き声が喧しい。

『うっせぇぞコラぁぁぁぁぁ！！！！』

「ガァァァァ」

いきなり大声で「思念」を送ったので、フェアリードラゴンたちはビクっとして全員が静かになったものの、クルルカンたちにも伝わってしまったようだ。四匹とも頭を振っている。すまん。

『俺に攻撃を仕掛けてきたのは、お前らフェアリードラゴンか？一体何の恨みがあって攻撃してきた？』

・・・誰も返答しない。もしかして「思念」が伝わらない？いや、伝わってたよね？お前ら反応してたし。しかし、ヤツらに対話の意志がないということは、これ以上コイツらとかかわるのは時間の無駄だ。

『おい、クルルカン。コイツら食っちゃっていいぞ？結界解くと逃げやがるだろうから、全員殺しちゃってからでもいい？』

『本来は生きたままで食すのが美味いのだが・・・。奴らは足が速い。それも致し方あるまい』

『わかった』

『ま、待ってくれ』

『何だと？』

『待ってくれ』

『バカ野郎、さっきから待ってるじゃねぇか』

『すまない、待ってくれ』

『さっきから喋りやがるのはどこのどいつだ？』

一匹のフェアリードラゴンがおずおずと立ち上がり、ゆっくりと歩いてくる。

『すぐ来いコラァ！』

一瞬で俺のところに飛んできた。結界に顔をぶつけて蹲っている。あ、クルルカンの皆さん、また怒鳴ってごめんなさいね？あれ、ゴンたちも聞こえてるんだね。みんなも驚かせちゃったね。

『おい、早くしゃべれ、クルルカンのお兄さんたちがお腹を空かせているだろう？』

『いきなり襲ったのには、訳がある。我々は無暗に襲うことはしな

い。他のドラゴン族とは違うのだ。襲ったその訳をきか・・・』

『はよ言えコラァ！！』

『き、客人、少々落ち着かれよ』

『ああ、ごめんね。また驚かせちゃったね。すまんすまん。オイ、フェアリーども。お前らがチンタラしてるお陰でクルルカンの兄さんたちが迷惑してるやないかい！ウチの身内もエライ迷惑しとるやんけ！はよ言わんかい！何じゃいその訳っちゅうのは！』

『・・・貴様がシンジョ様を奪ったからだ』

『シンジョ～～～？？』

『ご主人、フェアリ殿のことでありますよー』

『アホかお前ら。お前らの言うシンジョは勝手に俺の所に付いて来たんだ。人聞きの悪いこと言うな』

『ならば、シンジョ様を我らに返してもらいたい』

『断る』

『何だと！貴様、自分が何を言っているのかわかっているのか！』

『では聞くが、そのシンジョ様を返したところで、お前らは彼女をどうするんだ？』

『貴様に言うことではない』

『お待たせ、クルルカンの皆さん。食事の時間です』

『ま、待て！待ってくれ！話は終わっていない！』

『知らねぇよ』

俺は４匹のフェアリードラゴンに個別に結界を張り、クルルカンに投げる。彼らは即座にそいつらを口の中に入れ、かみ砕く。

「ガキィィィーン」

「キャァァァーーーーー」

「キュァァァァァァー」

「キューキューキューキューキューキュー！！！！！」

フェアリードラゴンたちがパニックに陥る。しかし、よく見ると食われたと思ったヤツらはまだ、クルルカンの口の中にいた。

『客人、これはどういうことだ？』

『ああ、ゴメン。結界を解除するのを忘れていた』

『早く解除しろ。いや、いい。このまま噛み砕こう』

クルルカンの口の中にいるヤツらは必死に脱出しようとしているが、結界に阻まれて身動きが取れない。その上、彼らが顎に力を入れ、噛み砕こうとするたびに結界にヒビが入っていく。

『貴様～』

フェアリードラゴンが俺を睨んでくる。

『お前、自分の立場をわきまえて物を言えよ。これはお前のせいでこうなったのだ。お前が俺をこういう行動に走らせたのだ。お前たちの命を握っているのは俺だということを忘れるな。次は、ない』

フェアリードラゴンたちは、身体を震わせながら俯いている。クルルカンの口の中で辛うじて生きている奴らは、「アキュゥ・・・」と声にならない声を漏らすことが精いっぱいの様子だ。

『最後に聞く。お前らはシンジョをどうするつもりだったのだ』

『・・・龍王様への生贄に』

『却下。そんな奴らに俺のフェアリ、ああ、お前たちのシンジョね。返せねぇよ』

『・・・』

『大体フェアリは俺が見つけた時には、片方の羽と角を失ってたんだ。それを治癒してここまで育ててきたのは俺だ。その俺に対して礼も言わず攻撃をしてくるなど、アホであるとしか思えん。そんなアホにウチの大事なペットを返せるか！』

『ペット？シンジョ様をペットなどと・・・』

『自分から望んでそうなったんだから仕方ないだろう』

『殺せ』

『ああん？』

『龍王様の加護を受けられぬ我々が、この先、生きていけるとは思えない。一思いに殺せ』

『いやだー私はまだ死にたくないー！』

『やめてくれー殺さないでー！！』

またしても結界の中が騒がしい。

『フェアリは、自分の命に等しい羽と角を犠牲にしてでも、この群れから逃げて正解だったな』

結界内が水を打ったように静まり返る。

『彼女は全力で自分の境遇を変えようと足掻いた。その結果、今の幸せな生活を手に入れた。それに比べてお前らは何だ？自分たちで何も努力しようとしないで、人に頼ろうとばっかりしやがって』

『しかし、我々の・・・』

『しかしもクソもねぇんだよ。そのしかし～ってのがお前らの未来を失くしていることになぜ気づかない？そんな言い訳考えてねぇで自分たちの力で生きていく方法を何故考えない。龍神もそんなお前らは守らないと思うぞ？お前らはシンジョに、龍神に、見捨てられるべくして見捨てられたんだ』

『・・・自分たちで生きていく方法』

『頑張って考えて、実践しときゃよかったな。たとえ失敗しても、何度もやり続ければそのうち正解にたどり着いたろうに。スキル的には使えそうなもの持ってたんだが、惜しかったな』

再び結界内に静寂が訪れる。そしてその周囲ではクルルカンが結界をかみ砕こうとしている音が不気味に俺たちの耳に響いていた。

『頼む。我が一族を助けてくれ。我らの命をあなた様に捧げる。あなた様の手足となり、盾となろう。頼む』

『はあ？お前、俺の話を・・・』

『お願いします！』
『頼みます！』
『お願い！』
『何卒！』
『私の命を！』

だあああああーうるせー。全員で念話を送ってきやがる。クルルカンも頭が痛そうだ。

『わかった！黙れ！うるせぇよお前ら！わかったよ！静まれ！』

ようやく混乱が収まってくる。

『・・・わかった。お前らを俺の配下としてやる。その代り、俺の命令は絶対だ。背くことは死を意味すると思え。しばらくは、この

結界から出ることは許さん』

そして俺はクルルカンの口の中にいた奴らの結界を張り直す。そしてそいつらをこちらに移動させ、結界の中に放り投げる。

『客人、それはあまりに・・・』

『すまん。代わりと言ってはなんだが、これでどうだ』

無限収納の中からカースシャロレーを四匹出してやる。クルルカンたちは一口でそれを丸呑みしてしまった。

『うまい。美味いぞ客人。馳走になった。それでは、我らが麓まで案内しよう』

『すまないな。あと、フェリスと合流したいのだが・・・』

『それも心得ている。任されよ』

『そういえば、フェリスの弟のラースは元気にしているのか?』

『ラース?ああ、ラースは・・・』

『どうかしたのか?』

『我らに、付いてこれば・・・わかるであろう』

他の三匹も何もしゃべらない。イヤな予感が、ムクムクと胸の中に湧き上がってくる・・・。

第百十話　会いたかった～Ｙｅｓ！君に～

「さて、こいつらをどうするかだな・・・」

襲ってきたフェアリードラゴンたちを結界の中に閉じ込めたまではよかったものの、コイツらをどうやって移動させるのかが問題なのだ。

「クルムファルに預けるのはいかがでありますかー」

「いや、既に館にはイトラが居るし、リコたちにはゲーキ達ゲュリオンの面倒も見てもらっている。これ以上の負担はかけられないだろう」

「で、ありますかー」

「よし、ここに置いて行こう」

「キャァァァ」

「アキャァアア」

結界内が騒がしくなる。

『待ってくれ！さっきと話が違うではないか！我々を守ると・・・』

『うるせぇよ。色々あってお前らを連れて行けねぇんだよ。迎えに来るからしばらくそこに居ろ。結界は張っておいてやる』

『そんな・・・』

『お客人、我らの仲間が見つけて襲っても、文句は言えまいぞ？』

『ああ、わかっている』

俺は俺たち以外には見えないように結界を張りなおす。

『何と・・・消えた・・・』

『お前たち、姿は見えなくしたが、声は聞こえる。あんまり騒ぐと気づかれるから気を付けろよ』

そう言い残して俺たちはイリモに乗り、上空へと舞い上がった。それに釣られてクルルカンも羽ばたいた。

『では、案内する。付いてこられよ』

俺たちはクルルカンに先導されて、再び山頂付近を進む。フェアリードラゴンたちから色んな「念話」が飛んできたが、ちょっと進むとそれは聞こえなくなった。どうやら、「竜魔法」の「念話」の範囲は５０メートルくらいのようだ。

しばらく進むと右手にさらに大きな山が見えてくる。

『お客人、あの山の向こうは白竜の縄張りになる。近づかぬように』

そう言って彼らは方向を転換させた。そこからは断崖絶壁の、それこそ目もくらむような山岳地帯を抜けて行った。数年前にここを超えた時は夜だったので気づかなかったが、かなりの危険地帯を俺は

進んでいたことになる。
そして飛び続けること1時間、ようやくなだらかな高原地帯が見えてきた。
『お客人、あのあたりがフェリスとの合流地点になる。あちらで待たれよ』
『ありがとう』
『間もなく来るであろう。あとは、フェリスが案内する』
イリモは高度を落としていく。すると、高原に何やら汚れのようなものが見えてきた。近づいてみるとそこには一匹の緑色のドラゴンが倒れていた。体長約3メートルくらいの、そこそこデカイドラゴンだ。
『おいクルルカンたち、ドラゴンが倒れているが、コイツはどうするんだ？』
『その倒れているのが、ラースだ』
『ラース？？』
俺は慌ててそこに向かう。確かに、ラースの面影はある。しかし、ピクリとも動かない。
「おい、ラース！ラース！俺だ、リノスだ！ラース！」
全く反応がない。イリモがラースの顔を舐めている。ゴンも心配そ

うに見ている。

「ご主人、ＭＰがゼロなので気絶しているでありますー。その上、怪我をしているのと、飢餓状態でもありますー」

『おいクルルカンたち、ラースは一体どうしたんだ?』

俺の呼びかけに答えることなく、彼らは、そのまま別の方向に向かって飛び去っていった。

ラースを鑑定してみる

ラース（クルルカン・１２歳）　ＬＶ１９　飢餓
ＨＰ：１３／７７２
ＭＰ：０／３５４
風魔法　ＬＶ３
火魔法　ＬＶ２
肉体強化　ＬＶ３
気配探知　ＬＶ１
魔力探知　ＬＶ１
飛翔　ＬＶ２
教養　ＬＶ２
竜魔法　ＬＶ１
麻痺耐性　ＬＶ２
毒耐性　ＬＶ２

なかなか高いスキルだ。まだ幼竜だろうが、その中ではトップクラスじゃないだろうか。とはいえ、このままにしておけば下手をすると死んでしまう。早速、俺は回復魔法をかけ、ＭＰを補充してやる。

「ゴゥオァァァァーーーー」
「ご主人様―！」

バカでかいクルルカン2匹とフェリスが空から降りてきた。2匹とも15メートル以上はある。空が覆いつくされている。

「フェリス、これ・・・何だ？」

「ウチの両親です」

「両親？」

『リノスさん、ラースの時は本当にお世話になりました。それに、ふーちゃんのこともすいません』

『あ・・・いや・・・それほどでも・・・』

『ご挨拶に伺いたくても伺えませずに、失礼しました。つねづねお会いしたいと思っていたのです。先ほどふーちゃんから様子は聞きました。色々とご迷惑をかけますが、よろしくお願いしますね』

『汝がリノス殿か。初めて御意を得るフェリスの父だ。今後もよしなに頼む。先ほど、若い者たちから話は聞いた。フェアリードラゴンについては、ご安心召され。手出しをせぬように申し伝えておいた』

『ありがとうございます・・・』

『よいよい、そのように畏まらずとも。娘と倅が世話になっておる

大恩人だ。一度、礼を言わねばと思うておったところだ。会えてうれしく思うぞ』

『いや・・・そのようなお気遣い、いただきまして・・・』

『まあ、我儘な娘によって、気に入らぬことがあれば、いつでも返してくだされ。もし、気に入ったのであれば、ずっと傍に置いていただいて構わぬ。汝の傍におれば、我は安心だ』

『パパ、もうそのくらいで』

『じゃあ、ふーちゃん、ママそろそろ帰るわね。しっかりね』

『いつでも帰ってきてよいのだぞ、ふーちゃん』

『ダメにきまってるでしょ！掟忘れたの！』

『じ・・・冗談だ。ママ・・・』

奥さんに引っ張られるように2匹のクルルカンは空に消えていった。

「何なんだ、あれ？」

「両親がどうしてもご挨拶をしたいというもので・・・」

「あんなバカでかくて雄々しいクルルカンが「ふーちゃん」って・・・」

「そこですか！？」

しばらく呆気にとられてしまったが、ハッとラースのことを思い出す。

「あ、お前の両親ラースを連れて帰るの忘れてるぞ！ラースどうして倒れてるんだ？」

「ああ、自分が悪いんです。ほっとけばすぐに目覚めますよ」

ビックリするくらいにアッサリした対応だ。一体何があった？ドラゴンの家族ってこんなもんなのか？

ちょっと呆れていると、フェリスの腹の鳴る音が聞こえる。

「ああ、腹減ってるだろ？はい、リコが作ってくれた、特製のお弁当だ」

無限収納からお弁当を出す。今日はかなり気合が入っていて、大きなバスケットが４つもある。よく食うフェリスのことだ。昨日持たせた分では足りないだろうと、昼飯をかなり大盛りにしてくれたのだ。

「うわ～おいしそ～いただきます！」

できたてアツアツを入れたので、とてもいい匂いがする。フェリスは美味しそうに食べている。そんな光景を見ると腹が減ってきた。俺も食おうと思った瞬間、景色がすごいスピードで流れていく。

・・・気が付くと、空を見ていた。体が重い。そして動かない。ふと横を見ると、ドラゴンの腕があった。俺はラースに組み敷かれていた。

『リノスさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーン』

うおおおおー頭の中がガンガンする。コイツ全力で叫んでやがる！

『会いたかったですぅぅぅぅぅぅ！！！！！』

うあだだだだーーーーー頭イタイ頭イタイ！！！

「アンタ何してんのよ！」

フェリスがラースをヒョイと持ち上げる。しかし、ラースは俺を離さず、俺もそのまま持ち上げられる。ラースは滝のように涙を流して泣いている。ラース、お前の涙で結界が濡れちまって何も見えねぇよ！

「離しなさい！ご主人様を離しなさい！」

ラースをユサユサゆする。フェリス、俺も揺れてるんだ、勘弁してくれ！

「離しなさいったら！」

ラースの体を掴んでいる手を放したその瞬間に背中に手刀を入れる。
声を出す間もなく俺たちは地面に叩きつけられる。

「フ・・・フェリス～」

「ああ！すみません、ご主人様！」

フェリスはラースを持ち上げ、まるでゴミでも捨てるかのようにポイっと投げ捨てた。

「大丈夫でしたか？」

「大丈夫なわけないだろう」

「すみません、弟が・・・。ちょっとシメてきます」

「いや、いい」

俺は身悶えしているラースのところに歩いていく。そして、ラースの頭にそっと手をやった。

『久しぶりだな、ラース。泣き虫ぶりは相変わらずのようだが、ずいぶん強くなったみたいじゃないか！』

『リノスさぁん・・・会いたかったです』

またラースの目に、涙が光っていた。

第百十一話　気まぐれは時として、俺を悪魔に変える

『それにしてもラース、お前どうしたんだ？傷だらけで、気絶してたぞ？』

『ラース殿、お久しぶりでありますー。傷とＭＰはご主人が治してくれたでありますー』

『キツネさん、お久しぶりです！また、リノスさんに助けていただきました・・・。ありがとうございます』

『いったい何があった？』

「人化の練習をしてたんですよ」

「人化？」

ラースはフェリスと同様、「人化」のスキルを身に着けようとしていたようだ。しかし、今のラースではＭＰがすぐ枯渇してしまう。ＭＰが０で気絶していたのは、そのためらしい。

「でも何で傷だらけだったんだ？」

「それは・・・エヘヘ・・・」

聞けば、ラースは久しぶりに帰ってきた姉に「人化」のコツを聞いたらしい。フェリスも色々とコツを教えてやっていたのだが、如何せんラースはまだまだうまくできない。じれてきたフェリスはつい

つい手が出てしまった。出しまくってしまった。つまり、タコ殴りにしてしまったというわけだ。

『姉ちゃんはやりすぎなんだよー』

『できないアンタが悪いんでしょうが！』

「ハイハイ、二人ともケンカしない！ふーちゃんもそのくらいで」

「・・・そ、その呼び方、やめてください」

ラースも腹が減っているので、昼飯は全部フェリス姉弟にやることにして、俺たちは非常用の弁当を食べることにした。おそらくそれだけでは足りないだろう。即席ではあるが、無限収納にあるオーク肉を焼いてやる。二人とも、うまい美味しいとすごい勢いで平らげていく。

『ちょっと！それ私のでしょ！』

『いいじゃないか！俺、今日は何も食べてないんだぞ！』

そんな微笑ましいやり取りをしながら、短い食事の時間は流れていった。

『・・・ありがとうございました！本当に美味しかったです！』

『もう食べるもの食べたんだから、アンタは早く帰りなさいよ！』

『ラース、すまないな。ちょっと急ぐんだ。またの機会に、今度はもっとどっさり持ってきてやるからな！』

『ありがとうございます！楽しみにしてます！』

ラースは大きな羽を羽ばたかせて、空に舞い上がった。

『リノスさん、俺も脱皮が終わったら・・・』

『ああ、いいぞ。いつでもウチに来い。ただし、フェリスもいるけどな？』

『ハイ！姉貴は大丈夫です！』

嬉しそうな顔をして、ラースは飛び去っていった。

「じゃあ、麓までご案内します」

「ああ。フェリス、頼む」

俺たちは再びイリモに乗り、ルノアの森を目指した。

フェリスの案内のおかげで、途中から険しい道のりがなくなったため、イリモに地上に降りてもらい、走って移動することにした。そのお陰でかなり早く進むことができ、日暮れ前にはルノアの森に着くことが出来た。

「イリモ、お疲れ様。助かったよ」

「まだ全然平気ですよ？」

実に頼もしいことを言ってくれる。取りあえず、今日の移動はここまでにして、転移結界を張って屋敷に帰る。ちょうど夕食の準備にかかったところで、キッチンではリコとペーリスが忙しく動いているところだった。

「じゃあ、私たちも手伝ってきますねー」

フェリスとルアラもキッチンに向かう。ダイニングを見るとフェアリがパタパタと飛んでいる。俺が手招きをすると嬉しそうに飛んできた。

『フェアリも留守番ご苦労様でした』

『ジェネハさんがいるから全然平気ですー』

『そいつは良かった。ところで今日、お前の仲間に出会ったぞ?』

『仲間―?』

『フェアリードラゴンに襲われた』

フェアリはギョッとした顔をして固まっている。

『心配するな。全匹確保の上、拘束してある。命に別状はない。フェリスは昔の仲間に会いたいか?』

『・・・会いたくない』

『わかった。じゃあ、奴らをお前に会わせないようにする。お前はいつまでもこの家にいていいからな』

『うん！』

フェアリは嬉しそうに俺の胸の中でパタパタと羽を動かした。

俺は再びフェアリードラゴンの結界に転移し、非常食用の弁当と食材を適当に結界の中に放り投げる。

『オラ、メシだ』

『いつになったらここから出られるんだ！』

『知らん。俺の仕事のカタがついてからだ』

『できれば暖かくて、美しい水があって、花が咲き誇るところがいいのだが』

『心当りはあるな』

『ではそこに連れていってくれ！』

『天国だけどな？』

『・・・』

『お前ら囚われの身のくせに贅沢言ってんじゃねぇよ。飯を食わせてもらえるだけありがたいと思え。一晩そこで頭を冷やしてろ』

そう言い残して、再び屋敷に戻ってきた。基本的に俺の張る結界は、一定の温度が保たれるようにしている。間違ってもヤツらが凍死す

ることはないだろう。

ワイワイと皆で今日あったことを報告し合い、美味しい料理に舌鼓を打つ。そして、ゆっくり風呂に入る。ここ最近メイはお疲れ気味だ。ニザでかなり力仕事をしているらしい。肩や腕がパンパンに張っている。ということで、夜は必然的にリコを抱きしめて寝る。次にメイと寝る時が少々怖いが、その時はその時で覚悟を決めて対峙したいと思う。

戦争に突入する寸前の緊迫した時期だというのに、我が屋敷だけは平和そのものだ。ここがあるおかげで、やってられない仕事も何とかやってられるのだ。

そして朝、いつものようにリコから昼食のバスケットをもらって、俺たちは転移結界に乗る。フェリスもルアラも手伝ったようで、今日もバスケットが４つもあった。自分の食べたいものをルンルンで詰めていたようだが、戦争を仕掛けに行っているので、もう少し緊張感も必要ではないか、と思ってしまうくらいこの二人には緊迫感がない。

ルノアの森を徒歩で抜けようとすると５日程かかってしまうので、イリモの翼で飛んでいくことにした。彼女には負担だが、これならばかなりの距離が稼げる。

「イリモ、今日は頼むぞ。フェリス、はぐれるな。全力で付いてこい」

「わかりました！」

イリモの全力での飛行は思った以上に速かった。フェリスが付いて

こられるかが心配だったが、彼女も何とか付いてきている。このまま進もうと思っていたところに、俺の視界に何かの塊を捉えた。

よく見ると、黄金鳥の群れだった。

「イリモ待て！」

「え？どうしたんですか！？」

イリモもフェリスも驚いている。俺は二人に目もくれず、黄金鳥をガン見している。見たところ、３００羽くらいいる。あの濃厚な味、肉汁・・・あの肉の美味さが口の中に湧き上がってくる。・・・食いたい。

「一旦下に降りてくれ」

ヤツらに見つかり、警戒されてしまうと逃げられてしまう。ここは細心の注意を払うところだ。

「ご主人様・・・？」

皆、けげんな顔をしている。俺はそれどころではない。どうやって黄金鳥を狩ろうかで頭がいっぱいだ。前回のような作戦はダメだ。時間がかかりすぎる。一網打尽にするためには・・・。

「そうだ、アレを使うか！」

俺は転移結界を張って移動する。そしてすぐさま戻ってくる。

「ご主人、これは・・・」

「コイツを使う」

俺は閉じ込めたフェアリードラゴンを結界ごと持ってきていた。

『え～フェアリードラゴンの諸君。緊急任務を与える。非常に名誉ある作戦に従事できる幸せを噛みしめたまえ』

うん？なぜかヤツらが慄いて見えるのは、気のせいか？

『諸君たちの任務は、北東の方向にいる黄金鳥の捕獲だ。上空に至ればすぐにその姿は現認できるだろう。羽根と嘴が金色であるために、見つけることは非常に簡単だ。その鳥を生け捕りにしてもらいたい。ただし、ヤツらの逃げ足の速さは折り紙付きだ。そこで、諸君たちの出番だ。その機動力をもってヤツらを圧倒し、逃げる前に捕らえるのだ。これから広範囲に結界を張ってヤツらを閉じ込めるが、襲撃がヤツらに知れると厄介だぞ。光の速さで逃げるからな。短時間で一匹も殺さず、捕らえることが出来れば、今後の君たちの処遇は変化するだろう。期待している。以上だ』

『いきなりそのような・・・』

『聞こえんな。何か言ったか？お前・・・名前がないと不便だな。そう・・・サダキチ。お前を本日よりサダキチと命名する。サダキチ、お前が頭領となり、捕獲せよ。捕らえた黄金鳥は、この紫の結界の中に放り込め。簡単だ。黄金鳥を捕らえたままこの結界に入れ。お前たちは出られるようにしておいてやる』

俺はすぐさま捕獲用の結界と、数十キロ四方に結界を張る。ぶつかっても衝撃を吸収する優しい仕様の結界だ。これで黄金鳥は死ぬこ

ともなく、結界外にも逃げられなくなった。

『では、お前たちの結界を解除する。あ、言い忘れたが、お前たちの誰か一名でも逃亡を図った場合、お前らは全員魔物のエサになってもらう。それでは・・・解除した。行け』

キョトンとしたドラゴンたちだったが、恐る恐る森の外へと飛び上がっていく。そして、一瞬のうちに紫の結界には黄金鳥が満杯になった。黄金鳥は一瞬キョトンとしていたが、逃げようにも逃げられず、必死で鳴いている。

「キェーッ!!キエエエエエエエエエーッ!キキキェーーーーー!」

「おお!懐かしいな!黄金鳥といえば、この鳴き声だな。しかしこれだけいるとうるさくてかなわん」

取りあえず、声が外部に漏れないように効能を追加で付与する。

「黄金鳥のあの鳴き声は、狩人の心が折れると言われているでありますのにー」

ゴンの驚嘆も俺には目に入らない。あっという間に黄金鳥はフェアリードラゴンに狩りつくされた。

『・・・３９、４０、４１。よし、全員揃っているな。優秀だな、お前ら』

『あ、ありがとうございます』

「コイツらは、マジで使えそうだな」

とんでもなく悪い顔をして、微笑む俺がそこに居た。

第百十二話　天国と地獄

黄金鳥たちは叫び続けている。必死で逃げようとしているが、俺の結界に阻まれて移動が出来ず、かなり戸惑っている様子だ。

フェアリードラゴンたちに言わせると、黄金鳥は速いには速いが、自分たちほどではないという。彼らにしてみれば、え?その程度なの?という感じだったそうだ。

『お前らの成果は素晴らしい。大変に満足した。今後、お前たちに暖かく、花が咲き乱れ、そして水のきれいな土地を用意しようではないか』

『ありがとうございます！』

「ご主人、そんなことを受け合って大丈夫でありますかー?」

「フェアリを見つけた場所があるだろう。あそこに結界を張ってやれば問題ない」

一仕事を終え、ちょっと早いが昼飯を食うことにする。フェアリードラゴンたちにもエサを渡してやる。飯を食いながら、フェアリードラゴンのサダキチと話をしていると、ヤツらの生態が分かってきた。

彼らの主食は花と言われているが、基本的には何でも食べるらしい。武器と言えば、羽から出る鱗粉であり、幻惑、混乱、快楽など精神

的に影響を及ぼす効果のある粉を精製できるという。当然、色々な匂いも出すことも出来る。しかし、獲物をおびき寄せても力が弱いため、あまり狩は得意ではないらしい。そのため、比較的狩りやすい植物の花などを食べるのだという。

『力が弱いくせによく俺を襲おうと思ったなー』

俺には全くダメージを与えられなかったが、彼らからしてみれば決死の攻撃であったらしい。その上、色々な鱗粉で攻撃もしていたのだが、全て結界に阻まれていたのだそうだ。

『ま、俺の配下にいる限り食いっぱぐれはないから、そこは安心するんだな』

非常食用に作った弁当だが、美味い美味いと言って食っている。彼らにしてみれば、天国のような環境のようだ。ちょっとの仕事で、腹いっぱい食えるのである。その上さらに、俺たちの弁当にも興味があるようだが、これは食わせられない。まあ今後、大きな成果を上げた時に食わせてやることにしよう。

デザートも食い、一段落した俺たちは、黄金鳥の見張りをフェアリードラゴンたちに任せて、再びイリモに乗ってルノアの森の上空を移動する。そして飛び続けることわずか5時間、俺たちが目指す場所が見えてきた。

「ジュカ王城か・・・懐かしいな」

一見すると、王都はそのままの形を維持しているようだ。俺は久しぶりに「千里鏡」を取り出して、王都を観察する。すると、

・・・見てはいけない物が見えてしまった。

王都の城壁沿いに、人がぶら下げられていた。どれもひどく傷つけられているため、おそらく死体なのだろう。それにしても夥しい。地獄絵図という言葉がピッタリの、死屍累々の惨状だ。ソレイユたちが言っていた、残虐非道な連中であることは間違いなさそうだ。

城壁の上には人は見当たらない。城門の上に数名の、全身を黒い鎧で包んだ兵士が警護しているのが見えるくらいだ。王都の中は、かなり鎧の兵士が目立っているものの、市などは開かれているようだ。

それにしても、城壁の損傷がひどい。俺もかなりぶっ壊したが、今は城壁全体にひび割れたり壊されたりしている。

「イリモ、フェリス、取りあえず、下に降りよう」

森の中で一旦結界を張って休憩する。周囲は日が傾きかけてきている。

「さて、本格的な作戦を立てなきゃいかんな。それには敵を知る必要がある」

「吾輩に任せていただきたいでありますー。城内は勝手知ったる場所でありますからー」

確かにゴンは元々ジュカに遣わされた白狐だった。しかも、気配を完全に消すことが出来るので、隠密行動をさせるのには打ってつけだろう。

「わかったゴン、じゃあ日暮れまで城内の探索をお願いできるかな

？」

「お安い御用でありますー」

「一応結界はかけているが、油断するな。ヤバイと思ったらすぐに逃げてこい」

「了解でありますー」

そう言ってゴンは姿を消した。日暮れまであと二時間ちょっと。俺は何をしようかと考えていると、フェリスとルアラが手持無沙汰そうだ。

「ご主人様、私たちは何をすればいいでしょう・・・」

「お前たちはそうだな・・・。そうだ、黄金鳥のから揚げを作れ」

早速、黄金鳥をこちらに転移させる。無限収納から料理セットを出してやる。

「この鳥は死んだらすぐ腐り始める。どれだけ素早く料理するかにかかっている。できるな？」

「「お任せください！」」

ルアラが鉢巻のようなものをしているが、頭の角に引っかかっていて、何やらいびつな形になっている。まあ、これはご愛敬だろう。

早速彼女らは調理に入った。思った以上に下処理が早い。一匹を処理するのに３０秒程という超早業だ。風魔法を上手に使って、血抜

きを一瞬で終わらせている。これならば大丈夫そうだ。

俺は安心して魔力探知を行う。

・・・驚いたことに、結界師らしき魔術師が2人しか見当たらない。通常、数週間かけて遠征する行軍には、結界師が必須である。道中の森などで魔物に襲われる危険があり、そのためにも結界師は通常よりも多めに従軍させるというのがセオリーなのだ。

他にも魔術師はいるが、数名である。強い魔力を持った者はほとんどいない。この魔術師たちはおそらく、回復用なのだろう。

これだけでは何とも言えないが、奴らはもしかして、俺が作った結界石のようなものを持っているのかもしれない。そうであれば、この編成には説明がつく。

探知範囲を広げてみるが、やはり大きな魔力は感知できない。精々、大きな魔物の魔力を感知するくらいだ。

『ご主人、ご主人』

ゴンから念話が飛んでくる。

『王都内に入ったでありますが、ひどい有様でありますー』

『どうした?』

『王都内は遺体だらけで、かなりの住人が殺されているでありますー』

『そうか・・・生存者はいないのか？』

『いいえ、生存者はいるでありますー。どうやら、敵に食料などを出さなかった商人や住人は、まとめて殺されたようでありますー』

『王都内の様子はどうだ？』

『黒い鎧の武者が町を制圧しており、かなり厳しい監視の状態に置かれているでありますー。町の住人から頻繁に食料を強奪しているようでありますー』

『わかった。そろそろ戻ってくれ』

『了解したでありますー』

およそ３０分後、ゴンは戻ってきた。王都を出る時、たまたま兵士たちの会話が耳に入り、聞いていたところ、どうやら彼らが装備している鎧には魔法をはじく効果が付与されているらしい。そして、町から徴収できる食料もほぼ尽きたため、西側の町に徴収に行く予定であることもわかった。

「ロクでもない奴らだな。補給ってのを考えてねぇんだな」

「そのようでありますなー」

「よし、わかった。これだけの情報があれば十分だ。作戦は立てられる。ゴン、ご苦労だった。フェリス、ルアラ、そろそろ屋敷に帰ろうか」

黄金鳥の処理は１００羽くらいが終了していた。アツアツの美味し

そうなから揚げが出来上がっている。一口つまんでみると、実にうまい。この味、コク、文句のつけようがない。

それを無限収納に入れ、フェアリードラゴンたちの下に転移する。から揚げをおすそ分けし、お弁当をだしてやる。ヤツらもかなり喜んでいるようだった。その光景に満足しつつ、俺たちは屋敷に転移したのだった。

「・・・そんなにひどい状態でしたの？」

「ああ、ゴンの話によると、かなりの住民が殺されているらしい。千里鏡で見ても、城壁に・・・」

食事時だということを思い出して、俺は思わず話を打ち切る。

「まあ、何だ。何とかするよ。明日は出発前にクルムファルに行く。クノゲンの部隊を借りていくぞ」

「まあ、クノゲンを？彼らもかなり訓練を積んでいますけれど、３００人ほどしかいないのですよ？ラマロン軍と戦うには人が少なすぎますわ」

「いや、まともに戦うわけじゃない。ちょっと作戦があってね。それがうまくいくといいんだけど・・・。まあ、ダメそうなら早々に撤退するよ」

「是非、そうしてください。絶対に死なないでくださいよ？」

「ご主人の結界は最強でありますー。間違っても死ぬことはないでありますよー」

「それにしても、このから揚げ、美味しいです」

「メイも気に入ってくれたか！」

「はい、とても美味しいです。できればこの鳥を養殖したいですね」

「あと２００羽くらいいるから、それを養殖しても面白いな」

「私なりに一度考えてみます。できれば実物を一度、見せてくれますか？」

「いいとも！黄金鳥がいつでも食べられるなんて、本当に夢のようだ。メイ、是非、頑張ってみてくれ！」

「ハイ！」

フェリスもルアラもフェアリも手を叩いて喜んでいる。本当に、我が家だけは平和だ。ジュカ王国の地獄ぶりと比べると、全くの正反対だ。

俺はそんなことを考えながら、明日の作戦のことを考えていた・・・。

第百十三話　王都奪還作戦

ルノアの森の大木の上に、二人の男が見える。二人とも冒険者風の格好をしているが、その雰囲気からは何かの魔物を狩ろうとする意気込みも、道に迷っているような焦りも感じられない。ただ、飄々とした空気を纏っている。

「どうだ？」

「完全に油断しています。もう、勝ったようなものですよ」

「お前にそう言ってもらえると、心強いよ」

木の上で悠長な会話をしているのは、リノスとクノゲンであった。

クノゲンは千里鏡をリノスに返し、腕を組んで空を見る。そしてゆっくりと視線の先にあるジュカ王城を見据えた。

「それでも、敵の素性が分からぬうちは、念には念を入れたほうがいいでしょうな」

「任せるよ」

二人はスルスルと木を下りてその姿を消した。

ハビラクはあくびをしながら空を見上げていた。いい天気だ。風も温かくなってきた。もうすぐ春だ・・・などと取り留めのないこと

を考える。彼はジュカ王国王都の北門を警備していた。

警備と言っても、彼一人である。詰め所にはもう一人の兵士がいるが、休憩中である。王都の城門の警備が二人だけなのだ。この人数では、敵に攻められれば一瞬で突破されかねないが、しかし、その心配はない。北から攻めてくる可能性は限りなくゼロだ。心配と言えば目の前に広がる森から魔物が出てこないか、それだけだ。もし魔物が出れば城門を閉めればいい。それで魔物は王都に入ることは出来ない。簡単で、楽な仕事だった。

王都に侵攻した時こそ戦闘に参加したが、それ以降は北門に回されて時間をつぶすだけの仕事になっている。楽な仕事だが、暇だ。何か刺激的なことはないだろうか。これでも精鋭隊に選抜された身だ。剣の扱いには自信がある。この剣を存分にふるってみたいものだ。それに、俺も魔法が使えて、空を飛べればいいのにな・・・。そんなことを考えていると、ハビラクの体が浮き上がった。

不思議な感覚にとらわれる。目の前の景色がスローモーションで過ぎていく。あれ?地面が下に見えるぞ?飛んでいるのか・・・?

そう思ったところで、ハビラクの意識は途切れた。

「やっぱりな。構造はプレートアーマーと同じだ」

「魔法はレジストするが、物理的な攻撃は通るんだな」

「剣は・・・普通だな。鎧に重点を置きすぎたのかな」

クノゲンの部下たちは、ラマロンの兵士から鎧を剥がしながら、和やかに談笑している。クノゲンはというと、メイが作った鋼鉄糸を丁寧に確認している。

「うーん、すばらしい。釣り糸のような細さと軽さだが、あれだけの重さの兵士を引っ張り上げて傷一つつかんとは・・・。さすがはメイ様ですな」

「いや、お前の釣りスキルの方が、俺はすごいと思うがな」

クノゲンは鋼鉄糸を森から投げて門番の首に巻き付け、それを凄まじい力で引き寄せた。まるで人形が飛ぶように兵士は俺たちの所へ飛んできたのだ。頭から地面に落ちた兵士は既に息絶えていた。

「あ、もう一匹出てきましたね。釣りましょう」

仲間の姿が見えないため、詰所からもう一人の兵士が門まで出てきた。怪訝そうにあたりを窺っているところに、森の中からクノゲンの鋼鉄糸が放たれる。先ほどと同様、兵士は兜を小脇に抱えたままの状態でこちらまで飛んできた。そして、木に頭を打ち付けてその場で絶命した。

「一丁上がりです」

素早く死体から鎧を剥ぐと、クノゲンとその部下がその鎧を着ていく。

「ピッタリです」

「うーん、北門にはこの二人しかいないみたいだな」

「思った以上にザルですね」

クノゲンは後ろを振り返り、部下たちに命令を下す。

「おい、お前ら、今回はかなりラクな仕事になりそうだ。動きがあるまで、しばらく休憩だ」

俺は無限収納から料理セットを取り出す。

「おい、フェリス、ルアラ、クノゲンたちの昼飯作るから手伝え」

「ええ？ニオイとかでバレませんか？」

「その時はその時だ。あ、ゴン、お前はまた城内に」

「了解であります。元よりそのつもりでありますー」

「では我々も城門に侵入してみます」

「くれぐれも気を付けろよ」

「探検ごっこみたいでワクワクしますな。子供の頃に戻ったようです」

全身鎧に包まれて表情はわからないが、何となく素振りで、クノゲンが満面の笑みを浮かべていることがわかる。

「お前には何も言わん。その前に、メシを食っていけ」

俺たちは３００名の兵士のために、パスタを茹で、コロッケを揚げ、サラダを作ってやる。

「・・・ダメですな。人っ子一人いません」

「東地区には人の気配を感じませんでした。おそらく無人かと思われます」

「西地区を見ましたが、農地は荒れ果てていました。商人街の方は人がいそうです。もっと探索してみますか？」

「いや、敵が動くのを待とう」

「私一人でも、問題なく探索できますが・・・？鎧で顔も隠れていますし」

「いや、時として戦いは、じっと動かないことも必要だ」

「・・・確かにそうですな。それでは、敵の出方を待ちましょう」

王都の兵に動きがあったのは、夜になってからのことだった。５名の兵士が俺の気配探知に引っかかった。馬に乗って北門に向かっているようだった。

しばらくすると、漆黒の鎧に身を包んだ兵士たちが門の外に姿を現す。それを見てクノゲンたちは鎧を着てゆっくりと立ち上がり、そいつらに向かって森を出ていく。

「お前ら、森の中で何してたんだ！サボってるんじゃないぞ！」

「お前らが帰ってこないから、皆カンカンだぞ?全く俺たちの手を煩わせやがって!」

「うん?後ろは何だ?冒険者か?こいつ等を捕らえていたのか・・・」

一瞬のうちに5人が倒される。クノゲンの部下たちの持つ短剣が、兵士の急所を正確に貫いていた。

兵士たちはその場で鎧を剝がされる。そして、クノゲンたちは鎧を持って俺たちの所に帰ってきた。

「全く、動きが遅いなコイツら。暇でしょうがないな」

そんなことを言い合いながら、俺たちは和気あいあいと用意された夕食を口に運ぶ。その時ちょうど、ゴンが帰ってきた。

「敵は西門に集中しているでありますー。占領されているのは、西地区でありますー。そして敵の本部は、南門の、王国軍本部のあった所に置かれているでありますー」

「そうかゴン、ご苦労だった」

そんな報告を聞いていると、また北門に３０騎ほど向かっているのを気配探知が感じ取った。コイツらも先ほどと同じく、クノゲンたちの餌食となった。

「・・・おっ!今度はまとまって来たぞ!１００程だ」

「よーし、今度は全員で行くぞ。やれやれ、ようやくだな」

この１００騎も、ほとんど抵抗することなくクノゲンたちの刀の錆になった。

「よし、コイツらの鎧を剥がして着用しろ。人選は任せる」

そうクノゲンたちに命じて、俺は一旦屋敷に転移する。リコたちに今日は帰らないことを告げるためだ。「思念」で伝えることもできるのだが、できればリコの顔を見ておきたい。ちょっと無理をして転移したのだ。

「おかえりなさい」

「ただいま。リコ、今から戦闘だ。今夜は戻らないからな」

「無理だけは、しないでくださいませね」

「わかっている。みんなも心配するな。暇を見て、また帰ってくる。緊急事態があれば、思念を使って連絡してきてくれ」

「わかりました」

皆の元気な姿を見て、心が落ち着く。そして、ダイニングを出て転移結界に向かう。

「リノス」

振り返ると、リコがいた。

「どうした、リコ・・・ウプッ」

ゆっくりとリコが唇を遠ざける。

「行ってらっしゃいませ」

「行ってくる」

お蔭で、何としても作戦を成功させようと、気合が入った。

「よーし、それでは、アイツらの出番だ」

現場に戻ってきた俺は、後方に待機させておいたフェアリードラゴンたちの下に向かう。

『諸君、長らく待たせた。敵がアホなためにとんだ時間を食った。しかし、これからは諸君の出番だ。打ち合わせ通りに頼むぞ。全員の帰還をもって、次の作戦の攻撃開始としたい。迅速かつ丁寧な作戦遂行を期待する』

『了解しました』

結界からフェアリードラゴンの姿が、一瞬で消えた。そして約5分後、フェアリードラゴンたちは全員無傷で戻ってきた。

『作戦終了しました。全員無事です。ちなみに、西門と南門以外には、兵士はいませんでした』

『ご苦労。休んでよし』

俺は再びクノゲンたちの下に向かう。

「よーし、鎧は装着できたか?全員、出撃だ!朝までには片付けるぞ!」

俺たちはゆっくり北門に向かって歩を進めた・・・。

第百十四話　完封勝利

漆黒の闇の中に、馬の蹄の音と鉄のこすれる音が、かすかに響き渡る。漆黒の鎧を着た騎兵がゆっくりと王都内を進む。

彼らはまるで物見遊山をするかのように、キョロキョロとあちこちを見渡しながら何かを確認するかのように、ゆっくりと歩を進める。

「死臭がひどいですね」

騎兵の一人が思わずつぶやいた。クノゲンの部下のリシマだ。

「ああ、予想以上に王都の民を殺戮したんだろうな。夜明けが恐ろしいよ」

「バーサーム侯爵様のお言葉とは思えませんね」

「いや、俺だって嫌なものは嫌だ。死屍累々の中、死臭が充満する中で朝メシなぞ食ってられないだろう」

「朝めしの心配ですか？さすがですね、フフフ」

騎士団の中から笑い声が漏れる。

「それにしても、無人の野を行くがごとしだな。この辺りは町人の住宅街なんだが、人っ子一人見えないな。人の気配は感じるんだがな」

「そりゃ、我々がこんな物騒な鎧を着ているからでしょう。わかってても寄ってきませんよ」

「確かに、それはそうだ」

右手に穀倉地帯を見、左手に住宅街を見ながらゆっくり進んでいくと、道が二手に分かれている。右手に進めば西門に通じ、左手に進めば王城の大手門に通じる。俺たちは迷わず右手に進み、西門に向かう。

西門には篝火が焚かれており、遠目からでもよく見えた。ちなみに、南門の近くにある王国軍本部の建物からも光が漏れており、ここも遠くからでもよく見える。

「何も仕掛けてきませんね。本当にバカばっかりなんですかね」

「リシマ、そう言うな。奴らだって、真剣だと思うぞ？たぶんだけどな」

再び騎士団の中から笑い声が漏れる。

西門に到達すると、門番が倒れていた。素早く数名の兵士が馬を下りて駆け寄り、そいつらの命を奪う。

「リシマ、任せたぞ！」

「お任せください！」

リシマたちは騎士屋敷が立ち並ぶエリアの中に入っていった。そして、残った数名の兵士で、西門の城門を閉じる。

「さすがにフェアリードラゴンたち。いい仕事するな」

彼らには、体がマヒをする鱗粉を空から撒かせていたのだ。上空から撒かせたので、効果を発揮するまで時間がかかるとのことだったので、抵抗されるのではないかと少々心配したのだが、杞憂に終わったようだ。

ラマロン軍は、元々騎士屋敷のあったところに逗留していた。内戦や彼らの侵攻で一部の屋敷は破壊されているが、まだ使える屋敷もかなり残っている。ヤツらはそこを無理やり使っていたのだ。そして待つこと３０分。リシマが戻ってきた。

「バーサーム様、片付きました。全く抵抗なく、簡単な作業でした。あとは・・・」

彼が向けた視線の先には、数十名の女たちがいた。全員、服がボロボロだ。泣いている女もいるし、虚ろな視線をしている者もいる。俺は思わず目を背ける。

「取りあえず、回復魔法を」

俺は、自分の使える最大級の回復魔法を彼女らにかけた。

「これで、体は元通りのはずだ。夜が明けるまで、どこかで休ませてやれ。くれぐれも丁重に扱ってくれ」

女たちは、兵士にまるで宝物を運ぶかのように、丁重に扱われて商人街の方に消えて行った。俺はその姿を見送ると、西門の隣に巨大な穴を土魔法で掘った。

「よーし、西門の兵士たちはここに埋めろ」

「侯爵様！西から篝火が見えます！」

俺は西門の兵士たちの処理を任せて、急いで西門の上に上がる。

遠目から篝火が近づいてくる。気配探知で探ってみると、３００名ほどいるようだ。

「お前ら、敵のお帰りだ。出迎える準備をしろ」

篝火はどんどん大きくなってくる。それに合わせて馬の蹄の音、鎧の音などが大きくなってくる。

「開門！開門！開けろ！ビュー様のお戻りだ！開門！」

けたたましく城門を叩いている。俺は城壁の上から顔を出して

「どなた様ですか？」

「何をしている開けろ！開けんか！」

「どちら様で？」

「大馬鹿者！副団長のビュー・レイリック様に決まっているだろう！早く開けんか！」

「へいへい。只今開けましょう」

俺はリシマたちに門を開けるよう手振りで指示を出す。

門がゆっくりと開かれる。待ちかねたようにレイリックの部隊は入城してきた。リシマたちはラマロン軍を囲むような形で出迎えている。

全員が入城したところで、城門が閉じられる。よく見ると、馬の上や兵士の肩に女性が乗せられている。しかも、一人や二人ではない。十数名単位の女性が居るようだ。

部隊の中心にいる騎兵がおもむろに兜を脱ぐ。そして怪訝そうに周りを見渡す。

「何だ?何故、これだけの者がここにいるんだ?何があった?・・・おい、誰か報告をしろ!」

「ビュー・レイリック」

兜を小脇に抱えた騎兵が振り返る。

「お前が、ビュー・レイリックか。コイツは殺すな。女は殺すなよ。・・・やれ!」

俺の命令が下った瞬間、リシマたちの剣が一閃される。悲鳴を上げる間もなく倒れる兵士たち。彼らは淡々とラマロン兵の急所を一突きして倒していく。無抵抗のまま、３００の軍勢はみるみる半分以下にまでその数を減らした。

「何だお前ら!何をしている!他の者は何をしている!反乱だ!これは反乱だ!応戦せよ!応戦せよ!」

狂ったようにレイリックが叫んでいる。しかし、その間にも歩兵は全て倒され、騎兵も次々と討ち取られていく。残りはレイリックを守る３０ほどの騎兵が残されるだけとなった。

「何だ！一体何だお前たち！なぜこんなことをする！」

「ビュー・レイリック」

肩で息をしながらレイリックは再び振り返る。目が血走っている。

「貴様は・・・誰だ？」

「バーサーム・ダーケ・リノスだ。王都を奪還すべく、ヒーデータ帝国より参上した。そこに大きな穴が開いているだろう？お前らの墓だ」

レイリックの目が大きく開かれる。

「やれ！」

瞬く間にレイリックを守る騎兵は討ち取られ、彼は四方八方から突きを食らい、なす術もなく馬から叩き落された。

「きっ、貴様ら・・・こんなことをしてタダで済むと思うなよ・・・」

「ほう、どうなるんだ？」

鎧を剥がされ、全裸にされたレイリックに城門から降りながら声を

かける。

「我が軍が必ずお前らを・・・」

「じゃあ、見に行こうか」

兵士たちに、転がっているラマロン兵を大穴に放り込むよう命じるとともに、ラマロン兵が連れてきた女性たちを保護するよう命じた。怪我をしている者もいなさそうだったが、取りあえず回復魔法をかけてやる。女たちはみな若く、中には年端もいかない子供もいた。俺は冷たい目でレイリックを睨む。奴は俺から目をそらして俯いていた。

そして俺とリシマ、そして数名の騎兵と共にレイリックを伴って騎士屋敷町を進む。レイリックは全裸の上、後ろ手に縛られて身動きのできない状態にされている。

「兵たちは・・・兵たちはどこへ行ったのだ・・・」

「宿舎代わりに使っていた屋敷の中で、全員永い眠りについている」

「バカな・・・我々精鋭部隊が貴様らなどに・・・」

「何なら見に行くか?戦闘時間は30分くらいだったか?すぐに終わったぞ?」

レイリックは絶句している。

しばらく進むと、一人の騎兵が南門の方角からやってきた。

「侯爵様。こちらは終了しました」

「ご苦労。西門も終了したところだ。怪我をした者は？」

「いいえ。全員無事です。ただし、司令官らしき者の姿は見当たりませんでした」

「そうか。まあ、それはクノゲンたちが何とかするだろう」

「ところで、その男は・・・」

「ああ、レイリックという。副団長だそうだ。大方、食料調達のために近隣の村を襲いに行ったのだろう。ご丁寧に、女まで攫って戻ってきたところを一網打尽にした。副団長というからには色々知ってそうだと思ったから、コイツだけは生かしておいたんだ」

「お見事です。それではそのレイリックに質問してもよろしいでしょうか？」

「いいぞ。許可する」

「おい、司令官がいただろう。どこへ行った？」

「・・・」

レイリックはそっぽを向いて完全に無視を決め込んでいる。

「侯爵様、拷問にかけてもよろしいでしょうか？」

「いや、そんなことをすると体力と時間の無駄だ。俺に任せておけ」

俺たちはゆっくりと歩を進める。そして、到着した南門は、チリ一つない美しい状態になっていた。俺は思わず嘆息を漏らす。

「いや、南門の兵士がすぐに片付きまして・・・。兵舎を担当する部隊と、王国軍本部を担当する部隊が作戦を完了するまで暇だったもので、清掃をしておりました」

「他のラマロン兵たちの片づけは？」

「それは、まだ済んでおりません」

「そうか。それは後から何とでもなる。気にするな」

「侯爵様！」

南門から一頭の馬が駆け込んでくる。こいつもクノゲンの配下の男だ。

「いかだで川を下っていたラマロンと思わしき者たち6名を捕らえました。今から護送しますので、馬をお借りします」

「ああ、頼む。お前らの被害は・・・大丈夫だな。俺の方も終わったところだ。ゆっくり帰ってこいとクノゲンに伝えてくれ」

「畏まりました！」

そう言い捨てて、男は再び南門に馬を走らせた。

「実質の被害、ゼロか」

「そうですね。そういえば。ラマロンは、このレイリックと捕らえた6名を加えて7名の生存ですか・・・稀にみる大勝利ですね」

顎に手を当てながら、淡々とリシマが分析する。

俺たちの会話を聞いて、レイリックは馬上で震えながら声を絞り出す。

「皇国最精鋭の我らマトカル部隊が一夜で壊滅するとは・・・貴様ら一体、何者だ?まさか、本当に大魔王が・・・」

「俺たちは大魔王でも何でもない。ただの、男たちだ。安心しろ。俺たちに完封されたが、お前らが弱いんじゃない」

俺は改めて視線をレイリックに向ける。

「俺たちが、強すぎるんだ」

第百十五話　王都の惨状

王都の空が白み始める。いつもと変わらぬ朝。冬の寒さは和らいでいる。しかし、王都に住む住人の心は凍えたままだ。

昨夜も何やら騒動があった。何十名もの兵士が北に向けて騎馬で通り過ぎていった。西門からまた、軍勢が出撃していったようでもある。こうした夜の後は決まって、新しい死体が往来に転がっているのが、ここ最近であった。場合によっては、城壁に吊るされている場合も多くあった。

恐る恐る家の扉を開けた住民たちは、王都がいつもと違うことを敏感に感じ取った。町の中にいつも停滞している「殺気」のようなものが感じられなかったのだ。

兵士に見つからないように外に出て見ると、住民たちは驚愕する。今まで自分たちを苦しめてきた黒騎兵たちが、大きな穴の中に放り込まれていたのだ。それだけでなく、南門では、夥しい黒騎兵たちの死体が、まるで魚のように整然と並べられていたのだった。

そしてそこには、見たこともない冒険者風の男数名と、大きな立て札が建てられていた。そこにはこんなメッセージが書かれていた。

「本日をもって、この王都はヒーデータ帝国が解放しました。これまでのご苦労は察して余りあると思います。今後は、我々がこの王都を守っていきます。ご安心ください。決してむやみな殺生や略奪は行いません。食料は十分にあります。まずは、今日の昼に炊き出しを行います。よければお越しください。　場所：北門前（ただ

し、食器持参のこと）

バーサーム・ダーケ・リノス」

夜明けとともに俺は屋敷に転移する。そして、リコたちに炊き出しの準備をお願いする。皆、こうなる予想はあったようで、まずは、クルムファルとニザ公国から集められるだけの食材を、メイとリコが担当となって、集めてくることになった。屋敷ではペーリス、フェリス、ルアラが米を炊き、片っ端からおにぎりを拵えていく。

それを見ながら俺は宮城（きゅうじょう）へ向かう。まだ宰相閣下は出勤していなかったが、陛下にはすぐに直接会うことができた。

「・・・相変わらず、素早いの」

「ええ。全ての作戦が予想以上にうまくいきましたので」

「よくやってくれた。今は何をすべきかの？」

「取りあえず、王都の抑えとして帝国の兵が入った方がいいでしょう」

「いや、それは王都民の心を逆なでするだけじゃ。やめた方がよい」

「どういうことでしょう？」

「考えてもみよ。これまでラマロンに蹂躙されてきた王都民なのだ。鎧を着た兵士たちへの恐怖は想像以上のものがあるであろう。しばらくは、リノス殿の手勢で王都を抑えてもらいたい」

「・・・しかし、治安などが」

「悪くなるようであれば、帝国の兵を入れよう。それまでは、何とか頼みたい。その代り、必要なものがあれば、何なりと言ってもらって構わぬ」

何だかうまく陛下に言いくるめられたような形で部屋を後にする。まあ、王都を見る限り衛生的には良くなさそうなので、落ち着いたら医者や大工などをまとめて借りる必要がある。その時は勅命でも発してもらおうと、自分に納得させて屋敷に戻った。

屋敷にはリコもメイも戻ってきており、炊き出しの手伝いをしていた。クルムファルもニザも、大量の食糧を調達することに成功したようだ。その報告を聞いて満足した俺は再び王都へ転移する。

北門前では、人化したゴンとクノゲンの部下たちが炊き出しの準備をしていた。俺は彼らの労をねぎらいながら、非常用の弁当を出してやる。そして俺は、南に向かって王都を歩き出した。

城壁には何人もの人が吊るされている。それを兵士たちが一人一人と下ろしていた。その下の、元々は広大な耕作地であったところには、夥しい死体が放置されていた。男も女も老いも若きもあらゆる世代の人々の遺体がそこにあった。

余りの光景に思わず住宅地の方に目を向ける。元々建っていた家に交じって、バラックのような掘っ立て小屋もあちこちに見える。子供の姿が見えたが、俺を見てすぐにどこかに逃げてしまった。

そのまま俺は商人街に入る。西門の様子を見ると、倒したラマロン

兵は既に俺が掘った大穴に放り込まれていた。かなり広く、深く掘ったのだが、数百人分がそこに入っているために、ほぼ満杯の状態だ。西門は閉じられており、数人が門とその上の城壁に配置されていて、外部からの侵入に目を光らせている。既にゴンは兵士たちに付いた呪いを除去してくれたようだ。彼らに労いの言葉をかけて、保護された女たちの屋敷に向かう。

女たちは悲惨だった。体の傷は癒えても、心の傷は癒えていない。俺の姿を見ると全員怯えた表情をし、体を震わせた。

「我々にも、こんな反応です。丁寧に接しているのですが・・・」

「まあ、仕方ないだろう。お前たちもすまないが、頼むな。女たちに食欲はあるかどうかわからんが、弁当を置いていく。朝めしだ、食ってくれ」

そう言って屋敷を後にする。そしてそのまま歩を進めた俺は、南門の王国軍本部の建物に着いた。その最上階、おそらくラマロン軍の司令官が居たと思われる部屋に、リシマをはじめとする、クノゲンの部下たちが休息していた。

「ここから見ると、壮観だな」

「ええ、魚を並べているみたいです」

「でも、はやく片づけないと、また臭いがえらいことになるな」

「そうですね。明日には片づけませんと」

「また、みんなには働いてもらわなきゃならないな」

「侯爵様、あのくらいなら、全然仕事のうちに入らないですよ」

そう言ってクノゲンの部下たちは笑う。

「まずは、ご苦労だった。メシを置いていく。これを食いながらゆっくり仮眠などして休んでいてくれ。あと、見張りに出ている奴らにも残しておいてやれよ？」

そう言って俺は転移結界を張り、ルノアの森に転移した。

『すまなかったな、お前たち。朝めしがまだだったな』

『それで、作戦の方は・・・？』

『成功だ。全くの被害を出すことなく、勝利を手にすることができた』

『さすがご主人様です』

『サダキチ、お前らにもう一つ仕事だ。朝めしを食ったら、王都に飛んでもらいたい。そして、あそこから出る異臭を抑える粉を撒いてもらいたい』

『お安い御用です』

『そして、しばらくは交代で王都の周囲を見張れ。怪しい者が居ればすぐに報告するように。あと、この国の中で気に入った場所があれば言え。そこにお前らの住まいを作ってやる』

『かしこまりました！』

フェアリードラゴンたちも随分と連携が上手になってきた。コイツらにはマジで働きに報いるものを与えてやらねばならない。

そんなことを考えつつ、再び帝都の屋敷に転移する。

屋敷では、ものすごい量のおにぎり、野菜のスープ、コロッケが出来上がっていた。

「リノス、もうダイニングでは置き場所がありませんわ！」

「わかった、王都へ持っていくよ！」

俺は休む間もなく、出来上がった炊き出し用の食材を王都へ運ぶべく、転移を繰り返した。

炊き出しを開始した当初は訪れる王都民が少なく、もしかして皆殺しになったのかと不安になったが、飯を食ったヤツから口コミで噂が広がったようで、北門には数百の王都民が押し寄せて、押すな押すなの大騒ぎになった。皆、服がどこかしら汚れていたり、破れていたりしている。だが、次から次へと運ばれてくる救援物資を見て、並んでいる王都民が歓声を上げる。元気はありそうだ。

リコを筆頭に皆、休みなしのブッ通しでやっているお蔭で、かなりスムーズに炊き出しは行われている。そんな中、列整理をしている俺のところに一人の老人が歩いてきた。

「リノス様かな？」

「ええ、そうですが」

「覚えておいでかな？肉屋の亭主だ」

「・・・ああ！ファンネルさん！」

ルノアの森で狩った魔物の肉を売りに行っていた肉屋の主人だった。以前とは比べ物にならないほど年老いている。俺は、これまでのことを聞いていく。

俺が王城をブッ壊した後の王都は、生き残ったカルギ派の一部貴族が私兵を入れて何とか統治を開始した。ほどなく、王国内では内乱状態になったが、王都に関しては基本的に全ての城門を閉じて「鎖国」の状態としていたらしい。これが幸か不幸か、王都民の流出を最小限に食い止めることができた。加えて、大魔王が降臨したという噂も相まって、王都には誰も手を出さなかったのだという。

食料については、王都内の広い穀倉地帯のおかげで、何とか餓死しない程度の食料を確保することが出来ており、王都に残った冒険者などがルノアの森に入って狩をしていたこともあって、何とか命を繋ぐことが出来ていた。

最初こそ、大魔王を恐れて脱出を図ったり、発狂したりする者、略奪や狼藉を働く者もいたが、ようやく王都内も落ち着いてきたところに、ラマロンの軍勢が侵攻してきた。南から攻め上ってきたラマロン軍は、瞬く間に南部の紛争地帯を平定し、全ての住民を殺害したのだという。そして、王都に侵攻してきた。

兵士と冒険者の連合軍は良く戦ったらしいが、所詮５００人程度の烏合の衆である。たちまち崩れた城壁の一部から侵入を許し、あっ

という間に蹂躙されてしまった。戦いに参加した者たちは全員殺され、あるいは生きたまま死ぬまで城壁に吊るされたのだという。

ラマロン兵は、最初こそは抵抗しない者には危害は加えないと約束したが、程なく食料の略奪が始まり、女たちは襲われ、拒否したり抵抗したりしたものは問答無用で殺された。

「・・・しかし、あんた達は、信用できそうじゃな。儂ら住民に食料を与えられたのは、初めてじゃ」

「俺たちは無駄な殺生をしたくありません。時間と労力の無駄ですから」

「これからどうするんじゃ？」

「取りあえず、王都を復旧させます。まずは食料の問題がありそうですね。俺の方で大量の食料を確保していますので、それをしばらくは配給します」

「儂も、何かあれば手伝うぞ。遠慮なくいってくれ」

「ありがとうございます。できるだけ多くの人に、この炊き出しのことを話してあげてください」

「うむ。おそらくここに並んでいる者たちが住人の全てじゃろうが、見かけたら伝えておくぞ」

俺は絶句していた。以前は兵士を含め数十万人が暮らしていた街なのだ。それが、現在ではわずか１０００人程度になっている。ラマロンの苛烈な仕打ちが分かろうというものだ。

炊き出しを配り終えたのは、昼を大分過ぎたころだった。俺たちはほとんど空に近くなった炊き出しの残り物を分け合う形で昼食を済ませた。そしてすぐさまリコたちは夜の炊き出しの準備にかかった。

「カレーを作りますわ」

「材料は・・・」

「ご主人様、屋敷の蔵に、米も野菜もまだまだあります。リコ姉さまと炊き出しを配りながら相談したのです。カレーなら簡単に大量に作れるし、配るのも楽ですから」

「わかった。リコとメイたちに任せる」

俺は、近くで炊き出しを食べていた人々に、夜も炊き出しをすることを伝え、他の人にも伝えてもらうよう話をする。

「ご主人様、使者の方が」

メイの声のする方に顔を向ける。馬に乗った冒険者風の青年がそこに居た。

「馬上より失礼します。クノゲン様が、捕虜を連れて戻られました。王国軍本部に向かうとのことです」

「いや、そこではなく、南門から入って東側の貴族屋敷街を通り、北門横の兵舎まで連れて来てくれと伝えてくれないか？」

「了解しました！では！」

そう言って青年は颯爽と馬を走らせて去っていった。

俺は近くにいた門番の一人に声をかける。

「ご苦労だが、王国軍本部に行って、リシマにあの・・・何と言ったか、フルチン野郎も一緒に北門横の兵舎に連れてこいと伝えてくれないか？」

「畏まりました！」

「さて・・・どう成敗してくれようか・・・」

俺は王都の空に目を向ける。吸い込まれそうな青空が、視界いっぱいに広がっていた。

第百十六話　リコ、完全試合を達成する

美味しそうなカレーの臭いが漂ってくる。夜の炊き出しが完成に近づいているようだ。前世で、子供の頃にカレーの臭いが自分の家からだと分かった時は、無性にうれしかった記憶が蘇る。

以前、自力でビーフシチューを作ったことはあるが、このカレーについてはペーリスのお手柄だ。彼女は色々なスパイスを組み合わせて、実にコクのあるカレーを作ってくれた。それに、使っている肉はカースシャロレーなのだ。不味いわけがない。実にぜいたくな炊き出しだ。

そんな香りを楽しみながら、俺は王都の北門の隣にある建物の一室に座っている。ここは元々王国軍の兵舎があった所で、建物自体はそのまま残されており、割合きれいな状態だ。

「リノス、よかったら味見をなさいますか？」

リコができたてのカレーを持ってきてくれる。食べてみると、やはり美味い。

「うまい。さすがはペーリスだな。これは店が開けるな。リコ、食べてみろ。あーん」

「・・・本当。美味しいですわね」

「・・・お取込み中失礼します」

「ああ、クノゲンか。ご苦労だったな。まあ、入ってくれ」

ラマロンらしき6名の捕虜を連れたクノゲンたちがやってきた。全員両手を前にして縛られている。そして、途中で出会ったというリシマも、レイリックを連れて部屋に入ってきた。ヤツは相変わらず、全裸で後ろ手に縛られている。なかなかカオスな状況だが、さすがにリコは眉一つ動かさない。

「相変わらず、お熱いですな」

「うらやましいだろ？」

「ハハハ、うらやましいですな」

「何やら、美味そうな匂いがしますね」

「夜の炊き出しのカレーを作っている。今食ってみたが、美味いぞ。お前たちも食え、腹減ってるだろ？」

リコに捕虜も含めた人数分のカレーを持ってくるようにお願いする。そして、彼女の退出を見届けた後、俺はおもむろに口を開く。

「ヒーデータ帝国のバーサーム・ダーケ・リノスだ。そのフルチン野郎は分かっているが、他の6名もラマロンの人間か？」

「・・・」

全員が俯いて何も答えない。俺はクノゲンに目配せをする。

「いかだで川を下ってきていました。何より、そのうちの一人は漆

黒の鎧に身を包んでいましたので、間違いないでしょう」

捕虜を見まわすが、鎧を付けた人間が見当たらない。

「捕らえた時、鎧を脱がしたのですが、そのままでは差しさわりがありまして・・・」

ポリポリと頬をかきながら困った表情でクノゲンが話す。そして、一番前に座っている金髪の人間に視線を向ける。コイツだけなぜか布にくるまれている。俺は再びクノゲンを見る。

「女なのです」

「女ぁ？」

「ええ、てっきり男だと思ったのですが、鎧を脱がせて裸にしたところ、ついている物が付いていませんでした」

「何だ、金玉を持たん奴が、この残酷非道な軍団の司令官だったというわけか？」

「・・・」

「ラマロン軍の司令官とお見受けするが、お名前を伺っても？」

やはり何も答えない。

「しょうがない。体に聞くか」

俺は「鑑定」スキルを発動しようとする。

「・・・好きにするがいい」

「うん？何？」

「私をオモチャにするのだろう。存分に楽しめばいい。貴様ら全員で私を嬲るのだろう。嬲るがいい。私の体中をお前たちの汚い舌で嘗め回して、私の穴という穴をお前らの逸物で犯し抜いていくのだろう。女と知られた上からはそれは覚悟している。私の体を存分に賞味するがいい」

「・・・お前、何言ってんだ？穴という穴？何の話だ？」

「そ・・・それは・・・私の・・・その・・・」

「なに真っ赤になってるんだ？大丈夫か、お前？」

何かとんでもない勘違いをしているようだ。ちょうどその時、リコが部屋に入ってきた。

「カレーをお持ちしましたわ」

「ああ、ありがとう。とりあえず、食べながら話そうか？」

クノゲンたちは早速、美味い美味いと食べているが、女たち捕虜は縄を解かれたにもかかわらず全く手を付けない。ちなみに、フルチン野郎にカレーはない。ヤツの縄を解く気はないので、余った分はリコにあげたのだ。

そんな中、女は気丈にもかなりしっかりした声で話し出した。

「ヒーデータ帝国の、バーサームという名は知っている。皇帝の妹を篭絡し、帝国を意のままに操ろうとする佞臣という噂通り、ロクでもなさそうだ！」

「ほう、そんな噂が立ってたんだな。俺はリコを篭絡したそうだ」

俺は視線をリコに送る。

「全く、噴飯ものですわね」

リコは呆れたように首を振る。

「私が望んでリノスの妻になったのですのにね」

「まさか・・・貴様が」

「ええ。ヒーデータ帝国皇帝の妹、ヒーデータ・シュア・リコレットと申しますわ」

「・・・大方、バーサームのあの顔で骨抜きにされたのだろう。人前でイチャくなど・・・ロクでもない女だ！」

「ええ、仰る通り私は、夫のことが好きすぎる、ロクでもない妻でございますわ」

リコは胸に手を当てて、かわいらしい笑顔を見せて答える。その笑顔を絶やさぬまま、

「私が夫に惚れたのはここではございません」

リコは指で自分の頬を指し、そして、ポンと胸を叩く。

「ここに惚れたのです」

苦虫をかみつぶしたような顔をして、女はリコを睨んでいる。

そんなリコの完全試合を見ながら、俺は鑑定スキルを発動させる。

「ほぉぉぉ。お前は、ラマロン皇国の皇帝の娘か。妾腹だったのか・・・？。皇位継承権はないと。子供の頃から剣・・・？男として？はぁ？・・・何だそりゃ？ぶあっはっはっは！そりゃ無理だろ！バカじゃねぇのか？ほぉ、フルチン野郎が参謀と。・・・ロクでもねぇ参謀だな。・・・なるほど。残酷だな。・・・何と言うことを・・・」

色々とグロい場面も見えてしまったので、頭がズキズキする。俺は一旦、一呼吸を置いて再び話し始める。

「今からお前のことを喋るが、自分から言うことは・・・ないようだな。間違いがあるなら、言ってくれ」

女をはじめとする捕虜たちは完全に凍り付いている。

「お前の名前は、ラマロン・マトカル。２３歳、女性。現皇帝のラマロン・クロウ・フレインスの娘だ。母親の身分が低かったために、宮廷内では育てられず、そこにいるフルチン野郎、ビュー・レイリックの父親に育てられた。・・・母親はフルチン野郎の親父の妾になったのか？まあ、そこはいい。親父が軍の将軍だったので、自分も軍人を目指した。しかし女じゃ軍人になれない。そこで、男とし

て剣術を身に付け、軍人となるべく訓練を受けた。まあ、頑張り屋さんで、軍人としての素養もあったようだな。成長の後、一度は女性と結婚するが、一切手を付けなかったために、ほどなく嫁さんに逃げられる。軍の中で嘲笑の的になりかけたが、反乱軍を皆殺しにして鎮圧して、保身に成功した。ちなみに、皆殺しにするのを提案したのは、そのフルチン野郎だ。そしてその後、次々と魔物の討伐・・・ドラゴンの征伐を成功させたのか？その功績で軍の司令官の任に着くことができた。そして、ジュカ王国への侵攻を任せられた。フルチン野郎のアホな作戦を採用して、全てのジュカ国民を殺しつくすことにした。その結果が、この有様になった・・・。どうだ？」

マトカルとフルチン野郎の目が見開かれ、瞳孔が開いている。俺はそいつらに構わず、その他の捕虜たちにも鑑定スキルを発動させる。

「そして・・・他の奴らは・・・結界師が・・・二人。両方とも女か。モノシ、お前はかなり優秀だな。・・・なるほど、自分の体がマヒしてきたので、咄嗟にマトカルたちに結界を張ったのか。それで脱出できたんだな。あとは・・・回復魔法の魔術師か。男が一人であとは女と。お前らは仕事してねぇな。モノシに感謝しろ？そうでないと、お前らは命がなかった」

ついでに、フルチン野郎にも鑑定スキルを発動させる。

「・・・予想はしていたが、想像以上にゲスだな、お前。無理やり女を手籠めにする以外知らねぇのか？真面目な恋愛が皆無じゃねぇか。・・・なるほど、王国の女たちを攫って手籠めにしていたのは、お前の命令だったんだな。・・・で、その光景をマトカルに盗み見させていたと。バカ野郎、まだネンネの女に気色の悪いプレイを見せてんじゃねぇよ。・・・オイオイ、随分と・・・。うわあ、最悪。見るに堪えん」

内容が衝撃的過ぎて俺には直視できず、思わず鑑定スキルを打ち切る。

「真正のアホだな、お前ら。司令官ならなぜソイツの暴走を止めねぇんだ」

「・・・戦場で女が必要になる。これは・・・当然のことだ」

「マトカルよ。お前女なんだから、フルチン野郎が辛抱たまらん状態なら、お前がヤラせてやりゃよかったじゃねぇか」

「なっ！バカな！私とレイリックはあくまで兄弟のようなものだ。あり得ん！レイリックとなど、天地がひっくり返ってもあり得ん！レイリックとなど！汚らわしい！気味が悪い！！」

・・・そこまで拒否ってやんなよ。フルチン野郎が地味に落ち込んでるじゃねぇか。

「レイリック、残念だったな。しかし心配するな。初恋ってのは叶わないものと相場が決まっている。それに、人前で全裸になる男を女は好きにならないと思うぞ？全く、粗末なモノをこれでもかと見せつけやがって！恥ずかしくねぇのか、お前」

凄まじい目でフルチン野郎は俺を睨んでいる。クノゲンたちは笑いをこらえるのに必死だ。マトカルは震えながら、必死で声を絞り出す。

「なんでそこまで我々のことを・・・。や、やはり貴様が大魔王・・・」

「さすがはラマロン皇国の司令官だな」

俺はニヤリと笑う。

「その通りだ。俺が、大魔王だ」

第百十七話　なんちゃって大魔王と両手の女神

シンと部屋の中は静まり返ってしまった。俺が大魔王と名乗ったことで、全員が引いてしまっている。息をする音すらも聞こえてきそうなほどの静寂だ。俺は声を低く落とし、できるだけ尊大な態度を取りつつ、話を続ける。

「久方ぶりに我が城に帰ってみれば、愚劣な人間どもが、城の中をメチャメチャにしておった。貴様たちは我の民を殺した。その罪は償ってもらわねばな。そうだな・・・貴様の国の民を根絶やしにしよう。我の城に侵入し、狼藉を働いた者どもは、手下どもに皆殺しにさせたが、それでは手ぬるい。おいお前！」

俺は捕虜として捕らわれている魔術師の男を指さす。

「国に帰って伝えるがいい。大魔王がお前らの国を灰にすると。しばらくの猶予をやろう。精々、怠りなく準備をするがいい。我を愉しませてくれよ？すぐに亡ぼしてはつまらんからな。城に侵入した奴らは全く骨のない奴らばかりだったので部下たちも退屈しておるところだ。この者どもを血祭りに上げたあと、お前らの国に向かう。早く行けよ？さもないと、我の方が早く着いてしまうかもしれんからな？フフフフフ」

男は完全に血の気を失っている。顔面が蒼白だ。

「外の馬を使うがいい。・・・行け！」

男は尻もちをつき、這う這うの体で外に飛び出していった。

「・・・アイツ行ったか？」

しばらくして、周りに尋ねてみる。部屋の中が大爆笑に包まれる。

「どうして大魔王だなんて言ったのですの？ビックリしましたわ」

「いや～、ラマロン軍が動揺しないかなーと思って」

「そこを狙ったにしては、随分と無理がありましたなー」

「そうか？いい芝居だったろ？」

「リノスにお芝居は無理ですわ」

「そうかー？いい演技だったと思うけどなー。だってアイツ、飛び出していったぞ？」

「侯爵様の芝居に、騙される方も騙される方ですな」

「クノゲン、ひどい言い方だな、それ」

「いえいえ、クノゲンの言う通りですわ」

捕虜たちをほったらかしにして、俺たちは大盛り上がりである。マトカルたちは鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしている。

「きっ・・・貴様は・・・何なのだ？」

「ああ、なんちゃって大魔王だ」

「ナンチャッテ？」

「大魔王でも何でもねぇよ」

「騙したのか！汚いぞ！」

「戦いに汚ねぇもへったくれもないだろう。お前らも、人のことを言えた人間じゃないだろう？」

「我々は・・・」

「上からの命令だったとは言わさんぞ。ジュカ王国は復活した大魔王が治めている地であり、そこに住まう人間たちは大魔王の手下だから皆殺しにするべきだ。そんなアホな考えに賛同してこの作戦を立案し実行したのは、お前とそこのフルチン野郎だろう？」

「・・・」

「そしてそこのフルチン野郎は、さらにゲスいぞ？首尾よくジュカ王国を併呑した後は、自分もその領地の一部を貰う手はずを整えている。貴族の子弟たちを自分の家臣にすることを条件としてな。皇国からすれば、食いっぱぐれて、くすぶっている貴族の次男や三男たちをジュカに送り込めるから、この野郎と皇国の利害は一致したわけだ」

「それでは、ラマロン皇国は・・・貴族の子弟に土地を分け与えるためにジュカ王国に・・・」

「ああ、ヒーデータ帝国と持っている悩みは同じだったということ

だ」

「何と浅はかな・・・」

「それだけじゃない。ラマロン皇国はここ数年、不作が続いていた。このままでは飢饉が発生する。その前に肥沃な土地を手に入れる必要がある。そこで目を付けたのがジュカ王国だ。ここを併呑してしまえば、当面の食糧の心配はなくなる。とはいえ、ジュカの人間たちに反乱を起こされては煩わしいから、敢えて苛烈な占領政策をすることで、反乱の目を摘もうとしたのだ」

「最悪の占領政策ですな」

「ああ。こいつらは目先のことしか考えていないから、こんなアホな作戦を思いつくのだ。お前ら俺が来なかったとして、どうやってこの国を維持していくつもりだったんだ？お前らのことだ。待っていれば本国から食料が届くと考えていたのだろう。甘ぇよ。国境付近でヒーデータとラマロンの両軍が睨み合っているのに、食糧なんざ届くわけねぇだろ」

「我が皇国はヒーデータを粉砕する！食料が届くのは間もなくのはずだ！」

「その割には、両軍ともに動きがないようだけどな」

「そこに大魔王復活、しかもラマロンの精鋭３０００が皆殺しにあったという報がとどけば・・・間違いなく、軍に動揺が走りますな」

「そうなればいいなと思うが、そこまでショボイ軍勢でないことを祈るがな」

「いや、そうもいかんでしょう。ジュカの王都を占領してわずか１０日ばかり。一国の王都をこのような短期間で占領する精鋭部隊が一夜にして、しかも３０００名もの兵が全滅したのです。そりゃあちらは焦るでしょう」

「ま、俺の知ったこっちゃないがね。焦ればラマロンの負け、焦らなければ次の策を考える。それだけだ」

俺は捕虜たちを見回す。全員、顔面が蒼白だ。

「女たちは大事な捕虜なので、丁重に扱う。安心しろ。俺たちはお前らのように獣ではない。身の安全は保障してやる。しばらくはこの王都でゆっくりとしているがいい」

そして、隣のレイリックに目を向ける。

「お前は、キツいおしおきが待っている。楽しみにしてろよ？」

ニヤリと俺は笑う。フルチン野郎は恐怖のあまり失禁していた。

夕方近くなってきたので、捕虜たちはクノゲンに任せて、俺たちは炊き出しの準備にかかる。夜の炊き出しは大好評だった。用意したカレーはクノゲンたちの夕食を確保するのが難しくなるほど、王都民はよく食べた。美味い料理は人の心を和ませるようで、人々に笑顔が見られるようになった。

炊き出しはカレーだけなので、別の人間でも事が足りるということで、早々に俺たちはお役御免となった。みんなを屋敷に返し、明日

に備えて早く休むよう伝える。明日はクルムファルから大量の食料と海産物が届く予定なのだそうだ。

残ったのは俺とリコ、メイの三人だけになった。俺は別の転移結界を用意して、三人でそこに乗る。着いたのは、王都の南門だった。

広場の死体置き場を見せないようにして、俺たちは東に向かって歩き出す。ここは、かなりの間放置されていたのだろう。ほぼすべての屋敷が幽霊屋敷のようになっていた。さすがにリコもメイも怖がってしまい。俺たちは三人手をつなぎながら道を歩いた。

ほどなくして、目的地に着いた。

「・・・大きな木ですわね」

「そう見えるようにしているんだ。今から結界を解く」

「・・・お屋敷ですか？」

「そう、ここが俺が奴隷時代を過ごした家、即ち、バーサーム家の屋敷だ」

「ここだったのですか・・・」

俺はリコとメイにどうしても俺が育った家を見せたかった。この屋敷を見れば、バーサーム家の人々の人となりを理解してもらえると思ったのだ。俺は二人の手を握りながら、屋敷の中に入る。夕闇が迫ってきているので、俺はライトの魔法で部屋の中を明るくする。ダイニングとキッチンしか残っていないが、全てはあの当時のまま、清潔な状態で保存されていた。懐かしい・・・。見ていると、あの

当時のことが鮮やかに思い出される。

上品に食事をとるエルザ様。次から次へと料理を平らげ、俺の給仕が間に合わないほどの速さで食事をするエリル。酒をガブ飲みしながら、昔の女の話を自慢気にするファルコ師匠、メイドたち・・・。ここで開催された華やかなバーティの数々・・・。不安ではあったけれど、それを感じる時間もなかったほどの濃密な時間がそこにあった。あの当時のことが走馬灯のように思い出される。

『おかえりなさい』

ふと、そんな声が聞こえた気がした。この声は、エルザ様だ。俺は思わず片膝をつき、胸に手を当てる。

「ご主人様、エルザ様。長らく留守をいたしました。リノス、ただいま・・・戻り、ました」

涙があふれて止まらない。そんな俺の肩をそっと抱く手があった。リコとメイだ。俺は思わず、二人の手を握る。軟らかく、ほのかに暖かい手だ。

リコはにっこり微笑むと、膝を折り、両手を胸の前で組み、頭を下げる。まるで神に祈るようなポーズのまま、小さな声でつぶやく。

「リノスの妻、リコレットでございます。ふつつかものですが、よろしくお願い申し上げます」

それを見たメイも同じポーズを取り、

「同じく妻のメイリアスでございます。まだまだ至らぬ点も多いですが、何卒お見守りくださいませ」

「ありがとうリコ、メイ」

二人はとても優しい笑みを讃えていた。女神が、そこに居た。

二人を伴って屋敷の外に出て、再び結界をかける。屋敷に帰ろうと振り返ってみた空には、とても美しい満月が出ていた。

「きれい・・・」

「本当ですね、リコ様」

「リコ、メイ、本当にきれいだ・・・」

俺は月明かりに照らされた二人の女神を、強く抱きしめた。

五日後、ヒーデータ帝国との国境付近に陣取っていたラマロン軍に、一人の使者が到着した。髪は乱れ、頬はこけ、目の下に濃いクマを作った、どう見ても不休不眠で走り続けた顔をしており、さらには、何かに怯え切ったような、ガタガタと体を震わせながらの到着だった。

「ち・・・注進・・・将軍様に・・・注進」

「どうした！」

「大魔王・・・復活・・・。マトカル・・・全滅。皇国・・・大魔

王・・・襲来」

そう言って男はがくりと項垂れた。この報告は上層部によって秘匿され、厳重な緘口令がひかれたが、ラマロン皇国軍上層部には激しい動揺が走ったことは言うまでもない。後にこの報告がラマロン皇国にとって予想だにしない結果を生むのだが、それはまた、別のお話。

第百十八話　王都復興への序章

王都に侵攻して一週間が過ぎた。俺たちは相変わらず、王都の復興に全力を挙げて取り組んでいる。

王都に侵攻した当初は、ここを立て直すのに、帝都から人を呼び、人海戦術でかかったとしても三年はかかるだろうと考えていた。しかし、アテにしていた帝国からの支援は皆無と言ってよく、当初の計画は見直さざるを得なかった。やるべきことはちょっと考えただけでも数十の項目が頭に浮かび、それらに優先順位をつけつつ、やれるところからやるといった感じだ。

しかし、炊き出しを開始してから三日目。ある変化があった。何と、都民の人々が炊き出しを自分たちがやると言ってくれたのだ。これはありがたかった。俺たちは食料を運ぶだけでよく、あとは集まったおばさまたちが勝手に献立を考えて、料理を作ってくれる。しかも、きちんと当番を組み、各自の役割を割り振る作業をほぼ一瞬でやってしまったのは、見事という外はなかった。

すぐさま俺たちは別の作業に取り掛かった。王都に放置された夥しい死体の処理であった。

取り合えず、フェアリードラゴンたちの鱗粉で臭いや腐敗は押さえてはいたのだが、所詮は付け焼刃に過ぎず、日が経てば腐敗も臭いも発生することは明らかだった。それを解決したのはメイだった。コラサーネという食虫植物で、生物の体中にツルを巻き付け、そこから養分を吸い取る悪魔のような植物を、その解決策に使ったのだ。

その植物はニザ公国の山奥に自生していると聞き、俺とメイはイリモに乗り、公国に転移した。そして、山に入るとその植物はすぐに見つかり、すぐさま結界に閉じ込めて王都に持ち帰った。

まず、死体が放置されている耕作地帯に植えられたコラサーネは、メイが何かの薬をかけるとすぐに根を張り、見る見るうちに死体をツルで覆いつくした。どうやら爆発的に成長を促進する薬だったようで、枯れるのも早いという欠点もあるらしいが、まさにこの環境に打って付けの薬だ。住宅地に被害が及ぶことは避けたいので、耕作地全体に結界を張って様子を見た。一晩経つと、そこは見事な花畑となっていた。

その咲いた花を、フェアリードラゴンたちがあっという間に食い尽くした。実に味わい深い豊潤な味だったと感想を聞いたが、俺にはよくわからない。

そしてさらに一晩経つと、コラサーネは見事に枯れていた。これを見て俺たちはラマロン兵の死体を集め、そこにコラサーネを植えた。二日後、そこには彼らが着用していた鎧と兜と刀だけが残されていた。それらの一部は俺たちが頂戴したが、余った大多数の鎧や兜は鉄クズ同然であったため、俺は王都民に希望があれば持ち帰って構わないと触れを出した。結局、彼らの鎧兜は一日できれいに全てが無くなっていた。後にそれらは王都の城門だけでなく、王都民の住居や店舗、果ては馬車などにも転用され、王都や王都民の防御力向上に一役買うことになるのだった。

その作業と同時並行してメイは、黄金鳥の研究も行っていた。鳥たちは結界の中で相変わらず喧しい声で鳴き倒していたが、メイは全く意に介せず鳥を捕まえるといきなり解体し始めた。そして、肉が腐るのをものともせず、鳥の研究にかかった。

待つこと一時間、数羽の黄金鳥を実験台にしたメイが、笑顔で俺に振り返る。

「ご主人様！これはとても珍しい個体です！なにしろサウナワースが体内を循環していますので、比較的シャリナオス現象が起こりやすくなるんですね！なるほどです。これはよくできていますよ。だから、リンクケージットさえ上手くできれば・・・。ただ、インワットでもいいかもしれません。・・・いけます！」

「・・・ああ、そう。・・・大体わかった。大体わかったよ、うん。黄金鳥は、任せるよ・・・」

「ハイ！」

ものすごい笑顔で、うれしそうにメイは返事をする。一抹の不安がないわけではないが、たぶん、おそらく、きっと大丈夫だろう。

その後、メイは黄金鳥にエサをやりつつルノアの森を徘徊、もとい、探検している。黄金鳥を飼育するにあたり、彼らの生態をもう少し詳しく知る必要があるのだという。基本的に結界を張ってあるし、位置についてはマップで確認できるので心配はしていない。ちゃんと晩御飯までには帰ってくるしね。

食料の心配がなくなり、おびただしい死体も処理された王都は一気に活気が蘇りつつあった。基本的に老人と子供、そして女性しかいない街であったが、皆、それぞれがこの街を立て直そうと動き出している。

特に老人たちが元気だ。昔取った何とやらで、大工仕事などはおじ

いちゃんが張り切ってやっている。耕作地もメイが調べた結果、全く問題ないことがわかったので、早速種を蒔き、井戸から水をやる光景が見られるようになった。

てっきりラマロンの兵士たちに蹂躙されたと思われていた若い女性も、意外に多くいた。何でも家や倉庫の屋根裏に隠して急場をしのいでいたのだとか。これは、これも俺たちの到着が遅れていれば、さらに悲劇が拡大していた可能性も高かった。

基本的に王都の警護はクノゲンたちが担い、今のところ大きな問題は起きていない。彼らが寸鉄を帯びずに冒険者風の格好をしているせいか、王都民からは完全に受け入れられている。元々彼らの多くが、帝国の次男・三男であり、基本的にイケメンである。それもあって、女性たちからのウケも上々で、その中には早くも若い女性からお弁当を作ってもらうヤツもいるらしい。まあ、愛が育まれることは良いことなので、今のところは静観している。

女と言えば、ラマロンの被害にあった女性たちの問題が、かなり深刻なものだった。近隣の村や町から攫われてきた女たちも既に被害にあっており、一筋縄ではいかなかった。メイもさすがにこれには対処する方法を持たず、この問題は暗礁に乗り上げるかに思えた。

それを救ったのは、何とポーセハイたちだった。

「黒の医師」とクルムファルで異名をとる彼らにも支援を命じたところ、腕利きの医師４名を転移させてきた。そいつらに王都民の健康管理を任せるついでに、女たちのことについて相談すると、フェアリードラゴンの鱗粉で記憶を消すこともできるのだと教えてくれた。

早速サダキチに相談したところ、それはフェアリのような上位種でないと無理なのだという。そこでフェアリに相談したところ、かなり迷いながらもやってみると答えてくれた。

早速女たちを屋敷に転移させて庭に集める。そして、フェアリと女たちを結界の中に閉じ込める。動けない女や錯乱している女も無理やり連れてきたので、結界の中がかなりの騒動になっている。その中にあってフェアリは彼女らの上空をパタパタと飛び回っている。

しばらく飛んでいたフェアリだが、突然彼女の体からまばゆい光が放たれた。やわらかな光がやさしく女たちを包み込む。光が収まるとそこには、倒れた女たちとフェアリの姿があった。

「おいフェアリ！しっかりしろ！」

「ううう・・・」

よく見ると羽がボロボロになっている。すぐさま俺はフェアリにアルティメットヒールをかけ、羽を修復してやる。

「無茶するな！」

「イメージ通りの粉を作ろうと思ったらついつい力を入れすぎちゃった・・・」

「でも、そこまで頑張るフェアリは偉いぞ！」

俺はフェアリを抱っこして、頭を撫でてやる。

「エヘヘ・・・」

嬉しそうにフェアリは笑う。何とも癒される笑顔だ。彼女も、人間ならばかなりの美少女であるに違いない。

女たちは丸一日眠り続けた。そして、目が覚めると、大半の女は見事にラマロン兵の記憶が消えていた。しかし、錯乱していたり完全に精神が崩壊していたりした女は、自分の名前すら忘れている記憶喪失の状態になっていた。フェアリはかなり落ち込んでいたが、これは彼女を責められない。どうやら記憶を失った女たちは、家族もラマロンに殺されてしまったなどの理由で、天涯孤独な人たちばかりのようだ。まだ若い彼女たちは、新たな人生を王都で歩み出すしかないのだ。

ちなみに、ラマロン兵たちからの被害にあった女性たちは、俺のエクストラヒールのおかげで全員生娘に戻っていたことを俺が知るのは、まだ随分先になってのことである。

今は、それぞれがそれぞれの生活を取り戻すのに精いっぱいの状況だ。俺は毎日王都に顔を出し、問題点を吸い上げ、その対策を考え、実行に移すという日々だ。リコ、ペーリス、フェリス、ルアラたちも交代で俺の仕事や王都民のサポートをしてくれている。ありがたい限りだ。

しかし、何と言っても、王都民のたくましさが、俺にはとても頼りになる。皆が自主的に集まり、問題点を議論し、その場で解決していくのだ。まだ、陳情のような要望が少ないのは、そのお陰でもある。

この王都でのやりとりが、将来思いもしなかった光景を生み出し、全世界が驚愕することになるのだが、今の俺はそれを知る由もなか

った。

第百十九話　反則的エロとの闘い

豪華なシャンデリアが吊るされ、フカフカのソファーが置かれた応接室。そのテーブルの上に美味しそうなクッキーがあり、その横には温かい紅茶が入れられている。

ヒーデータ帝国の最高級ホテル、帝都ホテルのスィートルームの応接室に、俺とリコは来ていた。さすがにスィートルームだけあって、クッキーも紅茶も一級品の味わいだ。このところ忙しい日々を過ごしていたので、こういう甘味は体の疲れを癒してくれる。

「お待たせしました」

いそいそと現れたのは、サイリュースのソレイユとアステスだ。二人ともいつものようにエロい格好である。突然に訪問したため、二人とも慌てて準備をしたのだろう、アステスの衣服に乱れが見える。そんな様子を微笑ましく思いながら、俺はゆっくりと口を開く。

「突然に訪問しまして申し訳ありません」

「一体どうされたのでしょうか？」

ソレイユは精いっぱい余裕を見せようとするが、緊張の面持ちは隠せない。

「陛下に報告ごとがあったので帝都に参りました。本当は明日来ようと思っていたのですが、思った以上に報告が早く済んでしまいましてね。折角ですので本日伺った次第です。ソレイユさんたちには、

報告が一つと、お願いが一つあります。」

二人は同時にごくりと唾を飲み込んでいる。

「まず、報告ですが、ジュカ王国の王都を陥落させました」

「ふぇいあ？」

ソレイユが声にならない声を上げる。思わず顔が真っ赤になっている。そんなソレイユを横目に、アステスが身を乗り出してくる。

「こ・・・侯爵様。我々がお願いに上がってから、二週間ほどになりますが・・・。どういうことでしょう？」

「ええ、俺が一軍を率いて王都を陥落させました」

「皇国最強のマトカル様が率いた軍を撃破されたのですか？」

「ええ。マトカルとその近習の女性たち、結界師2名、と魔術師3名は我々の捕虜になりました」

「リノス、あと一人いますわ」

「ああ、そうだったな。フルチン・・・いや、副団長のレイリックも捕虜にしました」

余りに衝撃的過ぎたのか、二人は口をあんぐりと開けたまま呆然としている。だめよ、女の子が口開けたままってのは。ソレイユがパクパクと口を動かしながら声を振り絞る。

「そ・・・それでは、お味方にも相当の被害が出たのでしょうね」

「いえ、皆無です」

「は？」

「我々の手勢３００名は一人の死者も出すことなく作戦を完了させました。ちなみに、ラマロン側の被害は、総数３０１９名のうち、死亡３０１１名、捕虜7名、逃亡１名です」

またしても二人はあんぐりと口を開けたまま動かなくなった。ま、そりゃそうだよね。まさか最強と信じていた部隊が、わずか３００の部隊に完封されるなんてことは、普通はありえないよね。

「話を続けますね？もう一つのお願いというのは、サイリュースの里に我々を案内してほしいのです」

ルノアの森でのサイリュースの里の位置は大体つかめていた。しかし、何度行っても里は見当たらず深い森ばかりが続いていた。調べてみるとどうやら、精霊たちが里全体を守護しているようで、外部の者を近づけない仕様になっているらしい。そこで、ソレイユたちに案内をお願いしに来たのだ。

「・・・それはお安い御用です。それでしたら、明日一日お時間をいただけませんでしょうか。我々の食糧を調達してまいります。お気遣いくださいますな。我々もこのような素晴らしい部屋を使わせていただいておりますので、必要なものは自分たちで用意いたします」

「ああ、大丈夫ですよ。たぶん食料は必要ないですよ？」

「どういうことでしょう？」

「半日あれば十分です。これから参りましょう」

「こ、これからですか？」

「ええ、これから」

二人は目を丸くして驚いている。俺とリコはソレイユたちを伴って隣の部屋に移動する。

「よし、ここに結界を張ります。あ、このことはご内密にお願いしますね？世間にバレるといろいろややこしいので・・・」

素早く転移結界を張り、四人でその上に乗る。瞬間的に周囲の景色が変わる。転移した先はルノアの森の中であり、目の前にはメイがいた。

「ご主人様、お待ちしておりました」

「紹介します。妻のメイリアスです。彼女が集落の土壌調査を行います」

「メイリアスです、よろしくお願いいたします」

「よ、よろしくお願いします。あの・・・ここは・・・」

「ジュカ王国、王都の北に位置するルノアの森の中です」

「え?え?何で・・・?」

ソレイユたちはキョロキョロとあたりを見渡して落ち着きがない。

「ホテルの部屋からここに転移しました」

「転移・・・って・・・」

「俺の本職は結界師です。結界スキルはレベルを上げると転移結界が張れるようになります」

「一瞬でここまで・・・これなら、マトカル部隊が敗れたのは、納得がいきます」

ソレイユは目を丸くして呟いている。

「基本的にこのスキルは秘密です。俺の家族や部下を除いては、ヒーデータ帝国の中でこれを知っているのは、皇帝陛下のみです」

「ツ・・・わかりました」

スキルの説明もそこそこに、俺たちはサイリュースの集落を目指した。

集落はすぐ近くにあった。俺たちの目には深い森が見えているだけなのだが、そこに漂う瘴気が尋常ではない。このまま進めば多大な犠牲を覚悟しなければならないレベルだと本能が告げてくる。

「ここが入り口です。ちょっとお待ちください」

ソレイユが何やら呪文を唱えている。すると、目の前の景色がどんどんと開けていく。そして現れたのは、森の中を切り開いた小さな集落だった。

集落の真ん中に火がメラメラと立ち上っており、キャンプファイヤーのようだ。そしてその奥にはちょっと大きめの池が見える。

「ソレイユ様！」

集落を見回していると突然、声がする。辺りを見回していると、木々の上からサイリュースたちが羽を使って降りてくる。

「おかえりなさいませ！」

「ただいま帰りました。サクトス、アイセル、留守中、変わったことはありませんでしたか？」

「王都の方から濃い血の匂いが参りましたが、その他は特に・・・」

「そう、それは良かったわ。早速で悪いのですが、皆を集めてもらえますか？バーサーム様をお連れしたのです」

「まあ・・・それは・・・わかりました。お待ちくださいませ」

サイリュースの一人が何やら呪文を唱えると、彼女の周りに羽の生えた小人が現れた。皮膚の色が薄い緑色であり、髪の毛は濃い緑色をしている。彼女たちは森のあちこちに飛んでいった。

「彼女はサクトス。森の精霊を操る者です」

「サクトスです。以後お見知りおきをくださいませ」

「森の精霊・・・？」

「森の精霊は、森の木々と会話をすることができます。彼らを味方につけているお陰で、我々は何とか守られているのです」

「このサクトスは森の精霊、そしてアイセルは水の精霊を操ることに長けています。その他にも風の精と土の精を操る者もおります」

「なるほど、この環境であれば、何とか生きながらえることは出来ますね」

そんな会話をしていると、次々と木の上からサイリュースたちが舞い降りてきた。

「ソレイユ様、おかえりなさいませ！」

背中に羽の生えたサイリュース３０人、しかも、全員がエロい。身に付けているのは、白い布を巻き付けたような衣装なのだが、皆、胸が大きい。しかも、光の加減でその胸が透けて見える。何という、ツボを押さえた、憎い演出であろうか。しかもこれが狙っている様子が全くなく、全員が素の状態なのだ。全く意識せずにこんな無防備な状態を見せられると、エロさが際立ってくる。

理性が飛びそうになった俺は思わずリコの手を握る。リコも、ものすごい力で俺の手を握り返してくる。そんな中、一人のサイリュースが俺たちの前に進み出る。とても清楚な雰囲気を漂わせ、凛とした知性を湛えた美女だ。この人は巨乳ではなく、どちらかと言えば美乳の部類に入るだろうか。なぜわかるか・・・。チラチラと透け

て見えるからだ！

「バーサーム様、ようこそお越し下さいました。族長のヴィヴァルと申します。サイリュース一族を代表して、歓迎申しますわ」

「あ、ありがとうございます。どこまで力になれるかは分かりませんが、お話だけは伺います」

「どうぞこちらにお越しくださいませ」

クルリと背中を向けて俺を案内するヴィヴァルだが、お尻も透けているので丸見えである。しかし、俺は耐えきった。リコが握りしめている手が悲鳴を上げているからだ。骨がミシミシ音を立てている。

集落のちょうど中心に据えられている焚火の所に案内される。そしてヴィヴァルらサイリュースは俺たちを囲むように控えている。

「この度は我が娘、ソレイユの願いをお聞き届けくださり、感謝申します。早速でございますが、この我らの耕す畑、これが何とか作物が実るようお知恵を借りたく存じます。今は森の精気を糧としておりますが、それも限界が近くなってきております。何卒、よろしくお願い申し上げます」

火に照らされてヴィヴァルとその周囲の方々の体が完全に透けて見える。しかも、全員屈んで俺に頭を下げたので、中身が完全に見えてしまった。ああ・・・キレイな体や・・・みなさん、ええもん持ってはりますわ・・・アカン、もう、ホンマに、あきませんわ～。

「それでしたら、私が・・・」

不意にメイが立ち上がり、颯爽と畑に入っていく。それに釣られてヴィヴァルたちサイリュースもメイに付いていった。ようやく俺は、蛇の生殺しの状態から脱出することができた。

「リコ・・・こん」

「寝かしませんわよ！」

ものすごい食い気味で返事をされる。

「あんな女たちに、負けませんわ！」

「そうだ。リコの肌に勝てる女など早々は・・・でも、」

「でも、何ですの？リノスへの愛情は誰にも負けませんわ！」

「いや・・・そうじゃなくて、サイリュースたちは・・・」

「何ですの？」

「その・・・全然毛がないんだな」

「・・・屋敷に帰ったら、私も・・・きれいにしますわ！」

リコの手にさらに力が加わる。痛い！痛い！折れる！折れる！大丈夫だから・・・リコはそのままでいいから・・・と必死に俺は骨が折れる一歩手前の痛みと闘いながら、声を振り絞った。

第百二十話　ひきこもり女、出て・・・来ちゃった

「ご主人様、この森の土を調べたのですが、ここの土はダメです」

メイが何とも言えない顔をして帰ってきた。

「どうしたんだ？」

「ここの土は細かいのに加えて、ジメジメしています。それに団子状になっている部分も多いので、これでは作物は育ちません」

「何とか手はないのか？」

「そうですね・・・方法はなくはないのですが、森の木々を伐採する必要があります」

「それは・・・絶対に出来ぬことです」

後ろからヴィヴァルたちサイリュースが帰ってきた。再びリコの手に力が入る。

「そんなことをすれば我らを守りし森と森の精霊の怒りを買います。我らは森の木々を切り倒す時には、精霊を通じて木たちに相談をするという条件でこの地に留まらせていただいています」

「う～ん、難しそうだな」

「この土の水分が無くなれば、耕作を行うことができます。あとは

排水がうまくできれば、問題なく耕作ができるのですが・・・」

「俺が毎回土魔法で耕すというのも、非効率的だからな・・・」

「イリサルが悪いのです。あの者が精霊をうまく扱えないからですわ」

俺とメイが悩んでいるところに、サイリュースの一人が声を上げる。

「お黙りなさい、サキトラ。イリサルを責めてはなりません」

ヴィヴァルが窘める。

「イリサル？」

「我が一族の中で唯一土精霊と契約できる者です。ラマロンでは問題なく土精霊と契約で来ていたのですが、こちらでは契約はできても、なかなかうまく使役できていないのです」

「なるほど。で、そのイリサルさんは・・・」

ヴィヴァルは俯く。そして、申し訳なさそうに

「イリサルは・・・自分の不甲斐なさに絶望して、家に閉じこもっているのです」

どうやらここにもひきこもりがいるらしい。

「イリサルが土精霊を使役していたころは何とか作物も採れたのですが、今では全く実らなくなってしまったのです」

「なるほど。それで俺のところに・・・」

取りあえずイリサルの家に行ってみることになった。彼女の家は木の中だという。

「この、すでに枯れた大木の中でイリサルは暮らしています。ここ数ヶ月は全く姿を見せません。元々好奇心の強い子で優秀だったのですが、こんなことになるとは・・・。族長として責任を感じております」

そういうとヴィヴァルは、枯れた大木の下に行き、腰を折って座った。どうやらあそこが家の入口のようだ。

「イリサル。バーサーム様がいらして下さいました。あなたの助けになると思います。一度、お話ししてみてはいかがですか？イリサル？イリサル？」

木の中からは全く反応がない。完全なるひきこもりがいるようだ。

「バーサーム様、本当に申し訳ございません。私の育て方が至らぬばかりに・・・」

「いえ、族長さまの育て方は関係ないと思いますよ？」

「と、おっしゃいますと？」

「う～ん。上手く言えないですけど、持っていき方次第だと思うんですが・・・」

俺はズカズカとイリサルの住まいに進む。よく見ると、小さなドアが見える。どうやらここが入り口で間違いなさそうだ。

「え～オホン。折角ですから皆さんに、一つ昔ばなしをお話ししましょう！」

俺はあえて大声を出して喋る。サイリュースたちは呆気にとられている。

むか～しむか～し、ある所におじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんは山に柴刈りに行き、お婆さんは川に洗濯に行きました。おばあさんが川で洗濯をしていると川上の方から大きなモモがどんぶらこ～どんぶらこ～と流れてきました。おばあさんはそれを見て大喜び。早速家に持って帰ったのでした。

家に戻ったおじいさんは大きなモモを見てビックリ！

「おお婆さん、何と大きなモモじゃ」

「川で拾ったんですよ、おじいさん。二人で食べましょう」

おばあさんが台所から大きな包丁を持ってきて、桃を切ろうとしたその時、

「ばあさん、待て。・・・お前、ばあさんではないね？・・・誰だえ？」

「フッ、フフフフフフフ・・・流石は『疾風の権蔵』、騙されぬか。しかし、雉も鳴かずば撃たれまいに！！！」

おばあさんの体がドンドン大きくなっていきます！何とおばあさんが巨大な鬼になったではありませんか！ど～なるおじいさん！！！

続く！ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ！！

「・・・さて、この続きは、あちらで申し上げることにしましょう」

スタスタと俺は歩き出す。

「待て！待って！！」

振り返ると、大木の幹から、かわいらしいサイリュースが顔を出していた。

「おじいさんは、どうなったの～～～！！！」

「・・・お前がイリサルか？」

「・・・おじいさんは？」

女は木の幹の穴から顔だけを出している。

「俺の質問に答えたら、教えてやる」

「・・・」

「土の精霊が言うことを聞いてくれねぇのか？」

プイッと女はそっぽを向く。

「まあ、そうだとしたら、気持ちはわかる。俺もあった。どれだけ誠意を尽くし、どれだけ説明しても言うこと聞いてくれないヤツがな。そんな奴と話するのは疲れるわな」

女に反応はない。

「そんな奴とは付き合わないって選択肢があるぞ?他の土の精霊いないのかよ?」

「・・・ノームだから無理」

「ノーム?」

ヴィヴアルに言わせると、ノームは土の精霊の中でも最上位の精霊なのだそうだ。

「ほう、そんな最上位の精霊を従えるなんざ、えれぇじゃねぇか。お前さんすごいじゃないの」

「・・・ヘタクソとかバカとか言われた」

「そうか~一生懸命やってんのに、それ言われたらキツイわな。一生懸命やってるけど、バカだなんだと言われるとヘコむよな~俺もあったあった」

俺はファルコ師匠との修行のことを話してやる。

「で、お前さんはおそらく、この一族に負い目を感じているんだろう？」

再び女は俯く。

「優しいな。お前さんは」

「優しい？」

「優しいじゃないの～。一族のことを考えて頑張って頑張って頑張ったんだ。それで自分が不甲斐ないと思ったんだろ？族長様たちがやさしい言葉をかけてくれたけれど、それも負い目になったたんじゃないか？そこまで自分の責任としてしょい込めるのは、優しい証拠だわな」

「・・・」

「もしかして、土の精霊とこれからうまくやっていく自信がないんじゃないのか？」

ギクッとした表情を女は浮かべる。

「だよなぁ。わかるわかる。不安だわな。でもな、その不安が無くなる方法があるんだが・・・聞く？」

女はしばらく考えた後、コックリと頷いた。

「以前な、色々なことを考えすぎて不安に苛まれている人がいた。その人もすごく優しい人だった。まあ、心が繊細だったんだな。優しくて繊細な分、不安を感じやすかったんだ。で、その不安に負け

ていたんだ。その人はな、ひたすら自分に「強気で行くんだ」って声をかけたんだ。するとどうだ、今はとても強気になって、不安に苛まれることが無くなったんだ。優しさと強さを兼ね備えた、すばらしい人物になってるんだ」

女はキョトンとした顔で俺を見ている。

「お前さんは優しい。だけど、不安に負けてしまう弱さがある。強い言葉を言い続ければ強くなれるもんなんだよ。まあ、俺の言うことは絶対じゃない。別に俺の言うことが受け入れられなくても構わない。お前さんの信じる道を行けばいい。まあ、参考になればいいってところかな」

俺はヴィヴアルの方に振り返る。

「族長様。彼女がひきこもったのは、族長さまのせいではありません。この人と土の精霊が合わなかっただけです。きっとこの人に合う精霊があるんじゃないですか?その精霊を操らせてみてはどうでしょう」

「たっ、確かにイリサルは火の精霊も操れますが・・・」

「ならば一度、火の精霊を本格的に操らせてみてはどうでしょう?よければそれでよし、ダメならば別の手を考えればいいのです。彼女は今の精霊との仕事はとてもつまらないものだと思いますよ?それを敢えてやらせるのは、彼女にとって負担以外の何物でもありません。誰か、土の精霊を操れる者はいないのですか?」

「・・・それは・・・何とも」

「ご主人様・・・」

メイが申し訳なさそうに話しかけてくる。

「一度、私にその土の精霊と話をさせてもらえないでしょうか？」

「どうしたんだメイ？」

「ええ、一つ提案がありまして・・・。土の精霊の協力が得られないかと思ったんです」

「おい、イリサル。俺の嫁と土の精霊と話をさせることは出来るか？」

「たぶん、無理だと思う」

「何でだ？」

「土の精霊は、私を嫌ってる。二度とお前の下には現れないと言われたから」

うーん、打つ手なし・・・か？

頭を悩ませる俺の後ろで、サイリュースたちがひそひそと話をしている。不覚にも俺は、それに気が付かなかった。

「・・・半年近くも誰とも話さなかったイリサルと、いとも簡単に話をするなんて・・・」

「ええ、かなり優秀な人物ですわ」

「ならば、合格、ですね」

「あの計画を早めてもいいんじゃないかしら？」

「そうね。無理してでもこれは、急いだほうがいいかもね」

数名のサイリュースが含み笑いを浮かべていた・・・。

第百二十一話　召喚された精霊たち

ノームは土の精霊では最上位に位置する種族であり、かなり知性が高い。イリサルは懸命にノームと対話しようと試みたが、あまりに高度な話をされるために、なかなか話が理解できなかったのだという。そして逆に、ノームの方が呆れてしまい、一方的に契約を打ち切られたのだという。

「う～ん、何とも言えんなぁ」

「・・・いつもバカだの、そんなことも知らんのか！とか言われて、辛かった」

「ああ、わかるわ～。俺も新入社員の頃はそうだったなぁ・・・」

そうだそうだ。一番最初に付いた上司がそんな人で、就職した当初は会社に行くのが嫌で嫌で仕方がなかった。ただその人は意外に優しいところがあったので、なんとか俺も耐えられたのだ。今思い出した。

「それはノームが悪い。しかし、まあ、そんな奴はどこにでもいる。一番大事なことは、そいつらにナメられないことだ。イリサル。残念ながらお前はノームにナメられていた。だから罵詈雑言を浴びたのだ。ナメられちゃぁイカン！」

「ハイ・・・」

「簡単だ。『なめんなよ！』って自分に言い続けろ。そうすればナ

メられない雰囲気を纏える。いまから一時間、大声でその言葉を繰り返せ」

「・・・やってみる」

イリサルは再び大木の中に姿を隠した。しばらくすると凄まじい怒号が森の中に響き渡る。

「舐めんなよコラァ！舐めんなよコルァ！舐めんなよコルァァァ！舐めんじゃねぇぞぉぉぉ～～～！！！！」

ヴィヴアル達の顔が引きつっているが、見なかったことにする。

サイリュースたちを放っておいて俺たちはメイの案内で、彼女たちの耕作地を見せてもらう。

「・・・かなり水分が多いな。ぐちゃぐちゃだ」

「これだけジメジメとしていては、作物は育ちません。木を伐採して、太陽の光が入ればいいのですが・・・」

「それは無理だと言っていたよな？」

「ええ。ですから、この条件で作物を育成させていたあのサイリュースの苦労は、並大抵のものではなかったと思います」

「精霊使いとしては優秀だったんだな」

「そう思います」

メイが認めるのであれば、本当に優秀なのだろう。集落には相変わらずイリサルの怒号が響き渡っている。何だか、かなり迫力が出てきたような気がするが、気のせいだろうか。

そんなことを考えていたら、後ろのサイリュースが何やら騒がしい。振り返ると、集落の中心に焚かれていた火が勢いを増しており、でかい火柱になっていた。

よく見ると火柱の先には、真っ赤なトカゲのような生き物が辺りをキョロキョロと見回していた。

「サラマンダー！サラマンダーだわ！」

「誰が召喚したの？誰？」

サイリュースたちが喧しい。取りあえず俺たちは火元に向かう。

「この俺を呼びゃがあるのは、どこのどいつだー」

サラマンダーと呼ばれるトカゲが叫んでいる。

「まさか、サラマンダーが召喚されるなんて・・・」

ヴィヴアルが戦いている。

「何です、あのトカゲは？」

「サラマンダーという火の精霊です。火精霊の中では最高ランクの精霊です。火が消えるとサラマンダーも消えてしまいます。みんな、薪を持ってきなさい！」

よく見ると、燃やしてあった薪が真っ黒になり、このままでは消えてしまいそうになっていた。サイリュースたちに呼び出された森の精霊たちが、あちこちの木の上から薪を持ってくる。それをサイリュースたちがドンドンと火の中に投げ入れていく。

「ウハハハハ！召喚門にぬっと顔を出すと、中の町の両側から新薪の雨がふ～る～よ～だ～」

サラマンダーはご機嫌である。

「一体誰が呼び出したんですかね？」

「おそらく、イリサルですわ」

「イリサル？」

「あの子は土の精霊と火の精霊が召喚できます。以前、火の精霊を召喚しましたがとても位が低い精霊でした。土の精霊はノームという最上位が召喚できましたので、ノームと契約したのですが・・・。まさかサラマンダーを召喚するとは・・・」

「おい、どうでもいいが、俺っちを呼びゃがったのはどこのどいつだ！おう、俺っちは気が短っけぇぜ。早くしねぇな」

「誰か、イリサルを呼んで来なさい！」

ヴィヴァルの絶叫にも似た声が集落に響き渡る。

「族長さま、そのように慌てなくても・・・」

「サラマンダーを怒らせると、この辺一帯が火の海になります。あの精霊を怒らせてはなりません」

取りあえず俺は、周囲に結界を張っておく。しばらくすると、ものすごい形相をしたイリサルが引きずられるようにして連れて来られた。

「オウ、お前ぇか、俺を呼びゃがったのは！」

「知らねぇよ！しかし、召喚されてくれたのはありがたい！アタシと契約してもらうよ！」

「ほほぅ。いい面付きをしてるじゃねぇか。気に入ったぜ。契約してやらぁ。その代り、退屈はイヤだぜ！」

サラマンダーがすっと消え、イリサルは一瞬体に炎を纏った。そして集落は何事もなかったかのように以前の姿を取り戻した。

「イ・・・イリサル」

「大丈夫。私は大丈夫だよ。族長様。大声を出した弾みに、ＭＰが漏れたのかもしれない。でも召喚できたのは幸いだった。・・・ちょっとノームの所に行っていいかい？」

スタスタとイリサルは畑の方向に向かって歩き始めた。俺たちもその後に従う。畑に着くとイリサルは何やら呪文を唱え始めた。しかし、何の反応もない。それでも彼女は力を籠めるようにして呪文を唱えている。

すると、彼女の体から炎が噴き出された。尋常じゃなく熱い。しかし、その炎で周辺にいるサイリュースたちの体が透けて見える。エロい・・・。あの人など全部見えてしまっている・・・。ヤバイ、理性が・・・。

「やかましいのぅ！さっきから！！お前とは会わんと言ったじゃろうが！！」

しわがれた声が森に響き渡り、俺はその声で理性を取り戻す。よく見ると、イリサルの足元に小さい、スコップのようなものを持った老人がいた。

「ジジイ！アタシもアンタに用はない。アンタに用があるのはあの人たちだ！」

「なんじゃとこの小娘！誰にものを言っとるんじゃ！よーし、儂ゃ怒ったぞ！この森の畑を丸ごと・・・」

「少々恐れ入ります」

メイがイリサルの後ろからノームに声をかけている。メイ、熱くないのか？

「何じゃお前は！」

「私、メイリアスと申します。ノームさんに一つ提案がありましたので、イリサルさんに呼び出していただきました」

「ああん？提案？」

「ここの畑って、水分が多いですよね?この状態だと作物は育たない・・・」

「それを何べんもコイツに言っとるんじゃ!水分を取り除けと!」

「そうですよね。わかります。それで、ここの水分が取り除ければ作物は実りますよね?」

「ああ、自信はある」

「私の方で、コングライリットを製作します。それをマクストリカ方法で土に入れて、その後、レイタンス方法で土をならしていくのはどうでしょう?」

「ホウ、お前は話せそうじゃな。しかし。マクストリカをするのであれば、コワイカンスが必要じゃぞ?」

「それは私が作ります」

「材質は?」

「メンサの木です」

「いや、ジュゴカンの木、しかも、白い部分が一番いい」

「なるほど、乾燥しますものね!それを作って・・・」

「それでじゃな・・・」

・・・何やら二人で盛り上がっている。ジジイの方は「そういう手

があったか！」「そうじゃ、それがええのう！」と嬉しそうに喋っている。本当に嬉しそうだ。

「・・・イヤな老人ですわね」

「リコ、言ってやるな。久しぶりに若い女としゃべるんだ。その気持ちは、察してやろう」

「・・・アタシも若いんだけどな」

「イリサル、君は、若すぎるのだよ。お姉さんたちみたいに、胸が膨らんでくれれば、ジイさんの態度も変わると思うよ」

イリサルは分かったような、分からないような顔をしている。そしてその隣でリコは何故か俺を睨んでいる。

「ご主人様、この畑は何とかなりそうです。今からお屋敷に帰ってその道具を作ります」

「メイちゃん、まずはこの土が乾ききってからじゃから、ゆっくりでええぞ。ゆっくりで」

「ハイ、ノームさん」

「エヘヘ。メイちゃんはかわいいのう」

エロジジイが・・・メイに鼻の下を伸ばしてやがる。ダメよ、メイは俺の嫁なんだから！

「土を乾かすんだろ？わけないよ？」

突然イリサルが呟いて、畑に向かって何やら呪文を唱えている。すると、サラマンダーが現れ、畑の真ん中で寝そべり出した。その瞬間、畑からはユラユラと煙が立ち上がっている。

「まあ、こんなものだぁ！」

サラマンダーは得意げに叫んで、姿を消した。調べてみるとそこは、先ほどまでのジメジメとした土ではなくなっていた。

「ほ～う。これなら、いい作物が出来そうじゃな。お前、ヤルではないか」

ノームのジジイが満足そうに微笑んでいる。

「でもここは湿気が多いので・・・」

「そうじゃな。メイちゃんはそのまま道具を作ってくれるといいのじゃ」

「わかりました」

「じゃあメイちゃん、何かあれば呼んでくれい」

「ハイ」

そう言ってノームは消えて行った。その後、メイから今年の秋の収穫を目指して畑を作り替えていく説明をしてもらった。ヴィヴアルをはじめサイリュースたちも安堵しているようだ。

「さ、リノス、あとはメイに任せて、帰りますわよ。」

「え？帰るの？」

「帰るんです」

俺はメイとサイリュースたちに一旦屋敷に帰ることを伝えて転移結界を張り、屋敷に帰った。

着いた途端、リコに腕を掴まれ、すごい力で引っ張られるようにして部屋に連れて行かれる。

「リ、リコ。まだお昼前だよ？」

「それが何か？」

「せめて昼飯を食べて・・・」

「ダメです！」

「落ち着けリコ、落ち着いてくっ・・・」

乱暴に唇を奪われた俺は、そのままベッドに押し倒された。

第百二十二話　賢者・リノス

何時間経っただろうか。既に日は落ちていて、部屋の中は真っ暗だ。そんな中でも、リコの白い肌は確認することができる。

静かだ。物音一つしない静寂の中で、リコの小さな寝息がかすかに聞こえてくる。俺はリコのかわいらしい顔を撫でた後、体を起こして服を身に付け、ダイニングに向かった。喉がカラカラに乾いていたのだ。

「あれ？お戻りだったんですか？」

俺の姿を見て、ペーリスが目を丸くしている。彼女は食事の準備をしているようだ。まだ、晩飯前みたいだ。

「ああ、ちょっと前にね。悪いけれど、冷たい水をくれないか」

キンキンに冷えた水を一気に飲み干す。美味い。水の粒子が体の細胞の一つ一つに染みわたっていくようだ。

「ご主人様～」

パタパタとフェアリが飛んでくる。フェアリを抱っこしていると、フェリスとルアラが帰ってくる。続いてゴンも戻ってくる。そして最後に、メイが戻ってきた。サイリュースたちへの説明は済み、今後の畑の耕作計画もまとめてきたのだと言う。そして、ソレイユたちは帝都ホテルに帰ったのだそうだ。ラマロンとの戦いが一段落するまで捕虜として過ごすつもりらしい。メイはその二人も転移結界

で送ってきたそうだ。

「別に捕虜になる必要ないんだけどな。まあ、すまなかったな、メイ」

「いいえ。転移するだけですから、全く問題ありません。ところで、リコさまは？」

「ああ、今日は疲れていて部屋で寝てるんだよ。ペーリス、済まないが、起きた時に食べられるサンドイッチでも作ってくれないか？あ、それと、冷たいお水も入れてやってくれ」

「かしこまりました」

ペーリスが見事な手際でサンドイッチを作り、小さいバスケットに入れてくれる。その準備が整ったのを確認して、俺たちは夕食を食べる。

皆で今日あったことを報告し合う。フェリスとルアラはジュカの王都での炊き出しの話だ。二人とも男連中に人気があるようで、どっちの炊き出しの列に人が並んだかを張り合っている。ペーリスも、暇を見つけて王都に行くという。彼女のお陰で、王都民は完全に胃袋を掴まれつつある。ゴンについても、クルムファルとニザの畑を管理してもらっているが、今のところ全く問題はなく、夏の収穫も問題なくできそうだという。これも一安心だ。

美味い料理に舌鼓を打ち、デザートを堪能する。そして、食後の後片付けが終わった後は、皆思い思いに時間を過ごしている。

俺はメイと共に離れに向かう。

「メイは今日も研究室か？」

「いいえ。材料が揃っていないので、作業は明日からにしようかと思っていますが・・・」

「風呂入るけど、一緒に入るか？」

「・・・ハイ」

顔を真っ赤にして答えるメイはとてもかわいらしい。俺はリコの夜食と水を部屋に運ぶ。まだリコはスヤスヤと寝息を立てていた。それを見て、風呂に向かう。

体を洗い、湯船につかる。至福の時間だ。

「・・・リコ様は、どうされたのですか？」

「寝てるよ」

「何かお疲れだったのでしょうか？」

「う～ん」

俺は屋敷に転移してきてからの顛末をメイに話した。

「・・・ご主人様を押し倒すなんて、リコ様にしては珍しいですね」

「ああ。でも、ベッドに入ると途端に大人しくなるんだ」

「いつものリコ様ですね」

「でも、ずっと潤んだ目で俺を見つめて、手をすごい力で握ってくるんだ」

「このところ・・・その・・・なかったですから・・・」

「そんなかわいらしい顔で見つめられると俺もさすがに・・・な。すげぇ頑張ったよ」

「リコ様がうらやましいです」

「サイリュースたちの透け見える体に興奮してしまったのは、紛れもない事実だ。リコはそこに嫉妬したのだろう。でも、また俺はリコに心を鷲掴みにされてしまったよ」

「・・・私も、ちょっと焼きもちを焼きましたよ？」

「メイにも、お詫びするよ」

「・・・ハイ」

風呂から上がった後、俺はメイと共にベッドに入った。リコとはまた違うが、メイはメイで素晴らしい。何と言っても均整の取れた体が非常に美しい。それにベッドに入るとメイはとても積極的になる。これはこれで俺は燃えるのだ。

メイとの濃厚な時間を堪能し、彼女の満足そうな寝顔を確認して、俺は眠りについた。

・・・なぜか早朝に目が覚めてしまった。もうひと眠りしようとしたところ、左右にリコとメイの寝顔が目に入った。二人ともとてもかわいい。また堪らなくなってしまった俺は、眠っている二人の体に、沢山のキスマークを付けた。

しばらく二度寝を愉しんだあと、リコとメイが目覚めると同時に、俺も目覚める。二人とも朝日を浴びると普段の自分を取り戻すようで、いつも恥ずかしそうに起きる。今朝は普段とは違う自分の体に気が付いて、さらに恥ずかしそうにしている。でも、どこかうれしそうだ。

服を着ようと起き上がると、リコが俺の手を引っ張る。思わずベッドに仰向けに倒れると、リコとメイがお返しに、俺の体にキスマークを付けた。

そんな感じでじゃれ合った後、服を着替えてダイニングに降りる。みんなでワイワイと朝食を食べ、俺とメイはサイリュースの里に、リコはクルムファルへ転移する。昨日とは打って変わって静かな雰囲気だが、よく見ると、ヴィヴァルたちは何やら女性の精霊を使役して上空に風を起こしている。

「バーサーム様、ようこそおいで下さいました。カメリアと申します。以後お見知りおきをお願いいたしますわ」

「族長さまたちは何をされているのです？」

「村に血の臭いが漂ってまいりましたので、風の精を使って、その臭いをかき消しているのです。血の臭いは精霊が最も嫌いますので・・・」

「なるほど」

「族長さまの手が空くまで、どうぞこちらでお待ちくださいませ」

「あ、私は畑の様子を・・・ノームさんとも話をしなければいけませんから」

メイは畑に行ってしまった。俺は一人、別の部屋に通される。

そこは、かなり広かった。部屋の1／4はフカフカの毛皮が敷かれており、ここで寝転ぶと気持ちよさそうだ。そんなことを考えていると、カメリアと共に3人のサイリュースが部屋に入ってきた。どれも美少女たちだ。当然、衣装が透けて見えるので、中身もバッチリ見えてしまう。

彼女たちは毛皮の上に座る。それを見た俺も彼女らの前に座る。そしておもむろにカメリアが口を開く。

「実は、バーサーム様にお願いがございます」

「何でしょう？」

「我々に、お情けをいただきたいのです」

「お情け？」

「つまりその・・・あなた様の子種を頂戴したいのです」

そう言って四人は着ている物を脱ぎ捨てた。

一糸まとわぬ美少女たちの姿が目の前にある。昨日の俺ならば完全に理性を飛ばしていただろう。しかし、今日の俺は一味違う。賢者・リノスにそのような誘惑は通じないのだ。

「それは、族長さまからのご命令ですか？」

「そ・・・それは・・・」

「あなた方の思いはありがたいですが、族長さまの許可なくしては、あとあと問題になりませんか？」

「それは、大丈夫です。決してバーサーム様のお名前は出しません」

「あなた方は、こうやって子孫を残しているのですか？」

「その通りです。我々は女性しか生むことができません。それ故、優秀な男の子種を宿して子孫を残していくしかないのです」

「あなた方はいままで何人の男を篭絡してきたのです？」

「失礼な。我々が身を任せる男は一人と決まっております。他の男には触れられたことはございません！」

カメリアは毅然と言い放つ。その他の女たちも同様にうなずく。

「・・・それならば、やめた方がいい」

「・・・なぜでございますか？」

「俺のはね・・・ヤバイんですよ」

「ヤバイ？」

「デカイのです」

「え？」

「馬並みなんです」

「と、おっしゃいますと？」

俺は拳を握り締めて差し出す。

「そ、そんなに！？」

「ええ。ですから、生娘にはかなりの・・・。妻のメイリアスも来ていますので、話をさせましょうか？」

「け、結構です・・・」

俺はオロオロとする彼女たちに服を着るように促して、部屋の外に出た。ヴィヴァルたちの作業も丁度終わったようだ。彼女は俺を見つけると、慌てたように駆け寄ってきた。

「バーサーム様、森の精霊の様子がおかしいのです。何か落ち着きがありません。ニト！ニト！はいるかしら？」

「はい、族長様、ここに」

「森の精霊たちは何と言っているの？」

「お待ちください」

ニトと呼ばれる、まだ幼い少女が何やら呪文を唱えている。しばらくすると、小さい森の精霊が現れて、何やら彼女と話をしている。

「族長様、森の外に殺気が渦巻いているようです。森の精霊たちが怯えています」

「また、戦なのでしょうか・・・」

ヴィヴァル達は不安げな表情を浮かべる。その時、頭の中に「思念」が飛んできた。

『ご主人様、ご主人様！』

『フェリスか、どうした？』

『敵襲です！西の方から大軍が王都に向かって来ています！』

『わかった。すぐに向かう』

俺は早速、王都に向けて転移結界を準備する・・・。

第百二十三話　老将軍、無双する

ヴィヴァルとメイに王都に転移すると伝える。メイはそれですべてを察したようで、たった一言、「ご無事でお戻りください」と言って送り出してくれた。

西門付近に到着すると、既にそこは戦闘準備の真っ最中であった。クノゲンの部下たちが迅速にかつ的確に準備を終えていく様子がよくわかる。俺はそれを見つつ、西門の上に上がる。

そこにはクノゲンとルアラがいた。

「敵襲だって？」

「ええ。フェリス殿が偵察に行っています。ほら、あそこです。あの黒い塊、見えますか？あれが敵です」

クノゲンがノホホンとした口調で俺の説明をしてくれる。

「まだ遠いな」

そう言いつつ俺は「マップ」で確認する。見ると、王都の西側の一部が真っ赤になっている。どうやら敵と認定してよさそうだ。どうやら数は３０００程度いるらしい。

「ご主人様！」

見るとフェリスが帰ってきていた。

「敵は３０００から５０００くらいだと思います。鎧を付けていたり、付けていなかったりと装備はまちまちです。ただ、全員が馬に乗っています。魔法使いもいるように見えました」

「ご苦労だった。クノゲン、どのくらいの距離かわかるか？」

「おそらく、馬で、全力で突撃すれば３０分といったところでしょうか」

「攻めてくるかな？」

「来るでしょう」

「そこまでアホ・・・ああ、何か軍勢が動き出しているな」

「来ましたね。総員、戦闘態勢につけ！！」

クノゲンの号令一下、兵士たちは迅速に自分の持ち場に移動していく。

「・・・どうやら様子見をしながらの進軍ですな。こいつは直前まで突撃はしてきませんな。おいお前たち！敵の到着は一時間後だ。それまでに小便を済ませておけ！」

兵士たちから笑いが起こる。緊張感や悲壮感といったものが、コイツらには全くない。頼もしい限りだ。

「アイツらは、ジュカ王国の領主たちかな？」

「おそらくそうでしょう。我々がラマロンの軍勢を全滅させたことを聞きつけて、連合軍を組織したのでしょうな」

「だから装備がまちまちなのかー」

「余程急いで軍勢をまとめたのでしょうな」

「ただ、日中で３０００の軍勢を相手にするとなると、ちょっと厄介だな」

「まあ、一部崩壊しているとはいえ、この王都の城壁がそう易々と破壊されるとは思えませんし、何よりリノス様の結界がありますからなー」

「持久戦に持ち込めば、確実に勝てるな」

「そうですな。部下たちにはラマロンの兵から奪った鎧を装備させているので、魔法にはかなり強くなっています。ですから、負ける要素は見当たりませんな」

「しかし、持久戦は避けたいな」

「と、おっしゃいますと？」

「一撃でアイツらを撃破したい。そうすりゃ二度と俺たちに喧嘩を売ろうとは思わんだろう」

「一罰百戒というやつですな」

「まあ、そういうことだ」

「では、夜を待って？」

「そうだな・・・一丁、ダメもとで頼んでみるか。クノゲン、ちょっと俺はここを離れるぞ。できるだけ早く戻ってくる。フェリス、何かあれば俺に「思念」を飛ばしてきてくれ」

「畏まりました」

そう言って俺は転移結界を張り、その場を後にした。

転移した先は帝都の宮城（きゅうじょう）だった。俺はすぐに陛下に緊急の報告があると兵士に告げる。兵士も心得たもので、すぐに入城させてくれる。案内されたのは陛下の私室の隣にある会議室だった。侍従が言うには、俺が来たらいつ何時でもすぐに自分の所に連れてくるように命じられているのだそうだ。

部屋に入ると、陛下とラファイエンスが既に座っていた。

「おお、リノス殿、今、陛下からジュカ王国のことを伺ったところだ。さすが、というべきかな」

「いえ、クノゲンたちのお陰です」

「相変わらず、謙虚だ」

「さてリノス殿、緊急の報告とは、何であろうの？」

「陛下、王都が敵に襲われております」

「敵？」

「おそらくですが、王都の陥落を聞きつけて、ジュカの貴族たちが連合軍を組織したようです。その数はおそらく３０００程度と思われます。私の手勢３００では少々荷が重いのです。既に王都の至近距離まで迫っております。できれば、援軍をお願いしたいのですが」

「リノス殿、それはいつのことかな？」

落ち着いた声でラファイエンスが質問してくる。

「本日、１５分ほど前です」

「本日？１５分前？？」

ラファイエンスは眉間にしわを寄せて俺を睨んでくる。

「ラファイエンス、貴公には話しておこうかの。これは他言無用だ。リノス殿はな、転移結界のスキルを持っておるのだ」

「転移結界？それは・・・あの・・・」

「そうだ。じゃによって、リノス殿はジュカから帝国まで一瞬で移動できるのだ」

「それは・・・また・・・かなりのＭＰを使うのでしょうな」

驚きすぎてラファイエンスは突拍子もないことを口走っている。

「そうか・・・ジュカにまた内乱か・・・」

陛下は腕を組んで考え始めた。

「ふむ、帝都の防衛軍は既に出陣させてしまったの。さて、どの部隊を引き抜くか・・・」

「陛下、恐れながらそのお役目、このラファイエンスにお任せいただけませんでしょうか？」

「貴公がか？北方の防衛は如何する？」

「私がおらずとも、部下が何とでも致しましょう」

「さすがに貴公一人行かせるわけにはいかんだろう」

「では、我が直属の騎士団を連れてまいります」

「・・・１００名ほどか・・・。リノス殿、それだけの人数だが、可能であろうか？」

全く問題ないが、俺はもったいを付けるようにちょっと考えて、

「何とか頑張りましょう」

と返事をする。

「そうか。宝物庫に取って置きのＭＰ回復薬がある。それを持っていけ」

「ありがとうございます」

「ラファイエンス、貴公は帝国の柱石じゃ。断じて死ぬことは許さん。危険な場合は必ず撤退せよ。そして、リノス殿の転移結界は秘匿せよ。それが守れる者だけに従軍を許す。これは勅命じゃ」

「畏まりました」

恭しく俺たちは一礼をして陛下の下を辞した。

「さて、準備をしてこようか！リノス殿、城門の前でお待ち下され！」

うれしそうにラファイエンスは、小走りに駆け出していった。俺は一旦、外に出てから屋敷に帰り、留守番をしているフェアリに、皆が帰ったら王都のことを伝えるよう言いつけ、イリモを伴って再び城門前に転移した。

約３０分後、帯剣し、鎧や兜などを身に付け、完全に戦闘態勢を整えたラファイエンスたちが城門の前に現れた。

「お待たせした。さてリノス殿、行こうか！」

老将軍はやる気満々だ。その後ろに控えている騎士団も苦笑している。俺は城門前の広場に転移結界を張る。約１００名もいるので、かなり大きな結界を必要としたが、なんとか全員を中に納めることができた。

「では、いきます」

結界を発動させると、一瞬で景色が変わる。さすがに全員が少しう

ろたえているようだ。

「こ、ここは、どこだ？森か？」

「ええ。ジュカ王国北方の、ルノアの森と呼ばれる森の中です」

「ルノアの森・・・」

「出口はあちらになります。森を出るとすぐジュカ王都の北門が見えます。まずはそちらに向かいましょう」

森を抜けると、兵士たちの歓声が聞こえてきた。どうやら戦闘が始まっているようだ。

「うん？戦闘が始まっているのか？どこだ？」

「あれに見えるのが王都の北門です。敵はおそらく西門を攻めています。あの北門を左に見て、城壁に沿って進んでいくと、敵に当たると思います」

「そうか、皆の者、続け！」

ラファイエンスたちは風のような速さで駆けだしていった。

俺とイリモは西門に転移する。そのまま城門の上に上がると、クノゲンが悠然と構え、フェリスとルアラが魔法で攻撃をかけていた。

「・・・敵は西門に全兵力を当てているのか？」

「そのようですな。フェリス殿とルアラ殿を筆頭に魔法で攻撃して

おりますが、向こうにも結界師がいるようでして、攻撃の一部が防がれておりますな」

「一部？」

「一部です」

「魔法の攻撃は・・・？」

「ある程度は通っております。まあ、今は魔術師が回復魔法をかけているようですが、それも遅かれ早かれ枯渇するでしょう」

見ると敵は、矢や魔法で攻撃もしているが、俺の結界に阻まれて攻撃は通らない。そこで、愚直に城門に向かって突っ込んでくる作戦を採っているようだ。そこに俺たちの兵が城壁の上から十字砲火のように魔法攻撃を繰り出しており、さらにはフェリスとルアラが正面から攻撃を仕掛けている。

「・・・意外とヤツらタフだな？」

「ええ。かなり訓練されている兵もいるみたいですな。ところで、援軍はどうなりましたか？」

「ああ、ラファイエンスとその愉快な仲間たちが援軍に来てくれた」

「ほう、将軍が。それは見ものですな」

クノゲンは嬉しそうだ。しばらくすると、敵の後方から小規模な軍団が凄まじい速さでこちらに向かってきているのが見えた。

「リノス様！将軍です！ラファイエンス部隊です！」

瞬く間にラファエンスたちは敵の背後に迫り、そのまま突撃していく。不意に背後から攻撃された敵は大混乱に陥った。次々とラファイエンスの部隊は敵をなぎ倒していく。何より、ラファイエンス自身が先頭に立って敵を片っ端からなで斬りにしている。

「あの老将軍、凄まじいな」

「若かりし頃は、「鬼」と呼ばれていたようですからな」

よく訓練され、練度の高いラファイエンスの部隊は、右に左に展開し、敵を翻弄していく。何より、ラファイエンスの剣捌きが尋常でなく速い。それに怖気づいた敵が後退し、さらにそこにラファイエンスとその愉快な仲間たちが突撃していく。そして、敵の部隊が完全に分断されたのを機に俺は全員に総攻撃を命じる。

「城門を開けろ！打って出ろ！」

クノゲンも出撃し、フェリスも敵の中に飛び込んでいった。

「ああっ、フェリス姉さま危ないですよ！！」

「ルアラ、お前はフェリスのサポートだ。アイツに近づく敵を魔法で攻撃しろ。フェリスに当てるんじゃないぞ！」

「わかりました！」

わずか４００の兵士に囲まれ、なす術もなく蹂躙されていく３００の兵士たち。ある者は斬られ、ある者は必死に逃亡を図るための

血路を開こうとしている。

約３０分後、全ての戦闘は完了した。今回はかなりの兵士の逃亡を見逃した。それぞれの領地に帰り、俺たちの「強さ」を吹聴してもらうためだ。

兵士たちはゾロゾロと西門に帰ってくる。そして、敵の大将を生け捕りにしたラファイエンスの部隊が西門を通過したのを合図に、王都の西門は再び閉じられた。

「いやー久しぶりに最前線に立ったが、まだまだ腕はサビついておらんな」

満面の笑みを湛えたラファイエンスの顔が、兜の中から現れた。

「少々手勢が少ないと思っていたが、あの機に城から打って出るとは見事な采配だったな。お陰で敵全体が動揺してくれたわ」

「将軍様、さすがですな」

「おお、クノゲンか。お主も、壮健そうで何よりだな」

今回も俺たちは一人の死者を出すことなく、敵を完封することができていた。怪我をした者が多くいたので、そいつらには回復魔法をかけてやる。

「いや～戦闘は、いいなぁ」

健康的な笑顔を見せるラファイエンス。その姿を見て俺は、このナイスガイな老将軍はひょっとして、かなりの戦闘狂ではないかと思

いつつ、苦笑いを浮かべるのだった。

第百二十四話　おいしいところを持っていかれる

兵士たちの談笑を耳にした市民たちが、少しずつ姿を見せ始める。
それを見たクノゲンが、

「みなさん、もう大丈夫ですよ。済みましたから」

と、気軽に答える。皆一様にホッとした表情を浮かべる。他の人々にも伝えてほしいとお願いすると、蜘蛛の子を散らすようにいなくなった。

「襲ってきた敵は一体誰だったんですか?その騎士たちは・・・」

話しかけてきたのは、王都民の集まりの中で代表格になりつつあるドーキという壮年の男だ。

「敵についてはこれから調べる。この騎士たちはヒーデータ帝国の騎士たちだ。彼らの助勢なくしては、この完全勝利はなかった」

「・・・この王都をお守りいただき、感謝いたします」

「礼なら、あそこにいるラファイエンス将軍に言ってくれ。あのお方の采配で勝てたようなものだ」

ドーキはラファイエンスの下に行き、丁寧に礼を言っている。老将軍は大テレに照れながら手を振っている。割かし、照れ屋でもあるのかもしれない。

怪我人の治癒も終わったところで、フェリスとルアラには炊き出しを命じ、俺たちは捕虜の尋問に向かう。場所は、王国軍本部のあった建物だ。ちなみに、マトカル一行もここに軟禁されている。

建物に入ると、手を後ろ手に縛られた男たち5人が跪いている。その中の一人が俺の姿を見て声を上げる。

「おい貴様ぁ！何をしている！頭が高いだろう！跪け！跪かんかぁ！」

予想外の言葉をかけられたので、思わずキョトンとなる。

「言葉が分からんのかぁ貴様！礼を知らん無礼者めが！大人しく跪けぇ！！」

「・・・何だコイツは？自己紹介をしているのか？」

「・・・リノスぅぅぅ。よもや、私を見忘れたわけではあるまい！私に対して、無礼であろうがぁ！」

「・・・ごめん。誰？」

「私だぁ！忘れたとは言わさんぞ！」

「・・・ありとあらゆる方向から考えてみたが・・・俺の記憶にはない」

「大馬鹿者ぉ！シゲア・ブリアン様だ！ブリアン様だぞ！」

「ブリアン？」

俺はしばし考える。

「シゲアって言ったな？もしかしてカルギの一族か何かか？」

「シゲア・カルギ元帥の息子だ！王宮警備隊長をしておっただろうがァ！」

「・・・そういえば、そんなイカついオッサンがいたな。あれ、お前だったっけ？ごめん、あんまり覚えてないや」

ぐぬぬぬぬ・・・とブリアンは歯ぎしりをしている。

「で、ブリアンとやら。王都を襲ったのは何故だ？」

「奴隷の分際で何という口の利き方をする！立場をわきまえんか！」

「・・・貴公、いかんな」

ラファイエンスが、甘いバリトンボイスで割って入る。

「こちらのお方は、バーサーム・ダーケ・リノス殿だ。ヒーデータ帝国皇帝の義弟にして、帝国侯爵のお方でありますぞ？以前の身分はいざ知らず、現在は帝国皇帝陛下のご一族に繋がるお方。貴公は今、捕虜である。お父上のカルギ元帥の御名は我らも存じている程の名将だ。そのような態度は、お父上の名声を傷つけますぞ？貴公が吐かれている言葉はそのまま、貴公に当てはまりますぞ？」

落ち着いた、しかし、一言一言に重みと迫力のあるラファイエンス

がこの場の空気を圧倒する。ブリアンは歯が割れるのではないかと思うくらいに、歯を食いしばっている。

「・・・貴様は、何者だ」

「私は、ヒーデータ帝国北方軍団長、ラファイエンス・オーグと言う」

「まさか、名将、ラファイエンス・・・」

ニヤリと老将軍は笑う。この爺さん、いちいちカッコイイ。

「さて、お前たち全員に聞く。この王都を襲った理由は一体何だ？返答によっては今後の対応を考えてやってもいい」

しばらくの沈黙が続く。

「・・・さらわれた娘を・・・取り戻しに来た」

「何？」

「ラマロンの軍勢は、我らの領地から食料と女を奪っていった。食料はいい。作ればまた手に入る。しかし、家族は・・・」

「なるほどな」

詳しく話を聞いていくと、ブリアン以外の４人はいずれも、ジュカ王国貴族に仕えていた人々であり、彼らが雇っていた傭兵団の団長だった。王国が崩壊した後、内乱状態になった王国で、いち早く領内をまとめ、これまでその領土を守ってきた者たちだった。雇い主

の貴族は、ある者は逃亡し、ある者は領土にとどまりながらも邪魔ばかりする厄介者となり、ある者は、軟禁状態なのだという。

内乱状態からようやく脱却しつつあり、領内も落ち着き始めたその時に、ラマロン軍が侵攻してきた。彼らはほぼ、問答無用で食料を略奪し、領民を殺し、女たちを攫っていった。圧倒的な軍事力の前になす術もなく蹂躙された彼らだったが、そのラマロン軍が壊滅したと聞いて、すぐさま行動を起こそうとした。そこに付け込んだのがブリアンだった。

ヤツは領主たちをそそのかし、連合軍を組織して王都の掌握を狙ったのだ。しかし、全く統率が取れていない軍であったため、作戦も何もあったものではなかった。結果的に彼らは獲物を見つけた獣のように、王都に殺到し、俺たちに易々と返り討ちにあったという次第だ。

「まあ、この戦いの最大の敗因はブリアン、お前の統率力のなさだな」

「おかしいと思ったのです。斥候を出すわけでもなく、王都を包囲するわけでもなく、政治的な策略を仕掛けてくるわけでもなかったですからな。なるほど、烏合の衆ならば、愚かな突撃作戦になってもおかしくないでしょうな」

「まあいいだろう。ブリアン以外のヤツらは縄を解いてやれ。攫われた娘たちを連れて帰るといい。そして、食料も持って帰らせてやれ。あと、炊き出しももうすぐ始まるだろうから、飯を食って帰れ。クノゲン、任せてもいいか？」

「ええ、お任せください」

縄を解かれた４人の捕虜たちは、俺たちに一礼をして、その場を去っていった。

「さてブリアン。お前はこれまで、盗賊と変わらないことをしてきたな？」

俺は既にブリアンの鑑定を完了していた。

「・・・」

「王国が滅んでから、領内をまとめたのはいい。しかし、その周辺の領地に侵攻してはダメだろう。ジュカの内乱はお前が起こしたと言っても過言ではない。お前はラマロンのフルチン野郎と同様、しばらく頭を冷やせ」

ブリアンは俺たちにものすごい憎悪の眼差しを向けたまま、引き立てられていった。

「ラマロンと言えば、精鋭部隊の隊長が捕らわれていると聞くが？」

不意にラファイエンスが口を開く。

「ええ、この上の部屋で軟禁しています」

「一度、話をしてみたいな」

「と、仰ると？」

「わずか３０００、装備が充実していたとはいえ、ジュカ王国の王

都をこの短期間で陥落させたのは、かなりの優れた指揮官だと思うのだ。敵であろうと、こうした優秀な者との会話は、自分自身を成長させる。リノス殿、迷惑になるようなことはせぬから、会わせてもらえまいか？」

「はあ・・・」

これだけキラキラした目で言われてしまっては、嫌とは言えない。俺はラファイエンスを伴って階段を上がり、マトカルたちの部屋に案内する。

「戦いはどうなったのだ？」

俺の姿を見るなり、マトカルが話しかけてくる。彼女は男物の冒険者風の服を身に付けている。一見すると、そこいらにいる若いアンちゃんのようだ。

「ああ、一人の死者も出すこともなく、問題なく排除できた」

「また、一人の死者も出さずに・・・どうなっているのだ、貴様らの軍は？」

「いや、今回は俺たちではなく、ここにいるラファイエンス将軍の援軍のおかげだ」

「ヒーデータ帝国のラファイエンスだ」

甘いおじさまボイスが耳に心地いい。

「こちらが、ラマロン軍の司令官、マトカルです」

「ほう、かなり若いのだな。この若さで３０００の軍を率い、ジュカの王都を陥落せしめるとは、なかなかのものだ」

マトカルは俯いている。

「リノス殿、マトカル殿の処遇は如何になされる？」

「まだ考えておりません」

「ならば命は取らず、このまま生かしておくがよかろう」

「と言うと？」

「これだけの将器のある軍人、しかも若者だ。この命を奪うのは惜しい」

「私の一存では決めかねますので・・・」

「まあ、それはそうだ。マトカル殿の処遇は私からも陛下に相談してみよう」

「私に対して、情けは無用です！」

毅然とマトカルが言い放つ。

「まあ、そう仰るな。私とて、貴殿の身分を保証できるものではない。その話はまた後にしよう。そういえば腹が減らぬか？ここの食事は美味しいと聞く。私もそれを愉しみに来たのだ。よければ、メシなど食いながらよもやま話などしようではないか」

さりげなくラファイエンスは腰の剣を俺に預け、目配せをした。俺は剣を持って部屋の外に出て、炊き出しを取りに、北門付近の王侯軍兵舎内に設置してある転移場所に転移した。

マトカルたちの炊き出しを手に、再び部屋の前に転移する。すると扉の中から女たちの笑い声が聞こえてきた。

「うふふ、いやですわ、将軍様」

「いやいや、私も若い頃は捨てたものではなかったのだぞ？」

「それでも・・・イヤですわ。アハハハハ」

俺はそっと扉を開ける。声をかけるのが憚られるほど、会話が盛り上がっている。俺は傍にあった小さな机の上に食事を置く。それを察してラファイエンスはゆっくりと振り返り、俺を見てウインクを投げた。テーブルに掛けた女たち、マトカルの顔でさえも笑みがこぼれている。俺は静かに一礼をして、部屋を出た。

「でも、将軍様・・・」

「いやいや、これから私のことは将軍様ではなく、オジサマと呼んでおくれ」

「わかりましたわ、オジサマ」

女たちの笑い声が部屋から漏れだしてきた。

何とも言えぬ思いを胸に建物の外に出た俺は、そこで繰り広げられ

た光景に目を見張った。何と、ラファイエス部隊の兵士たちが、王都の女性たちに囲まれているのだ。よくよく見ると、兵士たちは皆、イケメン揃いだった。

「やっぱり世の中、イケメンなんだな。なーんか、全部、ラファイエンスたちに持っていかれたなー」

無性に、リコとメイが恋しくなった。

第百二十五話　戦いの後の面倒な仕事

ブリアンの侵攻を鎮圧したその次の日から、俺は大忙しになった。というのも、ジュカ王国内を治めていた領主たちがこぞって王都にやってきたからだ。ある者は見え透いたおべんちゃらで俺に取り入ろうとし、ある者は高圧的に自分の意見を通そうとした。

集まった領主は３０人程度であった。ジュカ王国は確か、１００名を超える貴族家があったと記憶しているが、内乱を経て１／３程度にまで淘汰されたことになる。俺は集まった領主に、取りあえず現状での国境線を保持したまま兵を引くことを命じ、沙汰は追ってすると申し渡した。

彼らから聞き取った要望をまとめ、それが本当かどうかを確認していく。基本的に俺の「鑑定」スキルで大抵の嘘やごまかしは判るのだが、物的証拠が必要になる。そのため、フェアリードラゴンたちを使って、それぞれの領主の言い分を確認してきてもらった。

調べてみると、嘘をついている家と、そうでない家の差がはっきり出た。

新たな領地を寄こせだの、あそこは自分の領地だっただの、法外な食糧支援を要求してくる領主の大半は、元貴族の連中であった。俺が奴隷の身分であったのをいいことに、完全に俺をナメていたのだ。一方で、心から国の安定と領民たちの安全を願う領主もいた。こういう奴らは、逃げ出した貴族のケツを拭いてきた、元平民などの連中が大半だった。

彼らの要求をどこまで受け入れるのかは、ちょっと頭を悩ませた。さすがに、一日目に８人もの元貴族たちと謁見した時は、さすがの俺も萎えてしまい、夜はリコに慰めてもらった。それだけでなく、貴族は力技の恫喝に弱いとリコは息も絶え絶えになりながら教えてくれたのだ。相変わらず、すばらしい妻である。

そして、領主たちを引見すること3日。集まった領主たちにそれぞれの処遇を言い渡す準備が整った。

リコのアドバイス通り、王都にやってきた領主たちには毎日、ラファイエンスたちの模擬戦や騎馬戦などをこれでもかと見せつけて、俺たちの力を誇示した。そして、最後にカースシャロレーの群れを、領主たちの目の前で討伐させてみせた。彼らは選び抜かれた超一流の軍人たちである。３０頭にも及ぶ巨大牛の突撃を易々と止め、あっさり討伐してみせた。それを夕食に供したところ、貴族連中の食欲はかなり少ないものになっていた。

そしていよいよ当日、用意された会場には、クノゲン以下３００名の兵士がラマロンから奪った鎧に身を包み、着飾ったラファイエンス以下、１０名の親衛隊が並んだ。そしてその中心には全力で美しく着飾ったリコと、彼女の腕によりをかけてオシャレを施された俺の姿があった。

リコは目が覚める程に美しかった。俺の邪魔はしないように派手さを抑えた衣装だったが、そのあふれ出る気品と知性は周囲の空気を研ぎ澄ませ、ヒーデータ帝国の威光を存分に示していた。

「皆様におかれては初めて御意を得ます。ヒーデータ・シュア・リコレットでございます。この度は我が夫、バーサーム・ダーケ・リノスの下に集っていただけたこと、私よりも御礼申し上げますわ。

このジュカは愛する我が夫が生を受け、物心つくまで育てていただいた地。それが大魔王に蹂躙されたと聞き、私も心を痛めておりました。この度、夫が故国に赴き、その立て直しを皆様と共にお手伝いする。これ以上の喜びがありましょうか。私とても協力は惜しみませぬ故、皆さま存分にお力を振るってくださいませ」

へり下っているようで、言葉の端々に「アタシらに逆らったら容赦しねぇぞ、コラ？」という雰囲気を満々に滲ませている。そんなリコが最後に恭しく俺に頭を下げ、

「どうぞ、ご存分に采配を振るわれませ。このリコレット、身命を賭してあなた様の命に従います」

その言葉の直後、居並んでいた兵たちが俺に最敬礼をする。これで大半の貴族連中が沈黙した。

さらに俺はその場に、ラマロンの捕虜であるレイリックとブリアンを同席させた。二人ともフルチンにされたうえ縛られて身動きのできない姿にされている。さすがにブリアンのこの姿はジュカの人間にはショックだったようで、これで完全に領主たちの心が折れた。

その後は実にスムーズだった。俺の鑑定とフェアリードラゴンの証拠でシロと判断された者には食料を与えた。そしてクロと判断された者は、傭兵の2／3を王都警護部隊に差し出すことを申し渡した。その上、あまりにも素行不良な2名領主については、その身柄を王都で拘束し、領地を没収の上、統治能力に優れたシロの領主たちにその管理を任せることにした。

「やれやれ、疲れたな」

既に日が傾きつつある時間だが、俺はリコ、ラファイエンスとクノゲンたちと共に王国軍本部の休憩室で、甘い紅茶を飲んでいた。

「ヤツらのことは任せてください」

クノゲンが胸を張る。

「すまないな。お前には負担をかけるな」

「クノゲンならば、これしきではまだまだ仕事のうちには入らないな？」

ラファイエンスがニヤリと笑う。クノゲンも苦笑いしている。

「さて、リノス殿」

老将軍が真面目な顔になる。

「そろそろ、国境に兵を進めなければならんな」

「どういうことでしょう？」

「南の領地はラマロンに蹂躙されたままだ。そこにも、リノス殿が行って食料などを支援した方がよい。民衆は自分たちを食わせてくれる者を領主と認めるものだ。我々も手伝おう」

「しかし、将軍があまりここに長居をしても、北方軍の士気に影響が出るのでは？」

「なぁに、夕方からは自分の屋敷に帰って休んでいるのだ。問題な

どあるまい」

事も無げに老将軍は言ってのける。取りあえず、明日から俺はラファイエンスと共に南方の領地を巡検することになった。

老将軍は先に転移結界を使って帝国に帰り、俺とリコはフェリスたちを伴って帰ろうとした。するとそこに、マトカルと共に捕虜になっている魔術師の女が俺にこっそりと近づいてきた。

「あの・・・恐れ入ります。その・・・マトカル様のが・・・そろそろ始まりそうです」

一瞬何のことかわからなかったが、リコは瞬時に意味を理解し、何やらコソコソと話をし始めた。そして女を部屋に返すと、

「リノス、今からマトカルが参ります。彼女も連れて戻ります」

「うん？何でだ？」

「ええ、ちょっと試したいことがありまして」

クスリと笑うリコは、衣装の美しさも手伝って、いつもより何倍も美しく見えた。

「キレイだ、リコ」

リコは顔を真っ赤にしながら、俺の腕に手を伸ばしてくる。頬を赤く染めたリコは、いつも以上にかわいらしく見えた。

「う・・・オホン」

その声で我に返る。見ると、マトカルが来ていた。

「じ、じゃあ、行こうか・・・」

俺たちはフェリスたちと合流し、屋敷に転移した。

帰った早々、リコはフェリスとマトカルを伴って部屋に行ってしまった。ダイニングにはペーリスが作った美味そうな料理が並べられつつあった。既にみんな戻ってきており、席についていた。俺たちも椅子に座り、自然と今日の報告が始まる。メイの方は順調そのものでノームともうまくいっているという。それに、森の精霊たちの働きで、フェアリードラゴンたちが暮らせる場所を作ってくれたのだという。サイリュースの集落の近くらしいが、美しい水ときれいな花が咲き乱れる場所なのだそうだ。その件についてはメイに任せることにした。

さらに、黄金鳥の飼育もできそうだという。これからあのジューシーでコクのある肉がいつも食べられると思うと、テンションが上がる。

そんなことを話していると、リコがダイニングに下りてきた。その後ろから、フェリスに背中を押されるようにしてマトカルが入ってくる。

何とマトカルは、リコの衣装を着、化粧を施されて、美しく着飾っていた。

妾腹とはいえ、皇帝の娘である。着飾ると気品があり、大国の姫と言って十分通用する美しさだ。何より、ちょっと吊り上がった目じ

りに愛嬌があり、これは男性に人気が出そうな雰囲気である。

「もう少し、髪が伸びればもっと美しいのでしょうけど、まあ、こんな感じですと７０点くらいですわね」

リコが事も無げに言う。俺的には１００点満点なのだが。

「やはり女性は美しく着飾るべきだと思いますの。なにより、美しいのですから、その美しさは磨いた方が、マトカルは幸せになると思ったので、一度試してみたのですわ」

「さすがはリコ姉さまです。ちょっと姉さまの服を選んで、ささっと化粧をしただけでこれだけ美しくなるのですから・・・私もびっくりです」

「マトカルには後で私から、必要な物を差し上げますから、それをもってお帰りなさいな。まあ、せっかくですから、夕食を一緒に食べてお帰りなさいな」

「今・・・この格好でか？」

マトカルは顔を真っ赤にして、恥ずかしそうにモジモジしている。

「あ・・・足が寒い。女たちはその・・・こんな寒いのと恥ずかしいのを、いつも我慢しているのか？」

リコは不思議そうに首をかしげてマトカルを見ていたが、やがて思い出したように声を上げる。

「まあ、私としたことが。とんだことを忘れていましたわ！」

「どうした、リコ？」

「マトカルに、下着を履かせるのを、忘れていましたわ」

第百二十六話　プライドが邪魔をする

リコから新品の下着を借りたマトカルが席についたのを確認して、俺たちは夕食を食べ始める。いつものように、ワイワイガヤガヤとした食事風景だ。しかし、マトカルの喰いっぷりはよくない。

「マトカル、遠慮するなよ？食え食え」

マトカルは目をキョロキョロとさせている。

「・・・この家の食事は、騒々しいのだな」

「うん？皆でにぎやかに食った方が美味くないか？」

「リノス、大抵の貴族の家では、食事は静かに食べるものですわ。侯爵家でパーティでもないのに、にぎやかに食事をしているのは、我が家くらいのものですわ」

リコがフォローを入れてくれる。

「そうか？じゃあ、静かに食べるか？」

「いいえ。これはこれでいいものです。最初はちょっと驚きましたが、慣れれば皆で食べたほうが、私は好きですわ」

「と、いうことだ」

「まさか、敗軍の将が敵軍の将の屋敷に呼ばれて、このように歓待

されるとは・・・前代未聞だ」

「歓待？ただ、メシ食っていけって言ってるだけじゃねぇか」

「いや・・・そうはいっても・・・」

「固いこと言うな。ほらぁ、お前がヘンなこと言うから、から揚げ無くなってるじゃねぇか！」

「私のせいでは・・・」

「大丈夫です。まだありますから。マトカルさんもどんどん食べてくださいね」

そんなこんなで夕食は終了し、俺はリコと共にマトカルをジュカに送り届けた。

数日後、ヒーデータ帝国の国境地帯に布陣していたラマロン軍に、ある一報が届いた。

「何？ジュカ王都の帝国軍が南下しているというのか？」

「だ・・・大魔王の軍が動き始めたのでしょうか？」

「そうなれば・・・我らも・・・」

「ええい！我らがそのようにうろたえてどうします！」

気後れする将兵たちに一喝を入れたのは、第三軍を統括するアーモ

ンド軍団長だ。

「たとえ大魔王と言え、我ら皇国軍が総出でかかれば、引けを取るものではありません！それよりもまず、眼前の敵を叩かねば！」

「アーモンド、待て」

言葉を挟んだのは、総司令官のカリエス将軍である。

「大魔王の軍勢がいかなるものかを見分けなければ、味方の被害が拡大することもありうる。斥候を放ち、よくよく奴らの力量を測らねばならない」

「将軍はいつもそうです！そのようにのんびりしておっては、兵の士気にかかわります！」

アーモンドは腹の底から怒っていた。なぜ、目の前の敵を打ち破って、さっさと皇国に凱旋しないのかと。

皇国最精鋭のマトカル部隊がジュカを落とした後、ヒーデータから１０数万の軍勢が国境付近に押し出してきた。それはいい。当初の予想通りの展開だったからだ。皇国はすぐさまカリエスを総司令官として１０万の軍勢を差し向けた。

元々、国境に差し向けていた５万の軍勢を合わせて１５万の軍勢となったラマロン軍は、国境であるイルベジ川を挟み、ヒーデータ軍と睨み合う形で布陣を完了した。イルベジ川は山間の川であり、帝国と皇国の両軍が川を挟んだ山の中に布陣し合うという、山岳戦の様相を呈していた。

ラマロンは、軍勢の中から1万を援軍としてジュカに差し向ける予定であった。そこに届いたのが、マトカル部隊の壊滅と大魔王復活の報である。すぐさまカリエスはこれからの作戦の凍結を決定し、戦線は膠着状態になっていた。

アーモンド以下、従う幕僚たちの思いは一つである。一旦、兵を皇都まで引くべきであると。しかし、そのためには、目の前のヒーデータ軍が邪魔である。大魔王の対応と相まって、ここ数日は何度も軍議を重ねているが、有効な策は出てこない。

アーモンドは焦っていた。今、皇国が布陣している場所は、ヒーデータとジュカの二つの国境が接する場所なのだ。ここにジュカから大魔王の軍勢が現れると、ラマロン軍は囲まれる形になる。そうなれば、どう考えても皇国が不利になる。

総司令官のカリエスとしても、何も手を打たなかったわけではない。大魔王復活の情報をヒーデータ側にも流し、魔王軍に対抗するため停戦を打診したこともあった。しかし帝国側はその使者を鼻で笑い、大魔王はいないとさえ言い切り、提案は破談となったのである。

もっともそれは、皇国側の高圧的な物言いによる、売り言葉に買い言葉のような形となってしまったものであり、実情としては、ヒーデータ側も早く撤退したいという思いは同じであった。

「・・・しかし、ラマロンは動かんな」

ヒーデータ帝国の南方軍司令官、ライッセンは幕僚たちに呟く。

「数の上ではあちらが上。しかし、バーサーム名誉侯爵がジュカの王都を落としています。今少し待てば、ヤツらも撤退すると思うの

ですが・・・」

「大魔王が復活してここに攻めてくるから、先に国に引けなどと・・・そのような話を受けて撤退しては、我らは後々まで嘲りを受けることになる」

「早く撤退すれば、我々も撤退できますのに」

「うむ。しかし、奴らのことだ。我らに向かって突撃してくるかもしれんし、背後に回り込もうとするかもしれん。警備を厳重にしろ」

こうして、両軍双方が相手方の出方を待つ姿勢を取っているため、戦線は膠着状態が続いていたのである。

「・・・ということだ」

「膠着状態か・・・」

俺は王都の北門の隣にある兵舎の一室で、老将軍とクノゲンとでお茶を飲んでいる。

ラファイエンスと共に南方の地に救援物資を届けに行って3日、帝国軍とラマロンが睨み合っている国境がこの近くにあると聞いて俺は、一足先にイリモの翼を使い、戦線を観察した。そこは戦いが行われた形跡はなく、両軍、川を挟んで睨み合っていただけだった。

「これって、誰かが仲裁に入った方がいいんじゃないでしょうかね。俺が行ってみましょうか？」

「いや、リノス殿が間に入っては話がややこしくなる。仮にも貴殿は皇帝陛下の義弟と言う身分だ。仲裁に入るのであれば、ヒーデータとラマロンにあまりかかわりのない人間でないといかん」

「そういうもんですかねー？」

「察するところ双方、引くに引けぬ状況なのだろうな。どちらかが撤退すれば撤退するであろうが、双方国のメンツがかかっておるので、おいそれと撤退できぬのだろう」

「下らないですね」

「まあ、そう言うな。戦略的に見ても、山岳での撤退戦はかなり入念に準備せねば甚大な損害を被ることもある。撤退の最中に攻撃されないという保証はないからな。それができる人間と言うのであれば、クノゲンならできそうだな？」

「私では無理ですよ、将軍」

「お前ならどう撤退する？」

「うーん。さも帝国軍が山にいるかのように装い、夜陰に紛れて撤退しますね」

「なるほど。しかし、それでは敵前逃亡をしたとラマロンから嘲りを受けぬか？」

「そんな奴らは放っておけばよいのです。むしろ、一夜にして華麗に撤退したほうが、帝国軍の練度の高さを証明することにはなりませんか？」

「・・・クノゲンは前向きだな。私はその考えは嫌いではない。しかし、南方軍にそこまでの練度はあるだろうか。夜中、物音ひとつ立てずに山から撤退していくのだ。それができれば確かに称賛ものだが、なかなか難しいな。私の親衛隊でも・・・どうかな？」

フフフと老将軍は笑う。

「では将軍、あなた様でしたら、どうなさいます？」

「うむ、私か。私ならば・・・敵にある程度の損害を与え、反撃の目を摘んだ後、撤退をしたいところだが・・・。すまん、その損害をどう与えてよいのか、私にも思いつかん。おそらく最終的に私も、クノゲンのような作戦を採るだろうな」

「むしろ、敵さんにこの策を教えてやれば、逆に撤退するかもしれませんよ？」

「そうかもしれんな、ハハハハハ」

二人は豪快に笑う。

「しかし、だ。このままでは兵士たちが疲弊する。その前に何らかの手を打つ必要があるのは確かだ」

老将軍が真面目な顔をして言う。俺はじっと腕を組みながら、考える。どうすれば一番被害が少なく、両軍を撤退させることができるか・・・。

「一つ、策を思いついた。成功するかどうかわからないが・・・」

俺は二人に思い付いた作戦の内容を話す。

「面白い！それはやってみる価値はあるぞ！さすがはリノス殿だ。前代未聞だな、それは」

「では、私は早速準備に入りましょうか？」

「クノゲン、早速準備に入れ。急いだ方がいい」

「あの、ラファイエンス将軍、これはあくまで案なのですが・・・」

「いや、十分だ。私がライッセンに手紙を書いてやる。いや、陛下から勅命をいただいた方が良いかな？」

俺を完全に無視して老将軍は嬉々として根回しを考え始めた。

「いやぁ、長生きはするものだな。まさか、こんな面白い作戦が立てられるとは。これは、面白そうだ。面白そうだ。フフフフ」

・・・やっぱりこの爺さんは、戦闘狂かもしれない。

第百二十七話　対ラマロン軍作戦、発動！

「ハハハ、面白い作戦だの」

陛下はカラカラと笑い転げている。俺の隣ではラファイエンスがニヤリとニヒルな笑みを湛えている。

「まあそれで敵の動揺が生まれれば、それに越したことはないと思うんですが・・・」

「よかろう。やってみよ。余からライッセンに勅命を発しておく」

それから三日後、帝都からの早馬が国境地帯の南方方面軍に届いた。

「何だこの書簡は？」

帝国南方軍軍団長のライッセンは不快をあらわにしている。

「一体どうされたのですか？」

「これを見てみろ」

ライッセンは部下に届けられたばかりの書類を渡す。

「陛下の名代としてバーサーム様がお見えになるのですか？しかも作戦があるので、その指示に従えとは、これは一体・・・？」

「フン、戦闘をしたこともない陛下が思い付きで現場に介入してく

るとは・・・。しかもご丁寧に勅命だ。やれやれ、頭が痛いわ」

ライッセンは天を仰いだ。帝国軍の陣にリノスが到着したと告げられたのは、それからしばらくしてのことだった。

「・・・なぜ、貴公がおられる？」

ライッセンは挨拶も抜きに目を丸くして驚いている。

「いやなに、長期の休暇を取ってな」

「き、休暇ぁ？」

驚くのも無理はない。俺の隣にいたのは、北方軍軍団長のラファイエンスだったからだ。

「陛下から命じられたのだ。バーサーム侯爵を警護せよと」

「・・・北方軍はどうされたのです？」

「私が居なくても、どうにかするだろう」

「・・・」

「まあ心配しなさんな。私も長い間、帝都を離れるわけにはいかないからな。2、3日後には帰らねばならない。侯爵様の作戦を見届けて、我々はお暇するよ」

ハハハと笑い飛ばすラファイエンスをライッセンは胡散臭そうな目

で見つめていた。

「・・・これは、先に動いた方が負けですね」

俺と老将軍はライッセンの案内で、帝国軍と皇国軍が見渡せる山の上に来ていた。

「ああ。両軍どうにかして敵をおびき出そうといろいろやっておるが、一向に敵に動く気配がないのだ」

「敵も動けば負けだというのが分かっていますからね。しかし、こう膠着した状態も限界があるでしょう？」

「我が帝国軍は勝利を手にするまで一歩たりと動くことはない」

「強がりを言うなライッセン殿。ここに陣を張って約一ヶ月。兵達にも厭戦気分がみなぎるころであろう。南方軍軍団長たる貴公が立場上それを言えぬのはわからんでもないがな」

ライッセンはプイとそっぽを向く。

「山の中ですから魔物の襲来も多いでしょうに」

「それは何とかなっている」

「・・・まあ、ここいらの山全てに数十万人もの人間がいるのですから、魔物も襲ってきませんか？」

「・・・心配はいらんと言っているだろう！」

ライッセンは俺たちを促し、その場を離れた。そして案内されたのは、大きなテントの中だった。そこには、南方方面軍の幕僚が勢ぞろいしていた。

「さて、名誉侯爵殿の作戦を聞こうか？」

俺は幕僚たちに作戦内容を説明する。

「・・・まあ、敵をおびき寄せる作戦は理解できる。それがうまくいけばいいのだがな。しかし、問題はその後だ。何でそんなものを我々が作らなければならんのだ？」

「まあ、できるところまでで構いませんのでご協力をお願いいたします。・・・それでは、我々は早速作戦にあたります」

「さあ、楽しみだな！」

俺と老将軍はその場を後にし、クノゲンたちとの待ち合わせ地点に向かった。

「それではクノゲン、よろしく頼む」

「お任せください」

俺たちは両軍が睨み合っているイルベジ川に来ていた。対岸にはラマロン軍が柵を構築するなどして、強固な防衛線を築いている。クノゲンは懐から鋼鉄糸を取り出し、ラマロン兵の一人に狙いを定めた。

突然、対岸のラマロン兵の一人が空を飛んだ。そして、帝国軍近くの川の中に落ちた。

空を飛んだ兵士は、何が起こったのかが分からず、キョロキョロとあたりを見渡している。

「よし、行け！」

ラファイエンスの号令で、親衛隊の5駒がラマロン兵に襲いかかる。彼は慌てて起き上がり、川の中を逃げていく。親衛隊もすぐ殺さずに、一定の距離を取りながらラマロン兵を追い立てていく。

「おい見ろ！あそこ！ウチの兵が襲われてるぞ！」

対岸から20人ほどのラマロン兵が出てきて、親衛隊に襲いかかろうとする。

「よし、行け！」

そのラマロン兵に50人の親衛隊が襲いかかる。そんなことをしていると、対岸のラマロン兵に動きがあり、そのうちの一隊が動き始めた。

「今だ！」

俺は空に向かって灼熱弾を放つ。それを合図にして帝国軍の一部が動き出す。ラマロン軍同様、川の中を進み始める。軍勢的にはラマロン軍より少ない。そこに気が付いたラマロン側からさらに軍勢が押し出してきた。

「退けぇ！」

ラマロン軍が川の真ん中までやってきたところで、帝国軍が退き始める。ラマロン側はさらに追い打ちをかけようと追撃態勢に入った。部隊の先頭が渡河しようとしたその直後、森の中から弓矢と魔法がラマロン兵に向かって雨あられと降り注いだ。

「一体、前線で何が起こっている！報告せよ！」

カリエス将軍は声を荒げる。絶対に動くなと厳命していた前線で動きがあったのだ。しかも皇国軍が自ら動き出しているように見える。これはあってはならないことであった。

「左翼に展開している第二軍が突撃しています！」

「すぐに退かせろ！各自持ち場に戻れと厳命せよ！」

カリエスは怒りを込めた声で、伝令の兵士に命令を伝えた。

しかし、一旦動き出した、しかも川の中に展開している軍はなかなか動きが取れず、ラマロンの兵は次々と帝国軍の弓矢と魔法の餌食になり、その屍を川に晒した。間の悪いことに、第二軍の兵士は川に入った自軍の兵士を助けようと次から次へと川に入り、そこを狙い撃たれてさらに被害を拡大させていた。

「よし、敵陣の左翼をもぎ取るぞ！」

ラファイエンスが馬に乗り、駆け出そうとする。そこに風のように

駆ける1人の騎馬武者がいた。

「退けぇぇぇ!!!!退けぇぇぇ!!!!退くんだぁぁぁぁ!!!!」

対岸の帝国軍にも響き渡る大声で河原を駆けていく。あまりの鮮やかさに一瞬、帝国軍の動きが止まる。

騎馬武者の声を聞いたラマロン軍は我先へと自陣に戻り始めた。騎馬武者は盾で弓矢や魔法を防ぎながら、最前線の兵士に声をかけていく。

「もう大丈夫だぁぁぁ!!!!慌てず退け!!帝国軍は追いかけてこないぞぉ!!!!」

波が引くように、彼らは引き上げて行った。しかし、川はラマロン兵の死体で溢れ、流れ出る血で真っ赤に染まっていた。

「お見事です侯爵様。まずは成功ですな」

満面の笑みを湛えたクノゲンが俺のところにやってくる。

「クッ・・・あの騎士がおらねば、私も戦いに出られたものを!」

ラファイエンスが悔しがっている。

「いや将軍、ここで怪我でもされたら俺は陛下に怒られます。まずは馬を下りてください」

しぶしぶ老将軍は馬を下りる。そして、対岸に目をやり

「あの騎士、見事な采配だったな」

「そうですな。まさか一騎だけで最前線に乗り込んでくるとは、見上げたものですな」

「ああ、なかなかできんことだ。ラマロンにも、良い騎士がいるのだな」

ラマロン軍の迅速な撤退に感心しつつ、俺たちは次の作戦準備に取り掛かる。

「・・・どういうことだ、アーモンド？」

「・・・」

ラマロン軍の本部、幕僚たちが居並ぶ中で、カリエス将軍の怒りを含んだ声がアーモンド軍団長に向けられていた。

「・・・あのままでは、第二軍は壊滅すると思ったのです」

「だからと言って自軍を離れての行動。しかも、たった一騎での行動は褒められたものではない。お前が死ねば誰が第三軍を指揮するのだ」

「お言葉ですが将軍、将たるものが命を懸けなければ、どうして兵たちに死ねと言えるのです！」

「アーモンド、お前はいくつになった？」

「・・・32歳です」

「その若さで第三軍の軍団長に任じられるだけの将器がお前にはあるのだ。もっと将たるものの振る舞いを学べ」

アーモンドはじっとカリエス将軍を見据えた。声は怒気をはらんでいるが、目は氷のように冷たい。

「アーモンド。大将が死ねばその戦いは負けだ。将たる者は最後の最後まで生きなければならん。お前の行動はどうだ？一歩間違えれば死ぬところだったのだぞ？お前が死ねば第三軍は総崩れになる。そうなれば、この戦いは皇国にとって圧倒的に不利になるのだ。わかるな？」

アーモンドは何も言わず、一礼をしてその場を離れた。

「全く・・・将器はあるのだがな。惜しいな」

「将軍閣下、やはり平民上がりのアーモンドに軍団長の任は重すぎるのではありませんか？」

猫なで声で意見を述べるのは、第二軍の軍団長であるジゼウである。

「しかし、奴の働きで第二軍は壊滅を免れた。違うか？」

「ハッ・・・」

ジゼウはバツの悪そうな顔をして頭を下げた。

あたりは既に、夕方になろうとしていた。

第百二十八話　対ラマロン軍夜襲作戦

ラマロン皇国遠征軍は、大きく分けて４つの軍団から構成されている。即ち、総司令官であるカリエス将軍が率いる本軍を中心に、その前を固める第一軍、左翼の第二軍、右翼の第三軍と言う構成だ。

カリエス将軍は、頭を痛めていた。自陣を防衛することにかけては卓越した指揮能力を誇っていた第二軍軍団長のジゼウが、まんまと敵の挑発に乗り、軍を動かしてしまったのだ。

第二軍が布陣している左翼は、ジュカ側の国境にも接している。万が一、大魔王の軍が現れた時のために、多くの結界師をそこに配置していたのだが、その半数が討たれてしまっていた。

「重ねて申しおく。諸将は私の命令無くして断じて軍を動かすことはならん。特に第三軍は徹底せよ」

第三軍副将のシーバが申し訳なさそうに頭を下げる。

幕僚たちを自陣に帰し、一人になったカリエスは、眼下に展開する夕日に染まった皇国軍を見てため息をついた。

カリエス将軍とアーモンド軍団長の戦いに関する姿勢は対照的である。カリエス将軍は、将たる者は最後列で冷静に戦況を分析し、適切な命令を出さねばならないと考えており、大将が死ねば全てが終わると考えている。従って、自分自身が前線に出るなどは論外である。一方でアーモンド軍団長は、最前線で指揮を執り、自分も命を懸けることによって兵を叱咤激励し、兵士の士気を上げなければ、

戦うことは到底出来ないと考えている。

これは、皇国の士官学校で英才教育を受けたカリエスと、腕一本からたたき上げてきたアーモンドの言わば机上主義と現場主義の違いなのだが、あいにくとこの二人をつなぐ人材がこの軍にはいなかった。ラマロン軍の弱点と言えば、これが大きな弱点であった。

双方の言い分は正しい。しかし、それだけに話がややこしくなる。それを十分にわかっているカリエス将軍は、相容れぬ、しかし、類まれなる将器を持つアーモンド軍団長をどのように動かしていくのかに、思いを巡らせるのであった。

「日が落ちてきたな。そろそろ始めようか？」

俺はクノゲンに目配せをする。

「では、準備してきます」

「よろしく頼む」

クノゲンの姿が森の中に消えていったのを確認した俺は、後ろに控えているフェアリードラゴンのサダキチに目を向ける。

『サダキチ、出番だ。よろしく頼む』

『お任せください』

サダキチ以下、２０匹のフェアリードラゴンが飛び立っていく。俺はイルベジ川からジュカ側に流れている川と、その対岸の山に向か

って霧を発生させる。

「うん？何だあれは？霧か？」

ラマロン軍第二軍の兵長、ナゲシはジュカ側の国境地帯の異変に気が付いた。

夕日が墜ち、辺りが急速に暗闇に包まれていくこの時間、彼らは自陣の篝火に火を灯しているところであった。薄暗い中、ぼんやりと見える山が急速に真っ白い煙に包まれていく。軍団長に報告を入れようと、その場を離れようとしたその時、別の兵士から声が上がる。

「な、何だあれは！川が・・・燃えている？」

見ると、川の先は霧に包まれているものの、その先にユラユラと炎が揺らめいているように見える。しかもそれは巨大なものだった。数十メートルはあろうかという火柱が揺らめいていたのだ。そしてそれは、日が墜ちる速度に比例して、大きくなっているように見える。

「おーい、早くしろ！手はどれほど抜いても構わんから、早くしろ！」

霧の向こうではクノゲンが部下に発破をかけていた。

「いや～いざ手を抜けと言われても、意外に手を抜けないもんですね」

「何でもいいから早くしろ！もうすぐ始まっちまうぞ！」

クノゲンの部隊は、川の上に丸太を渡し、その上に巨大な櫓を組んでいた。しかもそれは川幅いっぱいに何棟もの櫓が建てられている。それに組みあがった所から火を放っているのだ。

「森に飛び火しないようにな。下手をすると山が丸焼けになってしまうからな！」

「まあ、風がないので大丈夫でしょう」

「作戦完了まで油断するな。組みあがった所から燃やしにかかれ！お前たち、早く組まないと焼け死ぬぞ！」

クノゲンたちは、まるで子供のように嬉々として作業を続けていた。

ラマロン側には動揺が走っていた。川の上流が真っ赤に染まっているのだ。まさか噂の大魔王が来たのかという予感を誰もが感じ始めたその時、第二軍の兵士たちに、耳慣れぬ音が聞こえてきた。

ドドドドドドドドーーーーーー

「おい、何だこの音？」

「ジュカ側から何かくるぞ？あれは・・・ぎゃぁ！」

突然、ラマロン軍の左翼が大混乱に陥る。ジュカ側の山から現れた、体長３メートルから４メートルにもおよぶ巨大な牛、エグニモの３０頭の群れが、川を越えてラマロン軍に突撃していたのだ。

エグニモの特徴は、Tの字形の大きな角である。その角を突き立てて突撃した彼らは、易々とラマロン軍の築いた柵をぶち破り、その周辺にいた兵士たちを弾き飛ばした。

「大魔王だ！大魔王が攻めてきたぞ！」

「逃げろ！早く逃げるんだ！」

「うわぁぁぁ！俺は死にたくねぇ！」

あちこちからそんな声がする。それに釣られて、ラマロン軍第二軍の兵士は、次々と逃げ出した。そしてエグニモは、ある個体は逃げるラマロン兵を追いかけていき、ある個体は隣の第一軍に突っ込んでいった。

「何？第二軍が崩れているだと！？」

カリエス将軍は驚きを隠さなかった。

「ハイ、突然ジュカ側から巨大なエグニモが現れ、第二軍に突っ込みました！しかも、第二軍を突き抜け、隣の第一軍にも突っ込んでいます！」

「現状は！」

「第一軍のエグニモは討伐されました。しかし、他のエグニモは第二軍の兵を追っている模様です！」

「エグニモは臆病な魔物・・・人を襲うとは・・・信じられん」

混乱する頭を何とか必死に整理し、カリエス将軍は平静を保とうとする。

「兵たちは大魔王が出たと言う者もあり、動揺が広がっております！」

「各自命令があるまで持ち場を離れるなと重ねて厳命しろ。逃げる兵士は切り殺して構わん！」

「ハッ！」

足早に去っていく伝令の後姿を見ながら、カリエス将軍は次の手を必死で考えていた。

『ご苦労だった、サダキチ』

『このくらい、なんでもありません』

『お前たち、さすがだな。まさかエグニモのメスの発情の匂いが、あれだけのオスを呼び寄せるとは思わなかったな』

『お役に立ててよかったです』

『よく、敵陣深くまで鱗粉を撒いてきてくれた。お陰で敵に大打撃を与えることができた。ご苦労だった。休んでよし』

「・・・侯爵様！こちらも成功です！」

サダキチと対話していると、クノゲンの部下が戻ってきた。エグニモの後ろについて川を渡らせていた奴らだ。

「敵の左翼に動揺が広がっています！」

「よし！よくやってくれた！」

「大魔王が出た！逃げろ！って叫んで回ったらかなりの兵が、逃げていきましたよ」

「そいつはよかった。お前たちも早く戻ってこい。あと、クノゲンたちにも早く戻ってこいと伝えてくれないか」

「お安い御用です！」

闇に消えていくクノゲンの部下を見送りながら、俺は深くため息をついた。

その時、帝国側から凄まじい声で勝どきが上がった。

「「「「うわぁぁぁぁぁぁ！！！！！」」」」

「「「「うおぉぉぉぉぉ！！！！！」」」」

昼間に配った数千枚の厚手の紙でメガホンを作り、それを使いつつ全軍の兵士たちが大声を張り上げていた。ある者は木の上に登って絶叫していたり、ある者は敵の攻撃が届くギリギリのところまで出て行って大声を張り上げたりする者もいた。

「バカヤロー早く帰らせろー」

「メシ食わせろー！！」

「母ちゃーん！」

「ユリアー愛してるぞー！！」

勝どきに交じって好き勝手なことを叫ぶ兵士もいる。それらの声が山々に跳ね返り、何とも言えぬ騒音を巻き起こしている。マップで確認してみると、左翼の兵士たちを中心に、多くの兵士が落伍しているようだ。

「これではラマロンは心を折られるな。相変わらず、見事な手並みだな」

一部始終を見ていたラファイエンスが呆れたような声で俺に話しかけてくる。

「大魔王も、かくもいくまいと思わせる戦略だったな。いや、参った。脱帽だ」

「大魔王がいるとすればそれは・・・人の心に住む、弱さなのかもしれませんね」

俺はすぐ近くまで戻りつつあるクノゲンたちの姿を見つけようと、闇の中に目を凝らした。

「・・・正気か、アーモンド？」

カリエス将軍は眉間にしわを寄せたまま、アーモンド軍団長を見据えている。

「左翼、第二軍は壊滅状態です。兵達に動揺が広がっています。ここは軍を一旦引くべきです。帝国軍の総攻撃が始まる前に」

「第三軍が殿を務めると言うのは、私は賛成しない。アーモンド、お前は死ぬ気だろう」

「私のことより、皇国軍のことが大事です。今は出来るだけ多くの兵を無傷で退かせることが大切です。軍を立て直し、皇国内にヒーデータ軍を誘い込めれば、我々に勝機があります」

「・・・わかった。死ぬなよ、アーモンド。大将が生きていればいくらでも軍勢は立て直せる。しかし、大将が居なければ・・・」

「わかっています。お任せください」

「・・・幕僚たちを呼べ。今すぐにだ！」

カリエス将軍の号令一下、ラマロン皇国軍は闇の中での迅速な撤退作戦を敢行した。

第百二十九話　撤退戦は精神戦

「・・・ラマロン軍が撤退を始めましたね」

マップで確認していると、対岸のラマロン軍が少しずつ移動しているのが分かる。

「まさか・・・？」

ラファイエンスとクノゲンも目を凝らして対岸を見ている。いくつかの篝火は見えるものの、兵士が引き上げている気配は感じられない。

「急いでライッセン殿のとこに向かおう」

俺たちはクノゲンに後の処理を任せて、帝国軍の本部に向かう。

「何？敵が撤退を始めただと？」

ちょうど夕食を食べようとしていた南方軍軍団長のライッセンは、料理の乗った皿を持ったまま立ち上がった。

「ええ、おそらくは、ですが」

「いや、そのような未確認の情報を鵜呑みにするわけにはいかん」

「仰る通りです。一度、斥候などを出して確認いただけませんか？」

「・・・よかろう」

斥候が戻るまでに時間がかかるとのことで、ライッセンは俺たちに夕食を出してくれた。メニューは、パンとスープ、そして、何かの肉を焼いたものと豆を煮たものだった。

「我が部隊の料理番が腕によりをかけて作った料理だ。味わって食べるといい。それに、酒もある。飲んでくれい」

ライッセンはドヤ顔ですすめてくる。俺と老将軍は無言で料理を食べる。正直、あまり美味しくない。

「しかし、今日の勝利は痛快だった」

酒を飲みながらライッセンはご満悦の表情を浮かべている。

「侯爵殿も見事だったが、帝国軍の迅速な撤退も見事だった。あれで敵の左翼が動いてくれた。そいつらを一網打尽にしたのは・・・実に痛快だ！」

「さすがはライッセン殿、と言うところかな」

ラファイエンスがニヤリと笑みを浮かべる。

「いやいや、ラファイエンス殿に比べれば私などまだまだヒヨッ子でありますぞ！」

いい加減、このオッサンの相手にも疲れてきたころ、斥候が戻ってきた。やはり、ラマロン軍は撤退していったらしい。

「ハハハ！まさか我らの声に恐れをなして逃げるとは。ラマロンは口ほどにもない奴らだな。よーし！追撃戦だ！幕僚たちを集めろ！」

「いや、待て」

ラファイエンスが押しとどめる。

「相手の一部は敗走したが、今は組織的に撤退をしているのだ。無暗に追撃しては取り返しのつかぬ痛打を被るぞ」

「何を気弱な！名将・ラファイエンスはどこに行ったのです！今が好機ではありませんか！」

「貴公は酔っている。そんな状態で指揮が執れるか」

「うるさい！南方軍軍団長は私だ！誰の命令も受けん！」

ライッセンはラファイエンスを押しのけるようにして歩き出す。

「おい、幕僚たちを集めろ！幕僚・・・」

その瞬間、ラファイエンスの手刀がライッセンの首筋に振り下ろされていた。

「・・・軍団長は酔いが回ったようだ。介抱して差し上げろ」

老将軍は伝令に告げ、俺を促してその場を離れた。

「・・・大丈夫なんですか、あれ？」

「なぁに、大丈夫だ。今追撃戦をすればかなりの被害が出る。考えてもみよ。土地勘のない敵国の中に攻め入るのだ。しかもこの夜に。敵はそれを読んで撤退しているだろう。そこに無暗に攻撃を仕掛けるのは自殺行為だ。この戦は、ラマロンの牽制が目的だ。皇国を侵略するのが目的ではない。無理な欲はかかぬものだ」

そう言って俺たちは本陣を後にした。

ラファイエンスとクノゲンたちは、帝国軍の中で夜を明かすという。

「侯爵様はどうぞ、お屋敷にお帰り下さい」

「いや、何かある時は・・・」

「たぶん、大丈夫ですよ?何かあれば転移結界を使ってお屋敷に伺います」

「・・・わかった。ではクノゲンも使えるようにしておくからな」

そう言って俺は彼らが寝泊まりできる結界を張ってやり、その後、転移結界を張って屋敷に帰った。

屋敷に帰ると、すでに夕食は終わっており、皆、風呂に入るなどしているようだ。フェアリは少し眠たそうだったが、俺を見つけるとパタパタと飛んできた。彼女を抱っこしつつ、ゴンに今日の様子を聞く。特に大きな問題はなさそうだ。

フェアリをいつも寝ている籠の中に入れ、俺は離れに向かう。研究

室にはメイがいた。サイリュースたちの支援のメドは立ってきており、今は必要な農具の開発に力を注いでいるという。これからも少し作業をするそうで、俺は、無理はしないように言い、そのまま二階に上がった。

ちょうどリコが手洗いから出てきたところだった。俺を見つけるなり抱きしめる。

「・・・どうした、リコ？」

「・・・おかえりなさいませ。どこもお怪我は？」

「ないよ。大丈夫だよ」

「夕食は？」

「ああ、帝国軍の本陣で出してくれたのを食べた。あまり美味しくなかったけどね」

「何か作りましょうか？」

「いや、いい。それよりも風呂に入りたい。一緒に入るか？」

「もちろんですわ」

やっとリコは俺から体を離してくれた。

風呂に入りながら二人で今日あったことを報告し合う。クノゲンたちの部隊を引き抜いてしまったので、クルムファルのことが心配だったが、杞憂のようだ。残ったクノゲンの部下たちが海人族などか

ら応援を得ているようだが、元々治安がよいために、今のところは問題ないようだ。

そんな話をしていると、メイも風呂に入ってくる。三人で風呂に入りながら話をする。何より心が休まる時間だ。そして俺たちは仲良くベッドに入り、そのまま朝を迎えた。

早朝、夜が明ける前に起き出した俺は、戦場に再び転移する。ラファイエンス及びクノゲンの部隊は、交代で番をしながら俺の張った結界の中で休んでいるようだった。俺は焚火の所に行き、無限収納から炊き出し用に拵えてまだ余っている、ぜんざい入りの寸胴を二つ出し、それを火にかけてコトコトと煮はじめた。

火が通り、美味しそうな匂いが漂う頃、クノゲンとラファイエンスが起き出してきた。

「いい匂いがするな」

「これはリノス様特製のぜんざいですな」

「ああ、よかったら食べてくれ」

「いや、ありがたい。疲れると甘いものが欲しくなりますからなー」

「いや、これは何とも・・・美味いな」

皆でぜんざいを食べているところに、本陣から伝令がやってきた。

「ラファイエンス将軍、バーサーム名誉侯爵、至急本陣までお越し

いただきたいとのことであります！」

「わかった」

「ああ～また山を登るのか。老体にはキツイな」

そんなことを言い合いながら俺たちは帝国南方軍本陣のテントに着いた。中に入ると幕僚たちが揃っている。

「・・・昨日、敵に追撃をかけようと思ったところまでは覚えているが、それ以降の記憶がない。貴公ら、知らぬか？」

不機嫌そうな顔をしたライッセンが俺たちを睨む。

「ライッセン殿はかなり酒を飲まれていた。それは覚えておいでか？」

抜け抜けとラファイエンスが問いかける。

「酒は・・・飲んでいたが、酔ってはいなかった」

「そうであったか。いや、いきなり倒れられたので我々は驚いたのだ。何しろ仰向けにひっくり返ったのだ。リノス殿に回復魔法をかけていただいたのだが、その様子では大したことはなかったようだな」

「それでは、この首の痛みが・・・」

「うむ。倒れた時に打ち付けたのであろうな。な、リノス殿、あの時は焦ったな？」

「そ・・・そうですね」

老将軍はライッセンにわからないように舌を出し、首をすくめて笑ってみせた。

「・・・まあ、いい。諸侯に集まってもらったのは他でもない。中央にラマロン軍がいるが、どうやら昨夜、大半のラマロン軍は撤退したようだ。その対応について意見を聞きたい」

幕僚たちは追撃するべきという意見と、ラマロン軍の撤退を見届けてからこちらも撤退するべきだと言う二つの意見に割れた。その時、伝令が本陣に飛び込んできた。

「申し上げます！ラマロン軍が森から出てきました。河原に軍を展開しています！」

外に出て見ると、数千のラマロン軍が、河原にびっしりと展開している様子が見えた。

そして、一騎の騎兵が川の中に入ってくる。

「我らはこれより修羅に入る！敵と会えば敵を斬り！親と会えば親を斬る！雑魚にかまうな！狙うは、大将の首だ！」

山々にこだまするほどの大音声を騎兵は上げている。それに呼応するかのように、兵たちも声を上げる。一糸乱れぬ、揃った返事だ。

「敵を倒せ！」　「倒せ！」

「敵を殺せ！」　「殺せ！」

騎士の声を合図に、兵士が言葉を繰り返す。そんなことを繰り返している。

「・・・小癪な。いいだろう。帝国軍の恐ろしさを見せてやる」

「いや、退きましょう。ライッセン様」

「何ぃ？」

「あれはおそらく味方が撤退するまでの時間稼ぎです。しかもあれは決死隊です。あれに討ってかかると帝国軍は甚大な被害を受けます。今、あの騎士と雌雄を決することが帝国にとって適当とは思えません。ここは逆に余裕を見せて悠然と撤退しましょう」

「私もリノス殿の意見に賛成だ。我々はラマロンに侵攻することが目的ではない。あくまで牽制だ。その目的は達せられたのだ。勝者は我らだ。悠々と退けばよいのだ」

幕僚たちの多くもラファイエンスの言葉にうなずいている。ライッセンはしばらく目をつぶって考えていたが、やがてあきらめたように、

「まあ、ラマロンには甚大な被害を与えたしな。戦果は十分作った。我々はここで退こう。撤退の準備を！」

その言葉を待ちかねたように、幕僚たちは迅速に動き出した。

「・・・アーモンド軍団長、敵は仕掛けてきませんね」

副団長のシーバが呟く。アーモンドはヒーデータ軍を睨みつけたまま微動だにしない。

「軍団長、あれを！敵が・・・退き始めました！」

ヒーデータ帝国の大軍団が撤退を開始している。しばらくその様子をうかがっていたが、どうやら敵は挑発に乗る気はないようだ。

「・・・また、命をつないでしまったな。・・・よし、我々も皇都に引き上げよう」

アーモンドは馬を皇国に向けた。そして、決死隊５０００名もその後に続いて進み始めた。

ふとアーモンドはジュカの国境に目をやった。一体大魔王は何であったのか。果たして本当に復活したのだろうか。そんなことを考えながら馬を進めていると、対岸に白馬に跨る冒険者風の男とそれに従う冒険者たち。そして、近衛騎兵のような見事な鎧兜を装備した騎兵たちがジュカに向かって引き上げていくのが見えた。

ふと、白馬の冒険者風の男と目が合った気がした。自分よりもはるかに若そうに見える。しかしこの男は危険であるとアーモンドの本能は告げていた。

「いずれの日にか、雌雄を決する相手・・・か」

そんなことを呟きつつ、彼らは皇都に向けて歩を速めた。

第百三十話　論功行賞

ヒーデータ帝国の宮城内にある、皇帝の私室。そこに5人の男たちが顔を揃えている。一人を除いて全員が眉間にしわを寄せている。

「ムチャクチャですよ、それ」

「そうかの？名案だと思ったのだがな」

俺はため息をつく。陛下から出された案があまりにも荒唐無稽な話だったからだ。

「宰相様はどう思われます？」

「うーん。前代未聞ではあるが・・・。名案と言えば名案ですな」

「そうであろう？」

「いやいや、やっぱりムチャクチャですよ！」

もう一人の参加者である北方軍軍団長のラファイエンスは、黙ったままニヒルな笑みを絶やさない。

ラマロンとの国境での戦いを終わらせてすぐに、俺とラファイエンスは陛下の下に戦況の報告に来ていた。そこに陛下は宰相閣下とヴァイラス殿下も呼ばれ、この5人での会議となったのだ。

話の内容は専ら論功行賞だった。こういうことは陛下たちで勝手に

決めてくれればいいのだが、何故か俺とラファイエンスも同席させられて、従軍した連中の褒賞についての会議に巻き込まれていた。そして、そこで陛下の荒唐無稽な案が発表されて、俺は腰を抜かすほどに驚いているのだ。

「フム。まあ、ライッセンが率いる南方軍が帰還するまで、まだ間があろう。それまでゆるりと考えようではないか」

陛下はニヤリと笑みを浮かべている。

「ところでリノス殿。リコレットはどうしている?」

「リコ・・・レットですか?今はクルムファル領の管理をしていますが・・・」

「いやなに、余から少々相談があっての。近いうちにリコレットと話をしたいのだ」

「わかりました。いつがよろしいでしょうか?」

「早ければ早い方が良い。今日、これからでも構わん」

「今から・・・ですか?」

陛下はゆっくりと頷く。俺は驚きながらも取りあえず部屋を出て、クルムファルの館の執務室に転移する。幸いにして誰もおらず、リコ1人だった。さすがにいきなり現れた俺を見てリコは驚いている。

「・・・一体どうされたのです!?」

「すまんリコ。今から帝都に行くことは出来ないか？」

「どうしたのです？」

「さっき陛下にラマロンとの戦況報告に行ったんだ。そしたら陛下が、リコに相談したいことがあると言うんだ」

「まあ、兄上が？」

「今からでも相談できるなら、したいそうだ」

「兄上がそこまで急がれるとは・・・何かあるのですわね。わかりました。今から参ります。ちょっとお待ちくださいませ」

リコは部屋を出ていったかと思うと、すぐに部屋に帰ってきた。これから外出することを館の者に伝えてきたのだそうだ。

「ところで、戦況は・・・」

「ああ、問題ない。ラマロンは撤退したし、帝国軍も撤退中だ。一応、帝国軍の勝利だよ」

「まあ、それはよかったですわ！さあ、参りましょう」

俺たちは再び陛下の私室近くの場所に転移した。

「・・・リコレット、久しいの」

「陛下に置かれましては、ご機嫌も麗しゅう・・・」

「よい、固い挨拶は抜きじゃ。済まぬな、突然に呼び出して。忙しかったのであろう？」

「いえ、問題ございません。陛下のお召しとあればいつ何時でも」

「余とそなたの間柄だ。兄上でよい」

「はい・・・」

「済まぬがリコレットと相談がある。皆の者は席を外してもらいたい。二人にしてくれ」

「陛下、私もですか？」

「ヴァイラス、お前もだ」

「・・・畏まりました」

皆が部屋を後にする。俺は最後に部屋を出ようしていたところ、陛下に呼び止められる。

「話が終わればリコレットはすぐに帰す。よければここに転移結界を張っておくがよい」

「わかりました」

俺は屋敷に直通する転移結界を張る。当然、俺とリコ以外は発動しないようにする。いきなり陛下が屋敷に来られても困るしね。

「それでは、失礼します」

俺は転移結界に乗って、屋敷に帰った。

リコが屋敷に帰ってきたのは、夜もだいぶ遅くなってきてからだった。心配だった俺はメイやゴンと共にダイニングで待っていたのだが、リコは驚くほどに疲れていた。

「リコ、夕食は？」

「大丈夫ですわ」

フラフラとリコは離れに行ってしまった。俺はリコを追いかける。

部屋に入るなり、ベッドにバッタリと仰向けに倒れたリコは、ボーッとした表情をしている。こんな表情を見るのは初めてだ。

「リコ・・・大丈夫か？」

「大丈夫ですわ」

よろよろと起き上がったリコは、俺の胸に顔をうずめた。

「リノス・・・私のこと、好き？」

「大好きだよ」

「ずっと・・・ずっと・・・傍に居てくださいませ」

リコは泣いていた。俺は敢えて涙の理由は聞かなかった。そして、一晩中リコに腕枕をしてその背中を撫で続けた。

あくる朝、リコのキスで俺は目覚めた。まだ夜明け前で何事かと思ったが、リコは風呂に入りたいと言う。そういえば風呂に入っていないことを思い出し、一緒に朝風呂に入ることにした。

いつ見てもリコの肌は美しい。全ての動きが洗練されているので、風呂に入る姿も何か優雅な舞を見ているようだ。

「リノス・・・」

一緒に湯船につかっていると、不意にリコが話しかけてくる。

「これから先、私が年をとっても、老女になっても、ずっと傍に居てくださいますか？」

「もちろんだよ」

「年をとっても、腕枕をしてくださいますか？」

「リコとは死ぬまで離れるつもりない。リコが俺を嫌いになるまで、一緒にいる」

リコは俺に抱き着き、再び涙を流した。

風呂から上がり、朝食を食べる頃にはいつものリコに戻っていた。何か吹っ切れたようにキビキビと動いている。

朝食が終わると、リコから一通の手紙を渡される。陛下に渡してほしいのだそうだ。俺は何も言わずそれを受け取った。リコはいつもの通りかわいらしい笑顔を俺に投げかけて、クルムファルに転移し

ていった。

俺は陛下の下に行き、リコの手紙を渡した。読み終わると陛下は、ふうとため息をつき、天を仰いだ。

「・・・一体どのような話をされたのか、伺っても？」

「いや、あくまで余の個人的な相談なのだ。事が動くまで何とも言えん」

「それは・・・いい話なのでしょうか？」

「それも何とも言えんのだ」

俺は釈然としない気持ちを押し殺して、部屋を退出した。

陛下の部屋を退出した俺は、その足で帝都ホテルに向かった。そしてそこに捕虜となっているサイリュースのソレイユたちに、ラマロンとの戦闘が一旦終了したことを伝えた。彼女たちは俺に丁寧に礼を言い、近いうちにぜひジュカにある集落に来てほしいと何度も頼まれた。あそこに行くにはまた、賢者・リノスにならないといけないのだが、それはまた後で考えるとしよう。

彼女たちは名残惜しそうに、荷物をまとめて帝都ホテルを引き払った。何故か大量の荷物を持って転移していったが、あれはいつ買ったのか・・・？まあ、詮索することはよしておこう。ちなみに、彼女たちの滞在費は俺が全て支払った。とりあえず、請求された金額を見て、二度ほど数字を数えたことだけは特記しておく。さすがは一流ホテル、である。

国境地帯に遠征していた南方軍が帰還するまでの一週間。俺はジュカの国を飛び回った。再びラマロンの侵攻の懸念があったので、サダキチらフェアリードラゴンたちに斥候に出てもらっていたが、特に大きな動きはなかった。

その間、宰相閣下と俺の論功行賞について話をしたが、俺に望みはなく、宰相閣下に一任することにした。とにかく俺は、平和に暮らしたいのだ。今の家族と今の暮らしができれば十分なのだと宰相閣下に伝え、陛下の荒唐無稽な話に乗らないようにと釘を刺した。宰相閣下も俺のよいようにすると返答してくれたので、この話はこれで打ち切ることにした。

帝国軍の凱旋が行われてから五日後、早くも論功行賞の発表を兼ねた、陛下主催の晩餐会が行われた。煌びやかな衣装を纏った貴婦人たちや、体中にイヤというほど勲章をぶら下げた軍人たちの中、俺もリコも正装してそこに列席した。

やはり、全力で着飾ったリコは周囲を圧倒するほどの美しさだ。リコが通ると必ず男性は振り返る。夫として何とも鼻が高い。

陛下との会談以来、リコは前にも増して俺を求めるようになった。それと比例してか、最近リコの美しさに磨きがかかったようにも感じる。ちなみに、リコのドレスに隠れた部分には俺のキスマークがついているのは、誰も知らない秘密だ。

貴族同士の社交辞令満載の挨拶が、ある程度終わった頃を見計らって陛下が登場し、晩餐会が始まった。

そしてその最中に、ラマロン皇国との戦勝報告がなされ、いよいよ論功行賞が宰相閣下より発表された。

基本的に兵士を出した貴族の家には報奨金が下賜され、功績のあった家には、報奨金の他に陛下から感状が授けられた。さらに、将官クラスには階級の昇進が告げられていく。

「さて、これから先の勲一等の功績を上げたものについては、陛下が直接褒賞を授けられる」

会場中が緊張に包まれる中、陛下がおもむろに玉座から立ち上がる。

「この度の戦功、朕は大いに満足である。中でも十万余の南方方面軍を率い、ラマロン皇国の侵略を阻止しただけでなく、敵に甚大な被害を与え、なおかつ味方の損害を最小限に抑えた、類まれなる指揮能力を発揮した、ライッセン・フレイラップ将軍と、わずか数百の軍勢でジュカ王国の王都を陥落させ、敵部隊を壊滅せしめた、バーサーム・ダーケ・リノス名誉侯爵の軍功は、特に帝国をして、その名声と国威向上に多大なる功績であると認むる。よって、両名は勲一等の功績があると認め、朕より特に褒賞を与える」

俺とライッセンは促されて陛下の前に出る。ライッセンは意気揚々と鼻の穴を膨らませている。

「ライッセン・フレイラップ将軍。その方は、勲一等ニヒキ勲章を授与し、元帥の称号を与える。さらに、終身現役武官としての待遇を行う。そして、その指揮能力の高さを認め、現在の帝国南方方面軍軍団長の任を解き、新たに帝国北方方面軍軍団長に任ずる」

「つ、つ、謹んで、お、お、お、お受けいたします」

ライッセンはよほど嬉しいのか、どもりながらもお辞儀をし、張っ

ていた胸をさらに張って、背中を反り返らせた。あれ、腰を傷めないか？

「そして、バーサーム・ダーケ・リノス名誉侯爵。その方は、勲一等ニヒキ勲章を授与し、ジュカ王国の旧領を与え、新たなる国を建国することを許す。それに伴い、国王の称号を名乗ることを許す」

会場中がものすごい騒めきに包まれる。俺は口をあんぐり開けたまま呆然とする。いやいや、陛下の元の案のままですやん。何も変わっていませんやん。話が違いますやん・・・。

「新しき国を建国するに際しては、帝国の人材を活用することを許す。朕からは、国家の柱石たる宰相と軍総司令官には、余の妹にして、そなたの妻である、ヒーデータ・シュア・リコレットと、元帝国北方方面軍軍団長の、ラファイエンス・オーグ将軍を推挙しておく」

会場内がさらにざわついている。リコとラファイエンス？聞いてないよ・・・？目の前が・・・真っ暗だ。

第百三十一話　考え方ひとつで見え方は変わる

目の前の陛下はニヤリと笑っている。俺は崩れそうな体を何とか踏ん張って耐えている。

「今後の国家の有り様については、朕も相談に乗る。いつでも相談に来られよ」

「お、恐れながら！・・・それにつきましては、私では務まりません。謹んでご辞退させていただきます」

思わず俺は言い放っていた。周囲がとんでもなくざわついているが、んなものは関係ない。誰が好き好んで、国王などになるものか！

「相変わらず名誉侯爵殿は遠慮深いの。ああ、言わんでもよい。そなたの妻、リコレットに遠慮しておるのであろう。安心せよ。リコレットには朕からよく言い聞かせておいた。この褒賞についてはすでに、リコレットも承知の上じゃ」

は？リコも承知？そんな話一言も聞かなかったぞ？どういうことだ？

「恐れながら、まだ妻とは相談しておりませず・・・。妻が宰相と言うのは・・・」

陛下はハッとしたような表情を浮かべる。

「これは朕としたことが！確かに、リコレットは王妃とならねばならぬ身。王妃が宰相を兼任するなど前代未聞じゃ。これは朕が誤り

だ。ハハハハハ」

カラカラと陛下は声を上げる。周囲の貴族も笑い声が漏れている。そして、貴族たちはガヤガヤと話を始める。そのどさくさに紛れて陛下はその場を後にした。

「国王とは・・・大した出世ですな」

隣のライッセンが憎々しげに俺を見る。知らねぇよ。俺が望んだもんじゃねぇんだ。こっちだって迷惑してんだよとヤツを睨み返す。

俺は振り返ってリコを見る。申し訳なさそうな顔をして俺とは目を合わそうとはしない。何故だリコ。俺がそんなことを望んでいないのはお前が一番よく知っているだろう。

俺はリコの下に向かおうとする。その瞬間、会場を警備している近衛兵の一人が俺の背後から声をかけてくる。

「名誉侯爵様。陛下がお呼びです」

俺は兵士を睨みつける。しかし、彼を睨んだところで何も変わらない。俺は気を取り直し、陛下に一言文句を言うために兵士の後に従った。

「ご苦労だったの」

微笑を湛えた陛下が悪びれもなく俺に話しかける。

「陛下！何なんですあれは！」

「失礼いたします。リコレット様がお見えになりました」

申し訳なさそうな顔をしてリコが入室してくる。

「リコ！何でだ！」

「・・・ごめんなさい」

リコは泣きそうな顔をしている。

「まあ、リノス殿、座れ。リコレットを責めるのは、余の話を聞いてからでも遅くはあるまい？」

俺は渋々ながら、陛下の前に置かれた椅子に座った。そしてリコも隣の椅子に座る。

「さて・・・何から話せばよいかの。まあ、一言でいえば、リノス殿をジュカの国王にするのは、帝国にとってちょうど良いのだ」

「ちょうど良い？」

「考えてもみよ。ジュカの王都を落としたのは、我が帝国なのだ。王都をこのまま捨ておくわけにはいくまい？」

「・・・」

「国を併呑するとなると、侵略された国の国王以下、一族を皆殺しにしてしまうのが常なのだが、ジュカは事情が違う。既にラマロンに一度蹂躙されている。そして、ラマロンは討伐され、ジュカの内

乱の元凶になった者も討伐されていると聞く。それをやったのは、我が帝国であり、リノス殿だ」

「だからと言って俺が・・・」

「まあ、聞け。ジュカに傀儡の政権を作ることも考えたが、それをするためには事前の根回しが必要になる。今回の侵攻はそれをしている暇がなかった。そうなれば、帝国より管理する者を遣わさねばならん」

リコが俯きながらそっと俺の手を握ってくる。

「貴族と言うのは、己の家を守ることのみに執着する。どの家を任じても、互いに足の引っ張り合いをするであろう。しかし、リノス殿であればそれが解決する。何せ帝国貴族のしがらみがない。さらに、王都を寡兵で落とした張本人であり、クルムファルとニザ公国を復活させた手腕もある。・・・いや隠さんでもいい。その家臣たちを使っている手腕を買うのだ。その実績であれば、帝国の貴族は今回の論功行賞に納得するだろう」

陛下はふぅと一息をつき、さらに言葉を続ける。

「宰相にリコレットを推薦したのは、リノス殿が最も信頼し、その片腕となるにふさわしい人材だと思ったからだ。そして、ラファイエンスだ。かの者は軍制を組織することに抜群の才能を持っておる。余が帝国内で最も信頼する男と言ってよい。その者を、リノス殿に預けるのだ。軍に関してはあの男に任せておけばよい。一度部下に謀られているが、それ以降はスキが無くなりおった。言ってみればリノス殿への最大の褒美は、ラファイエンスだの」

「しかし、俺は国王などは・・・」

「リノス殿が動く必要はない。要はいかに担がれるかだ。見たところリノス殿には良い人材が集まるようだ。おそらく、ジュカにリノス殿があれば、良い人材がジュカに集まろう」

「そんなぁ」

「人・金・モノの支援は惜しまぬ。先ほども申したように、帝国の人材はいくら活用してもらって構わん。クルムファルもそのままでよい」

「完全に、拒否権はなさそうですね」

「ウム。帝国としてはこの論功行賞を受けてもらわねば困るのだ。リノス殿がジュカにあれば、帝国がジュカを併呑したことを内外に示すことができる。しかも余の義弟が統治するのだ。帝国の版図は大幅に広がり、国威は大きく上昇する。それどころか、両国に挟まれたニザ公国は後顧の憂いが無くなり、復興に全力を注ぐことができる。そして、南のラマロンにも大きな脅威を与えることができる。戦略的には一石二鳥にも三鳥にもなるのだ」

リコの俺の手を握る力が強くなる。リコ、痛いよ。

「ジュカに関してはリノス殿の好きにしてもらって構わん。まあ、年に数回は帝都に顔を出してほしいがの。リノス殿ならば無理な政治はせぬであろうし、荒廃した国内も復興させてくれるであろう。余にできることならば何でもするぞ？どうだ？」

「リノス・・・」

目を真っ赤にしたリコが俺に話しかけてくる。

「リノスが居れば、本当に民が幸せに暮らせる国が作れると思いますわ。私も兄上からこの話を聞いたときは即座にお断りしたのです。でもよく考えてみると、リノスなら人間も獣人も、魔物も、貴族も軍人も職人も商人も・・・皆が幸せに暮らせる国が作れると思ったのです。きっと、メイも、ゴンも、ペーリスも、フェリスも、ルアラも、クノゲンたちも・・・皆がリノスを支えてくれるはずですわ」

「そんな・・・自信ないよ」

「私はリノスと結婚してとても幸せですわ。きっとそれは一緒に暮らす皆も同じです。こんな幸せな国が作れたらどんなに素晴らしいか・・・。とても理想論であることは承知しています。失敗するかもしれません。でも・・・」

「よーし、分かった」

陛下が突然声を上げる。

「もし、ジュカで何かが起こったら、余が全ての責任を持とう。ただし、余と宰相のグレモントが生きている間だけだがな。リノス殿は以前余に言ったではないか。不安に負けてはならぬと。強気でいかねばならぬのではないのか？」

意地悪そうな顔をして陛下は微笑む。

「失敗したらその時はその時じゃ。その時考えればよいのじゃ。国王になる機会はそうそうあるものではないぞ？今ならねばいつなる

のじゃ？世界中に国王になりたくてもなれぬ者が多くいる中で、リノス殿はその機会を得た。それを生かそうとは思わぬか？モノは考え方次第だぞ？」

「・・・まさか陛下にそんな説教をされるとは思わなかったです」

「・・・国王の話、受けてくれるな？」

「拒否権はないのでしょう？ならば、やるだけ、やるしかないじゃないですか」

「そうとなれば、決まりじゃ！」

陛下は立ち上がり俺を促して再び晩餐会の会場に向かった。

「皆に改めて紹介する。ジュカの新しき王となる、バーサーム・ダーケ・リノス殿じゃ。今後、帝国とジュカは従属関係ではない、対等な、兄弟同様の付き合いをしていく。余の義弟殿じゃ、皆も助けてやってくれい」

参列している貴族が恭しく首を垂れる。

「新国王様、このラファイエンス、新しき国の始まりに共に立てますこと、歓喜に堪えません。今後はこの身命を賭して仕えさせていただきます」

俺の前に進み出たラファイエンスが片膝をつき、頭を下げる。まだコイツを受け入れると決めたわけではないのだが・・・と考えていると、老将軍はスッと顔を上げ、俺にニヤリと笑い、ウインクを飛ばした。

「将軍、今後とも、よろしくお願いします」

「ハッ！」

相変わらずいい声だ。そして老将軍の横にはいつの間にかリコが控えていた。

「我が夫、そして新国王陛下、私も身命を賭してお仕え申し上げます」

「皆の者、今宵はめでたい宴じゃ。存分に楽しんでくれ！」

陛下のよく通る声が、広いパーティ会場に響き渡った。

「・・・本当に大丈夫かなぁ」

屋敷に帰る馬車の中で俺は呟く。今日はイリモを使わず、宮城（きゅうじょう）からの迎えの馬車を使ったのだ。あの後、帝国の貴族たちの売り込み攻勢にあって、逃げ出すのに苦労したのだ。リコが上手く裁いてくれなければ、俺は発狂していただろう。

「大丈夫ですわ、きっと」

リコが俺の手を握る。

「・・・私のこと、嫌いになりまして？」

「なるわけないだろう。俺はリコが居ないと生きてはいけないんだ」

「それは、私もですわ」

「これからどんなことが起こるか分からないけど、やるしかないんだよな。どうしてこう、俺は厄介ごとを引き寄せるんだろう？」

「その厄介ごとを全てやり遂げてきたではありませんか。それに、リノスは、私が全力で守りますわ」

「頼もしいな。リコが奥さんで本当によかったよ」

「私も、リノスが夫でよかったですわ」

俺はリコの手を再び握り返した。そして俺たちは屋敷に着くまでの間、その手を握り続けた。

第百三十二話　全てが見切り発車

「・・・ねえ、ちょっと聞いてるの？本当に大丈夫なの？」

うっせぇな。誰だよ・・・うおっ！エリルじゃないか！久しぶりだな・・・。

「ジュカ王国の王だなんて・・・本当によくやるわね！一体どうするつもり？」

・・・どうすると仰いましても、成り行きでそうなっちゃったものは仕方ないですよ。やるしかありません。あ、ところでお嬢様？

「何よ？」

この間夢に出てきた時は声が聞こえなかったんですが、森の方を指さしてましたよね？あれは何だったのでしょうか？

「犬神のいる方向を教えてあげてたのよ。何？気が付かなかったの？」

わかんないですよ、そんなこと。

「子供が欲しいっていうから、教えてあげたのに全く行こうとしないんだもの。そうしたら今度はジュカの王になるなんて！本当に訳が分からないわ！」

私だってわかりませんよ。でも、ありがとうございます。犬神の場

所を教えていただいていたんですね。嬉しいです。でも確か、犬神のいるところまでは半年くらいかかるんじゃなかったでしたっけ？

「それは人の足の話よ。馬を全力で飛ばせば二か月で着くわ！」

・・・遠すぎますよ。

「それで、これからどうしていくの？」

取りあえず、国民が食えるようにします。格式とか作法とかは後回しです。衣食足りて礼節を知ると言いますからね。まずは衣食住を確保することに全力を上げます。

「いいわね、それ。それをあなたの口から国民に伝えるといいわ」

そんなもんですか？

「そうよ、きっとそうよ！」

わかりました、そうしてみます。

「リノス」

何でしょう？

「・・・仕方がないわね。これからは私があなたを守ってあげる。安心しなさい」

安心って何ですか？えっ？どこへ行くんですか？おっ、走るの速ぇな。どこ行くんだエリルー。おーいエリルー！！

目が覚めるとまだ深夜だった。明日は国王に任じられてから初めてジュカに行く日だ。気持ちが高ぶっていたのかもしれない。ふと周りを見渡すと、リコが静かに寝息を立てていた。リコの寝顔は本当に癒される。ダメならまたリコに癒してもらおう。そう考えると気持ちが少し楽になった。そして、俺はそのまま再びベッドに入った。

ジュカ王国の王都にある西門前の大広場。ここに数千人の人々が集まっていた。貴族、軍人、市民、商人・・・。これだけの人々が集まるのはいつ以来だろうか。カルギ元帥の反乱の際、王都から民衆が逃げ出そうとごった返して以来のことではなかろうか。そして、城門の前には、数名の冒険者風の男と、兜を小脇に抱えた騎士たちが整列していた。

その中から、一人の男がスタスタと階段を上り、門の上に上がっていく。そして、門のちょうど真ん中まで来たところで、男は広場全体に魔法のような何かを放った。

「・・・アーアーアー。チェックチェック。ワントゥーワントゥー。ホンジツハセイテンナリ、ホンジツハセイテンナリ。・・・聞こえてる？」

若い男の声が響き渡る。民衆の視線はこの男に集中している。

「ああ～ええ～。あ、今ここには俺の声が聞こえるように結界を張りました。その、何だ。まあ、知っている奴も多いと思うけど、俺がこの国の新たな国王をやるはめになった、リノスだ。まあ、よろしく頼む。今日、ここに集まってもらったのは、これからのこの国

について、俺なりの考えを聞いてほしかったからだ。ちなみに、反対意見は聞くから、そのつもりでいてくれ」

男はエヘンと咳ばらいをし、再び話し始める。

「まず俺から皆にお願いしたいのは、俺はこの国を立て直したいってことだ。以前のジュカ王国に戻そうとは思わない。やるなら徹底的に・・・皆が住みやすい国を作るつもりだ。で、・・・ええと、そうだな。まあ、そういうことは追い追い決めていくとして、俺から皆に二つ、お願いというか、二つのことを定めたい」

民衆に一気に緊張が走る。

「なに、難しいことじゃない。人として当たり前のことだ。俺が定めるのは二つ。一つは、他人に迷惑をかけないこと。それは親であれ子であれ、妻や恋人であれ友人であれ、だ。まあ、子供や年寄りが迷惑をかけてしまうのは仕方がない。ただ、人に迷惑をかけずに生きるように努力する、これをやってもらいたい。そしてもう一つは、他人を助けてやる、だ。何でも構わない。他人を何らかの方法で助けてやってくれ。俺はこの二つを国の指針としたい」

民衆たちはポカンとした顔をしている。

「あ、これは俺が守れてない時は遠慮なく言ってくれ。まずは、この国を復興させたい。皆の着るものが揃い、住む場所があり、飯が食えるようにしたい。細かい国のことについては、それらがそろってから決めていきたい。まずは、この国が復興するように、みんなでこの国を作りたいと思う。よろしく頼む」

男はフウとため息をつき、さらに話を続ける。

「で、これは相談なんだが、国の名前を変えようと思う。ジュカってあれなんだろ？大魔王を連想させるんだろ？それって今後、色んな所で影響が出るような気がしてるんだ。で、国の名前をアガルタにしたいと思うんだが、どうだろうか。もし、他に候補があるなら言ってくれ。一週間待つ。一週間後の午後１２時で締め切るのでよろしく」

そういうと男はそくさと城門を降りていった。

・・・俺の言いたいことは民衆に伝えたつもりだ。これから先、どうなるのかわからない。しかし俺は、この国を復興させようと心に誓った。既にリコはこの国の体制について準備に入っているし、ゴンもメイも国の土壌調査や特産品などの研究に取り掛かっている。俺が考えるのは、まずは金を儲けることだ。国家として金がないのはヤバイ。ゲスい話だが、まずはそれを考えていこうと思う。

「・・・アガルタ？」

書類にサインをしていた手が止まる。顔を上げると同時に、頬に垂れた肉が揺れる。でっぷりと肥った体を大儀そうに立ち上がらせた男は、クルリと踵を返して、窓の外を睨む。

ラマロン皇国宰相、マドリンは不愉快そうな顔のまま、王宮内の自分の執務室の窓に映る荒れた海を見ていた。

「あと・・・ヒーデータ帝国から捕虜に関する書簡が来ております」

「捕虜?何と言っておるのだ」

「・・・捕虜解放の協議をしたいとのことです」

しばらくの沈黙ののち、マドリン宰相はクルリと体の向きを変え、呟くように吐き捨てた。

「黙殺せよ。我が皇国に捕虜について話をする余裕はない」

「畏まりました」

男は恭しく一礼をして部屋を出ていく。マドリン宰相はため息をつき、再び机の前に座ると、書類に目を通し始めた。書かれている数字に目を通す。サインをしなければならないが、ペンを持つ手が震えている。

その時、扉をノックする音が聞こえた。ジロリと扉を睨み、不機嫌そうな声で

「入れ」

と促す。入出してきたのは、カリエス将軍だった。

「おお、これは将軍。突然どうされた?」

「先ほど、皇太后陛下の下に行ってきた」

「皇太后陛下?で、陛下はなんと?」

「ヒーデータを攻めよと仰せであった」

マドリン宰相は天を仰ぐ。

「それは無理であろう・・・。ヒーデータはほぼ無傷で兵を引いたのだろう?今のヒーデータを攻めるのは自殺行為だ。それに、兵站が・・・」

「それは私からも申し上げた。が、えらくご立腹でな」

「まあ、マトカル部隊が全滅したことはお耳に入れておらんからな。確か、ヒーデータの大軍が攻めてきて仕方なく撤退したと申し上げたのだったな?」

「ああ。皇太后陛下が仰るには、それならばヒーデータはもぬけの殻のはずだ。今はヒーデータを落とす絶好の機会だ。ヒーデータの帝都という母屋を奪えとの仰せだ」

「それが出来れば、今頃やっておるわ。今は兵を食わせるべき食料がないことを、再三宰相である私から申し上げているのに、なぜお分かりいただけないのか」

「皇太后陛下は、食料ならあると仰せだ」

「ほう、それは初耳だ」

「ヒーデータの帝都までは山道を進む。山には山菜が生えているであろう。食せる魔物もいよう、木の根、木の葉などを食しながら向かえばよいと仰せだった」

「・・・皇太后陛下らしい考え方だな」

カリエス将軍とマドリン宰相は互いに苦笑いを浮かべる。

「皇太后陛下にかかっては、高い山も広い川も全く関係ない。地図だけご覧になって申されるのだから、重装備で山を登ってく時の辛さ、時間、熱さ寒さ。深い川を渡る時の困難さ、水の冷たさ、そんなものは全くお構いなしだ。私もああなりたいな。あれだけ悩みもなく作戦が立案できればどれだけ楽か。皇太后陛下から見れば、地図上では皇都とヒーデータは近い。今すぐに攻めれば帝都を落とせると考えられるのも無理はない」

「やれやれ。将軍、貴公も大変だな」

「それより宰相殿、今年の作物の収穫はいかがかな?」

「よくない。このままでは民は飢え死にしてしまう」

「やはり、ジュカの作物を根こそぎ持って帰った方がよかったか・・・。特にあそこは小麦の産地だ。ジュカの国民を一掃し、そこに皇国の民を入れて収穫をさせる・・・その計画が全くの水泡に帰した今、我らはどうするべきか」

カリエス将軍は遠い目をして呟く。マドリン宰相はため息をつき、

「農産物のことに関しては我々の仕事だ。我々はやれることをやるしかない。将軍、あなたは、アガルタの作物を手に入れる戦略を練ってみてくれ」

その時、部屋のドアがノックされ、侍従の一人が入ってきた。

「宰相様、陛下がお呼びです。緊急に会議を開くと仰せです」

「わかった、すぐ行くと伝えてくれ」

侍従は恭しく一礼をして退出した。

「・・・陛下とは皇帝陛下のことだろうか、それとも・・・？」

「将軍、そのような野暮なことを言うまい」

カリエス将軍は苦笑いを浮かべる。

「ところで宰相殿」

「何だ？」

「さっきから気になることがあるのだ」

「気になること？」

「先ほどからアガルタと言っておられるが、それはどこのことだ？」

マドリン宰相の乾いた笑い声が、部屋の中にこだましていた。

第百三十三話　ラマロンの事情とアガルタのこれから

ラマロン皇国の宮殿の奥深くにある会議室、そこに皇帝ラマロン・クロウ・フレインス以下、１０名の閣僚および軍関係の幕僚が並んでいる。そして、皇帝の後ろには、一人の女性が控えている。皇帝の生母である皇太后、ラマロン・クロウ・レイシスである。

彼女は齢６０を超えているものの壮健そのものであり、美しい銀髪はつややかに、そしてふっくらとした微笑みを湛えて着座していた。

「さて皆の者、本日火急に招集したのは他でもない。ジュカ国改め、アガルタ国についてじゃ」

皇帝が会議の口火を切ると、全員が首を垂れる。皇帝の言葉を聞くときは皆、こうしたポーズをとるのがラマロンのしきたりであった。

「ひと月ほど前、ヒーデータ帝国によってジュカは侵略された。しかし、国名をアガルタと改めた現在は、手勢も少なく、国内がまとまっておらぬ状況だと報告が参った。そうですね？お母上様」

皇太后は鷹揚にうなずく。

「しからば今一度、アガルタ国を攻めよ。今攻めれば落とすのはたやすかろう」

「恐れながら、しばらくお待ちくださいませ」

声を上げたのは、宰相のマドリンである。

「先日の派兵で皇国は兵站不足の状態にあります。今、皇国軍を動かすとなりますと、宮殿内に備蓄してある兵站に手を付けざるを得ません。もし兵を出しているその隙にヒーデータに攻め込まれますと、我々は持ちこたえることが出来なくなります。恐れながら、派兵につきましては、秋の収穫が終わってから、ご再考いただきたくお願い申し上げます」

「ううむ・・・」

室内を静寂が支配する。それを破ったのは、皇太后の声だった。

「それでよいのか？宰相？」

「誠に恐れ入ります。私は、これ以上の意見を申し上げることができません」

「マドリン宰相。そなたは何かというとできぬ、できぬ、の一点張りじゃ。その出来ぬことをできるようにするのが臣たるものの務めではないのか？」

「仰ることはごもっともでございます。しかし、国を預かる・・・」

「アガルタを攻めなさい」

「皇太后さま！」

「私が、言っているのです。攻めるのです。そうせねば、皇国は立ちいかぬのではないのか、宰相？」

ホホホと小さい声で皇太后は笑い声を漏らす。しかし、微笑みの奥の瞳は冷淡そのものである。その目に射すくめられるように、マドリン宰相は汗を描きながら俯く。そんな宰相に侮蔑の目を向け、再び皇太后は口を開く。

「誰ぞ、皇帝陛下の御意を叶える忠臣はおらぬのか？」

「・・・恐れながら」

声を上げたのは、第二軍団長のジゼウだった。

「確かに皇太后さまが仰るように、兵站がない、というのは理由になりません。ないならないなりに、攻める方法を考えませんと」

皇太后は深くうなずく。

「このジゼウに作戦がございます。僭越ながらそのお役目、私にお任せ願えませんでしょうか？」

「さすがはジゼウ殿、頼もしき限りじゃ。皇国軍はそうでなくてはならぬ」

皇太后の冷たい目は、カリエス将軍に向いていた。

「なにもいたずらに兵を進めるばかりが戦いではございません。兵を動かさずに勝利すればよいのです」

ジゼウはニヒヒと笑い、皇太后に恭しく一礼をするのであった。

国名をアガルタに改めてからの俺たちは多忙を極めていた。

俺たちは王都を都と改名した後、まずはここの復興に全力を入れることにした。幸い、帝都から大工などの職人が数多く移住してきた。そうした人たちが、都の人々と共に、壊れた家々などを片っ端から修理していっている。

さらに俺は、帝都にあったスーパー・ダーケの支店を都に出した。商人街の一角にあった空き家を改装し、そこに店を作った。管理や運営は、帝都の店を管理している猫人族のウィリスに任せた。ヤツには先日、子供が生まれたばかりであり、女房子供のためにもがんばると張り切っている。

さすがにまだ、売れるとは程遠い状況だが、都に金が回っていけば自然とスーパーの売り上げも上がるだろうと考えている。今は、投資の時期だと割り切ることにしたのだ。

これらの資金は、帝国が貸してくれた。しかも、無利息でいいそうだ。踏み倒そうと思えば踏み倒せるのだが、さすがにそれは陛下の顔をつぶすことになるので、早めに返したいと思う。

ゴンとメイは都の耕作地を始め、各地の農地を調べて回っている。都の耕作地については累々と死体が放置されていた場所であり、そこで作物を育てることに住民が抵抗を覚えないかが心配だったが、そこは問題ないらしい。この世界の住人は俺以上に割り切りが上手いようだ。

メイの傍には何故か土の精霊であるノームが、ストーカーの如く付

いて回っている。本来精霊とは精霊術を持つ術師が呼び出し、契約するものなのだが、稀に精霊の方から契約を申し出る場合があるらしく、メイの場合はそれに当たるらしい。ゴンとも話が合うようで、三人で和気あいあいと話をしながら、ああでもないこうでもないと楽しそうだ。

ゴンと言えば、農地の管理だけではなく、都はもとより、街道や治水などにもアドバイスをするようになっている。さすがに２００年以上生きているのはダテではない。過去の事例から的確に指示を出していて、それが実に説得力がある。

そして、リコはというと、クルムファルの仕事を週一日に減らして、ほぼ都に付きっきりだ。そこにはフェリスとルアラがサポートに入っている。二人とも物覚えがよく、リコの右腕、左腕になりそうだ。

結局リコを宰相とする陛下の案は断ることにした。今はリコが中心になって動いているが、幸い、彼女の仕事を都の人々が率先して手伝ってくれている。その中で見込みのありそうな、人望のある人を見つけて宰相として育てていくことにしたのだ。

こうした俺たちの働きに都の人々はよく応えてくれ、率先して手伝ってくれている。実にありがたい限りだ。

そして、俺はというと、国内の領主たちとの会議に大半の時間を割いている。

実際、俺に従う意思を見せてくれたのは、領主の２／３ほどで、全員が従う意思を見せたわけではない。しかし、それは割り切った。俺に従う者は全力で助ける。従わない者は放置プレイである。おそらく従う意思を見せない奴らの大半は、俺を値踏みしているのだろ

う。果たして本当に国を運営していけるのかどうかを見極めているに違いない。こういう奴らはきっと、国としての繁栄を見せれば、靡くはずだと考えている。

幸いにして、穀倉地帯となる広大な耕作地を持つ領主の大半が俺に従ってくれている。今は彼らと膝を詰めて、これからの国としての運営をどうするのかを議論している。

そして、アガルタ国の総司令官の任に就いたラファイエンスであるが、嬉々として職務に励んでいる。彼の親衛隊の大半もアガルタに移ってきた。彼らとクノゲンが中心となり、新たに雇った傭兵たちを訓練している。

現在、アガルタ国軍の兵士数は２０００名程度である。しかし、彼らは日々、成長している。

「そんなことで敵が殺せるか！もっと全力で突け！」

「違う！もっと手綱を緩めろ！馬が走れんだろう！」

「それじゃあ格好良くないだろう！そうだ！その美しい形に女が惚れるのだ！」

真っ黒に日焼けしながら、兵士たちに手とり足とりと教えているのは、何とラファイエンスである。老将軍は毎日先頭に立って兵士の訓練を行っている。元々若いころからこうした兵の訓練は彼の大好物だったとのことで、クノゲンに言わせると、これでも大分丸くなった方なのだという。

「私が入隊したころは、それはそれは恐ろしい方でしたな。私なぞ、

刀で斬られたのですから。しかし、訓練が終わると途端に優しくなり、色々と褒めてくださるのです。あのギャップがたまらなかった・・・懐かしいですな」

クノゲンは遠い目をして笑う。もしかしたらコイツにはM っ気があるかもしれない。

まだまだ俺たちの国は動き始めたばかりだ。甘い部分も多いだろう。国王としてどうよ？という人もあるだろうが、俺は俺でやるしかないのだ。そんな決意をもって取り組む日々である。

しかし今の俺は、ラマロンがアガルタ領を侵食しようと画策していることを、まだ知らない。

第百三十四話　希望的観測では、大勝利

サラセニア伯爵の下に一人の男が現れたのは、土砂降りの雨の日であった。

「よく降りますな。お蔭で服がびしょ濡れだ」

「まずは、ご用件を承ろう」

立派な髭を生やし、厳めしい顔つきのサラセニア伯爵が、さらに顔を強張らせている。そんな空気を察したのか、男はニヤリと笑みを浮かべながら、口を開く。

「ラマロン国皇帝陛下に置かれては、貴殿のお命を助けよと仰せです」

「どういうことだ？」

「陛下におかれては、ジュカ王国・・・今はアガルタでしたかな？再び侵攻せよとの御命令が発せられたのです」

「・・・」

サラセニア伯爵は男を睨みつける。

「基本的に我々はアガルタ国の人間を生かしておくつもりはありません。いや、皇国が許しても、世界の人々が許しません。何せ、大魔王に対して討伐を行うこともなく、一つとして対策を打たなかっ

たのですから」

「ジュカの王都が崩壊して以来大魔王の姿は見えぬ。その存在自体怪しいものだ」

「そうなのですか？先般、我らがジュカの王都を陥落せしめた後、その軍の者が大魔王が出現して、軍が壊滅したと報告してきました。そして、その者は発狂しました。考えてもごらんなさい。３０００の軍勢が一夜にして命を奪われるなど、聞いたことがない。十万の軍勢に包囲されたのならまだしも、そんな大軍は影も形もなかったと言うではありませんか。我らラマロン皇国はこの国に大魔王が出現したと見て、再び派兵することにしたのです」

「私にどうしろと言うのだ？」

「貴殿のお名前は、我が皇国にも届いております。陛下は貴殿のような方に限って、大魔王の傘下に入るわけはない。もしそうでないなら、皇国の貴族として迎えてもよいと仰せなのです」

「ラマロン皇国の・・・貴族」

「ええ。この国は長い内戦に見舞われておりました。その中を見事な手腕で領地を守り、さらにはその版図を広げ、領国を経営してきた手腕は、陛下のお目に留まっております。先だっての派兵の時に貴殿を攻めなかったのは、そのためです。もし、皇国にお味方いただけるのであれば、現在の身分と領地は保証いたしましょう」

男はグッと体を前に出し、低い声で呟くように口を開く。

「ただし、敵対するというのであれば、前回の如く、皆殺しに致し

ます」

サラセニア伯爵の目が泳いでいる。

「ま、そういうことはないと信じております。もし、我らに味方下さるなら、兵は欲しいだけ貸しましょう。それで大魔王の手下どもを討伐し、版図を広げるのも自由です。その代り、毎年の収穫の際、皇国に収穫物の一部を年貢として納めてもらいたい。こちらは確か・・・小麦が取れるのでしたな？であれば、夏と秋の二回、年貢を納めてもらいたい。皇国が貴殿に求めるのは収穫物の二割、それだけです」

「・・・わかった。しばらく考えさせてくれ」

「ええ、ええ。きっと伯爵様はご自身を大切になさる方と信じておりますので、我々は信じてお待ち申し上げますよ」

男はクックックと含み笑いをしながら、体を震わせた。

「そうか。7人まで儂の誘いに乗ったか！ニヒヒヒヒ」

笑いをこらえきれずに喜びを爆発させているのは、ラマロン皇国軍司令官のジゼウである。

「これで国境付近のアガルタの領主たちの大半は、我らに付くことになったな」

「しかし司令官殿、これらの領地からは、あまり作物の収穫は期待できませんが・・・」

「何を言うか！お前の目は節穴か！これらの領地の収穫量は、我が皇国の民を十分養うに値するぞ！」

「それは、全ての収穫量での話です。彼らが皇国に納めるのはこの二割でしかありません」

「お前はバカだな。そんな馬鹿正直だから出世せんのだ」

部下は露骨にいやそうな顔をする。

「それでは、約束を違えて、多く徴収すると言われるのですか？」

「そんなことはせん。皇国は、この儂は、約束を守る男だ」

「でしたら・・・」

「大バカ者。皇国が奴らに求めるのは、収穫量の二割だ。間違いはない」

「司令官殿のお言葉の意味が、分かりかねます」

「まあ、お前にはわからんだろうな。いいぞ。もう下がっていろ。儂はこれから外出する」

ジゼウはピラピラと手を振って部下の退室を促した。そして、再びニヒヒヒヒと一人、ほくそ笑むのであった。

「・・・一万？それだけの兵を何に使う？」

ジロリとジゼウの顔を睨みつけているのは、皇国軍総司令官のカリエス将軍である。

「ジュカ・・・いや、今はアガルタですかな?そこに進軍するためにです」

「アガルタ?何をしに行くのだ?」

「もちろん、年貢を徴収するために、です」

「お主の言っている意味が分からん。説明せよ」

ジゼウはフッと息を吐き、面倒くさそうな表情を浮かべて口を開く。

「ラマロン国境にあるアガルタの領主をわが手に寝返らせました。間もなく冬に種を蒔いた小麦と夏野菜の収穫ですからな。その年貢の徴収に行くのですよ」

「何?寝返らせた?聞いておらんぞ?しかし、年貢の徴収に一万の軍勢とは・・・」

「報告が先ほど来ましたので、いま、将軍には報告させていただいております。何せ、寝返ったのはサラセニア伯爵を始めとする7家です。それらから年貢を徴収するのにはそれくらいの軍勢は必要になります。何でしたら、内訳をお話ししましょうか?7家の年貢受け取りがそれぞれ兵1000。そして本陣の守りに兵3000です」

「しかし、兵站の問題もある。これはマドリン宰相と・・・」

「いえ、既に皇太后陛下からのお許しはいただいております」

「何？」

胸を張って答えるジゼウに向かって、カリエス将軍は怒りを含んだ声を向ける。

「皇太后陛下は殊の外お喜びでした。ジゼウ、これからの皇国軍はお前が率いればよい、などともったいないお言葉を頂戴しました」

「調子に乗るな。お前は守備隊の指揮は上手いが、攻め手の指揮は苦手だ。せめて副官として・・・」

「結構です！」

「ジゼウ！」

「もうよろしいですかな？もう間もなく収穫が始まってしまいます。私は急がねばなりません。準備もありますので、これで失礼させていただきます」

そう言い捨ててジゼウはカリエス将軍の部屋を出た。

その三日後、司令官ジゼウは、「アガルタ派遣軍総司令官」の職を与えられて、意気揚々と皇都を出発した。出発の直前まで、宰相のマドリンとは兵站の交渉を行ったが、彼は頑として首を縦に振らなかった。結局確保できたのは、二日間分の兵站だけだった。

皇都から国境まで三日かかる。単純計算をすれば、片道分にも満たない兵站しか持たずに出撃することになる。そこでジゼウは、出発

の前日になって、兵士たちに一日分の食料を持参のうえ、従軍するように申し渡したのだった。

皇都の民衆に見送られながら、ご機嫌の様子で出撃していくジゼウ総司令官。そんな彼を、マドリン宰相とカリエス将軍は、なんとも言えない表情で見送っていた。

「すまんな、将軍。あれ以上は無理だったのだ」

「いや、いい。むしろ私は、宰相殿の奔走に感謝している」

カリエス将軍は首をゆっくり振りながら答える。

「皇太后陛下は、宮殿内に備蓄している兵站を出せと仰せであったが、あれは最後の砦だ。いよいよ民が飢えるとなった時に出す、最後の食料なのだ」

「私も、それはわかっている。しかしジゼウのやつ、まさか兵士に食料持参を命じるとは・・・。まるで物見遊山に行くようだな」

「上手くいけばいいのですが・・・」

「そうだな。私の懸念が、杞憂に終わることを、祈るのみだ」

「将軍の杞憂とは？」

「いやなに、つまらんことだ。年を取ると心配性になっていかんな」

カリエス将軍はフフフと笑みをこぼす。しかし、その笑みはマドリン宰相には、何かをあきらめたような笑みに見えた。

第百三十五話　聞いてビックリ見てビックリ

ラマロン皇国の国境地帯。眼下のイルベジ川を渡り、東側に見える山を越えればヒーデータ領、西側の山を川づたいに進めばアガルタ国である。その山々を見下ろしながら、アガルタ派遣軍総司令官であるジゼウは、ため息をついていた。

ひと月前の忌々しい記憶が蘇る。バカな部下たちのためにヒーデータに大敗を期し、自分の顔に泥を塗られたのだ。あれほど動くなと厳命していたにもかかわらず、一部の部隊が勝手に川を渡り、弓矢と魔法の餌食になった。撤退命令を発しようとしたところに、忌々しい平民上がりのアーモンドに横やりを入れられた。輝かしい自分の軍歴にこれ以上汚点を残すわけにはいかない。

しかし、今回は違う。自分の直属の部隊の大半を動員している。今回は完全勝利を手にして凱旋する。そんな決意を新たにして彼は、部下たちに命令を下す。

「これからイルベジ川に沿って北に向かう。アガルタ領に抜けるまでの森の中は一切立ち止まるな。一目散に駆けろ。目指すは、サラセニア領だ。なぁに、心配するな。先触れの者が既にアガルタ国に入って、収穫を急ぐよう伝えているはずだ。着いたらすぐ、メシを食わせてやるぞ！ニヒヒヒヒ」

ジゼウ総司令官は颯爽と山を下り、イルベジ川に馬を進ませた。対岸の東側の山の砦には、ヒーデータ帝国の兵士が詰めており、自分たちの進軍は知られるところだろう。ヒーデータの軍が国境に押し出してくるまで早くて四日。それまでには戻ってこなければならな

い。今のジゼウにとって最大の敵は、時間であった。

「またラマロンが攻めてきたのか。懲りない奴らだなー」

俺はアガルタ国の都の中にある、元王国軍本部の一室で、斥候を担当しているフェアリードラゴンたちから、その報告を聞いた。

「クノゲン、今、動員できる兵士はどのくらいいる？」

「２０００名を少し超えるくらいでしょうか。まさか、助けに行くおつもりで？」

「いや、まずは奴らの動きを見る。森を抜けて北の、俺たちの都を突いてくるのか、西側の貴族たちの領地に向かうのか、あるいは東側の、俺たちに従う者たちの領地に向かうのかで戦略は大きく違うだろう。まずは、全軍にいつでも出撃できるように準備をさせておけ」

「畏まりました」

クノゲンは一礼をして部屋を出た。俺はフェアリードラゴンにラマロン軍の動きを監視するよう命令する。その時、窓の外から何かが降ってくるのが見えた。

「・・・雨か。梅雨の時期だけに、なかなかすっきりとした天気にはならんな」

俺はマップを展開し、国境付近のラマロン軍の動きを観察する。

アガルタ国の国境付近にある広大な森を、わずか半日で駆け抜けたラマロン軍は一旦小休止を取り、軍を7つに分けて西に向けた。そして、ジゼウ率いる本軍３０００は日が落ちる頃になってようやくサラセニア領に入り、伯爵の館に到着したのだった。

「ラマロン皇国、アガルタ国派遣軍の総司令官である、ジゼウだ」

「ジュカ王国伯爵の、サラセニアです。このような奥地までようこそお越し下された」

「ああ。皇国に味方した家の中でも、ここが最も西の位置にあるので、意外と時間がかかった。貴殿の名は聞いている。よくぞご決断なされた。この年貢を皇都に届けたら必ず、貴殿のことは皇帝陛下によくよく申しておこう」

「恐縮です」

「ところで、収穫の方は？」

「既に、無事に済んでいます」

「さすがはサラセニア伯爵だ。それであれば助かる。ところで、もうすぐ夜だ。年貢の受け取りは明日にすることにして、すまぬが兵たちに夕食を振舞ってもらいたい」

「夕食・・・これだけの人数を・・・？」

「ああ、我らは腹が減っておる。夕食を頼む。食料がなければ、今日収穫した分から出せばよいのだ。早くした方がよいぞ？部下たち

は腹が減っておるので、限界を迎えれば何をしでかすかわからん。他家のように一家を皆殺しにして食料を略奪するかもしれんそ？」

サラセニア伯爵はわなわなと体を震わせながら、家臣たちに領内に食料の供出をするよう触れ回れと命じた。

サラセニア伯は忸怩たる思いを胸にしながら、自分の計算に間違いはないと、自分に言い聞かせていた。このままラマロンに従っていれば、伯爵としての爵位は守られる。そしてうまくすれば、目の前にいる軍勢が自分の手足のごとく動くかもしれないのだ。そうなれば、領地はさらに広がる。しかも、ジュカ王国の中で最初にラマロン側に協力したのだ。ラマロン皇国とて、自分を粗略には扱わないだろう。そんな思いが伯爵の胸の中にはあった。

サラセニア伯爵家は、ジュカ王国の中でも名門と呼ばれる歴史と格式のある家柄であった。その格式ある家が、国王とはいえ、元奴隷の男に膝を折るなどは考えられなかった。確かに、ラマロンの精鋭３０００を葬った力は認めてやってもいい。自分自身とて戦った数年間は無駄ではなく、国王となった男の軍事的能力は認めてはいる。しかし、国を維持していくという点では話は別である。その元奴隷の国王に伝統と格式を背負った貴族の思いはわからないだろう。

伯爵は、遠からずこの国は再び内戦状態になると睨んでいた。その時のために、軍事力があり、さらには長い伝統を持つラマロンと手を結ぶ方が、自分たちの地位の保全と版図の拡大に有利だと結論を出していた。ここで、ラマロン側の機嫌を損ねるわけにはいかなかった。

結局、サラセニア伯爵はこの夜、一睡もすることが出来なかった。ラマロン軍はサラセニア領民の食料を存分に食い、酒を飲み、一部

の兵士は領民の家に押し入るなどの狼藉を働いた。それらの兵士を取り押さえ、一触即発の状況になりながらも何とかその場を収めていると、気が付けば朝を迎えていた。領民からの不満が寄せられていたが、年貢を納めれば早々に帰るだろうと説得をして、何とか領民たちの怒りを説き伏せたのだった。

日が昇り、軍を整えたジセウは早速、年貢の引き渡しを要求してきた。

「さて伯爵、年貢を受け取ろう。不正はないと信じるが、これも皇国の掟であるから理解してくれ。まずは全ての収穫物を出してもらいたい。そして、取り分である二割分を別にして置いてほしい」

収穫された小麦、野菜などが広場に集められ、積み上げられていく。

「ここに分けてある分が、年貢である二割分です。昨日あなた方に食料を提供しましたので、その分はここから差し引いていますのであしからず」

サラセニア伯爵としては、精いっぱいの抵抗であった。総司令官のジゼウは怒るかと思いきや、意外にも機嫌のよさそうな笑い声をあげた。

「ニヒヒヒヒ、伯爵殿は律儀なお方じゃ。そこまでせんでもよいものを・・・。まあいい。では、積み込むのだ！」

ジゼウの命令を受けたラマロン軍の兵士は、年貢を馬車の荷台に積みこんでいく。

「・・・お待ちください！それは我らが取り分です！あなた方にお

納めする年貢はこちらです！」

サラセニア伯爵は傭兵と共にラマロン軍を制止する。

「何をなされる伯爵！年貢の取り立ての邪魔をすると、死罪ですぞ！」

「何を言われるのだ！それは我らが取り分だ！年貢は収穫の二割とそう決めたではないか！」

「ああそうだ。二割が取り分だ」

「ならば！」

「大バカ者！二割が取り分というのは、お主たちの取り分のことだ」

「・・・どういうことだ！」

「大バカ者め！我らはこう言ったはずだ。『皇国が貴殿に求めるのは収穫量の二割』と。つまり、収穫量の二割が貴殿らの取り分、後は皇国の年貢であるという意味だ！」

「・・・なにをバカなことを！」

「バカはそちらだ。勝手に都合よく解釈するからこうなるのだ。我らは約状に従って年貢を徴収する。抵抗する者、邪魔をする者は容赦なく殺す。イヤならば力ずくで阻止しなされ。その手勢で阻止できるとは思えんが・・・。万が一、阻止できたとしても、その後は皇国から十万の軍勢が押し寄せて、領内全ての人間を皆殺しにするであろうな。先だって我らの蹂躙した地と同じ光景を見ることにな

る。さあ、やってみろ！」

ラマロン軍の兵士は一斉に刀と槍を民衆たちに向け、魔術師は詠唱を開始し始めた。サラセニア伯爵たちは怒りに打ち震えた顔を浮かべながら、事の成り行きを見守るしかなかった。

第百三十六話　それぞれの作戦会議

どんよりとした雲が空を覆っている。そして、降り始めた雨は少しずつその勢いを強めており、あちこちに水たまりを作っている。

アガルタ国に広がる草原の小高い丘の上に、ラマロン国の兵士たちの姿が見える。最初は小規模だった集団も徐々に数を増やし、数時間後には丘全体を埋め尽くす大軍団となった。その中心にいるのは、アガルタ国派遣軍の総司令官のジゼウである。彼は出迎えた兵士たちを満足そうに見まわす。

「全員揃っているか？」

「ハッ、総司令官殿で最後であります。全員揃っております」

「年貢の徴収は？」

「ご命令通り、徴収を完了しました」

「兵たちの被害は？」

「ございません。一部の地域では小競り合いになったようですが、問題なく徴収を完了しております」

「年貢の徴収を邪魔した者たちはどうした？」

「全員、処刑しました」

「徹底的にやったのだろうな？まあいい。要は、民を支配するために必要なのは恐怖だ。それを与えておけば、民からは搾り取るだけ搾り取れる。そうか、邪魔をした奴らは全員処刑したか。よくやった。ニヒヒヒヒ」

ジゼウは上機嫌でほくそ笑んだ。軍勢の中心には、彼らが各地で徴収してきた夥しい数の年貢の荷台が集められている。それを見ると自然に顔がほころんでくる。ジゼウは、兵士たちに命令を下す。

「軍議を開く。幕僚たちを集めろ。・・・雨が強くなってきたな。おい、結界師たち。年貢の荷台を守れ。特に小麦が入ったものは決して濡らすなよ！」

ジゼウの周囲に幕僚たちが集まり始めた。

「はあー。エゲツないことをするなぁ。まさに大魔王降臨じゃねぇか」

俺は斥候に出していたフェアリードラゴンたちからの報告を聞いて呆れていた。領民が必死で収穫した作物の大半をラマロンの兵士たちは持ち去ったのだ。一部の村ではそれを止めようとして小規模な戦闘になったらしいが、そいつらはラマロン兵たちに全員処刑されたという。それだけでなく、奴らは領民に対してかなりの乱暴狼藉も働いていたらしい。

「領主たちがどうなろうと知ったこっちゃないが、領民たちがかわいそうだな」

俺は王国軍本部の自室で天を仰いだ。そして、鈴を鳴らして人を呼

び、同じ建物に詰めているリコをはじめとする主だった者に、部屋に集まるよう伝えてくれと頼んだ。

皆はすぐに集まった。全員が席に着いたことを確認したクノゲンが口を開く。

「で、どうします？このままラマロン軍の様子を見ますか？」

「いや、食料をラマロンに持って帰られては、民が飢えるのではないか？」

心配そうなラファイエンスの顔。それに対してリコが口を挟む。

「いえ、国の収穫については今のところ豊作で順調ですわ。各地から集まる税で補てんすることは十分に可能ですわ」

「いや、ラマロン軍を討伐しよう。このままヤツらの好きにさせるのは、俺の性に合わん。奴らが奪った食料を奪い返す。将軍、クノゲン、出撃だ。メイ、ゴン、済まないが、兵士の数だけ結界石を用意してくれ。すぐにだ」

「わかったでありますー」

クノゲンとゴンたちが部屋を後にして、慌ただしく出撃準備が進められる。

「さて、そのラマロン軍討伐の作戦だが・・・」

「その、作戦なのだが・・・やはり、奇襲しかないだろうな」

遠い目をしながらラファイエンスが呟く。

「２０００の兵で１００００の兵を相手にするには、奇襲しかない。イルベジ川沿いの森に軍を進めるのだ。ラマロン軍が国へ帰るにはあそこを通るしかない。しかもあの道は山道なので道幅が狭くなっている。どのような大軍でも一列になって移動するしかないのだ。そこを突くのが一番効果的だ」

「わかった。将軍の作戦で行こう。出撃だ！」

俺とラファイエンスは足早に部屋を出た。しかし、何故かリコも一緒に部屋を出てくる。その様子を見た老将軍は、俺に目配せをして去っていった。

「リノス」

「どうした、リコ？」

リコは何も言わず、俺を抱きしめた。

「必ず、ご無事で帰って来て下さいませね」

「大丈夫だ。リコに抱きしめられて出撃すると、必ず勝つんだ。だから今回も大丈夫だ。今夜は戻らないかもしれないが、必ず帰ってくる」

「きっと、ですよ？」

俺はリコから体を離し、足早にイリモが繋がれてある南門に向かった。

「よーし、全員揃ったか！出撃するぞ！」

アガルタ国軍２０００騎が雨の中、ものすごい勢いで都を飛び出していった。

丘の上では、総司令官のジゼウを中心にラマロン軍の幕僚が集まり、馬に乗ったままで軍議が行われていた。ジゼウは降りしきる雨を忌々しそうに払いながら、口を開く。

「まずは、軍を二手に分ける。先発隊として、５０００の兵を兵１０００ずつ五隊に分け、先行させる。儂は残りの兵と共に食料を守りながら皇国に向かう」

「恐れながら・・・」

「話を最後まで聞け！・・・先発隊５０００は、急いでイルベジ川に沿って南に進むのだ」

ジゼウは遥か先に見えるイルベジ川を指して話を続ける。

「そして国境まで続く川沿いの森に着いたら、今夜はそこで野営をしろ。そして明朝、森の中を進め。その時、国境まで続くあの森を五つの区域に分ける。先行部隊は、それぞれの区域を担い、儂らが来るまでそこを守るのだ」

「恐れながら、理由を伺っても？」

「大馬鹿者！アガルタの連中に我が軍を襲わせないためだ！兵力的に我が方は圧倒的に有利だ。そんな我らに戦いを仕掛けるとすれば、それは奇襲しかない。我らに襲いかかる絶好の位置はどこだ？国境まで続く森だ。あそこは山道で道が細くなっている。いかな大軍とて森の中に兵を潜ませておけば、寡兵でも我らに一撃を加えられる。その可能性を摘むのだ！」

「おお、さすがは総司令官殿」

「先行部隊は森の入口に向かえ。そして我が本軍は食料を守備しながら進む。よいか？では、出発しろ」

ジゼウの命令を受けたラマロン軍が迅速に動きだした。

「うん？何だこれは？」

馬を走らせてしばらくした時、マップに動きがあった。そしてそれと同時に、フェアリードラゴンのサダキチから報告が入った。

「敵が二手に分かれている？」

ラマロン軍の一隊がすごい勢いで東に移動している。そして、後続部隊も、速さはそれほどでもないが、人の駆け足程度の速さで先行部隊を追っている。俺は一旦行軍を止め、兵士たちに休息を命じる。

「リノス殿、一体どうしたのだ？」

ラファイエンスが俺の近くに馬を進めてくる。

「敵軍が二手に分かれた。先発隊がものすごい勢いで東に移動している」

「まさか・・・？」

「このまま進めば敵軍とカチ合うかもしれない。ちょっと様子を見よう。せっかくだ。メシにしよう」

俺はイリモから降り、雨除けの結界を張ると、そこに軍勢を収容して皆に昨日から用意してあった弁当を配っていく。そして、メシを食い、しばしまったりとした時間を過ごしていると、ラマロン軍の先発隊がイルベジ川沿いの森に向かって進んでいくのがマップに表示された。そして、しばらくしてサダキチからも報告が入る。

「敵の先発隊はイルベジ川沿いの森を目指しているようだ」

「まさか・・・我らの作戦が敵に知られたと言うのか？」

「いや、将軍。それは違うと思うな。おそらく、敵の中にも、将軍と同じくらいの見識のあるやつがいたということだろう」

「さて、我らはどうするかな・・・？」

ラファイエンスは顎に手を当てて考え込んでいる。俺はマップの敵軍の動きを見ながら、口を開く。

「しばらく様子見だな」

マップを見つつサダキチ達の報告を聞きながら兵士たちの様子を見る。兵士たちは結界の中で思い思いに過ごしていた。中には昼寝を

する者もいる。

夕方近くになり、先行部隊が森の入り口付近で止まった。フェアリードラゴンたちの報告では野営の準備を整えているという。そして、後続部隊の動きも止まり、コイツらも野営の準備を始めた。

「えらく微妙な距離を取って野営をするんだな。この距離じゃどちらかの部隊が襲われても、おいそれと救援に向かえないだろうに」

俺は地面に地図を描き、兵士たちに敵の位置を教えてやる。

「まあ、後続部隊は食料を輸送しているのですから、こんなものでしょう。むしろ、我らに襲われても撃退できると踏んでいるのでしょう」

クノゲンが棒切れで敵の後続部隊を指しながら分析する。それを聞いてラファイエンスは、興奮した声で口を開く。

「夜襲をかけるか？」

「いや、将軍、やめましょう。きっと敵もそれを十分想定しているでしょう。それに、気配探知のスキルを持った魔術師もいるでしょう。まあ、夜は寝るものですから、俺たちも今日はここで野営をしましょう。決戦は明日ですね。明日、後続の軍勢を襲いましょう」

「後続の軍を・・・襲うのか？我らは敵中に挟まれることにはならぬだろうか？」

「いや、そうならないように、できるだけ後続の軍の近くで戦うんだ」

「しかしリノス殿、ここら一帯は確か、広い草原地帯のはずだ。敵が二手に分かれたとはいえ、我らとは倍ほどの兵力差があるのだ。隠れるところがない平地で奴らと真正面からぶつかっても、我らに勝ち目はないぞ？」

「それについては、俺に作戦がある。ただ、これにはかなり兵士の練度がいるんだが・・・」

「おお、それならば任せてくれ！私が手塩にかけて育てた者たちだ。真っ暗闇の中でも隊列を崩さず、物音ひとつ立てずに目標に向かって突撃するくらいの練度はある」

ラファイエンスは自信満々で胸を張る。

「お前ら、それ本当か？相当に練度が高いと思うが、わずか一月そこそこで・・・大丈夫か？」

兵士たちに目を向けると、皆、苦笑いしている。

「どれだけ将軍の訓練が厳しいものか、お分かりいただけると思います」

クノゲンも苦笑いをしている。

「よし、わかった。将軍の訓練の成果を見せてもらうぞ？」

俺は悪そうな顔をして、兵士たちに目を向けた。

第百三十七話　大身槍の田楽刺し

漆黒の闇の中、降り続く雨の音が聞こえている。ラマロン皇国の国境に通じる森の入り口付近には、ラマロン軍５０００が陣取っている。その軍司令官のネーヴェは、二人の魔術師を伴って森とは逆の、彼方まで広がる草原を睨みつけている。

「どうだ、なにかいるか？」

「・・・弱い反応はありますが・・・あれは狐か何かの生き物ですね。軍勢はいないようです」

ネーヴェは約一時間前に、斥候に放った部下からアガルタ軍が出撃しているという報告を受けていた。奴らは、馬で駆ければ自分たち先発隊と後続の本陣に数時間で到着する位置に陣を張っているという。

「寡兵とは言え、夜襲をかけてくるかもしれん。気配探知を怠るな」

魔術師にそう言ってネーヴェは、伝令に、本陣にも同じように報告をするよう命じた。

その後、ラマロンの兵士たちの大半は、降りしきる雨の音に加えて、アガルタ軍の夜襲と森に棲む魔物の襲撃を警戒するあまり、一睡もすることなく朝を迎えた。

「すでに夜明けだ！皆の者、森の中に移動するぞ！」

予定よりかなり早い時間であったが、ネーヴェは先発隊を森の中に移動させることにした。彼をはじめとした、ラマロン軍兵士たちの頭の中には、森の中で雨露をしのぎたいと言う思いと同時に、やはりまだ、大魔王に対する不安があった。森の中であれば自分たちの姿を大魔王から隠せる。普通に考えれば他愛のない、子供だましのような思考だが、彼らにしてみれば、少しでも安全な場所に行きたいという思いが、その場を支配していたのだった。

「うん？もう森の中に軍を進めたのか、早ぇな」

マップに動きがあったのは、ちょうど朝めしを食おうとしていた時だった。ちなみに本日の朝食は、焼きおにぎり、モヤシと豚肉の蒸し焼き、卵焼きと言ったメニューだ。俺は片手に持った焼きおにぎりを口に放り込み、パリパリに焼けた米と焦げた醤油の味を楽しみながら、兵士たちに声をかける。

「よーし、ちょっと早いけど、出陣するか！メシを食い終えた奴から準備してくれ！」

「ふぁーああ、こういう感じなら、野営も悪くないなぁ」

「ああ、こんなに快適な野営は初めてだ」

兵士たちは、俺の結界の中で十分な睡眠を取ったため、随分と調子がよさそうだ。そして手際よく野営地を引き払い、俺たちは移動を開始した。

朝方まで降り続いた雨は、日が昇るころには止みだし、その後は太陽が顔をのぞかせた。ようやく訪れた好天も、アガルタ派遣軍総司令官のジゼウは苛立ちを隠さない。

前日は予定していた行程の半分しか移動ができなかった。本来であれば、先発隊のすぐ近くまで軍を進めるつもりでいたのだ。しかし、降りしきる雨とぬかるんだ道は、食料を満載した荷台の移動を困難にした。さらに間の悪いことに、先行部隊の騎兵たちが移動したおかげで地面が掘り返されてしまい、ジゼウたちは泥の中を移動するハメになったのだった。

先発隊も隊列を組んで移動すればよかったのだが、野営地に急ぐあまり、それぞれがバラバラになって移動してしまったため、広範囲に地面が荒れてしまっていた。従って、その部分を避けて移動すると、かなりの距離を取ることになる。ジゼウたちは迂回するより、泥の中を移動することを選んだ。その結果、泥と雨が、彼らの進軍をさらに困難なものにしていたのだった。

降りしきる雨の中、眠れぬ夜を過ごし、疲れた体を休めるいとまもなく、兵士たちはこの日も苛酷な移動を強いられていた。好天とはいえ雨でぬかるんだ道はそのままであり、荷台を引っ張る馬も、それを後ろから押す兵士も、足を取られながらの進軍であった。

「もう少し何とかならんのか！」

ジゼウは周囲の部下に当たり散らしている。

「おい結界師！貴様、地面に結界を張って荷台が通れるように出来んのか？・・・チッ、役立たずめ！このままでは間に合わん。国境

にヒーデータの援軍が着いてしまうぞ！」

「総司令官殿、森に入れば多少、移動は楽になります。それまでの辛抱です」

「くそっ、アガルタの土地はどうなっているんだ！こんな話、聞いとらんぞ！」

ジゼウはブツブツと不満を言いながらゆっくりと歩を進める。しかし、考えてみれば自分には輝かしい未来が待っていることを思い出した。この食料を皇国に届ければ、自分は国を救った英雄である。皇太后陛下は何と仰るだろうか。「ジゼウ、大儀じゃ。今後はそなたがラマロン皇国総司令官として指揮を執るがよい」・・・そんなお言葉をいただけるのではないか。そうなれば、ラマロン軍十数万を自分の号令一下、好きに動かすことができる。それだけではない。金、女、名誉・・・すべての物が思い通りになる・・・。そんなことを機嫌よく考えていると、突然部下が声を上げる。

「総司令官殿、あれをご覧ください！」

見ると正面の丘を下った場所に、アガルタ軍と思わしき部隊が草原に展開している。敵は三隊に分かれており、そのうちの中央の一隊が突出しており、両翼の二軍が遥か後ろからゆっくりと追いかけているように見えた。この光景を見て、ジゼウは思わず失笑を漏らした。

「ニィッヒッヒッヒ！なんだあれは。まるでまとまっておらんじゃないか。正面と両翼の部隊があんなに距離があいていては連携も何もあったものではなかろう。察するところ、全軍がまとまる前に中央の部隊が先行しすぎて、あとの部隊が付いてこられなかった

のだろうな。しかも・・・中央の部隊はずいぶんと小規模だな。あれではすぐに撃破されてしまうな」

ジゼウは周りの兵士に向かって声を上げる。

「おいお前ら、誰かヤツらの所に行って戦いのやり方を教えてやれ！あれじゃ戦いにならんとな！ヒッヒッヒッヒッヒ！」

ジゼウのバカ笑いに、周囲もつられて笑い声が起こる。

「あいつらに、戦いのやり方を教えてやるか。騎兵部隊、各個撃破せよ！まずは、あの正面の部隊にかかれ！一人も生かして帰すな！」

ラマロン軍が隊列を整えながら、アガルタ軍に向けて突撃を開始した。

その光景を、正面に展開した部隊を率いるラファイエンスは、冷静に見ていた。

「よーし来たぞ。我らの大身槍（おおみやり）で奴らの田楽刺しを拵えてやる。我らの手料理、奴らにとくと振る舞ってやれ！」

オウ！と兵士たちは老将軍の言葉に応える。彼らの顔には笑みが浮かんでいた。

殺到するラマロン軍を前に、ラファイエンスの部隊はクルリと踵を返し、ものすごい勢いで後退していく。

「ヒヒヒヒヒ！何だあれは！逃げ出しおった！話にならんじゃないか！」

馬上でジゼウは笑い転げている。そしてラファイエンスの部隊は、ラマロン軍と一定の距離を取りながら、広く距離を取っている両翼の部隊の間を通過していく。ジゼウの地点からは、アガルタ軍がちょうどコの字形になったように見えた。そこに吸い寄せられるように、ラマロン軍騎兵部隊４０００が追いかけていく。

老将軍の部隊が停止した。その瞬間、今まで逃げていた部隊が突然踵を返し、ラマロン軍に襲いかかった。それと同時に、両翼の部隊も攻撃を仕掛ける。一糸乱れぬ、見事な連携だった。

「総司令官殿！我が軍が敵に囲まれています。援軍を！」

「なっ！バ、バカな！！」

ジゼウは目を見開いたまま固まってしまっている。信じられないことであった。勇猛果敢で鳴る皇国軍が、自軍の半分の兵力しか持たないアガルタ軍に囲まれて殲滅されているのだ。三方を囲まれ、浮足立った皇国軍は、驚くほど軽快な動きを見せるアガルタ軍兵士たちの槍に貫かれ、なす術もなく命を落としている。

「司令官殿！援軍を！」

「何だ・・・一体どうなっているんだ・・・何が起こっている・・・」

部下の絶叫にも似た声も、ジゼウの耳には届かなかった。彼は、常識ではありえない、悪夢のような現状を受け入れられないでいた。

「おいお前！」

ジゼウに進言していた騎士が、隣の騎士の胸倉を掴む。

「な、何だ？」

「総司令官殿は今、頷かれたな？」

「何？」

「私の援軍の具申に、総司令官殿は確かに頷かれたな！」

「・・・あ、ああ」

「国に帰ったら、確かに頷かれたと、証言してくれよ！・・・援軍に向かうぞ！続け！」

1人の騎士に率いられたラマロン軍が、丘を降りていった。荷台を守る兵士も出撃してしまい、ジゼウの周囲には数人の騎士と結界師、そして、徴収した年貢を満載した夥しい数の荷台が残るのみとなった。

「こ・・・この儂に敗北はない。敗北など、しない。敗北など・・・」

軽いめまいを覚えながら、ジゼウは目を見開いたまま、その場に呆然と立ち尽くすのであった。

第百三十八話　軍神・リノス

「ご主人様、ラマロンの援軍です」

「ああそうか。ありがとうイリモ」

突然イリモから話しかけられて、体がビクっとする。いかんいかん。目の前の光景に集中しすぎていた。

三軍に分けた俺たちアガルタ軍は、中央がラファイエンスの率いる４００名、左翼がクノゲンの率いる８００名、そして右翼が俺の率いる８００名という構成だ。ちなみに、一番兵力の少ないラファイエンスの部隊には、最精鋭の者を配置している。全く隊列を崩さず、殺到する敵とギリギリの間隔を保ちながら後退してくる姿は、逆に美しさすら感じた。

まんまとラファイエンスにおびき寄せられたラマロン軍は、老将軍の部隊と俺たち両翼の部隊が突撃して、大混乱に陥った。アガルタ軍には全員結界石を持たせてあり、基本的に物理的な攻撃は通らなくなっている。そのため、ラマロンの兵は面白いように俺たちに蹂躙されていった。このまま包囲して殲滅できるかと思っていたが、さすがに敵もバカではないようで、新たに援軍を繰り出してきた。

「よーし、退け！」

俺は号令と共に、火魔法「バースト」を空中に向けて放ち、爆発を起こす。それを合図に、俺たちは攻撃を止め、陣形を維持したまま２００メートルほど後退した。ラマロン軍は追ってこない。どうや

ら援軍と合流して隊列を整えているように見える。俺はラマロンの動きを見ながら、中央のラファイエンスの所に行く。するとそこには左翼のクノゲンも来ていた。

「リノス殿、今、クノゲンとも話していたのだが、どうやら敵は歩兵を援軍に入れたようだ」

「おそらく、その中には魔術師も混じっておるでしょうな」

「わかった。では、場所を移そう。あそこの、大きな水たまりになっている所がいいな。そこで元の陣形に戻って奴らの出方を待つ。突撃してくるようなら、奴らを水たまりに誘い込もう。合図を出したら、俺とクノゲンの部隊は前進して再びコの字形の陣形にする。ただし、その時は弓を持っている者と魔法が使える者たちを前面に出せ。奴らの魔法や攻撃は結界石で守れると思うが、念のため、合図があるまでは、魔術師と弓隊は後ろで待機させて、他の奴らは盾で防御させてくれ」

俺は手ぶりで移動場所と陣形を説明しながら、素早く指示を出し、すぐに自陣に帰った。

俺の帰陣を見届けると、ラファイエンスの中央の部隊が素早く両翼の部隊に合流し、そのまま二列になりながら、さらに２００メートルほど後退した。そして、水たまりの前に老将軍の部隊が陣を張り、そのすぐ後ろに俺が右翼、クノゲンが左翼の陣を張った。

「・・・小癪な。奴ら、魔術師との戦い方を知っているな」

ラマロン軍の司令官の一人が、憎々しげにつぶやく。その彼を押しとどめるようにして、もう一人の司令官が口を開く。

「ああ、おそらく正面の軍そのものが楯の役割を果たすのだろう。あれなら遠方から魔術で攻撃しても、被害は最小限に抑えられる。そして、騎兵で正面を突けば、また先ほどと同じく両翼の軍で挟み撃ちにするのだろう。しかし、同じ手は食わん。奴らは所詮、その程度の考えだ。いいだろう。その手に乗ってやろうではないか」

彼は周囲に向けて大声を上げる。

「皆、聞けい！もう一度、中央の部隊に向かって突撃しよう！おそらく奴らは、中央の部隊が後退しながら我らをおびき寄せて、両翼の部隊で包囲しようとするだろう。もし、正面の部隊が退却するのなら、そのまま追いかけつつ、左翼の部隊に突撃する。動かなければ、そのまま正面の敵に突撃する。騎兵隊が敵を殲滅している時に、歩兵隊は騎兵部隊の背後を守り、敵部隊を近づけさせないでくれ。心配するな！敵は寡兵だ！一気にカタをつけよう！」

司令官の一人はそう言って、アガルタ軍に向かって馬を走らせた。そしてその後を追うように、数千の騎兵が彼の後を追った。

「・・・突っ込んできやがった。注文通りだな。さて、俺たちのところまでたどり着けるかな？」

俺はニヤリと笑みを浮かべながら呟く。そして周囲の兵士に大声で指示を与える。

「命令があるまで、決して動くなよ！ギリギリまで敵を引き付けろ！」

左翼にいるクノゲンを見ると、奴は俺を見て、悠長に手を振っていた。

「・・・うん？正面の部隊が動かないな？よし、それならば正面を殲滅しよう！続け！」

騎馬隊の先頭を走っていた司令官が、馬の速度を速める。そして、そのまま水たまりの中に突っ込み、後に続く騎兵も次々と水たまりの中に突っ込んでいった。辺り一面に水しぶきが上がる。

それを合図として、ラファイエンスの部隊から弓と魔法で攻撃が加えられる。次々と落馬していくラマロン軍の兵士たち。その時、俺はクノゲンの部隊に合図を送る。

「前進！正面部隊の前に出ろ！」

素早く俺とクノゲンの部隊は、ラファイエスたちの前に出る。ちょうど、水たまりを囲むような、鉢形の陣形になっている。

「かかれ！」

着陣してすぐさま、俺は弓隊と魔術師たちに攻撃命令を下す。クノゲンの左翼からも、時を同じくして弓と魔法の攻撃が開始された。

ラマロン軍にとっては、水たまりに馬が足を取られて動きが取りに

くい上に、十字砲火に近い形で弓と魔法の攻撃を食らっている。進むこともままならず、退くこともままならず弓矢と魔法の餌食になっている。たまらず、ラマロン軍は後退を始める。そして、後続の歩兵部隊も騎兵隊が撤退しているのを見て、我先へと撤退していった。

「・・・な、何だ?何故兵たちが戻ってくるのだ?」

丘の上で戦闘を見つめていたアガルタ派遣軍総司令官のジゼウは、混乱していた。司令官の一人が兵の大半を率いて援軍に向かい、結果、敵は数百メートルにわたって後退していった。そして、ラマロン軍はその敵を追撃していった。そこまではいい。しかし、追撃を途中でやめ、兵士たちがバラバラになって撤退してくるのは、どうしても信じられなかった。

「総司令官殿、敵には結界師がいるためか、攻撃が全く通りません!」

帰ってきた司令官の一人が、息を切らしながら報告をする。ジゼウは小刻みに体を震わせながら兵士たちを見回す。

「こ・・・これだけか?」

当初、５０００程いたラマロン軍の兵士が、１０００程になっていた。

「総司令官殿、あれを!」

部下が指さす方向を見ると、アガルタ軍が整然と二本の長い隊列を作ってこちらに向かってくる。そして、ある地点に来ると号令と共に三軍に分かれ、ゆっくりと歩調を揃えてこちらに向かってくる。そのあまりの見事さに、ジゼウたちラマロン軍の兵士たちは、しばし我を忘れた。

「・・・総司令官殿、どうされますか？」

すでにジゼウは、戦意を喪失していた。

「・・・退け。全力でこの場を離脱せよ。先行部隊に合流せよ」

そう言い捨てて、ジゼウ以下のラマロン軍は、全速力でその場からの離脱を図った。あとに残ったのは、彼らが領主たちから奪った、食料を満載した夥しい数の荷台だった。

「敵が逃げていくな。リノス殿、追撃するかな？」

ラファイエンスがニヤリと笑みを浮かべながら俺に問いかけてくる。この爺さんは、戦闘になると本当に嬉しそうな顔をする。

「いや、やめておきましょう。それよりも、あの食料の回収を急ごう。クノゲン、お前の部隊は先に都に帰れ。可能性は低いだろうが、敵が都を突いてきたら、その時は頼む！」

「畏まりました！しかし、奴らにそこまでの余力はないでしょう。ご安心ください！」

そう言って、クノゲンの部隊は都を目指して去っていった。俺は老将軍と共に、食料の回収に向かう。

「それにしても見事な戦略と采配ぶりだった。まさしく貴殿は軍神、だな」

「そんな、買い被りですよ」

俺はラファイエスの顔を見ずに、小さく呟いた。そして、ゆっくりイリモを走らせた。

戦場を離脱したラマロン軍の撤退は悲惨だった。森の中の部隊と合流できたのはよかったが、彼らは全く食料を持っていなかった。空腹と疲労の中、それでも全力で国境を目指して移動しなければならなかったのだ。

何とか国境を越え、ラマロン皇国に入っても、彼らは皇都に戻るまでに、いくつかの山を越えなければならなかった。そこから落伍者が出始め、腹をすかせた兵士たちは、山野の村や民家に侵入して食料を奪うなど、狼藉を働いた。

結局、疲労困憊しながら皇都にたどり着けたのは、わずか４０００程度であった。出陣時の６割の兵士が敵に討たれ、あるいは移動中に魔物に襲われ、あるいは落伍したのである。この事実はラマロン皇国全体に大きな衝撃を与え、同時に、皇国内における軍の威光を大きく失墜させたのであった。

当然、ラマロン皇国皇太后の怒りはすさまじく、アガルタ派遣軍総

司令官であったジゼウは敗北の責任と兵士たちの監督不行き届きの責任を問われ、皇都の真ん中で、多くの民衆の目に晒されながらその首を討たれた。

雨が降りしきる中、刑場に引き出されたジゼウは泣きながら命乞いをし、そして抵抗した。

「いやだぁぁぁぁぁ！！！死にたくない死にたくない死にたくない！！！」

「儂は悪くない！儂じゃない！部下が、無能な部下が！！」

「やめろ！触るな！やめろ！やめろ！やめろ！」

「助けて！助けて！いやだ！いやだ！パパ助けてぇぇぇ！ママ！ママ！ママァ！！！！」

そのあまりに見苦しい様子は、ラマロン皇国軍の信頼を、さらに失墜させたのだった。

第百三十九話　戦い済んで・・・も、仕事は終わらない

ラマロン軍の撤退を見届けた俺たちは、部隊を二つに分け、奪われた食料の接収と、怪我をして動けないでいるラマロン兵たちの捕獲に向かうことにした。敵兵の捕獲についてはラファイエンスに任せることにして、俺たちは食料の接収に向かう。

「ぎょ～さんあるなぁ・・・」

思わず口をついて出てきた言葉がそれである。本当に、そうとしか言い表せないほどの沢山の荷台が放置されていたのだ。

「国王様、この食料、どうしますか？」

部下の一人が尋ねてくる。俺は顔をしかめて

「その、国王様はやめろ。リノスでいい。しかし、これを都に持って帰るのもアレだな。まあ、ラマロンの奴らが領民から奪った食料だ。奴らに返してやろう」

俺はあらかじめ持ってきていた紙に一筆したためる。

『アガルタ国を預かるはめになった、リノスです。ラマロン軍に食料を奪われてお気の毒さまでした。ラマロン軍は問題なく我々が討伐しました。ついては、奪われた食料は返そうかと思います。ご希望の方は、ダイワース平原まで。ただし、本日の日暮れまでしか待ちません。なお、雨天になれば撤退しますので、お早目にお越しく

ださい。ご近所お誘いあわせの上、奮ってのお越し、お待ちしております』

それを部下たちに書き写しをさせ、サダキチ達フェアリードラゴンに持たせて、領主たちの下に遣わした。直接、奴らに渡らない可能性も考慮して手紙は数十枚用意し、領主の館近辺に撒いてくるように命じたのだった。

一方、ラファイエンスたちは、とても効率的に倒れているラマロン兵を捕獲していった。捕らえてみてわかったのだが、重軽傷者が２０００名近くいたのだ。特に重傷者については、俺もその治癒に駆り出される始末だった。ちなみに、ラマロン側の戦死者は、１０００名を少し超える程度だった。

俺は、武装解除された捕虜たちを結界内に閉じ込め、そして、土魔法で草原に大きな穴を掘る。そこに死者を埋めるよう兵士たちに指示を出した。それらを行いつつ、ちょっと遅い昼飯の準備にかかるよう兵士たちに命じた。

昼飯はバーベキューのようなものにした。朝食用の余った焼きおにぎりを中心に、肉と野菜をどんどん焼いていく。すぐに、おいしそうな匂いが辺りに漂ってきた。俺は手が空いたものから飯を食うように指示を出す。ふと、捕虜たちを見ると、奴らは結界にベッタリとくっついてバーベキューを見ていた。俺はそいつらのところに向かう。

「何だお前ら、腹減ってるのか？」

コクコクと兵士たちが頷く。

「おーい、お前ら！コイツらにもメシ食わせてやれ！」

朝までの雨が嘘のように晴れ上がった青空の下、バーベキュー大会が始まった。

メシが食い終わり、俺たちの軍勢にも大きめの結界を張り、まったりと休憩の時間を取っているところに、食料を奪われた領主の一人が、数十人の男たちを連れて到着した。そしてその後、次々と領主たちが食料の引き取りにやってきたのだった。

領主たちの対応は様々だった。高圧的に、俺たちからむしり取るように食料を持って帰ろうとする者、ぶっきらぼうに淡々と食料を持って帰ろうとする者、そして、一番多かったのが、言い訳をしつつ俺におべんちゃらを言う者だった。

「いや、さすがは我らが王。ラマロン軍を討伐してくれると信じておりましたぞ。我らも一矢報いたかったのですが、これは王に手柄を譲らねばならんと思いましてな。敢えて奴らを見過ごしたのです。我が目に狂いはなかった！」

さすがにこれには俺も笑うしかなかった。どうしようもないバカはどこにでもいるものだが、こんな領主に仕えている者たちが、本当に気の毒に思えてならなかった。

俺は三者三様の態度を見せる領主たちに呆れながら、全員に同じ言葉を伝える。

「まずもってお前に領主としての資格はない。領民を守れなかった

のだからな。欲に目がくらみ、保身に走った結果がこれだ。今後もお前に領民が守れるとは思えない。その力がないことが今回のことで証明されたからな。油断してたとか計略でしたとか言い訳するなよ？今回はたまたま俺の部下が気付いたから救援できたんだ。本来ならばお前らは領民ともども飢えていた。何より可哀想なのは領民だ。その善良なる領民に免じて、今回は奪われたものを返してやる。今後の自分たちの身の振り方をよくよく考えろ。・・・次は、ないぞ？」

領主たちは一様に俺に憎しみの視線を投げ、有り余る食料を手に、自領に帰っていった。

日が落ちかけた頃、アガルタ領の最奥に領土を持つ、サラセニア伯爵が到着した。

「・・・もう、時間切れかな？・・・国王殿」

「いや、リノスでいい。よく来てくれたな、サラセニア伯爵。奪われた食料はあそこだ。持って帰るといい」

サラセニア伯爵はじっと食料が詰まれた荷台を見つめている。そして、大きなため息をついた。

「民を・・・飢えさせるところであった」

「ああ、そうだな」

「敵の子供だましのような甘言に乗ってしまい・・・。国王、いや、リノス殿。今回のこと、サラセニア・ジャーヘム、礼を言いますぞ」

「ああ、礼には及ばん。しかし、次はない。自分の身の振り方を一度、考えてみるんだな。領民を食わせられない領主なんて、百害あって一利なしだからな」

サラセニア伯爵は、しばらくじっと俺の目を見つめ、そして、部下たちと共に食料を持って領地に帰っていった。

伯爵を見送る俺の横に、ラファイエンスがやってくる。

「リノス殿、今日はもうこの辺で、お屋敷に帰られてはどうかな？」

「しかし、将軍・・・」

「今宵はここで野営をする。なぁに、リノス殿のこの結界があれば今宵は大丈夫だ。兵士たちに持たせた結界石も、あと二日持つ。明日の朝、捕虜たちを連れて都に帰るまで、何の問題もない。奥方が、寂しがっているのではないかな？」

老将軍は俺にウインクを飛ばす。

「しかし、捕虜たちの数が多いですよ？大丈夫ですか？」

「心配いらん。捕虜たちを食わせるだけの食料も十分にある。それに、兵たちにもよい訓練になる。自軍より多い捕虜を護送するなど、これほど良い訓練の機会は滅多にない」

老将軍は兵士たちを見て嬉々とした顔で話している。

「わかりました。では、お言葉に甘えて・・・。くれぐれも兵士たちに、無理はさせないようにしてくださいね」

「ああ、分かっている！」

俺はイリモに跨り、兵士たちに声をかける。

「お前ら！俺は先に都に帰る。あとはラファイエンス将軍の指示に従ってくれ。今日の戦いぶりは実に見事だった！また、都で会おう！」

そう言って俺はイリモを走らせた。

兵士たちの姿が見えなくなるところまで移動した俺は、イリモから降り、帝都の屋敷につながる転移結界を張る。屋敷の裏庭に転移すると、何とそこにリコがいた。

「リノス！」

俺の姿を見るや、いきなり俺の胸に飛び込んでくる。その様子を察してか、イリモは一人で馬小屋に向かって歩いていった。

「どうしたんだ、リコ？」

「・・・怖い夢を見たのですわ」

「夢？」

俺はリコの背中を撫でてやりながら答える。リコは小刻みに震えていた。

「戦いの中で・・・リノスの結界が破られて・・・リノスが殺され

る夢でしたわ」

「そうか。それは怖い夢だったな。安心してくれ。俺はちゃんと生きている。約束通り、生きて帰ってきたよ、リコ」

リコは俺の胸から顔を上げ、まじまじと俺の顔を見つめる。

「本当にリノスですね？リノスですわね？」

俺の顔と体をペタペタと触りながら、リコは呟いている。

「大丈夫だ。ちゃーんと足もあるぞ？」

「足・・・は何か関係あるんですの？・・・やっぱり、リノスですわ」

フッとリコは笑みを漏らす。ヤバイ、マジでかわいい。

俺はリコを伴って屋敷に入った。ちょうどダイニングには夕食が並べられてあり、ペーリス特製の魚料理が並んでいた。

「お帰りなさいませ、ご主人様！」

「おかえりなさい！ご主人様！」

「師匠！おかえりなさい！」

口々に皆が俺を出迎えてくれる。そしてちょうどメイが俺たちの後ろから現れる。

「おかえりなさいませ、ご主人様」

「ただいま、メイ」

「朝からリコ様がずっと落ち着かずに、アガルタでも部屋の中を行ったり来たりされていました。お屋敷に帰ってきても、ご主人様を心配して裏庭と家を行ったり来たり・・・。ご無事で戻られて、本当によかったです」

「ああ、心配かけたな。・・・何だリコ、顔色が悪いぞ？大丈夫か？」

「だって・・・あんなに怖い夢をみたものですから・・・」

「そうか、せっかくだ、メシにしよう。うわっ、美味そうだな！さすがはペーリスだな！冷めないうちに食べよう！」

全員が席に着いたことを確認して、俺は口を開く。

「今回の戦闘も、ほぼ被害ゼロで勝つことが出来ました。皆さんのお陰でもあります。感謝します。それでは・・・いただきます！」

「「「「「「いただきます！」」」」」」

皆でワイワイと食事を楽しむ。いつもの晩餐の光景が、そこにあった。

第百四十話　さぁーみんなで考えようー

次の日、俺はイリモに乗って帝都の宮城（きゅうじょう）に向かい、皇帝陛下に謁見した。

通された部屋は、陛下の私室の近くにあるいつもの会議室だ。当然そこにはグレモント宰相とヴァイラス殿下も呼び出された。俺は、昨日のラマロン軍討伐の様子を話す。

「ふむ。敵は引き上げたのか。では、国境に向かっておる軍を引き上げさせねばの」

陛下が宙を睨みながら独り言のように呟く。

「それにしても、相変わらず見事だな、貴殿の采配は」

宰相閣下は、ヤレヤレと首を振りながら呆れたような顔をしている。

「いえいえ。ラファイエンス将軍が鍛えてくれた兵たちのお蔭です。俺は何もしていません」

「それにしても、捕虜２０００名というのが心配です。今後はどうなさるのです？義兄上（あにうえ）？」

ヴァイラス殿下が心配そうな顔をしている。この人は俺が国王になってから、「義兄上（あにうえ）」などと呼ぶようになった。まあ、間違いではないのだが、何とも面はゆい。聞けば陛下からそう呼べと命じられているのだという。

「いや、別段問題はないと思いますよ。おそらく、ラファイエンス将軍が都に護送していると思います。今日中、遅くとも明日には到着すると思いますよ？」

「いや、そういうことではなくてですね・・・。捕虜の処遇のことです」

「うーん。今のところ考えていませんが、基本的には解放することになると思います。ラマロンと交渉して、賠償金が取れれば御の字というところじゃないですかね？」

「ああ、その話だがの」

俺の話を聞いて、陛下が口をはさんでくる。

「先だって侵攻してきたラマロンの捕虜のことだが、捕虜交換の交渉を打診しておるが、一向に回答がない。再度、交渉を打診する使者を遣わし、回答期限も設けておるのだが、動く気配は全くない。察するところ、ラマロンに捕虜のことについて対話する余裕はないと余は見ている。おそらくリノス殿の捕らえた捕虜も、同じような対応を取るだろうな」

「・・・と、いうことは、どうなります？」

「我らで煮るなと焼くなと好きにすればよい、ということだの。まとめて全員の首を刎ねても、ラマロンは文句が言えん」

「そんな物騒な」

「ハッハッハ！何を言うか。ジュカの王都に侵攻してきたラマロン軍３０００を皆殺しにしておいて、今さら物騒も何もあるまい？」

陛下は意地悪そうな目で俺を見つめている。

「まあ、それは冗談だが、捕虜の扱いについては、余からは何も言うことはない。リノス殿が決めればよい。元々リノス殿が捕らえた者どもだからの。帝国に手伝えることがあれば、何なりと言ってくれ。こちらもできるだけ対応するぞ」

「はい・・・」

「まあ、せっかく来たのじゃ。世継ぎのアローズの顔を見て行くがよい」

俺は陛下に案内されて、私室に連れていかれる。

「どうだ、なかなかの美男であろう？」

ゆりかごの中でスヤスヤと眠るアローズ皇太子は、ふっくらとした顔立ちをしている。どうやら、タウンゼット妃に面差しは似ている・・・のかな？

「これは・・・どちらに似られたのか・・・」

「どうも、タウンゼットに似ておるようだの」

「ああ、それは良かった」

「リノス殿、それは余に対して、不敬だぞ？」

陛下がちょっと怒っている。ヤバイ、地雷を踏みかけるところだった。取りあえずその場を何とか納めて陛下の機嫌を直し、俺は城を後にした。

アガルタに転移した俺は、自室で事務処理をこなしつつ、ラファイエンスが連れてくるであろう捕虜たちの受け入れ準備を命じた。そして、リコたちを呼び、捕虜の対応について話し合った。

「普通、捕虜ってのは、どういう扱いになるんだ？」

俺の問いかけに対して、リコがすぐさま答えてくれる。

「二つありますわ。国が侵略された時に兵士が捕らえられた場合は、奴隷として売買されます。そして、戦いの最中に捕虜になった場合は、大抵は国同士が交渉して引き渡すのが通例です。賠償金のような形で、金銭で交渉することが多いと聞いていますわ」

「なるほど、そうか。しかし、皇帝陛下が言うには、ヒーデータからラマロンに捕虜交換の使者を出しても返事がないそうだ。そこで、ラマロンの捕虜についての処遇は俺に一任されているんだ。皆はどう思う？」

「・・・都の人々は、ラマロンの奴らを許さないと思います」

そう言って唇をかむのは、都の人々の声を聞き、それらを解決している団体の長を務めるセオダルだった。まだ３０手前だが、なかなか人をまとめる力があり、都の人々からの信頼も厚い男だ。彼自身も、ラマロン軍の侵攻で母親を殺されている。都の人々の思いは、

彼が一番よくわかるのだろう。

「そうは言っても、全員の首を刎ねる訳にもいかんだろう」

「まあ、それはそうですが・・・」

「いっそのこと、奴隷にしてしまってはいかがでありますかー」

助け船を出してくれたのはゴンだ。

「奴隷であれば、行動を縛ることも可能でありますし、適性を見て、建築作業などの都の復興の手伝いに当ててもいいでありましょうし、そのまま兵士として雇うのもいいと思うでありますー」

俺はしばし目をつぶって考える。そして、

「よしわかった。捕虜たちについては、奴隷にすることにしよう。ただし、ラマロンに帰りたいと希望する奴らについては、国境まで送る。奴隷になった者たちは俺たちが管理して、都の復興を手伝ってもらう。よく働いたものについては、奴隷から解放してやる。この方向でどうだろうか?」

「リノス様、それは・・・甘すぎるのでは?」

セオダルは納得いかないみたいだ。

「いいえ、これでよいと思いますわ」

その空気を感じてか、リコが賛成の意見を述べてくれる。

「今回侵攻してきた兵たちの中には、イヤイヤ連れてこられた者もいるはずですわ。そのような者たちには、国に帰りたいと思う者も多いと思います。それに、捕虜たちにも家族がいると思いますわ。その人々に家族がいなくなる悲しみを味わわせるべきではないと思います。返還する捕虜たちについては、リノスとゴンに見分してもらえればいいのですわ」

「わかりました。リコレット様がそう仰るのであれば・・・」

セオダルは首を垂れる。

「セオダル、あなたの気持ちは、私もよくわかりましてよ。しかし、憎しみを憎しみで返せば、必ず新たな憎しみを生みます。どこかで、断ち切らなければならないのです」

「はい。このセオダル、肝に銘じます」

凛としたリコの姿勢が、実に頼もしい。リコはその表情のまま、俺の目を見つめる。

「ところで、マトカルたちの処遇はどうされますか？」

「うーん」

マトカルたちに従っていた結界師と回復魔法が使える魔術師については、普通の捕虜と同じ扱いでいいだろうが、マトカルとフルチン野郎の処遇は別である。何と言っても、この都に侵攻してきた軍の司令官とその副官なのである。何らかの責任を負わねばならない立場なのだ。

「何となくだが、この話をすればマトカルは自分で死ぬだろうし、フルチン野郎は命乞いをするだろうな」

全員が黙り込む。どうやら、考えていることは同じだったようだ。

「一番、捕虜として旨味があるのは、マトカルでありますなー」

ゴンが俺たちを見回しながら口を開く。

「何と言っても、皇帝の娘という事実があるのでありますー。最悪、マトカルは人質という使い方が出来るのでありますー。何かの交渉の時に有利に働くと思うのでありますがー」

「いやしかしゴン、ラマロンの皇帝は宮殿でマトカルを育てずに、フルチン野郎の親父に養育させたのだろう？愛情のカケラも持ってないんじゃないのか？」

「うう・・・ご主人の言うことも、もっともでありますー」

「わかりました。マトカルについては、私に考えがあります。一度、マトカルと話してみたいと思うのですが、よろしいでしょうか？」

リコの目が光っている。何かいい案を思いついたようだ。俺は、すぐさま許可を出した。

「では、あとはフルチン野郎の処遇について考えよう。あ、ついでに、カルギの息子も捕らえていたんだっけな。ついでに、そいつの処遇も考えようか」

俺たちの会議は、夕方になるまで続いたのだった。

結局この日、ラファイエンスたちは都に帰ることが出来なかった。都まで数時間という場所まで来てはいたものの、一旦野営をして、明朝に都に入るのだという。そして、明日の朝は俺も軍に合流して一緒に都に入ってほしいのだという。俺はその話に同意し、彼らへの十分な食糧を持っていくよう指示して、帝都の屋敷に帰ったのだった。

あくる日、老将軍の一行に俺は合流した。見て驚いたのが、全員、鎧がピカピカに磨かれており、きれいに身支度をしていたのだ。一糸乱れぬ隊列を作り、その先頭を堂々と闊歩するラファイエンスは、とても格好が良かった。そして、彼に指示される形で、俺はその先頭をイリモに乗って進み、都に凱旋した。

当然都の人々は大歓声をもって俺たちを迎えてくれた。そして、クノゲンたちの部隊と合流した部隊は、きれいに整列し、老将軍の指揮のもと、彼らは一糸乱れぬ動きで俺に敬礼をしてみせた。あまりの見事さと驚きのあまり、取りあえず敬礼を返した俺の右手が震えていたことは、ナイショの話である。

その後、俺とゴンは捕虜たちを引見し、犯罪歴のある者をはじき出した後、彼らに今後のことについて伝える。

「今ここにいる奴らの中で、ラマロンに帰りたい奴らは手を上げろ。国境まで送ってやる。その他の連中は奴隷となり、都の復興を手伝ってもらう。このまま兵士として居てもらっても構わない。よく働いたものは奴隷からの解放を約束する。あとは・・・毎日三食、全員、腹いっぱいメシを食わせてやる！」

結局、ラマロンへの帰還を希望したのは６０名ほどであり、俺はそ

いつらに十分な食糧を持たせて、国境まで送らせた。そして、アガルタに留まることを選んだ捕虜の大半は、ラマロンに雇われた傭兵であり、この奴隷兵たちが後に、アガルタ軍の最強部隊になっていくのだが・・・。それはまた、別のお話。

第百四十一話　モンスターペアレント

ラマロン皇国の皇都は、数日前からの雨が未だやまず、ぐずついた天気のままであった。その鬱陶しい天気そのままの、重苦しい雰囲気が宮殿内の一室を支配していた。

その部屋には四人の人間がおり、そのうちの二人は首を垂れている。そして、その二人を、まるで汚いものを見るかのような視線を投げかけているのは、ラマロン国皇太后、ラマロン・クロウ・レイシスである。そして、その母に心配そうな視線を投げかけているのは、ラマロン国皇帝、ラマロン・クロウ・フレインスである。

「面をお上げなさい」

皇太后は、情を一切感じさせない、冷たい声を二人の男に投げかける。それを受けて男たちは、ゆっくりと顔を上げる。ラマロン国宰相のマドリンと、軍総司令官のカリエス将軍である。

「将軍、息災そうですね？」

皇太后の、感情を一切出さない顔と声。しかし、それだけに、彼女の腹の中に渦巻く沸々とした怒りが、彼らには手に取るようにわかる。そんな雰囲気の中、宰相のマドリンは肥った体を大儀そうにゆすりながら一歩前に進み出る。

「恐れながら、この夏の収穫につきましては、絶望的でございます。加えて、秋の収穫に付きましても、昨年とほぼ同じ程度の収穫量しか見込めません。誠に恐れ多いことではございますが、宮殿内に備

蓄しております兵糧を、民にお恵みいただきますようお願い申し上げます」

「宰相・・・それは、どうにもならんのか？」

皇帝が眉間にしわを寄せて尋ねる。マドリンはさらに畏まるようにして体を曲げる。

「誠に恐れ多きことながら。こればかりはいかんとも・・・」

皇帝は目を閉じて天を仰ぐ。時が止まったかのように、誰も動かない。しばしの沈黙が訪れるが、それを破ったのはやはり、皇太后の声であった。

「将軍、何か言うことはないのか？」

カリエス将軍はキョトンとした表情を浮かべながら、答える。

「私が、でしょうか？あいにく、私は政治的な話は・・・」

「宰相が食料不足のために、宮殿内に備蓄している兵糧を民に与えよと申しています。これを聞いて、何か言うことはないのですか」

「天気、天候は我々の力の及ぶところではございません。ここは、我らが主神様であらせられる・・・」

「おだまりなさい！」

皇太后の一喝が部屋の中に響き渡る。一瞬、時が止まる。

「元はと言えば、アガルタに送った軍が、食料を持ち帰らなかったことが原因ではありませんか！それが上手くいってさえすれば、このようなことにはならなかったはずです！将軍、貴方は総司令官として責任を感じないのですか！」

カリエス将軍はふぅと息を吐き、再び姿勢を正して腰を折る。

「恐れながら、立場上の責任を取ることは吝かではありませんが、私の与り知らぬところで立てられた作戦につきましては、責任を負いかねます」

「あなたは一体・・・自分が何を言っているのか、分かっているのですか！」

「どのような作戦であれ、敗北すればその作戦は失敗と歴史に記されます。そして、誰が立てた作戦であっても、それは皇帝陛下のご失政と歴史に残るのです。皇太后陛下、誠に僭越ではございますが、ジゼウの作戦失敗は実にお気の毒様でございました。ジゼウにつきましては、これも、私も宰相殿も与り知らぬ所で処断が下り、処刑されてしまいました。作戦失敗の責任はジゼウにもありましょう。彼は処刑されてその罪を償いましたが、しかし、それでも、陛下のご失政という汚点は消すことが出来ません」

カリエス将軍は怒っていた。さすがにそれを表に出すことはしない男ではあったが、しかし、言葉の端々に彼の怒りは見て取れた。皇太后は目を見開いて聞いていたが、やがていつものような表情に戻り、静かに言葉を発する。

「では、陛下の汚点を消すためには、どうすればよい？将軍？」

「その汚点を上回る成果を上げることかと愚考いたします」

皇太后は満足そうに頷く。

「では、将軍。その成果とやらは、どう上げるのです？」

カリエス将軍は、顔を上げ、皇太后を真っすぐ見据えて返答する。

「まずは、軍の再編をいたします。しかる後、私自ら一軍を率いてアガルタに向かいます」

皇太后は大仰に驚いたような顔をする。

「将軍自らアガルタに向かう、というのか？」

「はい。アガルタにはラマロン皇国軍兵士２０００が捕らわれております。それを解放するための交渉として赴きます。そこで私がアガルタ王に謁見し、その場で王と刺し違えます」

「将軍、それは・・・」

宰相のマドリンが口を挟む。しかし、カリエス将軍の気迫に押され、マドリンも絶句している。

「ホホ、ホホ、オホホホホホホ」

皇太后の笑い声が響き渡る。そして彼女は、いつもの表情に戻る。

「それで？」

「アガルタ王と刺し違えました後は、皇国軍が一気にアガルタになだれ込み、素早く占領いたします。その後、アガルタの食料を接収しまして・・・」

「もうよい！」

再び皇太后の一喝が部屋に響き渡る。

「そのような荒唐無稽な話、誰が取り上げましょうか。万に一つ上手くいったとして、そもそも、アガルタに捕らわれている者たちをどうするつもりなのです？まさか、皇国に連れ帰るのではあるまいな？一旦、おめおめと敵の軍門に下った者たちの帰参を認めるのですか？それこそ皇国の恥、陛下の治世の汚点となるは必定。ただでさえ皇国内では食料が不足しているのです。捕らわれている者たちが帰参すれば、それだけ食料が必要になるのでしょう？そのような話は認められません」

さすがに宰相のマドリンが一歩前に進み出る。

「お言葉ながら皇太后陛下、捕らわれし者たちを迎え入れることが、何でご失政になりましょうか。寧ろ、徳厚き皇帝として未来永劫称えられることかと存じます」

皇太后はマドリンの顔をじっと見つめる。

「宰相がそこまで言うのならば、勝手にするがいいでしょう。しかし、軍の再編を行いつつ、その作戦を実行するのは、少々無理があるのではないか？将軍、そなたは、軍の再編に全力を挙げるがよろしいのではありませんか？」

「し、しかしお母上様、そんなことをすれば、我が皇国軍全軍の指揮が疎かになります」

さすがに皇帝が口を挟む。皇太后は満足そうに微笑みを湛えながら頷く。

「さすがは陛下。よくぞそこにお気づきになりました。それならば、全軍を統括する司令官を置けばよいのです」

「お母上様、全軍を統括する指揮官とは？」

「ご安心ください、陛下。誠にふさわしい人材がおります」

皇太后はポンポンと手を叩く。すると、後ろの扉が開き、きらびやかな軍服を身に着けた青年が入室してくる。

「お召しにより罷り越しました。ケーニッヒ・ラフェンテでございます」

ケーニッヒと名乗る見目麗しい青年は片膝をつき、恭しく首を垂れる。その青年に皇太后は、満足そうな眼差しを送っている。皇帝は笑みをこぼしながら、

「おお！ケーニッヒ公爵か！皇都防衛軍の司令官である公が、軍を統括するか。それならば朕も安心だ」

皇太后は鷹揚に頷く。

「ケーニッヒ公爵は、私の姪を母に持つお方。言わば、私の妹の孫に当たります。これは、誠に恐れ多きことながら、陛下と公爵様に

は同じ血が流れております。公爵様ならばきっと、陛下のお心をお汲み取りになり、御意に沿うような働きをいたしましょう」

「さすがはお母上様だ。ケーニッヒ公爵、そなたをラマロン皇国統括司令官に任ずる。これからのこと、よろしく頼む！」

「畏まりました」

ケーニッヒ公爵は恭しく一礼する。

「時に公爵様、先ほどのカリエス将軍のお話は、聞かれましたか？」

皇太后の問いかけに、公爵は毅然として答える。

「はい。総司令官殿の作戦は見事かと存じます。この上は、皇太后さまのご命令通り、軍の再編に注力されるのがよろしいかと存じます」

しかし、皇太后はゆっくりと首を振る。

「いやいや、私は軍に関しては不案内です。判断は、あなた方がして下さい」

公爵はにっこりと笑う。

「畏まりました。それでは、私の判断で、カリエス将軍は軍の再編成に注力していただきましょう。ちょうど、ジゼウ元司令官の部隊の後任がまだ決まっていませんね。カリエス将軍にはまず、ジゼウ元司令官の部隊の再編を担っていただきましょうか。その後、将軍の作戦を決行されるのがよろしいかと思います。いかがですか？」

公爵に顔を向けられたカリエス将軍は、彼を一瞥して、一切の感情を込めずに答える。

「ああ、いいだろう。そうさせてもらおう」

ケーニッヒ公爵はニヤリと笑い、

「私も、アガルタを揺さぶる策を考えてみましょう。民を飢えさせることは私の本意ではない。思いはひとつです。お互い、協力してやっていきましょう！」

「ホホホホホ、さすがは公爵殿。やはり、ラマロン軍はこうでなくてはならぬ。これで皇国軍は一枚岩になれました。陛下、これでしたら、宮殿の兵糧を民に与えてもよいのではありませんか？」

「ああ、そうですね、お母上様。マドリン宰相、宮殿に備蓄している食料を供出することを許す」

「・・・ありがとう存じます」

マドリンはゆっくりと頭を下げる。

「何と慈悲深い皇帝陛下であられますこと。陛下のこの善政は、未来永劫語り継がれることになりましょう。ホホホホホ」

「その通りでございます。皇太后陛下」

皇太后と皇帝、そして公爵が、それぞれ満面の笑みを交わす。その横で、マドリン宰相とカリエス将軍は無表情のままで首を垂れ続け

ていた。

外の雨は勢いを増し、雨粒が宮殿の屋根を激しく打ち付けていた。

第百四十二話　好事魔多し

降ったり止んだりのぐずついた天気が終わりを告げ、ここ最近はきれいな青空が見られるようになった。その、抜けるような青空のもと、アガルタの都は建築ラッシュを迎えている。職人たちの威勢のいい声に交じって、石を削る音、釘を打つ音などがそこかしこで聞こえてくる。

まず、俺たちが着手したのは、家を失った人々が住む場所の建設だ。これは旧ジュカ王国の兵舎が有り余っていたので、その一部を改装して、彼らの住居に当てることにした。それと並行して、壊れていた城壁や、その他諸々の施設の修復などを行っている。これには、ゴンの知識がとても役に立っており、今のゴンはほぼ、現場監督として八面六臂の活躍ぶりだ。

当然こうした建築作業には人手がいる。そうなると、都に住む男たちは自然とそこに従事していく。それと同時に、建築資材が必要となるわけで、そこは商人や都の人々がそれらを調達し、販売する商売を始める。そして、その人たちに対して、食堂や衣料を扱う店が出てくる・・・。そんな流れで、少しずつ都に金が回り始めている。お蔭で、ウィリスが店長を務めるスーパー・ダーケもようやく黒字化してきたところだ。

都の経済が回り出すと、自然と周辺の領土にも金が回り出す。俺に従う領主たちから、地元の名産品や特産品を把握し、それを買い上げて都で売る。今のところは経済が順調なので、領主たちもホクホク顔だ。彼らの偉い所は、その儲けた金を自分の懐に入れないで、きちんと領民に還元していることだ。

ちなみに、俺に従わない領主たちは、放ったらかしにしている。俺から何かを頼むこともないし、彼らから俺に何かを言ってくることもない。今年は豊作のようなので、彼らからすれば、食えているだけで十分、というところなのだろうか。

とはいえ、俺も自分の陣営との差別化は図りたいところだ。そこで、生産量をさらに上げ、それを継続する手法を確立するべく、メイたちが中心となって動いてくれている。

メイ曰く、アガルタの土地は、サイリュースたちが使役する精霊たちの加護を受けているせいか、とても肥沃な土地なのだという。それに加えて、メイのストーカーでもあるノームの爺が、作物が実りやすいようにしてくれているのだそうだ。

爺はメイが呼べばいつでも出てくる。メイの守護霊のようなものらしいが、ということは、俺とメイの、下手をするとリコも交えたエロい場面も見ている可能性もある。それは一度確かめたいが、もし、爺からそのことに突っ込まれたら、俺はおそらく萎えてしまうだろう。今は、怖くて聞けない。

リコ、フェリス、ルアラたちは、いつも書類と格闘している。あまり俺には何も言わないが、彼女らで話している内容が、少しずつ俺にはわからなくなってきた。専門用語が飛び交うのだ。彼女らの仕事は、王都から移住してきた優秀な貴族の子弟や、都の若者たちが手伝ってくれている。何より偉いのは、きちんと夕食までに仕事を終わらせることだ。残業なし。プログラマー時代の、ダラダラした仕事ぶりしか知らない俺にとっては、奇跡のような仕事ぶりだ。

軍関係は、相変わらずラファイエンスが嬉々として兵士を鍛えてい

る。今日は裏庭から鉄が打ち合う音が聞こえてくる。ちょっと興味がわいたので行ってみると、そこにはラファイエンスと刀で斬り合う兵士がいた。よく見ると、マトカルだった。

彼女は、人質としてアガルタに拘留されることになった。しかし、何もしないのはさすがにどうよ?という意見があり、マトカル本人も嫌がった。そこで、普段はラファイエンスの副官として、将軍の仕事の手伝いをすることになったのだ。

兵士たちは動揺するかと思いきや、彼女はすぐに兵士たちと打ち解けた。老将軍と共に、彼女も兵士の育成に携わっているようだ。ちなみに、彼女のあだ名は「小鬼」だそうである。

なお、マトカルについては、普段は女性の格好をして暮らすことを義務付けられている。これは俺の指示ではなく、リコの指示だ。

「美しくなる可能性があるのならば、それを伸ばすべきですわ!」

リコの意見にだれも反対する者がなく、マトカルはリコの衣装を身に着けて建物の中をうろついている。当然、下着は着用している。最初は彼女の抵抗感が半端なかったが、最近になってようやく慣れてきたようだ。もっとも彼女は人質のため、基本的には元王国軍本部の敷地内から出ることはない。

マトカルの剣は、一言で言えば力技だ。とにかく敵を力任せにブッ叩く。一方のラファイエンスは、流れるような動きから、狙った所をピンポイントで突いていく。自ずと勝負の行方は明らかだった。

「・・・いかんな。無駄な動きが多すぎる。突撃して敵をかく乱するのには向いているが、敵に囲まれてしまうと、命を落とすな」

「ハイ・・・。精進します」

「いや、しかし、センスはある。磨けば光るぞ」

「ありがとうございます」

そんなことを話しながら、二人は俺のいるところに歩いてくる。ふと、老将軍は軽く手を上げながらニコニコした笑みを浮かべた。

「もう着いたのか？」

驚いて俺は横を見る。すると、いつの間にか上品な老婦人が立っていた。

「はい。つい今しがた到着しました」

彼女は老将軍に恭しく一礼をする。

「リノス殿、紹介しておこう。私の妻、ルイシファーだ。ルイシファー、アガルタ国国王の、リノス殿だ」

「これは気付きませず、ご無礼をいたしました。ラファイエンスの妻、ルイシファーでございます。以後お見知りおきをくださいませ」

老婦人が膝を曲げ、右手を胸に当てて一礼する。

「やめてください。そんな畏まらなくても大丈夫です。リノスでいいですよ。ラファイエンス将軍にはいつも助けていただいています。こちらこそ、よろしくお願いします」

老婦人はニッコリと微笑む。俺はラファイエンスに向き直る。

「それにしても将軍、マトカルとの模擬戦を見ていましたが、見事ですね」

「いや、マトカルは本当にセンスがある。鍛えがいがある。ずっとそばに置いておきたいくらいだ。ハハハハ」

マトカルの目が泳いでいる。

「・・・将軍、マトカルに手を出さないでくださいね？」

「何を言うか！私のはもう干物だ。そちらに関しては、今は無理だ。ハハハハハ」

豪快に笑い飛ばして、老将軍はマトカルを伴って建物の中に入っていった。その後姿を眺めながらラファイエンス夫人は呟く。

「今は・・・なのですね」

俺はギクっとしながらも、フォローを入れる。

「・・・干物って言っていましたから、大丈夫ですよ」

「・・・干物は水に漬けると、また元の姿に戻るのです」

「まさか・・・」

「いえ、いいのです。モテない主人よりマシですわ。モテる男性の

方が、私も張り合いがあります。なんかこう・・・燃えますの」

俺は心からラファイエンス夫人を尊敬した。

ちなみに、フルチン野郎とカルギの息子については協議の結果、終身重労働の刑に処すことになった。二人とも体力だけには自信のある肉体バカである。それにふさわしい就労場所を用意しておいた。

「フッ、フッ、フッ、ああ、もうダメだ・・・」

「もっとぉ！ほらぁ！ほらぁ！ほらぁ！」

「か、勘弁してくれ・・・」

「ダメェ！早くゥ！ああん、そっちも？ダメねぇ。でも、ほーら、こうすれば・・・」

「うっ、うわっ、はぁぁぁぁぁ」

「ほーら、元気になった。いくわよー」

「くっ、はぁぁぁ、もう、もう、やめてくれぇぇぇぇ」

彼らが送られた所は、サキュバスの里だった。サイリュースの族長であるヴィヴァルに聞くと、ツテがあるとのことだったので、彼らを眠らせている間に護送したのだ。ちなみに、彼らが城門を出る時は、全裸のまま都の人々に見送られての出発だった。

さすがに、普通の男をサキュバスの里に行かせるのは危険すぎたた

め、護送はサイリュースたちにお願いした。屈強な男が二人も贈られたサキュバスは大喜びで、将来、必ず俺に恩を返すとのことだ。どんな恩が返ってくるのか・・・。仇で返ってこないことを祈るのみだ。

全ての事柄が上手くいっていた。俺も、このまますべてが順調に行くと思っていた。しかし、不幸は突然俺たちに襲いかかってきた。

いつものように皆で朝食をとっている時に、それは起こった。リコがフラフラと立ち上がり、ダイニングを出て行こうとする。

「リコ、大丈夫か？顔色が悪いぞ？」

「大丈夫・・・ですわ」

リコが部屋を出た直後、ドン！という大きな音が聞こえた。俺たちは慌ててリコの元に向かう。

「リコ、大丈夫か？」

「ううううう・・・」

リコが蹲っている。

「リコ？」

「リコ殿！」

「姉さま！」

俺は思わずリコの肩に手をやる。リコは俺の手をものすごい力で握ってくる。

「痛い・・・痛い・・・痛い・・・痛い・・・」

腹を押さえて苦しむリコ。握っている俺の手が小刻みに震えている。

俺はすぐさま回復魔法をかけてやる。痛みが引いたのか、リコは激しい息遣いのまま、ゆっくり顔を上げる。

そして、そのままリコは意識を失った。

第百四十三話　リコの遺言

リコを部屋のベッドに寝かせる。よほど痛かったのだろう。全身に汗がにじんでいた。

「ご主人様、リコ様は私が見ますから・・・」

メイがそっと俺の肩に手を置く。俺はメイにリコの着替えを頼み、部屋を後にする。

全員が黙ったままだ。重苦しい雰囲気がダイニングを包む。

「リコ殿はお疲れだったのでありますー。メイ殿は優秀な薬師でありますから、メイ殿に任せておけば、大丈夫でありますー」

ゴンの一言で、ちょっと救われた気がした。確かに、メイは薬師としては超一流だ。きっとリコを治してくれるに違いない。俺は全員に安心するように言い、ペーリスは大学へ、フェリスとルアラはアガルタへ向かわせる。そしてゴンは、クルムファルに向かってもらった。今日は週に一度の、リコがクルムファルに行く日だったのだ。

そして俺は、フェアリを伴ってリコが寝ている部屋に向かう。部屋に入ると、既にリコはメイの手で着替え終わっていて、眠っているところだった。

「メイ、すまないな」

「いいえ。大丈夫です。リコ様はこのところずっとお忙しかったで

すから・・・。お疲れが出たのです。ちょうどいい休息になります」

「メイにそういってもらえると安心だ。でも、メイも同じくらい忙しかっただろ？メイも倒れられては叶わんから、フェアリを連れてきた。何かあればフェアリに手伝ってもらってくれ。フェアリ、頼むぞ？」

「まかせてください！」

フェアリは羽をパタパタさせながら胸を張る。そんな俺をメイは仕事に行くよう促し、俺はアガルタに向かった。

正直、仕事は全く手に付かなかった。フェリスとルアラは、リコがいない分をカバーしてくれているようだ。彼女たちはむしろ、リコがいないことを忘れるかのように仕事に没頭している。そんな彼女たちを見るのは、俺自身としても心が痛かった。仕方なく俺は、フラフラと街に出かけた。

「あ、リノス様、これは・・・」

「リノス様・・・」

街ゆく人々が俺を見て頭を下げる。そんなことは無用だといつも言っているのだが、何故かみんな俺に頭を下げる。最初は王という肩書のためだろうと思っていたが、ラファイエンスに言わせると、それは違うのだという。

「権威というものは、人にどれだけ頭を下げてもらえるか、なのだ。

どんなにボンクラなヤツでも、多くの人に頭を下げさせれば、自然と人は、あの人は偉いのだと思ってくれる。それが、権威だ」

確かに前世の頃、会社にいた社長の息子はアホだったが、妙に迫力があった。そういえば、毎朝朝礼で社員に頭を下げられていたな・・・。そんな下らない事を思い出しながら、俺は街を歩く。

どのくらい歩いただろうか。気が付けば北門まで歩いていた。俺は門の上に上がり、都の街並みを見渡す。

あちこちに足場が組まれ、建物が建設されている。粉塵や音が外に漏れないようにメイとゴンが共同で作ったシートを使うよう奨励しているので、シートに覆われた建物が目に付く。ふと俺は、その建物のシートが人間のかさぶたのように見えた。そうだ、傷ついた街もこうやって再生しようとしているのだ。きっとリコも、治るに違いない。痛みを感じるってことは、患部がそこだと体が教えてくれているのだ。そこを治せば、きっとリコは元気になるだろう。そう思うと、少し心が楽になった。

この日は早めに屋敷に帰った。リコの様子を見に部屋に入ると、予想外の光景が目に入った。

「痛い・・・痛い・・・」

腹を押さえて必死に痛みを我慢するリコ。その背中を一生懸命さすっているメイ。その上をフェアリがパタパタと飛び、何かの鱗粉を落としている。しばらくすると痛みが引いたのか、リコは再び力なくベッドに横たわった。

「リコ・・・」

俺は思わずリコの手を取って握りしめた。リコはうっすらと目を開けて小さく微笑み、力のない声で呟く。

「大丈夫・・・ですわ」

「数十分おきにお腹の痛みで起きられます。朝も一度、痛みで起きられたので痛み止めを作って飲ませましたら、しばらくゆっくり休まれていましたが・・・。薬が切れると、また・・・」

メイが申し訳なさそうに言う。

「大丈夫、私も痛みを和らげる粉を作れるからー」

フェアリが念話を送ってくる。俺はメイの隣に座る。

「リコのこの痛み、いつからだ？」

「・・・一昨日くらいから、お腹の痛みは訴えられていました」

「そうか」

「単なる食あたりかと思っていたのですが・・・。まさかここまで痛みを訴えられるとは・・・」

「俺のかけた回復魔法でも治癒していない、ということだな。メイ、こういう症状の病気に心当りはないか？」

「・・・」

「どうした？」

「一つ・・・あります。ガイッシャ、という病です」

「何だ、それは？」

「体の筋肉が固まる病です。まず腹筋から固まっていくために、最初は激しい腹痛を感じます。その後、少しずつ体の筋肉が硬直していくために、全身に激しい痛みを感じます。そして最後は心臓が硬直して死に至ります」

「・・・それを治癒する方法は？」

「・・・残念ながら」

俺はいても立ってもいられず、部屋の外に出た。まさかリコがそんな病気であるはずがない。リコが死ぬはずはない。必死で自分にそう言い聞かせた。リコがいない未来・・・そんなものは考えられない。そんなことを考えながら裏庭に出ると、おひいさまの祠が目に入った。俺は何かに縋りつきたい一心で、その転移結界に乗った。

「おお、久しく会わなんだが、元気にしておるかぇ？」

俺は挨拶もそこそこに、おひいさまにリコのことを話す。

「ふぅむ。それは難儀なことじゃ。妾もガイッシャという病は聞いたことがあるが、治癒したことはない。もしかすると、サンディーユが知っておるやもしれぬな」

おひいさまに呼び出されて、サンディーユがやってくる。

「・・・ううむ。話を聞く限りでは、ガイッシャという病に症状はよく似ておる。某も、治癒の方法というのは・・・存ぜぬ」

「おお、リノス様、なんとおいたわしや」

侍女の千枝と左枝がさめざめと泣いている。おひいさまもサンディーユも、古い文献を当たれば何かの手がかりをつかめるかもしれないということで、取りあえずは調べてもらうことになった。

屋敷に帰るとゴンがいた。先ほどメイから聞いた話と、おひいさまの所に行った話をする。ゴンも、その病気の可能性を疑っていたそうだ。そんな話をしていると、メイがフェアリを抱っこしながら、ダイニングに入ってきた。

「ご主人様・・・。リコ様が、呼んでおられます」

「ああ、わかった。すぐに行く」

俺はダイニングを出て、離れの部屋に向かう。

部屋に入ると、リコが落ち着いた顔でベッドに横になっていた。

「・・・お見苦しい姿を、お目にかけましたわ」

俺はリコのもとに行き、その手を握り締める。

「きっと疲れたんだよ、リコ。しばらくゆっくり休んでくれ」

リコは小さく笑い、ゆっくりと首を振る。

「疲れではなく、私の命が、もうすぐ尽きるのです」

「バカなことを言うな!!」

自分でも驚くほどの大声を出していた。しかし、リコは一切表情を崩さない。

「・・・お腹がちぎれるかと思いました。このような激しい痛みは、初めてです。それが治らずにひどくなっていくなど・・・。どう考えても、普通ではありませんわ」

「・・・」

俺は返す言葉が見つからず、じっと下を向いてしまう。

「・・・リノス」

「なんだい、リコ?」

「お願いが、あるのです。聞いていただけまして?」

「ああ、いいよ」

「これは、私の遺言です。必ず、お聞き届けくださいませ」

「バカ野郎、遺言だなんて・・・。縁起でもないこと言うな!」

俺はリコの手を握りながら、涙を流していた。そんな俺にリコは優

しい微笑みを投げかける。

「リノス、あなたにお願いしたいのは、新しく妻を娶ってもらいたいのです」

「なにもこんな時に、そんな話を・・・」

「いいえ。こんな時だからこそ、なのです。よく聞いて、リノス。私が死ねば、リノスの妻はメイ一人になりますわ。そうなればメイはこれまでの研究が出来なくなります。メイを貴族の習慣に縛るのは、あまりにも可哀想ですわ。ですから、新しい妻を娶ってほしいのです」

「・・・リコ、そんなことを考えなくてもいい。娶るって、誰をだ？」

「まずは、ニザ公国のコンシディー様ですわ」

「コンシディー様？」

「リノスが国王になる時に、陛下・・・兄上に勧められたのです」

「・・・あの時か！」

「コンシディー様を娶れば、ニザ、ヒーデータ、アガルタはより強固に連携できます。ドワーフ王もそれを望んでおられるそうです。それに、コンシディー様はメイとよく話が合います。メイの陰になり、日なたになって支えてくれると思いますわ」

俺は絶句して言葉が出ない。俺の知らない所でそんな話があったと

は・・・。呆然とする俺に、リコはさらに言葉を続ける。

「そして、サイリュースのソレイユ様です」

「ソレイユ？」

「ええ。あの方は精霊を使役する能力に長けたお方。メイが精霊を使役していますが、これまで通り使役し続けられるとは限りません。精霊の使役になれたソレイユ様なら、メイの良い相談相手になりますわ」

そこまで言うとリコは天井を向いて大きく息を吸い込み、ゆっくりと息を吐き出す。そして、再び俺を見る。

「そして最後に、マトカルですわ」

「マトカル？」

「彼女はラマロン皇国の皇女です。その血筋を取り込めば、ラマロンへの大きな牽制となります。それに、もし、彼女との間に子供が生まれたら・・・」

「子供が生まれたら、何だ？」

「王女が生まれたら、兄上の子供であるアローズの妻にしてくださいませ」

「何？」

「本来ならば兄上は、私とリノスの子供を嫁にしたいと思っていた

のです。しかし、私はこの体。それに私が死ねば、リノスとヒーデータを繋ぐものが無くなります。ですから、マトカルは是非娶ってくださいませ。そして子を為してくださいませ。マトカルとの子供であれば、血筋的には問題なく帝国に輿入れできるでしょう」

「リコ、何もそこまで！」

「国とはそういうものですわ。リノス・・・あなたと結婚してたった数年でしたけれども、本当に幸せでした。本来ならば私は逆賊として命を奪われていたのです。しかし、こんなに幸せな日々を送ることが出来た・・・大満足です」

俺はリコの手を握りしめたまま、泣くしかなかった。

「ごめんなさい、リノス。私は、至らぬ妻でした。でも、生まれ変わったら、もう一度、もう一度、私と夫婦になってくださいませ。今度はもっとかわいらしい女性で生まれてきますから」

「やめろリコ、そんなこと言わないでくれ！」

「話せる時に言っておきませんと・・・もうすぐ話もでき・・・ううう・・・痛い・・・痛い・・・」

「リコ！リコ！」

慌てて俺は治癒魔法をかける。リコは再び、ぐったりとベッドに横たわった。その時、部屋の扉がノックされ、メイの声がする。

「ご主人様、ポーセハイのローニ様がお見えです」

取るものも取りあえず俺はダイニングに向かう。ローニと名乗るポーセハイは、まだ若いが、優秀そうな女性の黒ウサギだった。

「チワンさんからの命令で参りました、ローニと申します。リコレット様がご病気と伺いましたが・・・」

「チワン？・・・そうか、ゴンから聞いたんだな。さすがに手回しが早いな。ローニとか言ったな？そうなんだ。腹に強い痛みがあってな。頼む、治してやってくれ。せめて、痛みだけでも取ってやってくれ！」

俺は黒ウサギに必死で懇願する。彼女は取りあえずメイの案内で、リコの部屋に向かっていった。しばらくすると、メイがダイニングに戻ってきた。

「・・・ご主人様。リコ様から書簡を三通預かりました。ニザのドワーフ王と、サイリュースのヴィヴァル族長、そして・・・マトカルさん宛です。リコ様はすぐに届けるようにと仰いましたが・・・」

「・・・ああ、そうしてやってくれ」

メイは無言で転移結界のある裏庭に向かっていった。

その後、ローニが戻ってくるまでの時間がとても長く感じた。実際、小一時間くらいかかっただろうか。そして、ようやく彼女はダイニングに戻ってきた。

「どうだ、リコは？」

ローニは背筋をピンと伸ばし、一礼をする。

「これは、治るものではありません。私たちで治癒というのは・・・できかねます」

・・・目の前が、真っ暗になった。

第百四十四話　青天の霹靂

「いくつかお尋ねさせていただきたいのですが、よろしいでしょうか？」

ポーセハイのローニが口を開く。

「何だ？」

俺はぶっきらぼうに返答を返す。リコを治癒できないのであれば、コイツが居ても仕方がない。できれば、早く帰ってほしいと思いながら、ぶ然とした表情を浮かべる。

「リコレット様にこのような痛みが出たのは、いつからでしょうか？」

「今朝だ。軽い痛み自体は一昨日くらいからあったそうだが」

ローニは頷きながら、手元の紙に何かを記している。

「何か、お薬などは服用されましたか？」

「メイが痛み止めの薬を調合して飲ませたようだ。それに、フェアリードラゴンのフェアリが痛みを軽減する鱗粉を出して、リコに吸わせた」

「治癒魔法は？」

「俺がかけた」

「ハイヒールですか？」

「いや、エクストラヒールだ」

「エクストラヒール・・・」

ブツブツと何かを言いながらローニはメモを取っている。

「恐れ入りますが、飲ませたお薬と、その・・・鱗粉、ですか？拝見できますか？」

「薬については俺はわからない。メイが作ったからな。鱗粉はフェアリが出せる。おい、フェアリ」

「わかったー」

フェアリが羽を動かして鱗粉を作り出す。ローニはそれを丁寧に集めて、指ですりつぶしたり、匂いをかいだり、ちょっと舐めたりして観察している。

「うん、これは神経性のものですね。おそらく、痛覚を麻痺させるものですね。これは問題なしと」

カリカリとメモを書き入れる。その時、メイが帰ってきた。

「ご主人様、リコ様の書簡を手渡してきました。ドワーフ王とヴィヴァル族長は、大喜びでお受けするとおっしゃいましたが、マトカルさんは、畏まりました・・・と言って、すごく申し訳なさそうに

お辞儀をしていました。あれは一体、何が書かれてあったのですか？」

「・・・大体、察しはつくが、今はそれどこじゃない。このローニがメイに薬のことで聞きたいそうだ」

「薬のこと・・・ですか？」

メイはローニの所に行き、何やら話を始めた。どうやらかなり専門的な話をしているようで、俺たちにはその内容は全く分からなかった。やれ、どんな植物を使っただの、割合だの、精製方法だの、かなり詳しく話をしている。

「なるほど、それでしたら、人体には問題なさそうですね。ただ、その薬は今後、使わないでください。あと、治癒魔法を使うのも控えてください」

きっぱりとローニが言い切る。その言い方が、俺の癪に障った。

「おいお前、さっきからいい加減にしろよ？」

「いい加減・・・ですか？」

「ああ。さっきから薬がどうだの、鱗粉がどうだの訳の分からん事ばかり聞きやがって。用が済んだらとっとと帰れ。リコの病気を治せないんだろ？せめて痛みだけでも軽減してほしいが、それもできないんだろう？それならお前が居ても邪魔になるだけだ」

ローニは、シャキッと背筋を伸ばし、ピョコんとお辞儀をする。

「これは、私の説明不足でした。お許しください。リコレット様のお体を案じての質問でした。あまり強い薬ですと、お体に障りますので。ただ、先ほどからお話をお聞きしまして、リコレット様がお飲みになられた薬はどれも強いものではないため、問題ありません」

「でもお前、メイの薬は今後飲むなと言ってたじゃねぇか！」

「はい。メイ様のお薬は、体内の痛みを発する患部の動きを止めるものです。それはあまりよろしくありませんので、お止めいただくよう申し上げました」

「はあ？意味わかんねぇぞ？痛みを発する患部の動きを止めて何が悪いんだ！」

「それをされますと、排泄されなくなりますので・・・」

「は、排泄？」

「触診しましたところ、リコレット様は、ここ１０日間程便通がないようです。激しい腹部の痛みは、便を排泄しようとするために起こっているものです。ですから、メイ様のお薬を服用されますと、腸が排泄運動を止めてしまいます。ですから、お止めくださいと申し上げました」

「・・・と、いうことは、リコの腹痛の原因は・・・便秘？」

「そういうことになります」

身体の力が一気に抜け、俺は椅子にへたり込むようにして腰を下ろす。

「念のため触診と、検尿を行いまして、他の病気がないのかを調べましたが、特に大きな問題はなさそうです。取りあえずリコレット様には、便がゆるやかに排泄されるお薬をお飲みいただきましたので、しばらくすれば全ての便が排泄されると思います。おそらくそれで、痛みはなくなるかと思います」

「そうか・・・よかった・・・。でも待てよ?リコは今まで便秘なんかしたことなかったよな?そんな話も聞かなかったぞ?メイ、フェリス、ルアラ、お前たちは何か聞いているか?」

フェリスとルアラは顔を見合わせている。

「いえ、リコ姉さまからは、私たちは聞いたことがありません」

メイもしばらく考えていたが、

「そうですね。私もそんな話は聞いたことがありませんね・・・」

全員が首をひねる。ローニは俺たちを見回しながら、

「リコレット様の生活習慣が変わられたというのはありませんか?」

「ああ、確かにここ数か月で、働く場所が変わった」

「運動は、どうでしょうか?」

「ほぼ、しないな。家事をやる時くらいか?」

ローニは長い耳をピクピクと動かしながら、うんうんと頷きつつ口

を開く。

「便秘は規則正しい食事と運動で、かなりの確率で防ぐことが出来ます。ちょっと待っていて下さい」

そう言うとロー二は、新たな紙を取り出し、カリカリとそこに何かを書き始めた。

「・・・ハイ、できました。これが、便秘解消に効果のある食材です。これらを使って食事を作られると、いいと思いますよ」

目を通してみたが、書かれていた食材の半分以上は、俺の知らない物だった。俺はその紙をペーリスに渡しながら、呆れたように呟く。

「それにしても驚くな。いきなり便秘なんかになるんだな」

ロー二は不思議そうな顔をして、小首をかしげる。

「珍しくないですよ?よくあることですよ?」

「そうなのか?」

「はい。ご懐妊の初期症状としては、珍しくありません」

「・・・何?今、なんて言った?」

「ええと・・・ご懐妊の初期症状としては珍しくないと・・・」

「か、懐妊?それって、もしかして・・・」

「・・・あれ?ご存じなかったのですか?それは・・・失礼いたしました。この度はおめでとうございます。リコレット様は確かに、ご懐妊しておられます。詳しく調べてみませんとわかりませんが、おそらく既に、二か月目に入られているかと思います。先ほど私が申し上げましたのは、ご懐妊は病気ではありませんので、つわりや便秘などのご懐妊にまつわる症状を治癒する、というのは出来かねますという意味でした。説明不足で申し訳ございませんでした」

ロー二はお辞儀をして笑顔で俺に説明してくれる。俺はフラフラと椅子から立ち上がると、全力でリコが寝ている部屋に向かう。

「リコ!」

既に上半身を起こしていたリコは、突然飛び込んできた俺の姿を見て、目を丸くして驚いている。

「な、何ですの?」

「リコ・・・リコ・・・」

俺は涙を流しながらリコを抱きしめる。そして、オイオイと泣いた。

「リ・・・リノス。・・・ちょっと、リノス・・・」

「リコ、よかった。よかった・・・」

「扉が開いたままですわ。はっ、恥ずかしいですわ。やめてくださいませ・・・」

「リコぉ・・・リコぉ・・・」

「わかった、わかりましたから、離してくださいませ。ちょっと・・・離して！」

リコが驚くほどの力で俺の腕を振りほどく。びっくりした俺は、泣き顔のままポカンとリコの顔を見る。リコは俯きながら恥ずかしそうに、

「ト・・・トイレに・・・トイレに行かせてくださいませ！」

ベッドから飛び出したリコは、脱兎のごとく部屋の外に出ていった。

パタパタパタパタ・・・リコが走り去る音が廊下中に響き渡る。そして、バタン！と大きな音がしたかと思うと、それ以降、リコは約1時間トイレの中で籠り続けたのだった。

アガルタ国とその同盟国に、リコレットの懐妊が発表されたのは、その次の日のことであった。

第百四十五話　そして、大騒ぎになる

リコのお腹に子供がいる。正真正銘、俺とリコの子供だ。あの日の後、ポーセハイのローニに再度診察してもらい、リコの出産予定日が年明けの1月末ごろと診断された。

で、今のリコはというと・・・。まだベッドから出ずに安静にしている。

「・・・リノス、もう大丈夫ですわ」

「大丈夫なわけないだろう！リコの子供が流れでもしたらどうするんだ！安静に、安静にしてるんだ！」

「ローニも言っていましたけど、懐妊は病気ではありませんわ。それに動かないと、その・・・」

「その、何だ？」

「・・・また、お腹が痛くなりますわ」

「じゃあ、歩いてもいいけど、慎重に、慎重にな。決して転ぶんじゃないぞ！」

「わかっていますわ」

「なあリコ」

「何です？」

「お腹の子は、男の子か？女の子か？」

「そんなこと・・・。まだわかりませんわ！」

リコにとって俺は、かなりウザイ存在になっているようだ。とはいえ、この世界でリコの年齢は、かなりの高齢出産になる。ということは、色々なリスクも高いということになる。ローニも、普通の生活をする分には構わないが、無理はしないようにと言われている。その兼ね合いが難しい所だ。

ただ、リコの妊娠が分かってからは、今までが嘘であったかのように、家の中は明るくなった。何より、リコが嬉しそうだ。イヤ、本当に、悪い後は良いというが、本当だと実感する。

リコの妊娠を発表した数日後から、各方面から祝いの使者がアガルタに訪れるようになった。本来は、リコが安定期に入ってから発表するべきだったのだが、あまりの嬉しさに我を忘れてしまい、即座に発表してしまった。これは大いに反省している。

おひいさまとサンディーユには、すぐさま報告に行った。二人とも大笑いで、大事にはならずに済んだ。もっとも、二人が好きなお土産をどっさり持っていったので、ご機嫌は頗るよかったのだが。

リコも妊娠の兆候らしきものはあったらしいが、まさかこのタイミングで子供ができるとは思いもよらなかったらしい。彼女は意外にデリケートであり、環境が大きく変わると、俺たちのわからない部分で色々と変化はあったそうだ。今回も、アガルタに職場が変わったために妊娠とは思わなかったのだそうだ。

今の俺の一番の仕事は、祝いの挨拶を述べに来るアガルタの領主とヒーデータの貴族たちの引見である。その中には、サイリュースの族長、ヴィヴァルもいた。

リコの懐妊の発表から二週間、ヴィヴァルは上機嫌で俺のもとにやってきた。さすがに里で着ているエロい衣装ではなく、人間の貴族たちが着用するドレスを身に付けていた。おそらくこの二週間で自分を磨き上げたのだろう。ドレスで露出はかなり抑えられているが、それでも、隠しても隠しきれぬ色気は、訪れる領主たちのド肝を抜いていた。

「この度は、誠におめでとうございます」

いつも以上に、よく透き通る声でヴィヴァルは挨拶をする。

「ありがとうございます。族長様も、わざわざのお越し、痛み入ります」

「いえいえ、このくらいのことは何でもありません。サイリュースの里も、耕作地が広がり、作物も実っています。リノス様には、感謝してもしきれません」

「いや、妻のメイがやったことです。礼ならメイに言ってやってください」

「またご謙遜を。妻、といえば、この度は、娘のソレイユの輿入れのお話をいただき、我ら一族は歓喜に堪えません。いつでも、ソレイユは輿入れさせますわ」

ヴィヴァルは大張り切りである。俺はちょっと苦笑いをしながら、

「ええ、それはまた、改めてお話させていただきたいと思います。今は妻のリコレットが・・・」

「そうですわね。これは私としたことが。リコレット様はまだご懐妊されたばかり。お腹のお子様が落ち着かれるまで、まだしばらくはかかりますわね。そういえば、ニザ公国の王女様もお輿入れなさるとか・・・。そちらとの兼ね合いもありましょうから、その話はまた、時機を見て致しましょう。ホホホホホ」

ヴィヴァルの顔は笑っているが、目は笑っていない。そんなドワーフの女なんかに、私の娘は負けないわよ！と目が物語っている。俺は苦笑いを返すのがやっとだった。

そして、ヴィヴァルと示し合わせたかのように、ニザ公国の宰相、ユーリーがやってきた。そしてその隣には、白髪のナイス・ガイが控えていた。さすがにこれには俺も、椅子から転げ落ちそうなくらいに驚いた。

「ご無沙汰をいたしております。この度は誠におめでたく・・・」

「い、いや、ユーリー宰相。な・・・何で、何で、鹿神様がおられるのですか？」

「いや、孫娘がリノス殿と誼を通じると聞いて、嬉しさのあまり来てしまったのだ。リノス殿、この度のコンシディーの輿入れの話、ありがたく思うぞ！」

「い・・・いえ、そんな・・・」

「ドワーフ王も大喜びでして・・・。王はすぐにでも輿入れさせよと仰せだったのですが、それはさすがにと、お止め申したのです」

「さすがはユーリー宰相。ありがとうございます」

「何せ王女は行儀作法がまだ完ぺきではありません。聞けば・・・サイリュースとやらの、大変美しい精霊使いも娶られるとのこと。このままではコンシディー様の肩身が狭くなりますから、せめて、行儀作法だけでもきちんと身に付けてお輿入れさせたく、今はその猛特訓中です」

「そ、そうですか。それは、それは・・・」

「リコレット様もご懐妊されたばかり。落ち着かれるまでまだまだ時間がかかりましょう。お輿入れの時期はまた、改めてご相談いたしましょうか。それまで王女様はみっちり、私が仕込んでおきます！」

鹿神様は苦笑いしている。俺も苦笑いを浮かべるしかなかった。

「そ、そうですね。くれぐれも、無理はしないでくださいね」

ユーリーは任せておけとばかりに、大いに胸を張っていた。

二人が俺の部屋から退出すると、入れ替わりにルアラが入ってきた。

「師匠、これで今日の面会は終了です」

「ああ～やっと終わったか。サイリュースとドワーフが続けてくる

とは思わなかったな。あの二人、何か打ち合わせでもしているのかね？」

「そりゃ、情報収集には余念がないと思います。おそらく、ニザの使者が出発したと聞いてヴィヴァル様は、使者が到着するこの日に合わせて来たのだと思います」

「なんでそんなことを・・・」

「相手を見極めるためだと思います。使者の人となり、身に付けている物、礼儀作法・・・。それだけでも、その国の在り様が分かりますから」

「ルアラ、お前もリコみたいなことを言うようになったな」

「どういう意味ですか？」

「いや、褒めてるんだよ。お前も成長したなってさ。ところで、ニザの二人は、これからどうするんだ？まさかこれからトンボ帰りってことはないだろう」

「そうですね。ちょっと聞いてきます」

「もし、都に泊まるつもりなら、ホテルクルムファルを使え。ポーセハイの転移術だとか何とか言って転移すればいい」

「畏まりました」

結局、ユーリー宰相と鹿神様は、ホテルクルムファルに滞在することを選んだ。そして、そこのサービスと景色に大満足し、料理に舌

鼓を打ち、予定の日程を超えて逗留して、伸び伸びと羽を伸ばして帰国の途についた。

その夜、俺は寝室でリコに今日あったことを話した。

「さすがはサイリュースですわね」

「ルアラもおんなじことを言っていたよ」

「マトカルはどうしていますか？」

「うーん。マトカルは妙によそよそしくなってな・・・」

普段もあまり喋ってこないマトカルだったが、リコの書簡を受け取って以来、意識的に俺を避けるようになっていた。俺としては気にしていないが、何ともやりにくいのだ。

「無理もありませんわ。青天の霹靂だったでしょうから」

「リコはなぜ、マトカルを？」

「何となく、ですわ」

「何となく？」

「ええ。マトカルと話をした時に、リノスと初めて二人っきりで話した時に感じたような気分になりましたの。もしかしたら、リノスにとっても、私にとっても、良い存在になるのでは・・・と思ったのですわ」

「ふーん。ルアラとかペーリスとかではないんだ？」

「リノスが嫌でしょう？ルアラたちも嫌でしょうし、私も、それは嫌ですわ」

「まあね」

俺はリコの手を握る。

「リコ・・・。輿入れの話、断ってもいいんだぞ？」

リコは目を丸くして、俺の手を握り返す。

「そんなことできませんわ！こちらから話を持って行ったのです。今それを反故にすれば、アガルタ国は一気に信用を失いますわ！」

「でも・・・リコは大丈夫なのか？」

「私は・・・大丈夫ですわ。覚悟はできていますの。ですから、リノスは新しい妻たちと、どんどん・・・誼を・・・深めて・・・グスン、行って、いただければ・・・グスン、エグッ・・・ううううう・・・」

大粒の涙を流しながら、リコは俺に抱き着いてきた。俺は優しくリコの背中を撫でながら、

「大丈夫だリコ。妻が増えようと、俺の一番大好きな妻はリコだ。子供が生まれても、一緒に寝てくれな？」

「リノスうううう・・・」

俺はリコをギュッと抱きしめた。

第百四十六話　上質の羊羹には、いい餡が使われる

暑い夏が訪れた。ジリジリと照り付ける太陽が眩しい。そんな中、アガルタの都にある俺の執務室に一人の来客が告げられる。アポなし突撃訪問だが、知った人物なので通してくれと伝える。しばらくすると、その人物がやってきた。

「おうっ、まっぴらごめんねぇ！まっぴらごめんねぇ！」

「何だ？部屋の外でピラピラ言いやがって。入ってこい」

椅子に座ったまま俺が声をかけると、乱暴にドアを開けて入ってきたのは、小柄だが真っ黒に日焼けした、腕っぷしの強そうな職人風の男である。

「おう大将（てぇしょう）、まっぴらごめんねぇ！」

「やあゲンさん。元気そうだな。一体どうした、この真昼間に」

部屋に入ってきたのは、大工の棟梁であるゲンさんである。帝都で1、2位を争うほどの腕利きの大工だが、アガルタで一旗揚げようと弟子を引き連れて数か月前、移住してきた。アガルタでは絶賛建設ラッシュとあって、ゲンさんには注文が殺到しており、かなり忙しくしているのだ。

「大将（てぇしょう）、聞いたぜ？新しく嫁を迎えるんだってな？」

「まあ、ね」

俺は何とも言えない顔をして答える。

「奥方のご懐妊ともども、二重の喜びだぁな。で、あっしら大工(でぇく)らが集まって、大将(てぇしょう)に祝いを贈ろうって話になったんだ」

ゲンさんは得意げな顔をして、ずいっと俺の近くに体を寄せる。

「別にいいよ。ゲンさんも忙しいんだから、無理しないでくれ」

「いいや、それが大ありよ！大将(てぇしょう)、新しい奥方が住む場所は決まってるのかい？」

「あー」

俺は思わず空を睨む。

「今は奥方二人と娘っ子二人とゴン兄貴でことが足りているだろうが、新しい奥方を迎えるとなると、今のままじゃいけねぇだろ？新しいお子も生まれるんだ。ここは一つ、大将(てぇしょう)の家を拵えようじゃねぇかって話になってるんでぇ」

ゲンさんは目をキラキラさせている。今のところ、都の人々には、俺の転移結界は秘匿している。そのために彼らは、俺たち一家はこの元王国軍本部の建物に住んでいると思っているのだ。

「でな大将(てぇしょう)。この都には王様が住む場所がねぇんだ。俺たちで王様が住む宮殿を建てさせちゃくれねぇか？ジュカ王国の時のようなバカでけぇものは作れねぇが、それなりのものを仕上げる自信はあるぜ？」

「ありがたい話だが、ゲンさんも忙しいだろう？」

「いいや、帝都のトメ公、トメライルだよ！・・・知らねぇ？・・・そのトメ公がアガルタに来るってんだ。野郎が来るってんなら、俺っちの仕事をトメ公に任せちまおうと思ってな。他の親方衆とも話したんだが、俺たちの手でドデかいもんを作ってみてぇって思いは一緒なんだ。大将（てぇしょう）、一つ俺たちに祝いとして、城を建てさせてくんねぇ！」

ありがたいようなありがたくないような話だが、ゲンさんの言うこともっともだという気もする。この話は一旦俺にあずからせてもらう形にして、後日返事をすることにした。

「いい返事を待ってるぜ！」

ニッと白い歯を見せ、笑顔でゲンさんは部屋を後にした。

夜、帝都の屋敷に戻った俺は、早速皆にゲンさんの提案を話した。

「うーん。このお屋敷は愛着があるんですけれど・・・」

そう話すのはペーリスだ。無理もない。この屋敷のキッチンはほぼ、ペーリスが選んだ器具、食器で満たされている。彼女のこの屋敷への愛着は、人一倍だろう。

「ペーリスちゃんは大学もありますから、アガルタに行くのは・・・」

ペーリスの心配をしているのは、メイだ。ペーリスも心配だが、この屋敷にはメイの研究に使う道具や資料が大量に保管されてある。それを移すとなると、かなりの労力だろう。

ゴン、フェリス、ルアラ、フェアリにも聞いてみたが、彼らはどっちでもいいという感じだ。

「ゲンさんの言うことは、もっともですわ」

毅然と発言したのはリコだ。

「やはり、城は必要ですわ。王とその一族を守る場所でもあり、国の力の象徴でもあります。アガルタは建国したばかりの国。大きな城を建てれば、それだけ周辺国に圧力をかけられますわ」

皆、押し黙ってしまった。確かに、リコの言うことも一理ある。俺は腕を組んで考える。

「・・・お城って、いるかな？」

「リノス、何を言っていますの？必要ですわ！」

「リコの言うことも、もっともだと思うんだ。でも、お城って本当に役に立つかな？だってジュカの城も大きくて鉄壁の守りを誇っていたけど、結局カルギの反乱であえなく国王一家は滅んだ。どんなにすごい城を作っても、結局その城を誰も守らなければ意味がないんじゃないかなって思うんだ」

「リノスの結界があれば十分守れますわ」

「うん、そうなんだけどな。もし俺が死んだら、結界は効かなくなるぞ?その時に城の内部で反乱を起こされたら、全てが終わるぞ?」

「アガルタに住む者に限ってそんなことは・・・」

「リコ、ないとは言い切れないぞ。俺たちは大丈夫でも、子供や孫たちの代はどうだろうか?それに、今、大規模な城を建てれば、かなりの人員を動員しなきゃいけないだろ?そうすればアガルタに住む人々の負担になりはしないだろうか。何も今、無理をして城を建てる必要はないと思うんだ」

「リノス・・・」

「ただ、コンシディー公女とソレイユは確実にやってくるから、彼女らの部屋は用意しないといけないな」

「あれ?マトカルは・・・?」

「うん、マトカルは一度、ゆっくり話をしなきゃなと思ってるんだ。彼女の意に沿わないのであれば、それはそれで考えたいと思うんだ」

リコは目を伏せて俯く。

「いや、リコが責任を感じる必要はない。あくまで、俺の問題だ」

「余計なことを・・・しましたわ」

「リコ、大丈夫だ。ただ、城を建ててしまうと、やれ女官だの兵士だのを置かなきゃいけないだろ?できるだけシンプルにしたいんだ。できれば、コンシディーとソレイユは身一つで来て欲しいと思って

いるくらいだ」

「さすがにそれは・・・。最低でも女官の一人や二人は連れてくると思いますわ」

「やっぱりそうか・・・。そうだよなぁ」

「コンシディー公女もソレイユ様も、高貴なお方ですわ。かたや一国の公女で、かたや族長の娘です。それなりの迎え方をしなければ、失礼になりますわ」

「ただ、ご主人のスキルは、知る者は少ない方がいいでありますー」

「ゴンの言うこともっともだ。わかった。ちょっと考えるよ」

俺は結論を先送りにして、風呂に入って寝ることにした。

今日はリコとメイと三人で風呂に入る。リコの妊娠が分かってから、風呂はなるべく三人で入ることにしているのだ。リコのお腹はまだ目立って膨らんではいないが、これからどんな風になるのか、不安が半分、楽しみが半分といったところだ。

三人で湯船に入りながら、疲れを落とす。至福の時間だ。

「お風呂って気持ちいいですね～」

思わずメイが声を漏らす。

「そうだな。極楽だよな～」

俺もノホホンとした声で答える。

「もしお城に移っても、こうやってお風呂に入りたいですね～」

「そうだな～」

そんな会話をしていると、リコが俺の隣に来た。俺はリコを背中から抱きしめて、両手でお腹をやさしく撫でる。

「この子が生まれても、パパとママとでお風呂に入れたらいいな」

リコはとてもうれしそうな顔をしていた。

そして、俺とリコはベッドに入る。このところ俺はずっとリコのお腹に手を当てて寝ており、今日もお腹に手を当てて寝ようとする。しかし、リコはその手をやさしく払って、俺の胸に顔をうずめてくる。

「・・・リノスは、どうしたいのですの？」

「何がだい？」

「お城のことです」

「俺は・・・今の生活のままがいいな。何か今さら貴族みたいな生活をしても、たぶん馴染めないだろう。城も大きなものは必要ないと思っている。アガルタの人々が俺を見放せば、どんなに立派な城を建てても、結局は無駄になる。それよりも、アガルタの人々を俺が守り、そして俺がアガルタの人々から守られる関係を作りたい。

そっちの方が、城を建てるよりいいと思うんだ。すごく非常識で甘い考えかもしれないけど、それが、俺の本心だ」

リコは俺の胸をキュッと掴む。俺も、リコの背中を優しく抱きしめた。

そして次の日の朝、皆で朝食を食べている時に、リコが口を開いた。

「昨日のお城の話ですが・・・」

「どうした、リコ？」

「私なりに考えてみたのですが、やはり、城は建てるべきだと思います」

俺はゆっくりと頷く。

「しかし、大きな城は必要ないと思います。リノスの言う通り、一番大切なことは、アガルタの人々から信頼を得ることだと思いますわ。ただ、威厳と格式のある建物・・・そうですわね、領主や各国の使者を引見し、歓待する建物は建てるべきだと思います。それで十分ですわ」

「リコ・・・俺たちは、どこに住むんだ？」

「今のまま、この屋敷で住めばいいのですわ。仕事が終わればこの屋敷に帰ってくる。それでいいと思いますわ。コンシディー公女とソレイユ様の住む場所は、空いている敷地に、新たに建てればいいのです。お二人には一度お話をして、この屋敷で住むのがイヤなら

ば、新しく作る建物の中に部屋を作ればいいのです。それであれば、侍女や女官を連れてきても、十分対応できますわ」

「それはいい考えでありますなー」

「リコ姉さま、さすがです！私も賛成です！」

みなリコの案に賛成のようだ。リコは俺をじっと見る。

「リノス、どうでしょうか？」

「俺も、その案に賛成だ」

「ありがとう、リノス。考えてみれば私も、この屋敷が一番好きですわ。そしてこの屋敷で、みんなで生まれてくるこの子を育てたいと思いますわ」

「わかった。じゃあアガルタに建てるのは、城ではなくて、洋館で決まりだな」

「ようかん？」

「宮城（きゅうじょう）にある、舞踏会なんかで使われている建物のことだよ」

「ああ、迎賓館のことですわね」

「そうだ。いい案が使われるから、きっと上質な洋館が出来上がるだろう」

そう言って俺は、ゲンさんと話をするためにアガルタに向かった。

第百四十七話　日出る国と日没する国

アガルタ国の都は、熱気に包まれていた。夏の陽射しが照り付ける中、暑さに負けないくらいの、威勢のいい声があちこちで聞こえてくる。

彼らは１０月に国王が新しい妻を迎えるのに合わせて、その宮殿を急ピッチで建設している。職人たちはここが腕の見せ所とばかりに、惜しげもなく持てる技術の全てを注ぎ込んでおり、まだ建設途中でありながら、完成すればさぞ素晴らしい建物が出来上がるであろうと思わせる出来栄えである。

俺はゴンと共に建設中の建物を見ている。まだ建設が始まってひと月ほどだが、予想をはるかに超えるスピードで建物が出来上がっている。

大工のゲンさんが中心となって建設を担っているが、現場からは怒号しか聞こえてこない。親方衆の気合は伝わってくるが、そこで働いている若手が潰れてしまわないか、少々心配ではある。

新しく建設する建物だが、バーサーム家の屋敷跡に建てることにした。まだ、ダイニングとキッチンが残っているところに建て増す形を取ったのだ。ゲンさんに言わせると、この建物自体かなり丈夫に丁寧に作ってあるらしく、俺の建て増し案を喜んで受け入れてくれた。

そこから職人衆が動き出すまでが早かった。デザインなどは一任し

ていたせいもあるが、あれよあれよという間に足場が出来、建設が始まった。設計書などはどうしているのだろうと思うが、ゴンがアドバイザーとして携わっているので、敢えてそこは何も言わないでおく。俺をはじめとする、家族全員の部屋も作るそうで、バーサーム家の広い庭を利用した、かなり大きな建物になる予定だ。

コンシディーとソレイユについては、メイが使者となり、ニザとサイリュースの里に打ち合わせに行ってもらった。彼女はリコの体調を考慮して、安定期に入る１０月下旬、秋の収穫が終わる頃に輿入れの日程を決めてきた。やはり二人ともそれなりの数の女官と侍女が付いてくるようだ。しかし、メイが直接二人に会って話をしたところ、帝都の屋敷に住むことは問題ないと言う。特にコンシディーは、以前食べたペーリスの食事が忘れられないらしく、ぜひ住みたいとのことだった。そこで、現在は帝都の屋敷も増築中だ。

帝都の屋敷については、基本的に俺たちが住んでいる新館を建て増しする予定だ。職人たちが屋敷に来ることで、俺たちの転移結界などが外部に漏れる危険性があったのだが、以前屋敷を増築した大工に頼んだところ、その時に使った設計図があるらしい。基本的に帝都の屋敷は木造建築なので、設計書を元に、別の場所で素材を加工し、現地で一気に組み上げる形を取るらしく、意外に屋敷に直接来ての作業は少ないようだ。これについては、リコとペーリスに任せることにした。

現在、絶賛マタニティーライフ中のリコだが、ここ最近はつわりの症状が出るようになった。とはいえ、症状自体はひどいものではなく、食事は問題なくできている。俺としては大人しく屋敷で寝ていて欲しいが、主治医であるポーセハイのローニ曰く、それなりに動いた方がよいということと、あまり妊婦のストレスになるようなことは避けるよう言われているため、無理のない範囲で仕事を手伝っ

てもらうつもりだ。

ちなみに、アガルタの王宮建設と帝都の屋敷の建て増し費用については、帝国の陛下がポンと出してくれた。とはいえ、金の出どころは建国の時に融資された資金である。要は、返済額を減らしてくれたのだ。

そしてマトカルについては、二人で、差し向かいで話をした。

「マトカル、お前は多くのアガルタの人間を虐殺した。本来ならば死をもって償わなきゃならん。そうしないと、お前に殺された者の家族は納得しないからな」

「分かっている。本来はそうすべきだろう。覚悟はできている」

「しかし、俺はお前を殺さないことに決めた。死にゃ全てが終わっちまうからな。死んでハイ終わりってレベルじゃねぇからな。お前がやってきたことは」

「リコレット殿が、リノス殿の妻になれと言ってきた。私は敗北した者だ。どういう扱いを受けても、文句は言えない。好きにするといい」

「バカ野郎。まあ、その、何だ。お前は殺した人間たちへの罪悪感なんざ皆無だろ？死への恐怖・・・みたいなものもあまりねぇだろ。それじゃお前に殺された人間たちが殺され損だと思わないか？」

「私にどうしろというのだ。一生男の嬲り者になり、穴という穴を

犯され、飽きるまで・・・」

「マトカル、取りあえず、そのプレイから離れようか。・・・オホン。俺は、お前を幸せにする」

「・・・幸せ？」

「ああ。俺と俺たちの家族がお前を幸せにする。お前が人としての幸せを感じた時に初めて、お前が殺した人たちや、その家族たちの無念や苦しみ、怒り、憎しみが分かるだろう。お前に憎しみの目を向ける人々の気持ちが理解できた時、初めてお前は自分の罪と向き合うことができる。きっとそれは、死ぬよりも辛い思いを味わうことになる。それが、俺たちがお前に課す刑だ」

マトカルはわかったようなわかっていないような顔をしている。

「我ながら残酷なことをすると思うよ。幸せを感じれば感じる程、不幸を感じる度合いも大きくなるんだからな。メチャ幸せにしてやるから、覚悟しておけよ？取りあえず、俺の嫁になるのに、その呪いスキルはよろしくないな。生まれてくる子供に悪影響を与えそうだから、こいつは除去しといてやる」

マトカルは俯いたまま、何も言わなかった。

彼女の輿入れについては、ラファイエスが喜んでいる。そんな素振りは俺にはおくびも見せないが、マトカルが断ると、老将軍が衰弱死するのではないかと懸念するほどのアゲアゲ状態なのだそうだ。

マトカルは、ラマロン国皇帝の庶子という身分であるが、特にその身分を明らかにすることはしないことにした。彼女の身分について

は、隠したところでいずれは周知の事実となるだろうし、好奇の目線で見られることは想像に難くない。それは彼女自身が、罪の重さに気付き、それと向き合いながら、今後の生き方や行動で世間の目を変えていくしかない。アガルタの人々の理解や賛同は得られないかもしれないが、俺はあえてこの方法を選んだ。俺たちはただ、彼女がラマロン皇国で生活していた時よりも幸せな人生を送ることができるよう、協力していくだけだ。

この、リノスが新しい妻を迎えるという情報は、ラマロン皇国にも伝わっていた。

皇国の皇都にある宮殿の一室に、きらびやかな軍服を身に付けた青年が椅子に座り、机に頬杖を突いたまま部下の報告を聞いている。新しく皇国軍の統括司令官に就任した、ケーニッヒ公爵である。

「ふーん。敵もなかなかやるね。ニザ公国の姫を嫁に迎えるとは。これで、ヒーデータ、ニザ、アガルタの結束は強まり、アガルタは後顧の憂いを断って、皇国との戦いに集中できるわけだ」

「アガルタの王は、ニザの王女に加えて、あと数名の女を娶るそうです。その中にはマトカル司令官の名前も・・・」

細身で神経質そうな顔をした部下が顔をしかめながら報告する。ケーニッヒ公爵はフンと鼻を鳴らす。

「まあ、放っておけ。しかし、マトカルのことについては、あくま

で他人ということにしろ。そうだな・・・。国民には、アガルタがマトカル司令官の勇名を利用しようとしている・・・とでも言っておけばいい。ヤツが女だと知っているのは軍関係者の上層部だけだ。マトカルはアガルタと戦って華々しく散り、軍神となった・・・とでもしておくのが一番いいだろう」

「畏まりました」

「それよりも、ジゼウのバカが失敗したおかげで、皇国内における軍の威光は地に落ちている。それどころか、兵士たちもアガルタに大魔王が出たなどと臆病風に吹かれているヤツも多い。まずは軍の威光を取り戻さないとね」

「もしかしてまた、派兵でしょうか?」

部下の手がかすかにふるえている。

「バカだな、君は。あのケチな宰相が食料を出すわけがないだろう。今年いっぱいは無理だろうな。僕が一番懸念するのは、先日の失敗を吹聴して、皇国軍の威光をさらに貶めようとする輩だよ。皇都をはじめとして街のあちこちで皇国軍の敗北が噂になっている。噂っていうのは尾ひれが付くからね。そんな皇国軍にとって敵となる奴らを、跋扈させるわけにはいかないだろ?」

「では、如何なさいますか?」

「軍の中で使えそうな者を選抜して、各町と村に忍ばせろ。そして、軍の威光を貶めようとするやつらを徹底的に探し出し、捕らえるんだ」

「畏まりました」

「そいつらを軍の名において処刑する。民に軍の恐ろしさが伝わるだろうし、皇国内における軍の威光も回復する。どうだ、一石二鳥だろ？」

「すばらしいお考えかと思いますが、宰相たちがうるさいのでは・・・？」

「ああ、放っておけ。本来は宰相がやるべきことを、代わって僕がやってやろうとしているんだ。所詮、政治屋には、考えがここまで及ばないよ」

「まことにその通りかと思います」

部下は恭しく一礼をする。そして顔を上げ、不安そうに口を開く。

「軍の綱紀粛正はいかがいたしましょうか」

ケーニッヒ公爵は面倒くさそうに答える。

「大魔王に怯えている奴らは、まとめてカリエス将軍の部隊に送ればいい。というより、カリエス将軍の部隊だけが、大魔王に怯えていると言ってもいいかもしれないな。そんな臆病者の教育は、将軍に任せておけ」

「畏まりました」

一礼をして部屋を出ていく部下。その姿をため息をつきながらケーニッヒ公爵は見送った。

一方、宮殿の中のマドリン宰相の部屋では、一人の男が宰相と何やら話し込んでいる。ラマロン皇国総司令官の、カリエス将軍である。

「将軍、いかがかな?ジゼウ殿が残した軍の再編は?」

ため息交じりに問いかけるマドリン宰相の顔をちらりと見て、カリエス将軍は口を開く。

「まさか、ここまでとは正直思わなかった」

「そんなにひどいのか?」

「ああ。士気が全くない。というより、兵たちは怯えきっている。大きな音や空を飛ぶ鳥の影を見ただけで、怯える者が多くいる。あれではどんな良い作戦を立てても、アガルタには勝てないだろう」

「ううむ・・・」

マドリン宰相は手を額に当てて天井を見上げる。

「将軍が皇太后陛下に申し上げた、アガルタ王と刺し違えると約束した一件、あれは当面難しそうだな」

将軍はゆっくりため息をつく。

「今は兵士の訓練が最優先で、作戦の決行はまだまだ時間がかかりそうだ。それよりも、兵士たちの誤解を解いてやることが最優先だ」

「誤解？どういうことだ？」

「兵たちの間では、ジュカを滅ぼした大魔王は、この皇国にいるというのが専らの噂でな」

「皇国に大魔王とは・・・何と言うことだ・・・。ジゼウの部隊は一体どうしたのだ？」

「国境付近でヒーデータと睨み合った時に、ジゼウの隊では、おかしなことが起こっていたのだ」

「おかしなこと？」

「突然兵士の一人が空を飛んで敵陣に吸い寄せられたり、ジュカ側の山に霧が発生して、大魔王らしき影が見えたり、挙句には、普段人など襲わない臆病な魔物であるエグニモが大量に押し寄せて、ジゼウの隊を襲った」

「まさか・・・」

「私も、まさかとは思うが、兵士たちが口々に言うのだ。大魔王が出たと。実際にジゼウの隊では多くの戦死者を出したが、大魔王が出たと兵たちに知らせた者は、全員が死んでいたそうだ。おそらくエグニモは大魔王が操り、その姿を見たものは全員が殺された。そして、我らが混乱した隙に、皇国に入り込んだのだと兵たちは言うのだ」

「しかし将軍、もし大魔王が皇国に入り込んでいたのであれば、今頃とっくに我が国は蹂躙されていただろう」

マドリン宰相は、額から流れ出る汗を拭きながら、必死になって言葉を返している。そんなマドリンをカリエス将軍は、冷静な目で見ながら、落ち着いた声で言葉を続ける。

「いや、兵たちはこう信じている。大魔王はこの皇国に潜伏し、この国を滅ぼそうとしていると」

「潜伏している・・・と？」

「魔物の中には、人に化けることができる個体もある。大魔王クラスの魔物であれば、人に化けるのは容易かろう」

「大魔王が人に化けている？一体誰に？」

「ここ最近、突然人が変わってしまわれた方はおらんだろうか？無理難題を押し付け、その責を部下に押し付け、排除し、皇国の規律を乱そうとするお方が・・・」

「まさか、皇太后陛下に大・・・」

「おっと、宰相殿。それから先は、不敬だ」

カリエス将軍は目を閉じる。そして、大きく息を吐き出す。マドリン宰相は冷たい汗を背中に感じながら、ここ最近皇国で起こった事柄を頭の中で思い浮かべた。

ラマロン皇国の歯車が、少しずつ狂い始めていた。

第百四十八話　皇太后、ラマロン・クロウ・レイシス

ラマロン皇国皇太后、ラマロン・クロウ・レイシスは、目の前の光景に、大いに満足していた。

そこには、皇国の主だった貴族と軍人が一堂に会している。そして、全員が片膝をつき、右手を胸に当てて頭を下げていた。即ち、この部屋において頭を下げていないのは、警備の兵士を除けば、たったの二人。皇太后である自分と、息子であるラマロン皇国皇帝だけである。

レイシスは噛みしめていた。この眺めを堪能できる幸せを。

皇太后であるレイシスの玉座は、皇帝の玉座の下手に置かれている。つまり、皇帝と同じ高さに自分の玉座は置かれているのだ。皇帝だけが見ることが許される景色を、自分も同じように見ている。そして何より、命よりも大切な息子と共に、この最高の景色を共有できている。このような幸せがあるだろうか。

宰相のマドリンが立ち上がり、皇帝に恭しく一礼をして、集まった貴族たちに食料を下賜する勅書を読み上げている。その声を聞きながら彼女は、戦い続けてきた数十年間を振り返っていた。彼女の半生は、息子を皇帝にすることに全てを賭けた人生であった。

ラマロン・クロウ・レイシスは、ラマロン皇国の南端の地であるケシルの街で生まれた。父は皇国軍の参謀であり、後にジュカ王国の一部の地域を占領する働きを見せ、その地の総督となった人物であ

った。

レイシスが１０歳の時、その父の凱旋式が皇都で行われた。その煌びやかな光景を、彼女は今でも鮮やかに思い出すことができる。

しかし、父はジュカ王国軍の反撃にあい、その戦いのさなか命を落とす。レイシス１２歳の時であった。夫に先立たれた母はその後、時の皇帝、ラマロン・クロウ・ディウスに見初められ、その妻の一人として迎えられた。

レイシス１５歳の時、皇帝の弟であるルキウスの息子、アエノと結婚することになった。ただし、アエノには既に正妻がおり、レイシスは側室として迎えられたのだった。そして彼女は程なくして身籠った。

激しいつわりに苦しみながらも、お腹が膨らみ始め、ようやく安定期を迎えようとしていたある時、母が姦通の容疑をかけられて、皇帝・ディウスに処刑された。これは王妃や他の側室たちの陰謀と言われているが、レイシスにとっては大きな衝撃であった。義父のルキウスと、夫のアエノは皇帝に憚って、身重のレイシスを屋敷の一部屋に幽閉した。日当たりの悪い部屋で、粗末な食事を与えられながらたった一人、自分についてきた三名の侍女と共に、レイシスはその部屋で子供を産み落とした。現皇帝、ラマロン・クロウ・フレインスである。

皇族や貴族において子供が生まれた場合、乳母がつけられるのが一般的だが、レイシスの場合は、乳母はつけられなかった。つまり彼女は、自分の母乳でフレインスを育てたのである。そして、その部屋で、侍女たちと共に5年の歳月を過ごすことになる。

幸いにしてフレインスは父に似て丈夫な子供であった。そして、大人しい子供であり、手のかからない子供であった。彼女は持てる全ての時間を子供と過ごすことに費やし、子供の成長だけを楽しみに生きたのだった。

フレインスが5歳になった時、皇帝ディウスが崩御した。そして紆余曲折を経て、次の皇帝には義父であるルキウスが即位することになった。この時、レイシスもようやく幽閉を解かれ、夫と共に宮殿に移り住むことが許された。

そのさらに5年後、義父・ルキウスもこの世を去り、皇帝には夫であるアエノが即位することになった。

アエノは有能な皇帝であった。当時、ジュカ王国に占領されていた地域へ遠征を行い、その地の征服に成功したのだ。それだけでなく、先々代の皇帝・ディウスが度重なる遠征を繰り返したことで崩壊していた、ラマロン皇国の財政を建て直したのである。実はその陰には、レイシスの活躍があった。彼女は、財政立て直しにおける陰の功労者だったのだ。

皇帝アエノは、名君と呼ぶにふさわしい政策家であった。だが、即位の直後からその忙しさのために、妻たちへの関心は急速に薄れていった。王妃をはじめ、側室たちは皇帝の気を引こうと、豪華で煌びやかに着飾り、その美しさを競った。そのために、皇国の財政状況は悪化の一途をたどったのだった。

そんな中、レイシスは夫である皇帝に進言する。倹約をしましょう、と。

そして、レイシスは女たちの美しさの競演には目もくれず、徹底的

に自分の周囲にあるムダを取り除いていった。与えられていた多くの侍女を解雇し、皇帝から与えられた宝石や衣装、そして豪華な調度品を売り払い、率先して狭い粗末な部屋に移った。彼女にしてみれば、息子・フレインスが傍にいれば何もいらなかったのである。本来であれば宮殿を追放される、下手をすると命までも危なくなる行為であるが、その行動は皇帝の心を打った。そしてこのことがきっかけとなり、皇帝は後宮に倹約令を出した。それまで莫大に使われていた後宮の経費が浮くことになり、皇国の財政は回復に向かってゆく。

このことが契機となり、彼女は、皇帝と彼に仕える官僚や軍人たちの注目を集めるようになった。

数年後、アエノ皇帝の皇后が崩御した。後の皇妃を誰にするのかという議論になった時、多くの官僚と軍人たちがレイシスを皇妃に推した。そして、その声に押される形で皇帝はレイシスを皇妃としたのであった。

皇妃となったレイシスは、徹底的に無駄を省くよう皇帝に進言していった。まず、皇帝の十指に余る側室たちを整理し、側室は二人だけとした。この時、後宮に残った側室は、二人ともが軍の高官を父に持つ者であった。皇国内で発言力の強いのは軍人である。レイシスはそこに目を付けた。こうして彼女は軍を味方に付けることに成功し、そして、皇帝の三人の息子たちの内、次男と三男を臣籍に降下させた。

これらは反発意見も多かったが、結果的に側室や親王たちを養う費用だけでなく、そこに仕える侍従や侍女と言った人々の人件費を削ることにもつながり、結果的には膨大な経費を節減することにつながった。

こうして、皇帝と軍の信頼を得たレイシスは、次に、息子のフレインスを皇帝にするための布石を着々と打っていく。

彼女はまず、ラマロン皇帝の近衛隊長を務めていた、ケーニッヒ・ワモリに、自身の妹を後妻として嫁がせた。そして、その妹を後宮の女官長に据えた。

ワモリは気持ちの優しい男であった。そのワモリを妹と共に叱咤・激励しつつ、彼を昇進させていき、最終的には近衛長官に据えた。そして、後宮に残っている二人の側室の父たちについては、最終的に、軍総司令官と皇都防衛軍司令官の職に就けた。

自分の息子、フレインスについても、前皇帝の孫娘を嫁に迎え、さらにはフレインスを皇帝の養子として正式に手続きを行い、万全の手はずを整えた。

こうして、軍と後宮を押さえたレイシスは、彼らの口を通じて皇帝に、本当に皇位にふさわしいのは皇太子ではなく、フレインスであると繰り返し吹き込ませたのだった。

一方で、皇太子側とて黙って静観していたわけではない。後宮を追われた女たちとその実家、そして、宰相らを味方につけ、レイシスの身分の低さとフレインスの暗愚ぶりを吹聴して回った。ここに、ラマロン皇国は、醜い権力闘争が幕を開けたかに思えた。

しかし、その権力闘争は意外な形で幕を下ろす。皇帝が皇太子を廃嫡したのだ。

レイシスが皇太子側にかけた罠は巧妙だった。彼女はまず夫である

アエノ皇帝に、次の皇位を継ぐのは皇太子殿下が適当であると説いた。そして、そのためには皇太子に、万民を納得させるだけの大きな成果を上げさせるように勧めた。

一方で皇太子側には、レイシス一派が皇太子側を追い落とそうとしており、息子のフレインスに大きな成果を上げさせようと画策しているという情報を流した。しかも、その政策が「スズメの駆除」であることも同時に伝えたのだった。

皇国内でスズメは農作物を食い荒らす害鳥として認識されており、皇太子側は喜んでこの案を取り入れて皇帝に奏上した。皇帝もこの案を受け入れ、皇太子をスズメ駆除の責任者として任命したのだった。

皇太子はすぐに触れを出し、国中のスズメを駆除していった。

しかし、問題はすぐに発生した。国中で蚊、ハエ、イナゴなどが大発生したのだ。そして、それらの害虫が農作物を食い荒らし、ラマロン皇国はこれまでにない程の凶作となるかに思えた。

それを救ったのが、フレインスである。レイシスとフレインス親子に組する一派は、スズメの駆除を積極的に行わず、彼らの領地における農作物は無事であった。このお陰でラマロン皇国は危機を迎えることなく乗り切ることが出来た。

レイシスは知っていた。スズメが害鳥ではないことを。幼いフレインスと共に過ごした狭い、粗末は部屋で、年老いた侍女の一人からスズメの役割を聞いていたのだった。

この政策の大失敗は、皇太子の信頼を失墜させるのに十分であった。

皇太子は世間の批判にさらされ、父の皇帝からも見放される形で、皇都から遠く離れた粗末な屋敷に幽閉されることになった。

軍と民衆の支持を受けたレイシスに、もはや敵はいなかった。そして彼女は、老いの影が見られた夫、アエノ皇帝を暗殺するに至った。

彼女が使ったのは、毒殺という手段である。コンサルムという薬を用いて皇帝を呼吸困難に陥れ、殺害したのだ。

このコンサルムという薬は遅効性の毒であるが、苦みがあるのが難点であった。そこで彼女は、食事のデザートに甘い氷菓子を出すよう料理番に指示を出した。もともと甘いもの好きであり、夏という季節ということも相まって皇帝はこれを喜び、数多くの氷菓子を口に運んだ。そして、その後に出された、レイシス自らが入れたワインを飲んで就寝し、翌日、ベッドの上で物言わぬ姿になって発見されたのだった。

人の口腔は冷たいものを食べると、しばらくの間味覚がマヒする。それを利用しての毒殺であった。父が軍人であり、怪我をした時に水魔法で患部を冷して痛みを和らげている場面を、彼女は幼い日に見ていた。その経験にヒントを得たのである。

皇帝崩御から一年、念願であった息子、フレインスの即位式が行われた。彼女は名実ともに皇帝の母、皇太后として絶大な権力を手に入れたのである。

幼いころから優しい言葉で包み込んで育てたフレインスは、繊細で、気の小さな男であり、母親に見放されることを極度に恐れる人物に育っていた。結果的にフレインスは母の言うことを問答無用で受け入れるようになっていた。彼女はそんな息子を愛し、彼の邪魔にな

るもの、無駄なものは容赦なく排除していった。

その甲斐あって、今ではこの母子に対抗する者は皆無となった。ようやく、全ての権力を手に入れ、贅を尽くした物に囲まれた生活を手に入れたのだ。しかし、それだけの物を得てなお、皇太后の欲望は終わることがなかった。

現在の彼女の欲望は、先帝の名声を息子が超えることである。ラマロン皇国は手に入れた。今度は皇国の歴史を手に入れたい。息子、フレインスを皇国史上もっとも優れた名君とする。それが今の彼女の望みだった。

そのためには、何としても息子に大きな成果を上げさせねばならない。現在のラマロン皇国に訪れている食料危機は、その欲望を満たす最高のチャンスであった。皇太后の歪んだ愛が、暴走し始めようとしていた・・・。

第百四十九話　言葉にできず、ただ泣き濡れる

9月も終わりに近づいている。普段であれば、秋の気配が漂うのだが、今年のアガルタは、まだ暑さが残っている。

約二か月前から開始された迎賓館の建設は、ほぼ完成に近づいている。職人たちの腕が抜群によかったのもあるが、ここひと月は、職人同士の腕比べが暴走気味で、ほぼ突貫工事となっているのも影響しているようだ。

リコはようやく安定期に入り、数日前からアガルタに出勤してくるようになった。これまでも、三日に一度は顔を出してはいたが、俺のお願いでほぼ実務には携わらず、本当に顔見せ程度にしてもらっていた。まあ、後から聞くと、俺の知らない所でかなり仕事を手伝っていたようだが。

リコの妊娠が分かった時から、俺は彼女が担っていた行政業務が滞ることを覚悟していた。しかし、それは杞憂に終わり、フェリスとルアラが中心となり、スタッフ一丸となってその穴を見事に埋めてくれている。

その中でも頭角を現しているのが、マルノアとセオダルとウェルネの三人だ。

マルノアは、フルチン野郎が攫ってきた女の一人である。かなり深い心の傷を負っていたが、リハビリを兼ねてフェリスとルアラの仕事を手伝っているうちに、とてつもない能力を身に付けていることがわかった。今では、彼女らにスカウトされる形で働いてもらって

いる。その能力とは暗算であり、とんでもない桁数の計算を一瞬で終える。しかも、抜群に正確である。

セオダルは、都の人々との太い人脈を持つ男であり、私利私欲がなく、都の人々の声を拾い上げて、それを政策として反映している。どこかの国の国会議員に爪の垢を煎じて飲ませたいくらいの働きぶりである。

そして、ウェルネはあの、サラセニア伯爵の娘である。彼女は父の反対を押し切って、家出同然で都にやってきた。16歳という年齢にふさわしく、彼女は恐れを知らず、実に行動的だ。いきなり俺に面会を申し込むと、言ってのけた言葉が男前だった。

「一か月間、私をここで働かせてください。お金はいりません。一か月経って役に立たないと思われるのであれば、大人しく父のもとに帰ります。その代り、食事と寝る場所は与えてください」

凡そ貴族の娘とは思えない言葉に、さすがの俺もひるんだが、なかなか面白そうだったので、一か月間、彼女を雇ってみた。昭和の「モーレツ社員」の如く、彼女は貪欲に仕事を覚えていった。元から事務仕事に適性のあったためか、今ではフェリスとルアラの妹分として活躍している。なにより、下級貴族の事情に明るいので、その考え方や嗜好などをアドバイスしてくれる。ゆくゆくは、まだ俺に従わない貴族たちの窓口になってくれればと期待している。

国の実務に関しては、この5人が実質切り盛りしており、後は折に触れてやってくる領主たちが、意外にいろんなことを手伝ってくれている。

「フェリスたちが、あんなによくできるとは思いませんでしたわ」

ある時リコが彼女らの仕事を見て、フッと俺に漏らした。

「フェリスたちは、リコがやっていたことを真似てるだけだって言ってたよ？」

「私は、あそこまでの仕事量はこなせませんでしたわ」

「いや、リコが彼女らを育てたんだよ。リコがいなければ、今のフェリスたちはなかった。リコのお陰だよ」

「そんな・・・。でも、私はもう、引退ですわね」

リコは寂しそうに呟いた。

「何言ってるんだ。これからリコは子育てという仕事が待ってるじゃないか。本当に頼むよ？丈夫な子を産んでくれよ？」

「そうですわね。頑張りますわ！」

とびっきりの笑顔を見せて、リコは愛おしそうに自分のお腹を撫でた。

安定期を迎えたリコの今の仕事は、迎賓館の内装についての打ち合わせだ。彼女の一流のセンスで迎賓館の内部が、粋で洗練されたものになりつつある。町の業者や大工たちと打ち合わせをするリコは、とても楽しそうだ。

そしてリコは同時に、新しい妻たちが入る予定である後宮についても、打ち合わせを始めている。

コンシディー公女もソレイユも、当初の予想通り、数名の従者を引き連れて輿入れしてくることになった。特にコンシディーには、女官長のミンシを筆頭に、２０名もの侍女を連れてくる。対してソレイユは、アステスを筆頭に１０名のサイリュースを連れてくる予定だ。

既に都にはミンシとアステスがやってきており、建設途中の迎賓館を見ながらいろいろと打ち合わせを行っている。

さすがにリコ一人では負担になると考えた俺は、現在ホテルクルムファルの総支配人である、リコの側近中の側近であったクエナにサポートをお願いした。彼女は喜んでアガルタに転移してきた。

色々と相談の結果、後宮の女官長にはクエナが就任することになり、ホテルクルムファルのスタッフの一部を後宮に入れることになった。現在は、行儀作法についての打ち合わせをクエナ、ミンシ、アステスが中心になって行っている。

そして、コンシディーとソレイユたちについては、それぞれの寝室は用意するが、基本的に帝都の屋敷で普段の生活は行うことになった。要は、朝、迎賓館に出張し、夕方になったら屋敷に戻るというサラリーマンのような生活を送ることになる。外部の目をごまかすために、それぞれの部屋に屋敷に通じる転移結界を張ることにし、基本的に結界について知る者は、クエナ、ミンシ、アステスの三人だけとすることにした。

ミンシはさすがに反対したが、コンシディー本人が希望していることを伝え、様子を見てもらうことになった。

そんな忙しい日々を送っていると、いつの間にか俺は21歳になっていた。

一部の者たちは、大将（てぇしょう）の誕生日だ、一つ、樽酒を積んで、芸者を呼んでドンチャン騒ぎといこうじゃねぇか！と景気のいい提案をしてくれたが、それは丁重にお断りした。寧ろ、迎賓館の完成の時に、思う存分ドンチャン騒ぎをしてもらうことにしたのだ。

そしてある日の夜、夕食を食べようと食卓に座った時、皆が俺にサプライズをしてくれた。

「リノス、お誕生日おめでとうございます」

リコの発声を機に、皆が口々に祝いを述べてくれる。そして、リコから小さな箱を手渡された。

「これは？」

箱を開けてみると、そこには真っ白に輝く石が埋め込まれたネックレスが入っていた。

「真ん中に光る石は、ダイストという石ですわ」

「ダイスト？」

「はるか北方にある、ストレンジ島のダゴイ火山の火口付近で採れる石ですわ。ストレンジ島は創造神ヒルムが降り立った地と言われていて、そこで採れるダイストは聖なる力を宿すと言われているの

ですわ」

「そんなに貴重な石なら、さぞ高かっただろう」

「いいえ。お金はかかっていませんわ」

「じゃあ、どうしたんだこれ？」

「ジェネハが採ってきたのですわ」

ジェネラルハーピーのジェネハが、わざわざ行って採って来てくれたらしい。そういえば、最近姿が見えず、イリモに聞くと狩りに出ていると言われていたので別段気にも留めていなかったのだが、まさかこんなことをしていたとは驚きだ。

しかもさらに驚くことに、普通であれば人がストレンジ島に行くためには１年は悠々かかる距離なのだが、ジェネハは何と１０日間で往復したらしい。

「・・・ジェネハって、すげぇんだな」

「今そこに気が付いたんですか？」

フェリスが目を丸くして驚いている。

「ジェネハ殿の飛ぶ速さは、ハヤブサの倍以上の速さで、しかも長時間飛ぶことができるでありますー」

・・・まさかそんな能力があったとは。ジェネハには、ごちそうをたんと持っていくことにしよう。

ジェネハが採ってきたこの石は、メイの手で磨かれ、ネックレスとして製作されたのだという。メイ曰く、石が余っていたので他にも三つ、小ぶりのネックレスを作ったとのことで、これは新しく妻に迎えるコンシディーらにあげて欲しいのだという。

「ありがとうな、メイ。式典だけじゃなく、肌身離さず身に付けさせてもらうよ」

そう言って俺は早速、ネックレスを身に付けた。

「メイ、まだ石は余っているのか？だったら、いつでも構わないから、リコとメイの分も作ればいいよ。皆で、おそろいのネックレスをしよう」

メイはリコと顔を見合わせ、そして申し訳なさそうな顔をして答える。

「申し訳ございません、ご主人様。それは・・・いつになるのか、わからないです」

「何でだ？・・・ああ、メイも忙しいもんな。ゴメン、悪かった。今のは忘れてくれ」

「リノス、メイは作りたくても、作れないのですわ」

「何だメイ、どうした？怪我でもしたのか？」

「いいえ。メイには既に、出来ているのですわ」

「なんだ、じゃ、後はリコの分だけってことか。そうか、リコは・・・子供が生まれて、子育てがひと段落した時にってことか？そうだな。今ネックレスをすると、首に絡まる可能性があるし、生まれてすぐだと子供に引きちぎられるかもしれないしな。メイ、本当にいつでもいい。いつでもいいからな」

「私はもう、ちゃんと出来ていますわ」

リコがニッコリと笑う。俺は何の事だかわからず、首をかしげる。
そんな俺を見てメイが申し訳なさそうに口を開く。

「ご主人様、私もその・・・できました」

「だから・・・」

「察しが悪いですわ、リノス！メイも、私と同じになったのです」

リコは自分のお腹を優しくなでる。

「うん？それって・・・まさか・・・」

「この間、リコ様の診察に来られたローニさんに診てもらいました。
そしたら・・・もうすぐ三か月になるらしいです」

「う・・・う・・・え・・・あ・・・」

言葉が出てこない。

「ご主人、おめでとうございますでありますー」

「ご主人様、おめでとうございます！」

「師匠、おめでとうございます！」

「おめでとうございます！」

「おめでとうございます！」

口々に皆が大喜びで、俺に祝いを言ってくれる。そして、メイにも同じように皆からお祝いを言われている。

俺は嬉しさのあまり両手で顔を押さえて、ただただ、泣くことしかできなかった。

第百五十話　奇跡の宴会

「おう大将（てぇしょう）、もっと飲みねぇ！そっちの旦那もドンドン飲もうじゃねぇか！」

大工のゲンさんの威勢のいい声が響き渡っている。そして、その周囲には多くの人々が酒を飲み、料理を食べ、笑い合い、語り合っている。アガルタ国の都では今、歴史上はじめての、とんでもなく非常識な光景が繰り広げられていた。

酒をガブ飲みし、見事に出来上がっている大工の棟梁の横で酒を飲まされている男は、この国の王である。そしてその横で、爆笑しながらゆっくりと酒を煽っているのが、ヒーデータ帝国皇帝、ヒーデータ・シュア・ヒートである。

皇帝と国王が野外で、しかも、大工と共に酒を飲むという光景が今までであっただろうか。しかし、この場はこれで収まらない。周囲にはさらに非常識な光景が繰り広げられていたのだ。

「ハイ、パスタが出来上がりましたわ！」

先ほどから優雅に大量のパスタを茹で、ソースを作っているのは、アガルタ国の王妃、リコレットである。かなりお腹がふっくらしてきているが、それをものともせず、手際よく料理を作っている。そしてその隣では、ペーリス、フェリス、ルアラをはじめとして、多くの女性が料理を作り、皆に振る舞っている。

「リコちゃん、アンタ身重なんだから無理しちゃダメだよ！」

「大丈夫ですわ！」

「そうだよ！あたしが若い頃はもっと動いていたもんさ！」

王妃が普通のおばさんたちと会話をしながら食事を作る・・・そんな光景を呆れた顔をしながら見ているのは、ヒーデータ帝国宰相、グレモントである。その近くでは、エプロン姿のおばさんたちにお腹を撫でられている女性もいる。

「メイちゃん、よかったねー。お腹を冷やしちゃだめだよ」

「ありがとうございます」

照れくさそうに返事をしているのは、アガルタ国の第二夫人であるメイリアスである。

皇帝も、王族も、宰相も、獣人も、魔物も、男も、女も、ありとあらゆる身分と種族が一堂に会し、宴会をしている。後にこれは「アガルタの奇跡」と呼ばれ、全世界に衝撃を与えた出来事として歴史に残ることになる。

・・・きっかけは、ほんの軽い気持ちだった。それがまさか、こんなことになろうとは思いもよらなかった。

アガルタ国内で、秋の収穫が終わりを迎えた１０月の下旬。ようやく迎賓館が完成した。東京ドームの半分くらいの広さと、三階建ての建物であるが、石と木材を上手に使った見事な建物に仕上がった。ゲンさん曰く、この建物はまだまだ増築することが可能とのことで、

時期と機会を見てそれは相談することになった。

そして、その完成を待ちかねたかのように、コンシディーとソレイユがやってきた。そして、その到着を受けてマトカルも同様にやってきた。

彼女らは侍女と共に迎賓館の中を見て驚嘆の声を上げ、一発で内装とその調度品のすばらしさに魅せられた。そして侍女たちは大喜びで自分たちが使う部屋や主人の荷物を運び込んだ。

迎賓館の完成に合わせて、帝都の屋敷の増築も完了した。部屋数を三つ増やし、トイレも一つ追加して作った。空いている一階部分については悩んだ結果、書庫とした。メイとペーリスの本が多くなってきたこともあって、そうしたのだ。

コンシディーとソレイユ、マトカルは帝都の屋敷を見て、これもかなり気に入ってくれた。中でも便座が温かくなる仕様については、三人共に大喜びだった。

そして、与えられた部屋に色々と私物を運び込みつつ、足りない物については帝都やアガルタの都で購入し、その都度部屋に運び込んでいった。

全ての準備が整ったのは、ちょうど十一月に入った時だった。そして、その日に俺たちは、仕事部屋を迎賓館に移した。今まで俺たちがいた建物は、正式にアガルタ軍本部の建物となり、その長にはラファイエンスが就任することになった。

そんな時、遅い昼飯を食べていると、大工のゲンさんが訪ねてきたのだ。

「大将(てぇしょう)！どうだい、俺たちが造った屋敷ぁ」

「ゲンさん、すばらしいものを造ってくれた！ありがとう！礼が遅くなってすまなかった」

「いいや、いいってことよ！それでよ、今度、大工(でぇく)仲間と集まって、皆でパーッと酒でも飲もうじゃねぇかってぇ話になってるんでぇ。大将(てぇしょう)、よかったら、顔だけでも出してやってくんねぇか？仲間の仕事を労ってやってくんねぇな！」

「そうか、そんなことならお安い御用だ。ゲンさん、ちょっと待っててくれ」

そう言って俺はリコの下に行く。そして、ゲンさんの話をすると、大喜びで賛成してくれた。

「ゲンさん、待たせたな。今、リコと話をしたんだが、迎賓館の庭を使ってくれ。そして俺たちも参加させてくれ。酒と料理はこちらで用意をするから、ゲンさんは仲間を集めてくれ」

「すまねぇな！じゃ、ありがたくそうさせてもらうぜ！」

とまあ、当初はこんな感じで話がまとまったのだ。開催は五日後としたのだが、その話が都中を駆け回り、我も我もと参加希望者が増えた。三日後、いつもの赤い顔を真っ青にしたゲンさんが、奥さんを伴って再び現れた。

「大将(てぇしょう)、すまねぇ。あの話が都中を駆け巡ってな・・・。みんな来るってんだ・・・」

「みんな?どのくらいの人数になるんだ?」

「わからねぇ。ざっと見積もって、１０００ってとこか?」

「い、いっせん?」

「親方衆・・・。トメ公、ハチ、クマ、ジン公・・・。その弟子たち・・・。石屋、材木屋・・・かかわった奴らを上げりゃ、キリがねぇんだ」

「うーん。そうは言っても、何とか・・・するしかないな。今さら断れないだろ?」

「すまねぇ大将(てぇしょう)。かっちけねぇ・・・」

ショボンとするゲンさんを口惜しそうに見ていた奥さんが、ずいっと前に出る。

「大将、大丈夫だよ。アタシらが手伝うからさ!女房連中に声をかけりゃ１０００や２０００のおまんまを拵えるなんざ、造作もないよ!ただ大将にゃ済まないけど、材料とお酒の用意だけはお願いしたいんだ」

「わ、わかった。材料は・・・どんなのがいい?」

「なぁんでもいいよ!毒でなけりゃ、何でも作ってやるよ!」

女将さんの迫力に押される形で、俺は食材と酒を用意することになった。

このことをリコに話すと、調理する場所や食事をする場所、ごみ箱・・・など、色々と問題点とその対策を列挙し始めた。それについてはリコに任せることにし、俺は二日後に迫った宴会の準備に忙殺されることになった。

その間、帝都の陛下の所にも報告に行くと、今度は陛下が宴会に興味を示した。

「余も、行ってみたいの」

「なりません！そのような場所に陛下が行かれるなど！」

当然、宰相閣下は反対する。俺も、同意見だ。

「なに、身分を偽ればいいのだ。まさかヒーデータの皇帝がそこにいるとは思うまい」

「しかし、陛下の御身に万一のことがあってはなりません！」

「宰相、これも民の様子を見るよい機会ではないのか？よし、わかった。なら宰相、そなたも付いてまいれ」

「何故私が！」

「余が心配なのであろう？宰相が付いて来て余を見張れば、問題あるまい！」

「へ・・・陛下・・・」

こうして、ヒーデータのとある商人であるヒート旦那と、その番頭グレモントとして、やんごとなき身分のお方の参加が決まってしまった。

そして当日、集まったのは２０００人を超える人々だった。広い、芝生に囲まれた美しい迎賓館の庭で、抜けるような秋晴れの下、俺は何故か乾杯の発声を任されるはめになった。

「え～あ～その～。皆さんお疲れ様でした。これからもよろしくお願いします。今日集まったみなさんは・・・」

「大将（てぇしょう）！長い！早くしてくんねぇ！」

どこからか罵声が飛んでくる。俺は目を泳がせながら

「か、乾杯～～～～～！！！」

こうして、歴史に残る宴会は幕を開けた。檀上から見ると、集まった人々の顔がよく見える。どこでどう噂を聞き付けたのか、サイリュースの族長のヴィヴアルの姿が見える。その隣にさりげなく移動して挨拶をしているのは、ラファイエンスだ。早速ペーリスの料理を食べに行っているのは、帰国したはずのニザ公国宰相のユーリーだ。そして何故か鹿神さまがいる。ローニもいる。陛下は実に楽しそうにしている・・・。

そんなことを考えていると、下からゲンさんらの罵声が飛んでくる。早く一緒に酒を飲もうというのだ。そして俺はこの日、意識がなくなるまで飲み続けた。

泥酔状態になる直前、ベロベロになりながら俺は、新しい妻たちを

壇上に連れて行った。戸惑う彼女らの腕を取り、問答無用に連れて行く。あとから聞くとそれは、連行に近い形だったそうだ。そして俺は、集まった人々に向かって口を開く。

「みなはん、こつらが、あたらひくむかへました妻たちでふ。今後とも、どうぞ、よろひくおねがひ、しまふ」

しばらくして、会場から割れんばかりの拍手が起こった。この日のことは、そこまでは覚えているのだが、あとはどこからが夢で、どこからが現実だったのか、覚えていない。

第百五十一話　冬のはじまり

奇跡の宴会から一ヶ月。アガルタ国に木枯らしが吹き始めていた。

俺は今、迎賓館の執務室で昼食を食べている。昼食といっても、前世のようなコンビニで買ったおにぎりなどではない。フルコースを食べている。いや、国王だからというわけではない。試食である。迎賓館で出す食事のメニューを決めているのだ。

迎賓館は、表向きは国王とその家族の住居ではあるが、その他にも、来賓が宿泊できるスペースもある。年が明けると、アガルタ国の領主が新年のあいさつに訪れる。その時に、ヒーデータとニザからは年賀の使者が来ることになっている。特に、ヒーデータとニザの使者は、迎賓館に宿泊させる必要があるのだ。

それだけでなく、アガルタの復興が伝わったためか、ジュカ滅亡後に交易が途絶えていた国々から、今後も交易をしたいという申し入れが、次々と寄せられているのだ。

そのため今は、迎賓館の宿泊部門の準備を急ピッチで進めている。

そのスタッフについては、フルチン野郎が攫ってきた女たちをまとめて雇用した。その上で、俺に従う領主たちの娘を数名受け入れた。そして、追加で都に住む娘を雇ったため、かなりの大所帯になっている。

その中で適性を見極めて、来客対応係、清掃・準備係、料理番など、それぞれに役割を割り振った。コック長はペーリスをとも考えたが、

帝国の帝都ホテルの料理人をスカウトして料理長に据えた。都にはいろいろな人々が集まっており、雇用した人の中にも珍しい料理を知っている人が多くいた。現在はそうした人々の意見も取り入れながら、オリジナルの料理を開発しているところだ。

そして、新しく妻に迎えたコンシディー、ソレイユ、マトカルだが、今のところは問題なく日々を送っている。

あの宴会の後、しばらくして俺は三人と晴れて夫婦になった。

さすがに帝都の屋敷でというのは何となく憚られたので、しばらくは迎賓館の彼女らの部屋に通うことにした。

リコやメイの時にも思ったが、こういうことは三者三様で、意外な発見も多かった。

まずコンシディーだが、彼女は意外なほどに恥ずかしがり屋で、泣き虫だった。ニザで見せていた、お転婆でわがままな顔はどこへやら。自分の体を見られて恥ずかしいと言って泣き、朝起きても恥ずかしいと言って涙を見せた。まあ、慣れればまた変わるのだろうが、今はイメージとのギャップが楽しく、愛おしい。

次にソレイユだが、彼女は全身にあふれんばかりの喜びをあらわして、俺を受け入れた。

「最も愛おしい方にこの身を委ねることができるのです。こんな幸せがありましょうか」

そう言って彼女は俺に抱き着いた。男としてここまで言われては、

正直嬉しい。その上、見事な巨乳である。メイといい勝負だが、エロさで言えば、ソレイユに軍配が上がるだろう。背中に羽が生えているが、寝る時には驚くほどに小さく畳むことができる。彼女を抱きしめると、背中の羽が気持ちいい。メイとはまた違った良さを持っている。

そして、マトカルである。彼女は三人の中で一番毅然として俺を受け入れた。そして何より驚いたのが、彼女は・・・目を閉じないのだ。

今もそうだが、リコを筆頭に他の女たちは、必ず目を閉じて俺を受け入れる。確かに薄目を開けている時はあるが、最初から最後まできちんと目を開けているのは、マトカルだけだ。

逆にマトカル自身も、俺の振る舞い方には驚いたらしい。彼女が知っているのは、フルチン野郎たちのやり方だけだ。これは俺も鑑定スキルで見たが、とてもとても口に出せるような代物ではなく、前世の頃に俺が見たどんなエロビデオよりもゲスい内容だった。

マトカルもそんな場面は見たくなかったらしいのだが、やはりどうしても目に入ってしまうらしい。というより、フルチン野郎が敢えて見せていた節もある。どうやらそれでマトカルの興奮を煽って、あわよくばと考えていたようだ。今さらながらに、アホな奴である。

ということでマトカルは、男と女は複数プレイという変な固定観念が出来上がっていた。女は複数の男を相手にし、力ずくで、乱暴に扱われるものだというイメージを持っていたようだ。しかし、俺はその正反対の態度で、彼女自身も驚き、戸惑ったらしい。

まあ、かくいう俺も、リコとメイと三人で寝ることはよくある。ち

らっとそのことを言ってみたが、マトカルはリコとメイと一緒でも構わないと言う。なかなか男前な話ではあるが、真顔で、俺の目をじっと見据えて言ってくるため、エロさは全くない。何だか俺が他の女に取っている態度を冷静に観察されそうで、逆に俺からは、しばらく今のままで様子を見ようと言ってしまったくらいだ。

そのリコはといえば、お腹はかなり膨らんできた。大きなボールをお腹に付けているかのような姿になっている。今ではお腹の赤ん坊がよく動いており、少々寝不足気味だ。そろそろリコは仕事を休み、出産準備に入らなければならない。リコには、男か女かは何となくわかるようだが、俺には教えてくれない。ただ、主治医のローニ曰く、男の子の可能性が高いと言う。お腹の出方が男と女で違うのだそうだ。どうやらお腹を見た限りでは、男の子の可能性が高いとのことだ。

夜など、お腹を蹴られてなかなかリコが寝付けない時などは、俺がお腹を撫でてやる。すると、嘘のように赤ん坊が大人しくなる。ということで、俺が一緒にいる時は、いつもリコのお腹に手を当てて寝ることにしている。

メイのお腹も大きくなってきた。彼女の予定日は三月とのことで、メイもリコに合わせて早めに出産準備に入るようだ。幸いにしてメイにはつわりなどの症状が全くない。まだお腹が小さいので何とも言えないが、かなり大人しい子なのかもしれない。

１２月に入る少し前、三人の新しい妻は本格的に帝都の屋敷で暮らし始めた。ニザのお城で蝶よ花よと育ててられてきたコンシディーは嫌がるかと思ったが、意外に彼女が一番屋敷での暮らしを楽しんでいる。どうやら、城から付いて来たミンシは行儀作法にうるさく、息が詰まるのだという。ここではそんなことに気を使わなくていい

と喜んでいる。

しかし、彼女は知らない。我が家のテーブルマナーが、みんなリコの作法を見習っているので、とても洗練されていることを。

お陰で食卓はいつにも増してにぎやかになっている。彼女たちも料理を覚えるのだと言っているので、どんな料理を作るのかが楽しみだ。

ちなみに、彼女らもきちんと仕事に就いている。コンシディーは、メイの代わりに農作物の管理と、ドワーフの管理を任せている。彼女の輿入れに合わせてドワーフたちも都にやってきて、工房などを開いているのだ。

ソレイユは、迎賓館の宿泊エリアの管理である。彼女は行儀作法に優れているため、アステスと共に、スタッフの教育係になっている。きっと優雅で洗練されたサービスが今後、確立されていくのだろう。

そしてマトカルは、相変わらずラファイエンスの下で、兵士たちを訓練している。ちなみに、彼女と共に捕虜になった女たちも、アガルタ軍で働いている。結界師と回復魔法が使える魔術師のため、危険な訓練やけがをした兵士の治療など、非常に役に立っているのだという。

なお、俺の妻になると、スキルが少しだけ上がるという特典が付く。先日、鑑定スキルを使って彼女たちのスキルを見てみたら、こんな感じになっていた。

コンシディー（ドワーフ族の公女・３２歳）ＬＶ４１
ＨＰ：１５９
ＭＰ：１７４
結界魔法　ＬＶ３
火魔法　ＬＶ２
水魔法　ＬＶ２
剣術　ＬＶ２
錬金術　ＬＶ４（ＵＰ）
鍛冶師　ＬＶ４（ＵＰ）
肉体強化　ＬＶ１
回避　ＬＶ１
行儀作法　ＬＶ２
教養　ＬＶ３（ＵＰ）
毒耐性　ＬＶ５
麻痺耐性　ＬＶ５

鉄壁

鉄壁：毒耐性ＬＶ５、麻痺耐性ＬＶ５

ソレイユ（サイリュース・５７歳）ＬＶ５５
ＨＰ：　８９
ＭＰ：７７４
精霊術　ＬＶ５（ＵＰ）
回復魔法　ＬＶ２
詠唱　ＬＶ１
ＭＰ回復　ＬＶ２
魔力探知　ＬＶ３

行儀作法　ＬＶ３
教養　　ＬＶ３

神召喚

神召喚：精霊術ＬＶ５

マトカル（剣士・２３歳）ＬＶ２３
ＨＰ：４００
ＭＰ：　２４

剣術　　ＬＶ４
肉体回復　ＬＶ５（ＵＰ）
肉体強化　ＬＶ５（ＵＰ）
回避　　ＬＶ１
精神耐性　ＬＶ３
教養　　ＬＶ２

無病息災

無病息災：肉体回復ＬＶ５、肉体強化ＬＶ５

全員、スキルが上がって、称号が付いてしまった。コンシディーは鹿神の加護を受けているために、称号については、俺の妻になる前から称号が付いていたようだ。彼女は加護のためか、三つのスキルがアップしている。

特にソレイユの「神召喚」という称号も気になる。額面通り受け取れば神様を召喚できる能力ということだが、どんな能力であるのか、ちょっと楽しみだ。三人の能力については今後、ゆっくりと見ていきたいと思う。

一方で、ラマロン皇国のダイダス村では、村長のジンビが鋭い目つきで空を見上げていた。

ダイダス村は、バンザビ山の山頂近くにある１５０人ほどの小さな集落である。山頂を越えればイルベジ川を眼下に望むことができ、川を越えればアガルタ国とヒーデータ帝国に向かうことができる位置にある。

ジンビはゆっくりと息を吐きだす。その息は白く、風に乗って流されていった。そして彼の顔にはゆっくりと雪が降りてきていた。

「冬・・・か」

誰に言うともなく彼は呟く。そして再び目を閉じ、じっと何かを考える。しばらくして彼はまた、ゆっくりと息を吐きつつ目を開けた。

「アガルタに、行こう」

何かを決意したかのように彼は踵を返し、村長の家に入っていく。

雪が少しずつ地面を覆い始めていた。

第百五十二話　呼ばれて飛び出て

チラチラと粉雪が舞う１２月の初旬、俺たちは帝都の屋敷の庭に集まっていた。

この日は仕事がお休みで、全員が屋敷に揃っていた。ちょうどいい機会ということで、先日から試してみたいことをやろうと思ったのだ。

お腹の大きなリコとメイは、体に障るので屋敷の中に居ろという俺の指示を押し切って、二人ともが外に出てきている。当然、二人には転んでも衝撃を吸収し、温度を一定に保つ結界を張っている。

そして、俺たちから少し離れた所にソレイユがいる。彼女は今、体中のＭＰを集めて、詠唱に集中しようとしている。

俺と夫婦になったことで、ソレイユの精霊術スキルのレベルがカンストしていた。これまで彼女は森の精霊を使役していたのだが、レベルが上がったことで、さらに高位の精霊と契約できるのだという。今まで契約してきた精霊とは一旦契約を白紙に戻し、新しい精霊と契約してみようということになったのだ。

もし、高位の精霊との契約に失敗したらという俺の心配は杞憂のようで、一度契約した精霊は再度契約してくれる可能性が高いそうだ。これまでソレイユと森の精霊はかなりいい関係を築いてきたそうで、おそらくその点は問題ないのだという。

先ほどからソレイユは両手を前に突き出しながら、深呼吸を繰り返

している。どうやら魔力を下っ腹に集中させているようだ。そんなところに魔力を集中させてどうするんだと思っていると、ソレイユは詠唱を開始し始めた。

「ن ا ح ب ك ن ا ح ب ك ن ا ح ب ك س ا ع د ن ي س ا ع د ن ي ه ي ا ه ي س ا ع د ن ي ا ・・・」

・・・一体何を言っているのか、皆目見当がつかない。ソレイユの下腹に溜められた魔力が両手に伝わっていく。そして、両手の前に魔法陣が浮かび上がる。かなりデカイ。そしてそれが地面にゆっくりと降りていく。

「我の前に出でよ！！」

ソレイユのドスの効いた声が冬の空に響き渡る。その瞬間、魔法陣から眩いばかりの光が発せられた。

「ソレイユ！」

魔力を全て放出したソレイユがぐったりと倒れている。真冬のこの寒さだが、彼女の顔には汗がにじんでいる。俺はすぐさまソレイユに魔力を充填してやる。

「大丈夫か、ソレイユ？」

「・・・大丈夫です。・・・その・・・精霊は・・・」

周囲を見回すが、何の姿も見えない。

「・・・何も見えないぞ？」

「・・・申し訳ありません。召喚に、失敗したみたいです」

ガックリとうなだれるソレイユ。俺は外にいる皆を促して屋敷に入った。ソレイユは、俺がお姫様抱っこをして、連れて行った。当然、リコの許可は得ている。

「いやーまさか召喚が失敗するとはな。そういうことは、よくあるのか？」

俺たちは屋敷のダイニングでぜんざいを食べながら話をする。さっきまで寒いところに居たので、温かいぜんざいが美味しい。ちなみに今回は、焼いた餅を入れている。このちょっと焦げた餅にぜんざいがまた、合うのだ。

「そうですね・・・高位の精霊を召喚する時には、よくあります。精霊に認められないと契約してもらえないですから。きっと私が未熟なので、契約してくれなかったんだと思います」

ソレイユはショックが大きかったのか、ぜんざいに全く手を付けない。

「まあ、そう落ち込むな。今回がダメでも、また次やればいい。それより食べろ。ぜんざい冷めちまうぞ？」

「はい・・・」

「そう考えると、精霊から契約を頼まれたメイ殿は、すごいでありますなー」

ゴンが餅を食いながらしゃべっている。メイはにっこり笑って、

「いいえ。たまたまですよ。今回ソレイユさんが召喚した精霊は、かなりの高位の精霊だったのではないですか？」

ソレイユは少しずつ食べていたぜんさいを置き、メイを見る。

「そうです。神級の精霊を呼び出しました」

「神級？」

思わず俺は頓狂な声を上げる。

「おい、ソレイユ大丈夫だろうな？変な神様召喚しないでくれよ？」

ソレイユは驚いた顔をして首をプルプルと振る。

「そんな、大丈夫です。間違っても邪神などは召喚しません」

「いや、神様って色んなのがいるぞ？疫病神・・・貧乏神・・・死神・・・」

「ご主人！死神だなんて、縁起が悪いでありますー！」

・・・ゴンに怒られてしまった。俺はシュンとして小さな声でゴメンナサイと謝る。何故か皆は大爆笑だ。

「まあ何事もなかったので、よしとしよう。ぜんざい、いっぱい作ったからな。おかわりドンドンしてくれよー。餅もまだあるから、

食べてくれよ?どうだ、美味いか?」

「おいしいです!」

「うまいでありますー!」

「本当においしいですわ!」

「おいしいー」

「うまそうなのらー」

・・・何か、聞き覚えのない言葉が一つ混じっていないか?俺は食卓を見回す。リコ、ペーリス、ゴン、メイ、フェリス、マトカル、ルアラ、フェアリ、子供、コンシディー、ソレイユ・・・うん?子供?・・・誰だ?

何故か真っ白な肌の色で、髪まで真っ白な子供がそこにいた。目が大きく、緑の瞳だ。ついでに、魔法使いのローブのような服を着ているが、それも白だった。

「おいしそうなのらー。我にも食べさせるのらー」

「・・・誰だ?」

キョトンとしていると、突然フェアリが俺の胸元に飛んでくる。一体どうしたんだと抱っこしてやると、フェアリが震えている。

「フェアリ、どうした?」

『あう・・・ああ・・・あああうあ・・・・』

何か混乱しているようで、フェアリから届く念話が理解できない。

「・・・ほう、そのドラゴンは、我がわかるみたいらな」

基本的にこの屋敷には悪意のある者、敵意のある者は近づけない結界を張っているのだ。舌ったらずな子供だが、俺の結界を通り抜けてくる段階で、かなり怪しい。

「・・・何者だ？」

俺はそう言いつつ、この子供に鑑定スキルを発動させる。その瞬間、目の前が真っ暗になり、頭の中に大爆音が響き渡った。

「うぁいだだだだだだだだだだだだーーーー！！！」

頭を押さえて思わず蹲る。周りのみんなが俺の名前を叫んでいるが、俺はそれどころではない。頭が爆発しそうだ。俺は鑑定を終了させる。その瞬間、全身から冷たい汗がにじみ出た。

「ほう、我を鑑定したのかー？丈夫なヤツらな。普通は爆発するのらがな」

ノホホンとした口調ではあるが、言っていることはとんでもない内容だ。俺は汗を拭いながら言葉を続ける。

「・・・お前は、誰だ？」

白い子供は驚いたような表情を見せる。

「我を呼んだのは、お前たちではないのかー。そのためにわざわざ、この姿になってやったのらぞー？」

「ええと・・・どちら様で？」

「我は神龍らー」

「ええっ？うそ！！」

驚いて立ち上がったのはソレイユだ。彼女はぜんざいの器を持ったまま、口をあんぐり開けている。よく見ると、近くでフェリスが腰を抜かしている。

「し・・・神龍って・・・まさか・・・」

「神龍らぞ」

「うわぁぁぁぁぁーーーー。ごめんなさい！ごめんなさぁい！」

ソレイユが神に祈るようなポーズで震えている。

「おい、どういうことだソレイユ！説明しろ！フェリス！おいフェリス！」

フェリスは固まってしまって動かない。その時、ゆっくり手を叩く音が聞こえる。

「せっかくいらしたのですから、とりあえずその方に、ぜんざいを

食べていただいたら？お餅、いかがなさいますか？」

「おーう。おいしそうなのらー。食べるのらー」

「ではちょっと待っていてくださいませ」

リコは大きなお腹を抱えながらキッチンに向かう。そして、しばらくして餅入りのぜんざいを持って戻ってきた。

「熱いので、気を付けて食べてくださいね」

「おーう」

いつの間にか白い子供が俺の席に座っている。そして、出されたスプーンを使わずに、俺の箸を器用に使ってぜんざいをすする。

「うーん、うまいのらー」

「まだまだありますから、たくさん召し上がれ」

「苦しゅうないのらー」

俺は恐る恐るリコの顔を見る。

「リコ・・・怖くないのか？」

「怖くなんてありませんわ。かわいい子供ではありませんか。子供に悪い人はいませんわ」

そしてリコは白い子供の横に座る。

「差し支えなければ、教えてくださいな。神龍とおっしゃいましたが、どうしてここへ？」

「神召喚の呪文を聞いたのらー。美しい調べで、清らかな雰囲気らったので、来てみたのらー」

相変わらずソレイユは震えている。フェリスも固まったままだ。そして、フェアリも俺の腕の中で震えている。しかしリコは落ち着き払っている。

「そうですの。それはそれは。でも、子供のお姿なのですわね」

「来てみると人間がいたのらー。我の姿を人間が見ると即死するのらー。だから死なないように、極限まで力をおさえたら、この姿になったのらー。うまくしゃべれないのらー」

「まあ、そうだったのですか。あ、おかわりはいかが？」

「頼むのらー。白いやつも頼むのらー」

再びリコはキッチンに向かう。白い子供は何やら嬉しそうにゆらゆらと体を揺らしている。そしてしばらくしてリコがぜんざいを持ってきた。

「さあ、どうぞ」

「いただくのらー」

そして、神龍を名乗る白い子供はそれから、ぜんざいを食べ続けた。

さすがにリコを何度もいかせるわけにはいかないので、それはペーリスに代わってもらった。その後、落ち着きを取り戻したソレイユの説明では、この神龍は、精霊の中でも最上位に位置するらしく、それこそ伝説の存在らしい。「神の使者」と呼ばれる存在であり、邪悪なるもの全てを消滅させる力を持つ精霊なのだそうだ。

「お呼びだてして、本当に、本当に申し訳ありません」

ペコペコと頭を下げながら、ソレイユは神龍に謝っている。

「いや、我が召喚されたのらー。気にしてはならんのらー」

「で、神龍様、これからどうされるのです？」

恐る恐る俺が聞いてみると、神龍はのほほんとした声で答える。

「決まっておろう。召喚されたからには、契約してやるのらー」

「えええええええええーーーー？」

ソレイユが驚きまくっている。神龍はピッと人差し指をたてると、ソレイユの体が白く光った。どうやら、これが契約完了のサインらしい。

「我のことを感じ取ったそのドラゴンは、いいセンスをしているのらー。そして、そこで固まっているのも、ドラゴンらな？これもいいセンスなのらー」

上機嫌で神龍はぜんざいを食べている。結局、彼は寸胴鍋いっぱいに作ったぜんざいと、用意した餅を全て平らげて、ようやく姿を消

した。本来であれば、おひいさまにお供えにする予定であったぜんざいを、全て食われた俺は再び、ぜんざいを作りに取り掛かるのだった。

ちなみに、動けなかったフェリスであるが、這う這うの体で自分の部屋に戻っていった。あとでリコに聞くと、神龍とわかった瞬間に椅子から転げ落ちたのだが、その時にどうやら粗相をしていたらしい。これは、リコと俺の胸の中でしまっておこうと思う。

第百五十三話　動き出した歯車

窓の外は一面の銀世界だった。太陽が彩るその景色の美しさに、俺はしばし寒さを忘れた。

「リノス、どうかしたのですか？」

「いいや、リコ。見てごらん、一面の銀世界だ」

俺はリコの手を取ってベッドから起こし、肩を抱くようにして窓まで連れていく。

「まあ、キレイ・・・」

「もう、完全に冬だな」

「そうですわね」

そして俺たちは服を着替え、俺はリコの手を取って階段を降り、ダイニングに向かう。

１２月ももう半ばを過ぎた。もうすぐ年も明ける。そうするとリコは、いよいよ出産だ。それについては楽しみが半分、不安が半分というのが正直なところだ。この世界では、貴族は生まれた子供については、乳母を雇うのが一般的だが、リコは母乳で育てるようだ。それについては俺も賛成している。

リコのことは心配だが、新しく迎えた妻たちのことも忘れてはいない。彼女らとは、ローテーションで一緒にいることにしている。今のところの流れとしてはこんな感じだ。

月曜日：リコ　or　メイ
火曜日：コンシディー
水曜日：リコ or メイ
木曜日：ソレイユ
金曜日：リコ or メイ
土曜日：マトカル
日曜日：リコ or メイ

まあ、時と場合によって変化することもあるのだが、概ねこんな感じで過ごしている。新婚なのに？？という意見もあるかとは思うが、特にリコが俺と一緒にいないと不安がるのだ。

メイについては、リコに遠慮しているせいか、あまり三人では寝たがらない。それを知ってか、週に一度は必ずメイと一緒に寝るようリコが計らってくれる。ちなみに、メイもリコも、一人寝る時は、元々メイが書庫として使っていた一階の部屋で寝ている。本を全て運び出したところに大きなベッドを入れて、寝室としたのだ。ローニの診察もここで行われ、一応、分娩室にもなる予定だ。

彼女らがその部屋で寝る時は、必ず家族の誰かが一緒に寝ている。最初はただ、お腹の子供が心配でそうしていたのだが、いつしかリコ姉さま、メイ姉さまの相談部屋になっており、彼女たちの悩みを二人が聴いてやる時間になっている。当然そこにはゴンは入っておらず、女たちの連帯感だけが増しているような気がしてならない。

そんな中、アガルタに来客があった。目つきの鋭い、狩人のような恰好をした男たち三人が、俺に面会を求めてやってきた。ラマロン皇国にある村の代表者だという。俺はクノゲンとその配下数名を従え、迎賓館の一室で男たちを引見した。

「ラマロン皇国ダイタス村の村長、ジンビです。こちらは、村の若い者で、イジラとドンセイだ。私の護衛として連れてきた。目通りをお許しいただき、感謝する」

「この雪の中よく来たな。まあ、これで温まるといい」

俺はこの三人に甘酒を出してやった。三人はしばらく躊躇していたが、顔を見合わせながらゆっくりとそれを飲みだした。

「ちょっとクセがあるから、口に合わないかもしれないがな。で、この俺に何の用だ」

ジンビと名乗る目つきの鋭い男は、連れてきた若者たちに目配せをする。それを受けて若者らはゆっくりと頷いている。

「やはり、アガルタ王ご本人か。その・・・何というか・・・随分、気さくなのだな」

「ほう、俺の顔を知っているのか。それはうれしいな。お前たちは、俺に話があって来たんだろう？そりゃ俺が話を聞くさ。で、用とは何だ？」

ジンビたちはゆっくりと片膝をつき、右手を胸に当てて頭を下げる。

「アガルタ王。我らダイタス村、村長の私以下１５０名を配下に加

えていただきたい」

「・・・また藪から棒な話だな。理由を聞いてもいいか？」

「ラマロン皇国に従っていては、我らは亡ぶからです」

聞けば、今年のラマロン皇国の、秋の収穫はかなり厳しいものであったらしい。このままでは飢饉が起こることは誰の目にも明らかであった。そこで皇国は各町や村に対して食糧支援を実施したらしい。そこまでは、よかった。

「しかし、与えられた食料は、到底我らが生きていけるだけの量ではありませんでした」

村に届けられたのは、村長のジンビが要請していた量の半分以下だったらしい。ダイタス村は山の中腹にあり、冬は雪に覆われてしまうため食料を確保することが難しい。その上、先の戦争で若い男たちが兵隊に取られてしまい、村は年寄りと女子供が大半なのだという。

「私は村長として、村人を守らねばなりません。このまま座して死を待つより、生きるための方策を探らねばなりません」

「それが、俺たちに従うということか？」

俺は真っすぐにジンビの目を見る。彼も俺の目を見つめて逸らさずに、ゆっくりと頷く。

「先の戦で、皇国軍がアガルタから引き揚げてきた。その時に、兵士の一部が村を襲い、食料を強奪していった。あれさえあればこの

冬は越せたものを・・・。あれは兵士ではない。兵士の格好をした盗賊だ。そんな強盗と化す軍は軍ではない」

ジンビは吐き捨てるように言う。

「戦に向かった皇国軍の中には、村の若い者も居たのだ。しかし、何日たっても帰ってこない。てっきり戦死したのだろうと諦めていたのだが、その時ひょっこりとこの二人を含め5人もの若い者が帰ってきたのだ。しかも、背負いきれぬほどの食糧を持って。聞けば、アガルタの王が持たせてくれたと言うではないか。自領に攻め込んできた兵士を解放するだけでも破格の対応であるのに、それに食料を持たせて国境まで送るなど・・・前代未聞のことだが、その時、思ったのだ。この王であれば、我らは飢えずに済むのでは、と」

「まあ、このアガルタの国は、領民を食わせる、着させる、住まわせるというのを原則にしているからな。そいつらだって、戦争したくてしてたんじゃないことは分かっていたからな。家には家族もいるっていうし、それなら食料持たせて帰してやろうと思っただけだ」

「ありがたかった。本当にありがたかった」

ジンビは深く腰を折ってお辞儀をする。後ろに控えていた男たちも、ありがとうございますと、ぴょこぴょこお辞儀をしている。

ジンビは落ち着いた声で言葉を続ける。

「ここ数年、皇国は不作続きだった。我らも税が上がり苦しかった。それでも皇国のためならばと飢える寸前になりながら何とか命をつないできたのだ。そんな我らから食料を奪い、さらに、村を救おうとはしない皇国に、私は絶望している。もう我らは飢えて死ぬしか

ない。しかし、その前に一度、アガルタ王に縋ってみようと思ったのだ。我らを飢えから救ってもらえまいか・・・」

ジンビの態度に俺は好感を持っていた。彼はプライドも何もかなぐり捨てて、村人を救おうとしている。この男は、信用できると俺は直感で感じていた。

「わかった。取りあえず一旦考えさせてくれ。時間は取らせない。三時間待ってくれ。おい、ラファイエンスとマトを呼んできてくれ」

クノゲンは三人を連れて部屋を出ていく。そして三十分後、ラファイエンス、クノゲン、マトカルが部屋にやって来た。俺はジンビの話を三人に聞かせる。

「どう思う？」

ラファイエンスはニヤリと笑う。

「もう、心の中では決まっているのでは？」

「さすがは将軍。俺は、支援したいと思う」

「ただ、ラマロン軍が黙っていないでしょうな。全面戦争になりますな」

クノゲンが腕を組みつつ溜め息をつく。

「おいマト、ジンビが村長をしているダイタス村はどこにあるんだ？」

「ダイタス村は、バンザビ山を越えてしばらく行ったところだ。ここらへんだな」

マトカルが簡単な地図を描いてくれる。

「なんだ。この前、ヒーデータの軍と睨み合っていた・・・ええと・・・イルベジ川の、対岸の山じゃないか。なるほど、村のちょうど裏側にラマロン軍が駐留していたんだな」

俺は顎に手を当てながら、マトカルが書いてくれた地図を眺める。

「しかしこれだけ山深い村では、軍事的な利点はあまりないな」

ラファイエンスが眉間にしわを寄せながら言葉を続ける。

「この山全てを占領するのであれば、兵站基地として機能するだろうが、我らにこの山全てを抑える力はない。それをするのであれば、ヒーデータの援軍が必要だが、果たして帝国は動いてくれるだろうか・・・」

俺はしばらく地図を眺めながら思案する。そして、マトカルを見る。

「おいマト、このイルベジ川ってのはどこに繋がっているんだ?」

マトカルはさらに地図を描いていく。

「この川はラマロン海に注いでいる。その河口近くには、ガルビーという大きな都市がある。ガルビーから、ジンビが村長をしているダイタス村のあるバンザビ山までは、高い山が連なっている」

「その間の山の中に、町や村はあるのか？」

「スイレボ村があるだけだ」

「どこだ？」

「ダイタス村から、西に進んだ、このあたりだ」

「かなり遠いな。山の麓にあるのか。スイレボ村からダイタス村までどのくらいだ？」

「山を登っていくのであれば二日、ダイタス村から行くのであれば一日くらいだ」

「なるほどな」

「リノス殿、この山の中にある村が一体、どうしたのだ？」

ラファイエンスが訝しそうな顔で聞いてくる。俺はニヤリと笑う。

「マト、もしダイタス村がアガルタに寝返ったら、ラマロンはすぐさまダイタス村を討伐するかな？」

「・・・私だったら、今すぐはしないな。まあ、この村を敵が大軍で占領しに来るというのであれば話は別だが、この村一つでは何もできないだろう。討伐するとしたら年貢の徴収の時だ。その時に行って収穫物を根こそぎ強奪する。いずれにせよ、ダイタス村がアガルタに付いたところで、すぐに討伐されることはないな」

「わかった。じゃ、こういうのはどうかな？」

俺は思いついた作戦を三人に話す。

「ハァッハッハッハ！面白いな。それは面白い！」

ラファイエンスが膝を叩いて喜んでいる。

「敵はビックリするでしょうね」

クノゲンも微笑みを湛えながら頷いている。

「リ・・・リノス様はとんでもないことを考えるな・・・」

マトカルは口をあんぐり開けて呆れている。

「マトカルよ、そなたが嫁いだ主人は、やはり軍神であろう？」

ラファイエンスがニヒルな笑みをマトカルに投げかける。彼女は呆れたように首を左右に振っている。

「ラマロンは大きなミスを犯したな。一つはマトカルを奪還しなかったこと。そして奴らは、もう一つ大きな失敗をしようとしている。さて、気が付くかな？」

意地の悪そうな顔で、俺は再びマトカルの描いた地図に、視線を落とした。

第百五十四話　仕事納め

トン、トン、トン、トン・・・。

ゆっくりと指で机を叩く音が、会議室の中に響いている。それは、音を鳴らしている人物の苛立ちを十分に表していた。

「で？」

目を少し見開きつつ、大きなため息をつきながら居住まいをただしているのは、ラマロン軍統括司令官のケーニッヒ公爵である。その彼に対し、硬い表情を一切崩そうとせず視線を向け続けているのは、ラマロン皇国第三軍の軍団長であるアーモンドであった。この日は、年内最後の、幕僚たちが集まっての会議だったのだが、例年になく荒れた展開になっていた。

「もう一度言います。ダイタス村を占領するべきです」

ケーニッヒ公爵は、ヤレヤレという顔をしながら首を振る。

「だから、それはさっきから言ってるじゃないか。意味がないと」

「意味がない、と仰る意味が分かりかねます。アガルタは戦わずして国境を進めたのですぞ？」

「いや、僕が聞いているのは、本当にダイタス村が寝返ったのかってことだよ。僕が聞いたところによると、村長以下、若い者たちがアガルタに侵入して食料を運んできただけだそうじゃないか。それ

だけで寝返ったというのは早計じゃないか？アーモンド司令官？」

「運んできたと仰いましたが、敵側から支援を受けておるのです。これを裏切りと言わずして、何と言うのですか！」

「まあ、それが裏切りであったとしても、今すぐ討伐の必要はないだろう。第一、皇国軍には兵糧がない。たかが１５０名程度、しかも、ほとんどが老人と女子供の村に討伐軍を編成するのか？食料の無駄だよ。それならば、収穫の時期に行けばいい。それに、バンザビ山の周辺はこれから雪に閉ざされる。ヒーデータが侵攻してくることはないだろう。もちろん、アガルタもね」

「しかし！・・・敵はイルベジ川を越えてバンザビ山を占拠できるようになります。あの山を抑えられると、皇都までは遮るもののない一本道です。バンザビ山を敵に渡してはなりません！」

声を荒げるアーモンド司令官に、ケーニッヒ公爵は顎を少し上げ、アーモンドを指さす。

「じゃあ聞くが、皇国軍はダイタス村の連中に敗れると言うのか？」

アーモンド司令官は背筋をピンと伸ばす。

「そんなことは、あろうはずがありません」

「なら、今は別にいいだろう。無駄なことはやるべきではない。兵を送るとしても、春まで放っておけ」

そう言い捨てて、ケーニッヒ公爵は足早に部屋を後にした。そして、廊下を歩きながら彼は呟く。

「全く、バカばっかりだな。どうしてこうもムダなことばかり考えるかな」

「仰る通りです。統括司令官殿」

副官が後ろから付いて来ながら追従する。公爵は足を止めて振り返る。

「あの村一つで何かできるとは思わんが、一応、監視は緩めるな」

副官にそう命じて、彼は自室へと戻っていった。

一方、会議室ではアーモンド司令官が机に両手をついて、その苛立ちを隠そうともせずに大きく息を吐き出していた。

「全く、何と言うことだ・・・」

「アーモンド」

声をした方に目をやると、そこにはカリエス将軍が、目を閉じたまま椅子に端座していた。

「将軍！なぜ何も仰らないのですか！」

カリエス将軍は、無言のまま微動だにしない。

「・・・あの村は、何か嫌な予感がします。根拠はありません。軍人としてのカンです。私の本能が、あの村は捨て置いてはならない

と言っているのです！」

そう言い捨てると、アーモンドは足早に会議室を出て行った。カリエス将軍以下、残った司令官たちは、どうすることもできずにただ、成り行きを見守るしかなかった。そんな中でカリエス将軍は、ゆっくりと目を開く。

「無駄なことをするな・・・か。さすがは皇太后陛下のご一族にあらせられる御方だな。言うことがいちいち陛下とよく似ておられる。・・・アーモンドが、暴走しなければいいのだがな」

カリエス将軍は深くため息をついた。

アガルタの都は、地面がうっすらと雪に覆われるようになった。この世界ではクリスマスというイベントは存在しない。従って、サンタクロースという存在もない。しかし、俺の前には、真っ赤なお鼻の大工のゲンさんが、満面の笑みで立っている。

「すまないな、ゲンさん。年の瀬で忙しい時なのに」

「トシノセ？何にも乗せるもんなんざ、ありゃしねぇやな。で、用って何だい？」

「ああ、それのことなんだが・・・」

俺はゲンさんに注文の品を告げる。

「・・・そんなもん、すぐにでも作ってやらぁな。ヘタすりゃ大将（てぇしょう）でも作れちまうぜ？」

訝しがるゲンさんに、俺は笑顔で答える。

「いや、丈夫なものを拵えて欲しいんだ。ちょっとやそっとじゃ潰れない、丈夫なものを頼みたいんだ」

「まあ、北の森に行きゃ、カルワサンの木がたんと生えてらぁな。ありゃクソ固ぇからよ。あいつを使ゃ、そりぁ丈夫なもんが出来上がるってぇもんよ」

「まあ、暖かくなるまでに仕上げてもらえばいい。急ぎじゃないから、ゆっくりやってくれ。取りあえず、一つ出来たら見せてくれないかな？」

「おう、任せときな！」

ゲンさんは、いつもの白い歯をニッと見せて笑う。

「俺たちは今日で今年の仕事は終わりにする。ゲンさんも無理しないでくれな。よいお年を」

ゲンさんは、へへへと笑い、ピラピラと手を振りながら部屋を後にした。

「さて・・・。どうなるかな・・・」

俺は誰に言うともなく、独り言をつぶやいた。そして、ちょっと早い時間だが、そのまま俺は帝都の屋敷に転移した。

屋敷に帰ると、何やら馬小屋の方が騒がしい。気になったので行ってみると、そこにはいつもの、ジェネハとイリモがおり、その周囲にハーピーとフェアリがいた。何をしているのかと思って近づいてみると、

「海を越えると、真っ黒な大地があってな。その真ん中に火を吐く山があったのじゃ」

「ジェネハ様、それは我らが住んでいた島にあった、あの煉獄魔鳥が住んでいた山のことでしょうか？」

「おおそうじゃ。その山じゃ」

「その火を噴く入口の近くに、あの石があったのじゃ」

「それでそれでー？」

「うむ。私は灼熱の大地に降り立って・・・」

ジェネハの武勇伝を聞いて皆で盛り上がっているらしい。俺は思わず笑みを漏らす。そして、話の邪魔にならないように、そっと屋敷に入った。

ダイニングには、リコとソレイユがいた。もう臨月に入ろうとしている彼女は、基本的に屋敷にいるのだが、誰か必ず彼女の側にいることにしているのだ。

「リノス、おかえりなさい」

「おかえりなさいませ、リノス様」

二人が笑顔で出迎えてくれる。リコとソレイユの二人は、当初はあまり合わないのかもしれないと心配したが、蓋を開けてみれば意外に二人は話の合う仲だった。どちらもオシャレが好きなので、その話題でよく盛り上がっているみたいだ。

ソレイユは椅子から立ち上がって俺を出迎えようとする。

「ああ、いい。そのままそのまま」

そう言って俺はキッチンに向かう。リコは椅子に腰かけたまま、

「リノス、手伝いますわよ?ソレイユ、手伝ってあげてくださいな」

とソレイユにお願いしている。

「いやいい。今日は俺が晩飯を作るって言っただろ?ソレイユはリコの側についてやっててくれ」

「・・・わかりました」

ちょっと戸惑いながらソレイユはリコの隣に座る。そして俺は、久しぶりにキッチンで野菜の下ごしらえにかかる。そうしている間に、ゴンが戻ってきた。

「いや~遅くなったでありますー」

「ゴン、すまないが肉を薄く切ってくれ。たくさんな!」

「了解でありますー」

ゴンはカースシャロレーの肉を丁寧に薄切りしていく。それを見ながら俺は、豆腐を火にあぶって、焼き豆腐を作る。その火加減を見ながら、大量の白菜とねぎをきざみ、さらに、しいたけに切り込みを入れていく。

その間に次々と皆が帰ってくる。そして最後に、メイとコンシディー、そしてフェリスが帰ってきた。フェリスは大きな鍋を二つ、肩に担いでいる。

「ただいま戻りましたー」

フェリスは元気良く屋敷に入ってくる。その後に続いてコンシディーとメイが入ってきた。メイもお腹がふっくらとしてきた。お腹の子供も動いているようで、こちらの出産も今から楽しみだ。

「ご主人様、出来上がったご注文の鍋を取ってきました」

「ああ、ありがとうメイ。それにしても、ドワーフはさすがだな。注文して一週間で完成させるとは、これは恐れ入ったな」

「みんな、かなり気合を入れて作っていましたので、いいものが出来上がっています」

そう説明してくれたのは、コンシディーだ。彼女はドワーフの様子を折りに触れて見に行っているが、最近ではずっとメイの側にいてくれて、彼女の体を気遣ってくれる。実にありがたい。

「そうか、それじゃフェリス、担いでいる鍋をテーブルに置いてくれ。あ、俺が土魔法で作った卓上かまどを出して、その上にな。置

けたら火を起こして鍋を温めておいてくれ」

「ご主人様、油はどうしますか？」

「カースシャロレーの油の塊があるだろう？それを鍋に塗ってくれ」

フェリスが準備している間に、俺はパスタを茹でる。そしてそのまま俺は肉を持ってダイニングに行く。

「よーしみんな、今日は俺の特製のスキヤキだ！」

俺は肉を鍋に放り込み、砂糖と醤油で味付けをする。肉はすぐにおいしそうな匂いと共に、グツグツと音を立てる。

「さあ、まずは肉を食ってくれ。あ、ハーピーの卵があるだろう？それを割って、かき混ぜて、それに肉を絡めて食べてくれ」

皆、不思議そうな顔をして肉を食べる。

「あ、おいしい！」

「おいしいですわ！」

「おいしいですね！」

「ナニコレ、おいしい！」

どうやら好評のようだ。その匂いに誘われたのか、フェアリも帰ってきた。

「肉が食い終わったら、もう一度肉と野菜を入れるからな。これは火が通るまで待ってくれ。あ。パスタも入れなきゃな」

そう言って俺は再び肉を入れ、具を入れて再び砂糖と醤油で味付けをする。具材に火が通るまでの間に、もう一つの鍋で肉を焼く。

「ゴンこっちへ来て食おう！フェアリ、お前も食え。フェリス、お前足りないだろ？こっちの分も食え！」

こうして俺たちはスキヤキを堪能したのだった。最初はスキヤキにパスタってどうよ？と思ったが、食べてみると意外に美味しかった。コック長のペーリスは早速スキヤキの改良を考えているようだ。マトカルは一言も言わず、ひたすら食べ続けていたので、美味しかったのだろう。

俺がひとかかえするほどの大鍋で作ったため、予想以上に余ってしまった。それについては、ジェネハとハーピーたちにおすそ分けをした。彼女らもとても気に入ってくれ、俺としても大成功だった。今度は、おひいさまかサンディーユにお供えしてみようと思う。

こうして、俺たちの年は暮れていった。

第百五十五話　新年早々から大仕事

年が明けた。年末年始は、基本的に仕事はお休みとしたので、食っちゃ寝の生活を送った。休みとはいえ、それぞれの仕事は気になるらしく、マトカルやフェリスなどは、ちょいちょいアガルタに出勤していった。

俺はというと、リコとメイの子供の名前を決めようと奮闘していた。しかし、たくさんの候補をあげたものの、全く決まらなかった。結局、子供の顔を見てから決めようということになり、何をしているのかわからない正月休みになった。

年明け最初の仕事は、新年のあいさつに訪れたアガルタの領主たちを引見することだった。ジュカ時代の貴族は、年初めに必ず国王に新年のご挨拶を行っていたのだが、俺は迂闊にも彼らを引見する日を定めるのを忘れていた。結局、領主たちはジュカ時代の旧例に従って正月五日に合わせて都に来てしまい、一方で俺は三日まで完全にオフにしてしまっていたため、色々と少々混乱を生んでしまった。反省である。

そんな中でも領主たちの心は広く、取り立てて俺にクレームを言ってくる者は皆無だったのは、せめてもの救いだった。

昨年から既に予定が決まっていた、ヒーデータ、ニザ、そしてバイトス公国からの使者については、迎賓館の宿泊エリアで丁寧にもてなした。さすがにリコがプロデュースした、洗練された内装や、ソレイユたちが知恵を絞って拵えた接遇はどれも好評で、提供した料理もかなり気に入ってくれたみたいだ。

ちなみに、バイトス公国の使者に同行してきた商人たちは帰り際、これまで年に一回の交易を数回に増やしたいと言って都を後にした。あの国ではチーズなどが手に入るし、とても手の込んだ工芸品なども生産している。きっと交易が広がれば、リコやメイ、ペーリスなどは喜ぶだろう。

そして、俺に従わない領主の七家のうち、二家があいさつにやって来た。そのうちの一つが、サラセニア伯爵だった。彼は淡々と俺に新年の挨拶を述べ、娘が世話になっていることへの礼を述べた。おそらく、娘が心配で見にきたのだろう。あともう一つは、偵察に来たことを隠そうともせず、都のあちこちをまるで、嘗め回すかのようにして見ていた。あまりいい気分ではないが、こいつは放っておくことにした。

その合間を縫って俺は、帝国の陛下の所に新年のあいさつに行った。さすがに貴族が集まる時期を避けて内々に行ったのだが、陛下はリコの子供を心待ちにしてくれていた。そして何と、子供のためにタウンゼット王妃が毛糸で帽子を編んでくれていたのだ。

「陛下、恐縮です」

「タウンゼットも、リノス殿に子供が生まれるのを楽しみにしておるのだ。何といっても、女であれば将来、アローズの妃となるかもしれんからの」

「陛下、生まれる前からそんな・・・」

「いや、こういうことは最初に決めておいた方がよいのだ」

「しかし、医者からは男の子かもしれないと言われています」

「それであれば重畳だ。アガルタ国の世継ぎが生まれるのだ。それはそれでめでたい。アローズと互いに助け合えるではないか」

「陛下・・・」

子供が生まれてからこの人は、完全に親バカになってしまっている。この話をリコにしたところ、彼女は大笑いしていた。

いよいよリコの出産予定日が近づいてきた。俺は万全を期して、ポーセハイのローニを屋敷に軟禁した。軟禁といっても、三食おやつ付きだ。いつ生まれてもいいように、リコの傍に居てもらったのだ。

しかし、予定日を三日過ぎても、生まれる兆候は全く見られなかった。

「・・・何ともありませんわね」

リコは大きなお腹を抱えながらため息をつく。

「はじめてのお産は、予定日を過ぎることがよくあります。心配いりません」

ローニは笑顔で励ましてくれる。

「本当に、ママが大好きなんだなこの子は」

そう言って俺たちは三人で笑い合った。

しかし、予定日を一週間過ぎても、出産の兆候は見られなかった。さすがにこれにはローニも焦りを隠さなかった。リコのお腹に聴診器のようなものを当てて診察しつつ、心配そうに見つめる俺を見る。

「お子様の心音を確認しましたが、一週間もお腹の中にいるとは思えないくらいに、しっかりしています。しかし、これ以上長引きますと、お子様自体にもよろしくありませんし、何より頭が大きくなりすぎて生まれてこられなくなります。誠に申し訳ありませんが、明日の朝までに陣痛が起こらないのであれば、陣痛を起こす薬を処方することをお許しください」

俺はただ、頷くしかなかった。

それから俺はずっとリコと二人で彼女のお腹を撫で続けた。そして夜もリコと一緒に寝ながら、そのお腹を撫で続けた。

「・・・リノス、起きて。起きてくださいませ」

「・・・うん、何だ？リコ？」

お腹を撫でながら寝てしまったようだ。目を開けるとリコのかわいらしい顔がそこにあった。

「何だか、お腹がちょっとだけ痛いのですわ」

「もしかして、来たか！」

「いいえ。わからないですわ。それほど痛くはありませんの」

俺は慌てて一階で寝ているローニを起こしに行く。彼女はすぐに駆けつけてきた。

「・・・陣痛が始まったようです。一階の部屋に来ていただけますか？」

俺はリコの手を取って二階から一階の部屋に降りていく。ローニはテキパキと準備を整えていく。俺も何か手伝おうかと言ってみるが、

「大丈夫です。まだ本陣痛ではありませんから。しばらくご一緒に居ていただいても大丈夫ですよ」

その言葉に甘えて俺は、リコの手を握りながら傍に寄り添った。そして、そのまま朝を迎えた。

「とりあえずみんなに、陣痛が始まりそうだと伝えてくるよ」

俺はローニにリコのことをお願いして、ダイニングに向かった。

リコの陣痛が始まりそうだと聞いた皆は、大興奮だった。

「いよいよですね！ご主人様！」

フェリスが目を輝かせながら俺のところに寄ってくる。

「そうだな、いよいよだな」

そんなことをワイワイと皆で話していると、ローニがダイニングにやって来た。

「陣痛が始まりました。恐れ入りますが、今から言う物をご準備ください」

「じゃ、私、それをやります」

「私はアガルタに向かいますね。何かあれば言ってください」

「吾輩はクルムファルに行って伝えてくるであります！」

ローニの言葉を聞いて、事前に打ち合わせをしていたかの如く、皆が一斉に動き出す。瞬時に自分たちで判断し、短い言葉のやり取りを交わすだけで、とても効率的に動いている。今さらながら、すごい家族を持ったと感心してしまう。

俺はリコの下に向かう。彼女は陣痛の痛みに耐えているところだった。

「リコ・・・」

「だ・・・大丈夫・・・ですわ」

「頼んだぞ、リコ」

「お任せ・・・ください。必ず・・・無事に産んで見せますわ」

俺はリコの手を握り、背中をさすってやる。

「リノス様、恐れ入りますが、出産の準備に入ります。一旦、部屋の外でお待ちください」

ローニと、その後ろにルアラとペーリスがお湯や荷物を抱えて控えていた。俺はその場を離れたくはなかったが、リコが見せた優しい微笑に背中を押される形で、その部屋を後にした。

子供はなかなか生まれてこず、いわゆる難産だった。何度も何度もリコの部屋の前に行ったが、中に入るのは憚られた。時折、リコの絶叫にも似た叫び声が聞こえてくることもあり、俺は部屋の前をウロウロするしかなかった。

夜になっても、子供は生まれてこなかった。全員、ダイニングに集まっていたが、誰も口を開くものはない。全員が、リコがいる部屋を向いて見守っていた。

「観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄舎利子色不異空空不異色色即是空空即是色・・・」

俺は神に祈るようなポーズで、無意識に般若心経を唱えていた。実は、俺も難産だった。その時にばあちゃんはひたすら般若心経を唱えていたらしい。そのお陰か、俺は無事に生まれてきたし、おふくろも無事だった。そんな前世のことを不意に思い出したのだ。

「以無所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸仏依般若波羅蜜多故・・・」

一心不乱にお経を唱える。もう何回唱えただろうか。そして、空が白み始めた頃、ダイニングにローニが現れた。

「・・・お生まれになりました。リコレット様も、お子様も無事です。おめでとうございます！」

誰も言葉を発する者はいない。ただ、全員が、ゆっくりと息を吐き出していた。ダイニングを支配していた緊張感が急速に緩んでいくのを感じる。

俺は、あふれ出る涙を拭おうともせず、ローニに案内されて、リコの下に向かった。

第百五十六話　感動の再会

リコが居る離れに入ると、赤ん坊の泣く声が聞こえる。ずいぶんと大きな声だ。

「さあ、どうぞ」

ローニが部屋のドアを開けようとする。

「ちょっと待ってくれ！」

「どうされました？」

「結界を張るから、ちょっと待ってくれ」

「け、結界ですか？」

「ほら、赤ん坊に俺の雑菌がうつったらだめだろ？手も洗ってないし・・・」

ローニはにっこりと笑う。

「そうですね。一応、その点は万全を期していますが・・・。結界を張っていただくと、さらに安全かもしれませんね。それでは、お願いします」

そして、結界を張り終えた俺は、ローニの案内で部屋に入った。

部屋の中は、最初にリコを連れて来た時のままだった。とても清潔で、整理整頓されていた。昨日、部屋の前で聞いた、リコの絶叫にも似た叫び声があったのを微塵も感じさせない。その部屋は白い布にくるまれた、赤ん坊の大きな泣き声で満たされていた。

リコはかなりやつれていたが、赤ん坊を幸せそうな顔をして抱いていた。俺はゆっくりとリコのベッドに近づく。

「リコ・・・」

「リノス・・・生まれましたわ」

「ありがとう。よく・・・やってくれた・・・ありがとう・・・」

何度も何度も涙を拭うが、涙がとまらない。リコの肩に手を置きながら俺は涙をぬぐい続ける。

「リノス・・・。泣いていないで、子供の顔を見てあげてくださいな」

リコから赤ん坊を手渡される。恐る恐る抱いてみると、予想以上に軽い。相変わらず大きな声で、腕の中でウゴウゴと動いている。

「元気な子だな。ちょっと・・・大きいか？」

「はい。かなり大きな赤ちゃんだと思います」

ローニがフォローを入れてくれる。

「ローニ、ありがとう。ご苦労様でした。ローニのお陰だ」

「いいえ。私はただ、お手伝いをしただけです。本当に頑張られたのは、リコレット様です。そして、ルアラさんとペーリスさんに、本当によく助けていただきました」

俺は子供を抱きながらルアラとペーリスを探す。彼女たちは部屋の入口の近くで、椅子に座ってグッタリとしていた。彼女たちもやつれているが、その顔には笑顔が浮かんでいる。

「ご主人様、おめでとうございます」

「本当に、よかったです。おめでとうございます」

「ルアラ、ペーリス。本当にありがとうな。お前たちのお陰だ。ありがとう」

ルアラもペーリスも、互いに笑顔で顔を見合わせている。

俺はゆっくりと赤ん坊の顔を見る。そして、思わず吹き出してしまった。それと同時に、涙が頬を伝う。

「どうしたのです？リノス？」

泣きながら笑っている俺を見て、リコがちょっと驚いている。

「この子はもしかして・・・女の子か？」

「はい、元気な女のお子様です」

ローニの声が俺の背中越しに聞こえる。

「リノス・・・ごめんなさい。男の子を生みたかったのですが・・・」

リコはしょんぼりと項垂れる。

「いや、いい。いいんだ。二人とも無事ならいいんだ。娘か・・・。華やかでにぎやかになるな」

そう言いながら俺は赤ん坊をリコに返す。母親に抱かれた赤ん坊は、安心したように手をキュッと握りしめたまま大人しくなり、パクパクと口を動かし始めた。

「リノス・・・この子の名前を決めなければいけませんわ」

「そうだな」

俺は再び赤ん坊の顔を覗き込む。しわくちゃの、まるでお猿さんのような顔だが、何故か眉間に一本、シワが刻まれている。俺はこの赤ん坊に鑑定スキルを発動させる。

「やっぱりな・・・」

「どうしたのです、リノス？」

リコが不思議そうな顔をしている。俺は笑顔を浮かべながらリコを見る。

「名前は、決まったよ」

「まあ、どんな？」

「エリルだ」

「エリル・・・。リノスが奴隷時代に剣術を教えていただいていた方のお名前・・・？」

「ああ。以前、エリルお嬢様が俺の夢に出てきたんだ。そして、俺を守ると言ってくださったんだ。その直後にリコが懐妊した。この子はきっとお嬢様の生まれ変わりだと思うんだ」

「バーサーム・ダーケ・エリル・・・。ウフフ、とってもいい名前ですわ」

リコは満面の笑みを浮かべて子供を見ている。眉間に刻まれた一筋のシワ、目を閉じた時にキュッと上がる眉毛。そして、生まれながらに持つ「剣術ＬＶ１」のスキル。きっとこの子は、エリルの生まれ変わりだと、俺は確信した。

「おかえりなさいませ、エリルお嬢様」

俺は赤ん坊に向かって、小さく呟く。その言葉に安心したかのように赤ん坊は、スヤスヤと寝息を立て始めた。

「・・・妃殿下！お逃げください！妃殿下！！」

「逃げよ！せめてそなただけでも逃げよ！生まれてくる余の子供を守るのだ！」

ヒーデータ帝国の宮城内にある館において、反乱が勃発していた。反乱軍はその館の主人を侮り、皇帝が留守になる絶妙なタイミングを見計らい、周到な計画を立てて作戦を実行に移した。完全に虚を突かれた形となった館は、少ない手勢での迎撃を余儀なくされていた。

「ムダですわ。この屋敷は完全に包囲されています」

「それでは、地下の転移結界に！」

「おそらく、それも破壊されているでしょう」

ふっくらとしたお腹を撫でながら、妃殿下と呼ばれる女性はゆっくりと椅子から立ち上がった。

「そなたは・・・なぜそんなに落ち着いていられるのだ。怖くは・・・ないのか？」

顔を引きつらせながら、館の主人は声をかける。女の方はため息をつきながら、ゆっくりと周囲を見回す。

「ですから、警護を怠らないようにと申しましたのに・・・。まあ、こうなっては仕方ありませんね。やるしかないでしょう」

「やるって・・・何をだ？」

「決まっています。戦うのです」

「なっ、バカな！外にどれだけの兵が居ると思っているのだ！おそらく５００はいるのだぞ？」

女は目を閉じて何かを考えている。一瞬の静寂が部屋に訪れ、そして、女はゆっくり目を開ける。

「うーん呪いが付いてしまうわね。お父さんにお願いしないといけなくなるな・・・。ママに怒られるのは確定ね。でも、これはしょうがないわね。カルン、あなたはこの部屋に、あるだけの剣を持ってきて頂戴」

「そなたは・・・本当に戦うつもりか？」

「当然ですわ。幸い、この部屋は一切の魔法が通じない結界が張られています。この部屋にいる限り、負けることはありませんわ」

「妃殿下、持ってまいりました。部屋にあるのは・・・これだけです」

カルンと呼ばれた侍女が、両手に六本の剣を抱えて持ってきた。

「こんなにもあったのね。十分だわ」

そう言いながら女は、その内にあった愛用の剣を手に取る。その時、鎧兜に身を固めた兵士が部屋に乱入してきた。

「皇太子殿下と妃殿下とお見受けいたします。お命を・・・ぐえええ！」

最後まで言葉を言わせることなく、妃殿下と呼ばれる女の剣は、兵士の喉笛を突いていた。その直後、周囲にいた兵士が一瞬のうちに斬り伏せられていた。

「・・・さすがはホーリーソード。切れ味が抜群ね」

女は周りに転がる死体に目もくれず、剣の刃こぼれを確認していた。そして、兵士の叫び声を聞いて、さらに多くの兵士が部屋に乱入してくる。

「殿下、私の後ろに下がっていてください。動いてはなりませんよ？」

チラリと後ろを振り返りつつ、女の剣が目にも止まらぬ速さで振り抜かれ、一瞬のうちに兵士たちは命を奪われた。

この夜、反乱軍はたった一人の女によって壊滅させられた。乱の首謀者は、体を鎧兜ごと一刀両断にされるという、凄惨な死を迎えたのだった。

「暁の乱」と呼ばれたこの反乱を鎮圧したのは、ヒーデータ帝国皇太子の妻であった。この時、返り血を浴びて真っ赤に染まった服を着ていたことから、その後彼女は、「鮮血の妃」と呼ばれ、歴史にその名を残すことになる。その名をエリルと言った。

彼女は後に、ヒーデータ帝国第十六代皇帝、ヒーデータ・シュア・アローズの皇后となり、帝国史上最強の皇后と呼ばれるのだが、それはまだ、数十年後のことである。

まさかこの赤ん坊に、そんな未来が待ち受けているとは、この時の

リノスもリコにも、知る由もなかった。

第百五十七話　新しい家族

寝不足の日々が続いている。昼飯を食った後に猛烈な睡魔に襲われることが度々だ。後から考えてみると、ある意味でこの時が一番アガルタ国にとって危機だったかもしれない。何といってもリコがおらず、俺自身もフラフラだったからだ。

当然、部下や都の人々の前ではそんな醜態は見せられない。人が訪ねてきた時などは根性でシャンとしていたのだが、普段は机に頬杖を突きながら、何か難しそうなことを考えるふりをして、居眠りをブッこいていたのだ。前世の頃、徹夜続きの現場であったために、自然に寝たふりをするのがうまくなった。その経験がこちらの世界でも活きている。

寝不足の原因は、言うまでもなくエリルだ。先代もかくやと思わせるほどの泣きっぷりである。これがまあ、うるさいのだ。夜中に起こされるので、リコは俺以上に寝不足になっている。

俺たち親が寝不足であっても、エリルはおっぱいをよく飲み、大声で泣き、そしてぐっすりと寝る。きっと豪快な女性になるのだろう。

娘が生まれてから、意外な発見もあった。何とリコの胸が大きくなったのだ。出産を経験すれば大抵そうなるらしいが、きちんと谷間ができている。ただ、乳の出がよいために、油断すると胸が母乳まみれになってしまう。リコもリコで苦労しているのだ。

一番大きな驚きが、何故かエリルがマトカルに懐くということだ。夜、どうしても泣き止まないときはマトカルに抱っこしてもらって

いる。どんなにご機嫌が悪くても、マトカルに抱っこされると、スヤスヤと寝てくれる。最近ではマトカルがリコと一緒に寝てくれているので、リコの寝不足は、ようやく軽減されつつある。

おっぱいを飲ませた後のゲップや、オムツを替えたり、風呂に入れたり、服を着替えさせたりする・・・。こういったことを家族みんなで、楽しみながら手伝ってくれている。当然、父親として俺も協力はしている。

二月が終わるその日は、休日だった。いつにも増して大泣きしているエリルをあやしながら皆で飯を食う。リコのおっぱいを飲んで満腹し、ようやくエリルが眠った頃に皆の食事が終わり、思い思いにまったりと時間を過ごしていたその時、ダイニングで声がする。

「メイ姉さま・・・？」

見ると、裏庭の離れに通じる扉の前でメイが立ち尽くしている。近づいてみると、メイの足元が濡れている。

「もしかして、メイ姉さまも粗相を・・・」

フェリスが思わず口を開く。

「バカ野郎！破水だ！ローニを！ローニを呼べ！急げ！」

俺は大声で指示を出し、メイに布を当てながら分娩室へ連れていく。ベッドに布を敷き詰め、ゆっくりメイをそこに寝かせる。

「ご主人様・・・大丈夫です。まだ予定日ではありませんから」

「いや、破水したら生まなきゃいけないだろう。ローニに見てもらおう」

「はい・・・」

俺はローニが来るまでメイの手を握り続けていた。

ローニが到着すると、すぐさま彼女はメイの手当てに当たった。当然俺は部屋の外に出されてしまい、その代わりにルアラとペーリスがローニに呼ばれて部屋に入った。そして、しばらくするとローニが部屋から出てきた。

「ただいま確認しましたところ、破水でした。少し陣痛も始まっているようです。このまま出産していただきます」

「ローニ、まだ予定日の前だけれど、大丈夫だろうか？」

「大丈夫です。予定日まであと二週間くらいですから、問題ないと思います」

「そうか。任せたぞ。頼むな」

ローニはピンと背を伸ばし、ピョコンと頭を下げて、部屋に入っていった。

メイの出産は、とても安産だった。破水後、二時間で生まれたのだ。リコの前例もあることから、俺たちは出産が深夜に及ぶことを予想して、その万全の対策を練っていたところだった。そんな中、突然ローニが現れたので、俺たちは逆に何かヤバイことが起こったのかと緊張したのだ。

「な・・・ローニ・・・どうしたんだ？」

ローニは真面目な顔で背中をピンと伸ばし、ダイニングにいた俺たちの顔を見渡している。

「おい・・・ローニ？」

その声を聞いて、ローニの顔が崩れて笑顔になる。

「おめでとうございます。無事にお生まれになりました。かわいい女のお子様です。メイ様も問題ありません」

「「「「「やったー！！！！」」」」」

全員でハイタッチをして喜びを分かち合う。そんな中、エリルを抱いていたリコが俺の腕をツンツンと突く。

「リノス、メイのところに行ってやってくださいませ」

「ああ、そうだな。行ってくるよ」

俺はローニに案内されて、メイのところに向かった。

メイによく似た、羊獣人の女の子だった。頭にかわいらしい羊の角が生えており、既に、頭にもきちんと羊の毛が生えていた。フニャァーフニャァーと泣いていて、鳴き声までもかわいらしい。

「メイ、やったな。ありがとう」

「・・・」

メイはうれしそうな顔をしたまま、涙を流していた。

「とても安産で、リコ姉さまの時と比べると、かなり楽でした」

ルアラが笑顔で教えてくれる。俺は子供を抱きながら彼女に笑顔を返す。

「この子はエリルに比べると・・・小さいか？」

「はい。出産が早かったために、ちょっと小さいですが、健康的には問題ありません。ただ、今後の経過は見させていただきたいと思います」

「ああ、そうしてくれ。ありがとうローニ。娘を二人とも世話になったな。これからもよろしく頼む」

「はい。メイ様が動かれるようになるまでは、全力で努めさせていただきます」

ローニはいつもの毅然とした態度を崩すことなく、とても頼もしい言葉を口にしてくれた。

「ご主人様・・・。この子の名前を決めていただけないでしょうか」

メイが笑顔で口を開く。

「そうだな。この子はきっと、かわいらしい子になるだろう。かわいい名前にしてやらないとな」

そう言いながら俺は、この子を鑑定してみる。すると、「教養ＬＶ１」が付いていた。

「きっとこの子は、メイに似て賢い子になるかもしれないな」

そう言いながら俺は赤ん坊を返した。メイはとっても嬉しそうな顔で、子供の顔を眺めていた。

その日の夕食は、当然ご馳走になった。さすがにメイにご馳走を食べさせるのはよろしくないとのことで、彼女にはリコとペーリスが付いていてくれることになった。リコがサンドイッチとおはぎを作って持って行き、その後ろをフェアリがパタパタと飛んで行った。

我が家のご馳走といえば肉だ。俺がキッチンに立ち、ドラゴンの肉と黄金鳥の肉を出して、カツとから揚げを作った。そして、クルムファルから届いたサーモンのような魚をマリネにしてサラダにし、そして、ニンニクの風味を持つレムリカという食材を使って、ガーリックライスを作った。自分で言うのも何だが、実にうまく作ることができて、大好評だった。

さらに、デザートは俺がペーリスとともにアイデアを温めてきたケーキを、腕によりをかけて作った。さすがにこれは食べられないだろうと思っていたが、女子は別腹を持っているようで、満腹ながらも完食してしまったのには驚くほかはなかった。特に、ローニは全く遠慮なくガンガン食べていた。冗談でダイエットは気にしないのかと聞いてみたが、彼女はダイエットに対しても、驚くほど豊富な知識を持っていた。

「暴飲暴食をしなければ、問題ありません。貴族の方など、絶食して痩せようとされる方がいますが、あれは本末転倒です。体質にもよりますが、太るということは、食生活が偏っているか、運動不足からくることが多いのです。あと、精神的に太る方もおいでになります」

なかなか興味深い話だ。そういえば前世のおふくろはいつもダイエットに失敗していたのを思い出した。もっともおふくろは還暦を過ぎたのを境に、ダイエットをやめてしまうという男前な方法を取るのだが。

「ダイエットは体に悪いよ。ストレスしか溜まんないんだから！」

今でもこの言葉は、俺の脳裏に焼き付いている。

「自分がダメだと思っていると、成功率は低くなります。太っていてダメだ。だから痩せなければならないと思っている方は痩せにくくなります。人はイヤなことを避けようとしますので、余計に食べてしまうのです。そうではなくて、今の自分を受け入れ、今のままでいいのだけれど、ちょっと良くなるように食べる量を控えてみよう、そう思えば無理して食べることもなくなりますし、自然と痩せていくのです。あ、からあげ、もうありませんか？ありますか？・・・すみません」

から揚げを食べながら語るローニはとても男前で、ルアラを筆頭に女子は彼女の話にクギ付けだった。そんな彼女たちを見て、俺は口を開く。

「みんな、そんなに太ってないぞ？むしろ、もう少しふっくらしてもいいと思うぞ？」

何故か女子全員の軽蔑しきった視線を浴びてしまった。その夜、ダイニングにいた女子たちが妙に俺に対してよそよそしい気がしたのだが、気のせいだと思い込むことにする。大丈夫、きっと、気のせいに違いない・・・。

第百五十八話　新婚旅行？いや、仕事です！

メイに子供が生まれてからさらに一ヶ月が経ち、アガルタ国の雪もそろそろ溶け出してきた。

メイの子供の名前は、「アリリア」と名付けることにした。俺は俺で色々と考えていたのだが、いつの間にか女たちで相談がまとまっていて、リコからこの名前を提案されてきたのだ。

名前の響きがよかったのと、リコ以外の嫁やフェリス達もその名前がいいという全員一致の形で、名前が決まったのだった。

ひと月に二人の娘の父親になってしまった。娘たちを抱っこしながら、臭いからイヤ！と言われないようにしないと・・・などと下らないことを考える。リコもメイもお互いに子供を世話し合っているし、他の嫁たちも率先して子供の世話をしてくれる。本当にありがたい限りだ。

その一方で、俺はラマロン皇国のダイタス村のことが気になっていた。

１２月に村長のジンビが訪れた時、俺は彼らに食料を支援してやった。その時は兵士たちに持てるだけの食糧を持たせて国境付近まで彼らを送り届けたのだが、あれだけではおそらく、食料が尽きかけているはずなのだ。食料が足りない場合であれば何か言ってくるだろうと思っていたが、何も言ってこない。

「ダイタス村は大丈夫だろうか」

「大丈夫ではないと思うが・・・。あそこは豊かな土地ではないからな」

俺はマトカルと二人で風呂に入りながら、ダイタス村のことを話していた。マトカルは風呂に入る時もあまり恥じらうことがない。コンシディーなどは、俺と一緒に入るには入るが、自分の体を見られるのが恥ずかしいらしく、いつも湯船に深く体を沈めてしまう。

マトカルはよくリコと風呂に入っており、どうやらリコの洗練された入浴作法を会得しつつあるようだ。ちなみに、エリルは風呂でもマトカルに抱かれると大人しくなる。風呂好きのリコは大助かりなのだ。

「それにしては、ジンビは何も言ってこないな」

「いや、言いに来たくても来られない状況にあるのかもしれないな。ダイタス村は山の中にある。アガルタの都の雪がまだ溶けていないところを見ると、ダイタス村があるバンザビ山はまだ雪深いだろう。その雪のために動けないのかもしれないな」

「なるほど・・・一度、様子を見に行った方がいいのかもしれないな」

「まさか、リノス様が行くのか？」

「う～ん、俺が行った方が安全だと思うんだよな」

「さすがに・・・一人はやめてくれ。それであれば、私も一緒に行こう」

「マトが行くと顔が知られているんじゃないのか？大丈夫か？」

「う～ん」

マトカルは天を仰ぐ。

「それにしても、こうして明るいところで見ると、マトの体は傷だらけだな」

歴戦の戦士といわれているだけあって、マトカルの胸、腹、肩、腕にはいくつかの刀傷や火傷の跡がついている。その上彼女は筋肉質だ。腹筋など見事に割れている。

「まあ、皇国軍人は基本的に、回復魔法を使わないからな」

大抵、軍における訓練や戦闘には回復魔法が使える魔術師が同行しているのだが、ラマロン軍の軍人たちは、命に係わる深手や病気でない限りは、出来るだけ自分で治療するのだという。マトカルもそれに倣って、傷を受けても薬草を使うなどして、自分で治療してきたのだそうだ。これは魔術師のＭＰはできるだけ温存するという戦略でもあるらしい。

「戦士にとって傷は勲章のようなものだからな。皇国軍で無傷の者はナメられるのだ。かと言って、傷跡を見せびらかすのも軽蔑される。下着や鎧の隙間からチラリとのぞくような傷が一番いい。しかし、背中の傷は最も唾棄すべきものとされている。そのために、私の背中には、一切傷はついていない」

彼女はクルリと背中を向ける。確かに、傷跡は全く見られない。

「これは、敵に背後を見せたことのない証なのだ」

「でもマト、このお尻にある赤いシミみたいなものは何だ？」

俺はマトカルの尻を指で突っつく。

「そ・・・それは・・・この間、リノス様が付けたのだ。し・・・尻を突くのは・・・やめて・・・くっ、くすぐったい・・・」

「マトのお尻は柔らかいんだなー」

そんなことをしていると、脱衣室からバタバタと音がする。そして、風呂場のドアが勢いよく開かれ、全裸のソレイユが入ってきた。

「ご主人様、私も一緒に入ります！」

そう言って彼女はさっさと体を洗い、風呂に入ってくる。

「ソレイユはいつも俺がマトと入っていると乱入してくるなー」

「たまたまです。本当はシディーの時もご一緒したいのですけど、シディーが嫌がりますでしょ？」

「まあ、確かに」

一度、コンシディーと一緒に入っている時にソレイユに乱入された時があったが、その直後に彼女は風呂から飛び出すようにしてあがってしまった。その後、部屋で恥ずかしいと泣かれて、宥めるのに苦労したのだ。

「まあ、その体を見せつけられては、シディー殿は居づらいだろう」
マトカルが呆れたように言う。
「そうかしら？でも、マトは嫌がりませんわね？」
「私は剣が使える体であればいいのだ。しかし、シディー殿は自分の体に引け目を感じている。ソレイユ殿やメイ様のように豊満な胸があるわけでなし、リコ様のように絹のような肌を持っているわけでなし、どうしても自分の体を卑下してしまうのだろう」
「あーら、そんなことありませんのに。ねえ、ご主人様？」
「まあ、シディーはその奥ゆかしさが魅力だな」
「リノス様もこう仰っている。あまり、シディー殿を挑発するべきではない」
「わかりましたわ・・・。それにしても、リコ様のお肌・・・私も一度見てみたいものです。マトが羨ましいわ」
「確かに、リコ様の肌はキレイだ。シミ一つない。しかし、リコ様もシディー殿と同じくあまり肌を見せるのを好まれない。私も遠慮したいのだが、リコ様がどうしてもと仰るので、仕方なくお仕えしているのだ。悪く思わないでくれ」
「いいえ、そんな・・・」
マトカルが見事な会話の運びでソレイユを黙らせてしまった。

「ところで、ご主人様とマトは何を話してらしたのです？」

「ああ、ダイタス村のことだ」

俺はマトカルと話していたことをソレイユに伝える。

「まあ、それでしたら、私をお連れ下さい！」

ソレイユの顔がぱぁぁぁっと明るくなる。

「皇国の森は、私はよく知っております。それに、今では神龍様の加護もいただいています。邪悪な魔物などは寄せ付けませんし、きっとご主人様のお役に立ってみせますわ！」

「うーん、そうだな・・・」

「いや、リノス様。ソレイユ殿であればいい戦力になる。皇国の土地勘があるのは大きいぞ」

「さすがはマトですわ！」

ソレイユは大喜びだ。

「うーん。考えさせてくれ・・・。ちょっと風呂からあがろうか。のぼせそうだ」

結局俺は、マトカルの助言を受け入れて、ソレイユを伴ってダイタス村に行くことにしたのだった。

村に向かうにあたって、ラファイエンスたちから斥候を出すべきだという意見が出されたため、一旦、フェアリードラゴンのサダキチにひとっ走りしてもらった。その結果、かなり深い雪に閉ざされているらしいという報告があった。

そこで俺は、食料を持っていくと書いた手紙をサダキチに持たせ、村長のジンビの家に持って行かせた。家の前に手紙を落とし、トントンとドアをノックしたあと上空に移動し、ちゃんと中年の男が手紙を拾うところを確認して、サダキチは帰ってきた。完璧な仕事ぶりである。

そして俺はソレイユと共にイリモに跨り、ダイタス村に向かった。本来は、帝国軍とラマロン軍が睨み合った時に拵えた転移結界を使いたかったのだが、雪深い中に埋もれてしまって、転移できなかった。何とも惜しい限りだ。

それで今回は仕方がなく、イリモの協力を仰ぐ形になった。ちなみに、ソレイユも飛べるのは飛べるのだが、イリモの速さほどではないため、俺と一緒に乗ってもらう形になった。

「わぁ～白馬に乗った王子様とこうやって旅に出る・・・夢だったんです！」

ソレイユはとても楽しそうだ。一応、敵地に乗り込むので油断は禁物だと釘を刺しておいたのだが、彼女の頭の中は、華やかな新婚旅行に酔いしれていた。

「ソレイユ、キョロキョロするなよ！」

「わかっています。ご主人様の体・・・あったかい。・・・幸せ」

「ソレイユ、俺もイリモもダイタス村の位置を知らないんだ。お前が教えてくれなきゃいけないんだぞ？」

「大丈夫です。・・・見えました。あれがバンザビ山です。そしてそこを越えるとすぐに・・・見えました！ダイタス村です！」

眼下に、雪の中にポッカリと穴が開いているように見える部分がある。それが、俺たちが目指すダイタス村だった。

第百五十九話　ダイタス村でのおもてなし

上空からダイタス村を確認した俺たちは、村から少し離れた森の中に降り立った。ソレイユをイリモから降ろすと、森の中に黄色い、小さな光が無数に現れた。

「おい、ソレイユ。あの光は何だ？」

「森の精霊たちです。私たちを・・・出迎えているようです」

そんなことを話していると、森の奥からひときわ大きな光が俺たちに近づいてくる。よく見ると、黄色い光に包まれた小人のような女性だった。

「私はこの森を守護しています精霊・クレイドルです。神の祝福を受けたあなた方を歓迎いたします。僭越ながら、この森の中では、我々に案内をさせてくださいませ」

「私は、神龍様の加護を受けし、サイリュースのソレイユと申します。お言葉に甘えて、この森の案内を頼みます」

「承知しました」

「私たちをダイタス村に案内してください。なお、こちらは私の主人であります、アガルタ国王、リノス様。そして、その愛馬であるイリモ様です。くれぐれも粗相のないように願います」

「畏まりました」

クレイドルがフッと消えたかと思うと、森の精霊たちが一列に並んでダイタス村までの道のりを示してくれていた。

「ソレイユ、何か・・・すごいな」

「当然ですわ。精霊の中でも最上位の神龍と契約しているのですから、精霊たちには畏敬の念を抱かれるのは自然なことです」

「神龍って、単なる甘いもの好きな子供じゃないんだな」

「ご主人様・・・神龍様に怒られますよ・・・」

ソレイユに呆れられてしまった。確かに、多少のことでは動じないあのフェリスが、驚きのあまりおもらしする程の力を持っているのだ。そういう意味で、神龍のすごさをわからない俺は、センスがないのかもしれない。

「さあ、参りましょう」

ソレイユに促される形で、俺たちは森の中を進んでいった。

ダイタス村には程なくして到着した。村の入り口には、屈強そうな若者が立っており、村の警護をしていた。彼らは俺の姿を見ると慌てて駆け寄ってきた。

「もしかして、アガルタ国王様か?」

「ああ、そうだ。俺のことはリノスでいい」

「おお、リノス様だ。まさか本当に来ていただけるとは！お待ちしていました、さあ、どうぞ！」

ダイタス村の若い者に丁寧に案内されて村に入る。よく見るとそいつらは、村長のジンビと共にアガルタに来た男たちだった。そしてジンビの家に案内されると、彼は飛び上がらんばかりに驚いていた。

「おお、リノス様！リノス様ではありませんか！本当にお越しいただけるとは。昨日お手紙を見て、まさかと思っていましたが・・・。お目にかかれてこのジンビ、歓喜に耐えません。ありがとうございます。ありがとうございます！」

ジンビは膝をついて何度も腰を折る。

「よしてくれジンビ。俺が勝手に来たのだ。そんなに畏まらないでくれ。いや、ちょっと気になったんで寄せてもらったんだ。用が済んだらすぐ帰るから、気を使わないでくれ」

「いいえ、そういうわけにはいきません！ささ、どうぞ！」

ジンビに勧められるままに俺は囲炉裏の前に座る。

「村の者を呼んでまいります。少々お待ちください！」

俺は囲炉裏の火にあたりながら、ジンビの家を見回す。村長の家だけあって家は広いが、贅沢なものは何一つとしてない。狩猟用に使われると思われる弓矢や槍、天井近くまで積み上げられた薪・・・。生活する必要最低限の物しかそこにはなかった。

「ご主人様・・・これ、ハワンの毛皮です」

不意にソレイユが言葉を漏らす。彼女の視線の先には、俺たちが座っている敷物があった。確かに、フワフワして座り心地がとてもいい。

「ハワン？」

「とても暖かくて軽い毛で覆われた、シカのような魔物です。とても警戒心が強いので、狩ることが難しいのです。この敷物は・・・大変な高級品ですわ」

「なるほどな。それだけ俺たちは、大事な客ということだ」

そんなことを話していると、ジンビが大勢の村人たちを引き連れて家に入ってきた。

「皆、座ってくれ・・・。こちらにおられるのは、正真正銘のアガルタ国王のリノス様だ。我が村の窮地を救っていただいた御方だ。今回も村を心配していただいて、わざわざここまでお越し下された。皆からも礼を言ってくれ」

村人たちが口々に礼を言ってくる。見ると老人と女、子供たちばかりだ。若い男もいるにはいるが、かなり少ない。

「で、村の食糧事情はどうなんだ？」

ジンビはため息をつきながら首を振る。

「この大雪で、動くに動けない状態なのです。いただいた食料も、もうすぐ尽きるところだったのです」

「そうか・・・。やっぱり来てよかったな。心配していたんだ。ジンビが持って帰った食料じゃそろそろ限界だろうに、使者一人寄越さないから、もしやと思ったんだ」

「こんな、我らのような小さい村を心配していただくなど・・・」

ジンビの頬に涙が伝っている。

「まあ、心配しなくていい。ちゃんと食料は持ってきた。しばらくは飢えることはないだろう。安心してくれ」

おお～と村人たちから声が上がる。

「王様、ひとつ聞いていいか？」

声がする方に視線を向けると、中学生くらいの女の子が立ち上がっていた。

「リリス！黙っていろ！アガルタ王に無礼だぞ！」

「ジンビ、いい。リリス・・・とか言ったな？俺に聞きたいことってのは、何だい？」

リリスと呼ばれた少女は、ちょっと目を伏せたが、やがて意を決したように口を開く。

「アンタが何でうちの村に食料をくれるんだ？この村には何にもないぞ？私たちから何を奪うつもりだ？」

「リリス！」

ジンビの声が、広い部屋にこだまする。リリスは思わず目を閉じて、体を小さくする。

「・・・そうだな。リリス、お前が正しいよ。そう思うよな？いや、お前の言う通りだ。これは俺にもわからないんだ。何故か食料を支援しようと思ったんだ。だって、俺たちはお前らから見れば敵国だ。その敵国に食料を支援してくれって、なかなか言えるもんじゃないぞ？俺はそこにジンビの、村長として意地もプライドもかなぐり捨てて村人を守りたいという思いを感じたんだ。まあ、言ってみれば、ジンビのその意気に報いてやりたいと感じたからかな？」

リリスはしばらくじっと俺の顔を見ていたが、やがて小さく頷いた。

「わかった。変なこと聞いて、すまなかった」

俺はリリスに笑顔を送る。ジンビは少し安心したような顔をしたが、やがてすぐに緊張した面持ちになる。

「リノス様、お越しいただいた所で恐縮ですが、我々のお話を聞いていただきたい」

「どうした？」

「我々は、リノス様から食料をいただいてから、何度も話し合いを重ねました。そして、今後はアガルタ国のために仕えていこうという結論に至りました。リノス様、我々を配下に加えていただきたい。伏してお願い申し上げる」

ジンビ以下、そこに集まった全員が俺に平伏していた。

「あああああ、やめろやめろ。そんなことはしなくていい。・・・このダイタス村を配下に加えるのは構わないが、そうなるとラマロンが攻めてくるぞ?そうなればこの村は蹂躙される。その点はどうするんだ?」

「いえ、その点はご心配なく。我々は表向きはラマロンに従います」

「ほう」

「しかし、ラマロンの情報はリノス様に逐一お伝えします。若い者の中には、皇国軍にいる者もおります。その者たちから軍の情報を聞き出して、リノス様にお伝えします」

「つまり、スパイになるということか?」

「はい。我々が生き残る道は、それしかありません。皇国の追及をかわす手は、いくつか考えていますので」

「う〜ん」

俺は天井を見ながら唸る。そして、視線を戻すと、そこに集まる村人全員の視線が俺に集まっていた。その時、俺は小さな違和感に気が付いた。

俺が視線を向けた先には、若い女が座っている。どこからどう見ても村人だ。しかし、違和感がある。俺はその女を無言で見続ける。女も俺の視線に気が付いて、俺の目を見たままじっとしている。

「・・・リノス様？」

俺はジンビを手で制する。その瞬間、女が村人の間を縫うようにして逃げ出した。

「逃がすな！捕らえろ！」

俺の声を聞いて、後ろに控えていた若い男たちがすぐさま女を追いかける。ジンビも追いかけていく。突然のことでその場は、騒然となっている。

しばらくすると、男たちに引き立てられる形で、先ほどの女が連れて来られた。

「おい、ジィフィーロ、どうして逃げたりしたんだ？」

ジンビが女に言葉をかけている。

「ほう、ジィフィーロというのか？」

「はい、我が村のマロフという男の女房です。まさか・・・」

「どうやら、普通の女房じゃないみたいだぞ？」

「ジィフィーロ！お前まさか俺たちを騙してたのか？おい、何か言ってくれ！」

「・・・」

ジィフィーロは俯いたまま黙りこくっている。

「ジンビ、無駄だ。口を割るようじゃスパイは務まらんからな」

「スパイ・・・。リノス様・・・どうしてこの女がスパイだと・・・」

ジンビは不思議そうな顔で尋ねる。

「ああ、お前の話を聞いている時、村人たちの呼吸は荒かった。そりゃそうだよな。お前たちの生き死にがかかってるんだからな。しかし、この女は呼吸が荒れていなかった。怪しいと思うのは、当然だろう？」

ジンビは目を見開いたまま、リノスを凝視し続けた。

第百六十話　上記正に領収いたしました

村人たちは水を打ったように静まり返っている。まさか、顔見知りの人間が皇国のスパイであったということに、ショックを受けているようだ。

「ジィフィーロ・・・なぜだ?」

ジンビがガックリと膝をつき、項垂れる。ジィフィーロは俯いたまま微動だにしない。俺は彼女に鑑定スキルを発動させる。

「・・・ジィフィーロとか言ったな?皇国の人間から亭主のマロフを人質に取られているのか?・・・早く村に帰してやる代わりに、村人の行動を探れと言われたか?週に一度、皇国の人間と連絡を取り合っていたか・・・。ここ最近は大雪で連絡が出来ていない・・・か?」

ジィフィーロは顔を上げて俺を凝視している。

「り、リノス様・・・なぜそのようなことが・・・」

ジンビは何か怯えるような眼で俺を見ている。そんな彼に、俺はニヤリと笑みを見せる。

「ああ、あくまで俺の予想だ。外部の人間をいきなりスパイとしてこの村に入り込むのは難しいだろうからな。そう考えると、村人の誰かの弱みを握って利用するというのが一番簡単だ。さっき、このジィフィーロはマロフの女房だと言っていたから、おそらくそうじ

ゃないかと思って言ってみたんだが・・・。あながち、ハズレではないようだな?」

ジィフィーロは目を泳がせながら、再び俯く。

「マロフを返してほしいか、ジィフィーロ?」

その言葉にジィフィーロは、キッと俺を見て口を開く。

「当り前じゃないか!もう二年、もう二年だぞ!兵隊に取られて!お陰でこの村は荒廃する一方だ。私たち女と爺様たちが畑を耕すだけじゃ食べていけない。ハワンを狩る者が居ないから金が入ってこない。マロフが、マロフが帰ってくればハワンが狩れる。そうすりゃ村は何とかなるんだ!」

女は涙を流し、床を拳で叩きながら俺に怒りをぶつけてくる。集まった村人たちも皆、俯いて何も言おうとはしない。

「ジィフィーロ、気持ちはわかるが・・・。その前に何故俺に相談してくれなかった?」

ジンビがジィフィーロににじり寄りながら尋ねる。

「言えるわけ・・・ないじゃないか!そんなこと、言えるわけ・・・」

「ジィフィーロ・・・」

ジィフィーロもジンビも号泣していた。そして周りの村人も、声を殺して泣いていた。俺はその光景を見ながら、何とかしてこの人々

を救えはしないかと考えを巡らせていた。チラリと横にいるソレイユを見ると、彼女も心配そうな顔で村人たちを見つめていた。

「ご主人様・・・何とかしてあげられませんか？」

「う～ん」

腕組をしながら考えている俺に、村長のジンビが涙をぬぐいながら口を開く。

「アガルタ王、リノス様。この度の我らへの食糧のお恵み、心から感謝いたします。村を代表してこのジンビ、心からお礼を申します。これから先はこの村のこと。我らで決着を着けます。どうぞ、お気になさいませんように・・・」

「いや、そうは言ってもだな・・・。ヘタすりゃこの村は皇国軍に討伐されるぞ？そうなったらおそらく、ここの村人全員が殺されちまうぞ？それは俺も避けたいんだよな・・・。おいジィフィーロ、お前はラマロン側にどこまでこの村の内情を伝えたんだ？」

「・・・村長がアガルタから食料を調達してきたことと、これから皇国に付くかアガルタに付くかで村が揉めてるってところまでは伝えた」

「う～ん。なるほどな・・・」

ふと俺は自分の足元に視線を落とす。そこにはハワンの毛皮が敷かれていた。

「ジンビ、この毛皮・・・もらってもいいか？」

ジンビは一瞬言葉に詰まる。そして、絞り出すようにして答える。

「あ・・・わ・・・わかり・・・ました。お持ちください」

「村長！それは村に食料が無くなった時に売る最後の毛皮じゃないか！」

ジィフィーロが絶叫する。

「ジィフィーロ。いいのだ。今この村は存亡の危機にある。そこにリノス様は食料を持ってきてくださった。この毛皮を売る時は、今この時だ」

ジンビが諭すように話す。

「リノス様、どうぞ、その毛皮をお持ちください」

「よーし。わかった。それじゃ・・・」

俺は無限収納から紙とペンを出し、サラサラとそこに書いていく。

「村人たちが飢えない最低限の食糧の量ってどのくらいだ？で、あと、この毛皮っていくらで売るんだ？・・・大体でいい」

「食料は・・・米か小麦が２０袋もあれば何とか・・・。毛皮は、１０，０００Ｇぐらいですか・・・」

ジンビの話を聞きながら、俺は紙にそれを書き入れていく。

「はい、できた。こんなもんでどうだ？」

「・・・これは・・・何でしょうか？」

「領収書だ」

「リョウシュウショ？」

「物を売ったり買ったりするときに発行する証明書のようなものだ。この毛皮を、この食料で買いましたっていう証明書だ」

俺が発行した領収書はこんな感じだ。

【領収書】

ダイタス村村長　ジンビ様

領収物：ハワンの毛皮　１枚

但し、食料代として上記正に領収いたしました。

領収明細：

・米　１０袋
・小麦　１０袋
・野菜　１０kg
・肉　１０kg

アガルタ国国王　バーサーム・ダーケ・リノス

「おい、ジィフィーロ。お前、字は読めるか？」

「・・・読めないね」

「ならちょうどいい。コイツをその・・・何だ？ラマロン軍のヤツに渡せ」

「どういうことだい？」

ジンビもジィフィーロも目を丸くしている。そりゃそうだ。領収書なんてものを見たことがないんだから。そりゃ、そうなるよね。俺は村人たちの顔を見ながら話をする。

「この村をラマロン軍の討伐から救う手立てを考えた。要は、ダイタス村がアガルタの国から食料を買ったことにすればいい。ラマロンの街じゃ食料なんて売ってないんだろ？だったら、アガルタから買ったってことにすればいいじゃないかってことだ。それで、軍の奴には、ラマロンに付くかアガルタに付くかという議論は、ラマロンに付くことにしたと言えばいい。アガルタはケチだって言っておけ」

「そ・・・そんなことで」

ジンビは既に肩で息をしている。話の展開に付いて来られないようだ。ということは、ジィフィーロをはじめとする村人は、もっと付いて来られないと考えてよさそうだ。その時、リリスが立ち上がって声を上げる。

「アタシたちは食料がないから毛皮を売って食料を買った。それがたまたまアガルタから食料を買ったってことだろ？何にも悪くないじゃないか！皇国で売ってないんだから！生きるために敵国から食料を買ったんだ。何で悪く言われることがあるんだ？敵の食糧を減らして、味方の食糧を増やしたんだぞ？何で私たちが討伐されるんだ？王様はアタシらに食料を売りましたっていう証拠をくれたんだろ？いいじゃないか！」

その言葉を聞いて、ようやく村人たちも理解できたようだ。リリス、グッジョブだ。

「そういうことだ。雪が解けたらジィフィーロはその紙を軍の人間に渡せ。それまで無くすんじゃないぞ？あと、アガルタはケチだって言うのも忘れるなよ？」

俺はニヤリと笑みを浮かべてジィフィーロを見る。彼女は目を丸くしてコクコクと頷いた。

「さて、持ってきた食料を渡そう。ジンビ、食料の貯蔵庫みたいなものはあるのか？」

「は・・・はい。ご案内します」

俺たちはジンビの家の隣にある建物に案内された。

「・・・見事に何もないな」

「・・・」

ジンビは黙って俯いている。俺はそこに、領収書に書かれていた食

料を無限収納から出していく。

「ま、こんなもんか？」

「ありがとうございます。これでしばらく村は命をつないでいけます。本当に、感謝します」

「いや、これだけじゃもたないだろ？」

「もたない・・・と仰ると？」

「いや、これだけじゃひと月くらいしかもたないだろう？」

「雪が解ければ何とか・・・」

「いや、無理しなくていい。おいソレイユ」

俺は隣にいるソレイユに目を向ける。

「森の精霊たちに、食料を保存している場所を隠してもらうように頼めるか？サイリュースの里みたいに」

「ええ、お安い御用です」

「ジンビ、この食料は非常用に取っておけ。ラマロンの人間が見に来るかもしれん。その時はこれを見せればいい。あとの分は、この森の中に隠そう。森の中に何か目印になるような場所はあるか？」

「そうですね・・・」

俺たちは、ジンビの案内で、村を出てすぐにある大木の前にやって来た。

「おお、この木ならわかりやすそうだな」

そう言って俺はその前に大量の食糧を出していく。米、小麦、野菜、魚、肉、果物・・・。大木の周囲が食料でいっぱいになった。そしてそこに大きな結界を張って、食料をその中に閉じ込める。

「こ・・・こんなにたくさんの食糧を・・・」

「足りなくなったらまた言ってくれ。ちなみに、この結界の中の物は腐らないからな。安心してくれ」

「これで我らは飢えなくて済む。・・・ありがとうございます。ありがとうございます」

そこにいた村人全員が平伏し、口々に俺にお礼を言っている。俺は大テレにテレて、そんなことをする必要はないと何度も繰り返し、そして、ソレイユに村人以外の人間からこの結界を隠してもらうよう、森の精霊たちに頼んでくれと指示を出した。

数日後、ラマロン皇国皇都にある宮殿の一室では、皇国軍統括司令官のケーニッヒ公爵が、一枚の紙を見ながらため息をついていた。

「ご苦労様」

「・・・それだけ、ですか?」

眉間に深い皺を刻み、ケーニッヒを睨みつけているのは、ラマロン軍のアーモンド第三軍司令官である。

「他に何かあるのかい？」

「ダイタス村は、勝手に敵国と交渉したのですぞ？」

「仕方がないだろう？食料がないんだから」

「食料がないのであれば、なぜ皇国に要請しないのです！」

「そりゃ、皇国に食料がないことが分かっているからだろ？」

ケーニッヒ公爵は目を見開いている。コイツ、何言ってんだ？という表情を崩そうとしない。

「ダイタス村は、皇国に頼らず、自分たちの力で食料を調達したんだ。実に理にかなった、無駄のない行動だと思うよ？それとも何かい？アーモンド君は、皇国に、食料がないと分かっていて、それでも、食料を、く、だ、さ、い、と言ってくることが正しいとでも言うのかい？」

「自国の民を飢えさせないようにするのは、国として当然の務めです」

「ない物はしょうがないだろ？いや、君が自分で食料を調達してダイタス村を支援するというのなら話は別だけどね？すごく無駄な行動だと思うけれど、やるのは自由だ。一人でやればいい。皇国に食料は、ない。ダイタス村は、皇国に頼らず、自力で食料を調達した。

偉いねぇ。勲章の一つでもあげたいくらいだよ。それにしてもアガルタはケチだな。ハワンの毛皮でこれだけしか食料を用意しないんだからな。そんなケチな国にダイタス村がなびくと思うかい？」

ケーニッヒ公爵はフフンと鼻を鳴らし、ニヤけた表情を浮かべてアーモンドを見た。まるで、アーモンドを見下すかのような視線であった。それを感じ取ったアーモンドは、黙ったままこぶしを握り締め、ケーニッヒ公爵を睨みつけるのだった。

第百六十一話　招かれざる客

「じゃ、俺はそろそろ帰る。何かあれば・・・そうだな。この箱の中に、知らせたい内容を書いた紙を入れて、外に出しておいてくれ」

ジンビに余っていた木の空箱を渡し、俺はソレイユを促して、アガルタに帰ろうとする。

「そんな！何もおもてなしもせず、このままお返ししては・・・」

ジンビが慌てて俺を押しとどめようとする。

「いや、この村の者と俺が会っているのを誰かに見られたら、それこそややこしいことになるだろう。俺は招かれざる客だ。用が済んだら早々に退散するよ」

村人たちは口々に俺の名を呼んでいる。そんな中を右手を上げ、会釈をしながら俺はイリモの下に歩いていく。まるで選挙中の候補者みたいだ。

「じゃあな！」

俺はソレイユと共にイリモに乗り、森の中を進んでいった。しばらく進むと、この森の精霊であるクレイドルが姿を現した。

「ソレイユ様、リノス様、ご案内いたします」

「ありがとうクレイドル。私たちは・・・山頂まで案内していただ

けるかしら？」

「畏まりました」

森の中に再び精霊たちの道しるべが光輝いた。俺たちはそれに沿ってバンザビ山の山頂を目指した。

程なく山頂に到着し、眼下にイルベジ川を望む。標高の高い山だけあって、ここから見ると、アガルタとヒーデータの国境付近が丸見えだ。

「よーしイリモ、都まで頼むぞ！」

「お任せくださいい」

イリモは翼を大きく広げて、大空に舞い上がった。

イルベジ川に沿って北に進路を取る。遥か彼方にはジュカ山脈やルノア山脈も見える。もう四月になろうというのに、未だに雪が残っていて、空から見ると実に美しい景色だ。標高の高い山だけに雪解けも遅いのだろうなと考えていたその時、全身に凄まじい衝撃を受けて俺は空中に投げ出された。

「ご主人様―！」

ものすごい速さで地面に向かって落下しているその上から、ソレイユの声が降りてくる。俺は慌てて結界を張り直そうとしたその時、落下する速度が急速に落ちた。気が付くと空中でソレイユが俺に抱き着いていて、パタパタと彼女の羽が動いている。どうやらソレイユが背中の羽を使って俺を抱きとめてくれたようだ。

ゆっくりと俺たちは河原に着陸する。そして、その後を追ってイリモも空から降りてきた。

「ご主人様、大丈夫ですか？」

「ああ、ありがとうイリモ。ソレイユが抱き留めてくれなかったら、今頃大怪我だったな」

「突然イリモから落ちたのでビックリしました。お怪我がなくてよかったです」

「ああ、いきなり衝撃を受けて気が付いたら・・・ぐわっ！」

再び俺は衝撃を受けて数メートル吹っ飛ばされる。立ち上がろうとすると、また衝撃を受けて吹っ飛ばされる。

「ぐっ・・・何だ？何が・・・ガハッ！」

吹っ飛ばされてうつ伏せになっているところに、今度は背中に衝撃を受ける。たまらず俺はゴロゴロと転がってその衝撃から逃れようとする。よく見ると俺が寝ていたところが抉れて、小さなクレーターが出来ている。

「柔結界！」

俺は起き上がりながら、衝撃を吸収する分厚い結界を張りなおす。しかも、結界の外殻には、触れた瞬間にとてつもない粘着性を持つ効果を付与した結界を張る。

その直後、一本の細いストローのような穴が結界にできた。それは少しずつ俺の体に迫っていたが、やがてその動きを止める。穴の先端をよく見ようとした瞬間、そこから吹き出すようにして、何か巨大なものが空に舞い上がった。

何とそれは、薄水色の鱗を持った、巨大なドラゴンだった。

「ドラゴン・・・？」

思わず俺は声を漏らす。ドラゴンは背中に生えた二枚の翼をゆっくりと動かしながら、上空にとどまり、じっと俺を見据えている。俺はこのドラゴンに鑑定スキルを発動させる。

ス・ｂｔｒ／ニ３０１（シ．ｊｐｇ・ＸＹ４ｉｓシ）Ｔｔ／／Ｐａ：／／ｔｔ４９ＬＬ：オ・９８團州　ｉｄ９梅寿　３ｄＫ魁玉　ｕｅ５可江　タｕ白鸚　コＳ茶谷　１３／．大芝翫　Ｓｙ５芝乃親父　ｍＡ５岡本町　ＪＡ／明船町　１１ｎ紀尾井町　ｓ６２神谷町　ｏＩ８永田町　６／ｂ

今戸　　７Ｓ１０

助六由縁江戸桜、勧進帳、京鹿子娘道成寺

助六由縁江戸桜：團州　大芝翫　魁玉
勧進帳：可江　芝乃親父　白鸚
京鹿子娘道成寺：岡本町

・・・何じゃこりゃ？文字化けしているのか？・・・これは意図的に書き換えられているようだ。いずれにせよ、鑑定スキルをブロックできるほどのスキル持ちということになる。ということは、かなりのスキルを持ちだ。コイツは油断できない。

上空のドラゴンはゴルァァァというううめき声を漏らすと、体から眩いばかりの光を放った。俺は素早く自分とソレイユ、イリモに最高硬度の結界を張りなおす。

光が収まると、俺の前に見目麗しい美青年が立っていた。

「・・・結界ＬＶ２などと・・・。随分とふざけているのだな」

男だか女だかわからない中性的な声で、青年は話しかけてくる。

「それは、お互い様だろう？お前は一体誰だ？何のために俺を襲う？」

青年はニヤリと笑い、目を大きく開く。

「我は、龍王だ。我のシンジョを返してもらおう！」

「シンジョ？あ～フェアリのことか？あれは俺のペットだ。返せって人聞きが悪いな？フェアリが望んで俺のペットになったんだ。盗んだみたいに言うんじゃねぇよ。てゆうかこの会話、どっかで前に一回やらなかったか？」

「どうあっても、返す気はないのだな？」

「だから言ってるじゃねぇか。フェアリが望んでウチに居るんだ。返すとか返さないの問題じゃねぇだろ？人の話聞けよ」

「仕方がないな。それならば、問答無用だ！」

龍王と名乗る男は、一瞬で距離を縮めて俺のすぐそばに移動する。既に右手がドラゴンの手に変化しており、その爪が俺を襲う。しかしその爪は結界に阻まれる。龍王の動きが一瞬止まる。その瞬間に俺は無限収納からホーリーソードを取り出し、その腕に向けて剣を振るう。

キィィィン！

キレイな、鈴を鳴らしたような音がする。確かに龍王の腕を斬ったはずだが、彼の腕は全くの無傷だった。龍王は一旦上空に飛び上がって、俺と距離を取る。

「無駄だ。我の体は聖なる鱗にて守られている。どのような攻撃も、無意味！フフフフフ」

龍王は不敵に笑っている。確かホーリーソードは邪悪な物に対しては抜群の切れ味を誇っていたんだっけ？ということは、龍王の鱗に

は効かないってことか。そう思った俺は素早く剣を「鬼切」に持ち替える。

「ほう、随分と禍々しい剣だな。フフフフ。それで我が斬れるか・・・試してみるがいい！」

再び龍王が突撃してくる。俺は遠慮なく龍王を脳天から斬り付ける。

龍王は左腕で鬼切の斬撃を受け止めていた。これも、龍王にはノーダメージのようだ。気が付くと龍王の右腕が真っ赤に灼熱している。

「失せよ！」

龍王の左腕から炎が飛び出し、俺にまとわりつく。すぐに俺は結界ごと紅蓮の炎に包まれた。

「ご主人様ぁ―！！」

ソレイユの絶叫が響き渡る。その声に龍王が反応する。

「うん？そなたは・・・サイリュースか？そして・・・ユニコーンペガサス。随分と珍しい者を連れているのだな」

「そうかな？そんなことないと思うけどなー？」

俺は全くの無傷で立っている。俺の声を聞いて振り返った龍王は、目を見開いている。

「我の灼熱を耐えきったというのか・・・。やはりただの結界師ではないな？」

「いや、俺はＬＶ２の結界師だ。でも、あまり油断しない方がいいぞ？」

「人間の分際で言わせておけば！よかろう。どうやら貴様は、苦しんで死にたいらしいな」

そう言うと龍王はみるみる小さくなった。そして、姿が消えた。

「なるほど。目に見えないくらいに小さくなって攻撃をしていたのか。考えたな」

俺は先ほどと同じ「柔結界」を張りなおして、攻撃に備える。

その瞬間、俺の結界に衝撃が走り、ヒビが入る。次々と衝撃が走り、結界にヒビが入っていく。結界が割れる直前になって、ようやく攻撃の手が止まった。

「ほほう。これだけやってもまだ結界が破れぬとは・・・。やはり神結界が扱えるのか？しかし、もうその結界はもう、使い物にならんぞ？」

どこからともなく龍王の声が聞こえる。

「まさか粘着部分を凍らせて攻撃してくるとは思わなかった。やはり龍王はダテじゃないな」

実際のところを言うと、あの攻撃はかなり焦った。俺は再び結界の硬度を上げる。これならば結界が割れることはないが、龍王にダメージを与えることもない。俺は息を整えながら、無限収納から「黒

刀」を取り出す。そして刀を腰に差して居合い抜きの態勢を取る。

「何をするのかは知らんが、大人しくシンジョを返せば、命だけは助けてやるぞ？」

「だ、か、ら、フェアリが望んでウチに来たって言ってんだろ？アホなの、お前？いや、アホなんだろうな。どうしてこうも話が分からんかなー」

「死ねぃ！」

俺は目を閉じて気配探知と魔力探知を駆使して龍王の気配を探る。捉えた！と思った瞬間に俺は黒刀を抜きはらった。バキッという鈍い音と共に、凄まじく固いものを斬った感触が伝わってくる。龍王はゴアァァァァという叫び声と共に、上空に人型になって姿を現した。

「何ということをする！・・・怪我でもしたら、どうするのだ！」

龍王の言葉を聞いて、俺は思わず失笑を漏らした。

第百六十二話　こちらにおわす方をどなたと心得る

龍王は上空から、笑い声を上げる俺を睨みつけている。その時、俺の顔に何かがポロポロと落ちてきた。

「何だこりゃ？」

見ると銀色の、メタリック調の、金属のようなものだった。ツルツルしていて、とても肌触りがいい。

「あああ！何ということだ！何ということを！！」

龍王が絶叫している。見るとヤツは自分の腕を見ながらワナワナと震えていた。

「我の・・・腕の鱗が・・・」

どうやら俺の顔に落ちてきたのは、龍王の鱗らしい。黒刀が当たった時に、どうやら傷がついたらしい。

「人間如きに体を傷つけられるとは・・・。許さん・・・許さんぞ！！！」

龍王の体から光が放たれる。そしてそこには元のドラゴンの姿に戻った龍王が居た。しかも体が真っ赤になっている。ゴルルルルと雷のような鳴き声を上げながら、ゆっくりと地面に降りてくる。先ほどとは違い、かなりの殺気を帯びていて威圧感が半端ではない。これはマジでヤバそうだ。

俺は龍王に向けて神結界を張る。どんなドラゴンでも破れない硬度を持った結界だ。それを縮小させていき、龍王を圧縮して潰そうとする。

・・・パーン。小さな風船が割れるような音がした。見ると、龍王に張った神結界が粉々に砕けている。しかもそれは消えずに、まだ龍王の周囲に漂っていた。

「グワァァァッ！」

龍王がぐるりと首を大きく回すと、周囲に漂っていた結界の破片が俺たちに向かって飛んできた。反射的に思わず腕で顔を覆ったが、あらかじめ張ってあった結界のために、俺たちは全員無傷だった。しかし、その周囲は、結界の破片で地面のあちこちが抉れていた。

「神結界を破りやがるのか・・・。なかなか面倒くさいヤツだな。コロコロと色を変えやがって・・・上等だ。こうなりゃ肉弾戦だ。ボッコボコにしてやんよ！」

俺は黒刀を握り締めて龍王の下に近づく。それを見たヤツは大きく息を吸い込み始めた。

「ブ、ブレスを吐きやがるか！」

俺は全力で周囲に結界を張ろうと、魔力を集中させる。その時、

「静まれ」

落ち着いた子供のような声が聞こえた。ふっと声のする方を向くと、

そこには白いローブを着た神龍様が立っていた。

「静まるのら」

いつの間にか俺の隣に移動していた彼は、落ち着いた声で話しながら、俺の左足にそっと触れる。その瞬間、俺の体が硬直する。ドラゴンは既にブレスを吐く直前の態勢で、口の周囲に銀色の光が集まっていた。

「あ・・・ブレス・・・ブレス・・・」

喘ぐような声を出す俺を尻目にかけながら神龍様は、スタスタとドラゴンに近づいていく。そして、ゆっくりと人差し指を天に向ける。

「静まるのら」

その瞬間、ドラゴンの動きが止まる。口の周りも光を失っていく。

「ゴ・・・ゴア・・・こ・・・この・・・気配は・・・」

「静まるのら、二人とも」

その声を聞いた直後に、体が軽くなり、身動きができるようになる。それはドラゴンも同じようで、首をゆっくりと左右に動かしながら俺たちを観察している。

「バカな奴らー。こんなところでブレスを吐くと、ここらが焼け野原になるのらー」

「ま・・・まさか・・・神龍様？なぜ・・・」

「私が召喚しました！」

ソレイユが俺たちの傍に走ってくる。

「すみません、ご主人様。思わず神龍様を召喚してしまいました」

「いや、いいソレイユ。それにしても神龍様、申し訳ありませんでした。こんなところに呼び出して」

「気にしなくていいのらー。我もこの姿になるのに時間がかかったのらー。許すのらー」

のほほんと話している神龍様にドラゴンがズシンズシンと足音を立てながら歩いて来る。そして顎を地面につける。どうやら平伏のポーズを取っているようだ。

「神龍様・・・。お目にかかれまして光栄でございます」

「おー。久しぶりなのらー」

「この度は、我が失態・・・。弁解の余地もございません」

「うーん？何の話らー？」

「その・・・。シンジョの一人を逃がしてしまい、そのまま捨て置きましたことを・・・」

「それは初めて聞いたのらー。我はただ、契約した主に呼ばれて出てきただけなのらー」

「け・・・契約、と仰いますと？」

「うーん。そこのサイリュースと契約してやったのらー。我の主らー」

「し・・・神龍様が契約・・・・。主・・・・？その・・・・サイリュースが・・・・？」

ソレイユは申し訳なさそうな顔をして、ペコペコと頭を下げている。

「で、お前と戦っていたのが、我の主の主らー」

「え？神龍様の、主の主？？？」

「おーう。とても美味いものを食わせるのらぞ？おい主、また前のアレを食わせるのらー」

神龍様は俺の方を向いて笑顔を見せる。

「はい、いつなりとも喜んで！」

俺は直立不動で返事をした。このドラゴンがここまでビビる相手なのだ。俺がどれだけ頑張っても勝てない相手なのは明白だった。

神龍様が人化しているのに、ドラゴンが何もしていないのは失礼だと思ったのか、ヤツも人化する。ゴンやフェリスも人化することができるが、人化をした直後は基本的に全裸なのだが、この二人は何故か服を着ている。後で聞いたら、魔力で服を作れるのだそうだ。これはソレイユに言わせると、何千年の時をかけて魔力を錬成しな

いとできないスキルなのだとか。試しに俺もやってみたが、全く出来なかった。

そして俺は、神龍様の仲介の下、なぜ今になってこのドラゴンがフェアリを取り戻しに来たのか、その理由を聞くことができた。

このドラゴン＝龍王は、既に年齢は３００，０００歳を超えているらしい。コイツは神龍様の姿を直接見ることができ、その上、神龍様の言葉を聞くことができる。その「神託」を伝えるのがこのドラゴンの役目であり、さらにこのドラゴンの声を聞くことができるのが、彼らの言う「シンジョ」と呼ばれるドラゴンたちである。

神龍様は、天候と大地、その中でも特に水を操ることが得意な精霊であり、その水の流れを中心とした大地の動きと風の向き、雲の流れなどから、天変地異を知ることが出来るのだという。神龍様は事前に察知した天変地異をこのドラゴンに伝え、そして、彼は天変地異が起こる場所の近くに住まうドラゴンたちにシンジョを通して情報を伝えていたのだ。

龍王と呼ばれるドラゴンの声を聞くためには、フェリスらが持っている「念話」のスキルでは聞くことが出来ず、さらにレベルの高い「思考転写」のスキルが必要なのだという。それには膨大な魔力が必要であるため、「シンジョ」の才能を持つドラゴンはひたすら、魔力を上げる修練を課されることになるそうだ。これは俺も経験があるが、本当に辛いのだ。気絶するまでＭＰを使い、起きて、またＭＰを使い切る・・・。今、それをやれと言われると、俺は全力で拒否したいくらいにツライものなのだ。

ちなみに、「思考転写」というスキルは言葉だけでなく、鮮明なイメージを伝えることが出来るのだという。送られてくるイメージは、

ＭＰの量に比例して鮮明なものになるらしく、そのために、「シンジョ」と呼ばれるドラゴンは、できるだけＭＰ容量を大きくすることが必須になるのだ。どうりで出会った頃のフェアリのＭＰが、年の割にケタ外れに多かったのは、そのためだったのだ。

「うーん、まあ、そのシンジョは主の主のところにいるので、心配ないのらー」

「しかし、神龍様。そのお言葉を賜ることが出来るのは、私だけかと存じます。私の思念転写は、龍族の張る結界内でしか、シンジョたちは聞くことができません。従って、この男のもとにいるシンジョは、フェアリー族に一旦返して貰わねばなりません」

「ああ、それならば心配ないのらー。我の言葉は主を通して伝えるのらー」

「お、恐れながら神龍様。神龍様のお言葉をこのサイリュースが賜りますと、肉体が崩壊するかと存じますが・・・」

「うん？我がこの姿になって伝えれば、問題ないのらー」

「そんな・・・何と恐れ多い・・・」

ドラゴンは元々薄青かった鱗をさらに青くして、恐縮している。神龍様が人化してお出ましになること自体がとんでもないことのようだが、よく考えると、下手をすれば俺とソレイユがエロいことをしている最中に、いきなり現れる可能性もあるということだ。それは、できれば、避けたいものだ・・・。

「よいのらー。この者たちは、美味いものを食わせる。よいのらよ

いのらー」

俺たちの心配をよそに、神龍様はケラケラと笑っている。こうして見ると、見た目は白髪だが子供っぽくてカワイイ。

なお、この龍王は、フェアリが逃げ出したことについては把握していたという。しかし、ドラゴン族の中では最弱に近いフェアリー族のシンジョである。彼からしてみれば、シンジョも守れぬドラゴン族はドラゴン族ではないという考え方であったそうで、結局フェアリードラゴンたちを罰することもなく、特に何もしようとしなかったらしい。

しかし、数か月前、この龍王は神龍様の気配を感じた。何事やあらんと緊張してお言葉を待っていたそうだが、待てど暮らせど神託は降りてこなかった。彼はおそらく近いうちに神託があるだろうと予想していたが、しかし、その時になってフェアリー族のシンジョがいないということが万が一、神龍様にバレると、自分は神龍様の信頼を失う。そうなる前に、フェアリを奪還しようと考え、血眼になって探したところ、飼い主の俺を発見したというわけだ。

最初、龍王は帝都の屋敷を襲おうと考えていたそうだ。しかし、強力な結界が張られているのと、クルルカンのフェリスの気配と、ジェネハをはじめとするハーピーたち、挙句にはベリアルであるペーリスの気配を感じたので、断念したのだという。これだけの戦力を相手にするには、いかに龍王と言えど手こずることは目に見えており、その間に俺に連れ去られてしまえば、全てが水の泡になるのだ。

そこで龍王は、この結界を張っている俺を先に抹殺しようと、機会をうかがっていたというわけだ。

「何だそりゃ？龍王のくせに、意外と気が小さいんだな」

「貴様、誰にものを言っているのだ！」

龍王が鱗を赤くして怒っている。

「その方こそ、誰にものを言っているのら？この者は、我の主の、主になる者ぞ？」

「くっ・・・ははっ」

龍王は悔しそうに頭を俺に下げる。

「いや、俺に気は使わないでくれ。それにしても、神龍様の神託っていうのは、そんなに頻繁に出るものなのか？」

龍王はぷいっと横を向いたまま、口を開く。

「最後に神託を賜ったのは、数年前だ。その前の神託は・・・１７年前に賜った」

「数年前の神託って・・・？」

「おー。ジュカ王国でとんでもない邪悪な魔物の気配を感じたのらー。我でも手こずりそうな相手らったので、全てのドラゴンに縄張りから出ることを禁止したのらー」

「確かに、あの時の邪気は、凄まじいものがございました」

懐かしそうにその時の話をする二人。そして、ソレイユも、そうだ

ったですわね～とその会話に参加している。俺はその三人を見ながら、心の中で静かに手を合わせて詫びるのだった。

第百六十三話　アガルタ攻略作戦

四月も半ばになってようやく、春を感じさせる暖かい風が吹くようになった。

ラマロン皇国皇都の宮殿からは、海が一望できる。その海に一艘の船が進んでいるのが見える。

船には、黒いボレロのような服を着た、長身の男が乗っていた。男は太陽の光を眩しそうに手で遮りながら、断崖絶壁の上に立つラマロン皇国の宮殿を見上げていた。そして、今年は例年よりも春が遅いと思いつつ、下船の準備に取りかかるのだった。

皇国の宮殿内にあるサロンには、正装したケーニッヒ公爵が客人の到着を待ちかねていた。このサロンは貴人をもてなすための部屋であり、大理石のような美しい光沢を放つ石で作られた、縦長の部屋であった。

「お見えになりました」

部下の、客人の到着を知らせる声を聞いて公爵は姿勢を正す。その直後、タイミングよく客人が入室してくる。

「これはこれは、アリスガード司教。遠方よりはるばるのお越し、痛み入ります」

「ケーニッヒ様、ご機嫌麗しく何よりでございます」

アリスガードと呼ばれた男は、長身の体躯を折り曲げるようにして、恭しく一礼をする。

「船でお着きになったその足で宮殿に来ていただけるとは・・・。恐縮の限りです」

「いえいえ。この報告を一刻も早くお伝えせねばと思っておりましたもので・・・。私の方こそ、ご迷惑も顧みずに押しかけまして、恐縮いたします」

そう言いながらアリスガードは、懐の中から恭しく一通の書簡を取り出す。

「我らが教皇、ジュヴアンセル聖下からの書簡でございます」

「拝見いたします」

ケーニッヒはその書簡をじっと見つめ、ニヤリと笑みをこぼした。

「さすがは教皇聖下であらせられます。くれぐれも、くれぐれもよしなにお伝えください」

ケーニッヒはアリスガードの手を両手で強く握りしめる。

「我らクリミアーナ教は、いつ如何なる時も、ラマロン皇国の味方です。主神様であらせられる、クリミアーナ様のご加護がありますように・・・。必要なものは、もうすぐ到着しますので、お待ちくださいませ」

アリスガードはケーニッヒの手を両手で握り返しながら、やさしく

彼に微笑みかけた。

数時間後、宮殿の一室に、ラマロン皇国皇帝以下、主だった者が集められていた。そこには当然のごとく皇太后・レイシスが皇帝のすぐ後ろに控え、宰相のマドリンや、皇国軍総司令官のカリエスなども顔を揃えていた。

全員が揃ったためか、会議室の扉が静かに閉じられる。一瞬の静寂をおいて、ケーニッヒ公爵が立ち上がり、皇帝に一礼をした後、席に座る者たちを見回す。

「陛下にご臨席をいただき、諸侯に集まっていただいたのは他でもない。昨年から我らを悩ませている、アガルタ国の討伐について論じたいと思う」

その言葉を聞いて、宰相以下、集まった人々の顔が固まる。しかし、皇太后は相変わらず柔らかな笑みを浮かべている。その皇太后をチラリと見て、ケーニッヒはさらに言葉を続ける。

「すでに雪の大半は解けた。山国とはいえ、アガルタの雪も解けた頃だろう。今こそ、アガルタと昨年来の雌雄を決する時だと私は思う。諸侯の意見を聞きたい」

宰相のマドリンは目をパチパチさせながら、ケーニッヒの提案に反論する。

「公爵様。恐れながら、春の収穫がまだ済んでおりません。また、春の収穫だけでは、アガルタを攻めるだけの十分な兵糧にはなり得ません。食料を持たずに攻めるとでも仰るのですか？」

「それは、いくら何でも難しいだろう」

カリエス将軍がマドリンの発言を擁護する。それを受けてマドリンはさらに言葉を続ける。

「公爵様、一体どれだけの兵で攻められるのかは存じませんが、例えば一万の兵を率いて攻めたとして、最低でも二週間分の食料が必要になるでしょう。しかし、一万の規模でさえ、春の収穫で用意できるのは一日分です。それだけでは・・・」

「そのような無駄な議論はやめよ!」

ケーニッヒが強い口調で、マドリンの言葉を遮る。

「何度同じ議論を繰り返せば済むのだ!兵糧がない、兵糧がないなど・・・!なければ何故、調達しようとしないのだ!我らはジュカの地を奪われているのだぞ?このまま敗北したままでよいのか?奪われたら奪い返す!それが皇国の取るべき姿勢ではないのか!」

部屋が水を打ったように静かになる。ケーニッヒは、集まった人々に視線を送りながら、さらに言葉を続ける。

「私は、諸侯に絶望している。諸侯に陛下に対する忠誠心はないのか!昨年、陛下は仰せられたではないか!アガルタを攻めよと!そのご命令から早、一年だ。この一年間、諸侯は何をしていた?陛下のご命令を遂行しようともせず、不作だ凶作だと言って、宮殿に備蓄している食料まで下賜していただくよう奏上する始末。陛下のお慈悲によって食料が下賜されたにもかかわらず、そのご恩を返そうともしない!今日は諸侯にそのご恩を返す機会を作ったつもりだっ

たが、相変わらずの不毛な議論。私はもう、我慢がならない！これならば、大失敗ではあったが、それでもアガルタを攻めようとした亡きジゼウ軍団長の方が、遥かにマシだ！！」

ケーニッヒは、集まった諸侯を舐めるように見回している。そんな光景を皇太后は満足そうに頷きながら見守っている。

「それでは・・・統括司令官殿には、何か作戦があるとでも仰るのですか？それでしたら、承りたい」

半ばあきれたような顔をして発言しているのは、第三軍軍団長のアーモンドだ。ケーニッヒはアーモンドに冷たい視線を向けながら口を開く。

「皇国の騎兵部隊の全て、総勢五万をもって、アガルタの都を急襲する。占領後は、速やかにアガルタの各地を陥落させる。騎馬隊の機動力を生かして、疾風迅雷の如く奴らに襲いかかるのだ！」

「・・・公爵殿、お見事な作戦かとは思うが・・・。それよりも、肝心の兵糧はどうするのだ？」

落ち着いた声で発言するのは、カリエス将軍である。そんな彼をケーニッヒは鼻で笑う。

「食糧、食糧と・・・。あなた方はそれしか言わない。それ以外の話はできないのか？」

「最も重要なことだ。腹が減っては戦が出来ぬ」

「カリエス将軍も耄碌したのですね？私が食料のことを解決せずに、

この作戦を立案していると思っていますね？食料の問題は解決しています。既に港から、十万人分の食料が皇都に送られているところです。量が量だけに輸送に手間取っていますが、本日の夜には到着するでしょう」

宰相のマドリンは目を丸くして驚いている。

「そ・・・それほどの食料をどうやって・・・」

ケーニッヒはヤレヤレといった表情でマドリンの顔を見る。

「クリミアーナ教に協力を仰ぎました」

「なっ！？クリミアーナ教？」

「ええ。我らが国教であるクリミアーナ教です。ジュカに出現した大魔王は、ヒーデータに占領されてアガルタと国名を改めても未だ生きている。その大魔王をラマロンが討伐する。ついてはその食料を支援いただきたいと教皇様にお願いしたのです。教皇様は即座に食料を送ってくれました。従って、食糧の心配はない。皇国は好きなだけ皇国の戦いができるのです」

「お待ちください！クリミアーナ教とは・・・」

マドリンが大きな体を机に投げ出すようにして声を上げている。しかし、その声をかき消すように、ゆっくりとした、しかし乾いた音の拍手が鳴り響いた。

手を叩いているのは、皇太后だ。

「すばらしい。すばらしいではありませんか！さすがはケーニッヒ公爵。貴殿だけですね、真に陛下の御身のことを考えておいでになるのは。国家の柱石とは、まさに公爵様のためにあるような言葉です」

「ははっ。勿体のうございます」

ケーニッヒは皇太后に恭しく一礼をする。

「して、公爵様。アガルタにはどのようにして攻め込まれるのですか？」

「はい。まずは各地からの軍勢を吸収しつつ、バンザビ山の麓まで参ります。そして、アガルタとの国境である、イルベジ川を越えたところで、馬にて都を急襲します。国境から都まで馬で駆ければ一日半です。夜陰に乗じて進めば、敵に戦いの準備をする時間を与えずに、都を占領することが出来るかと存じます」

「なるほど・・・。この春の時期にアガルタを占領すれば、秋にはアガルタの豊富な作物が手に入る・・・。実に無駄のない、見事な作戦かと思います。公爵様は、よくぞ陛下のお心に沿う作戦を立てられました。私は大いに満足です」

「ハハッ、恐れ入ります！」

皇太后は、集まった諸侯を見回しながら言葉を続ける。

「私は、公爵様の作戦は素晴らしいと思いました。その作戦の可否はこの場で論じてください？まあ、私は、その作戦を進めるのが妥当とは思いますが、何分素人ですから・・・オホホホホ」

そんな皇太后を察してか、皇帝がゆっくりと皇太后に顔を向ける。

「お母上様。ご心配には及びません」

皇帝は集まった諸侯に向けて宣言する。

「今後は、ケーニッヒ公爵の作戦を、いかに効率的に進めるか、この一点に絞って論ぜよ」

「お・・・恐れ入り奉ります、陛下。あの・・・公爵様、皇都の守りはどうなさるのでしょう?」

閣僚の一人が恐る恐る発言する。ケーニッヒはその言葉にうんうんと大きくうなずく。

「なるほど、心配ごもっともです。皇都の守りは・・・。カリエス将軍、貴方にお任せいたします」

「・・・」

カリエスは静かにケーニッヒを見つめる。

「貴方にお任せしている部隊は、皇国軍の中で最も臆病者が集まる部隊だ。戦場に出しても役に立たないでしょうから、大人しくこの皇都を守っていてください」

その時、すかさず皇太后が口を開く。

「おお、そういえば、カリエス将軍は以前私に、アガルタ王と刺し

違えると申していませんでしたか?あのお話はどこにいったのでしょう?まさか、お忘れか?ご自身が仰ったことを実行できない・・・。そのような臆病な者が指揮する部隊が、果たして皇都の守りを任せられましょうか?」

皇太后は露骨に嫌そうな顔をしながら、横目でカリエス将軍を睨んでいる。しかしカリエスは彼女と一切目を合わせることなく、涼しい目でケーニッヒを見続けている。

「皇太后様、万に一つも、この皇都が攻撃されることはありません。昨年以来、各地で皇国に盾突く反乱分子どもは残らず捕らえて処刑しております。従って臆病者でも役目は果たすことは十分可能です。仮にも将軍の称号をいただいているのですから、せめて一つくらいの功績は立てていただきませんと」

「まあ、なんと慈悲深い。さすがはケーニッヒ公爵ですね」

ホホホホホと皇太后の、機嫌のよさそうな笑い声が部屋中に響き渡った。

第百六十四話　公爵は、捕らぬ狸の皮算用がお好き

ラマロン皇国宮殿の長い廊下を、一人の若者が颯爽と歩いている。一切の迷いを感じさせないその足取りからは、男の満ち溢れた自信と、確固たる意志を感じ取ることが出来る。

廊下を歩いているのは、ラマロン皇国軍統括司令官である、ケーニッヒ公爵である。その彼の歩みを、まるで邪魔をするかのように背後から声がかかる。

「待て！ケーニッヒ！」

彼は立ち止まる。そして、眉間にしわを寄せたまま、ゆっくりと声のする方を振り返る。そこには、カリエス将軍とアーモンド司令官、そして、その他の軍司令官が全員顔を揃えていた。

彼らはゆっくりとこちらに向かって歩いて来る。そしてその後ろを、巨体を揺らしながら、人が歩く速度と同じ速さで宰相のマドリンが走ってくる。

「一体どういうつもりだ、ケーニッヒ？」

歩きながらカリエス将軍はゆっくりと、落ち着いた声で問いかける。しかし、ケーニッヒはそれに対し、鼻で笑って答える。

「どういうつもりとは、仰る意味がわかりませんね」

「公爵様・・・何故・・・勝手にクリミアーナ教から支援を受けた

のです」

宰相のマドリンが息を切らしながら問いかけてくる。

「それを説明する必要はない。食料が足りないから、ある所から支援してもらった。それだけです」

ケーニッヒは踵を返して、その場を離れようとする。

「お待ちください！あのクリミアーナ教が何の見返りもなく動くとは思えません！せめて、どのような条件で食料を支援いただいたのか、それだけでも教えてもらいたい！」

マドリンの大きな声が耳ざわりだと思いながら、ケーニッヒは面倒くさそうに振り返る。

「ジュヴアンセル教皇聖下のお孫様を、我が妻として迎えることにしたのです。さらには、教皇聖下の甥御様に当たられるカッセル様を陛下のご養子として迎えるのです」

「妻・・・とは。奥方のジェリファ様はどうされたのですか？それに、陛下にご養子を迎えるなどと、そんな話は、宰相たる私は聞いておりませんぞ！」

「私が、皇太后陛下と皇帝陛下に奏上しましたところ、即座にお許しがでましたので、そのようにお返事をしたまでです。妻は離縁しました。結婚して三年。子供が出来ませんでしたからね。いい機会でしょう。もうよろしいですか？それでは、準備がありますので、私は失礼します」

「準備？ケーニッヒ、一体いつアガルタに攻め込のだ？」

カリエス将軍が頓狂な声を上げる。それに対し、ケーニッヒは目を丸くして答える。

「いつ？すぐに決まっているでしょう！今からでも出陣したいくらいだが・・・。まあ、いろいろと準備もありますから、早くても一週間から十日後には出陣します」

ケーニッヒはカリエスの後ろに控えている司令官たちに視線を送る。

「あなた方も、そのつもりで準備にかかってください！」

そう言ってケーニッヒは再び、颯爽と歩き始めた。宰相のマドリンは深い息を吐きながら前かがみになった。

「何ということを・・・。公爵様は、皇国をクリミアーナ教に支配させるおつもりか・・・」

「・・・なるほどな。ケーニッヒは、以前からクリミアーナ教が我が皇国と誼をさらに深めたいと望んでいたのを利用したのだな。確かに、ケーニッヒは皇帝陛下のご一族に連なる者。奴との婚儀は、クリミアーナ教からすれば願ったりかなったりだろう。これで奴はさらに強力な後ろ盾を得ることになるな。しかし、陛下にご養子を迎えるという話は解せぬ・・・。なぜそこまでするのだ？皇太后陛下も皇帝陛下も、なぜそんな話を許可したのだ・・・？」

カリエス将軍は、顔を強張らせたまま、ケーニッヒが歩いて行った廊下をじっと見据えている。

「・・・いずれにせよ、皇国は、クリミアーナ教の干渉を受けることになる。教会は・・・そんなに甘い連中ではない」

呆然とした表情で、マドリン宰相は呟く。

「宰相殿、それは、ケーニッヒの作戦が上手くいったらば、の話だ」

「何？将軍はまさか・・・公爵様の作戦が失敗するとでも・・・？」

「いや、そうならねばよいなと思うだけだがな。ケーニッヒも十分に作戦は練っているのだろう。私は、皇都を守りながら、戦いの趨勢を見させてもらうとしよう」

一人納得したようにうなずくカリエス将軍。その時宮殿内に、春の暖かな風が吹き込んでくるが、マドリン宰相以下、そこに集まった者たちには、その温もりを感じる余裕はなかった。

数日後、ラマロン皇国の宮殿内では、華やかな舞踏会が開かれていた。皇太后と皇帝が隣席の下、きらびやかに着飾った貴族たちが会場を埋め尽くしている。彼らは実に楽しそうだ。それもそのはずで、この場において皇国がアガルタ国に再度侵攻することと、その総司令官には、ケーニッヒ公爵が就任すること、そしてさらには、ケーニッヒの結婚と皇帝陛下に養子を、クリミアーナ教の教皇一族から迎えることが発表されたのである。

集まった貴族たちは、皇国の勝利と、その後の繁栄を疑わなかった。皇帝からは、この度の婚儀と養子縁組の祝いの一つとして、クリミアーナ教の教皇から十分な食料の支援が得られたと発表されていた。食料さえあれば皇国が負けるはずがない。誰もがそう信じていたの

だ。

この舞踏会の主役はケーニッヒだった。彼は波のように押し寄せる貴族たちの挨拶を、満面の笑みで受け続けた。その一方で、これから先、どの貴族が自分の派閥に加わり、役に立ちそうであるのかを見極めることも、彼は忘れなかった。

舞踏会が一段落した頃、ようやく彼は休息をとることが出来た。彼は副官として務めている部下が差し出す飲み物で喉を潤しながら、ため息をつく。

「さすがは貴族の連中は鼻が利くね。今まで見向きもしなかった者たちが、しっぽを振って私に近づいてくる」

「それは仕方ありません。司令官殿は何といっても、クリミアーナ教皇聖下のお孫様を妻に迎えられる御方なのです。世界最大の宗教組織であるクリミアーナ教が背後にいる御方ですから、それは貴族たちも近づきになりたいと思うのは、当然のことです」

副官の男は、姿勢を崩すことなく、言葉を続ける。

「しかし、本日の催しには、閣僚と軍関係者が一人も参加しておりません」

「ああ、放っておけ。どうせ私に対する当てつけだろう。出陣の準備が忙しいとか何とか言って来ないというのは、まあ、彼ららしいじゃないか」

ケーニッヒはニヤニヤと笑いながら、グラスの中の飲み物を見る。

「他の司令官殿や閣僚らはやはり、教皇聖下のご一族を陛下のご養子とするのが、納得いかないようです」

「フフフ。カッセル様は御年８歳だ。カッセル様おひとりでは何もできないだろう。そこを上手く皇国側に取り込むのだ。当然、私の妻も、な」

「なるほど・・・それを聞いて安心いたしました。私のような凡庸な者では、思いもつかない戦略でございます」

「カッセル様は、まずは皇太后陛下のお側にお迎えする。そこで陛下直々にご養育をいただくのだ。妻は当然私が教育する。この二人からの要求は、さすがの教皇も首を縦に振らざるを得ないだろう。クリミアーナ教を取り込めば、皇国は労せずして、世界一の国家となる。フフフ、実に効率的だろ？」

「実に、お見事な戦略です。脱帽でございます」

副官の男は恭しく一礼する。その時、部屋の扉がノックされ、一人の男が入室してきた。それは、クリミアーナ教のアリスガードだった。ケーニッヒは椅子から立ち上がって、この男を大きく両手を広げて、大仰に出迎える。

「おお！これはアリスガード司教！なかなかごあいさつにも伺えず、失礼しました」

アリスガードは柔和な笑みを浮かべている。

「いえいえ。本日の主役は公爵様。こうした催しでは動けぬこともあるでしょう。その点は十分理解しておりますから、どうぞお気に

なされずに」

「いや、そう言っていただくと、助かります」

「私は明後日、クリミアーナ国に向けて出航いたします。本日、陛下から公爵様とヴィエイユ様の婚儀を発表していただきました。私は一刻も早くこの知らせを、教皇聖下にお伝えしなければなりません。婚儀の日取りは、討伐が終わってからになろうかと思いますが、吉報をお待ち申し上げております」

「ええ、首を長くして待っていてください。おそらく、アガルタの討伐は、時間はかからないかと思います。遅くとも、春が終わるまでには、アガルタ占領のお知らせすることが出来ると思います」

「さすがは、皇国の柱石と言われるお方。何と頼もしい」

「今後とも、皇国と、このケーニッヒをよろしくお願いいたします」

「こちらこそ」

二人の男は、笑顔でお互いの両手を握り合った。

二日後の朝、ケーニッヒは、意気揚々と皇国軍騎馬隊を連れて皇都を出た。それを見送る民衆の声と、軍楽隊が打ち鳴らす音は、広い皇都中に響き渡っていた。その喧騒の中、皇都防衛を任されたカリエス将軍は、宮殿の一室から静かにこの出陣を見送っていた。そして、別の部屋では、宰相のマドリンも、この出陣を不安そうな顔で見送っていた。

この皇都の盛り上がりは、出港しつつある船でも聞くことができた。その喧噪を聞きながらアリスガード司教は、ゆっくりと遠くなりつつある皇国の宮殿を見つめていた。

「我が主よ、我らに恵みを与え給え。そして、悪を、滅し給え・・・」

アリスガードは天を仰ぎ、主神、クリミアーナに敬虔な祈りをささげるのであった。

第百六十五話　無駄を利用する者、省く者

「ルルッル～ルルルルッル～ルルルルルル～♪ルルッル～ルルルルルッル～ルルルルルル～♪ランララ～ラララララァッ！チャラララララララララララ～♪」

聞いたこともない不思議なメロディーを口ずさみながら、都の湖を眺めているのは、アガルタ国の国王、リノスである。手を後ろに組み、体を揺らしながら相変わらず、不思議な音を奏でているが、その姿からは怒りや憎しみといった負の感情は微塵も感じられない。ようやく訪れた春を心から楽しんでいるように見える。

しかし、王の視線の先には、かつてあったジュカ王国の王城跡・・・現在では巨大な岩があり、その視線を下ろすと、湖一面に何やら怪しげな物が浮かべられている。普段は美しい湖面が、この物体のお陰で景観を大きく損ねている。ジュカ王国時代を知る者が見れば、激怒してもおかしくない光景が広がっている。

「春だねぇ～。春だ。いいなぁ、春は。何てったって花粉症がないのがいいね！やっぱりこの世界の気候かな～。環境かな～。この体のせいなのかね？でも、花粉症になっているヤツ見たことないからな～。この世界には花粉症はないのかね～」

一人でブツブツと意味の分からない言葉を羅列しているアガルタ王。彼は時折、こんな理解不能な独り言を呟くときがある。周囲の者は、日々の激務に晒されている王に気を使って、こういう時は生暖かい目で見守ることにしているのだ。

そんな王の背後に人の影が近づいてくる。その足取りは、特に王に気を遣うこともなく遠慮というものを感じさせない。

「おう大将(てぇしょう)！どおでぇ、コイツらの出来栄えはよ？」

「ああ、ゲンさんか。思った以上に大きいな。それに、こんなに作れと言った覚えはないんだけどな。こりゃ、こいつらが消えるまでは、一年はかかりそうだな。・・・まあいい。余ったら余ったで、考えるよ。ありがとう」

「いいってことよ！沢山あるに越したことぁねぇじゃねぇか！丈夫に作ってあるからよ？ちょっとじゃそっとじゃ壊れねぇよ！」

アガルタ王は苦笑いを浮かべて、まだ寒さの残るこの時期にもかかわらず、褌に半纏を一枚着ただけの恐ろしく薄着のこの男に、丁寧に礼を言うのだった。

執務室に帰ると、窓の外にフェアリードラゴンが中を伺っている。そして俺の姿を見つけると、鼻先で窓をノックする。俺は窓を開けてソイツを部屋の中に入れる。

『どうした？』

『ラマロン軍が動き始めました。ラマロンの都をはじめ各地の都市から、軍勢が出発しています』

『どのくらいの規模かわかるか？』

『まだ、そこまでは・・・。ひとまず、監視を続けます』

『ああ、頼む。決して無理はするな』

そう言って俺は窓を開けてやる。その直後、フェアリードラゴンの姿が消えた。

「全くこの時期に何をしようとしてやがるのか・・・。かなわんな」

そう言いながら俺は窓を閉め、机の鈴を鳴らして、ラファイエンス以下、主だった者を集めるように伝えた。

約一時間後、会議室にはラファイエンス以下、十名の者たちが集合していた。

「おそらく、アガルタに再度侵攻してくる軍勢に間違いあるまい」

ラファイエンスは、顎に手を当てながら、机の上に広げられた地図を見ながら呟く。

「私もそう思います。前回のごとくバンザビ山を迂回してイルベジ川に至り、そこから北進してアガルタに至るつもりなのでしょう」

クノゲンが、地図を指さしながら自分の予想を説明していく。

「まじか・・・ヤツらは今、アガルタを攻める気なのか？」

「何といわれるリノス殿、我らアガルタ軍はいつでも迎撃できる体制を整えている。今すぐ出撃せよと言われても十分対応できるのだぞ？」

ラファイエンスが胸を張る。

「食料については、全く問題ありません。最悪、この都が包囲されても、一年間は都の人々を養えるだけの食糧は備蓄しています」

ルアラが適確に現状を説明してくれる。

「わかった。う～ん、そうだな。一旦、敵の装備を確認したい。何か新しいものを開発しているのかもしれん」

「いや、リノス様。皇国軍の兵糧が心配だ」

「どういうことだ、マト？」

「もともと皇国は兵糧不足だ。にもかかわらず、この春の収穫も終わらぬうちに軍を動かすのだ。もしかしたら、ダイタス村の食糧を奪いに行く可能性がある」

「なるほど、その線も考えられるな。よし、まずはラマロン軍の装備と、進路の確認を取ろう。作戦はそれが分かってから決めても遅くないだろう」

そう言って俺は、フェアリードラゴンの頭領であるサダキチを呼び出した。

一方、ラマロン皇国の皇都を出発したケーニッヒ総司令官は、ほぼ丸一日かけて行軍したこともあって、夜には、皇都の北西にあるレ

イニーの街に到着していた。

「いや、さすがに騎馬隊ばかりだと行軍が早いね。歩兵を連れていると、到着が深夜になるところだったが、半分の時間で到着した。まずは幸先のいい出発だ」

予定よりも早くレイニーの街に到着できたことで、ケーニッヒは上機嫌である。

「さすがは総司令官殿です。この分ですと、アガルタの占領も予定よりも早く済みそうですね」

恭しくお辞儀をしながら副官が追従する。

「いや、戦いはそう、予定通りに進むものじゃない。そのくらいの見識は私も持っているつもりだ。まずは、このレイニーの街で各地の軍を吸収する。出発は二日後だ。それ以降は山越えと野営の連続になるから、兵士たちには十分休養を取るように伝えろ。あ、それからアーモンド司令官を呼んでくれ」

「アーモンド司令官ですか？」

「そうだ。早々に呼んでくれ」

しばらくして、ケーニッヒの部屋にアーモンド司令官がやって来た。

「お呼びと伺いましたが」

「ああ。二日後、全軍をアガルタに出発させる予定だというのは、聞いたのかな？」

「はい、先ほど。私を呼びに来た者がそう伝えてきました」

「ああそう。それならいいや。アーモンド君、君は、帯同しなくていい」

「・・・どういうことでしょう？」

「明日、君に預けてある５０００の兵でバンザビ山に向かってくれ」

「お話の意図が分かりかねます」

アーモンドは無表情で答える。その姿を見てケーニッヒは、ヤレヤレといったポーズを取りながら言葉を続ける。

「あのねぇ。私は君の作戦を採用しようと言っているんだよ？自分から作戦を提案しておいて、話の意図が分からないとは、私に対して失礼じゃないか？うん？」

ケーニッヒは首をかしげながら、目を見開いてアーモンドを睨む。

「このアガルタ攻略作戦における作戦会議は、実施されていません。従いまして、私が本作戦において発言できる機会は与えられておりませんので、私の作戦を採用すると仰る公爵様・・・総司令官殿のお話の意図が、私には分かりかねます。もっとも、明日、軍を率いてバンザビ山に至れというご命令が只今下りましたので、その作戦については遂行いたします」

アーモンドは一切の感情を表に表さず、淡々とした口調で言葉を返していた。その様子にケーニッヒはニヤリと笑みを漏らしている。

「全く・・・可愛げがないし、素直じゃないね、君は。まあいい。命令が理解できているのなら、それでいい。ただ、バンザビ山に向かえと言ったが、ダイタス村を攻めろとは言っていないから、そこは間違わないでくれよ？」

「どういうことです！」

「ダイタス村を攻めるには及ばない。時間と労力の無駄だからね。君は、バンザビ山の麓まで軍を率いて、ダイタス村を牽制すればいい。山に入ってダイタス村に行こうとする者や、山から下りて他の街に向かう者については、取り調べてもいい。ともかく、私からの使者が来るまで、君はバンザビ山の麓で待機しておいてくれ」

「・・・」

アーモンドは冷たい目でケーニッヒを見ている。

「私からの命令は以上だ。下がっていいよ」

ケーニッヒは右手をピラピラと動かして退室を促す。アーモンドは、一切表情を変えることなく、一礼をして部屋を後にした。

「無駄は、できるだけ省いていかないとな・・・」

誰に言うともなく、ケーニッヒは呟く。そして彼は椅子に座り、楽しそうな笑みを湛えながら、アガルタ侵攻作戦が完了した後の政策を、頭の中で思い描くのだった。

第百六十六話　転ばぬ先の杖

フェアリードラゴンのサダキチ達をラマロンに偵察に出してから、次々に俺の下に報告が寄せられた。どうやら奴らは、皇都の北西にあるレイニーという都市に駐留して、各地の軍を吸収しているようだ。そして、全員が騎馬隊であり、その総勢は五万を超えるという。しかも国境に近い街や都市には、それなりの数の軍勢が配置されているが、それ以外の街は最低限の兵士しか残していないことも分かった。

「これで、ダイタス村の討伐の可能性は消えたな」

地図を見ながら呟くのはマトカルだ。俺たちは昨日開いた会議の内容を確認しつつ、次々に寄せられる報告を分析していた。お陰で俺は、昨日の夜から執務室に泊まり込んでいた。本来ならば、アリリアをメイと二人で風呂に入れ、そのままアリリアの寝顔を見ながら、メイを抱きしめて寝る予定だったのだ。俺の楽しみを奪うラマロンには、鉄槌を下さねばならない。

「そうだな。あの標高の高い山を馬で登るのは困難だ。狙いはダイタス村ではなく、アガルタかヒーデータだろうが、ほぼ確実にアガルタだな」

ラファイエンスが笑みを浮かべながら頷いている。また、戦闘に参加できそうなので、うれしくて仕方がないらしい。

そんな話をしている最中に、サダキチが現れた。

『ご主人様。敵の一部が動き始めました。数は多くないようです。山の方に真っすぐ向かっています』

『ご苦労』

俺は、サダキチからの報告を皆に共有する。

「それはダイタス村への牽制だな」

「間違いない」

マトカルとラファイエンスが夫婦漫才のように、間の合った受け答えをしている。ネタ合わせでもしているのだろうか？

「と、いうことは、奴らの狙いはアガルタってことか・・・？」

「先ほどのリノス様からのお話によると、全軍が騎馬隊だという。おそらく、国境まで兵を進めて、そこから一気に騎馬隊の機動力を活かしてアガルタの街、もしかすると、都を一気に突いてくるのかもしれないな」

「マト、ラマロンは新しい装備を開発してたりはしないのか？」

「いいや・・・。魔法をレジストする鎧を開発することに全力を挙げていた。他の装備を開発する余裕はなかったはずだ。それに、一年やそこらで、五万人分の新装備を用意するなど不可能だ」

「はあああ・・・。と、なると、ラマロンの司令官は、何も知らないんだな」

「どういうことだ、リノス様？」

俺はマトカルやラファイエンス、そしてそこに集まった者たちに視線を移していく。そして、気が付いた。

「ああ・・・。マトや将軍・・・そしてクノゲンは、ジュカの人間じゃなかったな。わからないのも仕方がないかな。おい、セオダルやウェルネたちは・・・わかるよな？」

セオダル達、ジュカ王国出身の者たちは、苦笑いを浮かべている。

「リノス様、すまないが、私にもわかるように説明してくれないか？」

マトカルが目を白黒させている。

「結構大変なんだよ、この時期にアガルタに攻め込もうとすると」

「ああ、そうか！これは私としたことが！そうだそうだ。確かにラマロンがアガルタを攻めることは難しいな」

苦笑いを浮かべながら、悔しそうに話しているのは、ラファイエンスだ。その様子を隣のクノゲンは不思議そうな顔をしてみている。

「将軍。私にもわかりかねます。どういうことでしょう？」

「クノゲンは、ジュカとの戦いに参加したことは・・・なるほど。若い頃に一度だけか。しかも、小競り合いだな。それではわからんだろうな」

ラファイエンスは満足そうに頷いている。マトカルやクノゲンはよくわからないような顔をしている。

「マトとクノゲンは後で将軍に教えてもらえ。ところで、ラマロン軍が国境に着くのは何日後かな？」

「明日出発するとして・・・おそらく、早くて明後日、遅くとも明明後日には到着するだろう」

「なるほど・・・。じゃ、明日の昼、出撃するぞ。準備を整えておいてくれ」

「リノス様は、夜のうちに国境付近の森に兵を潜ませて、皇国軍を迎え討とうと言うのか？」

マトカルが、それやめた方がいいんじゃない？という顔で俺と見つめている。

「いや、俺たちの目標は国境ではない」

「えっ・・・？皇国軍を迎え討つのではないのか？」

マトカルは目を見開いて驚いている。

「ああそうだ。俺たちはラマロンの裏をかく。これはアガルタの都にいる全兵力をもってあたる」

「何をしようとしているのかわからないが、リノス様、全兵力はまずい。せめて守備隊を・・・」

俺はマトカルに皆まで言わせず、言葉を遮る。

「それじゃマト、都の守備隊はお前に任せる。今すぐ、腕の立つ者１００名を選抜しろ。よし、本日の会議はこれまでだ。将軍、クノゲンは残ってくれ。明日の打ち合わせをしよう」

「私は・・・」

「守備隊を指揮するには、優れた司令官でないとダメだ。今回は、指揮能力が一番高いマトが担当してくれ」

マトカルは納得いかない顔のまま、他の者と一緒に部屋を後にした。そして俺たちは、明日からの作戦の打ち合わせを始めた。

その夜は一日ぶりに屋敷に帰った。相変わらずエリルとアリリアは泣いているか、寝ているかのどちらかだ。そして、夕食前に明日の昼から出撃すること、夜は帰れないかもしれないことを家族に伝えた。

夕食後は、俺はペーリスとキッチンのことについて色々と相談する。家族が増えたことと、作る料理の種類が増えたので、食器と器具が増えてきた。そこで、水屋（食器棚）を増やそうということになり、どのようなものにするのかを打ち合わせたのだ。既にリコなど、料理をする主だった者たちから意見の吸い上げは終わっており、俺はそれを聞きながら自分の希望を伝えつつ、話を詰めていった。

その間に、リコとメイは二人でそれぞれの子供を抱えて風呂に入ってしまい、その他の者も、自分の部屋に帰るなどして、思い思いの時間を過ごしている。

水屋の打ち合わせを終え、リコとメイが風呂から上がって来たので、俺も風呂に入る。今日はコンシディーと一緒に入る日だ。彼女は俺と風呂に入る日は何故か、食事が終わるとすぐに部屋に帰ってしまう。俺も不思議に思っていたので、そのことを聞いてみることにした。

「・・・その・・・準備を・・・」

「準備？」

シディーは湯船の中に体育すわりをしながら、恥ずかしそうに話をしている。

「だって・・・。リノス様の背中をどうやって洗うとか・・・。あと、髪を整える薬も・・・」

シディーは一見、ストレートの髪質に見えるが、実は髪の量が多く剛毛である。これはドワーフの特徴らしいのだが、シディーはサラサラストレートヘアに憧れており、特製のコンディショナーを使用している。それをわざわざ、俺と風呂に入る前には必ず、準備していたのだという。

「作りたての時が、一番いい香りがするので・・・」

普段のシディーからは想像もつかない、奥ゆかしいことを言う。その時、風呂のドアが静かに開いた。その瞬間、シディーは湯船の深くに体を沈めてしまった。口から下が完全に湯船に隠れてしまっている。

「・・・一緒に、入っていいか？」

遠慮がちに風呂に入ってきたのはマトカルだった。シディーに大丈夫かと聞いてみたら小さく頷いていたので、一緒に入ることにする。マトカルは素早く体を洗い、風呂に入ってくる。

「珍しいな、マトが入ってくるなんて」

「いや・・・遠慮しようとは思っていたのだが・・・」

マトカルはちらりとシディーを見る。シディーは元の体育すわりに戻っていた。マトカルは大丈夫のようだ。

「今日の昼にリノス様が言っていた、皇国がアガルタに攻め込めない理由を・・・教えてほしいのだ」

「うん?ラファイエンスに教えてもらったんじゃなかったのか?」

「それは聞いたのだが・・・。将軍は・・・その・・・ベッドの中で教えてもらえと」

「エロジジイめ・・・」

「ただ、その・・・今日はシディー殿となので・・・それで・・・」

「風呂で聞こうと思ったのか?飯食っている時でもよかったじゃないか?」

「計画段階での戦術や作戦は、なるべく秘匿するものだ」

「ああ、うん。わかった。なに、簡単なことだ。春になるとジュカ

山脈やルノア山脈の雪が解ける。それが雪解け水になって流れてくるんだ。で、アガルタの川は春になると増水する。その川の水は、イルベジ川に注いでいる。だから国境地帯は、春になると増水して川幅がかなり広くなるんだ」

「川が増水することは知っていたが、まさか行軍が困難になるほどとは・・・」

「ラマロンもヒーデータも、イルベジ川が増水したところでほとんど被害はないから、あまり気にしないのだろう。ただ、川の深さが増し、流れがいつもより急になるから、あそこを馬で渡ろうとすると、かなり苦労すると思うぞ？ラマロンは、事前の準備を怠ったな」

そんな話をしている中、シディーがゆっくりと立ち上がった。膨らみかけたような胸や、体が露になる。

「シディーどうした？」

「のぼせそうです・・・。あがりませんか？」

俺とマトカルは苦笑いしながら、風呂からあがろうとする。

「シディー殿はうらやましいな」

「どうして？」

「きれいな体をしているではないか」

「きれい？私の体が？」

「ああ。リコ様には及ばないが、私のように傷があるわけではなし、ソレイユ殿のように体のあちこちにホクロがあるわけでない。整った、きれいな体をしているぞ？」

「・・・ありがとう」

この日以来、シディーは俺と風呂に入る時は、恥ずかしがりはするものの、極端に体を隠すようなことはなくなったのだった。

第百六十七話　出陣、という名の物見遊山

「うおーい、ぶつからないように気を付けろよー」

「わかってるよー。お前こそヘンなところにぶつけるんじゃないぞー」

「誰に言ってるんだー。こっちゃ子供の頃から慣れてるんだー」

「バカ野郎、そりゃ俺もだー」

兵士たちの口喧嘩が続いている。しかし、そこには緊張感はほとんど感じられない。どちらかと言うと、のんびりとした雰囲気が漂っている。一方で、別の場所では、兵士たちのノホホンとした会話が交わされている。

「ああ・・・癒されるな」

「移りゆく景色、木々を彩る優しい光・・・。あちこちに咲く花・・・美しい・・・」

およそ、これから戦闘に向かうとは思えない会話であるが、これらの会話を交わしているのは、漆黒の兜を身にまとい、ある者は帯剣し、ある者は槍を持ち、ある者は弓矢を装備している兵士たちである。一見すると、すぐにでも戦闘態勢に入ることが出来る出で立ちであるが、彼らの大半は、呑気にキョロキョロと移り行く景気を愉しんでいる。

「貴様ら！ひっくり返るなよ！結界で守られているとはいえ、ひっくり返ると戻るのに時間がかかる！細心の注意を払え！」

兵士たちに注意を喚起しているのはクノゲンだ。そのすぐ隣には、笑顔で悠々と酒を飲みながら移りゆく景色を楽しむラファイエンスの姿があった。

「たまにはいいものだな。こんなのんびりとした戦いは」

老将軍自身、長い軍歴の中でも初めて体験する、緊張感のない戦いが始まろうとしていた。

その頃、俺とソレイユはイリモを連れて、ダイタス村に来ていた。

「ジンビ、どうだ、皇国の動きは？」

「山を降りた麓に、５０００程の軍勢がいますが、特に攻撃してくる様子は見られません。山に入ろうとする者や、山から出ていく者は一応取り調べをされているそうですが、特に何かがあるわけではありません」

「そうか。ダイタス村に新たに来たヤツはいるのか？」

「おりません」

「山を越えようとするヤツは？」

「それも、おらんでしょうな。山頂まで行くには我が村を通らねば

なりません。リノス様がお見えになって以来、この村を訪れたものは皆無です」

「わかった。あと、確認なんだが・・・。食料は、足りてるな？」

「十分です」

ジンビは笑顔で答えた。俺はその姿に安心して、村を出て山頂に向かった。そしてそこで、ソレイユに森の精霊であるクレイドルを呼び出してもらう。

「お呼びでしょうか、ソレイユ様」

「我が主からあなたに、お願いがあります。聞いていただけるかしら？」

「はい、何なりと」

「すまないが、夜になったらイルベジ川を照らしてもらうことは出来ないだろうか？いや、イルベジ川に沿って光ってもらえばいいんだ」

「お安い御用です。それでは、日没から夜明けまで、イルベジ川を照らしてごらんに入れます」

「すまないね。何かお礼をしないといけないな」

「いいえ。ソレイユ様がお越しになるだけで、我々森の精の精気は上がるのです。お見えいただくだけで、十分でございます」

そう言って笑顔を見せながら、クレイドルは消えていった。そして、俺たちはイリモに跨り、彼女の羽を使って大空に舞い上がり、川伝いに進んでいった。程なくして、大きな街が見える。それを上空から俺は観察する。その時、フェアリードラゴンが俺の前に現れる。

『ご苦労。様子はどうだ?』

『鎧を付けた兵士はほとんどいません。奴らはあの大きな、四角い建物から出てきます』

『あれが兵舎か・・・。わかった。では、サダキチに伝えてくれないか?』

『畏まりました』

俺の指示を聞いたフェアリードラゴンは、一瞬のうちに姿を消した。

「じゃ、俺たちは将軍たちが来るまで、休憩しようか」

そう言って、俺たちは森の中に降りて行った。

そして、日が落ちた頃。アガルタの兵士たちは、ラマロン皇国との国境に差し掛かった。その時、一人の兵士から声が上がる。

「おい、見ろ!森が・・・」

「おお〜」

兵士たちから歓声が上がる。何と、森の木々が発光し、イルベジ川を煌々と照らしていたのだ。

「美しい・・・」

「すばらしいな・・・」

兵士たちが口々に感嘆の声を上げる。その幻想的な光景に、兵士たちは時間を忘れて見入るのであった。

「・・・ご主人様、見えました！」

ソレイユが声を上げる。カシャカシャと、暗闇の中から鎧の鉄が擦れる音が聞こえる。俺はあらかじめ用意しておいた篝火の下に立つ。

「リノス様！」

俺の姿を見つけた兵士たちが、次々と俺の周りに集まってくる。

「お前たち、道中は問題なかったか？」

「もう最高でした！景色はいい、気候はいい、メシは美味い、森は美しいわで、大満足でした！」

「そうか。ただし、俺たちは物見遊山で来たんじゃないからな？これから、仕事してもらうぞ？」

「ええ、お任せください！」

兵士たちの間から、ラファイエンスとクノゲンが顔を出している。

「将軍、お疲れ様です」

「いや、こんなにのんびりとした戦いは初めてだ。いいものだな」

ラファイエンスはご満悦の表情を浮かべている。

「ほとんど何もしていませんので、体力は万全です。今すぐにでも戦えますな」

クノゲンは腕をブルンブルンと振り回している。

「俺も休養十分だ。クノゲンたちには、これから働いてもらうが・・・。おそらく、それもすぐに済んでしまいそうなんだけどな」

俺はニヤリと笑う。その時、フェアリードラゴンが目の前に現れる。俺は、ソイツから報告を受ける。

「さて、準備は整ったようだ。みんな揃っているのか？・・・それじゃ行こうか。あの階段を登った所に目標がある。俺が案内するから付いてこい」

そう言って俺は、断崖絶壁の上にそびえ立つ建物を目指して歩き出した。

ラマロン皇国の皇都にある宮殿の一室には、皇太后、ラマロン・ク

ロウ・レイシスと皇帝、ラマロン・クロウ・フレインスが和やかな時間を過ごしていた。

太陽の光が降り注ぐ午後、取り巻きの女官たちと共に過ごす、まったりとしたティータイム。まさかこの国で数万の兵士が他国に侵攻している最中であるという雰囲気は、微塵も感じられない平和なひと時がそこにあった。

皇太后は机の上に広げられた地図を、上機嫌で見つめている。

「そろそろケーニッヒ公爵が、アガルタの国境に着く頃でしょうか？であれば、今日の夜にはイルベジ川を上って・・・明日の今頃にはアガルタの都。明後日には都は陥落しているでしょうか？その知らせが来るのは・・・五日後くらいでしょうか？」

皇太后は持っている扇で地図を指しながら、ラマロン軍が取ると思われる進路を予想していた。そんな様子を皇帝は目を細めて見ている。

「お母上様は心配性だ。ケーニッヒ公爵のことですから、もっと早くに知らせを寄越すかもしれませんよ？」

「おお、それでは、使者を迎える準備をしてやらなくては」

「お母上様、使者の者は、報告をした後でケーニッヒ公爵の下に帰るのです。引き留めて使者が戻らないと、公爵が心配いたします」

「おや、それでは準備をするだけ無駄ですね？ホホホホホ」

皇太后の笑い声が契機となり、皆が大笑いする。そんな楽しげな時

間を打ち消すかのように、部屋の扉が乱暴に開かれる。そして、そこには青い顔をして、肩で息をしながら小刻みに震えている侍従が立っていた。

「何事です！そんな乱暴な開け方は、陛下のお耳障りになりますわ！お気をつけあそばせ！」

女官の一人が、目を吊り上げて侍従を睨みつける。しかし侍従は、そんな視線を意に介すことなく、必死に言葉を絞り出す。

「も・・・申し上げます！た・・・たった今・・・報告が・・・報告が参りました」

その声を聞いて、皇太后の顔が、ぱあああっと明るくなる。

「もしや、ケーニッヒ公爵がもう、アガルタを占領したのですか？いや、我が皇国軍が国境でアガルタ軍を撃破したのでしょう？アガルタ王を討ったのですか！？」

侍従は唾を飲み込み、息を整えつつ、言葉を続ける。

「ガルビーが・・・城塞都市のガルビーが、アガルタ軍によって陥落しました」

その瞬間、皇太后以下、そこにいた者全員が、ピクリとも動かなくなった。

ラマロン皇国の時が、止まった。

第百六十八話　戦いは、背中を見せた者の負け

「よ・・・よく聞こえぬな。今一度申せ。どの都市が陥落したと？」

声を発したのは、ラマロン皇国皇帝だった。必死で冷静さを装っているが、声は震えている。その様子を見て、皇太后も口を開く。

「ええ、私としたことが、聞き逃しました。陥落したのは、アガルタの、何という都市ですか？」

皇太后の顔も必死で余裕のある笑みを取り繕うが、引きつった笑顔を作るのがやっとだった。

侍従は深呼吸をし、手元のメモをじっと見て、再び皇帝と皇太后を見据える。

「申し上げます。皇国の城塞都市であるガルビーが、陥落しました。アガルタ軍によって、陥落しました」

落ち着いた、ゆっくりとした口調で侍従は報告する。その報告が進むにつれて、皇帝と皇太后の顔から血の気が引いていった。

「・・・ガルビーが・・・陥落？・・・信じられん・・・」

皇帝はその現実を受け入れられず、呆然自失となっている。

「・・・将軍を・・・カリエス将軍を呼びなさい」

皇太后のドスの効いた声が吐き出された。その声に侍従は、体を震わせながら声を絞り出す。

「かしこ・・・まりました。この・・・知らせは、ケーニッヒ様にも」

「無用です！」

絶叫にも似た皇太后の声が部屋中に響き渡る。

「ケーニッヒ公爵には、このままアガルタを攻めさせなさい！ガルビーを落としたとあらば、アガルタは全軍で攻めたはずです。ということは今、アガルタはもぬけの殻です！攻めさせなさい！それよりも、ガルビーです！必ず、必ず、取り戻すのです！将軍を、カリエス将軍を早く呼びなさい！！」

皇太后のあまりの剣幕に恐れをなした侍従は、その場から逃げるようにして去っていった。部屋には、皇太后の激しい息遣いが聞こえるのみで、誰も言葉を発する者はなかった。

しばらくして、カリエス将軍が現れた。

「火急のお呼びと聞き、参上しました」

「ガルビーに行きなさい」

「は？皇太后陛下、お言葉の意味が、分かりかねますが・・・」

「ガルビーに行くのです！！」

皇太后は思わず立ち上がり、絶叫していた。そこにはいつものふっくらとした余裕のある笑みは一切なく、目を吊り上げ、眉間に深い皺を刻んだ老婆がいるのみだった。そんな光景を目を泳がしながら見ていた皇帝は、言葉に詰まりつつカリエス将軍に口を開く。

「ガッ・・・ガルビーが、陥落したのだ。アガルタが、陥落させたと報告があった」

カリエス将軍の目つきが変わる。先ほどまでのノホホンとした雰囲気はどこにもなく、幾たびの試練と修羅場を乗り越えてきた男の顔がそこにあった。

「ガルビーが・・・。あそこは皇都とは指呼の間。あそこが落ちれば、皇都が危ない。それにしても、難攻不落を誇っていたあの城塞都市を陥落させるとは・・・。しかし、あそこを攻めるとなると、我が旗下の兵一万では足りません。ここは、皇都の防衛軍三万と、アガルタに遠征した部隊を呼び戻さねばならないでしょう」

「わ、わかった。好きにするが・・・」

「なりません！」

皇帝の言葉を遮ったのは、皇太后であった。彼女の剣幕に絶句する皇帝を横目で眺めながら、彼女は言葉を続ける。

「皇都の防衛部隊を連れて行くのは認めましょう。アガルタ派遣軍を戻すことはなりません！」

「何故でございますか！あの城塞都市は堅牢です。大軍を持って蹂躙するしか方法は・・・」

「アガルタはもぬけの殻でしょう！」

一瞬虚を突かれたカリエス将軍であったが、瞬間的に彼は自分を取り戻す。そして、ゆっくりと息を吐いて落ち着きを取り戻しつつ、彼は諭すように言葉を続ける。

「仰る通り、アガルタはもぬけの殻かもしれません。しかし、陛下。今、我らに最も必要なものは、アガルタではなく、ガルビーを奪還することです。このままでは、たとえアガルタを落とせたとしても、皇都という母屋を失うことになりかねません。その点をお汲み取りいただいて、何卒、何卒、アガルタへの遠征をお取りやめいただきますよう、このカリエス・シーマ、伏して伏して、お願い申し上げます」

「なりません。アガルタへの遠征を中止することはなりません」

「皇太后さま！今、ヒーデータの援軍がガルビーに到着すると、さらに落とすのは難しくなります！今、ガルビーを占領している部隊は、多く見積もっても三千でしょう。十万の兵で囲み、総攻撃をかければ、いかに堅牢な都市といえども、陥落させられます。何卒、何卒・・・」

カリエス将軍は深々と首を垂れる。言葉を発する者は誰もいない。そして、カリエス将軍の耳に、絹ずれの音が耳に入った。

「何度、同じことを言わせるのですか。私は、そうした無駄なことが、大嫌いなのです」

そう言って皇太后は踵を返して部屋を後にした。

「将軍、そういうわけだ。皇都防衛軍を率いて、ガルビーを奪還せよ。これは勅命である」

皇帝は首を垂れ続けるカリエス将軍を一瞥し、すぐに母親の皇太后を追いかけるようにして部屋を後にした。そして、それに続いて女官たちも部屋を後にした。

誰もいなくなったその部屋で、カリエス将軍はゆっくりと頭を上げた。そして、天井を見ながら深く息を吐きだした。将軍は、遠くを見ていた。ただただ、遠くを見据えていた。

一方、いくつかの山越えと野営を経て、ようやくアガルタの国境に到着したラマロン軍は、目前の光景に息を呑んでいた。

そこには、見たこともないような大河があった。

アガルタ派遣軍総司令官のケーニッヒは、狼狽を隠そうともせず、声を荒げていた。

「何だこれは！何があった！イルベジ川がこんな状態になっているなんて、聞いてないぞ！」

ギリギリと歯を食いしばりながら、大河となったイルベジ川を睨んでいる。誰も声を発する者はいない。その時、到着した後続の部隊に居た兵士たちの、何気ない会話がケーニッヒの耳に入った。

「うわ～やっぱりな」

「ここ最近暖かかったからなー。もしやと思ってたが、やっぱり増水してたかー」

ケーニッヒは無言で、その兵士たちの所に馬で向かう。総司令官が近づいてきたことに驚き、首を垂れる兵士たち。その二人に向かってケーニッヒは素早く剣を抜いて切っ先を突きつける。

「無駄口を叩く奴は死刑にしたいが、今のは許してやる。私の質問に答えろ。お前たちは何故、この川が増水するのを知っていたんだ？」

「じ・・・自分たちは、この川の近くで育ちました。イルベジ川は毎年春になると雪解け水の影響で、増水するのです。水の流れも急になるので危ないからよく、子供の頃は、近所のおばさんに怒られたものです。しかし、この水はとてもいい水らしくて、この水で作った香水なんかはすばらしく・・・」

「ぬうん！」

必死で喋っていた兵士は、ケーニッヒの剣に喉を突かれて、即死していた。

「私は、私の質問に答えることは許したが、無駄口を叩くことを許したわけではない」

ケーニッヒは、殺された兵士の隣で震え、戦いている、もう一人の兵士に向かって剣を向ける。

「おい、貴様。どの隊の者だ？」

「第四軍、ベネゼーネ司令官閣下の騎馬隊の者です」

「階級は？」

「兵長です」

「兵長・・・ということは、精鋭部隊だな？この川を渡れるか？」

「わ・・・わかりません」

「私の命令だ。今からこの川を渡れ。簡単な話だ。アガルタ側まで渡れたら、褒美をやろう。死にたいのなら遠慮なく拒否するがいい。・・・行け」

ケーニッヒから突き出された剣が、さらに兵士の喉元に突きつけられる。たまらず兵士はその場から離れ、アガルタに向かって馬を大河に進ませた。

ちょうど川の真ん中あたりまで進んだところで、馬がその歩みを止めた。しばらく兵士は馬に鞭を入れ、鐙で馬の腹を蹴るなどしていたが、やがて馬が川の水に流され、兵士も一緒に流された。その男は二度と水面に姿を現さなかった。

「総司令官殿、一旦、兵を皇都まで退きましょう」

長年自分に仕えている副官が近くにやってきて、声をかける。

「いや、アガルタに進軍だ」

「お待ちください。この川を進めば、落伍する兵士も多数出るかと思います。このまま兵を川に入れるのは、得策ではありません」

副官は必死の形相で訴えている。ケーニッヒはしばらく川を睨みつけていたが、やがて副官に命令を下す。

「司令官たちを集めろ。軍議を開く」

ケーニッヒは集まった司令官に対し、明日の朝までにこの川を渡る策を考えろと命令した。しかし、司令官全員の意見は、レイニーまでの撤退であった。ケーニッヒはあくまでアガルタへの侵攻を主張したが、司令官たちはケーニッヒの命令を聞くことなく、撤退を開始したのだった。

やむなく、レイニーまで撤退することにしたケーニッヒであったが、その心の中は激しい憎悪で満たされていた。

「アガルタも・・・司令官どもも・・・潰してやる。アガルタを潰し、そのあと、私の命令を無視した司令官どもを潰す・・・。こんな無駄なことをする奴らは・・・潰す・・・」

ケーニッヒは一人、撤退する道中の馬上で、ブツブツと物騒な言葉を吐き続けるのであった。

第百六十九話　ガルビー占領とマトカルの気遣い

城塞都市ガルビー。ラマロン皇国皇都から北西に、馬で三時間の距離にある都市である。山の峰を切り取ったかのような台地の上に位置し、さらには、背後にラマロン海、北側にイルベジ川を備えた天然の要害を要した城塞都市である。

元々この都市は、ラマロン皇国が現在の皇都を建設する前に都が置かれた都市であった。数百年前、皇国を統一すべく初代皇帝がその人生の大半を過ごした街であり、皇国の人間にとっては、皇都と並ぶ、最も守るべき都市の一つである。

そのガルビーの城塞から、俺たちは遥か彼方に見えるラマロン皇国の皇都を見ていた。

「動きはなさそうだな」

ラファイエンスが貧乏ゆすりをしながら、苦々しげにつぶやいている。

「いや、将軍、皇国軍が全力でこの街に殺到したら間違いなく勝てませんよ？」

「そうですな。将軍が戦闘に出たい気持ちもわかりますが、我々はこの堅牢な城塞都市を落とせることを証明したのです。それだけで十分でしょう。もし大軍で攻めてきたら、その時は堂々と退却しましょう」

クノゲンが笑いながら将軍を窘めている。

実際、戦闘時間はほぼ、ゼロだったのだ。アガルタの都を解放した時と同様、フェアリードラゴンのサダキチたちに、上空から体をマヒさせる鱗粉を兵舎に撒いてもらい、俺たちは夜陰に乗じてそこに突撃した。そこには、３００名ほどの兵士が詰めているだけで、全員がキレイに捕虜になった。

そして、門番や各主要施設を警護してる兵士たちも、残らず捕らえることに成功した。

そして、その中の二名を解放し、皇都に走らせた。皇都から軍勢が出てくれば、規模によっては戦ってもよいと思っていたが、皇都からは全く動きは見られない。動揺しているのか、それともアガルタに向けた軍勢を帰還させているのか、今はそれを見極めようとしていた。

その時、サダキチが目の前に現れた。

『どうした？』

『国境のラマロン軍が退却を始めました』

『そうか、ご苦労だった。サダキチ、一つ、仕事を頼まれてくれ』

そう言って俺は、懐から紙を出して、メモを書いていく。

『すまないが、これを都のマトカルに渡してくれ。見つからなければ、迎賓館にいる者に渡してくれれば伝わるはずだ』

『畏まりました』

そう言ってサダキチは、再び姿を消した。

「リノス殿、マトカルに何を・・・？ラブレターかな？」

ラファイエンスがニヒルな笑みを湛えている。俺は笑顔を返しながら、

「いえ、ガルビーの人々へのお土産を手配してもらおうと思いましてね」

老将軍は目を細めて、彼方の皇都を見ながら頷いている。

ガルビーの人々は、朝起きて街に出て見ると、目を丸くして驚いた。街の入り口や人が多く集まるところの十か所に、このような看板が立てられていたからだ。

『ガルビーの市民の皆様へ

おはようございます。お目覚めは如何でしょうか？よく眠れた人も眠れなかった人も、まずはこの看板を見て驚いていることでしょう。実は、昨夜のうちにこの街はアガルタ軍が占領しました。あ、市民の皆さんを傷つけることはしませんので、安心してください。しばらくご厄介になります。仲良くしてください。できるだけ早くお暇しようと思いますので、しばしお付き合いください。城門はしばらく閉じます。ごめんなさい。しばらくは、町から出ることも、入ることもできません。ご不便をおかけします。できるだけ食料不足に

ならないようにしますので、その点はご安心ください。
よろしくお願いします。

アガルタ国国王　バーサーム・ダーケ・リノス』

市民の間では様々な憶測が飛び交い、街は混乱状態になりかけたが、その時、どこからともなく兵士たちが現れた。漆黒の鎧に身を包んだ兵士に、市民は固唾を飲んで見守った。彼らは整列すると見事な行進を行って見せ、一糸乱れぬ統率の取れた動きを披露した。それは市民を魅了し、その間に、軍団の長と見られる男の指示によって、兵士たちは素早く城門などの各主要施設の警護に当たったのだ。

この動きで、アガルタ軍は市民の信頼を得た。

軍勢を配置すると同時に、リノス達は街を出歩いていた。そして、予想以上にこの街には兵糧がないことを知った。この街に駐留していた兵士の大半は、アガルタに向かっており、そのために備蓄してあった食料の大半が持ち去られていたのだった。そこでリノスは、国境付近のラマロン軍の動きを見ながら、食料を支援しようと考えたのだった。

俺は、ガランとした食糧庫に一人で入り、そこにアガルタの都への転移結界を張る。まず俺は自分の執務室に転移し、そこからマトカルを探す。彼女はすぐに見つかった。

「リノス様！」

「おおマト。メモは見たか？」

「ああ、見た。これから食糧庫に向かうところだ」

「じゃあ、食糧庫の地下に空き部屋があっただろう？そこに運び込んでくれるか？」

「わかった」

俺はルアラに念話で食糧庫から物資をガルビーに転移させると伝える。ルアラは即答でＯＫを出してくれた。

アガルタの守備兵たちが、食料を地下に運び込む。そしてそれを俺はガルビーに転移させる。それを繰り返すこと数回。ガランとしていた食糧庫が、物資でいっぱいになった。

俺は外に出て、クノゲンに炊き出しをするように命じる。既に昼をとっくに過ぎていた。

相談の結果、夜はカレーを炊き出すことになった。皇都の動きはなく、国境付近のラマロン軍は絶賛撤退中とのことで、今日の襲撃はないだろうと予想して、俺もたまねぎのみじん切りを手伝った。

ガルビーの人々に、カレーは大好評だった。かなりの人数分を作ったのだが、ほぼ完食状態だった。そのカレーを食べながら、明日以降の短い打ち合わせをして、その日の業務を終えることが出来た。

兵舎の一室に俺の部屋が与えられ、ようやくそこでくつろぐことが出来た。この街の司令官が使っていた部屋のようで、応接室と執務室がある。ソレイユも炊き出しを手伝うなどしていたため疲労困憊のようで、応接室のソファーにもたれかかるなり、眠ってしまった。

俺は一人、執務室に入り、そこの椅子に座って、ため息をつく。早く風呂に入りたいと考えていたところに、執務室の扉がノックされる。

「マトカルだ」

「うん？マト？どうした？入れ入れ」

部屋に入ってきたマトカルは何故かフルフェイスの兜を被っていた。俺の姿を見て、兜を脱ぐ。

「どうしたマト？その出で立ちは？」

「私の姿を皇国の人間に見られるのは、不味いだろう」

「ああ、確かに。マトの顔を知っている者もいるだろうからな。で、どうしてガルビーに？」

「ああ、リノス様のお相手をと思ってな」

「お相手？何の話だ？」

「いや、問題なければ帰ろうと思ったのだ。ソレイユ殿が務めていると思ったのだが、部屋を覗くと、ソレイユ殿はソファーで涎を垂らしながら寝ていた。あの様子ではリノス様のお相手は出来ないだろうと思ったので、来てみたのだ」

「ああ・・・そうか。それは・・・ありがとう」

「では・・・」

マトカルは身につけていた鎧を脱いでいく。そして、シャツを脱ぎ、下着も脱いで一糸まとわぬ裸になった。

「・・・マト？」

俺は目を見開いて固まる。

「・・・男は戦いの後は、女を求めるだろう？ソレイユ殿が眠ってしまっているので、私がお相手しようと・・・。あ、ソレイユ殿がいいのであれば起こすぞ？私と二人まとめてでもいい。どういう態勢がいいのだ？」

「マ・・・マト・・・。うん、大丈夫だ」

マトカルは、皇国軍にいた頃、戦闘が終わるたびにフルチン野郎とその一派は、女を求めていたそうだ。それを見ていたため、男＝戦闘後、女を求めるというイメージが出来上がってしまい、俺も女を求めているだろうと気をきかせてくれたというわけだ。

俺もエロいことは嫌いではないが、女の方から明るい場所で開放的に求められてしまうのは、萎えてしまう。やはり、エロいことは暗いところで、恥じらいながらというのが、俺の好みなのだ。

「・・・というわけだ。でもマト、その気持ちはうれしいぞ。ありがとう」

そう言って俺はマトに軽くキスをした。

「ソレイユを起こして、屋敷に帰ろうか」

「な!?屋敷に帰るのか?」

「ああ、ここに転移結界を張って屋敷に帰る」

「・・・全く考えていなかった」

マトカルは悔しそうな顔をする。そして恥ずかしそうに服を着ていく。今日はリコと一緒に寝る日だ。リコを抱きしめながら、エリルと川の字になって寝るのだ。

「リ・・・リノス様」

「何だ、マト?」

「さっきのことは・・・リコ様にはナイショにしておいてくれ」

「そうだな」

俺は笑いながら、起こしても起きないソレイユを負ぶりながら、マトカルを連れて帝都の屋敷に帰った。

第百七十話　そして、歴史は大きく動いてゆく

屋敷に帰ると、既に夕食は終わっており、メイたちは風呂に入っているところだった。ペーリスが夜食を作ろうかと聞いてくるが、カレーでお腹がいっぱいだったために、丁寧に断る。

ゴンやフェリスなどから、その日あったことを聞いていると、俺の風呂の番が来たようだ。今日は久しぶりに一人でのんびりと、手足を伸ばして湯船に浸かる。こんな時は自然と鼻歌が出てしまう。

そして、寝室に入ると、ちょうどエリルを寝かしつけたリコがいた。ベッドの隣のベビーベッドにはエリルが大の字になって寝ている。彼女は寝姿も豪快だ。

さて寝ようとベッドに入るが、何故かリコはベッドに入ってこない。

「リコ、どうした？」

「・・・今日、ローニからお許しが出ましたわ」

「お許し？」

リコはニコリと微笑むと、無言で着ているパジャマを脱ぎ、一糸まとわぬ姿になった。

「もう、普段の生活に戻ってもいいそうですわ」

「きれいだ、リコ・・・」

「まだ・・・お腹が出ていますでしょ?恥ずかしいですわ」

そう言って彼女はベッドに入ってくる。そして俺は、夢中でリコを抱きしめた。

子供を産む前より、リコの胸は遥かに豊かになっている。そして、産んだ後の体型もかなり元の状態に戻っているようだ。自慢のきめ細かい肌は衰えることなく、何やら出産後の方がさらに磨きがかかったようにも思える。そんなことを思いながらリコを抱きしめていると、俺の顔に何かが当たった。

「ご・・・ごめんなさい」

「うん?何だろう?」

「エリルには十分飲ませているのですが・・・それでもまだ・・・」

「ああ、いいじゃないか。健康な証拠だ。安心したよ」

俺はリコの顔をじっと見る。

「リコ・・・。一つ、お願いがある」

「何ですの?」

「もう一人、産んでくれないか?」

「もちろんですわ。次は、男の子を・・・。ですからこれからも、存分に愛してくださいませ」

「大好きだ、リコ・・・」

俺は再びリコを強く抱きしめた。

同じ頃、ラマロン皇国皇都の宮殿では、皇太后・レイシスが、眠れぬ夜を過ごしていた。昼過ぎにガルビーが陥落したという知らせを受け、カリエス将軍にはすぐさまガルビーを攻め落とせと命令していた。今、この時もまだ、カリエスがガルビーに向かったという報告はない。皇都の防衛軍を組み込むことは許可したものの、全軍が出撃するわけにはいかず、最低限の兵力は残さねばならない。その編成をしていると聞いていたが、早く出撃をせぬものか。今、攻め込めば効果的な夜襲になるのではないか。意外に早くガルビーは奪還できるのではないか・・・。そんなことを考えている内に、皇太后はしばしのまどろみに墜ちていった。

どれほど寝たのだろうか。思わず目を覚ましたのは、深夜の時間であった。何やら胸騒ぎを覚えた皇太后は、部屋付きの女官を呼ぶ。しかし、返事はない。広い部屋をウロウロしながら、女官たちの名前を呼ぶ。その時、ゆっくりと部屋の扉が開かれた。

「何をしていたのです！スハナですか？ライエンですか？至急・・・」

皇太后は絶句していた。そこには、決してこの部屋に入れるはずのない、鎧兜を装備し、帯剣した騎士が数名立っていたのだ。

「何者です！一体誰の許可を得てこの部屋に入ってきたのです！無

礼者めっ！」

皇太后は凛とした声で言い放つ。それを受けて、騎兵の一人が兜を脱ぎ、ゆっくりと近づいてくる。薄闇の中、その姿が見えてくるにつれて、皇太后の目が大きく開かれていく。

「カ・・・カリエス・・・」

男は、ラマロン皇国軍のカリエス将軍だった。彼はゆっくりと皇太后の前に立ち、落ち着いた声で口を開く。

「大魔王め・・・。我が、討伐してくれる」

「何を言っているのです！血迷いましたか将軍！誰か！誰か！謀反です！謀反です！カリエス将軍が叛きました！誰か！誰か！」

部屋の中を歩き回りながら皇太后は絶叫している。その姿を見ながら、カリエス将軍はゆっくりと剣を抜く。

「バカなことはおやめなさい！私を誰だと心得るのです！皇太后、ラマロン・クロウ・レイシスです！何をしているのかわかっているのですか！おやめなさい！やめなさい！近づかないで！来ないで！陛下！陛下ぁ～！」

断末魔の絶叫が上がる。そこには、皇太后の背中に深々と剣が突き立てられている光景があった。スローモーションのように皇太后の体が地面に崩れ落ちていく。カリエスはゆっくりと息を吐きだした。

宰相のマドリンは、兵士たちによって皇都の宮殿にある自室に軟禁

されていた。何を問うても答えるものはなく、今はただただ、部屋の中をウロウロしていることしかできなかった。その時、部屋の扉が開き、一人の兵士が入室してきた。

「宰相様、カリエス将軍がお呼びです。ご同行願います」

マドリンは無言でうなずき、兵士の後に従った。

広い宮殿内の廊下を歩いていく。いつもの、通いなれた廊下だが、今日はなぜか遠くに感じる。そして、案内されたのは、皇帝の玉座がある部屋だった。部屋に入ると、男の号泣が部屋の中に響き渡っていた。

「母上様〜!!お母上様〜〜!!お母上様!!目をお開け下さい!目をお開け下さい!フレインスと、フレインスとお呼びください!目を覚ましてください!お母上様〜!!」

恥も外聞もなく、豪華な机の上に置かれた老女の生首に縋りつくようにして絶叫しているのは、ラマロン皇国皇帝である。すでに壮年の域に達しようという年齢ではあるが、その振る舞いは少年のようであった。

そしてその生首のすぐ後ろには、カリエス将軍が立っていた。マドリンは足早に将軍の下に近づく。

「将軍!これは!どういうことだ・・・」

「大魔王を討った」

「何だと?」

その話を聞いた皇帝が、あふれ出る涙を拭おうともせずにカリエス将軍に言葉を投げつける。

「カリエス！よくもお母上様を！貴様だけは許さん！余は貴様を・・・」

「皇太后さまわぁ！！！！」

皇帝の言葉をかき消すような大声が、カリエスから発せられる。そのあまりの剣幕に皇帝は言葉を失う。

「皇太后陛下は、すでに身罷られていたのです」

「何だと？お母上様が、既に身罷られていた・・・？」

「左様です。陛下。これは、大魔王が皇太后陛下に人化しているのです。ご覧ください。首を包んでいた布の血が真っ黒になっております。ここにお持ちした時は赤かったものが・・・」

「そ、そなたは何を、何を・・・」

「お連れしろ」

カリエス将軍の、情を感じさせない声。その命令を受けて兵士たちは、泣きわめく皇帝の腕を取って、その部屋から連れ出した。

「将軍、陛下をどうするつもりだ！」

「陛下は、皇太后陛下に化けた大魔王から強い影響を受けておられ

るので、しばらくは静養していただく。従って、その後の公務については、宰相殿、あなたに委ねたい」

「わ・・・私が？」

「お願いしたい。そして、皇国軍については、私が引き続き見ることとする。我ら二人で、この国を建て直そう」

カリエスはじっとマドリンの顔を見る。そして、ゆっくりと頷く。

「わかった」

「頼む」

そんな短いやり取りを終えて、カリエスは兵士と共に、皇太后の首を持って部屋の外に出て行った。一人残されたマドリンは、誰も座っていない、二つの玉座を呆然と眺めていた。

カリエスは、足早に宮殿の廊下を歩いていく。そして、突き当りのバルコニーの前に出た。その時、そこに控えていた二人の兵士が扉を開ける。眼下に見える広場には、ラマロン軍の兵士がひしめいていた。カリエスは、皇太后の生首を抱え上げ、大声で兵士に呼びかける。

「たった今、ラマロン皇国総司令官、カリエス・シーマ！大魔王を、討ち取った！！」

一瞬の間をおいて、兵士たちから大歓声が起こる。ラマロン皇国の歴史が、大きく動いた。

第百七十一話　落としどころ

「ああ、ああっ、ああー、うんぎゃぁーうんぎゃぁーうんぎゃぁー」

けたたましい赤ん坊の泣き声で目が覚める。エリルだ。今日も腹を空かせて大声で泣いている。健康状態は良好のようだ。

寝ぼけ眼をこすりながら、目を開ける。すると目の前に、リコがエリルに母乳をあげている姿が見えた。実に神々しい光景だ。

「おはよう、リコ。エリル」

「おはようございます。リノス」

二人で笑顔を交わしながら、一心不乱に母乳を飲んでいるエリルを二人で見る。俺もリコも、自然に笑顔になってしまう。幸せなひと時だ。

服を着替えて、ダイニングに降りて、皆で顔を合わせながら朝食を取る。今日のメニューは、パンにカリカリベーコンとスクランブルドエッグ、サラダ、そして、ツナポテトとデザートというものだ。ゴロゴロとしたジャガイモが美味しい。いつもながらペーリスの腕前には感心する。

皆で朝食を終えると、それぞれが出勤していく。俺はガルビーの街に転移する。

街に着くと、ラファイエンスとクノゲンが俺の到着を待っていた。

「おお、リノス殿。よいところへ」

「どうしました、将軍？」

「先ほど、ラマロンの皇都から使者が来て、本日の昼に停戦協定の相談をしたいと申し入れがあったのだ」

「わかりました。その提案を受けましょう。使者は？」

「ああ、今、呼んで来よう」

俺は使者に停戦協定を受けると伝え、会見場所をガルビーと決めた。そして昼過ぎ、皇都から数名の騎兵がガルビーにやって来た。そして、特に大きな問題もなく、彼らは会見場所である、俺の執務室にある応接室にやってきた。

「ラマロン皇国軍総司令官、カリエス・シーマだ」

「アガルタ国国王、バーサーム・ダーケ・リノスです」

「貴方がアガルタ王、ご本人か？」

俺は無言でうなずく。

「・・・思った以上に若いのだな。私は、皇帝陛下からこの交渉における全権を委任されている。私の言葉は皇帝陛下の言葉であると思っていただいて構わない」

そんな会話から始まった俺たちの停戦交渉だが、こんな感じでまとまった。

【アガルタ国とラマロン皇国は、停戦協定を結ぶにあたって、以下のことを定める】

・アガルタ国とラマロン皇国は、半永久的に停戦する。

・双方の国に食料不足などが起こった場合、両国は相互に援助し合うこととする。

・また、両国の国境及び、支配地域を下記の通り規定する。

1. イルベジ川沿いのバンザビ山からガルビーまでをアガルタの領土とする。

2. ダイタス村については、アガルタが領有する。

3. 城塞都市ガルビーについては、アガルタが領有する。

細かいことを言うとまだまだあるのだが、ざっとこんな感じになったのだ。ガルビーについては、かなり強気に交渉してみた。確率的には低いだろうと思っていたが、捕虜の兵士を全員解放することを条件に、領有が認められてしまった。言ってみるものだ。

ラマロンからしてみれば、アガルタの農地における技術力が欲しいというのが本音らしい。一部の領土を失っても、生産効率を上げることを選択したというわけだ。国民を食わせるという意識は、どうやら共通しているようだ。こちらは、なるべく早いうちに、シディーを中心とした技術者集団を派遣することになるだろう。

あらかたの会談が済んだ時、カリエス将軍が、こんなことを言い出した。

「差し支えなければで結構なのだが、どうやってこの堅牢な城塞都市を陥落させたのか、教えてもらえないだろうか？」

「いいでしょう。直接見た方がわかりやすいでしょうね。こちらへ来てください」

俺は断崖絶壁の下に流れるイルベジ川に案内する。そこには、夥しい数の筏が繋がれていた。

「あれに乗って、夜陰に紛れてガルビーまでやって来たんですよ」

「・・・なるほどな。増水したイルベジ川ならば、かなり早くガルビーまで来られる。しかし、皇国の兵はなぜ、これだけの数の筏を見つけられなかったのだろうか？」

「ああ、バンザビ山にあるダイタス村が協力してくれていましたからね。あそこが我が陣営になったことで、イルベジ川はほぼ、ラマロン側から見ることは難しくなったというわけです」

「なるほどな・・・。どうりでアガルタ軍の動きがわからなかったわけだ。ダイタス村か・・・。我々は全く眼中になかったな。ああ、そう言えば一人いたな・・・。アーモンドの勘は、正しかったのだな」

カリエス将軍はフッフッフと力なく笑う。

「元々はダイタス村に食料を運び込むために作った筏で、作りすぎてしまったくらいだったのですが、思わぬところで役に立ちましたね。ダイタス村に価値を見出すか、見出さなかったか、それに加え

て、この筏の余剰分を利用したことで、大きな違いが出たのでしょう」

「・・・同感だ。しかし、ヒーデータからの援軍を要請していなかったとは・・・これも誤算だった」

「ええ。援軍要請を忘れていました。ですから、大軍で攻めて来られるとさすがに防衛できないですから、その時は撤退しようと思っていました」

「・・・アガルタにやった兵をガルビー攻略に当てれば、あるいは、というところか」

「ええ。それであれば、間違いなく俺たちは撤退していました」

「フッ、フフフフ・・・。私の軍人としての才覚も、捨てたものではなかったのだな」

カリエス将軍は、夕闇迫るイルベジ川に浮かぶ筏を、ぼんやりと見つめ続けていた。

一方で、レイニーに到着したアガルタ派遣軍には、衝撃の報告と命令が届いていた。

「な・・・バカな。皇太后陛下が、大魔王だと?」

目を見開いて小刻みに震えているのは、アガルタ派遣軍総司令官のケーニッヒ公爵である。

「これは謀反だ！反乱だ！カリエス将軍の反乱だ！あの・・・老いぼれめ！司令官たちを集めろ！」

程なくして集まった司令官たちに、ケーニッヒは命令を下す。

「全将兵に告ぐ！全軍をもって、皇都に向かう。逆賊カリエスを討つのだ！」

激高するケーニッヒの下に、数人の兵士が近づいてくる。彼はその兵士を血走った眼で睨みつける。

「何だ、貴様らは！」

兵士たちは無表情のままだ。その中の一人が、懐から一通の紙を取り出し、大声で読み上げる。

「ラマロン皇国公爵、ケーニッヒ・ラフェンテ。国家反逆罪の疑いにより、その身柄を拘束し、皇都に護送するものとする。・・・ラマロン軍総司令官、カリエス・シーマ」

「な・・・何？何を言ってるんだ！誰がそんなことを許可した！私を誰だと思っているんだ！ラマロン皇国・・・やめろ！さわるな！無礼者め！やめろ！あぐっ！」

兵士たちは無言でケーニッヒを取り押さえ、連行していく。集まった司令官たちは全員が総立ちになり、事の成り行きを固唾を飲んで見守っている。その様子を、ケーニッヒを捕縛する命令書を読み上げた兵士が横目で見ながら、口を開く。

「ラマロン軍、第二軍軍団長のトライアルです。ケーニッヒ公爵は、皇太后陛下に化けた大魔王に感化された可能性が極めて高く、このような形を取らざるを得ませんでした。今回の作戦も大魔王に唆された公爵様が、計画し、実行したものです。そのために、我らはバンザビ山からガルビーの一帯をアガルタに占領されております。国家として重大局面を迎えていますが、まずはアガルタとは停戦協定を締結する予定であります。その後、皇国は国力増強に全力を挙げ、捲土重来をはかることになります。お集りの諸侯には、カリエス将軍から、皇都に一旦帰還せよとのご命令です。本日はこのレイニーにお留まりいただき、明日の朝、皇都までご帰還ください。ご安心ください。皇国に潜んでいた大魔王は、討伐されました！」

軍団長たちは動かない。しばらくの静寂が訪れた後、軍団長の一人がパチパチと手を叩く。それに釣られるかのように、次々と拍手が起こり、やがて、大歓声に包まれたのであった。

同じ頃、バンザビ山の麓に陣を敷いていたアーモンドの下にも、撤退の命令が届いていた。

「・・・ガルビーが落ちた、か。無理をしてでも、ダイタス村を攻めておけば・・・」

アーモンドは唇をかみながら、遥か西の城塞都市を遠い目で見続けていた。

やわらかい太陽の光が燦々と降り注ぐ部屋の中、真っ白な大理石がアーチ状に組まれている。その部屋の中に、一人の老人と、若い娘、

そして、一人の子供がいた。老人は天井を向いて何かに祈りをささげており、娘と子供は膝をついたまま俯き、粛々とその声を聞いている。

祈りの声が止む。老人は大きなため息をつく。それが合図であったかのように、二人の男女はゆっくりと顔を上げる。

「ヴィエイユ」

「はい」

老人のやさしく、語りかけるような声。それに対して、少女は凛とした声で答える。

「そなたは、伴侶を助け、そして、天道に導くのです。わかりますね？」

「はい。必ずや天道に導いてごらんに入れます」

老人はやさしそうな、満足げな微笑を浮かべる。そして、その隣の少年に、優しく微笑みかける。

「カッセルよ。そなたも、ヴィエイユを助け、新しいお父様、お婆様をお助けし、そして、天道に導くのですよ？」

「かしこまりました」

キレイな、透き通るような声で少年は答える。老人は、満足げにほほ笑む。その時、一人の女性が静かに老人の下に近づき、そっと耳打ちする。老人は一瞬遠い目をするが、すぐに柔和な笑顔を浮かべ

て、

「ご苦労様」

と労いの言葉をかける。女は頭を下げたままの姿勢で、しずしずとその場を下がっていく。

「ヴィエイユ、カッセル。ラマロン皇国へ行く話は、延期とします」

うれしそうな、優しげな笑顔を見せながら老人は口を開く。少女も少年も、恭しく頭を下げる。

「まさか、ラマロン皇国に政変が起こるとは、驚きましたね。アガルタ・・・という新興国・・・。天道に従う国か、叛く国か。一度、確認する必要がありそうですね」

柔和な笑みを崩すことなく呟くのは、クリミアーナ教教皇ジュヴァンセルである。別名、「微笑の怪物」と呼ばれる男の、その優しげな眼は、遥か先にあるアガルタの都を見据えていた。

第百七十二話　コンシディーと家の味（前書き）

私が子供の頃は、各家庭に「家の味」のようなものがあり、お呼ばれなどして友人の家でご飯をごちそうになる時などは、楽しみでしょうがありませんでした。特に卵焼きなどは、各家庭によって作り方や味付けなどが異なり、楽しみながら食べた思い出があります。そんな思い出話をふと思い出したので、それを元にして書いてみました。

第百七十二話　コンシディーと家の味

ある日の昼下がり。帝都のリノス家の屋敷では、コンシディーが考えるポーズを決めたまま、微動だにしないでいる。

「う～ん」

一見すると頭痛と戦っているように見えるが、彼女の中では、眉間に深い皺を刻んで悩んでいるつもりである。見た目が幼いので、まだ、顔にはシワが刻めないのだ。

目の前には、一つの鍋が置かれている。そこには今、煮えたばかりのかぼちゃの煮つけがあった。シディーはその鍋を見ながら、小さく呟いていた。

「・・・なにに入れればいいのよ」

事の発端は、これより十分前に遡る。

この日は休日ではあったが、昼食後にそれぞれに動きがあった。メイとリコは子供を抱えてクルムファルに転移していった。主治医であるローニの下に行き、子供たちのアレルギーの有無や健康状態を調べに行ったのだ。この世界では、赤ん坊にそこまでの検査を行うことは通常ない。これは、主人であるリノスがどうしてもと言って聞かなかったためだ。

「食物アレルギーがあったら大変じゃないか！一応、一応検査して

もらえ。あと、耳や目もちゃんと見えているかも検査してもらっておこう」

リコもメイもアレルギーという言葉がわからず、半ばあきれながらではあったが、ローニは博学であり、育児の悩み相談も兼ねてクルムファルに向かうことにしたのであった。

また、ペーリスは大学、ゴンとフェアリ、ソレイユはラマロンに、そして、マトカルとフェリス、ルアラはアガルタの都でちょっとしたトラブルに対応するため、急行していた。屋敷には、主人のリノスとシディーが残る形となった。

リノスは夕食のおかずを作ると言って、一人で機嫌よく何かを作っていた。シディーは、研究室でメイと共同開発をしている、作物の生育を助ける薬品の実験をすることにし、ようやく実験結果となるサンプルが揃い始めたとき、ダイニングから声がかかった。

「おーい、シディー！シディー！」

「はぁーい、何でしょうか？」

いそいそと実験室からキッチンに移動する。リノスは既に屋敷から出ようとしているところであった。

「すまん、ちょっとアガルタに行ってくる。ラマロンから使者が来てしまったらしいんだ」

「あ、そうですか。行ってらっしゃいませ」

「あ、なんきんたいたのみずやにいれといて」

「え？」

「だから、なんきんたいたのみずやにいれといて」

「なんきんたいたのみずやに・・・？」

「ああそうだ。いれといてくれ。よろしくな」

そう言ってリノスは屋敷を出て行ってしまった。

「なんきんたいたのみずやにいれといてって・・・何？」

シディーは自分の全知能全能力を駆使して、この暗号のような言葉を解読しようと努める。

「いれといて、だから、何かを入れるんだわ・・・。みずやに・・・って何？なんきん？たいたの？・・・わからない」

シディーは考えた。目を閉じて、じっと考え続けた。しかし、どう考えても解決策は見つからない。

屋敷には誰もいない。困ったシディーは、この暗号を解読できそうな人間は誰であろうかと考えた。一番効率的であるのはリノス本人に聞くのが一番だが、彼は使者と会うのだという。使者と会っている最中に、

「お話し中恐れ入ります。リノス様、先ほどの、なんきんたいたのみずやにいれといて、というのはどういう意味ですか？」

と使者たちの中を手刀を切りながら分け入っていき、リノスに聞きに行く度胸はさすがにない。

リコやメイならば知っていそうだが、子供を連れている。子供の面倒を見ている最中に、そんなことを聞きに行く、そんなデリカシーのない女では自分はない。

ペーリスは大学、フェリス、ルアラは知ってそうだが、忙しいときはこの二人はいつも険悪なムードであるため、聞きにくい。マトカルは知っているとは思えない。ソレイユは嫌味を言われそうだ。ゴンとフェアリは・・・間違いなく忙しいだろう。そう考えると、家族に聞くことが出来る人はいなかった。

その時、シディーの頭の中に、一人の女性の顔が浮かんだ。あの人ならば、知っているかもしれない。早速彼女は、その人の所に向かった。

向かった先は、アガルタの迎賓館だ。使者を迎えるためいつも以上の人が居たが、宿泊棟の準備は既に完了しており、スタッフは客人の到着を待つばかりの状態であった。それを確認したシディーは、その人の部屋に向かう。

「まあ、どうされたのですか？」

驚きの声を上げたのは、元・ニザ公国の女官長であったミンシであった。現在は迎賓館宿泊棟の支配人を務めている。シディーはその彼女に早速、質問をぶつける。

「ごめんなさい、ミンシ。ちょっと聞きたいことがあるの」

「何でしょうか？」

「あの・・・リノス様から、なんきんたいたのみずやにいれといて、と言われたの。どういう意味かしら？」

「え？もう一度お願いします」

「なんきんたいたのみずやにいれといて、と言われたの」

ミンシはシディーの言葉を何度も復唱する。

「もしかして、ミンシもわからないのかしら？」

「いいえ！そんなことはございません！わかります。わかりますとも」

ミンシは胸を張って答える。シディーはその態度を見て、ホッと胸をなでおろす。

「じゃあ、なんきんって何かしら？」

「なんきん・・・。すみません、リノス様からはどういう状況で頼まれたのでしょうか？」

「状況？ええと、キッチンで、お鍋があって・・・。リノス様が料理をしていたんだわ」

「なるほど！それでわかりました。それはお鍋です。お鍋のことが、なんきんです」

「え？お鍋をなんきんって言うの？？」

「姫様、人族の世界では、住むところによって物の名称が変わることがあるのです」

「あ、ああ。そうね。確かに。確かにそうね。リノス様は元々ジュカ王国出身・・・。ジュカでは、鍋をなんきんって言っていたのかもしれないわね。わかった、ありがとう。じゃ、たいたの、は？」

「姫様、たいたの、ではなく、ぱいたん、ではありませんか？」

「ああ、ぱいたん・・・たいたの・・・。うん、ぱいたん、だったかもしれないわ」

「それでしたら、牛や鳥の骨からとる白湯（ぱいたん）スープのことです」

「なるほど、スープのことなのね。わかった。じゃあ、みずやっていうのは何かしら？」

「姫様、みずやではなく、水菜ではありませんか？」

「みずや・・・水菜・・・。うん、水菜だったかもしれないわ」

「そうでございましょう。答えは出たではありませんか」

ミンシはホッとしたような顔をする。シディーは人差し指を顎に当て、斜め上を眺める。

「と、いうことは、なんきんというお鍋の中に、牛か鳥の骨を煮詰めた白湯スープと水菜を入れろってことかしら？でもミンシ、お鍋

の中にはかぼちゃの煮た料理が入っていたのよ?そこにそんなものを入れて美味しいのかしら?」

ミンシの顔がいつも以上に厳しい表情になる。

「姫様、お察しなさいませ」

「どういうこと?」

「姫様、料理というのは家々によって味付けが違うものです。言わば、家の味、というものがございます。おそらくリノス様は、バーサーム家、ひいてはアガルタ王家の味を、姫様に伝授されようとしているのではないでしょうか?」

「私に?どうして?」

「姫様、庶民の家ではどこでも、嫁を迎えれば、その家の奥方様からお嫁様に、家の味を伝えていくものなのです。不敬ながらリノス様におかせられては、元奴隷というご身分。従って、こう申しては何ですが・・・。お生まれは庶民である可能性が高うございます。いえ、別に庶民だからどう、というわけではございません。アガルタ王は、幼いころに家の味を伝える場面を、どこかでご覧になったのではないでしょうか。だからこそ、ご自身が姫様に家の味をご伝授なされるのだと、このミンシは愚考します」

「なるほど・・・」

「姫様。姫様はアガルタ王家の味を受け継ぎ、それを次の世代に伝えていかねばなりません。リノス様のお子様がご成婚され、新しいお嫁様がお迎えになられたとき、姫様がそのお味をお伝えするので

す」

「でも、リノス様に男のお子様はおいでにならないわよ？」

「姫様！もうっ！何を言っているんですか！その、男のお子様を、姫様がお産みあそばすのです！」

「私が？」

「そうです！ドワーフ族、とりわけ王族は男系家系です。きっとリノス様と姫様のお子様は男のお子様でしょう。と、なれば、そのお子様のお嫁様にアガルタ王家の味を伝授できるのは・・・。姫様しかいないということになります。だからこそリノス様は姫様に家の味をお伝えしたのではないでしょうか。姫様、どうぞどうぞ、立派なお子様をお産み下さいませ。このミンシ、心よりお祈り申し上げております」

「・・・ミンシ、ありがとう」

目に涙をためてシディーは礼を言う。その姿を満足げな微笑みを湛えながら、ミンシはゆっくりと頷くのだった。

屋敷に帰るとシディーは早速冷蔵庫をあさり、ストックしてあった骨付きの黄金鳥の肉をいくつか取り出して白湯スープを作り、鍋の中に入れた。続いて水菜を刻んで鍋の中に投入する。そして、それらをグツグツと煮ていった。

夜になって、リノスはようやく屋敷に帰ってきた。

「いや疲れたな～。まさかラマロンが、あんなに鉱物資源が豊富だったとは知らなかったな～」

そんな独り言を言いながらリノスはキッチンに入ってきた。そこには、鍋の前で立ち尽くすシディーの姿があった。

「何やってんだ、シディー？」

「あ、リノス様、おかえりなさいませ」

笑顔で迎えるシディーだったが、彼女は鍋をグツグツ煮ている。

「あ、なんきんたいたの、温めなおしてくれてるんだな。ありがとう」

「はい。リノス様が言われたように、なんきんというこの鍋に、白湯スープと水菜を入れています」

「うん？どういうことだ・・・？え？ちがうよ・・・。なんきんというのは・・・カボチャだ。たいたのというのは、煮物のことだ。みずやってのは水屋、食器棚のことだ。つまり、カボチャの煮物を食器棚の中に入れて冷ましておけという意味だ」

今度はシディーの目が見開かれていく。

「え・・・それじゃ・・・私・・・」

「せっかくのカボチャの煮物に何ということを・・・。ああ、色が変わっちまってるな」

そう言いながらリノスは箸で鍋の中をかき混ぜる。

「これ、いいカボチャなんだけどな。勿体ないな」

そう言ってリノスは煮物を口の中に放り込む。

「うぁん？・・・白湯スープが意外に濃厚・・・黄金鳥のダシか・・・。まあ・・・。これは、ほう、なんとまあ」

そんなことを言いながらリノスは次々とカボチャの煮物を口に運ぶ。

そして、おもむろにシディーの顔を見た。

「シディー、意外とイケるな」

リノスはニヤリと笑って呟く。

「これ、家の味にしようか？」

第百七十三話　クリミアーナ教国

ラマロン皇国皇都の港から、船で東に進むこと一週間。絶海の孤島に、その国はある。

島の面積はかなり広く、人口は約一千万人を擁する巨大な都市がある。島の周囲は断崖絶壁であり、それに沿う形で高い城壁が備えられている。都市の中は様々な区画で区切られており、国民の食料もその中で生産され、そして、人々の愛もこの中で育まれる。この国は、ほぼ全国民が一つの教義を深く共有しており、そのため、国民相互のつながりは極めて強い。つまりこの都市は、世界中から選抜された者だけが住むことを許される聖地のような場所なのである。

その国の名を、クリミアーナ教国という。

数千年前、人族が魔物に蹂躙され、滅亡の危機に瀕した時、類まれなる治癒魔術を駆使して人族を救い、遂に魔物との戦いに終止符を打った女神、アフロディーテ・クリミアーナが建国した国である。

クリミアーナは、自身が身に付けた知識や技術を惜しげもなく人々に伝え、人族の発展に寄与していった。彼女の能力で最も優れていたのは「加護」スキルであり、ＬＶ３までの「呪い」を取り除くことができた。従って彼女は人族の悪魔化を防いだ女神として認識されている。そして、臨終の際には神となり、そのまま天に昇ったとされる。そのため、この国ではクリミアーナを神として崇め、彼女の遺志を継いで、学問と研究を貴ぶ国家であり続けている。

一方でこの国は、クリミアーナの教えを教義とした、所謂、クリミ

アーナ教を興した。魔物からの救世主であった彼女の教えはたちまち人族に受け入れられ、現在では世界中の国々に信者を持つ。しかも、国の元首が敬虔な信徒であることから、この宗教を国教としている国家も多く、現に、ヒーデータ帝国並びにラマロン皇国もこれを国教としており、言わば、名実ともに世界最大の宗教組織に成長していた。

クリミアーナの教えは、「我らを利する者は助け、害するものを排除せよ」というものである。当然、我らとは人族を指すのであるが、この教義が生まれて数千年、現在では、この「我ら」は「クリミアーナ教」と解釈される傾向にある。

この教国を率いるのが教皇、ジュヴアンセル・セインである。既に頭は禿げ上がり、口に湛えている髭も真っ白になっているが、肌色もよく、健康そのものに見える。しかし、彼は齢八十を超えており、それでなお、でっぷりと太った堂々とした体格を維持している。そのため、一見すると彼を五十代半ばと見る人も多い。

常に優しげな微笑みを湛え、どのような身分の者に対しても丁寧で慈悲深く、彼が声を荒げる姿や怒った姿を見た者は皆無である。しかし、彼はクリミアーナ教の教皇であると同時に、クリミアーナ国の国家元首でもある。世界中の国家やその国民を信徒に持ち、至る所に建設された教会を通じて得る情報は、どの国家よりも正確で確実なものである。この国は世界最高の情報国家でもあった。

人心と国家、そして世界の情報を一手に握る教皇ジュヴアンセル。その菩薩のような柔和な笑みの中には、電子計算機のごとき怜悧で明晰な頭脳が埋め込まれているのである。

五月の日差しが照りつけ、少々汗ばむ陽気となったこの日、クリミアーナ教国の首都であるアフロディーテでは、ジモークが行われ、教皇以下、全ての枢機卿が列席した華やかな宴が公邸である教皇宮殿で行われていた。

アフロディーテに住むことが許されるのは、多大なる功績を認められた者であり、それに満たないものは世界の各地に赴くことになる。ある者は布教し、ある者は住民を癒し、教え、諭し、ある者は教国の教義に背く者を罰する役割を担う。それは四年に一度のジモーク、いわゆる人事評価で決定され、アフロディーテに住む者、出ていく者が決められるのである。

この日はいわゆる、アフロディーテを出ていく者の送別会であった。そこには悲壮感や敗北感といった負の感情は一切ない。彼らは一度、聖地・アフロディーテに迎えられた者たちなのだ。世界各地に散ったとしても、教会関係者からは羨望の眼差しで見られるのである。

一方で、そこには年端も行かぬ少年少女たちの姿も見られた。彼らはこのアフロディーテで生を受けた者たちであり、初めてこの首都から出ていく者たちである。彼らはいわゆる特権階級の子弟たちであり、余程のことがない限り、次のジモークで首都に呼び戻される。そしてまた、次のジモークで世界に旅立っていく。彼らの大半は狂信的なクリミアーナ教の信者であり、首都と世界各地を往復しながら、とりわけ国家や貴族たちを取り込む役割を担うのである。

パーティーは和やかのうちに終了し、参加者に向かって教皇が祝福の言葉と祈りをささげている。その、優しげで温かい教皇の祈りに誰もが恍惚の表情を浮かべているその中に、たった二人、感情を一切あらわさず、無表情を貫く者がいた。二人は教皇の祈りの最中で

あるにもかかわらず、小声で言葉を交わしていた。

「クッ・・・本当だったら、僕もこの祝福を受けられたのに・・・」

そう言って唇をかむのは、八歳の少年、カッセルである。彼は教皇の妹であるデメテルのひ孫にあたる。幼いころからその類稀なる才能を発揮し、神童の名をほしいままにしている。そんな彼を宥めるように、隣の少女が優しい口調で語りかける。

「そのようなことを言っては、ダメ。きっと、クリミアーナ様が、必ず導いてくださいます。今回は、クリミアーナ様のお導きなのです」

そう言って神に祈るポーズを取るのは、教皇の孫であるヴィエイユである。今年十四歳になる彼女は、祖父の教皇の血を最も色濃く受け継いでいると、専らの評判の才女である。常に慈悲深い表情を湛えており、物腰も柔らかではあるが、その目の奥は常に研ぎ澄まされた怜悧な頭脳が備わっており、その分析力はカミソリのようであるとも言われる。

当初この二人は、今年のジモークにおいてラマロン皇国に派遣される予定であった。ヴィエイユは皇帝の一族であるケーニッヒ公爵の妻として、そして、カッセルはその皇帝の養子として赴く予定であったが、ついひと月ほど前に突然そのジモークが延期されたのだ。二人ともこの首都に留まれるのはうれしくもあったが、やはり、早く任地に赴き、一人でも多くの人々をクリミアーナ様のお教え、天道に導きたいというのが正直な気持ちであった。

そんな気持ちを察してか、祈りが終わり、皆が退出する中、二人は教皇に呼ばれた。

「ヴィエイユもカッセルも、この度のこと、残念に思っていますね？」

「・・・」

図星を突かれたカッセルは、ただ唇をかんでいる。一方でヴィエイユは、慈悲深い表情を崩すことなく言葉を返す。

「はい。正直申しますと、最初は残念に思っておりました。しかし、これはクリミアーナ様のお導きかと思います。きっと、私をさらに高められる場所を、クリミアーナ様はお導き下さると思います」

教皇は満足そうに頷く。

「ヴィエイユの言う通りです。あなたが赴く予定であったケーニッヒ様は、先日、不慮の事故でお亡くなりになられました。悲しいことです。誰よりもクリミアーナ様への熱き信仰の心をお持ちだっただけに、私も残念でなりません。それにショックを受けたラマロン国皇帝陛下も、現在は病床に臥せっておられるとのこと。無理もありません、お母上様を亡くされ、そして今また、最も信頼を寄せておられた公爵様を亡くされたのですから、その心中は察して余りあります。つまり皇国は現在喪中。従って、カッセルが赴くことも憚られます。理解してください」

教皇は柔らかな笑みを讃えて二人を見る。二人は静かに膝をつき、首を垂れるのであった。

「二人は次のジモークまで待つつもりはありません。ふさわしい任地があれば、特例として赴いていただきます」

その言葉を聞いて二人は思わず顔を上げる。

「ええ、ええ。いいのです。特例を発するのは・・・五十年ぶりでしょうか。それだけの努力をあなた方はされています。これも、クリミアーナ様のお導きでしょう」

二人は目に涙を溜めている。特例で出されるジモークは、言わば教皇候補と同じ意味を持つ。これはつまるところこの二人に対する教皇の期待の表れであり、それを感じた二人はただただ、その感動に打ち震えるしかなかった。

会場を後にした教皇に、一人の司教が近づき、恭しく首を垂れる。

「誠に恐れ入ります。本日、イマーニ様より臨時枢機卿会議の開催を求める要望書が提出されました」

「ほう。臨時枢機卿会議とは・・・。一体いかなる理由でしょうか」

「はい。人類を苦しめてきた難病であります、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスの特効薬が発見されたとのことで、それを教皇聖下をはじめ、枢機卿の皆様方に発表したいとの要望でございます」

教皇は大きくうなずく。

「イマーニの言うことならば間違いはないでしょう。いいでしょう。会議の開催を許可します。できれば、多くの方に聞いていただくといいでしょう。このような大発見を、我々のみが独占することはよくありませんからね」

「畏まりました」

そう言って司教は恭しくその場を下がっていった。教皇は優しい笑みを浮かべて彼を見送る。そして、ゆっくりと自分の部屋に向けて歩き出した。

まさかこの発表が、全世界を大騒動に巻き込むことになるとは知らずに。

春が、終わろうとしていた。

第百七十四話　研究発表

クリミアーナ教国の首都、アフロディーテにある大聖堂は、立錐の余地もない程に人で埋め尽くされていた。そこには教皇以下、全ての枢機卿が列席し、ある種の荘厳な雰囲気を醸し出している。そして、その前には二人の男と一人の女性が静かに座っている。

臨時枢機卿会議・・・。このクリミアーナ教国、もしくは全世界に影響があると思われる事件、災害、発明、発見があった場合に召集される会議であり、その権威は高い。大魔王の蹂躙によってジュカ王国の滅亡を受けて開かれて以来、数年ぶりに開催された会議である。前回は非公式の会議であったが、今回の会議は公開されるとのことで、アフロディーテに住む人々の高い関心と注目を集めていた。

「それでは、始めてください」

教皇の一言で、大聖堂が静寂に包まれる。そして、一人の男性がゆっくりと立ち上がり、口を開く。

「クリミアーナ医学研究所所長のイマーニでございます。この度は、私どもにこのような機会を設けていただき、歓喜に耐えません。今回、臨時枢機卿会議の開催を要請いたしましたのは、数千年の間、我ら人族を苦しめ続けてきた難病、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスの原因究明とその特効薬を、私どもの研究所員が発見するに至りましたので、そのご報告をさせていただきたいと思い、要請した次第でございます」

その言葉を受けて、座っていた二人がゆっくりと立ち上がる。

「私ども研究所の副所長を務めますダリナーと、特効薬を発見しました研究所員のグラリーナでございます」

二人は恭しく一礼をする。

先ほどから淀みのない声で、さわやかな弁舌を振るうイマーニは、知性溢れる顔つきをした医学研究者である。教国始まって以来の天才と称され、数々の医薬品の開発と手法の発明は、数多くの人族を救済してきた。その中でも、人体再生のスペシャリストとして高い評価を受けている研究者である。

本来欠損した人体部分は、ＬＶ４の回復魔法を駆使しなければ再生することはできなかったが、イマーニは魔術と薬品を組み合わせることで、徐々にではあるが欠損部分が再生することを発見した。つまり、ＬＶ３の回復魔法でもＬＶ４の効果を発揮できることを発見したのである。

温厚篤実な性格ということもあり、全ての研究者から慕われる人物であった。

一方、副所長のダリナーは、一言でいえば、忍耐強そうな顔をした男である。実際、彼は何度も何度も失敗と挑戦を繰り返し、成果を上げてきた言わば叩き上げの研究者である。その豊かな経験に裏打ちされた含蓄は、所長のイマーニの研究を大いに助けており、言わば彼はイマーニの右腕であると言える。

そして、唯一の女性であるグラリーナは、一人、異彩を放っていた。既に中年の域を出ようとしているイマーニとダリナーと比較すると、

彼女は格段に若い風貌であった。それもそのはずで、イマーニは五十歳、ダリナーは四十八歳という年齢のなか、グラリーナはわずか二十六歳という若さであった。そのまだ若き研究者が、全世界に影響を及ぼすかもしれない大発見をしたというのである。この事実に、大聖堂に集まった人々は驚愕したのである。

しかも、グラリーナの風貌も、人々の関心を引いた。ちょっと猫背でありながら、瞬きの少ない、潤んだ黒目は溢れる知性を感じさせ、日に焼けていない少し青白いその顔色は、昼も夜も一心不乱に研究に打ち込んでいる姿を想起させる。小柄で痩せた体、そして何より、イマーニとダリナーが司祭の礼服に身を包んでいる中で、彼女一人が白衣姿であったのだ。

「それでは、これらの病が起こる原因と、その特効薬につきまして、グラリーナ研究員より発表させていただきます」

グラリーナはゆっくりと口を開く。

「私どもの研究によりますと、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスを発症する原因は共通しており、それは、獣人の体液を媒介して感染することがわかりました」

大聖堂が揺れる。人々の唸り声で、振動しているのだ。

「静粛に」

教皇が右手を上げて清聴を促す。先ほどの大歓声が嘘のように静まり返る。

「具体的に申し上げますと、いわゆる眠り病と言われるキリスレイ、

これは犬獣人の体液を媒介して発症します。そして、段階的に筋肉が硬直していく病であるガイッシャ、これは狼獣人の体液を媒介して発症します。最後に、突然死に至る病でありますルロワンス、これは猫獣人の体液を媒介して発症することがわかりました」

再び大聖堂が大歓声に包まれる。教皇以下枢機卿は微動だにすることなく、彼女らを見つめている。教皇は目を閉じてしばらく物思いにふけっていたが、やがて聴衆が落ち着きを取り戻したことを見計らうと、ゆっくりと口を開く。

「なるほど。それで、その特効薬はどのように作られるのですか？」

「はい。我々は、これらの病が発症するのは、人族に病に対する抗体がないためと考えました。そこで、最も病に対する抗体が強い生物を調べましたところ、羊獣人の抗体が最も強いことがわかりました。そして、その抗体は肝臓で作られていることもわかっております。その、肝臓で作られている胆汁に、私が開発しました酸液をある一定の分量で加えますと、これらの病のうち、キリスレイは完治し、ガイッシャは症状の進行が止まり、ルロワンスは発症が確認されなくなりました」

大聖堂は静寂のままだ。誰もがその成果に耳を疑っているのである。そのうち、会場の誰かが小さく手を叩いた。それが契機となり、大聖堂は万雷の拍手に包まれた。

教皇はその拍手が鳴りやむのを待って再び口を開く。

「クラリーナ女史が仰ることはよくわかりました。それを証明する根拠はあるのですか？」

その言葉を受けて、所長のイマーニが口を開く。

「クラリーナ女史は過去、私の研究におきまして、人体再生液に微量の塩分を加えることによって、その効果が高まるということを発見した実績がございます。彼女は一日に１００本の研究資料を読み、ほぼ不休不眠で研究に没頭する才女であります。この研究成果は、我ら人族を救う大発見であると、私、並びに副所長のダリナーが証明いたします」

ダリナーも大きく頷く。教皇は目を閉じてしばらく物思いにふけっていたが、やがてゆっくりと目を開けて口を開く。

「イマーニ所長がそこまで仰るのであれば、大丈夫なのでしょう。わかりました。これより、我がクリミアーナ教国並びにクリミアーナ教は、犬獣人、狼獣人、猫獣人との接触を禁止します。彼らについては、今すぐこの首都からの追放を命じます。そして、羊獣人については・・・その身柄を拘束します。すぐ、首都にいる羊獣人については、その身を捕らえなさい。各地の羊獣人については、このアフロディーテへの護送を命じます」

教皇は壇上の席からゆっくりと階段を降りてくる。そして、イマーニたちの前までやってくると、一人一人の手を両手で握りしめる。

「三人とも、よくやってくれました。これで、人族は救われます」

「もったいないお言葉でございます・・・」

三人はあふれ出る涙を拭おうともせず、感涙にむせんだのだった。

その夜、教皇は執務室の机で積み上げられた書類に目を通していた。

その時、ふっと頭の中にある考えが浮かんだ。

「そういえば・・・アガルタ王には羊獣人の妻がいましたか・・・。天道に従う国か、叛く国か、見極めるいい機会かもしれませんね・・・」

誰に言うともなく教皇は呟く。その顔は柔和な笑みのままではあるが、その目の奥は怜悧な光が宿っていたのだった。

第百七十五話　何にも知らない俺たちは、海開き

城塞都市ガルビーの岬からは、ラマロン海が一望できる。海面に燦々と降り注ぐ太陽の光が美しい。そして、沖の方に視線を移すと、そこには二つの渦潮が目に入ってくる。雄大で雄々しい渦潮は、見る者に活気を与えてくれる。リノスはこの街に来た時から、この光景を気に入っていた。

「いや～今日もデカイ渦潮だねぇ～」

俺はガルビーに来るたびにこの渦潮を見て感動している。あそこから海の底なしのパワーが発せられているような感じがして、俺も元気になるような気がするのだ。よし、今日も頑張ろう！夜も頑張るんだ！という気になる。できれば毎日この光景を見たいものだ。

そんなことを考えていると、俺の背後に数名の男の気配がする。殺気は感じないため、俺に敵対する気はなさそうだ。俺はゆっくりと後ろを振り返る。

「アガルタ王、リノス様とお見受けする」

一目見て屈強と思われる男たちが六人立っていた。全員インデアンのような派手な格好をしている。原色だらけの服と装飾品が眩しい。

「ああ、そうだ。俺がリノスだ。お前たちは？」

「お初にお目にかかります。私は、このガルビーの街で漁業組合の長を務めます、ムーロイと申します。アガルタ王、リノス様にお願

いがありまして、ここまで押しかけてまいりました」

ムーロイと名乗る男たちは片膝をつき、首を垂れる。俺もひざを折って屈み、奴らとできるだけ目線の高さを合わそうとする。

「何もそんなに畏まらないでくれ。俺に頼みか。俺にできることなら、手伝おう。話してくれないか」

「ありがとうございます！」

目を輝かせながらムーロイは語り出す。

元々、このガルビーは漁業町として誕生したのだという。海からは無尽蔵の魚が獲れ、この町は大いに潤っていたそうだ。ラマロン皇国の初代皇帝も、この豊富な海の幸を元手に交易を行い、力をつけていった。言わばこの街は、堅牢な要塞都市としてその名が知れ渡っているが、皇国一の漁獲高を誇る漁港としての一面もあったのである。

しかし、四年前に突然、ラマロン海に渦潮が起こり始めた。最初のうちは小規模であったが、日を追うごとに大きくなり、現在の大きさになった。しかも、最初は一つだけであった渦潮が、いつしか二つになっていた。こうなっては、常に海は荒れている状態であり、漁をする船を出すこともできなくなった。ここ数年、漁師たちは浜辺近くの魚を獲って糊口をしのいでいたが、それも限界に来ていた。さらには、この街にはかなり大きな港を備えているが、これだけ海が荒れているために交易の船も来ることができないでいる。そこにきての、不作続きであった皇国の食糧事情も重なり、この街は兵糧攻めに近い状態にあった。

ムーロイたちは、この状況を何とか打開しようと、俺の所に相談に来たというわけだ。

「う～ん、海のことは俺にもよくわからんからな～」

俺は腕組をしながら考える。ムーロイたちは不安そうな顔をしながら口を開く。

「無理は承知で相談しております。聞けば、リノス様は色々な薬品や精霊たちを使って皇国の田畑を復旧されているとか。それが海に通用するかどうかはさておき、もしかしたら、と思い相談に上がったのです」

「まあ、一度、考えてみるよ」

そう言って俺は、ムーロイの連絡先を聞き、ガルビーでの仕事に取りかかった。

夜になり、帝都の屋敷に帰ると早速、家族にムーロイの話をする。

「あー。あの海は荒れるでしょうね」

そんなことを言ってきたのはルアラだ。

「何でだ？」

「ラマロン海ですよね・・・。確かあそこは、アムピトリテ様がおられる海ですから・・・」

「アムピトリテ・・・？」

「ポセイドン王の・・・正妻です」

「何じゃそら？」

聞けばルアラの父、ポセイドンとその正妻であるアムピトリテは大恋愛の末、結ばれた仲であったそうだ。それはおとぎ話にもなっており、リコなどは幼い頃、その話が大好きであり、何度も何度も女官にそのお話をしてくれとねだったらしい。

「本当に素敵なおとぎ話なのですよ・・・。神々の反対を押し切って、ポセイドンがプロポーズする場面は、今思い出しても胸が熱くなりますわ」

リコは中空に目を泳がせて、別の世界にトリップしてしまっている。

「ゴホン、ポセイドン王は俺も会ったことがあるけれど、まさかそんな純愛をする人には見えないな。まあ、あくまでおとぎ話だ」

「いえ、事実みたいです」

ルアラが即答してくる。

「マジで？」

「はい・・・。私が聞いたところによると、その時の父はその・・・まだ、女性と触れ合ったことがなかったようで・・・」

「お互い、初恋ってか？」

「だった、ようです・・・」

「まあ、それでは私とリノスのようですわ！」

一人リコだけが喜んでいる。聞けば、念願かなって恋する女性と結婚できたまではよかったが、女性を知ってしまったポセイドン王は女性に興味を持ち始め、それから次々と側室を増やしていき、現在に至るのだという。

「父はその・・・ヘンなところで、真面目ですから・・・」

「ルアラ、お父上の気持ちは、俺もわからなくはない。わからなくはないが・・・あれはやりすぎだ」

「すみません」

何故かルアラが落ち込んでいる。

「いや、ルアラが落ち込む必要はない。ということは、ラマロン海が荒れているのは、アムピトリテが焼きもちを焼いているから・・・か？」

「間違いないと思います。それはそれは、怒っていると思います」

「あの渦潮が、海の女王の心の中に渦巻いている怨念を表しているって思うと・・・。確かに魚は寄り付かないだろうし、漁船も近づけないよな・・・」

その後、俺たちはルアラを中心として、アムピトリテへの対策を話し合った。本来であれば海の神に仕える巫女であったルアラが歌（

演歌）を捧げるのが効果的なのだが、如何せん彼女は憎き亭主の娘なのである。下手をすると女王の神経を逆なでしかねない。しかし、ルアラはダメもとでもやってみたいと言い張ったので、一度連れて行ってみることになった。

その夜、リコと二人っきりになった時、リコが俺の耳元で囁いてきた。

「私、女王様がポセイドン王の愛を取り戻す方法がわかりましたわ」

「どういうことだ、リコ？」

「他のどの側室よりも主人を愛し、そして、愛されればよいのですわ」

「ど・・・どうやって？」

「簡単ですわ。離れないようにすればいいのですわ。こうやって・・・」

リコは俺の体にしがみついてくる。

「いや、リコ、これじゃ・・・」

「リノスは、私のことがキライになりまして？」

「大きな声を出さないでくれ。エリルが起きてしまう・・・」

「私のことは・・・？」

「だ、大好きです・・・」

「私も、大好きですわ。ポセイドン王たちも、私たちのようになればいいのです」

「そ、そうだね」

その夜、リコは空が白むまで俺の手を離さず、ピタリと体をくっつけ続けた。

次の日、俺はルアラを伴ってガルビーに転移した。岬からはいつもの雄大な渦潮が見える。それを見たルアラは思わず声を上げる。

「これは・・・何と凄まじい怒り・・・。これを慰撫するのは私ではとても・・・」

「いや、ビビるなルアラ。一度、やってみろ」

「は・・・はい」

ルアラは全力でその渦潮に向けて歌う。歌っているのは、俺が教えた定番の失恋ソングだ。誰かにあなたを取られるなら、あなたを殺しちゃっていい?という内容の歌だ。かなり難しいのだが、さすがはルアラである。見事に歌いこなしていて、コブシの使い方も完璧だ。

「・・・ダメみたいです」

渦潮は全く衰えを見せず、海は激しく荒れている。

「・・・仕方がない。別の方法を考えよう」

俺は力なく呟く。相変わらず雄々しい渦潮を見ていると、ふと、子供の頃に風呂で親父が歌っていた歌を思い出した。俺は思わず鼻歌交じりにその歌を歌う。

秋・・・恋人が去っていった・・・。私は凍えている程に寒い・・・恋人よ・・・傍に居てちょうだい・・・。そして、この別れ話が、冗談であってほしい・・・。

「・・・師匠・・・なんて悲しい歌を・・・」

「ルアラ、これは失恋しないとわからない。お前がこの歌の奥深さを知るのは、まだ早い」

俺は海を見ながらニヒルに呟く。

「そう、まだ早いン。でもウチはめっちゃわかるン」

「おい、いきなり何言ってんだよルアラ」

振り返るとそこには、平安時代の女官のような恰好をした、小学生くらいの幼い女の子が立っていた。

「・・・誰だい？」

「アンタやろ？さっき歌ぅてたんわ。ウチの気持ち、その歌の通りなン。メッチャ癒されたン」

「・・・えっと?お宅様は??」

「ウチ、アムピトリテって言うン。トリちゃんでええン」

「もしかして・・・ポセイドン王の・・・?」

「そう。ドンちゃんのお嫁さんなン。でも、ドンちゃんウチのところに来てくれへン。他の女の所に行ってしもたン。寂しかったン。イライラしてたン。悔しかったン。だからドンちゃんのいる海の隣の海を荒らしてヤツあたりしてたン」

「もっ・・・申し訳ございませんでした。父のこととはいえ・・・申しわけ・・・」

ルアラが土下座して謝っている。

「アンタは誰なン?」

「ポセイドン王の２１７番目の娘の、ルアラです」

そして、ルアラからポセイドン王の現状について報告され、何度も彼女は謝った。

「女王様、お望みならば、女王様のお気持ちをこのルアラを介してポセイドン王にお伝えすることはできます。しかし・・・王の性癖が治るとは思えません。女王様のお気持ちが済むことであれば、俺たちのできる限りのことはしたいと思います。海の民が困っております。できれば、海を静かにしていただければありがたいのですが・・・」

アムピトリテは目を閉じてじっと考えている。

「ウチも大人気なかったン。ええ歌聞かせてくれたから、海を開こうと思うン」

寂しそうに彼女は呟く。

「ありがとうございます。せっかくですから女王様。一年に何度か、海の上で楽しい、にぎやかなお祭りを致しましょう。美味しいものをお供えします。下手ですが、歌をささげましょう、音楽なども奏でましょう。いかがですか?」

「うん、それやったら、寂しくなくなりそうなン」

「では、そう致しましょう!」

こうしてガルビーでは渦潮は消え、海は穏やかさを取り戻した。漁師たちは大感激し、数年ぶりの漁に出ることができたのであった。そして漁師たちは、季節の変わり目ごとにお祭りを行い、海の女王に感謝の意を表したのだった。

しかし、リノス達は知らなかった。せっかく開かれたこの海が、この港が、後に悲劇の舞台になることを・・・。

第百七十六話　やって来たのは最悪の使者

アガルタの都では二日前からの雨が降り続いていた。空を覆うぶ厚い黒い雲は、見る人を否応なく鬱陶しい気分にさせる。その都の迎賓館の一室では、さらに気分の落ち込む話がリノスの下にもたらされていた。

「・・・どういうこと？」

俺は目を見開いて、首をかしげる。そんな姿を見て、目の前に立つ男と女は、ニヤリとした笑みを湛えている。

「もう一度申し上げます」

腹の底から絞り出すような野太い声が、部屋の中に響き渡る。小柄で痩せているくせに、声だけは迫力がある。俺はその男に視線を移すが、相変わらず首はかしげたままだ。

「我がクリミアーナ教においては、犬獣人、狼獣人、猫獣人の国外追放、並びに羊獣人の捕獲を貴国に要請いたします。ひと月後、貴国にて捕えました羊獣人たちを、我が首都、アフロディーテに護送したく思います。つきましては、復活しましたガルビーの港に、我が教国の船が着岸できますよう許可をいただきたくお願い申し上げます」

そう言って二人は恭しく頭を下げる。

「獣人が不治の病の原因？　よくわからんな。俺の周りではそんな

ヤツは一人もいないけれどな・・・」

「ご理解いただけないのはごもっともです。しかし、世界に誇る最高の医学者がそう断じているのです。間違いはございません。このままではこの国中に疫病が蔓延する可能性がございます。アガルタ王におかれましては、是非、この国の人民をお救いいただきたくお願い申し上げます」

「まあ、話の内容は、わかった」

「そう言っていただければ、助かります。何しろ、アガルタ国は、ヒーデータ帝国、ラマロン皇国、ニザ公国と深い誼を通じておられます。アガルタ王が率先して、我らクリミアーナ教国にご協力いただければ、他の国もそれに倣われると存じます。王におかれては、主神様であらせられるクリミアーナ様より、ご加護があることと存じます」

男はスッと祈りのポーズを取る。

「アガルタ王に申し上げます」

後ろに控えていた女がスッと前に進み出て、頭を下げる。

「俺のことはリノスでいい。いや、何も俺はクリミアーナに協力すると言ったわけではない。勝手に話を進めるな」

俺の毅然とした態度に、女はニコリと笑みを浮かべる。

「これは失礼しました。ところで、アガルタ王におかれては、お妃さまが羊獣人と伺いましたが・・・」

「……ああ。正確に言うと、ドワーフと羊獣人のハーフだ。厳密に言うと羊獣人ではない。それがどうした？」

「そのお妃さまも、我らが首都、アフロディーテに送られることになりましょう。お察し申します。差し支えなければ、アガルタ王のお近くに、我らクリミアーナ教の神官を遣わしましょう。きっと、王のお力になれると考えます」

女は少女のような、無垢な微笑を見せている。俺は居住まいを正して、口を開く。

「はあ？何でメイを……？　なぜ妻をクリミアーナの都に送らなきゃならないんだ？　お前、言葉に気を付けてモノを言えよ？　仮にも一国の王妃だ。それを差し出せとは無礼にも程があるぞ？　言っておくが、アガルタはクリミアーナの属国ではない。もし、そう考えているのであれば、考えを改めるんだな。どうしてもというのであれば、腕ずくで取りに来い。いつでも相手をしてやる。あと、神官も必要ないな。まあ、獣人の病については取りあえず、俺の方でも調べてみる。本当に獣人たちが原因ならば、その時は対策を考える」

「……左様でございますか。ただ……、そのお妃さまは、確か、犯罪奴隷のご身分ですね？」

「なに？」

「お名前がメイリアス。間違いございませんか？」

「……」

俺は無言で少女を睨みつける。

「で、ありましたら、お妃さまは我らが都、アフロディーテに護送いただかねばなりません」

「はあ？　何を言ってるんだ？」

「ご存知でしょうか？　犯罪奴隷というのは、所有権は犯罪奴隷に指定した者が持つということを」

「どういう意味だ？」

「そのメイリアス……。失礼しました。メイリアス王妃様を犯罪奴隷としたのは、我がクリミアーナ教でございます」

「何じゃそれは！？」

「多くの人間を殺したメイリアスを捕らえ、犯罪奴隷としたのは、我がクリミアーナ教なのです」

「だったらどうだと言うんだ？」

「元々奴隷のご身分であった、アガルタ王様であればお分かりかと存じますが、奴隷というのは、所有者がその行動の全てを制限できます。一般の奴隷は命を奪うことまではできませんが、犯罪奴隷は……」

「まさか……」

「もう、お分かりいただけましたでしょうか？　我らもできるだけお元気な状態でお妃さまをアフロディーテにお連れしたいと思っております。道中はご安心くださいませ。犯罪奴隷とはいえ、一国の王妃。丁重におもてなしいたします」

「ちょっと待て、その犯罪奴隷の……」

「まあ、一度、落ち着かれてお考えになるのがよろしいかと存じます」

女は真面目な表情を浮かべながら、俺の言葉を遮った。そして、再び気持ちの悪い笑みを浮かべる。

「アガルタ国の羊獣人たちをお送りいただけないのであれば、それも結構かと存じます。ただし、その時は、お妃さまはどうなりますことか……。あ、そういえば、アガルタ王様とメイリアス王妃様の間には、お子様もお生まれとか。犯罪奴隷の子供ですから、そのお子様も、もしかすると……」

「メイと娘に手を出したら、承知せんぞ？　全力でお前らをブッ潰すからな？」

「これは失礼いたしました。ご無礼を申し上げました。平にお許しくださいませ。ただし、羊獣人たちを護送する船はひと月後にガルビーに参ります。なるべく早くにお決めいただきますとありがたく存じます。おそらく・・・ヒーデータ帝国も、ラマロン皇国も、我がクリミアーナ教を国教と定めている国・・・。少なくともこの二か国はすぐにでも動き出しましょうから、くれぐれも、後れを取らぬようご助言申し上げます」

そう言って二人は恭しく一礼をして、その場を後にした。俺は呆然としたまま、ヤツらの後姿を見送った。

その夜、屋敷に戻った俺は、家族の皆にクリミアーナ教のことを話した。さすがにメイはショックを隠し切れず、呆然自失の状態だった。その姿を見て、リコが口を開く。

「そのようなこと、信じられませんわ。あの難病の原因が、獣人たちだなんて・・・」

気丈に振る舞うが、やはり動揺は隠しきれない。それでもリコは言葉を続ける。

「それに、確たる証拠はあるのでしょうか？　それに、メイとアリリアを人質に取るようなことを……」

「さっきアリリアは鑑定してみたが、犯罪奴隷の表示はなかった。あとは、メイの奴隷身分をどう解放するかだ。それに、取りあえずだが、クリミアーナの使者がこんなものを置いていった」

俺はヤツらから受け取った冊子をテーブルの上に差し出す。

「こ・・・これは！」

シディーが声を上げる。

「これは・・・。サンクチュアリ。もっとも権威のある医学書です」

メイは無言でその冊子を手に取り、パラパラとページをめくり始めた。そして、該当部分と思われる個所を見つけたのだろうか。しばらくじっと視線をその冊子に向け続けた。

誰もしゃべる者もなく、皆、メイの一挙手一投足を見つめている。メイがページをめくる音だけがダイニングに響いていたが、やがてメイは天井を向き、ふぅーっと大きく息を吐きだした。

「どうだ、メイ?」

「論理的には・・・完璧です」

「俺は勉強が苦手だったからよくわからないんだが、やはり、難病の原因は獣人たちで、その特効薬は羊の獣人たちの胆汁なのか?」

「これを読む限りでは・・・そのようです」

「まさか・・・」

シディーも呆然となっている。

「サンクチュアリに研究が紹介されるだけでも名誉なことなのに、それに加えて、イマーニ博士とダリナー博士のお墨付きともなれば、ほぼ、間違いないと見ていいでしょう」

「でも何で、教国は何の罪もない羊獣人を捕らえるのでしょうか?」

フェリスが口を開く。メイは優しい眼差しをフェリスに向ける。

「ひとり分の特効薬を作ろうとすると、羊獣人五人分の胆汁が必要

になります。今、世界中でどれほどの人がこれらの難病に苦しんでいるのかは分からないけれど・・・。少なくとも、数千人の人間を救おうと思うと、一万人くらいの羊獣人が必要になりますね」

「そ・・・そんな。そこまでして、何で人間を救わないといけないんですか？」

「それが、クリミアーナ教です。あの教国は人族のためならどんなことでもする国です」

「リノス様・・・」

フェリスは泣きそうな顔になっている。俺は短く息を吐いて口を開く。

「俺は、メイをヤツらに渡す気はない。それに、その病は根絶しなければ人間は亡ぶのか？そんな夥しい獣人たちの犠牲を払ってまで人族の命を優先させるのは、俺は納得いかん」

「リノス・・・」

「ご主人・・・お願いするでありますー」

「安心しろみんな。メイ。俺は、メイは渡さない」

重苦しい話し合いが終わった。皆、無言で部屋に引き上げていく。俺は一人で風呂に入り、これから先のことを考える。考えれば考えるだけ、色んなことが頭をよぎる。そして、何も解決策が見つからない。じっと湯船を見ながら考える。

「考えてもしゃーない。その時その時。何とかなるなる」

そう言って俺は顔をザブザブと洗って風呂から上がった。

寝室に入ると、誰もいない。今日はリコのはずだが、リコの姿が見えない。仕方なくベッドに一人で入ると、メイが部屋に入ってきた。

「メイ、どうした？アリリアは？」

「・・・シディーちゃんがあずかると言ってくれまして・・・」

「そうか」

「本当はリコ様だったのですが、リコ様が・・・お行きなさいと・・・」

「メイ、おいで」

「・・・」

メイは申し訳なさそうにベッドに入ってくる。しかし、いつものメイではない。パジャマを着たまま、じっとうつ伏せになっている。

「・・・メイ」

メイはゆっくりと顔を上げて、俺を見る。

「ご主人様、お願いがあります」

「何だい？」

「私は、教国に参ります」

「バカなことを言うな」

「その代り、その代り・・・アリリアは、アリリアはここに置いてください」

「やめろ、やめてくれメイ。俺はメイを教国にやる気はない。当然アリリアもだ。その犯罪奴隷の身分を必ず解放してやる。どんなヤツが来ても追い払ってやる。絶対に、絶対に、守ってやる！」

「ご主人様・・・」

メイは泣いていた。こんなに泣いたメイを見たのは初めてだった。

結局、俺もメイも、この夜は一睡もできなかった。

俺はただ、メイの背中を撫で続けることしか、できなかった。

第百七十七話　八方ふさがり

クリミアーナ教の使者が来てから三日が経った。結局俺は何の打開策も見出せずにいた。簡単にできるだろうと思っていたメイの犯罪奴隷の解放は、全くうまくいかなかった。奴隷商の人間を呼び出して聞いてみたが、犯罪奴隷の認定は彼らの領分ではなく、その解放の仕方もわからないのだという。

加えて、獣人たちのことについても、全く進展がなかった。アガルタの都には、犬獣人もいれば猫獣人もいる。そして数は少ないが狼獣人もいる。彼ら、彼女らを見ていると、俺はどうしても獣人たちが不治の病を媒介しているようには思えなかったのだ。

藁をもすがる思いで、おひいさまにも聞きに行ったが、彼女も犯罪奴隷を解放する手段は知らなかったし、これらの病の感染経路についても知らなかった。さすがに落胆の色を隠すことができなかった俺を見かねて、サンディーユが調べてくれることになったが、やはり時間はかかるのだという。

今のところ都の人々には何も伝えていないため、目立った混乱は起こっていない。メイは伝染病の原因は獣人たちに間違いないと言い切ったが、しかし、何となく、ただ、何となくだが、俺には、そんなことはないだろうという感情が沸き上がってくる。

それに、俺なりに調べてみたが、クリミアーナ教というのは思った以上に厄介な相手のようだ。

この宗教は世界中に信者を持っているらしい、その上、国家レベル

でこの宗教を信仰している国も多い。何より、この宗教の司教は人族の「呪い」を解除できる能力を有しているのと、ＬＶ３クラスの治癒魔術が使える。言わば医者のような存在であり、人々の命を司ってきた。そして、犯罪奴隷の制度を確立したのも彼らだったのだ。

ジュカ王国にも確かに教会はあったし、エルザ様も礼拝に訪れていたし、俺も何度かお伴をしたことがある。幸い（？）俺がジュカの王城をぶっ壊した後の内乱で、司教たちはこの国を引き上げてしまい、今のところアガルタでのクリミアーナ教の影響は強くない。それどころか、一番助けて欲しいときに逃げたということで、アガルタの人々からの印象は、逆によくはない。

しかし、世界中に信徒を持ち、いくつかの国家を支配下に置いているのは事実だ。ヒーデータ帝国にしても、ラマロン皇国にしても、この宗教の影響下に置かれている。対応を間違えば、この国々までもが敵に回る可能性があるのだ。そうなればさすがに俺も厳しい状況に陥る。このアガルタの都だけならまだしも、広いアガルタ国全てを守るのは難しい。それどころか、下手をすると天井知らずの人間が死ぬことになる。それは避けねばならなかった。しかも、それ以上に、メイの命が奪われることは、俺にとっては耐えられない。それだけは、何としても避けたいのが本音だ。

この三日間は、その感情との葛藤の日々だった。

やはり、この日も何も考えつかないまま帝都の屋敷に帰る。そんな俺の雰囲気を察してか、食事もいつものにぎやかしい雰囲気が失われていて、空気がどんよりとしている。

そんな時、屋敷に来客があった。スーパー・ダーケを任せているウィリスだった。

「ご主人様、お願いがあるんだ」

「どうしたウィリス、入れ入れ」

屋敷に招き入れようとするが、ウィリスはなかなか入ってこない。様子を見にウィリスに近づいてみると、玄関を出たところに、妹のシェーラとユリエル、そして数名の猫族たちがいた。

「どうしたんだ？これは一体・・・？」

「本当に、本当に申し訳ないんだが・・・。僕たちを匿ってもらえないだろうか」

「一体どうしたんだ？」

俺の言葉を聞いて、妹のシェーラが泣き崩れる。その様子をウィリスは悲しそうな顔で見つめながら、口を開く。

「帝都の人々が・・・いきなり襲ってきたんだ」

「帝都の人々が？」

「僕たちに触れると人族が不治の病にかかるらしいんだ。だから・・・。出て行けと・・・」

ウィリスは悔しそうな顔して歯を食いしばっている。そして、妹のシェーラが泣きながら俺に訴えかける。

「あんまりじゃ！あんまりなのじゃ！今まで我らの店からそんな病

を得た人など居たことはなかったはずじゃ！それなのに・・・。大体我らは、猫人族ではない！れっきとした猫族なのじゃ！みんな間違えておるのじゃ！あんまりじゃ！」

何とかシェーラを宥めすかして、屋敷の中に入れる。そして、ウィリスの口から語られた話は、俺たちをしばし絶句させた。

いつもの通り店を開けたものの、この日はいつになく客足は伸びなかったという。そして、昼過ぎになって突然、男たちが店に怒鳴り込んできた。猫人族が不治の病を広めている、この店から不治の病が生み出されている、だから今すぐ出ていけと。

さすがにウィリスが止めに入ったが、男たちは取り付く島がなかった。仕方なく彼らは二階の部屋に避難し、店は人間の男たちに任せることにした。しかし、しばらくすると今度は帝都の防衛軍の兵士が訪ねてきて、ウィリスたちを拘束すると言い出した。さすがにそれには従えないと、すったもんだの末、彼らは兵士たちに無理やり店から追い出された。

彼らは俺の屋敷に避難することにしたのだが、その道すがら彼らは、帝都の人々から避けられ、石までもぶつけられることもあったのだそうだ。俺は開いた口がふさがらなかった。

「取り敢えず、明日、陛下のところに行ってくるよ。お前たちはここでしばらく居るといい」

「ご主人様・・・。本当に・・・申し訳ない・・・」

ウィリスはこらえ切れなかったかのように、滂沱の涙を流した。それを慰める奥さんや、不思議そうに眺める子供。見ている俺たちが

申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

彼らに食事を与え、ペーリスやフェリス、ルアラ、シディー、マトカルたちの部屋にそれぞれの猫族は迎え入れられた。ウィリスたち男猫たちは、今は空いている分娩室につかった部屋に寝てもらうことになった。

翌朝、俺は早速帝都の宮城（きゅうじょう）に向かい、陛下に謁見した。

「陛下・・・どういうことでしょうか？」

「二日前、余の下にクリミアーナ教の司教がやってきたのだ」

「まさか陛下も、クリミアーナ教の言うことを真に受けておられるのですか？」

陛下は目を閉じ、指でこめかみを押さえる。そして、しばらくの静寂の後、重々しく口を開いた。

「クリミアーナ教は我が国教。しかも、その王たる教皇直々の要請なのだ。余もなかなか断れぬよ」

「陛下は本当に、獣人たちが不治の病の源であるとお考えなのですか？」

「・・・わからん。余にもわからん。しかし、教皇直々の要請、そしてその要請書には世界一ともいわれる研究者の名前もある。さすがに無下にはできまいよ」

「では陛下は、獣人たちを捕らえ、クリミアーナの都に送ると・・・

？」

「それは・・・余も頭を痛めているのだ。なるべく、そうしたくはない。したくはないのだが・・・」

「いっそのこと、陛下の勅命で、しばらくの間獣人たちへの暴力や排除を禁止されては？」

「そうもいかんのだ。教皇からの要請は、研究結果に基づいた正当なものだ。その要請に反するような振る舞いを行えば、帝国はクリミアーナの敵と見なされる。そうなっては、帝国は全世界を相手に戦いを挑むことになる。それどころか、我がヒーデータ帝国の国教はクリミアーナ教だ。市民だけでなく、貴族や軍人にも信徒は大勢いる。クリミアーナを敵に回せば、たちまち信徒たちが反乱を起こすだろう。そうなっては、我が帝国は崩壊する。余も苦しいのだ。獣人たちは助けてやりたい。何しろ、リノス殿の妻にも獣人がいるからの。余とてどうにかしたいのだが・・・。すまぬ。今のところ手立てが見つからぬ。せめて、余から命令を出すのをギリギリまで伸ばす・・・。これしか今は打つ手がない」

陛下は目を閉じ、眉間に深いしわを刻みながら、天を仰いだ。俺は何も言えないまま、その場から退室せざるを得なかった。

宮城（きゅうじょう）を出たその足で俺は、ガルビーに転移した。朝、帝都に向かう前に、カリエス将軍に会いたいという書簡をサダキチに届けさせたのだ。今のところ将軍からの返事はないという。しばらく部屋で待っていると、何とカリエス将軍自らがガルビーにやってきた。

「すみませんね将軍。わざわざお越しいただかなくても・・・」

恐縮する俺に将軍は、無言で首を振る。

「いや、今やアガルタは事実上の皇国の宗主国だ。その国王がお呼びなのだ。何を差し置いても伺うのが筋というものだ。気になされるな」

「では将軍、早速ですが、クリミアーナ教の話なのですが・・・」

「ああ、皇都にもやってきた。今のところ我らには、そんなことをしている余裕はない。国力の回復に全力を挙げねばならんと答えている。しかし、奴らは教皇直々の要請書をタテに取って強気な態度を崩そうとしない。まあ、あの国の連中が強気なのは、今に始まったことではないのだが・・・」

カリエスは苦笑いを浮かべる。

「正直、将軍はどう思われますか？俺はどうしても獣人たちが不治の病の源とは信じられないのです」

「まあ、アガルタ王のお妃の一人が獣人であるから、そのようなお気持ちになられるのは、わからなくはない」

「では、将軍も、クリミアーナと同じように・・・」

「いや、私はそうは考えない。これまで何十年と戦場に出ていたが、皇国で、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスが流行したことは、近年はない。確か、年に数人の患者が出る程度だったと記憶している。しかし、皇国軍にも今回対象となっている獣人たちがいるが、私が記憶するところでは、皇国軍でそのような病にかかった者はいない。そして、その家族にもいない。だが・・・」

「だが、何でしょうか？」

「世界で最も権威のある医学研究所が認めているのだ。やはり、何らかの原因は、あるのだろう」

「では、将軍も、獣人たちを・・・」

「私も、何とかしたいのだが、今のところ打つ手がない。獣人がいなくなるということは、それだけ国力の回復が遅れるということだ。頭が痛い問題だ・・・」

結局、カリエス将軍との話し合いも、何の成果も見いだせなかった。

そして、八方ふさがりの状態のまま、時間だけが無駄に過ぎていった・・・。

第百七十八話　メイの決意

「リノス様、クリミアーナ教国の使者の方が、お目通りを願っています」

「・・・わかった。通してくれ」

羊獣人たちを護送する船が着くまであと十日と迫っていたこの日、ついに教国の使者からのコンタクトがあった。ヤツらがアガルタに来てから約二週間、結局俺は何一つ現状を打開する手を打てずにいた。おひいさまのところにも相談に行ったが、結局おひいさまにも獣人たちが不治の病の源であるということはわからなかった。それでも俺は、獣人たちを追放することも、羊獣人たちを捕らえることもできなかったし、そうした命令は一切出さなかった。

俺の前世の記憶を辿れば、宗教を敵に回すと、とんでもないことになるというイメージがある。いわゆるテロの問題だ。国中のあちこちでテロを起こされてはどうしようもない。そして、何も知らない幼い子供がそのテロに参加するなどという光景は、絶対にやられたくはないし、見たくはない。クリミアーナ教は聞けば聞くほど、狂信的な部分がある。彼らならばそれをやりかねないし、実際、遠い昔にはそんなことをやってきた節がある。そんなことを考えると、クリミアーナは相当デリケートに対応しなければならず、その対応に色々と苦慮していたのだ。

そんな状況を知ってか知らずか、クリミアーナの使者たちは迎賓館から全く外出しようとはせず、静観を決め込んでいた。おそらくヤツらは、教皇からの要請をタテに取り、高圧的に恫喝してくるのだ

ろう。そうなった場合は、こちらにも事情があるとか何とか言い訳をして、回答を伸ばすしかない。そう考えながら俺はヤツらが待っている、迎賓館の謁見の間に向かった。

「これはこれはアガルタ王、ご機嫌麗しく何よりでございます」

相変わらず小柄なくせによく通る声で挨拶をしてくるのは、男司教のコフレシだ。その後ろで、笑みをたたえながら恭しく頭を下げているのは、女司教のジョリーナだ。俺は二人を睨みつけるようにして、席に着く。コフレシは満面の笑みをたたえながら口を開く。

「我々は明日、ガルビーに立ちます。本日はそのご挨拶に参りました」

「そうか・・・」

予想とは違う展開に、拍子抜けがしてしまう。そんな俺の雰囲気を察して、コフレシはさらに言葉を続ける。

「獣人たちの追放については、お時間もかかりましょう。それにつきましては今すぐでなくとも結構でございます。我々はこれよりガルビーに向かい、そこから出航します。途中ラマロン皇国の皇都に寄りまして、そこで羊獣人たちを収容した後、アフロディーテに向かいます。そして再び、アガルタ国に戻って参る予定でございます。その時にでも、今回のことにつきましては、ゆっくりとお話をさせていただきたいと存じます」

「・・・俺には未だに、獣人たちが不治の病の源だとは、信じられないんだがな」

「ホッホッホ。アガルタ王はお優しくていらっしゃる。その慈悲深いお心はきっと、アガルタ国の民を幸せに導かれることでしょう。あ、そういえば、アガルタ王はまだ洗礼はお済みでなかったのでは・・・？これは、私としたことが、迂闊でございました。次にお目にかかります時は、是非洗礼をお受けくださいませ」

「あいにく俺は、無宗教でね」

俺としては精いっぱい皮肉を込めたつもりだったが、ヤツらは動じることはなく、相変わらず微笑んだままだ。しばらくの静寂が部屋を包んだ後、女司教が口を開く。

「恐れながら、王妃様であられますリコレット様は、既にクリミアーナ教への洗礼を済ませておられます。私たちがアガルタに戻りますまで時間がございます。その間に、リコレット様より、クリミアーナ教がいかに人族を救い、敬われているか、そして、主神様であらせられます、クリミアーナ様のご加護がいかに尊いものか、是非、お聞きくださいませ。きっと、そのお話を聞けば、アガルタ王も、我がクリミアーナ教へ心を寄せられることと思います」

透き通った目、一点の曇りのない目で女司教は俺に語りかける。風貌がまだ少女のあどけなさを残しているだけに、その言葉には妙な説得力を孕んでいた。

「まあ、道中、気を付けて帰るんだな」

そう言い捨てて俺は、その部屋を後にした。

そして夕方、屋敷に帰った俺は、皆にクリミアーナの使者が明日帰還すると報告した。全員が安堵の表情をしている。

「取り敢えず・・・僕たちは使者が戻ってくるまで、ここに居られるのかな・・・」

思わずつぶやいたのは、先日以来、屋敷に居候しているウィリスだ。

「安心しろウィリス。俺はお前たちを追放するつもりはない。獣人たちもだ。何とか方法を考えないとな。メイ、シディー、何とか獣人たちを救う手立てを考えてみてくれないか？頼むよ。俺はメイの犯罪奴隷を解放する手段を色々と試してみる」

「大丈夫です・・・。私が、何とかします」

メイが強張った顔で口を開く。

「メイ様、私も手伝います。一緒に、手立てを考えましょう。ドワーフたちにも協力をしてもらえるよう、父に言ってみます」

「シディー、頼む。メイを助けてやってくれ。近いうちに、鹿神様のところにも相談に行こう。俺とメイとシディーと三人で行こう」

「吾輩も行くでありますー」

「そうだなゴン。お前も一緒に来てくれ。リコ、フェリス、ルアラ、ソレイユ、マト・・・。みんな協力してくれ」

皆が真剣な表情でうなずく。しかし、何故かリコの反応が薄い。ちょっと気になったが、敢えてこの場では追及はしないことにした。

「明日は休みだ。久しぶりに、うまいものでも食うか！晴れたらバ

ーベキューー、雨が降ったら屋敷の中で俺が何か作ろう。から揚げか・・・ケーキか・・・ぜんざいがいいか？」

「大丈夫です、私が腕によりをかけて作りますから」

「いいえ、ペーリス姉さまばっかりですから、たまには私がやります！」

「おお～それじゃ、雨が降ったらフェリスがコック長で何か作ってくれ。ペーリスはアドバイザーだ。俺も手伝うから、何かあったら言ってくれ」

「賛成でありますー美味いものを食べるでありますー」

ようやくみんなの笑顔を見ることができた。その光景に少し安堵の気持ちを持ちつつ、この場をお開きとした。

そして夜、寝室でリコと二人っきりになった時、俺はさっきのことを尋ねてみた。

「リコ・・・さっきのことだけど・・・」

「・・・」

リコは俯いたまま喋らない。俺はリコを背中から抱きしめる。

「クリミアーナ教は・・・リコも洗礼を受けていたんだっけ？教皇の要請に反するようなことは、やっぱり心苦しいか？」

「・・・わからないのです」

「わからない？」

「幼い頃から教えられてきたのですわ・・・。クリミアーナ様は我々を守ってくださる御方、正しい道に導いてくださる御方・・・。その・・・クリミアーナ教国は、人間を救い続けてきた国・・・。その国が発表したことですから、きっとそうなのでしょう。でも、でも、獣人たちを追放して解決するのでしょうか？特効薬はあるとはいえ、多くの羊獣人たちが犠牲になりますわ。そんな犠牲の上に私たちが生き永らえても、何があるのでしょうか・・・？これまでクリミアーナ教が獣人を迫害したことなどありませんでしたのに・・・。私には、わからない・・・わからないのですわ」

リコは頭を抱えて首を振る。俺はリコをさらに強く抱きしめる。その時、部屋の扉がノックされた。

「・・・ご主人様、メイリアスです」

「ああメイか・・・。いいよ、入っておいで」

俺はリコから体を離す。その直後にドアが開き、メイが入ってきた。

「・・・アリリアは？」

「部屋で寝ています」

「そうか・・・」

メイは俺とリコをまっすぐに見据えながら、口を開いた。

「リコ様、申し訳ありませんが、今夜は私がご主人様のお相手をして差し上げたいのですが、よろしいでしょうか？」

リコはゆっくりとうなずく。そして、立ち上がり、ベビーベッドに寝かせているエリルを優しく抱きかかえた。

「今日は、メイが一緒にいた方がいいですわ」

「申し訳・・・ありません」

メイは申し訳なさそうに頭を下げる。リコは優しく微笑んで、ゆっくりとドアに向かって歩いていく。

「リコ様」

不意にメイが声をかける。

「アリリアを・・・アリリアをよろしくお願いします・・・」

そう言って深々とリコに向かってメイは頭を下げた。

「安心してメイ。アリリアは私に任せてください。大丈夫ですわ」

優しい微笑みを湛えたまま、リコは寝室を後にした。

メイはそれを見届けると、ゆっくりと俺に近づき、そして、抱きついてきた。

「メイ・・・。大丈夫だ。必ず、守るからな」

「私が、何とかします。必ず、何とかしますから・・・」

「メイ・・・」

俺は、メイを強く強く抱きしめた。

朝、起きるとそこにメイの姿はなかった。そして、枕元には一枚のメモがあった。

『クリミアーナ教国が発表した病の原因と、その対策を調べてきます。アリリアをよろしくお願いします
……メイリアス』

「メイ・・・」

俺は呆然としながら、彼女の名前を呟いた。そして、メイは、昼になっても帰ってこなかった。

「このアガルタの水運の活用は素晴らしいですね」

「そうですね。アガルタ王が優秀な結界師であるという噂は本当だったようですね。まさか、この石に結界の効果が付与されているとは・・・」

そんな会話を交わしているのは、コフレシとジョリーナだ。二人はアガルタの都から筏に乗り、ガルビーに向かって川を進んでいると

ころであった。

「この速さであれば、予定よりも早く着きそうですね」

コフレシが誰に言うともなく呟く。

「この筏で川を下るというのは、あなた様がお考えになったのですか？」

ジョリーナは後ろを振り返りながら、口を開く。

「いえ・・・」

蚊の鳴くような、小さな声が聞こえる。ジョリーナはその声を聞いて、満足そうな笑みを浮かべる。

ジョリーナの視線の先には、見目麗しい羊獣人・・・アガルタ王リノスの第二王妃、メイリアスの姿があった。

第百七十九話　神龍様、神様を語る

降っていた雨がやみ、黒く厚い雲の隙間から真っ赤な夕日が顔を出している。その陽の光に照らされて、屋敷の壁が真っ赤に染まっている。もう、日暮れの時間だ。

にもかかわらず、メイは戻ってこない。メイが何の連絡もなしに、この時間まで家を空けることは今までなかったことだ。屋敷のダイニングには皆が顔を揃えていて、心配そうな表情を浮かべている。

俺はテーブルに両肘を突き、神に祈るようなポーズでじっと考えている。メイはきっと戻ってくる・・・そう信じたい。しかし、もし何か事故にでもあっていたら・・・。いや、それならば念話で連絡してくるはずだ・・・。マップで探ってみるが、俺が探知できるのは半径５０ｋｍだ。この周辺にメイはいない。各国を転移してマップで・・・いかんいかん、ちょっと心を落ち着けようと、目を閉じてゆっくりと深呼吸をする。しかし、胸に噴水のように湧き上がってくる不安とイヤな予感が、もはや限界を迎えていた。

「・・・メイを探そう」

誰に言うともなく呟く。そしてゆっくり目を開けると、ダイニングにいる全員の視線が俺に向けられていることに気が付く。俺は全員に視線を送り、ゆっくりと立ち上がる。

「みんなで手分けをして、メイを探そう」

全員が無言で頷く。その直後、全員がどこに向かい、何をするかが

話し合われる。そして、すぐにその役割が決まった。

「待ってください！」

声を上げたのはソレイユだ。

「どうした？」

「ちょっとだけ、お待ちください・・・」

そう言ってソレイユは、何かに祈り始めた。このポーズは神龍様を呼びだす呪文を唱えている態勢だ。全員が静かにソレイユを見つめる。そしてしばらくすると、ソレイユは、ゆっくりと息を吐き出した。

「・・・少々お待ちください。まもなく、お見えになるはずです」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・相変わらず出てくるのが遅いな、神龍様は」

「そうかー？これでも早くなったのらぞ？」

俺のすぐ横で声がして驚いて飛びのく。そこには、白髪の子供が立っていた。神龍様だ。それを見てソレイユが駆け寄ってくる。

「誠に申し訳ございません、神龍様。私たちの家族のメイ様の行方が分かりません。精霊たちにお声をかけていただき、メイ様を探してはいただけませんでしょうか？」

「うーん？それは難儀な話らー」

「やはり、神龍様でも難しいですか・・・。それなら、人海戦術だ。俺は転移しながらマップで・・・」

「お主らが、難儀らと言うたのらー。羊獣人の女のことらな？川を下っているみたいらぞ？」

「え？もう調べられたのですか？」

ソレイユは目を丸くして驚いている。

「森の精霊からすぐに反応があったのらー。山の上にある街に向かっているみたいらな」

「リノス様！ガルビーだ！」

マトカルが声を上げる。

「アガルタの川はイルベジ川に注いでいる。イルベジ川を下れば、ガルビーに着く。早朝にアガルタの都を出れば、早ければちょうどこのくらいの時間に、ガルビーに着くだろう」

「ガルビー・・・。まさか、クリミアーナの使者と一緒に居るんじゃないだろうな？病の原因と対策を調べるって言ってたのは、まさか、クリミアーナ教国に乗り込んで調べるってことだったのか？・・・

・だとしたら、危険だ。奴らは羊獣人の命を奪うつもりだ。メイが危ない・・・行ってくる」

俺は即座に、裏庭に作っているガルビーに向かう転移結界のもとに向かう。

「待ってリノス！私も一緒に行きますわ！」

リコがエリルを抱っこしながら俺を追いかけてくる。

「リコ、お前は屋敷に居てくれ。エリルとアリリアを守ってくれ」

「でも・・・」

「頼む」

「リノス・・・。メイを・・・メイを・・・」

「わかっている」

「リノス様、ちょっと待ってくれ！」

「何だ、マト？」

マトカルが俺の側にやってくる。

「今、リノス様がガルビーに行けば、秘匿している転移結界がクリミアーナにバレる恐れがある。行くにしても方法を変えた方がいい」

「ツ・・・」

俺は苦虫を噛み潰したような顔をする。確かに、今着いたばかりのガルビーに俺が現れては、相手に疑われるだろう。俺はしばらく天井を眺めて思案を巡らす。そして、ゆっくりと視線を家族全員に向けた。

「マトの言う通りかもしれん。ガルビーには明日、向かうことにする」

そして俺は、ペーリスに視線を送り、神龍様にぜんざいを温めて出すようにお願いをする。彼女は快く応じてくれ、いそいそと火をおこし始めた。

「おーう。ぜんざいなのらー。楽しみなのらー」

神龍様は椅子に腰かけて、ご機嫌の様子でぜんざいを待っている。この緊迫した空気の中、この人だけがノホホンとしている。俺はその隣に腰かけ、思い切って話しかけてみた。

「恐れ入ります、神龍様。少々お尋ねしてもよろしいでしょうか？」

「おーう、何ら？」

「神龍様は神様にお会いになったことはあるのでしょうか？」

「カミサマという名前の者には会った記憶はないのらー」

「・・・もしかして、ですが、神龍様がこの世界を創造された創造神様なのでしょうか？」

「我は主の言うような神ではないな」

「大変恐れ入りますが、神龍様、あなたは何者なのですか？」

神龍様は目を閉じてじっと考えている。そしてゆっくりと目を開ける。

「我はただ、他の精霊よりも長く生き、他の精霊よりも多くの能力を有しておるだけの存在ら」

「神ではないと？」

「我がこの世を創造した者ではないのは確からー。我がこの世に生を受けた時から、この世はあったのらー。もっともその時は、人族など弱い弱い存在であった。それが、このように美味いものを作るようになるとは、我も思わなかったのらー」

神龍様はケラケラと笑う。

「では、クリミアーナという神はご存じでしょうか？」

「クリミアーナ？」

神龍様は遠い目をして考えている。

「おお、そうら。その昔、人族を救うておった女がおったのらー。それが確か、そんな名らったな」

「その女が神になったと言われているのですが・・・」

「それは我にもわからん。しかし、クリミアーナという女は死んだ。それだけは確かなのらー」

ようやく神龍様の前に温められたぜんざいが置かれる。彼は嬉しそうにそれをペロリと平らげ、おかわりを求める。そして神龍は再び語り始める。

「主たちの言う神とは皆、人族が付けたようなものらー」

「どういうことです？」

「神龍・・・狐神・・・猿神・・・犬神・・・猫神・・・鹿神・・・鳥神・・・多くの神と呼ばれる者がこの世にはおる。それらは皆、一族の中で最も長生きをし、最も優れた能力を有する者たちら。人間たちは、自分より優れた能力を持つものを神と言い、貢物などをして崇めてきた。そして神と呼ばれる者たちは、何らかの形で人間にその礼を返した。ただそれだけのことなのらー。我とて、主から美味いものをたんと食わせてもらっておる。だからこそ、その礼として、契約してやっているのら。そんなものなのら」

「つまり・・・神はいないと？」

「我は、今言うた以外の神には会ったことも、話をしたこともないのらー」

再びぜんざいが運ばれてくる。神龍様は嬉しそうにそれを平らげていく。

「昔の人族は弱かったのらー。神と呼ばれる者たちの庇護を受けねば、生きることが出来なかったのらー。人間たちの呼ぶ神が多くい

るのも、そのせいかもしれぬなー」

「そうですか……。あと、一つお尋ねします。犯罪奴隷というのはご存知でしょうか？クリミアーナ教が確立したものですが、奴隷魔法以上の効果があるようで、奴隷に死を選ばせることもできるそうなのです」

「犯罪奴隷？うーん、どういうやつら？」

「ええと……。奴隷魔法というのはですね……」

俺は自分がかけられた奴隷魔法のことを詳しく話す。神龍様はおーう、おーうと頷きながらその話を機嫌よく聞いている。

「それならば、我ら竜族にも、そうした魔法があるのらー。その解放は、ある程度の回復魔法と加護のスキルを持つ者であれば、行えるはずなのらー。こんな感じらー」

神龍様が人差し指をピッと立てると、俺の体がほんのりと光る。……なるほど。口で説明するのは難しいが、感覚はわかった。つまり、呪いを除去するイメージと、体ではなく、魂全体に回復魔法をかけるイメージだ。加護を発動させながら、回復魔法を発動するという流れだ。よし、掴めた。

「主ならば、簡単にできるらろう？」

「はい、ありがとうございます。神龍様、今夜は、すきなだけぜんざいをお召し上がりください」

「おーう、食うのらー」

そう言って神龍様は思う存分ぜんざいを堪能しまくり、そのまま機嫌のよさそうな笑い声を残して姿を消した。

次の日の昼過ぎ、俺はガルビーの街に転移した。マップを展開すると、確かにメイの反応があった。俺は念話でメイに呼びかけるが、反応はない。仕方なくマップに示されている場所に向かってみると、そこは思わず舌打ちしてしまうような場所だった。

「教会か・・・」

確かにこの街には、他の街よりも規模の大きい教会があった。その門は固く閉じられており、人の出入りを拒否しているかのようにも見えた。俺は門を掴み、ゆさゆさとゆすってみるが、ビクともしない。全力を出せばどうにでもなるのだが、ハテどうするか。そんなことを考えていると、中から司教らしき男が出てきた。

「どなた様でしょうか？」

「アガルタ王のリノスだ」

「お引き取り下さいませ」

「何？」

「昨日より数日間、我がクリミアーナ教国の関係者以外は、教会への出入りは差し止められております」

「それは、誰の命令だ？」

「失礼いたします」

俺の質問に答えることなく、司教はその場を後にし、教会の中に入っていった。

「なるほど。メイを渡す気はないってことか・・・？上等だ。何が何でも取り返してやる。獣人たちが病の源か何かは知らんが、人族のために羊獣人の命を奪うって考えが気に入らん。獣人も同じ人間じゃねぇか。何様だ、この野郎ども？ぜってぇメイは取り返す・・・」

俺は教会に向かって小さく呟く。そして、メイに向けて念話を送る。

『メイ、聞こえるか？リノスだ。教会の前に来ている。メイ、俺は教国と戦うことに決めた。やっぱり、ヤツらの言うことは間違っている。だから、ヤツらの言うことは金輪際聞かないつもりだ。メイ、一人で戦おうとしてるんだな？いいんだ。いいんだ、メイ。一人で戦わなくてもいい。俺たちと一緒に、戦おう。だからメイ、俺は必ず、必ずメイを助けるからな。必ず、助けるからな』

『・・・ご・・・ご主人・・・様』

消え入りそうな念話がかすかに聞こえてくる。俺は教会を睨みながらゆっくりと踵を返して、その場から離れる。そして、一旦ガルビーの街を離れ、帝都の屋敷に戻るのだった。

第百八十話　神の使徒か、大悪人か

ガルビーの街を後にした俺は、屋敷へは帰らず、アガルタの都に転移した。そして、俺の執務室に入り、しばらく目を閉じて物思いにふける。

クリミアーナ教の連中とは全面戦争になるだろう。その前に、何としてもメイを取り戻さなければならない。俺が全力で教会に踏み込めば、簡単にメイは救出できるだろう。しかし、それでは俺は全世界のクリミアーナ教の信者を敵に回すことになる。俺だけならまだしも、帝都の陛下やニザのドワーフ王、ラマロンのカリエス将軍たちも窮地に陥ることになる。ヤツと対決するには少し時間が必要だ。その時間をどう作るか・・・。俺は夜の帳が下りたアガルタの都を見ながら考える。

『・・・サダキチ』

『お呼びでしょうか』

窓を開けて念話を飛ばすと同時に、サダキチが現れる。相変わらず、早い。さすがはフェアリードラゴンを率いる頭領だけある。

『ガルビーの港とその周囲を見張れ。船が近づいたら、すぐに知らせてくれ。それと、船が出入りする港の近くにある、赤茶けた大きな建物から羊獣人が出てきたら、すぐに知られてくれ』

『畏まりました』

そう言ってサダキチはスッと姿を消した。

「見せてもらおうか、クリミアーナの信仰心の深さとやらを・・・」

ニヤリと笑いながら呟いた俺は、そのまま帝都の屋敷に転移した。

「ただいま」

「リノス！メイは・・・」

リコが飛び出すようにして俺のところにやってくる。

「ああ、見つけた。姿は確認できなかったが、ほぼ確実にガルビーの教会の中にいる」

「では、どうして助けなかったのです！」

「今、俺が踏み込むと、おそらくクリミアーナとすぐに全面戦争になる。ヤツらと事を構えるのは、まだ準備が必要だ。その時間稼ぎをしなきゃならん」

「じゃあ・・・メイは・・・」

「心配するなリコ。メイは必ず取り戻す。クリミアーナの信仰心が深ければ必ず、メイは取り戻せる」

「そんな・・・。もし信仰心がなかったら・・・」

「その時は・・・。俺が力づくで取り戻す。安心しろ」

「リノス様はまた、何か作戦を思いつかれたのだな？」

「さすがはマトだな。察しがいいな」

「内容を聞いても・・・いや、聞かないでおこう。作戦の内容を知るものは、少ない方がいい。もし、作戦を実行するにあたって私を加えてくれるのであれば、教えてくれ。できれば人気のないところで・・・だな・・・」

何故かマトの目が泳ぎ始め、顔が少しずつ赤くなってくる。

「どうした、マト？顔が赤いぞ？」

「・・・何でもない」

「取り敢えず、メイは今、ガルビーの教会で軟禁されている。おそらく奴らは船で自分の国に戻るまではメイを丁寧に扱うだろう。それにメイには結界を張ってある。そこは心配していない。勝負は、クリミアーナからの迎えの船が着いてからだ。まずは俺たちに手を出すと面倒くさい相手だとヤツらに思わせねばならん。メイは、必ず取り戻す。そして、クリミアーナには絶対に、思い通りにはさせない。これから色々なことが起こるかもしれん。全力でみんなを守る。だからみんなも、俺に力を貸してくれ」

全員が大きくうなずく。その様子を見て、俺はようやく迷いを吹っ切ることができた。

サダキチから連絡があったのは、それから五日後のことだった。

『ガルビーから少し離れた所に船が見えました』

『ご苦労。すぐに到着するか？』

『ゆっくりと進んでいるように見えます。まだ、すぐには着かないと思います』

『わかった。引き続き見張ってくれ。ガルビーに着いたらすぐに知らせてくれ』

『畏まりました』

クリミアーナの船がガルビーの港に接近したという報告が、サダキチからもたらされたのは、翌日のことだった。その時、俺はアガルタの都の執務室で仕事中だった。俺は報告を受けてすぐさま念話を飛ばす。

『ルアラ、ルアラ。聞こえるか？』

『師匠、何でしょうか？』

『今すぐガルビーに向かう。ついて来い。すぐに俺の執務室に来られるか？』

『すぐ行きます』

ほどなくしてルアラがやってきた。そして俺たちはガルビーに急行した。

クリミアーナの船は、接舷している最中だった。俺はルアラに指示

を与える。

「わかりました。やってみます」

そう言ってルアラは海の方向に向かって走っていった。俺はマップでメイを確認しながら、しばらく船の近くで待機する。さすがに俺の姿を見られると住民が騒ぎかねないので、俺の姿は見えない結界を張って待機する。

一時間ほど待っただろうか。ようやく教会に動きがあった。数名が教会から出て、港に向かっている。どうやら馬車を使って移動しているようで、速度が速い。見る見るうちに俺の近くまで奴らはやってきた。

馬車は四台に及んでいた。メイが乗っているのは確かだ。俺はルアラに念話を送りながら結界を解除し、ゆっくりと船へと向かう。

馬車からは既に人が下りてきており、船に乗ろうとしているところだった。司教風の格好をしている者もいる一方で、目深にフードを被っている者も四人いる。俺はそいつらに向かって声をかける。

「メイ！」

フードを被っている一人が、ピクリと体を振るわせる。そこの声を聞いて船に乗り込もうとしていた司教たちが振り向く。

「・・・誰かと思えば、アガルタ王・・・」

そう言いながら馬車から降りてきたのは、司教のコフレシだった。その後ろから、女司教のジョリーナも馬車から降りてくる。

「これはこれはアガルタ王、再びお目にかかれて光栄でございます。この度は・・・。ああ、奥方様のお見送りに来られたのですか？何と・・・奥方思いのお方ですこと。すばらしいことでございます」

目をキラキラと輝かせてジョリーナは口を開いている。俺はニヤリと笑みを返す。

「お前たち、これから出港するつもりか？」

「ええ、これからアフロディーテに向けて出港いたします。予定よりも早く船が着きました。これもクリミアーナ様のご加護のおかげでございます。途中、ラマロン皇国の皇都にも寄らねばなりません。早く着くのに越したことはございませんので、予定を早めて出港いたします」

満面の笑みを湛えながらコフレシはよく通る声で俺に話しかける。

「それは、やめといた方がいいな」

「どういう意味でしょう？」

コフレシは笑みを絶やさないが、眉間にほんの少し、皺が刻まれている。

「どうもこうも、クリミアーナ様がそう仰るんだ」

「何ですと？」

「お前たちはクリミアーナ様の怒りに触れた。船は出させないそう

だ」

「一体何をおっしゃっておられるのやら・・・」

コフレシは鼻で笑いながら俺を見ている。

「嘘だと思うなら、海を見てみな」

コフレシは小刻みに首を上下に揺らしつつ、ゆっくりと後ろを振り返った。

「・・・何だ、あれは？渦潮が・・・。消えたのではなかったのか！」

ちょうど、港のすぐ沖合で巨大な渦潮が発生している。

「お前たちが羊獣人を連れて行こうとすることに、クリミアーナ様はお怒りのようだ。だから、船は出させないとさ」

俺は両手を挙げて首をすくめる。

「な・・・何を証拠に！」

「俺が教会を訪ねて、けんもホロロに追い返された時があっただろう？あの夜に、クリミアーナ様が俺の夢枕に立ったんだ」

「バッ、バカな！」

「信じる、信じないはお前たちの勝手だ。クリミアーナ様はこう仰った。羊獣人たちを連れ去るのは許さん。決して船を出させん、と

な」

コフレシは忌々しそうに振り返って海を見る。

「クリミアーナ様は慈悲深い方だ。羊獣人を置いてこのまま大人しく、真っ直ぐ国に帰るのなら、海を開いてくださるだろう。信じる、信じないのは、お前たちの勝手だ。このまま船を出して、渦潮と格闘するというのも、お前たちの勝手だ」

俺は身を乗り出しながら話をする。コフレシ達司教は、顔を見合わせている。

「お前たちは、クリミアーナ様への信仰心は、そんなものか？メイ、こっちへ来い」

フードを被っている一人は、小刻みに首を動かしていたが、やがてゆっくりと俺の下に歩いてきた。俺はそっとフードを取る。

「・・・メイ、お帰り」

「ご主人様・・・」

メイは泣きながら俺に抱き着いてきた。俺は優しくメイの背中を撫でる。俺はメイを抱きしめながら、犯罪奴隷解放の呪文を唱える。神龍様の魔法をイメージして発動させると、一瞬だけメイの体がほのかに光る。鑑定してみると、これまで表示されていた「奴隷賢者」が「賢者」に変わっていた。どうやら成功したようだ。それを見届けた俺は、クリミアーナ教の連中に声をかける。

「あと、言い忘れていたが、このメイリアスの犯罪奴隷だが、こち

らもクリミアーナ様のご加護をもってお許しになるそうだ。嘘だと思うなら確かめてみるといい。……どうやらお前たちでは確かめられないか？　まあ、それはいい」

「ご主人様・・・他にも・・・他にも・・・羊獣人が・・・」

メイがしゃくり上げながら俺に懇願してくる。

「羊獣人は置いて行けよ？クリミアーナ様は羊獣人を連れ出して利用することにお怒りなんだからな。羊獣人を解放すれば、お前ら、きっと、無事に出港できるぞ？・・・行け！」

クリミアーナの司教たちは、フードを被った者をその場に残し、無表情のまま船に乗り込んだ。マップで確認したところ、羊の獣人は船には乗っていないようだ。

『ルアラ、いいぞ』

念話を送った直後に渦潮が収まる。そしてしばらくして、司教たちを乗せた船はゆっくりとガルビーの港を離れていった。

「師匠～。メイ姉さま～！！」

しばらくするとルアラが走ってきた。

「メイ姉さま～」

「ルアラちゃん～」

二人は泣きながら抱き合っている。

「ええ場面なン」

いつの間にか、海の女王、アムピトリテが俺の隣に現れていた。

「アムピトリテ様、無理を言いまして・・・ありがとうございました」

「このくらいは何でもないン。いつでも言うてくれてええン」

「ありがとうございます。また、お供え持っていきますね」

「楽しみにしてるン」

そう言ってアムピトリテは姿を消した。

数日後、クリミアーナ教国の首都、アフロディーテに到着したコフレシ達は、早速、教皇の下にガルビーでの出来事を報告した。

「ほう、クリミアーナ様の御声を聞いたと・・・。それに、犯罪奴隷を解放するというご加護があったと・・・」

教皇は相変わらず柔和な笑みを湛えている。

「おっ・・・恐れながら、洗礼も受けぬ身で、クリミアーナ様が夢枕に立つ、ご加護があるなどと、大それたことをアガルタ王は申しております。それに、教皇聖下の要請を全く無視しております。アガルタは、天道に背く国と考えてよろしいかと思います」

コフレシは早口でまくし立てる。教皇は柔和な笑みを絶やさぬまま、しばらく物思いにふける。

「しかし、アガルタ王が言った、いや、クリミアーナ様のお告げの通り、羊獣人を解放すると、海が収まったのでしょう?羊獣人のお妃については確認が必要ですが、おそらく犯罪奴隷は解放されているのでしょう。それならば、アガルタ王を、アガルタ国を、天道に背く国とは言えませんね」

教皇は大きなため息を一つつく。

「それにしても、アガルタ王は不思議なお方ですね。クリミアーナ様が遣わされた使徒様か。それとも、クリミアーナ様の御名を語る大悪人か・・・。これはますます、アガルタ王を調べてみなければ、いけませんね・・・」

教皇の柔和な目は再び、アガルタの方向に向けられていた。

第百八十一話　救世主はお腹を空かせて現れる

メイが戻ってきた。俺の胸に顔をうずめて泣いているメイを俺は強く抱きしめた。そしてようやく落ち着いたメイは、同じようにフードを被っている人たちのところに行き、何やら話をしている。

しばらくしてメイは、フードを被っている三人を連れて俺のところに戻ってきた。

「ご主人様・・・。囚われていた方々です・・・」

メイの声を聞いて三人はゆっくりとフードを取る。三人とも女性の羊獣人だ。そのうちの一人はかなり若い。

「君は・・・まだ子供だな？いくつだい？」

「１３歳です」

「こんな子供まで連れて行こうとしてたのか、ヤツらは・・・」

怒りが沸々と湧き上がってくる。聞くとこの少女は教会が開設している孤児院にいたらしい。そこには人間をはじめ、獣人たちも居たそうなのだが、先日、突然猫獣人と犬獣人が追い出され、自分は教会に閉じ込められたのだと言う。あとの二人は教会で住み込みで働いていた人たちなのだという。この人たちもいきなり部屋に閉じ込められ、何の説明もなく連れ出されたらしい。この二人は何も事情を知らされておらず、メイの話を聞いて、ショックを隠し切れない様子だった。

「さすがに、このままにしておくのは、彼女らは危険だよな・・・」

俺は彼女らを連れて、ガルビーの防衛軍の詰め所に向かった。そして、現在ガルビーの管理を任せているクラフトに彼女たちを預けた。

「事情は後で説明するが、羊獣人、猫獣人、犬獣人、狼獣人たちが助けを求めてきたら、必ず保護してやってくれ。空いている兵舎があるだろう。そこに匿ってやってくれ」

クラフトは即座に部下に命じて、獣人たちの保護に乗り出した。それを見届けて、俺はメイとルアラを伴って帝都の屋敷に帰った。

「メイ！メイ！」

リコがメイの姿を見て抱き着く。そして、二人は声をあげて泣き出した。俺はそれを見ながら、家族に念話でメイが戻ってきたことと、犯罪奴隷からも解放したことを伝える。全員から安堵の念話が送られてくる。メイはアリリアを抱きながら、何度も何度もアリリアにごめんねを言っている。

「メイ・・・もうそのくらいでいい。あんまり自分を責めるな」

「メイ、これからは一人で動かないでください。必ず私かリノスに、相談してくださいな」

「ご主人様、リコ様・・・本当に、申し訳ありませんでした」

メイは深々と頭を下げる。俺は再びメイを抱きしめた。その時、屋敷の裏口から声がする。

「ごめんください。遅くなりまして申し訳ありませんでした」

「ああ、そう言えば、今日はローニが来る日だったのですわ」

「ローニ？何のために？」

「エリルとアリリアの様子を見に来てくれる約束をしていたのですわ」

「ああ、そうか。検診か。それなら入ってもらおう」

リコに案内されてローニはダイニングにやってきた。彼女は俺を見るとぴょこんと頭を下げる。

「これはリノス様、お久しぶりです」

「久しぶりだなローニ。いつもリコとメイが世話になるな」

「いいえ。出産の主治医ですから、折に触れてお子様の様子を確認するのは、医師として当然のことです」

「すまないが、よろしく頼むよ」

「お任せください」

そう言ってローニはリコたちを連れて別室へ行ってしまった。そして、しばらくして、彼女たちはダイニングに戻ってきた。

「お子様たちも、リコ様、メイ様も、特に大きな問題は見当たりま

せんでした。お子様たちは順調にお育ちです。ご安心ください」

「ありがとうローニ。そろそろメシの支度をするが、どうだ？晩飯食って帰るか？」

ローニは再びぴょこんと頭を下げる。

「ありがとうございます。お言葉に甘えさせていただきます」

夕食はリコが作るという。俺は飯が出来るまでエリルの子守をすることにする。アリリアを抱っこしているメイとローニの三人で、ダイニングのテーブルで他愛のない話をする。そういえばローニは医者だ。俺は思い切ってクリミアーナ教が発表した獣人が不治の病の源であるという話をしてみることにした。

「・・・え？どういうことでしょうか？」

「俺も詳しくはわからないんだが、クリミアーナ教国の連中がそう言っているんだ。何でも世界一の研究者のお墨付きとかで、俺も対処に困っているんだ。俺はどうしても獣人たちがそんな病気を媒介しているとは思えないんだ。ローニ、お前はどう思う？」

「大変申し訳ありません。リノス様の仰る意味が分かりかねます。そんな話は聞いたこともありませんし、ましてや、羊獣人の胆汁が特効薬になるなど、聞いたこともありません」

「でも・・・これにはそう書いてあるのよ・・・」

メイがクリミアーナ教国から送られてきた医学書をローニに手渡す。ローニはその本を見て目を見開く。

「これは・・・サンクチュアリ・・・」

そう呟いてローニは、パラパラとページをめくりだす。途中、ほう、とか、ほおおなどという声をあげながら医学書を読み進めていく。そして、該当するページにたどり着いたのか、彼女の目が細めになり、動きが止まる。

パラ・・・パラ・・・パラ・・・一字一字丁寧に読んでいるかの如き速さで、ゆっくりとページがめくられていく。そして、ローニは目を閉じたままゆっくりと医学書を閉じ、上を向いて何かを考えている。

「メイ様・・・」

不意にローニが、目を閉じたままの姿勢で呟く。

「メイ様は、これをご覧になって、どう思われましたか?」

メイは目を伏せる。

「論理上は、完璧だと思いました」

ローニは目を閉じたまま、ゆっくりと首を振る。

「メイ様としたことが・・・」

「どういうことだ、ローニ?」

俺は目を閉じたままのローニに話しかける。彼女はゆっくりと目を

開き、メイを見る。

「メイ様、これは、医学の話です。医学の話なのです」

「ローニさん?」

メイが首をかしげている。

「まだわかりませんか?メイ様ともあろう御方が。メイ様、よくお考えになってください。医学なのです。医学なのですよ?」

「落ち着け、ローニ。どうしたんだ?」

ローニはメイの下に近寄り、両手でメイの肩を掴む。

「メイ様、医学なのです。医学とは、論理で説明できないことで成立しているのですよ?その医学の中で、論理的に完ぺきなものほど、怪しいものはないではないですか?」

「あ・・・」

メイが何かを思い出したかのように、どんどん目が見開かれていく。メイの目に生気が宿ってくる。

「そうです。そうなのですメイ様!目をお覚まし下さい!」

メイは再び医学書を手に取り、ページをめくる。

「そうか・・・そうだわ・・・私としたことが・・・そんな簡単なことを見落としていた」

「そうです、メイ様。お分かりになりましたか」

「ありがとうローニさん。わかったわ。騙されていたわ。ありがとう。ローニさんは、すごいですね。騙されていないんですもの」

「いいえ。よくあることです。私も、何度もそんな経験があります」

二人はニコニコと笑みを交わす。

「・・・すまん、二人とも。俺には全くわからん。説明してくれないか？」

ローニはハッとした表情をして、ぴょこんとお辞儀をする。

「申し訳ありませんでした。リノス様を置いてけぼりにしてしまいました」

「いや、いい・・・。気にしないでくれ」

「わかりやすく説明しますと、医学というのは、経験と確率の積み重ねなのです」

「うぁん？」

俺は首をかしげる。

「例えば、シャドボの木の根を粉にしますと、人間は深い眠りにつきます。これは開腹手術をする時などに使うのですが、なぜ、シャドボの木の根が人間を眠りにつかせるのかはわかりません。それど

ころか、千人に一人程度の割合で、眠りから覚めない場合もあります。これも、なぜ目覚めないのかがわかりません。また、回復魔法も、なぜあの呪文を唱えると傷が癒えるのかということについては、わかりません。こうしたことは、何度も何度も繰り返し実践してわかったことなのです。つまり、医学は、経験の蓄積の上に成り立つ確率の学問なのです」

「ええと・・・まだ、ちょっとわからんのだが・・・」

「申し訳ありません。私が口下手なもので」

「いや、ローニのせいじゃない。俺の理解が悪いんだ」

「つまり、このサンクチュアリに発表されている内容は、経験の蓄積の上に成り立っていません。まず、この理論を証明するための確率を明らかにする必要があります。つまり・・・」

ローニは、噛んで含めるように話をしてくれたおかげで、やっと俺も理解することができた。

「なるほど、そういうことか・・・。結果論だが、俺の予測は半分当たっていたわけだ」

「直感でお感じになられたのはさすがだと思います。リノス様、まずは、クリミアーナ教国へ使者を立てられることをお勧めします」

「わかった。そうしよう」

その時、お腹の鳴る音が聞こえた。

「ローニ、腹減っているな?今日はお礼だ。思う存分食って帰ってくれ。何かリクエストはあるか?今から俺が作ってやろう」

「できれば・・・からあげを・・・」

「いいだろう。黄金鳥のから揚げを、たらふくご馳走しよう」

俺はエリルをローニに預けて、いそいそとキッチンに向かった。

クリミアーナ教国にアガルタ国から特使が出発したのは、その翌日のことであった。

第百八十二話　リノスの大演説

「あーあーあー。テステステス。マイクテストマイクテスト。ツーツーツー。ワンツーワンツー」

アガルタの都に男の声が響き渡る。皆、何事やあらんと手を止めてその声に耳を傾ける。

「ええ～と。アガルタ国王のリノスです。すみません、皆さん忙しいところにお邪魔をしています。今日は皆さんにお話がありまして、このようなことをしています。しばらくの間、俺のおしゃべりにお付き合いをください」

そう言って、リノスはエヘンエヘンと咳払いをする。

「え～っと。何から話そうかな・・・。そう、ちょっと前、クリミアーナ教国から使者が来ました。奴らは不治の病である、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスの原因は獣人だという。だから、獣人たちを追放しろと。そして、その病の特効薬は羊獣人たちが必要だとも言ってきた。俺は、戸惑いました。アガルタの国では人に迷惑をかけないというのが約束事だ。奴らの言う通りならば、獣人は人に迷惑をかけることになる。でも、俺はどうしてもそうとは思えなかった。思えなかったが、確信はなかった。しかも、獣人が病の源であると言っているのは、世界一の医者だという。俺は自分の直感に自信がなかった。だから迷った。迷い続けました・・・」

リノスの声が一瞬途切れる。アガルタの都は静寂に包まれている。

「それに加えて、クリミアーナ教は世界に信者を持つ宗教だ。その教団を敵に回せば、このアガルタに信者が騒乱を起こすんじゃないのか。この国の人々に迷惑がかかるんじゃないのか、そんなことを考えてしまったために、俺はとても混乱しました。でも、ようやく自分の中で決心がつきました。だからこそ、こうやって皆さんに俺の決意を聞いてもらおうとしています」

リノスは一度言葉を切って深呼吸をする。

「俺は獣人たちは、不治の病の原因ではないと思います。何故なら、クリミアーナの説は、きちんと実証されているかどうかが疑わしいからです。多くの獣人たちは、我々と一緒に生活しています。結婚している人もいます。その人たちから病気が発症したという話を、俺は聞いたことがありません。だから、クリミアーナの説を信じることができません。それに、獣人たちを追放したり、捕らえれば、それこそ多くの人が傷つき、迷惑を被ります。これはアガルタの姿勢に反します。彼らは、羊獣人とドワーフの娘である、妻のメイリアスでさえ、捕らえようとしました。はっきり言って滅茶苦茶です。今、獣人たちは、何も悪いことをしていないのに、世界中の国々から追われようとしています。俺は、その彼らをこの国に迎え入れようと思います。そして、彼らを守ろうと思います。できるだけ皆さんには迷惑をかけないように努めます。そして、彼らが病気の源ではないと証明したいと思います。アガルタの皆さん、避難してくる獣人たちを、温かく迎えてやってください。皆で、困っている彼らに手を差し伸べましょう。よろしくお願いします。・・・リノスでした」

・・・俺は結界を解除する。そして、大きく息を吐きだす。我ながら無茶なことを言っていると思う。おそらく都の人々は、「はあ？不治の病の源の疑いのある獣人たちを迎え入れる？ふざけんなよ！」

と思っているかもしれない。しかし、俺はメイとローニの「クリミアーナの説は、確定ではない」の言葉を信じたいと思うし、俺の直感も信じようと決断したのだ。

俺はアガルタの都にある迎賓館の執務室で、これからのことを考えた。避難してくるであろう獣人はどのくらいになるのか・・・。羊獣人たちはまず保護しないといけないだろう。であれば・・・。

そんなことを考えていると、執務室の扉がノックされる。入ってきたのは、フェリスだ。

「ご主人様・・・」

「フェリス、すまないな。これからまた、忙しくなる」

「・・・迎賓館の表に、続々と人が集まって来ています」

「何？」

俺は慌てて窓の外を見る。迎賓館の壁伝いに人が並んでいるのが見える。そして、部屋の外に出て、迎賓館の正門付近を見る。そこには、黒山の人だかりができていた。

俺はフェリスが止めるのも聞かずに外に出て、正門に向かう。そこには、都の防衛軍の兵士が守っており、厳戒態勢を敷いていくれている。集まった人々は実に静かだ。特に石を投げるわけでもなく、迎賓館に突入してくるわけでもない。ただただ、静かだった。

俺はゆっくりと正門の前に立つ。俺の姿を見つけた群衆からざわめきが起こる。

「おい、ちょっと、ごめんなせぇ、ごめんなせぇ」

威勢のいい声がしたかと思うと、群衆の中から大工のゲンさんが現れた。その後ろからはおかみさんの姿も見える。

「大将、聞いたぜ？」

「・・・ああ、無理を言ったな、ゲンさん」

「大将に一つ、聞きてぇことがある」

「何だ？」

「その獣人たちは、本当に病を運んできたのかい？大将の目で見たのかい？」

「いや、俺は見ていない。色々調べてみたが、その事実は確認できなかった」

「なら、話は簡単だぁな！」

ゲンさんはいつも以上に大声を張り上げる。

「獣人たちはまだ、何にもしてねぇじゃねぇか！何にもしてねぇのに追放なんざヒデェ話だぜ？大将、俺っちは、大将の考えに乗ったぜ？獣人たちを面倒見てやろうじゃねぇか！」

「そうだよ、大将！大将の言ってることはきっと間違いないよ！アタシらは大将を信じてるよ！」

「おかみさん・・・」

「王様ぁ。アンタはこの都を立て直してくれたお人だ！俺はあんたを信じるぜ！」

「リノスさん！クリミアーナは内乱の時に逃げ出した奴らだ。そんな奴らの言うことなんかアテにならないよ！俺はリノスさんを信じるぜ！」

「リノス様！」

「王様！」

「大丈夫だよ！あたしたちが付いてるからね！」

集まった群衆が口々に俺の名を呼んでくれている。俺はあふれ出る涙を止めることもできずに、ただただ、頭を下げ続けた。

「びっ、びなざん、あ、ありがとう、ござびばす・・・」

俺は大歓声に包まれながら、ひたすら号泣し続けた。

夜、屋敷に帰ると、都の話は皆に伝わったようで、メイが真っ先に俺に近づいてくる。

「ご主人様・・・」

「メイ、大丈夫だ。アガルタの人々は、わかってくれた。ありがたい話だ」

「本当に・・・」

メイも目に涙をいっぱいにためている。

「俺は明日から、アガルタの領主たちの屋敷を回る。今回のことを、伝えねばならん」

「では、私が伴をしよう」

「そうだな、マト、お願いできるか」

「リノス様、私もご一緒します」

「そうだな、ソレイユも居た方がいいな」

「お任せください！」

そして俺たちは、獣人たちを迎える準備について皆で話し合った。

風呂に入り、寝室に入るとリコがいた。エリルは既に大の字になって寝ている。泣き出すととんでもなくうるさいが、よく寝る子だ。きっといい子に育つだろう。

そんなエリルの寝顔を見ていると、後ろからリコが抱き着いてくる。俺はリコの手をそっと握る。

「・・・アガルタの都の人々に、クリミアーナ教国の話をしたのですね」

「ああ」

「私は、今回のリノスを見ていて、うれしくなりましたわ」

「うれしい？どうして？」

俺はリコから体を離す。

「クリミアーナに惑わされずに、獣人たちのことをきちんと考えてくれたことと、あとは……メイを守ってくださったのは、本当にうれしかったですわ」

「リコ……怒らないのか？」

「怒る？　どうしてですの？」

「ああ。その……今回はメイに気がいってしまっていて、なかなかリコと一緒にいられなかったからな……」

「リノス、メイは私の家族ですわ。ほかの女とは違いますわ」

「そう言ってもらえると、安心したよ。今回は俺も勉強になった。あそこまで頭がぐちゃぐちゃになるとは思わなかったな。何せ、宗教の一番恐ろしいところは、神の名において平気で人を殺すことができるし、何より、罪の意識と死の恐怖を取り払ってしまうことにある。クリミアーナ教の連中には、そんな狂気を感じたんだ。笑顔で人を殺す人間や、喜んで死にに来る兵士が居てみろ。どんな屈強な人間でも勝てないぞ？それに、どれだけ倒しても、根絶やしにはならないだろ。全くもって厄介だよ」

「もう、考えは落ち着いたのですか？」

「ああ、メイの予想外の行動のおかげで、俺が守るべきものと戦うべき相手がわかった。獣人だってアガルタの国の人間だ。何の証拠もなく、ただ病気になりますっていう情報だけで獣人を追放しろだの、羊獣人をよこせだの、一体何様だと言うんだ。俺は、俺の納得できる説明を聞くまではクリミアーナの言うことは聞かないことにしたんだ」

「よかった・・・。いつものリノスですわ。私も、クリミアーナ教のことで随分動揺しました。リノスの話を聞いて、私も覚悟が決まりましたわ。でも、都の人々の前で涙したのは、いただけませんわ」

「う・・・うん。リコの言う通りかもしれないな。俺は・・・王には向いてないな」

「リノスは、弱いですわ、弱すぎるところがあります」

リコはゆっくりと起き上がる。そして、俺の顔を優しく抱きしめた。

「でも、リノスのその弱さが、リノスの魅力でもありますわ」

「カッコ悪いだろう？」

「いいえ。完全無欠の殿方のどこに魅力を感じましょうか？リノスに、その弱さがあるおかげで、私は、リノスと一緒に居られるのです」

「リコ・・・。お母さんみたいなことを、言うようになったな」

「今からは、リノスの恋人になりますわ・・・」

リコは再び、俺に抱き着いてきた。

リノスは気が付いていない。自分が結界師として、一つレベルが上がっていることを。彼がそれに気が付くのは、もう少し先の話である。

夜が、ゆっくりと更けていった。

第百八十三話　静かなる戦いの幕開け

数日間続いていたぐずついた天気が回復した。屋敷の外に出ると、見事な虹が出ていた。俺は眩しそうに太陽の光を手で遮りながら、その虹をしばらく見つめ続けた。

「これは、リノス様。ご無沙汰しております」

「チワンか。久しぶりだな。元気そうで何よりだ」

数日前、ポーセハイのローニのお陰で、クリミアーナ教国が主張している獣人病原説が完璧なものではないことがわかった。今日はその対策を話し合うために、ポーセハイの代表格であるチワンに来てもらったのだ。当然その後ろには、ローニも控えている。

「リノス様も、ご健勝で」

「固っ苦しい話は抜きだ。まずは、屋敷に入ってくれ」

「帝都のお屋敷でなくとも、アガルタまで参りましたのに」

「いや、アガルタじゃ昼飯食えないだろ？」

「ははぁ、なるほど」

チワンは苦笑いを浮かべる。その後ろですました顔をしたローニがいるが、耳がピクピクと動いている。

「今日も黄金鳥のからあげか？」

ローニは、小さくお辞儀をする。

屋敷のダイニングには既に、メイとリコが座っていて、二人とも泣いている子供たちをあやしている。アリリアはすぐに大人しくなったが、エリルは泣き続けている。俺はエリルをリコから受け取って抱っこしてやる。しばらくすると、エリルはスヤスヤと眠りに落ちた。

「お上手ですね」

「まあな。腕っぷしのいい腕の中が、この子の好みみたいだ」

エリルをベビーベッドに寝かせて俺も席に着く。既にチワンはクリミアーナから贈られてきた医学書に目を通している。そして、ゆっくりと医学書を机の上に置く。

「・・・クリミアーナらしい」

チワンは誰に言うともなく呟く。

「やっぱり、クリミアーナの言っていることは、間違いなんだろうか？」

「間違いとも言い切れません。おそらくこれを書いた医学者は、全くの悪意がないと思います。悪意がないだけに、これは面倒ですね」

チワンはため息をつく。

「クリミアーナ教国の医学研究所は、圧倒的な頭脳を揃えた集団です。世界中の信者の中から、最も優れた者が都に住むことを許され、研究に携わることができます。それ故に、彼らの中には、つまらない共通点を持つことがよくあります」

「つまらない共通点？」

「自分の信念ではなく、自分の嗜好に合わせた思考を採用する。どんなにいい加減でつじつまの合わないことでも、自信満々に話す。自分を傍観者と見なし、発言者を分類してレッテル貼りをし、実体化して属性を勝手に設定し、解説する。そんな共通点です」

「自分が頭がいいと勘違いしているヤツにありがちな話しだな」

「ただ、この内容を見る限りでは、この研究員はそこまでひどくはないように思いますが・・・。それにしても、この全てを断定していく書き方は・・・。メイ様がそう思うのも仕方がないと思います」

「うーん、俺は勉強ができなかったから、論文なんて言うと、その言葉だけでビビっちまうよ」

「ご謙遜を。さて・・・これを覆すには・・・。もう使者は送られたのですね？」

「ああ、数日前にな。ローニに言われた通り、クリミアーナには三つの条件を出しておいた。それを奴らが呑めばいいんだが、呑まない場合は、全面戦争になる可能性がある」

「いいえ。間違いなく乗ってくると思います。何といっても、クリ

ミアーナ医学研究所のイマーニ博士と、ダリナー博士が共に認めているのですから、教国としては、自分たちの成果を世間に知らしめる絶好の機会だと思います」

「そうか」

「で、早速ですが、教国がリノス様の条件を呑んだ後のことなのですが・・・」

俺たちは、今後のことを話し合う。

クリミアーナ教国でも、夏の訪れを知らせるように燦々とした陽の光が、首都、アフロディーテに降り注いでいた。その陽の光に照らされた教皇宮殿は、外壁が白で統一されていることもあって、照り返しが強い。しかしそのために、教皇宮殿は白く輝いているように見える。

「教皇聖下、失礼します」

執務室に入ってきたのは、司教のコフレシだった。

「ああ、コフレシですか。どうしました?」

教皇は見ていた書類を机の上に置き、コフレシに優しい眼差しを注ぐ。

「アガルタから・・・。アガルタ王から書簡が参りました」

「・・・アガルタ王から書簡？」

教皇はちょっと驚いた表情を浮かべつつ、書簡を手にする。

「ご苦労様」

教皇は相変わらず柔和な笑みを浮かべて、書簡を手にする。そして、ゆっくりとそれを読み始めた。

「・・・すぐにイマーニとダリナーを呼んでください」

「はっ。失礼します」

コフレシは素早い動作で頭を下げ、教皇の執務室を後にする。穏やかな口調だが、教皇はすぐに、という言葉を言われた。通常、教皇が何かを急かせることはないと言っていい。何故ならば、教皇の命令や言葉は何を差し置いても最優先させる事柄であるからだ。で、あるにもかかわらず、すぐに、という言葉を教皇は発した。何か、大変なことが起こったのだろうとコフレシは解釈したのだ。

しばらくして後、イマーニとダリナーが教皇の執務室にやって来た。

「二人とも、忙しいところ呼び出して申し訳ありませんでした。研究の方は、大丈夫でしょうか？」

「いいえ。教皇聖下のお召しです。何を差し置いても参らねばなりません。研究は順調でございます」

キビキビと発言しているのは、ダリナーである。その隣でイマーニは温厚そうな微笑みを湛えている。

「そうですか。それを聞いて安心しました。実は先ほど、アガルタ王から、こんな書簡が届けられたのです」

教皇は机の上に置いてある書簡を手に取って差し出す。イマーニは恭しくそれを受け取る。

「拝見します」

ゆっくりとリノスからの書簡が広げられていく。イマーニは表情を崩すことなく、その書簡を読み進めていく。

「いかがですか？」

教皇が優しい口調で尋ねる。

「私としては、全く問題ございません。むしろ、良い機会かと存じます」

「イマーニ所長、アガルタ王は何と言ってきたのです？」

ダリナーが割り込んでくる。

「アガルタ王は、我々が発表した、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスの病原が獣人の体液である、そして、それの特効薬は羊獣人の胆汁であるという説に納得がいかないとのことです。その説明を求めたいが、書簡をやり取りしていては時間がかかるから、公開質問会を実施して欲しいという要請です」

「公開質問会・・・」

「場所は、アフロディーテ。ただし、公開としたいので、希望者は可能な限り全員参加させることが条件です」

「この首都で、ですか？」

「そして、この質問会が終了するまで、アガルタでは追放された獣人たちを受け入れるとのことです」

「なっ！病原体である獣人もですか！」

「そのようです。さらに、羊獣人のアフロディーテへの護送も断るとのことです。そして、できればこの質問会が終了するまで、各国に要請した獣人たちの追放と羊獣人の捕縛を延期してもらいたいとも書いてあります」

「これは・・・アガルタからの、我が教国に対する挑戦ではありませんか！」

ダリナーは真っ赤な顔をして怒りをあらわにしている。

「ダリナー副所長」

やさしく、まるで幼い子供に言うかのごとき優しい声が聞こえてくる。ダリナーは恐縮して慌てて首を垂れる。

「アガルタは、あなたの研究に横やりを入れられているように思えますが、これを断れば、アガルタ王は教国の研究は信用に足らずと吹聴することでしょう。いえ、それはそれで構いません。そのようなことで教国の屋台骨が、これまで築き上げてきた教国の研究成果

が揺らぐことはありませんからね。しかし、イマーニ所長はこれを受けてよいと仰いました。そうですね？」

教皇はイマーニに視線を向ける。

「その通りです、教皇聖下。世界中に我々の研究成果を発表するよき機会です。この機会に、獣人たちが人族にとっていかに危険な存在であるのかを広く知らしめることができます。また、羊獣人の胆汁を用いれば、その不治の病はあるいは治癒し、あるいは進行が止まり、あるいは根絶すると知らしめることが出来ます。不治の病に苦しむ人族に希望を与えられます。いい機会です。ぜひ、やりましょう」

イマーニは自信満々の表情を浮かべている。教皇はその姿を見て、大きく頷く。

「教皇聖下、さらに言えば、グラリーナ女史が発表した研究成果が、クリミアーナ教国のものであると示す機会でもあります。彼女はコリスリン王国から我が国に派遣されている研究者です。うかうかしていますと、彼女の研究成果が自分のものであるとコリスリン王国が言いかねません。手を打つのは早い方がよろしいかと存じます」

「わかりました。それについてはまた、時間を改めて話をしましょう。まずはアガルタ王に返信を。そして・・・獣人の追放については各国に対応はお任せしましょう。羊獣人の護送については、クリミアーナから船を出すことは止めにしましょう。ただし、各国が自主的に護送してくる場合は、受け入れてください」

「かしこまりました。お任せください」

「コフレシ、お願いしましたよ」

教皇の言葉を聞いたコフレシは再び機敏な動きで執務室を後にした。
そして、それを見届けたイマーニとダリナーも、教皇に恭しく一礼をして執務室を後にした。

教皇は、先ほどまで読んでいた書類に再び目を通す。

「アガルタ王・・・リノス・・・。報告によれば、大変に優秀な結界師のようですね。可能なれば・・・教国に迎えたいくらいです。しかし・・・まさか政治的な駆け引きを仕掛けてくるとは思いもよりませんでした・・・。まあ、ご本人にはその意識はないのかもしれませんが。戦場であれば強力無比でも、果たして、この政治的な場ではどうなのでしょう。得意の結界は使えませんね・・・。彼はどのように足掻くのか・・・。楽しみですね・・・」

書類を何度も読み返しながら教皇は、相変わらず柔和な笑みを浮かべている。しかし、その瞳の奥の、電子計算機のような頭脳は、リノスの分析を始めるのだった。

第百八十四話　戦いのための布石

雲一つない快晴。抜けるような青空がアガルタの都に広がっている。まさしく夏真っ盛りの気候の中、都の外ではそれ以上の熱気があった。

「てめぇ！しっかりしねぇか！」

「すいやせん、親方！」

「このっ、バカ野郎！」

凄まじい怒号が飛び交っているのは、大工たちである。アガルタの都の傍に集落が急ピッチで建設されている。しかも、そこには何故か三階建ての建物が多くみられる。これは、下で遊んでいる子供たちに声が届く距離が適当であろうというアガルタ王の提案により、三階建ての、いわゆるハイツような建築物が建てられているのだった。今、大工のゲンさんが造ろうとしている集落は二つ目であり、既に完成した一つ目の集落は、避難してきた獣人たちで埋まりつつあった。

「ボサッとしてたら間に合わねぇぞ！俺っちの弟子を名乗りてぇんなら、二日で仕上げな！二日で！」

「お・・・親方ぁ・・・」

「この野郎！口動かさねぇで手ぇ動かしやがれ！」

そんな光景を、リノスは焼きたてのパンを頬張りながら眺めていた。

「大変そうだな、ゲンさんの弟子っていうのも・・・。それにしても、お前らもなかなか逞しいな。越してきた早々から商売を始めるとはな」

「エヘヘヘヘ」

苦笑いするのは、犬獣人のオヤジである。この男はアガルタに避難して早々に屋台を引いて焼きたてのパンを売る商売を始めた。いつでも焼きたての美味しいパンが食べられる店として人気を博しつつある。

「王様のお陰で、私たちは何とか生き永らえることができました。王様には感謝してもしきれません。私のパンでよければ、毎日迎賓館までお届けに上がりますよ？」

「それは大変だろう。俺が買いに来ればいい話だ。そんな人の世話焼いていないで、早くパンを焼け。アンパンはまだか？」

「へいへいただいま」

そう言ってオヤジは、出来立てのアンパンを俺に差し出す。そして俺は、何のためらいもなくそのアンパンにかぶりつく。・・・美味い。砂糖の甘さだけではなく、きちんと小豆の旨みがでている。俺の目に狂いはなかった。このオヤジなら俺のめがねに適うアンパンを拵えると思っていたのだ。

「美味い・・・。美味いな・・・。また明日も来るよ」

「へイ、まいどあり！」

俺は都に向けて歩き出す。

『リノス様、リノス様。フェリスです』

突然念話が飛んでくる。

『どうした？』

『クリミアーナから使者が参りました』

『わかった。すぐ行くから、待たせておけ。あと、クノゲンも同席させてくれ』

『畏まりました』

「くそっ、焼きそばが食いに行けなくなったじゃねぇか」

そんなことを呟きながら、俺は迎賓館の執務室に転移する。

「また会ったな」

「アガルタ王におかれましては、ご機嫌麗しく・・・」

相変わらずよく通る大きな声であいさつをしてくるのは、司教のコフレシだ。

「ああ、そんな固っ苦しい挨拶は抜きだ。用向きをきかせてくれ」

言葉を遮られたためか、コフレシはいつもの柔和な笑顔が少々引きつっている。

「先だって頂戴しました書簡についてですが、教皇聖下におかせられては、我が国の首都、アフロディーテにて公開質問会を行うことは問題ないとの仰せでございます」

「そうか、わかった」

「時期でございますが、九月一日の開催としたいとのことでございます」

「今からひと月半後か」

「さすがに全世界から全ての研究者を集めるのは困難でございます。ただし、なるべく近隣の諸国からはご参加を願いたく思っております」

「なるほど。で、その招待はいつするんだ?」

「アガルタ王のお返事を頂戴し、アフロディーテに立ち帰りまして教皇聖下にご報告を申し上げた後、招待の使者を派遣する予定でございます」

コフレシはいつもの柔和な笑みを湛えながら言葉をつなぐ。

「こういうことは早くしませんと。獣人たちを受け入れておられるアガルタ国で、いつ不治の病が蔓延するかもしれませんので」

「お前も、パン屋と一緒か・・・」

「は？」

「いや、こっちの話だ。では、俺は九月一日の開催に同意した。従って、俺から周辺国へ案内を出しても、問題ないな？」

「・・・ええ。問題ございません」

「ところで、その招待状は、教皇自ら作るのか？」

「まさか・・・。教皇聖下の名において我々司教が作成し、教皇聖下の御承認をいただいてから、発行いたします」

「そうか、やっぱりな。ならば・・・」

俺は紙とペンを持ってこさせ、コフレシに渡す。

「これは・・・？」

「ああ、教皇に出すであろう招待状を書いてもらいたい」

「どういうことでしょうか？」

「だから、教皇が出すであろう招待状を書いて欲しいのだ。教皇のサイン・・・それは、真似られるだろう？」

「・・・」

「どうした？なぜ黙っている？おかしいな？違うじゃないか？」

「違うとは、一体何を仰って・・・」

俺はニヤリと笑う。

「いや、この間夢を見たんだ。クリミアーナ様がまた・・・な」

「また夢枕に立たれたというのですか！」

「ああ。招待状は使者に来たヤツに書いてもらえと仰っていた」

「ばっバカな！」

「考えてもみろ。そんなことを俺が考えつくわけないだろう？考えついたとしても、教皇の、サインを、お前に、真似ろ、なんて普通は言わないよな。そんなことを言った日にゃ、クリミアーナ教を敵に回すことになる。いかに無知な俺でも、そんなことくらいはわかっているつもりだ。それを、敢えて、言うのだ。わかるな？」

「・・・」

「ああ、ちなみにクリミアーナ様は、それを書いた者には、加護を与えると仰っていたな。君は、クリミアーナ様の加護は、い～ら～な～い、と言うのかな？」

コフレシは渋々ながら紙に向かってサラサラと何かを書き始める。

そして、出来上がったのは教皇名による招待状だった。きちんと、質問会の内容、場所、時間が明記されている。

「・・・ちょっと上から目線な気もしないではないが、まあ、こんなもんでいいだろう。アガルタがクリミアーナと公開討論会をすると招待状を出しても、誰も信じないだろう。新興国の辛いところだ。そこにいくと、クリミアーナ様はさすがだ。こんな俺に良い知恵を授けて下さった」

「・・・では、私は、アガルタ王のお返事を教皇聖下に伝えて参ります」

「ああ、そうしてくれ。あ、そうだ。君の加護の話は、決して人に話してはいけない。人に話した瞬間、その加護は自動的に消滅する。いや、俺が言ってるんじゃないよ？クリミアーナ様がそう仰るんだ。どんな加護が与えられるのか、うらやましい限りだ。あ、またクリミアーナ様が夢枕に立たれたら、その時は連絡する」

コフレシは一礼をすると、きびきびとした動作で謁見の間を出て行った。

「特に、難癖をつけてくることもなかったですな」

俺の執務室に戻るなり、クノゲンが口を開く。

「ああ。クリミアーナ様の名前を出したら、途端に大人しシュン太郎になりやがった。それにしてもあいつらは、イヤなやつらだ。ところでクノゲン、ちょっと教えてくれ」

俺は机の上に地図を広げる。

「クリミアーナの首都は・・・ここか。ここから一か月くらい旅を

すれば、どのあたりまで行けるんだ？」

クノゲンは顎に手を当てながら考える。

「まあ、この時期ですから嵐に遭うことはないと思いますから・・・。まあ、このあたりくらいでしょうか」

「ふーん、まあまあ行けるじゃないか」

「それが何か？」

「いや、それよりも、これらの国々はやっぱりクリミアーナ教の支配下になってるんだろうな」

「まあ、周辺国は影響が強いですが、このサンダンジ国などは太陽を神と崇めていて、独自の宗教文化を持っていますな」

「なるほどな。ありがとう、助かったよ」

俺はその後、都の外に作った獣人たちの避難村に向かう。基本的に村に入る時と出る時に消毒される結界を張っているが、効果のほどは分からない。しかし、そこでは都の人々が炊き出しを行い、獣人たちを暖かく迎えている光景があった。皆、俺を見ると礼を言いに来る。それに手を上げて応えつつ、真っ白な建物に向かう。そこに居るのは、メイだった。

ポーセハイのローニと共にメイは、アガルタに避難してくる獣人を片っ端から診察していった。そして、今のところ不治の病と見られるような現象は確認できていない。この村ができて数週間、俺を含

め人間も出入りしているが、全く病を発症している者はいない。一部で恋の病を患っている者はいるようだが、それは別の話だ。

俺の姿を見たメイは、診察の手を止める。俺は手でそのままでいいと示して診察を続けさせる。その時、ローニがやってきてタイミングよく交代してくれる。俺はメイと二人で奥の部屋に入った。

「どうだ、状況は？」

「今日も特に病を発症している方は見られません」

「そうか。さっき、クリミアーナから使者が来た。それで、公開質問会の日程がひと月半後と言ってきた。それで俺は了承しておいた」

「わかりました。ローニさんと一緒に、準備します」

「あんまり根を詰めすぎないようにな。アリリアもいるからな」

「ハイ・・・大丈夫です」

実際、メイは獣人たちの診察の傍ら、都の中で匿われている羊獣人たちのケアにも当たっているのだ。まさに八面六臂の活躍ぶりで、さらには屋敷に帰るとアリリアの面倒を見、夜遅くまで研究に没頭している。俺は傍で見ていて倒れはしないかとヒヤヒヤしているのだ。

「もう少しすると、ポーセハイの人たちも手伝ってくれるようですから・・・」

「ああ、そうしてもらってくれ。無理だけはするなよ」

そう言って俺は部屋を出て、ローニに頼むと手で合図をして、建物から出た。

そして俺は執務室に帰り、コフレシが書いた招待状を数枚の紙に書き写し、教皇のサインを丁寧にまね、その下に俺のサインを書き加えていく。その出来上がりを確認し終わると、窓を開けてサダキチに念話を送る。

『お呼びでしょうか』

『この紙を近隣諸国に配ってくれ。一番立派な建物にいる人間に渡してくれればいい。あ、ヒーデータとニザ、ラマロンは俺から渡すので、行かなくていい。お前たちの速さは世界一だ。移動している最中に招待状が破れるといかんので、結界を張っておく』

『畏まりました。ありがとうございます』

サダキチが消えたのを確認して、俺はため息をつく。

「クリミアーナに帰って教皇から決裁もらって招待状を送るなんざ、本当にクリミアーナの周辺国からしか来られねぇじゃねぇか。食えねぇ奴らだ、全く。さて、この作戦が果たしてどこまで功を奏するか・・・。ま、やるだけやるしかねーな」

そう言って俺は、帝都の陛下の下に向かったのだった。

第百八十五話　気が付けば前哨戦

大海原に一艘の船が見える。ヒーデータ帝国の旗を掲げた巨大な船が、ゆっくりと海原を進んでいる。この世界にこれほど巨大な船を建造できる国は、そうはない。既にこの船の威容だけで、ヒーデータ帝国の力を十分に伺い知ることができる。

その船に乗っているのは、アガルタ国の国王リノスと、その愛妾である羊獣人のメイリアス、そして黒いウサギ獣人、チワンとローニが乗船している。そして、ヒーデータ帝国からは、帝国大学の医学研究所の所長、ロベルトとその部下たち数名が乗船しており、さらには、ニザ公国からは、ドワーフ王の高弟であるピタンとその部下たちが乗船している。総勢、１５人にも及ぶ集団が乗船しているのである。

「ようやく見えてきましたね・・・」

そう呟くのは、ヒーデータ帝国皇帝の弟であるヴァイラスである。

「そうですね。あと、半日で到着というところでしょうか」

「船上での十日間は、さすがに疲れましたよ」

「まあ、船酔いは仕方がないですね」

「義兄（あにうえ）上の回復魔法とメイリアス殿のお薬がなければ、今頃どうなっていたか・・・」

「無理せず帝都におられればよかったのに」

「仕方がありませんよ。陛下の命令ですから」

「まあ、殿下にも頑張ってもらいますから、本当によろしく頼みますよ？」

「ええ、任せてください」

俺はヴァイラス殿下とそんな話をしながら和んでいる。実際、一昨日はかなり船が揺れて、研究者たちも船酔いで苦しんでいた。俺たちは全く問題がなかったので、俺は回復魔法をかけつつ、メイの作る船酔いの回復薬を飲ませてやったのだ。

船の旅は基本的にすることがないと思いきや、研究者たちは飽きることなく朝から晩まで、今回の問題に対する討論会と勉強会を続けていた。こういう理系の話はチンプンカンプンな俺はすることがなく、釣り三昧の日々を過ごしていたのだった。高校生の頃、数学と理科類の授業は散々睡眠学習をしたのだが、全く身についていない。勉強しておけばよかったと、ちょっとだけ思ってしまったのは、ナイショの話である。

夜は当然、帝都の屋敷に転移して眠った。同行しているポーセハイのチワンとローニも屋敷に泊まってもらう。ちょうど、屋敷で匿っていた猫人族のウィリスが、アガルタの獣人村に移ったのと入れ替わりのような形になった。

ローニは、どうしても屋敷での食事が食べたいたらしく、船での朝食と夕食はほとんど食べず、屋敷で夕食の残り物を少々食べ、朝、それはそれは遠慮なくガッツリ食べて船へと戻っていったのだった。

ペーリスは気を利かせてローニの分を別に作ってくれるなどしてくれ、かなり負担をかけてしまった。もっとも彼女は笑顔で、帰ってきたローニに夜食用のサンドイッチを渡し、朝は嬉々としてローニのためにステーキを焼いていたので、そこが救いと言えば救いなのだが。

そんなこんなで、俺たちはようやく目指す場所であるクリミアーナ教国の首都、アフロディーテに到着したのだった。

「・・・一体、これで何か国目なのだ？」

机の上で頭を抱えているのは、司教のコフレシである。公開質問会の前日であるというのに、訪れる使節団が後を絶たない。てっきりアガルタ、ニザ、ヒーデータ、ラマロンの使節団は来るとしても、あとはクリミアーナの周辺国くらいで、精々百人も来ればいいところであろうと考えていた。しかし、蓋を開けてみると、かなり遠方の国からも使節団がやってきている。しかも、自分が書いた招待状を携えて。彼はアガルタ王が何か策略を巡らしたと確信を持ちつつ、使節団の対応に追われていた。

一応は国を代表する人々であるため、粗略に扱うことは許されない。従って、当初予定していた迎賓館ではとても収容しきれず、慌てて他のホテルを手配している始末なのである。

結局、蓋を開けてみれば、参加した国は４１か国に及び、３００名を超える使節団がアフロディーテに到着していたのである。それに加えて、招待されていないにもかかわらずやってくる市民や学生たちも多くいたため、港は大混乱に陥っていた。そして今また、サン

ダンジ王国から使節団が到着したとの知らせが届いたばかりなのである。

「クッ・・・。アガルタ王め・・・どんな手を使ったのだ・・・。ああ、そのアガルタ王がまだ到着していない。おそらく、ヒーデータとニザ、ラマロンの使節団も来るだろう。そうなれば・・・。ええい、忌々しい」

教皇の信頼を得ようと、この仕事を一人で安請け合いしてしまったことを、コフレシは今更ながらに後悔するのだった。

当初開催が予定されていた質問会の会場は、医学研究所の講堂であったが、予想外の人数になったために、大聖堂を使わざるを得ない状況であった。こうした予想外の出来事に教皇は相変わらず優しい笑みを湛えながら同意してくれ、労いの言葉をかけてくれたのが、彼にとってせめてもの救いであった。

質問会の開催は、明日である。時間を忘れて準備にかかるコフレシの部屋に、一人の若い司教が入室してくる。

「失礼します」

「今、私は忙しいのだ。何ですか?」

「たった今、港にヒーデータ帝国の船が到着しました。アガルタ王、ニザ公国のお使者の方々もご一緒とのことです。ラマロン皇国は、国内の復興に全力を挙げるとのことで、使節団の派遣は見送るとのことです」

「・・・そうか。よし、では、教皇宮殿に案内しなさい」

「それが・・・」

「何だ、早く言いなさい」

「今夜は船にて宿泊するとのことで、明日の質問会には直接船から向かうとのアガルタ王からの伝言です」

コフレシは舌打ちをする。

「まあ、いい。アガルタ王らがそう言っているのなら、そうさせなさい」

「畏まりました」

「・・・ったく・・・こちらの気も知らないで・・・」

コフレシはブツブツと呟きながら、明日の準備に意識を切り替えるのであった。

フンフンフンフンフフ～ン♪フフ～フンフンフフフ～♪フフフフ～イエイ！
フンフンフンフンフフ～ン♪フフ～フンフンフフフ～♪フフフフ～イエイ！

夜、帝都の屋敷で、誰も居なくなったダイニングで一人で鼻歌を歌いながら、テーブルの上で何かの作業をしているのは、リノスであ

る。

「・・・ご主人様」

「ああ、メイか。先に寝ていてくれ。明日も早いからな」

「何をされているのですか？」

「ああ、米粒で紙を張り合わせているんだよ」

「一体何に使われるのですか？」

「うん？メモ用紙だ」

「メモ用紙・・・ですか？」

「ああ。あんまりカッコいいものじゃないけど、こうやって張り合わせた方が、やりやすいんだよ」

「お手伝い・・・します」

「ああ、いい。もうすぐ終わるから。あとはコメが乾けば完成だ。朝になればカピカピになってるよ」

「何だか申し訳ないです・・・」

「別にメイが悪いわけじゃない。ただ、わからないから質問しに行くだけだ。それだけだ。メイも納得できないんだろ？堂々と質問すりゃいい。メイやローニは間違っていない。俺は詳しいことはわからんから、あまり口出しできないかもしれんが、できるだけの協力

はする。大丈夫だ、メイ。思い切り話をしてこい」

「・・・」

メイは黙って俺に抱き着いてくる。

「風呂、入るか？」

「・・・ハイ」

メイは小さな声で呟いた。

クリミアーナ教国首都、アフロディーテの大聖堂の外には、人々があふれ出していた。二千人を収容できる大聖堂であるが、各国からの使節団とクリミアーナ教国医学研究所の所員、教皇をはじめ枢機卿などの教会関係者などで席は瞬く間に埋まり、そこに入ることを許された一般市民はごくわずかだった。

それに加えて、主神、クリミアーナの御声を聞き、クリミアーナ様の使徒様か、はたまた御名を語る大悪人かと噂されるリノスの動向や発言は、この都に住む者にとって注目の的であった。そのために、そのリノスを一目見ようと、敬虔なクリミアーナ教の信徒でもある一般市民は大挙してこの大聖堂に訪れ、どさくさに紛れて入国してきた研究者や学生なども加わって、会場周辺は大混乱をきたしていた。

そんな中、リノスたちは教国が迎えによこした馬車に乗って、会場である大聖堂に向かっていた。

いよいよ、クリミアーナ教国との戦いの幕が開こうとしていた。

第百八十六話　公開質問会

クリミアーナ教国の首都、アフロディーテ。その中心部に建てられている大聖堂は、先ほどまでの喧騒が嘘であったかのような静寂に包まれていた。

大聖堂の中央、主神クリミアーナの肖像画が掲げられているすぐ下の壇上には、教皇以下枢機卿が並んでおり、その前には二つの机が向かい合わせで並べられていた。上手側にはクリミアーナ研究所所長のイマーニをはじめ、副所長のダリナー、研究員のグラリーナが静かに座っている。一方の机には、アガルタ王リノスの愛妾といわれる羊獣人、メイリアスと、兎獣人ポーセハイのチワンとローニが座っている。そして、その横には、ロール状にした紙を小脇に抱えて立っている一人の男がいた。それが、アガルタ国国王、バーサーム・ダーケ・リノス、その人であった。

リノスは会場に入るなリ、大聖堂の司教の一人に何やら耳打ちを始めた。最初は訝る表情を崩さなかった司教だが、最後は上司に確認を取りに行き、戸惑いながらもリノスに許可が出たことを伝えた。そして、会場に入ると、メイ以下の三名は着席し、リノスだけが立ち尽くしたのだ。

会場内は戸惑いとこれから何が起こるのかの期待感で、全員がリノスに視線を注いでいた。その静寂の中、二人の司教が小さな机を運び、ちょうど両者の真ん中にそれを置いた。壇上の教皇のすぐ下の位置に、机が置かれている。

設置が終わるとリノスはスタスタと歩いていき、その机に座る。紙

とペンを机に並べ、それが終わると背筋を伸ばしてすました顔をする。しかし、会場内は静寂に包まれたままだ。リノスは再びキョロキョロと会場を見ながら、口を開く。

「どうぞ？始めてもらっていいですよ？」

「アガルタ王」

声を発したのは教皇だった。

「このようなところから失礼します。はじめてお目にかかります。クリミアーナ教国教皇を務めます、ジュヴァンセル・セインと申します。この度は遠路はるばるようこそおいで下さいました」

いつもの柔和な笑みを絶やさず、眼下のリノスを見下ろしている。リノスはスッと立ち上がり、教皇に一礼をする。

「教皇様、この度はこのような機会を設けていただき、ありがとうございました。感謝いたします」

教皇は満足そうな顔で頷く。

「聞けばアガルタ王はクリミアーナ様の御声をお聞きになられたとか・・・。もしかするとアガルタ王は、クリミアーナ様がお遣しになった使徒様かもしれませんね？」

相変わらず柔和な笑みで、優し気な眼差しを教皇はリノスに向けている。

「そのお話は今日のこの場とは関係ありませんね。時間も限られて

いますし、質問会を先に始めませんか？」

会場中が凍り付く。しかし、教皇は柔和な笑みを絶やさない。

「そうですね。アガルタ王の仰る通りですね。それでは、始めましょう。アガルタ王、そのようなところにおいでにならず、私の所におい下さい。シュノハート」

名前を呼ばれた枢機卿は立ち上がり、自分の席を空けようとする。

「ああ、いい、いいですよ、そのままで。そこだとやりにくいので」

リノスは手で制する。シュノハートは当惑した顔をして教皇を見ている。教皇はゆっくりと頷き、彼は再び自分の席に座った。

「それでは、始めてください」

教皇の声を聞いてイマーニが口を開く。

「クリミアーナ医学研究所所長のイマーニでございます。この度はこのような機会を設けていただきましたこと、大変にうれしく存じます。この会議が医学の発展につながるよう、お互い研鑽を積みたく思います。よろしくお願いいたします」

それを受けて、メイが立ち上がる。

「アガルタ国国王、リノスにお仕えいたします、メイリアスと申します。この度、クリミアーナ教国が発表された、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスの病原が一部獣人たちの体液を媒介して感染するという発見、さらにはその特効薬として、羊獣人の胆汁が有効で

あるという説につきまして、どうしても腑に落ちない点がございます。そのために、この質問会を開催いただきました。感謝いたします」

よく通る、凛としたメイの声が会場内に響き渡る。メイは一礼をした後、言葉を続ける。

「まず、この医学書、サンクチュアリに発表されました説は、論理的には問題ないかと思います。しかし、具体的な内容が何一つ記載されていませんので、私は、この説を信じることができません。ぜひ、その点をご説明願います」

メイはそう言って着席する。それを受けて、グラリーナが口を開く。

「具体的に申しますと、特効薬につきましては、羊獣人の胆汁に、私が開発しました酸液をある一定の分量で加えますと・・・」

「いや、そういうことではないのですよ」

グラリーナの発言を遮ったのは、チワンだった。

「はじめてお目にかかります。ポーセハイ診療所の院長をしております、チワンでございます」

会場中が揺れる。「ポーセハイ?」「あの、ポーセハイか・・・」そんな囁き声があちこちから聞こえてくる。

「私どもがお尋ねしていますのは、一体どれだけの症例で実験したのか、そして、どれだけの回数の再現実験を実施されたのか、その数字をお教え願いたいのです」

「なるほど、わかりました」

クリミアーナ医学研究所所長のイマーニが口を開く。

「確かに、あなた方ポーセハイが以前お出しになった論文・・・。『蚊を媒介とした突発性高熱における治療法』、あの論文は、発表された段階で九十点の出来栄えでした。それに比べれば、私どもの論文は三十点です。まだまだ説明の必要があります。それは認めましょう。しかし、しかし、これは人族が数千年の間苦しんできた不治の病が治癒できる唯一の方法なのであります」

イマーニは一言一言に熱い思いを込めて話をしている。

「まあ、何と言ってもポーセハイは気軽に人体実験をしていると聞きます、発表段階で、それなりの実証結果が出せるのは頷けますよね」

そんな厭味ったらしいことを言っているのは、副所長のダリナーである。ダリナーは内心、このポーセハイが忌々しくてならなかった。クリミアーナ医学研究所は、世界に誇る名門。世界中から秀才を揃え、圧倒的な頭脳でこの世界の医学界をけん引してきたという自負がある。方や、若き研究者を、決して多いとは言えないコーチたちが丁寧に育てていくポーセハイ。その昔は、彼らが発表する論文は人族には適さない噴飯的なものも多かったが、ここ数年は、クリミアーナでも長年にわたって解明できなかった病を根絶に導くなどの実績を積み重ねつつある。この質問会は、クリミアーナとポーセハイの、医学界での覇権をかけた争いという側面があった。もっともその意識は、ダリナー達クリミアーナ側に強く、ポーセハイたちは彼らを歯牙にもかけていないのであるが。

そんな感情を押し殺しつつポーセハイを睨むダリナーに、ローニが口を開く。

「確かに、以前は人体実験を行っていたことは認めます。ただし、ここ数年の論文では、大ねずみを使っての実証実験がほとんどです。人体実験は、実施していません」

「人体実験の話はさておきまして、私たちから、皆様に三つの要請をさせていただきます」

メイがさわやかな弁舌を振るう。

「一つ、なぜ、一部の獣人たちの体液がキリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスを発症させるのか。サンクチュアリにはその具体的な事例が記載されていません。その発症実験を、複数の、クリミアーナ教国以外の国で実施すること。敢えて言えば、例えば、オーガーなどは人体と非常によく似た体質を持っています。それを使ってもよいかとも思います」

大聖堂が騒めいている。しかし、教皇が手をかざすと一瞬で静寂に包まれる。

「・・・ありがとうございます。二つ目は、羊獣人の胆汁が特効薬になるとのことですが、それが完治する薬品であることを、一つ目にあげた発症実験の済んだ個体で、各国々で実証実験をすること」

メイは一つ息を入れる。

「そして三つめが、特効薬の開発方法を明らかにすること」

再び大聖堂が騒めく。メイに対して罵詈雑言の類も交じっている。主に発言しているのは、クリミアーナの医学研究所員のようだ。

「静粛に」

教皇の一言で再び大聖堂が静寂に包まれる。それを確認したメイは、ローニに目配せをして、頷く。

「我々の要請は、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスの感染が、獣人たちの体液を媒介し、その特効薬が羊獣人の胆汁であるというクリミアーナ医学研究所の説を、ここに集まった世界各国の研究機関で再現実験を実施することです」

大聖堂がどよめきとざわめきが交錯する。そんな中、教皇はいつもの頬笑みを湛えた眼差しを崩さず、優しい、しかし、よく通る声で列席者を諭す。

「静粛に、静粛にしましょう。みなさん、アガルタ国の研究者の、アガルタ王妃のお話を、最後まで聞こうではありませんか」

どよめきとざわめきが徐々に収まっていく。

「ここに集まった研究者の国々で再現実験をすると言うのか！バカな！どれだけの時間がかかると思っているのだ！」

吐き捨てるように発言しているのは、副所長のダリナーだ。

「可能です」

ローニの声がダリナーの声をかき消す。彼女はスッと立ち上がり、ぴょこんと頭を下げる。

「我々ポーセハイは全員転移スキルを持っています。ポーセハイ全員で、皆さまをそれぞれの国へ転移させます。そして、二週間後、再びお迎えに上がりまして、ここに集合いただければいいのです。確か、病原菌は獣人の体液を媒介して、人族に発症するまで数日・・・だったですよね？特効薬の製造方法を教授いただければ、二週間もあれば十分再現実験は可能であると思います」

「いや、世界各国で再現実験をやる必要がないと言っているのだ」

ダリナーの発言に、すかさずメイが反論する。

「お待ちください、ダリナー副所長。もし、その特効薬が有効なものであった場合は、各国でその製造方法を会得することができ、これらの病が流行した時に、迅速な対応が可能になります。それとも、特効薬の製造方法はクリミアーナが独占して気に入らない国には渡さないとでも仰るのでしょうか。まさかそれは杞憂でありましょうが、これからの世界のことをお考えいただくと、私の要請を是非、お考えいただきたいのです」

メイの発言に、誰も異を唱える者はいなかった。

「要は、クリミアーナの説が、偶然でなかったという点を、我々は証明したいだけなのです」

ローニがさらに口を開く。ダリナーは苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「しょ・・・所長！」

たまらずダリナーは隣のイマーニを見る。しかしイマーニは落ち着き払ったまま、静かに知性を湛えた目を、メイに向けていた・・・。

第百八十七話　公開質問会②

「なるほど、仰ることはごもっともです」

クリミアーナ医学研究所所長のイマーニが、落ち着き払った声で答える。

「ダリナー君」

隣のダリナーに向かってイマーニが声をかける。

「君は、グラリーナ女史が作った特効薬の効果を確認しました。その実験の流れをこの場にお集まりの人々にお伝えし、再現実験をしていただこうではありませんか。グラリーナ女史も、あなたが作った酸液を提供してください。それと同時に、羊獣人の胆汁との配合率も皆さんに知らせてください」

「所長！」

ダリナーはイマーニに詰め寄ろうとするが、彼は手で制する。その時、

「わかりました」

グラリーナは抑揚のない声で返事をする。ダリナーは渋々頷いている。二人の様子を見ながら、イマーニは言葉を続ける。

「さて、問題は、です。キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスは伝

染病です。ここに集まった国々で実験を行うと、それらの病原菌が外に漏れると、国が大混乱に陥る危険性があります。ここは、医学的技術力の高い国を選んで、担当していただくのが得策かと思いますが、いかがですか？」

メイたちは顔を見合わせていたが、やがて、メイが口を開く。

「私たちはそれで結構です。ぜひ、我が国であるアガルタでも、その再現実験を担当させていただきたいです」

メイはチラリとリノスを見る。リノスはメイをちらりと見て、大きくうなずく。

「お待ちください！アガルタは、大魔王が降臨していたと噂される国。それに、建国間もない国です。到底、病原菌が厳重に管理できる環境があるとは思えません」

ダリナーが厳しい口調で、畳みかけるように話している。その時、

「ちょっとよろしいでしょうか？」

大聖堂の前列から声が上がる。声の主は、右手を挙げて立ち上がる。それは、ヒーデータ帝国皇帝の弟、ヴァイラスだった。

「ヒーデータ帝国の、ヒーデータ・シュア・ヴァイラスです。クリミアーナ様には、兄であります、ヒーデータ帝国皇帝陛下以下、帝国の者にご加護をいただき、感謝の念に堪えません。さて、先ほどのお話ですが、アガルタ国で発生しました大魔王は、ラマロン皇国にて討伐されたと聞いております。また、ご懸念の実験設備につきましては、我が帝国大学の医療研究施設を使っていただいても構い

ません」

「ヴァイラス殿下、そのようなこと、あなた様のご一存でお決めになってもよろしいのでしょうか？もし、病原菌が外に漏れだしますと、帝国の・・・」

噛みつくように話に割り込んでくるダリナーの声を、ヴァイラスが遮る。

「私は、皇帝陛下からこの会議における全権を委任されております。私の言葉は、兄である、ヒーデータ帝国皇帝の言葉と捉えていただいて、問題ございません」

「すばらしい」

教皇が突然声を上げる。

「ヒーデータ帝国と言えば、大変に素晴らしい研究施設を持っていると聞いています。また、学者もとても研究熱心だと聞いています。ヒーデータ帝国に任せておけば、問題ないのではないですか？間違っても、病原菌を漏らすなどということは、ないでしょう」

教皇は両脇に控える枢機卿たちを交互に見ながら話をする。枢機卿たち全員が頷いたのを確認した教皇は、眼下のイマーニたちに視線を送る。

「よろしいですか？」

「はい、よろしいかと存じます。教皇聖下」

イマーニは恭しく一礼をする。教皇は大聖堂を見まわしながら、言葉を続ける。

「他に、再現実験の担当を希望する国はありますか？遠慮なく手をお上げください・・・」

「お任せください！」

「いいえ、我が国にお任せください！」

「教皇聖下！我が国にぜひ！」

矢継ぎ早に数か国から手が上がり、教皇へのアピール合戦が始まる。言うまでもなく、クリミアーナ教の強い影響下にある国々だ。教皇は柔和な笑みを湛えながら、手を挙げている国の代表団を一人一人、満足そうに眺めている。

「何と熱心なことでしょうか・・・。うんうん、それでは・・・ヨームアン王国にお願いしようと思いますが、いかがですか？」

「「「「異議なし！」」」」

手を挙げていた国々が見事にハモりながら、返答をする。立っていたヨームアン王国の代表らしき男が、教皇に最敬礼をしながら、大聖堂中に響き渡る大声で返答を返す。

「教皇聖下！我がヨームアン王国をご指名くださり、恐悦至極に存じ上げ奉ります！この上は、甚だ未熟な我々ではございますが、全霊を以て務めさせていただきます！ありがとうございます！ありがとうございます！」

ヨームアン王国の代表は何度も何度も教皇に向かってお辞儀を繰り返す。それに釣られて、会場から拍手が起こり、やがてそれは万雷の拍手となって大聖堂を覆いつくした。教皇も、小刻みに頷きながらゆっくりと、小さく拍手をしている。

会場内が収まると、再び教皇が口を開く。

「さて・・・。再現実験を担うのは、ヒーデータ帝国の施設を借り受けて実施するアガルタ国と、ヨームアン王国、この二か国でよろしいですか？」

「「「「賛成！！」」」」

ニザ公国の代表と他、数名の候補が手を挙げて発言しようとしているが、再び起こった万雷の拍手と歓声、賛成の声でかき消されてしまっている。その時、その喧騒をはるかに凌駕する大声が大聖堂中に響き渡る。

「我が国もぉ！やらせてぇいただくぅ！！！！」

ばかデカイ大声を出していたのは、ストールを纏った褐色の、痩せた男だった。その男の一括で、一瞬にして会場はもとの静寂を取り戻す。

「・・・サンダンジ国。貴国も希望されるのですね？」

「ああ。四百年前、我が国はキリスレイが流行し、国が荒廃する寸前まで追い詰められた。キリスレイの撲滅は我が国の悲願だ。ぜひ、協力させていただきたい」

「・・・いいでしょう。それでは、再現実験は、アガルタ国、ヨームアン王国、サンダンジ国の三か国でよろしいでしょうか？」

教皇が落ち着いた、優しげな声を会場に投げかける。場内からは賛同を意味する拍手が鳴り響いた。教皇は両手を目の高さまで上げる。すると先ほどまでの拍手が止み、元の静寂に戻る。教皇は身を乗り出すようにして、眼下のメイに声をかける。

「アガルタ王妃、続けてください？」

「お言葉ですが、あと数か所で実験を行っても・・・」

メイの言葉が終わらないうちに、場内から罵声と怒号が響き渡る。俺はメモの手を止めてグダグダ言っている奴らを黙らせよう立ち上がる。しかし、その怒号は教皇の一言で静寂に戻った。

「静粛に、静粛に。皆さん。静粛に願います。アガルタ王妃、続けてください？」

教皇に顔を向けようとしてローニと目が合う。ローニはゆっくりと首を振り、そして、頷いた。俺は再び座り、メモを取る体勢に入る。

「・・・ありがとうございます。それでは、再現実験につきまして、皆様のお知恵を借りたく存じます。サンクチュアリでは、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスは、それぞれ、犬獣人、猫獣人、狼獣人の体液を媒介して感染するとありました。我々は、その病気に感染している人間をそれぞれの症例に合わせて、合計１５名を特定できております。それらの病魔に侵されている患者の体液を、どのようにして、獣人に感染させ、他の人間に感染させるるのか・・・。

この感染経路を確かめる点が、最も難しい問題であると考えております。サンクチュアリでは、その感染経緯の実証実験の詳細が記されておりません」

教皇はメイの話に頷きながら、言葉をはさむ。

「・・・羊獣人の胆汁の問題もありますね？」

「教皇聖下、よろしいでしょうか」

口を挟んできたのはダリナーだった。

「教国とその周辺国に住む者たちに声をかけてみましょう。敬虔なクリミアーナ教の信徒である彼らです。人族の不治の病を根治するための実験とあれば、人間も獣人も喜んで協力を申し出るでしょう」

ドヤ顔で胸を張ってダリナーは発言している。教皇は優しい笑みを湛えながらうなずく。

「なるほど。それもよろしいかもしれませんね。そのような敬虔な・・・」

「異議あり！」

教皇の言葉を遮ったのは、リノスだった。先ほどからの、机にかじりつくような体勢のまま、手だけを挙げている。

「・・・と、提案があった・・・と。ああ、手が痛ぇ。ええと、異議あり・・・と。ああ、ごめんなさいね。ええと、何の話だ？ああ、そうそう、感染経路ね。別に立候補を募らなくてもよくなくないで

すか?特に胆汁は、肝臓患って手術する予定の羊獣人いませんか?その手術中に胆汁を採取すればいいのではないかと」

「・・・アガルタ王は面白いことを仰る。どこか、心当たりがあるとでも?」

教皇は笑みを絶やさぬままリノスを見ている。その時、チワンの声が響き渡る。

「ええ。我々の患者で手術予定の者がおります。その手術日程を早めて実施して、胆汁を採取しましょう。ついでに、病巣も切除しましょう」

チワンはニヤリと笑みを漏らす。

メイはさらに言葉を続ける。

「感染実験も、何も人体を使う必要はないかと思います。医学研究所の皆さんが、どの個体で実験されたのかはわかりませんが、例えば、繰り返しになりますが、オーガーなどは人体とほぼ同じ構造、体質を持っています。あくまで、私の個人的な見解ではありますが、オーガーを実験として使ってもよろしいのではないでしょうか?」

イマーニは鷹揚に頷きながら、隣のダリーナとグラリーナを見る。

「グラリーナ女史、オーガーを実験に使っても差し支えないですか?」

「ええ、差し支えありません」

グラリーナは即答する。

「では、オーガーを使いましょう。ちょうどいい。実験室に生きたオーガーが十体います。それを差し上げますので、お使いください。あとは獣人ですね・・・」

イマーニはちょっと考えるふりをする。その姿を横目で見ながら、リノスは言葉を挟む。

「あまりやりたくはないことですが、どうしても人体実験の必要があるのであれば、各国の大悪党を使うのも手です。人間もいれば獣人もいるでしょう。ちょうど、タイミングよくこの国に結構な人数の盗賊団が紛れ込んでいるみたいですし・・・。人間も獣人もいるみたいですよ?そいつらを捕らえて・・・というのもアリだと思いますが?」

その言葉に教皇以下、会場中は呆気に取られている。

「ええとまず、感染する実験はオーガーでよろしいですか?実験にオーガーを使用することに異議ございませんか?・・・ない。で、犯罪者の獣人を用いるのは・・・?・・・異議なしっと」

リノスはそんなことを言いながら、手元の紙に、サクサクと書き込みをするのだった。

第百八十八話　リノスの隠れた才能

「・・・それにしても恐ろしいですね。何のためらいもなく、クリミアーナ教の人々に人体実験の立候補を募ろうなどと言い出すとは」

ドン引きをしながら、半ば呆れたような声を出しているのは、ポーセハイのローニだ。公開質問会の一日目は無事に終了し、俺たちはヒーデータ帝国の船まで帰ってきている。既に日が暮れつつあり、海を見ると、水平線の彼方に夕日が落ちていく見事な景色が広がっている。

「おそらく、クリミアーナ教に心酔している羊獣人であれば、何のためらいもなく手を上げると思います」

メイが悲しそうな目で呟く。

「だから宗教ってのは恐ろしいんだ。簡単に命を捨てることを決意できてしまうし、命を捨てられるんだ。喜んで死ぬ奴はまだいいとして、一番悲惨なのは、神の名において無理やり生贄にされる奴らだ。自分が死ななきゃ家族がえらい目に合うし、生きててもえらい目に合う。そんな環境に置かれてしまって、仕方なく手を上げるようなヤツもいるだろう。教皇の話に割って入って正解だったな」

俺は腕を組みながら全員に視線を送りながら話をする。皆の顔が強張っている。

「全く、再現実験をしたいと手を上げておったのに、あの教皇め・・・我がドワーフを無視しおってからに！」

プリプリと怒っているのは、ニザ公国の使節団の一員であるピタンだった。

「まあ、クリミアーナとしてみれば、クリミアーナ教の影響が少ない国が増えては困ると考えたのでしょう」

ヴァイラス殿下が、これも呆れたよう顔をして話をしている。

「それにしても、チワン、ローニ、すでに病気に侵されている人たちを確保しているとはさすがだな。それぞれ一人くらいは確保すると思っていたが、十五人も確保するとはな」

俺はチワンとローニを交互に見ながら話しかけた。

「いえ、意外と簡単に見つかりました」

「え？チワン、そうなの？」

「はい。メイ様とローニを始めとして、アガルタの獣人村で診察に携わった者が、診察する際に聞き取り調査を行ったのです。彼らは色んな地域からやって来ましたからね。キリスレイやガイッシャ、ルロワンスに似たような症例を発症した者はいなかったかと、聞いてみたのです。すると、かなり多くの情報が寄せられました。あの病気は特徴的ですし、罹患すればまず動くことは困難ですからね。その情報をもとに調べましたら、十五人がそれぞれの病に罹患していることがわかったのです」

「さすがはポーセハイ。やはり、モノが違うな」

「まあこう申し上げては何ですが・・・。クリミアーナは、知識は豊富ですが、圧倒的に経験が足りません。我々ポーセハイは知識はもちろん大切ですが、それと同じく経験も大切にしております。そうでないと、現場で患者と対した時に、効果的な治療ができませんから。それに、知識と経験がなければ知恵は生まれてきません」

「チワン・・・お前、大人になったな」

「やめてください、リノス様」

俺たちは船の上で笑い合った。取りあえず、今日の質問会が無事に終了したことを労いあって、明日の本番に備えることにした。明日は羊獣人の胆汁とともに、罹患している病人も運び込む予定なのだ。そして、それに合わせて、クリミアーナ側からは、特効薬を作るのに必要な酸液を提供される予定だ。

「さてと。それじゃ、人体実験に使う獣人たちを確保しに行くか・・・」

俺は一旦自分の姿が見えなくなる結界を張って船外に出る。そしてマップを駆使しながら「盗賊」と表示されたヤツがいる場所に向かう。何とそこは学校だった。

「うまいことを考えたな。学校に潜伏したか。確かに夜の学校は誰も居なくなるわな。逆に、学校の金を盗もうってか？いやいや、そもそも学校に金なんざあるのかね？」

そんなことを言いながら俺は潜伏している盗賊の下に向かう。

奴らはでかい教室の中で絶賛休憩中だった。そいつらを結界に閉じ

込めて、それごと外に連れ出す。

「ぎょ～さんいるな。二十四人？まあいいか。で、必要なのは、猫獣人、犬獣人、狼獣人っと。おお、いるいる。何だお前ら、全員呪いが付いてるじゃないか。ＬＶ２多いな。マジでロクでもないなお前ら」

盗賊どもは何かを叫んでいるが、一切無視する。俺は機械的に対象となる獣人を選別する。

「何だ・・・。六人しかいないじゃないの。取りあえずこいつらは確保っと」

残りは結界に閉じ込めたまま、六人の獣人を伴って船に戻る。内訳は犬獣人四名、猫獣人二名だ。さすがにこれでは足りないので、俺は一足先に帝都の屋敷に転移する。

「ソレイユ、帰っているか？」

「はーい。何でしょうか？」

「森の精霊に悪～い犬獣人と猫獣人と狼獣人に心当たりがないのか聞いてみてくれない？」

「ええ～？？」

ソレイユはかなりビックリしていたが、やがて精霊たちに俺の要求を伝え始めた。

「・・・ッ。ちょっと待って・・・。ええと、ヒーデータに狼獣人

二名、カルワルアに犬獣人が・・・」

「ああ、そりゃ俺が行ったことのない場所だ。ポーセハイたちの力も借りなきゃな」

こうして俺は、ポーセハイたちの力を借りながら、対象となる呪い持ちの獣人たちを確保することに成功した。よくしたもので、全員が男で、見るからに悪そうな連中が揃っていた。捕らえた連中はヒーデータ帝国の船に転移させ、船底に閉じ込めた。

「お前たちには、約二週間、病人の看病をしてもらいながら、オーガーと同居してもらう。相手は力自慢で食いしん坊だ。食われないように全力で自分の身を守れ。頑張って生きろ。健闘を祈る」

そんな俺の短い説明に、彼らは大反発だったが、それを華麗にスルーして奴らを二重の結界に閉じ込めた。

作業を終えた俺は、メイ、そしてチワンとローニの四人で一旦船内の部屋に入り、そこから帝都の屋敷に転移した。そこでふと、俺は羊獣人の胆汁のことについて気になったので、チワンに聞いてみる。

「ところで、羊獣人の胆汁は大丈夫なのか？」

「ええ。今夜手術しますので、その時に採取してきます」

「お前たちは・・・徹夜明けで明日を迎えるのか・・・」

驚く俺に、ローニはぴょこんと頭を下げる。

「いえ、手術自体は他の者が担当しています。我々は胆汁を採取す

るだけです。ですので、今晩も・・・その・・・夕食を・・・」

「あ、ああ。それを聞いて安心した。じゃあ今日はローニに世話になったから、ドラゴン肉を出そう。チワン、ローニ、明日も頼むぞ」

「「はい」」

二人とも実に元気な声で返事をしてくれた。屋敷に入ると、既に皆の夕食は終わっていたが、俺たちの分は取り置いてくれていた。今日は、マイタケのようなキノコを使った炊き込みご飯だった。さすがにこれと肉は合わなかなと思いつつ、ドラゴン肉のカツを作る。あとはサラダとスープ、そしてかぼちゃの煮つけというメニューだったが、意外と美味しかった。

食事が終わると、チワンとローニはどこかに転移していった。俺は早速ダイニングで、ロール紙に取ったメモを広げ、別の紙に書き写していく。

「リノス様、何ですかそれは？」

フェリスが興味津々で覗き込んでくる。

「ああ、これか。今日の議事録だ」

「ギジロク？」

「今日の会議で、誰が、何を喋ったかを記録しているんだ。後々に言った言わないっていうことにならないためにな」

「でもこれって・・・ヘンな記号が書いているだけですよね？」

フェリスが俺のメモを見て不思議がる。リコもメイも皆がメモを見る。

「リノス・・・これは何の模様ですの？」

「私も・・・ご主人様が何を書かれているのかわからないです」

リコもメイも子供を抱っこしながらメモを見るが、全く読めないらしい。

「吾輩もはじめて見る文字でありますー。何語でありますか、これはー」

「ゴン、これは速記だ」

「ソッキ、でありますかー」

「ああ。人の喋った言葉を記号であらわす文字だ。知っていると便利なんだが、まさかここで役に立つとは思わなかったな」

「ごっ、ご主人はいつこのような文字を身に付けられたのでありますかー」

「ああ、昔な」

俺は遠い目をして、懐かしい、甘酸っぱい記憶を思い出す。高校生の頃、大好きだった女の子が速記でノートを取っていたのを見て、俺も勉強したのだ。話をするきっかけは作れ、仲良くはなれたのだが、結局その恋は実ることはなかった。まあ、相手に彼氏がいたと

いうお約束の終わり方だったのだが。

「しかし、この速記っていうのは意外に使えるんだぞ？ライブなんかで、ＭＣをメモって文字化してやると、ツレが喜ぶんだこれが」

「らいぶなんかでえむしーをめもってもじか？何でありますかー？」

「ああいや、こっちの話だ。ハハハハハ」

「バーサーム家ではそのようなことまで教育されるのですね。どうりで亡きバーサーム侯爵が優秀だったわけですわ」

リコが妙に感心している。俺は再び笑ってごまかす。

「俺はこの作業があるから、まだまだ遅くなる。みんな、明日もあるだろうから、先に寝てくれ。マト、今日は遅くなるから、リコと一緒に風呂に入って、寝てやってくれるか？」

「わかった」

予定では今日はマトと一緒に寝る日だったのだが、予定を変更してリコと一緒に寝てもらう。マトには今度、たっぷりお礼をしようと思う。

そして俺は、メモの文字起こしをしながら、議事録の作成にかかった。ついでに言うと、出来上がった議事録の複写はゴンが手伝ってくれた。この世界は活版印刷も木版印刷すらなく、全て手書きだ。ゴンは一字も間違うことなく、見事なスピードで書き写して見せた。お陰で朝を迎えるまでに、議事録が四部も出来上がった。何と優秀な白狐だろうか。

二時間ほど仮眠を取り、朝を迎える。いつの間にかポーセハイのチワンとローニも屋敷に戻って来ていた。二人ともよく寝たようで、ローニには目やにが付いていたが、敢えて何も言わなかった。

朝食はサンドイッチとサラダ、そして昨日のドラゴンのカツだ。それぞれ、好みのものをパンに挟めるようになっており、カツの他に、オルレイン（マグロ）を焼いてほぐしたもの、いわゆるツナ、卵焼き、ハム、ポテトサラダ・・・など、多くの種類が用意されていた。リコとペーリスが全力でかかれば、このくらいはすぐにできてしまう。当然味は、今すぐ店が出せるレベルだ。

ローニは無表情のまま黙々と、ガツガツとサンドイッチを食べている。耳がピクピクと動いているので、どうやら美味しいらしい。最後に残ったドラゴンのカツをしれっとゲットしていったのは、見なかったことにする。

食事が終わり、俺たちは再び帝国の船の船室に転移する。チワンとローニは、病人を迎えに行ったため、遅れて転移してくるようだ。俺は船室で議事録にサインをしていく。ついでに、「作成人は僕、リノス。僕ちゃんの許可なく内容を書き加えたり、修正したり、付け足したりしちゃだめだからね」という内容をもっともらしい文章にして記入する。

そしてそれらを抱えてデッキに上がると、ちょうどクリミアーナからの迎えの馬車が到着したところだった。

「さあメイ、行こうか」

「はい、ご主人様」

俺たちは意気揚々と馬車に乗り込んだ。

第百八十九話　準備完了

公開質問会二日目は、前日とは打って変わって緊張感に包まれながらのスタートとなった。

事の起こりはリノスだった。教皇が会場に到着し、着席すると同時にリノスは、小脇に抱えていた紙の束を教皇に手渡した。教皇は訝りながらその冊子に目を通す。

「昨日の議事録です」

「ギジロク？」

「昨日、クリミアーナ教国の方々と我々の議論が全て掲載されています。まあ、久しぶりにやりましたので、誤字・脱字の類はご容赦を。あとは・・・字が汚いのもご容赦を」

「アガルタ王・・・一体これはどういう・・・」

「ああ、いいですよ。善意なんで。差し上げます差し上げます」

リノスは照れた表情をして、手をピラピラと振る。

「アガルタ王！」

強めの口調で呼びかけたのは、副所長のダリーナだ。

「一体、どういうつもりなのですか！」

「どういうも何も、必要じゃないのか？」

「何がです！」

「だってさ。昨日結構重要な話してなかった？再現実験のやり方とかさ。手順が違ったら、ヘンな結果が出たらダメだろ？で、お互いの認識にズレがあっても意味ないだろうし。だから、文字化したんだ。ホラ、言った、言わないの水掛け論にならないための、お互いの共通認識をしといた方がいいだろう」

「そんなことをせずとも、昨日の会議の内容はすべて頭に入っております！」

「お宅はね？俺はそんなに賢くないから、昨日の会議のことなんざ全て覚えてないんだよ。だから、さ？」

「これはこれは素晴らしいですね。アガルタ王、ありがとうございます。感謝申し上げます」

口をはさんできたのは、所長のイマーニだ。彼は議事録を丁寧に見ながら、頻りに頷いている。

「ほう、よくもここまで我々の会話を再現していただきました。うむ。私もこの部分は忘れていましたね・・・。もう少し丁寧に説明するべきでした。ダリーナ君もです。この発言はちょっといただけませんよ？ほらここ、もう少し詳しく説明しなくては・・・」

「しょ・・・所長・・・」

ダリーナは顔をこわばらせてイマーニを見ている。イマーニは、相変わらず知性を湛えた目で、優しい眼差しをダリーナに投げかけている。その視線に抗しきれないように、ダリーナは渋々と着席した。その隣には、グラリーナが静かに自分の席に端座している。

相変わらず愛嬌のある顔立ちと、真っ黒なクリクリとした目。そして、理系女子らしい清楚を兼ね備えた才女の印象が、リノスたちのところにもオーラのごとく伝わってくる。

「まあ、昨日の議事録を確認いただいて、もし追加点や修正点がありましたら、話し合ってください。修正版の議事録を作りますので。グラリーナさんも、ご覧くださいね？」

リノスはグラリーナに軽く頭を下げる。それを見て、グラリーナも少し微笑みながら軽く頭を下げる。そしてリノスは、再び教皇とイマーニを交互に見ながら口を開く。

「議事録はあと三部あります。一部は我々が、もう一部は・・・再現実験を行うサンダンジ国がお持ちになった方がよろしいですかね？」

イマーニが微笑みを返す。リノスは彼らに背を向けて、声を上げる。

「サンダンジ国からの使節団の方、おられますか？昨日の議事録をお持ちください」

客席から褐色の男が立ち上がり、大股歩きでステージまでやってくる。

「昨日の議事録です。どうぞ」

男は無言でそれを受け取ると、パラパラとページをめくり、議事録を読み始めた。そして、しばらく読み進めているうちに、男はニヤリと苦笑いを浮かべた。

「私の発言も書かれてあるのか。これは、参ったな。しかし、実に詳細に書かれてある。そして見やすい。これならば、論点や実験のやり方に齟齬が生じることはなさそうだ。私は、サンダンジ国のニケという。見たところ、修正点はなさそうだ。アガルタ王、お骨折り感謝する」

「いいえ、どういたしまして」

「アガルタ王、最後の一冊を受け取りましょう！」

ズケズケとリノスの傍までやってきたのは、ヨームアン王国の使節団の男だ。

「教皇聖下！おはようございます！本日も麗しきご尊顔を拝し、恐悦至極に存じ上げ奉ります！」

男は格式ばった挨拶をし、すぐに教皇に向かって最敬礼をしている。そんな彼に教皇は優しい声で労いの言葉をかける。

「ああ、おはようございます。本日も、ご苦労様ですね。あなたのお名前は・・・」

「はい！ヨームアン王立大学医学長、ガレイシでございます！」

「ガレイシさん、ヨームアン王国の皆さん、大変でしょうが、よろ

しくお願いします。皆様にクリミアーナ様のご加護がありますよう」

教皇はヨームアン王国の代表団に向かって右手を出し、手招きをしている。どうやら祝福を与えるポーズのようで、代表団は全員が立ち上がり、教皇に最敬礼をしている。

「あ・・・ありがたき幸せ！」

ガレイシと名乗る代表が、年甲斐もなく涙を流して喜んでいる。既に頭が禿げ上がっているおっさんが泣いている姿は、リノスたちを戸惑わせるのに十分だった。

「グスッ、さて、アガルタ王、我々にもその書類、いただこうか！」

「いや、クリミアーナの人から見せてもらって？」

「な・・・何ですと？」

「いや、どうやらクリミアーナの人たちと仲良さそうだから、見せてもらうか、写させてもらったらいいと思いますよ？あ、教皇にお渡ししたので、それを貸してもらえばいいと思いますよ？教皇は見てもお分かりにならないでしょうから」

「なっ！バカな！何を言われるのだ！」

「だって、クリミアーナ教国に二冊もあげてるんですよ？それをまた・・・ねえ？」

「ならばその余っている書類は・・・」

「それは、渡すところがありますからご心配なく」

声を上げたのはヴァイラス殿下だ。

「それは我々ヒーデータ帝国が受け取ります」

「何故だ！おかしいではないか！」

「我々が写し本を拵えます。貴国には写しの写しでよければ、近日中に揃えてお渡ししましょう。もちろん、修正点があれば、修正してお渡ししましょう。再現実験が終了するまで、ひと月もふた月もかかりはしないでしょう。その間、我々はここアフロディーテに滞在します。実験結果が出るまでは暇ですからね。我々はこの議事録の写し取りを行います。ニザ公国の方々も同船されていますので、ドワーフの皆さんと作業に勤しむことにいたします。ご希望がありましたら、どうぞ。写しを作ってお持ちしますよ？」

ヴァイラス殿下が俺から議事録を受け取り、颯爽と自分の席に戻っていく。その時、チワンとローニが到着したという知らせが来た。俺は外に出て、転移してきた患者たちに結界を張る。患者たちはベッドに寝かされており、全員が眠っている状態で転移してきていた。ベッドの傍には、転移を手伝ったであろう数名のポーセハイが控えていた。そしてついでに、俺が捕らえた呪い付きの獣人たちも転移させてくれていた。

「リノス様、患者たちです。で、この・・・」

「ああ、ご苦労だった。さすがはポーセハイ、仕事が丁寧だな。患者たちには、もう結界は張り終わった。先にこの人たちを運び込もう。アイツらは後でいい。取り敢えず、眠らせちまうか」

次々と運び込まれてくるベッドと患者たちを見て、会場内は騒然となった。俺は殺菌する結界を張ってあると説明するが、なかなか会場内のどよめきは収まらない。そんな中、再現実験を担う各国使節団が壇上に上がり、丁寧に獣人たちの病状を調べ始めた。最も長く調べていたのはクリミアーナの連中だったが、やがて全員が調査を終えたようで、それぞれの患者たちは、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスに感染している患者であると確認された。

その後、眠らせている獣人たちが運び込まれると共に、実験対象となるオーガーがクリミアーナ側から提供され、各国が持ち帰ることとなった。クリミアーナ側からは、獣人たちとオーガーに異常がないのかを相互で確認しあうよう要請され、この確認作業に時間がとられた。

やがてそれも終わると、チワンたちから羊獣人の胆汁が提供され、最後に、クリミアーナからこれまでの実験の流れと、特効薬の作成に必要な酸液とその配合率が記載された書類を受け取って、ようやく実験準備が完了した。

「それでは、実験期間は十四日間でよろしいでしょうか？二週間後の九月十六日の正午に、再びこの大聖堂にて実験結果の発表を行う。それで、よろしいですね？」

教皇が再現実験の日時を確認すると全員が頷く。もっとも、ヨームアンの連中は一糸乱れぬ最敬礼だったのだが。

そして俺は、魔力を通すと半径一キロメートル以内に結界が張られ、その結界を通る際に消毒される結界石を渡す。それを受け取り、使節団のそれぞれは、ポーセハイに伴われて各国に転移していった。

舞台上では、俺たちとクリミアーナの連中が残った。

「さて、どのような結果になるのか・・・。楽しみです。我々の主張が、皆さんの手で証明されると確信しています。それに、新たな発見もあるかもしれませんね。その時は、次の機会に是非共有してください！」

そう言ってイマーニは俺とメイ、チワン、ローニの手を順に握る。その光景を、教皇は、相変わらず優しい微笑みを浮かべながら、じっと見据えるのであった。

第百九十話　徹夜明けの鉄則

公開質問会以来、メイは帝都の屋敷に帰らずに、帝国大学の医学研究室にこもったままだった。彼女がようやく屋敷に帰って来たのは、十二日後だった。

一見して不眠不休で実験をしたであろうと思わせるほどに、メイは憔悴しきっていた。顔はやつれ、目は充血し、目の下に濃いクマを作っている。それは、メイを転移させてきたローニも同じで、まさしく二人はボロボロの状態だった。

屋敷に、それこそ倒れるようにして帰ってきた二人を、リコは風呂に入るようすすめる。当然俺は反対した。すぐにベッドに放り込むべきだと。しかし、リコは譲らず、二人は疲れた体を引きずるようにして、風呂に向かった。そして案の定、二人は風呂で溺れた。

「徹夜明けの風呂は気をつけなきゃいけないんだ。湯船に入ると、安心感と気持ちよさで寝てしまうことが多い。狭い風呂ならいいんだが、ウチの風呂は広いからな。そりゃ溺れるだろう。徹夜明けは湯船に浸かるな、というのは鉄則なのだ」

湯船から引き揚げたメイを介抱しながらドヤ顔で俺は呟く。しかしリコはせっせとローニを介抱している。リコのこの態度は後ろめたさを感じている時の態度だ。あとで優しくすると、とってもかわいいリコが見られるのだ。

前世の頃、初めて三日三晩で徹夜での作業を経験し、フラフラになりながら帰宅したことがあった。その時先輩に言われたのが、「湯

船に浸っちゃダメよ」だった。その当時の俺はそんなアドバイスは耳に入らず、湯船に入ってしまった。実に気持ちいい、天にも昇るような感覚を今でも覚えている。そして・・・記憶は途切れ、気が付くと五時間が経過していた。当然風呂の中は水になり、エライ思いをしたのだ。先輩の一人はそのまま湯船で溺れてしまい、あわやあの世に送られるところだったという。徹夜明けの湯船は、危険なのだ。

メイとローニは泥のように眠り続けた。昏々と眠り続けること丸一日。朝食を食べていると、突然メイがダイニングに飛び込んできた。

「おはよう、メイ」

「申し訳ありません、今日は・・・何日ですか？」

「九月の十四日の朝だよ、メイ」

「よ・・・よかった・・・。締め切りを過ぎた夢を見たもので・・・」

メイはヘナヘナとその場にへたり込む。ローニはまだ寝ているという。取りあえずメイには席についてもらい、一緒に朝食を食べることにする。

「その前に、アリリアは・・・アリリアは」

「ここにいますわよ」

リコがアリリアを連れてくると、メイはうれしそうな顔をしてアリリアを抱っこする。そして、おもむろに胸をはだけて、アリリアに

授乳を始めた。

「うっ・・・くっ・・・。実験の最中は胸が張って・・・」

「メイ、無理をしてはダメですわ。さぞ胸が張って痛かったことでしょう」

「搾乳はしていたのですが・・・。リコ様、アリリアを、ありがとうございます」

メイは痛みに耐えながら授乳している。アリリアもお腹がすいていたのか、どんどんメイの母乳を呑んでいる。そして、ようやく授乳が終わり、アリリアもスヤスヤと寝たところで、メイは朝食に手を付けた。

「ああ・・・おいしい。おいしいです。ペーリスちゃん、ありがとう・・・」

心から美味しそうな顔をしてメイは朝食を食べる。彼女たちには毎日研究室までお弁当を届けていたのだが、食べたり食べなかったり、だったようだ。風呂もあったそうだが、眠気覚ましに湯浴びをしたくらいで、ほぼ再現実験に没頭していたのだという。

「で、再現実験は、どうだったんだ?」

メイは食事の手を止め、じっと下を向く。

「全て・・・失敗でした」

「失敗?どういうことだ?」

その時、ダイニングのドアが開き、ローニが現れた。

「おはようロー」

「いい匂い・・・お腹が・・・お腹が・・・」

どうやら、完全に飢える一歩手前のようだ。そういうこともあろうかと、ローニのために沢山のパンとスープ、から揚げ、サラダを作っていたのだ。彼女は片っ端からそれを口の中に放り込んでいく。

「ローニ、食べながらで構わない。今、メイから聞いたんだが、再現実験は失敗したそうだな？」

ローニは食べながらコクコクと頷いている。

「クリミアーナが行ったという、それぞれの病気に罹患した人間と獣人、そしてオーガを一緒に過ごさせるという実験を試みました。彼らの主張では、一日ないし二日で発症とありましたが、全くその兆候は見られませんでした。念のため彼らを一緒にして五日間、様子を見ましたが、獣人たちには全く感染は見られませんでした」

ローニはそこで言葉を切り、ゴクリと口の中の食べ物を飲み込んだ。

「要は・・・。あ、からあげ、おかわりあります？すみません。あと・・・パンも・・・」

ローニがパンを頬張りながら片手を上げている。

「キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスが獣人の体液を媒介して感

染するという、クリミアーナの説が証明できません。実験台となった獣人とオーガはどれも感染しませんでした。あ、ふらいどぽてと・・・全然、大丈夫です。食べられます。・・・ええと。そうそう、感染しないものに特効薬も何もありませんが、取りあえず特効薬は作りまして・・・あまりやりたくはなかったのですが、罹患した人間に投与してみましたが、病原菌が消滅した、または症状が改善したという事実は確認できませんでした」

「ということは、クリミアーナは嘘っぱちを発表したってことか？」

「まだ、何とも言えません。もしかすると、クリミアーナでは成功しているかもしれませんし、その他の国でも成功していたら・・・」

メイは不安そうな顔をしながら答える。ローニは頬張っていた食べ物を再びゴクリと飲み込む。

「メイ様、大丈夫です。あれだけ実験したのです。あれ以上のことはもう、できないくらいにやったのです。我々の実験は完璧でした。ないものはない、でないものは、でないのです」

「そうだメイ。自信を持て。必死で、何度も何度も繰り返し繰り返しやって同じ結果が出たんだろ？仕方がないよ。それでいいじゃないか」

「ハイ・・・。しかし、サンクチュアリに掲載されたほどの論なので・・・」

「メイ、自分を信じるんだ。サンクチュアリが絶対とは限らない。だって人間が作ってるんだろ？間違いはあるはずだ。むしろ、間違いが正しいとされるのが、俺は一番怖い。俺たちの実験が間違って

いたら、次にやり直せばいいんだ。大丈夫だ、自信を持て！」

「・・・わかりました」

メイは何かを決意したかのような目になった。俺は黙って頷く。

「で、あれば大変申し訳ないのですが、リノス様にお願いがあります」

ローニがサンドイッチを片手に話しかけてくる。てゆうか、まだ食うのか、コイツは。

「俺でよければ何なりと力になるぞ？」

「この数日の実験で採りましたデータが膨大な量になっていまして・・・恐れ入りますが、リノス様に転移結界を張っていただいて、こちらのお屋敷に保管いただきたいのですが・・・」

「何だそんなことか。それなら、お安い御用だ」

ローニがサンドイッチを食べ終わるのを待って、俺はローニと共に、帝都大学の医学研究室に転移する。そこには黙々と実験道具を片付けるチワンの姿があった。彼は俺たちを見つけるなリ、激高する。

「遅っそぉぉぉぉぉぉぃぃぃぃぃぃぃ！！！！何してたんだ！！！」

ローニがぴょこんと頭を下げる。

「申し訳ありませんでした！リノス様のお屋敷でお風呂をいただき、

そのまま気絶しておりました！」

「ローニ！お前はメイ様を送ってくるだけの役割だったはずだ！丸一日研究室を空けるとは！研究者として片付けができないのは失格だ！出したらなおす！使ったら片づけると何度言ったらわかるんだ！」

「申し訳ありません！」

「チ・・・チワン・・・そう怒るな。まあ、ローニも疲れていたからな。仕方がない。昨日一日、チワンは片づけをしてくれていたのか？すまなかったな。キレイに片付いてるじゃないか・・・。ローニに頼まれて実験結果を取りに来たんだが・・・どこにあるんだ？」

チワンは俺をジロリと睨んだが、すぐにいつもの様子に戻る。

「リノス様、わざわざご足労いただきありがとうございます。実験結果はこちらになります」

そう言って隣の部屋の扉を開ける。

「なんじゃこりゃぁぁぁぁ！！！！」

部屋いっぱいに、何十冊あるかわからない程の分厚い冊子が積まれていた。

「こ、これ、全部、実験結果？」

「ええそうです。もう少しやりたかったのですが、獣人たちの力が尽きてしまいまして・・・」

申し訳なさそうにチワンが謝る。

ふと見ると、牢屋に入れられた獣人たち全員が、俺たちに向かって土下座をし、両手を頭の上に合わせて震えている。みな、泣きながらゴメンナサイを呪文のように連呼している。

「いや・・・いいんだ。しかしこの実験結果は・・・転移結界を使わないと、運べないよな。あ、無限収納があるから、それに入れて俺が持っておこう」

「そうしていただけると助かります」

俺は無限収納に数十冊の実験結果を収納する。

「チワン、お前は寝たのか？」

「寝ましたとも。三日前に二時間ほど」

「はあ？何言ってんのお前？」

「実は、ちょっと眠いのです」

「屋敷のベッドを使ってくれ。ゆっくり寝てくれ。メシも用意する。たらふく食ってくれ」

「そうしていただけると助かります」

チワンは喜んで屋敷に転移し、そして、寝室に向かった。

「ローニ、チワンはどんな体してるんだ?大丈夫か?」

「あの方は、三日間くらい寝なくても平気なのです。お陰で私は何度徹夜させられたことか・・・」

ローニはうんざりした顔で嘆いている。

「でも、チワンさんには本当に助けていただきました。感謝です」

メイがホッとした顔で口を開く。その時、ルアラがダイニングに入ってきた。

「あ、ルアラ、チワンはちゃんと寝室に行ったか?途中で倒れてなかっただろうな?」

「はい、大丈夫です。でも、すっごく臭かったので、お風呂を沸かしました。今、入っていただいています」

「風呂?・・・まさか・・・」

慌てて風呂を覗いてみると、そこには湯船の中で仰向けになり、既に意識を失いながらも、幸せそうな顔をして溺れている、チワンの姿があった・・・。

第百九十一話　大荒れ・・・あれあれ？

九月十六日正午。クリミアーナ共和国の首都、アフロディーテの大聖堂には、ちょうど二週間前と同じ参加者が、同じ位置に着席していた。異なる点を挙げるとするのならば、ヨームアン王国の研究者たちが、リノスたちと同じ壇上に座っていることである。彼らは当然のように、クリミアーナ医学研究所所長のイマーニたちの後ろに着席している。

「そろそろ、始めてもよろしいでしょうか？」

教皇の一言から質問会が再開される。イマーニは興奮を隠し切れない様子である一方で、副所長のダリーナは強張った顔を崩さず、グラリーナは相変わらず落ち着いた雰囲気で自分の手元を見つめている。

「それでは・・・アガルタ国から、発表いただきましょうか」

教皇の穏やかな声が響き渡る。それを受けてメイがゆっくりと立ち上がる。

「まず最初に、結論から申し上げます。私共の再現実験では、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンス、全ての病が、特定の獣人を媒介して人間に感染するという事例は見られませんでした。同時に、羊獣人の胆汁が、それらの病原菌を死滅させるという事例も、発見されませんでした。我々は・・・」

メイが喋れば喋るほど、会場内のざわめきが大きくなっていく。そ

して最後は、またしても喧騒の状態となった。これまでであれば教皇が止めに入っていたのだが、今回は何故か微動だにせず、事の成り行きを見守っている。

「黙れぇぇぇぇ！！！！黙らんかぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

とんでもない爆音が大聖堂に鳴り響く。あまりの音の大きさに耳がキーンとする。聖堂内は、先ほどとは打って変わってシーンとした空気に包まれている。

「我が国も、同じだった」

発言していたのは、サウダンジ国のニケだった。彼はとてもよく通る渋い声で語りだした。

「我々が預かった患者たちは、確かにキリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスに感染していた。キリスレイの特徴である、全身に発疹が確認できていたし、ガイッシャの特徴である筋肉の硬直も確認できた。そして、ルロワンスの特徴でもある、首の周囲に紫色の斑点が出ているのも確認できた。それらの患者と獣人、オーガを同居させてみた。しかし、クリミアーナのやり方では、全て再現実験はうまくいかなかった。そこで我々は、病人それぞれから体液を抽出し、預かった獣人たちに触れさせてみた。しかし、全く感染は確認できなかった。羊獣人の胆汁を用いた特効薬についても然りだ。再現実験はことごとく失敗している。何故だ。なぜこうなったのだ？我々は失望している。詳しくは、この報告書にまとめているので、読んでもらいたい」

ニケが舞台の前にやってきて、三冊の報告書を置いて行った。彼の背中からは怒りの感情が見て取れる。その報告書を司教が手にして、

一冊を教皇の下に、もう一冊をイマーニに、そして、最後の一冊をヨームアン王国のところに持って行った。

イマーニはその報告書を興味深そうに読んでいる。その時、壇上の教皇が声を上げる。

「ヨームアン王国はいかがでしょうか？」

ガレイシと名乗るヨームアンの代表はキビキビとした動作で起立し、教皇に最敬礼をした後、自信満々の声で口を開いた。

「我が国の実験では、全てのオーガに感染が確認されました」

会場内が再びどよめきに包まれる。そして、図ったかのように大拍手に包まれる。

「さて・・・これは困りましたね・・・」

教皇が声を上げる。それを受けてダリーナは立ち上がり、教皇に一礼をする。

「教皇聖下、これには原因があるかと存じます。我がクリミアーナ、アガルタ、サンダンジ、ヨームアン。この四か国は地理も異なれば気候も異なります。ここは、実験の場所を変えみてはいかがでしょうか？」

イマーニもうんうんと頷いている。

「そうですね・・・。クリミアーナとヨームアンでは成功し、アガルタとサンダンジでは失敗している・・・。共通点と言えば、ヨー

ムアンがクリミアーナに近いということくらいですか・・・。それでは・・・」

「クリミアーナ様のご加護のお陰です！」

どこからともなく声がする。その声に触発されるかの如く、会場中からクリミアーナ様！の声が起こる。一部の教会関係者は祈りをささげる者までいる。よく見ると、教皇まで祈りをささげている。

それに気づいた会場内は徐々に静けさを取り戻していく。そして、大聖堂に滔々とした教皇の祈りの言葉だけが響き渡っている。

「クリミアーナ様の、勿体ないご加護を頂戴し、我ら恐懼して落涙止まらざるあるのみ・・・」

教皇が涙を流しながら声を震わしている。それを見て、教会関係者たちも涙を流しているようで、会場内からすすり泣く声が聞こえる。

「お待ちください」

その厳かな雰囲気を打ち破ったのは、メイだった。

「地理や気候が異なるくらいで、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスの発症に偏りがありましょうか。これらの伝染病は、世界各地で発症しております。そのような原因ではないかと思います。我々は、医学を生業とするものです。そのような推測ではなく、徹底した議論と実験を繰り返し、経験と確立を積み重ねていくべきです。まずはこの場は、それぞれの実証実験がどのようなものであったのかを発表し合い、議論を重ねるべきであると考えます」

「だから、それは話が平行線になるだけだ！」

苦々しそうにダリーナが口を開く。それに対して、ローニがすかさず反論する。

「その、話が平行線にならないようにするために、再現実験の結果を発表し合うのです。我々はほぼ二週間、ずっと再現実験に携わり続けました。ほぼ、不休不眠で携わっておりました。それを証拠に、実験ノートが、ええと・・・七十四冊にも及びました。我々の主張はこれを見ればすぐにわかることです。今回は各自、実験ノートを出し合いましょう。そして、それを互いが見て、問題点を明確にするべきであろうと思います」

「そうですね。それがいい。そうしましょう」

賛成の声を上げたのは、意外にもクリミアーナのイマーニだった。彼は立ち上がると教皇に一礼し、語り始めた。

「アガルタ妃が仰る通りです。我々は医学を生業とする身です。人の命を扱う仕事です。そんな我々が、推測だけで結論付けていいはずがない。今回は、人族が数千年の間苦しみ続けていた伝染病が撲滅できるかもしれない機会なのです。この機を逃すべきではありません。やりましょう。ぜひ、やらせてください。教皇聖下、伏してお願い申し上げます！」

イマーニは教皇に向かって最敬礼をする。

「イマーニ所長がそこまで仰るのであれば、異論はありません。存分におやり下さい」

「ありがとうございます、教皇聖下。それでは・・・まずはアガルタの実験ノートを拝見しましょうか？」

「いえ、イマーニ様。ここは、再現実験に携わったすべての機関が、実験ノートを公表するべきでしょう」

チワンが落ち着いた声で口を開いた。それに対し、ダリーナは噛みつくように反論する。

「ここですべての機関の実験ノートを公開したら、この壇上がノートで埋まってしまうわ！」

しかし、チワンは全く動じない。

「それでは、場所を移せばいいでしょう。正直申し上げて、我々はクリミアーナの論文は信ぴょう性がないと思っている。片やクリミアーナは、我々の再現実験は信ぴょう性がないと思っている。これでは議論になりません。イマーニ所長が仰るように、これらの伝染病を真に撲滅するのであれば、今こそ胸襟を開いて議論するべきでしょう」

ダリーナは歯ぎしりをして、チワンを睨みつけている。イマーニは、そんなダリーナを目で制しながら口を開く。

「ダリーナ君。我々も実験ノートを公開するのです。グラリーナ君も、実験ノートを持ってくるように。サンダンジの・・・ニケ様、実験ノートはお持ちですか？」

「当然だ。持ってきている。我々も五十冊程度になっているので、運び込むには少し時間が必要だ」

「わかりました。時間がかかるのは構わないと思います。アガルタは・・・すぐに用意できますか?わかりました。それでは、ヨームアン王国の研究ノートは、どのくらいでしょうか?」

イマーニの言葉を受けて、ヨームアン王国のガレイシは固まっている。

「どうされました?実験ノートは・・・?」

「それが・・・その・・・」

「冊数が多くて、持ち運びが難しいですか?それなら、我が研究所の者も手伝わせましょう。遠慮なく仰ってください」

「それが・・・その・・・手元にはないのです」

「ああ、それでは我々ポーセハイがヨームアン王国に一緒に転移しましょう。どのくらいの冊数でしょうか。数によって、もう一人つけねばなりません」

ガレイシは、ガバッと頭を下げる。

「実験ノートを・・・作っていません」

メイ、チワン、ローニ、イマーニ、ダリーナが壇上で固まっている。サンダンジのニケは、口をぽかんと開けて、せっかくの男前を、台無しにしているところだった。

第百九十二話　メイの連続コンボ

「実験ノートを作っていない？では、どうやって実験が成功したと証明するのですか？」

ローニが厳しい口調でヨームアン王国のガレイシを追及する。

「い・・・いや、その・・・。二週間という短い時間であったために・・・」

「理由にならないでしょう。基本的に、何らかの実験をするのであれば、詳細な実験ノートを取りながら行うことが常識です。それ以外に、実験を行ったと証明できるものがないからです。だからこそ、研究に携わる者が最初に叩き込まれることが、実験ノートの取り方のはずです。素人や学生がやるならともかく、あなたは確か、教鞭を取る身分のはずです。まさか、知らないとは言いませんよね？」

ガレイシは、歯を食いしばりながらローニを睨みつけている。

「確かに、確かに我々の実験は成功したのだ。それは今後、論文で明らかにしていく！」

それを聞いてチワンは、静かに口を開く。

「ガレイシ教授、あなたは先だって我が主、アガルタ王が作られた議事録をお読みになりましたか？それを読めば、この度のような結論にはなりえないと思います。もしかすると、クリミアーナ教国から写しがもらえなかったと仰るかもしれませんが、その点につきま

しては、ヒーデータ帝国のヴァイラス殿下が写しを作ると仰いました。それすらも、手に入れていないのでしょうか?だとしたら、大変な不手際かと思います。多少入手するまで時間がかかったとしても、議事録を精読して実験に当たらねばならないと思いますが、いかがでしょうか?アガルタ王も仰っていましたよね?議事録を確認しろと。修正点があれば言えと?」

チワンの目が怖い。怒っている。チワンが、怒っている。その雰囲気を察してか、メイが割って入る。

「我々は何も、ガレイシ教授の論を否定したいわけではありません。確認をしたいのです。まずは、議事録はお手元におありなのでしょうか?そして、どのような再現実験をされて、サンクチュアリに記された内容が正しいという結論を導き出されたのか、それを伺いたく思います」

素人目に見ても、そこまでやらなくてもいいじゃん、と思えるほどの助け舟だった。しかし、ガレイシはにべもない返答をする。

「サンクチュアリは正しいのだ。教国の発表には、イマーニ所長とダリーナ副所長がお墨付きを与えておられるのだ。間違いはない。むしろ、それに異を唱えることは、クリミアーナ様の御心に反する。それは・・・」

「ふざけるなっ!!!」

突然、大聖堂に絶叫が響き渡る。全員が声のした方に注目する。そこには、ものすごい目でガレイシたちを睨みつけている、メイの姿があった。

「・・・ふざけないでください。人の、命がかかっているんですよ？人の命を何だと思っているんですか？もし、特効薬ができたら、たくさんの人々が、家族が、仲間が、救われるのですよ？たくさんの人々が救えるのに、なぜ全力でやろうとしないのです。・・・あなた方に、研究者を名乗る資格はありません。・・・出て行ってください。・・・全員、席を立って、出て行ってください。・・・立てと言っているうちに立ちませんと、本当に立つ瀬がなくなりますよ？」

メイの迫力に圧倒されているヨームアン王国の連中は互いに顔を見合わせている。ガレイシはイマーニたちに視線を送るが、完全に無視されている。彼らは、そくさと壇上を降り、そして、大聖堂から退出していった。

「さて、イマーニ所長。あなた方も、ヨームアン王国の方々と同じですか？我々を失望させないでくださいね？」

ローニが鋭い目つきでイマーニを睨んでいる。しかし彼は、全く表情を変えず、落ち着き払って答える。

「もちろんですとも」

イマーニはゆっくりと、ダリーナに視線を移す。

「副所長、あなたが特効薬の効果を発見するまでの経緯を、ここで発表してください」

「畏まりました」

そういうとダリーナはゆっくりと立ち上がる。

「我々は、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンス、それぞれに感染した人間をもとに実験を行いました。すなわち、羊獣人の胆汁に、グラリーナ女史が作成した酸液を1：3の割合で配合し、直接人体に投与しました。投与した直後、キリスレイの患者につきましては、四十度近くまで発熱しましたが、二日後に解熱し、その一日後に意識を取り戻しています。現在では、歩行もでき、会話も問題なくできており、日常生活に支障はありません。次に、ガイッシャの患者ですが、こちらは、既に下半身がマヒ状態にありました。従来でありますと、上半身にマヒが進行し、呼吸困難に陥って死に至りますが、現在は下半身マヒの状態のまま、現状を維持しております。そして最後にキリスレイ。こちらの患者は、首に現れておりました紫の斑点は消え失せ、現在のところ死に至ることはなく、日常生活を送っております。以上です」

「今、副所長のダリーナから申し上げました通りです。我々としては、この実験結果をさらに具体的に、詳細に説明するべく現在、論文を作成中でありますし、もし、要請があるのであれば、実験に協力いただいた患者本人に聞き取り調査を実施していただくのも問題ないと考えております。ただし、」

ここでイマーニは言葉を切り、低い声で、ゆっくりと、集まった研究者に言い聞かせるようにして話を続ける。

「グラリーナ女史が開発した、酸液につきましては、その製造方法の権利は、我がクリミアーナ教国に属し、クリミアーナ教の財産と致します。その点をご了承いただきたい」

またしても、会場内から拍手喝さいが起こる。クリミアーナ教は、こうした時のために練習でもしているのだろうか？やけに統率が取

れている。その歓声の中、メイは再び立ち上がる。

「お話はよく分かりました。しかし、大きな疑問がございます」

「大きな疑問、とは？」

「ダリーナ副所長は、実験に使用した患者を、自ら準備されたのですか？」

ダリーナはフン、と鼻で笑いながら言葉を返す。

「アガルタ王妃、実験用の患者を用意する手間がどれだけかかるのかご存知でしょう？私も忙しい身ですからね。そこまでの時間はありませんよ。グラリーナ女史が用意した患者を用いて実験をしたのですよ」

その言葉を聞いてメイが前のめりの姿勢になる。

「と・・・いうことは、ご自身で患者をご用意されていないんですよね？では、どうしてその患者がキリスレイなどに罹患していることが分かったのですか？そのお話ですと、患者が獣人たちの体液を媒介するという根拠にはなりませんね？我々が一番の疑問は、なぜ、これらの病気が特定の獣人たちの体液を媒介して感染するのか、です。その部分には触れておられませんよね？そもそも、きちんと感染経路を調べ、実証もせずに、サンクチュアリに発表したのですか？むしろ、サンクチュアリとは、そのような信ぴょう性の薄い論文を掲載してしまったということでしょうか？」

「アガルタ王妃、言葉が過ぎますぞ！我々は、感染経路の実験を行い、実証している。それを受けて特効薬の実験を実施し、実証した

のだ。それは、私が確認している」

ダリーナは、顔を真っ赤にして熱弁をふるう。しかし、メイは冷静さを失っていなかった。

「先ほど、ダリーナ様は、患者はグラリーナ女史が用意したと仰いましたよね?そうですよね?ご主人・・・いえ、リノス様?」

リノスは速記の手を止めて、メイを見る。

「ええと・・・ちょっと待ってね。・・・とリノス・・・じゃない、議事録作成人であるアガルタ王リノスに確認を求めた・・・だ。はい、お待たせしました。ええと、先ほどのダリーナさんの発言は・・・『アガルタ王妃、実験用の患者を用意する手間がどれだけかかるのかご存知でしょう?私も忙しい身ですからね。そこまでの時間はありませんよ。グラリーナ女史が用意した患者を用いて実験をしたのですよ』です。・・・と、復唱したっと。・・・ああ、どうぞ、続けて?」

「ありがとうございます。・・・患者は、グラリーナ女史が用意したのですね?」

ダリーナの顔に刻まれた眉間の皺が深くなっていく。

「はい、患者は私が、ご用意しました。私が、獣人の体液が媒介となり、発症しているのを確認しています」

「その実験ノートを見せていただいてもよろしいでしょうか?」

ローニがすかさず要求する。

「グラリーナ女史、君の実験ノートはすぐに準備できるか？」

イマーニはメイとローニに顔を向けたまま、目だけをグラリーナの方向に動かして尋ねる。彼女はゆっくりとローニに視線を移し、目を細める。

「ええ、問題ありません。すぐにご用意しましょう」

イマーニとダリーナは大きくうなずく。それを確認したかのように、教皇が口を開く。

「準備まで時間がかかりそうですね。一時間、休憩を取ることにしましょう。再開は一時間後とします。よろしいでしょうか？」

メイたちもイマーニたちも頷く。俺は限界近くになっていた右手をプラプラと振りながら頷いた。

そして休憩終了後、壇上に現れたクリミアーナ研究所員たちの様子を見て、大聖堂内は水を打ったような静けさに包まれた。所長のイマーニの姿はなく、副所長のダリーナとグラリーナが壇上に現れ、彼らは呆然とした足取りで、自分の席に向かう。そしてそこで、ダリーナは体を震わせながら口を開いた。

「お集りの皆様に、お詫びがございます。クリミアーナ医学研究所所長、イマーニが・・・倒れました」

全員の目が、テンになった。

第百九十三話　三つのミス

グラリーナ・ネーヴェ。二十六歳。彼女がクリミアーナ医学研究所にやってきたのは、わずか二年前のことであった。

クリミアーナ教国での人の入れ替わりは、四年に一回実施されるジモークの時であり、それ以外の時期に人の異動が行われるのは珍しい。もっとも、問題等を起こして教国から追放されるのは、その限りではないのだが。

グラリーナは、ひっそりとクリミアーナ医学研究所に中途入所してきた。同じ医学研究所に勤務している者でも、彼女の存在を知らぬ者が多くいた程、彼女の存在は秘匿されていた。

グラリーナはもともと、医学畑の人間ではなかった。コリスリン王国という、クリミアーナ教国から船で二日ほどの距離にある国で生まれた。彼女の生家は裕福な材木商であり、少女時代は、何一つ不自由ない暮らしを送ることができた。

幼い頃から学問好きであり、学校の成績は良かった。彼女が興味を持ったのは錬金術であり、様々な鉱石から金を作り出そうとする試みに心を惹かれ、王立大学に進学しても、その研究を専攻したのだった。

そんなある日、彼女は人生を変える場面に出くわすことになる。

大学でたまたま見つけた新聞の記事。そこには、クリミアーナ教国の医学研究所のイマーニが、魔法を使わずに、人体の欠損を治癒す

る方法を開発したとあった。

この人間の限界を超えたとされる発明と発見は、彼女の心を大きく揺さぶった。グラリーナは錬金術の研究をやめ、医療の道を志すことにした。

そこでの彼女の猛勉強ぶりは、コリスリン王立大学の伝説となっている。普通であれば四年かけて学ぶ医学の知識を、彼女はわずか一年で習得してしまった。そして、コリスリン王立大学で医学の権威と言われるガディ教授の下で、特別に研究に加わることを許されたのだった。

コリスリン大学は、クリミアーナ医学研究所と双璧をなす、医学において権威のある大学である。特に医学部を率いるガディ氏の研究成果は素晴らしく、とりわけ、ＬＶ３の回復魔法でも治療が難しかったワイヒルド、いわゆる癌の治療において、ＬＶ３の回復魔法と薬を組み合わせることで、その進行を劇的に抑制する、という大きな成果を残している。

そんなガディ氏の下で研究をするようになってからひと月が過ぎたころ、ガディ氏がグラリーナを高く評価する出来事が起きた。それは、ガディ氏が助手たちに、ワイヒルドの治癒における最新の論文をまとめ、一週間後、研究室内のミーティングで発表するようにと指示を出したことに始まる。

グラリーナは期限の日までに百本の論文を読み、これまでのワイヒルドに関する治療の歴史からその最新の治療方法、そして、その問題点と解決へのアプローチ法を見事にプレゼンして見せた。

その後、彼女のその知性は、ガディ氏をはじめとした助手たち全員

から評価され、その透明感のある美貌と相まって、たちまち大学の名物と言われる存在となった。

さらに彼女は、ガディ氏の下で、魔法を使わずとも、ワイヒルドの進行を抑制する手法を発見するという大手柄も立てたのだ。ワイヒルドに侵されている臓器の一部を細かく砕き、ビーカーに入れ、それを度数の高いアルコールに浸して、熱を加えて沸騰させる。そして残った液体を使用すると、高い頻度でワイヒルドの進行が抑制されたのである。

この発見で、コリスリン大学は大騒ぎになった。もしかすると、グラリーナはワイヒルドを根治に導く手法を開発するのではないか。そんな巨大な予想が大学内で噂されるようになった。

ここでコリスリン大学は、一つのミスを犯す。なぜ、アルコールを沸騰させるとワイヒルドの進行が抑制されるのか、という点は追及されず、「高い頻度で抑制される」という点だけが注目されてしまったのだ。

コリスリン大学は、グラリーナの、アルコールを沸騰させて薬品を作るという発想が素晴らしいと判断して、彼女に月２００００Ｇ、日本円にして二百万円で大学の上席研究員として留まるよう打診したのだった。

この話はたちまち国中の噂になった。それどころか、その噂が海を飛び越えて、周辺国にも伝わった。クリミアーナ教国もその一つであり、各国は、優秀な研究者・グラリーナを迎え入れようと、あの手この手で懐柔したが、全て空振りに終わった。このことから、「コリスリン大学とガディ教授は、グラリーナ女史の白衣の裾を捕まえて離さない」という噂が、まことしやかに周辺国で囁かれるよう

になっていった。

そんな彼女を求めたのが、クリミアーナ教国である。敢えて言えば、医学研究所所長のイマーニが熱烈に求めたと言って過言ではない。教国は、クリミアーナ教の影響力を存分に利用して、コリスリン王国に、グラリーナをクリミアーナに留学させるよう要求した。最初は何とかその要求を躱していたコリスリン王国であったが、教皇直々の要請書を突き付けられたことで、もはや断る術がなくなった。

コリスリン大学は、どうしてもグラリーナを手放したくなかった。そこで大学は一計を案じ、彼女に博士号を授与し、博士研究員としてクリミアーナに送り出すという条件を付けて、了承した。しかも、その旅費と滞在費はコリスリン大学が負担するという条件まで付けたのである。

これは、コリスリン大学の引き抜き防止と、ある種のクリミアーナに対する当てつけでもあったのだが、このコリスリン大学の態度は、さらに教国に注目を持たせることになった。評判が評判を呼んでいたのである。

さらに教国もまた、一つミスを犯していた。彼女の存在をオープンにしなかったのだ。

グラリーナ女史は、素晴らしいアイデアを持っている。そのアイデアは人に知られてはいけない。そのアイデアを駆使して、新しい方法論を生み出せば、クリミアーナのものにする。そんな思惑が先行していたのである。

実際彼女は研究室に入ると、すぐさま成果を出した。イマーニが開発した、人体の再生液に微量の塩分を加えると、その効果が高まる

ことを発見したのだ。

この時、グラリーナの研究に恋をした男が二人いた。一人は、所長のイマーニ。そしてもう一人が副所長のダリーナである。

二人は研究途上であった、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスの特効薬の開発というプロジェクトに、グラリーナを参加させて研究を再開した。ダリーナは、特効薬の開発にかけては、研究所の右に出る者はいない。そんな彼が、それぞれの病気に罹患した患者に、羊獣人の胆汁を使用するというグラリーナのアイデアを用いて実験したところ、患者は完治し、あるいは病の進行が抑制され、ある者は症状そのものが改善するという結果を得たのだった。

クリミアーナはここでまた、ミスを犯した。病に罹患した患者は、グラリーナが担当していたことを伏せたのだ。ダリーナ自身も、これだけ大きな研究成果を上げてきているグラリーナ女史が「お使いください」と言われたから使ったのであり、それがうまく成果に結びついたので、その成果を発表したに過ぎなかったのだが。

なぜ、これらの病は、特定の獣人の体液を媒介して感染するのか。

感染経路の証明

特効薬の有効性の証明

次々と疑問が出てくるが、隣に偉大な研究者であるイマーニとダリーナが付いているため、研究所員も信用してしまった。そして、話はどんどん巨大化していく。研究の実証という点に目を向けず、グラリーナが発見し、開発したものを、どのようにして教国のものとするのかという点に目が向いていた。あくまで、コリスリン王国からの借りものであるグラリーナ。彼女の発見を、成果をコリスリン王国に取られないようにどうするか・・・。そんな研究を熱心にや

っていたのである。

誰も、彼女の研究内容を見ていなかったのだ。

そして、アガルタ王妃メイリアスからの追求と、ポーセハイのローニからの要請を受け、イマーニとダリーナが、改めてグラリーナの実験ノートを確認した時、彼らは大変な衝撃を受けることになる。

提出された、彼女の実験ノートは、たった一冊だけだったのだ。

第百九十四話　弱い者イジメ

「こ・・・これは・・・？」

「実験ノートです」

驚いた表情を崩さないイマーニに対し、グラリーナは平静そのものだった。

「なぜ・・・たった一冊なんだ？」

イマーニはパラパラとグラリーナの実験ノートを見ていく。

「これだけしか書き込みがないなんて・・・。一回？一回しか実験していないのか？」

「はい。一回の実験で結果が出ましたので・・・」

「一回の実験で成功した？そ・・・そんなことが・・・あるはずが・・・」

イマーニの声が裏返っている。

「しょ・・・所長！」

ダリーナがイマーニの手元からふんだくるようにして、グラリーナの実験ノートに目を通す。

「こ・・・これは・・・。他に・・・試さなかったのか・・・」

ダリーナの声が震えている。隣でイマーニが胸を押さえて、呼吸を荒くしている。

「はあー、はあー、ふぅー、ふうー。こ・・・これは・・・このまま発表・・・。・・・ちょっと、考えさせて、下さい。すみませんが、一人に、一人に、していただけませんか。・・・あと、三十分あります。・・・しばらく・・・一人にして・・・下さい」

「所長！」

イマーニの肩に手を置いて必死で声をかけるダリーナ。その光景にグラリーナは戸惑いを隠せない。

苦しい息の中、頑なに一人にしてくれ、考えさせてくれと懇願するイマーニ。その様子に、二人は追い出されるようにして部屋を出た。

「・・・一回で成功などと・・・。バカな・・・」

別室でダリーナは両手で顔を覆いながら呟く。

「・・・本当に、キリスレイ、ガイッシャ・・・」

「もういい！」

グラリーナの話を、ダリーナの絶叫にも似た一喝で遮る。二人は微動だにせず、ただただ沈黙を続けた。そして、間もなく休憩時間が終わる頃、二人はイマーニの部屋に再び向かった。

そこには、机の上に突っ伏したまま、意識を失っているイマーニの姿があった。

呼びかけても、体をゆすってもイマーニの反応はない。彼らは人を呼び、イマーニを搬送する。その時、質問会の再開を告げる鐘が鳴り響いた。二人は呆然自失のまま、イマーニの机に置かれてあったグラリーナの実験ノートを手を取り、フラフラと大聖堂の会場に戻ったのだった。

大聖堂の壁に掛けられた主神・クリミアーナの肖像画。その最も近い場所にいる教皇の顔から笑みが消えていた。眉毛をハの字にして、疑問を感じているような顔をしている。

「ダリーナ副所長・・・。イマーニ所長が倒れたというのは、どういうことでしょうか？」

教皇の落ち着いた声が大聖堂内に響き渡る。ダリーナはうろたえながら立ち上がる。

「誠に、誠に、申し訳ございません。申し訳ございません。申し訳、ございません」

ダリーナは何度も何度も教皇に向かってお辞儀をする。その尋常ならざる様子は、会場内を動揺させるのに十分だった。ざわめく場内。ダリーナは相変わらず教皇に頭を下げ続けている。そんな中、メイの朗々とした声が響き渡る。

「お静まりください。ダリーナ副所長も、お席にお着き下さい。イ

マーニ所長がお倒れになったのは、ダリーナ副所長のせいなのでしょうか？突然の発病なのですか？差し支えなければ、私たちも協力しましょうか？」

ダリーナは、フラフラとメイに向き直る。そして、蒼白になった顔で口を開く。

「・・・結構です」

その言葉を聞いてメイは小さくうなずく。そして、言葉を続ける。

「それでは、グラリーナ研究員の実験ノートを拝見したく思います」

「ハイ・・・」

沈痛な面持ちでグラリーナが立ち上がり、メイたちの机に歩いてくる。そして、手に持っていたノートをメイに手渡した。

「え？これだけですか？実験ノートですよ？」

驚きの声を上げたのはチワンだ。ローニも目を丸くして驚いている。メイは一切表情を変えず、黙ってグラリーナの実験ノートを受け取り、それに目を通す。メイもチワンもメイの横からノートを覗き込んでいる。

会場内は相変わらずざわめいている。教皇はそれを窘めようともせず、じっとメイたちの動きを凝視している。ダリーナは、頭を抱えて机に突っ伏したままだ。そして、リノスはチラチラとメイたちの動きを見ながら、既に限界を超えている自分の右手に回復魔法をかけていた。

「よくわかりました」

メイの声が大聖堂内に響き渡る。それと同時に、メイはパタンと実験ノートを閉じて立ち上がる。

「グラリーナさん、実験は、一回だけしかしていないのですね？」

グラリーナは毅然として答える。

「はい。その実験の結果は、私が発表した内容、サンクチュアリに掲載された内容と同じになります」

「認められません」

ローニが立ち上がって口をはさむ。グラリーナが反論する。

「何故ですか？一度の実験でしたが、結果が出たのです。結果が出たのです。信じて下さい！」

「我々は、あなたの研究が、偶然の産物でないことを確認したいのです。だから、再現実験をお願いしたのです。では、ここに書かれている手法であと十回実験をしてみて、同じ結果が出ると断言できますか？根拠を示せますか？」

「そ・・・それは・・・」

「断言できない段階で、ダメなのです。いいですか？医学とは、経験と確率の積み重ねなのです。一度望む結果が出たからと言って、それを可とする学問ではないのです。何度も何度も実験を繰り返し

て経験と確率を数字化する。その数字が、信頼に値するかどうかの基準になるのです。確かに、あなたのノートでは成功率百パーセントですよね。分母は一、分子も一。イコール百パーセント。しかし、今回再現実験を実施したことによって、分母は三になりました。そして分子は一。今のところ、成功率三十三パーセントに下がっています。この様子ですと、分母を増やせば増やすほど、成功率は下がりそうですよね？」

「・・・」

グラリーナは反論する言葉が見つからず、ローニを睨んでいる。

「私も改めてノートを拝見しましたが、グラリーナ研究員の、この実験ノートの作成は、百点満点で言えば十点です。書き込みが少なすぎるし、手順を示す絵なども極端に少ない。余白も多い。これでは、いつ何時でも追加で書き込みができてしまう。これは、いただけません」

チワンが首を振りながら口を開いている。グラリーナは、目に涙をいっぱいにためてメイたちを睨んでいる。そんな様子でも、ローニは一切手加減しない。

「グラリーナ研究員の実験に信ぴょう性は全くありません。従って、クリミアーナ教国が発表した、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスは特定の獣人たちを媒介して人間に感染するという論理は全く説得力を持ちません。況や、羊獣人の胆汁が特効薬の原料になるという論理も、説得力を持ちません。これは、大変なことです。大事件です」

会場内が大騒ぎになっている。その喧騒の中、前列の男が立ち上が

り、ローニを指さして大声を上げる。

「そこまで言うことはないだろう！グラリーナ女史は成功したと言っているのだ！」

チワンは呆れるような顔をして、言葉を返す。

「そもそも、その患者がキリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスに感染していたのかさえ、疑わしいのです。ここに集まった全員が納得できるような根拠、つまり、目に見える証拠は用意できますか？・・・できないのであれば、それを信じることはできません」

毅然とした態度で、チワンは男に語りかける。彼は、チワンを睨みつけたまま、忌々しそうな顔を隠そうともせず、憮然として席に着いた。

「静粛に」

教皇の声が響き渡る。いつものような優しい声ではない。威厳に満ちた声が響き渡る。

「これは、由々しき問題です。そのような不確かな情報を発表していたのですか？・・・今、ここにはおられませんが、私の前で、間違いはないと言い切ったイマーニ所長の言葉は嘘だったのでしょうか？我々も騙されていたのでしょうか？それならば、許されざるべきことです。これは主神様、クリミアーナ様に対する裏切り行為ですよ？」

教皇をはじめ居並ぶ枢機卿たち、そして客席の各国使節団から軽蔑に似た眼差しが、壇上のグラリーナに注がれている。彼女は、涙を

流しながら体を震わせている。

「・・・お待ちください」

落ち着いた、毅然とした声が大聖堂内に響き渡る。そこにいた全員が声の主に視線を送る。彼らの視線の先には・・・メイがいた。

大聖堂内は、厳かな緊張感に包まれつつあった。

第百九十五話　責任の所在

教皇はゆっくりと視線をメイに向ける。メイもその視線を受け止めるかのように、教皇と目を合わせている。二人の間に見えない火花が散っている。しばらくするとメイは、教皇から視線を外し、ゆっくりと大聖堂内を見回し、そして、目の前で声を殺して泣いているグラリーナを見る。

「グラリーナさん。もう一度、お尋ねします。あなたがサンクチュアリで発表した内容は、間違いなく、実験の結果に従って発表されたのですよね？」

グラリーナは無言でうなずく。

「メイ様、彼女の発表は信ぴょう性がないと・・・」

「黙っていてください。大丈夫。私に、任せてください、ローニさん」

口を挟もうとしたローニは、しばらく固まっていたが、やがて、ゆっくりと席に座る。それを確認したメイは、再び教皇に視線を向ける。

「教皇様、彼女は、確かに、実験の結果をサンクチュアリに発表したと言っておられます」

教皇は一瞬目を見開き、一つため息を漏らす。

「ですから、その内容が不確かなものだったのでしょう？その不確かな情報を発表したグラリーナ女史は、我がクリミアーナ教国を始めとして、世界中に混乱を引き起こしました。その責は負わねばならないでしょう？」

「教皇様、話が飛躍しています。彼女はただの、いち研究員です。彼女の発表を確認し、指導する立場の人間は何をしていたのでしょうか？そして、その内容を掲載したサンクチュアリ。こちらの編集されている方々は、何故確認を取らなかったのでしょう？そして、特定の獣人たちが国を追われ、羊獣人たちが捕らわれるという事態に発展している現在の状況は、彼女が作り出したものではないはずです」

会場内がどよめく。しかしメイはそれを意に介さず、言葉を続ける。

「要するに、今回のこの問題は、グラリーナ女史ひとりの問題ではないかと存じます。さらに言えば、悪意なき方々によって引き起こされた問題であると考えます」

「悪意なき方？」

教皇が思わず言葉を発する。メイは教皇を見てゆっくりと頷く。

「サンクチュアリに掲載された、クリミアーナ教国医学研究所の論理は、完璧なものでした。私も拝読して、一度は納得しました。その内容からは全くの悪意も、捏造しようとする雰囲気も感じられませんでした。しかも、それを承認しているのは、世界一とも言われるイマーニ所長とダリーナ副所長でした。とりわけ、イマーニ教授の実績とその人柄は誰もが知るところでした。だからこそ、私を含め、それをお読みになった方々も、サンクチュアリに掲載された論

文を信じるに至ったと思うのです」

騒めいていた会場内が、少しずつ静寂を取り戻していく。メイは会場を見回しながら、さらに言葉を続ける。

「グラリーナさんを始め、この発表に関わった方は、誰も実験結果を捏造しようと思ったわけではない。グラリーナさんも悪意を持って実験に携わったわけではない。たまたま、一度の実験でうまくいってしまった。その事実にグラリーナさんも驚いてしまったのではないでしょうか。グラリーナさんの実験結果は信ぴょう性に欠けますが、逆に、彼女が意図的に、悪意を持って実験結果を捏造したということも言えません。この問題は、小さな偶然がきっかけで起こったものだと思うのです」

「それでは、アガルタ王妃は、この問題について責任を取るべき人間はいないと仰るのですか?それは、社会通念上、通らない理屈だと思いますが?」

教皇は威厳のある声でメイに問いかける。まるで、俺に責任を取れとはいわないよな?と言わんばかりの雰囲気を漂わせている。

「今、私は、責任の所在を論じているわけではありません。このような事態に陥った原因を論じているのです。この問題の最大の原因は、グラリーナさんが実施した実験を、誰も見ていなかった。この、とても重要なことが、たった一つ、この重要なことだけが見逃されていたことにあると思います」

教皇の顔が凍り付いている。メイはさらに続ける。

「また、サンクチュアリにも問題があったと思います。イマーニ博

士とダリーナ博士の名前があるから、それを無条件に信じてしまったのでしょう。一度、他の機関で再現実験を行えば、このようなことにはなり得なかった。これは、大いに反省するべき点だと思います」

再び会場内にざわめきが起こる。もっとも権威のある医学書に、真っ向から断罪しているのだ。研究者たちが戸惑うのも無理はない。

「では、アガルタ王妃は、どうせよと仰るのでしょう?」

教皇は半ばあきれたような顔をしてメイに尋ねる。彼の胸中は、グラリーナとダリーナを罰すればすべてが解決すると思っていただけに、メイが何を考えているのかを図りかねていた。もっとも、彼の頭の中では、彼女が政治的に受け入れられない提案をして、笑いものになるだろうという予測を立てていた。しかし、メイの話は、教皇の予想を大きく裏切るものだった。

「今回のこの問題は、グラリーナさんの手の内で起きたことです。ですから、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスが、特定の獣人の体液を媒介して人間に感染すること、その特効薬が獣人の胆汁を用いて作られること、これらのことは違うとは断定できません。グラリーナさんという、世界でただ一人の前で起こった現象であるために、万人の真理とはなり得ませんが、全く起きないとも言えないのです」

メイは、ゆっくりと会場を見回し、そして、口を開く。

「キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスの感染経路の解明と、その特効薬の研究は、ここに参加した、そして、参加を希望する国々が協力し、連携して、実施するべきものであると思います」

大聖堂が水を打ったように静まり返る。そして、その静寂を破るかのように、小さな拍手が大聖堂に響き渡る。それをしているのは・・・リノスだった。そして、それに釣られるように、徐々に拍手が広がっていき、やがて大聖堂は大きな拍手で包まれた。

メイはグラリーナの肩にポンと手を置く。彼女はこらえ切れない様子で、滂沱の涙を流していた。

「アガルタ王妃の仰ることはよくわかりました」

教皇の声が響き渡る。大聖堂は再び静寂に包まれる。

「それでは、この問題の責任は、誰がとるのでしょうか・・・。イマーニ所長は倒れています。そうなると、副所長の・・・」

ダリーナはガバッと顔を上げ、恐れ戦いた顔で教皇の顔を見る。

「クリミアーナ様の、お導きでしょう」

突然リノスが声を上げる。全員が驚きの目で彼を見る。

「きっと、クリミアーナ様が、この病気の原因を、皆で究明せよというお導きだったのでしょう。そう考えれば、説明がつきますよね？」

リノスは可愛らしく首をかしげて教皇を見ている。

「アガルタ王、どういうことでしょうか？」

「クリミアーナ様は、敢えてグラリーナさんの実験を、一回で成功するように導かれたのでしょう。完全な解決策ではなく、解決のヒントを示すために。それを一部の、トチ狂・・・いや、クリミアーナ様の教えを守る敬虔な信徒が、ぼうそ・・・迅速な行動を起こした。しかしそれは、クリミアーナ様が意図していたことではなかった。だからこそ、クリミアーナ様が私の夢枕に立たれ、教国の使者がガルビーの港から出すなとお命じになられたのです」

客席の、クリミアーナ教を信仰する国々がざわついている。リノスはそんな彼らに一瞥をくれながら、さらに言葉を続ける。

「わが妻、メイリアスは、そのご意思を知ってか知らずか、実証実験を行い、教国の発表した結果が事実とは異なるものだという結論を導き出しました。さらには、教国の発表した論理にもヒントがあると見抜きました。そして、最後に、この病の問題を、全員で協力して解決に導くよう提案しました。まさしくこれこそが、クリミアーナ様のご意思だったのではないでしょうか？そう考えれば、クリミアーナ様が私の夢枕に立たれた説明がつきます。ええ、付きますね。付きます付きます」

リノスは右手を顎に当てたまま、一人で納得して頷いている。

「お見事です、メイリアス殿。まさしくアガルタ王が仰る通り、それこそがクリミアーナ様のご意思でしょう。そのご意思をよくお汲み取りになりました。すばらしい、さすが、メイリアス殿です！」

そう言って立ち上がるのは、ヴァイラスである。彼は立ち上がるなリ大きな拍手をする。そしてそれに呼応するかのように、彼の周囲に座る使節団が立ち上がり、拍手をする。大聖堂内の半分程度の使節団が拍手に加わった。

「・・・アガルタ王の」

「その提案に、我がサンダンジ国は賛成する！」

教皇の言葉を遮りながら、立ち上がって大声を出しているのは、サンダンジ国のニケだった。

「今回は、国ごとが担当して実験を行った。今後は、様々な国が集まり、議論を重ね、実験を重ねることで、キリスレイなどの不治の病を根絶に導いていくことは、大いに賛成する。ぜひ、我が国も加えていただきたい！」

「ニケさん、ありがとうございます。しかし、お国の許可は取らなくて大丈夫ですか？」

「アガルタ王、サンダンジ国の王は私だ。貴国ではどのような体制かは知らぬが、我が国は王の命令は絶対である。我が言葉はそのまま、国の政策として実施される」

「え？まじ？ああ・・・そうなんだ・・・。ですよね～。それを聞いて安心しました」

リノスはドギマギしながら返答を返す。そして、クルリと後ろを向き、教皇に向かって口を開いた。

「教皇様、これはクリミアーナ様のお導きです。よ、ろ、し、い、で、す、ね？」

教皇はじっとリノスの顔を見ている。そして、無表情のままゆっく

りと立ち上がる。

「あとのことは、皆さんで、お決めください」

いつもの柔和な笑顔を浮かべながら、教皇は席を後にした。そして、その後を追うように枢機卿たちも退出していった。

「教皇聖下！」

「捨て置いてよろしいのですか！」

そんな枢機卿の言葉を、まるで聞こえていないかのような足取りで教皇は控室に戻る。そして、居並ぶ枢機卿に向かって口を開く。

「クリミアーナ様のお導きなのです。喜んで後押ししようではありませんか」

「教皇聖下！」

「ジュウゼン枢機卿、そう興奮されますな。皆さんのお気持ちはよくわかります。ええ、よくわかりますとも。誰よりもクリミアーナ様にお仕えしてきた我々です。そうですね・・・。クリミアーナ様のご意思に報いる方策を、考えねばなりませんね・・・。皆さんは、その案を考えてください。お願いしますね」

教皇の意図を全てくみ取った枢機卿たちは、次々と退出していく。

そして、控室に一人になった教皇は、独り言を呟く。

「クリミアーナ様のお導き・・・。どの口がそれを言うのか・・・。小僧と小娘が、調子に乗りおって・・・。クリミアーナ様の御名を

語る大悪人どもめが・・・」

そこには、いつもの柔和な表情をした教皇はおらず、眉間に深い皺を刻み、目を見開いた醜悪な面相をした老人がいた。

彼は知らない。リノスが作成した質問会の議事録は、広く民衆の手によって複写されていることを。そして、この日の議事録も、やがて民衆に読まれる運命にあることを。それを読んだ民衆が、メイリアスを「聖女」と呼ぶ未来を・・・。

クリミアーナ教国の首都、アフロディーテの中心にある大聖堂は、分厚い雲に覆われ始めていた。

第百九十六話　勧誘する者、される者

公開質問会は幕を閉じた。取り敢えず、クリミアーナの説は論破したが、徹底的にフルボッコするには至らなかった。勿体ない気がしてならない。しかし、この国をあまり追い詰めるのも危険だ。全世界のクリミアーナ教の信者が敵に回ると、面倒なことになる。ある程度、クリミアーナ側の体面も残しつつ着地させたのは、ある意味メイはお手柄と言えるかもしれない。

教皇が大聖堂を後にすると、クリミアーナ側の国の使節団が退出しようとしていたので、大声で呼び止める。そして、クリミアーナ様は獣人たちを追放し、羊獣人を捕らえることにお怒りであると話し、ゆめゆめ獣人を捕らえるなど乱暴狼藉を働くなと念を押しておいた。

その後、その場に残った三十四か国が、それぞれどのような研究を担当するのか、または担当したいのかを話し合った。さて、これから詳細の話に入ろうとしたとき、クリミアーナ教のコフレシ司教がやってきて、俺たちに大聖堂から出ていくように言ってきた。

「はあ？君は、何を、言っているんだ？クリミアーナ様が、そう、あちらにおられるクリミアーナ様が、皆で解決せよと仰った事柄なのに、そのクリミアーナ教の、総本山たるアフロディーテの、大聖堂は、その、クリミアーナ様のご命令に、背くんだ？背くんだね？それともこれは、コフレシ君、君の一存かな？」

コフレシは苦虫を噛み潰したような顔を隠すことなく、言葉を絞り出す。

「ま・・・間もなく、夕暮れです・・・。大聖堂は・・・火気厳禁のために・・・誠に恐れ入りますが、本日は、お引き取り下さい」

俺は大きくうなずく。

「なるほど、それならば仕方がない。本日は、ということは、明日もここを使えるのだろうね？コフレシ君？」

「そっ・・・それは・・・」

「コフレシ君がいれば大丈夫だろう。明日の十時、会議を再開することでいかがですか？」

集まった使節団は、全員が同意した。

「そんな顔をするなコフレシ君。我々とて忙しいのだ。何も十日も二十日もここに居座る気はない。明日一日でいい。そのくらいの仕事は、君にもできるだろう。選ばれし、君ならば、ね？」

コフレシは震えながら頭を下げていた。

使節団はゾロゾロと大聖堂の出口に向かって移動し始めた。それを見届けて、俺たちも帰ろうとすると、サンダンジ国のニケが俺たちの下にやってきた。

「ニケさん・・・。いや、サンダンジ王、先ほどは失礼しました」

「アガルタ王が頭を下げられることはない。私のことはニケでいい。それにしても・・・いい奥方を持たれたな」

「ありがとうございます」

「これだけの美しさを持ちながら、あの教養と、教皇に一歩も引かぬ肝の強さを持っておられるとは・・・。是非、我が妻に迎えたいくらいだ」

「サンダンジ王」

「いや、冗談だ。アガルタ妃・・・。我々はキリスレイの撲滅は、何としてもやり遂げたいと思っている。世界中で見ても、おそらく我がサンダンジ国が最もキリスレイに罹患しているはずなのだ。そちらにおいでのポーセハイのお二人共ども、是非、是非、力を貸してほしいのだ。我々からの支援は惜しまぬ。頼む」

ニケはスッと頭を下げる。メイはにっこり笑う。

「もちろんです。是非、一緒にやりましょう。ところで、実験の際にお預けした患者の様子はいかがですか?」

「ああ、今のところ死んだ者はいない」

「その方々は、できましたら私たちでお預かりしようと思うのですが・・・。差し支えなければ、近日中にポーセハイの方々に転移術で引き取りに伺いますが・・・」

「それはありがたい。よしなに頼む」

ニケは両手を出してメイの右手を握る。そして、その手にキスをして、颯爽と去っていった。

「・・・手に、キスを・・・」

「メイ・・・。今夜は一緒に風呂に入るぞ」

「ハイ・・・」

メイは顔を真っ赤にして頷いた。

ふと後ろを振り返ると、グラリーナが立ち尽くしていた。副所長のダリーナの姿は既になかった。

「グラリーナさん、あなたも、いや、あなたは、今後も研究を続けてくださいね？」

メイが優しく語りかける。彼女は力なく微笑んだ。

「グラリーナさん、よければ、我々ポーセハイの集落に来ませんか？」

チワンが唐突に声をかける。

「私は・・・。コリスリン王国の研究者です。クリミアーナ教国とコリスリン王国の許可なく離れるわけにはいきません」

「何言ってるんですか！クリミアーナ様のご意思があるではありませんか！そのご意思を叶えるために、勉強しに行くと言えば、誰も文句は言いませんよ？」

ローニがすかさず口をはさむ。そんな彼女を横目で見ながら、チワンが口を開く。

「あなたは大変に豊富な知識を持っておられる。しかし、圧倒的に実践経験が浅い。しかも、基礎的な約束事を知らない。実験ノートを見ましたが、実に初々しいミスが目立つ。あれではどのような素晴らしい研究をしても、その成果を証明することができない。大変勿体ないと思います。もしよければ、我々がその点もお教えしますよ？」

「チワンさんは、とても厳しいですけどね！悪魔以上ですよ？」

ローニがここぞとばかりに悪態をついている。しかし、グラリーナは固まったままだ。俺はすかさず結界を張る。

「グラリーナさん、結界を張りましたから、安心していいですよ。我々の声は他の人には聞こえませんから。グラリーナさん、このままこの国にとどまれば、教国はあなたの命を奪うかもしれません。そこまでいかなくても、あなたの立場は非常に悪くなるでしょう。そんな環境の中で研究ができますか？ここで研究をしたいのであれば止めませんが、あなたはあなたの人生を決める権利があります。チワンたちは、あなたに救いの手を差し伸べました。その手を取るのかどうかは、あなたが決めてください。幸せになる方を選べばいいですよ？」

彼女はしばらく悩んでいたが、やがて、チワンとローニの顔を見て、小さく、よろしくお願いしますと返答した。俺は彼女に他の人には見えなくなる効果を付与し、全員で大聖堂を出て、馬車で帝国の船に向かった。

船に着くと、チワンとローニは、先にグラリーナをクルムファルに送ると言って転移していった。それを見届けたかのように、ヴァイ

ラス殿下が現れる。

「お疲れさまでした、義兄上（あにうえ）。しかし・・・クリミアーナ様の御名を騙るとは・・・大丈夫なのでしょうか？」

「なぁに、大丈夫ですよ。バレなきゃ、イカサマじゃないですから」

そう言って俺はニヤリと笑う。ヴァイラス殿下は呆れたように首をゆっくりと振っていた。

そして俺とメイは帝都の屋敷に帰った。ちょうど夕食の最中であり、俺たちは滑り込みで温かい食事を食べることができた。

「あれ？チワンさんとローニさんは？」

ソレイユが聞いてくる。

「ああ、先にクルムファルに帰ったよ」

「お二人の夕食は・・・ご用意しておいた方がいいですね？」

「そうだなペーリス、お願いできるか」

「わかりました」

「多めに作っておいてやってくれ」

そんなことを言いながら俺たちは夕食を終える。そして俺はアリリアをリコに頼み、メイと二人で風呂に入った。ニケにキスをされた手はもちろんのこと、隅から隅まで、それはそれは念入りに念入り

に洗ってやった。

「ご・・・ご主人様、もう、それ以上は・・・」

「もうダメか？じゃあやめにしようか。メイが怒ると怖いからな。大聖堂でヨームアン王国の連中を叱り飛ばした時は、本当に俺もビビったよ」

「やめてください・・・。でも、続きは・・・部屋で・・・」

メイは真っ赤な顔をして俯く。そして、俺たちはそのまま二人で寝室に入った。

その頃、クリミアーナ教国の首都、アフロディーテにある教皇宮殿では、教皇ジュヴァンセルが部下の司教からの報告を受けていた。

「そうですか・・・。イマーニ所長は、亡くなりましたか・・・。グラリーナ女史は失踪・・・。おそらく、この国からは出ていないでしょう。このアフロディーテに居るはずです。探してください。彼女は、大切な、客人ですからね。あと・・・ダリーナ副所長は・・・しばらくお休みをしてもらいましょう。あれだけのことがあったのです。すぐに研究という激務に戻るのは、肉体的にも精神的にも、厳しいものがあるでしょう」

恭しく頭を下げる司教に教皇は、いつもと同じように優しい言葉で語りかけている。

「それと、ヴィエイユとカッセルを呼んでください」

二人の名前を聞いた司教は、いつも以上に機敏な動きで一礼をし、部屋を後にした。しばらくすると、ヴィエイユとカッセルが教皇の執務室にやってきた。

「このような夜分に呼び出して申し訳ありませんでした。特例のジモークが決まりましたので、お伝えしようと思いまして、ご足労いただきました」

特例のジモークと聞いて、二人の顔がぱあっと明るくなる。

「二人とも、出発は三か月後になります。準備を怠らないようにお願いします。二人の任地は、アガルタ国。アガルタ王がいる都です。そこで、アガルタの人々を、天道に導いてください」

二人は体中からうれしさを溢れさせて、キビキビと一礼をする。その姿を満足そうに教皇は眺めていた。

「クリミアーナ様の御声を聞いたアガルタ王です。ここは是非、正しき道、天道に導かねばなりません。王の周囲には、天道に背く者も多くいるようです。今こそ、クリミアーナ様のご加護を受けているアガルタ国を、アガルタ王を、天道に導くのです。二人とも、わかりますね？」

「「はい！」」

キラキラとした目で二人は返事をする。その姿を見て、教皇は満足そうに頷くのだった。

第百九十七話　第二ラウンドの鐘が鳴る

結局、数千年にわたって人族を苦しめてきた、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスという伝染病は、公開質問会に出席し、参加を表明した三十四か国において、協同研究が行われることになった。

その議長国は当然アガルタ国が選ばれ、総責任者はアガルタ王リノスが就くことになった。もっともそれは名目上のことであり、実質はメイリアスを中心に、ポーセハイのチワンとローニが補佐にあたり、その下に各国の研究者たちが居るという図式になった。

大聖堂で行われた会議は、とても白熱したものになった。結果的に、研究室の中心はアガルタに置くことになり、二か月後を目途に、研究者たちをアガルタに派遣してくることになった。それまで、実験に協力してもらった患者は、ポーセハイの里で面倒を見ることになった。この点については、ヨームアン王国にも要請を入れ、近日中にポーセハイが患者を迎えに行くと言伝を入れた。

その他、諸々のことがこの場で効率よく決まっていった。お陰で議事録を取る俺の右手は完全に限界を超えてしまい、夜は回復魔法をかけながらそれを文字起こししたのだった。俺はほぼ、一睡もすることなく、前日の会議の議事録と共に二本の議事録を書き上げ、その横でゴンがそれを同時並行で書き写していった。そして全てを書き終えた俺は、そのまま深い眠りについた。

俺がブッ倒れている間、リコを筆頭に、家族の皆が議事録を書き写してくれた。エリルとアリリアという二人の乳飲み子を、皆でサポートしながら午前中いっぱいかけて作成してくれたのだという。俺

が昼前に起きて、ダイニングに降りてくると十六冊の議事録が出来がっていた。テーブルの傍ではゴンが眠りについている。俺の姿を見つけて、フェアリがパタパタと飛んでくる。

「フェアリ、みんなはどこに行ったんだ?」

「仕事に行ったよー」

「マジか・・・」

その時、ダイニングの扉が開き、リコが入ってきた。

「あ、リノス、おはようございます。ちょうど今、起こそうと思っていたところだったのですわ。皆は、お仕事に出かけられました。メイから伝言です。十三時から再び会議を行うので、クリミアーナまでお越しくださいとのことでした」

「わかった。すぐに向かう」

「あ、昼食を作っていますわ。食べて行って下さいませ」

そこには沢山のサンドイッチが作られていた。俺は遠慮せずにそれを頬張り、スヤスヤと寝ているエリルとアリリアを見てしばし癒される。そして、リコを抱きしめてから、クリミアーナに転移した。

大聖堂を使う許可は得ていなかったが、皆、当然のようにここに集まっている。チワンとローニもいる。今回は、俺の議事録の確認が中心だった。さすがに数が足りないので、回し読みをせざるを得ず、少々時間がかかった。それに一部、修正依頼が出たため、その部分を赤字で修正し、議事録は承認された。議事録を手に入れられなか

った国については、各国が分担して書き写し、本日中に届けることで合意した。

結局教皇はこの二日間、姿を現さなかった。俺は議事録を司教のコフレシに預け、明日ここを離れると告げた。彼は何とも言えぬ顔をしながら、俺に挨拶をしていた。

ヒーデータの船に帰ると、ヴァイラス殿下以下、連れてきた帝国とニザのドワーフの研究者たち数十名が俺の議事録をシャカリキになって写していた。何でも、アフロディーテに住む研究者や、どさくさに紛れて入国してきた者たちが、俺の議事録を読みたいと声を上げているのだという。

「我々の成果を示すいい機会ですからね。ギリギリまで作業を行いますよ。どうせ船の中は暇なのです。いい暇つぶしになります」

ヴァイラス殿下は笑いながら、自分も書き写し作業に入っていった。

次の日、俺たちは、大量の議事録をクリミアーナ市民への置き土産に、この国を後にした。さすがにこの日だけは教皇は姿を見せ、各国の使節団に労いの言葉をかけて見送っていた。

俺とメイは早速アガルタに転移し、シディを呼んで打ち合わせをする。そして、大工のゲンさんを呼び出す。

「待たせたな大将（てえしょう）！何だい、話ってなぁ」

「すまないゲンさん。都の東側にある貴族屋敷を改造してもらいた

いんだ。詳しくはこのメイから聞いてほしいんだが・・・。忙しいところにさらに忙しくしてしまうな」

ゲンさんは、メイから工事の概要をフンフンと頷きながら聴いている。そして、握りこぶしをドンと自分の胸に当てる。

「任してくんねぇ！そのくらいのこと、造作もねぇやなぁ。ただ、屋敷の中をキレイにするだけの話だろ？なにも俺っちがするまでもねぇやな。んなこたぁヨタの野郎に任せときゃ一週間で終わらせちまわぁ。で、中身の工事のことだが・・・」

再びメイ、シディー、ゲンさんの三人で話合いが始まる。

「合点だ。その、ドワーフたちの作業に、俺っちと俺っちの弟子も交えてもらいてぇ」

「ゲンさん、獣人村は大丈夫かい？」

「ああ、建物の建て方は全部弟子たちに伝授してるんでぇ。ヤツらが何とかするだろうよ。何ともならなけりゃ、俺っちが何とかなるようにすらぁな。ドワーフの腕が見られるなんざなかなかねぇこった。俺っちのウデも上がろうってもんよ。ついでに、弟子たちも見させときゃ、少しは参考になるだろうよ」

「そうかい。わかった。よろしく頼むよ」

ゲンさんはニカッと笑う。その後、この三人はかなり長い時間、アガルタ医療研究所の建物について、楽しそうに議論を交わしていた。

リノス達がクリミアーナを離れて三日。首都アフロディーテでは、臨時枢機卿会議が招集されていた。一年の間に二回ものこの会議が招集されたことは、長いクリミアーナ教国の歴史の中でも、かなり稀有なことであると言えた。

非公式での開催とあって、会議の列席を許された枢機卿、司教たちは緊張の面持ちで、会場である大聖堂に着席していた。そこにゆっくりと教皇が登壇する。同時に、一人の少女と一人の少年が、教皇が入場してきた扉の前に控えている。教皇は席に着くと、ゆっくりと列席した人々を見回し、おもむろに口を開いた。

「皆さん、お忙しい中、お集まりいただき、ありがとうございます。この度、特別のジモークを行うこととなりましたので、発表いたします」

会場中が騒めく。特例のジモークが行われるのは五十年ぶりのことである。通例として、特例のジモークに選ばれた者は、その大半が後に教皇に就任している。つまり、今回の特例のジモークを発表するということは、現教皇の後継者指名と同じ意味を持っていた。

「この度、特例のジモークを行いますのは、ヴィエイユとカッセルです」

会場内が再びざわめきに包まれる。後継者と目されていた教皇の息子、カトー枢機卿ではなく、その娘と甥にジモークが行われるのである。カトー枢機卿は現在、この国にはおらず、遠く離れた異国の地に赴任中である。カトー枢機卿を呼び戻すことなく、特別のジモークの実施はつまり、カトー枢機卿の廃嫡を意味し、次期教皇はヴィエイユとカッセルの二人による後継者レースが幕を開けたことを

告げるものだった。

「二人の任地は、アガルタです。皆さんもご存じのとおり、アガルタ王はクリミアーナ様の御声を聞かれた御方。言わば、クリミアーナ様の加護を受けておられる御方と見ております。しかし、アガルタ王の周囲はまだまだ天道に従わぬものも多いと聞きます。このままでは、クリミアーナ様のご加護が無くなる可能性があります。ヴェイユとカッセルには、力を合わせて、アガルタ王、そしてアガルタ国を天道に導くよう期待しています」

ヴィエイユとカッセルは恭しく頭を下げる。

「ただし、ご覧の通り、二人はまだ幼い。この二人だけの力では難しい面もあるでしょう。そこで、お集まりの皆さん。どうか、この二人を助けてあげてください。我がクリミアーナ教が総力を挙げてアガルタを天道に導き、主神さまのご加護を受けたアガルタ王を、お守りしようではありませんか」

大聖堂が割れんばかりの拍手に包まれる。その中で、ヴィエイユとカッセルは何度も頭を下げて、その栄誉を噛みしめていた。教皇はその光景を満足げな表情を浮かべながら、独り言を呟く。

「アガルタの都に、全世界からクリミアーナ教の信徒が押し寄せるのです・・・。すばらしい光景が見られるのでしょうね。楽しみです。実に、楽しみです・・・」

大聖堂の拍手は、何時までも鳴りやむことはなかった。

第百九十八話　戦いに向けての第一歩

最近、朝晩の冷え込みがでてきたと思っていると、この日は粉雪が降っていた。冬の訪れを感じる瞬間だが、それもそのはずで、今日は十二月一日なのだ。

気が付けば俺は二十二歳になっていた。前世だと大学四年生というところだろうが、この世界での二十二歳は、四十代くらいのイメージである。オッサンである。ジェネレーションギャップを感じる年ごろなのである。

そうは言っても、肉体的には全く問題はない。肩こりはないし、腰痛もない。絶好調なのだ。

そしてこの日は、技術の粋を駆使したアガルタ医療研究所の開所式なのだ。およそ千人の人々を招いて、華やかにその開所を祝った。

当初は三十四か国で協力して、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスの撲滅に当たろうということだったが、アガルタやヒーデータ、ニザなどの周辺国もその噂を聞きつけて、協力したいと申し出た国が七か国もあった。その一部は、アガルタの内情を探ろうという意図もあるかもしれないが、出来の悪い国は早々に追い返せばいいとのチワンたちのアドバイスにより、来るもの拒まずの精神で受け入れることにした結果、四十一か国でのスタートとなったのだ。

研究所内は、メイたちの要望が反映された素晴らしい最新設備を備えたものになった。また、メイの強い要望で研究所付属の病院も設置され、そこで医者を育てていくことになった。その中心となった

のはチワンであり、ローニともども数人のポーセハイを伴って、早速診療を開始していた。

加えて、入院施設も充実しており、およそ三百床ものベッドを用意し、多くの病人を受け入れる体制も整えていた。

この施設を作るために、三つの貴族屋敷を使用している。そう、たった三つなのだ。ジュカ王国の貴族がどれだけ大きな屋敷に住んでいたのかが、分かろうというものだ。ちなみに、どさくさに紛れて、王族の屋敷を一つホテルに改装した。なかなかレトロな雰囲気であり、歴史ある老舗ホテルのような、渋い、趣のある出来栄えだ。

入院施設は立派だが、まだまだスタッフが足りず、今は診療所に毛の生えたような医療活動しかできていない。しかし、メイやシディーが中心となって、薬師や看護師などを育て始めた。その大半が、避難してきた獣人たちだ。

メイ、チワン、ローニの研究では、獣人を媒介として病気が伝染する可能性は極めて低いと結論付けていたため、思い切って獣人を区別せずに受け入れた。そのせいもあってか、学びに来る彼らの目の色が違う。そうした彼らの姿勢は、当初は二の足を踏んでいた一部の都人の心を打ち、誰もが気軽に訪れることができる診療所になりつつある。たまに、おかみさん連中が差し入れを持ってきてくれることもある。ありがたい限りだ。

同時に、新しいホテルにも、獣人たちを採用した。ソレイユがデザインしたユニフォームは実にカッコよく、可愛らしく。それに憧れてホテルマンを目指す若者が殺到した。彼ら彼女らは、迎賓館のスタッフが交代で研修を行い、メキメキとスキルを上げている。先日、オープン前のテストをするとのことで、満室の状態を作り、運営テ

ストを行った。都の人々を招待し、俺も招待されてリコと共に泊まってきたが、サービスといい、調度品といい、食事の味と言い、帝国ホテルと変わらないクォリティーであったことは驚いた。俺は大満足だったのだが、さすがにリコは目の付け所が違い、スタッフや調度品のことについて、細かいアドバイスを出していた。

そうしたことを経て、今日の研究所の開所を迎えたわけであるが、一応王様である俺は、着慣れない礼服を着て、全身に冷や汗をかきながら、開所式に招いた数百人の客の前に立っている。その隣には、これまた全力で着飾ったリコがいる。髪を結い上げ、ティアラを身に付け、そして肩を出したドレスが実に豪華だ。そしてさらに美しい肌をこれでもかと見せつけながら、俺の隣にそっと立っている。

その後ろには、メイ、マトカル、シディー、ソレイユが、それぞれ着飾って控えている。その中で特別色気を放っているのはソレイユなのだが、意外にマトカルも、全力で着飾るとかなり美しいのである。

俺はそんな嫁たちを背に、一歩前に出て祝辞を述べる。

「ああ、ええと。本日はお日柄もよく、何よりでございます。このアガルタ医療研究所は、世の中の伝染病を撲滅しようという目的の下、設立されました。本日、それが完成を迎え、開所できましたことは歓喜に耐えません」

いつもは苦手なスピーチだが、今回は違う。リコが後ろからちゃんとセリフをしゃべってくれているのだ。これで俺は噛むことがない。

「ゆくゆくはこの研究所で、多くの伝染病が撲滅できますよう、私も王として尽くしていく所存ですわ。ここにお集りの皆さま、是非、

私どもにお力をお貸しくださいませ。お願い申しますわ」

・・・会場内は何か微妙な空気に包まれる。しかし俺は意に介することなく堂々と、舞台から下りていった。その直後、会場から大きな拍手が起こり、この日の開所式は大成功で幕を閉じることができた。

それからしばらくして、アガルタのとある組合の中で、リノスは話題の人となっていた。

「やっぱりリノス様は、ウチらの所属だったのねー」

「わかる。わかるわぁ。王様を演じるのも大変なのよね～。でも、緊張すると素がでちゃうあたり、なかなかカワイイわね～」

「でも、奥方が大勢いるってのは、どっちもってことだわよね？」

「いいじゃないの～。わかんないわよ？王様って子孫を残さないといけないから、無理して頑張ってんのかもしれないわよ？」

「ええ～じゃあ、アタシ達が癒して差し上げないと～」

「みんないいこと？リノス様の素のお顔は、あたし達だけの秘密よ？」

「もっちろんだわ～姉さん～」

以降、リノスは、とある組合の方々から、熱い視線を送られることになるのだが、今はまだ、それを知らない。

研究所が建設されている頃から俺は、チワンやローニが連れてきたキリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスの患者たちを見舞っていた。見舞うといっても、果物を持って訪ねていく本当の見舞いではない。患者それぞれを鑑定していたのだ。

患者一人一人の過去を丁寧に覗き見ていく。まず、最初に取り掛かったのは、ガイッシャの四人の患者たちだ。これは、年代、性別がバラバラであり、病気を発症した時期もバラバラだった。獣人と暮らしていたのは一人だけ。しかも、三十代のという若さの男性だった。

この男性は確かに、狼獣人の女性と結婚していた。しかし、一人の男性は、狼獣人と接触したことはないにもかかわらず、発症している。彼らを鑑定して分かったのは、この病はまず、体をねじったり、曲げたりすることができなくなり、その後、腹部の痛みを発症して、それが全身に広がるという共通点があることが分かった。一応彼らにＬＶ５の回復魔法、アルティメットヒールをかけてみた。痛みは緩和されたが、固まった筋肉は戻ることがなく、しかもひと月もすると再び痛みを発症するという、厄介な病気だった。

次に鑑定したのは、ルロワンスの患者だ。

首に紫の斑点が出て、その後に突然死を迎えるという悪魔的な病気だが、これを患っていたのは五人の男女だった。この人たちも丁寧に鑑定していくが、猫獣人と暮らしていたのは、これも一名だけだった。これも年代はバラバラであり、発症した時期もまちまちだったが、全員が四十代以上であった。この病は、五人のうち三人が、両親のどちらかがルロワンスに似た症状を発症して死亡しているの

が分かった。もしかすると、遺伝的な病気なのかもしれない。彼らにもアルティメットヒールをかけてみたところ、紫の斑点の大部分が消えた。現在は経過観察中だ。

そして最後に鑑定したのは、キリスレイの患者だった。

これも男女六人で、この病が一番年齢の幅が広かった。一番若いので十四歳、一番年上で五十歳だったのだ。全員がこん睡状態であり、対話は出来なかった。彼ら彼女らを鑑定していくと、これもまた、発症した時期がバラバラであり、しかも、犬獣人と暮らしている者は一人もいなかった。

彼らの発病は様々で、微熱が続く、体全体がかゆくなるといった例の他に、風を受けると極端に不快になるという痛風に似たような症状を発症している者もいた。ただ、この病気だけは、一つの共通点があった。全員、犬を飼っていたのだ。むろん犬の種類はバラバラだったのだが。

俺はメイたちに犬を調査するように伝えて、彼らにアルティメットヒールをかけた。しかし、彼らは誰一人として目覚めず、現在でも昏々と眠り続けている。この病は、徐々に呼吸が浅くなっていき、やがて死に至るといわれている。確かに、患者の一人は呼吸が浅く、現在はメイたちが開発した呼吸器のようなものを付けられて、何とか命をつないでいる。

こうして、アガルタの医療研究所は華々しいスタートを切ることができた。しかし、クリミアーナが放った刺客たちは、アガルタのすぐ近くまで迫っていた。

特例のジモークを受けたヴェイユとカッセルの準備が、着々と整い

つつあった。彼女らは年明けとともに、アガルタに向けて出航することになっている。そして、それに呼応するかのように、全世界から、クリミアーナ教の信徒が、アガルタを目指して国を出発しようと、万端の準備を整えていたのである。

クリミアーナの反撃が、始まろうとしていた。

第百九十九話　千客万来

年が明けた。この世界では除夜の鐘をつくこともなく、ましてやカウントダウンなどというイベントもなく、一般市民は割合にのんびりしている。俺たちも、きちんと年末年始の休暇を取得したこともあり、比較的のんびり過ごすことができた。

また、働いている人々にもほぼ、無理やり休暇を取らせた。さすがにホテルなどはそうもいかず、シフト制にせざるを得なかったが、当然年末年始に出勤する人々には、割増料金を支払っている。前世の頃、女上司の気まぐれで散々仕事の内容を変えられ、何日も残業し、休日出勤をしてやっと仕事を仕上げたことがあった。当然その時の残業申請をしたのだが、女上司の言った一言は、

「自分の実力が足りないから残業してるんでしょ？自分の実力が足りないっていう理由での残業は認められないわね～」

だった。当然、残業申請は受理されず、いわゆるサービス残業となった。むろん、その女には後で呪いをかけたのは言うまでもない。

そんな経験があるので、自分を助けてくれている人々には、全力で報いようと思っているのだ。

とはいえ、正月五日には、アガルタの貴族たちが新年のあいさつに訪れるので、休暇前まではその準備で忙殺されていた。特に忙しかったのはリコで、子育てをしながら、貴族たちの新年のあいさつに向けての衣装選びが、それはそれは大変だった。自分一人でもかなりの時間を要するのに、今回は一気に嫁が三人も増えたために、そ

の分も彼女が担当したのだ。

そこで活躍したのがソレイユだった。彼女のセンスも洗練されており、リコと相通ずるところがあったようだ。彼女がリコの右腕のようになったおかげで、年末年始休暇をきちんと休むことが出来た。とはいえ、俺とメイ、シディー、マトは何度も着たり脱いだりを繰り返さねばならず、かなり疲れたのだが。

お蔭で、貴族たちの引見もつつがなく終えられた。昨年のように、せっかく新年のあいさつに来たけれど、泊まる場所がないという事態は避けることが出来ている。ジュカ時代の貴族は殺されてしまった者もいる一方で、領地を捨てて逃げて行った者も多くいる。そのため、半分以上の屋敷が空き家のままになっている。それらを活用して宿泊施設にしてもいいなと思う一方で、既に老朽化が進んでいる屋敷もあり、このあたりをどうしようかと考え中なのである。

都近くにできた獣人村も、かなりの賑わいを見せている。彼ら独自の技術もあり、織物などの工芸品も生み出され、アガルタの都で売られるようになった。都の人々も、彼らを温かく迎え入れてくれている。俺は彼らを都に迎え入れたかったのだが、さすがに都もこの一年で人口が増えてしまい、飽和状態になりつつある。何より、都に住もうとすれば色々と金がかかる。そこにいくと獣人村は、住宅費はいらない、炊き出しはあるということで、あまり金はかからない。不便な点も多くあるが、そこら辺は彼らが協力し、助け合いながら何とか生活をしているのだ。

何より彼らは、自分たちの窮地を救ってくれたアガルタという国に何とか貢献しようとしてくれている。その姿勢だけでもうれしいし、実際、彼らはいろいろなところで貢献してくれている。そんな彼らに、俺もアガルタの国民も好感をもって接しているのだ。

ようやく貴族たちの引見が終わった頃、フェアリードラゴンたちからいくつかの報告がもたらされた。

『ガルビー近くの海に船が見えます。かなり多いです』

『どこの船かわかるか？』

『そこまでは・・・』

『武装している兵士は乗っているのか？』

『今のところ、武器を持った人間はいないように見えました』

『わかった、ご苦労だった。引き続き、見張ってくれ』

『畏まりました』

ファリードラゴンたちが消えたのを確認して、俺は執務室の鈴を鳴らす。そして、やってきた職員に、クノゲンを呼ぶように伝える。

しばらくしてやってきたクノゲンに、俺はガルビーのことを伝え、そこでの様子を見てくるように命ずる。そして二日後、クノゲンが戻ってきた。早速俺は、ラファイエンスとマトカルを呼び、報告を聞いた。

「ガルビーにクリミアーナの船が到着しています。そこには教皇の孫であるヴィエイユ様と、そのいとこに当たられるカッセル様が乗っておられるとのことです。現在はガルビーの教会に逗留されており、近日中に都に向かわれるとのことです」

「ほう、教皇の孫が来たか・・・。そこに兵士は乗っていなかったのだな？」

「武装した者はおりませんでした。教会関係者とみられる者数名と、あとは魔術師が数名だけでした。武装した兵士が乗っておれば、将軍にお願いするところだったのですが、今回は出番がありませんな」

ラファイエンスは苦笑いを浮かべている。俺は腕組をしながらじっと考えている。

「リノス様、ヤツらの狙いはなんだろうな？」

マトカルが心配そうに尋ねてくる。

「う～ん。沖合にかなり多くの船がいて、ガルビーに向かっているという報告があった。最悪の状況を想定すると、その船全てにクリミアーナ教の連中が乗船していたとするなら、ヘタをすればガルビーがその信徒に占領される可能性があるな」

「それはないな、リノス様。ガルビーは城塞都市だ。山の上に石を積み上げてできた都市であり、あれ以上の建物は増やせない。空いているのは兵舎くらいだが、そこさえ押さえておけば、あの都市に多くの人間を受け入れる余裕はないと思うぞ」

「マトカル殿の言う通りです。兵舎は私の手で押さえましょう。ただ、ガルビーの山を切り開いて街を拡張するというのであれば、話は変わってきますな」

「わかった。クノゲン、お前はガルビーの兵舎を守れ。そして、沖

合の船が何者であるかを確認してくれ。商人の船であれば入港を許すが、クリミアーナの船であれば、その目的を確認できるまで入港を許すな。あの港も、そう沢山の船は入港できないからな。ヘタをすると、クリミアーナの船で海上封鎖される危険性もある。その点を気をつけてな。手勢が足りないなら都の軍勢を動かしても構わん。何はともあれ、奴らの狙いを見極めるまでは動けないな」

「わかりました。私は一旦、ガルビーに戻ります」

「ああ、よろしく頼むな、クノゲン」

「リノス様、クリミアーナの信徒がガルビーに押し寄せるのならば、また、食糧不足にはなりはしないだろうか？」

「う～ん。そうだなマト。食料を持たずに船旅をするほどバカなヤツらではないだろうが・・・。一応、救援物資用の食料を確保して置いてくれ。腹を空かせて暴動でも起こされてはかなわんからな」

「わかった」

「今回は、私の出番はなさそうだな」

「いや将軍、いざとなればお願いします。もし、クリミアーナの連中が騒乱を起こせば、将軍の出番です。ただ、そうなると相手は死を恐れない兵士たちになります。手ごわいですよ？覚悟しておいてください」

「死を恐れぬ兵士・・・。厄介だな」

「ええ。まあ、そうならないように手は尽くしますが・・・」

「そうだな、そうならないようにした方がいいな」

ラファイエンスは微笑みを湛えたまま、ゆっくりと頷いた。

数日後、クノゲンから再び報告があった。

「ガルビーの沖合にいる船は、確認できただけでも七隻います。あるいはそれ以上になる可能性もあります。そこには全員クリミアーナの信徒が乗っております。一部、護身用の武器は携帯しているものの、武装した兵士は僅かです。既にヴィエイユ様たちを乗せた船が一隻入港していまして、その中には凡そですが、一千人弱の信徒が乗っており、ガルビーに上陸しようとしています。現在は上陸許可を与えずに、他の船は入港を制限して、沖合に待機させています。食料は十分持っているようで、数か月は持ちこたえられるとのことです」

「やっぱり、クリミアーナの連中だったか・・・。奴らの狙いは、ガルビーか？」

「いえ、そうではないようです」

「どういうことだ、クノゲン？」

「ガルビーの教会を通して、書簡が参りました。ヴィエイユ様とカッセル様が、リノス様に謁見したいそうです。できれば、信徒を連れて行きたいとの要望です」

「信徒を連れて、都に・・・？」

「おそらくですが、クリミアーナの狙いは・・・このアガルタの都ではないでしょうか」

「都か・・・」

俺は窓の外を睨みながら考える。外は、一面の銀世界になっていた・・・。

第二百話　小娘の戯言

アガルタの都では、一昨日から降り出した雪が、さらに勢いを増して降り続いている。今年は例年になく大雪であり、一部では珍しく、都の人々が道路を雪かきをする光景も見られる。

そんな大雪の中、約十日前にガルビーに上陸したクリミアーナ教の代表者たちが、アガルタの都にやってきた。彼らは到着するなり、すぐさまリノスに謁見を申し出た。

「アガルタ王におかれましては、ご機嫌も麗しく何よりでございます。私はヴィエイユと申します。そして、これに控えますは、我が一族に名を連ねます、カッセルでございます。まだまだ幼くはありますが、クリミアーナ様へ忠誠は誰よりも深き者です。必ずや、この国を、この世界を、正しき天道に導く者でございます。何卒、お見知りおき下さいませ」

ヴィエイユは淀みのない声であいさつを述べる。リノスはそれを無表情で見ていた。

「ヴィエイユ、とか言ったな？まだ若いな。いくつかな？」

「はい、私は十四歳になります」

「十四歳？はぁぁぁ。その年で遠路はるばるよく来たな。そっちのカッセルだっけ？君は・・・八歳？すごいな。お、そこに居るのはコフレシ君じゃないか。久しぶりだな。元気そうで何よりだ。ところで、今日は何の御用で？」

「はい。我らが教皇聖下の書簡を預かって参りましたので。お届けに上がりました」

「何？教皇の書簡？」

リノスは周囲にいたクノゲンとマトカルに目配せをする。クノゲンは聞いてないよ、という顔をする。リノスは胡散臭そうな顔をしてその書簡を受け取り、目を通す。

「・・・何だこりゃ？」

リノスはそう言い捨てて、教皇の手紙をクノゲンに渡す。

「アガルタの都を楽園にする手伝いをするために、二人を遣わしたとあるが、一体どういうことだ？」

ヴィエイユは目を見開いて笑顔を作る。

「アガルタの都は、大魔王が降臨した地。その大魔王は討伐されたと伺いましたが、また再び大魔王、もしくはそれに類する魔物が降臨する可能性がございます。我々は主神・クリミアーナ様のご加護をもちましてその降臨を阻止し、アガルタ国に真の平和をもたらせます。国の発展は、平和であること、人心の康寧が第一かと存じます。我々はそれを、この国にもたらしたく思っております」

「大魔王・・・。お前らもか・・・」

「お前らも、とは？」

「大体、大魔王大魔王っていうけど、そんなに悪いヤツか？なりたくてなったんじゃないと思うぞ？」

「それはどういう意味でしょう？」

ヴィエイユの目が鋭くなっている。カッセルは小さな声で邪教徒か？などと呟いている。

「いや、大魔王が直接俺に何かしたわけじゃないからな」

ヴィエイユはホホホと上品に笑う。

「これはアガルタ王ともあろうお方が！いいえ、失礼いたしました。アガルタ王は、長きにわたりヒーデータ帝国におられたと聞き及んでおります。それでしたら、大魔王がいかに恐ろしい存在であるのかをご存じないのも道理でございます。大魔王は、この地に長い間君臨し、死屍累々たる地獄の惨状を作り出しました。生きとし生けるもの全ての命を奪い、この国を滅ぼし、生き残った者にも苛烈な仕打ちを与え、この世の生き地獄を生み出しました。もう二度と、あのような悲劇を生み出してはなりません。その大魔王の降臨を阻止することが出来ますのは、わが主神様、クリミアーナ様であり、その敬虔な信徒である我々のみでございます」

リノスは苦笑いを浮かべながら話を聞いていたが、やがて首をゆっくり左右に振る。

「さらに、アガルタ王におかれては、クリミアーナ様が夢枕に立たれ、その御声を聞かれたと伺っております。これはクリミアーナ様のご加護を頂戴している証。であれば、同じクリミアーナ様にお仕えする我々が、お力になるのは道理でございます。このアガルタが、

この都が、楽園になりますようお手伝いさせていただきたく存じます」

爛爛と輝く目でヴィエイユは語る。リノスはため息をつきながら口を開く。

「お前らの言う楽園ってのは、何だ？」

「皆が平和に、楽しく、そして穏やかに暮らせること。真の幸福がある国です」

「・・・人の価値観は千差万別。人によって幸福の定義は違うだろうに、真の幸福などあるものかね？」

「ございます。平和に、楽しく、穏やかな暮らしがあれば、皆、必ず幸福になります」

「ハッハッハ・・・。必ずか。そうか。では、具体的にどうするんだ？」

「我々にお任せください。アガルタの国はまだまだ発展途上。いえ、これからますます栄えていかねばならぬ国でございます。その思いは我が教皇様を始め、クリミアーナ教の信徒も同じ考えでございます。既にアガルタの国づくりをお手伝いしたいと、世界中から信徒がこのアガルタに向けて続々と集まっております」

「なるほど。その前に、俺の質問に答えようか？君たちは、具体的に、この国で何をするんだい？」

「これは失礼いたしました。我々は、この国の発展に寄与します。

具体的には、この国に住み、ある者は兵士としてお役に立ち、ある者は魔術師として、またある者は武器や魔道具を作り、またある者は病に倒れた者を救い、またある者は、荒れた土地を開墾し、ある者は街を作ります。信徒それぞれが技術と経験を持っております。それらをこの国で生かすことで、アガルタという国を栄えさせ、この世の楽園を築いてまいります。さらに言えば、信徒たちがこの都で生活することによって、この国は財政的に潤うことにもなるかとも存じます」

「なるほど、信徒はわかった。で、ヴィエイユとやら、貴女は、具体的に何をするの？」

「私は、呪われた者を正しき道へ。即ち、天道に従わせることが責務と考えております」

「天道に、従わせる・・・か。なかなか、だな」

リノスとヴィエイユのやり取りを見ていたカッセルが口を挟んでくる。

「アガルタ王におかれましては、是非、我々にこの国で活動する機会を頂戴できますと、ありがたく存じます。我々には優秀な医師もおります。先だっての伝染病騒動におきましても、まだまだ獣人たちの病原菌説が払しょくされたとは言えません。もしかすると、このアガルタで病の流行が起こるやもしれません。そうならぬよう、手を尽くしたく存じます」

彼は恭しく一礼をする。

「まあ、話の内容はよくわかった。ただ、見てもらえれば分かるが、

この都は既に人口が増えすぎていてな。そんなに多くの信徒を迎え入れるだけの場所がない。先に獣人たちを保護した時も、彼らを都の中で保護したかったのだが、それが出来ずに、都の外に獣人村を作って保護した有様だ。アガルタの国は基本的に来るもの拒まずだ。しかし、先ほど言ったように場所がないからな。都の外に自分たちで住むところを建ててもらわなけりゃならない。それでもいいのであれば、俺はなにも言うつもりはない」

ヴィエイユとカッセルの眼がキラリと光る。そしてヴィエイユはすぐさま飛び切りの笑顔を見せる。

「アガルタ王様は、きっと我々を受け入れてくださると思っていました。ありがとうございます」

「礼には及ばない。ただし、この国では、人に迷惑をかけないというのが唯一無二の約束事だ。人に迷惑をかけるヤツはこの国にいらん。お前たちクリミアーナ教の人間が人に迷惑をかけるとは思えんが、くれぐれも、その点だけは注意してくれ」

「畏まりました。ご懸念には及びません。我々は人を救うのが使命。人に迷惑など・・・あろうはずがございません」

嬉しそうな顔をしながらヴィエイユは答える。リノスはそれを苦笑いしながら見つめていた。

ヴィエイユ達、クリミアーナの使者は一旦ガルビーに戻り、信徒と共に再びこのアガルタの都に戻ってくると言って、リノスのもとを辞していった。

「リノス様、あんなことを約束して、大丈夫なのか？」

マトカルが不安そうな顔をしている。

「心配するな、マト。奴らがどれだけのものか見てやろうじゃないか。奴らの思う通りことが進めばいいんだがな。さて、どこまで頑張るかな・・・？」

リノスは、意地の悪そうな顔をしながら、クックックと含み笑いを浮かべた。

第二百話　小娘の戯言（後書き）

次回予告：「挑戦状と暗殺予告」　３／２１（火）更新予定。

第二百一話　挑戦状と暗殺予告

ヴィエイユたちを見送った翌日、アガルタのリノスの執務室では、朝から会議が行われていた。膨大な資料が山と積まれたなかで、リノスを筆頭に、メイ、チワン、ローニが顔を寄せ合って侃々諤々と意見が戦わされていた。

議題となっているのは、先日、リノスがキリスレイの患者を鑑定した際に指摘した、犬が媒介の原因となる可能性についてのことだった。

「現在のところまだ、調査中の段階ではありますが、アガルタ、ヒーデータ、ニザの三か国につきまして調査したところ、犬を飼っている家はおよそ七百家庭でした。一部は貴族家庭であり、調査を拒否された家が八家ありましたが、その他の、調査に協力いただけた家庭では全くキリスレイを発症した事例は見られませんでした」

メイが申し訳なさそうに報告する。リノスは首を振りながらメイを見据える。

「いや、メイが気に病むことはない。いいんだ。ダメなら次の手を考えればいい」

その声を聞いてローニが口を開く。

「私の方は、念のため犬獣人について調査をして参りました。先ほどメイ様のお話にありました三か国の中で犬獣人が一番多いのは言うまでもなくアガルタです。アガルタに住むおよそ二千人の犬獣人

を調査しましたが、全く感染は見られませんでしたし、その知り合いについても、キリスレイに感染した人はいないとのことでした」

「そうか・・・」

「ちなみに、なのですが」

チワンが口を開く。

「キリスレイの罹患している六人の患者のうち、四人がサンダンジ国の周辺国に住んでいました。以前、サンダンジ王が仰っていましたが、あの国は以前、キリスレイが大流行したことがあります。さらに、この病に罹患する率が他の国よりも高いのも事実です。一度、サンダンジ国で、入念な調査をしてみてもいいかもしれません」

説明を聞きながらローニは、山のように積み上げられた書類の中から該当する患者のデータを取り出し、該当部分を開いて俺に見せてくれる。よく当たりが付くものだ。性能のいいデータベースだなと思っていたところに、メイが口を開く。

「私も、一度、サンダンジ国に行って調査をしたいと思います。おそらく、サンダンジ王も許可してくださると思います。ただ・・・」

メイはそこで目を伏せる。そりゃそうだ。あの王はメイに気がある。さすがに襲いはしないだろうが、おさわり、キス・・・などのセクハラはあるだろう。さらに言えば、毎日何かしら口説かれることは覚悟しなければならない。

「まあ、幸か不幸か、メイはまだ犯罪奴隷の身分を解除していない。だからメイがサンダンジ王のものになることは、ない。ただ、毎日

スケベなことをされたり、言葉攻めにあうのは精神衛生上よろしくないよな」

そう言って俺は腕を組んで考える。そして、まずはサンダンジ王に相談するために、王宛に書状を書くことにし、俺は机に向かってカリカリとペンを走らせた。

「いいことを考えた。もし、サンダンジ王から許可が出たら、メイがポーセハイに見える結界を張ろう。書状にも、ポーセハイたちを調査に差し向けると書いておこう」

そう言って俺は書状を完成させて、それをチワンに渡す。彼はサンダンジに転移した経験を持つポーセハイにそれを渡すべく、転移していった。

「・・・申し訳ありません。ご主人様」

「いいよ。メイが謝ることはない。俺としてもメイを取られては敵わないからな。アリリアも悲しむ。何より、俺の上に乗っかかってきてくれるメイがいないと、寂しくなる」

「ご主人様・・・」

メイは顔を真っ赤にしている。

「オ・・・オホン」

ローニが咳払いをしている。いかんいかん、ローニの存在を忘れていた。

「過ぎたるは・・・毒です」

ローニの、学者然とした顔での説教は、俺をヘコませるのに十分だった。

しばらくすると、チワンが一人のポーセハイを伴って執務室に転移してきた。

「リノス様、サンダンジ国に行っておりました、ラセースです。以後お見知りおきください」

チワンから紹介されたラセースが一礼する。そこそこ年はいっているが、頭のよさそうな顔をしている男だ。

「サンダンジ王にリノス様の書簡を届けて参りました。王様は大変喜ばれまして、ぜひお願いしたいとのお返事でした」

「それだけか？」

「それだけ・・・とは？」

「他にサンダンジ王は何か言っていなかったか？」

「ああ・・・ええ・・・。メイリアス様はお見えにならないのかと・・・」

「やっぱりな」

俺はケラケラと笑う。

「サンダンジに行くときには、メイにはポーセハイに見える結界を張ろう。おそらくバレることはないと思うが・・・。ああ、メイでは名前でバレちまうな。何か名前を考えないと・・・」

「メイサーマでよろしいかと」

ローニが口を挟む。俺は膝を叩いて笑う。

「なるほど。メイサーマさんか。サンダンジ王がどんな顔をするのか見ものだな。ハッハッハ！チワン、ローニ、ラセース。メイのことを頼むぞ？あと、残業は認めません。定時退社を心掛けてください？」

「テイジタイシャ？」

「十八時には仕事を終えるように。ローニは特に延長する傾向があるからな」

「・・・はい、畏まりました」

そう言って、ポーセハイの三人とメイは医学研究所に転移していった。

そして夕方、俺の執務室に新たな来客があった。饅頭屋を営んでいるヤワサという男だった。この店は、俺がアガルタに来た時に炊き出しで振る舞ったぜんざいを気に入り、それを店で出していたのだ。なかなか味もよく、気に入った俺は、あんこの作り方を教えてやり、ついでに、饅頭のことを教えてやったのだ。彼は持ち前の研究熱心

さを発揮して、見事に饅頭を作り上げた。現在ではそれがこの店の名物になっており、俺も贔屓にしている店なのだ。

「おおヤワサ、どうした？」

「ヘイ、ご注文の品を持ってまいりました」

「うん？注文をした覚えはないが？」

「ええ。リノス様からではありません。ええと・・・そうだ、ヴィエイユとかいう若い娘が、これをリノス様に届けてくれと・・・」

ヤワサは抱えていた箱を俺に差し出す。中を見ると、夥しい数の饅頭が入っていた。

「百個入っております。お代はいただいておりますので・・・。それにしても、饅頭百個を注文しておいて、すぐ金を払って帰ったのです。小娘には高いお代なのですが・・・。お名前だけしか仰いませんでしたが、あれはどこぞの貴族様で？」

「まあ、そんなところだ」

「なるほど、どうりで・・・。ヘイ、ではまたよろしくお願いします。まいどあり～」

そう言ってヤワサは執務室から出ていった。

俺は届けられた饅頭を持って帝都の屋敷に帰る。その数を見てリコは驚きの声を上げた。

「まあ、何ですの、この饅頭の数は・・・？」

「ああ、クリミアーナ教からの贈り物だ」

「クリミアーナ教・・・。まさか・・・」

「いや、毒は入ってないと思うよ」

「でも・・・」

リコは気味悪そうに饅頭を眺めている。一方でフェリスやゴンたちは大喜びで見ている。どうやら早く食べたいらしい。

「もうすぐ夕食だ。晩飯食ったら食っていいぞ。あと、コイツらをおひいさまの所にお供えしてやってくれ。あとルアラ、ガルビーに行ってトリちゃんにもお供えしてきてくれ」

「わかったでありますー」

「わかりましたー」

そう言って二人は裏庭に出ていった。その後しばらくして、メイやマトたちが帰って来て夕食となり、その後で、デザートとして皆で饅頭を食べた。

「それにしても、気味が悪いですわ。なぜ、饅頭なのでしょう？」

リコが饅頭を見ながら呟く。

「おそらく、クリミアーナの情報網を、俺に知らしめたいんだろう」

「情報網？」

「ああ。俺の好きなものが饅頭であること、その贔屓の店を知っていること、それに、俺の家族を含め、側近くに仕えている者が百名程度いること。クリミアーナの情報網を使えば、そうした、俺のプライベートのことも知るくらい何でもないぞという警告なのだろう」

「お饅頭一つで、そこまで・・・」

「これは、明らかにクリミアーナからの挑戦状だ。まだあるぞリコ、これには裏の意味があると俺は睨んでいる」

「裏の意味？」

「これだけの饅頭を一人で食べると・・・死んじゃうよな？・・・そういうことだ」

「え？よくわかりませんわ」

「あんこだけに・・・暗殺ってね」

「リノス・・・」

リコはガックリとうなだれている。俺はそれに意を介さずに饅頭を口の中に運ぶ。うまい。あんこの味が実に上品だ。そのまま俺は続けて饅頭を三つばかり食べ、そして、口を開く。

「・・・お茶がこわいな」

第二百二話　眠り病撲滅の手がかり

翌日からメイは、ポーセハイたちと共にサンダンジ国に行くようになった。一旦、アガルタの研究所に顔を出してから、俺の執務室に顔を出し、そこで結界を張ってからサンダンジに向かう。そして、帰りは俺の執務室に寄り、結界を解除した後で再び研究所に戻り、帝都の屋敷に帰ってくるというスケジュールだ。

メイは子育てがあるために、当然、サンダンジへの出勤はローテーションを組んで行われる。なるべくメイの出勤を減らしてくれたチワンには、感謝しなければならないだろう。

メイたちがサンダンジに行き始めてから六日後、チワンたちポーセハイ三人から、サンダンジでキリスレイの患者が増加傾向にあるという報告を受けた。

「ここ一ヶ月の間に、キリスレイに罹患する患者が二十名を超えています」

「チワン、それは多い方なのか？」

「はい。サンダンジ国でキリスレイに罹患するのは、平均して年間三十人程度です。今年に入ったばかりで罹患者が二十名を超えるのは、数十年なかったことだと王は言っておられます」

「なるほど・・・。今のペースで患者が増えるとなると・・・二百名を超えるな。それは・・・ヤバイな」

「はい。患者がどこで罹患したのかを調べましたところ、ほぼ全員が、住んでいる場所も、職業も異なります。そして、発症した日時も、です。我々の力では感染経路を特定できません。そこでリノス様、恐れ入りますが、我々と共にサンダンジ国に赴いていただき、罹患した患者を鑑定していただけないでしょうか」

「私もぜひ、連れて行ってください」

メイが真剣な顔をして俺に願い出てくる。

「なるほどな。俺でよければ力になろう。メイも一緒に来るといい。ただ・・・ちょっと待ってくれ」

俺はチワンたちを待たせて、執務室の窓を開ける。そして、サダキチを呼び出す。

『お呼びでしょうか』

『ガルビーにいるクリミアーナ教の奴らはどうしている?』

『お待ちください』

しばらくすると、サダキチが現れる。

『ガルビーから次々と人が川を上っています』

『今、どの辺りだ?』

『先頭はまだ、ガルビーを出てすぐの所に居ました。道を作りながら移動しているようです』

『なるほどな。わかった。先頭の奴らがアガルタに入ったら、すぐ知らせてくれ』

『畏まりました』

そう言ってサダキチは再び姿を消した。

「おそらく、土魔法が使える奴らが先頭で道を作りながら来てやがるのか・・・」

そう呟く俺を、メイは心配そうな顔をして見ている。

「心配するなメイ。春になればイルベジ川の水は増水する。そうなれば、奴らの作った道も役に立たなくなる。どうするか・・・見ものだな。これをマトたちに教えてから、サンダンジに向かおう」

そう言って俺たちはマトカルたちのいる部屋に転移し、その後、メイに結界を張ってサンダンジに向かった。

転移した先は、病院のような施設だった。

「ここで、患者が収容されているのです」

「病院みたいなところか」

チワンの説明に思わず俺も声を漏らす。チワンたちは不要だと言っていたが、念のため全員に消毒用の結界を張ってやる。そして、チ

ワンの案内で、俺は隔離された建物の中に入っていく。そこにはベッドが並べられ、こん睡状態に陥っている数十人の患者が並んでいた。

「この方々が、ここ数日間でキリスレイを発症した方です」

「なるほど・・・。まさしく老若男女、色んな年代の人がいるな。子供もいるじゃないか・・・」

「この全員の発症時の状況を調べましたが、家の中で発症したのが十一名、外で発症した者が十九名でした。中には突然倒れた者もおります」

「全員が眠っているのか・・・」

「はい。今のところは、ですが。中にはけいれんを起こしていた者もおりますが、今は落ち着いています」

「ちょっとよろしいでしょうか」

ローニが口を挟んでくる。

「私とメイ・・・いや、メイサーマさん、ラセースさんが調べましたところ、罹患した患者の家族構成はバラバラです。ちなみに、犬獣人と接触している人は五人いますが、あくまで近所に住んで居るというだけで、深い付き合いはないようです」

「なるほど。これだけでも、クリミアーナの説がガセだとわかろうってもんだな」

俺はそう言い捨てて、患者たちを見つめる。

「では、一人ずつ鑑定していくぞ？」

「はい、よろしくお願いします」

チワンが俺に一礼をする。それを見て、俺も頷く。まずは、目の前に寝ている壮年の男性を鑑定する。

「・・・幸せそうな家庭だな。宿屋の主か。・・・肉屋の前にいる犬の尾を踏んづけて・・・噛まれたのか。不運だな。酒が好きなんだな。・・・へぇ、働き者だな。・・・いつも買いに行く八百屋のオヤジが犬獣人か」

そんな、俺の独り言のように話す鑑定内容を、チワンやローニたちがメモしていく。

二十人すべての人生を鑑定すると、かなり時間がかかってしまうために、倒れる前後のところを重点的に見ていく。続いて中年のおばさん、若い青年、幼い子供・・・と次々と鑑定していく。

「ふぅぅぅぅー」

全ての患者を鑑定し終わったのは、昼をとっくに過ぎていた。約三時間もの間ぶっ通しで鑑定していたため、久しぶりにＭＰが減った。鑑定を終えると、俺は思わず大きく息を吐きながら、椅子に崩れ落ちていた。

「お疲れ様でした」

メイがすぐさま介抱してくれる。一瞬、このままメイの胸の中で眠りたいと思ったが、何とか自分を保つ。

「リノス様、ありがとうございました。大丈夫ですか？」

チワンが声を弾ませて礼を言ってくる。

「いいや。初めて長時間ぶっ通しで鑑定したので、頭がクラクラしているだけだ。しばらく休めば大丈夫だ。で、何かわかったか？」

「少々お待ちください」

チワンはローニとメイ、そしてラセースと共に、俺が鑑定の最中しゃべったことをメモした紙を、互いに見ながら何やら話をしている。

「ちょっと待ってください！」

ローニが声を上げる。

「ほら、この人と、この人、そして・・・この人、この人もです。ほら、ここです。一致します」

「ローニさん、この人と、この人、そしてこの女の子も・・・一致します」

メイがメモを指さしながら説明してく。そして、何やらブツブツと呟きながら紙を取り寄せて何やらカリカリと書き込んでいる。

「メイ、ローニ。何かわかったか？」

「リノス様、メイ様は素晴らしいです！よくぞそこに気が付かれました。まとめていただいたこの書類も、実に見やすい。素晴らしい！」

チワンが手放しでメイをほめている。メイは照れて両手を顔の前に出して小刻みに振っている。

「チワン・・・先に見つけたのはローニのような気がするんだが・・・」

「ああ、ローニは褒めすぎると調子に乗ります。医師なら、このくらいのことは当然、見抜けないといけません」

「厳しいな、チワン・・・」

ローニは耳をピクピクさせながらチワンに食って掛かる。

「チワンさん、私は褒められて伸びるのです。そのように貶されてばかりですと、向上心が削がれてしまいます！」

そんなローニをチワンは冷たい目で見ている。

「褒められて伸びる？そんなことを言っているから、お前はここ一番に弱いのだ」

「ぐはっ！」

あまりの返答に、ローニが悶絶している。

「ま、まあローニが先に見つけてくれたのは事実だ。ありがとう、

礼を言う、ローニ。チワンもローニが憎くて言ってるんじゃないと思うぞ？人間には三つの評価があってな」

「三つの評価、ですか？」

ローニは涙目で俺を見ている。

「無視、賞賛、批判というヤツだ。見込みのないヤツは相手にされないから無視される。少し見込みのあるヤツは褒めてやる気を出させる。そして、コイツはモノになると思うヤツは、厳しく接して考えさせて、スキルを上げさせるってヤツだ。チワンに批判されているってことは、ローニはモノになると思われてるんだよ。な、チワン？」

チワンは一瞬の間をおいて、大きくうなずいた。その後、ローニに一週間、帝都の屋敷でメシを食わせるという条件を出して、やっと彼女は機嫌を直してくれた。

「これは、アガルタ王。来られるのであれば言っていただければ、歓迎の式典を催したものを・・・。わざわざのお越し、痛み入る」

サンダンジ国王ニケは、王宮にある謁見の間に俺が居るのを見て、ガチで驚いていた。ポーセハイに頼まれて、彼らとともに転移してきたと伝えると、一瞬ニケは鋭い目を見せた。

「彼らを使えば、一瞬で軍勢を運べるのだな・・・。これは、アガルタと敵対することは、絶対に出来ぬな・・・」

「いいえ王様、我々ポーセハイが一緒に転移できますのは、一人だけです。ご心配には及びません」

「いいや、チワン殿・・・謙遜されるな・・・いやいや・・・」

ニケは鋭い目をしながら、首を振っている。

「いやなに、サンダンジ王、今回お邪魔したのは、貴国を苦しめているキリスレイの感染経路を解明するヒントが掴めたのをお伝えするためです。この、我々の予測が正しいかどうかを証明するためには、貴国のお力添えが必須なのです。そのため、アガルタ国王として、あなたにお願いに上がりました」

「何を言われるアガルタ王、何もそのような。キリスレイの撲滅をお願いしているのは、我々だ。お願いに上がるのはむしろ私の方だ。なんなりと言ってくれ。協力は惜しまん」

「そういっていただけると助かります。実は・・・」

俺はキリスレイの感染経路の予測と、その対処策を伝える。その瞬間、ニケの顔が歪む。しばらくの間、沈黙が続く。そして、ニケは重々しく口を開く。

「それは・・・わが国では、協力できかねる・・・。すまぬ・・・」

謁見の間に再び、沈黙が訪れた。

第二百三話　うちの子に限って・・・

「わが国で・・・クシャナミナは我らが友であり、家族であり、子供であるとされている。むやみに捕らえて彼らの自由を奪うことは禁じられているのだ・・・」

サンダンジ王のニケは苦虫を噛み潰したような顔をしながら、俺たちに話しかける。事前に調べたところによると、この国の発展は、クシャナミナと呼ばれる犬たちと共にあったようだ。

まだ、この国が建国されたばかりの頃、人々は国を発展させるために多大な努力と労力を払っていた。砂漠の中にあったオアシスを拠点に、少しずつ街を広げていったのだが、その際、犬たちは襲いかかる魔物に人間と共に敢然と立ち向かったのだ。それ以降、この国では犬を友として、家族として扱うという風習が根付いた。

その思想は徹底されていて、日本のような犬の殺処分場などは存在しない。なぜなら、捨て犬や飼い主による飼育放棄ということがないからだ。何らかの事情で飼い主が犬を飼えなくなった場合は、国による保護施設まである。そういった意味では、このサンダンジ国は動物愛護にあふれた国であると言える。

メイたちが、俺の鑑定情報をまとめたところによると、感染経路は二つなのだという。しかも、その二つともが、犬がかかわっていたのだ。

一つ目の感染経路が、サンダンジ国の、ある花屋で飼われていた犬である。二十人の内、五人がその犬に噛まれていた。しかもそれは、

一人が尻尾を踏んで噛まれている他は、全員その犬に何かをしたわけではなく、突然その犬に噛まれているのだ。さらに、キリスレイを発症している患者の一人は、その犬を保護しようとしている時に噛まれ、その後発症している。

二つ目の感染経路は、教師の家で飼われていた犬である。四人がその犬に噛まれており、当然その飼い主の教師はキリスレイを発症していた。この犬は散歩に出ている時に、やはり無差別に人を噛んでおり、噛まれた全員が発症していたのだ。

「従って、その二匹の犬をまず保護し、状態を確かめる必要があります」

「・・・わが国では、そうした人を噛むような犬については、専門の調教師が再教育を施すことになっている。それは、調教師の領分であり、今までその領分を犯して、王の命令で犬を捕らえたという例は、ない」

ニケは明らかに動揺していた。目が泳ぎまくっている。王の命令は絶対だと言っていたことから考えると、犬を捕らえる命令は出せないことはないだろうが、彼の中ではその現実が受け入れられないのだろう。

「・・・信じられぬ。我らと共に繁栄を築いてきたクシャナミナが、憎むべきキリスレイの原因であったなどとは」

「サンダンジ王、いや、敢えてニケさんと呼ばせてもらいます。ニケさん、あなたは、この国を救いたいのではないのですか？ポーセハイの彼らが示した可能性は、このまま放っておくと、犬たちも、人も、キリスレイに罹ってしまうのです。この国の王として、それ

を見過ごしてはいけないと思います」

彼は目を閉じてじっと考えている。そして、ゆっくりと目を開ける。

「誰ぞ」

「お呼びでしょうか王」

「グラワンスを呼べ」

「ハッ」

お付きの者に短く命令をしてニケは、再び目を閉じた。しばらくすると、小柄だが筋骨隆々の、褐色の肌を持った男が現れた。

「グラワンス」

「ハッ」

「至急、花屋で飼われているクシャナミナと、教師の家で飼われていたクシャナミナを探し出し、我が前に連れてこい。人を噛んでいるという。おそらく、調教師の誰かの下に居るはずだ」

「王、恐れ入りますが、理由をお尋ねしてもよろしいでしょうか？」

「その二匹のクシャナミナが、キリスレイに感染している可能性があり、それを人に感染させている可能性があるのだ」

一瞬の間をおいて、グラワンスと呼ばれた筋骨隆々の男は、大きな声で笑いだした。

「ウハハハハ。王！何を仰るのです。クシャナミナがキリスレイに感染していると？ありえません。クシャナミナは我らが友、家族、我らが子です。何で我らを滅亡に追い込む伝染病をまき散らすのです」

「その・・・可能性があるのだ」

「王、如何されました？今までそのようなこと、あった試しがありませぬ」

「グラワンス・・・。これは・・・命令で・・・ある」

ニケの目に涙が光っていた。その様子にグラワンスは目を丸くして驚いている。

「私とて、信じたくはない。信じたくはないのだ。友を、家族を、子を疑いたくはない。しかし、キリスレイを再び我が国で流行らせるわけにはいかん。いかんのだ。グラワンス・・・察してくれ」

グラワンスは、ゆっくりと頭を下げ、足早に部屋を出ていった。

そして、しばらくすると、グラワンスは、檻の中に入れられた一匹の白い犬を運んできた。それを見てニケは口を開く。

「あとの一匹はどうしたのだ？」

「ハッ・・・あとの一匹は・・・既に亡くなっておりました」

「・・・」

絶句しているニケを尻目に、チワンたちがその犬を観察しようとする。しかし犬はかなりの興奮状態であり、檻の中で暴れ始めた。その時、グラワンスが何やら呪文を唱えると、犬は押さえつけられるように頭を下げる。しかし、犬はガルルルル―と唸り続けている。グラワンスはため息をつき、口を開く。

「このクシャナミナは興奮状態にありました。それで人を噛んだのです」

「なるほど。リノス様、この犬でしょうか?」

チワンがグラワンスの言葉に同意しながら、俺に意見を求める。俺はこの犬を鑑定する。

「ああ、間違いない。この犬だ。……この犬も、別の犬に噛まれているな」

その説明を聞きながら、ローニは檻の周りをウロウロしながら観察している。

「興奮しているのでしょうか?それにしては、涎を垂らしていますし、目が座っていますね。何か狂気を感じるのは私だけでしょうか?」

「そうですね・・・。何かに取りつかれているような雰囲気ですよね」

メイもその様子を見て不気味そうな顔をしている。しかし、グラワンスはその話を言下に否定する。

「それは、いきなり見ず知らずの人の下に呼び出されたからです。彼は大変に気が強い性格だ。何もしていないのに籠に閉じ込められて、このような場所に引き出されては、誰でも怒るというものだ」

ローニはすっと立ち上がり、グラワンスに視線を向ける。

「なるほど、仰る通りかもしれません。しかし、この犬に噛まれた方々全員が、今のところキリスレイを発症しているようです。一度、我々でお調べさせていただきます」

グラワンスは眉間にしわを刻み、ニケの方向に振り返った。ニケは静かに頷いた。

「クシャナミナは我らの友であり、家族なのだ。手荒なマネは、許さん」

グラワンスはローニたちに向かってそう言い放ち、足早にその場を後にした。それを見送ったチワンは、再びその犬の下に近づく。

「さて、この犬を傷つけずに丁重に運ぶには・・・」

「俺が結界を張ろう」

そう言って俺は、その犬に檻ごと結界に閉じ込め、眠りに落ちる効果を付与していく。

「・・・あれ？眠らないな？」

普通であれば眠りに落ちる効果が、この犬には効かない。さらに効

果を強めて強い眠りに誘導する。しばらくすると、犬から唸り声が消え、ようやく深い眠りに落ちた。

「かなりの興奮状態にあったみたいだな。ここまで効果を付与して眠らせたのは初めてだ」

「アガルタ王・・・あなたは・・・」

ニケが目を丸くして驚いている。

「ああ、俺の本職は結界師なのです。そこそこの結界を張れるんですよ？」

「結界師・・・」

「よい師、よい主人、よい姉に恵まれたお陰で、何とか思い通りの結界を張ることができるようになりましたが・・・。しかし、できれば・・・結界師が活躍しなくてもよい世の中になればいいのですがね」

そんな俺の発言に、ニケは驚きの声を上げる。

「何を言われるアガルタ王。結界師は王を守るうえで最も必要なスキルだ。それが必要なくなるなどとは・・・。寧ろ私は、結界スキルを持つ貴殿がうらやましい」

「・・・まあ、便利なスキルではありますけどね。ただ、王であれ何であれ、常に命の危険に晒されなければならない世の中を、何とか変えてみたいのですよ」

「アガルタ王、それは難しいだろう。我ら王族は・・・他者から命を狙われるのは、ある種の義務と捉えねばならない」

「なるほど。そういう考え方も、ありますね」

「リノス様、そろそろ参りましょうか」

結界に閉じ込められた犬を抱えながらローニが促してくる。俺は静かに頷き、ニケに一礼をして、その場を後にしたのだった。

第二百四話　クリミアーナの思惑と意地悪な対策会議

サンダンジ王、ニケの部屋から退出した俺たちは、すぐさまサンダンジ国の研究所に直行した。そして、俺の手で、相変わらず深い眠りについたままの白い犬を檻からそっと出し、机の上に置く。そして、メイが懐から黄色い粉を出し、その犬の鼻先に持っていって嗅がせた。

「もう大丈夫です。あと一時間は目が覚めませんから、その間にやってしまいましょう。ご主人様、結界の解除をお願いします」

メイの言葉を聞いて俺は結界を解除する。そして、メイとポーセハイたちの研究が始まった。

彼ら、彼女らは、とても手際よく犬から色々なものを採取していく。唾液、血液、毛・・・。歯の一部も削っていたようにも見える。そして、ものの数十分で完了させてしまった。

「あとは採取した、これらのものを調べたいと思います。ご主人様、ありがとうございました」

「うん？もういいの？」

「はい。本来は持ち帰りたいのですが、おそらくサンダンジ王がお許しにならないと思います。血液を始めとした体液が採取できたので、これでかなり研究は進むと思います」

「わかった、メイ。では、この犬を返しに行こうか」

「ただ、結界を解除してしまいますと、感染が広がる可能性があります。ですから・・・」

「結界はそのままにしておいた方がいいな」

そんな会話を交わしながら、俺たちは再びニケの下に戻ってきた。彼は別の謁見があるとかで会うことは出来なかったが、王宮の兵士に借りていた犬を返しておいた。その時に、この犬はキリスレイに感染している可能性が高いこと、結界に閉じ込めていることを説明しておいた。さすがに兵士は驚いていたが、結界の天井部分に穴をあけており、そこから食べ物などを入れることができると補足しておいた。

その後、メイたちとアガルタの研究所に転移して、短い打ち合わせを行った。彼女らは当面はアガルタの研究所を拠点に、折に触れてサンダンジ国の状況を見ながら、キリスレイの研究を行うことになった。

そして、その三日後。サダキチから、クリミアーナ教の連中がアガルタに入ったとの連絡があった。

「ずいぶん遅い進み具合だな。このペースで行くと、都に着くまでさらに三日くらいかかるんじゃないか？」

俺は地図を見ながら声を上げる。

「かなり大きな道を作っているのですよ」

クノゲンが苦笑いしながら答える。

「河原に、人が四人並んで通ることができるくらいの、まっすぐに伸びる道を作っていますな」

「なるほど。そりゃ時間はかかるよな」

「リノス殿、これは由々しき事態だ」

焦った声を出しているのは、ラファイエンスだ。

「これだけの広さの道を作られると、騎馬兵が自由に往来できてしまう。クリミアーナは、アガルタの都に一直線に通じる道を作ろうとしているのだ。物資も兵士も最短距離で運べるようにされてしまうと、厄介なことになる」

「うーん」

俺は腕を組んで考える。その様子を見てマトカルが口を開く。

「リノス様、いっそのこと、夜陰に紛れて道を壊してしまおうか？」

「いや、マト、その・・・何ていうかな？勿体なくない？」

「も・・・勿体ない？」

「いや、せっかく道を作ってくれてるんだからさー。後で使えそうじゃないか」

「す・・・すまない。リノス様の考えていることが・・・わからない」

「マト、考えてもみろ。確かに、アガルタからガルビーまでは船を使えば早く行ける。しかし、逆となるとなかなか大変だ。今は、腕っぷしの強い奴らがヨイヤサヨイヤサと船をアガルタまで引っ張り上げていくか、歩いてくるしかない。河原の上を歩くのは大変だぞ？馬もなかなか大変みたいだしな。そう考えると、道ができるってのは、旅人たちには助かるよな～」

「確かにそうだが、道ができてしまうと、クリミアーナの連中が・・・」

「わかっている。わかっているマト。それをわかったうえで言っているんだ」

俺とマトの会話を聞いていたクノゲンが口を開く。

「既にガルビーの沖合には十四隻もの船が待機しています。一隻に五百人乗っているとして、都合七千人がアガルタをめがけてやってくるのです。それに、ヒーデータや、その他の国から陸路でやってくることも考えますと、数万の信者がアガルタに流れ込んできます」

「もしや・・・奴らの狙いは、アガルタの食糧か！」

マトカルが声を上げる。俺はため息をつきながら答える。

「まあ、それもあるだろう。おそらく奴らの本当の狙いは、世論操作だろう」

「世論操作？」

「圧倒的多数の人間が集まって声を上げりゃ、俺を王の位から追い落とすなんざ簡単だろう」

「リノス様、リノス様はアガルタの国民から慕われている。たとえクリミアーナの連中がおかしなことをしたとしても、都の人々がそれを許さないだろう」

「クリミアーナは、そうやって都の人々に攻撃をさせることで、このアガルタに攻め込む口実を作ろうとしているのもあるだろうな」

「くそっ！忌々しい！」

「これマトカル。そのように怒るものではない。せっかくの美しい顔が台無しだ。さて、リノス殿・・・。いずれにしろ、クリミアーナをこのままにしては置かれぬと思うがな？」

「ええ。将軍の仰る通りです。易々とヤツらを全員、アガルタに入れてしまうのは、後々ややこしいことになりそうですね。しかし、策は考えてあります」

「ほう、それは？」

「まあ、この作戦はちょっと、タイミングが大切でね。まだやるかどうかわかりませんから、やる時になれば、すぐに将軍にお話ししましょう」

「うむむ・・・」

ラファイエンスは両眼を閉じて唸っている。それをクノゲンは苦笑しながら見ている。

「それにしても、クリミアーナは上手いですな。この時期に移動を開始するとは・・・。イルベジ川の水が増水する前にアガルタに着くことができ、さらに、何か事が起こっても、しばらくはイルベジ川が増水しているので、簡単にヒーデータとラマロンから援軍は送ることができない。それを見越してのこの移動なのでしょうな」

「そうだな。まあ、排除しようと思えば排除できるんだがな。まあ、せっかく遠くから来たんだ。特にあの、教皇の書簡を携えてきた小娘と、その横についていた坊主くらいは、アガルタに入れてやらないといけないだろう？何てったって楽園を作ろうってんだからな」

「では・・・リノス様は、クリミアーナの信徒全員をアガルタに入れる気はないということか？」

「ああ。信徒と言っても、全員が悪いわけじゃないだろう。お仕置きされるのは、奴らだけでいい」

「その策は、いつ発令されるのだ？」

「うーん。それもまだ、未定なんだよな。マトにも協力してもらわなきゃならないから、その時は頼むぞ？」

「わ・・・わかった」

「まあ、何はともあれ、作戦はリノス殿の下知があってからということだ。それまでは、我々はいつでも出撃できる準備を怠らないことだ。クノゲン、マトカル、気を引き締めていかねばな」

ラファイエンスの言葉に、二人は力強く頷く。そして、三人は俺の部屋から出ていった。部屋から出る際、ラファイエンスがマトカルに何やら耳打ちしている。そして、マトカルは一人、俺の執務室に残っている。

「マト、どうした？・・・顔が真っ赤じゃないか？」

「うううう・・・」

「・・・はああ、また、ラファイエンスに、エロいことを言われたな？」

マトカルの目が動いている。どうやら図星らしい。

「当ててみようか？リノス殿に、ベッドの中で教えてもらえ、だろ？」

マトカルは首を振る。

「うん？何て言われたんだ？」

マトカルは顔を真っ赤にして、言いにくそうに口を開く。

「一晩中リノス様を離すなと・・・。策を話すまで、一晩中リノス様の上に乗って攻め続けろと・・・」

俺は久しぶりに、腹を抱えて爆笑したのだった。

第二百五話　見てないようで見てる

河原のあちこちで、たき火が焚かれている。その周囲には多くの人間が集まっており、一見すると、何か大規模な工事の指揮所のような雰囲気である。河原の奥に目を向けると、夥しい数のテントが見える。そして、その最奥には、二棟のロッジのような建物が見える。

そのうちの一つのロッジには、一人の少女と一人の少年が、司教たちと共に食事前の祈りを捧げていた。

「・・・我が主よ、我らに恵みを与え給え。そして、悪を滅し給え」

その祈りが終わるのを待っていたかのように扉が開かれ、一人の冒険者風の男が入室してくる。

「お食事中失礼します。ヴィエイユ様、森の出口までの道が、完成しました」

その声を聞いたヴィエイユの顔が明るくなる。

「まあ、それでは、アガルタの都に向かうことができるのですね？」

「はい。お食事を終えられましたら、移動したく存じます。おそらく今日中には森を抜けることができるでしょう。そして、森を抜けますと、アガルタの都まで三日ほどで到着する見込みです。ヴィエイユ様におかれましては、ご不便をおかけしますが・・・」

ヴィエイユは笑顔を湛えながら、祖父譲りの優しい声で答える。

「いいえ。このくらいは何でもありません。アガルタの人々を天道に導く者が、このくらいの不便を耐えられなくてどうしましょうか。ご心配には及びません」

その話を聞きながら、ヴィエイユの隣に座っていた女司教が声を上げる。

「さすがはヴィエイユ様。素晴らしいお言葉です。きっとヴィエイユ様のその、清廉で正しきお心で、アガルタ国は天道に従う国となりましょう。ヴィエイユ様が通られたこの道は、ゆくゆくは、ヴィエイユ様受難の道と呼ばれることになりましょう」

「いいえ、ジョリーナさん。アガルタ国が天道に従う国となるのは、私のおかげでも、私たちのお陰でもありません。偏に、クリミアーナ様の御導きです」

同席している司教たちから歓声が上がる。

「ここにお集りの皆さんに、クリミアーナ様のご加護がありますよう。さあ、冷めないうちに食べましょう。そして、食事が終わりましたら、すぐに出発しましょう」

笑顔でヴィエイユは司教たちを促した。

約一時間後、一行は、キャンプを張っていた河原を出発した。その後ろには数百人の信者たちが列をなして並んでいた。

これらは全員が、ヴィエイユたちと共に船でやってきた人々である。総勢七百人に及ぶ彼ら、彼女らは、実に多様な人々であった。司教

たちはもとより、数十名の魔術師、結界師をはじめ、腕の立つ剣士数百名、そして、様々な職業に従事している、選び抜かれた、誰よりも信仰心の厚い信徒たちおよそ四百名が従っていた。

この信徒たちは、実に忠実に司教たちの命令に従事した。どのような命令でも喜んで受けた。全員がヴィエイユやカッセルに仕えることに、無上の喜びを感じていたのである。

さらに信徒たちは、豊富な食料を始め、ヴィエイユとカッセルが過ごす部屋までも運んでいた。彼女らが過ごすロッジは組み立て式であり、ものの一時間もあれば組み上げることができる。それらの材料や資材を馬車に乗せ、彼らは土魔法で作られた平坦な道を、ゆっくりゆっくりとアガルタに向けて移動していたのである。

途中、魔物の襲撃もあったが、それらは問題なく魔術師と剣士たちによって排除された。剣士たちは冒険者風の格好をしているが、その服は魔法耐性に優れており、その下には、鎖帷子のような下着を着こんでいるという念の入れようだった。

ヴィエイユとカッセルはゆっくりと、アガルタに向けて歩を進めている。

「姉さま、相変わらず、とても歩きやすい道ですね」

「そうね。これだけの距離の道を作るのだけでも素晴らしいですが、平坦な道を作り続けているのも、素晴らしいですね。我が、教国の魔術師たちの素晴らしさが分かろうというものです」

二人の会話を聞いていた、女司祭のジョリーナが声をかける。

「この道は、かなり丈夫に作られているのですよ」

「ジョリーナさん、そうなのですか？」

「ヴィエイユ様も、カッセル様も、覚えておいてくださいませ。このアガルタに入るまでに歩いてきたイルベジ川は、春になると氾濫します。雪解け水が流れてくるのです。あと数ヶ月すれば、我々が歩いてきた道は、水に浸かってしまいます。そのために、水が引いた後でも使えるように、道を丈夫に作っているのです」

「素晴らしいですね。ジョリーナさんは、何でも知っているのですね！」

嬉しそうにヴィエイユはジョリーナの話を聞いている。

総勢七百名に及ぶクリミアーナ教、しかも世界中から選び抜かれた信徒が集まる首都、アフロディーテの信徒たちをもってしても、誰一人として気が付く者はいなかった。彼らの行動が、上空からフェアリードラゴンに常に監視されていることを。そして、彼らの会話の全てが、森の精霊たちによって聞かれていたことを。彼らの行動と会話は全て、リノス達に筒抜けであったのだ。

「ほう、なるほど。水が引いても道は使えるのか。それはありがたいな」

俺は執務室で手を叩いて喜んでいる。

「そのために、土魔法が使える魔術師たちは、森の外で倒れている

ようです」

報告をしているのは、ソレイユだ。

「だろうな。魔術師たちに同情するよ。いやしかし、森の精霊たちの情報収集能力は素晴らしいものがあるな。ソレイユが味方でよかったよ」

「ご冗談を。私がこのような能力を得ましたのは全て、リノス様のお陰です」

「そうか？」

「ええ。リノス様のお情けを受けなければ、このような能力は得られませんでした。最愛の方からお情けを頂戴できただけでなく、このような素晴らしい能力まで頂戴しました。女として、無上の喜びです。あとは、リノス様のお子様を授かれば、私の望みは全て達せられたと言っても過言ではありません」

「まあ、それは、神のみぞ知るというやつだ」

「確かに仰る通りですが、努力しないことには授かるものも授かりません。いつでも、いつでも私をお召くださいませ。いつ何時でも駆けつけます。夜、皆さまが寝静まった頃に、私の部屋にお見えになってもよろしいですのよ？」

「お・・・オホン」

マトカルが顔を赤らめながら咳払いをしている。

「まあ、私としたことが！マトを忘れていましたわ」

「ソレイユ殿、臍の下の話は・・・ここでは・・・」

「アラ、いいではないですか。ここにいるのは、リノス様と私、そして、マトだけですもの。それともマトは、リノス様のお情けはいらないと仰るの？」

「う・・・そういうわけでは・・・」

「ソレイユ、真昼間からそういう話を明け透けにするもんじゃないな。少し慎しもうか」

俺の厳しい言葉に、さすがのソレイユも少々へコんでいる。

「まあ、何だ。今後も引き続き、森の精霊たちにクリミアーナの連中の監視を続けさせてくれ。頼りにしているぞ、ソレイユ」

「はい、畏まりました」

俺はソレイユに小さく頷くと、執務室の窓を開ける。

『サダキチ』

『お呼びでしょうか』

『ガルビーの様子はどうだ？』

『お待ちください』

そう言ってサダキチは姿を消す。そして数秒後、再び俺の前に現れる。

『ほかの船からはまだ、上陸していないようです。都までの道中も、一つの塊以外見当たりません』

『わかった。ご苦労』

サダキチが消えたのを確認して再び窓を閉め、俺は執務室の机に座って目を閉じる。

「・・・ということは、先発部隊がアガルタに着いてから、後発の部隊が出発する算段か？アガルタからガルビーまで船で一日だから・・・。道を作りつつ輸送手段を確保して、ヤツらの拠点となる場所の目ぼしが付けば、一気に信者をアガルタに送り込もうってか？だとしたら・・・。随分慎重な動き方をするんだな」

俺は目を開けて、マトカルに視線を向ける。

「マト、さっきも聞いた通り、クリミアーナの先発部隊が森を抜けそうだ。お前は一足先にクリミアーナの一行の所に行き、小娘と坊主をここに連れてきてくれ」

「二人だけか？」

「まあ、お付きの司教たちも付いてくるというだろうから、そいつらも連れてこい。来るの来ないのとゴチャゴチャ抜かしやがったら、俺にクリミアーナ様の神託があったと言え。勿体付けながら言えよ？」

「わ・・・わかった」

「あ、無理しないでいいぞ?芝居ができないなら、できないでいい。マトは芝居がヘタクソだからな」

「そんなことはない。これでも一軍を率いる身だ。冷静沈着な振る舞いには自信がある」

「顔を真っ赤にしてモジモジしながら、今日は・・・しなくても大丈夫だ。ってたまに言うのは、ありゃ芝居か?その割には、抱きしめると俺を離さないけどな」

「な!?そんな・・・。ううう・・・。へ、臍の下の話は・・・」

マトカルは真っ赤になって俯いている。

「しない約束だったな。スマンスマン」

俺はソレイユと顔を見合わせながら、フフフと笑みを漏らした。

第二百六話　ニケの色気とローニの食い気

マトカルは馬車を仕立てて、クリミアーナの小娘と坊主を迎えに行った。それと入れ替わるようにして、メイとローニが執務室に転移してきた。

「今度はメイとローニか」

「え？」

「いや、こっちの話だ」

「ご主人様、お喜びください。キリスレイ撲滅の研究が一歩前進しました」

「え？マジで？？」

驚く俺の顔を見て、にこやかな笑顔を交わすメイとローニ。二人とも嬉しさが込み上げてきている。その笑顔のままメイが口を開く。

「先日、サンダンジ国で採取した犬の唾液を大ネズミに注射したところ、キリスレイと同じ症状を発症しました。おそらく、ですが、犬を媒介として感染している可能性が高いです」

メイの説明を補足するかのようにローニがぴょこんと頭を下げて、口を開く。

「今、チワンさんたちが継続して実験していますが、二十匹の大ネ

ズミに、犬の唾液を注射したところ、十一匹がキリスレイと同じ症状を発症しています。この先、さらに大ネズミに感染が確認される可能性が極めて高いです。ということは、キリスレイに感染している犬に噛まれると、かなりの確率で人間は感染すると予想されます。リノス様、恐れ入りますが、サンダンジ王にこの旨をお話しいただきたいのです。サンダンジ国でキリスレイが大流行する可能性があります」

「なるほど。わかった。今すぐ行くのか？」

「はい。一旦、我々でサンダンジ王にお目通りを願ってきます。それが許されるのであれば、ご主人様に転移していただきたく思います」

「わかった、任せるよ。じゃ、メイに結界を張ろうか」

結界を張り終えると、メイとローニはすぐさま転移していった。

「よく考えれば、キリスレイは狂犬病……みたいなものだよな？詳しいことはわからんが……。ああ～やっぱり、勉強しときゃよかったな。それにしても、クリミアーナとキリスレイ・・・。やれやれ、気の休まる時がないな」

俺は天井を見ながら、独り言を呟く。そういえば、クリミアーナの小娘が持ってきた饅頭がまだ残っていたな。濃い緑茶と飲めば疲れは飛ぶだろうか。ああ、前世の頃、贔屓にしていた和菓子が食いたいな。そうそう、東京・両国にある、あの伝説の和菓子屋は絶品だったな。銀座のあの店の、最中は美味だった。瓢箪のお菓子もおいしいんだよね。あとは京都か・・・。北大路のお菓子屋、その手前の駅にあるお菓子屋は美味いが高かったな。和風カステラ、クッキ

ーの店・・・。食いてぇな・・・。

「ご主人様」

「うおっ！」

和菓子のことを思い出していたら、突然声がして、ビビってしまった。見ると、メイとローニが転移してきていた。

「サンダンジ王がお会いになるとのことです。恐れ入りますが・・・」

「ああ、分かった。一緒に行こう」

・・・転移する直前にアガルタの和菓子屋、ヤワサの店でお菓子を買ってくればよかったと、ちょっぴり後悔しつつ俺はサンダンジ国の王宮に転移する。

俺の姿を見つけると、衛兵がすぐさま王宮内に通してくれ、謁見の間に案内してくれる。そこではサンダンジ王、ニケが待ちわびたように部屋をウロウロしている光景が目に入った。

「おお、アガルタ王。キリスレイの原因が分かったとは、誠か？」

「ええ。まだ確定ではありませんが、高い確率であるとは思います」

「・・・やはり、クシャナミナか？」

俺は静かに頷く。

「まさか・・・。我らが友であり、家族であり、子供であるクシャナミナが・・・」

呆然とするニケに、メイが諭すように話しかける。

「サンダンジ王様、お気持ちはよくわかります。しかし、早く手を打たねば、キリスレイが大流行する可能性があります。これ以上、サンダンジ国民の友であり、家族であり、子供であるクシャナミナと、サンダンジ国の皆さんをキリスレイに感染させるべきではありません。サンダンジ王様、お気をしっかり持ってください」

ニケは驚いたような顔をしながら、メイの顔をじっと見つめている。そして、小さく頷いた。

「よろしいですね？では、ローニさん、お願いします」

メイはニケの顔をじっと見て、彼が落ち着きを取り戻したことを確認して、ローニの顔を見る。ローニはぴょこんとお辞儀をして口を開く。

「我々が確認している感染経路は、キリスレイに感染している犬の唾液です。感染している犬に噛まれると、その唾液が人間の体内に入り、感染していると考えます。先日、キリスレイに感染している犬から採取した唾液を、二十匹の大ネズミに注射しましたところ、わずか数日で十一匹がキリスレイに似た症状を発症しています。サンダンジ王様におかれましては、キリスレイに感染している犬を隔離していただきますよう、お願い申します」

ニケは無表情でローニに視線を向けている。そして、落ち着いた声で口を開く。

「・・・ローニ殿、キリスレイに感染しているクシャナミナの特徴は？」

「はい。先日、こちらで拝見させていただきました白い犬は、常に興奮状態にあり、非常に攻撃的でした。おそらく、調教師の方も手を焼かれるのではないかと思います。まずは、常に興奮状態であり、誰かれ構わずに噛んだり襲ったりしている攻撃性の強い犬、狂気を感じさせる犬を、隔離いただければと思います」

「・・・わかった。誰ぞある。グラワンスを呼べ」

そう命じてニケは目を閉じた。彼なりに心の整理をする時間が欲しいのだろうと察した俺たちは、しばらく無言で彼を見守った。しばらくして、グラワンスが部屋に入ってきた。

「王、お呼びでしょうか」

「常に興奮状態にあり、常に攻撃的な姿勢を取っているクシャナミナを、すぐさま隔離せよ。国中の、該当するクシャナミナを、調べよ」

「王、それは・・・」

「グラワンス、主命だ。王の命令は、絶対だ。・・・わかるな？」

「・・・畏まりました」

苦虫をかみつぶしたような顔をしてグラワンスは頭を下げる。

「グラワンス、許せ。隔離したクシャナミナについては、手厚く、手厚く保護せよ」

ニケの言葉に、グラワンスは何も返答することなく、一礼をして足早に部屋を後にした。

「・・・グラワンスの名誉と、誇りを傷つけたな」

息をゆっくりと吐きながらニケは呟く。俺たちはただ、静かにニケを見守っている。

「アガルタ王」

不意にニケが言葉を発する。俺は彼に視線を向ける。

「あなたは、優秀な部下と・・・妃をお持ちだな。うらやましい」

「ありがとうございます。しかし、妃とは・・・？メイリアスはここにはおりませんが？」

抜け抜けと俺は返答する。それを聞いてニケは、メイに視線を移す。

「そのポーセハイはおそらく、メイリアス殿であろう？」

思わず俺は固まる。なぜ、バレたんだ？ＬＶ５の結界なのに！そんな俺たちを見ながら、ニケはニヤリと笑みを漏らす。

「ポーセハイが転移する時は、一人ひとりそれぞれが転移していた。しかし、彼女だけは何故かローニ殿と一緒に転移している。初めはそのスキルがないものだと思っていたが、ポーセハイは全員が転移

スキルを持っていると聞いた。で、あれば、誰かが変装していると考えるのが普通であろう。しかし、何度見ても変装には見えなかったが、今日、話をしてみてわかったのだ。私に気をしっかり持て、などという者はそういない。我が母にも、そのようなことは言われた記憶がない。私が知る限り、そのような胆力があるのはただ一人。メイリアス殿だけだ。違うか？」

俺はその言葉を聞いて思わず笑みを漏らす。

「ご名答です。さすがですね。ええ、このポーセハイは、我が妻であるメイリアスです。ポーセハイに見える結界を張っていたのですが、まさか、そのような形で見破られるとは思いませんでした。俺の結界を見破った人間は、そうはいないですよ？」

そう言って俺は、メイの結界を解除する。

「やはり、メイリアス殿か。いつ見ても、美しいな」

メイはにっこりと笑って、俺の後ろに隠れるようにして立つ。ニケはメイの姿が見えなくなって、ちょっと残念そうだ。それを見て、ローニが口を開く。

「サンダンジ王様、我々はこれより、キリスレイの特効薬の開発にかかります。それまで、お手数ではありますが、キリスレイに感染している可能性のある犬の隔離を、よろしくお願いいたします。また、その隔離した犬をお借りするかもしれません。その時は是非、ご協力をいただきますと嬉しく思います」

「・・・わかった。ただし、条件がある」

「条件・・・ですか？」

「ローニ殿、しばらくこのサンダンジ王国に留まっていただけないだろうか？この国にキリスレイに感染している者も多くいよう。その者たちを助けてもらいたいのだ。貴殿は実に優秀な医者だ。できれば、王宮の専属医師として迎えたいくらいだ」

ニケの言葉に、ローニは相変わらず毅然とした態度を見せる。

「私はまだ、未熟者です。そのような大役は務まりません。これまで通り、アガルタとサンダンジを行き来しながら、研究と患者の治療を並行して行いたく思います。どうしても、医師を常駐させたいのであれば、チワンさんに相談ください。それすらも認めぬ、とおっしゃるのであれば、私は、このお仕事を遠慮させていただきます」

ニケは目を丸くして驚いていたが、やがて、ニヤリと笑みを見せた。

「ローニ殿は手厳しい。わかった。貴殿は今のままでよい。医師の常駐はチワン殿に相談してみよう。・・・そうだ、ローニ殿を我が妃として迎えれば、貴殿はこの国に居てもらえるな？」

ローニはシャキッと背筋を伸ばし、再びぴょこんと頭を下げる。

「お断り申し上げます。僭越ながら、サンダンジ王様は私の好みではありません」

「これは手厳しい。フフフフ・・・」

ニケは満足そうな顔で頷いていた。結局、ローニもメイも、今のままでいいということになり、俺たちは謁見の間を後にした。

「まさかニケから口説かれるとは、ローニもやるな？」

俺の質問にローニは無表情で答える。

「多くの女性と交わる男性は、嫌いなのです」

「ほう、それは初耳だな。ということは、五人も嫁がいる俺は、ローニは嫌いってことか？」

ローニの顎がゆっくりと上がっていく。そして、絞り出すように声を出す。

「おいしい食事を作る方は・・・その限りではありません」

「なんだ・・・。ローニはやっぱり、色気より食い気なんだな」

ローニはすました表情をしている。それを見て、俺とメイは笑顔を交わし合うのだった。

第二百七話　なんねぇだ！行っちゃなんねぇだ！

俺たちがサンダンジ国から帰ってきた次の日の夕刻、マトカルがアガルタの都に帰ってきた。出発した時に率いていた馬車と、予想通り数名の司教を連れて。

司教たちは馬に乗ってやって来た。全員が上手に馬を操っている。それだけ見ても、このクリミアーナ教国の司教たちが、一筋縄ではいかない曲者だということが分かろうものである。

奴らは都に到着するとすぐ、マトカルに伴われて迎賓館の謁見の間にやってきた。

「アガルタ王様、しばらくぶりでございます。我らが主神様、クリミアーナ様のご神託があったとか。是非是非、承りたく、取るものも取りあえず参上いたしました」

ヴィエイユは目を輝かせて、笑顔で話をしてくる。俺は苦笑いをしながら彼女に返答する。

「取るものも取りあえず・・・か。馬車に揺られて優雅な旅に見えたが、気のせいか？」

「とんでもないことでございます。私は一刻も早くアガルタ王様の下に参りたいと思っておりました。あいにく私は馬に乗ることができません。そのために、馬車に揺られながら、ひたすらクリミアーナ様に一刻も早くアガルタの都につきますようお祈りを申し上げておりました。その願いが通じ、日没までに、こうして謁見が叶いま

した。クリミアーナ様のご加護に感謝申し上げます」

そう言ってヴィエイユは祈りのポーズを取る。

「ふ～うん。確かに、お前たちをここまで運んできたのは、かなりの早さだったと思うが、それは、馬車を操る者のウデでも、それを先導し、安全で最短の道を進んだマトカルのお陰ではないのだな？」

「いいえ。むろん、馬を操られた御方や、先導された・・・そちらの御方もすばらしいと思います。その方々にも、クリミアーナ様がご加護を下されたのでしょう。さらに、いつも以上の力を発揮されたのだと思います」

俺は思わず失笑する。マトカルを見ると、彼女は呆れたように首を左右に振っている。

「いいな、その考え方は。ラクに世の中を生きられそうだ」

「王様！ご神託を承りたく、お願い申し上げます！」

ケラケラと笑っている俺にイラついたのか、小娘の横に控えていた小僧が、若干キレ気味に俺に話しかけてくる。俺は笑顔を湛えたまま、その小僧に話しかける。

「まあ、そう焦るな坊主。慌てる乞食は貰いが少ないと言うだろう？」

「坊主・・・」

俺の言葉が気に障ったのか、小僧は俺を睨みつけている。ヴィエイ

ユは、その小僧の方にそっと手を置いて宥めている。

「アガルタ王」

よく通る声が部屋中に響き渡る。司教のコフレシだ。

「おお！コフレシ君。コフレシ君じゃないか！いや～久しぶりだな。会えてうれしいよ。元気そうで何よりだ。うん、何よりだ、何よりだ」

俺はわざとらしく頷いて見せる。コフレシはその挑発には乗らず、落ち着いた声で話しかけてくる。

「アガルタ王、恐れ入りますが、ご神託の内容をお教えいただきましょうか。我らにとって、クリミアーナ様からのご神託は、極めて重要なのです。お察しください」

小娘と小僧、そして六名の司教たちの視線が俺に注がれている。俺は、ゴホンと咳払いをして、姿勢を正す。

「一つ聞くが、今、ガルビーの沖合に、お前たちの船が十数隻やって来ているよな？あの船に乗っている奴らは全員、このアガルタにやってくるのか？」

クリミアーナの連中は互いに目配せをしつつ、何事かを確認している。そして、ヴィエイユが口を開く。

「はい。世界中の信徒が、このアガルタを楽園にするためのお手伝いをしたいと、参っております。間もなく敬虔な信徒たちが、このアガルタに到着するものと思われます」

それを聞いて俺は、ややオーバーアクションながらも、左手で顔を覆う。

「ああ～それか～。クリミアーナ様がおっしゃっていたことは～」

「どういうことでしょう？」

コフレシが落ち着いた声で聞いてくる。

「コフレシ君、クリミアーナ様はこう仰ったのだ。信徒を集めてはならぬ。集めてはならぬ、と。何でも、信徒を一か所に集めるのは、クリミアーナ様はお許しにならないのだそうだ」

「それはどういう意味ですか？」

小僧がしゃしゃり出てくる。

「知らん。俺はただ、夢で聞いたことをお前らに伝えようとしているのだ。意味を知りたけりゃ、坊主、お前が聞いてこい。・・・天国でな！」

小僧は目を見開いて俺を見ている。俺はそれにかまわずに言葉を続ける。

「なるほど・・・。ガルビーの沖に到着しているクリミアーナ教の信徒が、全員、アガルタに来るのか・・・。一体どのくらいの人数だ？十や二十じゃないよな？少なく見積もっても・・・数千か？ということは、クリミアーナ様の、信徒を集めてはならぬというお告げに反することになるよな？」

俺はクリミアーナの連中を見渡す。ヤツらは全員表情が無くなっている。

「諸君、ガルビーにいる信徒に伝えるのだ。なんねぇだ！行っちゃなんねぇだ。行けばえれぇ目に合うだ・・・とな」

「恐れながら申し上げます」

ヴィエイユが静かに口を開く。

「アガルタ王様がお受けになった神託は、果たして、クリミアーナ様ご本人様なのでしょうか？」

「うん？どういう意味だ？」

「こう申し上げては何ですが・・・。アガルタは大魔王が降臨した地、ややもすると、同じような邪悪なる存在が降臨する可能性もございます。もしかすると、邪神がアガルタ王様の夢に侵入されたのではないでしょうか？」

「なぜ、そう言える？」

「我が主神様であるクリミアーナ様は、信徒が集まる場所には、必ずご加護を授けてくださいます。我らクリミアーナ教が栄えておりますのも、そのためでございます。そんなクリミアーナ様が、信徒を集めてはならぬという神託を、しかも、アガルタ王様に下されるのは、いささか腑に落ちません。ここは一度、よくよく吟味なされるのがよろしいかと存じます」

ヴィエイユの話に、クリミアーナの連中は全員が頷いている。そして、小僧が再び口を開く。

「ヴィエイユ姉さまの仰ることはごもっともであると思います。そう言えば、アガルタ王は未だ、洗礼がお済みでないと伺っております。我らの洗礼を受けていただき、クリミアーナ様の敬虔な信徒となられて後、その神託を再び受けられたのであれば、我々も納得いたします。クリミアーナ様は寛大なお方です。一度、ご神託を聞き入れなかったとしても、我ら信徒の生死にかかわる重大事であれば、必ずもう一度、神託を授けてくれるはずです。まずは、アガルタ王の洗礼を、先に行いましょう」

小僧は両手を前に出して、俺を抱きしめんばかりの態勢で話をしてくる。それを、隣のヴィエイユは愛おしそうな眼差して見ている。

「カッセルの言う通りだと思います。アガルタ王様には、邪悪なる悪魔が憑いている可能性がございます。このままでは、アガルタ王様はもとより、ご家族、ご家来、ひいてはアガルタ国すべてに災いが降りかかります。そう、あの、大魔王が降臨した時のごとく・・・。そのような悲劇は繰り返すべきではございません。我らの主神様、クリミアーナ様は、洗礼を受けた敬虔な信徒は、必ずやそのような邪悪なる者どもを排除してくれます。アガルタ王様、どうぞ、我らの洗礼をお受け下さいませ」

「アガルタ王様、ヴィエイユ姉さまの仰る通りです。聞き及びしましたところ、アガルタ王様は見事な剣をお持ちですとか・・・。しかし、その剣は邪悪なる悪魔どもまでは斬れないかと存じます。我がクリミアーナ様は、そのような邪悪なる悪魔どもから守ってくださいます。ぜひ、洗礼をお受け下さいませ」

ヴィエイユとカッセルは満面の笑みを湛えている。俺はじっと二人の話を聞き、それが終わると、スッと立ち上がり、肩を張る。

「オホン。無形の陰鬼、陽魔、亡霊は、九字真言を持ってこれを切断せんに、何の難きことやあらむ」

・・・謁見の間に、微妙な空気が流れる。リノスは、小声で「勧進帳知らねぇのか」などと呟いている。

「う・・・オホン。そこは、してまた山伏のいでたちは！なんて名調子で言ってくれると問答が盛り上がるんだが・・・知らねぇよな？ああ、いい。こっちの話だ。まあ、何だ。信じる、信じないはお前らの勝手だ。俺の話が信じられないのならば、好きにしろ。ただし、天罰が落ちても、俺は知らんからな」

俺はそう言って、コフレシに視線を向ける。

「コフレシ君は、俺が言っていることは、分かるな？」

コフレシは眉間に皺を刻んで、無言で俺を睨みつけている。

「ああそうだ、コフレシ君。例のものは、例の日の、例の時間に、例の方法で、君に与えられるそうだ。楽しみにしていろ？よかったな？」

俺の言葉を聞いてコフレシはさらに顔を強張らせた。

「まあ、洗礼云々より、先に話し合うことがあるだろう？後のことは、お前らで一度、相談するんだな？」

そう言って俺は、クリミアーナの連中を退出させた。

「・・・リノス様、クリミアーナの連中をあのように刺激して、大丈夫なのか？」

マトカルが不安そうな顔で聞いてくる。

「心配するなマト。奴らが動かないのであればそれもよし。大挙してアガルタに来るのであれば、その時は追い返すまでだ。さて、ヤツらはどう出るかな？」

俺は意地悪そうな顔をして笑う。その様子をマトカルは、強張った顔で見つめるのだった。

第二百八話　天罰

雪がちらつく冬の寒い日であるにもかかわらず、アガルタの都にある迎賓館の一室は、窓が開け放たれていた。その窓辺には、一人の男の姿があった。国王のリノスである。彼は、窓から見える一面の銀世界を、何かを食べながらじっと見ている。そのリノスの背後に、人影が見えた。

「・・・寒くないのか？」

話しかけているのはマトカルだった。リノスはちらりとマトカルを見る。しかし、相変わらず何かを食べ続けている。

「結界を張っているからな。問題ない。基本的に、結界の中では一番適温になるように調整している。あれ？マトに結界を張っていなかったか？」

「攻撃を受けない結界は張ってもらったが・・・温度までは・・・」

「おお、そうだったか。じゃ、結界を張りなおそう。・・・ほらよ」

「・・・暖かい。・・・便利だな、リノス様の結界は。・・・一緒にいると、どんどん自分がヤワになりそうだ」

戸惑いながら呟くマトカルをチラリと見て、リノスはニヤリと笑う。そして彼は、机の上に置かれた箱に手を伸ばして何かを取り、それを口の中に放り込むのだった。

その時、窓の外に数匹のフェアリードラゴンが現れる。リノスは、寒風が吹き込む窓辺に立ち、彼らと対峙している。

『・・・なるほど。この寒風の中、接舷を始めたか』

『はい。船から続々と人が降りてきています』

『ヒーデータからも人の集団が向かって来ています。あと一日くらいでイルベジ川に到着すると思われます』

『ニザ公国からも、人の集団が移動しています。こちらは、あと数日はかかる見込みです』

『わかった。ご苦労だったな。褒美だ、食え』

俺はそう言って、小娘がお土産に持ってきた店の饅頭をフェアリードラゴンたちの口の中に放り込んでやる。彼らは尻尾を振りながら姿を消した。それを見届けて俺は窓を閉め、マトカルの方向に振り返る。

「マト、ニザとの国境に軍勢を展開させろ。クリミアーナの信徒が来るようだ」

「ニザからも来るのか？奴らは・・・国境で追い返せばいいのか？」

「いや、そいつらは入れてやれ。ある程度の人数がいないと、小娘たちも楽園が作れないだろうからな」

俺はニヤリと笑う。

「そしてマト、クノゲンを呼べ。早急にだ」

「わかった」

しばらくすると、マトカルに伴われて、クノゲンがやって来た。

「クノゲン、すぐにガルビーに向かってくれ。沖合に停泊していたクリミアーナの船が接舷を開始しているようだ」

「わかりました。すぐに行って上陸を阻止します」

「いや、上陸させるのは構わん」

「どういうことですか？」

「上陸は構わんが、アガルタに向かうことは禁じる。奴らを一歩もガルビーから出すな」

「リノス様、それでしたらいっそのこと、上陸を阻止したほうがよろしいかと思いますが・・・」

「いや、上陸は許可してやれ。そして、アガルタに出発するのは三日遅らせろ。なんだかんだとぬかしやがったら、クリミアーナ様の神託が俺に下ったのだと言え。それでも、無理やり出発しようとするやつらは、放っておいて構わん。とにかくクノゲンは、クリミアーナの出発を三日遅らせてくれ。それだけでいい。そうしないと天罰が下るとか言っておけば、大丈夫だろう」

「ははぁ。また、何かよからぬことを企んでおいでですな？わかりました。そのように致しましょう」

「すまんな。クノゲンもマトも、決して無理はするな。マトはクリミアーナの連中が無事にアガルタに入るのを確認したら、すぐに戻ってこい」

「わかった。見守るだけでいいのだな？」

「ああ。ただし、軍勢に危害を加えたり、ナメたことを抜かしやがったりするのであれば、遠慮なく追い返せ。一戦になれば、奴らは死を恐れない兵士になるからな。そこは覚悟しておけよ？なるべく、そうならないように願うが・・・それは・・・できるな？」

「任せてくれ。ヤツらを大人しくさせつつ、アガルタに連れてくるのだろう？問題ない」

「よし。寒いから気をつけて行けよ？帰ってきたら、俺が温めなおしてやる」

「りっ・・・リノス様が先ほど結界を張ってくれたおかげで寒くはない。大丈夫だ」

マトカルはそう言って部屋を出ていった。クノゲンはその様子を見て苦笑いしている。

「顔が真っ赤でしたな」

「マトはこういう話には免疫がないからな。ついついやってしまう

んだよ」

「あまりやりすぎますと、リコレット様に怒られますぞ？」

「おおう！そりゃイカンな。そうならないように、自重するよ」

俺はクノゲンと二人で声を出して笑い合った。そして、クノゲンはガルビーの街に転移していった。

「さてと・・・俺も行くか」

クノゲンを見送った俺は、背伸びをして、執務室を後にした。

その日の夕方、ガルビーの港は混乱を極めていた。接舷した船から上陸した数百人に及ぶ信徒と、アガルタの兵士たちとの間で小競り合いが起こっていた。

「あなた方は何なのですか！なぜ、我々の進路を塞ぐのです！」

「我々はこのアガルタを楽園にするために来たのです！なぜ我々の邪魔をするのですか！」

「我らはクリミアーナ様の信徒。我らの進路を邪魔すると、天罰が当たるぞ！」

罵詈雑言にも似た言葉が、兵士たちに浴びせられる。しかし、アガルタの兵士たちはそのような挑発には一切乗らず、全員が表情を変えることなく、押し寄せるクリミアーナの信徒を押し返している。

一部の信徒はスキを見て通り抜ける者もいたが、兵士たちは一切興味を示さず、淡々と押し寄せる信徒たちを押し返すことに専念していた。

その時、数人の司教が、群衆を分けるようにして兵士たちの前に進み出て、怒りの声を上げた。

「クリミアーナ教の司祭長、カーリです。あなた方の司令官をお出しなさい！あなた方は誰の命令で、このようなことをするのですか！あなた方の王であるアガルタ王は、我々クリミアーナ教の入国を許可しているではありませんか！にもかかわらず、我々の移動を妨げるのは何故なのです！司令官を出しなさい！司令官を・・・うわっ！」

カーリと名乗る司祭長は、兵士たちの間から伸びてきた手に胸ぐらを掴まれ、そのまま引っ張り込まれていた。彼は息を荒げながら、自分の胸ぐらを掴んだ手の主を探す。

「・・・アガルタ軍の副司令官、クノゲンです」

声は自分の頭上から聞こえてきた。思わず頭を上げると、そこには人のよさそうな顔をした、しかし、体格のいい小柄な男が立っていた。

「あなたが司令官ですか。一体どういう・・・」

「神託が下りましてな」

「え？」

「我が王、リノスに、先だってクリミアーナ様からご神託があったのです」

「何？まさか・・・」

「本当かどうかは私には分かりませんがな。何しろ私はクリミアーナの信徒ではないのでね。我が王はこのような夢を見たそうです。クリミアーナ様が、信徒を集めてはならぬ、集めてはならぬ・・・。と、それはそれは悲しそうな声で仰られたそうです。すすり泣いて・・・もおられたのでしたかな？とにかく、クリミアーナ様は、信徒を集めてはならぬ、と仰ったそうです」

クノゲンはもっともらしそうに頷きながら、カーリに諭すように話しかけている。

「しかし、既にここガルビーには十隻を超える船が集まってしまった。このままではクリミアーナ様の御意に叛くことになりますな？本来ならば一艘一艘の船にお知らせしたいところでしたが、時間がありません。そこで主、リノスは、ここ三日間は、クリミアーナの皆さんは船にて避難していただくようにとお命じになられました。そのために、ガルビーから出ることを止めているのです」

「避難？どういうことですか！」

「ほら、天罰が下る可能性もありますからな？」

「天罰？なにを言うのだ。我々は敬虔なクリミアーナ教の信徒です。主神様であるクリミアーナ様から見れば、我が子も同然の我々。何で罰が下りましょうか」

カーリは豪快に笑う。その彼の耳に、聞きなれない音がどこからともなく聞こえてくる。そして、その音は徐々に大きくなってくる。

「な・・・なんだ、この音は?」

「ははぁ。思ったより早く、天罰が下るのですな?」

クノゲンは空を見てニヤリと笑う。その笑顔をカーリーは忌々しそうな顔をして睨みつけた。その瞬間、彼は目を見開いて固まった。

彼が見たものは、イルベジ川の上流から大量の鉄砲水が、アガルタ兵の制止を突破したクリミアーナの信徒たちを飲み込みながら流れてゆく光景だった。

第二百九話　上げ潮と下げ潮

「あちゃー。ちょっとやりすぎたか？」

俺は上空で思わず声を漏らす。魔力の込め具合を間違ったかもしれない。

俺は今、アガルタとラマロンの国境に来ていた。そして、イリモに乗ったまま上空を旋回している。眼下に見えるイルベジ川は水位が大幅に上がり、濁流となっている。

クノゲンがガルビーに転移したのを見送った俺は、イリモに乗ってこの国境付近に来ていた。一面の銀世界に包まれた幻想的な光景が広がっている。山間部のためか、雪が降り続いており、積雪量もかなりのものだ。そんな光景を楽しみながら、さらにイルベジ川の上流を目指していく。イリモの翼で飛ぶと、すぐに標高の高い雪山が見えてきた。

「あれ・・・は？」

しばらくイリモに上空を旋回してもらい、場所を選んで地上に降りてもらう。

「おお、すげぇな・・・」

何とそこには、巨大な氷瀑が出現していた。縦も横も数十メートルに及ぶだろうか。巨大な氷の壁がそこにあった。その迫力と幻想的

な光景に俺はしばし見とれる。

「滝が凍るというのは聞いたことがあるが・・・。まさかこれほど見事なものだとは思わなかったな」

「キレイです・・・」

イリモもその光景をうっとりと眺めている。俺はイリモの体を撫でてやる。

「ちょっと勿体ないけど、やるか。ま、この寒さだ。また滝は凍るだろう」

凍るには凍るだろうが、おそらく二度と、この形に凍ることはないことは容易に想像できたため、俺はしばしこの光景を目に焼き付ける。

「よし、じゃあイリモ、頼む」

再びイリモに跨った俺は、上空に舞い上がり、滝の頂上に至る。そこには雪山に囲まれた小さな湖があった。

俺は小さな灼熱弾を目の前の雪山に向けて放つ。同時に、湖と氷瀑に向かってファイヤーボールを投げる。一瞬のうちに氷の壁が崩れ落ち、その直後、目の前の雪山から大量の雪が湖に向かって滑り落ちるようにして流れていく。しかも、雪深く突き刺さっているにもかかわらず灼熱弾の炎は衰えず、雪が炎を纏いながら滑り落ちていく光景は、言葉で言い表せない程の幻想的な光景を生み出していた。

その炎を纏った雪が湖に滑り落ちた瞬間、雪が一瞬にして溶けて、

大量の水が滝から落ちていった。まるで、水がいっぱいに入った巨大なバケツをひっくり返したかのような風景だった。しかも、灼熱弾で溶かした雪は、周囲の山の雪の一部も溶かしており、一気に湖の水位が上がっている。

「おおう！見事な光景だが・・・。やりすぎたな？こりゃ、しばらくはイルベジ川は増水することになるな」

上空からは大量の水が川下に向かって流れていくのが見える。俺はイリモに雪山の頂上に降りてもらい、その直後、アガルタとラマロンの国境に転移する。

そこは、先ほどとは打って変わって静寂が支配していた。しんしんと降る雪の音だけが聞こえている。しばらくこの雰囲気に包まれていたい気持ちになったが、それを振り切るようにして再びイリモに乗って上空に至る。すると、川上の方からすさまじい濁流がやってきているのが遠目に見える。

「……予想以上だな。まあ、あのあたりに人家はないから人的被害は心配なさそうだが……。ただ、森の精霊たちには怒られるかもしれんな。あとでソレイユに言って状況を確かめないとな」

そんなことを呟きながら俺は、濁流が国境まで迫ってくるのをじっと眺めていた。そして、とんでもない水量が俺とイリモの足元を通り過ぎる。

「おおー。すごい水量だな。まあ・・・。このくらいの水位なら、大丈夫だろう」

そう言って俺は、帝都の屋敷に帰った。

アガルタとラマロン皇国の国境に通じる森の出口に、二棟のロッジが立てられている。そして、その周囲にはおびただしい数のテントが張られている。言うまでもなく、クリミアーナ教国の首都、アフロディーテから移住してきたクリミアーナ教国の者たちのキャンプである。そのロッジの一室では、和やかなティータイムが催されていた。

「・・・すべて合わせると、およそ三万ですか」

優雅な振る舞いで紅茶を口に運んでいるのはヴィエイユである。彼女を含む六人の司教たちとカッセルは、思い思いに菓子を口に運んでおり、リラックスした空気がそこにあった。その雰囲気を壊すことなく、司教の一人であるコフレシが笑顔で口を開く。

「ええ。ガルビーからはおそらく一万を超える信徒がイルベジ川を上ってきます。さらに、ヒーデータ経由でも一万近い信徒がイルベジ川を経由して、このアガルタにやって来ましょう。そして、ニザ経由でも、数千の信徒がやってくるとのことです」

「なるほど・・・。やはり、アガルタの周囲の国から信徒を移動させるとなると、このくらいが限界ですか」

「アガルタ自体が、山に囲まれた場所にありますから・・・。なかなか周辺国とはいえ、簡単に移動できるものではありません」

「そう考えると、アガルタがガルビーを支配下に置いていたのは、

我々にとって幸いでした。あそこの港がなければ、我々を含め、信徒の移動はさらに困難なものとなったでしょう」

コフレシの後に言葉を続けているのは、女司教である。その言葉を聞いて、ヴィエイユは鷹揚に頷く。

「そうですね。これも偏に、クリミアーナ様のご加護のお陰でしょう。我々をアガルタに差し向けるべく、クリミアーナ様が導かれたのでしょう。もちろん、道を作って移動しやすくするという案を考えたカッセルの働きも大きいですね」

その言葉を聞いてカッセルの口角が少し上がっている。それを愛おしそうな眼差しで見ていたヴィエイユは、さらに言葉を続ける。

「三万もの信徒が集まってくるわけですから、それなりの場所が必要になりますね。さて、我々の楽園を作るのは、どこがいいでしょうか？やはり、アガルタの都近くがいいでしょうか・・・」

「姉さま。そしてみなさん。僕から提案があります」

自信満々の顔をして立ち上がったのはカッセルだ。

「今、我々が逗留しているこの地に楽園を作ればいいかと思います。ここには森もあり、水もあります。そして何より、イルベジ川を上ってくる者たちと合流するのに好都合です。さらに、ここは船に乗ればガルビーまで半日で行くことができます。また、アガルタの物資も、この川沿いを経てイルベジ川に至ります。ここを押さえると、アガルタの物資も、場合によっては押さえることができます。どうでしょうか？」

司教たちは顔を見合わせているが、反対する者はいない。その様子を見てヴィエイユは口を開く。

「カッセルの案はとても説得力があると思います。皆さんいかがでしょうか？」

司教全員が頷く。それを見てヴィエイユは満面の笑みを浮かべて宣言する。

「ではここに、クリミアーナ教国の総力を結集して、この地に楽園を築きましょう。カッセル、素晴らしい考えを、ありがとうございます」

ヴィエイユの視線を受けてカッセルは、嬉しそうに頷いた。

「ヴィエイユ様。本格的な建設は、ガルビーに停泊している船から資材が運び込まれてからになりましょう。それまでは、続々とやってくるであろう信徒を迎える準備をしたいと思いますが、いかがでしょうか？」

「素晴らしいですね、コフレシさん。ぜひ、そうしてください」

「畏まりました」

コフレシは恭しく一礼し、ロッジを後にした。

「・・・アガルタ王には早く洗礼を受けていただきたいのですが、クリミアーナ様を騙る邪神に心を操られているようです。しかし、我らが作る楽園を見れば、聡明なアガルタ王のこと、きっと目を覚ましていただけるでしょう。クリミアーナ様が天罰をお下しになる

など・・・。あり得るはずがありません」

ヴィエイユは笑顔で口を開く。そして、その笑顔のまま、一人の司教に視線を移す。

「ニエデスさんは、ご苦労ですが、ニザからやって来る信徒たちを迎えに行ってあげてください。あと、残った皆さんはアガルタの都に、クリミアーナ様のありがたい教えを広めに参りましょう」

ヴィエイユの言葉に、全員が笑顔で頷いた。彼女たちは知らない。リノスが仕掛けた鉄砲水が、想像を絶する地獄を生み出すことを。そして、その光景はクリミアーナの人々、とりわけヴィエイユには大きなトラウマとなり、長年苦しみ続けることになることを。

アガルタの大地は、太陽に照らされた、一面の銀世界が美しく大地を彩っていた。

第二百十話　順調と挫折

二月になった。この月は、リノス家にとっては娘たちの誕生月であるため、一年の中でも最も大切な月であると位置づけられている。リコレットとの間にできた長女、エリルは二月二日が誕生日であり、メイとの間にできた次女、アリリアの誕生日は二月二十八日、しかも、一歳の誕生日ということもあり、リノスのテンションは三日ほど前から、ちょっとおかしなことになっていた。

「ズンダッダダダっ、ズンダッダダダっ、ズンダッダダダッダ～ん。ハアッ！」

またしても、不思議なメロディーを鼻歌で歌いながら、何やらご機嫌の様子なリノスは、ダイニングのテーブルで書き物をしている。そんなリノスの足元に、ヨチヨチ歩きの子供がまとわりつく。

「エリルー。アリリアー」

娘の名前を呼びながら、リノスは二人を膝の上に抱き上げる。

「エリル、アリリア。パパの邪魔をしてはいけませんわ」

「いいよリコ。別に急ぎのことじゃないから大丈夫だ」

「まあ、でも・・・」

リコの心配をよそに、リノスは二人の娘を抱き上げてあやしている。ここ最近、二人の娘はつかまり立ちから、伝わり歩きをするようになってきていた。そんな娘たちが、リノスは可愛くてならない。最近の彼は、寄ると触ると子供たちを抱っこしている。

「リノス・・・。あまり甘やかしすぎては・・・」

「何言ってるんだリコ。どうせ大きくなったら、パパ臭いからイヤ、とか言われるんだ。いつまでこの子たちが抱っこさせてくれるのかわからないんだぞ？ヘタすりゃ、五歳くらいで恋人できるかもしれないんだぞ？そうなれば・・・。いや、待て、エリルは既に陛下の息子のアローズ殿下と婚約してるな。となればだ、この子を抱っこできるのはあと何回だ？そう考えたら・・・。俺は抱っこをする！時間と体力が許す限り、抱っこをするんだ！」

そう言ってリノスは、子供を抱っこしたまま、ダイニングを出て行ってしまった。

「リノス・・・」

そう呟き、半ばあきれながらも、リコはその姿を微笑ましく思う。そして、リノスが書いていた紙に視線を向ける。そこには、エリルとアリリアの誕生日に出す食事のメニューが書かれていた。

「・・・こんなに作って、誰が食べるのかしら？カースシャロレー四頭？何を作る気かしら？」

リコが考えているさなかに、突然ダイニングの扉が開き、リノスが入ってくる。

「リコ！リコ！エリルが喋ったぞ！」

「まあ・・・」

「さっき、トウサン、って言ったんだ！エリル、もう一回ママの前で言ってごらん！さあ、さあ！」

満面の笑みでリノスはエリルを促している。対してエリルはポカンとした顔をリノスに向けている。

「ほうら、エリル」

「・・・まま」

「え？」

「ママ」

「まあ、エリルは、ママと喋れるようになったのですね？偉いですわ！賢いですわ！」

リコはリノスの腕にいるエリルに満面の笑みを投げかける。

「リノス、明日はエリルの誕生日ですわ！盛大にお祝いしましょう！明日は私が、腕によりをかけて食事を作りますわ！」

「ああ、いや、リコ・・・明日はその・・・スキヤキを・・・」

「お任せください。スキヤキの他にも、沢山作りますわっ！ペーリス！フェリス！ルアラ！シディ！ソレイユ！ちょっと来てください

な！」

ひとりテンションが上がっているリコを見て、リノスは苦笑いを浮かべる。

「まさか俺以上にリコがハジけるとは・・・予想外だな。それにしても、エリルはすごいな。一歳で言葉を喋るのは早い方じゃないか？こりゃ、アリリアももうすぐ喋るのかな？二人とも順調に成長してるんだな。・・・おいおいリコ、そんなデカイ鍋持ち出して、何作る気だ？これは・・・明日はチワンやローニたちだけじゃなく、ラファイエンスやクノゲンたちも呼んだ方が良さそうだな」

リノスは、エリルとアリリアを抱きながら、明日招待するメンバーを頭に思い浮かべるのだった。

一面の銀世界に覆われた草原。その中に突如としてテント村が出現している。二棟のロッジを中心に、それを囲むようにして、草原だけでなく川を越えた森の中にまでテントが立てられている。雪の中におよそ数千に及ぶテントが並ぶ光景は、ある種異様と言えた。それに加えて、あちこちの場所で、同じようなロッジに似た建物が建設されようとしている。

そのテント村の中心にあるロッジの一室では、先ほどから重苦しい沈黙が流れている。テーブルには、数名の司教たちが居並んで座っており、その一番奥の椅子には、一人の少女と一人の少年が座っている。彼らの視線は、ちょうど部屋の入り口に立っている男に向けられていた。その男の服はくたびれ果てており、足は泥にまみれ、

顔は疲労の色が色濃く出ていた。

「ガルビー沖に停泊している方々が、アガルタに来られないとは・・・。どういうことでしょう?」

言葉を発したのは、ヴィエイユだ。いつものように微笑みを湛えてはいるが、声にすこし怒気が混じっている。

「ガルビーに上陸することができません。そのため、シルエナイ、ナライブツ、カトワタルロ、ホーエインス、ザカリ、ゲイランの各国々からの船は一旦、自国に引きあげることとなりました」

ヴィエイユを始めとした司教たちの目が大きく見開かれる。その中の一人である、司教のコフレシは唾を飲み込みながら口を開く。

「何故です?何故、我々の命令なく勝手に引き上げるのですか!」

「ガルビーに鉄砲水が発生したのです。それ以後、川の水が増水して、我々は川を上ってくることができなくなりました。ガルビーからの物資が届かないのは、そのためです。私はラマロンから大きく迂回してここまでやってきましたが、イルベジ川が増水していたために、渡河するのに多大な労力を費やしました。あの川を、信徒が渡るのは不可能です。ましてや物資を満載した荷台が渡るなどは・・・。それに、アガルタ王に再び神託が下っておりまして・・・」

「神託?」

「信徒を集めてはならぬ、との神託があったようです。ガルビーの鉄砲水は、そのお告げを守らなかったためであると考えます」

ヴィエイユの顔は凍り付いている。そんな中、カッセルが声を上げる。

「やはりこの国はまだ、大魔王の影響下にあるのではないでしょうか・・・」

カッセルがそう思うのも無理はない。実を言えば、ヴィエイユたちクリミアーナ教が当初立てた計画は全て頓挫し、現在は打つ手のない状況に追い込まれていたのだ。

彼らは当初、アガルタの都近くに、クリミアーナ教国からの移住者が集まる集落を作る予定であった。圧倒的な物量で、わずかな日数であっという間に都市を建築し、クリミアーナ教国の国力を見せつける。そして、豊富な食料と共に潤沢な資金で、アガルタの都の食糧を買い占め、一時的に食料不足の状況を作り出そうとしていた。

イルベジ川は春になると増水する。そうなれば一時的とはいえ、アガルタの物流は滞る。その時を見計らって食料の買い占めを行えば、一時的とはいえ、都の人々に不安を与えることができる。一度、大魔王に支配され、内戦を経験し、苦汁をなめた経験のあるアガルタ国民である。再びその惨禍が起こるのではないかと思うそのスキを狙って、教国が食料援助を行う。特に信徒には手厚い支援を実施することで、人々にクリミアーナ教への関心を高める。その後、クリミアーナ教を布教すれば、多くの信者獲得につながる。そうしてアガルタの国中に信者の数を増やしていき、最終的にアガルタを乗っ取ろうという算段であったのだ。

これはある意味でクリミアーナの常套手段とも言えるやり方であった。人心の不安につけこみ、それを解決することで信者を増やしていく。そのために敢えて災害や騒乱を起こすことも厭わなかった。

そのお陰もあってクリミアーナ教は順調に信者を増やしていき、世界中に拠点を持つ国家に成長したのである。

しかし、アガルタは違った。手始めに布教に出かけたアガルタの都では、クリミアーナ教は歯牙にもかけられなかった。食料は十分にあり、精強な軍隊を持ち、資金も潤沢。そして何より、都の人々全員が、王であるリノスを信頼していたのである。司教が大魔王や疫病をはじめとした、様々な不安をあおっても、人々は必ずこのような返答を返した。

「リノス様が居るから、大丈夫」

「この国のヤツらはいい奴ばっかりだから、大丈夫」

ある司教などは、この真冬のさ中であるにもかかわらず、褌一つに半纏を纏った、恐ろしく薄着の男に一喝されたのだ。

「バカ野郎！何を信じてもいいが、人をテメエの信心する神サマに誘い込むんじゃねぇ！ケジメってぇものがねぇのか！テメエは！」

ガルビー沖の停泊している船に積んでいる、大量の物資が到着しないという事実。さらに、リノスが聞いたという、信徒を集めてはならぬ、というクリミアーナ様からの神託。ヴィエイユたちクリミアーナの人々にとって、受難ともいえる出来事がこの先、待ち構えているのだが、ヴィエイユたちはまだ、それを知らない・・・。

第二百十一話　ヴィエイユ受難。でも、まだ序の口

アガルタの大地を覆っていた雪がようやく解け始めた。暖かく吹く風は、待ちに待った春の訪れを告げている。しかし、その訪れを感じる余裕のない者がここにいた。クリミアーナ教国のヴィエイユたちだ。

彼女たちは雪解けを待たずに、教徒だけが住む村の建設を開始した。ニザ公国を経由して持ち込まれた物資を活用しつつ、寒さと戦いながら森の木々を切り倒して材木を作り、それを加工して、自分たちが住む住居を作り始めた。そして、それと並行して村の周囲に城壁も作っていた。その速さはリノス達の予想を超えるものであり、春を迎える頃には、その七割が完成していたのである。

ここまでは、ヴィエイユたちクリミアーナの思惑通りであった。移住者数は予定していた三分の一程度ではあったが、本国の選び抜かれた精強な兵士と、熟練の域に達している技術者たちをここに連れてくることができていた。言わば教国の最精鋭の人間が揃った、実に効率的な集団となっていたのだ。それだけに、村の建築は小規模で済んでいたし、食料も十分にあり、あと一年は暮らしていけるだけの備蓄があった。あとは、アガルタの民をクリミアーナ側に引き込みつつ、ジワジワと勢力を拡大していけばよかったのだ。もし、それに危機感を抱いたアガルタが攻撃でも仕掛け来ようものであれば、練達の兵士をもって全力で返り討ちにして、そのまま都を陥落させ、ついでにその近くに作られた獣人村を滅ぼしてしまおうと考えていた。

しかし、ここで予想外のことが二つ起こった。一つは、アガルタに

おけるクリミアーナ教の信者が全く増えないことであり、もう一つが、結露の問題であった。

深刻なのは結露であった。村はしばしば家屋の外にも、中にも結露が発生した。それを防止するべく、ヴィエイユたちは様々な対策を行ったが、有効な改善策は見いだせなかった。結果、春を迎える頃には、あちこちの建物にカビが生え、そのために何ともいえぬ不快な臭いに包まれていた。中にはキノコが生えている家も見られるようになっていたのだ。

当然、彼らの寝床となるベッド、その上に敷かれているシーツの類、さらには衣服などにもカビが生えていた。普通の人間であればすぐにでも逃げだすような不快な環境であるが、信徒たちはそれでも、持ち前の精神力で耐え続けていた。

また、彼らはアガルタのあちこちで民衆と諍いを起こしていた。とりわけ都の人々からの信用はゼロであり、徐々にではあるが、彼らはアガルタの国民から忌諱される存在になりつつあった。

「・・・わかりました。引き続き、続けてください」

司教の報告を聞き終わったヴィエイユは、できるだけ鷹揚に振る舞おうと努めていた。しかし、全身から発せられる倦怠感と、彼女が無理して振る舞うその動き一つ一つが、惨酷なまでに痛々しい姿を周囲に見せつけていた。

「ヴィエイユ様・・・」

声をかけているのは司教のコフレシだった。

「少しお休みください。とは言いましてもこの環境・・・。しかし、あと数日で新しい家も出来上がります。そうしましたら、そちらの家に移られて、お休みください」

その言葉を聞いたヴィエイユは、ニコリと微笑みを返す。

「他の信徒たちも、私と同じようにこの環境に耐えているのです。私一人がそのような特別な待遇を受けるわけには参りません。そのお心だけで結構です」

コフレシはしばし俯いていたが、やがて意を決したように口を開く。

「ヴィエイユ様、この地を離れましょう。新たな場所に、我らが住まいを求めてはいかがでしょう?」

「何を言っているのです!」

珍しくヴィエイユは語気を荒げて答える。

「これまで、この村を築くのにどれだけの労力を使ったと思っているのですか!村の建設は予定通りなのです。たかが、カビが生えているからと言ってむざむざこの地を放棄すると、さらに我がクリミアーナはアガルタの民から誹りを受けることになるでしょう。それに、この場所はアガルタの喉元です。ここに我々が居ることは、アガルタ王の喉元に刃を突き付けているのに等しいのですよ?そこを離れるなど・・・。これもクリミアーナ様が与え給う苦難。これを乗り越えてこそ、我々は真の主神様の僕となることができるのです。コフレシさん、あなたの、クリミアーナ様への忠誠心は、そのような薄っぺらいものなのですか!」

ヴィエイユの、普段見せない怒りの表情に、コフレシはただただ恐縮している。

「も・・・申し訳ございません。このコフレシ、浅はかでございました」

「わかればいいのです。必ず、必ず、クリミアーナ様は我らをお助けくださいます。春になれば、暖かくなれば状況も変わります。あと少しです。我らはまだやることがあります。畑を作り、作物を育てなければなりません。この村を繁栄に導くのです。我らの力を見せつけるのです。そうすれば、アガルタの民も必ずクリミアーナ様のご加護の力を思い知るでしょう。ここが正念場です。コフレシさん、頑張りましょう」

コフレシは何度も頭を下げながら、部屋を後にしていった。そして、それと入れ替わるようにして、カッセルが部屋に入ってきた。

「姉さま・・・」

「ああ、カッセル。今、コフレシさんが・・・」

「外で聞いていました。姉さま・・・。姉さまの考えは正しいと思います。ただ・・・」

「ただ、何かしら、カッセル？」

「やはり、この国は未だ大魔王の影響下にあるとしか思えません。ここは一度、本国に、教皇聖下に相談・・・」

「無用です」

「姉さま！」

「アガルタ王以下、この国の民は、我らクリミアーナ教を、主神様の尊い教えを受け入れませんでした。この国は必ず天罰が落ちることでしょう。教皇聖下に報告しても、我らに敵する者どもを滅せよと仰るに違いありません。我らはここに楽園を築くのです。私たちはこの村を繁栄に導かねばなりません。我らに敵する邪悪な者どもに鉄槌が下るとき、この国の民は自らの愚かさに気が付くのです。それには、この村が繁栄していなければなりません。アガルタ国に再び地獄絵図のような光景になった時、ただ一つ繁栄し、平和な楽園が存在していた。我らはそうならねばなりません。カッセル、あなたも力を貸してください。ああ、そうです。今一度アガルタの民にこのことを説いて回りましょう。今ならば間に合うと・・・」

ヴィエイユはそう言うと、いそいそと外出の準備をして部屋を後にした。その姿をカッセルは何も言うことができずに、見送るしかなかった。

ヴィエイユは、数名の司教と共にアガルタの都に向かい、そして、布教を始めた。クリミアーナ様がどれだけ偉大なお方であるのか。一方、この国に待ち受ける恐ろしい未来を迫真の表情で語って聞かせた。そして、それを救うことができるのはクリミアーナ様のご加護だけであることを熱っぽく語り、最後に、クリミアーナ村がその救いの場所であることを、やさしい眼差しで語って聞かせたのだった。

自分自身でも満点をつけてもいい、会心の出来だった。ヴィエイユ

は、自身の布教術に絶対の自信を持っていた。現に、これまで様々な土地で布教活動を行ってきたが、どの地域でも彼女の神々しい雰囲気と、その圧倒的な説得力を持ったプレゼン能力で、数多くの信者を獲得してきた。その彼女が満点をつけるほどの出来栄えだったのだ。しかし、彼女の周囲に集まったアガルタの人々の反応は、冷ややかなものだった。

「その邪悪なる者ってのは、いつ来るんだ？」

「近い未来、近い未来です！」

「まあ、リノス様がおいでになるから大丈夫だろう」

「いいえ！アガルタ王様では到底太刀打ちできない程の強大な、邪悪な存在なのです！そう、その昔・・・」

「あの王様で太刀打ちできない相手なら、どこに逃げても死ぬしかないぞ？まあ大丈夫だって。あの王様なら何とかするだろう。都に居ないのなら話は別だが、昨日も市場で買い物してたからまあ、大丈夫だろう。ところで、リノス様でも太刀打ちできない相手って、どんな格好してるんだ？」

「それはそれは邪悪な・・・。邪悪な・・・邪悪な・・・」

「嬢ちゃん、あんまり大人をからかうんじゃねぇよ」

そんな会話がどこに行っても繰り返されるばかりだった。さらには、そうしたヴィエイユを見かねて、食べ物や飲み物などを差し入れてくれた都の人もいたのだが、そんな人々に対しても、彼女たちはいつもの対応をやり続けた。

「この寒さの残る日に湯を下さるとは・・・。これもクリミアーナ様のお陰です。主神様に感謝いたします」

当然、施しをした人は、何とも言えない表情を浮かべながら、彼女たちから離れていくのだった。

この日も全く成果を得ることなく、日も暮れかかってきた。ヴィエイユたちは仕方なく帰路につこうとしたその時、一人の男が重そうな石を抱えて歩いているのが見えた。ヴィエイユたちは、その男に近づき、その石を一緒に持った。しかし、男の反応は予想外のものだった。

「オイ、触るな！触るんじゃねぇ！」

「いいえ、手伝います。重いでしょ？手伝います。お気になされずに」

「触るなって言ってんだろうがぁ！ああっ！」

たまらず男は石を放り出すようにして地面に置いた。

「バカ野郎！一人で持つ方が楽に運べるんだ。お前たちが持つと重心が崩れるんだよ！仕事の邪魔するんじゃねぇや！こちとら、日暮れまでに親方の現場までコイツを運ばなけりゃならねぇんだ！邪魔するねいっ！」

そう言うと男は、よっこらせっと石を持ち上げ、再び歩き出したのだった。

村に戻る途中、司教の一人が呟くように口を開いた。

「アガルタ王は結界が得意だと聞いた・・・。もしや、我らクリミアーナ教を拒む結界を都に張っているのでは・・・」

「そうかもしれませんね。きっと・・・そうなのでしょう」

力なくヴィエイユは呟く。もはや彼女たちには、この会話が荒唐無稽な内容であると判断する気力さえも失われつつあった。しかも、その話はある意味、半分当たっていたのだが、そのことは当然、知る由もない。そんな中、ヴィエイユは頭を小刻みに振りながら、折れそうな心を奮い立たせる。いけないいけない。私が弱気になってはいけないわ、と。そして、必ずアガルタ王を、この国の民を見返してやろうと、強く心に誓うのだった・・・。

第二百十二話　リノスは、与えて取る

「はぁぁ・・・。そんなことになっていたとはな」

俺はソレイユと共に風呂に入りながら、クリミアーナ村の報告を聞いていた。ヤツらがアガルタに入った時からずっと、サダキチたちと共に森の精霊たちにも監視を頼んでいたのだ。

「クリミアーナの人々は森の木々を乱獲し、さらには、自分たちの住居を建てる場所を確保するために、森を焼いています。適度に木を切るのであれば問題ないのですが、彼らの行いは度を越えています。森の精霊たちが怒るのも、無理はありません」

「で、ヤツらはその、森の精霊たちの呪いにかかっているってことか」

「呪いというよりは、精霊たちの嫌がらせです。あの村全体の湿度が異常に高いのは、森の精霊たちが水の精霊たちと協力してやっているためです。そのせいで彼らの住居はカビだらけですし、中にはキノコが生えている家もあります」

「ヤツらにイヤがらせをしろと命じたのは俺だが、まさかこんなことになるとはな。それにしても、冬の間、ずっとジメジメした中で生活していたのか・・・。クリミアーナの連中はよく耐えているな。すごい精神力だな」

「ええ。私もすぐに音を上げると思っていたのですが・・・。意外に忍耐力がありますわ。でも、さすがに彼らの心も折れそうになっ

ています」

「だろうなぁ。その時、ヤツらがどう出るかだな。大人しく教国に帰るといいんだがな」

「リノス様は、まだクリミアーナの人々が何かをするとお考えですか？」

「窮鼠猫を噛むというからな。追い詰められた人間は何をするかわからん。そもそも、他国にいきなり大人数で押しかけて、その国をぶん取ろうとするヤツらだ。普通なら戦争になるが、ヤツらは敢えてその戦争を起こして、国々を占領してきた。そりゃ、死ぬことを恐れない兵士が居るんだ。余程の戦力差がない限り負けることはないよな。そんなヤツらと正面からぶつかるのは得策じゃない。ここはひとつ、ヤツらに穏便にこの国を離れてもらうのが一番だ。ソレイユ、すまないが、これからも引き続きヤツらの動きを見張ってくれ」

「畏まりました」

「本当に、ソレイユが味方でよかったと思うよ」

「うふふ。私は、死ぬまでリノス様の味方ですわ」

「頼もしいな。・・・そろそろ上がろうか、ソレイユ」

俺たちは風呂から上がり、脱衣所でタオルを使って体を拭く。俺は自分の体を拭きながら、ソレイユの体も拭いてやる。彼女は何故か俺が体を拭いてやると、とてもうれしそうな顔をする。

「リノス様、お願いがあります」

「何だい？」

「ご褒美を・・・くださいませ」

「うん？」

「今夜は・・・」

「・・・わかった。今日は、優しいのがいいのか？乱暴なのがいいのか？」

「今日は・・・乱暴にしてください・・・」

「いいのか？ソレイユはすぐイヤイヤって言うからな～」

「それは・・・」

ソレイユは耳まで真っ赤にして照れている。そんなソレイユをお姫様抱っこをして、俺たちは部屋に向かった。

次の日、俺は執務室に座りながらあくびをかみ殺していた。昨日の夜は頑張りすぎた。ソレイユの大きな胸は反則だ。それに加えてあのエロさである。さすがはサキュバスの一族だけはある。昨日の晩は何とか俺が勝利したが、あと数年で俺は、ベッドの上の戦いにおいてはソレイユに敗北するかもしれない。そんなことを考えていると、執務室の扉がノックされる。俺は慌てて姿勢を整え、入室を促す。入ってきたのは、メイ、チワン、ローニ、そして、クリミアー

ナ教国から亡命しているグラリーナだった。

「おおメイ、どうした？」

「リノス様、キリスレイの特効薬について、報告に参りました」

チワンが落ち着いた声で俺に話しかけてくる。

「チワン、どうだ、特効薬は？」

「残念ながら、患者を完治させるまでには至っておりません。それと並行して、キリスレイ発症防止の薬を開発しておりまして、そちらの方が、何とか目途が立ちそうです」

「ほう」

「これはメイ様が発見されたのですが、コカトリスの毒とグラリーナの酸液を使うことで、キリスレイの発症が抑えられそうなのです」

「ほう、メイ。本当か？」

「まだ人体に投与していませんので何とも言えないのですが、ニ十体のオーガにキリスレイに感染した犬に噛ませてみましたが、発症しませんでした。さらには、症状が軽度である場合は、その進行もかなり遅らせることができるようです。これについてまだ、確認段階なのですが・・・」

「すごいな。コカトリスの毒・・・だっけ？コカトリスって、人を石に変えるんだっけ？」

「はい。コカトリスの毒は、ドローパーサルミンフェイスの含有量が八十七パーセントです。それをグラリーナさんの酸液を八対二の割合で配合して、含有量を適度な濃度に抑えます。それをさらに、ソルフボンズ方式で抽出していきます。それにガタメランズをシトラールしますと、最大限の効果が発揮されます」

「・・・ああ。・・・うん。・・・わかった、メイ」

そのやり取りをチワンは笑いながら見ている。

「メイ様、実にわかりやすい解説ですが、おそらくリノス様には分からないかと思いますよ？」

「えっ？ああ・・・。すみません。ついつい専門用語で話してしまいました・・・」

「いい。いいんだメイ。効果が高そうなことは伝わった。大丈夫だ。それに、メイの困ったカワイイ顔が見られたから、俺としては大満足だ」

メイは顔を真っ赤にして俯いている。その様子をグラリーナは微笑ましそうに見ている。

「オ・・・オホン」

すかさずローニが咳払いしてくる。そして、チワンが口を開く。

「リノス様には、サンダンジ王様に、私どもが開発した予防薬を国の民に投与する許可を得ていただきたいのです」

「俺が？サンダンジ王に？」

「はい。キリスレイはこれに罹患した犬に噛まれると、高い確率で感染します。その罹患した犬が多くいるのはサンダンジ国です。早く予防する必要があります」

「わかった。そういうことなら、話をしてみよう。ところで、グラリーナ。どうだ、研究の方は？」

「はい。まだまだ学ぶことが多くて、付いていくのがやっとですが、充実しています」

「グラリーナは物覚えが早く、伸びしろがあります。きっといい研究者になります」

「チワンがそう言うなら間違いないだろう。ローニのいいライバルになりそうだな？」

その言葉にローニはツンとした表情をしてそっぽを向く。

「そう簡単に、後輩に抜かれる私ではありません」

「ハハハ、さすがはローニだ。頼もしいな。ローニは娘たちの主治医でもあるからな。これからも頼りにしているぞ」

そう言って俺は外出用の衣服に着替えて、サンダンジ国に転移した。

王宮で俺がやって来たことを告げると、すぐさま謁見の間に通された。しばらく待っていると、国王のニケがやってきた。

「アガルタ王はいつも出し抜けに来られるな」

「すみません」

「いや、謝る必要はない。ポーセハイの転移は便利だな。いつ見ても、うらやましい限りだ」

ニヤリと笑うニケ。そして、真面目な顔となり、口を開く。

「アガルタ王とメイリアス殿が揃って来られるということは、キリスレイに関して何か進展があったのか？」

「さすがはニケさんです。その通りです。ただ、これはあくまでお願い、なのですが・・・」

俺はキリスレイの予防薬についての話をする。ニケは微動だにせず俺の話を聞いている。

「いくらだ？」

「え？」

「その予防薬を全て我が国が買い受ける。望みの金額を言ってくれ」

ニケのあまりにも早い決断に、俺は思わず絶句してしまう。

「お金など結構です」

声の主はメイだった。これにはさすがにニケが固まってしまってい

る。

「あ・・・私・・・余計なことを・・・」

メイは両手で口を押さえて、小さな声で呟いた。俺も小声で呟く。

「いいやメイ、構わない。続けてくれ」

メイはスッと背筋を伸ばして、よく通る声でニケに話しかける。

「私たちが開発した予防薬はあくまでオーガでの実験でしか効果が確認できていません。もし、人体に投与すれば何かしらの反応が出るかもしれません。そのような段階の薬を使ってくださいとお願いしているのです。お金などいただくわけには参りません」

「し・・・しかしメイリアス殿・・・」

「ニケさん。妻のメイリアスの言う通りです。まだ人体での効果が確認されていない薬に、お金などもらえませんよ」

「サンダンジ王様。この予防薬の製造方法は、この国の研究者の方々にもお伝えします。是非、この国の研究者と私たちで、さらに効果が出るように研究をしていきたいと思います。できれば・・・この予防薬が犬たちにも効けばいいのですけれど・・・。それも含めて、これからは、より完璧に近い予防薬の開発に力を注ぎます」

「メ・・・メイリアス殿・・・。アガルタ王・・・。感謝・・・感謝する」

ニケは涙を流しながら頭を下げていた。

その後、ニケの命令ですぐさまサンダンジ国の中で、メイたちが作った予防薬が国民に投与された。それから一か月。心配された副作用やアレルギー反応などはなく、今のところサンダンジ国におけるキリスレイが新たに発生したという報告はない。

アガルタの雪が完全に解け、大地には春の花が咲き乱れるようになったある日、サンダンジ国から俺に一通の書簡と五つの箱が届けられた。ちょうどメイとチワン、そしてローニからサンダンジの報告を聞いていたところだった。タイミングのいいことに、この書簡を届けてきたのは、サンダンジ国の医療研究所に詰めているポーセハイのラセースだった。

「ニケさんから書簡？何だ？」

俺は箱の中から書簡を取り出し、目を通す。

『貴国からいただいた予防薬を民に投与してひと月。我が国において、キリスレイの新たな発症は確認されていない。これを以て、貴国が作られた予防薬は効果あるものと認める。せめてもの御礼として、予防薬の開発に携わった、リノスアガルタ王、メイリアス王妃、ポーセハイのチワン殿、ローニ殿、ラセース殿に、我が国の最高勲章であるクシャナミトラクリン勲章を贈与する。　我が生涯の友と、我が国を救いし聖女殿と賢者たちへ　　―サンダンジ・ウルハ・ニケ』

俺は思わず苦笑いを浮かべる。メイたちは顔を見合わせながら笑顔を交わしている。贈られた勲章を手に取ってみると、人間が犬を抱いている絵が刻まれた、純金と思われるメダルだった。俺は笑みを

漏らしながら口を開く。

「勲章にも犬がデザインされているんだな。結果的に、予防薬をタダでやった代わりに、サンダンジ国の絶大な信頼が得られたな」

「この勲章・・・かわいい。サンダンジ国らしいですね。しかし、まだキリスレイの特効薬ができたわけではありません。私たちは早く、それを完成させなければなりません。頑張りましょう」

メイの力強い声で、ポーセハイたちの顔が引き締まる。その様子を見て俺は、きっとこの病は撲滅に向かうだろうと、心の中で確信するのだった。

第二百十三話　とんでもない本音

「ご主人様、クリミアーナ村で異変が起こっているようです」

都にある俺の執務室でそんな報告をしているのは、ソレイユだ。森の精霊たちから連絡があったのだという。

「ここ最近、バタバタと村の住人が亡くなっているようです。そのためでしょうか、カッセル様がこの都に向かって出発したようです」

「クリミアーナ村で人が死んでいる……？疫病か？何やらイヤな予感しかしないが、とりあえず坊主がこちらに向かっているのか。ならば、ヤツの話を聞いてからだな」

俺の話を聞きながら、ソレイユは背中の羽をユラユラと動かしている。これは、何か楽しいことがある時の仕草だ。ちなみに、落ち込んでいるときは羽が小さくなり、逆に大きく開いているときは、疲れている時なのだ。ソレイユは笑顔で俺に答える。

「精霊たちの報告をいつも聞いているせいでしょうか。私も精霊たちと同じくクリミアーナが嫌いです。そのクリミアーナが滅ぶかもしれないのです。これが喜ばずに居られましょうか」

俺はその言葉に、苦笑いを浮かべるしかなかった。

カッセルが都にやってきたのは、その次の日だった。ちょうどメイとチワン、ローニとキリスレイの特効薬の開発についてこれからの予定を詰めていたその時、部屋の外で何やら言い争う声が聞こえた

のだ。

「駄目だ！駄目だと言っているだろう！」

「アガルタ王に、アガルタ王に会わせて下さい！」

「ダメだ！リノス様は今、お話し中だ！」

俺は扉に向かって声をかける。

「いいぞ～。話は済んでいる。部屋に入れてやれ」

しばらくして、扉がゆっくりと開かれる。そこにはカッセルが息を乱しながら立っていた。彼は俺の顔を見るとフラフラと部屋の中に入ってきた。そして、ストンと崩れ落ちるように膝をついた。

「どうした、坊主？ヴィエイユ姉さまと喧嘩でもしたのか？」

「・・・」

「坊主、黙ってちゃわからんぞ？」

「・・・助けて」

「うん？何？」

「助けてください。教徒を・・・ヴィエイユ姉さまを・・・助けてください！」

顔を上げて叫ぶカッセルの目からは、涙が溢れていた。そして、堰

を切ったように泣き続けた。いつもは生意気で強気な態度な小坊主が、こうして泣いている姿を見ると、まだまだ子供だ。

彼が落ち着くのを待って、メイが近づき、優しく背中を撫でている。よく見るとヤツの服のあちこちに、黒いカビが生えている。

「大丈夫。大丈夫ですから、落ち着いて。落ち着いてください。」

「村が・・・信徒が・・・ヴェエイユ姉さまが・・・悪魔に・・・邪神たちに・・・ううう・・・」

カッセルは涙をぬぐいながら、これまでの顛末を語り始めた。

冬の間、高い湿度と発生するカビに悩まされ続けていたクリミアーナ村であったが、雪が溶けだした頃から、森林の伐採を本格化した。理由は、自給自足の生活を送るために、彼らの腹を満たすだけの作物を生産する必要があったためだ。現在備蓄している食料は十分ではあるのだが、彼らは数年間のスパンでアガルタに逗留し、楽園をつくる計画であるために、田畑の開墾が必須であったのだ。

土を耕し、種をまき、肥料をまいて、とりあえず田畑の体裁を整えたのだが、その時、クリミアーナ村で異変が起こった。数名の人間が突然倒れ、そのまま亡くなったのだ。まさしく突然死というような死に方をしたため、自慢のクリミアーナの医師たちもどうすることもできなかったのだという。

その後しばらくして、再び数名の人間が突然死した。さすがにこれは何かあるだろうと手を尽くして調べたのだが、その原因がわからない。本格的に調査を始めたころから、突然死する人が増えた。ここひと月で既に四十数名もの人間が死んだらしい。

勝手に人の国に大勢で押しかけてきた挙句、楽園を作るなどと大言壮語をしたにもかかわらず、人が突然死するような疫病が発生している。これを機会に、国を出ていくのかと思いきや、その信徒たちを助けてくれなどと身勝手な言い分を、よくもしゃあしゃあと並べられるものだと、俺は半ば呆れながらヤツの話を聞く。コイツらがどうなろうと知ったことではないが、まあ、ヤツらの楽園を作ることは認めたのは俺なので、取りあえず今は、大人の対応を取ることにする。

「……なるほど。そりゃえらいことだな。で、坊主、お前は俺に助けを求めに来たが、もう一人の小娘はどうしている？まさか死んだんじゃないよな？」

カッセルはキッとした目で俺を睨みながら、口を開く。

「姉さまは……。ヴィエイユ様は、司教たちと共に、ひたすら祈っています」

「はあ？祈っているだぁ？」

俺は思わず頓狂な声を出す。

「で、何か効果は出ているのか？」

カッセルは目を伏せる。

「だよなぁ。お前の姉さまは一体何考えているんだ？」

「僕も、最初は、この国に大魔王の影響が残っているか、それに類

する邪神がいるのだと思っていた。そいつらが、我々クリミアーナの人間を排除しようとしているんだと思っていた。だから僕たちはありとあらゆる手段を講じて戦ったんだ。でも……。でも……。どうしようもないんだ。みんな死んでいくんだ。だから……だから……助けてほしい。助けてください、僕たちを、助けてください……」

カッセルは何度も何度も俺たちに頭を下げる。その無様ともいえる姿を見て、メイはずっと彼の背中を優しくさすっている。

「ご主人様……」

メイが不安そうな声を上げる。しかし、俺はこのカッセルの態度に違和感を覚えていた。俺は無言でヤツに鑑定を発動させる。

全てを見終えた俺はゆっくりと目を閉じる。どのくらいの時間が経っただろうか。実際はほんの数分のことだったのかもしれないが、俺自身はかなりの長い時間、考えていた気がする。ゆっくりと目を開けてカッセルを見ると、ヤツは視線を逸らせず、俺を見続けている。

「……坊主、俺が、お前たちを助けてやる義理は、ないな」

低い声でカッセルに話しかけると、ヤツの頬がピクリと動く。奥歯を噛みしめているようだ。

「さて、何から話そうか？まずは……お前らの最初の目的は、世論操作ではなく、ましてや俺の追放でもない。最終目標は、俺と、俺の家族をはじめとして、アガルタの人々を皆殺しにするつもりだったんだな？」

カッセルの体がピクリと動く。そしてヤツは小刻みに震え出し、俺から目を逸らした。

「クリミアーナの船が大挙してガルビーにやってきた段階で、お前らの狙いは世論操作だろうと考えていた。それは当たっていたようだな？アガルタの国中の食料をお前らが買い占めて飢餓状態を作る。同時並行でアガルタの人々の不安をあおり、信者になれば命は救われると説いて信者を増やしていく。そして信者たちには持ってきた膨大な食料を分け与えて、クリミアーナ様のお慈悲を見せつける。そうすれば、信者の数は飛躍的に増えていくと考えていたんだな。最終的にお前らはその世論を味方に、俺に天道に背く者たちの処刑を求める。即ちその対象は俺の家族たち。俺がそれを受け入れても、受け入れなくても、俺の家族を殺し、そして最終的に俺も殺そうとしていた。違うか？」

「違う！僕たちは、そんなんじゃない！本当に楽園を作ろうと思ったんだ！我らクリミアーナ教徒の楽園を……」

「我ら、クリミアーナ教徒の、楽園か？まあ、それは半分当たっているのだろう。しかし、ここに来てお前たちには予想だにしないことが起こった。当初予定していた移住者の大半が引き返してしまったこと。予想外に信者が増えず、むしろアガルタの人々から忌諱されてしまったこと。結露の問題。そして今回の疫病……。どうやらこの疫病は人に感染するらしいことまでは把握しているようだな？で、今のままではクリミアーナの人間が全滅する危険性もある。しかし……教国に帰るという選択肢はないようだな？まあ、それは俺の知ったことじゃない。そこで、その現場に、俺やメイ、あわよくばポーセハイたちをはじめとした、多くのアガルタの人間を呼ぶことによって、一人でも多くの人間をこの病気に感染させて、この国に蔓延させようってか？まあこの病に罹ればまず、助からないが、

それにしても、凄まじい捨て身の攻撃だな。しかもこれはお前の一存だな?誰にも相談せず、一人で勝手に動いてやがる。俺たちを村に呼び寄せたら、コイツはまだ病にかかっていない信徒と共に、逃げる算段をしていやがる。病に罹ったクリミアーナの信徒から、アガルタの民衆にことごとく病を感染させて、皆殺しにしようってか?その行動力と発想力は褒めてやってもいいが、激しく方向性を間違っている。というより、マジで頭が腐ってるな、お前?」

カッセルは俺の話を聞きながら、徐々に目を見開いていく。そして図星を突かれたためか、ヤツは突然激高した。

「僕の頭が腐っている?クリミアーナ様の御声を聞いたなどと、邪神に惑わされた者が偉そうなことを言うな!大人しく天道に従うのなら命は助けようと思っていたのに!この国の王も、民も、僕たちの言うことを聞きもしない!この国は天道に背く国だ!であれば、必ず我がクリミアーナが滅ぼさねばならない!必ずだ!・・・何だその眼は?僕を殺すか?僕を殺せばすぐにでも世界中のクリミアーナ教徒がアガルタを滅ぼしにやって来るぞ!やってみろ!やってみるがいい!何年かかっても、何十年かかってもクリミアーナ教徒はお前たちを殺す!天道に背く者は、クリミアーナ教に背く者は、必ず滅ぼすからな!どんな手段を使ってもだ!そうなりたくなかったら、僕の言うことを聞け!病に罹った我が敬虔な信者たちを助けろ!そうすれば僕から教皇聖下に命だけは助けてもらえるよう頼んでやる!早く僕たちを助けろ!」

「うるせえよ」

静かに呟くと俺は坊主に結界を張る。ヤツは身動きが取れず、歯を食いしばりながら俺を睨みつけている。

「坊主、ちょっとオイタが過ぎたようだな。しかし、今回は俺も勉強になった。自分の予想に慢心しちゃいかんな。俺にはまだまだ、裏の裏を読み通す洞察力が必要だったようだ。俺の甘さを気づかせてくれたお前には、礼を言うぞ？」

「ご主人様……」

メイがドン引きしながらカッセルの傍から離れ、思わず声を上げながら俺のところに移動してくる。

「バカ、ですね」

ローニが呆れたようにつぶやく。

「ああ、バカな奴だ。しかし、ここまでのバカだと厄介だぞ？バカなうえに追い詰められているから、なりふり構わずに行動してやがるだろう。ちなみに、泣いていたのも芝居だ。惜しいな、役者にすりゃ、そこそこにはなれたかもしれんな」

その話を聞きながら、チワンが落ち着いた様子で口を開く。

「何にしても、病の件が気になります。まずは一度村に行って調査をする必要がありますね。突然死していると言っていましたので、もしかすると、ルロワンスの可能性もあります。いずれにせよ、病気の特定をせねばなりません」

「さすがはチワンだな。ご明察だ。奴らの村で蔓延しているのは、どうやらルロワンスのようだ。死んだ人間たちは須らく顔や体に紫色の斑点が浮き出している」

「そうであれば尚更早急に対処したほうがよいでしょう。ルロワンスがアガルタに蔓延することだけは避けねばなりません」

チワンが落ち着いた様子で助言してくれる。俺はちょっと考えて、口を開く。

「チワンの言うことはもっともだ。早急にルロワンスの対策をしよう。まずはどうすればいい？」

「今のところこの国でルロワンスが発症しているという報告は、我々ポーセハイたちの間では上がってきておりません。おそらく、クリミアーナ村の中で発生しているものと思われますので、できましたら、その村全体に結界を張っていただければと思います」

「わかった。まずはチワンたちと俺たちに無菌状態になる結界を張った方がよくないか？」

「いいえ、無菌状態に慣れてしまいますと、結界が解除された時に抵抗力が落ちてしまいますから、それは現地で調査をする時で結構です」

「わかった。あとは・・・この坊主だな。コイツは俺の怒りに触れた。俺の家族を殺そうとしていやがったからな。家族の敵は許すまじ、というのが俺のポリシーだ。しかも、自分の従姉のヴィエイユも身代わりにしようとしていやがった。コイツには、死ぬよりも辛い思いを味わってもらわねばな」

「リノス様……」

目を丸くしているチワンを横目に見ながら、俺は口を開く。

「そもそもこの坊主は、まだ子供だ。自分の行動に責任を持てない上に、大人をナメくさりやがるガキは、キツイお仕置きをしなけりゃならん。おいお前、覚悟しとけよ？あとは・・・アガルタに来た信徒たちの対策も、もう一度練り直さなきゃならんな。俺も腹をくくらなきゃな。坊主、お前は無事にこの国を出られるとは思わんことだ」

その言葉を聞いてなお、カッセルは殺意を込めた目で俺を睨み続けるのだった。

第二百十四話　あだゆめ

俺は目の前の坊主に目もくれず、机の上の鈴を鳴らす。すぐに外にいた警護の兵士が執務室に入ってくる。

「ラファイエンスとクノゲンを呼べ」

兵士は一礼をして部屋を足早に出ていく。しばらくすると、ラファイエンスたちが執務室にやってきた。そこにはなぜか、マトカルも付いて来ていた。

「なんだ、マトも来たのか。まあいい。将軍、出陣です。クリミアーナ村に向かいます」

「おお！ついに攻めますか！待っていましたぞ！腕が鳴るな」

「いいえ、攻めるのではないのです」

「どういうことだ？」

「屈強な騎馬兵、二十名程度を集めてください。できれば、帝都の頃から将軍に仕えている者がいいですね。将軍には、倒れているクリミアーナの連中を介抱してほしいのです」

「介抱？」

「ええ。好みの女性を選んでいただいて、構いません。たっぷり抱きしめて、優しい言葉をささやきながら、介抱してあげてください」

「何と、そのような……」

半ばあきれ顔の将軍であったが、好みの女性にお触りができるためか、顔は満面の笑みを浮かべている。

「俺はイリモを連れてくる。メイ、チワン、ローニ、お前たちも付いて来てくれ。将軍たちと共に、門の前で待機してくれ」

メイたちは無言で頷く。

「リノス様」

「ちょうどいいマト、お前はこの坊主を連れてこい。伝染病に感染している可能性があるが、心配するな。結界を張ってある。しかも、ヤツの声は聞こえないように効果を付与してある。それごと連れて行ってくれ」

「わかった」

マトがカッセルを、まるでぬいぐるみを抱えるかのように小脇に抱えて部屋を出ていく。それを確認した俺は再び警備兵を呼び、都をはじめ、アガルタの街に居るであろうクリミアーナの信者を捕らえるように命令し、執務室から帝都の屋敷に転移する。そして、約三十分後、俺たちは王都の西門前に整列を完了していた二十名の騎馬兵と共に、クリミアーナ村に向けて出発した。メイは俺の後ろ、チワンはクノゲン、そして、ローニは居心地が悪そうにラファイエンスの後ろに乗っている。

「よーし。ついて来い！」

そう言って俺たちは風のような速さで都を離れる。どんどんと離れていき、やがて城壁が見えなくなったところで馬を止め、俺はマップで周囲の様子を探る。

「よし、誰もいないな」

俺はマトカルの所に行き、彼女の小脇に抱えられている坊主に目をやる。相変わらずヤツは殺意を込めた目で俺を睨み、何かを叫んでいる。

「坊やはネンネの時間だ」

そう言って結界内のカッセルを眠らせた。子供とはいえ、かなり重いはずだが、マトカルは全く問題ないという。寝た子は重たくなるものだが、彼女は平然とした顔で片手でヤツを抱えている。ちょっとマトを尊敬してしまった。

「一旦ここで全員に結界を張る。これから行く森には伝染病が蔓延している可能性が極めて高い。しかし安心しろ。常に結界内はキレイな空気で満たされている。結界内に病原菌が入ることはないだろう。しかし、予想外のことも想定される。各自十分注意するようにな。将軍以下、クノゲンたちにお願いしたいのは、村に住んでいる教徒たちを一か所に集合させることだ。動けない教徒はそのままでも構わん。集合場所は追って指示する。ちなみに、マトが抱えているあの坊主のような、白い衣装を着ている女がいると思うが、ソイツには手を出さないでくれ。そいつは、俺が話をする。全員、了解か？ではここで転移する！」

その声と共に、騎馬隊が一瞬にして姿を消した。

到着したところは、広い草原だった。ここは以前、ラマロン軍が攻め込んできた時に迎撃し、撃退した場所だった。その時の戦闘が懐かしく思い出される。しかし俺は、その思い出に浸ることなく、イリモをクリミアーナ村に走らせる。そして走ること二時間、俺たちはクリミアーナ村を眼下に捕らえた。

村の中は、静まりかえっていた。俺たちが村に入っても、テントの中からは誰一人として出てくることがなく、かすかに祈りの声が聞こえてくる程度だった。俺たちはどんどんと村の中に入っていく。すると奥から司教の一人が飛び出すようにして現れた。

「あなた方は、何者なのです！誰の許可を得て、この村に……」

「アガルタ王のリノスだ」

ずいっと前に進み出て宣言する。彼は一瞬戸惑った表情を浮かべたが、すぐに平静の顔に戻る。彼の顔には、紫色の斑点が二つほど出ている。

「一体何の御用でしょう？」

「いやなに、カッセル君が我々に助けを求めてきたのだ」

「カッセル様？」

彼はマトカルの小脇に抱えられ、ぐったりしているカッセルを見て目を丸くしている。

「彼が俺のところに来て、助けてくれと懇願したのでな。取るものもとりあえず飛んできた次第だ。何でも、人がバタバタと死ぬそうじゃないか？どうしたのだ、大丈夫か？あの小娘……ヴィエイユ殿はどちらにおられる。かわいそうに、カッセル君はヴィエイユ姉さまを、ヴィエイユ姉さまをと言いながら気を失ったのだ」

自分でも驚くほど気持ちの入っていない棒読みのセリフ廻しだ。そんな俺の話に、彼はしばらく目を泳がせていたが、やがて、ご案内しますと小さく呟いて、俺たちを案内した。

俺たちを案内している男はムーラックと名乗った。彼は俺たちの前を歩きながら時おり吐き気をもよおしていた。

俺たちは外の空気が入らない結界を張っていたために気が付かなかったが、どうやらこの村は、結露のために発生したカビが発する悪臭に加えて、亡くなった信徒たちが発する死臭も加わって、鼻がひん曲がるほどの腐敗臭に包まれていたのだ。

歩きながら周囲を見渡すと、家やテントは多く見られたが、人の姿はまばらだ。外に出ている人たちを見ると、皆、目がトンでいる。そして、我が主神様、お助けをと言いながら、ブツブツと祈りの言葉を呟きながら徘徊している。それを見ながら進むと、大きなロッジが見えてきた。ヴィエイユはそこに居た。

彼女は、壁の上に掲げられた絵に向かって、祈りをささげていた。俺たちの入室に気づいていないのか、一心不乱に祈りの言葉を呟き続けている。

「ヴィエイユ様……」

俺たちを連れてきた司教の声で彼女はピクリと体を震わせ、ゆっくりと振り返った。見ると顔中に紫色の斑点が出ていた。彼女はしばらく虚ろな目で俺たちを見ていたが、やがてギョッとした、驚いた表情を浮かべ、キョロキョロと周囲を見渡しながら、驚きを隠そうともせずに言葉を漏らした。

「アガルタ王様……なぜ、ここに？……ハッ！」

突然彼女は両手で顔を隠してうずくまる。

「見ないで。見ないでください！見ないで！」

「……なるほどな。坊主が言っていたのは、このことだったか。まあ、自業自得だが、お前たちにはまだまだお仕置きを受けてもらわねばな」

そう言って俺は、ヴィエイユを結界に閉じ込め、そして、そのまま彼女を眠らせた。

……柔らかなぬくもりに包まれながら、ヴィエイユは眠りから覚めた。よく寝た。こんなに良く寝たのはいつ以来だろう。ここ数か月は眠れぬ夜を過ごしてきた。久しぶりに感じる熟睡した感覚。寝すぎて、ちょっと体がだるい。今日も目覚めることができた。私は生きている。でも、またあの臭いと湿気、そしていつ死ぬのかわからない一日を生きなければならないのか。でも、私は教皇の孫。無様な姿は見せられない。起きなければ。クリミアーナ様にお祈りをささげなければ。そうしないと死が迎えに来るような気がする。いや

だ、まだ私は、死にたくない……。

折れそうな心を奮い立たせながら、彼女は起き上がる。すると、目に飛び込んできたのは、見たこともないような豪華な部屋だった。

広いフカフカのベッド。軽いが暖かい羽毛布団のようなシーツに彼女はくるまっていた。まだまだ寝ていたい感情を抑え込みながら、彼女はベッドから降りる。すると、隣の、これも大きなベッドにはカッセルが眠っていた。ふと顔を上げて辺りを見渡すと、明るく、広い部屋が目に入ってきた。豪華な内装、シャンデリア、そして身に着けている清潔で肌触りのよいパジャマ……。あまりの豪華さに彼女は目を見張る。そして、隣に寝ていたカッセルを起こす。

「何です姉さま……。あれ?」

「カッセル、ここはどこかしら?どうして私たちはこんなところに……」

「そうですね。ここは……って、姉さま!顔の斑点が!」

カッセルの驚いた声を聞いて、ヴィエイユは再び部屋を見渡す。すると、大きな姿見が目に入った。彼女は急いでそこに行き、自分の顔を確認する。

「……斑点が、消えている」

彼女の顔が驚きから安堵の表情に変わっていく。その時、部屋の扉がノックされ、美しいメイドが入ってきた。

「お目覚めでしょうか。ここは我が主の屋敷でございます。故あっ

て名前は申し上げられませんが、皆さまはアガルタの村から、こちらにお移しさせていただきました。隣の部屋には他の司教様たちもおられます。皆さまの病は大変重篤でしたが、ご安心ください。教国から秘蔵している特効薬が届きましたので、皆様に投与しております。もう、命の心配はございませんので、ご安心ください。また、我が主からの伝言でございます。体調と体力を回復させるため、四～五日逗留なされるとよい。村の信者たちにも、食料と清潔な服や布を配っており、村の環境は改善されています。十分体力と気力を回復させた上で、これからの戦略をお考え下さいとのことです。……そろそろ昼食の時間です。食事をお持ちします」

そう言ってメイドは部屋を後にした。ヴィエイユとカッセルは、まだ今の状況に思考が付いて行かずに、しばらく無言のままで顔を見合わせていた。そして、再び部屋のドアがノックされ、先ほどのメイドが食事を運んできた。美味しそうなパスタに肉料理、スープ、サラダ……どれも久しぶりに食べる温かい食事と、新鮮なサラダであり、しかもこれまで食べた食事の中で最も美味なものだった。二人は無言で、テーブルの上に置かれた食事を口に運んだ。

食事が終わり、食器が下げられると、入れ替わるように五人の司教たちが入室してきた。コフレシやジョリーナの姿も見える。二人の顔がぱあっと明るくなる。

「まあ、皆さんも？助かったのですね？」

「はい、ヴィエイユ様。ここはあの村から約一日の場所にある館です。どなたかのお屋敷かは教えていただけませんが、我々に薬を投与して病を治癒いただき、また、清潔な部屋と衣服も与えていただき、つい今しがたは、大変に美味しい食事も頂戴しました。ヴィエイユ様も、お顔が……。お美しいお顔が戻られました。よろしゅう

ございました。よろしゅうございましたね。カッセル様も…。これも、主神様のご加護の賜物です」

コフレシは涙を流しながら祈りのポーズを取る。

「館の主人は四～五日は滞在して、気力と体力を回復させるようにと言っているようです。メイドたちは厳命を受けているらしく、屋敷からはお出しできないのですと言っておりました」

口を開いたのはジョリーナだった。それを聞いてコフレシが反論する。

「いいではありませんか。屋敷の主人がそうおっしゃっているのですから、四～五日滞在すればよいのです。私が聞いたところによりますと、その間、村の人々に物資を届けるのと、開村以来我らを悩ませた湿気を除去する作業をするようです。おそらく、アガルタの敬虔なクリミアーナ教の領主なのでしょう。で、あれば、ここはリベルグ伯爵のお屋敷ではないでしょうか？」

「リベルグ伯爵？」

ヴィエイユがいつもの鷹揚さを取り戻して、ゆったりと尋ねる。

「はい。リベルグ伯爵は我がクリミアーナ教の信者。しかも、アガルタ王を未だ王と認めてはいない、アガルタでも数少ない領主の一人です。おそらく、名前を出すと後でアガルタ王の追及を受けることになります。そのために、我らを秘密で援助されているのでしょう」

コフレシの言葉に、ヴィエイユ以下、全員が頷く。

「今回はこのお情けに甘えましょう。これも主神様のお導きです。我らの願いが通じたのです。ヴィエイユ様とカッセル様は特によくお休みください。さぞ、お疲れかと思いますので」

コフレシの言葉に、ヴィエイユは笑顔で答える。

「ご心配には及びません。私たちは大丈夫です。むしろ、コフレシさんたちこそ、休まねばなりません。今回はお言葉に甘えて、ゆっくり休ませていただきましょう」

そう言って彼女たちは、この屋敷の逗留を決めたのだった。屋敷のもてなしは、まさしく至れり尽くせりで、痒い所に手が届くもてなしぶりであった。三度の料理、ティータイムのお菓子なども実に美味しく、よく眠れ、快適に目覚めるという非の打ち所のない日々を過ごすことができ、彼女たちは大満足だった。

そして、逗留五日目。いつものように、良く寝たという幸せな感覚と共に、ヴィエイユは目を覚ました。ゆっくりと目を開けると、そこには今までとは全く違う光景が広がっていた。数名の兵士たちと、黒い服を着た男。よく見るとそれは、アガルタ王のリノスだった。彼はヴィエイユと目が合うと、ニヤリと笑って、ゆっくりと口を開いた。

「おはよう。そして、おかえり」

なぜ？どうして……？という疑問が頭の中を駆け巡る。そして、ヴィエイユの思考は、停止した。

第二百十五話　戻された現実

ヴィエイユは目の前の光景が理解できないでいる。ここはどこなのか。どうしてアガルタ王がここにいるのか、この兵士たちは誰なのか。だが、彼女はすぐさま自分を取り戻し、祖父譲りの怜悧さでこの状況の分析をはじめる。

おそらく、自分たちを保護してくれたリベルグ伯爵のことが外部に漏れたのだろう。アガルタ王は、自分に従わない伯爵を追い落とす絶好の機会を得たとばかりに、この屋敷に踏み込んできた。で、あれば、自分たちが囚われることはない。むしろ、自分たちを保護してくれた伯爵を庇うことで、自分の名声は高まる。それどころか、この屋敷に踏み込んできたアガルタ王の横暴さを吹聴することで、この国と王の名声を落とすことができ、教国が攻め込む口実も作ることができる。

「あれ？ここは……？」

ヴィエイユが頭の中で分析が完了しようとしていた時、不意に声が聞こえた、この声はカッセルの声だ。彼女はゆっくりと起き上がる。その瞬間、驚きの光景が目に入った。

目の前に広がっている景色は、いつも見ていたクリミアーナ村にある、自室の光景だった。

「これは……。リベルグ伯爵は……？」

目をギョッと見開きながらヴィエイユは周囲を見渡している。そし

て、同じように狼狽しながら周囲を見回しているカッセルの姿が目に入った。

「カッセル……」

「姉さま……。ここは……伯爵様のお屋敷では？一体いつの間に？」

「二人とも、楽しい夢を見ていたようで、何よりだな。リベルグ伯爵って、誰のことだ？アガルタにはそんなヤツはいないぞ？」

男の声を聞いて二人はビクッと体を震わせて、目を見開きながら、声の主であるリノスを凝視した。

「まあ、たっぷり寝られたようで、よかったな。いい夢は見られたか？取り敢えず俺は、そこの坊主を送り届けた。コイツは教育がなってないな。もう一度、イチから行儀作法をやり直させろ。この坊主が姉さま姉さまと言うから心配していたが、元気そうだな？安心したよ。じゃあ俺はこれで失礼するよ？」

リノスが踵を返すとドアが開き、兵士たちが担架を運び込んできた。よく見るとそこには顔に紫の斑点を浮かべた若い男が乗せられていた。

「アッ・・・ハッ・・・ガッ・・・」

男は体を震わせながら、首に手を当てて口を大きく開けている。そんな様子を見て、リノスは口を開く。

「何とまあ。君はルロワンスに感染しているな？かわいそうに発作を起こしているぢゃないか！おおおお、苦しいだろう。見たところ

まだ若いぢゃないか。未来ある若者が目の前で死なれちゃ夢見が悪い。さっそく治癒しようじゃないか」

抑揚のない、まるで棒読みのセリフのような、一切の感情を感じないセリフ回し。しかも途中カンでしまっている。リノスはそんな出来栄えに落ち込んだ様子もなく、淡々と男の前で膝をつき、体に手を触れる。しばらくすると、男は肩を上下させながら呼吸を整え始めた。よく見ると、その顔には紫の斑点が消えている。リノスたちはその様子を見届けて、ゆっくりと立ち上がり、部屋の外に出て行った。

ヴィエイユとカッセルは呆然とした表情で、その後姿を見送った。その直後から、ここ最近特にひどくなってきた悪臭が漂ってくる。その臭いは、二人の意識を否が応にも現実に引き戻していった。つい今しがた、リノスを連れてきた司教のムーラックが、ヴィエイユの名前を呼んでいるが、彼女の耳には届かない。彼女はよろよろと立ち上がり、恐る恐る隣の部屋の扉を開け、そして、すぐに扉を閉めた。扉を背に、もたれかかるようにして立ち尽くすヴィエイユの息が乱れている。彼女が見たものは、顔中に紫色の斑点を浮かべながら絶命している、二人の司教の姿だった。そして、この二人が部屋の悪臭の原因になっていることも思い出した。

ちょうど五日前、この部屋で司教のジョリーナと祈りをささげていた時、隣の部屋でドン、と大きな音がした。部屋を覗いてみると、一番若い司教であるルワローグが目をカッと見開いて倒れていた。

慌ててジョリーナが駆け寄って介抱するが、ルワローグの反応はない。このひと月、この村で頻繁に見られたこの光景は、ヴィエイユ

を急速に追い詰めていた。ピクリとも動かないルワローグ、必死に彼の名を呼ぶジョリーナ、そして自分。三人共に、体中に紫色の斑点が浮き出ている。ヴィエイユに至っては、体はもとより、顔中にも紫色の斑点が出ており、その整った美しい顔を不気味な化け物じみた顔に豹変させていたのだった。

彼女はその光景を凝視することができず、後ずさりしながら、主神であるクリミアーナの肖像画に向かう。そしてそこで、一心不乱に祈りをささげ始めた。今、自分たちが罹っている病は、ルロワンスであろう。紫色の斑点が出ている者は確実に死ぬ。しかもそれは、突然に倒れて死んでいくのだ。

この病は伝染する。医師たちの判断で、発症した者はこの村に閉じ込められ、そうでない者は、さらに森の奥深くに避難するという措置が取られていた。しかし、その避難先でも発症する者が後を絶たず、ほどなく村は、紫色の斑点を浮き出した者たちでいっぱいになった。村人は最低限の食事を摂る他は、一日の大半を祈りに費やすようになっていた。そして、ヴィエイユと数名の司教もそれに感染し、元いたロッジでの生活に戻っていたのだ。

ルロワンスに発症していない者が死者に触れることは、病気に感染する危険性があったために厳禁されていた。そのため村では、病を発症した者が死者を葬っていたのだが、亡くなる人が増えるにつれて、村人はその遺体を放置するようになり、さらにも増して祈りに時間を割くようになった。そのため村では、あちこちから死臭が発生し、さらに劣悪な環境に陥っていた。

本国から連れてきたクリミアーナ自慢の医師団も、この状況には全く対処できないでいた。この村の中に獣人は一人もいない。ルロワンスの感染は獣人を媒介すると信じていた彼らは、この現状に戸惑

うばかりだったのだ。

そんな状況のもと、多くの信者の死が確実に迫っており、しかも、それがいつ起こるのかがわからない。本国には定期的に連絡を入れているが、この時期はイルベジ川が氾濫しており、救援は期待できない。それを証拠に、本国から使者が訪れたことが一度もなかったからだ。たとえ教国が総力を挙げて優秀な医師、薬を送ったとしても、今のこの状況が改善できるのかどうかは誰にも分らない。

ヴィエイユは、今日、すぐに死ぬのかもしれないという恐怖に押しつぶされそうになりながら、必死に祈り続けた。そうしないと、発狂してしまいそうだったのだ。

どれほどの時間が経ったのだろう。気が付くと辺りは既に暗くなっていた。周囲には誰もいない。彼女はジョリーナの名前を呼ぶが、返事はない。彼女はライトの魔法を唱えて部屋を明るくし、そして、恐る恐るルワローグが倒れている部屋を覗き込んだ。

そこには、ルワローグに添い寝するような形で絶命している、ジョリーナの姿があった。そして、ふと視線を上げると鏡があり、そこに映った、青白い顔一面に不気味な紫の斑点が浮き出た自分の顔と目が合った。

「いやぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

堪えていたものが爆発したかのように、彼女は叫んだ。必死で祖父を、父を、母を、そして、近くの村に居るであろう従弟のカッセルの名を。しかし、いくら呼んでも叫んでも、誰も、何も答えてくれなかった。まさしく彼女は、たった一人になっていた。

それから彼女は、祈り続けた。一心不乱に祈り続けた。朝になり、様子を見に来た司教の呼びかけに全く応じず、ただ救い給えと祈りを繰り返した。司教たちが何度もヴィエイユを休ませようとするが、彼女は断固としてそれを無視し続けた。祈りを止めた瞬間に、自分の命が終わりそうな気がしてならなかったのだ。

一体、どのくらいの時間が経ったのだろう。ずっと同じ姿勢のまま、朦朧とする意識。何度も気絶しそうになるが、徐々に強くなってくる死臭のために、意識はギリギリのところで失われることはなかった。このまま気絶できればどれだけ楽だっただろう。しかし、漂ってくる強烈な臭気は、彼女に眠ることを許さず、さらに彼女を死の恐怖に苛んだ。

そんな発狂寸前にまで追い詰められていた時、不意に自分の名を呼ぶ声が聞こえた。思わず振り向くと、そこには見慣れぬ男の姿が映った。よく見るとそれは、アガルタ王・リノスの姿だった。

瞬時に彼女は、リノスに対して毅然とした態度を取らねばならないと考えた。彼に応対しようとしたその瞬間、紫色の斑点が無数に浮き出た自分の左手が目に入り、自分自身の醜い姿を思い出した。彼女は本能的に、変わり果てたその顔を隠す。そして、彼女の意識はそこで途切れたのだった。

あのお屋敷での五日間は何だったのか？自分の病は治ったのではなかったのか？そんな疑問が頭をよぎる。しかし、目の前に見えている光景は、まさしく今まで自分が耐えに耐えてきた環境であった。死臭と共に漂っているカビのニオイ、じめじめとした空気、じっとりと湿っている衣服。しかもそこには、あちこちに黒いカビが生え

ている。そして、隣の部屋には、腐乱し始めている二人の司教の死体……。

また、あの生活に戻らねばならない？いつ来るのかわからない死を待つ生活を送るのか？恐怖に、不快に耐えていくのか？そう考えた時、彼女の目に、先ほどリノスに治療された男の姿が目に入った。彼は茫然とヴィエイユを見ている。彼と目が合った瞬間、彼女は何かに弾かれるように、外に飛び出していた。そしてそこには、アガルタ王、リノスの後姿と、それを取り囲むように立ち尽くす、多くの病に侵された信徒たちの姿があった。そして、鼻を突く臭気。その悪臭は、ここで歯を食いしばって耐えてきた今までの悪夢を、鮮やかにヴィエイユの脳裏に思い出させた。

「待って！」

ヴィエイユは無意識に叫んでいた。リノスの動きが止まる。彼女はその背中に向かって、必死に叫ぶ。

「お願い！お願いです！助けて！助けてください！お願いします！お願いします！」

リノスは背を向けたまま動かない。ヴィエイユは転げ落ちるようにロッジの階段を駆け下り、リノスの足に縋りつく。

「お願いします！助けて！お願いします！助けて！助けて！助けて！死にたくないのです！死にたくない！死にたくない！助けて！助けてください！お願いしますぅぅぅぅ！！！！」

絶叫し、慟哭するヴィエイユ。そこには教皇の孫というステータスも、品位も、気品も何もかもをかなぐり捨てた、子供のように泣き

じゃくる少女がそこにいた。

「姉さま……」

その姿を見て、カッセルが絶句したように立ち尽くしている。ヴィエイユはリノスのズボンの裾を掴んだまま、白い服を泥だらけにしながら、なおも慟哭している。リノスはため息をつくと、ゆっくりと顔を向けて、足元のヴィエイユとカッセルと交互に視線を向ける。

「お前たちの、クリミアーナ様に、助けてもらえよ?」

優しい笑顔を湛えて、リノスは口を開いた。その言葉を聞いてヴィエイユは泣きながら頭を振る。

「お前たちはこの地に、楽園を拵えるんだろう?そして、お前たちのクリミアーナ様は、大魔王クラスの厄災でも、お前たちを守ってくださるんだろう?今こそ俺にみせてくれ。そのご加護とやらを」

ヴィエイユはイヤ……イヤ……と呟きながら小刻みに首を振っている。カッセルは息を荒くして呆然とリノスを見ている。そしてその周囲には、固唾をのんで様子を見守る、クリミアーナ村の住人たちの姿があった。

リノスは周囲をゆっくりと見渡す。どれも、紫色の斑点が浮き出た者たちばかりだ。その様子にため息をつきながら、リノスはゆっくり踵を返して、ヴィエイユたちに向き直る。

「助けてやってもいいぞ?お前が罹っているのはおそらくルロワンスだろう?それが完治するかどうかはわからんが、その紫色の斑点を消すことくらいはできる。しかしそれは、お前たち自身を否定す

ることになる。クリミアーナ教そのものを否定することになるんだが、それでも構わんのか?要は、お前たちのクリミアーナ様は、お前たちを救わなかったことになるが、それでもいいんだな?」

ヴィエイユは恐る恐る顔を上げてリノスを見る。もはやこの少女に、この状況を分析し、対策を講じるという思考力は残っていなかった。彼女はただ、涙を流して、声にならない声を上げ続けるしかなかった。

第二百十六話　そして、心は折れていく

ヴィエイユはしゃくり上げるようにして泣いている。豪華な金糸で刺しゅうされた真っ白い衣装が、ぬかるんだ地面に膝をついているために、もはや見る影もなく汚れきっている。さらに、所々に見える黒いカビが、この少女の哀れさを引き立てていた。

リノスはゆっくりとしゃがんで、蹲っているヴィエイユに何やら囁いている。その直後、彼女はガバッと顔を上げ、リノスの目を見ながら小刻みに首を左右に振る。

「それが出来ねぇなら、クリミアーナ様に救ってもらいな？」

そう言ってリノスは踵を返そうとする。

「待って！待って！わかりました！わかりましたから！」

再びヴィエイユの絶叫が響き渡る。その声を聞いてリノスは再び向き直る。ヴィエイユは体を小刻みに震わせながら、絞り出すようにして話し始める。

「わ……我々が信じていました……クリミアーナ様は……。我々に……ご加護を……与えませんでした。私……ジュヴァンセル・ヴィエイユはこれから……アガルタ王、リノス様に、絶対の忠誠を……お誓い申し上げます」

そう言うとヴィエイユはその場で泣き崩れた。

「いいだろう、ヴィエイユ。お前を救ってやろう。ついて来い」

リノスはヴィエイユを通り過ぎて、ロッジに入っていく。そして彼女は、ゆらゆらと亡霊のように立ち上がり、呆然とした表情でリノスの後ろをついていく。

「姉さま……」

心配そうに声をかけるカッセルに一瞥もくれることなく、ヴィエイユはリノスに続いてロッジに入っていった。

それから、ほんの数分のことであった。リノスがヴィエイユを抱きかかえるようにして、ロッジからでてきたのだ。

「姉さま！ヴィエイユ姉さま！おい！姉さまに何をしたんだ！」

ゆっくりとロッジの階段を下りてくるリノスに向かって、カッセルが噛みつくように言葉をぶつけてくる。

「バカ野郎。よく見ろ」

リノスはカッセルにヴィエイユの姿を見せる。

「姉さま！斑点が……！」

これまでヴィエイユの顔を醜くしていた紫色の斑点はキレイに無くなり、彼女は元の美しい顔を取り戻して、やすらかな寝顔を見せていた。

「メイ！ローニ！チワン！」

リノスの呼びかけに、クリミアーナの信者たちの後ろから三人が現れる。

「ヴィエイユを頼む。おそらく治癒しているとは思うが、一度、調べてみてくれ」

チワンがヴィエイユを受け取り、村の外に運んでいく。村人たちは固唾をのんでヴィエイユが運ばれていくのを見守っていた。

「クリミアーナの教徒諸君！」

不意にリノスの大声が響き渡る。全員の視線がリノスに注がれる。

「今見た通り、どこまで治癒できるかはわからんが、ルロワンスの特徴である紫の斑点を除去することはできる。数か月前、同じような症状を持った人間にもやってみたが、今のところそいつらは死んでいない。助けてほしいヤツは、助けてやる。その代り」

そこまで言ってリノスは言葉を切って、周囲を見回す。教徒たちの顔が凍り付いている。

「お前たちが信じるクリミアーナ様は、お前たちを救わないことを認め、そして、俺に絶対の忠誠を誓うことが条件だ。そりゃそうだろ？俺は、お前たちの命の恩人になるんだからな。礼を返すというのは、当然のことだよな？それが受け入れられないヤツは、そのままでいろ。悪臭漂うこの土地で、カビだらけの部屋に住み、食料もなく、病死するか餓死するかを選べばいい。俺は無理強いはしない。ただし、俺に忠誠を誓うというのであれば、最低限の生活は保障し

よう」

教徒たちが騒めいている。後ろの方では小競り合いも起きているようだ。

「まあ、俺にも時間はないからな。三十分だけ時間をやる。その時間以内に決めろ。誰か！マトカルを呼べ！マト！どこだ！」

俺の呼びかけにマトカルがすぐさま姿を現す。

「マト、将軍たちは今、休憩中か？…全てのテントに伝達はできたんだな？よし。では、三十分後に全員を森の入り口に集合させてくれ。俺に従う教徒たちを護衛するからな。あ、そうだ。将軍と、数名は俺のところに寄こしてくれ。うら若き女性はエスコートしなきゃならんからな」

「承知した」

そう言ってマトカルは森の奥に消えていった。

リノスは村に到着してすぐ、ヴィエイユを眠らせた。そして、すでに眠っていたカッセルも共に、二人に考えうる限りの、極上の快適を感じる夢を見る結界を二人に張った。その後、ラファイエンスたちに命じて、病人がいるテントやロッジに、今の病気が治るかもしれない、すぐにヴィエイユのいるロッジに行くようにと伝えさせた。彼らは大声でそのことを伝えるのと同時に、外に出ていた信徒たちに、家族や友人に伝えてもらうよう協力を仰いだのだった。それは意外なほどすんなりと受け入れられ、数時間後には夥しい信徒がロッジの前に集まっていたのだった。

リノスが村人たちに決断を迫ってから、ちょうど三十分後、ロッジの前に残ったのは、およそ五百名にも及ぶ信徒たちだった。リノスは彼らを、限界まで収容できる五十名をロッジの部屋に入れ、全員でヴィエイユの誓いと同じ言葉を大声で言わせた後で、アルティメットヒールをかけた。彼らは壁を向いて並ばせ、その列の一番後ろでリノスが呪文を唱えることで、ネタがばれないようにすることも忘れなかった。

リノスに忠誠を誓った約五百人の信徒たちは、ラファイエンスたちの誘導で、森を出て三十分ほど歩いた地点に移動していった。ここには依然、ラマロン軍を撃退した時の部隊が野営に使った場所があり、現在でもそこはアガルタ軍の野営訓練地になっており、そこに新たに結界村を作って彼らを収容したのだった。

そして、リノスとメイ、チワン、ローニ、イリモとマトカルは、村の外に出ると一旦、都の執務室に転移した。リノスはマトカルに食料の用意と、それが整い次第、兵士を連れて結界村に向かうように指示を出した。

そしてすぐさまリノスたちは、メイと共に会議に入った。

「どうだった、メイ？」

「はい。おそらく、あの環境がルロワンスの原因の一つだと思います。もう少し詳しく調査してみないとわかりませんが、ご主人様が鑑定いただいた患者の状況と突合させて、もう一度調べたいと思います」

メイの目が輝いている。その様子を見てチワンが口を開く。

「あくまで私見ですが、ルロワンスの原因は、彼らの衣服に付着しているカビも大きな原因ではないかと思います。その点も詳しく調べたいと思います」

「ああ、わかった。チワン、ローニ、よろしく頼む」

二人はピョコンと頭を下げた。

「明日はソレイユも連れて調査に行こう。あとは……命乞いをしてくる信者も救ってやるかな？」

「リノス様が治癒した信者も、一度調査したいと思います」

「ああ、ローニ、そうしてくれ。そこから何か掴めるかもしれんからな」

「リノス様、食料の準備と出陣の準備が完了しました」

「おおマト、さすがに早いな。わかった。先に食料を転移させてしまおう」

俺は救援物資が準備されている食糧庫の地下に向かい、結界村を作る際に、あらかじめ作っておいた、外からは見えない仕様になっている貯蔵庫結界に向かって、物資とともに転移する。一瞬でそれは完了し、俺はそこから出てアガルタの兵を探し、彼に貯蔵庫に食料を運んだことを伝える。そして再び貯蔵庫に入り、そのままアガルタの都に転移した。

俺の帰還を確認するまでもなく。マトカルは結界村に向かって移動

を始めたという。俺はその報告に満足して、執務室で残務の処理に入った。

夕方、帝都の屋敷に帰ってくると、エリルとアリリアが俺を迎えてくれる。彼女たちの笑顔が俺を癒してくれる。二人を抱っこしてダイニングの中をうろうろしながら、マトカルは今日は帰らないと告げ、夕食を待った。

そして夜、風呂から上がり、寝室に入るとリコがいた。

「あれ？リコ、エリルは？」

「メイが預かってくれていますわ」

「ああ、だからメイと一緒に風呂に入っていたのか」

「リノス、話があるのですわ」

いつになく真剣な表情で話しかけてくる。

「どうしたんだ？」

「今日……クリミアーナの村で、ヴィエイユという小娘を抱いたとメイから聞きましたわ。一体どうゆうつもりなのです？」

リコの気配がいつもと違う。これは真剣に怒っているときの雰囲気だ。

「いや、違っ、リコ！違う違う！抱いたというのはそういうことじ

ゃない。お姫様抱っこをだな……」

「お、お姫様抱っこ!?　……わかりましたわ。皆までおっしゃらなくてけっこうです新しい妻を娶ろうとお考えなのですね？それについては私は反対する気はございませんがそういうことはなぜ最初に仰っていただけないのですこちらとしても準備というものがございますわところで新しい妻とされる方はどのような方でしょうかお聞かせいただけまして？おいくつ？どちらのご出身？どのようなスキルをお持ちで？いやむしろどこでお見染めになりまして？いや言いたくなければよろしいのですよただちょっと聞きたいと思っただけなのですわ」

「リコ！リコ！待ってくれ！違う！待ってくれ！」

俺は必死でリコを抱きしめる。彼女は肩で息をしながら小さい声で呟く。

「おひめさまだっこ……おひめさまだっこ……」

俺は無言でリコをお姫様抱っこをし、優しくベッドに運んだ。そして、まだ何か言おうとしているリコの唇を、俺の唇で塞いだのだった。

第二百十七話　ばあちゃんの教え

「……というわけだ」

「……」

俺はリコを腕枕しながら抱きしめつつ、優しく背中を撫でながら話をしている。リコは聞いているのかいないのか、ずっと無言だ。それどころか、さっきから俺が背中を撫でるたびに、ピクッピクッと体を震わせている。きっと、くすぐったいのだろう。

「ずいぶん前になるけれど、俺はリコが認めていない女を傍に置くことはないと約束した。それを破る気は全くない。今までもそうだったし、これからもだ」

俺の言葉に嘘偽りはない。リコがいいといった女は、今のところ全員、いい家族になっている。

リコは相変わらず、俺の胸に顔をうずめたままだ。腕枕をしている右手でリコの髪の毛を撫でてやる。パーマが当たったようなくせ毛だが、日々のお手入れがいいのだろう。髪はまるで絹のように滑らかで、スベスベする。初めてリコを抱きしめた日からもう何年も経つが、この髪の毛と肌の美しさは、全く衰えない。リコを抱きしめていると、とても癒されるのだ。

「では、そのヴィエイユとかいう娘は、全く関係がないのですわね？」

リコがモソモソと俺の胸から顔を起こしながら話しかけてくる。

「ああ、もちろんだ。今日はたまたまいないが、マトに確認してみるといいよ」

「……わかりましたわ」

そう言うとリコは、自分の唇で俺の唇を塞いだ。

「ウプッ。リコ……」

「今宵は……離しませんわ」

「リコ……。エリルを産んでからその……」

「何ですの？」

「ずいぶんと好きに……なったんだな……」

リコはゆっくりと俺に覆いかぶさってくる。

「リノスが悪いのです。リノスが……私をこんな女にしたのです……」

「リコ……」

俺はそれからリコと、じっくり、ゆっくり、たっぷりとした濃厚な時間を過ごしたのだった。

次の日、俺は早速クリミアーナ教徒たちの結界村に転移する。村の外は、まだ病に罹患していない教徒たち数千が、結界村に押し寄せていた。外には既にアガルタの軍勢がバリケードを張っており、集まった教徒に対しては、この村に保護されている者にはルロワンスに罹患している可能性が極めて高いこと、近づかないことを繰り返しアナウンスする兵士たちの声が響き渡っていた。

俺はその喧騒を聞きながら、本部に向かう。そこには、ラファイエンスとクノゲン、そしてマトカルが集まっていた。

「リノス様……」

いち早く俺に気が付いたマトカルが話しかけてくる。

「マト、ご苦労だったな。随分到着が速いようだが、一晩中馬を走らせたのか？ゆっくり休め……と言いたいところだが、今はそれは難しそうだな？」

俺の言葉を聞いてラファイエンスがニヤリと笑っている。おそらく、頭の中でスケベなことを考えているのだろう。俺はそんな老将軍に向かって、声をかける。

「将軍、保護している信徒たちの様子はいかがですか？」

「大人しいな。予想外に大人しい」

「おそらく、病が再発するのではないかと不安なのでしょう。斑点は消えましたが、病が完治したかどうかは、誰にも分かりませんからな」

そう言ってクノゲンがフォローしてくれる。

「まあ、確かにそうだな。祈りの声は……聞こえているか？」

「今のところ聞こえてはいませんが……」

チラリとクノゲンは教徒たちの結界に視線を向ける。

「リノス殿、彼らが棄教させるのは、さすがに難しいのではないのかな？」

ラファイエンスが口を開く。俺は彼を見ながら、ゆっくりと頷く。

「そうですね。取り敢えず俺に絶対服従を誓わせましたが、そう簡単にヤツらは服従しないでしょうね。今回はヴィエイユをカッセルから引き離すことが目的でしたので、当初の思惑は達成されたと言えます。あのヴィエイユという女はカミソリのような頭脳を持っています。あの娘がカッセルの側にいる限り、我々は後々まで手こずることになったでしょう。そのカミソリを刃引くために、快適な夢を見させて現実に引き戻すという今回の作戦は予想以上の結果になりました。さらに、クリミアーナの信徒を５００とはいえ、嘘でもこちら側に服従を誓わせることができたのは、棚からぼたもちです。これでクリミアーナ側に、あの坊主が大きく動揺すれば言うことなしなのですが……。まあ、一度話をしてみて、彼らの反応を見ましょう。それよりもまず、一番にしなければならないことは、このルロワンスという病気が他の者に伝染させないことです。そして、この病気の原因を突き止めることですね」

俺の言葉に三人は静かに頷いた。

「信徒たちの朝食が終わったら、一度全員を集めてください。みんな、朝食は……？まだですか。それなら、俺たちも食べましょう」

そう言って、俺たちは炊き出しのメシを味わった。そしてその後、結界村の信徒全員が村の外に集められた。俺はその集団に大きな結界を張る。ふと見ると、その先頭にヴィエイユの姿があった。彼女は魂が抜けたような、呆然自失の状態だった。そして彼女を司教であろう女が介抱している。俺は小娘たちに一瞥をくれて、口を開く。

「ええ～ああ～まあその～聞こえる？オホン。アガルタ王、リノスだ。昨日はよく眠れたか？昨日の段階で命を失ったものは手を挙げろ。……誰もいないな？よし」

そう言って俺は、姿勢を正す。

「昨日俺はお前たちに、ルロワンスの治療を施した。その手法は今は言えないが、おそらく、治癒しているはずだ。まあこれは後日、ウチの医師たちから診察を受けて確認してくれ。今日俺が言いたいのはだな」

俺は言葉を切って信徒たちを見渡す。皆一様に不安そうな顔をしている。

「別に、クリミアーナ教を捨てろ、というつもりはないってことだ」

そこに居た教徒全員が驚きの表情を浮かべる。俺はさらに言葉を続ける。

「別に何を信じてもいい。クリミアーナ様だろうが、お狐様や龍神様……。何なら大魔王を信じていても構わない」

信徒たちが戸惑い始める。全員の目が泳いでいる。

「いや、俺は宗教ってのは必要だと思うんだ。何かを信じることは大切だからな。でもな、宗教の意義を知っている奴らは少ない。それはお前らも同じだと思う」

俺はゆっくりと信徒を見渡す。ヴィエイユは相変わらず呆然自失の状態だ。

「いいか？何かを信じるってのは、心を平静に保つための一つの手段だ。何か困難なことに直面した時、クリミアーナ様が、お狐様が、ご先祖様が見守っていただいているから大丈夫だと思うことで、平常心でコトに当たることができる。極端なことを言えば、人間が一番恐れるのは死だ。その恐怖に苛まれていては何もできなくなる。つい昨日までのお前たちがそうだったな？いつ死ぬのかわからない恐怖に縛られて祈る他、何もできなかった。そうだろう？」

教徒たちが一様に目を伏せる。俺は構わず言葉を続ける。

「人間なんて所詮、そういうものだ。だから、何かを信じることで平常心で死に向き合えればよかったんだがな。お前たちが何故、死を前にして平常心を保てなかったのか？それはクリミアーナという信じるモノに、何かを求めていたからだ」

クリミアーナという言葉に反応して、信徒たちの視線が俺に向けられる。

「神様ってのはな、何もしちゃくれないもんなんだ。ただ、見ている。それだけだ」

教徒たちの表情が凍り付いている。

「神様からすりゃ、人間のやることなんざ愚かし過ぎて見ちゃいられないもんだ。それでも、じっと見守っているんだ。そんな神様に何かをしてくれって求めちゃいけない。感謝しこそすれ、求めちゃいけないんだ。その見守ってくれている神様に恥じない行動をしなきゃいけないんだ」

水を打ったように静まり返る教徒たち。ヴィエイユの肩が小刻みに震えている。

「それに宗教ってのはな、宗教が人間を支配するのではなくて、人間が宗教を支配しなきゃいけないんだよ。わかる？宗教に支配されちまうと、神の名において人を殺すことが出来ちまうんだよ。何の資格があって人の命を奪うことができるんだ？そんな恐ろしいことも平気でやってのける。言ってみれば、宗教はやり方を間違うと、人を悪魔に変える。だから、人が宗教を支配するんだ。信じることで平常心を保つツールの一つだと思えばいい。言ってみりゃ、自分自身そのものを信じられれば一番いいんだがな。信じられる自分を作ることが出来りゃ、宗教なんざいらなくなる。俺はそう思っている。だから、お前らもクリミアーナ教を棄てろとは言わん。信じるのは自由だ。しかし、お前らが信じるクリミアーナ様ってのは、見守るだけだ。何もしちゃくれない。だから、信じるのであれば、クリミアーナ様に恥じない生き方をしろ。人に迷惑をかけるな。人の嫌がることをするな。今回のこの疫病は、いい機会になったんじゃないのか？俺はそう思うぞ。ハイ、俺の話はこれで終わり。あとは、自分たちで考えな？」

俺はそう言って、スタスタとその場を後にした。

「リノス様、お見事だ。いつの間にそのような知識を身に付けられたのだ？」

俺の後ろを付いてきながらマトカルが話しかけてくる。俺は彼女を振り返りながら、苦笑いを浮かべる。

「ああ、いや。俺の知識じゃない。俺のばあちゃんが言っていたことだ」

「ばあちゃん？」

「優しいばあちゃんでな。俺のことを心から、本当にかわいがってくれた。そのばあちゃんが俺を膝に抱きながらよくあの話をしてくれていたんだ。思い出すな……」

「リノス様の……おばあさま……。そのような素晴らしい御方なら、私も一度会ってみたいな」

マトカルの言葉に一瞬言葉を失いながら、俺は遠い目をして呟く。

「死んじゃったんだよ」

「え？」

「もう、この世にはいないんだよ。でも、見事だったぞ？十二月二十五日に生まれて、百歳の三月三日の日に亡くなったんだ。暑からず、寒からずの日で、しかも休日に弔いができる日だったんだ。お陰で、ばあちゃんが愛していた家族全員が集まって看取って、あの世に送ることができたんだ。徳のある人は、違うな」

そんな話をしながら、亡くなったばあちゃんのことを思い出していると、自然に涙が溢れてくる。俺はマトカルに気付かれないように、そっと涙を拭った。

「ばあちゃんは、色んな人の面倒を見て、助けていた。近所の人からの人望も厚くてな。そういう徳のある人は、神様が死に方を選ばせてくれるんだそうだ。まさしく、ばあちゃんがそうだった。俺は、神様ってのはじっと見守っていて、徳の高い人だけに、最後に死に方を選ばせてくれる存在だと思うんだ」

マトカルは、自分にバレないようにそっと涙を拭いながら話をするリノスの背中を、愛おしそうに見つめながら、百歳という驚愕するほどの寿命を保つ人間を一族に持つ家系であれば、なるほどリノスの能力が人間離れしているのも頷けると、一人で納得するのだった。

第二百十八話　未来を見る者、絶望を見る者

「何をしたらこんなことになるんじゃ！」

森の中で老人の怒号が響き渡っている。白髪の小人の老人は森の中を移動しながら、折に触れてしゃがみ込み、土の状態を確認している。そして、その度に絶叫しながら聞くに堪えない罵詈雑言を大声でまくし立てていた。

「まあまあ、そんなに怒らずに・・・」

困った顔をしながら老人を宥めているのは、メイだ。老人はメイの顔を見ると、今までの怒りが嘘だったかのように、柔和な表情を浮かべる。

「おお、すまんかったのメイちゃん。いや、あまりにもひどいので、ついつい言葉が過ぎたわい。連れの人たちもすまんかったの？」

ヘラヘラとスケベそうな笑みを湛えているこの老人は、土の精霊であるノームだった。彼はメイに呼び出されて、アガルタにあるクリミアーナ村の土壌調査をしていたのだ。

不治の病と言われる伝染病のルロワンスの発症が確認されて以降、この村はリノスの張った強力な結界で覆われ、人の出入りは厳しく制限されていた。一切の空気が漏れない効果が付与されているため、病原菌が外に漏れる危険性は少なくはなっているが、それでも油断はならない。ここに入るには、リノスの許可が必要であると同時に、彼に無菌状態の効果を付与した結界を張ってもらうことが、条件と

なっているのだ。

メイと共にこの村を訪れているのは、チワンとローニのポーセハイと共に、ソレイユも同行していた。ルロワンスが発生しているのはこの村だけのことであるため、メイたちは、この村の環境に大きな原因があるのではないかと考えていた。そのため彼女たちは、この森の土壌、大気、カビなどを調査しつつ、それぞれのサンプルを持ち帰ろうとしていた。

その中で一人、場違いな程の色気を振りまいているのがソレイユだった。彼女は穏やかな笑みを浮かべながらゆっくりと森を見渡している。一見すると森林浴を楽しんでいるように見えるが、実は彼女は、森と水の精霊たちから聞き取り調査を行っているのだ。

「今のところ、森も水も、特に被害はないようです」

精霊たちと対話していたソレイユがメイに報告をする。するとノームは素早くソレイユの足元にやってくる。

「いや、お嬢ちゃん。それは今だけじゃ。このままこの環境が続けば、おそらく土壌は汚れていくぞい。ただ森を焼いただけではないぞい。土が急激に元気をなくしておる。土が病気になっておるんじゃ。土の中で何やら毒物が繁殖しておるようじゃな。儂も初めて見るぞい！何をすればこんなひどい有様になるんじゃ！」

ノームが目をカッと見開きながら、ソレイユに話しかけている。一見すると、土が汚れていることに怒りながらソレイユに話をしているように見えるが、実は彼の視線はソレイユの短いスカートの中に向けられており、さらには、彼女の大きな胸に向けられている。よく見ると、彼女の胸の部分に小さな突起が見えるのだ。それに気づ

いたノームは、そこから全く視線を逸らさず、瞬きすらしない。

彼はその豊富な知識と経験から、下から仰ぎ見ているソレイユのスカートの中身はインナーパンツ、いわゆる見せパンであるということを見抜いていた。それは彼の興味の対象ではない。一瞬、彼はソレイユへの興味を失いかけたが、すぐに胸の突起に気が付いた。一旦ガッカリさせられてからの、それだ。しかも、形のよい巨乳。彼はソレイユのおっぱいにガッチリ心を掴まれてしまっていた。しかし、彼は知らない。ソレイユの胸の突起は、彼女が開発した乳首付きの下着、いわゆるヌーブラであるという事実を。

元々、自分の体に絶対の自信を持っているソレイユは、そうしたスケベな視線を向けられることには何の抵抗も感じず、むしろその視線は賞賛に等しい感覚だった。だが、リノスの妻になって以来、リコやメイらの影響を受けて、露出の高い服を着ることは少なくなっていた。リコの、自分の肌を見ていいのは好きな人だけ、という考え方に、ソレイユも賛同したのだ。しかし、メイから事情を聴いた彼女は、精霊使いのプロらしく、ノームの特徴を彼女から聞き、彼の心をくすぐるための対策として、結婚前までに使っていた下着を持ち出し、その色気を武器に上手にノームを誘導することを考え、実践したのだ。

「あら、さすがはノームさんだわ。すごいですわぁ。この森の土にどうして毒物が増殖しているのか、私、知りたぁい」

そう言いながらソレイユは体をゆする。彼女の大きな胸が、プルルンと揺れる。

「おお、任せておけ。儂が調べてやるぞい。また、教えてやるぞい！」

そう言ってノームは森の奥へと消えていった。

「メイ様、すみませんでした。メイ様が使役するべきノームを、私が使役してしまって……」

「いえ、構いません。ソレイユさんのお陰で、調べたかった土壌の汚染具合が調べられそうです。ノームさんをあれだけやる気マンマンにすることは、私では難しいです。私こそ、感謝しています。それにしても、ノームさんは胸の大きい人が好きなのですね……」

「まあ、年寄りというのは、そういうものです」

そう言って二人は笑いあった。その時、別の場所に行っていたチワンとローニが二人の下に帰ってきた。

「メイ様、カビの採取が終わりました。見たところ、数種類のカビが発生しています。この中のどれかが、ルロワンス発症の手がかりになればいいのですが……」

「そうですね、チワンさん。そのカビは厳重に密閉して、研究室に持って帰って詳しく調べましょう」

「わかりました」

「メイ様、私の方は、感染状態にある患者から、血液を採取してきました」

ぴょこんと頭を下げながら話をしているのは、ローニだ。彼女はリノスの治癒を拒み、あくまでクリミアーナ教に執着して、この村に

とどまり続けている信者たちから血液を採取していたのだった。当然、信者たちに、まともに協力を依頼しても拒否されることは明白であったし、現にメイたちがこの村に到着して色々と調査を始めると、案の定、大多数の信者は彼女らに協力しないばかりか、罵詈雑言を浴びせかけ、木の間に隠れて石を投げるなどの、あからさまな妨害を行う者もいたのだ。

結局そうした妨害はリノスの張った結界に阻まれ、挙句、彼女たちに食って掛かったり、暴力を振るおうとする奴に至っては、結界に触れた瞬間に電流が走って気絶するという結末を迎える。とはいえ、信徒たちの抵抗はまだまだ激しいものであったため、ローニは事前にフェアリに頼んで、人を眠らせる鱗粉を出してもらい、それを用いて信者たちを眠らせつつ血液を採取していった。

「では、これらを持って一度、研究室に帰りましょう。大丈夫です。きっとこの中に、ルロワンス撲滅の手がかりはあります。あ、ノームさーん。帰りますよー」

「おい。わかったぞい！」

ノームは土の一部を自分の両手で掬うようにして持ちながら、メイの下に帰ってきた。そして彼女たちは、一旦村を後にしたのだった。

その村からさらに森の奥に、クリミアーナ信徒たちの避難キャンプが作られていた。ここでは湧水もあり、結露は発生するものの、以前ほどではなかった。これはルロワンスの発症原因が結露にあるかもしれないという、メイからの進言を受けたリノスが、ソレイユに命じて湿度を下げさせたことによるものだった。

そうしたこともあり、カッセルらにとっては劇的に改善された環境となっていたのだが、一方で、森の奥深くに村を作ったために、昼となく夜となく、魔物の襲来を受け続けることになっていた。現在は何とか屈強な兵士たちの力で撃退しているが、その兵士たちも少しずつ疲弊してきている。このままでは一年後には食料も尽き、兵士たちも現在の戦力を保持できているかどうかは、甚だ不透明な状態だった。

カッセルは焦っていた。間もなく九歳になろうとしているが、確かに同年代の子供と比較すると、頭脳の明晰さや知識量は群を抜いているが、所詮、彼は子供であった。これまでは、ヴィエイユというカリスマ性を持った肉親と有能な司教たちに囲まれていたためにその才能を発揮できていたのだが、いざ自分がそのトップに立った時、彼は何も打つ手を思いつかないでいた。

彼は「チェックと改善」は得意であったが、「無から有を生み出す」ことには適性がなかった。彼自身はそれを全く気が付いていなかったし、当然、周囲の者もそれに気づいている者は皆無であった。それどころか、この幼いカッセルが、起死回生の策を練りだすだろうと過剰な期待を寄せていた。そして、カッセル自身もその期待に応えようと頭を巡らせるが、全く何も思い浮かばない現状に苛立っていたのだった。

「くそっ……どうすればいい。教国に応援を要請するにしても川が氾濫していては……。姉さまを……姉さまを取り戻さないと……。そのためにはどうすれば……どうすれば……」

机の上に突っ伏したままカッセルは苦悩する。彼はヴィエイユとは違い、現実逃避をせずに、ひたすらに現実を見据えている強さを持ってはいたが、その現実を見れば見るほど、彼には絶望的な未来し

か見えてこなかった。

カッセルの精神は、徐々に蝕まれつつあった。

第二百十九話　だるまさんがころんだ

「……服を脱いで、裸になってください」

「……」

白衣を着た三人の研究者の前には、一人の少女が震えながら立っていた。彼女は青ざめた表情を浮かべつつ、ゆっくりと上着の紐を解いていく。シュル、シュル、シュルという音が部屋に響き渡る。そして、彼女は胸の前で手を止める。よく見るとその手は小刻みに震えている。

「脱いでください」

「……」

彼女はあきらめたようにゆっくりと胸をはだけた。服の下には何もつけておらず、まだ膨らみ始めたばかりの幼い胸があらわになる。その直後、上着はゆっくりと床に落ち、下着一枚の姿になった彼女は、両手で胸を隠す。

「下着も脱いでください」

無情な言葉だ。その言葉を聞いた少女は一瞬、ピクンと体を震わせる。そして、目を伏せながら、胸を隠していた両手を下ろしていく。そして、彼女は震えながら、ゆっくりと下着を下ろしていく。

「足を開いてください。顔を上げてください」

少女は目を閉じたまま、一糸まとわぬ裸体を晒す形になった。シミ一つない真っ白な、絹のような美しい肌だが、痩せた体だ。あばら骨が浮き出している。その上に、お椀を伏せたような小さな乳房が乗っており、それが彼女を女であることを証明している。体毛はすべて処理されており、まさしく彼女は、生まれたままの姿を晒していた。

「では、始めましょう」

三人の研究者は少女に近づき、彼女の体の、ありとあらゆる場所を調べていく。全身をはい回る手や指の感触に、少女は悪寒にも似た感覚に苛まれ、その両目からは自然と涙が溢れた。この幼い裸体を晒しているのはヴィエイユであり、それこそクリミアーナの人間がこの光景を見れば発狂するような、一見すると虐待に近い仕打ちが行われていた。むろんこれは必要があって行われていることなのだが……。そんなことを繰り返すこと数回、ついにヴィエイユの精神は崩壊寸前まで追い詰められたのだった。

アガルタの都にあるリノスの執務室。そこに一人の女が呆然と立ち尽くしていた。美しかった金髪はほつれ、頬はげっそりと痩せこけ、目の下には濃い隈が出来ていた。女の全身から疲労感と倦怠感が滲み出ており、一見すると四十台半ばの女性に見える。まさかこれがクリミアーナ教の教皇の孫として、蝶よ花よと育てられてきたヴィエイユであるとは、誰も気が付かないだろう。信徒たちの憧れを一身に集めた美少女ぶりは、そこには全くなかった。

そのヴィエイユの前には、机の上で腕を組んだまま彼女を見据えているリノスがおり、その上手側にはラファイエンスとクノゲン、そ

してマトカルが控え、下手側にはメイとチワン、ローニが控えていた。ヴィエイユは口を半開きにしたまま、焦点の定まらぬ視線をリノスたちに向けていた。

「で、どうだ。体の調子は?」

リノスが落ち着いた声でヴィエイユに尋ねる。彼女は即答せず、やや長い間をあけて、か細い声で返答する。

「……問題、ございません」

リノスは、やれやれといった表情で、隣のメイに視線を向ける。

「今のところルロワンスの特徴である紫色の斑点は見えませんし、呼吸、脈拍ともに安定しています。ただ……」

メイは何やら口ごもっている。リノスは小首をかしげて、ちょっと目を見開いてメイを見る。彼女は困ったような表情を浮かべたが、やがてリノスの傍に近づき、耳打ちをする。

「……それって、やばくない?え?まさか……できてるの?相手は誰?」

「いいえ、そういうことではありません。別に、心配することではありません」

声を発したのはローニだ。

「確かに、14歳での生理不順は経過観察が必要ですが、このヴィエイユさんの場合はショックとストレスによるものです。それが解

消されれば、自ずと正常に戻ります。彼女は男と交わった経験はまだありませんので、断じて懐妊ではありません」

「ああ、そうか。ちょっと安心した。しかし、ローニは、はっきり言うんだな」

リノスはローニの全くオブラートに包まない発言に苦笑しつつ、ヴィエイユを見る。彼女はほとんど感情というものを失ったかのように、無表情のままだ。リノスはその様子を見ながら、小さなため息をついた。

ヴィエイユがこのようになるのは、無理もなかった。死ぬかもしれないという恐怖と、劣悪な環境に置かれて精神をガリガリに削られた挙句、信じていた神を自ら裏切ったという行為に、彼女の心はズタズタにされていた。さらに彼女は、内心、家族も帰る場所も全てを失ったと思っていた。実際、教国に帰っても彼女の居場所はないであろうし、下手をするとその身分をはく奪されて、その存在そのものを闇に葬られる可能性すらあった。

そこにきての、アガルタの医療研究所において頻繁に実施される、ルロワンスの検査。これが彼女を現在の状態にまで追い込んでいた。

この病気は、首筋の周りに紫の斑点が見られることが一般的だったが、アガルタで感染した患者の大半は、体中に斑点を浮きだたせるという現象が発生していた。その中でも、ヴィエイユに現れた紫色の斑点の数、範囲は遥かに群を抜いており、それがために彼女はルロワンス研究における最も重要な生体サンプルと位置付けられた。そのため、彼女は何度も研究所に呼び出されては、精密検査を実施されていた。その検査は、採血に始まり、問診、身体検査という、ごく簡単なものだったのだが、この身体検査が、彼女にとって大き

な負担であった。

彼女は、身体検査委の際は必ず全裸になることを求められ、研究所員にその未熟な裸体を晒さねばならなかった。しかも、体にルロワンスの反応がないかどうかを調べるために、それこそ、頭のてっぺんから足のつま先、果ては肛門に至るまで、体の隅々までを研究員に見せる必要があった。そのために時には、屈辱的な姿勢も取らねばならず、こうしたことの繰り返しは、彼女のプライドを大きく傷つけていた。

当然、アガルタ側の配慮により、診察を行うのはメイ、ローニが中心であり、できるだけ女性の研究員を配置するという配慮が取られていたのだが、これまで、自分の乳母か、子供の頃から従っていた侍女くらいにしか裸体を晒したことのなかったヴィエイユにとって、見ず知らずの、しかも、衆人環視の下で裸を晒すというこの行為は、苦痛以外の何物でもなかった。当初はプライドと持ち前の精神力で耐えていたヴィエイユだったが、ここ最近ではそれも限界に達し、廃人同然の姿になったのだった。

本来であれば舌を噛み切ってでも、この屈辱的な仕打ちから逃れるべきなのであるが、ヴィエイユは既に、死ぬ気力すらも無くしていた。彼女は心の中で、誰か自分を殺してくれはしないかと、ただただ強く願うしかなかった。

彼女の様子がおかしいと報告を受けたリノスは、さっそくヴィエイユを執務室に連れてこさせたが、その様子はリノスの予想をはるかに超えており、彼はこれまでのヴィエイユとのギャップの大きさに、内心驚いていたのであった。

「……メイ、ヴィエイユの検査はまだ続けるのか？」

「……そうですね。ご主人様に治癒を施していただいて一か月。ルロワンスの反応は出ていませんので、完治したと見てよいと思います。ただ、病気が病気だけに、しばらく経過観察をした方がいいのですが……」

「治癒など、しなければよかった……」

メイの声を聞いてヴィエイユは小さく呟いた。

「こんなに、恥ずかしい思いをするのであれば、死んでしまえば、よかった……」

そう言って彼女はさめざめと涙を流した。リノスは大きくため息をついて、ヴィエイユに話しかける。

「まあ、治癒してしまったんなら、しょうがないな。生きたくても生きられなかった信徒たちと比べれば、まだマシだと思うことだ。これから人生を作っていけるだろう。死んでしまった信徒たちの分も、お前は生きなきゃな。で、これからどうするんだ?まだ、アガルタで楽園を作るのか?それとも、教国に帰るか?帰るんだったら、ガルビーまで送ってやるぞ?お前たちの信徒も何人かイルベジ川を下ろうとしたようだが、増水中の上に、さらに水量が例年以上に増えている。今のあそこは、かなり熟練された者でなければ川を下っていくのは難しいからな。どうだ、教国に帰るか?」

「……クリミアーナには、私の帰る場所など、ありません。私も、どうしていいのか、わかりません」

そう言って彼女は再び涙を流した。これから信徒たちをどうやって

導いていくのか、しかも、リノスに賛同を示した信徒と、カッセルが率いる、未だクリミアーナ教を信じる者たちとの兼ね合いをどうするのか。ヴィエイユにはやらねばならない問題が山積していたが、ほとんど手付かずの状態であり、その点も彼女を焦燥に駆り立て、さらに精神状態を不安定なものにしていた。リノスは結論を急がず、まずは結界村を離れて、ゆっくり心と体を休めるべきだとのメイたちの意見を取り入れ、ヴィエイユにこの都で、しばらく逗留することを認めたのだった。

メイたちに伴われて退出していくヴィエイユの後姿を見送ったリノスは、天井を仰いでため息をついた。その様子を見ていたラファイエンスが、出し抜けに口を開く。

「どうすれば穏便に教徒たちがアガルタから出て行ってくれるか、とお考えかな？」

「さすがは将軍、ご明察です。嫌がらせをして出ていかそうとしていたのが、まさかこんな結果になるとは思いもよりませんでした。さらに話がややこしくなってしまいましたね。あんな状態になっているとは……。腐っても教皇の孫です。彼女が動かない限り信徒たちも動かないでしょう。彼女をどう動かすか、ですね」

そのリノスの様子を見て、ラファイエンスはニヤリと笑う。

「なに、話は簡単ですぞ？それに、今は絶好の機会だ」

「絶好の機会？」

「そうだ。今、ヴィエイユの心は完全に折れている。それは、リノス殿に忠誠を誓った信徒たちも同じだ。特にヴィエイユは女だ。上

手にやれば、彼女はリノス殿の言うがままの女になるぞ？脱げと言われれば脱ぎ、足を開けと言えば足を開くだろう」

「いや、将軍……。俺は別に……」

「いや、あくまで例え話だ。リノス殿、ヴィエイユにたっぷりと情をかけなされ。そうすれば彼女は、リノス殿の言うことは何でも聞く女になるだろうし、リノス殿のために死ぬことも厭わない女になるだろう。そうしておいて、彼女を教国に帰すのだ。そうすればクリミアーナは自然と二つに割れる。いや、ヴィエイユが教皇に敗北するかもしれぬが、その時は別の策を考えればいいのだ。クリミアーナの矛先は今、アガルタに向いている。まずはその矛先を、別のところに向けねばならない。それが、自国に向くのであれば時間稼ぎになり、さらには教国の力を削ぐことにもつながる。一石二鳥だ」

「すばらしい戦略かと思いますが、将軍。俺に女を篭絡することなどできませんよ」

「何を言われる！リコレット様やマトカルをはじめとして、何人も美女を侍らせているリノス殿の言葉とも思えぬな。まあ、謙遜はそのくらいにして、一度やってみなされ。何もリノス殿一人で頑張れと言っているわけではない。我らも手伝おう。我らは、結界村の警護を行いつつ、そこに住んでいる女どもに情けをかけていこう。なに、女たちはヴィエイユと同じように呆然自失で、手も足も出ぬ状態だ。あの娘が教国に戻る時のために、一人でも多くの味方をこちら側に転ばせておこう。どうだ？」

「将軍……。気に入った娘が、見つかったのですね？」

俺の意地悪な質問にラファイエンスは答えず、人差し指を口元に持

っていき、俺にウインクを送る。そして老将軍はクノゲンに向き直る。

「クノゲン、お前はこの作戦に関与しなくてもよいからな」

「は？何故ですか？」

「わからんのか！この作戦は、選ばれし美男もしくは洗練された紳士でなければ成功はおぼつかん。本来は、男装すれば女どもを虜にする美男になるであろうマトカルも参加させたいが、それはさすがに出来んな。まあ、そういうわけだ。……わかるな？」

クノゲンは一瞬目を見開いたが、その意図を察したらしく、苦笑いを浮かべて首を左右に振るのだった。

その夜、屋敷の寝室で、俺は老将軍の提案をリコに相談した。

「……リノスは、そのヴィエイユを側室にするつもりはおありではなくって？」

「ああ、ない」

「本当に？」

「本当に」

「本当に本当に？」

「本当に本当に」

「本当に本当に本当に？」

「しつこいなリコ。本当に本当に本当に、そのつもりは、ない」

「そうでしたか。私はもう一人くらい側室を増やしてもよいと思っていましたのに……」

「え？本当に？」

「リノス……。今、ちょっと嬉しそうな顔をしましたわね？やっぱり……」

「いや、ちがっ、違う！そんなつもりじゃない！意地悪なことを言わないでくれ。俺は、リコが居ればそれでいいんだ。他の女は、いらないんだ。リコが一番いいんだ」

薄暗い部屋の中でもわかるくらいに、リコの顔が真っ赤になっている。リコはそのまま俺のそばに寄ってきて、俺の顔を両腕で優しく包み込む。リコの体から石鹸のいいにおいがする。

「リノスなら、ヴィエイユの心を掴めると思いますけれど、その女がリノスを追いかけてくるのは困りものですわね。突然この屋敷に土足で上がりこまれては……。わかりましたわ。そのヴィエイユという娘、一度、私が話をしてみますわ」

「リコが？大丈夫か？」

「ええ。根拠はありませんが、自信があるのですわ。同じ女同士、

分かり合えないことはないと思いますわ。要は、リノスに従わせればいいのですわね？それならば……キャッ」

俺はリコに抱きしめられながら、彼女のパジャマを脱がしていた。そして、最後の下着を脱がせて、ベッドに寝かせる。

「すまんリコ、ちょっと、我慢できなくなった」

「うふふ、気付かないうちに裸にされているとは……。上手になりましたのね？でも、うれしい……。愛していますわ、リノス」

「俺もだ、リコ」

俺はちょっと乱暴に、リコを抱きしめた。この夜のリコはいつも以上に優しかった。そのお陰で俺は、これまでのモヤモヤした悩みを解消させることができたのだった。

第二百二十話　女同士の身の上話

朝、朝食を終えたリコは、フェリスやルアラ、マトカルらと共に都に向けて転移していった。今日の俺は休暇を取り、メイと共に子守の一日だ。

エリルもアリリアも、つかまり立ちから歩こうとする時期に来ている。二人とも「ママ」や「マンマ」など色々な言葉をしゃべりながら、機嫌よく過ごしてくれているが、二人を見ていると、それぞれの性格が出ていて面白い。

エリルは行動派のようだ。まだ歩けないのに歩こうとしている。トテトテと歩くがすぐにベタッと転んでしまう。そこで泣くかと思いきや、彼女はムクリと立ち上がってまた歩き出す。転んでもあきらめず、すぐ起き上がっていく姿は、ちょっと感動する。きっとこの子は早く歩けるようになるだろう。行動を見ていると、亡くなった先代エリルに、やはり似ているようだ。

一方でアリリアは慎重派だ。伝わり歩きはするものの、エリルが転んでいる姿を見ているためか、自分から歩きに行こうとはしない。しかし、一歩歩いてつかまり、二歩歩いてつかまりしながら歩いている。どうやらこの子はあまり失敗をしないタイプのようだ。

そんな娘たちをメイは甲斐甲斐しく面倒を見ている。さらにはフェアリも、娘たちの頭上をパタパタと飛びながらいい遊び相手になっている。こうしてみていると、この三人はまるで姉妹のようだ。

子どもたちとフェアリがじゃれ合いながら遊んでいる様子を見なが

ら、俺はメイに話しかける。

「キリスレイの特効薬ができたかと思ったら、今度はルロワンスが発生するとはな。メイもなかなか休まる時がないな」

「いいえ。私は子供たちのことがありますから、比較的休ませていただいています。むしろ、チワンさんやローニさんが心配です。でも最近はシディーちゃんが手伝ってくれますので、それがかなり助かっています」

「ああ、シディーは分析が得意なんだっけ？」

「はい。ドワーフ族は物質を徹底的に分析してから武器や防具を作ります。モノの持っている特性を最大限に活かすための分析力は必要で、その点ではシディーちゃんはとても優秀です。ルロワンスの発生源やその対策も目途はついています。あとは実験結果で証明できれば大丈夫だと思います」

「メイやシディーたちには負担をかけるけれど、ルロワンスの対策、よろしく頼むな？」

「はい、お任せください」

メイの満面の笑みを見て、俺の心は癒されていくのだった。

ちょうど同じ頃、アガルタの迎賓館の一室では、リコとヴィエイユの会談が始まっていた。

当初リコは二人だけの会談を希望したのだが、さすがにそれは危険

が伴うとのことで、マトカルがそこに同席していた。当然リコにはリノスの結界が張られているために、彼女が攻撃を受けることはない。しかしマトカルは、この会談にイヤな予感を感じていた。そのため彼女は、リコを一人にすることに不安を感じていたのだ。

「これまで信じていたものが崩壊して、生きる目的を失ってしまいましたわね。どうしていいのかわかりませんわよね？　わかりますわ」

挨拶もそこそこにリコは口火を切る。ヴィエイユは相変わらず虚ろな目でリコを見つめている。

「私もあなたと同じでした。その昔、仕えていた者たちが遠ざけられ、あるいは討たれ、私自身も幽閉されて、一時は命を奪われそうになった経験がありますわ。実の兄に。その時は、私も呆然自失になりました。第一皇女として誹りは受けたくないという自尊心……。自害すればよかったのかもしれませんが、あいにく私にはその勇気はありませんでした。そこにきて、私の助命と引き換えに、今の夫であるアガルタ王・リノスとの結婚の命令……。好きでもない男、しかも、奴隷上がりの男との結婚の強要……。どうしていいのかわかりませんでしたわ」

ヴィエイユは相変わらず、無表情のままだ。リコはそれには構わず、話を続ける。

「あなたはきっと、誰よりもクリミアーナ教国のために心を砕き、そして、努力されたのだと思いますわ。人には言わなくとも、私にはわかります。あなたは、私と同じニオイがするのですわ。きっと、教えを守り、自分に厳しくあり、色々なものを我慢し、犠牲にしてきたのだと思いますわ。すべては教国のために……。それだけ努力

をされてきたのにもかかわらず、ご自身が病に感染されて、さらには、信じていた神を冒涜するようなことをしてしまった」

ヴィエイユの目がゆっくりと横に動いていく。リコはその様子を見て、優しい笑みを浮かべる。

「……辛かったですわね」

その言葉を聞いた瞬間、ヴィエイユの目から涙が流れ落ちる。そして、彼女は声を殺して泣き出した。リコはゆっくりと彼女の傍に行き、優しくその背中を撫でる。

「辛かった、辛かった。自分の力ではどうしようもなかったですわね？　自分自身を否定してしまいましたわね？　辛かったでしょう。私も同じでした。わかります。そのお気持ち、よくわかりますわよ」

リコは小さく声を上げて泣いているヴィエイユの両手を握り、優しい声で彼女に語り掛ける。

「今、あなたは、死にたいと思っていますわよね？　でも、ご自身では死ねないので、誰かに殺してほしい、そう願っておいでですわよね？」

ヴィエイユは泣きながらゆっくりと頷いた。

「あなたは素晴らしいお人ですわ。そこまで責任感のあるお人を、私は見たことがありませんわ。でもね、ヴィエイユさん、こう考えてはいかがかしら。これは絶対ではありません。ヴィエイユさんはあなたの信じる道をすすめばよろしいのですから。これは、一つの考え方と捉えていただければうれしいですわ」

リコはそこで言葉を切る。しばらく彼女は何も言わず、ヴィエイユの手を握り続けている。ヴィエイユもその雰囲気を察して、ゆっくりと顔を上げて、リコを見る。

「死ぬのはいつでもできるのです。その気さえあれば、いつでも死ねます」

優しい笑みを浮かべながら物騒な言葉を吐くリコを、ヴィエイユは目を見開いて凝視する。

「でもね、あなたは今、生きています。生かされています。これには何か、意味があるのではなくって？」

「私は……多くの信徒を死に追いやりました。……クリミアーナ教の威信に傷をつけました。きっと、その、天罰なのでしょう。死ぬまで苦しめ、と」

「いいえ。私はむしろ逆だと思うのです」

「逆？」

「私もそうでした。夫と結婚する時は、あなたと同じようなことを思いましたわ。でも、考え方を変えたのです。ひょっとして、これには意味があるのではないかと。私が生かされている意味は何なのか、それを見つけてみようと」

「……リコレット様の、生きる意味は、見つかったのですか？」

リコは満面の笑みを湛えて、口を開く。

「ええ。割と簡単に見つかりましたわ。私の生きる意味は、アガルタ王・リノスを支えて、この国を戦のない平和な国にするための手助けをすること。これはもともと私が目標としていたことであり、打ち砕かれた夢でもあります。しかし、夫を助けることで、私は子供のころからの夢が再び、追いかけることができるようになりました。考え方と捉え方次第で、物事はどのようにでも変えることができますわ」

ヴィエイユの両目は落ち着きなく左右に動いている。リコは彼女の両手から手を放し、姿勢を正して、真剣な表情になって、再び話しかける。

「ヴィエイユ様、もう一度、生かされた意味をお考えになっては如何かしら?もしかすると、あなたの信じるクリミアーナ様は、あなたに何らかの使命をお与えになったのではなくって?今のクリミアーナ教は、果たして主神様が望む形なのかしら?」

そこまで言うと、リコは再び柔和な顔になる。

「まあ、あくまでこれは私の考えですので、別に受け入れる必要などありませんわ。ただ、私と同じ境遇のあなたが気になって来てみただけなのですわ。でも、お話しできてよかったですわ。あなたは、私が思った以上に責任感のある御方でした。お会いできただけでも、よかったですわ」

リコは本当にうれしそうな顔をして話をしている。その姿を見てヴィエイユは、少し心が軽くなったような気がしていた。

一時間後、会談が行われた部屋からは、女たちの笑い声が聞こえて

いた。リコ、ヴィエイユに加えて、マトカルもその輪の中に入って、お茶を飲みながらお菓子を食べ、会話を楽しんでいたのだ。

ヴィエイユは二人の女との会話を楽しみながら、リコが言った、自分が生かされている意味について、思いを馳せるのだった……。

第二百二十一話　四者四様

リコが屋敷に帰ってきたのは、夕方だった。アガルタの都に勤務している、フェリスやルアラ、そしてシディーらと一緒に帰ってきた。リコの顔が見えるや否や、娘たちはママ～と彼女の下に寄っていく。リコは満面の笑みで二人の娘を抱きかかえる。

「エリル、アリリア、ただいま帰りましたわ。たくさん遊んだかしら？　いい子にしていたかしら？」

「リコ様おかえりなさい。二人とも、とってもいい子にしていました」

「メイ、せっかくのお休みなのに、一日中子守をさせてしまいましたわ」

「いいえ。このくらい、何でもありません」

リコとメイが仲良く、今日一日あったことを報告し合っている。その様子をフェリスとルアラは呆然と見ている。

「フェリス、ルアラ、どうしたんだ？　随分と疲れてないか？」

二人は苦笑いを俺に向ける。聞けば、ヴィエイユとの会談を終えた後、リコは久しぶりにフェリスとルアラの所に差し入れを持って行ったらしい。と、そこまではよかったのだが、ふと、机の上に積まれた書類がリコの目に留まった。そこから怒涛の如く、リコ姉さまの書類チェックがはじまり、徹底的に書類の不備を指摘され続けた

のだという。その話は聞けば聞くほど精神的に疲れるものであり、俺はひたすら苦笑いを浮かべるしかなかった。

フェリスとルアラには、先に風呂に入るよう命じて、俺はリコから今日の話を聞く。

「ええ。問題ありませんでしたわ。話をしてみてわかりましたが、あのヴィエイユという人は相当頭のいい方ですわ。おそらく、そう長くはない時期に、ご自分がどうしたいのか、これからどうするのかをお決めになると思いますわ」

「そうか。さすがはリコだな」

「いいえ。私がリノスに言われたことを、そのままヴィエイユに言っただけですわ」

「え？俺がリコに？何のことだ？」

「まあ、覚えていないのですか！？宮城（きゅうじょう）の私の部屋でリノスが言ったのですよ！？」

「ああ……あれか」

照れくさそうに目を逸らすリノスを見て、リコはその時のことを改めて懐かしく思い出すのだった。

リコを見送ったヴィエイユは一人、部屋の中で考えていた。自分は敢えて生かされているというリコの言葉は、彼女の腑に落ちるものがあった。これまで信じてきたクリミアーナ様を否定し、裏切った

自分が何故、命を奪われていないのか。死ぬまで苦しみ続けるために生かされているのではなかったのか。だが、そうであれば、自らの命を絶てばいいのだ。しかし、それが今はどうしてもできない。ということは、これは罰ではなかったのか？　では、どうすればいい？　今の状況が、生かされているものであるとすれば、自分は一体何をするために生かされているのか？

ズキズキと痛む頭痛を感じながら、ヴィエイユは思考する。今までの人生を振り返りつつ、クリミアーナ教の、クリミアーナ教国のことを振り返ってみる。なぜ……？　なぜ……？　クラクラとした感覚に抵抗するように、彼女は熟考する。

リコと過ごした時間は確実に、多感で鋭い感性を持つこの少女に、何かの気づきを与えていた。これまで死と隣り合わせに生きてきたヴィエイユにとって、この悩み事は、悩みの部類に入らぬ程度のものであった。彼女は今、自分の人生を振り返りつつ、これまで教えられてきた、「～しなければならない」や「～であるべきである」というクリミアーナの固定観念から解放され、第三者的な視点を持つようになっていた。そして、彼女の持つ抜群の分析力は、クリミアーナ教とクリミアーナ教国に向けられようとしていた。

森の奥深くに建てられた一棟のロッジ。その中の薄暗い一室で、一人の少年がぼんやりと虚空に視線を泳がせていた。ここ最近再びひどくなってきた湿度のため、身に付けている服は湿り気を感じる。その中で、少年は充血した目でブツブツと何かつぶやきながら、頭の中に浮かんでは消え、浮かんでは消えする考えを整理でき切れずにいた。

「楽園を作るんだ……。アガルタ王は、絶対に許さない……。僕の

頭が腐っているなどと……。姉さまを、ヴィエイユ姉さまを、信徒を取り戻さないと……。連絡が遮断されている……。姉さまたちは無事なのか？　いや、ルロワンスは完治しているのか？　確認が取れないままに姉さまを迎えると再び……。教国に連絡を……。いや、その前に信徒たちをまとめないと……」

次から次へと湧き上がってくる不安は、カッセルの精神バランスを著しく崩していた。

「オマエ、コロサレルゾ？」

「誰だ！」

「コノママジャ、コロサレルゾ？　ミンナ、オマエノテキダゾ？　ミンナ、オマエヲワラッテイル……」

「やめろっ！　誰だっ！　誰だっ！」

カッセルは耳元でささやいてくる声を振り払おうとする。これは幻聴なのだが、もはや彼には、それが幻聴であるかどうかを認識する力すらも残っていなかった。

「僕を嗤うものは許さない……。絶対に、許さない……」

カッセルは今、爆発寸前にまで追い詰められていた。

「……ほほう。不思議なこともあるものですね」

そう呟きつつ、報告書から視線を外し、ゆっくりと右手で目頭を押さえる。ここ最近は老いのためか、字が見づらくなってきた。そんなことを思いつつ、右手を目から放し、目の前に立つ女性に視線を向ける。

「いかがいたしましょうか……」

不安そうな面持ちで女は尋ねる。その様子を見ると何故か笑いがこみあげてくる。

「フッ……フフッ……フフフフ……」

「教皇様……？」

女が目を見開いて驚いている。満面の笑みを湛えながら声を殺して笑っているのは、クリミアーナ教国の教皇、ジュヴァンセル・セインであった。彼はひとしきり含み笑いを続けた後、ゆっくりと息を吐く。

「いえいえ、私の若い頃のことを思い出していましてね。そう……あれはまだ、２５歳くらいの時でしたか。赴任したガシラーソン国で迫害を受けましてね。信徒たちと小さな砦に立てこもったのですよ。食料もなく、ましてや教国からの援軍もない。そんな状況下で、私ももう終わりかなと思いましたが……。クリミアーナ様のご加護を頂戴して、何とかその危機を乗り越えることができました。まさか、ヴィエイユとカッセルが、私と同じような状況に陥るとは……。これも巡りあわせですね。さて、彼女たちはこの危機をどうやって乗り越えるでしょうかね。特にヴィエイユは、父親と同じ失敗を繰り返さないでもらいたいものです。まあ、聡明な彼女のこと、それはないと信じていますが……。まあ、見ていて御覧なさい。この危

機を乗り切った者が、おそらく私の後を継ぐことになるでしょう。さて……アガルタ王とその一族の首を持ち帰るのは、果たして誰でしょうか？」

教皇は満足げな笑みを浮かべる。女は表情を凍り付かせたまま、教皇に口を開く。

「ぞ……存じませんでした。教皇聖下がそのような過去をお持ちとは……」

教皇は満足そうに体をゆすりながら頷く。

「しかし、教皇聖下。もし万が一、ヴィエイユ様とカッセル様がお二人とも成果を残せず、教国にお戻りになられましたら……。ツッ！これは不敬でございました。お許しくださいませ」

「いいのです。その可能性もなくはないでしょう。その時は、新しい後継者を立てるまでです」

「新しい後継者……。恐れながら、教皇聖下のお血を引き、跡を担えるお方は、ヴィエイユ様とカッセル様だけかと心得ますが……」

女の言葉に、教皇は再びニコリと満面の笑みを漏らす。

「その時はまた、子供を作ればいいのです」

「……！」

「男は女と違って、いくつになっても子供を作ることができますからね。ヴィエイユとカッセルが倒れた場合を想定して、今から子供

を作るのも、いいかもしれませんね。キャンセイナさん、あなた、協力してくれますか？」

教皇はいつもの通り、やさしい笑みを湛えている。しかし、キャンセイナと呼ばれた女司教は、たった今聞いた身の毛もよだつ話に、平静を装うのに精いっぱいだった。そんな様子を満足そうに眺めながら教皇は手を叩く。すぐに若い男の司教が入室してきた。

「アガルタのクリミアーナ村に使者を立てなさい。いいえ、内容などどうでもよろしい。ヴィエイユとカッセルがどのような戦略を立てるのかを見てくるのです。……ええ。使者がイルベジ川を越えられず、消息を絶っているのは知っています。数を増やしなさい。アガルタに入る道はそこだけではないでしょう？あらゆる手段を講じてアガルタに人を遣わしなさい」

教皇は若い司教を見送った後、ゆっくりと口を開く。

「天道に従わぬものを取り除いた者に、あの国を任せましょう。きっと、我が主神様のご加護の厚い国となることでしょう。さて、どのような結末になるのか……楽しみです」

教皇は知らない。これまで送った全ての密偵が、アガルタ領内に入った瞬間に森の精霊たちに惑わされ、ある者は命を落とし、ある者は魔物の餌食になっていたという事実を。

そんなことは全く知らない教皇は、アガルタの方向を見据え、再び満足そうな表情を浮かべるのだった。

第二百二十二話　熟考する二人

眠れぬ夜が続いていた。眠ったとしても、すぐに目が覚める。ここ数日、自分は何時間寝たのだろう……。そんなことを、真っ暗な部屋の中でぼんやりと考えているのは、カッセルだった。

彼は夜、一旦ベッドに入りはするものの、当然のごとく眠ることはできない。何故なら、目を閉じれば次から次へと不安が沸き起こってくるのと同時に、時折聞こえてくる幻聴のために、全く眠ることができなかった。

彼は延々と、真っ暗な闇の中で起きている。明かりをつければよいのだが、それをすることはない。何故なら、その明かりで森の魔物が寄って来はしないかという不安と、明かりをつけることで、村の住人達に自分が起きていることが知られてしまう。彼らに、夜も眠れずに悩んでいると思われたくはなかった。

結果的に彼は、夜が白むまで起き続けていることになる。そして、ちょっとしたまどろみの後、再び起きだして、日課としている村の見回りに出かけていくのだ。

彼は、村の住人に弱みを見せることを極端に嫌がっていた。しかし、そのやつれ切ったカッセルの姿は既に、住民たちに不安を抱かせるのに十分だった。

この夜も、カッセルは眠ることが出来なかった。

なぜ自分がこのような目に合わなければならないのか。彼は闇を睨

みながら考える。当然それはアガルタ王・リノスが大きくかかわっていることは明白だ。しかし、彼は殺せない。一瞬にして自分の自由を奪い、そして眠らせた。その時見ていた夢は心地よいものだったが、それすらも、あのリノスが見せていたのだろうか？であれば、勝てる見込みはない。ノホホンとした雰囲気を漂わせた、王には到底見えぬ王は、人知をはるかに超えた者であるとカッセルは認識していた。

で、あれば、一旦教国へ引くという手段しかない。イルベジ川が大増水しているために、川を下ってガルビーに至ることは難しいが、ラマロンに抜けることは不可能ではない。多くの犠牲を払うであろうが、何とかなるだろう。また、遠回りにはなるが、ニザを経由して、大きく迂回して教国へ帰還するということも可能だ。それを選択するのであれば、今、出発しなければ、食料が持たない可能性がある。

そこまで考えて、カッセルは首を振る。もう、何度も考えてきたことだ。しかし、結論はいつも同じだ。この手段は使えない。

何故ならば、教国に帰っても、自分たちの居場所はないからだ。特例のジモークを受けての今回の任務なのだ。何の成果も上げずに帰るなど、自分が無能であると吹聴しに帰るのも同じだ。それだけでなく、自分の一族全員が没落の憂き目を見るだろう。ヴィエイユの父親がそうだった。成果を上げるどころか、赴任した地で迫害され、命がらがら逃げ帰ったのだ。それ以来叔父は、父である教皇の信頼を失い、教国内で冷たい視線にさらされながら、肩身の狭い暮らしを続けることを余儀なくされた。そして、その後すぐに叔父は、妻と子供たちを連れて、ほとんど人が住んでいない未開の地に飛ばされ、もう何年も帰還できていない。

例外的にヴィエイユだけは、幼い頃から聡明さを発揮していたことで教皇の目に留まっており、彼の鶴の一声でアフロディーテにとどまることを許されていた。教皇聖下の、血を分けた息子ですらそうなのだ。教皇聖下の妹の一族とはいえ、既にその曾祖母はこの世になく、後ろ盾が教皇だけというカッセルにとって、教皇の信頼を失うことはすなわち、死を意味するのだ。

一体どうすればいい。このままでは村全体が滅びてしまう。このまま滅ぶのか？なぜ自分はこんな苦境に立たされるのだろうか？確かに、自分はヴィエイユを利用しようとしていたことは確かだ。彼女はおそらく大きな成果を上げる。その手助けをすることで、ヴィエイユと教皇の信頼を得ようと努めてきた。そして、彼女に大きな失態があれば、ヴィエイユを押しのけて自分が主導権を握ろうとも考えていたのだ。

彼の思考はヴィエイユに向けられる。姉さまはどうしているだろうか。今頃、何をされているのだろうか……。確か、司教の一人は言っていた。姉さまは、アガルタの都で特別待遇を受けていて、元気に、すこやかに過ごされて、懸念されたルロワンスの症状は発症せず、紫の斑点も出ていないと。

そこで彼は舌打ちをする。ヴィエイユ姉さまは、クリミアーナ様を否定した人物だ。そんな裏切り者がなぜ、優雅な暮らしをしていて、自分はこんなに苦しんでいるのか？

姉さまの裏切りは今でも信じられない。あれだけ狂信的にクリミアーナ様を信仰していた姉さまが、それを否定したのだ。すべての困難をクリミアーナ様の御導きと受け入れ、そして、全ての幸福をクリミアーナ様のお陰と言って、一切驕ったところがなかった姉さま。その清廉潔白な振る舞いは、誰からも信頼を集めていた。その姉さ

まがまさか、裏切るとは思わなかった。

姉さまが自分の傍にいてくれたら、どれだけ助かったか。どれだけこの苦しみは和らいだか。奥の手はあった。それを使うこともなく、このどうしようもない状況に追い込まれてしまった。そう考えると、ヴィエイユの振る舞いは残念でもあり、許しがたいものでもあった。

「姉さまが……。姉さまが裏切りさえしなければ……。何故、僕たちを裏切った……。我れを害するものを、排除せよ……」

カッセルは闇の中に視線を泳がせながら、クリミアーナ教の教義を呟く。そうだ。ヴィエイユを、村を出ていった教徒たちは殺さねばならない。そうせねば、自分の未来はない。裏切り者を殺さねば……。そうすれば、この苦しみは終わる。堂々と教国に帰ることが出来る。そうだ、裏切り者の首を持ち帰り、その後に再びアガルタを攻める策を考えればいいのだ。

だが、そこまで考えてカッセルは、ゆっくりとため息をつく。姉さまは殺さねばならない。しかし、何故か彼女を殺すことをためらう自分が心の中に居る。殺さねばならない、でも、殺したくない……。そんなことを考えることしばし。彼はゆっくりと顔を上げる。

「姉さまに、会おう」

ヴィエイユを許すとか許さないとかではなく、彼女を殺す覚悟を決めるためにヴィエイユに会う。その決意を胸に、彼は部屋の外に控えている者を呼んだ。

同じ頃、アガルタの迎賓館の一室で、目を閉じて物思いにふける少

女がいた。ヴィエイユである。彼女は以前から悩み続けていた、自分のこれからについて、結論を出そうとしていた。

彼女の人生の指針となっていたのは、「我らを利する者は助け、害するものを排除せよ」というクリミアーナ教の教義である。彼女は聖女と呼ばれたかった。多くの人を救う聖女。そう、主神様であらせられるクリミアーナ様のように。そのために、多くの知識をつけ、多くの困難に耐えてきた。その思いは今でも変わらない。これまでは、クリミアーナ様の教えを忠実に守りさえすれば、多くの人は救っていけると思っていたのだ。

しかし、結果はどうであろうか。我らクリミアーナ教を利する者たちで、このアガルタに来たまではよかった。しかし、敬虔な信徒たちの大半はここに来ることが出来なかった。さらに、アガルタの民衆はクリミアーナの考えに賛同しなかった。そして、我々はその民衆を排除することすらできていない。翻って自分たちの境遇を見ると、結露という劣悪な環境が発生し、それだけでなく、自分を含め、多くの者たちがルロワンスという恐ろしい伝染病に感染した。それがために死んだ者は１００を優に超えるだろう。

カッセルは言っていた。これは大魔王、もしくはそれに類する邪神の差し金だろうと。確かにその可能性はあるかもしれない。しかし、それであればクリミアーナ様はなぜ、自分たちをお助けにならなかったのか？ありとあらゆる策を講じたが、その全てがうまくいかなかった。その挙句、アガルタ王・リノスにクリミアーナ様を否定する言葉を言わされ、口に出すのも憚られるような辱めを受けた。

一体なぜ？その疑問に、王妃リコレットは一つのヒントを示した。今のクリミアーナ教は、果たして主神様がお望みの形なのかと。

現在のクリミアーナ教とその教国は、絶対権力者である教皇の独裁政治である。教皇の決断が全てである。むろんそれがよい側面もあるだろう。しかし、教皇によって幸せを奪われたものも多いのも事実だ。自分の両親のように。

これまではそれも、クリミアーナ様が与え給う試練だと思って耐えてきた。しかし、人の幸せを奪うのは果たして、主神様の望む形だったのだろうか？今、教団と教国は、権謀術数が渦巻いている。自分はそれに巻き込まれぬよう、また、巻き込まれても対処できるようにこれまで生きてきた。果たしてそれは、主神様はお望みだったのだろうか？

ヴィエイユは考える。これまでのクリミアーナ教の歴史を思い返しながら。主神様のお言葉の一つ一つを思い出しながら。

アガルタ王・リノスは言った。神様というのは、ただ、見ているだけの存在だと。これまでの教国の歴史を、主神様はどのような思いでご覧になっていただろうか。……決して、笑顔でご覧になってはいないはずだ。我々はむしろ、主神様を悲しませていたのかもしれない。主神様が安心してご覧いただくためにはどうしたらいい？主神様は……利する者を助けよ、と言い残された。つまりそれは、救うということなのだろう。我々は確かに、多くの人を救ってきたという自負はある。しかし、主神様から見て、我々の行為は果たして、人を救うと認められる行為だったのか。

主神様の望む、人を救うというのはどういう行為であろうか？

そこまで考えて、ヴィエイユはハタと気が付く。教義の「我ら」というのは、クリミアーナ教徒のことではなく、もっと広義の意味を指すのではないかと。クリミアーナ教徒以外の、むしろ、教徒以外

の人間も救えと言う意味なのではないか。そう思うと、ヴィエイユは、バラバラに分かれていたピースがピタリと合っていくような感覚に囚われた。

そうだ。教徒以外の人間も救うのだ。だからこそ、クリミアーナ教は古来、最新の技術を開発し続けてきたのであり、最先端の医療研究を行ってきたのだ。それを活用して、多くの人を救ってきた。だから、長い歴史の中でクリミアーナ教は受け入れられてきたのだ。

「教徒も、それ以外の人間も、獣人も、生きとし生けるもの全てに救いの手を差し伸べる……。それができる人間でなければならないし、クリミアーナ教でなければならないし、教国でなければならない……」

ヴィエイユは急速に体中が和らいでいくような、心地いい感覚を全身に感じていた。そして、その感覚が高まるにつれて、彼女の目は見開かれ、瞳の奥に鋭い光が差していくのだった。

第二百二十三話　ヴィエイユ、覚醒

アガルタの都にある執務室。リノスは、その椅子に腰かけながら両腕を頭の後ろに組み、物思いにふけっていた。その机の上には二通の書簡が置かれており、その前には、書簡を届けてきた二人の男が、リノスの顔色を窺うように立っていた。

「あの……お断りしましょうか？」

沈黙に耐えきれず、男の一人が口を開く。その言葉にリノスは、ちょっと驚いたような顔をしながら、あわてて手を振りながら返答を返す。

「すまないすまない。いや、まさか示し合わせたようなタイミングだったのでな。何か裏があるんじゃないかと勘ぐっていたんだ。そうだな……。やっぱり最初はこっちだな。正式にお話ししたいと書いてあるしな。あとのは……。もう少し待たせておけ。コイツはどうせロクなことじゃないだろう。……しばらく待っていてくれ」

そう言ってリノスは、執務室を後にした。

「まさかヴィエイユとカッセルから、同じタイミングで俺に会いたいと書簡を送ってくるとは思わなかったな。小娘の方は、リコにも話をしたいと書いてあるし、坊主の方はヴィエイユとも話がしたいと書いていやがる。二人ともほぼ文面が同じというのは、何か気持ち悪いな……」

そんなことをブツブツと呟きながら、リノスは一旦、帝都の屋敷に

転移した。

数時間後、迎賓館の謁見の間では、リノスとリコが玉座に座り、会談を申し込んで来たヴィエイユを迎えていた。リノスが帝都の屋敷に戻り、ヴィエイユが会いたいと申し入れてきたとリコに伝えると、彼女はすぐさま承知して準備に取り掛かった。そして、1時間という、リコにしては驚異的な早さで身支度を整え、嫌がるリノスにも正装をさせて、この迎賓館に転移してきたのだった。当初は執務室でヴィエイユに会えばいいと考えていたリノスは、慣れない衣装のために居心地が悪く、少々不機嫌になっていた。

「……ご希望通り、我が王妃様にも同席いただいたぞ？　わざわざ書簡なんか送らずに、メイやローニに言えばよかったものを。むしろ、お前が話をしたいのは王妃様の方じゃないのか？　であれば、俺は席を外すが？」

正装をして謁見の間に現れたヴィエイユに対して、リノスはその不機嫌さを隠そうともせずに、ぶっきらぼうに話しかける。そんな彼の雰囲気に全く臆することなく、彼女は優雅に頭を下げる。

「お骨折りをいただきまして、ありがとうございます。いいえ。アガルタ王様にも是非、私の話を聞いていただきたく思います。アガルタ王様、王妃様、不躾なお願いを申しました私を、お許しくださいませ」

「いいえ、全く問題ございませんわ。このところ体調を崩されていたと聞いていましたが、見たところ、少しお元気になられたご様子ですね。その後、体の様子はいかがですか？」

相変わらず見事な美しさをたたえたリコが、ヴィエイユに話しかけ

る。彼女は、かなり痩せてはいるが、目の下のクマも取れ、何より、その目には力強い光が湛えられていた。

「はい。ありがとうございます。問題ございません。アガルタ王妃様におかせられては、この私に、このようなおもてなしをいただけますとは恐縮です。こちらも、感謝申し上げます」

「ヴィエイユさん、あなたはクリミアーナ教国の教皇聖下の一族に連なるお方。そのあなたが、我が夫・アガルタ王様だけでなく、わざわざ私にも会いたいと書簡を送ってこられました。きっと、何か、ご決断をされたものと思いましたので、このようなもてなしを致しました」

「えっ？　そうなの？　それなら、執務室でもいいじゃん……」

そんなことをポソッと呟くリノスを、リコは笑みを湛えた顔のまま視線を向ける。しかし、その眼は全く笑っていない。これはいい加減にしなさいよというリコのサインだ。あまりスネ続けていると、あとでお仕置きをされてしまう。リノスは心の中でゴメンナサイを繰り返しながら、居住まいを正した。

「で、書簡にもあったが、我々に伝えたいこととは、何かな？」

ヴィエイユの気配が変わる。何かの覚悟を決めたかのような迫力が、彼女の全身から発せられる。

「私の生き方と覚悟が決まりましたので、ご報告申し上げようと思いました。ただ……」

「ただ……何だ？」

「はい。一つわからないことがあります。しかし、それは、私がこれからの人生をかけて導き出すものだと考えます。いらぬことを申しました。お忘れください」

「いいえ、ヴィエイユさん。もしよければ、そのわからないことも、教えていただけまして？　もしかすると、何かの参考になることをお伝えできるかもしれなくてよ？」

「はい、では……」

ヴィエイユは改めて居住まいを正し、そして、ゆっくりと口を開く。

「私は一旦、教国に戻ろうと思います。そして、これからは、主神様、クリミアーナ様のような聖女となるべく、この人生のすべてをかけたいと思います」

「何だ、今までとそう変わらんじゃないか」

思わず口を開いたリノスに、リコは再び視線を向ける。彼は一瞬リコを見たが、やがてちょっと首をくすめて、再びヴィエイユに視線を戻した。

「これまで私は、クリミアーナ教を信じる者たちだけを救おうと考えておりました。クリミアーナ教こそが正しく、それに反する思想、行動は、全て排除するべき悪であると考えておりました」

遠い目をしていたヴィエイユが、再びリノスとリコに視線を戻す。

「これから私は、クリミアーナ教を信じる者だけでなく、それに反

する考え方を持つ方にも、それを信じない方にも、分け隔てなく救っていこうと思います。生きとし生けるもの全てに、救いの手を差し伸べられる人間でありたいと思いますし、そうなれますよう、努力して参りたいと思います」

「ずいぶんと立派な話だが、大丈夫か？　相当苦労すると思うぞ？」

リノスの言葉にヴィエイユは再び遠い目をする。

「私は気が付いたのです。クリミアーナ教の教義に、『我らを利する者は助け、害する者を排除せよ』という一節があります。それは、クリミアーナ教徒を救えという意味であると教えられてきましたが、おそらく主神様は、生きとし生けるもの全てを救えという意味で、我ら、という言葉を使われたのだと思います。そして、害する者とは、人の幸せを奪うもの、欲望や思想、あとは……まさしくアガルタ王が仰った、人に迷惑をかける行為や考えがそうなのでしょう。そうしたものを排除せよという意味であると思います。これこそが、クリミアーナ教の本当の教義だと気が付いたのです」

リノスはその言葉を聞いて、思わず、ほぅとため息を漏らす。そしてその直後、リノスの隣に座るリコが拍手をしながら立ち上がった。

「素晴らしい、素晴らしいですわっ、ヴィエイユ様！　そのお言葉を聞いて、私もこれまで疑問に思っていた教義が、やっと腑に落ちましたわ」

ヴィエイユはニッコリとほほ笑む。

「死と隣り合わせの日々を送り、さらには、死にたくなるような日々がありましたが、むしろ、そうした環境に置かれ、自分自身と十

分に向き合ったことで、私は本当にまだまだ生きていきたいのだと気が付きました。そして、どうやって生きていこうかを考えた結果、このような結論に至りました。私は、この試練を与えていただいたことに感謝しますし、私の命をお助けいただいたアガルタ王様には、心から感謝申し上げます」

そう言ってヴィエイユは片膝をつき、深々と頭を下げた。そして、しばらくすると立ち上がり、再び口を開く。

「私はこれから生きていくために、人を救う方法を身に付けねばなりません。それは、今はまだ、わかりませんが、これからの人生を通して見つけていきたいと思います」

「アラ、それは、簡単なことですわよ？」

リコは満面の笑みを湛えてヴィエイユを見ている。

「簡単、でしょうか？」

「ええ、簡単です。人を救う手段というのは、二つしかありませんわ。知識とお金です。人の心は知ることによって開かれますわ。私がそうでした。ヒーデータ帝国の城の中で育ち、全くの世間というものを知りませんでした。その時の私は、自分では何もできないくせに、高い理想を振りかざすイヤな女でした。それが夫と出会い、たくさんの方々と出会い、教えられ、諭され、経験して、今の私があるのです。ヴィエイユさん、あなたも、たくさんのことを学び、知り、経験をなさいな。そうすれば、あなたなりの人が救える方法が見つかりますわ。あとのお金は、言うまでもありませんわね。ないよりは、あった方がいいに決まっていますし、お金を持っていると、多くの人が救えますわ」

リコはゾッとするほど美しい笑みを湛えて、ヴィエイユに話しかけている。そして、そのヴィエイユも、何かに納得したように、大きく何度も頷くのだった。

「ところで、話は変わるが、カッセルから俺に会いたいという書簡が届いてな。そこには、ヴィエイユ姉さまにも会いたいとあった。どうだ、カッセルと会うか？」

リノスは咳ばらいをしながら、ヴィエイユに語りかける。彼女は一切の迷いなく、即答する。

「はい、問題ございません。むしろ、カッセルとは話をしたいと思っておりました。是非、アガルタ王様も、私とカッセルの会見に同席くださいませ」

「えっ？　いいのか？　二人で話したいこともあるんじゃないのか？」

「いいえ。むしろ、アガルタ王様がおいでになった方が、よろしいかと思います」

「そ……そうか。ならば、そのように返答しておくよ。また、日程については連絡する」

「畏まりました。では、私は、失礼いたします」

ヴィエイユが退出した後、リノスは思わずリコに向かって、口を開く。

「まさかヴィエイユがあんな仕上がりになるとはな。予想外だ。それにしても、すごいな、リコ。いつの間に、あんなことを考えついていたんだ？」

「あら、全て、リノスが教えてくれたことですわよ？」

「俺が？　ウソ……。そんなこと、あったかな……」

眉間に皺を寄せながらじっと考えているリノス。彼は自然に人を助けることができ、色々なことを気づかせる特技を持っているのだが、本人には全くその自覚がない。そんなリノスをリコは愛おしいと思い、さらに彼に対する愛情を深めるのだった。

数年後にヴィエイユは、クリミアーナ教始まって以来の大事件を引き起こすのだが、それはまた、別のお話。

第二百二十四話　ボクの姉さま

「……そうか。姉さまも承知したか。場所は……。ああ、僕の要請通り、裏切者たちがいるあの村になったんだな。わかった」

司教の一人が恭しく頭を下げて、部屋を出ていく。カッセルは真っ赤に充血した目を、たった今、男が出ていったばかりの扉に向け続けていた。

「……」

「……うるさいな。黙っていろよ」

ブツブツとカッセルは一人で呟く。折に触れて聞こえてくる幻聴は、ここ最近日増しに増えてきていた。その声に苦しめられながらも彼は、ヴィエイユをどうするのかを、じっと考え続けていた。

「……もし、もしもだ。姉さまが己の行いを悔い、泣いて命乞いをするのであれば、今回は許してやってもいい。教国へ……帰るんだ」

「……」

再び聞こえてくる幻聴。その声を振り払うかのように首を振る。そして、両手を叩いて人を呼ぶ。

「お呼びでしょうか？」

「今、戦える兵士たちはどのくらいいる？」

「そうですね……３０００人少々というところでしょうか」

「何？　３０００？　なんでそんなに少ないんだ！　兵士は５０００人近くいただろう！」

「およそ１０００名がルロワンスに感染しています。彼らの大半は今、アガルタ王の治癒を拒否して村にとどまっております。しかし、そこにはアガルタ王の強力な結界が張られて、誰も入ることができません」

「くっ……。そいつらを解放してやりたいが……」

ルロワンスに感染した者たちを解放し、アガルタの町や村に送り届ければ、自ずとアガルタの民衆もルロワンスに感染する可能性が高い。カッセルは頭の中でそう考えていた。しかし、彼の前に立つ司教見習の男は、彼のその考えを察して、申し訳なさそうに大量殺戮の計画が実現不可能なことを伝える。

「恐れながら、難しいかと思います。我らも何度もあの村に入ろうと試みましたが、武器を使っての攻撃はもちろん、魔法などの攻撃も、全て防がれてしまいます」

彼からしてみれば、カッセルのやろうとしていることは、受け入れがたいものであった。今、ルロワンスに感染している者たちを外に出せば、自分たちも感染する可能性があるのだ。避難してきた教徒たちを、感染する可能性の少ない場所に移さねばならない。まず、それが先であろうと彼は考えていたのだ。だが、カッセルにはそんな考えは微塵も持ち合わせていなかった。

「わかった。じゃあ感染した者どもは放っておけ。ところで、裏切者たちがいる村を守っているアガルタの兵はどのくらいいる？」

「およそ２０００程度と思われます」

「そうか。……では、明日の朝、残っている兵士の中で、１０００の兵士を選りすぐれ。僕は彼らと共に村に向かう。彼らにはいつものように、普通の民の姿に見えるような格好をさせろ」

「畏まりました」

若い男が恭しく一礼をして部屋を出ていく。しばらく物思いにふけっていたカッセルは、懐から大人の手のひらのような大きさの、細いビンを取り出した。これは教国を出る時に、教皇から特別に与えられたものだ。本来はヴィエイユが持っていたのだが、彼女がここでルロワンスを発症して元の村に戻る時に、彼女から預かっていた。彼はそのビンをしばらくの間じっと見続けていた。

翌朝、カッセルは精鋭部隊１０００名を連れて村を出た。残りの２０００名には村を守るように命じ、住民にはいつでも逃げられる態勢を整えておくように言い残していた。そのため、村ではまるで、戦争でも始めるかのような混乱が生じていた。

そんな村の様子を横目で見ながら、カッセルはゆっくりと森の外に馬を進める。そして、森を出てしばらく進むと、彼は行軍を止めた。

「この軍勢に加わることを許された諸君！　君たちこそ、我がクリミアーナ教の真の兵士と認めよう。その証として、君たちにこれを授けよう！」

カッセルは懐に持っていたビンから丸薬を取り出し、帯同している兵士たち一人一人にそれを与えていく。

「この薬は、教皇聖下が特別に下された薬だ。もし戦闘になった場合はそれを呑め。我が主、クリミアーナ様の加護が得られるものだ。君たちの能力を最大限に引き出してくれるだろう」

兵士たちは一様に喜びの声を上げる。これまで劣悪な環境に耐えてきた甲斐があった。同僚が、友が、恋人が、家族が、ルロワンスという伝染病に感染し、ある者は息絶え、ある者は裏切り、そして、まだ多くの者が、いまだにあの恐ろしい村に閉じ込められて、ただ死を待っている。そんな状況下でも、自分たちは罹患せず、ひたすらクリミアーナ様にお仕えしてきた。自分たちの信仰の深さが評価されてこの五体満足の体がある。そう思っていた中でのこの下され物だ。しかも教皇聖下の孫であるカッセル様から直々に頂いたこの薬は、自分たちの苦労に報いるのに、十分なものだった。

それに加えてカッセルは彼らに、戦闘になる可能性を示唆した。ということは、アガルタの兵士たちと戦うことになる。彼らの大半は、アガルタには大魔王もしくは、それに類する邪神がこの国を支配しているという教国の話を未だに信じており、これまでに置かれていた劣悪な環境は、彼らにそう信じさせるのに十分だった。兵士たちは、一人でも多くのアガルタ兵、言い換えれば、邪神の手先を倒して、この国を真の国に導こうと考えていたのだった。

結局、カッセルに従軍したのは、兵士の力量ではなく、忠誠心によって選ばれた者たちであり、誰もが狂信的にクリミアーナ教を信仰していた者たちばかりだった。そんな様子をカッセルは満足そうに眺めながら、彼らに声をかける。

「僕が命令を出すまで、動くことは許さない。いいか？　……それでは、出発する！」

カッセルは再び軍を進めた。

クリミアーナの一団が到着したのは、約束の時間を1時間も過ぎた頃だった。リノスは前日に、マトカルと数名の兵士と共にヴィエイユを伴って結界村に入っており、この日も朝から、ヴィエイユとカッセルの会談に向けて余念がなかった。そのためだけの新たな結界を張り、そこに、リノスが許可した人間以外は一切の魔法が通じない効果を付与するなどして、色々と準備を行っていたのだ。

正直、ちょっとやり過ぎだろうという感情がないわけではなかった。しかし、前日の夜、リコからヴィエイユは無事に教国に帰すべきであり、万一のことがあってはならないと言われていたために、リノスは内心、面倒くさいと思いながらも、朝から頑張ったのだ。

にもかかわらず、待てど暮らせど彼は現れず、しびれを切らした彼は、マップを発動させて彼の現在位置を確認しながら、その進行速度の遅さに、舌打ちをしながら眺めていたのだった。

そして、ようやくカッセルたちは到着し、彼は案内役の兵士に連れられて一人、結界村のリノスたちがいる部屋に乗り込んできた。

「おい、ずいぶんおそっ」

「姉さまぁ！」

リノスの言葉を遮るようにして、カッセルはヴィエイユを見るなり大声を上げる。しかし、ヴィエイユは全くひるまない。微笑を湛えたままの顔で、カッセルを見ている。

「姉さま！　どうしてクリミアーナ教を裏切ったのですか！　どうして教国に背いたのですか！　誰よりも主神様を敬愛していた姉さまが、なぜ！　姉さま、あなたの行動は、主神様に顔向けができますか！　信徒たちに何と詫びるのですか！　姉さま！」

カッセルは充血した目でヴィエイユを見据えたまま、狂ったように早口でまくし立てる。その言葉づかいもさることながら、まるで悪魔のような形相に、リノスはドン引きしてしまっていた。しかし、ヴィエイユは一切表情を崩さない。それが逆に、カッセルの神経を逆なでした。

「何とか言ったらどうなんだ！」

「カッセル」

ヴィエイユの凛とした声が結界部屋の中に響き渡る。相変わらずカッセルは目を真っ赤に充血させて、ヴィエイユを睨みつけている。

「私は、クリミアーナ教を裏切ったりしないわ。そして、これからも、クリミアーナ教と共に私は生きていきます」

「何！？　じゃあ、先日の、あの無様な体たらくはなんだ！　そこにいる邪神の手先であるアガルタ王に泣いて命乞いをし、それだけでなく、クリミアーナ様は我々を救わないなどとあなたは言った！　確かに言ったぞ！　教徒たちが見ている目の前でだ！　それはどう説明するんだ！」

ヴィエイユは相変わらず微笑みを崩さない。そして、目の前の子供に、諭すように言葉を発する。

「ええ。確かに、あの時は私も追い詰められていました。しかし、そのお陰で、私は、主神様の本当の教義を知ることができたのです」

「本当の教義ぃ!?」

「カッセル、よく聞いてください。教義の……」

「うるさい! 黙れ! 今さら教義の話など聞きたくない! 姉さま! 教国はあなたを許しませんよ! 絶対にだ! あなたの父上と同じく、辺境に送られて一生を過ごすことになるんだ! それでもいいのですか! 姉さま、僕に命乞いをするのであれば、助けてあげます。教皇聖下にお願いしてあげます。これから先、僕の言うことを何でも聞いてくれるのであれば、命は助けます。さあ、僕の前に膝まづいて許しを乞え! 絶対服従を誓え!」

あまりの剣幕と傲慢さに、さすがのヴィエイユも顔が凍り付いている。しかし、彼女はすぐに元の顔に戻り、ゆっくりと話し始める。

「お父様と同じ辺境に送られる……望むところです。むしろ、そうなりたいと願っています。カッセル、あなたに命乞いをして、今のままでいられることこそ、私にとっては不都合極まりありません。あなたは私を意のままに操って何をするつもりなのかしら? 私は何もできないわよ? もしかして、あなたは私の体が見たいのですか? だったら、見せてあげます。今、ここで脱いで、裸になるわよ? 私の裸であなたの怒りが収まって、冷静な話し合いができるのであれば、喜んで裸になるわ!」

カッセルの目が大きく見開かれる。まさかあのヴィエイユが、自分から裸になると言うなど、彼にとっては全くの予想外の返答だった。

「姉さま……何を言っているんです？　喜んで裸になるって……。姉さまの裸など……。僕はただ、姉さまを……。姉さま、よく考えてください。姉さま、辺境に飛ばされるということは、危険が伴うのですよ？　多くの困難が伴うのですよ？　アガルタとは比較にならぬほどの困難や苦労が……」

「望むところです」

カッセルに皆まで言わせず、ヴィエイユは言い切った。すでに彼女の顔からは笑みが消え、目の奥には強い意志を感じさせる光が宿っていた。

「カッセル、あなたは、たくさんの人々の前で、自分の肛門を見られたことがある？　明るい中で裸になって、体中を触られて、ありとあらゆる所、それこそ、肛門のシワの一つ一つを拡げられて調べられたことがある？　本当に恥ずかしかった。死にたかった。その苦しみに比べれば、どんな苦労や苦難にも耐えられます。しかし、私はそんな絶望の中で悟ったのです。本当のクリミアーナ教の意味を、主神様が本当に伝えたかったことを。私はこれから、辺境を歩いて、主神様の教えを説いて回ります。そして、多くの人を救います。困難があるということは、そこにいる人々も困難にあえいでいるのでしょう？ならば、私が行って、その人々を救うのです。それこそが、クリミアーナ教のなすべき姿です！」

「姉さま……。い、今何て……？　こ、肛門？　肛門って何です……？」

カッセルは目を血走らせながらヴィエイユを見つめている。そして、視線を、その隣にいるリノスにゆっくりと向けた。

「おいお前、姉さまに何をした！　僕の姉さまに何をしたぁぁぁ！！　答えろ邪神め！　肛門って何だ！　まさかお前、姉さまを……。許さん、許さんぞぉぉぉぉ！！！！」

子供とは思えない程の大絶叫が響き渡る。リノスはドン引きの表情から徐々に眉間に皺を刻んでいく。目の前のカッセルは、悪魔のような形相で、肩で息をしながらリノスを睨みつけている。リノスは、その様子を睨みつけながら、ゆっくりと立ち上がった……。

第二百二十五話　カッセルの狂気

カッセルは、肩で息をしながら、目をむき、歯をむき出して、まるで悪魔のような形相でリノスを睨みつけている。そんな彼の様子を、リノスは冷たい目で見下す。

「坊主、もう、お前の知っている姉さまは、ここにはいない。お前の大好きな姉さまは、死んだようなものだ」

「うぐぁぁぁ

かけ、大好きだった姉さまではない。

今まで必死で考えてきたことは何だったのか。必死で姉さまを取り戻す方法を考えてきた自分が、バカに思える。そんな言いようのない怒りを感じながら、彼は村の出口まで走った。

村から出るとすぐ、マトカルに率いられたアガルタ軍が、その入り口を固めていたが、カッセルはそれには目もくれず、自分が率いてきた部隊に向かって走っていった。リノスが追いついた時には既に彼は、馬上の人となっていた。

「全員、薬を呑め！」

カッセルが大声で叫ぶ。その命令一下、クリミアーナの兵士たちが何のためらいもなく懐から薬を取り出し、飲み込む。

「何だ？　何をしている？」

馬上で、マトカルは怪訝な顔をしながら様子を窺う。クリミアーナの兵士たちは、全員が目を丸くして、驚いたような表情を浮かべて、固まっている。

「はぁーはぁーはぁ……。あああああ、うわははははがぁぁぁうははは！！！！」

固まっていたクリミアーナの兵士が、突然叫びだした。全員が天に向かって、叫びとも笑いともつかない声を上げている。そして、やがてその声は収まり、彼らは目を見開いたまま、焦点の合わぬ目をアガルタ軍に向けた。

「何か様子がおかしいぞ！　総員、戦闘準備！　リノス様……ツっ！　後ろへ下がっていてくれ！」

マトカルは素早く兵士たちに戦闘準備を命じ、リノスを村の中に避難させようとした。しかし、すでにリノスはイリモに乗り、戦闘準備を整えていた。それだけでなく、いつの間にかラファイエンスもリノスの傍に付いており、戦闘態勢を完了していた。

「殺せ！　裏切者を殺せ！　邪神に惑わされた者どもを殺せ！　全員殺せぇ！！」

カッセルが部隊の一番後方から叫ぶ。その声に呼応するかのように、歩兵と騎馬兵の１０００名からなるクリミアーナ兵が突撃を開始した。それを確認したカッセルは一人、踵を返してその場を去っていった。

「きゃあああああああ～～～～～～！！！！！」

「ひぅりぃぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～～～！！！！！」

およそ人の声とは思えないほどの奇声を上げて、兵士たちは突っ込んできた。よく見ると、兵士たち全員の顔が恍惚の笑顔になっている。そのあまりの不気味さに、さすがのアガルタ兵たちも一瞬たじろぐ。しかし、その中で一人、冷静に戦況を分析する者がいた。マトカルである。

「しっかりしろ！　展開せよ！　挟撃せよ！！」

よく通るマトカルの声に、アガルタ兵は我に返り、村の入り口を中心に、一瞬にして隊が二手に分かれて左右に展開する。そして、ク

リミアーナ兵がマトカル率いる正面の部隊に襲い掛かろうとしたその直後、両翼の部隊が一気に攻撃を仕掛ける。

「おお！　さすがはマトカル。見事な采配だ」

村の入り口でラファイエンスが思わず声を漏らす。アガルタ軍は見事な連携で、一瞬のうちにクリミアーナ兵たちを、三方から包囲する形になっていた。

「うん？　何だあれは？」

リノスが不思議に思うのも無理はない。形勢はアガルタ側に圧倒的に有利であり、クリミアーナ兵たちは、剣で斬られ、槍で突かれ、魔法で切り裂かれ、焼かれるなどしている。しかし、彼らは全く怯まない。体中から血を流しながら、それでも恍惚の表情を浮かべてアガルタ兵たちに襲いかかってくる。いくら斬っても、突いても、どれだけ傷つけても、まるでゾンビのように襲い掛かってくるのだ。

「風刃！！」

風魔法がクリミアーナ軍の真ん中に叩き込まれる。それを撃ったのはリノスだ。一瞬のうちに、何十という兵士が真っ二つになる。しかし、クリミアーナの兵士は全く意に介することなく、目の前のアガルタ兵に狂ったように刃を突き立てている。

「何だあいつら？　仲間が死んでいるのに、笑っていやがる」

リノスは忌々しそうに呟くと、再び右腕に魔力を集中させる。

「灼熱弾！！」

再びクリミアーナ軍の真ん中に魔法が撃ち込まれる。ＬＶ５の火魔法のため、辺り一面が火の海になる。

「今のうちに全員、一旦撤退せよ！　村の中に引け！　引けぇ！！」

リノスの命令が下されると、今まで攻撃をしていたアガルタ兵が組織的に撤退していく。まずは両翼に展開している部隊が、敵を攻撃しながら徐々に村の入り口に向かって撤退していく。そして、両翼の部隊が村に入ったその時、火の海の中から躍り込むようにしてクリミアーナ兵たちが現れ、マトカルの部隊に襲いかかった。

「殿は私が引き受ける！　全員引け！」

マトカルの部隊は、彼女を中心に炎から現れる兵士たちを斬り伏せながら後退していく。一切後ろを振り返らずに後退していく様は、実に見事だ。しかし、炎の中から現れた一人が、マトカルの乗る馬の首にしがみついた。何と男は全身に炎を纏いながらなお、恍惚の表情を浮かべていたのだ。

「ヒヒヒヒィィィーーーーン！！」

突然、炎を纏った男に抱き着かれて驚いた馬が暴れだす。その瞬間、マトカルの体が宙に投げ出され、そして地面に叩きつけられた。その直後、クリミアーナ兵は倒れているマトカルに襲いかかった。

「マト！！　ウインドカッター！！」

リノスは叫び、風魔法でマトカルに狂ったように襲いかかる兵士たちの首を跳ねる。その直後、彼女はアガルタの兵士たちに抱えられ

るようにして村の中に運び込まれ、それを確認したリノスは再び、村全体に強力な結界を張った。

「これで安全だ。これでヤツらはここには入ることはできない。とはいえ、村の周囲を固めて警護を怠るな。この結界村の人間たちからも目を離すなよ！」

兵士たちにそう命じると、リノスはイリモから降り、マトカルの所に向かう。当然、マトカルをはじめとするアガルタ兵たちにはリノスの結界が付与されており、彼女が傷を付けられることはない。しかし、マトカルは気を失っているためか、動かない。顔面が蒼白になっている。

「マト！　おい、マト！　しっかりしろ！」

マトカルを抱き起してみるが、反応はない。よく見ると、彼女の寝ていた地面が血に染まっている。

「これは……血？　何故だ。マトには結界を張っているのに、なぜ出血している！？　おい、マト！　マト！」

マトカルはリノスの呼びかけにも一切、反応を示さない。リノスは傍にいたラファイエンスに目配せをし、その直後、マトカルを抱えたまま、どこかに転移していった。

「全軍、結界村の警護に当たれ！　村の住民たちは部屋から出すな！　心配いらん。我が王の結界は誰にも破られん。ただし、油断はするな！　怪しいヤツが居たら捕らえろ！　散開！」

ラファイエンスの命令が下ると、アガルタ軍の兵士は、全く動揺も

見せずに、結界村の警護に向かうのだった。

リノスが転移した先は、メイたちがいるアガルタ医療研究所だった。

「メイ！　メイ！　ローニ！　チワン！」

「ご主人様!?　どうされたのです!?　え?　マトちゃん?」

リノスの声に驚いたように部屋から飛び出してきたのは、メイだった。そのあとすぐにローニも飛び出してくる。

「マトが……出血が……止まらないんだ」

「ちょっと見せてください！」

マトカルを床に下ろさせて、メイはすぐさま彼女を触診する。

「ローニさん！　マトちゃんをすぐに医療室に運び込みます！　準備を！」

「わかりました」

ピョコンとお辞儀をしたローニは、そのままどこかに転移していった。メイはマトカルを抱え上げる。

「メイ、いい。マトは俺が連れていく」

「いいえ、ご主人様。ここはご遠慮ください」

「メイ、何故だ？」

「お願いします。ここはご遠慮いただいて、私とローニさんに任せてください。大丈夫です。命に別状はありませんから」

「メイ……」

メイのただならぬ気配に、リノスは何も言うことが出来なかった。メイはマトカルを抱えながらリノスの目をじっと見て、ゆっくりと頷く。そして、足早にその場を去っていった。リノスはその後姿が見えなくなるまでじっと見送った。

しばらくして再び結界村に転移すると、目の前にラファイエンスの後姿が見えた。彼は腕を組んで、じっと結界の外を見つめていた。

「将軍、マトは……」

そこまで言うと、老将軍はスッと右手を挙げる。そして、ゆっくり首だけをリノスに向ける。

「御覧なされ。結界の外を」

ふと結界の外に目を向けると、そこには、恍惚の表情を浮かべたまま、クリミアーナ兵同士が殺し合う、凄まじい同士討ちの光景が目に入った。

「こっ……これは……」

あまりのことに、リノスは言葉を失う。老将軍はゆっくりと息を吐きながら呟いた。

「片手、片足、両手、両足を失ってもなお、恍惚の表情を浮かべて殺し合っている。あの男を見なされ。両腕を失っているにもかかわらず、別の男の頭に噛り付いている。噛み殺そうというのだろうな。しかも、その男はもう、死んでいる。彼らにとって戦いとは何なのだろうな。何のために生きているのか。これが、彼らの望んだ人生なのだろうか……」

老将軍は呆れたような、しかし、寂しそうに呟く。彼の背中が、少し小さくなっているような気がした。

「おそらく、彼らが呑んでいた薬のせいでしょう。……あのクソガキめがぁ！」

リノスは、信仰にすがる教徒の心を盾として、彼らに血みどろの戦いを強いたカッセルを、心の底から憎悪していた。

第二百二十五話　カッセルの狂気（後書き）

予告：次話でカッセル坊ちゃん、お仕置きされる予定です。

第二百二十六話　お仕置き

「ところでリノス殿……マトカルの様子は……」

ラファイエンスが口を開く。結界の外では、まだまだ同士討ちが行われており、その様子を茫然と眺めながら、老将軍は力なく話しかけてくる。

「意識は戻っていません。ただ、命に別状はないようです。メイに預けてきましたので、おそらく、大丈夫だと思います」

その言葉を聞いて老将軍はゆっくりと頷いた。

「アガルタ王様……」

背後からリノスを呼ぶ声が聞こえる。声のする方向に顔を向けると、そこにはヴィエイユが一人で立っていた。

「何しに来た。ご覧の通り、結界の外では醜い同士討ちの最中だ。出世前の女が見るもんじゃない。結界の中に入っていろ」

「構いません。それよりも、お願いがございます」

毅然とした表情でヴィエイユはリノスを見つめる。

「ここから、私を出してください」

「ヴィエイユ、目の前の光景をよく見てみろ。得体のしれない薬を

飲んだ兵士たちが、喜んで同士討ちをしているんだ。結界の外に出れば、いかに教皇の孫とはいえ、間違いなくヤツらに殺されるぞ？」

「それでもかまいません。彼らが飲んだのはおそらく、教国が秘蔵している薬……。人間をバーサーカーにする薬です。我が祖父である教皇、ジュヴァンセル・セインが長い年月をかけて完成させたものです。あれを飲めば一切の痛みを感じることなく、死ぬまで喜んで戦い続けます。まさかカッセルがあれを使うとは思いもよりませんでしたが……。あの子は、それを使ってしまったのですね」

「そうか。それが教国の強さの秘密か。そりゃ、あんな兵士たちに襲われちゃ、大抵の軍勢は太刀打ちできんだろうな。そんなものを長年かけて作り出していたとは、まともな神経を持った人間のやることじゃねぇ。マジで腐っているな、お前らクリミアーナは？」

リノスの憎しみを込めた眼差しを、ヴィエイユは無言で受け止める。そして、再び口を開く。

「結界の外の兵士たちは、遅かれ早かれ天に召されることでしょう。私は、死にゆく彼らを救ってやりたいと思います」

「死にゆく兵を救う？　同士討ちをしているアイツらをか？」

「はい。出来るかどうかはわかりませんが、私なりのことをやりたいと思います」

「……そうか。なら、勝手にしろ。死んでも知らんからな」

そう言ってリノスは道を空ける。ふと見ると、リノス達の背後には多くのクリミアーナの信者たちが集まっていた。皆、息を殺して様

子を窺っている。そんな信徒たちをちらりと見たヴィエイユは、リノスに一礼をしてから、ゆっくりと結界の外に出ていった。

結界を出るとすぐ、体をズタズタに斬られた男が倒れていた。しかし、まだ息はあり、彼は相変わらず恍惚の表情を浮かべながらヴィエイユを見た。そして、片手に持っていた剣を彼女に向け、力なく振り回す。

「うひは、うひゃひゃひゃひゃ、うひひ、うひひ」

笑いとも喜びともつかぬ声で、男はヴィエイユを見て笑っている。そんな彼に臆することなく、彼女はゆっくりと近づいていく。そして、ただ、ゆらゆらと剣を振り回している彼の腕を優しく掴むと、そのまま彼を抱きしめた。

「ひゃは、ひゃは、ひゃはははは……」

もう既に命が尽きようとしているのだろう。徐々に男の笑い声が小さくなっていく。ヴィエイユは、彼の返り血で服を真っ赤に染めながらも、なお、抱きしめ続ける。

「辛かったですわね。もう、大丈夫ですよ。よく頑張りました。よく頑張りました……」

「あいひひひひ……ひひひ……お…かあ……さん……」

そう言って男はガックリと項垂れた。ヴィエイユは彼をゆっくりと横たえ、そして、その顔を優しく撫でた。

「ぎぃやはははは一。あらはははうひひひー。うひゃひゃひゃー」

再び結界の外で奇声が上がる。見ると、足を引きずりながら、数人の男がヴィエイユに向かっていく。彼女はその声を聞いてゆっくりと振り返る。よく見ると、その男の手には剣が握られており、彼女を殺そうとしているのは明らかだった。しかし、この男たちがヴィエイユに近づくことはなかった。リノスの風魔法が、一瞬にしてその首を刎ねたのだ。

「将軍……。外にいるクリミアーナの兵士たちを、あの世に送ってもらえませんか？」

「そうだな。殺すのも、情けだ」

ラファイエンスは、そう呟いて、兵士たちを連れて結界の外に出ていった。そして、それと入れ替わるようにヴィエイユが帰ってきた。体だけでなく、頬や腕などにも返り血を浴びた、猟奇的な姿になっているが、その顔は落ち着き払っていた。

「アガルタ王様、ありがとうございます」

そう言って彼女は恭しくリノスに頭を下げた。彼はその言葉に頷き、周囲の兵士たちに口を開く。

「誰か！　ヴィエイユたちを警護しろ！　俺が戻るまで、油断するな！」

そう言い捨てて、リノスはイリモを走らせ、風のような速さで結界村を後にした。

「はあ、はあ、はあ、みんな……みんな……死ねぇ！　死ぬんだ！」

カッセルはブツブツと呟きながら、薄暗い森の中を馬に乗って走っていた。教国秘蔵の薬を飲んだあの兵士たちは、おそらく狂戦士となっているだろう。ただ、人を殺すことだけに喜びを見出す戦士たちが暴れまわる姿……想像しただけでも愉快だ。きっと、今頃は忌々しいアガルタ兵たちを殺戮しながら、ヴィエイユ以下の裏切者どもを殺し尽くしているだろう。

そんな思いに浸っている中、突然カッセルは馬から身を投げ出された。

「くそっ！　何だ！　駄馬め！」

そこまで言って、彼は声を出せなくなった。あまりの光景に、息を呑んでいたのだ。

目の前には、巨大なオオカミが数匹、乗ってきた馬に襲いかかっていたのだ。一匹は馬の後ろ脚を貪り食っており、もう一匹は馬の腹に食らいつき、そして、もう一匹は馬の首に噛みついていた。既に馬は鳴き声を上げることもなく、その眼には光が失われていた。

「ガルルルルルル～」

不気味な声が背中から聞こえる。慌てて振り向こうとしたその瞬間、カッセルの左肩に激痛が走った。

「うぎゃぁぁぁ

断末魔の絶叫が森の中に響き渡る。見ると、目の前で馬を食らっているのと同じ種類と思われる巨大なオオカミが、カッセルの小さな左肩に食らいついていた。オオカミは一切の手加減をすることなく、噛んでいる顎にさらに力を加え、カッセルの左肩を食いちぎった。

「いぎゃぁぁぁぁぁ！！！！」

激痛に意識が飛びそうになる。目の前のオオカミは、カッセルから食いちぎった部分をうまそうに咀嚼している。このままでは食われる。殺される。死ぬ。そんな思いが彼の頭の中を満たしていく。

「死ねない！　ボクは死ねない！　教皇になるんだ！　こんなところで、死ねるかぁ！」

一瞬のうちに、目の前のオオカミの姿が消える。そして次の瞬間、左手に衝撃を感じたと思った瞬間、彼の左腕は、オオカミに食いちぎられていた。その現実を認識した直後、彼の左肩から夥しい血が噴き出していた。

「うわぁぁぁぁ！！　誰か！　誰か！　誰か！　助けて！　助けて！　助けて！　誰か！　誰か！　お母様！　お母様！　お母さまぁ！」

必死で叫ぶカッセルであったが、その声は通じない。オオカミは再びカッセルに向かってゆっくりと歩いてくる。

「いやだぁぁぁぁ！　いやだぁぁぁぁ！　やめろぉぉぉぉ！　やめろぉぉぉぉ！」

逃げたいが体が動かない。涙を流しながらカッセルは必死で声を絞り出す。その声が通じたのか、オオカミの歩みが止まった。そして、ビクンと体を震わせたかと思うと、くるりと踵を返して、誰もいない方向に向かって、ガルルルルーと威嚇を始めた。

カッセルは体を震わせながら、オオカミが睨んでいる藪の中を凝視する。しばらくして、そこから現れたのは、彼が思ってもいなかった人物……アガルタ王、リノスだった。

「面白いことになっているな、坊主？」

見たこともないような美しい白馬に跨ったリノスが、話しかけてくる。カッセルはその現実が理解できない。狂戦士たちはどうした？　姉さまは？　どうして、僕に追いつけた？　そんなことが頭をグルグルと回る。

「やっぱり一人か？　マジで頭が腐っているな、お前。子供が一人で森の中に入るなんざ、自殺行為に決まっているだろう。あ、自殺したかったのなら、邪魔をしたな」

カッセルは未だに目の前の現実が理解できない。しかし、ないはずの左腕からは激痛を感じるし、出血のためか、既に左半身の感覚がなくなりつつある。そして、恐怖のためか出血のためか判別できないが、彼の口は自然とカチカチと音を鳴らしている。そんな様子を見て、リノスは悪そうな笑みを浮かべる。

「オオカミのエサになろうってのか？　そりゃつまらんな。　お前には、こんな仕打ちなど、まだまだ手ぬるい。そう簡単に死なれては、お前の勝手な命令のために死んでいった者たちが納得しないだろう。もっと、もっと、苦しまんとな？　……そらよ」

リノスの右手が一瞬だけ光る。すると、カッセルの左腕の傷が治癒され、出血が止まった。

「命の危険にさらされると、必要最低限の治癒を施す結界をお前に張った。どんなにひどい怪我を負っても、最低限、今の状態には戻してやる。その左腕に免じての、出血大サービスだ。ただし、致命傷を負うまでは、普段通り痛みも感じるし、苦しみも感じる。何度も死の境をさまよいながら、生きていけ」

「ど……どういうつもりだ！　殺せ！　これも主神様のお告げだというのか！　邪神め！　殺せ！　僕を殺せ！」

「さっきまで助けを乞うていたヤツの言葉とは思えんな。まあ何だ。これは俺の、気まぐれだ。おそらくお前の大好きなクリミアーナ教と教国は、遠からず大きな災難に見舞われることになるだろう。お前はそれを、指をくわえて眺めていろ。何が正解で、何が間違っていたのか。地獄の中で、お前なりに答えを導き出せ。まあ、頑張れ。俺はお前が、これから先の長い人生を、有意義に歩んでいくことを期待している。あ、ちなみに、俺は邪神じゃないぞ？　俺は……なんちゃって大魔王だ。間違えるな」

そう言い捨てて、リノスはニヤリと笑顔を浮かべたままクルリと踵を返し、風のような速さで森の中に消えていった。そして、カッセルを襲ったオオカミは再び彼に向き直り、ゆっくりと近づいていくのだった。

「うっ……来るな……やめろ……来るな……来るなぁぁぁぁぁぁ！！！！」

カッセルの、この世の無間地獄が、始まろうとしていた。

第二百二十七話　贖罪

リノスが結界村に帰ってきたのは、すでに日が西に傾いていた。

「……ひでぇな」

村の入り口付近でイリモを止めた彼は、思わず呟く。そこには、夥しい数のクリミアーナ兵の死体が並べられていた。そして、その周囲には亡くなった兵士たちの友や家族たちが、アガルタ兵たちと共に粛々と弔いの準備をしているところだった。

兵士たちの亡骸は、どれもひどい有様だった。一人として、五体満足の者はいなかった。しかも、全員が笑顔を浮かべて絶命しているという、凄惨な光景がそこにあった。

リノスの姿を見つけた、ラファイエンスが近づいて来る。そして、二人は馬を並べて、報告をし合う。

「クリミアーナ兵は全員討伐した。絶命せん限り、何度でも立ち上がって戦いを挑んでくるので苦労したが、心臓を一突きして息の根を止めた。あまり苦しませたくはなかったのでな。こういう掃討戦は、心が痛むな」

「ありがとうございます将軍。カッセルの方は、キツイお仕置きをしてきました。おそらく、死ぬことはありませんが、死ぬよりも辛い苦しみを味わい続けることになるでしょう」

「そうか……。とんでもないヤツだったが、よくよく考えれば、あ

れはまだ子供だ。そう考えると、クリミアーナという国は、恐ろしい国だな」

「ええ。この後の処理は、慎重にしなければなりません」

老将軍は無言で頷き、そして、彼は再び俺を見る。

「リノス殿、あとのことは私に任せてくれ。貴殿は、マトカルの所へ……」

「そうさせてもらいます。あとはよろしくお願いします」

そう言って俺は、アガルタの医療研究所に転移した。

中に入ると、メイの部屋に通された。いつも思うが、この施設は常にキレイで清潔だ。働いているスタッフも研究者も、俺を見ると気さくに挨拶をしてくれる。メイたちの努力の賜物か、この施設には研究所によくありがちなおカタイ雰囲気は微塵も感じられない。そんなことを思いながらしばらく待っていると、メイがやってきた。

「お待たせしました」

「メイ、どうだ、マトの様子は？」

メイは小さく頷く。

「意識は取り戻しました。命に別状はありません」

「そうか……。安心したよ。でも、なんであんなに出血していたん

だ？結界は完璧に張っていたんだがな。やっぱり体のどこかを斬られていたのか？」

メイは目を泳がせながら、何やら言いにくそうな様子で俺を見た。やがて彼女は意を決したように、口を開く。

「言いにくいことなのですが……」

「なに？　どうした？」

「マトちゃんのお腹には、赤ちゃんがいました」

「なに？」

「妊娠していました」

「えっ……。ちょっと待て。マトは落馬していたぞ？　そして……」

「はい。おそらくその時に、流産したものと思われます」

「り……流産？」

「まだ初期段階の妊娠でした。マトちゃんにも自覚症状は少々あったようですが……」

しばし呆然となる。どのくらいの時間が経ったのだろうか。俺は必死で言葉を絞り出す。

「マトは……どうしている？」

「今は薬で眠らせています。経過を見ないとわかりませんが、おそらく手術は必要ないと思います。ただ、しばらくは安静にしていないといけませんので、数日はこちらで入院させたいと思います」

主治医としてローニが付いてくれているのだという。俺はローニにくれぐれもよろしく伝えてくれと伝言して、イリモを連れて帝都の屋敷に帰った。

本来はラファイエンスに伝えてやらなければならないのだろうが、俺はどうしてもそんな気分になれなかった。屋敷に帰っても呆然としたまま、全てが上の空だった。俺はとりあえず、寝室に向かい、ベッドの上で大の字になる。

「どうしたのです、リノス？」

様子を察してリコが部屋にやってきた。彼女はゆっくりとベッドに腰を下ろして、やさしく俺の手を握った。俺はマトカルが妊娠していたこと、今日の戦闘のこと、そして、彼女が流産したことを話した。リコはその話をじっと聞いていたが、やがてその話を聞き終わると、毅然として立ち上がった。

「リノス、ローニが言っていましたが、妊娠初期での流産は、誰のせいでもないのですわ。誰のせいでもないのです。リノスのせいでも、マトのせいでも、そして……クリミアーナやヴィエイユたちのせいでもありませんわ。絶対に……マトを責めてはいけませんわ」

「ああ、わかっている」

「しっかり、しっかりするのです、リノス。マトを救えるのは、リノス、あなたですわ」

そう言ってリコは俺にキスをして、部屋を出ていった。

俺はダイニングに降りる気がせず、メシも食わずにボーッと考えていた。子供がいると知っていれば、マトを従軍させなかった。いや、俺の采配が間違っていたのか。マトが殿を受け持とうとしたのを止めていれば、こんなことにはならなかった。そもそも、あのクソガキがあんなことをしなければ……。いやいや、もっとうまくクリミアーナの対策をしていれば……。

色々と考えるが、答えは出てこない。どのくらい時間が経ったのだろう。再びリコが部屋に入ってきた。

「とうたーん」

パタパタとエリルとアリリアが部屋に入ってくる。

「さあ、リノス、考えるのはそのくらいにして、エリルとアリリアをお風呂に入れてくださいな。一緒に入りますわよ」

リコに無理やり促される形で、俺はリコと共に、娘二人と風呂に入った。風呂の中での彼女らはお転婆そのものだ。じっとしていることがない。俺は泡だらけになりながら二人を追いかける。そのおかげで、かなり気が楽になった。

娘たちを風呂から上げると、シディーとソレイユが彼女たちの体を拭き、着替えさせる。俺はようやくゆっくりと風呂に浸かることが出来た。リコの話では、マトカルの事は帰ってきたメイが皆に伝えてくれたそうで、さすがに皆もショックを受けたようだ。しばらくそんな話をしていると、リコが俺の隣に寄ってくる。そして、膝立

になり、俺の顔を抱きしめた。

「リノス、マトが帰ってきたら、こうやって抱きしめてやってくださいませね。何も言わなくてもいいです。こうやって、抱きしめてあげるのです」

「リコ……」

「一番傷ついているのはマトですわ。すぐには癒えないと思いますけれど、そういうときこそ、リノスが傍にいてあげてくださいませ。抱きしめられると、傷は癒えていくものですわ」

「わかった……。リコ、ありがとう……」

その夜、リコはその小さくて、柔らかい手で、一晩中俺の手を握り続けた。

次の日の朝、俺はリコと共にマトカルを見舞った。ショックを受けているかと思いきや、彼女は意外に元気な様子だった。

「まさか、私に子供が出来ていたとは思わなかった。ちょっと、体の調子がおかしいと思っていたが、予想外だった。いや、もう大丈夫だ。心配をかけた」

「マト、無理をしてはいけませんわ。ゆっくりと休まないといけませんわ」

「すまないリコ様……。ところで、クリミアーナの連中はどうだったのだ？　ヤツらの強さは尋常ではなかった。アガルタ軍に被害は

？　ラファイエンス様や皆は無事だろうか？」

俺は彼女に、その点については心配いらないと伝える。

「マト、早く元気になってくれな。エリルやアリリアも、マトがいなくて寂しがっている」

「そうか。それならば、早く屋敷に帰らねばな。エリルもアリリアも、いい子たちだ」

そこまで言うと、マトカルはゆっくりと視線を病室の窓に向けた。

「……次の春を迎えるころには、この手に抱けていたのか」

「マト？」

マトカルの肩が、小刻みに震えていた。

「きっと……きっと、私に天罰が下ったのだな。……私は多くの人を殺してきた。その罰なのだろう。……今まで上手くいきすぎていたのだ。私が、幸せになっては、いけないのだ。……でも、産みたかった。エリルや、アリリアのような子供を……私も……。それにしても……どんな罰でも受け入れる覚悟はできていたが……。この罰は……辛いな……」

マトカルの声がどんどんと涙声になっていく。俺は思わずマトカルの手を握る。リコも俺と共にその手を握る。

「マト……。きっと赤ちゃんは、今、生まれてくる時ではないと思ったのですわ。きっと、きっと、一番いい時期にまた、戻ってきて

くれますわ。だからマト、その時のために早く体を治すのです」

「リコ様……。リノス様……」

マトカルは初めて、俺たちの前で涙を見せた。俺もリコも、ただ無言で、彼女の背中を撫で続けることしかできなかった。

「そうか……。そんなことになっていたとはな……」

俺から報告を聞いたラファイエンスは、ショックを隠し切れない様子だった。

「珍しい話ではないが……。娘のように接してきたマトカルが、そのようなことになると、ちょっとこたえるな。実は、楽しみにしていたのだ。マトカルとリノス殿の子供を」

「将軍……」

「いや、忘れてくれ。老いぼれの、戯言だ」

ラファイエンスは苦笑いを浮かべながら、手をヒラヒラと振る。そして彼は、毅然とした顔になり、昨日の報告を始めるのだった。

クリミアーナ兵たちの埋葬は完了しているという。さすがに村の住民たちは動揺していたようだが、特に大きな混乱もなかったとのことだった。そして、これからのクリミアーナについて話をしていると、突然、兵士の一人が俺たちの所に飛び込んで来た。

「報告します！　村人が我々の制止を振り切って、続々と広場に集

まっています！　どうやらヴィエイユが村人を集めているようです！」

慌てて俺と老将軍は村の広場に向かう。そこには、大勢の信徒の前で、よく通る声で演説するヴィエイユの姿があった。

……その内容は、衝撃的なものだった。

第二百二十八話　言わぬが花と知らぬが仏

「ここにいる皆さんは、教国では選びぬかれた、優秀な方々でした」

ヴィエイユは桶のようなものをひっくり返し、その上に立って演説をしている。そして、それを囲むように、多くの信徒が集まって来ていた。警護の兵士たちも戸惑っている様子で、俺の姿を見ると、全員、俺に視線を向けてくる。俺は、手を出すなと目で合図をして、ヴィエイユの話に耳を傾ける。

「皆さんは、これまで身に付けてきた技術、知識、経験には誇りを持っていたと思います。それは私も同じでした。しかし、ルロワンスに感染した私たちは、何もできなかった。ただ、いつ訪れるとも知れない死を待つだけでした」

集まった信徒たちのざわめきが収まり、広場がシンとした静寂に包まれる。

「私は、死ぬことが怖かった。そして、死にたくないと切に思いました。必死で祈り続けました。しかし、主神様はなにもお応えにはなりませんでした。そんな私たちを救っていただいたのは、アガルタ王様でした」

ヴィエイユは俺に気が付いたが、すぐに視線を逸らせて、言葉を続ける。

「何も私は、みなさんにアガルタ王に忠誠を誓えと言っているわけではありません。そして、逆に、これから先もクリミアーナ教に対

して忠誠を誓えと言うつもりもありません」

教徒たちが騒がしくなる。しかし、ヴィエイユはそれに構わず、口を開く。

「私は、今回のことは、主神様が我々に無力感を感じさせるために与えられた困難だったと解釈しています。我々は今回のことで、何もできなかった。そう、我々はこれまで世界一の国家を自負してきましたが、実際の我々は、無力だったのです。そんな無力の私たちですが、我々はこれまで、クリミアーナ教を信じる者には手を差し伸べて、信じない者には見て見ぬふりをしてきました。……傲慢だったと思います。もし、我々と同じことをアガルタ王がなさっていたらどうなっていたでしょう？　……ここにいる全ての者たちは、死んでいたでしょう」

そう言ってヴィエイユは目を閉じて、顔を上げる。そして、再び目を開き、信徒たちを見回す。

「しかし、アガルタ王は我々をお助け下さった。そして、私たちは今、生きています。これはきっと、我々も、教徒以外の人々も救えとの、主神さまのお導きだと思うのです」

再び広場が静寂に包まれる。

「アガルタに来たこと、ルロワンスに罹ったこと、それらは決して間違いではありません。意味があったのです。我々は今、生きています。生きることが許されたのです。まだ、生きてやるべきことがあるはずなのです。我々は、一人でも多くの人々を救うために生かされたのではありませんか。無力だけれども、それでも、私たちだからこそ、できることがあるはずです。我々の英知を結集して人々

を救いましょう。それこそが、主神様が私たちに伝えたかったことではないでしょうか」

そこまで言うとヴィエイユは息をつき、そして、満面の笑みを湛えて、口を開く。

「だから皆さん、教国へ、アフロディーテに帰りましょう。そして、真のクリミアーナ教を作っていきましょう」

彼女は信徒一人一人に、帰りましょう、一緒に作っていきましょうと呼びかけている。集まった信徒たちは泣いていた。裏切り者と呼ばれることもなく、むしろ、自分たちが信じる主神様に認められているというヴィエイユの言葉に深く共感し、安堵したようだった。

彼女はピョンと樽の上から降り、まっすぐに俺の所に向かってきた。

「アガルタ王様、我々はアフロディーテに帰ります。ただ、申し訳ありませんが、イルベジ川の水量が落ち着くまでは、もう少しこちらに居させていただいてよろしいでしょうか」

俺はヴィエイユの顔をじっと見て、あきらめたように口を開く。

「好きにしろ。まあ、まだルロワンスが完治したかどうかもわからんからな。川の水位が落ち着くまで、この場所はお前たちに貸しといてやる」

「ありがとうございます。このご恩、忘れません」

「取りあえず、森の奥に隠れている信徒たちも何とかしろ」

「畏まりました。私が責任をもって話をします」

俺は隣の老将軍に視線を向けて呟く。

「将軍、しばらくは……」

「任せてくれ。願ったりかなったりだ。なかなか墜ちない花もあるのでな」

「墜ちない花……ですか？　この村に花など咲いていましたか？」

老将軍の言葉を聞きつけたヴィエイユが話しかけてくる。ラファイエンスは遠くに目をやって、頷きながら口を開く。

「言わぬが花だ。お嬢ちゃん」

数週間後、俺は執務室で、メイ、ローニ、チワンの訪問を受けていた。ルロワンスの分析結果について進展があったのだ。

「原因は、カビか……」

てっきり病原菌の類だと思っていた俺は、予想外の結果に絶句する。そんな俺にチワンは落ち着いた様子で、噛んで含めるようにして説明を始める。

「はい。クリミアーナの人々は、食料生産のために森を焼き、畑を作りました。そして、その肥料としてアヒルネの灰を肥料として使用していました」

「アヒルネの灰？」

「はい。南の島に生えている雑草なのですが、これを灰にすると、作物の生育を助ける肥料になるのです」

「で、その肥料とカビとどういう関係があるんだ？」

「そこに森の中の湿度が異常に上がり、結露が発生しました。そこに生えたカビが、ルロワンスの原因になったのです」

「チワン、すまんがもう少し詳しく説明してくれ」

「はい。通常であれば、アヒルネの灰にはカビなどは生えません。しかし、このカビは異常な湿度と低温の環境であれば培養されるのです。まさに、アガルタの冬と森の中の湿度上昇が、この病を生み出したと言って過言ではありません」

「そうなのか……で、そのカビはなぜ、人を死に至らせるんだ？」

「人体に吸い込まれたカビは、血管に炎症を起こすのです。感染した患者に紫の斑点がありましたが、あれがまさにそうです。そして、その炎症は段階的に進行すると同時に、徐々に体の中心に広がっていき、最後は肺に炎症を起こします。突然呼吸困難になりますので、突然死に見えるというのが、このルロワンスという病です」

「そうか……。通常、首の周りに紫の斑点が出るものが、どうしてクリミアーナの連中、特にヴィエイユなんか顔中に斑点が浮き出ていたが、あれはどういうわけだ？」

「通常ですと、気温や湿度は変化します。従って、病気の進行は遅く、まず、口に近い首の周りに斑点が出るのですが、アガルタの場合は安定して気温が低く、湿度が高い日々が続きました。そういった意味で、病気の進行は早まったと考えられますが、ヴィエイユの場合は特殊ですね。顔中に斑点が出るというのは、現在も調査中です。ただ、あのまま放っておくと、おそらく脳が浸食されたと思われますので、治癒のタイミングとしてはギリギリだったと思います」

「何とも……。ヴィエイユは、運がよかったということか……」

「このルロワンスですが、さらに厄介な点があります。それは、森の土壌も汚染するという点です」

口を開いたのはメイだ。

「土の上で増殖したカビは、少量の毒の物質を排出していますので、少しずつ土壌を汚染していきます。このままではあの森では作物は出来なくなります」

「それを止めるには、どうすればいい？」

「気温を上げて、湿度を下げればカビは死滅しますので、それでよいかと思います」

「もう森の精霊たちの嫌がらせはなくなっているはずだから、湿度は心配ないと思うが……。念のため、結界内の温度を上げておこう。３０℃くらいにしておこうか……」

メイたちは顔を見合わせて苦笑いをしている。そんな彼女たちに、俺は再び口を開く。

「で、その治療薬は出来たのか？」

「はい、できました」

「おおう、さすがはメイたちだな。ということは、グラリーナの唱えた説は、全く的外れだったということか」

「ところが、そうでもないのです」

チワンが苦笑いをしながら、口を開いている。

「どうゆうこと？」

「グラリーナの作る酸液が、ルロワンスを発症する体内のカビを死滅させるのです」

「はあ？　何じゃそら？」

「羊獣人の胆汁と酸液を混ぜて……というのが、彼女の説でしたが、実験の結果、羊獣人の胆汁を混ぜると、少しだけカビの死滅が早まりますが、酸液さえあれば、なくても問題はありません」

「確か、猫獣人を媒介して感染すると言ってなかったか？」

「はい。それも実験しました。猫獣人にはルロワンスの耐性がありましてね。ルロワンスのカビを何年も保菌できるのです。おそらく、グラリーナが使用した猫獣人の体液には、その菌が混じっていたのでしょう」

「何ちゅう女だ……」

「ええ。彼女自身には自覚は全くありませんが、おそらく、完全にとはいきませんが、ある程度であれば、正解にたどり着く最短距離を導き出す才能があるのでしょう。ある意味で、彼女は神様に愛されています」

「私は、そういうことは一切認めません」

はっきり言い切るのはローニだ。確かに、彼女の考えからはグラリーナの偶然の産物というのは受け入れられないだろう。

「つまり、コントロール抜群ってやつか。あれ？　そういえば、もう一人、コントロール抜群だなと思った奴がいたと思うんだが……。思い出せないや」

「結果的に、リノス様のＬＶ５の回復魔法は、炎症を起こし、壊死していた血管を復活させたのでしょう。そのために患者が治癒したものと考えます」

「なるほどな。で、チワン、その治療薬というのは、どういうものだ？」

「どういうも何も、グラリーナの酸液を直接注射して、あとは血管の炎症を抑える薬を投与するだけです。感染初期であれば治癒できますし、発症していなくても、酸液を注射しておけば、ルロワンスに感染することはありません。病が進行してしまうと、かなり厄介ではありますが……」

「なるほど。だから、ルロワンスに感染していた奴は、親子代々に

続いていたのか。住んで居る場所が一緒だからだったんだな。それでようやく納得がいったよ」

俺は、ゆっくりと息を吐きながら遠い目をする。

「嫌がらせをして、クリミアーナの連中に穏便に出ていってもらおうとした俺の策略は、ルロワンスの壮大な人体実験になっていたということか……。まあ、そのためにメイはじめとした、ポーセハイたちを本格的に撲滅の研究に向かわせることになったから、それはある意味で、クリミアーナのお陰と言えば言えなくもないか……」

「まあ、教国の連中のこれまでの行いを考えれば、このくらいの仕打ちは仕方がないと思いますが……」

「チワンもそう思うか？」

「ご主人様、私たちは早速、結界村の方々に酸液を配ってきます。あと、まだ感染している人たちにも……。ルロワンスの発症原因については、ヴィエイユさんに伝えますか？」

俺は笑みを浮かべ、ゆっくり首を振りながらメイを見る。

「メイ、それは、知らぬが仏だ」

第二百二十九話　帰還

「……それでは、参ります」

「ああ、気をつけてな」

夏を感じさせる抜けるような青空の下、アガルタの結界村には数千のクリミアーナ教徒が集まっていた。いよいよ彼らはこの日、故国に向けて出発する。リノスたちは、その見送りにやってきたのだ。

彼の目の前にいるのはヴィエイユだ。体調は元に戻り、体つきもふっくらとして、以前の美少女ぶりを取り戻していた。どうかすると、少し大人びた雰囲気も纏い始めており、以前より美しくなった気もしないでもなかった。

そんな彼女は、美しい笑みを湛えてリノスに別れの挨拶をしていた。彼女はここ数か月、森の中に避難していた信者たちはもちろんのこと、ルロワンスに感染し、頑なに治療を拒んでいた信徒たちとも粘り強く話し合い、ついに説得することに成功していた。

カッセルが率いていた森の中の信徒は、彼によって兵士たちがバーサーカーとなり、無残な死を遂げたことと、その挙句に、彼が兵士たちとこの村の住人を見放して逃亡したことを知ると、簡単にヴィエイユたちの説得に応じた。その一方で、最も難航したのがルロワンスに感染していた信徒たちだった。彼らは、ヴィエイユを裏切り者と見なして、その話を聞かないばかりか、部屋にこもって会おうともしなかったのだ。

そんな信徒たちと交流したのは、メイだった。彼女はアガルタの医療研究所のスタッフと共に、毎日彼らの下に食事と清潔な衣服を届け、ルロワンスの治癒を行ったのだった。当初は妨害や罵詈雑言を浴びせられることもあったが、彼女たちはそれらにもひるまずに、毎日彼らに支援を続けたのだった。それだけでなく、この村の土壌を改善し、ソレイユと共に精霊たちの協力のもとで、森の環境改善にも努めた。

当初は頑なだった信徒たちも、メイが訪れるたびに結露で発生したカビが消えていき、環境が改善していく様子を目の当たりにして、その不思議な力に驚嘆した。そして、日々、自分たちの下に通い、甲斐甲斐しく世話を焼いてくれる美しい研究所員に徐々に心を開いていった。これはリノスの案で、研究所員にユニフォームを着用させたことが、効果的に働いていたのだった。

それはいわゆるナース服と呼ばれるものであり、紺色のワンピースに白いエプロンと帽子を身に付け、しかも、ワンピースはミニスカートという、日本のオジサマ世代の男性には圧倒的に支持されるであろう衣装が採用されていた。当然このデザインはソレイユが担当し、その卓越したセンスで清楚とエロを兼ね備えた、見事なコスチュームを作り上げていた。

加えて、女性信者に対しては、敢えてイケメンを選ばずに、面倒見のよい愛嬌のある男性医師を派遣していた。こうした痒い所に手が届くような対応は、女性信者たちの心を開かせるのに時間はかからなかった。

気が付いてみると、その医師や看護師たち、そして、彼らたちに適切な指示を与えているメイには、大きな信頼が集まり、ルロワンスに感染した者たちは、彼女のことを「クリミアーナ様の再来」や「

聖女」などと呼ぶようになっていた。ここにきてようやく信徒たちはヴィエイユの説得に応じるようになったのだった。

こうして、信者たちのまとまりが見え始めたころ、ヴィエイユは教国への帰還を決意した。リノスとしてもそれに異論はなく、信徒それぞれが故郷に帰られるだけの食料支援を約束し、ついにその日を迎えたのだった。

ニザ公国からやって来た信徒たちは既に出発し、あとは、ヴィエイユたちの本国である首都、アフロディーテに帰る者たちを残すのみになっていた。ヴィエイユは見送りに来たリノスやメイたちに深々と頭を下げて礼を言いつつ、チラリと視線を移す。そこには、ラファイエンスを囲む数名の女性信徒たちが、泣きながら老将軍との別れを惜しんでいる光景があった。

「離れたくない……離れたくないですわ」

「私もだよ、リーゼ、アクリ、シメンサ……。君たちと別れるのは、私も身を斬られる思いだ。しかし、昨日も話した通り、君たちはヴィエイユを助けるという使命がある。私の願いだ。彼女を頼む」

「おじ様のお願いです。よろこんで承りますわ。でも……でも……」

「リーゼ……。必ず、必ずまた会える。愛し合う者は自ずと惹かれ合うものだ」

「おじ様……」

「……一体、何をやっているんだあれは？　それにしても将軍は、元気だなぁ」

リノスはその光景を苦笑しながら見ている。そして、ヴィエイユも苦笑いをしつつリノスに返答する。

「まあ、色恋のことですから、私は立ち入ることはできませんね。彼女たちは色々と助けていただいていますので、私にとってはありがたいです」

「まあ、な」

再びリノスは苦笑する。彼女たちもヴィエイユについて教国に帰るのだ。言わば彼女たちはアガルタからの密偵であり、それを承知でヴィエイユも彼女たちを傍に置くのだ。言ってみれば、ラファイエンスと別れを惜しんでいる女たちは、ヴィエイユとリノスの連絡役なのだ。

「これまで本当にありがとうございました。また、これからも、よろしくお願いいたします」

ヴィエイユはそう言いながら、別れの言葉を口にして出発したのだった。

既にイルベジ川の水位は下がり、彼女たちは水運を利用しつつガルビーに向かう。その道中、アガルタに向かう際に作った道が目に入る。あれだけ増水していた川であったにもかかわらず、その道に損傷はなく、健在であり、ガルビーからの物資が次々と運ばれていた。

「クリミアーナの技術力は、やはり、大したものだわ」

筏の上でポソリと呟くヴィエイユ。しかし、その眼は何かを確信するかのような光が宿っていた。

白で統一された建物が立ち並ぶ、クリミアーナ教国の首都、アフロディーテ。太陽の強い日差しが降り注ぐと、この街は厳しい照り返しを発生させる。そんな中、都の港には、数千の教徒を乗せた船が到着していた。

照り返しの眩しさの中、船から降りてくる人々にはまるで、光の中から現れるように見える。その光景を見た都の人々には、ある種の神秘的な感覚を感じていた。その人々の先頭を歩くのはヴィエイユであり、彼女は帰国したその足で、教皇神殿に向かった。

約1年ぶりに再会する教皇、ジュヴァンセル・セインは、相変わらず柔和な表情を崩すことなく、ヴィエイユを引見した。

「戻りましたか、ヴィエイユ。アガルタでの出来事は、先にいただいた手紙を読みました。実に大変なことでしたね。カッセルは……残念でしたが、あなたが無事で戻って来られて何よりです。ええ、何よりです」

ヴィエイユを見ながら、教皇はゆっくりと頷く。クリミアーナの優れた情報網を駆使しても、杳として知れなかったアガルタの事情。そこで一体何があったのか、教皇はヴィエイユを観察する。どことなくあどけさがなくなり、大人の女になりつつある雰囲気を醸し出すようになっている。何より、彼女の目が、教皇が知っているヴィエイユのそれではなかった。

「ガルビーで起こった鉄砲水のために、派遣するはずであった信者の大半が上陸出来ないという報告を受けて数か月……。我々も、八方手を尽くして救済する方法を探ったのですが、上手くいきませんでした。よく、厳しい状況の中で、アガルタの冬を乗り越えました。その上、ルロワンスという伝染病が発生したにもかかわらず、よく帰国しました。ご苦労様です。ご苦労様でした。さて……帰国早々ですが、アガルタ国で一体何があったのか、詳しく聞かせていただけますか？」

その声に、ヴィエイユは顔を上げ、じっと教皇を見る。

「その前に、教皇様にお尋ねしたいことがございます」

「何？」

予期していなかったヴィエイユの反応に、教皇はキョトンとした顔をする。

「クリミアーナ教の教義に、『我らを利する者は助け、害する者は排除せよ』という一節がございます。これの意味を、今一度お教え願いませんでしょうか？」

教皇はちょっと目を見開く。まさかヴィエイユからそのような質問を受けるとは思わなかったからだ。子供のころから何度も繰り返して教え、それを信じて疑わなかったこの娘が、何を今更……と、少々訝しがりながらも、彼は口を開く。

「我がクリミアーナ教を、主神様であらせられるクリミアーナ様の教えを信じ、我がクリミアーナ教とこの教国のために力を尽くす者

は全力で助け、逆に、主神様の教えを受け入れない者、我が教国を害する者は全力で排除する、ということです。そもそも我がクリミアーナ教は……」

「ありがとうございます」

ヴィエイユは教皇の言葉を遮る。このようなことは今までなかったことだ。教皇はあまりの予想外の出来事に、固まっている。

「やはり、私の思った通りの教皇様でございました。安心いたしました」

ヴィエイユは満面の笑みを湛えて教皇を見る。そして、そのままの顔でさらに言葉を続ける。

「教皇様、お願いがございます。私をこのまま、クレファライス国にお遣わし下さい」

「クレファライス国？」

「はい。私はアガルタ国で、何も成果を残すことが出来ませんでした。さらに、カッセルをはじめ、教国にとって大切な人材を失いました。にもかかわらず、私は死ぬこともできずに、アガルタ王に助けられて命を長らえております。私は、何も致しておりません。従いまして、私はもっと厳しい状況に自分を置きたいと存じます。そこで主神様の教えを広め、自分を磨きたいと存じます」

「何と……。素晴らしいお心がけだとは思いますが……。ヴィエイユ、クレファライス国は天道に背いた国です。むしろ教国が討伐の対象とした国……。そこで活動するのは、多くの困難を伴いますし、

あなた自身の命が危険に晒される可能性もあるのですよ？」

「はい。承知しております。覚悟のうえでございます。」

「……なるほど、そうですか。……わかりました。ちょっと考えさせてください。沙汰は、追って下します」

そう言って教皇はその部屋を後にした。

後日、ヴィエイユは望み通り教皇から、クレファライス国への派遣が命ぜられた。しかも、ヴィエイユと共にアガルタから帰還した者たちも、彼女と行動を共にすることを熱烈に希望したために、その大半がクレファライス国に向かうことになった。

通常であれば、ヴィエイユは廃嫡され、首都アフロディーテから追放される。教皇直々のジモークで、全く成果を出せなかったからだ。しかし彼女は、泣いて詫びるわけでもなく、教皇の慈悲に縋ることもなく、先例に倣って、ジモークで成果を出せなかった者が僻地へ赴くことを自ら進んで希望した。しかも、教国に背いた危険地帯へ赴任するというのだ。

この申し出は正直、教皇にとっては予想外のことであったが、彼はこの会話を通して、ヴィエイユがまだ利用する価値があることを認めていた。

これであれば、わざわざ自分の孫を処罰する必要はなくなるし、彼女の望みを受け入れ、そこで成果を上げた時には再び教皇候補にすればよい。司教たちも民衆も納得する。しかも、アガルタから帰還した者たちは、教国の中でも選りすぐりの者たちだ。彼らを連れていけば、そう簡単にヴィエイユが死ぬことはない。むしろ、最悪で

もクレファライス国を弱体化させることにはなるだろう。そう考えた教皇は、渡りに船と、彼女にクレファライス国への派遣を命じたのだった。

数日後、ヴィエイユたちを乗せた船が、再びアフロディーテの港から出港するのを、教皇は涙を浮かべて見送った。これで、自分はさらに慈悲深い教皇として民衆に認識される。そんなことを考えながら、彼はこれからの教国のこと、そして、得体のしれぬ国、アガルタのこれからの対策を考えていた。

彼は気が付いていなかった。ヴィエイユの笑顔に隠された恐るべき計画を。これまでの彼ならば、おそらく見抜いたであろうヴィエイユの変化を、彼は見逃した。……既に彼は、老いていたのだ。

ヴィエイユを見送った数か月後、教皇の前に意外な男が姿を現した。ガリガリに痩せこけた体、顔から体にかけて無数の傷があり、一見すると半死半生に見えるが、にもかかわらず、その眼は爛々と輝いている。

さらに、その男には、左腕がなかった。

教皇の前に現れたのは、行方不明であった、カッセルだった。

第二百三十話　帰還②

ただただ、幽鬼のように立ち尽くしているカッセルは、以前のような上品さと聡明さ、そして、頭のいい子供にありがちなプライドの高さを感じさせる雰囲気はどこにもなかった。ただ、目だけを爛々と輝かせて、教皇を睨みつけていた。その様子からは、怒りと憎悪、そして恐怖という感情を読み取ることができる。しかし、感じ取ることができるのはそれだけで、それ以外の感情は、彼からは何も感じられない。

「カッセル……。カッセルなのですか？」

そのあまりの変貌ぶりに、教皇は思わず周囲にいた枢機卿に確認する。その御意を受けた枢機卿が、教皇に小声で説明する。

「教皇聖下ぁ！！！！」

広い教皇の執務室に、カッセルの絶叫にも似た声が響き渡る。

「クリミアーナ教国は、このままでは滅びますよ！」

あまりの発言に、列席者が凍り付く。しかし、教皇だけは、そんな彼の暴言を、柔和な顔のまま受け止めている。

「アガルタは、天道に背く国だ！　絶対に許してはならない国だ！　絶対に、滅ぼさねばならない国です！　確かにアガルタ王は言った、自分は大魔王の僕だと！　しかし、しかし、アフロディーテに帰ってくるまでに立ち寄った国々はどうだ！　僕が何度もあの国の

危うさを説明し、何度もアガルタに兵を向けろと言っても、誰一人としてあの国に、あの王に、鉄槌を下そうとする者はいなかった！

我がクリミアーナ教国はどうなっているのです！　目の前に教国に、天道に従わぬ国があるのになぜ滅ぼさない！　主神さまのお言葉を蔑ろにしている！　こんな国は、人々は、邪神の僕どもは、必ず滅ぼさねばならない！　必ずだ！」

教皇はゆっくりと頷き、優しい声でカッセルに語りかける。

「カッセル、一体どうしたのです？　これまで、何があったのです？」

「僕は、誰よりも主神様の教えは正しいと思っている。主神様の教えは人族を真の幸福に導く唯一のものだ。その教えに従わぬ国、者どもは排除せねばならない！　我が教国は、主神様の教えを守る敬虔な信者たちを守り、幸福に導かねばならない。アガルタと、それに連なる国は、主神さまの教えを否定し、あまつさえ、敬虔な信徒たちを死に追いやった！　それに抵抗した僕は、これだけの傷、左腕を失う怪我を負った。アガルタは、アガルタ王は、天道に叛く大悪人だ！　こんな輩は、必ず滅ぼさねばならないんだ！　しかし、クリミアーナ教を国教と定める国々は、ただ一国としてアガルタを誅する動きを見せていない。クリミアーナ教は、教国は、これでいいのか！　これを許していては、教国は滅ぶ！　教国が滅ぶということは、主神様が敗北するということだ！　僕にはそれが我慢ならない！」

何かに取りつかれたかのように喋るカッセルに、誰も口をはさむことが出来ない。彼は体力が低下しているためか、肩を上下させながら、激しく呼吸をしている。

無理もない。彼はもう、何度死ぬような経験をしただろうか。あのアガルタの森で、何千回も魔物に体を食われ、抉られた。毒に侵されたことも一度や二度ではない。体がマヒして動かなくなったこともあった。ありとあらゆる苦しみを受けながら、彼は一歩ずつクリミアーナの本国に向けて歩いたのだ。

「地獄」という言葉では到底表現できない、筆舌に尽くしがたい苦しみを受け続けた旅だった。魔物に襲われる恐怖に加えて、飢えと渇きと疲労が常に襲ってくる状況の中、森の中の道しるべのない旅。時には断崖絶壁から飛び降りたことさえあった。そんなことをやりつつ、彼はまさしく死ぬ思いで森を抜けたのだ。気が付くとそこは、アガルタの西隣のビーユア王国だった。そこで、運よくクリミアーナ教会の神官に保護され、ようやくのことでアフロディーテに帰還したのだった。

カッセルは、相変わらず荒い息を続けている。しかし、その射すくめるような視線は依然として、教皇に向けたままだ。

「フッ……フフフ……ウフフフフ……フアハハハハハハハハハ」

執務室の中に笑い声がこだまする。その声を上げているのは、誰あろう、教皇自身だった。「微笑みの怪物」と呼ばれるこの男が、声をあげて笑うのは、果たして何年ぶりだろうか。その、誰もが予想もしなかった光景に、そこにいた全員の顔が強張っている。

教皇は思い出していた。若い頃、赴任した国で裏切られ、迫害され、わずかの信徒と共に砦に立てこもった時のことを。許せなかった。主神様の素晴らしい教えに賛同せず、その敬虔な使徒である自分たちを迫害したこの国を、民衆を。迫りくる軍勢を見ながら彼は、激しい憎悪でその心を満たしていった。

食料もなく、飢え死にする寸前まで追い詰められたその時、彼はまだ開発途中であった薬を教徒たちに与えた。すると、兵士たちは死を恐れぬ兵士となって敵軍に襲い掛かった。そのあまりに異常な戦いぶりに敵軍は、なすすべもなく彼らに蹂躙されていった。そして、終わってみればそこには、薬を与えた教徒たち全員と、その数十倍以上の累々たる敵軍の死体が広がっていたのだった。

その光景を教皇は思い出していた。そして、その時の気持ちが、カッセルと同じであったことも、懐かしく思いだしたのだった。

「……私も、年を取ったのでしょうね。まさか、カッセルに教えられるとは思いませんでしたよ。……そうですね。天道に背く者は排除し、天道に従う者を助ける。これこそが我らの使命。それを……忘れていましたか。確かに私は、天道に背く者を野放しにし過ぎていたのかもしれませんね」

教皇は満足そうな笑みを浮かべながら、カッセルに優しい眼差しを向ける。

「では、カッセル。このクリミアーナ教国が滅びぬようにするためには、どうすればよいですか？」

カッセルはしばらく無言で教皇を見る。そして、おもむろに口を開く。

「まずは、この教国内、教徒らの中において、裏切り者を、天道に背く者を排除することです」

「ほう……。この教国と教徒たちの中に、裏切り者がいるというの

ですか？」

「はい。ございます」

「それは？」

「まずは、レイアランス枢機卿とクライフェリッチ司教、アリスガード司教、そして……ヴィエイユ姉さまです」

執務室がざわめきに包まれる。まさか教皇の孫を、あの狂信的に教義に忠実であったヴィエイユを裏切り者呼ばわりしたのだ。この発言で、カッセルは教皇によって命を奪われるだろう。執務室にいた者全員がそう思った。

「理由を聞いても？　レイアランス枢機卿は、あなたの父方の叔父に当たるお方。自分の一族を、自分の手で誅すると言うのですか？　ヴィエイユもまた、然りです」

彼らの予想に反して教皇は、相変わらず落ち着いていた。そして、カッセルは再び言葉を続ける。

「レイアランス枢機卿は、ヒーデータ帝国にあったにもかかわらず、アガルタにいた我々を支援しませんでした。クライフェリッチ司教、アリスガード司教も同様です。二人ともニザ公国とラマロン皇国の連絡役でありながら、何一つとしてアガルタの我々に支援を行いませんでした。これを裏切りと言わずして何と言いましょうか？　恐れ多くも教皇聖下の特別のジモークに何もしなかった。これほどの大罪がありましょうか。そして……。ヴィエイユ姉さまは……アガルタ王に……邪神の手先に篭絡されております」

「お……お待ちください、カッセル様！　まさかヴィエイユ様にあってそれは……」

思わず司教の一人が口を開く。カッセルはその鋭い眼差しを司教に向ける。

「考えてもみろ！　アガルタ王を討伐しようとした信徒たちは、全員が殺されたんだ。そして、僕は、これだけの傷を負った。ところが、ヴィエイユ姉さまはどうだ？　無傷で帰国したんじゃないのか？　おかしいとは思わなかったのか！　僕が、教国が滅ぶと思うのは、そこなのだ。邪神に体を開き、蹂躙され、魂を奪われたからこそ、姉さまは無傷で帰還できたのだ！　なぜ、それが見抜けなかった！　……しかし、主神様は教国をお見捨てではない。僕がここに生きて帰還できたことが、何よりの証拠だ。何度も魔物に襲われ、命の危険にさらされたが、左腕を失うだけで、命を落とすことはなかった。これは、主神様がクリミアーナを救えとの思し召しに他ならないだろう！」

「……わかりました、カッセル。ヴィエイユについては、調査が必要ですね。彼女は既にクレファライス国に旅立っていますのでね。まずは……レイアランス枢機卿とクライフェリッチ司教、アリスガード司教を調査していただけますか？」

教皇は優しい口調でカッセルに命じる。

「畏まりました。しかし、教皇聖下。姉さまは、いつの日か、必ず叛きます。その時は……。そして、アガルタ王、ヤツだけは絶対に許さない。必ず、必ず僕が排除してみせます」

教皇はニコリと満面の笑みを湛える。

「そうですか。その時は、お願いしますね」

レイアランス枢機卿とクライフェリッチ司教、アリスガード司教の三人が、反逆者としてアフロディーテの広場において十字架に架けられたのは、それからひと月のちのことだった。その三人に止めの槍を入れたのは、カッセル自身だった……。

第二百三十一話　遠き落日

ヴィエイユとカッセルが、それぞれの道を歩き始めてから5年後、クリミアーナ教国の首都、アフロディーテでは臨時枢機卿会議が行われ、満場一致で次期教皇の決定がなされた。

教皇に指名されたのは、わずか１４歳の少年で、左腕を失いながらもクリミアーナ教の綱紀粛正を断行し、さらにクリミアーナ教を国教とする国々の繋がりを強化した実績が認められての教皇指名だった。その名をカッセルと言った。

会議終了後、教皇神殿の一室で、現教皇、ジュヴアンセル・セインをはじめとする各枢機卿たち幹部が一堂に会しての、カッセルの次期教皇内定の宴が行われた。これから全世界に向けて次期教皇決定の発表が行われる。そして一年後には、全世界の国主や関係者を招待して、盛大な就任式が開催されることになっていた。それに合わせて、現教皇は隠居することも正式に決定していたのだった。

教皇の隣に控えるカッセルには、枢機卿から次々と祝いの挨拶がなされている。この5年間で、教徒たちの信仰に対する姿勢は見違えるまでになっていた。教皇の言葉は即ち、主神様の言葉。その命令に忠実に従う者は手厚く保護し、従わぬ者は容赦なく排除してきた。そのおかげで、一万人近い人間が粛清され、２つの国が滅びたのだが、カッセルはその成果に満足していなかった。

彼が、まず葬りたかったのはヴィエイユだった。しかし結局、彼女の反逆の証拠を掴むことはできず、それどころか、彼女は教国に反する国々を、再び信仰厚き国に変貌させるという成果まで残してい

たのだ。しかし一方で、教国からの命令をのらりくらりと躱し、必ずしも教国に従う姿勢を見せなかった。これが決め手となり、カッセルがその後継者に指名されることになったのだった。

加えて彼は、「不死の男」という異名があった。彼の過激な政策は当然、多くの敵を生み出したが、その敵の襲撃や暗殺の類を、全て切り抜けてきたのだ。彼はそれを主神様のご加護と吹聴し、周囲も幾度も危機を切り抜けるカッセルを見て、それを認めざるを得なくなっていった。むろんこれは、リノスの張った結界が功を奏しているのだが、当然、クリミアーナの人々はその事情を知らない。

今ではカッセルに対抗できる者は教国にはいない。教国とそれに連なる国々との鉄の結束を作り上げることはできた。あとはヴィエイユと、宿敵であるアガルタを葬ることだった。特にアガルタ王、リノスには世話になった。この恩は何倍にもして返さねばならない。

カッセルはアフロディーテに帰還して以来、何度もアガルタへの策を試みた。ある時は侵攻作戦であったり、ある時は経済封鎖を試みたこともあった。しかし、そのどれもが成果を出すことが出来なかった。彼のこの5年間の取り組みの中で、唯一の汚点と言えば、それであった。

これらの試みは全て、計画段階で頓挫した。その都度都度で、教国の領内で天変地異が起こったり、反乱を起こしたりする者が現れたのだ。こうしたことが起こるたびに、教国内は混乱し、その収束に多大なる時間を費やした。これはリノスとヴィエイユを始めとするアガルタ側の国々の連携が成しえたものだった。カッセルは二人の関係を疑いつつも、ついに、その証拠をつかむことはできなかった。

だが、これからは、これまでのような口惜しい思いをすることは、

もうなくなる。長い権力闘争の末、教皇の座を掴み取ることができたのだ。これまでのような、根回しをして……といった、まどろっこしいことはもうしない。これからは自分の意志一つでコトを動かすことができるのだ。

カッセルは考える。まずはヴィエイユだ。彼女は生きて捕らえて、必ずこのアフロディーテで十字架に架ける。そしてその後は、ニザ、ラマロン、ヒーデータと順に滅ぼしていき、アガルタを世界の中から完全に孤立させる。あの国に住まう者は全員餓死させるのだ。泣きながら命乞いをしてくる者どもを殺戮して、教国の力を、天道に背く者の末路がどれほどの苦しみを伴うのかを見せつけねばならない。

そんなことを考えていた時、会場から叫び声とも歓声ともつかぬ声が沸き上がった。その声の方向を見ると、人の腕くらいの大きさの小さなドラゴンが宙に浮いていた。そして、そのドラゴンは手に持っていたこぶし大の石をポトリと床に落とし、そのまま消え去った。

会場内が呆気にとられる中、その石が置かれた所から、何と着飾ったヴィエイユの姿が浮かび上がった。その光景に、会場内は騒然とする。

「お久しぶりでございます、教皇様。そして、カッセル。いや、次期教皇様と申し上げた方がよろしいでしょうか？」

満面の笑みを湛えながら、優雅にお辞儀をするヴィエイユ。少女の面影はなくなり、大人の女性としての色気と気品を兼ね備えた美しい佇まいに、枢機卿たちは思わず見とれてしまっている。

「ヴ……ヴィエイユ。あなたは、どうやってここへ……」

驚きながらも、何とか教皇は言葉を絞り出す。ヴィエイユは相変わらず満面の笑みを湛えている。

「姉さま、久しぶりですね」

言葉をかけたのはカッセルだった。彼はゆっくりと彼女の下に近づいていく。そして、彼女の正面に立ち、言葉を投げつける。

「おそらく、アガルタ王の差し金ですね？　邪神がやりそうなことだ。そして、その邪神に肌身を許した女が何の用です？　ここに入り込むために、どんな仕掛けを使った？　おそらくアガルタ王の邪悪な魔法を使ったのでしょうね。　姉さま、その力を得るために、あなたは何度、アガルタ王にその尻を差し出したのです？　何度アガルタ王の男根に貫かれたのです？　その乳、性器、肛門……およそ性交に使える部分は全て、アガルタ王に蹂躙されたのでしょう？　残念ながら、アガルタ王の性交用奴隷が存在する場所は、この都にはありませんよ？」

カッセルは、口角を上げ、ひきつった笑みを浮かべながら、考えられうる限りの下劣な言葉でヴィエイユを冒涜する。しかし、彼女は眉一つ動かさず、相変わらず笑みを湛えたままだ。

「……この数年で、ずいぶんとお勉強をしたのね、カッセル。偉いわね。誉めてあげます」

笑顔の奥の目は、完全にカッセルを侮蔑している。その様子を見ながら、枢機卿の一人が口を開く。

「ヴィエイユ様、あなたには、アガルタ王に肌身を許したという噂

があります。それは本当ですか？」

ヴィエイユはその笑顔のまま枢機卿に向き直り、ゆっくりと口を開く。

「ご想像に、お任せします」

「捕らえろ！　この女を捕らえろ！」

カッセルの叫ぶような大声を聞いた兵士たちが部屋に乱入してくる。そして、我先にとヴィエイユを捕らえようとする。しかし、彼女に一定の距離まで近づくと、兵士たちは次々と音もなく倒れていく。その様子に兵士たちはたじろぎながら、彼女の周りを十重二十重に取り囲む。

「お静まりください」

ヴィエイユのよく通る声が聞こえる。彼女は教皇とカッセルに、交互に視線を向けながら話を続ける。

「今日お伺いしたのは、単にカッセルの次期教皇就任の祝いを述べに来ただけですが、せっかくです。そのお祝いとして、私から、一つだけ、おめでたい話をお知らせしておきましょうか」

「何だと？」

カッセルの憎しみを湛えた視線を無視するかのように、ヴィエイユは話を続ける。

「カッセル、まずはおめでとう。頑張ってくださいね。私からのお

祝いとして、これを差し上げます」

ヴィエイユは懐から一通の書簡を取り出して、それをポイと投げる。あまりのことに、その場が凍る。

「そして、お知らせですが、この度、私は、いま、ただいまをもって、新しいクリミアーナ教を立てることといたします。真の主神様の教えを広めることを目的に、真クリミアーナ教を設立いたします。お陰様で、多くの国、多くの人が私の思いに共感していただき、ご協力を約束いただきました。教皇様、カッセルとは仲良くしたいと思っておりますが、我らを害する者は排除しますので、そのおつもりで。……では、私はお暇致します。ごめんくださいませ」

そう言ってヴィエイユは姿を消した。後になってわかることだが、ヴィエイユの巧みなプレゼン力と丁寧な支援によって、真クリミアーナ教の陣営に取り込まれたのは、教国の陣営のおよそ半分にも及ぶ数であった。教国は当然、それを是とせず、後にカッセルはヴィエイユ陣営に攻撃を仕掛け、クリミアーナ教は勢力を二分した戦いに発展し、教国はその勢力を大きく削られることになる。

ちなみに、ヴィエイユが持ってきた書簡には、このような内容が書いてあったのだが、カッセルはそれを見ようともせずに、部屋を後にしていた。

『前略、カッセル様。次期教皇指名おめでとう。ささやかながらお祝いを贈らせてもらいます。あなたには、致命傷を負うと強制的に回復されてしまう呪いがかけられていますね？　それを、解除します。これで、いつでも愛する主神様の下にいくことができます。よかったですね。これから先、あなたが病に倒れようと、殺されよう

と、我々は一切関知しないからそのつもりで。なお、あなたの結界は自動的に消滅します。健闘を祈ります』

後にカッセルは、自ら大軍を率いて真クリミアーナ教国軍に決戦を挑み、雨のように降り注ぐ弓矢に全身を貫かれて、戦場にその屍を晒した。教皇、ジュヴァンセルも、カッセルが戦死したその数か月後に、アフロディーテにおいて十字架に架けられ、必死の命乞いもむなしく、ヴィエイユの槍で心臓を貫かれてその命を終えることになるのだが……。それはまた、別のお話。

第二百三十二話　不治の病

ヴィエイユたちがアガルタを去った後、リノスたちは平穏さを取り戻していた。リノスは相変わらずアガルタと帝都を往復して、クリミアーナの動きに注意を払いつつ、政務に励んでいた。

リコはこれまで通り娘たちの育児を担当し、メイは研究に没頭していた。アガルタの医療研究所は、キリスレイとルロワンスの感染経路を発見したことと、その予防薬と特効薬を作り出したことで、その名声は世界中に轟きつつあった。その上、そうした薬を惜しげもなく無料で世界中の国々に配布したため、研究所、ひいてはそこを率いるメイの名声はいやが上にも高まった。現在ではメイは「聖女」や「大賢者」と呼ばれ、世界中の研究者から尊敬を集めている。

ほとんど採算度外視で活動しているように見えるこの研究所だが、実は資金は非常に潤沢であり、それは各国からの莫大な寄付金によって支えられていた。なぜ、莫大な寄付が集まるのか？　アガルタと敵対する、とりわけクリミアーナ教国とその属国からは、何らかの黒い取引があると吹聴されているのだが、実際は、寄付額に応じて開発した薬や、建設された建物や部屋にその国や王の名前を付けるという取り組みをしており、いわゆるネーミングライツの制度を導入しているのが、その理由だった。これは、サンダンジ王のニケがキリスレイの予防薬を贈られた礼として、莫大な金貨をアガルタに送ったことにはじまる。

当初、リノスはこれを固辞しようとしたが、ニケはどうしても譲らなかった。仕方なくその金貨で、研究所の別棟を建築し、そこで、様々な病気の特効薬の開発を試みた。そして、さらに効果の高いキ

リスレイの特効薬が開発されると、リノスたちはその薬に「サンダンジ」と名付けた。その後、この名前は研究者や薬師などを通じて世界中に知られることとなり、サンダンジ国はキリスレイが蔓延する国というマイナスイメージから脱却できたのだった。こうした広告力に目を付けた各国は、こぞってアガルタ医療研究所に寄付を行い、自身の国家イメージの向上を狙ったのだ。

こうして潤沢な資金を得た研究所では、現在はもっとも治癒が難しいとされるガイッシャの研究に全力を挙げると共に、研究所付属の病院を拡大し、多くの患者を受け入れつつ、医療技術の向上を目指しているのだった。

そして、秋も深まり、間もなくリノスの誕生日を迎えようとしていたある日、彼は思い立っておひいさまの下に出かけていった。クリミアーナ教国との戦いでは、彼女たちとは疎遠になっていた。もちろん、お供えはきちんとしていたのだが、なかなか豊富なバリエーションをお供えすることが出来ていなかったために、今回は、新たに作った新製品を携えて、そのお披露目もかねて訪問したのだった。

「おお、久しいのう」

リノスの姿を見ると、おひいさまは目じりを下げる。彼がやってくると、必ず何か美味なスィーツを持ってくるために、彼女はその訪問が楽しみでならなかった。

「お久しぶりです、おひいさま。今年はお願いばかり言ってすみませんでした。また、新しいお菓子が出来ましたので、お持ちしました。お口に合えばよいのですが……」

そう言って彼は、手に持っていた長方形の紙包みを広げていく。そ

こから黄金色の、美しい菓子が現れた。

「カステラ、というお菓子です」

「ほほう。かすてら、とな。苦しゅうない。千枝、左枝、これへ持て」

しずしずと二人の女官がおひいさまの下にカステラを運んでいく。彼女はそれをカットすることなく、まるでバナナを食べるかのように平らげてしまった。それを傍で見ていたサンディーユは、眉間に皺を刻みながらリノスに尋ねる。

「リノス殿、あのお菓子は、あのように一口で平らげるものなのであろうか？」

「いや……。本来は一口大に切り分けまして、少しずつ食べるものなのですが」

「そうであろう、そうであろう。おひいさま、そのようなはしたない食べ方は……」

サンディーユがいつもの小言を言おうとした時、突然おひいさまの絶叫が響き渡る。

「何と！　これは美味なるものじゃ！　美味であるぞよ！　わらわは気に入ったぞ！　これもお供えするのじゃ！　たんとお供えするのじゃ！　あ、ゆめゆめサンディーユニは供えるでないぞよ」

「おひいさま！」

「ええい、黙りゃ！　……うん？　そなた、称号が減っておるのう。そなたのスキルは多すぎて目がチカチカするが、少しはスッキリしたようじゃの」

「え？　称号が減っていますか？」

リノスは慌てて自分に鑑定を発動させる。

人心収攬：加護ＬＶ５　教養ＬＶ５　結界魔法ＬＶ５　気配探知ＬＶ５　魔力探知ＬＶ５　回避ＬＶ５　洞察ＬＶ５

人心収攬……周囲の人間同士に強い信頼関係を生む。

おお！　いくつかの称号がなくなっている。そして、新たな称号が加わっている。どうやらカンストスキルがまた、統合されたようだ。新しい称号は、どうやら信頼関係を構築するスキルであるらしい。

「どうやら、関わる者たちの間で信頼関係が築かれるのじゃな。しかもそれは、ＭＰ量に比例するようじゃ。そなたの場合はＭＰがほぼ無尽蔵じゃ。そのために、アガルタの国に生きる者たちの大半は信頼関係で結ばれるようじゃな」

「何か、ドえらいスキルですね……」

「人の心は弱いものじゃ。いくら強力な魔法や武器を持っていても、信頼関係がなくては簡単に滅びる。そういった意味では、人の心をつなげる効果があることによって、そなたのスキルは結界以上の防御力を持つのやもしれぬな」

「結界師としては、最高のスキルだと思います」

いつの間にか、ものすごいスキルを手に入れてしまっていた。自分を含めて、その仲間たちが強い信頼関係に結ばれるというのは、最高じゃないか。アガルタの国民が、クリミアーナの教義や布教に全く興味を示さなかったのは、もしかしたら、俺のこのスキルが影響していたのかもしれない。

おひいさまには丁寧に礼を言って、その場を後にする。そして、ペーリスにカステラの量産をお願いしなければと思いつつ、帝都の屋敷に転移すると、裏口の扉が少し開いていた。何とも不用心だ。結界で守られているとはいえ、こういう気のゆるみはいけない。俺は屋敷の人間を少し驚かせようと、抜き足、差し足、忍び足で屋敷の中に入る。すると、ダイニングから女たちのヒソヒソ話が聞こえてきた。

「……が、この薬です」

「感謝しますわ。もうあんな苦しい思いは、二度としたくありませんから……」

「ご安心ください。メイ様と私が十分注意して作りましたので、体に一切の負担はないはずです」

「ローニ、ありがとう。くれぐれも、リノスには秘密にしておいてくださいな」

「畏まりました」

「余計な心配をかけたくないのですわ」

「リコ様、大丈夫です。私とローニさんで、全力でサポートしますから」

「メイ、ローニ、迷惑をかけますわ」

「大丈夫です。お渡ししたお薬は、ジャスロの実に似せてあります。毎朝起きられた時に、一錠飲んでください。水も何もいりません。周囲の人は単に口内の洗浄をしているように見えますので、何の違和感もないと思います」

「ありがとう、メイ、ローニ。必ずお礼はしますわね」

「いいえ、私たちは、リコ様に苦痛なく過ごしていただければ、それでよいのです……」

背中に冷たい汗が流れ落ちる。どう考えても健康な人間がする話じゃない。何でわざわざジャスロの実に薬を似せる必要がある？　そもそも何で薬を飲むことを、俺に隠さなきゃいけないんだ？　あんなに苦しい思いって何だ？　リコの体に何が起こっているんだ……？

俺は一旦コッソリと外に出て、深呼吸をする。そして、気合を入れ直して再び屋敷の中に入る。ここは、きちんとリコに説明してもらわなきゃいけない。

「……あれ？」

屋敷の中には誰もいなかった。さっき聞いたあの話は、幻か？

「あれ？　どうされたんですか？」

「うおっ！　ペーリスか……。おかえり」

ペーリスに怪訝な顔をされてしまった。そんなことをしているうちに、フェリスやルアラ、ゴンたちが帰ってくる。そして、ゴンからクリミアーナ教国に新たな動きがあったと報告してきたために、色々と打ち合わせをしていると、メイがアリリアを連れてダイニングに入ってくる。

「とうたーん。だっこー」

「うおおおーい、アリリア～おいで～」

……こうして、気が付けば、いつもの賑やかな夕食タイムになってしまっていた。

この日はローニも一緒に夕食を食っている。どうやら、リコたちと子供たちの検診に来たらしい。ということは、さっきの話は幻ではない。しかし、この場で聞くのはちょっと憚られる。それに今の彼女は、一心不乱にロアーグ魚を食べている。鯛のような上品な味わいの白身魚だが、彼女はこの塩焼きを気に入っていて、一匹丸ごと、それこそ、気持ちがいいくらいに食べている。頬肉が美味しい、眼肉が美味しいと目玉までくりぬいて食べ、それだけに飽き足らず、骨についた身も丁寧にほぐして食べている。

俺はその食いっぷりに感心しつつ、ローニに話しかけるタイミングを図っていたのだが、なかなかそのチャンスは訪れず、俺はなし崩し的に、娘二人と共に風呂に押し込まれてしまった。

元気な娘たちに振り回されながらそれぞれの体を洗い、やっとのことで風呂から上がる。ようやく一息ついたところに、今度はソレイユが部屋に入ってきた。そういえば、今日は彼女の日だったのだ。俺はリコに事情を聴きたいと思っていたのだが、ソレイユは俺の気持ちを知ってか知らずか、早々と俺からマウントを取り、まるで襲うかのようにして俺の体を蹂躙していった。

そして、次の日の夜、ようやくリコと二人っきりになれた俺は、意を決して彼女に事情を尋ねた。

「リコ、聞きたいことがある」

「何ですの？」

「リコの体のことだ」

「……もしや、気が付いていましたの？」

「……」

「ちょうどいい機会ですわ。リノス、今日はダメだと言おうと思っていたのですが、今日からしばらく……リノスのお相手は、できそうにないのですわ」

「リコ、どういうことだ？　……そんなに、悪いのか？」

「いえ……。メイとローニに薬を作ってもらったので、今は大丈夫ですわ」

「どうして早く言ってくれないんだ！　よし、回復魔法をかけよう。

ちょっと待ってろ」

「無駄です。やめてくださいませ」

「無駄？」

「ええ、無駄ですわ。回復魔法で治癒できるものではありませんわ」

「リコ……まさか……」

「ええ、そのまさかですわ」

「……メイでも……ローニでも……治癒できない不治の病に罹ったというのか！」

俺は思わず大声を出していた。リコは目を丸くして驚いている。

「不治の病……？　何の話？」

「回復魔法で治癒できないんだろう？」

「リノス……。違いますわ。……私は……これですわ」

リコは俺の手を取り、そのまま自分の腹に俺の手を当てる。

「え？　これって……」

「ええ。懐妊したのです」

「懐妊！？　え？　え？　え？　ウソ？　マジで？」

「まだ、二か月目に入ろうとするところのようですわ。リノスにはもう少し落ち着いてから話そうと思っていたのですけれど……。今度は、男の子を生んで見せますわ」

「リコ！　リコ！　リコ！　リコぉぉぉぉぉ」

思わずリコを抱きしめる。だが、強く抱きしめすぎたためか、リコが痛い痛いと言ってしまった。思わず俺は体を離す。

「リノス、赤ちゃんが潰れてしまいますわ」

「ゴメン……。でも、何でメイとローニに薬を作ってもらう必要があるんだ？　つわりか？」

「懐妊すると……その……出なくなりますから……」

「ああ……あれか。……確かに、そうだったな」

「体に負担はかかりませんし、今のところ順調ですから、心配はありませんわ」

「リコ……。体を大事にしてくれな。元気な子を産んでくれよな」

「はい、大丈夫ですわ。きっと、元気な子を産んで見せますわ」

リコは満面の笑みを浮かべる。ヤバイ、マジでかわいい。めちゃくちゃカワイイ。

「本当に、本当にうれしいよ。マジで神様に、神様に感謝だな」

……ささやかですが、あなたへのお礼です。ありがとう

「うん？　何か言ったか、リコ？」

「いいえ、何も言いませんわ」

「あれ？　なんか声が聞こえた気がするんだけどな……。まあ、いいや。それにしても間抜けだな俺は。リコの妊娠に気が付かなくて、不治の病に罹っていたと思い込むだなんて……。いや、申し訳ない。申し訳なかった」

頭をガリガリ掻きながら謝る俺に、リコはニコリと笑いながら、口を開く。

「いいえ。実は私は、死ぬまで治らない病を患っているのです。リノスの言うことは、当たっていますわ」

「えっ!?　マジで!?　その病気って……何？」

俺はベッドの上で正座して、ゴクリと唾を呑み込みながらリコに尋ねる。その様子を見て彼女は、再びそのかわいらしい顔に笑みを湛える。

「それは……恋の病ですわ。私は、死ぬまでリノスに恋するのです」

「リコ……」

リノスは再びリコを抱きしめた。今度は宝物を抱くように、やさしく抱きしめた。そして、このリコという宝物を、死ぬまで守っていこうと、強く心に誓うのだった。

第二百三十三話　族長命令

「イヤです！」

「まあ、そう言わずにだな……」

「イヤなものはイヤなのです！」

プリプリと怒っているのは、ローニだった。彼女の長い耳が横にゆっくりと揺れている。これは怒っている証拠だ。ちなみに、彼女の心の動きは全て、その耳に現れる。耳がクルクルと回るように動くときは、何かを考えているときであり、お腹がすくと耳がフニャフニャになる。その他も色々とあるのだが、それはここでは割愛する。とにかく今、彼女は怒っているのだ。

「ローニ……」

呆れたような声を出しているのは、チワンだ。腕を組みながら、ローニを睨みつけている。

「何も今すぐ結婚しろというわけではない。お前に一度会いたいという人がいるから、会ってみたらどうだと言っているだけだ」

「私はイヤです。とにかくイヤなのです」

「ラバデ王国の研究者だ。非常に優秀な男だぞ？　しかも次男坊だ。本国に帰る必要も、家を継ぐ必要もない。もし、この話が進めば、アガルタに骨を埋めてもいいとまで言っているのだ。めったにいな

いぞ？　こんな男は」

「長男だろうが八男だろうが関係ありません。繰り返しになりますが、私は結婚する気はありません！」

「お前なぁ、断る俺の身にもなってくれ」

チワンが嘆くのも無理はなかった。優秀な研究者であるローニには、いくつかの縁談が持ち込まれていた。同業の研究者はもとより、貴族、王族、果てはサンダンジ王までが、正式にローニを妻に迎えたいと打診してきていたのだ。しかし彼女は一度も相手と会うこともなく、全ての縁談を断っていた。

「とにかく私は、イヤなのです」

「気持ちはわからんでもないがローニ、一度くらい会ってから決めてくれ。それとも、誰か心に決めた人でもいるのか？」

「いえ……。それは……い、い、い、いません」

「……ローニ、リノス様だけは、絶対にダメだからな？」

「ありえません」

「リノス様じゃないのか？」

「そんなわけありません。私だって、そこら辺の分別はあります。むしろ、リノス様のご家庭に波風は立てたくありません。あのご家庭が壊れると、私は飢え死にしますから」

「お前……。リノス様のお屋敷をレストランか何かと間違ってないか？」

「そんなこと思うわけないじゃないですかーやだなーハッハッハ」

「……とにかく、一度会え」

「めんどくさいですね……」

「心の声を口にするなと昔から言っているだろう！　ローニ、これは族長命令だ。相手は俺の恩人の知り合いなのだ。俺の顔を立てて一週間後に一度、相手と会ってくれ」

「全く、人を呼び出しておいて、また縁談ですか。いい加減にしてほしいです……」

なぜ自分の結婚を他人にとやかく言われなければならないのか。ローニはプリプリと怒りながら研究所の長い廊下を歩く。そして、勢いよく部屋の扉を開くと、そこはメイとグラリーナが実験データをまとめているところだった。

「すみません、遅れました」

ぴょこんと彼女はお辞儀をする。メイは笑顔を返してローニを迎える。グラリーナは相変わらずいつもの微笑を湛えて、ローニを見ている。ローニの気配を察してか、メイが声をかける。

「チワンさん、大丈夫でしたか？」

「やっぱり、縁談でした。お断りしたら、怒っちゃいました」

「あらあら、それは、大変でしたね」

鷹揚に声をかけているのはグラリーナだ。彼女はゆったりと立ち上がって、ローニに椅子を用意する。

「結局、相手と会うことになりました」

「それはよかったですね」

グラリーナの、ノホホンとした口調が、ローニの癪に障った。彼女はできるだけそれを悟られないようにしながら、口を開く。

「なにがいいものですか。どうせ、私を通じてメイ様やリノス様に近づこうとしているのです。そんな野心のある方との結婚など、まっぴらです」

「そうなのですか？」

メイが思わず尋ねる。

「そうに決まっています。本当に私を愛しているのであれば、なぜ私に直接言わないのですか？　チワンさんを介して頼むなど……私は気に入りません」

「でも、一度会ってみてはいかがですか？　意外とローニさんに合う人かもしれませんよ？」

「メイ様、相手は次男坊なのです。次男坊は家を継ぐことはできませんから、自分の力で家を立てる必要があります。そのお方の魂胆は見えています。私と結婚し、アガルタ研究所に入り込み、ここで家を立てるつもりなのです」

「そうかしら？　私はそうは思えませんが……」

メイが首をかしげる。

「そのお方、何となくですが、とってもいい方ではないでしょうか」

そんなことを言っているのは、グラリーナだ。彼女はいつの間にか用意したお茶とお菓子を、トレイの上にのせて立っており、ゆったりとそれらをテーブルの上に置いていく。

「せっかくなのですから、一度、会ってみてはいかがですか？　イヤなら断ればいいのです」

グラリーナの言葉にメイも頷く。

「そうですよ、ローニさん。まさかイヤがるローニさんを無理やり結婚させようとするチワンさんではないと思います。もし、そうなれば私とリノス様が間に入りますから、安心してください」

「ハイ……」

ローニは渋々ながら頷いた。そしてしばらく実験結果の確認を行った後、ローニは懐妊中のリコの診察に向かうために、メイと共に帝都の屋敷に転移したのだった。

「……私も、メイの言う通りだと思いますわ」

リコは診察が終わり、自分の衣服をあらためながらローニに口を開く。

「やはり、そうでしょうか……」

「人は会って見なければわからない所もありますわ。たとえ望まぬ出会いだったとはいえ、こうやってローニと会いたいと言ってくれているのですから、何かの縁があるかもしれなくてよ？」

「はい……」

「まあ、決めるのはローニですわ。本当にイヤなら断ればいいのです。私はどちらを選んでもローニを応援しますわ。大丈夫です。安心なさいな。さあ、このお話はおしまいにして、夕食を食べましょう。今日はリノスがギョーザを作ると言っていましたわ。ローニも一緒にいかがかしら？」

「お言葉に甘えさせていただきます」

ダイニングに降りると、リノスは大きな鍋を振るって、チャーハンを作っているところだった。彼は大皿にチャーハンを盛り付けて、ダイニングのテーブルに置く。美味しそうなニオイが漂ってくる。

「おおローニ、リコはどうだった？　大丈夫か。それはよかった。メシ食っていくだろ？　そう言うと思って今日は多めに作っておいたんだ。チャーハンにギョーザにからあげ、サラダ、そして豆腐というメニューだ。今日はバイキング形式にするから、好きなだけ食

って帰ってくれ」

リノスが喋っている最中にも、大皿に盛られた大量のギョーザとからあげ、チャーハンなどが運び出されてくる。それを運んでいるのはフェリスとペーリスだが、二人とも到底女一人では持てない程の量を満載した大皿を、片手で持ち上げている。それを見ていると、自然にローニのお腹の音が鳴ってくる。

そして、いただきますの言葉と共に、ローニは料理を平らげていく。美味しい。どれも実に美味しい。これだからリノス家の訪問はやめられないのだ。この日は、サンダンジ国から贈られたという酒も出されており、調子に乗ったローニは、それも勧められるままに飲み、その酒の美味さも手伝って、すこぶるゴキゲンな仕上がりになった。

「で、ローニ、お見合いするんだって？」

デザートのお饅頭を食べているときに、出し抜けにリノスから質問が飛んできた。もう何度目の質問だろう。正直、答え飽きた。彼女は酔いも手伝って、必要最低限の答えを返す。

「会います。で、決断します」

「え？　そうなの？」

「はい、すぐに決断すると思います」

「そうか、それはよかった。でも、相手は人間なんだろ？　ポーセハイと人間が結婚したら、お前たちの転移能力はどうなるんだ？」

「問題ありません。基本的に、相手が誰であれ、ポーセハイが子供

を産むと、その子供はポーセハイで産まれてきます。男性の場合は、半々の確率でポーセハイが生まれます」

「へぇ～何とも不思議な種族なんだな。ということは、ローニが人間と結婚しても、生まれるのはポーセハイなのか」

「ハイ、その通りです」

「そういえば、ローニはいくつだっけ？」

「２５歳です」

「ああ、もうそんな年だったのか。もっと若いと思っていたが……。その年なら、自分で決められるな」

「はい、決めまして、またご報告に参ります」

「ああ、楽しみにしているよ」

リノスとの会話もそこそこに屋敷を辞したローニは、そのまま自分の部屋に転移した。ベッドに入った彼女は、久しぶりに満ち足りた感覚のまま、深い眠りにつくのだった。

第二百三十三話　族長命令（後書き）

もう一話続きます。次話「憧れの人」は7／14（金）9：00に公開予定です。

第二百三十四話　憧れの人

お見合いの当日、彼女は着慣れないフォーマルな服装に身を包んで、見合い会場の隣の部屋に控えていた。会場といっても、アガルタの医療研究所内であり、研究部屋の一室に机と椅子を運び込み、応接室のような体裁を整えているだけの、簡素なものだった。これは相手方の要望によるもので、ローニに気を使わせないための配慮だった。

当のローニ本人は、ブータンのキラのような民族衣装に身を包み、それが何とも着慣れないためにソワソワしていた。彼女も一人の女性である。やはり相手は気になる。憧れているあのお方のような、フサフサの金髪、抜けるような白い肌、パッチリした目をもった美青年。そして、やさしく、甘い声……。あの方のようなお人であれば、結婚を考えてもいい。自分を利用しようという野心がなく、研究に理解があり、自分だけを愛していただける方であればいい。

百歩譲って、見目の麗しさはそこそこでも構わない。ちゃんと定職を持って自立し、自分の生き方に誇りを持っている人であれば考える余地はある。女性に対しては優しく振舞い、ある程度、女性から人気のある男……。さらには、料理などができて、炊事、洗濯、家事万般が苦にならないのであればポイントは高い。贅沢は言わないが、おいしい料理を作ることができれば、なお結構だ。浮気などはもっての外。誕生日など、記念日をきちんと覚えていて、その都度都度にプレゼントなどをしてくれる程度で、十分だ。そんな男であれば、結婚を考えてもいい。そう、贅沢は言わない。

そんなことを考えていると、隣の部屋から、チワンと相手方の男と

思われる男の話し声が聞こえてきた。

「……遠くからわざわざすみませんでした」

「いえいえ、こちらからお願いしたのです。私から出向くのは当然です」

……どうも、声は好みではないようだ。ちょっと年上？　そういえば、相手の年齢を聞くのを忘れていた。ローニにしては珍しい手落ちだ。気になった彼女は、ちょうど壁の上に、灯り取り用にはめ込まれていたガラス窓から覗いてみることにした。よっこらせと棚の上に上り、部屋を覗いてみると、そこには驚愕の光景があった。

チワンと話をしているのは、頭がツルツルに剥げ、口ひげを蓄えた、壮年の男だったのだ。

「では、ローニを呼びますので、少々お待ちください」

チワンが隣の部屋の扉を開けて、入ってくる。その瞬間、ローニの絶叫が響き渡った。

「お断りします！！」

「ローニ、どうしたんだ？」

「イヤです！　私はイヤです！」

「いまさら何を言っているんだ！　相手に対して失礼だろう！」

「イヤです！　お断りします！　あんな人と結婚するくらいなら、

死んだ方がマシです！」

取り敢えず来いと、無理やり連れていこうとにじり寄ってくるチワン。それを見て彼女は、思わず傍にあった実験用具を収納する長方形の缶を手に取って、ブン投げた。

それはチワンの顔をかすめて、隣の部屋に飛んでいった。その直後、カーンといい音がしたかと思うと、うわっ！と男の声が聞こえてきた。

「大丈夫ですか！」

チワンが隣の部屋に向かったスキに、ローニは転移していた。バカにしています。私とあんなつるっパゲのおじさんと娶わせようとしていたなんて……あんまりです……。彼女は泣きながら、転移した先であるリノスの屋敷に駆けこんだ。

「イタタタタ……」

「大丈夫ですか？　申し訳ありません、ウチのローニが、こんなものを投げまして……」

チワンは何度も頭を下げて謝っている。しかし、そんな彼に男は優しい声で話しかける。

「いいえ。お約束を頂戴しておきながら、遅れてしまいました。缶を投げられても仕方がありません」

「何を仰います！　まだ約束の時間前ではありませんか！」

「いいえ。既に皆さんお揃いですから……。本来は私が一番先に来ていなければならないのです。申し訳ありませんでした」

頭を押さえながら起き上がったその男は、金色の髪を持つ、見目麗しい美青年だった。

「ジャイヴ、大丈夫ですか？」

心配そうにツルツル頭の男が寄ってくる。

「ええ、大丈夫です。先生、申し訳ありませんでした」

「全く……。申し訳ありませんでした。ペライン先生、大事なお弟子さんに怪我をさせてしまいまして……」

「いいえチワン殿、気になさらないでください」

「失礼します。何か大きな音が聞こえましたが、大丈夫ですか？」

ひょこっと部屋の中を覗き込んだのは、グラリーナだ。

「アラ、血が出ているではありませんか」

そう言って彼女は部屋の中に入り、ジャイヴの傍による。そして、彼の頭に優しく手を当てて、傷の様子を見る。

「ああ、どうぞ、お構いなく……」

「傷は……大丈夫ですね。これでしばらく傷口を押さえていてくだ

さい」

そう言うと彼女は素早く懐から一枚の布を取り出し、それを口にくわえたかと思うと、ビリビリと破って手ごろな大きさにし、そこに何かの薬品をつけて男の額に当てた。

「これで化膿することはありませんから」

「ありがとうございます。あの……お名前をお伺いしても？」

「はい。こちらの研究所でお世話になっております、グラリーナと申します」

「あなたが、グラリーナさんですか……」

彼女はニコリと微笑むと、おっとりと会釈をして、部屋を出ていった。

そんなことは露知らぬローニは、帝都のリノスの屋敷で涙を拭っていた。ちょうど休日であったために、リコもメイも在宅であり、二人は話を聞きながら、彼女を優しく宥めたのだった。

「……ありがとうございます。いいのです。やはり、憧れている方がいるのに、他の男性と一瞬であっても結婚を考えてはいけなかったのです。これは天罰なのです。やはり私は、憧れている、あのお方との縁が深まるように努めるのです」

「まあ、初耳ですわ！　ローニにそんな方がおられたなんて……。どのようなお方？」

リコは目をキラキラさせて、食い入るようにローニの顔を見る。

「まだ、数回しかお会いしたことがないですし、言葉を掛けていただいたのも数回ですが……」

「まあ、なんて素敵な話なのでしょう」

リコもメイも、ローニから初めて聞く恋話に興味津々だ。その憧れの人とは、ちょうどクリミアーナ教国の首都、アフロディーテで行われた公開質問会に行ったときに出会ったのだと言う。帝国の船の中で、たまたま彼女の耳にゴミが付いていたのを、さりげなく取ってくれたのが、その始まりだった。

「まあ、帝国のお方？　それでしたら、兄に頼んで調べてもらうことができますわ。まだ、独り身でしたら、娶わせることもできますわよ？」

「いいえ、とんでもありません。そうしたことはあまりしたくはないのです。できれば、その……自然に再会したいのです」

「まあ、その気持ち、よくわかりますわ。自然に……。何かのパーティーで再会する、というのはどうかしら？」

「あ、いいですね、それ」

ローニの耳がピンとなる。

「それならばちょうどいいですわ。二週間後に、弟のヴァイラスが正式にグレモント家に養子に入って、公爵に序せられます。その時、

お披露目のパーティーも開かれるのですわ。ローニ、あなたもおいでなさいな。あなたが来てくれるのであれば、私も安心してパーティーに参加できますわ」

「えっ？　そんな……。いいのですか？」

「ええ、問題ありませんわ」

「あっ……ありがとうございます！　ヴァイラス様が公爵に……。もう、王族ではなくなるのですね？」

「表向きはそうなりますわね。ただ、お妃にはワーロフ帝国の第一皇女を娶りますので、扱いはほとんど王族と変わりませんわ」

「え？　お妃？」

「ええ。ヴァイラスの叙爵披露に合わせて、お妃の披露も行う予定なのですわ」

「うえええええっ！？」

「あ、そんなに心配しなくてよろしいのよ？　確かに兄上をはじめ、帝国の主だった方が列席されますが、あくまで内々のパーティーですので、招待する方の身分は問われませんわ」

「ヴァ……ヴァイラス様……結婚されるのですか？」

「ええ。やっとですわ。弟も随分と浮名を流しましたが、ようやく年貢を納めることになりました」

「う……浮名って、ヴァイラス様はそのように多くの女性と交わっていたのですか？」

「そうですわね……。私が知る限り……。１００は超えますわね」

「ひゃ、ひゃく！？」

「心配していたのです。いつの日か痛い目に合うのではと。ただ、別れ上手なのでしょうか、そうしたいざこざは一切なかったですわね。まあ、結婚するからには、もうお妃一人だけを愛していくべきですわ。先日、弟には私からキツく意見をしたところです」

「ハ……ハハハハハ……」

「ところで、ローニの憧れのお方のことを聞かせていただけまして？　お名前は？　お年は？　どのような特徴をお持ち？　背が高いとか、ホクロがあるとか……。聞かせてくださいな」

「ありがとうございます……。大丈夫です……。そのような所には……。私はこれで、失礼します」

ローニは脱兎のごとく屋敷を飛び出して、自分の部屋に転移していった。そして、彼女と入れ替わるようにして、リノスが屋敷に帰ってきた。

「え？　ローニ帰っちゃったのか？　何？　お見合い断ったのか！？」

「ええ、随分と年上の方だったようで……」

「何だよー。決めるって言っていたから、サプライズでローニの新居を作ってもらうようにゲンさんに頼んできたところだったのに……。３ＬＤＫの一戸建てだぞ？　しかも、子供が生まれるのを想定して、二階を建て増せるように頼んできたのに……。しかも、備え付けの家具付きなんだぞ？　どうすんだ、あれ？」

ブツブツと呟くリノスに、リコは優しく諭すように声をかける。

「まあ、ローニにはあこがれの人がいるそうですわ。そのお方と話がまとまりましたら、そのお家をプレゼントすればいいのですわ」

「ええっ？　そんな男がいたのか？　何だよー。ローニも隅に置けないな」

そう言って、リノスとリコは笑いあったのだった。

「……ううう。ヴァイラス様が結婚って。ひゃくにんって……。うえぇぇぇぇーーーン」

その夜、ローニは久しぶりに涙で枕を濡らした。

二週間後、ローニはリコの説得に負けて、ヴァイラスのパーティーに参加した。憧れの人についての話は、研究が忙しいと、まるで子供がつくようなウソをついて何とか躱したのだった。彼女は、もし、ヴァイラスのお妃さまが残念な仕上がりであった場合は、チャンスが訪れるかもしれないという一縷の望みを捨てきれずにいたのだっ

た。

しかし、彼女はお妃様を見て、腰が抜けるくらいに驚いた。絶世の美女だったのだ。その姿を見た瞬間に、完全敗北を認めざるを得なかった。そしてその夜、彼女は再び枕を涙で濡らした。

しばらく落ち込んでいたローニだったが、リコの往診に赴いた時に、リノスが娘たちに言った何気ない一言を聞いて、何とか立ち直ることが出来た。それは、二人の娘を抱っこしながら、リノスは娘の顔に自分の顔をスリスリしながら言っていた、こんな一言だった。

「エリル、アリリア。ママみたいに優しい女の人になるんだぞー。優しい女の子の所には、白馬に乗った王子様がお前たちを迎えに来てくれるんだぞー」

「いやー。とうたんがいいー」

「とうたんがいいー」

「そうか～！　エリルー。アリリアー。ずっと、とうたんの傍にいておくれー」

それ以降ローニは、いつの日か自分にも、白馬に乗った王子様が迎えに来てくれると信じるようになった。

ちなみに、ローニとお見合いをする予定であったジャイヴは、グラリーナに一目ぼれをしてしまい、彼女への猛アタックをかけるようになった。その努力は実を結び、二人はそのまま結婚するのだった。後にジャイヴ自身もアガルタ研究所に勤務し、夫婦で数々の実績を上げていくようになるのだが……。それはまた、別のお話。

なお彼は、浮気は一切せず、ひたすらグラリーナを愛し続けて、二人は人もうらやむおしどり夫婦になっていくことを特筆しておく。彼はローニの理想に限りなく近く、家事万般は苦にならないために、グラリーナの帰宅が遅くなるときには嬉々として料理と洗濯、掃除をする男であった。そして、休日には彼女に腕によりをかけた料理を振る舞うなど、働く女性にとって理想的な男であり、ローニは後に心から後悔することになる。しかし、そんな彼女にも一応、春は訪れるのだが……。それもまた、別のお話。

第二百三十五話　名君とバカ殿

クリミアーナ教国の教皇神殿の地下には、『スークレイの書』という書物が所蔵されている。その部屋は厳重に秘匿され、結界によって守られており、教皇と数人の幹部のみが入ることを許される。

入室方法は、教皇を始めとする幹部たちがいつも左手にはめているリングであり、それが入出許可書になっている。これは、教皇およびその幹部が死去した時には次の代に引き継がれ、同時に、『スークレイの書』についても引き継がれる。

この書物は既に１０００巻を超えており、今、ようやく現教皇、ジュヴァンセル・セインによって、１００７巻目が書棚の中に収められた。真新しい紙で製本されたその書物の題名は、『アガルタ国』。ここ数年で建国された国であり、国力や軍事力、技術力などが急速に向上しており、その充実ぶりは、クリミアーナ教国としても捨て置けぬ存在になった国だ。そして、その最初のページには、教皇直筆でこのように記されている。

為政者：バーサーム・ダーケ・リノス（男）
人物評：邪神の手先。あるいはそれそのもの。全世界の仇敵。

リノスが読めば思わず笑ってしまうような内容である。言ってみればこの『スークレイの書』とは、いわゆる、この世界の国ごとに記された歴史書であり、クリミアーナが持つ世界一の情報網を駆使して集めた情報が、詳細に記されている書物なのだ。これこそがクリミアーナ教国の強さの一端であり、歴代教皇をはじめとする幹部たちは、王の崩御や即位、その結婚や出産、反乱や災害など、対象と

なる国に起こった事象を書き記し、新たな国が生まれれば新たに書を作りながら、次の世代に情報を引き継いできた。言い換えればこれは、恐ろしい手間暇をかけて作り出されたデーターベースなのだ。

これまで、建国されたり、滅亡したりした国々は数多あるが、その中で最も評価の低い為政者は、リノスであった。ぶっちぎりの最下位なのだ。その理由は言うまでもないが、その一方で、リノスに負けず劣らずの、低い評価を下された為政者がもう一人いた。フラディメ王国のメインティア王である。彼に下された評価は、こうである。

為政者：フラディメ・ロスカーノ・メインティア（男）
人物評：生まれながらの馬鹿。思慮分別なし。色情狂で文盲。

フラディメ王国は、リノスたちが住むアガルタ国から、船で5日、徒歩で2日の距離にある国だ。海と山に囲まれてはいるが、その領土は広大であり、そこから生産される食糧は豊富である。また、領民への教育は行き届いており、この世界では珍しく、どの身分の者でも学べる学校までが設立されているのだ。にもかかわらず、この国の王は、教国から最悪の評価を受けていた。

その理由は、この国をここまでの繁栄に導いたのは、前王であるフラディメ・ロスカーノ・リボーンであり、その息子たる現王は、ほぼ、何もしていないと言って過言ではなかった。

今年２６歳のメインティア王であるが、彼が日々行うことと言えば、趣味の世界に没頭することだ。彼の趣味は大きく分けて三つあり、一つが女性、二つ目が芸術、そして、三つめが美食というものだった。

つまり彼は日々、女性と戯れながら、その合間に好きな絵を描き、そして美味いものを食らうという生活を送っていた。そのために政務は疎かになり、見かねた前王であるリボーン大上王が、隠居の身でありながら再び政務を執り、この国を維持しているのであった。

こうした王の堕落ぶりに、大上王の悩みは深かった。彼は稀に見る名君の誉れ高き男であり、幼少のころから数々の苦労を乗り越えて、現在の繁栄を手にした言わば苦労人であった。誰よりも人の恐ろしさと、その付き合い方の重要性を知っている男であるだけに、息子の放蕩ぶりは我慢がならなかった。

現在は堕落しているが、子どもの頃の彼は聡明で、将来を嘱望されていた。大上王をはじめとした家来たちはこれまで何度も彼の意識改革を試みたが、全て空振りに終わっていた。不幸なことに、大上王の子供は現王ただ一人であり、他に後継者がなかった。他国から養子を迎えようとも考えたこともあったが、そこは忠臣たちが断固として諫め、寧ろ王として即位させた方が、責任感が生まれるのではないかという意見を容れて即位させてみたが、彼の放蕩ぶりは、留まるところを知らなかった。

それどころか、即位した直後から彼は、後宮に次から次へと女を召し抱え、即位してから今までの８年間で、その数は５０を優に超える。後宮に迎えた女たちが、王族や貴族の娘など、素性がしっかりしている者であればまだ、我慢はできた。しかし彼は、その王族や貴族から迎えた妻たちに仕えている侍女たちにも、手当たり次第に手を付けていた。

「いけません、おやめください王様、お許しくださいませ」

「よいではないか、よいではないか。ささ、参れ、参れ」

どこかの時代劇に出てきそうな場面であるが、アリスン城内では、こうした場面が日常茶飯事であった。王は自分の好みの女を見つけると、その手を掴み、自身の部屋に引きずっていった。そして、その女どもに産ませた子供が７０人を越えるという事態にまで発展していたのだった。

彼の正室をはじめ、関係のある女たちは全て居城のアリスン城に住んでいたが、もはやそこは女の城と呼んで差し支えなかった。お腹の大きな女が常に歩いている状態であり、あちらにも、こちらにもメインティア王に似た子供たちが遊んでいるという光景がそこにはあった。

しかも、女が密集している城内においては、嫉妬心も渦巻けば怨念もたまる。側室の中にはヒステリーを発症する者もおり、扉を開けただけで、少し音をさせても錯乱状態になる女もいた。メインティア王は精力絶倫で無類の女好きであったが、反面、フェミニストの側面があった。

「では、扉に綿を付けたらいいよ」

お陰で扉の音は静かになったが、逆に彼は、大上王からの雨のような小言を食らうはめになった。

しかし、その小言も彼には届かなかった。そして、挙句の果てには、大上王が住む敷地の一部に精神を病んだ女たちの静養部屋と、併せて、その子供たちが遊ぶ場所を作りたいなどと要請してくる有様であった。ここに至って、大上王もついに堪忍袋の緒が切れた。

「私の孫は、誇り高き騎士の子である」

そう宣言したかと思うと、すぐさまメインティア王の住む城の向かいの馬場に、軍勢と魔法使いを集めて、早朝から暮れ方まで、猛烈な火力演習を行い、轟音を響かせた。

これで、大上王と息子のメインティア王との関係は、修復不可能なほどに崩壊した。

大上王は悩んだ。このままでは自分の死後、遠からずこの国は崩壊する。どうしてこうなったのか、彼には皆目わからなかった。悩んだ末に、彼の脳裏に一人の男の名が浮かび上がった。

アガルタ王・リノス。

わずか数年の間に、乱れていたジュカ王国を再興しただけでなく、その類まれな手腕で、キリスレイとルロワンスという、人類をもっとも苦しめた原因不明の伝染病を撲滅に導いた。それだけでなく、世界で最も恐れられているクリミアーナ教国とその教徒に堂々と渡り合い、ついにその干渉を退けた男。

フラディメ王国も、それまではクリミアーナ教国を受け入れ、支援も受けていたのだが、息子が即位して以来、教国とは急速に疎遠になりつつあった。一方で学問好きな大上王は、リノスが提唱した有志の国が集まって、伝染病撲滅の研究機関を作ることに賛成し、研究者を派遣していた。そして、ちょうど3か月後に、その研究の発表会が行われることになっていた。

「……アガルタ王に相談をしてみよう」

苦虫をかみつぶしたような顔で、大上王はつぶやく。既に自分は老

いている。生きられるとしても、あと数年だろう。自分の目の黒いうちに、この国の行く末を確かなものにしておきたい。そう思った彼の行動は、早かった。

「宰相のアウッサイを呼べ」

彼は宰相を呼び出すと、3か月後にアガルタの医療研究所にて開催される、研究発表会に参加をすること、そして、そこには現王メインティアも連れていくことを告げた。大上王と王が襲われると、確実に国が亡びる危険な旅である。しかし、大上王はその危険を冒してでもアガルタに行くことが、現在の問題を解決に導くだろうと直感していた。もしかしたら、彼や彼の妃は、息子を改善させる何かを知っているかもしれない。何の根拠もない思惑であるが、大上王は自分の直感に賭けることを選択したのだ。

彼は、道中の警備体制について万全を期すように宰相に命じ、すぐさまアガルタ王・リノスに向けて筆を執った。

『親愛なるアガルタ王・リノス殿。貴国の医療研究所における研究発表会の招待、大変にうれしく思っております。是非、参加させていただきたく筆を執りました。私を含め、現王である我が愚息も伴って、貴国にて知的好奇心を満たしたいと思います。なお、大変不躾ではありますが、アガルタ王と一度、ゆるりと話を致したく、会談の機会を設けていただけると幸いです。よろしくお願いいたします』

少々遜り過ぎの気がしないでもないが、ここはなりふりを構ってはいられない。彼はその手紙を封筒に入れると、厳重に蜜蝋を施し、使者にそれをリノスの下に届けさせた。

隠居館の窓から見えるアリスン城を、大上王は鋭い目で睨みつけていた。

第二百三十六話　アガルタまでの旅路

まだまだ残暑の厳しさが残る朝、フラディメ国の首都、オービッゼでは５０名の騎馬兵たちが、ゆっくりとアリスン城を出発していた。そこには、２台の馬車を伴っており、表向きには、アガルタ国で開催される学会に参加するために、国の研究者を派遣するための護衛であると発表されていた。

しかし、その実は、馬車の中には国王のメインティア王と、その父であるリボーン大上王が乗っていた。国の王である二人が不在になるという事態だが、大上王は細心の注意を払って、自身が不在の間でも政務が滞らぬように準備を整えていた。

まず、大上王自身については影武者を用意し、政務については、全幅の信頼を寄せている宰相、アウッサイに任せることにしていた。この事情を知る者はごくわずかに限定し、情報が漏れないようにすることも忘れなかった。ちなみに、息子のメインティア王については、普段から国政を顧みなかったために、その不在は、全く問題にならなかった。

騎馬兵たちに守られた2台の馬車は粛々と街道を進む。当初、大上王は息子のメインティア王と膝を突き合わせて馬車に乗り、たっぷりと小言を言うつもりだった。しかし、王はその気配を察してか、出発前から仮病を使い、最後の最後まで城から出ることに抵抗した。仕方がなく、大上王と馬車を分け、なるべく二人が会わないようにすることで、ようやく彼の首を縦に振らせることが出来たのだった。

大上王とメインティア王の二人は、移動中でも、その行動は正反対

だった。

大上王は、恐ろしく真面目な男であり、その性格は厳格を極めていた。彼はアガルタまでの道中を綿密に調べ、細かいスケジュールを立てていた。そして、国内を移動する馬車においては、その窓から見える景色をつぶさに観察し、国内の情勢を把握することに努めた。作物の生育状況はもちろん、窓から見える民の様子、挙句は、彼らの会話まで聞き取る努力までしていたのだった。そしてさらには、船での移動においては、名君らしく、船中で読書をすることを考えついた。

そのために彼は、二つの本箱を作らせて、その箱に十五冊の政治書を詰めて持ち運んでいた。どの本も分厚いもので、重量は約４０kgにも及んでおり、それを家来に持たせて移動していたのだが、それを運ぶ家来たちは、一苦労だった。

彼は船内において、自分が見た国内の状況を分析し、その合間に、携帯した本を読みたいときに読んだ。揺れる船内も何のその。彼は心配された船酔いを一切起こすことなく、読書を楽しんでいた。お陰でアガルタに到着する頃には、相当な読書をすることができ、溢れる知的好奇心を大いに満足させることができた。

さらには、アガルタ国のガルビーに到着し、そこから都に向かうまでの道中も、彼は馬車の窓から国内を観察し、自国の発展に参考になるものがないか、目を皿のようにして探し続けたのだった。

一方で、息子のメインティア王は、父王を疎ましく思いながらも、マイペースでアガルタまでの道中を楽しんだ。

馬車の中では、移り行く風光明媚な景色を楽しみ、気が向けばその様子を絵に描いた。お陰で、アガルタの都に到着するまでの絵日記が出来上がる始末であった。船での移動においても、家来たちの配慮で、父王との接触は極力避けられ、乗船する時も下船する時も、互いが会わないようにする措置が取られていた。

そうした配慮もあり、旅自体は大きな問題が起こることもなく、比較的のんびりとしたものであったが、一つだけ、彼を苦しめたものがあった。女である。

アリスン城においては、昼となく夜となく数々の女と閨を共にしていた彼も、さすがに父王の目が光る中で、女性を伴って旅に出ることは出来なかった。馬車で移動していた2日間は、かろうじて我慢したものの、船での移動になったところで、彼は女性のいない空閨に耐えられなくなった。

幸か不幸か、彼には同性愛の趣味は全くなかった。父王が同性愛を蛇蝎のごとく嫌い、徹底的に弾圧していたのも影響していたのもあるが、ともかく彼は、女性だけを愛する男であった。

『……聞こえてくるのは荒波の音ばかり。いつも傍にいる美しい女もいない。一人で眠るのが寂しくて眠れない。その代り……月の光が私のベッドに入ってきた。今夜は、月を抱いて寝ることにしよう』

彼は仕方なく絵日記にこんな詩を書き添えて、その無聊を慰めた。

アガルタ国に入り、都までの道中で、一行は休憩を取ることになった。田園地帯が広がる小さな村での小休止。父王は相変わらずその生真面目さと厳格さを発揮して、まだ暑さの残る中、ひたすらに何

かのメモを取り続けていた。炎天下の中、家来たちは大汗をかきながら父王の傍に控えている。メインティア王は、そんな固っ苦しい様子を見るのは息が詰まりそうで、苦手であった。彼は少ない供の者を連れて、木陰に腰を下ろすと、目の前に広がる田園の風景を楽しんだ。

ふと目を移すと、近くで田畑の雑草を摘んでいる女たちの姿が見えた。この暑さの中での作業であるために、女たちは素足をむき出しにし、胸を少しはだけたような格好をしていた。メインティア王の視線は、彼女たちの胸元に集中している。

「女たちが群れて雑草を摘んでいるね。でも、女たちの胸がこの暑さに蒸れて、汗の玉が光っているよ。何だか、かわいそうだね」

そんなことを呟くと彼は、紙と絵筆を取り出して、その情景をせっせと写生するのだった。

この父子（おやこ）がアガルタの都に到着したその日、迎賓館では、研究の発表会に先駆けて、参加者を歓迎するパーティーが開かれた。ここでも、父王と現王の差がはっきりと表れた。

こうしたパーティーでガツガツ食べるのは、行儀のよくないことであると信じる大上王は、予め食事を用意して、パーティーが始まる前に、腹をある程度満たしていた。粗食を旨とする大上王は、専ら野菜と魚をゆっくりと、少量ずつ食べることを良しとしており、こうした華やかな場で振舞われる贅を尽くした料理は苦手であった。従って、彼は少量の飲み物で喉を潤しながら、参加した学者たちの話に耳を傾けながら、彼らたちとの会話を楽しんだ。

それに対して現王は、次から次へと料理を平らげてその味に舌鼓を打ち、キョロキョロと落ち着かなく会場中を見渡していた。食事の給仕をしている侍女たちを物色しては、人間であれ獣人であれサイリュースであれ、気軽に口をきき、彼女たちとの会話を楽しんだ。

アガルタの食事は好みに合っていたようで、彼は誰が見ても明らかな程に、限界まで料理をその胃袋の中に詰め込んだ。さらにまだ食い足りない彼は、一旦嘔吐して、再び料理を平らげようと試みたが、さすがにこれには大上王が待ったをかけた。

そんな様子を、リノスは会場の隣の部屋に作られた、のぞき穴から見ていた。

パーティーの最中に彼が姿を現すと、参加した人々は気を使って料理に手を付けないだろうというリコのアドバイスで、彼はパーティーの最後に登場する段取りであった。まだパーティーの終了時間まで間があり、何も今、リノスがスタンバイする必要はないのだが、この日のメニューを考えたのはリノスとペーリスだった。この日初めてお目見えする料理やスイーツもあるため、リノスとしてはその反応が気になっていたのだ。どうやら参加者には好評のようであり、彼は胸を撫で下ろしていたのだが、その時、彼の目には珍奇な光景が目に入った。

色白で、なかなかの美男に見える男が、えずきながらも、何とかシュークリームを食べようとしている。その横で、小柄で、あばた面の厳めしい顔をした老人が、その手を掴んで止めさせようとしている。ものすごい形相で男を睨みつけている老人、その老人を、心底嫌そうな表情で顔を背けている男。一見すると、どこかの若旦那とそのお守役に見えるが、リノスは、それが手紙を送ってきた、フラディメ王国のリボーン大上王と、その息子のメインティア王である

と察していた。

「ケッタイな父子（おやこ）だな……。何かまた、厄介ごとのニオイがするんだけどなぁ……。気のせいであれば、いいんだけどな」

そんなことを呟きながら、リノスはパーティーに登場するための準備を始めるのだった。

第二百三十七話　厄介払い

歓迎会は和やかなうちに終了し、参加した人々は、アガルタ国のもてなしに大満足をして会場を後にした。リノスとペーリスの狙いは当たり、特に彼女が苦心して作った、トンカツの上にブラウンソースをかけた「ブラカツ」は、味にうるさい王族や貴族たちにも、大好評だった。

そして次の日の朝、リボーン大上王とメインティア王との会談のため、リノスはメイを伴って、迎賓館の一室に向かった。当初はリノスだけが会う予定だったのだが、リボーン王のたっての頼みで、メイも同席することになったのだ。

「おお！　アガルタ王！　お会いしたかったですぞ！　メイリアス王妃も！　お忙しい中、よくぞお時間を取ってくだされた。このリボーン、感謝申しますぞ！」

リノスたちの姿を見るや、リボーン王はすぐさま立ち上がり、大股で二人の前に歩いて来て、力強くその手を握った。間近で見る彼の顔はアバタだらけであり、決して美男とは言えない。しかし、その鋭い眼光は、何者にも屈しない意志の強さを感じさせ、キビキビとした動きは、厳格な彼の性格を如実に表していた。

一方で息子のメインティア王は、柔和な笑顔を湛えたまま、リノスたちの様子を見守っていた。彼はゆっくりと三人の前に進み出ると、優雅に一礼をして、口を開いた。

「フラディメ国のメインティアです。本日は学会の準備でお忙しい

中で、父のわがままでお時間をいただくことになりまして、恐縮の限りです」

その言葉を聞いた瞬間、大上王の目がカッと開かれる。そして、その顔のまま彼は素早く首を動かして、息子の顔を睨みつけた。

……怖い。キンタマが縮み上がるくらいに恐ろしい顔だった。さすがの息子もその顔にビビったらしく、彼はゆっくりと父親から目を背けた。

用意された席に着き、挨拶もそこそこにリボーン王は、興奮した声で口を開く。

「いや、この学会を心待ちにしておりましたのです。メイリアス王妃、あなたのお書きになられた論文は、このリボーン、隅から隅まで、一字一句噛みしめるように読ませていただきましたぞ」

「あ……ありがとうございます」

「いや、あなたの明快な論理の組み立ては、私の知的好奇心を刺激してやまぬ。学会での発表を心待ちにしておりますぞ！」

「はい……がんばります」

メイは、眼光鋭い老人の、威圧するような声に戸惑いつつ、笑顔で言葉を返す。

「リボーン大上王は、随分と学問がお好きなのですね」

リノスが何気なく言った一言だったが、リボーン王は我が意を得た

りと言わんばかりに、目を大きく見開き、ずいっと体を前に寄せて、嬉しそうに言葉を返す。

「これからは、知性の世の中になると私は信じておりますでな。今までのように、神への信仰ではなく、人間の知的な判断によって国を動かしていかねばならんと思っております。とはいえ、我が国にはまだ、国を動かすほどの知性を備えた家来は少ない。そのために、全ての判断は一国を治める者に求められますのじゃ。それ故に私は、深い教養と広い知識を身に付けねばならぬのです」

「なるほど、素晴らしいお話ですね。私も見習わねばなりませんね」

「何を仰るアガルタ王！　私は貴方の治世を理想としておりますのじゃ！　見習わねばならんのは、我らの方だ」

「そんな……。買いかぶりですよ」

「いやいや！　世界で先駆けてクリミアーナ教からの干渉を脱し、メイリアス王妃をはじめとして、ポーセハイ、ドワーフなどの優れた知識を持つ者を集めて、この国を治めておられる。謙遜されずともよい。こうした優れた者が、それぞれの得意な分野を担当しながら国を治めていく体制が整えば、多少王がバカでも……。いやいや、アガルタ王のことではない。失礼した。王の力量によって国が左右されることはない。いや、貴殿の手腕は見事だ。実に見事だ」

あまりにも手放しで褒められるために、リノスもメイも少し面はゆく、二人は顔を見合わせながら苦笑いをしている。そんな雰囲気を察してか、リボーン王は少し声のトーンを落として、話を続ける。

「今回、お時間をいただいたのは、相談したいことがあるためなの

だ」

「相談……ですか？」

「ウム。アガルタ王、メイリアス王妃に相談に乗っていただきたいのは、この愚息のことだ」

それからリボーン王は、隣に座る息子がいかに愚かであるかを語った。女にだらしがなく、わがままで、学問を疎かにし、政務を行わないために、家来たちはもとより国中の民衆、果ては鳥、獣に至るまでバカにされていると言って、隣の息子を睨みつけた。しかし、メインティアは柔らかな笑顔を湛えたまま、父王の小言を聞き流している。

「我が国では、カラスまでが息子のことをバカにすると言われているのだ」

「カラスまでも……ですか？」

「民が言うには、カラスというのは賢く、働き者の鳥だという。朝早く起きて城下に飛んでくると、家々の嫁たちを起こして回るのだそうじゃ」

「ほう……」

「カラスは家の窓から顔を出し、おっカァー、おっカァーと鳴く」

あまりのブッ込みように、リノスは目を見開いて固まる。リボーン王はそんな様子などに目もくれず、話を続ける。

「しかしな、我がアリスン城の屋根にとまると、カラスの鳴き声が変わるのだそうだ」

「鳴き声が……それは何と？」

「アホーアホーと鳴いていると言うのだ！」

……何故かメイがウケている。クスクスと体を震わせながら、必死で笑いをこらえている。

「笑いごとでなぁぁぁぁぁぁい！！」

部屋の中にリボーン王の大音声がこだまする。リノスもメイも、あまりのことに固まる。メインティア王は父王の様子を察して、既に両耳を指で塞いでいた。

「……失礼した。アガルタ王とメイリアス王妃に相談したいことは、どうしたら、この息子が王として相応しい人物になるかということなのだ。これでも幼少の頃は利発で聡明だった。私も、その成長を楽しみにしていたのですじゃ。しかし、成長と共に堕落が始まり、王に即位してからさらに堕落しおった。最早私の手には負えませぬのじゃ」

「う～ん。まずは、父子（おやこ）で腹を割って話をしてみればいかがですか？」

「アガルタ王、そうできるものならば、そうしておりますじゃ。まず、息子は私が呼んでも仮病を使って出ては来ん。何か小言を言っても、今のように薄ら笑いを湛えたまま何も言わんのだ」

「う〜ん」

「私は、息子が何かの病に罹っているのではと疑っていますのじゃ」

「まさかぁ」

「私もそう思う。しかし、そう考えざるを得ないのだ。アガルタの医療技術は世界一ですじゃ。世界中の有能な研究者が集まっている。不躾ではあるが、アガルタ王、我が息子を一度、診察してもらえぬだろうか？」

リノスはメイと顔を見合わせる。その時、今まで沈黙したままであったメインティア王が口を開いた。

「父上、私を、アガルタに追放するおつもりですか？」

「大バカ者ぉぉぉぉぉぉぉ！！」

再び大上王の大音声が響き渡る。

「そなたを追放しようと思うのであれば、今頃とっくに追放しておるわ。私はそなたがバカには思えぬ。あれだけ聡明であったお主が、このように堕落するなど、私は信じられぬのだ。病に罹っておるのであれば、治せばよい。一度、アガルタ王と王妃殿に診てもらうのじゃ」

「……父上。これまで何度も申し上げておりますが、私は病でも何でもありません」

大上王は忌々しそうにメインティア王を睨みつけると、さっと、リ

ノスたちに向き直る。

「病気でなければ、ただ軟弱になっただけのこと。アガルタ王、そのときは、この愚息の根性を叩きなおしてもらえんだろうか？　私ではもう、どうにもならんのですじゃ！」

あまりの話に、さすがのリノスも目が泳ぐ。そして、両手を挙げて二人を宥めるようなポーズを取りながら、口を開く。

「いやいや、ちょっと待ってください。根性を叩きなおすなど私には……。それに、こちらのメインティア王は、フラディメ国の国王でしょう？　国王が国を離れるのはよろしくないかと思いますが……」

「問題ない。愚息は即位して以来、政務を執ろうとはせなんだのだ。従って、国内の政治は全て私と家来たちが見てきた。恥ずかしい話だが、愚息がおらなんでも、国の政治は問題ないのだ。むしろ、子供が増えぬので、家来たちは安心するであろう」

「いや、そうは言ってもですね……」

「分かりました。父上の望むとおりに致しましょう。アガルタ王、メイリアス王妃、一度、私の体を調べてください。そして、しばらくの間、このアガルタに逗留させてください」

メインティア王が早口でまくし立てる。そして、彼は父王に向き直り、噛んで含めるような言い回しで言葉を続けた。

「そして、このアガルタで、自らを見つめなおし、見聞を広めて参ります。それでよろしいのでしょう？　父上？」

しばらくの沈黙の後、大上王はゆっくりと口を開く。

「それでよい。これで、学会に集中できるというものじゃ」

再び、重苦しい沈黙が訪れていた。

第二百三十八話　息子の言い分

「……あまりのお話ですので、我々としては即答できません。まずは、学会が終わるまで、お二人でもう一度ゆっくりとお考え下さい」

リノスはそう言ってリボーン大上王との会見を打ち切り、メイを伴って学会の会場に移動した。

「ムチャクチャな話だな。現役の王様を預かれとは……。厄介な父子（おやこ）だな」

ボヤくリノスの後ろを歩きながら、メイも困ったような笑みを浮かべるしかなかった。

「こっそり二人を鑑定してみたが、大上王は頑固一徹真面目一筋、息子の方は遊んでばっかりだ。はぁー後ろ暗い部分が全くないのも、逆にややこしい……」

リノスは、歩きながら大きなため息をつくのだった。

アガルタ医療研究所の大会議室で、３日間に渡って行われた学会は、とても白熱したものだった。互いの国が新しい研究の発表を行い、大きな賛同を得た一方で、侃侃諤諤の激論が交わされた論題もあり、その日の日程が終了しても、研究者たちは夜遅くまで互いの議論を交わし合った。

その中でも、最も精力的に議論を交わしていたのがリボーン大上王

であった。彼は疑問を持った事柄にはすぐさま手を挙げて質問し、納得がいくまで説明を求めた。そして、共感した論については手放しで礼賛し、その成果を湛えた。彼は、夜遅くまでその日に発表された論文を検証し、様々な研究者と議論を交わしながら、知的好奇心を存分に満たしていった。

リノス自身も、学会が終わった後は、サンダンジ国王のニケをはじめとする、各国の王族たちと様々な情報交換を行っていた。その主な内容はやはり、クリミアーナ教国の事柄が中心であったが、軍事、内政、外交など、話題は多岐にわたった。

リノスを訪ねてくる王族や研究者の一部には、あからさまにアガルタの情報や技術を盗もうとしてくる者、半ば恫喝に近い話をしてくる者もいたが、それについては、気配を消して部屋のオブジェと化していたゴンが念話でアドバイスを送るなどして、角を立てることなく上手く断ることに成功していた。

リノス自身も、先のカッセルとヴィエイユとの攻防の中で、油断すると痛い目を見ることを学んでいたために、細心の注意を払って対応したのだった。一方で、彼が信頼できる王と国との間においては、この学会を経ることで、相互の協力体制を築くことができつつあった。

問題のメインティア王は、学会には参加していたものの、心ここにあらずの雰囲気を隠そうともせず、ひたすら机に向かって何かを書いていた。リノスは自分の席からこの父子（おやこ）の様子を折に触れて観察し、そのあまりの正反対の態度に、逆に、面白ささえ感じたのだった。

そして、学会の全日程が終了した日の夜、リノスは初日にリボーン

大上王と話をした部屋に向かった。メインティア王から改めて二人で会いたいと要請されていたのだが、予定が会わず、延び延びになっていたのだ。

「いやー、くたびれたねー」

リノスたちが部屋に入るなり、メインティア王は砕けた調子で話しかけてきた。予想外の態度に、リノスは思わず眉間に皺を寄せる。王の従者たちは緊張した様子で会談の行方を見守っているが、彼はそんな様子を気に掛けることなく、ゴロンとソファーに横になり、頬杖をつきながらニコニコとリノスを見た。

「申し訳なかったね。父が無理難題を言ってしまって。お詫びと、明日、父と話をする前に私の気持ちを伝えておこうと思ってね。私は、アガルタに残ることにするよ。いつまでここにいるのかは、父と相談することになると思うけれどね」

「……ずいぶんとアッサリと国を出る決断をするのですね。一国の王とは思えない考えと振る舞いですね」

思わず本音が出たリノスの言葉に、気にする様子もなく彼は言葉を続ける。

「すまないね。私は固っ苦しいのが苦手なんだ。勘弁しておくれ。……正直、私も、アリスン城の窮屈な暮らしにちょっと参っていたところだったんだ。しばらく、ここアガルタに逗留するのは、正直言ってイヤではないんだ。以前から気になっていた国でもあるしね。もちろん、アガルタ王が許してくれればの話だが」

「いや、さすがに王がいないのは国としてマズいでしょう。それに、

フラディメ王国とアガルタは同盟関係でもないですし、ましてや属国でもありません。そんな国の王を預かることなんてできませんよ」

「へぇ～。意外とカタいことを言うんだね。いいと思うよ？　別に私がいなくてもあの国は問題なくやっていける。父は王が全て政治を行わねばならないという考え方だが、私はそうは思わないんだ。そんなものは、大方、家臣に任せておけばいい。父はあまりにも家来たちを信用しなさすぎる。我が国の人材も捨てたものではないんだ。政治などは優秀な家臣に任せておけばいいと思うよ？　むしろ、王も限りある人生を楽しまなくてはね」

「まるで、死んだジュカ王国の国王のような考え方ですね」

「ハッハッハ！　一緒にしないでおくれよ。ジュカの国王は暗君以外の何物でもなかった。彼が国のことを一度でも考えたことがあっただろうか？　女にうつつを抜かして、自分の欲望を満たす、それだけの男だった。私は、違うよ。我がフラディメ国の行く末を案じているからね」

「ジュカ王とあなたの違いが、俺にはよくわかりませんが……」

呆気にとられるリノスを尻目に、メインティア王はゆっくりと立ち上がり、う～んと背伸びをして、再びソファーに座る。

「大体、私は父のようにはなりたくはないのだ」

「リボーン大上王は立派な人だと思いますが……」

「立派……かなぁ？　まあ、息子の私が言うのもなんだけど、父は確かに、政治的な能力はズバ抜けていると思うよ。これが乱世なら、

おそらく覇を唱えただろうね。しかし、世の中は治まろうとしているんだ。全世界を騒がせた大魔王も討伐されたし、クリミアーナも……ね。世の中が平穏になろうとしているこの時代に、父のやり方は合わないよ」

「それを、あなたが言いますか？」

メインティア王はニッコリと笑う。

「家来たちは父の前に出ると、あの眼光の鋭さに圧倒されて、皆、黙ってしまうんだ。さすがにこれではいけないと思ったんだろうね。父は家来を集めて、自分の治世に非があれば、遠慮なく言うがよいと言ったんだ」

「……立派なことだと思いますが？」

「でもね、実際は、イヤな大上王なんだよ？　このアガルタに来るときだってそうだ。今の若い者は鍛え方が足りないと言って、朝から日が落ちるまで家臣たちを休ませずに移動させたんだ。特に父の本箱を持つ者などは、たまらなかっただろうね。父は、あまりにも周囲の者に自分の考え方を押し付けすぎる。家臣の意見を受け入れるとは言っているが、あれでは無理だ」

メインティア王は、ニコニコとした笑顔のままではあるが、話している内容は実に辛らつだ。リノスはそのギャップに戸惑いつつも、彼の話に耳を傾ける。

「父は騎士としての自負心が強くてね。常に戦場を意識して生活しているんだ。父の時代はそれでよかったのかもしれない。いや、そうせざるを得なかったのだろう。でも、今は時代が違うよ。あんな

窮屈な王では国の人々が疲れてしまう。だから、私は父と反対のことをする。むしろ、国の人々が穏やかに、楽しく暮らせるようにするべきだと思うんだ」

ソファーに座りながら足を組み、楽しそうな顔で、メインティア王はリノスを見ている。

「あなたのお気持ちはよくわかりました。ただし、こちらとしても都合というものがあります。一度、考えさせていただいて、明日、大上王様との会見の時に、お返事を致します」

「うん。いい返事を期待しているよ」

王は目をキラキラさせている。まるで、リノスがこの話を断ることなど、全く念頭にないかの様子だ。そんな王の姿を見たリノスは、大きなため息をついて、足早に部屋を後にしたのだった。

第二百三十九話　困ったちゃんの対応

帝都の屋敷に転移すると、夕食はとっくに終わり、リコとマトカルは、既に子供たちと共に寝てしまっていた。ソレイユとフェリスは風呂に入っているという。ダイニングにはゴンとメイ、ペーリス、ルアラ、そしてシディーがリノスの帰りを待っていた。

「お帰りなさい、リノス様」

「ただいま、シディー」

「夕食は……何か召し上がりますか？」

ペーリスが立ち上がりながらリノスに話しかける。彼女の声を聞くと、何故か無性に腹が減ってくる。

「ああ、何か軽く食べたいな。そういえば、ペーリスはもうすぐ卒業だな。卒業できそうか？」

「問題ありません。では、何か作りますね」

そう言ってペーリスはキッチンに向かった。

「ペーリス殿は大学では成績優秀で、おそらく首席で卒業するでありますなー」

「マジで？　そういえば、ペーリスは卒業してからどうするんだ？」

「ご主人、お忘れでありますな？　大学を作って、そこにペーリス殿を教師として迎えるというお話を」

「……いや？　覚えて？　います、よ？」

メイもシディーもキョトンとしている。あれ？　この話、誰にも言っていなかったっけ？　……えらいこっちゃ。どうしよう？　このままではペーリスは、フリーターという名の無職になってしまう。早急に対策を考えねば。

しかし、今の俺の優先順位は、メインティア王のことだ。俺はゴンたちに、先ほど王と話した内容を伝え、どうしたらよいものか、アドバイスを求めた。

「よいのではありませぬかー。むしろ、人質としては、この上ない御方でありますー」

「人質って……。俺はそんなつもりはない。それにあの王を預かると、お守が大変だと思うぞ？　何せ女癖が悪いらしいからな」

「７０人の子供がいるって言ってましたよね？　父と同じニオイがします」

「ああ、ルアラ。さすがに、お前の親父には劣るだろうがな」

「ただ、クリミアーナとのことや、我が国のことを考えると、あの国は捨て置けぬのでありますー」

「どういうことだ？　ゴン？」

ゴンは人化し、紙に地図を書き始めた。そして、それを見せながらリノスたちに説明する。

「我が国と、ヒーデータ、ラマロン、ニザは強固な同盟関係がありますなー。そして、ニケ王がおわすサンダンジ国は、ちょうど我が国とクリミアーナの間にありますー。そして、フラディメ国はサンダンジのちょうど北、西側が海に面した位置にありますー」

「……と、いうことは？」

「フラディメ国と誼を通じておけば、クリミアーナが攻めて来た時に、背後から攻撃してもらえるでありますー。この国は言わば、クリミアーナの戦略上、重要な位置にあるのでありますなー。我が国の防波堤としては最適でありますー。それに、コメが豊富に獲れる国でありますし、軍事的技術力もなかなかでありますー。特に首長鳥を使役しての空中攻撃が有名でありますなー。大上王と国王に恩を売っておけば、損のない国でありますー」

リノスは目を閉じて天を仰ぐ。

「……米の産地か。それに、誼を通じておけば、俺たちがまだ確立できていない空中戦のノウハウも得られるかもしれんな。とすれば、大上王を無下には出来んな」

リノスは大きなため息をつく。無理もない、アガルタの泣き所は、まさしく空からの攻撃なのだ。

陸・海・空のうち、陸戦については相当な戦力をアガルタは有していた。歩兵、騎兵、魔法……どれをとっても高い質を備えており、

加えて、リノスの結界による防御力とサダキチたちフェリードラゴンの優れた諜報能力は、寡兵でも十分に戦うことができる戦力だった。

だが一方で、空に目を向けてみれば、そこは必ずしも盤石とはいえない状況だった。

特にアガルタの西側に位置する山脈は、全く手つかずの状態だった。そこは標高が高く、断崖絶壁の多い山脈であるために、その山を超えて侵攻してくる敵は今のところ皆無であるが、しかし、もし、ここを超えて空中から攻撃を仕掛けられると、防戦一方にならざるを得ない状態にあったのだ。

リノスの結界は、都全体に張ることは可能であるが、アガルタの全ての街に、それを継続して張り続けることはさすがに難しかった。このことは、ジェネハにも相談してみたのだが、やはり彼女たちは一気に家族を増やすつもりはなく、アガルタ全土の空の防衛に関しては、物理的に難しいとの返事だった。

さらに、同盟国のラマロン皇国にまで目を向ければ、この国の海や空の防衛にまで注力することは、国内の復興を第一としている現在では難しかった。よって、ラマロンがクリミアーナに海や空から攻撃されると、すぐに蹂躙されてしまう危険性があった。既に、教国の首都、アフロディーテの港では数多くの軍船が停泊しており、さらには、そうした船が新たに複数建造されているという報告が、サダキチたちフェアリードラゴンからあったばかりだった。そうした意味で、同盟国も含めた防衛についても、検討の余地があったのだ。

リノス本人は、他国に侵略する気は毛頭なく、基本的に楽観主義であるために、そうしたことはゆっくりと対策を立てればよいという

考えだったが、さすがにゴンやフェリス、ルアラたちからは窘められた。そこで、空についてはドラゴンに協力してもらうことを考え、海については、ルアラの父、ポセイドン王の協力を仰ごうと考えたのだった。

しかし、これらの作戦は結果的に失敗していた。ドラゴンについては、ソレイユを通じて神龍様に打診してみたが、基本的にドラゴン族は自分たちの縄張りから出ることはなく、フェリスのクルルカンが修行のため縄張りを出るのは、かなり特殊な例であると教えてくれた。そのクルルカンも、一族を率いて縄張りを出ることはなく、修行に出しているのは、あくまで自分の縄張りを守ることに主眼を置いているためなのだそうだ。

リノスに仕えているサダキチたちフェアリードラゴンは、かなりのレアケースになるらしい。フェアリというシンジョが逃げ出し、しかも、その彼女を連れたリノスが、たまたま縄張り近くを通るという偶然が重なったことで、あの襲撃が起こったのだ。しかも、そのドラゴンを完封し、一族全員が人間の配下になるなど、誰も予想し得ない、ドラゴン族始まって以来の椿事と言ってよかった。

それもこれも、フェアリが逃亡した段階で竜王が適正に対処しておけば、このような事態は防ぐことが出来たのだが、それについては、ここでは言及しない。竜王も実は反省しているのだ。

当初リノスは、ジュカ王国のカルギ元帥のワイバーンを用いた手法を模索したが、それには、膨大な手間暇がかかるのだ。神龍様によると、ワイバーンは厳密にいえばドラゴン族ではなく、いわゆる亜種になるのだそうだ。つまり、トカゲやコウモリ、ワシ、ヘビなどがら進化したドラゴンは言葉を持たず、言葉や念話で意思疎通することが出来ない。そのため、亜種族については犬や猫のように躾け

ることが必要なのだという。

成龍を躾けるのにはかなり困難を伴うため、必然的に仔竜の段階から躾ける必要がある。ただ、その手間暇は膨大なものになる。カルギの、ワイバーンの卵から孵化させて自分の僕となるように調教するという手法は、かなりの特殊例なのだという。そうした点から、ドラゴンを活用した空軍については、有効な打開策を見いだせずにいたのだった。

さらに、ポセイドン王との協力体制については、まずもって王のスケジュールが合わず、面会すらできなかった。実の娘のルアラでさえも、会えるのは早くて2年後になるのだという。当然それは、千を超える側室たちと過ごす時間を優先しているからに他ならない。こちらについては、書簡を送ることしかできず、しかも、その返事は未だに返ってきていない。

こうしたことから、海の対策については当面は、ガルビーの海深くに住む、ポセイドン王の正室であるトリちゃんにお願いをして、もし敵がガルビーに襲来した時に限って、海を荒れさせるという対策にとどまっていた。

「王が賢ければ迷わないんだがな。何と言っても、あの感じだ。首長鳥の活用方法を知っているとは思えないし、預かったら預かったで、どんな騒動を起こすのかわかったもんじゃない。先行きが不安で仕方がないよ」

「それでは、リボーン大上王に、メインティア王は留学ということで世話はするが、万が一のことがあっても責任は持たない、あと、アガルタの女性に手を出したり、その他、ご主人が問題であると感

じたりする行為があった場合は、すぐさまお引き取りを願うという条件を付けてはいかがでありますかー？」

「そうですね。私も、ゴンさんの意見に賛成です。我が国の脅威が少なくなるのであれば、それもよしだと思います。ただ、好色な男は、一人で満足することはなく、際限なく女性を求めます。おそらく……その点で問題を起こす可能性が極めて高いので、常に厳しく監視する必要がありますが、その点は私とフェリス姉さまとで上手くやりたいと思います」

「それがいいでありますなー。首長鳥の件は、王の様子を見ながら、徐々に話をする方がよいでありましょうなー。最初から首長鳥の活用方法を聞いてもよいではありましょうが、もし、王に変化が見られぬ場合は、後々ややこしいことになるかもしれぬでありますからなー」

「わかった。俺もゴンの意見に賛成だ。あの国とはなるべく距離を置きたいんだ。それと、王のことは……ルアラにお願いしようか。メイ、シディー。二人も、ゴンとルアラの意見で賛成か？」

二人はコクリと頷いた。

「リコとマトには……明日の朝に相談してみるよ。きっと反対はしないと思う」

「ハイ、できました～。お待たせしました～」

ちょうどいいタイミングでペーリスが食事を運んでくる。彼女は手際よく、モヤシを使って作ったオムレツとサラダ、そして豆腐とフルーツを食卓に並べていく。

「おお！　美味そうだな！　それに、胃にも優しそうだ」

「うわっ！　美味しそう！　師匠、私にもちょっと下さい」

「お前はメシ食ったんじゃねぇのかよ～」

「いいじゃないですか～」

「ルアラちゃん、余っているオムレツがあるから、それを食べますか？」

「さすが、ペーリス姉さま！　いただきます！」

「ルアラ殿は食いしん坊でありますなー。……吾輩も小腹がすいてきたでありますー」

「ゴンさん、梨があまっていますけど、食べますか？」

「ペーリス殿、かたじけないでありますー」

「みんな、食いすぎだろ。太っても知らんからな」

そこには、いつもの笑顔に包まれたリノス家の食卓があった。しかし、リノスをはじめとして、ゴンとルアラはこの後、メインティア王と深く関わっていくことになるのだが……。

そんなことは露知らないこの三人は、呑気に目の前の食事に舌鼓を打つのだった。

第二百四十話　おもしろいはなし

「それでは、よろしくお願いする」

リボーン大上王は満面の笑みを浮かべ、両手で力強くリノスの手を握った。顔は笑っているが、やはり恐ろしい顔立ちだ。結局、メインティア王については、アガルタで預かることを承諾し、リノスはその恐怖心と面倒くさいという感情を隠すために、苦笑いを浮かべるしかなかった。

これに遡ること数時間、リノスは朝食を食べながらリコとマトカルにこの話を持ち出した。現役の王を預かるという、あまりに荒唐無稽な話に二人は絶句してしまい、リコなどは目を閉じて考え込んでしまったくらいだ。そして、二人の結論は、リノスにその判断を任せるというものだった。

彼はあまり気乗りのしないまま、メイを伴ってアガルタに転移した。隣のメイが正装し、リコの手で見事な化粧を施されて、いつも以上の美しさを湛えていたことが、せめてもの救いだった。

大上王とメインティア王の父子（おやこ）会談は、１分もしない間に終了したらしい。

「父上、私は、しばらくアガルタで学びます」

「うむ」

父子（おやこ）が交わした会話は、たったこれだけだった。

二人の意思を確認したリノスは、王を預かる上で、その名目を留学とすることにし、その上で、大上王に四つの条件を付けた。

・王の扱いについては、アガルタ国に一任する。
・王の警護に就いては万全を期すが、不慮の事故等で王の身が危険にさらされても、アガルタ国は責任を取らない。
・王の留学期間は1年間とする。
・王に何か問題がある場合は、アガルタ王の判断で留学期限は短縮することが出来る。

一見するとかなり無責任な内容ではあるが、大上王もメインティア王も、その点に関しては何も言うこともなく、この内容はアッサリと了承された。

その後、大上王は、大きな肩の荷を降ろしたかのように、にこやかにメイと談笑し、学会での発表を褒めちぎり、時間が許す限りメイに様々な質問をぶつけ、彼女も誠実にその質問に答えた。

「……ね？　私の言った通りだったでしょう？」

大上王の姿を見ながら、メインティア王は相変わらずにこやかな笑みを絶やさぬまま、リノスに話しかける。彼は呆れたような顔をしながら、王に向かって口を開く。

「前代未聞ですよ、こんなことは」

「ハハハ、大丈夫。アガルタ王に迷惑はかけないようにするよ。ね

？　パターソン」

王が振り返った先には、従者の一人である若い男が控えていた。彼は恭しく一礼をし、声を殺して、呟くようにリノスに話しかけた。

「誠に恐れながら、我が王の滞在費につきましては、我が国が全て負担致します。アガルタ王様にはなるべくご迷惑はかけぬよう、私共も取り組んでまいりますので、今後とも何卒よしなにお願い申し上げます」

「そんなことは当然だろうと思うかもしれないけど、父を知る者からすれば、破格のことなんだよ？　何せ父は質素・倹約が大好きだからね。無駄な金は一切使わない人が、私のために全ての経費を持つと言ったんだ。近いうちに天変地異でも起こるかもしれないね」

クックックと王は笑う。その横でパターソンは申し訳なさそうにリノスに頭を下げている。

「アガルタ王は、質素・倹約は大事だろうと思っているね？　隠さなくてもいい。顔にそう書いてある。でもね、経費を切り詰めて貯めた金を、父は何に使っていると思う？　確かに、学校を建て、民に教育を施したけれども、それはほんの一部だ。貯めた金の大半は武備と築城に使っているんだよ。お陰で、我がアリスン城は異様に立派になった」

王は遠い目をしながら、父の背中を見た。それにつられて、リノスも大上王に目を移す。彼は小柄な体全てを使ってメイに質問している。どうやら、その内容は作物の保存に関する事柄のようだった。

「あの……。アガルタ王様」

声のする方に目を向けると、パターソンが言いにくそうな顔をしながら、リノスの顔を覗き込んでいた。

「あの……大変申し上げにくいのですが……」

「何だい？」

「そろそろ、我が王がその……限界を迎えそうでして……」

「限界？　……ああ、そっちか」

リノスはメインティア王にゆっくり視線を移す。彼は全く表情を変えず、先ほどと同じように笑みを湛えたままだ。

「アガルタには、ヒーデータ帝国で有名な遊郭である、ミラヤの支店があるそうだね。色んな女がいるというじゃないか。ぜひ、私もそちらに行ってみたいね」

「その……。このままでは我が王は、アガルタにお仕えする女性に手を出しかねませんので……」

「おいおい、失礼だな、パターソン。私はそのくらいの分別はあるつもりだよ？」

「……それがお出来になるようでしたら、それに越したことはございません」

そんな主従の会話を、リノスは呆れた顔で見ている。そして、首を振りながら面倒くさそうに口を開いた。

「その件については、ちょっと考えましょう」

「あの……あともう一つございまして……」

「何だ、まだあるのか？」

「その……。ずっと色街に通い詰めると言うのは警備上、ご迷惑になろうかと思います。できれば、本国から王の身の回りの世話をする女を呼び寄せるのが一番と思うのですが……。大上王様はまずお許しにはならないかと思います。そこで、アガルタ王様にお知恵を拝借できないかと……」

申し訳ございませんとパターソンはペコペコと頭を下げている。リノスは天井を見上げてため息をつき、しばらく考えていたが、やがて、遠い目をしながら口を開いた。

「炊事洗濯掃除、身の回りの世話をする女性が必要でしょう。その方を本国から呼び寄せたらどうですか？　もし、本国にそんな気の利く女がいないのであれば、アガルタで雇ってもよいと俺が言っていたと、大上王に言えばいい」

「なるほど！　……アガルタ王様のおすすめを断れば、我が国には気の利く女はいないと言っているのも同然です。と、なれば……。わかりました。大上王様に申し上げてみます！　ありがとうございます！　ありがとうございます！」

「ああ、もう、そんなペコペコ頭を下げなくてもいい」

「そちらで、何をコソコソ話をしておるのだ！」

リノスがパターソンに話をしていると、突然、大上王の大声が響き渡った。彼は大股でリノスの傍まで寄って来たかと思うと、その両手を強く握りしめた。

「愚息のこと、何卒よしなに。それにしてもアガルタ王は、よい奥方をお持ちじゃ。このリボーン、うらやましいですぞ！　是非、メイリアス王妃と共に、一度、我が国にお越し下され。そうじゃ、いつの日か、あの学会をわが国で開いて下され。そして、我が国の若い者たちに、その素晴らしい知識を伝えてやって下され」

大上王は痛いくらいの力でリノスの手を握りしめていた。そして、その力を抜くことなく、彼は、メインティア王とその従者たちに目を向ける。

「そなたらも、よく学べ」

彼はゆっくりとリノスに視線を移す。

「それでは、よろしくお願いする」

そう言って大上王は再び大股で歩き、部屋を出ていった。扉の近くにいたメイの傍を通り過ぎる時、彼はメイに向かって一礼をし、メイも彼ににこやかな笑みを向けたのだった。

その後をパターソンが素早く追いかけていく。その姿を見送ったメインティア王は、ゆっくりとソファーに腰を下ろし、再びリノスに話しかけた。

「さて、パターソンは父を説得できるかな？　彼が戻ってくるまで、

しばらく時間がかかるだろうね。ちょうどいい、アガルタ王と話がしたいと思っていたところだったんだ。何か、面白い話をしてくれないかい？」

「面白い話ぃ？」

「うん、是非、聞いてみたいんだ」

王は目をキラキラさせてリノスの目を見つめている。

「もし、私が面白いと思う話をしてくれたら、アガルタ王、あなたの命令を一つ、何でも聞こう」

「何でも？」

「ああ、何でも。私が出来る範囲のことなら、何でも聞こう。それこそ、命を絶てと言われれば、命を絶ってもいい」

リノスはじっと王の目を見た。そして、ゆっくりと息を吐きながら口を開く。

「要は、面白いと思わせればいいんだな？　……よし」

彼は目を閉じてちょっと考えるそぶりをし、キッと目を開いて、話を始めた。

「むか～し、むか～し、ある所に、おじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんは山に柴刈りに行き、おばあさんは川に洗濯にいきました。おばあさんが川で洗濯をしていると、川上から大きなモモが、どんぶらこ～どんぶらこ～と流れてきました。おばあ

さんはそれを持って帰りました。おじいさんは家に帰ってビックリ。おお！　大きなモモじゃ！　おじいさん、川で拾ったんですよ。バアさん、早速食べよう。おばあさんが包丁でモモを切ると、中にはなんとかわいらしい男の子が入っていました。おじいさんとおばあさんはその子に桃太郎と名付けて、大切に育てたのでした。……長いので一部中略ね。桃太郎が道を歩いていると、白い犬がやって来ました。桃太郎さん、桃太郎さん、お腰につけたキビ団子、一つ私に下さい。桃太郎はその犬を見て言いました。ほう、お前はずいぶん白い犬だな。真っ白じゃないか。シッポまで真っ白だ。シッポまで真っ白……。尾も白い。……尾も、白い話。……どうだ！　おもしろいはなしだ！」

「うふ、あは、ウフフフフフフ」

メイが笑いをこらえている。メインティア王はじっとリノスの話を聞いていたが、やがて懐から紙の束を取り出した。そして、それが合図であるかのように、従者の一人が王に近づいてペンを渡す。彼は、カリカリと手元の紙に何やら書き始めた。

「おじいさんとおばあさん……。柴刈り……。包丁……桃太郎……っと。白い犬……。尾も白い……。おもしろいはなし……っと」

彼はうんうんと頷きながらそのメモを見る。そして、再びリノスの顔を見て口を開く。

「その途中の、中略ってところ、もう少し詳しく聞かせてもらえるかな？」

あまりに意外な返答に、リノスは思わず声を上げた。

「その話、他所行ってするんじゃねぇぞ！」

堪え切れなかったように、メイの爆笑が、部屋の中に響き渡った…。

第二百四十一話　シッポを出したキツネ

「大上王様に伝えて参りました。……あれ？」

部屋に戻ってきたパターソンの目に飛び込んで来たのは、大爆笑するメイと、リノスがメインティア王を睨みつけている光景だった。そんな状況だが、王本人は、いつもの笑みを湛えたままじっと二人を見据えている。

彼は恐縮しながら、大上王の言葉を伝える。

「お……恐れながら申し上げます。大上王様におかせられましては、アガルタ王様のお話を受けるとの仰せでした。ただし、自分では気の利く女を見分ける力はない。城内から募ってはみるが、誰も希望しない場合は、アガルタにてお探し願いたいとのことでございました」

「フ……ウフフフフ。父らしいな。女を見分ける力はない、というあたり、父らしいね。何しろ父は女といえば、母上一人しか知らないからね。そうか、城内で女を募るか……。どんな女が来るのか、楽しみだね」

「お……おそれながら、アリスン城に、王の下にはせ参じる女がおりましょうか？」

「うん？　いなければ、こちらで探すさ。ともあれ、まずは父からの返事待ちということだね。さて、どんな返事を寄こしてくるか……。ところで、父の機嫌はどうだった？　どやされなかったかい？」

「ええ、ご機嫌はすこぶるよろしゅうございました。何でも、手に入れた論文をどのように運ぼうか、嬉しそうにお考えでした」

「それはそれは。父に従って帰国する兵士たちに、同情するよ」

パターソンはリノスに向き直り、再び頭を下げる。

「アガルタ王様、ありがとうございました。不躾極まりないお願いを申しますが、何卒、王の願いをお聞き届けになりますよう、お願い申します」

リノスは、パターソンの慇懃な態度に力が抜けてしまい、首を振りながら口を開く。

「ああ、何とか考えてみるよ。それにしても、お前たちの王は、とんでもないな」

「とんでもない、と仰いますと？　また、我が王が何か……？」

「面白い話をしろと言ってきた。面白ければ、俺の命令を一つ何でも聞くとさ。死ねと言われれば死ぬんだそうだ」

「国王様！」

パターソンは驚いた顔でメインティア王を見る。しかし彼は全く表情を変えず、飄々とした様子で口を開いた。

「どうしても、アガルタ王から話を聞いてみたかったんだ。きっと面白い話を持っているだろうなと思ってね。でも、私の目に狂いは

なかったよ。本当におもしろいはなしを聞かせてくれたからね。……大丈夫。アガルタ王に限って私の命を奪うようなことはしないよ。そこら辺の分別はある御方だ。しかしアガルタ王、あなたのご命令通り、先ほど聞いた話は、誰にも言わないから安心していいよ。……これで、君の命令は聞いたことになるね？」

王はニコリと笑いながら、眉間に皺を寄せているリノスを見る。そして、再背後に控えているパターソンを始めとする従者たちに視線を移す。

「皆に申しおく、我はこれより、アガルタ国の留学生だ。そなたたち、我が近習3名も同様だ。アガルタ王の命令は絶対に服従せよ。王の命令は私の命令、いや、大上王の命令だと思うのだ」

「……国王様は、これからどうなさるおつもりなのですか？」

従者の一人が不安そうな声で口を開く。王は笑みを湛えたまま言葉を返す。

「せっかくアガルタに来たのだ。メイリアス王妃に体を診ていただいた後、しばらくは、都の名所や宝物を見て回ろうと思う。忙しくなるぞ？」

そう言って王はケラケラと笑うのだった。その様子を見ていたリノスに、パターソンが再び話しかけてくる。

「アガルタ王様、我が王にはいろいろと思うところはおありかと思いますが、決して悪い御方ではないのです。実際、大上王様が隠居され、王が即位された時、国の者全員がホッとしたのです。王は万事行うことが穏やかで、その……傍にお仕えしておりましても、我

々は楽しゅうございます。ただ、わがままで、女にだらしがないだけなのでございます」

「それ、一番ダメだと思うぞ？　……まあいい。パターソン、お前の顔を立てて、俺は何も言わないことにする。とりあえず、しばらくは迎賓館の部屋を使うといい。こちらからも、人を遣わそう。何か用があればその者に言ってくれ。ただし、それなりに腕のある者たちだ。間違っても手籠めにしようなどと思わぬことだ。また、王が他の女に手を出したり、俺に不都合のある振る舞いがあったりしたら……。その時は、わかっているな？」

恭しく頭を下げるパターソン。リノスはメインティア王とその従者たちをひと睨みして、無言の圧力をかけた後、メイを伴って部屋を後にした。

その夕方、帝都の屋敷に帰ったリノスは、ダイニングで物思いに耽っていた。メインティア王をどう扱うかに頭を悩ませていたのだ。

ペーリスが作る料理の、いい匂いが漂ってくる。次々と家族が帰宅し、あっという間にダイニングは騒がしくなる。

「リノス、一体、どうしたのです？」

リコがエリルを抱っこしながら、リノスの隣に座る。彼は今日あったこと、メインティア王の問題について、話をする。リコは難しいですわねと言いながら、エリルの食事の準備をテキパキと整えている。その隣ではメイがアリリアを同じように、食事の準備を整えている。

「ただいまでありますー」

リノス、リコ、メイの三人が話をしている最中に、ゴンが帰ってきた。

「ご主人、どうかされたのでありますかー？」

「ああゴン、実はな」

次々とキッチンから料理が運ばれてくる最中であったが、リノスはゴンに今日あったこと、メインティア王のことについて話をしたのだった。

「なるほど！　よくわかったであります！」

すでに人化を解除して、白狐の姿の戻っていたゴンだが、彼は器用に前足を使って、手をポンと鳴らした。そして、何かに得心したかのように頷きながら、彼は口を開く。

「吾輩に、任せるのでありますー」

「おお、ゴン、何か名案でもあるのか？」

「当然でありますー」

ゴンの声を聞いて、ペーリスをはじめ、フェリス、ルアラ、ソレイユ、マトカル、シディー、果てはフェアリもパタパタと飛んできた。全員がゴンに注目している。

「簡単でありますー。メインティア王の身分を偽って、色街に連れ

て行けばいいのでありますー。あそこは人通りが多いでありますから、人ごみに紛れてしまえば、王のことはわからないでありましょうなー。店に払う代金は王が支払うので、こちらの懐は痛まぬでありますし、店も客の安全には気を使っているでありますー。万全を期して、ご主人の結界を張っておけば、おそらく大丈夫でありましょうなー」

ほう、なるほどと皆が頷く。

「どの王族もすることでありますが、衣装を変えて、どこかの商家の旦那とでも言っておけば、店側からも、それ以上の詮索はされないのでありますー。色街の案内は、吾輩に任せて欲しいのでありますー。あの街のことは裏も表も全て熟知しているでありますからなー。各種色事に精通している吾輩に、よくぞ相談してくれたでありますー。あの街は、ミラヤもいいでありますが、他にも良い店がたくさんあるでありますー。メインティア王の好みに合う店にお連れするでありますぞー。若い女がいいのか、年増がいいのか、複数プレイもいいでありますなー。一国の王でありますから、金に糸目をつけず、早めに言えば、水揚げも出来るかもしれぬでありますなー。あ、色街が初めてであれば、最初はお触り専門の店でもよいでありますなー。巨乳、貧乳、美乳……。色々な女がいるでありますー。その女たちの乳をモフモフしながら、我らもモフモフされる……。その後、腰を据えてミラヤで裸の女たちを並べて片っ端から……。想像しただけで興奮するでありますなー。ウヒヒヒヒ。あとは……あれ？」

気が付くと、軽蔑しきった女の視線に、ゴンは晒されていた。さらには、エリルにはマトカルが、アリリアにはソレイユがそれぞれ子供たちの耳を押さえ、ゴンの話を聞こえないようにしていたのだった。

「……あの……その……あくまで……聞いた話で、ありますよー。この吾輩がまさか、ねぇ……。ハハハハハ」

全身から冷や汗を流すゴンに、リコは一瞥をくれた後、フェリスとルアラに視線を向け、無表情のまま、顎をしゃくった。二人は一切表情を変えないまま無言で一礼をして、ゴンの後ろに立った。

「あれ？　フェリス殿？　ルアラ殿？　何をするでありますか？　ええ？　ちょっと？　どこに？　あれ？　いやいやそれは！　おひいさまの所だけは！　それだけは！　ちょっと！　ゴメンナサイでありますー！　ゴメンナサイでありますー！　ご主人！　ご主人！　たすけ……」

「二人はすぐにでも戻ってきますわ。さ、冷めないうちに食べましょう」

リコは笑顔で皆に声をかける。しかし、その眼は全く笑っていなかった。

「バカめ……。こんなところで、尻尾を出すこともないだろうに……」

リノスはゴンのゲスさと間抜けさに呆れつつも、それでも、王の対応を彼に任せようと心に決めるのだった。

その夜、ゴンは屋敷に戻ることはなかった。

第二百四十二話　連中と飲み食い

よく晴れた日の午後、リノスはおひいさまの屋敷に来ていた。フェリスとルアラによって、彼女の屋敷に放り込まれたゴンは、夜が明けても帰ってこなかった。屋敷では既にゴンの存在は消された形になっており、誰も彼を迎えに行こうと言う者はいなかった。リノスは仕方なく、手に持ちきれない程のお供えを持っておひいさまの所に赴き、事情を説明することで、ゴンはやっと解放されたのだった。

ゴンは号泣していた。おひいさまの眷属を辞めて、普通のキツネに戻るとまで言い出したのだ。彼曰く、口に出すのも憚られるほどのお仕置きを受けたとのことだったが、それもこれも、全て自業自得なのだ。

「ゴン、このままでは屋敷に帰りづらいだろう。一旦、アガルタの迎賓館に行くぞ。メインティア王と色街に行く打ち合わせがあるんだ。そこに同席してくれ」

「ううううう……わかったでありますー」

そう言って二人はアガルタに転移していった。

話を聞いたメインティア王は満足そうに頷いていた。そして、しばらく遠くを見るような目で、虚空を眺め続けた。

「何か？」

訝るリノスに、王はニコリと笑って言葉を返す。

「いや、もう少し、華やかに行けないかと思ってね。別に悪いことをしているわけじゃないから、コソコソ行く必要はないと思うんだ。でも、あまり大っぴらにやるとね。私の警護や何かでアガルタ王に迷惑がかかる。何かいい案はないかなと思ってね」

「王のお気持ちもわからぬではないでありますがー」

そう言ってゴンは、困った表情を浮かべながらリノスを見る。

「アガルタ王、何かいい案はないかな？　いや、費用については心配いらないよ。父が全て負担するからね」

「いやいや、メインティア王。あなたが使おうとしている金は、国の民が納めた税でしょう？　国の人々が汗水流して働いて納めた税を、あなたの遊びに使うのですか？」

リノスの言葉に王は困ったような表情をする。

「ちなみに、俺は王という身分ですが、自分で商売をしています。自分の食い扶持は、自分で稼いでいますよ？」

「ウフフ、アガルタ王はまるで父のようなこと言うね？　でも、父と違うのは、自分できちんと金を得ているということだ。……よし、わかった。では、私の遊びの代金は、アガルタ王から借りることにしよう。そして、ここで逗留する間に返済していこうじゃないか。これでどうだい？」

「返す当てがあるのですか？　大上王に泣きつくというのは……」

「泣きつかないよ。アテはあるんだ。私は絵を書くのが好きでね。その絵を売って資金を稼ごうじゃないか。……そうだな、名前も変えた方がいいな。メインティアの名前では、名前だけで売れていると思われるからね？　何か、いい名前はないかな？　あ、そうそう、私が描いた絵はこんな感じだよ」

ニコニコと笑みを湛えながら、王はアガルタまでの道中で描いた絵日記をリノスに手渡した。彼はそれをしばらく見つめていたが、やがて顔を上げ、王に向かって口を開く。

「何だか……ものすごい絵を書きますね」

「へえ、珍しいね。私の絵をすごい、と評したのはアガルタ王が初めてだ」

「絵の良しあしはよくわかりませんが、何だかニオイまでわかる気がします。ゴン、この絵を見てみろ」

リノスは絵日記をゴンに渡す。

「な？　汗のにおいまで伝わってこないか？」

ゴンの手元には、王がアガルタに来る途中、休息のために立ち寄った村での、女たちが畑仕事をする場面が描かれていた。ゴンはその絵をじっと見ていたが、首をかしげながらそれをリノスに返す。

「吾輩にはよくわからないでありますなー。大体、素人がよいと思うものは、玄人が見ると平凡なものであることが多いでありますからなー。一度、画商か何かに見せるのが一番でありますー」

「そうか？　そんなもんかな？　……わかりました。メインティア王。それでは、画家として、このアガルタで活動してみてはいかがですか。たとえ1Gでも、自分で稼ぐのはいいことだと思いますよ？　そうですね……。画家としての名前は、越後屋でいいでしょう」

「エチゴヤ……？　……うん、いいね！　いかにも芸術家という響きだ。ちょうどいい、色街に行くときも、その名前を使おう」

リノスは皮肉を込めて付けた名前だが、王は意外なほどに喜んでいる。そんな様子を見ながら、リノスはさらに口を開く。

「あと、色街のことですが、華やかに……というのはあまり賛成しませんが、賑やかに……というのであれば、考えがありますよ」

その言葉を聞いて王は、ほう、と驚いた顔になり、すぐに目をキラキラさせて次の言葉を待った。

「アガルタの大工たちと一緒に、連中（れんじゅう）をするというのはどうでしょう？」

「連中（れんじゅう）？　初めて聞く言葉だけど、何だか面白そうだね」

「ええ。俺の故郷で昔、よくやっていたらしいのですがね。俺も見たことはありませんが、何でも、若い衆が揃いの衣装に身を包んで、色街で遊ぶというものらしいです」

「服装を一緒にするのかい？　まるで軍勢のようだね」

「ええ。その衣装を、色街で遊ぶのにふさわしいものに工夫するの

です。街の様子に溶けこんだ、さりとて下品にならず、むしろ心がワクワクするような衣装を身に付けるのです」

「うんうん、それ、面白いね。是非、その衣装選びは私にやらせてくれ」

「え？　王、自らですか？」

「街に行って、色々と店を見たいと思っていたところだったんだ。ちょうどいい。あ、供の者は、いらないよ。我々だけで十分だ。な？　パターソン？」

パターソンは苦虫を噛み潰したような顔でお辞儀をする。その姿を満足そうな顔で眺めていた王は、再びリノスに向き直る。

「確か……大工と一緒にと言ったね？　なぜ、大工なんだい？」

「ええ、このアガルタの街のほとんどが、大工たちの手によるものです。彼らにはあまりその働きを労えていません。おかみさんがいる人は難しいかもしれませんが、独り身の男たちであれば、こうした遊びに連れて行くのもいいのではと思ったのです。それに彼らは腕っぷしもありますから、王の警護もできますし、何より、面倒見の良い人たちが多いので、何か困った時の助けにもなるでしょう」

「さすがはアガルタ王だ。行き届いているね。名君と呼ばれる理由が、よくわかったよ。では、ご苦労をかけるけれど、連中（れんじゅう）に加わる大工の人数を、私に教えてもらえるかい？　私はこれから都の店を回ることにするよ」

「これからですか？」

「まだ日が落ちるまで時間があるだろう？　早く決めないと、いつまでも行くことが出来ないからね」

そう言って王は供の者を連れて部屋を後にした。リノスはサイリュースのアステスを呼び出し、メインティア王をそれとなく警護するように伝えて、そのまま部屋を出ていった。

「せっかくだ。ゲンさんのところに寄って帰るか」

「そうでありますなー。夕暮れも近いので、おそらく仕事は終わり近くになっているはずでありますー」

二人はそんな話をしながら、大工のゲンさんの作業現場に転移したのだった。

「そいつぁ面白れぇじゃねぇか！」

現場にはゲンさんの弟子たちをはじめ、仲間たちの大半が集まっていた。彼らはリノスからの提案を聞くや、もろ手を挙げて歓迎し、その場は大盛り上がりになった。

「おい、お前ぇ、カカァの方はどうするんでぇ！」

「なにおぅ？　カカァなんざ、上手く巻いていくに決まってんじゃねぇか！」

「一つ、何か歌でも歌いながら、景気よく行こうじゃねぇか！」

ワイワイと若い男たちが、目を輝かせて話し合っている。リノスはその男たちを手で制しながら、口を開いた。

「みんな、タダで連れて行くわけじゃないんだ。一つ頼みがある。連中（れんじゅう）には、商家の若旦那……。越後屋という絵を扱う店の若旦那のお供をしてほしいんだ。何せ色街は物騒な所だ。怪我でもしないよう、ヘンな騒動に巻き込まれないように、守ってやって欲しいんだ」

「何でぇ！　そんなことは造作もねぇやな。俺たちゃ、腕っぷしにかけちゃどこにも引けを取らねぇ。任してくんねいな！」

「何も喧嘩をしに行くわけじゃない。くれぐれも騒動を起こさないでくれよ？　その代り、飲み食いは自由にしてもらって構わない。遠慮なくやってくれ」

その言葉で、若い大工たちのボルテージは上がる。うぉぉぉぉーという声が部屋中に響き渡った。そこに、先ほどから姿を見せていなかった棟梁のゲンさんが部屋に入ってきた。その姿を見つけた、ゲンさんの弟弟子と思われる男が、大声で彼に声をかける。

「なあ、兄ィ！　兄ィも行くだろ？　飲み食いもたーんとあるんだってよ！」

ゲンさんはキョトンとした顔をしたかと思うと、見る見る不愉快そうな顔つきになっていく。弟弟子は思わず立ち上がって、彼に声をかける。

「兄ィ！　どうしたんでぇ！」

「やっとこさ仕事が終わったかと思えば、また大工（でえく）の仕事の話か！

いい加減にしろい！」

「大工（でえく）の仕事？　一体何の話だ？」

訝る弟弟子に、ゲンさんは眉間に皺を寄せながら口を開く。

「だって、鑿（のみ）と杭（くい）が、あるんだろう？」

第二百四十三話　俺の屍を越えてゆけ

弟弟子のトメライルから話を聞いたゲンさんは、一瞬、目をキラリと輝かせたが、やがてすぐに肩を落とし、力なく呟いた。

「ありがてぇ話なんだが……。大将（てぇしょう）、俺ぁ、どうも行けそうにねぇな」

「何だ、ゲンさん？　何か具合の悪いことでもあるのか？」

「いや……そういうわけじゃねぇんだが……。その……カミさんが、な」

その声を聞いて皆が思い出したかのように、ああ～うわああ～とため息を漏らす。聞けばゲンさんのおかみさんは、かなりの焼きもちやきであり、浮気などもっての外、という人であるらしいのだ。リノスもおカミさんには何度か会っているが、確かに、恰幅がよく、気は強そうで、とてもしっかりしている女性だという印象がある。

「俺も久しぶりに色街には行ってみてぇが……。そんなことを言った日にゃ、正座させられた挙句に、定規でもって俺っちの膝小僧をバシバシ叩かれちまう」

「……す、凄まじいお仕置きだな」

「カミさんが居ねぇ時なら何とか算段を付けるんだがな……。今から遊びに行ってこいなんて言おうもんなら、まず感づかれちまう。だからよ……。俺っちは抜きにして、みんなで楽しんできてくんね

ぇな」

寂しそうにゲンさんは呟く。その様子に、トメライルは立ち上がり、ゲンさんに声をかける。

「何を言うんでぇ兄ィ！　俺たちの大将（てぇしょう）は兄ィじゃねぇか！　兄ィを置いて俺たちが行けるわけねぇじゃねぇか！　兄ィがいなきゃ意味がねぇ！」

「トメ公……」

ゲンさんは目に涙を浮かべている。トメライルはリノスに向き直って早口でまくし立てる。

「大将（てぇしょう）！　何とか兄ィが色街に行けるようにしてやってくんねぇな！　何だったら、俺ら全員で姉（あね）さんに頭ぁ下げたっていいんだ！　何とかしてやってくんねぇ！」

「う～ん」

リノスは目を閉じて、天井を見上げて何かを考えていた。そして、ふうと息を吐くと、ゆっくりとした口調で話し始めた。

「上手くいくかどうかはわからんが……」

全員がリノスの言葉に耳を傾け、そして、しばらく後にシンとした静寂が部屋の中を包みこんだ。

「何だいお前さん改まって！　話って何だい！」

いつ見ても恐ろしい女房だと思う。何故に俺はこんな女を女房に持ってしまったのか？　元はと言えば、自分の親方の家で女中奉公していた女だったのだ。たまたま声をかけたのがきっかけで、その後、よく話をするようになった。そして、親方の媒酌で結婚することになったのだ。あの時のカミさんはかわいらしかった……。

ゲンさんが昔の甘酸っぱい思い出に浸っていると、腹の底から響き渡るような音がする。言うまでもなくおカミさんの怒号だ。

「何だい！　早くお言いよ！」

ゲンさんは、反射的にゴメンナサイと言いそうになりながら、無意識に正座をする。そして、一旦自分の手元に視線を落としてからゆっくりと顔を上げ、リノスに言われた通り、何かを思い出すように、遠い目をしながら語り始めた。

「いや……。今日、大将（てぇしょう）が来てくれてよ。俺たち大工（でえく）はよく頑張っていると褒めてくれたんでぇ」

「良かったじゃないのさ」

「それでな？　その褒美に俺たちを色街に連れて行ってくれるってんだ。……まあ、聞きねぇな。……俺っちは行かねぇよ。いや、大将（てぇしょう）やトメ公らが、俺っちは連れて行かれねぇってんだ。お前ぇのカミさんは、焼餅やきだから、俺っちを色街に出す器量はねぇだろう。お前ぇは帰っていいとよさ。まあ、行きたくねぇと言えばウソになるが……。何か、情けなくってなぁ」

ゲンさんは、時おり手に視線を落としながら、深いため息をつく。

その右手にはセリフが書いてあり、これがバレると間違いなく五体満足ではいられない。ゲンさんも、一世一代の大芝居なのだ。

パァーーン！！

いきなり何かをブッ叩く音がした。思わずゲンさんは目を閉じて身を固くする。恐る恐る目を開けてみると、おカミさんの右手がテーブルの上に乗っている。おそらく、これまで幾度となく、自分の意識を刈り取ってきた、この黄金の右腕でテーブルを叩いたのだろう。その凶器のような手が、また自分に向けられるのか……そんな戦慄を感じていると、おカミさんは、ゆっくりと話し始めた。

「……悔しいじゃないかね。これでお前さんを行かせなかったら、アタシャ度量の狭い女房だと思われちまうじゃないか！　……いいよ。せっかくの大将のお誘いだ。行っといで！　アンタも立場ってモノがあるだろ？　仕方ないじゃないか。ただし、一回だけだよ！」

「……おっ母ぁ！　ありがてぇ！」

ゲンさんは手を合わせ、拝むようにしておカミさんに礼を言う。

「やめとくれよ！　手を合わせて拝むなんて縁起でもないね！　アタシャまだ、死んでないよ！　……あれ、お前さん、どうしたんだい？　何かコッチの手だけやけに汚れているね？　ちょっと見せてごらんよ」

「いや、これは、まだ、仕事の汚れが……落ちてねぇんだ！　……風呂入ってくらぁ」

ゲンさんは脱兎のごとく部屋から出ていった。次の日、ゲンさんは

大喜びでリノスの許に礼を言いに来たのは、言うまでもない。

ゲンさんがおカミさんと戦っていた頃、リノスも、リコをはじめとする妻たちに、この日のことを報告していた。

「……と、いうわけなんだ」

「……」

説明が終わると、部屋の中に静寂が訪れる。ダイニングのテーブルには、リノスとゴンが並んで座り、他の家族は、その正面に並んでいた。まるで陪審員での裁判が行われているかのような状態だ。

「わかりましたわ」

その静寂を破ったのは、リコだった。彼女は一切表情を変えずにリノスとゴンを交互に見比べている。

「で、その色街に、リノスも行くのですか？」

「あ、いや……。俺は……」

「行ってらっしゃいな」

「え？」

予想外の言葉に、リノスは絶句してしまう。まさかリコが色街に行くことを許すとは思わなかったからだ。

「ゴン一人では心もとないでしょう？　メインティア王は……まだお会いしたことはありませんが、手のかかるお人なのでしょう？　リノスがいませんと……。いいのですわよ？　私には気を使わなくて。メイも、シディーも、ソレイユも、マトも、そして、フェリスも、ルアラも、ペーリスも、フェアリも、イリモも、ジェネハ、イトラも……みんな、リノスの立場は理解していますわ。どうぞ、お行きなさいな。行ってくださいませ」

「……いや、その、あのですね」

「私に気を使わないでくださいませ」

何が恐ろしいか。リコが全く表情を変えず、目が全然笑っていないのだ。リコだけではない、ここにいるシディーも、マトも、他の女たちも全員、目が笑っていない。そんな圧力の中、ゴンはずっと目を伏せ続けている。

「リノスもたまには、そうしたところに行って、気分転換をしてらっしゃいな」

「私も、いいと思います」

シディーが口を開く。マトカルはエリルを、メイはアリリアを抱っこしながら、ゆっくりと頷いている。フェリス、ルアラは一切表情を変えずにリノスを見ており、フェアリはペーリスの胸の中で、ゆっくりと羽を動かしながら、既におねむの状態になっている。

「いや……その……俺は……い、い、い、行きませんよ？　行くわけないじゃないですか。リコやメイや、シディー、ソレイユ、マトを置いて行きませんよ。やだなぁ、ハッハッハ」

「そんなに遠慮することありませんわ」

「いや、いい。俺は行かないよ」

「本当に？」

「ああ」

「……さすがはリノスですわ。では、その連中（れんじゅう）とやらは、ゴンが皆さまをご案内するのですね？　ゴン、ご苦労ですが、よろしくお願いしますね？」

ようやくリコに笑顔が見えた。それに釣られるようにして、女たちの顔にも笑顔が戻る。張り詰めた緊張感が緩んでいくのが、リノスには、よくわかった。隣のゴンは、ただただ恐縮している。

「……やっぱり、あなたのお父上様は、素敵なお父上様ですわ」

膨らみ始めたお腹を愛おしそうにさすりながらリコは、嬉しそうに呟いている。

「ご主人……」

隣に座っているゴンが小さな声で呟く。

「ゴン、任せたぞ」

リコや女たちのうれしそうな顔を見ながら、リノスはあきらめたように呟く。目の前では、シディーとソレイユが、リコに先に風呂に

入るように勧めている。そして、リコはマトカルに一緒に入りましょうと誘っている。

「リノス、一緒にお風呂に入りましょう。シディー、ソレイユ、すみませんが、エリルとアリリアをお風呂から上げてもらえるかしら？」

「はい、わかりましたー」

女たちはバタバタと動き出している。そしてリコは再びリノスに向き直る。

「さあ、リノス。一緒に入りましょう」

心から嬉しそうな顔を見せるリコの顔を見ながら、リノスはゆっくりと立ち上がる。そして、ゴンをチラリと見て、あきらめたような顔をしながら、口を開いた。

「ゴン、俺の屍を、超えて行け」

幸か不幸か、リノスのこの判断は後に、彼とアガルタにとって大きな利益をもたらすことになり、彼はリコに深く感謝することになる。しかし、そんなことはまだ知る由もない彼は、大きなため息をつきながら、屋敷の風呂に向かうのだった。

第二百四十四話　兄さん、メッチャええ人ですやん

ある日の夕暮れ、奇抜だが、とても洗練された粋な衣装に身を包んだ一団が、アガルタの都を練り歩き、そこに住む人々を驚かせた。彼らは「連中（れんじゅう）、連中（れんじゅう）」と、奇妙なリズムを刻みながら、ゆっくりと遊郭街へと流れていった。

その連中（れんじゅう）の噂はすぐに広まり、都の人々は彼らの姿を一目見ようと、都の街は大混乱となった。しかし何故か、彼らの行く道々にはアガルタの軍勢が警護しており、そのために、目立った事件や事故は一つも起らなかった。

彼らは吸い込まれるようにして、遊郭・ミラヤに入っていく。帝都の本店とは違って、この店の外観は洗練されており、一見すると遊郭のようには見えない。これは、敢えてリノスたちがそれらしくない建物に建設したのだ。

ラマロン軍を退けた直後から、荒廃した都の復興にあたったリノスたちは、色街の復興にも注力した。ジュカ王国時代のような暗く、いかにも犯罪組織が運営しているような雰囲気ではなく、洗練された、華やかな街並みに作り替えていったのだ。それが功を奏してか、この街は、男女の色ごとだけでなく、文化的なサロンとしての役割も担うようになっている。

この「ミラヤ・アガルタ」の建物をはじめ、色街全体のデザインを考えたのはリコであり、そのイメージよりも遥かに洗練された街並みを作ったのは、誰あろう、この連中（れんじゅう）に加わっているゲンさんたち大工だった。

「まあ、いらっしゃまし。どうぞ、おあがりになってくださいませ」

いつも以上に愛想のいい女将に導かれて、彼らは二階の広い部屋に通される。そして、絶妙なタイミングで酒と肴が運ばれてくる。ゴンから今日の主賓の紹介と、短い挨拶のあと、自然にドンチャン騒ぎが始まっていく。次々に運ばれてくる酒と山海の珍味、そして美女たち……。彼らは心ゆくまで、めくるめく夜のおもてなしを、堪能したのだった。

次の日の夕刻、リノスが帝都の屋敷に帰ってくると、ゴンが帰宅していた。

「おおゴン、帰ったか」

「ただいまでありますー」

「特に何も報告はなかったので、問題ないと思っていたが、どうだった？」

「もう、大満足でありますー。ゲンさんをはじめ、吾輩を含めて皆、大喜びでありましたー。さすがはミラヤでありますなー。万事に行き届いたおもてなしでありましたー」

リノスは苦笑いを浮かべる。この日のために、リノスが直々にミラヤ・アガルタの女将に書簡を送り、ミラヤのスタッフへの差し入れまで届させたのだ。これでサービスが悪かったら、リノスの面目は丸つぶれである。

「メインティア王は？」

「特に何もおっしゃられなかったでありますなー。あ、明日以降に、一度、ご主人と話がしたいとのことでありましたー」

「そうか。じゃあ、明日にでも時間を見つけて行くとするかな」

リノスがゴンと話をしていると、続々と家族たちが帰ってくる。そして、リノス家には、いつもの夕食までの騒がしい時間が訪れるのだった。

次の日、リノスは迎賓館の一室で、メインティア王と面会した。

「アガルタ王様！　昨日は我々の無理なお願いをお聞き届けくださり、本当にありがとうございました」

ペコペコと頭を下げているのは、パターソンである。彼は腰を痛めないかと思うほどに何度も何度もリノスに向かってお辞儀をする。

「ああ、満足だったのであれば、よかったな。パターソン、お前たちも行った……ようだな。その顔を見る限りでは、大層モテたようだな？」

メインティア王の従者たちは、互いの顔を見合わせながら、照れ笑いを浮かべている。

「我々は、その、仕事でありますから、ええと……」

「いや、隠さなくてもいい。ま、お前たちはまだ独身だろう？　た

まにはそういうことも必要だろう」

リノスの言葉に、パターソンは顔を赤らめながら視線を外した。

そんな従者の様子を、メインティア王はいつものように微笑みを湛えた顔で見つめていた。そして、リノスに向き直ると、姿勢を正して口を開いた。

「まずは、今回のこと、心から礼を言わせてもらう。ミラヤもよかったが、この年になって、本当に心から信頼できる友、いや、師と仰ぐ方と出会うことが出来た。これも偏に、アガルタ王のお陰だ」

予想外の言葉にリノスは思わずキョトンとなる。

「師と仰ぐ方？　誰です？」

「ラファイエンス殿だ」

「将軍！？」

聞けば、あの連中（れんじゅう）に、ラファイエンスも参加していたらしい。彼は王たちと同じ衣装を身に付けて連中（れんじゅう）に参加しつつ、一行の警護を行っていたのだが、どうやらちゃっかり皆と共にミラヤに上がり込み、おもてなしを受けていたようだ。

「あのお方の女性観には感服したね。女をいかに自分に惚れさせるか、その行程をいかに楽しむか、という話は刺激的だった。私などは、興味のある女はすぐにベッドに寝かせてしまう。……まだまだだと思ったね。いや、本当にアガルタに逗留してよかったよ」

「……一体何を教わって来たんだ？」

呆気にとられるリノスに、王は全く気にする様子もなく、さらに言葉を続ける。

「で、せっかくアガルタに来ているんだ。どうせなら、ここで徹底的に学ぼうと思ってね」

「まさか、これからずっとミラヤに通い詰めるとでも言うんじゃないでしょうね？」

「いや、そういうことじゃないんだ。人に会わせて欲しいと思ってね。アガルタ王に仕えている、ルアラという女性がいるね？　彼女に一度、会わせて欲しいんだ」

「ルアラ、ですか？　まさか、彼女を気に入ったということじゃないでしょうね？」

「いやいや違う。違うよ。私が用があるのは、ルアラ殿ではなく、彼女の父上だ。彼女はポセイドン王の娘だというじゃないか。彼女を通じて、ポセイドン王に目通りできないかと思ってね」

「ポセイドン王？」

「うん。ポセイドン王は１０００人を超える側室を持ち、５００人を超える子供を作ったというじゃないか。おそらくあのお方が、色事の世界では最高峰だろう。どうせ目指すのなら、最も高き頂を目指したいんだ」

リノスは口をあんぐり開けて王を見る。彼は目をキラキラさせなが

らリノスを見ている。言っていることは欲望丸出しなのだが、逆に、ただ純粋に色事を愛しているためか、彼の目からは邪念のようなものが一切感じられない。

「……まあ、ルアラはともかく、ポセイドン王には私も一度、お目にかかりたいと思っていたところです。もし、話が進むようであれば、貴方にも声を掛けましょう。しかし、ポセイドン王はかなり忙しい方のようですよ？　実の娘が会いたいと言っても、今からでは2年後と言われています。あまり、期待しないで下さいね」

「ああ、わかっているよ。楽しみに待つとしよう」

「それまでは、頑張って絵を売って、ミラヤで我慢していただくほかありませんね」

「う～ん、正直、ミラヤの女は私の好みではないんだ。いや、この間はエチケットとして、きちんとエスコートしたよ？　しかし、あの店に通おうとは思わないね。いや、とても素晴らしいもてなしだったし、満足はしている。ただ……女が美しすぎる。これが、惜しいね」

「女が美しすぎるぅ？」

思わず声を上げるリノスに、パターソンが慌てて間に入る。

「いえ、アガルタ王様、誤解なさらないでください。我が王の申すことは皮肉でも何でもないのです。本当にミラヤの方々はお美しい方ばかりでした。ただ、その……。我が王は、どちらかといえば……。庶民的な女性が好みでして……」

「庶民的だぁ？」

「その……。容姿端麗な女よりも、例えば……。足が太かったり、尻が大きかったり……。目が細かったり、鼻が……上を向いていたりと、ちょっと、特徴のある女が好みなのです」

「つまりそれって……。B専ってこと？」

「B専？」

「いや、例えばだな……。この迎賓館の職員である、サイリュースたち。……そう、背中に羽の生えている女たち。あいつらは、王の好みではないってことか？」

メインティア王はしばらく考えていたが、やがて何かを思い出したのか、首を振りながら口を開く。

「ああ～。あの方たちね。ダメだ。美しすぎるね。私はどうも。できれば閨は遠慮したいね」

「とすると……。例えば、この迎賓館の宿泊棟の支配人のミンシなんかはどうです？」

「ミンシ……？　ああ、あのドワーフの小柄な女性か。……いいね。是非閨を共にしたいが、彼女はああ見えて、かなりの年齢なのだろう？　惜しいね」

「と、いうことは、ミラヤでは、花魁ではなく、どちらかと言えば、酒や肴を運んできた女に王の好みがいたということですか？」

「さすがはアガルタ王だ。鋭いね。そうなんだ。肴を運んできた女に、ちょっとふくよかで、いいのが居てね。できればその女と閨を共にしたかったのだが……。さすがにそれは言い出せなくってね。私にも、そのくらいの分別はあるからね」

その言葉を聞いたリノスは、何故かうんうんと頷いている。そして、満面の笑みを浮かべながら、思わずつぶやいた。

「兄さん、メッチャええ人ですやん」

同じ頃、フラディメ国のアリスン城では、リボーン大上王が世にも恐ろしい顔つきで、居並ぶ女たちを睨みつけていた。

大上王の前に控えているのは、このアリスン城でメインティア王の側室たちに仕える下女たちだった。彼女たちは大上王の鋭い眼光に恐れおののき、物音一つ立てることができない。広いアリスン城の大広間に数百人が集められているが、それだけの人間がいるとは思えない程の静寂が、この空間を包んでいた。

「もう一度言う。誰か、我が愚息、メインティア王が居るアガルタに行く者はいないか？」

ドスの効いた、迫力のある声が大広間に響き渡る。女たちは誰一人として声をあげる者がいない。無理もない。大上王の性格のキツさは天下に知れ渡っている。彼女たちは、下手なことを言い出せば、大上王に殺されると思っていたのだった。

しばらく重苦しい沈黙が流れていたが、やがて、末席から声がした。

「あの～。私が行きましょうか？」

大上王は声のした方向を睨みつける。そこには、目じりが垂れ下がった、ノホホンとした顔つきの女が控えていた。

「お前は……。名は何という？」

「はい、ノレーンと申します」

「年はいくつだ？」

「１８歳になります」

大上王は鋭い眼光のまま大きく頷き、表向きは喜んだような素振りを見せ、ひきつった笑顔を見せながら、ノレーンに声をかける。

「そうか。ご苦労だが、アガルタに行ってくれ」

そう言って彼はさっさとその場を切り上げた。ご苦労、とは言ったものの、彼の内心は穏やかではなかった。結局、大上王がノレーンに笑顔を見せたのはこの日一日だけであり、その後、彼は何年にも渡って、彼女のことを無視し続けることになる。

実際、ノレーンは少し変わった女だった。メインティア王の女たちは、彼の求めに応じて体を任せているだけだったが、彼女は自ら望んで王に抱かれに行くと言うのだ。天下のリボーン大上王を前にして、豪然と「私が行く」と言い放つのは、並大抵ではない。１８歳のこの女には、恐れ知らずの強烈な遺伝子が宿っていた。そして、この遺伝子こそが、その後のフラディメ国の運命を左右することに

なるのだが……。それはまた、別のお話。

第二百四十五話　予想外の展開

「師匠……。どうしましょう……」

「まさか、こんなことになるとはな……」

リノスの執務室で、ルアラはオドオドとした様子で、両手を胸の前で固く握りしめていた。一方、リノスは椅子に座りながら、思わず天を仰いでいた。二人の間には不穏な空気が流れている。

「ここは、私一人だけ……」

「いや、そうもいかんだろう」

「黙って……。黙っていれば、わからないと思います。言い訳は他に、何とでも付けられますし、私が何とかします」

「ルアラ……。そう考えるのはわからんでもないが……。バレるのは、遅かれ早かれだと思うぞ？」

「……」

「……まずは、リコに話をしないとな」

「師匠……」

「ルアラ、お前はここに居ろ。俺一人で行ってくる」

「……」

じっと俯いたままのルアラを残して、リノスは帝都の屋敷に転移していった。

彼が執務室に帰ってきたのは、しばらく経ってからのことだった。しかも、そこにはリコが一緒に付いて来ていた。その姿を見て、ルアラはギョッと目を見開き、小刻みに震えだした。

「リコ姉さま……」

「ルアラ……。話はリノスから聞きましたわ。後のことは、この私が何とかします。安心なさいな」

「そんな、姉さま……」

「ルアラは私たちの家族ではありませんか。気にしないでくださいな」

「姉さま……。すみません」

ルアラはじっと俯いている。リノスはそんな二人の会話を、何とも言えぬ表情で眺めていた。二人の間での会話に、彼が口をはさむ余地はなかった。そんな様子を察してか、リコがリノスに向き直る。

「後のことは、私に任せてくださいませ」

「リコ……すまん」

そう言ってリノスは、ルアラを伴って執務室を後にした。

事の発端は、ルアラが、父親であるポセイドン王に送った書簡だった。彼女は父上に直接お目にかかりたい、目通りできるのは2年後と言われたが、それは何時頃か。できれば今、お世話になっているアガルタ王にもお引き合わせしたい。こちらも忙しい日々を送っているので、願わくば、詳しい日程を聞かせて欲しい。そう書いて送ったのだ。そして、その文末に、現在、父上と同様、女性を愛することに生涯を懸けているフラディメ国のメインティア王がアガルタに逗留しており、父上に女性の扱い方の指南を受けたいと熱望している。父上の名声は、この陸の世界にも轟いている、と記したのだった。

ルアラにしてみれば、父に対して皮肉を込めて書いたのだが、豈図(あにはか)らんや、ポセイドン王から早々に返信があった。そしてそこには、メインティア王と話がしたいので連れてきなさい、とあった。しかも、指定された日時が、今月であれば満月の夜、さもなくば、2年後の11月の満月の夜、というものだった。

ポセイドン王からの手紙が届いた日から満月の日までは、あと3日しかなかった。リノスたちは慌ててメインティア王にその事情を伝えると共に、ポセイドン王に3日後の訪問を伝えたのだった。

アガルタからポセイドン王宮まで、まともに移動すると一週間はかかってしまう。当然、移動は転移を使うのだが、リノスの転移結界は外部の者には秘匿しているために、それを使うわけにはいかず、帝都まではチワンやローニたちポーセハイの力を借りることにしたのだった。彼らも忙しい日々を送っていたために、こちらの調整も難航したが、何とか無理を聞いてもらう形になった。

調整が最も難航したのが、リノスとルアラだった。ポセイドン王宮への往復は、3日間を予定していたのだが、このたった3日間を調整するのが、至難の業だった。二人とも、スケジュールが過密を極めていたのだ。

リノスの予定は、何とか調整することが出来た。しかし、ルアラのスケジュールは、出発の前日になっても、どうしても調整がつかなかった。彼女は、自分自身はアガルタに残り、自分の背格好によく似た者を影武者として帯同させることを提案した。影武者にリノスの結界を張り、ルアラのように見せればいいと考えたのだ。しかし、それでは、会話を交わせばたちまち偽物であると露見する。彼女の案を採用するわけにはいかなかった。

そこでリノスは、ピンチヒッターにリコを投入することを思い立った。お腹の子供も既に安定期を迎え、体調はいい。一つの気分転換にもなればいいという気持ちで提案してみたところ、リコは大喜びで二つ返事を返してきた。リノスはリコに深く感謝したが、一方で、フェリスとルアラをはじめとする政府関係者は、これから訪れるであろう、リコ様の鬼チェックと、マシンガンのごとく乱れ飛ぶ改善指示に戦々恐々としていたのだった。

さすがにルアラは直撃弾こそ免れることができるが、リコ様によって大量の「やり直し」が発生することは目に見えていた。しかも、仕事は待ってはくれない。彼女がポセイドン王のもとに行っている間に、どんどんと仕事は溜まる。当然それは帰還してからやっつけねばならない。彼女がヘコむのは、無理もないことだった。

迎賓館の一室にリノスとルアラは入っていく。そこには、ポーセハイたちとメインティア王が既に準備を整えていた。しかし、その中

には意外な人物がいた。リノスは目を丸くして口を開く。

「……将軍、何をしているんですか？」

何とそこにはラファイエンスがいた。本来ならば兵士の訓練などで忙しくしているはずの将軍が、なぜこの部屋にいるのか。リノスは驚きを隠せないでいた。

「私が、お呼びしたのだよ」

声の主はメインティア王だった。彼はいつもの微笑みを湛えた顔でリノスを見ている。

「いや、将軍と話をしていたら、是非、ポセイドン王の話を聞いてみたいと言ってね。きっと、ポセイドン王も将軍のことは気に入るはずだからね」

「いや、最初の話を思い出しましょう。ポセイドン王に会いに行く主旨は、交渉です。女の話はあくまでオマケですよ？」

「そうかな？　話に聞くと、ルアラ殿が父王に会いたいと言った時は2年後と言われて、私のことを書いて送ったらば、3日後に来いと返事があったそうじゃないか。きっと王も我々と話がしたいと思っているに違いないよ。私にはポセイドン王の気持ちがよくわかる。ね、将軍？」

「ああ、一つのことを極めんと心に決める者は、志を同じくする者と語らいたいと思うものだ。それに、メインティア王の警護をする者が必要だろう。なぁに、軍のことはマトカルに任せておけばいい。リノス殿の交渉の邪魔はせん。むしろ、我々を連れて行くことで、

交渉は間違いなくうまく運ぶだろう。大船に乗ったつもりで、任せてくれ」

自信満々のラファイエンスの態度に、リノスは返す言葉を失う。その隣でルアラは、別に一人二人増えても一緒です。父は気にしないと思いますよと、半分投げ槍のような返答を返している。そうしてリノスたちは、なし崩し的にポーセハイたちと共に、ヒーデータ帝国のカイリークの街に転移したのだった。

ポーセハイたちに丁寧に礼を言い、お土産を渡して、3日後に迎えに来てもらうように要請したリノスは、ルアラ以外の全員に結界を張り、海の中に入る。相変わらず、海の中でのルアラの動きは速い。おそらくあれでも動きをセーブしているのだろう、チラチラとリノスたちの様子をうかがっている。意外なのは、メインティア王の泳ぎが上手なことだった。後になってわかることだが、彼は幼い頃から父である大上王に水練を厳しく仕込まれたのだと言う。

大上王の考え方は、ラマロン皇国のカリエス将軍と同じく、大将が死ねば戦は負けというものだった。従って大将は最後の最後まで生き延びねばならない。しかし、逃げる時に泳ぐことが出来なければ、川や海を越えることが出来ずに、追っ手に追いつかれてしまう。そうならないために、大上王はメインティア王に水練を課したのだった。

結局、泳ぎが一番ヘタなのはリノスであり、彼は三人の足を引っ張ることとなった。水深が下がれば下がるほどその動きは鈍くなり、挙句には振り返ったルアラが舌打ちする程、先頭集団から遅れたのだった。

やっとたどり着いたポセイドン王宮だが、俺の脳裏に、初めて訪れた時に苦い経験が思い出される。

「確か城に入るまでに、かなり待たされたんだ。将軍、メインティア王、覚悟しておいてくださいね？」

そう言って俺たちは、城門まで泳いでいく。すると、門番の姿が目に入った。

「ルアラ様ですねー？　お待ちしておりましたー。どうぞ、お通り下さーい」

門番が俺たちを見つけると、すぐに城門を開き、招き入れる。そして中には既に案内役の兵士がスタンバイしている。彼は俺たちが城門をくぐるのに合わせて動き出し、案内を始めた。お陰で俺たちは、全く立ち止まることなく、城内に入り、そのまま王宮内を移動することが出来た。

「何だこれ？　前に来た時とはえらい違いで、今回はいやにスムーズだな？」

「……すみません」

何故かルアラが謝っている。そんな話をしていると、俺たちは謁見の間にたどり着いた。ここでも俺たちが到着すると同時に扉が開かれ、立ち止まることはなかった。

部屋に入ると、王の側近であるカルヤートが控えていた。彼は既に玉座に向かって左手を指しており、俺たちが部屋に入るとすぐに声

をかけた。

「そのまま立ち止まらずにお進みください。そうです、玉座の後ろの扉に、立ち止まらずにお進みください」

「あの……お久しぶりで……」

「立ち止まらないでください！　私の所には来る必要はありません！　私への挨拶は無用です。さ、早く我が王のもとへお進みください。王がお待ちです。早くっ。慌てず、走らず、騒がずに、しかし、止まらずに、早くお進みください」

「……せわしないな。何だこれ？」

「……本当に、すみません」

「いや、別にルアラが謝ることはないよ」

そうやってスタスタと歩くこと数分、俺たちは広い庭のような所にたどり着いた。海底らしく色とりどりの巨大なサンゴ礁が生えている。その一番奥、桃色のサンゴに囲まれた場所に、ポセイドン王はいた。

大きな丸いテーブルに腰かけ、にこやかな笑みを浮かべながら俺たちを見ている。相変わらず男前だ。

「座り給え」

俺たちが近づくと、ポセイドン王は優し気に声をかけた。するとどこからともなく半魚人のような男が現れて、テーブルに椅子を備え

付けていく。そして彼らは椅子を持ちながら、「リノス様、こちらです」。「ルアラ姫」「メインティア様」などと俺たちの名前を呼んで誘導する。結局、俺たちは、全く立ち止まることなく、スムーズに自分の席に座ることが出来た。

「ポセイドン王様、お久しぶりです。アガルタ国の……」

「いや、挨拶はいい。固い話は抜きだ。私に女性の扱い方を知りたいと？　見たところ……。君たちも相当な手練れだね？　いや、隠さなくてもわかる。私の直感は正しかった。君たちを呼んで正解だったな。よし、本日は女性について、恋と愛について、心行くまで語り合おうではないか」

ラファイエンスもメインティア王も、コイツ、わかっているじゃないかといった顔をしている。将軍に至っては、さあ、何から話しましょうかね？　一つあっしが露払いでも致しましょうか？　というような顔をしている。ポセイドン王も、ものすごい期待感を持っているのが伝わってくる。

……何だか、男子校の修学旅行みたいだ。あれ？　俺も着席しているってことは、俺もこのゲスい話し合いに巻き込まれるのか？

その話、俺の話が終わってから、やってくれない？

第二百四十六話　追い込まれるリノス

「せっかく我が城まで来たのだ。私だけが一方的に話をするのではなく、君たちからも、これまで私が経験したことのないような、いい話が聞きたいね」

にこやかな笑みを浮かべたまま、ポセイドン王は俺たちを見まわす。

「あいにくと私は、ポセイドン王のお気に召すような話は、持ち合わせていません。何しろ私は、興味を持った女は、すぐにベッドに寝かせてしまいますので」

メインティア王が照れながら話をする。ポセイドン王は笑みを崩すことなく、ゆっくりと頷いている。

「それもよいだろう。しかし、君は、それで満足できずに我が許に来た。君は私に何を聞きたい？」

どうやら、メインティア王との話が盛り上がりそうだ。俺は隣のルアラと目を合わせて、何とかこの場から離れようとする。そんな話は、三人でやってくれればいいのだ。

「父上様、誠にすみませんが、私は席を外させていただきます」

ルアラが立ち上がる。ナイスだ、ルアラ。このタイミングで俺も外に出よう。

「では、わた……」

「そうかい。ええと……。女性を前にしてする話ではなかったね。ええと……」

俺が相槌を打って一緒に出ようとしたが、ポセイドン王の反応が予想外に早かった。完全に俺の声が食われてしまった。王はにこやかにルアラを見ているが、どうやら彼女の名前を思い出せないらしい。ルアラは大きく一つため息をついて、呆れたように口を開く。

「ルアラです、父上様。お気になさらないでください。私は、母に会いに参りますので、お話が終わりましたら、またお召しください」

「そうかい。うん、では、話が終わったら呼ぶことにしよう。気を付けて行っておいで」

「あの……」

「ああ、君は確か、娘が世話になっている……。うん、娘が世話をかけるね。今日はそのお礼も兼ねて、存分に語ろう。時間は十分にある。君たちが満足するまで付き合うつもりだ。遠慮しないでくれたまえ」

「おお！　さすがはアガルタ王だ。ポセイドン王に十分に時間を取ってお話をいただけるとは。やはり、君は素晴らしい男だ」

「ポセイドン王のお話は、きっと我が王のこれからに、大いに役立ちましょう」

メインティア王とラファイエンスが抜け抜けと言い放つ。そのお陰で俺は、席を外すタイミングを逃してしまった。ふとルアラを見る

と、彼女は一刻も早くこの場を去りたいという顔をしながら、俺たちに向けて一礼をする。そして踵を返し、スタスタと部屋を出ていってしまった。

「それでは、まずご挨拶代わりに私からお話し致しましょう。私は、甘酸っぱい失恋のお話です」

ラファイエンスが口を開く。ポセイドン王はにこやかに微笑み、頷きながら、彼に視線を移す。

「私は、アガルタ王にお仕えする、ラファイエンス・オーグと申す者です。私がまだ若い頃……。そうですな、ヒーデータ帝国の帝国士官学校を卒業してすぐの頃、たまたま警護を担当しました皇女様に、一目惚れを致しました。しかしこちらは一介の兵士、相手は皇帝の娘……。声をおかけすることも出来ず、ただお傍にお仕えしながら、悶々と暮らしておりましたところ、何故か私が彼女に思いを寄せていることが、宮城中の話題となりました。その時、思ったのです。誰にも言っていないのに……何故だ、と」

……小学校なんかで、よくありがちな話だな。その振る舞いと態度でわかってしまうってヤツだ。本人は隠しているつもりだが、周囲から見るとバレバレなんだ、これが。まさか将軍に、そんな甘酸っぱい経験があったとは。

ふと視線を移すと、メインティア王は天井を見ながら、ううむ……と唸っている。対して、ポセイドン王は、相変わらず微笑みのまま、目を閉じて何かを考えている。

「うーん。思いを遂げたくても遂げられぬ身分違いの恋か……。うむ、確かに、私にはそうした経験がない。自らに置き換えて考えて

みると……。口惜しい気持ちになるだろうな」

「ええ、仰る通りです。その口惜しさが、次に同じ思いをせぬ場合は、どうしたらよかろうと考え、自らを磨いていくことにつながりました」

「なるほど。うむ、面白い。ラファイエンスとやら、私は満足だ。いい話を聞かせてもらった」

今みたいな話でいいの？　なんか、拍子抜けだ。そのくらいの話なら俺でもできそうだ。モテないエピソードには自信があるのだ。

そんなことを考えていると、ポセイドン王の視線が俺に向いていることに気が付く。どうやら、お前も何か喋れと言いたいのだろう。とりあえず、モテないエピソードを披露して、あとは話が終わるまで、この部屋の空気と一体化しておこう。精々、将軍とメイティア王には、色々な話をしてもらって、この王のご機嫌を取ってもらうことにしよう。

「……アガルタ王、君は、どうだい？」

「ええ、私などは、そんなに面白い話でもありません。先ほどのラファイエンス将軍のような、失恋に関する話であれば、一つありますので、お話ししましょう」

……何故か、全員が俺を興味深そうに見ている。何か、話しづらい。

「ええと……。俺がまだ若い……。いや、子供の頃、子供の頃ですね。一人の女の子を好きになりまして……。ただ、どうしても、その娘に好きだとは言えなかったのです。好きと言って、彼女にドン

引きされて、避けられるのが怖かったのです。で、好きという思いを心に閉じ込めていましたら、友人が言うのですよ。お前、何か悩みでもあるのか？　元気ねぇぞ？　ってね」

……全員が目を閉じて、何かを考えている。

「なぜ、思いを告げん？」

ポセイドン王が、よくわからんという顔で俺を睨んでいる。

「そうだ。それならば、腕を取ってベッドに連れて行けばよいではないか。体に異常をきたすほど我慢しているのならば、なおさらだ。ベッドが無理ならば、人気のないところに連れて行き、何故思いを遂げない？　私には理解できない」

首を振りながらメインティア王は、呆れたように呟く。俺はテメェのような色魔じゃねぇんだよ。黙ってろよ。

「ううむ……。その相手は王女だったのか？　……違う？　同じ年で、同じ身分？　身分違いの恋であればさもありなんと思うが……。それならば……己が狙いを定めた獲物を目の前にして何もせぬとは……敵前逃亡ではないのか？」

ちょっと待て、何でそんなややこしい話になるんだ？　これ、俺が高校生の時の話だよ？　しょうがないじゃないか、まだ誰とも付き合ったことがなかったんだから。まあ、ヘタレであることは認めるが、それ、そんなにダメなことか？　一回くらいない？　そんな経験？

「いや……。私も、初めて好きになった女性と言いますか……。そ

の……どうしてよいのかわからなかったもので……」

「我が王は、元々は平民なのです。平民には侍女や女官などはおりません。従って、両王のごとく、誰かが手助けしてくれるということは、よほど裕福なものでなければございません。我が王の立場も、ご理解ください」

ラファイエンスが助け舟を出してくれる。それでも両王は理解できないという表情をしている。

「まあ、仰ることはよくわかります。俺も、好きだと伝えておけばよかったと思います。ただ……」

「ほう、ただ……何だ？」

「その女性とは別々の道を歩むことになりましたが、今でもその女性は、俺の思い出の中で、あの当時と変わらず清楚で美しいままです。ヘタに手を付けて幻滅するよりも、キレイないい思い出として残るというのもいいと思いますよ？　思い出というのは、輝きますからね。思いを忍んで、忍んで、忍び続けたからこそ、死ぬまで色あせない思い出として残ったので、俺は後悔していません」

再び沈黙が流れた。そして、ポセイドン王は小さな声で呟いた。

「忍ぶ恋……。忍ぶ恋……。忍ぶ恋か……」

その言葉を聞いて、将軍とメインティア王がポセイドン王に目を向ける。彼はゆっくりと目を開き、今までとは打って変わり、真顔になって口を開いた。

「……思い出は色あせず、輝き続けるか。確かに、自らが想像していた女と異なることもよくある。しかし、敢えて手を付けず、生涯美しい思い出として残し続ける……。なるほど、それはそれで、奥ゆかしいのかもしれないね。思いを内に秘めながら、それでも、隠しても隠し切れぬその思い。私には理解できないが、まあ、そういう色恋もあるのだろうな」

え？　ポセイドン王、ちょっと怒ってる？

「アガルタ王、今回はポセイドン王の広い心に救われたね。次は……ないよ？」

メインティア王がいかにも不満ですという表情のまま俺に話しかけてくる。

……何でお前にそんなことを言われなきゃなんねぇんだよ。　何だよ、その、空気読めねぇなコイツ、みたいな顔は！？　気に入らねぇんなら、マジで大上王の許に帰してやろうか？　一般の男ってなぁ、テメエらみたいに女に囲まれた生活しているわけじゃねぇんだ。口説いて口説いて口説いて……頑張ってるんだ！　お前ら、世間の男が聞いたらブッ飛ばされるぞ？

「うむ。それでは、君たちの質問には何でも答えることにしよう。私に聞きたいことは、何だい？」

「私は、どうすれば女性と長い間、楽しく、そして、面白く過ごせるのか、その方法を指南いただきたい。私には５０名を超える側室がおりますが、皆、私に体を預けるのみで、正直、欲望を満たしてしまいますと、面白みがなくなってしまうのです」

いつになく真剣な表情でメインティア王がポセイドン王に尋ねている。彼は再び柔和な顔に戻り、ゆっくりと頷きながら言葉を返す。

「なに、簡単なことだよ。女性に何かをしてあげればいい」

「何か、とは……」

「女性の希望を把握して、それをやってあげるのだよ。その希望をどうやって把握するのかは、いくつか方法があるのであとで教えよう。君は、自分の欲望だけを押し付けていないかい？　ただ、体を求めるだけになっていないかい？　それだと女は、体は開くけれども、心は開いてくれない。まずは、心を開かせないとね」

メインティア王は、なるほど師匠、その手がありましたかーといった様子で、うんうんと頷いている。そんな姿を見ながら、ポセイドン王はさらに言葉を続ける。

「あとは、笑顔だね」

「笑顔？」

「女性には常に笑顔でいることだ。そうすれば、比較的心を開いてくれやすい」

……なんかうまいことを言いながら、ちょっといいことを言っているような気がする。そんなポセイドン王を、まるで神様を見るかのようにメインティア王は見ている。

「それでは……」

ポセイドン王の話は、よほどメインティア王の興味を引いたと見えて、彼は矢継ぎ早に質問を繰り出す。そして王はその質問に、丁寧に答えを返していく。そして、ラファイエンスも折に触れて話題に入っていき、この三人の会話は盛り上がっていった。俺は、その話を聞きながら、ポセイドン王との交渉に入るタイミングを計っていた。

「……さて、他に何か私に聞きたいことは、ないかい？　アガルタ王はどうだい？」

絶妙のタイミングで、ポセイドン王が話を振ってくれる。俺はここがチャンスと見て、すかさず交渉の話題を持ち出す。

「ポセイドン王に、実はお願いがありまして」

「お願い？　何だい？」

「実は、ポセイドン王と同盟を結びたいのです」

「同盟？」

「いいやしばらく」

俺の話を誰かが遮った。ふと見ると、ラファイエンスが俺を鋭い目で睨んでいた。そして彼は再びポセイドン王に向き直り、恭しく一礼をしながら口を開いた。

「我が王が申しました同盟と申しますのは、軍事的な意味を持つものではございません。ゆめゆめ誤解くださいませんように」

「ああそうかい。軍事的な意味ではないのだね？」

「ハイ、仰る通りでございます」

……このオッサン、勝手に話をブッ潰しやがった！　何しやがんだ！

俺がラファイエンスを睨みつけていると、ポセイドン王が口を開く。

「つまり、アガルタ王は我と話をするだけでなく、それ以上の付き合い、誼を通じたいというのかな？　そうであれば、一つ、条件がある」

「条件……ですか？」

「ああ、この私を驚かせてもらいたい」

「驚かせる？」

「そうだ。この私が驚き、感動するような愛の話をしてくれないか？　そのくらいの実力がなくては、私も胸襟を開いて語り合おうとは思えないからね」

「おお、私もアガルタ王の話が聞きたいね。先ほどのように色も臭いもない話ではなく、王のとっておきの話が聞きたいね。いや、君は持っているはずだ。是非、聞きたいね」

「……お任せください両王様。我が主、アガルタ王、バーサーム・ダーケ・リノスは、両王様が、必ずご満足いただけるお話を、披露してご覧に入れます」

ラファイエンスが恭しく一礼する。ポセイドン、メインティア両王は、満足そうな笑みを浮かべて俺を見ている。ナニコレ？　なんでそんなにハードル上がっているんだ？　この変態どもが満足する話？　何を話せばいいんだ！？　マジで恋愛経験少ないんだよ、俺。

……帰りたい。マジで帰りたい。どうすんだ、これ？

第二百四十七話　お古い話を申し上げます

よく見ると、目の前に座っている三人は、それぞれが違う雰囲気を纏っている。まず、俺の右隣に控えているラファイエンスは、いつもの表情で、ゆっくりと両王に視線を向け、そして、俺を見た。いかにも、私がフォローをするから安心して話すといい、というような雰囲気を醸し出している。

一方で、左側に控えているメインティア王は、じっと俺の顔を見ている。目をキラキラさせているところを見ると、期待で胸をいっぱいにしているようだ。さらに、正面のポセイドン王に至っては、じっと俺を見据えたままだ。まるで、俺の力量を図ろうとしているみたいだ。

どうやら、ここからは逃げられそうにない。腹をくくるしかなさそうだ。

「ええ～あの～その～。俺の経験ではなく、聞いた話、でもいいのでしょうか？」

「構わない」

ポセイドン王が即答する。メインティア王はニヤリと微笑んでいる。何もそんな照れないで、自分の経験だよと素直に話せばいいのに……などと思っているのだろう。コイツの考えは手に取るようにわかる。

俺は覚悟を決めて、オホンと咳払いをして、口を開く。

「昔々の、お古い話でございます。ある国の王様のもとに、一人の美しいお妃がおりました。王様はその美しさに心奪われ、お妃さまを深く、深く寵愛しておりました」

「うむ、よくある話だ。まるで我が父、大上王のようだ」

「……」

「そのご寵愛の甲斐ありまして、お二人の間には、可愛らしい男の子が生まれました。しかし、王様には多くの側室がおり、お妃さまは、身分の低いご出身でした。そのため、お妃さまは他の側室から嫉妬され、色々と嫌がらせをされるようになりました。そのせいでしょうか、だんだんと病に伏せることが多くなりました」

「うん、よくわかる。我がアリスン城もまさにそのような状態だ」

「……」

「そして、王子様が3歳になった頃、お妃さまはついに重い病を得て、還らぬ人となったのです」

「何と……。なんと痛ましいことだ！　そうなる前に、何か手を打てなかったのか！」

「……」

「王様は深く、深く嘆き悲しみました。いつまで経ってもそのお妃さまのことが忘れられませんでした。それを見かねた家来たちは、お妃さまにそっくりな女性を見つけ出し、そして、その女性を王の

側に仕えさせたのです」

「素晴らしい忠臣だ！　我がフラディメ国も、そのような忠臣が一人でもおれば……」

「……」

「王は喜び、新しいお妃さまを寵愛し、元気を取り戻されました」

「そうだろう、そうだろう」

……さっきからこのバカ殿のツッコミがうざい。一方で、ポセイドン王は全く顔の表情を変えず、真顔で俺の話を聞き続けている。ちょっと不気味だ。そう思っていると、不意にポセイドン王が口を開く。

「それで？　まさかそれで終わりではないだろうね？　だとしたら……」

「いいえ、お話はまだ続きます」

「そうか、聞こう」

ポセイドンさん、何も、そんなにカリカリせんでもええがな。怖ぇよ。俺は再びオホンと咳払いをして、話を続ける。

「さて、亡くなられたお妃さまとの間に生まれた王子様ですが、この王子様も、自分の母親が亡くなられた後、とても寂しい思いをしていらっしゃいました。そして彼は、亡き母の面影のある新しいお妃さまに、次第に懐くようになり、お妃さまも、そんな彼に愛情を

注ぐようになります」

「うむ。いい話だ」

「……」

「そして、時が経ち、王子様が成長するに従って、お妃さまに対する思いが愛情に変わっていきます。つまり、お妃さまは、王子にとって初恋の人になるわけです」

「ほほう。それで、それで？」

相変わらずバカ殿がうざいが、よく見ると、腕組みをして黙っているポセイドン王の体がちょっと前かがみになっている。話に興味を持ち出したか？　よし、話を続けよう。

「さすがに、父王のいる手前、お妃に思いを告げたり、ましてや手を付けたりすることは出来ません。結局、王子様はお妃さまを慕い続けながらも、自分も妃を迎えることになります」

「ほう、まさかそれで、その恋は終わりましたと言うんじゃないだろうね？」

「まさかぁ」

「うん、そう言うと思ったよ。さあ、早く続きを聞かせておくれ」

何故かバカ殿が俺の話にノリノリになっている。マジでうざい。

「オホン。で、王子はずっとお妃さまへの愛情を持ち続けていまし

たが、ある時、そのお妃さまが病に倒れました。そして彼女は、王宮を出て、空気のきれいな田舎に移って静養することになりました。それを知った王子様は、そのお妃の後を追ったのです」

「おおっ！　まさか……」

「そのまさかです。王子はお妃さまが静養している屋敷に忍び込み、思いを遂げたのです」

「そうか！　やったか！　そうでなくては！　で？　で？　その後どうなった？」

「彼女は王子様の子供を身籠ったのです」

「おお～。そうなったか～。天罰だな。いや、しかし、気持ちはわかる。うんうん。気持ちはわかるぞ。しかし、大変なことになった」

「病の癒えたお妃さまは王宮にお戻りになりました。そして、罪の意識にさいなまれながらも、王子の子供を産み落としました。男の子でした。王様はことのほか喜び、そのお子を自分の王太子としたのです」

「……まて！　なぜ生まれた子どもが王太子になるのだ？　通常は兄たる王子が王太子になるのが筋だろう？　まさか……まさか……王は王子とお妃との関係を知って……？　だとしたら、だとしたらだ！　王子は姦通罪に問われて火あぶりに……！」

「……落ち着いてください、メインティア王。まだ続きがありますから。で、お妃さまは、罪の意識に苦しんで、その後すぐに亡くなってしまいます。王子も罪の意識と、愛する人を失った悲しみで、

落ち込む日々を送ります」

「なんと不幸なことだ……。いや、待て！　罪の意識に……と言ったな？　まさかそれは建前で、本当は人知れず王に処刑されたのではないのか？　だとすると王子は落ち込んでいる場合ではないぞ！　早く国外に逃げなければ命が……」

「……メインティア王、ちょっと黙っていてください。話がし辛いです。いいですか？　で、そんなふさぎ込む毎日を送っていた王子ですが、ある時、気分転換に山に散策に出かけます。そこで、ちょっと大きなお屋敷を見つけます」

「ほう、何だかまた、新しい話になりそうだな」

「で、その屋敷からは小さな女の子の声が聞こえます。スズメに逃げられた～などと、他愛もないことを言っているのです。王子は、たまたま見つけた壁の隙間から、その様子を覗いてみたのです」

「ううむ。決して許される振る舞いではないが……。気持ちはわかる。それで？」

「そこには１０歳くらいの女の子が遊んでいました。その女の子が、何と亡くなったお妃さまにそっくりだったのです」

「何っ！　そうきたか！　屋敷の女を見初めるとは思っていたが、少女だったか……。しかし、１０歳ではどうにもならんな」

「と、思うでしょ？　しかし、王子様はその少女を自分の屋敷に連れ帰るのです。そして、教養を身に付けさせ、自分の好みの女性になるように育てるのです」

「ほう……」

「そして、少女が１４歳になった時、王子は彼女を妻として迎えたのです」

「何ィ！　そんなことが……あるのか……」

「そして王子は、その少女を心から愛し、彼女も王子を心から愛して、二人は仲睦まじくその後を暮らしましたとさ……。そんなお話です」

全員が押し黙り、辺りがシンとなる。ポセイドン王は相変わらず表情を崩さない。メインティア王は目を左右に激しく動かして動揺を抑えきれないでいる。ラファイエンスは、いつの間にか目を閉じたまま上を向き、じっと何かを考えこんでいる。

まさか……元ネタがバレた？　いや、そんなはずはない。彼らが知っているはずはない。俺が高校生の時に習った作品で、ちょっとデフォルメもしているのだ。内容ちょっとちゃうやんけ、と言われそうだが、これは決してうろ覚えだったからではない。敢えて、ちょっとデフォルメしたのだ。そう、敢えてだ！

「ア……アガルタ王、その王子は、父王から姦通の咎め立てはなかったのか？　え？　どうなのだ？」

「咎め立て……ですか？　確か、それはなかったと思いますよ……。そう、先のお妃との間に生まれた子供が即位して、王子は臣下に下り、新しい王の元、政務を補佐したと記憶しています」

「何？　自分の子供を王位につけて、その後見になったのか！　何という狡猾な……それでは、その国は最早、王子の意のままではないか。王位簒奪ではないのか？　他の家来たちは何をしているのだ？」

何故かメインティア王が震えながらトンチンカンな質問をしてくる。大丈夫か、コイツは？

「いや、もちろん政権闘争みたいなものはありましたよ？　実際、政争に敗れて王子は都を離れて隠棲していますしね。しかし、最終的に彼は都に呼び戻されて、高い位につきました。人物もそれなりに優れていたと思いますよ？」

「しかし……しかし、それでは王位を簒奪したのも同じではないか」

「貴公、すこし黙ったらどうだい？」

ポセイドン王が口を開いた。いつもとは違って、迫力のある声だ。背中がゾクっとする。メインティア王はオロオロとしながら居住まいを正した。

「うむ……。今までに聞いたことのなかった話だ。継母を慕うというのはない話ではないが……。まさか、幼い少女を、自分の好みの女に育てて妻にするというのには驚いたな。果たして私は、そのようなことができるだろうか？　……できないね。そうするためには、常にその少女に愛情を注ぎ続けねばならないだろう。そうしないと、互いに深い愛情が通い合わないからね。その王子は、少女を妻に迎えた後、仲睦まじく暮らしたとあった。少女も王子を受け入れたのだ。育ての親であるにもかかわらず、だ。よほどその少女が優れていたのか……。いや、王子の愛情だ。この海よりも深い愛情がなけ

れば、この話は成立しない……」

いつの間にかポセイドン王の眉間に皺が刻まれており、ちょっと迫力のある顔になっている。この人、怒ると怖そうだ。言葉には気を付けないと、後がややこしそうだな。そんなことを考えていると、王が再び口を開く。

「……驚いた。いや、面白かった。まさか、人族の、私よりもはるかに若い男に、このようなことを教わるとは、思いもよらなかったな。危うく私は、アガルタ王、君を見損なうところだったよ」

ポセイドン王は、厳しい表情のまま頷いている。怖い……。俺は何といえばいいんだ？　そんな感じで混乱していると、不意にポセイドン王の声が響き渡る。

「我は満足だ！　やはり、この者たちを招いたのは間違いではなかった！　今日より我らは兄弟だ！　同じ志を持つ、兄弟と認めよう！」

……え？　何言ってんの？　兄弟って……。同じ志って……。すまん、一緒にしないで欲しいんだが……。

いつの間にか、テーブルにグラスのようなものが並べられている。そして、その中には透明な液体が入っている。ポセイドン王はそのグラスを手に取り、再び笑みを湛えて口を開く。

「人族では、兄弟の契りを交わす時に、酒を酌み交わすそうじゃないか。それに則り、我々も、酒を酌み交わして、兄弟の契りを結ぼうではないか！」

その言葉を聞いて、メインティア王は我が意を得たとばかりにグラスを取る。そして、ラファイエンスもゆっくりとグラスを取る。……三人が俺をガン見している。仕方がないので、俺もグラスを取る。

「我らこれより、兄弟の契りを結ぶ。この世に生を受けた日はバラバラだが、こうして兄弟の契りを結んだ上からは、どこまでも助け合おう。そして、死を迎える時は……同じ死に方で、死ぬことを誓おう！」

そう言ってポセイドン王は一気に酒を飲みほした。それに続いて、メインティア王とラファイエンスも飲み干す。そして、最後に、俺も渋々ながらその酒を飲みほした。

美味くない酒だ。それに、同じ死に方って何だ？　もしかして、腹上死？　その死に方は、マジでイヤだなぁ……。

第二百四十八話　名場面をパクるんじゃねぇ！

「何と……。ポセイドン王様と兄弟の契りとは……。我らは、この上のない喜びですな」

心から嬉しそうな表情を浮かべながら俺たちに話をしているのは、ラファイエンスだ。彼は満面の笑みを湛えながら、再びポセイドン王に視線を向ける。

「ポセイドン王様、我らは義兄弟となりました。これよりは、我らは互いに手を取り合う仲です。ただ……一つ、心苦しい点がございます」

ラファイエンスの意外な言葉に、ポセイドン王は不思議そうな表情を浮かべる。

「心苦しいとは？　私と義兄弟の契りを結ぶのに、何か障害になることでもあるのかい？」

「いえ、そんなことはございません。ただ、我々は人族で、王ほどの力はなく、むしろ非力です。ともすれば、王にお助けを求めることが多くなるやもしれません。このラファイエンス、それが心苦しゅうございます」

老将軍は目を閉じて、いかにも申し訳なさそうな顔をしながら首を振る。それを見たポセイドン王は、ニコリと柔和な笑みを浮かべながら口を開く。

「何を言うのだ。義兄弟の契りを結んだ上からは、そのように畏まることはない。兄弟に危機があるときはいつでも手助けをしようじゃないか。遠慮なく言ってくれればいいよ」

「なんと心強いお言葉でありましょうか。いや、正直申しますと、我がアガルタはクリミアーナ教国から侵攻の脅威に晒されておりましてな。現に、かの国の首都、アフロディーテの港には、我が国を攻め滅ぼすための多くの軍船が用意されていると聞き及んでおります。これが無くなれば、我らはいつ何時でもポセイドン王と雅な恋の話が出来るのですが……。しかし、王のお言葉を聞いて安心いたしました。もし、かの国が我が国を攻めて参りましたときには、ご相談させていただきたく存じます」

ポセイドン王はゆっくりと頷いて目を閉じる。しばらくの間沈黙が流れたが、やがて王は再び目を開けて、柔和な笑みを湛えて口を開いた。

「クリミアーナとは、確か、ターピス海にある島国だね？　……うん、確かに、たくさんの船が港に停泊していたね。しかも、血と鉄の臭いがする船だ。あれに海を荒らされるのは私もご免だ。……よし」

ポセイドン王は天井を向き、空に向かって、右手の人差し指を動かし始めた。まるで何かの文字を書いているようだ。最後に彼は、人差し指を突き上げた姿勢を取り、しばらく固まる。そして、ゆっくりと視線を再び俺たちに向けた。

「全て駆逐しておいたので、もう、大丈夫だよ」

「駆逐……されましたか？」

「ああ、安心するといい」

「……おお！　さすがは我らが兄！　このラファイエンス、歓喜に耐えません」

老将軍は恭しく一礼をする。ポセイドン王はその様子を見て、満足そうに頷いている。後になってわかることなのだが、その頃、アフロディーテでは、沖合で突然大爆発と共に巨大な水柱が上がり、その直後に発生した津波が、港に停泊していた軍船を襲っていた。波にのまれて崩壊する船もあり、巨大な波に港に打ち上げられた軍船もあり、それらがまとめて押し寄せたアフロディーテの港は、甚大な被害を受けていたのだった。

ポセイドン王は、老将軍に向けていた視線を、ゆっくりと俺に向けた。

「……思い出したよ、アガルタ王。確か君は、娘と共に、私の妻、アムピトリテの怒りを鎮めてくれたのだったね。あれは本当に助かったんだよ。彼女はなかなか私に会ってくれなくてね。まだ、そのお礼ができていなかったので、今日はいい機会だった。いや、兄弟。また、いつでも遊びに来るといいよ。そして私にまた珍しい恋の話を聞かせておくれ」

「おお！　それはよい趣向だ！　アガルタ王の知識はこんなものではないはずだ。是非私もその話を聞いてみたいね。どうでしょう、ポセイドン王。いや、兄上様。定期的に集まって、アガルタ王の話を聞くというのは」

「いいね。ぜひ、そうしよう」

……俺をそっちのけにして、二人で盛り上がってやがる。いやいや、愛の話？　あるわけないだろ。モテない俺には、無理な注文だ。それにしても、単に女好きの王様だと思っていたが、ポセイドン王を名乗っているのはダテじゃないらしい。一度、サダキチに調査をさせなければならないだろうが、クリミアーナの船を駆逐したと言っていた。ヤツらの船はガルビーで一度見たが、結構なデカさだった。その船を数十隻まとめて葬ったのだ。とんでもない力だ。

そんなことを考えている俺を尻目に、ポセイドン王とメインティア王は何やら二人で盛り上がっている。

「そうだね。あまり時を置かない方がいいね。互いに集まるのは……5年に一度くらいがいいね。かなり頻繁になってしまうがね」

「は？　5年？」

ポセイドン王の予想外のブッ込みで、メインティア王は目を丸くして驚いている。さすがに5年という期間は長い。

「そうですな。そのくらいがちょうどいいでしょう。ただ、人族の寿命は短こうございます。この老いぼれは、次にお目にかかるときは、この世にはいないかもしれませんな」

にこやかな笑みを湛えて口を開いたのは、ラファイエンスだ。

「うむ。人族の寿命は短いと聞く。いいだろう。それならば……」

ポセイドン王はどこからともなく、小さな箱を取り出して、テーブルの上に置いた。

「これを肌身離さずに持っておくといい。次の5年後に我らが出会うまでの間、貴公の災いを取り除いてくれるだろう」

「おお！　このような老いぼれに、何という素晴らしいものを！」

老将軍は大喜びで、その箱を押し戴くようにして礼を言っている。これはもしかしてアレか？　浦〇太郎が竜宮城でもらうアレか？箱を開けるとオジイちゃんになってしまうという……。このオッサンは既にオジイちゃんだから、箱を開けても大丈夫ってか？

ラファイエンスの感激ぶりを満足そうに眺めていたポセイドン王は、俺たちを見まわして、再び口を開く。

「うむ。我は満足だ。それでは兄弟、再び5年後に会おう！　くれぐれもここでの……そうだな、桃サンゴの庭……。うむ、この、桃園の誓いを、忘れないでおこう！」

とーえんのちかい！　この王様、『桃園の誓い』って言いやがった！　あの、有名な場面をまさかここでパクるとは！　あの物語のファンならば絶対に怒るぞ！　いや、ファンもさることながら、あの三人の英雄に、逆に怒られまっせ？　なにより、人数が一人多い！

固まる俺に目もくれず、メインティア王と老将軍は頭を下げて畏まっている。その様子を満足げに見つめていたポセイドン王は、ゆっくりと立ち上がると、再び俺の顔を見つめ、ニコリと笑って、そのまま庭の奥に消えていった。

「それでは、ご案内します」

いきなり後ろから半魚人に話しかけられてビクっとなる。俺たちは顔を見合わせながら、その男についていく。しばらく歩くと、再び王の玉座の前に出た。そこには先ほどと同じく、カルヤートが控えており、彼は右手で扉を指しながら、俺たちに声をかけた。

「ご苦労様でございました！　立ち止まらずにゆっくりとお進みください！　どうぞ扉に向かってお進みください。立ち止まらずに、まっすぐ、扉までお進みください。本日は誠にお疲れ様でした！我が王も大いに満足されております。この度のご訪問、誠にありがとうございました！」

ライブ会場での、終演したときの追い出しアナウンスのようだ。そんなことを思いつつ、カルヤートを睨みながら俺たちは玉座の部屋を後にする。そのまま城門まで案内されるのかと思いきや、予想に反して俺たちは、別の部屋に案内されてしまった。そこは、広いテーブルといくつかの椅子があり、まるで会議室のような部屋だった。そして、その部屋には、赤いタコのような顔をした男が控えていた。

彼は、俺たちの姿を見た瞬間、その顔を真っ赤に変色させ、目を大きく見開いた。

なに？　怒っていますか？？　俺は、タコに恨まれる覚えは、ないんだけどなぁ……。

第二百四十九話　グッジョブ&ナイスプレー

「ようこそおいでいただきました。どうぞお掛けください。ささ、どうぞどうぞ」

予想に反して丁寧な対応でヤツは話しかけてきた。ここでモメるのも得策ではないと考えた俺たちは、勧められるままに席に着く。それを確認したタコ男は俺の向かい側に座り、上ずった声で、早口でまくし立ててきた。

「私、ポセイドン王付きの劇作家、ナンボークと申します。この度、我が王の命令によりまして、ええと……お名前は……そう、リノス様。リノス様が王にお話しいただいた恋物語を戯曲化せよと命令を受けました。お急ぎのところ申し訳ありません。今一度、王にお話しいただいた恋物語……継母が出てくるのですか？　それを私にお聞かせいただけませんでしょうか？」

このタコ男、ちょっと興奮しているようだ。目がなんかおかしい。俺はとりあえず落ち着こうと話すが、彼はその言葉に大声で反論する。

「４００年ぶりなのです！　４００年ぶりに我が王から新作を作れとのご命令が出たのです！　これが落ち着いていられましょうか！　腕が鳴るのです。やっと……やっと私の作品を再び王にお目にかけることができるのです。待ちに待った機会なのです。ああ～～～～興奮する～！」

グニャグニャとタコ男は悶えている。あまりの気色悪さに俺はドン

引きしてしまうが、メインティア王たちはニコニコと笑っている。俺は促されるままに、ポセイドン王に語った話を彼に伝える。途中、細かい点を何度も突っ込まれ、シドロモドロになる場面もあったが、何とか話をやり切った。

「わかりました。ありがとうございます！　うう～ん。いいですね！　大体において美女だけしか出てこないお話ですので、女優たちは喜ぶでしょう。子役が難しいですが……そこはこちらで何とか致しましょう。では早速執筆にかかります！　いかに男女のナマの話にせず、恋と愛の要素を散りばめた作品にするかが大切ですね。それを書けるのは私くらいなものでしょう。ああ～腕が鳴る。腕が鳴りますぅぅぅぅ」

そう悶えながら、タコ男は部屋を後にしたのだった。

「ふう～」

俺は思わずため息をついていた。この城に来てからずっとせわしなかった。なんだかようやく一息つけた気がしたのだ。

「いや、ポセイドン王の話は非常に参考になった。この城にきてよかった」

メインティア王が満足げに話をしている。

「そうですな。我々もまだまだ勉強が足りませんでした。かの王に喜んでいただける話題が提供できるように、これからますます精進しませんと」

ラファイエンスが頷きながら話している。彼は話をしながら俺に視

線を送り、再び口を開く。

「ポセイドン王の話もさることながら、かの王と我が王の間で、義兄弟の契り……同盟を結べたことが、何よりの成果だ」

そう言って彼は俺に向かってウインクをする。

「そうですね。まさかあのような形で俺たちとポセイドン王との間につながりができるとは思ってもみませんでした。これも偏に、将軍のお陰ですね。ありがとうございます。しかし将軍、なぜ俺が同盟の話をしようとしたとき、いきなり止めたのですか？」

「リノス殿、ポセイドン王は女性を愛する優美なお方だ。そうしたお方は血を連想する話題を嫌う傾向がある。いきなり同盟、などという血なまぐさい話をすると、王が即座に断りかねないと思ったのだ。それで話を遮らせてもらった。まさか、王自身が驚く話をせよと言われたのには予想外だったが、リノス殿ならばきっとうまくやってくれるだろうと信じて、王に追従してみたが、やはり、思った通りだった」

「なるほど、確かに私も、血を連想する事柄は嫌いだ。さすがラファイエンス殿はよくわかっていらっしゃる！」

メインティア王が手放しで老将軍を褒めたたえている。それを涼しい顔で受け流している将軍……。言っていることは無責任そのものだし、またしても、このオッサンにおいしいところを持っていかれてしまった。しかし、彼の言っていることは的を射ている部分はある。さすがは年の功というべきか。今回の彼の機転はマジで、グッジョブだった。

しばらくすると、ルアラが半魚人に案内されて部屋に入ってきた。どうやら母親とも会え、弟とも遊べたようだ。その後、俺たちは半魚人に城門まで案内され、そのまま海を泳いで陸へと上がった。当初は3日を予定していた訪問が、1日で終わってしまった。仕方なく念話でチワンと連絡を取り、ポーセハイたちに無理を言って迎えに来てもらい、俺たちはアガルタの迎賓館まで帰ってきたのだった。

「あっ……姉さま」

館の廊下で思わずルアラが声を上げる。視線の先には、今日の業務を終えたリコとフェリス、そしてマトカルがこちらに向かって歩いて来ていた。よく見ると、フェリスがげっそりとやつれている。どうやら、かなりハードな目にあったようだ。

「あっ、もう戻られたのですね？」

俺たちに気づいたリコは一瞬笑顔になったが、見慣れない男がいるとわかると、怪訝な表情を浮かべる。

「ああ、リコ、紹介するよ。フラディメ国のメインティア王だ」

「まあ、このお方がメインティア王様？　お初にお目にかかります。私はアガルタ王リノスの妻で、リコレットと申します。こちらが同じく妻のマトカル、そして、こちらが、さるお家から行儀見習いでお預かりしています、フェリスですわ」

リコが優雅に二人を紹介している。彼女たちはそれぞれ、リコに習った通り、優雅な礼でメインティア王に挨拶をする。

「以後、お見知りおきくださいませ」

最後にリコが優雅に一礼をする。お腹が邪魔になるように思えたが、それを全く問題にしなかったところは、さすがだ。

「美しい！」

突然、メインティア王が大声を上げる。何事かと全員が目を丸くする。

「このお方が、アガルタ王のお妃か！　なんと美しい……。絵に描いたようだ！」

メインティア王がリコをガン見しながら、わなわなと震えている。リコは戸惑いの表情を見せながらも、言葉を返す。

「とんでもございませんわ。ご覧の通り、身籠りましてから少々ふくよかになりまして……。また、このような普段着でお目にかかっておりますので、お恥ずかしい限りですわ」

「何をおっしゃる！　ふくよかとは、またご謙遜を！　そのあふれ出る気品、美しさ！　この世にこれほどの美女がそうはおるまい！　アガルタ王のお妃が美しいとは聞いていたが、まさかこれほどとは……。　ううむ。相手がアガルタ王でなければ、私は一国をかけて争うだろうに。美しい！　素晴らしい！」

もの凄いテンションでメインティア王はリコを褒めちぎっている。ちょっと落ち着きなさいよと言おうとしたところに、リコたちの後ろから、メインティア王の従者であるパターソンが、一人の女性を伴って歩いてきた。

「ああ、パターソンじゃないか。どうしたんだ？」

「あ……お話し中のところを……。これは失礼いたしました」

「いや、いい。ところで、そちらの方は？」

パターソンは俺とメインティア王を見比べながら、言おうかどうかを迷っている様子だったが、やがて意を決したように口を開いた。

「本国から、その……。我が王の身の回りの世話をする女が参りました。ノレーンです」

小柄な、目じりの垂れ下がった、「おかめ」みたいな愛嬌のある女が、恭しく俺たちに一礼をする。その顔を見た瞬間、再びメインティア王が声を上げる。

「美しい！　気に入ったぞ！　ノレーンと申すか！　１８歳？　よしっ！　ささ、参れ！」

「え？　国王様？　あの、国王様？　国王様？　国王様？」

戸惑うノレーンの手を掴んで、彼は無理やり廊下を引きずっていく。そして角を曲がるや否や、再び王の声が上がる。

「パターソン！　ベッドだ！　ベッドを用意しろ！　すぐにだ！」

あまりのことに、リコを始め、女たちはポカンと口を開けている。その光景を、ラファイエンスはニコニコと笑みを浮かべて眺めていた。

「……一体なんですの？　いきなりベッドを用意しろとは」

リコが怪訝な表情で口を開いている。俺は思わず口を挟む。

「リ……リコの美しさに、興奮しちゃったんだろうな、きっと」

俺の顔をチラリと見るリコ。そして、彼女はため息をつきながら、ゆっくりと口を開く。

「いきなりベッドは感心しませんが……。メインティア王様は……女性の趣味は、よろしいようですわね」

リコがちょっと照れている。その様子を見て、ラファイエンスはパチリと俺にウインクを投げた。

……そうだろう。我ながら、ナイスプレーだ。

第二百五十話　これは絵ですか？ええ。いい絵ですか？いいえ。

まだ晩秋にもかかわらず、この年のアガルタの都は早くも雪に覆われ、例年になく早い時期に冬が訪れていた。とはいえ、都では雪かきをする人々の活気ある声で溢れかえり、その季節外れの寒さに打ち震えるような光景は微塵もなかった。そして、年が明けた直後からは、人々のさらなる熱気で、大いに盛り上がりを見せていた。それもそのはずで、都では年に一度の大イベントが開催されていたのだ。

例年、アガルタの都では年が明けて5日目に、貴族たちが新年のあいさつにやって来る。これはジュカ時代の慣わしがそのまま続いているのだが、リノスが国王になってしばらくは、彼に従わない貴族たちがその挨拶をボイコットすることもあった。だが、ここ数年はそれもなくなり、貴族たちは表向き王に対しては、服従の姿勢を見せるようになっていた。それと前後して、彼らたちによる物産展のようなものが、この時期に都で催されるようになっていた。

それは数年前に、リノスが何気なく漏らした一言から始まった。

貴族たちがリノスの許に訪れる際には、必ず自領の特産品を貢物として持参していた。当初、彼はその必要はないと命じていたのだが、貴族たちは見栄もあり、それを止める者は皆無だった。毎年、リノスの許に集まる大量の特産品は、意外にアガルタの都では流通していないものが多かった。

「物産展みたいなものを開いて売れば、かなり儲かりそうだよね」

たまたまサラセニア伯爵が納めた毛皮のコートを見たリノスは、その出来栄えの見事さに思わずそんな一言を漏らした。その言葉にヒントを得た伯爵は、次の年から大量の毛皮を持参し、リノスの許可を得て迎賓館の敷地の一角を使って、それらを都の人々に売ったところ、その評判が都中を駆け巡った。それが契機となって、伯爵の許には、都の人々から大量の注文が集まり、彼は大きな利益を得ることができたのだった。

これに目を付けたアガルタの貴族が、我も我もと出店許可をリノスに申請してきたことで、彼は、貴族が集まる正月の期間に限って大手門前の広場を開放し、そこで物産展を開催することを許したのだった。当然そこにはリノスの結界が張られ、どんなに寒い日であっても、その中の温度は一定になるような効果が付与されていた。そのせいもあって、物産展が開催されている期間は、都の人々が押すな押すなの大盛況を呈していたのだった。

そんな物産展だが、今年はその会場の片隅で、のほほんと似顔絵を描いている男がいた。言うまでもなく、フラディメ国のメインティア王だ。彼は、アガルタに来てから描いた絵を売る傍らで、そこに訪れる人々の似顔絵を描いていた。

元々絵を描くことが好きであり、さらにはその卓越した筆さばきで、ものの数分で似顔絵を仕上げてしまう特技は、来場客の目を引いた。しかも性格が優しい王の客対応は、とてもきめ細やかなものであり、彼の店はたちまち繁盛していたのだった。客が客を連れてくるという状況であり、それと同時に、きれいな人はより美しく、そうでない人もそれなりに描くために、彼の絵は特に女性からの評価が高く、現在では長蛇の列ができる有様だった。

「う〜ん、いいね！　美しいね！　素晴らしいよ！」

「そんなぁ～。私、ちょっと出っ歯だから……」

「そこがいいんじゃないか！　それが君の美しさだ！　素晴らしい！　その笑顔、いいね！」

そんな誉め言葉を駆使しながら彼は楽しそうに絵筆を走らせる。その隣では、パターソンたちが王の描いた絵を売っていた。そこには「越後屋」とネームが入っているが、王自らが描いた絵であるために、いかなる評価を得ようとも、その作品を安売りするわけにはいかぬと、彼らはその絵にかなり強気な値段をつけていた。だが、にもかかわらず王の絵は徐々に売れていき、最終日にはあと数枚を残すばかりで、完売する勢いだった。彼の絵は、一般の人々には見向きもされないのだが、なぜか一風変わった者が立ち止まり、決して安くはないその絵を即決で購入していくことが多かった。

「すみません」

この日も、店番をするパターソンたちの前に、一人の若い男が現れた。どう見てもまだ、学生風の男で、幼さが残る顔立ちだ。男はその澄んだ瞳で、パターソンの傍らにある絵をまっすぐに見据えながら口を開いた。

「この『あやめ』という絵を売っていただきたいのですが……」

「畏まりました。ただ……お代金が８０００Ｇですが……」

怪訝そうな表情でパターソンは口を開く。その顔を見て男は一瞬目をそらしたが、再びパターソンに視線を向け、何かを決意したかのように表情で口を開く。

「僕はアガルタ医療研究所に勤めています、タケイチと申します。今、手持ちのお金が１０００Ｇしかありません。大変申し訳ないのですが、残りのお金は月々収める形ではだめでしょうか？　月々１０００Ｇずつなら、持って来られるのです」

ローンの支払いなど考慮に入れていなかったパターソンは戸惑いの表情を浮かべている。そんな中、のほほんとした声が、彼らの耳に入ってきた。

「かまわないよ」

声の主はその作者であるメインティア王だ。彼は描き上げた絵を客に渡してゆっくりと立ち上がり、タケイチの傍に近づくと、飾ってある絵を取り、無造作に彼に手渡す。

「えっ？　いや……絵は、お金を支払い終わってからで……」

「いいよ。見たいのだろう？」

「はい……見たいです」

「じゃあ、家に持って帰って見るといい。お金はできたときに持ってきてくればいいよ」

「あっ、ありがとうございます！」

タケイチは驚いた表情のまま何度もお辞儀をする。王はその様子を満足そうに眺め、何度も頷いていた。

「気前がいいですね、メインティ……いや、越後屋さん」

多くの人でごった返している会場内の人波を、かき分けるようにしてやってきたリノスが声をかける。彼は目の前に座る女性を、にこやかに眺めながら忙しそうに絵筆を動かしつつ、口を開く。

「私の絵を好んでくれたのであれば、それでいいよ。時間をかけてでも絵を手に入れようなんて素敵じゃないか」

「そういうものですかね。あなたの絵がどれくらい売れているのか興味があって見に来たのですが……大方売れているようですね。でも、先ほどのようにお金を取ってない、なんてことはないですよね？」

「大丈夫だよ。そこはパターソンたちが厳しくやっているからね。それに、戯れで始めた似顔絵描きが思った以上に好評でね。売れ行きは予想以上だ。おそらく君に借りたお金の大半は、返せるはずだよ」

「マジかー」

正直、本当にこのバカ殿が返せるだけの金を稼ぐとは思っていなかった。先ほどからこの店には誰も絵を買いに来ていない。おそらくコイツの絵は、ごく一部のマニアだけに恐ろしくウケているのだろう。そんなことを考えていると、店の奥に裏返しにされた絵が吊るされているのが見えた。

「あれ？　あの裏返しになっている絵は何です？」

「ああ、あれか。いや、私は売ってもいいと思うのだが、パターソ

ンがダメだと言うんだよ」

王は照れくさそうに頭を描いている。俺とメイは裏返しになっている絵に近づき、何気なくそれを見て、思わず絶句する。

「これは……絵か？」

見るとそこには、まるで写真を見るかのようなリアルさで、美しい裸婦の絵が描かれていた。それを見てメイもそれが本当に絵であるのかを確かめるように、マジマジと凝視している。

「ええ。間違いなく王がお描きになった絵です。しかし、それは売ることはできません」

「何でだ？　これだけ見事に描かれている絵だ。すぐに売れるんじゃないのか？」

「いけません。その絵のモデルは……ノレーンなのです」

「えっ！？　ノレーン？」

いつもの見慣れたおかめ顔ではない、まるで別人のように描かれているために俺たちは驚きを隠せないでいた。そんな俺たちにメインティア王は、いつもの、のほほんとした口調で話しかけてきた。

「ノレーンはいつも一緒に居るからね。どうしてもこんな仕上がりになってしまうのだよ」

「本当に、ノレーンですか？」

「何を言うんだい、どこからどう見ても、ノレーンじゃないか」

王は真顔で話している。どうやら、彼の目にノレーンは本当に絶世の美女に見えているようだ。マジで目が悪いんじゃないだろうか。

「王はこの絵をお売りになると申します。しかし、ノレーンは今や王の側室です。お妃様の肌を、大衆に見せるわけには参りません。ですから私が断固としてお止め申したのです」

パターソンが困った顔で話しかけてくる。

「まあ、そりゃそうだ。そういえば、ノレーンの姿が見えないな」

「ああ。ノレーンは、コレでね」

王は照れくさそうに自分の腹を撫でた。

「え？　マジっすか!?　まだアガルタに来て3か月くらいじゃないですか？」

驚く俺にパターソンが申し訳なさそうに口を開く。

「その……。王が、ノレーンを毎夜激しく……」

「何だい、パターソン。そんなことまで知っているのか？」

「それは……。毎晩ずっと声が聞こえますものですから……」

「アッハッハッハ！　聞こえていたのか！　これは参ったな」

そんなおバカな主従の話を聞きながら俺は、メインティア王と絵を交互に見比べ、ため息をつきながら口を開いた。

「でも勿体ないな。このクォリティーなら高く売れるだろうにな。いい絵じゃないか」

「いいえ！　そんなことはございません！　これは絶対に売れません！」

「うふっ、あはははははは」

突然メイの笑い声が聞こえてくる。思わず俺たちは彼女に目を向けた。

「メイ、どうしたんだ？」

「これは絵か？　ええ……って……。いい絵じゃないか。いいえ、ですって……。可笑しいっ。アハハハハハ」

ものすごくかわいらしい笑顔を浮かべて、ケラケラと笑うメイ。その天真爛漫な笑顔は、何故だか少しだけ、俺の心を癒してくれたのだった。

……その夜、俺はシディーと眠りについていた。

彼女の寝方は少し変わっている。必ず俺の掌に顔を載せて眠るのだ。体が小さいためか、通常の枕では眠りにくいらしく、かと言って俺の腕枕……というのはリコ専用という暗黙の了解があるようで、彼女は頑としてそれは求めなかった。で、色々と試した結果、俺の掌

というのが一番彼女に合っているということが分かったのだ。

その夜も、俺は左手の掌で、シディーの顔を包みこむようにして、さらに右手で彼女の背中の抱くようにして眠りについていた。

静かな夜だった。しかし、その静寂は突然破られた。それを破ったのは、何とシディだった。

彼女は突然ベッドの上に起き上がる。いつもと違う気配に、俺も目を覚ました。

「どうしたシディー？」

「……」

「シディ？」

彼女は闇を睨みながら微動だにしない。一体何事かと、俺も起き上がった瞬間に、彼女は小さな声で呟いた。

「この屋敷が揺れます。もうすぐ……もうすぐ……。５、４、３、２、１」

ドドドドドドドドーーーーー。

地鳴りと共に屋敷がゆっくりと、大きく揺れる。

「大丈夫です。もうすぐ収まります。３、２、１」

……今までの揺れが、まるでなかったかのように辺りはいつもの静

寂を取り戻していた。

「シディィ……」

「……明日の朝5時４０分２１秒に再び揺れます。でも、小さいです。あとは……。あとは……。つッ！　頭が……。リノス様……。私、どうしちゃったのでしょう……。何だか、怖い……」

彼女はゆっくりと俺の胸に顔をうずめた。俺は思わずシディーを抱きしめる。彼女の体は、じっとりと汗がにじんでいた。

第二百五十一話　覚醒

シディーの様子がおかしい。今までこんな彼女は見たことがなかった。

ヒーデータ帝国では滅多に起こらない地震のあと、彼女は異常なほどに繊細になった。例えば、屋敷に誰があと何歩で入ってくるかを、感覚だけで見事に言い当てたり、何時間何分何秒後に雨が降ってくるといったことを正確に言い当てたりしたのだ。

シディー自身も、なぜこんなことになったのかがわからずに、戸惑ってばかりいる。当然、その様子を見てリコやメイをはじめとする家族たちも心配している。

シディーに言わせると、何となくそんな予感がするという感覚が一番近いらしい。ただ、常に頭の中に情報が沸き上がってくる状態であるらしく、夕方ごろには頭痛を起こしていた。メイ曰く、沸き上がる情報量に脳の処理スピードが付いていっていないために、その状態に慣れるまではしばらく頭痛が続くだろうとのことだった。

そのせいもあってか、彼女はその夜から不眠になった。

眠るには眠るのだが、どうしてもすぐに目が覚めてしまう。肉体的には休んでいるが、頭は起きているという状態であるらしい。さすがに心配したリコとメイが、フェアリに眠る鱗粉を出させ、それを使うことで、やっと彼女は眠れるようになった。

このシディーの覚醒は、本人を疲弊させる一方で、周囲の人々にと

っては逆に、思ってもみなかった大きな恩恵を与えた。

彼女はメイらと共にアガルタの医療研究所で医学の研究を手伝うと同時に、アガルタの農作物の研究と、ドワーフたちの技術向上に関するアドバイザーの役割も担っていた。それらの仕事が、シディーのおかげで劇的に改善されたり、向上したりしているのだ。

まさしくカミソリのような直感力と言ってよかった。何か行き詰っている研究や技術開発に関して、彼女がしばらく眺めているだけで、その解決方法をたちどころに思いつくのだ。何の根拠もないのだが、彼女の言う通りにやってみると、目指していた以上の結果が得られる。スタッフは大喜びなのだが、その一方で、アガルタの研究所などでは、シディーが思いついた手法の根拠集めに、大わらわになっている。

しかし、あまりにも頭脳を使いすぎるためか、シディーは徐々にやつれていった。それに比例するように、彼女は甘いものを求めるようになった。どうやら、頭をフル回転させていると体が糖分を欲するらしく、彼女は暇があるとスイーツを口の中に放り込んでいる。

シディーが口にするのは専ら、お饅頭などの和菓子系だ。ケーキなどでも構わないのだが、それを食べ続けると確実に太るだろうという俺の判断で、和菓子系をすすめてみたのだ。

今のところ彼女の体型に変化はないが、その和菓子でさえ、あんこの新しい作り方を思いつき、それを店に伝えて作らせたところ、驚くほど上品なあんこが出来上がった。あんこマスターを自認する俺にとってはうれしい限りだが、シディーは相変わらず頭痛に悩まされていて、辛そうだ。

見かねた俺は、休日にイリモと共に彼女を連れて都を出て、草原に向かった。都や屋敷にいてはどうしても多くの情報が入ってくる。なるべく何もない所に連れて行って、ゆっくりと休ませてやろうと思ったのだ。

まだ寒さの残るアガルタ。彼女を連れてきた草原は、一面の銀世界だった。俺は無限収納から大きなベッドを出し、雪の上に置く。そこにシディーを寝かせて結界を張る。当然その中には気温を一定に保つと同時に、極力外音も遮断する効果を付与していた。

「……どうだ、シディー？」

「……ありがとうございます。すごく、楽です」

ベッドに体を横たえた途端にグッタリとしているシディー。彼女は薄目を開けてぼんやりと真っ白な銀世界を眺めていた。

「……もうしばらくするとまた大地が揺れます。これから１０年間くらいは続きそうですね。３年後の……８月１４日の１２時ちょうどにダリスアン大陸で火山が噴火します。かなり大規模に爆発します……」

まるで預言者のようにブツブツと彼女は呟いている。俺はシディーの頭を優しく撫でながら口を開く。

「シディー。ちょっと寝たらどうだ……」

彼女は力なく頷き、ゆっくりと目を閉じた。俺は事前にフェアリに出してもらった鱗粉をシディーの周りに振りかける。しばらくすると彼女は小さな寝息を立て始め、スヤスヤと眠りについた。俺は彼

女の頬に手の甲を当てて、その寝顔をしばらく見つめていた。

1時間ほどで彼女は目覚めた。長い時間眠るよりも、1時間程度熟睡する方がシディーの体質に合っているらしい。彼女は目覚めると、ううーんと背伸びをして、コキコキと音をさせながら首を左右に動かした。

「よく寝た……。スッキリしました」

「よかった。シディー、あんまり無理するな。しばらくはこんな感じで、だだっ広い所で昼寝をすればいい。ちょうどここなら誰も来ないし、情報も入ってこないだろう。転移結界を張ってやるから、ここで休むといい」

「ありがとうございます。リノス様……私……」

「どうした、シディー」

「私、自分が怖いんです。何か……おかしくなりそうです」

「そうだな。いきなり覚醒したもんな。ドワーフ族にはよくあることなのか？」

「いいえ。聞いたことがありません。メイちゃんもドワーフの血が流れていますけれど、メイちゃんはこんな状態にはなったことがないと言っていました」

「そうか……一度、メイかローニに調べてもらった方がいいかもな」

「私……死ぬかもしれないです……」

「バカなことを言うな！」

「でも……私……」

今まで耐えてきたものがこらえきれなくなったかのように、彼女はポロポロと涙をこぼした。俺は大丈夫だといいながら彼女を優しく抱きしめた。いきなり頭の中に爆発的に色々な情報が流れ込んでくるのだ。それは辛いだろう。シディーの気持ちはわからなくはない。

「リノス様……私……ずっとお側にいたいです……。大好きです……」

「シディー……」

俺はしばらくの間、彼女の背中を優しく撫で続けた。

そろそろ夕方近くになり、シディーも落ち着きを取り戻した。さて、帝都の屋敷に帰ろうとしていたところ、俺の気配探知に反応があった。イリモにもそれが分かったようで、反応のあった方向を見つめている。ただ、俺にはこの反応に見覚えがあった。

「……ヤツは何をやっているんだ？」

草原の彼方から馬に乗った数人が、ゆっくりと俺たちのいる方向に向かっている。俺はシディーと共にイリモに乗り、その一団に向けて彼女を走らせた。

「やあ、君か」

「何をしているんですか？」

優雅に雪原を進んでいたのは、メインティア王たちだった。

「カナシリという村に古代の宝剣があると聞いてね。是非、見たいと思って出かけていたんだよ」

「相変わらず名物や宝物見物が好きですね」

「だって、楽しいじゃないか」

いつもと変わらず、ノホホンとした様子で彼は口を開いている。その様子をシディーはじっと見つめ続けている。

「ああ、シディーは初めてだったか？　フラディメ国のメインティア王だ。これは、私の妻の一人で、コンシディーです」

「ほう、これは顔立ちの整ったお妃さまだね。まだ幼い……なるほど、ドワーフなのだね。馬上にて失礼します。只今ご紹介にあずかりました、フラディメ・ロスカーノ・メインティアです。以後、お見知りおきを」

彼は馬上からシディーに対し、優雅なお辞儀をした。バカ殿だが、こうした行儀作法は実に見事にやってのける。何とも不思議な人だ。

いつものようにシディーも挨拶を返すのかと思いきや、彼女はじっとメインティア王を見つめている。

「……シディー、どうした？」

「……」

「シディー？」

「……お妃さま、私の顔に、何かあるのかな？」

メインティア王もキョトンとした顔でシディーを見つめている。彼女は目を上下左右に激しく動かしながら、ピクリとも動かずに王を凝視している。そして、ゆっくりと右手が彼女の懐の中に入っていく。そして、再び現れた右手には、ミスリルで作られた、彼女がいつも携えている護身用の短剣が握られていた。

「シディー、何を……」

「ヤァァァァー！！」

気が付けば彼女は短剣を向けてメインティア王に飛びかかっていた。

「うわっ！」

その予想もしていなかった行為に驚いた王が、馬から仰向けに落ちる。シディーは素早く王の胸の上に馬乗りになった。

「曲者ぉ！」

彼女の絶叫と共に、その両手に握りしめられた短剣が、メインティア王に突き立てられた。

第二百五十二話　悪夢

全ての事柄がゆっくりと、スローモーションを見るかのような動きで展開していった。

ものすごい形相で短剣を突き刺そうとしているシディー。目をカッと見開いたまま動けないでいるメインティア王。そして、ゆっくりとシディーに走り寄りながら彼女を取り押さえようとしているパターソンたち従者。

俺はイリモの上で動くことができず、ただ、その光景を見ることしかできなかった。

シディーの短剣がメインティア王に突き立てられた。その瞬間、パリーンとガラスが割れるような音が響いた。これは結界が割れる音だ。ああ、懐かしい。エリルに結界をブチ割られた時の音だ。その直後に衝撃と共に目の前が真っ暗になるんだった。俺の体が本能的に硬直する。

メインティア王に結界は張っていない。彼がその必要はないと頑なに拒否したのだ。ただ、そうは言っても一国の王であり、何もしないわけにはいかなかった。そこで、パターソンたちに俺が作った結界石を渡していたのだが、おそらくその石の張った結界が破られたのだろう。

俺の結界石はそんじょそこらのスキルでは破られない強度を誇るが、シディーも結界スキルを持っている。ましてや覚醒している彼女のことだ、結界石が張った程度のものは、易々と破れるのだろう。

結界を破ったシディーは、短剣を水平に構えて、それをそのままメインティア王の首筋に当てた。

「国王様ぁ！！」

何と、メインティア王の従者二人が剣を振りかぶっていた。その瞬間、俺はシディーに結界を張る。

パアァァァァーン

風船が割れるような音が辺りに響き渡る。剣はシディーの頭の上で止まり、もう一人の剣は、シディーの背中で止まっていた。二人とも確実に彼女の急所を狙っていた。結界が一瞬でも遅れていたら確実にシディーは死んでいただろう。

結界が張られているのを察したのだろう。パターソンたちは俺に視線を向けた。

「待て、お前ら！　シディー！」

俺はイリモから飛び降り、急いでシディーの許に向かう。

「シディー！」

「……」

彼女は短剣を王の首筋に当てたまま、何やら呪文のような言葉を呟いていた。その瞬間、王の周りから紫色の陽炎が沸き上がった。

「ユ……ル……サン……ゾ……。ユ……ルサ……ン……」

そんな言葉が聞こえたかと思うと、その陽炎は姿を消した。俺は結界を解除して、シディーを羽交い絞めにするようにして抱きかかえる。

「国王様！　お怪我は！　国王様！」

パターソンたちが素早く王を取り囲むようにして彼を介抱する。王はショックが大きいのか、目を見開いた状態で微動だにしない。

「はあ、はあ、ああ、はあ、はあ、ああ、うあああ」

肩で息をしながら、声にならない声をあげるメインティア王。その周りで彼の名前を必死で呼ぶパターソンたち。その光景を見ながら俺はシディーに声をかける。

「どうしたんだ、シディー。　何があった？」

彼女は持っていた短剣をポトリと落としたかと思うと、両手で頭を押さえて苦しみ始めた。

「痛い……頭が……頭が……逃がさない……逃がしては……」

「シディ！」

「うっ、ウェェェェェ～」

彼女は雪の上に胃の中のものを残らず嘔吐した。広い草原の中に響き渡る俺とパターソンたちの声。辺りは夕陽のために、真っ赤に染

まっていた。

夜になって、俺たちはようやくアガルタの都に到着した。シディーもメインティア王も、あれ以降ぐったりとしており、既に眠っているようにも見える。

「アガルタ王様……我々はここで……」

パターソンたちが話しかけてくるが、どこか余所余所しい。それはそうだろう。自分の主人が目の前で襲われたのだ。彼らとて、咄嗟のこととはいえ、シディーを殺そうとしたのだ。俺に対して複雑な感情を抱くのは致し方ないことだろう。

「今日はすまなかったな。ちょっとメインティア王が心配だ。すぐにメイかポーセハイを向かわせる」

「いいえ、お気遣いなく」

俺と一切目を合わすことなく俯きながらパターソンは答える。そんな彼に従者の一人が何やら小声で話しかけている。彼は悔しそうな表情を浮かべながら俯いた。そして、彼に話しかけていた男が前に進み出て、一礼をして口を開いた。

「アガルタ王様、ありがとう存じます。我が王のことも心配です。お言葉に甘えまして、どなたかに診察いただきますとありがたく存じます」

「わかった。ではすぐに向かわせる。しばらく待っていてくれ」

そう言って俺はその場を後にし、帝都の屋敷に戻った。

メインティア王の許にはメイとマトカルを派遣した。メイ一人でもよかったのだが、最悪のことを考えてマトカルにその警護を頼んだのだ。二人はシディーの振る舞いに驚きながらも、文句ひとつ言わずにアガルタに転移してくれた。

俺はシディーを部屋のベッドに寝かせ、明日の朝一番にローニかチワンに見てもらおうと話をする。彼女はゆっくりと頷くと、そのまま眠りについた。

俺は彼女の寝顔を見ながら考える。これは、どう考えても異常だ。シディーがいきなり人を襲うなどというのは考えられない。そう言えば、彼女は逃がさない……と呟いていた。メインティア王から立ち上った陽炎は、一体何だったのか。嫌な予感がする。

俺はフェアリを呼び、シディーに眠る粉を出してやるのと、しばらくその様子を見るように伝え、部屋を出た。そしてダイニングに降りて、リコとソレイユに今日のことを改めて話した。

「紫の陽炎……ですか？　精霊でしょうか？　ですが、紫の精霊は……聞いたことがありませんね」

ソレイユは困ったような顔をしながら、心当たりの精霊がないかを思い出そうとしている。結局、色々と考えてみたが結論は出ず、明日、シディーが暴れた場所にもう一度行って、ソレイユに精霊の有無を確かめてもらうというリコの提案に賛成して、その夜は眠りにつくことにした。

……久しぶりに一人で眠る夜だった。この日はマトカルだったのだが、彼女は結局アガルタに行ったまま帰ってこなかったのだ。そして、その夜、俺は夢を見た。

怪しげな老婆がゆっくりとやって来る。気味の悪い笑い声をあげながら、俺の許に近づいてくる。何がおかしいのか、その気味悪さに俺はその老婆を避けようと体の向きを変える。その瞬間、老婆の指が異様に長く伸びた。

俺は反射的にその攻撃を躱した。指が伸びたと思っていたが、それは爪であり、しかもそいつは確実に俺の心臓を狙っていた。

「何しやがる！　誰だ、お前は！」

「イヒヒヒヒ！」

相変わらず気味の悪い声で笑う老婆。彼女は両手の爪を伸ばし、俺を切り刻もうとするかのように襲いかかってきた。……凄まじいスピードだった。躱すのがやっとという速さだ。俺は隙を見て老婆に灼熱弾を放つ。しかしそれは彼女の体をすり抜けて彼方の空に飛んでいった。

「ヒヒヒヒヒー！」

とんでもない速さで彼女の爪が襲いかかる。俺は素早く結界を張る。

バキッ！　パキッ！　パキキキキキキー

攻撃は結界に阻まれていた。なおも彼女は俺の結界を破ろうと力を込めているらしい。結界が黒板を爪でひっかいたようなイヤな音を

立てている。

「ギシャー！」

老婆のものすごい叫び声が上がった瞬間、その爪が結界を切り裂き、そのまま俺の体を抉った。

「うぐあぁぁぁぁぁぁ！！」

あまりの痛みに思わず声をあげる。その瞬間に、目が覚めた。

「……夢か」

あまりのリアルさに息が上がっている。水でも飲もうとベッドから降りようと思ったその瞬間に、俺の体に激痛が走る。

「ッ！　なんだ？」

見ると、俺の胸の部分が引っかかれたようにズタズタになってる。そして、そこから血が滴り落ちていた。

「……これは……あの夢の……？」

思わずキョロキョロと周りを確認してみるが、誰もいない。気配探知や魔力探知を使ってみたが、おかしな反応はない。

俺はズタズタになっていた部分に回復魔法をかけた。傷は一瞬で治癒できたが、しかし、俺は、その夜は朝まで一睡もすることができなかった。

次の日、俺は休暇を取り、ソレイユを伴ってシディーが暴れた場所に向かった。そこで、彼女に様々なことを調べてもらったのだが、かなり長い時間をかけたにもかかわらず、結局、何もわからなかった。

夕方近くになって屋敷に帰ると、ローニがいた。彼女は既に戻って来ていたメイとリコと話をしている最中だった。

「おお、ローニ。シディーの様子はどうだ?」

彼女は俺を見ると立ち上がり、ぴょこんとお辞儀をして口を開いた。

「はい。先ほど診察しました。ちょっと食事をとられて、すぐまた眠られています」

「どこか、悪いのか?」

「何とも言えません。いま、リコ様とメイ様からお話を伺いましたが、ここ最近、慢性的な睡眠不足だったようですね。で、あれば、頭痛と嘔吐は頷けます。確かに、シディー様のひらめきはものすごいものがありました。それだけ頭に情報が湧き上がっているのであれば、頭痛を起こすのは自然なことです。今は相当お疲れのご様子ですので、熟睡するためのお薬をお飲みいただきました。薬が切れてお目覚めになってから、またお話を伺いたいと思います」

「そうか……シディーは大丈夫なんだな?」

「はい。今は十分な休養を取れば大丈夫かと思います。まず、今日一日は様子を見たいと思います」

「そうか、よろしく頼むな。あと、メイ。メインティア王はどうだった？」

「シディーちゃんと同じです。眠っておられます」

「そっちもか？」

「ただ、メインティア王は今朝お目覚めになったあと、突然お腹がすいたと、かなりの量の食事を召し上がられて、また眠られました。その後、お昼ごろに起きられて、また食事を召し上がって、眠られました。一応診察はしましたが、特に気になるような症状は見られませんでした」

「そうか。そっちも引き続き頼んでもいいか？」

「お任せください。また、明日の朝にでも様子を見に行きます」

「よろしく頼むな」

そんなことを言いながら、俺たちは夕食を食べた。シディーはいないものの、ペーリスの料理に舌鼓を打ち、相変わらずローニの大食いに皆が驚きつつ大爆笑するといういつもの光景がそこにあった。

前日、ほとんど眠れなかった俺は、早めにベッドに入った。今日はリコと一緒に寝る日だ。彼女のお腹もかなり大きくなってきた。もう男か女かは分かりそうなものだが、彼女は男だと断言して憚らない。何としても男の子をと気合が入っているが、もし女の子だったら……と考えても仕方がないことを考えてしまう。

リコは相変わらず、俺の腕枕で眠る。彼女は左腕の腕枕がお気に入りだ。いつもながら、リコを抱きしめていると本当に癒される。そうした満ち足りた気持ちのまま、俺は眠りにつくことができた。

そして、その夜も、夢を見た。

「とうたーん」

背後から俺を呼ぶ声がする。振り返るとそこにはアリリアがいた。

「うおーい、アリリアー」

「だっこー」

「おいでー」

両手を上げてパタパタと走ってくるアリリア。俺は彼女を抱きかかえて抱っこをする。いつもは俺の腕の中でキョロキョロとあたりを見回すのだが、この時は違った。俺の首に手をまわして抱きついたままだったのだ。

「どうしたーアリリアー」

「とぉうたぁぁぁぁぁん」

ふと見ると、アリリアの口が耳まで裂けていた。そして開かれた口の中には、鋭い歯が生えていた。

「アガッ！」

俺の肩口に噛みつこうとしたアリリアの首を右手で掴む。ものすごい力で俺に噛みつこうとしているアリリア。俺は右手にさらに力を籠める。

「何……者……だ」

「ガァァァ……ウゴアアアア」

獣のような鳴き声を上げながら化け物は尚も俺に噛みつこうとしている。既にアリリアの顔ではなく、鋭い歯を持った気味の悪いトカゲのような醜悪な顔になっている。

「昨日もお前の仕業か！　なぜ俺を狙う！」

「ゴ……ゴアアア……」

「答えろ！」

「……キサマハ、イツデモ、コロセル」

「何だと！？」

俺はさらに右手に力を入れて、化け物の首を絞めあげる。おそらくこいつがメインティア王の陽炎の正体なのだろう。もしかしたら、シディーの一件もコイツかもしれない。化け物は相当苦しいらしく、既に声が出せないでいるようだ。

「……ノス。……ノス。リ……ノス」

化け物から聞き覚えのある声がする。これは……誰だ？　誰が化けているんだ？

そう思った瞬間に目が覚めた。

「リ……ノス。リ……ノ……ス……」

夢の声がまだ聞こえる。ふと見ると、そこには信じられない光景があった。

……俺の右手が、リコの細い首に食い込み、全力で締め上げていたのだ。

「うわぁぁぁぁ」

絶叫にも似た声と共に俺は慌ててその手を放す。リコは口を半開きにしたままぐったりとしており、ピクリとも動かないでいる。

「リコ！　リコ！　リコォォォォォォ！！」

真夜中の屋敷に、俺の絶叫が響き渡った。

第二百五十三話　封印

「ゴボッ、ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ！」

俺の叫び声をかき消すかのように、リコが激しくせき込んでいる。

「リコ！　リコ！」

「ハアッ！　ハアッ！　ハアッ！」

リコは俺に背を向けたまま激しく肩を上下させている。俺は思わず彼女の背中をさする。その時、俺の耳に聞き覚えのない声が聞こえる。

……サン。我ヲじゃまスル者ハ、ユルさん。……しメ。苦しメ……。

「誰じゃァコラぁ！　出てこい！　ブッ殺したらぁ！」

「ご主人様！」

怒りで我を失い、思わず大声を上げたと同時に、誰かに背中から抱きしめられる。振り向くと、メイの顔がそこにあった。その顔を見た瞬間、俺は無意識に口を開いていた。

「リコが！　リコを！　リコを！」

「落ち着いてください！　ご主人様、落ち着いてください！」

メイは、なおも俺を離さない。メイ、俺はいいからリコを……と言おうとした時、既にリコの傍にはマトカルが控えていた。彼女は俺の目を見て一度頷いた後、リコをやさしく抱えて部屋を出ていった。

「リコ、リコ、リコォォォォ」

「ご主人様、大丈夫です。大丈夫ですから」

俺はしばらくの間ベッドの上で号泣し、その間メイはずっと俺を抱きしめ続けた。

しばらくして落ち着いた俺は、メイに手を握られたまま、注意深く寝室を見回す。気配探知、魔力探知を最大限に高め、この部屋だけでなく屋敷の敷地全体にその範囲を広げていくが、怪しいものは一切引っかからない。

……おかしい。前回、自分の体が傷つけられた時は、眠っている最中、無意識に引っ掻いたのかと思っていたが、やはり違うようだ。しかし何故だ。確かに声は聞こえたのだ。何者かがこの屋敷に入り込んでいるのは確かだ。だが、この屋敷の敷地には結界が張ってある。家族に敵意を持つ者は何人たりと通すことはない。その俺の結界を破ったというのか？　で、あればどうやってそれを破った？　俺は混乱する頭の中で、必死になって考える。

「ご主人様」

メイの声で再び我に返る。

「リコ様のところに、参りましょう」

メイの落ち着いた、そして優しい口調に、俺はただ、頷くしかなかった。

メイに先導されて、俺はマトカルの部屋に向かう。扉を開けると、リコがベッドに寝ており、マトカルはエリルを抱っこしてその傍に控えていた。

「先ほどまで苦しんでおられたが、今は落ち着いて眠っている」

その言葉を聞いてメイがリコの脈を取り、呼吸を調べるなどしている。エリルはマトカルに抱かれたままじっとしている。どうやら眠っているようだ。そして、メイがゆっくりと頷くと、マトカルはエリルを起こさないように、小さな声で口を開く。

「エリルを、傍に寝かせてやりたいが……」

メイが再び頷く。マトカルはベッドの毛布の端をちょっと持ち上げ、その隙間にエリルを寝かせた。彼女はベッドに入った瞬間に寝返りを打ち、リコにピタリとくっ付いた。

俺はエリルの頭を撫でながら、メイに話しかける。

「メイ……リコは？」

「呼吸も脈拍も安定しています。顔色もよく、特に問題はないと思います。突然大声を上げられて、一体どうされたのですか？」

「……夢を見たんだ。アリリアを抱っこしたら、化け物になっていて……。俺に噛みつこうとしたので、思わず右手でその首を絞めた。

で、気が付いたら、リコの首を絞めていたんだ……」

「……」

メイもマトカルも何と返事をしていいのかがわからないという顔をしている。俺はその様子を見ながら、言葉を続ける。

「で、必死でリコの名前を叫んでいた時に声が聞こえたんだ。許さないだの、苦しめだの……。そうだ、その前の日も……」

「おーう、久しぶりなのらー」

「し……神龍様？」

突然部屋に真っ白な子供が現れる。一体なぜ神龍様が？　と皆がキョトンとなる。

「あの……シディーに言われて、お呼びしました」

部屋の扉の前でソレイユが申し訳なさそうな顔つきで立っていた。

「なぜシディーがソレイユに神龍様を呼び出させるんだ？」

「知りませんわ。何か大声がしたので、部屋を出ようとしたら、扉の前にシディーがいたのです。すぐに神龍様を呼び出すようにと言われたのです」

「何だそりゃ？　で、シディーはどこに行ったんだ？」

「知りませんわ。一階に降りて……ひゃっ！」

ソレイユが飛び跳ねるようにして部屋の中に入ってきた。そして、その後から幽鬼のような雰囲気を纏ったシディーが入ってきた。

「シディー……？」

よく見ると左手に鞘に入った短剣が握られている。これはおそらくいつも携帯している護身用の短剣だろう。そして、右手には小さな壺を持っていた。

「シディー……何を持っているんだ？　その壺は……？」

「ガライアの粉です」

「ガライア？」

「ご主人様、オリハルコンを削った時に出た粉塵に、ミスリルを削った粉塵を混ぜたものです」

メイが小声で説明してくれる。そんな俺たちをぼーっとした表情で眺めていたシディーは、抑揚のない声で口を開いた。

「……神龍様もおいでですね。ソレイユ、ありがとう。では、神龍様、リノス様、お力をお貸しください」

そう言ってシディーはゆっくりと廊下を歩きだした。

慌てて俺たちは彼女の後ろを追う。シディーはゆっくりと俺の寝室に入っていった。

部屋に入ると、シディーは部屋の壁をじっと睨んでいた。そして、その状態のまま、相変わらず抑揚のない声で俺たちに声をかける。

「神龍様、こちらにお越しください」

「お、おーう」

「リノス様は、こちらに」

彼女の指示に従って、俺たちは移動する。そして、神龍様と俺がシディーの左右を固めるような態勢が出来上がった。

「おーう、なんら？　これは？」

神龍様が首をかしげている。俺には全く見えないが、神龍様はシディーと同じく壁を凝視している。

「恐れ入りますが、これが見えるようにしていただけませんでしょうか？」

「うん？　おーう、これは念霊（ねんりょう）らな？　うーん。どーれ」

神龍様が顎とクイッと上げる。すると、壁の前に、シミのようなものが浮き上がってくるのが見えた。

「リノス様。このシミに結界を張ってください。一切の空気も通さない強力なものお願いします」

「おっ、おお」

シディーに言われる通り、俺はその壁に向けて強力な結界を張る。
空気の粒子すらも通さない結界だ。その様子を見ながらシディーは、左手に持った短剣を小脇に抱え、右手に持った壷の中から銀色の粉末を取り出して、何やら呪文のようなものを唱えながら、そのシミの部分にパラパラと振りかけた。

「うわっ！　なんじゃこりゃ！」

思わず声が漏れた。何と、結界の中に四角い顔で、顎のしゃくれた壮年の男の姿が現れたのだ。その周囲を、先ほど振りかけた粉が雲のように浮いている。

「だっ、誰だ、お前は……？」

「……」

結界内に浮かびあがった男は、目を閉じたまま立ち尽くしている。

「うーん、惜しいのら。もう一息であったのらー」

神龍様がノホホンとした口調で口を開いている。

「し……神龍様、惜しいとはどういうことでしょうか？」

「この者の正体は、精霊になる一歩前の姿ら」

神龍さまによると、高位のスキルを持つ者が死んだとき、その肉体は滅びても、魔力や念などがこの世に残ることがあるのだという。そうしたものを念霊（ねんりょう）と呼ぶのだそうだ。

「惜しいのらー。善なる心を持っておれば精霊に昇華できたのらがな。この者は憎しみが残っておる、いや、純粋な憎しみらな。そのために、精霊にはなれなかったのらー。しかし、珍しいのらー。邪な念霊はすぐに滅びるものなのらがな。……うん？　しかも、こやつは？」

神龍様は、まじまじと結界に閉じ込められた男を見ている。

「ええ、思念を操ることができます」

口を開いたのはシディーだった。

「珍しい事例です。邪な念霊ですが、そのあまりの憎しみの強さで、この世に残り続けたのでしょうね。しかも、半分精霊化して、人に思念を向けて操ることができるようになっています。かなり厄介な相手です」

淡々とシディーは語る。その様子を神龍様は満足そうに眺めながら頷いている。

「我も、初めて見たのらー。珍しいものを見たのらー」

「シディー？」

「リノス様、この念霊は、魔力探知と気配探知には反応しません。それに、リノス様の結界では、この存在を防ぐことは出来ません。言ってみれば、人の念の塊ですので、実体がないのです」

「じゃあ、どうするんだ？　このまま……」

「封じ込めます」

「何？」

シディーは短剣を鞘から抜き、その刀身を念霊（ねんりょう）に向けて、何かの呪文を唱え始めた。

「ガッ……おノれ……わレは……ゆるサぬ……ユル……」

目を閉じていた男が、いきなり目をカッと明けて、何やら抵抗している。しかし、その姿は少しずつ薄くなっていく。ふと見ると、シディーの短剣が紫色に輝いている。彼女はその刀身に、先ほどの壺から粉を振りかけていく。

「神龍様、お力をいただけませんか？」

「おーう。封じ込めるのらな？」

神龍様が紫色の刀をじっと見ると、そこがみるみる白い光に変わっていった。シディーはゆっくりとその刀身を俺に向ける。

「リノス様、先ほどの強力な結界を、この刀身に張ってください」

「あ、ああ」

俺は言われるがままに先ほどの結界を張る。すると眩しいくらいに発光していた刀身から光が失われ、それを確認したシディーは、ゆっくりとその刀を鞘に納めた。

「ありがとうございます。無事にこの短剣に封じ込めました」

「どういうことだ、シディー？」

「この短剣には鹿神様の加護が付与されています。そこに神龍様のお力と、リノス様のお力。そして、及ばずながら私の力を付与して念霊（ねんりょう）を封じ込めました。その力を発揮しようとすればするほど、強力な結界が張られますので、もう、思念で人を操ることは出来なくなりました」

「一体、何者だったんだ？　こいつは？」

「メインティア王に関係があるみたいですね」

「メインティア王？」

「はい。元々この念霊（ねんりょう）はメインティア王に憑りついていました。あまりにも邪悪な気配と殺気を放っていましたので、調伏しようとしましたが、思った以上に強力でしたので失敗してしまいました。でも、もう大丈夫です」

「何であのバカ殿に？　まさか……水子の霊か何かか！？」

「いいえ。そんな生易しいものではありません。これはかなり……かなり……」

「シディー、どうした？」

「かなりの憎しみが……ウエェェェェェ～」

シディーは再び胃の中のものを吐き出し、寝室の床を派手に汚した。

第二百五十四話　神の一言

夜が明けた。丸2日間、ほぼ寝ていないので、ちょっと体がだるい。

俺はダイニングのテーブルに腰かけ、目の前で朝食？　を食べる神龍様の姿を呆然と眺めている。このお方はなんと、屋敷にある全てのカステラとケーキを片っ端から食べているのだ。カステラなど、まるでポ〇キーを食べるかのように頭からかじりついて、むしゃむしゃと食べている。

「うまいのらー。このかすてらも、気に入ったのらー」

ご満悦の神龍様だ。見ていてちょっと気持ちが悪いが、俺のすぐ隣には、なまめかしいパジャマ姿のソレイユが座っている。上から何か羽織ればいいのに、寒いと言いながら、ピタリと俺に体をくっ付けて寄り添っているために、それが俺の目を覚ましてくれている。

シディーは俺の部屋で派手に嘔吐した後、メイたちに抱えられるようにして部屋に連れて行かれた。昨日は眠るための粉を吸い込んで寝ていたところを俺の大声で無理やり起こしてしまい、半覚醒の状態だったらしい。今、彼女は再びフェアリが出した粉で眠りについている。

「ご主人様……」

後ろで声が聞こえる。振り向くと、そこにはメイがいた。

「リコ様が……お目覚めになりました」

「わかった」

俺は深呼吸をして立ち上がる。そして、神龍様をソレイユに任せて、メイと共にゆっくりとリコがいる部屋に向かった。

歩けばそれこそ、３０秒もかからずに行くことができる距離だが、今日の俺にはとても遠くに感じる。シディーが封印した念霊（ねんりょう）に操られていたとはいえ、俺はリコの首を絞めたのだ。しかも、あやうく死ぬところだったのだ。リコは俺に愛想を尽かすだろうか。誠心誠意謝って、もし、それでも許されないのならば、彼女の決断を受け入れるしかない。

そんなことを考えていると、部屋の前に着いた。やっぱり足が止まってしまう。そんな俺をメイは優しく促し、俺は意を決して扉を開けた。

ベッドの上にリコはいた。その隣でマトカルがエリルを抱っこしている。俺に気が付いたエリルは、マトカルから降り、飛び跳ねるようにして俺の所に走ってきた。

「とうたーん」

「エリルー」

彼女を抱っこしてやると、まだ眠いのか、俺の肩に顔をスリスリとしている。俺は彼女を抱えたまま、ベッドの横の椅子に腰かける。

「リコ……」

「……」

彼女はじっと俺の目を見つめている。なかなか言葉が出て来ずに、しばらく沈黙が流れる。

「……リコ様の体調は、問題ありません。おなかの赤ちゃんも、順調です」

メイがフォローを入れてくれる。

「リコ……その……無事で、何ともなくてよかった。お腹の子供も……よかった」

リコはゆっくりと視線を自分のお腹に落とし、愛おしそうにそのふくらみを撫でた。

「リコ……本当に、すまなかった……」

俺はゆっくりと頭を下げる。

「別にリノスが謝る必要はありませんわ」

不意にリコの声が聞こえる。俺は思わず顔を上げて彼女の顔を見る。リコはまっすぐな瞳で俺を見つめている。

「もう、念霊（ねんりょう）……ですか？　それは退治したのですか？」

「ああ。シディーが上手く封じ込めてくれた」

「それなら、もう、大丈夫ですわね」

「リコ……その……いいのか？」

「何がですの？」

「俺は……リコを殺そうとしたんだぞ？」

「思念……ですか？　操られていたのでしょう？　それは、仕方がありませんわ。むしろ、鉄壁を誇るリノスの結界を掻い潜ったのです。その念霊（ねんりょう）を褒めるべきですわ」

「リコ、それでも……」

「リノス」

リコが真剣な眼差しで俺を見つめている。俺はゴクリと唾をのんで、次の言葉を待つ。

「あなたに殺されるのであれば、私は本望ですわ」

「え？　なに？」

「リノスに殺されるのであれば、本望です。どうせ死ぬのであれば、あなたの手で、この命を終わらせたいですわ」

「リコ……」

「ただ、そうは言っても、一つだけお願いがあります」

「お願い？」

「せめて……このお腹の子が……。この子だけは、何としてでも産みたいのですわ」

「リコ……」

俺は左腕のエリルを抱っこしたまま、右手でリコを抱きしめた。何と幸せな言葉だろうか。このまましばらく、この幸せな時間を味わっておきたい……。

「おなかすいたー」

エリルの一言で、現実に戻されてしまった。俺はエリルの顔を見つめる。彼女は恥ずかしそうに、俺の腕を抜け出し、そのままリコのベッドに倒れ込んだ。その様子を見たリコは、いつもの笑みを浮かべて口を開いた。

「さあ、エリル、リノス、食事にしましょう！」

その笑顔は驚くほどに美しく、可愛らしかった。そんなリコの体からは、後光がさしているように、俺には見えた。

その日の夕方、俺はシディーを伴ってメインティア王の部屋を訪れていた。突然来訪したためにパターソンたちは目を丸くして驚いている。実は、俺自身も驚いているのだ。

その少し前、アガルタの執務室で仕事をしていたら、突然シディーがやってきた。よく寝たせいか、いつもより元気に見えるが、それ

だけに絶好調だったのだろう。いきなりこれからメインティア王の所に行きたいと言い出した。

俺は相手の都合を確認しようとしたのだが、シディーは今すぐにと言って聞かない。結局俺はその理由を聞くことなく、スタスタと王の部屋に向かって歩く彼女の後ろを付いて行く他なかった。そして、部屋に着くなり彼女は、挨拶もそこそこに、メインティア王に向かって口を開いた。

「フラディメ国で何があったのでしょうか？　メインティア王様、あなたは、凄まじい憎しみを持った念霊（ねんりょう）に憑りつかれていました。今は短剣に封じ込めていますが、きっといつの日かこの封印は破られるでしょう。リノス様が亡くなれば……この封印も解けてしまいますから。この念霊（ねんりょう）を再びこの世に放つことは、フラディメ国にとっても、世界の国々にとってもよろしくありません。できれば、この念霊（ねんりょう）を慰撫することが必要だと思います。王様、ここに封じ込められている、四角い顔をした男は、一体誰なのですか？」

シディーの話を聞いた直後から、明らかにパターソンたちが動揺している。しかし、メインティア王はいつもの柔和な笑みのまま、ゆっくり口を開いた。

「四角い顔……。キャバレットの叔父上かな？」

「キャバレット？」

「わが父、大上王の弟だ。そうか、キャバレットの叔父上か……」

「そのキャバレット様は、何故、半精霊化するほどの憎しみを持たれているのですか？　一体、フラディメ国で何があったのですか？」

シディーの問いかけにメインティア王は答えず、目を閉じて、静かに何かを思い出している。

「叔父上様は……。蹴鞠の名手でね。芸術を愛する御方だった。我が父とは真逆の方だったが、それでいて二人の仲はよかった。父の右腕と呼んで差し支えなかった」

「では、なぜ、そのようなお方が……」

「詳しくは私もわからないんだ。パターソンたちは何か知っているかもしれないけれどね」

王はゆっくりと後ろを向いてパターソンたちに視線を向ける。彼らは一斉に王から目を逸らした。

「いくら聞いても、知らないと言うのだよ。知らないものを教えろとは言えないからね。ただ、私が聞いているのは、叔母上がお亡くなりになった直後に叔父上は狂われて、まだ幼かった息子のグレゴーンを手にかけ、その後でご自分で命を絶たれたということだ。確かに叔父上と叔母上は仲が良かったからね。私は叔母上も好きだったし、従弟のグレゴーンとも仲が良かったから、その話を聞いた時はさすがに大きな衝撃を受けた」

メインティア王は何かを思い出すかのような遠い目をして、しばらくの間沈黙する。そして、再びゆっくりと口を開いた。

「そうか……叔父上が私に憑いていたのか。しかも、憎しみを持って……。叔父上に恨まれる覚えはないのだけれどね。一体なぜなのだろう。できれば、叔父上に会って話がしてみたいね。王妃様、そ

の……叔父上が封じられている短剣……は、どちらにあるのかな？」

「さる場所に祀ってあります」

「それをいただいても？」

「強力な結界で封印しているので、お目にかかることは難しいと思います。まずは……」

シディーは目を閉じ、左手の人差し指と中指を額に当てて何かを考えていた。そして、ゆっくりと顔を上げ、メインティア王に向かって口を開く。

「まずはこの念霊（ねんりょう）を慰撫することが先決ですね。それをどうするか……」

「なるほど。それならば私に任せてもらおう」

「何かお心当たりでもおありですか？」

「ああ。私に一つ、考えがある。叔父上の件は私に任せてもらおう」

いつになく自信満々のメインティア王。その姿を、シディーは無表情で眺めている。俺は、何か厄介ごとが起こりそうな予感に、軽い頭痛を覚えるのだった。

第二百五十五話　念霊慰撫

「ふう～」

メインティア王の部屋を出た直後、俺はため息を漏らしていた。その様子をシディーが不安そうな顔をして見ている。大丈夫ですかと心配する彼女に、俺は手で制しながら、ゆっくりと廊下を歩きながら口を開く。

「実は大上王に鑑定スキルを使った時にな、見えていたんだ。弟を殺せと命じていた場面が」

「え？　どういうことですか？」

「うーん。二人で国のことで議論を交わしていてな。それで、弟の方が大上王の命令は聞かれないと言ったんだ。大上王はかなり悩んだが、結局、国のために弟を殺す決断をしたんだ」

「何という……兄弟なのに……」

「いや、王には多かれ少なかれ、そういう後ろ暗い部分はあるものだ。あの大上王はまだそういった部分は少ない方だ。むしろ、そうしなければ国が立ちいかない状態だったんだ。ただ、あの爺さんは一度決断したことはすぐに実行するからな。弟と腹を割って話し合うこともなく、いきなり殺してしまっている」

「それでしたら、あの念霊（ねんりょう）がメインティア王に憑りついていた理由がわかる気がします。おそらく、あの王様を堕落させて、最終的に

フラディメ国を滅ぼすつもりだったのでしょう」

「なるほどな。しかし、あの念霊（ねんりょう）の憎しみは相当なものだ。あれを慰撫するのは、かなり難しそうだぞ？」

「はい。しかし、メインティア王は自信満々のご様子ですし、今回は、あの王様にお任せしてみれば……ッ」

シディーは両手でこめかみを押さえて、グリグリと揉み始めた。やはり何か考えを巡らせると頭痛がするらしい。

「シディー。大丈夫か？」

「はい……。すぐに収まると思います。あの……リノス様」

「何だい？」

「一度、ニザ公国に帰ろうと思うのですが、お許しいただけますでしょうか」

「どうした？」

「鹿神様にお目にかかってこようと思います」

「鹿神様に？」

「はい。この頭痛と吐き気のことを相談をしたいのです。これまで鹿神様のご加護のお陰で、ほとんど体調が悪くなることはなかったのですが、今回はかなり深刻に思えます。一度、鹿神様に……」

「そうだな。メイやローニとも相談して、早いうちに鹿神様の許に行くといい。俺も付いて行くよ」

「そんな……申し訳ないです」

「いや、いいんだ。それに、シディーは頑張り屋さんだから、辛いことやしんどいことは言わないだろう？　俺にできることがあれば何でもするから、遠慮なく言ってくれよ？　シディーは大事な家族だ。鹿神様のお知恵を借りながら、体調が戻るようにやっていこう。あと、おひいさまのところにも相談に行ってもいいかもしれないな」

「ううう……リノス様……」

「泣くなシディー。さあ、帰ってメシにしよう」

そう言って俺たちは、屋敷に戻った。

そして、次の日の夕方、アガルタの執務室で仕事をしていると、思いがけない人物が訪ねてきた。

「いや、仕事中にすまないね」

「メインティア王!?　いきなり、どうしたのですか？」

「うん。叔父上の魂を慰める品が出来上がったんだ。叔父上が封印されている場所に連れて行ってもらえないだろうか」

「今から、ですか？」

「早いほうが良くないかい？」

訝る俺に、後ろに控えていたパターソンが申し訳なさそうに口を開く。

「恐れながら……。我が王におかれましては、昨夜以来、不眠不休で作業をしておられまして……。出来ますれば、すぐにでもキャバレット様の魂を慰撫して差し上げればと思いまして……」

「昨日から不休不眠？　であれば、一旦休んで明日の朝でもよくなくないか？」

「いや……その……」

パターソンは言いにくそうな顔で俺から視線を逸らせる。その直後、メインティア王の、のほほんとした口調が耳に入った。

「実は明日は、ノレーンに替わる新しい女が本国からやってくるのだよ」

「なに？　と……いうことは……？」

俺は目を見開いて驚く。まさか、明日、女が到着するので、それまでにこの問題を片づけておきたいと言い出すとは思わなかった。何とも自分勝手な話だ。

そんなことを考えていると、メインティア王が柔和な笑みのまま、俺に近づき、小声で話しかけてきた。

「そういうことにしておいてくれ。パターソンも父から口止めされ

ているらしくてね。詳しいことは言えないみたいなんだ。しかし、パターソンは一刻も早く叔父上を慰撫しないといけないと言うんだ。彼の立場もわかってやってくれないか？」

王の表情はいつもと変わらないが、纏っている雰囲気が少し違っている。まさか、念霊からの支配が解けて、本性が現れ始めているのだろうか。もしかしたらコイツは、有能な男なのかもしれない。そう直感した俺は、王にその慰撫を任せてみることにした。

「……わかりました。ちょっと待っていてください。ここではなんですから、部屋に戻って待っていてください」

「わかった。いつもすまないね」

メインティア王はにこやかな笑みを湛えたまま、パターソンたちを伴って部屋を後にした。

俺はすぐさま屋敷に転移し、シディーの部屋に向かう。ちょうど彼女は自分の部屋でベッドに寝たまま、メイとローニと話をしていた。俺は部屋に入るのをためらったが、構いませんというシディーの言葉に促されるような形で、彼女たちにこれまでの顛末を話す。

「シディー。すまないが、念霊を封印してある短剣を、アガルタまで運んでもらえないだろうか？　メインティア王が慰撫できるものを作ったので、試したいんだそうだ」

「わかりました。メイちゃん、ローニさん、またあとで話を聞かせてください」

そう言ってシディーはベッドを降りて、部屋を出ていく。そして、

向かった先は、屋敷の応接室だった。ここにその短剣が収められているのだ。基本的に来客がない限りは、この部屋は使われることはない。今のところは、物騒なものを保管するのにはうってつけの場所だ。さらに、俺たちが住んでいる建物から離れているという点も、この部屋を選んだ理由の一つだ。

俺は、念には念を入れてこの部屋全体に結界を張っていた。それを解除して、俺たちは部屋に入る。念霊（ねんりょう）が封印されている短剣は、テーブルの真ん中に無造作に置かれていた。そして、シディーは何のためらいもなくそれを掴み、自分の懐に入れた。それを確認した俺は、その場からアガルタの迎賓館に転移した。

「おおっ！　早かったね！」

部屋に入るなり、メインティア王は、うれしそうな顔をして俺たちに近寄ってきた。

「叔父上が封印されている短剣はどれかな？」

「こちらです」

シディーは懐から短剣を取り出して、王に渡す。彼はそれをまじまじと見て、再び俺たちに視線を向け、口を開く。

「中をあらためても？」

コクリとシディーが頷く。彼はゆっくりと短剣を鞘から引き抜いた。

「見たところ何の変哲もない短剣だが……。アガルタ王と王妃様が

言うのだ、間違いはないだろう。……よし」

彼は抜きはらった短剣をテーブルの上に置き、スタスタと部屋の奥に歩いて行くメインティア王。しばらくして、彼は自分の背丈ほどもある大きな額縁を抱えて戻ってきた。

「私の力作だ。我ながら、最高傑作だと思うよ」

そう言って彼は額縁をクルリと回転させた。

……まるで、今にも動き出すのではないかと思われるような、見事な人物画がそこにあった。微笑みを湛えながらまっすぐにこちらを見ている気品のある夫人と、その隣には、これまた賢そうな顔だちをした少年が描かれている。おそらくこれが、キャバレットの妻と、その子供なのだろう。

あまりの絵の見事さに、しばし我を忘れて見入っていると、テーブルの短剣が小刻みに震えていることに気づいた。俺はとっさに結界を張ろうとしたが、その時、シディーが俺の右手を掴んで、その動きを止めに入った。

「シディー」

「リノス様、ご覧ください」

シディーの視線の先を追うと、何とそこには、封印したはずの、あの四角い顔の男が浮かび上がっていた。そして、その周囲にシディーが封印の時に使った粉が、らせん状に浮かび上がり、まるで念霊（ねんりょう）を閉じ込めているかのように纏わりついている。

「……てぇあ。……ミーティア。……グレゴーン。ミーティア、ミーティア……」

「リノス様……。あの念霊（ねんりょう）に鑑定スキルは使えませんか？」

シディーの言葉に我に返った俺は、コイツに鑑定スキルを発動させてみる。しかし、いつもはスムーズに映像が脳裏に浮かび上がってくるのだが、今回はなぜか、断片的な映像しか浮かび上がってこない。俺は意識を集中し、さらに魔力を込め、この念霊（ねんりょう）に魔力を纏わりつかせるようにして、あらためて鑑定スキルを発動させてみた。そして、ようやくこの男の過去を見ることができた。

……それは、とても悲しい過去だった。

第二百五十六話　化け物の正体

フラディメ・ロスカーノ・キャバレット。リボーン大上王の実弟にして、大上王が全幅の信頼を置いた人物である。この二人の兄弟は、性格も、好みもまるで正反対でありながら、互いの足りない部分を補いながら、現在のフラディメ国の隆盛を築き上げた。

この兄弟の若き時代は、苦難の連続だった。父王の長男と次男として生まれたこの二人は、同腹ということもあり、同じ屋根の下で育てられた。幼い頃から学問好きで真面目一徹の兄に対して弟は、華やかなものを愛する、芸事好きな少年であった。

そんな二人は、父王が亡くなった直後から、その生活が一変する。

本来であれば、長男であるリボーンが王の位に就くのが筋なのだが、結果的に王位を継いだのは、彼らの弟である三男だった。彼らの母親は側室であり、しかも身分が低かった。対して、三男の母親は王の正室であり、当然その出自は貴族の名家であった。さらには、敬虔なクリミアーナ教の信者ということもあり、実家と教国の全面的な支援を受けた三男が王として即位することになったのだった。新しく即位した王はわずか3歳であり、その側近たちは兄弟を疎み、彼らをフラディメ国の僻地に追いやった。リボーン１４歳、キャバレット１２歳のときだった。

二人が追いやられた土地は悲惨だった。痩せた土地で収穫できる作物は少なく、さらには多くの魔物が折に触れて土地を荒らしていた。それだけでなく、伝染病も蔓延し、もはやそこに暮らす人々に生きる希望すら見いだせない状況であったのだ。

そんな状況下であったが、リボーンは持ち前の勤勉さと我慢強さで、土地の地質調査をはじめ、その地に適した作物を必死で見出していった。それと同時に、侵攻してくる魔物に対しては、弟はもちろん、その土地や流浪の冒険者や騎士たちの手も借りながら、自らも先頭に立って戦いに赴き、少しずつその支配地域を広げていったのだった。

一方でキャバレットは、持ち前の芸術センスを生かして、絵を書き、歌を歌い、音楽を奏でて民衆を慰撫し続けた。中でも、父王から受け継いだ、この国に伝わる蹴鞠のセンスは群を抜いており、その曲芸的な毬さばきは、見るものに感動すら与えたのだ。

貧しい土地と魔物、そしてリボーン自らも感染し、苦しんだ伝染病と格闘すること１０年。ようやく領内に落ち着きが見られ始めた矢先に、弟王がわずか１３歳でこの世を去った。まだ年若かった王には当然、後継ぎはいない。いろいろと紆余曲折はあったものの、僻地での領土経営の手腕が認められる形で、兄であるリボーンがその後継に指名されることになったのだった。

しかし、リボーンが即位しても、兄弟の地位は危ういものであった。まだまだ前王の側近と、クリミアーナ教国の影響が強い中での領国経営は、困難を極めた。そして、それを契機と見た家来が反乱を起こす……。兄弟の命運は最早尽きたかに見えた。

しかし、この国難を乗り切ったのがキャバレットだった。彼は小柄な兄と違って生来大柄であり、成人する頃には身長が１８０センチを超えていた。彼はこの恵まれた体躯を生かして、戦場で暴れまわったのだ。

平時でもキャバレットの姿を見ると、腕に覚えのある者は、喧嘩を吹っ掛けられてはかなわぬと、皆、路地に隠れ、家に逃げ帰る程の威圧感があった。そんな彼が戦場で、槍を振るって猛然と突撃していくと、みな彼を恐れて逃げ惑うのだ。そのために彼は多くの首を獲り、得意げに戻ってくるのだった。こうした彼の活躍があって、フラディメ国は一応の平定をみることができた。

その後、リボーン王は持ち前の知識と教養、そして、これまでの経験を基にして、独自の思想体系を築くに至り、その思想でもって政治をし、国全体をその思想で染め上げようとした。それはいわゆる儒教の思想に似たものであり、人に対して思いやりを持つことを説き、損得にとらわれずに、人のなすべきことを説いた。そのうえで、それらをどのように行動に移すのかを説き、具体的な慣習や礼儀を細かく定めた。そして、学問を奨励し、誠実であることを繰り返し説いたのだ。

家来をはじめとして、このあまりに厳格な思想は息が詰まるものだった。それをうまく中和していたのが、キャバレットであった。彼は王弟という立場を利用して、折に触れて国の民を慰安する催しを開いた。彼は戦場においては鬼神のごとく暴れたが、生まれつき徳性を備えており、義に厚く人に好かれる人物だった。そのため彼は、王の側近として重きをなし、ともすれば独裁に走りがちな兄を掣肘する役割を担っていた。頭脳明晰で決断力に優れた兄と、人徳があり粋な弟。この二人が組み合うことで、フラディメ国は、建国以来の隆盛を極めることにつながっていく。

しかし、そうした関係はある時、突然終わりを告げる。

ある時、発生した長雨の影響で大洪水が起き、そのために領内の作物は壊滅状態となった。領内は飢餓地獄となり、食料を配らなけれ

ば、領民の多くが餓死してしまう。しかし、それに待ったをかけた人物がいた。前王の側近たちだ。

「我ら王族や貴族が飢えているのに、領民に食料を配るとはどういうことだ！　領民は牛馬のようなもの。雑草や木の根でも食わせておけばよい！」

彼らは平然とそう言い放った。しかし、放っておけば領民は死に絶え、国が亡ぶのは明白だった。ここに至って、リボーン王は決断した。

――言うことを聞かない家来は殺す。

彼の行動は速かった。強欲で領民を苦しめた者や、ぜいたくな生活を送る者、遊びにうつつを抜かす者……そうした者を見つけ出すために、密偵を使って家来を監視し、そういった者を次々とアリスン城に呼び出しては査問し、時には殺した。そうして罰した者の財産を全て没収し、それらを他国からの食料の調達に当てたのだ。

当然、その対象は、キャバレットにも及んだ。彼はアリスン城に呼び出され、兄王の前で堂々と自分の考えを述べた。

「兄上！　何も私はぜいたくをしているわけではありませんぞ！　人は楽しみがなくては生きては行けません。この国難のときだからこそ、領民を慰める歌や音楽が必要なのです。歌や音楽、蹴鞠を辞めろという兄上の命令は聞かれません。何より、こうした芸術を否定するのは愚かなことです。まあ、お任せください。このキャバレットが、領民の心を慰撫してみせます」

キャバレットは、カラカラと笑い声をあげ、大きな体をゆすりなが

ら部屋を後にした。彼にしてみれば、兄のリボーンとは分かり合えているつもりであった。しかし、自分の背中に鋭い視線を投げかけている王は、既にキャバレットの知っている兄ではなかった。彼は信念を持って粛清を始めていたのだ。しかも、その胸中には、一点のやましさもなかった。それが、どれほど恐ろしいことであるのか、その時のキャバレットにはわからなかった。

彼は城を出たその足でオービッゼの街に向かい、飢えに苦しむ領民に施しを与え、音楽を奏でて彼らを慰めながら、屋敷への帰路についた。

異変を感じたのは明け方だった。枕元に備えている剣を手に取り、傍で眠る妻のミーティアを残して彼は寝室を出た。ゆっくりと注意を払いながら庭に出ると、何やら不快な音が耳についた。

ふと頭上を見ると、夜明け前の空に、真っ赤な雨が降ってきているのが見えた。キャバレットが雨に見えたものは炎を纏った弓矢であり、それらは吸い込まれるように屋敷の屋根や壁に突き刺さり、一瞬のうちに屋敷を火の海に変えた。彼はすぐさま家族を守るべく、屋敷に向かおうとした。だが、その瞬間を待っていたかのように、彼の背中に夥しい数の弓矢が突き刺さる。そしてその直後、鎧を装備した兵士たちが雪崩を打って屋敷に殺到し、彼は奮戦むなしく、兵士たちの槍に貫かれてその命を散らしたのだった。

……気が付いた時には、空を飛んでいた。ふわふわと漂うように宙に浮いていたのだ。不思議な気持ちになりながらも、ふと、これまでの事を思い出した。自分は兵士の槍に貫かれて死んだのではなかったのか。そういえば、あの炎は……そこまで考えた時、彼の目に映ったのは、真っ黒に焼け焦げた屋敷跡だった。

「ミーティア！　グレゴーン！」

必死になって最愛の妻と息子の名前を叫ぶ。しかし、返事はない。するとその眼前に、焼け爛れて死んでいる人間の姿が目に入った。よく見るとそれは、小さな子供を抱きかかえるようにして焼け死んでいる妻と子の姿だった。

「隊長殿！　お妃さまとグレゴーン様が見つかりました！」

ふとそんな声が耳に入る。するとすぐさま、妻と子の遺体は兵士たちに囲まれた。

「……確かに、お妃さまとグレゴーン様だ。よし、この遺体を完全に消せ！」

兵士たちは二人の遺体を外に運び出し、そこに薪を積み上げて、彼らの遺体を燃やしたのだった。キャバレットはその一部始終を見ていた。そして、全てが終わり、愛する家族が完全に灰になったことを確認すると同時に、凄まじい憎しみを胸に宿していた。

「ミーティア……グレゴーン……何と言うことを……何と言うことを……あっ……兄上ぇぇぇぇぇぇぇ～～～～！！　許さん、許さんぞォォォォォォォ～～～～！！」

自分を襲った兵士は、間違いなくリボーン王の近衛師団の兵士たちであり、この襲撃を命じたのは、誰あろう兄自身であることは明白だった。彼は無念さと共に、その強烈な憎しみで兄を呪った。

そんなキャバレットの様子を見ていた者がいた。空気の精霊であるポープである。

彼女はこうした死んだ人間の魂を吸収することで、自身の力を強めることができた。彼女からしてみれば、こうした強い念を持つ魂は、さらに自分の力を高めてくれる要素となるために、何のためらいもなく、このキャバレットの魂を取り込もうとしたのだった。

しかし、それが誤算だった。

魂の姿となり果てても、キャバレットの持つ念の力は、ポープの力を遥かに凌駕していたのだった。結局ポープはその意思をキャバレットに乗っ取られ、彼は精霊として再びこの世に生を受けることになった。だが、完全にポープの体を取り込んだわけではなかったために、精霊としての体裁を整えることは出来ず、その前段階の念霊（ねんりょう）にとどまったのだった。しかし、空気の精霊としての能力は取得していたために、彼は自由に体の形を変え、空気に乗ってどこへでも行くことが出来るだけでなく、その念の力で相手を操ることもできるようになったのだった。

そして、念霊（ねんりょう）となった彼が、真っ先に向かった先はアリスン城だった。彼は考えた。どうすれば兄王が最も苦しむであろうかと。そう考えた時に思いついたのは、甥のメインティアの事だった。聡明で、兄王が最も期待をかけているこの王子を堕落させることで、兄王は苦しみ、そして、この国も亡ぶことになる。こんな国は滅んでしまえばいい。滅ぶべきなのだと思いながら、彼はアリスン城に向かった。そして、空気を通じてメインティア王の体内に入り込み、彼を操ったのだった。

「……と、いうのが、このキャバレットのこれまでだ」

俺はゆっくりと息を吐きながら、鑑定スキルで見た、この念霊（ねんりょう）の過去を話す。メインティア王は一切表情を変えることなく俺の話に聞き入り、パターソンたちは唇をかみ、俯きながら話を聞いていた。

「知っていたかい？　……どうも、そのようだね」

メインティア王は後ろに控えるパターソンたちに視線を向けて口を開いた。そして、再び目を閉じて天井を向き、何かの物思いに耽るようなポーズを取った。

「父を、大上王を責めるべきではないね」

彼は目を閉じたまま、そんな言葉を呟いた。パターソンたちの視線がゆっくりとメインティア王に注がれていく。彼は再び目を開け、苦虫を噛み潰したような顔をして、口を開いた。

「王も貴族も領民も人間としては同じ。慈しまねばならぬ……というのは父の口癖だが、それを具現化するために、父はこんな過酷な恐怖政治を行ったのだろう。父は多くの人間を処刑し、その政治によって何万という民を飢えから救った。父は叔父上とは違って、どこまでも現実的だった。いや、現実的にならざるを得なかったのだろう。父は、私のように、幸運な時代の生まれではなかったからね」

そう言って王はニコリと笑った。そして、パターソンたちに視線を向け、俺とシディーに視線を向けて、再び柔和な顔のまま口を開いた。

「でも、私は父のやり方は嫌いだ。父のようにはなるまい。いや、むしろ、叔父上に憑りつかれてよかった。きっと絵や食に楽しさを見出したのは、叔父上の影響だろう。うん、それでいい。それでよ

かったのだ。そのお陰で私はアガルタ王と知己を得ることができた。それだけじゃない。ラファイエンス殿も然り、さらにはポセイドン王とも知己を得ることが出来た。それもこれも、叔父上が我が体においでになったればこそだ」

そう言ってメインティア王はクックックッと笑った。そして、ゆっくりと顔を上げ、俺の顔をじっと見つめながら、彼はゆっくりと口を開いた。

「アガルタ王殿、我が叔父、キャバレット公爵については、色々と許せぬ感情もあるだろうが、叔父上のことについては、私に任せてもらえないだろうか。フラディメ国の国王として、責任をもって取り扱おう。……この通りだ」

彼はきびきびとした動作で俺に頭を下げた。そこには、いつものノホホンとしたバカ殿はいなかった。威厳を纏った、正真正銘の一国の王がいた……。

第二百五十七話　そういうことか！

「……それではメインティア王、この件は、あなたにお任せします。よろしくおねがいします」

「ありがとう。任せておくれ」

彼はいつものようにノホホンとした笑みを湛えて俺たちを見ていた。彼はキャバレットが封印されている短剣を手に取り、ゆっくりと鞘に納めた後、それを大事そうに自分の懐に入れた。それを確認した俺たちは部屋を後にし、ゆっくりと迎賓館の廊下を歩きながら転移結界のある執務室に向かった。

正直なことを言えば、あのキャバレットの念霊（ねんりょう）は、何としても倒すつもりだった。一歩間違えば、リコとお腹の子供は死ぬところだったのだ。だが、このメインティア王の雰囲気は、何故か俺の心を落ち着けた。もしかして、人の怒りや憎しみを鎮める力でもあるのだろうかと思いながら歩いていると、シディーが指で、自分のこめかみを押さえていることに気が付いた。

「大丈夫か？　休んでいるところにすまなかったな、シディー」

「いいえ。大丈夫です。それよりも、あの念霊（ねんりょう）が慰撫できそうで、本当に良かったです。それにしても、まさか空気の精霊を取り込んでいたとは、想像もつきませんでした。近いうちに時間を見つけて、メイちゃんとソレイユとで研究してみたいと思います」

「あんまり難しいことを考えるなよ。また頭が痛くなるぞ」

「はい、気を付けます。あと……鹿神様の所ですが……」

「ああ、明日にでも行ってみようか？　俺もついて行くよ」

「はい。ありがとうございます」

そんな話をしているうちに、俺たちは執務室に着いた。

「じゃあ、帰るか」

「はい」

シディーが俺にピタリと抱きついてくる。別にそんなことをしなくても転移は出来るのだが、シディーは二人きりになると、よくこうやって俺に抱きついてくるのだ。

「あっ、帰ってこられました」

屋敷に帰ると、ダイニングのテーブルに家族全員が座っていた。いつもはキッチンにいることの多いペーリスまでが椅子に座っている。その彼女が俺とシディーの帰宅に気が付いて声を上げ、その直後に、全員の視線が俺たちに注がれた。

「……一体どうしたんだ？　……って、ローニもいるのか？」

リコとメイに挟まれる形でローニが座っていた。彼女はスッと立ち上がり、ぴょこんと頭を下げる。

「一つ、お伝えしたいことがありまして、お帰りをお待ちしておりました。まずは、お座りください」

「報告？　おおっ！　まさかローニ、結婚が決まったのか？」

「……いえ。私は結婚する予定はありませんし、その相手もおりません。結婚する理由もありませんし、結婚したいとも思いません」

「ああ、それは……悪かったな。で、その、報告って何だい？」

何やら気まずい雰囲気になってしまった。俺はちょっと申し訳ない気持ちで、シディーと並んで空いている席に座る。

「今年の秋ごろになりますので、十分時間はありますが、一度チワンさんと相談しまして、なるべくこのまま私がお世話をさせていただければと思います」

ローニがぴょこんと頭を下げながら口を開いた。一体何のことだかわからず、俺はシディーと顔を見合わせながら、ローニの次の言葉を待つ。

「……以上です」

「すまんローニ。何のことだかわからん」

「あ、失礼しました。ご出産のことです」

「何だ、リコのことか。え？　夏じゃなかったのか？　秋って言った？　7月の半ば頃だと聞いていたけれど、違ったのか？　あれ？　何か……合わなくない？」

パニックになる俺の姿を見て、リコがクスクスと笑っている。

「ローニ、それだけではリノスにはわかりませんわ。最初から説明してあげませんと。ごめんなさい、リノス。私のことではありませんわ。ローニも何回も説明しているので、話が飛んでしまっているのですわ」

「申し訳ありませんでした。なにせ……7回目のことになりますから」

ローニがやっちまった、という表情を浮かべている。俺は一体何のことだかわからずに、首をかしげてローニをじっと見る。

「コンシディー様は懐妊されています」

「え？」

「ふぇあえ？」

あまりの予想外の言葉にシディーは声にならない声を上げている。そんな俺たちを交互に見ながら、ローニは再び口を開く。

「本日、メイ様と診察しましたときに、検尿を致しました。念のために調べましたら、ご懐妊していることが分かりました。まだ、1か月程の、かなり初期の妊娠であろうと思われます。コンシディー様には、お子様が落ち着かれるまでは、あまり激しい運動は控えていただくようにお願いいたします。……あ、その前に、この度は」

ローニはそこまで言うと、シャキッと背筋を伸ばし、再び、ぴょこ

んと頭を下げた。

「おめでとうございます！」

「「「「「おめでとうー！！」」」」」

ローニのお辞儀が合図だったかのように、家族全員が声を揃えて祝いの言葉を言ってくれている。だが、これも予想外のことであったために、俺もシディーもぽかんと口を開けたまま固まってしまっている。

「シディー」

リコがゆっくりと立ち上がり、俺たちの側にやってくる。そして、シディーの左手を両手で握り、優しい笑みを浮かべて口を開く。

「お互い、頑張って元気な子を産みましょう。何かあればいつでも相談に乗りますわ。遠慮なく言ってくださいな」

「シディーちゃん、私も相談に乗りますからね」

メイがにこやかに話しかけている。シディーは何と返答していいのかがわからないらしい。口をパクパクさせながら、リコとメイを交互に見つめている。

「リノス」

シディーの手を握りながらリコが俺に視線を向けている。

「シディーに何か言ってやってくださいませ」

その言葉に俺はハッと我に返り、空いているシディーの右手を握りながら口を開く。

「シディー、おめでとう。そして、ありがとう。元気な子を産んでくれよな。困ったことがあったら俺も協力するからな。家族全員で俺たちの子供を育てていこう。そうか……何度か吐いていたけれど、あれはもしかして、つわりだったのか？　もう、絶対に無理はしないでくれよ？　まずは、体を大事にしてくれよな？」

「はい……はい……うれしいですぅぅぅぅ……」

シディーはポロポロと涙をこぼしながら、何度も何度も頷いた。そしてそんな彼女に、家族全員から再び、お祝いの言葉がかけられたのだった。

「ああっ！　じゃあ私……うわぁぁぁ……どうしよう……お腹の子供が……」

突然シディーが立ち上がり、お腹を押さえたまま、わなわなと震えだした。

「どうしたんだ、シディー」

「私……メインティア王様に飛びかかっちゃいました……」

「あっ！」

「どういうことですか？」

訝るローニに俺は数日前の出来事を話した。シディーがイリモの背中からメインティア王に飛びかかったこと、そして、そのまま雪の上に倒れ、王に馬乗りになって剣を突き立てたこと、それを聞きながら、ローニは冷静にカリカリと手元の紙にメモを取っている。そして、スッと顔を上げ、落ち着いた声でシディーに話しかける。

「その後、出血などはありましたか？」

「いいえ、全くありません」

「それならば大丈夫だと思いますが、一度、詳しく検査をしましょうか」

「はい……」

シディーはメイとローニに伴われて別室に移動していった。……結局、彼女の体とお腹の子供には何の異常も見られず、俺たちはホッと胸を撫で下ろしたのだった。

そして次の日、俺はシディーを伴ってニザ公国の鹿神様の許に転移した。

「おおっ！　久しいな！　二人そろってとは珍しいな」

鹿神様が祀られている大木の前に俺たちが来ると、早速彼は人間の姿になって姿を見せた。やはりシディーはかわいいのだろう。満面の笑みを湛えている。俺は挨拶もそこそこに、鹿神様へのお供えを無限収納から取り出す。今回はめでたい報告もあるために、かなり大量の品物を持参した。とは言っても、大部分が酒とそのおつまみ

なのだが。

「おお、このように大量の貢物を……。そなたの食物はみな美味だ。楽しみだ」

ほくほく顔の鹿神様であった。

「今回、帰国しましたのは、お願いと報告のためなのです」

シディーが畏まった口調で念霊（ねんりょう）を鹿神様の加護を受けた短剣に封じ込めたことを説明する。彼はその話をじっと聞いていたが、やがて、ゆっくりと頷きながら、シディーに向けて口を開いた。

「なるほどな。半精霊化している怨霊を封じ込めたのか。我が加護を与えた品が役に立ったのであれば、それは重畳だ。ならばコンシディー。そなたの父に新たなる短剣を打ってもらうがいい。我が加護を受けられる霊剣を作ることが出来るのは、ドワーフ王であるエイモンだけだ」

「畏まりました。では早速、城に参りまして、父にその旨を伝えます。あと、報告なのですが……。この度、リノス様の子供を授かることが出来ました」

シディーがちょっと照れながら話をする。鹿神様は目を大きく見開きながら、両手をパシンと鳴らした。

「そうか！　でかしたな！　我も楽しみにしておったのだ！　そうかそうか！　うむ。それならば、王子が生まれた時の慣例に従って、そなたの父にもう一振りの剣を打ってもらうがいい」

「あの……鹿神様、まだ、王子と決まったわけでは……」

「王子だ」

「え？」

「ドワーフ王の一族はこれまで、必ず第一子は男児が生まれているのだ。従ってコンシディー、そなたの子供もほぼ間違いなく王子だ」

「は、はい……。畏まりました」

「あの……鹿神様……」

「おお、リノス殿。我が孫娘のコンシディーとそなたとの子供の誕生、うれしく思うぞ」

「はい、ありがとうございます。それとは別に一つご相談がありまして……。シディーが身籠るのと時を同じくして、彼女の身に不思議なことが起きております。その……やたらと頭が冴えているといいますか、予知のようなことも出来るようになっておりまして……」

「さもありなん。我が加護を与えた王族の女性は、身籠ると感性が研ぎ澄まされる」

「と、いうことは、シディーのこれまでのことは……」

「我の加護が原因だ。これまで我が加護を与えた王族の女性はコンシディーを含めて４人いるが、全員、身籠った時に感性が鋭くなった。我が娘のクレイドルなどは、夫の浮気を一瞬で見破って、怒りのあまり刃傷沙汰になりかけた。……懐かしいな」

フッフッフと鹿神様はニヒルな笑い顔を浮かべている。聞けば、彼の娘のクレイドルの時には、第一子の妊娠の時にこの現象が見られたという。このチート能力は安定期に入ると失われてしまうらしく、それまでの間に有益にこの能力を使うようアドバイスを受けた。

心配していた頭痛も徐々に軽減されるようだ。シディーの場合は俺との結婚で能力が上がったこともあって、感性がこれまで以上に研ぎ澄まされているらしい。そのために、やましいことをしようとするだけで、一瞬でシディーは見破る可能性が高く、しばらくは大人しくしておくように言われてしまった。俺はやましいことをする気は毛頭ないが、鹿神様のお言葉は深く胸に刻みつけておこうと思う。

その後、俺たちは鹿神様に丁寧に礼を言い、その足でドワーフ王のいる城に向かった。

ちょうどその頃、王の部屋では、怒りの形相を浮かべているドワーフ王と、その前で顔面蒼白になりながら震えている男の姿があった。王がその男に何かを言おうと立ち上がった時、家来からコンシディーがリノスを伴って帰還したという報告が寄せられた。

王はちょっと驚いた表情を浮かべたが、すぐにいつもの顔に戻り、震えている男に向かって口を開いた。

「あともう一度機会をやる。次はない。儂の目にかなう剣を作ることができねば、お前を廃嫡とする。死ぬ気でやるのだ、ガルトー」

王の目の前で震えているのは、コンシディーの兄であり、次期ニザ公国国王であるニザ・ガルトーであった……。

第二百五十八話　名探偵コンシディー

「そうですか！　それはそれはおめでとうございます！　姫様、よろしゅうございました。よろしゅうございました」

我がことのように喜びを爆発させているのは、ニザ公国の宰相であるユーリーだった。鹿神様の許を辞した俺たちは、その足で王宮に向かった。アポなしで訪れたために、王宮の兵士たちは俺たちの訪問にかなり驚いていたが、やがて、兵士の一人が進み出て、王宮内に案内してくれた。てっきり謁見の間に通されるのかと思いきや、通されたのは、シディーが嫁ぐ前に暮らしていた部屋だった。

久しぶりに戻る自分の部屋に、シディーはうれしそうだ。何せ、家具やベッドが以前のままで置かれていたのだ。

「うわぁ、懐かしい……」

そんなことを言いながら、彼女は部屋のあちこちを動き回る。そして、ゆっくりと、自分のベッドに腰を下ろした。目を閉じてゆっくり深呼吸をするシディー。自分が長年暮らした部屋だ。一番癒される場所なのだろう。

そんなことをしていると、宰相のユーリーが部屋に入ってきた。慌ててシディーは立ち上がり、姿勢を正す。

「ああ姫様、どうぞおかけになったままで。そのままで結構です。お久しぶりでございます」

そう言って彼は恭しく俺とシディーに一礼をした。いつもながら丁寧な対応だ。俺は、アポなしで来てしまった非礼を詫びると共に、シディーの妊娠と鹿神様の話を詳しく話した。

「そうですか！　それはおめでとうございます！」

彼は手放しで喜び、そして、俺に深々とお辞儀をして、姫様のことをこれからも何卒よろしくお願いしますと言って涙ぐんだ。

そんな様子を見ながら、シディーはキョロキョロと部屋を見渡している。ユーリー宰相は怪訝そうな表情を浮かべながら、彼女に話しかける。

「あの……姫様、なにか？」

「埃の臭いがしないわね」

「ええ。それはもう、毎日掃除をしているはずですから」

「私がアガルタに行った後で、この部屋は誰も使わなかったのかしら？」

「姫様がお暮しになったお部屋です。他の者に使わせることなどできません」

恭しく一礼をするユーリー宰相。そんな様子を見たシディーの目が、カッと見開かれた。

「私が逃げ出して帰ってくる。もしくは、リノス様に愛想をつかされて戻ってくると考えていたのね？」

「……は？　……え？」

「姫様はわがままでお転婆で行儀が悪い。だからきっと近いうちに、逃げ出すか追い出されるかで公国に戻ってくるだろう。そうなった時のために、いつでも迎えられるように部屋を残しておこう。そう考えていたのね？」

「……いいえ。そんなわけは……ありません、よ？」

完全にユーリー宰相の目が泳いでいる。その様子と答え方で、シディーの話が真実であることが丸わかりだ。しかし、シディーの追及はそこで終わらない。彼女はスッと隣の俺に視線を移して、低い声で呟く。

「リノス様……。今、さすがはユーリー宰相と思われましたね？」

「え？　は？　いっ……いや、そんなことは、ありません、よ？」

俺も目が泳いでしまった。鹿神様のチート能力はハンパない。シディーはほっぺを膨らませてむくれている。俺は思わずユーリー宰相に視線を送る。彼はハンカチで汗をぬぐいながらゆっくりと頷いた。

「オホン、姫様。この度のうれしいお知らせ、早速王様にご報告申し上げたいのですが、しばらくお待ちいただけますでしょうか。王はただいまガルトー様とお話し中でして……。それが終わりましてから、ご案内いたしますので」

「父上がお兄様と？　ふーん」

シディーが左手の人差し指を、顎の下に当てている。これは、彼女が何かを考えているポーズだ。彼女はそのまま天井を見ながら何やら物思いに耽っている。その様子を見たユーリー宰相は、また、呼びにまいりますので、ごゆっくりと言いながら、あたふたと部屋を後にしていった。

ふと振り返ると、シディーが両手でこめかみを押さえている。ちょっと頭を使いすぎているようだ。

「シディー、少し休んだらどうだ？」

「えっ？　でも……」

「大丈夫だ。ドワーフ王に会う時間が来たら教えてやる。元々ここはお前の部屋だ。滅多にない機会だから、久しぶりに自分のベッドで休んだらどうだ」

シディーはしばらく考えていたが、やがてコロンとベッドに横になった。彼女はすごく懐かしそうな表情を浮かべながらゆっくり目を閉じ、そして、しばらくすると、スヤスヤと寝息を立て始めた。

ユーリー宰相が再び現れたのは、それから1時間ほど経った頃だった。ちょうどシディーが目覚めるのを見計らうかのように登場したのだ。まあ、ここは公女の部屋だ。どこかに監視する穴やなにかがあってもおかしくはない。シディーも宰相のタイミングの良さには何もツッコミを入れることなく、俺たちはドワーフ王の私室に通された。

「何と！　コンシディーが身籠ったとは……。めでたい。これでアガルタと公国の関係はさらに盤石なものになる。いやめでたい」

懐妊の報告を聞いたドワーフ王は、一見すると国同士の親密さが増したことを喜んでいるように見えるが、相好を崩している表情から、シディーの懐妊を心から喜んでいるように見える。そして、鹿神様の話を聞いたドワーフ王は大きく頷き、左手に握りこぶしを作り、それを右手で包み込むようなポーズを取りながら口を開く。

「わかった。鹿神様の加護が受けられる聖剣を早速作るとしよう。そして、コンシディー。鹿神様が仰るように、おそらく生まれてくるのは王子だろう。その王子の剣も作らねばならんな」

そこまで言って王はハタと何かを思い出したかのように顔を上げる。そして、部屋の外にいる兵士に向かって声高に命じた。

「ガルトーを、ガルトーを呼べ！」

しばらくして現れたのは、これまた中学生のように見える、細い、痩せた少年のような男だった。どうやらこれがシディーの兄のようだ。彼は俺たちにチラリと視線を向け、ニコリと優しそうな微笑みを浮かべたあと、真っ直ぐにドワーフ王の許に行き、ちょっと震えるような声で口を開いた。

「お呼び、でしょうか。父上」

「うむ。そなたを呼んだのは他でもない。コンシディーが身籠ったのだ」

その言葉を聞いたガルトーは、再び優しそうな笑みを浮かべて頷いた。

「コンシディー。おめでとう」

「ありがとうございます。お兄様」

「ガルトーよ。お主に命じる。コンシディーの子供のために、剣を一振り作れ」

「……はい。畏まりました」

「それとあと一つ」

ドワーフ王は言葉を切って俺たちに視線を向け、そして、再びガルトーに視線を向けた。

「鹿神様の加護を受けるための聖剣を作れ。コンシディーに持たせるのだ」

その言葉にガルトーは体を震わせながら返事を返す。

「父上！　鹿神様の加護を受ける聖剣は、以前父上がお作りになられたではありませんか！」

「確かに、儂が作った。しかし、その聖剣は邪悪なる霊を封じ込めるために使われた。従って、コンシディーには新たな聖剣を授けねばならないのだ。お主もわかっておろう。王族の女性にはすべからく鹿神様のご加護とそのお力を受けた守り刀を授けることを」

「ぞ……存じております。が……」

「が、なんだ？」

「聖剣はドワーフ王が作るべきもの。父上しかお作りになれぬと存じます」

「それをそなたに作らせるのだ。どういう意味かわかるな？」

「もし、それに失敗しましたら……」

「それは、そなたが一番よくわかっているであろう」

「……はい。承りました」

「期日は……」

「おまちください」

突然シディーが話に割って入った。まさか彼女が口をはさんでくるとは思わなかったのか、二人とも鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしている。

「父上がお作りになる方がよいでしょう。お兄様では無理です」

「なっ！？」

いきなり爆弾発言をブッ込まれたので、兄のガルトーは目を見開いて固まる。青白い顔がさらに青ざめている。そんな様子をドワーフ王はため息をつきながら見ている。

「無理……と言うか。ガルトー、そなたの至らなさは、このコンシディーにも伝わるようだ。嘆かわしい限りだ」

「いいえ、父上。父上のご注文の品は、誰にも作ることは出来ない、そう申しているのです」

「どういうことだ？」

「父上はお兄様に剣を打つ時の最も大事なことを教えていませんね？　それは自分で気が付くべきだと思っておいでです。しかし、お兄様は試行錯誤を重ねますが、その大切なことに気が付いていない。父上はそれが歯がゆくてならない、違いますか？」

「……」

「何のヒントも与えず、ただやみくもに作らせていては時間の無駄です。お兄様は死ぬまで正解にたどり着かないでしょう。それどころか、お兄様は、これに失敗した時は、死ぬ覚悟でいますね？」

「コンシディー……」

「お兄様、気に病むことはありません。父上の目にかなう物が作られないのは、当然のことです。父上の教え方が間違っているのですから」

「何？　コンシディー。娘とはいえ、儂の技術に口を出すことは許さんぞ？」

「父上、溶かしたパルポーズの粉をミスリルの剣に薄く塗り、槌で叩いて鍛える時、本来は１分間に６０回叩いて水で冷やすのが定法ですよね？」

「ああ、そうだ」

「で、あれば、答えは簡単です。お兄様は６０回叩いているのに対して、父上は６１回叩いているのです。それを何度も繰り返すので、自ずと鍛え方に差が出ているのです」

「何故、そう言い切れる？」

「匂いです」

「匂い？」

「おそらくお兄様は、先ほどまで剣を打っていたのでしょう。パルポーズの焼ける臭いがします。しかし、父上が剣を打った時の臭いとは異なっています。そう、臭いが薄いのです。そう考えると、自ずと父上よりも槌で叩く回数が少ないのだろうと予想できます。真面目で杓子定規のお兄様ですから。一方で、一旦、槌を軽くミスリルに乗せてから叩き始める父上の癖。そうしたことを踏まえますと、先ほどの答えに行きつくのです。お兄様、一度、６１回叩いてごらんなさいませ。きっとお兄様でしたら、父上よりも良いものをお作りになられるはずです」

ドワーフ王もガルトーも、ポカンと口を開けてシディーを見つめている。結局、一度、彼女の言う通りやってみようということになり、ガルトーは再び工房に戻っていった。

聖剣が出来上がるまでには一週間ほどかかるらしく、また、生まれてくる王子のための剣も打たねばならないために、完成までに１０日かかるのだという。そこでちょうど１０日後、再びニザ公国に赴いて剣の仕上がりを見たところ、驚くべき光景がそこにあった。

何と、剣も短剣も、その刀身の周りに円を描くように、薄い光が現れていたのだ。まさしく、聖なる力を湛えた剣であることは、誰の目から見ても明らかだった。

結局、ガルトーが作った剣はドワーフ王の許しを受けることが出来た。ガルトーは大いに面目を施し、彼はこころからホッとした表情を浮かべながら、シディーに感謝の言葉を述べた。

「コンシディー。本当にありがとう。助かったよ。それにしてもものすごい洞察力だな。我が妹ながら、恐ろしささえ感じるよ」

「そうですか？　そんなことありませんよ。私は真実を明らかにしただけです。ね？　リノス様？」

俺に視線を向けながら話しかけてくるシディーに、俺は頷きながら言葉を返す。

「まさしく、名探偵だな」

「メイタンテイ？」

「たったひとつの真実見抜く、見た目は子供、頭脳は大人ってやつだ」

第二百五十九話　やっぱり、死ななきゃ治らない？

シディーの兄、ガルトーが作った聖剣に、鹿神様の加護を付与してもらった俺たちは、再び帝都の屋敷に戻ってきた。しばらくすると、アガルタの迎賓館から、パターソンから俺に、迎賓館まで来て欲しいという連絡があった。

俺は早速、迎賓館に転移する。シディーも一緒だ。部屋で休めと言ったのだが、彼女はどうしても付いて行くという。封じ込めたキャバレットのことが気になるらしいのだ。

「ああ、アガルタ王様、コンシディー王妃様までも……。お忙しいところお呼びだてして申し訳ございませんでした」

相変わらずパターソンはペコペコと何度もお辞儀をする。マジで腰を痛めないのだろうか？　いや、既に腰を痛めているのかもしれない。そんなことを考えていると、彼は、まずはこちらへと俺を窓際に案内した。

「恐れ入ります、王妃様はその……ご遠慮いただけますか？　あっ、ちょうど今、見ることが出来ます。まずはアガルタ王様、その窓の外の鏡をご覧ください」

不思議そうな表情を浮かべるシディーを目で制して、何事かと思いながら窓の外にある、木の枝に吊るされている鏡を見る。よく見るとそこには、メインティア王らしき人物が映っていた。しかも、彼はどうやら全裸でいるようだ。そして、壁に向かって両手を上げながら、カクカクと卑猥に腰を振っている。これは、絶対シディーに

見せるわけにはいかない。

「何のプレイだ？　あれは？」

「5日ほど前から、ずっとあの調子なのです」

「はあ？　5日も裸でいるのか？」

「はい……その……」

パターソンが言うには、キャバレットの霊が封じ込められた短剣を託された日から、彼はこの部屋に閉じこもっているのだという。決して誰にも扉を開けることを許さず、部屋の中から時折「はぁぁぁぁぁぁ」だの、「オッホォォォォォ」などの嘆息とも喘ぎ声ともつかない声が聞こえてくるらしく、パターソンたちはそれで王の生存を確認していたのだという。

部屋に籠って5日目あたりまでは、食事の時間は部屋から出てきたそうだが、それ以降は部屋から出て来なくなった。部屋をノックしても返事はなく、部屋に入ろうとすると、扉が開かない。何とか、かろうじて体半分くらいは開くのだが、何をどうしてもそれ以上は開かない。仕方なく彼らは、その隙間から水や食事を差し入れているのだそうだ。

そんな状態になって2日。果たして差し入れた食事を食べているのかどうかもわからない状態が続き、彼らはいよいよ心配になった。そこで、外の木に登り、枝がミシミシと音を立てる中、何とか王がひきこもっている部屋の窓を覗いてみると、俺が見た光景が広がっていたのだという。彼らは常に王の様子を見るために一計を案じ、窓の中が見える位置にある木の枝に鏡を吊るし、隣の部屋からでも

中が見える体制を整えた。

常に王の姿を確認することは出来ないが、それでも時おり鏡に映るその姿から、どうやら彼は気が向けば差し入れられた食事を手づかみで食べているらしく、餓死する心配はなさそうだった。だが、一体それがいつまで続くのか、さすがにパターソンたちの心配は頂点に達した。そこで、仕方なく俺に助けを求めてきたというわけだ。

「しかしだな、どうしろというんだ？　どう見ても変態プレイ中としか思えないんだが？」

「そんなことを仰らないでください。王が……我が王が心配なのです。本当に狂ったのではないかと……」

パターソンはポロポロと涙をこぼしながら話しかけてくる。俺は大きなため息をつきながら、彼に言葉をかける。

「まあ、あれを見せられては、狂っていると思われても仕方がないな」

「やはり……そうでしょうか……。もう１０日以上になりますものね。その前からですから、ほぼ、三週間近くになります……。ああ、こんなことになるのなら、早く連れてくるべきなのでした……」

「連れてくる？　何の話だ？」

訝る俺に、パターソンは驚いたような表情を浮かべて口を開いた。

「ノレーンの懐妊がわかって以来……。三週間、三週間近くも、我が王は女を抱いていないのです。朝に昼に夜に女を抱かねば満足さ

れない王が、ひと月近くも空閨なのです。今までなかったことです。そんな状況に我が王が耐えられるはずもないのは、子供でも分かる話なのでした。ああ、私が付いていながら何と言うことだ……。こんなことなら、どこかで女を手に入れて、王に抱かせればよかったのです……」

「……ッ、最低」

シディーが、まるで汚いものを見るかのような目でパターソンを見ている。俺は苦笑いを浮かべながらその様子を眺めていると、シディーがゆっくりと俺に視線を移す。

「要は、メインティア王を部屋から出せばよいのですよね？」

シディーのその言葉に、俺はチラリとパターソンに視線を移す。彼は驚いたような表情を浮かべながらコクコクと頷いている。その様子を見たシディーは、面倒くさそうな顔をしながら部屋の中を物色する。そして、ノレーンと何かを話し合いながら、大きな白い布を持って来て広げ、そこに何やら文字を書きだした。

「美しい！」

「何と美しいのだ！」

「とても美しいですね！　まるで絵のようです！」

「ああー消えてしまうー惜しいなーこんなに美しいものが消えてしまうー残念だー」

「チッ。……でも、美しいですね！　本当に感動しますぅ」

……俺のセリフ廻しが気に入らないのだろう。シディーが舌打ちをしている。そして、睨んでいる……怖い。

いや、俺は頑張ったのだ。本気を出して、歌舞伎の十五代目市村羽左衛門のようなセリフ廻しを真似てみたのだ。何？　十五代目羽左衛門を知らない？　……それならいい。でも、よかったら調べてみな？　超オトコマエだよ？　ともあれ、俺たちは、シディーが白い布に書いたセリフを、迫真の演技で読み上げたのだ。

「メインティア王は、美しいものがお好きですよね？　リノス様の棒読みが気になりますが、たぶんこれで釣れると思いますよ？」

「何を言うんだ。敢えてあのセリフ廻しにしたんだ。……それにしても、魚じゃないんだから。そんなことで出てくるかな？」

そんなことを言っていると、メインティア王がひきこもっている部屋の扉から、ドン！　と何かを叩くような音がする。全員の視線がそこに集中する。またしばらくすると、ドン！　ガリッ！ガリッ！ガリッ！と何かを引っ掻く音がする。そして、しばらくの静寂のあと、ゆっくりと扉が開かれた。

「美しいものとは、どれだい？」

キラキラとした目で現れたメインティア王。一糸まとわぬ裸体、顎の周りに苔のように生えている髭……。完全に変質者の風貌で、見る者全てに不快感を与えると同時に、ここ数日風呂に入っていなかったのだろう、部屋の中からもさることながら、彼の体からも、ものすごい臭気が放たれていた。

「ウップ」

その臭いに耐えかねたシディーは口元を抑えながら脱兎のごとく部屋を出ていってしまった。感性が研ぎ澄まされている時期だけに、

嗅覚も人並み以上になっているのだろう。彼女に感じる臭気は、鼻がひん曲がる程度では済まなかったのだろう。

「……一体、何をやっているんですか？」

「ああ、アガルタ王、君か。叔父上の魂を鎮めようと思ってね。ちょっと頑張り過ぎてしまったかな？」

いつものように、にこやかな笑みを湛えながら口を開くメインティア王。俺もその臭いには耐えかねてしまい、すぐさま俺は臭いを除去する結界を自分に張った。パターソンたちも顔をしかめている。ただ、ノレーンだけはポーカーフェイスなのか、表情が変わっているようには見えない。

「まずは、風呂に入ってもらいましょうか。おい、パターソン」

俺が促すと、彼はすぐさま王を浴室に連れて行った。そして、残った従者たちは王の部屋に入り、「ウエッ」とか「オエッ」とかいった声を上げながら、部屋を掃除し始めた。俺はその間に帝都の屋敷に帰り、ソレイユの部屋に向かう。

「あら、お珍しいですね。まだ日の高いうちから……。でも、うれしい」

「あ、いや、そうじゃないんだ。いや、脱がなくていい……。その……ソレイユの持っている香水を借りられないかと思ってね」

「香水、ですか？」

「ああ、できるだけ香りの強いヤツがいいかな」

「それでしたら……この、カリサリキの香りなどおすすめですわ」

「ありがとう、それを借りていくよ」

そう言って俺は再びメインティア王の部屋に転移した。部屋に入ると、風呂から上がったのだろう、バスローブ姿のメインティア王が、ソファーにゆったりと腰かけていた。俺は彼には構わず、すぐさまひきこもっていた部屋に、ソレイユから借りた香水をふんだんに振りまいた。そして、メインティア王の前に座る。もうよかろうと結界を解除してみたが、やはりまだ臭う。俺は黙って彼にも香水を振りかけた。

「いや、迷惑をかけたね」

「一体何をやっていたんですか？　全裸で踊っていましたよね？　どう見てもスケベ大明神に祈りをささげているようにしか見えなかったですよ？」

「ハッハッハ！　そんなまさか。いや、叔父上の魂を慰めるためのものを作っていたんだ。絵筆を使うから汚れるんだ。裸になっていたのは、そのためだよ」

「腰を振っていたのは？」

「そんなところまで見ていたのかい？　あれは眠気覚ましだ。絵を描きたいという欲求があるにもかかわらず、睡魔が勝ってしまう時があってね。その時は全身を揺らして睡魔を跳ねのけていたのだよ」

「いや、そこは寝ましょうよ」

「そうもいかんのだ」

突然、彼は真顔になり、低い声でしゃべり始めた。

「叔父上の憎しみは相当なものだ。……パターソンがすべて教えてくれたのだ。それを慰撫するのは、並大抵のことではない。叔父上の魂は、未来永劫、我がフラディメ国において鎮め続けねばならないのだ。そのためには、我らもその覚悟を叔父上に見せる必要がある。ダラダラとしていては、叔父上にその思いは伝わらない。だからこそ、私は不休不眠で叔父上の魂を鎮める証を作ったのだ」

その時、従者の一人が、王の部屋が片付いたと報告に来た。彼は鷹揚に頷きながら、俺に向かって声をかける。

「その証はほぼ、完成したんだ。君にも見せよう」

そう言って彼はスタスタと部屋に入っていった。仕方なく、俺もその後を付いて行く。

ソレイユの香水をもってしても、部屋にはまだ、若干の臭気が残っていた。この臭いはおそらく……アレだ。マジでこの数日間、部屋から出ていなかったらしい。そんなことを考えていると、扉のすぐ前の床一面に、白い大きな板が置かれているのが見えた。どうやら、このデカイ板を扉に立てかけていたようで、それで扉が開かなかったのだ。メインティア王は、パターソンたちに命じてその板を引き起こし、壁に立てかけさせた。

……そこには、今にも動き出すのではないかと思うような、とんでもなくリアルな人物画が描かれていた。

キャバレットと思われる大柄な男、その隣には、彼の妻と思われる美しい女性。そして、その間には、聡明そうな顔をした少年が描かれていた。しかも、描かれている三人は、互いに手をつなぎ合っていた。一見しただけで、深い愛情で繋がり合っている家族の姿がそこにあった。

「我が国で、叔父上一家のことは消された形になっている。私は、叔父上のことを忘却の彼方に葬り去るべきではないと思う。叔父上一家のことは、我ら王家が子々孫々に至るまで、その魂を鎮め続けなければならない。叔父上は、ご自身や家族が忘れ去られることを最も恐れておいでなのだ。叔父上の魂を慰撫するのは、我々が彼を、彼の家族を忘れないことだ。叔父上のことは、未来永劫我が国で祀る。……ご安心くださいね、叔父上」

彼は優しそうな笑みを浮かべて、傍らにあった、キャバレットが封印されている短剣を見た。何となく、ではあるけれど、その短剣の雰囲気が変わったような気がした。

「私が帰国する時はこれを持って帰ろう。ちゃんと、持ち運びができるように、バラバラに出来るようになっているから、パターソンたちは、安心していい」

そう言って彼は、満足そうに頷いた。

「失礼します」

突然部屋に入って来たのは、ちょっと小太りの、小柄な女性だった。

「恐れ入ります。ノレーン様のご機嫌伺いに参りました」

「ああ、どうぞ」

パターソンが彼女を部屋に招き入れる。その直後、俺に小さな声で、彼女は先日からノレーンの体調管理を担当することになった医師だと説明してくれた。

「それでは、ノレーン様のこと、よろしくお願いします」

「待て、パターソン！」

突然声を上げたのは、メインティア王だった。俺は何事かと彼をガン見する。

「そなた……名は何と言う？」

「えっ？　あっ、はい。お初にお目にかかります。ノレーン様の主治医をしております、カナルと申します」

「カナル……。年はいくつだ？」

「はい、２８歳でございます」

メインティア王は、ゆっくりとカナルの許に近づいていく。そして、彼女の顔をじっと見る。

「あの……」

「美しい！　参れ！」

「えっ？　あのっ。　え？」

メインティア王はいきなりカナルの腕を掴み、ものすごい速さで隣の部屋まで引きずっていった。その後をパターソンが慌てて追いかけていった。

「やっぱり、バカ殿じゃないか……」

そんなことを呟きながら、呆気に取られてしまった俺は、しばらくその場を動くことが出来なかった。

第二百六十話　殿、ご乱心？

「放せ！　何をするのだ！　放せ、パターソン！　無礼者！　無礼者ぉぉぉぉ！！」

「お静まり下さい！　国王様！　お静まり下さい！」

そんなやり取りが隣の部屋から聞こえてきたかと思うと、パターソンに羽交い絞めをされた格好で、メインティア王が引きずり出されてきた。俺は思わずパターソンに声をかける。

「パターソン！　殿中でござる。殿中でござるって言うんだ！」

「でんちゅうでござる！　でんちゅうでござる！　……アガルタ王様、これは一体、何の呪文でしょうか！」

「おお～忠臣蔵みたいだ」

「遊んでいないで、国王様を止めてください！　お願いですから！」

メインティア王は目が据わっている。完全に本気モードにスイッチが入ってしまったようだ。

「何かのお仕置きですか？　これは？」

メインティア王を止めようとして立ち上がったところに、シディーが帰ってきた。どうやら彼女には、この二人のやり取りが、逃げるバカ殿をパターソンが捕まえているように見えたらしい。

目の前では相変わらず、おバカな『忠臣蔵・松の廊下』の場面が演じられている。その様子を見ながら、俺はシディーにこれまでの顛末を手短に説明する。

「チッ……最低……。要は、アイツを止めればいいのですよね？」

そう言ってシディーは、右手を懐に入れながら、ゆっくりと王たちに向かって歩き出した。いつもは見せない、無表情のシディーの顔は、怖かった。何より、舌打ちしているし、王のことをアイツ呼ばわりしているところからも、彼女の怒りの沸点が高いことがわかる。

「ワ・タ・シ・ハ、このぉ、燃えたぎるぅ、情熱をぉぉぉ、あの女にぃ、ぶつけるのだぁぁぁ！　邪魔を、するな、パターソォォォン！！」

「国王様！　なにとぞ！　な・に・と・ぞ、お静まり下さい！　皆様の、眼も、ございまぁすぅぅぅ！！」

「いい加減にしなさいっ！」

シディーの絶叫にも似た声が部屋の中に響き渡る。見ると、メインティア王の顔の周りに、白い煙が漂っていた。

「パターソン、放せ！　パタ……」

突然、メインティア王がパタリと倒れた。そして、パターソンもゆっくりと、王の上に折り重なるようにして倒れていった。

「心配いりません。フェアリからもらった、眠るための粉を使った

だけです。朝になれば目覚めます」

そう言って、シディーは王の側近たちに視線を移す。彼らはシディーの視線の鋭さにビクつきながら、この二人を寝室に運んでいった。結局、このバカ殿のご乱心は、シディーの働きのおかげで、間一髪で止めることが出来たのだった。そして俺は、ミラヤ・アガルタに使いをやり、明日からしばらく一人のバカと、その家来を預かってもらうよう頼んだ。当然、相手をする女は、ミラヤの中で一番ブサイクな女でよいと念を押しておくことも忘れなかった。俺は、バカ殿の家来たちに、今日中に二人をミラヤに移すよう命じて、シディーを伴って部屋を出た。

「一瞬、名君かなと思ったんだが、やっぱりバカはバカなのかもしれないな。本能むき出しだったな」

「……」

「どうした、シディー？」

「リノス様も……あんな風になるのでしょうか？」

「ならないよ。シディーだってイヤだろ？　乱暴にされるのは」

「……一回くらいは」

「え？」

「いいえ、何でもありません！　私はその……優しいのが、いい……です」

シディーは耳まで真っ赤にしながら、スタスタと廊下を歩いて行った。俺はそんなシディーの振る舞いをかわいらしいと思いながら、転移結界のある執務室に帰っていった。

季節は移り、アガルタの都にも春が訪れた。

結局、ノレーンの主治医は交代させざるを得ず、その人選に苦労した。何せ、ちょっとでも特徴のある女であれば、バカ殿が欲情するのだ。そこで思いついたのが、サイリュースに頼むという案だった。

彼女らは基本的に、全員が見目麗しい女性たちだ。そこで、族長のヴィヴァルに相談したところ、彼女らも人間と同じ出産をするらしく、産婆の役割が出来る者もいるらしい。彼女は俺の要請を快諾し、里から実に見目麗しいサイリュースを派遣してくれた。そして、思った通り彼女はバカ殿の眼には止まらず、ようやくノレーンは安定したマタニティーライフに入ることが出来た。加えて、彼女の美貌はバカ殿の家来たちの心をつかみ、訪れるたびに、男たちからいつも大歓迎を受けることになったのだった。

メインティア王はというと、あれ以来、月に数回、ミラヤ・アガルタに通っている。しかも、最近では、ラファイエンスや大工のゲンさんらと連れ立って、連中（れんじゅう）のようなこともしているらしい。

このバカ殿のミラヤ通いは、意外に店側からも歓迎されているらしいのだ。それは、常に一番売れない女郎を指名するので、客の指名が取れない、いわゆる「お茶を引く」ことがなくなるために、店側からも、遊女側からも感謝されているのだという。今や彼は「テイ様」と呼ばれて、人気者なのだという。人間、何が幸いするのかわからない。

そんなある日、メインティア王の許に、大上王からの書簡が届いた。

「……ノレーンの帰国は認めないのだそうだ」

「え？　どういうことですか？　子供も生まれるのに？」

本国の大上王からは、しばしばメイ宛に書簡が届くようになっていた。その内容は、学術的な内容ばかりで、俺には皆目わからないことが多かったのだが、先日の書簡で、珍しくメインティア王の近況はどうしているかと書いて寄こしてきたのだった。そこで、俺の勧めで、メインティア王自身が大上王に近況報告の手紙を出させたのだが、その返信には、王の子供を身籠っているノレーンの帰国を認めないと書かれていたのだ。

「……父が言うには、ノレーンは、その生まれた子供と共に、アガルタで逗留せよとのことだ」

「いや、いきなりそんなことを言われても、こちらとしても都合というものがありますよ。それに、普通は大上王様から俺宛に伺いを立てませんかね？　何で俺の許可なく勝手に話を進めようとしているのか、理解に苦しみますね」

俺は思わず本音を漏らす。だってそうじゃないか？　何だか、完全に俺をナメているとしか思えん。そんなことを考えていると、パターソンが、Ａ３用紙くらいの大きさの、冊子のようなものを小脇に抱えて俺たちの所にやってきた。

「アガルタ王様、我が大上王様よりの書簡でございます」

受け取ってみると、それは封筒であり、しかも、厳重に封蝋が施された状態だった。

俺は封を切り、中に入っていた書簡に目を通す。そこには、メインティア王が言った通りのことが書かれてあり、さらには、フラディメ国は、アガルタ国とさらに誼を深めたい。そこで、国王の側室たるノレーンと、その子供を人質としてお預けする。もし、フラディメ国がもし、アガルタに弓を引くことがあれば、存分に二人を成敗して欲しい。希望を言えば、ノレーンの子供をアガルタで教育して欲しい。もし、生まれてくるのが男の子ならば、ゆくゆくは、その子供にフラディメ国の領地の一部を与えたい、とあった。

「……凄まじい無茶ぶりですね」

「父からしてみれば、これ以上アリスン城に女子供が増えるのが耐えられないんだろうね」

そう言って彼はクックックと笑う。

「父は、ノレーンと生まれてくる子供の二人の費用については全てフラディメ国が負担すると、私への書簡には書いてあった。君の所にも？　……まあ、それは当然のことだけれどね」

「いや、いきなりそんなことを言われてもですね……」

「実は私も、父の意見に賛成なのだよ」

「何だと？」

「フラディメ国に連れて帰れば、ノレーンはほかの女たちとの嫉妬

や怨念の中で生きなければならないんだ。それがいかに大変なことなのかは……ノレーンが一番よく知っているね？」

メインティア王は、チラリとノレーンに視線を移す。彼女はゆっくりと頭を下げた。

「それに、生まれてくる子供が、もし、優秀であったならば、間違いなく父は自分の思想に染め上げようとするだろう。そうなると、子供がかわいそうだ。そこにいくと、アガルタであれば、そんな軋轢や偏った思想に染まることもない。むしろ、ノレーンにとっても子供にとってもいい環境で暮らせると思うんだ。それに……」

「それに、何です？」

「ノレーンと子供がここアガルタに居てくれると、私も来やすいからね。ポセイドン王にも会いに行きやすいし」

彼はいつものようにキラキラした瞳で俺を見ている。俺は呆れながら、彼に返答を返す。

「だから、こちらの立場も……」

「いや、アガルタ国にも利益のある話だ」

突然、王の声が低いバリトンボイスに変わる。

「考えてもみよ。生まれてくる我が子が、成長のあかつきにはフラディメ国において領地を与えると父、大上王は約束している。そして、それには国王たる私も同意しているのだ。疑うならば、血判を押してもいい。アガルタは、我が子をアガルタの色で染めることが

出来るのだ。その子がフラディメ国で領主となる……。これは戦わずしてアガルタは国境を進めることになりはしないだろうか？　そうでなくとも、やり方次第では、生まれてくる我が子から、我が国の情報を自由に聞き出すこともできるのだぞ？　言わば、我が国は、敢えて貴国に領土と情報を提供すると言っているのだ」

「……一体、なぜそこまでするのです？」

「父は、それだけアガルタ国に惚れ込んだのだろう。いや、正確に言えば、メイリアス王妃に惚れ込んだのだ。あのお方を味方につけておけば、我が国は安泰だと考えたのだろう。では、メイリアス王妃を味方につけるためにはどうすればよいか？　それは夫であるアガルタ王、君を味方につけることだ。君とメイリアス王妃、そしてアガルタが我が国の後ろ盾になってくれる。これほど心強いことはない。我が父ながら、よくそこまで頭が回ると思うし、その決断力はさすがではある」

「……」

「今すぐに答えを出せとは言わない。ただ、我が父、大上王は、練りに練った上でこの話をしてきている。荒唐無稽な話かもしれないが、私もこの意見には賛成だ。私とて国を預かる身だ。国の行く末は、考えなくてはいけないが、この話は、双方にとって利益のある話だと思うのだ」

そこまで言うと、彼はゆっくりと立ち上がり、いつもの笑みを讃えた顔に戻る。

「いい返事を期待しているよ。じゃ、ルアラ殿の所に行ってくるよ」

「ルアラの所に？」

「ああ、久しぶりに、ポセイドン王に会いたくなった。ちょっと、行ってくるよ」

そう言って彼は足早に部屋を後にしたのだった。

「もしかしてあれは……作り阿呆なのか？」

俺は、天井を見上げながら、首をひねるのだった。

結局、ノレーンとその子供はアガルタで預かることになった。その返信を大上王に返し、彼女の出産準備や住む場所などを決めていると、あっという間に月日は過ぎていった。気が付けば季節は、夏になろうとしていた。そしていよいよ、リコの出産予定日が近づいてきたのだ。

第二百六十一話　棺のリコあれまあ死んだ

「あなたはそこに立って、息だけしていればいいのです！」

一見すると、パワハラにしか見えない過激な言葉を吐いているのはローニだった。彼女がここまで怒りをあらわにするのは珍しい。その光景を、リノスはダイニングのテーブルに腰かけながら、何とも言えない顔で眺めていた。

事の起こりは、リコの出産予定日が5日後に迫り、ローニが泊まり込みでリノスの屋敷にやってくる時だった。彼女にしてみれば、リノスの屋敷に居れば、常にリコの側にいることができ、何かあればすぐに対応できるのと同時に、現在の研究の進捗や問題点、疑問に思ったことなどをメイやシディーと相談できるというメリットもあった。加えて、ようやく安定期を迎えたシディーの出産に関する不安やこれからのことも相談できるとも考えていたために、彼女は予定を早めてリノスの屋敷に行くことにしたのだった。

ちなみに、リノスの屋敷に居れば、美味しい食事を3食、食べたいだけ食べられるために、彼女はこの日を指折り数えて、待ちに待っていたことは、誰にも言わない秘密だ。

そんな緊張と至福の時間を送ろうと、数日分の荷物をまとめ、自分の部屋からリノスの屋敷に転移しようとしたその時、ローニの目の前に、一人のポーセハイが転移してきた。

「誰？　誰ですか！？」

ポーセハイが何の前触れもなく、いきなり転移してくるのは珍しい。通常は思念でやりとりをし、相手の同意を得てから転移してくるものなのだ。いきなり転移して来るのは、緊急事態を除いてほぼ、あり得ないことであるために、ローニが驚くのは無理のないことだった。

「ロ～～～ニ～～～」

転移してきた瞬間、そのポーセハイは馴れ馴れしく彼女の名を呼び、そして、いきなり抱きついてきた。全く想定外のことであったために、さすがのローニも驚きと戸惑いで、体が硬直する。

「久しぶり～久しぶりだ～会いたかったんだ～」

「ちょっ……ちょっと放してください！　誰？　誰ですか!?」

「僕だよ、ローニ！」

ガバッと体を離し、ローニの両肩を掴んだまま、男は満面の笑みを浮かべる。

「……誰？」

眼を見開いて固まるローニ。その言葉を聞いて男は驚いた表情を浮かべる。

「僕だよ、ローニ！　ドーキだよ！　君と婚約していたドーキだよ。いやー久しぶりだぁ。全然変わらないね、ローニ。見た目も、魔力の波数も、昔のままだ」

「あー」

ローニはいかにも残念そうな顔をして天を仰ぐ。そして彼女はゆっくりと首を振りながら、ため息をつく。

「今、私は忙しいのです。邪魔しないでください。それに、あなたと婚約した覚えはありません」

「え？　何を言っているんだよ、ローニ？」

「気安く呼ばないでください。今から私は仕事なのです。出て行ってください！」

彼女は男の襟首を掴んで、そのまま部屋の外に放り出した。そして鍵をかけ、素早く荷物を持ってリノスの屋敷に転移したのだった。

「すみません、遅くなりました」

リノスの屋敷に着いてすぐ、ローニは与えられた自分の部屋に荷物を下ろしてリコの部屋に向かった。

「ローニ……。なんだかちょっと、お腹が痛いのですわ」

不安そうな顔をしながらリコは大きく膨らんだお腹を撫でていた。その傍ではエリルが心配そうな顔をして母親の様子を見守っていた。

「わかりました。もしかすると陣痛かもしれませんね。ちょっと診察しますね」

そう言ってローニはリコのお腹にやさしく触れ、お腹の胎児の診察を始めるのだった。

リコの陣痛が始まったかもしれないと聞いて、俺たちは速やかにその準備に入った。俺はリコを抱えるようにして1階の産室に連れて行く。まだ予定日前で、陣痛かどうかも分からないというリコに、どうせ生まれるんだから早めに部屋に移ればいいよと言いながら、彼女を連れて行った。エリルもアリリアも、心配そうではあるが、弟か妹が生まれることに興味津々だ。

既に産室の準備は整っており、俺は一旦、リコをローニに任せてダイニングに戻る。既に湯は沸いていて、とりあえずということで、フェリスが湯を持っていく。出産は3回目ということで、皆、それぞれの役割がわかっていて、何事もスムーズだ。

ルアラとペーリスが準備を整えて産室に向かう。そしてメイもその後を追うようにダイニングを出て行った。俺はマトカルとシディー、そしてソレイユらと共に、ダイニングでエリルとアリリアの子守を担当する。

「リコ様、大丈夫でしょうか……」

ソレイユが不安そうな顔で口を開く。その様子をちらりと見ながら、シディーは大きく頷きながら答えを返す。

「全く問題ないと思うわよ?」

「どうして?」

「根拠はないけれど、私には確信があるのよ」

「このところのシディーの直感は、当たるものね……」

そんな会話を交わしていると、突然、ダイニングの隅の空間が歪みはじめ、ポーセハイが転移してきているのが見えた。

「うん？　何だ？　誰だ？　チワン……じゃなさそうだな」

どうやらまだ若い男のポーセハイのようだ。彼は転移が終わるなり、ゼエゼエと荒い息をしながら、ダイニングの床に突っ伏した。

「何者だ？」

マトカルがエリルとアリリアを守りながら、剣の柄に手をかけている。男は懐から小さな瓶を取り出して、ぐいっとそれを煽る。しばらくすると、ゼイゼイと荒かった呼吸が整いはじめ、やがて男はスッと顔を上げて、キョロキョロと辺りを見回した。

「くっ……ここまで魔力を使わされるとは……。あれ？　ここは？　ローニの魔力を追ってきたんだけどな……」

「ポーセハイか？　初めて見る顔だな。ローニの友達か？　ローニは今、出産に立ち会ってもらっている。君は……誰だい？」

俺はマトカルを手で制して、いきなり転移してきた男に尋ねる。この屋敷に転移できたということは、悪意や敵意のない証拠だ。見たところ、人のよさそうな顔をしているので、俺は彼を信じることにしたのだ。

「あ、僕、ローニの婚約者の、ドーキって言います」

「はあ？　婚約者だぁ？」

「リノス様！」

その時、突然ローニの声が部屋に響き渡った。思わず俺たちはその声に振り向く。そこには、真面目な顔をしたローニがいた。

「おめでとうございます。お生まれになりました」

「え？　生まれたって……産室に入ってまだ３０分くらいだぞ？」

「はい、あの後しばらくして本陣痛になりまして、たった3回いきんだだけで、すぐにお生まれになりました」

「え？　そうなの？　……で、リコは？　子供は？　男か？　女か？」

ローニはぴょこんとお辞儀をして、口を開く。

「ひつぎのみこあれましぬ！」

「何？」

「ひつぎのみこあれましぬ、です！」

「……棺のリコ、あれまあ死んだ？　ど、どういうことだ！？」

ローニはキョトンとした顔になっている。一瞬の静寂の後、部屋中

が大爆笑に包まれる。

「日嗣(ひつぎ)の皇子(みこ)あれましぬ、です。リノス様。お世継ぎがお生まれになりましたという意味です。お世継ぎのご誕生、おめでとうございます！」

シディーが教えてくれる。どうやらこの言葉は、国王だけにしか使わない、嫡子誕生を報告する言葉であるらしい。一生に一度使うかどうかの、とてもレアな言葉であると教えてもらった。

「と……いうことは、男の子か！　リコは？　母子ともに元気？　やっっっったなぁ！　ローニ、ありがとう！　ローニのお陰だ！」

俺は思わず喜びを爆発させる。

「「「おめでとうございます！」」」

家族のみんなが笑顔で祝福してくれている。エリルやアリリアも弟が生まれたと聞いて、とてもうれしそうだ。

「いや、おめでとうございます！　何だかわかりませんが、男の子ですか？　日嗣の皇子あれましぬ、ということは、どこかの国王様でしょうか？　知らずに失礼しました。誠におめでとうございます！」

何故かローニの婚約者を名乗るポーセハイが、丁寧に祝いを言ってくれる。その様子を見てローニが声を上げる。

「ドーキ！　あなた、一体何をしているんですか！」

「ああローニ、やっと会えた～。君の魔力を辿ってきたんだけど、このお屋敷どうなってるんだ？　すごい波数が小さくって探すのに苦労したよ」

「帰ってください！」

「そんなこと言わないでおくれよ～。ゴメン、思念を飛ばさずに会いに行ったことは謝るから、そんなに怒らないでおくれ」

「そ、う、い、う、問題ではありません！　すぐに、すぐに出て行ってください！」

「ま、まあまあローニ、せっかく婚約者が尋ねてきてくれているんだから……」

「はあ？　婚約者？　バカですか？　そんなわけありません！　そんなわけがあるはずがありません！」

ローニにバカと言われてしまった。一応、俺、国王だよ？　面目丸つぶれの俺は、ショックのあまり椅子に崩れ落ちる。その様子を見て、ドーキが敢然と口を開いた。

「何言ってるんだローニ。約束したじゃないか！　お互いに一人前になったら結婚しようねって……」

「それは5歳の頃の話でしょ！　そんな子供の頃の約束が今でも有効なわけはないでしょう！　それに、あなたは一体今までどこで何をしていたのですか！　チワンさんの招集にも応じず、一体何をしていたのですか！　ちゃんと医者として活動しているのでしょね！　今、一体何をしているのです！」

「今は……料理屋だ」

「は？」

「いや、今はどっちかというと、お菓子屋かな？」

「お菓子屋？　あなた、それでもポーセハイですか！　ポーセハイは……」

「ローニ」

ドーキはゆっくりとローニの所に歩いていく。いつになく、真剣な表情をしている。俺たちは思わず息をのんで、その様子を見守る。

「君が怒るのはよくわかる。それはそうだ。そのことについては、謝るから。僕の話を、僕の心からの本心を聞いてほしいんだ」

そんなことを言うや否や、彼はローニを優しく抱きしめた。

「ちゃんとプロポーズをしていなかったね。ローニ、僕と一緒に、家庭を作ろう……ぐふっ」

気が付けば、ローニの右手がドーキのみぞおちに深々と食い込んでいた。彼はゆっくりと崩れ落ちるようにして、床に膝をついた。

「私は、仕事中なのです。邪魔しないでください！」

ローニは悶絶するドーキに目もくれず、再びシャキッと背筋を伸ばし、ぴょこんとお辞儀をしながら、俺たちに口を開いた。

「お見苦しいものをお目にかけました。リコレット様がお待ちです！　皆様、どうぞ産室にお越しください！」

その声を聞いたドーキがゆっくりと立ち上がる。彼女のボディーブローが効いているのだろう。足がガクガク震えている。そんな状態であるにもかかわらず、彼は声を震わせながら、ローニに声をかける。

「ぼ……僕も、僕も手伝うよ。何でも、何でも言っておくれ」

ブチッ……ローニからそんな音が聞こえてきたような気がした。その直後、彼女の顔にみるみる怒りの色が浮かんでくる。

「息だけしていなさい！」

「え？」

「あなたが出来ることは何もありません！　あなたはそこに立って、息だけしていればいいのです！　息をするだけです！　一ミリも動かずに、です！　何も難しくはありません！　いいですね！」

……早く、妻と子供に、会いたい。

第二百六十一話　棺のリコあれまあ死んだ（後書き）

お願い：

キャラクターの名前を考えるのに苦労しています。すみません、助けてください。

男性、女性、都市名……広く募集します。アイデアあるよ！という方、コメント欄でも結構ですし、メッセージで直接送っていただいても構いません。いただいた案は、できるだけ拙作で採用したいと考えております。気軽にご連絡ください。よろしくお願いいたします。

第二百六十二話　喜びあれば悲しみも

「ロ……ニ……」

ドーキがガックリとうなだれている。そして、膝をついて、肩を激しく動かしている。どうやら、ローニの言葉もさることながら、先ほど食らったボディーブローがまだ効いているようだ。

「師匠、まずはリコ姉さまの所へ……。私、彼を見張っておきますから」

ルアラが呆れたような顔をしながら、俺に口を開く。フェアリはこの様子が珍しいのか、パタパタとドーキの上を飛んでいる。

「恐れ入ります。それではルアラ様、この男を見張っていていただけますでしょうか。差支えなければフェアリ様、体を麻痺する鱗粉を出していただいて、この男を動けなくしていただいても結構です。転移で逃げる可能性もありますが、そのときは放っておいてください。この男は昔から腕力はありませんでしたので、襲撃の類はないと思います。ご安心ください」

ローニは早口でここまで言って、ふうと息をついた。そして、再び俺に向き直り、ぴょこんと頭を下げた。

「それでは、ご案内いたします」

その言葉に従い、俺は四つん這いになって苦しんでいるドーキを心配しながら、リコの許に向かった。彼を結界に閉じ込めておこうか

とも考えたが、何となく、この男が俺たちに危害を加えることはないだろうという直感めいたものがあったので、敢えて何もしないでおいた。ま、ルアラもそこそこ強いので、エライことにはならないだろう。

「では、どうぞ」

産室に着くと、ローニが扉を開けてくれる。俺は全員にクリーンの魔法をかけて消毒し、部屋に入る。エリルやアリリアが生まれた時と同じ光景がそこに広がっていた。

「あ、ご主人様」

見ると、ベッドの側でメイが赤ん坊を抱っこしながら、俺に微笑みかけている。フェリスやペーリスは、最後の片づけをしているようだったが、俺の姿を見ると、笑顔でおめでとうございますと言ってくれる。俺は彼女たちにお礼を言いながら、足早にメイの所に向かう。そして、彼女から子供を受け取った。

……おサルさんのようにしわくちゃだが、顔の輪郭が、何となく俺に似ているような気がする。目をぎゅっと閉じている。泣いていない所を見ると、既に眠っているようだ。

「俺に……似ているのかな？」

「……お父上様に、そっくりですわ」

リコが満面の笑みで俺を見つめている。俺は子供をリコに渡し、ベッドの傍の椅子に腰かける。

「男の子か」

「ええ、男の子ですわ」

「やったな、リコ」

「ええ。世継ぎを……産めましたわ」

「ありがとう。リコ、本当に、よくやってくれた」

「名前を……決めなければいけませんわ」

「ああ、実はもう考えてあるんだ。名前は……ほら、あの、イデアだ」

「まあ、イデア」

リコの顔がぱあぁっと明るくなる。実は、エリルが生まれる時に、男の子だろうと言われていたために、リコと二人で色々と名前を考えていたのだ。そして、そのときに二人で、イデアという名前なんかいいよねと話していたのだった。今回、この子が生まれて、その顔を見た時に、俺の記憶にその時の光景が蘇ったのだ。

「バーサーム・ダーケ・イデア……。きっと、素敵な男性になりますわ」

そう言ってリコは幸せそうに微笑んだ。

「リコ、体は、大丈夫か？」

「はい。今回はとても早く生まれましたので……エリルの時とは比べ物にならないくらいに、楽でしたわ」

「そうか。よかった。それにしてもこの子はもう寝ちゃったのか？ずいぶん大人しいな」

「ええ。お腹にいる時からつわりも少なかったので、とてもいい子ですわ」

リコは子供の頭を愛おしそうに撫でている。その様子を見ながら、皆、口々に、「かわいい」とか「本当におめでとうございます」などの祝いを言ってくれる。リコは本当にうれしそうだ。

「かあたーん」

アリリアがメイに飛びつくようにして、抱っこをせがんでいる。メイはゆっくりと彼女を抱き上げて、赤ん坊を見せる。

「さあ、アリリアの弟よ。アリリアもこれからは、お姉ちゃんらしくしましょうね」

「はあーい」

家族全員が笑顔になる。何とも幸せな光景だ。

ふと見ると、エリルがポツンと一人で、こちらの様子を伺っている。俺はゆっくりと彼女の許に向かい、そして、しゃがみ込む。

「おめでとうエリル。また、お姉ちゃんになったね」

そう言って俺はエリルを抱きかかえた。そして、リコの所まで連れて行く。

「ほうら、エリル、弟のイデア君だ。……何かあったら、守ってあげてね」

「うん！」

エリルはものすごくうれしそうな顔をして頷いた。その様子を見て、家族全員が再び笑顔になった。

「あの～。どうも、おめでとうございます」

突然、頓狂な声が部屋に響き渡る。その声のした方向を見ると、ドーキが満面の笑みで立っていた。その彼をローニが無言で胸ぐらをつかみ、外に連れ出そうとする。

「待ってよ、ローニ！　違うんだ！」

「何が違うのですか！　ここは産室です！　関係者以外は、立ち入り禁止です！　で、て、い、き、な、さ、い！」

「ちょっと、待って！　お妃さまに、これを……」

よく見ると、ドーキが手に何かを抱えている。

「ローニ、いい。ちょっと待て。ドーキ、君の手に持っているものは、何だい？」

「はい……カチン、です」

「カチン？」

「お餅のことです、師匠」

ドーキの後ろからルアラが現れる。彼女はローニをまあまあと宥めながら、俺たちに向かって口を開く。

「いきなり、そうだ、と呟いたかと思うと、突然転移しまして……。どこかに行ったのかと思ったら、しばらくしたらまた、お屋敷に帰ってきました。そのとき、このお餅を持って来ていました。この彼が作ったのだそうです。で、このお餅は体力を回復させる効果があるそうで、是非、リコ姉さまにお渡ししたいということで……」

「で、連れて来たのか？」

「私も試しに一つ食べましたけれど、これが、その……すごく美味しかったんです」

「餅がか？」

俺はドーキの側に行き、彼の抱えている箱の中身を見せてもらう。中には、平べったいお餅が数枚入っていた。俺はこれに鑑定スキルを発動させてみたが、毒物などは入っていないようだ。

「一枚、もらっていいかな？」

「どうぞ」

彼は満面の笑みで答える。俺は餅を一枚取り出し、それを口の中に

放り込む。

「……うん……めぇぇぇぇぇぇ！！　何じゃこれ！　めっちゃ美味いな！」

「でしょう、師匠？　本当に美味しいお餅です」

ルアラが絶賛するのも頷ける。ただの餅かと思っていたら、そいつはとてもしなやかで、ほどほどの甘さがあった。さらに、この餅は二枚重ねになっていて、しかも、餅の中にはペースト状のソースが入っており、これがまた濃厚な旨味を持っていて、餅の味と見事なハーモニーを生み出していた。

「餅の美味さもさることながら、中身のソースも上品。そして……ゴボウが入っているのか？　でも、この旨味は……スゲェな。こんな美味な餅、初めて食べたよ。感動した」

ドーキは照れくさそうな顔をしながら、長い耳をユラユラと動かしている。

「それにしてもルアラ、お前、こう言っちゃなんだが、よく食べたな。毒とか何とかは気にならなかったのか？」

「私は、ある程度の毒なら消化できますし、フェアリがいたので、最悪は解毒する粉を出してもらえるかなと思いまして。それよりも、直感的にこれは美味しいと思ったものですから」

「なるほどな。確かに、餅がツヤツヤしていて美味しそうだものな。こんなものが作れるんだな。スゲェな、ドーキ」

「まだ、試作品の段階ですけれど、喜んでいただけてうれしいです。お口に合うかどうかわかりませんが、お子さんを産まれたということで、お疲れでしょうからその……お妃さまにと思いまして」

そう言って彼は、箱を俺に差し出した。俺は彼に丁寧に礼を言いながら、その餅をリコに食べさせた。

「リコ、あーん」

「……これは、本当に、美味しいですわね。メイ、マト、みんなも、食べてごらんなさいな」

リコも両手を口に当てて絶句している。そして、メイたちも餅を食べさせる。当然のように、彼女たちからも口々に美味しいと絶賛の声が上がる。そして、残った一枚を、俺は再びリコの口の中に、ひょいと入れた。彼女はそれをゆっくりと咀嚼して味わい、幸せそうな顔をしながら、ゴクリと飲み込んだ。

「ふう。ご馳走様でした。ドーキ……さん、本当に美味しゅうございました。感謝申しますわ」

ものすごい笑顔でリコはお礼を言っている。その姿を見てドーキは、とんでもございませんとペコペコと頭を下げている。

「ところで、こちらのドーキさんは、ローニと同じポーセハイですわね？　ローニのお仲間かしら？」

リコが不思議そうな顔をして聞いてくる。そうだ、リコにドーキのことを紹介していなかった。これは迂闊だった。

「ああ、リコ。彼は……」

「はい！　ボク、ローニの婚約者です！　……ぐふっ」

見ると、彼の脇腹にはローニの拳が深々と突き刺さっていた。

「ワ、タ、シ、ハ、あなたと婚約した覚えはありません！　それに……何で私の分がないんですかぁぁぁぁ！！」

……え？　そこ？　……まあ、確かに、食いしん坊のローニにしてみれば、美味しい餅が食べられなかったのは、悲しみ以外の何物でもないだろう。何はともあれ、このローニの問題も、解決しなきゃならないようだ。それにしても、こんな騒ぎの中でもイデア君はスヤスヤと寝たままだ。彼は将来、大物になるのかもしれない……。

第二百六十二話　喜びあれば悲しみも（後書き）

皆様にお願い：：

前回のお願いの際に、多くのご意見をいただきましてありがとうございました。ギリシャ神話の名前をもじる、ランダムで名前を付けるサイトをご紹介いただくなど、助かりました。勉強になりました。また、数名の方から具体的なアイデアも頂戴しまして、こちらも感謝でございます！「ルルイエ大陸」採用させていただき、次話で登場する予定です。お楽しみに！

キャラクター名はまだまだ募集中です。男性、女性、都市名……広く募集します。アイデアあるよ！という方、コメント欄でも結構ですし、メッセージで直接送っていただいても構いません。よろしくお願いいたします。

あ、キャラクターの性格やスキルなど記載してメッセージいただいた方がおられましたが、素敵でした。一瞬、惚れました（笑）。次章に使わせていただきます！ありがとうございます！

第二百六十三話　紆余曲折

「……で、どういうわけなんだ？」

リコの産室からダイニングに戻ってきた。椅子に座る俺の目の前には、ローニとドーキが並んで座っている。そして、俺の隣には、おそらくここ数日徹夜続きなのだろう、目を真っ赤に充血させた、チワンの姿があった。

俺は、この二人の話を聞く前に、ポーセハイの長であるチワンも同席してもらった方がいいと考えた。そこで、チワンに念話を飛ばしたところ、即答で伺いますと返事があった。そして、ほどなくして俺の屋敷に転移してきたのだった。

「チワン、大丈夫か？　寝て……ないな？」

「問題ありません。４日ほど寝てないだけです。問題ありませんよ」

「いや、寝ようよ……」

「それより、行方が分からなかった同胞が見つかったのです。こんなにうれしいことはありません。……ドーキ、久しぶりだな」

「はい……お久しぶりです」

席に着くや否や、チワンが口を開く。ドーキは何か後ろめたいことがあるのか、チワンを前にしてオドオドしている。

「ところで、お前は今、何をしている？」

「……」

「お菓子屋をやっていると言っていました」

ローニが憮然とした表情で答える。それを聞いたチワンは、ため息をつきながら言葉を続ける。

「そうか。ちゃんと生きているならそれでいい。実は心配していたんだ。いくら思念で呼びかけても返答がない。だから、安否を確認することもできなかった。それにしても、本当に生きていて、何よりだった」

「……すみません。魔力を一切封印していたのです」

「いや、謝らなくていい。だが、どうして一切の魔力を封印していたんだ？　差し支えがなければ、教えてもらえないだろうか？」

「……一人前になろうと思って」

「一人前？」

「僕は……医学の才能はありません。人の血を見るのが大嫌いですから。鼻が利きすぎるから、薬だって扱えない。だから、別の道で一人前になろうと思ったんです」

「確かにお前は、ちょっとでも刺激のある薬を扱うと、くしゃみが止まらなくなっていたな。うん、それはわかる。で、それがなぜ、お菓子屋なんだ？」

「最初は料理人になろうとしたんです。子供の頃から、母の料理を手伝うのが好きでしたし、自分で何かを作るのも好きでした。だから、ホテルの厨房に入って修業をしていたんです……。しばらくそこに居たのですが、あるとき、兄弟子が自分の国で店を出すことになって、僕も一緒に働かないかと誘われたんです」

「ほう、ならば、それなりにお前は頑張ったんだな。しかし、魔力を封印することもあるまい」

「いいえ。ポーセハイの能力は、医学的なことにも使えますが、人を惑わすこともできます。そういう能力があることは出来るだけ隠したかったのです。……ポーセハイの評判はあまり良くなかったですから。僕は、一人前になるまでは、ポーセハイであることをできるだけ隠しながら、魔力を使わずに、自分の力でやっていきたいと思ったのです」

「なるほどな」

「それで、兄弟子の国に向かおうと旅をしていたんですが、途中で道に迷っちゃって……。必死で山の中をさ迷っていたら、ミーダイ国にたどり着いたんです」

「ミーダイ国？」

「ルルイエ大陸にある国です。ここからだと……船と徒歩で１０日ほどかかりますか。周囲を高い山に囲まれた、小さな国です」

「ルルイエ大陸？」

「リノス様、お忘れですか？　あのフラディメ国やサンダンジ国がある大陸ですよ。で、ドーキ、お前はそこで、何故お菓子屋に？」

「ミーダイ国の人々はとてもいい人ばかりで、こんな僕を手厚くもてなしてくれました。ただ、その国では、採れるのが大根やニンジンなどの根菜ばかりでして……。正直、あまり美味しくはなかったんです。そこで、僕がお礼に料理をしてあげたら、とても喜ばれて……。で、そこに居ついて料理屋を始めたんです」

「お菓子屋、関係なくないか？」

「ええ。最初は料理屋をやっていたんですけれど、色々と調べていくと、ヤートと呼ばれる大根みたいな作物が、煮詰めると砂糖みたいな粉ができることが分かったんです。ミーダイ国では、あまり甘味のお菓子というものがなかったので、一度作ってみようと思ったのが、お菓子を作るきっかけです。試行錯誤の結果、意外に美味しいお米が採れるのが分かりまして、それにヤートを加えてカチン……こちらではお餅というのですか？　それを拵えてみたんです。そうしたら、すごく周りの人に喜んでもらえて……。で、根菜の料理は他の人に任せて、僕はお菓子屋をやってみようと……それで、今に至ります」

「なるほど、じゃあ、きちんと生活は出来ているんだな？」

「はい。それは……。家も持てたので、僕も一人前になったかなと。で、ローニと……」

そこまで言うとドーキは、チラリとローニを見た。しかし彼女はフンとそっぽを向いている。

「そう言えば、お前たちは子供の頃、仲が良かったからな。いい機会じゃないかローニ、結婚しろ」

チワンが真顔で口を開いている。それを聞いてローニの目が吊り上がる。

「イ、ヤ、で、す。大体、結婚云々の話は、５歳の頃の話です。その話を２０年以上も覚えているのって、おかしくないですか？　リノス様、おかしいですよね？」

ローニが俺をガン見している。俺はオホンと咳払いをして、口を開く。

「まあ、その、何だ。男と女は思考が全然違うのだよ、ローニ」

「どういうことでしょうか？」

「上書き保存と、名前を付けて保存の違いだ」

「え？　ウワガキ……？」

「要は、女性の思い出は上塗りされていくと言われている。特に以前付き合った人のことなどはあまり意識せず、今、付き合っている人に集中するらしいな。しかし、男は違う。昔の思い出をいつまでも記憶の片隅に取っておくんだ。たとえ、嫁がいようとも、だ。それをたまに思い出しては、あの時の女の子はどうしているかな……好きって言っていたよな……なんて考えるんだ」

「……気持ち悪いですね」

「……気持ち悪いって言うな。悲しくなるわ。男ってのはそういう生き物だ」

隣でチワンが深く頷いている。そうだろう。チワン、お前は、俺の言っていることはわかるよな？

「だから、ドーキが5歳の約束を持ち出してくるのは、分からんではない。女子からすると気持ち悪いかもしれんが、俺から言わせると、心が純粋なヤツだと思うぞ？　ローニは今のところ、好きな人はいないのか？」

「いません」

「なら、付き合っちゃえばいいんじゃないか？」

「えー」

「いや、結婚しろとは言わん。2、3回デートくらいしてやれんか？」

「リノス様、失礼を顧みずに言わせていただきますが、私にも選ぶ権利はあります」

「う～ん。ダメかぁ」

俺は天井を見ながら唸る。ドーキはいいヤツだと思うんだけどなー。いや、これは、男としての勘だ。5歳の、おそらく彼にとっての初恋をずっと忘れずにいた……叶えてやりたい。うん、確かに、女子からはキモイと思われるかもしれない。俺も、マジで？　と思う気持ちがないわけではないが、お節介を焼きたい……。

「まあ、族長として、ローニ、お前に無理に結婚しろとは言わん。ただ、いつまでも独身というのもなぁ……まあ、それはいい。ところでドーキ、お前の住まいは確認させてくれ。それに、月に1度は我々の村に顔を出してくれ」

「はあ……それが……」

「どうした？」

「僕はあまり店を空けられないのです」

「どういうことだ？」

「僕がいないと、帝様（みかどさま）が残念がりますので……」

帝様（みかどさま）っていうと、王様ってことか？　まさここここで王様の名前が出るとは思わなかった。もしかするとドーキは、皇帝の料理番ってやつなのだろうか？

俺は、詳しい話を聞こうと、さらに彼の話に耳を傾ける……。

第二百六十三話　紆余曲折（後書き）

皆様にお願い：：

まだまだキャラクターの名前、募集中です。
男性、女性、都市名……広く募集しています。アイデアあるよ！という方、コメント欄でも結構ですし、
メッセージで直接送っていただいても構いません。よろしくお願いいたします。採用された名前は次章にて使わせていただきます。助けてください。よろしくお願いします！

第二百六十四話　みんなイイ人ばっかりだ

予想外の答えだったためか、チワンが頓狂な声を出している。そんな様子を見ながらドーキは、ぼそぼそと帝との関係を語り始めた。

「帝様ぁ？」

話を聞くと、ミーダイ国は約１０年前に、国を二分するような大乱があったらしい。今の帝は、その乱が収束した後に、わずか１２歳で即位されたのだという。しかし、その大乱で都の大半は焼け野原と化し、国は大きく衰退した。一時期は住まいの御所は荒れ放題となっていたらしい。本来は、貴族たちが帝を支えねばならないのだが、彼らも、その日の暮らしで精いっぱいであり、帝のことまで構う余裕などない状況なのだそうだ。

そのため帝は、即位はしたものの財政難からその即位式すら行うことが出来ずに、今に至っているという。国の財政はほぼ破たんした状態であるらしく、帝の地位にありながら、食うに事欠く有様なのだそうだ。ある時期などは、一日一食、しかもそれさえも粗末な食事のみで命をつないでいたこともあったのだという。

そこで、見かねたドーキがある朝、なけなしのもち米を撞いて、こぶし大程の餅を６つ作り、それを御所に納めたのだと言う。応対した女官は驚き、そして大いに喜び、そのまま帝の許にそれを持って行った。しばらく待っているとその女官が戻って来て、庭に回れという。大きくて広い、しかし、荒れた庭を歩くこととしばし。彼は、大きな建物の前に出た。キョロキョロとあたりを見回していると、風よけの布がはためいているのに気が付いた。元々ここには壁があ

ったのだが、戦乱の影響で壁に大穴が開いてしまい、その部分を布で覆っている、というより、布をぶら下げているようにしか見えないのだが、そこから、小柄な男が顔を出していた。

「……それが、帝様（みかどさま）だったんです」

「え？　ずいぶん気さくなんだな」

「はい。それでわざわざ僕のところまでお出ましになって、餅が美味しかったとお礼を言われたのです。とても喜んでくれまして……。うれしいじゃないですか。それで、その日から毎朝、お餅をお届けしているんです」

「マジか……」

「女官様は、気を使わなくていいと言われるのですが、どうやら、僕のお餅を帝様（みかどさま）と皇后様が仲良く召し上がられているようで……。この間などは、皇后様もお出ましになって、毎日お餅を楽しみにしていると仰いました。僕が朝餉をお持ちせねば、お二人が飢えてしまいます。だから、僕が店を長い間空けるわけにはいかないんです」

あまりの話に、俺は絶句する。何、この話。メッチャええ話ですやん。

「認められません」

いきなりキツイ言葉が飛んでくる。発言しているのは、ローニだ。

「王ならば、なぜ、国を復興されないのです？　なぜ、ご自身で他国に赴いて救援要請をしないのですか？　財政が破たんしているの

なら、まずは財政再建をするべきでしょう」

「うーん。ローニの言う通りなんだよね。ただ、国内はまだまだ治安が悪いし、盗賊なんかも出るんだ。それに、帝様は高潔すぎるんだよね……」

「高潔すぎる？」

「うん。他国に救援といっても、とても不便な場所に国があるので、なかなか物資を届けるのが難しいんだ。それに、帝様は支払う対価がないと仰ってね。だから、その対価となる物をご自分でお作りになっているんだ」

「何ですって？」

「帝様が土をこねて焼き物を作り、皇后さまが機を織って布を拵えて、それを売っているんだ。で、そこから得たお金の大半を民に分け与えている。帝様のお作りになる茶わんや壷はとてもいいもので、結構売れるんだよ。でも、最近は偽物も出回るようになってね……。帝様はそれを取り締まるどころか、偽物を作っている者にも生活があるだろうと仰って、応援しようとさえなさるんだ。そりゃ、いつまで経っても暮らし向きは楽にならないさ。お付きの方も、もっと上手に儲けましょうとご意見も申し上げているし、実際、支援の申し出もあったんだけど、帝様が断られるんだ」

「何ですか、それ？　売れるなら売ればいいじゃないですか？」

「うん。邪心があると仰ってね。国の民を唆そうとしているから受けないとキッパリと断られたんだ。でも、帝様はそういう高潔さがあるから、国の人々にはとても慕われていてね。だから何とか今、

国が滅びずに持っているんだ」

「何だか、スゲエ王様だな」

「本当は、僕が転移を使って、世界各国に帝様（みかどさま）や皇后様がお作りになった品を売って歩けばいいんだろうけれど、僕の魔力は少なくて……僕一人を転移させるので精一杯なんです。子供の頃から、もっと魔法の修行をしておけばと、今になって後悔しています」

「うん？　でも、ドーキ。君は確か、リコに食べさせたお餅を転移して取りに帰ってたじゃないか。2～3回転移できるのなら、王様の作品を売りに行くことくらいは出来るんじゃないのか？」

俺の質問に、ドーキはちょっと悲しそうな表情を浮かべて口を開く。

「あれは……MPを回復させるポーションを飲んだのです。通常であれば、転移を使って往復してしまうと、回復するまでに二日かかります。ポーションもそんなにたくさん持っているわけではないので……」

「なるほど。それなら……難しいな。てゆうか、そんな大変なことなのに、わざわざ餅を持ってきてくれたのか？　……ありがとうな」

俺はちょっと感動してしまった。どこまでいい奴なんだ。そんな中、ローニが突然口を開いた。

「と、いうことは、もし、万が一、億が一、私があなたと結婚したとすると、私はそのミーダイ国に住まねばならなくなりますね？　私はアガルタの研究所に勤めていますし、さらに私は、アガルタ王妃のリコレット様、コンシディー様の主治医です。ミーダイ国には

住むことは出来ません。よって、あなたとの結婚は……」

「お前は何度も転移できるだろう。できなければ、鍛えてやるから安心しろ」

「ぐはっ！」

チワンの適確なツッコミにローニが悶絶している。この日は、ドーキが国に戻らなければならないと言って、話し合いは後日に持ち越された。

その日の夜、俺はメイとシディーを伴って、再びリコの産室に向かい、彼女と息子を見舞った。ドーキのことはローニから聞いたらしく、リコは子供におっぱいをあげながら、口を開く。

「ドーキというお方は、いい人ですわね。それに、ミーダイ国の帝様も、とても良いお方のようですわね。私たちが出来ることであれば、お助けして差し上げたいですわね」

「そうだな。機会があれば一度、伺ってもいいかもしれないな」

「そうですわね。私も一度、お目にかかりたいですわ」

そこまで言うと、リコはイデアを胸から離し、肩に抱いて彼の背中をトントンと叩いてげっぷをさせている。そして、イデアをメイに渡して衣服をあらためながら、再び口を開いた。

「ところでリノス、一つ聞きたいことがあるのですわ」

「何だい？」

「ローニから聞いたのですが、男性と女性の考え方ですか？　女性は今を見て、男性はいつまでも昔の恋人を覚えている……というお話、あれは、どなたから学ばれたのですか？」

「え？　誰って……？」

「男性はさておき、女性の……は、女性でないとわからないものですわ。どなたから学ばれまして？　メイからですか？　シディーからですか？」

メイもシディーも、顔を見合わせながら首を振っている。そして、二人とも俺に注目している。何？　この展開？　いや、前世の記憶ですよ。昔……ね。教えてもらったんだよ。でも、そんなことをここで言えるわけはない。俺は目を泳がせながら、口を開く。

「エリルだ」

「エリル？　エリルはまだ……」

「いや、エリルお嬢様の方だ」

「え？」

「お嬢様が昔、俺にそう教えてくれたんだ。うん、お嬢様が、だ」

「……そうでしたか。さすがはリノスの先生ですわね」

リコが笑みを浮かべている。よかった。何とか乗り切ったようだ。ただ、今夜あたり、もしかすると、エリルが夢に出てくるかもしれ

ない。そのときは……ひたすらに怒られることにしよう。いや、イメージアップは図れたから、逆に褒められるのかも……って、エリルに限ってそれはないな。まあ、出たら出たで、そのときはそのときだ。

その夜、俺は寝言で何故か「話せばわかります！」という言葉を繰り返した。

第二百六十四話　みんなイイ人ばっかりだ（後書き）

先日から募集していますキャラクター名、アイデアをいただきありがとうございました。現在、下記の名前を採用し、次章にて使用させていただきたいと思います。

男性名：クロヌノ、ゼンハイ、フィット、ベンテ、ダエモ、カホシ、ナンゴ、リーヘイ
女性名：ハーギ、サツキ（メイがいてサツキがいないのはアカンやろ、のメッセージに大納得でした）、ゼザ、シロン

まだまだ募集中です（特に都市名）。よろしくお願いします。

第二百六十五話　それぞれの夢

「それではな。……息災で、暮らせよ」

沈痛な面持ちで話をしている男の眼には、涙が光っていた。彼は思いを断ち切るかのように踵を返して、ゆっくりと馬を走らせた。そして、振り返ることなく、アガルタの草原をゆっくりと進んでいく……。

と、いきなり彼はクルリと馬を返し、全力で戻ってきた。そして馬から飛び降りて、元居た場所に戻っていく。

「やっぱり別れるのは無理だぁ～～～無理だぁ～～～～おおおお～～～～」

「……一体あと何回これが続くんだ？　もう8回目だぞ？」

号泣しているのは、メインティア王であり、その視線の先には、赤ん坊を抱いたノレーンの姿があった。そして、その周囲には何とも言えない表情で立ち尽くすリノスと、メインティア王の従者であるパターソンたちの姿があった。その様子をマトカルは呆れた顔で眺めている。

メインティア王の側室であるノレーンは、予定よりも2週間も早く産気づき、一時、メインティア王の周囲は騒然となった。だが、彼女の主治医であるサイリュースの見事な対処で事なきを得た。……産まれたのは、男の子だった。王はこの子に、オンサールと名付け

た。

子供はサイリュースの配慮で精霊たちの力を借りながら、しばらくの間過ごすことになった。いわゆる保育器に入っているようなもので、それも数日のうちに出ることができ、彼は母親の許に帰ってきたのだった。

このオンサールだが、どこをどうしたものか、メインティア王の可愛がり様は半端ではなかった。彼はノレーンと共に子供のおむつを替え、一緒に風呂に入れるなどの子煩悩パパに豹変してしまっていた。７０人以上の子供がいるのに、一体どうしたことかとパターソンたちは目を白黒させていた。

しかし、彼のアガルタでの逗留期間は残されていなかった。既に帰国の日程は決まっており、その準備も滞りなく終わろうとしていたのだ。結局、子供と過ごせたのは2か月ほどであり、彼は泣く泣く帰国の途に就くことになったのだった。

「……帰国の日程を延ばせなかったのか？　居ても居なくてもよい王なのだろう？」

マトカルが呟く。俺は力なく首を振りながら口を開く。

「いや、本人が言い出したことなんだ。俺は引き留めたんだぞ？　でも、キャバレットの件もあるから、予定通り帰らなければならないと頑として言い張ったんだ。大上王も、進歩がなければアガルタに逗留しても良いと書いて寄こしてきていたんだけど、それを蹴って王は帰ると言い切ったんだ。自分の国をよりよいものに導く夢が出来たから、早く帰国して取り掛かりたいとまで言っていたんだぞ？　まさか今日、当日にこんな仕上がりになるとは、思いも寄らな

かったよ」

「さっきから行ったり来たりを繰り返しているが……どちらかに決めてもらいたいのだがな。とはいえ、荷物もまとめていることだしな……仕方がないな」

マトカルはため息をつきながら、メインティア王の許に向かう。

「メインティア王様、お妃さまと王子様の絵を描かれてはいかがか。そうすれば、お二人といつも一緒に居られることになりはしないだろうか？」

その声を聞いてメインティア王は、ガバッと顔を上げる。

「その手があったか！　さすがはアガルタ王のお妃さまだ。是非、そうさせてもらおう！　パターソン、今日の出立は延期だ！　今から絵を描く！　絵筆を出せ！」

パターソンたち従者が、膝から崩れ落ちたのは言うまでもない。結局、メインティア王はもう一日アガルタに滞在し、絵を描き上げて次の日の朝、号泣しながら帰国の途に就いた。

そして、その三日後。シディーの陣痛が始まった。夕方、メイと共に庭を散歩している時にお腹が痛くなり、彼女の判断ですぐさま産室に連れて行かれた。そして、ローニを呼び、いよいよ出産に取り掛かったのだった。

体が小さいために、出産まで時間がかかるだろうと思っていたが、俺の心配をよそに、シディーは日付が変わる頃になって、無事に赤

ん坊を産み終えた。

……産まれたのは、何と、女の子だった。

ローニからその報告を聞いて仰天している最中に、何と、サダキチが俺の目の前に現れた。

「どうした、サダキチ」

「敵襲です」

「敵襲？」

「夥しいシカが、それも小鹿がこの屋敷の周囲を取り囲んでいます」

「シカ？　小鹿がいっぱい？　……もしかしてこの魔力は？　……サダキチ、それ、放っておいても構わないや」

「え？」

「……うん。大丈夫だ。ご苦労だった」

俺はサダキチに黄金鳥の肉を与えて帰らせる。そして、それから約1時間後、数千匹にも上るシカの大軍が屋敷の庭に現れた。ジェネハらハーピーたちが驚きのあまり臨戦態勢に入ってしまい、屋敷の前は一時騒然となったが、俺が外に出るとすぐに、シカたちが発光しながら1か所に集まり始めた。俺はジェネハたちに心配の必要はないと告げて、彼女らを下がらせる。

「……一体、何をやっているんですか？　鹿神様？」

にこやかな笑みを浮かべて俺の許に近づいてくる鹿神様。確か、この人には帝都の屋敷の場所は教えていなかったはずだ。何故、ここが分かったのだろうか。

「いや、コンシディーの気配を頼りに来たのだ。結界のせいか？　コンシディーの気配を見つけるのに苦労したぞ。だが、新しい気配を感じたので、きっと生まれたのだと思って、居ても立っても居られずに来させてもらったのだ。そなたの結界は一歩間違えば命の危険があるのでな。力の強い者であればあるほど効果を発揮する結界を張っているのか？　我の姿では結界が突破できなかった。よって我は力を分散したのだが、結界を通る時には肝を冷やした。実に厄介だ」

ハッハッハッと豪快に笑う鹿神様。聞けば、出産の予定日の１週間も前から屋敷の結界の外に待機して、シディーの動向を探っていたのだというのだ。ストーカーの中でも上級者クラスに入る行動力だ。しかし、彼の言い分もきちんとあった。ドワーフ王家の女子については、男子に比べて抵抗力が低いために、生まれてすぐに鹿神様からの加護を受けねばならないそうで、それもあって鹿神様はストーカー行為に及んだのだと言うのだ。

「でも鹿神様は、シディーの子供は王子だと言っていましたよね？　女子だという可能性も考えておられたのですか？」

「……いや、皆無だ」

笑顔でぬけぬけと言ってのける鹿神様。つまるところ彼は、最愛の孫であるシディーの子供を早く抱きたいという思いだけで、ストーカー行為に及んでいたのだ。加護についても、ひと月以内であれば

全く問題ないのだという。何とも呆れた話だ。

「そんなにかわいいのであれば、もっとシディーの所に来てやってくれればよかったんですよ」

そんなことを言う俺に、彼は苦笑いをして答えを返す。

「いや、そうもいかんのだ。我はニザ公国を守護せねばならんからな」

「え？　でも、今このヒーデータ帝国に来ていては、ニザ公国は……？」

「そこは……アハハ、大丈夫だ」

俺は怪訝な表情をしながら、鹿神様をダイニングに案内する。当然、家族はびっくりしている。俺は鹿神様を皆に紹介して、シディーの産室に向かう。そこには、ローニとメイ、そして、フェリスとペーリスがシディーのベッドに集まっていた。

シディーはとても幸せそうな顔をして、赤ん坊を抱いていた。

「リノス様、どうぞ」

ローニの案内で、シディーのベッドの隣に腰を下ろす。

「リノス様……まさかの、女の子でした」

ちょっと驚いたような顔をするシディー。俺はそんな彼女に笑顔で口を開く。

「いいや。元気に産んでくれて、シディーも無事ならそれでいいんだ。……おお、シディーによく似ているな。この子は……賢そうな顔をしているな」

そんな俺の言葉に、彼女はとてもうれしそうな顔をしている。ドワーフ王族の中で、初産で女性が産まれるという初めての事態なのだが、彼女はそこら辺は問題ないらしい。これは後で聞いたのだが、生れたのが女の子とわかった段階で、メイとローニはかなり焦ったらしい。そして、恐る恐るシディーに女の子であることを伝えたところ、彼女は一瞬驚いた表情を浮かべたが、すぐに柔和な顔になり、こう呟いたのだそうだ。

「大丈夫。この子は絶対に大丈夫」

何の根拠もないのだが、シディーには絶対の自信があったのだそうだ。その話を聞いて以降、俺はこの問題を考えるのは止めることにした。きっと、シディーの直感は正しいと俺も思うからだ。

「それにしても、あれだけ抜群の頭脳をしていたのに、男か女かはわからなかったんですね、シディー姉さま」

フェリスが赤ん坊を覗き込みながらそんなことを言ってくる。

「自分のことになると、全く分からないのよ。困ったものだわ」

「まあいいじゃないか。シディーのおかげで俺たちは助かっているんだし」

そんなことを言い合いながら、俺たちは笑いあった。その後、鹿神

様が来ていることを告げ、驚きのあまり狼狽える彼女を何とか宥めて鹿神様を呼び、加護を授けてもらった。

「おお！　我が妻のサマーシェによく似ている。この子は将来美人になるだろう」

デレデレの鹿神様であった。結局、この子の名前は、俺とシディー、そして鹿神様との相談で、「ピアトリス」とすることに決まった。ピアというのは、ドワーフの言葉で、最高に美しいという意味らしく、そして、トリスというのは、初代ドワーフ王のお妃の名前だ。それを組み合わせて、美しい佇まいでありつつ、自分の人生を切り開いていく女性になるように願いを込めた。

「ピアトリス……可愛い名前……」

そう言ってシディーは再び我が子を抱きしめた。

彼女は、直感的に感じていた。この子が自分にはない才能を持って生まれてきたことを。そして、その才能が、きっと多くの人を幸せに導くだろうということを。

キュッと目を閉じながら、うごうごと自分の腕の中で動いている我が子を見ながら、シディーはこれまでに感じたことのない達成感と幸せで満たされていた。そして、この子の成長を見守りながら、その才能を見つけて、伸ばしていこうと決意した。彼女自身にとっても、新しい夢を見つけた瞬間でもあったのだ。

さて、このピアトリスが生まれてから5日後、鹿神様と入れ替わるようにして、ある男がリノスの屋敷を訪れた。このことが、リノスを始めアガルタにとって最大の危機をもたらすことになるのだが…

…。それはまた、別のお話。

第二百六十五話　それぞれの夢（後書き）

第九章終了です。これから間話3本を挟んで、新章に入る予定です。

第二百六十六話　鬼の目にも涙

フラディメ国には、二つのタブーがある。

「フラディメで　触れてはならぬ二つごと　王のあばたに　王弟の死」

このことは、アリスン城に仕える人間が最初に教えられる事柄であり、ここ数十年間、家来たちの間で秘密裏に伝えられてきた。ここでの王とは、言うまでもなくリボーン大上王のことであり、家来たちは彼を恐れるあまり、今ではこの話題が大上王の前で出ることはない。

そんなアリスン城の大広間は、首都、オービッゼに居る全ての貴族と、城に仕える家来、女官のほぼ全員が集められ、立錐の余地もなく人で埋め尽くされていた。にもかかわらず、この部屋はまるで人がいないかのような静寂に包まれている。誰もが息を殺して、微動だにせずに立ち尽くしているのだ。

部屋の奥に設えられた、一段高くなった場所には3つの玉座が置かれており、その真ん中には国王であるメインティア王が、いつもと変わらぬノホホンとした表情で座っている。彼は、緊張感で張り詰めた人々の顔を満足そうに眺めている一方で、下座には彼の正妃が座っているが、彼女は顔面を蒼白にしながら、扇を口元に当てながら俯いている。よく見ると、彼女の肩は小刻みに上下している。

「どうです、よく描けているでしょう?」

メインティア王はチラリと上手の玉座に目をやりながら、言葉を放つ。しかし、そこには誰もいない。

言うまでもなく、その席にはリボーン大上王が座っているはずであった。だが彼は、居並ぶ家来たちに背を向けたまま、メインティア王の玉座の後ろで立ち尽くしている。彼の視線の先には、巨大な絵が飾られており、それは言うまでもなく、王がアガルタで不休不眠の末に書き上げた、キャバレット一家の絵であった。そして、その前には、キャバレットが封じ込められている短剣も祀られていた。

帰国したメインティア王は、大上王へのあいさつもそこそこに、オービッゼの全ての貴族とアリスン城内の家来たちをすぐさま大広間に集めるように命令を出した。大上王は訝ったが、いつもとは違う雰囲気を纏い、柔和だが迫力のある物言いをする息子に押し切られる形で、わざわざ隠居館からこの部屋までやってきた。そして、全員が揃ったのを確認した王は、おもむろに口を開いた。

「皆の者、1年もの間、よくこの国と城を守ってくれた。礼を言う。お蔭で私はアガルタで、多くの知己を得、多くのことを学ぶことができた。そのことについては追い追い話をするとして、まずは、ここに集まった皆に見せたいものがある。……パターソン」

メインティア王は、傍らに控えていたパターソンに目配せをする。彼は、一礼をし、おずおずと傍の扉から外に出て行った。そして、ほどなくして、玉座の背後を飾るカーテンが静かに開かれていく。

……そこには巨大な絵が立てかけられていた。しかも、そこには、大上王の亡き弟であるキャバレットと、その妻子が見事に描かれて

いたのだった。

人々は絵のあまりの素晴らしさに息をのんだが、その一方で、描かれているのがキャバレット一家であるとわかると、しばらくは、吸い込んだ息を吐き出すことができない程に凍りついた。そんな雰囲気を楽しむように微笑みを浮かべながら王は、玉座にかけたままゆっくりと振り返る。そして、それにつられる形で、彼の正妃と大上王が振り返った。

しばらくの沈黙の後、正妃は見てはいけない物を見てしまったかのように、素早く正面に向き直り、口に扇子を当てたまま俯いてしまった。その光景を、王は優しい笑みのまま見守っている。そのとき、大上王がゆっくりと立ち上がり、絵に向かって近づいていく。

「……どういうつもりだ？」

威厳のある声が部屋中に響き渡る。よく見ると、大上王の拳は固く握りしめられており、かすかに震えている。集まった人々はこれからどのような恐ろしいことが起こるのか、固唾を呑んで見守っている。

「そういうことですよ、父上」

ノホホンとした声が響き渡る。大上王はピクリとも動かずに絵を睨み続けている。家来たちからは彼の背中しか見えないが、その顔はこの世のものとは思えぬほどの恐ろしい形相になっていることは、容易に想像がついた。

「キャバレットの叔父上のことについては、アガルタから手紙を差し上げた通りです。私は、叔父上たちを忘却の彼方に追いやるべき

ではないと考えています。そのために、我々は……」

「勝手にせよ」

王の話を最後まで聞くことなく、大上王は吐き捨てるようにして、そして、ぶ然とした表情を浮かべたまま、大股で部屋を後にしていった。その様子を、王はいつものように柔和な笑顔で見送った。

「……父上もあのように言っておいでだ。さて、皆の者。我は本日をもって、叔父、キャバレット、並びにその妻である叔母のミーティア、その子息であるグレゴーンの名誉を回復させようと思う。従って、キャバレットの叔父上は公爵の位に復させ、息子のグレゴーンにも公爵の位を授ける。そして、彼らを祀る墓を建てようと思う」

集まっている大半の者は、キャバレットのことを知っていた。この王の言葉に皆は、眼を見開いて驚く。そんな様子を見ながら王は、さらに言葉を続ける。

「叔父上は、華やかなことを好まれた。王族のような地味な墓は好まれないだろう。そうだな……美術館。そうだ、叔父上の寄徳が偲ばれるような物を展示するのだ。そして、誰もがそこを訪れるようにしよう。当然、入場料など、金を取ることは禁じる。そこに、この絵と短剣を飾ろうではないか」

王は満足そうな表情を浮かべながら、再び振り返ってキャバレット一家の絵を眺める。

「あともう一つ……ネシウム伯爵親子」

振り返った王が名を呼んだ。すると、居並ぶ人の中から小柄な壮年

の男と、まだあどけなさが残る少年が現れた。

「はっ……ここに」

「今日をもって、フラディメ国の国技として蹴鞠を定める。伯爵は幼い頃から叔父上に蹴鞠を習っておったな？　これから、伯爵が中心となって、叔父上の、引いては我が国の伝統である蹴鞠を広めてもらいたい」

「はっ……ははっ！　身命を賭しまして……」

親子は震えながら頭を下げる。その様子に満足げな表情を浮かべながら、王は新しく作るキャバレットの墓について、矢継ぎ早に命令を下していくのだった。

……その夜、誰もいない、いるはずのない大広間に、一人の男が立っていた。天窓から差し込む満月の光が部屋の中を薄暗く照らしている。男は、何やらブツブツと呪文を唱えたかと思うと、小さな光の塊を掌の上に発生させ、それを空中に浮かべた。

「……懐かしいな。そなたは、魔法については全く不得意であった。幼い頃は、こうやってよく、部屋を明るくしてやったな」

ぼそぼそと独り言のように呟いているのは、何と、リボーン大上王だった。彼は懐かしそうに絵を見ながら、小さな声で、さらに呟く。

「……もう二度と会えぬと思っていたが、こんな形で会えるとはな」

そう言いながら彼は、絵の前に祀られている短剣を手に取った。封

印のためか、剣を抜くことは出来なかったが、彼はそれでも、その短剣を愛おしそうに撫でる。

「……キャバレット。あのとき、なぜ、儂に詫びなかったのじゃ。兄上、すまぬ。そう言ってくれれば、そなたの命は救えたのだ。それを……意地を張りよってからに。言うことを聞かぬ他の貴族たちを厳しく罰しているのに、そなただけを許すことは出来るわけがなかろう。儂は……儂は……そなたを失いたくはなかった。だからこそ、儂に詫びよと書状を遣わしたのだ。だというに……だというに……そなたは……。いや、すまぬことをした。そなたにも、ミーティア殿も、グレゴーンにも。されど、仕方がなかった。仕方がなかったのじゃ……」

大上王はゆっくりと息を吐く。そして、やさしく絵に触れながら、口を開く。

「……キャバレット。儂は、どうすればよかった？　そして、これからどうすればよい？　家来たちは、誰も儂に意見をする者がない。そなたのように、儂を諫める者がおらんのだ。儂がやってきたことは正しかったのだろうか？　キャバレット、教えてくれ。どうすれば、家来たちは儂に心を開いてくれる？　どうすれば、息子は儂と語り合ってくれるだろうか？　儂は……わからんのだ。キャバレット、教えてくれ。頼む……頼む……」

誰も居ない大広間で、大上王はしばらくの間、大粒の涙を流し続けた。

メインティア王に、キャバレットの美術館について、自分の隠居館を提供したいという申し出が大上王からあったのは、その翌日のことだった……。

第二百六十六話　鬼の目にも涙（後書き）

『結界師への転生　第二巻』発売決定しました！
発売は、２０１８年１月頃の予定です。これも偏に、読者の皆様のお蔭です。感謝申し上げます。
第二巻はいよいよ、リコ様、メイちゃんが登場します。例によってエピソードも加筆する予定です。
詳しくは、活動報告をご覧ください！

第二百六十七話　サッカーの神様

キャバレットの魂がフラディメ国で祀られるようになってから、およそ１００年の月日が経った。今、彼はフラディメ国の首都、オービッゼの森の中で、静かに時を過ごしている。

元々は、リボーン大上王の隠居館を改装した美術館に祀られていた彼であったが、今から約５０年前に、館の老朽化を理由に、この森の中に新たに美術館は建てられ、魂をここに移されたのだ。

森の中とは言え、この建物に人が絶えることはない。入場料が無料であることはもちろんだが、そこに蒐集されている品物が、歴史的価値が高く、学者やマニアが目を輝かせて通ってくるのだ。

「……」

キャバレットは、剣に封じ込められて１００年経った今でも、その命を繋いでいた。彼は相変わらずただ、無言で日々を過ごし続けていた。

兄、リボーンに対しての思いは、未だ複雑なものがある。だが、甥のメインティアは毎月のように自分の許に赴き、その魂を慰めようと努力していた。何より、自分の傍らに飾られた絵が、何とも自分の心を癒すのだ。妻のミーティアは、あの時のままの美しさを湛えており、息子のグレゴーンは、その聡明さが見事に表れている。この絵を見ていると、早く自分も家族の許に行きたいという感情も湧き上がってくる。しかし、今の自分は精霊に取り込まれた中途半端

な状態だ。これからあと、どのくらい生きるのか見当もつかない。

「ふぅ～」

キャバレットは、訪れる人々を見て、ため息をつく。皆、取りあえず頭を下げてくれる。自分のことはこの国に住まうものであれば誰でも知っているし、必ず一度はここに訪れて、慰撫してくれようとするのだ。それはこの国の王とて例外ではない。毎年必ず王自らがここを訪れて、どうかお静まり下さい、これからも我が国をお見守り下さいと頭を下げるのだ。その上、年に一度、自分の目の前で蹴鞠が披露され、美しい音楽が奏でられるなど、国を挙げて自分を慰めてくれるのだ。

ここ数年は、それがセレモニー化してきている感もないではないが、元々義に厚い性格のキャバレットは、今のところ何かコトを起こすつもりはなかった。封印された当初は強力な結界を張られ、身動きを取るのも一苦労であったが、いつしかその結界も解けていた。今の彼は、この短剣から出ようと思えば出ることは出来た。しかし、この国の人々の、面はゆくなるほどの、痒い所に手が届くような慰撫に、彼は敢えて封印を破って外に出ようとする気持ちを萎えさせていたのだった。

そんなある日の昼下がり、一人の少年がキャバレットの前に現れた。子供が一人でここに来るのは珍しい。キャバレットはぼんやりと、その少年を眺めていた。彼は気恥ずかしそうにあたりを見回しながら、パンパンと柏手を二つ打ち、小さな声でキャバレットに話しかけた。

「神様、神様……。サッカーが上手くなるようにして下さい。お願いします」

そう言って彼は、脱兎の如くその場を走り去った。キャバレットには何のことであるのか、さっぱりわからず、彼は呆気にとられながら、その少年を見送った。

そして次の日、またしても少年がやってきた。そして、昨日と同じ言葉をつぶやいた。

「……さっかー？」

少年は「さっかー」というものが上手くなりたいという。それが一体何であるのか、彼には皆目見当もつかなかった。

キャバレットの戸惑いが解消されぬまま、少年は毎日この場所に通い、彼に願いをかけた。あるとき、余りのしつこさに根負けする形で、キャバレットは封印を破り、少年の前に姿を現すことにした。

「神様、神様……。サッカーが上手くなるようにして下さい。お願いします」

「……おい、これ、坊主」

「あれ？　おじさん、何？」

「誰でもよいわ。この間からずっとさっかーを上手くしてくれと言っておるが、うるさくてかなわん。さっかーとは何じゃ？」

「おじさん、サッカー知らないの？　ボルを蹴る競技だよ」

「ボル？　ボルとは何だ？」

「ボルも知らないのかよ。あの……こう……皮でできた丸いものだよ」

「ああ、毬のことか？」

「違うよ～。毬っていうのは女の子の遊びじゃないか。ボルだよ。ボルを蹴って遊ぶんだよ」

「蹴る？　蹴鞠のことか？」

「違うよ～。蹴鞠じゃないよ～。ボルをゴルに入れるんだよ。フォーメーションを組んでさ」

「ふぉーめーしょん？」

「おじさんに話してもわからないよ。この神様は蹴鞠が得意だったんだ。ボルを蹴るのが上手い神様なんだ。明日僕は試合なんだ。明日の試合には何としても勝たなきゃいけないんだ。だから一生懸命この神様にお祈りしてるんだ。だから、邪魔しないでおくれよ」

「神？　ここの主は、蹴鞠は得意だが、その……ボル？　さっかーなどというものは知らんぞ？」

「やだなーおじさん。ここの神様はよく聞いてくれるんだぜ？　僕がサッカーを上手にしてくれって頼んだら、本当に上手になったんだ。試合だって負けないんだぜ？　今のところ、この神様にお願いした試合は、全部勝っているんだ。すごくご利益のある神様なんだぜ？」

「……いや、そんなことはないと思うぞ？」

「いいからもう、邪魔しないでよ！　あっち行ってよオジサン！」

キャバレットは少年にけんもほろろに扱われ、追い出されてしまった。さっかーとは何であるのか？　彼は外に出てそれを見に行こうと試みたが、未だ封印の力は有効のようで、彼はある一定の距離以上はどうしても移動することができなかった。

この少年の言うサッカーは、キャバレットが封印されて数年後に、当時のアガルタ王であったリノスが考案したものだった。メインティア王が蹴鞠を世界に広めたいという相談を受けた際、彼が一肌脱いだのだ。リノスは、蹴鞠という形式的なものではなく、サッカーという、１チーム１１人で戦うスポーツとして普及活動を行ったのだった。最初こそ、競技人口は伸び悩んだが、３０年ほど前に一大ブームが巻き起こり、それ以降サッカーは世界のスポーツとして認識されるようになった。そんなことは全く知らないキャバレットは、ただただ、戸惑いながら、封印されていた短剣に戻る他なかったのだった。

それからさらに１０年後。キャバレットの周囲は、劇的に変化していた。

彼の短剣の周囲には、夥しい数のボルやユニフォーム、スパイクなどが飾られており、そこには厳重な結界が張られていた。よく見ると、展示品のほぼ全てに、何か文字のような、記号のようなものが書かれており、辛うじて読めるものには「感謝」や「奉納」などの文字が多く見られる。そして、その前には多くの大人と子供たちの姿があった。

「すげぇ！　ドーファッサリナのサイン入りユニフォームだ！」

「こっちは伝説のゴルを決めた時のボルがあるぜ！」

「うおっ！　フラディメがワールドカップで初優勝した時のボルがあるぞ！　すげぇ！　当時のメンバー全員のサインが入ってる！」

「何でこんな森の中の美術館に、こんなレアなアイテムが飾られているんだ？」

「何だ、お前知らんのか？　ここはサッカーの神様が祀られているんだよ」

「サッカーの神様？」

「ああ、名プレイヤーのザリアファンが子供の頃、毎日この神様にサッカーが上手くなるように祈ったそうだ。そのご利益があって、彼は世界の得点王になったんだ。今も得点の記録を更新し続けているのも、この神様の御利益のお蔭だと、彼の本に書いてあるぞ」

「スゲェな。俺もあやかろう！」

「今じゃ、世界中のサッカー選手がここで祈りを捧げているくらいだ。お前のような三流選手にはご利益はないだろうがな」

「いやいや、ちょっとくらいご利益あるかもしれねぇし！」

キャバレットの許には、目をキラキラさせた少年少女が日々、列をなして祈りを捧げるようになっていた。それだけでなく、世界に名を馳せた名プレイヤーが、折に触れてここを訪れるために、この場

所は世界の有名選手に会える場所として、サッカーファンの名所となっていたのだ。

「神様、神様……サッカーを上手にしてください……」

「……いや、だから。さっかーとは、一体何なのじゃ」

日々戸惑いながら、彼は少年少女たちの祈りを浴びる。彼らの純真な、キラキラとした目を見ていると、どうしても彼は、自分は神ではなく、ましてやスキルを上げる能力などは持っていないなどとは言えないのだった。

キャバレットの戸惑いをよそに、今日もこの場所には、ご利益を求めて少年少女たちが集まるのだった。

第二百六十八話　なぜなぜなぜ　どうしてなの？

「はぁぁぁぁ～。ふぅぅぅ～」

ため息をついているのは、リノスの妻の一人であるソレイユだ。愛嬌のある顔立ちと、とりわけ、その豊満な胸は、リノスの妻たちの中でも際立った存在だ。そんな彼女は、今、自分の胸に手を当てながら、一糸まとわぬ裸の状態で、その体を鏡の前にさらけ出していた。しかし、鏡に映る彼女は、なぜか浮かない表情だった。

……我ながら整った顔立ちだと思う。ちょっとタレ目なところが気になるが、冷静に分析すると、これがいい愛嬌になっている。リコ様のようにキッと目が吊り上がっているわけでなく、メイ様のように知性を湛えた目でもなく、シディーのようにクリっとした、いかにも可愛らしいですよという目でもない。そして、マトカルのようにジトッとしたような目でもない。そう考えると、リノス様のお側にいる女は全てタイプが違う。見事なものだと思うと同時に、キャラが被っている人がいないので、助かったと思う気持ちもないではない。

実のところ、ソレイユは焦っていた。このリノス家のお妃の中で、自分だけが子供を産んでいないのだ。厳密に言えば、マトカルも同じだが、彼女は流産になったとはいえ、一度、リノス様の子供を宿している。と、いうことは、次も子供ができる可能性は高いのだ。

このままであれば……ソレイユは考える。もし、このまま子供ができなくても、それを理由に自分を追い出すようなリノス様ではない。そして、リコ様を始め、他の皆も自分を追い出すことはないだろう。

しかし、母親であり、サイリュースの族長である、ヴィヴァルはどう思うだろうか。

リノスの妃に迎えられるにあたって、ソレイユは一族から大いなる期待をかけられて里を送り出されていた。それは言うまでもなく、優秀な子供を産むことであり、ゆくゆくはその子を族長とすることであった。

サキュパスの血を引くサイリュースは、元々から妊娠しにくい体質ではあった。そのため、多くのサイリュースは複数の男たちと交わりながら子孫を残そうとする。現に、メインティア王の側室であるノレーンの主治医を務めたキュイレールも、王の側近たちと交わり、この度めでたく子を宿している。

しかし、ソレイユにはその選択肢は全くと言っていいほどなかった。自分が他の男と交わることは、リノスとその家族への裏切りになる。と、いうより、リノス以外の男と交わること自体が、彼女にとって考えたくもない事柄であった。そういった意味では、彼女は、サイリュースの中では珍しい一途な性格であると言えた。

ソレイユはその豊満な体を、色々と角度を変えながら鏡に向かって映し出す。我ながら、いい体をしている。さすがに、リコ様のような、シミ一つない美しい肌ではない。メイ様のように、ちょっと大きめで、形のいい胸ではない。大きさでは負けはしないが、形の良さ……という点では、メイ様に軍配が上がる。しかし、シディーのように、膨らみ始めたような胸に比べれば、圧勝しているだろう。ましてや、マトカルのように体中に傷があるわけではない。ちょっと、左胸の下と、おへそ、そして、右の内ももと背中の数か所にホクロがあるが、それでも、ぶっちぎりの勝利だろう。ということは、自分の体はリノス家では可もなく不可でもない位置ではないか。体

が中途半端だから子供ができない？　いや、もっと別の原因がありそうだ……。

彼女がこんなことを真面目に考え始めたのは、つい最近のことだ。と、いうのも、メイの娘であるアリリアがソレイユに懐いていて、彼女はその可愛らしさにメロメロになっているのだ。とりわけアリリアは、ソレイユの歌がお気に入りだった。特に精霊を慰める歌を歌ってやると、アリリアはまだ回らぬ舌で一緒に歌おうとさえするのだ。

「ら～ららら～ららら～～～ららら～ららるるるるら～るるる～ら～」
「た～た～」

最近では一部の曲を覚え、その最後の部分を一緒に歌うのだ。ソレイユはその振る舞いに心からカワイイと思いつつ、これが自分の娘であればさぞ……といったようなことを考えるようになった。おそらくアリリアは、自分のようには歌えないだろう。サイリュースには独特の音感がある。その微妙な音感は、彼女には把握することは出来ない。やはり、サイリュースでなければ歌えないのだ。

そう考えた時、ソレイユはやはり自分の娘が欲しいと思う。自分が母から習い覚えた、精霊と交わるための多くの歌を伝えたかった。その中には、一子相伝の秘曲もあるのだ。かわいい自分の娘にそれを伝えたい。ソレイユは子供たちを抱くたびにその思いを強くしていった。

どうしたら、子供を授かるだろうか？　彼女は思い余って、母・ヴィヴァルに手紙を出した。そして返ってきた内容は、口に出すのも憚られる程の過激な性技が書かれたものであった。

「……いや、そうじゃなくて」

ソレイユはその内容に絶句し、手紙を燃やそうと思いつつも、それを机の引き出しの奥深くにしまい込むのだった。

彼女は裸のまま思い悩む。一体どうすれば……。自分の何が悪いのかを考える。だが、答えは出ない。そのとき、彼女の頭に閃くものがあった。ソレイユはいそいそと下着をつけ、服を身につけて、飛び出すようにして部屋を出て行った。

「う～ん、どうなんだろう……」

眉間に刻めないシワを刻みながら、シディーは答える。彼女は、先日生まれたばかりのピアトリスの寝顔を眺めながら、毛布をかけてやるなど、甲斐甲斐しく世話を焼いている。

「私の場合は……特にこれといってなかったわね。本当に、自然。自然に任せたのよ」

「何か……ほら、ない？　何か工夫したとか」

「ないなぁ。強いて言えば、全てをリノス様にお任せしていたから……かな？」

シディーは顔を赤らめながら、そんな返答を返す。ソレイユはため息をつきつつも、ピアトリスの寝顔を覗き込む。……かわいい。この子もかわいい。やっぱりデレデレになりながら、シディーに何かやることはないかと尋ねて、何もないという返答を受けて、彼女は少し落ち込みながらシディーの部屋を後にした。

続いて向かったのは、マトカルの部屋だった。しかし、彼女の返答もシディーと同じだった。結局ソレイユは、何の成果も得られずに、トボトボと自分の部屋に戻るのだった。

「あれ？　どうかしたのですか？」

声をかけてきたのはリコだった。勘のいいリコは、ソレイユの雰囲気を見ただけで、何か深刻な悩みを抱えているのではと察した。そして、スヤスヤと眠るイデアを抱きながら、傍らにいたエリルに、先にマトカルの部屋に行くように伝え、彼女はソレイユの部屋に一緒に入ったのだった。

「どうかしたの？　私でよければ、聞きますわよ？」

「はい……実は……」

ソレイユはリコに自分の抱えている悩みを詳らかに話した。リコは、うん、うん、と頷きながら彼女の話を親身になって聞いている。そして、ソレイユが話し終わるや、ゆっくりと、大きく頷きながら口を開く。

「ソレイユの気持ち、わかりますわ。私も、なかなかリノスとの間に子供が授かりませんでしたから……。ソレイユの焦りや苦しみは、よくわかりますわ」

「どうしたらいいでしょうか、リコ様……。リコ様は、どうやってエリルやイデアを授かったのですか？」

「そうですわね……。私は、リノスに任せていましたから……。」

「任せる……ですか？　シディーもマトも、みんなリノス様にお任せしていたと言っていました」

「基本的に……そうですわね。大体リノスの言う通りにしていましたから……」

「リノス様の言う通り……。それは、その……自分から積極的にということではなく……でしょうか？」

「せ、積極的……では、ない、と、思い、ますわ、よ？」

「そうですか……」

リコは顔を赤らめながら返答を返している。そんな様子を見ながら、ソレイユは考える。これまでの自分のリノス様への接し方は間違っていたのでは、と。

これまでは、寝室に入ると積極的にリノス様の体を求めていた。むしろ、そうすることがソレイユにとっては普通であり、サイリュースとして振る舞いであると母、ヴィヴァルから教えられてきた。しかし、リコ様を始め、他の女たちは違う。リノスの言う通りにしてきたと言う。今までの自分とは、真逆の姿勢だったのだ。

「……なるほど。リノス様に、お任せする。ありがとうございます。リコ様、何か、掴めた気がします」

「そ、そう？　参考になったようで、うれしいですわ」

リコとそんな会話を交わしながら、ソレイユは無意識に拳を握り締

めるのだった。

それから2日。いよいよリノスと一緒に寝る日がやって来た。彼女はいつもと同じなまめかしいパジャマを着用し、体に香水を振って、万端の準備を整える。ただ、今日の自分はいつもと一味違う。さあ、今日は、リノス様はどんな顔をなさるだろう？　いつもと違う趣に興奮してしまうかもしれない……。そんなことを考えながら彼女は寝室の扉を静かに開ける。

リノスは既にベッドに入っていた。上半身を起こして、何やら本のようなものを読んでいる。

「リノス様……」

「ああ、ごめん、ソレイユ」

「何ですか？」

「ああ。フラディメ国のリボーン大上王から贈られてきたんだ。メイから習ったこと実践した結果を論文にしたんだと。俺が読んでもわからないだろうに、メイは先に俺に目を通してくれと言うんだ。参ったよ」

「ああ、そうですか。それは大変ですわね」

そんなことを言いながらソレイユはベッドの中に入る。

「……ソレイユ？」

リノスは思わず声を漏らす。いつものソレイユの振る舞いではない

からだ。普段であれば、すぐに自分のパジャマを脱ぎ捨ててリノスからマウントを取りにくるのだが、今日はやけにしおらしい。自分の隣で、目を閉じてじっとしている。

「……ソレイユ？」

反応はない。リノスはしばらく彼女の顔をじっと見つめていたが、やがて、何かに納得したように、モソモソとベッドに入り、明かりを消したのだった。

……さあ、いつでもおいで下さい、リノス様。どこから、どんな感じで来るのかしら。

そんなことを考えながら、ワクワクと胸をときめかせながらソレイユは待っている。待っている。待っている……。

「あれ？」

うっすらと目を開けて隣のリノスを見ると、そこには予想外の光景が目に飛び込んできた。

「すぅーすぅーすぅー」

何と、リノスはあろうことか熟睡していたのだ。え？　何故？　……てゆうか、早くない？　混乱するソレイユ。結局彼女はその状態のまま、朝まで一睡もすることが出来なかった。

そして朝、リノスが目覚めると、そこには彼の顔をじっとのぞき込むソレイユの姿があった。

「ソレイユ？　……おは」

「リノス様……私……やっぱり……我慢できませぇぇぇーん！！」

「うおっ！　何だ？　何だぁぁぁ！？」

……結局、そこにはいつものリノスとソレイユの姿があった。

しかし、このソレイユの努力は、後に実を結ぶことになり、そのために彼女は多大な労力を使うことになるのだが……。それは、また、別のお話。

第二百六十九話　なんでそうなるの？

ピアトリスが生まれてから5日後、鹿神様と入れ替わるようにして、ドーキが屋敷に転移してきた。彼は息子のイデアが誕生して以来、１０日に一度くらいのペースで、俺たちにお菓子を届けてくれるようになっていた。と、いうのも、彼の作るお菓子を食べると、リコの体調がすこぶるよくなるのだ。そのことでお礼を言うと、彼は喜んでお菓子を持って来てくれるようになった。

今回は、ピアトリスが生まれたこともあり、その祝いを兼ねて、いつもよりも多めのお餅を持って来てくれた。彼の作るお菓子はマジで美味い。何というか……とても上品な味わいなのだ。

俺たちも、貰うばかりでは気が引けるので、いつも帰るときはお土産を持たせるようにしている。遠慮深い彼は、最初はなかなかそれを受け取ってくれず、ＭＰをチャージしてくれるだけで十分だと言うのだが、結局、押し問答の末に、俺のお土産をヒントに美味いものを持って来いと言って、ようやく受け取ってもらったのだ。

今回も、俺の作ったあんことエラサハル、いわゆるかつお節と、乾燥させた昆布をお土産に用意している。なぜ、かつお節と昆布なのか。それにはちょっとした事情がある。

彼は絶品のお菓子を作る一方で、元々経営していた料理屋で出している料理については、大きな悩みを抱えていた。それは、料理がイマイチ美味しくないという、食べ物屋にしてはなかなか厳しい問題に直面していたのだった。ただそれは、全てがドーキの責任ではなく、使える調味料が少ないという理由によるもので、そんな中でも

かなり味の研究をし、現状からしてみればむしろ善戦していると言えた。だが、我が家の食事と比較してしまうと、お話にならないレベルで、実際、初めて彼の作った料理を口にしたとき、俺たちは全員無言になった。

色々話を聞いてみると、ミーダイ国では基本的に、調味料と言えば塩のみであり、あとはシイタケのようなキノコを煮詰めてダシを取るくらいなのだと言う。どうりで、何ともコクのない食事が出来上がるはずだ。

そこで、俺が作ったかつお節と、乾燥した昆布でダシを取ることを教えてあげた。彼は大いに感動し、それ以来いつも、お菓子を持ってくるのと同時に、カツオと昆布ダシを用いた料理も持ってくるようになった。

味はかなり美味しくなっている。これならば店に出せるレベルだとは思うし、リコを始めとするウチの家族にも評判はいい。だが、ローニだけは、頑なに彼の作る料理に手を付けないでいた。初めて食べた時の味があまりにも微妙過ぎて、それ以降、彼の料理を信頼しなくなっていたのだ。

一度でも食べてくれると、おそらく気に入るはずだし、ドーキのことを見直してくれると思うのだ。俺としては、何とかローニとドーキとの間を取り持ってやりたいが、なかなか女子の心は複雑だ。今のところ、全く進展する様子がない。

そんな俺たちを前にして、ドーキはいつになく申し訳なさそうな表情を浮かべながら、口を開く。

「リノス様、僕はしばらくの間、こちらにお邪魔できそうにはあり

ません」

「どうした？」

「その……ミーダイ国の塩が尽きそうなのです。一応、僕は転移が出来ますので、塩を仕入れに行こうと思っているのです。恐れ入りますが、大量の塩が採れる国をご存知でしたら、教えていただけませんか？」

聞けば、これまで塩の取引をしていた隣国から突然、交易を停止されてしまったのだという。当然、塩がなければ生活ができない。山国で唯一の塩の取引先がなくなってしまったため、ミーダイ国は大きなダメージを受けているのだそうだ。

山の中にある国とは聞いていたが、ミーダイ国とは一体どんな国なのか。ゴンに聞いて調べてみると、何のことはない。ニケ王のいるサンダンジ国とメインティア王のいるフラディメ国のちょうど中間にある国だった。とはいえ、断崖絶壁な山の中の窪地に作られた国であり、交通の便は極端に悪い。地形の話を聞く限りでは、もしかすると元々は、火山の噴火口だったのかもしれない。

周囲を断崖絶壁に囲まれているために、ミーダイ国からサンダンジ国とフラディメ国に行くのは、多大な労力を要する。唯一、交易ができる国は隣国のタナ王国なのだが、この国が突然ミーダイ国に交易中止を通告してきた。しかもこの国は、熱烈にクリミアーナ教を信仰している国なのだという。

「１０年前の大戦も、クリミアーナ教が原因だったみたいです。元々、ミーダイ国は土地柄もあって、あまり外国とは交流していなかったんです。そこに、クリミアーナ教の人たちが徐々に移り住んで

きて、自分たちの信仰を広めようとして……それを止めさせようとした人々との間で戦闘になって、それで国の大半が焼き払われてしまったんだそうです」

「クリミアーナは本当にロクなことをしないな」

俺は懐かしそうな顔をして遠くを見つめる。そんな様子を見ながらドーキは言葉を続ける。

「……僕がミーダイ国に住んだのは、戦いが終わって3年ほど経ってからですが、それでも、国は焼け野原でした。人々は力を合わせて復興させようとしていましたが、それでも全然間に合わなくて……。タナ王国には岩と岩の間にできた細い道を通るしかなくて、馬車は通れません。仕方がないので、人々は食糧や資材を背中に背負ったり、馬の背中に乗せたりして運んでいたのです。でも、ついこの間から突然、タナ王国がミーダイ国とは取引をしないと言われてしまいまして……」

「何かそれ、裏で何か動いているような気がするな。クリミアーナ……だろうな。何の意図があるんだろうな？」

「僕にはそうしたことはよくわからないのですけれど……。まずは塩がなければ料理ができませんので、それが一番急を要するのです。今のままではミーダイ国は2か月も持ちません」

「なるほど、確かにそりゃそうだ。まあ、塩ならこの屋敷に沢山ある。それを持っていくといい」

「え？　本当ですか？」

俺はキッチンを通り、地下の貯蔵庫に向かう。そこから、塩の入った壺を取り出してダイニングに戻る。この間、クルムファルから仕入れたばかりなので、まだ貯蔵庫には大量の塩があるのだ。

「４つもあれば、結構持つんじゃないかな？　まだあるから足りなければ言ってくれ」

ドーキは一瞬嬉しそうな顔をしたが、すぐに顔を曇らせた。

「あの……お支払するお代金を持ち合わせていないので……」

「いいよ、持っていきな。代金は出世払いでいいよ」

「シュッセバライ？」

「無理のない範囲で返してくれればいいってことだ。あと、塩なら沢山取り寄せられる。必要な量を言ってくれ」

「あ……ありがとうございます。このご恩は……。この量でしたら、僕の店は、半年くらいは大丈夫かと思いますが、ミーダイ国全体となると……塩壺はあと２０くらい必要だと思います」

「２０？　そんなもので足りるのか？」

「あまり大量に持って行っても塩が溶けてしまいますので、向こう３か月くらい必要な量で言うと、そんなものかなと思います。一度に持っていくのは無理ですので、月に何度か、頑張ってこちらに塩を取りに来させていただきます」

「それで間に合うか？　チワンに頼んだらどうだ？」

「え？　チワンさん？」

「お前はＭＰが少ない。そう何回も転移できないだろう？　何人かのポーセハイに手伝ってもらった方がよくなくないか？」

「は……はい」

ドーキは申し訳なさそうに俯いている。本来は俺の転移結界を使えばいくらも運び込めるのだが、さすがにこれは秘匿しておきたい能力なので、敢えてチワンを使うことにした。俺はドーキに気にすることはないと言って、彼をダイニングのテーブルに座らせる。そして、チワンに連絡を取る。

しばらくして、彼はローニと3人のポーセハイと共に転移してきた。

「お久しぶりです、リノス様。お姫様誕生のお祝いにも来ることが出来ずに、申し訳ありませんでした」

「いや、いい。研究が忙しいのはメイから聞いている。あんまり無理はしないでくれよ？」

「はい。ありがとうございます」

そう言いながらチワンは、俺の隣に座っているドーキに視線を向ける。

「ドーキ、塩が止められていると聞いた。大変だな。俺たちでよければ手伝うぞ。ちょうどお前の住まいも確認したいと思っていたんだ」

「すみません。本当に……ありがとうございます」

「まずはチワン、ウチの食糧庫の塩壺を全部ミーダイ国に持っていこう。あと１０個くらいあるんだ」

「わかりました」

そう言って、俺はチワンを食糧庫に案内する。ローニも行くかと思いきや、彼女はぴょこんとお辞儀をして離れに向かった。どうやら、シディーと子供の様子を見に行ったようだ。俺たちはその後姿を見送り、そして、チワンが連れてきた若いポーセハイと共に、塩壺をえっちらおっちらと運び出していく。

「では、転移させよう。まずはドーキ、お前は俺と共にミーダイ国に転移してくれ」

「わかりました」

そう言って二人は転移していく。そしてしばらくしてチワンが戻ってきた。彼は部下と共に塩壺を転移させようとする。

「あ、チワン、待ってくれ。俺も一緒に連れて行ってくれ。おそらくこれからもっと沢山の塩が必要になるだろう。その時のために、ミーダイ国に転移結界を張っておこうと思うんだ」

「ああ、そうですね。そうしていただけると助かります」

「ただ、これはあくまで秘密だからな」

「わかりました」

そんな話をしながら、俺も彼らの転移に紛れ込み、ミーダイ国に転移したのだった。

……到着したのは店の玄関だった。予想以上に狭く、俺たち5人と塩壺で、既にいっぱいいっぱいだ。

「あれ？　ドーキは？」

チワンが苦笑いを浮かべて隣の部屋を指さしている。見るとそこには、ＭＰ切れを起こしてぶっ倒れているドーキの姿があった。

「……ううう、すみません」

ガックリとうなだれるドーキ。俺は気にするなと声をかけ、チワンらと共に塩壺を店の奥に運んでいく。

「……全部入りきらないですね」

「そうか、じゃあ仕方がないな。まあ、ちょうどいいや。外で保存しよう。どうせなら結界を張って、塩が溶けないように効果を付与しようか。ちょっと大き目の結界を張ろう」

そう言って俺は、目の前の勝手口と思われるドアをゆっくりと開けた。

ドン！

「うおっ！」

突然、右半身に衝撃を受けた。すぐ目の前には壁が見えている。どうやら小さい、人ひとりが通れるくらいの狭い裏路地に通じる扉だったようだ。そして、ふと右側を見ると、牛のような顔をした、でかい男が尻もちをついていた。小脇に大きな布袋を抱えているが、よく見ると、その袋はゴソゴソと動いている。

「……ケテ。……タス……テ。タスケ……テ」

かすかに聞こえる声。俺がその声に気を取られている隙に、牛男は無言で背中に差している剣を音もなく抜いていた。それに気が付いた時にはもう、剣は俺の体に突き刺さる寸前だった。

ドスッ！

……男の剣は、ちょうど開いた扉に突き刺さった。俺は剣が刺さる瞬間に身を引いていたのだ。と同時に、牛男の顎をめがけて蹴りを放っていた。

「ぐはっ……」

悶絶する牛男。どうやらタダ者ではなさそうだし、完全にあかん奴のニオイがする。そのとき、地面に転がっている袋が再びゴソゴソと動いたかと思うと、その中からぴょこっと何かが飛び出した。

「……子供！？」

出てきたのはまだ幼い、おかっぱ頭の少女だった。彼女は俺と目があった瞬間に、大きく息を吸い込んだ。

「たぁぁぁぁぁすううううけぇぇぇぇぇぇぇてぇぇぇぇぇぇぇぇぇ〜〜〜〜〜〜！！」

だぁぁぁぁ〜〜うるせぇ〜〜！！　余りの大声に、俺は思わず耳をふさぐ。

「見つけぁ！」

路地の奥から女の声がしたかと思うと、たちまち俺の前に3人の女が現れた。

「ひー様！　お怪我は！」

「おお！　ハーギ！　助けてたべ！」

女たちはすぐさま抜剣してその切っ先を俺に向けながら、素早く少女を自分たちの背後に匿う。そして、そのうちの一人が、落ち着いた声で口を開く。

「お主らが巷を騒がす、かどわかしか？　もう逃げられぬぞ！　神妙に縛につけ！」

……濡れ衣だ。

第二百七十話　一人暮らし始めました

新しい住まいは、約６畳の１Ｌのお部屋です。ちょっと狭い気がしますが、一人で寝る分には全く問題ありません。ちょっと室内は寒さを感じます。冷暖房は……なしでしょうか？　大家さんに確認しないといけませんね。こうしたことも一人暮らしの醍醐味と言えるでしょう。あ、なんか、すごく環境の悪い所に聞こえるかもしれませんが、そんなことはありません。窓から差し込む光が、とても美しいです。キラキラと色を変えながら光を見ていると、何だか心が癒されます……。

俺は膝を抱えて座りながら、そんなことを考えている。俺の周囲を黒い壁が囲んでいて、どういうつもりなのかはわからないが、視線を上げると、壁の上に鉄格子が入った窓が見える。そこから光が差し込んでいて、まあ、スタンダードな牢屋と言える。周囲はかなり薄暗い。そういえば、お手洗いはどうするんだろうか？　垂れ流しだろうか？　そうなると汚れるし、隠すものが一切ないから、ある意味、完全に衆人プレイになる。

なぜ、俺がこんな所に閉じ込められているのか。好きで入っているわけじゃない。ドーキの店から嫌も応もなく、いきなり引き立てられたのだ。チワンたちが飛び出して事情を説明しようとしたのにもかかわらず、女たち、いや、正確に言えば、俺を引き立てた女は、一切聞く耳を持たなかった。もう一人の小柄な女が、問答無用でその場で何やら呪文を唱えて、この牢にぶち込んだのだ。どうやらここは空間魔法で作られた場所であるらしい。だが、この空間内は、魔法は問題なく使える。先ほど、チワンに念話を飛ばしてみたが、きちんと会話できた。彼には心配ないと伝えて、何かあれば念話を

飛ばしてもらうように言ったところだ。

魔法が使えるということは、おそらく転移結界も使えるということだ。一度、試してみるかと考えていると、先ほど俺を捕らえた女と、この空間にぶち込んだ女が、俺の前に現れた。そして、女の一人が早口でまくし立ててくる。

「どうじゃ、吐く気になったか？」

「え？」

「ええい！　吐け！　吐かぬか！　吐かねば、お主の体に聞くことになるぞ！　どうじゃ！　まだ吐かんか！　ならばそれでもよい。ええい、シロン！　この者に拷問を加えるのじゃ！」

「もしもし？」

「ほほう、拷問と聞いて怖気づきよったか。フフン、口ほどにもない、他愛もないやつじゃな？　なぜひーさまを攫った？　攫ってどうするつもりだったのじゃ？　誰に頼まれた？　そなたの名は？　どこから来た？　ええい！　正直に白状せよ！　何故喋らん！　喋る気になったのではなかったのか！　うむむ、嘘か、嘘をつきよったのだな？　よかろう、それならば、相応の罰を与えるまでじゃ！　準備が出来るまでしばらくそこで頭を冷やしておれ！」

女はそう言い残して、その場から消えてしまった。

……何か、面白くね？　自分で勝手にしゃべって自分で怒っているよ。……もう一回、見たいが、その前にまずは俺の話も聞いてもらわねばならないんだが。もう一度帰ってこないかな？

……アンコール、アンコール、アンコール

小さく手拍子をしながら、小声で俺はアンコールを求める。すると、女がまた現れた。

「何じゃ！　何をブツブツと言っておるのじゃ！　あんこーる？　シロン、この者は何と言っておるのじゃ？」

「ええと……あの……」

「もうよい！　狂いおったか？　狂いおったのじゃろうな。我らの仕置きの恐ろしさに耐えられなかったのじゃろう。さもありなん。ええい！　このような狂った者に用はない、殺せ！　殺してしまうのじゃ！」

……殺すんかい。

女はプリプリ怒りながら、再び消えてしまった。一人残った、シロンと呼ばれた小柄な女は、ふう、と一つため息をついて、ゆっくり俺を見た。

「あの……ええと……その……」

「俺、殺されちゃうんですか？」

「うう～ん、ゼザ様が……その……」

「あの……俺、何もしていませんよ？　何もしていないのに……」

「シロン、下がれ」

そんな声がしたかと思えば、また新しい女が現れた。銀色の鎧を装備している。コイツは確か、ハーギと呼ばれていた、俺に剣を突きつけていた女だ。

「……お主、吐かんそうだな」

「いや、だからですね。濡れ衣なんですって。俺、何もしていませんから。ここから出してもらえませんか？」

相手が女性ということもあって、俺は丁寧に対応する。ハーギという女は俺を胡散臭そうな顔で見ているが、どうやら、コイツは話が出来そうだ。

「濡れ衣……どの口がそれを言うのだ？　ひ―様を攫って逃げておいて、捕まると言い訳か？」

「イヤ、俺が扉を開けた瞬間に、あの牛男とぶつかったんですよ。俺は、あの店のドーキの知り合いです。本当です。嘘だと思うなら彼に聞いてみてください」

彼女はじっと俺を見ている。しばらくの間、沈黙が流れる。

「お主、何者じゃ？」

「は？」

「鑑定してみたが、何もわからんではないか」

鑑定？　スキル持ちか？　俺はすぐさまこの女に鑑定スキルを発動させてみた。

【ハーギ（魔法剣士・２１歳）ＨＰ：１５４　ＭＰ：１４５】
剣術ＬＶ２　火魔法ＬＶ１　風魔法ＬＶ２　ＭＰ回復ＬＶ１　教養ＬＶ１　鑑定ＬＶ２

……まあまあのスキルだ。鑑定ＬＶ２では、相手のスキルの一部が何となくわかる程度だ。俺のスキルはもちろん、その人間の過去を覗くことなど、到底出来ないのだが……この女の言葉は疑問だ。

「鑑定で何もわからんって、そもそもそんなに詳しく分らんでしょうに」

「何を言うのだ！　その人間が善なる者か悪なる者かくらいはわかるのだ！」

「あー」

確かに、その区別は付く気がする。俺の場合はどうだったかと思いをはせてみるが、何せ俺は、ほぼ一足飛びにＬＶ３まで上がった気がする。まあ、ファルコ師匠の鬼のような修行を経験すれば誰だって上がるだろうし、そうしないとマジで死ぬのだ。ただ、確かに、師匠に鑑定を発動させ続けたおかげで、この人はゲスくて、エロくて、金に汚い人ではあるが、悪い人ではないことはわかった。それはエリルも同じだった。

「いや、あなたの場合は、俺のスキルを感じようとしていませんか？　そうではなくて、俺が善人か悪人かに絞って鑑定スキルを発動させてみてはどうですか？　一度、やってごらんなさい」

ハーギは一瞬イラッとした顔をしたが、やがてコホンと咳払いをして、再び俺を見つめた。彼女の眉間にシワが刻まれていく。そして、ゆっくりと息を吐きながら口を開く。

「女のことを考えている？　……不埒なっ！」

「あー惜しい！　当たらずとも遠からずだが、不埒とは失礼な。女のことを考えていたのは否定しないが、それは妻たちのことを考えていたんだ。この際だから言っておくが、俺は妻たちを愛している。浮気などはしない。多分しないと思う。うん、しないんじゃないかな？　……ま、覚悟しておくのに越したことはないが。エヘヘ」

いかん。自分で言っていて照れてしまった。ハーギとシロンは俺をまるで汚いものを見るかのような、軽蔑しきった視線を投げかけている。

何か変な間が開いてしまったので、俺は気晴らしに、シロンと呼ばれる小柄な女も鑑定してみた。

【シロン（魔術師・１５歳）ＨＰ：４４　ＭＰ：１１５】
水魔法ＬＶ１　風魔法ＬＶ１　空間魔法ＬＶ２　ＭＰ回復ＬＶ１
教養ＬＶ１

１５歳でこのスキルはなかなか優秀だ。空間魔法などという珍しいスキルを持っているし、それがＬＶ２まで伸びているのだ。もしかするとこの子は才能持ちかもしれない。

そんなことを思っていると、何やら騒がしい声が聞こえてくる。何だと思って耳を澄ましていると、どうやらそれは、先ほど俺を殺せ

と命じた、ゼザという女の声のようだ。

「シロン！　どこにいったのだ！　シロン！　シロン！」

声はだんだんと大きくなり、そして、シロンたちの背後からゼザが現れた。

「シロン！　まだこんなところで……！　あれ？　ハーギ様？　なぜハーギ様がここに？　ひー様のお傍に居るのでは？　あれ？　私がはぐれた？　いいや、そんなことはない……」

ゼザはせわしなく顔を左右に動かして、ハーギとシロンを交互に見比べている。そして、ふと牢の中の俺と目が合った。

「お主は……死んだのではなかったのか？　殺せと命じたはずだが？　いや、人違いか……？　ちょっと待て……」

一人で自問自答を繰り返すゼザ。彼女は考えるのが面倒くさいと思ったのか、頭を左右に激しく振り出した。そして、ぴたりとその動きを止め、俺たちを見回すように口を開いた。

「いや、皆、落ち着け。落ち着くのじゃ」

……お前が落ち着けよ。

第二百七十一話　取り調べ

「……ゼザ、落ち着くのだ。そなたはいつも、そそっかしくていかん」

ハーギは呆れた表情を浮かべたまま口を開く。ゼザはハッ、と申し訳なさそうに頭を下げている。てゆうか、コイツの場合はそそっかしいっていうレベルじゃない気がするのだが。

「さて、まずは、そなたを取り調べねばな。なぜ、ひー様を攫った？」

「いや、まず、なぜ人さらいが前提なのですか。さっきから言っていますが、俺は何もしていませんよ？　何を証拠にそんなことをおっしゃるのですか？」

「しらばっくれるな！　そなたが我らに魔法を放って馬車を止め、その隙に牛男がひー様を攫ったではないか！」

「それが俺だという証拠は？」

「その服！　その髪型！　そして何より、ひー様ご自身が攫った男がそなたであると言っておられるのだ！」

「どういうこと？」

「そなたら二人して、ひー様を布袋の中に入れたのであろう。そのときに、ひー様は犯人の顔をご覧になったのだ。一人は牛男、そし

てもう一人は、黒い服を着た人間の男であったという。それが、そなたで間違いないと言っておられるのだ。もう言い逃れは出来んぞ？　観念せよ」

ハーギはクイッと顎を上げて俺を睨む。そのとき、ゼザが一歩前に進み出て、口を開いた。

「本来ならばそなたなぞ、すぐに無礼打ちにするところなのだ。しかし、これはそなた一人の考えではあるまい。誰ぞに命じられたのであろう？　吐け。正直に申せば、命だけは助けて取らせるぞ？　吐け！　まだ吐かんか！　強情な奴だ！　ハーギ様、こやつ口を割るとは思えません！　やはり殺しましょう！」

「ゼザ……」

ハーギはゆっくりと首を振りながら、呆れた表情でため息をついている。

……いや、まずは俺の話を聞かないかね？　と、いうより、完全に俺を犯人と見なしているし、まずもって俺の話を聞く気はなさそうだ。

「そなたはどうやら魔法が使えるようだが、それは無駄というものだ。このシロンの空間魔法の中では、魔法は使えぬ。どうじゃ？　驚いたであろう？」

「え？　マジですか？　ちょっとごめんください？」

『チワン、チワン』

『どうされました、リノス様？』

『今、何か変わったことはあるか？』

『いいえ、何もありません。リノス様こそ、大丈夫ですか？』

『ああ、今のところ大丈夫だ。くれぐれも注意してくれな』

『畏まりました』

……全然問題ありませんやん。念話使えますやん。そんなことを思っていると、女の笑い声が部屋中に響き渡った。

「ホッホッホッホッホ！　一生懸命魔法を使おうとしておるのか？　無駄だと言ったであろうが。そなたはこれまでじゃ。ここからは出られぬ。諦めて素直に吐け。吐くのじゃ」

目を閉じて念話を飛ばしていたので、彼女たちには、俺が必死で抵抗しているように見えたらしい。

「そういえば、俺が倒した牛男がいたと思いますが、そいつはどうしました？」

「この後に及んでまだシラを切るか！？　牛男は別の場所に閉じ込めておるわ」

「すみません、その男に話は聞きましたか？」

「いいや、まだ聞いておらん」

「まずは、その男に話を聞いてみてもらえませんか？　たぶん、俺が犯人じゃないことが分かると思うんですよ」

「ええい！　黙れ黙れ！　そのようなこと、そなたが指図することではないわ！」

「ハーギ様、拷問にかけましょう！　ギッタギッタのバコバコにしましょう。さすれば吐きます。シロン、やるのじゃ！」

「えっと……あの……」

いきなりゼザが割り込んできたので、シロンは戸惑いながらハーギとゼザを見比べている。

ハーギは俺の顔をじっと見つめながら、ゆっくりと落ち着いた声で話しかける。

「お主、本当に吐く気はないのだな？　吐かねば体に聞くことになるぞ？」

俺は彼女らがやり取りをしている間に、鑑定スキルを使って、三人の過去を覗いていた。

牛車に乗っていたのは、ハーギとシロンだった。そして、その車を警護していたのはゼザだ。まず、ゼザの記憶によると、牛車の右斜め前で大きな爆発が起こった。彼女は反射的に車に張り付き、主君を守ろうとした。一方で車の中では、大きな爆発音が聞こえた瞬間に、ハーギとシロンはその音のした方向に目を向けた。その瞬間、シロンは突き飛ばされてうつぶせに倒れ、気が付くとお姫様の姿はなかった。彼女らは、お姫様の絶叫にも似た助けを求める声で事態

に気が付き、犯人たちを追いかけたのだった。唯一、ゼザは誘拐にいち早く気が付き、姫を攫う二人を追いかけていたが、見失ってしまったというわけだ。

つまり、犯人の後姿をまともに見ていたのはゼザ一人であり、あとの二人は、辛うじて後姿を見ただけで、実際に犯人を見ていたわけではない。この三人がこれほど強硬に俺を犯人に仕立てようとしているのは、誰でもいいから犯人に仕立てて、この事件の幕引きをしようとしているのだろうか。だとすれば、俺はとんでもないコトに巻き込まれたことになる。

何が一番問題か。ゼザの記憶を見たところ、姫を攫った男の格好が、黒いローブ姿だったのだ。ちなみに、俺が着ているのは黒いシャツだ。色は同じでも、格好が全く違う。

「あの……犯人は本当に、俺が着ているこのシャツを着ていたんですかね？　ローブとかじゃなくて？」

ハーギとシロンはゆっくりとゼザを見る。彼女は自信満々に口を開く。

「私が見た後姿は、黒い髪、黒い服だった。背格好も同じだ。この男に間違いない！」

……待て待て！　お前の記憶の服と俺の服装は全くちゃうやんけ！　驚きのあまり絶句する俺に、ハーギは冷たい視線を俺に投げかけ、静かに口を開く。

「シロン、やれ」

「はい。……万物を司る神よ。我に力の一部を与えたまえ。全てのものを吹き飛ばす風よ、刃となれ。そして、彼の者を切り刻め……えいっ！」

小さな風の刃が俺に向かって飛んでくる。しかしそれは、俺の結界に見事にはじかれて消えてしまった。

「どうじゃ！　シロンの風魔法の味は？　痛いであろうが？　さあ、これ以上苦しみたくなければ、吐け！　吐くのじゃ！」

ゼザがドヤ顔で口を開いている。いや、弾かれているでしょうに。俺の体には全く傷がついていないでしょうに。大体その魔法、ＬＶ１ですよね？　俺が張っている結界はＬＶ５なんですけど……。てゆうか、俺の結界が発動している段階で、この空間魔法完全にポンコツですよね？

「ええい！　まだ吐く気にはならんか！　シロン、遠慮はいらぬ。ヤツの体を切り刻め！　切り刻むのじゃ！」

ゼザが興奮したように命じている。もはやこれ以上、話し合いが通じる相手ではないと判断した俺は、彼女らの背後を指さして大声で叫ぶ。

「あれー？　誰だ！？　あれはー？」

三人が一斉に後ろを振り返る。その瞬間、俺は転移結界を発動して、その場を離れた。

「……あれ？　お帰りなさい」

「ただいま、リコ」

帰ってきたのは、帝都にある俺の屋敷だ。ダイニングではリコがイデアに授乳中で、その様子をエリルとアリリアが珍しそうに眺めていた。

「とうたーん」

「とうたーん」

俺を見つけると二人は両手を上げて俺のところにやってくる。二人を抱っこしてやるが、最近体重が増えたのか、めっきりと重たくなった。彼女たちも成長しているのだ。

「エリルー、アリリアー、二人とも重たくなったなぁ。とうたんはもうすぐ二人を抱っこできなくなるかもなー」

「いやー」

「抱っこー」

二人は俺の胸に顔をうずめてくる。なんて幸せな時間なのだろう。時が止まればいいのにと心から思ってしまう。そんな様子をリコは幸せそうな顔をして眺めていた。

「リコ、イデアはどうだ？」

「ええ。よく乳を飲みますわ。夜泣きもなくて、とてもいい子ですわ」

「そうか。この子は将来、大物になりそうだな」

「ええ、そうですわね」

そんな話をしていると、メイとマトカルが傍にやってきて、抱っこしている二人を引き取ってくれた。俺は二人に礼を言い、まだミーダイ国に居ると思われるチワンたちに念話を飛ばした。

『チワン、チワン』

『ああ、リノス様』

『取りあえず、帝都の屋敷に帰ってきた』

『おお、よくぞご無事で』

『俺を捕らえた女どもは、一体何者なんだ？　全く話が通じなかったから、逃げて来たよ』

『そうでしたか。心配していたのです。あ、こちらは大丈夫です。ドーキが魔力切れで倒れていますが、しばらくすれば目覚めるでしょう。彼の様子を見る者一人を置いて、我々も一旦帰ります』

『そうか。すまないな。また明日にでもドーキの所に行こうか。あ、何かヤバそうなことが起こるようだったら、すぐに逃げろと二人に言っておいてくれ』

『わかりました。問題ありません』

そして俺は再びリコの許に行きイデアの顔を覗き込んだ……。

第二百七十二話　一体何者なんだ？

次の日の朝、俺とチワンは再びドーキの店に転移した。前日は黒い服を着たばっかりに、訳の分からないトラブルに巻き込まれた。そこで今日は、ちょっとフォーマルな衣装に身を包んでみた。リコにコーディネートをお願いしたら、イデアに授乳する時間なので、自分で選んでくれと言われてしまった。子供が生まれる前なら嬉々として選んでくれたのだが……。一抹の寂しさを感じながら、俺は服を着る。

「まあ！　何ですの？　その格好は……。上下の色が全然合っていませんわ。野暮ったく見えています。国王なのですから……。少しは他人の眼も気にしないといけませんわ。パンツも……そのようなものではなく、もっと細身に仕立てたものを着ませんと太っているように見えますわ」

ダイニングに下りた瞬間に、リコからダメ出しをされてしまった。そして、彼女の指示に従うこと数回。結局、昨日と同じカジュアルスタイルになって、やっと俺は外出の許可を得ることができたのだった。

俺とチワンが店に転移すると、ドーキがお菓子を作る作業をしていた。聞けば彼は早朝、まだ暗いうちに起き出して餅を搗き、出来上がった一部を持ってどこかに出かけたのだと言う。おそらく帝様の朝食を持っていったのだろう。しばらくして帰ってくると、休む間もなく餡を作りつつ、菓子を作り出したのだそうだ。そんな忙しい中、彼は、俺たちを見つけるなり、近寄ってきて、床に頭を擦りつけるようにして口を開いた。

「昨日は……本当に……申し訳ありませんでした……」

「いや、いい、ドーキ。気にしてはいない。お前が謝ることはないんだ」

「でも……」

「いい、いいんだ。でも、昨日の女たちはありゃ何だ？　勝手に人を犯人に仕立てやがった。ドーキの方は大丈夫だったのか？」

「はい。僕の所には誰も来ませんでした。……昨日の方々は、クワンパック様のご家来だと思います」

「クワンパック？」

「この国の宰相です。でも、宰相らしいことは全くせずに、ひたすらご自分の趣味に生きておられる方です」

「何だそりゃ？」

「雅やかなことを好まれまして……今は、山奥の別荘に籠られて、そこでお庭を作っておられます」

「庭だぁ？」

「何でも、お庭の苔を丁寧に育てておられるとか……。あと、滝も作ろうとしているとか」

「ロクでもなさすぎないか、それ？」

「ハイ……都があまりにも荒廃してしまって、全くヤル気を無くされたようでして……」

「何でクビにして、新たな宰相を任命しないんだ？」

「帝様が、気持ちはわかると仰いまして……。それ以降は、帝様が全ておやりになっています」

「できるのか、そんなこと？」

「……難しいと思います。ですが、先の戦乱で政務を執っていた貴族の半分以上が滅びたり、国外に逃げてしまったりしていますので、実質的に政務を執る人材が不足しているのです。そのお陰……なのかどうかはわかりませんが、この国は比較的自由に何でもすることができます。僕が店を出せているのも、気軽に帝様にお目通りできるのも、そのためなのです」

「なるほどな。で、何でそのポンコツ宰相の娘が攫われているんだ？」

「オージン様ですね？　あのお方は、その……大変わがままでして……。その上、宰相様は財産を多くお持ちですし、オージン様を攫って、お金を手に入れようとしたのではないかと……。まだまだこの都は、治安が良くないですから」

「なるほど。そのわがまま姫にして、あの家来ありというわけか……。二度と会いたくないな。それにしても、一応犯人と目星をつけた男が逃げたのに、何もしないんだな。てっきりドーキの所に事情聴取に来ると思っていたんだがな」

「……すみませんでした」

「いや、謝ることはない。運が悪かっただけだ。ところで、昨日塩を運び込んだんだが、入りきれなくてな。外にまとめて出しておこうと思ったんだが……」

「ああ、ありがとうございます。昨日お話は聞きました。保存用の結界も張ることができるのですね。本当にありがたいです。僭越ですが、お言葉に甘えまして、こちらに移していただければありがたいです」

そう言って彼は店の玄関を開けて、外に出ていく。

「……大丈夫です。今は誰も居ません。すぐ近くなのです。こちらです。どうぞ」

案内されて外に出てみると、目の前には広い通りがあり、そのすぐ奥には川が流れている。さらにその奥には、高い壁が建てられていて、それはかなり長い距離にわたっていた。そして、遥か先に、煌びやかな門が見えた。

「あれが帝様のお住まいです」

「デカイな」

「はい。御所はかなり大規模なのです。ですが、戦乱以降は荒れに荒れていました」

「そうなんだ？　見たところ、そんなに荒れているようには見えな

いけどな」

「僕がこの国に住み始めた時は、壁は崩れ、庭は荒れ放題、屋根からは雨漏りがする状態でした。それをこの国の町衆が力を合わせて少しずつ修復したのです」

「町衆？」

「はい。このお館を中心として、この都には６つの町がありまして、その町ごとに町民が集まっているのです。ちなみに、僕が住んでいるところにも町衆がありまして、北の町衆と呼ばれています」

「その町衆は何をしているんだ？」

「町を運営しています」

「え？」

「戦乱以降、国が乱れに乱れまして……。このままでは国が滅びてしまうと考えた都の人々は、独自に用心棒を雇い入れるなどしまして、自衛手段を取り始めたのです。それが町衆の始まりです。今では６つの町衆が話し合いながら、それぞれの町を運営しているのです」

「独立国家共同体みたいな国だな」

「詳しいことはよくわからないですが、町衆がクリミアーナを追い出し、悪党たちを追い出したおかげで、この国は平穏さが戻りました。皆が話し合いながら都を治めていますので、いい国になりつつあります」

「そうか。まあ、ある意味理想的な国かもしれないな。で、その町衆が何で帝様のお館を修理するんだ？　むしろ、帝様を追い出そうとはしないのか？」

「帝様はとても高潔なお方なのです。その……お話をさせていただきますと、何故か、お助けしたい気持ちになるのです。帝様からは、何かをせよと命じられたことは一度もないのですが、町衆が苦しい状態をやりくりしながら、帝様をお助けしているのです」

「何だそりゃ？　何かすごい話だが……。町衆には帝様から何が貰えるんだ？」

「いいえ。町衆が無償でご奉仕しています」

「はあ？」

「これは言葉で説明するのが難しいのです。リノス様も、一度帝様に会えばお分かりいただけると思います」

「ふぅん、何か、不思議な王様だな」

そんなことを言いながら、俺たちはドーキの店から少し離れた倉庫のような建物に案内された。

「ここが、我が北町衆が管理している蔵です。まだまだ余裕はありますので、こちらに塩を運び込みます」

「ああ、わかった。では、ここに運び込もうか」

ドーキはチワンたちに蔵の中を案内している。どうやらここは二階建てであり、この上にも収納スペースがあると同時に、地下にも収納部屋があるのだと言う。俺はドーキに一声かけて、目の前にあった階段を降りていく。……かなり広いスペースだ。俺はライトの魔法を唱えて部屋を明るくし、手ごろな場所に転移結界を張った。

再び階段を上がると、ドーキとチワンたちはまだ、何かの打ち合わせをしているところだった。俺は彼らの許に近づいていく。そのとき、蔵の扉が開き、人相の悪い屈強そうな男たちの姿が見えた。彼らは胡散臭そうな顔でチラリと俺の顔を見たが、すぐに視線をそらし、ズンズンと中に入ってきた。そして、真っすぐにドーキの許に向かっていく。

何かイヤな予感がするので、俺も急いでドーキの所に向かう。何か因縁を付けられるのであれば、守ってやらねばならない。

「探しましたぜ」

ヤツらの中で、最も背の高い男が口を開く。俺は緊張しながら、次の言葉を待つ。ところが、彼らはスッと片膝をついて、頭を下げる。

「お話がありやして、参上しやした。ドーキの旦那」

旦那？　……ドーキ、お前、一体何者なんだ？

第二百七十三話　そうきましたか

「そうなのです。僕がこの北町衆の代表なのです。お断りしたのですが、どうしてもと言われてしまいまして、しかたなく……」

困ったような顔をしながらドーキは、先ほどやって来た人相の悪い男たちの許に近づいていく。

「すみません、お話があるとのことですが、その前に、塩が届いているのです。手伝っていただけませんか？」

ドーキは、彼らに店に置いてある塩壷を運び込むように丁寧な言葉で指示を出した。

「ヘイ、承知しました。しかし旦那、この方たちは……」

男たちは鋭い視線を俺たちに投げかけてくる。それはそうだ。見ず知らずの男と、黒ウサギたち。怪しいと思うのは当然のことだ。

「この方たちは、塩を分けてくださった方です。そして、この三人は僕の同胞です。三人とも転移スキルを持っていますので、ほとんど労力を使わずに、大量の塩を運んでくることが出来ました。皆さんも、お礼を言ってください」

ドーキの言葉を聞きながら、男たちの目が徐々に見開かれていく。そして彼らは、飛びのくようして後ろに下がって頭を下げた。

「こりゃ……知らぬこととはいえ、失礼しやした。本当に、ありが

とうごぜぇます」

「ああいや、畏まらなくていい。俺は……このドーキの友人でリノスという」

「リノス？　確か……アガルタの王様がそんな名前だったような……」

「ああ、いや、名前が似ているだけで、あちらとは大違いだ。俺は……単なる商人のリノスだ」

そんなこと言いながら、俺はドーキとチワンたちに目配せをする。ただでさえ、宰相の娘の誘拐事件の濡れ衣を着せられた身なのだ。ここでヘタに身分を明かしてややこしいことになるのは避けたい。

「そ……そうなんです。この方が沢山の塩を持っていらして……。で、私の同胞と共に塩を運んでくれたのです」

「へ、ありがとうごぜぇます。なにしろ、塩がなけりゃ、このドーキの旦那のお店も開けられねぇし、あっしらの生活もままならねぇってんですから……たかが塩ごときで、情けねぇ話でやす。あの……そちらの黒ウサギの旦那方は、ドーキ旦那の同胞……お仲間でやすか？」

「私はチワンと言います。このドーキとは彼が幼いころからの顔見知りです。あ、私は医者をやっています。そして、こちらがゼンハイとフィットです。彼らも私と同じ医者です」

「……ドーキの旦那と同じ黒のウサギ獣人ってこたぁ、やはりあの、医師団のポーセハイで？」

先ほどから俺たちに話しかけている男が、驚いたような表情を浮かべながら口を開いている。チワンはちょっと意外そうな顔をしながら、返答を返す。

「ええ。我々はアガルタ国やヒーデータ帝国を中心に医療活動を行っている者です。私はその、代表を務めている者です」

「あなたがあの……有名な……」

「ほう、我々をご存じなのですか？」

「申し遅れました。あっしはベンテと申します。この北町衆のほんの頭数でございやす。あっしは元は冒険者でしてね。世界各国を旅して歩いた者でござぇます。ヒーデータのクルムファルで腹痛を起こしてブッ倒れていたところを、黒いウサギの兄さんに助けていただきやした。もう、死ぬかと思うような痛みだったんでやすが、そのお兄いさんに、たちどころに治していただいたんで……。そのときは十分なお礼もできずに、今になるまでうっちゃっていたんですが……。まさか、二度までも助けられるとは思いもよりませんで……。何とも面目ねぇことで……」

「別に面目なくはないと思うぞ？」

俺はフォローを入れたつもりだったのだが、彼はさらに恐縮してしまった。そんな様子を見ながら、ドーキは再び口を開く。

「……ベンテさん、そのくらいで。まずは、塩を運び込みましょうか。あ、紹介が遅れました。僕と共に北町衆の運営を手伝っていただいています、ダエモさんとカホシさん、ナンゴさんリーヘイさん

です」

紹介された４人は、ベンテと共に深々と頭を下げる。全員、悪党顔だが、とても礼儀正しくて、なんだか好感が持てる。

「へイ、それじゃ、かかりやす」

ベンテの一声で、塩壷たちが次々と運び出されていく。壷自体はそこそこ重いのだが、彼らはそれを軽々と持ち上げており、一人で二つ重ねて持っていく。俺たちも一緒になって手伝ったために、塩壷はあっという間に倉庫の中に納められた。

「これだけあれば、数ヶ月は持ちそうでやすね。ありがてぇことでごぜぇやす。ドーキの旦那、あっしらはこのあと、他の町の旦那たちに、塩が届いたことを触れてめぇりやす」

「ああ、そうしてもらえると助かります。外は物騒ですから、どうぞ気を付けてくださいね」

「へ、そのことでやすが、旦那。一つ、お聞きしたいことがごぜぇやす。何でも昨日、オージン様が攫われそうになったと聞きやしたが……」

思わず俺たちは顔を見合わせる。ドーキは俺たちに目で心配いらないと告げ、彼らに向けて口を開く。

「ええ。えっと……ベンテさんたちはそのことについて、どこまで知っていますか？」

五人は互いに顔を見合わせていたが、やがて、申し訳なさそうにベ

ンテが再び口を開く。

「何でも、ドーキの旦那のお店で捕り物があったと聞きやした。あっしらは、昨日の夜にそのことを聞きやして……で、心配になりやしたものですから、こんな朝っぱらから、失礼も顧みず皆で申し合わせて伺った次第でござぇやす」

「なるほど、そういうわけだったのですね。皆さん、仕事もおありだったでしょう。申し訳なかったです。ご心配をおかけしました」

「いいえ！　旦那が謝ることぁねぇんで……。聞けば、下手人はすぐに捕まったと聞きましたが……見たところ、旦那にお怪我はねぇようで、安心した次第で……。ただ、先ほどこちらに伺うときに小耳に挟みやしたが、どうやら下手人が逃げちまったようで……何とも物騒な話しでやす」

……背中がゾクゾクしてくる。もしかすると、ドーキの店も、彼自身も危なくなるかもしれない。

「と、いうことは、犯人たちを捕らえるために捜索隊が出されるのかな？」

俺は平静を装いながら、彼らに対して口を開く。だが、ベンテから返ってきた答えは、意外なものだった。

「いいえ。そうじゃねぇみたいです」

「え？　どういうことだ？」

「なんでも、オージン様の護衛の方々は皆、下手人を逃がした廉で、

お屋敷の地下の座敷牢に閉じ込められたと聞きやした。で、追っ手の人数が足りねぇってんで、各町衆にその下手人探しをお命じになるとか……。追っ付け、旦那のところにも役人が来るかと思いやす。地獄耳の上町（かみちょう）の旦那が仰っていたんで、間違いねぇと思います」

「……上町（かみちょう）のショゲツ様ですか。なるほど、あのお方でしたら、間違いはないでしょう。相変わらず、情報が早いですね」

「へ、実は昨日の一件も、ショゲツの旦那のお身内から、あっしのところに知らせていただいたんで……」

「なるほど。ありがたいことです。近いうちに、ショゲツ様にお礼に伺わないといけませんね」

「差し出がましいことを申しやすが旦那、他の五ケ町に触れ回るついでに、寄合をお決めになっちゃいかがでございやしょうか。既に、南町、西町は塩が尽きかけていると聞いておりやす。早ぇに越したことはねぇかと思いやすが……」

「そうですね……では」

ドーキと五人の男たちは何やら打ち合わせを始めた。どうやら、俺が運び込んだ塩を後日、他の五ケ町の代表者が集まって分配するようだ。まあ、これでこの国の人々が救われるのであれば、俺としてはうれしい限りだ。ただ、俺の逃亡がバレることは予想していたが、まさか町衆を巻き込んで捜索しようとしていることは思いも寄らないことだった。ちょっとこれは、対策を立てる必要があるな……そんなことを考えていたとき、ドーキの声が聞こえた。

「お待たせしました。では、我々は店に帰りましょうか」

一度、チワンや皆で、今後のことを考えよう。そんなことを思いながら、俺たちはすぐ近くにあるドーキの店に戻るのだった。そして、俺たちの帰りを待ちかねたように、二人の女が俺たちの背後に立った。不覚にも、俺はそのことに気が付かずにいた……。

第二百七十三話　そうきましたか（後書き）

キャラ名、都市名、引き続き募集しています。よろしくお願いします……。（ただし、採用されたものに関しては、著作権は発生しませんので、よろしくお願いします）

第二百七十四話　失言

「そこな若いの、待ちゃ」

ドーキの店に着き、入り口から中に入ろうとすると、突然背後から声を掛けられた。振り返ってみると、何とそこには白いローブを着た女と、その傍らには、鼠色のローブを着てフードで顔をすっぽりと隠した、小さな子供が控えていた。女はかなりの細面で、神経質そうな風貌だ。振り返った俺たちに、腕を組みながらクイッと顎を上げ、まるで俺たちを見下すかのような態度を取っている。何だか、カチンとくる雰囲気だ。

「待てとお留めなされしは、それがしがことでござるよな？」

……俺の返答があまりにもブッ飛んでいたためか、女はゆっくりと俺から目を逸らし、あらぬ方向に視線を泳がせた。てゆうか、この女はどう見ても俺より年下だろう。そんな俺に「お若いの」などと話しかけてくる段階で、完全に俺をバカにしている。

「サツキ、サツキ」

フードを被った子供の声を聞いた瞬間、女はハッと我に返り、その子供の前で片膝をついた。

「しばらくお待ちくださいませ。すぐに取り計らいます」

「どうかしましたか……って、サツキ様？　もしかして……オージン様？」

俺たちがなかなか店に入ってこないために、何事かと外に出てきたドーキが絶句している。その様子を満足そうに眺めた女はゆっくりと立ち上がり、それが合図であるかのように、子供がフードを取って顔を出した。

「ドーキ。来てやったぞよ。昼餉（ひるげ）はそちの店で食すぞよ」

……昨日、布袋の中から出てきた女の子だ。間違いない。このおかっぱ頭は忘れたくても忘れられないくらいにパンチが効いている。確かに、この子だ。何か俺に対して「あっ、お前は！」みたいな話をしてくるかと思ったが、真正面にいて、目もあっているにもかかわらず、この子は俺に対して何も反応を示さない。どうやら、俺のことを覚えてはいないようだ。

「ドーキ、そなたに頼みたいことがあるのでな。わざわざ出向いてやったぞよ？」

女が半笑いで俺たちに口を開いた。なんちゅう高圧的な物言いなんだ。ローブをまくり上げて、パンツを脱がして、剥き出しのお尻に全力でペンペンしてやろうか？

「あ……その……ここでは、なんですから……」

ドーキがビクビクしながら女たちを案内する。彼が向かったのは、店の裏手にある建物だった。無造作に扉を開けると、そこは何とカウンター付きの店だった。中には虎獣人と思われる若い男が何やら作業をしており、ドーキを見つけると、すぐにカウンターの中から飛び出してきた。

「旦那、いかがなさいました？」

「……オージン様がお忍びなのです。今日のご予約のお客様は５組でしたね？　では、奥の部屋を借ります。あ、気にしないで、仕込みを続けてください」

そう言いながら彼は俺たちを部屋に案内した。

その部屋は見事な座敷だった。板張りだが、きれいな庭があり、料亭のような趣のある部屋だった。

「さ、どうぞ」

ドーキは席に着くように勧めるが、オージンはキョロキョロと辺りを見回していて、座ろうとしない。てっきり部屋が珍しいのか、庭でも眺めているのかと思っていると、突然その女の子は俺を指さした。

「そち、ここに座わりゃ」

俺を指さしたその手で、自分の足元を指している。俺たちは一瞬キョトンとしたが、俺は勧められるままにオージンが指さす場所に腰を下ろす。

「うむ」

そういいながら彼女は俺の膝の上に座った。胡坐をかいている俺の足を座布団代わりにしていやがる。予想外の行動に俺は呆気に取られてしまい、目を見開いて固まる。

隣に控えているサツキも、その様子を気に留めるでもなく俺の隣に座る。チワンたちはどうしていいのかわからず、その場に立ち尽くしている。そんな中、ドーキが俺たちの前に進み出てきて、落ち着いた声で口を開く。

「オージン様。突然のお越しですが、一体何の御用でしょうか？　それに、いま腰を掛けておられるお方は、私の大切なお客様です。そこをおどきください」

「フフン。メシ屋風情が生意気な口を利くではないか？　そちゃ何か？　このような汚い板の上にひー様に座れと言うのかぇ？　そちの察しが悪いゆえにひー様が自ら敷物を求められたのではないか。大体、なぜ我々がそなたの所にわざわざ来たのか、そちゃわからぬのかぇ？」

「サツキ様、あいにく私には、わかりかねます」

二人の間で見えない火花が散っている。女はニヤニヤと意地の悪そうな笑みを浮かべながら、一旦ドーキから視線を外し、懐から細長い管と小さい箱を取り出した。何かと思っていると、それはキセルのようなもので、彼女は優雅な動きで箱を自分の前に置き、その後、左指に小さな火の玉を作り出して、それをキセルの先端に当てながらゆっくりと吸い口に口を付けて、息を吸う。

「ふぅぅ～」

女はドーキに向かってゆっくりと息を吐き出した。その煙がまともに彼の顔にかかっている。見たところ２０歳前後かと思われる若い風貌だが、やっていることはいやらしいオバサンのような粘着質な振舞いだ。見ていてムカムカする。しかしドーキは微動だにせず、

静かに女の顔を見据えている。

「恐れ入りますが、もうすぐ店を開けねばなりません。手短にお願いします」

「……そなた、気を付けて物を申せ。話とは、昨日のことじゃ」

いきなり声が低くなっている。何かマジで粘着質な女のようだ。

「昨日の？　どういうことでしょうか？」

ドーキが言葉を言い終わらないかのうちに、庭の池で泳いでいた鳥が突然飛び立った。

「あっ！　サツキ見や！　鴈(がん)が飛ぶぞ！」

俺の膝の上の少女が頓狂な声を上げる。

「ホホホ、ひー様。鴈(がん)と言うは下賤な者の言葉でございます。鴈(がん)ではなく、雁(かり)と仰せあそばしませ。ガン、はカリと申します」

「おお、左様か」

少女はコクコクと頷いている。その様子を満足そうに眺めながら女は、ホホホと笑みを浮かべながら自分の前に置いた小箱にキセルの先端を付け、ポンポンと叩いた。どうやらタバコの灰を落としているらしい。そのとき、何故かキセルから雁首がポロリと箱の中に落ちてしまった。

「サツキ！」

膝の上の少女が再び頓狂な声を上げる。彼女は落ちた雁首を指さして、嬉しそうに声を張り上げた。

「ガン……ではない……カリ首が落ちた！　カリ首が落ちた！　何やら不吉だわぁ！」

……見る見るうちにサツキの顔が赤くなっていく。俺はあらぬ方向を向いて、笑いをこらえるのに必死だった。

「……ご予約のお客様ですね、どうぞこちらへ」

部屋の外から男の声が聞こえてきた。それと同時に、ドヤドヤと人が入ってきている。どうやら、この店に予約をしていた客がやってきたようだ。

「なっ……なんじゃ、騒がしい！」

サツキが顔を赤らめながら口をとがらせている。ドーキはやれやれという表情をしながら、口を開く。

「予約をいただいたお客様が来られたのです。皆様にお食事を出さねばなりません。私も手伝わねばなりませんので、手短にとお願いしたのです」

「人払いせよ」

「え？」

「その予約の客を全員追い返せ」

「サツキ様！」

「よいではないか？　うん？　客からは既に金をもらっておる？　それならばその金を返してくりょう。もう料理を作った？　ならばコチが食してやろうぞ。サツキ、金をだしてやりゃ」

ドーキが止めるのも聞かず、この姫と女は客を追い出せという。そして、女が懐から金貨をジャラジャラと取り出し、板の上に並べ始めた。

「客は5組と言ったかえ？　一組金貨1枚ならば十分であろう？　それにこれはそちへの迷惑料じゃ。そちにも1枚遣わすぞえ。これで、客を追い返せ」

「その金貨、俺にも1枚もらえませんか？」

「リノス様……」

ドーキがハトが豆鉄砲を食らったような顔をして驚いている。俺は彼にちょっと目配せをしながら、サツキに左手を出して金貨をねだる。

「ホッホッホ。そなたも金が欲しいかえ？　よいよい。そなたもご苦労であるからのう。このくらいの金貨、いくらでもやるほどに。それ……」

女は金貨をポンと俺に向かって投げた。チリィンといい音がする。俺は黙って側に投げられた金貨を手に取った。きれいな金貨だ。俺

はそれを膝に腰かけている姫に手渡した。

「はい、これ、差し上げます」

「何じゃ？　なぜ、サツキのやった金貨をコチに寄こすのじゃ？」

「これで、貴方たちも帰ってください」

一瞬の静寂が訪れる。キョトンとするオージン。俺は視線を傍に座っているサツキに向ける。彼女は俺を睨みつけたまま、体からじわじわと殺気を漂わせ始めていた。

第二百七十五話　姫廻し

「熱っ！」

飛び上がるようにしてオージンは俺の許を離れ、サツキの背中の後ろに隠れた。子供の体だが、意外と重い。いいかげん足がしびれてきそうだったので、俺は自分に張っている結界の温度を上げたのだ。

「貴様……」

「あ、いや、俺は何もしていませんよ？　ただ、予約したお客様を、いきなり追い返すというのは、ちょっと乱暴じゃないですかね。そんなことをすると、この店のお客さん減ることになります。あなたが未来永劫この店の面倒見るというのなら、話は別ですが」

「フフン、そなた、何を言っておるのじゃ？」

「可笑しいことがあるのであれば、アハハと声を上げて笑った方がいいですよ。フフンと鼻で笑うのは、イヤな笑い方です。折角の美人が台無しになります。……ただ、あなたも人のことを笑えた人ではないですよね？」

「何を言うているのじゃ、そなた、気でも狂うておるのかぇ？」

女は相変わらず引きつった、ニヤニヤとした笑みを俺に投げかけている。俺は既に鑑定スキルを発動させて、この女の過去を把握していた。ちなみに、彼女のスキルはこんな感じだ。

【サツキ（魔導士・２１歳）ＨＰ：１２１　ＭＰ：２９５】
火魔法ＬＶ１　水魔法ＬＶ２　風魔法ＬＶ２　空間魔法ＬＶ３　結界ＬＶ２　ＭＰ回復ＬＶ２　詠唱ＬＶ３　教養ＬＶ３

２１歳でのこのスキルは優秀だ。将来はいい魔導士になる可能性が高い。だが彼女は、実はコンプレックスの塊だ。それに加えて寂しがり屋であるために、怒られたり、仲間外れにされたりすることが一番傷つく。そうならないために、子供の頃から必死で修行してきたのだが、どこをどう間違えたのか、いつしかプライドの高い女に仕上がってしまっていた。本人は今の振る舞いが正しいと信じているのだが、実際は、多くの人に嫌われている。学校や会社で一人はいる、正論を振りかざすだけの、イヤな女になり果てている。

こんな女はリコに頼めばおそらく、２秒で優しく殺してくれるのだが、あいにくとリコはここにはいない。仕方がないので、俺がやることにする。

「……火魔法得意って言っていますけど、本当は苦手ですよね？　ファイヤーボール飛ばすとき、風魔法を同時に使わないと飛んでいかないですよね？」

女の顔が凍りついている。俺は手を緩めずにさらに言葉を続ける。

「……それに、本当はこのドーキの店に来る予定は無かったですよね？　でも、あなたは閃いた。……北町衆の代表であるドーキの力を使って、その姫を攫った犯人を捜させれば好都合だと。しかも、そのお姫様がこの店の食事を食べたいと言ってくれたので、願ったりかなったりの展開になっていますよね？　…て、ゆうか、お姫様の誘拐にあなたも一枚噛んでいますよね？」

「なっ……どうして……いや、そんなことはない！　私は、知らぬ……きっ、貴様ぁ！」

女が立ち上がった瞬間に、俺の周囲が青い光で包まれる。

「ドーキ、心配いらない。予約のお客を……」

そう言い残して、俺はその場から消えた。

「……意外に広いな」

気が付くと俺は、地平線が見える程の広大な場所に居た。

「……そなたはもう逃げられぬ。ここでそなたは、死ぬのじゃ。死ねぃ！　死ねっ！」

憎しみのこもった声がどこからともなく聞こえてくる。俺はその声を聞きながら、魔力感知を働かせる。

「……思った通りだが、この空間魔法、使い勝手が悪そうだな。結界魔法との違いは何だ？　一度、ゴンかおひいさまに聞かないといけないな」

俺は一人でそんなことを呟きながら体を前に倒す。

「なっ！？」

背後から女の声が聞こえる。ゆっくりと振り返ると、そこには昨日俺を捕らえたハーギが剣を振り切った状態のまま、目を見開いて固

まっていた。

「ハーギ！　その者を殺せ！　殺すのじゃ！　さすれば、不手際は許して遣わす！　やれ！　やれぃ！」

「……サツキ様、この男、何者だ？」

ハーギが俺に剣を構えながら呟く。どうやら、完璧に後ろを取った相手に剣が躱されたので、かなり動揺しているようだ。剣筋は悪くはないが、気配探知と魔力探知のお陰で、この女の動きは手に取るようにわかる。

「……うん？　そなた、まさか、昨日の！」

「はあっ！」

最後まで言葉を言わせることなく、俺は風魔法を駆使した衝撃波を放っていた。ハーギは剣でそれを防御したが、俺は同時に3つの衝撃波を繰り出していた。一発目は防御できたが、二発目と三発目を同時に食らい、あえなくその体は遠くに吹っ飛ばされた。

「ぐっ……ぐぅぅぅ」

「しばらくは動けないだろう。大人しく寝ておけ」

俺はハーギに近づいていく。そのとき、彼女の体が透けていき、やがてその姿は消えてしまった。

「……なるほどな。この女に聞かれるとマズいからか。そうだろうな。何と言っても、お前が仕組んだ誘拐事件が、彼女にバレると大

変だからな」

俺はニヤリと笑みを浮かべながら呟く。サツキが何か喋ってくるかと思ったが、声は聞こえず、俺の周りには、だだっ広い空間が広がるばかりだ。

「さて……そろそろ、この空間から出ないとな」

「フッ、フフフフ……。そなたはこの空間からは出られぬ。ハーギを倒したのは褒めてやろうぞ。しかし、あの風魔法はＬＶ３であろう？　その程度のスキルではここから出ることは叶わぬ」

「だろうね。でも、これならどうかな？」

俺は水魔法を操り、この空間内の温度を下げていく。使っているのは水魔法ＬＶ５の絶対零度（アブソルート・ゼロ）だ。見る見るうちに、空間内が凍りついてくる。

「……ツキ……ツキ！　サツキー！　サツキー！」

一瞬目の前が真っ白になり、気が付いてみると、目の前には下半身と両手を凍らせたサツキがおり、その傍らには、動こうとして動けないでいるハーギの姿があった。そして、小さな姫はあたふたと動き回りながら、必死でサツキの名前を呼んでいる。

「残念だったな。お前の空間魔法はＬＶ３までならば、その力を封じ込めることができるのだろうが、それ以上のスキルに関しては無理なようだな」

「ひぎぃ！　ひぎぃ！　腕が！　足が！　足がぁぁぁ！」

ものすごい形相を浮かべながら女は必死で氷漬けになった自分の体を動かそうとする。しかし、水魔法ＬＶ５で作られた氷はそう簡単に溶けるものではない。そのとき、オロオロとしていた姫が血相を変えて俺に近づいてきた。

「そち！　すぐにサツキを助けよ！」

「何？」

「そちがコチの言うことを聞かねば、この店は潰れることになるのじゃ！」

「どういうことだ？」

「コチの僕（しもべ）は、サツキやハーギだけではない。多くの僕（しもべ）がいるのじゃ。コチが命じれば、この店やドーキの命など……えっ？　ええっ？　何をするのじゃ！」

俺は無言で、その姫を抱え上げていた。そして右手を振りかぶり、それを勢いよく小さな尻に向けて叩きつけた。

パアーン、パァーン、パァァン！！

「ギヤァァァァァァァァ！！」

断末魔のような絶叫が部屋の中に響き渡る。こういうこともあろうかと、俺は事前に音が聞こえないように結界を張っていたのだ。

「いっ、いいいいいいいいい～～～～」

俺から放り出された姫は、クルンと一回転をして、床に尻もちをついた。彼女はすぐさま起き上がり、尻を押さえながら涙目で俺を睨む。その様子を見ながら、チワンが慌てて俺の側に寄ってきて、口を開いた。

「リノス様……。震えております。ちと、やりすぎでは……」

「いや、いいんだチワン。この子は俺をナメているのだ。ナメた子供は思いっきり打ち据えてやらねばならん」

その言葉を聞きながら、姫は震えた声で、早口でまくし立ててくる。

「ゆゆゆゆ許さんぞ……。コチに、コチに……このような……ゆるさん……全員捕らえてくりょう……全員……痛い、痛いぞよ……お尻が……うわぁぁぁぁぁぁぁーーーん！！」

だぁぁぁぁぁっ、うるせぇー。子供のくせに、相変わらず何て声量をしているんだ。あまりの喧しさに、俺はオージンに一切の音を遮断する結界を張った。

「リノス様、リノス様、お逃げください。チワンさん一旦……」

ドーキが慄きながら口を開いている。俺は彼に皆まで言わせずに口を開く。

「この姫の誘拐を企んだ真犯人は、別にいる。このサツキはそれに手を貸しているだけにすぎない。俺はその誘拐犯に仕立て上げられそうになったというわけだ。本来なら俺がお仕置きを食らわせたいが、あいにくとここは俺の国じゃないからな。……コイツはどこに

引き渡せばいい？」

「あの……えっと……」

「どうした、ドーキ？」

「サツキ様の場合は……帝様になります」

「え？　国王自らがか？」

「はい……。先の大戦後、町の中での諍いや揉め事は、町衆が取り締まり、貴族のことに関しては、帝様が治めておられます。サツキ様の場合は、クワンパック家のことになりますので……帝様ですね」

「では、その帝様の所に連れて行こう。どうすればいい？」

「まずは御所にこのことをお伝えして、御所を警護するオワラ衆の方に、身柄を引き取りに来ていただくのが一般的です。わかりました。一旦店を閉めて、僕が御所に行ってきます」

「ああ、いや、予約の客がもう来ているんだろう？　食事中にいきなり帰れと言われると、さすがに客は怒るぞ？　店が終わるのは……夕方？　わかった。ドーキ、店が終わったら御所に行こう。俺も一緒に連れて行ってくれ」

「え？」

「このサツキという女はロクでもねぇこと考えてやがるが、それはまあいい。そのことも場合によっては話さなきゃいけないだろうし、何より、ドーキ一人では、コトが有耶無耶にされてしまわないか？」

「帝様に限って、それはないと思うのですが……。そうですね、リノス様も一緒に来ていただいた方がいいかもしれませんね。わかりました。帝様には連絡を入れてみます。…リノス様、本当に、本当に、申し訳ありません」

「いいってことだ。そんなに謝るな。何か俺が悪いみたいじゃないか」

俺はニヤリとした笑みを浮かべたまま、下半身が氷漬けになっている女に視線を移す。彼女は俺に憎しみの眼差しを向けたまま、ワナワナと震え続けている。

「姫を攫わせておいて、責任を護衛の者に押し付けている間に、お前は姫の後を追おうとしてたんだろう？　しかし、そんな時に俺に出会ってしまったのは不運としか言いようがないな。計画は失敗してしまったが、その犯人捜しを命じることで、何とかコトを有耶無耶にしようとしていたようだが、こいつもあいにくだったな」

俺の話を聞きながら、サツキは相変わらず震えながら視線をあらぬ方向に外した。そして、姫は驚いた表情を見せながら、隣のサツキを凝視するのだった。

第二百七十六話　帝様

カリカリカリカリカリ……。カリカリカリカリカリ……。……チリリリリーン。

机の上に置いているベルを鳴らすと、すぐに扉がノックされて、男が入室してくる。

「お呼びでしょうか？」

「決裁の書類には全部サインをしておいたから、持っていってくれ」

「畏まりました」

男は恭しく一礼をして紙の束を受け取り、そのまま部屋を後にした。

「ふぅ～。やれやれ……おっ。もう時間か。じゃあそろそろ行くか」

俺はそう言って、再びドーキの店に転移した。

「リノス様！」

店に入るなり、ドーキは飛び出すようにして俺の許にやって来て、ペコペコと頭を下げる。

「大丈夫だったか？」

「はい。今のところ、お客様以外は、誰も……」

「そうか」

俺たちはそんな短いやり取りを交わしたあと、彼が経営するもう一軒の料理屋に移動する。

「旦那……」

「クロヌロさん、何かありましたか？」

「いえ、大丈夫ですが……」

「あなたには迷惑は掛からないようにしますから、大丈夫です」

ドーキは落ち着いた声で虎獣人の男に話しをしている。そして、俺たちはもといた座敷に向かう。

「……」

俺たちが部屋に入ると、ポーセハイのゼンハイとフィットが小さく一礼した。彼らの前には、三人の女が眠っており、そして、そのすぐ横でチワンもまた、幸せそうな顔をして眠りについていた。

「大丈夫だったか？　すまんな、お前たちも巻き添えにしてしまって」

謝る俺に、二人は笑顔で首を振った。

「チワンは……徹夜続きなんだな。しばらく寝かせといてやろう」

そう言って俺たちは笑顔を交わし合う。そして俺は、ゆっくりと視線を女たちに向けた。

サツキを氷漬けにしたあと、女たち三人は結界に閉じ込めて眠らせた。そのとき、サツキの氷は溶かしておいた。その後、俺はアガルタで片付けなければならない仕事があるために、そこから転移し、国王としての業務に取り掛かったのだ。同時に、ドーキは料理屋を手伝いつつ、お菓子屋の開店準備にかかった。

彼の店の営業形態は、この世界においてはかなり特殊だ。料理屋については昼と夜の営業だが、昼は１１時に開店し、１４時で一旦店を閉めてしまう。その後、１８時に再び開店し、２１時まで営業する。お菓子屋については、１２時に開店し、１６時で閉店という短い営業時間だ。しかも、お菓子屋については、１６時まで営業していることが珍しい程に、かなり早く店じまいをしてしまうのだ。

一見すると随分強気な営業姿勢に見えるが、これにはちゃんと訳がある。ドーキは味を落とさないように、数量限定販売を貫いているのだ。結果、料理屋もお菓子屋も、基本的に予約で完売してしまう。儲けは少ないのだが、彼も、いっしょに働いているクロヌノも、儲けることにはあまり興味がなく、自分たちが食べていけるだけの収入があれば十分と考えていて、余った時間は北町衆の活動や、町衆が主催する勉強会に行くなどして、自己投資に充てているのだ。

ドーキとの付き合いから、俺は彼の生活スタイルを知っていたために、サツキたちを眠らせて、彼の手が空くであろう夕方の時間に帝と会おうと考えたのだ。基本的にドーキが頼めば帝はいつでも会ってくれるそうなのだが、彼は調整能力にも長けていた。店番をしながら、菓子を買いに来た客に帝への嘆願書を邸宅に持っていくよう

に頼み、その数時間後には、帝から目通りを許すことが書かれた許可証が既に届けられていた。帝の直筆で書かれているというその文字は、とても迫力がある一方で、どこか優美さを感じさせる書体であり、この字から見ても、帝という人はタダ者ではない雰囲気が見て取れる。

「では、行きましょうか」

俺はドーキと連れ立って店を出る。そのまま館に沿って進み、大きな門を潜って中に入ると、倉庫のような大きな二棟の建物が目に入った。

「こちらです」

その建物を左手に見ながらゆっくりと進んでいく。足元は玉砂利のようなものが敷き詰められており、歩くたびにジャリジャリと音を立てている。しばらく歩くと、本格的な館が見え、俺たちはそこを超えてすぐ左に曲がった。

……実に見事な庭が目に飛び込んできた。大きな池があり、その周囲に色々な木が植えられているが、それらが池の水面に映り、何とも言えない癒しの空間が作られていた。

「帝様！」

ドーキの声でふと我に返る。彼は俺に目配せをして小走りに走っていく。よく見ると、その庭の周囲にも建物があり、それらをつなぐ渡り廊下のようなところに人影のようなものが見えていた。俺はドーキの後を追いかける。

……そこには、布を体に巻き付けたような衣装を纏った、小柄な男が立っていた。しかも、その頭には、二本の角が生えていた。彼に近づくにつれ、その風貌が明らかになっていく。目は細く、しかもタレ目であるために、柔和さを感じさせる。巻きつけた布から見える髪の色は銀色で、その顔は薄緑色だった。

「よう参った」

予想以上にカン高い声だった。ドーキは地面に片膝をつき、恭しく頭を下げる。

「緊急のこととはいえ、申し訳ありませんでした」

「なに、構わぬ。外ならぬドーキの頼みじゃ。何を差し置いてでも会おうぞ」

帝は優しい笑みを浮かべながらドーキを見ている。そして、スッと視線を俺に向け、ニコリと笑みを向けた。

「ここでは話はできぬによって、ささ、中に入られよ」

そう言って彼は建物の中に消えていった。

案内された部屋は何もなく、ガランとしていた。唯一目に入ったのが、ほのかに青白い光を放つ、トラのような置物だ。帝はその前に自ら緑色の座布団のような円形の敷物を二つ床に並べ、自分はその置物の側にフワリと腰を下ろした。

「さ、座ってくれい」

「き……恐縮です」

ドーキはわざわざ座布団を外して床に座る。俺もそれに倣って床に腰を下ろした。

「ホホホホホ、二人とも、遠慮深いことよな。さて、マロに伝えたいこととは、一体なんだえ？」

「帝様、こちらは、僕たちに塩を提供していただいた、リノス様です」

「なに、塩を？」

「はい。この国の人々が3か月は持ちこたえられるだけの塩を提供いただきました。あ、ご懸念には及びません。お代金は、いつでも払える時にと言っていただいて……」

ドーキがそこまで言うと、帝はスッと立ち上がり、体に巻き付けてある布をクルクルと解きだした。あっという間に彼は上半身裸になり、その布を丁寧に畳んで、ゆっくりと俺の許に差し出した。

「ミーダイ国を治める、ゴンナーラじゃ。支払代金にはとても足りぬだろうが、せめてその足しにしてくれ。マロが使うてしもうたが、妻が精魂込めて織った布じゃ。それでも売ればそれなりの価値になる物じゃ」

あまりに予想外の行動に俺は、慌ててその布を帝の許に返す。

「いいえ、本当に結構です。お代金は後でも十分です。私の国では塩が大量に採れます。それに、ドーキには私の妻が出産したときに、

滋養のある餅……こちらではカチンと言うのですか？　を持って来てもらって、色々と助けてもらいました。今回はその恩返しです。気にしないでください」

「さりとて……ドーキの作るカチンと、此度の塩とでは、全く釣り合わぬが……？」

「ええ。代金は少額でも月々に返してもらうようにします。決して無料というわけではありません」

「月々……。代金を取る、というのであれば、マロは何も言わん。……心から感謝するぞよ。しかし……そなたは、一体何者だえ？」

「色々と商売をしている者です」

「商人……か。見たところ邪念は感じぬな。それに……なにやら強い力を感じる」

「恐れ入ります。買い被りですよ」

一瞬表情に出そうになるが、何とかこらえる。アガルタの国王と名乗ってもよかったのだが、本能的に身分を偽ってしまい、思わず商人と答えてしまった。だが、嘘は言っていない。それに、何となくではあるが、俺の力を感じ取っているところを見ると、レベルの低い鑑定スキルを持っているのだろうか。先ほどから帝はずっと俺の目を見続けている。彼の瞳はとても美しい。大きな目をしているので、よく見えるのだ。エメラルドグリーンの瞳を見ていると、何だか吸い込まれそうな気分になってくるが、とても心地がいい。そのために鑑定スキルを発動させようと思うのだが、その瞬間に、それをしてはいけない気分になってくる。どうやら彼は、タダ者ではな

さそうだ。ここは、サツキたちのクレームではなく、彼女らを鑑定した内容を話した方が良さそうだ。そんなことを考えていると、再び帝様が口を開いた。

「ところで、マロに会いたいというのは？」

「はい。今回、ミーダイ国は塩止めにあっていますよね？　それは実は、隣国のタナ王国の策略のようなのです」

「タナ王国？　なぜ、そなたがそのようなことを知っているのじゃ？」

「ええ、私がこの国に来た時に、とある誘拐事件に巻き込まれまして、その濡れ衣を着せられたのです。それに関わった者たちと話をしているうちに、とんでもないことが分かりましてね。それを、帝様にお伝えしたいと思いまして、このように無理を言ってお時間をいただいた次第です」

「ほう……それは……是非、聞かせてもらおうか」

帝は姿勢を正して、俺に向かい合った。それを見て、俺はドーキに目配せをするのだった……。

第二百七十七話　嵐の前の静けさ

「帝様、実は昨日、クワンパック様のご息女のオージン様が、連れ去られそうになったのです」

俺に促されるような形でドーキが口を開く。帝は少し驚いたような顔をしながら、言葉を返す。

「何と、オージンが、か？」

「はい。それで、たまたま居合わせた、こちらのリノス様がその犯人に疑われまして……その……クワンパック様のご家中である、ハーギ様たちに囚われそうになったのです」

その言葉を聞いた帝は、さも申し訳ないと言わんばかりの顔をして俺を見た。そして、ゆっくりと天井を仰ぎ、ふう～っと大きなため息をついた。

「オージンに目を付けた、か……。かどわかしが流行っておると聞いていたが、まさかオージンを攫うとは思わなんだわぇ。……今朝、カチンを持ってきたときには、そのような話は聞かなんだな？」

「申し訳ありません」

「いや、ドーキのことじゃ。マロに心配をかけぬようにと配慮してくれたのであろう？　よい、感謝するぞよ」

「そんな、勿体ない……」

「で、オージンらは今、どうしておる？」

「私の店においでになります。その……」

ドーキが言いにくそうにしているので、俺が代わって話をすることにする。

「彼女らは、ドーキの店で眠っています」

「眠っている？　ハテ？　どういうことじゃな？」

「いや、昨日ひと悶着あったばかりですので、ドーキのことが心配になりまして、今朝もう一度様子を見に行ったのです。そのついでということもありませんが、彼の同胞と共に、私の屋敷にある塩も運び込んだ次第です。……ええ。ポーセハイは転移できますから。で、今朝、彼の店に行くと、サツキという女性と、そのお姫様と鉢合わせをしましてね。で、店の中で話を伺ったのですが、まあ、サツキ……という女性とちょっと口論めいたものになりまして……。で、私が彼女の空間魔法で閉じ込められたのですが、何とか脱出することはできましたが、それをするに際して、彼女に眠ってもらったという次第です」

「な……何と？　サツキの空間魔法から脱出した……と？」

「ええ、たまたま、なのですが。ええと、そのサツキですが、実は、あのお姫様を隣国のタナ王国に連れて行くつもりだったようで……」

「何と？」

帝には予想もしなかった答えだったのだろう。キョトンとした顔をしている。俺が鑑定スキルで見たサツキの過去は、幼いころから懸命に努力していたが、ある時を境に突然男に操られ、その関係が今も続いているということだ。コイツを操る男こそ、わがまま姫の誘拐を計画した本人であり、実行犯でもあったのだ。

「タナ王国は、どうやらサツキとお姫様に何かをやらせようと企んでいるようですね」

帝は再び大きなため息をついた。そして、ゆっくりと手を三回打つ。

「……これに」

現れたのは、一人の女性だった。しずしずと歩いているが、この部屋に来るまでの速さが常人離れしている。俺の気配探知には、この部屋の外に突然反応があったように感じたのだ。一体コイツらは何者だろうか？

「ドーキの店に行き、オージンとサツキを連れて参れ」

「承知」

「帝様」

不意にドーキが口を開く。女は立ち上がろうとしていたが、帝をチラリと見て、やがてすぐに居住まいを正してその場に端座した。

「僕が連れて来ます」

「ほう、そなたがかえ？　転移……か？　そなたは大丈夫なのかえ

？」

「はい、問題ありません。ただ……僕の同胞も一緒に転移してくると思います。よろしいでしょうか？」

「うむ、構わぬ」

「では」

そう言ってドーキはその場から消えた。そして、ものの1分も経たないうちに、チワンたちと共にこの場に戻ってきた。相変わらず女たちはスヤスヤと眠りについている。ドーキはかなり具合が悪そうで、肩を小刻みに上下させている。俺は黙って彼にＭＰをチャージしておいた。

そして、同時に俺は、結界で眠っている女たちを起こした。

「ふぁぁぁぁ……よく寝たのじゃ」

姫が大あくびをしながら体を起こす。続いてサツキとハーギがゆっくりと目を覚ます。

「あれ……ここは……？」

「みっ、帝様！？　ひー様！　ひー様！」

「うあん？　うえっ！」

女たちが固まっている。帝は相変わらず微笑を湛えた顔で彼女らを見つめている。彼はゆっくりと俺たちに視線を移し、そして優しい

口調で話しかけてきた。

「人払いじゃ。済まぬが、席を外してくれまいか？」

「し、しかし帝様……」

「よい、ドーキ。マロのことならば心配はいらぬ。リノス殿とやら……。この度は誠に迷惑をかけた。この侘びと礼は、必ずさせてもらうによって、しばし時間をくれまいか。この度のこと、すまぬ」

そう言って彼は俺に深々と頭を下げた。

「いえ、気にしないでください。頭をお上げください」

ゆっくりと頭を上げた彼は、相変わらず微笑んでいた。

「御退出を……」

帝の側に控えている女に促される形で、俺たちは部屋を後にした。そのとき、女たちの顔を見たが、全員が顔面蒼白で、ハーギに至っては震えながら平伏したままだった。俺たちはドーキの案内で館を出て、そのまま彼の店に向かった。

「……震えていましたね」

館を出てしばらくすると、チワンが呆れたように口を開く。

「ああ。ドーキ、帝様と言うのは、あんなに朗らかな顔をしていたが、やはり怖い人なのか？」

「いいえ。とてもお優しい方ですが……。ただ、帝様の前に出ますと、どうしても嘘がつけないのです」

「嘘がつけない？」

「はい。その雰囲気と言いますか、邪念を感じ取られますので、嘘をつくとすぐにバレます。そして、あの感じで優しく諭されますと……大抵の人間は白状してしまいます」

「何かそんなスキルを持っている……ということかな？」

「僕にはよくわかりませんが……」

「何ともよくわからない人だな。ただ、今の話を聞く限りでは、あの女どもは帝の前で色々なことを吐かされているのかな？」

「はい。洗いざらい全部喋っていると思います」

「凄まじいスキルだな」

「どうなのでしょう。スキルのことについては、僕も深くは聞きませんし、帝様もお話になりませんから……。ただ、あんな感じで我々と気さくにお話になりますし、お礼の類は絶対になさる御方で、とても誠実な方なのです」

「うーん、まあ、確かに、何となく助けてやりたいなと思う気持ちもわからなくはないが……。ただ、あの風貌は珍しいな。頭に立派なツノが生えていたな。人族……か？」

「いえ、オーガと人族の混血だと聞いています」

「オーガとか……」

そんな会話としていると、ドーキの店に着いてしまった。そこには、朝、俺たちと一緒に塩を運んだベンテが待っていた。

「あ、旦那、お帰りなさいやし」

「ああ、ベンテさん。戻られましたか。塩は大丈夫でしたか？」

「へい。残りの五ケ町全てに持っていってめぇりやした。どちらも皆、お喜びでさぁ。で、近いうちに、旦那衆の寄り合いをやりてぇと南町の旦那が仰っておいででした。あと、塩を下さったお方にもぜひお礼がしてぇと」

「ああ、そうですか。それはそれは本当にご苦労様でした。これは……今日のお礼です。皆さんでお酒でも召し上がってください」

ドーキは懐から小粒の銀を取り出して彼に与えている。ベンテは恐縮しながらその金を受け取り、丁寧に礼を言ってその場から去っていった。その後、俺たちはこれからのことを話し合ったが、ドーキは帝様にすべてを任せておけばいいと言って、平然とした顔をしていた。クワンパック家から姫たちのことを追及されないのかと思ったが、その心配はないという。彼はこのまま夜の営業に入ると言って、料理屋に向かっていった。さすがにこのままでは心配なので、俺たちはポーセハイのゼンハイにここに残ってもらうことにした。彼も問題ありませんと言ってくれ、ドーキは恐縮しきりだった。

何かあればすぐに念話を送るように伝えて、俺たちは一旦帰途に就いた。もう少し、色々とモメることを予想していたのだが、何とも

あっけなく一日が終わってしまった。しかしそれは、嵐の前の静けさであり、ドーキから緊急の念話が送られてきたのは、その次の日のことだった。

第二百七十八話　性格悪いは勝利の証

「……なるほどな。わかった」

俺は手紙から目を離し、ゆっくりとそれを隣の座っているリコに渡す。彼女はそれを無表情のまま眺めている。俺たちの前には、緊張感を漂わせたドーキと、面倒くさそうな顔をしたローニが座っている。

「ミーダイ国の王自らが来られるのですか？　お詫びとありますが、なにもそこまでする必要はないと思いますわ」

ドーキが持ってきた書状は、帝様からのものだった。そこには、先日、クワンパック家の姫たちがやらかしたことに対する詫びと、贈られた塩に対してのお礼が書かれてあった。それだけでなく、一国の王を辱めたことに対する詫びと、それについて、帝自らが詫びに行きたいと記されていた。俺は自分の身分を隠したつもりだったのだが、あの帝には通用しなかったらしい。

「あの……」

ドーキが申し訳なさそうな顔をして口を開く。

「帝様は、リノス様のことを相当な大国の王だと仰っていました。……本当ですか？」

彼は俺をどこか辺境の領主だと思っていたらしい。確かに、彼に自分の身分を詳しく明かしていなかったし、ドーキが来るのはこの屋

敷だけだった。ここだけを見れば、森近くの草原の中にある、単なる一領主と見るのが妥当だ。ただ、イデアが産まれた時にローニが、「日嗣の皇子、あれましぬ」と報告していたのを聞いて、一応、どこかの王様ではあるんだろうなという認識だったらしい。そんなドーキの様子を、ローニは呆れた顔で見つめている。

「あなた、リノス様のご身分を知らずにいままでいたのですか？　どこまでおめでたいのですか」

「そんなこと言わないでおくれよ。誰も教えてくれなかったし、僕だって聞きにくかったんだ」

「まあまあ二人とも、そのくらいで」

俺は二人を宥め、コホンと咳払いをする。

「まあ、遅かれ早かれだろうから、ドーキ、君には話しておこうか。いいな、リコ？」

リコはゆっくりと頷く。それを確認した俺は、ゆっくりと口を開く。

「俺は、アガルタ国の王、バーサーム・ダーケ・リノスだ。いや、別に俺はなりたくてなったんじゃない……って、ドーキ？　……ドーキ？　おーい、ドーキー」

バシン！

ローニがドーキの頭をブン殴っている。彼は目を丸くしてパクパクと口を開けたり閉じたりしている。

「あ……あの……アガルタの……王様？」

「そうだよ」

その瞬間、彼は慌てて椅子から立ち上がり、片膝をついて頭を下げた。

「し……知らぬこととはいえ、失礼を致しました。ご無礼の段、平にご容赦くださいませ」

「おい、待ってくれ。やめてくれ、ドーキ」

俺は慌てて彼を引き起こす。彼はペコペコと頭を下げながら、申し訳なさそうに椅子に座る。そのとき、何かに気が付いたのか、彼の長い耳がピクピクと動き、キョロキョロと辺りを見廻し始めた。

「どうした？」

「いや……あの……アガルタというのは、とても繁栄している国だと聞きました。失礼ですが、こちらのお屋敷は……かなり……」

「あー」

アガルタの都からは転移結界で移動しているのだが、彼にそのことを話そうかどうか、ちょっと悩んでしまう。できるだけ秘匿しておいた方がいいと言われているのだが……。そんなことを考えていると、ローニが口を開いた。

「もちろん、ここはアガルタの都ではありません。ここはリノス様のご家族だけが住んでいます」

「え？　どういう……」

「アガルタの都から、毎日こちらに私やチワンさんと一緒に転移しているのです」

「あっ、そうか……。そうだよね。ローニは何度も転移できるから……なるほど。うん、確かに、こうやって別の場所に住まいを設けておけば、突然反乱が起こって襲われても大丈夫だし、都が攻められて陥落しても、王様一家は逃げられるよね。さすがは……イテッ！」

一人で納得しながら喋っているドーキの頭を、再びローニがブン殴っていた。ローニ、グーで殴るのはいけない。女子がグーで殴っちゃいけない。

「縁起でもないことを言わないで下さい！」

「まあまあローニ。そのくらいで……。ドーキ、帝様には、わかりましたと伝えてくれ。それにしても、帝様は、いつもこんな感じなのか？」

「いいえ。基本的に帝様は御所から出られることはありません。こんなことは前代未聞のようです。ただ、僕の転移を使えば、御所から出ることなく移動できますので……。通常は、ご自身の作った茶碗や、お召しの服、直筆の感状をお与えになります」

「そうか……。帝様に伝えてくれ。お詫びの品はいいから、今回は国と国同士が仲良くなるために訪問いただきたいと」

「まあ、それはとてもいいことですわ！」

リコがうれしそうな声を上げる。彼女も、帝様に会いたいと思っていたために、この話はまさしく渡りに船だった。俺はドーキにＭＰをチャージしてやり、彼をミーダイ国に帰らせた。

そして、数日後、帝様がアガルタの都に転移してきた。

てっきり、帝様一人が来るのかと思いきや、彼は転移する人数は５人と連絡してきた。そこで、彼の迎えには、チワンたちポーセハイに手伝ってもらい、御所からアガルタの迎賓館のスィートルームに転移してもらったのだった。そこから、俺たちが待つ謁見の間まで移動してもらう。本来は、アガルタの街並みを見せるなどして国力の高さを見せつけるのだろうが、俺たちはミーダイ国に力を見せつけたいわけではない。それもあって、極々シンプルにいこうということになったのだった。

「……お見えになりました」

兵士の報告を聞いて、俺は居住まいを正す。チラリと横を見ると、リコを始め、着飾った妻たちが居並んでいる。皆、リコのプロデュースのお陰で美しく仕上がっている。元々が綺麗なうえに、さらに磨きがかかっているのだ。さらに、最近子供を産んだリコとシディーは、さらに美しさが際立っているように思える。そんな彼女たちの様子に見とれていると、リコがコホンと咳払いをする。どうやら、帝様が到着したようだ。

白い、それでいて銀色のような光沢を放つ布を巻き付けた帝様が俺たちの所まで歩いてくる。その後ろには、彼とよく似た薄緑色の体

表を持つ女性が、落ち着いた赤の布を巻き付けた格好で従っていた。そしてさらにその後ろには、明らかにガチガチに緊張した状態のオージンとサツキ、そしてその後ろには、二人を見張るようにして、先日御所で帝様に呼び出されていた女官が従っていた。さらにその最後尾には、これまた恐縮しっぱなしのドーキの姿があった。

「……久しいの、リノス殿。ミーダイ国国王、ベナン・トゥレス・ゴンナーラじゃ。そしてこれが……我が妻であるデカルじゃ」

帝様に促されて、赤い布を纏った夫人が前に進み出る。

「ベナン・トゥレス・デカルでございます。以後、お見知りおきをくださいませ」

頭までスッポリ被っていた布をスッと取って彼女は一礼をする。帝様と同様、頭に小さな角があり、薄青の髪の色をしている。そして目は紫色の瞳であるが、とても気品のある、美しい顔立ちをしている。俺はスッと立ち上がり笑顔を見せながら口を開く。

「アガルタ国王、バーサーム・ダーケ・リノスです。本日はようこそお越しくださいました。帝様、皇后さま、アガルタ国王として、お二人を歓迎します。そして……後ろに控える方々も」

そう言って俺が視線を向けると、オージンはさっと顔を伏せてしまい、サツキも一切顔を上げず、俺を見ようとはしない。ドーキは相変わらずハトが豆鉄砲を食らったような顔をしている。まあ、今日の俺はリコによって全力でおめかしをしている。この恐ろしく煌びやかな衣装に面を食らっているのだろう。……ふと、視線を戻すと、帝様がリコたちに視線を向けている。

「ああ、紹介します。俺の妻たちです。この赤いドレスを身に付けているのが、正妻のリコレットです。そして、メイリアス、コンシディー、ソレイユ、マトカルです」

俺の紹介を受けて妻たちが立ち上がって一礼をする。

「帝様、皇后さま、お二人をお迎えできて、この上のない喜びでございます」

リコが見事な行儀作法で歓迎の挨拶を述べる。

「みっ……皆、お美しい奥方じゃの……これは驚いた……」

帝様は目を丸くして驚いている。そのとき、聞こえるか聞こえないかの小さな声が俺の耳に入った。

「……皆、性格が悪そうじゃの」

「ひー様」

明らかにオージンとサツキの声だ。しかもサツキは窘めるのではなく、そうですよねぇと言わんばかりの言い方だ。この二人は相変わらずのようだ。帝様は笑顔を浮かべたまま、クルリと振り返って、オージンたちに視線を向けた。彼女たちはスッと視線を落として畏まっている。

「二人とも、預けてあるものを出しゃ」

帝様の命令で、彼女たちは顔を見合わせながらアタフタと呪文を唱え始めた。おそらく空間魔法に収納して何かを持ってきたのだろう。

二人とも目を閉じて必死で集中している。

『……性格が悪いって言っていますが、この女自身が、相当性格が悪いですよ』

思いがけずシディーから念話が飛んでくる。

『放っておきなさいな。相手にしてはいけませんわ』

『でも、リコ様……』

『いいや、シディー。完全勝利だぞ』

『え？　どういうことでしょう？』

『女性は自分を基準として、ちょっと上は、好きな人は好きそう。さらに上は、性格悪そうって言うじゃないか。つまりは、リコもメイも、シディーもソレイユもマトも、全員あの姫より圧勝だということだ』

皆が俺の念話にゆっくりと頷いている。

『リノス』

『何だい、リコ』

『それは一体、どなたから学ばれたのですか？　きっとそれは、女性からですわよね？』

リコが美しい笑みを湛えながら、俺に視線を向けている。俺は背中

に汗を噴き出しながら、ゆっくりとリコから視線を逸らせた。

第二百七十九話　ミーダイ・コンフィデンシャル

ふと見ると、帝様の前には三つの大きな箱が置かれており、その上には何やら珍しい品物が置かれていた。

俺から向かって左側の箱の上には、茶碗が三つ並べられていた。小さめのお椀、大きめのお椀、そして、湯飲みのようなお椀と三種類あり、どれも一部が茶色くくすんでいる部分もあるが、全体的に白で統一された高級そうな茶碗だった。

次に、真ん中に置かれた箱の上には、なにやら大きな石の塊が載っていた。これは確か、帝様に会った時に彼の側にあった獅子の置物に使われていた材質と同じもののようだ。そして、一番左端の箱の上には、巻物が三段に積まれて置かれていた。俺は視線を帝様に移すと同じタイミングで、彼はゆっくりと口を開いた。

「そこもとには、このオージンとサツキが失礼なことをした。それだけにとどまらず、この者たちの家来はそこもとを殺そうとさえした。知らぬこととはいえ、一国の王に恥辱を与えたことは、ミーダイ国を預かる者として詫びねばならぬ。これらはマロからのせめてもの詫びのしるしじゃ」

「いや、本当に結構ですよ」

「せっかくじゃ、受け取ってくれぬか。この碗はマロが精魂込めて焼いたものじゃ。どれも３０ずつ持って参った。そして、この反物は、我が妻が精魂込めて機を織ったものじゃ。気に入らぬかもしれぬが、受け取ってくれめせ」

帝様はにこやかに笑いながら、三つの箱を眺めている。そのとき、隣のリコがゆっくりと立ち上がる。それと同時に、メイとシディーも同時に立ち上がった。三人は目配せをしながらゆっくりと帝様の許に近づいていく。余りに突拍子のない行動に、俺はキョトンとしてしまう。

「リノス様……」

マトカルが小声で話しかけてくる。どうやら俺たちも一緒に行こうと言いたいようだ。俺はマトとソレイユに目配せをして立ち上がり、リコたちの所に向かう。

「すばらしいですわ。このような見事なものを……。この布も……何と肌触りのいい……」

リコが箱の前にしゃがみこんで、茶碗と布を見ている。メイもシディーも興味津々のようだ。

「気に入ってもらえれば、僥倖じゃ」

「とんでもございませんわ。このようなすばらしい品々をわざわざ……。ね、あなた？」

リコが満面の笑みで俺に視線を向けてくる。俺には全くその価値はわからなかったが、取りあえず笑顔で頷いておく。

「妻たちもこのように喜んでおります。帝様、ほんとうにありがとうございます。ところで……この石は？」

俺は真ん中に置かれた、ほのかに青白い光を放っている、一抱えほどもある大きな石に目をやる。

「これはプリルの石じゃ」

「「プリルの石!?」」

メイとシディーが声を上げる。二人とも目を丸くして驚いている。
一体どういうことだ?

「プリルの石は、別名、神の石と呼ばれている、とても希少価値の高い石です。魔法の効果を無くすことができると言われています。この石は……原石ですか?　石を精製して純度を上げれば上げる程、ＬＶの高い魔法も防御できますし、また、その効果が持続する時間も長くなると言われています」

メイがものすごい目つきで石を凝視している。いつもながら、珍しいものや現象を見つけた時のメイの表情は怖い。せっかくの美女なのに……惜しい。そんなことを思っていると、リコが左手を俺に見せてくる。その薬指には、指輪が光っている。

「母の形見であるこの、メイメントの指輪……。これも、精製したプリルの石が使われているのですわ」

「なるほど……。と、すれば、これだけ大きな石であれば、使い方によっては……」

「その通りじゃ」

帝様が、ゆっくりと口を開く。

「我がミーダイ国では、このプリルの石の原石が採れるのじゃ。これはその中でも最大にして最高の品質を誇るのじゃ。そして、その精製ができるのがマロなのじゃ。精製にはこの原石を砕いたものを使うのじゃ」

「……なるほど。あの、御所でお目にかかったときに、帝様の側にあった……トラ？　のような置物がありましたが、あれによく似た色をしていますね」

「あれは魂魄石じゃ。プリルの石を精製したときに出るニクス……こちらの国では、灰と言うのかの？　それが冷えて固まったものじゃ。歴代の帝が石を精製するにあたり、ニクスをこの魂魄石に注ぎ続けてきた。プリルの石ほどの効果はないが、それでも、邪気や邪念、あらゆる災厄から石の周囲に居る者を守るとされておる。帝が継承し続けてきた、わが国唯一の宝なのじゃ。

聞けば、このミーダイ国は、このプリルの石のお陰で、小国ながらも生きながらえることが出来ていた。石の精製には数千度に及ぶ熱を何日も維持する必要があり、それには多大な魔力を必要とする。そのため、それに携わる帝は、命を削るようにしてコトにあたるのだという。

基本的に、プリルの石が精製されるのは、帝の生涯で2回から3回なのだという。それはつまり、父と共に精製し、その手法を学ぶ時に一度、その後、一人で精製する時に一度、そして最後に、自分の子供に精製方法を伝える時に一度、この3回程度なのだ。それだけに、その価値は天井知らずの値段が付く。それ故に、プリルの石はこの国における最高の褒章であり、その一方でミーダイ国では、帝が息子にその技術を伝える時に精製された石が販売されるのだとい

う。この国は、この時販売された石で、数十年食いつなげる資金を手に入れていたのだった。

だが、約１０年前。この石に目を付けたクリミアーナ教が、ミーダイ国に侵略を試みた。それまで何度かの干渉はあったようだが、この国は鉄壁の連携でそれらをことごとく跳ね返していた。だが、教皇、ジュヴァンセル・セインの老獪かつ巧妙な策は、この国の鉄の連携をも崩壊させてしまった。ミーダイ国では国を二分する大乱が発生し、国は焦土と化した。そしてクリミアーナ教は、大乱の直後にこの国に侵攻することはせず、およそ１０年の歳月をかけて、まるで真綿で首を締めるかのように、徐々に国力を削いでいった。

「この石を持って参ったのは、リノス殿、そこもとを見込んでのことじゃ」

「どういうことでしょう？」

「そこもとは、クリミアーナ教国の干渉を退けたと言う。そして、その体からは邪念の類は感じなんだ。さらには、邪な者らを寄せ付けぬ雰囲気も感じたのじゃ。この石は邪念のある者が持てば、この世界に大いなる厄災を招くことになる。恥ずかしながら、マロには、ミーダイ国ではこの石は最早守り切られぬ。誠にあい済まぬが、貴国でこの石を守ってはもらえぬだろうか？　……この通りじゃ」

帝様はゆっくりと俺に向かって頭を下げた。

「おやめください、帝様。お手をお上げください」

俺の言葉に、帝は微笑みを湛えたままゆっくりと頭を上げる。そして、チラリと後ろに控えている女二人に視線を移す。

「サツキは、好いた男の頼みであったゆえに、断ることが出来なんだのじゃ。それに、オージンの暮らしが今よりも良くなると言われておったために、かどわかそうとしたのじゃ。巻き込まれてしまったリノス殿には申し訳ないことをしたが、これも、サツキが主人のためを思ってやったことなのじゃ。ゆめゆめ、かの者を責めないで欲しいのじゃ」

「どういうことです？」

「サツキには好いた男がおってな。その男が、タナ王国に参れば、オージンは今よりもさらに良い暮らしが約束されて、サツキとも幸せに暮らせると言っておったのだ」

サツキは体を震わせながら、恥ずかしそうに俯いている。そしてオージンもじっと下を向いて俯いている。

「オージンも、我が儘に見えておるが、実はとても気の優しい娘なのじゃ。サツキの話を聞きながら、マロに必死になってサツキを許してくれいと懇願しよった。二人とも、強がっておるが、こう見えて実はか弱き女子（おなご）なのじゃ」

帝の話を聞きながら、この二人の女はずっと頭を下げ続けている。俺はその姿を見ながらゆっくりと口を開く。

「このサツキという人は、その、惚れた男……黒い服を着た……クリミアーナの男でしょうか？　その男は……どこに行ったのです？」

俺の話を聞いた瞬間に、サツキがガバッと顔を上げる。何故知っているんだ？　という表情を浮かべたまま、その顔にはみるみる汗が

噴き出してきていた。

「うえ……あう……ええ……おっ、おっ、オクタ様は……もう……国には……。国境で落ち合う……。全てはこの、サツキの浅はかさでございました。お許しくださいませ、お許しくださいませ」

サツキはペコペコと頭を下げている。俺は鑑定スキルで見た、これまでの経緯を帝に説明をする。彼は笑みを崩さぬまま、サツキを見ていた。

「サツキ、オージン。そなたらの気持ちもわからぬではないぞえ。しかし、やってよいことと悪いことがある。二人とも、わかるな？」

「「ハイ……」」

「二人とも、アガルタ王に、謝りゃ」

帝に促される形で、二人は顔を見合わせながらおずおずと口を開いた。

「この度のこと、私の浅はかな行いによりまして、アガルタ王様、帝様、皇后さまにおかれましては、多大なるご迷惑をおかけしましたこと、このサツキ、深く深くお詫び申し上げる次第でございます。この上は、いかなる罰も甘んじて受ける所存でございます……」

「こっ、この度のこと……妾も謝るぞよ。本当じゃ、悪いと思っておる。先ほどの……性格悪そうと言ったことも謝るぞよ。奥方が皆、奇麗だったので、ついイライラしたのじゃ。本当に、ごめんなさいだったのじゃ。お尻はぶたないで欲しいのじゃ」

「この二人については、我が国で閉門・蟄居させるつもりじゃ。しばらくは……な」

「この二人のことは、帝様にお任せしますよ。確かにこの二人は、頭を冷やした方がよさそうですね」

「ひゃっ！　あれ！　なにを……なさいます」

突然、女性の声が上がる。一体何事かと声のした方向に目を向けると、そこには、皇后さまの肩を抱いているメイの姿があった。

……メイ、一体どうした？　何があった？

第二百八十話　妻には一生勝てません

驚く皇后さまに、メイはニコリと微笑みながら、傍らに控えていた兵士の一人に何かの指示を出した。俺はその狙いがいまいち読めずに、事の成り行きを見ているしかなかったが、ふと、メイの隣にいるシディーと目が合った。彼女は任せてくれと言わんばかりに、ゆっくりと力強く頷いた。その様子を見て俺は、無言のまま帝様に視線を向ける。彼は心配そうに皇后さまと俺を交互に見ている。

兵士が椅子を抱えて戻ってきた。彼に小さな声で礼を言ったメイは、ゆっくりと皇后さまをその椅子に座らせる。

「大丈夫ですか？　無理をしないでくださいね」

にこやかな微笑みを湛えた表情でメイは、しゃがんだ姿勢のまま皇后さまに話しかける。彼女は目を白黒させながら、どうしていいのかわからない様子で、帝様を見つめている。

「……お、おかまいのぅ」

両目を激しく左右に動かしながら、皇后さまはメイに言葉を絞り出すようにして口を開く。その様子に、帝様がゆっくりと二人の許に向かう。

「お妃殿、一体、我が妻に何があったのじゃ？」

メイは皇后さまの手を握り、しゃがんだ姿勢のまま、体を帝様に向ける。

「勝手なことをして、申し訳ありませんでした。皇后さまが、かなりお疲れのようでしたので……」

「そ……そんな、ミは疲れてなど……」

「で、あればよろしいのです。申し訳ありませんでした。いえ、肩が小刻みに動いていて、呼吸も浅くて乱れていたように見えました。そのために、何か体に不調があるのではと思ったのです」

「その診立ては間違いではないと思います。ですが、体調不良ではありませんね。おそらく妊娠されているのではないでしょうか？」

突然シディーが口を開く。どうやら直感が閃いたようだ。

「なに！？　まことか！？」

帝様が頓狂な声を上げる。驚きのあまり、声が裏返ってしまっている。彼は目を見開きながら皇后さまの顔を覗き込むようにして見ている。

「オクよ、どうなのじゃ？」

「わ……わかりませぬ……。薬師に診てもらわねば……」

「薬師……。呼ぶとなると、ちと時間がかかるの」

「帝様、差支えなければ、私が診察しましょうか？　一応、薬師の知識はありますが……」

メイが交互に見ながら話しかける。二人は顔を見合わせていたが、やがて帝様が、柔和な笑顔を湛えて、メイに口を開いた。

「では……。アガルタ王殿……お妃さまのお言葉に甘えてもよいかの？」

「もちろんですよ。妻のメイリアスは、世界屈指の名医です。ご安心ください」

「大賢者・メイリアスの名前はマロも聞いている。そのような名医に診察してもらえるなど、マロにとっても、オクにとっても、僥倖じゃ。うん？　名医だけにメイという名前……かの？」

「そんな……うふふ、あはははははは」

メイがウケてしまっている。ボケるつもりは全くなかったために、メイの予想外の反応で帝様が戸惑っている。

「……オージン、サツキ。もうコトは済んだ。そなたたちは、しばらくの間、頭を冷やしゃ」

帝様はポリポリと頬を掻きながら俺を見る。俺は小さく頷きながらオージンたちに目をやると、彼女らは目を伏せたまま床に頭を擦りつけるようにして平伏をしている。その後、俺は別室に控えているチワンたちを呼び、一緒に付いて来た女官と共に、二人を転移させた。

帝様はオージンたちの姿が消えると、嬉しそうに皇后さまに視線を向け、そして、そのままその視線をメイにも向け、くれぐれも妻を頼むと丁寧に頭を下げた。メイも丁寧にお辞儀を返し、シディーと

共に皇后さまを部屋の外に案内していった。帝様はそれを見送った後、不意にドーキに向かって口を開く。

「さて……ドーキ、お主に頼みがある」

「僕に、でしょうか。はい、何でございましょう？」

「オクが身籠っていたならばの話じゃが、産の時に使う湯を沸かすための火を、そなたの店から借り受けたいのじゃ」

「え？　どういうことでしょう？」

「本来、帝の妻が御所で産をする場合、聖火を用いて湯を沸かすことが仕来りになっておる。だが、先の戦でその聖火は失われ、未だその火を起こすことが叶うておらん。これはマロの力不足でもあるのじゃが、さりとて、通常の火を使うては、生まれ来る我が子に可哀想じゃ。そこで、ドーキ。そなたの店の火を借りたいと思うのじゃ」

「なぜ、僕の店なのですか？」

「ドーキは帝の膳を拵えておる。我の食す物を拵えておるそなたの店の竈の火は、清らかなものじゃ。それゆえに、マロはそなたの店の火を借りたいと願うのじゃ」

「そ……そんな、何と恐れ多い……」

「あくまで、オクが身籠っていたら、の話じゃ」

「はい……」

困った顔を隠そうともせず、ドーキは耳をフニャフニャにして俯いている。帝様はその様子を、満足そうな顔をして眺めていた。聞けば、ミーダイ国の聖火は、太陽の熱を集め、それをさらに代々の帝が自ら魔力を使って灯し続けてきた火なのだという。それはプリルの石を精製する時に欠かせないものであるのだが、それが消えてしまったために、帝はプリルの石を作ることが出来ずにいる。ミーダイ国が衰退したのは、これも大きな原因なのだそうだ。

しかし、この帝はあきらめておらず、再び聖火を灯すべく奮闘している。太陽の熱は集められるらしいのだが、それを聖火に昇華し、維持し続けるための膨大な魔力をコツコツと溜めているのだという。その手法は教えてもらえなかったが、話の内容から察するに、かなりの忍耐力と体力の消耗を伴うようだ。

そんな話をしている中、オージンたちを連行した女官が、再び転移してきた。彼女はキュアライトという名前で、帝様専属の護衛なのだそうだ。とても大人しく、無駄口は一切叩かない人物のようだが、怒らせると怖そうな雰囲気を持っている。ちょうどその時、メイたちが部屋に戻ってきて、検査の結果を伝えてくれた。やはり、皇后さまは懐妊しており、それを聞いた帝様は大いに喜んだ。俺は帝様と皇后さまに祝いを兼ねた夕食を共にしないかと誘い、彼らは満面の笑みで頷いてくれた。

屋敷ではローニが一人で子供たちの世話をしてくれているために、マトカルとソレイユ、そしてシディーには先に屋敷に帰ってもらい、夕食にはリコとメイとが同席した。帝様も、皇后さまと共に護衛のキュアライトも同席することになった。

皇后さまのケアはリコとメイに任せ、俺は帝様と色々なことを語り

合った。お互いの生い立ちからこれまでのこと、そして、これからのことを。聞けば、帝様の人生は苦労と辛抱の連続であったようだ。しかし、それでも彼は腐ることなく、必死でミーダイ国の復興のために努力をし続けているのだ。

「帝様は本当に我慢強いですね。俺だったら、投げ出しちゃっていますよ」

「いやいや、そのような大層なことではない。何事も、気持ち次第じゃ」

「ほう」

「苦しいことや辛いこと……そう思っていては、余計に苦しくなる。苦しい中、辛い中でも楽しみを見つけていくのじゃ。さすれば、色々なことが見えてくるのじゃ。マロが焼き物を作り、オクが機を織る……。我らはこれをしている時が全てを忘れられる。そして楽しい。その作ったものが他国で金になり、それが民に渡る。それを繰り返すことで、少しずつじゃが国は復興に向かっておる。マロに手を差し伸べてくれる者も増えてきた。今、マロは少しずつ国が立ち直っていく姿を見るのがうれしい。楽しい。他の王はどのようにマロを見ておるかは知らぬが、日々を楽しく、いきいきと生きておる者に、人と幸せは集まるとマロは信じておるのじゃ」

「……なるほど、ヒーデータ帝国の皇帝、我が義兄も同じことを言っておりました」

「ほう、左様か。機会があれば、ヒーデータ帝国の皇帝陛下とも会ってみたいものじゃ」

「ええ、機会があれば紹介しましょう。帝様とは気が合うと思います」

「マロは今まで、国の外に出たことがない。これからは自国のことだけではいかぬ。見聞を広めねば、また、あのような大乱が起こるであろう。偏った感情は争いを生む。マロはもっと色々な人と会い、学ばねばならぬ」

リコたちも、帝様の言葉に深く頷いている。そのとき、お腹の鳴る音が部屋に響き渡った。

「……失礼」

スッと頭を下げているのは、キュアライトだ。彼女は料理に一切手を付けず、あまつさえ、座ろうともしないのだ。さすがにそれはやめてくれと、何とか椅子には座ってもらったが、彼女は帝様と皇后さまを守ることに集中したいのだろう。料理には見向きもしなかったのだ。

「ハラ減っているのなら、食べてくれないかな？」

「そうじゃキュアライト。食事に手を付けぬのは失礼じゃ。マロに遠慮はいらぬによって、ささ、上がりゃ、上がりゃ」

帝様の言葉にも彼女はひたすら軽く頭を下げるのみで、結局最後まで彼女は料理に手を付けることはなかった。

食事も終わり、アガルタの料理を堪能した帝様たちは、ポーセハイたちに伴われて帰途に就いた。その際、リコがキュアライトにバスケットを手渡し、彼女は不思議そうな顔をしてそれを受け取った。

「今日の料理が入っています。お家に帰って食べてくださいな」

「……」

「お腹がすいているのではなくて？　よかったら食べてくださいな」

リコは満面の笑みで口を開いていた。キュアライトは、申し訳なさそうな顔をしながらそれを受け取り、やはり無言のまま、頭を深々と下げた。そして、そのまま帝様たちは転移していった。

「……すごいな、リコ。一体、いつの間に用意させたんだ？」

「そんなことよりもリノス、教えてくださいませ」

「え？　何を？」

「女性がかわいいという基準の話ですわ。あれはどなたに教えていただいたのですか？」

リコが真っすぐに俺を見つめている。気が付くとメイも俺に視線を向けている。何か、怖い……。

「エ、エ、エ、エルザ様。エルザ様ですよ」

「エルザ様？」

「そう、エルザ様。俺が王宮に入るに際して教えていただいたんだ。女性の話には気を付けなさいと……ね」

リコとメイは顔を見合わせている。そしてリコはゆっくりと俺に視線を向けた。

「さすがは、エルザ様ですわ。しかし、一つだけ覚えておいて欲しいのですわ」

「な……何だい？」

「女性同士の間でも、心から可愛らしいと思った時もかわいいと言いますし、本当にいい人のことも、いい人と言いますわ。大切なのは、言葉そのものではなく、その人の心を感じること。リノスなら、きっとそれが出来るはずですわ」

……俺はただ、自分の浅はかさを恥じて、苦笑いするしかなかった。やはり、俺はリコには死ぬまで敵いそうもない。

第二百八十一話　閉門はツライよ

ミーダイ国の帝が住む御所の北西に、広大な屋敷が広がっている。国を二分する大乱があったにもかかわらず、その屋敷は比較的被害が少なかったために、その佇まいは昔からの風情を残したままになっていた。言うまでもなくここは、ミーダイ国の宰相を務めるクワンパック家の屋敷であり、オージンやサツキもここに住んでいる。

帝から閉門を命じられた二人は、屋敷に帰るとすぐさま自室に軟禁された。この国での閉門という罰は、かなり重い罰の部類に入る。部屋の中では自由に過ごすことができるのだが、外に出ることは禁じられる。中には、小さなオマルが運び込まれ、用も部屋の中で足すことになっている。汚物に関しては、食事を運び込むときに処理されるが、それでも、部屋の中は臭気で満たされることになるために、環境としては劣悪だ。風呂も週に2回と制限され、それも小さな盥を部屋に運び込んで、行水のような形で行われる。言わば彼女たちは、自宅にいながら、ほぼ牢獄に入れられたのと同じ生活を強いられるのだ。

この環境にオージンは、わずか数時間で音を上げた。これまでお姫様育ちで何不自由なく育った彼女にしてみれば、食べたいものも食べられず、飲みたいものも飲めず、行きたいところにも行けないこの生活から受けるストレスは、想像を絶するものだった。さらには、いつも自分の側についていた、サツキを始め、警護の女たちも遠ざけられており、彼女は初めて味わう孤独感に耐えられなくなった。何とも言えぬ恐怖と不安感に苛まれた彼女は、部屋の扉を激しく叩きながら、あられもなく大声で泣き叫んだ。

「ここから出してたもー！　出してたもー！　出してくれめせーー！！　お願いじゃー！！　出して、出して、出してたもぉぉぉぉーー！！　うわぁぁぁぁぁぁぁーーー！！」

彼女は、食事も摂らず、水も飲まず、狂ったように泣き叫び続けた。その人並外れた大声は、広大な屋敷内に響き渡り、離れの部屋に閉じ込められていたサツキにも十分に聞き取ることが出来た。彼女は、元々が下級貴族の出身であったことから、こうした不便な生活は何とか耐えることができたが、自分の主君であり、産まれた頃から世話をし続けてきた、いわば妹のような、娘のようなオージンが泣き叫ぶ声は、サツキの心を大きく傷つけた。せめて、ひー様だけでも赦免にならないものかと思案してみるものの、必要最小限にしか人が出入りせず、しかも、彼女の魔法を封じるために、クワンパック家が所有している宝物である「魔吸石」が部屋の四隅に置かれているために、打てる手段は何もなかった。というのも、「魔吸石」はその名の通り、人の魔力を吸い取る。四隅に置かれたこの石は、御所の警護を担当するオワラ衆によって、サツキが気絶しないギリギリまで魔力を吸い取るように調整されていたのだった。

オージンは、二日目を迎えると途端に大人しくなった。それでも、食事を運んでくる時間になると、その者たちに向けて大声でここから出せと喚いていたが、三日目になるとその声も全く聞こえなくなった。そして、閉門が一週間に及ぶと、いよいよサツキ自身の精神状態も限界を迎えようとしていた。

元々彼女は、下級貴族の中でも最下層の身分の家に生まれた。本来であれば、帝はもとより、オージンにすら目通りが許されない者だった。同じ下級貴族に嫁いで、一生日が当たらないままに生涯を終えるか、どこかの貴族の妾や後妻になるなどして生涯を送るのが一般的であった。

だが、彼女は強運を持っていた。5歳になった時に、サツキはクワンパック家に行儀見習いに出されることになったのだが、ここから彼女の人生は好転する。

行儀見習い……と聞こえはいいが、実のところは口減らしであり、その実は単なる女中奉公に過ぎなかった。奉公に上がったその初日、下女の着物を着せられた彼女が、数少ない自分の荷物を持って女中部屋に連れて行かれた時に、誤ってこの家の奥方の前に飛び出してしまった。しかも彼女は奥方の顔を知らない。そのために、目の前に現れた女性のきれいな着物を掴み「おばさん、いいべべじゃ」と言ったのだ。周囲は顔面蒼白になったが、しかし、奥方はそんなサツキをかわいいと思ったのか大いに喜び、叱るどころか色々な品を与えて帰した。下女が奥方に召されるなど例がない。これ以降サツキは、下女仲間から「サツキは幸福者(しあわせもの)よ」と一目を置かれるようになったのだった。

さらに数年後、この奥方がオージンを生むと、サツキはその世話係兼遊び相手を命じられた。単なる下女がお姫様の世話係になるなど、望外の出世だ。彼女は奥方の期待に応えるべく、オージンの世話をしつつ懸命に勉学に励んだ。現在の彼女があるのは、このときの猛勉強があったからに他ならない。

しかし、その2年後に奥方が亡くなると、サツキへの風当たりは日ごとに激しさを増していった。彼女は今、薄暗い部屋の中で、幼い頃、虐められ、からかわれて悔しい、悲しい思い出の、いくつもの場面を鮮明に思い出していた。自分を虐めた同僚やこの家の家来たちの表情、セリフ、風景、風の匂いに至るまで……。そんなことを思い出しながら彼女は、あんな思いは二度としたくはない、あの頃には絶対に戻りたくないと怯え、嫌だ、嫌だとブツブツと呟くのだ

った。

これから先のことを考えると、全身が総毛立つ程の恐ろしさを感じる。せっかく築き上げてきた今の地位は失われる。そうなれば、今まで横柄な態度を取り、バカにしてきた者たちから、自分は再び追い込まれることになるのだ。オージン様の威光を借りることは最早できない……。彼女は絶望のどん底に突き落とされていた。

これまで散々傲慢不遜な態度を取り続けてきた、イヤな女であったことは認める。しかしそれは、自分を守る唯一の方法だったのだ。他人の失敗の粗探しをして、それをあげつらい、自分自身はそれが出来るように見せつける。そうすることで、人よりも優位に立つことで、あらゆる批判から自身を守り続けてきた。生きるためには、それしかなかったのだ。

その手法は激しく間違っているのだが、サツキがそれを直視することはできるはずもなく、ましてや、その考え方を変えることなど出来るはずもなかった。そんな彼女だが、心を許せる者が二人いた。一人は言うまでもなくオージンであり、そしてもう一人は、オクタというクワンパック家に仕える治癒魔術師だった。

彼はこの家の主治医のような存在であり、まだ若いが腕は確かで、オージンの許にも頻繁に顔を出していた。物腰は柔らかく、誰に対しても丁寧であり、家中の者全員が彼には心を許していたのだった。

そんな彼はとりわけ、サツキにだけは自分の悩みを打ち明けていた。この家の人間関係のこと、自分のスキルのこと……。サツキ以上に知識も人望も持っているはずの男が、何故か家中で嫌われている自分に対しては心を開いてくれる。サツキにしてみれば、このような男性は初めてのことだった。不思議に思った彼女は、オクタにその

理由を尋ねてみたところ、意外な答えが返ってきた。

「サツキ様、あなたは私と同じニオイがするのです」

「どういうことじゃぇ？」

「私は下級貴族の出身です。そんな私を師は目をかけてくれ、一人前の治癒魔術師として育ててくれました。しかし、そんな私を妬み、悪口を言ったり、意地悪を仕掛けてきたり……。そんな仕打ちにずっと耐えてきたのです。この悔しい気持ちは、サツキ様ならばご理解いただけると思ったのです」

これ以降、サツキはオクタを同士と見るようになり、二人の関係は少しずつ近づいていった。そんな彼が、サツキにプロポーズしたのは、つい先日のことだった。夜、こっそりと部屋に忍んできたオクタは、サツキの眼を真っすぐに見据えながら、ゆっくりと、落ち着いた声で口を開いた。

「サツキ様、私と夫婦（めおと）になっていただけませんか」

「何と……妾を……。なれど、ひー様を残しては……」

「ならば、ひー様と共に、我が故郷であるタナ王国においでください」

「何？」

「この国には最早、未来がありません。宰相様は山の別荘に籠られたまま風流三昧です。人々は貧苦にあえいでいますが、誰一人手を差し伸べようとはしません。帝様でさえも、巷の菓子屋から食事を

恵んでもらう有様です。それに……これはサツキ様だけにお話しするのですが……我が故郷のタナ王国が、ミーダイ国との交易を停止することになったのです」

「な！　タナ王国が……」

「はい。そうなれば、遠からずこの国は亡びるでしょう。だから私は、愛するあなただけでも救いたい。私と夫婦になって、一緒にタナ王国に来ていただきたいのです。ひー様がご心配であれば、一緒にお連れしましょう。私は王族の皆さまとも繋がりがあります。ひー様とサツキ様がいつも一緒に居られるように取り計らいましょう。いかがですか？」

「そ……そんなことを……ひー様は……あっ？」

気が付くとサツキはオクタの厚い胸の中にいた。心臓の鼓動が早くなる。サツキは一体どうしていいのかが分からずに、体を硬直させている。オクタはそんな彼女の両肩を掴み、優しく体を離す。

「大丈夫……僕を、信じて……」

直後に、オクタの唇がサツキの唇に重なってきた。電流のようなものが、彼女の体を駆け巡る……。そして次の日の夜明け前、オクタは密かにサツキの部屋を出ていった。そして、部屋に一人残されたサツキは、涙で髪の毛を濡らしたまま、呆然と天井を眺め続けていたのだった。

サツキはこのとき、オクタにその体と心を奪われた。

第二百八十二話　出奔

閉門が十日目を迎えた。オージンとサツキに下された閉門期間は2週間であり、あと4日程でまずは自由の身にはなるが、サツキは衰弱しきっていた。

ここ数日はロクに食事も喉を通らず、体調は極めて悪い。本来は、閉門中であっても、体調が悪い場合は治癒魔術師が回復魔法をかけるのが一般的なのだが、サツキの場合はその処置はなされていなかった。

元々この家に仕えていた治癒魔術師のオクタが逃亡していることももちろんあるが、それ以上にこの家でサツキは目の敵にされていたために、彼女に手を貸す人間は一人もいないというのが、その大きな理由でもあった。言ってみれば因果応報なのだが、それだけに、あの計画が頓挫したことは、大いに悔やまれてならなかった。

上手くいくはずだった。顔を隠したオクタがオージンを牛車から連れ去り、その混乱に乗じて自分もタナ王国の国境に向かい、そこで落ち合う手はずだったのだ。しかし、蓋を開けてみればオージンは無事に戻り、あまつさえ、オクタの手下である牛獣人と見たこともない人間の男が下手人として連行されてきたのだ。予想外だった。頭の中が真っ白になった。

だが、しばらくすると、連行してきた男がいつの間にかいなくなっているという報告があった。サツキはこれを千載一遇のチャンスとばかりに、オージンの警護を務めていた者たちにその責任を取らせ、謹慎させた。そしてさらに、誘拐計画が失敗した場所が、北町衆の

代表であるドーキの店であることから、彼と北町衆に下手人探索を命じ、その機に乗じてオージンを連れて国境に向かおうと考えたのだ。

オクタの手下である牛獣人を密かに逃がし、オクタに後から自分も追いかけると言伝を頼んでから、オージンを連れてドーキの店に向かったが、ここで大きな誤算が起きた。小ぎれいな格好をした、一風変わった優男が、誰も知るはずのない自分の計画を暴露したのだ。しかも、男は自分が育てた主君のオージンに手を上げていた。許すことは出来なかった。すぐさまその男を空間魔法に閉じ込め、謹慎を命じていたハーギを自空間に放り込み、男を殺すよう命じたが、男はそのハーギを一瞬のうちに戦闘不能にしてしまった。仕方なく、男をこのまま空間内に閉じ込めておこうと思ったが、男はサツキの空間内で魔力を封じられなかったばかりか、彼女自身も凍りつかせて自由を奪うという芸当をやってのけた。

あり得ないことだった。これまで、必死で空間魔法の修練をし、これだけは誰にも負けない自信があったにもかかわらず、男はサツキを一蹴したのだ。そして、気が付くと彼女はオージンと共に帝の前に引き出されていた。しかも、男はアガルタ国の国王、リノスであるという。何故、アガルタという遠方の国の王がここにいるのか？

そんな疑問を口にできるはずもなく、彼女は帝から尋問を受け、洗いざらいのことを喋らされたのだ。

サツキはうつろな目をしながら、オージンのことを考える。閉門になってすぐに聞こえていた彼女の絶叫にも似た声は全く聞こえてこない。どうしているだろうか、大丈夫だろうか。自分のために大切なひー様をこのような目に合わせて済まないと思う。許されるならば、ひー様にこのことを心から詫びたいと思う。そんなことを考えながらサツキは、ぼんやりと虚空を見ていた。

「……キさん。……ツキさん」

男の声が聞こえる。ハテ、いよいよ幻聴が聞こえて来たのかと思っていると、彼女の耳にはっきりとした言葉が聞こえた。

「サツキさん」

ふと声のした方向を振り向く。そこには一人の男がいた。彼は薄暗い中、ゆっくりとサツキの許に近づいてきた。

「……オクタ様」

サツキは陶然としながら、まるでうわ言のように男の名前を呟いた。彼はサツキを優しく抱きしめ、その顔を自分の胸の中に埋めさせた。

「……なぜ、ここに」

「国境から引き返してきました。すまない。遅くなって……」

「会いたかった……」

サツキは彼の服を両手で掴む。

「僕も会いたかった。無事でいてくれてよかった……」

そう言って彼はサツキの頭にキスをする。そのとき、サツキが何かに怯えるようにして、素早くオクタの体から離れる。

「どうしたのです？」

「いけませぬ。妾は……汚い……その……臭いも……」

そう言って身もだえるサツキをオクタは背中から再びやさしく抱きしめた。

「臭いなど……大丈夫だ。僕の愛するサツキの、汚い所などあるものか」

「ううう……」

サツキの眼から滂沱の涙が溢れだした。この世界で、このオクタだけは自分を愛してくれる。それだけで充分だった。

「さ、一緒に逃げよう」

「え？」

彼は懐から小さな小箱を取り出し、魔吸石が置いてあるところに向かう。そして、手に布を持ち、それで包むようにして石を掴み、ゆっくりと持ち上げて箱の中に仕舞った。

「オ……オクタ様？」

「シッ！　黙っていてください」

あり得ないことだった。魔吸石を素手で触れば、たちどころに体中の魔力を吸い取られて気絶するのだ。しかし彼は、気絶するどころか、全く普段と変わらない様子に見える。もしかすると、あの手に持っている布に何か仕掛けがあるのか……。そんな事を考えている

と、、四隅に置いてあった魔吸石を回収したオクタが、再び傍らにやってきた。そして懐から炭のような棒を取り出し、それで床に何やら不思議な紋章を描いて、それをぐるりと丸く囲った。

「こ……これは？」

「さあ、ここに乗ってください。立てますか？　……では」

……気が付けば外に出ていた。既に日は落ち、夜になっていた。サツキは無意識に空気をいっぱいに吸い込む。……おいしい。空気がこのように美味しいものだとは、思いもしなかった。

ふと見ると、オクタが屋敷の縁の下を覗いている。彼は振り返りざま、サツキに声をかける。

「あなたを連れて行きたいが……ちょっと無理ですね。どこかに隠れていられますか？」

「一体どこへ？」

「ひー様を連れてまいります」

「え？」

「ひー様はあなた無しでは生きてはいけないでしょう。それに、このままこの国に居ても、ひー様には良いことは何一つありません。当初の計画通り、ひー様も連れて行きましょう」

「おお、お頼み申しまする」

サツキは震える足を何とか引きずりながら、庭の茂みに身を隠す。そしてそれを確認したオクタは、何のためらいもなく屋敷の縁の下に潜っていった。

どのくらいの時間が経っただろうか。1時間？　2時間？　あるいはもっと短かったのかもしれない。しかし、サツキには何時間もの時間が経過していたように思えた。突然、庭の真ん中に、ゆっくりと人形が浮かび上がったのだ。目を凝らして見てみると、それはオクタであり、その腕にはオージンが抱きかかえられていた。その上、白い小さな箱がその手にあるように見えた。

「オ……オクタ様……。ひー様……よくぞご無事で……。その手に持っているのは……まさか」

「ええ、プリルの石です。クワンパック家の家宝でしょう？　ご当主がいない今、これを屋敷にそのまま残しておくことは出来ませんからね。無理をして持ってきました」

サツキはヨロヨロと、動かぬ体を必死に引きずるようにしてオクタの許に向かう。オージンは眠っているのか、ハッハッと、まるで犬のような短い呼吸を繰り返している。髪はボサボサに乱れ、顔はゲッソリとやつれている。その上、彼女の体臭が鼻を衝く。おそらくこの十日間は、風呂にまともに入っていないのだろう。サツキは思わずオージンにクリーンの魔法をかけた。

「ありがとう。あなたは、大丈夫ですか？」

「はい。妾は……」

オクタはニコリと笑みを浮かべ、サツキにクリーンの魔法をかけた。

そして、オージンをサツキに預け、再び庭の地面に不思議な模様を描き始めた。

「さ、来て下さい」

彼は再びオージンを抱えて紋様の上に乗り、サツキに笑顔で声をかける。彼女はおずおずと紋様の上に乗ると、先ほどと同じように視界が薄れていく。

「あ、サ……」

何か、聞こえたような気がしたが、サツキにはその声の主が誰であるのかを考えるだけの気力は残されていなかった。

閉門中のオージンとサツキの姿が消えたと、リノスの許に知らせが届いたのは、その翌日のことだった。

第二百八十二話　出奔（後書き）

２０１７年最後の投稿となります。今年は色々とお世話になりました。よいお年をお迎えください！

第二百八十三話　ぎおん（前書き）

新年あけましておめでとうございます。昨年中はお世話になりました。今年も何卒、結界師への転生をよろしくお願い申し上げます！

第二百八十三話　ぎおん

「……わかった」

俺はそう言って、読んでいた手紙を丁寧に元の状態に戻していく。目の前には、先日帝の護衛としてやって来たキュアライトと、女性のポーセハイが控えている。

俺が執務室で仕事をしている最中に、いきなりミーダイ国から使者が来たとの報告があった。何でも緊急を要する事柄だと言うので、俺は取るもの物も取りあえず、使者を謁見の間に通した。そして、そこで待っていたのはキュアライトとポーセハイのターマだった。

ターマはつい先日、ミーダイ国に赴任したばかりの、まだ若いポーセハイだ。皇后さまの懐妊がわかり、誰か彼女の世話をする者が必要になった。ミーダイ国に薬師と呼ばれる医者は2人いるのだが、そのうちの一人を皇后さまの専属にしては、間違いなくミーダイ国の医療がえらいことになる。しかも、二人ともに男性で、普段であれば問題ないのだが、今の皇后さまの体を診るのには少々抵抗があった。そこで、帝様からメイに相談があり、そこから、彼女がアガルタの医療研究所で助手を務めているターマに白羽の矢が立ったというわけだ。

彼女を主治医にするという帝様の考えは、御所内や貴族たちから反発があったようだが、ポーセハイは転移術を持っており、いざという時に皇后さまを守ることが出来るという帝様の鶴の一声で、すんなりと決定したのだった。

ちなみに、ドーキの店に居候のような状態になっていた、ゼンハイとフィットも、ミーダイ国で医療活動をすることになった。2名の薬師が過労のため倒れる寸前であったため、彼らに代わって、ポーセハイの二人が医療を担当することになったのだ。薬師たちは貴族たち、ポーセハイは国民と切り分けて医療活動を行うらしい。まあ、いざこざが起こらないように俺としても注意深く見ていこうと思う。

そんなことを考えていると、キュアライトと目が合った。彼女は俺を見つめたまま、微動だにしない。

「どうした？　俺の顔に何かついているのかな？」

「お助けを」

ゆっくり彼女は頭を下げる。俺はその言葉の意味がよく分からず、どういうことかと聞き直す。

「国を救い給え」

「え？　そんなにヤバイ状況なのか？」

キュアライトはコクリと頷く。

「え……待て。書状には、オージンとサツキの二人の姿がいなくなった……。で、魔吸石とプリルの石が無くなっていたとあったが……」

「ミーダイ国のほか、世界の危機。何卒……」

「いや、ちょっと待ってくれ。何卒と言われて頭を下げられてもだ

な……。どうすればいいんだ？」

「帝様のお命、危うし。何卒……」

「つかぬことを聞くが、帝様は俺に助けを求めろと言って君を派遣したのか？」

キュアライトは残念そうな顔をしながら首を振る。俺は唖然としながら、思わずターマを見る。彼女はスッと頭を下げ、そして落ち着いた声で口を開いた。

「私も昨日初めて知ったことで、お話に間違いがあるかもしれませんが、ご容赦ください。サツキさんが閉門の時に使われた魔吸石は、拳大程の大きさの物だったそうです。直接触ろうものならば、たちどころに魔力を吸いつくされ、人間であればすぐに気絶してしまうそうなのです。それが４つ共に無くなっていて、さらには、クワンパック家秘蔵のプリルの石も無くなっていたそうです」

「と、いうことは、石を盗んだ犯人は、魔力を吸い取られない何らかの工夫をしてその石を盗み出したということか？　いや待て、魔吸石とプリルの石が悪用されれば、魔法使いの攻撃は効かなくなるばかりか、魔法使いそのものが無力化されてしまう」

「その通りです。魔力は人間であれば誰しもが持っているもの。やり方によっては、強力な武器となります」

「なるほど。しかし、なぜその管理をきちんとしなかったのだ？　というより、その石をどうやって運び込んだ？」

「魔吸石は、大きな台座に乗せて、人の体に触れぬようにしていた

のだそうです。部屋の外は厳重に見張られており、プリルの石も、屋敷の者が常に警護していたそうなのですが……」

「なるほど。そう考えると、何かちょっとイヤな予感がするな……。よし、すぐに妻のコンシディーを伴って、ミーダイ国に向かおう」

「コンシディー……様？」

「ああ、見た目は子供、頭脳は大人……というより、抜群の洞察力と直観力がある。その彼女に、一度現場を見てもらおう。そして、帝様と話をしてみよう」

「多謝……」

キュアライトは片膝をついて、深々と頭を下げた。俺は大慌てでその必要はないと言って彼女を立たせた。

数時間後、俺はシディーを伴って帝様の居る御所に来ていた。玄関先で出迎えた女官に案内を頼むと、俺の顔を知っていたようで、すぐに帝の御座所に案内してくれた。そして、そこには見覚えのある女三人が、帝様とキュアライトの前で畏まっていた。それは俺を襲ったハーギとゼザ、そしてシロンだった。帝様は俺の顔を見ると、いつもの柔和な笑みを浮かべた。

「おお、わざわざお越しくだされたか……。痛み入るの」

「あっ！　貴様は！　帝様！　お危のう……ぐあっ！」

俺に襲いかかろうとしたハーギが悶絶している。よく見ると、キュ

アライトがハーギに向けて手をかざしている。どうやら何かの術を使ったようだ。

「慮外者……」

小さな、呟くような声だが、彼女の言葉には、帝の前で無礼を働くものは何人たりと許さないという覚悟を感じる。俺はその雰囲気にちょっと圧倒されてしまった。ハーギの隣に控えていたゼザもシロンも、あまりの光景に絶句してしまっている。ゼザにいたっては、眼を見開き、口をぽかんと開けて、かなりだらしのない表情になってしまっている。

「帝様……何やら大変なことになっているみたいですね」

「すまぬな……。また、ハーギが無礼を働いたの。この者にはあとで言うて聞かせるほどに……。書状にも書いたが、オージンとサツキが出奔したようなのじゃ。しかも、魔吸石が４つ無くなっておるのと、秘蔵のプリルの石も無くなっておるのじゃ。屋敷と宝物庫は厳重に見張られておったので、逃げることなど困難であったのじゃが……。魔吸石とプリルの石が国外に持ち出されたとなると、この先よからぬことが起こる可能性があるのじゃ。それゆえに、貴殿には書状を遣わして注意を呼びかけたのじゃが……。ただ、このゼザがオージンらの姿を見たと言うので、ここで話を聞いておったのじゃが、皆目わからぬのじゃよ」

「わからない、とはどういうことでしょうか？　そういうこともあろうかと、妻のコンシディーを連れて来ました。彼女は素晴らしい洞察力の持ち主です。もしかしたら、お力になれるかもしれません」

帝様はシディーを見て、ゆっくりと微笑む。そして再びゼザに視線

を向けて、優しく口を開いた。

「ゼザ、ご苦労じゃが、先ほど話したことをもう一度聞かせてくりゃ」

ゼザは畏まりましたと、シャキッと背筋を伸ばし、両手を前に突き出して、もの凄い速さでまくし立てる。

「昨夜、パチッときまして、うあっとなりまして、パッとして、サッ、ストンとしました。そして、トントントン、キュッ、トントントンで、あれ？　でして、カリカリ、ぐるーん、サッ、パッパッパッ、ずあーん、ふぁさ、だったのです！」

……宇宙の言葉を喋っていやがるのか？　ってか、マジでいい加減にしろよ？

俺は一瞬、右手に魔力を込めようとしたが何とか思い直し、隣のシディーにゆっくりと視線を移した。

第二百八十四話　それを言わんかい

「え？　ごめんなさい、もう一回お願いします」

シディーが目を丸くして驚いている。さすがの彼女も、理解できなかったようだ。ゼザはふぅと息を吐き、やれやれと言った表情を浮かべたかと思うと、今度は噛んで含めるように、身振り手振りを交えながら、ゆっくりと口を開いた。

「だから、昨夜、昨夜です。私が、パチッときまして、うわっとなったのです。それで、パッとして、サッと行って、ストンとして、その後で、トントントンと来て、キュッで、また、トントントンで来たのです。そのとき、カリカリ、グルーンで、サツキ様がサッで、それからパッパッパッパで、ずあーんで、ふぁさ、だったのです。オージン様もです！」

もうわかっただろうという表情を浮かべながらゼザはゆっくりと頷く。いや、余計に分からん。俺はゆっくりとシディーに視線を向ける。シディーは人差し指を顎の下に当て、腕組みをしながら宙に視線を漂わせている。これは彼女が謎解きをしている時のスタイルだ。その姿を見ながら視線を移していくと、帝様が心配そうな顔をしながら俺たちを見つめている。そしてその後ろに控えるキュアライトは、やれやれといった表情でゼザを睨んでいる。

「要は、昨日の夜、あなたが目覚めてお手洗い……ですか？　その帰りに、サツキ……さんですか？　オージンさんも一緒に消えた場面を見たということですよね？」

「そうだ」

シディーの推理にゼザがコクコクと頷いている。すげえな、あんな擬音だらけの説明でよくわかったな。相変わらずものすごい洞察力だ。

実は、シディーの鋭い感性は失われてはいない。ピアトリスがまだお腹にいる頃、鹿神様からは安定期に入るとチート能力は消えると言われていたのだが、シディーの場合はそれが消えることはなかった。もっとも、本人に言わせると、全盛期に比べればかなり落ちているそうなのだが、それでも、その洞察力と直観力はズバ抜けたままだ。

「ただ、サツキさんとオージンさんがどのように消えたのかが、ちょっとわからないですね」

シディーの言葉に、ゼザは立ち上がって右手をシャカシャカと振って口を開く。

「こう……わらわらわらわら、ふぁーん、ざっ、ふぁさっと消えたのだ。そこに行ってみたが、何も起こらなかった。消えたのだ。消えてしまったのだ」

「なるほど、とにかく二人がゼザさんの前で消えたということですよね？」

「……クズノイッハ」

小さな声で呟いたのは、ゼザの隣に座っていたシロンだった。

「え？　何ですか？」

シディーの問いかけに、シロンはおずおずと口を開く。

「えっと……その……地面に……魔法を書いて……でも……」

「でも、何ですか？」

「もう、使える……人……いない」

「うーん」

シディーは再び人差し指を顎の下に当てて考えている。そのとき、帝様が静かに口を開いた。

「クズノイッハ……貴殿たちの国では、魔法陣と言うのかの？　その能力は、わが国でも既に５００年ほど前に滅びた力じゃ。複雑な文様を刻む手間がかかる上に、地面に魔力を通さねばならん。それには緻密に魔力を操るスキルが必要じゃ。それ故に滅びた術なのじゃが……。その力が復活したというのかの？　……俄かには信じられぬことじゃが、もしそうであれば、屋敷を見張っていた者たちに見つからずに逃げることは可能じゃの」

シディーを始め、全員の表情が強張っている。

「シディー、その魔法陣っていうのは、どんな能力なんだ？」

「私も詳しいことは分かりませんが、地面に魔力で呪文を書くと、転移出来たり、魔物が召喚出来たりするものです。私も聞いた話では、太古の昔に廃れてしまった能力だったはずで、今はそれを使え

る人間はいないはずです」

その話を聞いた帝様は再びゼザと向かい合い、優しい口調で問いかけた。

「重ねて問う。そなたは、オージンとサツキが消えるところを見たのじゃな？　……左様か。では、どうやって消えた？　その様子を聞かしゃ」

「ハッ、先ほども申しましたように、私が庭を見ましたら、カリカリ、グルーンでして、そこからスワッとパッとパッパッパ……」

「もうよい。それは、クズノイッハであったか？」

「わかりかねます」

「……ご苦労であった」

帝様は微笑みを湛えているが、その表情には明らかに疲れの色が見える。確かに、このゼザの半端ないコミュ力のなさにまともに対応していては、疲れてしまうだろう。それにしても、このゼザに誰か、会話というものを教えてやらなかったのだろうか。本当に、よくこれでここまで生きてこられたな。

「リノス殿」

帝様が落ち着いた声で俺に話しかけてくる。

「クズノイッハ……魔法陣が復活したかどうかはさておき、魔吸石が４つ、さらにはプリルの石までも持ち去られたとあっては、由々

しき事態じゃ。もしこれがクリミアーナの手に渡っていたならば、そこもとの国も厄介なことになろう。気を付けてくれめせ。そして……迷惑をかけることになろう……申し訳ない」

帝様は深々と俺の前で頭を下げた。その様子にゼザたちは固まっている。

「お手をお上げください。なってしまったことは仕方のないことです。皆で知恵を出し合いながら対策を考えましょう。幸い、ここにいる妻のコンシディーはドワーフ王の娘です。また、メイリアスも技術的な知識も豊富です。皆で考えましょう」

「すまぬ……。世界を脅威にさらしてしもうた。マロの力不足じゃ。サツキの心底を見抜けなんだ」

「帝様……」

「恐れ入りますが、一つお尋ねしてもよろしいでしょうか？」

突然シディーが帝様に口を開く。彼はゆっくりと頷いた。

「単刀直入に伺いますが、帝様は何らかのスキルをお持ちではないですか？　差支えがなければ、どのようなスキルなのか、お教え願えませんか？」

「何と不敬な！　王妃だからと言って聞いていいことかどうかの分別もつかぬのか、この大バカ者！　たとえ……ぐはっ！」

ハーギがいきなりシディーに向かってまくし立てたが、ほどなくして蹲ってしまった。ふと見ると、キュアライトが先ほどと同じく、

掌をハーギに向けている。あれは何か、掌底波か何かが出ているんだろうか？

「不埒者……」

キュアライトは微動だにせず、一切の感情のない声で呟いている。その様子を帝様は諭すようにして、ゆっくりと頷き、そして俺たちに視線を戻した。

「……そうじゃな。マロの能力の話はしておらなんだ。よかろう。リノス殿とコンシディー殿にはお話ししようかの」

帝様はスッと視線をキュアライトに向けた。彼女は心得たとばかりに一礼をして、手刀を斜めに切った。その瞬間、ハーギたち三人の姿が消えた。

「……あの者たちを信じていないわけではない。だが、あまり公になるのも……の」

帝様は遠い目をしながら呟く。そして、フッと息を吐いて再び口を開いた。

「マロには、鬼眼（きがん）が備わっておる」

「きがん？」

「このミーダイ国の王族は、元はオーガの一族なのじゃ」

「オーガ……」

「ネファシという種族で、眼に特殊な能力を持つ。マロは人の心の真偽がわかるのじゃ」

「人の心が読めるということでしょうか？」

「いや、人の心まではわからぬ。ただ、人の話が真なるものか、邪なるものかを見分けることができる。その上で邪な心のある者は、マロがその眼を見ながら念じれば、本心を話させることができるのじゃ」

「なるほど、それで、サツキさんたちは洗いざらい喋らされたのですね？」

「したが、プリルの石のことまでは喋っておらなんだ。あの時はまだ、石をどうにかしようとは考えておらなんだのかもしれぬの」

……まさか、ウソ発見器が内蔵されている眼を持っていたとは、予想もしていなかった。しかも、嘘が付けないようになるとは……。シディーはいい質問をしてくれた。それを知らないでいると、これから先、どんなヘタを打つことになるか、わかったものではない。そういう意味では、この帝様はある意味では恐ろしいお方だ。できれば、そんな物騒なスキルを持っていたことは、早く言ってほしかった……。

そして、帝様はさらに自分のスキルを詳しく説明してくれた。相手に真実を喋らそうとすると、かなりの魔力を消耗すること。それゆえに、通常は言葉の真偽のみを確認し、自分の心に嘘をついている者については、その点を追及して、なるべく本人に喋らそうとしているのだそうだ。

俺に初めて会った時、俺は自分のことを、商売をしている者と偽った。しかし、心に邪な思いを持っていないことが分かったために、敢えて追及をしなかったのだという。直感的に、この男は何か自分の力になってくれそうだと感じたのだそうだ。

「なるほど……しかし、帝様。先ほどゼザが訳の分からない言葉でしゃべっていましたが、そのお力で本心を語らせることは出来なかったのですか？」

シディーが鋭い質問をぶつける。帝様は、ちょっと残念そうな表情を浮かべながら、口を開く。

「いや、あれがゼザの本心なのじゃろう。あの者は幼い頃から知っておるが、どちらかと言うと、感覚と直感で生きている者じゃからな。……キュアライト、ゼザたちを出してやってたもれ」

キュアライトはスッと一礼をして、再び宙に向けて手刀を切った。その直後、三人の女たちの姿が現れた。帝様は優しい口調で彼女たちに口を開く。

「そなたたち、大儀であった。下がってよい」

ゼザたちはゆっくりと頭を伏せる。

「まずは、魔法陣が復活したのかどうかを調べる必要がありますね。俺の方でも心当りをあたってみます。土の上に紋様を描くのでしたっけ？　……とすると、杖か何かを使うってことですよね？」

「いい加減にせよ！」

突然、部屋の中に大声が響き渡る。驚いて見てみると、そこには片膝を立て、今にも俺に挑みかかろうとするかのような姿勢で睨みつけているゼザの姿があった。彼女は俺に視線を向けたまま、いつものように早口でまくし立ててきた。

「いったい何度同じ話を聞けば理解するのじゃ！　何度も言っておろうが！　黒い棒で地面に紋章を書いて、それをグルッと囲んでいたと！　その上にサツキ様が載ったらば、スッ、パッパッパと消えたのだ！　オージン様も同じだ！　人の話をよく聞くのじゃ！」

……それを早く言わんかい。

第二百八十五話　怖くないように

「ほう、空間魔法の使い手だけでなく、４つの魔吸石とプリルの石までも持ち帰るとは……」

驚きと感嘆とが入り混じった声が部屋の中に響き渡る。その声を聞きながら、男は恭しく頭を下げた。

「ご満足いただき、恐悦でございます」

「いや、大いに満足だ。これで、手駒はそろった。……これで、世界が変わる」

「御意……」

満足そうな微笑みを湛えて頭を下げているのは、ミーダイ国からサツキらを連れ出したオクタだった。彼の前には薄いカーテンがかけられており、その奥には玉座に座る人物の影が見える。

「オクタ、よくやった。褒めてとらす。これで我が国が世界に冠たる国となる道筋が見えた。……ところで、ミーダイ国から連れてきた女どもは、どうじゃ？」

「はい、全く問題ございません。陛下の覇道をお助けするべく、教育してまいります」

「うむ。任せたぞ」

「畏まりました」

オクタは再び恭しく頭を垂れた。

同じ頃、タナ王国の国王宮殿の一室では、オージンが喜びを爆発させていた。

「サツキ見や！　なんと美味しそうな果実であろう。これは食してよいのか？　これもよいのか？　これも？　うわぁ！　この床はフカフカじゃのう。薄暗かった我が屋敷とはエライ違いじゃ！　今日からこの部屋が妾のものになるとはうれしいのう。サツキ、よくぞ妾を連れて来てくれた！　褒めてとらすぞよ！」

体中からうれしさを表しながらオージンはサツキに向き直る。彼女はその様子を愛おしそうに見つめている。

「お気に召していただき、よろしゅうございました。されどひー様、これから我らは客人の扱いになります。これまでのお屋敷での自由は無くなります故、今まで以上にしっかりせねばなりませぬぞえ」

「わかっておる！　わかっておる！　……したが、このようなよい国であれば、ハーギたちも連れてくればよかったのう……」

その言葉にサツキは寂しそうな笑みを浮かべる。確かに、この国に来たことで、オージンの警護をする者は誰もいない。オクタからはその点については心配ないと言われているが、やはり、ハーギたちは、自分と同様、オージンが子供の頃より警護を務めていた者たちだったのだ。しかも、彼女らは腕は立つが、対人関係能力が低い。それ故にサツキは彼女らに対して常に優位であり続けることができ、

思い通りに動かすことができていたのだ。これから先は、自尊心を満たしてくれる相手がいない。果たして大丈夫だろうか？　オージン様やオクタの自分への関心が薄れてしまわないだろうか……そんな不安が頭をよぎっていた。

だが、その一方で、彼女は何とも言えぬ解放感に満たされていた。もう、人の目を気にすることはない。自分を傷つける者もいない。気心知れたハーギたちとの別れは惜しいが、それを補って余りある余裕がこの国にはあった。

サツキは感動していた。タナ王国に着くや否や、そこには多くの兵士が控えており、そのまま彼女たちは国王宮殿に案内された。そして、国王であるタナ・カーシ・ヴィル自らが出迎えて、彼女らを大いに歓迎すると言ってくれたのだ。しかも、この豪華な国王宮殿に住まうことを許され、これからは、タナ王国で幸せを見つけるとよいとまで言ってくれたのだった。あまりのもてなしぶりに、最初はサツキも訝ったが、今後は王国魔術師として、この国の子弟たちに空間魔法を教えてやって欲しいと言われて、彼女は天にも昇る気持ちになった。

これからは平穏な日々になる……愛する人との幸せに満ちた生活がはじまるのだ……。そんな幸せの未来予想図をサツキが思い描こうとしたとき、部屋の扉がノックされ、静かに開いた。そこに立っていたのは、オクタと数名の女性だった。

「失礼します」

恭しく一礼をして彼は部屋に入ってきた。そして、優しい笑みを湛えながら口を開く。

「ひー様、いかがですか？　お部屋は気に入っていただけましたか？」

「おお！　満足じゃ！　オクタ、感謝するぞよ！」

オージンは満面の笑みで口を開いている。

「お気に召して頂いて、安心しました。先ほど、陛下からご命令がありまして、ひー様については、この国王宮殿において丁重にもてなせとのことでございました。そこで、これよりは、こちらのお二方、カワラザさんとムラカさんがひー様のお世話係を務めます」

「なに……？　サツキは……？」

「ご安心ください。サツキさんも今まで通りひー様のお世話を務めます。ただ、ずっと一緒というわけにも……できますれば、サツキさんにもお休みをお与えください」

「な……なるほどの。サツキ、少しは休みゃ」

「はっ……」

サツキは戸惑いながら頭を下げる。そして、新しくオージンの侍女となったカワラザとムラカが、恭しく挨拶を述べる。

「これから我々が精いっぱい務めさせていただきます」

「うむ、よい。苦しゅうないぞよ」

そんな満面の笑みを浮かべたオージンを部屋に残し、サツキはオク

タに案内されて、近くの別の部屋に向かった。

「おお……」

部屋に入った途端、思わず嘆息が漏れた。オージンの部屋と勝るとも劣らぬほどの豪華な部屋だったのだ。豪華なシャンデリアに天涯付きのベッド、風呂もトイレも完備した、至れり尽くせりの部屋だったのだ。

「今日からこの部屋を使ってよいと、国王陛下からお許しをいただいたのです」

「このような見事な部屋を……国王陛下には感謝の言葉もござりませぬ」

「国王陛下は、とても慈悲深いお方です。ミーダイ国の国王様や、クワンパック様と比べますと……雲泥の差じゃ」

その話を聞いてサツキは表情を曇らせる。オージンの父親であるクワンパックはさておき、帝様には、後ろめたい気持ちを持っているためだ。

「確かに……。父君のクワンパック様は、ほとんどひ―様に関心を示されなんだ。ですが、帝様は……。閉門を命じられたとはいえ、本来ならば死罪になってもおかしくはない妾を、お許しくだされた。あの、帝様の慈悲深きお心を裏切った妾は……。それに、無礼を働いたのが、あの、アガルタ王……。帝様とアガルタ王を敵にしてしまったのかと思うと、何やら胸騒ぎが致しますのじゃ。何とのう怖おうございます……ひゃっ！」

気が付けばサツキはオクタに抱えあげられていた。この細い体のどこにこんな力があるのかと思うほどに、オクタはサツキを軽々と抱えている。そして彼は、そのままサツキをベッドに寝かせ、耳元で呟く。

「では、僕が怖くないようにしてあげよう」

そう言って彼は唇を重ねてきた。サツキは静かに目を閉て、彼に全てを任せるのだった。

「……出奔ですか」

口を開いているのは、リコだった。俺は、シディーと共に帝都の屋敷に帰り、サツキとオージンがタナ王国に出奔したことを皆に報告していた。

「ああ。クワンパック家の家宝である魔吸石４つと、プリルの石とともに消えたらしい。どうやって消えたのかはまだわからんが、魔法陣を使った形跡がある」

「魔法陣でありますかー。それはまた、古めかしい……」

ゴンが驚いている。聞けば、魔法陣と言うのはとんでもなくコスパが悪いらしく、出発地点と到着地点に魔法陣の紋章を描かねばならないのはもちろん、少しでも間違えると発動しないものなのだそうだ。もちろん、かなりの魔力を必要とするのはもちろん、紋章が消えたり壊れたりしても発動しないし、紋章自体も複雑なうえにかなり多くの種類があるために、覚えるのが大変なのだという。

「どちらかと言うと、魔物を召喚するために使われていたスキルでありますなー。ただし、上位の魔物を召喚しようとすると、相当量のＭＰを使わねばならないでありますからなー。転移するにせよ、召喚するにせよ、手間暇がかかりすぎるスキルでありますなー」

「ただ、話に聞くと、黒い棒のようなもので魔法陣を描いていたという話もあるんだ。何か心当りはないか？」

「うーん、吾輩にはわからぬでありますなー。ここはおひいさまか、サンディーユ様に聞くのがよいかと思うのでありますー」

「なるほど、わかった。ちょうど空間魔法のことも気になっていたんだ。久しぶりに明日、おひいさまの所に行ってみようか」

次の日、俺はゴンを連れておひいさまの許に向かった。だが、それは、これから始まる厄介ごとの始まりでもあったのだった……。

第二百八十六話　教えて、先生！

おひいさまの屋敷に着くとすぐ、目の前の大きな門が静かに開いていく。いつ来ても、この門は自動で開く。一体どんな仕掛けなのだろうかと不思議に思いながら中に入ると、お馴染みの女官が控えていた。そして、俺たちは彼女の案内でおひいさまの部屋に通される。

「魔法陣とは……懐かしいのぅ」

そこまで言うと、彼女はじっと俺を見つめている。尻尾がゆらゆらと揺れているところを見ると、ご機嫌は麗しいようだ。でも、なぜ黙っているのだろうか？　俺はおひいさまから視線を外すことなく、次の言葉を待つ。

「……ご主人、ご主人」

俺の背中をゴンがつついてくる。どうやら早くお土産を出せ、ということらしい。俺はオホンと咳払いをして、無限収納からお土産を出していく。

「……失礼ながら本日も貢物を持ってきました。今回は新たに、きなこ餅を作ってみました。気に入っていただけるとうれしいのですが……」

「はっ？　ほ、ほほう、きなこ餅とは……苦しゅうない。苦しゅうないぞよ」

目が完全に一点に集中している。目の前に置かれた巨大な箱の中身

が気になって仕方がないようだ。どうやら、いつもは部屋に入るなりお土産を出していたので、今回はどうしたことかと気を揉んでいたようだ。俺はきなこ餅が入った箱を彼女の傍に持っていき、蓋を開ける。

「おお、何と……初めて見るものじゃわえ」

おひいさまは目を輝かせている。餅の上に砂糖を混ぜたきなこを振りかけているだけなのだが、実はちょっとした俺の自信作だ。ドーキの店から分けてもらった餅を使い、きな粉と砂糖の絶妙な配合を研究した、とても上品な味に仕上がっている。きっと、気に入ってくれるはずだ。

「ところで……あんこは……ないのかぇ？」

「ご安心ください。持参しております。今回もおはぎを持ってきました。また、カステラと妻が作りましたケーキも持参しております」

「うむうむ、苦しゅうない。そなたはほんに気の利く男じゃ。これ、そなたも妾の眷属なれば、このくらいの気遣いをせよ！　手ぶらで来おってからに……」

おひいさまは目を細めて喜びながら、ゴンに対してはブツブツと小言を言っている。彼もそれを受けて、へへェ～と平伏している。

「うむ、魔法陣と空間魔法じゃな。よしよし、教えてやるほどに、まずはサンディーユに聞くがよい。あの者に聞いてわからぬ所があれば、妾が教えて進ぜよう。あ奴は別棟に居るはずじゃ。妾からそなたたちのことは伝えておくほどに、早ぅ行って聞いてみるがよい」

教えてくれへんのかいっ！　と突っ込みを入れそうになるが、よく考えてみると、彼女は、一刻も早くきなこ餅が食べたいのだろう。俺はその気持ちを察して、一旦部屋から退出する。さて、サンディーユが居るという別棟はどこかと探していると、部屋の中から奇妙な声が聞こえてきた。

「むひょー。旨しっ！　旨しっ！　これ、千枝！　何じゃその手は？　やらん！　やらぬぞ！　左枝！　勝手に妾のケーキを食すでない！　めっ！　めっ！」

俺は苦笑いを浮かべながら、別棟に通じる渡り廊下を歩いていく。しばらくすると、突き当りに大きな建物が見えた。どうやらあそこにサンディーユが居るらしい。目の前の障子をゆっくりと開けると、そこには、きちんと端座してはいるが、コックリコックリと居眠りをするサンディーユの姿があった。さて、どうしよう。起こすのも可哀想だと思っていると、フッと彼の眼が開かれ、俺と目が合った。

「あっ、おひさ……」

「曲者じゃ！　出会え！」

「ちょっとちょっと！」

俺は必死で彼に自分自身をアピールする。

「……オホン、いきなりであったので、驚いたわ。……で、儂に何の用じゃ？」

……ものすごく迷惑そうな顔をしている。察するに、全然おひいさまからの情報連携ができていないようだ。まあ、それは何となく想

定されていたことではあるのだが。俺はおひいさまと交わした話についてサンディーユに語る。すると彼は、ううむ……と腕組をして考え込んでしまった。

「いやなに、空間魔法と魔法陣とはな……。魔法陣とは懐かしい言葉じゃ。だが、解せんな。空間魔法のことまでも自ら教えず、儂に聞けと言われるとは……。空間魔法ならば儂よりおひいさまの方が詳しいはずじゃ。なぜなら儂は、空間魔法は使えぬが、おひいさまはＬＶ４のスキルを持っておる。何故儂に……？」

……一刻も早くお土産を食べたかったのでしょうね。俺は一人で納得しつつ、気を取り直してサンディーユに尋ねる。

「わかりました。空間魔法についてはおひいさまに聞くとして、魔法陣について教えていただけませんか？」

「魔法陣のスキルはかなり前に滅びている。いやなに、用途は多様だったのじゃが、その紋様を描くのがかなり複雑なのじゃ。一か所でも間違うと魔法陣は機能せぬでな。それゆえ、そのスキルを取得しようとする者が少なく、結果的に滅びてしまったというわけじゃ」

「その魔法陣は、どのような効果があったのですか？」

「主な効果は、転移、召喚、結界じゃ。ただし、複雑で難解な魔法陣に加えて、召喚は膨大な魔力が必要になる。転移は転移元と転移先に同じ魔法陣があれば機能する。結界は魔法陣の中の者を守るというものじゃ。どちらにせよ、使い勝手は悪い」

「なるほど、その召喚というのは、例えば俺の魔力を使うと、どのような者が召喚できますか？」

「うむむ……そなたほどの魔力を持った者など、古今東西聞いたことはないのでな。しかとしたことまでは言えぬが……。この世に害をなす大いなる災厄を召喚する可能性もあるな。だが、今はその紋様も滅びてしまっておる。ついこの間まで……とは言っても、２００年ほど前だが、エルフが魔法陣を使っておった。だが、今はどうしておるのやら……」

「エルフ？　エルフってあの、耳の長い？　どこか森の奥に住んでいるという？」

「森の奥？　何を言っているのじゃ？　エルフと言うのは、山の上に住んでいるに決まっているではないか」

サンディーユが目を見開いている。俺、そんな頓狂なことを言ったか？　俺が読んだラノベでは基本的にそんな感じだったのだが、どうやらこの世界では違うらしい。

「ご主人、エルフと言うのは、世界で一番高い山と言われる、フィルコン山脈に住んでいる者たちでありますー。氷に閉ざされた世界と言われていて、あまりに過酷な環境のために、近づくことさえできぬのでありますー」

「何でまた、そんな過酷なところに住んでいるんだ？」

「エルフは今より７００年ほど前に、下界との交わりを断ったのじゃ。清らかな空気と水を求めて山に住まいを求めてな。詳しいことは儂にもよく分らんが、気が付けば世界中にあったエルフの里が、ある日を境に忽然と消えていたのじゃ。あのときは儂も大いに驚いたものじゃ」

サンディーユは腕を組みながら懐かしそうに頷いている。

「して、その魔法陣という古のスキルに、そなたは何故執心しているのじゃ？」

「サンディーユ様、実は先日、ミーダイ国で魔吸石４つとプリルの石、空間魔法の使い手が攫われた事件があったのです。その犯人はどうやら、黒い棒のようなものを使って魔法陣を描き、石を盗み出した可能性があるのです。それに、空間魔法の使い手を連れ去っていきました……。これを世界の危機と言う者もおりまして……」

「何っ！　なぜそれを早く言わん！　こうしてはおれん」

サンディーユはいそいそと立ち上がる。俺は一体どうしたことだと尋ねると、彼は目を大きく見開いて、大声で口を開いた。

「黒い棒で魔法陣を描いたと申したな！　それはまさしくエルフが秘蔵しておった宝物、ラトギスの杖。少ない魔力で魔法陣を作ることが出来る代物じゃ。およそ５００年前に盗まれたと聞いておったが、まさかここでその名を聞こうとは！　おひいさまに報告致さねば。少々中座するぞ」

そう言ってサンディーユは足早に部屋を後にしていった。ちょうどいい、俺たちも彼の後を追いかけて、魔法陣の話と空間魔法の話を教えてもらおう。俺はゴンと顔を見合わせては立ち上がり、サンディーユの後を追いかけるのだった……。

第二百八十七話　おひいさま、激怒！

部屋の前までやってくると、サンディーユがウロウロしている。何事かと思い近づいて見ると、彼は部屋に向かって絶叫していた。

「おひいさま！　おひいさま！　何故でござります！　ここを開けてくだされ！」

「ならん！　目通りは許さぬ！」

サンディーユは障子を睨みながら、ぐぬぬ……と歯ぎしりをしている。おそらくまだ貢物の味見……いや、がっつり食べている途中なのだろう。彼が入ってきて寄こせと言われるのがイヤなのか。いや、そこまで意地汚い人ではないか。ということは……食べ方が汚いなどと怒られるのがいやなのだろう。とはいえ俺もいつまでもここにいる訳にはいかない。俺はサンディーユの隣に立ち、障子に向かって口を開く。

「おひいさま、リノスです。お渡しし忘れていた貢物がありまして……。入ってもよろしいでしょうか？」

「……何？　貢物じゃと？　うむ、苦しゅうない。苦しゅうないぞよ。さあさあこちらへ、きなこもちきなこもち」

きなこもちきなこもち……の言葉が何故かハモっている。おそらく千枝と左枝も一緒に言っているのだろう。相変わらずこの三人の息はピッタリだ。

中に入ると、おひいさまの胸のあたりが金色に輝いていた。ずいぶん食べこぼしたようだ。確かに、きなこ餅を食べるときは粉が落ちやすい。俺も子供の頃はずいぶんと叱られもしたし、粉を落とさないように食べるのに苦労したものだ。だが、今は全く粉を落とさずに食べる技術を習得することができているため、その心配は皆無なのだが。あとで彼女にその技を教えておこう。

「おひいさま！　また汚しておる！　千枝も、左枝も！　あれほど……」

「まあまあサンディーユさん、そのくらいで。おひいさまにお伝えすることがあるのでは？」

俺の言葉を聞いて彼はううむと唸る。そのとき、千枝と左枝がペロリと舌を出していた。

「おひいさま！　一大事ですぞ！　ラトギスの杖が見つかったやも知れませぬぞ！」

「ラトギスの杖？」

おひいさまは手をペロペロと舐めながら、まるで汚いものを見るかのような目でサンディーユを眺めている。そんな様子に彼はチッと舌打ちをして、再び口を開く。

「５００年ほど前にエルフの許から盗まれた杖でございます！　ほら、あの、黒い杖で、魔法陣が描ける……」

そこまで言うと、おひいさまの目がカッと見開かれる。

「そう、あのラトギスの杖でございます！　妖狐・ヘイズが盗み出した、あれでございます！」

「ヘイズの行方が知れたというのかえ！」

「わかりません。しかし、ヘイズが他の者に杖を盗まれるとは思えませぬ。このリノス殿の話を聞く限りでは、持ち主はヤツと考えてよいでしょう」

「あの、出しガラ野郎のドブ板野郎のタレ味噌野郎が！　目にもの見せてくれる！」

おひいさまの体の周りを狐火が取り囲んでいる。……怖い。

彼女の視線がゆっくりと俺に向けられる。俺は彼女のあまりの迫力に圧倒されてしまい、目を見開いたまま固まってしまう。

「そなた」

「……はい。何でしょう？」

「ご苦労ではあるが、ヘイズの行方を追ってはくれぬか？」

「あの……どういうことでしょう？」

「居場所を探し出すだけでよい。あとは妾がやる」

……目が完全に据わっている。怖い。マジで怖い。

「ずる賢いあ奴のことじゃ。妾が動くと確実にヤツは勘づくであろ

う。そうなっては、ヤツを捕らえる機会は永久にないやも知れぬ。そこで、そなたに頼むのじゃ。……受けてくれるな？」

「あ……ええ……はい」

「頼んだぞ。何かあれば言うて来るのじゃ。助けは惜しまぬ」

「あの……空間魔法のことを……」

「キェェェェェーーーーイ！！」

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い～～～～～！！」

突然、おひいさまの絶叫と共に、頭に激痛が走る。あまりの痛さに俺は、頭を押さえて蹲りながら、のたうち回る。

「ふぅぅぅぅ～。相変わらずそなたはややこしいわぇ。ここかっ！　ここかっ！　ええい、面倒くさい！　ここでよい！　ここでよい！　うりゃあ！　うりゃあ！　うりゃぁぁぁっ！　……生きておるか？　生きておるな？　生きているであろう、うむ。空間魔法のスキルを授けたによって、己で体験してみるとよい。結界魔法に比べると全く役に立たんスキル……にも見えようが、いや、それはその、使い方次第によって良い方法もあろう。自分で使ってみるのじゃ。ヘイズを見つけた報酬じゃ。そなたならば必ず見つけられよう。先に与えておくぞよ」

……みたいなことを喋っていたように記憶するが、俺はそれどころではない。激痛を和らげるためにひたすら回復魔法をかけ続けていたのだ。ようやく意識がはっきりしてきたと思ったら、そのタイミ

ングでおひいさまが口を開いていた。

「ご苦労であった。下がってよい」

えっ？　と固まる俺に、おひいさまと千枝、左枝の三人が、早く出ていけとばかりにじっと俺を見つめている。俺は後ろに控えていたゴンに促されるようにして、呆然としたまま部屋を後にしようとする。そのとき、不意におひいさまの声が聞こえた。

「ああそち、待ちゃ。待ちゃ」

クルリと振り返った俺に、彼女はさらに言葉を続ける。

「出し忘れている貢物を、ここに出して行きゃ」

俺は苦笑いを浮かべながら、ドーキからもらっていた餅を置いて、その場を後にした。

「えらい所をお目にかけたな。それにしても、あんな怒りに満ちたおひいさまは、久しぶりじゃ」

サンディーユは俺たちを部屋に招き入れた後、自分でお茶を入れて、俺たちに出しながら口を開いた。

「あ、いえ、お構いなく……。一体、何が何やらさっぱりわかりませんが……」

「さもありなん。そなたは知る由もない。そこに居る……ゴンも知

らぬことじゃ」

「一体どういうことか、説明してもらえませんか？」

「うむ。したが……。すまぬ、ゴン。そなたは席を外してくれぬか？」

「何故でありますか！？　これはおひいさまに関わる話ではないのでありませぬかー？　おひいさまの眷属たる吾輩が席を外して、何故、ご主人だけに話をされるのでありますかー」

ゴンの言い分ももっともだ。しかしサンディーユは苦虫をかみつぶしたような顔をしながら口を開く。

「いや、そうではない。儂の相談事もあるのじゃ。その方に聞かれたくないのは……わかるであろう？」

そう言いながら彼は、どこからともなく一枚のカードを出し、ゴンの前にポンと投げた。

「アガルタの……それ、立花屋の……な。一日無料で遊べる。それでしばらく時間を潰して参れ」

「えっ！？　立花屋？　あの……ここ最近できた娼館で、ミラヤと人気を二分する、あの立花屋でありますかー？　美女揃いのミラヤとは一線を画して、多種多様な、人間、獣人は言うに及ばず、幅広い年齢と色んなタイプの女性を取り揃えて、しかもお値段も幅広く、庶民から王族まで楽しめる大人の憩い場と評価の高い立花屋でありますかー。吾輩も一度行かねばと思っていたのでありますが、この吾輩ですら、なかなか予約が取れない程の人気店である立花屋であ

りますかー？」

「……能書きがうるさいわ。それを持っていけば、予約なしで遊ばせてくれる。ああ、遠慮はいらぬ。好きなだけ遊んで来ればよい」

「いや……あの……そんな……悪い……でも……そうでありますかー？　そこまで仰られると、吾輩も断りにくいでありますなー。では、ちょっと見学に、あくまで見学に、今後の後学のために、ちょっと、行ってくるでありますー」

そんなことを言いながら、ウヘヘヘヘとゲスい笑い声を漏らしながら、ゴンは部屋を後にした。

「ま、しばらくヤツは帰って来まい。１週間経って帰ってこない場合は、悪いが迎えに行ってやってくれい」

「は……はあ」

「さてさて、ヘイズのことじゃな。あ奴は元々、おひいさまの眷属だった狐じゃ」

「え？」

「今から１０００年ほど前になろうか。どこをどう間違えたのか、ある日突然おひいさまの眷属を辞め、妖狐に転生しおったのだ」

「妖狐に……ですか？」

「左様。通常、妖狐に転生するのは、余程の悪事を働いたときなのじゃ。大抵は転生する際に肉体が耐えきれずに滅ぶものじゃが、稀

に転生に成功する狐もいる。それがヘイズじゃ。元々ヤツは魔力量が並外れておった。それゆえ転生できたのじゃろうな。それ以降ヤツは盗賊となり、多くの宝物を奪った。我々も全力で行方を追ったが、どうしても尻尾を掴むことは出来なんだのじゃ」

「その妖狐がなぜ、エルフ秘蔵の宝物を盗んだのですか？」

「そのことじゃ。エルフが地上を捨て、山深くに籠るようになったのも、ヘイズの仕業なのじゃよ。そして、おひいさまとエルフが絶縁状態になったのも、ヤツが関わっているのだ」

サンディーユは大きなため息をついて俯く。何やら根が深そうな話だ。俺はさらに詳しい話を聞こうと、彼の言葉に耳を傾ける……。

第二百八十八話　エルフとおひいさま

約７００年前、エルフは世界の各地に点在していた。その大半が小さな集落を構えて日々の生活を送っていたのだった。元々、あまり他種族との交流を好まず、どちらかと言えば排他的なエルフだったが、それでも、必要最低限の外部との交流は保っていたのだった。

その当時、最もエルフとの交流があったのが、おひいさま率いる狐族だった。

彼らは人族との深い交流を持ちつつ、そこから得る「お供え」の一部をエルフに分け与えていた。そして、その見返りとして、エルフは彼らに「ロスサの水」と呼ばれる液体を分け与えていた。

この「ロスサの水」とは、エルフが清水から生み出す特殊な液体で、それを振りまけば周囲の病原菌を死滅させる効果を持つものだった。加えてその液体は、邪気を払う効果もあるとされ、狐族はそれぞれの活動する地域でその液体を使い、人々の生活を守ってきた。こうした、持ちつ持たれつの関係が、長い間続いていたのだ。

しかし、妖狐・ヘイズが現れてから、この関係は突然の終わりを迎える。ヘイズがエルフ王の一人娘であるジャニスを攫い、あろうことか、いくつかのエルフの村を壊滅させたのだ。

さすがにこれには狐神であるおひいさま自らが捜索に当たり、ヘイズの行方をつきとめた。そして彼を倒し、ジャニスの奪還に成功したのだった。

「……で、なぜ、倒したはずのヘイズが、今になって出てくるのですか？」

俺の問いかけにサンディーユは、困ったような表情を浮かべながら口を開く。

「倒した……息の根を止めたはずのヘイズが、生きておったのじゃな」

「どういうことです？」

「おひいさまが、とどめを刺さなんだのじゃ」

「えー？」

「おひいさまは基本的に、命を奪うことは好まれぬ。基本的に我ら狐族が罪を犯した場合、全ての能力を奪われて野に放つのが仕来りなのじゃ。ヘイズも、おひいさまによって半死半生にされ、全ての能力を奪われてそのまま放置されたのじゃ。儂もそのときはその場におったが、あの傷ではそう長くはもたぬ。てっきり森の魔物の餌になるじゃろうと思っておったのじゃが……ヘイズの奴め、どこをどうしたものか、生き残りおったのだな。その後、奴は再びエルフの里を襲ったのじゃ」

「……何という。で、そのときは何をしたのですか？」

「まず、姫を攫われ、仲間を殺されたエルフ王は、一族の安全を最優先に考えた結果、山深い場所で生きていくことを決めた」

「世界で一番高いと言われる、フィルコン山脈……でしたっけ？」

「そうじゃ。そこに世界に散らばっていたエルフたちを集め、皆で暮らし始めたのじゃ」

「確か、一夜にして……と言っていましたよね？　本当に一夜にしてエルフの里が無くなったのですか？」

「それじゃよ。エルフ王には秘蔵している宝物があった。その一つがラトギスの杖じゃ。この杖は転移魔法陣を描くことが出来る。王はそれを用いて世界各国に点在するエルフをフィルコン山脈に移動させたのじゃろうな」

「なるほど。で、その杖が今はヘイズの手にあるというのは？」

「今から５００年前に、フィルコン山脈のエルフ王の館から盗まれたのじゃ。しかも、ジャニス姫も……な」

「え、またですか？」

「フィルコン山脈は人跡未踏の場所にある。まず、人族では行きつくことさえ叶わぬ。そこにたどり着き、あまつさえエルフ王の館から宝物を盗み出せる程のスキルを持つ者と言えば……自ずと目星は付く。しかも、ジャニス姫に執心するとなれば……ヘイズ以外に考えられぬ」

「いや、別の可能性と言うのは……」

「ない。ヘイズは元々大の女好きであった。まあ、狐族の男は基本的に女好きであると相場が決まっておるのだが……。それ、その方

の許に居るゴンを見ても分かろう。……何じゃその目は？　儂？　儂は品行方正が服を着て歩いていると言われるほどの堅物じゃ。……そりゃ、若い頃は遊んだこともなかったわけではない。したが、それも昔の話。今はおひいさまの側近くに仕える者としての立場があるでな。いや、全然、全然じゃ。立花屋のカード？　あっ、あれは、その、ほれ、何じゃ。その……あれじゃよ。まあ、下らんもので……それがどうということでもないのじゃが……まあ、たまたま、そう、たまたま、儂の所にあったのじゃよ。決して贔屓にしているわけではないのじゃぞ？　八ッ橋などという娼婦などは、儂は一切知らぬ」

サンディーユは額の汗をぬぐいながら、必死の形相でしゃべっている。まあ、同じ男として、彼の言っていることはわからなくはない。ここは温かい目で見守ることにする。

「オホン、何の話じゃ。そう、ヘイズ。ヘイズの話じゃ。奴は女好きじゃが、そこには強いこだわりがあってな。気品のある女性を極端に好むのじゃ。そうした女性をあるときは力づくでねじ伏せ、あるときは優しい言葉で懐柔するなどして、最終的に自分に惚れさせ、女性を意のままに操ることを好むのじゃ」

「……なかなか、ですね」

「百歩譲ってそこまではよい。女性たちを大事にしてくれるのであればな。しかし、ヘイズの場合、手に入れた女性に飽きてしまうと、奴は無慈悲に女たちを捨てる。そのために多くの女性が命を奪われたのじゃ。奴が妖狐に転生したのは、そのあたりが原因なのじゃ」

「まさしく、女の敵ですね」

「左様。おそらくヘイズが攫ったジャニス姫も、何らかの形で利用されているじゃろうな。利用価値があるために、殺されてはおらんだろうが、果たして今、どのようになっているのやら……」

サンディーユは腕を組みながら、遠くを見つめている。

「しかし、二度までも姫を攫われていながら、エルフ王は何もしなかったんですか？」

「当然、エルフは一族を上げてヘイズの行方を追ったが、その足取りはようとして知れなんだのじゃ。業を煮やした王は、おひいさまにもヘイズの探索を求められてな。奴の首を上げるまで、エルフは狐族との交流を断つと言われたのだ。我らも全力で奴の行方を追っているのだがな。全く尻尾が掴めん。それ以来、エルフと我らの交流は途絶えたままなのじゃ」

「なるほど……で、今回、その足取りが掴めたということですね。それにしても、おひいさまの怒りがとんでもなかったですね。あそこまで怒るものなのですか？」

「考えてもみよ。一度ならずも二度までもご自身の顔に泥を塗られたのじゃ。あの気位の高いおひいさまが耐えられるわけがなかろうて。それに、一度は倒した相手にしてやられているのじゃ。ご自身のスキルに絶対の自信をもっておいでのおひいさまじゃ。その悔しさは人一倍であろうよ」

俺ははぁと納得しつつ、さらにサンディーユからヘイズの特徴について教えてもらった。その話をまとめると、概ねこんな感じだ。

・魔力総量は３００くらいで中の上程度。ただし、魔力の回復は早い
・幻術、幻惑のスキルがＬＶ４あり、他に回復魔法ＬＶ３、教養ＬＶ４、人化ＬＶ４を持っていた
・狡猾さは天下一品
・毒物のことについて異常に詳しい
・記憶力が抜群。一度見た人の顔は絶対に忘れない
・できるだけ自分から手を下さないようにする傾向が強い
・身体的な特徴は、素顔は赤黒い色をしている。その上、不気味な筋隈が浮き出ている。さらには、背中に抉れたような傷跡がある。おひいさまから逃げようとしたときにつけられた傷らしい
・基本的に臆病な性格。危ない橋は渡らない

俺は彼の話を聞きながらメモを取る。これだけの情報で彼の全てを判断することはできないし、５００年前のステータスなので、レベルは上がっているとみていいだろう。この妖狐はおそらく、石橋を叩いて渡るような、緻密な計算をして行動する相手のように感じる。こうした男には、いかに相手のテリトリーで戦わず、自分のテリトリーに引き込むかがポイントになってくるのだが……。

そんなことを考えつつ、俺はサンディーユにお礼を言い、彼のために用意したお土産を手渡して、部屋を後にした。

ドーキのこと、帝様のこと、オージンとサツキのこと、おひいさまのこと、そして、ヘイズのこと……それらのことを考えていると、何だか、ものすごいことが起こりそうな予感がしてならなかった。

その夜、俺は、なかなか眠りにつくことができなかった。

第二百八十九話　軍神誕生

あれから1週間が経った。俺は今、屋敷の庭で難しい表情を浮かべながら一人で佇んでいる。

「……ロウオ……リファ……ドルア……はっ！」

両手を思いっきり突き出す。すると、手の前の空間がゆがみ、景色が抉られていく。しばらくするとそのゆがみはゆっくりと収まり、再び元の風景に戻った。

「……距離を縮めることはできないんだな」

俺は自分の手を見つめながら、誰に言うともなく呟く。おひいさまの屋敷から帰ってきてから、暇さえあれば空間魔法を使って実験しているが、この魔法はなかなか使い勝手が悪い。詠唱をして、丁寧に魔法を構築しているのだが、それでもなかなか思い通りにはいかない。

今のところ効果的と思われる使い方は、いわゆる「アイテムボックス」としての使い方だ。空間の一部を自分のものとして、その中にアイテムを収納できるという機能だ。俺が持っている無限収納は、その効力を付与された袋と言える。どうやって空間魔法の効果をこの袋に付与したのかはまだわからないが、バーサーム家の初代様の時代には、空間魔法に熟達した者がいたのだろう。今のところ俺にはこの、無限収納があるために、敢えて空間魔法を使おうとは思わないが、やり方によっては、緊急避難用のスペースを作ることができるのでは、とも考える。生身の人間で実験したことはないが、あ

のサツキやシロンの作り出した空間では、問題なく俺は動けていた。近いうちに実験をしてみてもいいかもしれない。

「……羨ましいな」

俺の背後で声がする。マトカルだ。彼女は俺に視線を向けながら、大きなため息をついている。

「どうした、マト？」

「私は、魔法は使えない。自由自在に魔法が使えるリノス様が羨ましいと思うのだ」

「しかし、マトには剣術があるじゃないか。それに、ラファイエンスをも遥かに凌駕する指揮能力があるじゃないか」

「いや……そのどれもが、リノス様の足元にも及ばない。いや、自分でわかるのだ。自分の能力の限界というやつが」

「いいや、今のマトでも十分だよ」

彼女は寂しそうな笑顔を見せながら、遠くに視線を泳がせた。そして、ゆっくりと俺に視線を戻して、静かに口を開く。

「私にも……空間魔法を教えてもらえないだろうか？」

「う～ん、今ちょくちょく使っているんだが、かなり使い勝手が悪いんだ。アイテムボックスとしては使えそうなんだが、これもかなり魔力を使う。マトの魔力ではすぐに気を失ってしまうだろう。空間魔法を覚えるのは反対しないけど、まずは魔力総量を上げるとこ

ろから始めた方がいいな」

「この年になっては……それは、難しいだろうな」

「マト……」

「……ああ、無駄話をしてしまった。すまない。リコ様が呼んでいるんだ」

「わかった。もう日暮れだな」

俺はそう呟きながら、マトカルの肩を抱いて屋敷に戻った。

「……あれ？　どうしたんだ？」

ダイニングのテーブルにはリコがイデアを抱っこしながら座っていた。そして、その前にフェリスとルアラが無表情で立っていた。何だ、この異様な雰囲気は？

「……どうしましょう、リコ姉さま？」

「そうですわね……」

フェリスの問いかけに、一切表情を変えずにリコは口を開いている。そして、テーブルの上に置いてあった木のスプーンを、ゆっくりと手にした。

「あなたたちに……任せますわ」

その瞬間、リコは両手でそのスプーンをバキッと折った。それを見たフェリスとルアラはスッと一礼をして、そのまま外に出ていってしまった。

「ど……どうしたんだ、リコ？」

「ええ、ゴンの帰りが遅いので、心配していましたのですけれど……。取り越し苦労のようでしたわ」

「うわちゃー」

俺は思わず天を仰いだ。サンディーユに1週間、ゴンが帰らなければ迎えに行けと言われていたことをすっかり忘れていた。そして、それを覚えていたリコは、ゴンを迎えにフェリスらを遣ったそうなのだが、どうやら立花屋で、かなりロックなおもてなしを受けているようなのだ。いくらなんでもそれは看過できぬと、たった今、二人を再び使いにやったのだそうだ。

……ゴンはそれからさらに1週間、屋敷に帰ってこなかった。

同じ頃、クリミアーナ教国の首都アフロディーテでは、今まさに晩餐会が開かれようとしていた。豪華な料理がテーブルを彩る中、壇上にいる教皇、ジュヴァンセル・セインが、その巨体を大儀そうに揺らしながらゆっくりと立ち上がる。

「みなさん、もうご存知の方も多いと思いますが、本日はタナ王国の国王であるタナ・カーシ・ヴィル殿がお見えになっていますので、ささやかではありますが、歓迎の宴を催した次第です。皆さん、お忙しい中、よくぞお集まりいただきました。感謝申します」

教皇の言葉が言い終わるや否や、会場に集まった人々が一糸乱れぬ動きで一礼をする。それを満足そうに眺めていた教皇は、テーブルに置かれたワイングラスを手に取り、それを高く掲げた。それに倣い、会場内の全員が素早くグラスを手にして教皇の言葉を待つ。

「タナ王国にクリミアーナ様のご加護があらんことを。そして、我がクリミアーナ教にさらなる繁栄を願って……乾杯！」

「「「「「乾杯」」」」」

チィィィィンとグラスがぶつかる音がする。驚いたことに、その音すらも一糸乱れぬ響きを見せたのだ。まるで数日前から何度もリハーサルを重ねたかの如くスムーズで、洗練された動きで人々はグラスを合わせ、席についていたのだった。

「教皇聖下、朗報がございます！」

壇上の隅で声を上げた男がいた。居並ぶ幹部たちの中でひときわ小柄で、しかも、少年のような声であるにもかかわらず、その男の顔は老人のように皺だらけであった。よく見ればそれは皺ではなく、無数の傷跡であり、ここに集まった信者たちはその事実を知っていたが、この男を話題にする者は皆無だった。

「どうしました、カッセル？」

教皇の鷹揚な声が響き渡る。彼は一礼をした後、会場内の人々に向けてよく通る声で口を開いた。

「本日お越しになられた、タナ王国国王様より、教皇聖下に貢物が

ございます」

その声が合図であったかのように、タナ王国の国王が立ち上がり、口を開く。

「我らタナ王国は、クリミアーナ教国のますますの発展にお力添えを致したく、こちらを教皇聖下に献上いたします。……まずは、こちらをご覧ください」

国王はスッと自分の背後に視線を移した。すると、どこからともなく一人の男が現れた。

「タナ王国におきまして、国王陛下にお仕えいたします、オクタ・ニタ・マーシです。我が国王陛下が献上いたしますのは、こちらでございます」

彼は一礼をすると、足元から大きな宝箱を取り出して国王のテーブルの上に置いた。それを国王自ら開け、教皇に差し出した。

「これ……は？」

怪訝そうな表情を浮かべながら、教皇は箱の中身を見つめている。

「プリルの石と魔吸石でございます。教皇聖下」

言葉を発したのは、カッセルだ。その声に驚いたような表情を浮かべた教皇は、慌てたようにカッセルに視線を向けた。

「タナ王国の国王様は、４つの魔吸石と、１つのプリルの石をお持ちくださいました。これだけの大きさのプリルの石は、前代未聞か

と思われます。これら全てを、我がクリミアーナ教国に献上されるとのことでございます」

「ほう、何と……信心深い……」

「クリミアーナ教国の発展に、少しでも寄与できれば、我らこの上の喜びはございません」

ニヤリと微笑みを湛えながら、国王は恭しく一礼をする。

「おお……よくぞこのような貴重な物をお持ちくださいました。タナ国王の信仰の厚さ、このジュヴァンセル・セイン、深く深く心に刻みました。今後はなお一層、貴国にはお力添えを致しましょう」

「ははっ、ありがたき幸せでございます」

「今宵はめでたい。皆さん、大いに楽しみましょう。楽しみましょう」

いつになくご機嫌の教皇の姿が、そこにあった。

「……よくぞお持ちいただきました。感謝します」

「いいえ。カッセル様の御ためには、我々は協力を惜しみません」

宴が終わってすぐに別室に移動した男たちがいた。言うまでもなく、カッセルとタナ国王、そして、オクタの三人だ。彼らはテーブルをはさんで腰かけ、互いに視線を合わせつつ、顔に薄ら笑いを浮かべながら話し合っていた。

「これで、我がクリミアーナ軍は無敵となる」

「それは、よろしゅうございました」

「いや、国王陛下、よくぞやってくれました。感謝いたします」

「何の何の。このくらいはたやすきこと。全てはこのオクタがやり遂げたこと。彼を褒めてやってください」

「オクタ殿、感謝します」

「何と勿体ない」

カッセルは、テーブルに置かれた石たちを満足そうな顔で眺めながら、まるで独り言を言うように呟く。

「この石が実戦に投入できるのは、早くて3年の月日がかかるだろう。それまでの間は……そうだな。実戦の訓練でもしていただきましょうか。指示はまた後で致します」

「それでしたら、一つお願いがございます」

「何なりと」

「隣国のミーダイ国ですが、その処遇は我らにお任せいただいてもよろしいでしょうか」

「ええ結構です。元々、天道に沿わない国ですしね。攻めて領国を併呑するもよし、根絶やしにするもよし。好きになさってください」

タナ国王とオクタは顔を見合わせてニヤリと笑った後、ゆっくりと頭を下げた。

「では、我らはこれにて」

「ああ、お待ちください陛下」

部屋を後にしようとしていたタナ国王らは、ゆっくりとカッセルに向き直る。

「本日より、あなたには軍神の称号を授けましょう。そして、その軍神を支え続けている皇后さまにも、聖女の称号を与えましょう。近いうちに、教皇聖下からお触れを出していただけるよう取り計らいます。今後も、我がクリミアーナ教国の最強軍としての活躍を、期待しています」

「おお、我が悲願であった軍神の称号を賜るとは……。このタナ・カーシ・ヴィルを始め、我が国は子々孫々までカッセル様に忠誠を誓います」

国王は恭しく頭を下げながら、部屋を後にしていった。一人残されたカッセルは、ニヤリと笑みを浮かべながら、ゆっくりと窓の外を見た。その視線の遥か先には、リノスが住む、アガルタ国があった……。

第二百九十話　また、巻き込まれる

アガルタの都に初雪が降った。ここ最近は朝晩が冷え込んできていたので、しばらくすると雪になるかなと思っていた矢先のことだった。まだ１１月に入ったばかりなのだが、今年の冬は訪れが早いようだ。

執務室で窓の外でチラチラと舞う雪を見ながら物思いにふけっていると、突然俺に念話が飛んできた。ミーダイ国に駐留しているターマからだ。何でも俺にミーダイ国に来てほしいらしく、その予定を確認してきたのだ。何でも、塩を届けた五ケ町の長が礼を言いたいらしい。そんなことはいいと辞退したのだが、相手はどうしてもと言って聞かず、逆にドーキの立場が危うくなるかもしれないと言われてしまった。仕方なく俺は、フェリスとルアラを呼び出してスケジュールを調整し、明日の夕方に行くと返答したのだった。

そして次の日の夕方、ゼンハイが俺を迎えに来てくれ、一緒にミーダイ国に転移した。そこにはドーキがいつものように申し訳なさそうな顔をして控えていて、俺が着くなりペコペコと何度もお辞儀をする。

「もうそのくらいでいいぞ、ドーキ。腰を痛めてしまうぞ？」

「本当に……本当に申し訳ありません」

「俺に礼を言いたいんだろう？　いいじゃないか。怒られるわけじゃないんだから」

そう言って俺たちは笑みを交わし合う。

五ケ町の寄り合いは、店の近くの倉庫で行われるとのことで、ドーキが先頭に立って俺を案内する。案内といっても、目と鼻の先なのだが、彼は警戒心を剥き出しにしながら歩いている。俺にはマップに加えて気配探知と魔力探知があるので、周囲に誰がいるのかはほぼわかるのだが、ある意味、こうした用心深さは必要だ。ドーキの姿は、見習うべきものがある。

そんなことを考えていると、あっという間に倉庫についてしまった。中に入ると、すぐ地下に通じる階段を降りていく。すると、奥に明かりが見えた。そこに向かってズンズンと進んでいくと、５０人くらいの男女が車座になっているのが見える。どうやらこの人たちが、町衆の代表たちのようだ。

「遅くなりました」

ドーキがスッと彼らに一礼をすると、全員が俺たちに注目する。薄明りに照らされた人々の風貌は多種多様だ。坊主の人もいるし、目鼻顔立ちの整った女性もいる。獣人もいる。それに……衣装がドレスを着ている人から、ほとんど裸に近い人まで、これまた多種多様だ。俺は思わず小さな声で呟く。

「なんでもござれ……だな。紋付羽織袴を着たヤツも、一人くらいはいるんじゃないか」

「え？　何です？」

「いや、何でもない……」

あまりの異様な雰囲気に、正直俺は呑まれてしまっていた。そんな様子を全く気にかけることなく、車座の中で、ひときわ大きい女が口を開いた。

「もしかして、アンタはんが塩を分けてくれはった人かぇ？」

「はい。商人の……リノス様です」

「ハッハッハ！　ドーキはん、アテの前で嘘はあきまへんえ。皆まで言わずとも知っています。あの、アガルタの国王さんでっしゃろ？」

「……！」

絶句するドーキに、女はニヤリと笑みを見せる。

「ドーキはんは正直なお人やさかい、アテはあんたはんが好きどすわ。まま、ようお越しやす。アテは上町（かみまち）の長をしております、ショゲツと申します。この度はアテらに塩を恵んでもろうて、ほんまにありがとうどした。感謝していますえ」

「いえいえ、とんでもない。皆さんのお役に立てたのであれば、こんなにうれしいことはありません」

「いや、本当に感謝しおります。私は下町（しもちょう）のトキワ。どれほど助かったかしれません」

「南町のカメガだ。私も感謝しているんだ」

「東町のリョクアです。私も、感謝いたしております」

「西町のカイシドでやんす。本当に助かったでやんす」

各町衆の代表が口々に感謝の言葉を述べてくる。どいつもかなりパンチの効いた風貌なのだが、これだけ立て続けに自己紹介されると、覚えきれない。しかもその手下？　までもが挨拶を述べてくる。マジで頭の中がグチャグチャになりそうだ。

「まあ、皆さん、そのくらいで」

ショゲツの一声で、その場がしんと静まり返る。彼女は大きな体をゆすりながら、俺に向き直った。

「ほんまはな、リノスはんに礼を言うためにあつまったのやが、事情が変わりました。アテが家を出る前に、物騒な話を耳にしたんやが……。皆、聞いてくれはるやろか？」

何事かと全員が顔を見合わせながら、ショゲツに注目する。彼女は全員に視線を合わせながら、重々しく口を開く。

「隣のタナ王国がな、軍勢を集めているみたいなんや。どうもそれは、アテらを攻めるためのものらしいのや」

「ちょ、ちょっと待ってください！　タナ王国から軍勢って……そんな話……」

「聞かんやろな。極秘に集めてるみたいやよってな、ドーキはん」

「なぜ……」

ドーキを始めとして、そこに居る全員が呆然としている。そんな中、ショゲツはさらに口を開く。

「クリミアーナの連中を放り出してから今の今まで、タナ王国はアテらをほったらかしにしてましたわな。せやけど、今になっていきなり攻めてくるのはアテにもよくわからんのどす。あるとすれば、帝様がお持ちの魂魄石やろうけど、もしそれが狙いなら、何も軍勢を集める必要なんかあらしまへん。腕利きの者数名を忍び込ませた方が、効率的ですよってな。にもかかわらず、タナは軍勢を集めて攻めようとしている……。なんやえらいことにならへんかと思うてますのや。ほんまはアガルタ王はんにお礼をするところやけど、事が急を要しますのや。せっかく来てもろて申し訳ないのやけど、アガルタ王はん、ドーキはん、アテの頼みを聞いてくれまへんやろうか？」

「ぼ……僕でよければ……」

ドーキが戸惑いながら口を開いている。俺としてもいきなりの展開で、何と答えていいのか迷ってしまう。今のところ俺のマップにも気配探知にも、魔力探知にも反応はない。一体この女は何を根拠にそんなことを言っているのか。しかし、嘘をついているようには見えない。そんなことを考えていると、ショゲツは俺たちに視線を合わせながら、重々しく口を開いた。

「詳しい話を聞かせてやりたいけれど、事は一刻を争うのや。ドーキはん、アンタ、転移が使えるな？　すぐに帝様らを避難させておくれや。アガルタ王はん、すまんけど、帝様をアガルタで匿もうたってもらえしまへんか？」

「え……あ……」

ドーキはゆっくりと俺に視線を向けた。俺はそこまで急いで帝様を転移させる根拠を聞こうとしたそのとき、マップが突然開く。そこには、周囲が真っ赤に染まった様子が映し出されていた。と、同時に気配探知と魔力探知が反応する。夥しい魔力を感じる。俺は一瞬で、相当数の魔法使いがいることを把握していた。

「敵に囲まれたようだ」

「くっ……もうか？」

ショゲツが驚きとも、あきらめともつかない声を漏らしたその瞬間に、地面が揺れた。

「なんだ？」

全員が総立ちになる。その直後、皆は外に向かって走り出していた。

「うわっ！　イテッ！」

外に出るや否や、頭の上に石が落ちてきた。思わず天を仰ぐと、そこには空がなく、真っ黒い粒が上空を埋め尽くしていた。

「危ない！　うわぁぁぁっ！」

次々とデカい石が空から降ってきていた。全員が必死で倉庫の中に逃げようとしている。その中で、ドーキとショゲツが明らかに皆と違う方向に体を向けている。

「帝様ぁ！」

「帝ぉぉぉ！」

「バカ野郎、戻れ！　危ない！」

二人の頭上に3メートルは優に超す大きさの巨大な石が落ちてきているのが見えた。彼らはそれを必死で躱そうと体をひねっているが、到底逃げ切れるものではないのは、誰の目にも明らかだった。俺はほぼ無意識に、しかも全力で結界スキルを発動していた。

「ぬあぁぁぁぁっ！！」

俺の声と、ドーキたちの頭上に石が落ちるのが、ほぼ同時だった。そしてその直後、ミーダイ国には大小さまざまな、夥しい数の石が降り注いだ。

数分後、ミーダイ国は石に埋まり、その姿を消した。

第二百九十一話　夕陽と闇の中で

山の山頂に、さらに小高い山ができていた。そして、その周囲を数百の人間が囲んでいる。その中で、ひときわ目立つ男がゆっくりと、今できたばかりの山に近づいていく。

「どうやら、完全に埋まったようだな」

銀色の鎧に身を固めたその男は、ニヤリと笑みを漏らしながら、足でその山をコツコツと蹴っている。その様子を見た黒いローブ姿の男が口を開く。

「５０人もの土魔法使いを動員しましたからね。思ったより早かったですね」

「さすがはオクタだな。そなたの転移術、実に見事であった。褒めてつかわすぞ」

「勿体ないお言葉でございます」

恭しく頭を下げるオクタを満足そうに眺めているのは、タナ王国国王であるヴィルだった。彼はふと、視線を明後日の方向に向ける。そこには、遥か彼方の水平線に沈みゆく見事な夕陽が見えていた。

「おおっ、何とも見事な夕陽ではないか」

「誠でございます」

将校と思われる、煌びやかな鎧を身にまとった男が恭しく追随する。

「我がタナ王国に夕陽が沈んでいきます。軍神がおいでましますが国に、まるで太陽までもが引き寄せられているようでございます」

「フフフ、歯の浮くようなことを言う奴だ」

皇帝は笑みを絶やさぬまま小さく頷いている。そして彼はさっとその身を翻し、集まってきた将兵たちに向かって口を開く。

「皆の者、ご苦労であった！　しかし、我が作戦はこれで終わりではない。今回はあくまで、フラディメ国と我が国に通じる道をふさいだに過ぎぬ。我らの戦いは始まったばかりなのだ。ゆめゆめ此度の勝利を過信してはならぬぞ！」

集まった将兵が膝をつき、恭しく頭を下げる。そんな中、白髪のローブ姿の男がゆっくりと皇帝の前に進み出た。

「恐れながら申し上げます」

「何だ、ジェラニウス」

「陛下の御勝利を完璧なものとするため、ミーダイ国を完全に埋めてしまってはいかがでしょうか」

「どういうことだ？」

「今は単に、土魔法で切り出した土や岩を無造作に谷に投げ込んで、埋めただけに過ぎませぬ。一見、この山の下は完全に埋まっているように見えますが、実のところは、あちこちに空洞ができておるは

ずです。万全を期すのであれば、土魔法で徹底的に、隙間なく谷を埋めてはと……」

「無用だ」

皇帝は手をスッと上げてジェラニウスの言葉を遮る。だが彼は、なおも食い下がる。

「もしや、谷の中にまだ生きている者もおるやもしれず……」

「ハッハッハ！　ジェラニウスは相変わらず心配性だ。たとえ生きている者がいたとしても、生きてかの国から出られる可能性は、皆無だ。我が国との国境には既に一軍を配していて、蟻の子一匹出ることはできぬ。さらにこの谷を登って脱出するとなれば、いかにしてこの何層にも重なった岩を潜り抜けられようか？　よいよい。ジェラニウスたち魔法使いたちの力は余もよく知るところだ。今、そなたたちの魔力をいたずらに使うべきではない。温存しておくのだ。それに……」

皇帝は再び山を振り返り、その姿をまじまじと眺めながら、再びニヤリと微笑む。

「この荒削りな、一見無粋に見えるこの山も、こうして夕陽に照らされれば却って憐れみを増して、風流な趣があるではないか」

皇帝のその言葉に、老魔導士は静かに頭を下げた。

「……ひっ、ひっ、ひっ、ひぃぃぃぃ～」

闇の中に気味の悪い声が聞こえている。よく耳を澄ますと、あちこちから人の息遣いが聞こえてくる。

「おーい、大丈夫かー？」

俺は闇に向かって声をかけながら、掌の上に光の玉を発生させ、それを浮き上がらせる。一方で俺は目の前に展開されているマップを注意深く見守る。この国の周囲が真っ赤になっているからだ。どうやら完全に敵に囲まれているらしい。今のところ、敵に動きはない。さてどうするか……と思っていたところで、いきなり敵影がマップから消えた。どうやら敵は去っていったらしい。俺はフッと息を吐き、辺りを見廻す。

「うおっ！　マジでギリギリのところで止まっているな……」

発生させたライトが、倉庫の屋根あたりで止まっている。つまりは、俺の結界の天井がそこなのだ。そして、ふと視線を地面に落とすと、そこにはへたり込むショゲツとドーキの姿があり、そのすぐ頭上にバカでかい岩が迫っていた。

瞬間的に結界を張ったために、かなりいびつな形になってしまっている。これは結界師としては失格だ。ファルコ師匠が見ると、確実に怒られる出来栄えだ。結界師たるもの瞬間的に、正確に自分のイメージした形、硬度を持つ結界を張らなければならない。

そんな反省をしていると、ショゲツとドーキが匍匐前進で俺たちの所までやって来る。そして、二人は俺の足元でゼイゼイと激しい息をしている。

「……歩いてくればいいだろうに」

「何を悠長な。これは一体、どういうことや。はっ！　そや！　帝様、帝様は！」

ショゲツが巨体を起こして御所のある方向に目を向ける。しかし、ここからでは御所の様子は見ることができない。彼女は大声で帝様ぁ～と叫んでいるが、当然の如く返答はない。

「御所の様子を見に行きましょう。僕が転移します。その前に……」

ドーキが辺りを見廻しながら口を開いている。彼は倉庫に視線を向け、その中にいる人々に向かって声をかけた。

「どなたか、ライトの魔法を使える方はおられますか？　もし使えるなら、ライトを出してください。そしてまず、皆さんのお家が無事かどうかを確認してください。何かありましたら、お手数ですが、私の店まで伝えてください。もし、店に誰も居ないのであれば、メモを放り込んでおいてください。まずは、皆さん……」

ドーキがそこまで言うと、倉庫の中から夥しい光が漏れだした。そして、ゾロゾロと人々が外に出てくる。彼らは掌にライトを載せながら、挨拶もそこそこに自分たちの家に向かっていった。ドーキの見事な判断だ。

「すみませんが、一旦、店の様子を見てもよろしいでしょうか？」

「ドーキはん、アテも帝様のご様子を見に行きたいのや。アテも連れて行っておくれや」

ドーキは少し困った表情を浮かべたが、ニコリと笑みを返して、足

早に店に向かって歩き出した。やはり、自分が丹精込めて作り上げてきた店は気になるようだ。俺も自分の店を持っているので、その気持ちはよくわかる。

店に着くまでのわずかな時間だが、闇の中に少しずつ小さな光が現れ始めていた。どうやら結界は上手く機能しているようだ。一方で、この国全体にきちんと結界を張れているかが気になりつつも、俺はドーキに続いて彼の店に入った。

「旦那様！」

店に入るや否や、虎獣人のクロヌロが飛び出してきた。ものすごい轟音の直後に真っ暗になり、彼はすぐさま店の外に出た。そこには闇に包まれた景色があり、彼はランタンに火を灯して最低限の明かりを確保しつつ、竈の火を落としたのだった。

彼の話を聞いていると、突然チワンたちポーセハイが転移してきた。何事かと思っていると、どうやらこの国で医療活動を始めていたゼンハイが念話を飛ばしたらしい。

「緊急信号を受信しましたので、取り急ぎ見に来ました。皆さん大丈夫ですか？」

「ああ、この界隈は大丈夫だ。いきなりデカい石が降ってきて、気が付いたら真っ暗になっていたんだ。おそらく俺たちは生き埋めにされているんだろう。チワン、済まないがしばらくこの店に居てくれないか。そして、もし怪我人がいるなら手当てしてやってくれないか……って、ローニもいるのか！？」

見れば、チワンたちの後ろの方でローニが控えていた。ただでさえ

狭い店なのにもかかわらず、１０人ものポーセハイが転移してきているので、店の玄関は立錐の余地もなくなっていた。彼女はほぼ、身動きの取れない状態になっていたが、俺と目が合うと、スッと目礼をしてくれた。

「皆さん、本当にありがとうございます。この店の部屋は自由に使ってください。あと、近くに大きな倉庫があります。そちらも使ってください。ドーキから頼まれたと言っていただければ問題なく使えるはずです。あと、ローニ……ありがとう」

彼はポーセハイの一人一人を見ながらテキパキと指示を出していく。そして、俺たちに向き直り、静かに口を開いた。

「では、僕たちは御所に参りましょうか。チワンさん、転移をお願いします。リノス様、申し訳ありませんが、ＭＰを……」

「ああ、わかっている」

「ドーキ、ターマからも念話があって、彼女は既に皇后さまの許に向かったそうだ」

「わかりました。では、参りましょうか」

俺たちは一瞬のうちに御所に転移する。そこは、俺が帝様に初めて会った大広間のような場所であったが、そこには完全な闇に包まれており、しかも、人の気配は全く感じられなかった。

「帝様ぁーショゲツでございますー！　帝様ぁー！」

よく通る甲高い声が部屋に響き渡る。しかし、いくら待っても返答

はなく、この部屋に来る者すらいなかった。

第二百九十一話　夕陽と闇の中で（後書き）

本日、『結界師への転生②』が発売になりました。第二章のヒーデータ帝国編が収録されています。新しいエピソードとして、リコレットの生い立ちから、リノスとの初夜の場面も追加されています。ＷＥＢ版では未収録の戦闘シーンなど、かなり内容の濃い作品に仕上がりました。よければ、是非！　よろしくお願いします！

第二百九十二話　闇夜のつぶて

一体どのくらい、俺たちはそこに立ち尽くしていたのか。実際はほんの数分だったのだろうが、体感的にはかなりの時間、そこに立ち尽くしていたように思える。

闇の中、静寂に包まれた空間がそこにあった。一緒に転移してきた人の呼吸する音が聞こえるくらいの静けさだ。本来ならば、すぐに御所内を捜索しなければならないのだろうが、このときの俺たちは全員がおそらく、同じことを思っていた。――きっと誰かが来るだろう、と。

「リノス様、帝様は奥においでになるようです」

突然声を発したのはチワンだった。どうやら念話でターマと交信していたようだった。チワンはさらに念話で話をしている。俺は黙って掌にライトを発生させ、部屋を明るくする。するとすぐに、何もないガランとした部屋が見えた。

「ええと……。何だか道順がややこしくて覚えきれませんね」

ターマから教わったと思われる順路を必死で覚えようとしているようだ。俺はマップを展開させると同時に、気配探知と魔力探知を発動させて、御所内の様子を探る。

「ああ、わかった。大体わかったよ。俺が案内するから、みんな付いて来い」

「アガルタ王はん……御所内はえろう複雑な作りになってますのんえ。せやのにアンタ、どないして御所のご様子をわかりますのんえ？」

「ナイショです」

俺はラファイエンスのマネをして、ショゲツにウインクをしながら人差し指を口元に当てる。だが彼女は無表情になり、「えらいかわいいお顔どすな」と捨て台詞を吐かれてしまった。

「……ではリノス様、恐れ入りますが、ご案内をお願いできますか。あと、そのライトも付けたままでお願いしたいのですが」

「ああ、わかっている。その前に、ドーキ」

俺は彼にＭＰをチャージしてやる。相変わらず申し訳なさそうな顔をしながら、ペコペコとお辞儀をしている。俺はそんな彼を諭すようにして部屋を後にした。

数歩行って曲がり、数歩行ってまた曲がる……。そんなクネクネと廊下を歩くこと数分、俺たちは長い渡り廊下にたどり着いた。その先には、大きな建物が見える。どうやら帝様たちは、ここに居るらしい。マップには表示されていないが、その周囲にはかなり多くの者が控えているようだ。俺のマップに表示されない……というのは、実はものすごいスキルだ。ＬＶ５の気配探知と魔力探知を駆使してようやくその存在がわかる。忍者か何かだろうか。おそらく他の魔術師では、この存在を認識することすら難しいだろう。

「あの……」

渡り廊下を前にそんなことを考えていると、ドーキが不意に口を開く。俺は彼に視線を向ける。

「ここから先はお気を付けください。オワラ衆が帝様をお守りしているはずです。不審な者は容赦なく排除されます。まずは僕が行ってお頭に訳を話してきます」

「そうや。これだけの人数で奥殿に入れば、間違いなくオワラ衆に襲われます。アテも一緒に行きましょう。ドーキはんとアテはお頭にも顔を覚えてもろうていますさかいに。決してオワラ衆をナメたらあきまへん」

いつになく真剣な表情でショゲツまでもが口を開いている。俺は、だろうね、と一言だけ返事をする。それが意外であったのか、二人は目を見開いて俺を見ている。そんな彼らに、心配はいらないと目配せをしながら、俺はチワンに向かって口を開く。

「チワン、ターマは帝様の側に居るのか？」

「ちょっとお待ちください。……そうですね。帝様と皇后さまの側に居るようです」

「では、ターマに俺たちが渡り廊下の所まで来たと伝えてくれ。これから部屋に向かうと」

「わかりました。……廊下を渡って突き当りの部屋から入って、真っすぐにお進みくださいとのことです」

「わかった」

俺はドーキらに目配せをして、ゆっくりと渡り廊下を歩き出す。よく磨きこまれているためか、床がツルツルする。しかも、歩くごとにキュイ、キュイと音が鳴る。４人もの人間が歩いているので、意外にうるさい音になっている。

奥殿と呼ばれる建物が徐々に近づいてくる。そして、ようやく俺たちの眼に、その入り口と思われる扉が見えた。どうやらあそこから中に入れと言うのだろう。そう思った瞬間、俺は歩みを止めた。

「……リノス様？」

皆が怪訝そうな表情を浮かべる中、俺は無限収納から、ラマロン国から贈られた厳岩石（げんがんせき）を取り出していた。真っ黒な、高い硬度を持つ岩。それを俺は闇の中に素早く投げた。

……ピシッと小さな音が聞こえる。

「そんな所に隠れていないで、姿を見せたらどうだ？」

俺はもう一つのライトを出して、音がした方向に移動させる。そこには、身長２メートルを優に超す大男が立ち尽くしていた。しかもその右腕には、俺が投げた厳岩石（げんがんせき）が握られていた。

「闇夜のつぶて……見事」

「誰だ？　上手に気配と殺気を隠していたが、俺の眼はごまかせん。何者だ？」

男は黙ったまま、音もなくゆっくりと俺たちに向かって歩いて来る。そして右手の掌に載せた石をポンポンと上に放りながら、ゆっくり

と口を開いた。

「……オワラ衆お頭、イッカク」

そう言いながら彼は俺に、持っていた石をポンと投げた。その顔は長く、極端な馬面だった。細いタレ目、分厚い唇……。一度見ると忘れない程の、特徴ある顔立ちだ。

「お頭様！」

その顔を見て、ドーキとショゲツが平伏する。俺はその様子を横目で見ながら、この男と対峙する。

「なぜ、俺に殺気を向ける」

「徹底して疑うのが、我らの基本」

「俺を殺す気だったのか？」

「不審な振舞いあらば」

「で、今はどうだ？」

「我が姿見せては最早、闇討ちは不可」

「……帝様の許に、案内してくれるか？」

「承知」

そういうと彼は、腰に差している剣を取り出して地面に突き立てた。

そして、その柄に右足を乗せたかと思うと、フワリと空中に浮き上がり、屋根に上った。どうやら剣にはヒモが付いていたらしく、彼の体の後を追うように剣も空に舞い上がっていった。

屋根に上った彼は、パンパンと柏手を二つ打ち、ピィーィっと口笛を立て続けに三回吹いた。そして屋根からフワリと飛んだ彼は、俺たちのいる渡り廊下に音もなく降りてきた。

「……待たせた。結界を解除した。ご安心を」

どうやらこの建物を守る仲間に、俺たちが敵ではないことを知らせていたらしい。その姿と言い、黒一色の服と言い、不気味さが半端ではない。

「ところで、結界と言ったな？　一体何人がここを警護しているんだ？」

「我を含め、３人」

「……少なくない？」

「我らは帝を警護するのみ。他は無用」

「少数精鋭ってことか？」

イッカクは無言で頷く。その横顔からは、何やら悲壮な雰囲気が伝わってくる。おそらく、必要最低限の人数で、必要最低限のことしかできないのかもしれない。そんなことを考えていると、俺たちは扉の前に着いた。

イッカクは無造作に扉を開け、大きい体を折るようにして建物の中に入った。その中は、ろうそくが二本立てかけられていたが、かなり暗い。そんな中でも彼はするすると進んでいく。俺はライトの明かりを頼りに、彼の後を歩いていく。しばらくすると、白い襖のような扉に行き当たった。イッカクはその前に来ると、スッとひざを折り、小さな、しかし、よく通る声で話しかけた。

「アガルタ王一同、到着」

「入るがよい」

ゆっくりと襖を開かれる。そこには数十人の黒装束の者が控えており、俺たちが部屋に入ると、一斉に視線を向けてくる。そして、部屋の奥には大きな畳が敷かれており、その中央には胸を押さえている皇后さまと、その右手を握り締める帝様、その横には呪文を詠唱するターマの姿があった。

「帝様！」

「帝様、ようご無事で……」

ドーキとショゲツが帝様の側に近づいていく。彼はゆっくりと二人に視線を向けて、優しい声で口を開く。

「……二人とも、よく参った。迎えてやりたいが、すまぬ、今、オクが、な」

帝様は皇后さまに視線を向ける。彼女は目を見開いたまま、苦しそうに胸を押さえている。その彼女にターマが、回復魔法をかけ続けている。

「どうした、一体何があった？」

チワンが皇后さまの許に駆け寄る。ターマは困惑を隠そうともせずに、早口で俺たちに口を開く。

「私がたまたま診察をしているときに、突然轟音と共に、真っ暗になりまして……。それからすぐに皇后さまがこのように苦しみを訴えられたのです。その原因が分からず、回復魔法をかけ続けているのですが……申し訳ありません」

「何？　回復魔法でも治癒しない？　心臓か？」

チワンが皇后さまの顔を覗き込み、丁寧に観察をしている。

「いや、これは過呼吸じゃないか？」

「カコキュウ？」

「ちょっと待っていろ」

俺は無限収納から布袋を取り出し、それを皇后さまの頭にすっぽりと被せる。その瞬間、黒装束の者たちから殺気が放たれる。

「待て、皆の者。待つのじゃ」

それを察した帝様が、慌てて止めに入ってくれた。しばらくすると、皇后さまの肩がゆっくりと上下し始めた。その様子を見て、俺は布袋を彼女の頭から取り除いた。

「はあーはあーはあー。助かり……ました」

「い……一体どういうわけじゃ？」

「突然大きな衝撃を受けると、たまにこのような状態になると聞いたことがありましてね。そのときは、何かの袋を頭にかぶせてやると症状が治まると聞いていたのですが、その通りでしたね。よかった」

「か……かたじけない」

帝様は深々と俺に頭を下げた。俺は大いに恐縮して、その頭を必死で上げてもらうように懇願する。

「……したが、これは一体どういうわけじゃぇ？」

「それにつきましては帝様、このショゲツよりご説明申し上げます」

彼女は巨体をゆすりながら、帝様の前に進み出る。どうやら彼女は今回の騒動の原因を知っているようだ。俺たちはその話を聞こうと、彼女の周囲に集まった……。

第二百九十三話　さて、どうしよう？

「タナ王国は、我が国を攻め滅ぼす算段を立てておりました」

ショゲツは周囲に丹念に注意を配りながら、ヒソヒソと話し始めた。自然と俺たちも彼女の側に近寄っていく。

「無論その後ろには、クリミアーナ教国が糸を引いているに違いはおへん。何で今、タナ王国が攻めてくるんやと思わはるのは道理どす。おそらく、プリルの石を手に入れたからやと思います。何せ、クリミアーナは支配国を使って、手を変え品を変えして、石を手に入れようとしていましたさかいに」

「なるほど。今回、クワンパック様のお屋敷から魔吸石とプリルの石を持ちだせたことによって、目的は達せられたというわけですね？　で、ミーダイ国が邪魔になって、滅ぼそうとしていた……と」

ドーキが頷きながら言葉を返している。

「せや。クワンパック家の家宝であるプリルの石は、子供の握りこぶしほどもある大きさの物や。あないな大きさの石は、そこいらにはないものどす。クリミアーナからしてみれば、願ったりかなったり。しかも、魔吸石まで手に入れたのや。これ以上の成果はあらしまへん。そこで、我が国を滅ぼして、二度とプリルの石を生産できんようにするために、攻め滅ぼそうとしたのやろ」

「ちょっと待ってくれ。確か、１０年ほど前の大戦もクリミアーナが介入していたと聞いたが、それってもしかして……」

「せや。さすがはリノスはんやな。その通りや。プリルの石を奪うために仕掛けられたんどす。帝様を含めた、あの石を下賜された家と、まだ持っていない家同士が争うたんや」

「で、結果は……」

「辛うじて、帝様たちが勝ちはった。せやけど……」

ショゲツはチラリと帝様に視線を向けた。彼は小さなため息をつきながら、ゆっくりと口を開いた。

「我が父ゴカーシが、命と引き換えに賊軍を討ったのじゃ」

「そのとき、プリルの石は……？」

「元々、プリルの石が下賜された家は少ないのじゃ。オージンたちのクワンパック家を筆頭に、４家しかない。その４家にある石はいずれも無事で、全て我が下に集めた。リノス殿に預かってもらった、あの石たちがそれじゃ」

「なるほど……。ではなぜクワンパック家は石を差し出さなかったのです？」

「差し出す前に隠棲されてしまってな……奪い取るわけにもいかぬでな……」

「何とまあ……」

俺は思わず絶句してしまう。そしてさらに聞けば、帝様の父上は、

体中の魔力を絞り出して敵に火の雨を降らせ、そのまま絶命したのだと言う。元々プリルの石を精製するために、膨大な火を扱う術を知っていたために、それだけの大魔法が撃てたのだが、魔力が不足している状態であったために、自分の命までも犠牲にして魔法を構築したのだそうだ。

「……せやけど、解せんのは、タナ王国の動きどす。アテに全く悟られずに軍を動かしたやなんて……信じられまへん。ここに居るオワラ衆にもおそらく知られずにこれだけのことをしやった……。一体、タナ王国はどんな手を使こうたんか……」

「おそらく、魔法陣を使ったのでしょうね」

「魔法陣……？　クズノイッハか。しかし、あれはかなりの魔力を使うと聞いた。この……仕儀は一人二人でできるものではあるまいに……」

「いえ、帝様。どうやら少ない魔力でも魔法陣を描くことができるアイテムを持った者が、タナ王国にいるようです。そしておそらく、そいつがサツキさんを誑かし、プリルの石を奪った張本人です。おそらく、この山の山頂に、いくつかの魔法陣を描いて大量の岩を落としたのでしょう。帝様が仰るように、一人二人の魔術師ではなく、少なくとも数十人規模の魔術師が一斉に岩を落としたのだと思います」

「何ちゅう……。ここまでしやはるのか……」

「しかしなぜ、タナ王国がそこまでするのじゃ……。いきなり……」

「恐れながら」

戸惑う帝様に、オワラ衆のお頭であるイッカクが前に進み出る。彼は静かに平伏し、ゆっくりと口を開く。

「戦略上、我が国は、邪魔」

「どういうことじゃ？」

「我が国は、フラディメ、サンダンジに通じる国。わが国潰せば、タナ王国、後顧の憂いなし」

「なるほどな……。タナ王国は、何かさらに大きなコトを起こそうとしているのかもしれぬな……」

帝様は大きなため息をつきながら、天を仰いだ。

「したが……この闇の状況……。これはもしかして……リノス殿、そこもとが？」

「はい。咄嗟のことだったのですが、この国全体に結界を張りました。全てに張れているのかどうかはわかりませんが……」

「国全体に！？　そこもとは……」

「ええ。本職は結界師なのです。かなり丈夫な結界を張っていますので、石が崩れ落ちることはないと思います。」

「結界師……。わが国全てが石で閉ざされているようであるとは、先ほどオワラ衆が申して参ったが……まさか、結界で守られていたとは……」

帝様は天を仰ぎながらポカンと口を開けている。いや、完璧に結界を張れていれば、エヘヘと照れ笑いも出来るのだが、完ぺきではないのだ。かなり恥ずかしい……。

「……大丈夫です。問題ございません」

不意にターマの声が聞こえる。見ると彼女は、皇后さまの脈をとっていたようだ。丁寧に皇后さまに毛布のような布を着せ掛け、肩が冷えないようにしている。

「お腹のお子様も、問題ないと思います」

「かたじけないの、ターマ殿」

「お上……」

皇后さまが不安そうな面持ちで口を開く。彼女はゆっくりと帝様の前に進み出て、彼の手を両手で握りながら、涙声で話しかける。

「このようなことを……ここで申し上げるのは甚だ……甚だ不躾ですが……私は、怖ぅございます。お上……お上……」

帝様は皇后さまの手を握りながら、もう片方の手で、その背中を優しくなで続けた。

「せやけど、問題はこの石や。これ、どないします？　皆で掘り起こすちゅうてもやな……」

「あ、それなら問題ないですよ。この結界を上昇させればいいだけ

ですから」

「え？　リノスはんどういうことや？」

「今、上に張っている結界を上昇させます。そうすれば、石たちは山の斜面に落ちていきますよね？」

「なんとまあ、器用な……。うん、それやったら、それでお願いするわ。お礼は弾みますえ」

「よし、それじゃ」

「待て」

結界を上昇させようと立ち上がった瞬間に、帝様から声が飛んできた。何事かと思って彼に視線を向けると、彼は姿勢を正して座り、重々しく口を開いた。

「今、この上にある石がなくなれば、再びタナ王国から軍を向けられるであろう。少数であれば、オワラ衆を駆使して排除することはできるが、大軍をもって攻められると、兵力のないマロたちは、蹂躙されるほかはない」

「では、どうしろとおっしゃますのんえ？」

「しばらくは、このままでいるのじゃ」

「そんなアホな！　現に皇后さまは怯えてあらしゃいます。このままではお腹のやや様も、どうなるものか……」

帝様は心配そうに皇后さまに視線を向ける。そして、絞り出すように口を開いた。

「とはいえ、国の者の命がかかっておる……。今は、耐えるのじゃ……」

「恐れながら、光は肝要」

とつぜんイッカクが口を開く。

「闇の中にては、人、生きられず」

「それやったら、石を一つ一つ取り除きましょう。それで、光を……」

帝様はショゲツに向かって、ゆっくりと首を振った。彼女は一瞬動きを止めたが、やがてガックリとうなだれてしまった。

「……帝様、この国に住む人は、どのくらいですか?」

「……リノス殿、そこもとには、迷惑をかけ通しじゃの。すまぬ。ここから先は我らで何とかするによって、そこもとは、すぐにこの国を離れられよ。ドーキ、済まぬが、リノス殿を国に送り届けてくりゃ」

「帝様、さすがにこの環境で暮らすのは無理というものです。何より、皇后さまのお体のこともあります。ここはひとつ、住む場所を変えてはどうでしょうか?」

「どういうことじゃ?」

「いえね、アガルタには結界村というものがありましてね。以前、ある難民を保護した場所がそのまま残っているのですよ。３０００人くらいなら収容できると思うのですが……」

「私も、その現場を知っていますが、なかなか快適なところですよ。転移するのであれば、我々ポーセハイがお手伝いしますよ」

チワンが助け舟を出してくれる。帝様は、俺とチワンと交互に見比べていたが、やがて視線を床に落として黙ってしまった。

全員が、帝様の決断に固唾を呑んで注目していた。

第二百九十四話　避難

帝様は目を閉じてじっと俯いたまま、微動だにしない。この人のことだ。きっと頭の中でいろんなことを考えているのだろう。これはしばらく時間がかかりそうだなと思っていたそのとき、帝様がスッと顔を上げた。

「アガルタ王殿」

「はい」

「すまぬが……我が国の民を……助けてやって給もらぬか……」

「喜んで」

俺のその言葉に、帝様は寂しそうな表情を浮かべて、ゆっくりと頷いた。

「……すまぬ」

「お気になさらないでください。生きていればいいのです。生きていれば、何度でもやり直せます」

そこまで言うと俺は、チワンに視線を向け、彼に念話を飛ばす。

『チワン』

『はい、どうされました？』

『聞いた通りだ。この国の民をアガルタに移住させる』

『はい。我々ポーセハイを総動員します』

『いや、俺の転移結界を使う』

『それでは……秘密が……』

『いや、俺に考えがある。ドーキの店に居るポーセハイたちだけで十分だ。あとで指示を出す。俺からの念話での指示があることを、すまないがローニたちに伝えてくれないか』

『わかりました。念話を飛ばします』

見つめ合っている俺とチワンの様子を、帝様たちが不思議そうな顔をして眺めている。俺はコホンと咳払いをして、再び帝様に向き直る。

「帝様、アガルタへの移動はなるべく早い方がよいでしょう」

「うむ。道理じゃ。イッカク」

「これに」

「国の民に総触(そうぶ)れを出しゃ。明日の日の出……というても分からぬの。なるべく早く、この国に住まう者全員をこの御所に……」

「お待ちください！」

突然ショゲツが帝様の言葉を遮る。

「ご無礼の段、ご容赦くださいませ。国の民を集めるのは、アテら町衆にお任せください。町ごとにすぐに集めますさかいに、ドーキはん、あんさんらポーセハイが町ごとに転移させてくれたらええのどす」

「しかしそれでは……」

「名案」

訝る帝様にイッカクが重々しく口を開いている。

「兄上もそない言うてはりますさかいに！」

「兄上ぇ！？」

「ああ、リノスはんが知らんのも無理はおへんな。アテとイッカクは兄妹どす」

ホホホホとショゲツは高らかに笑うが、イッカクは眉間に皺を寄せ、不愉快そうな雰囲気を醸し出している。

「彼の者、妹に非ず」

「え？」

「勘当せし者故」

「勘当？」

「口数多し」

まあ確かに、このオバサンはよくしゃべる。勘当に至るまでには色々な紆余曲折があったことは容易に想像がつくが……。俺はオホンと咳払いをして、帝様に向かって口を開く。

「ショゲツさんの言う通り、各町衆に人を集めてもらいましょう。そうだな……チワン、町ごとにポーセハイを一人ずつ配置しようか。それで、準備が整ったら念話を飛ばしてくれ」

「わかりました。各町の場所はわかりませんので……ドーキ、案内できるか？」

「はい。大丈夫です」

「では、ドーキの店に戻ろうか。あそこを拠点に、君のＭＰをチャージしながら、ポーセハイを送り込んでいこう」

「わかりました」

「ちょっと待っておくれやす」

「どうしました、ショゲツさん？」

「先に……帝様と皇后さまを避難させておくれやす」

「ああ、そうですね」

帝様に先に結界村に避難してもらおうと言おうとしたが、彼はゆっ

くり首を振った。

「マロは、最後でよい。この国の最後の民が転移するまで、見届ける義務がある」

「そんな、帝様……」

「ショゲツ、お主の心遣い、マロはうれしく思うぞよ。その気持ちだけで十分じゃ。十分じゃ……」

そして彼はクルリと踵を返し、皇后さまの側に行き、再び彼女の手を握る。

「オクよ、怖いであろうが、しばらく辛抱してくりゃ。マロもそなたの側にいるによって……の」

皇后さまは帝様の眼をじっと見ながら、ゆっくりと頷いた。

それがまるで合図であるかのように、俺たちは素早く行動に移った。

ミーダイ国の町衆の動きは実に素晴らしかった。各町に配置したポーセハイたちを通じて結界村の状況を把握した彼らは、まずは身の回りの貴重品だけを持って集まるよう町人たちに指示を出したのだ。その際彼らは、結界村に避難した後も、可能な限りポーセハイの転移を使ってこの国に戻り、必要な荷物を取りに来られるようにするよう、チワンたちに交渉することも忘れなかった。

お蔭で、ものの数時間も立たないうちに町人たちの避難準備は完了し、俺はチワンたち数人のポーセハイを伴って各町に転移していく。そこには数百に及ぶ人々が集まっており、俺はチワンたちと人々を

囲むようにして立ち、彼らを転移させた。建前として、複数のポーセハイがあつまれば、これだけの人数を転移させることができるということにしたのだ。とはいえ、後で数百人の人間を転移させてくれと言われることのないように、このスキルは相当のＭＰを消費するので、余程の緊急時でなければできないことだとも説明しておいた。

予想以上の速さで民衆たちの転移は終わり、俺は一旦アガルタの都に転移し、フェリスたちに事情を説明して救援物資をまとめるように指示を出した。そしてすぐにミーダイ国に取って返し、チワンたちと合流し、再び帝様の許に転移した。しかし、奥殿には帝様の姿は見えず、皇后さまとキュアライト、そしてターマがいるのみだった。

「あれ、帝様は……？」

「大広間に」

「ここには、三人だけか？」

キュアライトはコクリと頷き、ゆっくりと口を開く。

「他は、大広間にて、貴族の引見」

「なるほどな。それで皇后さまには腕の立つキュアライトを置いたのか。さすがだな。では、皇后さまも帝様の許に参りましょう」

俺たちは皇后さまを伴って、ゆっくりと大広間まで移動する。そして、部屋の扉を開けるとそこには、帝様や皇后さまと同じような顔立ちをした人々が、立錐の余地なく犇めいていた。さらには、下女

たちだろうか？　粗末な着物を着た女たちが、庭にも犇めいている。

「こ……これは？」

あまりの光景に俺は絶句してしまう。そんな俺のところに、何やら豪華な着物に身を包んだ鬼たち数人がしずしずとやって来る。

「そこもとが、アガルタ王様であらしゃいますか？」

「はい、そうですが……」

「この度のこと、ほんまにおおきにどす。我はセッショと申す、帝様の側近くに仕える者。心から礼を言いますえ」

よく見ると、帝様に似ている。兄妹か何かだろうか。そんなことを思っていると、帝様がやってきた。

「おお、よく帰ってきてくれた。礼を申す、礼を申すぞよ」

「民衆の避難はほぼ完了しました。あとは……こちらの方々は？」

「ミーダイ国の貴族たちじゃ」

「あーなるほど。……しかし、こう言っては何ですが、皆さん帝様に似てらっしゃいますね」

「さもあろう。皆、マロの親類じゃによって」

「……なるほど」

聞けば、ミーダイ国の貴族は基本的に、帝様と血のつながりのある者たちで占められているのだという。しかも、彼の妃には、その貴族たちの子女から選ばれるために、どうしても血は濃くなる。そのために、集まった貴族たちの顔が皆一様に同じような顔立ちになっているのだ。中でも子供、女の子たちは、髪型が同じだったということもあるだろうが、顔立ちがオージンそっくりだった。

聞けば、彼らの移動はかなり大変だったらしい。御所を警護するイッカクを筆頭にしたオワラ衆が手分けをして貴族屋敷に向かい、人々を御所に案内したのだが、彼らは牛車に乗って避難しようとしたのだそうだ。さすがにそれでは日が暮れてしまう。さすがにそこは帝様が厳命を出して、御所への避難を最優先させたのだという。どうりで、この部屋の人々から言いようのない倦怠感を感じるわけだ。

そんな話をしながら、俺たちはこの貴族たちをアガルタに転移させる。そして、すぐに帝様たちの許に戻ってくる。彼はほぼ一瞬で数百の人々を転移させた俺たちの様子を見て、口をポカンと開けたまま固まってしまっていた。

「そ……そこもとらは、考えられぬことをする……」

「いや、かなりのＭＰを消費しますからね。こんなことは１０年に一度あるかないかですよ」

「そ……そうかの」

「では帝様、皇后さまと共に、アガルタにご案内します。お二人はアガルタの迎賓館にご案内しますね。あと……オワラ衆も」

そこまで言うと、頭領のイッカクがどこからともなく姿を現した。

「イッカク、大儀であった」

「未完了にて」

「何？　まだ誰ぞ残りおるのか？」

「御意」

イッカクはフッと息を吐き、ちょっと苛立ったような雰囲気を醸し出しながら、口を開く。

「クワンパック様、未だ、屋敷を動かれず」

帝様はゆっくりと天を仰いだ。

第二百九十五話　捲土重来

「なぜクワンパック様は動かれないのですか？」

チワンが呆れたような声を出している。イッカクはふうと小さいため息をついている。そのとき、帝様が寂しそうな表情を浮かべながら口を開く。

「おそらく、宝物と共に死ぬ気なのであろう」

「さにあらず」

「どういうことだえ、イッカク？」

「美しさに見惚れて候」

「何？」

「動くこと能わず」

帝様はイッカクの言うことがいまいちよくわからないと言った表情で、頬をポリポリと掻いている。

「帝様、もうクワンパック様は放っておきませんか？」

チワンが見かねて口を開いている。それに対して帝様は、ゆっくりと首を振った。

「いや。彼の者を放っておくと危ない。彼の者は魔吸石を作ることができるのじゃ」

そこまで言うと彼は、小さな声で呟いた。

「イッカク。無理にでも連れて参れ。非常なる手段を取ることも、さし許す」

「あの帝様、俺が行きましょうか？」

「そこもとが？　策はあるのかえ？」

「ええまあ」

クワンパックがどのような男かは知らないが、おひいさまから貰った空間魔法の中に閉じ込めてしまえばいいのだ。何度かの練習と調査の末、空間魔法の使い方がある程度はわかったのだ。イッカクにド突き廻されてやって来て、後で問題を起こされてもかなわない。最悪、どうしようもない男であるならば、どこかに閉じ込めておけばいい。俺が行けば、穏便に事が済むと思ったのだ。

「……では、そこもとには、本当に、本当に世話になる」

「ああ、気にしないでください」

「したが……マロの口からいうのは何じゃが……彼の者は、なかなかの変わり者じゃぞよ」

「大丈夫です。俺も、怒っている人や珍しい人を見ると面白いと思ってしまう変態なので」

「……そこもとならば、上手くやれそうじゃの」

クワンパック家はドーキが知っているとのことだったため、彼とチワンと俺、そして帝様がキュアライトを護衛に付けてくれた。俺のスキルでは特に護衛は必要ないのだが、帝様はどうしても連れて行け、そこもとに怪我でもされたらかなわぬと言って譲らなかった。仕方なく俺たちは、苦笑いを浮かべながらクワンパック家に転移したのだった。

屋敷に着いてすぐ、大きな門が見えた。門は固く閉ざされているように見えたが、試しに押してみると簡単に開けることができた。そして、そのまま屋敷の中に入ったものの、人の気配は一切なく、俺のごめんくださいの声がむなしく響き渡っていた。

屋敷の中は真っ暗だった。俺はライトの魔法を唱えて周囲を明るくする。そして、気配探知を使うと……いた。一部屋に数十人の人間が集まっているようだ。俺はそこに向けてしずしずと歩き出した。

……実に広大な屋敷だった。よくは見えなかったが、どうやら庭には滝があるようで、水が落ちる音が闇の中に響き渡っていた。１０分ほども歩いただろうか。俺たちはようやく、人の気配が集まっている部屋にたどり着いた。

「あの……ごめんください」

部屋に入ると、何故か全員が俺に背を向けている。何度か呼び掛けてみるが、誰も俺の声に反応しない。一体何事かと俺たちは顔を見合わせていると、いきなり甲高い声で怒号が聞こえてきた。

「ボンクラぁ！　消しゃ！　消しゃぁ！」

声のした方向に視線を向けるが、姿が確認できない。戸惑っていると、闇の中から人をかき分けながらやって来る人影が見えた。

「無粋なことをするな！　明かりを消しゃ！」

「……クワンパック公」

キュアライトが小さく呟く。どうやらこのキレ廻している小柄なオッサンがクワンパック本人らしい。よくみるとやはり、どことなく帝様に似ている。しかし、その目つきや雰囲気からは何とはない狂気を感じさせる。

「明かりを消せと言うているやないか！」

いきなり俺の掌の上にあったライトを消してしまった。彼はスッと踵を返して、再びどこかに行ってしまった。俺たちはあっけに取られてしまい、しばらくは口を利くことができなかった。だがその直後、先程のクワンパックの絶叫にも似た声が突然俺たちの耳に聞こえてきた。

「ステキやん！　やっぱステキやん！」

一体何だと思いながら、声のする方向に俺たちも行ってみる。かなり多くの人がひしめいているようだが、彼らはどうやらこの家に仕えている人々のようであり、この狂気を帯びた主人の振る舞いを、固唾を呑んで見守っているようだった。

クワンパックは庭に居た。そこには上空から一筋の光が池に向かっ

て差し込んでいた。どうやら、結界の上に堆積している岩の間から、奇跡的に光が届いているようだ。

「闇の中に一筋の光。その周囲にほのかに見える埃や塵……。それらが何とも言えぬ模様を浮かび上がらせておる……。刻一刻とその姿を変える模様……。二度とは同じ姿を見せぬこの世界……ステキやん！　ステキやん！」

……何やら、詫び・さびの境地に達しているような言い方だ。どうやらこのままでは完全に埒があかないと判断した俺は、一瞬にして特大のライトを出して周囲を明るくする。

「何するのや！　……って、うおっ！　我が丹精込めた庭がこのように……ステキやん！　ステキ……」

俺は黙って彼を結界に閉じ込め、そのまま眠りにつかせた。そして、あまりの光景に目を見開いて驚いているクワンパック家の人々に向かって声をかける。

「はい、皆さん避難しますよ～。もうこの国にいるのはあなた方だけです。ここは危険です。空は岩で覆われていますので。これから、アガルタという国に皆さんをご案内します。大丈夫です。いい国だという自負はあります。いずれ安全が確認されましたら、この国に戻ってくることも出来ますので、まずは皆さん、身の回りの物を……持っている？　あ、避難しようとしていてここに集まったけれど、このオッサ……いや、クワンパック様が動かれなかった？　それはそれは、皆さんご苦労様でございました。それでは、避難しましょうか」

念のため、気配探知でこの屋敷を探ってみると、別の場所に数名が

いるようだ。この人たちも救わねばならないが、まずはここに居る人たちを避難させようということで、俺たちは彼らをアガルタに転移させた。

そして、再びクワンパック家の屋敷に戻り、取り残された人々の救出に向かう。どうやらそこは、女性たちが住む部屋のようで、他の部屋にはない煌びやかな趣があった。そしてその突き当りの部屋に、三人の人間がいるようだ。マップを見る限り盗賊の類ではなさそうだが、俺は注意深く部屋の襖を開けた。

……そこに居たのは、ハーギ、ゼザ、シロンの三人だった。俺の姿を見た瞬間、ゼザが早口にまくしたててくる。

「またか！　我々は動かんと言っておるだろう！　何回言えばわかるのだ！　察しの悪い！　そうか、お館様に言われたのだな？　しかし、お館様の命令でも動けん！　な！　わかるであろう？　そうか、わかったか。よい子じゃ」

「ゼザ、待て！　その男は！　貴様～！」

ハーギがいきなり刀を抜いて俺に斬りかかってきた。俺は手刀で彼女の剣を叩き折る。ハーギは信じられないという表情を浮かべながら、刀を構えた姿勢のまま、壁に向かって吹っ飛んでいった。

「無礼者……」

キュアライトが手をかざしている。どうやら俺が刀を叩き折ったと同時に、衝撃波を繰り出していたようだ。あまりの光景に、シロンは目を白黒させて、どうしていいのかわからないといった表情を浮かべている。そんな中、ゼザが口を開く。

「……オワラ衆!?　そうか！　帝様の命令か！　我らの命を奪いに来たのだな！　我々を、ドン、バン、バサッ、ギリギリ、ドスッ、ボン、ガンガンパリン、ジュシュ～ドワッとして、ダリダリ、ばあーんの、がーんで、ずわっしゃぁぁぁぁ～と」

「うるせえよ」

俺は瞬間的にゼザに結界を張り、彼女を眠らせた。どうやらハーギは先ほどの衝撃波で気絶しているようなので、コイツは放っておくことにする。俺はシロンの許に行き、しゃがみ込みながら彼女に尋ねる。

「なぜ、ここに居たんだ？」

「あの……ん……その……オージン様が」

「オージンはタナ王国に行ってしまったぞ？」

「帰って来るかも……だから……みんなで……待つ……」

シロンの眼から涙が溢れて来ていた。どうやらここはオージンの部屋らしい。彼女たちはオージンが戻ってくるかもしれないと考えて、この部屋を守ろうとしていたようだ。

「大丈夫。別に今すぐこの屋敷が無くなるわけじゃない。まずは皆で、安全な場所に避難しよう。死んじゃったら、オージンに会えないだろ？」

俺のその言葉に、シロンはポロポロと涙を流しながら、コクリと頷

いた。

「……全て終わりました」

彼女たちをアガルタに送り届けてすぐに、俺たちは帝様の許に転移していた。彼はほっとしたような表情を浮かべながら、俺に深々と頭を下げた。

「帝様と皇后さまは、アガルタの迎賓館にご案内します。皇后さまのお体のこともありますから……」

「すまぬ。この礼は、幾年かかろうとも……」

「ええ。楽しみにしています」

そう言って俺たちは笑顔を交わし合った。そんな中、ドーキがそろそろ行きましょうかと声をかけてくる。俺は帝様たちに目配せをして、転移しましょうかと促す。彼はニコリと笑みを浮かべたが、何かを思い出したかのように、フラフラと縁側に出ていった。そして、まるで別れを惜しむかのように、ゆっくりと御所を見廻した。

「帝様……」

ドーキが傍に行こうとしたが、俺はそれを手で制した。よく見ると、彼の肩が小刻みに震えていたのだ。

「……お父様（もうさま）……お母様（たあさま）……申し訳……申し訳ありません……」

彼は、声を震わせながら頭を下げていた。俺たちはただ、その後姿

を、黙って見ている他はなかった。

第二百九十五話　捲土重来（後書き）

ミーダイ国編、取りあえず完結です。１本間話を挟んで、新章に移ります。内容は、リノスと妖狐・ヘイズの戦いになる予定です！

第二百九十六話　「のむう」使う

「う〜ん」

天を仰ぎながら唸っているのは、リノスの妻の一人であるコンシディーだ。彼女は愛娘のピアトリスを抱っこしながら、眉間に刻めない皺を刻んでいる。一見すると、何やら子育てのことで悩んでいるように見えるが、実はそうではない。ピアトリスは母親の腕の中でスヤスヤと寝息を立てており、その表情は幸せそのものだ。

シディーは朝からずっと考え続けていた。リノスが言った一言が、どうしても気になっていたのだ。それは今朝、リノスとゴンとが話をしているときに、たまたま小耳にはさんだ、こんな言葉だった。

「やっぱり悪いヤツといえば、のむう使うだろ？」

「のむう」という言葉は初めて聞く言葉だ。普段であれば、わからない言葉があったとしても、直感的に言葉の意味を思いつくことができていたが、今回はそれが全く働かない。これまでの人生の中で学んだ、ありとあらゆる知識を総動員してみるが、「のむう」という言葉には全く心当りはないし、当然、見たこともない。

こんなことはリノスに聞けばすぐに解決するのだろうが、あいにく彼はアガルタに行ってしまった。まさか、政務中のリノスの所に行って、「のむうとは何でしょうか？」などと聞けるわけもない。自分はそんな空気の読めない女ではない。

リノス様のお帰りを待って、聞いてみよう……。一度は自分にそう

言い聞かせてみたものの、やはり気になる。気にしないでおこうと思えば思うほど、気になる。今や彼女は、体の細胞の一つ一つから、「のむう」とは何かを解明せよ、という信号を送られているような感覚に囚われていた。

ヒントは、リノスの言っていた、「のむう」は悪いヤツが使うということ。ということは、盗賊の類が使うもののようだ。盗賊は何を使うのか……。ねじ回し、針金……糸鋸のようなもの……いろいろな道具が頭の中を駆け巡るが、これというものは思いつかない。そんなことを考えていると、ズキズキと頭が痛くなってきた。シディーはピアトリスをベッドに寝かせ、愛おしそうに顔を撫でながら、毛布をかぶせてやる。

「……まあ、どうしましたの？」

こめかみをグリグリと指で押さえながらダイニングに降りると、リコがその様子に気付いて、声をかけてきた。シディーは大丈夫ですと言ってはみたが、リコの眼はごまかせなかった。

「大丈夫？　無理をしてはいけませんわ。少し横になっていなさいな」

「いえ、大丈夫です。本当に大丈夫ですから」

「かあたーん、あちょぼー」

「あちょぼーあちょぼー」

シディーの姿を見つけるや、エリルとアリリアが遊んでくれとせがんでくる。ここ最近、二人はずいぶんと話す言葉も多くなってきた。

そんな様子をかわいいと思いながら、シディーは二人と手をつなぐ。この子たちと遊べば、気もまぎれる。しかし、頭痛は簡単には収まらず、彼女の頭を痛めつける。

「ツツツ……」

「かあたーん、だいじょーぶー？」

「大丈夫よー」

「無理はいけませんわ、シディー。ここに居るとエリルやアリリアがどうしても遊んでと言ってきますわ。この子たちとピアトリスは私が見ていますから、あなたはメイの所で薬をもらって来るといいですわ」

「でも……」

「大丈夫、行ってらっしゃいな」

そこまで言うとリコはフェアリを呼び、エリルとアリリアと遊んであげるように命じた。シディーはその気遣いに感謝しつつ、メイの研究所に転移したのだった。

「……ありがとう、メイちゃん。ずいぶんと楽になったわ」

シディーはゆっくりと湯飲みをテーブルに置いた。その様子をメイは優しい笑顔で見守っている。

「よかった。シディーちゃんは根を詰めすぎると頭痛が起こるから、

あまり無理しないでくださいね」

「うん、ありがとう」

シディーにとってメイは、姉のようであり、親友のような存在だ。同じドワーフの血が流れていることもあるが、何となく、彼女と話をしていると、落ち着くのだ。リノス家に嫁いできてから緊張の連続だったシディーを、陰になり日向になり支えてくれたのはメイであり、本来は彼女に対しては敬わねばならないのだが、メイの敬語は使わないで下さいという言葉に甘えて、今では友達のように甘えてしまっているのだ。

「あの……メイちゃん、知っていたらでいいんだけど、教えてくれないかな？」

「ええ、私でよければ何でも」

「のむう、って知ってる？」

「のむう？」

メイの両目が天井を向いている。これはメイが本当に知らないときに見せる表情だ。

「あのね、今朝リノス様がゴンさんと話をしていたときに仰っていたのよ。悪いヤツはのむうを使うって」

「悪い人が……」

「そうなの。何かを使って悪いことをするのであれば、盗賊よね？

盗賊が使うものって何？　って考えると、色々なものが思い当たるのよね。そんなことを考えていたら、頭が痛くなっちゃって……」

「なるほど。うん、確かにそうですね。盗賊……。子供の頃、昔話で聞いたことがあるのですが、もしかするとそれは、クロスオーバーの鍵のことではないでしょうか？」

「クロスオーバーの鍵？」

「別名、究極の鍵と呼ばれるマジックアイテムです。どんな複雑な形状にも形を変えられる鍵で、その昔、大盗賊がそれを使って世界の宝物庫を荒らしまわったのだとか……。でもそれは、神の怒りに触れて海中深く沈められたと言われています。もしかして、それのことでしょうか？」

シディーは人差し指を顎の下に当て、天を仰ぎながらしばらく考える。そして、視線をメイに戻し、ゆっくりと口を開いた。

「うん、きっと、それね。メイちゃんありがとう。助かったわ。きっと、そのクロスオーバーの鍵を使って荒らしまわる盗賊が現れたのかもしれないわ」

「それは大変ですね！　何かの対策を行わないと、アガルタの宝物庫も危ないです」

「確かに……。うん、それは私が何とかするわ」

「え？　シディーちゃんが？」

「ドワーフの工房に話をしてみるわ。あと、ニザの父や兄にも相談

してみるわ。そして、クロスオーバーの鍵でも破られない鍵を開発して見せるわ。私たちドワーフができないことなど、ないはずなのよ！」

シディーはそう言うと、メイに丁寧に礼を言って帝都の屋敷に帰っていった。

その夜、シディーはリノスの寝室に向かった。

ベッドの上で彼女はリノスの両手を力強く握り、目をカッと見開いて、まるで宣言をするかのように堂々と口を開いた。

「リノス様、ご安心ください。何とかなりそうです」

「え……？　何が？」

「アガルタの宝物庫は盤石です。のむうを使っても開かない鍵は作れそうです！　父や兄に相談しましたら、何とかなると言ってくれました。楽しみに待っていてください！」

「ちょっと待て、何の話だ？　のむう？　何だそれ？」

「ほら、今朝、ゴンさんと二人でお話していたではないですか」

「ゴンと？」

「悪いヤツはのむうを使うと」

「悪いヤツ？　……ああ、それってもしかしたら、『のむう使う』じゃなくて、『飲む・打つ・買う』のことじゃないのか？」

「え？」

「悪いヤツは、飲む・打つ・買うの三拍子が揃っている……みたいな話をゴンとしていたんだ。きっとそのことだな？」

「え……？　私……もしかして……」

「どうした？」

シディーはリノスの話を聞いて勘違いしてしまったこと、メイと相談した結果、それはクロスオーバーの鍵と考えたこと、それを防ぐ鍵をドワーフ王を始め、一族全員で開発することになったことなどを恥ずかしそうに話した。

リノスは腹を抱えて爆笑していた。よくもそこまで考えたものだと言って、大笑いしていた。シディーは顔を真っ赤にして、今にも泣き出しそうな顔をしながら、小さな声で呟く。

「私……どうしよう……？」

「いや、そのままでいいよ」

「どういうことでしょうか？」

「誰にも破られない鍵ができるなんて素敵じゃないか。将来的に人の役に立つ物が出来上がるのなら、大成功じゃないか。そんなに気に病むことはない。もし、何か文句を言われるようなことがあれば、俺が謝ってやる。シディーは何も気にすることはない」

「あっ、ありがとうございますぅぅぅぅ」

シディーはリノスの胸の中で泣いた。彼はその小さな背中を、いつまでも優しく撫でてくれた。彼女はリノスの体の温もりに包まれながら、この人を死ぬまで愛し続けていこうと固く心に誓うのだった……。

第二百九十七話　お主もワルよのう

ミーダイ国の人々がアガルタに移住してきて約3ヶ月、彼らの生活も、ようやく落ち着きを取り戻し始めた。大地を覆っていた雪も溶け始めており、この国にもようやく春が訪れようとしている。

帝様と皇后さまは迎賓館にあって、穏やかな暮らしを送っている。皇后さまはようやく安定期を迎え、お腹が大きくなりつつある。一方で帝様は、アガルタのドワーフ工房に日参している。これはシディーの紹介であり、プリルの石を効率的に精製するための技術を学びに行っているのだ。

元々勤勉な帝様は、ドワーフの技術を次から次へとマスターしていった。そして、それらの技術を応用して、時間が空いた時などは作陶をするなどして、自分の作品を生み出していったのだ。

実は、帝様が作る作品は、とても評価が高い。特にそのファンとなっているのが、この人だ。

「美しい！　この色！　この手触り！　光沢！　どれをとっても非の打ち所がない！」

頓狂な声を上げているのは、フラディメ国のメインティア王だ。彼は自国に帰ってからも、月に1回から2回はアガルタに通うようになっていた。それはもちろん、溺愛してやまない息子のオンサールに会うためであり、人生の師と仰ぐポセイドン王に会うためでもある。そんな彼が、たまたま帝様の作った茶碗を目にしたところから、アガルタに転移したときには、必ず帝様の許に通うようになってい

たのだ。

実は、メインティア王の許には、ミーダイ国の問題児を預かってもらっている。そう、あの、クワンパックだ。

彼はアガルタを気に入らなかった。やれ風情がないだの、不細工だのと小言が絶えず、そのあまりのヘイトぶりに兵士たちが参ってしまい、苦肉の策として、メインティア王に相談したのだ。彼はその話を聞くや、すぐさまクワンパックに会い、そして、ものの数分で打ち解けてしまった。どうやら同じ志を共有している者同士であることがわかったらしい。まさしく、変態は変態を知るといったところか。

そうしたこともあって、クワンパックは極秘裏にフラディメ国に送られ、現在は軟禁状態にある。いや、決して俺やメインティア王が軟禁状態にしたわけではない。クワンパック自身がその状態を望んだのだ。言わば、今の彼は完全なひきこもり状態にある。

通常であれば、クワンパックの身の上を案じるところなのだが、実は彼は「魔吸石」を精製する手法を知っている。本来は彼から帝様にその手法を伝授しなければならないのだが、今の彼は完全にヤル気を無くしている。その上、帝様自身も魔力の問題もあり、その伝授ができない状態なのだ。しかし、彼を野放しにしておくと、クリミア―ナがどんな触手を延ばしてくるのかが分かったものではない。そういうこともあって、フラディメ国の国王専用の別荘地でひきこもってくれている方が、安全度は増すのだ。

メインティア王は、満足そうに帝様の作品を眺めている。そして、懐から大量の金貨が入った袋を取り出し、机の上に置いた。帝様は何度も金は要らないと断るのだが、彼は頑として法外な金を置いて

いくのだった。だが、このフラディメ国から贈られた金は、将来的にミーダイ国が復興する際の貴重な資金になるのだが、それがわかるのは、まだ先のことだ。

帝様やメインティア王との話もそこそこに、俺は自分の執務室に引き上げる。扉を開けると、何とそこにはゴンがいた。

「おお、どうした、ゴン」

「ヘイズの尻尾が掴めたでありますー」

俺は目を見開いて驚く。おひいさまから行方を追えと命じられてから、八方手を尽くして情報を集めようとしたのだが、なかなか思った程の情報は集まらなかったのだ。

おそらく、ほぼ確実に、タナ王国に仕えているオクタがヘイズなのだろう。だが、その足取りは全くと言っていい程掴めなかった。俺はゴンの話に耳を傾ける。

「ヘイズは、タナ王国にはいないでありますなー」

「やはりな。どうりで、ヤツの足取りが掴めないわけだ。で、ヤツはどこに居るんだ?」

「クリミアーナ教国の首都、アフロディーテでありますー」

「何?　クリミアーナの首都にはサダキチ達フェアリードラゴンが監視しているのに、その目を掻い潜ったというのか?」

「ヘイズは転移ができるでありますからなー。アフロディーテにあ

る研究所の一室に居るようでありますなー。当然、外には全く出ないという徹底ぶりでありますー」

「なるほどな。外に全く出ないのであれば、それはわからないよな。でもゴン、そんな状況なのに、よくわかったな」

「エヘヘ」

「……何か良からぬことをしたな？」

「ギクー。いっ、いや、そ、そんな、吾輩は……全く……」

「怒らないから、言ってごらん？」

ゴンが語ったところによると、隠れて遊びに行っている娼館で、たまたまヘイズの噂を耳にしたらしい。話の出どころは商人の一行であり、彼らは世界中を巡りながら珍しい物や高価なものを集めている。そんな彼らが、アフロディーテに行ったとき、研究所に不思議な建物を目にしたのだという。

その建物は壁に囲まれており、入り口が全くないのだというのだ。研究所員にその建物の話を聞いても答えてくれず、その上、大量のツワンクルドの注文を受けたのだという。

「ツワンクルド？」

「銅とグライエスという金属の合金でありますなー。ツワンクルドは、ほんの少しではありますが、魔法の威力を上げると言われているでありますー。ちなみに、グライエスはここアガルタでよく採れる鉱石でありますー」

「と、いうことは？」

「その商人はツワンクルドを仕入れるためにアガルタに来たのでありますなー」

「おそらくそのツワンクルドはクリミアーナに運び込まれて、何らかの兵器に利用される。それは、ミーダイ国から持ち出されたプリルの石か、魔吸石を用いての兵器ということだ」

「吾輩も同感でありますー」

「ゴン、女遊びも意外と役に立つんだな」

俺は意地悪そうな笑みを浮かべてゴンを見る。彼はポリポリと頭を掻きながら、申し訳なさそうに口を開く。

「あの……リコ殿たちには……」

「わかっている。また、おひいさまのところに放り込まれてしまうからな」

「既に、おひいさまのところには、報告に行ったのでありますー」

「おおそうか。で、おひいさまはアフロディーテに行くのか？」

「行くわけはないのでありますー。ヘイズの姿が確認されていないところには行けぬとの仰せでありましたー。おひいさまは確実に仕留められる状況がないかぎりは、お出にならないでありますなー」

「だろうな。そういえばゴン、アガルタのグライエスは、商人たちはもう買っていったのか？」

「とんでもないでありますー。その話を聞いてすぐに、販売を停止したでありますー。あの鉱石はドワーフたちが工房で使っているでありますからなー。買い占められると、ドワーフたちから怒られるでありますー」

「なるほどな。でも、商人たちには売ってやれないかな？」

「え？　どういうことでありますかー？」

「いや、グライエスの効果を落としたものを売ればいいんじゃないかと思ったんだ」

「なるほど！　それでありましたら、ドワーフ工房から出るグライエスを売ればいいのでありますー。何と言っても工房で徹底的に利用されたものでありますからなー。見た目はグライエスでありますが、中身は普通の石と変わらないでありますー。タダの石を買ってもらえる……儲かるでありますなー。イヒヒヒヒ」

悪そうな顔をしてゴンが笑っている。俺はその様子を見ながら、ゆっくりと口を開く。

「アガルタのグライエスが何の効果もないことがバレてしまえば、それはそのときだ。バレずにそれを利用し続けるのであれば、それもよし。動けば何らかの反応があるだろう。対策を立てるのは、それからだな」

そんなことを言いながら俺は、次の一手を考え始めていた。

第二百九十八話　妖狐、戸惑う

一体、何が起こっているのか、理解することができなかった。オクタは目の前の闇を、ただ茫然とした表情で眺めていた。

事は、アフロディーテにおいて、タナ王国国王とカッセルとの会談の中で起こった。数か月前からオクタは、皇帝直々の命令を受け、タナ王国とクリミアーナ教国の連絡役を担っていた。そのため彼には、クリミアーナ教国の首都、アフロディーテにおいて屋敷を与えられていたのだった。両国の連携は、かなり秘匿する事項が多い。そうしたことから、与えられた屋敷では、元々あった入り口を封鎖し、外からは誰も中に入ることが出来ないようにしていた。屋敷の出入りは、オクタ自身が持つラトギスの杖を使って転移する形で行い、タナ王国国王とカッセルの秘密協議も、この場所で行われているのだ。

そんな秘密協議が行われること数回、会議の最中、カッセルから思いもよらない情報提供があった。何と、ミーダイ国に住んで居たと思わしき人々が、アガルタに移っているというのだ。俄かには信じがたい話だが、グライエスを入手しに向かった商人が、確かにオーガによく似た人々の姿を見たという報告があったのだという。しかも、アガルタの都ではなく、川を下る最中の、一見すれば何もない草原の真ん中に突然集落が現れ、そしてそれは森の中まで続いていたのだという。

その集落は、以前クリミアーナ教国がアガルタの侵攻を企てたときに作られた前線基地であり、カッセルとしては忘れようにも忘れられない、因縁の地でもあったのだ。

カッセルの恨み節を聞きながらオクタは考える。確かに、自分たちはあの国を急襲した。そして、ほぼ一瞬のうちにあの国を山の中に埋め立てたのだ。逃げる時間など、あるはずがなかった。とはいえ、確かにアガルタにはミーダイ国の人間が多くいるという。では、なぜそれほど多くの者が外に逃げられたのか？　それともやはり単なる見間違いか……。彼はその明晰な頭脳で分析を試みるが、やはり答えは出ない。そんな中、カッセルの表情が和らぎ、笑顔を浮かべながら、口を開いた。

「とはいえ、アガルタから大量にグライエスの鉱石が運び込まれて来た。どうやらアガルタ側には、僕たちの戦略は伝わっていないらしいですね」

「ええ。グライエスはほとんど役に立たない鉱石。魔力を少しだけ増幅することは出来るが、それは微々たるもの。いくら買ったところで気付かれる心配はない。しかも、念には念を入れて、石を集めるのは、カサリーナ大陸にあるルワン湖を埋め立てるためだと触れている」

「フフフ。確かに、グライエスを用いて作るツワンクルドは、効果が薄い。だが、それは他国での話。クリミアーナ研究所の手にかかれば、その効果は数倍に引き出すことができる。フフフ……楽しみだ。今後とも、鉱石の確保への協力、お願いします」

「勿論だ。しかしながらカッセル様、ミーダイ国の連中が大挙してアガルタに渡った……というのは、由々しき事態です。俄かには信じられませんが……」

「オクタの申す通り、ミーダイ国の攻略には、余自らが指揮を執っ

た。我らの作戦は完璧だった。カッセル様のお言葉とは言え、余にもそれは信じられぬ」

「まあ、あくまで商人が見た、というだけなのだが、嫌な予感がするのでね。できれば、貴国において調べていただきたい」

「承知した。……オクタ」

「畏まりました」

こうしてこの日の会議は終了したのだが、オクタにはどうしても納得がいかなかった。一度、アガルタに出向いて、その集落とやらを探ってみようかとも考えたが、自分の直感が、その場所に行くことは危険だと告げていた。今まで幾度となく危機が訪れたが、全て自分の直感に従って行動した結果、今の自分がある。唯一、自分の直感に反して、エルフ王の娘であるミークを見捨てて逃げられず、おひいさまと相まみえることになり、半死半生になったが、それ以降は自分の直感に、より忠実に生きるようになった。今回も、アガルタに行くことは取りやめる。そう決めた直後、彼の方に抱き着く女性がいた。

「ヘイズ、何を考えているのじゃ」

「何度言ったらわかるんだ。今の私はヘイズではない……」

「オクタであろう？　わかっておるわ。我がヘイズと呼ぶ訳は、知っておろうに？」

「わかった。では、幻覚魔法を……」

「また、魔法か？　久しくそなたの逸物で突いてもらっておらぬ。特にあのサツキが来てからは……な！」

「仕方がない。今はあの女を仕込んでいる所なのだ。今は我慢してくれ。その代り……面白いところに連れて行ってやる」

「何？　まことか？　それでは、早く、早く行こうぞ！」

長い耳を揺らしながら、体をオクタに摺り寄せるようにしているこの女性こそ、エルフ王の娘、ミークであった。彼はミークの様子を見ながらゆっくりと立ち上がり、懐から一本の杖を取り出してそれを地面に向け、呪文を唱え始めた。

「……ツっ！　何だ？」

ミーダイ国に転移しようとしたとき、何かの力に弾かれたような感覚に囚われた。通常、転移魔法陣が張れぬ場所であれば、魔法陣は発光せずに何も起こらないものなのだが、転移を拒否するような反応を受けたのは、今回が初めてだった。不思議に思いながらも彼は、ミーダイ国ではなく、タナ王国とミーダイ国の国境に転移魔法陣を張り、その上に乗った。

一瞬にして周囲が漆黒の闇になった。だが、オクタは妖狐であるために、夜目が効く。彼は漆黒の闇の中で、周囲が岩に囲まれていることを把握していた。

「……おそらく、これが我々の落とした岩だ」

彼は岩をコンコンと叩きながら小さな声で呟く。その様子が見えないのか、ミークがライトの魔法を唱えて、周囲を明るくした。そこ

には周囲は黄土色であるにもかかわらず、目の前のだけは、真っ黒い岩石が幾重にも積もったような光景があった。オクタはミークを後ろに下がらせた後、黒い岩石をペタペタと触っていたが、やがてその手を止めて、再び詠唱を始めた。

「……はっ！」

オクタの声と共に、黒い岩石が塵のようになって崩れ落ちる。濛々とした土煙が襲ってくるが、彼は風魔法を発動させてそれを躱す。しばらくの後、彼らの目の前には大きな空洞が現れ、その中は漆黒の闇が広がっていた。

「ねぇ～ヘイズ～ではない、オクタぁ～。なんじゃ、これは？　どこが面白いのじゃぁ～？」

ミークは期待外れとばかりに残念そうに口を開いた。しかしオクタはその声に全く反応を示さず、ひたすらに闇を見続けている。

「ねえ～オク……」

「……何だこれは？」

「え？」

「町が……そのまま残っている？　何なんだ、これは？」

よく見るとオクタが震えている。ミークはその闇の中を見ようと、ライトの光を移動させる。しかしそれは、ある一定所までは進むが、そこから先には進めることができなかった。

「ちょ……何じゃこれは？　中が分からぬではないか！」

「……なるほど、結界魔法か？　それにしては、かなり丈夫な結界だ。落とした岩の重さは相当な重さのはずだ。それを……防いでいるのか？　これだけの結界を張れる結界師が、ミーダイ国に居たというのか？　ありえない！　これだけの結界を張っていれば、事前に気が付くはずだ。一体いつ張ったのだ？」

オクタは両眼を忙しそうに動かしながら、額に汗を浮かべながらブツブツと呟いている。そんな様子をミークはつまらなそうに見ている。

「……人の気配は、ない。どうやら、ミーダイ国の連中がアガルタに移ったというのは、あながち嘘ではなさそうだ。……しかし、どうやって？　……あの、ポーセハイか？　いや、彼らでは全員は無理だろう。……とすると？」

ブツブツと尚も呟いているオクタに、ミークは業を煮やしたかのようにピョンと飛び跳ね、彼に抱き着いた。

「面白くないではないか。この侘びはきっちりしてもらうぞ？」

「ああ、わかった。今宵は……気を失うまで……」

「やった！　本当に我が気を失うまでじゃぞ？　よし、それならば早く帰ろうぞ！」

ミークに急かされる形で、オクタは渋々ながら懐からラトギスの杖を取り出し、それを地面に向けた。

「一度、アガルタに行く必要があるな……」

その言葉を発した瞬間、彼らの姿は消えていた。洞窟には、オクタの言葉が、木霊のようにしばらくの間、響き続けていた。

第二百九十九話　女神

ポカポカと暖かい風が、春の香りを運んできていた。草原には青草が生い茂り、その上を蝶々がユラユラと飛んでいる。そんな中、散歩とも行進ともつかない、フラフラとした足取りで草原を進む一団があった。

よく見るとそれは、まだ年端もいかない少女たちであり、彼女らは全員が同じ特徴を持っていた。外見がオーガに似ているという点もさることながら、それに加えて皆、猫背であり、肌の色は病的に白かった。皆、同じような顔立ちをしており、一見すると何かの目の錯覚を起こしているかのような感覚に囚われる。

彼女たちを先導しているのが、鎧を纏った女性だ。これは言うまでもなく、アガルタ王・リノスの妻であるマトカルだ。美しい金髪をポニーテールにした、何とも凛々しい姿で堂々と草原を歩いている。その後ろを、このオーガの少女たちがゾロゾロと付いて来ているのだった。

マトカルはあるところまで来ると、その歩みをぴたりと止め、クルリと後ろを振り返った。そして、やや距離の離れてしまった少女たちに向けて声をかける。

「よーし、今日もよく頑張った！」

少女たちはマトカルの傍まで来ると、ヘナヘナと、まるで空気の抜けるように草原に倒れ込む。中には四つん這いになったまま、肩で息をしている少女もいる。そんな様子を見ながらマトカルは、大き

なため息をついた。

「たった5分の移動で、これだけ疲れるとは……一体どんな生活をしていたのだ？」

彼女の独り言のような呟きに、答える者はいない。そこにはただ、少女たちの息遣いが聞こえるのみだった。

彼女たちは、ミーダイ国から避難してきた、貴族のお姫様たちだ。将来は未来の帝様の妃になるかもしれない女性たちなのだが、春とはいえ、日中に行軍を強いられているのには理由がある。

ミーダイ国から転移してきてすぐに、貴族たちから、あまり人と関わらない場所で生活をしたいという申し出があった。元々彼らは長い年月の間、外部との接点を持たず、家族を始めとした一族のみで生活を送ってきた。そのため、同じ国の民とはいえ、多くの人に自身の顔を晒すことに異常な抵抗をみせた。

幸い、リノスが用意した結界村は草原の真ん中にあり、外部とはある程度隔離された場所にあるため、まずは貴族たちにはそこに入ってもらった。ただし、村自体は小規模であったために、貴族たちが雇っていた下男下女は必要最低限の数しか置くことは許されなかった。そのため貴族たちは泣く泣く召使の大半に暇を与え、一家につき二人ないしは三人の下男下女を抱えるのみとなった。

一方で、民衆たちの住む場所が無くなったのだが、その点については、クリミアーナ教の者たちが以前、疫病であるルロワンスに苦しめられた場所に建設したロッジなどが、未だ手付かずのまま残っており、彼らはそこに入ることになった。

民衆たちの行動は素早かった。たちまちのうちに森の中の建物を確認し、五ヶ町の長が集まって町割りを行い、住む場所を決めてしまった。それどころか、森を切り開いて開墾をはじめ、自給自足の生活を開始し始めたのだ。さすがにこれにはリノス達は驚き、手厚い救援物資を送ると共に、彼らの開墾作業をできるだけ支援したのだった。

一方で、結界村に入った貴族たちは徐々に疲弊していった。元々自活する習慣のなかった彼らは、驚くほど一人では何もできなかった。救援物資の配給や炊き出しなども行うが、彼らはそれでさえも自分の住処に届けてくれろと言い出す始末だったのだ。

そこで帝様は触れを出し、現在は国の緊急事態であるために、貴族たちも自活するように命令を出した。とはいえ、配給や食料については、集配所に取りに行けと命じたに過ぎなかったのだが、貴族たちは3日間もぶっ通しで会議を行い、そんなことをするのであれば餓死を選ぶという一派との激論の末、ようやく家来の誰かを取りに行かせるという返事を寄越したのだった。だが、その話は認められず、食料や日用品を取りに来るのは、基本的にその家の子息もしくは姫とせよとの帝様から命令が下ったのだ。

貴族の子女に敢えて限定するようにアドバイスしたのは、リコだった。

あるとき、たまたま人手が足りないことから、炊き出しのために結界村を訪れたリコは、そこに住む貴族の子女、とりわけ姫たちを見て愕然とした。屋敷の奥深く、薄暗い場所で大切にかしずかれたために目が悪く、全員が青白い顔の同じような顔立ちをした猫背の少女たち……その姿は、リコの眼には自分の人生を持たず、ひたすら両親に人生の決定権を握られているだけの受け身な姿勢に映った。

そういった意味で、外見は貴族の子女と同じ格好をしているものの、父のクワンパックから完全に放任主義で、わがまま放題で活発に育てられたオージンは、貴族の子弟の中では異質な女性であると言えた。

だが、この女性たちを見たリコの正義感に火が付いた。家庭を守るのは女性。夫を教育し、子供を教育するのは女性。そのために女性は強くなくてはならぬ。ただ受け身のままでは幸せは掴めない。自身の経験からそのことをイヤというほど知っていた彼女は、帝様を通じて、できるだけ貴族の姫たちに外出を促し、炊き出しを行いながら、彼女たちを教育し始めた。

炊き出しの弁当を取りに来た女子たちに、料理に使われている具材がどのようなものであるのか、どういった効能があるのかといったことをはじめ、女性とはどうあるべきかを一人一人に、やさしく語りかけたのだ。箸の上げ下げしかできない女性は損であり、自分で自分の人生を切り開くのですと諭していったのだ。

リコの言葉は、なかなか伝わりはしなかったが、それでも、マトカルに警護されながら一週間ほど彼女の許に通うようになると、少女たちの雰囲気が変わり始めた。まだ全員肩で息をしている状態だが、それでもその顔や肌の色の血色が、目に見えてよくなっていた。リコは炊き出しの料理を用意し、一人一人に振る舞いながら、その労をねぎらっていく。そして同時に、ゴンたちが彼女らに付いてきた下男・下女に配給物を渡していくのだった。

「……何だ、これは？」

この様子を見ていたのはオクタことヘイズだった。彼は細心の注意

を払いながら、アガルタに転移していた。そして、ミーダイ国から避難してきた人々を見たという情報を頼りに、その集落をようやく突き留めたところだった。

彼の目には、信じられない光景が映っていた。貴族の姫たちと思われる一団が太陽の下で歩いていたのだ。ミーダイ国では絶対にありえなかったことだ。彼はその事実を確かめるべく、気配を完全に消して結界村に忍び込んだ。

少女の一団は確かに、ミーダイ国の貴族の姫たちだった。彼女たちは明るい日の光の中で自分の顔を晒し、あまつさえ、食事までも共にしていた。一体どうしたことだと驚いていると、その中に、一人の女性の姿を目にとめた。明らかにその一団の中で異質な存在。長い、金色の髪の毛を風に揺らめかせながら、姫たち一人一人に話しかけている女性がいたのだ。元々女性好きということもあって彼は、その女性を注視した。

ふと、その女性が振り返った。その瞬間、彼は呼吸をすることを忘れた。

……理想の女性がそこに立っていた。美しい金色の髪、キッと吊り上がった意思の強そうな目、それでいて、その目には知性を感じさせる。さらには、抜けるような白い肌。その女性の目、口元、鼻……全てが彼の好みだった。気が付けば彼は、フラフラとその女性の前に進み出ていた。

「まあ、どうかなされましたか？」

その女性は、美しい笑顔を湛えながら口を開いた。その声ですらも、彼の好みだった。

「あなたは？」

まるで熱に浮かされたように、抑揚のない声で彼は話しかけていた。その女性はちょっと不思議そうな表情を浮かべたが、すぐにもとの笑顔に戻り、しっかりとした声で名を名乗った。

「私は、リコレットと申しますわ」

「リコレット……」

「何か、私に御用でしょうか？　あなたは、どちらのご家来……キャッ！」

無意識のうちに彼はリコの腕を取っていた。驚きの表情を浮かべながらその手を振りほどこうとするリコ。しかし彼はその腕に力を籠めると同時に、空いている手でラトギスの杖を持ち、魔法陣を描く。

「来るんだ」

「離して！」

「曲者ぉ！」

今まさに魔法陣を発動しようとしたとき、彼の頭上に剣が振り下ろされる。護衛のマトカルが異変に気付き、すぐさま彼に斬りかかったのだ。

「くっ！」

紙一重で剣を躱す。再び魔法陣を描こうと魔力を発動しようとしたとき、彼の頭にものすごい衝撃が走った。

「覚悟！」

気が付けば目の前に白狐が立っていた。その瞬間に、彼は全てを悟った。

「おひいさまの眷属か！　やはりあの女が動いていたか！　私としたことが不覚だった！」

そう言った瞬間、彼の周囲がまばゆい光で包まれる。それと同時に、リコたちの耳に聞きなれない音が聞こえた。

「クイクイキュィ～～ン～キュイイイン」

気が付くと、既に男の姿はなかった。

「取り逃がしたでありますかー。吾輩の法力をもってしてもダメでありましたかー」

「ゴン、一体何なのですか、あのお方は？」

「リコ殿、あれはヘイズでありますー。ご主人がおひいさまから探索を命じられている妖狐でありますー。消える直前にその顔に浮かび上がった赤黒い筋、妖狐・ヘイズに間違いないでありますー」

「リコ様、大丈夫か？」

マトカルが剣を鞘に納めながらリコの体を気遣う。彼女は顔をしか

めながら、それでも気丈に言葉を返した。

「腕に……痣が……。でも、大丈夫ですわ。ところでゴン、さっきあの方が消えるときに、何か変な泣き声のような音が聞こえましたが……あれは、何だったのです？」

ゴンは少し言いにくそうな表情を浮かべたが、やがて呟くように小さな声で口を開いた。

「……あれは、キツネ言葉でありますー」

「キツネ言葉……」

「また会おう、私の女神……そう言っていたでありますー」

リコの顔が、みるみる強張っていった。

第三百話　　思いと想い

あの日からヘイズは女神リコレットのことが、忘れられなくなった。

千年以上の時を生き続け、これまで幾多の女性を篭絡してきた彼にとって、初めての経験だった。どうしても、何としても、あの女性を手に入れたいと思ったのだ。

リコレットを見初めた次の日から、彼は彼女のことを調べ始めた。そして、その情報はすぐに集まった。彼女は、アガルタ王・リノスの正妻にして、あの国の皇后であるということ。大国、ヒーデータ帝国の先代皇帝の第一皇女であるということ。その帝国では、かなりの過激思想の持ち主とされ、厄介払いされる形で、アガルタ王の許に嫁いでいたこと。しかも彼女は、夫であるリノスとの間に、二人も子供を生んでいた。夫婦仲はよく、最近は見かけなくなっているが、王子誕生の前までは、フラリと都の店に現れることもあったのだという。

何より、ヘイズの心を捕えて離さなかったのは、彼女自身が実に聡明で、行動的なところだ。それであれば、ミーダイ国の貴族たちに対しての振る舞いも納得できる。

彼自身、手に入れた女性は数えきれないほどの人数になるが、その大半が、彼のものになってしまうと、途端に大人しくなり、彼にもねるようになってしまう。依存体質の女性を中心に狙ってきたこともその大きな要因ではあるのだが、彼にとっては、そうした女性は既に食傷気味であり、面白みに欠けた。

元々、気の強い女性はあまり好みではなかったが、女神（リコレット）と出会ってしまった今、ヘイズは彼女をどのようにして手に入れようか……そんなことを心躍らせながら考えるようになっていた。

だが、これまでのように時間をかけて……というわけにはいかない。今回は、できるだけ時間をかけず、一瞬で事を進める必要がある。その上、奪い取った後は速やかに自分のものにしなければならない。エルフの里から姫を奪還したときもかなりの困難を伴ったが、今回はそれ以上の困難を伴うだろう。そう考えると、打てる手は自ずと限られてくる。

しかし、今の彼に不安や恐怖という感情は微塵もない。あの、理想的な顔立ちと強気な性格。そんな美しく、目に知性を湛えた凛とした女神（リコレット）を自分の手で蹂躙し、仕えさせる……。そんなことを想像すると、久しぶりに強い欲望を感じる。あの日以降、寝ても覚めても、彼女のことが頭から離れないヘイズは、知らず知らずのうちに欲望に心を支配されていった。

その一方で、あの美しい肌を、その体を自由に弄ぶことができる夫・リノスに対して彼は、どす黒い嫉妬の炎を燃やし始めていた。

「あの女神（リコレット）は、私のモノになる運命にある。彼女は今、それを知らないだけだ……」

一人でそんなことを呟きながら、彼はアガルタの都に目を向けるのだった。

◆◆◆◆◆

リコがヘイズに襲われた。それを察したマトカルが剣を振るい、同

時に、ゴンも攻撃を行ったことで、何とかヤツから守ることができた。

気になるのは、リコの右腕にできた痣だ。痣ができているということは、少なからず腕にダメージを食らったということだ。これは、ありえないことだ。彼女には常に俺の結界を張っている。魔法も物理的攻撃もカンストする結界だ。にもかかわらず、その腕には痣ができてしまっている。一体これは何なのか。

俺はすぐさま、リコを連れておひいさまの許に飛んだ。だが、彼女自身もその痣が何であるのかがわからず、むしろ、ヘイズを取り逃がしたゴンに激怒していた。さすがにあの状況で仕留めるのは無理だとリコが説明してくれたが、ヘイズはますます姿を現さなくなるだろうと、おひいさまの嘆きはとどまるところを知らず、俺たちは宥めるのに苦労したのだった。

数日たっても、リコの痣は治らなかった。メイやローニに薬を作ってもらったが、それが消える気配は全くなく、歯がゆさを感じた俺は、毎日リコと一緒に風呂に入り、念入りに洗ってみたが、全く効果がなかった。俺が洗いすぎたから痣が消えないのだろうか？　いや、断じてそんなことはない。

そんな状況下でも、リコは結界村に行くことは止めなかった。頑固と言えば頑固なのだが、彼女は彼女なりに情熱をもって貴族の子女たちの教育をやっているのだ。そこで俺は、リコが外出するときには必ず側に一緒について行くことにした。

彼女の仕事ぶりを見ていると、実に効率的に物事を処理していることに気づく。そして、上手に他人を巻き込みながら物事を最短距離で完了させようとしているのだ。これは見ていてとても勉強になる。

この姿に感銘を受けたのが、他ならぬ帝様だった。彼は俺たちが結界村に行くときには必ず付いて来るようになっていた。そこで、リコの仕事ぶりを見るにつけ、彼自身にも気付きがあったようだ。あるとき、俺とリコが炊き出しをしていると、彼はじっと俺たちの動きを見ていた。そして、それが終わるとゆっくりと俺たちに近づいてきて、口を開く。

「……マロは、間違っておったのやもしれぬな」

「どうしました？」

「……マロは、全てのことを自分でやろうとしていた。それでは、いかぬのだな」

「……それができればいいのですが、あいにく俺はそんなにスキルが高くはありません。やはり、他人に助けてもらいながら国を運営しています。妻だってそうです。俺に比べればはるかにスキルはありますが、それでも限界はあります。ああやって、色んな人を巻き込みながら手伝ってもらっています。一人だと、きっと妻もここまでのことは出来ないでしょう」

実際、この炊き出しは、俺とリコだけでなく、ここに配給を取りに来ている貴族の子女たちも手伝ってくれているのだ。その中で抜群に手先の器用な人もいるし、機転の利く人もいる。彼女たちの適性を見抜き、手伝ってもらうことで、俺たちの仕事はとても効率的になっていったのだ。

「ここにいる内子（うちこ）……この国では子女というのかの？　彼女らだけでも、これだけのことを成すのじゃ。況や貴族たちを置いてをや。

やり方次第じゃ。どうやって、あの者たちを巻き込むかじゃの」

「別に難しいことではありませんわ、帝様。その人のことをよく見て、上手にできるところを褒めて、伸ばしてあげればよいのですわ。彼女たちの親御様も、きっと素晴らしい能力をお持ちだと思いますわ」

「そうじゃな。感謝するぞよ皇后殿。マロはもう一度、ミーダイ国に戻らねばならぬ。そのときのために、この村で今一度、貴族たちを巻き込みながら国としての体制を整えようぞ」

「お手伝いしますよ、帝様」

「私と夫は既に帝様に巻き込まれておりますわ。それに、町衆の方々も、既に帝様に巻き込まれておりますわ。帝様のお力とご人徳であれば、貴族の方々を巻き込むことなど、すぐにできてしまいますわ」

リコがかわいらしい笑みを湛えている。それを見て、帝様も笑顔になっていた。

その様子を見て俺は、きっとミーダイ国は復興する。そう確信したのだった。

「さて、私の女神（リコレット）を手に入れるためにはまず、どう動くべきかな……」

「ヘイズぅ～。顔色が赤くなっておるな。珍しいのう」

腕を組みながら窓の外を睨むヘイズの顔色は赤く、そこには、不気味な筋隈が浮かび上がっていた。言うまでもなくこれは高位の妖狐を表すものであり、自室の中とはいえ、これを誰にも見せぬように振る舞ってきた、用心深いヘイズにしては珍しい光景であった。

その彼の背中越しに抱き着いているのは、エルフ王の娘、ミークだ。彼女は一糸まとわぬ姿のまま、なまめかしい姿態をヘイズの体に擦り付けている。

「その赤黒い筋が顔に出てきたのは、いつ以来じゃ？」

「これは……私としたことが。こんな失態は、少なくても、数百年ぶりだな」

「そのときは、なにがあったのじゃ？」

「君だよ」

「妾か？」

「君をエルフの郷から奪うときだ。あのときは、全力でいかなければ君を連れて逃げおおせなかった」

「フフフ。相変わらず口が上手いの。で、今回の女子（おなご）は、それほどのものなのか？」

「ああ、私のこれまでの中で、最高の女性だよ」

「フフフフ、アハハハハハ。ヘイズはいつもそう言う」

ミークは腹を抱えて笑い転げている。その光景を見ながら、ヘイズは苦笑いを浮かべながら、リコレットを手に入れるための方策を、頭の中で思い描くのだった。

第三百一話　滅ぶ者と生まれる者

湖のほとりに建てられた、巨大な城が炎に包まれている。真っ赤な炎が、真っ白い城壁に映えて、得も言われぬ美しい光景を見せている。ふと視線を落とせば、そこには城を囲む城塞都市があり、そこからも火の手が上がっており、あちこちから黒煙が空に向かって伸びている。

「……何と美しきことよ」

白毛の馬に跨り、銀色に輝く鎧を着た男が、誰に言うともなく呟く。彼は満足そうに頷きながら、ゆっくりと振り返り、控えていた家来たちに向けて口を開く。

「もっと火矢と火魔法を放て。あの街、あの城……全てを焼き尽くすのだ。その業火で……天を焦がそうぞ」

片膝をついて控えていた男たちは一斉に一礼をして、素早く馬に跨り、風のように消えていった。男は再び踵を返して、燃え盛る街を眼下に見下ろす。

「もう少し骨があると思ったのだが、拍子抜けじゃな。魔法都市が、聞いてあきれるわ」

あきれたような、しかし、満足そうな微笑みを浮かべながら男は呟く。その傍に、一人の男の影が近づいて来た。

「終わったのか？」

「はい、今しがた」

「そなたも、物好きな男だな、オクタ」

男はチラリと視線を向ける。そこには、鎧を身に付け、片膝をついたオクタの姿があった。

「我が愚策をお聞き届けいただき、感謝申し上げます、陛下」

「オクタのことじゃ、何か策があるのであろう？」

ニヤリと笑みを浮かべているのは、タナ王国国王、タナ・カーシ・ヴィルだ。そんな彼に対して、オクタ＝妖狐・ヘイズは、恭しく首を垂れ、ゆっくりと口を開く。

「いいえ、ただ、美しい女が無残な死を遂げるのが、哀れに思ったからでございます」

「フフフ……言いおるわ。で、女王とその娘たちだけを逃がしたのは、どういう狙いがあるのじゃ？」

「……なに、簡単なことです。皆殺しにしてしまっては、わが軍の強さを広めてくれる者がいなくなるからでございます」

「なるほどな。この戦闘の一部始終を見ていた女王なれば、我らの強さ、恐ろしさを存分に語ってくれような」

「しかも、人の話には尾ひれがつきます。おそらく数か月後には、多くの国が我が国に恐れをなして、臣下の礼を取ることになりまし

ょう」

「フフフ、これから先が、楽しみだな」

「はい」

そう言って二人は、笑みを交わし合った。

……5月も半ばになり、蒸し暑さを感じるようになった。そんな中、アガルタの迎賓館ではちょっとした緊張感に包まれている。それは、帝様の皇后さまが産気づき、今まさに新しい命が生まれようとしているからだった。

産室にはメイを始め、ルアラとペーリスがその手伝いをしている。加えて、主治医であるターマも一緒に中に詰めていた。

皇后さまが産室に入って5時間。俺と帝様、そして結界村から来たダジョーダとナディーンという二人の貴族が待機用に設けられた部屋で、今か今かと吉報を待っていた。

「……なかなか生まれて来ぬのう」

帝様はため息交じりに呟く。もう、何度この言葉を繰り返したか。彼は落ち着きなく部屋の中をウロウロと歩き回り、窓の外を見つめては、しばらく物思いにふけっている。

「帝様……このくらいお産にかかるのは、よくあることでございます」

「そうです。私のオクなど、丸一日お産で苦しみました。それに比べれば、まだ大したことはありません」

「ま……丸一日……」

彼は目を見開いて驚き、その表情のままゆっくりと俺を見た。どうやら、今の話、マジっすか、と聞いているようだ。

「俺にもよくわかりませんが、女性のお産は、場合によると丸一日以上かかる場合もあるようです。特に初めての出産は、時間がかかるみたいですね。妻のリコレットなども、長女を出産したときは、ほぼ一日かかりましたから……」

「さ……左様か……。オクも心配じゃが、ドーキも……な」

帝様がドーキのことを心配するには訳がある。

以前から子供が生まれたときの産湯には、ドーキの店の竈の火を使うと帝様は言ってきた。その意思を汲み、ドーキは皇后さまの陣痛が始まったと聞くと、すぐにミーダイ国に転移して、竈に火を灯し、それをアガルタに持ってきた。産湯はそれで沸かしているのだが、火が消えるなどの不測の事態に備えて彼は、それ以降もずっと店で火の番をしているのだ。

ちなみに、ドーキはアガルタに住まいを移しても、毎日ミーダイ国に帰り、帝様の朝食を作り続けていた。迎賓館でも食事には全く不自由はしていないのだが、帝様はドーキが作る素朴な味を愛していたし、また、ドーキもそれを望んだのだ。ただ、彼の餅やお菓子を作るのには、きれいな水とサイサと呼ばれる殺菌性に優れた葉っぱ

が必要なのだそうで、彼はその煩わしさも厭わず、毎日せっせと往復を繰り返した。そういうこともあって、帝様の食卓には、ドーキの菓子が並び、皇后さまもそれを食べながら滋養を蓄えていったのだ。

ちなみに、ドーキは毎日アガルタとミーダイ国を往復していたおかげで、少し魔力が上がり、今では一日に数回は転移できるようになっていた。

だが、お産は夕方になっても終わる気配を見せなかった。定期的に迎賓館のスタッフが報告に来てくれるのだが、いずれも、まだ生まれていませんという報告ばかりだった。そのうち帝様も歩き回るのを止め、じっと椅子に座って待っているようになっていた。

俺は一旦仕事に戻り、陽が落ちて来た頃に再び部屋を訪れたのだが、そこには明かりも点けず、薄暗い部屋の中で、微動だにしない三人の男たちの姿があった。しかも、全員にツノが生えている。一瞬だけ見ると、かなり怖い光景だ。

シーンと静まり返った部屋の中。そこには言葉を発することすら躊躇われる緊張感があった。一旦、食事でもして、休憩しませんかという言葉をかけようとしたとき、帝様が突然立ち上がった。

「……来た」

ダジョーダとナディーンは顔を見合わせている。

「……帝、何が、来たのですか？」

「走ってくる音が、聞こえる」

俺の耳にはそんなものは全く聞こえない。一体どうしたことかと思っていると、不意に俺の耳に聞きなれない音が聞こえた。

パタパタパタパタ……。

その音は徐々に大きくなっていき、部屋の扉の前でパタリと止まった。そして、ノックの音と共に扉が乱暴に開かれ、部屋の中に女性の声が響き渡った。

「失礼します！　……あれ？」

部屋が真っ暗なので、驚いている。俺は素早くライトの魔法を出して明るくする。扉の前に立っていたのは、何とメイだった。

「メイ、どうした？」

「ご主人様……。あっ、ええと……お生まれになりました」

「生まれたか！　して、オクは？」

「皇后さまはお元気です。お生まれになったお子様もお元気です。元気な、元気な男の子です！　日嗣の皇子、あれましぬ、です！」

「おおっ！　男子か！」

「親王様のご誕生おめでとうございます」

「おめでとうございます」

ダジョーダとナディーンが口々に祝いの言葉を述べている。俺も彼らに交じって祝いを述べる。

「よければ帝様、産室にお越しください」

「うむ」

ダジョーダは結界村に報告に行くと言って部屋を出ていき、ナディーンはこの部屋で待つという。俺は帝様を伴って、メイと共に産室に向かう。

「あ、リノス様」

部屋の前にはドーキが立っていた。帝様はその姿を見つけると、彼に駆け寄り、両手を取って、深々と頭を下げて礼を言った。

「此度のこと、誠に、誠に、感謝じゃ」

「そんな……お手をお上げください。感謝だなんて……」

帝様は、恐縮するドーキに何度も礼を言いながら、メイに連れられて、部屋の中に入っていった。

「ドーキ、ご苦労様」

「いいえ。このくらい、何でもないことです。お生まれになったのは、親王様ですってね。本当に、我がことのようにうれしいです」

そんな話をしていると、廊下が何やら騒がしい。一体どうしたことだと思っていると、鎧を装備した兵士が走ってくるのが見えた。彼

は俺の傍までくると、片膝をつき、早口でまくし立ててきた。

「リノス様、こちらにおいででしたか。恐れ入りますが、アガルタ軍本部までお戻りください。一大事です」

「どうした？」

「魔法国家のサルファーテの都が陥落したとの知らせが入りました。また、タナ王国が軍を動かした模様です！」

「また、タナ王国か……」

俺はゆっくりと天を仰いだ。どうやら、新しい命の誕生を、ゆっくりとは祝わせてくれないようだ……。

第三百二話　投げられた賽

アガルタ軍本部に戻ると、そこにはラファイエンス以下、主だった者が全員、顔を揃えていた。驚いたことに、サダキチもテーブルの端にチョコンと立っている。体が小さいので、一見すると、何かの彫刻に見える……そんなことを考えながら俺は、席に着く。

「サルファーテの都が陥落したって？」

「ああ、間違いない情報だ。まずはテーシの報告を聞いてくれ」

マトカルに促されて、一番末席に控えていたポーセハイが立ち上がる。

「お初にお目にかかります。サルファーテに留学しておりました、テーシです」

彼はポーセハイの中でも、１、２位を争うほどの回復魔法の使い手だ。将来はおそらく、ＬＶ５の回復魔法を習得するであろうと言われている。チワンを始め、ポーセハイたちはこの男に大いなる期待をかけていて、そのため、世界最大にして最高の魔法使いが集まるサルファーテ国の都に留学させていたのだった。彼は落ち着いた声で、ゆっくりと説明を始めた。

「サルファーテ国の都、ハイセルにタナ王国の軍が突然侵攻してきましたのが、５日前です。サルファーテ側は、タナ軍が国境に向かっていることを全く知らなかったようです。国境を守っていた防衛軍はわずか１日で総崩れとなり、タナ軍は雪崩を打ってハイセルに

至りました。都では、約３０００名もの魔法使いが前線に立ち、侵攻を食い止めようとしましたが、なす術もなく敗れ、わずか3日間の攻防で陥落しました」

「俄かには……信じられないな」

マトカルが絶句している。その気持ちはよくわかる。何せ、サルファーテといえば、世界屈指の魔法大国なのだ。確か、世界に十数人しかいないＬＶ５のスキルを持つ魔法使いも、この国には数名いたはずだ。それもあって、この国には世界中から魔法を習い、研究しようと数多くの留学生が訪れており、アガルタも、テーシを始め、数人の魔法使いを留学させていたのだ。

そうしたこともあり、サルファーテ国、特に都のハイセルは、かなり強力な魔法で街全体が守られており、ちょっとやそっとでは陥落どころか、城壁の中に入ることさえ難しいと言われていた。というのも、都の中にはＬＶ４の結界魔法が使える者が十数名おり、ＬＶ３の結界魔法に至っては、扱える魔法使いが百名近くいると聞いていた。これらの結界師が全員で何重にも結界を張れば、かなりの防御力になる。俺が全力で攻めてもその結界をブチ破るのは骨が折れるだろう。さらに、攻撃に特化した魔法使いが１０００名以上いるのだ。まさしくハリネズミのような都市なのだが、それをわずか３日で陥落させたのだ。マトカルが驚くのも無理はない。

俺はマトカルをチラリと見て、すぐにサダキチに視線を向ける。

『サダキチ達は、この戦闘を見たのか？』

『はい。ほぼ、一方的な戦いでした』

『詳しく聞かせてくれ』

『国境を突破したタナ軍は、ものすごい速さでハイセルに迫り、包囲しました』

『速さ、というのは？』

『全員が騎馬隊だったのです』

『なるほど、続けてくれ』

『都を包囲したタナ軍は、まず、弓で攻撃を仕掛けました。その攻撃は防御していたようです。そのときは攻撃を止め、一日後に再び弓での攻撃を行いました。その日も攻撃はそれで終了したのですが、明けて三日目にタナ王国軍が突撃を開始し、城門が破られてからは一方的に……』

『なるほど。ハイセルからは攻撃しなかったのか？』

『一日目と二日目は城壁の上から激しく攻撃をしていました。ですが、三日目になりますと、どういうわけか魔法での攻撃は、ほぼ皆無でした』

『皆無……か』

俺はそこまで聞くと、再びテーシに視線を向けた。

「テーシ、都の中はどうだった？」

「はい、都を囲まれた当初は、タナ軍の放った矢が、ほとんど被害

がなかったこともあり、皆の士気は高かったのです。しかし、二日目になると途端に魔法使いが倒れ始めたのです」

「魔法使いが、倒れ始めた？」

「はい。私は後方で治癒魔法担当していたのですが、夜にかけて魔力不足と思われる症状で運び込まれる人が激増し、夜が明ける頃には前線に出ていた魔法使いのほとんどが戦闘不能になっていました」

「おそらく、魔吸石の仕業かな？」

ラファイエンスが誰に言うともなく呟く。俺は彼に視線を向け、ゆっくりと頷く。

「おそらくは、そうでしょう。ところでテーシ、ハイセルには騎士や歩兵はいなかったのか？」

「いいえ。居るには居ましたが……」

「兵数はどのくらいだ？」

「おそらく、１０００程度かと」

「それじゃ、衆寡敵せずだな」

「仰ることはごもっともです。サルファーテ国も、自国の魔法技術の高さに胡坐をかいていた点も、この敗戦の一因と思います。ですが、魔法にかけては世界最高のスキルと技術を持った国が、わずか数日で灰燼に帰すというのは……今でも信じられません」

俺はテーシのその言葉に頷きながら、サダキチに念話を送る。

『サダキチ達は、タナ軍がサルファーテに向かったことは、いつ知ったんだ？』

『わかりませんでした。気が付いたら、サルファーテ国の国境付近に軍勢が侵攻していたのです』

「サダキチ達の目を掻い潜ったか……。運もよかった……か？」

俺は誰に言うともなく呟く。

「問題はだ」

ラファイエンスが立ち上がって口を開く。

「問題は二つある。一つが、今、テーシが報告したように、世界最高の魔法技術とスキルを持つサルファーテ国が滅びたこと。これを受けて我々は、魔法での攻撃と防御について再度、検討する必要がある。要は、リノス殿の結界だけに頼っていてはいかん、というわけだ」

その言葉に、マトカルは俯き、クノゲンは苦笑いを浮かべている。そんな様子を見ながら、老将軍はさらに言葉を続ける。

「もう一つが、タナ王国の後ろには、間違いなくクリミアーナが控えているということだ。今回滅ぼされたサルファーテ国は、むしろクリミアーナとは距離を置いていた国だ。当然、我が国とも距離を置いていた、言わば独立した国であった。その国を攻撃したということは、これはとりもなおさず、クリミアーナに組さない国は滅ぼ

すという意思表示に他ならない。敵はタナ王国だけではない、クリミアーナ教国、そして、それに連なる国々たちだ」

彼はそこまで話をすると、小さなため息をつき、声を落として、再び口を開いた。

「つまりこれは、世界を二つに割った、これまでにない大規模な戦争になる可能性がある、ということだ」

その言葉を聞いて、マトカルの背筋が伸びていく。俺はそれを見ながら、ゆっくりと口を開く。

「将軍の言う通りだ。俺たちは早急に今までの戦略を見直さなければならないな。特にこのアガルタの防衛についての策はもう一度練り直す必要があるだろう。まずは、そのことについてクノゲンを中心に策を練ってみてくれ。敵は恐ろしく速い機動力を持っているみたいだから、それも念頭に置いてくれ。将軍とマトは、これまでの軍の編成を一度見直してくれ。魔法使いが倒れてしまった場合の戦い方というのは、想定していないんじゃないか？　昔のように、槍を持って突撃……というのも、違う気がする。それは、シディーたちドワーフたちとも一緒に考えてもらいたい」

「承知した」

「マト、頼むぞ」

「……わかった」

「あの……リノス様、恐れ入ります」

突然、テーシが口を開いた。俺は思わず彼に視線を向ける。

「どうした、テーシ」

「実は、ハイセルの都から脱出するとき、私の同胞らと共に、サルファーテ国のルファナ王女も一緒にお救いしたのです。そのルファナ様が、是非、リノス様にお会いしたいと言っておられます」

「その、ルファナ王女とは、どんなお方だ？」

「ハイセルの戦闘において、最前線で戦っておられた司令官の一人です」

「恐らく、ハイセルにおける戦闘の全てを知る人物でしょうな」

ラファイエンスが鋭い目つきになって口を開いている。その話に、マトカルも大きく頷いている。

「リノス様、ルファナ王女から戦闘の様子を聞いた方がいい。こういうことは早い方がいいな」

「……そうか、わかった。テーシ、その王女様は、今から会うことはできるのか？」

「可能だと思います。ルファナ王女様も一刻も早くお会いしたいと仰っていましたので」

「わかった、では、今から会おう。……ここに来てもらった方がいいかな？」

俺はラファイエンスたちに視線を向ける。彼は黙ったまま、大きく頷いた。それが合図であったかのように、テーシは足早に部屋を後にしていった。

第三百三話　ルファナ王女

コツ、コツ、コツ……。

部屋の外から、廊下を足早に歩く音が聞こえてくる。そしてその音は俺たちが居る部屋の前で、ピタリと止まった。

扉が開かれると同時に、俺たちは起立していた。誰が命じたわけではない。何故か皆一緒に立ち上がったのだ。俺はただ、王女がここにやって来るにあたって、座ったままで迎えては失礼にあたると思ったから立ち上がったのだが。

ただ、その思いは、全員が同じだったらしい。

部屋に入ってきたのは、痩せた長身の女性だった。彼女の姿を見た瞬間、全員が一礼をする。あまりの連帯感に思わず見入ってしまい、俺はお辞儀をするのを忘れてしまったほどだ。

如何にも重そうな金の鎧を装備したルファナ王女は、俺たちの姿を見て一瞬、目を見開いた。まさかこんな会議室に通されるとは思わなかったのか、はたまた、ラファイエンス以下、集まった全員が一糸乱れぬ連携で立ち上がり、一礼をした姿に驚いたのか……。おそらくそのどちらもだろう。

「大変な中、わざわざお呼びだてして申し訳ありませんでした。アガルタ国国王、バーサーム・ダーケ・リノスです」

彼女はスッと視線を俺に向ける。そしてゆっくりと俺に向き直りな

がら片膝を付き、口を開いた。

「サルファーテ王国の第四王女、サルファーテ・リン・ルファナでございます。以後、お見知りおきを」

俺はルファナ王女に椅子に座るように勧める。彼女が着席したのを見計らって、俺たちも席に着く。

「こんな所にお呼びだてして申し訳ありませんでした。ただ、この席には、アガルタ国軍の総司令官であるラファイエンス以下、軍の幹部が集まっています。ルファナ王女のお力になれるのではと思いまして、こちらにお越しいただきました」

俺の説明に納得がいったのか、彼女はゆっくりと頷き、老将軍たちを見回しながら口を開く。

「名将・ラファイエンスの御名は私も聞いています。お会いできて光栄です」

老将軍が恥ずかしそうにニヤリと笑う。ルファナ王女はその様子を見ながら、さらに言葉を続ける。

「アガルタ王は実に優秀な軍をお持ちです。いや、隠さずとも私には分かります。とても訓練が行き届いています。しかし、その優秀な軍も、タナ王国軍にかかればものの数日で蹂躙されるでしょう。どうか、世界の国々に、あの国の悪辣さを伝えていただきたいのです。そして、世界の国々と心を一つにして、タナ王国軍をこの世から葬り去ってほしいのです」

彼女はそこまで一気にしゃべると、フウと小さく息を吐いた。俺は

ラファイエンスたちに視線を向ける。それに気づいた彼は、ゆっくりと頷いた。このルファナ王女の話を額面通りに受け取らず、冷静に判断を下しながら聞いていけと俺に伝えているのだ。

王女はそれから一気に、まくしたてるようにしてタナ王国軍との戦闘の詳細を語った。

まず、突然国境付近に現れた数万の王国軍は、易々と国境を突破し、都であるハイセルに殺到した。タナ軍は騎兵を中心とした編成であり、いわゆる、その機動力を活かした電撃作戦を実行したようだった。

「分厚い鎧を着た騎兵が集団で突撃してくるのです。我々の歩兵や騎兵ではとても太刀打ちできなかった」

王女は悔しそうに唇を噛む。戦いは都での籠城戦に移った。この地点ではサルファーテ側はまだ、自分たちが負けることなど想定していなかったようだ。数千を超える魔法使いを擁し、加えて豊富に蓄えられた食料、堅牢な城壁……。ひと月やふた月は楽々と持ちこたえられる、そう考えていたのだそうだ。

しかも、タナ王国側からの攻撃は矢を放つのみだった。結界師をそれなりに備え、鉄壁の防御を自認していたサルファーテ側は、結界が破られたことに驚愕したらしいが、その矢は城壁を越えて街に達したものの、それらは建物の壁などに突き刺さり、人への被害は皆無だった。その後、タナ軍は都に突撃して来るだろうと考えていたが、意外にも、彼らのハイセルへの主だった攻撃は、それだけだった。

だが、その後、日を追うごとにハイセルの都を守る兵士たちから、

体調不良を訴える声が激増していった。しかもその大半が魔法使いであり、サルファーテ側の戦力は、一気に落ちたのだった。

「突然兵士たちがバタバタと倒れていくのです。後方にいた治癒魔術師たちに応援を頼んだが、全く回復しない。症状からＭＰが枯渇しているのではと考えて、ポーションを飲んでみると、一時的には回復するのだが、すぐにまた魔力切れを起こす。そうしている間に、タナ軍が突撃を開始し、我々はなす術もなく……」

王女は唇をかみながら、小刻みに体を震わせている。

「……魔吸石の威力はかなりのものなのだな」

俺は誰に言うともなく呟く。その言葉に、老将軍が反応する。

「いや、おそらく魔吸石に何か仕掛けをしているのだろう。たった数日で、数千にも及ぶ魔法使いのＭＰを枯渇させるなど、考えられないことだ」

「わかりました、将軍。魔吸石については帝様と一度話をしてみましょう。その上で、シディーたちドワーフにも協力をしてもらいましょう」

俺は再びルファナ王女に視線を向ける。

「ところで、ルファナ王女。あなたは前線で指揮を執っていたと聞いています。多くの魔法使いが倒れていったとのことでしたが、あなたの体調は大丈夫だったのですか？」

「私は……」

王女の目が泳いでいる。一体どうしたことだと思っていると、彼女は恥ずかしそうに口を開いた。

「体調は……問題ありませんでした」

「ＭＰは枯渇しなかったと？」

「はい」

「う～ん。何故、他の魔法使いのＭＰが枯渇して、王女のＭＰは枯渇しなかったんだろうな？　その鎧かな？」

「い……いや……その……」

「どうしました？」

「私は……魔法が苦手で……」

「あ、そうなのですね。だから、指揮官に？」

彼女は顔を真っ赤にしながら、頷いた。それにしても不思議なこともあるものだ。ＭＰが多いであろう魔法使いには多大な影響があるが、ＭＰが少ない王女には影響がほとんどなかった。と、すると、俺のＭＰは人並外れて多い。もし、魔吸石の効果がＭＰ量に比例するのであれば、かなり厄介なことになるんじゃないのか。これは早く対策を打たねばならないようだ。

ちなみに、サルファーテ王家は代々、優秀な魔術師や魔導士を輩出してきた。従って、ＭＰ量や扱える魔法のレベルによって、その人

の良し悪しを決める傾向にあるのだと言う。そのため、ＭＰ量が少なく、それ故に扱える魔法も少ないルファナ王女は、王家の中ではどちらかというと落ちこぼれとして冷遇されていた。そのために、王宮を飛び出すような形で、軍関係の仕事に就いたのだという。だが、テーシからの報告によれば、彼女は殺到するタナ軍を引き付けつつ、多くの人々を城外に逃がしたのだと聞いている。その状況判断や指示内容を聞いているうちに、この人は指揮官としてかなり優秀な人であるという印象を持った。それは老将軍もマトカルも同じだったようだ。

「いや、ルファナ様、何も気に病むことはない。あなたはかなり優秀な指揮官だ」

マトカルがよく通る声で口を開く。その話に、アガルタ軍幹部たちが大きく頷く。

「し、しかし……」

「なにも戦いに勝つだけが指揮官の役目ではない。優秀な指揮官は、いかにして部下や兵士たちの命を守るのかが大切なのだ。兵士たちに死なれてしまってはそれまでだが、生きていれば、捲土重来を期すこともできる。多くの人の命を救った貴女は、とても有能な指揮官だ。胸を張っていい」

「マトカルの言う通りだ。今、聞きましたお話は、このラファイエンス・オーグ、とても参考になりましたぞ。よく、多くの魔法使いや民衆の命を救われた。お見事です」

王女はどのように返答していいのかがわからないのか、じっと俯いている。そんな様子を見ながら、老将軍は俺に視線を向けてきた。

「アガルタに到着後、すぐにお呼びだてして申し訳ありませんでした。どうぞ今は、ゆっくりとお休みになって下さい。誰か、王女を案内してくれ！」

彼女は兵士の一人に案内されながら、部屋を後にしていった。その姿を見届けた俺は、再び全員向けて口を開く。

「さて、これから、本当の作戦会議を始めようか」

部屋にいる全員が頷いた。

第三百四話　仕事始め

新しい年を迎えた。いつもと変わらぬ穏やかな年明けだったが、例年のようなノホホンとした雰囲気ではない。昨年の秋にサルファーテ王国が滅亡したことを受けて、アガルタでは対タナ王国の対策が進められていた。その中心となっているのが、メイ、シディー、マトカルであり、彼女たちはそれこそ、目の回るような忙しい日々を送っていたのだ。

しかも、タナ王国の対策を行うにあたって、かなり財政的な負担がかかることが分かり、それにも対応しなければならなかった。さすがにそれは、フェリスやルアラでは手に余る。そこで、１２月に入った頃からリコが現場復帰し、その驚くべき処理能力で、アガルタの財政を見事に調整してくれていた。

これまでリコが帝都の屋敷で担当していたエリルらの子守は、今はソレイユが嬉々として携わっている。それはもう、子供と同じようになって一緒に遊んでいて、子供たちも、ソレイユをマミーと呼んで懐いているため、これはこれで上手くいっている。

そんな感じで、我が家は総出で事に当たっていたのだが、さすがに正月休みは全員で取ろうということで、ほぼ無理やり休ませることにした。メイやマトカルは根が真面目なために仕事が気になっていたが、そこはシディーが自信を持って問題ないと言い切ってくれたので、彼女たちも安心したようだ。

何より喜んだのが、子供たちだ。いつもは居たり居なかったりする母親がずっと居るのだ。皆、母親にベッタリと甘えている。その中

でもエリルはお姉ちゃんとしての自覚が生まれて来たのか、かなりしっかりするようになり、弟のイデアの面倒も見るようになっていた。

父親としてはうれしいが、こうして成長していって、最後は自立して俺の許を離れてしまうのだろうなと考えると、ちょっと悲しみがこみあげてくる。

そして、正月休みを終え、俺たちはいつもの仕事に復帰した。だが、それからしばらくして、事件は起こった。

1月も終わりになろうとしていたこの日、新年を迎えたあいさつに訪れる貴族や各国の使者の数も少なくなり、ようやく新年のウキウキ感も薄れ、執務室でようやく溜まっている仕事に集中していたそのとき、突然マップが開いた。一体何事かと思って見てみると、都から数キロ離れた草原に赤いマークが示されている。その数およそ50程度。俺は窓を開けてサダキチを呼びだそうとした瞬間に、フェアリードラゴンがタイミングよく現れる。

『敵襲です』

『相手は？』

『アンデッドのようです』

『アンデッド？　一体いつ現れたんだ？』

『わかりません。警戒に当たっていたのですが、突然現れました』

『そうか、わかった。引き続きそのアンデッドを見張ってくれ』

『承知しました』

そう言ってフェアリードラゴンは姿を消した。俺は鈴を鳴らして人を呼ぶ。

「敵襲だ。将軍とマトを呼んでくれ」

兵士が部屋から去ると、俺は誰に言うともなく呟いた。

「ヘイズが、動き始めたかな……？」

しばらくすると、ラファイエンスとマトカルが執務室にやってきた。俺は二人にマップに反応があったことを告げ、どうやらアンデッドが出現したと伝えた。二人は俺の話に、顔を見合わせて、不思議そうな顔をしている。

「なぜ、アンデッドが……？　いや、ない話ではないのだが……」

「ない話ではない、というのはどういうことだ、マト？」

「いやなに、人がアンデッドとして蘇るのは、死体に邪悪な精霊が宿ったり、死んだ者に強い恨みや憎しみがあり、それが空気中の魔力を取り込んだりする、というのが一般的だ。だが、昨年末から今まで、アガルタ国内で５０名もの人間が死んだ、などということは聞いたことがないし、その上、このアガルタの精霊はソレイユ殿が完璧に支配下に置いている。アンデッドが出現するなど……解せんのだ」

そんなマトカルに、老将軍はいつものニヒルな笑みを浮かべたまま、諭すように口を開く。

「いや、おそらく、リノス殿を襲った者の仕業だろうな。転移魔法陣を使ったのだろう」

「しかしだ、将軍。だとすれば、敵の狙いが分からない。都を攻撃するにしては人数と言い距離と言い中途半端だ」

「バクスオン公爵ではないのかな？」

老将軍の一言に、マトカルはハッとした表情を浮かべる。

「なるほど！　確かにローウィン帝国のバクスオン公爵が、本日出立される。公爵が襲われると……」

「アガルタの信頼は落ちるな。しかも、国内にアンデッドを放置したとなれば……」

「日和見的な国は一気にアガルタから離れていく……」

そんな会話を黙って聞いていた俺は、二人に視線を向けながら口を開く。

「まずは、アンデッドを討伐しなきゃな。バクスオン公爵は……まだ出発していないよな？　こんなときに出発が遅れているとは、何とも巡り合わせのいい人だな。よし、俺が行こう」

椅子から立ち上がろうとする俺を、マトカルが慌てて止めに入る。

「待ってくれ！　敵はもしかすると、リノス様をおびき寄せようとしているのかもしれない。ここは、私が行く。私に行かせてくれ」

俺はラファイエンスに視線を向ける。彼はニッコリ笑って頷く。俺はゆっくりと息を吐きながら、マトカルに向かって口を開く。

「じゃあ、マト、お願いしていいか？　俺が行かない代わりに、クノゲンを連れて行ってくれ。兵士も、出来るだけ精鋭を連れて行ってくれ」

「わかった」

俺とマトカルのやり取りを見て、老将軍がフッフッフと笑みを漏らす。

「将軍、どうしました？」

「いや、まだまだおアツイなと思ってな。この様子であれば、近いうちにもう一人、家族が増えそうだな」

俺とマトカルは顔を見合わせながら、絶句する。よく見ると、マトカルの顔は真っ赤になっていた。

リノスの執務室を出たマトカルは、早速クノゲンと２００騎の兵士と共に、アンデッドが出たと言われる地点に向かって出発した。そしてそれは、すぐに見つかった。丘を下った窪地に、アンデッドたちが暴れていたのだ。マトカルは兜を脱いで、その光景を凝視する。

「……不幸中の幸いだな。かなり凶暴なアンデッドだ。すぐに討伐

しよう」

マトカルは再び兜をかぶり、馬を走らせようとするが、それをクノゲンが引き留める。

「お待ちください。ここは我々にお任せください。マトカル様はこちらでお待ちください」

「いや、そういうわけにはいかない。まず私が……」

「いや、相手はアンデッドです。マトカル様お一人で斬り伏せられては、連れてきた兵士たちの訓練になりません」

クノゲンはニコリと笑う。マトカルはしばらく考えているような素振りをしていたが、やがてゆっくりと頷いた。

「私に続け！」

クノゲンの号令一下、兵士たちは統率された動きでアンテッドに向かっていく。

丘の上から戦闘を眺めていると、討伐は一方的だった。アンデッドたちは激しい抵抗を見せたが、所詮は丸腰であり、武器、防具を装備したアガルタ軍に傷一つ付けることなく、次々と倒されていった。

その様子を眺めながらマトカルは、一体、このアンデッドにはどのような意図があったのかを考える。見たところ、何か軍勢が隠れているようには見えず、魔法で攻撃されるわけでもない。一瞬、アガルタ軍をおびき寄せておいて、別動隊が都を襲う作戦かとも考えたが、都にはラファイエンス率いるアガルタ軍本隊がいる。その上、

リノスもいるのだ。簡単に攻撃されるとは思えない。と、すれば、敵の狙いは何だったのか……。そんなことを考えていると、自身の周囲の景色が、ゆっくりと動いていることに気が付いた。

ふと我に返り周囲を見回す。すると、マトカルの愛馬がゆっくりと森に向かって走っていることに気が付いた。

あり得ないことだった。自分の指示なく勝手な振舞いをする馬ではない。マトカルは訝りながらも手綱を引いていく。

「おい……どうしたのだ……ホーク、どう、どう、どう」

何度手綱を引いても、馬は止まることなく歩き続ける。馬上で混乱しながらも必死で止めようとするマトカルだったが、ふとした瞬間に、馬が突然その歩みを止めた。気が付くとそこは森の中であり、目の前には大木が立ちはだかるように生えていた。

「どうしたのだ、ホーク……」

愛馬の首に手をやりながら、彼女は語りかける。

……ドスッ！

不意に彼女の肩に衝撃が走った。マトカルはゆっくりと愛馬の背中に倒れていった。

第三百五話　マトカルと子狐

「……マトカル様！」

鎧を装備した男たちが声を上げる。その視線の先には、ゆっくりと森の奥から馬を操りながらこちらに向かって来るマトカルの姿があった。

「大丈夫だ、心配するな」

「一体、どうされたのです？」

「いや、このホークが、何かを感じたのだろうな。突然歩き出したのだ。今までこのようなことはなかったから、少々私も驚いてしまった。だが、ホークはさすがに賢い馬だ」

「それが……その、肩の……」

兵士たちが驚くのは無理もない。マトカルの肩に、黄色い子狐が巻き付くようにして乗っていたからだ。だが、彼女はそんな兵士たちを見て、にこやかに笑みを讃える。

「いや、突然木の上から落ちて来たのだ。どうやら怪我をしているらしい。おそらくホークはこのことを感じたのだろう。だとすれば、見捨てていくのも……な」

マトカルは肩に乗せている子狐にチラリと視線を向けると、再び微笑む。そして、いつもの表情に戻り、口を開く。

「それで、アンデッドたちは？」

「すべて討伐しました」

「そうか。ご苦労だった。念のため、死体は全て焼却せよ。再び復活することも、ないとは言えないからな」

「はっ」

兵士の返答に頷きながら、マトカルは馬を走らせた。

マトは意外に早く迎賓館に帰ってきた。アンデッドは問題なく討伐され、兵士たちの被害もゼロだったようだ。普段はいの一番に直接俺に報告に来るマトなのだが、今回は珍しく伝令を使って報告してきた。一体どうしたことだと尋ねたところ、何と子狐を拾ったのだという。そして、マトは帰ってくるなりその子狐を手当てし、ミルクを与えるなどして介抱しているのだという。

「ふぅ～ん。マトが……か。何だか珍しいな。だが、子狐というのが気になるな。もしかするとおひいさまの眷属かな？　よし、一度見に行ってみるか」

そう言って俺は、伝令の兵士にマトがいる部屋まで案内してもらったのだった。

「リノス様！」

部屋に入ってきた俺に、マトは驚いていた。だが、すぐにいつもの冷静な顔に戻り、テーブルの上の子狐に目をやった。子狐はミルクを飲みながら、与えられたパンを食べている。どうやらかなりお腹がすいていたようだ。

「この子狐か……」

「いや、ホークがいきなり森に向かって歩き出したのだ。一体何事かと思っていたが、突然木の前で止まったかと思うと、この子狐が落ちてきたのだ。あの馬は頭のいい馬だ。きっと何かを感じたのだろうと思ってな。それで連れてきたのだ」

「そうか、もしかするとおひいさまの眷属じゃないかと思っていたんだが、毛の色が黄色だから、それも違うようだな」

「いや、むしろ、人間が狐の姿にされているのかもしれないな」

「え？　それじゃまさに美女と野獣みたいだな」

「美女と野獣？」

「あ、知らないよな？　うん、確かに知らない話だな。あるとき、美しい王子がいたんだが、傲慢でわがままだったんだ。で、その王子に老婆が尋ねてくるんだが、その老婆を邪険に扱ったら、老婆が魔女でな。醜い獣の姿に変えられてしまったんだ。で、真実の愛を見つけるまでその呪いは解けない……。そんなお話だ」

「醜い獣……。獣に真実の愛など、どうやって見つけるのだ？」

「あ、いや、そういうことじゃなくて……。その……何て言うのか

な？　獣の姿をしているが、人間の心をもっているというか……な。まあ、結局、真実の愛を見つけて、姿が人間に戻って、めでたしめでたしになったと記憶しているんだが、この子狐も、そんな感じなのかな？」

俺はそんなことを言いながら、子狐に向けて鑑定スキルを発動させる。

「なっ！　うわっ！？」

「どうしたのだ、リノス様！？」

俺が思わず飛びのくようにして傍を離れたので、マトカルが驚いている。俺は眉間に皺を寄せながら、彼女に向けて口を開く。

「この子狐、タダ者じゃないぞ」

「え？　……どういうことだ？」

「何だか、この子狐には、何重もの魔法がかけられているようだ」

「なぜ、そう言い切れるのだ？」

「色んな魔法を感じるんだよ」

実際、この子狐を鑑定しようとすると、頭の中に砂嵐のようなイメージが爆音とともに浮かび上がったのだ。言うなれば、昔のブラウン管テレビで、受信できないチャンネルを合わせたときに出ていた、あの映像と音だ。……平成生まれには、わからないかもしれない。近くの昭和生まれの人たちに聞いてみるといい。何とも言えぬイヤ

な音だったのだ。

それでも、この子狐からは断片的ではあるが、情報を得ることはできた。どうやらこの子はまだ幼い少女のようだ。色々な色のついた球体が、この少女を包んでいる場面が見えた。おそらくこれは、魔法が何重にもかけられていることを表しているのだろう。念のために、魔力探知を発動してみたところ、確かに、この子狐からはかなり強力な魔力を感じる。

「これを解くためには……相当大変そうだな」

俺はそんなことを呟きながら子狐を見つめる。彼女は、その視線を怖いと思ったのか、トコトコとマトカルの所に歩いていき、キュイキュイと可愛らしい鳴き声を上げた。マトカルはその子狐を愛おしそうに抱き上げる。

「早く、元の姿に戻れるといいな」

そう言ってマトは子狐に微笑みかけた。その後彼女は、子狐を肩の上に乗せ、再び俺に向き直った。

「リノス様、一つお願いがあるのだ」

「どうした？」

「リコ様を呼んで欲しいのだ」

「リコを？　何故だ？」

「ちょっと、緊急に相談したいことがあってな」

「何？　どうした藪から棒に？」

訝る俺に、マトはじっと視線を合わせたまま黙っている。

「すまん、女同士でないと、いけない話なのだ」

マトカルのその表情は真剣そのものだ。俺はいつもとは違うその雰囲気に押されてしまう。マトが抱えている悩みならば、いくつか心当りがあるが、そのことだろうか。いずれにせよ、男たる俺には話しにくい内容であることは間違いない。それならば、子供たちがいる屋敷では相談はしにくいだろう。それに、この迎賓館で仕事中のリコは基本的に忙しい。マトが行けば相談に乗ってくれるだろうが、彼女の仕事の手を止めるのも憚られるだろう。となれば、リコのスケジュールを知っている俺に頼むのは自然なことだ。俺は自分の察しの悪さを恥じながら、申し訳なさそうに口を開く。

「ああ、気づかずにすまなかったな。リコだったら、今の時間であれば出て来られるだろう。でも、そんなに時間はないと思うぞ？夕方４時くらいになるとまた、書類のチェックが始まるだろうから、３０分くらいしか相談に乗れないと思うが、大丈夫か？」

「問題ない。お手数をおかけして、申し訳ない」

マトはスッと一礼をした。俺は気を使う必要はないと言いながら人を呼び、リコにマトカルの部屋まで来るように伝えてくれと命じたのだった。

リコがやって来るまでには時間がある。俺はマトに改めてアンデットが何故、このアガルタで発生したのか、そして、今後の対策をど

うするべきなのかを話し合った。

マト曰く、亡くなった人を埋葬するときに、土葬してしまうと、稀にその死体がアンデットとして復活することがあるらしい。特に古の時代に大規模な戦闘があった場所などでは、そうしたことが起こりやすいのだと言う。今回、アンデッドが出現した箇所は、その昔、ジュカ王国軍とヒーデータ帝国軍が激突し、多くの犠牲者を出した、言わば古戦場であったらしい。ジュカ国内深くにおびき寄せられた帝国軍が、待ち構えていたカルギ元帥が率いるジュカ軍に徹底的に壊滅させられた場所であったそうで、あの場所では相当数の兵士が死んだらしい。

「かなり激しい戦闘だったので、両軍ともに死傷者が多く、死体を荼毘にふせるだけの余裕がなく、穴を掘って死体を埋めたのだろう。割合凶暴で、戦闘力の高いアンデッドが出現するのも、頷ける気がするな」

そんなマトカルの話を聴いていると、部屋の扉がノックされる。どうやらリコが来たようだ。俺が入室を促すと、リコが部屋に入ってきた。だがその直後、俺は驚愕の光景を目にして、絶句してしまった。

……何と、リコの後ろから、もう一人のマトカルが部屋に入ってきたのだ。

第三百六話　本物と偽物

「え？　……な！？」

俺は思わず呆然となる。本当にマトが二人いるのだ。いったいこれは、どういうわけだ？

「リノス様、離れてくれ！　そいつは偽物だ！」

リコの後ろに控えていたマトカルが声を荒げる。いつもの、マトのいい声が部屋の中に響き渡る。

「リコ様、離れてくれ！　そいつこそ偽物だ！」

今度は俺の後ろに控えているマトが声を荒げる。俺は絶対音感は持ち合わせていないが、全く同じ声に聞こえる。そんな中、二人のマトカルは剣を抜き、互いが剣を構えている。

「リコ！」

俺は思わずリコの手を取り、二人から離れる。

「リノス、どちらかが、偽物であることは間違いありませんわ」

そういうリコは、俺の腕を痛いくらいに掴んでくる。顔は平静を装っているが、内心はかなり動揺しているようだ。

「この偽物めぇ！」

「うりゃあ！」

一瞬の間をおいてマトカル同士の斬り合いが始まった。マトの剣術スキルはかなり高く、そこいらの者に負けることはない。だが、二人は互角の戦いを繰り広げていて、どちらかが手を抜いているようには見えない。完全に、ガチで二人のマトカルが戦っている。

「待て！　やめろ！」

俺の一声で、二人はその動きを止めた。まさに一足一刀の間合いであり、どちらかが動けば必死の斬撃を叩き込める距離で、両者は肩で息をしながら睨み合っている。

「まず、二人とも、離れろ！」

俺の一言で、二人は剣を構えて睨み合ったまま、ゆっくりと後退していく。そして両者はお互いが壁に背中を付けるようにして、その動きを止めた。

「二人とも、剣を置け」

俺の声がむなしく響き渡る。二人は俺の声が聞こえなかったかのように、微動だにしない。

「剣を置け。置かないと、偽物と見なす」

俺は無限収納からホーリーソードを取り出し、鞘から剣を抜いた。その様子をチラリと見た二人は、一切警戒を解く気配を見せぬまま、ゆっくりと床に剣を置いた。

「二人とも、こちらに歩いて来い」

二人は睨み合ったまま、ゆっくりと俺たちの所に歩いてくる。何か不穏な動きがあればすぐに対処できるようにと考えているのだろう。二人の歩みが尋常でないくらいに遅い。

「止まれ！」

俺の数メートル前で二人は止まる。ここはまさに俺の一足一刀の間合いだ。俺がその気になれば、致命傷を叩き込める距離だった。

「よし、お前たち二人を調べる。まずは鎧を脱げ。身に寸鉄を帯びず、丸腰となるんだ。おかしな動きをしたら、その瞬間に、斬る」

俺のその言葉に、まずは左側のマトカルが反応した。彼女はさっと横に移動したかと思うと、すぐに鎧を脱ぎ始めた。その様子を見た右側にいたマトカルが、これまた無表情のまま淡々と鎧を脱ぎ始めた。

「あのっ……いや……そこまでせんでも……」

俺はただ、鎧を脱げと言ったのだが、二人のマトカルは一糸まとわぬ全裸になっていた。予想外の展開に、俺は少し戸惑ってしまう。

「私の体は、リノス様が一番よく知っているはずだ。どうぞ心ゆくまで調べてくれ」

右側のマトカルが毅然とした態度で口を開く。俺はその姿を横目で見ながら、左側のマトカルを見る。彼女も俺を見据えたまま、無言

で力強く頷く。どちらも、マトならばそうするだろうと言う振る舞いだ。

俺はリコに耳打ちをして、まず右側のマトカルに向かって歩いていく。リコも左側のマトカルに警戒しながら俺の後ろについて来る。そして俺は、リコと同様、左側のマトカルに注意を払いながら、目の前のマトカルを調べる。髪の毛、顔、首、肩、胸、お腹……。手触りはいつものマトと変わりがなかった。ホクロの位置も、体に刻まれた傷跡も、俺の記憶にあるマトカルだった。彼女は全く無表情のまま、毅然とその場に立ち尽くしていた。

俺はリコを連れて数歩後に下がり、今度は左側のマトカルに向かっていく。そして、右側と同様、髪の毛からお腹まで手で触りながら調べていく。こちらも、手触りといい、ホクロの位置といい、傷跡の位置といい、いつものマトと変わりがなかった。そして俺は、彼女の背中に手を廻して、ゆっくりと腰に向かって下げていく。

「はっ」

思わずマトカルから声が漏れた。その瞬間、俺は目を見開きながら体を離し、呟くようにして口を開く。

「やはり、お前が偽物だ！」

目の前のマトカルがギョッとした表情を浮かべる。その瞬間に、俺はホーリーソードを振るっていた。

「ガハッ！」

不意を突かれたかのような表情を浮かべながら、もう一方のマトカ

ルから声が上がる。俺の剣は、右側の、最初に調べたマトカルの胸を深々と貫いていた。

「な……なぜ……」

「上手く化けられるんだな。完璧だ。だが、俺の目はごまかせん。相手が悪かったな」

そう言って俺は、このマトカルから剣を抜き、そのまま袈裟懸けで斬りつけた。致死傷を負いながらもそいつは必死で体を躱して真っ二つにされるのを防いだが、剣はその左肩を切り裂き、彼女の左腕は床にボトリと落ちた。

「うぐあぁぁぁぁぁ！！」

肩から血を噴き出しながら、そいつは子狐の所に向かっていく。そしてその瞬間、子狐の体からまばゆい光が発せられた。

「ヘイズぅ！」

光の中、幼い少女がそいつを後ろから抱きしめ、そしてその唇を奪っている光景が見えた。ヤツの体がみるみる男の体に変化し、同時に斬られた左腕が再生されている。

「来い！　リコレット！」

光の中から男の声が聞こえる。その瞬間、俺の後ろでガラスが砕けるような音が響き渡った。

俺はそれに目もくれず、光に向かって結界を張る。

「ぬあぁぁぁぁ！！」

男の断末魔にも似た絶叫と共に、その光は徐々に消えていき、やがて姿を消した。

「……逃げやがったか。やはり、ヘイズだったか」

俺は誰に言うともなく呟く。だが、俺の結界から逃げるのだ、肉体にはかなりのダメージがあるはずだ。そんなことを思っていると、マトカルの声が響き渡る。

「リノス様！　リコ様が！　リコ様が！」

俺の後ろにいるはずのリコが消えている。マトカルは眉間に皺を刻みながら、必死で俺に訴えかけている。

「落ち着け、マト！」

俺はチラリと部屋の片隅に目をやる。するとそこに、リコの姿が現れた。

「リ……リコ様……」

はぁぁと腰が抜けたような格好になるマトカル。そんな彼女にリコはゆっくりと近づき、彼女をギュッと抱きしめた。

「マト……よかった……」

俺もマトの傍に行き、片膝をつきながら、彼女に声をかける。

「お帰り、マト」

その言葉に安心したのか、彼女は目からポロポロと涙をこぼし、声を殺して泣き出した。

マトカルが落ち着くのを待って、俺はこれまでの経緯を彼女から聞いた。

森の中で体に衝撃を感じた後、気が付くと木を背にして倒れていた。愛馬のホークの姿はなく、森から外に出てみると、率いていた軍勢も見当たらない。その瞬間、彼女は何かがあったと察知し、リコに念話を飛ばした。彼女曰く、直感的にリコが狙われていると思ったのだと言う。それでリコの状況を確認するために念話を飛ばしたのだ。リコはそれを受けてすぐさまローニを呼び、彼女の転移を使ってマトカルをアガルタの自分の部屋に移動させた。彼女が転移して来るまでの間に、タイミングよく偽マトカルが帰還し、俺が呼んでいるとリコの部屋に伝令が来たのだと言う。それでリコはマトを伴って、やってきたのだそうだ。

「それにしても、リコ様が無事でよかった。一体いつの間に転移していたのだ？」

マトが安心したように口を開く。俺は笑みを湛えながら言葉を返す。

「マトが裸になった後、俺がリコに耳打ちしただろう？　あのときに、リコに姿が見えなくなる結界を張って、同時に、リコの姿を映し出す結界を張ったんだ」

「あのときリノスが、部屋の隅に行けと言ったのですわ。私はその言葉に従って、ただ移動しただけに過ぎませんわ」

「そんなことが……。しかし、どうしてリノス様は、あれが偽物だとわかったのだ？　私自身も、あそこまで似せられるとは思わなかった。剣の癖、歩き方、話し方……。そして体の傷まで……」

「そうだな。確かに見た目は全く一緒だったし、何がすごいかって、マトのスキルまで一緒だったんだ。鑑定スキルを発動させてみたんだが、全く一緒のスキルが表示されていた」

「では……私の過去を、覗いたのか？」

「いや、それには時間がかかるから、敢えてしなかった。そんなことをすれば逃げられると思ったからな」

「一体、リノス様はいつ、偽物を見破ったんだ？」

「二人が剣を床に置いて睨み合っているときだ」

「え？　そんなときによく……見破れたな……」

「簡単なことさ。片一方のマトには結界が張られていて、もう一方には結界が張られていなかった。さすがはヘイズだとほめてやりたいが、俺の神結界まではマネできなかったようだな」

俺はニヤリと笑みを浮かべながら、クックックと笑い声を漏らす。

そんな俺にマトカルは呆れたような声を上げる。

「リノス様も、人が悪い。それならば、あのようなことを言わずと

も……」

「ああ、身に寸鉄を帯びずにってやつか？　あれは本当に武装解除をさせようと思ったんだ。ここまでマトに似せられる相手は妖狐・ヘイズの可能性が高い。体の中にどんなマジックアイテムを持っているのかわからなかったからな。でも、マトが裸になってくれたおかげで助かった。お蔭で、ヘイズの体に触れることができた。マト、お手柄だぞ」

俺の言葉がまだよく理解できないと言う表情を浮かべながら、マトカルは俺を見つめている。そして、ちょっと俯き加減になり、小さな声で俺に口を開いた。

「でっ……では、どうして、私だけ背中と、尻を触ったのだ？」

「ああ、あれか。いや、本物のマトだと確信したかったんだ。ほら、マトは、お尻が……な？」

その言葉を聞いた瞬間、マトカルの顔が真っ赤になった。それを見てリコが俺を睨んでいる。ごめんなさい、調子に乗りすぎました。

俺は照れ隠しもあって、オホンと咳ばらいを一つして、リコとマトを交互に見つめながら、ゆっくりと口を開く。

「妖狐・ヘイズには罠を仕掛けることができた。これが吉と出るか凶と出るか……。いずれにせよ、ダメなら次の手を考えるまでだ。だが、あの妖狐……マジで侮れないな。それに、あの狐に化けた少女も……な。正直、致命傷を叩き込めたと確信していたんだが、あの少女はとんでもない速さでその傷を治癒していたようだからな。リコ、マト、これからのアガルタの体制を、考え直さなきゃいけな

いぞ」

俺の言葉に二人は大きく頷く。その後、マトカルは服を身に付け、リコと共に仕事に戻っていった。その夜、マトは昼間のことが余程恥ずかしかったのか、悔しかったのか、俺を朝まで寝かせてくれなかった……。

第三百七話　戦いの後

「取り逃がしおったか……」

ドスの効いた声が響き渡っている。俺は恐ろしさのあまり、頭を下げて床に視線を落としたままだ。その隣で、ゴンは床に這いつくばりながら、頭の上で両手を合わせている。

俺は前日にあったヘイズの襲撃について、おひいさまの許に報告に訪れていた。それなりにお怒りにはなるだろうなと思ってはいたが、まさかここまでとは正直、予想していなかった。

俺の目の前にはカッと目を見開き、しかも左の目玉が真ん中に寄っているという迫力満点の顔をしたおひいさまが居るのだ。彼女は俺の報告を無言で聞いていたが、やがてゆっくりと両眼を閉じたかと思うと、いきなりカっと目を開いて、今のような表情になった。怖い、怖すぎる……。

彼女の前には、サンディーユが控えている。彼はおひいさまの様子に全く動じることなく、腕を組みながら天を仰いでいる。そして、ふぅ、と小さく息を吐くと、俺たちに視線を移し、ゆっくりと語りかけた。

「まあ、妖狐・ヘイズの襲撃を退けたのじゃ。まずは、大儀であったと言っておこう。リコレット殿がご無事で、何よりじゃった」

俺は無言で頭を下げる。そんな様子を見ながら、サンディーユは再び口を開く。

「じゃが、奥方の一人にほぼ完ぺきに化けおおせるとはヘイズめ、凄まじいスキルを身につけておるのじゃな」

「はい。体つきはもちろんのこと、喋り方、振舞い方、その他諸々の事柄についても、全く妻のマトカルと一緒でした。鑑定スキルを発動しましたが、現れたスキルは全く一緒でした。過去を覗けば違っていたかもしれませんが、スキルまでコピーするとは、ものすごいスキルだと思います。結界を張っていなければ、どうなっていたことか……」

俺の言葉にサンディーユはうんうんと頷く。

「もしかすると、エルフ王の許からミーク様を攫ったのも、そのスキルを用いたのやもしれぬな。それに、ヘイズに抱き着いておったのは、おそらくそのミーク様で間違いはなかろう。もしや命を奪われているのではと思っておったが、まずは無事が確認できて、重畳じゃ」

彼はそう言いながら、ふぅぅぅと息を吐き出した。そして、おひいさまに向き直り、恭しく頭を下げた。

「おひいさま、思うところはおありかとは思いますが、まずは、ミーク姫がご無事であること、エルフ王にお知らせしては如何でしょうか」

その言葉に、彼女は全く表情を変えないまま、ゆっくりと頷く。

「じゃが、あのヘイズのことじゃ。今後ますますヤツの動きは知れなくなるであろうな」

怒りのためか、悔しさのためか、おひいさまの体がわなわなと震えている。そんな様子を見ながら俺は、口を開く。

「そのことですが、おひいさま。実は、妻の体を調べているときに、そのヘイズの体に触ることができましてね」

「ほう」

「できるかどうかはわかりませんが、一応……」

俺は話をしながら、おひいさまの前ににじり寄っていく。そして俺は、おひいさまとサンディーユを交えて、ヒソヒソと話を始めるのだった。

「おい、もうそのくらいでいいよ」

煩わしそうな声を出しているのは、妖狐・ヘイズだった。彼は一糸まとわぬ裸のままベッドの上で仰向けになっている。そしてその体には、これまた一糸まとわぬ裸の少女がまとわりついているのだった。少女はヘイズの声を聞いて、髪をかき上げながらゆっくりと顔を上げる。

「まだじゃ、まだまだじゃ。こんなものではないはずじゃ」

「いや、もう傷は十分に癒えた。もういいよ」

ヘイズの声に、少女はニヤリと笑みを漏らす。

「されど、体はまだまだ妾を欲しておるではないか？」

「……」

「それに、まだ、妾には礼をしてもらっておらんからな？」

「……好きにするといいよ」

「うふっ、ヘイズはそうでなくては。まだまだ、こんなものではないはずじゃ。もっと……もっとじゃ……」

再び少女はヘイズの体に顔をうずめる。彼はその様子を、ため息をつきながらじっと見ている。そして、これがリコレットであったならば、さぞ……などと思う。あと一歩、あと一歩のところだった。手を伸ばせば触れられるところまで彼女は居たのだ。しかし、あのアガルタ王・リノスのまさかの攻撃で、全ての計画が水泡に帰した。これはどう考えても、自分の敗北だ。このような敗北感を味わうのは久しぶりのことだ。

ヘイズは最後の最後まであきらめなかった。致命傷を負いながらも、持てる魔力の全てを使って、リコレットを転移させようと試みた。しかし、その魔法は彼女には届かず、その姿は雲散してしまった。おそらく、リノスが事前に結界を張ったのだろう。一体いつそれを張ったのかはヘイズ自身も分からなかった。おそらく、リコレットと耳打ちしていたあのときに、何らかの仕掛けをしたのだろう。いや、だが、それが絶対とは言えない。

正直、ヘイズは驚いていた。あの、マトカルの体をコピーしたとき、本来であれば、その人の記憶の全てまでコピーすることができる自身のスキルが、記憶の一部しかコピーすることができなかった。お

そらく、彼女には魔法で何らかの防御策がかけられていることを想定して、プリルの石を埋め込んだ杖を用いて攻撃するなど、万全を期したのだ。だが、魔法の効力を無効化したにもかかわらず、人化のクォリティーは自身が望む出来栄えとは程遠いものだった。それでも、易々とアガルタの都に入り込み、リコレットを呼びだすところまでは上手く運ぶことができたのだ。だが、まさかマトカル本人が、こんなにも早く自分の前に現れるとは思わなかった。しかし、ここに至っても、ヘイズは自身の変化のスキルには絶対の自信を持っていた。見破られるはずがないとタカを括っていた。そこを、リノスに突かれた。

気が付けば、心臓を貫かれ、左腕を落とされていた。ミークが助けに入らなければ、いかに自分と言えど命は危なかった。そういった意味で、ミークには感謝してもしきれない。

元々、このミークを連れてきたのは、リコレットのためであった。

ヘイズはリコレットを見つけ次第、連れ去ろうと考えていた。おそらくそのときのリコレットは激しく抵抗するだろう。そうなれば、彼女も何らかの傷を負うことになる。そうなったときのために、素早く傷を治癒できるミークを連れて来ていたのだ。

このミークには、驚異的な治癒能力がある。彼女が口の中から分泌する液体が、それなのだ。それを体内に取り込めば、たとえ致命傷といえども、命があるうちは完璧に治癒してくれる。実際、彼女のお陰で命を救われたことは、多い。

今回もかなり危ないところを救われた。うれしさはないとは言えないが、ヘイズの心は、全く晴れなかった。

二度までも狙った獲物を逃がしてしまった悔しさはもちろんある。だが、それ以上に、あのリコレットを奪うことが今後、さらに困難になることは容易に想像できる。あのアガルタ王・リノスはかなり優秀だ。クリミア―ナの人々やアガルタの都で聞いた話を総合すると、彼は結界スキルを持っており、それはかなりの高ランクのスキルであると言えた。

「スキルとしては……ＬＶ４か？　それにしては、多彩だな。オリジナルのスキルに昇華させたか？」

ヘイズは天井を睨みながら、そんな言葉を呟く。彼には、ミーダイ国で見た、あの結界がどうしても合点がいかなかったのだ。あの結界を一人で生成し、それを幾日も持続させ続けるなど、不可能だ。

「……くっ。あの女の記憶を辿ってみても、あのアガルタ王とのことは断片的にしか出てこない。しかも……食事をしている風景ばかりだ。一体どうなっているんだ？」

彼は目を閉じて、マトカルの記憶を辿っていくが、リノスと会って以降の記憶が読み取れてないのだ。こんなことも、彼にとっては初めてのことだった。

「……間違いなく、おひいさまが動いているな。……狐族の眷属を動員してあのミーダイ国の結界を維持しているのか？　いずれにせよ、今後は細心の注意を払って動かないとな」

そんなことを呟きながら、彼は自身の脇腹に視線を落とす。そこには、リノスに触れられて以降にできた、小さな、黄色いシミが浮き出していた。ヘイズはそのシミを見るたびに、イヤな予感が心に湧き上がってくるのだった。

「これからの動き方を、もう一度考えるか……。今度こそ、今度こそ、あの女神（リコレット）を僕の手に……。いつの日か、このベッドに寝かせてやる……そして……」

「うふふ、ヘイズ、ようやく元気になったようじゃ」

彼の呟きをかき消すようにして、ミークが声を上げる。彼女は口元をほころばせながら、ヘイズを見つめている。

「よし、じゃあ、この間のお礼をするよ、ミーク」

「うふっ、ヘイズはそうでなくては」

ヘイズはやさしくミークの頬に触れる。だが、その脳裏は、リコレットのことでいっぱいになっていた。彼は、目の前のミークの姿をリコレットに重ねながら、彼女を抱き寄せるのだった……。

第三百八話　母と娘

アガルタの迎賓館の一室で、一人の女性が浮かない表情を浮かべながら、手紙に目を通していた。彼女は深いため息をつくと、その手紙を丁寧に、元の状態に折り畳んでいく。そして、ゆっくりと立ち上がり、足早に部屋を後にしていった。

「……なるほど。そういう事情ならば大変だな。いつでもアガルタに来てもらうといい。いいな、リコ？」

俺は隣に座っているリコに目配せをする。彼女は力強く頷き、そして、毅然とした声で口を開いた。

「ご実家にまで裏切られるとは、お気の毒ですわ。是非、ここアガルタにおいでくださいとお返事なさってくださいませ」

その言葉に、深々と頭を下げているのは、サルファーテ王国の第四王女である、ルファナだった。

彼女の許に届いていた手紙は、母親であるサルファーテ女王からのものだった。そこには、この間まで身を寄せていた屋敷が襲撃され、多くの者が殺されてしまったこと。そして、そこから命がらがら脱出し、現在はメモブールという長姉が嫁いでいる国に身を寄せていること。さらには、そこすらも安心することはできず、できれば、ルファナのいるアガルタに身を寄せたいと書かれてあったのだ。

サルファーテ王国が滅亡して約1年。母からこのような連絡が来る

とは、ルファナ自身も思ってもみなかった。それもそのはずで、ルファナは母から勘当されており、おそらく二度と会うことも、連絡をもらうこともないだろうと諦めていた。そこにきての、突然の母からの手紙……。彼女が戸惑うのは無理のないことだった。

元々、魔法に対して適性のなかったルファナは、母親からの愛情は注がれず、どちらかというと、王国内では冷遇されていた。だがそれでも、生来生真面目な彼女は、母親を敬い続け、王国が崩壊した際、母や姉たちの無事が確認されたときなどは、彼女は涙を流して喜んだのだ。

結局、母と姉たちは、脱出に成功した者たち千数百の家来と共に、母の実家であるザイフェーク帝国に向かった。ルファナ自身は、たまたま、ポーセハイのテーシが傍に居たおかげでアガルタに転移して、危ういところを脱すことができたのだが、それを知った母は激怒し、敵前逃亡であるとして、絶縁を宣言したのだ。ルファナは、勘当された以後も、母との連絡は定期的に行っており、自身の近況を報告し続けていたのだった。

現在、彼女は、アガルタ王・リノスの計らいで、留学生という扱いを受けており、都で丁重な保護を受けていた。彼女はそこで、貪欲に知識を吸収し、来るべきサルファーテ王国復興のときに備えていたのだった。その中でも、リノスの妻であるメイとマトカルとはたちまちのうちに打ち解け、まさに親友と呼べる間柄になっていた。ルファナはここで、ようやく自分の居場所を見つけ、自分の人生を謳歌しようとしていた。母からの手紙が届いたのは、ちょうどそんな頃だった。

ルファナは母から頼られたことを喜びつつ、一方で、一抹の寂しさを感じていた。彼女の知る母は、絶対君主として君臨する女王であ

り、あらゆる高位の魔法を操りながら国を導いていく強き王の象徴のような女性だった。そのため、弱音を吐く姿などは一度も見たことはなく、ましてや、娘とはいえ、他人に弱みを見せることなど、想像すらできない人物であった。

だが、手紙に書かれている内容からは、不安と焦り、そして何より、死に対して怯える母の心境がありありと読み取ることができた。王国から逃れてきた千数百の家来が、襲撃によって数十人に激減したとはいえ、まさか母がこのような弱気な手紙を送ってくるとは思わなかった。当初は、本当に母が書いたものかと訝ったが、その筆跡はやはり母親のものであり、彼女は、何とも言えぬ感情を持ちながら、その手紙に目を通したのだった。

母からの要請を承知した彼女の行動は素早かった。すぐさまリノスに連絡を取り、事の顛末を報告し、母親たちの保護を要請した。リノスもリコも、すぐさまその許しを出してくれ、ルファナは早速、母親にその旨を認めた書状を送ったのだった。

リノスからは、数十人であれば、ポーセハイたちに頼んでアガルタまで転移させようと提案されていたのだが、母からの返事には、それを丁重に断る内容が書かれていた。あくまで、自分たちの力で、海路にてアガルタを目指す、とあった。その母の頑固さにルファナは頭を抱えつつ、ひたすらに母が無事にアガルタに到着するように祈るのだった。

そして、メモブールを出立して三週間後、真夏の暑い盛りに、女王一行はようやくの思いで、港町であるガルビーに到着したのだった。ルファナは数日前からガルビーに滞在して、母と姉たちが入港するのを待っていた。そして、約1年半ぶりに再会を果たした。

「母上……」

「ルファナ……」

たった1年半会わないだけで、人はこれほど年を取るものなのかと、ルファナは息を呑んだ。豊かで美しかった母の黒髪は真っ白になっており、その顔には、苦労の後がにじみ出ていた。特に、眉間に刻まれた数本のシワは、彼女が常に他人を警戒し続けてきたことがよく見て取れた。母の足取りは重く、船から降りるとすぐに長年側に仕えてきた侍従武官のレアルに手を取られているほどだった。そんな、老いた母の様子は、ルファナの胸を痛いほどに締め付けた。

彼女は早速、母と姉たち一行をガルビーにある屋敷の一つに案内した。母は倒れ込むようにして椅子に腰かける。そして、姉たちが椅子に腰を下ろしたのを見計らって、ルファナも椅子に腰を掛けた。

「母上……お久しぶりでございます」

彼女の言葉に、女王は無言で頷いている。その様子を見ていたレアルが、母に替わって口を開く。

「女王様はご覧の通り、疲れ切っておいでになります。まずはルファナ様、ご健勝なる体を拝し、お慶び申し上げます。また、アガルタ王様に女王様、王女様の保護を要請いただき、心から御礼を申し上げます」

「レアル、いいのよ、そんな。お礼は私ではなく、アガルタ王様に言ってちょうだい。あなたも……苦労をしたのね。それに、姉上たちも……」

彼女はゆっくりと姉たちを見廻す。二人の姉は、目を合わせようともせず、俯いたままだ。彼女たちも、ルファナに対しては冷淡な対応を取り続けていたため、別段珍しい光景ではなかった。

「……ルファナ」

不意に母の声が聞こえる。思わず視線を向けると、彼女は手を震わせながら、たどたどしく言葉を絞り出した。

「この……アガルタは……どうなのじゃ」

「どう……と仰いますと？」

「我の命は、守られるのか？　アガルタ王は、我を守ろうという意思はあるのか？」

母の言葉の意味がいまいち飲み込めず、ルファナは姉たちに視線を向ける。すると彼女たちはヤレヤレというううんざりとした表情を浮かべている。そして、二番目の姉がゆっくりと、諭すように口を開く。

「母上、アガルタは、あの……クリミアーナの干渉を退けた国です。隣国のヒーデータ帝国、ラマロン皇国、ニザ公国と同盟関係にあり、しかも、それらの国と婚姻……」

「我が聞きたいのは、そこではない！」

突然母が激高する。先ほどの疲れ切った老婆とは別人のような表情を浮かべている。これは、ルファナが知っている母ではなかった。あまりの変貌ぶりに、彼女は言葉を失う。

「我は……もう……あのような思いは……しとうはないのじゃ……」

肩で息をしながら母はゆっくりと椅子に座る。そしてさらに言葉を続ける。

「魔法が……通じぬ……。我が生涯をかけて磨いてきた魔法が……。魔法使いが、魔導士が死んでいくのじゃ……なす術もなく……死んで……。あの弓矢に貫かれて……」

「母上！」

突然女王の話が遮られた。慌てて声のした方向に視線を向けると、そこには三番目の姉が強張った表情を浮かべながら、女王である母親を睨みつけていた。母の、女王の話を遮るなど、王国にいるときには許されることではなかった。たとえ血のつながった娘とはいえ、そんな振舞いは考えたこともなかった。だが姉は、そんなことは日常茶飯事であるかのように、母に向かってさらに言葉を続ける。

「そのようなことを、行く先々で仰るから、せっかく我々をお助けいただいた国々が、タナ王国に恐れをなして……最後には、裏切るのですわ」

その言葉に母は、一瞬ぎくりとした表情を浮かべ、やがてオロオロと首を振りながら、俯いた。

「母上、アガルタは、アガルタ王様は、必ずや母上、姉上をお守りくださいます。まずは……都に参りましょう」

ルファナのその言葉に答えるものは、誰も居なかった。重苦しい沈

黙が、部屋を包んでいた……。

第三百九話　悪所通い

ルファナ王女が母一行を迎えにガルビーに向かっているその間、アガルタの都では一つの問題が発生していた。今、迎賓館の部屋の一室では、その問題に対処すべく、秘密の会議が行われようとしていた。そこに居るのは、リノスをはじめとして、リコ、メイという顔ぶれの他に、チワン、ローニ、ドーキ、ターマという四人のポーセハイ、さらには、オワラ衆キュアライトもその場に顔を揃えていた。そして、彼らの視線の先には、幼子を抱きながら涙にくれる、ミーダイ国の皇后さまの姿があった。

彼女は、オーギと名付けられた皇子を大切そうに自身の隣に寝かせる。どうやら彼は眠っているようだ。皇后さまは赤子の頭を愛おしそうに撫でている。そんな様子を皆、ただ無言で見守っていた。

「俄かには……信じられませんが……」

その沈黙を破って口を開いたのは、ドーキだ。彼は驚いた表情のまま固まっている。そんな彼に、キュアライトが無表情だが、申し訳なさそうに口を開く。

「事実……」

その言葉に、全員がため息をつき、ガックリと項垂れた。

問題になっているのは、帝様だ。何と、あろうことかあるまいことか、彼はこのところ折に触れて、娼館・ミラヤアガルタに通っているのだと言う。その話を聞いたとき、俺もまさかと思ったが、どう

やら事実であるらしい。

帝様の変化に気が付いたのは、皇后様だった。日頃は子供の面倒を進んでみるイクメンパパなのだが、夕方になると、人に会ってくると言ってフラリと出ていくことが多くなった。当初は、高名な学者や政治家に会い、ミーダイ国復活のために色々と学ぶのだという帝様の言葉を信用していた皇后様だったが、あるとき、彼がこれまでには記憶にない香りを付けて帰って来た。皇后さまは直感的に、これは女の香りであると見抜き、帝様を観察し始めたのだと言う。

そうなると、彼の行動の全てが怪しく見えてきた。何故、夕方に出かけなければならないのか。昼間ではダメなのか。そもそも、何故、帝様が会いに行ってばかりなのか。相手をこの迎賓館に呼ぶことは出来ないのか……。そんなことを考えていた皇后さまはついに、キュアライトに命じて、夫の尾行を命じた。

帝様の警護はイッカクが常に担当しており、キュアライトはその部下だ。皇后さまの命令は、上司を裏切ることになるため、彼女は戸惑ったが、皇后さまの涙ながらの訴えに根負けする形で、その任務を引き受けたのだ。とはいえ、相手はイッカクだ。ただ単に尾行しても、彼はすぐに気が付いてしまう。キュアライトは、持てる忍びの技術を最大限に駆使して帝様の後を追った。途中、何度かお頭に気づかれそうになりながらも、何とかその目を躱し、遂に帝様が娼館・ミラヤアガルタに入る所を目撃したのだった。

彼女はこの衝撃の事実を皇后さまに伝えるかどうかを悩んだ。そして、まず、彼女の主治医であるターマに相談した。そのターマも判断がつかず、彼女はドーキとチワンに相談し、そこから俺、さらにリコとメイに話がいく形になってしまったのだ。結局、皇后さまに隠し通すのは無理だと俺たちは判断し、彼女にその事実を告げたの

だった。

ある程度予想し、覚悟をしていたとはいえ、皇后さまは帝様の行動を知って、喋ることができなくなった。全員で、必死で介抱したがその症状は改善しなかった。そこで、ドーキが機転を利かせてローニを呼んできた。彼女が同じような症状を治癒した経験があることを思い出したのだという。結局、転移してきたローニの処置のお蔭で、皇后さまはやっと落ち着くことができた。

「まったく……だから、男という生き物はダメなのです」

ローニの強烈な一言に、俺たち男の子は思わず目を伏せる。いや、断っておくが、俺は、浮気などはしたことはないし、しようとも思わない。本当だ。これはマジな話だ。嘘だと思うなら、俺の目を見てほしい。そんなことをする男の目ではないはずだ！

そんなことを思いながら目を上げると、ローニと目が合った。俺は思わず彼女から視線を外す。いや、だって、ローニ怖いんだもん。

「……まあ、これは帝様ご本人の口から説明いただくのがよろしいですわね」

リコの落ち着いた声が部屋に響き渡る。彼女は俺たちを見廻しながら、さらに言葉を続ける。

「私は、帝様が他の女性に現を抜かすとは思えませんわ。きっと何かの訳がおありではなくて？　それに……娼館に入ったというだけで、部屋の中まで見たわけではありませんのでしょ？」

リコがチラリと俺に視線を向けてくる。俺はちょっと慌てながらも、

皆に対して口を開く。

「あっ、ああ……。あの、ミラヤは、ミラヤはですね……。単なる娼館ではなくて、その……サロン、文化的なサロンとしての役割も担っております。従いまして、帝様がそこで浮気をしているかどうかというのは、実に微妙なことでありまして……」

全員の視線が痛い。お前がミラヤアガルタの営業許可出したんだろ？　その店のコンセプト決めたのお前なんだろ？　てことは、皇后さまに上手に説明できるよね？　そんな、みんなの視線が、辛い……。

「……皆で、帝様のお帰りを待ちましょう」

リコのその一言で、その場は一旦解散となった。

帝様が迎賓館に帰ってきたのは、その夜もかなり更けてからのことだった。彼は部屋に入るなり、そこに控えていた俺たちの姿を見て、驚きの表情を浮かべた。そりゃそうだ。まさか、自分の部屋に１０人近い人間がいるとは思わないだろう。彼は、俺たち一人一人に視線を向けながら、オロオロと扉の前に立ち尽くしている。

「帝様、お疲れのところ申し訳ございませんが、一つ、お話を聞かせていただきたいのですわ」

リコの毅然とした声が聞こえてきた。彼はフッと息をつき、ゆっくりと俺たちの座っているテーブルに向かってきた。そして、ゆっくりと空いている椅子に座る。

「このように大勢……。一体、どうしたのじゃ？」

「帝様、単刀直入に伺います。あなた様はこのところ、娼館に通っておいでですわね？」

リコの直球が帝様にぶつけられる。彼は一瞬ギクっとした表情を浮かべたが、やがてポリポリと頬を掻きながら、言いにくそうな雰囲気を醸し出している。

「いっ……いや……その……」

「お上」

震える声で、皇后さまが口を開く。

「私に……落ち度があるのでしたら、仰ってくださりませ。そのような……私に隠れるようにして……悪所通いとは……私は……」

ポロポロと涙をこぼしながら、彼女は帝様に語りかける。彼は慌てたようにキョロキョロと周囲を見廻しながら、口を開いた。

「ま……待て、オクよ。一体、何の話をしておるのじゃ？　マロは確かに娼館には行ったが、別の女子（おなご）に目移りしたからではない。オクよ、落ち着くのじゃ」

「娼館に……行った？」

「いっ、いや……そういうことではない。そういうことではないのじゃ」

号泣する皇后さまと、それを必死になだめようとする帝様。この状

況はアカン。確実に帝様がアウェーだ。何とかしてやらねばと思いながら、言葉をかけるタイミングを計っていると、不意に野太い男の声が聞こえてきた。

「誤解に候」

気が付けば、帝様のすぐ後ろにイッカクが控えていた。いきなりのことで、皆が凍り付く。そこに、彼はさらに言葉を続ける。

「娼館は、対面（体面？）にて」

「どういうことですの？」

リコが不思議そうな顔をして尋ねている。そんな中、帝様は頬を掻きながら、照れくさそうに口を開いた。

「マロが娼館に行っておったは……人に会うためじゃ」

「人に会うため？」

「うむ。ここ迎賓館で人と会うためには、それなりの身分、それなりの格好が必要になろう。それに……膝を突き合わせて話をすることができぬ。じゃによって、娼館で会っておるのじゃ」

「すみません、もう少しわかるように説明してもらえませんか？」

俺の一言に、彼は大きく頷いて、これまでの経緯を説明し始めた。

元々、向学心の強い帝様は、アガルタで多くの人と会い、教えを受けながら、自らのスキルを上げようと試みていた。ただ、迎賓館で

は自ずと呼ぶ人間は限られ、市井の人が気軽にやって来ることは難しい状況にあった。そこで目を付けたのが娼館だった。ここならば、身分に関係なく、また、服装などもラフな格好でもある程度は許される。そして、膝を突き合わせて議論することもできる。そうしたことから彼は人と会う場所に娼館を選んだのだった。

その後、彼はこれまで娼館で会った人のことを滔々と語り始めた。見識の高い学者をはじめ、軍人、医者、果ては、街で子供たちに絵を教えている老人にまで彼は会っていた。そして、そこから得た知識を、どのようにミーダイ国のために活かそうかと考えていたのだった。そのあまりの行動力に、俺はポカンと口を開けたまま話を聞くほかなかった。

「……そういうことじゃ、オクよ。マロはそなたがイヤになったわけではない。あくまで自らの学問のための娼館通いじゃ。……したが、その方にもいらぬ心配をかけたの。許して給れ」

そう言って彼は深々と頭を下げた。その後、イッカクが断じて帝様は他の女とは交わっていないと証言し、帝様の疑いは晴れた。彼は申し訳なさそうに俺たちに侘びを言いながら、言葉を続ける。

「したが、あの娼館街という所は、面白き所じゃな。珍しい者が多くおった」

「そうですか。しかし帝様、よく娼館などで人に会おうとなどと思いましたね」

俺の一言に、帝様はニコリと笑みを漏らす。

「うむ、男爵殿の助言での」

「男爵殿？」

「……ゴン殿に候」

「ゴン！？」

聞けば、帝様を娼館に案内したのはゴンなのだと言う。そういえば、帝様に講義をするとか何とか言って、夜遅くに帰ってきたことがあったが、まさか、そんなことをしていたとは……。しかもヤツはアガルタの娼館街では、「ゴン男爵」と呼ばれる有名なお大尽なのだという。

俺は思わず隣のリコを見る。彼女は無表情のまま、遠くを、宇宙の果ての果てを見ているかのような遠い目をしていた。俺は思わず目を背ける。

「……マロとてただ遊びに娼館街に行っていたのではないぞよ。あそこは千差万別、あらゆる人種、身分の者たちが訪れる。そのために、多くの情報が集まるのじゃ。あそこに通ったのは、無駄ではなかったぞよ」

帝様はにこやかにほほ笑みながら口を開いている。そして、俺たちを再び見廻しながら、少し顔を強張らせた。

「どうやら、オージンとサツキが、このアガルタに入ったようじゃ」

第三百十話　さて、誰が行く？

「オージンとサツキが！？　一体何のために？」

俺は思わず頓狂な声を上げる。それはそうだ。この二人の行方は、いくら探しても、ようとして知れなかったからだ。今になってこの二人が動き出すというのは、俺にはイヤな予感しかしない。

「うむ。マロも最初に聞いたときは驚いた。じゃが、空間魔法の使い手は珍しいでな。マロもまだ見てはおらぬが、話を聴く限りでは、おそらくサツキじゃろうな」

この二人がアガルタに姿を見せたのは、数日前に遡るのだと言う。彼女たちは、ニザ公国を経由して、アガルタに入ったらしい。

「で、二人は今どこに？」

「シェトラという街にいるようじゃの」

「……」

シェトラは、アガルタの都から徒歩で1日の距離にある小さな町だ。俺はマップを使って街の様子を見てみるが、俺に敵意を持った人間はどうやらいないようだ。そんな中、再び帝様の声が響き渡る。

「ギルドというところを通じて、女性の魔術師を探しておるのかの？　どうやらそこにサツキが現れたようじゃ」

「あー」

俺は思わず遠い目をする。そういえば、ルファナ王女が、母親をアガルタに呼び寄せることになった際に、ギルドを通じて女官を募集すると言っていたことを思い出したのだ。

聞けば、サルファーテ女王の警護は男性が中心となって担当しているらしいが、やはりそこは女性が必要になることもあり、女王としては不便と感じているのだという。そこで、アガルタで落ち着くのならば、女性の女官を数名傍に置きたいというのがルファナ王女の希望だったのだ。

だが、彼女が示した採用基準というのは、とてもハードルの高いものだった。少なくともＬＶ３以上の魔法が１つないし２つ扱える者で、かつ、高貴な家に仕えた経験のある人、というものだった。ルファナからしてみれば、女王の側近くに仕える者であるために、腕が立つのは当然だが、行儀作法もそれなりでなくてはならない。ただ、一から作法や教養を身に付けさせることは、時間の関係上難しい。そこで、このようなハードルの高い募集要項になったのだが……。それを聞いた俺は心の中で、誰も応募して来る者はいないだろうと考えていた。来たとしても、自信過剰なヤツか、身の程知らずのヤツかのどちらかだろうと思っていたのだ。だが、まさかサツキが応募してくるというのは、予想外のことだった。

「……」

俺は目を閉じて、無言のまま天を仰ぐ。そんな様子に、帝様はさらに言葉を続ける。

「イッカク」

「はっ」

「誰ぞ、オワラ衆にサツキたちの顔を知る者はおろうか？」

「キュアライトが存じて候」

「では、キュアライト。その方、シェトラという街に参りて、サツキとオージンを監視せよ」

「御意」

「いや、お待ちください」

話に割り込んできたのは、ドーキだった。彼は帝様を見つめたまま、ゆっくりと口を開く。

「オワラ衆であれば、サツキは顔を知っている可能性があります。あの人は、何度か御所に来られているのを見たことがあります。キュアライトさんでは気付かれる恐れが……」

「心配無用」

キュアライトが落ち着いた声で反論する。無表情だが、何となくムッとしているようだ。だが、そんな彼女に臆することなく、ドーキはさらに言葉を続ける。

「それに……キュアライトさんがいなくなれば、皇后さまの警護が……」

「そも、心配無用」

イッカクが毅然として言い切る。だが、それでもドーキは言葉を続ける。

「いえ、ここ数ヶ月、皇后さまのお側を警護していたのはキュアライトさんです。オワラ衆は人を入れ替えれば済む話ですが、皇后さまはどうでしょうか？　突然、勝手知らぬ方が側に仕えられては戸惑われませんか？　それでなくとも、親王様をご出産されたばかりの皇后さまです。いたずらにご心労をおかけすることになりませんか？」

なるほど、確かにドーキの言うことも一理ある。皇后さまは無言でじっと目を伏せている。彼女としても、キュアライトが側に居た方が安心するのだろう。さて、そうならば……と思いを巡らそうとした瞬間、ローニ声が聞こえた。

「ならば、選択肢はひとつですね」

「え？　どういうことだい、ローニ？」

「話は簡単です。ドーキ、あなたが行けばいいのです」

「え？　僕が？　いや……行きたいのはやまやまだけれども……僕はサツキさんとオージン様に顔が……」

「リノス様に結界を張ってもらえばいいのです」

「え？」

「リノス様、以前メイ様がポーセハイに見える結界を張られたことがありましたが、あの結界をドーキに張ればいいのです」

「あー、なるほど、確かにな」

俺は苦笑いを浮かべながら返事を返す。そうだ、そのスキルがあることを忘れていた。

「ええと……僕は別に構いませんが……」

「が、何です？　あなたは念話が使えますし、転移も使えます。打ってつけじゃありませんか」

「いや、確かにそうなんだけれども、僕は……お店が……」

「時間が空いているときにやればいいのです。相手も２４時間、３６５日動き続けているわけではないでしょう。人間なのですから、必ず眠る時間、休む時間はあるはずです。そのときにお店のことをやればいいのです」

ローニは頷きながら喋っているが、言っていることはとんでもない内容だ。ドーキに店のことをやりたいのであれば、２４時間体制でやれと言っているのだ。これはさすがにヒドイ。

「あの……」

そんな中、申し訳なさそうに口を開いたのは、ターマだった。彼女は俺たちの顔をチラチラと見ながら、たどたどしい様子で話し始めた。

「よければ……。ドーキさんがお店のことをしている間は、私が代わりましょうか？」

「え？」

「確か、お店のことは、朝の数時間ですよね？　そのくらいの時間であれば、私が代わりに見張ります。……いえ、その、戦うことはできませんけれども、見張るくらいなら、大丈夫かなと思います。何かあれば念話で伝えますし、危険があれば転移で逃げればいいのですし」

……全員が俺に注目している。どうやら、俺が判断しなければならないようだ。

「サツキとオージンの動きはやはり気になる。やはり、二人を監視する必要があるな」

「でも、リノス……」

「いいんだ、リコ。大丈夫だ。ドーキ、お願いできるかな」

「はい……僕でよければ、喜んで」

「いや、ドーキがずっと見張る必要はない。もちろん、別人に見える結界を張るが、見張りをする者は、別のヤツに任せる」

「え？」

「ドーキは、サツキとオージンの情報を引き継いでくれるだけでいい」

「は……はぁ」

俺は笑みを湛えながら口を開く。そして、傍らに控えているリコにそっと耳打ちをする。彼女は一瞬、キョトンとした表情を浮かべたが、やがて、真面目な表情に戻り、先に参りますわねと呟いて部屋を後にしていった。

「リノス様……一体、何を……」

「大丈夫だ。ドーキは何も心配することはない。だが、ご苦労で申し訳ないが、今からシェトラに転移してくれないか？　そして、サツキとオージンの居場所を探って欲しいんだ。そして、帝様……」

俺は帝様に向き直る。彼は俺の視線を受けて、スッと背筋を伸ばした。

「ドーキにオワラ衆の一人を護衛に付けてもらえませんか？」

帝様はイッカクに視線を向ける。彼はスッと頭を下げて、よく通る低い声で呟く。

「承知」

「では、今からドーキに結界を張ろう。その後すぐにオワラ衆と共に転移してくれ。……ターマ、そんな心配そうな顔をするな。明け方までには交代の者を寄こすから、ドーキはすぐに帰ってくる。ドーキは交代の者が来た段階で引継ぎをして、すぐにその場を離れてくれ」

そう言って俺は、全員を見廻して、さらに言葉を続ける。

「サツキとオージンの後ろには、おそらく妖狐・ヘイズがいるだろう。ヤツは一筋縄ではいかない男だ。ドーキ以外の者も、ゆめゆめ油断しないで欲しい」

俺の言葉に、全員が力強く頷いた。

第三百十一話　試練の道行

「……そうか、わかった。引き続き、監視し続けてくれ」

俺は執務室で、目を閉じながら念話を飛ばす。つい今しがた、サツキとオージンが都に向かってシェトラから出発したと念話があったのだ。それと時を同じくして、ガルビーのルファナ王女からも、都に向けて出発すると連絡があったばかりだった。母親のサルファーテ女王が衰弱しており、途中のミーダイ国の町衆が住む村で一泊した後、都に向かうのだという。

本来ならば、ガルビーで体力の回復を待って都に移動すればいいのだが、それは女王が頑として拒否し、一刻も早く都に向かいたいと、たって希望されたのだ。それならば、ポーセハイたちに頼んで転移してくれれば事は済むのだが、それはそれで女王のプライドが許さないのだそうだ。転移術はポーセハイの専売特許で、人族が習得するのはとても困難だ。どうやら女王は自分よりスキルの高い魔法を見るのがイヤらしい。もう、この段階でかなりややこしい人であることがわかり、俺はまた新たな厄介ごとを引き寄せてしまったのではと、内心ビクビクしているのだ。

俺は気分を替えようと、再び目を閉じながら腕を組んで考える。サツキとオージンの裏には間違いなくヘイズが動いているだろう。だが、ヤツがあの二人の傍に居るとは考えにくい。そこまでバレバレの動きをするとは思えない。だが、確実にヤツは何かを企んでいる。目的は……リコだろう。ヤツはリコを手に入れるために、今回はかなり緻密な作戦を計画したに違いない。もし、俺がヘイズの立場であれば……。俺は天を仰ぎながら、頭の中をフル回転させる。

「……ふあぁぁぁ……ぐふっ！」

口を大きく開けたまま、白目を剥いて悶絶しているのは、ゴンだった。その彼の傍には、ドラム缶のような体格を持ち、まるで白粉を塗ったかのような真っ白い顔をした者が控えていた。

「あくびしながら後をつけたらアカンが！」

そんな言葉と共に、まるで鈍器で殴られたかのような鈍い音が数発鳴り響く。たまらずゴンは飛び跳ねるようにして、数歩後ろに下がる。

「吾輩の急所ばかりを狙って……ぐふっ！」

「声、大きいがっ」

ゴンは脇腹を突かれて、突っ伏すようにして倒れる。彼は歯を食いしばりながら、目の前の巨体を睨みつけている。

正直、あまりの展開の速さに頭が付いていけていない。アガルタの娼館で遊んでいたところに、いきなり踏み込まれた。いや、踏み込まれただけならまだいい。そのとき、気を失うまでブン殴られたのだ。

実に納得いかない仕打ちだ。別に悪いことをしているわけではない。しかもこの日は仕事で来ている。ミーダイ国の帝様を連れ、そのエスコートとして来ていたのだ。彼が人と会っている間、さすがにそこに同席するわけにはいかない。仕方がないので、この娼館の女将

に勧められるままに別室で待機していただけなのだ。

確かに、そこには１０人の娼婦がいた。だがそれは、この娼館に居れば、必ずついて来るものなのだ。まさか、彼女らと無言でいる訳にもいかない。せっかくなので、皆で遊ぼうという話になり、部屋に豆腐を敷き詰めて、そこを水田に見立てて娼婦に田植えをさせていたにすぎない。踏み込んできたフェリスとルアラに、娼婦たちに下着を着けずにそれをさせていたことを咎められたが、それはこの店のルールであり、何もゴン自身が企画・実施したわけではない。確かにアイデアは出した。だが、実際にやったのは娼婦たちの判断だ。自分が命じたわけではない。

そんな楽しい遊びを邪魔され、殴られ、そして、気が付けばおひいさまの屋敷に放り込まれていた。そこでは千枝・左枝という鬼よりも怖い女官が控えており、その二人に、口ではとても言えない恥ずかしいお仕置きを食らわされた。この二人からのお仕置きは数度目になるが、その都度レベルが上がっている。二人は変態だの下衆だのと罵るが、ゴンから言わせると、次から次へと飽きることなく残酷なお仕置きを思いつくこの女官たちこそ、筋金入りの変態だと思う。だが、今回は本当に参った。あと一息で、おひいさまの眷属を辞めると言いそうになった。

しかし、相手もさる者で、そのギリギリのところで手を止めるのだ。そして、この苦しみから逃れたいのであれば、アガルタのシェトラに行き、ある人物を監視せよとの取引を持ち掛けてきた。ゴンも男だ。そんなことをおいそれと受ければ、この変態女官の軍門に下るようなものだ。これでもアガルタ王・リノスの右腕にして、なくてはならない存在であるという自負はある。ええそうですか、助かりましたと受け入れるわけにはいかなかった。

そんなゴンの思いは一瞬で打ち砕かれた。この女官たちは、ゴンがこれまで秘密にしていたプライベートの情報を的確に掴んでいたのだ。これはいけない。これをバラされれば、自分はリノス家には居られなくなる。間違いなく、奥方のリコ殿以下、全ての家族からの信頼を失うだろう。それだけは絶対に避けねばならなかった。

彼は仕方なくその命令に従うことにした。そして、シェトラに向かおうとしたそのとき、監視を付けるという声と共に、ドラム缶のような体躯をした者が目の前に現れた。玉ノ井と名乗る、おひいさま付きの女官だが、実に恐ろしい女官だった。何せ、その体躯の通り、ものすごいパワーの持ち主なのだ。無理やり手を取られて握手をされたのだが、その握力たるや、あまりの痛さにゴンは声を出すことすらできなかった。彼女はその体躯に似ず、気配を完全に消すこともできると同時に、その姿を隠すこともできる、優秀な隠密スキルを身に付けていた。ゴンは無理やり、その女官と共に、シェトラにおいて見張りの任務に就いたのだった。

尾行の対象は、二人の女性であり、そのうちの一人はまだ少女だった。二人はまるで姉妹のようにベッタリと寄り添いながら、行動を共にしていた。基本的に動くのは年上の女性で、少女は基本的に無言、そして、無表情であった。ドーキからの引継ぎでは、オージンという少女はお転婆で、気に入らないことがあると大声で叫ぶから注意せよとあったが、この様子を見る限り、そんな雰囲気は微塵も感じられなかった。一方、サツキという女性は、空間魔法の使い手であり、毒舌で嫌味な人物とのことだったが、その彼女は朗らかに応対しており、それもゴンとしては意外だった。

二人は準備を整えて宿屋を出発し、真っすぐにアガルタの都に向かって歩いていた。シェトラからの道中はいくつかの森を抜けるルートだ。ゴンたちは、彼女らと共に都に向かう旅人たちや、森の木々

の間に巧みにその身を隠しつつ、二人の後を追った。何より、この二人には妖狐・ヘイズがついていると言われており、ゴンとしてもかなり神経を使いながらの旅路だった。だが、玉ノ井はそんな彼の緊張をよそに、飄々とした表情で事も無げにこんな言葉を呟いた。

「ヘイズはおらんよって、安心したらええが」

一体何を根拠に……と、ゴンは開いた口が塞がらなかった。しかし、彼女は絶対の自信があるらしい。彼はその言葉を心にとめつつ、それでも、緊張をしながら旅を続けた。

この旅の最も困難だった点は、この玉ノ井だった。少しでも気配を消すことを怠ると、すぐにボディーに凄まじい衝撃が走る。その高速ボディーブローは最後の最後までゴンを苦しめ続けたのだった。

尾行すること丸一日。二人は女性とは思えぬほどの健脚ぶりで、食事を摂らないばかりか、全く休憩を取らずに歩き続け、陽が落ちる頃にはアガルタの都に到着したのだった。道中、二人は全く会話をしている素振りがなく、ただ淡々と歩き続けるという実に不気味な道行だった。そして、都の宿屋に入り、その体を休めたのだった。

ゴンはその顛末を玉ノ井と共にリノスに報告し、その後、スイッチが切れるかの如く、彼の執務室の床に倒れ伏したのだった。

第三百十二話　神龍様、受難

オージンとサツキが都に入った。二人は俺の張った結界を、難なくすり抜けていた。

額面通りに解釈すれば、この二人には邪念はないということになる。だが、「純粋な悪」である場合は、話は別だ。自身がやろうとしていることが、たとえ人殺しであっても、それが素晴らしいことだと、全く疑うことなく信じ切っていれば、俺の結界をすり抜ける可能性がある。

「ヘイズの気配は、あらへんガイ」

俺の思考を遮るように、目の前に立っている玉ノ井が口を開く。ふと視線を移すと、右手に人化が解け、白狐の姿に戻って気絶しているゴンを、まるでゴミのように持っている。俺はその姿にため息をつきつつ、彼女にゆっくりと口を開く。

「ご苦労だった。今後ともよしなに。あと、おひいさまに、よろしく伝えてくれ」

「承知したで。ほなら」

そう言って彼女は踵を返し、執務室を出ていった。

この玉ノ井は、実はおひいさまの秘密兵器なのだ。彼女の眷属には、妖狐に転生し、悪事を働く者を討伐する者が多数いるが、その中で、どうしても手に負えない場合に出てくるのが、この玉ノ井なのだそ

うだ。そのため、彼女の存在を知る者は少なく、まさに知る人ぞ知る伝説の白狐なのだという。

彼女は一度、ヘイズと相対しており、彼との戦闘では一歩も引かぬ働きぶりを見せた。それが功を奏して、おひいさまがヘイズを捕らえることにつながったと言われている。その彼女が、サツキとオージンにはヘイズの姿は見られないと言い切ったのだ。おそらく、ヘイズは彼女らの側には居ないのだろう。

二人の監視は、引き続きこの玉ノ井が担当してくれるらしい。俺は部下に命じて、彼女のために好きなものを与えさせた。その体躯の通り、彼女は食べることが大好きなのだそうで、俺は彼女の望むものは可能な限り与えてくれと指示したのだ。

一方、ルファナ王女も無事に本日の宿に到着したらしい。玉ノ井たちが来る少し前に、それを知らせる手紙をサダキチの部下が持って来てくれた。サルファーテ女王は森の中に作られたロッジをあまり気に入っていないようで、一刻も早くアガルタの都に向かいたいと言っているのだそうだ。ロッジの内装が気に入らないのではなく、森の中では暗殺者の類はその身を隠しやすく、襲われる確率が高くなると思っているらしい。どうやら、以前、別の国で森の中で逗留しているところを襲われたのが、トラウマになっているようだ。

「やっぱり、ガルビーから護衛を付けた方がよかったのか？　いや、そんなこと言われてもな……」

俺は誰に言うともなく呟く。実は、女王一行には、アガルタの護衛は付けていない。彼女たちは自身の数少ない親衛隊に守られて移動しているのだ。

当初俺は、クノゲンらをガルビーに派遣しようかとも考えたが、それはルファナ王女に丁重に断られた。それは言うまでもなく、サルファーテ女王が、アガルタの兵士に襲われるのではないかと疑念を持つからという理由だった。それなら勝手にしろよとも思ったが、ルファナ王女が本当に申し訳なさそうに、頭を下げ続けるのを見て、その気分は萎えてしまった。

とはいえ、俺たちは知らないもんね、というわけにはいかない。そこで、ソレイユに頼んで、女王一行は、森の精霊たちにその監視を頼むことにした。何かあれば、すぐに俺に知らせるようにと言ってあるのだが、今のところそうした知らせはない。俺は女王一行の様子を確認するべく、帝都の屋敷に帰ることにした。

「クチャクチャ音を立てて食べてはいけませんわっ！」

「早く食べるのはだめ！　ゆっくりたべるの！」

「うーん」

屋敷に帰ると、エリルとアリリアがおままごとをやっていた。それはそれで可愛らしいのだが、俺はその光景を見て絶句し、しばらく動くことができなかった。

……娘たちが遊んでいるのは、何と、神龍様だったのだ。

「脇を開いてはダメですわっ！」

「よーく、よーく、噛まないと、病気になっちゃうよー」

「難しいのらー」

神龍様はエリルに後ろから抱きつかれ、アリリアに頭と顎を押さえられて、カミカミさせられている。俺はこの現実を受け入れることができず、二度ほど深呼吸をして、ようやく口を開いた。

「お前たち、何しているんだ？」

「あ、とうたーん、おかえりー」

「おかえりー」

エリルとアリリアがパタパタと走ってくる。そして、ピョンと飛び跳ねて俺の胸にダイブしてくる。これはいつものことで、俺は二人を抱きとめて、両腕で抱っこをする。

「一体、何をしていたんだ？」

「しんりゅうーくんとおままごとー」

「しんりゅーくん、おぎょうぎわるいー」

そんな二人の話を聞きながら、俺は神龍様に視線を移す。彼はヤレヤレといった表情を浮かべてはいるが、いつもの通り、ニコニコとした表情のままでいる。俺は二人を床に下ろし、神龍様に片膝をついて、重々しく話しかける。

「娘たちが……誠に、申し訳ございません……」

「おーう、別にいいのらー。我も楽しかったのらー」

聞けば、神龍様は俺がアガルタに出勤した後になって、ソレイユから呼び出されたらしい。彼女から、森の精霊を駆使してサルファーテ女王を見張って欲しいと頼まれ、二つ返事で引き受けてくれたのだ。彼にしてみれば、そんなことは朝飯前のことで、その力をもって、アガルタの精霊たちに命令を下した直後に、エリルとアリリアに捕まったのだという。

当然、ソレイユは無礼なことと二人を窘めた。だが、人族の子供と遊ぶという経験を持たない神龍様は、好奇心を刺激され、気軽に二人と交流を持った。しばらくは積み木をするなど大人しく、楽しく遊んでいたのだが、昼食の後からその関係性は微妙に変化していったのだという。

彼は食事をするときは、次から次へと料理を口の中に運ぶ。しかもその速さが尋常ではない。噛まずに飲み込んでいるのではないかと思うような食べっぷりなのだ。俺もリコも、他の家族も、そうした光景は見慣れたものであり、何しろ神龍様なのだ。そう、神様なのだ。メチャメチャ世話になっているのだ。まさかそんな人に、テーブルマナーを守れとか、ゆっくり食えなどとは言える訳もない。

だが、そんなことはエリルやアリリアにはわかるはずもない。彼女たちは普段、厳しくリコから躾けられているテーブルマナーを完全に無視して食事をする弟分を見て、これは直してやらねばと思ったらしい。特に正義感の強いエリルは、こんな振る舞いが続けば、きっとママに怒られる。ママが怒ると怖い。そんな思いをこの弟分に経験させるべきではないと思ったらしい。お昼寝から覚めると、早速二人のテーブルマナー講座が始まったのだという。

最初こそ、スプーンの使い方、フォークの使い方など基本的なレッスンで、その見本をエリルが見せていたそうなのだが、やがて夕方になり、キッチンのペーリスは大量の料理を作るべく奮闘中となってしまった。そこに折悪く、イデアやピアトリスがぐずりだして、それにリコとソレイユがかかりきりになってしまったために、神龍様の監視がない状態になった。

「さあ、やってごらん」

エリルのその一言から、神龍様へのテーブルマナー講習は本格化したのだそうで、やれ持ち方が悪いだの、座り方が悪いなど、彼はまだ幼い女子にケチョンケチョンにけなされ続けたのだという。

俺はその話を聞きながら、背中に冷たいものが流れていた。楽しそうに語ってはいるが、その内容は無礼そのものだ。もし、神龍様の勘気に触れるようなことがあれば、俺たちは一瞬で滅びるのだ。俺は何度も彼に向けて頭を下げ続けた。

「あれ？　どうしたのです？」

突然、リコとソレイユが、それぞれイデアとピアトリスを抱っこしながらダイニングに現れた。どうやら、二人とも機嫌を直したようで、母親の腕の中で、珍しそうな顔でこちらを見ている。

「神龍様、一人にしてしまいまして、申し訳ございません。……リノス様、何かございましたか？」

ソレイユが訝しそうに話しかけてくる。俺は言葉に窮する。

「いや、この二人に遊んでもらっていたのらー。楽しかったのらー」

「まあ、何とご無礼を……」

リコが目を丸くしながら、エリルとアリリアに視線を向ける。彼女たちは、申し訳なさそうにオドオドとしている。

「よいのらー。その二人は、我の知らぬことを教えてくれたのらー。よいのらよいのらー」

そう言って神龍様はケラケラと笑う。俺はフッと笑みを讃え、神龍様に顔を近づけながら、小さな声で呟く。

「ありがとうございます、神龍様」

そして俺は、家族に向かって手を叩きながら口を開いた。

「さあ、メシにしよう！　神龍様もおいでだから、今日はたくさん作らなきゃいけないぞ。俺も手伝おう！」

……ようやく、家族全員が笑顔になった。

第三百十三話　親孝行

真夏の太陽が照り付ける中、一台の馬車がアガルタの草原を走っていた。その馬車の周囲は数十騎の騎馬隊が警護しており、一見すると、アガルタの領主、もしくはその家族が都に向かっているように見える。だが、よく見るとその馬車は、真夏であるにもかかわらず窓がピッタリと閉じられており、ある種の奇妙さを感じさせる。もし、中に人が乗っているのであれば、さぞ蒸し暑いことだろうと、誰もが思うような有様だった。

実際、馬車の中は蒸し風呂状態だった。中には、サルファーテ女王と二人の王女が乗っていたのだが、女王のたっての頼みで窓を開けることは許されず、三人は汗にまみれていた。

その馬車には、まるで寄り添うような至近距離で馬を走らせている女性の姿があった。言うまでもなくそれは、ルファナ王女だ。彼女は馬車の中の母の容体を案じながら、時おり用意していた水などを、馬を走らせたままの状態で、馬車の中に差し入れるなどしていた。この彼女の助けがなければ、女王はもちろん、二人の王女たちも確実に脱水状態に陥ったことだろう。

本来、都までの道中は、徒歩で従う家来たちに合わせて、ゆっくりとした足取りで向かう予定だった。だが、女王は一刻も早い移動を強く希望した。そのため、徒歩で向かう予定であった者たちは置き去りにされた形になり、彼らは先行する女王たちに大きく遅れる形で、その歩みを進めていたのだった。

この、全く休息を取らない強行軍のおかげで、彼女たちは陽が西に

傾く前に都に到着することができた。その報告を受けたリノスは、執務室で半ば呆れたような声を上げた。

「なんちゅうせっかちさだ。こっちにも都合ってもんがあるぞ」

そんなことを言いながら彼は、机の上の書類をいそいそと片付け、ゆっくりと立ち上がるのだった。

「母上……」

迎賓館に到着した女王一行は、通された部屋で固まっていた。そこにいた全員の視線が、女王に注がれている。彼女は目をせわしなく左右に動かしながら、その狼狽ぶりを隠そうともせず、たどたどしい口調で口を開く。

「……ならば、よきに計らえ」

その言葉を聞いて、全員の緊張が一気に緩んでいった。

事の起こりは、迎賓館に到着してすぐのことだった。支配人であるミンシは、彼女たち、とりわけ女王と二人の王女が汗に濡れている姿を見て、すぐさま風呂で汗を流し、着替えをしてはと提案したのだ。だが、女王はその言葉になかなか首を縦に振らなかった。その理由は、まさかこんな事態になるとは思いも寄らず、自身の女官たちを伴わずに来てしまったことにより、彼女が自己嫌悪に陥ってしまい、返事もままならない状態になったからだ。生まれた時から大勢の家来に傅かれた女王が、一人で風呂に入るなど、とんでもない話であったし、王女たちと一緒にという提案もなされたが、当然二人も母親と同様、一人で風呂に入った経験などなく、所詮は無理な

話だった。ここに至って、王女たちの不満は爆発した。

「だから言ったのです！　皆でゆっくりと参ろうと！　だからこんなことになるのです！」

「しばらく、しばらくお待ちください。なにも今すぐアガルタ王様に謁見せねばならないというわけではありません。供の者たちは、遅くとも夜が明けるまでには到着するでしょう。それを待ち、謁見は明日にしていただいても差支えはありません」

凍りついた空気を何とか和らげようと口を開いたのは、侍従武官のレアルだ。だが、その彼の言葉をもってしても、王女たちの怒りを収めることはできなかった。

「レアル！　あなたは黙っていなさい！　そもそもあなたも悪いのです！　いかに母上のご命令とはいえ、こんな無理な命令を受けることはないのです！　なぜあなたも皆と共に参りましょうと諫言しないのですか！　この責任はあなたにもあるのですよ！」

「マイユ、おやめ。レアルのせいでは……ない」

女王は力なく、次女に向けて言葉をかける。だが、それから先の言葉が見つからず、彼女はオロオロとするばかりだった。そんな様子を見かねて、ルファナ王女が口を開く。

「母上様、姉上様……」

やさしく、諭すような声で彼女は話しかける。その声に三人は、ハッとした表情を浮かべながら振り向く。

「及ばずながら、私がお手伝いを致します。ご心配なさいませんよう」

三人はルファナの言葉の意味が呑み込めず、キョトンとした表情を浮かべる。その様子を見ながら彼女は、さらに言葉を続ける。

「母上様と姉上様の介添えは、私が行います。ご心配には及びません」

「ルファナ……どういう……」

「私は幼い頃から士官学校におりましたので、大抵のことはできます。それに、ここアガルタでお世話になって1年、風呂も着付けも、全て自分でできるようになっています。後宮の者たちほど上手にはできないかもしれませんが……。それでも、慮外ながら姉上たちにお任せするよりは、遥かにマシですし……それに、いざというとき、お守りすることもできます」

「お、恐れ入ります、ルファナ様。その……風呂では丸腰になりましょう。素手で女王様をお守りすると……？」

レアルからしてみれば、ルファナ一人では心もとなかった。ここは是非、侍女たちの到着を待つべきだという考えがあったのだ。女王付きの侍女たちはいずれも戦闘訓練を受けた者たちだ。一人で警護するより、複数で警護した方がよいことは明らかだったのだ。だが、そんな彼の心配をよそに、ルファナは力強く、きっぱりと言い切った。

「剣を携えて風呂に入ります」

「そ……そんなことをすれば、剣が……」

「母上の命には代えられません」

その様子を見ていた女王は、ゆっくりと首を振りながら、力なく呟いた。

「ならば……よきに計らえ。ルファナ……。お前に頼むとしよう……。レアル、お前は、アガルタ王への謁見をお願いしておくれ」

女王のすがるような視線を受けて、彼は無言で頭を下げるほかはなかった。結局、女王の入浴はルファナが担当することになり、姉たち二人は、自身の肌を妹に晒すのを嫌い、迎賓館のスタッフであるサイリュースたちの手を借りることになった。二人の王女にしてみれば、完全にルファナへの当てつけなのだが、これはこれで、女王に少しばかりの安心感をもたらせた。常に帯剣した腕の立つ護衛、しかもそれは冷遇してきたとはいえ、血を分けた娘なのだ。彼女はルファナに手を取られる形で、ゆっくりと部屋を後にしていった。

「あの……恐れ入ります」

女王について一緒に部屋に入ろうとしたレアルは、美しいサイリュースに入室を拒否された。訝る彼に彼女は恭しく一礼をし、毅然とした様子で口を開いた。

「ここから先は、女性専用の浴場となります。殿方は、ご遠慮くださいませ」

「……ああ、わかりました。では、私はこちらで待たせていただきます」

彼は扉を離れ、壁に背をついて立哨のポーズを取る。だが、その彼にサイリュースはにこやかな笑みを湛えながら、言葉を続ける。

「あの……部屋の前で待たれるというのは……」

「しかし、私は……」

「ご心配には及びません」

突然背後から声がする。驚いて振り向くと、そこには先ほど自分たちを案内してくれた支配人の女性が立っていた。

「こちらは、浴室や化粧室など、女性が使用するお部屋が集まっておりまして、多くの女性の皆様が通られます。誠に恐縮でございますが、鎧を身に付け、帯剣されたお方がおいでになりますと、皆さまが利用し辛くなります。お役目であることは重々承知の上ではございますが、ここは私共にお任せいただきまして、誠に恐れ入りますが、こちらのお部屋でお待ちいただけませんでしょうか？」

彼女の慇懃な態度に圧倒される形で、レアルは渋々その場を離れた。

案内されると思っていた部屋は、浴室から少し離れた場所にあるようだった。いくつかの廊下の角を曲がり、歩き続けている。このままでは事が起こった場合にすぐに駆け付けることができなくなる。できれば、先ほどいた部屋に戻らせて欲しいと言おうとしたそのとき、ミンシの足が止まった。

「こちらでございます。どうぞ、お入りくださいませ」

恭しく頭を下げる彼女の姿を見ながら、彼は開かれている扉から中に入った。部屋は薄暗く、一体何の部屋なのだと思ったその瞬間、背後の扉が音もなく閉じられた。

「よく来たな。待っていたぞ？」

彼はビクッと体を震わせ、驚いた表情のまま声のする方向に顔を向ける。

……そこには、驚愕の光景が広がっていた。

第三百十四話　化けの皮が剝がれるとき

「こっ、これは……。ハハッ！」

レアルは思わず片膝をついて頭を垂れた。何と視線の先には丸いテーブルがあり、そこにはアガルタ王・リノスと、その隣には皇后であるリコレットが座り、その周囲には王族のような衣装を身に着けた者たちが居並んでいる。

「そこでは話が遠い、近くに寄ってくれ」

リノスの声が響き渡る。彼は驚いたように顔を上げ、じっとテーブルに付いている者たちを凝視する。彼らは視線を外すことなく、ニヤリとした笑みを浮かべながら、ゆっくりと頷いている。レアルはキョロキョロと辺りを憚るようにしていたが、やがてスッと立ち上がり、ゆっくりとテーブルの前に進み、そして再び膝をつき、リノスに向かって頭を垂れた。

「突然のことで驚きました。一体、何のおつもりですか、アガルタ王様」

レアルはゆっくりと頭を上げ、上目遣いにリノスを見た。彼はじっとレアルを見つめたまま微動だにしない。背筋をピンと伸ばし、まるで皇后のリコレットの侍従のような緊張した姿勢だ。しばらくの間、沈黙が流れる。一体、何がどうなっているのかと戸惑っていると、不意にリノスの声が響き渡った。

「何も……ないな」

慌てて顔を上げ、リノスに視線を向ける。彼もまた自分に視線を向け続けている。レアルは一瞬、リノスの言葉の意味をわかりかねたが、すぐに言葉の意図を汲み取った。彼はフッと息を吐き、意を決して口を開く。

「恐れながら申し上げます。このようなことを申し上げるのは、甚だ不躾ではございますが、我がサルファーテ国女王陛下の第四王女、サルファーテ・ルファナ様のご様子が……。私の知るルファナ様ではございません！」

一気にまくしたてて、再び顔を上げてリノスを見るが、彼は鳩が豆鉄砲を食ったような表情を浮かべている。レアルは再び頭を下げて、言葉を続ける。

「ルファナ様は、第四王女とはいえ、母君であられます女王陛下とは疎遠でございました。それが、あの、タナ王国との戦い以降、人が変わったように陛下に忠勤をあそばすようになりました。それまでは……お話にすらなられなかったお二人であられますのに……。ハッ、そう言えば先程、ルファナ様は女王陛下を手伝うと仰せになられて、ご一緒に浴室にお入りになりました。誠に恐れ入りますが、私に浴室の入室をお許しください！　さもなければ、どなたか人をやり、部屋の中をお検めください！　何卒、伏して、伏してお願い申し上げます！」

レアルの話があまりに予想外のものであったためか、部屋の中には静寂が訪れている。だが、そのすぐ後にリノスの声が響き渡った。

「一つ、聞きたいことがある」

「何なりと」

「あなたの名前を伺っても？」

「は？」

レアルは一瞬、キョトンとした表情を浮かべる。だがすぐに彼は姿勢を正し、声を絞り出すようにして、その質問に答える。

「サルファーテ国女王陛下の侍従武官長を勤めます、レアル・ステイトです」

リノスはその言葉に大きく頷く。

「なるほど、レアル・ステイトさんね。アガルタ国国王、バーサーム・ダーケ・リノスです。初めまして」

「え？」

レアルの目が見開かれる。リノスはその様子に気を使うことなく、さらに言葉を続ける。

「本当に、何もない。ここまでくると清々しささえ感じるな。大抵人間というのは、多かれ少なかれ邪念を持っているものだが、お前は、そういうものを全く感じないな。今までいろいろな人間を見てきたが、初めてのことだよ」

リノスは笑みを讃えているが、その目は全く笑っておらず、その不気味さは増し続けている。

「上手く存在を消していたが、あまりにも完璧すぎたな……。だが、そんなお前にしては、初歩的なミスを犯すんだな。会ったこともない人に、アガルタ王様なんてな……レアル。いや、妖狐・ヘイズ。俺たちがサルファーテ女王の部屋に向かうその隙を狙って、リコを攫う……そんな作戦だったのか？　このためだけに、サルファーテ国を滅ぼし、女王の側に付いてひたすら追い込み続けていたのか？　やることが壮大すぎて驚くが……その行動力を他に活かせなかったのかね？」

「ア……アガルタ王様、一体何を仰います……。ヘイズなどという名前には、記憶にございません。他人の空似と世間では申します。よく似た者もおりますれば、お人違い下さいますな」

「フッ、いかにシラを切ろうとも、逃れぬ証拠はそこにある。その、左の頬に一つのホクロだ」

リノスがレアルを指さすと、彼の左の頬に薄黒いシミが浮かび上がる。

「マトカルに化けたとき、身体検査をすると見せかけて、魔力で目印を付けておいたのだ。これも上手に消していたな。だが、完璧に消すまでには至らなかったな。今、お前の顔に浮き上がったホクロが何よりの証拠だ。……もう、逃げられんぞ？　妖狐・ヘイズ！」

リノスの言葉が言い終わると同時に、突然、前触れもなく、部屋が光に包まれる。その瞬間、リコが座っていた席から、何かがはじける音が鳴り響いた。

「くっ！？」

光がおさまると、そこには驚きの声を上げているサツキの姿があった。彼女はリコのすぐ前で何かを投げきったような態勢で固まっていて、その顔は、歯を食いしばりながらゆがみ切っていた。リノスはそんな彼女には目もくれず、ホーリーソードを抜いて、目の前のレアルに対峙する。

「やめぇぇぇぇい！」

突然、リノスの隣に控えていた兵士が絶叫している。彼の視線の先を見ると、ヘイズの背後……それも、部屋の隅にオージンと思われる少女が、目をカッと見開くと同時に、口も大きく開けていた。しかもその体は徐々に赤みを増している。

「コォォォォォッ！」

「やめんかぁ！」

控えていた兵士がものすごい速さで少女に突撃していく。見る間に彼は、まるでウエスタンラリアートをするかのように組み付き、オージンを引き倒した。その瞬間、兵士の姿が変わる。そこにいたのは、何とサンディーユだった。

「南無！」

ドン！　という音と共に、そこから白い煙が立ち上る。同時に、目の前のヘイズの姿が消えた。

「ふんっ！」

リノスは体の体勢を全く変えず、剣だけを振るう。

「くっ……」

何かに弾かれるようにして、男の姿が現れた。彼は飛び跳ねるようにして後退し、蹲っているサツキと背中合わせになった。それが合図であるかのように、リコが素早く彼らから距離を取る。よく見ると、男の顔は、妖狐・ヘイズのそれに変わっていた。彼は右肩を押さえ、その手からは血がしたたり落ちていた。

「ヘイズ、覚悟！」

リコの前に控えていた兵士が、ヘイズに向けて手をかざしている。よく見るとその兵士も徐々に姿を変えつつあり、やがてすぐに玉ノ井の姿に変わる。その瞬間、彼女の両手から無数の糸が飛び出し、みるみるうちに二人の体に巻き付いた。

「ガアッ！」

突然、玉ノ井が叫び声を上げて片膝をつく。気が付くと、ヘイズとサツキはリコの側に移動しており、しかも、ヘイズはその腕で、リコの首を背後から締め上げていた。

「二度も同じ手が通用するとは思わないことだ！　サツキ！」

「ハイ！」

ヘイズの言葉にサツキが彼にピタリと寄り添う。そして、それと同時に、彼らの体が光り出す。

「女神（リコレット）はもらった！」

その言葉と共に、光はさらに輝きを増していき、やがて眼を開けているのも困難なほどのまぶしさを放った。

「……どういうことだ!?」

光が収まる。何とそこには、先程と同じ態勢のまま立ち尽くす三人の姿があった。ヘイズは目を見開いて驚いている。

「すみません、遅くなりまして」

声のする方に目を向けると、そこには、はあはあと息を切らせ、肩で息をするソレイユの姿があった。そして、その傍らには、神龍様の姿があった。

「おーう、言っておった通り、そやつの体の自由を奪っておいたのらー」

ヘイズの表情に変化はない。神龍様の力で体は動かないはずなのにもかかわらず、なぜ、そんなに余裕を持っていられるのだ？　まだ何か策があるのか？　そんなことを思いながらゆっくりリノスは三人に近づいていく。そのとき、彼の耳に、奇妙な音が聞こえてきた。

ミシ……ミシ……ギギギギギ……ギギギギギギギギーーーーーー。

見ると、ヘイズの右手の薬指に嵌められた指輪が青白く光っている。そして、そこに何かが吸い寄せられるように、白い煙のようなものが渦を巻いていた。

「ぬあぁぁっ！」

何かを振り払うかのように、ヘイズの右腕が振るわれる。そしてその手に持った杖が再び光を発する。だが、その光は途中でしぼむようにして消え失せる。ヘイズの顔色が変わる。

「何だ！　何が起こったんだ！　どうして転移しない！　何故だ！　何故だ！」

「オクタ様！」

ヘイズとサツキの絶叫にも似た声が響き渡る。

「ふぅぅぅ～～～～」

まるで二人の狼狽ぶりには一切、関心がないとばかりに、リコが大きなため息をついていた。あまりの予想外の行動に、ヘイズとサツキは、思わずリコに視線を向けた……。

第三百十五話　結末

ヘイズの左腕が首に食い込んでいる状態のリコが、余裕しゃくしゃくの表情を浮かべている。その様子を見て俺は、ニヤリと笑みを漏らす。すると、それが合図であったかのように、リコの体が徐々に大きくなっていく。その大きさに比例するように、ヘイズの目も徐々に見開かれていく。

「おっ……おっ……おっ……」

「ヘイズ、久しぶりじゃな」

そこに現れたのは、何と、おひいさまだった。

彼女の周囲に狐火が一つ、また一つと現れていく。そして、六つの狐火を纏ったとき、おひいさまがゆっくりと口を開く。

「あのときよりも、さらにスキルを上げたのじゃな。そなたのスキルを奪うのに骨が折れたわぇ。しかも、称号が二つも増えておった。これ以上スキルを上げられると、妾でも奪い取るのができなくなっておった。まさに、ギリギリの機会じゃったな」

「がっ……ガッ……ぐあぁぁぁっ」

ヘイズは必死で体を動かそうとする。だが、その体はピクリとも動かない。そして、顔には不気味な筋熊が浮かび上がっている。

「無駄じゃ。全てのスキルを奪われたお主は、もはや何も出来ぬ。

覚悟を決めるのじゃ」

「女神（りこれっと）……僕の女神（リコレット）……」

「この期に及んでまだ女子（おなご）か！　あさましいのう……。そなたはそのような者ではなかったに……」

「あ……諦められるか！　あの女は僕のモノになる運命にある！　あの唇を、乳を、尻を……何としても！　何としても！」

「ぬぇい！」

気合いとも叫び声とつかぬ絶叫が響き渡る。気が付けば、俺の足元にヘイズの首が転がっていた。

おひいさまが目をカッと見開きながら、右手を振り切ったようなポーズを取っている。その彼女の大きな肩がゆっくりと上下している。

「おひいさま……」

俺の言葉に、彼女は表情を変えることなく、目だけをこちらに向けた。ものすごい迫力だ。

「大儀じゃった……」

彼女の言葉に、俺は恭しく一礼をする。

「リノス殿！　すまぬ！　こちらも何とかしてくれい！」

叫び声のする方向に視線を向けると、そこには、少女に馬乗りにな

っているサンディーユの姿があった。俺はそこに向かおうとして、ふとサツキに視線を向けた。彼女は首のないヘイズの死体を呆然とした表情で見つめていた。そのすぐ隣には、玉ノ井がいた。彼女は俺と目が合うと、サツキのことは心配するなと言わんばかりに、ゆっくりと頷いた。俺はすぐにサンディーユの許に向かう。

そこには、大の字に寝転がったオージンの姿があった。半目のまま口をポカンと開けている。その視線は焦点を定めず、虚ろな表情のままピクリとも動かない。

「一体、これは……」

「自爆しようとしておったのだ」

「自爆!?」

「体が真っ赤に染まっておった。察するところ、コア・スープの術を使おうとしていたのじゃろう」

「コア・スープ?」

「我ら狐族に伝わる秘術じゃ。全てのHPとMPを凝縮して爆発させる術でな。ヘイズめ……このような幼子に、まさかこのような術を仕込むとは」

サンディーユは眉間に深い皺を刻みながら、ワナワナと震えている。そんな中でもオージンは一切の反応を示さない。

「今は、どういう状態ですか?」

「おそらく自爆用の熱を発したことで、脳が焼き切れたのやもしれぬ。某の回復魔法では全く役に立たぬようじゃ。リノス殿は確か、ＬＶ５の回復魔法が使えるはず。それを試してやってくれぬか」

俺はすぐさまＬＶ５の回復魔法をオージンにかけた。……彼女の様子は全く変わらない。立て続けに数度魔法をかけてみるが、やはり結果は同じだった。

「……ダメか。脳が、溶けておるのかもしれぬ……哀れな。命は、助かりはしたが、この幼子は、これから魂が抜けた状態で、生涯を送らねばならぬ。某がもっと早く止めに入っておれば」

「サンディーユさん」

俺は彼の肩に手を置く。老狐は目を伏せたまま、ゆっくりと立ち上がった。

俺はサツキの様子を見に行こうと、再び彼女に向かって歩き出す。その途中、おひいさまに刎ねられたヘイズの首が目に入った。

「あれ？　人化が解けていませんね？」

そうなのだ。妖狐・ヘイズとあるからは、彼はゴンと同じ狐のはずなのだ。死んでいるのならば、その人化が解けていなければおかしい。だが、目の前に転がる首は、確かに顔に筋隈が現れているが、人間のままなのだ。これは一体どういうことだろうか？

「……肉体を、入れ替えたのじゃろうな」

不意におひいさまが口を開いた。肉体を入れ替える？　どういうこ

とだ？

「憑依というスキルじゃ。自分の意識を他人に乗り移らせることができるのじゃが、極めれば、己のスキルを移すことができる。言うなれば、肉体を乗っ取ることができるのじゃ。ヘイズの憑依スキルはＬＶ５に達しておった。おそらく、人間であったこの者にヘイズが憑依したのじゃろう。妾が討伐した折、ヘイズの狐としての肉体はもはや使い物にはならぬほど傷ついておった。おそらくヤツは何らかの手段を使って、スキルごとこの人間に乗り移ったのじゃろう」

「え？　それではもしかするとヘイズはまた……」

「その心配はない。既にヤツは首を刎ねられておる。誰かに憑依することは不可能じゃ」

おひいさまはそこまで言うと、ふぅと息を吐いた。

「とはいえ、ヘイズのことじゃ、どのような策を弄しておるのか分かったものではない。そなた、ご苦労じゃが、ヘイズの死体を焼いてもらえぬじゃろうか？　そなたの火魔法であれば、一瞬で灰にできよう」

「……わかりました」

そのとき、俺の視界に、今までヘイズの死体を眺め続けていたサツキが、スッと体を起こすのが見えた。そして、その右手にキラリと光るものが見えた。

「バカ、やめ……」

一瞬のことだった。サツキが持っていた短刀で自分の胸を貫いた。ものすごい血がその体から溢れだし、見る間に床を染めていった。俺は慌ててサツキの許に駆け寄る。

「オク……タ……様……。私も……まい……り……」

俺が抱き留める前に、彼女はゆっくりとヘイズの体の上に倒れていった。……見事だった。本当に心臓を一突きにしていたのだ。俺の回復魔法でも治癒することはできなかった。

その後、俺はヘイズの死体を結界に閉じ込めて、一瞬のうちにその体を灰にした。そしてそれは、おひいさまたちが屋敷に持って帰ると言い、骨壺のような入れ物に丁重に入れて、サンディーユたちを伴って転移していった。

俺はメイとローニを呼び、サツキとオージンを診察させた。わかっていたことだが、サツキは完全にこと切れていた。一方のオージンは、一旦メイの研究所で調べることになった。脳が溶けたのであれば、呼吸ができなくなるので確実に死んでしまうのだが、彼女の場合は呼吸が出来ている。おそらく、脳は無事なのではないかというのがメイとローニの一致する意見だったのだ。俺はくれぐれもよろしく頼むと二人に言って、転移するのを見送った。

しばらくして、俺はソレイユと共にサルファーテ女王を引見した。彼女はルファナ王女に手を取られ、ヨロヨロと覚束ない足取りで俺の許に現れた。そして、タナ王国に蹂躙された時の恐怖を語り、見苦しいほどにアガルタに命を守って欲しいと懇願したのだった。

その女王の様子に、ルファナ王女も、その二人の姉たちも、じっと目を伏せたままピクリとも動こうとはしなかった。よく見れば、二

人の姉の手は小刻みに震えていたのだ。その様子に俺は、先程のことを話そうかどうかを迷ったが、意を決して女王たちに口を開いた。

……女王たちは絶句していた。とりわけ女王は、おそらく最も信頼していた家来だったのだろう。それが妖狐・ヘイズであったと知って、呆然自失の状態になった。そんな様子を見ながら二人の姉たちは、レアルが裏切り者だったのであれば、これまでのことが全て説明が付くと納得し、挙句には俺に対して丁寧に礼を言う始末だった。

女王一行は、俺の、気のすむまで迎賓館に居てもいいという話と、迎賓館に居る限りは、アガルタ軍が万難を排して警護するという話を聞いて、涙を流しながら礼を言い、ゆっくりと部屋を後にしていった。

「何とも、後味の悪い結末ですね……」

誰も居なくなった部屋で、無言で空を見上げたまま微動だにしない俺の隣で、ソレイユがポソリと呟く。俺はゆっくりと彼女に視線を向け、大きなため息を一つつきながら、ゆっくりと立ち上がった。

「屋敷に帰ろうか。今日はありがとうな、ソレイユ」

ソレイユはゆっくりと頭を下げて立ち上がり、リノスにピタリと体を寄せた。彼女から伝わるほのかな温もりにちょっとホッとした感覚を感じながら、二人は帝都の屋敷に転移したのだった。

第三百十六話　秘密の作戦会議

「ただいまー」

「とうたん、マミー、おかえりなさいー」

「おかえりなさいー」

帝都の屋敷に帰ると、エリルとアリリアが出迎えてくれた。以前までは、帰ってくると問答無用で俺の胸にダイブしてきた二人だが、ここ最近は、二人してお辞儀をしてお帰りを言ってくれるようになった。子供たちも着実に成長している。

そんな様子を嬉しく思いながら俺は、二人の娘を抱っこする。正直、かなり重い。だが、こうして抱っこできるのもおそらくあと少しのことだろう。そう考えると、腕が痛かろうが、腰が痛かろうが、そんなことは言っていられない。体が悲鳴を上げるまで、娘を抱っこし続けよう、そんなことを思いながら、俺はダイニングの椅子に腰を下ろす。すると、その途端、二人は俺の腕をすり抜けて、パタパタと離れに向かって走っていった。その姿は微笑ましくもあり、ちょっと寂しくもある。

「ママーぁ！　とうたん、おかえりー」

二人の声が聞こえてくる。しばらくすると、イデアを抱っこしたままの状態で、リコとシディーがダイニングに入ってきた。シディーの腕には、ピアトリスが抱っこされている。そしてその後ろから、エリルとアリリアがパタパタと足音を鳴らして部屋に入ってきた。

俺はリコからイデアを抱き取ろうとするが、彼は母親にギュッと抱きついたまま離れようとはしない。別に俺が抱いても泣きはしないのだが、彼はできるだけ母親から離れたくはないようで、いつもこんな感じで拒否られることが多いのだ。俺は苦笑いをしながら、自分の席に座る。リコは優しい笑みを浮かべながら、イデアを椅子に座らせ、食事の準備を整える。

そんな様子を眺めていると、いつの間にか家族全員が揃っていた。そして、俺たちはいつもの夕食タイムに突入する。

「……ヘイズのことだが、今日、おひいさまが討伐したよ」

「そうですの……」

夕食の最中、俺は手短にヘイズの討伐を報告した。声を発したのはリコだけだった。他の者は、全員がゆっくりと頷いているだけだった。実は、あの現場には、気配を完全に隠したゴンが潜んでいた。彼はヘイズが討伐された後、すぐに屋敷に帰り、皆にその様子を伝えていたのだ。ヘイズの他にサツキが死に、オージンが茫然自失の状態になったという後味の悪さは、リコたちも感じていたようで、彼女たちはそれ以上深くこのことについて聞いてはこなかった。

食事が終わり、デザートを食べ終わると、子供たちはリコやマトカルたちに連れられて風呂に向かう。ダイニングにはメイとソレイユ、ペーリス、ルアラ、ゴンが残り、自然と俺の周囲に集まり、それぞれ椅子に腰を下ろした。

「オージンさんのことですが……」

メイが言いにくそうに口を開く。そして、研究所で調査した結果を報告してくれた。

今のオージンは、言ってみれば自分の体に閉じ込められている状態なのだという。つまり、意識も感覚もあるのだが、体が動かせない状態になっているのだ。わずかに動かすことができるのは、眼球と瞼のみで、メイやローニ、アガルタ医療研究所のスタッフの問いかけに対しては、それらがわずかに動いたことで、彼女に意識があることが確認されたのだそうだ。ただ、こうした症状はメイにとっても、ローニたちにとっては初めてのことであり、有効な対処法はなく、しばらくは様子を見るしか方法はないのだと、メイは悔しそうな表情を浮かべながら俯いた。

「いいや、メイ。よくそこまで調べてくれた。オージンの意識があるということがわかっただけでも、おお手柄だ。ありがとう。礼を言う。すまないが、オージンのことを、頼むな」

俺の言葉にメイは、畏まりましたと頭を下げた。

「さて、お礼ついで……と言っては失礼になるけれど、ソレイユ、神龍様にお礼を言っておいてくれ。また、近々、お礼をするからお出ましいただこう。そのときはまた、頼むな」

その言葉に、ソレイユも承知しましたと言って頭を下げる。

今回の妖狐・ヘイズの戦いに関しては、全てが神龍様のお蔭と言って過言ではなかった。彼にサルファーテ女王一行の監視をお願いしたことが、今回の討伐につながったのだ。

彼は、女王一行を見て、瞬時に一人の男が怪しいと看破した。それ

は言うまでもなく、レアルに化けた、妖狐・ヘイズだった。人間には多かれ少なかれ、邪念を始めとする様々な感情が同居しているものだが、侍従武官のレアルだけは、そうしたマイナスの感情を感じなかったのだ。と、いうより、喜びや楽しみといった感情も持っていない、言うなれば、全くの無の人間であったのだ。

何万年という時を生きている神龍様をして、このような人間は初めて見る者だった。と、いうより、そうした者は最早人間ではない。そう考えると、そんな芸当ができるのは、妖狐・ヘイズではないかという考えに行き当たる。そのため俺は、この旨をおひいさまに報告し、彼女はサンディーユと玉ノ井を密かに見張りに寄こしたのだった。

そして、この二人も、レアルが妖狐・ヘイズに間違いはないだろうと断定した。それは、鑑定スキルを使っても、彼の過去が全く無であったことと、彼からは妖気も感じなければ、人族が持つ、人間らしい匂いすらも持っていなかったのだ。ここまでくると、何かの探知に引っかかることもなければ、俺がどんな効果を付与した結界を張っても、易々とすり抜けることができる。敵ながら、恐ろしいスキルを身に付けていたのだ。

妖狐・ヘイズを確認したおひいさまの動きは素早かった。ヤツの狙いはリコであることは明白だ。おそらく、サルファーテ女王を囮に使い、リコを奪いに来るだろう。そのように読んだ彼女は、自身がリコに化けてヘイズに肉薄する作戦を立てた。そして、計略は図に当たり、ヘイズは無事に討伐されたのだ。しかも、そこには万全を期してソレイユを配置し、神龍様の力を借りる準備もしていたのだ。まさに、万事計画通りにコトが進んだことになる。

そんなことを話していると、子供たちが風呂から上がったとマトカ

ルが伝えてきた。今後のことは、明日以降に改めて話し合おうということになり、この日は解散ということになった。

メイとソレイユは、風呂から上がるエリルとアリリアの世話に向かう。そして皆がワイワイと子供たちの世話をしているそのさ中に、俺は勧められるままに風呂に入った。

何となく、一人で風呂に入るのは久しぶりだ。湯船に体を鎮めながら、俺はぼんやりと色々なことを考える。そして、風呂から上がり、パジャマに着替えて寝室に向かう。

扉を開けると、リコがイデアをベビーベッドに寝かせる所だった。彼はこのところ、面差しがますます俺に似てきた。エリルの姿を探したが、見当たらない。きっとマトカルと一緒に寝ているのだろう。彼女は本当にマトカルが大好きだ。やはり剣の才能がある者同士、通じ合うものがあるのだろうか。そんなことを考えていると、不意にリコがスルリと抱きついてきた。

「……リコ？」

「本当は、もう、遠慮しないといけないですけれど……」

「遠慮するって、何をだい？」

「……一緒に、寝ることですわ」

この世界の王族では、女性は３０歳になると夫と一緒に寝るのを遠慮するというのが作法なのだそうだ。だがリコは、持ち前の寂しがり屋から、それができずにズルズルと今まで来てしまっていたのだと言う。俺はそんなことを気にする必要はないと言おうとするが、

その前に、リコが小さな声で呟いた。

「でも……しばらくは、こうして、一緒に寝てくださいませ……。さもないと、眠れない気がするのですわ」

俺はゆっくりとリコを抱きしめ、そして、口を開く。

「リコが今、思っていることを当ててみようか？　……ヘイズは生きている。違うか？」

その瞬間、彼女は驚いた表情を浮かべながら、ガバッと体を離した。俺はその顔を愛おしそうに撫でる。

「実は、俺も、そう思っているんだ」

そう言いながら俺は、リコの腕をやさしく掴み、自分の顔近くまで引き寄せた。

「ヘイズが付けた、このリコの腕のシミ……。これはおそらくヤツの魔力が付いているのだろう。それが消えていないとなると……。ヤツは生きている可能性が高いな」

「……実は、私も、そう思っていたのですわ」

リコは再び俺の胸に顔をうずめる。俺はそんな彼女をやさしく抱きしめる。

「きっと……ヘイズはまた、襲ってきますわ。リノス……私は……あなたの腕の中でしか、生きられませんわ。もし、ヘイズに攫われるようなことがあれば、私は、舌を噛み切って、死ぬつもりです…

…」

「……俺も、リコが居なければ生きていけない。メイもシディーもソレイユもマトもみんな愛している。でも、やっぱりリコが居ないと、俺は嫌だ。だから、絶対、絶対にリコは守って見せる。守って見せるからな」

そう言って俺はリコを抱え上げて、やさしくベッドに連れて行く。

「リノス……愛していますわ」

「俺もだ、リコ……」

出会った頃はトゲのある女性だったが、結婚してからはそれも無くなり、むしろ、とても情のある妻になった。俺のために何とかしてやらなければならないと、いつも考えてくれているのがよくわかるのだ。そういった意味で、彼女は理想的な妻であると言える。結婚した当初は永遠の恋人のような存在だったが、今ではむしろ、俺の大親友のような存在だ。そんなリコを、他の男に渡せるわけがない。

「リコ……」

「何ですの？」

「今度、ヘイズが襲ってきたら……」

俺は小さな声で、彼女の耳元で囁く。リコはそれをじっと聞いていたが、やがて、俺の体を強く抱きしめた。

「必ず、必ず、ヘイズを倒すのですわ。リノス……助けに来て、く

ださいませね」

「もちろんだ。もちろんだよ、リコ」

「リノス……」

リコの体は、子供を二人も生んでいるとは思えない程に均整が取れていた。それに、その風貌も、初めて会ったころから、ほとんど変わっていないようにも思える。それに、相変わらずその肌は、シミ一つなく、ましてや角質などは一切ない、まるで絹のような美しさを保っていた。

リノスはリコを抱きしめながら、絶対にこの妻（ひと）だけは守り抜いて見せると、あらためて決意するのだった……。

第三百十七話　眠りからの目ざめ

「……ぅ……ズぅ～……イズぅ～……ヘイズぅ……あっ！」

椅子に座ったままベッドを見つめているのは、エルフ王の娘であるミークだ。その彼女の目の前には、滾々と眠る一人の男がいる。そして、その男の目が、今ようやく開かれていた。

「この間から随分と眠るのじゃな。人間というのは、数年に一度はそんな風になるのか？」

ミークの問いに男は答えない。その瞳は焦点を定めず、虚ろなままだ。

「……何日経った？」

男は気だるそうに口を開く。その様子に、ミークはうんざりした表情を浮かべている。

「5日間じゃ。声をかけても、体をゆすっても起きぬ。退屈で退屈で仕方なかったぞよ」

ミークのその声に、男はゆっくりと息を吐き出す。これが妖狐・ヘイズと知れば、そのあまりの衰弱ぶりに、彼を知る者は驚くに違いない。彼にとっては、リノスとの闘いは、それほどのダメージを負うものだったのだ。

彼はゆっくりと体を起こし、フラフラと部屋の隅に歩いていく。そ

して、コップのようなものに手をかざす。

「……くっ、水すらも出せないとは」

ヘイズはクルリと振り返り、退屈そうにあくびをしているミークに向かって声をかける。

「すまないが、水を出してくれないか？」

「水ぅ？　そんなもの、どうするのじゃ？」

「決まっている。飲むんだよ」

ミークは不思議そうな表情を浮かべながらヘイズに向かって手をかざす。しばらくすると、彼女の小さな掌から勢いよく水が湧き出した。彼はミークの掌に顔を近づけ、流れ出る水を無我夢中で飲んでいく。

「うふふ、あはは、面白いのう、ヘイズ」

床が濡れるのも構わず、ミークはケラケラと笑いながら水を出し続ける。そのとき、ヘイズが彼女の手首を掴む。予想外の行動でミークは思わず体をビクッと震わせる。それと同時に、水の流れが止まる。

「……生き返ったよ。ありがとう」

彼は大きなため息をつきながら、再び寝ていたベッドに戻り、体を横たえる。そして、再びゆっくりと目を閉じる。

一筋縄ではいかないとは思っていたが、まさかここまでとは正直、思わなかった。ミークをエルフの里から奪ったあのときなど、問題にはならない程の難易度だ。

「敵の能力を、低く見積もりすぎていたな……」

誰に言うともなく、ヘイズは小さな声で呟く。おひいさまとその眷属が出てくることは想定の範囲内だった。彼が最も予想外であったのは、リノスの結界能力とソレイユの精霊を扱う能力だった。

まさかおひいさまが女神（リコレット）に化けているとは思わなかった。あの女の妖気には細心の注意を払っていたのだ。にもかかわらず、自分の探知能力に全く引っかからなかった。あの女に、自分の妖気を完全に消し去ることなど出来るはずもない。と考えれば、あれはアガルタ王・リノスの結界であることは明らかだ。

「……とすれば、やはり、神結界のさらに上を行く結界を編み出したか？」

先日のマトカルのことといい、今回のことといい、プリルの石と魔吸石を装備していたにもかかわらず、その結界は破ることができず、また、その効力を失わせることができなかった。とすれば、石たちの能力を超えた魔力を有しているか、さもなくば、何かの仕掛けをしたのかのどちらかだ。だが、リノスは人間だ。プリルの石や魔吸石を超えたＭＰがあるとはどうしても信じられなかった。

「だが、アガルタ王のあの能力……。人間では、ない……か？」

そこまで考えたヘイズはゆっくりと目を開ける。リノスの能力は確かに異常だ。ミーダイ国の結界といい、リコレットを守った結界、

そして、おひいさまを化けさせたあの結界……。どれをとっても、ヘイズの予想をはるかに超えた規模とクオリティーだったのだ。まず、普通の人間では不可能だ。

「……まさか、数年前の大魔王、か？」

大魔王が降臨し、一つの国を壊滅させたことはヘイズも知っていた。そして、その禍々しい妖気を感じることもできていた。彼は一瞬、その妖気を発する者に興味を持ち、その様子を見に行こうかとも考えた。だが、用心深い彼はそれを思いとどまった。タナ王国からジュカ王国まではかなりの距離がある。その距離を超えてなお、易々と感じられる妖気を発するというのは、尋常ではない。となれば、おひいさまが動くことは十分にありうる。その動向を見極めて後、動こうと彼は考えて、そのときは動かなかったのだ。だが、その禍々しい妖気はすぐに消えてしまい、その後、ラマロン皇国で大魔王は討たれたと報告されている。

しかし、その大魔王が自分と同じ憑依のスキルを持つのであれば話は別だ。もしかして、討たれた大魔王は影武者であり、本体は別の所で生息しているのかもしれない。それがリノスであるとすれば、あの人間離れしたスキルの説明がつく。

一方で、リノスが大魔王だとすると、彼からは禍々しい妖気の類は一切感じられない。自身に結界を張って妖気を秘匿しているとも考えられるが、それであれば、アガルタが世界に稀に見る強国でかつ、平和な国となっている状況の説明がつかない。ヘイズが知る、伝説の中の大魔王は、何よりも殺戮を好む人物であるとされている。そんな人物が、ミーダイ国に結界を張り、あの国の人々を救うなどとは考えられない。

「大いなる災厄のための準備……か？」

そこまで呟いて、彼はフッと苦笑する。そして、自分自身に言い聞かせる。想像だけで考えず、現実の証拠を照らし合わせて考えろ……と。そんなことを考えていると、彼の視界にミークの姿が見えた。彼女は一糸まとわぬ、裸になっていた。

「へイズぅ～」

彼女は甘えた声で幼い体を擦り寄せてくる。だが彼は、全く体を動かそうとせず、ミークに諭すようにして口を開く。

「今はダメだよ。魔力がカラなんだ。今の僕は普通の人間と変わらないんだ」

ミークはキョトンとした表情を浮かべながら、首をカクンと傾ける。

「ならば、ポーションを飲めばいいではないか」

「いや、それはダメだ」

「何故じゃ？」

「魔力が回復しても、精神が回復するわけではない。今の僕は全てのＭＰを使い果たしていると同時に、肉体的にも精神的にもボロボロなのだ」

「ならば、妾の……」

そう言ってミークは唇を近づけてくる。彼は手でその唇を遮りなが

ら、さらに言葉を続ける。

「いや、肉体だけではダメだ。精神的……つまり、気持ちの部分で落ち込んでいると、回復が遅れてしまうのさ。ここ数日はほとんど飲まず食わずでいて、この体にも無理をさせた。そのために、回復能力が著しく落ちている。そこに来て、僕自身も落ち込んでしまっているからね。余計に回復が遅くなっているんだよ」

「ヘイズにしては珍しいのぅ。いつもは、傷を負っても妾と遊んでくれるのに……。この間の大怪我のときにでも、朝まで楽しんだではないか～」

眉毛をハの字に曲げていじけるミークに、ヘイズはため息をつきながら口を開く。

「仕方がないだろう。僕のスキルすべてをあの男に移したんだ。MPが枯渇するのと、肉体的な負担は大きいと説明しただろう？　それにしても、勿体ないな。あれだけ僕に似ている男はそうはいない。完全にダマし切れると思っていたんだけれどな。それにしても、あのアガルタ王もさることながら、厄介なのはあの精霊使いの女だ。あの女の操る精霊の力は、一体何だったのだ？　プリルの石も魔吸石も全く効かなかった。それどころか、石の影響を完全に消し去って、僕の体の自由を完璧に奪うとは……。なるほど、アガルタ王が僕の正体を見破れたのは、あの女のお蔭もあってのことか……。女神（れっと）は奪えなかったが、アガルタ王の戦力を見極（りこ）められただけでも、成果だ」

「さっきから何を一人でブツブツと言っておるのじゃ～」

「これから、どんな楽しいことをしようかと考えているんだよ。も

ちろん、君と一緒にね」

「面白いことぉ？　また、リコなんとかという女を奪いに行くのか？」

「ああ。サツキが作戦通りに死んでくれたおかげで、ヤツらは僕が死んだと思っているだろう。それでいい。僕も肉体と魔力が完全に回復するまでかなりの時間がかかる。その間に、ゆっくり作戦を立てるとしよう……。ミーク、しばらくは一緒に居られるから。今日のところは我慢してくれないか。明日から、しばらくは毎日君と一緒に居られるよ」

「おおっ！　じゃあ、また、丸一日遊んでくれるのじゃな？」

「ああ、サツキが消えたからね。これからは、前と一緒だよ」

「やった！　では、今日一日は、辛抱しようぞ！」

その言葉を聞いてヘイズはフッと笑みを漏らす。そしてゆっくりと目を閉じて、再びリコレットを手に入れるための計画を頭の中で思い描くのだった……。

第三百十七話　眠りからの目ざめ（後書き）

釣り狐編、完了です。次回は間話を1本挟みましてから新章に入ります。

第三百十八話　怪我の功名

アガルタの都の真ん中には、人工的に作られた湖がある。そして、その中心には、巨大な岩がそびえ立っている。これは言うまでもなく、リノスがジュカ王国を滅ぼしたときにできたものだ。そこには悲しい逸話があるのだが、今、ここではそれには触れない。それよりも、その湖のほとりで、一人の女性が腕を組みながら、この岩を睨みつけている。

その女性は、何とゼザだった。彼女は頭の中で、色々なことを猛烈な勢いで考え続けていた。

「はあ～」

相変わらず考えはまとまらず、解決策も導き出せない。彼女はそんな自分に嫌気をさしつつ、ガックリと肩を落としながら、トボトボとその場を後にするのだった。

「戻りました」

扉を開けると、一人の少女が椅子に座っていた。それは言うまでもなく、彼女の主人であるオージンだ。ゼザは物言わぬ主人の前に進み出ると、片膝をつき、恭しく頭を下げた。

オージンが見つかったと聞いた、ゼザ、ハーギ、シロンの三人は狂喜し、取るものも取りあえず都の迎賓館に駆け付けた。だが、そこで彼女が見たのは、既に息絶えたサツキと、物言わぬ姿になり果て

たオージンの姿だった。

この三人は、サツキ同様、幼い頃にクワンパック家に奉公に上がった者たちだった。オージンが生まれ、その世話がサツキ一人では手に余るために、亡きクワンパックの奥方が新たに侍女として、オージンの遊び相手としてこの三人を付けたのだ。元々この三人も、口減らしのために売られたようなものだった。そのため、この三人にとっては、クワンパック家、とりわけその奥方は命の恩人であり、オージンは主君であると同時に、それこそ赤ん坊のころから面倒を見てきた、娘のような、妹のような存在だった。そんなオージンの変わり果てた姿を見て、この三人は人目もはばからず号泣したのだった。

当初、オージンの身柄は、アガルタの医療研究所において、メイ自らが担当して、その治療にあたることになっていた。だが、ゼザたち三人は、オージンの世話は自分たちが行うと強硬に主張して譲らなかった。特にゼザとハーギは剣を抜いて主張しようとしたため、駆け付けてきた帝様専属の護衛集団であるオワラ衆のキュアライトからキツイお仕置きを受けることになった。通常であれば、このような振舞いをするゼザたちは国外に追放されるのが一般的ではあるのだが、そこは、シロンが涙ながらに懇願し、メイのとりなしもあって、何とかこの三人はオージンと共に暮らすことを許されたのだった。

四人での暮らしが始まってみると、意外にゼザたちはオージンの世話を完璧にやりこなしていった。三人ともコミュ力がなく、ゼザはゼザで慌てるとすぐに擬音だらけの言葉になり、シロンはシロンでなかなか言葉が出てこず、ハーギに至っては、すぐに人の言葉を信じてしまうという欠点がありつつも、ともかく、オージンへの世話に関しては文句のつけどころのない行き届いたものだった。

とりわけ、ゼザは、オージンのわずかに動く眼球と瞼、そして、呼吸……そうした細かい変化を見逃さず、さらには、彼女が発する雰囲気を敏感に感じ取ることができ、指示は擬音だらけであるものの、長い付き合いもあって、ハーギとシロンはそれを聞き分けることができ、すぐに対処することができていた。そのせいもあって、オージンのストレスは激減していたのだった。最早、この三人は、オージンが生活するうえで絶対に欠くことができない存在になっていたのだった。

だが、メイやシディーの知識と技術をもってしても、オージンの容体は一向に変化が見られなかった。彼女を何とかしたいという思いは、ゼザたちも同じで、彼女たちも、何か助けになることはないだろうかと自問自答する日々が続いていた。その中でも、ゼザの思いはひとしおだった。

夜、眠りに落ちたオージンの寝顔を見ながら、彼女は一人考える。何とか、手足……いや、指先の一つだけでも動かせるようにはならないのか。そして、こんなことになってしまった原因は何だろうか……と。だが、いくら考えても答えは出なかった。

そんな日々を送ること数日、ある日ゼザは、いつものように、研究所にあるメイの部屋に向かった。オージンの食事を受け取りに行くためだ。

体が動かせないオージンは、基本的に自分で食事を摂ることができない。辛うじて水を飲むことはできるが、それも、口を開けてやり、そこに少しずつ水を注いでやってようやく、水を飲むことができる。そんな状態であるため、食事は固形物を食べるなどはとんでもない話であり、彼女はいつも、メイたち研究所のスタッフが作った錠剤

で食事を摂っているのだ。

それは、レスルと呼ばれる錠剤で、人間が生きる上で最低限に必要な栄養が含まれたものだった。それを舌の下に含むことによって体内に吸収させるというものだ。オージンの食事については、注射など他に方法がないこともなかったのだが、ゼザたちはできるだけひー様の体を傷つけたくないと希望して、現在の食事形態に落ち着いていた。とはいえ、錠剤だけでは栄養の足りない部分もあり、月に数度はメイたち医師による注射が行われるのだが。

「失礼する……あれ？」

メイの部屋に入ると、いつもいるはずの彼女の姿がなかった。だが、机の上には、ゼザに渡そうとする錠剤が三つ置かれていた。おそらく薬はこれだろうと判断した彼女は、それを手に取り、そのまま部屋を後にしようとした。そのとき、メイの机の後ろにある棚が目に入った。そこには、何やら薬のような粉末が入った小瓶が整然と並べられている。その中で、一つだけ紫色のビンがあることに気が付いた。彼女はその瓶に興味を持ち、ゆっくりとそれを手に取った。きれいな色だ。中にはレスルと同じ錠剤が入っていた。鼻を近づけてみると、何やら甘い香りがする。それはゼザの記憶にある香りだった。

「……シンメーノ？」

毎年正月にクワンパック家で振舞われるお菓子で、いわゆる栗きんとんのようなものだが、その香りにそっくりだったのだ。

「シンメーノはひー様の大好物。これも一緒ならば、喜ばれる」

そう考えた彼女は、その錠剤も数個、その手の中に握りしめたのだった。

「あれ？」

メイが部屋に戻ってくると、ゼザがちょうど部屋から出ていこうとしていた。彼女はいつものようにやさしい笑みを浮かべつつ、ゼザに声をかける。

「あ、レスルを取りに来られたのですか？」

「かっ、で、ふわっ、で、パシパシっとしたから、ドン、だ」

そんなことを言いながら彼女は右手に持っていたレスルの錠剤をメイに見せ、そのまま足早に部屋を後にしていった。

ゼザがメイの部屋に戻ってきたのは、それからしばらくしてのことだった。

「ひー様が！　ひー様が！」

「オージンさんがどうかしましたか！？」

「カリっ、ゴクッとしたら、ぶわぶわーっ、ベロッ、バハッ、グテ～だ！」

「……すぐに行きます！」

メイは部屋を飛び出してオージンの許に向かう。そのただならぬ様子に気が付いた職員たちがその後を追いかけてくる。

「……！！」

オージンの部屋の到着したメイたちが見たものは、驚愕の光景だった。口からオレンジ色の、ゼリーのような物体をゆっくりと吐き出しながら、小刻みに震えているオージン。その周囲を、ハーギとシロンが泣きながらオージンの背中をさすり、その名前を呼んでいた。

「どいてください！」

メイが素早くオージンの許に駆け寄り、彼女を椅子から降ろす。そして、メイの膝の上に彼女を寝かせ、その背中を力いっぱい打ち付ける。

「ベハッ！　ヴェロアっ！」

まるで魔物の鳴き声のような声を上げながら、オージンはさらにオレンジ色の物体を吐き出した。メイは扉を振り返ると、駆け付けてきた研究者たちに素早く指示を出す。

「すぐに胃を洗浄します！　準備を！」

走り去る研究者たち。そして、数人の男たちがオージンの体を抱えるようにして運んでいく。

「すみません、吐瀉物も回収してください」

メイは傍らに居た研究者に、オージンが吐き出した物体の回収も命

じ、すぐに研究者たちの後を追った。

嵐のように研究者たちが立ち去った後、オージンの部屋では、一晩中女性の号泣する声が止むことはなかった。

幸い、オージンの容体は重篤なものではなく、彼女は次の日の昼には自室に帰された。そして、それを入れ替わるようにゼザがメイの許に呼ばれ、彼女はきついお叱りを受けた。

ゼザが持ち出した紫色の錠剤は、人間で言えば血糖値を下げるインスリンのような薬剤だった。通常、この薬を健常者が飲めば、一時的に低血糖状態となって意識を失うことはあるものの、重篤な状態になることもなく、後遺症が残るようなこともほとんどないものだった。だが、オージンは、オレンジ色のゼリー状の物体を吐き出し、しかもそれは放っておくと彼女の気管を圧迫して呼吸困難の状態を引き起こす可能性すらあったのだ。こんなことは、メイはもちろん、アガルタ医療研究所スタッフの誰もが想像だにしなかった現象だった。

メイは、早速、なぜこのようなことが起こったのかの調査にかかった。そして、同時に、オージンから回収した吐瀉物を詳細に調査する。すると、そこには驚くべき事柄が分かり、しかもそれは、今後のアガルタの戦略に大きな影響を与えることになるのだが……。それは、また、別のお話。

第三百十九話　軍事演習

雪に覆われたアガルタの平原に、巨大なドームが出現していた。それは一目見てはわからない程に外観とよく似せられている。そして、その中には、アガルタ軍の精鋭５０００の兵士たちが、秘密の演習を行っていた。

兵士たちは二手に分かれ、クノゲンとマトカルがそれぞれ指揮を執りながら、模擬戦を行っていた。それを小高い丘の上から見守っているのはリノスとラファイエンス、そして、メイとシディーと数名のドワーフたちがいた。

メイやシディーがこのような戦闘訓練に顔を出すのは珍しい。というより、このようなことは初めてだと言えた。特にメイは、実戦さながらに展開される訓練に驚いたらしく、彼女はリノスの後ろに下がって、肩越しに恐々とそれを眺めていた。そんなメイにリノスは、笑みを浮かべつつやさしく声をかける。

「そこに居て、見えるかい？　メイが作った武器なのだ。ちゃんと見てくれよ？」

メイはオドオドとした様子で頷く。リノスは笑みを浮かべながら再び訓練に目を向ける。今回は、クノゲンが率いる軍勢に対して、マトカル率いる部隊が攻撃を仕掛けているという図式だ。

「降参！　降参です！」

クノゲンの声が響き渡る。彼の声を合図として、二つの部隊は再び

ゆっくりと離れ、距離を取った。

「……一方的にやられましたな。脱帽です」

ニコニコと笑みを浮かべながらクノゲンはリノスたちの前で口を開く。それを見ていた老将軍は驚いた表情を隠そうともせず、前に控えているクノゲンとマトカルに向けて口を開く。

「クノゲンが手も足も出ぬとは……正直驚いたな。いや、クノゲン、お前が年を取っただけか？」

その言葉にクノゲンは苦笑いを浮かべる。

「否定は致しません。私ももうすぐ５０歳になりますからな」

「何を言うか！　５０歳など、男盛りではないか！　まだまだしっかりせねばならん！」

「そうは仰いますが将軍、マトカル様の統率力もさることながら、この武器の威力もすさまじいものがありますぞ」

「大バカ者！　そうした状況を何とかするのが指揮官の役目だろう」

「まあまあ将軍」

俺はラファイエンスを手で制しながら、マトカルに視線を向ける。

「マト、見事だった。実際に見て、初めてお前が言っていた意味が理解できた。なるほど、これなら確かに効率的に戦えるな。逆にマト、何か気付いたことはあるか？　要望があれば言ってくれ」

彼女はスッと顔を上げ、しばらく沈黙した後、ゆっくりと口を開く。

「出来れば武器は、もう少し小型化した方がいいな。できれば、腰に差す剣ぐらいがちょうどいい」

その声を受けてドワーフたちがカリカリとメモを取っている。その様子をチラリと見ながら、マトカルはさらに言葉を続ける。

「それに、鎧も軽量化した方がいいかもしれない。特に歩兵はいかに早く動くかが勝負になってくる。そう考えると、今、彼らが身に着けている鎧は重過ぎる。体力の消耗が激しいのだ。今回は一回きりの戦闘だから問題ないが、何度も戦闘を、しかも長期間に渡るとなると、かなり負担が大きくなりそうだ」

その言葉を聞きながら、シディーが人差し指を顎の下に当てながら、天を仰いでいる。これは何かを推理しているポーズだが、その最中にドワーフの一人が声を上げる。

「これ以上の軽い鎧と言われるが、軽さを追求すると強度が減る。軽い鎧はいくらもできるが、そうすれば、弓矢や魔法からは身を守れない。当然、剣や槍の攻撃からも身を守れない。今の鎧がギリギリなのだ」

その言葉にドワーフたちは一様に頷く。

「別に、いらないんじゃないかしら?」

突然シディーが口を開く。彼女の言葉の意味が呑み込めず、俺たちは黙って次の言葉を待つ。

「機動性を重視するなら、鎧などない方がいいわ。中途半端に鎧を装備しても、弓矢の攻撃で急所を突かれれば同じだし、むしろその攻撃に遭わないように、指揮官が戦況を見極めればいいんじゃないかしら。魔法の攻撃は、リノス様の結界石を活用すればいいのよ」

「いや、いくらなんでもそれは……」

「兵たちの負担を考えれば、それもいいかもしれないな」

ラファイエンスが口を開こうとしたところに、マトカルが口を挟む。老将軍は一瞬驚いた表情を浮かべたが、やがてニコリと笑い、ゆっくりと頷いた。

「ではマト、ご苦労だが、鎧を装備しないとして、歩兵がどんな運用をすればいいのか、一度考えてみてくれ。メイやシディー、そしてみんな、何かいい案があればどんどん出してくれ。今日の演習は、収穫大だった。クノゲン、マト、ご苦労だった！」

俺のその声で、全員が頭を下げた。

一方、タナ王国においても、雪の積もる平原で、アガルタと同じような軍事訓練が行われていた。

平原の真ん中に数千の兵士たちが一か所に集められており、その周囲を軍勢が囲んでいる。さらに、四方の小高い丘の上にも軍が配置されており、その様子を山の頂上から、国王であるヴィルが豪華な玉座に座り、多くの部下を伴いながらその様子を見つめていた。

やがて、真ん中の一団に向かって、周囲の兵士たちが突撃を開始した。皆、槍を真っすぐに構えて突撃していっている。だが、中央に居る部隊は、一瞬のうちに持っていた盾を使って、巨大な壁を作り出した。その瞬間、金属がはじけ飛ぶような音が響き渡る。

攻撃隊は真槍を装備しているにもかかわらず、防御隊の態勢を全く崩せてはいなかった。そんなことが数度繰り返されたが、防御隊はびくともせず、鉄がぶつかり合う音が響き渡るのみだった。

攻撃隊が元の位置に退却した直後、今度は丘の上に配置された部隊が攻撃に移った。これらの部隊は、魔導士を含む魔法使いが中心であり、そこから、火・水・風・雷の攻撃が行われた。だが、守備隊はさらに肩を寄せ合うようにして集まっていく。まるでおしくらまんじゅうをしているような状況だが、その直後、スッと盾が構えられ、まるで一つの巨大な岩のような形になった。そこに、あらゆる属性の魔法が降り注いでいく。だが、その岩はびくともせず、雨のような魔法攻撃に耐え続けた。

その後、地上の部隊と魔法使いとの連携攻撃が数度行われたが、それでも守備隊が崩れることはなく、約2時間にわたる戦闘訓練は一旦休憩となった。

しばらくすると、ヴィルの前に、三人の男たちが現れ、片膝をついて恭しく頭を下げた。彼はその様子を満足そうに眺めながら、一人一人に視線を向ける。

「なかなか、攻めあぐねていたようだな」

国王の言葉だが、誰も反応する者がいない。彼はそれでも、笑みを崩さぬまま、ローブ姿の男に視線を向け、さらに言葉を続けた。

「ジェラニウス、どうだ？」

名前を呼ばれた男がゆっくりと頭を上げる。その顔には笑みが浮かんでいた。

「お見事でございました。兵たちの装備やジョニク殿の采配も見事でありましたが、この戦術をお考えになった陛下に、脱帽でございます」

「ホンシュ、貴様はどうだ？」

「ハッ、ジェラニウス卿の申される通り、我らの歩兵と騎兵では全く歯が立ちませんでした。実にお見事かと思います」

その言葉に国王は大きく頷く。そして、頭を下げ続けている男にゆっくりと視線を向ける。

「ジョニク、見事であった」

男はゆっくりと顔を上げ、再び頭を下げる。

「クリミアーナの技術は大したものだな。アガルタから取り寄せたほとんど役に立たぬツワンクルドの力をここまで引き出すとはな。ジェラニウスが率いる魔導士たちの全力の攻撃をここまで防御できるとは思わなんだぞ。この物質的攻撃にも、魔法攻撃にも耐えうる盾は、いかなる攻撃をも通すことはあるまい。ジョニク、そなたは、さらにこの盾の活用方法を研究せよ。今回は行わなかったが、次回は弓隊の攻撃も試さねばならぬ。……念には念を入れるのだ。そして余は今ここに、この見事な盾を全兵に配布することを命ずる。す

ぐに用意を致せ！」

国王の言葉に、傍に控えていた全員が頭を下げる。

「ジョニク」

「ハッ」

「先ほどの攻撃で、兵たちの損害はどのくらい出た？」

「ハッ、およそ……」

「いや、余が当ててみよう。……北側の部隊におよそ３００。その中での死亡が１００名。どうじゃ？」

「ご……ご推察の通りでございます」

「北側の隊だけ、盾の隙間が広く空いておった。盾と盾の間は隙間なく、そして高さも均一になるようにせよ。次回は……余も中に入って見分しようぞ！　軍神を守る部隊じゃ、その出来栄えには一点のミスも許されぬぞ！」

国王の言葉にジョニクは驚きの表情を浮かべながら、ゆっくりと頭を下げるのだった。

タナ王国の雪原に、国王の笑い声が響き渡っていた……。

第三百二十話　引き金を引く者

パラ……パラ……パラ……。紙がこすれる音が部屋の中に響いている。

一人の老人が分厚い紙の束に視線を落とし続けていた。そして、その彼の前には、三人の若い男たちが直立不動の姿勢で立ち尽くしている。どちらかと言えば寒さを感じるこの室内で、男たちはうっすらと汗を滲ませている。

「うん？」

老人の一言に、三人は体を震わせて反応し、息を殺して老人の次の言葉を待った。そんな様子に気が付いていないのか、彼は紙の束から視線を一切外そうとしない。

「ふぅむ」

しばらくすると、一切表情を変えず、老人は頷く。三人の男たちは、安心したようにゆっくりと息を吐き出す。わずか数秒のことであったが、彼らは緊張のあまり呼吸をすることすらできなかったのだ。

「うむ、ようやった。ご苦労であった、下がってよい」

男たちは表情こそ変えはしないが、その全身からは言い知れぬ安堵感が漂っていた。彼らは一礼をし、ゆっくりと部屋を後にしていった。

「ふぅむ」

男たちを見送った後、再び手許に視線を落としているのは、フラディメ国のリボーン大上王だ。彼の手には、先程研究者たちからまとめられたレポートの束があり、それを何度も何度も目を通していく。

「これは、大発見じゃな」

誰に言うともなく呟く彼の顔には笑みが漏れていた。大上王はスッと顔を上げ、傍らの机に視線を向ける。そこには一通の手紙が置かれていた。その差出人は、彼が尊敬してやまない、アガルタ国の王妃であるメイリアスからのものだった。

メイは、オージンが吐き出した物体を調べる中で、それが不思議な効果を持つものであることを突き止めた。

調べ始めた当初、オージンの吐瀉物はオレンジ色のゼリー状のものだったが、一日が経過するとそれは、岩のように固くなった。さらに色も赤紫色のようになり、メイを始めとする研究者たちは、そのあまりの変わりように息を呑んだのだった。

色々と調べていくうちに、この物体には、それを手に持っているだけで、魔力を回復させる効果があることが分かった。だが、その効果は人によってまちまちで、リノスのような膨大な魔力を持つ者には期待したほどの効果は表れず、一方で、アガルタ医療研究所に併設されている病院で、主に初級の回復魔法で治癒を行う医師に対しては、劇的な効果が見られ、彼らはほぼ休憩なしで一日中回復魔法をかけ続けることができるようになっていたのだった。

こうしたことからメイは、医療研究所の協力国に対して臨床実験を

依頼した。そこには当然、フラディメ国も含まれており、その手紙を受け取った大上王はすぐさま協力する旨の返書をしたためたのだった。

大上王は机に置いてあるメイからの手紙をゆっくりと広げる。整った美しい字だ。文字にはその人の人格が宿るというのが彼の持論だが、この手紙に書かれている文字からは一点の野心もなく、ただ純粋にこの石が持つ効果を研究したいという思いを感じ取ることができた。まさしくこれが研究に携わる者のあるべき姿だ。そんな彼女が、自分に対して研究を手伝ってくれというのだ。断る道理がない。しかも、その彼女が驚くであろう結果を得ることができたのだ。彼は手紙を折りたたみながら、満足そうに頷く。

さらには、この調査には、息子であるメインティア王も協力してくれていた。息子と何とか距離を縮めたいと願っていた大上王にしてみれば、予想外の結果も生んでいたのだ。

実を言うと彼は、息子の協力は全く期待しておらず、最初から自分と研究者たちのみでこの実験に協力するつもりでいた。だが、この話を聞きつけた息子は、研究者たちを城に呼び、さる人物に引き合わせたのだと言う。その人物こそオージンの父であるクワンパックなのだが、それは秘匿されていたことは言うまでもない。ともあれ、息子が引き合わせた貴族風の男が様々なアイデアを出したらしい。それを元に実験を繰り返した結果、この石は、３０くらいのＭＰであれば一瞬で回復させる機能を持つものであることが分かったのだ。しかも、性別や年代によってその数値は変化する。つまり、この石が最も効果を発揮するのは、２０代後半の男性であり、次いで女性。逆に最も効果の薄いのは、１０代後半の男性という結果が分かったのだ。大上王の持つ紙の束はその詳細なレポートであり、そこには、なぜこうした効果が表れるのかの詳細が記載されていた。

彼はうれしかった。女性にしか興味を示さないと思っていた息子が、まさか、このような結果をもたらすヒントを授けてくれる知識人と交流していた。もしかしたら、息子は何かの研究を独自に行っているのかもしれない。もし、なにか行き詰っていること、困っていることがあるのであれば、助けてやらないでもない……。そこまで考えて大上王は首をゆっくりと振る。さすがに、息子は自分に助けてくれとは言ってこないだろうと。

そんなことを考えながら彼は机に向かい、メイに向けての返書をしたためようとペンを走らせた。そのとき、ふと彼の胸に思いついたものがあった。

「これを、皆で発表し合ってはどうだ？」

彼の頭の中に、以前思い描いた、フラディメ国での学会の開催が頭をよぎった。彼は目をカッと見開きながら、何度も何度も頷く。

「そうじゃ。学会を開こう。我が国で学会を開くのじゃ。さすれば、多くの国の研究者が集まり、我が国の若い研究者たちのよい刺激にもなろう。うむ、我ながら名案じゃ。あとは……メイリアス殿が見えられるかどうか、じゃな」

彼はそう呟くと、再びテーブルに視線を落とし、書きかけの手紙にサラサラと一文を加えた。

「ううむ……これでは上から目線過ぎるか？　いや、メイリアス殿のことじゃ、このくらい書かねば、知的好奇心を刺激できまい」

そんな独り言を呟きながら、大上王は手紙を封筒に仕舞う。そして、

同じような内容の手紙を、アガルタ王・リノスに宛ててしたため、それにも厳重な封蝋を施して、手を鳴らす。

「お呼びでしょうか」

「この……いや、王に伝えい。来年の春……3月か4月ごろに、全世界の研究者を集めた学会を開こうと思う。その旨の書簡をアガルタ王とメイリアス王妃に打診しようと思うが、王の考えを聞きたい……とな」

「ハッ、畏まりました」

長年側に仕えている家来が恭しく一礼をして退室していく。彼はその様子を眺めながらため息をつく。アガルタも巻き込んでの学会開催だ、よもや反対はするまいと思いながらも、学会には息子も同席し、そこに参加するであろう各国の王族と交流を深めてくれれば、と彼はため息をつきながら立ち上がるのだった。

伝言を受けたメインティア王は、次の日、早速、父に返答を寄こした。彼の主張は、学会を開催することには異議はないが、それに対して条件を二つ付けたい。それが了承されれば、王である自分自身も、学会の開催を手伝う、というものだった。

その一つ目は、学会の開催場所は、メインティア王が決めるというものだった。理由としては、場所によっては、軍事的内政的機密が外部に漏れるのを防ぐため、というもので、これに関しては、大上王は大きく頷きながら同意したのだった。メインティア王としては、アガルタから預かっているクワンパックの存在が外部に漏れるのを防ぎたかった、というのが本当の理由なのだが、大上王はその意図を大きく超えた解釈を行ったのだった。

王から示された条件の二つ目は、アガルタに逗留させている、側室のノレーンと息子のオンサールを帰国させたいというものであった。その言葉を聞いた瞬間、大上王の眉間に深いシワが刻まれ、使者として訪れた家来は、瞬時に直立不動の姿勢となった。

……大上王は、しばらく沈黙した後、一時的という条件で、二人の帰国を認めたのだった。

第三百二十一話　親バカ同士

「はあ～」

俺は大きなため息をつきながら、天を仰ぐ。疲れた。マジで疲れたのだ。

その俺の手には、分厚い書簡が握られていた。送り主は、フラディメ国のリボーン大上王だ。彼はその中で、俺に対して、以前メイから送られた論文に感動していることを述べ、それに触発されて自国でも研究を行ったところ、大発見があった。ついてはそれをアガルタに伝えたいと思ったが、こういう大発見は広く世界に公表するべきだと思う。ついては学会を開きたいと思うので、是非、賛同して欲しい……と、いう内容を実に丁寧かつ詳細に書いて寄こしたのだ。こんな長い手紙を見るのは久しぶり、というより、初めてだ。目が疲れてしまった。

さらに、その書簡には、メインティア王のお妃であるノレーンと、その子供のオンサールも一時的に帰国するのを認めるとあり、これまで二人の面倒を見てくれたことに対する感謝の意が添えられていた。

俺は早速メイを呼び、大上王の要請を伝える。彼女は大賛成で、むしろ、こうした学会は1年に1度くらいの割合で実施した方がいいですと目を輝かせた。問題は日程だが、それについては俺に一任するという。フラディメ国まで一週間だが、基本的に俺の転移結界を使えばいつでもアガルタに帰ってこられるために、特にメイたちがスケジュールの調整を行う必要はないようだ。

「さてと、大上王に返事を出す前に、あの人と打ち合わせをしておくか」

俺はそう呟いて立ち上がり、執務室を後にした。

「うん？　もう来たのかい？　相変わらず早いね」

満面の笑みで俺を迎えたのは、フラディメ国のメインティア王だ。彼は政務の合間を縫って、一ヶ月に一度くらいの割合でアガルタにやって来ていた。ルアラを通じてポセイドン王の所に顔を出しつつ、愛息のオンサールの顔を見て帰るのだ。本当はもう少しアガルタに来る頻度を上げたいらしいのだが、国王という立場上そうもいかないらしい。

「大体、君のくれた結界石がいけないのだよ」

「どういうことです？」

「あれのＭＰを満タンにするのに、我が国の魔導士をもってしても５日はかかる。しかも、それが二個となれば、都合１０日かかるのだよ。魔導士にしてもブッ続けでＭＰを注ぎ込むわけにはいかないからね。休み休みやっていると、どうしても一ヶ月近くかかってしまう。あれ、もう少し、何とかならないかな？」

「贅沢を言いなさんな。転移効果を持つ結界石なんて、世界中を探しても持っているのは、あなただけですよ？」

俺の言葉に彼は、ニコリと笑顔になり、その表情のままゆっくりと

頷いた。

「ところで、今日はどうしたのかな？」

「いえ、大上王が言っている学会ですが、メインティア王のご意見も聞いておこうと思いましてね」

「あ、私はいつでも大丈夫だ。まあ、そういう難しい話には、あまり興味はないのだけれど」

「いえ、そういうことではなくてですね。お妃さまのノレーンとオンサール君のことについてです」

「ああ、それは私が父におねだりをしたのだ。ノレーンとオンサールの帰国を認めてくれれば、学会の開催に賛成するとね」

彼はフフフと笑い声を漏らしながら、顎の下に手を当て、ゆっくりと踵を返して、後ろで遊んでいる息子と、それを見守る妻の姿を見た。

「ノレーン、お前も、一度くらいは里帰りがしたいだろう？」

彼女はその、ノホホンとした表情のままゆっくりと首を振っている。

「無理をしなくていい。お前の両親は、いきなりアガルタに行ってしまったお前のことをとても心配している。一度くらい両親に元気な姿を見せてやれ。それに、オンサールの顔も見せてやるのだ」

その言葉を聞いたノレーンは、ゆっくりと頭を下げた。

「……なるほど、お妃さまのために。愛妻家じゃないですか」

「ハッハッハ、アガルタ王はノレーンのために私が大上王に掛け合ったと思っているのかい？　だとしたら、とんだ思い違いだ」

「え？　どういうことです？」

「私の本当の狙いは、息子のオンサールを父に会わせることだ」

「どういうことです？」

「私には70人を超える息子と娘がいるが、誰一人として父は気に入っていないんだ。王太子のサレハは12歳になるが、父はその息子でさえ、二度しか目通りを許していない。その他の息子や娘は、一度会えばいい方で、ここ最近生まれた子供たちについては、全く会おうともしない」

「自分の孫なのに？　一体なぜ？」

「母親の身分が低いことと、顔立ちが気に入らないのだろうね」

「どういうこと？」

「私は息子や娘たちは可愛いと思っているのだが、父の好みではないようでね」

「あー、確かに、あなたはB専（びーせん）ですものね」

「びーせん？　よくわからないが……。ともあれ、父はどうやら、背が高く、体の大きな者が好きらしいのだ。まあ、父はあの通り小

柄な人だ。キャバレットの叔父上のような、筋骨隆々とした大男に憧れがあるのだろうね」

「それが、お妃さまとオンサールに何の関係が？」

「わからないかな、アガルタ王ともある人が！？　オンサールは、同じ2歳児の中ではかなり大きい体をしている。そして、頭もいい。父が気に入ると思ったのだ」

「……そうですかね？」

「君の娘であるピアトリスと比べてみたまえ。オンサールの方がはるかに大きいだろう？」

「まあ、男の子と女の子の違いがありますから」

「それに、オンサールは賢い。彼は私やノレーンの言っている言葉を理解している。従って、大人しい。しかも、大人しいだけでなく、それなりに言葉も喋れる。こんな子供は、私の子供たちの中ではオンサールくらいなものだ。きっと、大上王は気に入るだろう。あの父が気に入るのであれば、今後、私の国王としての仕事がしやすくなる」

「そんなものですか？」

「父の一番の懸念は、私の後を継ぐ者のことだ。一族の中で誰一人として父の目に適う者がいないからね。そのために父は、自分が死んだ後のフラディメ国の行く末を、心から心配しているのだ。父の目に適う者が一人いれば、その者が国を補佐していくことができる。父も安心できるというものだ」

「まあ、それがうまくいくのであれば、俺としてはそれで構いませんが……。ただ、ウチのピアトリスもかなり大人しい、手のかからない子供ですよ？　それに言葉は少ないですが、きちんと、おはようございます、いただきます、ごちそうさま、ありがとう、ごめんなさい、おやすみなさい……といった言葉は喋れます。親バカかもしれませんが、ウチのピアトリスとオンサールを比べてみると、彼が飛びぬけて優秀……と言ってしまうのは、どうでしょう？」

メインティア王は、ほう、と頷きながら、何度も頷く。その彼にノレーンが、ピアトリスさまはとてもお行儀のよい姫様でございます、と言ってくれる。そりゃそうだ。我が家ではリコの厳しくも温かい躾けと、メイやシディーからの英才教育、そして、マトカルとソレイユのフォローという盤石の態勢で子育てをしているのだ。そのお蔭で、エリルはお姉ちゃんらしくなったし、アリリアは色々なことに興味を持って、ソレイユやメイを質問攻めにしている。イデアもかなり好奇心旺盛な男の子で、屋敷の中と外を走り回っているが、決してお行儀の悪いことはしない。ウチの子供たちは、完璧なのだ。

そんな話をしていると、メインティア王も負けてはいない。私の子供たちもかわいいと言って譲らない。

「いいえ、普通ですよ、普通。俺も妻たちから男前だの、かわいいだのと言われますが、どうです？　メインティア王から見て。普通の男でしょ？」

「確かにそうだ」

そんな話をしながら、俺たちは笑い合った。だがその直後、メインティア王の口からとんでもない提案が出され、そのあまりの内容に

俺は、しばし言葉を忘れるのだった……。

第三百二十二話　大上王の要請とメイの大ボケ

ポカンと口を開けて呆れている俺の姿が意外だったのか、逆にメインティア王が不思議そうな顔をしている。

「どうしたんだい？」

「いっ……いえ、その……正気ですか？」

「一体何を言っているのだい、君は？」

メインティア王はますますわからないといった表情を浮かべている。俺からしてみれば、この男自体がよくわからない。なんと彼は、ウチのピアトリスをオンサールの嫁に迎えたいと言い出したのだ。青天の霹靂とはこのことだ。

「王族たる者は、子供が生まれれば早めにどの国と婚姻を交わすのかを決めるものだ。まあ、私の場合は子供が多いから、そうそう輿入れ先もないために、我が国の貴族たちに輿入れせざるを得ないのだけれどね。オンサールとピアトリス殿は年も同じ、しかも、ここアガルタで育った幼馴染だ。ピアトリス殿にしても、全く知らない家に嫁ぐよりはいいと思うけれど？　それとも、既にピアトリス殿には許嫁がいるのかな？」

「いえ……俺は、娘には自由に恋愛させて、自分で自分の伴侶を見つけて欲しいと思っています」

そこまで言うと、メインティア王の声色が変わる。低い、ドスの効

いた声だ。

「ほう、それでは、エリル殿とヒーデータ帝国の皇太子と婚約しているというのは、あれは単なるうわさかな？」

「あーあれはですね……」

「いや、皆まで言う必要はない。私も国と国の話だ、そこに立ち入る気持ちはない。ただ、この話はアガルタにとって悪い話ではないと思うよ？　いや、聞き給え。ピアトリス殿がオンサールに輿入れすると、我が国の情報は、アガルタに筒抜けになるのだ。……わからないかな？　まさか、ピアトリス殿一人で輿入れさせるわけはないだろう？　当然そこには侍女たちもついて来る。その者たちを傍においてくれと言われれば、私は拒否できない。従って、アガルタの人間が我がアリスン城の奥深くに入り込むことができる。意味は分かるね？」

「何でそこまでするのです？」

「決まっているじゃないか！　アガルタと誼を通じたいからだ！　今はオンサールを人質として預けているが、その彼にアガルタ王の娘を娶らすと、我がフラディメ国は盤石になる。そう思わないかい？」

「はあ……」

「ともかくだ、この話は一度、考えてみて欲しい。ダメならダメで、そのときは私が息子に女の惚れさせ方を徹底的に伝授するつもりだ。そして、ピアトリス殿の心を掴ませるよ。逆に、そちらの方が、アガルタ王にとってはいいかもしれないね？」

彼はニコニコと機嫌のよさそうな笑みを浮かべている。俺は、その様子を見ながら、深いため息をつく。

「娘には、護身術を徹底的に身に付けさせましょう」

「うん？　どういう意味だい？」

「どうせ、腕づくでベッドに引きずり込むのでしょう？　で、あれば、そうならないように、どんな男に襲われても太刀打ちできる護身術を身に付けさせます。今から修行すれば、相当な腕になるでしょうね」

「ハッハッハ！　これは参ったね！　今回は私が負けたよ。だが、今すぐでなくてもいいが、一度、オンサールとの婚儀を考えてもらえると、うれしいな」

その言葉に俺は、静かに首を振るのだった。

それから一ヶ月後、大上王から正式に学会を開催する旨の書状と、その招待状が俺たちの許に届いた。開催日は４月１４日と定められていて、俺は書状を持ってきた大上王の家来に、喜んで参加すると伝えた。

「あの……誠に、誠に、恐れながら申し上げます」

使者の男が、この寒い中、額にうっすら汗を浮かべながら俺に話しかけてくる。彼は一度深呼吸をして、さらに言葉を続ける。

「わ……我らが大上王様におかせられては、事前に、メイリアス様に我が国にお越しいただきたいと希望されております」

彼が言うには、フラディメ側の発表について、大上王はアガルタとの共同研究として発表したいと考えており、その準備をメイたちと一緒に行いたいと希望しているのだという。つまりは、学会の開催まで二ヶ月あるが、メイに一ヶ月早くフラディメに入ってもらい、発表の準備を一緒にしたいという意向だ。

「無理を申し上げているのは重々承知の上でございます。ただ、我が大上王の知的好奇心は留まるところを知りませず……。あくまで、あくまで、大上王様はただただ、学問の質の向上のみを願っているだけでございまして……」

「わかっている。そちらのメインティア王とは違う、といいたいんだな？　大上王には俺も会ったことはあるので、その人物は知っているつもりだ。ただ、それについては妻の予定もある。ちょっと時間をもらってもいいか？　今日はもう夜だ。返事は明日でいいか？」

「結構でございます。ありがとうございます」

彼は恭しく頭を下げた。

俺はその後、屋敷に帰り、夕食を食べた。子供たちを風呂に入れ、寝室に入るとメイがいた。今日はメイの日なのだ。

「アリリアはいつものソレイユと……か？」

「はい」

アリリアは気まぐれな子で、メイと一緒に寝たいといったかと思えば、次の日はソレイユの部屋で寝たりする。逆に、エリルはマトカルにベッタリだ。マトカルの日でも俺の寝室で一緒に寝たいと言い出す始末だ。だが、アリリアは俺と一緒に寝たいとは言わない。俺としてはそれがちょっと寂しいのだが。

「アリリアは、子守唄がないと眠れませんから」

彼女はいつもメイかソレイユの子守歌がお気に入りなのだ。特にソレイユの歌は効果抜群で、すぐに眠りに落ちる。だが、俺やリコの歌では彼女は眠らない。リコはリコでかなりきれいな声で歌うのだが、どうもダメらしい。海の神に歌と踊りを捧げる巫女であるルアラにも何度か歌わせてみたが、これはダメだった。赤ん坊の頃などは火が付いたように泣き出したし、今でも彼女の歌を聞くと、途端に大人しくなる。今では悪いことをしたお仕置きとして重宝しているが、ルアラはルアラでその立ち位置に、少々傷ついているのだ。実際、ルアラの演歌は上手い。こぶし廻しが抜群に上手くなっているのだ。お蔭で、海の女王であるトリちゃんの機嫌はすこぶるいい状態で、ルアラは彼女にとって精神安定上なくてはならない存在になっている。

「まあ、子守唄で眠るという時期も、もうすぐ終わるだろう。今しかない時期だから、これはこれで貴重なのかもしれないな。もう少し大きくなったらきっと、一人で寝るようになるんだろうしな」

「そうですね」

そんなことを言いながら俺たちは笑顔を交わし合う。そんな中、俺は先ほど迎賓館で聞いた大上王の意向を伝える。彼女は少し何かを考えていたが、やがて、ゆっくりと口を開いた。

「今回のフラディメ国の発表は、フラディメ国が発見したということで、よいと思います」

「うん？　何でだ？　元々、オージンのゲロ……吐瀉物を調べたのは、メイたちだろう？」

「ですが……その効果を発見したのは、大上王様ですし……」

「メイにしては珍しいな。そういう共同研究は大好きじゃないのか？」

「いえ……その……ひと月も行きっぱなしというのは……」

「アリリアのことが気になるのか？」

「……」

メイはじっと俺を見つめている。そしてゆっくりと俺から視線を外し、恥ずかしそうに口を開く。

「ひと月も……ご主人様の側に……居られないのは……」

「え？　何で？　帰ってくればいいよ」

「え？」

「ローニを連れて行くんだろ？　夜になったら一緒に帰ってくればいいよ」

「あ……」

メイは顔を真っ赤にしている。こんな表情を見るのは久しぶりだ。
何とかわいいことか。

「ハッハッハ！　メイにしては珍しい大ボケだな」

「……すみません。お側に居られないと思うと、不安で」

「いいよ、ありがとう、メイ。じゃあ、大上王には返事をしておいていいな？　細かい調整については、メイに任せるから、よろしく頼むな」

「わかりました」

メイは耳まで真っ赤にして、恥ずかしそうに俯いた。俺はその表情を心から可愛らしいと思いつつ、優しく彼女を抱きしめた。

その夜、メイはいつになく目が冴えて、夜遅くまで俺を眠らせてくれなかった。

第三百二十三話　密談

メイがアガルタ医療研究所のスタッフを連れて、フラディメ国に出張して数日が経った。今、俺の目の前には、山と積まれた料理を片っ端から食べまくるローニの姿があった。

今は朝だ。朝食からこんなにガッツリ食べるなど、まるで部活をやっている男子高校生並みだ。見ていてこちらが気持ち悪くなるくらいの食べっぷりだ。どうやら彼女は、ストレスを食事で解消するタイプらしい。

メイたちが船で到着すると、何とそこにはリボーン大上王が迎えに来ていた。彼はメイたちを超が付くほどのＶＩＰ待遇でもてなしてくれたのだという。万事行き届いた細やかな配慮で、陸路での移動中や宿泊先のアリスン城では、不便を感じることは全くと言っていい程ないそうだ。ではなぜ、ローニがストレスを溜めているのか。その理由は、やはりリボーン大上王なのだ。

彼は、メイたちと会うなり、これまで自身が研究において感じた疑問点をぶつけてきたらしい。メイやローニはそれに対して丁寧に答えていったのだが、彼の知的好奇心は留まるところを知らず、陸路での道中の二日間は、馬車の中でひたすら質問攻めにあっていた。

アリスン城に到着して、フラディメ国の研究者との合同研究とその発表に向けての準備は滞りなく始めることができたのだが、大上王はその研究者と必ず夕食を共にし、研究の進捗を確認しつつ、そこから再び彼の質問タイムに移るのだという。

ローニに言わせると、フラディメ国の料理は、大上王の好みだろうか、基本的に薄味で、まるで薬膳料理のようなメニューなのだという。研究と発表準備で忙しいところにきて、大上王の質問攻め、それに加えて、料理もあまり口に合わないときては、さすがのローニも爆発寸前のストレスを溜めるに至っていたのだ。メイはそんな不満は全く出さないが、ローニ曰く、メイもかなりストレスが溜まっているのだという。その指摘を受けて、メイのことを観察してみたが、そんな素振りは全く見られなかった。だが、その夜のメイは俺に抱き付いて離れず、恥ずかしそうに、ポソリポソリと呟きながら振舞う姿は、何とも言えずエロく、これはこれで俺はうれしいものだった。

だが、さすがに負担が大きいと判断した俺は早速、メインティア王に連絡を取り、大上王の食事会を回避してもらうよう依頼した。彼はそれを見越していたかの如くすぐに手を打ち、その日から大上王の食事会は無くなったのだった。

数日後、転移してきたメインティア王に俺は礼を言いながら、どんな方法を使ったのかを聞いてみた。彼はいつものように笑みを浮かべながら飄々と口を開いた。

「ああ、簡単だよ。父に息子のオンサールを会わせたのだ」

「え？　それだけですか？」

「フフフ、私の睨んだとおりだったよ。父はオンサールを気に入ってね。今は彼と遊ぶのに夢中だ」

聞けば大上王は、オンサールと対面した際、その顔を見てニヤリと微笑んだのだという。アバタ面の厳めしい顔つきをした男が笑うの

だ。それはそれは恐ろしい表情だったのだそうだ。だが、オンサールはそれに全くひるまず、泣くことはなかったのだという。さらに大上王は彼の近くまでやって来て、その顔をマジマジと観察したそうだが、そのときもオンサールは一切表情を変えることはなかったのだそうだ。

「……こう言っては失礼ですが、あの大上王に至近距離に近づかれたら、さすがの俺も泣いてしまうかもしれません。……オンサールは、偉いですね」

「そうだろう？　私は、父の側には5秒と一緒に居られないからね」

そう言って俺たちは笑いあった。聞けばその後、大上王は、何とオンサールの体にペタペタと触り、その後、さらに恐ろしげな笑顔を見せたというのだ。さすがにそのときばかりはメインティア王も背筋が凍える思いがしたらしい。

「あんな顔をした父は、初めて見たよ。よほどうれしかったんだろうね。それはそうさ。私の子供たちの中で、2歳の時の体は誰よりも大きかったからね。きっと将来、大きくなると思ったのだろう。父はその後、自分が護身用に身に付けていた短剣をオンサールに与えたのだからね。そこで、オンサールはどうしたと思う？」

「……わかりませんね」

「何と、その短剣を抜いたのだ」

「危ないじゃないですか！」

「彼はその刀身を見て不思議そうな顔をしていたよ。さすがに父も

驚いて刀を取り上げて鞘にしまっていたがね。危ない、危ない、何て言いながら。あの怒鳴りつける父はどこにいったのやら」

そう言ってメインティア王はクックックと笑う。

「あ、それで、父はオンサールに家庭教師をつけることにしたのだ。だから、アガルタには三名の家庭教師を兼ねた家来が派遣される。おそらく君が来たときに、父から話があるはずだ。もちろん、彼らの費用は我が国で負担するから、心配しないでくれ。父は……三人を前にして、一人前に育てろ、ヘマをするなと命じたのだ。フッフッフおかしいじゃないか」

メインティア王は思い出し笑いをしながら、体を震わせている。俺はそんな様子を見ながら、三名もの人間が来るのであれば、今、オンサールとその母親のノレーンが住んでいる部屋では手狭になるために、もう一部屋空けなければならないかなと、そんなことに思いを馳せていた。

同じ頃、クリミアーナ教国の首都、アフロディーテでは、教皇たちの密談が行われていた。

教皇であるジュヴァンセル・セインを中心に、その隣にカッセルが座り、彼らの向かい側にはタナ王国国王のタナ・カーシ・ヴィルが座り、その両脇をタナ王国軍の幹部とみられる男たちが固めていた。

「なるほど。ヴィル殿らしいですね」

相変わらずニコニコと笑みを絶やさぬまま、優しい口調で話しかけているのは、教皇であるジュヴァンセルだ。彼はゆっくりと、自身

の前に座る人たち一人一人に視線を向けながら、鷹揚に頷いている。

「タナ国王様の作戦、誠に見事かと思います。これで天道に従う者、背く者がはっきりとわかります」

カッセルが目を見開きながら、教皇に進言している。彼は視線をタナ国王に向け直し、さらに言葉を続ける。

「おそらく、隣国のサンダンジ国は、天道に背くでしょう。そうなれば、あなた方が侵攻して併呑する。そうなれば、フラディメ国も自ずと手に入る。タナ王国の悲願であった、ルルイエ大陸の統一が果たされることになりますね」

「いや、コトはそんなに簡単には運ばないでしょう」

「……そう仰りながら、既にサンダンジとフラディメの侵攻計画を立てているのではありませんか？」

カッセルのその言葉に、タナ国王たちがフフフと含み笑いを漏らす。

「とはいえ……」

ゆっくりと教皇が口を開いている。全員が姿勢を正して、彼の言葉の続きを待つ。

「フラディメ国はお気の毒ですね。リボーン王……現在は大上王でしょうか？　あのお方は、非常に学問を好まれるお方で、名君と呼んで差支えないお方です。そのお方のおわす国を亡ぼす算段を立てるとは……いささか気が引けますね」

その言葉に、カッセルが素早く反応する。

「確かに、リボーン大上王は名君と呼んで差支えない方と思います。ですが、現王のメインティア様は、暗愚以外の何物でもありません。我がクリミアーナには使い一つ寄こさず、信仰を怠り、日々、房事に励んでいるだけのお方ではありませんか。王のお子様方も、どうやら国をまとめていくだけの才覚を持ったお方はおいでにならぬ様子……。で、あれば、国の行く末は見えております。悪しき心を持った者に国を乗っ取られる前に、我らクリミアーナが救うのです。これも、主神様のお導きかと存じます」

「そうですね。カッセルの言う通りです。いけませんね、私も最近、耄碌したようです」

教皇はそう言いながら笑みを漏らす。それにつられる形で、部屋にいた全員の顔に笑みが浮かんでいた。

リノスの許に、フラディメ国での学会開催を差し止める教皇からの命令書が届いたのは、それから数日後のことだった。

第三百二十四話　悲壮の覚悟

「……何だこりゃ？」

俺は呆れた顔を隠そうともせず、敢えて声を張り気味にして口を開いた。その手には、クリミアーナ教国から送られてきた書状が握られている。

「一体何の資格があって学会を差し止めるなどと……何を食えば、こんな気色の悪い考えになるんだ？」

俺は、首を振りながら執務室の天井を睨んだ。

結局、俺は、クリミアーナの要請を無視してフラディメ国での学会に参加することを即決した。もう既に準備が整おうとしていたところに、今さら辞めますなどと言えるはずもなかった。一応、メイにはクリミアーナの話を伝えたところ、彼女は、ご主人様にお任せしますと言っていたが、俺が即答で参加しようと言うと、ホッとしたような、嬉しそうな表情を浮かべていた。俺にとって学会は、優先順位からすると下から数えた方が早い事柄だ。まあ、他の国が来ないなら来ないで、あっさり、サクッと終わらせればいいじゃないかと気軽な気持ちだったのだ。

だが、蓋を開けて見ると、フラディメ国で開催された学会は、大盛況だった。参加した国々の研究者はメイの発表を聞こうと会場に押しかけ、慌てたフラディメ側では、メイの発表を三回も実施することにしたのだった。メイやローニたちが発表する内容は、俺にはほ

とんど理解できなかったが、折に触れてどよめきがあがり、拍手が起こっていた。どうやら、学者たちも目からウロコの大発見があったようだ。メイが一度、詳しく説明してくれたのだが、何分ベッドの上でのことだったので、正直あまり覚えていない。メイの可愛らしい顔と、あんなことや、こんなことをしたこと……くらいしか覚えていないのだ。これは俺の名誉のために言っておくが、決して理解力がないのではない。メイの、あの、おっぱいを目にしては、理性が飛んでしまうのだ。結婚して何年も経つが、ドワーフの血が入っているせいか、メイは全く年を取る気配がない。それどころか、アリリアを産んでから美しさと色気に年々磨きがかかっているように思える。かわいくて、美しくて、やさしくて、賢くて、エロい妻なのだ。そんな彼女を抱きしめていては、難しい話は頭には入ってこない。

そんなメイは、連日、研究者たちとの会合に呼ばれ、大忙しだ。まあ、彼女の傍にはローニがピタリと寄り添っているので心配事はないのだが……やはり心配してしまうことはあるものだ。サンダンジ国のニケ王だ。

彼はメイとローニの発表には必ず参加し、二人から全く視線を外そうとはしない。ガン見だ。これは気になる。今日も彼は、王族のために用意された特別席に座りながら、二人が参加しているシンポジウムの様子を微動だにせずに凝視し続けていた。さすがに気になった俺は、彼の席の隣に座ることにした。

「ずいぶんご熱心なのですね」

「……すばらしい」

「何が……でしょうか？」

「……全てにおいて、だ。アガルタ王、貴殿が、羨ましい」

一切俺を見ずに彼は呟く。ちょっと失礼な態度だ。そんな俺の感情を察したのか、彼はゆっくりとメイたちから視線を外し、俺に向き直った。

「余はこの美しさを、忘れまい。知性溢れた美女は、余の心を癒してくれる」

俺は返す言葉が見つからずに固まる。そんな俺に彼はニヤリと笑みを漏らしながら口を開く。

「実は今日は、アガルタ王。貴殿を呼びに来たのだ。ちょっと私に付き合ってはくれまいか？」

「何です？」

「ちょっとした、食事だ」

「わかりました。いいですよ」

俺はニケ王についてアリスン城の廊下を進んでいく。彼はまるで自分の城のように迷路のような廊下をスイスイと歩いていく。そして、彼は何の変哲もない部屋の扉を無造作に開け、中に入っていく。俺も訝りながら、彼の後について部屋に入る。

……そこには、豪華な衣装に身を包んだ数人の男たちが集まっていた。彼らは俺たちを見ると立ち上がり、鷹揚に頭を下げた。

「皆さま、アガルタ王をお連れした」

ニケ王が笑みを浮かべながら椅子に座る。それが合図であったかのように、男たちも席に着く。俺は一つだけ空いているニケ王の隣の椅子に腰を下ろす。すると、それを待っていたかのように、男の一人が口を開く。

「我は、バセファシリ王国のミウムと言う。アガルタ王、お目にかかれて光栄に思いますぞ！」

「シャナリーゼ国の国王、ゾビアークと申す。以後、よしなに」

「デアルダージ帝国皇帝ブッセと申しまする」

この部屋にいる男たちは全員、何らかの国の国王だった。俺はあまりのことに驚いてしまい、口をポカンと開けて固まる。

「済まぬな、アガルタ王。こうせねば貴殿は我らの会合に来てくれぬと思ったのだ。許してくれ」

「一体、何なのですか？」

驚く俺に、ニケはこれまでのこととこれからの展望を語り始めた。聞けば、現在、サンダンジ国とその隣国であるタナ王国は、表向きは友好な関係であるものの、タナ側は、確実にサンダンジに侵攻して来るのだという。ニケは当然迎え撃つ気でいるのだが、この学会が始まる直前に届いたクリミアーナからの手紙が、事態をややこしくしているのだという。当然、あの手紙は教皇の名前で出されており、手紙＝教皇の命令となるのだ。従って、この学会に参加した国々は自動的に教皇に背いたことになり、最悪の場合、クリミアーナ

教国から討伐される危険性があるのだという。

俺の目の前に座る王たちは皆、クリミアーナ教国から干渉を受け、国政を牛耳られようとしている者たちばかりで、何とかそこから脱したいと切望している国王たちだったのだ。ニケは、そうした王たちと秘密裏に関係を結び、クリミアーナの弱体化を画策していた。

「この学会はまさしく、反クリミアーナの国々が集まる形になった。アガルタ王、貴殿もお気づきだろうが、この学会には我らの医療研究に参加していない国々も多くやって来ている」

「と、いうことは？」

「表向きは学会の参加だが、本当の理由は、これから起こるであろうクリミアーナの討伐から、いかに自国を守るか、それを国々で議論し、出来れば同盟を結びたいと考えているのだ。そして、その全ての国が、貴殿のアガルタと同盟を結びたいと考えている」

「ははあ、それで俺にはいくつもの食事会が申し込まれていたのですね？」

実は、俺には３０を超える食事会の誘いがあったのだ。しかも、フラディメ国に到着した直後から。あまりの多さに俺はその全てを丁重に断ったのだ。だって、いきなり知らない国の人々と会うというのも何だかイヤだったし、何より、全てに参加すること自体が不可能なのだ。では、興味のある国とだけ会えばいいと思われるだろうが、それは断った国の心証を著しく害することになる。だが、今のニケの話を聞くと、断って正解だった気がする。

「クリミアーナが次に狙うは、おそらく我がサンダンジ国であろう。

ここ、ルルイエ大陸を統一するのは、タナ王国の昔からの悲願だ。今はその、絶好の機会だ」

「タナ軍に勝てる……ニケさんに勝算はあるのですか？」

「ない」

「え？」

「考えてもみられよ。サルファーテ国を併呑したタナ王国だ。兵数にしておそらく１０万は下るまい。おそらくクリミアーナ側の諸国からの援軍も合わせると、総数は２０万を超えるであろうな」

「では……どうするので？」

「ここにお集まりの諸王は皆、クリミアーナ側の国々と国境を接している。別に我に援軍を出してほしいのではない。もし、我が国に兵が向けられた際は、国境を封鎖して欲しいのだ」

「クリミアーナの援軍が来ないように……ですか？」

「いや、時間を稼いでもらえればよい。タナの１０万の兵であれば、我が国内深くにおびき寄せ、砂漠において戦えば、我が旗下３万の兵士であっても勝機はある。そして、アガルタ王、貴殿には改めて頼みたいことがある」

「頼みたいこと？」

「我が国をはじめとした、ここに集まる国の研究者を、貴殿のアガルタに避難させて欲しいのだ」

「え？　それは、もしかして……？」

「たっての願いだ」

ニケはスッと俺に頭を下げる。そして、それに合わせるような形で、集まっている諸王たちも、頭を下げていた。あまりのことに俺は絶句し、しばらくの間、息を呑んだ。

第三百二十五話　茶番会議

フラディメ国で行われた学会は、大盛況のうちに幕を閉じた。メイと大上王が発表した内容は、世紀の大発見として集まった学者たちから喝采を受け、メイの名声はさらに高まっていた。それと同時に、リボーン大上王の計らいで、参加した学者たちは知識交流を大いに楽しむことができ、彼らは今7後さらに、新しい研究に力を注いでいくことを約束し合ったのだった。

その学会が終了して二週間。クリミアーナ教国の首都、アフロディーテでは、教皇、ジュヴァンセル・セインが、呆然とした表情を浮かべつつ、手に持った書簡に目を通している。

「教皇聖下、失礼いたします」

若い司教が恭しく一礼をして入室してくる。彼は目だけを向け、ゆっくりと頷く。

「申し上げます。タナ王国国王、ヴィル様がお見えになりました」

「わかりました。カッセルと他の枢機卿も呼んでください」

司教は一礼をして部屋を後にする。彼はやれやれといった表情を浮かべながら、大儀そうに椅子から立ち上がる。

「……お召しにより参りました。教皇聖下におかれましては、ご機嫌麗しく、何よりとお慶び申し上げます」

タナ王国国王、ヴィルは顔に微笑を浮かべながら恭しく頭を下げる。その様子を教皇は満足げな表情で見ながら、入室してくる。その彼の後を追うように、８人の枢機卿が続き、そして最後に、カッセルが入室してきた。

カッセルが教皇の隣に来ると、それが合図であったかのようにヴィルは頭を上げる。そして、教皇に促される形で、目の前に備えられた椅子に座る。彼が着席すると同時に、教皇たちも席に着いた。

「さて、皆さんをお呼び立てしたのは他でもありません」

教皇がゆっくりと口を開く。それに合わせて、全員が姿勢を正して、彼に注目する。その様子をゆっくりと見廻しながら、さらに言葉が続けられる。

「先だって、フラディメ国において世界医療研究学会と題される催しが開催されました。こちらについては、皆さんもすでにご存じの通り、私からその開催を中止、もしくは延期するよう求めていたのですが……」

「至急討伐すべしです！」

「天道に背く国には死を！」

教皇の言葉を遮るようにして、数名の枢機卿が鼻息荒く物騒な言葉を吐いている。教皇はその意見を手で制す。

「お気持ちはわかりますが、私は事を荒立てたくはありません。いえ、あの研究会には、我が国の医療研究所の者が参加することがで

きませんでした。世界医療研究学会とあるのですから、当然我が国も参加しなければなりません。だが、フラディメ国は我が国の参加を待たずに学会を開催し、あまつさえ、自国の発表が世紀の大発見であると発表してしまいました。私も拝読しましたが、あれは素晴らしい発見です。魔力総量が少なければ少ないほど、その回復力を発揮する石……。まだＬＶの低い魔法使はほぼ、魔力切れの心配をすることがなくなる。素晴らしいです……。ええ、素晴らしい発見であったと思います」

教皇はそこで言葉を一旦切り、ゆっくりと息を吐く。そして、全員に視線を向けながら、さらに言葉を続ける。

「ですが、これはあくまでフラディメ国とアガルタ国が独自で行った研究であって、他の研究機関で実験がなされ、その有効性を証明されているわけではありません。数年前、我が国の、キリスレイ、ガイッシャ、ルロワンスにおける特効薬開発において、実験は何度も繰り返すべきであって、偶然の産物でないことを証明せねばならないと仰られたアガルタ王妃が、まさかこのようなことをなさるとは……非常に残念です」

「教皇聖下、我がクリミアーナ教国の名において、全世界にこの横暴を訴えかけましょう！」

枢機卿の言葉に、教皇は満足げな表情を浮かべながら頷く。

「ええ、本来はそうすべきなのでしょう。ですが、それは効果がありませんね」

教皇の言葉に、集まった枢機卿が不思議そうな表情を浮かべる。

「フラディメ国で開催された学会、あそこには約５０か国に及ぶ国々が参加しているようです。つまりこれは、私の要請を受け入れていただけなかった国が５０か国にも及ぶということになります。もしかすると、アガルタとの付き合い上、仕方なく……という国もあるでしょうが、それにしても多いですね。これは偏に、私の能力不足ですね。耄碌したのでしょう……」

教皇は目を閉じて、ゆっくりと天を仰ぐ。その様子に枢機卿たちが、そんなことはありません！　と宥めている。そんな中、タナ王国国王のヴィルが教皇の側に控えているカッセルに目配せをする。それを受けてカッセルは、小さく頷いた。

「教皇聖下に申し上げます」

「何でしょうか、カッセル？」

「フラディメ国で開催された学会……。それはつまり、天道に反する行為。天道に反する者は排除するというのが、我が教国の姿勢でございました。今、ここにきて、その姿勢を曲げるべきではないと存じます」

「カッセルは、学会に参加した５０か国を討て、そう言うのですか？」

「御意」

「恐れながら」

ヴィルが二人の会話に割って入る。教皇以下、全員の視線が注がれる中、彼はゆっくりと口を開く。

「５０か国すべてを討つ必要はありますまい。核となる国を討ちさえすれば、あとは放っておいても自滅します。この私にお任せいただきたく、お願い申し上げます」

「ほう、それは頼もしいですね。その……タナ国王様が、天道に反する国々の、その核となると思われる国をお伺いしても？」

「サンダンジ国とアガルタ国です」

その言葉に、枢機卿たちの声にならない声が部屋の中に広がっていく。教皇は大きく頷きながら、優しい口調でさらに言葉を続ける。

「サンダンジ国とアガルタ国……確かに、天道に従う姿勢が見えませんね。ただ……両国とも、討伐は難しいのではありませんか？」

「問題ございません」

すかさずカッセルが口を挟む。

「タナ王国国王陛下は、軍神であらせられます。先だっても、教国に従わぬサルファーテ国を瞬く間に壊滅せしめたお方です。サンダンジもアガルタも、この軍神によって間違いなく鉄槌を下されることと存じます」

「恐れながら、我が国の総兵力はすでに１０万を超えます。南のサンダンジとフラディメを併呑すれば、その兵力は優に２０万を超えることになりましょう。私が住む大陸から、アガルタまでは遮るもののない一本道……。それだけの兵力と、我が国が作り上げた武器・防具をもってすれば、アガルタを討伐するのは容易いことです。こ

れらの国が滅べば、自ずと世界中の国々が、主神様の前に膝を折ることになりましょう。全ての作戦はこの私にお任せください。すでに、いくつかの策は考えております。この世界に主神様の教えを行き渡らせるのがわが使命と心得ます。何卒、伏してお願い申し上げます」

ヴィルの言葉に、教皇は満足そうに頷いている。

「よくぞ申してくれました。さすがに軍神と言われるお方だけありますね。よろしい。あなたにすべてをお任せいたしましょう。存分に采配をお振るいください。我が教国も、支援は惜しみません。何かあれば何なりとご相談ください。カッセル、あなたを私の名代に任じます。くれぐれも頼みましたよ」

「ハハッ、不肖の身ではありますが、我が身命を賭して……」

恭しく頭を下げるカッセルを、にこやかな笑みで眺めながら教皇は、ゆっくりと席を立つ。

「年老いた私にできることなどありませんが……できるだけ、あなた方の作戦が計画通りに進むよう、手助けしていくことに致しましょう」

そんな言葉を残して、教皇は枢機卿たちを伴って部屋を後にしていった。

「……ふぅー。やれやれ」

教皇を見送った後、カッセルはさも疲れたといわんばかりの表情を浮かべながら、席にドカッと座る。その様子をヴィルは、口元だけ

をゆがめた表情で眺めている。

「いつもながら回りくどいことです。教皇聖下は、こういう重大なことに関しては基本的に、ご自身の考えを仰らない。いつも枢機卿の誰かが気を利かして今後の展開を述べなきゃいけない。茶番劇ですが、これがなかなか疲れるのですよ」

「ですが、カッセル殿のお話は、どうやら教皇聖下の思惑と一致していたようですね」

「まあ……ね」

カッセルは意地悪そうな笑みを一瞬浮かべたが、すぐに元の表情に戻って椅子に座り直し、姿勢を正して再びヴィルに話しかける。

「ところで、作戦の方は、順調なのですか？」

「ええ、それはもう。すでに準備は整っております。他にもいくつかの作戦が進行中です。問題はありません」

「そうですか。それでは、教皇聖下の許に参ります。できるだけ、あのお方の力を利用しなくては……。労力は、最小限にしたいですからね」

「同感です」

二人は顔を見合わせながら、クスクスと笑い合った。この二日後、クリミアーナ教国の首都、アフロディーテから一人の使者が送られ、同時にその裏で、ある作戦が実行された。その内容と意図をリノスたちは知る由もなかった……。

第三百二十六話　惚れ直す

「……リノス本人に聞いた方が、よろしいですわね」

リコは呟きながら、ふぅーと息を吐く。その様子を、メイとシディーは心配そうな表情を浮かべながら、ゆっくりと頷いた。

事の起こりは、シディーからの指摘だった。それは普段と変わらぬ朝食のひとときだった。ワイワイと子供たちと共に摂る食事。皆、子供たちの様子を気にしながら、ペーリスたちが作る料理に舌鼓を打っていた。だが、リノス一人は、どこか気だるそうな雰囲気を醸し出していた。これを見たシディーは、その様子に胸騒ぎを覚えた。何か、重大なことが起こりそうな予感がしたのだ。

実際、ここ最近のリノスは政務に忙殺されているのか、ベッドに入ると、早々に眠ってしまう。この間も、彼女が寝室に入ると、既にリノスは眠ってしまっており、シディーはリノスを起こさぬようゆっくりと彼の掌の上に自分の顔を載せたのだった。

寝室に入ると既にリノスが眠っているというのは、リコもメイも同じだった。二人とも、単に疲れているだけだと思っていたのだが、シディーの話を聞いて、これは何かあると直感したのだった。

念のため、彼女たちはマトカルとソレイユにも話を聞いてみた。すると、この二人のときには、リノスは眠らずにいることがわかった。しかも、マトカルは多くを語らなかったが、ソレイユに関しては、ここ最近、夜が白むまで何度も求められることを、顔を赤らめながら語ったのだ。結局、ここ最近のリノスは、マトカルとソレイユに

だけは、一晩中その傍を離れずに彼女たちを抱きしめていることがわかったのだった。

それを知ったとき、リコは一瞬、寂しい気持ちになったが、すぐに頭の中を切り替えた。リノスは妻たちを蔑ろにする男性ではない。もしかすると、何らかの理由があるのではないか。ヘイズとの一件以来、リコの中には、リノスに対するゆるぎない信頼感が生まれていた。そして彼女は、彼の話を聞くべく、ある日の昼下がりに、リノスの執務室を訪れたのだった。

「はい、どうぞー。……あれ？　どうぞー」

執務室の扉がノックされたので入室を促したが、入ってくる気配がない。俺の声が聞こえなかったのかと思って、ちょっと大き目の声で返事をしてみたが、やはり誰も入ってこない。誰かのイタズラかと思っていると、扉がゆっくりと開く。

「失礼しますわ」

「……リコ!?　え？　なっ……どうしたんだ？」

俺は狼狽を隠すことができず、思わず立ち上がる。今の時期のリコは繁忙期で、俺の部屋に来る余裕などないはずなのだ。そこを無理して来たということは、重大な何かが起こったのか……はたまた……などと俺はその理由を考える。だが、何も思いつかない。思い当たる節はないことはないのだが……まさか……。俺は頭の中をフル回転させながら、リコの言葉を待つ。彼女は一切の表情を変えず、俺に視線を向けたまま、ゆっくりと口を開く。

「確かめたいことがあるのですわ」

「た、確かめたいこと……？」

「このところ、お疲れのように見えますわ。それは、マトとソレイユにご執心……。そのために、お疲れではないのですか？」

「うぇあ？　いっ、いや、あの、その、あのですね。その……それがどうしたというわけではありませんが、その、何ですよ。何といっても、あれなのですよ。ええ、そうなのです。あれですよあれです。ええ、そういうことでその……何にしましょう？」

「リノス、落ち着いてくださいませ。別にあなたを責めているわけではありませんわ」

「ううう……」

「別に、マトとソレイユに愛を注ぐのは構わないのです。ただ、いきなり……な気がするものですから、何かあったのかと心配になったのですわ」

「あの、いや、その、別にですね、どうしたというわけでは……」

何と答えていいのかわからず、シドロモドロニなってしまう。これはいかん。これではいけないと焦っていると、いきなりリコに両肩を掴まれた。驚いて彼女の見ると、そのかわいらしい顔が、俺のすぐ目の前にあった。

「リノス、落ち着いて。大丈夫。私は、あなたを絶対にキライにはなりませんわ」

「ううう……リコ……」

俺はゆっくりと彼女を抱きしめた。

「落ち着いてくださいませね。屋敷ではペーリスやルアラたちもいますし、子供たちもいます。二人で話ができるのは、ここが一番だと思ったのですわ。お仕事の邪魔をしたことは申し訳なく思っています。怒らないでくださいませね」

怒るも何も、リコは俺のことを心配してくれているのだ。感謝しこそすれ、怒るなどとはとんでもないことだ。

リコは俺を椅子に座らせ、自分も傍らにあった椅子を持って来て、俺のすぐ隣、お互いのひざとひざを合わせるようにして座る。そして、俺の左手を両手で握りながら、一体どうしたのです？　とやさしく問いかけた。

「……いや、ソレイユとマトを見ていると、辛抱ができなくて、たまらなくなってしまうんだ」

俺は申し訳なさそうに口を開く。リコは真剣な表情で、それはいつから？　どういうときにです？　と質問してくる。

「ああ、いや、ひと月ほど前からかな？　別に、食事をしているときや、普段屋敷にいるときは何ともないんだ。でも……一緒に風呂に入って、寝室に行くと……その……」

「欲情が抑えられなくなるのですね？」

俺はコクリと頷く。リコの手の力が少しずつ強まっている。それに比例するように、俺の心臓の鼓動も、その速さを増していく。俺としても、これではいけないと思っているのだが、どうしたことか、歯止めがきかないのだ。完全に言い訳になるのだが、そんな俺の様子をソレイユはとても喜んでいる。むしろ、彼女の方に火が付いてしまって、俺を放さない。そんなわけで、ついつい夜が白むまで頑張ってしまい、精も根も尽き果てたようになって眠る。俺はクタクタの状態で起きるのだが、ソレイユは絶好調と言わんばかりに元気いっぱいに起きる。俺と同じで、ほとんど寝ていない状態なのだが、何故か彼女は元気なのだ。

「……まあ、ソレイユはサイリュースですから。それに、一週間に一度のことです。それほど負担にはなっていないのでしょう。でもリノスは、マトとも同じような状態になるのでしょう？　それでは……体が壊れてしまいますわ。……わかりましたわ。リノス自身も何とかしたいと思っていますが、どうにもならないというのですわね？　わかりました。私の方で一度調べてみますわ。これには、何者かによる陰謀を感じますわ」

「陰謀？」

「ええ。だっておかしいではありませんか。これまで私たちを平等に愛していたリノスが、突然心変わりをするとは思えませんわ。それを、今聞いた話で確信しましたわ」

「リコ……その……怒らないのか？」

「怒る理由がありませんわ」

彼女は優しい笑みを湛えている。そうだ、この優しい笑みだ。この

笑顔が俺は大好きなのだ。いつもは厳しいことを言うこともあるリコだが、この笑みで人を癒すのだ。だから俺はもちろん、メイをはじめとする妻たち、フェリスたちや子供たちもリコを敬うのだ。俺は思わず彼女を抱きしめる。この笑顔に、リコに惚れ直してしまった。

そんな俺の背中を、リコはやさしく撫でてくれている。そして、小さな声で俺に囁いた。

「私たちはいつもリノスに守ってもらっています。今回くらいは、私の手でリノスを守らせてくださいませ」

「ああ、頼む」

リコは大きく頷き、ゆっくりと立ち上がり、扉に向かって歩き出した。そして、部屋を出ていくそのときに俺の方向を振り返った。

「……リノスのことも心配ですが、今の話を聞いては、マトも心配ですわ。女性の体はデリケートなのです。やさしく、やさしくしてあげてくださいませ」

「……ああ、わかった」

俺はその場で、しばらくはソレイユとマトとは入浴しないことと、一緒に寝ないことを約束した。その言葉を聞いてリコは力強く部屋を後にしていった。

このリコの行動力はすばらしく、彼女が調査に乗り出したその二日後、驚くべき陰謀が浮かび上がった。それを聞いて俺は、かつてないほどの戦慄を覚えたのだった……。

第三百二十六話　惚れ直す（後書き）

５／３０に『結界師への転生③』が発売になりました！　メイちゃん大活躍の内容になっていますので、是非、お手に取ってご覧ください！

第三百二十七話　恐るべき呪い

リノスの執務室において、リコとメイ、そしてシディーの三人がリノスの前に座っていた。そして、リコの口から語られた名前に、リノスは頓狂な声を上げた。

「ポセラ・セイク？」

俺は初めて聞く名前に首をかしげる。だが、俺の目の前に座るリコ、メイ、シディーの表情は真剣そのものだ。その様子に俺は、背筋を伸ばして彼女たちの話に耳を傾ける。

ポセラ・セイクとは、いわゆる呪術の一種で、人を呪い殺すものなのだそうだ。聞けば、その呪いのかけ方が凄まじい。俺の呪いについてのイメージは、深夜に藁人形に釘を打ったり、火を焚いて寿限無寿限無と呪文を言いながら呪ったりする、というものだが、今回のものは、そんな生易しいものではなかった。一組の男女が裸で抱き合いながら交わり合うというもので、それが丸三日間、飲まず食わずのぶっ通しで行われるという、ファンキーを通り越して、もはや狂気としか言えないものだったのだ。

しかも、そのレイアウト自体も狂っている。男女の前には祭壇が設けられ、そこには若い魔法使い男女の生首が置かれ、さらに、その真ん中には、ドラゴンの骸骨が置かれるのだという。この骸骨は、高位のドラゴンであればあるほど効果を増すらしく、今回は何と、黒龍の骸骨が使われていたそうだ。ちなみに黒龍は、アガルタからはるか南にあるモハラという島にあるクレスソ山脈に住んでおり、ドラゴン族の中でも狡猾さにおいては随一と言われる種族なのだそ

うだ。今回使用されたのは、若いドラゴンだったようで、これが長老クラスであったら、果たしてどのような結果になっていたのかは、想像もできないのだという。この骸骨に特別な魔力を付与した紙を張り付け、そこに呪うべき相手の名前を記入する。そして、男女が交わった際の体液を塗り込めていく。その回数に比例して、呪うべき相手の性欲が極限まで高ぶり、際限なく女性を求め続けて、挙句には狂い死にするというグロテスクなものらしい。

なぜ、男女が交わり合うのかといえば、男性側が絶頂を迎えたときに、一種の「真っ白な状態」に陥る。そのとき、男の肉体は空白になっているそうで、そこに邪悪なる神を憑依させ、呪いをかけるのだという。ただし、男の意識はすぐに回復する。つまりは、男は絶頂の状態を繰り返すことで呪いの効果を発揮しており、その回数が多ければ多いほど、呪いの効果は高まる。この呪いは下手をすると、男性側もしくは女性側、あるいはその両方ともに死ぬこともあるのだという。リコの話では、それが実際に行われていたというのだから、恐ろしい話だ。

「で……リコ、それは一体どこで行われていたんだ？」

「驚かないで下さいませ。ヒーデータ帝国の帝都ですわ」

「はぁっ！？」

全く予期していなかった場所に、俺は再び頓狂な声を上げてしまった。そんな俺の様子に、リコたちは無表情のままで座り続けている。

「帝都には未だ、クリミアーナ教の教会があります。ポセラ・セイクはまさにそこで行われていたのですわ」

リコの表情が歪む。それはそうだ。自分が生まれ育った都で、そのようなおどろおどろしい儀式が行われていたのだ。リコにとっては、自分自身を汚されたように感じるだろう。

聞けば、帝都の兵士が教会に踏み込んだとき、そこではプレイの真っ最中だったらしい。しかも男はゲッソリとやつれ、蒼い顔をしたまま腰を振り続け、その下で女性は泡を吹いて気絶していたのだそうだ。あまりの光景に兵士たちは絶句し、しばらく何もできなかったのだという。

何とか気を取り直して二人を引き離すと、その直後、男は意識を失った。そして男は、手当の甲斐もなく、ほどなくして絶命したが、女性は数時間後に意識を取り戻した。とはいえ、体へのダメージは大きく、おそらくまともな生活には戻れないような体になってしまっているらしい。そんな中でも、彼女から話を聞き出すことに成功し、この女性は法外な金額で雇われたに過ぎない、一介の娼婦だったことがわかった。

女性からしてみれば、単に男と交わるだけの簡単な仕事であり、それだけで数年は暮らしていけるだけの金が手に入るとあって、喜んで引き受けたのだ。しかし、現れた相手役の男は疲れ知らずであり、彼女は何度も意識を失ったのだという。

「す……凄まじい話だな」

呆れる俺に、リコはさらに言葉を続ける。

「祭壇にはリノスの名前が書かれた呪符に加えて、マトとソレイユの名前が書かれた呪符もあったのですわ」

「え？　……ということは？」

「リノスだけが呪われていたのではなく、マトもソレイユも呪われていたことになりますわね」

「……」

なるほど、それで二人とも朝までずっと俺に付き合えたのだ、と妙に納得してしまう。これはメイの推察だが、おそらく俺の結界のお陰で、呪いの効果は半減していたようだ。メイが調べでは、今回、俺やマトカル、ソレイユにかけられた呪いは最強クラスになるそうで、これをまともな人間がかかると、おそらく、男も女も死ぬまで互いを求め続けるのだそうだ。それが一晩で、しかも、俺の体力が尽きて眠ってしまう……という程度で済んでいたのは、俺の結界が功を奏していたからなのだという。

「そうか……しかし、よくこの二日間で呪いがかけられていることと、その場所が特定できたな。一体、どうやって調べたんだ？」

「簡単ですわ。まず、シディーが直感で呪がかけられていると思いついて、それをメイが調べたのですわ。ポセラ・セイクに行き当たるのにはそう時間はかかりませんでしたし、最後は、シディーが帝都の教会を特定したのですわ」

「……さすが、だな。それにしてもシディー。どうして帝都だと思ったんだ？」

「呪いをかけるならば、絶対に邪魔をされてはいけません。狙いがリノス様であれば、リノス様が警戒しない場所……そう考えると、アガルタの都、帝都、私の故郷のニザというところになります。そ

の中でクリミアーナと関係があるところと言えば……」

「ヒーデータ帝国というわけか」

シディーはコクリと頷く。相変わらず、素晴らしい洞察力だと感心する。

その後、ドラゴンの髑髏は粉々に砕かれ、さらには帝国の魔導士の火魔法によって焼かれた後、地中深く埋められたのだという。どこに埋められたのかは、敢えて聞かなかった。今回の件については、リコのお蔭もあるが、全面的に陛下が協力してくれたために、迅速な解決につながっていた。また一つ、陛下に借りが出来てしまった気もしないではない。まあ、それはそうとして今度一度、陛下にお礼を言いに行かねばならない。

そして、俺はというと、呪いは解けたと言うリコの指示のもと、マトカルとソレイユと一緒に寝てよいということになった。呪いがかかっていない状態を確かめるべきだというリコの意見に従って、早速、いつものローテーションを変更して、今夜と明日の夜は、それぞれ、ソレイユとマトカルと過ごすことになった。いつもながら、リコの心の広さには感心するが、間違いなく心中は寂しさを覚えているはずだ。リコにもお礼をしなければならない。

二人と過ごすにあたっては、未だに辛抱たまらん状態になるのであれば、すぐにリコに相談するということになり、さらには、メイが部屋で待機していて、俺に何かあればすぐに駆け付けられる体制を取るという厳戒態勢が敷かれることになったのだった。

俺は一抹の不安を抱えながらその夜、ソレイユが待つ寝室に向かう。そして、部屋の前で数回、深呼吸をして心を落ち着け、ゆっくりと

扉を開けるのだった……。

第三百二十八話　呪いがもたらせたもの

結果を先に言ってしまうと、俺は、暴風雨のような衝動に陥ることはなく、いつもの状態に戻っていた。それに一番ホッとしていたのが意外にもソレイユだった。

「正直、リノス様が以前のままでしたら、今夜は勘弁してくださいと言おうと思っていました……」

聞けば彼女は、俺にエロブーストがかかっていた最初の頃はうれしくて仕方がなかったそうで、持てる全てのテクニックを駆使して俺に対峙していたのだそうだ。だが、全く衰えぬ俺のペースに、基本的に体力がなかったソレイユは、自分もヘロヘロになりながら朝を迎えていたのだという。てっきり大喜びで俺との時間を過ごしていたのだろうと思っていたが、どちらかというと、明け方近くの時間は、サイリュースのプライドにかけて必死で頑張っていたのだそうだ。

「そう言えば、最後の方はずっとイヤイヤって言っていた気がするな。ソレイユはいつもイヤイヤっていうけれど、あれは本当に嫌だったのか？」

「イヤではありませんでしたが……その……無意識に……」

ソレイユは申し訳なさそうな表情を浮かべながら、あんな激しい夜はキライではないが、毎回というのはさすがにキツく、できれば半月に一度くらいにして欲しいと言っていた。そして、母親のヴィヴァルにはこのことは絶対に秘密にして欲しいとお願いされた。男を

虜にすることに絶対の自信を持つサイリュースが、体力不足で負けたということが知られれば、母からどんなお叱りを受けるかがわからないと、目に涙を溜めながら訴えていた。いつもの妖艶なソレイユとは別の顔が見られたために、俺にとっては新鮮だったが、彼女はマジでビビっていた。母としてのヴィヴァルはとても怖い人であるらしい。

そのせいもあってか、その夜のソレイユは、いつになくおしとやかだった。

次の日はマトカルだったが、こちらも、以前のような状態にはならず、俺は冷静に彼女と応対することができた。話をしていて、こちらも意外だったのだが、彼女はソレイユとは逆に、俺のエロブーストについては、ほとんど問題なかったのだという。軍隊で鍛えていることもあるのだろう、体力が人並み以上にあるために、過酷と思われる夜も、問題なく過ごすことができたようだ。

「でも、次の日は軍の勤務があっただろう？　兵の訓練とか……大丈夫だったのか？」

「問題ない。ラマロンにいた頃は、重装備で夜間を行軍し、短い仮眠をとってすぐに一日行軍するといった訓練も受けてきた。それに比べれば、全く問題なく耐えられる」

「でも、訓練は少なからず休憩があっただろう？　俺の場合は、休憩はほぼなかったと思うんだが……」

「そうだな。リノス様は肉体強化のスキルがあるから、体力が落ちてくると、自然にそのスキルが補ってくれる。そのために朝までぶっ通しだったが、訓練とは違い、常に心地いい状態だったので、精

神的にはとても楽だった」

「心地いい状態って……マト……」

「あ、う、そ、そういう意味ではない」

顔を赤らめながらアタフタとするマトカルは、とてもかわいらしかった。そんな様子を見られるのが恥ずかしいのか、彼女は真顔に戻って、さらに話を続ける。

「それに……夜明けまでの少しの間は眠ることができたので、体力的には問題はないのだ」

「少しの間って……1時間もなかっただろう？」

「1時間もあれば十分だ。長い時間眠るのも悪くはないが、短い時間で熟睡しても、体力は回復するし、逆に頭は冴えるものなのだ。それが一ヶ月間続くとなれば話は別だが、ラマロンでは短時間睡眠のスキルを身に付けることは、司令官となる者にとって必須スキルとされていたので、一週間程度であれば、全く問題はないのだ。むしろリノス様も短時間で熟睡するスキルを身に付けた方がいい。これから大きな戦いが起こる可能性があるのだろう？　戦場に出ては、眠れぬこともあるだろうからな」

「いや……それは……」

苦笑いする俺に、マトカルは真剣な表情を浮かべている。

「戦場においては大事なスキルだ。丸一日槍や剣、魔法を使い続けるとクタクタになるが、夜は夜で夜襲に備えねばならないこともあ

る。そんなときに眠っていて敵に侵入を許してしまっては、目も当てられない。短い時間で熟睡して体力を回復し、敵の襲撃に備えられる準備をした方がいい。特にリノス様は軍の最高司令官になる。常に冷静な判断が行えるようにしておかねば。睡魔に襲われて判断力が低下していては、勝てる戦いにも敗北してしまう」

「……そ、そうだな。マトの言うことも一理ある。回復魔法は肉体の傷は治癒してくれるが、精神的な疲れは取ってはくれないからな。あ、いや、精神魔法があるか？　あれは……使ったことはないが、あれなら眠気を飛ばしてくれるんじゃないか？　一度、試してみるか」

俺のその言葉に、マトカルは無言で視線を向け続けている。

「わ……わかった。短時間睡眠のスキルは、あらためてどこかで訓練しようか。前のように、明け方近くまでブッ通し……というのはマトにも負担をかけるし、俺自身も難しいからな」

「まあ、私は別に構わないのだが……」

「え？」

「何でもない……」

その夜のマトカルは、恥ずかしさも手伝ってか、いつもとは違って久しぶりに、ずっと目を閉じたままだった。

二人と過ごした次の日の夜、俺は眠ることなく、寝室のベッドに横になりながら、リコを待っていた。

彼女はイデアを抱っこしながら寝室に入ってきた。ここ最近の彼はいつもにも増してお母さん子になっている。リコが抱っこしないと眠らない。それどころか、リコが屋敷にいる間は、ベッタリとくっついていて離れようとしない。リコは甘えて困ると言うが、俺はそうは思わない。男の子なのだ。遠からず母親が部屋に入っただけで激怒する時期がやって来る。ママ、ママと甘えてくれるのは今のうちだ。そうしたこともあって俺は、彼がママの側に居ようとするのを止める気はないのだ。

リコはベッドの横に置かれている子供用のベッドに、注意深くイデアを寝かせる。眠りが浅い状態で寝かせると起きてしまい、泣いてさらに寝かせるのが大変なのだ。

「……寝ましたわね」

リコはゆっくりと息を吐きながら、イデアから目を離すことなく俺の寝ているベッドに近づいて来る。

「本当に、甘えん坊で困りますわ」

「男の子はそんなものだよ。ママって言われる時期は、意外と短いものだよ。今の時期が一番楽しい時期かもしれないよ」

「それでも……」

困った表情を浮かべながら、リコはベッドに入ってきた。俺はいつものとおり、彼女に腕枕をする。リコは再びゆっくりと息を吐きながら口を開く。

「やっぱり、リノスの腕枕が一番安心しますわ」

笑顔を浮かべながらリコは俺に体をピタリと寄せ付ける。

「きっと、イデアはリコに似たんだろうな」

「何故です？　私はリノスに似ていると思いますわ」

「顔は俺に似ているかもしれないけれど、中身はリコだよ」

「そうでしょうか？」

「だって、一人では寝られないじゃないか」

リコは恥ずかしそうに顔を俺の胸に埋めながら、拳でトントンと俺の胸を小突くようにして叩いてくる。そして、しばらくしてゆっくりと顔を上げ、嬉しそうな表情を浮かべた。

「やっと……いつものリノスが戻ってきてくれましたわ。……お帰りなさいませ」

「心配かけたね。ごめんな、リコ」

「いいえ、ただ、私は、リノスが心配だっただけですわ」

リコがものすごくかわいらしい笑顔で俺を見ている。俺たちはお互いに手を握り合う。

「ありがとう。やっぱり、リコが大好きだ」

「私もですわ」

その夜、俺とリコは、いつも以上にゆっくりと眠ることができた。

第三百二十九話　戦いの始まり

まだ寒さの残る三月初旬、クリミアーナ教国の首都、アフロディーテでは、臨時枢機卿会議が招集され、その会場である大聖堂は、ピンと張りつめた緊張感に包まれていた。ただ、今回の会議はいつもとは趣が異なり、ここに参加している者たちは皆、この会議の結末を容易に想像することができていた。彼らが醸し出す緊張感は、これから確実に起こる、教国史上最大規模の、全世界を巻き込んだ戦いについての期待感を周囲に悟られぬよう、自分を抑えているために生まれたものだと言って過言ではなかった。

彼らは、理屈抜きにクリミアーナ教国の勝利を信じて疑わなかった。むしろ彼らの関心は、次回のジモークにおいて自分がどの国に派遣され、どのような使命を担うのか。それによって、教国が勝利した暁に、自分の地位がどの程度にまで上がるのか、という点にあった。

そんな彼らの心を知ってか知らずか、この日の会議は驚くほどの早さで幕を閉じた。教皇以下、枢機卿たちが登場し、席に着いた直後、カッセルの口から、教皇の名において、天道に従わぬ国へ鉄槌を下す旨の宣言が行われ、４月のジモークにおいて多くの人々に天命が与えられるだろうと述べられたのだった。教国派の国々には出兵の命令書が出され、大規模な軍勢の動員が発表された。その矛先はサンダンジ国であり、ひいてはその後ろに控える、リノスたちのアガルタであることは明らかだった。

時を同じくしてタナ王国でも、既に出兵の準備が整いつつあった。既に十万を超える軍勢を前に、タナ王国国王のヴィルは満面の笑みを浮かべていた。

「我が軍勢ながら、見事なものよ。さて、サンダンジの者どもは、我らといかに戦うのか……楽しみだな。おそらく今日にでもアフロディーテにおいて、教皇聖下から討伐令が下っておろう。我らはそれを受け、どの国よりも先駆けてサンダンジに向かう。教国の本隊が到着する前に、あの国を併呑し、その勢いを駆ってフラディメを併呑する。そして、本隊と共にアガルタに向かう……。そうなればおそらく、ラマロンとヒーデータが兵を出してこよう……。奴らとの戦いも……楽しみだ！」

満足そうな笑みを浮かべたまま、誰に言うともなく彼は呟く。大規模な軍勢を己の意のままに動かしながら敵を打ち倒してく……長年夢見ていたことが今、叶おうとしているのだ。彼は今、興奮の頂点にあった。そんな中、彼は突然踵を返して、さらに言葉を続ける。

「出立は明後日とする！　各自、準備を怠るな！」

彼の眼前には片膝をついて畏まる家来たちが控えていた。そのうちの一人である、白いローブ姿を着た初老の男が、彼に向かって恭しく口を開いた。

「恐れながら陛下、未だオクタ殿の姿が見えませんが……」

「フフフ、ジェラニウスよ。オクタは今、休息中じゃ」

「こっ……この時期に休息とは！」

「ウフフ、相変わらず生真面目よの、そなたは。オクタは何も遊んでいるわけではない。ヤツは既に動き始めておる。もうしばらくすると我らに合流する手はずとなっている。それよりもジェラニウス、

そなたには別にやってもらわねばならぬことがある。軍神にふさわしい大仕事だ。やってくれるか？」

「ハッ、不肖の身ではございますが、陛下のご命令とあらば、我が身命を賭してお仕えいたします」

「さすがはジェラニウスだ。では、そなたには別に我が策を授けよう。他の者は、出陣準備にかかれ！」

国王の言葉に、その場にいた全員が一斉に頭を下げた。

一方、リノスのいるアガルタ国でも、意外な人物が彼の前に現れていた。

「……久しいな」

「本当に、お久しぶりでございます」

謁見の間で、にこやかにリノスに話しかけているのは、見目麗しい美女だった。まだ少女のようなあどけなさを残しつつも、その目には知性を湛え、凛とした雰囲気を持っていた。その上、豊満な胸と抜群のプロポーションを持っており、一目見ただけで、彼女はどこかの王女であろうと思わせる雰囲気を漂わせていた。

……その女性は、クリミアーナ教国の教皇の孫である、ヴィエイユだった。

数年前、リノスとの闘いに敗れてアフロディーテに帰還したはずの彼女から突然、目通りを願う手紙が届いたのは、わずか二日前のこ

とだった。そこには、折り入って相談したいことがあると認められており、さらには、目通りが許されるのであれば、すぐにお会いしたい。ついては、ポーセハイを迎えに寄こしてほしいと付け加えられていた。彼女の現在の住まいはクレファライス国とあり、おそらくポーセハイの中で知っている者がいるはずだとも書かれていたのだった。リノスは訝りながらも彼女に会う決意をし、クレファライス国に迎えをやったのだった。ちなみに、クレファライス国は元々、ポーセハイの代表であるチワンが長年住んでいた国であり、彼はその国であれば表も裏も知っていると言って、二つ返事でヴィエイユの迎えを引き受けたのだった。

「……ずいぶんご立派におなりになったのですね。それに、お美しくなられましたわね」

俺の隣でリコが落ち着いた声で、ヴィエイユに話しかけている。それは、決して社交辞令ではない、心から再会を喜んでいる気持ちが伝わるような話しぶりだ。そんなリコにヴィエイユは、にこやかな笑みを湛えている。

「皇后さまもお変わりなく、何よりでございます。聞けば、お世継ぎ様がお生まれになったとか……心からお祝い申し上げます」

そう言って彼女は、見事な作法で一礼をする。その様子をリコは目を細めながら見ている。

「……え？　何？　まだ生娘なの？」

俺は思わず声を漏らす。あまりにデリカシーのない言葉に、リコはちょっと驚いた表情で俺に視線を向ける。同時に、ヴィエイユも少し目を見開いて俺を見ている。

正直、俺はヴィエイユの数年間の行動に、心の中で唸っていたのだ。

彼女の姿を見た直後、俺は直感的に、この娘が何か良からぬことを企んでいると感じた。そして、すぐに鑑定スキルを発動させて、彼女の過去を覗いたのだ。

このアガルタを離れ、クレファライス国に向かった彼女の人生は、艱難辛苦の連続だった。向かった先は元々、クリミア＝ナ教国と敵対していた国であり、そこに、大勢の信徒を連れて向かったのだ。当然、彼女たちは凄まじい迫害に晒されることになった。まず、入国を認められないのはもちろん、彼女たちが乗った船は、問答無用で攻撃されたのだ。

そんな中、彼女は信徒たちを船に残し、たった一人でクレファライス国に向かい、国王に謁見した。その道中は、一切言葉を発することを許されず、水も食事もほとんど与えられず、まるで重罪人を護送するかのような仕打ちを受けていた。しかも、都に着くまでのわずか二日間の間に彼女は三回も兵士たちに襲われそうになっていたのだ。だが、彼女は持ち前の聡明さを生かして、上手に兵士たちを説得し、すんでのところで操を守ることに成功していた。それだけでも驚嘆に値するのだが、さらに彼女は、クレファライス国の国王ですらも、その色気と才覚を用いて、長い時間をかけて篭絡せしめていたのだった。その様子も凄まじいもので、彼女は、あるときはその肉体を使いながら男たちに近づき、あるときはその弁舌で説得する一方で、自分たちに敵対する者たちについては、教徒たちを使ってその命を奪うことも厭わなかったのだ。

その様子を見て俺は、戦慄を覚えながら、目の前で美しく微笑むこの少女を、悪魔だと思った。不思議なことに彼女は、多くの男たち

にその裸身を晒しながらも、ついに最後の一線を超えることはなく、あまつさえ、自分の体に指一本でさえも触れさせていなかった。彼女は、その体を求められたり、襲われそうになったりすると、決まって自分から服を脱ぎ、惜しげもなくその裸身を晒していた。そして、一糸まとわぬ状態で、甘ったるい声で男たちの欲望を刺激しつつ、最後には、男たちの心を掴むことに成功していた。何とも恐ろしい女性に成長したものだ。俺がつい本音を口走ってしまったのは、こうしたことが理由だったのだ。

俺は雰囲気を変えようと、咳ばらいを一つしてから再び、ヴィエイユに視線を向ける。

「ところで、俺に折り入って相談したいことがある、とあったが、一体何の相談だ？」

俺は彼女から視線を外さず、心の中で絶対に篭絡されてはならないと自分に言い聞かせる。だが、彼女から帰ってきた答えは、俺が全く予想だにしない内容だった。

「はい、ご相談というのは他でもございません。クリミアーナ教国を、我が祖父である教皇、ジュヴァンセル・セインを、この世から葬り去りたく思っております。アガルタ王様には、是非、そのお力添えを賜りたく、ご相談させていただきたいのでございます」

いつしかヴィエイユの顔からは、笑顔が消えていた。

第三百三十話　変態の思考回路

これまでのにこやかな笑みとは打って変わって、ヴィエイユは一切の情を感じさせない、無表情に変わっていた。その様子に俺は、背中にゾクッとしたものを感じながら、努めて冷静を装う。

「お前の爺さん……いや、教皇をこの世から葬るとは、穏やかじゃないな。一体何があった？」

「これは、以前から決めていたことでございます。なかなか実行に移せませんでしたが、この度、ようやくその機会がきた……それだけでございます」

「ほう、詳しく聞いてもいいかな？」

彼女はフッと声を漏らしたかと思うと、再び笑顔になった。先ほどとは違い、人懐っこい笑みだ。気を抜いていたら、心を許しそうになるほどの愛嬌だ。そんな俺をまるで見透かしたかのように、彼女は優しい声で俺に語り掛けてきた。

「我が祖父、ジュヴァンセル・セインは、己が意に沿わぬ人々を追い出し、あるいは殺してきました。現在のクリミアーナ教国、ひいてはクリミアーナ教は、祖父の独断と偏見によって支配されていると言って過言ではありません。祖父は高齢ですが、その肉体は強靭で、まださらに生き続けることでしょう。と、なれば、彼のために不幸になる人々はさらに増えるかと存じます。しかし今、クリミアーナ教国は全世界に向けて、天道に反する国々を討伐する教皇命令を発令しました。この機会に私は兵を挙げ、祖父、ジュヴァンセル・

セインを討つことにしたのでございます」

「ちょっと待て。教皇命令？　そんな命令が出されたのはいつのことだ？」

「二日前でございます」

「二日ぁ？　えらく情報が早いじゃないか？」

「ええ。表向きは、私は教国に忠実であるように振舞ってまいりました。そのため、教皇命令は発令される前に、既に私の耳には入っておりました。もっとも……教国に見せていたのは姿勢だけで、実際は、多くの命令をのらりくらりと躱しながら、今日まで過ごしているのですが」

そこまで言うと彼女は、右手を口に当てて、ホホホと可愛らしく笑う。

「教皇の命令は、『天道に反する国々を討て』とあるはずです。天道に反する国とはすなわち、先だってフラディメ国で行われた学会に参加した国々を指します。その中で、最優先に討伐するべき国と考えられるのが……」

「俺たちアガルタというわけか？」

「左様です」

彼女は懐から小さく折りたたまれたハンカチのような布を取り出した。そしてそれを床に広げていく。意外にもそれはかなり大きなものであり、そこにはこのアガルタを中心とした世界地図が書かれて

いた。

「討伐軍の中心となるのは、タナ王国です。国王であるヴィル様は、軍神の称号を与えられた程の戦上手。加えて、ご自身も無類の戦好きです。そのお方が、おそらく全兵力をもって南進してくるでしょう」

「ニケさんのいる、サンダンジ国を攻めるというわけか」

「ご明察です。さらには、隣国のフラディメ国を併呑し、その勢いを駆ってアガルタに攻めてくるでしょう。おそらくそこには、教国側の国々からの兵士も合流しているでしょうから、総勢は数十万に膨れ上がるかと存じます」

「……それで？」

「おそらく、ヴィル様は、真っ先にアガルタのガルビーを目指されることでしょう。ここが堕ちれば、ラマロン皇国が堕ち、さらにはアガルタとヒーデータ帝国、この両国の喉元に刃を突き付けることにもなります。ここを陥落させて後、軍を二手に分け、一軍はヒーデータへの抑えとし、ヴィル様率いる本軍はイルベジ川を上ってアガルタに攻めこむという作戦かと存じます」

「……なるほど。で、ヴィエイユ、お前はどうするのだ？」

「私は、この戦いはガルビーが堕ちるかどうかが重要な点であると考えます。そこで、私はクレファライス国および、我が信徒４万をもって、アガルタの西側、すなわち、ヒムキス海を下り、ガルビーに向かうタナ軍の背後を突きます。アガルタ王様におかれましては、我々がヒムキス海を航行する際に、誤って攻撃いただかないこと、

合わせて、周辺国へのその旨の通知、そして、願わくば、ニザ公国のラワンの港に停泊することをお許しいただき、そこで、水や食料の支援をいただきたいのです」

そこまで言い切るとヴィエイユは、フゥと息を吐き、スッと俺に視線を向けた。その表情は自信に満ち溢れており、己の予測に一切の問題はないと言いたげな様子だった。その彼女を見つめながら俺は、ゆっくりと口を開く。

「まず、お前がいま語った作戦は、この際、当を得たものと言えるだろう。だが、果たして敵はそう思い通りに事を進めてくれるかな？」

俺の言葉が意外だったのか、彼女はキョトンとした表情を浮かべる。

「どういう、意味、でしょうか？」

「お前の作戦は、言ってみれば、色も匂いもない。タナ王国の国王は戦闘狂と見た。そんなド変態であれば、もっとオリジナリティーを出してくるはずだ」

「おりじなりてぃー？」

「人が考えもつかない作戦をやりたがる、ということだ。……ヴィエイユ、お前の話はよくわかった。できるだけ、その望みはかなえよう。だが、今話した作戦を実行するのはちょっと待て。タナ軍がニケさんのいるサンダンジを攻めることは間違いないだろうが、果たしてどう攻めるか……その出方を見る必要があるな。それによっては、お前の願いは叶えられないかもしれないな」

「おそらく、私が今、申し上げた通りに事が運ぶと考えますが……」

「ああ、そうなれば、重畳だ」

俺の言葉が癪に障ったのか、彼女は冷淡な笑みを浮かべ、俺を挑発するかのように口を開いた。

「では、私と賭けを致しませんか？」

「賭け？」

「私は、自分の作戦予想に絶対の自信を持っております。私の予想通りに事が進みました暁には、私が建てます国に、向こう十年間、無償での食糧支援をお願い申し上げます」

「ほう、では、お前の予想が外れたら、どうするんだ？」

「……私の操を差し上げます。どのように扱っていただいても、結構でございます。憚りながら私は、女としての価値は相当にあると自負しております」

その言葉を聞いた俺は思わず爆笑する。

「ハッハッハ！　お前、俺が断るのを見越して話をしているだろう？　いや、言わなくても分かる。恐ろしい女になったものだな。俺が5人の妻と暮らしていることを知り、それ以上の妻を求めていないことを知って言っているのだろう？　まあ、その予想は当たらずとも遠からずだ。生娘とはいえ、今のところ俺はお前に興味はない。てゆうかお前、俺と夜を共にすると、とんでもないことになるぞ？　この間からドえらいエロブーストがかかってしまってな。お前に

言っても分かるまいが、朝までノンストップでできるようになったんだ。体が壊れちまうぞ？　嘘だと思うなら、ソレイユに聞いてみるといい」

「リノス」

「冗談だ、リコ。でも、本当のことだっただろう？　まあ、それはそれとして、なるほど、ヴィエイユ。お前の狙いがよくわかったよ。お前の真の狙いは、この世界を巻き込んだ戦いを利用して、自分の国を作ることだったんだな？　そのために、俺を利用しようとしている……そんなところか？」

「恐れ入ります。アガルタ、ヒーデータ、ニザは、今や世界に名だたる大穀倉地帯をお持ちです。アガルタ王様と繋がることができれば、食糧の心配はなくなり、さらには、作物の収穫を飛躍的に伸ばせる技術や最先端と言われる医療技術も手に入ります。こう申しては何ですが、私の予想が当たりましても、アガルタ王様から求められますれば、私はいつでもこの操を捧げる覚悟でございます。また、それだけの価値が、この国にはございます」

どうやら彼女は真実を語っているらしい。これまでとは雰囲気がガラリと変わっている。俺は笑みを絶やさないまま彼女の話を聞いていたが、やがてそれを遮るようにして、右手をスッと上げる。

「残念だが、その予想は外れるだろう。タナ国王が俺と同じ変態だとすれば、そんな正攻法は取らないだろう。人をアッと驚く作戦を立てるはずだ。そうだな、さしずめ俺ならば……」

「リノス、リノス」

隣でリコが小さな声で俺に話しかけている。

「何だい、リコ？」

「悪そうな顔に、なっていますわよ」

ちょっと眉をひそめながら注意されてしまった。俺は思わず苦笑いを浮かべる。

「相変わらず、お仲がよろしくて、羨ましい限りでございます」

ヴィエイユが微笑みを湛えながら口を開いている。リコはちょっと顔を赤らめながら俺から視線を外し、再び彼女に視線を向けた。その様子を見て、俺も彼女に視線を向ける。

「ヴィエイユ……まずはよく来てくれた。今後、お前にも助けてもらわねばならないことも多くあるだろう。よろしく頼む」

「畏まりました」

再び、ヴィエイユは笑みを浮かべながら、恭しく俺に頭を下げた。

第三百三十一話　遅速行軍

「よーし、全軍止まれ！　我らはここで三日間逗留する。各兵は交代で警備に当たれ。くれぐれも乱暴・狼藉はするでないぞ！」

指揮官の命令に、兵士たちは粛々と、ある者は軍装を解き、ある者は警備の配置に向かう。その様子を町の高台から眺めているのは、タナ王国国王のヴィルだった。彼はその様子を満足そうな表情を浮かべながら、頷いている。そして、チラリと側に控えている家来たちに視線を向ける。

「お前たちも休むがいい。我も湯に入ってゆるりと休息しようぞ」

その言葉に、全員が首を垂れた。

「……一体どうなっているのだ」

吐き捨てるように呟いているのは、サンダンジ国の国王であるニケだった。彼の前には頭を擦りつけるようにして平伏している家来がいた。

「……油断せず、引き続き見張るのだ」

「ハッ……」

少々怒気を含んだ王の声に、家来はそそくさと部屋を後にしていった。彼は居並ぶ幕僚たちを見廻しながら、誰に言うともなく呟く。

「一体、タナ軍は何を考えているのか……。奴らが王都であるコガを出たのが三日前だ。コガから国境であるカコナ川まで三日……。しかし、今の段階で奴らはまだキューエとは……。コガからキューエは一日あれば十分に着く距離だ。それを三日もかけてとは……まるでナメクジが這うようにノロノロと進んでいるのは、何か策があってのことか？　一体、奴らは何を考えているのか……」

「父上……恐れながら」

「何だ、シン」

「タナ軍は我らに恐れをなしているのではありませんか。奴らはクリミアーナ教国からの命を受けて出兵しているに過ぎません。併呑したサルファーテを立て直すのにそれどころではないでしょう。と、なれば、奴らは積極的に戦いたくはないはずです。父上、ここは是非、タナ側に和議の使者を送られてはいかがでしょうか。クリミアーナ教国に怪しまれずに、互いの被害が最小限となるよう話し合いをしたいと打診してみるのです」

ニケは険しい表情のまま、王太子であるシンの顔を眺めている。彼は、しばらくして大きなため息をつくと、ゆっくりと、噛んで含めるようにして、息子に語りかけた。

「そなたは……よい子じゃな。なぜに、もう少し、悪い息子に生まれてくれなんだぞ」

その言葉にシンは、よくわからないといった表情を浮かべる。ニケは息子の顔をじっと見つめる。我が息子ながら、端正な顔立ちだと思う。まだ１６歳だが、王としての風格は十分に備えているだろう。

しかし、息子は優しすぎる。その優しさは、平和な世の中であれば有効に働くが、今は血で血を洗う戦乱の時代だ。息子の優しさは王として非常に危険だ。この優しさは時として、多くの家来や民の命を失うことにつながることをニケは知っていた。

ニケはそんなことを考えながら、息子を下がらせる。そして、居並ぶ幕僚を前に、大きなため息をつきながら、小さな声で呟く。

「我が死んだら……この国は……滅ぶな」

「国王様……」

「冗談だ」

ニケは苦笑いを浮かべながら、小刻みに首を振る。

「だが、シンの鷹揚さはこの国では貴重だ。いずれの日にか、あの性格が必要となる日が来るであろう。そのためには……よき伴侶がおらねばな。年上の、しっかりした……そう、メイ殿のような女性が……」

「国王様！」

「フッフッフ。国の存亡をかけた戦の最中に、そんなことを考えている余裕はないと言いたいのであろう？　だが、もうすぐ、そのようなことを考えている暇などなくなるだろう。しばらくは、我の戯言に付き合え」

「はっ……」

ニケは目を閉じて、腕組みをしながら物思いにふけっている。居並ぶ幕僚たちは、その様子をただ静かに見守っている。

「……よもや、我らの策に気が付いた、ということはあるまいな？」

誰に言うともなく呟いたニケの言葉に、家来たちは一斉に彼に視線を向ける。

「そのときのことも、考えておかねばなるまい……」

彼はゆっくりと目を上げて、視線を背後に向ける。そこには、緑色の小さなドラゴン――フェアリードラゴンが、退屈そうな表情を浮かべながら控えていた。

「そなたにも、忙しくなるときが来よう。今は、休んでいるといい」

そう言って彼は立ち上がった。

実際、サンダンジ国は鉄壁の防御態勢を敷いていた。多くの砦が築かれ、国中がまるでハリネズミのような状態を作り上げていたのだ。ニケには、国内で戦うのであれば絶対に勝つ自信があった。いかに魔法を無効化するタナ軍であっても、国内におびき寄せて戦えば、何十万の大軍とはいえ、戦線は伸び切る。そうした状態にしておいて本隊を突けば、軍勢の数は問題でなくなる。リノスからは、何かあったときの緊急用の連絡手段として、一羽のドラゴンが送られているが、これを使うときは即ち、サンダンジ国が大勝利を収めるか大敗北を喫するかのどちらかであろうとニケは考えていた。彼は自室に戻ると一人、瞑想にふけるのだった。

「……そうか、わかった」

俺の言葉を聞いて、サダキチはスッと姿を消した。俺は窓を閉め、よっこらせと執務室の椅子に座る。

「サダキチに確認したが、今のところ動きはないようだ」

「う～ん」

目の前で唸っているのは、ラファイエンスだった。その後ろにはマトカルとクノゲン、そしてルファナ王女が控えていた。

「稀に見る遅速行軍ですな」

ヤレヤレといった表情を浮かべているのはクノゲンだ。その様子をチラリと見ながら顔を強張らせているのは、ルファナ王女だ。彼女は実際にタナ軍と戦った経験があるために、現在では俺たちのアドバイザーとしての役割を担ってもらっているのだ。

「解せません。てっきり、サンダンジの国境を急襲するものと思っていましたが……。なぜ今になって機動力を封印するのか……。彼らの動きがわかりかねます。軍をまとめて転移させる機会を窺っているのでしょうか？」

「うーん、もしかしたら、サンダンジ側の作戦に気が付いたのかもしれませんね」

「何を言われるのですか、クノゲン殿。作戦に気が付いたのであれば、力で罠を食い破るか、別のルートを取るのかのどちらかです。いたずらに時間をかければ兵も疲れる、兵站も尽きる。タナ側にと

って良いことはひとつもありません。なぜこのような愚策を取るのか……」

「……ルファナ様には、参りましたな」

「いやむしろ、こうは考えられないだろうか？」

そう言いながらマトカルは俺の机の前に進み出る。そこには、ヴィエイユから贈られた世界地図が広げられていた。

「タナ軍は背後を警戒しているのではないだろうか」

「背後……と仰いますと？」

「ここだ」

マトカルをとり囲むようにして、全員で彼女が指さす場所を見つめる。

「ここは……ミーダイ国ではありませんか」

「そうだ。このミーダイ国は現在、リノス様の結界によって守られている。我々アガルタ軍がここを通ってタナ側に出るとすれば、タナの王都は指呼の間。タナ側は全兵力をもって出陣している。王都を守る兵をほとんど残していない状態だ。我々が攻めると、ほぼ無血開城に近い状態で占領できる」

「なるほど……それで……常に背後を意識しているために、このような遅速行軍になっていると……さすがはマトカル様、このルファナ・ジン・サルファーテ、感服しました」

彼女はスッとマトカルに頭を下げる。その様子をチラリと見たマトカルは、すぐに俺に視線を移して、じっと俺の目を見つめた。

「……違うと思うな」

俺の言葉に、ラファイエンスとクノゲンが頷く。

「ミーダイ国を通って敵の王都を攻める……聞こえはいいが、占領した後のことはどうするんだ？」

「それは……」

「その王都にはどのくらいの人が住んでいるんだ？　何十万人単位じゃないのかな。その人々を抑えなきゃならないし、その上、タナ軍１０万は無傷のまま残っているんだ。逆に占領した王都を攻められてみろ、守り切れないぞ。それはそうだ、相手は勝手知ったる場所で、王都の裏も表も知り尽くしている。たとえ城門を閉じても易々と侵入してくるだろう。そうなれば俺たちは袋のネズミにならないか？」

「くっ……」

マトカルは悔しそうな表情をする。その様子を見守っていたラファイエンスが口を開く。

「それにしても解せんな。ルファナ殿が言われたように、このままではタナ軍は単に物見遊山をしているに過ぎない。それが奴らの狙いとは思えないが……」

「もしかして、待っているのかな？」

「リノス殿、どういうことだ？」

「いや、サンダンジの兵士が国境に出てくるのを待っているのかもしれませんね。さらに理想を言えば、俺たちアガルタも出てきて欲しいと思っているかもしれません。どうせなら、一回の戦闘でケリをつけたいでしょうから、敵さんは」

ラファイエンスは目を丸くして驚いている。そのとき、執務室の扉がノックされ、スタッフの一人が部屋に入ってきた。

「申し上げます。ただいま、メイリアス様とコンシディー様から言伝がございまして、早急にお目にかかりたいとのことでございます」

「メイとシディーが？　……わかった。では将軍たちは引き続きタナ軍の動向を見守って下さい。動きがあればすぐに知らせてください。では！」

そう言って俺は部屋を後にした。

「……リノス殿がいる限り、我らに負けはないな」

空席となったリノスの椅子を眺めながら、ラファイエンスは笑みを湛えながら呟く。そして、目の前の三人に視線を向けながら、呆れたような表情を浮かべた。

「まさに、あのお方こそ、軍神だ」

第三百三十二話　お互い様

「あれ？　ここって？」

案内された部屋は、迎賓館の中に作られたメイの私室だった。てっきり医療研究所かと思っていたために、思わず声が出てしまった。

「メイ、入るぞ」

ドアをノックして部屋に入ると、そこにはメイの他にシディーもいて、その隣には三人のドワーフが控えていた。

「お忙しい中、お呼びだてして申し訳ありません」

メイがスッと立ち上がり、いかにも申し訳なさそうな表情を浮かべて頭を下げる。俺は問題ないと言って、彼女を座らせようとする。

「ありがとうございます。ですがご主人様、すぐにお目にかけたいものがあります」

そう言って彼女はシディーたちドワーフに目配せをした。顔じゅうが髭で覆われているため、人相はよくわからないが、おそらく初老と思われる三人のドワーフが部屋の隅に移動していく。そこには、白い布がかけられた物体が置かれており、彼らはそれを大儀そうに持ち上げて、ゆっくりと俺の許に持ってきた。

「気に入っていただけると、嬉しいのですが……」

そう言ってメイはゆっくりと布を取った。

「こ……これは……」

予想外の物が現れたために俺は絶句してしまう。そこには、銀色に輝く、巨大なヤギのような姿をした置物が置かれていたのだ。ポカンと口を開けて固まる俺を気遣いながらメイはゆっくりと口を開く。

「ご主人様専用の鎧です。持ち運びがしやすいようにこのような形に作っていますが、パーツを分解しますと、プレートアーマーになります。シディーちゃんたちドワーフの方々に作っていただいたのです」

「リノス様」

シディーが一歩前に進み出て、真剣な眼差しで俺を凝視している。俺はシディーに視線を向ける。

「リノス様には結界魔法がありますが、タナ軍はその魔力を無効化する術を持っています。おそらくそれは、プリルの石と魔吸石を組み合わせることで、魔力を無効化し、さらに魔術師のＭＰを奪うというものだと我々は考えています。リノス様の魔力総量は相当なものだと推察しますが、いかにそのリノス様とはいえ、タナ軍に集中的に攻撃を仕掛けられては、魔力が尽きてしまう可能性があります。そこで我々は、リノス様の魔力の回復速度を劇的に上げる効果を付与した鎧を作りました。一見すると重そうに見えますが、ブラックスコーピオンの殻を、その強度が堕ちないギリギリのところまで薄くしていますから、とても軽いものです。総重量は５kg程度ですので、普段と同じように動くことができます。単に魔力の回復力を上げるだけでなく、物質的攻撃の防御力も、オリハルコンの鎧と何ら

遜色はありません。最悪、リノス様の魔力が枯渇しても、弓矢の攻撃は問題なく防ぐことが可能です。……リノス様？　リノス様？　……ちょっと、リノス様？」

「懐かしい！」

思わず俺は声を上げる。その様子にそこにいた全員が目を丸くして驚いている。

「これ、聖闘〇星矢だろ？　うわぁ、懐かしいな～。これってあれだろ？　カプ〇コーンだろ？　なかなかマニアックだな。普通はアク〇リアスとか、ア〇エスとか、バ〇ゴとかが人気があったんだけれどな。いや、これは嫌いじゃない。嫌いじゃないぞ～。なかなかツボを押さえているじゃないか～。俺は好きだぞ？　いや～どこで調べたんだ？　こっちの世界にも同じような話があるのか？　これ、金色だったら、それそのものだぞ？　うわぁ、カッコええ～。あ、ちなみに聞くが、これ、ジジイの方じゃないよな？」

俺の言葉に全員が固まっている。そんな中、メイが申し訳なさそうに、振り絞るようにして声をかけてきた。

「あの……お話が……わかりかねます……せいん……と？　かぷ？　あの……もう一度、お話をいただければありがたいのですが……」

……ゴメン。知らんよね。知っているわけはないよね。うん。知っていたとしても、まさかカプ〇コーンが好きっていう人も少数派だよね。すまん、悪かった。いきなりツボを突かれてしまったので、我を忘れてしまったのだ。俺はオホンと咳払いをして、小さな声で申し訳なさそうに呟く。

「すまん、このところ、ちょっと疲れていてな……」

「そ……そうでしたか……難しいとは思いますが、ゆっくりお風呂に入られて、今日は早くお休みになられては……」

「うん、なるべく善処しようと思う」

ちょっと微妙な空気になってしまったが、シディーの一度着用してみてはという声に、俺は早速鎧の試着にかかった。着てみると全てが俺の体にピッタリで、スムーズに動くことができ、違和感などは微塵もなかった。

「これ、スゲェな。こんなに俺の体に合って、しかも軽い。鎧を付けているとは思えないくらいに動きも普段とそう変わらない。よくこんな見事な鎧を作れたな？」

「そりゃ、リノス様の体はいつも見ていますし、直接触ってもいますから、大体の寸法はわかりますよ。ね、メイちゃん？」

「は……はい……」

シディーの問いかけにメイは顔を真っ赤にしている。やばい、かわいい。

俺は雑念を振り払うようにして、ドワーフたちに視線を向ける。彼らは、じっと俺の動きを観察していて、何か問題がないかをチェックしているようだった。

「いや、素晴らしい鎧だ。感謝する。ところで、この鎧を身に付けていると、どのくらい魔力が回復するんだ？」

俺の問いかけに、ドワーフの一人が一歩前に進み出てきた。

「オージン1に対して3のツワンクルドを混ぜているので、ライアガーの7%ほどです」

「え？」

言っている意味が全く分からん。目を丸くしている俺に、メイはくすくすと笑い、シディーはヤレヤレといった表情を浮かべている。

「ザンジ、あなたの説明ではリノス様は理解できないわ。もっと、子供でも分かるように、かみ砕いて説明しないと……」

シディーの言葉に、ドワーフは面目ないと言わんばかりに頭を下げている。

「では、私からその鎧について詳しく説明させていただきますね」

メイが笑顔で話しかけてきた。俺たちは彼女に視線を向ける。

「先日、オージンさんの凝固した吐瀉物……我々はそれをオージンと呼んでいます。そこに7つの鉱石……ユーヨ、コーヨ、ソージ、サンサク、ミト、並びにビゼ、シブ……を混ぜようとしたのですが、これは合金配合が異なりましたので、ウキを用いました。これだけ属性が異なりますので、念のため、その点をお断りいたします。次にノン、オウバ、ギリノ……これは『降る雨は、天から落ちて地を濡らし、やがては池となりゆく』と言われていますので、それに従いまして、シヒツをかけものにしまして、タク、モウクをイゼしました。それをダン鷲の骨をすりつぶしたものを溶かして混ぜ、それ

らをご主人様の体に合わせてヒーグをして、コノスを丁寧に行いながら、仕上げています。そのため、魔力の回復は通常であれば毎秒１．１２９８７６５％の上昇ですので、魔力量に比例してそれは拡大していきます。ですが、注意点としてハリマゼノンをコビョージンしますとその比率が大きく異なってきますので、ご注意ください。おそらくそうしたことは稀であるとは思いますが、これらも念のためお伝えしておきます。ちなみに、ライツワンダをするときは、それぞれを近づけていただければ、自然とクリッチゲートしますので、特に難しいことはありません」

「あ……ああ……」

「わかりやすい！　さすがメイちゃん！」

固まる俺に、シディーが満面の笑みで声を上げている。彼女は傍に控えているドワーフに体を向ける。

「説明というのは、こうやってするよ！　とても分かりやすかったでしょ？　あなたたちは自分の頭の中にある言葉で話をしているでしょ？　そうではなくて、相手の言葉で話をしてあげないと……。そうでなければ伝わる者も伝わらないわ。ね、リノス様？」

振り返るシディーに俺は苦笑いを浮かべる。そして、メイとシディーの二人を見比べながら、力なく口を開いた。

「まあ、お互い様、というところだな」

第三百三十三話　おめでたい話

メイとシディーは俺の様子を訝りながらも、ドワーフたちに命じて鎧を外に運びださせた。何でも最後の仕上げをするとかで、それは一日あれば十分完了するのだそうだ。だが、あの鎧はカッコイイ。しばらくは俺の枕元に置いて眺めていたい気分だ。

できればあれは箱に入れて、輪っかを引っ張るとそれが開いて鎧が現れて、自動的に俺に装備されるようにして欲しい……。自分で言っていて、そんなことあるわけないやんけ、と思ったりするが、メイやシディーに頼めば、何となくやれそうな気もする。ただ、それをするとなると、おそらく多くのドワーフや技術者が巻き込まれることになりそうだ。彼らのためにも、その案は俺の心の中にしまっておくことにしよう。

そんなことを考えていると、メイとシディーが俺の前に進み出る。二人は顔を見合わせながらゆっくりと頷いた。

「あの……ご主人様、私たちからあと二つの報告と、一つのお願いがあります」

「うん？　お願い？　メイからお願いされるなんて珍しいな？　いいよ」

「では、まず報告から……。一つ目の報告は、ソレイユさんのことです」

「ああ、どうだったんだ？」

実はソレイユはこのところ、体調を崩しているのだ。太ももの付け根辺りに痛みがあり、しばらくは問題なく生活できていたのだが、三日ほど前、それが激痛に代わった。痛み自体はすぐに治まったのだが、重病の可能性もなきにしもあらずということで、メイに診察を頼んでいたのだ。メイはきれいな瞳を真っすぐに俺に向けながら、俺に報告を続ける。

「詳しく調べましたところ、特に病気は見つかりませんでした」

「え？　じゃあ、あの痛みは一体何だったんだ？」

「病気ではありませんが、ソレイユさんはお腹に赤ちゃんがいます」

「え？　それって……もしかして……？」

「はい。妊娠しています。おめでとうございます」

「おおう……」

完全に、あのエロブーストのせいだ。まあ、あれだけハッスルプレイをしたのであれば、子供ができてもおかしくはない。

「次に、二つ目の報告になりますが、この話をソレイユさんにしたところ、子供が生まれるまでの間、サイリュースの里に帰るとのことでした」

「え？　どういうこと？」

「何でも、サイリュースは身籠ると、精霊を呼びだすことができな

くなるそうです。精霊の加護を受けない状態でいると、病気などの抵抗力が極端に落ちてしまうそうなのです。ソレイユさんの場合、神龍様の加護を受けていましたので、今のところは問題なく過ごしていますが、出産までの期間を考えますと、やはり徐々に抵抗力は弱まってくると思われますので……」

「……わかった。俺からも族長様に手紙を出しておこう」

「そして、お願いになるのですが……」

「うん、何だい？」

「マトちゃんも検査をしたいと思っています」

「マトを？　何故だ？」

「妊娠している可能性があります」

「え？」

「これはあくまで、薬師としての私の勘なのですが、マトちゃんも身籠っている可能性があると考えています。マトちゃんの場合、一度流産していますので、二度目が起こる可能性が否定できません。もし、身籠っているのであれば、できるだけ早く安静にした方がよいと思います」

「そうだな。今、マトはアガルタ軍の司令官として八面六臂の活躍だ。もし、身籠っていたら、あんな動き方はとんでもない話になるな。わかった。メイ、マトを診察してやってくれ。シディーも頼むぞ」

「お任せください」

俺は二人にソレイユとマトカルのことをくれぐれも頼むと再度、念押しをして部屋を出た。

執務室に戻りながら俺はふと、足を止める。

「ソレイユが身籠り、マトが身籠った可能性がある……。ソレイユがサイリュースの里に帰り、マトが妊娠したとすると、軍務には就くことができない。ソレイユがいなくなれば、リコの守りが手薄になるし、マトがいなくなれば、アガルタ軍の攻撃の起点を失う……。まさか、ヘイズの野郎はそこまで考えて俺やソレイユたちに呪いをかけていたのか？　だとしたら……恐ろしいキツネ野郎だ」

そこまで考えると、何だか体に身震いがする。何だか、飛車角を取られた、二枚落ちで戦わなければならない……そんな感覚に囚われたのだ。

その後、マトカルはソレイユに伴われて医療研究所に向かい、簡易検査の結果、やはり妊娠していることが分かった。その夜、屋敷に帰った俺は、家族全員を集めて、ソレイユとマトカルが身籠ったことを告げた。

「エリル、アリリア、またお姉ちゃんになるね。まだ弟か妹かはわからないけれど、生まれてきたら遊んであげてね」

「わかりましたわっ！　お姉ちゃんとしていっぱい遊びますわっ！」

「エリルはえらいね～」

「できれば、弟がいいですわ」

「弟か～弟君が生まれてくれるといいなぁ」

そう言って俺は家族全員を見廻す。皆、笑顔だ。ふと見ると、アリリアに何だか元気がない。

「アリリア、どうしたんだ？」

「マミーと一緒にいたい。私もマミーと一緒に行く！　お別れするのは、いやだぁぁぁぁぁ」

そう言って彼女は泣き出してしまった。

「アリリア……」

メイが宥めているが、彼女は泣き止む気配がない。皆戸惑っている中で、ソレイユがゆっくりとアリリアに近づき、彼女を抱っこした。

「森にいる～たくさんのせいれいは～きれいにきれいに光っている～♪」

ソレイユが美しい声で歌うと、アリリアはグズリながらも少しずつ泣き止んでいく。

「マミーが毎日歌っていたおやすみの歌は、アリリアは歌える？」

「うん」

「寂しくて眠れないときは、マミーの歌を歌ってちょうだい。必ず寂しくなくなるからね」

「……」

「マミーがいなくなるわけじゃないのよ？　必ずアリリアの所にも帰ってくるからね。それに……」

彼女はチラリと俺に視線を向け、そして再びアリリアに視線を戻す。

「たまには、サイリュースの里に遊びに来てもいいのよ。アリリアだったら、大歓迎よ」

「うん、行く。絶対に行く」

ソレイユは俺に許しを請うような視線を向けてくる。俺はゆっくりと頷く。

「アリリアもエリルも、月に一度くらいはマミーのいるサイリュースの里に行ってもいいよ」

エリルもアリリアも頷いている。アリリアはソレイユとの別れが本当に辛いのか、彼女にギュッとしがみついている。

「今日は、マミーと一緒に寝る？」

アリリアは無言で頷いた。

食事が終わり、風呂から上がった俺は寝室に向かう。そこにはリコが一人で俺を待っていた。

「あれ？　エリルは？」

「マトカルの所に行きましたわ」

「マトの所へ？」

「ソレイユのように、マトも離れ離れになるかもしれないと思ったようですわ」

「そうか……でも、マトのお腹を蹴っ飛ばさないか、ちょっと心配だな」

「エリルは寝相のとてもいい子ですわ。間違ってもそんなことはしませんわ」

「そうか……本当に、リコとそっくりだな」

「そうでしょうか？」

「寝相といい……話し方といい、エリルは本当にリコに似てきたな」

「そう？　私はリノスに似ていると思っていますわよ？」

「そうか？」

そんなことを言いながら俺たちはベッドに入る。

「リコ……」

「……」

「ソレイユがいなくなると、リコの……」

「大丈夫ですわ」

「リコ……」

「ソレイユがいなくとも、ここにはメイもいますし、シディーもいますわ。たとえヘイズが襲ってきたとしても、そう簡単には思い通りにはさせませんわ。それに、私も、自分の身は自分で守りたいと思います」

「リコ、絶対に、絶対に無理だけはしないでくれ。必ず俺が守るからね」

リコはゆっくりと首をふる。

「リノス、あなたはタナ王国との戦いに集中してくださいませ。私のことは、心配しなくて、いいのですわ」

俺はリコを抱きしめる。彼女は小さな声で俺の名前を囁いた。俺はリコを抱きしめながら、この美しい肌を絶対にヘイズには渡すまいと固く心に誓うのだった。

第三百三十四話　作戦四様

「……今日で……五日目になりますが、いかがいたしましょうか？」

「あと二日待て」

「ハッ」

ニヤリとした笑みを湛えながら口を開いているのは、タナ王国国王のヴィルだった。出陣して早くもひと月が経とうとしているが、彼に疲れは微塵も感じさせない。むしろ、機嫌がよいのか、出陣して以降はその顔から微笑みが絶えることがない。

「さて……敵はどのように思っているかな？」

「おそらく、和戦両様の構えを取っているものと思われます」

「フフフ、ホンシュもそう思うか？　……敵に迷いが出れば、間違いなく我らの勝ちじゃ」

「ハハッ」

ホンシュをはじめとした、そこに居並んだ家来全員が恭しく頭を下げた。

実際、サンダンジ側はタナ王国側の動きが全く読めず、そのために、内部は二つに割れようとしていた。あくまでタナ側が侵攻してくる

と信じて疑わない国王ニケと、タナ側が和議を求めていると信じる息子のシンとの間で、意見が真っ二つに割れようとしていたのだ。

タナ側が侵攻を始めた当初は、シンの意見は一笑に付されていたのだが、ここ数日の間に彼の意見を支持する者が急増していた。それは希望的観測もある一方で、サンダンジ側の兵士たちの疲労がピークに達しており、そのために、早くこの戦いが一旦でも終わりを迎えることを望む者が激増していたのだ。

タナ軍の機動力は、この世界では知らぬものはない程に有名であったし、その上、軍勢丸ごとを転移させる術も持っている。タナ軍は遅速行軍を続けながらも、部隊の一部が国境であるカコナ川まで進軍してきては、そのまま取って返すということを繰り返していた。ニケは、タナ軍は、転移術を扱うのはオクタと呼ばれる王の側近であり、彼が行ったことのない場所には転移できないという情報を事前にリノスから得ていた。そうしたことから、彼にはタナ側の動きは、自分たちサンダンジ側の目の前に軍を転移させるための準備としか映らなかった。そのため、国境を守る守備兵たちはもちろん、国中に展開している部隊に対して、常に臨戦体制を取るように命じていたのだ。

だが、それが一ヶ月に及ぶとなると、将兵たちの士気は下がる一方だった。いつ襲ってくるかもしれないタナ軍。兵士たちはそれに内心怯えている。その状態が長く続いているために、怯えは明確な恐怖となって表れていた。そこにきての、息子シンから繰り返される和議の提案……このまま時を過ごせば、サンダンジ側は二つに割れることは明らかであり、そこをタナ軍に突かれると、サンダンジ側は簡単に崩壊してしまうのは火を見るよりも明らかだった。

ニケは今、眉間に深いシワを刻みながら、目を閉じてじっと何かを

考えている。

「恐れながら申し上げます」

「何だ？」

ニケの前に片膝をついて控えているのは、斥候部隊を任せている部隊長だ。

「タナ側に動きはありません。もう既に五日間も動く様子が見えません」

「……そうか」

「あの……恐れながら……」

「何だ？」

「一度、タナ側に和平の使者を送ってみてはいかがでしょうか？」

「……」

「このままでは、敵の出方がわからぬままでございます。使者を送り、相手の様子を見れば、我らと戦う気があるのかないのか……その点だけでも分かるかと存じますが……」

「オーディティー」

「ハッ」

「それは……お前の考えか？　それともシンの考えか？」

「私の一存でございます」

「……の、割には、シンと言っていることが同じだな」

「……恐れながら、シン様の申されることにも、一理あるかと思います」

その言葉を聞いてニケはゆっくりと目を開ける。

「オーディティー。お前はいくつになった？」

「今年で、４６歳になります」

「呆けるのは、まだ早いな」

「……恐れ入りますが、国王様の仰る意味がわかりかねます」

「わからんのか」

「はっ」

「オーディティー。お前がタナ軍の中に放った間者は何人になる？　そして、何人が戻ってきた？」

「……」

「答えよ」

「１０人の間者をタナ側に送り、帰還はゼロでございます」

その言葉を聞いてニケはゆっくりと息を吐く。

「我らの放った間者、しかもオーディティーが手塩にかけて育てた者たちが全員未帰還なのだ。と、すれば、敵は常に厳戒態勢でこの戦に臨んでいることになる。そんな敵が、我らと和平を求めると思うか？　明らかにこれは精神戦を仕掛けておるのだ。我らが和平の使者を送るということは、その段階で我らはタナ側に負けたということになる。それがわからぬオーディティーではあるまい？」

その言葉を聞いて、男は無言で深々と頭を下げた。

「よい、オーディティー。人は弱きもの。困難な状況が続けば、何らかの救いを求めたいと思うものじゃ。だが、敵の策に気が付かず、己の策を吹聴するシンを……このまま捨て置けば、間違いなく我らは滅ぶ」

「国王様……」

「シンを斬れば兵たちも覚悟を決めよう。が、我にはどうしてもできぬ。我が子を手にかけることは、できぬ……」

「国王様、何が憎くて子を斬る親が、どこにおりましょうか」

オーディティーの言葉に、ニケはゆっくりと頷く。そして、彼を下がらせた後、誰も居なくなった本陣で、ニケは大きなため息をついた。

「もはや、我ら一人の力ではタナ軍には対処できまい……。無念で

はあるが……」

そう言って彼は懐から紙を取り出し、そこに手紙を認め始めた。

「……ご苦労だった」

俺はそう言って、手紙を持ってきたフェアリードラゴンに、肉を与えて帰らせた。そして窓を閉め、椅子に座って目を閉じる。

ニケの手紙には、アガルタ軍の援軍を求める内容が記載されていた。そして、力を合わせてタナ軍を撃退して欲しいと書かれてあったのだ。

正直、ここまで膠着状態になるとは俺も予想はしていなかった。少なくとも、タナ側はサンダンジ国との国境を侵してくるだろうと考えていたのだ。その場合、ニケたちが易々と破れる可能性は低いと見積もっていた。彼らはあらゆるところに砦を築いていたし、これは極秘情報ではあるが、各所に地雷のようなものを設置していたのだ。これはドワーフが開発したもので、その威力はなかなかのものだ。そうしてタナ軍がサンダンジ国の奥深くまで入り込み、浮足立ったところを見計らって、俺たちアガルタの軍勢が背後を突くという形に持ち込もうと考えていたのだが、これまでの流れを見ると、どうやら俺たちの作戦は最初の段階で頓挫してしまっていた。

「う～ん。さて、どうするかな……」

俺は頭をフル回転させて次の作戦を考える。そのとき、執務室のドアがノックされて扉が開いた。そこから現れたのは、意外な人物だった。

「お邪魔するよ」

「メインティア王!?　一体、どうしたのですか？」

「いや～くたびれちゃってね」

彼は空いている椅子にゆっくりと腰を下ろし、足を組んでため息をついた。

「ずいぶんとお疲れのようですが……」

「そりゃ疲れるさ、毎日手紙を書いているからね」

「手紙？」

「クリミアーナにさ」

「どういうこと？」

聞けば、クリミアーナ教国からは、メインティア王に対してアフロディーテまで釈明に来いと矢のような催促が来ているのだという。その点に関してはリボーン大上王が釈明に行くと主張したが、教国はそれを認めず、あくまでメインティア王の召喚を命じているのだという。

「そして、二言目には、主神様の教えに背くのかとくるんだ。よく言うよね、我が国に旨味がないと知った途端、引き上げていった連中が、今になって主神様がどうだのと言ってくるんだ。笑ってしまうよ」

彼は肩を震わせながら、クックックと笑っている。

「とはいえ、このままにしておくわけにはいかないでしょう？　放っておけばフラディメはクリミアーナの討伐対象になりますよ？」

「ああ、それはない」

「何で？」

「ヤツらは私を女狂いのバカ国王だと思っているからさ」

「それは俺も同感ですが、それが討伐対象にならないという理由にはならないでしょう」

「クックック。アガルタ王は手厳しいね？　でも、考えてもみ給え。そんなバカ王が治めている国だ。放っておいても自落すると考えるのが普通の考え方じゃないかな？　そんな国にわざわざ軍を派遣して蹂躙するなどというのはバカげているよ。賢いクリミアーナは、そんな回りくどいことをせずに、私をアフロディーテに呼びだして詰問し、私のバカさ加減を白日の下に晒した挙句に、王としての資格なしと烙印を押して、また新たな国王を立てようとするつもりなのだよ」

「え？　そんなことが？」

「幸か不幸か、私の娘であるユリアがフェルド国に留学していてね。あの国はクリミアーナ教を国教としている国だ。娘はまだ１０歳だから、あの子を女王に立てて、そこに教国の者たちを送り込んで国を支配するつもりなのだろう。そして、ゆくゆくはどこかの国の王

族で、クリミアーナ教の敬虔な信者を婿に送り込んで、盤石の支配体制を作る……そんなところじゃないかな？」

「なんとまあ。で、あなたはどうするつもりなのですか？」

俺の言葉を聞いたメインティア王はニッコリと笑いながら、言葉を返した。

「そんなことをされるのは、私もゴメンだ。だから私は……これから死ぬことにしたのだよ」

……は？　お前、今、何て言った？

第三百三十五話　これも作戦

「死ぬ……って言いました？」

「ああ、そうさ」

メインティア王はニコニコと機嫌のよさそうな表情を浮かべている。俺は「何言うとるんじゃ！」と頭を叩きたい衝動に駆られるが、それを必死の思いで抑え込み、努めて冷静を装いながら彼に話しかける。

「スーサイドってことですか？」

「すーさいど？　どういう意味だい？」

「その……自ら命を……」

「絶つわけはないだろう！？　何を言っているんだ、君は？　私には愛する女たちがいて、子供たちもいる。まだまだ絵も描き足りていないし、美味な食材ももっともっと探求していきたいのだ。だが、今のこの王という身分は堅苦しすぎる。それをどうにかしたいと考えていたのだけれど、ようやくその打開策を見つけることができたんだ」

「それが……死ぬってこと？」

「そうだ。重ねて言うが、本当に死ぬわけじゃない。死んだように見せるということだ」

「ええと……もう少し、わかるように説明していただけますか？」

彼はクックックと楽しそうに笑いながら、キラキラと目を輝かせながら俺に口を開いた。俺は思わず顔をしかめる。この人が目を輝かせているときは、ロクな話をしないのだ。

「私は死んだとクリミアーナに報告をするのだ。クリミアーナには私は病に侵されていると言っている。彼らが医師団を派遣してくると、仮病であることがバレてしまうからね」

「あの……何でそんなややこしいことを……」

「彼らは私をバカだと思っているだろう。だから、本当にバカであると信じさせたかったのだ。そうすれば、彼らの矛先は外れてくれる……そう考えたのだ」

「……大丈夫か？」

「それに、これはオンサールのためでもあるし、君のためでもある」

「オンサールと俺のため？」

「そうだ。私亡きあとのフラディメ国の国王は、オンサールとするのだ」

「はあ！？　アンタ一体何をやっているんだ？　オンサールって二歳……だよね？」

「そうだ」

「フラディメ国は……？」

「父の大上王が後見に立つ。それに宰相のアウッサイはまだまだ健在だし、その彼の許にはパターソンを付けることにした。今の宰相が倒れても問題ない体制は整えるよ」

「はぁぁぁ……」

「既に父の許可は取っていてね。父自身も、私という王がいながら政務を執っていることに違和感があったようでね。とはいえ、私は政治のことなどに興味はないから、仕方なく今の体制になっていたんだ。ここで私の存在が消え、オンサールに王位が渡れば、父は幼い孫の後見ということで遠慮なく政治ができる。しかも、自分の持てるもの全てを息子に伝えるだろう。それが、父にとっても、私にとっても、そして、息子にとっても、最終的にはフラディメの民衆にとってもよいのだよ」

「でも、他のお子さんたちは……」

「全く問題はない。父が生きている今、王位を継ぐなどとんでもない話だと子供たち……よりもむしろ、その母親たちが反対するだろう。しかも今はクリミアーナに睨まれているややこしい時期だ。そんな時期に王位を継ごうなんて誰も思わないよ」

「そんなものですか！？　まあ、フラディメ国のことなので俺はあまり口出しはしませんが……。それに、俺のためと言っていましたが、それは一体……？」

そこまで言うと、メインティア王はその顔から笑みを消し、真面目

な顔つきになった。

「オンサールが王位に即位すれば、ピアトリス殿との婚儀も、しやすくなるだろう？」

その言葉を聞いて俺は、目を閉じたまま天井を仰いだ……。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

クリミアーナ教国の首都、アフロディーテ。その中心に建てられた教皇神殿の一室で、一人の少年が机に噛り付くようにして座っている。よく見れば彼には左腕がなく、残った右手で器用に手紙を読んでいた。これは言うまでもなく、カッセルだ。彼は手紙を読み終わると、深くため息をつきながら、吐き捨てるようにして呟く。

「一体、何なんだ、この王は？　狂っているな……」

カッセルが呆れ返るのも無理はない。この手紙の差出人は、フラディメ国のメインティア王だ。彼は二日ないし三日ごとに、教皇宛に手紙を送ってきていた。当初はアフロディーテへの訪問を延期させて欲しいという要請の手紙と思っていたカッセルだが、その内容を読んで彼は言葉を失った。そこには、こんな内容が書かれていたのだ。

「このところ病状が進行し、側室たちとの閨ができなくなっております。既に、空閨が二十日になっており、我慢ができなくなっております。そのため、早く薬をいただきたくお願いいたします。私としましては、これまで以上に側室たちを愛したいと思っております。それに、先日、我がアリスン城に新しい侍女が数名参っており、その中の三人と閨を共にしたいと思っております。この三人には特に

目をかけたく思っており、多種多様な経験を積ませるつもりです。そのためには、閨の回数をこれまで以上に増やさねばなりません。何卒、この心苦しさをご理解いただきまして、ご配慮のほどをお願い申します」

恥も外聞もなく、開けっぴろげにこのようなことを書いて寄こしてくるとは、さすがのカッセルも予想していなかった。彼は、これまで届けられたメインティア王の書簡を机の上に並べ、それらを一つ一つ、到着順に目を通していった――。

「背中に腫れ物ができてしまい、色々と薬を試しましたが、全く効き目がありません。是非、教国がお持ちの薬を送っていただけないでしょうか。ちなみに、背中の腫れ物は、肩甲骨の右下にこぶし大程の大きさで、少々熱を持っています。どうしてよいのかがわかりませんので、ご指導のほど、お願いいたします」

まず、メインティア王から初めて届いた書状が、こんな内容だった。確か、このときは仮病であると考えて、一笑に付したのだ。

そして、その三日後に届いた書状には、こんなことが書かれてあったのだ。

「背中の腫れは一向に引く気配を見せません。食事が悪かったのでしょうか？　もし、治癒するために食した方がよいものがあれば、教えていただきたくお願いいたします。指示通りのものを食べることに致します」

この段階でも彼は、メインティア王の仮病を疑わなかった。だが一方で、この王を少しからかってみたくなった。そこでカッセルは適当な雑草の名前を数種類と、珍味とされる食材数種類をリストアッ

プして返信したのだった。もちろんそこには、アフロディーテへの出頭日を定めることも忘れなかった。

だがその手紙を送ってからしばらくして、毎日のようにフラディメ国から手紙が届くようになった。その内容は、カッセルが指定した食材を食べたという報告であり、この日は炒めて食べただの、煮て食べただのと、実にどうでもいい内容が真面目に書かれて送られてくるのだった。

カッセルは予想外の展開に驚き、そしてあきれ果てていた。大抵の国王は、クリミアーナ教国からの出頭命令が下ると、平身低頭し、多くの貢物をもって我先にアフロディーテへやってくるものなのだ。クリミアーナ教国から討伐対象と認識されると、ほぼ確実にその国は滅ぼされてきた。そのため、教国の恐ろしさは全世界の国に浸透しているものと思っていた。

例外的にアガルタだけは、教国の指示は完全に無視されてきたし、今ではこの国を服従させるのは、軍事的に侵攻して徹底的に壊滅させる以外ないと考えている。だがそれは新興国で、しかも、王自身が奴隷という身分であり、要は「知らない」ために教国を無視できているのであって、元々、敬虔さの程度のこそあれ、長年にわたりクリミアーナ教を信仰してきたフラディメ国が、教国の恐ろしさを知らぬはずはなかった。にもかかわらず、別段教国に対して詫びを言うこともなく、ノホホンとこうした手紙を送りつけてきて、挙句の果てに、このような破廉恥極まりない手紙を送りつけてくるメインティアという王を、カッセルは正直、その人間性を測りかねていた。

「スークレイの書にある以上の、本物のバカなのかもしれないな」

だが、フラディメ国にはリボーン大上王という傑物がいる。大上王は息子の振る舞いを知らないのだろうか。そんなことは考えられない。これまで政務を見てきたのは大上王であり、その彼がこんな破廉恥な手紙を教国に送りつけるのを見過ごすとは思えなかった。

「一旦、フラディメ国に医師団を送ってみるか……？」

彼は天を仰ぎながら、誰に言うともなく呟いた。

第三百三十六話　それぞれの役割

結局、メインティア王の提案は保留とすることにした。やはり俺はピアトリスには、自分で生涯の伴侶を見つけて欲しいと思う気持ちが強いのだ。

今のところ娘の中で婚約しているのは、長女のエリルだけだ。陛下に言われてその申し出を受けてしまったが、それがエリルを苦しめているのではないかと思う気がないこともないからだ。

彼女は長女ということもあり、しかもヒーデータ帝国の皇太子殿下と婚約していることもあって、リコからは厳しく教育されている。今のところ特に反抗するわけでもなく、リコの言うことをよく聞いて、とてもしっかりしたお姉ちゃんに育ってくれているし、行儀作法も実に見事だ。どこに出しても恥ずかしくない娘だと胸を張って言える。

だが一方で、同じ年に生まれたアリリアを見れば、彼女は実に天真爛漫な女の子に育っている。彼女は彼女でとても記憶力のいい、ある意味で先天的な頭の良さを持った子供だと思うのだが、何より、とても素直に喜怒哀楽を表現するのだ。親としてどちらがどうというわけではないが、俺はあまり子供を型にはめて育てるのには賛成しない。やはり子供は天真爛漫であっていいと思うのだ。もし、エリルが皇太子殿下をどうしても気に入らず、俺もコイツはダメだと思うような男であったならば、婚約を破棄してもいいと思っている。こんなことをリコが聞いたら、一晩中どころかエンドレスの話し合いになってしまうので、これはナイショにしていて欲しい。

メインティア王との話し合いを終えた俺は、執務室に向かう。部屋に入ると、窓の外にサダキチをはじめとした数羽のフェアリードラゴンが控えていた。俺はすぐに窓を開けて彼らを中に入れ、そして報告を聞く。

「……各地で教国に従う国々が兵を動かし始めたか。向かう先は……アフロディーテか」

俺は目を閉じて腕を組んだまま誰に言うともなく呟く。そして、サダキチ達にねぎらいの言葉をかけて窓を開け、彼らを下がらせると、目を閉じて念話を飛ばそうと意識を集中させた。

『チワン、すまないが、執務室まで来てくれ』

彼はすぐに転移してきた。彼は俺から指示を受けると、承知しましたと言ってすぐにその姿を消した。

「一刻の猶予もないな……」

俺は執務室の窓に視線を向ける。そこから見える景色は、皮肉なほどに美しいものだった。

「突然お呼びだてして、本当に申し訳ありません」

それから数時間後、既に日は暮れ、深夜になろうとしていた時間帯に、俺は集まった人々に向かって頭を下げていた。

迎賓館の会議室。そこには、通常ではありえない顔ぶれがそろって

いた。まず、俺の上手の席にはヒーデータ帝国の皇帝陛下、その隣にはグレモント宰相、さらにその隣には、ヴァイラス公爵の姿もあった。下手に目を移すと、そこにはラマロン皇国のカリエス将軍とマドリン宰相の姿があり、さらにその隣には、ニザ公国のユーリー宰相の姿があった。そして、俺の正面の席には、ミーダイ国の帝様とフラディメ国のメインティア王、さらにその隣には……ヴィエイユの姿があった。

俺はこの錚々たる顔ぶれを見廻しながら、よくもこれだけのメンツが集まったものだと我ながら感心していた。そのとき、ヴィエイユと目が合った。彼女は相変わらず薄い微笑みを浮かべている。その表情からは怜悧さが読み取れ、俺は思わず我に返る。

「さて、本日急にお集まりいただいたのには訳があります。タナ王国の件です」

俺の言葉に全員が頷く。もう既に、あの国が何をしようとしているのか、ひいてはその後ろにいるクリミアーナが何をしようとしているのかを知っているのだ。

「既にタナ軍はニケ王のいるサンダンジ国の国境付近まで進出しています。その行軍速度は遅く、既に都を出てひと月になりますが、未だサンダンジに侵攻する動きは見られません」

「迷いが出た方が、負けるな」

誰に言うともなくカリエス将軍が呟く。その言葉に俺はゆっくりと頷く。

「既にサンダンジ側では迷いが出ています。確実に侵攻してくると

考える者と、和平を模索しているのではと考える者との二派に分かれているようです」

「……まさに、敵の注文通りの展開になっているな」

発言しているのはグレモント宰相だ。その言葉に全員が頷く。

「そこで、サンダンジのニケ王から俺のところに援軍要請が来ました。つまり、現在の布陣を解き、国境を突破してタナ軍に襲いかかりそれを打ち破りたいとのことです。そのために、アガルタに協力して欲しいとのことでした。本日お集まりいただいたのは、サンダンジへの援軍を要請したいと考えたからです。いや、別に兵を出すことだけではありません。ニザ公国には武器や防具の支援をいただきたいと思っています。それぞれが協力できることがあれば、是非お願いしたいのです。もちろんアガルタも兵を出します。ただ、ウチは少数精鋭主義ですので、１万の兵が限界ですが……。」

「我がラマロン皇国は、兵をお貸ししましょう。我が宗主国であるアガルタが兵を出すのです。当然のことです。兵力で言えば2万を派遣しましょう」

「少なくないかな？　貴国の全兵力は１５万ではなかったかな？」

口を挟んでいるのはヒーデータのグレモント宰相だ。その言葉に、マドリンが巨体をゆすりながら反論する。

「カリエス将軍が申しておるのは、我が国の精鋭部隊を出すということです。いたずらに多くの兵を連れても経費がかかるだけです。そのための精鋭部隊の派遣ということです。決してヒーデータ帝国を牽制しているわけではありませんので、その点はご安心ください」

何やら二人の間で火花が散っている。隣の陛下は涼しい顔をして我関せずの様子だ。そんな中、ニザのユーリー宰相が口を開く。

「我がニザ公国は武器と防具を提供しましょう。以前より開発しておりました新型武器の小型化には既に成功しております。すでに生産も始まっておりますが、それにつきましては３０００人程度の数が限界です」

「ユーリー宰相、十分です。では、引き取りにはポーセハイを向かわせます」

「わかりました。あと、公国にある武器や防具は好きなだけ持って行ってもらって構わないと我が王も言っておいでです」

「そうだな……。アガルタには新型の武器と防具があるし、ラマロンには……あの魔法をレジストする自慢の鎧がありますよね？　武器については……既に新しいものを開発しているのですか？　なるほど、特に支援は必要ないと……」

「マロのミーダイ国は、残念ながら力添えをすることは叶わぬが……。マロの警護に当たっておるオワラ衆という隠密がおる。頭領のイッカク以下数名を連れて行ってもらえぬか。役には立つはずじゃ」

帝様が驚く提案をしてくる。確かにイッカクたちが来てくれるのは心強い。ある意味、ヘタな軍勢が来るより価値がある。

「ですが帝様、あなたの警護が……」

「問題ない。キュアライトらを残すによって、マロたちはそれで十

分じゃ。要は、貴殿が戻られるまで、マロがオクと子供の側におればそれでよいのじゃ」

その言葉に俺は思わず笑顔になる。だがすぐに真面目な表情に戻し、メインティア王に視線を向ける。彼は目を細めて笑顔を作っているが、どことなくこの会議には興味がないという雰囲気を醸し出している。

「私も協力できることはないが……。何しろ私はこれから死ぬ予定だからね。……冗談だ。そうだな、私はポセイドン兄の連絡役を担うとしよう。君のことだ。ポセイドン兄にも協力をお願いするのだろう？　で、あれば、私が行った方が話はうまくまとまる。そちらの方は任せてくれ」

……割と空気読めますやん。そんなことを思いながら俺はゆっくりと息を吐く。すると突然、俺を呼ぶ声が聞こえた。

「義弟殿」

声のする方を向くと、ヒーデータ帝国の陛下が俺に視線を向けていた。いつもと変わらない表情だが、彼の口から放たれた言葉に、俺はしばらく固まるほかなかった。

何と、ヒーデータ帝国は、この戦には参加しないと言い出したのだ……。

第三百三十七話　時は来れり

会議室の空気が張りつめている。まさか、ヒーデータ帝国が静観を決め込むなど、考えもしなかったからだ。俺は目を見開いたまま陛下に視線を向ける。

「悪く思わんでくれ、義弟殿。これには理由があるのだ」

「理由……と仰いますと？」

「うむ。我がヒーデータ帝国は国教をクリミアーナ教としておる。従って帝都をはじめ国内では多くの教会が建ち、教国の司祭たちが住んでおる」

「まさか、教国に味方する……そう言われるので？」

メインティア王が低い声で話しかけてくる。その様子に陛下はニコリと笑みを漏らす。

「我が国が教国に味方したとしても、どの国にも益は何一つとしてない」

「つまりは、だ」

グレモント宰相が身を乗り出すようにして、そこにいる全員に視線を向ける。

「我が帝国が動けば、自ずとクリミアーナに動きがバレる。いや、

まあ聞きなされ。儂は常に最悪の状況を考えてコトを構えることにしている。アガルタとラマロンの精鋭部隊が留守にしている間、クリミアーナがどのような策を弄してくるのかわからん。従って我らは、アガルタとラマロンに事が起こったときに速やかに動ける体制を取ることにする。言わば、後詰の役割を担うのだ」

宰相閣下がそこまでいうと、何故か陛下がフフフと笑っている。

「宰相、苦しい言い訳だの？　もはや隠し立てをせず、正直に言ってしまってはどうじゃ？」

「しかし陛下……」

「宰相殿が言えないのであれば、私が言いましょう」

そう言っているのはヴァイラス公爵だ。彼はスッと一礼をすると、さも残念そうな表情を浮かべる。

「実を言うと、我が今のヒーデータ軍は、軍として機能しておらず、とても実戦に投入できる状態ではないのです」

「どういうことだ？」

驚いた声を出しているのは、カリエス将軍だ。彼はヴァイラス公爵の言葉が信じられないといった表情を浮かべている。

「軍が軍として機能しないとは……こう言っては何だが、貴公らは何をされていたのだ？　怠慢ではないのか？」

「カリエス将軍の言われることはもっともです」

「これは私の責任なのだ」

ヴァイラス公爵を庇うように陛下が俺たちを見廻す。

「私とて兵は出したい。だが、軍の将軍たちが承知をせぬのだ。皇帝の権限で命令を出すことはできるが、それをすると必ずや軍の中には叛く者が出る。ヒーデータ帝国はそうした悪しき歴史を持っておるのじゃ」

「それを利用して、膿を出し切るおつもりなのですね？」

ヴィエイユが突然陛下の話に割って入る。皆、思わず彼女に視線を向ける。

「ヒーデータ帝国はアガルタ軍に合流すると勅命を出す。すると必ずや反乱を起こす者たちが現れる……。すでに背く者が誰であるのかはわかっている……。おそらくそれは、クリミアーナ教を盲目的に信仰する方々ですね？　軍は一旦、帝都を出て出陣する。そして、帝都では反乱が起こる。それを見越して出陣した部隊を帝都に戻して反乱軍を鎮圧する……そんなところでしょうか？」

「ど……どうしてそれを……」

「陛下、そしてヴァイラス様……」

驚くヴァイラス公爵に、ヴィエイユは数秒間視線を離さず、部屋の中には静寂が訪れていた。そして彼女はチラリと俺に視線を向け、さらに言葉を続ける。

「お二人とも、上手に嘘をお付きになりますね？　おそらくこれは、陛下と宰相様が計画されたのでしょう。お二人から苦しまれた雰囲気が伝わって参ります。それにヴァイラス様も、何とかしてこのお二方を助けたいという思いが伝わりますわ。私、そうしたお方は嫌いではありません」

「そうか、それはよかった」

ヴィエイユの言葉に陛下が鷹揚に応えている。

「ヴィエイユ殿、見事な推察だが、私にはもう一つの計画があるが、それはお分かりかな？」

「もう一つの計画……でしょうか」

「うむ。私はその謀反を利用して、軍の反乱分子を排除する。そして、それに合わせて……クリミアーナの司祭とそれに類する者どもも排除しようと思っておるのじゃ」

「陛下……それは……」

「義弟……いや、リノス殿。我が帝国はクリミアーナ教とはこれを機会に縁を切る。すまぬが、そういうわけじゃ。許してくれい」

「よくわかりましたわ」

ヴィエイユの顔がパッと明るくなる。彼女は全員に視線を向けながら、よく通るきれいな声で滔々と語り始めた。

「軍勢につきましては、私が率います軍がそのまま皆様にお味方い

たします。総勢は４万です。それにラマロン軍２万、アガルタ軍１万、そしてサンダンジの３万を合わせますと数の上ではタナ軍とは互角になります。あとは戦略をどう立てるのかが肝要かと思われます」

彼女の話に皆が頷いている。ヴィエイユはそれを見て、再び俺に視線を向けてきた。これは同意を求めているようだ。

「時は来た、というわけのようだな。そうだな……作戦としては……」

俺の言葉に、全員が固唾を呑んで耳を傾けた。

ちょうど同じころ、タナ王国側でも同じような会議が開かれていた。国境近くの街、その領主の広い館の中の一室で、こちらは緊迫した雰囲気はなく、作戦の段取りを淡々と確認するだけにとどまっていた。相変わらず国王のヴィルは機嫌のよさそうな笑みを浮かべている。そのとき、兵士の一人が一礼をして入室してきた。そして、小走りにヴィルの側に近づき、彼に耳打ちをした。

「そうか。大儀であった。下がって休め」

兵士にねぎらいの言葉をかけて下がらせた後、すぐに立ち上がって、目の前の幕僚たちに、まるで宣言をするかのように口を開いた。

「余の命が出たらすぐに動けるよう、準備を怠るな」

その言葉に全員が恭しく頭を下げた。

部屋を出たヴィルは、自身の居室には向かわず、屋敷の外に出た。
そこには月明かりの中、一人の男が控えていた。その姿を見つけると、ヴィルは意地悪そうな笑みを浮かべた。

「もう、よいのか？」

「ハッ。もう、すっかり」

「よくぞ戻ってきた。……オクタ。そなたを待っていたぞ！」

その言葉を受けて、控えていた男が顔を上げる。そこには以前のままのオクタの姿があった。

「回復するのにかなりの時間を要してしまいました。お許しください。しかし、ここまでの陛下の指揮は見事でございました。このオクタ、感服いたしました」

「フフン、言いおるわ。で、そなたの準備とやらは終わったのか？」

「ハッ、既にアガルタに向けて人を放ち、入り込むことに成功しております。私の方の準備も、整いましてございます」

「オクタ……見よ！　美しい月ではないか」

ヴィルに促される形で、オクタは視線を空に向ける。そこには煌々と輝く満月があった。

「この月の如く、我らの準備も欠けている部分がなくなったというわけじゃな」

「誠に。仰る通りだと思います」

オクタのその言葉に、ヴィルはこらえ切れなかったように、大声で笑う。

「もはや、サンダンジの命運は風前の灯火……。あとはアガルタ王をどのように料理するかだが……ヤツの命も既にわが手に握られておる。どのような末路を辿るのか……楽しみじゃな。この世界は我が掌中にあるも同然。この満月の如く、全てが満ち満ちておる。……誰ぞある！」

彼の一言に素早く兵士の一人が駆けつけて、片膝をついて平伏する。

「将兵たちに伝えよ。出陣は明日とする。各々、準備を抜かるなと申せ」

「ハハッ！」

自分の許を後にする兵士の後姿を眺めながら、ヴィルは満足そうに頷いている。

「これからは我が悲願の総仕上げ……オクタ、頼むぞ！」

「ハッ、お任せください」

恭しく頭を下げるオクタにヴィルは満面の笑みを浮かべるのだった……。

第三百三十八話　やられた！

「ご注進！　ご注進！　国王様！　一大事です！」

ニケの許に一人の兵士が血相を変えて飛び込んできた。だが、ニケの側に居た幕僚の一人がスッと右手を挙げて彼を制す。

「落ち着け。国王様はすでにご存じだ。今、下知の最中だ。静かにせよ」

兵士は目を見開いたまま固まる。そんな彼を誰も気に留める者はなく、そこに居る者全員がニケの声に耳を傾けていた。

「……各将の陣立ては以上だ。今一度繰り返す。敵がどのような策を弄し、どのように挑発しようとも、我が命令が下るまで動くことは許さん。我らが攻撃に出るときは、アガルタ軍が敵の背後に回り、袋のネズミとしたときだ。それまでは降りかかる火の粉を払うつもりで、いかなる挑発に乗ってはならぬ。我の命令なくして動くことはならぬと兵に厳命せよ」

その言葉に、全員が緊張の面持ちで頭を下げた。

◆◆◆◆◆◆◆

サダキチから報告を受けた俺は、すぐにニケに連絡を取った。何せ今回は１０万を超える軍勢が国境に向かって動いていたのだ。俺は一瞬、今回も陽動作戦ではないかと考えたが、それにしては規模が大きすぎるし、クリミアーナ本隊は未だアフロディーテに集結して

いる最中だ。おそらくこれは明確な攻撃意思を持っていると判断した俺は、すぐさまサダキチに書簡を持たせてニケの許に走らせたのだった。

次から次にフェアリードラゴンたちから報告が入ってくる。そして、タナ軍は一気に国境まで押し出していった。俺はその動向を、執務室の中で見守っていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆

タナ王国との国境であるカコナ川の砦の兵士たちは、タナ軍が現れるのを今か今かと待ちわびていた。ここに籠る兵士たちはわずか２千という規模だが、サンダンジ国の中でも最精鋭の兵士たちが配属されていた。

彼らの任務は、タナ軍と戦うことではない。むしろ、タナ軍を引き付けるだけ引き付け、ある程度の損害を与えつつ退却することだった。彼らに課されたのは、いかに全員の命を守りながら退却し、タナ軍をサンダンジ国内におびき寄せるかという任務を担っていたのだ。

「間もなくタナ軍が現れるだろう。全員、命を惜しめ！　但し、今回だけだぞ！」

砦の司令官を務めるオメゾの言葉に、兵士たちから笑いが起こる。ニケのいる本陣と違って、この砦の兵士たちの士気は高く、百戦錬磨の彼らは、自身の腕に絶対の自信を持っていた。

実際、１０万もの敵をわずか2千の兵士で迎撃するのだ。通常であれば、衆寡敵せず。一瞬にして踏みつぶされる戦力差だ。だが、彼

らは目の前のカコナ川を堀に見立て、夜な夜な川の底を掘削し、その深さを増していた。タナ軍がじっと動かなかった１ヶ月以上もの間、彼らはコツコツとその工事を継続し続けた。その結果、「雨だれ石を穿つ」という言葉どおり、一見浅い川に見え、すぐに渡河ができるように見えているこのカコナ川は、敵の侵攻を遅らせるのに十分な機能を備えた堀に変貌していたのだった。

サンダンジ国が誇る最精鋭の兵たちが固唾を呑んで見守る中、地鳴りのような音と共に、タナ軍１０万が現れた。砦の兵士たちに緊張が走る。

「ああっ！　あれを見ろ！」

「タナ軍が西に向かっている！」

「どういうことだ！？」

てっきり砦を攻撃してくると思いきや、タナ軍は砦の目の前を通り過ぎて、西に向かって進んでいく。その様子を見ていた司令官のオメゾは、カッと目を見開いて立ち上がった。

「し、しまった！」

「司令官殿、どうされました？」

「まさか、奴ら、スワンプに向かっているのではあるまいな？　……すぐに我が王に伝令を送れ！」

オメゾは砦の中から、西に向かってまるで大蛇が進むかのごときタナ王国の大軍を、憎しみを込めた目で睨みつけるしか術がなかった。

「迂闊であった……。一生の不覚だ……」

俺の目の前には、ガックリと項垂れるニケの姿があった。彼の許に派遣していたフェアリードラゴンが書簡を持って帰って来たのだが、そこには一刻も早く俺に会いたいと殴り書きされた一文が書かれていたのだ。その様子はかなり慌てていたと報告されていたために、急を要すると判断した俺は、フェアリードラゴンに転移効果を付与した結界石を持たせて、ニケの許に向かわせた。彼はすぐに執務室に転移してきた。そして、俺の顔を見ると、申し訳ないという表情を浮かべたかと思うと、俺の机に手をついて、ガックリと項垂れたのだ。

「ニケさん、そのスワンプという場所ですが、どういう場所ですか？　砦ですか？」

彼はゆっくりと顔を上げ、俺の目をじっと見据える。

「……オアシスだ」

「オアシス？」

「我がサンダンジ国の最大のオアシスにして、水がめとなっている場所だ」

「え？　それじゃ……」

「我らは命の水を取られたも同然なのだ」

「……」

俺は心の中で唸っていた。ようやく敵の狙いが読めたからだ。最初から敵はサンダンジのオアシス、水の手を断つことが狙いだったのだ。迂闊に攻め入れば、ハリネズミのような防御体制と共に、慣れない砂漠での戦いも相まって苦戦は必至と考えたのだろう。できるだけ損害を減らすためには、サンダンジを弱体化させねばならない。最も効果的なのは、水の手を断つことだ。砂漠の国にとって水は貴重品だ。それを断てば、肉体的にも精神的にも大きなダメージを与えることができるのだ。

おそらく敵は、サンダンジの兵が国境のカコナ川を夜な夜な浚渫しているのを知っていたのだろう。それが完成するのを待って侵攻を開始したのだ。迂闊に川を渡れば、今度はサンダンジの兵士が川底に足を取られて身動きができなくなる。ニケ側は自分で自分の首を絞めた格好となっていた。

しかも、サンダンジはこれから乾季に入る。雨はほとんど期待できない。敵はそこまでも見通して侵攻してきているのは確実なのだ。

「……敵ながら、天晴ですね」

「……ああ」

「水ならば、ある程度であれば支援することは可能です。幸いアガルタは湧水が豊富です。都の北には広大な森が広がっていて、そこからの湧水が都に流れ込んでいます。それに、この建物の前には大きな湖がありますが、そこでも水が湧き出ていますから、大量の水を送ることはできます。それに、魔法で雲を発生させて雨を降らせることは可能ですが……」

俺の言葉に、ニケはゆっくりと首を振る。

「……ですよね。ニケさんが求めているのはそれではありませんよね。実は俺も同感です。この際、タナ軍を徹底的に潰さねばなりません。そうですよね？」

「その通りだ」

「ニケさん、すみませんが、そのスワンプというオアシスのある場所について教えてもらえますか？　できれば地図を書いていただけると助かりますが……」

「お安い御用だ」

彼は俺が差し出す紙に、さらさらと地図を書き始めた。実に見やすい地図だ。この人は絵を描かせても上手いに違いない。

「……なるほど、サンダンジ国の奥深くに入り込んだのですね」

「ああ。ここなら水があり、雨露をしのぐ木々もある。大軍を休ませるのには、持って来いの場所だ」

「う～ん、逆に包囲して兵糧攻めをするのは、難しいですね。それに……力攻めも難しいですね」

「……」

ニケは唇を噛んでいる。彼も同じことを考えていたようだ。このオアシスは台地の上にあり、言ってみれば、その台地が石垣の役目を

果たしているのだ。台地の上にある軍勢……言ってみれば籠城している軍勢を攻めるとなれば、敵の3倍の兵力が必要になる。今の状況は、圧倒的にタナ側に有利なのだ。そんなことを考えながら俺は、じっと地図を眺め続ける。

「ここってどうなっていますか？」

「……ただの河原だが、何か？」

俺の指さす地図の部分を見て、ニケが不思議そうな顔をしている。

「ここなら、敵をおびき寄せられるかも……」

ニケの目が、ギョッと見開かれ、せっかくの男前が台無しになっていた。

第三百三十九話　涙の別れ

ニケとの会談の三日後の深夜、俺は帝都の屋敷でメイたちが作ってくれた鎧を身に付けていた。俺はこの日、サンダンジに向けて出陣することにしたのだ。すでにアガルタ軍の出陣準備も整っていて、さらには、ラマロン皇国でも準備は万全に整っている。あとは俺の命令を待つばかりになっていた。また、ヴィエイユも既に事前に示し合わせた場所に軍を待機させていて、いつでも出撃可能な状態となっていた。

これに遡ること一日前、俺は密かにサンダンジに向かい、タナ軍が占領しているスワンプの近くまで足を延ばし、そこに転移結界を張っておいた。まさに川を隔ててタナ軍が見えるすぐそこまで行き、結界を張ってきたのだ。合わせて、ラマロンとヴィエイユのところにもスワンプへの転移結界を張っておいた。作戦では、アガルタ、ラマロン、ヴィエイユの三軍が同時にこの場所に転移することになっていて、それに呼応する形でサンダンジ軍も合流する手はずとなっていた。当然、転移結界は秘匿しているために、ラマロンとヴィエイユのところには、数名のポーセハイが詰めていたのだった。

幸いなことに、このスワンプという場所はこの時期、明け方になると霧が立ち込める。それに紛れて大軍を集結させ、一気にタナ軍を襲うという作戦だ。そのため、出陣は夜が明ける前の、深夜にすることになっていた。

深夜にもかかわらず、メイとシディーは俺にテキパキと鎧を着せてくれている。別に俺の執務室で身に付けてもよかったのだが、この鎧は俺の体に合わせて作られていると同時に、身に付ける順番があ

るらしく、それらがかなり複雑らしいのだ。一見すると単純な作りに見える鎧だが、実は何枚もの薄いプレートが組み合わさってできている。そのためその作りは精巧を極めていて、ちょっとでもおかしな部分があると全体的におかしくなる。そのため、何か問題が発生したときは素早く対応できるように、帝都の屋敷でこの鎧を着ることになったのだ。相変わらず、メイとシディーは休むことなく丁寧に鎧を着せていく。俺はその様子に感心しながら、俎板の鯉の如く、二人にその身を委ねていた。

「……出来上がりました」

メイの声で我へ帰る。本当に鎧を着ているとは思えない程に軽い。手足を動かしてみるが、違和感が全くない。

「すごいなこの鎧……。身に付けているとは思えないくらいだ」

俺の声に、メイとシディーは顔を見合わせながら頷いている。

「ご主人様、剣を……」

そういえば剣を差していなかった。鏡に映る自分の姿が、どうも何だかしっくりこないと思っていたが、剣がなかった。俺は思わず苦笑いを浮かべる。

無限収納には、「鬼切」、「ホーリーソード」、「黒刀」が入っている。他にもドワーフ公王からシディーを妻に迎えたときに贈られた剣があるが、それはアガルタの迎賓館で保管してある。あまりにも豪華であるために、パーティーなどで着飾る必要があるときに身に付けているので、どちらかと言えば実戦向きではないのだ。

俺はそれぞれの剣を頭に思い浮かべる。そして、すぐにそれは決まった。

「ホーリーソードだ」

俺は無限収納からそれを取り出してメイに渡す。彼女はそれを受け取り、小さな声で失礼しますと呟き、恭しくそれを掲げると、ゆっくり剣を鞘から引き抜いた。

メイはじっと刀身に目を凝らす。柄から切っ先まで何度も丁寧に剣を眺めていく。

「きれい……」

ドアの向こうで声が聞こえた。シディーが扉を開けると、そこにはエリルとアリリアの姿があった。

「こらっ、二人とも覗いちゃダメでしょ。早く寝なさい」

「う……ごめんなさい……」

二人は揃ってペコリと頭を下げる。その姿が可愛らしい。

「エリル、アリリア、入っておいで」

二人は互いに顔を見合わせていたが、やがてパタパタと小走りで俺の側に近づいてきた。俺はメイから剣を受け取り、片膝をついて娘たちの頭をナデナデしてやる。

「エリル。アリリア。とうたんはしばらく帰ってこられないかもし

れない。とうたんが留守の間、弟たちの面倒を頼むぞ」

「いつ帰ってくるの？」

アリリアが心配そうな表情で尋ねてくる。俺はニッコリ笑いながら彼女に語りかける。

「すぐだよ。すぐに終わらせて帰ってくるからね」

「早く帰って来てね」

「ああ、わかった」

ふと目をやると、エリルが俺の左手に握られているホーリーソードをじっと見つめている。

「エリル、どうした？」

彼女は俺の言葉にビクッと体を震わせたが、やがてとても言いにくそうな表情を浮かべながら、ゆっくりと口を開いた。

「その剣……もう一回……見たい」

「エリルちゃん……」

メイが諭すような表情のまま、首を振っている。俺はメイを右手で制して、再びエリルに向き直る。

「そうか、この剣が見たいか。よし」

俺は立ち上がって柄に手をかけ、ゆっくりと刀身を引き抜く。そして再び片膝をつき、彼女に剣を見せた。

「きれい……」

目を丸くして驚くエリル。俺はその様子を眺めながら、ゆっくりと口を開く。

「これはね、お母さんととうたんが一緒に作った剣なんだよ」

エリルが驚いた表情のまま俺に視線を向けた。え？　アンタ剣を作れるの？　といった表情だ。まあ厳密に言えば、この剣を作ったのはメイで、俺は単にコイツに魔力を流し込んだだけなのだが。

「それで、合っているよね？」

メイは俺の言葉に優しい笑みを浮かべながら頷く。その様子を見ながら俺は剣を鞘にしまう。

「エリル、頼んだよ」

彼女は口を真一文字に結びながら、力強く頷いた。

部屋を出ると、マトカルがパジャマ姿のままで廊下に立っていた。エリルとアリリアを連れてきたのは、どうやらマトカルだったようだ。

「マト、寝ていてくれ」

「そうもいかない。本来ならば私が……」

申し訳なさそうな表情でマトカルは俺から視線を逸らせた。彼女は妊娠が分かってからすぐに流産の兆候が見られるなどしたために、最近では安静にしていることが多くなっていたのだ。実際、彼女が考えた戦略は多く、兵士たちも彼女によって精鋭に鍛えられていた。俺としてはマトを攻撃部隊の指揮官と考えていただけに、その計算は完全にくるってしまっていた。

「いや、マトが鍛えた兵士たちは将軍が見てくれる。それに、クノゲンも連れて行くから、何とかなるよ」

「頼む……。あと、ルファナ王女も……」

「ああ、クノゲンの側に付けて、無茶なことはしないように見張らせるよ」

俺は苦笑いを浮かべながら答える。彼女はサルファーテ国民の敵を討ちたいと従軍を強く希望していたのだ。その思いに俺は根負けする形で従軍を許したのだが、彼女の戦力はマトやクノゲンに比べるとかなり低いと言わざるを得ず、まずは、クノゲンの側に付けて様子を見ることにしたのだった。

「マトちゃん、体が冷えますから……」

メイが心配そうに話しかける。マトカルは申し訳ないという表情のままコクリと頷いた。

「子供たちのことは任せてくれ。エリル、アリリア、部屋に戻ろう」

「頼んだぞ、マト。メイもシディーも、ご苦労だった。部屋に帰っ

て休んでくれ」

「でも……」

「メイちゃん、リノス様は大丈夫よ。私が言うんだから間違いないわ」

「シディーにそう言ってもらえると心強いな。いや、気持ちはうれしいんだ。でも、見送られると、何か縁起が悪い心持がするんだ。だから……」

「わかりました。では……行ってらっしゃいませ」

「行ってらっしゃいませ」

メイとシディーが恭しく頭を下げた。マトカルはエリルとアリリアの手を握りながら、俺に小さく頷き、俺も彼女に向けて大きく頷いた。

「では、行ってくる」

俺は踵を返して、階段を下りていった。

離れを出て、転移結界のある場所に向かおうとすると、ふと母屋の建物が目に入った。もしかすると、負けるかもしれない。負けたらここには二度と戻っては来られないだろう……。そんな思いが胸に突きあげてくる。俺は頭を振ってそんな縁起でもない考えを打ち消そうとする。そのとき、母屋の勝手口が音もなく開いた。

「リコ……」

そこには、リコが立っていた。彼女はニコリと笑いながら俺に近づいて来る。

「ついに、行かれるのですね」

「ああ、行ってくる。必ず帰ってくる」

そのとき、リコが俺に抱きついてきた。俺は彼女の背中をやさしく抱きしめる。

「許してくださいませ」

「どうした？」

「行ってらっしゃいませと見送らねばならないのです。妻として、夫の出陣を毅然と見送らねばならないのです。でも……でも……行かせたくない……できることなら……このまま……」

「リコ……」

リコの体がゆっくりと俺から離れた。彼女は手で涙を拭きながら、精一杯の笑顔を作りながら、口を開く。

「行って……らっしゃいませ。ご武運を……」

俺は無言でリコを抱きしめた。そして、必ず彼女の許に帰ってこようと強く心に誓ったのだった。

第三百三十九話　涙の別れ（後書き）

長くなりますので、一旦「軍神編」を終了します。次章は７／２０（金）から再開です。もしかしたら、７／１８か７／１９に間話を挟むかもしれません。書く内容としては、あまり本筋には関係のない話になろうかと思いますので、気に入らなければ読み飛ばしてください・・・。

第三百四十話　師匠

「いらっしゃいませ」

「これと……これと……これをくれ」

「はい、まいどあり」

一見、どこでも交わされていそうな会話だが、なぜか望みの商品を手に入れたにもかかわらず、その人の表情は沈んでいた。

「私とて、普通に喋れるのだ……」

そんなことを呟きながらアガルタの都を歩いているのは、ミーダイ国から避難してきているゼザだった。彼女は現在、主君であるオージンの側に四六時中仕えており、持てる時間のすべてをオージンに注いでいると言って過言ではなかった。通常であれば、彼女の振る舞いはまさに、家来の鑑として賞賛に値するものだったのだが、実際のところ、アガルタの人々からの評価は芳しいものではなかった。

彼女には、一つの悪癖があった。焦ったり興奮したりすると、言葉が全て擬音語になるのだ。それがために、オージンの命が危機にさらされたことも、一度や二度ではないのだ。

彼女は彼女なりに、一生懸命に伝えようと努力をしているのだが、伝えようとすればするほど、相手には伝わらない。ただ気持ちを落ち着けてさえいれば、今日のように問題なく話をすることはできるのだ。そう、落ち着けば……。

彼女は考える。いかに泰然自若として、全ての事柄に冷静に対応できるか……ということを。だが、考えれば考える程、その答えは出ない。ゼザは思い余ってこのことを、アガルタ王・リノスの妻であるメイリアスに相談してみたのだった。

「……要は、常に心が落ち着く薬を作って欲しい。そういうことでしょうか？」

メイの言葉にゼザはコクコクと頷く。メイはゆっくりと息を吐き出しながら、隣に控えている、リノスのもう一人の妻であるコンシディーの顔を見た。彼女も呆れたような表情を浮かべている。

「とりあえず、落ち着きましょうか」

白衣を着たメイが、ハーブティーを入れ、目の前に差し出してくれる。ゼザはそれをゆっくりと手に取って、自分の口に運ぶ。

「私は、喋りたいのだ。もっと、多くの人と話がしたいのだ」

相変わらず、このお茶を飲むと心が落ち着いて、言葉が出てくるようになる。アガルタの都では安価で手に入るお茶だが、自分や同僚のハーギやシロンが入れると、ここまでの落ち着きは得られない。おそらくこれは、メイリアスが持つ、何とも優しくて人懐っこいその雰囲気が自分を落ち着かせているのだとゼザは感じていた。

このメイリアスという人はモテるだろうな……。ゼザは何度かメイと応対する中で、そんなことを感じていた。凛とした知性を感じさせる一方で、笑うととても愛嬌がある。その上、とても気づかいのできる女性なのだ。そのために、この医療研究所のスタッフはもち

ろん、患者からもとても慕われている。アガルタ王・リノスが惚れ込むのも、もっともだと思う。

正直に言えば、メイリアス王妃とコンシディー王妃には常に自分の側にいて欲しいと思う。コンシディー王妃は、自分の擬音だらけの言葉をある程度解釈してくれる。この人のお蔭で、ひーさまの命が救われたことも一度や二度ではない。この優れた通訳と、落ち着きを与えてくれる人が側に居れば、盤石なのだが……。だが、そんなことは所詮無理な話であり、それを十分にわかっているゼザは、ため息をつくほかなかった。

そんな中、メイリアスはゼザの会話力が改善するように考えてみると言ってくれた。彼女はその言葉に感謝しつつ、再びオージンの許に帰るのだった。

その日は、久しぶりの休暇だった。

ここ最近はオージンの体調も良く、ハーギとシロンもようやく彼女の意思を読み取れるようになってきた。そのため、二人からはひーさまのお世話は任せて欲しいと言われ、ゼザは休暇を与えられた形になった。

二人の心遣いに心から感謝しつつゼザは街に出た。色々な店を物色してみるが、どうしても、これはひーさまが喜びそうだ、ひーさまは気に入らないだろうと考えてしまう。そんな自分に苦笑しつつ彼女は、さらに足を延ばして、西地区の端まで出かけてみることにしたのだった。

ふと、彼女の目に留まるものがあった。それは、美しい女性が両手を広げて何かを歌っているポスターで、ふと視線を上げるとそこは、

アガルタの国立劇場だった。

アガルタ国皇后・リコレットの発案で作られたこの劇場は、一見すると円形の石垣に見える。だが、その内部は劇場になっており、その設計から建設まで、ドワーフの技術の粋が結集されている劇場で、その評価は高い。音響は抜群で、しかも、どの席に座っていても舞台が見やすい構造になっているのだ。アガルタではこの最高の設備を備えた劇場で、毎月のように何かの催しが行われ、しかもそれを安価で見ることができる。ゼザは劇場のことは知っていたが、実際そこに入ったことはなかった。彼女は建物への興味もさることながら、そのポスターに興味を持った。何故か、自分を招き入れているように感じたのだ。

彼女は吸い込まれるようにして劇場に入る。するとそこでは、いわゆるミュージカルのような芝居が行われていた。白い衣装を着た初老の女優が一人、舞台の上に立っていて、彼女は、まるですすり泣くような声で歌いだした。

「私はぁ～♪　生きて見せるぅ～たとえ全てを失うことになろうともぉ～♪」

話の筋は、愛する恋人が不治の病にかかり、それをヒロインが治療しようとする、というものだった。ヒロインは艱難辛苦の末、ある魔女の許にたどり着き、恋人の病気を治すことのできる薬を手に入れる。だが、それと引き換えに彼女は、吃音というハンデを付けられてしまう。

「おっおっおっおっおっ、おとうとうとうとうとうとうさまっまっまっ……わっわっわっわっわっわたくしっしっしっわわわわ」

「お前は私をバカにしているのか！」

「いっいっいっいっいいえ！　そっそっそっそっそんなななななな」

「もうよい、出て行け！」

話したくても話せない、喋りたくても喋れない。そんな彼女と自分を重ねたゼザは、いつしかその芝居の中に引き込まれていった。愛する恋人ともなかなか話ができない。そして、その恋人の両親が二人の結婚を認めないと宣言して、絶望に堕とされる場面などは、彼女は声を殺しながら号泣した。

今まさに命を断とうとしたそのとき、ヒロインはあることで自分の思いを伝えられることを発見する。それが「歌」だった。

「私は～私は～今の私は～♪　あなたを愛すことが～♪　生きること～輝くこと～♪　永遠に～あなたを～愛し続ける♪」

ようやく彼女は自分の思いを恋人に伝えられた。しかも、彼女の歌声は多くの人々の心を癒していく……。それを知った恋人の両親も二人の結婚を認め、物語は大団円を迎える……。

幕が閉まってからも、ゼザは感動のあまり、自分の席から動くことができなかった。そして、誰も居なくなった客席を見つめながら、彼女は小さな声で呟く。

「……これだ」

居ても立ってもいられなかった。これだ。これなのだ。これならば、自分の気持ちを、伝えたいことを相手に伝えることができる。彼女

は客席を飛び出すと、出演者の控室へと走り出した。

当然、関係者ではないゼザは、控室に通ることは許されず、扉の前でスタッフに制止された。だが、あきらめきれない彼女は、扉の向こうにいるであろう、主役を務めていた女優に向かって大声で叫んだ。

「歌！　歌！　私も歌で、このグッとしてダッとしたやつをドン！　ボワッ！　バアアアアっとダン！　としたいのだ！　だから、ジャッと、ジャッと……弟子にィ！」

必死だった。こんなに必死になったのは、ひーさまが食事をのどに詰まらせて死にかけたとき以来だ。確かあれは三ヶ月ほど前だった……。

そんなことを考えていると、扉が開き、若い女性がでてきた。彼女はゼザを制止するスタッフを宥め、そして、主演を勤めている女優、ミ・ターキーが呼んでいると、彼女を楽屋まで案内してくれたのだった。

部屋に入ると、美しい銀髪をきれいにまとめ、端正な佇まいで座る老婆がゼザに視線を向けていた。彼女は部屋に入るなり、片膝ついて、必死に自分の思いを伝えた。

「私は……自分の思いを……ブワッ！　ザン！　ザザン！　どうぁ～ワシャッ、るわーんでしたいのです！」

ミ・ターキーはゼザの言葉を一切表情を変えずに耳を傾けていたが、やがて大きく頷き、フッと優しい笑顔を見せた。

「では、明日からここで、ザッとしてすわっとしてルラララ～でタン、としましょう」

「しっ、師匠ぉぉぉ～！！」

ゼザは号泣しながら、その場に崩れ落ちた。次の日からゼザは、空いた時間のすべてをミ・ターキーとの特訓に費やすことになった。それは後に意外な形で役に立つときが来るのだが……。

それはまた、別のお話。

第三百四十一話　いざ、戦場へ！

漆黒の闇の中、アガルタ国の都にある練兵場には、篝火が煌々と焚かれている。そこには、アガルタが誇る精兵１万人が整然と整列し、命令が下るのを待っている。その最前列には、白髪をきれいにまとめた老人と、髭面の小男が控えていた。それは、言うまでもなく、アガルタ軍最高司令官であるラファイエンスと、その副官であるクノゲンだった。二人は居並ぶ兵士たちを前に、小声で言葉を交わす。

「……何を言われます！？」

クノゲンの目が大きく見開かれている。その様子をラファイエンスは意地悪そうな笑みを浮かべながら眺めている。

「私も、年だ。もう昔のようにはいかんだろう」

クノゲンはラファイエンスの言葉の意味を理解しかねていた。まさか出陣する直前の今になって、この戦いを最後に、司令官を辞するなどと言うとは、長年仕えてきたクノゲンをしても、予想もしないことだった。本来ならば皆を鼓舞し、死への恐怖を取り払うべきときなのだ。そんなときに、このような後ろ向きな発言をする将軍の意図を、彼は図りかねていた。その様子を察してか、ラファイエンスは真面目な表情を浮かべながら、クノゲンに対して口を開く。

「この戦いはおそらく、私の軍歴の中で最も激しい戦いになるだろう。私とて、生きて帰れるかどうかはわからん。今までは、このような危険な戦いに赴くときは、心が躍ったものだが、今回ばかりはどうもそうではないらしい。いや、戦いは楽しみなのだが……。ど

うしても、もう一度ここに帰って来たいという思いの方が強くてな。……司令官たる者、後ろ髪を引かれる思いで出陣するなど、あってはならぬことだ。もし、この戦いで生きて帰ってこられたのならば、私は司令官を引退するつもりだ。クノゲン、後のことはお前に頼みたい」

「……閣下」

「いや、老いぼれが恋々と司令官の座にいることはよくない。早く若い者にその座を譲らねばならないのだ。今がその、丁度いい時期なのだ」

「……遅くなりました」

二人の会話に割って入ってきたのは、ルファナ王女だ。彼女は重々しい鎧を身に付け、いかにも武張った印象を与えるような格好で現れた。急所となる部分は全て分厚い鎧で覆われており、その様子からは、一目見て彼女が女性であると見分ける者は少ないと思われた。彼女は緊張した面持ちを浮かべていたが、やがて二人の姿を見ると、その表情が驚きのそれに変わった。

「そ……装備は、それだけなのでしょうか？」

彼女が驚くのは無理もない。ラファイエンスの身に付けているのはプレートアーマーではなく、ごく軽装な出で立ちだった。さすがに兜をかぶり、鎧を身に付けてはいるように見せているが、それは体の上半身や急所のみを守るためだけのものであり、腕や足の部分は全く守られていないように見える。クノゲンに至っては、鎧はおろか兜すら身に付けておらず、いつもの平装の状態であるように見えた。その上、後ろに控えている兵士たちも、その装備は非常に軽い

ものに見えた。

「ああ、もしかして、アガルタ王様の結界が……だが……」

そこまで言って彼女は言葉を飲み込む。一瞬、この軽装備はリノスの結界を考慮に入れているのだと解釈し、それではタナ軍には意味をなさないと言いかけたのだが、さすがにそれを知らないわけはないのだ。だが、彼女には、これから戦地に赴くとは思えない、むしろ訓練をするような装備で控えている彼らの様子が、どうしても理解できなかった。

「ご心配なく、今に、わかります」

クノゲンが目を細めながら話しかけてくる。目の前の二人の男が醸し出す絶対の自信にあふれた雰囲気に、ルファナはゆっくりと息を吐き出した。

「……ハッ、申し上げます。リノス様が到着されました」

兵士の一人が片膝をついて報告する。三人はゆっくりと後ろを振り返る。するとそこには、見事な鎧を装備し、美しい白馬に跨りながらこちらに向かって来るリノスの姿があった。その後ろには、チワンをはじめとしたポーセハイたち数人が控えている。時折聞こえる、リノスの鎧が触れ合う音だろうか、キィン、キィンという甲高い音が耳に心地いい。リノスのその、美しい佇まいに、ラファイエンス以下、そこに居並ぶ全員が息を呑んでいた。

「全員、揃ったか？」

リノスの一言で、皆が我に返る。

「ええ、いつでも出撃できます」

クノゲンが笑みを湛えながら言葉を返す。リノスは頷きながら、彼らの後ろに控えている兵士たちを見廻す。

「過酷な……戦いになるかもしれないな」

「ええ。おそらく全員がここに戻ってくることはないでしょうな」

クノゲンの言葉に、皆が頷く。

「ここに居並ぶ者は、全員が戦いを生業とする者たちばかりだ。死ぬことは覚悟の上。それに、戦場での死を望む者たちばかりだ。無論、私もその一人だが」

そう言ってラファイエンスはニヤリと笑う。その様子にリノスは、苦笑いを浮かべる。

「……申し上げます。出発の刻限です。間もなく夜が明けると思われます」

「わかった」

そう言ってリノスは、イリモを促して兵士たちの前に進み出る。

「これより出陣する！　皆、俺に続いてくれ！」

リノスの声に続いて、一万人の兵士たちの、一糸乱れぬ返事が返ってきた。その様子に満足そうな表情を浮かべた彼は、ゆっくりと馬

首をめぐらせた。そしてその後ろを兵士たちが隊列を組みながら後に続いた。

「……リノス様」

転移結界を張っている場所に向かっているさ中に、チワンが声をかけてきた。彼の右手には、小さな袋が握られている。

「どうした、チワン？」

「こちらの袋ですが……メイ様からリノス様にお渡しするようにと……」

俺は無言で彼から小袋を受け取る。中には、ほのかに桃色の光を湛えた小さな石が入っていた。

「これ……は？」

「私もよくはわかりませんが、メイ様がお渡しして欲しいと……」

「お守り袋か……」

「え？」

「俺は、愛されているな」

そう言ってリノスはニコリとした笑みを浮かべた。その様子に、チワンも笑みを浮かべる。何も根拠はないが、チワンは直感的に、この戦いはリノスが勝つだろうと感じていた。彼はこれまで医者として、多くの人の死を見届けてきた。その経験から彼は、死にゆく人

間が浮かべる表情をある程度は知っていた。リノスが浮かべた笑みは、死の運命にある者が浮かべる表情ではなかった。この王はこれから先、まだまだ生きる運命にある……。彼はそう確信しながら、リノスに断りを入れながら、転移結界のある場所に走り出すのだった。

一方、スワンプの街では、タナ王国国王であるヴィルが眠りについていた。彼はベッドに横になりながら、ただ静かに寝息を立てていた。一見すると熟睡しているように見えるが、実はそうではない。彼は、体はリラックスしている状態だが、頭の中は起きている状態だった。

間もなく、史上類を見ない戦いが始まる。十万にも及ぶ軍勢を、自分の号令一下、自在に操ることができる。敵はどのような手を打ってくるだろうか？　それは考えればすぐ答えが出るものだ。優秀な指揮官であればあるほど、間違いなくここスワンプに陣取ったタナ軍を討とうと動き出すはずだ。問題はその時期であり、援軍として現れるであろうアガルタ軍の到着を彼は今か今かと待っていたのだった。

この戦いにおける彼の立てた作戦には、絶対の自信を持っていた。彼の戦いぶりはその極端なまでの自信の強さが特徴であり、一切の迷いのない指揮がこのタナ軍を強国たらしめている要因の一つであった。

彼の耳に、小さな足音が聞こえた。それは徐々に大きくなっていき、部屋の前でピタリと止まった。

「……申し上げます」

「何じゃ」

「サンダンジ軍が砦を出たようでございます。全軍、カコナ川に向かっているようです」

「来たか！」

そう叫ぶと彼はガバッと体を起こした。その目には、爛爛とした光が宿っていた……。

第三百四十二話　開戦

幕僚たちが居並ぶ中、銀の鎧に身を包んだヴィルが姿を現す。彼は一段高いところに置かれた椅子にどっかりと座り、周囲を見廻した。

「首尾はどうじゃ」

幕僚の一人が、スッと頭を下げ、早口で報告をする。

「ハッ、サンダンジの国中に展開しておりました砦から、続々と兵士たちがカコナ川に向かって出撃しております」

「それはいつのことだ？」

「ハッ、一時間ほど前になります」

報告を聞いてヴィルは目を閉じて腕を組み、じっと何かを考えている。そして、ニヤリと笑みを漏らすと、小さな声で呟く。

「勝った……な」

彼は目を開けて、スッと立ち上がると、大声で家来を呼んだ。

「外の様子はどうじゃ！」

「ハッ、霧に包まれております」

「霧が晴れるのはいつ頃じゃ！」

「もう間もなくのことと思われます」

「我らは勝ったぞ！　サンダンジの兵たちは間に合わぬ。奴らが我らに勝つのは夜襲しかない。だが、もう間もなく夜が明ける。明るくなってしまっては、奴らは我らには勝てぬ」

「ですが陛下、アガルタの援軍が……」

「ジェラニウス、それは愚問じゃ」

「ハハッ」

「全軍、戦闘準備に入れ！」

ヴィルの言葉に、幕僚たち全員が頭を下げた。

◆◆◆◆◆

「……何も見えんな」

転移したところは、真っ白の世界だった。イリモから降りて目を凝らしてみるが、やはり何も見えない。素早く気配探知を発動させてみると、俺たちのすぐ西側に数万単位の人が集まっているのが分かった。おそらくこれはヴィエイユたちだろう。俺は傍に居るチワンに、彼女の許にいるポーセハイと連絡を取り、俺たちが到着したことを伝えるように指示を出す。そしてすぐさまこの周囲一帯に結界を張る。まずは、俺たちの気配を消す効果を付与した結界を張るこ

とにした。

その直後、今度は東側に気配探知が反応する。この数の様子では、おそらくラマロン軍だろう。俺はもう一人のポーセハイに命じて、ラマロン側にも連絡を取る。そして、その周辺にも結界が張られているかを確認して、俺は再び霧を睨む。

「しかし深い霧だな……。こりゃ晴れるまで時間がかかりそうだな」

そんなことを呟きながら、俺は再び気配探知を発動させる。すると、北西の方向に、夥しい人間の気配を感じた。この方角にはスワンプがあり、ここにいるのは間違いなくタナ軍だ。今のところ動きはない。この霧を風魔法で晴らすこともできるのだが、まだ準備が整っていない。まずは全軍に配置に着くように指示を出そうとしたそのとき、ヴィエイユがポーセハイを伴って転移してきた。そしてすぐに、ラマロン側からカリエス将軍もポーセハイと共に転移してきた。

「まずは着陣されて祝着です」

カリエス将軍がニコリと笑顔を見せる。その様子に俺も愛想笑いを浮かべる。

「さて……この霧が晴れたら、我々はすぐに川を越えてスワンプを攻めます」

ヴィエイユがよく通る声で話しかけてくる。俺は彼女に攻めるにあたっての細かい指示を与える。そのとき、俺たちの周りの霧が少しずつ晴れていくことに気が付いた。その瞬間、対岸に夥しい人間の気配を感じる。目を凝らして見てみると、対岸に大軍勢が集結しているのが見えた。そのとき、対岸から何か黒い塊が空に向けて放た

れた。

「くっ！」

俺は反射的に張っている結界を強化する。いつしか、霧が完全に晴れ渡り、美しい朝の景色が現れていた。

「なっ！？」

「あれは……」

カリエスとヴィエイユが目を見開いて驚いている。空に放たれた黒い物体は、ゆっくりと放物線を描き、まるで雨のように俺たちの頭上に落ちて来た。

「離れて……あれ？」

俺の背後で大声が上がる。よく見るとそれはルファナ王女だった。黒い物体は、俺たちから十数メートル上空で止まっている。よく見るとそれは、ものすごい数の矢だった。

「アガルタ王様、離れてください！　この矢はＭＰを吸い取ります。魔法使いの方々は、速やかに後方に避難してください！」

ルファナ王女が周囲の者たちに後方に下がるよう、大声で指示を出している。

「第一隊、後方へ下がり後詰せよ！　その他は戦闘用意！」

王女の声よりもさらに大きな声が響き渡る。その声の主はラファイ

エンスだった。彼は俺に目で後方に下がるよう促す。俺はそれに従う形で、再びイリモに跨る。それと時を同じくして、すぐさま俺たちの前に兵士が配置につき、厚い壁を作っていく。ラファイエンスは、彼は周囲の兵士たちに指示を出しながら前進していく。

「剣や槍での肉弾戦は我らに任せてもらおう。さあ、戦闘だ！　腕が鳴るなぁ」

満面の笑みを浮かべながら老将軍は馬を走らせる。その後ろをクノゲンが苦笑いしながら付いて行った。さらにその後ろを、ルファナ王女が兵士たちと共に緊張した面持ちで追いかけていった。俺はゆっくりと後方に下がりながら、ヴィエイユとカリエスに指示を与える。

「敵はおそらく、俺たちアガルタの軍勢に殺到するだろう。カリエス将軍。あなたのラマロン軍は、俺の指示があるまで動かないでください。ヴィエイユ、お前は……」

「アガルタ王様のお側にいますわ」

「何？」

「殺到するタナ軍を見たいのです。どうせ、私たちも、ラマロンの皆様と同じでございましょう？　待機ならば、私がいなくても問題ございませんわ」

「勝手にしろ」

俺はそう言い捨ててイリモをさらに走らせる。カリエス将軍は苦笑いをしながら、ポーセハイと共に自陣に転移していった。

アガルタ軍は見る間に布陣を完了していった。その様子を、対岸の丘の上から睨みつけている男がいた。タナ王国国王のヴィルだ。

「敵ながら見事なものよ」

「よく訓練されている兵士たちですね。なかなかああはいきませんよ」

ヴィルの隣で口を開いているのは、オクタこと、妖狐・ヘイズだった。彼は余裕たっぷりの笑顔を浮かべながら、さらに言葉を続ける。

「やはり予想通り、アガルタ軍……いや、あちらにいる軍勢のすべてに強力な結界が張られていますね。我々の魔吸石の粉をかけた矢が貫通せずに、上空でとどまっています。あの結界の強度をどこまで減らせるか……少しの間、様子を見ましょう」

「さもありなん。やはり、噂以上の結界じゃな」

その言葉を受けてヴィルが満足そうな表情で頷く。彼は立ち上がると、目の前に展開する敵陣の様子に目を凝らす。

「……正面にアガルタ軍、左翼にラマロン。右翼が主神様を裏切った賊軍か。我らの前面にいる軍は、誰だ？」

「アガルタ軍最高司令官のラファイエンスであろうかと思われます」

ヴィルの側に控えていた幕僚の一人が声を上げる。それを聞いて、ヴィルの目が見開かれる。

「名将・ラファイエンスか！　それに……大魔王殺しの英雄・カリエス！　そしてアガルタ王・リノス！　相手にとって不足なし。今宵は、この三人の首を並べて、祝杯をあげようぞ！」

その言葉に、周囲の幕僚たちから歓声が上がる。

「誠に恐れながら申し上げます！」

「何だ、ジーギス！」

「陛下におかせられては、主神様を裏切りし賊軍の将、ヴィエイユ殿をどのようになさるおつもりでしょうか？」

「これ、ジーギス！　今は戦闘中だ。そんなさ中に女の話とは！」

「よい、よい、ジェラニウス。ヴィエイユ殿については、なるべく生け捕りにして、アフロディーテに護送せよと教皇聖下の命令じゃ。おそらく、アフロディーテにおいて公開処刑としたいのだろうな」

その言葉を聞いて、男の表情に下卑た笑みが浮かび上がる。彼は舌で唇をペロリと舐めていたが、やがて、ヴィルの機嫌を伺うかのように、申し訳なさそうな声で彼に尋ねた。

「ヴィエイユを生け捕りにしましたらば、その褒美に、その身柄を私にお預けいただけませんでしょうか？」

その言葉にヴィルは大爆笑している。

「ふあっはっはっは！　ジーギスは相変わらずじゃな。アフロディ

ーテに届けるまで、その体を存分に賞味しようとてか！　相変わらず女が好きじゃな。よいよい、どうせ死を賜るお方じゃ。好きにするがよいぞ」

「畏まりました！　それでは、参ります！」

ジーギスは兜を小脇に抱えると、足早に本陣を後にしていった。

「さて、そろそろ次の段階に移るべきかと」

オクタの声が静かに響き渡る。その声を受けて、ヴィルは無言のまま顎をしゃくった。タナ軍の奥の手が使われようとしていた……。

第三百四十三話　動揺

「下がれ！　後ろに下がれ！　後ろに下がるんだ！」

大声で兵士たちに命令を下しているのはクノゲンだった。彼は手綱を器用に操りながら、約二千の軍勢を率いて、リノスの傍からはるか後方に離れていった。この部隊は言わば、アガルタ軍にとっての奥の手の一つだった。クノゲンは敵方のただならぬ動きを察して、素早くこの一団を後方に退避させたのだ。それもそのはずで、敵陣のちょうど真ん中に、巨大な大砲のようなものが出現したのだ。その砲口は空を向いていたが、明らかにアガルタ軍を狙ったものであることは、誰の目から見ても明らかだった。クノゲンはその異様な出で立ちを見て、直感的にこの部隊は後方に退避させた方がよいと判断したのだ。

リノスはクノゲンから部隊を撤退させるという進言をすぐさま承知した。彼は無言のまま慌てて退避していく軍勢を横目でチラリと見ただけだった。

その様子をルファナ王女が目を白黒させて眺めている。彼女自身も、予想外のクノゲンの動きにどうしてよいのかわからなかった。前線に出てタナ軍の兵士を斬りたいという思いはあるものの、隣にいるアガルタ王・リノスからはクノゲンから絶対に離れるなという厳命を受けている。リノスに視線を向けるが、彼は敵を見据えたまま微動だにしない。彼女はしばらくオロオロとしていたが、やがて残念そうな表情を浮かべて、後方に下がっていった。

そのとき、タナ軍からドンという、まるで大砲を放ったかのような

音が響き渡った。見ると、上空に何やら光る物体が打ち上げられていた。その瞬間、リノスの鎧が紫色に輝いて俺の周囲を覆った。

……気が付くと周囲が真っ白になっていた。

爆風と強烈な光で、瞬間的に視覚と聴覚を奪われたが、徐々にその感覚は戻ってきた。よく目を凝らして見てみると、俺の目の前には先ほどと変わらぬ光景がそこにあったが、兵士たちが皆、一様に耳を押さえている。爆風で耳をやられたのかもしれない。さらに視線を対岸に移すと、そこには黒い塊のようなものができていた。しばらくすると、タナ軍も元の姿に戻り始めた。どうやら盾を使って、今の爆風を防御していたようだ。

「まさか爆弾を使うとはな。耳や目をやられた者もいるかもしれん。回復魔法をかけておくか」

俺は前線の兵士たちに回復魔法をかける。だが、回復魔法をかけたときに現れる青い光は、俺のすぐ傍で消えてしまう。前線の兵士たちは、まだ耳を押さえていて、回復魔法が効いている様子は見えない。一体どういうことだ？

「……魔力が……使用不可」

俺のすぐ傍でオワラ衆のお頭であるイッカクが呟いている。一体いつの間にここに居たのだろうか？　彼は腕組をしながらキョロキョロと辺りを見廻している。そして、俺に視線を向けると、さも残念そうな声で口を開いた。

「プリルの石と推察」

「何？　どういうことだ？」

「魔力、使用不可に候。魔吸石の可能性もあり」

「え？」

「結界、機能せずの恐れあり」

「ちょっと、もう少し詳しく……」

そこまで言ったとき、対岸のタナ軍からビュッという音が響いた。思わずその方向に視線を向けると、またしても黒い物体が空に向かって放たれていた。それはきれいな放物線を描きながら、俺たちの所に落ちて来た。

「うわっ！」

「ぎゃっ！」

あちこちで兵士たちの悲鳴が上がる。それと時を同じくして、アガルタ軍全体に動揺が広がっていた。

「け……結界が……効いていない？」

俺は茫然とした表情を浮かべながら、目の前の光景を眺めていた。

一方、最前線のラファイエンスは、その動揺を収めようと、いつも以上に声を張り上げていた。

「静まれ！　静まるのだ！　皆の者、静まれぇぇぇ！！」

その大声に、兵士たちの視線がラファイエンスに集まる。彼は眉間に皺を寄せ、血走った眼で敵の陣地を睨みつけたまま、周囲の兵士たちに声をかける。

「我が王の結界が機能しておらねば、なおのこと我らの腕の見せ所だ！　これまでの訓練の成果が発揮できるではないか！　魔法も、弓矢も、躱し方は全て教えたはずだ！　思い出せ！　あの苦しい訓練を思い出せ！　肉弾戦だ！　肉弾戦だぞ！　興奮するではないか！　皆の者、剣を取れ！　槍を取れ！　やるぞ！　そのために、我らの装備は軽くしてあるのだ！　タナ軍の者どもを、一人残らず討ち取るぞ！」

兵士たちから大歓声が上がる。そして彼らは驚くべき速さで戦闘態勢を整えた。それと同時に、弓矢に貫かれて傷ついた者は素早く後方の部隊に送られ、いつものアガルタ軍の連携が戻っていた。

兵士たちが動揺しているのは、ラマロン軍でも同じだった。本陣ではカリエス将軍が伝令を走らせて部隊の鎮静化を図っていたが、なかなか思い通りに兵士たちの動揺は収まらなかった。

ラマロン側でも、魔法が使えないということは把握しており、魔術師や魔導士たちを素早く後方に移動させると同時に、弓矢に貫かれて命を落としたり、ケガをしたりした者たちも後方に移そうとしていたために、さらに混乱に拍車をかけていた。

カリエス将軍は焦りを隠し切れなかった。このままでは間違いなく、タナ軍はラマロン側に突っ込んでくる。動揺している軍に攻撃を仕掛けるのは戦いの定法であり、最も効率よく勝てる方法でもあるの

だ。そのことを誰よりも熟知しているカリエス将軍は、目の前で動揺を続ける兵士たちの様子が歯がゆくてならなかった。

そのとき、最前線の川沿いを一人の騎士がゆっくりと進んでいるのが見えた。よく見るとそれは、司令官の一人であるアーモンドだった。彼は馬の鞍の上に立ち、左手を自軍の兵士たちにかざしながらゆっくりと進んでいる。その様子を兵士たちは呆気にとられた様子で見ていたが、やがてアーモンドがニコリと微笑んでいるのに気が付いた。

その表情はとても穏やかなものだった。兵士たちのどよめきが少しずつ収まっていく。そして、彼らの視線がアーモンドに集中したとき、大声で命令が下った。

「全軍、体勢を立て直せ！」

一瞬のうちにラマロン皇国軍の整列が完了する。それを見届けたアーモンドは素早く馬に跨り、自陣へと戻っていった。

「アーモンドめ……やりおるわ」

カリエス将軍は満足そうな笑みを浮かべながら、椅子に腰を下ろした。

「フッフッフ、ハッハッハ、アッハッハッハッハッハ！！」

天に向かって大笑いをしているのは、タナ王国国王のヴィルだった。彼はひとしきり大声で笑うと、爛爛と光る眼をアガルタ軍の方向に向けた。

「余が思う以上の軍勢じゃ。気に入った！　この軍勢をもってすれば、どの軍勢でも負けることはあるまい。この軍神たる余が、あれらの兵たちを鍛えて遣わす。今以上の強き兵になるであろう！　余の野望を叶える軍兵に加えて遣わそうぞ！」

彼はギョロリとした目で、アガルタ軍とラマロン軍を交互に見比べている。そして腰に差した剣を抜き、その切っ先をカコナ川の対岸に向けた。

「突撃せよ！　敵は魔法は使えぬ！　我らの力を見せつけるのじゃ！　進めぇ！」

ヴィルの号令一下、タナ軍の前衛部隊がカコナ川を渡り始めた。

嬉々として戦いの行方を見守るヴィルの後ろで、オクタこと妖狐・ヘイズは満足そうな表情で頷いていた。その彼にヴィルは興奮を隠し切れない様子で話しかける。

「オクタ、ジェラニウスたち魔術師を移動させよ」

「ご安心を。すでに完了しております」

「相変わらず、早いの」

再び視線をアガルタ軍の方向に移したヴィルは、誰に言うともなく呟く。

「ジェラニウスたち魔導士たちが健在である限り、我らに負けはない。フフフ……。アガルタ王リノス、大魔王殺しのカリエス……こ

やつらの首は、陽が落ちる頃には胴についてはおらぬ……」

そんなヴィルの後姿を見ながら、ヘイズは恭しく頭を下げた。そして少しずつ彼から距離を取りながら、ニヤリとした笑みを浮かべながら、小さな声で呟く。

「まあ、戦いの準備としてはこんなものかな。あとは陛下の采配にお任せするとしようか。陛下、頼みましたよ。できるだけアガルタ王をこの戦場に釘づけにして下さいね？　理想を言えば、首を刎ねていただければうれしいですね」

彼は懐から杖を取り出し、それを地面に向けた。

「さて、これから僕も戦いを始めるとするか」

地面が光り出し、彼を包んでいく。

「女神（リコレット）……今、行くよ」

その言葉を残して、ヘイズの姿が戦場から消えた。

第三百四十四話　お行儀

「来るぞ！　総員、槍、構えっ！」

ラファイエンスの声が戦場に響き渡る。その声を受けて兵士たちは一糸乱れぬ動きで槍を構えた。

「私が命令を下すまで、攻め込むことはならん。持ち場にて敵を迎撃せよ！　かかれっ！」

その直後、アガルタ軍の先鋒が、カコナ川を渡ろうとしているタナ軍に襲いかかった。

「焦らんでいい。焦らずにやってくれ」

ラファイエンスは前線の様子を見ながら、後方の兵士たちに声をかける。そこでは、先程タナ軍から発射された矢を迅速に回収している兵士たちの姿があった。彼らはそれぞれ持ちきれない程の夥しい矢を抱えるようにして持ち、それを川に流していった。その様子を見ながら老将軍は、小さな声で呟く。

「兵たちに異常は見られぬ……。これも、メイ殿が持たせてくれた石のお蔭か？　石だけに、医師の役割も果たしてくれたのかな？」

そう言って彼はフフフと笑う。そのとき、隣に控えている騎士が、目を見開いて固まっている姿が目に入った。

「オイ、これは、ナイショにしておけよ」

彼はウインクをして、再び戦場に視線を向けた。

ちょうど同じころ、この戦場で目を見開いて固まっている者が、もう一人いた。ヴィエイユだ。彼女は驚いたような表情を崩すことなく、呆然とその場に立ち尽くしていた。

「……どうした？」

「……アガルタ王様、いつ、馬を替えられたのですか？」

俺は言っている意味がよく分からないという素振りをする。そのときふと、頭の中にあることが思い当たり、俺は思わず苦笑いを浮かべる。

「ま、その……なんだ。……そういうことだ」

俺の視線の先には、イリモの姿があった。先ほどの爆発で、どうやらイリモにかけていた結界が消えてしまって、彼女に生えている角が見えてしまったのだろう。そんな俺の様子をヴィエイユは表情を崩さずに眺めていたが、やがてふっと柔和な顔になり、俺に話しかけてくる。

「アガルタ王様の……結界でしたか。結界が消えてしまって、その馬は大丈夫なのですか？」

「大丈夫か、イリモ？」

『大丈夫です』

彼女は噺いただけだが、それだけで彼女の言わんとしていることが伝わってくる。俺は、頼むぞと言いながら彼女の首をやさしく撫でてやる。

「さて、アガルタ王様、一つお願いがございます」

突然ヴィエイユの声がする。彼女に視線を向けると、人懐っこい笑みを浮かべながらチラリと戦場に視線を移し、すぐに俺に視線を戻してきた。

「タナ軍が我が陣営にも攻撃を加えています。きっとアガルタ軍に集中するかと思っていたのですが……。こうなりましては、私が指揮を執らねばなりません。恐れ入りますが、私を自陣まで転移させていただけないでしょうか？」

お前にはポーセハイがいるだろうという言葉を、すんでのところで飲みこむ。彼女の後ろに控えている若いポーセハイが済まないといった表情で控えているのが目に入ったからだ。確か彼も、魔力が使えない状態になっているはずなのだ。俺は天を仰ぎながら、ふっと息を吐く。ヴィエイユに転移結界を知られてもいい者だろうか。そんな迷いが頭の中に去来していたのだ。だが、ヴィエイユの一言が、その迷いを消し去る。

「アガルタ王様の結界には、転移効果もあるはずです」

「……何？」

彼女は俺のすぐ近くまで近づいて来て、小さな声で呟いた。このヴ

ィエイユのことだ。そのくらいのことは知っているだろうとは思っていたが、本人の口からそれを聞くと、やはりちょっとショックだ。この二人、付き合っているなと薄々感じていたところに、俺たち、付き合っているんだよね、と堂々と交際宣言されたときの衝撃度と似た感じだ。

そんな俺の様子を見ながらヴィエイユは笑顔のまま、さらに言葉を続ける。

「アガルタ王様のことは、何でも知っているつもりでございます。なにしろ私はあなた様に一度、抱かれておりますもの」

「バカ野郎。お姫様抱っこをしただけじゃないか。さも、俺とお前が男と女の関係にあるような言い方をするんじゃねぇ」

「失礼しました。このような話、リコレット様がお聞きになれば、大変なことになりますものね」

ウフフと彼女は笑い声を漏らす。俺は毒気を抜かれてしまい、ヤレヤレとため息をつきながらイリモから降りた。

「ただ、転移できるかどうかはわからんぞ。お前の陣地に張った転移結界が壊れている可能性があるからな」

「やはり、転移結界をお持ちだったのですね？」

「何？」

ヴィエイユはしてやったりといった表情を浮かべる。しまった、喋らされてしまった。俺の様子を満足そうな表情で眺めていたヴィエ

イユは、俺のすぐ近くまで顔を寄せ、甘ったるい声で呟いた。

「アガルタ王様に転移結界があるとわかったからには、私が帰陣するのは、自陣深くまで攻め込まれたときで構いません。恐れながら、今しばらく、ここに居させてくださいませ」

俺は眉間に皺を寄せる。それを察知したヴィエイユは、さらに言葉を続けた。

「アガルタ王様、転移結界の秘密を守る方法が一つございます。私を手籠めになさいませ。そして、私をあなた様なしでは生きていけぬ体になさいませ。さすれば、私はこの秘密を墓場まで持って行くでしょう」

俺は思わずフッと笑みを漏らし、そのまま踵を返して再びイリモの上に跨る。

「お行儀が悪い子だな、お前は」

俺の言葉に、ヴィエイユはキョトンとした表情を浮かべる。

「お前のこれまでの人生には同情するが、そうかといって、やっていいことと悪いことがある。お前はこの戦いが終わったら一度、リコとメイの許に弟子入りしろ。女性としての生き方を、学べ。勿体ないぞ、ヴィエイユ？」

俺の言葉に、彼女は再び笑みを浮かべた。だが、その表情には寂しさが浮かんでいた。

一方、ヴィエイユが率いていたクリミアーナ軍は苦戦していた。タナ軍の突撃に晒されて、防戦一方になっていたのだ。

「突けぇ！　突けぇ！　突き崩せぇ！」

馬上から大声でタナ軍の兵士を指揮しているは司令官のジーギスだった。彼は陣形を山形に組み、ヴィエイユの陣に突撃していた。一見するとすぐに破れそうに見えたクリミアーナ軍だが、彼らは盾を巧みに使ってジーギスたちの突撃を受け止め、その攻撃を防御し続けていた。進めば進むほどに守りが固くなるクリミアーナ軍に、ジーギスはそのいら立ちを隠すことができなくなっていた。

「敵を倒しながら、ヴィエイユを探せ！　決して傷つけるではないぞ！　あの女は、私が捕らえる！」

彼は敵を切り倒しながら興奮の絶頂にあった。人を殺す楽しみと、若くて美しい女の敵司令官を捕らえ、その体を蹂躙したいという期待感が入り混じったこの感覚は、彼の体をいつも以上に活性化させていた。いつになく体が動くことを自覚しつつ彼は、さらに敵陣奥深くに向かって馬を走らせた。

ふと、目の前に黒い影が見えた。その瞬間、体に凄まじい重さを感じる。

「ぐっ……なっ……」

彼の体に三人の男が抱きついていると気が付いたときには、すでに周囲の兵士がそれを引きはがそうと刃を向けていた。彼自身も辛うじて動く右腕を使って、自分にまとわりついている男の一人の脇腹を突き刺した。そのとき、男のうめき声と共に、聞きなれない音が

彼の耳に聞こえてきた。

シュッ、シュッ、シュッ、シュッ……。

この音は何だと思ったそのとき、周囲を固めていたクリミアーナの兵士たちが、自分たちから大きく距離を取っていることに気が付いた。彼の記憶はその瞬間に途切れた。

ヴィエイユの陣から轟音と共に火柱が上がったのは、その直後のことだった。

第三百四十五話　総攻撃

タナ王国国王であるヴィルは、敵陣の中で突然上がった火柱の方向を凝視していた。そのとき、一人の家来が本陣に駆け込んでくる。彼は無言で走り寄る家来に視線を向ける。

「申し上げます！　ジーギス・クレッセンド司令官殿、討ち死になされました！」

側近たちが驚く中、ヴィルは表情を一切変えずに、目の前に控えている家来に早口で質問をぶつける。

「先程の火柱は何じゃ！」

「ハッ！　兵士が自爆したようでございます。ジーギス様はそれに巻き込まれた形で……」

「右翼を攻撃しているジーギスの部隊を、すぐに元の陣まで撤退させよ！」

「ハッ！」

「ジーギスの副将はブカンであったな。ブカンに伝えよ。兵を引き、整頓せよと。これよりは、我が本陣の許可なく兵を突撃させることはならぬと」

「ハッ！」

「その代り、対岸から主神様を裏切りし者どもに、雨のように矢を射かけよ。見たところ、奴らは盾を持っておらぬ。持っていたとしても、かなり小さい物じゃ。飛び道具での攻撃は有効に働くであろう。ああ、使用する弓は通常のものでよいと、左様に伝えィ！」

ハッ、という言葉と共に一礼して去っていく兵士の後姿を見送りながら、ヴィルはフゥ、とため息をついた。

「愚か者めが。おそらくは、女を捕らえようと功を焦ったのであろう。惜しい男を無くしたものじゃ。だが、褒めて取らそうぞ。武人たる者は戦場で死すもの。ジーギスは見事に戦場で散った。定めしあの者は我が国の守護神となるであろうな。……それにしても、敵は我らが教国の信徒のような戦いぶりをする。ジーギスと共に死んだ兵たちは、教皇聖下、ひいては主神様の祝福を受けられぬ……。哀れじゃな」

彼はゆっくりと首を左右に振りながら、目の前で行われている戦闘の様子に注目する。

戦いは膠着状態だった。タナ軍はよく攻めてはいるが、攻め切れていないというのが正直なところだ。

「……サンダンジ軍はどこにいる？」

「兵をまとめるのに戸惑っているようで、おそらくここに到着するのは、あと数時間はかかろうかと思われます」

「フッ、それまでに決着をつけてくれるわ」

そうは言ったものの、戦いの様子は、ヴィルが予想していたよりも

はるかに進捗は停滞していた。だが、彼はそんな予想とは違った戦いの流れすらも楽しみに変える程の戦好きであり、彼は目を爛爛と輝かせながら、次の打つ手を思索する。

「クッ……思った以上に、敵の守りは固いな」

「うむ。あと一歩なのだがな。敵陣が崩れそうで崩れないのは、あの前備えに陣を敷く、ラファイエンスのためです」

幕僚たちの声に、ヴィルがほう、と言いながら彼らに視線を向ける。それに気づいた幕僚たちは頭を下げて押し黙る。

「よい、続けよ」

「……ハッ。あのラファイエンスという男。いかに挑発しようとも頑として陣立てを崩そうとしません。それがアガルタ軍、ひいては敵軍全体の崩れを防いでいるのです」

「……やはり、敵の狙いはサンダンジの軍に我らが横腹を突かせようという腹じゃな。そうはさせぬ。そろそろ総攻撃をかけてくれる。ルミネを呼べ！」

しばらくして、ヴィルの前に真っ赤な鎧を着こんだ男が現れた。身長は2メートル近くあり、全身を鋼鉄の鎧で固めていて、僅かに目の部分が空いているだけの異様な出で立ちをした男だった。彼は大儀そうにヴィルの前に片膝をついて畏まる。

「お召しにより、参上いたしました」

「そなたに兵、2万を預ける。アガルタ軍の前衛を粉砕せよ」

「仰せのままに」

「頃はよし」

そう言って彼は立ち上がり、腰に差した剣を抜き、ラファイエンスの陣に向けて大声で命じた。

「皆、根限りアガルタ軍を攻めよ！　正面の敵を打ち破り、アガルタ王・リノスの首を獲れ！」

幕僚たちが一斉に頭を下げ、雲の子を散らしたようにヴィルの許から去っていった。

その頃、俺はフェアリードラゴンを肩に乗せながら、手紙を書いていた。ニケの許に遣わしていたフェアリードラゴンが、彼の書簡を携えて戻ってきていたのだ。

チラチラと前線の様子を見ながら、紙にメモを書いていく。我ながら汚い字だが、今は戦闘の真っ最中だ。それは勘弁してもらおう。

ニケの手紙には、ようやくカコナ川を越えてこちらに急行しているとあった。どうやら、兵をまとめるのに時間がかかっていたらしい。その焦りと無念さが字体にありありと現れていた。フェアリードラゴンに聞くと、どうやらニケの息子が兵を出すことに反対したらしい。喉元に刃を突き付けられている状態でのこの動きは理解に苦しむが、彼は息子との怒鳴り合いの末に息子を殴り倒し、兵を動かしたのだそうだ。殴られた息子は兵士たちにどこかに連れて行かれたそうで、そういうこともあって、彼の着陣が遅れているのだ。俺は

戦いが始まったこと、今は俺たちの方が寡兵であるために防戦一方になっていること、できれば、タナ軍の側面を突いてもらいたいと言う内容を認めて、その紙をドラゴンに渡す。

『これをニケさんのところに持って行ってくれ』

『承知しました』

その瞬間、俺の肩が軽くなる。魔法が使えない状況になっていて、辛うじて俺の周囲だけは魔法が使えるが、それが発揮できるのは、俺の周囲３０センチくらいなのだ。そのために、フェアリードラゴンとの会話も、彼らを俺の肩の上に乗せて行う。これが意外に重たいので、俺の肩は少し凝っているのだ。

「リ……リノス様！　あれを！」

近くにいた兵士の声で顔を上げると、中央の部隊がラファイエンスの許に突撃しているのが見えた。ひときわデカイ、真っ赤な鎧を装備した男が槍で兵士たちの体を空中に放り投げていた。それどころか、先程までヴィエイユの部隊を攻めていた左翼の軍勢の半分程度がラファイエンスの許に向かって川を渡っている。これはヤバイ。

「はあっ！」

俺は右手に魔力を集中させて、巨大な火の玉を作り出す。

「シェア・ファイヤー！」

高温の火の玉が発射されたが、それはすぐに空中で雲散してしまった。ダメもとで魔法を打ってみたが、やはり無駄なようだ。

「ヴィエイユ！」

「はい」

「ラファイエンスが窮地にある！　頼む！　助けてやってくれ！」

彼女の顔がぱああっと明るくなる。そして、見たこともないような満面の笑みをその顔に浮かべる。

「はい！　よろこんで！」

俺はイリモから降り、手招きをしてヴィエイユの後ろに控えていたポーセハイをこちらに呼ぶ。そして、傍に控えているイッカクに口を開く。

「イッカク！　敵部隊を混乱させてくれ！　特にあの赤い野郎を何とかしてくれ！　できるか？」

「承知」

その返事をした直後、イッカクは傍に控えていたオワラ衆に目配せをする。すると、彼らの姿が、まるで煙のようにスッと消えた。

「スゲェ……」

「感心している場合ではありませんわ。私のお役目は何でございますか？」

「ちょっと待て。伝令！　三番隊、五番隊を前衛に差し向けろ！

四番隊はその場を堅持せよ！」

ハッ、と伝令が返事をして、すぐさま馬に乗って俺の両側面を守っていた部隊に命令を伝えに行く。その様子を見ながら俺は、ヴィエイユに話しかける。

「お前は、タナ軍を攻撃してくれ」

「畏まりました。あの左翼の部隊を突くのですね？」

「いや、そうじゃない。正面攻撃をするのではなく、側面に回り込め」

「は？」

「側面に回り込みながら、敵の背後に背後に兵を動かしていくんだ。つまり……」

「承知しました。お任せください。ですが、我が陣が抜けたところをタナ軍に突かれれば、逆にアガルタ軍が包囲されることになります。そうなると、手薄の本陣を突かれることに……ならないよう、一部の兵は残しておきますね？」

「そういうことだ。頼む」

俺はポーセハイとヴィエイユの、体が触れ合うギリギリのところまで近づく。そのとき、ヴィエイユが俺にピタリと抱きついて来た。さらには、足まで絡めてきている。

「アガルタ王様のぬくもりが感じられないのが、寂しいですわ」

「やかましい。おい、君もこっちに来てくれ」

俺は空いている右手でポーセハイの方を抱くようにして掴み、転移結界を発動させた。

第三百四十六話　扇の要を討て

「動くな！　動いてはならん！」

前線ではラファイエンスの絶叫にも似た声が響き渡っていた。彼は迫り来る敵を突き崩しながら、周囲の兵士たちに向けて声を上げる。

「他の隊は動いても、我ら前備えのラファイエンス隊は、断じて動くなーっ！」

すでに周囲は乱戦の様子を呈していて、さらにそこに敵が突撃してきているために、彼には次から次へと刀や槍が繰り出されていた。まさに、退くのも進むのもままならない状況の中、彼は討ちかかる敵を自慢の槍で蹴散らしながら、さらに大声を張り上げる。

「何千、何万という蜂が、蜜を求めて飛んでも決して散らないのは、常に動かざる巣があるからだ！　動くな！　我らは動ぜずして戦えーっ！　お前たちならば、出来るはずだーっ！」

老将軍の声に、兵士たちの、おおーっ！　という大声が響き渡る。彼はそれを聞いて満足そうな表情を浮かべる。しかし、次の瞬間、彼の表情は厳しいものとなり、その視線を河原の方向に向けた。

そこでは、真っ赤な鎧を着た男が、暴れ狂っていた。長い戦歴を誇るラファイエンスをして、このような男は、未だかつて見たことがなかった。

「悪魔、とは、このような者を言うのであろうか……」

その戦いぶりを見て、彼は思わずそんな言葉を漏らす。

実際、赤い鎧の男――ルミネは、ラファイエンスが手塩にかけて育てた兵士たちの攻撃を、その固い鎧で受け止めながら長い槍で攻撃を繰り出していた。今のところ兵士たちは、彼を川から上がったところで食い止め、その力任せの攻撃を見事に躱してはいるが、この状況ではジリ貧になることが目に見えていた。

それどころか、左翼に展開していた部隊の一部が、川を渡って自陣に向かっている。ただでさえ、正面の敵を食い止めるのが精いっぱいの状況下で、さらに大軍が迫っているのだ。ラファイエンスは、思わず顔をしかめる。

「グォォォォ！」

そのとき、まるで牛の鳴き声に似た声が戦場に響き渡る。見ると、ミーダイ国からやってきたオワラ衆たちが、ルミネの周囲を取り囲んでいるのが目に入った。彼らはルミネの周りをクルクルと回りながら、右手の人差し指と中指を立て、何かの呪文をブツブツと呟いている。程なくして、ルミネは片膝をついて、その巨体の動きを止めた。

「推参！」

イッカクの言葉と同時に、オワラ衆が散り、周囲の敵を倒し始めていく。彼らは短い剣を持ち、それで敵の急所を一突きにして、効率よく仕留めていくのだ。その様子は実に見事で、ラファイエンスは一瞬、戦いを忘れた。

「し……将軍！」

隣の部下の声で、彼は我に返る。

「あの赤い化け物は、オワラ衆に任せるほかあるまい！　それよりも……あの左翼だな」

彼は迫り来る敵を斬り伏せながら、必死で戦況を分析する。打開策を考えるが、効果的な策は何も浮かんでこない。

「これは、死ぬな」

誰に言うともなく彼は呟く。今のところ、斬りかかってくる兵士は、問題なく対処できている。これまで何人もの敵を倒してきているが、まだまだ体は動く。だが、これがあと、数時間も続くとなると話は別だ。

そのとき、左翼側から地鳴りのような音が聞こえてきた。思わずその方向に視線を向けると、ヴィエイユの軍勢の大半が、タナ側に向けて突撃を開始する光景が目に入った。

「ほう、あのお嬢ちゃん、わかっているじゃないか。単に戦見物に来ただけではないようだな。それとも、我らが軍神殿のお導きかな？」

彼は左翼の方向に視線を向け、ニヤリと笑みを浮かべたまま、ぬうん！　という唸り声と共に槍を突き出す。その瞬間、ぐはっ！　という声と共に、一人の騎士が宙を舞う。彼の槍は、騎士の喉笛を正確に突いていたのだ。だがその槍は、柄の真ん中あたりでポッキリと折れていた。彼は舌打ちをしながら、腰に差している剣を素早く

引き抜いた。

「たとえこのラファイエンスが討ち死にしたとしても、うろたえるな！　後しばらく持ちこたえれば、必ずサンダンジ軍が到着する！　今少しの辛抱だ！　動くでないぞ！」

大声を上げる彼に、さらに数人の騎士たちが襲いかかる。だが、彼は見事な剣さばきで騎士たちを斬り伏せる。その一方で、彼の疲労は、確実にその体に蓄積されていった。

この老将軍の奮闘ぶりは、右翼を守るラマロン軍からもよく見えていた。彼らは圧倒的に少ない軍勢で、その倍近くはあろう敵の大軍を受け止めている。その様子は、ラマロン軍を大いに鼓舞していた。

「あんな爺さんが、あれだけ働くのだ！　若い我らが出来ぬことはない！　かかれ！　敵を倒すのだ！」

そう言って彼らは、目の前のタナ軍に襲いかかるのだった。

この様子は、タナ軍の本陣からもよく見えていた。国王のヴィルは眉間に皺を寄せたまま、目だけを激しく動かし、戦場全体の動きを把握しようと努める。

「……攻め切れておらぬな」

彼の呟きに反応する者はいない。周囲にいる全員が、恭しく頭を下げていた。彼は苛立っていた。ここまで自分の思い描いた作戦が上手くいかなかったことは、経験上なかったことだった。彼もまた、焦る自分との戦いを強いられていたのだ。

彼が焦る理由は三つあった。一つ目が、サンダンジ軍の動きであり、彼らがこの戦場に到着すると、退路を断たれることになる。現在の兵力をもってすれば、彼らを打ち破ることは造作もないことだが、サンダンジ軍が現れることで、一見するとタナ軍を包囲する格好となり、それが敵の士気を上げ、味方の士気が下がることを、彼は避けたいと考えていた。

そして二つ目が、右翼に展開しているヴィエイユの動きだった。彼にはこの動きがいまいち理解ができなかった。彼女が動いたおかげで、クリミアーナ軍の戦線は伸び切っている。おそらくそこを突けば、易々と突破できるであろうし、そこから敵の本陣をつくことは可能なはずだ。だが彼は、直感的にその策は失敗する、それどころか、タナ軍に甚大な損害を与えると感じていた。それがなぜそうなるのかは、今の彼にはわからない。むしろ、敵の大将であるリノスが何を考えているのか、何をしようとしているのかが、彼には分りかねていた。

そして最後は、自身の右腕とも頼むオクタの不在だった。彼さえいれば、作戦の幅は広がり、最悪の場合、一瞬で軍勢を丸ごと自国に戻すことができるのだ。だが彼は忽然と姿を消してしまった。プリルの石を爆発させて作り出した、「魔法封じ」の作戦は、まだまだその効果は有効だが、もし、オクタが戻らなかった場合、アガルタ軍が魔法を用いての攻撃に移ることを、彼は特に恐れていたのだ。

ヴィルは注意深く戦場を見渡していく。そして、彼の視線は、ある一点に注がれる。ヴィルはゆっくりと椅子から立ち上がり、手に持っていた指揮棒をスッと上げる。

「あの者の首を獲れ。あれが、アガルタ軍の要じゃ。全力で、あの

者の首を獲るのじゃ。さすれば、アガルタ軍の堅陣は崩れる」

彼の指揮棒が差す場所には、未だ奮戦を続ける、名将・ラファイエンスの姿があった。

……一体、どのくらいの時間を、戦い続けているのだろうか。実際は、そう長い時間ではない気がするが、ラファイエンスは全身に疲れを感じていた。すでに彼の右手に持っている剣は、刀身がボロボロになっていて、最早、突くことでしか敵を倒すことはできなくなっている。だが、彼は鬼の形相を浮かべながら、周囲の兵士の鞍を拳で叩きながら激励し、迫り来る敵を倒していた。そんな中、彼の目に、対岸のタナ軍がさらに突撃をしてくる姿が目に入った。

「し、将軍！　も、もはや、これ以上は！！」

部下の絶叫にも似た叫び声が聞こえる。だが彼は、あらん限りの声を振り絞って、兵士たちに声をかける。

「動くなぁぁぁぁ！！」

そのとき、北東の方角に、兵士たちの歓声が上がった。思わず視線を移すと、川の対岸に軍勢が続々と集まっているのが目に入った。ラファイエンスは直感的に、それがサンダンジ軍であることを感じ取っていた。彼は剣を掲げて、大声で叫ぶ。

「見よ！　あれはサンダンジ軍！　我らは勝ったぞ！　我らの勝利だ！」

その瞬間、ラファイエンスの体に、数本の矢が突き刺さった。その

うちの一本は、彼の首に深々と突き刺さっていた。彼は剣を振り上げた体勢のまま、ゆっくりと馬から落ちていった……。

第三百四十七話　よくもお主は……

「ラファイエンス様、戦死～！　ラファイエンス様、あえないご最期～！」

俺がヴィエイユの陣から戻ってきた直後、そんな言葉が耳に入ってきた。

「将軍が……戦死？　どういうことだ！？」

「しばらくお待ちください！　ただいま確認中です！」

兵士の一人が早口でまくし立てる。前線は乱戦になっていて、俺のいる場所からでは味方と敵が判別しにくい状況になっている。

ちょっと陣を留守にしていたら状況が変わってしまっているために、俺はこれまでの状況を聞こうと周囲に目を向けてみるが、皆、ヴィエイユたちが張っている陣に視線を集中させている。そこに視線を向けてみると、彼女の軍勢が徐々に敵の左翼を囲みつつあり、タナ軍の陣形が崩れようとしているようだった。

「あいつ、やるな……」

思わずそんな言葉が口を突いて出てきた。俺は敵が動揺してくれれば十分と考えていたのだが、あの様子では、敵の左翼がかなり押されているように見える。そのとき、どこからともなくイッカクが姿を現す。驚きのあまり俺は声を上げることができないでいた。マジ

でコイツは心臓に悪い。

「将軍殿、ご最期。お味方、参着」

「え？」

「サンダンジ軍、参着」

彼が指さす方向を見ると、北東の方角に一軍が集結していた。ようやくニケの軍勢が到着したようだ。しかも、あの位置に陣を張ると、タナ軍の退路を断つことになる。いい位置に陣を張っている。

俺は戦況とラファイエンスの確認をしようと、再び前線に目を向ける。すると、そこから数人の兵士が、一人の男を抱え上げるようにしてこちらに走ってくるのが見えた。

「将軍！」

俺の許に到着したのは、ラファイエンスの亡骸だった。彼は右手に剣を握り締めたまま目を見開いていた。その目からは光が失われており、何より、彼の体には矢が数本突き刺さっていて、中でも、その首に深々と刺さる矢が、痛々しさに拍車をかけていた。

「将軍！　将軍～～！！」

俺の必死の呼びかけにも、彼は全く反応を示さない。俺の心の中に、沸々と怒りが湧き上がってくる。

「あの野郎！」

俺はイリモの許に向かい、ひらりと彼女の背中に乗る。そしてすぐさま彼女を走らせようとするが、何故か彼女は進まない。

「御待ち候へ」

気が付くと、イッカクがイリモの鼻先に掌を当てて、彼女が進めないようにしている。俺は怒気を込めた声で、イッカクに命令を下す。

「どけ！　将軍の敵討ちだ！　どくんだ！」

「お平らに」

「何っ？」

「大将が動けば、負けに候」

「何を言っていやがる！」

俺の言葉を無視する形で、イッカクは残る左手をスッと上げる。彼の指の先には、少しずつ自陣に後退していくタナ軍の姿があった。どうやら退却命令が出ているらしい。退け、退けという声が聞こえてきた。

「いや、よかった。ようやく一息つけるな」

突然頓狂な声が上がる。驚いた俺は声のする方向に視線を向ける。何とそこには、上半身をムクリと起こした、ラファイエンスの姿があった。

相変わらず顔面は蒼白だが、首が小刻みに左右に揺れている。首に

矢を刺したまま動いている姿は、不気味以外の何物でもない。

「しょ……将軍！」

俺はイリモから飛び降りて、ラファイエンスの許に走る。彼は俺の姿を見ると、ニヤリと笑みを漏らした。

「死んだと思ったのだがな。あいにくと、生きているようだ」

「よかった……でも、何で……。その……矢が首に……」

俺の戸惑いをよそに、彼は首筋に手を当て、刺さっている矢に触る。するとそれがポロリと地面に落ちた。ペタペタと体を触るが、特に痛みなどは感じないらしい。体に刺さっていた矢も、ほどなく全て地面に落ちた。

「これのせいかもしれんな」

彼はゆっくりと鎧の中に手を入れ、懐から小さな箱を取り出した。それはあちこちに傷があり、すでにボロボロの状態だった。

「将軍……これは？」

「ポセイドン王からもらった箱だ」

「……あのときの」

確か、メインティア王と共にポセイドン王宮を訪問したときに、ラファイエンスがもらってきた箱だ。まさかこの箱に命を守る効果があったのだろうか。そんなことを考えていると、老将軍は掌に乗せ

た箱をゆっくりと握る。すると、彼の手からサラサラと砂のようなものが流れ落ち、その手には何も残らなかった。

彼は、ゆっくりと息を吐き出しながら、首だけを俺に向けた。

「すまないが、少し疲れた。あとのことは、頼みたい」

「わかりました。任せてください。伝令！　前線の兵士たちに伝えてくれ。将軍は無事だと」

「いや、それには及ばん」

俺の言葉を遮るようにして、ラファイエンスが口を開いた。

「何故です、将軍！」

「私が死んだことにしておけば、敵は油断するだろう。なぁに、わが軍のことなら、心配いらん。私が死んでも持ち場を動くなと厳命している。見なされ、敵が徐々に後退している。私がいなくても大丈夫だ。さすがは、オワラ衆だな」

彼は俺の後ろに控えているイッカクに視線を向けて、ニヤリと笑う。そして再び俺に視線を向けて、彼はゆっくりと頷いた。

「わかりました将軍。そのようにしましょう。まずは、休んでください」

俺の言葉に安心したように、老将軍はニコリと笑顔を見せ、そのままパタリと仰向けに倒れた。程なくして彼から大きなイビキが聞こえてくる。

「……まあ、あれだけ熟睡できれば、問題ないだろう。誰か、将軍をクノゲンの所まで運んでやってくれ」

兵士たちが迅速な動きで、老将軍を担架に乗せて、後方の部隊まで運んでいく。俺はため息をつきながら、前線の戦況に目を向けた。そこでは、司令官を失ったにもかかわらず、タナ軍を押し返そうとしているアガルタ軍の様子が目に飛び込んできた。

「うん？　タナ軍が引き始めているのか？　よし！　……だが、ここでは遠いな……。本陣を前線に移すぞ！　進め！」

一糸乱れぬ動きでリノスの本陣が前線に向かって動き出す。それを見たアガルタ軍の兵士たちの士気は上がり、タナ軍にさらなる攻撃を加えるのだった。

◆◆◆◆◆

「これ以上は攻められぬと申すのか！」

タナ王国国王であるヴィルは激怒していた。アガルタ軍の総司令官であるラファイエンスが戦死したという報告を聞いたが、にもかかわらず、前線の兵はそれ以上前進することをせず、それどころか、兵士たちは徐々に後退していく有様だった。

ヴィルは理解できなかった。すでに、敵軍の要である将を討ったのだ。あと一押しでアガルタ軍の正面は崩壊する。アガルタ王・リノスの首は、すぐ手の届くところにあるのだ。にもかかわらず、攻めることをしない将兵たちが、彼には理解できなかった。

「恐れながら、前線の兵士たちの間で、退却命令が下されている由にございます」

「何故だ！　我の命令以外は聞いてはならんと厳命しているはずではないか！　しかも、アガルタを攻めているのは、ホンシュとルミネであろうが！　奴らが……臆病風に吹かれたというのか！」

ヴィルは知らない。オワラ衆の一人が、そのホンシュの声色を真似て、兵士たちに退却命令を出していたことを。乱戦の中、兵士たちは周囲を見廻す余裕もなく、目の前のアガルタ兵と戦っていた。そこにきての、司令官からの退却命令……。彼らはそれに従って、ゆっくりと退却を始めたのだ。一方で、司令官であるホンシュ本人は、攻撃命令を出しているにもかかわらず退却してくる兵士たちを見て激怒し、再び大声で攻撃命令を出した。ここに来て、タナ側の兵士たちに混乱が生まれ、前線の部隊は大混乱になっていたのだ。

「陛下！　一旦兵を引き、軍勢を整えましょう！」

「何っ！　敵は寡兵！　あと一歩でアガルタ王の首が獲れるのだ！　攻めよ！　攻めるのじゃ！」

幕僚の一人であるタブーが、必死にヴィルに進言するが、彼は憤怒の形相で睨みつけ、攻撃命令を下す。だが彼はそんな主君に対して、噛んで含めるような言い回しで、説得を試みる。

「陛下、恐れながら、戦は数ではございません！　一に軍略、二に地の利、三に兵の士気でございます！　我らは地の利に乏しく、さらには、兵の士気も低下しております。ここは一旦お引きください！　軍勢を立て直せば、十分我らに勝機はございます！　軍神であらせられる陛下が、それをお分かりにならぬはずは、ありますまい

！」

「申し上げます！　サンダンジ軍が、こちらに向かって動き始めました！」

「申し上げます！　右翼に展開しておりました敵軍が、我が後方に回り込み、スワンプに突入する構えを見せております！」

「何とか食い止められぬのか！」

「恐れながら、陛下……」

「……全軍をスワンプに一旦転移させる。オクタ！　オクタはおらぬか！　オクタ！」

「恐れながら、どこにも姿が見当たりません！」

「何ィ！？　余から離れるなとあれほど申しておったに！」

「今は、軍勢を立て直すことが先決でございます。いたずらに将兵を消耗するのは……」

「もうよい！」

ヴィルは吐き捨てるように、タブーの言葉を遮った。彼は立ち上がり、指揮棒を真っ二つに折りながら、大声で命令を下す。

「タブー、全軍に告げよ！　敵を迎え撃ちながら後方へ陣を結集し、スワンプに退けと！」

彼は折った指揮棒を地面に叩きつけると、大股で愛馬の許に向かい、その背に跨った。

「オクタ……どこに行ったのじゃ……。余から離れるなと命じておったに……」

唇を噛みながら彼は、馬の尻に鞭を入れた。オクタさえいれば、十万の軍勢をすぐさま別の場所に移し、そのまま攻撃ができるのに……。彼は忸怩たる思いを胸に、近習と共に、本陣を離れた。

その頃、アガルタの都では、リノスの妻たちが、最大の危機を迎えようとしていた……。

第三百四十八話　ナイショの話

戦場を離れたオクタこと、妖狐・ヘイズは、真っ先にアガルタに転移していた。その場所は、ミーダイ国から避難してきた人々が住む結界村であり、彼が初めてリコレットと出会った場所だった。

あの日以来、彼は一日たりともリコレットのことを忘れたことはなかった。その思い人を今日こそ手に入れる。何としても……。彼はラトギスの杖を握り締めながら、自分自身に気合いを入れる。おそらく今回が、彼女を手に入れる最後のチャンスだろう。絶対に失敗することは許されなかった。

彼は気配を完全に消し、村の中に忍び込むと、リコレットを探してみたが、すでにそこには、多くの住人たちが笑顔を交わし合い、互いに色々と手助けをしている光景が目に入る。驚くべきは、ミーダイ国の貴族の子女たちが率先して動いていることだ。もはやそこは、彼が知っているミーダイ国の姿はなかった。

彼はしばらくその村を物色していたが、リコレットの姿を見つけることはできず、彼は村を出て、その足でアガルタの都に向かった。

小高い丘の上に転移したヘイズは、アガルタの都を守る城壁をまじまじと見つめる。おそらくあそこにリコレットはいるのだろう。だが、あの都には強力な結界が張られている。以前、サルファーテ女王を伴って都に入ったときは、入念な準備の末、完全に邪念を消していたためにラトギスの杖を使って転移することができたが。今はその時間がなく、邪念の塊と化しているヘイズの力では、あの結界にあえなく弾かれてしまうのは、目に見えていた。

「ただただ、純粋な愛なのだけれどね。でも、あの結界はそんな僕を受け入れようとはしない……」

彼はニヤリと笑みを浮かべながら、ラトギスの杖を振るう。すぐにまばゆい光が現れ、そこに二メートルを超えるドラゴンが三匹現れた。その様子を満足そうな表情でヘイズは眺めている。

「さあ、ようやくお前たちの出番が来た。せいぜい、暴れてくれよ」

そう言って彼はスッと人差し指をドラゴンたちに向けて振るう。その瞬間、その目に赤い光が宿り、グルルル～と声を上げ始めた。

「さあ行け！　命の限り暴れてこい！」

ヘイズはドラゴンたちの尻を次々と蹴り飛ばす。その直後、彼らは全力でアガルタの都に向けて突進していった。

「さて、次の準備にかかるか……」

ヘイズはクスリと笑みを浮かべながら杖を振るい、その姿を消した。

「……おい、あれは何だ？」

草原の彼方から何かがものすごい速さでこちらに向かっているのを、城壁の上で警備をしていた兵士が気付いた。彼はすぐさまアガルタ軍の本部に伝令を走らせる。だがそれらは、何かにとりつかれたかのように、一直線にアガルタの城壁に向かって来ている。

「な……ドラゴン？　槍？」

彼の目に移ったのは、中型のドラゴンだった。しかも、その先頭を走る一頭には、頭に生えた二本の角の先に、槍のようなものが取り付けられていた。ドラゴンは瞬く間に城壁に肉薄してきた。

パァーン！！

大きな風船が割れるような轟音が響き渡る。その衝撃のためか、突撃してきたドラゴンたちが仰向けに倒れながらバタバタと両手足を動かしている。程なくしてそれらはクルリと元の姿勢に戻り、そのまま城壁沿いを走り、西門の方角に向かっていった。

叫び声が聞こえたのは、しばらくしてからのことだった。何と、城壁に突撃してきたドラゴンが、西門から都の中に躍り込むようにして侵入したのだ。周囲の人々は吹き飛ばされ、ある者は城壁に体を打ち付けられて、大きなケガを負った。

「……そうか。ご苦労だった」

そう呟いているのは、マトカルだった。彼女は帝都にある屋敷の自室の窓から顔を出していた。そこにはパタパタと羽を動かしながら空に浮くフェアリードラゴンが、彼女に都の状況を報告していた。そこではドラゴンが暴れ、さらに、外では数百ものアンデッドが暴れながら西門の方向に向かっているのだという。警備兵たちはドラゴンを押さえるのに精いっぱいであり、アンデッドにまで対応しきれていないようだ。

「帰って、休んでくれ」

彼女は引き出しから干し肉を取り出して、フェアリードラゴンに差し出す。

「……どうした？　そんな申し訳なさそうな顔をするな。命じたのは私だ。お前は私の命令に従っただけだ。お前が責められることはない」

マトカルはフッと優しい笑みを浮かべる。それを見て、フェアリードラゴンはスッとその姿を消した。

「さて、支度をしようか……」

しばらくして、マトカルは鎧に身を包んで部屋を出た。廊下を歩きながら彼女は、リコ様たちには申し訳ないと思いながら、まずはアガルタの都の防衛をいかにするべきかを考えていた。もしかすると、リノスの張った結界が破られる可能性があるということは、彼女自身も承知していた。中型とはいえ、ドラゴンが都の中まで侵入しているのは、結界が破られたと考えていいだろう。さらに報告では数百に及ぶアンデッドが都を目指しているのだという。彼らは一体一体の力が極端に強い。従って、一対一の勝負になると抜群の強さを発揮する。それに対抗するためには、組織的に攻撃を加えねばならない。それができる将兵は今、リノスの許に行ってしまっているため、自分がやらねば、都に大きな被害が出るだろうと考えていた。

彼女は足音を消して離れの建物を出て、転移結界のある場所に向かう。そのとき、何か空気を切り裂くような音が聞こえた。そこには、庭でエリルが棒を持って素振りをしているところだった。確か、この時間は、アリリアたちとおままごとをして遊んでいる時間のはずだが……そんなことを考えながら、マトカルは足を止めた。

エリルはマトカルに背を向け、その存在には気づいていない。ただひたすら、一心不乱に棒を上段に構え、そこから一気に振り下ろす作業を繰り返している。

このまま通り過ぎることはできた。だが彼女は、エリルの背中を見て、どうしてもそこを動くことができなかった。

「違う」

マトカルの声に、エリルが驚いたような表情を浮かべながら振り返る。

「えっ？　マト……ちゃん？」

「エリル、剣は、右手で振るものではない。左で振るのだ」

そう言って彼女はエリルの許に近づき、その小さい手に握られている棒を静かに取り上げる。そして、ゆっくりと構えてスッと上段の構えを取り、そこから一気に振り下ろした。

「剣は、こうやって振るのだ。エリル、お前は筋がいい。まだ剣のことはわからないだろうが……剣が好きならば、帰ってきたら、教えてやろう」

「どこに……行くの？」

「ナイショだ。ママにも、内緒にしておいてくれ。すぐに戻ってくる」

そう言って彼女はエリルに棒を返し、スタスタと転移結界のある場所に向かった。エリルはその様子を呆然と見送った。

「エリル？　どこにいるのです？　エリル？」

母屋の方から自分を呼ぶ声がする。この声は、ママの声だ。

「まあ、ここに居たのですか、エリル。何をしていたの？」

棒を握り締めたまま、エリルは動けないでいる。そんな彼女に近づいて来たリコは、怪訝な表情を浮かべながら口を開く。

「何をしていましたの？」

「う……う……う……」

「……エリル？」

「マトちゃんが……」

「マトがどうかしましたの？」

「……何でもない」

「エリル！」

リコが真剣な表情を浮かべながら、エリルの前にしゃがみ込む。そして、彼女の目をじっと見つめる。しばらくすると、エリルの目から涙が溢れてくるのが見えた。

「マト……ちゃんが、鎧を着て……出かけて行きました」

「何ですって？」

リコは立ち上がると、母屋の方向を向いて大声で叫ぶ。

「ペーリス！　ペーリス！　子供たちのことを、頼みますわっ！」

慌てて勝手口から出てきたペーリスを見て、リコは小さく頷く。そして再びエリルの前にしゃがみ、優しく彼女を抱きしめた。

「お母様はすぐに戻ってきますわ。その間、妹と弟たちのことを、頼みますわね？」

「マ……ママ……」

リコはエリルから体を離し、再び彼女の目をじっと見つめる。

「できるかしら？」

エリルは涙を拭き、しゃくり上げながら、大きく頷いた。

「それでこそ、お姉ちゃんですわ。よく知らせてくれました。すぐに、マトを迎えに行って来ますわ」

そう言ってリコはにっこりと笑う。……初めて見る母の表情だった。いつもの厳しい母の顔ではなく、ゾッとするほど美しい笑顔だった。そのあまりの美しさに、エリルの体は震えた。

リコは立ち上がり、転移結界のある場所に向けて走り出した。その

後姿を見て、エリルの目には再び、涙が溢れだした……。

第三百四十九話　緊急案件

アガルタの都に突入してきた三匹のドラゴンは、西門の周囲の建物や周囲の人々に大きな被害を出しながら暴れ続けていた。

「くそっ！　攻撃が通らない！」

「あの硬い鱗のせいだ！」

そんなことを言いながら兵士たちは必死でドラゴンたちを食い止めている。その後方ではメイやローニたち医療研究所のスタッフが総出で、怪我をした人たちの治療に当たっていた。

「仕留めたぞ！」

兵士たちの歓声が上がる。どうやら、西門近くのアガルタ軍本部の付近まで侵入したドラゴンを仕留めたようだ。少し小柄ではあったが、それでもそれの持つ力は強く、兵士たちはケガ人を出しながらも、何とかこのドラゴンを討伐することに成功していたのだった。

「目だ！　ドラゴンの目を突け！」

そんな声が西門付近の兵士たちの間で駆けまわる。程なくして、もう一匹のドラゴンも討伐されたという知らせが届き、兵士たちの士気は上がる。だが、その後に届いた知らせに、兵士たちは愕然とする。

「何？　アンデッド？」

都の守備隊の指揮を任されているローウッドは、目を丸くして驚く。そして、忌々しそうに目の前で暴れるドラゴンを睨みながら、冷静に戦況を分析する。

「ドラゴンにアンデッド……。厄介だな。だが、幸か不幸か、同じ西側から攻めてきている。このドラゴンを倒し、その勢いを駆ってアンデッドと相対するか……」

そう呟くと彼は、兵士たちにこのドラゴンを十重二十重に取り巻いて、攻撃を集中させるよう命じるのだった。

「アンデッドですって？　しかも数千！？」

驚いた声を上げているのは、フェリスだった。彼女は驚いた表情を見せつつも、その手許では次から次へと正確な位置に書類にサインを行っていた。彼女は左目で伝令を見ながら、右目で書類の内容を確認するという離れ業をやってのけていた。ドラゴンの視野は広く、３６０℃を見渡せると言われているのだが、人化しているとはいえ、元々、ドラゴン族の中でも高位にあるクルルカンの彼女は、視野の広さも失われていない。それがために、彼女はこのような離れ業をいとも簡単にやってのけることができるのだった。

「恐れながら、フェリス様、ルアラ様におかれては、東地区にお下がりください。ここも危のうございます」

「いや、私たちも戦うわ……って、政策名間違っている！　不承認っと！」

驚く兵士を前に、フェリスは隣で微動だにせずに机に噛り付くルアラに声をかける。

「どう？　手は空きそう？　ってゆうか、空けてよね？」

その言葉を受けてルアラはしばらく沈黙していたが、やがて、イラつきを隠そうともせず、早口に返答を返す。

「わかっているわよ。……ああもう！　やっぱり税率間違っている！」

彼女はそんなことを言いながら、ペンで書類に記載された数字に二重線を引き、新たな数字を記入していく。ルアラはルアラで、抜群の暗算能力を活かして、アガルタ国の経理の一切を担っていた。彼女も、ポセイドン王の娘として、幼少の頃は海の中で育った。海は広いために、自分がポセイドン王宮の位置からどの方角に、どのくらいの距離を進んだのかを正確に計算しないと迷子になってしまう。そのために彼女は、幼い頃から徹底して暗算の訓練を受けてきたのだ。そのお蔭もあって現在では、たとえ１０桁の計算でも、わずか数秒で計算できる能力を持つに至っているのだ。

「ハイ！　終わった！　今年度の補正予算、終わりっ！」

そう言うとルアラは立ち上がり、コキコキと首を鳴らしながら、隣のフェリスに視線を向ける。

「お姉さま、行かないのですか？」

「ちょっと……待って……。承認……っと。ハイ、私も終わったわ。行きましょうか！」

フェリスは素早く立ち上がると、ルアラを伴って部屋を出ていく。
その後ろを兵士が戸惑いながらも付いて来る。彼女たちは当初はフェリスがドラゴンを討伐すると言っていたのだが、すでに兵士たちが総出で討伐に当っていることを聞いて、アンデッド討伐に加わることになっていた。

「あの……アンデッドには、ハーギ様とゼザ様も加勢くださるとのことですが……」

兵士の声を聞きながらフェリスは、不思議そうな表情を浮かべる。

「ハーギとゼザ？　あの二人、魔法は使えたかしら？」

「いえ、剣で立ち向かうつもりじゃないかしら」

ルアラの声に、フェリスは呆れた表情を浮かべる。

「バカじゃないの？　確実に死ぬわよ？」

「ですから、二人が到着する前に、私たちで片付けないと」

「そうね」

そんな会話を交わしながら、二人は足早に階段を上り、城壁の上に向かう。すると、そこからは、遥か彼方に草原を埋め尽くすアンデッドの姿が見えた。

「うわ～ものすごい数ね」

「お姉さま、早く片付けましょう。私、他にも仕事があるので」

「そうね。私も仕事がまだ終わっていないわ」

フェリスとルアラは、スルスルと腕まくりをして、グルグルと肩を廻し始めた。

「さて、緊急案件を片付けるわよ！　ウインドストーム！」

「仕事の後も仕事か……。何か、イヤになっちゃう。アイスバレット！」

城壁からアンデッドに向けて、凄まじい魔法が放たれ、目の前のアンデットたちが一瞬で消え失せた。だが、その後からアンデッドの大軍が再び現れる。二人は顔を見合わせて、ニヤリとした笑みを浮かべながら、魔法を打つタイミングを図るのだった。

一方、西門では最後のドラゴン討伐に手こずっていた。兵士たちは休みなく攻撃を繰り出していたが、ドラゴンはその硬い体表を駆使して、その攻撃を躱し続けていた。急所と思われる目を中心に攻撃を行うものの、ドラゴンはクルリと背中を向けて、尻尾で攻撃を繰り出し、兵士たちが近づくことを許さなかった。

守備隊隊長のローウッドの許には、すでにフェリスとルアラが城壁の上から、迫り来るアンデッドに攻撃を加えているという知らせは届いていた。加えて、ミーダイ国のハーギとゼザが加勢に向かっているという知らせが、つい先ほど届いたばかりだった。それだけに、彼は早くこのドラゴンを討伐して、外のアンデッド討伐に向かいたかった。

「ええい！　何をしている！　早く！　早く倒さんかぁ！」

「尻尾の付け根を狙え！」

突然背後から声が上がる。驚いたローウッドが振り返ると、そこには鎧を装備したマトカルの姿があった。

「ま……マトカル様……」

彼女はフッと優しい笑みを浮かべる。だが、その顔色は悪く、ローウッドは思わず息を呑んだ。

「全軍、散開！　三隊に散開せよ！　ドラゴンの前に二隊、残りは背後に回れ！」

マトカルのよく通る声が響き渡る。その声を受けて、兵士たちが一糸乱れぬ動きで三つの隊に分かれ、配置についた。その動きにドラゴンもキョトンとした表情を浮かべている。

「前衛の二隊、突け！」

目の前から槍の突きを繰り出されたドラゴンは素早く背中を向け、尻尾で攻撃を仕掛けようとする。だが、背後に展開した一隊がマトカルの命令ですぐさま槍を繰り出してくる。

「ゴアァァッ！」

周囲を槍で囲まれたドラゴンが後ろ足で立ち上がる。その瞬間、マトカルの指示が飛んだ。

「尻尾の付け根を突け！」

ドラゴンの後方の部隊から槍が繰り出される。その槍はいとも簡単にドラゴンの体に突き刺さった。

「ゴギャァァァ！」

仰け反るようにしてドラゴンが倒れる。ちょうど腹を出した状態で倒れているのを見て、マトカルは素早く指示を出す。

「今だ！　腹を突け！」

体勢を立て直そうとするドラゴンの腹に槍が次々と突き立てられていく。程なくしてドラゴンは動きをピタリと止め、やがて、その目から光が失われていった。その様子を傍で見ていたローウッドは、無言のままマトカルに向かって一礼をした。

「いい、ローウッド。よくやってくれた」

彼女は優しい笑みを湛えながら、彼に言葉をかける。そしてすぐに兵士たちに視線を向け、さらに指示を与えた。

「全軍、整列せよ！　ドラゴン討伐の仕事の後だが、もう一仕事だ！　すぐに外のアンデッド討伐に向かう！　馬を曳け！」

「マトカル様！　お体が！」

「大丈夫だ。心配するな、ローウッド」

彼女は手を挙げて、止めに入ろうとするローウッドを止める。そのとき、背後から男の叫び声に似た声が耳に入った。

「コイツだ！　コイツが、俺の母親を殺しやがったんだ！　コイツがあのときのラマロン軍の司令官だ！」

マトカルはゆっくりと声のする方向に振り返る。そこには、予想もしていない、驚愕の光景が広がっていた……。

第三百五十話　絶叫

「人殺しだ！　コイツは人殺しだ！　コイツが俺の母親を殺したんだ！」

少し離れた場所で、一人の男がマトカルを指さしながら、狂ったように叫んでいる。ローウッドは男を窘めようと歩き出すが、マトカルはそれを止め、放っておけと言わんばかりにゆっくりと首を振る。

男はなおも叫び続けている。その声に、何事かと思った民衆が徐々に集まってくる。彼らは遠巻きにその男の姿を見ていたが、やがて、数人の男女が進み出てきて、先程の男と同じようにマトカルを指さして大声で叫び始めた。

「アイツだ！　ジュカ時代にこの都の人々を殺しつくしたラマロン軍の司令官だ！」

「お前たちのせいで私の両親は殺されたわ！　返して！　父と母を返して！」

「人殺し！　人殺し！」

その声に引き寄せられる形で群衆は見る間に増えていく。その上、集まった群衆がざわめき始めていた。

「マ……マトカル様」

「放っておけ。我々の敵は外のアンデッドだ」

そう言い捨てて、マトカルは自分の許に曳かれてきた愛馬の上にひらりと跨った。その瞬間、マトカルの顔に何かが当たった。

「……ッ」

ふと見ると、足元にグチャグチャに潰れたトマトのような果実が見えた。どうやらこれが顔に当たったらしい。それが契機となったのか、群衆の中からマトカルをめがけて、石など色々なものが投げ込まれてきた。

ローウッドをはじめとする兵士たちは、どうしてよいのかが分からずに、その場に立ち尽くしてしまっている。だが、その兵士たちをマトカルが一喝する。

「放っておけ！　今、我々がやらねばならぬことは、アンデッドの討伐だ！　このアガルタの都を守ることだ！　その気のない者はここに居て構わん！　都を守る気のある者は、私に続け！」

マトカルはそう言って民衆たちに背を向け、ゆっくりと馬を西門へと進めた。兵士たちは顔を見合わせていたが、やがて一人、また一人とマトカルの後を追い、やがて全員が整列して彼女の後に続いた。

民衆はなおも騒ぎ続けている。相変わらず、マトカルたちには石などが投げ込まれている。だが、兵士たちはそれに全く狼狽えることなく、整然と行進している。そのあまりに統率の取れた行動に、民衆たちは息を呑んだ。

マトカルたちが隊列を組んだまま西門を潜ろうとしたそのとき、マトカルの名を呼ぶ声が響き渡った。

「マト！　おやめなさい！　今すぐ屋敷に帰るのです！　マト！　マト！」

声の主は、ヒーデータ帝国の屋敷にいるはずのリコレットだった。彼女は西門のすぐそばの城壁の上で、必死で声を上げていた。マトカルは馬上でその姿を確認すると、一瞬、目を見開いて驚いたが、やがてフッと笑みを漏らす。そして、右手を挙げ、心配ないという素振りを示した。

「マト！　お腹に赤ちゃんがいるのです！　今すぐ屋敷に帰るのです！　子供に何かあったら、どうするのです！」

リコが必死で叫んでいるが、マトカルは微笑みを湛えたままゆっくりと首を振る。そして右手を自分の腹に当て、ゆっくりと撫でながら小さな声で呟く。

「すまんな……。でも、ありがとう……」

彼女は一瞬だけ、悲しみをこらえる表情を浮かべたが、やがていつもの表情に戻り、後ろに従う兵士たちに向けて大声で命令を下した。

「これよりアンデッドを討伐する！　私に続け！」

マトカルは馬に鞭を入れ、勢いよく馬を走らせる。そして、その後ろを兵士たちが従って行った。

「マト！　おやめなさい！　子供が流れてしまいますわ！　マト！　マト！」

リコの叫び声が、少しずつマトカルの耳から遠ざかっていった。

一方、妖狐・ヘイズは群衆の中にいた。彼は魔法で、事前に送り込んだ人間たちの意識を操りながら、マトカルに対して憎しみを強めるよう扇動していた。だが、彼の力をもってしても、民衆はなかなか扇動されることはなく、暴れているのは、彼が送り込んだ人々のみだった。当初の計画では、都の人々を扇動して大混乱を引き起こし、その隙に女神（リコレット）を攫おうとしていたのだ。今回は途中までは、予想外とも言える程の出来栄えだった。何と、出てこないと踏んでいたマトカルが現れた。彼は民衆を使ってマトカルを襲わせ、その息の根を止めようとした。だが、大多数の民衆は動かず、その計画は躓きを見せていたのだった。

彼の魔力をもってすれば、数千の民衆を扇動することは可能だった。だが彼は、リコレットを手に入れるために万全を期したいと考えていた。相手は自分の計画を何度も潰してきたアガルタ王・リノス。いつも予想外の行動を取る彼のことだ。今回も何があるのかが分からない。最悪の状況を想定するならば、いたずらに魔力を使うことは避けたかった。

だが、その扇動が功を奏したのか、マトカルが出発しようとしたそのとき、彼の耳に、忘れようにも忘れられないあの声が聞こえてきた。

「……ついに見つけたぞ、僕の女神（リコレット）！」

彼は素早く群衆から離れると、懐からラトギスの杖を取り出し、地面に向けた。

「マト……マト……」

リコはマトカルが去った方角をじっと見つめていた。彼女は、西側の城壁から放たれている魔法に当たらないように、一旦北の方角に移動しているようだった。それでも、彼女を見つけたアンデッドの一部が、わらわらと向かっている。軍勢は襲ってきたアンデッドを斬り伏せているのか、一切スピードを落とすことなく、進軍を続けている。

何とか彼女を止めなければ……。だが、今の自分には足がない。そのときふと、彼女の頭に閃くものがあった。

「ローニ……ローニに頼めば……」

ポーセハイは相手の魔力を辿って転移することができる。マトカルとも何度も接しているローニならば、彼女の魔力を辿ってそこに転移することはできるだろう。そう考えた彼女は、ローニに向けて念話を送ろうとした。だが、その瞬間に、彼女の呼吸が止まった。

「リコレット」

突然自分の名を呼ばれ、思わず振り返った先には、何と、妖狐・ヘイズの姿があったのだ。

「やっと会えたね。会いたかったよ」

彼は優しそうな笑みを湛えながら口を開いている。だが、その体中から発せられるただならぬ雰囲気に、リコは無意識のうちに体を震わせた。ヘイズはそんな彼女にスッと近づき、右手を彼女のあごの

下に添える。

「……やはり、美しい」

その言葉に、リコは顔をそむける。

「あっ！　オクタ！」

ヘイズの背後で女性の声が聞こえた。彼は忌々しそうに振り返ると、そこには、二人の女性が立っていた。彼にはその二人に見覚えがあった。

「ハーギ？　もう一人は……まさかゼザか？」

二人とはミーダイ国の一件以来会っていなかったが、ハーギの姿はそのときと変わりはなかったが、ゼザは著しく成長して、女性としての色気を放っていたのだ。

「ほう、あのゼザが……変われば変わるものだな」

妙に感心する彼に、ハーギは素早く剣を抜き、斬りかかってきた。

「ふんっ！」

まるで虫を払いのけるように右手を払うと、ハーギが無言のままゆっくりと崩れ落ちた。その様子にゼザは目を丸くして驚いている。

「ゼザ、お前もか？　だが、あいにくと私は、お前の相手をしている暇はない」

その言葉を聞くや、ゼザはフッと息を吸い込んだ。

「こっ、こんなところで～お前に会うとはな～♪　ひっひっひーさまのぉ～♪　仇であるお前だぁ～♪　この私がぁ～この私がぁ～何としてもぉ～♪　お前を～お前を～討ち果たすぅ～♪」

「え？」

ゼザの振る舞いがヘイズには理解ができなかった。ゼザと言えば、焦り出すと言葉が擬音だらけになり、何を言っているのかが分からない女だったのだが、今、目の前にいるゼザは、まるで踊り子のように歌を歌っている。この全く予想していなかった展開に、ヘイズは一瞬混乱した。その彼の様子を見て、ゼザはさらに口を開く。

「私のぉ～心はぁ～歌で～歌で伝えるのだ～♪　Ｏｈ　Ｙｅａｒ！　目の前にいる敵ぃ、アタシの仇ぃ、今流行りの正義を振りかざす場合じゃねぇぜイエスっ！　正直者の正義依存症アタマ割りなよジーザス！　まき散らした怒りはヤツの命を奪うだろう！」

「ふんっ！」

ゼザがラップのような歌い終わらないうちに、ヘイズの杖が振り下ろされ、その瞬間にゼザの姿が消えた。

「さあ、これで邪魔者はいなくなった。来るんだ、僕の女神（リコレット）！」

リコに振り返った彼の顔には、赤黒い筋隈が浮かんでいた。

第三百五十一話　一念通天

「ちっ……近づかないで……」

リコはゆっくりと後ずさりをしていたが、やがて背中に城壁が当たり、退路を断たれてしまった。それを見たヘイズはニヤリとした笑みを浮かべながら、ラトギスの杖を振るう。

「……うん？」

リコを転移させようとしたものの、彼女の姿は残ったままだ。彼は訝りながら彼女の様子を窺う。

「い……いやっ！」

ヘイズは素早くリコに近づき、彼女が胸の前で合わせている手を取った。すると、左手の薬指にキラリと光る指輪が嵌められていることに気が付いた。

「これは……プリルの石か？　へぇ、考えたね。さすがはアガルタ王だね。だが、僕には無意味だ」

「やっ……」

彼は左腕をリコの体に廻して抱きしめる。そして、鼻をその頭に近づけて、思いっきり吸い込んだ。

「……いい香りだ。この香りも、今日から僕のものだ」

そう言って彼は、右手に持っている杖を振るう。

リコは心の中でもう一度夫の名を呼ぼうとした。だが、願いも空しく、彼女の姿はヘイズと共にその場から消え失せた。

◆　◆　◆

……ノス……リノス。

「うん？」

俺に耳に一瞬、リコの声が聞こえた気がした。その瞬間、俺は隣に控えているイッカクに視線を向けた。

「しばらく留守にする。兵たちが深追いするようなら、退却命令を出せ。……あそこの森から先は兵を進めるな。逆に、タナ軍が盛り返してきて、カコナ川を越えてくるようであれば、速やかに陣をクノゲンの所まで退却させろ」

俺は早口で彼にまくしたてる。イッカクはその様子に、目を見開いて驚いている。

「……我に将器なし」

「別に指揮を執れと言っているわけじゃない。タナ軍を退却させた声色師がいるだろう。俺の声色は真似られないか？」

「……可能」

「頼むぞ。すぐに戻る」

そう言って俺は、背格好がよく似ている伝令の一人を呼び、被っている兜を脱いだ。

「いかがなさいました？」

「この兜をかぶって、イリモに乗ってくれ」

「は？」

「大将がいるといないでは、兵士の士気にかかわるだろう。嘘でも俺がいると思わせた方がいいんだ。説明している暇はない。早くしてくれ」

戸惑う兵士に無理やり兜を預けてそれを被らせる。そして俺はイリモから降り、彼女に声をかける。

「イリモ、頼むな」

彼女はわかりましたと嘶く。

「さ、乗れ。早く」

恐る恐るイリモに跨る兵士の様子を見ながら、俺は背中のマントを取り外して、それをすっぽりと頭からかぶる。その瞬間に、俺は転移結界を発動させて、戦場を後にしていた。

「……」

帝都の屋敷では、エリルが一人、母親が向かった転移結界の方向をじっと見据えていた。屋敷に入るよう優しく促すペーリスやゴン、そして妹のアリリアの言葉も聞かず、ただただ、転移結界の方向を見つめ続けた。

……もうすぐママが帰ってくる。……もうすぐママが帰ってくる。

彼女は祈るような気持ちで母親の帰りを待ち続けていた。もし、自分が屋敷に入ってしまったら、二度とママに会えない……そんな気がしていたのだ。

その願いが天に通じたのか、彼女の目の前に、思ってもみない人物が現れた。

「おとうさん！　おとうさん！」

彼女の目の前に現れたのは、父であるリノスだった。彼女は全力で父の許に走り、その胸に飛び込む。

「ママが……ママが……」

「ママがどうした！？」

「行っちゃった……行っちゃいました……」

彼女の目から再び涙が次々に溢れ出してくる。彼女は必死で父に訴えかけているが、パニックに陥っているのか、涙声のためなのか、その話には要領を得ない。

「エリル……」

リノスは優しい眼差しを浮かべて、彼女の頭に手を置き、静かに目を閉じた。一瞬の間だったが、二人の間に静寂な空気が流れる。

「エリル……」

父は再び彼女の名前を呼びながら、ゆっくりと目を開けた。そして、いつもの優しい表情を浮かべながら、彼女の頭を撫でた。

「お前は優しい子だな。偉い。偉いぞ、さすがはお姉ちゃんだ」

「うっ……うっ……うっ……おとうさぁぁぁん」

堪えていたものが爆発したように、エリルは号泣する。そんな彼女の頭をやさしく撫でながら、父親は声をかけた。

「じゃあエリル。とうたんは、ママを迎えに行ってくる。お留守番をお願いしても、いいかな？」

「うっ……うん」

しゃくり上げながらエリルは返事を返す。それを見たリノスは、満面の笑みを浮かべて頷いた。そして、これまで見たこともないような厳しい表情を見せたかと思うと、目を閉じてゆっくりと息を吐き出した。

「ふっ……ふぅぅぅぅ」

父の体が震えている。小刻みだが、地面が揺れている気がする。エ

リルはこれまで見たこともないような父の雰囲気に息を呑んだ。

一体、どのくらいの時間が経ったのか。実際は短い時間だったが、二人の間に静寂が訪れる。

「……捉えた」

リノスが小さく呟いた瞬間、その姿は消え失せていた。エリルは誰も居なくなった庭を見つめながら、両手を握り締め、父と母が帰ってくるまでここで待とうと決意するのだった。

……幼い彼女の瞳から、再び涙が溢れだした。

同じ頃、リコはベッドの上に放り投げられていた。

「キャッ！」

小さな叫び声を上げると同時に、彼女の体の上に、何かが覆いかぶさってきた。言うまでもなくそれは妖狐・ヘイズだった。彼はすでに上着を脱いだ状態で、まぶしいくらいの白い肌を晒している。彼はリコの体に馬乗りになる形で覆いかぶさり、彼女の服に手をかけて、無造作にそれを破いて剥ぎ取ろうとする。

「イヤッ！　イヤッ！」

必死の叫び声を上げながら、リコは手で自分の胸を隠す。かなり丈夫な生地を使って作られたドレスだが、ヘイズはそれをものともせずに引き裂いて、上半身の服が開けられた状態になってしまっていた。

これ以上は何としても……。リコがそう考えたとき、彼女の耳に、まるで狂ったかのような女性の笑い声が聞こえてきた。

「キャヤハハハー。ヘイズぅ、そうやって乱暴にするのは、久しぶりじゃな。妾のときみたいじゃ」

「うるさい！　ミーク、お前は外に出ていろ！」

「よいではないか。お前が心を奪われた女を、ようやく手に入れるのじゃ。妾も見たいぞよ」

「勝手にしろ」

ヘイズは左手を彼女の頭に手を廻し、余った右手で、リコのスカートの中に乱暴に手を入れて、その下着を剥ぎ取ろうとした。

「くっ……」

ヘイズが思わず声を上げる。何とリコがヘイズの腕に噛みついていたのだ。その様子を、ミークも驚きの表情で眺めている。

「はあ、はあ、はあ……」

しばらくすると、リコの荒い声が部屋の中に響き渡る。その様子を見ながらヘイズは、一切の感情を感じさせない声で、リコに声をかける。

「どうした？　もっと噛めよ」

「……お願い。主人の、主人の許に帰して」

「そいつは、できないね」

彼は赤い筋隈を浮かべたまま、不気味な笑みを浮かべる。

「君の気が済むまで噛んで構わないよ。何なら、引っ掻いても構わない。殴っても構わないよ。ただし、君は僕のものにする。僕だけの女にする。イヤなら、いくら噛んでも、構わない。……どうだい？　もっと噛むかい？」

リコは肩を激しく動かしながら、力なく首を振る。彼女はじっとヘイズの目を見つめていたが、やがて視線を逸らし、そのまま顔を背けた。

「聞き分けて、くれたみたいだね」

ヘイズはニヤリと笑みを浮かべながら、一旦リコから体を離すと、一糸まとわぬ姿となった。そして、再びリコの体に覆いかぶさると、彼女の服を乱暴に引き裂いていった。

ヘイズの欲望の塊が、リコの体に突き立てられたのは、その直後のことだった……。

第三百五十一話　一念通天（後書き）

長くなりますので、二話に分けます。次話も合わせてご覧ください。

第三百五十二話　敗北

「なっ！　ぐっ！　……何だ！」

突然ヘイズの声が上がる。彼は戸惑った表情を浮かべながら、体を左右に動かそうとするが、その体はピクリとも動かない。

目の前にいる女神（リコレット）は、目を閉じて美しい顔を背けたままだ。ようやく思いを遂げることができた。これからお楽しみの時間なのに、その体が動かない。彼の欲望の塊が、ガッチリと固定された状態になっているようだ。

「……間に合った。よかった」

突然、男の声が耳に入る。驚いたヘイズは声のする方向に、必死に目を動かす。するとそこには、アガルタ王・リノスの姿があった。

「なっ……なぜ!?　何故貴様が……」

思わず彼は胸の下にいるはずのリコレットに視線を移す。だが、そこには彼女の姿はなかった。慌ててその姿を探すと、何と彼女はリノスの足元で足を投げ出して座っていた。破れた服でその胸を必死で隠しながら、ハアハアと肩で息をしている。

「いっ……いつの間に……。僕の物になったはずじゃなかったのか！　何だ、これは……」

ヘイズは必死で体を動かそうとしている。時おり、その体がぼんや

りと光っていて、何かの魔法を使っている様子がうかがえるが、その効果が表れている様子はなく、何をどうやっても、彼の体は動かない。

「何をした！　この僕に、何をしたんだ！」

憎しみを込めた凄まじいその表情に、リコは恐れおののいているが、リノスは平然とした表情を浮かべている。

「ミーク！　ミーク！　ミーク！」

彼は必死でミークの名を呼ぶが、返答はない。つい先ほどまで、自分とリコレットの逢瀬を見物していたのだ。すぐ近くにいるはずなのだ。

「あの、エルフの姫なら、眠ってもらっている」

不意にリノスの声が聞こえた。彼は再び憎しみを込めた目で、仇敵ともいえる男の顔を凝視する。

「危なかったな。あと少し遅れていたら、俺はまた、大魔王になっていたかもしれん」

そう言ってリノスは片膝をついて、右手でリコレットの肩を抱いた。彼女はそれを待っていたかのように、夫の胸に顔をうずめた。

「リノス……リノス……」

「ああ、怖かったね。怖かったね、リコ。もう、大丈夫だからな」

「ううう……リノス……」

これまでの緊張と恐怖から解放されたためなのか、リコはリノスの胸の中でさめざめと泣いた。その肩をリノスはやさしく撫で続けた。

リコが落ち着くのを待って俺は、ゆっくりとヘイズに声をかける。

「さて、妖狐・ヘイズ。あまり時間もない。お前をこれから、おひいさまの許に連れて行く」

「……」

相変わらずものすごい形相でヤツは俺を睨みつけてくる。

「まず、僕の質問に答えろ！　一体、僕に何をした！」

「簡単だ。結界を張ったのだ」

「結界？　バカな！　僕に結界を張るなどできるはずは……」

「あの戦場で魔法が使えないようにしていたのに……ってか？　影響がなかったと言えば嘘になるが、俺の魔力を完全に封じることはできなかったな。それに、お前、自分の姿を見て見ろ。フルチンだろうが」

彼はその言葉に、ハッとした表情を浮かべる。そして、オロオロと四つん這いの状態のまま、目を激しく動かしている。

「一か八かだったんだがな。お前が全裸でいたから、直感的にいけ

るんじゃないかと踏んで結界を張ってみたが、上手くいったな。戦場では苦労したが、ここでは問題なく魔法が使えた。お蔭で、結界師として、最高傑作のものが張れた」

俺は無表情のまま、大きく頷く。自分でも恐ろしく思うほどに、頭の中は冷静だった。それどころか、この妖狐の一挙手一投足を丁寧に観察しようとしているのだ。

今のヘイズは、何のアイテムも持っていない状態だ。それなりに魔力も高く、使える魔法も多いが、今、ヤツに張っている結界はＬＶ５だ。その体にピタリと合うように仕上げているので、身動きすることすらできないはずだ。この結界を破れるのは、魔吸石かプリルの石ぐらいのものだ。しかも、魔吸石を使うと、結界が消えた瞬間にヘイズの魔力も吸い取られる。俺はゆっくりとリコから体を離し、彼のベッドに向かう。そして、その傍に二本の杖が乱雑に置かれているのを見つけた。

「道具ってのは、大切に使わないとな。いざっていうときに、道具に見放されるんだよ」

「……くっ、それは、僕のだ！　触るなっ！」

ヘイズは絶叫しているが、俺はそれを完全に無視して、二本の杖を無限収納の中に入れた。その瞬間、ヘイズは大声で叫び声を上げた。

「ぬぅあぁぁぁぁぁ！！　どうして！　僕の計画は完璧だった！　なのに、何故、貴様がぁぁぁ！　どうやってここに来たぁ！」

まるで狂ったように叫ぶヘイズ。俺はあまりのことに絶句してしまい、言葉を失う。彼はゼイゼイと激しい息遣いをしながら、俺を睨

みつけている。

「話は簡単だ。リコの魔力を辿ってきたんだよ」

「何だと？」

「ポーセハイの転移術をヒントにしたんだ。これも咄嗟のことだったんだけれどもな。リコの行方が分からなかったから、その魔力を探したんだ。ちょっと苦労したが、ほんのわずかだが、リコの魔力を感じることができた。そこに転移したら、ここに着いたというわけだ。お前が全裸になってリコを襲う寸前のところだったから、危なかった。お前に結界を張ると同時にリコにも結界を張って、すぐ俺の側に転移させた。あ、ちなみに、お前がモノにしたと思っていたのは、俺が見せた幻影だ」

ヘイズは俺に向けている眼をリコに向けた。彼女は一瞬、ビクッと体を震わせたが、やがて俺に視線を向け、大きく頷いた。俺はリコの側に行って再び膝をつき、彼女の肩を優しく抱いた。

「ずっと……ずっと、心の中でリノスの名前を呼んでいましたの……。ゼザが……ゼザが歌を歌っている間に……必死に……」

「ああ、きっと無意識のうちに念話を飛ばしていたんだな。大丈夫、それはちゃんと届いたよ。戦場でリコの声を聞いたんだ。慌てて屋敷に転移したら、エリルがいてな。ママが行ってしまったと言って泣いていた。あの子を鑑定して見たら、リコとマトが出ていく記憶が見えてな。その瞬間、リコの魔力を必死で探ったんだ」

「リノス……」

リコがものすごい力で、俺の腕に絡みついてくる。

「ふっ、ふざけるな……」

ヘイズが顔を歪ませながら呟いている。

「リコレットの魔力を辿っただと？　あり得ない……この結界に守られたこの地で、彼女の魔力が外に漏れるなど……。たとえそうであったとしても、世界の果てにいるお前などに、そんな微弱な魔力が捕らえられてたまるか……」

「もちろん、苦労はしたさ。何てったって、この世界のすべてに俺の魔力を行き渡らせたんだ。お蔭で膨大な魔力を消費してしまったよ。だが、その魔力も、もう回復した」

俺はスッと鎧に触れる。メイとシディーたちが心血を注いだだけあって、実に優秀な鎧だ。

ヘイズは俺の言葉が信じられないらしい。呆然とした表情で、喘ぐように口を開く。

「世界すべてに魔力を……？　貴様いったい……」

「俺のことはどうでもいい。ヘイズよ、お前はこれから一緒に来てもらうぞ？　その一糸まとわぬ姿で、おひいさまの前に出るといい」

「リノス、待って」

突然リコが話しかけてきた。俺は驚きながら、彼女の表情を見る。

リコは胸を押さえながら、ゆっくりと立ち上がって、ヘイズの顔を

じっと見つめる。

「あなたに、一つ、聞きたいことがあるのですわ」

その言葉に、ヘイズは赤く濁った眼をリコに向ける。

「サツキさんのことは、サツキさんのことは、どう思っていらしたの？」

リコの質問が、全く予想していなかったのか、彼はキョトンとした表情を浮かべたかと思うと、プッと噴き出し、呆れたような口調で返答した。

「サツキ？　どうでもいい、あんな女は。僕はリコレット、お前だけが……」

「お黙りなさいっ！」

リコの絶叫が部屋の中に響き渡る。さすがのヘイズも、目を見開いて驚いている。

「何と言うことを……。サツキさんは、命をかけてあなたを愛していたのですわ。それを、どうでもいいなんて……。あなたのために、命まで投げだした人を……」

「女は……女はバカだからね。サツキはその中でも特別にバカだった。物覚えの悪い女で、僕を一度も満足させることができなかったんだ。そんなヤツが少しとはいえ、僕の役に立ったんだ。喜ぶべきだろう？　それに、バカ女の一人や二人がいなくなったところで、世界は痛くも痒くもないだろう」

「ゆっ……許せない……」

「リコ、そこまでだ」

「リノス！」

「リコがこれ以上、ヤツに怒りを向けるべきではない。時間の無駄だ。それよりもリコには、やるべきことがある」

「でもッ……」

「エリルが、屋敷で待っている。リコの帰りを庭に出たままずっと、待ち続けているんだ。早く帰ってやってくれ。それにマトのことも……」

「それでもリノス、この男だけは許せませんわ！　何としても……！」

俺は無言でリコを抱きしめた。彼女の肩が上下している。どのくらいの時間、俺はリコを抱きしめていただろうか。実際はそんなに長い時間ではなかったと思うが、俺は彼女の呼吸が落ち着くまで抱き締め続けた。そして俺は、ゆっくりと彼女から体を離す。

「わかるな、リコ？」

リコは俺の目をじっと見つめながら、ゆっくりと頷いた。

俺はリコの目を見つめ続けたまま、無言で彼女を帝都の屋敷に転移させた。リコはその姿が消える最後の最後まで俺から目を離さなか

った。

リコの姿が消えたことを確認した俺は、再びヘイズの許に近づいて、落ち着いた声でヤツに話しかけた。

「さて、妖狐・ヘイズ。お前をおひいさまに引き渡そうと思ったが、どうやらお前は芯から腐っているようだな。お前には、キツイお仕置きが必要のようだ」

「お仕置き？　やってみるがいい！　望むところだ！」

その言葉に、俺はゆっくりと立ち上がった……。

第三百五十三話　大魔王のお仕置き

俺は小さなため息をついていた。たった今、念話でおひいさまと連絡を取ったのだ。

彼女は、ヘイズを生きたまま連れてこいとは言わなかった。その首だけを持って来てくれればよいと言ったのだ。

ヘイズは顔をゆがませながらも、笑みを浮かべているように見える。すでに覚悟を決めたのか、それとも、自分は殺されない絶対の自信があるのか、ヤツの心の中は読めない。だが、これだけは言えるが、この妖狐は生かしておけば、未来永劫、リコのことを狙い続けるだろう。下手をすると、リコ以外の、メイやシディー、ソレイユにも手を出しかねない。

一瞬だけ、この男の矯正も考えてはみたが、すぐにそれは諦めた。コイツはすでにおひいさまに一度、命を助けられている。自分の振る舞いが原因で命が危機にさらされる経験も何度もあっただろう。にもかかわらず、その考えは全く変わらなかったし、自分の欲望の赴くままに行動してきている。詳しく鑑定していないので全てはわからないが、おそらくかなり多くの人々を不幸にしてきたことは、容易に想像がつく。

「……なあ、一つ、僕と取引をしないか？」

不意にヘイズが話しかけてくる。先ほどの強気の姿勢とは打って変わって、弱気な姿勢を見せている。

「どうした？　今になって、命乞いか？」

「ああ。やっぱり、命が惜しくなった。どうだろう？　僕を助けてくれたら、君の望むものを何でも与えようじゃないか。金でも、女でも、地位でも……。僕の力は知っているだろう？　どうだ？」

「あいにくと、そのどれもに興味はないな」

「そうか。だが、これだけは約束しよう。もう二度と君の家族は襲わない。二度と他の女性にも手を出さない。僕はミークと二人、人知れずひっそりと生きていくことにする。僕の持っているアイテムはすべて君にあげよう。僕はこの裸のまま、ミークと共に、ここを出ようじゃないか。行先は君が決めてもらって構わない。どうだ？」

「あの、エルフの姫がどうやらお気に入りのようだな」

「もちろんさ。あれは僕が心から愛した女だ。僕の好みに育てた女だ。手放したくはない」

「そんな愛する女がいて、どうしてリコに手を出そうとしたんだ？」

「ミークは僕の好みに育てていく楽しみがいのある女だった。だが、リコレットは、僕の理想とする女だったのだ。あの髪の色、顔立ち、体つき、声……どれもが僕の好みだったのだ」

「何だ、外見だけか？」

「中身など、関係ないだろう。僕のモノにしてしまえば、女などどれも同じだ。僕の好むように変えていくだけさ。愛なんてものは、そのうち生まれるんだ。それに、人妻というのがよかった……。夫

から無理やり奪い取って、その心と体を蹂躙する……。あと一歩だった……あと一歩……」

「……大馬鹿野郎が」

俺はヘドを吐きたくなる感情を胸に秘めながら、ゆっくりと部屋を見廻す。すると、ロフトのようになったところで、長い耳をした、エルフの少女がぐったりとしている姿が目に入った。

「……よっと」

俺はその少女を抱えて、ヘイズがいるベッドの傍の椅子に座らせる。そして、彼女に結界を張って自由を奪い、それから、彼女を覚醒させる。

「なっ、何じゃぁぁ！　体が動かん！　体が動かんではないかぁぁぁ！　うぎゃぁ～！」

およそ姫とは思えない振る舞いで、彼女は奇声を上げながら、動かない体を動かそうとして、じたばたと暴れている。その様子を見ながら俺は、呆れたような口調でヘイズに話しかけた。

「まるで、獣のようだ」

「なっ、何をする気だ？」

ヘイズは顔を歪めながら、俺を凝視している。そんなヤツに俺はさらに言葉を続ける。

「ひとつ、賭けをしよう」

「賭け？」

「お前、このエルフの姫に愛されている自信はあるのか？」

「もちろんだ。ミークは僕のためなら、喜んで死ぬだろう」

「わかった。では、お前がこの姫に愛されていると証明されれば、お前の望み通り、二人で余生を送ることを許そうじゃないか」

その言葉を聞いたヘイズの顔が、イヤらしく歪み、下卑た笑みを浮かべている。どうやら、自分はエルフの姫に愛されているという絶対の自信があるようだ。

俺はゆっくりと、叫び続け、暴れ続けているミークの前に立ち、その頭に掌を載せた。

「ううっ……はぁぁっ……うわぁぁぁっ……はぁぁぁ……」

しばらくすると、これまで暴れていた表情とは打って変わって、ミークは恍惚の表情を浮かべる。目がトロンとなり、口が半開きになっている。その表情を見たヘイズは、驚きの声を上げる。

「なっ……何をしているんだ！」

「精神魔法で、この子の精神を操っているのだ。今、この子に極上の快楽を与えているところだ」

「何だと？」

「俺は、お前とこの姫が、愛情でつながっているとは到底、思えないのだ。お前たちが繋がっているのは、快楽だ。愛情で繋がっているのならば、引き裂くことは難しいが、快楽とならば話は別だ。それまで以上の快楽を与えてやればいい。俺が賭けをしようと言ったのは、この点だ。お前が本当にこの姫に愛されているのならば、お前は生き残ることができるはずだ。……我ながら残酷なお仕置きを考えたものだと思うよ。本来は、こんなことを考える男ではないのだけれどな？　まあ、一応、その昔に大魔王だった時期もあったから、それが今でも影響しているのかもしれないな？」

「大魔王!？　貴様、まさか……」

「黙って見ていろ」

俺はヘイズの問いかけには答えず、ゆっくりとミークから手を離す。しばらくすると、彼女は狼狽えたような表情になり、必死で俺に懇願する。

「やっ、何で止めるのじゃ？　やめないで欲しいのじゃ。もっと、もっと欲しいのじゃ。お願いじゃ。さっきのをもっと……もっとなのじゃ」

「そうか、いいぞ」

「はっ、早くするのじゃ。早くぅ、早くぅ」

「もう一度して欲しいのならば、あの男を、殺せ」

俺は彼女の結界を解除してやり、懐からロープを取り出して、その小さな手に渡す。彼女は脱兎の如くヘイズのベッドに向かって走っ

ていく。そして、四つん這いになっている彼の背に跨り、ロープを首に巻き付けた。それを見た俺は、ヘイズの首のまわりの結界を解除する。

「ぐっ……ぐあぁぁ……や……止めろ……ミーク……ミーク……」

ミークは一切の迷いを見せず、容赦なくロープを全力で引いて、ヘイズの首を絞め続けている。徐々にヘイズが目をでろんと剥き、それと同時に口が開かれて、舌がベロリと垂れてくる。

「どうやらお前は賭けに負けたみたいだな。そんなことで、お前がしてきた罪は許されることはないだろうが、まずは眠れ、妖狐・ヘイズ。最愛の女性（ひと）に命を奪われる……。散々女性を泣かせてきたお前にとって、最もふさわしい最期だ」

俺の言葉が言い終わった直後、ヘイズの瞳から光が消えた。ミークはなおも全力でヘイズの首を絞め続けている。その姿はあまりにも猟奇的だった。

俺は彼女にゆっくりと近づき、もう止めろと声をかける。

「よいのか？　よいのか？　もう死んだのか？　ならば早く、さっきのやつじゃ。さっきのやつを、早く、早く」

瞳を潤ませ、舌で唇を嘗め回しながら、ミークは俺の懇願してくる。俺はよかろうと呟いて、再び頭に掌を当て、そのまま彼女を眠らせた。

「……これまで、大変だったね。これからは、本当に君が愛し、愛してくれる人と人生を送るといい。しばらくは、ゆっくりと休みな」

俺は彼女を抱えると、転移結界を発動して、その場から姿を消した。
そこには、これまで浮名を流してきた色男の面影を全く残さない、醜く、歪み切った表情を浮かべた屍があるのみだった。

妖狐・ヘイズは、こうして生涯を閉じた。

第三百五十四話　家族の絆

あんなに真剣な表情を浮かべた夫を見たのは、いつ以来だろうか？
　リコは急速に変わっていく目の前の景色を見ながら、そんなことを考えていた。

リノスに任せておけば、安心だ。そんな思いが胸に去来したそのとき、彼女の目の前に見慣れた景色が飛び込んできた。そして、そこにはじっと、一人で立ち尽くす少女がいた。エリルだ。

「ママぁ！」

リコの姿を見つけると、彼女は大きく目を見開いて、全速力で走ってくる。そして、そのままリコの胸に飛び込んできた。

「ママぁ！　ママぁ！　ママぁぁぁぁ」

なんと愛おしい娘なのだろう。きっとこの子は、自分がアガルタに向かったときからずっと、この庭で自分の帰りを待ち続けていてくれたのだ。リコは力の限り愛娘を抱きしめる。

「いっ……痛いよ……ママ……」

「あら、ごめんなさい」

エリルと顔を見合わせる。彼女は頬を涙で濡らしながら、じっとリコを見つめている。リコはその彼女の頬にスッと手を触れて、涙を拭う。

「偉かったですわね」

その言葉に、エリルは大きく頷く。リコはエリルをもう一度抱きしめて、さらに言葉を続ける。

「お母様はこれから、マトを迎えに行って来ますわ。エリル、あなたはお母様が帰ってくるまでまた、待っていられるかしら？」

「マトちゃん……帰ってくる？」

「必ず、連れて帰って来ますわ」

エリルはリコの目を見ながら、ゆっくりと頷いた。

「じゃあエリル、お母様からお願いですわ。私が帰ってくるまで、アリリアと一緒に、弟や妹たちと遊んであげてくれるかしら？」

「わかり……ました」

「お願いしますわね、エリル」

彼女は大きく頷くと、スッと踵を返し、屋敷に向かって走っていった。リコはその後姿を愛おしそうに眺めている。ふと、エリルが屋敷に入る直前にこちらを振り返った。リコは優しい笑みを湛えながら、彼女に向けて手を振る。それを見たエリルは、ゆっくりと屋敷に入っていった。

「エリル、お願いね」

リコはそう呟いて、再び転移結界のある場所に向けて歩き出した。

……ママの服が破れていた。胸元に大きく縦に走った破れあと。それをママは手で押さえながら抱きしめてくれた。

その表情はいつものママと同じだったけれど、何だか、いつものママとは様子が違っていた。きっと、大変なことがあったに違いない。エリルは生まれ持った鋭敏な感性で、そうしたことを悟っていた。きっと、お父さんがママを助けたに違いない。きっとママは怖い思いをしたはずだ。でも、怖かったなどとは言わずに、今度はすぐにマトちゃんを助けに行くと言う。そんなママを、エリルは心から偉いと思った。しかも、ママは弟と妹たちと遊んであげて欲しいと言った。きっと、ママの言いつけを守れば、必ずママはマトちゃんを連れて帰ってくる。エリルは直感的にそう悟った。

本当は、もっとママに抱きしめられたかった。お父さんはどうしたのかと聞きたかった。だが彼女は、そんな思いを押し殺しながら、屋敷の扉を開けたのだった。

「ちょっと！　もうポーションないの？」

「倉庫に行けばあるでしょうけど、取って来ましょうか？」

「アンタが離れたら、攻撃力が減るでしょう！」

「じゃあどうしろって言うのです？　さっきから念話を飛ばしていますけれど、誰も反応しませんけど？」

「ああ～。魔力が切れそうだわ。体は絶好調なのに……。ゴメン、私、休んでいていい？」

「もう一息で全滅させられるところまで来ているんですから、頑張りましょうよ！」

「……わかっているわよ。言ってみただけよ」

ペチャクチャと話をしながら魔法を打っているのは、フェリスとルアラだった。彼女たちは迫り来るアンデッドを魔法で迎撃しながら、マトカルが率いる部隊と連携を取って、その勢力を大幅に削いでいた。現在はほぼ、アンデッドを包囲する形となっていて、その殲滅に当たっていたのだ。

だが、高位の魔法を、しかも両手から放ち続けたお蔭で、二人の魔力は枯渇気味だった。魔法と槍による攻撃が連携しているお蔭で、アンデッドの注意が散漫になっているために、もし、どちらかの攻撃が止まると、彼らは一方に攻撃を集中するだろう。そうなると、いかにマトカルたちとはいえ、数の上では劣る彼女たちが苦戦することは目に見えていた。

「それにしても、しぶといわね」

「アンデッドの中でも、かなり高ランクですよ、あれ。確実に急所を仕留めないと、倒れませんから」

「やっぱり、魔法は放つだけじゃなくて、ピンポイントで狙えるように訓練しないとダメね」

「それ、私も同感です」

「これが終わったら、もう一度、魔法の練習をやり直さなきゃね」

「イケると思ったんだけれどな……。お姉さま、ブレスを放った方が早く片付くのではないですか？」

「アンタねぇ。ブレスを放つのにもかなりの魔力が必要なのよ？そんなことをしたら、本当に倒れちゃうわよ！」

実際、フェリスとルアラは、自分たちの魔法にはそこそこの自信があった。だが、このアンデッドと戦ってみると、彼女らの魔法で倒れはするのだが、しばらくすると再び立ち上がって前に進んでくる。両手、両足を吹き飛ばされているにもかかわらず、それでも這って進んでくる姿は辟易とさせられる。だが、そんな中、西門から飛び出していったマトカルの部隊は、自分たちの魔法の範囲外から効率的にアンデッドを仕留めていっている。城壁の上からの攻撃と、地上からの攻撃がとても効果的に作用しているのだ。そう言うこともあって、二人は魔法を打ち続けねばならなかった。

『ちょっとお願い！　誰でもいいから西門の上までポーションを持って来て！』

ダメもとでフェリスは念話を飛ばしてみる。確か、近くにはメイ姉さまやシディー姉さまもいるはずだ。それに、ポーセハイたちもいるはずだ。どうして誰も反応してくれないのだろうと、彼女は首をかしげる。

実際、彼女の念話はメイやシディーたちには届いていなかった。西門に突撃したドラゴンの角に付けられていた魔吸石が砕けて西門付近に散らばっていたのだ。その数は微量で、影響もほとんどなかっ

たのだが、それがために、フェリスらの念話には雑音を生じさせていたのだった。結果的に、彼女らが飛ばした念話は、メイたちには雑音としか聞こえておらず、そのために対応が遅れていたのだった。

「お姉さま！　アンデッドたちがマト姉さまに向かって行っています！」

ルアラの声で我に返ったフェリスは、舌打ちをしながら口を開く。

「ああもう！　魔力が切れるっていうのに～。しぶといわね！」

そのとき、彼女の頬に何かが当たった。驚いて振り向くと、そこにはポーションの瓶があった。そして、その先にはリコの笑顔があった。最近のリコには見られなかった、肩にストールのようなものを巻きつけていたが、それは、ヘイズに破かれた部分を隠すための応急処置なのだが、そんなことはフェリスたちは知る由もなかった。

「リコ姉さま！」

「遅くなって申し訳なかったですわ。ポーション、四本持ってきましたけれど、足りるかしら？」

「十分です、リコ姉さま！」

二人はグイッとビンを呷ると、再び腕まくりをして城壁の上に立った。

「さあ、あと一息よ！　アンデッドを殲滅するわよ！」

「はい！　お姉さま！」

城壁からこれまで以上の魔法が放たれたのは、その直後だった。

約1時間後、全てのアンデッドの討伐が終了した。マトカルたちの部隊はゆっくりと西門に向かって引き上げてきている。その様子をリコは、ずっと城壁の上から見守っていた。

マトカルを先頭に、部隊はゆっくりと西門を潜る。彼女の様子は一見すると普段と変わりないように見えた。リコは様子を見ようと、城壁から城門へと向かって走り出した。

西門の広場には民衆たちが立ち尽くしていた。彼らはマトカルたちが入城してきても無言のままで、広場には馬の蹄の音と鎧が触れ合うカシャカシャという音が、不気味に鳴り響いていた。

そのとき、不意に民衆の中からパチパチと手を打つ音が聞こえた。それは徐々に広がっていき、すぐに広場は大きな拍手に包まれた。その様子をマトカルは、馬上から優しい目で眺めていた。

「マト！　マト！　マト！」

自分の名前を呼ばれて、彼女は我に返る。見ると、すぐ傍にリコの顔があることに気が付いた。

「マト！　無理をして……。体は！？　お腹の子供に触りますわ！　早く馬から降りるのです！」

「ああ、心配ない。アンデッドも問題なく、討伐できた。都は、守られた」

そう言って彼女は、馬から降りた。その直後、彼女は崩れ落ちるように、ゆっくりと片膝をついた。その顔は蒼白で、気付けば彼女は肩をゆっくりと上下させていた。

リコは大声で人を呼び、マトカルをメイの許に移動させたのだった……。

第三百五十五話　非情の決断？

ヘイズを討ち取ったと、念話でおひいさまに報告を入れた。彼女曰く、ヘイズのことに関しては、全ては自分たちで始末をつけるので、俺は関わらなくていいとのことだった。そしてその直後に、ゴンが転移してきた。彼は、人化を解除して白狐の状態のまま、あとは任せるでありますーと、いつになく真剣な眼差しで言っていた。ヘイズの亡骸をおひいさまの屋敷まで運ぶのだと言う。

彼は恐る恐るヘイズの体を調べていたが、やがて俺に向き直ると、ペコリと頭を下げた。

「この度のこと、主人に成り代わりまして、厚く御礼申し上げるでありますー」

そこには、リコたちにお仕置きされているエロ狐の姿は、どこにもなかった。

眠らせているエルフの姫が気がかりだったが、それもおひいさまのところですべて対応するのだと言う。最後に彼女から、この礼は必ずさせてもらうとの念話があった。何となくだが、彼女は彼女なりに、自分の責任を痛感しているようだ。

俺はヘイズの隠れ家から戦場に転移する。一旦帝都の屋敷に帰って、リコたちの様子を見たかったが、この戦いに敗北するとかなり厳しい状況に陥ってしまうため、俺は敢えて戦場に戻ることにした。

「すまない、遅くなった。戦況は？」

戦場は転移する前の状況と、ほぼ変わらなかった。俺の姿を見つけた兵士の一人が、機敏な動きで俺の許にやって来て片膝をつき、戦況を報告してくれた。どうやら敵は一旦、スワンプに退き上げたようだ。ラマロン軍もヴィエイユの軍も、スワンプの一歩手前まで追撃したらしいが、敵は組織的に撤退していたため、なかなかその堅陣を崩すことはできなかったのだと言う。俺は彼にねぎらいの言葉をかけて下がらせる。

「あの……私はどうすれば……」

情けない声が俺の耳に入る。見ると、イリモに跨っている影武者君が、戸惑った様子で俺を見ていた。俺は笑顔を浮かべながら、彼に近づく。

「いいよ。降りてもらって構わない。ありがとう、助かったよ」

そう言って彼が降りるのを手伝ってやる。彼は申し訳なさそうな表情を浮かべながら兜を脱ぎ、俺に渡す。そして、脱兎の如くその場から走り去ってしまった。

その様子を見つめながら兜をかぶり直した俺は、再びイリモの背に跨る。

……目前に広がるカコナ川が、累々たる死体で埋まっていた。戦っている最中は全く気が付かなかったが、こうして改めて見てみると、今日の戦いがいかに激戦であったかがわかる。血の臭いと死臭が入り混じった、何とも言えない悪臭が鼻を突いてくる。

思わずため息を漏らしそうになったそのとき、目の前にサダキチが

現れた。驚きながらも俺は、左腕を差し出して彼をその上に止まらせた。

『どうした、サダキチ』

『タナ軍の全軍が街に入りました』

『そうか。見張りを怠るな。何かあればすぐに知らせてくれ』

『承知しました』

サダキチが消えると、俺は再び周囲を見廻す。

「イッカク、イッカクはいないか」

「御前に」

相変わらず全く気配を感じさせずに現れる彼は、隠密として超一流の腕を持っていることを改めて認識する。正直、彼らオワラ衆がいなければヤバイ状況に陥っていた場面もあった。帝様はいい援軍を付けてくれたと、心の中で感謝する。

「俺がいない間に、何も問題は起こらなかったか？」

「……」

「どうした？」

「負傷者、多し」

「何？」

「魔法使うこと能わず」

イッカクの話では、アガルタ軍をはじめとして、全体的に負傷兵が多く、しかも魔法が使えない状態であるために、治癒魔法で兵士の傷を治すことができないのだと言う。最低限の応急処置は行っているらしいが、このままでは多くの死者が出ることが予想される。

「……わかった。ちょっと待っていてくれ」

俺はイリモから降りて、傍に居たポーセハイを呼び、彼の肩に手を置いて再び転移結界を張った。

向かった先は、アガルタの都だった。医療研究所の、メイの部屋に向かったのだ。

そこでは、メイを筆頭に数人のスタッフと共に会議の真っ最中だった。転移するや否や、全員の視線が注がれて、ちょっと気恥ずかしくなる。メイは俺の姿を見つけると立ち上がって、うれしさとも驚きともつかない表情を浮かべながら口を開いた。

「ご主人様！」

「メイ、みんな、会議中にすまない。頼みがあるんだ」

彼女は一瞬、戸惑った表情を見せたが、すぐに承知しましたと言ってくれる。俺はその言葉に頷きながら、そこに居た全員に視線を向ける。

「すまないが、できるだけ多くの医師を戦場に派遣してもらえないだろうか。魔法が使えない状態で、傷ついた兵士たちの治療ができないんだ。負傷者が大量に出ていて、このままでは多くの兵士が死んでしまう。頼む、助けてやってくれ」

俺はスッと頭を下げる。何とも言えない静寂が部屋の中を包んだ。

恐る恐る目を開けて見ると、会議に参加していたポーセハイ全員が目を閉じている。何をしているのかと思っていると、チワンが立ち上がって、俺に視線を向けた。

「最低限の者だけを残して、ポーセハイ全員を戦場に転移させます。医療研究所のスタッフの中で、転移できない者もおります。その者たちを恐れ入りますがリノス様、戦場まで転移していただけますか？　おい、ルーティン。戦場の場所を皆に念話してくれ」

俺と共に戦場から転移してきたポーセハイが返事もせずに目を閉じる。その直後に、会議室にいたポーセハイが一人、また一人と消えていき、あっという間に部屋にはチワンとローニ、メイと俺の四人だけになった。

「ローニ、お前何をしているんだ？　早く行かないか」

「待ってください、チワンさん。ドーキが行くと言って聞かないのです」

「何？」

「彼は医師の知識はほとんどありません。血を見るのが嫌いな人が行って役に立つものですかと言っているのですが、聞かなくて……。

ああ、うるさい」

ローニは頭をブンブンと振っている。どうやらドーキは料理の腕を活かして、戦場で傷ついた兵士の食事を作ると言っているのだと言う。俺はメイと顔を見合わせながら、口を開いた。

「いい、ドーキも連れて行け」

「でも……」

「いいから」

「わかりました」

ローニはしばらく目を閉じていたが、やがて彼女も戦場に向かいますと言って、部屋を後にしていった。そして、それが合図であったかのように、部屋がノックされ、若い研究者が準備ができましたと言ってきた。何という準備の良さだろうか。

メイとチワンに促される形で、俺は部屋を出て、別の一室に案内される。廊下を歩きながらメイが、都がドラゴンに襲われたこと。さらに、アンデッドが都を襲おうとしたこと。それらをフェリスとルアラが魔法で、さらには、マトカルが兵を指揮して討伐したことを手短に教えてくれた。そして、マトカルは戦いの後で倒れ、医療研究所で入院していること、お腹の赤ん坊が危ない状況だということも教えてくれた。

俺は一瞬、足を止める。今からマトの様子を見に行きたいと話すが、メイはゆっくりと首を振った。彼女の知性を湛えた真っすぐな眼差しが、マトカルの状態が重いことを物語っており、彼女のことは任

せて欲しいという思いが伝わってくる。俺は、絞り出すようにマトのことを頼むというのが精いっぱいだった。その言葉に、メイはお任せください、といって俺の手を優しく握った。

案内された部屋には、百名を超えるスタッフが控えていた。人間もいれば獣人もいる。実に多種多様だ。それに、その後ろには大量の箱が山と積まれていた。どうやらあれに薬品が詰まっているらしい。そんなことを考えていると、メイの声が部屋の中に響き渡る。

「皆さん、お疲れのところ申し訳ありませんが、カコナ川で戦闘があり、多くの兵士が傷ついているようです。回復魔法が使えない状態にあると言います。我々は薬などを持って、そこで医療活動を行います。戦場ですから、くれぐれも身の安全には注意してください。一応、全員オージンを携帯してください。使えるようならば、それを使って治癒します。まず皆さんにお願いすることは……」

メイはそこで言葉を切り、一瞬、悔しそうな表情を浮かべたが、やがて、毅然とした表情で口を開いた。

「負傷された人々の傷の状態を5つの段階に分けます。皆さんは、傷が浅い人から治癒していっていただきます。戦場に着いたら、すぐに兵士の傷の状態を見て、その状況を判断してください。一番傷が浅い人を1、重い人を5とします。それぞれ、兵士の体によく見えるように書き込んでください。そして、その人々を番号ごとに集めます。皆さんは、1番と2番の人々を中心に治癒してください。よろしくお願いします」

彼女の言葉に全員が頷く。そしてメイは俺に向き直り、転移を促すかのように頭を下げた。

俺はメイのあまりにもシステム化された話に驚きつつも、転移結界を張って、そこに居た全員を戦場に転移させた。

メイが発案した、一見、血も涙もないように見えるこの方法は後に、人々をしてメイが聖女と呼ばれるきっかけとなるのだが、そのことをリノスはもちろん、メイ自身も、知る由もなかった……。

第三百五十六話　戦場の聖女

ポーセハイを中心とする、アガルタ医師団の動きは実に迅速だった。彼らは戦場に到着するとすぐに、簡易な救護所を設置し、そこで軽症の兵士たちの治療に当たった。彼らはそれだけでなく、動ける兵士たちにも協力を仰いで、アガルタから持ち込んだ大量の組み立て式のベッドを組み上げ、いくつものテントを張った。驚いたことにそこには、組み立て式の風呂までもが用意されていて、その行き届いた準備に俺は驚きを隠すことができなかった。

彼らが到着して1時間後には、何もなかった河原の中に、大規模な医療用のテントが出現していた。医師団の者たちは大人数の兵士たちに実に効率よく指示を出していた。彼らが持ってきた、おそらくドワーフが造ったと思われる組み立て式のベッドや医療器具が実に簡易にできていたことも大きいが、医師団の者たちの無駄のない動きがやはり大きかった。あとで聞いてみると、メイの医療研究所では、こうした大量の負傷者が出ることを想定して、どんな状況下でも迅速に医療活動が行えるように常に訓練をしていたのだと言う。幸か不幸か、今回の戦いは一方で、メイの周到な準備力の高さを証明する結果ともなったのだった。

実際に兵士たちを治療してみてわかったことだが、この魔法が使えないと思われていた戦場ではＬＶ１の魔法であれば、使用は可能であることがわかった。

ただし、その効果は大きく制限される。通常ならば、ＬＶ１の回復魔法は切り傷くらいであれば一瞬で治癒してしまうが、この戦場では、三度ほどかけてようやく治癒するのだ。つまりは、使用できる

魔法はＬＶ１のみ、しかも、その効果は通常の三分の一になるという結論に至った。どうやら敵は、魔法のＬＶが高ければ高いほどその効力を奪う効果を俺たちに仕掛けているようだ。それがわかってからの医師団の動きは素早かった。

まず、自力歩行ができる軽症者については、アガルタから運んできた薬を使って消毒し、包帯を巻くなどして治療していった。数が多いためにこれは、まるで流れ作業のような段取りで治療が行われていた。

その隣ではドーキが炊き出しを行っていた。一見すると何の変哲もないスープだが、そこには滋養強壮に効く食材がふんだんに使われているらしく、疲労回復に効果があるのだと言う。兵士たちからの評判はかなり良く、お代わりを求める者も多くいたようだ。

幸いにして、ドーキをはじめ、転移をしてきた者たちは、クリーンやウォーターなどの魔法は使えたために、水や火に関しては、大きな問題が起こることはなかった。

次に、深手を負った者たち、つまり、担架で運ばれてくるような者たちの治療については、医師団の中でも経験の浅い者たちが担当していた。つまり、ＬＶ１の回復魔法が使える彼ら、彼女らは、少量の魔力を瞬時に回復させることができる石、オージンを持って、ひたすらに回復魔法をかけ続けるという役割を担った。先輩医師が指示された患部に向かって無言で回復魔法をかけ続けるその姿は、ある種の異様な雰囲気を醸し出していた。

そして、最も重い重傷者が運び込まれたテントでは、チワンとローニを筆頭とした、もっとも腕のあるポーセハイたちが奮闘していた。まさに一刻を争う重傷患者を前にして、彼らは見事な手際で治療を

施していく。驚いたことに、野戦病院であるにもかかわらず、外科手術が行われていたのだ。あそこのテントの中では無菌状態なのだろうか……。そんなことを心配をしたが、こうした医療行為については俺の範囲外のことであるために、黙って彼らに任せることにしたのだった。

俺はその様子を見ながら、タナ軍の撤退に取り残され、捕虜となった兵士たちを引見していた。その数は数百名に及び、全員が何らかの傷を負っていた。俺は一言、彼らに食事を与え、医療テントで治療を受けるように命令した。

「恐れながら申し上げる」

「何だい？」

「私は、タナ軍第七部隊の中隊長、オルフルト・ヘイメンと申します。アガルタ王のご命令の意味がわかりかねます」

「意味が分かりかねる……とは、どういう意味だい？」

「死を迎える我々に、そのようなことをなさらずとも、今ここで首を刎ねていただきたい」

「死にたきゃ勝手に死ねばいい」

俺は吐き捨てるようにヘイメン以下、捕虜全員に向けて告げる。

「お前たちが死に値するかどうかの罪を犯しているのかどうかは、俺は知らん。ただ、メイ……。この医療団を率いている責任者が、お前たちタナ軍の負傷者も治療すると言っているから、そう伝えた

に過ぎない。ちなみにメイは、抜群にかわいいから、惚れないように気を付けろ。さすがに恋煩いは治せないからな。それに……お前たちはタナの王様の命令に従って戦ったのだと俺は信じる。別に戦いたくて戦ったのではないだろう？　まあ、そんな戦闘狂がいるのなら話は別だが、見たところそんな変態はいないようだからな。まずは傷を治療するといい。とりあえず、お前たちのことは一応は調べるが、問題のない者は、この戦いが終わったら国に帰るなり旅に出るなり、好きにするといい。あ、今、死にたいと言う者は、それも勝手にするといい。俺は止めない」

「そんな……あり得ない……」

ヘイメンは絶句しているが、俺はそれを無視してさらに言葉を続ける。

「見ろ、対岸を。アガルタの兵士もさることながら、お前たちタナ軍の兵士たちもたくさん死んでいる。……動いている者も結構いるな。あれはタナ軍の兵士たちか？　お前たちの仲間もいるんじゃないのか。だったら、こちらに連れてきて、医療テントに運んで治療してもらうといい。俺の方から話は通しておいてやる」

「我らがこのまま逃げる……そうは思われないのですか！？」

「ヘイメン、お前、さっきからよく喋るな？　お前たちに興味はない。別に逃げようが国に帰ろうが、好きにすればいい。お前たちは捕虜になったが、俺はお前たちに興味はない。だが、この陣中にいるのだ。ケガをしている者は治療して、残りの人生を全うすればいいと俺は考えている。それだけだ」

兵士たちは一言の言葉も発しない。そんな彼らを眺めながら、俺は

ゆっくりと対岸に目を向ける。そこには累々たる亡骸が広がっていた。

「これ以上人を殺めれば、鬼が哭く……」

誰に言うともなく、俺は小さな声で呟いた。

一方、アガルタ医療団の団長であるメイは、数人の女性と兵士を伴って、医療キャンプとは少し離れた場所にいた。そこは、兵士の亡骸が並べられている場所だった。

夥しい亡骸が並べられているそのすぐ近くに、布で仕切られた場所があり、メイたちはそこに居た。そこではまだ息はあるが、瀕死の重傷を負い、死を待つだけの者たちが運ばれてきていた。彼女はそんな兵士たちの死を看取っていたのだ。

メイは運ばれてくる重傷者、一人一人の手を握りながら、その傷を負ったところに手を当てて、優しい笑みを浮かべるのだった。すると、苦しんでいた兵士たちは、安心したような表情を浮かべながら、ゆっくりと目を閉じる。そんなことを彼女は休むことなく、ぶっ続けで行っていたのだった。

息も絶え絶えに痛みや苦しみを訴える者には、やさしく声をかけ、その部分にやさしく触れる。まさに手当てと呼ぶにふさわしい医療行為が行われていた。家族や友人に遺言を残そうとする者には、できる限り聞き取って、傍に控えている女性たちにメモを取らせた。それをアガルタ軍の兵士だけでなく、果てはタナ軍の兵士たちにも行ったのだった。その分け隔てのない対応は、アガルタ軍の兵士はもちろん、タナ軍の兵士たちも涙を流して感謝したのだった。

報告を聞いたリノスがその現場に駆け付けたとき、メイは彼にちょっと微笑んだだけで、すぐに重傷者の手当てを再開した。その様子を見たリノスは、兵士たちを丁重に葬るように命じ、しばらくはメイの様子を無言のまま見つめ続けたのだった。

さらに彼女は、その作業がひと段落すると、休むことなく、昼夜に渡って重傷者を一人一人見回るなど、手厚い看護を続けたのだった。

いつしか兵士たちの間では、メイのことを「聖女」と呼ぶようになったのだった……。

第三百五十七話　夕闇の作戦会議

サンダンジ王国を流れるカコナ川の上流にあるスワンプでは、数万に及ぶタナ軍の兵士たちが、オアシスから湧き出る豊富な水でのどの渇きを潤しながら、戦闘の疲れを癒そうとしていた。砂漠の水平線に太陽が沈もうとしており、その雄大な景色は、しばしの間、戦いの残酷さを忘れさせてくれる。だが、その本陣では、国王のヴィルが険しい表情を浮かべたまま、居並ぶ幕僚たちを睨みつけていた。

「お味方の損失ですが、２４７１名の行方がわかっておりません」

兵士の一人が直立不動でヴィルに報告する。それを受けて、幕僚の一人が早口でまくし立てる。

「わずか２５００の損失とは、何とも優秀ではございませんか！２５００といえば、アガルタ軍の兵士たちもそのくらいの損失を与えておりましょう。ラマロン軍や賊軍にもそれなりの被害を与えておりますれば、此度の戦は、我らの大勝と言って差支えありますまい！」

そう言って彼は、他の幕僚たちに視線を向け、同意を求める。だが、皇帝ヴィルは、その幕僚の意見に納得しなかった。

「その数は、真の数か？」

「はっ……」

突然皇帝から意見を求められた兵士は固まっている。ヴィルは、し

ばらく報告を行った兵士を睨みつけていたが、やがて、先程、口を開いた幕僚に視線を向ける。

「レジデント」

「はっ」

「貴様、先程、わが軍の大勝利と申したな？　何を持って大勝利と言うのか？」

「はっ……それは……。味方の損害と、敵の損害……」

「そんなことはどうでもよい」

言葉を遮られたレジデントは、ハッと言って頭を下げる。

「大勝利と言うのは、敵将を討ち取った、もしくは捕らえたときのことを言うのだ。今日の戦で、アガルタ王・リノス、大魔王殺しのカリエス、裏切り者のヴィエイユ。この三人のうちの一人でも討ち取ったものがおるのか？　生け捕りにした者はおるのか？　ならば、その身柄か首を持って来るがいい。余が自ら見分してくれる。さあ、どうじゃ？」

ヴィルの言葉に反論する者は一人もいない。不気味なほどの静寂が、彼の周囲を包んでいる。

「しかし陛下……」

「何じゃ？」

「我らは、アガルタ軍最高司令官である、名将・ラファイエンスを討ち取っております。指揮官を失ったアガルタは最早、翼を奪われた鳥と同じでございます」

食い下がってくる幕僚に、ヴィルは一瞥をくれてすぐ、大きなため息をつく。

「その扇の要を討ったにもかかわらず、我らは攻めきれなかった。それどころか、逆に逆賊どもに攻め込まれ、退却を余儀なくされておるのだ。これのどこが大勝利と言えるのか？」

再び、ヴィルの周囲に沈黙が訪れる。彼は居並ぶ幕僚一人一人に視線を向けながら、さらに言葉を続ける。

「よいか。戦においてあるのは、勝つか、負けるかしかない。我らに負けは許されぬ。勝つのじゃ。勝つのじゃ。此度の戦は、サンダンジの都を占領することが一番の目的じゃ。ニケ、リノス、カリエス、ヴィエイユ……いずれかの首を挙げねば、勝利とは言えぬ。皆、甘い考えは捨てよ。決死の覚悟で、勝利を掴み取るのじゃ、よいな？」

ヴィルのその言葉に、幕僚たちは静かに頭を下げた。

一方、リノスたちの方でも、軍議が開かれていた。

「……」

「……ニケさん、もういいですよ」

リノスたちの前で頭を下げているのは、サンダンジ国王のニケだった。すでに夕闇が辺りを暗くしていたため、部屋の中はランプの灯がともっている。その薄明かりに照らされるニケの最敬礼の姿勢は、リノスたちの心を戸惑わせた。

「すまぬ……。援軍を出してもらっておきながら、その我らが足を引っ張るとは……。これも全て、私の不徳の致すところ……。本当に、申し訳なかった……」

「頭を上げてください、ニケさん。いいのです。被害はそこまで深刻ではありませんから」

「アガルタ王の言われる通りだ。我らラマロンも、被害は軽微だ。それよりも、予想以上の速さで戦場に到着してくれた。あと少し、到着が遅れていれば、アガルタ軍はもとより、我らラマロン軍も危なかった。このカリエス、感謝申しますぞ」

「いや……。もっと早くに着陣せねばならなかったのだ。本来は、夜が明ける前に着陣せねばならないところを、兵の回収に手間取った……。着陣が昼前となっては、最早、何の言い訳も出来ぬ。さりとて、今の私にはこうして貴公らに詫びを言うしかない。すまなかった、この通りだ……」

必死でニケは謝っているが、その後ろに控えた、ニケによく似た若者がぶ然とした表情で立ち尽くしているのが、実に気になる。おそらく、ニケの息子なのだろうが、何故か、片目が大きく腫れている。

「……シン、お前からも皆さまに詫びぬか。お前の愚かな諫言によって、我らは遅参したのだ。あと一時、我らの到着が遅れれば、アガルタ軍以下の援軍は壊滅し、我らは窮地に追い込まれていたかも

しれぬのだ。己が振舞いを、ここに居並ぶ方々に対して、詫びよ」

「お言葉ですが父上、敵の腹の内は未だ読めておりません。もし、賽の目が逆に出て、敵方が和平をねがっているとしたならば、それでも私は詫びねばなりませんか？」

「シン！　貴様あれほど！」

「ニケさん、そこまで！」

俺は思わずニケを止めた。彼に手が剣の柄にかかっていたからだ。放っておけば、この場で彼はこの若者を斬る可能性があった。

「サンダンジ王様にお尋ねいたします。そちらのおいでのお方は、ご子息様でしょうか？」

突然ヴィエイユが口を開く。ニケは一瞬、戸惑った表情を浮かべたが、すぐに落ち着きを取り戻して、彼女に応対する。

「いかにも。これは我が嫡子にして、サンダンジ国の王太子である、シン・サンダンジだ」

父親に紹介されたシンは、表情を変えないまま、胸に手を当てて一礼をして、形式通りの挨拶を返す。

「左様でございますか。私は、クリミアーナ教国教皇の孫であります、ジュヴァンセル・ヴィエイユと申します。サンダンジ王様、こちらのシン様は、ゆくゆくはサンダンジ国をお継ぎ遊ばすのでございますか？」

「ああ、今のところは、そのつもりだ」

「ならば、我らは撤退いたします」

突然のヴィエイユの言葉に、俺たちは驚く。だが、そんな俺たちに向けてヴィエイユはさらに言葉を続ける。

「このシン様がサンダンジ国を継がれるのであれば、この国は遅かれ早かれ亡ぶ運命にあります。そのような未来のない国に手を貸すことは、無駄以外の何物でもありません。タナ軍の動きを見れば、これまでの戦いを見れば、和平などを求めていないことは一目瞭然ではありませんか。にもかかわらず、そのようなことを口になさり、あまつさえ、サンダンジ軍の足枷となっている……。そのような方に手を貸すのは、無駄なことです。我らの敬虔な信徒に命をかけさせることはできません。従いまして、我らは撤退いたします」

「ヴィエイユ、言葉を慎め」

「いや、アガルタ王。ヴィエイユ殿の申す通りだ。我が息子シンはまだ若い。加えて、優しすぎる嫌いがある。この優しさは乱世においては危険であることは、私も重々に承知している。だが、これから先、世が治まる中でのシンの優しさは役立つと思うのだ。この度の不始末は、この私が取らせたいと思う。それ故、どうか、我が国をお救いいただきたい」

ニケの言葉にヴィエイユはまだ何かを言いたそうな表情を浮かべていたが、俺はスッと手を挙げて彼女を止めた。そして、ニケの後ろで顔を真っ赤にしながら屈辱に耐えているシンに向かって声をかけた。

「俺も、タナ軍が和平を求めていると信じたい。君が考えているような展開になれば、とても素敵なことだと思う。今後は、父上の側にいて、君の考えが正しかったかどうかを確認してみてはどうかな？」

俺の言葉に、シンはゆっくりと一礼をして、部屋を出ていった。俺は笑みを浮かべながら、残った皆に視線を向ける。

「さて、軍議に入りましょうか。今日の戦いは、正直言って俺たちの負けでしょう。明日から仕切り直しです。敵はスワンプに退き上げたことで、動くに動けない状態になりました。この状態が続けば、自ずとタナ軍は自落します」

「待て、アガルタ王。敵は軍勢を転移する能力を持っているのだろう？　で、あれば……」

「いえ。その能力を持っている者は、もうこの世にはおりません。詳しくは言えませんが、確かな情報です」

「ということは……」

「ええ。正面のアガルタ軍を突けば、ラマロン、ヴィエイユ、サンダンジ軍の三方から攻撃されます。アガルタ以外の軍を突いても、同じように三方から攻撃を食らうことになります」

「なるほど。我らの食料は十分にある……我慢比べだな！」

「そうですね。カリエス将軍の言われる通りかもしれません。ただ、敵はどんな作戦を弄してくるのかわかりませんから、引き続き監視を緩めないようにしましょう」

「……わかった。いつでも出撃できるように、準備をしておくことにしよう」

その後、俺たちは夜が更けるまで、タナ軍の動きをシミュレーションしながら、今後の作戦を考えたのだった……。

第三百五十八話　非常識

「……一体何をやっているのだ？」

「……さあ。……まるで、何かに取りつかれているようだ」

「どうする？」

「どうするも何も、あるがままのことを、我が国王陛下に伝えるだけだ」

そんな会話を交わしているのは、タナ軍の斥候部隊に所属する二人だ。彼らは物陰に隠れながらカコナ川の対岸に陣を張るアガルタ軍の動きを見張り続けていた。その目に移る敵は、およそ戦いの最中とは思えない、あまりにも現実離れした光景に、彼らは息を呑んで見守り続けるのだった。

「……大儀であった」

斥候からの報告を聞いたタナ国王ヴィルは、険しい表情を崩すことなく、ゆっくりと息を吐いた。アガルタ軍は一体何をやろうとしているのか？　そんな思いが湧き上がってくる。

放っていた斥候からの報告では、アガルタ軍は防御はそっちのけで、ひたすらに穴を掘り続けているのだと言う。この報告を最初聞いたときは、ヴィルは耳を疑った。だが、次々と戻ってくる斥候は口を揃えて、アガルタ軍は総出で穴を掘っていると報告してくるのだ。

その一方で、ラマロン軍、ヴィエイユが率いる賊軍、サンダンジ軍は未だ厳重な警戒態勢を取り続けている。敵の狙いが全く読めない……。ヴィルの人生の中で、こんなことは今までなかったことだった。

そんな中でも彼は考えを巡らせる。当初は、穴を掘っているのは、堀を拵えているのではないかと解釈したこともあった。穴の中に川の水を曳けば、即席であるとはいえ、出城にはなる。そこで防御を固めて我が軍と対峙しようとしているのではないか……。だが、そんなことをしたところで、何の意味もなさないことは明らかだった。籠城したところでまず、問題となるのは食料だ。約十万近い兵士たちの腹をどう満たすのか？　彼らも食料はある程度は用意しているだろうが、数ヶ月も居座れる程は持って来ていないだろう。対してタナ軍は、サンダンジの都を陥落させることを目的としているため、食糧は豊富に用意してきていた。その点から考えても、カコナ川に砦を築く意味は全くなく、アガルタ軍が全軍で取りつかれたように穴を掘る理由がわからなかった。

「何をしようとしているのかは知らぬが、まあよい。この戦、先に動いた方が負けじゃ。というより、我が軍から先に動くことはない。もうすぐ、敵は食料が尽きる頃であろう。そのときに奴らがどう動くかじゃ。見張りを怠るな。それに……アガルタ軍が掘っている穴についても、できうる限り調べよ」

彼は厳しい表情のまま、部下たちに命じるのだった。

「あとどのくらい掘ればいいんだ？」

「そうだな……結構な数を掘っているな。もうこのくらいでいいで

しょうか、クノゲン様？」

「うーん。そうだな、取りあえずこのくらいにしておこうか。あとは皆で手分けして埋めていこう」

「承知しました」

そんな、一見すると悠長に見える会話がアガルタ軍の本陣近くで行われていた。彼らは、クノゲンの指示のもと、土の場所に数千に及ぶ穴を掘っていた。そして今、彼らは穴を掘るのを止めて、ゆっくりと歩き出していた。

「……そうか。では、よろしく頼む」

昇り切った太陽を眩しそうに眺めながら、リノスは兵士たちに向けて口を開いていた。その間にも、彼の肩には小さなドラゴンが現れては消え、を繰り返していた。兵士たちは、そんな光景に驚くことなく、ただその様子をチラリと見ただけで、黙々と次の作業に移っていった。

それからしばらくして、アガルタ軍に掘った夥しい穴には、この戦いで命を落とした兵士たちの亡骸が、横たわっていた。アガルタ、クリミアーナ、ラマロン……。それだけではなく、タナ側の兵士たちも、彼らと同じように丁寧に埋葬されていた。

医療テントでは未だ、重傷者への懸命な治療が行われている。にもかかわらずリノスは、戦いの次の日にこの埋葬を実行した。その命令を聞いた家来たちは一瞬、驚いたような表情を浮かべたが、やがて一礼をして彼の許から方々に散っていった。彼の命令は、明日の

朝から兵士たちの亡骸を埋葬するから、手の空いている者は、穴を掘るのを手伝ってほしいというものだったのだが、それは瞬く間に全軍に知れ渡り、予想外の人数がそれに参加するために、リノスの許に集まったのだった。

「私たちは何もしていませんからな。せめてこんな形でよければ、働かせて下さい」

真っ先に駆け付けてきたのは、クノゲンだった。彼は我先に穴を掘る係を買って出て、部下たちもそれに続いた。

さらには、その話を聞きつけたラマロン軍とヴィエイユ軍、果てはサンダンジ軍からも、数百人が志願してきた。そして、全軍はそれが終わるまで、タナ軍が攻めてくればいつでも迎撃できるよう臨戦体制を取り続けたのだった。

そして今、リノスは目の前に掘られた夥しい墓穴の前に立っている。その隣にはメイの姿もあった。彼女は両手を自分の胸の前に組み、まるで何かに祈るような姿勢で、眼前に広がる巨大な墓を眺めていた。

「すまぬ。遅くなった」

そう言ってリノスの隣にやって来たのは、サンダンジ国王のニケだ。彼はリノスとメイに視線を向け、スッと目礼をした後、彼らと同様に眼前の墓に視線を向けた。

「……一体、どのくらいの人数になるのか」

「……およそ五千になります」

「五千……。そのうちの大半が、アガルタ軍、というところか……」

ニケの言葉にリノスは何も答えなかった。確かに、死傷者の数で言えばアガルタ軍が群を抜いて多く、死者の数は約三千に上っていた。彼は何とも言えぬ表情を浮かべながら、ただ静かに佇んでいた。

「遅くなりました」

「……おお、お揃いか」

ちょうど同じタイミングで声をかけてきたのは、ラマロン軍のカリエス将軍とヴィエイユだった。その二人に対しても、ニケは静かな声で改めて礼を述べた。

「この度は、我が国のことで貴国らにも迷惑をかけた。ご加勢、感謝する」

「いいやニケ王様、気にされることはない。戦いに死はつきもの。我ら軍人は戦場において死すもの。死んだ者たちも、本望でありましょう」

「その通りですわ、ニケ王様。我が軍も死傷者は多くございますが、皆喜んで天に召されております。お気遣いは無用です。それに……」

ヴィエイユは薄い笑いを浮かべながら、目の前に広がる巨大な墓に視線を向ける。

「このように丁重に葬られるのです。これだけでも破格の待遇というものです。本来は、戦場に屍を晒し、鳥や魔物たちに肉を食われ、

装備品は盗賊や旅人たちに奪われるのです。戦場で埋葬されるなど、しかも、敵軍の兵士まで埋葬されるなど、古今聞いたことがございません。それだけでも、ここで死した者たちは価値があるというものです」

その言葉に、ニケとカリエスが顔を見合わせながら苦笑いを浮かべる。

「そろそろ、始めましょうか……」

リノスの言葉に、三人はゆっくりと彼の隣に並ぶ。そして、それと同時に、リノスはスッと手を挙げる。すると、それが合図であったかのように、掘られた墓穴に土がかけられていった。

……不意にメイが手を前で組んだまま、ゆっくりと膝を折り、正座をするような体勢を取った。そして彼女は俯きながらボソボソと何かを呟き始めた。

「次は……幸せに、生まれ変わりますよう……」

その声を聞きながらリノスはゆっくりと兜を脱ぎ、片膝をついて頭を下げた。それとほぼ同時に、周囲に控えていた兵士も、兜を脱ぎ、騎乗している者は馬から降りて、全員がリノスと同じポーズを取った。それに倣うように、カリエスもニケも、リノスと同じような体勢を取った。一方、ヴィエイユは一人その場に立ち尽くしていたが、やがて彼女も、彼らと同じようなポーズを取った。

その姿は実に美しいものだった。彼らは埋葬が終了するまで、その姿勢を崩すことはなかった……。

第三百五十九話　休憩

「小癪なマネを……」

小さな、しかし、怒りを抑えるかのような声でヴィルは呟く。彼は、アガルタ軍において、大規模な兵士の埋葬式が行われているとの報告を受けて、表情を強張らせていた。

「……小賢しいことをやりおるわ」

ヴィルは吐き捨てるように呟く。彼はアガルタ軍の行為を、単なるパフォーマンスと解釈していた。大損害を受けたアガルタ軍は、兵士の士気が下がっている。それを補うために、敢えて敵前で埋葬を行うことで、兵士たち、ひいてはラマロン軍など周囲の軍勢の士気を上げようとしていると考えた。リノスとしては、全くそのような狙いはなかったのだが、豈はからんや、このことによってアガルタ側の軍勢の士気は上がり、強固な連帯意識が生まれることになった。皮肉にも、ヴィルの解釈は、現実のものとなったのだった。

加えて、アガルタ軍には、これまでになかったテントがいくつも建てられ、そこで様々な医療行為が行われているらしいという報告も、ヴィルの許には寄せられていた。その上、そこには聖女と呼ばれる者もいるらしいという報告もあり、彼は何とも言えぬ笑顔を浮かべながら、大きなため息をついた。

「フッ、アガルタ軍も必死じゃな。魔法が使えぬによって、傷ついた兵士たちの治療はできぬ。今の奴らには、精々応急手当てをすることが限界であろうがな。じゃが、兵力に乏しい奴らじゃ。一兵で

も失いたくはないのであろう。それに聖女とは……。すでに教皇聖下より我が妻が聖女とお認めいただいておるにもかかわらず、敢えてそれを持ち出すとはな。そこまでせねばならぬアガルタが、哀れじゃ。……ああなっては最早、奴らに先は見えておる」

彼にはこの戦いには絶対の自信を持っていた。必ず敵は先に退却する。その機を捉えれば、確実に勝つ自信があった。彼は斥候を放ってアガルタ軍の動きを注視しながら、自らは、兵士たちと共にこのスワンプで英気を養うつもりでいた。

だが、彼は知らない。彼らはサダキチ達フェアリードラゴンが、上空から常に監視されていることを。そして、ドラゴンたちは、監視を続けながらリノスの命令をじっと待っているということを……。

一方のリノスは、サダキチ達フェアリードラゴンたちの報告を聞きながら、一人、何かを考え続けていた。そのとき、オワラ衆の筆頭であるイッカクが彼の許に姿を現して、その場に畏まった。彼の後ろには、一人の男が控えていた。

「おお、どうだった?」

「朗報にて候」

「何?」

イッカクは後ろに控えている男に促す。すると彼は懐から一枚の紙を取り出し、それをリノスの前に広げた。

「……」

男は無言で地図を指さす。それをリノスは苦笑いを浮かべながら口を開く。

「そこまで行けば、魔法が使える……そういうわけかな？」

その言葉に男はゆっくりと頷く。

「そこまで行くには……どのくらいかかる？」

「約、一日に候」

「一日か……。わかった」

そのとき、リノスの前にサダキチが姿を現した。彼はフワリとリノスの肩の上に下り立った。

「……何？　……うん、……うん。どのあたりだ？」

リノスは自分の懐から地図を取り出し、それをサダキチに見せている。彼は地図の場所を指さしながら、ここか？　ここか？　と質問していく。そして、しばらくすると、肩に乗っていたサダキチの姿が消えた。

「イッカク」

「……」

「すまないが、ひとつ、調べてもらいたいことがある。ここなんだけれどな……」

リノスは地図のある部分を指さしている。イッカクともう一人のオワラ衆の男は、その部分を無言で眺め続けている。

「お前たちオワラ衆は足が速いが、ここに行くまでにどのくらいになる？」

イッカクはしばらく考えていたが、やがて、重々しく口を開く。

「我の足にては二日。然れども、我が配下、ジュウニの足にては一日にて可能」

「ここで調べてもらいたいことがある。そして……」

リノスはイッカクにゴニョゴニョと耳打ちをする。彼は大きく頷き、「御免」と言って立ち上がり、空に向かって柏手を二回打った。そして、体と腕をペタペタと触り、さらに柏手を二回打った。

「何のブロックサインなんだ？」

「ブロック……？」

「あ、野球分らんよね。いや、忘れてくれ……」

「……」

「ところで、今のは？」

「ジョウニに命じて候」

「え？　今ので伝わったの？」

リノスの声にイッカクは無言で頷く。

「スゲェな、オワラ衆……。帝様に、今度お礼をしなきゃいけないな……」

そう言ってリノスは、タナ軍のいるスワンプの方角に視線を向けた。

そして、その態勢のまま伝令を呼ぶ。

「全軍に伝えてくれ。今日から三日間はここを動くことはない。おそらく敵からの襲撃もないだろうが、一応は警戒を怠るな。各々三日間、十分に体を休めるように」

その言葉に、伝令の兵士はハッと畏まる。

「あ、それと、今夜軍議を開こうと思う。ご苦労だが、ニケさんとカリエス将軍、そして……ヴィエイユに俺のところに来るように伝えてくれ。そうだな……せっかくだから、夕食を共にしようか。夜7時に集合……そう伝えてくれ」

兵士は一礼をして足早にリノスの許を去っていった。

「さて、メイの様子を見てこようか」

そう言って彼は、医療テントに向かって歩き出した。

「あ、いらっしゃいませ！　ってリノス様！　すみません、ちょっと手が離せなくて……」

リノスの姿を見て驚いているのは、ポーセハイのドーキだ。彼は手許を忙しく動かしながら照れくさそうに話かけている。それもそのはずで、彼の前には長い行列ができていた。

「ああいや、そのままでいい。すまんな、ちょっと様子を見に来ただけなんだ」

「ありがとうございます。僕の方は、全く問題ないです」

「忙しそうだな」

「いいえ！　みなさん、僕の料理を美味しいと言って食べてくれます。こんなにうれしいことはありません」

そう言って彼はニコニコとしながら野菜を刻んでいる。その周囲では、料理番の兵士たちが忙しそうに働いている。

「まあ、無理だけはしないでくれな」

俺の言葉に、ドーキは笑顔で答えてくれる。本当は彼に今夜の夕食を差し入れてもらおうと思っていたのだが、この様子ではさすがに負担が大きそうだ。俺は今夜のカリエス将軍たちに出す夕食をどうしようかと考えながら、メイたちがいるであろうテントに向かう。だが、そこにメイの姿はなかった。

居場所を聞くと、彼女は数千人に及ぶ傷病兵たちをずっと見回っているのだと言う。おそらく、ベッドが並んでいるテントにいるだろうとのことで、そこに移動してみると、メイは患者一人一人に今の気分を聞き、あるいは脈を取るなどしていた。そして、ポーセハイ

たちから彼らの病状を聞きながら、的確に指示を出していく。聞けば、メイはそれを不休不眠で続けているのだと言う。

「ご主人様……」

俺の姿に気が付いたメイが傍にやってきた。一見すると普段と変わらない様子だが、やはり体全体に何やらどんよりとした気配が漂っている。

「メイ、大丈夫か？」

「大丈夫です。こちらへは……？」

「ああ、メイの様子を見に来たのと、俺たちは最低、三日間はここに逗留することにした。それを伝えに来たんだ」

メイはちょっと考える素振りをしながら、三日あれば、軽傷の人であれば問題なく治療できますと答えた。重傷者については、ポーセハイたちがそれぞれアガルタの医療研究所に転移させたらしい。その上で、チワンがアガルタに戻り、重傷者の様子を見ているのだと教えてくれた。そして、勝手な振舞いをしたことを謝った。俺は謝る必要はないと言いながら、彼女によくやってくれたと言って、労をねぎらった。

「三日の間に、治療できそうにない方は、アガルタの研究所に転移してもらおうと思います。よろしいでしょうか？」

「ああ、そうしてくれ。それにメイ……少し休め」

「ありがとうございます。時間を見つけて休みます」

「いや、できることなら、すぐに休んでくれ。何だか、メイから疲れている雰囲気を感じるんだ」

「ご主人様……」

「メイに倒れられたら、アリリアや子供たちが悲しむ。それに、俺も悲しい」

「ううっ……」

メイはちょっと顔を赤らめながら項垂れる。そのとき、ベッドに寝ていた兵士が声をかけてきた。

「メイ様、休んでください！　ここに来られてからメイ様はずっと休んでいません！　食事も、水も……摂られていないのではないですか？　休んでください。俺たちは大丈夫ですから！」

「そうですよメイ様！　休んでください！」

「メイ様！」

「メイ様！」

兵士たちが口々にメイに対して感謝の言葉と、休んでくれという言葉を口にしている。その声を聞きながら、メイはオロオロとしていたが、やがて、ゆっくり兵士たちに向けて頭を下げた。その目には、一粒の涙が光っていた……。

第三百六十話　バーベキュー

結局メイは、控室でしばらく休むことになった。こちらに転移してきてからほぼ４８時間、休みなく働いていたのだ。しかも、食事もとらなければ、水も飲んでいないのだと言う。誰もがメイに休息をとるように勧めたのだが、彼女は大丈夫ですの一言で、頑として休もうとはしなかったのだそうだ。メイを控室に案内する際は、ポーセハイたちから礼を言われたほどだ。

俺としては、メイには帝都の屋敷に帰ってゆっくりと休んで欲しかった。きっと、リコや子供たちも心配しているはずなのだ。だが、彼女は自分だけ家に帰るわけはいかないと言って、この戦場で休むことを譲らなかった。結局、他のスタッフが休んでいる控室であればということで、彼女をそこに連れて行った。そこは、単にベッドが置いてあるだけの場所で、テントの端には地面の上に毛布が敷かれていて、どうやらそこで休息をしている者もいるようだった。メイは最初、そこに座ろうとしたので、慌ててベッドで横になるように勧め、ほぼ無理やりにそこに寝かせた。そして、水分を補給すること、食事を摂ること、最低数時間は寝ることを厳しく言い渡した。そして、その見張りにはローニを充てた。彼女には、この戦いが片付いたら、屋敷で腹いっぱい飯を食わせてやるという条件を付けたところ、無表情で頷いていた。彼女の耳がピンと伸びたので、喜んでいると解釈することにした。

そして俺は再び本陣に戻り、夕方の食事の準備を始めるのだった。

「……ありがとう。助かったよ」

俺の労いの言葉と、伝令が本陣に入ってくるのがほぼ同時だった。
俺の言葉に促されるような形で、兵士たちが本陣を後にする。伝令の兵士は一体何をやっているのかと訝しそうにしていたが、やがて、皆さまが自陣を出られてこちらに向かっていると報告してくれた。
俺は彼に礼を言って下がらせる。

「さてと……準備は万端だな」

俺は満足そうに頷いた。

しばらくすると、カリエス将軍がやってきた。その後ろには、精悍な顔つきをした男が控えていて、俺を鋭い目で睨んでいた。

「紹介しよう。我が軍の軍団長を勤めているアーモンドだ」

「アーモンド・ジャリクスです。以後お見知りおきを」

彼は俺から一切視線を外さぬまま、スッと腰を折った。

「バーサーム・ダーケ・リノスです。初めまして」

「……アガルタ王とお会いしたのは、初めてではございません」

「え？　あ、そうでしたか。それは失礼しました。あの……どちらでお会いしましたか？」

「イルベジ川で、帝国軍と我が軍がにらみ合っているときに……。確か、冒険者風の衣服を着て、白い馬に乗っておられたと記憶しています」

「ああ……あのとき。もしかして、決死隊……殿を勤めておいでだった……？」

「左様です」

「確かに、お見掛けしましたね」

「アーモンド」

カリエス将軍が呆れたような表情を浮かべている。

「お前の場合は、ただお見かけしただけだ。こうして顔を突き合わせてお会いするのは初めてだろう？　アガルタ王様、ご無礼の段、お許しください」

「いいえ。俺のことを覚えていてくれて、嬉しいです」

アーモンドはぶ然とした表情を浮かべていたが、俺が差し出した手を、彼は力強く握った。

「お待たせした」

俺とアーモンドが握手をしていると、サンダンジ国のニケ王がやってきた。彼も男性を一人、連れてきていた。彼は確か、ニケの息子だ。

「やあ、君は……」

声をかけた俺に、ニケの息子は紋切り型の挨拶を述べる。それに苦

笑いをしながらニケは俺とカリエスに挨拶をする。

「皆さん、どなたかをお連れになっていますね」

俺が何の気なしに話したことだが、彼らはそれが意外だったらしい。カリエスがキョトンとした表情をしている。

「軍議を開くとありましたから……。己が信頼する副官を伴って参加するものと思っておりましたが……。もしかすると、内密の相談でしたか？」

そんなことを言いながら、カリエスはニケと顔を見合わせている。あとで聞くと、一人で参加した場合、作戦内容に解釈の違いが出る可能性がある。それを避けるために、他国と共同戦線を張る場合は、最低でも二名以上で軍議に参加することが通例なのだそうだ。一つ、勉強になった。

そんなことをしているうちに、ヴィエイユがやってきた。彼女は誰も伴わず、一人だった。そのことを聞くと、いつものように満面の笑みを浮かべた。

「お気遣いありがとうございます。全く問題ございません」

俺はその言葉に苦笑しながら人を呼び、クノゲンを呼んでくれと命じた。アガルタ軍をざっと見廻した中で、最も軍事的なことに精通しているのはラファイエンスだが、彼は今のところ死んだことになっていて、すでにその身はアガルタに転移させていた。となれば、その次ということになると、それはクノゲンを置いて他にはなかった。彼ならば、俺のことを上手にフォローしてくれるだろうという思惑もあって、俺は彼を呼んだのだ。

「ではまず先に、食事の準備をしましょうか」

「準備？」

ニケの息子が思わず声を上げる。俺は彼に視線を向けながら笑顔で声をかける。

「そうだ。今日は皆でバーベキューでもやろうと思いましてね。バーベキューって……ご存じないですか？　各々で食材を焼くのです。あちらに炭を入れたバーベキュー台を準備しました。肉と野菜はこちらに用意しています。好きなものを、好きなだけご自分で焼いて下さい。焼き加減もお任せします。調味料は塩と醤油があります。これもお好みでどうぞ」

このために俺は、無限収納に納めている肉と野菜を取り出し、食べやすい大きさにカットしたのだ。野菜は問題なかったが、肉を切ると俺の持っているナイフはすぐにボロボロになってしまった。そのために、ホーリーソードで肉を切ったが、こいつは全く刃こぼれしなかった。さすがはメイの作った逸品だけある。あ、ちなみに、この剣で肉を切ったのは、内緒にしていて欲しい。

初めてのバーベキューということで、皆戸惑っている。俺がまず手本を見せて肉と野菜を焼く。そして、食べごろを見計らって皿に取り、塩をかけて食べる。……美味い。肉がいいのか、炭で焼いているのがいいのか。ともあれ、なかなかのお味だ。

「面白そうですね」

そう言ってヴィエイユが肉を焼き始める。彼女の様子を見ながら、

カリエスやニケたちも肉や野菜を焼き始めた。その様子を見ながら俺は酒を出していく。

そのとき、クノゲンがやってきた。何と後ろにルファナ王女を伴っていた。意外にこの二人は、いい仲なのか？

「遅くなりました。ルファナ様がおいでですが……構いませんか？　リノス様に命じられたと言って、ずっと私に付いて来るのです」

クノゲンは辟易とした表情を浮かべながら、王女に視線を向ける。

「アガルタ王様が、クノゲン殿に付けと言われたのです。ですから……」

彼女も渋々ながらという表情を浮かべている。俺は二人に入るように促し、カリエスたちに目で二人を参加させたいと訴えた。ニケもカリエスも問題ないと小さく頷き、ニケの息子のシンは俺とは目を合わせなかった。対照的にヴィエイユはニコリと笑みを浮かべ、俺の許に近づいてきた。

「全く問題ございませんわ。人数が多い方が、よい作戦が思いつきやすいかと存じます」

そう言って彼女は二人を招き入れた。そして、小さな声で呟く。

「あの女性（かた）、なかなか強かですね。この大戦の軍議に出るという価値を知っておいでなのです」

「そうかな？」

そう言って俺は、淡々と酒の準備を始めた。

「さて、肉も焼けました。野菜も焼けました。取りあえず皆で乾杯しましょうか。その後で、軍議を行いましょうか」

俺の声に、皆がグラスを取る。その中で、何とも言えない表情を浮かべている男がいた。ニケの息子だ。彼からは、無理やりこの軍議に参加させられた感がありありと感じ取られる。

「まあ、なぜこんなことをと思われるかもしれませんが、皆で難しい顔を突き合わせて議論するのもいいですが、今回の戦いはかなり大変なものになると思います。きっと、これまでの作戦では通用しないでしょう。そこで、皆で酒を飲み、食事を摂りながら、ちょっと肩の力を抜いて議論してみてはどうかと思った次第です。ダメな場合はまた考えますが、一度、この方法を試してみましょう。何かいい案が出れば、儲けものです」

俺の言葉を聞きながら、皆、頷いている。何故かクノゲンは半笑いだ。ニケの息子は……あきらめたように、俺に向き直った。どうやら彼も、この場に参加することを決めたようだ。

「では、まずは、我々の出会いに、乾杯！」

こうして、軍議を兼ねたバーベキュー大会は幕を開けた。

第三百六十一話　軍議

肉や野菜を焼きながら軍議を行うというのは、おそらく前代未聞のことだろう。この会議の決定次第で、多くの人の命が危険にさらされる可能性もあるが、それはそれとして、参加している人々は、この状況をむしろ楽しもうとしているようだ。

とりわけ、サンダンジ王のニケは、自分で調理をするというシステムを気に入り、肉や野菜を色々な焼き加減に調理して、その味の違いを楽しんでいた。ただ、ほぼ生の状態の肉も食べていたので、お腹の調子は大丈夫だろうかと、いらぬ心配をしてしまう。

やはり、こうした場で気が利くのはクノゲンだ。次々に肉や野菜、追加で用意した貝柱などを焼いていき、それをルファナ王女やカリエス将軍たちに配っている。そしてヴィエイユも、自ら肉を焼きながら美味しい美味しいと言って食べている。

こうして見ると、ただのバーベキューだが、能動的に動く者と受け身の者との差がよく出てくる。最も能動的なのはクノゲンとアーモンドだ。彼はクノゲンの動きを見て、その後自分が替わりましょうと言って焼き方に回った。この二人は、かなり気を遣える。

一方で、その対極にいるのが、ニケの息子のシンだ。彼は何もしない。ただ、ウロウロとバーベキュー台の周りをうろつくのみだ。ニケも息子と語らい合えばよいと思うのだが、彼は自分が楽しむのに集中してしまっている。それを見かねたヴィエイユが、仕方なく彼に焼いた肉や野菜を分け与えている。で、彼はそれからヴィエイユの傍から一歩も離れようとはしない。

宴もたけなわになった頃、俺はテーブルを新たに用意して、そこにサンダンジ国の地図を広げる。

「あ、食べながらで結構ですので、ちょっとこちらを見てください」

俺は現在、俺たちが陣を張っている位置と、タナ軍がいるスワンプの位置を指し示す。

「兵力は互角。これは先に動いた方が負ける」

誰に言うともなくカリエスが口を開く。その言葉に、皆が一様に頷く。彼はサンダンジ軍がいる場所を指して、さらに言葉を続ける。

「何より、この位置にサンダンジ軍がいるのがいい。ここにサンダンジ軍の精鋭がいることで、敵は退くに退けなくなっている。ここに陣を張ったおかげで、この均衡が生み出されている。サンダンジ王……命を懸けた甲斐がありましたな。そうでなければ今頃我らは……」

「いや、そんなことはない」

ニケが真面目な顔をしながら首を振っている。聞けばニケは、ほぼ単騎でこの戦場に到着したらしい。兵をまとめていると時間がかかると判断した彼は、それを部下に任せ、自分の近習と共に戦場に向かったのだと言う。俺たちは数万のサンダンジ軍が到着したと思い込んでいたが、実際は数十騎だった。到着した直後にタナ軍に攻められていれば、ほぼ確実にニケの命はなかった。だが、彼とその近習は持っていた旗を目立つところに掲げるなど、必死で軍勢がいるように見せかけた。それが功を奏して、敵はまんまとダマされてく

れたのだ。

ニケは申し訳なさそうな表情を浮かべているが、その働きは見事なものであったらしい。カリエスの陣からはその動きがよく見えたそうで、彼はそのことを手放しで称賛し続けた。一方で、後方にいたクノゲンとルファナ王女、ニケの息子のシンは、何となくバツの悪そうな雰囲気を醸し出している。それを感じた俺は、話題を変えようと、地図を指さした。

「今、俺たちが陣を張っている場所はここですよね？　先ほど調べましたところ……」

俺は指を南に移動していく。

「ここまでくれば、魔法が使えることがわかったのです」

「何？　本当か？」

カリエスとアーモンドが地図を覗き込んでくる。二人は一瞬、顔を見合わせたが、やがてその額に深い皺を刻んだ。

「……遠いな」

誰に言うともなく、カリエスが呟く。その声に、ニケがゆっくりと頷く。

「そこは砂漠の真ん中だ。ここから馬で半日、徒歩だと丸一日はかかろう。しかもそれは、砂漠に慣れた我がサンダンジの馬と人であればの話だ。砂漠に慣れていないとなると……もう少し時間がかかるだろう」

「ということは、今の医療テントをそこに移すことができれば……とは考えてみたが、それは難しそうだな」

「……というより、アガルタ王は、何故ここに注目されたのでしょう？」

アーモンドが俺に視線を向ける。それを受けて俺は再び地図に視線を落とす。

「いや、ここに敵を誘い込めないかと思ってね……」

「……！」

全員が声にならない声を上げている気配がした。一瞬の間、沈黙が訪れた。

「しっ……しかし、誘い込むと言っても……」

「そうだ。カリエス殿の言われる通り、そもそもどうやってここに敵軍を誘い込むかが問題だ……」

「父上、それを論ずるのが軍議でしょう。これだけの方々がお集まりなのです。皆の知恵を絞ればよいのです」

「よいことを仰いますね、シン様。是非、あなた様のご意見を承りたく思いますわ」

ヴィエイユが目を輝かせてシンに迫っている。その豹変ぶりに、若者は戸惑いの表情を浮かべている。

「わっ……私は……」

「シン、お前は黙っていろ」

ニケが呆れたような表情を浮かべている。だが、それが彼の癪に障ったのか、シンはいささか声を荒げながら、俺たちを見廻す。

「私が一軍を率いて囮となります。私がタナ軍を引き付けている間に、お味方が敵を囲めば、必勝は疑いありません！」

「シン……」

「無理ですわ」

ニケが何かを言おうとしていたその直前に、ヴィエイユが言葉を発していた。そのあまりに断定的な物言いに、シンの表情が強張っている。

「あなた様が動いたところで、敵は動きはしません」

「そんなことはわからない……」

「いいえ、わかります。そもそも、敵はあなた様に価値を見出しておりません」

「どういうことです！？」

「敵が討ちたいと思っているのは、アガルタ王様、カリエス様、ニケ王様……そして、私です。あなたの首は敵にとってあってもなく

ても、どうでもよいのです」

「……」

「ですがシン様。私は、自らの命をかけて役に立とうとするお方は嫌いではありません。今のお言葉で、私はあなた様を見直しました。私、あなた様を大好きになりました」

ヴィエイユの言葉に、シンは顔を真っ赤にして俯いている。やめなさいよ、純朴な青年をからかうのは……って、ニケの顔が怖ぇ……。

「話を元に戻しましょう。この遮るもののない平坦な砂漠地帯に、どうやって敵をおびき寄せるのかということ、それに、ここでどのようにして戦うのか、この二点を議論しませんといけませんな」

クノゲンが絶妙なタイミングで話を整理してくれる。俺は彼の言葉に大きく頷く。

「あくまで俺の考えですが、タナ軍をおびき寄せるとなると、それはアガルタ軍が囮になる他はないと考えます」

「お待ちください！　それでは、アガルタ軍の被害は増えるばかりですぞ！」

「いや、カリエス将軍が思っておられるようなことはしないつもりです」

「どういうことです？」

「俺たちはただ退却します。この、魔法が使える地点までゆっくり

と退却するのです」

「退却すると言われてもだな……。タナ軍に追いつかれでもしたら、それこそ貴殿の命が危ない」

「カリエス将軍がそう思っておいででしたら、間違いなく敵もそう思っているでしょう」

「どういうことかな、クノゲン殿？」

「この戦いは、次の段階に入りました。そう、いつ、どの軍が、どの方角から撤退するのかという点です。現地点では、我らが圧倒的に不利です。そのため、敵方は我らが撤退する機会をじっと待っています。そして、そのやり方いかんによっては、敵は再び攻撃してくるでしょう」

「では、敵が攻撃してくる可能性が低い方法を取るべきではないか？　アガルタ王のお話では、確実に敵に狙われる……」

そこまで話をすると、カリエスがハッとした表情を浮かべる。

「まさか、アガルタ軍が囮になって敵を砂漠におびき寄せ、その隙に我らでタナ軍を囲もうと……そう考えておられるのですか？」

カリエスの言葉に、俺はニコリと笑みを漏らす。

「ただ、これにはかなり細かな段取りがいるだろう。危険度が、高すぎる……」

カリエスの言葉に、皆が頷いている。それを見た俺は、ゆっくりと

口を開く。

「だからこそ、皆さんで知恵を貸して欲しいのです……」

第三百六十二話　腹の読み合い

夕方から始まったバーベキュー軍議は、結局深夜近くまで続けられた。食材をあらかた食い尽くした俺たちは、酒を片手に軍議を続けた。

当初俺は、サダキチ達に命じて、体が痺れる粉を上空から撒こうと考えていたが、それはニケの一言で却下となった。それとなくスワンプの気候について聞いてみたところ、そこでは常に風が吹いているのだと言う。しかも、そこで吹いている風は東西南北あらゆる方向から吹いているらしく、風の流れを読んで……というのも難しい状況なのだそうだ。それがわかっただけでも、今回、軍議を開いた甲斐はあったというものだ。

結果的には、全員が納得できる作戦を練り上げることができた。その詳細は、誰にも喋らないと言う約束なのでここでは明かさないが、かなり緊密な連携が必要で、皆、細心の注意を払う必要があるとだけ言っておく。

可笑しかったのはニケの息子のシンで、彼はヴィエイユにピッタリと寄り添って、二人はまるで恋人のように見えたことだ。二人は折に触れてボソボソと小声で話をして、クスリと笑い合う……。そんな微笑ましい光景が何度も見られたのだ。そう言えば、確かヴィエイユはシンより一つ年上……。まあ、似合いと言えば似合いのカップルだろう。

ただし、現実はそう甘くない。バーベキューが終わり、ニケが後ろ髪をひかれているシンを伴って本陣を後にした直後、ヴィエイユは

衝撃的な言葉を小声で呟いた。

「バカな男ですわ」

その言葉に、残っていたクノゲンもルファナ王女も、驚いた表情を浮かべていた。これがカリエスやアーモンドに聞かれたら、おそらく彼女はキツイお小言を食らっただろうが、二人がいないタイミングを見計らって発言しているのだろう。この娘の強かさには、さすがに俺も目を覆いたくなる。

「シン君と二人、仲良くしていたじゃないか」

「ええ。あのお方の心を奪うなど、容易いことでした。ちょっと思わせぶりな姿勢を見せると、私の傍から離れないのですもの……。まあ、呆れるのを通り越して、むしろ、かわいいとさえ思いました」

「お前なぁ……。純朴な男子の心を弄ぶな」

「いいえ。あのお方は多くの女性を知っておりますわ。ただ……それは周囲の方々にあてがわれた女性たちでございましょう。ご自身から好きになって、何とかモノにしたいと思ったことなど、なかったのですわね」

「彼の初恋の相手がヴィエイユとは……。同情するよ」

俺のその言葉に、彼女は取り合うことをせず、ニコリと笑みを浮かべながら、じっと俺の目を見据える。

「私の体と心は、アガルタ王様に差し上げるのが私の望みでございます。それ以外の殿方には、指一本この体に触れさせるつもりはご

ざいません」

そこまで言うと彼女は、チラリとルファナ王女に視線を向けた。

「もっとも、私の体が見たいという殿方には、条件次第でお見せすることは厭いませんが」

その言葉にルファナ王女はギョッとした顔をする。そして、顔を強張らせたまま足早に本陣を後にした。その後ろをクノゲンが呆れたような表情で追いかけていった。

「アガルタ王様がお望みであれば、いつ何時でも、私をお召しください。どのようなご命令でも、喜んで従いますわ」

ヴィエイユの目が、トロンとしたものに変わっている。何とも艶めかしい、色気のある目だ。

「……お前、本当に、俺の言うことは何でも聞くのか？」

「はい。脱げと言われれば脱ぎます。どんな姿態も厭いません。ただ……」

「ただ、何だ？」

「他の男と交われ、というご命令だけはお断り申し上げます」

「何だそりゃ？　俺の言うことは何でも聞くのではなかったのか？」

「……」

ヴィエイユは真面目な表情になって、俺を見据えている。その瞳の奥には、何かの覚悟が見て取れた。

「他の殿方と交わるのであれば、すぐさま自決いたします。私は今までそう覚悟してまいりましたし、これからもその覚悟は揺らぐことはございません」

「……怖いな」

思わず俺は呟いていた。ヴィエイユが話している内容は、半分俺のストーカーになりますと言っているようなものだと思ったからだ。

「わかった。ではヴィエイユ、お前に命じる」

「ハイ」

「今すぐ……脱がなくていい！　今すぐ、自分の陣に帰って寝ろ。作戦決行は三日後だ。それまでに兵士たちを十分に休ませろ。そして、お前自身も……休め」

俺の言葉に、ヴィエイユは不満をあらわにしている。

「というより、お前ほとんど寝ていないだろう？　隠さなくてもいい。だが、睡眠は大事だ。あまり勧められたものではないが、ポーセハイにオモリという男がいる。そいつを向かわせる」

「薬……をいただけるのでしょうか？」

「いや、それも考えたが、あまりそれはよろしくないだろう。薬ではなく、オモリにフェアルドラドの定理について講義してもらうの

だ。あまりに難解すぎて、それを聞けばわずか数秒で眠りの世界にいざなってくれると言う優れものだ。この俺なども１０秒と持たなかった」

「うふっ、あはっ、アッハハハハハ……。面白いですわね。では……楽しみにしております」

「やはり、お前は腹の底から笑った方がいいな」

「え？」

「微笑み百面相は悪いとは思わないが、やはり、腹の底から笑った方が、かわいらしく見えるな」

「それを仰りたいがために、先程のお話を……」

「まあ、何だ。とにかく休め。そういうことだ」

ヴィエイユはわかったような、わからないような表情を浮かべながら、本陣を後にしていった。その後姿を見送りながら、俺は無意識に呟いていた。

「意外とウケたな。今度、メイにこのネタを試してみるか……」

次の日、目をカッと見開きながら、そのお話は是非聞きたいです！　眠るなんてとんでもありません。ご主人様も一緒に、是非！　と言うメイ。その後、俺は眠気を必死で我慢しながら彼女と共に講義を聞いたことで、激しく疲れを覚えるのだが、このときの俺は、そんな未来が待ち受けているとは、知る由もなかった。

一方、タナ王国のヴィルの陣では、同じように地図を睨みながら作戦を練る幕僚たちの姿があった。その様子をヴィルは退屈そうな表情で眺めている。

「おそらく殿はサンダンジ軍だろう」

「退却するとなれば、最初にアガルタ軍が動くだろう。何と言っても名将・ラファイエンスを失っている。それに、兵の消耗も激しい。まずはアガルタ軍本隊を安全な場所に移し、その後ろを賊軍が追い、その後ろをラマロン、最後にサンダンジという順番だ」

「それを見越して我らは、カコナ川流域に軍勢を伏せておき、アガルタが引き上げて来るときにその横っ腹を突く。戦線は伸び切っておるだろうから、大将首は簡単に獲れるだろう」

「うむ、問題は、いつ敵が動き出すかということだ」

「待て、賊軍のことを甘く見すぎてはいないか？　奴らは兵を簡単に自爆させるような戦略を取ってくる。ジーギスの如く、我が軍に自爆隊の夜襲がかけられでもしたら、大混乱に陥るぞ」

「それは見張りを厳重にすればよいのだ。斥候も多く放っている。その点は心配あるまい」

「そなたたち、いい歳をしてわかっておらぬな」

「は！？」

不意にヴィルが呟く。彼はゆっくりと首を横に振りながら、大きな

ため息をついた。

「そのような、誰にでも予測できる作戦を、あのアガルタが取るとは思われぬ。考えても見よ。アガルタ、ラマロン、賊軍は何のためにこのサンダンジまで出張ってきているのだ。我らを壊滅させるために来ているのだ。にもかかわらず、おめおめと退却するなどと言う考えは、奴らには全くないであろう」

「では、国王陛下は、奴らはあくまで我らと戦うつもりであると？　しかし、現在の状況では……」

「むろん、奴らが圧倒的に不利ではある。そうした状況下で考えることと言えば、策を弄して我らを壊滅に追い込むことだ。奇襲という手もあるが、それは無理であろうな」

「……」

「今、敵は魔法が使えぬ状態にある。ジェラニウスが健在である限り、奴らには魔法は使えぬ。と、なれば、何とか魔法が使える状態にしたいというのが自然というものじゃ」

「と、いうことは……」

「ジェラニウス達の影響が及ばぬ場所まで移動する……と考えるであろうな」

ヴィルは姿勢を正しながら、地図をじっと見つめる。

「儂がアガルタ側ならば、今の場所から南へまっすぐに移動する」

「陛下……そこは、何もないただの砂漠かと……」

「遮るものの何もない砂漠……。そこで兵士たちの傷を治癒し、あわよくば、我らをそこに誘い込んで、袋のネズミとするだろうな。魔法が使える状態であれば、アガルタにも十分勝機はある」

「我らが動かねば……」

「いや、我らをどのように動かすのか……その算段は考えているであろうな」

ヴィルは楽しそうに頷きながら、幕僚たちに命じる。

「アガルタから目を離すな。動きがあればすぐに知らせよ。……フフフ、奴らがどのような手を打ってくるか……楽しみじゃ！」

ヴィルは不敵に笑う。だが一方で、彼は右腕と頼むオクタの帰りを、今か今かと待っていたのだった。

彼の許に、アガルタ軍に動きがあったとの知らせが来たのは、それから二日後のことだった。

第三百六十三話　そして、いよいよ動き出す

夕闇迫る中、カコナ川の対岸には夥しい数の篝火が焚かれていた。ここ数日は毎日見られた光景であり、タナ軍の将兵は特に珍しさは感じなくなっていた。だが、この日のアガルタ軍には、いつもとは違う様子が見受けられた。

「……煙」

斥候からの報告を受けたヴィルは、誰に言うともなく呟く。その様子を幕僚たちは不思議そうな表情を浮かべながら眺めている。

「それは、どの程度じゃ」

「ハッ。いつもの倍以上の煙かと思われます。アガルタ軍の後方に、まるで雲霞の如くたなびいております」

「アガルタ軍は、煙幕を張ろうとしているのでしょうか……」

幕僚の一人が思わず呟いたその一言に、ヴィルは声を上げて笑う。

「ハッハッハ！　なるほどな。バリアントはそう見たか。当たらずとも遠からず……というところだな。ウワッハッハッハ！」

よほど先程の言葉が気に入ったのか、彼は腹を抱えて大笑いしている。先日の戦い以降、どちらかと言えば厳しい表情しか見せることのなかった主君が突然見せた笑顔に、幕僚たちは戸惑いの表情を浮かべる。

「陛下、恐れながら。そのアガルタの陣から立ち上る煙に、何故執心なさいます？」

幕僚の一人であるタブーの一言に、ヴィルは顔を強張らせる。

「タブー、貴様でもわからぬのか？」

「は？」

「アガルタの陣から立ち上る煙は、おそらく、食事の用意をしているのじゃ」

「食事……でございますか？」

「しかも、雲霞のごとき煙が立ち上っておるとの報告じゃ。ということは、いつもより多めの食料を作っているのだろうな……。おそらく、数日分の食事を作っておるのじゃろうな」

「ということは……」

「ああ。今宵、アガルタ軍は動く。スワンプを攻撃するためではない。一旦戦場を撤退するつもりなのだ。あの煙はその食料を作るためのものじゃ。魔法が使える場所まで移動して帰ってくるまでの食料じゃ。……斥候を全員カコナ川に向かわせよ。アガルタ軍全軍の動きから目を離すでないぞ」

ヴィルの言葉に、幕僚たちは目を白黒させながら黙って頭を下げた。

そして、陽が落ち、辺りに夕闇に包まれた頃、斥候の一人がヴィル

の許に足早に駆け寄ってきた。

「申し上げます！　アガルタ軍が動き始めました！　どうやら、後方に移動しているようです！」

「ついに動いたか。それで？　賊軍とラマロン軍、サンダンジ軍の動きはどうじゃ？」

「今のところ動きらしい動きは見られません。ただ、賊軍の動きが俄かに騒がしいように見受けられます」

「フフフ……。アガルタの抜けた穴を埋めようとしているのか？　それにしては、お粗末じゃな」

ヴィルは口元にニヤリとした笑みを浮かべながら、大声で傍の兵士に命じる。

「ホンシュとルミネを呼べ！」

程なくして彼の前に二人が現れ、平伏する。彼はその様子を満足そうに眺めながら、ゆっくりとした口調で話しかける。

「そなたたちに、先日の戦で受けた恥辱を雪ぐ機会を与えようと思うが、どうじゃ？」

「ありがたき幸せにございます！」

「そのお役目、是非、このルミネに！」

「よいよい。そなたたちであれば、そう言うと思っておった。つい

先ほど、アガルタ軍が撤退を開始した」

「ということは、陛下……」

「ああ。追撃戦を行う」

ヴィルの言葉に、ホンシュとルミネは無言で頭を下げる。二人の体から活気が満ち溢れてきているのが、誰の目にも明らかだった。

「深夜の追撃戦となろう。味方同士が斬り合う同士討ちだけは何としても避けよ。そして、この追撃戦の指揮は、余が執る」

「お待ちください陛下！」

傍に控えていたタブーが片膝をついて控える。だが、そんな彼をヴィルは一瞥しただけで、すぐに幕僚たちに視線を移した。

「アガルタ軍の軍勢はおそらく、五千にも満たぬであろう。では、余はそれ以上の……二万の軍勢を以ってヤツらを追撃する。歩兵はいらぬ。全て、騎馬隊とする。すぐに出陣する。賊軍が手間取っている間に、我らはアガルタの穴をつくのだ！　撤退したアガルタ軍が魔法を使える地点まで移動させてはならぬ。急げ！」

タナ軍の準備が完了したのは、それからわずか数十分のことだった。

◆◆◆◆◆

それから遡ること数時間前、リノスは最後の軍議を行っていた。

「そ……それではあまりにも危険すぎる」

驚いたような表情で口を開いているのは、ラマロン軍のカリエス将軍だった。

「いや、タナ軍を殲滅するのは、この機をおいて他にはありません。ですから……」

「いや、アガルタ王、私もカリエス殿の意見に賛成だ」

そう言って、真剣な眼差しをリノスに向けているのはニケだった。

「何も、アガルタだけが危険を冒し、ある程度の犠牲もやむなしという作戦を行う必要はない。先日決めた作戦通りに、コトを行うべきだ」

「う〜ん。それをずっと考えていたのですがね。たぶん俺なら、一気に攻めようとはしないと思うのですよ」

「え？」

リノスの周囲にいた、ニケ、カリエス、アーモンド、ヴィエイユ、シン、クノゲン、ルファナ王女の顔が、一様にキョトンとなる。

「アガルタ軍が撤退していく。それを追う形でラマロン軍とヴィエイユの軍が撤退する。ニケさんたちサンダンジ軍は後詰としてその場に残る。そして、タナ軍が俺たちを突いてきたら、ニケさんたちがタナ軍の横っ腹を突く。サンダンジを攻めれば、俺たちが背後を突く……。よく考えられた見事な作戦だと思います。ただ、敵が動

かなかった場合はどうなるのかなと、ふと考えたのですよ。そうなった場合のことも考えた方がいいかなと。敵が動かなかった場合は、いたずらに俺たちとサンダンジ軍の距離が広がるばかりです。下手をすれば、サンダンジ軍が取り残される形になってしまいますから」

「そのようなことにはなりませぬ！」

突然口を開いたのは、ニケの息子であるシンだ。彼はスッと立ち上がると、周囲を見廻しながら、リノスの前に進み出た。

「アガルタ王様は深読みが過ぎるかと存じます。たとえ我が軍が孤立したとしましても、タナ軍十万、何の恐れることがありましょう。我がサンダンジ軍が、蹴散らしてくれましょう。砂漠での戦いは我らが慣れております」

「シン、控えろ。戦は口でするものではない」

ニケのドスの効いた声が響き渡る。その声に恐れをなしたのか、シンは悔しそうな表情を浮かべながら、自分の席に再びついた。

「恐れながらサンダンジ王様」

突然ヴィエイユが口を開く。俯いていたシンがパッと顔を上げて彼女を見据える。

「シン様のお気持ちもお汲み取りくださいませ」

「……どういうことかな、ヴィエイユ殿？」

「タナ軍強しといえども、我らサンダンジ軍の剣と魔法には誰にも

かなわぬ……そう申されておいでなのです。そうですわね？　シン様？」

「ヴィエイユ、もういい。お前は喋るな。話がややこしくなる」

リノスは勘弁してくれと言わんばかりに、ゆっくりと首を振る。そして、再び周囲を見廻しながら口を開く。

「別に俺たちは、この作戦で痛手を被るつもりはありません。むしろ、一人の死者も出さずに、タナ軍を殲滅したいと思っています」

そう言いながら彼は、隣のクノゲンに視線を向ける。

「クノゲン、アレは使えるんだな？」

「ええ。問題ありません。オージンを握りながらであれば、ちゃんと補充することもできます。時間はかかりますがね。それにしてもよくできていますな。中身の構造はどうなっているのでしょうな？」

「メイとシディーとドワーフたちが、技術の粋を集めて作ったんだ。中身の構造なんて、俺たちにわかるはずはないだろう」

そう言って二人は笑い合う。

「とはいえ、やはりアガルタ軍だけでは危険だ。もう少し兵を連れて行くべきだ」

カリエスの言葉に、リノスはちょっと考える素振りをする。

「……では、機動力のある騎馬隊を少々借りることはできますか？」

「おお、それならば、我がサンダンジの騎馬隊をお貸ししよう。砂漠の中での戦いでは重宝するはずだ」

「では、その騎馬隊を私が率いてアガルタ王様の許に参りましょう」

「シン、黙っていろ」

「恐れながら……」

親子喧嘩が再び始まろうとしたそのとき、不意に声が聞こえた。視線を移してみると、そこには、ラマロン軍のアーモンド司令官が畏まっていた。

「そのお役目、私にお任せいただけませんか。兵の扱いには少々、自信があります」

「アーモンド……」

何かを言おうとしたカリエスを、リノスはスッと手で制す。

「いや、彼でいい。そうか、あなたがいましたか。あなたであれば、鬼に金棒だ。な？　クノゲン？」

リノスは隣のクノゲンに視線を向けた。彼はアーモンドを見ながら、満足そうに頷いた。

第三百六十四話　月明かりの戦闘

月明かりに照らされた砂漠の中を進む一団があった。言うまでもなく、リノスが率いるアガルタ軍だ。彼らは黙って一面に広がる砂漠の中を行軍し続けている。

「……敵は動くでしょうか？」

ソワソワした表情を隠そうともせずクノゲンが話しかけてくる。

「動くと思うんだがな。敵の大将は、なかなかのやり手と見た。今夜、俺たちが動くと勘づいてくれると信じている」

そんな会話を交わしていると、目の前にサダキチが現れ、俺の肩の上に止まった。

『敵が動き始めました』

『ほう、詳しく』

『部隊の一部が街を出て、川に向かっています』

『どの方向だ？』

『南です』

『……南？』

俺は頭の中で、地図を思い浮かべながら考える。

『サダキチ、タナ軍から目を離すな』

『承知しました』

そう言ってサダキチは姿を消した。俺は馬首を並べているクノゲンとルファナ王女に視線を向ける。

「敵が動き出したそうだ」

「動きましたか！」

「クノゲンは嬉しそうだな」

「ええ。ようやく無駄飯ぐらいの境遇からオサラバできるのです。この気持ち、お分かりいただけんでしょうな」

彼の言葉に俺は苦笑いを浮かべる。

「ただ、スワンプを出たのはいいが、南に向かっているのだそうだ」

「南？　我らの背後を突いて来るのではないのですか？　そのために、陣形に大穴を開けたのに……。罠であると気づかれましたか？」

「いや、そうでもないだろう」

ルファナ王女が、よく通る声で話しかけてくる。彼女は、失礼と言って俺とクノゲンの間に馬を滑り込ませる。

「おそらく敵は、ヴィエイユ殿の陣を迂回してくるつもりだ。そして、我らの横っ腹を突こうとしているのだ」

「なるほど。そう考えたか」

俺は顎の下に手を当てて、ちょっと物思いにふける。

「アガルタ王様」

声のする方向に視線を向けると、イリモの轡を取りながら歩いている、一人の男の姿があった。彼はサンダンジ王から遣わされたネーオという男で、この国の砂漠のことを熟知している。その彼が、ニコニコと笑みを湛えながら、俺に話しかけてくる。

「この先には、サンドワームの巣があるね。何だったら、そこに敵をおびき寄せて、一網打尽にするがいいね」

「いや、そうもいかんだろう。敵はその辺のことも知っていると考えた方がよさそうだ。下手をすると、俺たちがその巣のある所に追い落とされる可能性もある。当初のお願い通り、安全な場所を選んで案内してくれ」

ネーオはニコリと笑いながら、畏まり、と言って、北に向けて歩き出した。

そして、二時間ほど歩いたとき、サダキチからタナ軍が接近してきていると報告があった。どうやら敵は騎馬部隊を中心に軍を編成していて、その機動力を生かして俺たちを追尾しているらしい。

「ようやく来たね」

そう言ってネーオはニコリと笑う。俺は行軍を止めて、全軍に休憩を命ずる。そして、クノゲン以下、主だった者を集めて軍議を開く。

「決戦の場所はここにする。作戦は以前伝えた通りだ。クノゲン、頼むぞ」

俺の言葉に彼は恭しく一礼をする。

「そして、そのサポートとして、アーモンド司令官。あなたに指揮をお願いします」

アーモンドはぶ然とした表情を崩すことなく俺を睨みつけていたが、やがてゆっくりと頭を下げた。

「まずは兵士たちには腹ごしらえをさせろ。見ての通り、夜の砂漠は凍てつく寒さだ。全員にピタンを貼れと厳命しろ。あとは、温かいスープを作って体を温めてくれ。以上だ」

俺は全員に命令を下しながら、懐に忍ばせたピタンを取り出す。一見すると、何の変哲もない小さな袋なのだが、この中には小さな石が入っていて、それが熱を発しているのだ。コイツを持っているだけで、かなりの寒さがしのげるのだ。

「それにしても、シディーたちドワーフの技術力はスゲェな。わずかの間に、こんなものを作ってしまうんだからな」

俺は空に現れている月を見ながらそんなことを呟く。俺は砂漠での戦いを決めた直後、寒暖差の激しい砂漠の環境を考慮して、夜は暖を取ることができるものはないかとシディーに相談したのだ。俺と

しては、カイロのようなものを作ってくれれば御の字だったのだが、彼女は、いつものようにあごの下に人差し指を当てて何かを考えるポーズをとっていたが、やがて、何やら専門用語を並べた言葉で解説を始めた。その内容は俺には皆目見当はつかなかったが、どうやらすぐにできる、ということだけはわかった。そして次の日の夜、彼女はドワーフと共に、大量の石を持って転移してきた。驚く俺に彼女は、この石に水をかければ発熱するから、兵士一人一人に持たせてくださいと言って、石を俺の掌に置き、そこに水をかけた。

……まるで、お灸をすえられているくらいに熱かった。思わず、ギャアと叫んでその石を放り出してしまったくらいだ。この鎧は、こうした熱は防御しないのだろうか？　てっきり適当なところで熱をカットしてくれるものと思い込んでいたが、どうやらそんな機能はないらしい。それに、俺の結界も役に立っていない。一体これは、何なのだろうか？

涙目になって謝るシディーを、大丈夫だと制しながら、その石を布にくるんで懐に入れてみると、なるほど体全体が温かくなった。遠赤外線でも出ているのだろうか、とも考えたが、詳しいことはよくわからない。

俺はシディーに丁寧に礼を言い、石を受け取ると、すぐさま兵士たちにこの石を分け与えるように命じた。石自体も小さいもので、一人数個は簡単に持つことができるため、暖を取るだけでなく、いくつかの石を集めればすぐに竈になる。実際、兵士たちは石を集めて湯を沸かし、スープを作っている。これも、僅か数十秒で湯が沸くのだから、ティ〇ァール並みの熱量だ。

そんなことをしながら暖を取り、体を休めること一時間、サダキチからタナ軍がすぐ近くまで迫っているという報告があった。俺は全

軍に命令を下す。

「よし、休憩時間は終わりだ。全軍、速やかに準備にかかれ！」

そう言って俺は兜をかぶり、イリモに跨った。

◆　◆　◆

時を同じくして、ヴィルの許にはアガルタ軍を捉えたという情報が、斥候から報告されていた。彼はすぐさまホンシュとルミネを傍に呼び、命令を下す。

「あの丘を越えれば、アガルタ軍の殿の姿を捉えることができよう。敵を見つけたら、すぐさま突撃を開始せよ。先陣はルミネ、そなたに命ずる」

ヴィルの言葉に、ルミネは恭しく一礼をする。その様子を満足そうに頷きながら、彼はルミネの隣に控えているホンシュに命令を下す。

「言うまでもないことだが、本陣からの命令なくして撤退することは許さん。先日のような不始末は、二度と許さんぞ」

「畏まってございます。兵士たちには、間違っても退けという命令は下さないことを徹底して伝えております。ご安心ください」

その言葉にヴィルは満足そうに頷く。

「よし！　ルミネを先陣に、アガルタ軍に突撃を開始せよ！　アガルタ王・リノスの首を獲れ！」

その命令が下るや否や、タナ軍は陣形を整えて、アガルタ軍へ突撃を開始した。

◆　◆　◆

「見えた……」

先陣を任されているルミネは、分厚い鎧の中で思わず呟いた。月明かりの中、丘の上を上っていく一団が目に入ったのだ。まさしくあれは撤退中のアガルタ軍だ。彼は鼻の穴を膨らませながら、周囲の兵士たちに向けて突撃の合図を送る。

二度とあのような失態は犯さない。何をしたのかは知らないが、あのときは突然頭が痛みだし、戦闘不能になった。おそらくあれは、耳に入った不愉快な音が原因なのだろう。そう考えた彼は、兜の中を軟らかい綿のようなものを詰めて、鎧が共鳴しない細工を施していた。これならば周囲の音は聞こえにくくなるが、戦闘不能に陥ることはない。戦闘の指揮は合図だけで何とでもなる。むしろ、この方が集中力が高まって好都合だ……。そんなことを考えながら馬を走らせ、アガルタ軍に肉薄しようとしたそのとき、彼の全身に衝撃が走った。

「ぐはっ！」

彼は叫び声と共に馬から落ち、全身を砂の上に打ち付けた。一体、何が起こったのか？　体中に痛みを感じながら、彼はゆっくりと起き上がる。そして、状況を確認しようと立ち上がったそのとき、再び体中に衝撃が走った。

「ガアッ！」

叫び声と共に、再び彼は砂の上に大の字になって倒れる。体が動かない……息が苦しい……一体何が起こっているのか……。彼は混乱する頭の中で、必死で現状を把握しようと勤める。だが、その意思に反して、彼の意識は少しずつ遠ざかっていった。

「美しい……月……」

意識を失う直前、彼の目に入ってきたのは、空に輝く満月だった。兜の隙間から見える月は、美しく、そして、冷たいものだった……。

第三百六十五話　惨状

一方の司令官であるホンシュも、目の前の惨状を受け入れることができなかった。

乾いた破裂音が鳴り響いたかと思うと、突撃をしていた兵士たちが次々と落馬していった。それは先陣を切るルミネも同じだった。分厚い鋼鉄製のフルガードの鎧を着用し、相当の魔法の攻撃も物理的攻撃も受け止めることのできる彼が倒され、その鎧はあちこちに大きな窪みができていた。彼は砂の上に大の字になって倒れて動かず、すでに戦闘能力を喪失している。こんなことは、これまでの戦いの中で初めてのことだった。

「全軍固まれ！　楯を使って防御しろ！」

ホンシュの命令に、兵士たちが迅速な動きで自身の周囲を固めていく。このままの体制で敵に突撃をかけよう……そんなことを考えたそのとき、地鳴りのような音が聞こえた。ふと視線を移してみると、丘の上に撤退していたアガルタ軍の一団が、突然攻撃に移った。見たこともない程の速さで、しかも物も言わずに粛々と突撃を仕掛けて来ていたのだ。そのあまりの不気味さに、ホンシュは一瞬、息を呑んだ。

「防御！」

命令を下すのと、アガルタ軍が殺到するのがほぼ、同時だった。

「ぐはっ！」

「うわっ！」
「ぐっ！」

あちこちで兵士たちの声が上がる。それと同時に、金属がぶつかり合う音も耳に入ってくる。敵は槍で突き崩そうとしているらしいが、この盾を使っての防御はいささか自信がある。おそらく敵は突き崩せないとわかると動揺するだろう。そこで攻撃に転じれば……。

そんなことを考えていると、馬の蹄の音が遠ざかっていく。ホンシュは盾の間に隙間を作らせて、そこから周囲を覗き込む。すると、先程襲ってきたとみられる一団が、丘の上に引き上げていく様子が見えた。

「解除せよ！　状況を報告せよ！」

兵士たちの鎧がこすれる音が聞こえる中、彼はアガルタ軍が引き上げていった方向を、睨みつけた。

◆◆◆

「さすがですな」

にこやかな笑みを浮かべて話しかけているのは、クノゲンだった。その視線の先には、馬上で息を整えているアーモンドの姿があった。彼は鋭い目でクノゲンを睨みつけている。

「どうでしたか。タナ軍の防御は？」

「堅い」

「ほう」

「だが、穴がないわけではない。盾と楯のが少しでもずれているところ、もしくは、隙間が空いているところに槍を打ち込めば、中の兵士たちを倒せるだろう。それに……足元がほぼ無防備だった。そこを狙えば、あの堅い守りは崩せよう」

「ただ一度戦っただけでそこまで見抜くとは……。いや、あなたが味方でよかったですな」

「世辞はいい。こんな動きもしない者たちと戦うのは……私の性に合わん」

アーモンドは吐き捨てるようにして、馬をゆっくりと進めた。クノゲンは笑みを浮かべながら、その背中を見送った。

「よし、こちらの被害状況を報告しろ！　……全員帰還？　よし、それでいい。誰も無駄死にはするな。危険と察知したらすぐに逃げろ。敵でなくとも構わん。魔物の気配を感じても逃げるのだ。夜とは言え、砂漠には毒を持ったサソリなどもいる。各自十分に注意しろと伝えろ」

膝をついてクノゲンの命令を聞いていた兵士は、ハッと返事をして、足早にその場を去っていった。

「甘すぎはしないだろうか？」

怪訝な表情を浮かべているのは、ルファナ王女だ。彼女は相変わらず重々しい鎧を纏い、大儀そうな動きでクノゲンの側に近づいて来る。

「兵士たちに逃げることを許してしまうと、すぐに戦線が崩壊してしまう。やはり、命を盾に踏みとどまらせるべきでは？」

「いいえ。これでいいのです。我が軍は何より、兵力が少ない。一人でも多くの兵の命を救いながら戦わねばなりません。それに……」

クノゲンはこれまでの柔和な顔を一変させて、真剣な眼差しでルファナ王女を見据える。

「私の部隊にいる兵士たちは、いずれも百戦錬磨の男たちです。一人一人の戦闘力が群を抜いています。それ故に、一人が欠けると大幅な戦力低下となるのです。納得いかない点も多くあろうかとは思いますが、静観していただきたい」

クノゲンの初めて見せる表情に、ルファナ王女は息を呑み、それ以上言葉を続けることができなかった。その様子を見ながら彼はいつもの表情に戻り、兵士たちに命令を下す。

「よし、速やかに引き上げるぞ！　急げ！」

クノゲンの号令一下、兵士たちが迅速に撤退を開始した。

夜を徹して行われたこの追撃戦で、タナ軍は甚大な被害を受けることになった。彼らは逃げるアガルタ軍を追尾しては捉え、そこで反撃に遭って兵力を削がれることを繰り返していた。

アガルタ軍は、追ってくるタナ軍の姿を見つけると、兵士たちがバラバラになって散開する。そして、軍勢を整えて突撃するタナ軍に

対して、飛び道具を使って攻撃してきた。それは「魔銃」と称するアガルタ軍の新兵器で、充填した魔力を用いて鉄の玉を発射するというものなのだが、そのときのタナ軍にはそのような武器があることは把握していなかった。

ただ、どうやらそうした飛び道具を持っていると察知したタナ軍は、自慢の盾を用いて防御を固めながら突撃を行ったが、アガルタ軍はそれも構わずに攻撃を仕掛けてきた。彼らの攻撃力は抜群であり、当初は何とかその攻撃を躱すことはできていたが、やがて兵士の足元を集中的に狙われると、タナ軍は決まって陣形を崩した。さらに、魔銃で攻撃されたそのすぐ後には、決まってアガルタ軍は騎兵で突撃を仕掛けてきた。彼らは盾と楯の間や、防御の弱い点を的確に突いて攻撃を仕掛けてくるため、タナ軍は徐々にその数を減らしていった。そして、夜が白み始めた頃、タナ国皇帝のヴィルの怒りは、ついに頂点に達した。

「一体何をやっておるのだ！」

ヴィルの怒号に、幕僚たちはただ頭を下げてその怒りをやり過ごそうとしている。居並ぶ幕僚の大半は何らかの傷を負っていて、この戦いの激戦ぶりがよく見てとれた。

「ルミネやホンシュを始めとして、アガルタに攻撃を仕掛ける度に我が軍の損害は増えるばかりだ！　それに何と申す！？　この寒さと砂漠の移動で兵士たちの疲れがたまっておるから、一旦兵を退けと申すのか？　弱音を吐きおって！　貴様らそれでも常勝タナ軍の幕僚どもかァ！　恥を知れ、恥を！」

すでに先陣を命じたルミネとホンシュの姿はそこには居なかった。

二人とも、アガルタ軍の銃に撃たれて戦闘不能となり、タナ軍から落伍していたのだ。

「……恐れながら」

ヴィルの前に進み出たのは、幕僚の一人であるタブーだ。彼はキッとヴィルを見据えながら、落ち着いた声で話しかける。

「敵はこれまでの敵とは全く異なる戦いを仕掛けて来ております。兵士たちはバラバラに散開しているため、攻撃しようにも的を絞ることができません。しかも、ヤツらは強力な飛び道具を持ち、我らを防戦一方に追い込んでおります。さらにその直後に行われる騎馬隊の突撃……。討ち死にしたる面々は、いずれもアガルタ軍の前で血の涙を流しながら、あるいは砂漠の砂に、血まみれの爪を立てながら果ててございます」

「タブー。そなたは、何が言いたいのだ!?」

「如何に攻めても、自軍の将兵を損耗するだけの無念さを……本陣におられる陛下には、おわかりになりますまい」

「タブー卿、言葉が過ぎますぞ！」

幕僚の一人が見かねて声をかけるが、ヴィルもタブーも睨み合ったまま微動だにしない。

「……余が命じた作戦に手落ちがあった、そう申すのか?」

落ち着いた、だが、ドスの効いた声でヴィルが口を開く。しかし、タブーはいつもの落ち着いた声で、ゆっくりと彼に話しかける。

「いえ、手落ちではございません。明らかな失敗でございます。アガルタ軍に対して、我らはあまりにも無策でございます」

その瞬間、ヴィルの手が傍にあった剣に手が掛かった。

「申し上げます！　アガルタ軍が、陣を張っております！」

「何？」

「この先に小さなオアシスがございます。そこで、全軍が休息をとっているように見受けられます！」

伝令のその声に、ヴィルは剣から手を離し、幕僚たちに視線を向ける。

「疲れがあるのは敵も同じじゃ。我らは何としてもここで、アガルタ王の首を挙げねばならぬ。ここは敵中じゃ。我らが生きて帰るには、敵将の首を挙げる他ないのじゃ」

彼は立ち上がると、居並ぶ幕僚たちに大声で命令を下す。

「この上は総攻めじゃ！　他の首などいらぬ。敵はアガルタ王・リノスただ一人だ！」

その言葉に、幕僚たちはゆっくりと頭を下げた……。

第三百六十六話　乾坤一擲

ヴィルの目がカッと見開かれている。彼は目の前に広がる光景を、いまだに信じられずにいた。

「陛下、お危のうございます」

背後から、幕僚の一人であるタブーの声が聞こえるが、彼は敢えてその声に反応しなかった。もとより、危険は承知の上だった。彼は何と、自らアガルタ軍への斥候を買って出ていたのだ。

皇帝自ら、親衛隊も引き連れずに敵陣近くまで向かうことなど、あり得ない振る舞いだった。だが、彼は総攻撃を行う前に、どうしてもアガルタの陣立てを自らの目で確認したかったのだ。

これまでの、アガルタと対峙して以来の戦いは、計画通りに作戦が遂行できたことは一度としてなかった。アガルタとの戦いは、いつも途中で思わぬ横やりが入るなど、いつもあと一歩というところで軌道修正を余儀なくされる。彼は考えていた。何故、思い通りにコトが運ばないのかと。

その原因はすぐに思いつくことができた。オクタの存在だ。彼は転移という能力を使って、タナ軍の軍事的機動力を格段に高めていたと同時に、彼のもたらす情報は実に的を射たものであり、これまでのタナ軍の作戦成功のカギを握っていたと言って過言ではなかった。そうしたこともあってヴィルは、これまでのタナ軍の体たらくは、幕僚たちが報告する情報の質にあると考えていた。

今回の総攻撃において彼は、何としてもアガルタ王・リノスの首を挙げたかった。そうしなければ、このままズルズルと砂漠の奥地に引きずり込まれることになる。そうなると戦線は膠着し、敵中の中に取り残されることになる。彼としてはそれだけは何としても避けたかった。そのため、彼は敵の情報を確認するために、自ら斥候に出たのだった。

「アガルタ王、ヤツの首を獲るのだ。ヤツの首を獲れば、この戦、終わりだ……」

ヴィルは誰に言うともなく、独り言を呟きながら、眼下のアガルタ軍を見据える。伝令からの報告の通り、敵は砂漠の中にできている小さなオアシスに陣を張っていた。敵に動く気配はなく、明らかに休息をとっている様子だが、問題はその場所だった。何と敵は、砂漠の中にできた窪地に陣を張っていたのだ。

……幕僚たちを従えたアガルタ軍が、何故、このような愚策を？

勝利を確信する一方で、ヴィルの胸中には一抹の疑問が残っていた。こんなところに陣を張れば、周囲から攻撃されると、なす術もなく壊滅することは明らかだった。こうした窪地に軍を進めるときには周囲に敵軍がいないかどうか、細心の注意を払わねばならないのは、戦いの常識だった。で、あるにもかかわらず、アガルタはその常識外れのことをやっているのだ。

……何か罠があるやもしれぬ。

彼はアガルタ軍を見据えながら、もし、自分がアガルタ軍の立場であったならばと考える。

「囮やもしれぬな」

彼は振り返り、控えていたタブーに視線を向ける。

「囮……でございますか？」

「アガルタ軍の周囲に物見を放て！　総攻撃をかけるか否かを決めるのは、それからじゃ」

そう言って彼は愛馬に跨り、自陣に向けて走り出した。

オアシスに逗留しているのは間違いなくアガルタ軍であり、周囲に部隊はいないと報告があったのは、それから数時間後のことだった。既に陽は高く上り、気温もぐんぐんと上昇していた。ヴィルは眉間に皺を寄せたまま、あらぬ方向を見つめ続けていた。

「陛下、恐れながら、今が攻め時であると愚考します」

幕僚の一人が進言してくる。だが彼はその声に反応せず、相変わらず何かの物思いにふけっている。

「この機を逃すと、アガルタを殲滅する機会は……。間もなくヤツらは行軍を開始するでしょう。その前に……」

そのとき、ヴィルの視線が、幕僚たちに向けられた。

◆　◆　◆

「喉が渇いただろう。オアシスの水を飲んでいけ」

俺の言葉が終わる前に、目の前のサダキチは姿を消した。

「やっぱり、陽が出てきた砂漠は、喉が渇くよな」

そんなことを言いながら、俺は目の前に控えているクノゲンたちに視線を向ける。

「タナ軍が動き出したそうだ」

俺の声に、全員が頷く。俺は傍らに控えているアーモンドに視線を向ける。

「特に何をすることもないとは思うが、一応、準備をしてもらえるかな？　水は好きなだけ持って行くといい」

彼は無言でスッと頭を下げると、足早にその場を去っていった。

「何とも、いい男っぷりですな」

クノゲンがため息をつきながら、アーモンドの後姿を見送る。

「彼の見事な働きぶりは、カリエス将軍にちゃんと報告しなきゃな」

「そうですな」

俺はクノゲンとそんな会話を交わしながら立ち上がり、傍に置いていた兜に手を伸ばした。

◆　◆　◆

「……」

砂漠の丘の上で、ヴィルは腰に差している剣を抜きはらった。そして、それを天に向けて突き上げた。

「我は軍神なり！　汝らは軍神の兵たる本領を見せよ！　五波、十波、二十波……。アガルタ王・リノスの首を挙げるまで、断じて、断じて攻撃の手を緩めるでない！！　……突撃ィ！！」

彼の剣が振り下ろされた直後、タナ軍の一斉突撃が始まった。

馬を走らせながらヴィルは、目の前に迫ってくるアガルタ軍の様子を凝視する。兵士たちは一応は戦闘態勢を取っているが、攻撃を仕掛けてくる様子はない。弓隊もいなければ、怪しげな飛び道具を使う部隊がいる様子も見えない。何かがおかしいと思っていたその瞬間、先陣を切ってアガルタ軍に突っ込んでいった兵士たちが、まるではじけ飛ぶようにして宙を舞った。

……一体、何が起こったのか、理解することができなかった。ただ、アガルタ軍が何かの策を施したのだけは辛うじて理解できる。ヤツらは何をした！？　そんなことを考えている中でも、兵士たちが次々にはじけ飛んでいる。

パチッ、パァン！

何かがはじけるような、破裂するような音が響き渡っている。まさかこれが報告にあった、昨夜の攻撃なのだろうか？　だが、アガルタ側の兵士が攻撃をしている様子は見えない。

そのとき、ヴィルの体に衝撃が走った。何事かと思いながら周囲を見廻すと、何と、はじけ飛んだ兵士の体が、タナ軍に向かってまるで弾丸のように、四方八方から飛んできていたのだ。そのあまりの凄まじさに、ヴィルは思わず馬を止めた。

「うっ……うわぁぁぁ……」

「あっ……あんな軍勢に……敵うわけはない……」

思わず馬を止めた彼の耳に、親衛隊の兵士たちの弱気な声が聞こえてきた。思わず声のする方向を睨みつけると、彼の背後をいくつもの黒い影が通り抜けるのに気が付いた。

……それは、タナ軍の兵士たちだった。彼らは、攻撃命令を放棄して我先に逃げ出していたのだった。

「かかれ！　かかるのだ！　退くでない！　かかれぇ！」

ヴィルは剣を振り回しながら必死で命令を下す。だが、彼の声は兵士たちに届かず、次々と騎兵や歩兵が彼の前を通り過ぎていく。

「ぐわぁぁぁぁ！」

絶叫とともに彼は剣を振るう。その瞬間、傍を通り過ぎようとしていた兵士の体が地面に投げ出された。だが、目の前で自軍の兵士が斬られたのにもかかわらず、兵士たちの動きは止まらず、タナ軍は完全に壊走状態になっていた。

「我は軍神じゃぁ！　軍神の命令が聞けぬのかぁ！　貴様らぁ！　貴様らぁぁぁぁ！」

ヴィルの絶叫が戦場に響き渡る。だが、その声は、空しく戦場の喧騒にかき消された。

「……はあ、はあ、はあ」

肩を上下させながら、激しく呼吸をするヴィルの前には、砂漠の景色が広がり、その数十メートル前には、槍を構えた兵士たちが並ぶアガルタ軍の陣があった。

「陛下……」

不意に自分を呼ぶ声が聞こえる。ゆっくりと声のする方向に視線を向けると、そこには幕僚の一人であるタブーの姿があった。

「……」

無言で睨みつけるヴィルをじっと見据えていたタブーだが、彼はゆっくりと視線を外し、アガルタ軍の方向に視線を向けた。それにつられるようにしてヴィルがタブーの視線を追うと、そこには、アガルタ軍の陣地から隊列を組みながらこちらに向かって来る騎馬隊の姿が見えた。

「陛下……いかがなさいますか？」

タブーの言葉に、ヴィルは何の反応も示さず、憎しみを込めた目で、こちらに向かって来る騎馬隊を睨みつけるのだった……。

第三百六十七話　どの口がそれを言う！？（前書き）

『結界師への転生』が、去る１０月１２日に幻冬舎さまのデンシバーズ（ｈｔｔｐ：／／ｄｅｎｓｈｉ－ｂｉｒｚ．ｃｏｍ／ｋｅｋｋａｉｓｈｉ／）にてコミック化されました！　これも偏に、拙作をご贔屓いただいている皆様のお陰と、厚く御礼申し上げます！

第三百六十七話　どの口がそれを言う！？

ヴィルは近づいて来るアガルタの騎兵たちを、微動だにせずに睨み続けていた。そのとき、彼の周囲を、わずかに残った数名の親衛隊が固めて、臨戦態勢を取った。

「陛下……」

傍でタブーが小さな声で話しかけてくるが、彼は一切の反応を示さない。やがて、騎馬隊はヴィルの周囲を取り囲み、その中の一人が、静かな声で話しかけてきた。

「私は、ラマロン軍の司令官を勤める、アーモンドというものだ。そのお姿を見るに、タナ軍の司令官のお一人であろうかと拝察する。貴公の名を伺いましょうか」

その声にヴィルは返答せず、赤く濁った瞳をアーモンドに向け続けた。アーモンドはヴィルの傍にいるタブーに視線を向け、先程と同じ問いかけをする。彼は、返答の許可を得るようにヴィルに視線を向けたが、相変わらずアーモンドを見据えたままで全く反応はない。

「……ラマロン軍が囮となっておったのか」

不意にヴィルが言葉を発した。アーモンドは怪訝な表情を浮かべながら、落ち着いた声で返答する。

「いや、私の所属はラマロン皇国だが、貴公たちが攻撃されたのは、紛れもなくアガルタ王が率いる軍勢である。私は単に援軍に来てい

るだけに過ぎない。……まずは、お名前を伺いましょうか」

「無礼者ぉ！」

突然、ヴィルの声が砂漠に響き渡る。彼の荒い息が、アーモンドのところまではっきり聞こえてくる。

「仮にも敵とは言え、一国の王と対するのだ。我らはアガルタ軍と戦っているのだ。ならば、アガルタ軍の中から然るべき者を寄こすのが筋だろう！　貴様では話にならん！　帰ってアガルタ王に伝えるがいい！　我はタナ王国国王、タナ・カーシ・ヴィルである！　我を捕らえたくば、アガルタ王自身がここに来るがいいと！」

アーモンドは一瞬驚いた表情を浮かべたが、すぐに目の前で激高するヴィルの顔を侮蔑の目で眺めていた。戦場において敵を捕らえるのに、アガルタもラマロンもないのだ。たまたま、戦場に取り残された一団を見た彼が、攻撃しようとはやる兵士たちを抑えて来ているのだ。司令官によっては、すでに彼の命は無くなっていたのだ。にもかかわらず、その状況を理解せず、あまつさえ、自らを国王と名乗り、それに見合う扱いを求めてきた。こんな男は、国王としての資格はない。アーモンドは心の中でそう呟いていた。

現にヴィルは、あらゆる面で、国王という座から落ちているのだ。家来も、兵士も、その多くが逃げ去っていた。今は配下の数名の兵士だけが、ヴィルの残存兵力だった。そういう状態ではヴィルの発言は効力はないし、その発言自体すらできる立場にいないのだ。

……こうなったら、おとなしく助命でも乞えば、まだまだみどころもあるのに。

彼は周囲に目をやる。ヴィルを守る兵士たちの表情は引きつっており、その真ん中に、白馬の上に金色の鞍を載せ、その上で銀の鎧を装備してふんぞり返りながら、アーモンドを見下しているヴィルの、高くて細い鼻梁が、アーモンドには叩き潰してやりたいほど憎らしく見えた。

……やたらと兵を動かすだけ動かして、兵士や周辺の国々を混乱させたバカ国王め。

彼はそんなことを心の中で吐き捨てていたが、表面上は落ち着いた様子を見せながら、ヴィルに向けて口を開く。

「私はあくまで、戦場に取り残された貴公を捕えに来たに過ぎない。貴公らは敗者である。今の貴公らには、自ら死を選ぶことも、生きることも決める権利すらない。貴公らの命を始めとするすべての事柄は、アガルタ王が判断される。長く戦場においでになった貴公らに、それがわからぬはずはないだろう」

そう言って彼は、周囲の部下たちに向けて顎をしゃくる。それを受けた兵士たちは馬を降り、タナ軍の兵士たちを捕らえ始めた。ヴィルたちは唯々諾々として彼らの命令に従い、その作業はわずか数十分で完了したのだった。

「司令官殿、よろしいのでしょうか？　仮にも一国の王なのです。もう少し……」

ヴィルたちをアガルタ軍本陣に護送している途中、アーモンドの副官であるシーバが話しかけてくる。後方にいるタナ軍の者たちを刺激しないように、アーモンドの馬に近づくことなく、さらには、彼の顔も見ることなく、ただ真っすぐを前を見据えたまま話しかけて

いる。その様子を見てアーモンドは、シーバの優秀さを改めて感じた。

「ああいう手合いは、妥協すると付けあがる。放っておくのが一番だ」

彼は口元に笑みを湛えながら、大きく頷いた。

……まさか、敵の大将を、タナ国の国王を捕らえられるとは思ってもいなかった。その報告を聞いた俺は最初、何かの間違いではないかと思った程だ。だが、敵の身柄を確保したアーモンドは、確かに敵がそう言ったのだと断言し、その処遇を決めるように言ってきた。

まずは、捕虜を引見するべきだというクノゲンたちの言葉に従う形で、俺は、アーモンドにここに連れてくるように命じる。程なくして現れたのは、神経質そうな表情を浮かべた初老の男と、落ち着いた、穏やかな表情を浮かべた、二人の男だった。

初老の男は、俺を見ると一瞬だけ、少し戸惑った表情を見せた。だが、すぐに眉間に皺を寄せ、仁王立ちしたまま俺を睨みつけてきた。その後ろに控えていた男は、ゆっくりと片膝をつき、俺にじっと視線を向ける。

そんなことをしている間に、アーモンド配下の兵士たちが、銀の鎧や剣などを持って入ってきた。

「こちらが、タナ王国国王が装備していた武器、防具です。その隣が、タナ軍親衛隊長である、タブーが装備していた、武器、防具になります」

俺はそれらをチラリと見て、再び初老の男に視線を向ける。彼は顎をクイッと上げ、まるで見下げるようにして俺を睨んでいる。

「アーモンド、タナ王国国王で間違いはないな？」

「はい。彼が装備していた鎧に刻まれた紋章は、確かにタナ王国国王家の紋章でした。間違いはないと思われます」

「そうか。ご苦労だった」

そう言って俺はスッと立ち上がり、傍に控えているクノゲンたちに目配せをする。そして、そのまま踵を返して、本陣から出ていこうとしたところ、突然、怒鳴り声が響き渡った。

「余の首を獲らぬのか！」

驚いて声のする方向に振り向くと、ヴィルが憤怒の表情を浮かべて俺を睨みつけていた。

「アガルタ王・リノス、そなたも一国の王ならば、戦いの作法ぐらいちゃんと心得ていてはどうだ。戦いに勝っても、戦いの作法を知らないならば、野盗の類と同じではないか。国王というものは、捕らえた将を引見し、言葉をかけ、しかる後にその処遇を申し渡すものだ。今後もアガルタは、あちこちの国を攻め、その国王や領主を捕らえることだろう。だが、戦いの作法を怠ったならば、やがてアガルタも面目を失い、滅びる運命となろう。我が言葉を、深く胸に刻むがいい！」

「貴様っ！　どの口がそれをッ！」

ヴィルの言葉が言い終わるか、終わらないかのうちに、ルファナ王女が剣を抜きはらっていた。それをクノゲンが止めに入り、彼女の剣の柄を右手で押さえている。俺はクノゲンに目配せをして、ルファナ王女を下がらせる。彼女はヴィルに憎しみを込めた視線を向けながら、本陣を後にしていった。

「さあ、斬れ！　余の首をもって、軍神の首を挙げたと末代までの誇りとするがいい！」

「いらない」

「何！？」

「お前の首に、価値はない」

「きっ、きっ、きっ……きさ……きさ……きささ」

「タナ軍は壊滅した。敵の軍団を制圧してしまった今、お前の首には、何の価値もない」

俺の言葉に、ヴィルは唖然としている。

「いや、アガルタ王。この男は、仮にも一国の王です。彼をこのままにすれば、再びタナ軍は勢いを盛り返すでしょう。ここで彼の首を獲り、タナ軍の兵士たちに晒すのです。そうすれば、敵は戦意を喪失し、我らの勝利は確定します」

進言するアーモンドに俺は視線を向ける。そして、ゆっくりと口を開く。

「彼が、自陣に帰れたら、ね。だが、ここは砂漠の真ん中だ。丸腰の彼らが徒歩で自軍にたどり着けるのだろうか？　無理だと思うよ？　首を晒す……ねぇ。う～ん。何か、もう一つだなぁ。あ、ちなみに、ヘイズ……そちらでは、オクタというのかな？　彼の転移を使って……って考えているかもしれないけれど、彼はもう死んだ。それは諦めるんだな」

「な……オクタが！？　オクタ……」

「アガルタ王様」

驚きのあまり呆然とするヴィル。そんな中、彼の後ろに控えていた男が口を開く。彼は片膝をついたまま、真っすぐに俺に視線を向けている。

「一つ、お尋ねしたいことがございます」

「何だい？」

「我らは、何故、敗れたのでしょうか？　我が軍はアガルタ軍を包囲し、殲滅するべく攻撃を致しました。が、その攻撃は全く効いていないように見えました。一体なぜ……。どんな策を講じられたのでしょうか？」

「ああ、そのことか。簡単だ。結界を張ったんだよ」

「け……結界！？」

「ああ。今は国王などと言う厄介ごとを押し付けられているが、実

は俺の本職は結界師でね。今回は、自分でも納得のいくいい結界が張れたと自負している」

「バ……バカな……。魔法は封じ込めたはずでは……」

ヴィルが、息も絶え絶えに呟いている。その様子を見ながら俺は、二人に向けてゆっくりと口を開く。

「では、なぜ俺たちが魔法を使えるようになったのか。種明かしをしようか」

目の前の二人の表情が徐々に青ざめていった……。

第三百六十八話　ご苦労様

俺は、目の前で立ち尽くすヴィルとタブーをそのままに、クノゲンたちに引き上げるための準備をしろと伝える。彼は伝令を呼び、それを命じる。するとすぐに、俺たちの周囲が俄かに騒がしくなった。

「ま、百聞は一見に如かずと言うからな。俺たちが魔法を使えるようになった理由を見せるのには、少々時間がかかる。しばらくの間だが、ゆっくりと休むといい」

そう言って俺は立ち上がり、踵を返して二人のいる場所から立ち去った。

「……こんなものでいいのかな？」

「ええ。あの手の男は、相手をすればするだけ要求をしてきます。基本的に相手をしないのが一番です」

俺は兵士たちの間を歩きながら、傍にいたアーモンドと会話を交わす。当初俺は、ヴィルとは色々と語ろうと考えていた。何せ、あれだけ短期間に隣国を制圧し、このサンダンジ国までも併呑しようとしたのだ。何か、学ぶべきことや相通ずるものがあるのではと考えたが、あの様子を見る限りでは、かなり独裁者の色が強そうだ。

「ああいうのは、上手くいっているときはいいのだろうが、上手くいかなくなると、坂を転がるようにして崩壊していくようだな」

「何か、お心当たりのことがありますか？」

「いや、俺も会ったことはないが、ある国でいたんだよ。そんな独裁者が」

「ドクサイシャ？」

「まあ、タナ王のように、全てを自分の意のままに操りたいと思う王のことだよ。その男は、平民出身だったが、巧みな弁舌を用いて、その国の国主になった。その直後から、ものすごい勢いで周辺国を侵略していって、世界を制覇するんじゃないかという程だったのだが、ある作戦が失敗したのをきっかけに、その国は敗れてしまった。当然、その国の独裁者は自ら命を絶った。ちなみに、その男は、元々は画家になりたかったのだが、それが叶わなかったために、仕方なく独裁者になった。まあ、人類史上最悪の職業選択をした男だ」

「何と……」

アーモンドは、わかったような、わからないような表情を浮かべている。そんな彼を横目で見ながら歩いていると、先程の伝令が俺に近づいて来て、準備が整ったと告げてきた。

「早いな。さすがだな。じゃあ、もう一度、あの独裁者の元に戻るか。……っとその前に」

俺はそんなことを呟きながら目を閉じ、意識を集中し始めた。

しばらくして、俺はヴィルたちの前に再び戻ってきた。彼らとその近習たちは、アガルタの兵士たちに監視されていて、特にヴィルは居心地が悪そうに、周囲の兵士たちをせわしなく睨みつけていた。

俺はそんな彼らに、ただ一言、これから戻るとだけ告げて、ポーセハイの肩に手を置いた。

「では、戻ろう」

そう言って俺は転移結界を発動させた。

「な……何じゃ？　一体何が起こったのじゃ？」

キョロキョロとヴィルは周囲を見廻す。彼のいる場所は、四方に白い布が張られているために風景が変わらず、そのために、タナ側の人間たちには、転移の様子がいまいちわからなかったようだ。だが、周囲から大きな歓声が上がっているために、何かが起こったことはわかるらしい。

「陛下！　足元を！」

近習の一人の声で、全員が足元に視線を向け、そして絶句する。これまで砂だった地面が、石だらけのそれに替わっていたからだ。その様子を見ながら俺は兵士たちに、布を取り払えと命令する。

目の前に現れたのは、見慣れたカコナ川の景色だった。ヴィル以下、タナ側の人間は、目の前に広がる光景に目を白黒させている。どうやら、現実としてなかなか受け入れられないようだ。

そのとき、イッカクが突然姿を現す。彼の存在に気が付いたタナ側の兵士たちが、ヴィルの傍を固める。そのあまりの慣れた行動に、俺は思わず苦笑する。

「御前に」

「ご苦労だった」

俺の声に頷いた彼は、スッと視線を後ろに向けた。すると、兵士の間から、イッカクと同じ格好をした者が、一人の男を引きずりながら歩いてきた。よく見るとその男は、白髪の男性で、鎧を装備しているものの、それはすでにボロボロになっており、顔に血がぺったりと付いていて、かなりの傷を負っている様子だった。

ズルズルと引きずられてくる白髪の男は、俺たちに気付くと、体をビクッと震わせて、その動きを止めた。

「ま……まさか……陛下!?　なぜ、陛下がここにおられる!?」

「ジェラニウス……」

二人とも目を見開いて固まっている。だが、オワラ衆の一人は、そんなこともお構いなしに、ジェラニウスの首根っこを掴んで、ズルズルと引きずりながら俺たちの許に連れてきた。

「斯様に候者は、ジョウニに候」

イッカクがこちらに向かって来るオワラ衆の一人を紹介する。彼は体中に黒い包帯のような布を巻き付けていて、その表情を伺い知ることはできない。だが、体にぴったりと薄い布が巻き付けられているので、その体つきは見ることができる。彼の体は、全く贅肉のない、言ってみれば、ガリガリの体をしていた。なるほど、この体なら、長距離を走れるなと思わず俺は納得してしまう。

彼はジェラニウスの体を地面に叩きつけるようにして、ひれ伏させる。そして、片膝をついて、俺にスッと頭を下げた。

「へっ……陛下……。陛下……。申し訳……申し訳ございません……」

まるで、タナ軍の敗北を宣言するかのように、ジェラニウスは慟哭した。

タナ軍と睨み合っている際に、サダキチから報告があったのは、とある場所で、数人の男たちが強い光の周囲に集まっているという情報だった。その光は真っすぐに俺たちが陣を張る方向に向いており、しかも、そこに居る男たちは掌をその光にかざして、ブツブツと何やら呪文のようなものを唱えていたというものだった。

直感的に怪しいと判断した俺は、イッカクに命じ、その光を調べてもらうことにした。ただそこは、戦場からかなり離れた場所にあったため、普通の人間ではなかなか時間がかかる。だが、オワラ衆は普通の人間よりも速く走ることができる。そこで俺はイッカクに、オワラ衆の中で最も足の速い男に、その探索を命じたのだ。

「……完遂」

ジョウニもまた、簡潔に報告をしてくる。俺はご苦労と言って彼に労いの言葉をかけた。

結果的に、このジェラニウス達は、戦場から遠く離れた場所で、ある装置を使って俺たちに向けて魔力を送り続けていた。言うまでも

なくそれは、この戦場で俺たちの魔力を封じ込めるためのものであり、彼らはそれこそ、命を削って魔力を送り続けていたのだ。

ジョウニの手には、人の拳大程の淡いピンク色の石が握られていた。これこそが、魔力を遠方に送る装置であるらしく、それは当然、オクタことヘイズが彼らに与えたものだった。

彼は、俺の命令を忠実に実行したらしい。俺は、その光を消せと命令を出していた。それだけでなく、もし、その光を消すことを邪魔する者があれば捕らえること、最悪、非情な手段を取ることも許すと言っておいた。そのため彼は、装置をブッ壊す際、周囲にいたタナ軍の兵士たちを皆殺しにしたのだと言う。その中でも最も頑強に抵抗したのが、慟哭しているジェラニウスだった。だが、彼の魔法をもってしても、ジョウニの体に傷一つ付けることはできず、逆に彼は体をズタズタに斬られたのだという。だが、斬られても斬られてもその都度、回復魔法を唱えて復活してくる彼に、これ以上戦うのは時間の無駄と判断したジョウニは、彼を気絶させ、縛り上げてここまで連れてきたのだそうだ。ちなみに、連れてくると言っても、手を引いて彼を連れてきたのではない。彼を背負って走ってきたのだそうだ。最早、人間のする芸当ではない。

「君が、装置を破壊してくれて助かったよ。お蔭で、結界を張ることができて、タナ軍を殲滅することができた。オワラ衆には、改めてお礼をさせてもらうよ」

「魔法……いつ気付かれしをや？」

「ああ、たまたま、オアシスで休憩をしていたときに、兵士の一人がライトの魔法を唱えたら、それが出たんだ。もしかしたらと思って、魔法を使ってみたら、いつものように使えたんだよ」

そう言いながら俺は、掌の上で、火を出したり、ライトを出したりして、魔法が使えることをアピールする。これまでは、1メートル先には魔法は届かなかったが、今はかなり先まで炎を届かせることができる。そんなことをしながら俺は、小さな声で呟く。

「やっぱり魔法は万能で、便利だな。これさえあれば、この戦いは、すぐにでも終わらせられそうだ……」

第三百六十九話　タナ国の処遇

やがて、アガルタの本陣には、カリエス将軍やニケ王らが次々とやってきた。最後にヴィエイユがやってきたが、彼女はやって来てすぐに、ニケ王に付いて来た息子のシンを見つけて、ニコリと微笑んだ。その瞬間から彼は、ヴィエイユをガン見し続けている。

その後すぐに彼女は俺に視線を向け、シンとはまた違った、目に色気を湛えた微笑みを浮かべた。どうやら、本命はあなたです、と言いたいようだ。

それぞれの軍の最高司令官が揃ったところで、ヴィルたちの引見が始まった。彼らの処遇は捕らえた俺の一存で決めてしまってもいいとアーモンドは言っていたが、クノゲンは、諸侯に引見した方がいいと言う。俺はそのクノゲンの意見を容れて、皆にヴィルを引見させたのだ。

アーモンドなどは、兵士たちにもヴィルの姿を晒すべきだと言っていたが、さすがにそれはいかんだろうと考えた俺は、四方に白い布を張って、その中で引見することにした。

「サンダンジ国の王である、ニケだ」

各将それぞれが、ヴィルたちに自己紹介をしていく。彼はふんぞり返ったまま俺たちの挨拶を受けていた。まるで、どちらが勝者であるのかわからない状況だ。

「さて、このヴィルたちの処遇ですが……」

俺の問いかけに、全員が視線を向けてくる。その中で俺は、スッとニケに視線を向ける。

「アガルタ王にお任せする」

彼はまるで宣言するようにそう言い切った。その隣で、息子のシンは、驚いたような表情を浮かべている。なぜ、このサンダンジ国で裁くと言わないのか……おそらく、そう思っているに違いない。ニケもその思いに気付いているのだろうが、彼は断固として息子には視線を向けない。そんな様子を見ながら俺は、カリエス将軍とアーモンド司令官に視線を向ける。彼らはゆっくりと頷き、ヴィルたちの処遇を俺に一任すると、無言で賛同を示した。

「アガルタ王様に申し上げます」

突然、そんな声がする。これは言うまでもなく、ヴィエイユだ。

「この、タナ王らの処遇は、私にお任せ願えませんか？」

あまりにも予想外の話だったのだろう。俺以外の全員が面を食らったような表情をしている。そんな中、俺は努めて冷静に、彼女に返答を返す。

「何をする気だ？」

「逆に、アガルタ王様は、この方々をどうなさるおつもりですか？」

「……」

正直、ヴィルたちの処遇については、細かいところまでは考えていなかった。命を奪う……ことも考えたが、直感的にそれをすると、タナ軍が頑強な抵抗をして、この先ややこしいことになる気がする。それはやらない方がよさそうだ。むしろ、ヴィルを人質に取りながら、何とかうまく収めていく……。

「この方々を生かしたまま、裏で操る……そうお考えではないですか？」

今、俺が考えていたことをズバリと指摘されて、思わずピクリと体を震わせてしまう。その様子を満面の笑みで見ていたヴィエイユは、わかっていますよと言わんばかりに、大きく頷いた。

「そのお考えに、私も賛成です。そのために、この方の処遇を私にお任せください。アガルタ王様のご命令に忠実に従う者に仕上げて御覧に入れますわ」

「いや、俺は別に女王様と下僕を拵えるつもりはない。それは、他でやってくれ」

俺の言葉に、ヴィエイユはいまいちよくわからないという表情を浮かべたが、すぐに元の表情に戻り、今度はニケたちを見まわしながら、よく通る声で口を開いた。

「それでは、タナ王国の処遇は如何になさいますか？　まさか、この王を解き放って、お構いなしとは参りますまい？　では、どの国がタナ王国の占領を担当なさいますか？　アガルタ、ラマロンの両国はここから遠方にございます。それに、今の軍勢の規模では、タナ王国を占領し、管理することは難しいかと存じます。と、なれば、隣接する国が占領……となりますが、国境を接するミーダイ国とフ

ラディメ国は、そもそもこの戦いに参加しておりませんから、その資格はございません。となれば、サンダンジ王国となりますが……。ニケ王様がそれをお受けするとは到底思えません」

「なぜ、そう言い切れる、ヴィエイユ？」

「これは……アガルタ王様としたことが。簡単です。それは、男のプライドです」

「何？」

「ニケ王様は、誰よりも誇り高きお方……。そのお方が、自ら援軍を乞いながら、決戦の場に遅参し、ただ指をくわえて戦いの趨勢を見守っていただけ……それだけの戦果しか挙げていない状況の中で、隣国の、しかも大国を併呑させてくれなどと、口が裂けても言えません」

「……ヴィエイユ、言葉を慎め」

「いや、ヴィエイユ殿の言われる通りだ。我らは戦に遅参した。その上、ほぼ、自軍の損害は限りなくゼロに近い。我らに論功行賞を論じる資格などない。それゆえ、タナ王国の処遇はアガルタ王に一任すると言っているのだ。何と言っても、この戦いでの一番の戦果を挙げたのは、アガルタ軍だ。続いて、ヴィエイユ殿……。お二人でお決めになるがよろしかろう」

ニケは真っすぐな視線を俺たちに向けている。時と場合によっては、息子を連れてここを去り、自陣に戻る……。彼の目からは、そんな覚悟が読み取れた。そんな様子をヴィルは薄笑いを浮かべながら眺めている。

「ニケ王様もこのように言っておいでです。タナ国の占領は我々にお任せください。アガルタの属国として、アガルタ王様の意のままに動く国に作り変えて御覧に入れます」

俺はヴィエイユの言葉に反応を示さず、大きなため息をつきながら考える。そして、スッとヴィルに視線を向け、しばらくそのままの姿勢で固まる。

「……何じゃ？　余に、知恵を貸して欲しいのか？　よかろう。貴様らの状況は、そこにいる賊軍……いや、ヴィエイユ殿が言われる通りじゃろうな。それならば……」

「黙っていろ」

俺は冷たく言い放ちながら、ヴィルの頭に手を載せた。彼は憤怒の表情を浮かべ、俺の手を振り払う素振りを見せたが、俺が全力でヤツの頭を掴んでいるために、戸惑っているようだ。

「……割かし、王としては、そこそこできるようだな？」

「……」

静かな沈黙がその場に流れる。よく見ると、ヴィルの目が、これまでの憤怒を湛えた目から、フッと焦点を定めない、何やらボーっとした表情に変わっていく。

「今から俺の言う言葉を繰り返せ。『私はタナ王国国王、タナ・カーシ・ヴィル。全てはこの世界のために』」

「……我は、タナ王国国王、。タナ・カーシ・ヴィル。すべては……この……世界のために……」

まるで酒に酔っているかのように、目をくるくると廻しながら、彼は俺の言った言葉をブツブツと呟いている。その様子を、彼の従者たちが目を見開いて眺めている。俺は、その彼らに近づき、ヴィルと同じように頭の上に掌を載せる。

……やがて、ヴィルを始めとする全員が、ブツブツと何やらよくわからない言葉を呟いているが、その声は小さく、俺にしか聞こえない程度だ。その上、その様子はすぐに収まり、先程と同じ落ち着いた表情に戻る。

「お前たちの命は助けることにする。ただし、これからは俺の命令に従ってもらう。いいな？」

「承知……しました」

ヴィルはこれまでとは打って変わって真面目な表情で答える。それを確認した俺は、ヴィエイユに向き直る。

「タナ王国にはヴィエイユ、お前が占領しろ。このヴィル以下、タナ軍の諸将を連れて引き上げてくれ。まずは……彼らをタナ軍本隊がいるスワンプに連れて行け。おそらくヴィルが、退却命令を出すはずだ。お前はタナ軍と一緒に本国に引き上げるだけでいい。念のために、フェアリードラゴンを付けておく。何かあったら、それを使って俺に知らせを寄こせ」

そこまで命じて俺は、ニケたちに向き直る。

「アガルタ王……貴殿は、何をなされたのだ？」

ニケが目を見開いて驚いている。さっきまでイキっていたヴィルが、突然大人しくなったために、かなり戸惑っているようだ。

「彼にはちょっと、お灸を据えたのですよ」

「オキュウ？」

「ちょっと脅かしたのです」

「……」

「タナ王国は、基本的にはこのままに、俺たちが裏で操る形を取りましょう。あまり気乗りはしませんが……。だが、彼らの後ろには、クリミアーナ教国が控えています。あの国と戦うためには、ここで無駄な血を流すべきではないと俺は考えます。色々と思うところもあろうかとは思いますが、ここは俺に任せていただきたいと思います」

俺の言葉に、そこに居た全員が頭を下げた。

第三百七十話　撤退準備

「ただ、アガルタ王。貴殿の戦利品はどうするのだ？」

不意にニケが口を開く。俺は彼の言っている意味が分からず、返答に窮する。そんな俺に、カリエス将軍がフォローを入れてくれる。

「この戦いにおける勝者は、アガルタ王、あなただ。いや、謙遜されずともよい。敵の総大将……しかも、国王を捕らえているのだ。これを勝利と言わずして何と言おうか。この連合軍の総大将は貴殿であることは、誰の目にも見て明らかだ。その貴殿が戦利品を持って帰らねば、タナ国に勝利したことにはならないのだ」

「う～ん、戦利品……ですか」

「一般的には、敵国の王の首を持ち帰るものなのだがな。それを望まぬのであれば、敵の王の娘を差し出させるのもよし、人質を取るのもよい。領土や金……アガルタ王やアガルタ国が欲するものを何でも要求し、差し出させればよいのだ」

悩む俺にニケが落ち着いた声で話しかけてくる。だが、彼の話の中で、俺の心が動いたものは、何もなかった。俺はゆっくりと息を吐きながら、周囲を見廻す。すると、兵士たちが持ってきたヴィルたちが装備していた剣や鎧が目に入った。

「……アガルタ王？」

俺はニケの呼びかけには応えずに、ゆっくりとそこに向かう。そし

て、ヴィルが持っていた剣を手に取り、それをゆっくりと引き抜いて刀身を眺めた。

「……いい剣だ」

そう言うと俺は、再び剣を鞘に納める。

「俺の戦利品は、この剣にします。これで十分です」

「いや、しかし、それでは……」

「お見事です」

ヴィエイユが笑顔で話しかけてくる。彼女は俺たちを見廻しながら、パチパチと手を叩いている。

「それこそが王としての振る舞いかと存じます。アガルタ王様は、物ではなく、心をお取りになりました。それこそが、勝者の振る舞いですわ」

「世辞はいい」

「これは失礼いたしました」

そう言いながらヴィエイユは、呆然とあらぬ方向を見続けているヴィルたちに視線を向ける。

「さて、それでは、私たちは、タナ王たちを連れてスワンプに向かいますわ。……いえ、我々だけで十分です。スワンプにて、残りのタナ軍を吸収して、そのまま私たちはタナ国に向かいます。そして

……アガルタ王様のご意思に従うよう、タナ国を操って参りますわ」

彼女はそう言って、スタスタとヴィルたちの許に向かって行く。だがそのとき、ふと足を止め、再び踵を返したかと思うと、彼女はニケの傍に控えている、息子のシンの側に近づいていった。

「シン様」

ヴィエイユの甘ったるい声に、シンの体がビクッと震えた。

「これからは、隣国同士になりますわね。これから先々、仲良くして参りましょうね」

シンはその言葉にしばらくの間固まっていたが、やがて、再び体を震わせたかと思うと、シドロモドロになりながら、慌てて返答を返す。

「あ、ああ。そ、そうですね。隣国同士……。仲良く、仲良く致しましょう。ええ、喜んで」

彼はコホンと咳払いをして、自らを落ち着かせる。そして、スッと背筋を伸ばして、ヴィエイユをじっと見据えた。

「いつ、何時でも我が国にお越しください。このサンダンジ・クエア・シン、鶴首してお待ちしております」

俺からはヴィエイユの背中しか見えないが、彼女がシンにどんな笑顔を見せているのかは、何となくわかる。おそらく、嬉しさ全開の笑顔を見せているはずだ。シンの隣にいるニケは、鋭い視線を彼女に向けているが、ヴィエイユはそれに気づかないふりをしている。

そして、俺の方向に振り返った彼女は、パチリと俺にウインクを投げかけた。

「アガルタ王様」

「……何だ？」

「大事なことを聞き忘れていました。撤兵はいつになさいますか？」

「……なるべく早くにしたいと考えている」

「今日、もしくは、明日くらいでしょうか？」

「いや、そうもいかないだろう。負傷者を先にアガルタに移さねばならないし、陣所や医療用テントの撤収もある……。やることが色々とあるから、少なくとも、撤退の準備に三日程度はかかるだろう」

そう言って俺は、ニケたちに視線を向ける。彼らも同じように考えていたのだろう。皆一様に頷いている。

「畏まりました。それでは、我々の撤兵は、準備が整えばすぐに行いたいと存じます。あとのことは、お任せください」

そう言って彼女は、笑顔を浮かべながら再びヴィルたちの許に近づき、彼らを促して本陣を後にしていった。その直後、俺はサダキチを呼びだし、ヴィエイユの監視を怠るなと命令したのだった。

ヴィエイユ達は翌日の朝、タナ軍と共に撤退をしていった。俺たちの目の前を数万の兵士が整然と行進して、カコナ川の上流に向かって歩いていく。最悪の状況を考えて俺は、全軍に臨戦体制を取るよ

うに命じていたが、取り越し苦労に終わった。ヴィルにかけた精神魔法は、上手く作用しているようだ。

本格的に使うのは初めてだったが、精神魔法ＬＶ５はある意味で恐ろしい魔法だ。分かりやすく言うと、他人の意識を遠隔操作することができるのだ。従って、術者が気が向いたときに痛みを与える…みたいなこともできたりする。その範囲は術者の魔力によるようだが、俺の場合、魔力は無尽蔵に近いために、ヴィルは世界のどこにいても、俺に精神を操られることになる。感覚としては、頭の片隅に、ヴィルの意識を感じ取ることができ、その部分の意識を集中させれば、彼の意識はもちろん、見ている景色なども読み取ることができる。これは感覚的なことであるために、説明が難しいのだが……。

例えば、ヴィルの目の前に好きな女性がいたとする。彼はその女性を口説こうと甘い言葉を囁こうとする。だが、その意識を察知した俺は、ヴィルの意識を操り、女性に対して罵詈雑言を浴びせかけることができる……。まあ、そんな感じだと考えてもらえればいい。

まあ、そこまですれば、俺の日常生活にも支障が出そうなので、今のところヤツらには、タナ王国を平和に、穏便に納めることが最高の幸せであるという意識を植え付けている。そしてさらに、ヴィエイユ達の軍勢も友軍であるという意識を植え付けている。もう少しやり方もあるのだろうが、ヴィルの性格が劇的に変わってしまっては国が混乱すると考えて、少し穏便なやり方を今は取っている。何か、奴らの意識に変化があるようならば、すぐに勘づくことはできるために、今のところは心配はしていない。まあ、ヴィルたちのことについては、リコに相談しながら決めていこうと思う。

タナ軍を見送った後、俺たちは撤退の準備に入った。医療テント村の撤収に時間がかかると踏んでいたのだが、メイに言わせると、これらは半日あれば片付けられるのだと言う。急げば、その日の夕方には撤退できそうだったが、俺は敢えて撤退を一日延ばした。その理由は、タナ軍が放った、魔法を吸収する矢の影響を調べようと考えたからだ。

ラファイエンスの機転で、あの矢は、着弾するとすぐにカコナ川に流された。だが、その矢は流れていった先で、周囲に影響を与える可能性があった。しかも、この川はオアシスのあるスワンプに通じている。おそらくそのオアシスの底には、夥しい数の矢があるはずで、一応それらを調べようと考えたのだ。

俺はメイやその研究所のスタッフたちを伴って、スワンプに向かった。そして、そこで魔法の効果を試し、問題ないことを確かめる。一応、念のために、オアシスの水質検査を行ってもらったが、特に問題なしとの結果報告を受けて、俺たちは帰陣することにした。

夜になって、俺はメイを本陣に呼びだして、転移で屋敷に帰るように言ってみたが、彼女は皆と共に帰ると言って聞かなかった。

「アリリアが寂しがっているぞ？」

「はい……。でも、研究所の方々は、今夜もここで寝泊まりをされます。私一人だけお屋敷に帰っては、彼らに申し訳が立ちません。それは、きっと、アリリアも分かってくれると思います」

メイはとてもきれいな眼差しを俺に向けている。それを見た俺は、それ以上何も言うことができなかった。

「あっ」

メイから突然声が上がる。何事かと思っていると、彼女の視線が俺の背後に向けられている。思わずその方向に振り向くと、空には満天の星空があった。

「……きれいだな」

「ご主人様と二人っきりで星を眺めたのは、いつ以来でしょう……」

「……クルフムファルのときだよ」

そう言って振り返ると、目の前には、今まで見たことのないくらいにうれしそうな表情を湛えたメイがいた。

「……覚えて、いただいていたのですね」

「当り前じゃないか。メイは、あのときから全然変わらないな。むしろ、あの頃よりももっときれいになった……」

「ご主人様……」

俺はメイを抱きしめようと手を伸ばした。

「申し上げます！」

「うおっ！　なっ、なっ、なっ、何だ！？」

慌てて俺はメイから離れる。彼女も顔を真っ赤にしながら俯いてしまった。

「失礼いたし……。あ、メイ様も……。これは失礼いたしました」

伝令の兵士がオロオロとしてしまい、どうしていいのかわからない様子だ。俺は気にする必要はないと言って、彼を落ち着かせる。

「ハッ、それでは……申し上げます。アガルタ王様にお目通りを願う方が参っております」

「目通り？　もう夜になろうとするのにか？　誰だい？」

「それが……その……」

「どうした、早く言え」

「私でございます」

そう言って、本陣に入ってきたのは何と、ヴィルと共にタナ国に撤退したはずの、ヴィエイユだった……。

第三百七十一話　訪問者（前書き）

いよいよ１０／３１に『結界師への転生④』が発売されます（Ａｍａｚｏｎや一部書店では本日より購入可です。またＫｉｎｄｌｅ本は本日から購入可能です）。第四章の一部と第五章を収録しつつ書籍版限定のエピソードも収録して、読みやすい内容となりました。何より雫綺一生先生の挿絵が素晴らしいです。是非、お手に取ってご覧ください！

第三百七十一話　訪問者

彼女は、俺とメイを見て、スッと頭を下げた。そして、伝令の兵士にチラリと視線を向ける。その意図を察した兵士は、一礼をして去っていった。

「ヴィエイユ、どうした？　タナに向かったんじゃなかったのか？」

「ええ。我が軍はヴィル様らと共に、タナに向かっております。私はその途中で引き返して参りました」

「……一人で、か？」

「ええ。一人で参りました」

……どうもヴィエイユの話が俺の腑に落ちない。彼女は、サダキチに見張れと命じているのだ。フェアリードラゴンの目を掻い潜ったと言うのだろうか。彼女にそんなスキルがあるようには思えない。俺は舐めるように、彼女の頭の先からつま先までを観察する。

「恐れ入りますが、お人払いをお願いいたしたく存じます」

「うん？　メイがいては、悪いのか？」

「はい。アガルタ王様に内々のお願いがございまして」

「メイがいて不都合だという理由がわからんが？」

ヴィエイユは俺の言葉に、薄笑いを浮かべた。そして、何かを決意したように、肩をピクンと動かした。

「では、申し上げます。私は、クリミアーナ教国の国主にして、その教皇であります祖父、ジュヴァンセル・セインをこの世から抹殺したく存じます。そのご助力をお願いしに上がったのです」

「それは以前、聞いたような気がするが？　助力……とは、具体的にはどういうことかな？」

彼女はフッと柔和な笑みを浮かべる。

「特に援軍は必要ございません。武器などの類も、必要ないと思っております」

「では、何を助ければいい？」

「二つございます。一つ目が、アガルタ王様の転移術、これをお借りしたく思います」

「……アフロディーテだっけ？　クリミアーナの都に軍を一気に送るつもりか？」

「はい。今のところはそれが一番効果的な作戦であると考えますので。時期が参りましたら、是非、ご助力をお願いいたします」

「……で、助力の二つ目とは？」

「静観していただきたいのでございます」

「静観？　お前がクリミアーナを滅ぼすのを黙って見ておけというのか？」

「いいえ。正直申し上げて、クリミアーナの駆逐は簡単に済むと考えております。問題は、その後でございます」

「どういうことだ？」

「近い将来、我々は、アフロディーテを占領いたします。その後、クリミアーナ教を信仰する国々との戦いが始まることでしょう。我々は、その国々を一つずつ占領して参ります。そして、我々に敵対する国々をすべて占領し終えましたら……」

「なるほど、お前は世界一の大国の主となるな」

ヴィエイユは微笑みを湛えたまま、ゆっくりと首を振る。俺はその意味が分からず、怪訝な表情を浮かべる。

「ここサンダンジ国を、私共の国に併呑いたします。それを、静観していただきたいのです」

「何？」

俺は目の前に「マップ」を展開する。そして、それをじっと見つめる。

「……なるほど。サンダンジを併呑すれば、アフロディーテの防御態勢は盤石になる……か？」

「さすがでございます。その通りでございます。私は、アフロディ

ーテを奪還した後、そこに新しい国を建国いたします。新しき国の都は、やはりアフロディーテに置きたいと考えてございます。このサンダンジ国からアフロディーテまでは船で一日の距離……。しかも、遮るもののない一本道でございます。従って、サンダンジは戦略上、何としても我が国に属してもらわねばならないのです」

「このサンダンジがお前の国になれば、俺たちアガルタや他の国々からは、アフロディーテで行われていることが見えなくなる。その狙いもあるな？　と、いうよりそれがお前の狙いか？」

俺の指摘に、ヴィエイユの体が一瞬動いた。どうやら図星を突いたようだ。

「……今はそこまでの戦略は考えておりません」

「そうか。だがなヴィエイユ、サンダンジにはニケさんがいる。あの人は相当手ごわいぞ？　お前の思い通りにいくかな？」

「ええ。問題ございませんわ」

「ほう、強気だな」

「おそらく、私共がこの国を併呑するのは、十数年後でございます。そのとき、このサンダンジ国はおそらく、シン様が王位に就いておられるはずです」

「なぜ、そう言い切れる」

「それは、秘密です」

ヴィエイユはクスリと笑う。その笑顔は邪念のない、天使のような笑顔だった。

「シン君か……。今はお前に気があるようだが、人は変わる。数十年後までお前に惚れているとは限らないだろう」

「いいえ。きっとあの方は、死ぬまで私の虜でございますわ」

「何？」

「お聞き遊ばしましたでしょ？　あのお方は、私に向かって、確かにこう仰いました。『サンダンジ・クエア・シン、鶴首してお待ち申し上げる』と」

「……」

「あのお方は、真名（ハートネーム）を明かしておられました。それが全てでございます」

「……すまん、よくわからん」

「ご主人様……」

メイが小声で俺を呼び、ヒソヒソと耳打ちしてきた。聞けばこのサンダンジ国の王族では、真名（ハートネーム）と呼ばれる名前を持っていて、それは家族だけの秘密にしているそうなのだ。それを他人に明かすことは、家族と認めると同じ行為になるそうで、そうしたことは、一生に一度あるかないかのことなのだと言う。つまりシンは、ヴィエイユを家族の一員と認めたことになり、言い換えれば、彼はヴィエイユにプロポーズをしたと同じことになるのだそうだ。

さらにメイの説明では、おそらくシンの妻や側室たちも、彼の真名（ハートネーム）を知らないだろうとのことで、それだけ彼は、ヴィエイユに心奪われていることになるのだそうだ。だが一方で、ヴィエイユ以外の者にも真名（ハートネーム）を漏らしているシンは、かなり浅はかな振る舞いだとも教えてくれた。

そう考えると、ニケはいつも俺に送ってくる書簡に、『サンダンジ・ウルハ・ニケ』と署名をしている。これは相当俺を信頼しているのだろうと思って一瞬、胸が熱くなったが、「ウルハ」というのはサンダンジ国で国王を表す言葉であって真名（ハートネーム）ではないと、後でメイが優しく教えてくれた。

「……おそらく、数十年後には、世界の勢力図は一変しております。おそらくアガルタ王様の許には、ラマロン、ニザ、フラディメを始めとして、ヒーデータあたりからも色々と協力を求められるかと思いますが、それらをすべて無視し、静観していただきたいのです」

俺はゆっくりと息を吐いた。この娘はいつ、このようなことを考えていたのだろうか。驚きを通り越して、呆れ果ててしまう。だが、彼女の言っていることは、単に妄想の域にとどまらず、かなり現実的ではある。俺はゆっくりと目を閉じた。

「アガルタ王様」

まるで、自分へ意識を向け続けろと言わんばかりに、ヴィエイユがすかさず声をかけてくる。思わず目を開いた俺に、彼女は真剣な眼差しを俺に向ける。

「むろん、アガルタ王様には、それなりの見返りを用意いたします」

「見返り？」

訝る俺の目を、彼女はじっと見ていたが、やがて、これまで見たこともないような真剣な表情を浮かべ、口を開いた。

「私の体を差し上げます。どの殿方にも、指一本触れさせたことのないこの体を、アガルタ王様のお望みのままにして下さいませ。このジュヴァンセル・ヴィエイユ、どんな姿態も厭うものではございませんわ」

「……」

ヴィエイユの顔が真っ赤になっている。そして、その目が潤みを増していく。何とも色気のある姿だ。

「アガルタ王様には、リコレット様を始めとして、メイリアス様、コンシディー様、ソレイユ様、マトカル様と、いずれ劣らぬお妃さまがおいでになります。その中の一人に私をお加え下さいとは申しません。ですが、私は何としてもアガルタ王様と体の関係を結びたいのです。これは、私の望みでもありますが、このアガルタのため、ひいては世界のためでもあるのです」

「俺とお前が男と女の関係になるのが、世界のためというのが、よくわからんが……？」

「そ……それは、その……」

ヴィエイユの顔にどんどん赤みが増していく。そして、耳まで真っ

赤にした彼女は、両手を胸の前で組み、恥ずかしそうに俯く。その姿はまるで、好きな男子に愛を告げようとする少女のような趣があった……。

第三百七十二話　告白

「私は……アガルタ王様をずっとお慕いしておりました」

「……」

メイがいる前で、何ちゅう話をブッ込んでくるのだと思いながら、俺は隣のメイにチラリと視線を向ける。てっきり動揺しているかと思いきや、彼女は眉一つ動かさず、冷静にヴィエイユを見つめている。その様子に安心した俺は、再び視線を元に戻した。

「アガルタ王様は、私の命の恩人であり、そして……初めて私を抱いていただいた方でございました。あのとき以来私は、もう一度、アガルタ王様に抱いていただきたいと思っておりました……」

言っていることには間違いはないが、この娘はかなり話を端折っているし、盛ってもいる。確かにルロワンスに感染した彼女を救ったのは俺だが、その状況を作り出したのも俺なのだ。それに、俺に抱かれたと言っているが、お姫様抱っこをしただけで、俺はそれ以上のことはこの娘にはしていない。そう言えば、ヴィエイユをお姫様抱っこしたと聞いたリコが、驚くほどに戸惑ったのだった。あのときはビックリしたが、そのときのリコはかわいらしかった。今、思い出した……。

「私は、アガルタ王様のモノになるのが夢でございました。この心と体を奪ってくださいませ。そうすれば、アガルタは未来永劫、何者にも侵される心配はなくなります。というより、そうした方が、アガルタの将来のためになりますわ。それに……」

「それに、何だ？」

「私を支配していただくお方がいなければ、私は私を抑えられなくなるかもしれません。それが、怖いのです」

「どういうことだ？」

「祖父のようになりたくはないのです」

今までの少女のようなしとやかさから一転して、どんよりとした雰囲気を彼女は纏い始めている。ある意味彼女は超一流の女優だ。腹芸……いわゆる、腹の中で芝居をして、雰囲気を人に伝えることができている。通常、こうした芝居はかなり熟練した役者でなければできないものなのだが、この少女はすでにそれが完成されている。このスキルを身に着けるのに、彼女は凄まじい苦労を耐え抜いてきたのだろうと思うと、俺の心は少し痛んだ。そんな俺の心を読み取ったかのように、彼女は目にうっすらと涙を溜めながら、ゆっくりと口を開く。

「祖父のように、己の欲望を満たすためだけに、権力と知識を使う……。そうした人間になりたくはないのです。そのためには、私自身を抑えていただく方が必要なのです。私も祖父の血を継いでおります。この先、私が大国の主になったとき、祖父のように暴走する危険性があります。そうならないために、アガルタ王様には、私の体を蹂躙していただきたいのです。死ぬまで私が、あなた様の下僕であると、この体と心に刻みつけていただきたいのです。アガルタ王様、ひいてはお妃さまたちには、承服しかねる点もあろうかとは思いますが、そうした方が、今後の、この世界のためでもあろうかと思います」

一気にそこまでまくし立てると、再びヴィエイユの目が艶めかしいものに変わっていく。その様子を見ながら俺は、ゆっくりと息を吐きながら、彼女に命じる。

「……脱げ、ヴィエイユ」

俺の言葉を聞いて、彼女はゆっくりと頷いた。そして、少し恥じらいを見せながら、着ている服を一枚一枚脱ぎだした。最後に下着を脱ぐときに、彼女は一瞬その動きを止め、まるで意を決したかのように、素早く下着を脱いで、一糸まとわぬ肌を俺の前に晒した。

「ヴィエイユさん……」

メイが両手で口元を覆いながら、悲しそうな表情を浮かべている。彼女は俺とヴィエイユに交互に視線を向けていたが、そんなメイに、俺は小さな声で話しかける。

「……畏まりました」

メイはスッと立ち上がり、ヴィエイユの許に近づいていく。そしてメイはヴィエイユの前までくるとピタリとその動きを止め、じっとヴィエイユを見つめた。てっきりメイが部屋を出ていくと思っていたのだろう。そんな彼女が、まさか自分の目の前に来るとは予想外だったのか、ヴィエイユは明らかに動揺した表情を浮かべている。

「なっ……」

突然メイの顔がヴィエイユの顔に触れるギリギリの至近距離まで近づく。思わず彼女は顔を背ける。そんな様子を気にすることなく、

メイは舐めるようにヴィエイユの体を観察していく。

「足を開いてください」

「なっ！？」

「開いてください」

メイの冷静な声が響き渡る。ヴィエイユは俺に助けを乞うような視線を向けてきたが、俺は一切の反応を示さない。彼女は肩をゆっくり上下させていたが、やがてオロオロとした表情を浮かべながら、恥ずかしそうに足を開いた。そしてメイは再び舐めるように彼女の下半身を観察し始めた。ヴィエイユは顔を真っ赤にして、顔を背けている。本当に恥ずかしそうだ。

「……問題ありませんね」

メイは一言そう呟き、踵を返して俺の許に戻ってきた。そして、彼女にも聞こえるように、凛とした声で俺に話しかける。

「ご主人様、ヴィエイユさんの体に、ルロワンスの特徴は見られません。血液検査をしていませんので、完全に……とは言えませんが、高い確率で、完治しているとみてよさそうです。それに、肌の色つやもよく、見たところ他の病気に罹患している様子も見られませんし、健康体のように見えます」

その言葉を聞いて俺は大きく頷く。

「よかったな、ヴィエイユ。裸になったおかげで、世界最高の名医の診察を受けることができた。その上、ルロワンスは再発していな

いそうだ。お前確か、ルロワンスの特効薬を投与されていなかったんじゃないか？　ちょっと心配していたんだ。まあ、何事もなくて、よかった、よかった」

俺の言葉に彼女はキョトンとした表情を浮かべる。そんなヴィエイユに俺は、さらに言葉を続ける。

「それにしてもヴィエイユ、お前……ちゅ～とはんぱやなぁ～」

「え！？」

「リコのような美しい肌でもない、メイのような全身から溢れるような清楚さと知性があるわけでもない、シディーのような切れ味抜群の頭脳やかわいらしさがあるわけでもない、ソレイユのような、辛抱たまらんようなエロさもなければ、マトのようなしおらしさもない……。まあ、中の上、とは言えるかもしれんが、何か突き抜けたところがないとな……。あいにく俺の食指は動かないな」

俺は立ち上がり、ゆっくりとヴィエイユの許に近づく。

「それにお前、俺と関係を持つことで、俺にお前の暴走を止める役割をしてもらいたいと言っていたな？　それは本心なのだろうが、一方で、俺と関係を持つことで、俺をお前の虜にできればという思いも持っているんだろう？　……ちょっと目が動いた。図星というところか。それまで芝居だったら俺の負けだけれどな」

そう言って俺はハハハと乾いた笑い声をあげる。

「まずは服を着ろ、ヴィエイユ。まあ、こんなことは俺の言うことじゃないが、そういうことは、お前が一番好きな人とすればいいと

思うぞ。それを、武器にするのではなくてな」

ヴィエイユの顔が少しずつ青ざめていく。何となく、彼女の心の動きはわかるが、それすらも、彼女の腹の中で計算されている気もする。そう考えると俺は、この少女を心から信頼することはできそうにない。

「まあ、しばらくはお前の動きは静観させてもらう。その後のことは、そのときに考えることにしよう」

そう言いながら俺は、彼女が脱ぎ捨てた鎧や服を集めていく。

「……なるほど。秘密はこのマントか。『鏡（ミラー）マント』……周囲の風景と同化するこのマントで、魔物たちから襲われるのを避けてきたんだな」

俺は集めたものをヴィエイユに手渡す。

「だが、臭いは消せないから注意が必要だな。護衛を付けてやる。早くお前の軍に帰れ」

そう言って俺はメイを促し、本陣を後にした。

「……ったく、どうしてこう、俺の許には厄介ごとばっかり起こるんだ！？」

俺は頭をガリガリと掻きながら、誰に言うともなく呟いた。俺の脳裏には、近い将来起こるであろう、サンダンジ国内での親子骨肉の争いの光景が浮かんでいた……。

第三百七十三話　引き上げ

「よーし、それじゃ、帰るとするか」

俺は目の前にいるクノゲンたちに笑顔で話しかける。そして、そのまま視線を彼らの背後に向ける。

数日前に激戦があったとは思えない程、カコナ川の流れは静かそのものだった。さらに視線を移すと、この戦いで死んだ者たちの夥しい墓標が見える。しばらくそこに視線を向けていると、クノゲンが、そろそろ……と帰還を促してくる。俺はその言葉に頷いて、視線を元に戻す。

ここに残っているのは、アガルタ軍のみだった。すでに、ラマロン軍は俺の転移によって皇国に転移させた。ニケのサンダンジ軍も転移させようとしたのだが、それはニケに断固として断られた。彼曰く、国中から兵士を徴収しているため、都まで行軍しながら順次、兵士たちを帰していきたいのだそうだ。その言葉に俺は何も言わず、ただ頷くことしかできなかった。

それに、この前日の夜にニケは、密かに俺とメイの許を訪れていた。話の内容は、言うまでもなく、息子のシンのことだった。彼は息子がヴィエイユに心を奪われていることについて、危機感を募らせていた。シンが真名（ハートネーム）をみだりに明かしたことについて嘆き、このままでは、サンダンジ国は将来、確実にあの娘の前に膝を折ることになる……。彼はヴィエイユの意図を完全に見抜いていた。そして、その解決策として、シンをアガルタに数年間、留学させたいと言って

きたのだ。

「……留学、ですか？」

「ああ。できれば、メイリアス殿のおられる、医療研究所に留学させたい」

「……」

絶句する俺とメイの前で、ニケは体を小刻みに震わせながら、息子を甘やかしすぎてしまったこと、そして、その息子には多くの人との触れ合いを通して、王としていかに生きるべきであるのかを、自分なりに見つめ直して欲しいと思うことを切々と語ったのだった。

「本来は、倅を斬らねばならぬのだ。だが……それができぬ。どうしても、できぬのだ」

「ニケ王様」

メイが優しい口調で話しかける。彼は表情を一切変えないまま、静かにメイに視線を向ける。

「お子様を、愛していらっしゃるのですね。いいえ、わかります。子を愛さない親がどこにいるでしょうか」

その言葉に、ニケはゆっくりと項垂れた。その様子を見てメイは俺に視線を向ける。

「わかりました。息子さんをお預かりしましょう」

「……すまぬ。倅をアガルタに赴かせるについては、そちらにお任せする。ゆめゆめ、サンダンジ国の王族としての扱いはしないでいただきたい。あくまで、いち留学生として、取り扱ってほしい」

「わかりました。俺もそのつもりです。シン君にとっては、辛い時期もあるかもしれませんが……。それを乗り切ってくれると、俺は信じています」

「すまぬ……」

そう言って彼は、俺たちに何度も礼を言って本陣を後にしていった。

「ニケさんも、一人の親だったか……」

「ご主人様、よろしいのでしょうか？」

「何がだい、メイ？」

「ヴィエイユさんとの約束です。静観するはずでは……」

俺は遠くに視線を移しながら、小さな声で呟く。

「メイ、ヴィエイユが俺たちに何と言ったか、覚えているかい？」

「……はい。ヴィエイユさんは確か、ラマロン、ニザ、フラディメを始めとして、ヒーデータあたりからも色々と協力を求められるかと思いますが、それらをすべて無視し、静観していただきたい……。そう言っていたかと思います」

「さすがはメイ、抜群の記憶力だな。その中に、サンダンジからの

協力という言葉はあったかな？」

メイはしばらく何かを思い出す素振りをしていたが、やがてニコリと微笑みながら、俺に視線を向けた。

「確かに、サンダンジ国のことは言っていませんね」

「だろ？　だから、シン君をアガルタで預かっても、約束を破ったことにはならない。……王族を預かるのは、メインティア王以来か……果たしてシン君がどんな風に変わるのか、ちょっと楽しみではあるな。……メイ、頼んだぞ」

俺の言葉に、メイは静かに頭を下げた。

◆　◆　◆

俺は前日のニケとの会談を思い出しながら、ゆっくりと頭を振る。今はそれを考えるべきときではない。まずは目の前の兵士たちを無事にアガルタに転移させることが、一番優先されることなのだ。

俺は目の前に整列している兵士たちに視線を向ける。彼らの中には「呪い」が付いていた者もいたが、それらは解除しておいた。すでに、チワンたちポーセハイが俺たちの周りを囲むように整列している。準備は万端。あとは転移をするだけのようだ。

「よーし、忘れ物はないな？　では……転移しようか」

俺は傍に居たドーキの肩に手を置く。それを合図に、ポーセハイたちが兵士たちに向き直る。アガルタ軍の姿が消えたのは、その直後のことだった。

「ただいま」

帝都の屋敷に着いたのは、すでに陽が落ちた頃だった。転移でアガルタの都に戻ったのはいいが、その直後から、俺が留守の間にたまりにたまった仕事を処理しなければならず、俺は鎧を脱ぐ間もなく仕事に追われる羽目になった。と同時に、戦いで亡くなった兵士たちのことや、その他、戦後の残務処理も並行して行わねばならず、本当に目の回るような一日だった。

それはメイも同じであったようで、研究所に帰ってすぐさま、戦いで重傷を負った兵士たちを見舞い、その治療に当たっていたのだと言う。彼女も、留守にしていたのは数日間とはいえ、仕事は溜まりに溜まっていたらしく、それはそれは忙しかったのだそうだ。

ただ、さすがに周囲の者も、あまりに引きとどめては可哀想だと思ったのだろう。夕方近くになると、取りあえず今日は休んでくださいと言ってくれたのだ。その言葉に甘え、俺は最低限、やらねばならない仕事を終えて、家路に着いたのだった。その際、研究所に寄って、メイの身柄も確保してきた。放っておくと彼女は、本当に仕事が終わるまで徹夜し続けて、家に帰らない可能性がある。さすがにそれはいけないと考えた俺は、無理に彼女を帰らせたのだ。

屋敷に入ると、夕食の時間なのか、とても美味しそうなにおいがする。ダイニングに入ると、まさに夕食の直前だったようで、家族が全員揃っていた。皆、俺たちの姿を見て、表情がパァァっと明るくなった。それを見て俺も笑顔になる。

「おとうさん！」

「おかあさん！」

突然、エリルとアリリアが椅子から飛び跳ねるようにして俺たちのところに向かってきた。そして、エリルは俺の胸に、アリリアはメイの胸にダイブする。

「おとうさぁぁぁぁん。おとうさぁぁぁぁん」

「よしよし、エリル。偉かったね。ありがとうね」

俺はエリルを抱きしめながら、その頭をやさしく撫でる。ふと隣を見ると、メイとアリリアは抱き合ったまま泣いている。これはこれで美しい光景で、思わず俺もウルっときてしまう。

「おかえりなさいませ」

リコが笑顔で迎えてくれる。その表情に俺も、何だかホッとする。

「リコも、大変だったな」

「いいえ、私など……。それよりも、もう戦いは終わったのでしょ？　その鎧を脱いで、夕食を食べましょう」

「いや、この鎧は脱ぐのに時間がかかるんだ。ちょっと、お行儀が悪いけれども、このまま夕食にしよう。子供たちもお腹がすいているだろう。それに……俺も、お腹がすいているんだ」

そういう俺に、リコは優しく微笑みながら、では、夕食にしましょうと皆に声をかける。

俺は、久しぶりに、家族と共に賑やかな夕食を楽しんだ。

……そして夜。メイとシディーに鎧を脱がせてもらい、風呂に入って疲れを癒した俺は、寝室に向かう。そこには、息子のイデアを寝かしつけたリコが待っていた。

「イデアは、寝たのか？」

「ええ。お父様が来るまで起きていると頑張っていましたけれど、寝てしまいましたわ」

そう言いながらリコは、イデアをやさしくベッドに運ぶ。そして、ゆっくりと俺に抱きついてきた。

「おかえりなさいませ」

「ただいま、リコ」

俺はリコを強く抱きしめて一旦体を離す。そして、彼女の腕を取りヘイズが付けたシミのあった部分をじっと見つめる。

「シミは……無くなっているな」

「ええ。ヘイズの許から帰って来て、しばらくして、シミは消えましたわ」

「そうか……。やっと、いつものリコに戻ったな。シミ一つない、素晴らしい肌に……」

「リノス」

リコの声に思わず彼女の目を見つめる。彼女は真剣な眼差しを俺に向けている。

「ヴィエイユのこと、聞きましたわ。あの方を……いかがするのです？」

「何もしないつもりだよ」

「でも……。リノスの前で、裸になったのでしょ？　心は……動かなかったのですか？」

「うーん」

俺は優しくリコを抱きしめる。そして、その耳元で、小さな声で呟く。

「どうも俺は、向こうからやる気満々で来られると、引いてしまうんだよな。どちらかと言えば、俺は、リコみたいなタイプが好きなんだ」

そう言いながら俺は、リコの体をゆっくりと離す。そして彼女のパジャマをゆっくりと脱がせた。

「……ううっ。……じっと……見ないで……見ないでくださいませ。明かりを……。はっ、恥ずかしい……ですわ……」

「俺は、こうして恥ずかしそうにしているリコが、一番好きだ……」

そう言って俺は、再びリコを抱きしめ、部屋の明かりを落した。

第三百七十三話　引き上げ（後書き）

さる１０／３１に『結界師への転生④』が発売されました。雫綺一生先生のイラストが大変好評のようです。まだご覧になっていない方は是非一度、ご覧ください！

第三百七十四話　報告

クリミアーナ教国の首都、アフロディーテ。白で統一された建物の中で、ひときわ白く輝く教皇神殿の一室で、教皇ジュヴァンセル・セインは、一通の書簡に目を通していた。

「ふぅん」

彼はそう呟いたかと思うと、ゆっくりと天を仰ぎ、大きなため息をついた。

「アガルタ王がこの世を去りましたか……」

誰に言うともなくそう呟いた彼は、ゆっくりと姿勢を正す。その彼の前には、一人の少年が控えていた。彼は、その少年に向かって、ゆっくりと口を開く。

「タナ王様に、最大級の賛辞を贈ってください。そうですね……。ポルメレニアの杖がいいでしょう。教国秘蔵のアイテム……それを下賜してください」

「承知しました」

「ただし」

彼はそこまで言うと、遠い目をして、あらぬ方向に視線を向ける。

「行方不明とあるヴィエイユ……。彼女の行方は、何としてでも探

し出すよう厳命してください」

そこまで言うと彼は、再び視線を目の前の少年に戻した。

「それにしても、まさに、あなたの言う通りになりましたね。タナ国王のヴィル様に戦いのすべてをお任せしたお蔭で、主神様の教えを、天道に背く者を罰することができました。さすがは軍神、と言うべきでしょうか。それにしても、惜しいのはアガルタ王です……。主神様が夢枕に立たれるほど、クリミアーナ様に愛されたお方だっただけに……。ただ、現在は、主神様のお側でお仕えしている頃でしょうか。むしろ、アガルタにとっても、アガルタ王にとっても、よかったのかもしれません」

そこまで言うと彼は、顔に笑みを浮かべ、フフフと小さな声で笑う。

「さて……。これからのことですが、どうしますか？」

彼は目の前の少年に尋ねる。少年は迷うことなく、その質問に即答する。

「アガルタ王亡き今、あの国はもはや恐れるに足りません。ただ、あの国の背後にはヒーデータ帝国が控えています。皇帝の妹が嫁いでいるアガルタですから、ヒーデータとしては見捨てるわけにはいかないでしょう。従って、我らはヒーデータを天道に従わせるよう努力する必要があります。そのためには、タナ王様には、フラディメ国を併呑していただき、しかる後に、ラマロンに侵攻していただきます。そして、そこからヒーデータに圧力をかけ続ける……。長期戦にはなりますが、時間をかけねば、あの国は難しいと考えます」

その言葉に、教皇は大きく頷く。

「私も同意見です。成長しましたね、カッセル」

その言葉に、少年は恭しく頭を下げる。

「勿体ないお言葉でございます」

「片腕を失い、どうなることかと思いましたが……。よくぞここまで成長したと思います。いいでしょう。あなたに、お任せしましょう」

その言葉に、カッセルはスッと姿勢を正す。

「カッセル、あなたを次期教皇に指名します。私も長く教皇の地位を勤めすぎました。そろそろ、若い世代にこのクリミア―ナ教と教国のかじ取りを任せる時期が来たようです」

そう言うと彼は立ち上がり、ゆっくりとカッセルの前に進み出た。

「あなたの教皇就任は、年明けのジモークの頃にしましょう。それまで、気を緩めることのないように」

「畏まりました」

カッセルは恭しく一礼し、その彼の肩に教皇は、愛おしそうに手を置いた。

「……おかえりなさいませ」

部屋に戻ったカッセルを、一人の女性が恭しく一礼をして迎える。彼女はまだ、司教の身分ではあるが、カッセルの指名によって、彼の秘書を勤めている。そんな彼女の声にカッセルは全く反応せず、スタスタと机に向かい、どっかりと椅子に腰を下ろした。

「……次期教皇に指名された」

「……それは、おめでとうございます」

彼女の一切感情を込めないものの言い方に、彼は苦笑いを浮かべる。

「ああ。ところで、その後、ヴィル様から書簡は届いたか？」

「いいえ。未だ届いておりません。ただ……」

「ただ、何だい？」

「アウハイゼン枢機卿が、カッセル様のお命を狙っているという噂が出ております」

「そうか……。フフフ。放っておけ」

彼は不敵に笑いながら、何度も頷く。……もう、何度目だろうか、こうした暗殺の類は。これまで何度となく命を狙われて、傷を負ったのも一度や二度ではない。だが、その度に傷は治癒され、こうして生きることができている。そのために彼には、「不死の男」という異名まで付けられているのだ。これは、憎き敵であるアガルタ王・リノスの張った結界のお蔭であることは、カッセル以外の人間は知らない。

そのときふと、カッセルは、何かに思い当たったような表情を浮かべる。確かに、ヴィルから送られてきた書簡には、アガルタ王・リノスは死んだと書かれてあった。乱戦の中、命を落としたために、その体は酷く損壊しているので首を送ることはできないとあり、一瞬はその死を疑ったのだが、その隣には、その報告が確かなものであると言う、タナ国に遣わしている三人の枢機卿のサインが確かに記されていた。タナ王国には五名の枢機卿が派遣されているが、その中で、先の戦いに従軍した枢機卿全員がアガルタ王・リノスの死を確認しているのだ。そのために彼も教皇もその事実を認めたのだが、その枢機卿はもちろん、タナ王国に派遣されている枢機卿全員が、すでにヴィエイユの支配下にあることを彼らはまだ知らない。

カッセルは考える。リノスが死んだのであれば、自分に張られていたこの結界は、最早機能しないのではないかと。と、すれば、今後の自身の振る舞い方については、考え直す必要がある……。

「オレイブ」

「はい」

「さっき、アウハイゼンが僕を亡き者にしようとしているという噂があると言ったな？」

「左様です」

「……枢機卿のカーセオフに命じて、アウハイゼンを殺せ」

「畏まりました」

「それから、タナ王に手紙を送る。今から僕の言うことを書状に認

めろ」

「はい」

相変わらず感情を込めない言い方で返事をした彼女は、スッと自分の机に座り、紙とペンを取り出した。その様子を見ていたカッセルは、おもむろに口を開く。

「書くべきことは二つだ。まずは、この度の大勝利、教国として最大級の賛辞を贈る。ついては、教国秘蔵の宝物を贈る……それが一つ目だ。そして、二つ目は……。行方不明になっているヴィエイユ姉さまの所在を何としても突き止めろ……。それを認(したた)めろ」

カッセルの声を聞きながらオレイブは、カリカリとペンを走らせていく。そして、書簡が出来上がると、彼女はそれをカッセルの許に持って行く。

「……まあ、いいだろう。もう少し、姉さまの探索については命令口調でもいいと思うが……。まあ、こんなものか」

そんなことを言いながら、カッセルは顎をしゃくる。オレイブは無言で一礼をして、その親書を持って、部屋を後にした。

「……姉さま」

一人になったカッセルは、椅子に座ったまま、誰に言うともなく呟く。この数年間、彼は教皇を通じて何度も彼女をアフロディーテに召還しようと試みたが、その全てを見事に拒否されていた。そんな彼女が、あろうことかアガルタ軍と共にサンダンジ国に現れたという報告を聞いたときは、彼自身、衝撃を受けたのだ。しかも、ヴィ

ルからの報告を携えてきた使者と共に帰還した司教の一人から、ヴィエイユはアガルタ王・リノスの妾となり、在陣中は何度となく彼の陣所に呼ばれ、二人っきりで時間を過ごしていたという報告を受けていた。そうした噂はなかったわけではなかったが、現に戦場に従軍していた司教から直接聞く話は、カッセルに少なからず衝撃を与えたのだった。

「姉さま……何と言う……何と言うことを……」

彼はこぶしを握り締めながら、そんな言葉を呟く。当然この報告は、ヴィエイユ自身が流していたものなのだが、今の彼には、そんなことは知る由もなかった。

「僕の姉さま……。僕の姉さま……。探し出して、必ず……必ず僕のモノにする……。そして……永遠に僕のモノに……」

そこまで呟いたとき、不意に部屋の扉がノックされる。そして入室してきたのは、先程、部屋を出ていったオレイブだった。

「もう、手紙は出してきたのか？」

「はい」

「そうか……ならば、こちらに来い」

オレイブはカッセルに命じられるまま、彼の机の前まで歩を進めた。

「脱げ。そして、跪け」

カッセルの命令に、彼女は全く反応を示すことなく、淡々と服を脱

ぎ始めた。

「おい、今日は、ちょっと僕を噛んでみるか？」

「ご命令とあれば」

「いや……やめておこう」

結界が無効になっていた場合、自分の体が傷つく……。そう考えたとき、ちょっとした恐怖を感じてしまったことに、彼は少し戸惑いを覚えていた。これではいけないと思い直しながら彼は、跪いているオレイブに視線を向ける。痩せているが、２０歳という全身から若さを漲らせた、均整の取れた美しい体だ。

……姉さまの体も、このようなものか。

彼は目の前の裸身を見ながら、そんなことを考えていた。そして、ヴィエイユを捕らえた暁には、どのようにして彼女を自分に従わせようかと思いを巡らせながら、オレイブの髪の毛を乱暴に掴むのだった……。

第三百七十四話　報告（後書き）

軍神編、終了です。次回からは、間話「軍神編・後日談」に入ります。戦いの後の色々なエピソードを数話書きたいと思います。

第三百七十五話　パーティー

戦いが終わってからひと月後、アガルタの都にある迎賓館では、スタッフたちが忙しく動き回っていた。この日は、ここでパーティーが行われるのだ。ちなみに、アガルタの迎賓館での手際の良さは、世界一だ。これは、支配人のミンシの差配が優れていることもあるが、何より、そこで働いているサイリュースとドワーフたちの連携が見事なのだ。

基本的に会場の設営において、重いテーブルなどを運ぶのはドワーフたちの仕事だ。彼女らは女性とはいえ、子供の頃から金槌を使って鉄を鍛えている者が多く、その腕力は人間の男性をはるかに凌駕する。その自慢の力を生かして彼女らは、瞬く間に設営を完了させる。

それが済んだところから、サイリュースたちが登場する。彼女らは背中の羽を使って部屋の中を飛び回りながら、テーブルクロスなどをテキパキと飾り付けていく。そんな全く無駄のない連携のお陰で、突発的なパーティーでも、ここ迎賓館では難なく開催できてしまうのだ。

今回はアガルタ王・リノスの主催とあって、ミンシ以下、気合を入れて会場の準備を行っていた。基本的に内々のパーティーであり、ごくごく簡素にとリノスからはお達しがあったが、来客にはヒーデータ帝国の皇帝を始め、ラマロン皇国のカリエス将軍、サンダンジ国のニケ王など、先日の大戦で参加した錚々たる面々が参加することになっているのだ。スタッフたちの気合が入ってしまうのは、自然のことと言えた。

パーティーの前に、一足先に会場入りしたリノスとリコは、扉を開けた瞬間、固まってしまった。まるで王族の結婚式であるかのような、荘厳で豪華な会場設営が行われていたからだ。

その様子を見てリノスは、ガリガリと頭を掻きながら、あれほど簡素にと言ったのに……と半ば照れるような様子で独り言を呟いている。一方のリコは、その様子に目を輝かせ、傍にいたミンシに、設営のデザインについて細かい指示を出していた。そして、パンと手を合わせると、気合を入れて準備をすると言って、リノスの腕を掴んで部屋を後にしていった。

開催されたパーティーは豪華の一言に尽きた。リノスが普段着でと、敢えてドレスコードを指定していなかったにもかかわらず、招待された面々は正装をして現れた。彼としては、先の戦いの慰労会としてパーティーの開催を考えていたため、普段着でダラダラと飲んだり食べたりすればいいだろうと考えていたのだが、その思惑は完全に外れた形となった。

まず、会場に現れたのは、ラマロン皇国からカリエス将軍と宰相のマドリン、そして、司令官の代表として招かれたアーモンドだった。その彼らとタイミングを合わせるようにして到着したのは、サンダンジ国のニケと息子のシンだった。会場には既に、ラファイエンスとクノゲン、そして着飾ったルファナ王女が出迎える準備を整えていた。彼らは笑顔で先の戦いを労い合っている。するとそこに、ミーダイ国の帝様と皇后さまが到着する。二人は会場に入るとすぐに彼らの所に向かい、タナ国との戦いに勝利した祝いを述べた。オワラ衆のイッカクらの姿が見えないが……おそらくこの部屋のどこかに潜んでいて、二人を警備しているはずだ。

その後、ニザからはシディーの兄であるガルトーとユーリー宰相が到着し、ポーセハイのチワン、ローニ、ドーキらがやって来た。さらには、ルファナ王女の母であるサルファーテ女王が娘たちに介添えされて現れた。彼女らは、どこからかパーティーの話を聞きつけて、何としても国を奪った憎きタナ国に勝利してくれた礼を述べたいと言って聞かず、仕方なく参加を許したのだ。

パーティーが始まる直前に会場に入ってきたのは、ヒーデータ帝国の陛下とグレモント宰相、ヴァイラス公爵だ。彼らは今回の戦いには参加していないが、ニケやカリエスから可能であれば、陛下と今後のことについて話をしたいと言われたために、俺が招待したのだ。陛下もその点について、何か思うところがあったのだろう。俺の申し出をすぐに受け入れてくれた。

そんなことをしていると、パーティーの開始時間になる。俺はリコたちを伴って皆の前に出る。きちんと正装をしているために歩きにくい。俺たちが会場入りすると、声にならない声が漏れているのが分かる。それはそうだろう。髪を結い上げ、全力でおめかしをしたリコ、薄化粧で、ちょっと地味な白い衣装に身を包んでいるが、隠しても隠しきれぬ聡明さと優しさが溢れだしているメイ、そして、何ともかわいらしく、気品のある様子のシディーが並んでいるのだ。まさに、眼福の光景と言えるだろう。

残念ながら今回は、ソレイユとマトカルは欠席だ。二人とも出産の準備で、ソレイユはサイリュースの里から動くことができず、マトカルは未だ入院中なのだ。俺としては、この二人が全力でおめかしをした姿を見たかったのだが……残念なことだ。

居並ぶ人々を前に俺は、手短に挨拶を述べ、乾杯の音頭を取る。そのとき、招待していたにもかかわらず、到着していなかったヴィエイユが現れた。髪の毛をスッキリとまとめ、純白の衣装に身を包み、その頭には細いティアラを載せている。さすがに教皇の孫だけあって、気品と上品さは辺りを憚るものがあった。ヴィエイユ大好きっ子であるシン君に目を向けてみたが、彼は目を見開いたまま微動だにせず、遠目から見てもヴィエイユに心奪われているのがよくわかった。

そんなこんなで始まったパーティーだが、皆、思い思いに楽しんでいるようだ。当初は、腹の探り合いなどがあって盛り上がらないかと思ったが、意外にも皆、砕けた表情で楽しんでいるようだった。

そんな中、ニケはシンを伴って俺とメイの前にやって来て、息子のことをよしなに頼むと言って頭を下げた。ちなみにシンは、留学することをまったく知らされておらず、思いっきり驚いていた。しかも、それは今日から始まるのだと聞いて、彼は二度驚いていた。てっきり俺たちはシンに納得させているものと思っていたのだが、まさかの展開に俺もメイも戸惑いを隠せなかった。ニケ曰く、事前に話をしてしまうと、最悪の場合、国外に逃亡する恐れもあったとかで、この親子関係が今後、どのようになるのか、一抹の不安が頭をよぎった。

その後ニケは、何かに解放されたかのように、出されている料理を片っ端から食べていった。パーティーはバイキング形式にしていたのだが、一応、小さなバーベキュー台も準備して、希望があれば肉などを焼けるようにはしておいたのだが、彼は早々にそこを占領して、色んなものを焼き始めた。それが珍しかったのか、バーベキュー台にはミーダイ国の帝様夫婦とヒーデータの陛下が居座り、いつしかそこで色々な話が交わされていた。

俺はカリエス将軍とアーモンドらと話をしていたのだが、ふと気が付くと、ヴィエイユがいつの間にかヴァイラス公爵と話をしていることに気が付いた。リコに視線を向けると、彼女がツカツカと弟の所に歩いていた。直感的にこれはいけないと感じた俺は、思わず声を上げる。

「皆さんに発表があります！　ハイ、俺に注目～！　テストに出ますよ～！」

皆、キョトンとした表情を浮かべている。俺はコホンと咳払いをして、大きく息を吸い込む。

「この度、我がアガルタでは、軍の最高司令官であったラファイエンス将軍の引退に伴いまして、後任として、クノゲンをその任に任じることになりました。皆さん、今後とも、アガルタを、クノゲンをよろしくお願いします！」

突然のことでクノゲンは驚いた表情を浮かべていたが、やがて、はにかむような笑みを浮かべる。その直後、彼に注目が集まり、いつしか会場内は大きな拍手に包まれた。

「リノス様に申し上げます！」

突然、クノゲンから声が上がる。俺は驚いた表情で彼に視線を向ける。

「この度のこと、心から感謝いたします。総司令官の任官に当たりまして、一つ、お願いしたいことがあります！」

「お願い！？　……何だい？」

「ハイ。私とルファナ王女との結婚をお認めいただきたく、お願い申し上げます」

「ウエッ！？　君たち……付き合っていたの！？」

思わず俺はルファナ王女に視線を向ける。彼女は驚いた表情を浮かべながら、キョロキョロと周囲を見廻している。その彼女の前に、クノゲンはスッと近づいていく。

「ルファナ様、私と結婚していただけませんか？　サルファーテ女王陛下、大事の姫様を、私に下さいませんか？」

彼の声を受けたサルファーテ女王が、オロオロと周囲を見廻しながら、戸惑った様子で口を開く。

「そっ……そのような……。だが……アガルタ王の側近くに仕える方……。何の、異存が、あろうか。不肖なる娘ではあるが、よろしく頼みたい」

「女王様のお許しも出ました！　ルファナ様、私と、結婚していただきたい！」

会場内の全員の視線がルファナ王女に向けられる。彼女は戸惑っていたが、やがて、顔を真っ赤にして、俯きながら、小さな声で「ハイ」と答えた。それから数秒の静寂の後、会場内は大きな拍手で包まれた。

「この場であのようなことを言われては、女性としては受けるしか

選択肢はない。クノゲンめ、うまいことをやりおるわ」

いつしかラファイエンスが俺の傍に寄って来て、そんなことを呟きながらほくそ笑んでいる。その様子を見ながら俺はリコと顔を見合わせながら、苦笑いを浮かべるのだった。

ちなみに、クノゲンのこのプロポーズは、いつしか王都民の知るところとなり、数年後にはそれが舞台化されて大ヒットすることになるのだが……。それはまた、別のお話。

第三百七十六話　お礼

「う～ん」

俺は眉間に皺を寄せながら天を仰いだ。まあ、確かにそうなんだけれどね……。ただ、それは、今、やらなきゃいけないことなのかしら？

そんなことを思いながら、頭の中を整理する。

アガルタの都にある俺の執務室。目の前には、機嫌の良さそうな表情を浮かべているメインティア王が立っていた。この王、何のアポも取らずに、突然訪れたのだ。ビックリするじゃないか……。

彼は、ノックもせず部屋に入ってくるなり、出し抜けにポセイドン王の許に行こうと言い出した。まるで、近所のコンビニにジュースでも買いに行こうと言わんばかりの気軽さでだ。

今からすぐ行こう……。目を爛爛と輝かせながらメインティア王は俺を誘う。だが、一応俺は、アガルタの王なのだ。俺は俺で仕事がある。目の前には高く積まれた書類があり、それを片っ端から片付けているのだ。それに、昼からは会議、夕方からはクノゲンらアガルタ軍の幹部との打ち合わせ、そして夜は、エリルとアリリアと一緒におままごとをやり、その後はメイを抱きしめなければならないのだ。残念ながらこの王に割く時間はないのだ。

「その顔は、時間がない……という感じだね？」

ニコニコとした表情を崩すことなく、彼は鋭く俺の心の中を読む。
その言葉に俺は目を見開く。

「その通りです。しばらくは、難しいですね」

「しばらくって、どのくらいだい？」

「ええと……」

確か、明日はシディーとピアトリスを連れてニザのドワーフ王と鹿神様の許に行き、帰ってくるのは夜だ。そのままシディーを抱きしめるので、時間はない。その次の日は、サイリュースの里に行ってソレイユを見舞い、帰って来てからリコと語らい、その次の日は、マトカルを見舞うことになっている。と、なれば……。

「今年いっぱいは難しそうですね」

その答えに彼は、明らかに落胆した表情を浮かべる。

「君は、恩というものを知らないのかい？」

「どういう意味でしょう？」

「この度の戦いで、アガルタが大勝利を収めることができたのは、直接的ではないにしろ、我らが兄であるポセイドン王の力あったればこそではないのかい？　クリミア―ナ教国の海を荒らして軍を抑えてもらったのではないのかい？　ラファイエンス殿の命が守られたのは、兄上が彼に贈ったアイテムのお陰だったのではないのかい？　その礼も言わないとは……。君は人としての心を持たないのかい？」

表情は柔和だが、言っている言葉はかなり棘がある。俺はため息をつきながら彼を見据える。

「いや、行かないとは言っていませんよ。ただ、ポセイドン王は忙しいでしょう？　だからこそ、次回会うのは五年後にしようと約束したのではないのですか。いや、行きますよ。俺だって恩を忘れているわけではありませんよ。ポセイドン王の時間があるのであれば、俺はいつでも行くつもりです」

その言葉を待っていたかのように、メインティア王は大きく手を広げて、まるで俺を抱きしめるかのようなポーズを取った。

「ならば、今から行こうじゃないか！　ポセイドン兄は、我々をいつでも歓迎すると言っていたからね！」

「いや……あの……先様の予定をですね……」

「問題ない」

「ポセイドン王の許に行くのにはルアラのですね……」

「問題ない」

「いや、彼女は忙しいでしょう。それに、ラファイエンス将軍は……」

「問題ない。お入りください」

その言葉を受けて、ルアラとラファイエンスが入室してきた。ラフ

ァイエンスはニコニコと笑みを浮かべているのに対して、ルアラは目が完全に死んでいる。俺はポカンと口を開けたまま、しばらく何も言うことができなかった。

結局、俺は礼を言ってすぐに帰ってくると約束して、仕方なくポセイドン王の許に向かうことにした。ルアラには無理やり有給休暇を取らせて、一日、母親の許に遊びに行けと命じたのだ。彼女の仕事は、リコに代わってもらうことにした。ルアラはイヤがったが、リコはいい気分転換になると、突然のお願いにもかかわらずヤル気満々で、嬉々として受けてくれた。そして、ルアラにやり直しはさせないと約束して、ようやく彼女は職場を離れる覚悟を決めたのだった。

三人で深い海を潜る。メインティア王の泳ぎが格段に速くなっていて、ルアラと同じくらいの速さで進んでいる。さすがにちょくちょくポセイドン王の許に通っているだけあって、泳ぎも達者になっている。かく言う俺も、最初の頃に比べれば泳ぎは格段に速くなった……はずだ。まだ、全力で泳ぐルアラにはなかなか追いつかないが。

程なくしてポセイドン王の宮殿に到着する。今回は門番に止められることなく、そのまま中に入ることができた。その上、二人はどんどん宮殿の中を歩いていく。誰の案内も請わず、まるで自分の家であるかのように扉を次々と開けて進んでいく。そして、歩くこと十数分、何度目かの扉を開けたところに、ポセイドン王はいた。

「おお兄上、ご機嫌麗しく」

そう言ってメインティア王はポセイドン王の手を握る。彼もにこやかに笑みを浮かべている。

「おお、二人も来たのだね。よく来たね。君も……よく来たね」

そう言って彼は俺たちにも笑顔を向ける。いつもながらすさまじい男前だ。彼は微笑んだまま手をひらひらと揺らす。すると、どこからともなく半魚人のような男たちが現れ、テーブルと椅子を設置する。その様子を見てルアラはスッと一礼をして、母の許に行って来ますと言って、その場を後にした。

「座り給え」

俺たちに着席を促しながら、彼は優雅に椅子に座り、足を組む。

「兄上、この度は……」

待ちきれなかったようにメインティア王が話しかけるが、ポセイドン王は、笑顔のまま手をスッと上げて彼の言葉を制して、俺とラファイエンスに視線を向けた。

「息災で、何よりだ」

「ポセイドン王様、本日は御礼に参りました。先日、お目にかかったときにいただいたアイテムのお陰で、このラファイエンス、命を長らえることができました。心から御礼申し上げます」

「我らは兄弟の契りを交わした間柄だ。その者が戦いで命を落とすなど、あってはならないことだ。貴公に渡したあのカンスライワの箱は、大切に持っておくといい。邪悪なる者から、貴公の命を、今後も守ってくれるだろう」

「ハハッ！　ありがとうございます。このラファイエンス、感謝の言葉もございません」

恭しく頭を下げる老将軍の様子を、ポセイドン王は満足そうに頷いている。

「さて……我ら兄弟がこうして顔を揃えることができた。また何か、面白い話を聞かせておくれ」

ポセイドン王が甘い、優しい言葉で話しかけてくる。それに待っていましたとばかりに、メインティア王が身を乗り出して話しだす。

「今回は、私の十八人目の妻との馴れ初めをお話致しましょう」

「いや、今回は趣向を変えたいんだ」

「趣向を変えると言われますと？」

メインティア王がせかせかと体を動かしている。ポセイドン王から振られるであろうお題が気になって仕方がないらしい。その様子を、穏やかな表情を浮かべながら、俺たち一人一人に視線を向けながら、彼はゆっくりと口を開く。

「今回は、失恋の話を聞きたいね。私の心が締め付けられるような、甘くせつない話を」

「し……失恋……ですか……」

メインティア王が目を見開きながら、ゆっくりと首を振っている。兄さん、そのネタは予想していませんでしたわ～といった心境だろ

うか。彼は目を閉じて天を仰ぎながら、ウムムと唸っている。まあ、興味のある女性を見つければ、すぐに部屋に連れ込んでいた人だから、失恋の経験はないのかもしれない。その隣ではラファイエンスが、口髭を撫でながら物思いにふけっている。

……沈黙してしまった。二人とも何故、話をしないのだろうか。そんなことを思っていると、ふと、ポセイドン王と目が合った。彼は柔和な笑みを浮かべながら俺から全く視線を外そうとはしない。あれ？　……俺？　俺の失恋話！？　いやいや、だから、恋愛経験が少ないんだって！　いや、あるよ？　一方的に女子に嫌われた……みたいな話でよければ。でも、そんな話を求めてはいないでしょ？　そんな、甘く切ない失恋話なんて、俺は持ち合わせていないんだよ！

俺は助けを求めるように、隣のラファイエンスに視線を向ける……って、こっち見ろよ。失恋話のいくつかはあるだろう！？　それを一発、ブチかましてくれればいいんですよ！

「やはり、ここは、アガルタ王だね」

不意にメインティア王が口を開く。マジでテメェは黙っていろよ。

「うむ。こうした趣のある話は、我が王ですな。すまぬが、よろしく頼みたい」

……将軍？　将軍！？　いや、頭下げてないで……。ちょっと待ってくださいよ。いや、マジで勘弁して！

うろたえる俺。だが、ポセイドン王は静かに、ゆっくりと頷いている。何でだ？　何でこうなるんだ！？　ポセイドン王の部屋に、再

び沈黙が訪れた……。

第三百七十七話　お古いお話、再び

「ううう……あの……その……」

「何を勿体ぶっているんだい？　ほら、以前話していたように、聞いた話でも構わないよ。ね、兄上？」

メインティア王が目をキラキラさせながら、そんなことを宣う。その隣で、ポセイドン王も鷹揚に頷いている。完全に逃げ道をふさがれてしまった。ここはもう、何かを話すしかない。俺はバカ殿をぶん殴りたい衝動を抑えながら、必死で記憶を辿る。

「では……昔、昔の話ですが……」

うろ覚えだが、確か学校の授業で習った……。そう、国語の井本先生だったか、森尾先生だったか……。いや、まてよ、大学の授業でやったのか……。そんなことを思いつつ、記憶を辿りながら、ゆっくりと話を始める。

「昔、とある色男がおりました」

「ほう、まるで、私や兄上みたいだな。その色男が恋に破れるのかい？　それは楽しみだ」

「いえ、その男の話ではなく、その男に仕えていた侍女の話です」

「ほう、女性の失恋話かい？　それは興味深いね」

「その侍女にある日、ラブレターが届きました」

「ほうほう、それで？」

「ですが、女性はまだ若く、恋愛をしたことがありませんでした」

「ほう、いいね。それでそれで？」

「やはり、エチケットとして、ラブレターをもらった以上、返事を返さなければいけません。ですが、何しろ初めてのことであったために、女性はなかなか返事を返すことができませんでした」

「うむ、その通りだ。興味のない男なら興味がないと言えばいいし、興味があれば舞踏会などで会うなどすればいい。まったく……周囲の者は何をしていたのだ？」

「当然、その女性の同僚のお姉さまたちは、早くお返事をしないといけないのよと言って諭したのですが、彼女は戸惑ってしまって、なかなか返事ができなかったのです。何しろ、会うにせよ、断るにせよ、きちんとした返信をしなければ、彼女自身が軽薄な女性と見られてしまいます。それが原因で、変な噂が立てば、今後の彼女の人生にも差しさわりが出てきますので、慎重になるのは仕方のないことだったのです」

「なるほど！　それは一理ある。うむむ。そこまで考えているその女性は、きっと頭のいい方に違いない。是非一度、会って語ってみたいものだ」

「いや、メインティア王。あくまで物語の話ですから。別に特定の人がいるわけではありません」

「何を言うのだ！　その割には、ずいぶんと現実的じゃないか！　……なるほど、奥方にバレたくはないのだな？　うん、わかる。私も大上王にバレたときの鬱陶しさは身に染みている。アガルタ王の気持ちはわかる。わかるぞ」

「いや、違いますって。あくまで物語の……」

「つまらん話はいい。続きを」

ドスの効いた声が、俺の腹に響き渡る。見るとポセイドン王が真面目な顔をして俺を睨んでいる。その迫力に俺の体が震える。怖ぇ……。

「……オホン、それでは続きをお話します。……ええと、その侍女の返信があまりにも遅いために、主人である色男が、代筆したのです」

「ほう、なるほど、そうきたか。で、どんな内容を返したのだ？」

「内容までは習った記憶がない……のではなくて、ちょっと覚えていないのですが、確か、色男が返事のお手本を書いてやって、それを元に、返事を書いたのだと記憶しています。それを見た男は、何て素晴らしい返事なのだと言って、喜んだと……記憶しています」

「ほう、その内容が気になるね。何と言って返したのだい？　もったいぶらずに教えておくれよ」

「ええと、確か、送られてきたラブレターが、『あなたが好きで好きで、涙が流れて川のようになって服を濡らしています。あなたに

会う手立てのないのが辛い』というような内容だったので、それを受けて、『服が濡れるとありましたが、私への思いはその程度なのでしょうか？　思いが深くて涙が溢れて溢れて、自分の体まで流されてしまいそうと言ってくれれば、あなたに興味を持ちますのに』と書いて送ったと記憶しています」

「ほう、なかなかいい返事じゃないか。しかし、なぜ、そんなに回りくどいことをするのだ！？　男と女なのだ、好きか嫌いかしかないだろう！　好きならばベッドに引きずり込む、嫌いならば、好きになるまで口説き、受け入れられなければ、ベッドに引きずり込んで、自分を好きになるまで愛し抜く……それしかないだろうに！」

……どっちにしてもベッドに引きずり込むんかい。どこまで野獣なんだ、このバカ殿は？

メインティア王は、よくわからないと言った表情で首を振っている。ふと、ポセイドン王を見ると、先程の表情のまま、俺に視線を向け続けている。彼は俺と目が合うと、ゆっくりと頷いた。話を聞く気があるようだ。

「こんな回りくどい返事を出すのには、理由がありまして、女性はなかなか家の外に出ることができませんでした。今のように、自由に会うことができれば、見て、話して、相手の力量を図ったうえでお付き合いをするかどうかを決めることができますが、なかなか外に出られず、ましてや、男性と会うことが極端に制限されていては、なかなか相手を知ることはできません。そのために、こんな感じの手紙を送ってやり取りをしつつ、相手の力量を図っているのです」

「アガルタ王！」

突然、メインティア王が真面目な顔をして、俺を睨む。俺は驚きながら、彼に視線を向ける。

「その侍女というのは、まさか、王の後宮に仕える女官ではないのか？　いや、隠さなくてもいい。なるほど、後宮の女官ならば、なかなか外部の者と接触することはできないね。しかもその女性は、かなり王と王妃から信頼されているね？　ああ、言わなくてもわかる。それだけ優秀な女性なのだ……。しかも、とても心の美しい女性と見た。うん、それならば、注意深くもなるだろう。これで納得がいった」

「いや、それだけではない。その方法であれば、相手の愛情の深さまで図ることができる。うん、考えたね。面白そうだ。それで？」

ポセイドン王が笑顔で話しかけてくるが、目が全然笑っていないので、怖い。俺は咳ばらいをしながら、心と落ち着けつつ、話を続ける。

「で、二人は結局付き合うことになったのです」

「おお！　それはよかった。それで？」

「で、二人が付き合ってしばらく経ったとき、男から手紙が届いたのです」

「ほう、それで？　どんな内容だい？」

「『雨が降りそうだから、今日はそちらに行こうかどうかを迷っています。もし、雨が降らないのであれば、お伺いしようかと思うのですが』みたいな内容を送ったのです」

「何っ？　たかが雨程度で会いに行くのを止めるというのか！？
男の風上にも置けんな」

「ほう、メインティア王、あなたは、たとえ雨が降ろうが、槍が降ろうが、どんな状況でも女性に会うためとあらば、全てをかなぐり捨てていく男だと、そう言うのですか？」

「ああ、そういう気持ちは持っている」

「実際に行ったことは？」

「……ない」

ないんかい！　俺は呆れた様子で彼を眺める。

「雨ならば服も濡れる。濡れた体を温め合う楽しみもあるだろうに……。男はなぜそこに気が付かない。ううむ……惜しいことだ」

「女性は何と言ったのだ」

うおっ、ポセイドン王の目が怖ぇ。俺は姿勢を正して、さらに言葉を続ける。

「ええと、女性の方はですね……。確か、『私のことをどう思っているのか、あなたの本心を聞きかねていましたが、その程度しか思われていないと知った私には、涙の雨がどんどん降ってきました』と書いて送ったのです。それを見た男は、取る物も取りあえず、雨の中、ずぶ濡れになりながら、屋敷を飛び出して行った……。そんな話だったと記憶しています」

ここまで話して、俺はハタと気付く。ヤバイ、これ、失恋話か？
これだけでは失恋したかどうかはわからない。オーダーとは違う話をしてしまったか。そんなことを思いながら俺は、恐る恐るポセイドン王に視線を向ける。彼は目を閉じたまま黙っている。

「クックック、フッフッフ、アッハッハッハッハ！」

突然、メインティア王が笑いだした。あまりに意外な振舞いだったために、俺は彼を見ながら固まる。

「ハッハッハ！　涙の雨……ずぶ濡れになって……。ハッハッハッハッハ！　涙の雨ですと！　兄上！　兄上ぇ！」

辺りも憚らず、このバカ殿は腹を抱えて笑っている。ふとポセイドン王を見ると、何故か俯いている。

「フフッ、貴公……笑い……笑いすぎ……フッフッフ、アハハハハッ。フアッハッハッハ！」

「兄上！　兄上ぇ！」

「ハアッハッハッハ！」

何故か二人で肩を叩き合いながら、大爆笑している。一体何が面白かったのだろう？　二人のツボが全くわからない。俺は戸惑いながら、隣のラファイエンスに視線を向ける。彼は二人を見ながら、苦笑いを浮かべている。

「しょ……将軍……」

「まあ、よいではないか、リノス殿」

彼は、ウケたし、結果オーライでいいじゃないかと言わんばかりに、俺に向けてゆっくりと首を振る。そして、俺に顔を近づけて、小さな声で口を開く。

「結局、その男はその後どうなったのだ？」

「わからないですが、おそらく振られたと思います」

「ほう、何故、そう言い切れる？」

「涙だけに、塩分（艶聞）の多いのは、嫌われるでしょう」

「ハハハハハ」

ラファイエンスの乾いた笑い声が、部屋の中に響き渡った。

第三百七十八話　お見舞い

アガルタの王都の北に位置するルノアの森。その深い森の中に、三人の親子連れが佇んでいる。この森は多くの魔物が生息しているために、余程腕に自信のある冒険者でなければ帰還することは難しい。そんな場所に親子連れがいることは、とても珍しい光景だ。

「さあ、着いたぞ」

「……」

笑顔で話しかけているのは、アガルタ王のリノスだった。彼は、自分の足にまとわりつくようにして抱きついている娘のアリリアを愛おしそうに眺めている。だが、アリリアは不安そうな表情を崩さず、じっと森の奥を見つめている。そんな彼女の様子を、優しい眼差しで眺めているのは、母親であるメイだった。メイはアリリアとリノスに交互に視線を向けながら、森の奥深くをじっと見据える。

「……来た」

リノスが誰に言うともなく呟くと、森の木々がまるで何かの生き物であるかのような動きを見せたかと思うと、その間から村の入り口が現れた。

「さ、行こう」

「本当にマミーはこんなところにいるの？」

アリリアにしてみれば、あの華やかなソレイユが、こんな草深い森の奥にいるとは想像だにできなかったのだ。

マミーこと、ソレイユがサイリュースの里に帰って約二ヶ月。毎晩のように彼女の子守歌を聞いていたアリリアの寂しさは、早くも限界を迎えていた。ある夜、眠りながらソレイユの名を呼び、号泣するアリリアを見たリノスは、すぐさまサイリュースの里に行くことを決めた。そして、族長であり、ソレイユの母親でもあるヴィヴァルに手紙を出し、一度、妻を見舞いたいと伝えた。返信はすぐにあり、サイリュースは一族を挙げて歓迎する旨の内容が記されていたのだった。

アリリアの母親であるメイは、リノスのその行動を甘いと思いながらも、娘のために即座に動いてくれたことを嬉しく感じていた。それに、身籠ると精霊の加護が受けられず、抵抗力が極端に落ちると言っていた、ソレイユの体調も心配だった。サイリュースには腕のいい薬師がいるが、それでも、メイとしてはソレイユの体調が心配だった。リノスのアリリアと二人でソレイユの許に見舞いに行くというその話に、メイは自分も一緒に行くと言ってここまで来たのだ。そこには、抵抗力の弱っているソレイユに、この二人が行くことで何かの病気に感染することを危惧したこともその理由の一つだった。メイは忙しいスケジュールをやりくりして一日の休みを取り、二人に同行することに決めたのだった。

慣れた様子で、懐かしそうな表情を浮かべながらリノスは、アリリアの手を引いて村に入っていく。そのとき、空から何かが降ってきた。驚いたアリリアはすぐに父の後ろに隠れる。

「お待ちしておりました」

美しい三人のサイリュースが、笑顔で話しかけてきた。リノスは突然押しかけてきた非礼を詫び、迎えに来てくれたことに丁寧に礼を言う。そして、サイリュースたちの案内で、彼らは村の中に入った。

「お久しぶりでございます」

族長のヴィヴァルは、自身が住むテントのような建物の中で三人を笑顔で出迎えた。いつもと変わらぬ美貌で、メイは思わずリノスに視線を向ける。だが、彼はいつもと変わらぬ表情で、淡々とヴィヴァルと話をしている。

「ソレイユの様子はいかがですか？」

「ええ。至って元気です。どうぞ、顔を見てやってください」

そう言うと彼女は立ち上がり、リノスたちを外に案内し、目の前に生えている巨木に視線を向けた。そして、何か歌のようなリズムを口ずさむと、その巨木がみるみる人の形に変化していく。

「マミー！」

アリリアが両手を挙げて走り出す。巨木はソレイユの形に変化していた。彼女は優しい微笑みを湛えながら、アリリアを受け止める。

「マミー！　マミー！　会いたかった……」

ソレイユの胸に顔をうずめながら、アリリアは涙を流している。その頭を、ソレイユはやさしく撫でた。

「調子はどうですか？」

「ありがとうございます、メイ様。おかげさまで、とても順調です」

そう言って彼女はやさしくお腹を撫でた。よく見るとお腹がポッコリと膨らんでいる。そこにメイが手を添える。そして、リノスもゆっくりとソレイユのお腹に手を添えた。

「元気な子を産んでくれよな、ソレイユ。そして、早く屋敷に戻って来てくれな。アリリアが寂しがっているんだ」

「はい。頑張ります。アリリア、寂しくなったら、いつでもマミーのところに来てもいいのよ。お屋敷からこの村の入り口まで転移結界が張ってあるから、それに乗って来るといいのよ」

「うん。でも……」

アリリアは一瞬、嬉しそうな表情を浮かべたが、すぐに寂しそうな表情に変わる。

「マミーは病気になりやすいから、行っちゃダメだって……」

そう言いながらアリリアはメイの顔を見る。メイは少し厳しい表情を浮かべながら、小さく首を振る。

「メイ様、よければ、週に一度でいいですから、アリリアを村にお連れ下さい」

「でも……」

「ここは母が契約している森の精霊がおります。神龍様ほどではありませんが、森の精霊の中でも最高ランクの精霊が守って下さっています。ですから……」

「お母さん。ちゃんと手を洗います。歯磨きもします。だから、マミーのところに行かせてください」

そう言ってアリリアはペコリと頭を下げる。その姿に、リノスの胸は震えた。何と可愛い姿なのだろう……。ある種の感動を覚えながら、彼は隣にいるメイの顔を見た。その視線に気づいた彼女はスッとしゃがみ込み、アリリアの肩をやさしく抱いた。

「じゃあ、一週間に一度だけ、ここにお邪魔させてもらおうね。マミーを病気にしてはいけないから、必ずお母さんの言いつけは守ること。いいかな？」

その言葉に、アリリアは真剣な表情を浮かべて、コクリと頷いた。それを見たメイは、ソレイユに視線を向けて小さく一礼をし、そして、傍に控えているヴィヴァルにも、一礼をした。

「我らサイリュースは、いつでも皆さまを歓迎いたします。ただ、アリリアちゃんはまだ小さいですから、少し心配ですね。誰か、迎えをやった方がいいですね」

「いえ、そこまでしていただかなくても……」

「族長様、その役目、あたしにお任せ下さい！」

突然、女性の声が聞こえる。驚いて声のする方向を見ると、そこには、目の大きい美少女が腕組みをして立っていた。

「リノス様、メイ様、お久しぶりです！」

突然、名前を呼ばれたために、リノスもメイも驚いた表情を浮かべる。そんな彼らに少女は、満面の笑みで話しかける。

「へ～え～。こんなにかわいい女の子がいたんだね！　メイ様そっくりで、賢そうだ。この子は私がお迎えに行くよ。安心しな。せっかく久しぶりに会ったんだ。これまでのことを聞かせておくれよ！」

「あの……ごめん、誰？」

「え？　私だよ私。覚えていないの？　……メイ様？」

「ええと……ごめんなさい。どなたでしたっけ？」

「そんな……ひどい」

少女の目に、みるみる涙が溜まってくる。その様子を眺めながらヴィヴァルは、クスクスと笑っている。

「二人がわからないのは無理もありませんわ。その者はイリサルです」

「イリサルぅ！？」

リノスとメイが顔を見合わせて驚く。そして、二人はイリサルと呼ばれた少女の顔をまじまじと眺める。

「お前……。ひきこもりのイリサルか？」

「失礼だね！　ひきこもっていたんじゃないよ！　ただ、部屋の中で悩んでいただけだよ！」

「はあ……。確かにあれから何年も経っているからな……まさか、こんなに美しくなるとは思わなかったな」

「お世辞が上手になったね、リノス様」

「いいや、お世辞じゃない。本当に名前を言わないとわからなかったよ」

「そうですね、私もわかりませんでした。本当に美しくなりましたね……。懐かしいです」

そんなこと言いながら、リノスもメイも、イリサルたちも笑い合う。だがその頃、帝都のリノスの屋敷では、とんでもないことが起きようとしていた。

「……」

帝都の屋敷の外れに備えられた転移結界が張られている部屋。そこに、一人の少女が立ち尽くしていた。彼女はキョロキョロと周囲を伺っていたが、やがて意を決した表情を浮かべて、目の前の転移結界に視線を向けた。

その少女は、リノス家の長女である、エリルだった……。

第三百七十九話　一人旅

「うん？」

アガルタの医療研究所。そこの長い廊下を歩いているのは、ローニだった。彼女は何かの気配を感じて、思わず振り向いた。だが、そこには見慣れた景色があるのみで、特に異常は感じられなかった。

「何でしょうか？　誰か、私の後を付いてきているように感じたのですが……」

ローニの耳がピクピクと動いている。彼女は耳をすませてみるが、異常な音は何も聞こえない。

「ふぅ。時間がありませんね」

そう言って彼女は体内の魔力を集中させて、転移を発動させた。

「……」

物陰からひょっこり顔を出したのは、リノスの娘であるエリルだった。彼女は茫然とした表情を浮かべながら、長く続く廊下を眺めていた。

エリルがこの医療研究所に来たのには、訳がある。彼女はどうしてもマトカルに会いたかったのだ。

戦いが終わって、リノス家はいつもの落ち着きを取り戻していた。だが、ソレイユとマトカルの姿がないことに、エリル自身、寂しさを感じていた。マミーこと、ソレイユのことはいい。食事のときなどに、折に触れて話題が出るからだ。どうやら、マミーのお腹の中にいるのは、女の子らしい。マミーの種族には女の子しか生まれないらしく、しばらくすると妹が生まれるのだと聞かされていた。同じ妹のアリリアは、マミーの歌が聞けないことに寂しさを募らせていたが、エリル自身は、どちらかと言うと、妹の誕生を楽しみにしつつ、マトカルのことが気になって仕方がなかった。

あのとき、ママは確かに言った。マトを迎えに行ってくる……と。だが、待てど暮らせどマトカルは帰ってこない。父や母に聞いてみても、大丈夫だの返事しか返ってこない。彼女の目に映る両親の表情は、これ以上、マトカルのことを聞いてはいけないと言っているように見えた。それ以降、彼女はマトカルのことを話題にするのを止めた。

実際、この研究所に運ばれたときのマトカルは、危険な状態だった。特に胎児が危険な状況であり、メイの見立てでも、子供が助かる可能性は半々という状況だった。だが、あれから二ヶ月が経った今は、マトカルの体調も回復し、お腹の子供も最悪の状況を脱しつつあった。とはいえ、彼女は一度、流産をしているために、万全を期して、メイの太鼓判がもらえるｏｒ押されるまでは入院することになっていたのだ。だが、そんなことはエリルにはわからない。彼女は情報がない中で、日々、マトカルのことを心配し続けた。そして、思い余ってアガルタの医療研究所への転移結界に乗ってしまったのだ。

帝都の屋敷にある転移結界の部屋には、いくつかの転移先がある。彼女はお見送りと称して、メイの出勤を転移結界の部屋まで見送った。それで、どの結界がアガルタの医療研究所に通じるものである

のかを把握していた。笑顔で手を振るお母さん――メイのその、優しく穏やかな表情は、エリルに良心の呵責を掻き立てたが、それでも、マトカルに会いたい一心で、彼女はその感情を必死で抑え込んだのだった。

そして、この日。エリルは思い余って転移結界に乗ってみた。パパやママ、特にママには絶対に転移結界のある建物には近づいてはいけないと厳しく言われていたが、ちょっと行って帰ってくればいい。そう自分に言い聞かせて彼女は転移結界に乗ったのだった。

着いた先は、何もない、ガランとした広い部屋だった。すぐ目の前にはドアが見え、そこから光が漏れていた。エリルは恐る恐るドアに近づき、ゆっくりとノブを廻して、扉を開けてみた。そこには、ただただ長い廊下があるのみだった。

「……ここは、何？」

呆然として廊下を眺めていると、目の前に突然、人影が現れた。彼女は思わず目の前にあった、ゴミ箱の陰に隠れた。ゆらゆらとした人影が少しずつ形作られている。よく見るとそれは、黒い毛で覆われ、ピンとした長い耳を持つポーセハイだった。エリルはその姿から、これは家によく来るローニ先生だと直感的に気づいた。

そのローニは、キョロキョロと辺りを見廻していたが、やがて再びその姿を消してしまった。エリルは、他の誰かが来ないか、全身を緊張させながら恐る恐る、廊下を一歩一歩歩いていく。彼女には、廊下を歩いた先に何かがあると直感めいた確信があった。

一方のマトカルは、医療研究所の庭で、日光浴の最中だった。ひと

月ほど前までは、歩くことも極端に制限され、スタッフに付きっ切りで介護されていたため、少々体力や筋力が落ちてしまっていた。ここ最近は、激しい運動は禁じられていたものの、外に出て散歩することはできるようになっていた。お腹の子供も落ち着いてきたようで、あと一週間ほど様子を見て、帝都の屋敷に一時帰宅しましょうと、先程メイから言われたばかりだった。

庭をゆっくりと歩きながら、マトカルは少し大きくなってきたお腹をゆっくりと撫でる。まだ、男か女かはわからないが、よく流れないでいてくれた。果たして、どんな子供が生まれてくるのか。男でも女でも剣術を習わせよう。先に、エリルにある程度の剣術を教えて、あの子からこの、生まれてくる子供に剣術を教えさせるのも悪くはないな。そんなことを考えながら彼女は、お腹の子供に向かって、お前には優しい姉と兄がいるのだぞと小さな声で話しかけた。

そんな自分の姿にマトカルはふと苦笑する。まさか、自分がこんなことになるとは思いもしなかったからだ。女性として生きるのを捨て、ひたすらに男性の、軍人として生きてきたし、それを覚悟していた。だが、どうしたことか、リノス様の妻となり、そして、その彼の子供を身籠っている。数年前の自分からは考えられないことだ。そんなことを思いながら彼女はふと、目の前に建つ、ポーセハイ専用の宿直室に視線を向けた。ここはただ、長い廊下があるだけだが、実はその壁の向こう側には簡単なベッドと机が供えられた部屋がいくつかあり、ポーセハイたちは、転移能力を駆使してその部屋を使っているのだ。その廊下の先には帝都の屋敷に通じる転移結界がある。いつもメイ様はこの廊下を歩いて出勤してくるが、特に退勤する際は、ポーセハイと話をしながら歩き、どんどんとポーセハイが消えていって最後にメイ様一人になるというシュールな光景が毎日繰り返されている。これはおそらく、リノス様もリコ様も知らないだろう。あの光景を見たら、二人は肝をつぶすだろう……そんなこ

とを考えていると、思わず笑い声が込み上げてくる。

「マト……ちゃん？」

聞き覚えのある声がした、思わず顔を上げると、廊下の入り口に小さな女の子が立っているのが見えた。

「エリル……」

「マトちゃん！」

エリルの声を聞くと同時に、マトカルは走り出していた。そして、エリルも彼女に向かって全力で走ってくる。マトカルはその小さな体を思いっきり受け止める。

「エリル……来てくれたのか……」

「マトちゃん、体、痛くない？　苦しくない？」

「……大丈夫だ」

なんと愛おしい子供なのだろう。果たしてこれが４歳の子供だろうか。そんなことを思いながらマトカルは、エリルの頭を愛おしそうに撫でる。

「一人で……来たのか？」

「ママにはナイショ！　あと、パパにも」

「……わかった。私はもうすぐしたら屋敷に帰る。それまで、大人

しく待っているのだ」

「え？　帰ってくるの？」

エリルの顔がぱあああっと明るくなる。とてもかわいらしい笑顔だ。
それだけで、マトカルの心は癒されていく。

「あと7回夜を数えたら、帰る。それまで、大人しく屋敷で待っていてくれ」

その声にエリルは大きく頷く。

「さ、早く帰れ。そうしないと、ママに怒られるぞ」

その声にエリルの体がビクンと震える。マトカルはエリルの手を握り、優しく微笑みかける。

「転移結界のある部屋まで、一緒に行こう」

「うん」

こうして二人は、研究所の長い廊下を歩き出した。

幸いにして、転移結界のある場所までは、誰にも見つからずにたどり着くことができた。そして、名残惜しそうに手に結界に乗ったエリルの顔を、マトカルはその姿が消えるまで見つめ続けた。

「リコ様に怒られなければいいのだがな……。これで怒られてしまっては、あの子が可哀想だ。神よ……幼き子を、導き給え……」

生まれて初めてマトカルは、心の底から神に祈りを捧げた……。

第三百八十話　ミーダイ国、復活

真っ暗な闇の中に、小さな光の玉が現れて、辺りを照らしていった。その光の中にぼんやりと映し出されているのは、アガルタ王、リノスの姿だった。彼は注意深くゆっくりと周囲を見廻している。

「特に人の気配は感じませんね。それでは……やりますか」

彼は振り返りながらそんな言葉を呟く。彼の視線の先には、ミーダイ国の帝様の姿があった。

彼らがいるのは、ミーダイ国の御所の中にある大広間だった。言うまでもなくこの国は、タナ王国からの侵攻によって、その領土全域を石で埋め尽くされていた。リノスが咄嗟に張った結界のお陰で街は何とか壊滅を逃れていたが、全く太陽の光が届かない状況となってしまったために、とても人の住む場所ではなくなっていたのだ。

だが、先の戦いに勝利したこともあってリノスは、ミーダイ国の空を埋め尽くしている石を取り除き、この国を復活させることを帝様に提案してみた。帝様はそれを手放しで喜び、リノスの言葉に涙にむせびながら礼を言ったのだった。

「さあ、では、やりますか」

リノスはそう言いながらゆっくりと目を閉じる。その様子を帝様は息を殺して見守っている。彼を見守るのは、帝様ただ一人だった。ミーダイ国の復活は、この国に住む者全員の悲願であり、その復活の瞬間に立ち会いたいという者は後を絶たなかった。だが、帝様は

誰の参加も許さず、一人でそれを見届けると言って、頑として首を縦に振らなかった。

彼としては、国に住まう人々を二度も危険にさらしたくないという強い思いがあった。元々、ミーダイ国は、山の中をくり抜いたような場所に建てられた国だった。そのため、空には絶壁のような高い山がそびえ立っていた。タナ軍はその石壁を壊してこの国を埋め立てたのだが、色々と調査した結果、この山はかなり脆い石質でできているようで、単に結界を上昇させればよいというものではない状況にあった。下手をすれば、結界を上昇させたところから、山が崩壊する可能性すらあり、帝様としては、どんな些細なことであっても、国の人々を傷つけることだけは避けたいという思いがあったのだ。

「う……ん……」

リノスの声が漏れると同時に、御所の中が小刻みに揺れ出す。彼は目を閉じて意識を集中させながら、ブツブツと何かを呟いている。すると、小さな、地鳴りのような音が周囲から聞こえてきた。

「お父様（もうさま）、お母様（たあさま）……お守りください」

帝様が小さな声で呟いている。リノスはその声には反応を示さずに、ただひたすら魔力を集中させている。

突然、御所が大きく縦に揺れた。ドン、ドン、とまるで下から突き上げられるような揺れを感じる。そこで、リノスはゆっくりと息を吐き出し、それと同時に、先程から続いていた揺れは収まった。

「ず……ずいぶんと揺れておったが……」

「そうですね。結界を上昇させたのですが、どうしても石や結界が山を引っ掻くような形になります。小刻みに揺れていたのはそのせいです」

「さっきのあの、突き上げるような揺れは……何だえ？」

「それは……俺にもわかりません。ただ帝様、この山の岩は予想していた以上に脆いですね。下手をすれば、結界を上昇させて空の岩を取り除いても、また、山が崩落する可能性もありますね」

リノスの言葉に、帝様は大きく頷く。

「そこもとには話しておらなんだかもしれぬが、我が国では、山が突然崩れるというのは、よくあることなのじゃ。マロの代になってからは起こってはおらぬが、三代前の帝の頃に、国の東側の山において山が大きく崩れ、多くの人が死んだのじゃ」

「帝様、こう言っては何ですが、どうしてそんな危険な国にお住まいになるのですか？」

「それじゃよ。我らが危険を冒してこの国に住まうのは、この国で獲れる石、即ち、崩れやすいこの石こそが、プリルの石や魔吸石を作る素になっているのじゃ」

「はぁぁ……」

聞けば、この国は山の斜面を削りながら、その領土を拡大させてきたのだという。つまり、側面の山を削り取りながら、空いた場所に家を建てるなどしている。ただ、それが行き過ぎてしまい、ちょう

ど火山のマグマだまりのような格好になってしまっているのだという。おそらく先程の縦揺れは、ドームの天井部分に結界が引っかかってしまい、それを無理やり押し上げようとして山が震えていたのだろう。咄嗟に張った結界だが、実にややこしいことになっている。

「ええと……だから……うん？　とすると……あ、ダメだ。石が土砂のように流れ出るな。ええ～難しいな」

俺は頭の中で山の形とこの国の形をイメージしつつ、マップで確認しながら、どうやって空の石と山を崩さぬように結界を上昇させればいいのかを考える。理屈は簡単なのだが、結界の形状を都度都度に変えなければならないので、それがややこしい。そんなことを考えていると、ついに俺自身にも限界が来てしまった。

「……帝様、すみませんが、援軍を連れてきてよろしいでしょうか？」

「援軍？　そこもとが頼りとするのならば、連れてきてもらって構わん」

俺はわかりましたと言って、そこから転移する。そしてすぐに俺は援軍を連れて戻ってきた。

「そのお方は……確か……」

「ええ。妻のコンシディーです」

俺が連れてきたのはシディーだった。この人の聡明な頭脳と閃きがあれば、この難題を解決してくれると思ったのだ。シディーは俺の話を聞くと、いつものように人差し指を顎の下に当てて、何やら考

え始めた。

「恐れ入りますが、紙とペンをいただけませんでしょうか。あと、帝様、この国を見させていただくことはできますか？」

「あ、ああ……それは構わぬぞえ」

帝様の言葉に、シディーはスッと頭を下げた。

その後、俺はシディーと共に、ミーダイ国を隅から隅まで走り回った。国中にライトを点け周り、その上、足がないので、わざわざ帝都の屋敷からイリモを連れてきて、彼女に乗りながら陸と空を移動していったのだ。

シディーの明晰さは抜群で、彼女はこの国の立体的な地図のようなものを、大量の紙を使って書き始めた。驚くべきはその記憶力で、彼女は一度行った場所は確実に覚えていて、地図もほぼ、一筆書きのようなスピードで書き上げていった。そして、その最中に石を採取して、何やら小さいルーペのようなもので観察したりもしていた。

「わかりました。大体わかりました。大丈夫です。大丈夫ですが、かなり緻密な作業が必要になります」

走り回ること5時間。シディーは淡々とそんな言葉を呟いた。そして、上空に張っている結界の形をどのように変えれば効果的に上昇させることができるのか、立体的な地図を使って、丁寧に俺に教えてくれた。

その彼女の指示に従いながら俺は、結界の形を変えながらそれを上昇させていく。たまに、「違う！」とか「もう一度！」とか、今ま

で聞いたこともなかったような、ドスの効いた声で注意されて、心が折れそうになったりもしたが、ゆっくり時間をかけ、丁寧に上昇させた甲斐があって、ミーダイ国の空を覆っていた石は、すべて取り除かれたのだった。

「うわぁ！」

空が見えた瞬間、俺たちが同時に声を上げる。何とそこには、見事な満月が顔を出していたのだ。その冴えわたるような美しさに、俺たちは思わず息を呑んだ。

「クワンパックがおれば、さぞ、喜んだことじゃろうにな」

帝様はそう言ってフフフと笑みを漏らす。聞けばクワンパックは帰国を希望しているらしく、帝様もそれを認めるつもりのようだ。

「それに、オクと倅にもこの景色、見せてやりたかったの……」

「いえ、帝様。これから何度もこの景色は見ることができますから」

「そうじゃな」

俺たちを振り返った帝様は、本当にうれしそうな表情をしていた。

あとになってわかることだが、この国で獲れる石は、砕いて粉にしたものに水をかけ、それを乾かすととんでもない硬さになることが分かった。いわゆるコンクリートの原料のようなものであり、ミーダイ国はその後、この石を売ることでその財政を大きく好転させてゆくこととなる。

「さあ、帰りましょうか。ああ～一日中、頭と体を使い続けたから、疲れた」

う～んと背伸びをする俺に、帝様は笑顔で頷いている。その隣でシディーも、お疲れさまでしたと言って俺に頭を下げている。俺はそのシディーに向かって声をかける。

「久しぶりに心身ともに疲れたから、シディー。今日は癒してくれな」

「えっ！？　あのっ……それは……ハイ……頑張り、ます……」

顔を真っ赤にして俯くシディー。俺はただ、屋敷に帰って足の裏を、彼女の足で踏んで欲しかっただけなのだが……。あとで聞くと、どうやら彼女は、「癒してくれ」という言葉を「いやらしいことしてくれ」と聞き違えていたらしく、後で大笑いしたのは俺たちだけの秘密だ。

そんな俺たちを、月は柔らかい光で包み続けていた。

第三百八十話　ミーダイ国、復活（後書き）

本日、デンシバーズ様（ｈｔｔｐ：／／ｄｅｎｓｈｉ－ｂｉｒｚ．ｃｏｍ／ｋｅｋｋａｉｓｈｉ／）においてコミカライズ中の『結界師への転生　第二話』が公開されました。第一章のリノスとエリルの魔物狩りエピソードが描かれています。是非、ご覧ください！

第三百八十一話　発見

「タナ王国に……か？」

白い光沢のあるローブを身に纏う男が、驚きの声を上げていた。彼は口をポカンと開けたまま、固まっている。

「あの……」

「……それは、確かな情報なのだろうな？」

「はい。先日、タナ王国におきまして、閲兵式がございました。そこに招待された……アンマルドとカイザワフ、両枢機卿が見たと申しております」

「アルマンドとカイザワフ……」

二人ともに信頼のおける男たちだ。

「わかった。二人がそう言うのであれば、真実なのだろう。あとのことは考える。下がっていろ」

男はそう言って、報告に訪れた者を下がらせた。

「……姉さま」

その声には、安堵と憎悪が入り混じった、複雑な感情が吐き出されていた。そして、その声の主こそ、ひと月前にクリミアーナ教の教

皇に就任した、カッセルその人だった。

アガルタとタナ王国との戦いが終わった直後、タナ王国からアガルタ軍を壊滅させたと報告があった。アガルタ王リノスは戦死し、ヴィエイユは行方知れずとされていた。カッセルを始め、クリミアーナ教国の者たちは全力を挙げてヴィエイユの消息を探したが、その行方は知れなかった。

そのとき、カッセルは思った。もしかしたら、姉さまはもう、この世にはいないのではないかと。

だが、それが覆されたのは、ほどなくしてアガルタ王・リノスが生きているという報告だった。それは、カッセルが前教皇であるジュヴァンセル・セインから次期教皇指名を受けてしばらくした頃だった。何とリノスは、アガルタの都に新たに建設された大学の開校式に、堂々と出席したというのだ。

このアガルタに作られた大学は、開校前から高い評価を受けていた、アガルタ医療研究所を拡大して、総合大学としたものだった。それが発表されるや、その大学への入学希望者が殺到したと言われている。そのため、アガルタ大学には、世界中から優秀な研究者が集まることになった。だが、この大学が実施することは全て、このクリミアーナ教国を逆なでするものばかりだった。

まず発表されたのが、学長を始めとする教授陣だったが、それらは全て、クリミアーナに背いた者たちばかりだった。とりわけ、その教授の一人にグラリーナの名前が刻まれていたことは、クリミアーナ教国の怒りに火に油を注ぐ形となっていた。

その他にも、学長に就任すると発表されていたアガルタ王の妃であ

るメイリアスは、堂々と聖女を名乗っていたし、その他のポーセハイとみられる者たちも、それぞれに「ゴッドハンド」や「知の巨人」などといった敬称が付けられていた。聖女にしろ、ゴッドハンドにしろ、それらは当然、クリミアーナの許可などは得ているわけもなく、神の僕を自称する彼らの神経を、激しく刺激したのだった。だが、それらはメイたち本人が名乗っているわけではなく、報告書を作成した司教たちが勝手に、巷で言われている敬称を、さもアガルタが吹聴しているように書き加えただけに過ぎなかった。

カッセルはこれを契機として、全世界のクリミアーナ教を信仰する国々に書簡を送り、アガルタに総攻撃をかけるべく行動を開始した。だがその直後、教国内において、彼の教皇就任に異を唱える者たちが跋扈し始め、カッセルは、彼らとの政権闘争に巻き込まれることになった。

ようやく政敵を退け、教皇就任を確かなものとした矢先、今度はその就任パーティの席上で、突然ヴィエイユが現れ、クリミアーナからの離脱と、新たな教団を立ち上げることを宣言されてしまった。

だが、久しぶりに会うヴィエイユは、美しかった。その麗しさに一瞬、カッセルは心奪われそうになった。だが、この美しい姉さまが、毎夜の如くアガルタ王リノスに、その体を差し出し、蹂躙されていると思うと、彼の心の中に猛烈な嫉妬が沸き起こった。そして、何としても、この姉さまを取り戻さねばならないと強く思ったのだった。

ヴィエイユの姿はすぐに消えてしまったが、カッセルはその影を追い求めるように、全世界に向けてヴィエイユの探索を命じた。姉さまは生きている。その姉さまを何としても自分の前に跪かせる……。彼の心の中は、彼女で満たされていった。

探索すること数ヶ月。この日、ようやく彼の許にヴィエイユ発見の報告があった。しかもそれはタナ王国であったことに、カッセルは衝撃を受けた。何故ならば、タナ王国はカッセルが軍事的に最も頼りとする国であり、クリミアーナ教国軍の中でも中心となる存在であったからだ。

一瞬、怒りと衝撃で我を忘れそうになったが、彼はすぐに冷静さを取り戻す。そしてすぐに、教皇の執務室の壁に飾られた世界地図に視線を向ける。タナ王国とクリミアーナ教国の首都であるアフロディーテまでは、船を使えば僅かの日数で行くことができる。そんなことを考えながら彼は、クリミアーナ軍とタナ軍の現状を冷静に分析する。

「……急ぐ必要がある」

誰に言うともなく呟いた彼は、足早に執務室を後にした。

「……おお、カッセルではありませんか。どうしました？」

にこやかな笑みで彼を迎えたのは、前教皇、現在では名誉教皇の称号を得ている、ジュヴァンセル・セインだった。彼はゆったりと椅子に座ったままの状態でカッセルを迎えた。

「はい。既にお聞き及びのことかとは思いますが、ヴィエイユ姉さまの所在が明らかになりました」

「ふむ。それで？」

柔和な笑みを浮かべているが、その目の奥では、カッセルを冷静に値踏みしていることを、彼自身はよくわかっていた。教皇という地位にはいるものの、未だにこのクリミアーナ教国の最終決定権はこの名誉教皇の手にあるために、カッセルは小さなため息をついて、彼に対峙する。

「討伐しようと考えます」

「討伐……」

名誉教皇は、目を見開いて驚いたような表情を浮かべている。だがカッセルは、その様子を気にすることなく、一気に自分の意見をまくしたてる。

「ヴィエイユ姉さまがタナ王国にいる段階で、あの方の狙いはここ、アフロディーテであると考えます。姉さまの性格上、行動を起こすのは全ての計画を立案してからであると考えます。先の閲兵式はおそらく、我が国に侵攻するための準備なのでしょう。今は、兵を整え、食糧を準備していることでしょう。それらがすべて整ったとき、姉さまは行動を起こすはずです。我々は先手を打って、先にタナ王国に攻め込むのです」

「お話はよくわかりますが、カッセル。今のアフロディーテの兵力では、タナ国に勝てますか？　かの国の総兵力は１０万を超えるはずですが……」

「ご心配には及びません。シルエナイ、ナライブツ、カトワタルロ、ホーエインス、ザカリ、ゲイランの各国には常に動員できる兵力を整えておくように命じてあります。各国それぞれ、２万から３万の兵力ですが、それらの兵と、ここアフロディーテにいる４万の兵力

を合わせれば、タナ軍とは互角以上に戦えるかと思います」

「そうですか……。とはいえ、タナ軍の指揮は、ヴィル殿が執られるのではないですか？　あなたが認めた軍神ヴィルに、勝てるのですか？」

「ご懸念には及びません。おそらくヴィル様は出てこないでしょう」

「どういうことでしょうか？」

「あのヴィル様が、敬虔なクリミアーナ教の信徒にして、主神様を愛してやまぬあのお方が、姉さまに篭絡されるとは思えません。おそらくヴィル様はどこかに幽閉されているものと思われます。従って、タナ軍の実質の指揮は、ヴィエイユ姉さまが執られるものと思われます」

「なるほど……。百戦錬磨のヴィル殿ではなく、ヴィエイユならば勝てる見込みがあると……。わかりました、カッセル。あなたにお任せしましょう。好きなようにおやりなさい」

「ありがとうございます。名誉教皇聖下」

「ただし」

ジュヴァンセルは大儀そうに体を起こして立ち上がる。そして、柔和な視線をカッセルに向ける。

「ヴィエイユは必ず捕らえてください。生きて、このアフロディーテに連れてきてください」

「恐れながら教皇聖下、それは、一切傷をつけてはいけないのでしょうか？」

「どういう意味ですか？」

「例えば、激しく抵抗した場合などはどうしても……」

「まあ、そういう場合は仕方がありませんね。ただし、命を奪うことは禁じます」

「畏まりました。なるべく、姉さまを、美しい状態で、連れて参ります」

そういうとカッセルは勢いよくジュヴァンセルの居室を後にした。

そして、ヴィエイユを捕らえたときのことを想像して、ニヤリと笑みを漏らすのだった。

第三百八十二話　姉さま、姉さま……。

真っ暗闇の中、遥か彼方に小さな光が見える。それは徐々にその数を増やしていき、どんどんと大きくなっていく。

深夜の海岸。そこに音もなく数十隻の船が次々と着岸してきていた。強風が吹きすさび、波も高いこの状況下で船を接舷させるなどは、通常ではあり得ないことだった。だが、波が高く、強風が吹いているとはいえ、それは追い風であったために船は砂浜に打ち上げることにして、接舷を強行したのだった。

次々と砂浜に打ち上げられるようにして船が到着する。その直後から、夥しい数の兵士が戦場に現れ、上陸していく。言うまでもなくこれは、カッセル自ら率いるクリミアーナ教国軍であり、その数は約7万にのぼっていた。

「……」

船上に現れたカッセルは、手で風を遮りながら、眼下に集合している兵士たちに視線を向ける。それに満足そうに頷いた彼は、スッと視線を上げ、遠くを見据える。ここはタナ王国のアーミーと呼ばれる地域で、小さな漁村がある場所だった。こんなところに7万もの兵士を上陸させたのには、理由があった。

彼はこの軍勢を以って、タナ王国の王都を急襲しようと考えていた。ヴィエイユ姉さまは間違いなく、王都にいる。その彼女を逃がさないためには、ちまちまと時間をかけるわけにはいかない。彼女が予想もしない速さで王都を急襲し、包囲する必要がある。そう考えた

彼は、この嵐のような天候を利用して、軍を動かしたのだった。

元々、「チェックと改善」が得意であった彼は、タナ王国国王、ヴィルの戦術をよく研究していた。そして、その強さを電光石火の電撃戦であると正確に分析していた。だが、それはオクタこと妖狐へイズの転移術があればこその作戦であり、通常では、どのように力を尽くしても、行軍する兵士を隠し続けるというのは、至難の業と言えた。

そこでカッセルが思いついたのは、夜陰に紛れるという点と、行軍速度を限界まで高めるという点だった。この地域では、時期が来ると決まって暴風が吹く。それは東に向かって吹くことが多いと知っていた彼は、ちょうどタナ王国のある大陸の西側に位置する大陸に兵士を潜ませ、出撃の機会を窺っていたのだ。そして、予想通りこの二日前から風が強まり始め、前日には暴風が吹き荒れることとなった。

暴風と高波の中、しかも夜間の出航は困難を極めるかと思いきや、優秀な兵士たちは見事な操舵術でこれらの苦境を乗り切っていた。お蔭で、沈没した船は一艘のみという予想外な順調さで作戦は遂行されていた。

カッセルはゆっくりと船を降りる。そのときふと、東の方角が桃色に染まっているのが見えた。彼は船を降りてしばし、その光景を眺める。

「風は強いが、明るくなりそうだな。このような珍しい景色に出会えるとは……縁起がいい」

「あれは朝焼けです。おそらく今日は雨となりましょう」

カッセルの従者であるフランが呟いている。彼はその声に反応を示さず、周囲の兵士に向けて命令を下す。

「すぐに出陣の準備をしろ。目の前の峠を越え、王都に向かう。急げ」

カッセルは自身が立てた作戦に自信を深めていた。おそらくヴィエイユ姉さまは、クリミアーナ軍が王都の近くにあるアーミーの村に上陸しているとは予想していないだろう。現に、タナ側からの攻撃は一切なく、自分たちは無血上陸することができている。ここまでは予想通りの展開だ。あとは、王都を急襲して、蟻一匹出ることが出来ぬほどに王都を包囲して、姉さまを捕らえる。捕らえた後は……。

カッセルはそんなことを考えながら、出発準備ができるのを待った。程なくして準備が整うと、クリミアーナ軍はゆっくりと眼前の丘に向かって進んでいく。

「カッセル様、あれを！」

声のした方向を見ると、近習の一人が正面を指さしている。それを追うように視線を向けると、丘の上に軍勢が展開しているのが見えた。カッセルは思わず笑みを浮かべる。

「さすが姉さま、僕の作戦に気が付いた……か？」

彼はそんなことを呟きながら、素早く周囲の者に命令を下す。

「行軍を停止して、あの丘の上の軍勢を調べろ。おそらく、タナ軍……。いや、確実に姉さまの軍だろう。おい、あの丘の周囲はどうなっている？」

命令を受けたカッセルの周囲が俄かに騒がしくなる。そして、煌びやかな鎧を装備した若武者が、彼の馬前に進み出て片膝をついた。

「申し上げます。あの丘……ブルガラルの丘までの道のりには、すすき野原が広がるばかりでございます。あの丘の麓には、リエンスと呼ばれる小さな湖があるのみでございます」

その言葉にカッセルは大きく頷く。しばらくすると、斥候部隊が戻り、正面の軍勢はやはり、ヴィエイユ本人が率いている軍であると報告してきた。

「やはり、姉さまか……」

カッセルが予想した通り、丘の上に陣を張っているのは新・クリミアーナ教の軍勢であり、それを率いているのは、ヴィエイユだった。しかも敵は、クリミアーナ軍のおよそ半分の兵力でありながら、陣形を左右に展開させていて、まるでカッセルたちを囲むような陣形を取っていた。

……正面突破を敢行する。

カッセルの決断は早かった。彼が選択した作戦は、敢えて敵の包囲の真ん中に軍勢を入れる危険な行為だったが、カッセルには勝算があった。

僕には、攻撃は通用しない。

彼には、一つの確信があった。それは、自分は絶対に死なないのだという自信……。これまでカッセルは、何度も襲われてきた過去があった。あるときは剣で刺され、あるときは弓矢で射抜かれたこともある。だが、その度にこの体は治癒され、命を保ってきた。それはアガルタ王・リノスが張った結界のお陰であり、それを知らないカッセルではなかったのだが、これまで何度も命の危機を切り抜けてきた彼には、死への恐怖心が希薄になっていた。

彼は丘の上に陣を敷くヴィエイユの部隊を睨みながら、大声で命令を下す。

「正面の敵を突け、突撃せよ！」

その声を受けて、クリミアーナ軍が動き出した。その様子を見ながらカッセルは勝利を確信し、頭の中では早くも、ヴィエイユを捕らえた後のことを考え始めていた。

「うん？　何だ？　何故進まないんだ？」

本陣からは敵に突撃していった部隊が、突然その動きを止めたかに見えた。そのとき、伝令が彼の許に到着して、膝をついた。

「申し上げます！　あの丘の手前には、深い泥池が広がっています！」

ヴィエイユの本陣のある丘の手前は、一面のすすき野原だったが、その下は、深い泥の池が広がっていた。兵士たちはそこに足を取られ、腰まで泥に浸かるなどして、身動きが取れなくなっているのだという。その報告を聞いたカッセルは舌打ちをすると、すぐに近習

たちに命令を下す。

「残る兵力すべてを、姉さまの陣に向けろ」

「カッセル様、それは……」

「あの泥の池を兵士たちで埋めれば、進めるだろう。なあに、1万の兵を失う程度で、すぐに進めるようになるだろう。何としても、姉さまを捕らえるのだ」

近習たちはカッセルの言葉に息を呑んでいたが、やがてハッと返事をして、その場を去っていった。それを見届けた彼は、ひらりと愛馬の上に跨り、進軍の命令を下したのだった。

だが、カッセルの予想とは裏腹に、クリミアーナ軍は攻めても攻めても、ヴィエイユの本陣には、なかなかたどり着けなかった。彼らが本陣を突こうとすれば、ヴィエイユの軍は彼らの側面を突いて陣形を崩しにかかるため、カッセルらはそれらの敵と戦いながら前進しなければならなかった。

それでも、カッセルらはヴィエイユがいる陣まであと一歩と迫った。矢と魔法が雨あられと降り注ぐ中、カッセルの眼に一人の女性が映った。

「姉さま……」

確かに、確かに、ヴィエイユだった。カッセルらから数十メートル離れたところに、彼女はいた。カッセルと同じ白いローブを身に着け、頭には細いティアラのようなものを身に着けている。彼女はじっとカッセルを眺めているように見えた。

「姉さまぁ！」

近習の制止を無視して、カッセルは馬を駆った。足元には夥しい兵士の亡骸がある。馬はその上を走っていく。少しずつ大きくなってくるヴィエイユの姿……。そうだ、やっぱり、姉さまだ。僕の姉さまだ。

子供の頃から憧れ、その背中を追い続けてきた姉さま。聡明で優しく、美しい姉さま。姉さまがラマロン皇国のケーニッヒ公爵に嫁ぎ、カッセル自身が皇国の皇帝の養子になることが決まった夜、ずっと二人で一緒にクリミアーナ教を盛り立てていこうと約束した姉さま。あのときの姉さまは本当に美しかった。それがなぜ、こんなことに……。すべてはあの、アガルタ王のせいだ。あの邪神の手先が、姉さまをあのように……。もう一度、姉さまを取り戻さねばならない。もう一度、あのときの姉さまを……。

そんなことを考えていたそのとき、ヴィエイユが弓を構えていることに気が付いた。その矢は自身に向けられていて、ヴィエイユの目は、これまで見たこともない程の、冷たい、侮蔑に満ちた目をしていた。

「お前は、誰だ？　僕の知っている姉さまじゃ……」

カッセルがそこまで呟いたとき、ヴィエイユの手から矢が放たれた。まるで、スローモーションのように矢がカッセルの額に向かって来る。そして、頭に衝撃を受けたと同時に、彼の許に弓矢が雨あられの如く降り注ぎ、彼は全身を射抜かれて、そのまま泥の中に体を投げ出した。

……空が見える。透き通るような青空だ。……耳がキーンと鳴っている。これは、襲われたときに聞く音だ。これが聞こえなくなったとき、僕の体は治癒されているんだ。……きっと今回も。……今回も。傷が治ったらすぐに立ち上がって姉さまの許に……。すぐそこに姉さまはいる。姉さまを僕の腕に抱くんだ……。絶対に離しはしない……。そのまま姉さまを連れて船に戻るんだ……。そして裸にして、心から僕の僕になるまで責め続けるんだ……。休まず、眠らずに責め続けるんだ……。姉さまを……僕だけの姉さまに……。姉さま……。

ヴィエイユの放った矢は、正確にカッセルの眉間を貫いていた。彼女はゆっくりと持っていた弓を兵士の一人に渡し、そして、周囲の兵士に向けて無言で顎をしゃくる。すると、丘の上に布陣していた部隊から、さらに弓矢と魔法の攻撃が、クリミアーナ軍に向かって降り注いだ。

「ヴィエイユ様、敵の大将首を獲りに参りましょう」

兵士の声に、ヴィエイユはゆっくりと首を振る。

「必要ありません。カッセルが射抜かれたのを皆も見たでしょう？それだけで十分です。まずは、クリミアーナ軍を殲滅させることです。敵の軍団を潰すのです。そしてその後に……すぐに、軍勢をアフロディーテに向けるのです」

彼女のその言葉に、兵士たちはゆっくりと頭を下げた。

深い泥に足を取られたクリミアーナ軍の兵士たちは、なす術もなく倒されている。その様子を満足そうな表情を浮かべていたヴィエイユは、ふと、先程討ったカッセルが倒れていた場所に視線を向けた。

彼は目を見開いたままヴィエイユを睨み続けている。だが、その目には既に光がなかった。

「さようなら、カッセル。そして、ありがとう」

ヴィエイユは、クスリと笑みを浮かべたが、やがていつもの表情に戻り、再び戦場に視線を戻した……。

第三百八十三話　ラストメッセージ

クリミアーナ教国の名誉教皇であるジュヴァンセル・セインは、目を見開いたまま絶句していた。おそらく彼が信徒や部下に、このような表情を見せたのは初めてのことだろう。彼にとって目の前に広がる光景は、それほど想像さえしなかったものだった。

確かに、彼の目の前には、これまで忠誠をつくし続けてくれた優秀な部下たちの顔があった。そしてさらに、彼が軍神と頼むタナ王国国王、タナ・カーシ・ヴィルの姿さえもあった。だがその一方で、ヴィルの後ろには、意外な人物が控えていた。名誉教皇の孫である、ヴィエイユの姿があったのだ。

ジュヴァンセル・セインは、ヴィエイユがタナ王国にいるという知らせを受けて、彼女を捕らえるべく大軍を派遣していた。その司令官には、同じ彼の孫であり、現・教皇であるカッセルを据えて送り出していた。彼の許には、タナ王国に上陸したものの、頑強な抵抗に遭い、王都までの進軍が遅れているという報告が上がってきていた。そして、ほんのひと月前に、ようやく王都を陥落させてヴィエイユを捕え、それと同時に、幽閉されていた国王、ヴィルを救いだしたという報告があったばかりだった。

早速彼は、タナ王国に数名の枢機卿を使者として派遣して、その状況を確認させた。そして、枢機卿たちからカッセルの報告に間違いはないという報告を受けていた。その上で、タナ軍からは早速、ヴィエイユを首都・アフロディーテに護送するという報告を受けていたのだ。

ジュヴァンセル・セインは、帰還したカッセル以下の兵士たちに労いの言葉をかけ、さらに、タナ軍に対して祝福を与えようと考え、その上でヴィエイユを引見し、その処分を言い渡そうと考えていた。だが、彼らは突然現れた。名誉教皇の執務室に、ヴィルとその数名の家来、使者を命じた枢機卿、そして、ヴィエイユの姿が現れたのだった。

驚きと混乱で固まる名誉教皇。その彼に、目の前にいる者たちは冷ややかな視線を投げかけている。

「年を取りましたね」

若い女性の声が聞こえる。これは言うまでもなく、ヴィエイユの声だ。

「まだ、何が起こっているのかがお分かりにならないようですね。少なくとも、私の知っている教皇様は、お爺様は、そのような呆けた顔はなさいませんでした」

「な……は……う……」

名誉教皇は必死で声を絞り出そうとするが、言葉にならない声しか出すことができない。そんな彼をヴィエイユは哀れみの目で見ている。

「あなたに味方はいません。あなたは一人なのです、お爺様」

ヴィエイユのその声が、まるで合図であったかのように、名誉教皇の前に控えていた枢機卿たちが彼を拘束する。

「待て、待ちなさい！　クレホシル、レインダック、あなた方は……ぐっ」

あっという間に彼は後ろ手に縛られて、自由を奪われた。彼は机の上にうつ伏せにされていたが、それでも必死で首をもたげて、目の前のヴィエイユたちを睨みつける。

「まだ、何が起こったのか、理解できないようですね、お爺様？」

「ヴ……ヴィエイユ……あなたは……」

「お爺様、今、目の前にいる方々のすべては、私の僕でございますわ」

「な……に？」

「今、あなたを捕らえているクレホシル枢機卿、レインダック枢機卿は私に絶対の忠誠を誓っております。そして、ヴィル様をはじめ、ここにおいでの方々も、すべて私の命令に忠実に従う者たちですわ。そして、ここアフロディーテは我が軍が完全に占領しておりますわ」

「バカな！　お前はカッセルに捕らわれたのではないのか！　カッセルは、カッセルはどうした！」

「うふふ。ようやく本性が出て参りましたね、お爺様。いいですわ。せっかくですから全てをお話致しましょう。カッセルは死にました。私が、彼をクリミアーナ様の御許に送ったのです」

「な……。では、カッセルからの報告書は……」

「あれは全て、私が書いたものです」

「バカな！　あの字はカッセルの字だったはず！　ヴィエイユ、お前にカッセルの字を真似ることなど……」

「お忘れですか？　カッセルに字を教えたのは、私です。彼の字の癖は私が一番よく知っています。その字を真似ることなど、簡単なことですわ」

「タナ王国から帰還した者たちからそんなことは……」

「その者たちも全員、私に絶対の忠誠を誓っておりますわ」

「バ……バカな……」

「クリミアーナ教国軍の2万もの捕虜全員の心を支配するには、なかなか骨が折れましたが、何とかうまくいきました。自分を褒めてやりたいと思います」

そう言ってヴィエイユは満面の笑みを浮かべる。その屈託のない、まるで子供のような無垢な笑顔に、ジュヴァンセル・セインは無意識に体を震わせた。

「お爺様」

天使のような笑顔のまま、彼女はじっと名誉教皇を見据える。

「あなたの孫に生まれて、本当によかったと思います。父も母も、あなたに命を奪われましたし、私自身も、何度も命の危機にさらされましたけれども、あなたの傍にいて、人の心を掴む術を学べたお

陰で、私は多くの人々の心を支配することができるようになりました。そして、あなたを越えた……。これ以上の喜びがありましょうか。それもこれも、お爺様、あなたのお陰です。感謝申しますわ」

名誉教皇の顔が小刻みに震えている。その様子を、ヴィエイユは満足そうに眺めていたが、やがて顎をしゃくると、名誉教皇を取り押さえていた二人の枢機卿が、彼を執務室の窓に引きずっていった。

「な……ばっ……バカな……」

ジュヴァンセルの目には信じられない光景が飛び込んできた。何と、白で統一された美しい都であったアフロディーテが炎に包まれていたのだ。彼は目を見開いたまま固まり、そのまま部屋の外に引きづられていった。

「クレホシルさん、レインダックさん、あとでご褒美をあげますわね」

ヴィエイユのその声に振り向いた二人の枢機卿は、まるで何かに陶然としているような表情を浮かべている。その姿を見ながらヴィエイユはポケットから真っ赤で小さい丸薬を取り出して、それを眺める。

「さすが、お爺様が作った薬は、よく効きますね。素晴らしいわ……」

「……強気じゃな」

クスリと笑いながら、引き立てられていく名誉教皇を眺めていたヴィエイユの耳に、そんな声が聞こえる。彼女はゆっくりと声の主で

あるヴィルに視線を向ける。

「我らはそなたに心酔しているわけではないのだがな。まあ、名誉教皇の前で虚勢を張りたい気持ちはわからぬではないから、これ以上は何も言わぬがな」

ヴィエイユはフッと笑みを浮かべると、そのまま踵を返してスタスタと部屋を出ていった。

必死で笑顔を取り繕ったものの、ヴィエイユの心は穏やかではなかった。このヴィルらタナ王国の者たちは、アガルタ王・リノスの影響のためか、必ずしもヴィエイユの思い通りにはならず、いつもすんでの所で意見を翻したり、行動しなかったりするのだ。

……まあ、今回はお爺様を捕らえることができた。上出来だと思うことにしましょう。

彼女は見慣れた教皇神殿の廊下を歩きながら、自分にそう言い聞かせた。

翌日の朝、教皇神殿に一本の巨大な十字架が建った。通常は小高い丘の上に、高い壁に囲まれているために、その中を伺い知ることはできない場所に、まるで壁の上に十字架が建っているかのように見えるその光景は、アフロディーテに住む人々を驚愕させた。そこには、名誉教皇であるジュヴァンセル・セインが掛けられており、彼は裸にされ、両手両足を十字架に縛られた状態で民衆にその姿を晒していた。

「私を殺したところで、何が変わる?」

ジュヴァンセル・セインは、苦しい息の中、足元で自身を見上げているヴィエイユらに向けて、必死で話しかける。

「私はこれまで……クリミアーナ教国を率いてきた……。私に成り代わって教国を治めたいのであれば……治めるがいいでしょう。私を殺せば……この国は……世界は混乱する……。それがわからぬ、あなた方では、ないでしょう？」

ヴィエイユはその声がまるで聞こえないかのように、ただ優しげな微笑みを彼に投げかけていた。彼女の傍には、槍を携えた兵士が控えていて、彼女の命令を待っている。

「ヴィエイユ、私を殺しても、この世は変わりません。私を殺しても、私に代わる者が必ず現れます。今、私を殺しても、何の得にも、なりません。ヴィエイユ……ヴィエイユ！」

名誉教皇は、必死で言葉を絞り出すが、ヴィエイユは相変わらず笑みを浮かべたままだ。その表情のまま彼女は控えている兵士にチラリと視線を向ける。兵士はスッと一礼をしたかと思うと、スタスタと十字架の許に歩いて行き、そこに掛けられている名誉教皇の腹を槍で突き刺した。

断末魔の絶叫とともに、十字架の一部が彼の血で染まる。

「ガッ……ヴ……ヴィエイユ……ヴィエイユ……ヴ……」

口を開け、必死で呼吸をしようと喘ぐ名誉教皇。その様子をヴィエイユは、表情を崩すことなく、笑顔のまま眺め続けている。その彼に兵士がさらに槍を突き出し、再び男の絶叫が響き渡る。

兵士は名誉教皇の腹に深々と突き刺さった槍をゆっくりと引き抜き、ヴィエイユの傍に戻る。その様子を十字架の上の男は、歪み切った表情で眺めている。

「な……なにを……している……。と……とどめを……とどめを……刺さないか……」

彼の声に反応する者はいない。男の苦しい息遣いだけが聞こえてくる。

「ヴィエイユ……はやく……とどめを……」

「まだまだ」

「ヴィエイユ……ヴィエイユ……」

「あなたに殺された方々は、やすらかな死を迎えることは皆無だったでしょう？」

「ガッ……ガアアア……」

「餓死させられた者……。生きたまま火にあぶられて殺された者……。縛られたまま海に放り込まれた者……。あなたの命令で殺された者たち……私の父も母も、皆、苦しんで死に至りました。その人たちを差し置いて、あなたが安らかな死を迎えるなど、神が許しませんわ」

「かっ……神……」

名誉教皇の顔が歪み切り、醜悪な表情になっている。それをヴィエイユは満足そうな表情で眺めている。

「人間は、裸になれば、一人になれば、何もできない弱いものなのです。あなたも、そして、私も……」

ヴィエイユはそんな言葉を呟きながら、傍に控えていた兵士の槍をその手に持ち、ゆっくりと十字架の許に歩いていく。そして、ニコリと満面の笑みを浮かべたかと思うと、手に持っていた槍を、男の体に深々と突き立てた。

「醜悪な、顔……」

彼女はそう言い捨てたかと思うと、スッと踵を返して、その場を後にした。

この瞬間、クリミアーナ教国の歴史は、幕を閉じた。

第三百八十四話　新しい命

ちょうどヴィエイユが、タナ王国国王であるヴィルと共にクリミア―ナ教国の首都、アフロディーテに遠征している頃、アガルタのリノス家では、二つの大きな出来事が起ころうとしていた。言うまでもなく、妻であるマトカルとソレイユの出産だった。

ヒーデータ帝国にあるリノスの屋敷では今、蜂の巣を突いたような騒ぎになっていた。まず、朝方にソレイユの陣痛が始まったという報告があり、万全を期してメイがアガルタに赴いているその最中に、マトカルの陣痛も始まってしまったのだ。

特にマトカルは、一度流産を経験していると同時に、この臨月に至るまでも、なかなか体調が安定せずに入退院を繰り返していた。それだけに、母子ともにその健康状態が心配されていたのだ。

結局、ソレイユについては、彼女の母であり、サイリュースの族長でもあるヴィヴァルが、一族総出で出産に当たることを申し出てくれたお陰で、メイはマトカルの許に付きっ切りになることができた。だが、当初はサイリュースの里でソレイユの出産に立ち会うことになっていた、娘のアリリアは、どうしてもマミーと一緒にいたいと言って聞かず、彼女を宥めるのに大いに手間取ったのは、リノス家の一つの思い出として後々まで語られることになる。

一方で、マトカルの許には、もう一人の娘であるエリルが待機していた。彼女はマトカルの手を握ったまま放さず、ずっと付き添い続けていた。

二人の出産は難産だった。２４時間が経過しても生まれる様子は見えなかった。特にマトカルは深刻であり、なかなか子供が下りてこないという状況に陥っていた。断続的に襲ってくる激痛と戦いながら、時おり小さな声を漏らすマトカル。エリルの小さな手にも、痛みを我慢しているためか、握る力が強くなる。エリルはその痛みに耐えながら、ひたすらマトカルに声をかけ続けていた。

そしていよいよ、マトカルが分娩室に運ばれようとしたそのとき、彼女は肌身離さずに持っていたペンダントをエリルに渡した。これは、結婚したときにリノスから贈られたもので、彼女が宝物のようにしていて、誰にも触らせなかったものだったが、それをエリルに渡したのだ。エリルの体は震えた。

「おかあさん、ローニ先生、マトちゃんを……」

目に涙をいっぱいにためて懇願するエリルを、メイは笑顔で大きく頷き、分娩室に消えていった。

「大丈夫ですわ。エリル、あなたがここにいれば、きっとマトは無事に帰って来ますわ」

そう言って、母であるリコレットはエリルの体を抱きしめてくれた。彼女は右手で母の手を握り、左手でマトカルのペンダントを握り締めながら、新しい命が生まれる瞬間を待った。

マトカルの出産が終わったのは、それから2時間後のことだった。すでに深夜に及んでいたために、エリルはそのまま眠りについてしまった。彼女が目を覚ますと、そこは帝都の屋敷の寝室で、大きなベッドに一人、彼女は寝かされていたのだった。

いつもならばここには、父であるリノスか、母であるリコレットの姿があった。両親ともにいない目覚めは、エリルの中でほとんど経験のないことだった。彼女は慌てて部屋を見廻し、飛び起きるようにしてベッドから降りた。そのとき、寝室の扉が開いて、父であるリノスがパジャマ姿のまま部屋に入ってきた。

「おとうさん」

「ああエリル。起きちゃったか」

いつもの優しい笑顔を見せながら、リノスはエリルを抱きかかえた。そして彼女に小さな声でこう呟いた。

「無事に生まれたよ。また、お姉ちゃんになったね。おめでとう」

「マトちゃんは……？」

「ああ、元気だよ。ただ、今は疲れて眠っているから、もう少ししたらお見舞いに行こうね」

父のその言葉に、何故か涙が溢れてきた。彼女は父の首に手を廻して、しばらくの間泣き続けた。

エリルがマトカルに会えたのは、その日の昼過ぎのことだった。そのときの光景を、エリルは生涯、忘れることはなかった。

マトカルは、生まれたばかりの赤ん坊に授乳している最中だった。今まで見たこともないほどの穏やかな笑みを浮かべながら、腕に抱いている赤ん坊を愛おしそうに眺めていた。昼下がりの日差しが窓

から差し込むその中で、我が子に乳を与えるマトカルの姿は、とても神々しいものに見えた。私も、こんな顔をした女性（ひと）になりたい……。この日以来、エリルはマトカルへのあこがれをさらに強くしていった。そして、彼女の周りを取り囲む、幸せそうな表情を浮かべた父・リノスと母・リコレットやコンシディー。弟や妹たち……。いつの日か、自分もこんな家族を作りたい……。このときの光景と思い出は、彼女の脳裏に深く刻み込まれたのだった。

マトカルが産んだのは、男の子だった。長男のイデアに続く、第二王子の誕生に、リノス家は大きな喜びに包まれたのだった。

一方で、サイリュースの里からは、ソレイユの出産が終わったという報告は未だになかった。陣痛開始からすでに４０時間を経過していて、ソレイユの体力が持つかどうかが心配だった。

マトカルの出産のお祝いもそこそこに、メイは不眠不休のままアガルタにあるサイリュースの里に向かった。その後ろをアリリアが追いかけていく。俺たちはその背中をただ、静かに眺めているしかなかった。

だが、予想に反してメイは、１時間もしないうちに屋敷に帰ってきた。しかも、一緒に行ったアリリアは泣きじゃくりながら帰ってきたのだ。一体どうしたのかと聞く俺たちに、メイは力なく首を振った。

「わかりません」

「わからないって、どういうことだ？」

「サイリュースの里に入れなかったのです」

「え？　入れなかったって……？」

「外から何度も呼びかけてみたのですが、全く反応はありませんでした。アリリアは森の中をうろつき廻ろうとしますし、何とかこの子を宥めて帰ってきたのです……」

申し訳なさそうな表情を浮かべながら、メイは深々と頭を下げた。俺はそんなことをしないでくれと言って、彼女を椅子に座らせる。そして、泣きじゃくるアリリアを抱っこして、優しく話しかける。

「じゃあアリリア。とうたんと一緒に、マミーのところに行ってみようか？」

「私、嫌われちゃったの？」

「マミーがアリリアのことを嫌いになんかなるもんか」

「いい子になるから、いい子になるから……」

「大丈夫だ、アリリア」

そう言って俺は彼女の頭を撫でた。そのとき、リコと目が合った。彼女は目で早くソレイユの許に行ってあげて欲しいと訴えてきた。そして、メイをチラリと見て、メイも一緒に連れて行くようにと、目で合図をしてきた。俺はゆっくりと頷く。

「じゃあメイ、もう一度、俺と一緒に行こうか」

「ハイ……」

メイはゆっくりと立ち上がる。こんなに落ち込んだメイも久しぶりに見た。俺はアリリアを抱っこしながら、屋敷を出て、転移結界のある部屋に向かった。

「……」

「……」

「……」

サイリュースの里の入り口。俺たち三人は重苦しい沈黙に包まれていた。何度呼んでも、里からは何の反応もなく、ソレイユ自身に念話を飛ばしてみても、何の反応もなかったのだ。そして、メイが呼びだした土の精霊であるノームでさえも、強力な森の精霊たちの妨害に遭って、中に進むことはできなかったのだ。俺はただ、アリリアを抱っこしながら、呆然と生い茂る森の木々を眺めるしかなかった。

その頃、サイリュースの里では、リノスたちが思いもよらないことが起ころうとしていた。

「お母さん、やめて……。お願いだからやめて……」

目からとめどなく流れ出る涙を拭おうともせず、ソレイユは必死で懇願し続けていた。その腕の中には、すやすやと眠る赤ん坊の姿があった。夫であるリノスによく似た顔立ちの赤ん坊……。だが、その子の頭には、サイリュースの特徴である角が生えていなかった。そして、彼女の目の前には、短剣を構えた母、ヴィヴァルの姿があ

った。

「ごめんなさい、ソレイユ。これも、一族の掟なのよ……。ごめんなさい……」

ヴィヴァルの瞳からも、大粒の涙がこぼれ落ちていた……。

第三百八十五話　ダメ、ゼッタイ！

「マミー！　マミー！　……マミー」

アリリアの声が小さくなっていく。その小さな体をメイが抱きしめている。やがて彼女は、母親の胸に顔をうずめて体を震わせてしまった。

その傍では、リノスが眉間に皺を寄せながら目を閉じている。先ほどからずっとソレイユに念話を飛ばし続けているのだ。だが、その返答はなく、彼は彼女に念話を送りながら、サイリュースの集落に自身の魔力を広げている。これは、ソレイユの魔力を捉えて、そこに転移しようと考えているのだが、それすらもなかなか上手くいっていなかった。

そのとき、森の中から小さな光が見えた。

それはゆっくりとリノスたちの許に向かって来る。そして突然、まぶしい光を放ったかと思うと、ドサッという、何かが落ちる音が聞こえた。

「何だ？　……誰だ……？」

彼らの目の前には、ハアハアと苦しい息遣いをしながら、肩を上下させている少女がいた。彼女はゆっくりと顔を上げて、リノスたちを眺める。

「君は……確か、イリサル？　イリサルか？」

「ハア、ハア、ハア……」

彼女はリノスの問いかけに、コクコクと必死で頷く。そして、ゴクリと唾を飲みこむような素振りをして、息を整えながら口を開いた。

「ごめんなさい、遅くなって」

「どうした、一体、村の中で何が起こっているんだ？　ソレイユは？」

「族長様が契約している森精霊が手ごわくて……。ソレイユ様は無事だよ。でも……」

「でも、何だ？」

「とにかく来て！　早くしないと……」

イリサルは荒い息のままクルリと踵を返したかと思うと、何やらブツブツと呪文を唱え始めた。

「すごい……歌……」

イリサルの詠唱を聞いて、アリリアが目を丸くして驚いている。どうやらアリリアにはこの詠唱が歌に聞こえるようだ。

「ぬぁぁぁぁ！　また俺っを呼びゃあがるかぁ！」

一瞬、火柱が上がったかと思うと、空中にフワフワと炎を纏ったトカゲのような生き物が現れた。確かコイツは、イリサルが契約して

いる火の精霊であるサラマンダーだ。

「すまないけれど、もう一度、穴をあけてくれ！」

「何だな！　またあれをやれってのかい！　こいつはどうしたものでぇす！」

「頼む！　子供の命がかかっているんだ！　アンタしかこの道を開くことはできないんだ！」

「しょうがねぇな！　嬢ちゃんの頼みだ！　やってやらぁ！」

そう言うとサラマンダーは、掌に乗るような小さな火の玉となって、ゆっくりと森の中を進み始めた。

「ハア、ハア、ハア、さ、付いてきて」

大きく肩を上下させながらイリサルは森の中を進んでいく。俺はメイと顔を見合わせながら、黙って彼女の後を付いて行った。

……どのくらい歩いただろうか？　少なくとも１０分は歩いているような気がする。その間にも、イリサルの呼吸は荒くなるばかりで、やがて足元までもが覚束なくなってきていた。

「イリサル、大丈夫か？」

「……」

俺の問いかけに全く反応することなく、彼女は前に進んでいく。俺たちは黙ってその後姿に付いて行くしかなかった。

やがて、イリサルの足が止まった。その途端、彼女はドッとうつ伏せになって倒れた。慌てて彼女の許に駆け寄って抱き起してみたが、彼女は口を開けて気を失っていた。

「イリサル、しっかりしろ……って、あれ？」

気が付けば、俺たちはサイリュースの里に来ていた。どうやら、族長のヴィヴァルが守る森精霊の領域を抜けたようだ。

「魔力が枯渇しています。イリサルさんのことは私に任せてください。ご主人様はソレイユさんの所へ」

メイが懐から小さなビンを取り出しながら、俺にソレイユの許に行けと促してくる。その俺の手をアリリアがしっかりと掴んでいる。

「アリリア」

メイがアリリアを呼び止めて、その顔をじっと見ている。アリリアもメイの顔を見つめながら、コクリと頷いた。ほんの一瞬のことだが、母と娘でしかわからないいくつかの言葉が交わされたようだ。俺は立ち上がって、アリリアの手を引きながら族長様の住まいを目指す。

……扉を開けると、二人の女性が泣き崩れていた。

俺の目の前には、背中を向けた女性が涙を拭っている。よく見ると、その人の左手には、短剣らしきものが握られていた。そして、その奥には、一人の女性が壁に背中を付けたまま、蹲るようにして泣いていた。

「リノス様」

俺たちの気配に気が付いたのだろう。壁際にいる女性が顔を上げた。何とそれはソレイユだった。

「マミー！！」

アリリアは俺から手を離し、ソレイユの許に駆け寄ろうとしたが、すぐにその動きを止めた。俺の目の前の女性が振り返り、短剣を構えたのだ。何とそれは、ソレイユの母でもある、族長のヴィヴァルだった。

「来ないで……下さい。どうやってここへ？　すぐに出ていってください」

「族長様、一体どうしたのです？　何なのですか、これは！？」

俺の問いかけに、ヴィヴァルは目を真っ赤に腫らしたまま、ゆっくりと首を振っている。

「ソレイユ、どうしたんだ！　何が起こったんだ！」

「リノス様……申し訳……申し訳ありません……」

「ソレイユ……」

「さあ、出ていってください。さもなければ……あっ！」

短剣を構えるヴィヴァルの傍を、アリリアが素早くすり抜ける。そ

して、ソレイユの前に立った彼女は両手を広げて、二人の間に立ちはだかる。

「ダメ！　乱暴なことはダメ！　お母さんがダメって！　ダメなの！　ゼッタイダメなの！」

「そこをおどきなさい！」

ヴィヴァルが言葉を言い終わらないうちに、俺は彼女から短剣を取り上げていた。その瞬間、彼女はまるで空気が抜けていくように、ヘナヘナとその場に座り込んだ。

「マミー！　大丈夫？　痛いの痛いの飛んでけー」

アリリアはソレイユの体をペタペタと触りながら、痛いの痛いの飛んでけーと呟いている。メイに教えられたのだろうが、咄嗟の場面でこんなことができる我が娘が、俺には誇らしかった。

「アリリア……」

ソレイユの顔がクシャクシャになっていく。そして彼女は、さめざめと泣きだした。

ソレイユは何と、赤ん坊を抱きかかえていた。彼女の腕の中で赤ん坊は、スヤスヤと幸せそうな寝息を立てていた。何となくだが、顔立ちが俺に似ている気がする。

「生まれていたのか……」

「ええ。三日ほど前に……」

「その子は、この場で命を奪わねばなりません。離れるのです」

俺たちが赤ん坊に見入っていると、背中越しに物騒な声が聞こえる。驚いた俺たちは、声の主であるヴィヴァルに視線を向ける。彼女は泣きはらした顔を隠そうともせず、必死に気丈に振舞おうとしている。

「族長様、なぜ、この子の命を奪うのです」

「一族の掟なのです」

「掟？」

「その子は、掟に従って、命を奪わねばなりません。ですから、ソレイユ、その子を渡すのです」

ヴィヴァルはソレイユに向かって、片手をそっと差し出す。だが彼女は、赤ん坊をギュッと抱きしめたまま首を振る。その彼女の前にアリリアが立ち上がって、再び両手を広げた。

「何の掟かは知りませんが、まずは落ち着いてください」

「あ、角がない」

振り返ると、アリリアがソレイユの赤ん坊を覗き込んで声を上げている。俺も彼女の側に行って顔を確認すると、確かに、サイリュースの特徴である角が生えていない。これはどういうことだ？

「申し訳……申し訳ありません……」

ソレイユはそう言って再び赤ん坊を抱きしめ、そして涙を流して泣き出した。

「……まずは落ち着きましょう」

俺はライトの魔法を唱えて、部屋の中を明るくする。アリリアには、メイを、お母さんを呼んでくるようにと言って外に出させた。ここには何度か来たことがあるが、いつもきれいに片付いていたという印象がある。元々あまり物がない部屋だったが、今のこの部屋は、色々なものが散らかっている。二人で相当暴れたのだろう。赤ん坊の命を取られようとしていたのだ。ソレイユも必死で抵抗したのだろう。

俺の言葉に、二人はおずおずと傍にやって来た。だが、二人の距離が遠い。どちらかというと、ソレイユがヴィヴァルから再び襲われるのを警戒しているようだ。

「一体どうしたのです？　子供の命を取ろうなどと……。ソレイユに抱かれているのは、俺の子供でもあります。何をもって、子供の命を取ろうとするのです？」

俺は努めて冷静に口を開く。その声にヴィヴァルはチラリとソレイユを見たが、やがて、落ち着いた声でこれまでのことを語り始めた。

「はぁぁ！？　何じゃそりゃ！？」

俺は思わず声を上げていた。ヴィヴァルから語られた内容は、俺の予想を遥かに超えるものだった……。

第三百八十六話　暫

「そう……ですか。はああ……」

俺は族長様の話を聞いて絶句していた。ソレイユは相変わらず涙を流しながら泣いている。その隣でアリリアは、心配そうな表情を浮かべながら彼女の腕にしがみついている。

何と、ソレイユが産んだ子供は、男の子だったのだ。

サキュバスの流れを汲むサイリュースは基本的に、女性しか生まないというのが、俺の知っている知識だった。だが、長い彼女たちの歴史の中では、例外はあったらしい。

今から一千年近く前に、一人のサイリュースが男の子を産み落とした。女性しか生まれないと信じて疑わなかったサイリュースたちは、その誕生に大いに動揺する一方で、初の男子誕生に大いに喜んだのだという。

しかし、赤ん坊の泣き声は、その声量もさることながら、耳をふさぎたくなるほどの悪声であったらしい。そのせいで、サイリュースたちが契約している精霊たちが逃げて行ってしまい、彼女らの里は一時、危機的な状況に陥った。

元々、精霊の生気を体内に取り込むことで生命を維持していたサイリュースたちは、精霊の加護を得ることができなくなった途端、バタバタと倒れる者が続出したのだそうだ。これは推測の域を出ないのだが、おそらく、彼女らの体内に取り込まれた精霊たちは、体内

に取り込まれる毒物を中和したり、病原菌などを死滅させる抵抗力の役割を担ったりしていたのだろう。サイリュースの里には、原因不明の病を発症して寝込むものが激増したのだという。

事態を重く見た当時の族長は、二つの選択肢の中で揺れ動いた。それは、母親と共に赤ん坊を里から追放するか、その子供の命を奪うかという選択だった。結果的に、族長が選択したのは、後者だった。彼女は泣き叫ぶ母親の目の前で、赤ん坊の命を奪ったのだそうだ。

「なぜ、そのような惨いことを……」

俺はゆっくりと息を吐き出しながら、小さな声で呟く。何も母親の目の前で殺さなくてもいいだろう。母親と子供をどこかに隔離するということはできなかったのか。そんなことを考えながら、視線を見つめ続ける。

「赤ん坊の母親は、族長の娘だったのです」

「……」

聞けば、精霊の加護を持たないサイリュースは、ほどなくして死に至る。男の子を生んだ娘も、ソレイユと同様に、母親が契約する精霊に守られる形で妊娠期間を過ごしてきた。これは、身籠ったサイリュースは精霊を使役することができなくなるために、妊娠期間は、族長が契約する精霊に守られる形で出産までの時間を過ごすことになっているためだ。そのため、族長となる者は、高ランクの精霊と契約していることが必須で、しかも、火などの攻撃的なものではなく、森や水といった、どちらかと言えば癒しの役割を持った精霊を使役できるものが選ばれるのだという。

「では、神龍様と契約しているソレイユは、族長には……」

「いいえ。むしろ、ソレイユこそが次の族長にふさわしいのです」

神龍様は、精霊の中ではズバ抜けた存在なのだという。彼を自由に使役することができれば、サイリュースにとってその繁栄は約束されたも同然であり、何より、身籠ったサイリュースが病で命を落とすことはほぼ、皆無になるのだそうだ。

「ですから……。ですから、ソレイユをこの子と共にこの村から追い出すことはできません。そうなれば、残る手立ては……」

そう言って族長様は唇を噛んだ。そのとき、ソレイユが抱えている赤ん坊が泣き声を上げた。

……普通の赤ん坊の泣き声だ。むしろ、フニャア、フニャアと弱い声で泣いているように聞こえる。

「うっ……ツツツツ……」

赤ん坊の泣き声を聞いた族長様が、頭を押さえて蹲っている。ソレイユも目をギュッと閉じて、何かを必死で我慢している。

「うわぁ、面白い泣き声ぇー。ウニャアキィィィン、ウニャアキィィィンだって」

ソレイユの隣でアリリアが頓狂な声を上げている。彼女はキィィィンという音が聞こえるらしい。耳をすませてみるが、俺には全くそんな音は聞こえない。

「ううう……くっ……」

ソレイユが呻きながら、何のためらいもなく片手で胸をはだけ、赤ん坊に授乳をし出した。子供はコクコクと顎を揺らせて、一生懸命母親の乳を吸っている。

「うぁあ、かわいい……」

アリリアが赤ん坊を覗き込みながらそんな声を上げる。俺もその傍に寄って見てみる。

「うわぁ……かわいいな。どことなく、俺に似ているかな？」

ソレイユの胸に隠れて、半分くらいしか見えないが、その顔は何となく、前世の俺の親父の面差しに似ていた。フッと親父ことを思い出して、思わず俺は泣きそうになった。

「リノス様に、そっくりです……」

ソレイユが額にうっすらと汗を滲ませながら、それでも笑顔で俺に話しかけてきた。俺は涙を拭いながら、彼女の背中をやさしく抱きしめた。

「……」

ふと視線を移すと、族長様が何とも言えぬ表情で、俺たちを眺めている。俺は一旦彼女から視線を外し、嬉々として赤ん坊の顔を覗き込んでいるアリリアに視線を移す。

「なあ、アリリア。この子の泣き声ってキィィィンて音がするの

か？」

「え？　するよ？　キーンて音だよ」

「この子の泣き声を聞くと、頭が痛くなってしまって……」

ソレイユが申し訳なさそうに口を開く。

「そうか……俺には全く聞こえないけれどな……」

「その音が、精霊たちを惑わせています。精霊が一番嫌う音です」

「何ですって！？」

族長様曰く、サイリュースには独特の音感があり、かなり細かい音まで聞き取れるらしい。その彼女たちは、赤ん坊の発する高音の泣き声が聞き取れてしまい、頭痛を引き起こすのだという。どうやら、黒板を爪で引っ掻いたときになる、あの「キィーッ」という不快な音が爆音で鳴っているように聞こえる……と説明すればいいだろうか。この音のせいで、すでに族長様が契約する精霊は、このままこの音が聞こえるのであれば、契約を解除したいと言ってきているのだそうだ。

俺は少し考えて、ソレイユが抱いている子供に向けて右手をかざす。

「……リノス様？」

「この子に結界を張った」

「え？」

「どこまでできるかはわからないけれど、高い音が聞こえないようにすればいいんだろう？　ある一定の高さ以上の音を遮断する結界を張ってみた」

「リノス様……」

「泣くなソレイユ。お前は子供を、しかも男の子を生んでくれたんだ。よくやってくれた。ご苦労だったな。早くお前を休ませてやらないとな」

そう言いながら俺は、族長のヴィヴァルに向き直る。

「昔はいざ知らず、今は俺の結界があります。サイリュースたちに迷惑がかからないようにしますので、この子の命を、息子の命を奪うなどと言わないでください」

俺の言葉を聞いた族長様の目からは、再び涙が溢れ出ていた。

◆　◆　◆

だが、俺の結界をもってしても、子供が泣きはじめると、ヴィヴァルもソレイユも決まって頭痛を起こした。そこで俺は族長様の許可を得て、帝都の屋敷からリコを始めとする妻たちをこの里に呼び寄せて、今後の対策を話し合った。

そこで大活躍をしたのがアリリアだった。彼女はシディーと共に、サイリュースが頭痛を起こす原因を突き止めたのだ。彼女は自身が聞こえている音のイメージをシディーに伝え、それを元に彼女が俺たちにわかるように通訳してくれたのだ。

シディーの洞察力は見事の一言に尽きた。まだ語彙が少なく、ほとんど擬音に近い彼女の説明を丁寧に聴きとり、金属を鳴らして似た音を作って、俺にイメージを伝えたのだ。そのお陰もあって俺は、サイリュースたちの頭痛がかなり軽減できる結界を張ることができたのだった。

「それにしても、この子の泣き声は、何て複雑な音なのだろう。アリリア、お前はすごいな。エライエライ」

アリリアは嬉しそうな笑顔を見せながら、ソレイユの傍にベッタリとくっついている。そのソレイユには、リコとメイが頭に氷を載せたり、赤ん坊を着替えさせたりしている。

「ソレイユ、あなたはいい家に嫁いだわね」

「はい。お母さん」

数時間前とは打って変わって穏やかな表情を浮かべながら、ヴィヴァルはソレイユに話しかける。ソレイユも、満面の笑みを彼女に返している。……幸せな母娘の姿がそこにあった。

ソレイユが産んだ子供は、「セイサム」と名付けられ、数日後、マトカルが産んだ子供と共に、リノス家の一員として世間に公表された。この二人の王子には、それぞれ、数奇な運命が待ち受けているのだが、今のリノスも、マトカルも、そしてソレイユにも、知る由もなかった……。

第三百八十七話　男たちの苦悩

「そうか、アガルタ王に二人の王子が生まれたか。めでたい。早速使者を送り、皇子の誕生を寿ぐのだ」

そんな命令を下しているのは、タナ王国国王のヴィルだった。彼は王都にそびえたつ城の自室で、執務の最中だった。

あの大戦以来、タナ国は都をハイセルに移していた。この街は以前、サルファーテ国の都であった場所で、この国がタナに併呑されるまでは、湖のほとりに銀の城がそびえ立つ、実に美しい景観を誇っていた。

だが、タナ国がこの都に侵攻した際、この街は徹底的に焼き尽くされ、現在では以前の姿は見る影もなくなっていた。だが、戦略上この街は防御に優れ、湖やそこから流れる川を利用しての水運に価値を見出していたヴィルは、この都を占領してすぐに街の建設に取り掛かったのだった。

サルファーテ女王が治めていた頃のハイセルは、女王が魔法の扱いに優れていたことから、あまり城や街の防衛には重点が置かれていなかった。そのために、ヴィルの電撃的な攻撃になす術もなく敗れてしまっていたのだが、ヴィルは地の利を生かしてこの街を、鉄壁の防御態勢が整った街に作り直していった。そして、先の大戦が終わったと同時に、この街に都を移したのだった。

規模こそ小さく、以前のような美しさはないものの、防御と機能性を重視した、新たな王城でヴィルは、まるで人が変わったかのよう

に、次々と周辺国との和平に向けて動き出していた。まず、隣国であるサンダンジとフラディメについては、国境に設けられた関所を廃止し、両国の人々が自由に行き来できるようにした。当然、両国とは友好条約を締結し、互いに侵攻しないことを約束する条約を結んだのだ。さらに、山に囲まれているもう一つの隣国であるミーダイ国については、アガルタ王・リノスの取り計らいに寄り、両国を行き来できるトンネルを開通させ、この国とも交易ができるように取り計らっていた。

なお、ミーダイ国については、サンダンジとフラディメに通じるトンネルも併せて掘られ、これらの国とも自由に行き来できるようになっていた。これまでほぼ、他国との関りを断ってきたミーダイ国だったが、帝様の英断によって、隣国との交易を積極的に行うようになろうとしていたのだった。

こうした、次から次へと出される政策に、タナ王国内では動揺もあったものの、ほとんどの事柄については問題なく実行に移されていた。特に国民には広く受け入れられており、あの大戦以来、王様は大きく変わられたと言って、国中から支持を集める結果ともなっていたのだ。

「……」

政務を終え、一人自室に入ったヴィルは、大きく息を吸い、吐き出す行為を繰り返している。

「殺せ……殺すのだ……アガルタ王を殺せ……殺すのだ……」

不意にヴィルの口からそんな言葉が漏れる。その顔は歪み切っており、眉間には深い皺が刻まれていた。

「誰ぞ……殺せ……。ヤツを……殺すのだ、殺すのだ、殺すのだ……」

首を振りながら小さな声で、誰に言うともなく呟くヴィル。その姿は、昼間の彼からは想像もつかない豹変ぶりだった。

「コロセぇ！　殺すのじゃあ！！」

「どうかなさいましたか、陛下！」

ヴィルが、まるで感情を爆発させるかのように大声で叫ぶ。その声に驚いた兵士の一人が、慌てて彼の部屋に飛び込んできた。

「コ……おお、ヴィエイユ達は、どうしている？」

突然、ヴィルの表情が平素見せている穏やかなものに変わる。兵士は落ち着いて彼に返答を返す。

「ハッ、今のところ、動きはないようでございます」

「そうか。奴らのことじゃ、油断はするな。動きがあればすぐに知らせよ。アフロディーテに送っている留学生たちと密に連絡を取り合え。まあ、あの娘のことじゃ、なかなか尻尾は出さんじゃろうがな」

そう言いながら彼はニヤリと微笑む。兵士は畏まりましたと恭しく一礼をして、部屋を出ていった。

「……何を……何を言っておるのだ……。アガルタを攻めよ、馬を

曳け。兵を集めよ。アガルタに……アガルタに……、クソッ、くそおぉぉ」

ヴィルの目から涙が滂沱の如く溢れ出てくる。彼は両手で目を覆いながら、声を殺して泣き始めた。

あの大戦以来、ヴィルの精神は別の者に乗っ取られるようになっていた。普段の生活については問題なく送ることができ、表面上は以前と変わらなかった。食事も摂れれば、側室たちも自由に抱ける。だが、肝心な場面になると、その意識が乗っ取られるのだ。突然言葉が出てこなくなったかと思うと、全く考えもしない言葉がスラスラと口を突いて出てくる。しかもそれは、自分が全く意図していない、むしろ自身の考えとは真逆のことを喋り出すのだ。

そんなとき、彼は体の自由すらも奪われる。手足を動かすどころか、表情を変えることさえもできないのだ。そんな生活を送ること数ヶ月、彼の精神状態は限界を迎えようとしていた。

「己の体を自由に使うことも許されぬ……。己で命を絶つことすらもできぬ……。我は、我はこのまま単なる操り人形として生きてゆかねばならぬのか……。誰か殺せ。余を殺してくれ。誰か……誰か……」

彼は泣きながら、誰に言うともなく小さな声で呟く。大声を出せばその瞬間に、精神を乗っ取られる。この誰も居ない自室での時間が、今の彼に許された数少ない「自分を出せる場」となっていた。そんな彼の状況を知る者はこの国では皆無であり、彼は精神が崩壊するギリギリのところで、孤独な戦いを強いられているのだった。

◆◆◆

一方、アガルタ大学の学生寮では、一人の青年が机に突っ伏しながら、頭を抱えていた。

「……どうすればいい。……どうすればいいんだ」

部屋の中で一人呟いているのは、サンダンジ国の皇太子であるシンだった。彼は父の手によっていきなり、そして、ほぼ無理やりにこのアガルタに連れて来られて、この宿舎に入れられていた。

今の彼の心の中には、寝ても覚めてもヴィエイユのことでいっぱいだった。あの美しい顔、艶めかしい体、甘えたような声……。彼女の一挙手一投足を思い出すだけで、胸が焦がれる。一刻も早く彼女に会いたい。そして話をしたい……。あの体を抱きたい……。そんな思いで彼の心はいっぱいになっていた。

当然、大学の勉強は手につかなかった。学長のメイリアスからは、卒業試験に合格しなければ卒業はさせないと、はっきり申し渡されていたのだが、今の彼には正直、勉強どころではなかった。

……コンコン。

不意に彼の部屋がノックされる。驚いて部屋の扉を睨みつけるシン。彼は舌打ちをしながら、扉に向かった。

「こんばんは」

「ああ」

部屋の前に現れたのは、ジャニスとアンリ、ジョニーの三人の学生

だった。ジャニスは犬獣人の女性であり、何とも愛嬌のある笑顔が魅力の女性だ。対してアンリは人族の女性であり、クールな表情を浮かべている。そして、ポーセハイであるジョニーは、人懐っこそうな笑顔を常に絶やさない青年だ。この三人とシンは、バディーの関係にあった。

この制度はメイたちが考え出したもので、一人で学問をするより、色々な人と議論を交わしながら学んでいくことをよしとするもので、この寄宿舎に入っている学生はもちろん、アガルタ大学で学ぶ学生全員にその役割が割り当てられていた。当然、その組み合わせについては、大学の職員がその適性を見極めて決めていくことになっており、そこには非常に細かい配慮がなされていた。

とりわけシンについては、この寄宿舎の中で特に面倒見のいい者たちが選ばれ、常に彼に世話を焼いている状態となっていた。彼らは、サンダンジ国の温室育ちであり、社会常識が身に付いていないシンに少々驚きつつも、彼に次々と社会常識を教えていき、自立させようと取り組んでいたのだ。この裏には、アガルタ王リノスとその妻であるメイリアスの意図があることは言うまでもない。二人は、出来るだけシンを一人にせず、常に他者と触れ合わすことで、ヴィエイユのことを考える時間を減らそうと考えていたのだ。

「ねえ、シン君。明日の課題、もうやった？」

「ああ……いや……」

「出来ていなければ、手伝おうと思ったんだ。一緒にやろうよ」

「私は……」

「与えられたことをきちんとこなす。これが紳士の勤めじゃなくて？」

「……わかったよ」

しぶしぶながら彼は部屋を出て、寄宿舎の中にある自習室に向かう。こうした取り組みは功を奏し、後にヴィエイユは茫然自失となる事柄に遭遇することになるのだが……。今の彼には、そんな未来が待ち受けていることは、知る由もなかった。

第三百八十八話　エクスカリバー

「そんな！　姫様は儂らに死ねと言われるのか！」

「やっぱり、そうよね……」

そう言ってため息をついているのは、アガルタ王・リノスの妻であるコンシディーだ。彼女の前には三人のドワーフが控えているが、その全員が憤怒の表情を浮かべている。

こうなってしまったのには、訳がある。コンシディーの夫であるリノスが、ある物を欲していて、彼女としては、それを何としても手に入れたいと考えていたのだ。

事の発端は、数日前、フラディメ国のメインティア王から肖像画を描きたいと提案されたことに始まる。彼は、出し抜けにアガルタに王の肖像画がないというのはおかしいと言ってきた。確かに、コンシディーの実家であるニザ公国においても、歴代の公王や公婿の肖像画が飾られていて、それらの大半は、公王が最も脂の乗り切った時期に描かれているのだ。メインティア王は、ちょうど今がアガルタ王の最も脂の乗り切った時期であり、その姿を肖像画に描いて、後世にその威光を伝えるべきだと言ってきたのだ。

だが、その話をリノス自身は嫌がった。まだ、そんな時期ではないと言って、頑なにメインティア王の提案を拒もうとした。しかし、お妃さまたちの肖像画も描こうと提案されてから、風向きが変わった。リコがその話に乗り気になったのだ。

彼女はすでに齢３０を過ぎているが、その美しさは微塵の衰えも見せておらず、むしろ、そのあふれ出る色気は周囲の者を陶然とさせるものがあった。だが、そんな彼女も確実に老いていく。今の、夫から美しいと言われているその姿を残したいと考えるのは、無理からぬことだった。

結局リノスは、リコの説得に折れ、メインティア王の提案を受けることにした。肖像画について表立って意見を言わなかったものの、実際はそれを描いてもらうことに賛成の立場であったコンシディーは、その話を聞いて胸を撫で下ろした。

実際、シディーの娘のピアトリスは、メインティア王の息子であるオンサールと許嫁の関係にある。幸い二人は今のところ仲良しで、よく遊ぶ間柄だ。この先どのような関係になるかはわからないが、シディー自身は、オンサールの聡明さを見抜き、その優しい性格を気に入っていた。全く知らない人のところに嫁に行くよりは……。そう考えていたシディーにとって、この肖像画の提案は、メインティア王、ひいてはフラディメ国との関係を強めるのに打ってつけと考えたのだ。

その考えはメインティア王も同じであり、彼は、彼の独特な感覚で、アガルタ王家とつながるには、リノスの妻たちとのつながりが必須であると悟っていた。そうした思惑が絡まり合いながら、アガルタ王家の肖像画作成が始まることになった。

メインティア王は筆が速く、しかも、一度覚えた景色や人物は決して忘れることがなく、いつでもその風景や人物を描くことができるという特技を持っていた。そのため、リノス以下、モデルとなる人々は、各々が気に入った衣装に身を包み、３０分ほどの時間、メインティア王の前に立つだけでよかったのだ。

俺は後でいいというリノスの言葉に従い、肖像画は妻たちから描き始められた。最初に描かれたのはリコであり、その出来栄えは、本人も赤面するほどの見事なものだった。そうして、メイとシディー、ソレイユ、マトカルの肖像画が完成し、いよいよリノスの番となった。彼はここに至ってもあまり乗り気ではなく、子供たちがもう少し大きくなったときに家族全員で……などと言い出す始末だった。シディーには、夫が自身の外見にあまり自信がなく、さりとて、少し美形に描かれるのも心苦しいと感じているのを、何となくその雰囲気で知ってはいたものの、今ここに至って延期するというのもできない相談であった。

結局、リコから相談を受けたシディーが一計を案じ、彼が気に入っている鎧を纏わせることで、ようやくリノスは重い腰を上げた。

メイとシディーが二人で鎧を着せていると、彼はすぐに機嫌の良さそうな笑顔になった。シディーとしても、この鎧には思い入れがある。ドワーフの技術の粋を結集して作った鎧で、世界最高水準の防御力を誇っている自信があった。事実、先日のタナ国との戦いでは、この鎧は大活躍をしていて、アガルタを勝利に導くその一端を担ったのだ。

愛する夫は、そんな鎧を身に着けて肖像画に描かれる。これは、未来永劫、ドワーフの技術力の高さを証明することにもなる。シディーは鎧を着せながら、心を浮き立たせていた。

長い時間をかけてようやく鎧が着せ終わると、リノスはすぐに鏡の前に行って、自身の姿を大喜びでチェックし始めた。

「う～ん。いつ見てもカッコいいな。どっからどう見ても、カ〇リ

コーンそのものだ。うわ～マジでかっこええ～」

子供のように喜ぶリノスを見て、シディーは心から嬉しさを感じていた。苦労してメイちゃんやドワーフたちと共にこの鎧を作ってよかった。そんなことを心の中で思っていたとき、リノスの口から、予想もしない言葉が発せられた。

「エクスカリバー！」

その言葉を聞いて、シディーはギョッとした表情を浮かべる。慌ててリノスに視線を向けると、彼は鏡の前に立ち、右手を天に突きあげるような格好をして、それを一気に振り下ろしていた。

「エクス、カリバぁぁぁー」

確かに、確かに夫はエクスカリバーと言った。……何と迂闊なことであったろうか。その言葉を聞いて、シディーは愕然とした。

確かに、夫のために作った鎧は世界最高のものだ。だが、彼の持つ剣はどうだろうか。確かに、メイちゃんが魂を込めて作った剣、ホーリーソードを携えてはいるが、はたしてそれが世界最高の剣であるかと問われれば、即答はできない。何故ならば、世界最高の剣はエクスカリバーであることは、全世界の共通認識であり、しかもそれは、エルフ王が秘蔵する剣なのだ。

だが、シディーは諦められなかった。あの鎧には、エクスカリバーがふさわしい。それが揃えば、愛する夫は世界最高の武器、防具を所有していることになる。それをもって肖像画に描かれれば……。シディーの胸は高鳴った。

しかし、気が付いたときはすでに遅く、リノスは嬉々としてメインティア王の部屋に向かってしまっていた。落ち込むシディーは、ダメもとで、アガルタのドワーフたちに、エクスカリバーと同様の剣を作ることはできないかと尋ねてみたが、答えは決まっていた。

「姫様、それは無理というものじゃ。エクスカリバーを作るには、膨大な魔力がいるのと同時に、エルフの血が必要じゃ」

「それに、エルフが秘蔵しておるリボルバーの香木、あれが必要じゃと言われているのう」

「いずれにせよ、エクスカリバーを作れるのはエルフのみですじゃ。しかも、リボルバーの香木はすでに無くなりつつあると聞いた。やっても、一度も失敗できぬ難しい仕事になるですじゃ」

「やっぱりね……。でも、みんなは作ってみたいとは思わない？エクスカリバーを。どんなものでも斬ると言われる、あの剣を」

「そりゃ姫様、作りたいか、作りたくないかで言えば、そりゃ儂らだって作りたいぞい。じゃが、材料もなければ作る方法もわからんとなれば、諦めるしかないぞい」

「材料がない、作り方がわからない……。それじゃ、あなたたちが、エルフの里に行って、材料をもらって、作り方を教えてもらえばいいんじゃない？」

「無茶を言わんでくれ、姫様！」

「そうじゃ。エルフの里は、それはそれは高い山の上にある。しかも、断崖絶壁の山の上じゃ。儂らなど、近づくことさえできません

ぞ。それに、あそこはすさまじく寒い。儂ら年寄りが行けば、確実に全員凍死するぞい！」

「そこを何とか……」

「いかに姫様と言えど、そのご命令は儂ら、お断りですじゃ。それとも姫様は、儂らに死ねと言われるのか！」

ドワーフたちにそう言われてしまっては、シディーも引き下がる他はなかった。だが、彼女の心の中には、いつまでもエクスカリバーの剣のことが離れることはなかった。

後にこのことは、アガルタ王家を巻き込む騒動に発展することになるのだが……。それはまた、別のお話。

第三百八十八話　エクスカリバー（後書き）

軍神編・後日談は今回で終了です。次話から新章に突入します。お楽しみに。

本日が２０１８年最後の投稿となります。今年一年、本当にお世話になりました。また来年もよろしくお願い申し上げます。よいお年をお迎えください！

第三百八十九話　命名と命令（前書き）

あけましておめでとうございます。２０１９年も『結界師への転生』をよろしくお願い申し上げます。

第三百八十九話　命名と命令

「……よし、やっぱりあれだ。あれしかないな」

アガルタの都にある執務室で一人、リノスは腕組みをしながら考えていた。そして、たった今、その結論が出た。

彼は机に置かれている鈴を鳴らして、外にいる警備兵を呼び、これから出かけるので、今日はここには戻らないと告げた。兵士は一瞬驚いたような表情を浮かべたが、やがて恭しく一礼をして、退出していった。

「さて……行くか」

そう言って彼は、いそいそと机の上を片付け始めた。

◆　◆　◆

「あっ、リノス様……」

驚いた声を上げているのは、マトカルだった。彼女は数日前に生まれた我が子を抱きながら、目を丸くして驚いている。彼は執務室から直接、彼女が入院しているアガルタ医療研究所に向かったのだった。

「こんな時間にどうしたのだ？　政務は……」

「ああ、いいんだ。今日はサボリだ」

そう言って彼は、ニコリと笑みを浮かべながら、傍にあった椅子にゆっくりと座る。そのとき、マトカルのベッドの下がモソモソと動いた。彼は目を見開いて驚きながら身構える。

「……だから言ったのだ。もう隠れるのは無理だ。出てくるといい」

天を仰ぎながらマトカルが呟く。すると、彼女のベッドの下から、かわいらしい女の子がひょっこり顔を出した。

「エリル!?　どうしてお前がここに居るんだ?」

「う……う……う……」

「リノス様、怒らないでやってくれ。私が呼んだのだ」

「マトが!?」

呆気にとられるリノスに、マトカルはこれまでの経緯を説明していく。

「はぁぁぁ……。ナイショで来たとは……。よくバレなかったな」

「いや、おそらくバレている」

「どういうことだ?」

「きっとメイ様が気を利かしてくれているのだ。そうでなければ、エリルが来る時間に決まって、誰も居なくはならないだろう」

「……ごめんなさい」

目に涙をうっすらと溜めながら、エリルはぴょこんと頭を下げた。その姿はとても可愛らしく、リノスは思わず顔をほころばせる。

「ただ、おそらくエリルはリコ様には黙ってここに来ている。今はまだバレてはいないようだが……」

「わかった。リコには俺から言っておく。それにしてもエライな、エリル。一人で転移結界に乗ってここまで来られるようになったんだな……。もう立派なお姉ちゃんだな」

その声にエリルは、ちょっと嬉しそうな表情を浮かべながらコクリと頷いた。リノスは心の中で、おそらくリコも、この子がここに来ていることを知っていると悟った。心配性のリコが、エリルの行動に気が付かないわけがないのだ。それに、屋敷にはシディーもいる。この二人の目を掻い潜って子供のエリルが秘密で行動を起こすことは、ほぼ不可能に近い。聞けばエリルは、マトカルが出産する前からここに来ているのだそうだ。と、いうことは、リコもメイもシディーも、知っていながら敢えて何も言っていないのだろう。そう考えると、妻たちのこの娘への愛情の深さがわかって、リノスは少し幸せな気持ちになった。

そんなことを考えながら、再び椅子に座り、膝の上にエリルを載せて座らせると、リノスはマトカルに向けておもむろに口を開く。

「子供の名前なんだけれども……」

「ああ、決まったのか？」

「うん。すまないな。もうすぐ退院というところまで伸びてしまってな。名前については、いくつか候補を考えたんだけれど、ついさっき、決めたんだ。マトが気に入ってくれれば、それにしようと思っている」

リノス家では基本的に、子供が生まれたときは、その子を産んだ母親とリノスが相談して名前を決める、というのが暗黙のルールになっている。彼は生まれた子供の顔を見て名前を決めることにしており、先日生まれたソレイユの子供の名前を決めていたこともあって、マトカルの子供の名前を決めるのが遅くなっていたのだ。

「で、どんな名前にするのだ？」

マトカルが身を乗り出すようにして姿勢を正す。その雰囲気を敏感に察したエリルも父親の膝から降りて、マトカルの傍に控える。リノスはもう一度、じっとマトカルに抱かれている赤ん坊を見ていたが、やがてゆっくりと息を吐きながら口を開いた。

「名前は……ファルコにしようと思うんだ」

「ファルコ……。確かそれは……」

「ああ。俺に魔法を教えてくれた師匠だ。大魔導士ファルコの名前を貰おうと思うんだ」

「何と……。いいのか？　そんな大切な名前を……」

「俺も色々と考えたんだけれどな。でも、この子には才能があるんだ。すでに『火魔法ＬＶ１』のスキルが付いている」

「えっ！？　まさか……。そうか……。私はラマロンの皇国士官学校時代に、魔法の適性はないと言われていたのだが……。きっと、リノス様に似たのだろうな」

「どうだろうな。ソレイユが産んだセイサムは俺に似ているなと思ったけれど、スキルは付いていなかったな。この子は……俺に似ているかな？　何だか……師匠が生まれ変わったような気がするな」

そう言って彼女は、赤ん坊の顔を覗き込んだ。母親の腕の中で赤ん坊は、スヤスヤと寝息を立てている。その様子を見ながらマトカルは、微笑みを湛えながらゆっくりと頷いた。

「じゃあ、今日から、この子の名前はファルコにする。バーサーム・ダーケ・ファルコだ」

「ファルコ、いい名前！」

エリルが笑顔で赤ん坊の顔を覗き込んでいる。そして彼女はマトカルに視線を向けると、少し心配そうな表情を浮かべながら、小さな声で話しかける。

「マトちゃん……いつ、帰ってくるの？」

「ああ、心配ない。明後日には退院だ。あと、二つ寝たら、お屋敷に帰る」

「帰ってくるの！？　わぁい！」

エリルが両手を上げて喜んでいる。その様子を、マトカルは愛おしそうな表情で眺めている。

「マトちゃん、帰ってきたら、剣を教えて！」

「ああ、そうだったな」

そう言って彼女は、再びリノスに向き直る。

「リノス様、エリルには剣の才能があるようだ。私に、剣を教えさせて欲しい」

「あれ？　マトには言っていなかったか？　エリルには産まれたときから、『剣術ＬＶ１』のスキルが付いていたんだ。是非、そうしてやってくれ」

「そんな話は、初めて聞いた……。なるほどな。道理でこの子の構えが美しいわけだ。誰にも教わっていないのにきれいな構えができたのは、才能持ちだったからか……」

「リコには俺から言っておくから、時間の空いたときに、エリルに剣術を教えてやってくれ。ただし、マトは出産直後だから、くれぐれも無理をしないようにな。メイと相談しながらやってくれ。そして、エリル」

「はい」

「マトちゃんから、いっぱい剣術を覚えて、とうたんに教えてくれな」

「うん！」

「そして、弟のファルコ君が大きくなったら、エリルから剣術を教えてやってくれ」

「うん、わかった」

「さて、子供の名前も決まったことだし、そろそろ俺にその子を抱かせてくれないかな？」

「そうだったな。さ、父上だぞ」

マトカルは赤ん坊を、まるで宝物を渡すかのように、ゆっくりと、丁寧にリノスに渡す。彼女から赤ん坊を抱き取ったリノスは、満面の笑みを湛えながら、ファルコと名付けられた我が子に、小さな声で話しかけた。

「お帰りなさい、師匠。今度は俺が師匠を守りますからね。あ、くれぐれも酒と女性は控えてくださいね」

眠っている赤ん坊の顔に、少し笑顔が浮かんだように見えた。

◆　◆　◆

ちょうど同じ頃、ゴンは一人、主人であるおひいさまの許を訪れていた。

「……よいか。万事、抜かりなく準備をするのじゃ」

「ウヘヘヘヘヘー」

まるで床に頭を擦りつけるようにして平伏するゴン。その様子をお

ひいさまは、凄まじい形相で睨みつけていた。彼女の周囲には、怒りを表す狐火が、いくつも現れていた……。

第三百九十話　お怒り

「おお……ファルコとは……」

何とも言えない表情を浮かべながら、徐々に口元を緩めているのは、ヒーデータ帝国の宰相閣下だ。取りあえず俺は、二人の息子が生まれたことを陛下に報告に来ていた。

「大魔導士ファルコの名前をの。よい名ではないか。それに、セイサムという名も、なかなかではないか」

「はい。ソレイユが産みました子供は、『森の番人』という意味があるそうでして、ゆくゆくはたくさんの人を守れるような人物になってくれるようにとの願いを込めて、名付けました」

「フム。リノス殿も三人の息子を得て、アガルタも盤石じゃの」

「いえ、息子たちには、特に俺の後を継ぐことなどは考えずに、自分の人生を歩んでもらえればと考えています」

「フフフ、相変わらずそなたは謙遜するのじゃな。ま、余が言うことではないが、くれぐれも兄弟相克とならぬようにな」

「はい。そうならないように気を付けます」

そんなことを二人で話しながら、ふと宰相閣下に視線を向けると、彼は遠い目をしながら、目にうっすらと涙を溜めていた。きっと、ファルコ師匠との色々なことが思い出されているのだろう。

陛下はこの後、宰相たちと打ち合わせがあるとのことだったので、俺は早々に陛下の許を辞して、帝都の屋敷に帰った。

「ご主人……」

屋敷の勝手口の前で、突然声をかけられた。驚いて振り向くと、そこには人化を解いたゴンが申し訳なさそうな表情を浮かべながら、俺の顔色を窺っていた。その様子を見て俺は、直感的にゴンが何か大きなことをやらかしたのだろうと感じた。

「あの……申し上げにくいのでありますが……」

「わかった。場所を変えようか」

「いや、ここで大丈夫なのでありますー」

「気にすることはない。いや、皆まで言わなくてもいい。わかる、わかるぞ。お前の言いたいことはよくわかる。男には秘密の一つや二つはあるものだ。ここではリコたちに聞かれてしまう可能性がある。離れたところで、俺たちの会話が漏れないように結界を張って聞こうじゃないか。来い来い来い」

そう言って俺はゴンを手招きして、屋敷から離れたところに行こうとする。だが彼は、ブンブンと音が鳴るんじゃないかと思うほど激しく、その首を振っている。

「いや、おそらく、ご主人が考えていることではないのでありますー」

「うん？　いや、無理をしなくていいぞ」

「吾輩はこう見えてもおひいさまの眷属にして、法力を備える白狐でありますー。そんな吾輩に、後ろめたいことなど、ないのでありますー」

「ほう、では聞くが、『神の楽園』とは何だ？」

「はっ？　えっ？　なっ？　い……いや……吾輩は、そのような……」

「いいのかな、そんなことをして？」

「しっ、失礼な！　吾輩は、自分の甲斐性で遊んでいるのでありますー。誰にも迷惑をかけていないのでありますー。女たちにも、チップを弾んだので、問題ないはずなのでありますー。あれ？　おかしいでありますなー。あれだけ秘密にしていたのでありますのにー。もしかしたら……メインティア王が！？　あの野郎……」

「『神の楽園』という名前は聞いていたが、やっぱりゲスいことをしていたんだな」

俺はゆっくりとしゃがんで、ゴンの背中をポンと叩く。

「吾輩を騙したのでありますか！？」

「おやめなさいな、二人とも」

俺たちの背後で声が聞こえて、思わずビクっと体が震える。振り返るとそこには腕組みをしているリコが立っていた。

「子供たちもいますから……。まずは中にお入りなさいな」

俺たちは言われるままに、すごすごと屋敷の中に入った。

屋敷に入ってもゴンは人化をせずに白狐のままだった。こういう光景は珍しい。白狐の姿のままでいると、子供たちの格好のおもちゃになってしまうからだ。フェアリなどは羽があるために空に逃げることができるのだが、ゴンの場合は逃げることができない。その結果、女子たちに捕まると顔にお化粧という名の落書きを施され、イデアなどはぬいぐるみ代わりにされてずっと抱きしめられることになる。さすがのゴンもそれには参っているらしく、ここ数年は白狐の姿を見ること自体が珍しい状況にあったのだ。

さすがにいつものリコとは違う気配を察したのか、子供たちはゴンにちょっかいを出すことなく、リコに命じられるままに、離れの部屋に移動させられてしまった。そして、改めて俺たちの向かいにチョコンと座ったゴンに、リコが落ち着いた声で口を開く。

「で、二人で何を話していましたの？」

声に全く抑揚がない。何だか、怖ぇ……。

「いっ……いや……あの……その……」

「早くおっしゃいな」

「それでは申し上げるでありますー。実は、明日、おひいさまがこのお屋敷にお見えになるのでありますー」

「は？」
「え？」

声を上げたのが俺とリコの二人同時だった。それほど、ゴンの話は予想外のことだった。

「どうしておひいさまがこの屋敷へ？」

「それが……内々のお願いがあるのでありますー」

「内々のお願い？」

「妖狐・ヘイズの許から保護した、エルフ王の姫の件で、内々のお願いがあるのでありますー」

「エルフの姫？　ああ、あの少女のことか」

俺は腕組みをしながら、遠くを見つめる。確か、ヘイズが自分の好みに育てたという女性だ。確か、今はおひいさまの許で丁重に保護されていると聞いていた。それが今になって内々の話とは……。俺は胸騒ぎを覚える。

「で、その内々のお願いとは何だ？」

「それが、吾輩にもわからないのでありますー。ただ……」

「ただ、何だ？」

「おひいさまの周りに、狐火がいくつも見えたでありますー。あれは相当お怒りの証拠でありますー。一体何がお怒りであるのか、吾

輩にもわかりかねるのでありますー。おひいさまが自らあのお屋敷を出るなどは、余程のことがない限り、普段はあり得ぬことなのでありますー。あれだけお怒りのおひいさまがこの屋敷に来られると、最悪の場合、このお屋敷自体が吹っ飛ぶかもしれぬのでありますー」

「それは心配ありませんわ。リノスの結界がありますわ」

リコが事も無げに断言する。いや、一応相手は狐神なのだが……。

「だからこそなのでありますー。ご主人のスキルはすでにおひいさまを凌駕していると思われるのでありますが、そのご主人とおひいさまが相対することになれば、そうなれば……。吾輩にもどのような事態になるのか、わかりかねるのでありますー」

「うーん、一体、何を怒っているのかがわからないからな……。対処のしようがないな」

「まずは、おひいさまのお話を聞いてみることですわね。こちらが話を聞く姿勢を見せれば、無理に攻撃を仕掛けてくる方ではないと思いますわ。それで、こちらに非があれば、そのときは誠心誠意お詫びすればいいのですわ。そうですわね、ゴン？」

「ううう……」

俺は腕組みをしながら、目を閉じて考える。

「そうだな。まずは、話を聞かないことには何も始まらんな。と、なれば、おひいさまのご機嫌が少しでもよくなるように、明日はスイーツを大量に用意しておくか」

「何卒、よろしくお願い申し上げるであります！」

そう言ってゴンは俺たちに頭を下げた。その後、俺は明日に備えて、おひいさまが好むであろうスイーツづくりのために、キッチンに籠った。

そして夜、明日の準備を終えた俺は、一人で風呂に入った。今日は子供たちと遊んでやることができなかったなと反省しながら、明日のことをぼんやりと考える。

あのエルフの姫は、相当長い間ヘイズの許にいた。ということは、かなり彼の影響を受けていることは容易に想像できる。ただ、その点とおひいさまの怒りの接点が見つからない。一体彼女は何に怒りを覚えているのか……。考えても結論は出ない。

「ま、しゃーない。話を聞いてみないと、わからん」

そう言って俺は風呂から上がり、寝室に向かった。

「あれ？」

寝室には、リコ一人がいた。大抵、彼女の傍には息子のイデアがいるはずなのだが、今夜はその姿が見えない。

「イデアは……？」

「シディーのところで寝ていますわ。エリルは、メイのところでアリリアと一緒ですわ」

「はああ」

「リノス」

リコの雰囲気が変わった。俺は思わずゴクリと唾を呑む。

「昼に話していたこと、本当でして？」

「どういうことでしょうか？」

「男には秘密の一つや二つあるものだと言っていましたが、あなたも秘密がおありでして？」

「えっ？　いや、ないですよ？　ないないない。リコに秘密なんて、ないよ。ないないない！」

俺は必死で否定するが、リコはジトッとした目で俺を睨んでいる。これはあかんパターンだ。否定すればするほど、疑いが増していく。俺はゆっくりと息を吐いて、リコをじっと見つめる。

「ただ、敢えて、敢えて言うならば……リコのことだ」

「私の？　何ですの？」

「俺の秘密は……この寝室……ってところだ」

言葉の意味が分からないのだろう。リコはキョトンとした表情を浮かべている。その様子を見ながら俺は、彼女の耳元で小さな声で呟く。

「それはね……俺とリコ（俺、虜）」

リコはゆっくりと俯いたかと思うと、クスクスと声を殺して笑いだした。

第三百九十一話　ようこそ、見苦しきあばら家へ

次の日の朝、俺は政務を休んで裏庭にあるおひいさまの屋敷に通じる祠の前に立っていた。

この日は朝から本当にバタバタだった。まず、俺とおひいさまが全力でぶつかり合う可能性があったために、最悪の状況を考えて俺は家族を避難させた。まず、アガルタの迎賓館にはリコとイデアを避難させ、医療研究所には、メイと共にエリルとアリリアを避難させた。そしてシディーはピアトリスを連れてニザ公国に里帰りさせた。フェリスとルアラはいつもの如くアガルタに出勤したし、フェアリはイデアのお守のためにリコと共に転移させた。この屋敷に残っているのは、ジェネハたちハーピーとイリモだけだ。

俺はゴンと共に、ちょっと緊張しながら、おひいさまの到着を待っている。ゴンから聞いた話では、大体１１時頃にこちらに来る予定とのことだったが、すでに１１時も３０分になろうとしているが、未だにおひいさまの姿が見えない。少々不安が募ってきている。

「あっ、お見えになられるでありますー」

ゴンの声で我に返る。祠をじっと見つめていると、その前に桃色の光が現れた。漂ってくる妖気が半端ではない。

「……大儀じゃ」

目の前に現れたのは、何ともかわいらしい女の子だった。しかも、振袖？　のような衣装を纏っている。一体誰だ、この子は！？

「これはこれは見苦しきあばら家へ……ようこそお越しくだされました。……おひいさま」

「はあ!?　おひいさま!?」

どう見ても小学生くらいにしか見えない少女だ。確かにかわいい。萌えの本道をいっている。だが、いつも見る彼女の刺々しいまでの雰囲気は微塵も感じない。て、ゆうか、何で人化しているんだ?

「あの……本当に、おひいさまで?」

「左様じゃ」

「本当に本当に?」

「しつこいの!　本当じゃと申しておろうに!」

「あの……なぜ、人化しているので?」

俺が質問した瞬間、彼女の周囲に狐火がぐるりと現れる。それに恐れをなしたのか、ゴンはひたすら平伏している。

「……元の姿では、差しさわりがあるのじゃ」

「ま……まあ、まずは怒りを鎮められて……どうぞ、屋敷の中へ……」

◆
◆
◆

「……」

ダイニングのテーブルに腰を掛けたおひいさまが、じっと俺たちを睨んでいる。睨んではいるが、姿が萌え系の少女姿であるために、むしろ可愛さを感じる。これは是非、萌え道を極めようとしている猛者たちに見てもらいたいものだ。きっと彼らも、「お、ポイントしっかり押さえてるじゃん」と言ってくれるはずだ。だが、周囲の狐火は全く消えることがない。どうやら未だに怒っているらしい。

「あの……せっかくお越しいただきながら、気の利いたこともできませんが、よろしければスイーツなど召し上がりませんか？」

そう言って俺は、昨日の晩に準備したおはぎやケーキなどが乗った大皿を二枚、彼女の目の前に差し出す。

「……大儀じゃ」

彼女は一切表情を変えずに、手を伸ばし、次から次へとスイーツを口元に運んでいく。結局彼女は、おはぎを２０個、ケーキを２ホールを淡々と平らげた。そしてようやく、周囲に漂っていた狐火が消えた。

「……落ち着かれましたか？」

「満足じゃ。特に……色がたくさん付いていたものが、美味じゃった。今後は、あれもお供えをしてたも」

「承知しました」

おひいさまが気に入ったのは、色んなフルーツを載せたケーキだ。

色がたくさんという表現は、言い得て妙だ。そんなことを思いながら、俺は姿勢を正して改めて話しかける。

「ところで、今日はどうされましたか……。それに、そのお姿は……」

俺の問いかけに、おひいさまはフウとため息をついた。

「他でもない。あの、エルフの姫のことなのじゃ」

「ああ、ミークといいましたか。おひいさまにお預けしたあの少女のことですね」

「うむ。あの娘じゃがな。妾はエルフ王の許に返そうと思っておるのじゃ」

「ああ、それはいいことだと思います。あの子も、両親に会いたいでしょう」

「妾もそう思っておった。じゃがの……。そうもいかんのじゃ」

「と、言われますと？」

「妾の口から説明するのは、何とも憚られるのじゃ。……この屋敷には、奥方らは？」

「ええ。皆出かけておりまして、ここに居るのは、俺とゴンだけです」

「左様か。ならば、実際に見てもらうのが一番じゃな」

そう言っておひいさまは、ポンポンと手を叩いた。すると、音もなく勝手口の扉が開き、おひいさま付きの女官である千枝と左枝が、一人の少女を抱えるようにして入ってきた。

「何じゃあ！　離せ！　離すのじゃあ！」

まるで獣のように首を振っているのは、ミークだった。顔が歪み切っている。そんな彼女を二人の女官は、まるで放り投げるようにして床に寝かせた。

「何をするのじゃ！　……うん？　男？　男ではないか！　男じゃあ！」

俺の姿を認めた彼女は、いきなり服を脱ごうとした。それを千枝と左枝が、まるで羽交い絞めをするようにして止めている。その様子は凄まじいの一言に尽きた。

「一体、何事です！？」

驚く俺に、おひいさまは大きなため息をついた。

「妾の許に来てからというもの、万事がこの調子なのじゃ」

「え？」

「常に男を求めての。幸い、妾の屋敷には女しかおらぬ。じゃが、それでもこの娘は朝から晩まで男を求め続けて、挙句にはサンディーユにまで手を出そうとしたのじゃ」

「はあ？　あのおじいさんを？　それはいくら何でも……」

「じゃが、ヤツもまんざらでもない顔をしておるのじゃ。全く……」

そう言うと、おひいさまの周りに再び狐火が現れ始める。

「妾も八方手を尽くしてみたが、この娘の欲情を抑えることはできぬのじゃ。それ故、そなたにこの者を何とか出来ぬものかと相談に来た次第じゃ」

「……」

あまりのことに俺は絶句してしまう。おひいさまの力をもってしても、この少女を抑えることができないとは……。俺は戸惑いを隠せない。

「男ぉ……男ぉ……。早くそなたの逸物で、妾を突いてくれぃ。突いて突いて突きまくって欲しいのじゃ。体が疼くのじゃ。乱暴に、激しく、妾の体が壊れるくらいに突いて欲しいのじゃあ！　早く、早くぅ」

「不埒なっ！　妾はそうした淫乱な女子が一番嫌いじゃわぇ！　目ざわり、耳障りじゃ！　静まれ！　静まれと申すに！」

おひいさまの狐火が大きくなっている。俺は黙って立ち上がり、女官たちに押さえつけられながらもなお、暴れ続けているミークの頭にそっと手を載せる。

「男ぉ……おと……こぉ……」

彼女の目がトロンとなり、やがて、今までの様子が嘘であったかのように大人しくなった。

「精神魔法で、彼女を眠らせました。千枝さん、左枝さん、大丈夫ですか？」

「ほおおお。助かりましたわぇ。毎日この調子である故、我らも生傷が絶えぬのじゃ。リノス殿、感謝しますぞえ」

二人は俺に恭しく頭を下げる。俺は再びおひいさまの前に座り、ゆっくりと口を開く。

「まさかこんなことになっているとは思いませんでした。ただ……。今の様子を見る限りでは、この娘については、精神魔法で常に快楽を与え続けるしか手はないかもしれませんね」

「いや、そうもいかぬのじゃ」

「どういうことです？」

「この娘の父親であるエルフ王が、娘を返せと言って来ておるのじゃ。じゃが、この状態で返せば、エルフ王の怒りに触れることは目に見えておる。そうなれば、我ら狐族は未来永劫、エルフ族との交わりは断たれることになる。妾としては、何としてもそれは避けたい。これは我らだけではない、人族にも関わることじゃ」

「人族にも……ですか？」

「うむ。『ロスサの水』のことは知っておろう？」

「確か、サンディーユさんから教えていただきました」

「うむ。それがあれば、多くの人の命を救うことができる。何せそれは、振り撒けばかなりの殺菌効果があるからの。人族、とりわけ、幼い子供の命は今より格段に救うことができる」

「……なるほど」

「今回がエルフと再び交わることのできる最後の機会じゃ。失敗は許されぬ。そんな中で、姫がこの有様では……。察してくれい」

俺は大きなため息をつく。そんな俺を見つめながら、おひいさまは口を開いた。

「すまぬがそなた、あの姫を、何とか元の通りに戻してくれぬか。頼む」

そう言っておひいさまは頭を下げた。どうやらまた、俺の許に、厄介ごとが降りかかってきたようだ……。

第三百九十二話　早くも万策尽く……？

「……」

俺の目の前で天を仰いでいるのは、リコだった。子供たちが寝静まった夜、俺はリコ、メイ、シディーの三人の妻とゴンをダイニングに集めた。そして、妻たちにおひいさまからの要請と、エルフの姫であるミークの状況について説明したのだ。

妻たちは絶句していた。そんなことが現実に起こりうるのか……くらいのレベルで驚いている。

「グレフレアの薬を……使いますか？」

不意にシディーが口を開く。その声に、天を仰いでいたリコがゆっくりと視線を彼女に向ける。だが、その隣でメイがゆっくりと首を振っている。

「いえ、私は……反対です。回復するまでに時間がかかります。それに、エルフへの投与は例がありませんから、どんな副作用があるのかがわかりません」

「メイちゃん、私の直感だけれど、副作用はないと思うわよ」

「……シディーちゃんがそう言うのなら、副作用はないかもしれませんね。ただ、薬師としては、いきなり人体実験のようなことになりますので、賛成はできません」

落ち着いた、凛としたメイの声が響き渡る。この様子に、さすがのシディーも無言のままだ。

「メイ……」

「はい、リコ様」

「そのグレフレアの薬というのは、どういうものですか？」

「わかりやすく言えば、思考能力を低下させる効果のある薬です。今のご主人様のお話では、ミークさんは快楽におぼれている状態であると考えられます。そこで、思考能力を低下させる薬を投与しつつ、眠るための薬を投与しながら心を落ち着けていくというものです」

「眠るための薬……」

そう呟きながらリコは俺に視線を向ける。

「ミークさんの様子は、そんなにひどいものだったのですか？」

「ああ。もはや獣のようだった。男と見れば誰でも襲いかかるように見えた。実際、おひいさまの屋敷では、そこで仕えているサンディーユという老狐にまでも迫ったそうだ」

「そうですの……」

「あくまで俺の考えだが、ミークは男と交わることに快楽を感じている。これを元に戻すのは至難の業だが、男と交わること以外で快楽を感じるものがあれば、もしかしたら……という可能性はあると

思うんだ。快楽というのは語弊があるな。そう、今のミークにとっては、男と交わることが一番楽しいことになっているんだろう。それ以外で、彼女が楽しいと感じられるものがあればいいんだが……」

「そうですわね。彼女の中で、そうした変化があればいいのですわね」

リコはそう言って、再び目を閉じる。そして、しばらくの間沈黙が流れ、やがて、再び目を開いた彼女は、ゆっくりと息を吐き出しながら、小さな声で呟いた。

「おひいさまの申し出ですから、お断りするのは難しいですわね。ただ、お受けするとしても、場所の問題がありますわ。この屋敷では子供たちもいますから……。アガルタの迎賓館の一室にお迎えするのがいいでしょうか。あの、メインティア王がお使いになっていた部屋など、いいと思いますわ。そこにミークさんをお迎えして、私たちで手を尽くしてみましょう。リノス……」

「何だい？」

「あなたは、この問題にかかわらないでくださいませ」

「何故だ、リコ？」

「あなたが顔を出せば、おそらくミークさんはあなたに迫ることでしょう。ですから……控えて欲しいのですわ」

「俺の結界があるだろう。姿を隠すこともできるが……。いや、単に心配なだけだ。もしミークが暴れて、リコやメイやシディーを傷つけでもしたらと思うと、俺は心配でならないんだ」

「あれ？　リノス様の結界は、私たちにも張られているのではないのですか？」

「へ？　あ……うん、そうだったな。そうでした。忘れていました」

俺はシディーに向かってペコリと頭を下げる。

「ただ……よく考えてみると、リノスもおひいさまに色々と説明しなければならないことがありますわよね？　それならば、姿と気配を消して傍にいてもらうのが、いいかもしれませんわね」

リコのその声に、妻たちが頷く。その後、まずはミークの様子を見ながら、全員で相談して今後の対策を検討していくことになった。

「では、最初は私が見させてください」

堂々とシディーが口を開く。リコとメイは顔を見合わせていたが、やがて、彼女に一任してみようということになり、ミークをおひいさまの許から引き取る日程も決められた。諸々の準備も必要であるために、ミークを引き取るのは三日後と決め、その日の会議は終了した。

明日はソレイユとマトカルが屋敷に帰ってくる日だ。そんな時期にミークを引き取ることになるとは、何ともタイミングが悪いな……そんなことを思いながら、俺は風呂場に向かう。

ゆっくりと風呂に浸かっていると、シディーが入ってきた。彼女の恥ずかしがり屋は、結婚当初から変わらないままだ。さすがに、ピアトリスと一緒に入るときは、そうも言っていられず、時として、

いたずら盛りの彼女に振り回されるようになりながら、世話をすることもある。だが、俺と二人っきりのときは、自分の体を見られることを極端に嫌がるのだ。

「なあ、シディー」

「ふえ？」

特製のシャンプーで頭を洗っている彼女の背後から声をかけてしまったので、ちょっと間抜けな返事になっている。そんな彼女を可愛いと思いながら、俺は頭が洗い終わるのを待つ。

「何でしょうか？」

「その……ミークのこと、大丈夫か？」

「う～ん」

彼女は人差し指を顎の下に当て、いつもの推理するスタイルで天を仰ぐ。

「一応、心当りはあるのですが……。ただ、絶対の自信はないです。やってみて、その結果を見ながら対策を考えていくつもりです」

「シディーの頭脳をもってしても、然とした対策は導き出せないんだな。ということは、あのミークはかなり厄介だな……」

「ただでも、そのミークさんが回復するという点については、根拠はありませんが、自信があるのです」

「何？」

「きっと、リノス様をはじめ、リコ様、メイ様、そして……私が一緒になって問題に当たれば、きっと解決すると思います。だから、大丈夫です」

そう言ってシディーは力強く頷く。

「ところでシディー」

「はい？」

「その……寒くないか？　それに……俺のところからじゃ、シディーの裸が丸見えなんだが」

「えっ！？　うわっ！」

突然彼女は両手で胸を押さえて、しゃがみ込んでしまった。そして、そのままの姿勢で、まるで這うようにして、湯舟までやって来た。

「はっ……はずかしい……」

「シディーは恥ずかしがり屋さんだな。でも、久しぶりに明るいところでシディーの裸が見られたから、俺にとっては嬉しいひと時だった」

ちょっと意地悪を言う俺に、シディーは首までスッポリと浸かりながら、俺を睨んでいる。

「怒ったシディーの顔もまた、かわいいな。子供を一人生んでいる

とは思えない程の、初々しさだ」

そう言って俺は、彼女を抱きしめた。

「さあ、そろそろ上がろうか。今夜は、長い夜になるかもしれないな」

シディーの顔が、みるみる真っ赤になっていった。

◆　◆　◆

それから二週間後、俺たちは再びダイニングに集まっていた。リコ、メイ、シディーの三人は無表情で椅子に座り、その様子を、赤ん坊を抱えたソレイユとマトカルが心配そうな表情で眺めている。

結局、この二週間で、リコ、メイ、シディーはそれぞれ2回ずつミークに対して面談を行ったが、その全てが空振りに終わっていた。ミークは男を求めて暴れまわり、ゴンや俺に押さえつけられるということを繰り返していた。そのために、彼女らの話を聞こうとすらしなかったのだ。

俺としても精神魔法を操り、何とか回復を試みてはみたものの、まったく効果がなかったのだ。ソレイユにも色々と相談してみたが、さすがの彼女も、ここまでになると最早、廃人になるしかないと結論付けたのだ。サイリュースの中には、男を誘惑する中で、相手を故意に狂わせる場面も多々あり、そんな光景を彼女もよく見てきた。そんな彼女がそう結論付けたのだ。早くも万策尽くの状況であるかのような雰囲気に、俺の心の中は沈んでいた。

そんな中、ただ一人だけ、この状況を冷静に分析する者がいた。

「もしかするとだな……」

声を発したのは、マトカルだった。そこに居た全員の視線が、彼女に注がれた……。

第三百九十三話　誠心誠意

「ヘイズの影響？」

マトカルが指摘したのは、ミークには未だヘイズから受けた教育が影響しているのではということだった。何せ、数百年間もの間、ヤツと共にいたのだ。その影響はちょっとやそっとでは変えられない。その上、それだけ長い間一緒に暮らしていると、日々の生活が習慣化されてしまっている可能性が高い。いきなり習慣を変えられてしまうと、戸惑いのあまり、以前の習慣に戻ろうとする意識が働くのも無理からぬことだと言う。そのために、彼女を変えようとするのは、相当の時間がかかるだろうということだった。

「リノス様は、あのミークというエルフに、ヘイズに止めを刺させたのだろう？」

「ああ、そうだ」

「おそらくミークは、ヘイズの死を受け入れていない。そのために、頭の中はヘイズのことでいっぱいになっている。これは戦闘の中でよく起こることがあるのだが、敵の大将や司令官を討ち取ったとき、その部下たちは頑なに降伏を拒否することがある。いかに言葉を尽くそうとも、彼らが降伏することはない。結果的に皆殺しにする以外にないのだが、一つだけ、頑なな彼らを説き伏せる方法がある」

「何だい、それは？」

「大将の首を、彼らの前に晒すのだ。そうすれば、イヤでも彼らは

その死を受け入れざるを得なくなる」

俺は腕を組んで天を仰ぐ。マトカルの言うことも一理あるのかもしれない。だが、ヘイズの死体は、おひいさまたちの手によって徹底的に焼き尽くされ、骨すら残っていないのだ。

「拠り所だった……のかしら」

不意に口を開いたのはリコだった。彼女も目をじっと閉じたまま俯いている。こんな姿を見せるのは、あまり記憶にないことだ。

「きっと、ヘイズの言うことを聞かねば殺されることがわかって、あのエルフの姫は、ヘイズの望む通りの女性を演じたのかもしれませんわね。ただ……その期間があまりにも長すぎたために、演じていた性格がそのまま彼女にとって替わられてしまったのかもしれませんわね。そう考えますと……可哀想な女性ですわね……」

そこまで言うとリコは、大きなため息をついて、皆を見廻した。

「明日、もう一度私が、あの姫と話をしてみますわ」

その言葉には、リコの覚悟にも似た感情が感じ取れた。そうしたこともあって、彼女の意見に反対する者は、誰もいなかった。

◆◆◆

「まあ」

俺とリコが寝室に入ってくると、ルアラがいた。傍らのベッドにはイデアが静かに寝息を立てていた。

「イデア君がどうしてもリコ姉さまと一緒に寝ると言って聞かないものですから……」

聞けば、彼はリコを恋しがってかなりグズったのだそうだ。そろそろ3歳になろうとしているが、彼にはまだまだ母親が恋しいようだ。

リコはルアラに丁寧にお礼を言って、自分の部屋に下がらせた。彼女はイデアの顔を愛おしそうに撫でながら、小さな声で呟いた。

「いつまでも甘えん坊で……困りますわ。エリルのときは、ここまで甘えん坊ではありませんでしたのに……」

「いいや、男の子というのは、そんなものだよ」

「そうでしょうか」

「そうだよ。思いっきり甘えさせてやるといい。きっと強い子に育つ」

そんなことを言いながら俺は、前世のばあちゃんのことを思い出していた。男の子は甘えさせてやりなさい……というのは、ばあちゃんがよく、お袋に言っていた言葉だった。その言葉に間違いはないと信じているし、俺は自分の息子にそれを実践しようと思っているのだ。

リコはしばらくイデアの寝顔を見つめていたが、やがて俺の方を振り返り、小さな声で呟いた。

「私やリノスがこの子に愛情をかければ、それだけ優しい男性にな

るのでしょうか」

「ああ、そう思う。俺はエルザ様やファルコ師匠、エリルお嬢様…メイドのお姉さんたちから沢山の愛情を受けた。そして、かなり甘えさせてももらった。今俺があるのは、それがあったからだ」

「あの、エルフの姫も、ヘイズに愛情をかけてもらっていれば……」

「そのことだが、どうする気だ？　大丈夫か？」

「ええ、何とも言えませんが、もう一度、心を開いて話をしてみるつもりですわ」

「そうか。くれぐれも、無理だけはしないでくれ」

「わかりましたわ」

そう言ってリコは俺に抱きついて来た。

「実を言うと、明日のことが気になって、今夜は、眠れそうにないのですわ」

「うん？　俺の腕枕では、眠れなくなったのか？」

「そうではありませんけれども……」

「じゃあ、リコが熟睡できるように、俺も頑張るよ」

リコはまるで少女のような表情を浮かべながら、俺の胸に顔をうずめた。その彼女の髪の毛を、体を、俺は愛おしげに、ゆっくりと撫

でていった……。

◆　◆　◆

次の日、リコは俺を伴って、ミークの部屋に向かった。部屋に入った直後、ミークはリコに憎しみの表情を浮かべたが、俺の姿を見つけると、まるで獣のように襲いかかってきた。だが、俺には結界が張ってある。彼女は俺の結界に爪を立てながら言葉を絞り出した。

「男……男……そなた、妾を抱け。妾を抱くのじゃ……。そなたは確か、妾を気持ちよくさせてくれた男ではないか。もう一度、もう一度、妾を気持ちよくするのじゃ。気持ちよくするのじゃ」

「……お前を気持ちよくしたのは、いつだったかな？」

「早くするのじゃ！　早くするのじゃ！」

「俺の質問に答えたら、気持ちよくしてやる」

「ううう……。あのときじゃ。あのとき……ヘイズの部屋で……妾の頭に手を載せて……気持ちよく……ああ……」

「そのヘイズはどうなった？」

「ヘイズ……ヘイズ……」

「思い出してみろ」

「……首を絞めて……死んだ」

「誰が殺したんだ？」

「それは……それは……それは……」

「誰だ？」

「……！！　妾！？」

「馬乗りになって、ヘイズの首を全力で締めていた」

「なっ、あれは違う！　あれは……あれは……そうじゃ！　お前じゃ！　お前が妾に命じたのじゃ！　お前がヘイズを殺したのじゃ！」

「よーく思い出せ。ヘイズの首に縄をかけたのは誰だ？　誰がその縄を引っ張った？」

「ううう……うわぁぁぁぁぁぁ！！　ヘイズぅ！　ヘイズぅ！」

ミークが頭を抱えながら、髪を振り乱す。その背中をリコがギュッと抱きしめる。

「……キャッ！」

だが、ミークは叫びながらリコの腕を振りほどき、彼女は床に投げ出された。だがそれでも起き上がって再びミークを抱きしめるリコ。抱きしめては振りほどかれ、再び抱きしめるというのを繰り返すこと数回。ミークの体力が尽きたのか、彼女はガックリと膝をついて四つん這いに突っ伏してしまった。

そんな彼女の背中をやさしくさすりながら、リコは息を切らせなが

ら声をかけていく。

「もう……ヘイズは……死んだのですわ。もう……怖いものはないのですわ。もう……自分を押し殺すことはないのですわ。あなたの……お父上様や……お母上様の許に……帰れるのです。覚えているでしょ？　あなたを愛してくれた、心から愛してくれた、お父上様やお母上様……乳母もいたかしら？　あなたの家来たち……そこに、帰るのです。帰ってもいいのですよ……」

「ううう……うわあああああ……」

「怖かったですわね。怖かったですわね。でも、偉かった。あなたは偉かったですわ。自分の命を守るために、ヘイズの望む通りの女性を演じたのですわ。そして、見事にヘイズを騙しきったのですわ。悲しい夜もあったでしょ。それこそ、気も狂わんばかりに苦しい夜もあったでしょう。でも、ヘイズは死にました。もう、あんな怖い思いをすることはないのです。ないのですよ……」

「うっ……うっ……うっ……うわあああああ～～。父上ぇ……父上様ぁ……」

そう言ってミークはさめざめと泣き始めた。リコは彼女の体を、泣き止むまで抱きしめ続けた。

「帰りましょう、ミークさん。あなたの大好きなお父上様の許に、帰りましょう」

どのくらいの時間を抱きしめ続けていただろうか。ようやく落ち着いてきたミークに、リコはやさしく声をかけた。その声に、ミークは無言のまま、ゆっくりと頷いた……。

第三百九十四話　急ぐべし

リコとの話し合いから数日、ミークの様子は激変していた。その変化の様子を誰よりも驚いていたのが、他ならぬおひいさまだった。

「……まるで、別人じゃ」

「ええ。俺もそう思います」

今、俺たちの目の前にいるミークは、帝都の屋敷のダイニングで、子供たちとおままごとをしている最中なのだ。数日前までの、男を求めて取り乱していたミークはどこにもいない、ただ朗らかに微笑みながら、娘たちとの遊びに興じる少女がそこにいた。

あの日以来、ミークはこの屋敷に寝泊まりしていた。まだ数日しか経っていないが、すでに子供たちとは打ち解け、今ではいいお姉さんになっている。そして夜は必ずリコが彼女と一緒に過ごしながら、他愛のない話に花を咲かせているのだと言う。

そんな状況であるために、ここ数日は俺の傍にはシディーがいることが多くなった。メイもそれなりにいてくれるし、二人っきりになれば、それはそれは俺に愛情を注いでくれるのだが、シディーはミークのことについて俺に話をしたいらしい。二人っきりになると、決まってその話を持ち出してくる。特に昨日の夜などは、ベッドの上で目を爛爛と輝かせて俺の両手を握りながら、こんなことを話していたのだ。

「ミーク姫は一刻も早くエルフ王の許に帰した方がいいです」

「まだ早くないか？　もう少し様子を見た方がいいんじゃないか？」

「いえ、おそらくエルフ王は首を長くして娘の帰りを待っているはずです。それに、ミーク姫も父親のことを思い出したところです。時間をかければかけるほど、父親への思いは希薄になっていきます。今がそのいい機会だと思います」

「う～ん」

「一度、おひいさまに相談されてはいかがでしょうか？」

「そうだな。一度、相談してみるか」

「きっと、おひいさまもすぐに帰せと言われると思います」

「直感的にそう思うのか？」

俺の言葉に、シディーはゆっくりと頷く。

「わかった。明日、おひいさまの許に行ってくるよ」

「是非、そうなさいませ。そして、姫をエルフの里にお連れするときは、是非私を一緒にお連れください」

「シディーが？　何故だ？」

「何となく……です。何となく、私も一緒に行った方がいいと思うのです」

そんなことを言いながら、シディーは俺から視線を外した。

「シディー。何か隠しているな？」

「いいえ、何も」

「本当に？」

「……はい」

変な間が開いたなとは思ったが、俺は敢えてその点について話をすることはなく、いつものようにベッドに横になった。

そんなことがあっての今日、俺はおひいさまの許に行き、ミークの様子を報告したのだった。彼女はすぐさま屋敷にやって来た。そして、その様子を見ながら、誰に言うともなく小さな声で呟いた。

「これならば、エルフ王も怒るまい」

「おひいさま、その話ですが」

「なんじゃえ？」

「あのミーク姫ですが、なるべく早めにエルフ王の許に帰した方がいいのでしょうか？」

俺の問いかけに、おひいさまは目を閉じて考えていたが、やがてゆっくりと目を開いて俺に視線を向けた。

「そうじゃな。早いに越したことはないやもしれぬな」

「では……」

「そなた、頼めるか？　エルフの里へは、断崖絶壁の氷山を登らねばならぬ上、凄まじい寒さに耐えねばならぬ。しかも、里の周辺の山々には折に触れてかなり強い風が吹いておる。相当の腕を持つ者をもってしても、そこにたどり着くのはほぼ、不可能じゃ。じゃが、そなたのスキルであれば、それらの条件でも問題なく里にたどり着くことはできよう。すまぬが、妾の頼み、聞いてやってはくれまいか？」

「ご主人、吾輩からもお願いするでありますー」

いつの間にかゴンが俺たちの傍に来ていた。彼は白狐の姿に戻っていた。

「これはおひいさまとエルフ王の関係だけではないのでありますー。我ら狐族とエルフとの関係が回復すれば、我々は多くの人々に功徳を与えることができるのでありますー。その結果、巷に住む人々にも多くの恩恵が受けられるのでありますー。そのことを汲み取っていただいて、是非、お願いしたいのでありますー」

「うーん。いや、彼女をエルフ王の許に送り届けるのは吝かではありませんが、問題はどうやってそこに行くかですね……。前向きには考えたいと思いますが、少し、考えさせてください」

「ふむ。妾とて、そなたに無理を頼んでおるのは重々承知じゃ。ゆっくり考えて……と言いたいところじゃが、あまり時間はかけられぬ。すまぬが、早めに返答をくりゃれ」

「承知しました」

「……」

「……」

しばらく沈黙の時間が続く。何か他に言いたいことがあるのかと訝る俺に、ゴンが申し訳なさそうに、小さな声で俺に呟く。

「ご主人……その……甘味を……」

「ああ、これは失礼しました。気がつきませんで。娘たちのオヤツにケーキを焼くところです。しばらく時間がかかりますが……。あ、お供えしておきますね？」

「うむ。苦しゅうない。あと、おはぎも」

「承知しました。今日中に拵えてお供えしておきます」

「うむ」

おひいさまは大きく頷く。そして、ゴンに何か二言三言の言葉を与えて、そのまま屋敷を後にしていった。

「……ふぅ～。相変わらず言うことが無茶苦茶でありますなー。狐使いが荒くて、たまったものではないでありますー」

ゴンが人化しながらそんなことを呟いている。聞けば、エルフの里へはゴンも同行するようにと命令されたらしい。その上、俺に新し

いスイーツを開発するように伝えておけとも言われたのだそうだ。
俺はその話を聞きながら、苦笑いを浮かべるしかなかった。

その後、俺はリコたちとミーク姫のことについて話し合った。結論はすぐに出て、満場一致で、彼女をエルフの里に帰そうということになった。ただ問題はその道中で、どうやらその行程はかなり厳しいもののようだった。それについては、メイとシディーが知っているということだったので、二人と話を詰めることにして、その場はお開きになった。

「エルフの里にたどり着くまでには、二つの山を越えねばなりません」

メイと二人で風呂に入りながら俺は、エルフの里への行程を聞く。里のあるフィルコン山脈は、標高が８０００メートルを超えるらしく、そこにはほぼ、エルフ以外の生命は存在しないのだという。ただ、そこに至るまでには、標高６０００メートル程度のムロック山脈を越え、その後、マスピス山脈を越える必要があるのだそうだ。このマスピス山脈は、標高が３０００メートル程度らしいのだが、氷でできた山らしく、そこを超えるのには相当な困難が伴う。そこでは火が使えないらしく、暖を取ることができない。多くの冒険者がそこで命を落としていて、言わば死の領域と言われている場所なのだそうだ。

「そこまでたどり着けば、ご主人様の転移結界を使いながら移動することはできますが、問題は、その前にあるムロック山脈です。イリモちゃんの翼で超えることはできないと思います」

「ジェネハたちでも難しいかな？」

「おそらくは」

「う～ん。だったら、頑張って山を登るしかないかな」

「そうですね……。とはいえ、最後のフィルコン山脈も……」

「登ることを考えれば、かなりの労力を使う……か」

「一度、シディーちゃんに相談されてはいかがでしょうか？」

「シディーに？」

「はい。シディーちゃんであれば、もしかすると、山を越える方法を思いつくかもしれません」

「……そうだな。一度、シディーに聞いてみようか。早い方がいいな」

風呂から上がった俺は、寝室に向かう。シディーはメイが連れて来るということで、一人で待っていると、ほどなくしてメイがシディーを連れて部屋に入ってきた。

「ああ、シディーすまないな。ピアトリスは……ピアは大丈夫か？ちょっと三人で……」

「イヤです」

シディーがジトっとした目をしながら、俺を睨みつける。予想外の振る舞いに、一瞬キョトンとなる。

「三人は……イヤです」

「どうしてだ？　三人で一緒に……」

「絶対にイヤです！　メイちゃんと一緒なら猶更です！」

シディーの目にみるみる涙が溜まっていく。そして彼女は声を殺して泣き出してしまった。

「す……すまん、シディー。気に障ったのなら、謝るよ……」

「ひどい……ひどいですリノス様……。私が自分の体に自信がないのを知っていて……。メイちゃんと一緒にって……。メイちゃんと私じゃ、全然違う……」

「あの……シディーちゃん、そうじゃ、ないのよ」

メイが戸惑いながら、やさしくシディーに声をかける。

「ご主人様は、エルフの里に行くための方法を三人で考えたいと思っていらっしゃいます。たぶん、シディーちゃんの思っていることとは……違うんじゃないか……と……」

「え？」

ガバッと顔を上げるシディー。その顔が、みるみる真っ赤になっていった……。

第三百九十五話　色んなところで、色んな人たちが

「……姫様、今何と言われた？　儂も年を取りすぎたのか、ちょっと、お言葉の意味がよく呑み込めませなんだ」

口調は穏やかだが、その老人の顔には憤怒の表情がありありと浮かび上がっていた。その様子を、引きつった笑顔で眺めているのは、リノスの妻の一人であるコンシディーだった。

彼女の目の前には、アガルタの都で、ニザ公国が派遣したドワーフたちの長老格であるナンブツが座っていた。そして、その後ろには、彼と同じ長老格である二人の老ドワーフ、リンショックとサンカックが座っており、彼らもまた、ナンブツと同じように憤怒の表情を浮かべながら、コンシディーを睨みつけていた。

「だから、エクスカリバーの製造方法を……」

「それは前に説明したじゃろう！」

突然、声を荒げながら立ち上がったのは、リンショックだ。彼はハアハアと肩で息をしながら、さらに言葉を続ける。

「あれはエルフしか作れんものじゃ。儂らがどうあがいても作れる代物ではないんじゃ！」

「じゃあ聞くけれど、リンショックはエクスカリバーを見たことがあるのかしら？」

「それは……」

「あるの？　ないの？　どっち？」

「……ないぞい」

「え？　聞こえないわ？　何ですって？」

「見たことは、ないぞい！」

その言葉を聞いてシディーはニッコリと笑みを浮かべる。

「見たこともないってことは、その切れ味なんかも、当然わからないわよね？」

「姫様は何が言いたいんじゃ！」

「ドワーフたる者、鍛冶師であるならば、必ずその効果を自身の目にて把握すべし。これは、幼い頃から繰り返し教えられてきたことだし、あなたたちも、若い人々に口を酸っぱくして言っていることだと思うけれど、違うかしら？」

「……」

「で、あれば、その世界最強の剣とされるエクスカリバーの切れ味を、確認しないといけないわよね？」

「それを何で、儂らが……」

「エクスカリバーの切れ味を超える剣くらいなら、儂ら三人が全力

でかかれば、すぐに作って見せるって言っていたのは、誰だったかしら？」

シディーのその声に、老ドワーフたちは互いに顔を見合わせる。

「そ、それは、その場の雰囲気というものでじゃな……」

「あれ？　鍛冶師が一旦できると言ったものを、できないって言うのかしら？」

「うっ……それは……」

「じゃあ、行ってくれるわよね？」

「ううう……」

「姫様、儂はもう年じゃ。それに神経痛が……」

「儂も膝を悪くしてのう……」

「大丈夫。夜はここに帰って来て寝るといいのよ。あなたたちには、ムロック山脈まで旅をしてもらえればいいのよ。マスピス山脈とフィルコン山脈については、こちらで何とかするわ。……行ってもらえるわよね？」

シディーの言葉に、老ドワーフたちはゆっくりと頭を下げた。

前日の夜、リノスとメイと話し合ったシディーは、エルフの里に行くための問題が二つあることを瞬時に悟った。一つは言うまでもなく、エルフの里にたどり着くために越えなければならない山々たち

の問題、そして、もう一つが、その山脈まで至る道のりだった。

言うまでもなく、リノスを始めとして、バーサーム家の人々は基本的に仕事を持っているために忙しい。家族の誰かが欠けてしまってもいけない状況なのだ。当初は、リノスが転移結界を張りながら旅をすると言い張ったが、冷静に考えれば考えるほど、それは無理な相談だった。そこでシディーが考えついたのが、アガルタの老ドワーフたちを活用するという案だった。

この三人は、言わばドワーフの鼻つまみ者だった。過去の栄光にしがみついたままで自身を成長させようとはせず、若いドワーフたちに小言ばかり言うために、若手たちから煙たがられている者たちだった。そうした話はすでにシディーの耳に入っており、彼女はこの旅が彼らが自身を見つめ直すいい機会となるだろうと直感したこともあって、リノスの代わりに旅に出ることを提案したのだった。

しかもこの三人は、他のドワーフとは違い、魔力量が多かった。それは即ち、リノスやポーセハイたちが彼らの魔力を探知しやすいということになる。そのため、夜は、リノスもしくはポーセハイの誰かが彼らを迎えに行き、ここアガルタに転移するということになったのだった。

この案も当初は、様子を見るだけでいいというシディーの意見だったのに対して、さすがにそれは厳しいだろうというリノスとメイの意見に、半ば折れる形で渋々承知したものだった。彼らには一応、リノスの結界を張ってもらいはするものの、ほとんど自力で山までたどり着かねばならず、夜は家に帰れるとは言っても、その過酷さは察して余りあるものだった。シディー自身はこの機会を利用して、本気でこの三人の老人の根性を根っこから叩き直す気持ちでいたのだ。

一方でリノス自身は、屋敷の庭で一人、ブツブツと何かを呟きながら手に魔力を込めていた。

「はっ！」

彼の声と共に、目の前に巨大な氷山が現れる。それを叩いたり触ったりしながら、彼は丹念に調べている。

「こんなもんかな。……それじゃ」

彼は再び目を閉じて、手に魔力を集中させる。すると掌の上に黄色く輝く小さな球体が現れた。それはゆっくりと彼の手から離れ、先程作った氷山にゆっくりと向かって行く。そして、それはゆっくりと氷の中を進んでいく。

「よし。いい感じだ。そのまま……って、ありゃ？　消えちまった……」

彼はさも残念そうに、氷山に空いた穴を見つめる。その後再び彼は目を閉じて、先程と同じように黄色い球を出し、それを氷山に埋め込むという作業を繰り返していった。

シディーの出した案の一つは、氷山にトンネルを掘るというものだった。土魔法でムロック山脈にトンネルを拵えてそのままマスピス山脈に到達する。問題はそこからで、氷に覆われた山脈にいかにトンネルを掘るのかが大きな課題だった。リノスは、自身の持つ火魔法のスキルで、どうやったら効果的にトンネルを掘ることができるのかを日々、試行錯誤していたのだ。

当初は結界を張って山を登ることを考えもしたのだが、３０００メートル級の山を登るのは時間がかかりすぎてしまう。そこで、効率的に山を越えることを考えたところ、思い当たったのがこの火魔法でトンネルを掘るというものだった。

「魔力の調整が難しいな。あまり魔力を込め過ぎると、周囲の氷までもが解けてしまうしな……。逆に、全力を出してマスピス山脈自体を蒸発させてしまうというのも……。いやいや、それは逆にもっとえらいことが起きそうな気がするしな……。それにフィルコン山脈のこともよくわからないからな……こりゃどうしたらいいものか」

そんなことをブツブツと呟きながら、リノスは試行錯誤を繰り返していく。

「とりあえず、今日のこの実験をメイとシディーに話しておくか」

そう言って彼は転移結界を発動させて、帝都の屋敷に帰っていった。

その頃、おひいさまの屋敷では、一つの問題が持ち上がっていた。

「ええい！　黙りゃ、黙りゃ！」

「いいえ、黙りません。黙りませんぞ、おひいさま」

「お二人とも、もうそのくらいで……」

おひいさまの周囲には、その怒りを表す狐火が数個現れており、彼女自身も怒りの表情を浮かべている。その眼前には、鋭い視線を投

げつけている老狐――サンディーユの姿があった。二人はものすごい形相で睨み合い、その間を、女官である千枝、左枝がオロオロとしながら宥めている。

「もう一度申し上げます」

「もうよいと申すに！」

「いいえ、こればかりは聞いていただかねばなりません！　エルフの姫を、エルフ王の許に帰してはなりません！　断じてなりません！」

「エルフの姫を帰さねば、奴らと我らの関係が戻らぬではないか！　それをわからぬサンディーユではあるまい！」

「それは拙者も承知しております！　しかし、エルフの姫を帰してはなりません！　しかも、リノス殿が連れて行かれる……それもいけません！」

「サンディーユ、よい加減にせぬか！」

「いいえ、いけません。お二人を里に行かせてはなりません。行けばエルフの姫は確実に死にます。そして……リノス殿が行けば、確実にエルフの里は滅びます。ですから、今一度、ご再考を願い上げます！」

そう言ってサンディーユは深々と平伏した。その様子を、おひいさまは、ワナワナと震えながら、老狐を睨み続けた。

第三百九十六話　お待ちなせぇ

今、俺の目の前には、言葉では形容できないような光景が繰り広げられている。さて、どんな言葉を発すればよいものか……。俺は悩みながらも、その光景を眺め続ける。

帝都の屋敷のダイニング。目の前には、おひいさまの眷属であるサンディーユが座っている。見た目は口髭を蓄えた老狐だが、何故か袴をはき、袷のような衣服を身に着けている。どうやらこれが彼らの正装のようだが、その様子は珍奇と言おうか、冗談が過ぎると言おうか……。まさしく「ご家老」と呼ぶにふさわしい恰好ではある。

その彼の背中からひょっこり顔を出しているのは、娘のアリリアだ。彼女はサンディーユの背中越しに彼の髭を引っ張っている。だが、彼は全く反応しない。痛くはないのだろうかという俺の心配をよそに、じっと俺を睨み続けている。その目からは、この娘を何とかしろという意図は感じられない。

さらに、老狐の傍らには、エリルが控えていて、彼女は「これ、差し上げますわっ。どうぞ」と言って、自分のオヤツである饅頭を差し出している。テーブルの上にはすでにお茶とお饅頭が出ているのだが、それでも敢えてエリルは自分のお饅頭をあげようとしている。きっとサンディーユがお饅頭を気に入っていないと思っているのだろう。それならば、自分の持っている違う種類のお饅頭をあげようとしているのだろう。何ていいお姉さんなのだ。我が娘ながらいい娘に育ってくれたものだ。てゆうか、ウチの娘が自分のオヤツを抜いてまであげようとしているお饅頭になぜ反応しないのか。ちょっと人気のないところでじっくりと話し合いをしたいという気持ちも

ないわけじゃないが、今は黙っておくことにする。

さらに視線を落せば、息子のイデアが彼の袴をクイクイと引っ張っている。どうやら初めて見る者に興味があるらしい。それに、この老狐と遊びたいらしい。目がそう訴えている気がする。俺の大事な息子が、遊ぼうと誘っているのに、なぜこの老狐は無視をするのか。そんなに息子のことが嫌いだろうか。かなりかわいい顔をしていると思うのだが。いや、俺とリコの子供なのだ。可愛くないはずはないのだ。そんなエンジェルボーイのお誘いを無視するとは、ちょっと懲らしめてやらねばならない。さて、どうしてくれようか……。

「何をしているのです！」

突然、ダイニングに大声が響き渡る。見ると、リコが鬼のような顔をして立っていた。そのあまりの剣幕にエリルはお饅頭を握り締めたまま固まってしまい、アリリアは逃走を図っている。イデアはキョトンとした表情を浮かべながら、大好きなママの顔を見つめている。

「アリリア、いたずらをしてはいけませんわっ！　エリル、あなたはお姉ちゃんなのですから、妹たちがいたずらをしているのならば、止めなければいけませんわっ！」

「ごっ……ごめんなさい……」

「イデア、こっちにいらっしゃい」

そう言ってリコは息子を抱っこする。彼は母親の胸に顔をうずめて、幸せそうな顔でスリスリをしている。

「エリル、あなたは向こうへ行ってらっしゃい」

「はい……」

悲しそうな表情を浮かべながらエリルは離れに向かう。そんな彼女を俺は呼び止めた。

「エリル。お饅頭をあげようとしてくれて、ありがとうね。いたずらをしないで、偉かったね」

「……」

彼女は立ち止まってじっと俺を見ていたが、やがて、パタパタと小走りに離れに向かって行った。俺はその後姿を見ながら、彼女がサンディーユにオヤツをあげようとしていたこと、いたずらをしなかったことをリコに語って聞かせた。彼女は大きなため息をつきながら、エリルが出ていった勝手口の方向をしばらく見つめていた。

「……にぎやかな、ご家庭じゃな」

「すみません。娘たちが色々と悪さをしまして」

「リノス、どうしてあなたも止めなかったのです？　お客様に対して、失礼ですわっ」

「……ごめんなさい」

「いや、奥方殿、よろしいのじゃ。儂が押しかけてきたのじゃ。気にされることはない」

「申し訳ございません」

「さて、話の続きじゃ。リノス殿、ということで、エルフの里に行くのは少し待ってもらいたいのじゃ」

「その話ですが、サンディーユさん。どうしてミーク姫が行くと彼女は殺されるのですか？　それに、俺がエルフの里を滅ぼすというのも……よくわかりませんが……」

俺がエルフの里を滅ぼすという言葉に、リコが慄いている。俺はチラリと彼女に視線を向けて、大丈夫だという意思を見せて、再び老狐と向かい合う。

「道理じゃ。まず、儂が調べたところによると、エルフ王の許には、もう一人の姫がいる。つまり、その姫が次の女王になる予定なのじゃ」

「……ということは？」

「そこにミーク姫が帰ると……」

「後継者争いが起こる可能性がありますわね」

「その通りじゃ、奥方殿」

「ちょっと待ってください。次期女王に決定しているのでしょ？　それならば後継争いなど起こらないのではないですか？　しかも、ミーク姫が里を離れてから数百年も経っていると聞きました。既に廃嫡されているのではないですか？」

俺のその言葉に、サンディーユは力なく首を振る。

「いや、エルフ王は、長子が継ぐと決まっておるのじゃ。ミーク姫が戻られると、おそらく彼女が次期女王になる」

「そんな……」

「リノス、エルフであれ人間であれ、王族というものは、利用できるものは利用するという考えを持った者が多くいますわ。きっと、ミーク姫にその気がなくとも、彼女を利用しようとする者は必ず出てきますわ」

「う～ん」

俺は腕組みをして、天を仰ぎながら考える。

「では、ミーク姫は次期王にはならないと宣言してから会いに行くというのはどうです？」

「リノス、それはダメですわ。次期王を決めるのはエルフ王です。それに、ミークさんの人生です。勝手に私たちが決めてはいけませんわ」

「儂もそう思う。つまり、姫を連れて行けば、後継争いが起こる可能性……儂はかなり高い確率で起こると睨んでおる」

「なるほど……。あと、姫を連れて行けば、俺がエルフを滅ぼすという……のは？」

「それじゃ。おそらく、リノス殿はエルフの里に入ると、間違いな

く襲われる。そうなった場合、むざむざと自身の首をやるリノス殿ではあるまい。結果、己の身を守るためにそのスキルを使うことになるじゃろう」

「いや、そうはならないと思いますよ？　襲われそうになったら、転移結界で帰って来ますし」

「いや、おそらくエルフは、リノス殿のスキルへの対策を取るであろう。上手く逃げ出せたとしても、彼らは確実に追っ手を差し向けるじゃろう」

「え？　どうして？」

「エルフの里は誰にも侵すべからずの地……そう考えておる者が多いのじゃ。ここ数百年の間、我らも何度もエルフの里に使者を派遣したが、それらの者たちの全てが途中で謎の死を遂げておる。ヤツらはかなり優秀な暗殺者を抱えておるようなのじゃ」

「でも、俺には結界がありますが……」

「それはリノス殿が生きておればの話じゃろう。奴らは、そなたの孫子（まごこ）の代まで狙うじゃろう。何と言っても、寿命が違いすぎるでな」

「……」

「リノス殿がどう考えておるかは、儂にはわからぬ。じゃが、折に触れて襲ってくる暗殺の類を耐え続けねばならぬのじゃ。ましてやそれが、奥方を始め、家族にも及ぶとなれば、なかなか耐えられるものではない。そうなった場合……」

「エルフを根絶やしにすることを選択する……か」

そこまで言うと、不意にリコが俺の手を握ってきた。相変わらず柔らかい手だ。

「サンディーユさん、夫に限ってそれはありませんわ。ただ……エルフの里に行くについては、色々と考えることが多そうですわね。……このお話、一旦預からせていただいてよろしくて？　私たちも、一度、家族で話し合ってみますわ」

「そうしていただけると、幸いじゃ。すまぬ。こちらから願っておいて、今更このような話をするというのは、儂としても気が引けてならぬ……」

「そのようにお気遣い下さらないで……。いつもお世話になっているのですもの。このくらいは当然ですわ」

サンディーユはリコの言葉に大きく頷き、そして、ゆっくりと俺に視線を向けた。

「リノス殿は、よい嫁御を持たれたな」

そう言って彼は、寂しそうに笑った……。

第三百九十七話　カタオカナオタロウ

その夜、子供たちが寝静まった頃に、帝都の屋敷のダイニングでは家族会議が行われた。そこには、ミークの姿もあった。

俺はサンディーユからの話を包み隠さずに話す。その話を聞いた妻たちは皆、黙ってしまった。

「……意外に大丈夫なんじゃないですか？」

沈黙を破ったのはシディーだ。彼女は人差し指を顎に当てた、いつものような推理をする格好で天を仰いでいる。その様子に、皆の視線が彼女に集まる。

「シディー。直感が働いたのか？」

「はい。根拠はありませんけれども、サンディーユさんの懸念は杞憂に終わる気がします」

「とはいえ、リノス一人を行かせるのは……」

リコが心配そうな表情で俺を見ている。

「リコ様、大丈夫です。私が一緒に行きます。当初からそのつもりでしたし」

「ピアトリスはどうしますの？」

「その件ですが……」

シディーはエルフの里に至るまでの行程を、丁寧に説明した。老ドワーフ三名に旅をさせると聞いて、リコはかなり恐縮していたが、彼らの体調管理はメイが責任をもって行うと言ったことから、その案は受け入れられた。

最後に、ミークに自身の思いを聞いてみたが、彼女はやはり、エルフの里に帰りたいという希望を明らかにした。俺たちは彼女の意向を尊重することを確認して、まずは取りあえず、行くだけ行ってみるという結論を出して、その日の会議は一旦終わることにした。解散になった途端、マトカルとソレイユはそくさと子供と一緒に部屋に戻っていった。まだ赤ん坊なのに、二人の子供はまったく泣かずにスヤスヤと眠っていてくれていた。二人ともいい子になるに違いない。

その後、俺は風呂に入りながら、これからのことを考える。ただ、考えてみても、何をどうしていいのかが全くわからない。これは考えても無駄だなと思っていると、誰かが風呂に入ってきた。シディーだ。

彼女は俺の隣に座ってテキパキと洗髪をし始めた。彼女の洗髪時間は驚くほどに短い。その理由は、シャンプーとリンスの効果が抜群だからだ。さっと髪を洗うだけで汚れが落ちるし、リンスなどもスッと付けてお湯で洗い流せばいいらしい。これだけ素晴らしいものなのだから、売ればさぞや儲かると思いきや、これはシディー専用で、他の人には使えないらしい。かなりの剛毛でくせ毛の強い人に効果があるらしく、普通の人が使うと確実にハゲるらしい。そのために、俺もこのシャンプーを使ったことは一度もない。

シディーが髪を洗っているところに、俺が背中を流してやる。その後、二人で体を洗いっこして、湯舟に入る。

いつもは恥ずかしそうに湯舟に体を沈めているのだが、今日はなんだか様子がおかしい。そう言えば、体を洗ってやるときも、いつもは恥ずかしそうにしているのだが、今日はそれをあまり感じなかった。なにやら、うれしそうだ。

「何かいいことがあったのかな？」

「えっ！？　いや……なにも」

「何か、企んでいるな？」

「……何も、ありま、せん」

彼女の返答がちょっとツボにはまってしまった。俺は思わずクスリと笑みを漏らす。

「シディーはまるで、片岡直太郎みたいだな」

「カタオカナオタロウ？　ど……どういう意味でしょう？」

「かくしごとが下手って意味だよ。他人の嘘を見抜くのは上手いけれど、自分の気持ちを隠すのはヘタクソだな。誰が見ても、いつもと様子が全然違う。何かあったのかなって思うよ」

「ううう……」

彼女は顔を真っ赤にしながら、顔の半分まで湯につかっている。ブ

クブクと泡を立てているその姿が、何だか可愛らしい。

「で、なにがあった？」

「秘密です」

「どうしてだい？　何かうしろめたいことでもあるのか？」

「そ……そんなことは……」

「言いなさい」

「……」

「じゃあ、組み敷くよ？」

「組み敷く？」

「ああ。このまま寝室まで連れて行って、ベッドにシディーの体を放り投げて、乱暴に襲うよ？　シディーのことなんか全く意に介せずに、俺の欲望を満たすだけに集中するんだ。シディーの顔なんて一切見ないよ？」

「そんなの……イヤです！」

「じゃあ言いなさい」

「ううう……」

「組み敷こうか？」

俺はゆっくりとシディーの腕を取る。すると彼女は突然立ち上がる。幼い体が丸見えだ。

「こ……公国に帰ります」

「え？」

「優しくしてくれないのなら、ピアを連れて公国に帰ります。乱暴にされるのは、イヤです！」

シディーの目に涙が溜まっている。そしてついに彼女は泣き出してしまった。

「う……ゴメン。ごめんなさい。大丈夫、大丈夫だ。ちゃんと優しくします。いつものように、いや、いつも以上に優しくします」

「……本当に？」

「本当に」

「……さっきは本気で私に乱暴しようとしていましたね？」

「え？　な？　どうして？」

「リノス様は嘘を言われるときは、声が上ずります。先ほどは、声が低かった……。半分は冗談でも、半分は私に乱暴しようとしていましたね？　私を押さえつけて、無理やりに……」

「そんなことはない。断じてそんなことはない。いや、正直言うと、

そうしたいという思いがないと言えば嘘になる。そりゃ願望はあるさ。でも、シディーが嫌がることはしたくない。それだけはしない。俺の目を見てくれ、目を」

俺の目をじっと見ていたシディーが、ゆっくりと頷いている。どうやらわかってくれたみたいだ。

「ただ、何があったのかは教えてくれ。気になってしまう。シディーのことは信頼しているし、悪事を働くような人ではないと思っているけれど、やはり……な？」

そう言って俺は立ち上がって、シディーをやさしく抱きしめる。彼女は顔を真っ赤にしたまま、ゆっくりと湯舟の中に体を沈ませた。

「……怒りませんか？」

「え？」

「怒らないって、約束してください」

「大丈夫です、怒りません」

「クロスオーバーの鍵が……出来上がったのです」

「は？」

聞けば以前、シディーが勘違いから開発に至った、どんな扉でも開けてしまう鍵の開発に成功したらしい。作ったのは、シディーの兄のガルトーで、彼はそれこそ、ドワーフ族の技術の粋を結集してその鍵を作り上げたらしい。

クロスオーバーの鍵は、言ってみれば形状記憶の機能を付与した鍵で、鍵穴の形状に自由に形を変えられるものなのだそうだ。金庫のようにダイヤル式のもので、複雑な形状の者はどうするのだという疑問もあるが、そもそもこの世界にダイヤル式の金庫などは存在せず、どれだけ複雑な形の鍵を作るのかがその技術力の高さを図る基準になっている。そう考えると、差し込み式の鍵で、自由に形状を変えられるものはある意味、とんでもない代物を作り出してしまったのかもしれない。

「ところで、その鍵、一体何に使うつもりだ？」

「……エルフ王家の宝物庫を覗こうと」

「はあ？」

聞けば、エルフの里には、世界最高の切れ味を誇ると言われるエクスカリバーが秘蔵されているのだという。シディーはどうしてもその剣が見たい。その切れ味を見たいのだという。

「見せてくれと言って見せてくれる相手ではなさそうですし……それならば、と……」

「いやいや、そんなことしたら、さらに関係がややこしくなりますがな」

「……そうですよね。ですから、誰にも言わずに一人でやろうと」

「そもそも何でエクスカリバーにそんなにこだわるんだ？」

「作りたいからです」

「え？　どうして？」

「リノス様がお望みだからです」

「俺が？」

「以前、メインティア王様に肖像画を描いていただいたときに、エクスカリバーと……。さすがに手に入れるのは難しいので、それならば作ろうと……。でも、実物を見ないことには作れませんし……ですから……」

「フフ……ハッハッハッハ！　そうか、エクスカリバーな！　なるほど、そう取ったか！」

俺は腹を抱えて爆笑する。そんな様子をシディーはちょっと怖い目で睨みつけている。

「シディーはかわいいな」

「え？」

「大丈夫だ。エクスカリバーは作らなくていい。その気持ちだけで十分だよ」

「そんな……」

「別に最強の剣は必要ない。いや、必要ない世の中にしていけばいいんだ。シディーが作ってくれたあの鎧も素晴らしいが、できるだ

け鎧を着なくてもいい世の中にしていけばいい。俺はそう思っているんだ」

「は……はい……」

「ただ、そのクロスオーバーの鍵は、使い方を間違うと多くの人が不幸せになる可能性がある。だからシディー。その鍵は厳重に管理してくれ」

「承知しました」

「さあ、そろそろ上がろうか。今日は特別に、ここからお姫様抱っこで寝室まで運んでやろう」

「え？　そんな……」

「イヤか？」

「……お願いします」

顔を真っ赤にしながら項垂れるシディーは、本当にかわいらしかった。その夜、俺はいつも以上にシディーに優しく接した……。

第三百九十八話　退職希望

あれから三ヶ月が経った。旅に出た三名のドワーフたちは、順調にその行程を進んでいる。あとひと月もあれば、目的地に到着するようだ。

彼らの管理はシディーがかなり厳密に行っている。この三人は目を離すと基本的にサボる。最初の頃は、二日酔いと称して一週間、宿に泊ったままそこから動かなかったほどだ。そんな彼らを上手に叱咤激励し、時に脅したりしながら尻を叩いている。お蔭で彼らのペースも上がり、今では予定よりも早く目的地に着きそうなのだ。

彼らの体のメンテナンスは、メイが行ってくれている。彼女自身、かなり忙しいと思っていたのだが、意外とそうでもないらしい。アガルタ大学の学長に就任してからというもの、現場作業からは遠ざかってしまい、少しくらいなら時間の融通が利くらしい。夕方、ドワーフたちが帰ってくると、メイが診察を行う。そして、彼らの愚痴を聞きながらシップを貼ったり、薬を付けたりしてやる。大体時間にして３０分もあれば事足りるのだが、メイのあの笑顔とスタイルの良さで、ドワーフたちはメロメロになっている。ヤツらがメイのストーカーにならないかが心配だが、シディーがちゃんと見張ってくれているので、その点は安心している。

「あともう一息ですね。頑張ってくださいね」

「おおメイちゃん、任せておけい！　儂らにかかれば、あと一日くらいは短く出来そうじゃぞい！」

「それは素晴らしいですね！　期待しています！　頑張ってください」

そんなやり取りをしながら、ドワーフたちは自室へと帰っていく。

「メイ、あまり無理をしなくていいぞ」

寝室でまったりとしながら、俺はメイを労う。だが彼女はゆっくりと首を振る。

「いいえ。あの方々を診察していると、何だか初心に帰れそうな気がするのです」

「初心？」

「はい。薬師の見習いとして、父や母を手伝っていた頃のことを思い出すのです。あの頃は何もわからずただ、母の言うことを聞いていただけでしたけれど、ちゃんと手で患部を触って診察をして、どうすればこの人の痛みや苦しみを取り除くことができるのかを考えていました。ドワーフの皆さんとお話すると、そのときのことを思い出すのです」

そう言って彼女はゆっくりと体を起こして、ベッドの上で正座をする。

「ご主人様、お願いがあります」

月明かりに照らされたメイの真剣な表顔が、一糸まとわぬその体が、とてもきれいだ。

「何だい、メイ」

「アガルタ大学の学長の職を、辞めさせてください」

「理由を聞いてもいいかい？」

「やはり私は、直接患者と触れ合いたいのです。ですから、学長という重職は、他の優秀な方に譲って、私は一介の医師として働きたいと思うのです」

「そうか。……そうだな。その選択もアリかもしれないな。ただ……」

「何でしょうか？」

「アガルタ大学に通っている学生たちの大半は、メイに憧れて入ってきていると思うんだが……彼らの思いは、どうしようか？」

「それは……」

「それに、サンダンジから留学しているシン君のこともある。彼のことは……。まあ、ルームメイトに任せておけば大丈夫かな」

「……」

メイは正座をしたまま項垂れる。俺はゆっくりと息を吐き出しながら、再びメイに視線を向ける。

「今、メイは一つ上のステージに上がろうとしているんじゃないか

な」

「ステージ……ですか？」

「うん。今まではどちらかというと、目の前の患者を治癒することに集中していたと思うんだ。そのために知識を増やし、腕を磨いてきた。違うかな？」

「……はい」

「これからのメイには、メイのような薬師を、医者を増やしていく役割を担っていく段階に入ったと思うんだ。メイ一人だけでは限界があるだろう？　でも、メイのような腕のいい薬師がたくさんいたら、それだけ多くの人々を救えると思うんだけれど、どうだろう？」

「……はい」

「これまでメイが努力して身に付けてきた知識や技術を、若い研究者たちに伝えてもらえないだろうか？」

俺の言葉に、メイは深く頷く。

「……そうですね。元々は、そのために大学をお作りになったのですものね。……申し訳ありません。色々と考えすぎてしまって、本来のことを忘れてしまっていました」

「最近は忙しかったからな。すまんな。俺も何か対策を打つべきだった」

「そんな……勿体ない」

「ところでメイ、寒くないか？　裸のまま座っていては、寒いだろうに」

俺のその言葉に、メイはハッとした表情を浮かべ、やがて、恥ずかしそうにベッドに横になろうとした。

「あ、ごめんメイ、そのまま」

「え？」

「あと１０秒でいい。しばらくそのきれいな体を、見せていてくれないか？」

「……はい、喜んで。ご主人様がお気のすむまで、いつまでもこうしています」

「メイ……」

月明かりに照らされたメイの体は、本当に美しかった。結婚して、子供を産んでからも、メイのスタイルは変わらないままだ。これは、リコにもシディーにも言えることだが、俺の妻たちは、結婚や出産と言ったイベントがある度に美しくなっている気がする。何か俺に、そんな素敵なスキルが付いているのだろうかと思いつつ、俺は静かにメイを抱きしめ、そして、そのまま彼女をベッドに横たえた。

優しく彼女を抱きしめようとしたそのとき、逆に彼女から強く抱きしめられた。俺も、それに釣られるように腕に力を込めた。

実のところを言うとメイは、プレッシャーに押しつぶされそうにな

っていた。世間からは『聖女』や『大賢者』と呼ばれ、多くの人から尊敬を集めている。だが、彼女自身は自分をそんな風に思ったことは一度もなく、ただ一介の薬師であり医者でありたいという思いを強く持っていた。

果たして自分は、そんな大きな期待に応えられるだろうか。いや、応えられないかもしれない。そうなった場合、俺を含めた家族に迷惑がかかる。それになにより、娘のアリリアの傍にいてやれないのが、ずっと彼女の心に引っかかっていたようだ。

言うまでもなく、アリリアはソレイユに懐いている。それはそれはもう、ベッタリだ。他人から見たら、確実に二人が母娘であると言うだろう。メイはアリリアを可愛がるソレイユに感謝しながらも、もっと母親らしいことをしてやればよかったという後悔があるようだ。だが、俺の目からは、アリリアはメイをとても尊敬しているし、自慢の母親だと思っている。お転婆でいたずら好きだが、メイの言うことは絶対に聴く。だからちゃんと手を洗うし、歯も磨くし、好き嫌いを言わない。彼女は彼女なりに母親を尊敬しているのだ。

俺はメイの背中を撫でながら、そんな話を聞かせてやる。アリリアは仕事をしているメイが一番好きなのだ。彼女のことはソレイユを含め、全員でフォローするから心配いらない。そして、仕事についても気負わず、目の前の仕事を楽しめばいいと話した。

大学の学長……などと言う仕事は、なりたくてもなれない仕事だ。いくら学問を愛し、大学を愛していたとしても、周囲が認めてくれないとなれない職業だ。言わば「人から請われてなる仕事」なのだ。そうした、誰に出もなれない仕事に就くことができた幸運を喜びながら、楽しんで仕事をすればいいと言ったところ、彼女は俺の胸の中でさめざめと泣いた。メイの涙を見たのは、いつ以来だろうか。

その後、メイは激しく燃えた。相当にストレスが溜まっていたのか、不安やプレッシャーから解放されたためか、朝になって疲れを覚えるほどに、その夜のメイは凄かった。毎回……というのはちょっとしんどいが、たまになら、ああいうメイも悪くない。彼女の新たな一面を発見して、かなり得をした気分だ。

ちなみに、リコが産んだエリルも、アリリアと同様、マトカルにベッタリだが、リコはリコでそれは良いことだと考えている。どうしても母親と娘であれば甘えも出る。将来、ヒーデータ帝国の皇后となる女性に育てるためには、母親の手ではなく他の女性に教育してもらうのが一番だと言っている。さすがは皇帝の第一皇女は違うなと思ったが、リコはリコで厳しいこと言いながら、エリルを一番心配しているし、一番かわいいと思っている。俺はこれでいいと思っている。

そんなことをしている間に、あっという間にひと月が経ち、いよいよドワーフたちは目的地にすぐそこまでにたどり着いていた。さあ、いよいよ俺の出番だ。

第三百九十九話　山のあなあなあな（前書き）

コミックブースト様にて、『結界師への転生　第三話』コミカライズ版がアップされています（ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｇｅｎｔｏｓｈａ－ｃｏｍｉｃｓ．ｎｅｔ）。無料ですので、気が向かれたら是非、ご覧ください！

第三百九十九話　山のあなあなあな

雄大な山が広がっている。俺はその雄々しい姿を眺めながら、ゆっくりと息を吐いた。

俺は今、ムロック山脈の麓に来ていた。高い山とは聞いていたが、まさかこれほど雄大な山だと思わなかった。見ているだけで、何かのパワーを貰える……そんな気分が沸き起こるような山容だ。

そんな俺の傍には誰も居ない。たった一人でこんな大自然の中にいるのは、いつ以来だろう。実にのんびりした贅沢な時間だ。

そんな俺の目には何故か涙が光っている。……寂しい。マジで寂しい。早く家に帰りたい。

俺がこんなに弱気になっているのには訳がある。元々ここには、メイとシディーとゴンを連れてきた。言うまでもなく、このムロック山脈に俺の土魔法でトンネルを掘るためだ。

トンネルを掘るに際しては、どの方向でトンネルを掘り進めればいいのかを調査する必要があるため、この三人にそれをお願いしていたのだ。

三人は到着するとすぐに、景色に見とれている俺には見向きもせずに、山の調査を始めた。やれ、この山はナントカという石でできていそうだとか、地質的には……といった、俺の理解の範囲を超えた会話が繰り広げられる。ゴンなどは、その辺にある石ころを丹念に調べて、大昔に火山の爆発があったとかなかったとか、そんなこと

をブツブツと呟きながら歩き回っている。君はそんなキャラじゃなかったんじゃないのか？　いつものエロさはどこにいったのだ……。俺は一抹の寂しさを覚えてしまった。

そんなことをしているうちに、気が付くと俺の足元を、チョロチョロと走り回るヤツがいる。よく見ると、メイと契約している土精霊のノームだ。彼は走り回りながら、メイに何やら大声で指示を出している。そんなことをしていると、気が付けば俺の周りに人がいなくなっていたのだ。

断っておくが、迷子になったわけではない。置いてけぼりを食らわされたわけではない。断じてないのだ。俺がその気になれば念話で連絡を取ることもできるし、メイたちの魔力を辿れば、そこに転移することもできるのだ。たださっき、念話を飛ばしたら、「ご主人様はそこに居てください」とメイに言われてしまっただけだ。……寂しい。

結局、待つこと二時間。ようやく三人は俺のところに帰って来た。

すっかり飽きてしまった俺は、帝都の屋敷に一旦帰ろうと言ったが、メイたちは目を爛々と輝かせて、穴を掘る絶好の場所が見つかったと言って譲らなかった。取りあえず腹が減ったので一旦屋敷に帰ろうと提案してみたが、三人と一匹の妖精は、穴を掘るのが先だと言って断固として反対した。

「そんなに穴が大事か？　食事よりも穴が大事か？」

若干キレ気味に不貞腐れる俺。だが、メイとシディーは目を輝かせながら、それぞれが俺の手を握りながら、こんなことを言ってきた。

「今が一番いい時期なのです。この時期を逃すとこの辺りは雪と氷に閉ざされます。今しかないのです、今なのです」

二人がここまで俺の意見を完全に否定するのも珍しい。俺は納得いかない気分のまま、渋々と彼女らに従った。

歩くこと約１０分。連れて行かれたところは、緩やかな坂になっている場所だった。メイとシディーはその地面に穴を掘れという。

「え？　下に向かって掘るの？　地下に行くのか？」

「そうです。一旦地下に潜り、ある程度の地点まで来たときに、真っすぐに掘り進めます。ここの地質は、レオリレンス岩盤上にエチソート地層が形成されていまして、非常に硬い岩盤になっています」

「加えて、地下ではケイカワン現象が発生しているために、条件的には最適です」

「儂も色々な土を見てきたが、こんなに理想的な場所は初めてじゃのう。なかなかこんな地層は滅多にお目にはかかれん。文句ばっかり言う前に、メイちゃんに感謝するんじゃ！」

メイとシディーの言っている意味は、半分も理解できず、最後にはノームに怒られてしまった。

俺は涙をこらえながら、彼女らに言われるままに土魔法で穴を掘った。単に穴を掘るだけでは、そこが崩落してしまう可能性もある。そのために、掘った部分は固く錬成して、崩れてこないようにすることも忘れなかった。

三人に指示されるまま穴を掘り続けること数時間、何か硬いものにぶつかる感触を覚えたかと思うと、それ以上前に進むことができなくなった。それを見たメイとシディーが、俺を押しのけるようにして調べにかかる。

「……氷ですね」

「間違いないわ」

「どうやら越えましたね」

「越えたね、メイちゃん！」

そう言って二人は抱き合って喜びあっている。そこに、ゴンとノームも参加して、大盛り上がりになっている。俺は大きなため息をつきながら、その場に腰を下ろした。

あとで聞くと、この山の地層はかなり複雑であったらしく、穴を掘る方向を間違えれば、すぐに崩落する危険性があったらしい。加えて、この山周辺の天気は変わりやすく、ましてや雪などになると、すぐに視界がゼロになってしまう。たまたま俺たちが来た日が、絶好の好天だったために、メイとシディーは無理をしてでも穴を掘る作業を進めたかったのだそうだ。ちなみに、俺が掘ったトンネルはとても強度が高く、我ながらよくやったと褒めてやりたい出色の出来栄えだったが、それに触れてくれる人は誰もいなかった。

外に出てみると、すでに夕暮れだった。山頂付近に雪化粧を施した雄大なムロック山脈を、夕陽が美しく染め上げていた。沈みゆく夕陽を見ながら俺は、しばし疲れを忘れたのだった。

帝都の屋敷に帰ると、ちょうど夕食のタイミングだった。昼食を食べていなかったので、夕食は実に美味く、久しぶりに飲むお酒もとても美味しかった。だが、食卓の話題は、ムロック山脈のことが中心で、俺のことは一つも話題に上らなかった。

俺は一抹の寂しさを覚えながら子供たちを風呂に入れ、絵本を読んでやるなどして寝かしつける。この日読んだ絵本は、「どろぼうのどろぼう」というお話で、間抜けな泥棒が、大泥棒の家に泥棒に入るという可笑しいお話だった。

子供たちが寝静まると俺は寝室に向かう。そこではリコが待っていた。

「早かったですわね。子供たちはもう……どうかしたのですか？」

「りっ、リコぉぉぉぉ～」

「ちょっ、なっ、キャッ！」

彼女の姿を見ると、俺は堪らなくなってしまって、リコを抱きしめ、そのままお姫様抱っこして、ベッドに運んだ。

◆　◆　◆

「……ごめんなさい。反省しています。怒らないでください」

俺はリコの体を撫でながら、彼女の耳元で小さな声で呟く。ちょっと乱暴だった。いや、むしろ乱暴にしてしまった。リコはゆっくりと体を起こして、俺と向かい合うようにして体を横たえた。

「……何かありまして？」

「う……実は……」

優しいリコの声に導かれるようにして、俺は今日あったことを話した。彼女は俺の手を握りながら、じっとその話に耳を傾けている。

「……それは辛かったですわね」

話を聞き終わると、リコは微笑みを浮かべながら呟く。俺は思わず泣きそうになった。

「でもね、リノス。これは私にも言えることですけれども……。あまり人に期待をしてはいけないですわ」

「期待？」

「メイたちは褒めてくれるだろう、シディーがやさしくしてくれるだろう……。リノスの心の中で、そんな考えがあったのではないですか？」

「ううう……」

「期待をするから、期待通りにいかなかったときに、怒りを覚えるのですわ。最初から期待しなければ、そんなことにはなりませんわ」

「そうだな……」

「子供たちと接していると、いつも思うのです。子供たちに期待しすぎてはいけないと」

「どういうことだい？」

「このところ、子供たちを叱ることが多くなりました。あるときふと気づいたのです。この怒りは、私の思う通りにならないことが原因なのだと。子供たちには子供たちそれぞれに授かった能力がありますわ。それを、私の考えを押し付けるのは違うと思ったのですわ」

「すごいな。そんなことに思い至るなんて、やっぱりリコは凄いや」

「そんなことはありませんわよ」

そう言って彼女はクスクスと笑う。

「本当にごめんな。大事なリコを乱暴にしてしまった……」

謝る俺に、リコはゆっくりと首を振る。

「いいえ。さっきのリノスも、私は嫌いじゃありませんわ。何だか、かわいいですわ」

「……そうか」

そう言って俺はもう一度、リコを抱きしめた。今日の夜は、何だか、長くなりそうな気がした……。

第四百話　　私も行く！

「なんじゃこりゃぁ～～！！」

絶叫とともにその声が周囲に響き渡り、まるでハウリングを起こしているかのような状態になる。俺は思わず耳を塞いだ。

……見渡す限り、一面が氷の世界だった。しかも、地面の氷は、磨き抜かれたかのような輝きを放っていると同時に、太陽の光に照らされて、氷の下の地面までが見えていたのだ。

「……一体、どうすればこんなことになるのでしょう」

メイが目をカッと見開きながら、氷の上に這いつくばっている。彼女の目が真ん中に寄っている。どうやら、この現象はメイの研究者として琴線に触れたようだ。

彼女は氷を叩いたり引っ掻いたりしながら、その様子を調べている。俺はメイから目を離して、はるか遠くを眺める。すると、雲と雲の間から、巨大な壁がそびえ立っているのが見えた。どうやらあれが、フィルコン山脈のようだ。

前に見たムロック山脈とは異なり、フィルコン山脈は、黒い山だった。まるで、天に向かって伸びているような断崖絶壁の山で、その雰囲気は、やってくる者を断固として拒否しているかのようにも見える。この氷の山を越えた後、あの断崖絶壁の巨大な山を登るのか……。そう考えると、俺の心は少し折れそうになった。

実際、ここまでたどり着くまでが困難だった。ムロック山脈の地下に穴を掘ったまではいいが、地上に出るためには、上の氷をどうにかしないといけなかった。俺はこのときとばかりに、これまで練習していた火魔法を凝縮するやり方を試してみたのだ。

結果的には上手くいった。ただ、氷の中に火を通すとどうなるか。当然、氷は解ける。氷が解けるとどうなるか。水になる。こんな小学生でも知っている理屈を、俺は完全に忘れていた。練習のときに気が付かなかったのかと言われてしまうだろうが、気が付かなかった。あのときは、すぐに蒸発していったのだ。だから、今回も同じように行くと考えていたのだが、甘かった。

凝縮した火魔法……。それこそ、かなりの温度に上がった火の玉が氷の中に入っていくと、ものすごい水蒸気が上がった。しばらくすると、そこから大量の水が噴き出してきた。俺もメイもシディーも水をかぶってしまったが、あらかじめ結界を張っていたために、ずぶ濡れになることはなかったが、これにはかなり焦った。

結局、トンネルの下に大きな穴を掘ることで、流れ出てくる水の問題を解決することができたが、どの位置に穴を掘るのかというところでも、メイとシディーは入念に調査を行い、トンネルの強度に影響を与えないようにしてくれたのだ。

そして、穴を徐々に広げていきつつ、ようやく俺たちは地上に出ることができた。

『長いトンネルを抜けると雪国であった』。そんな小説の一ページを思い起こさせるような景色だった。雪国というより、氷の世界なのだが、それほど俺たちが見てきた世界とは別世界の景色だったのだ。俺は思わず呆然となってしまった。

美しい景色ではあるものの、足元がツルツルと滑る。ここを越えるのには、かなりの労力を必要とするようだ。

「う～ん」

腕組みをしながら考えていると、メイとシディーが寄ってきた。

「ご主人様、どうされました？」

「うん、この山を越えるのは、かなり骨だと思ってね」

「いいえ、訳ないですよ？」

シディーが事も無げに言う。

「もしかしてリノス様は、歩いてこの氷の山を越えようと考えておいでですか？」

「あっ……ああ」

「その必要はありません」

「どういうこと？」

「ジェネハちゃんなら越えられます」

「え？　マジで？」

聞けばジェネハは、３０００メートル級の山ならば、楽々越えられ

るのだという。しかも、彼女の翼は寒さにも強く、凍るようなことはない。寒い冬山を越えるのには、持って来いだというのだ。

早速俺は帝都の屋敷に帰り、ジェネハに相談する。彼女は快く引き受けてくれたが、一つだけ条件があるのだという。

「妾が運べるのは、二人までじゃ。それ以上は無理じゃな」

これにはシディーが困った。必然的に、ジェネハに乗れるのは俺とミーク姫ということになるからだ。

「ちょっと待ってください。行けないわけはないと思います。私の直感では行けるはずなんです！」

そう言って彼女は食い下がるが、ジェネハは頑として首を縦に振らない。これでは埒が明かないと、彼女を連れて屋敷に入るが、シディーは悔しそうな表情を浮かべたまま、自室に帰ってしまった。

その日、シディーは食事も摂らずに部屋にこもり続けた。ピアトリスのこともあり、俺たちは心配したが、部屋の中から聞こえてくるシディーの返事はとても元気であり、リコとメイの様子を見ましょうという一言で、俺たちは彼女を見守ることにしたのだった。

◆　◆　◆

「リノス様！　リノス様！」

朝、俺を起こす声で目が覚める。てっきり隣に寝ているメイの声かと思ったが、彼女も目を擦りながら目覚めている。一体どうしたことかと思っていると、俺の目の前にはシディーが仁王立ちしていた。

「どうしたんだ一体」

「リノス様、行けますよ。私も行けます！」

そう言って彼女は俺の目の前に一枚の紙を差し出す。

「……何じゃこりゃ？」

そこには数学だろうか。複雑な計算式が書かれてあり、俺の頭では全く理解することができなかった。俺は隣で寝ているメイにメモを渡す。彼女は眠そうな目でじっとそれを見ていたが、徐々にその目が開かれていく。

「すごい！　完璧じゃないですかシディーちゃん！」

そう言うとメイはベッドからガバッと起き上がり、そこから飛び降りるようにしてシディーの許に行って、彼女の両手を握った。

「ちょ……メイちゃん、裸……」

「あっ」

シディーが顔を真っ赤にして顔を背けている。あれ？　メイの裸を見たことがなかったのかしら？　その様子を見て、メイも恥ずかしそうにベッドに戻ってきて、シーツでその美しい体を隠した。

「あの……説明していただいても？」

「すみません……」

メイがシーツから顔だけを出しながら、俺に説明を始める。どうやら、ジェネハが運べる重さの限界を割り出し、それをどうやったら彼女に負担をかけずに運べるのかを計算しているのだという。

つまり、言ってみれば、彼女の両足で俺とシディーを運び、その背中にミークを乗せれば、ジェネハにかかる負担は最小限に抑えられるというわけだ。

「……と、いうわけで、私も行けます」

俺たちから顔を背けながら、しかし、顔を真っ赤にしながらシディーは嬉しそうな声で話している。

「まあ、この計算式の意味は俺にはわからないが、取りあえずジェネハに相談してみようか。何となく、彼女もイヤとは言わない気がするな」

「……すみませんが、服を着てください」

「何を言っているんだ、まだ起きる時間じゃないだろう。俺はもう少し寝るよ。シディーも寝ていないだろう？　少し休め」

「え？　私も一緒にそこで？？　……イヤです、絶対にイヤです！」

「いや、そうじゃなくて……」

「……リノス様、一瞬だけ、卑猥なことを考えていましたね？」

「そっ、そっ、そんなことは、ない」

全く油断も隙もないと思いながら俺は、オホンと咳払いをする。

「ただシディー、たとえ1時間でもいいから寝てくれ。あまり無理をしないでくれ」

「……わかりました」

「ピアはリコと一緒に寝ているはずだよ。あとで迎えに行ってやるといい」

「はい。あとでリコ様にはお礼を言っておきます」

そう言って彼女は、顔を真っ赤にしながら寝室を後にしていった。

俺は再びベッドに入ると、メイと向かい合うようにして体を横たえる。

「……目が冴えちゃった。眠れるかな？」

「……実は、私も目が冴えてしまいました」

「……じゃあ、もう起きるか？」

「はい」

俺のその声に、メイは優しく微笑んだ。

第四百一話　目くらまし

目の前には、黒い景色が広がっていた。一体、何のことだと思われるかもしれないが、俺の表現力ではただ、黒い景色としか言いようがないのだ。

ここに来るまでの行程は、とても快調なものだった。ジェネハの翼で大空高く舞い上がった俺たちは、易々とマスピス山脈を越えることができた。眼下には、太陽の光を受けて、まるで鏡のように輝く氷の山が広がり、それはそれは美しい景色だった。ジェネハの足に掴まりながら、俺もシディーも思わず嘆息を漏らしたほどだ。当然、彼女の背中に乗っているミーク姫も、その光景に大はしゃぎだったのだ。

だが、その山々の彼方には、天を覆うような巨大な山が見えてくる。それが徐々に近づいてくると、俺たちの口数は自然と少なくなっていった。

その山は、山頂付近は真っ白な雪のようなものに覆われていたが、麓を見ると、真っ黒な色をしていた。その形は、山というより、巨大なビルと表現した方が適当だろうか。まさしく断崖絶壁、切り立った山が垂直に天に向かって伸びていた。

さらに驚いたことには、麓に降り立つと、そこはまるで、巨大な屋根のようになっていたことだ。調べてみると、どうやらこの山はまるで逆三角錐のような形になっているらしい。山頂に向かって山が広がっている……そんなイメージをしてもらえると、わかりやすいだろうか。

「……何ちゅう山だ」

俺は思わず声を漏らす。そんな俺をよそに、シディーは真っ黒い山の斜面をペタペタと触っている。

「これは、人工的に削られていますね」

「え？」

「この山はかなり硬い岩盤でできています。そのために、この山が崩壊せずにいられるようですね。それにしても……これをここまで砕くのには、さぞ骨が折れたことでしょう……」

まるで感心するかのように、また、呆れるかのような表情を浮かべながら、シディーは首を振っている。聞けば、この麓の岩盤を削るに際しては、かなり細心の注意が払われているらしく、山が崩落しないよう、綿密な計算の許に行われているらしい。

そんな彼女の話を聞きながら、俺はミーク姫に視線を向ける。彼女はジェネハの背中に乗りながら、キョロキョロと辺りを見廻している。

「なあミーク、お前さんがエルフの里を出たときは、どうやって麓までたどり着いたんだ？」

「……覚えておらぬ」

「……」

聞けば、気が付いたらヘイズと一緒にいたのだそうで、別に吹雪の中を移動したわけでもなく、寒さに震えることもなかったらしい。幼い頃に育ったエルフの里の記憶は曖昧になっていて、一応、父親と母親の顔は覚えているらしいが、そうした頃の記憶はほとんどないのだという。覚えていることと言えば、ヘイズと一緒にいたところに突然何者かに踏み込まれ、気が付けば一室に監禁されていたこと、それからしばらくして、ヘイズが現れ、再び自分を連れ出したことなのだと言う。

「その連れ出されたときのことは、覚えていないのか？」

「気が付けば、ヘイズの部屋におったのじゃ」

「……なるほど。転移した、ということか。となれば、エルフの里では魔法は使えるということだな？」

俺は顎に手を当てながら考える。

「そうですよ、リノス様！　リノス様には、相手の魔法を感知して転移するスキルをお持ちです。それが使えれば、わざわざこの山を登る必要はなくなります！」

シディーが我が意を得たりといった表情で口を開いている。俺の考えていることを先に言われてしまった。ただ、エルフの魔法がどのようなものであるのか、俺にはわからない。そんなことを考えていると、シディーがスッと顔を近づけてきて、俺に耳打ちをする。

「リノス様、もしかして、エルフの魔力がどのようなものかがわからないと思っていますか？　それでしたら簡単です。そこに居るミーク姫の魔力を参考にすればいいのです」

……おおう、なるほど。さすがはシディーだ。俺の考えていることを、完全に把握している。ジェネハに無理を言ってこの人を連れてきて、本当によかった。彼女のスキルには頼もしさを感じるが、同時に、ちょっとした恐ろしさも感じる。俺は決して後ろめたいことはするまいと、改めて心に誓う。絶対に浮気はしない。もう、妻たちだけを愛して生きるのだ。

「そうです。それでいいのです」

シディーが大きく頷いている。まさか、今の俺の心も読んだのだろうか……。いや、まさか。たまたまだと思うことにしよう。

そんなことを考えながら、俺はミークの許に近づき、彼女の頭に手を載せる。

「……」

「……早く手をどけるのじゃ。髪型が乱れるではないか」

「ゴメン」

そう言えば一度、シディーに怒られたことがあったのを思い出した。あれは新婚時代のことだった。気まぐれに彼女の頭をナデナデしたら、とても悲しそうな顔をされたのだ。曰く、自分を可愛い女性と見てもらうために、必死でセットしているのだ。無暗に触られるとセットが崩れるのでやめて欲しい……。そう言われたのを思い出した。俺はゆっくりと彼女の頭から手をどける。

「よし、大体わかった」

そう言って俺は、手を地面につけて、魔力を注入していく。

「……」

かなりの魔力を注入しているが、ミークと同じ魔力は感じられない。それどころか、この山脈の中に生き物の気配すら感じないのだ。これは一体どうしたことだろうか。

「ふぅ……」

俺は一旦、魔力の注入を止め、天を仰ぐ。このまま続けてもいいが、何となくこれでは効果がないと感じたのだ。

「リノス様……大丈夫ですか？」

シディーが心配そうに声をかけてくる。俺は手で問題ないと制しながら、彼女に視線を向ける。

「ちょっと厄介だな。魔力を感じないどころか、生き物の気配すら感じない。本当にこの山にエルフがいるのか、それすらも疑わしくなってきたよ」

「う～ん」

シディーは人差し指を顎の下に当て、何かを考えるポーズを取り出した。彼女の目がゆっくりと左右に動いている。まるで『一〇さん』の中で、とんちを考えているときのようだ……。そんなことを考えていると、シディーと目が合った。彼女はしばらくじっと俺の目を見ていたが、やがて、彼女の目が少し見開かれた。どうやら何か閃

いたようだ。

「結界？」

「え？」

「もしかして、エルフは村全体に結界を張っているのではありませんか？　その……上手く説明はできませんが……」

「なるほど、結界に魔力を悟られないような効果を付与しているのかもしれないな。とすれば……」

俺は腕を組みながら考える。俺が相手の結界師の立場であったらば、どんな結界を張るだろうか。魔力が悟られないように……。それでいて、結界が張られていることもわからせないようにするためには、どうするか……。そのとき、俺の脳裏にフィルコン山脈の山容が浮かんだ。

「雪……か？」

フィルコン山脈は、山の中腹から山頂にかけて真っ白い雪に覆われている。その厚い雪に似せた結界を貼れば外からはわからない。俺は再び地面に手を当てて、魔力を注入する。

「……」

どのくらいの時間続けていただろうか。俺の額にはうっすらと汗が滲んでいる。この山脈全体に、かなりの量の魔力を行き渡らせているが、結界らしき魔力はまったく捉えられなかった。

「リノス様！」

シディーの声で我に返る。気が付くと俺は、彼女に抱きかかえられていた。ものすごい眠気が俺を襲っている。どうやら、ＭＰが枯渇してしまったようだ。

「むっ！」

突然唇に何か柔らかいものが押し当てられた。その直後、俺の口の中に、液体が流れ込んできた。これは……ＭＰ回復のポーションだ。

ふと目を開けると、目の前にシディーの顔があった。何と彼女は口移しで俺にポーションを飲ませてくれたのだ。

「すまんな、シディー。ただ……別に口移しじゃなくても……」

「リノス様がうつ伏せに倒れそうだったもので……。私では仰向けにすることはできませんから……」

「だからと言って……」

「ウフフ。仲がいいのう。まるで、恋人同士みたいじゃな」

ミークが俺たちの様子を見ながら、意地悪そうな表情を向けている。その隣で、ジェネハは、退屈そうに大きなあくびをしていた。俺はため息をつき、一旦帝都の屋敷に帰ろうと促して、転移結界を張るのだった……。

第四百二話　妻の助言①

久しぶりに疲れた。こんな日は、家で美味いものを食って、風呂に入って寝るに限る。そんなことを考えながら俺は帝都の屋敷に帰った。

屋敷に入るなり、子供たちが出迎えてくれる。つい最近まではエリルとアリリアが問答無用でダイブしてきたのだが、今はイデアとピアトリスがお帰りなさいと言って迎えてくれる。その後ろで、二人のお姉ちゃんが俺を迎えてくれている。いいお姉ちゃんになったなと思う反面、娘たちが俺から離れていくようで、ちょっと心寂しい。

俺はイデアとピアを抱っこして、その後でエリルとアリリアを抱っこする。この二人はいつまで抱っこさせてくれるのだろう。今年いっぱいかな……などと思いながら、ダイニングに入る。そこには、いつもと同じ美味しい食事がテーブルいっぱいに並べられていた。

いつもながら、我が家の食事は美味い。ペーリスだけでなく、フェリスやルアラの腕もかなり上がっている。それだけでなく、リコやメイ、シディー、ソレイユ、マトカルが交代で料理を作っている。妻たちの腕もかなりのものになっている。

ここ最近は、そこにエリルとイデアが加わるようになった。エリルは色々とお手伝いをしているが、イデアの方はほとんど遊びに近い。今は洗い物が大好きなようで、お皿を水でシャカシャカと洗っている。その様子をピアが楽しそうに眺めている。

食事が終わると、俺は子供たちと一緒に風呂に入る。かなり騒々し

いが、子供たちの体を洗い、次々と風呂から上げていく。外にはリコとメイが待っていて、子供たちを着替えさせている。

そんなドタバタした時間を過ごし、子供たちが寝静まる頃になって、ようやく俺は一息つくことができた。誰も居ない寝室で一人、ベッドに寝転がりながら、今日のことを考える。

「俺がエルフ側の結界師ならば、間違いなくあの雪と同じ色の結界を張る。だが、魔力を察知されないような効果を付与するには、どうしたらいい……」

俺は目を閉じて誰に言うともなく考える。まだ俺が奴隷時代だった頃に、ファルコ師匠から口を酸っぱくして教えられたことは、「イメージが大切」ということだ。とすれば、魔力が外に漏れないようにするイメージを具現化すると言うことか……。だが、そもそもそれをどうイメージしていいのかすら、今の俺にはわからない。

「う～ん。師匠だったら、どんなことを考えただろうか……」

色々と思い出してみるが、何故かあの人のこととなると、女にフラれてへこみ、怒っている姿が思い出されてしまう。あとは……。猟奇的な目で俺に全力で火魔法を放ってくる姿だ。そうだ、その炎に隠れる形でエリルが斬撃を繰り出してくるのだ……。そういえば、あれは、今から考えても見事な連携だった。どこか、俺の知らないところで二人で練習していたんじゃねぇのか？　……いや、まさか二人に限ってそんなことは。大体朝起きるのが苦手だった二人に、そんな時間があるわけがない。そんなことを考えていると、思わず笑みが漏れてしまう。

「楽しそうですわね」

優し気な声と、上品な香りが俺の鼻を突く。これはリコだ。俺はゆっくりと目を開ける。そこには、髪を下ろした、パジャマ姿のリコがいた。彼女はイデアを抱っこしながら、美しい笑みを浮かべている。

「うん、ちょっと、師匠のことを思い出してね」

「まあ……」

リコは少し驚いた表情を浮かべながら、イデアを子供用のベッドに寝かせる。そして、彼に愛おしそうに毛布を掛け、その顔を撫でながらほっぺにキスをした。リコは、彼の寝顔を満足そうに眺めていたが、やがて俺のベッドに入ってきた。

「やっぱり、男の子のかわいさはひとしおなんだな」

「そんなことはありませんわ。エリルもイデアも、もちろん、アリリアもピアも……。子供たちは皆、かわいいですわ。ただ……」

「ただ、何だい？」

「イデアとピアは私に懐いていますから……。どうしても、気になってしまいますわ」

「そうか……」

確かに、エリルは生まれたときからマトカルにベッタリだったし、今もそれは変わらない。彼女は彼女なりに、リコのことはとても尊敬しているし、憧れてもいる。だが、リコに関しては、どちらかと

いうと畏敬の念が強すぎて、なかなか傍に寄れないというのが正直なところのようだ。リコはその点を心配しているようだが、俺は、エリルが成長すれば、その距離感は無くなるものと考えているために、今のところは心配していないのだ。

そんなことを考えながら俺は、彼女に腕枕をする。そして、彼女の顔を見つめながら、今日あったことを話す。

「そうでしたの……。それはご苦労様でした。リノスが魔力が無くなるまで頑張ったことは、シディーから聞きましたわ。しかし、それほどまでしても、エルフの里がわからないとは……」

「ああ、おそらくヘイズの襲撃に備えて、万全の警備態勢を敷いているのだろうな」

「そのヘイズが、もうこの世にはいないことは、エルフには伝えていますの？」

「おひいさまが伝えたらしいんだが、伝わっているかどうかはわからないな」

「それほどまでに外部との接触を拒んでいるエルフですから、もしかしたら、それが伝わっていないかもしれないですわね」

「先に、俺の方から伝えてみる必要があるかもしれないな。だが、そうするとして、どうやって伝えるか、だな」

「そうですわね……」

リコはゆっくりと目を閉じる。相変わらず、美しい顔だ。俺はしば

らくその顔をじっと眺める。

不意にリコの眉毛がピクリと動いた。そして、ゆっくりと両目が開かれる。

「手紙はどうかしら？」

「手紙？」

「ミーク姫に手紙を書かせるのです。ヘイズが死んだこと。できれば、エルフの里に帰りたいと思っていると手紙を認めるのです」

「そんなことで、エルフが動くかな？」

「やってみる価値はあると思いますわ」

彼女は体を起こして、じっと俺の顔を見つめる。

「エルフ王はミーク姫に会いたいと思っていらっしゃるのでしょ？　にもかかわらず、リノスがフィルコン山脈の麓まで行っても、エルフ側から何の接触もなかった。むしろ、徹底して自分の存在を秘匿している……。エルフとて、自分の住む山の麓に誰が来たか、ということは把握しているはずですわ。おそらく、リノスたちがどういう意図をもって来たのかが図りかねているのではないでしょうか」

「なるほどな。そう考えると、ミーク姫に手紙を書かせるというのは、アリだな。あと、ヘイズが持っていたラトギスの杖……。あれは確か、エルフ秘蔵のアイテムだったんだろう？　それも返すと言ってやれば、さらに心を開いてくれるかもしれないな」

「そうですわね。それはいいかもしれませんわね」

リコがにっこりと笑う。

「ありがとうリコ。何だか、ちょっと前に進みそうだ」

「お役に立てて、よかったですわ」

そう言って彼女は再びベッドに入り、俺の腕に顔をうずめた。俺は彼女の体を抱きしめる。

「……明かりを……消してくださいませ」

「……最近リコは、明かりを消したがるな。何かあったのか？」

「体が……年を取ってきましたから……恥ずかしいですわ」

「そんなことはないだろう」

俺はそんなことを言いながら、明かりを落した。

暗闇の中でも、リコの体は微塵も衰えていないことは、よくわかった。絹のような美しい肌は変わらないし、それに、プロポーションも全く変わりがない。きっと彼女は彼女なりに、俺の見えないところで努力をしているのだろう。それを一切感じさせないリコの気遣いが、俺には嬉しかった。

「リノス……今、エルフのことを考えていますわね？」

リコを抱きしめていると、不意に彼女の声が聞こえてきた。しまっ

た。無意識のうちに、次の休みのときに、どうやってエルフとの接触の段取りを考えていた。俺は申し訳ない気持ちで、ゆっくりと顔を上げて、リコの顔を見る。薄暗い闇の中、彼女は潤んだ瞳で俺をじっと見つめている。

「今は、私のことだけを、考えて……」

俺はゆっくりと頷き、再びリコを抱きしめた。

第四百三話　妻の助言②

せっかくうまくいくと思ったのに、まさかこんなオチがつくとは……。そんなことを考えながら俺は今、呆然と立ち尽くしていた。世の中というのは、上手くいかないものだ……。

絶望する俺の目の前では、ミーク姫が不思議そうな表情を浮かべながら俺を眺めている。お前、何をヘコんでいるんだ？　彼女はきっとそう思っているに違いない。この少女が、わずか数秒前に、たった一言で俺を絶望の淵に叩き落したのだが、彼女にはその意識は全くないようだ。

昨夜、リコからミーク姫に手紙を書かせることを提案された俺は、早速、彼女に手紙を書くよう促してみた。だが、彼女から返ってきた答えは、衝撃のものだった。

「手紙？　なんじゃそれは？」

「紙に字を書いて自分の思いを伝えるんだ」

「字？　字とは何じゃ？」

まさか、文字を知らないとは思ってもみなかった。そりゃ、手紙なんざ書けないよな……。俺は思考停止になりそうになりながら、必死で考える。字が書けない人に、どうやって「私はエルフ、エルフ王の娘のミークです」という情報を伝えればいいのだろうか。というより、エルフはどうやってコミュニケーションを取っているのだろうか。まあ、喋ればいいじゃんとは思うが、連絡事項などはどう

しているのだろう？　全部記憶できてしまうのだろうか……。

そんなことを思いながら、一方で俺は、これからのことを考える。

そのとき、俺の背後に気配を感じた。

「どうされました？」

振り返るとそこにはソレイユがいた。彼女はセイサムを抱っこしながら、柔和な笑みを湛えている。俺はミークが字を書けないこと、そもそも文字を知らないことなどを手短に話した。

「う～ん。それでしたら、魔力で伝えるというのはどうでしょうか？」

「魔力？」

「はい。我々サイリュースには、『ティペットの裁き』と呼ばれるアイテムを作り出すことができます。それを応用すればいいのではないですか？」

「ティペットの裁き？」

「あれ？　お忘れですか？　リノス様にも一度、お使いいただいたのですよ？」

そう言ってソレイユは艶めかしく笑う。ここ最近思うことだが、ソレイユは子供を産んでからさらに色気が増した気がする。リコたちにも聞いてみたが、彼女たちはそんなことはないと言う。むしろ、以前まであった必死さ……頑張って色気を出そうとする姿勢が無くなったために、落ち着きが出てきたとさえ言うのだ。男子と女子で

は、見るポイントが違うのか、ここまで評価が分かれるのも珍しい。

「うふふ、お忘れですか？　初めてお会いしたときです」

「初めてソレイユに会ったとき？」

俺はそう言いながら、記憶を辿る。確か、ソレイユが腹を空かせて道端でぶっ倒れていたのが、一番最初の記憶だ。……どうやら違うらしい。ソレイユの目が怖い。それは言わない約束でしょと言わんばかりの顔をしている。……そうだ、確か、この屋敷の応接室で会ったんだ。そのとき確か、紙を渡されたんだ。

「ああ、あのときの紙か」

「そうです。人の邪心を映し出すあの紙こそが、ティペットの裁きです。あれを応用すればいいと思いますよ。少し待っていてください」

そう言ってソレイユは子供を俺に預けて、外に出ていってしまった。幸い、セイサムはぐっすりと眠っていたために全く手はかからないが、一体何をしようとしているのか、俺には皆目見当がつかなかった。それから十分ほどした頃だろうか。彼女は一枚の白い紙を持って再び俺たちの許に現れた。

「ミークさん、すみませんが、この紙に、両手を押し付けてください」

「ふ～ん。面倒くさいのう」

そう言いながらミークは渋々立ち上がって、テーブルの上に置かれ

た紙の上に両手を載せる。

「……これでよいのか？」

「ええ、結構です」

そう言ってソレイユはにこやかに笑う。

「ソレイユ……。その紙は一体何だ？」

「これはリノス様としたことが……。お分かりになりませんか？一度、魔力探知を発動させてみてください」

彼女に勧められるままに俺は、魔力探知を発動させる。すると、紙の上に、ミークの魔力が感じ取られた。

「あ、微量ではあるけれど、ミークの魔力を感じるな。これは一体……」

「その紙は、触れた者の魔力を少しだけ吸い取る効果を付与しています。私はまだ神龍様を呼びだせませんので、アステスに頼んで作ってもらいました。彼女が契約している森精霊の力をこの紙に写したのです」

聞けば、アステス自身もそれなりの高位の精霊と契約しているそうだが、彼女をして、この紙に微量の魔力を吸い取る力しか、その効果が付与できないのだ。ちなみに、俺が使ったティペットの裁きは、何と族長のヴィヴァルが作ったのだそうだ。どうやら族長様は、俺にサイリュースの里を救ってほしいと願う一方で、ソレイユに俺を篭絡させる腹もあったようだ。まあ、今の状況を考えれば、族長様

の思惑通りにコトが運んだと言えるだろう。ただ、ソレイユが神龍様を呼びだすことができるようになり、彼女がティペットの裁きを作ったとしたら、どんなモノが出来上がるのだろう。……何だか、恐ろしいのでそれは考えないことにする。

「ただ……。こんな微弱な魔力を果たしてエルフが感じてくれるだろうか」

「大丈夫ですよ。腐ってもエルフです。このくらいの魔力であれば、十分です。きっと、この魔力を通じてミークさんの、里に帰りたいと言う思いも伝わると思いますよ」

「……スゲェなエルフは」

俺はゆっくりと顔を振りながらため息をついた。別に調子に乗るわけではないが、俺のスキルはかなり高いものだと自負していた。だが、エルフのスキルはヘタをすると俺のはるか上をいくかもしれない……。そんなことを考えながら俺は、ちょっと自分の気を引き締め、両手で顔をパンパンと叩く。

「よし、わかった。ありがとうソレイユ。このティペットの裁きをフィルコン山脈の麓において来よう。念のために俺の手紙も添えておこうか。あと……ラトギスの杖も置いておこう」

俺の言葉に、ソレイユはにこやかに笑いながら、頭を下げた。

その後、俺はエルフ王宛の手紙を認めた。リコに見せると、赤ペン先生も真っ青になるほどにチェックを入れられ、その後、メイが添削し、さらに、シディーの案も盛り込んだことで、原形を全くとどめてはいないのだが、これは秘密だ。お蔭で、なかなか素晴らしい

出来栄えのものになった。

俺はその手紙を持って、前回シディーたちと一緒に来たときに転移結界を張った場所に赴いた。そこにティペットの裁きと手紙を同封した封筒を置き、その隣にはラトギスの杖を置いた。ただ、杖の方はエルフ王秘蔵のアイテムと聞いていたので、敢えてそこには結界を張ることにした。俺の許可がある者以外は結界に入ることができない効果を付与して、誰にも盗られないように万全の態勢を整えた。こんな前人未到の地までエルフ以外の生き物が来るとは思えないが、シディーがどうしても結界を張れと言っていたので、念には念を入れる意味でもそうすることにしたのだ。あとでなくなりました、とならないようにしなければならない……。

俺は天に向かってそびえ立つ山を見上げながら、小さな声でお願いしますと呟いて、再び転移結界に乗り、帝都の屋敷に帰った。手紙には、三日後にもう一度ミーク姫を伴ってここに来る。何かあれば、そのときに何らかのコンタクトを取って欲しいと書いておいた。

そしてその三日後。俺はシディーとミーク姫を連れてフィルコン山脈の麓に転移した。そこには、ラトギスの杖がそのままの形で置かれていたが、ふとその隣を見ると、置いていた手紙が無くなっていた。そこには、薄い紫色の拳大の石が置かれていた。俺は訝りながらも、その石に近づいた……。

第四百四話　再訪

石からはまるで、煙がたなびくように一筋の紫色の光が立ち上っている。俺は注意深くその球体を観察する。鑑定スキルを発動してみるが、何も出てこない。「普通の石」と表示されるのみだ。

これが普通の石でないことくらいは一目瞭然だ。ということは、俺の鑑定スキルを防御する仕掛けがこの石に施されていると見ていいだろう。鑑定が使えない状況は、俺の記憶の中では、神龍様を鑑定したとき以来だ。

「リノス様、離れてください！」

俺の背後でシディーの声がする。俺は飛び退くようにしてその場から離れる。すると、光が大きくなっていく。

「……」

気が付くと、一人の人間が立っていた。いや、見た目は人間だが、耳が長い。ソレイユのサイリュースとは違い、とがった耳が天を向いている。年の頃は２４歳～２５歳くらいだろうか。細身の若い女性という印象だ。深い緑色の服を着ているが、何やら長い布を巻き付けているかのような服を身に着けている。そんな彼女は、目を閉じたまま、じっと佇んでいる。

「あっ……あの……」

俺が話しかけようとすると、彼女はスッと右手を挙げて俺を制する

ポーズを取った。そのままの状態で時間が過ぎてゆく。

一体何をしようとしているのか、全くわからない中、女性の目がゆっくりと開かれた。瞳が緑色で、吸い込まれそうなほどに美しい。そんなことを思っていると、彼女はゆっくりと俺たちの許に近づいて来た。

「なっ！？」

女性は真っすぐにミーク姫の許に行き、まるでキスをするかのような至近距離まで顔を近づけた。そして、そのまま舐めるようにミーク姫の顔を観察し始めた。ミーク自身も全く臆することなく、ただボーっと突っ立っている。

やがて、エルフの女性はミークから離れ、俺の許にやって来た。てっきり、先程のような至近距離での観察をされるのかと思ったが、彼女はジト目で俺を睨んだまま動かなくなった。再び沈黙の時間が訪れる。

「……この結界は、そなたか？」

不意に声が聞こえる。見ると、目の前の女性が俺を睨みながら右手でラトギスの杖を指さしている。

「え……ええ。盗られてはいけないと思いましたので、一応……」

「見事。解除できなんだ」

「あ……ありがとうございます」

俺の言葉に、女性は全く表情を変えないまま、ゆっくりと頷いた。
そして、杖を指している右手を、クルクルと廻し始めた。

「……リノス様、結界を解除せよと言っているようです」

後ろでシディーが小さな声で呟く。相変わらずの洞察力で、頼もしい限りだ。

「……大丈夫です。この方は悪事を働く方ではありません」

シディーのその言葉で、俺は結界を解除する。女性はゆっくりとラトギスの杖を手に取り、それをじっと眺めている。やがて、コクリと小さく頷くと、そのまま踵を返して、紫色に光る石の許に歩いて行く。彼女はチラリと俺たちに視線を向けると、その状態のまま、まるで霞のように姿を消した。

「……消えちまった」

「……後について来いと言っているみたいですよ」

「……よくわかるな、シディー」

「……何となくですが」

「いや、妾にも、そのように聞こえたぞ」

「え？　どういうこと？」

ミークも、先程の女性の振る舞いが理解できるのだと言う。彼女曰く、言葉は聞こえないが、何となく女性の考えていること、伝えた

いことがわかるのだそうだ。

「顔や表情を見ておれば、何となくわかるではないか」

ミークは事も無げにそんなことを言ってのける。俺は思わずシディーに向き直るが、彼女もミークの意見に賛成だと言わんばかりに頷いている。

「すげえな。一流役者みたいだな。言葉を使わずに心情を伝えるなんて……。やっぱり、長く生きていると、そんなことができるようになるのかな？」

「そんなに難しいでしょうか？　リノス様だって、何を考えているかは私も把握できますよ？」

感心する俺にシディーがそんなことを言い出す。

「お腹がすいた、疲れた、早くお風呂に入りたい、早く寝たい……くらいのことはすぐにわかります。ちなみに今は、はやくお屋敷に帰りたいと思っていますね？　できれば夕食までに帰りたい。そして、夜はメイちゃんとイチャイチャしたいと思っていますね？」

「な！？　え？　そ……そんなことは……ありません、よ。何を、何を言われるのでしょうか」

「フフフ。そなたは、単純なのじゃな」

慌てふためく俺にミーク姫は意地悪そうな視線を向けてきた。俺は単純なのだろうか。まさかシディーがそこまで俺の心を正確に読んでいるとは思わなかった。いや、断っておくが、俺は常にエロいこ

とを考えているわけではない。たまたま、たまたま、早く帰れるといいなと思っただけだ。

俺は必死で心を落ち着かせながら、オホンと咳払いをして、シディーに向き直る。

「じゃあ、行くとしようか」

俺のその言葉に、二人は苦笑いを浮かべながらコクリと頷いた。

「……うお？」

思わず頓狂な声を上げてしまった。石の近くまで言ったことは覚えているのだが、一瞬記憶が途切れ、気が付けば暗い洞窟のような場所に俺は来ていた。洞窟……と言っても、そこは真っ暗闇ではなく、ほのかに明るい。これは苔が発光しているのだろうか。エメラルドグリーンの美しいほのかな光が、まるで俺を導くように洞窟の先に続いている。

「イテッ！」

突然体に衝撃が走り、俺は思わず声を漏らす。ふと見ると、俺の腕にシディーがしがみついていた。そしてその隣には、ミークが茫然とした表情で立ち尽くしていた。

「ここ……は？」

シディーが不思議そうな表情を浮かべながら周囲を見廻している。

「たぶん、こちらじゃ」

突然、ミーク姫がそんなことを言い出す。彼女はクルリと俺たちに背を向けて、全く先の見えない闇の中に向かって歩き出した。

「待てミーク！　危ないぞ！　……あれ？」

俺はライトの魔法を唱えて周囲を明るくしようとしたが、そのライトが出てこない。不思議に思っていると、闇の中からミークが現れ、呆れたような表情を浮かべながら口を開いた。

「雰囲気でわからぬのか？　ここでは魔法は使えぬ」

「そ……そうなんだ」

「それに、出口はあちらじゃ。そんな感じがするじゃろうに」

「そ……そうですか」

俺はシディーと顔を見合わせる。そんな俺たちに気遣うこともなく、ミーク姫はスタスタと闇に向かって歩いていく。

「まったく……世話が焼けるのう」

ミークは面倒くさそうに呟いている。彼女は俺の手を引く形で歩いているのだ。その俺は、シディーの手を握りながら歩いている。だって、暗くてまったく見えないんだもん。

歩いてみるとこの洞窟は、石などがあってなかなか歩きにくい道だ

った。お蔭で俺は何度も石に足を取られては転び、その度にミークに助けを求めた。そんな俺に彼女は辟易としながら俺の手を取って歩き出したのだ。

ちなみに、俺が自身に張った結界は問題なく作動している。これがなければ今頃、足などは擦り傷でエライことになっていたはずだ。察するところ、この洞窟内で魔法を発動させることはできないが、洞窟に入る前に掛けた魔法については影響はないらしい。何だかよくわからない仕様だが、そうなっている以上、仕方がない。

「もうすぐ出口のようじゃ」

一歩ずつ足元を確認しながら進む俺たちに、ミークの声が聞こえた。先はまったく見えないが、出口まですぐそこまでの位置にきているらしい。

不意にミークの動きが止まった。彼女は闇を見据えたまま動かないでいる。しばらくの沈黙の後、彼女は俺たちに振り返る。

「妾では無理と見える。そなたならば力はあろう。ここを開けるのじゃ」

彼女の指さすところに手を伸ばすと、何か硬いものに触れた。どうやらこれが出口の扉らしい。俺はゆっくりとその壁を押していく。

「……固いな」

「何をしておるんじゃ？」

「え？　だから、扉を開けようと」

「押してどうするのじゃ、引くのじゃ」

「……早く言いなさいよ」

俺は何か取っ手になりそうなところを探していく。すると、小さくはあるが、窪みのようなところを見つけた。俺はそこに指をひっかけて、ゆっくりと引っ張っていく。

……俺たちの周辺が少しずつ明るくなり、やがて、まばゆい程の光に包まれた。

第四百五話　エルフの里

「……うおお、何じゃこりゃ？」

俺は思わず声を漏らしていた。目の前に広がる景色が、想像を超えていたからだ。

そこには見事な街並みがあった。標高の高い山にあるとは思われぬほどの整った街並み……。家々は石を積み上げて作られているが、その屋根がとてもカラフルで、無節操に色づけされているように見えても、実はち密な計算をされて配色されているという感じもする。

俺は後ろを振り返り、ミークに視線を向ける。彼女にとっての故郷だ。さぞ、懐かしかろうと思っていたが、意外に彼女の反応は薄い。

「あれ？　どうした？　懐かしくないのか？」

「妾の記憶にはない」

「どういうことだ？」

「リノス様、おそらくミークさんはエルフ王の姫です。ほとんどお城から出ることはなかったのではありませんか？」

「マジで？」

俺は思わず振り返る。その視線の先には、小高い山に建てられた巨大な城があった。

「まずは、お城に向かいましょうか……って、あれ……」

シディーが俺の腕を引っ張る。何事かと思って視線を向けると、そこには、先程のエルフの女性を始めとする数人が、俺たちの傍で立ち尽くしていた。

「お迎えに参上しました」

エルフの女性は小さな声で呟く。俺はその声を聞きながら鑑定スキルを発動していた。だが、彼女たちを鑑定することはできなかった。俺の気配探知に引っかからずに、すぐ傍まで距離を詰められていることを考えれば、ここではほぼ、魔法を使うのはできないのかもしれない。そんなことを考えていると、俺の背中に冷たい汗が流れる。

「……大丈夫です、リノス様」

シディーがニコリと微笑みながら、俺に語りかけてくる。何となくだが、彼女の表情は大丈夫だろうと確信させるものがあった。俺はエルフたちに向き直り、胸に手を当ててスッと腰を折った。

「ご挨拶が遅れました。私、アガルタ国で国王を務めます、バーサーム・ダーケ・リノスと申します。この度は手紙でも申しました通り、エルフ王の姫君であられるミーク様を……」

「その名を呼ばれるな」

エルフの女性が右手の掌を俺に向けながらそんなことを言ってくる。俺は戸惑いながら頷く。

「ミークという名は王のみが呼ぶことを許される名。ジャニス姫と呼ばれよ」

「は……はあ」

「ミークでよい」

俺とエルフの会話を聞いていたミークがそんな声を上げる。エルフは一切表情を変えないまま、彼女を見つめている。

「ずっとミークと呼ばれているのじゃ。今さらジャニスはややこしい。今日から妾のことはミークと呼べ」

「……それは」

「この者たちは、妾の面倒を見てくれた者たちじゃ。そのくらいは、構わぬ」

その声にエルフたちは動揺しているのか、無言になってしまった。

「あの……」

「案内する」

話しかけようとしたところに、かなり食い気味で返されてしまった。別に怒らなくてもいいじゃないか……。

「あれ？」

気が付けば、城の入り口に来ていた。どうやら先程の場所から転移

したらしい。エルフたちが先導するようにその入り口に向かって歩いていく。俺たちもあわててその後ろに付いていく。

ふと後ろを振り返ると、エルフの里が一望できた。どうやらここは頂上付近にできたなだらかな傾斜を利用して街が作られているらしい。空は青いが、街の周囲は白く霞がかっていて何も見えない。かなり空気が薄いはずだが、今のところ俺は息苦しさを感じていない。一体、どんな結界が張られているのだろう……。結界師としての俺の好奇心がムクムクと持ち上がってくる。

エルフたちが城の中に入ると、そこは巨大なホールになっていた。その奥には大きくて長い階段があり、その前で数名のエルフらしき人々が控えていた。彼女らは真っすぐにその人たちに向かって歩いていく。

「ようこそ」

俺たちが近づくと、控えていたエルフの中から一人の男が進み出て、丁寧にお辞儀をする。彼は青白い顔色にこやかな笑みを浮かべたまま、俺たちに話しかけてきた。

「バーサーム・ダーケ・リノス様ですね？　お待ちしておりました。こちらにおいでいただけるかどうか少し不安でしたが、お見えいただいて恐縮です。私、エルフ王の側近くに仕えますオルトーと申します」

そう言って彼は俺たちに再びお辞儀をした後、ミークの前に進み出て、片膝をついた。

「お帰りをお待ちしておりましたジャニス姫様。このオルトー、姫

様をお迎えできまして、この上の喜びはございません」

「じゃからミークでよいと申すに」

うんざりした表情を浮かべながらミークが口を開く。彼は少し驚いた表情を浮かべたが、やがて、俺たちを連れてきたエルフたちに視線を向けた。しばらくの間沈黙が訪れる。どうやら彼らの中でいろんな会話が交わされているようだ。

「なるほど……姫様がそう言われるのであれば……。ですが、我々は姫様の臣下でございます。誠に僭越ながら、これまで通りジャニス姫様と呼ぶことをお許しください」

「……勝手にせよ」

もう飽き飽きだという表情を隠そうともしないミークは、キョロキョロと城の中を眺めている。そして、どうもよくわからないと言った表情で首をかしげている。

「うん？　この城も記憶にないのか？」

「この城は記憶にはない」

「何だそりゃ？」

俺は視線をオルトーに移す。彼は大きく頷きながら、ゆっくりと口を開く。

「誠に仰る通りです。ジャニス姫様は王族用の敷地でお育ちになりました。こちらまでおいでになることはなかったかと存じます」

彼は満足そうな笑顔を湛えながら俺たちに説明してくれる。

「ささ、こちらへどうぞ。ご案内いたします」

彼は笑顔を崩すことなく、俺たちを案内しつつ目の前にある階段に向かって歩き始めた。

「我らエルフとお話なられたことはおありですか？」

「いいえ。初めてです」

「そうですか。なかなか会話が出来なくて苦労されたのではありませんか？」

「そう……ですね」

「我らエルフは喋らずとも意思疎通ができます。しかも、外部との接触を断って数百年……。言葉を操ることも怪しい者たちが増えております。今回、姫様を迎えに参った者たちは、それなりの年齢のものを選びましたが、やはり久しぶりに外部の方と接触するにあたって、彼女たちも相当緊張したようです。そのためになかなか伝えきれなかった点も多かったようです。ご無礼の段、平にご容赦を」

オルトーは歩きながらそんなことを喋っている。先ほどの女性と比べればエライ差だ。そんな俺の驚きなど気にする様子もなく、彼はさらに言葉を続ける。

「狐神殿からお話をいただいたときは、信じられませんでした。すでにジャニス姫様はこの世におられぬと思っておりましたから……。

しかし、狐神様はなかなか姫様をお返しいただけませんでした。また嘘をつかれたと思っていた矢先に、あなた様からのお手紙……。しかも、ラトギスの杖までお返しになられた。あまりの急な展開に、我らもにわかに信じることができませんでした……。いや、エルフ族は猜疑心が強いものなのです。お許しください。とはいえ、お手紙の中にはジャニス姫様の魔力を感じることができました。これで、姫様は生きていると信じることができたのです」

「あの……。最初、私たちがフィルコン山脈の麓に行ったときは、私たちのことには気づかなかったのですか？」

シディーが不思議そうな表情を浮かべながらオルトーに質問する。彼は前を見据えたまま、ゆっくりと口を開く。

「気付いていなかったと言えば、嘘になります。むしろ、我々は当初は敵であると認識していました。このフィルコン山脈の麓まで来られたのです。それだけの能力を持つ者ですから、何としても討伐せねばならないと思いました。ですが……。姫様によく似た方がおいでになりましたので、攻撃を差し控えました。我々はその姫様でさえ、罠ではないかと疑っていましたが」

そう言って彼は俺たちに笑顔を向ける。俺は返す言葉が見つからず、ただ、苦笑いを浮かべるしかなかった。

その後、俺たちは迷路のような廊下を、かなり長い時間歩き続けた。何と言う広い城なのだろうかと驚く俺の一方で、シディーはずっと不思議そうな表情を浮かべていた。そして彼女は、人差し指を顎の下に当てて、何かを考え始めた。その様子に、俺を始めとする誰もが、気付くことはなかった……。

第四百六話　城の秘密

目の前に大きな扉が見えてきた。明らかにそこから放たれている雰囲気が異なっている。

「こちらから、王族専用の区域になります。恐れ入りますが、武器の類……体を傷つける可能性のある物は、こちらで預からせていただきます」

オルトーはにこやかな表情を浮かべてはいるが、目の奥は笑っていない。どうやら、この奥に入るのには、ヘタな小細工はしない方がよさそうだ。

俺はほとんど丸腰に近く、正直言って何も持って来ていない。ポケットの中を探ってみるが、何もない。やはり、何かお土産を持ってきた方がよかったのではないかという思いが湧き上がってくる。俺は持ってきた方がいいと思ったのだが、ミークが頑なにいらないと言って聞かなかったのだ。エルフは食べ物に興味がないのだそうだ。俺は、おはぎやケーキを持って行けば気に入ってもらえると思っていたのだが、それは無駄らしい。確かに、ミーク自身もほとんど食べない。温かいスープを飲み、たまに野菜を食べるくらいだ。子供達が食べているオヤツはもちろん、朝昼晩の食事に関しても、全く関心を示さないのだ。

俺はそんなことを考えながらミークに視線を向ける。彼女は面倒くさそうな表情を崩そうともせず、宙に視線を泳がせている。

「ちょっと……待って、ください、ね」

シディーがアセアセとポケットからいろいろなもの出している。つまようじのような細い棒や、ナイフのようなものまで、一体この小さな体にどれだけのものが入っていたのかと思うほどに、色々なものが出てくる。まるでドラ〇もんのようだ。

さすがにオルトーも、ここまでとは予想していなかったようで、その表情が強張っている。

「ふう……お待たせしました」

シディーのその声で我に返る。オルトーは笑みを浮かべたまま少し俺たちに顔を近づけて、そのままじっと眺め続ける。

「結構です。ありがとうございます」

そう言って彼は踵を返し、扉をノックした。俺はまったく鑑定スキルが働かないが、彼は俺やシディーのことがわかるらしい。一体これはどういうことだろうか。シディーに聞いてみようと思ったが、そのとき、扉がミシミシとイヤな音を立てて開いていく。扉の中には誰もおらず、人ひとりが通れるような狭い通路があるだけだった。しかも、通路の周囲の壁が黒い。どうやら、山の岩盤をくり抜いて作っているようだ。

「では、ご案内します」

戸惑う俺をそのままに、オルトーはスタスタと扉の中に入っていく。俺も彼に続いていく。すると、開けるときにはあれほどの音を出していたあの扉が、音もなく閉まった。その瞬間、俺の体に何ともイヤな予感が駆け抜ける。

この感覚は覚えがある。あの、タナ王国と戦った際に、魔法が使えなくなったときにそれに似ている。しかも今回は、そのときよりも強く感じる。

『シディー、シディー』

後ろを歩いているシディーに念話を飛ばしてみるが、彼女からは何も返ってこない。俺は前を歩くオルトーに鑑定スキルを発動してみるが、やはり何も見えない。火魔法を出そうとしてみたが、全く反応しない。どうやら本当にここでは魔法が使えないようだ。

……もしかして、人間だけ、か？

ふとそんな考えが頭の中に去来する。オルトーはおそらく鑑定スキル、それもかなりの高いレベルのものを持っていると見た。エルフは魔法が使えて、俺は使えない。先日のサンディーユの言葉が思い出される。エルフは俺に対しての対策を取るだろうというあのセリフが、現実味を帯びてきた。何か自分の身を守るものを持ってくればよかったと後悔したが、持ってきたところで、この部屋に入るときに全て没収されることを考えると、それは無駄な動きであるような気がする。ただ俺には、剣術を始めとする肉体的なスキルも充実している。ちょっとやそっとでは倒されない自信はあるが、魔法が全く使えないのは少々都合が悪い。おそらく、エルフが魔法で攻撃してきたら、俺はそれらを完全には躱し切れないだろう。となれば、シディーやミークを守り切ることが難しくなる。最悪の場合を想定すると、俺はどのように動くべきか……。

「知識……」

後ろから、そんな声が聞こえた。この声はシディーだ。どうやら、俺の後ろを歩きながら彼女は喋っているらしい。

「知識は攻撃力にもなり、防御力にもなる。薬にもなれば毒にもなる。使い方次第で、どうにでもなります」

誰に言うともなく、彼女は呟いている。俺の不安を察してくれたのだろうか。ただ、彼女のその言葉を聞いていると、俺の心の中に湧き上がる不安がゆっくりと落ち着いていくのを感じる。きっと、シディーがいれば、大丈夫だろう。

そんなことを思っていると、不意に広い部屋に出た。

「ここは……記憶にあるぞよ。……思い出した！　ここは遊び場じゃ。あっちへ行くと、外に出られるのじゃ！」

ミークが頓狂な声を上げる。彼女は数百年前の記憶を一気に取り戻すように、あちらには何があって、こちらには確か……とあちこちを見廻しながら目を輝かせている。

「ジャニス姫様、まずは、父君にご挨拶を」

オルトーが恭しく片膝をついて彼女に話しかけている。ミークはよいではないかと言いながら、キョロキョロと周囲を見廻しながら懐かしそうな表情を浮かべている。

「おいシディー、魔法は使えるか？」

「魔法？」

俺はオルトーがミークに集中している隙にシディーと小声で話をする。俺は手短に魔法が使えないことを話し、彼女自身も魔法は使えるかどうかの確認を行う。もしかすると純粋なドワーフで、しかも、鹿神様の加護を受けているシディーならば魔法が使えるのではと思ったが、その期待も空しく、彼女の魔法も発動しなかった。

「一体これはどうなっているんだろうな？」

「わかりませんけれども……。これはあくまで直感ですけれども……」

「何？　何だ？　教えてくれ」

「おそらくこれは結界ではないかと思います」

「け……結界！？」

「どうやら、エルフは魔法が使えるようですし……。私やリノス様だけが、しかも魔法だけが使えないようになっているというのは、結界の中でそうした効果が付与されているのではないでしょうか。それが一番効率的でもあります」

「た……確かに」

「ただ、リノス様の魔法を封じているとなると、相当どころか、神レベルの結界スキルを持っていますね。そう考えるとかなり厄介ですが……。ただ……」

「ただ、何だ？」

「イヤな予感は感じませんので、きっと大丈夫じゃないでしょうか？」

シディーがニコリと微笑む。確かに、俺もイヤな予感は感じていないため、彼女の一言はとても心強かった。

「さて、お待たせいたしました。王の許にご案内します」

そう言ってオルトーは再び踵を返して、歩き始めた。俺はシディーと顔を見合わせながら彼の後ろに付いていく。彼女は俺の服の裾をちょっと掴み、並ぶような形で歩いている。

「仲がよいな」

俺たちの背後でミークの声が聞こえる。これは完全に冷やかしている。

しばらく歩き、いくつかの扉を越えていくと、豪華な設えの扉が見えた。その前には、若い、見目麗しいエルフ二人が控えていて、俺たちに鋭い視線を投げかけている。そんな二人の様子を気にするわけでもなく、オルトーは扉の前に立つ。すると、二人のエルフが同じ動きで扉に手をかけ、ゆっくりと開けた。

……謁見の間というやつだろうか。金の豪華なシャンデリアが吊るされ、部屋の中がピカピカに磨き抜かれたように輝いていた。そこには着飾った多くのエルフが控えていて、その一番奥の、一段高くなったところに玉座が設えられていた。あそこがエルフ王の席らしい。

「どうぞ、お進みください」

オルトーが部屋に入り、俺たちに向き直って、入室を促す。俺はシディーと顔を見合わせながら、部屋に向かって足を踏み出した……。

第四百七話　招かれざる客？

そこは、エルフ王の住む城の謁見の間とは思えないほどの、簡素な部屋だった。

目の前には大きなカーテンが敷かれている。ただ、それだけの部屋だった。王の肖像画が飾っているわけでもなければ、豪華な鎧兜が備えられているわけでもない。山の中をくり抜いて作られているのだろうが、その壁は白く磨き抜かれている。だが、部屋自体は冷たい雰囲気を持っている。俺がこれまで見てきた謁見の間は、その国の威信を示そうとする姿勢がよく見てとれるものばかりで、どこも豪華で煌びやかなものだった。だが、ここはむしろ、冷たさを先に感じる。

目の前のカーテンの前に、一人の女性と思われるエルフが立っている。彼女は俺たちを睨みつけたまま、微動だにしない。その視線からは俺たちを歓迎している雰囲気は微塵も感じられず、むしろ、侮蔑の感情が向けられている。それはこの部屋に集まっているエルフたちからも十分すぎるほどに感じられる。

「そこでお止まり下さい」

静かな、しかし、感情を一切感じさせない声が響き渡る。部屋の中央辺りで、女性が立っている場所からかなり離れている。こんなところで立たせてどうするつもりだと思っていると、オルトーが俺たちを追い抜いて、スタスタと歩いていく。戸惑いながら彼の後姿を見つめていると、彼は女性のちょうど逆の位置で立ち止まり、こちらに振り向いた。

「膝をお付きください」

女性がさらに冷たく言い放つ。その口調が気に障るが、俺は粛々と膝を付こうとする。

「無用じゃ」

後ろから声がする。ミーク姫だ。

「そなたは、妾を救った恩人じゃ。畏まる必要はない」

「王の御前です」

ミークの声を、女性が言下に否定する。だが、彼女は黙っていない。

「この男とて、アガルタの王じゃ。そなた、無礼であるぞよ」

女性の雰囲気が変わった。明らかに怒っている。

「レイラ、もうそのくらいにしておけ」

オルトーが呆れたような表情で女性を窘める。彼女は表情を変えないまま、スッと俺たちから視線を逸らせた。彼はフッと息を吐くような素振りを見せ、スッとカーテンに向かって一礼をする。

スルスルとカーテンが上がる。そこには、白い衣装に身を包んだ男が立っていた。どうやらこれがエルフ王らしい。

「……」

誰も、何も言葉を発しない。ただ、静寂が部屋の中を支配する。

「ええと……この度は」

沈黙に耐えられずに俺が口火を切る。だが、その瞬間、目の前の二人をはじめ、その部屋にいたエルフ全員の視線が俺に向けられた。

「……！？」

予想外の反応だったために、俺も固まってしまう。再び沈黙が俺たちを包む。

「う……オホン、先に、名乗られよ」

オルトーが戸惑いのまま促してきた。

「ええと……。初めてお目にかかります、アガルタ国の国王をしております、バーサーム・ダーケ・リノスと申します。これに控えておりますのは、妻のコンシディーと申します。以後、お見知りおきをお願い申します。この度は、ミーク姫をお助けしまして、こちらにお連れしました」

「……」

再び沈黙が訪れる。……何だか、やりにくい。

そのとき、エルフ王が玉座につき、スッとオルトーのいる方向に体を傾けた。

「我が王……エルフ王・ホンノワイチは、大儀であると言っておられます」

「ありがとうございます」

……伝言ゲームかいっ！　喋った方が早いだろうに。ホンノワイチ……何だか、優しそうな名前だな。そんなことを思いながらも、取りあえず礼を言っておくことにする。

そのとき、ミーク姫がスッと俺の隣をすり抜けて、スタスタと王の許に向かって歩いていく。ためらいなどはまったく見られない。淡々と父の許に向かって歩いていく。そして、玉座の前に来ると立ち止まり、そこで彼女はしばらく立ち尽くした。

「……どうやら、会話を交わしているようですね」

シディーが俺の後ろで小さな声で呟いている。王と姫はじっと見つめ合っていて、よく見れば、王がかすかに頷いているようだ。

「うっ、うっ、ううう……」

まるで堪えていたものを爆発させるかのように、ミークが泣き崩れる。その様子を王は無表情で見つめている。だが、オルトーは目に手を当てて涙を拭うようなしぐさを見せている。一方で、レイラと呼ばれた女性は、相変わらず不機嫌そうな表情を隠そうともせず、その場に立ち尽くしている。

そのとき、王が涙を拭っているオルトーに視線を向けた。その瞬間、彼は王に向き直り、直立不動の姿勢を取った。そして約１０秒。彼はミーク姫に体を向け、再び直立不動の姿勢を取った。すると、グ

スグスと泣いていた彼女も、オルトーに視線を向けて、二人は見つめ合う。

しばらくすると、ミークがクルリと踵を返して、スタスタと俺たちの許に戻ってきた。彼女は俺たちの目の前までくると、さも疲れたと言ったような表情を浮かべながら大きなため息をついた。

「大儀であった。ゆっくり休めと父上は言っておいでじゃ。これまでのこと、本当に、本当に感謝するぞよ」

「そ……それはよかった。それにしても、えらく疲れているように見えるけれど、大丈夫か？」

「久しぶりに父上と話したによって、な」

「ハッハッハ、アガルタ王は、我らエルフのことをよくご存じないのですな」

オルトーが笑みを浮かべながら話しかけてくる。彼は機嫌の良さそうな雰囲気を醸し出しながら、さらに言葉を続ける。

「我らエルフは基本的に言葉を交わしません。ちょっとした視線、体の動きや雰囲気で対話をすることが可能なのです。そのために、エルフの中でも言葉を操ることができる者も少なくなりました。私などは、言葉で伝えた方がよいと思うのですが、どうも皆、それはイヤらしい。困ったものです。ハッハッハ」

「そうですか。さすがはエルフですね。言葉を交わさずに会話ができるとは……。オルトーさんが言葉を操れてよかった。そうでなければ、我々はどうすることもできませんでした」

俺の言葉に彼は大きく頷く。聞けば、エルフの寿命は長く、平均して５００年は生きるのだという。とりわけ、王族の寿命は長く１０００年に渡って生き続けることもあるのだそうだ。

「おそらく、ロスサの水が関係しているのでしょうね」

オルトーの説明を聞きながら、シディーが呟く。その声に彼はピクンと体を震わせた。どうやら、図星のようだ。ちょうどいい機会だ、そのこともお願いしてみよう。

「そのロスサの水ですが、狐神たるおひいさまは、昔の通り、エルフ族とロスサの水を取引したいと申しております。何卒、よろしくご検討の程、お願いいたします」

俺の言葉を受けて、オルトーはエルフ王に視線を向ける。再び沈黙が訪れ、やがて、彼の視線が俺に向けられた。

「王は考えておくと仰せです」

「そうですか。是非、よろしくお願いいたします」

「承知した。せっかくはるばるこのエルフの里まで来られたのだ。ゆっくりとしていかれるがよい」

「いいえ、我々はこれでお暇致します。あまり長居をしましては、ご迷惑でしょうから……」

俺の言葉にレイラが小さく頷いたのを俺は見逃さなかった。何故、俺たちを毛嫌いするのか……。まあ、嫌いなのは仕方がない。放っ

ておくことにしよう。

「それはならぬ。そなたたちは妾の恩人じゃ。礼をせねばなるまい。礼をするぞよ」

「いいえ、そんな、勿体ない」

「いいや、それでは妾の気が済まぬ。よいであろう？」

ミークがオルトーに視線を向ける。彼はちょっと戸惑った表情を浮かべたが、やがてにっこりと笑って、大きく頷いた。だが、その瞬間、彼の体がピクリと動いたかと思うと、驚いた表情を浮かべて、後ろに鎮座しているエルフ王に視線を向けた。

「……」

何度目かの沈黙が訪れる。一体どうしたことかと思っていると、彼は再び俺たちのいる方向に向き直り、戸惑いの表情を浮かべながら口を開いた。

「……王が、待てと言っておいでです」

「え？」

「あなた方に聞きたいことがあると、仰せです」

俺の背中に、冷たいものが流れた……。

第四百八話　予想外

心臓の鼓動が速くなる。いかん、落ち着け。落ち着くのだ、俺。

ゆっくりと息を吸い、ゆっくりと吐き出す。俺の動揺を悟ってか、シディーが俺の裾を掴んでくる。ここが正念場だ。

実は、ここに来る当初から、エルフ王の謁見が叶ったときのことをシミュレートしていたのだ。サンディーユの、ミーク姫がエルフの里に行くと殺されるという意見を受けて、俺たちはそれを防止する策を考えていた。

王との謁見が終了すれば、おそらく俺たちは追い返されるだろう。だが、彼女を城に一人残すというのは危険であるし、何をされるのかわかったものではない。むざむざ殺されに行くようなものだ。そこで、謁見終了後に、ミーク姫の方から俺たちに、礼をしたいと言ってもらい、彼女の部屋もしくは俺たちだけになれる部屋に案内してもらおうと考えていたのだ。そしてそこに、ミークの緊急脱出用の転移魔方陣を作る予定だったのだ。

転移魔法陣はすでに廃れた手法だが、ヘイズとの戦いの後に手に入れたラトギスの杖。これで描かれる魔法陣を見て、メイとシディーはそれがどういうものであるのかを解明していたのだ。その上、二人はかなり簡略化した魔法陣の開発にも成功していた。俺には全く理解できないのだが、シディーが完璧にそれをマスターしているのだ。

一方、魔法陣を起動させる魔力の問題だが、それについては、ソレ

イユが作った「ティペットの裁き」を利用することになっていた。彼女の母であるヴィヴァルを説得し、魔法陣を起動するのに十分な魔力を注入してもらった。あとは、魔法陣にこの紙を合わせるだけでいい。

ちなみに、「ティペットの裁き」はミークが持っている。彼女の髪の毛をまとめるためのリボンがそれに当たる。あとは、魔法陣を描くだけ。それは5分あれば事が足りるのだ。

これだけ壮大な計画は、全てシディー一人が考えた。俺はそんなことでエルフたちを欺けるのかが不安だったが、彼女は自分の意見に絶対の自信があると言い切った。

「考えてもみてください。エルフ王はミーク姫に会いたいと言っているのですよ？　その願いをわざわざ叶えようとしているのです。そんな私たちに、恩義を感じこそすれ、無下には扱わないと思います」

「いや、それでも……。こんなことは言いたくないが、エルフ王がクズ野郎だったら……。即座に俺たちを殺せと言うのでは……」

「その可能性も低いです」

「どうして？」

「エルフ王は数百年間、エルフ族を統治しています。エルフの里で反乱が起こったという話は聞いたことがありません。それどころか、世界各地に散らばっていたエルフを里に集結させています。相当の手腕のある王だと思いませんか？　外界との交わりを断っているとはいえ、エルフ王の悪評は全く聞こえてきません。それに、人徳の

ない王であれば、里から逃げ出してくるエルフもいるはずです。ですが、全くエルフの姿を見た者すらいない。これは、王に相当の人徳がある証拠だと思います」

「もしそうだとしても、ミークの要望に応えてくれるとは限らないんじゃないか？」

「いえ、長く人々を統治するために、最も大切なものは情です。無論、その他の能力も必要ですが、やはり情が一番です。そんな情のある王が、娘を取り戻してくれた恩人に礼をしないなどとは考えられません。もしかすると、家来たちは早く私たちを追い返せと言うかもしれませんが、きっとその意見は取り上げないかと思います」

彼女の自信に満ちた説得によって、結局俺はその意見を容れることにしたのだった。だが、その後は、ミークと王の前で一芝居を打たねばならないために、かなりの稽古を積まされたのだ。ミークはとても喜びながらウキウキでやっていたのだが、どうも俺のセリフ廻しがシディーは気に入らないらしい。「もっと自然に！」だとか「もっとさらりと言う！」などと、かなり厳しく叱責された。俺としては、歌舞伎の名優、十五代目市村羽左衛門のセリフ廻しを見事に真似たつもりだったのだが、どうもダメらしい。結構自信があったのだが……。

そんなこんなで稽古を重ねるのは数度に及んだが、結局、シディーの太鼓判は得られなかった。何度彼女の舌打ちを聞いたかわからず、心の中で悔し涙を流したのは一度や二度ではない。酷いのは、ここまで俺がヘコんでいるにもかかわらず、リコなどは、「どうしてもっと普通に言えないのです？」などと真顔で、真剣に心配していたことだ。こちらとしてはあくまで自然に、さらりとやっているつもりなのだが。

今回、俺としては完璧に運んだつもりだった。それを証拠に、シディーの舌打ちは聞こえてこなかった。リハーサルでは、このまま大儀であった、下がって休むがよいという流れだったのだ。まさか、俺たちに聞きたいことがあると王が言ってくるなど、思いもよらなかった。まさか、芝居がバレたのだろうか。いや、そんなことはない、断じてそんなことはない。

誰が見ても自然な流れだった。「そのまま引き取られよ」と言われる、もしくは、そうした言葉がない場合は、俺たちからお暇しますと言って、その場を離れようとする。ミークがそれを止めて礼をしたいと言う。好きにすればいいという流れになる。ミークの部屋か別室に通されるという流れになるはずなのだ。

俺はじっとエルフ王を凝視する。実に整った顔立ちの青年だ。髪の毛がエメラルドグリーンで実に美しい。年齢不詳だが、２０歳と言っても信じてしまうだろう。そのくらい若々しくも見える。

彼は全く表情を変えず、俺に視線を向け続けている。

「アガルタ王様、我が王は、そちらの女性は、本当に貴殿の妻かとお尋ねです」

オルトーが口を開く。予想していなかった質問だ。俺は思わずシディーに視線を向け、二人で顔を見合わせる。

「はい。これに控えますのは、我が妻の、コンシディーです」

ダン！

俺が言い終わらないうちに、エルフ王が右足で地面を踏み鳴らした。
一体何なのだ？

「……お……王は、そのような年端もいかぬ子供を、妻にしたのかと言っておいでです」

オルトーが戸惑いながら必死で通訳してくれている。

「い……いえ、妻は幼く見えますが、ドワーフなのです。彼女はドワーフ公王の息女なのです。ドワーフは外見的には幼く見えますが、これでも彼女は４０年の歳月を生きております」

「……チッ、３８年と９ケ月と１０日です」

「あ……う……妻は、３８年の歳月を生きております。エルフ族から見ればまだまだ幼く見えるかもしれませんが、妻は私よりも長く生きております。従いまして、決して幼い女性を妻に迎えたわけではありません。私は、妻を愛しております。妻も、私を愛していると信じております。……ね？」

思わずシディーに視線を移す。彼女は何とも言えぬ表情を浮かべていたが、俺の視線に気が付くと、顔をポッと赤らめて、ゆっくりと頷いた。そして、よく通る声で、エルフ王に向かって口を開いた。

「アガルタ王の妻、コンシディーでございます。夫からもございました通り、ニザ公国公王、ニザ・デューク・エイモンの息女でございます。我々ドワーフは成人しますと、男性は髭を生やし、女性はこのように髪を伸ばしてその外見を区別できるようにしております。先に夫は、私の方が長く生きていると申しましたが、年齢的にはそうは変わりません」

変わりません、という言葉を何故かシディーは強調している。これ以上は怖いので、敢えて何も言わないことにする。

オルトーはじっとエルフ王を凝視していたが、やがて、ゆっくりと息を吐くと、ヤレヤレといった表情を浮かべながら俺たちに向き直った。

「王は、ヘイズの出来事が忘れられないのです。アガルタ王の奥方をご覧になって、あなたをヘイズと同類ではないかと思ったのです」

「あの……一緒にしないでいただきたいです」

「うむ。失礼した。許していただきたい。その点は、私から王に説明申し上げた。王は……」

突然オルトーが絶句した。見ると、後ろに鎮座していたエルフ王が左手をスッと上げて、彼を制するようなポーズを取っている。王はゆっくりと立ち上がり、こちらに向かって歩き出した。

オルトーとレイラが顔を見合わせている。そして、慌てて二人が王の後ろを付いて来る。

コツ……コツ……コツ……。

一切表情を変えないまま、エルフ王が俺たちに近づいて来る。不気味だ。実に不気味だ。

俺たちとの距離が、約5メートルにまでなっただろうか。王は突然その歩みを止めた。そして、じっと俺たちを見据える。

「……よい」

若々しい声が聞こえた。王が喋ったのか??　俺は彼の顔を見つめる。すると、その口がゆっくりと開かれた。

「これより、寝所に参れ。我の夜伽をせよ」

……何?　お前、今、何て言った??

第四百九話　夜伽

俺たちの戸惑いをよそに、エルフ王はクルリと踵を返してスタスタと歩き出し、そして、そのまま奥に下がってしまった。彼の後ろをオルトーが焦った表情を浮かべながら付いていく。

その様子を、レイラは無表情のままで見送っていたが、やがてゆっくりとした歩みで俺たちの許に近づいて来た。

「ご案内します」

そう言って彼女は歩き出す。ミークも何のためらいもなく、彼女の後ろを付いていく。

「おい、ちょっと待て。さっきの話は」

「……」

俺の声でレイラは歩みを止めて俺たちに振り返ったが、その表情には明らかに侮蔑の色が出ていた。そして、無言のまま再び歩き出した。その様子からは、イヤなら付いて来るな、そのまま帰れという雰囲気がよく見てとれた。

だが、そんなイヤな雰囲気であるにもかかわらず、ミークはレイラの後ろに付いて、スタスタと歩いていく。

「行きましょう、リノス様」

シディーが毅然として歩き出す。その表情が俺にはあまりにも予想外の様子だった。思わず俺はシディーの手を握る。彼女はゆっくりと頷いて、二人の後を追おうと促してくる。

「絶対に守る。シディーのことは、俺が何としても守るから、安心しろ」

「リノス様……。ご安心ください。大丈夫です。リノス様が考えていらっしゃることは起こらないと思います」

「大丈夫って……」

「直感です」

「シディー……」

「それに、私はリノス様以外の男性に肌を見せることは絶対に、イヤです。この体を見られるのは、絶対に、イヤだ」

俺たちは固く手を握りながら、ただ無言で二人の後を追いかけた。

案内されたのは、ごく普通の部屋だった。ちょっと広めの印象だが、ベッドとテーブル、そしてクローゼットのような家具が供えられた部屋だ。ちょっとお高めのホテルの一部屋を想像してもらえるとわかるだろうか。

「あとで、お迎えに参ります」

「おい、ちょっ」

俺の言葉を聞き終わらないうちに、レイラは部屋から出ていってしまった。俺は彼女を追いかけようとしたが、シディーが俺の手を握ってそれを止めた。

「シディー……」

「ここに居ましょう、リノス様」

「ほんに、そなたたちは仲が良いのう」

「バカ野郎。そんなことを言っている場合か。さっきのアレは何なんだ」

「アレ、とは何じゃ？」

「お前、聞いていなかったのか？　夜伽をしろと言っていたぞ」

「父上がお望みなのじゃ、仕方がないであろう」

「ハア？　意味が分からんぞ？」

「この国で王の命令は絶対じゃ。父上がそう望まれたのであれば、誰も反対することができぬ」

ミークは事も無げにそんなことを言ってくる。俺は怒りを通り越して、呆れるほかはなかった。

「あれは確実に興味を持っている眼だった……」

シディーが誰に言うともなく呟く。いや、もしそれが本当だったら、彼女の操が危機に晒されていることになる。絶対に、何とかしなければならない状況だが、どうして彼女は落ち着いていられるのだろうか。

そのとき、ノックもなく部屋の扉が開かれた。見ると、背の高い、男だか女だかわからない中世的な風貌をしたエルフが立っている。そのエルフは、スッと俺たちを指さしたかと思うと、その姿勢のまま固まってしまった。

「体を清めよと言っておるぞよ」

「え？」

ミークの言葉に思わず俺たちは振り返る。彼女はコクコクと頷いている。一体何がどうなっているのか。俺は、再び扉に視線を向けるが、そこにはエルフの姿はなかった。

「……扉を閉めていかんかい」

小さな声で呟きながら、俺は扉を閉める。一体何なのだ、この城は。行儀作法というものを教えていないのだろうか。

俺は少し納得いかない感情を押し殺しながら、シディーの許に戻る。

「ほれ、あの水で体を清めるのじゃ」

見ると、ミークの後ろには洗面台のようなものが設えられていて、そこには満々と水が湛えられていた。

「それこそがロスサの水じゃ」

「え？」

俺は思わず水を見つめる。これがおひいさまがエルフとの関係改善を望む理由の一つである、ロスサの水なのか……。だが、俺には普通の水にしか見えない。

「それで体を洗えば、大抵の汚れは取れるはずじゃ」

「あのなぁ」

ロスサの水を見つけられた嬉しさはないとは言えないが、それよりも、このミークの淡々とした振る舞いが少し癪に障る。

「ミーク、お前よくそんな淡々として居られるな」

「うん？」

「うん？　じゃねぇよ。さっき見ただろう？　お前の父親が夜伽をせよと言ってきたんだぞ？」

「父上の眼鏡にかなったのじゃ。誇るがよい」

「お前、一体どういう神経をしているんだ？　夫の目の前で、その女房を夜伽させろなんて言うか、普通！？。どんな悪代官ぶりだよ！」

「アクダイカン？　何じゃそれは？」

「悪いヤツだということだ！」

「一体何を怒って……。ああ、そうか、わかったぞよ。うはははは」

「おい、何がおかしいんだ！」

ミークは腹を抱えて笑っていたが、やがて涙を拭きながら、俺に視線を移す。

「父上が二人に向けて色々と話しかけておったのだが、わからんかったようじゃの。まあ、それはそうじゃろうな。妾も父上のお言葉をわかるのに必死じゃったからの」

「どういうことだ？」

「父上はこう言っておいでじゃった。よくぞ来た。まずは別室で休まれるとよい。その後、ゆるりともてなそう……と」

「おい待て。夜伽をせよという言葉と全く話が繋がらないじゃないか」

「話を最後まで聞くのじゃ。そなたたちが父上に反応しておらんかったから、何度かお尋ねになられておった。それで、どうもこの二人にはわからぬようだと言われて、声を出してみようと仰せられたのじゃ」

「で、夜伽の話になるのか？」

「ちょっと待ってください」

シディーが声を上げる。彼女は俺の隣にやって来て、ギュッと手を握った。

「夜伽せよという言葉の前に王は、よい、と言っておいででした。あれはどういう意味なのですか？」

「ふぅん？　ああ、あれはレイラが、このような下賤な者にお言葉など勿体のうございます、とか何とか言っておったのじゃ。父上はそれに対して、よい、と言ったのじゃ」

それを聞いてシディーは俺から手を離し、右手の人差し指を顎の下に付けて、考えるポーズを取った。

「もしかして、レイラさんというお方は……リノス様のことが、嫌いですか？」

「言うまでもないことじゃ。嫌いに決まっておろう」

「男性が、嫌い？」

「そうじゃな」

「それに対して、エルフ王様は、リノス様のことがお嫌いではない？」

「そうじゃ」

「おい、シディー。一体どういうことだ？」

「ええと……。もしかすると、もしかするとですよ？　言いにくい

のですが……」

「何だ、シディー。もったいぶらずに教えてくれ」

「あの……もしかすると、エルフ王の寝室に呼ばれたのは……。夜伽を命じられたのはもしかすると、リノス様では……」

「はあ？　俺？」

あまりに荒唐無稽な話なために、俺は絶句する。そして、視線をゆっくりとミークの方向に向ける。

「何じゃ？　何を驚いたような顔をしておるのじゃ？」

「いや、エルフ王の夜伽って……」

「そなたじゃ」

「はあぁぁぁぁ？？」

「やっぱり」

シディーがさも残念そうな表情で頷いている。ちょっと待て、何で俺がエルフ王の夜伽をしなきゃいけないんだ！

「エルフ王からは確かに、興味を持っている雰囲気を感じていました。そういうことでしたか……」

そう言うとシディーは俺の手を両手でギュッと握る。おい、何だ？　何で何も言わないんだ？　何か言ってくれよ……。

てゆうか、それはイヤだ。絶対にイヤだ。俺はそっちの趣味は全くない。新しい世界の扉をノックするのだけは、絶対にイヤだ……！

第四百十話　臭い？

イヤな記憶が蘇る。そう、あれは前世の頃の話だ。

当時の上司に、社会経験だと言われて無理やりオカマバーに連れて行かれた。そこで俺は約2時間、お姉さまから口説かれたのだ。

「アンタ、かわいいわね」

「ありがとうございます」

「仕事は何をしているの？」

「プログラマーをしています」

「昼も夜も働く仕事じゃない。大変ねぇ」

「はあ……」

「辞めちゃいなさいよ」

「えっ！？　イヤ、でも、生活が……」

「アタシが面倒見てあげるわよ」

「え？」

「一緒に暮らしましょ。アンタ一人くらい、どうにでもなるわ」

「いやいや、それは……ハハハ」

「アタシと付き合ったら、人生変わるわよ」

「いっ、今の人生が気に入っています……」

ガッチリと腕をロックされ、それこそ、唇が触れるのではないかと思われるくらいの至近距離でひたすらに口説かれたのだ。うん。見た目は、とてもきれいなお姉さまだったが、自〇隊にいたらしく、その力はかなり強いものだった……。

そのときのことを思い出しながら俺は、自然に体が震えてくるのを止めることができなかった。

「お迎えに上がりました」

突然声が聞こえて、俺はビクッと体を震わせる。見ると、扉が開かれて、そこにレイラが相変わらず不機嫌そうな様子で立ち尽くしていた。

「えっ……その……」

「仕方がない。妾も一緒に行こうぞ」

「えっ!?」

ミークが立ち上がってそんな言葉を宣う。彼女はしばらく無言でレイラを見つめ続けていたが、やがて彼女は無言のままスタスタとそ

の場を後にしていった。

「……やっぱり扉は閉めないんだな」

「リノス様、そこですか？」

シディーが呆れたような表情で突っ込んでくる。確かにそうなのだが、でも、気にならない？　結局あの扉は誰が閉めるのだろうか？　自動で閉まるのだろうか？　そんなことを考えている俺の表情をシディーがじっと見つめてくる。

「……オホン。ミークも一緒に行ってくれるのか？」

「問題あるまい？」

「そ……そうなのか？　いざとなったら、助けてね」

焼け石に水であるのはわかっている。だが、魔法が封じられているこの城で、これから何が起こるのかがわからない。そんな一抹の不安が、こんな弱気なセリフを言わせたのかもしれない。そんな俺をミークは怪訝な顔で眺めている。

「まずは、この水で体を清めよ。そなたもじゃ」

そう言って彼女は、シディーに視線を移す。

「私も一緒に……？」

「よいじゃろう」

「……」

シディーがホッとしたような顔になる。彼女も彼女で心配してくれていたのだと思うと、ちょっと嬉しくなった。これで、襲われる心配は半減したと言っていい。俺たちはミークの指示に従って、満々と湛えられているロスサの水に手を浸した。この水は抜群の殺菌効果があり、口に含むと、虫歯なども治ってしまうらしい。

「本来は体を漬けるのじゃが……。まあそのくらいでよいじゃろう」

「えらく詳しいんだな」

「数百年ぶりとはいえ、戻ってくれば色々と思い出すこともある。ここでよく着替えたものじゃ。懐かしいわぇ」

「え？　ここはミークの部屋じゃないの？」

「妾の部屋ではない。ここは着替えるための部屋じゃ」

「はああ」

ミークの話によると、この部屋で色々と着替えを行うのだという。クローゼットの中には、そのときに着るべき服が収められていて、この部屋に入ると、無条件にクローゼットを開け、着替えるのが常だったそうだ。

「ということは、もしかして、この中に服が？」

「開けて見よ」

俺はミークの言葉に促されるようにして、ゆっくりとクローゼットの中を開けて見た。

「何にもない。……あれ？　何だこれは？」

クローゼットの床に、何やらビニールのような透明な物が置かれている。それを拾って開いてみると、レインコートのようなものが現れた。しかもそれは一枚しかなかった。

「それを着て行くのじゃ」

「誰が？」

「そなたに決まっておろう！」

何で俺がこんなものを着なければならないのか。そもそもこれは一体何なのか。鑑定スキルを発動してみるが、やはり何も見えない。シディーに視線を向けてみると、彼女も興味深そうにそれを眺めている。そして、俺に視線を向けると、コクリと大きく頷いた。どうやら彼女の直感では、着用して問題のないものらしい。

「それは着用すると、体の汚れを取るものです」

再び女性の声が聞こえる。驚いて声のした方向に視線を向けると、そこにはレイラが立っていた。彼女は面倒くさそうな表情を浮かべたまま、ゆっくりと口を開いた。

「王に謁見する際には、それを着ていただきます。先ほどはオルトー様が直接王の御前に案内してしまいましたが、本来はそれを着用していただくのが仕来りとなっております」

「それは……私たちが汚いから……ですか？」

シディーが遠慮がちに尋ねる。レイラはコクリと頷く。

「人族、とりわけ男は汚れています。その体から発する臭いは不快そのものです。久しぶりに人族の男を見ましたが、やはりその不快さは変わりません。早くそのウエイ・ローブを着用ください」

まるで汚いものを見るかのような視線を投げかけてくる。俺は渋々ながらレインコートを羽織ろうとする。

「……なあシディー。俺、臭い？」

「えっ！？　そ、そんな、ことは、ありません、よ？」

「……臭いんだ」

シディーはブンブンと首を振っている。だが、その様子は「お前、臭いけれど我慢できるレベルだよ」と言っているように見える。俺は居た堪れなくなって、ミークに視線を向ける。

「妾は全く気にならんがの。人族の生活に慣れすぎたのかもな」

そう言って彼女はケラケラと笑う。気にならない、ってことは、やっぱり臭うんだ。おかしい。毎日風呂に入っているのだ。それなりに身だしなみには気を遣っているのだ。もしかして加齢臭？　まだ２０代のはずなのだが。いや、前世の頃から考えると、すでに４０を超えているから、加齢臭が出てくるのも当たり前か。うん？　いや、肉体は２０代だから加齢臭は……。いやいや、それじゃないか

もしれない。足が臭いのだろうか？　口臭？　一体俺の何が臭いのだろうか？？

俺は思いっきり落ち込みながらレインコートを羽織る。するとレイラはふう―と息を吐き出して、じっと俺を眺め、やがてコクリと頷いた。

「臭いは消えたによって、父上の許に案内すると言っておる。さ、行こうぞ」

ミークの言葉が言い終わると同時に、レイラはクルリと踵を返した。

「……どこが臭いの？」

王の寝所に向かいながら俺は、シディーに小さな声で話しかける。彼女は小刻みに顔を振っている。臭くないよと言っているらしいが、どう見ても不自然だ。いや、臭いならそれでいい。ただ、改善できるのであれば改善していきたいだけなのだ。まあ、エルフが人族の臭いを嫌うのがわかっただけでも成果だ。それに、このレインコートを脱げば、最悪、エルフ王から体を求められたときの防衛策が取れる。

そんなことを考えながら俺はシディーを眺める。彼女は俺に視線を合わせなかったが、やがて、ゆっくりと顔を上げた。

「強いて言うなら……」

「何だい？」

「服に付けられている香りです」

「へ？」

「その服……独特の臭いがします」

「もしかして、防虫剤の臭いか……」

この世界でも洋服の虫食いというのは発生する。そのため俺もクローゼットに仕舞ってある服、とりわけ、余所行きの服に関しては、防虫剤を仕込んでいる。ちなみに、この世界で防虫剤は存在しない。俺がソレイユと共に開発したのだ。ただ、その防虫剤は虫が嫌う臭いを付けているだけという簡単なものだ。基本的に香りのしないように注意をしていたのだが、シディーには鼻をつく香りになっているらしい。

「あの……普段のリノス様は臭くないです。大丈夫です。むしろ私は好きです。その……お風呂上りなどはとてもいい匂いですし、その香りと一緒に寝るときは本当に……」

そこまで言うと彼女は顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「お待ちください」

そのとき、レイラの声が聞こえて、俺たちは我に返る。見ると、白い扉の前に俺たちは来ていた。どうやらここが王の寝室らしい。

俺はフッと深呼吸をして、気持ちを落ち着かせた。

第四百十一話　天下一品

扉が開かれると、そこにはシンプルな部屋が現れた。机、椅子……。ちょっとした小ぎれいな部屋。生活するのに最低限のものが揃った部屋だ。そこは何となく居心地の良さを感じさせる。

その部屋の一番奥にエルフ王は座っていた。エ〇ニエル夫人のような、何かで編んだような椅子にゆったりと腰かけ、俺たちを眺めていた。

扉が閉まると同時に、王が立ち上がってこちらに向かって来る。そして、ゆっくりと俺たちに向けて口を開く。

「よくぞ、来た」

「はい……」

彼はフッと笑みを漏らすと、スッと手を挙げて俺たちを案内する。通された部屋は、会議室のようなつくりになっていて、木で作られた長い机と椅子が備えられていた。

「娘を、助けて、くれた。感謝する」

顔の表情は変わらないが、彼の感謝の思いは何となく伝わる。そして彼は、ミークに視線を向け、優しい表情を浮かべる。どうやら、親子水入らずの会話がなされているらしい。

「うっ……うっ……ううううう」

突然ミークが泣き出した。

「よかったな、ミーク。父上に会えてな」

「何を言うのじゃ！　聞いておらんかったのか！」

ミークが目を真っ赤に泣きはらして俺を睨みつけてくる。あまりの予想外の展開に、俺は絶句してしまう。

「父上は、この城から出ろと言っておいでじゃ。もう戻ってきてはならぬと」

「ええっ？　あの……それは、もしかして後継者争いのことで？」

俺の言葉に、王は少し驚いたような表情を見せたが、すぐに元の表情に戻り、コクリと小さく頷く。

「許せ……。ここに呼んではならぬ。だが……。二度までも我の手から奪われたそなた……。不憫なことをした。どうしても、どうしても、会いたかった……」

そう言って王は涙をこぼした。

エルフ王との話は、かなり時間をかけたものとなった。彼は言葉を必死で操りながら、俺たちにこれまでの顛末を説明してくれた。

サンディーユが言っていた通り、エルフ王にはもう一人の娘がいる。現在はその娘が次期王となることにほぼ、決まっているのだそうだ。王自身も、姫がヘイズに攫われ、その行方が全くわからなかったこ

とで、後継者を次女に定めたのだそうだ。だが、俺がヘイズを倒し、ミーク姫の生存が明らかになると、生母を始めとする彼女の関係者たちは、姫が生きているのだから、彼女を後継者に据えるべきだと言って譲らなかった。このエルフの里はミーク派と次女派に分かれ、双方が激しく争うようなっているのだそうだ。

「そなたには礼を言う。娘を連れて、戻られよ」

「エルフ王様」

突然シディーが口を開く。彼女はスッと俺たちの前に進み出て、エルフ王と対峙する。

「今のこの状況を、解決したいと思っていますね？　それに……この山に来たことを、後悔していますね？」

「……」

「これは私の直感ですが……。エルフ族がこの山に来たことは、間違いであったと思います。それに、ここに居たのでは、問題は解決しないと思います」

「なぜ、そう言い切れる」

「そっ……それは……」

さすがのシディーも、明確には答えられないようだ。そんな彼女を王は無表情で眺めているが、気配が変わっている。怒りとも焦りともつかない、何とも言えない雰囲気を纏っている。

「エルフ王様、妻は洞察力に優れております。そのために、直感で話をすることがよくあるのです。お気に障られたのでしたら、お詫びします」

俺の言葉に、彼はゆっくりと息を吐いた。

「父上は妾に、もう二度とこの里には戻ってくるなと言っておいでじゃ。妾がここに居ては諍いが収まらぬ。それゆえに、妾には二度と里には近づかぬように言われておる」

「でも、ミーク、お前はどうするんだ？　まさか一人で生きて行けと？」

「狐神に頼むと仰せじゃ」

「おひいさま？」

「妾の世話をする者も付けるそうじゃ。その礼に、ロスサの水を以前の通り授けると言っておいでじゃ」

そこまで言うと彼女は、エルフ王に向き直る。彼女は再び目から涙をこぼしながら、小さく頷いている。それを見て、エルフ王も目を潤ませている。どうやら父娘が今生の別れをしているらしい。

「さ、娘を連れて、里を出られよ」

……エルフ王の表情が、雰囲気が、一刻も早くここから去れと言っている。

「……解決しない」

俺が帰ろうと促そうとすると、シディーが小さな声で呟いている。
彼女はガバッと顔を上げて、毅然とした態度で口を開き出した。

「それでは、解決しないと思います」

「シディー……」

「私たちやミーク姫がここを去っても、問題は解決しないです。根拠はありません、私の直感です。ですが、私の直感が、ここで解決をしろと言ってきています。エルフ王様も、夫……。リノス様であれば、今、エルフ族が抱えている問題を解決してくれるのではないかと思ったのではありませんか？　だからこそ、ご自身の寝所に呼ばれたのではありませんか？」

エルフ王の目が少し見開かれた。どうやら図星を突いたようだ。

「ここに来るまでに、私は違和感を覚えていました。それがなぜそう感じるのかがわかりませんでしたが、これも全て、エルフ王様、あなたが私たちをお導きになったのではありませんか？」

「どういうことだ、シディー？」

「ここに来るまでの道中、私たちには全くと言っていいほど問題は起こりませんでした。……そうです。襲撃の類は微塵もありませんでした。おかしいと思いませんか？　大事な姫を二度までも奪われ、他の種族が入り込むのを極端に嫌っていたエルフが、ミーク姫を連れているとはいえ、何の確認もしに来ないというのは不自然です」

「そ……そうか？」

「だって、本物のミーク姫かどうかわからないではありませんか。もっと早くに確認しに来るのが自然だと思います。それを易々とフィルコン山脈の麓まで私たちを通し、エルフの里に迎え入れた……。これまでのお話を聞けば、私たちをここまで来させることについて、かなりの反対があったのではありませんか？　エルフ王様はその反対意見を押し切って、私たちを呼ばれたことで、かなりの危険を冒されているのではないですか？」

シディーの視線の先にいるエルフ王は、全く表情を変えようとはしない。だが、雰囲気が先ほどまでとは明らかに違っている。

「これも、私の推測で恐れ入りますが、エルフ王様。我が夫、リノスをご覧になって、直感的に、この問題を解決できるとお感じになったのではありませんか？　その一方で、夫のスキルに気付かれたのではありませんか？　高いスキルを持つ夫を危険に巻き込まず、このまま無事に帰らせることにした……そうではありませんか？」

「……恐ろしい者じゃ」

エルフ王の顔が歪んでいる。怖い……。何だこの怖さは……。纏っている雰囲気が怖すぎる……。

王はゆっくりと俺に視線を向けてくる。背中に、冷たいものが流れ落ちる。

「そなたの妻は、何故、ここまで、我の心を知りおるぞ」

「つ……妻の頭脳は実に明晰でありまして……。困りごとなどを察することに、長けております」

「父上、妾も父上の力になりたいぞよ」

ミークが小さな声で呟いている。俺たちに聞こえるように言っているところをみると、俺たちにも手伝わせたいらしい。

エルフ王は大きく息を吐き、何か物思いにふけるような表情を浮かべた。

「あの……一つお尋ねしてよろしいでしょうか？」

俺の言葉に、エルフ王がコクリと頷く。

「夜伽をせよと言っておいででしたが、あれは、どういう意味で……」

「……人族の世界では、王の寝所に呼ぶことを、夜伽と言うのでは、ないのか」

……誰だよ、教えたのは。半分合ってて半分間違っているよ。どうやら、これまでの話の流れからすると、そっちの意味ではなさそうだ。むしろ、プライベートな空間に呼ぶことで、人払いの役割を持たせていたらしい。ミーク曰く、王の寝所に入ることが許されるのは、エルフの中でも数えるほどしかいないのだそうだ。そこに呼ばれた俺たちは、王から信頼に値すると思われていると考えてよいらしい。

俺はゆっくりと息を吐いて、心を落ち着ける。

そのとき、部屋の扉が突然開いた。驚いて視線を向けると、そこに

は肩を激しく上下させながら、ものすごい形相で立ち尽くしているエルフの姿があった。その姿を見た王は、一瞬驚いたような表情を見せたが、やがて厳しい表情を浮かべて、スッと立ち上がった。

「……一大事じゃ、レイラが殺されたそうじゃ」

……は？　何だって！？

第四百十二話　欠席裁判

呆気にとられる俺たちを尻目に、エルフ王は立ち上がってツカツカと扉に向かう。その後ろをミークが付いていく。話が急展開すぎて思考が追い付かないが、取りあえず俺も二人の後に付いて行こうとする。

「無用じゃ。そなたちはここで」

ミークが見たこともないような真剣な表情で、俺たちを止める。そして二人は足早に部屋を後にしていった。

「……」

俺はポカンとした表情を浮かべながら、二人が出ていった扉を眺める。やっぱり扉は閉めないんだなと思っているところに、シディーが俺の手を握ってくる。彼女は俺の目をじっと見ながら、ゆっくりと頷く。

「……？」

「また卑猥なことを考えているっ！」

突然怒られてしまった。卑猥とはご挨拶だ。潤んだ瞳で俺を見つめているので、ひょっとしてキスでもして欲しいのかと思っていたくらいなのだ。シディーはプリプリと怒りながら、両手を腰に当てた状態で、ずいっと俺に体を傾けてきた。

「そうじゃなくて、私たちも追いかけましょう！」

「そ……そうだな。ミークを一人にするとヤバイだろうからな」

「そうではなくて、私たちも行った方がいいと思います。何だかここにいると悪者扱いされそうな気がします」

シディーの言葉の意味がいまいち飲みこめなかったが、俺は立ち上がって扉に向かい、部屋を後にした。

長い廊下を進んでいくと、何やらざわついている雰囲気が感じ取れる。別に何か話声が聞こえるわけではないのだが、歩みを進めていくと、その声にならないざわめきを明確に感じ取ることができた。

しばらく歩くと、目の前に扉が見えてきた。俺は少しためらいながらもドアの取っ手を掴み、ゆっくりと押し開いた。

……目の前には大勢のエルフが集まっていた。そして、全員が俺に視線を向けていた。俺は扉を開けた姿勢のまま固まる。目の前には椅子が見える。そこに座っているのはおそらく、というか間違いなくエルフ王だ。どうやらあの廊下は、玉座のある部屋に通じていたらしい。

椅子のすぐ後ろにはミークが控えていて、俺たちに気が付くと、顔をしかめた。

ふと視線を左側に移すと、椅子から首だけを出したエルフが俺たちを見ていた。目が合うとギョっとした表情になり、すぐに椅子から飛び上がるようにして離れていった。

「部屋に戻られよ」

エルフ王が前を向いた状態のまま口を開いている。俺はどうしてよいのかがわからずに固まっていると、王の前に控えていた年老いたエルフが憤怒の表情を浮かべながら俺を指さした。

「……」

「……」

「……」

集まったエルフの動きを見ていると、言葉は発しないが、王に何かを言っているのがわかる。

「これって……。もしかして、俺たちをこの城に入れたから、殺人事件が起こったんだ……みたいなことを言っているのかな？」

「そのようですね」

シディーが俺の脇の下からひょっこり顔を出しながら呟く。彼女もまた、目を上下左右に激しく動かしながらエルフたちの動きを観察している。ふと視線を移すと、ミークがこめかみをグリグリしながら頭を振っている。

「ミーク、大丈夫か？」

俺の声に彼女はヒラヒラと手を振っている。大丈夫だと言いたいのだろうが、どう見ても大丈夫そうには見えない。

「……一体、何がどうなっているんだか」

「どうやら、レイラさんが殺されたのは、私たちがここに来たのが原因だと言っているようです。いや、むしろ、私たちがレイラさんを殺したと思っているようですね」

「いや、あり得ないだろう。俺たちはミークやエルフ王らと常に誰かと一緒に行動してきたんだ。エルフを殺すタイミングなんかなかっただろう。俺たちは完璧なアリバイがある」

「アリバイ？」

「……ちゃんと、俺たちがエルフを殺していないと証言してくれる人がいるだろう」

「そうですね。どうも、エルフ王が私たちは犯人ではないと言ってくれているようですね。その言葉が逆に、エルフの怒りに火に油を注いでいるように見えます」

シディーは相変わらず顔を上下左右に動かしてエルフを観察している。王の前には数百人のエルフが集まっていて、狭い部屋に立錐の余地もない程だ。相変わらず言葉は発しないが、時おり手が上がったり、俺たちを指さしたりしているところをみると、かなり彼らが怒っているのはわかるし、その雰囲気は言葉で表せない程にイヤな感じだ。一刻も早くこの場所から離れたいが、どうもそうはいかないらしい。

「どうやら、私たちを殺せと言っているようですね」

エルフの様子を眺めていると、シディーが物騒な言葉を呟いている。

何で俺たちが殺されなきゃならないのだろうか。

「エルフが殺されたのは、私たちがここに来たからだ。ここにエルフ以外の種族が入ってきたから、大事な同胞が殺されてしまった……。エルフ以外の種族が入ると必ず不幸が起こるから、はやくその男と女の子を追放しろ……というより、ここで殺してしまえと言っているようです」

「いやいや、無茶苦茶ですがな、それ。欠席裁判かい。まずは犯人捜しが先じゃないのか？」

「そうですね、完全に責任転嫁をしていますね」

「静まれ、皆の者！」

突然、男との大声が響き渡る。見るとエルフ王が椅子から立ち上がっている。

「まずは、レイラを殺した犯人を捜すことが先決である。皆の者に命ずる。レイラを殺せし者を探せ」

「……どうやら、私たちに聴かせるために、敢えてエルフ王は声を出されたようです」

小さな声で呟いているシディーの声が響き渡るほどに、部屋の中は静寂に包まれている。どうやら、王のその威厳に圧倒されているようだ。

「シディーが来てくれて、本当によかったよ」

「シッ！　黙って！」

思いっきり拒否られてしまった。ヘコむ……。マジでヘコむ……。意外と俺のこと、嫌い？

そんな俺に目もくれず、シディーはエルフたちを観察している。すると、先程、王の隣に座っていたエルフが、何やら掌を天井に向けて左右に振っている。

それが合図であったのか、数人のエルフが王の前に進み出たかと思うとそこを素通りして、俺たちの許にやって来た。そのうちの一人がいきなりシディーの腕を掴んで引きずり出そうとする。

「いっ、痛っ！」

「何をする！」

思わず俺はエルフの手を払いのける。彼は驚いたような表情を見せたかと思うと、俺の手が触れた部分に視線を向け、汚いものに触れたかのように手を何度も拭った。中学校時代のイヤな女子を思い出させる。何だか、イラっとする。

俺は冷静になろうと努めながら、彼女を背中に隠す。シディーを掴んだエルフは自分の手を掴みながら後ろに下がっていく。それと入れ替わるように別のエルフが前に立つ。そいつは手に短剣を握っている。どうやら俺を殺す気のようだ。

「……！」

無言のまま短剣が突き立てられる。だが俺はその腕を掴んで防御す

る。ヤツは必死に腕を引こうとするが俺の握力が強いためか、ビクとも動かない。その隙に左手で短剣を奪い取り、そいつに向ける。そのエルフは驚いた表情を浮かべながら後ろに下がり、また入れ替わるように別のエルフが進み出てきた。

そいつは問答無用で攻撃を仕掛けてくる。だが俺は完璧にそれを躱す。いい腕をしているが、まだまだ動きにムラがある。剣術ＬＶ５を持っている俺には、触れることすらできないだろう。

「すごい……リノス様」

背中越しにシディーの声が聞こえる。あれ？　俺の腕って見せたことなかったっけ？

一瞬、俺の意識がエルフから離れた隙を狙われた。気が付けば、すでにエルフの短剣が俺の胸に伸びていた。早い。さっきの動きはフェイクだったのか。こうなっては躱すことはできない。コイツを倒すしかない。

「やめよ！」

不意に男の大声が聞こえる。そのお陰で俺とエルフの動きが止まった。エルフの短剣は正確に俺の心臓を狙っていた。一方で俺の剣は、エルフの首筋に当てられていた。声がなければこのエルフは確実に喉笛を掻き切られていた。

さすがにその状況がわかったのだろう。エルフの顔が歪み切っている。そいつは歪んだ顔のままゆっくりと俺から離れていった……。

第四百十三話　質問

「待て！　静まれ！　静まれ！」

エルフ王とは違う男の声が聞こえる。その男は数人のエルフを従えて俺たちの近くにやって来た。オルトーだ。

彼に従っていた者たちが、俺たちの前に進み出てきて、まるで壁のようになってくれた。それを見て、先ほど俺を襲っていた者たちがゆっくりと引き下がっていく。エルフ王はその様子を無表情で眺めていたが、やがてクルリと踵を返して、集まったエルフたちに向けて何やら手で指示を出したかと思うと、スタスタと扉に向かって歩き出した。

部屋から出る直前、王は俺の前で足を止め、小さな声で呟いた。

「すまぬ」

彼の後ろをミークが追いかけていく。俺たちもオルトーに促される形で、彼らに付いていく。

てっきり元の部屋の戻るのかと思いきや、エルフ王は部屋を通り過ぎてしまった。ミークも同じように部屋を通り過ぎていく。一体どこに行こうとしているのかと思ったが、突然王が別の一室に入ってしまった。ミークはその部屋を行き過ぎて、さらに廊下を歩いていく。俺たちはエルフ王を心配しながらも、ミークの後に付いていく。

彼女はそこから数メートル離れた部屋に入っていった。

「おい、何なんだ、あれ？」

部屋に入るなり俺はミークに口を開く。彼女は傍にあった椅子に腰を下ろして、大きなため息をつきながら天を仰いでいる。

「誠に申し訳ありません。ジャニス姫をお連れいただいた方にあのような振舞い……。伏してお詫び申します」

オルトーが深々と腰を折っている。俺はシディーと顔を見合わせながら、小さくため息をついた。

「一体、何があったのですか？」

「そうですね……」

オルトーは付いて来た部下と思われるエルフたちをしばらく眺める。彼らはスッと一礼をして部屋を出ていく。シディーが大丈夫と言わんばかりに大きく頷く。

「今、若い者たちにこの部屋を、あなた方を警護するように命じました。あの者たちは常に私の傍にいる者たちです。心配はありません」

そう言って彼は俺とシディーの交互に視線を向ける。

「オルトー様、もしかして、ですが、先程、エルフ王様が、あそこにおいでになったエルフの皆様に仰っていたのは、こういうことではありませんか？」

シディーが俺に説明してくれた内容を、そのままオルトーに伝えると、彼は目を見開いて驚いた。

「よ……よくおわかりですね。一体どこで我々の意思疎通を……もしや姫が……」

「いいえ。直感です。何となく、そうなのかなと思ったのです」

「は……そう……ですか……」

「エルフの皆様も、我々と同じで、目を見ていれば自然にその方の考えていることがある程度読み取れます。顔の表情と目の動き、それに、エルフの皆様を取り巻く状況……それらを考えながら見ていますと、何となくですが……」

「いや、お見事です。あなた様はドワーフ公王のご息女でしたね？　さすがはドワーフ族だけあります。いや、すばらしい」

「ありがとうございます。ただ、わからないことがあります。よければ教えていただけないでしょうか」

「はい、私の知っていることであれば何でも」

「どうして、レイラさんは殺されたのですか？　何か、彼女に問題でも？」

「……正直、レイラが殺された理由は私には分かりかねるのです。確かに彼女は、人によって対応が変わることはありました。気に入る者にはとても愛想がいいですが、気に入らない者については冷淡な対応を取ることがありました。ですが、仕事に関しては非の打ち

どころがなかった者なのです。彼女は王妃様のお世話をしておりましたが、王妃様からの信頼も厚く、頼りにされていたものなのです。そんな彼女が殺されたのです。王妃様のお怒りも収まらず……」

「妾のことを、疫病神と言っておいでじゃった」

ミークが悲しそうに呟く。どうやらあの場では、彼女に対してかなり辛辣な意見も出されていたようだ。しかもそれが自分の母親から浴びせられたのだ。彼女の心は察して余りある状況だ。そんな彼女をオルトーはチラリと横目で見ていたが、やがて再びシディーに視線を向け、言葉を続けた。

「王妃様は、ジャニス姫のようなことを二度と起こしたくないのです。我々エルフは絆を何よりも大切にします。同胞たる我らの誰かが攫われるなどということは、耐えられないことなのです。ましてや、同胞の命が奪われたとなると……。王妃様のご心痛は……。王妃様も気が動転しておられますために、ジャニス姫に心無いお言葉をかけてしまわれたのです。その上、皆様方にも失礼なことを……」

王妃が俺たちを指してどのようなことを言っていたのかはわからないが、相当の罵詈雑言を言っていたのは容易に想像できる。きっと、不幸を運んできた疫病神とでも言っていたのだろう。

「……帰ってこねば、よかった」

ミークが小さな声で呟いている。やっと故郷に帰って来て、会いたかった両親に会えたのにもかかわらず、こんな仕打ちを受けているのだ。そりゃ、誰だって落ち込むだろう。

シディーも彼女を心配そうに見つめていたが、すぐさまオルトーに

向き直り、言葉を続ける。

「恐れ入りますが、エルフ王様にはもう一人、お姫様がおいでとか……。もしかして、今回の出来事は、その点も関係しているのでしょうか？」

「……お言葉の意味がわかりかねますが」

「大変申し訳ございません。あくまで私の直感なのですが……もしかして、そのもう一人のお姫様の周囲においでになる方々が、ジャニス姫を追い落とそうと画策したという……」

「そのようなことは断じてありません。何を証拠にそのようなことを言われるのです」

オルトーの、言葉は柔らかいが、その言葉の端々に怒りの感情を感じる。俺は思わず二人の話に割って入る。

「すみません。我々の世界ではそうしたことがよくあるのです。王位をめぐって子供たち……というより、その周囲の者たちが、仕えている主人を王位に就けようと後継者の資格のある者を排除することがよくあるのです。今、オルトーさんのお話を聞く中で、絆を最も大切にするエルフ族に限って、そのようなことはないでしょう。これは失礼しました」

「……いえ、そのような。我々も神ではありません。邪な心を持つ者は少なからずおります。今回の件も、そうした邪な者たちが引き起こしたことでしょう。先程、王はレイラを殺した者を何としても探し出すように厳命されました。邪な者が捕らえられるのも、そう遠いことではありますまい」

そこまで言うと彼は、ツカツカとミークの傍に行き、深々と腰を折る。

「姫様の御身は、このオルトーが何としてでもお守り申し上げます。どうか、ご安心ください」

彼はそう言ってスタスタと部屋を後にしようとする。

「皆さまには、程なくして王から何らかの指示がございましょう。それまでしばらく、お待ちください」

そう言って彼は、丁寧に扉を閉めて部屋を出ていった。

「……ここを出ようぞ。早く出ようぞ！」

オルトーが出ていくのを待っていたかのようにミークが口を開く。見れば目に涙をいっぱいに溜めている。

「今、ここを出るのはマズい。それでなくても俺たちはエルフ全員から目を付けられてしまっている。今、ここを出るのは自殺行為だ」

「ううう……。すまぬ。そなたたちが言っておった通りじゃった。妾は……自分の命が狙われるものとばかり思っておった。じゃが……。そなたたちも巻き込むことになろうとは……。何と詫びればよいか……」

「大丈夫だ。そのくらいの覚悟はしている。お前のことはちゃんと守るから、安心していろ」

実は俺もかなり不安だったのだが、彼女の手前、虚勢を張ってしまった。ちょっと後ろめたくなった俺は、無意識に隣のシディーに視線を向ける。彼女はいつもの、右手の人差し指を顎の下に当てたポーズで、何かを考えている。

「リノス様」

落ち着いた声が聞こえたかと思うと、シディーはスッと俺に顔を近づけてきた。

「今回の件で、確かなことが一つわかりました」

「確かなこと？」

「はい。レイラさんを殺した者のことです」

「ほう」

俺は思わず声を漏らす。もう、犯人に当たりをつけたのだろうか。相変わらずものすごい洞察力だ。彼女は俺の目を見ながら、ゆっくりと頷いた。

「犯人は、エルフの里……この中にいます」

……そりゃそうだろう。それ以外には、考えられないだろう。

俺はゆっくりと彼女から視線を外した。

第四百十四話　推理

「う～ん……」

先程からシディーは、椅子に腰かけて腕を組み、眉間に皺を寄せながら天を仰いでいる。恐る恐る声をかけてみるが、彼女は目を開くこともなく、スッと右手を挙げて俺を制した。その雰囲気からは、話しかけてくるなという意思がビシビシと伝わってくる。

これまで見たことのない表情であるために、俺は戸惑いと不安でどうしていいのかがわからない状態になってしまう。思わずミークに視線を向けてみるが、彼女は無表情のまま、シディーの様子を眺めているだけだ。そして、俺に視線を向けると、ゆっくりと頷く。……一体何のことだかわからない。

ただ、無言の時間が過ぎていく。

ここでじっとしているのも、何だか不安だ。ここはできることをするしかない。そう考えた俺は、シディーの様子を気にしながら、自分の魔法がどこまで使えるのかをチェックすることにした。

結果はすぐにわかった。本当に全く、笑ってしまうくらいに魔法が使えないのだ。

鑑定スキルはもちろん、クリーンやライトの魔法すらも出すことができなくなっていた。本当に魔法の使い方を忘れたのかと思った程だ。こんなことは今まであっただろうか。先日、タナ軍との戦いの中で魔法が封じ込められそうになったが、それでも俺自身の魔法は

使うことができた。だが今回は、完全に俺の魔法が封じ込められているようだ。

いやいやそれでも……。ちょっと現実を受け入れられない俺は、呼吸を整えて魔法を使おうと試みる。まずは、基本の基本に返ろう。

ファルコ師匠に初めて魔法を習ったときのことを思い出す。イメージが大切と師匠は言った。己の体の中に流れる血を意識しろと……。その中の熱を感じろ。それが魔力だ。そして、その熱を体の外に出すことをイメージする。同時に、その熱をどういったものにするのかを明確にイメージしてみる……。

確かに、血の中の熱は感じ取ることができる。それを体の外に……出せない。注意深く、血の中の熱を外に出すイメージを拵える。初めて張った結界を思い出してみる……が、発動しない。

そんなことを繰り返すこと数回、何となくではあるが、色々なことがわかってきた。

体内にある魔力は確かに感じ取ることができる。ただ、それを発動することができないようだ。必死でマッチを擦ってはみるが、火がつかない……そんな感覚だ。

そこまで考えたとき、不意に気配を感じた。視線を向けると、そこにはゆっくりと歩いてくるシディーの姿があった。

「シディー、どうした!?」

「リノス様、ちょっと失礼します、ねっ」

……パチン！

「痛ったぁい……」

まさかの平手打ちだった。シディーにビンタを張られるとは思ってもいなかった。女性に殴られたのって、初めてのことかもしれない。俺は頬を抑えながら涙目で彼女を見る。

「痛くないでしょ！？」

……痛いわ。頬も痛いし、心も痛いわ。

俺はゆっくりと首を振る。シディーは鋭い目つきのまま俺を睨んでいたが、やがて両手を腰に当て、顔をズッと俺の前に突き出してきた。

「リノス様、私を殴って下さい」

「イヤだ。何でシディーを殴らなきゃならないんだ！」

「確認したいことがあるのです。殴って下さい。できれば、怒りや憎しみを込めて」

「怪我をするだろうが！　怒りや憎しみ？　シディーには何の不満もないわ。それに、その可愛い顔を殴るなんて、できるわけがないだろう！」

彼女はポッと頬を赤らめたかと思うと、顔をしかめてスタスタと俺の許から去り、ミークの許に向かった。二人は何やらブツブツと話をしていたが、やがてミークの右手が高く掲げられたかと思うと、

彼女は勢いよくそれを振り下ろした。

……パン。

何かが破裂するような、いい音が響き渡る。

「シディー！」

俺は思わず彼女の許に駆け寄っていた。おそらく、シディーがミークに殴ってくれと言ったのだろう。とはいえ、かなりの勢いだった。頬が腫れていなければいいが……。

「うん、大丈夫ですね」

俺の心配をよそに、シディーはあっけらかんとした表情で頷いている。そして、目を丸くしている俺に視線を向けると、すこしむくれたような表情を浮かべた。

「全然痛くないじゃないですか。どうして、私の平手打ちが痛いなどと……。かなり怒りを込めましたのに……」

「いや、本当に痛かったよ？」

「……まあ、いいです。これで、ある程度納得がいきました」

「あの……説明をいただいても？」

シディーはふぅと息を吐くと、俺に顔を近づけて、小さな声で話し始めた。

「おそらく、今、私たちを取り巻いている環境は、かなり大勢のエルフが関わっている可能性があります」

「うぁん？」

「聞いてください。まず、エルフ側の立場に立って考えてみたのです。これまで、私たちが聞いた話から考えますと、エルフたちが最も嫌っているのは、同胞に危害が加えられることです。ひいては、エルフの今の生活を脅かされることが、最も恐れていることではないかと思うのです」

「確かに、そうだろうな」

「そんな中、やって来たのが私たちです。エルフ王の命令とはいえ、難攻不落の山々を越えてここまでたどり着くことのできる私たちです。エルフにとっては大いなる脅威だったと考えられます」

「ちょっと待て、脅威だったら、どこかで対策を立てないか？」

「それです。通常ならば、この里に至るどこかで暗殺の類を仕掛けるのでしょうが、エルフたちはこの里に引き入れることを選択したのです。私がエルフの立場ならそうします」

「どういうこと？」

「里に引き入れた方が、数を頼めるからです」

「数？」

「これはあくまで推測なのですが……エルフたちのスキルは相当に

高いと思われます。そして、その高いスキルを持ったエルフたちが、全力でリノス様の魔力を封じていると思われます」

「何だと？」

「今、リノス様は魔法が使えません。おそらくリノス様には、強力な結界が何重も張られているものと思われます」

「何重もの結界……」

「この里には間違いなく結界が張られています。そうでなければ、こんなに快適に皆が暮らすことなどできません。これだけの結界を張るとなると、相当な高い結界スキル、しかも、一人や二人ではないでしょう。相当数がこの結界に携わっているのでしょう」

「……」

「その結界を担当するエルフたちが、リノス様に何重もの結界を張っているとすれば……」

「なるほど。一人ではなくて、複数人で何重もの結界を張るのか。俺の動きや考え方を推測して、それに対応する何種類もの結界を張れば……」

「今、リノス様はその状態であると思われます。ただ、高スキルを持つエルフをして、この里に入るまでにリノス様が張った結界については、その効力を無力化できていないようです」

「なぜ、そう言い切れる？」

「リノス様は、ご自身と私たちに、暑くもならず寒くもならない効果と、邪念を持つ者の攻撃を全て無力化する結界を張っておられます。先程のミークさんの攻撃は、私には通りませんでした。もし、リノス様の結界が無力化されていれば、痛みを感じるはずです。そうはなりませんでしたので、リノス様の結界は、まだ効果が持続しています」

「エルフたちはそれを知っているのかな？」

「おそらく、知っていると思われます。さすがにどのような結界を張っているのか……。そこまではわからないかと思います」

「……そうか」

「おそらくエルフたちは、リノス様の命を奪いたいのでしょう。そして、それがなった暁には、ミーク姫の命を奪い、全てをこれまでと同じようにするでしょう。ただ、私の直感では、それをするべきではないと思います。まずは、私たちはこの里を無事に出なければいけません」

「どうやって里を出る？」

「私たちが無事に帰るためには、レイラさんを殺した犯人を突き止めることが一番だと思います。まずはそれに全力を挙げましょう。早くしないと、エルフたちが動き出してしまいます。リノス様が結界を解除しない限り、私たちが倒れることはそうそうありませんが、ミーク姫のこともありますし、時間をかければかけるだけ、状況は悪くなります」

「なるほど、ところでシディー、一つ聞いていいか？」

「はい、何なりと」

「さっきシディーが俺を叩いたとき、かなりの怒りを込めたと言っていたけれど……。何か不満でもあるのか？」

「リノス様……そこですか！？」

シディーの呆れたような表情が、俺の心をさらに締め付けた……。

第四百十五話　追及

「私はリノス様のことが大好きですし、これからもお側を離れるつもりはありません」

シディーは俺の目を見ながら、はっきりとそう言い切った。耳まで真っ赤にして、とてもかわいらしい。その言葉を信じることにして、取りあえずこの件については今後、触れないことにする。

「じゃあシディー。これからのことだけれども……」

「私に考えがあります。ちょっとお耳を」

彼女はそう言いながら俺に顔を近づけてきた。その様子をミークは、意地悪そうな表情で眺めていた。

◆◆◆

「あの……すみません」

ジャニス姫がおいでになる部屋の警備を命じられていたカクインは、不意に声をかけられたために、少し体を震わせた。だが彼は、その様子を悟られぬようにしながら、ゆっくりと声のする方向に視線を向けた。

そこには幼い少女が、扉から顔だけを出してこちらを見ていた。この女性は確か、ジャニス姫を連れてきた人族の妻だ。

『何か用でしょうか？』

彼は女性にメッセージを送ってみるが、彼女は全く反応せず、小首をかしげながら眺めているだけだ。彼は心の中で舌打ちをしながら、思考を巡らせる。

……まったく、何と言う面倒のかかる種族なのだ。

本来ならば、このような種族とは金輪際関わり合いになりたくはない。だが、相手は女性だ。女性は敬わねばならないというのは、エルフ族の掟にも近い仕来りだった。女性は子孫を産むことができる。男である自分がどう頑張ったところで、子供を産むことはできない。次の命を産むことのできる存在は、どの種族であれ、敬わねばならないのだ。

「何か？」

彼は知っている言葉の中で最も適当と思われる言葉を口にする。それを受けて女性は少し笑みを浮かべながら、さらに言葉を返してきた。

「恐れ入りますが、オルトー様にお取次ぎを願えませんか」

彼はその言葉に、ゆっくりと頷く。

……やはり、言葉というものは、不愉快だ。

そんなことを考えながら、カクインは城の廊下を歩く。言葉を発すれば、自ずと息が相手にかかる。そんなことは失礼以外の何物でもない。他の種族はそこに思いを馳せられないのか……。彼は怒りに

も似た不愉快さを感じながらも、オルトーが控える部屋に向かう。

『報告します。人族の女性が、隊長に面会を求めています』

『そうか、わかった。少し待たせすぎた。すまないが、すぐに行くと伝えてくれ。ちなみにだが、あのお方は人族ではない。ドワーフだ。くれぐれも粗相のないようにな』

オルトーの言葉を受けて彼は、恭しく一礼した。

……エルフは、ああでなければならない。

再び廊下を歩きながら彼は、上司であるオルトーの振る舞いに感心していた。隊長としても、人族の男に関わりたくはないことは、よくわかる。だが、そんなことを一切出さずに、その警備を行っている。それはジャニス姫がおいでになるから……というのが本当のところだろうが、とはいえ、エルフたちがこぞって嫌がる人族の警備を、イヤな顔一つせずに引き受けている彼の振る舞いは、実に見事だった。自分もそうした隊長の下で働いているのだ。ここで、自身の不満を露わにするわけにはいかない。

だが、そう考えながらも彼は、あの人族の男をどうしても好きになれなかった。カクインはエルフ王の警備を担当する男であり、エルフの中でも戦闘力は高い方だ。彼は戦いに関してはそれなりの自信があった。だが、広間で見たあの男の剣さばきは、その彼をして驚愕せしめるものだった。彼らを捕えに行った者たちは、自分よりもはるかに戦闘力の高い者たちだった。それを見事にあしらったのだ。しかも、その男は全力を出して戦っていないことは、彼の目からもよくわかった。一体あの男は何者であるのか。エルフが他の種族に負けることなどあってはならないし、考えたくもない事柄だった。

そんな葛藤を胸に秘めながら彼は、再びジャニス姫がいる部屋の前に戻ってきた。

トントン

部屋をノックして、扉を開ける。するとそこには、不思議な光景が繰り広げられていた。

「我らエルフに限って、同胞を殺すなどあり得ぬ」

「そうは言いましても……」

ジャニス姫が抑揚のない言葉を発している。その傍で、先程自分に話しかけてきたドワーフが困った表情を浮かべている。そしてさらに、人族の男が、顔を強張らせてその光景を眺めている。

「では、誰がレイラさんを殺したのでしょうか」

「誰かが忍び込んだのじゃろう」

「え？」

「それ以外考えられぬ」

ドワーフの女性はピクリと体を動かしたかと思うと、ゆっくりと首を後ろに廻した。そして、自分の姿に気が付くと、驚いたような表情を見せた。

「ああ、すみません、気が付かなくて。ジャニス姫様との話に夢中

になっていました」

女性の言葉に、彼はゆっくりと頷く。

「すみません、ジャニス姫様のお話は、誠なのでしょうか？」

「？」

「あの……我々の他に、何者かがこの里に忍び込んで、レイラさんを殺したというのは」

「……」

「あ、本当はそうであってほしい。そう思いましたね？」

「！？」

「でも、犯人はおそらくエルフの誰かだろう。それは、認めたくはない……。そう思っていらっしゃいますか？」

「恐れ入りますが、もうそのくらいで」

戸惑うカクインの背後で、声がした。そこには、柔和な笑みを浮かべたオルトーが立っていた。

「彼はまだ、言葉を操るのに慣れておりません」

「いや、シディーが言ったことと、この者が思っておったことはほぼ、同じじゃぞよ」

ミークが楽しそうに口を開く。その様子を笑みを浮かべながらオルトーは見ていたが、やがてシディーに視線を戻す。

「御用と伺いましたが」

「お忙しいところ申し訳ございません。ジャニス姫様が……」

そう言ってシディーはチラリとミークを見る。彼女はスッと息を吸い込んだかと思うと、何かを確認するかのように、ゆっくりと口を開いた。

「レイラのこと、エルフの仕業ではあるまい？」

「それは今、調査中でございます」

「恐れ入ります。レイラさんはどうやって殺されたのでしょうか？」

シディーがすかさず口を挟む。オルトーは少し戸惑いながらも返答する。

「それは……」

「よい。妾とて、同胞が殺されたのじゃ。その悔しさと悲しさは同じじゃ。まさか、残忍な殺され方をしたのか？」

「いえ、そのようなことではございません」

「首を絞められ殺されたのでしょうか？」

「……いいえ。腹を突かれて死んでおりました」

「血……が流れたのか？」

「……左様です」

ミークが驚いた表情を見せている。オルトーは申し訳なさそうに頭を下げる。

「血は、我らが最も忌み嫌うもの。それが流れたとなると……エルフの仕業ではあるまい」

「なぜ、そう言い切れるのですか？」

「エルフは血を見るのを何よりも嫌う。従って」

「エルフの仕業ではない、と」

シディーの言葉に、ミークはコクリと頷く。

「なるほど。で、レイラさんは何で殺されたのでしょうか。腹を刺されたとありました。剣かナイフのような鋭利な刃物でしょうか？」

「それを我らも探していますが、全く見つかりません」

「どこかに落ちているか、誰かが持ち去ったか……」

「それを今、調査中です」

オルトーはそこまで言うと、スッと姿勢を正して、直立不動の姿勢を取る。

「従いまして、未だ賊の行方はつかめておりません。我らも全力で探査をつづけますので、ジャニス姫様におかれましては、今しばらく、こちらの部屋でお留まりいただきますよう、お願い申し上げます。我らは全力で警備に当たります」

そう言うと彼は、傍らに控えていたカクインに視線を送り、そのまま二人で部屋を出ていってしまった。

「……」

その様子をシディーはじっと見守っていたが、彼女の右手の人差し指はそのあごの下に当てられていた。シディーの推理が再び、始まろうとしていた……。

第四百十六話　撃ち抜く

「すみません」

再び女性の声が聞こえた。カクインはまたかと思いながら、ゆっくりと振り返る。するとそこには、先程のドワーフの女性が顔を出していた。

「誠に恐れ入りますが、お水をいただけますでしょうか」

彼はコクリと頷いた。

◆　◆　◆

「喉が渇いていたのです。ありがとうございます！」

ポットのようなものを運んできたエルフに、シディーは手をパチパチと鳴らしながら、嬉しそうに話しかけている。水くらい魔法で出してやるのに……。そこまで考えて俺は、思わず失笑を漏らす。そうだ、魔法が使えないのだ。

シディーは運ばれてきたポットに興味津々だ。注ぎ口の見当たらない円筒型のもので、どうやってあれで水を注ぐのか、俺の位置からはわからない。それに、コップの類もないようだ。どうやって水を飲むのか。まさか、直接飲むのだろうか？

だが、エルフの男は、掌を天井に向けると、そこに何と、グラスのようなものを出現させた。それをテーブルの上に置いて再び掌を天

井に向ける。グラスが現れる。彼は二個のグラスを出した後、スッと俺に視線を向けてきた。どうやら、お前も水を飲むのか、と聞いているようだ。俺はコクリと小さく頷く。

……彼は露骨に嫌そうな表情を浮かべた。何で俺をそんなに嫌う？

俺が何をした？

俺は何とも言えない感情を押し殺しながら、エルフとシディーの様子を眺める。どうやらポットには天井に注ぎ口があるようで、彼はそれを手に持つとゆっくりと傾けていく。すると、グラスに水が注がれた。

「ありがとうございます」

いつも以上ににこやかに挨拶をするシディー。あんな笑顔を作ることができるのだ。こうして見ると、笑顔のシディーは、かわいいな……。

そんなことを思っていると、エルフは無言のままスタスタと部屋を後にしていった。それを見届けたシディーは、グラスを手に取って、水を飲んだ。

「……うん、美味しい。でもこれ、もしかして、氷？」

彼女は手に持っているグラスをじっと見て観察している。あらゆる角度からグラスを眺めていたかと思うと、突然それを口元に持って行った。どうやらグラスに唇を押し当てているみたいだ。

ちょっと興味が引かれた俺は、スッスッスと位置をずらせる。するとシディーは目を閉じたまま、グラスに唇を押し当てていた。何か、

アイドルのグラビアの1ページに出てきそうな絵面だ。

そのとき、シディーの両目がスッと開かれたかと思うと、彼女はそのまま俺に視線を向けた。

「リノス様、この氷、どう思われますか？」

彼女の差し出したグラスを手に持ってみる。

「冷たい」

「そのままじゃないですか」

……そんなガッカリした顔をするなよ。心が痛むわ。

「リノス様はこの氷のグラス、作ることはできますか？」

再び俺はグラスに視線を向ける。濁りのない、とても純度の高い氷だ。単に水を凍らせたものではない。それに、手に持っていても氷が解けてはこない。

「作ることはできるだろうが……かなり手間暇がかかるな」

俺の水魔法を駆使しても、これだけの純度の高い氷を作るのは時間がかかる。一瞬で作るのは不可能だ。

「やはりそうですか……」

シディーは再び推理するポーズを取りながら、何かを考えている。

彼女はその姿勢のまま、ゆっくりと部屋の中を歩き回っている。

「シディー……」

「純度の高い氷は、硬くて溶けにくい……。リノス様」

「何だい？」

「この氷のグラスを溶かすには、どのくらいの時間がかかりますか？」

「ふうん？」

俺は彼女の質問の意図がわからず、少し戸惑うが、手元のグラスに視線を落としながら、少し考えてみる。

「本気でやれば、一瞬で溶かすことができる。いや、溶かすどころか、蒸発してしまうな」

「なるほど」

彼女はコクコクと頷きながら、再び推理するポーズを取りながら部屋の中をゆっくりと歩く。

コツ……コツ……コツ……コツ……。

まるで秒針が時を刻むかのように、正確なリズムで彼女は歩いていく。そして、やがてその動きが止まった。

「おそらく、間違いない。それが一番スマート。あとは……」

誰に言うともなく彼女はブツブツと呟いている。どうやら何かを閃いたようだが、俺には何のことだかさっぱりわからない。そんな俺の戸惑いをよそに、彼女は天井を睨みながら、再び何かを考えている。

そのとき、ミークの手が、テーブルのポットに伸びているのが見えた。

「待て」

俺の言葉に、ミークはビクッと体を震わせて、その場で固まる。

「こんなことは思いたくはないが、毒が入っている可能性がある。この城を出るまで、飲み物と食べ物は口にしない方がいい」

「大丈夫です」

突然、シディーの声が聞こえる。彼女は天を仰いだ姿勢からゆっくりと俺たちに視線を向けた。

「この水は問題ありません」

「よいと言っておるではないか」

「いや、シディー。お前は鹿神様の加護による毒の耐性があるだろう。そこいらの毒では全く問題ないはずだ。だが、ミークにはそれがない。だから細心の注意を払ってだな……」

「この水に関しては、大丈夫です。私の直感ですが、おそらく、飲んでも問題ないはずです」

「そ……そうか」

シディーはミークに目配せをする。それを受けて彼女はグラスに水を注ぎ、コクコクと喉を鳴らしてそれを飲んだ。

「ふう。美味しい水じゃ」

「この水はどうやって作っているのでしょう？」

「雪を溶かして作っておるのじゃ。この山の雪を溶かした水は、やはり美味しいのう」

そう言ってミークは満足そうな表情を浮かべ、再びグラスに水を注いだ。

「リノス様……」

ミークの様子を見ながらシディーが話しかけてくる。表情が少し強張っていて、何だか迫力がある。

「私たちの命を奪うとすれば、おそらく毒殺でしょう。ご指摘の通り、私には鹿神様の加護がありますが、リノス様とミーク姫……とりわけミークさんについては、毒の耐性がありません。十分に注意する必要があります」

「ああ……。そうだな。何も毒物だけとは限らない。毒霧や毒の針で命を奪うことも考えられるな」

「毒霧は、よほど注意して扱わないと、周囲の者を巻き込む可能性

があります。毒の針は……仕込むのが大変そうですね。それは……ない気がします」

「そうか」

「口に入るものについて、細心の注意を払いましょう」

彼女は厳しい表情のまま、再び俺に視線を向ける。

「そんな不安そうな顔をしないでください、リノス様。犯人の目星はもうついています。あとは、どうやって犯人をおびき出すか。私たちが無事にこの城を出るか、それだけです」

「え？　今、何て言った？」

「で、す、か、ら。犯人の目星はもうついています。ただ、私たちが犯人を暴くよりも、犯人自身が私が犯人ですと言った方が、エルフたちも納得するでしょう。それをどうやってもっていくかが問題ですが、それはどうにかなります。ただ、ミーク姫が狙われていることには変わりませんので、それをどうやって守るのかが問題です。ですからリノス様、ミーク姫には十分注意してください。可能性は低いでしょうが、何か食べ物や飲み物を勧められたときは、必ず止めてください」

「あ……ああ」

シディーの説明に理解が追い付かず、戸惑いと不安でカチコチになっている俺に、彼女はフッと表情を和らげる。

「そんな顔をしないでください。この城から無事に出るためには、

リノス様のお力が絶対に必要です。こうして私が思索に集中できるのも、リノス様のお力があったればこそです。大丈夫です」

「そ……そうか。そう言ってくれると、嬉しい……」

俺の言葉に、彼女はにっこりと微笑む。

「そうやって笑うシディーは本当にかわいいな。その笑顔があれば、俺は落ち着いていられる」

「え？　そうなのですか？　そのくらいでしたら、いくらでも」

彼女は俺に向き直ると、一瞬だけ真面目な表情になり、すぐに、満面の笑みを作った。

「エヘッ、リノス様っ」

「ぐはっ」

「り……リノス様！？」

俺は思わず胸を押さえて蹲ってしまった。シディーの笑顔があまりにも萌え過ぎていて、胸を撃ち抜かれてしまった。

アタフタと俺の背中をさするシディー。そんな彼女に申し訳ないと思いながら俺は、彼女の笑みを脳裏に焼き付けるのだった……。

第四百十七話　マジで！？

またか……。いい加減にしてもらいたいものだ。

うんざりとした気持ちのまま静かに廊下を歩いているのは、エルフ王の警備を担当しているカクインだ。彼は大きなため息をつきながら、隊長であるオルトーの部屋に向かう。

自分はオルトー隊長のように心の広い人間ではない。できれば、人族とは関わり合いになりたくはないのだ。命令によって仕方なく警備の任に就いているが、本来ならば、このような任務は金輪際お断りしたいというのが本音だった。

彼は王に対する忠誠心は、誰にも負けない自信があった。王が死ねと言われれば、即座に命を差し出すだろう。そのために、王の警備を任されているのだ。だが、あの人族たちのためには死ねない。断じて死ぬわけにはいかないのだ。

ただ、今回はミーク姫からの依頼のために、断ることができなかった。それをすればおそらく、王が悲しむ。王を悲しませることは、彼の本意ではない。

そんな葛藤を抱えながら彼は、隊長のいる部屋の扉を開ける。

「……何？　犯人の目星がついただと？」

オルトーは目を丸くして驚いた。だが、すぐに元の表情に戻り、呆れたような笑みを浮かべた。

「一体、何を根拠にそのようなことを」

「わかりません。ただ、ミーク姫様はそう言われるのみで、まずは隊長を呼べとの一点張りでした」

「そうか。姫がそう言われるのならば仕方がない。伺おう」

そう言って彼は椅子から立ち上がった。

オルトーの後ろを歩きながらカクインは、心の中で呟いていた。隊長も、そこまでなさることはないだろうに、と。そして、彼の心中を察すると、本来はやりたくもない仕事であるにもかかわらず、不満を一切見せずに職務を全うしようとするその姿勢に、敬服するのだった。

◆◆◆

「犯人の目星がついたと伺いましたが……」

オルトーはにこやかな笑みを浮かべながら、シディーに視線を向けている。顔は笑っているが、彼の体からは、これ以上何も言ってくれるなという雰囲気がにじみ出ている。俺はシディーに目配せをするが、彼女は俺とは目を合わせずに、涼しい顔をしている。

「そうじゃ。レイラを殺したのは、左利きのエルフじゃ。この王族用の敷地内にいる、左利きのエルフ。しかも男じゃ。それを探すのじゃ」

「……」

「言葉にせよ。二人にわからんではないか。余計な誤解を生むかもしれぬぞよ」

「……承知いたしました。姫様、恐れ入りますが、その理由をお尋ねしてもよろしいでしょうか」

「レイラは左の腹を刺されていたのじゃろう？　であれば、左利きの者じゃ」

「恐れ入ります。しかし、それだけでは犯人が左利きと考えるのは早計であろうかと考えます」

「何故じゃ？」

「わき腹を刺されたとはいえ、前から刺されたのか後ろから刺されたのかで状況は変わって参ります。姫様がそうしたご心配をいただくことは無用でございます」

「妾とて心配じゃ。早く犯人を捕まえたいのじゃ」

「承知いたしました。ただいま全力で犯人を捕らえるべく奔走しております。姫様のその思い、十分でございます」

そう言って彼は恭しく頭を下げる。そのとき、ミークとシディーが目を見合わせた。

「オルトーさん、私からも質問してよろしいでしょうか」

「何なりと」

彼はシディーに向き直り、じっとその顔を見つめる。

「殺されたレイラさんの遺体はどちらにあるのでしょうか？」

「……なぜ、そのようなことを？」

「いえ、エルフの方々は、亡くなった方をどのように埋葬されるのかが気になりまして……」

「ハッハッハ。変わった御方ですね。……いや、失礼。我らエルフは亡くなりますと、そのまま里の外に葬られます」

「里の外に？　茶毘に付さないのですか？」

「ええ。我らは亡くなった状態のまま、里の外の雪の中に埋められます。確かに、地上で暮らしていた時代には土に葬ることもありましたが、この山に来てから以降、雪の中に埋めることに決まっております」

「あの……アンデッド化することは……」

「この寒さです。それはあり得ません。従って、遺体が腐敗することもありません。そのために、死んだ者に会いたければ、我々はいつでも会うことができるのです」

「ということは、レイラさんの遺体も……？　いえ、ミーク姫が仰るのです。我らエルフは、腹を刺されたくらいでは死なぬと」

シディーはスッとミークに視線を向ける。それを受けて彼女もゆっ

くりと頷く。

「大変に憚られることですが……。レイラは左脇腹を一突きされた状態で絶命しておりました。それ以上のことは、私にはわかりかねます」

「ありがとうございます。いえ、ミーク姫の懸念を払しょくしたいと思っただけなのです。一応、私は薬師としての教育を受けておりますので、遺体を見れば大体、何が致命傷となったのか程度のことはわかります。差支えなければ、レイラさんの遺体を見せていただくわけには参りませんでしょうか？」

「お安い御用です……と言いたいところですが、生憎レイラの遺体は、この城にはありません」

「もう埋葬されたのですか？」

「いいえ。茶毘に付しました」

「え？」

「レイラは血を流しました。血を流して死んだエルフにつきましては、茶毘に付すのが決まりなのです」

「そ……そうなのですね」

オロオロとした様子で、シディーはミークに視線を向ける。彼女はコクリと頷いて、オルトーに向き直る。

「遺体を見れば、どやつが犯人であるのかが、さらにわかったもの

を」

「姫様もご存じの通り、我らエルフ族において、血はもっとも忌むべきもの。その血を自ら拭うことができない者は、どのようなことをされようとも、文句が言えません。こう申しては何ですが、レイラは血でこの城を汚したのです。ですが、その汚れを最小限に抑えることができた……。それだけでも、彼女の生涯は大いに価値のあるものだったはずです」

……言っていることが無茶苦茶だ。コイツは本当に、どんな頭の中をしているのだ。俺は吐きそうになりながら、必死に耐えていた。確かに、レイラというエルフはイヤな女だった。だが、彼女は殺されたのだ。理由は知らないが、命を奪われたのだ。オルトーの話では、イヤな部分もありながら、仕事のできる女性であったという。言ってみれば、職場の同僚じゃないか。仲間じゃないか。その仲間が殺されているのに、その言い方はないだろう。悲しくはないのか？彼女にも家族があったんじゃないのか。ちゃんと家族には伝えたのだろうか。悲しんでいる人はいっぱいいるんじゃないだろうか？

……考えすぎて頭が痛くなってきた。いかん、ちょっと落ち着こうか。

俺は深呼吸をしながら息を整える。その間もオルトーとミークの会話は続けられている。そして、シディーはその様子をじっと眺め続けている。この状況下で冷静さを保っているシディーは凄いと思う反面、怒りを覚えないのだろうかという気持ちも湧き上がってくる。さっきまでの可愛らしい笑顔とは打って変わって、冷静な、どちらかというと冷たい表情をしている。ある意味、これがシディーの別の顔なのだろうか。俺の知らない一面を彼女は持っているのだろうか。

「……王が食事を振舞おうと言っておいでです。準備が整いましたら、迎えに上がります」

オルトーはそう言って部屋を後にしていった。

彼を見送ると、ミークは大きなため息をつき、シディーに視線を向けた。彼女は少し頷いただけで、右手の人差し指を顎の下に当てて何かを考えている。

「シディー……」

俺が話しかけると、彼女は右手を開いて、まるで俺にこれ以上話しかけてくるなと言わんばかりのポーズを取った。

「お気持ちはわかります」

「いや、あのだな」

「リノス様。あなたは今、とても怒っていらっしゃいますね？　そのお気持ちはよくわかります。ですが、怒りという感情は表に出さないでください。全ての判断を狂わせる原因となります。今は、冷静に、あくまで冷静に……氷のような意識で見るのです」

そこまで言うと、彼女ははああと息をゆっくり吐いた。

「でも、嬉しいです。リノス様がお怒りになってくれて……。実は私も、ムカムカしていたのです。あのオルトーという人は、ふざけています」

「シディー……」

「でも、そのお陰で、この事件における犯人がわかりました。あとは……どうやってあぶりだそうかしら……」

彼女は少し視線を宙に泳がせたが、やがて俺の方向に向き直った。

「これからリノス様にも動いていただかなくてはなりません。頼りにしてます」

そう言って彼女はにっこりと笑った。その笑顔はとても、かわいいものだった。

第四百十八話　おもてなし

「……王がお呼び、です」

部屋の警備を務めているエルフが、そんなことを伝えてきた。彼は頭の中にある言葉を必死に口に出そうとしているように見えた。何だか、言葉のイントネーションが少しおかしかった。

その言葉を受けて、ミークとシディーはゆっくりと立ち上がった。これまで二人は全く会話を交わさず、シディーは目を閉じたまま天井を向いたまま微動だにせず、ミークはボーっと視線を宙に漂わせ続けていたのだ。

二人は部屋から出る際に目を合わせ、小さく頷いた。もう、この二人の間には、俺には伺い知れない強い絆が生まれているようだ。俺は二人の背中を追いかける形で、案内されるがままに歩く。魔法が使えないという状況は、ここまで弱気にさせるのかと思うくらいに、何もできる気がしない。一体、この先どうなってしまうのか……。そんな不安が心の中に湧き上がってくる。俺は首を振ってその不安を拭い去ろうとする。俺がそんなことを考えてどうするんだ。俺が、この二人を守ってやらねばならないのだ……。そんなことを考えながら、深呼吸して気合を入れる。

そのとき、ふっとエルザ様のことを思い出した。あれは、俺が王宮結界師に決まった直後のことだった。

◆　◆　◆

「リノス」

「はい、ご主人様」

「王宮では孤立することもあるかもしれません。どうしようもない状況に陥ることもあるかもしれません。そのときはこう思うのです。何とかなる、と」

「何とかなる、でしょうか」

「孤立したり、何をやっても上手くいかない状況に陥ったとき、人は不安になります。そして、何かに縋りたくなります。邪な者は、その隙をついて取り入ってきます。不安や恐怖を感じているときに、優しい言葉をかけられると、人は簡単に信用してしまいます。ですから、自分の立場が危うくなったときは、何とかなる、と思うのです。そうすれば、自然と何とかなるものなのですよ」

「承知しました」

「リノス、あなたなら大丈夫です。きっと、大丈夫です」

◆◆◆

……何とかなる。何とかなるなる。何とか、なる。

俺は心の中で呟いていた。そうだ、何とかなるかもしれないな。うん、そんな気がする。傍にはシディーもいる。俺が何もかもをする必要はないんだ。足りない部分は助けてもらえればいい。俺は俺ができることをするだけだ。シディーも言っていたじゃないか。頼りにしていると。今は俺の出番じゃない。ただ、俺の力が必要になっ

たときのために、気持ちの準備をしておくだけだ。

そんなことを考えていると、何だか気持ちが楽になった。俺は心の中で手を合わせて呟く。

……エルザ様、ありがとうございます。これから先もどうぞ、私をお見守りください。

何となくだが、エルザ様が微笑んだ気がした。きっと、大丈夫だろう。そう覚悟を決めたとき、シディーたちの足が止まった。

目の前には大きな扉があった。それが音もなくゆっくりと開く。

「お入りください」

俺たちを呼びに来たエルフが先導して部屋に入っていく。中には長机のような白い、大きなテーブルが備え付けられていて、その一番奥にエルフ王が座っていた。彼は俺たちを見ると、スッと立ち上がり、自分の隣の席を勧めた。それに従う形で、俺たちは席に着く。

エルフ王、ミーク、シディー、俺、と横並びに座る。これでは会話はできないなと考えていると、隣のシディーから手が伸びてくる。そして、俺の手を握る。

……ここが正念場、と言っているように感じる。

彼女の顔は正面を向いている。だが、握っている手の力の入れ具合で、この場がかなり重要なものであることが伝わってくる。食事とあるからは、おそらくここで俺たちを毒殺する可能性が高いということか。俺たちというより、俺とシディーは毒の耐性があるために、

正確に言うとミークの命を奪おうとしてくるのだろう。よく見ると、シディーの右手はミークの手を握っていて、俺たち二人に彼女はメッセージを伝えているようだ。俺にも伝わるのだから、きっとミークにも伝わっているに違いない。ここが、勝負どころだ。

「我らの同胞が不幸な死を遂げたために、そなたたちをもてなすことができぬ。せめて、我らエルフの料理などを振舞おう。そして……今宵は、我が寝所に参るのだ」

部屋には給仕を担当すると思われる数人のエルフの姿があったが、その人々の表情が一瞬にして強張った。王の言葉があまりにも意外なものだったようだ。考えてみれば、あれだけ人族を嫌っているのだ。王とは言え、人族を寝所に呼ぶなどと言うことは、考えもしなかったことなのだろう。

その異常な雰囲気を察したのか、オルトーが颯爽と部屋に入ってきた。彼は何も言わず王の近くまでやって来たかと思うと、一礼してその場に控えた。そして、それが合図であったかのように、数人のエルフたちが部屋に入ってきた。手には皿を持っており、担当が割り当てられているのだろうか、それぞれが迷うことなく俺たちの前に静かにそれを置いた。

「ダルレア鳥の卵のスープです」

料理を運んできたエルフの一人が、よく通る声で説明してくれる。そして、言い終わるとクルリと踵を返して部屋を出ていってしまった。他のエルフも一緒に付いていく。まるで入念なリハーサルが行われていたかのような、統率の取れた動きだ。

「いただきましょうか」

シディーが笑顔で俺たちに話しかけてくる。そして彼女はスプーンを手に取り、スープを掬って口元に持って行った。

「うん、美味しゅうございます」

さすがはリコが伝えただけあって、冷静に見てみると、実に洗練された優雅なテーブルマナーだ。

一人で感心していると、ミークがスープに手をつけていて、それを口元に運ぶ。あ、いかん、毒物は……。っと、シディーと目が合った。どうやらこの料理は大丈夫と言っているようだ。彼女の感性を信じて、俺もスープに手をつけた。

「……美味いな」

何とも旨味の凝縮されたスープだ。卵の何とかと言っていたが、これは卵の味なのかな？

スープが飲み終わると、再びエルフたちが登場して、新しい料理を出してきた。

「マッコウの舌肉料理です」

まるで団子のような形をした黒い料理だ。付け合わせに野菜のような緑色の草が添えられてある。香ばしいとてもいい香りがする。

「美味しそうですね。いただきましょう」

シディーの言葉を合図に、料理を口の中に放り込む。この料理も濃

い味だ。肉だろうか？　噛むと肉汁のようなものが口の中いっぱいに広がる。付け合わせの野菜もシャキシャキしていて美味しい。

「カルチネーゼでございます」

続いて出されたのは、ピザのようなものだ。チーズがトロトロに溶けていい香りだ。トッピングには、キノコのようなものがふんだんに散りばめられている。……って、キノコ？　毒キノコの可能性が高い！？

「いただきましょう」

俺の心配をよそに、シディーはカルチネーゼをナイフとフォークを使って口の中に放り込んだ。

「うん、美味しいっ！」

今日イチと思われる笑顔でシディーは頷いている。俺も彼女に倣って食べてみたが、濃厚なチーズの味で、とても美味しかった。トッピングのキノコもちゃんと味が付いていて、噛めば噛むほどに味が出てくる。そんな料理だった。

「シャカットでございます」

次に出された料理は、かき氷だった。あれ、もうデザートか？　全然食い足りないが……。そんなことを思いながら隣を見ると、シディーも同じ気持ちなのだろうか、何とも言えないといった表情を浮かべている。だがすぐに元の表情に戻り、スプーンを使って氷を口の中に放り込んだ。

「甘くて美味しいですね！　これは……ハチミツとレモンでしょうか？　うん、美味しい」

コクコクと頷きながら大喜びで食べている。ミークも同じように美味しい美味しいと言って食べている。俺も食べてみたが、これまでに味わったことのない清涼感のあるかき氷だった。ああ、食べすぎた。頭がキーンとなる。

「ジュリオーブ……こちらで最後になります」

出されたのは、何やらソースのようなものに漬け込まれた、柿のような食べ物だった。甘い香りがする。これも美味しそうだ。

「お待ちください。これをいただくわけにはまいりません」

そのとき、シディーの凛とした声が響き渡った。俺は驚きながら、隣の彼女に視線を向けた……。

第四百十九話　告発

シディーは凛とした表情をエルフ王に向けている。彼は表情を変えてはいないものの、不思議な感情……一体どうしたのだという思いを抱いているのは、よく感じ取れた。

「……何か、我らに不手際がありましたか？」

オルトーが慌てた様子で進み出てくる。シディーはゆっくりと彼に視線を移したかと思うと、落ち着いた声で話しかける。

「大いに不手際です」

「一体どうされたのでしょうか？　詳しく承りましょうか」

彼女は目の前に置かれた皿を持つと、それをスッとオルトーの前に差し出した。

「……何か？」

キョトンとした表情を浮かべながらシディーを見るオルトー。だが、彼女は目を爛爛と輝かせながらクイッと顎を上げた。

「これをお食べください。そうすれば、お分かりかと思います」

「え？」

まるで時が止まったかのように、その場にいた全員が固まっている。

目の前に出されている料理に視線を移してみるが、何も怪しいところはない。甘い香りが漂っている。まさか、この料理に毒が仕込んであるのだろうか？

俺は小指でソースを少し掬い、口元に持って行く。俺には毒耐性があるので、そんじょそこらの毒は効かない。少し舐める程度なら問題ないだろう。このくらいの量で殺されるのならむしろ、エルフを褒めよう。て、ゆうか、飲みこまないなら問題ないよね？

俺の知識では、この世界の毒は飲みこんだ瞬間に効力を発揮するというものだ。これはエリルと共にルノアの森に自生している植物を食べた経験から言えることだし、メイからも習ったことだ。実際、彼女は毒の可能性があるものを調べるときは、口に含むことがある。初めてそれを見たときは驚いたが、メイ曰く、とても大事なことなのだという。かく言う俺も、エリルの無茶ぶりもあって、相当数の毒物を食べたが、口に含んだ瞬間に発作や反応のあるものは皆無だった。咀嚼し、飲みこんだ瞬間に悪寒が襲ってきて体に反応が起こるというのがいつものことで、俺がもだえ苦しむ様子を、エリルはいつも興味深そうな表情で眺めていたものだ。

「へえ、毒があるのね。こんなにいい香りがするのに……。じゃあリノス、これも食べてみてよ」

「フゴッ！？　ウッ……グゴゲゲゲゲ～」

「……これも毒があるみたいね」

……あれは完全に虐待だったな。うん、それ以外に形容する言葉が見当たらない。

そんなことを考えながら、俺は指のソースを舐める。

……美味い。何とも濃厚な味わいだ。とても甘いが、それでいてしつこくない。一体これは何を使っているのだろう。砂糖……ではなさそうだ。何かの甘い果実を煮詰めてソースを作っているのだろうか？

このまま飲み込みたいが、さすがにそれはやめよう。俺は懐からハンカチを取り出して、口元を拭う。……よし、今のところ何の異常もない。大丈夫なようだ。では、果肉の方はどうなのだろうか。興味を持った俺は、傍に置かれていたフォークに手を伸ばす。

「それ以上は食べない！　手はお膝の上ぇ！」

今まで聞いたこともないようなドスの効いたシディーの声が響き渡った。俺はビクッと体を震わせて思わず両手を膝の上に置き、硬直する。

シディーはフッと息を吐くと、差し出している皿をさらにオルトーに向けて差し出す。

「お召し上がりください」

「し、承知しました。ですが、あなた様に差し上げた料理を私がいただくわけにはまいりません。しばらくお待ちください。ただいま取り寄せて……」

「これを、食べてください」

「しっ……しかし……」

オルトーは目を白黒させながら戸惑っている。だが、シディーは彼を睨みつけたまま微動だにしない。

「……何が、あった？」

エルフ王が立ち上がり、シディーに話しかけている。彼女は顔をオルトーに向けたまま、目だけを動かして王に返答しようとする。

「何があるかどうかは、オルトー様がこれをお食べになれば、わかります」

「う……」

「さあ、お食べください。私に遠慮は無用です。それとも、食べられない何かがあるとでも？」

「そのようなことはございません。しかし、我らエルフは、他者に差し上げた皿の料理を食べるという風習はございません。それは言うまでもなく、そのお方に失礼に当たるからです。あなた様はよいと言っておいでですが、我らはそうはいきません。エルフと人族……あなた様はドワーフですか。しかし、風習や習慣は人族と変わりはありませんでしょう。二つの種族は互いに考え方も違えば、習慣も異なります。こう申し上げては失礼かとは思いますが、ここはエルフの里です。我らが里においては、我々の風習・習慣に倣っていただきたく思います。私は、あなた様はとても聡明なお方だと私は思っておりますし、私の言葉がわからぬお方ではないと存じますが、敢えてこのようなことを申し上げる私をお許しください。色々と思われることもあろうかとは思いますが、何卒、私の思いもお汲み取りいただきたく思います」

何と饒舌なことだろう。思わず感心してしまう。まるでアナウンサーが原稿を読むかのように、淀みのない、滑らかな口ぶりだ。

そんなオルトーの様子をシディーはじっと見つめていたが、やがて差し出した皿を元の位置に戻した。そして、クスリと可愛らしい笑みを漏らした。

「やはり、私が思った通りのオルトー様でした。ありがとうございます」

「は、ははっ」

シディーの言葉の意味が分かりかねているかのように、戸惑いながら彼は頭を下げる。その様子を彼女は満足そうに眺めていたが、やがて俺とミークに視線を向けて、小さく頷いたかと思うと、再びオルトーに視線を向ける。

「では、せっかくですからこのお料理をいただきます。ですが、食べることはできないだろうと思いますが、よろしいでしょうか？」

「……お言葉の意味がわかりかねます。こう申し上げては何ですが、我らはお出しした料理に絶対の自信を持っております。我らは人族とは違い、頻繁に食事をすることはありませんが、それでも、長い歴史を持つ我らエルフは、料理に対する膨大な調理法を蓄えております。あなた様はおそらく、この料理をお出ししてから時間が経ったことで味が落ちると思われているでしょうが、我らの料理は……」

突然、オルトーが驚いた表情を浮かべる。そして両目をキョロキョロと左右に動かして、何やら戸惑い始めた。一体どうしたというの

だろうか。

ふと、隣のシディーを見てみると、彼女は薄く笑っていた。まるですべてを見透かしたように、冷たい笑みを浮かべていた。その様子に俺の背筋は震えた。

「どうなさいました、オルトー様？」

やさしい、まるで彼を労わるかのような声で彼女は話しかける。だが彼は、その声がまるで聞こえていないかのように、じっと俯きながら両手の拳を握り締めている。その様子を冷たい笑みを浮かべながらシディーは、傍らにあったフォークを手に取り、見事な所作で目の前の料理を口の中に運んだ。

「……ペッ。不味い」

口元をハンカチで拭いながら、シディーは吐き出した料理を睨みつけている。そして、再び俺とミークに視線を向ける。どうやら食べてみろと言っているようだ。

「絶対に、飲みこまないでくださいね」

俺もミークも戸惑いの表情を浮かべたが、やがてフォークを手に取り、恐る恐る料理を口に運ぶ。

……苦い。甘さの中に、何とも言えない苦みが口の中に広がる。これは、マズイ。

「……最初こそ甘い味がするが、後から来る苦みが、何とも言えぬな」

ミークも首を振りながら料理を吐き出している。その様子をシディーは満足げに眺めている。一方のオルトーは目をピクピクと動かしながら、何とも憎々し気な表情で俺たちを睨んでいる。

「策士策に溺れるとはこのことだわ。これですべて理解できました。……レイラさんを殺したのは、あなたですね、オルトーさん？」

目の前のオルトーの雰囲気が、さっと変わった……。

第四百二十話　謎解き

「私がレイラを殺したなどと……。何を証拠にそんなことを言われるのか。返答次第では容赦しませんぞ！」

オルトーが目を吊り上げながら、怒りをあらわにしている。だがシディーは、全く表情を変えずに彼を眺め続けている。

そのとき、エルフ王がスッと立ち上がり、手で何かを制するポーズを取った。ミークも目をキョロキョロさせている。どうやら、周囲のエルフたちがざわついているようだ。

「では、お尋ねします」

室内の混乱を鎮めるかのような、凛とした声が響き渡る。いつの間にかシディーが再び立ち上がり、部屋の中をゆっくりと見廻している。

「あなたは、確かに、レイラさんを殺してはいない。そう言われるのですね？」

「もちろんです！　我らエルフが同胞の命を奪うなど、あってはならないことです。レイラは私の部下に当たります。家族のごとく接してきた彼女の命を奪うなど、あり得ないことです。なぜ、そのようなお話をなさるのか、理解に苦しみます」

「では、なぜ私たちの命を奪うのですか？」

「これはまた、おかしな話をなさいます。何を証拠に、皆さまの命を狙っていると？」

「この料理には毒が入っております」

「ほう、何をもって毒が入っていると言われます？」

「ちょっとお待ちください」

シディーはそう言うと、懐の中に手を忍ばせた。だが、しばらくして、彼女の動きがピタリと止まる。

「……ない。……チッ、私としたことが。そうだ、ここに入るとき、全部没収されたんだわ」

明らかに彼女の表情が曇る。そして唇を噛みながら天を睨んでいる。……要は、この料理に毒が入っていることを証明すればいいのか？

「エルフ王様」

俺の声を受けて彼はゆっくりと視線を向けてきた。シディーも驚いた表情を見せている。

「一つ、お尋ねします。この国で、エルフ以外の生き物はおりますでしょうか？」

「……何？」

「犬でも猫でも鳥でも……。何でもいいのです」

「……パスタム」

「パスタム？」

エルフ王は頷くと、スッと手を挙げる。すると、エルフの一人が戸惑いながら部屋を後にしていった。しばらくすると、籠のようなものを手に部屋に戻ってきた。

「……」

オロオロとしながら、エルフは俺たちの座るテーブルに、その籠を置き、そのまま去ってしまった。籠を開けると、中にはちょっと大き目な、ネズミのような生き物が入っていた。

「キューン」

パスタムと呼ばれた生き物は、かわいらしい鳴き声を上げたかと思うと、勢いよく籠から飛び出した。チョロチョロとテーブルの上を動き回っていたが、やがて、ピョンとシディーの皿に飛び乗ったかと思うと、モゴモゴと体を動かしながら、料理を食べ始めた。

パスタムは一心不乱に食べている。だが、突然体を震わせたかと思うと、いきなり仰向けになって倒れ、体を激しく痙攣させ始めた。その様子をじっと見つめていたシディーは俺に視線を向け、大きく頷いた。

「やはり、毒が入っていましたね？」

オルトーは拳を握り締めながら、わなわなと震えている。何か言ってくるかと思ったが、彼は突然姿勢を正したかと思うと、直立不動

の姿勢でエルフ王に向き直った。どうやら申し開きをしているようだ。

「……決して、私が毒を入れたわけではないと弁明しておる。じゃが、父上は、今宵、そなたたちをもてなすように命じていたにもかかわらず、この失態はどういうことじゃと言っておいでじゃ」

ミークが小声で通訳してくれる。王とオルトーは睨み合ったまま微動だにしない。だが、オルトーの額には、汗が滲み出ている。かなり追い込まれているようだ。

そのとき、音もなく部屋の扉が開いて、数人のエルフが入ってきた。その中の一人は、まるでウエディングドレスのような純白のドレスを着ていて、一人だけ目立っている。彼女らは王をじっと見つめる。

「……母上」

ミークが一言呟いたかと思うと、彼女の目にはうっすらと涙が光っている。どうやら二人は、かなり辛辣な話をしているようだ。

「一つ聞きたい」

突然エルフ王が俺たちに話しかけてきた。予想外のことなので、かなり驚いてしまう。

「な……何なりと」

「その方たちは、ミークをこの里に送り届けること以外にも、何か、疾しい望みを抱いていたのか？」

「そ、そのような……」

「我らの同胞たちが、そなたたちからそうした邪念を感じ取ったと言っておる」

邪念？　俺たちを鑑定したのか？　まあ、鑑定スキルを持った者ならエルフにはごまんと居るだろう。だが、そこそこのレベルであれば、対象者の過去を覗くことができるのだが……。であれば、俺たちに疾しいことなどないのはわかるはずだ。いや待てよ？　俺の張っている結界が、彼らの鑑定スキルを邪魔しているのか。だから、雰囲気しか掴むことができなかったのか。だが、そうは言っても、邪念というのが腑に落ちない。一体何のことを言っているのだろうか？

「それにつきましては、ご説明申し上げます」

シディーのよく通る声が聞こえる。部屋にいる全員の視線が彼女に集中していく。

「おそらく、それは私に原因があると思われます」

「何？」

「私には、この里に来るのを楽しみにしておりました。それは、エルフ王家が所蔵しているエクスカリバーの剣を見たいと思っておりました」

王の眉毛がピクリと動いた。だが、シディーは全く意に介さずに、さらに言葉を続ける。

「私はドワーフ王の娘でございます。父から鍛冶師としての手ほどきを受けております。我らドワーフに取りまして、伝説の名剣と言われるエクスカリバー、それを超える剣を生み出すことは悲願でございました。ですが、その剣は誰も見た者がなく、切れ味など、調べたくても調べられない状況でございました。しかしこの度、ミーク姫を伴ってエルフの里へ行くことが許されたのです。鍛冶師として、エクスカリバーが見たいという思いは抑えることができませんでした。ご無礼の段、平にご容赦ください」

そう言って彼女は腰を折る。だが、王妃はシディーとエルフ王を交互に見ながら、何かを伝えている。

「邪念がある、という曖昧な感覚でございましょう？　明確な殺意があるわけでなし、何かを企んだという証拠があるわけでなし、単なる雰囲気と感覚だけで、我々の命を奪うのですか？　鑑定されるのであれば、なぜもっと詳しく鑑定されないのでしょうか？」

突然のシディーの指摘に、王妃は虚を衝かれたような表情を浮かべ、やがてゆっくりと俺たちから目を逸らせた。

「王妃様、なぜそこまで私たち、ましてや娘でもあります、ミーク姫を毛嫌いなさいます？　いえ、言わなくともわかります。全て、オルトー様のお話を信じていらっしゃるのですね？」

シディーの言葉に、王妃がガバッと顔を上げ、驚いたような表情を浮かべている。シディーは真剣な眼差しを王妃に向けていたが、やがてゆっくりと頷くと、再びオルトーに向き直った。

「これでようやく全ての疑問が解けました。オルトー様、ミーク姫を、我々をこの城に招き入れたことから、レイラさんの死、そして、

私たちの殺害まで、その全ての計画を考え、実行していたのは、あなたですね？　この一連の事件の犯人は、あなたです！」

シディーがピッと右手でオルトーを指さす。彼の表情は真剣そのものに変わっており、これまでのような柔和な雰囲気は微塵もなかった。

「おそらく、あなたは、エルフ王様に何の相談もなく、独断でこの計画を進めていましたね？　実に周到に練り上げられた計画でした。ですが、惜しいことに、あなたの計画は完璧すぎました。実に惜しかったですね」

「……言わせておけば、何と無礼な。では、証拠はあるのですか？」

「いいでしょう。それでは、これまでのこと、お話し致しましょうか」

そう言って彼女は、傍に置かれたグラスをヒョイと持ち、ゴクリと喉を鳴らして水を飲みほした。その目は爛爛と輝き、小さな体から発する雰囲気が、神々しいものに変わっていた……。

第四百二十一話　謎解き②

「まず、どうしてこの料理に毒が入っていることがわかったのか、その点をお話しした方がいいでしょうか？」

オルトーの眉毛がピクリと動く。その体から伝わってくる、何とも言えぬイヤな雰囲気が半端ではない。そんな状況であるにもかかわらず、シディーは淡々と口を開く。

「この料理の直前に出された、甘い氷の料理。あれはとても美味しゅうございました。それはそうでしょう。あの料理こそが、この食事会の中で最も大切なところだったのですから。だからこそ、知恵に知恵を絞り、腕によりをかけた逸品に仕上がっていたのですね」

確かに、あのかき氷は美味しかった。だが、まさかこのかき氷がこの食事会のポイントだったなどとは、まったく信じられないことだ。

「その後に出されたこの料理……」

シディーは毒の入っている皿に視線を落としたかと思うと、そのまま俺に視線を向けた。

「リノス様、恐れ入りますが、この料理を味わっていただけますでしょうか？」

……俺に死ねというのか！？　ショックのあまり、目に涙が溜まってくる。

「いや、食べないでください？　おそらく大丈夫だとは思いますが、絶対に飲みこまないでください。味わうだけです。愛するリノス様に、もしものことがあったら、私は生きていけません。恐れ入りますが、味わうだけ……。いや、大丈夫かな？　おそらく飲みこむことはできないですね。大丈夫です。大丈夫ですから、ガッツリいっちゃってください」

シディーがウインクを飛ばしてくる。確かにかわいいのだが、何だろうか、この胸に去来する空虚な気持ちは。全く萌えてこない……。

そんなことを考えながら俺は、目の前の皿に視線を落とす。見るからに美味しそうなスイーツだ。先程、ソースを舐めてみたが、とても甘い味だった。きっとこの果実も相当に甘いのだろう。俺は、フォークでそれを刺して、口元に持って行く。

……きっととても甘いのだろうが、飲みこむことは厳禁だ。毒耐性ＬＶ５があるとはいえ、油断は禁物だ。口に含んで味わったら、すぐに吐き出すのだ。

自分の心にそう言い聞かせて、俺は果実を口の中に入れた。

「ぐえっ！」

自分でも驚くくらいに下品な声を出してしまった。いや、不味い。めっちゃ不味い。久しぶりにこんなに不味い料理を食べた。何と言うか……。口に入れた瞬間は甘さがいっぱいに広がるのだが、その後からは、何とも言えぬ苦みが広がる。甘さと苦みが醸し出すハーモニー……。不味いという言葉以外に、形容する言葉が見当たらない。敢えて言うならば、カ〇ピスに苦い薬を混ぜて飲んだときの感覚……とでも言おうか。残念。とにかく残念な味だ。

俺は堪らなくなってしまい、人目もはばからず、口の中のものを吐き出す。そして、グラスに注がれていた水を口に含み、ブクブクと濯ぐ。

「そのお水も飲みこまないでくださいね。いいです。お皿の中に吐き出しちゃってください」

シディーの指示通り、俺は口の中の水を吐き出す。まだ、若干の苦みが残っている。あと数回、口の中を濯ぎたいが、ここは取りあえず我慢することにする。

シディーは、俺の様子を満足そうな表情で眺めていたが、やがてオルトーに視線を移し、真剣な表情を浮かべながら、再び話を続ける。

「さすがのエルフをして、無味、無臭の毒物は作ることができなかった……。手に入れることができなかったのですね？　数百年間も外界と接触を断っていたから、できないのも当然と言ったところでしょうか。というより、この山中ではそもそも植物自体が育ちにくいですから、毒物を作ること自体が難しい……。と、いうより、外界との交流がなく、エルフ一族のみで暮らしていたから、特に毒物を扱う機会も、必要性もなかったというのが正直なところでしょうか？　その中で毒を生成し、知恵を絞りに絞って作ったこのメニュー。さすがというべきでしょうか。ですが、オルトー様は自分で張った罠に自分で嵌った形になりましたね」

「……」

オルトーの眉間に皺が寄っている。少し、殺気を帯びてきているように見える。シディーはその様子を見ても、全く怯むことなく、言

葉を続ける。

「この料理に混ぜられた毒……。おそらく、即効性があるから選ばれたのでしょう。ですが、この毒には苦みがある。何をどうしてもこの苦みを消すことはできなかった……違いますか？」

オルトーの呼吸が少し荒くなっている。握り締めた両手に力が加わっていることがよく見て取れる。

「そこであなたが考えたのが、この氷菓子。何と言っても、冷たいものを含めば、口の中がマヒしますからね。しかも、このデザートはほとんど噛まずに飲み込むように調理されている……。これならば、ほとんど苦みを感じずに飲み込むことでしょう」

「シディー、ちょっと待て。どうしてそんなことがわかるんだ？」

思わず声が出てしまった。彼女はちょっと意外そうな表情を浮かべたが、やがて優しい笑みを浮かべると、まるで噛んで含めるように、丁寧に話し始めた。

「リノス様もご自分でお料理をなさいますよね？　ご自身がお客様をもてなす立場に立たれたとき、冷たいものはいつ出されます？」

「……最初の方か、最後だな」

「でしょ？」

「冷たいものを出した後にデザートを出したりはしますか？」

「……しないな。やっぱりアイス……というより、氷系のものは最

後だな」

「同感です」

彼女はニッコリ笑うと、再びオルトーに視線を向ける。

「以前の私ならば、あなた様の罠にかかり、何の疑問もなくこの料理を食べたでしょう。しかし、夫と出会い、自ら料理に携わる経験をしたお陰で、今回の罠に気付くことができました。私は、よい人と結ばれました」

一体、このドワーフは何を言っているのだという空気がその場を支配している。だが隣の俺は、シディーの言葉が素直にうれしかった。

「この料理の差配を全て行ったのはオルトー様、あなたですよね？　賢いあなたのことです、おそらく毒もご自分で入れたのでしょうね。今回用いられたのは……カシトキでしょうか？　標高の高い山にも自生する草で、その実の中には乳液が取れます。それを乾燥させると粉末になります。少量であれば興奮剤になりますが、量が過ぎると筋肉が激しく痙攣し、呼吸困難に陥って死に至る……。おそらくそれを精製して今回の料理に使用したのでしょうか？　で、あれば、オルトー様。あなたの手は黄色くなっているはずです」

ビシッとシディーはオルトーを指さして決めポーズを取る。何とも格好がいいが、オルトー本人に、うろたえた様子は全く見られない。それどころか、彼は俺たちの許にゆっくりと近づいてきて、両手を上げる。

「さあ、心ゆくまでご覧ください。私の両手が黄色に染まっているでしょうか？」

見たところ、それらしき色は確認できない。彼は俺たちにしばらく掌を向けていたが、やがて、身の潔白を証明するかのように、エルフ王に向かって両手を見せるポーズを取った。

「ほーら、やっぱり」

シディーの嬉しそうな声が聞こえる。オルトーがものすごい形相で俺たちに振り向いた。

「オルトー様、その剣の柄は、何でしょうか？」

「柄？」

オルトーの腰に差している剣の柄……白い柄だが、よく見ると、その一部が黄色くなっている。彼は一瞬、ギョッとした表情を浮かべた。

「オルトー様、あなたには左手で剣の柄を握るという癖があります。おそらくあなたは、本来は左利きなのでしょうね。あなたは、その左手で毒を入れ、無意識のうちに柄を握った……。注意深いあなたのこと、おそらく手は洗っていると思い、他に証拠はないかと思っていましたが……。やっぱりでしたね。こちらに近づいて来ていただいて、助かりました」

満足げな表情を浮かべるシディー。だが、オルトーはこめかみをピクピクと動かしながら、言葉を絞り出すようにして、口を開く。

「そ……そんなことで……。白い柄なのです。色が変わることくらいあるでしょう？　それしきのことでこの私を……心外です。いい

加減にしていただきたい！」

その様子をシディーはじっと見ていたが、やがて、大きなため息をつきながら、ゆっくりと首を振った……。

第四百二十二話　謎解き③

「では、あなたは、毒を入れたのは自分ではない。そう言われるのですね？」

「当然です」

オルトーが真剣な眼差しでシディーを睨んでいる。一方の彼女は冷たい目で彼を眺めている。まるで炎と氷がぶつかり合うような雰囲気が、俺たちを圧倒する。ミークを始めとするエルフたちも、事の成り行きを、固唾を飲んで見守っているようだ。

ふとエルフ王と目が合った。彼はゆっくりと頷いている。どうやら、存分にやれと言っているように見える。

「その割には、この皿に毒が入っていることがわかったのにもかかわらず、狼狽える様子はまったく見えませんでしたが？」

「クッ……」

「どうやら、エルフの皆様は、本当に私と夫、そして、ミーク姫の命を奪おうとなさっているのですね。しかも、私たちを守ってくれているはずのあなたまでもが……。悲しゅうございます」

「私は、王の命令により、あなた方をお守り申し上げております。確かに、本日の料理の中に不適切なものが入っていたことにつきましては、私の責任です。心からお詫びを申し上げます。この上は、毒を盛った者を全力で突きとめます。ご納得いただけない点もあろ

うかとは思いますが、まずは部屋にお下がりください」

彼は右手を水平に上げて、俺たちに退出を促す。だが、シディーは全く怯むことなく、さらに言葉を続ける。

「その前に、確認したいことがあります」

「……」

「レイラさんを殺した犯人は、まだ、捕まりませんか？」

「……はい。未だ」

「手がかりさえも見つかりませんか？」

「……はい」

「検死をされたのは、どなたですか？」

「ケンシ？」

「レイラさんが殺された現場を確認し、彼女の死因を調べた方です。まさか、どなたも確認せずに、茶毘に付したのではありませんよね？」

「……私が確認しました」

「あなたですか？」

シディーの声色が変わった。何か、怒っている。……怖い。

「他に、確認した方は？」

「おりません」

「何と言う下劣な！　あなたは不幸にも死した一人の女性を裸にしたのですか！？　エルフは女性を敬うと聞いておりましたが、何と言うことをなさるのです！」

「……！」

エルフたちの気配が変わった。明らかに俺たちに敵意を、殺意を向けている。この女、何てことを言いやがるんだ！　という意識を向けているのが、俺にもよくわかった。目の前のオルトーの目がキュッと小さくなった。

「言っていいことと悪いことがありますぞ！　私がレイラを裸にするなどと！　そんなことはあろうはずがない！　一体何を証拠にそのようなことを！　これは私に対する侮辱だ！」

彼はスッとエルフ王に向き直り、一礼する。だが、王は一切表情を変えず、オルトーを眺め続けている。彼はゆっくりと顔を上げたが、王を凝視したまま固まってしまった。

「……オルトー様」

シディーが優しい声で話しかける。彼はゆっくり顔を向けたが、話しかけてくるなという表情を浮かべ、すぐに王に顔を向けようとする。

「あなたは、本当に、レイラさんを裸にしていないのですね？　信じてよろしいのですね？」

「お言葉の意味がわかりかねます。あなた方は時おり、私の理解の範疇を越えた質問をなされる。どうして私が、命を奪われたレイラを裸にしなければならないのです？　しかも、彼女は血で汚されているのです。その彼女に手を触れることなど……あり得ないことです」

まるで、子供に諭すかのように、噛んで含めるような言い方で彼は説明する。その雰囲気からは、もうこれ以上話しかけてくれるなと言った感情がありありと見てとれた。

「……わかりました。では、最後に確認させてください。レイラさんが死に至った原因は、一体何だったのでしょうか？」

オルトーは、もう勘弁してくれと言わんばかりに、首を左右に振る。そして、さも、面倒くさそうに口を開く。

「レイラは、わき腹を一突きにされて死んでおりました」

「右ですか？　左ですか？」

「左です。もういいでしょう？　恐れ入りますが……」

「聞きましたね？」

オルトーの言葉を遮って、シディーは俺に向き直る。彼女はエルフ王、ミークと順番に視線を向け、再び俺に視線を向けた。

「リノス様、今、オルトーさんは、レイラさんの死因は何だと言われましたか？」

「えっ……？　確か、左わき腹を一突きにされて殺された……？」

「そう聞こえましたね？　私も、そう聞こえました」

シディーはクスリと笑うと、その表情のまま、オルトーに視線を向けた。

「語るに落ちましたね」

「な……」

「オルトー様、あなたは今、ご自身で自分が犯人だと言われました」

「え……」

目を見開いて驚くオルトー。その彼をシディーは冷たい表情で眺めている。

「あなたは、レイラさんがわき腹を一突きにされて殺されたと言われました。そうですよね？」

「……」

「なぜ、一突きだとわかったのです？」

「それは……見ればわかります」

「服を着ていたのに？」

「レ……レイラは……血が付いていたのは一か所だけでしたから」

「血か付いていた……。命を奪われるほどに出血したのです。相当量の出血量だったでしょう。服も血に染まっていたでしょう。その中で、どうして一突きだと言えるのです？」

「う……」

「複数の傷があると疑わないのはおかしな話ではありませんか？大切な同胞の命が奪われたのです。せめて、あなたではなく、女性の誰かに傷をあらためさせることもしないというのは、明らかに不自然です。そうしたこともせず、彼女の死因が一突きにされたものであると断定できるのは、彼女を殺したのがあなただったから」

「ち……ちがう。私では」

オルトーは王に向き直り、何かを訴えている。おそらく、犯人は自分ではないと弁明しているのだろう。だが、その慌てぶりからは、彼が犯人であるという確信を持つのに十分なものだった。

「……オルトーは父上に、あくまで自分は殺していないと言っておるぞよ」

ミークが小さな声で呟く。それはそうだろう。私が犯人です、などと言えるわけはない。

「見苦しいですよ」

シディーの冷たい一言が響き渡る。

「あなたは、私たちを陥れるために、大切な同胞を殺した。私たちの味方のように振舞いながら近づき、油断させて、命を奪おうとした。エルフとはそのように卑怯なことをする種族なのですか？」

「黙れ！」

オルトーの表情が歪み切っている。体中から殺気を放っている。これはいけない。

「言わせておけば！」

その瞬間、オルトーの腕から光が放たれたかと思うと、灼熱の火の玉が放たれた。

「シディー！」

俺は彼女の腕を取って引き寄せる。炎が正確に俺たちの許に向かってきた。

「ちいっ！」

思わずシディーを抱き締め、灼熱弾に背中を向ける。

ドシュっ！

鈍い音が響き渡る。

「……」

俺は恐る恐る目を開ける。そこには、先ほどと同じ景色があった。

「うん、大丈夫。さすが、リノス様」

気が付くとシディーが俺の背中をペタペタと触っている。どうやら、先程の攻撃は俺の結界で防御できているようだ。

「うっ！」

いきなりシディーにギュッと抱きしめられた。彼女は満面の笑みを湛えていたかと思うと、スッと真剣な表情になり、再びオルトーに向き直る。

「これで、全ての疑問が解けました。やはり、レイラさんを殺したのは、オルトーさん、あなたで間違いありません」

「……」

憎しみを込めた表情で彼は俺たちを睨んでいる。いつの間にか、部屋に控えていたエルフたちも彼の近くに集まってきている。

「オルトーさん、あなたが犯人であることは、かなり早い段階から予想していましたが、どうしても凶器については確信を持てませんでした。ですが、今の攻撃を見て、確信が持てました」

シディーは集まったエルフを見廻しながら、グイッと胸を張った。

「では、レイラさんがどのように殺されたのか、お話ししましょうか」

オルトーの息が荒くなっている……。

第四百二十三話　名探偵再び

「オルトーさん、あなたが先ほど使われた魔法……あれは、火魔法。それもかなり高位の魔法ですね？」

「……」

オルトーは無言のまま俺たちを睨みつけている。怖い顔だ。狂気を感じるほどの表情だ。

「リノス様、あの火魔法のＬＶはどのくらいでしょうか？」

「……ＬＶ４というところかな」

オルトーの目が少し開かれた。どうやら図星のようだ。火魔法のＬＶ４とＬＶ５の大きな違いは、魔力を圧縮できるかどうかだ。オルトーは超高温の炎を生み出していたが、その威力を全てコントロールすることはできていなかった。もし俺がやるのであれば、圧縮した小さな超高温の炎を出して攻撃するだろう。そうしないと、エルフ王を巻き込む危険性があるからだ。王が高い結界ＬＶをもっているのであれば、話は別だが。

「ＬＶ４ということは、かなりの高温ですね？」

「そうだな。水なら一瞬で蒸発させられるな」

「いい答えです」

シディーは我が意を得たと言わんばかりに、大きく頷いた。そして、再びオルトーに向き直る。それと同時に、彼がクルリと背を向けた。そして、周囲にいた兵士たちが動き出そうとして……止まる。一体何事かと思っていると、彼ら全員の視線がある一点を見つめている。そこに視線を移すと、エルフ王が右手を挙げて、何かを止めるポーズを取っている。

彼はその体勢のまま、スッと俺たちに視線を向け、コクリと頷いた。どうやら、話を続けるよう促しているようだ。彼から発せられる雰囲気が、怒りを帯びているように感じる。己の部下が同胞を殺したかもしれないという事実に、戸惑いと怒りを覚えているようだ。

オルトーは歯を食いしばっているような表情を浮かべながら、右手をギュッと握り締めている。魔力を溜めているのだろうか……。魔力探知が働かないので、その様子を知ることができない。だが、おそらくヤツの魔法はＬＶ４が最高なのだろう。と考えれば、俺の結界を破ることはできない。魔法で攻撃することはできない。そう考えると、少し心が楽になった。

「人族の分際で何を言うか！　どこまで私を冒とくすれば気が済むのだ！　一体、何をもって私がレイラを殺したというのだ！」

オルトーの言葉が雑になっている。表情が完全に歪み切っている。もう、犯人は私ですと言っているようなものだ。

「あなたは、レイラさんが横腹を一突きにされて殺されたと言っておいででした。まさに犯人しか知りえないことです。それを知っているあなたは……」

「ええい！」

彼はそう叫ぶと、腰に付けている剣を掴み、それを高く掲げた。

「疑うならば、私の剣を調べてみるといい！　この剣にレイラの血がついているか！　忌まわしき血の臭いがするか！　調べてみるといい！」

「必要ありません」

「何っ！」

「頭のいい、そして用心深いあなたのことです。その剣は使ってはいないでしょ？」

「な……」

「剣を使って斬れば、血は飛び散るし、あなたも返り血を浴びることになります。あ、やり方によっては、そうならない方法もありますか？　しかし、剣を使えば、どうしたって刃こぼれができますし、血の臭いが付いてしまいますから、隠し切れませんよね。そこまで考えたあなたは、剣を使わずにレイラさんを殺す方法を考えた、違いますか？」

「……」

「あなた、尖らせた氷を使いましたね？」

オルトーの体がビクッと震える。

「氷の凶器でレイラさんを殺し、そしてすぐにその氷をあなたの火

魔法で溶かした。凶器の隠滅にはこれで成功しますよね？」

「な……ち……ちが……」

「よく考えましたね。この里で最も証拠を隠滅しやすいもの……。氷ならば、あなたの手にかかれば、わずか数秒で跡形もなく消すことができます。問題は、どうやってそれを作ったかですが……。まあ、エルフの中には水魔法を操ることのできる人が沢山いるでしょう。その方に作ってもらうといきたいところですが……。あなたのことです。他人に頼めば、裏切られる可能性がある。だから、自分で氷の凶器を調達するでしょう。まあ、私だったら……ツララを使います」

オルトーの目がピクピクと動いている。先程から彼は完全に固まってしまっている。そんな様子を、シディーは冷たい微笑みを浮かべながら眺めている。

「図星でしょうか？　どうやらそのようですね」

そう言うと彼女はエルフ王に向き直り、スッと腰を折る。

「エルフ王様にお願いがございます。私の推理は以上になります。こちらに控えておられるオルトー様。彼が、レイラさんを殺した犯人である可能性が極めて高いと存じます。彼女を殺すに至った凶器が、おそらく隠滅されていますので、証明することは難しいでしょうが……。ですが、ツララを使ったのであれば、この里に張られている結界、それをお調べください。結界の外には、いくつかのツララができているはずです。その中に一本に、人為的に切り取られた跡があるかと思います。レイラさんが殺されて数時間……。極寒の地とはいえ、すぐに切り取られた跡が消えることはないかと存じま

す」

エルフ王はシディーの話を静かに聞いていた。そして、それを聞き終わると、ゆっくりと息を吐いた。

「重ねて申し上げます。これは、誠に言いにくいことですが……。我が夫は、とても優秀な鑑定スキルがございます。おそらく、ではありますが、この里においでのエルフの皆様が、夫の魔力を封じるために結界を張っておいでかと存じます。恐れ入りますが、それを解除していただけませんか。そうすれば、夫の能力で真犯人を突き止めることができるかと存じます」

「……！？」

「……！？」

突然、部屋が騒がしくなった。ふと見ると、数十名の武装した兵士たちが、部屋に乱入してきていた。そして、その最後に、煌びやかな衣装を身に着けたエルフが登場した。この人は確か、エルフ王のお妃さまだ。彼女は俺たちをキッと睨むと、クイッと顎をしゃくった。それを合図に、兵士たちが俺たちに向かってきた……と思ったが、止まった。横を見ると、エルフ王が兵士たちを止めるポーズを取っている。彼は一点を見つめたまま、微動だにしない。

「……母上が、我らを殺せと言っておいでじゃ」

ミークが小さな声で呟く。彼女は自らを殺そうとしている母親に真っすぐに視線を向けている。

「このようなことが起こったのは、妾たちがこの里に来たからじゃ。

妾たちがいなくなれば、全てが元のままになると言っておいでじゃ」

……何ちゅう理屈だ。無茶苦茶にも程がある。そんな下らない考えのために、あのレイラという女性は殺されたのか？　冗談じゃない。俺たちを殺そうとしている段階で、完全に気が狂れているが……。善意でやったことが、ここまで裏目に出るものなのだろうか。

「……父上は、そなたたちは、妾を助けた恩人である。その恩人の命を奪おうとするのは許さんと言っておいでじゃ」

……エルフ王はまともだ。普通、そう考えるよね？

「……母上は、心底我らのことが憎いようじゃな」

ミークが寂しそうに俯く。それにしても、実の娘をそこまで憎むこともないだろうに……。

「継母ですよ」

シディーが小さな声で呟く。どういうことだ？

「あの方は、ミークさんの産みの母ではありませんね」

「なぜ、そう言い切れる？　直感か？」

「我が子を憎む親など、おりません」

シディーが寂しそうな表情で呟く。それはそうだ。我が子はかわいい。俺も、エリルやアリリア、イデアたち我が子は目に入れたら痛いとは思うが、宝だ。たとえどんなことがあったとしても、俺は子

供たちの味方でいてやりたいと思うし、ましてや、子供の命を奪おうなどとは考えもしないし、考えたくもないことだ。そう考えると、鋭い目で俺たちを睨みつけているあのお妃が継母だというのも頷ける。

「……母上は、他種族と関わるから不幸が起こる。他種族を早く排除するべきじゃと言っておいでじゃ」

「その考えは、間違っている」

思わず声が出てしまった。……あれ？　やけに静かになったな？……って、全員が俺に注目している!?　えっと、俺は、どうしたらいい？？

第四百二十三話　名探偵再び（後書き）

書籍版の完結版、『結界師への転生⑤』がいよいよ本日、発売になります。面白さ、エロさ、挿絵……その全てがこれまでの中で最高の出来栄えになっています。是非、手に取ってご覧くださいませ！

また本日、幻冬舎さまのｃｏｍｉｃブースト様にて、コミック版『結界師への転生　第五話』が公開されます。こちらも是非、確認ください。なおこちらは、無料公開は期間限定ですので、お早めに！

第四百二十四話　いよいよ出番？

静寂が部屋を支配している。エルフは喋らなくても意思疎通ができるが、どうやらそれをしていないらしい。これまで、この部屋で感じていたワサワサ感が、全くないのだ。

水を打ったような静けさの中、奥の扉の前に立ち尽くしているお妃が、俺に憎しみの眼差しを向けている。少しずつ顎が上がっていっている。彼女には徹底的に侮蔑されているようだ。

「……父上が、話を続けよと仰せじゃ」

ミークが小さな声で呟く。俺は促される形でコホンと咳ばらいをして、ゆっくりと口を開く。

「あなた方エルフは、誰のおかげで生きていられるのでしょうか？」

俺の問いかけに全員がキョトンとなる。お妃ですらも、お前、何言ってんの？　という表情を浮かべている。いかん、話の筋立てを全く考えずに話し始めたばっかりに、こんなことになってしまった。頭の中を整理しなければ……。

「ええと……。どうやら、エルフ以外の種族を排除すると言っておいでのようでしたが、そもそもそれって激しく間違っていると思います。なぜなら、人は人とのかかわりあいの中でしか生きられないからです」

しまった。エルフは人じゃないなと思いながら、敢えてそこはスル

ーすることにする。俺は未だポカンとした表情を浮かべたままのエルフたちを見廻しながら、さらに言葉を続ける。

「例えば、あなた方が身に付けている服……。確かにそれはエルフの誰かが作ったものでしょう。ですが、それを最初に作り出したのは誰でしょうか？　エルフではないと思います。さらに、その服を発展させ、今の形にしたのも……エルフではありませんね？　何が言いたいかというと、あなた方……当然それは俺たち人族も含まれますが、俺たちは他人との関わりの中で生きているのです。エルフ、人族、ドワーフ、獣人……。何かしら助けられて生きているのです。お互い様です。そう、お互い様なのです。姫が攫われてしまった……それについては同情しますが、だからと言って、他種族との交流を断つのはやりすぎだと思います。それをすると、成長しなくなりますから」

お妃が呆れた表情に変わっている。全く伝わっていないようだ。エルフ王を見てみるが……やはり頭の上にクエッションマークが出ているようだ。

「要は、何か困難が起こったときに、そこから逃げるのではなく、立ち向かうべきだと夫は申しているのです」

シディーがよく通る声で口を開いている。そうだ、俺が言いたいことは、そう言うことだ。

「エルフの皆様は、大事な姫が攫われてしまったことに大いに動揺し、また、悲しみに暮れたのでしょう。地上にいてはまた、同じことを繰り返す恐れがある。そう考えて、人跡未踏の地に足を踏み入れた。ですが、他種族との関係を断ってしまったことが、今回の事件を引き起こしたのだと夫は言いたいのです」

シディーは俺の服の裾をキュッと握ってきた。大丈夫、私が付いていますと言っているようだ。何とも心強い。

「……父上が、なぜ、他種族を排除することが間違っておるのかと聞いておられる。妾も聞きたいぞよ」

ミークが寂しそうな表情で問いかけてくる。俺は、彼女を見つめながら、ゆっくりと頷く。

「他種族を排除すると、その種族は間違いなく衰退します。そして、最後には滅ぶからです」

俺の一言でエルフたちがどよめいている。言葉を発しない人々が思わず声を上げている。何とも言えない雰囲気だ。

「今回、俺はこの里に来て大変残念に思っています。いや、別に命を狙われたからじゃない。何で命を狙われるんだという気持ちがないわけじゃないが……。まあ、それはいい。要は、あなた方のやっていることは、人の道に反するし、確実に不幸になろうとしているからです。俺は、エルフという種族はとても優秀であると思っていました。その思いに変わりはありませんが、しかし、確実に滅亡への道を進もうとしているように見えるのは、とても、残念なことです」

エルフ王がスッと立ち上がり、俺に向き直った。とても涼やかな目で見つめている。何だか、心が落ち着いていくのを感じる。

「他種族とのかかわりは、最低限はするべきなのです。その理由は、例えば、あなた方が着ている服。それは誰が作っていますか？　確

かにそれはエルフの誰かが作っているのかもしれません。しかしそれは、エルフが発明したものですか？　おそらくそれは人族が発明し、発展させたものでしょう。それをおひいさま……狐神を通じて手に入れた。違いますか？」

誰も言葉を発する者がいない。というより、俺の話を理解しかねているようだ。

「世の中、持ちつ持たれつと言います。あなた方は、排除している種族から何らかの恩恵を受けているのです。で、あれば、何らかの恩を返さなければならないのです」

一部のエルフたちの顔が歪んでいく。何で俺たちが下等な種族に恩を返さなきゃいけないんだという感情が手に取るようにわかる。

「それをしない種族は確実に滅ぶ……。俺はその教えが正しいものだと今、確信しました」

隣でシディーがコクコクと頷きながら、手を小さくパチパチと叩いている。

「事実、あなた方はミーク……ジャニス姫を連れてきた俺たちを殺そうとしているし、今も殺そうとしている。正々堂々と殺しに来るのならばまだしも、暗殺しようとしていました。それだけでなく、あなた方の大切な同胞を殺して、その責任を押し付けようとまでしている。これは、誰が見てもメチャクチャです。俺たちが無理やり押しかけてきたのならばまだわかる。だが、俺たちは事前にジャニス姫のことを通知して、エルフ側の意向を伺っています。あなた方は俺たちを里に迎え入れている……。これは、俺の提案を、話し合いの余地があるということだと解釈しています。というより、誰だ

ってそういう解釈をします。にもかかわらず命を狙われる……。俺には理解ができません。こんなことは言いたくはないが、他種族との交わりを断ったがために、エルフ独自の……自分たちの勝手な、都合のいい理屈を作り上げてそれを押し付けているだけにすぎないでしょう」

「もういい！」

突然大声がして、言葉が遮られる。ふと見ると、オルトーが歪み切った表情を浮かべながら、腰の剣に手を添えている。

「それ以上喋るな！　ムカムカする！」

オルトーは顔を真っ赤にしながら、俺たちの前に進み出る。

「ならば、正々堂々と貴様の命を奪おうではないか！」

……そっち？　イヤイヤ、話の流れからしてそんな展開にはならないだろう。そんなことを考えていると、彼の周囲に続々とエルフたちが集まってくる。二十名近くはいるだろうか。

突然、オルトーを始めとした全員が一斉に別の方向に視線を向けた。俺もその視線を追ってみると、エルフ王が彼らに何かを伝えていた。どうやら、そんな馬鹿なことはやめろと言っているように見える。だが、オルトーはゆっくりと首を振り、再び俺に視線を向けた。その目には明らかな殺気が漲っていた。

「仕方がない。やりますか」

そう言って俺は立ち上がる。そしてエルフ王に視線を向ける。

「すみませんが、彼らを懲らしめてもよろしいでしょうか？」

コイツは一体、何を言っているのだという表情を浮かべているエルフ王。その彼に、シディーが声をかける。

「すでに彼らは王に叛いております。この里において王の命令は絶対と聞きました。その命令に従わないのであれば、成敗されて当然です」

彼女はスッと俺の傍に寄って来て服の裾をキュッと掴む。

「おそらく、リノス様に魔法は効きません。安心して戦ってください」

俺は、オルトーたちを睨みながらゆっくりと頷いた。

第四百二十五話　戦闘

俺はオルトーを眺めながら、ゆっくりと壇上から降りていく。彼は鬼の形相を浮かべながら睨みつけてくる。凶相……。まるで何かに取りつかれているかのような表情だ。心の底から俺を憎んでいるのか。だとしたら、これまで俺たちに応対してきたあの誠実さは、一体何なのだろうか。これほどの憎しみを抱えながら、屈託のない笑顔を見せることのできる、この男は、ある意味で最も恐ろしい化け物なのかもしれない。

オルトーの周囲には剣を携えたエルフたちが集まっている。その数およそ２０人。それぞれがかなりの腕を持っていると見た。全員を相手にするのは骨だなと思いながら彼らを眺めていると、そのうちの一人が突然剣を抜き、俺に斬りかかってきた。

「……！」

紙一重のところで斬撃を躱す。その瞬間、俺の手刀が彼の首筋に落ちていた。若いエルフは驚いた表情のまま、ゆっくりと床に突っ伏した。

それが合図であったかのように、エルフたちが剣を抜いた。彼らの後ろには王妃が手を振りながら、何かを追い払うような動きを見せている。どうやら俺を早く殺せと言っているようだ。

俺はそれを見ながらゆっくりと壁際に移動する。これで背後から襲われる危険性はなくなる。「囲まれる前に退路を確保しろ」というのはエリルから習ったことだが、それと同時に、「囲まれそうにな

ったら、壁を背にして戦え」とも教えてもらっていたのだ。まさか、あのときの特訓の成果が、こんなところで試されるとは思ってもみなかった。

ふと視線を上げると、ミークとシディーがエルフ王の傍に移動していた。どうやら彼が二人を守ってくれているようだ。その彼も、周囲の者に何やら命令をだしているようだが、その内容まではわからない。ただ、彼の傍でシディーはじっと俺を見つめている。拳をギュッと握り締めて、それを小刻みに上下させている。「悪党どもを懲らしめちゃってください」と言っているのが手に取るようにわかる。

俺は片目でその様子を眺めながら、もう片方の目でエルフたちの動きを観察する。彼らは俺の周囲を固めながら少しずつ距離を縮めてきていた。

……さすがに、できるな。

彼らの動きを見ながら、俺は心の中で唸る。配置が完璧だったからだ。これは、少しでも体勢を崩されれば死角に入られる。結界で守られているとはいえ、彼らのことだ。その対策は練っていることだろう。油断はならない。

「……！」

無言のまま二人のエルフが俺に斬りかかってくる。二人とも剣を上段に構えて、一刀両断にしようとするかのような体勢だ。

「ハッ！」

彼らの剣が振り下ろされた瞬間、俺の手は彼らの剣の柄を握っていた。タイミングをずらしていたとはいえ、同じ上段からの斬撃だ。対応することはそう、難しくない。

彼らは必死で俺の腕を振りほどこうと剣を引いている。無駄だ。俺はこの手を離す気はない。

「……！！」

そのとき、二人のエルフの間から、とんでもない速さで小柄なエルフが突進してきた。剣を水平に構えている。

ガアン！

何か、堅いものがぶつかり合うような音が響いた。エルフの剣が俺の体を貫こうとした瞬間、俺は片足でその剣を跳ね上げたのだ。

「ガッ！」

跳ね上げた剣の切っ先が、俺から向かって右手のエルフの顔面を貫いていた。彼は剣を手放したかと思うと、血を噴き出しながら仰向けに倒れていく。俺は素早く剣を奪い取り、剣の柄で小柄なエルフのこめかみを思いっきり打った。

「……！」

声を上げる間もなく、目をカッと開きながらゆっくりと倒れていく。その様子を、信じられないといった表情で眺めているもう一人のエルフ。その男に、俺は剣を握ったまま正拳突きを食らわせる。彼は鼻血を流しながら、たたらを踏んで後退していった。

◆◆◆

……エルフ族が滅亡する。

リノスの戦闘を見ていたエルフ王、ホンノワイチは心の中で恐怖を感じていた。目の前で繰り広げられている戦いは、一人の人族の男がエルフを圧倒していた。いかに人数を揃えて戦いを挑んだとしても、彼を倒すことはできないだろう。このままでは彼一人に、エルフ族は敗れることになるだろう。王として、それは絶対に避けねばならないことであった。

『オルトー、止めるのだ！　今すぐ戦闘を止めるのだ！』

『殺すのです！　汚い人族の男を、殺すのです！』

自身の命令を打ち消しているのは、王妃であるワートキーだった。彼女はまるで、熱に浮かされたように殺せと命じ続けている。その様子を見ながら彼は、心の中で怒りに打ち震えていた。

……一体、何が不満なのだ。

すでに次期王は彼女の産んだ子に決定しているのだ。ミーク自身もそれは納得し、エルフの里を出て静かに暮らすことを宣言している。にもかかわらずジャニスを憎悪し、あろうことか、何の罪もない同胞を殺してまで、人族を陥れようとする彼女の考えが、彼には理解できなかった。

……あの者は気が触れている。

そう確信した彼は、周囲の者に命じて彼女を部屋に連れ戻すように指示を出す。だが、ほとんどの者が命令に反応しない。わずか数名の女性のエルフが、オロオロと戸惑っているだけだ。その他のエルフは皆、戦闘を眺めている。しかも、人族が倒されることを心から願っている。

……全ては、我の誤り。

彼は心の中でそう呟くと、傍らに控えている娘に視線を向ける。

『ジャニス』

『はい、父上様』

『ここを動いてはならぬぞ』

『どこへ行かれるのですか？』

『すぐに戻る』

そう言って彼は、傍らに置いてあった自らの剣を手に取った。そして、歩き出そうとしたその瞬間、人族の男が、自身に向かって剣を投げつけている光景が目に入った。

◆　◆　◆

……エルフたちの動きが、何やらおかしい。襲ってきた三人のエルフを倒した直後、俺を囲んでいた者たちが一斉に剣を鞘に納め、腰に差している小刀に手をかけた。接近戦を挑んでくるのだろうか。少々厄介ではあるが、俺には結界がある。スピードに自信があるの

かもしれないが、あれでは俺の結界は破れない。一体、何をするつもりだろうか……。

そんなことを考えていたとき、僅かな殺気を感じた。この部屋に渦巻いている強い殺気の中に感じる僅かな殺気……。うっかりすれば見落としてしまうほどの微弱な殺気だ。全身でエルフたちの気配を感じるように、神経を研ぎ澄ませていたからこそ感じ取ることができた。

それは、天井だった。天井の一部から感じる僅かな殺気……。イヤな予感がする。その瞬間、俺を囲んでいたエルフたちが一斉に小刀を抜き、俺に向かって投げつけてきた。

四方八方から飛んでくるナイフのような小刀。俺は剣を構えてそれをはじき落そうとするが、やはり天井のそれが気になる。

「りゃっ！」

俺は飛んでくるナイフを躱しながら剣を持ち換え、それを天井に投げつける。

「ぐあっ！」

小さな叫び声とともに天井から何かが落ちてきて、ドサリと音を立てる。そこには細い管のようなものを握り締めた、小柄なエルフが倒れていた。一体、何なのだろう、コイツは？

そのとき、頭上に殺気を感じた。見ると、数人の小柄なエルフが、天井から剣を構え、俺に向かって落下してきているのが見えた。

「ちいっ！」

ゴロゴロと床を転がりながら攻撃を躱し、素早く立ち上がる。

「かかったな」

背後から声が聞こえる。振り向こうとしたそのとき、俺の体が太い腕で抱き留められる。

「オ……オルトー……」

背後にいたのはオルトーだった。彼は不気味な笑みを浮かべながら、満足そうに俺を眺めている。

「モウ、オマエハ、ニゲラレナイ」

これまで聞いたことのないような声で、彼はそんな言葉を呟く。

バリリリリーーン！！

その直後、何かが砕ける音がする。これって、まさか、結界が砕けた音、か……！？

第四百二十六話　オルトー目線

「クッ！」

一瞬、オルトーの腕の力が弱まった。その隙に俺は素早く体を地に伏せ、転がりながらその場を離れる。

「ハアッ！」

起き上がった瞬間にオルトーからファイヤーボールが飛んでくる。それをすんでの所で躱す。背後では悲鳴のようなものが聞こえたが、心配している余裕は俺にはない。

……やはり、結界が破られている。

たった今の攻撃は、かなりの熱さを感じたのだ。これは即ち、俺の結界が機能していないことになる。だが、ふと見ると、オルトーの左手が真っ黒に焦げたような色に変わっている。すぐ足元を見ると、ボール大の、水晶のような球体が転がっていた。

「結界さえ破ってしまえば、貴様はただの人族。私の左手を犠牲にする価値は十分にある！」

ヤツは不敵な笑みを浮かべながら、残った右腕に炎を纏わせ始めた。おいおい、俺の後ろには大勢のエルフがいるというのに、火魔法をぶっ放す気か？　お前はマジでクズ……って、俺の後ろには誰も居ない！！

「フッ！」

一瞬、後ろを見ている間に、ヤツの右腕から炎が迸った。まるでドラゴンが襲ってくるように、長い火柱が向かって来る。俺は傍にあった剣を手に取り、炎に対峙する。

「リノス様ぁ！」

女性の金切り声が響き渡る。これはシディーの声だ。

◆　◆　◆

……殺った！

オルトーは自身の勝利を確信していた。どんな策を講じても破れなかったあの男の結界を破り、そして、その命を奪うことができた。彼の心の中は満足感でいっぱいだった。

許せなかった。数ある種族の中でも最も優れた種族であるエルフが、人族などと言う下等な生き物に敗北するなど、あってはならないことだった。

このリノスという男は、最初から気に入らないどころか、憎悪の対象だった。まず、麓の転移結界に張られたあの結界。中に収められていたラトギスの杖を取り出そうにも、どうやってもその結界を解除することができなかった。エルフの知識と頭脳を駆使してもビクともしない結界……。こんなことが起こるなど、信じられることではなかった。

そんな恐ろしい者を、王は里に案内せよと命令した。理解ができな

かった。薄汚い人族を里に入れるなど……。いかにジャニス姫を伴っているとはいえ、人族を里に入れるなど、許されることではなかった。

そこにいくと、王妃であるワートキー様は、よくわかっておいでだ。密かに人を遣わして、人族たちを消せと命令されたのだ。エルフの里を汚す者は、何人たりとも許してはならない。

だが、実際に会ってみるとこの人族は、予想を超えたスキルを持っていた。いかに鑑定しようとも、そのスキルは「結界ＬＶ２」と表示されるだけで、それ以上の情報はまったく得られなかった。エルフ族の中でも特に優れた鑑定スキルを持つ者をして、それだけの情報しか得られないのだ。通常であれば、対象者の過去までも覗き見ることのできる者であっても、だ。

……早急な対策が必要だった。このままでは、エルフの里が蹂躙される可能性がある。数百年前のヘイズの来襲の二の舞を演じるのだけは、何としても避けたかった。

そこでオルトーは、一族の中で最もスキルの高い結界師を集め、その者たちにあの男の能力を封じ込めるよう命じた。集められた結界師は１４名。彼らは何重にもわたって男の能力を封じる結界を張ったが、いくら結界を張ろうとも彼の魔力は感じ取られた。それは、能力を封じ込められていないことを表す。

……焦りを隠すことができなかった。このままでは不味い。そのとき、心の中に、どす黒い策が思い浮かんだ。

……この男に、濡れ衣を着せて、エルフ全体の力で葬ればよい、と。

同時にオルトーは、一人の同胞を犠牲にすることを思いついていた。それは、レイラだった。

彼女は王妃様に仕える女官であり、堅実な仕事ぶりで主人からの信頼も厚い。だが、その一方で、人によって対応の仕方を変える性格だった。自分が好んだ者には心を開くが、そうでない者には徹底して冷たく当たった。オルトーに関しては後者の対応で、上司である彼が話しかけているにもかかわらず、聞こえていないような素振りをすることさえあったのだ。

オルトーはその黒い欲望を心に秘める一方で、それが絶対に悟られないようにすることも忘れなかった。人族の男たちに対しては努めて丁寧に振舞い、過剰なまで接待を行った。そのお陰もあって彼らの信頼を得ることができた。そう考えた彼は、すぐさま計画を実行に移した。

仕事の合間を縫って城の外に出てツララを探し、手ごろな大きさの物を見つけると素早く切り取って戻った。そして、レイラを呼びだして、彼女の脇腹をツララで突き刺したのだった。

……我ながら見事だった。彼女は叫び声を上げることなく絶命し、屍を城の床に晒した。彼は素早くその場を離れ、仕事に戻った。

程なくしてレイラの死体が発見され、思惑通り、城の中は大混乱に陥った。オルトーはすぐさま王妃の許に参じ、この原因は人族が城に入ったことによるものだと報告したのだった。

全てが計算通りだった。完璧に事が運んでいた。あとは、王に人族たちの討伐を命じてもらうだけだった。だが、思わぬところで邪魔が入った。

まさか、子供の風貌をしたドワーフに、全てを見破られるとは思ってもみなかった。それどころか、犯人が自分であることを暴露され、あまつさえ、その事実を実に巧みに自分の口から話すように仕向けられていたのだ。

オルトーの頭の中には、完ぺきに事を運んでいたことが頓挫してしまったことの怒りと、ドワーフごときに見破られてしまった怒り、そして、エルフのこれまでの歴史を否定した人族の男に対する憎悪……。そうした負の感情がごちゃまぜになるという状態に陥った。

……もうこれは、この者たちを殺すしかない。

そう考えて、えりすぐりの部下たちを男に差し向けたが、男は見事な動きで攻撃を躱していく。さらにあろうことか、天井に放ってあった刺客でさえも排除されてしまったのだ。

ここに至っては、なりふりは構っていられなかった。やりたくはなかったが、奥の手を使わざるを得なかった。

オルトーは男の動きを注視しながら、機会を窺う。それはすぐにやって来た。素早く男の背後を取り、自由を奪った直後、懐から魔吸石を取り出して、男にぶつけたのだった。

大きな賭けだった。エルフの体の半分は魔力でできている。魔力と肉体が結び付いているために、肉体の一部は魔力が具現化したものなのだ。魔吸石を素手で掴むという行為は、大量の魔力を吸い取られてしまい、エルフにとっては自殺行為にも近いものだ。自分自身も左手を失うはめになったが、男の結界は砕けた。十分に価値のあることだった。

オルトーは渾身の力を振り絞って、男に火魔法を放った。部屋にいた同胞たちは避難している。この位置ならば王に当たる心配もない。今度こそうまくいった。

「はあっ！」

男は黒焦げになるはずだった。だが男は、剣を上段に構えたかと思うと、それを素早く振り下ろした。その瞬間、男に向かっていた火魔法が彼の前で真っ二つに割れていく。一体、何が起こっている…？　そんなことを考えた瞬間、その顔面に衝撃が走った。

「ぐはっ！」

膝がカクンと落ちて、ガタガタと震えだす。必死で目を見開いてみると、そこには、あの、人族の男が立っていた。

「きさ……ガッ！」

言葉を発しようとした瞬間、再び顔面に衝撃を受けた。グチャッという何かが砕けた音が聞こえる。気が付けば思わず尻もちをついていた。

「グッ……グゥゥゥゥ」

必死で右手に持っていた剣を床に突き立てながら、起き上がろうとする。男は拳を水平に構えた状態で睨みつけている。そうか、あの拳で殴られたのか。人族の分際で、私の顔を殴るとは……。いや、人族に触れられてしまった。何と汚らわしいことか……。

……切り刻んでくれる。

剣を構えようとしたそのとき、目の前の男が口を開いた。

「この、大馬鹿野郎がぁ！！」

そのドスの効いた声で、オルトーの体はすくみ上り、彼は動くことができなくなった……。

第四百二十七話　エルフ王、動く

「お前はどこまでクズなんだぁ！」

そう叫びながら俺は、握り締めた拳をオルトーの顔面にたたきつける。ヤツはそれを躱し切れずにまともに食らい、壁まで飛んで行った。

俺はチラリと後ろを見る。そこには、オルトーの攻撃で傷ついたエルフたちの姿があった。中には突っ伏したまま動かない者もいて、その傍らでは必死でその名を呼ぶ者もいた。

……コイツは同胞を何だと思っていやがるんだ。

俺はヤツにゆっくりと近づきながら、そんなことを考えていた。

……脳裏をかすめたのだ。断片的ではあるが、この男のこれまでが。そんな理由で、ただ嫌いだと言う理由だけでこんなことをしていやがったのか？　エルフというのは同胞を大切にするんじゃなかったのか？　女性に対しては敬いの精神があるんじゃなかったのか？　コイツのやっていることは、そのどれにも当てはまらない。

俺だけを攻撃してくるのならば、まだ話は分かる。だが、大切だと言っている割にエルフを殺し、傷つけている。何の罪もないのに、だ。アホという言葉以外にこの男を形容する言葉が見当たらない。

そんなヤツは、仰向けになり、鼻から夥しい血を流しながら、苦しそうに肩を上下させながら呼吸をしている。取りあえずコイツの意

識を失わせて、エルフ王に突き出そう。そう考えた俺は、再び拳を握り締めてヤツの前に立つ。

そのとき、オルトーがニヤリと微笑んだ気がした。その瞬間、彼の体が緑色に光った。これは、回復魔法か？

気付いたときには、ヤツはその右腕に炎を纏っていた。俺は思わず横に飛んでその攻撃を躱す。ヤツの火魔法は俺の遥か頭上を越えて天井に当たる。魔法の威力が強かったためか、天井の一部が砕けて、バラバラと床に落ちてきた。結構な大きさの石のようなものも落ちてくる。

「……しまった！」

俺が気を取られている隙にオルトーは立ち上がり、右手に剣を握ったままシディーたちの許に向かって走っていた。まだダメージが残っているのだろうか、足元がおぼつかない。あれなら追いつける。俺は素早く立ち上がって、ヤツを追いかけた。

オルトーの殺気はシディーたちに向いている。この距離ならギリギリ追いつける距離だが、油断はならない。ヤツはおそらくミークを斬ろうとしているのだろう。だが、その傍にはシディーがいる。彼女もそれなりに剣術は嗜んでいる。今は丸腰だが、ヤツの攻撃くらいは躱せるはずだ。

シディーもそれがわかっているのだろう。スッとミークの前に進み出た。来るなら来いという意思が伝わってくる。

そのとき、彼女らの前にエルフ王が進み出た。オルトーの動きが、ゆっくりと止まる。

「……」

「……」

二人は見つめ合ったまま動かない。王は右手に剣を携えたまま涼やかな目でオルトーを眺め続けている。あまりに予想外の出来ごとだったのか、部屋がしんと静まり返っている。

コツ……コツ……コツ……。

エルフ王がゆっくりと歩き出した。その足音が不気味に響き渡る。彼は表情を一切変えないままオルトーを眺め続けている。その目には、何やら悲しみの色が見えた。

ガッ！

一瞬のことだった。鈍い音がしたかと思うと、気が付けば、エルフ王の剣がオルトーの体を切り裂いていた。剣を抜いてから斬るまでの速さが尋常ではない。その剣は彼の右肩を切り裂いて、心臓にまで達したのだろう。一瞬の間をおいて、彼の体から血が噴き出した。

「……！」

「……！」

部屋中が声にならないような声で満たされている。どうやらエルフにとって血は本当に忌むべきもののようだ。血しぶきが体に付かぬよう、皆逃げまどっている。

……ドサッ。

小さな音を立ててオルトーの体が、まるで空気の抜けた人形のように崩れ落ちた。彼はカッと目を見開いたまま絶命していた。

「静まれ、皆の者」

剣についた血を拭おうともせずに、エルフ王はそれを鞘に仕舞いながら口を開く。

「このオルトーは王の命令に背きし者。逆賊である。それを我が成敗したのだ」

彼はオルトーの遺体を一瞥すると、部屋の壁際で恐れおののいているエルフたちに向き直る。

「我は、間違っていた。ただただ、我が一族を守りたかっただけなのだが……。時を経るに従って、我らは醜い種族に堕落してしまったようじゃ……。オルトーも、元は忠誠心溢れる家来であったものを……。このような……」

エルフ王は一瞬、悔しそうな表情を浮かべたが、やがてスッと顔を上げ、王妃に視線を向け、彼女に向かってゆっくりと歩き出した。

「妃よ。オルトーを罰した今、我はそなたも罰せねばならぬ」

「……！　……！　……！」

王の言葉に納得がいかないのだろう。彼女は右手を自身の胸に当て、目をカッと見開きながら何かを訴えている。そして、俺を指さしな

がらさらに何かを訴えている。察するに、こんな出来事が起こったのは、全ては俺たちがこの城に来たからだ、私はそれを排除しようとしたのだ……といったことを言っているのだろう。とても見苦しい光景ではあるが、何となく、彼女の取り乱した様子は、哀れみさえ感じられる。

「……」

エルフ王は彼女の傍まで来ると、じっと彼女を見つめ続けている。だが、彼女は足を踏み鳴らしながら、必死で何かを訴えている。

「……もうよい。それ以上、言うな」

エルフ王の悲しそうな声が響き渡った。俺の位置からは彼の背中しか見えないが、おそらくその心中は苦悶に満ちているのだろう。その顔が左右に揺れている。

「我は、そなたの命を奪いたくはないのだ。……わかるな？」

王妃の表情は固まったままだ。そんな彼女を、エルフ王はしばらく眺め続けていたが、やがてクルリと踵を返し、スッと右手を挙げてなにやら指示を出し始めた。部屋にいたエルフたちが戸惑いながらも動き出す。

「ひっ！　キッ！　アッ！」

何とも言えない奇声が聞こえたかと思うと、王妃が若いエルフたちに両腕を取られて引き立てられていた。彼女はプライドを傷つけられて怒っているのか、恐怖を感じているのか、よくわからない、何とも言えない表情を浮かべながら部屋を後にしていった。その様子

をエルフ王は全く見ようともしなかった。

「リノス様……」

シディーがミークを伴って俺の傍にやって来た。そして、俺に抱きつき、その小さな顔を擦りつけてきた。彼女は身長が低いために、その顔が俺のみぞおちの位置にくる。そこを圧迫されると少し苦しいのだが、今回は我慢することにしよう。

「相変わらず、仲が良いのう」

ミークが意地悪そうな笑顔で冷やかしてくる。俺は彼女にウインクを返すが、その意味は分かってもらえなかったらしい。不思議そうな表情を浮かべている。

「先ほど、父上がそなたに張っている結界を解除するよう命令しておいでじゃった。魔法は使えるかえ？」

おおう！　そんな命令が出ていたとは！　俺は体の魔力を集中させて、ライトの魔法を出してみる。すると、かなり大きなライトがボンという音と共に出現した。

「よかったのう」

「よかったです、リノス様」

シディーとミークが笑顔になっている。俺も笑顔で彼女たちに頷く。

「すまぬが、一つ、助けてやってたも」

ミークが何やら指さしている。その方向に視線を移すと、オルトーの攻撃で傷を負ったエルフたちが治癒されている光景が目に入った。

かなりひどい火傷を負っているのだろう。数名のエルフたちが何度も回復魔法をかけているが、なかなか治癒されていない。特にあの左腕は壊死してしまっているんじゃないだろうか。そこだけが、全く回復しているように見えない。

俺はエルフたちの側に行き、ＬＶ５の回復魔法をかけてやる。すると、黒い部分がスッとなくなり、白い肌が蘇った。エルフたちは驚きの表情で俺を眺めている。……そんな、悪魔を見るような目で見ないでくださいよ。

ここに居続けるのもどうかと思った俺は、フッと笑顔を見せてその場を離れ、シディーたちの許に戻る。ふと見ると、完全にこと切れたオルトーの亡骸が転がっていた。俺はそれに向けて鑑定スキルを発動させる。

……断片的にしか情報は拾えなかったが、彼がレイラを殺している犯人であることはわかった。驚いたのは、シディーが推理したことがほぼ当たっていたことだ。これなら驚きもするだろうし、突然激高したことにも納得がいく。

そのとき、俺の傍にエルフ王が近づいて来た。彼は悲しそうな目で俺を眺めていたが、やがて、片膝を突いたかと思うと、その頭を深々と下げた……。

第四百二十八話　長い一日の終わり

エルフ王が俺に頭を下げている。これって、もしかしてドえらいことなんじゃないだろうか？

辺りを見廻してみると、その場にいるエルフ全員の表情が固まっている。彼らとしても、散々軽視してきた種族に王が頭を下げているのだ。信じられない光景なのだろう。

「すまぬことをした……。我が娘の命を助けてもらった命の恩人を手にかけようとした。本来ならば感謝してもしきれぬ恩人に対しての数々の無礼な振舞い。エルフ一族を代表してこのホンノワイチ、心から詫びさせてもらう」

「お手をお上げください。十分です。もう既に賊はエルフ王様、あなたの手によって討伐されました。もう、それで十分でしょう」

俺の言葉を受けて彼はスッと顔を上げ、ゆっくりと立ち上がった。そして、俺たちに視線を向けているエルフを見廻していく。

「……何ゆえに、我らは堕落したか」

誰に言うともなく、彼は呟く。その肩がかすかに震えている。

「我らは誇り高き種族であった。争いをすることを良しとせず、それをいかにして回避するかを何代にもわたって考え続けてきた。そのために我らは高い知性とスキルを得た。それらをもってしても、このような事態となろうとは……。何が……何が間違ったのか……」

「きっと、皆、弱くなってしまっていたのかもしれませんね」

「弱い？」

俺の言葉が意外だったのだろうか、エルフ王が驚いた表情を浮かべている。まあ、自分たちが一番だと思っていたのに、弱いと言われてしまうと、そりゃ驚くかな。

「確かに、エルフの皆さんは、素晴らしい知識とスキルをお持ちだと思います。この人跡未踏の地に結界を張り、街を作り、ちゃんと生活している。こんなことは、エルフ以外の種族ではできないことだと思います。きっと、この生活を手に入れるために、多くの犠牲を払われたことだと思います。大変だったでしょう」

俺の言葉に、王は静かに頷く。

「そんな血と汗と涙がしみ込んだこの里に、他の種族が土足で入り込むのは、感情的に言ってよいものではないでしょう。ですが、そうは言っても、それを排除しようとする動きはやりすぎです。どう考えても普通ではありません」

俺は周囲のエルフに視線を向けながら口を開く。誰も俺に視線を合わせる者はいない。

「まず、何故人族をそのように毛嫌いなさるのかが、俺には理解できません。確かに、人族の中には悪い者もおります。しかし一方で、いい人もいます。あなた方は人族の悪い部分だけに焦点を当てておいでなのではないですか？　そうではなく、人族の良い点に焦点を当てていただきたいのです。あなた方に危害を加えようとしたり、

利用しようとしたりする者については、関係を持たなくてもよいのです。ですが、その種族すべてを排除するという考えはあまりにも極端すぎます」

ジワジワと俺に対する、何とも言えない感情が押し寄せてくるのを感じる。何を言っているのだという感情……。やはり、あまり気持ちのいいものではない。だが、エルフ王はそんな俺に対して、優しい眼差しを向けている。彼は俺と目が合うと、コクリと頷いた。

「間違っていたら申し訳ありませんが、あなた方は皆、とても頭のいい種族だと俺は思っています。ですが、長い間他種族と交流しなかったことから、ごく限られた情報や知識しか得られていなかったのではありませんか？　その少ない情報を駆使して、あなた方は俺たち人族のイメージを作り上げていた。さらには、自分たちが優位であるように考えていたのではないですか？」

エルフたちの雰囲気がまた変わった。何やら息を呑んでいるようだ。

「だが、実際の俺たちはあなた方が考えていた種族とは違っていたと思います。オルトーの計画が頓挫したのは、正しい情報を得ず、自分が勝手に拵えたイメージで動いた。これが最大の原因だったと思います。今の状態を続けると、きっとこの里には第二、第三のオルトーが生まれることでしょう。俺は、そうなって欲しくはないし、そうなってはいけないと思います」

「どうせよと！　危険にというか！」

一人のエルフが大声を上げる。喋り慣れていないためか、言葉の意味がいまいち飲みこめない。ちょっと困ったなと思っていると、シディーが後ろから耳打ちしてくれる。どうやら、里を解放すると危

険に晒される。お前はそんなことをしろと言うのかと言っているようだ。

「要は、エルフたちは同胞たちが危険な目に合うのを恐れているようですね」

シディーが通訳してくれる。なるほど、彼らの根底にあるのは、その考えだったんだな。

「エルフが危険な目に合わない方法が、一つある」

俺のその言葉に、エルフたちがざわつく。

「他の種族と交流するのです。いや、ここで怒らないで最後まで話を聞いてね？　あなた方に必要なのは、他種族の情報です。どんな人々で、どんな知識を持ち、どんな考え方をするのか……。そうした情報を持った方がいいと思います。まあ、エルフ全員が交流することは不可能でしょうが、できるだけ、色んな種族と交流した方がいいと思います。当然、その中にはエルフを攻撃しようとしたり、利用したりしようとする者もいるでしょう。そうした者は付き合わなければいい。あなた方を助けてくれる種族と交流していけばいい」

「それが、危険にならないこととどう関係がある？」

エルフ王が真面目な表情で口を開く。俺はコクリと頷きながら言葉を続ける。

「戦略、という言葉をご存じでしょうか？　センリャク……。戦いを略すと書きます。その名の通り、戦ってはダメなのです。できるだけ、戦いを避けなければならないのです。そのためには、味方を

増やさねばなりません……。これは、俺の体験から言えることですが、アガルタはここ最近、大きな戦いを経験しました。何とかその戦いは切り抜けることができましたが、俺たちは大きな痛手を被りました。避けられない戦いであった……と言ってしまえばそれまでですが、俺はこれからできるだけ、戦いが起こらないようにしていくつもりです。できるだけ敵を作らないでおこうと思っています。敵がいなくなれば、自ずと戦いは無くなると考えます。そうなれば、無敵になりますよね？」

……我ながらうまいことを言ったなと思ったが、どうやらエルフたちにはピンときていないようだ。

「あれ？」

突然、エルフたちがゾロゾロと部屋を出ていこうとしている。何か、気に障るようなことを言ってしまったのだろうか？

「……父上が皆に、このことは後日話し合おうと言って下がらせたのじゃ」

ミークが小声で話しかけてくる。何だ、そうならそうと、早く言ってくれればいいのに。

「さ、我が寝所に参れ。今宵はゆっくりと休まれよ」

エルフ王が俺たち一人一人に視線を向けながら話しかけてくる。俺は彼の目を見ながら、ゆっくりと頷いた。

彼は踵を返してゆっくりと歩き出す。俺たちも彼に続く。

エルフ王の寝所は、とても簡素なものだった。大きな天蓋付きのベッドと、そこから少し離れたところに、ベッドが二つ並んでいた。どうやらエルフ王が俺たちのために別に運ばせたようだ。

「この部屋には人払いをしておる。ゆるりと休むがよい。そして、夜が明けたら、山を降りるといい」

そう言って彼は頷く。そのとき、ミークが大きなベッドの上にピョンと飛び乗り、エルフ王に視線を向ける。それに気が付いた彼はベッドに腰かけてミークと目を合わせる。彼はその体勢のまま動かなくなった。父娘二人、積もる話をしているようだ。

「さっきのリノス様、格好良かったです」

シディーが目をキラキラさせながら、小さな声で話しかけてくる。

「敵がいなくなれば無敵になるっていうお言葉……とっても上手だと思いました。もう、後ろからギュッと抱きしめたかったです」

……一人でもわかってくれる人がいれば、それでいいや。そんなことを考えながら俺は、エルフ王たちの様子を見ながら、シディーのおでこにキスをした。

俺たちの長い一日が、終わった。

第四百二十九話　おかえり！

結局、俺たちは一睡もすることなく朝を迎えた。

別にベッドが硬かったからだとか、枕が替わったからだとか、そういった理由で眠れなかったのではない。何だかんだとしていたら、朝日が差し込んできたというわけなのだ。時間を見ていなかったので気が付かなかったが、かなり深夜まで俺たちは活動していたようだ。

「……許す」

突然そんな声が聞こえた。驚いて声の方向を向くと、エルフ王が俺たちに視線を向けていた。彼は少し考えた様子を見せていたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「ここに、転移結界を、許す」

ミークの話によると、ここは王のプライベートルームであり、ごくわずかな近しい者しか入ることが許されない。そんな場所に転移結界を張れと彼は言っている。いつでも、会いに来て構わないという意思表示なのだそうだ。

いや、そうは言っても、あなたには政務があるでしょう。来たところで会えないという可能性は極めて高くないかという気もしなくはないが、そこは敢えて突っ込まないことにしよう。

そんな俺の心の中を知ってか知らずか、エルフ王はゆっくりと頷い

ている。どうやら、俺にかけられていた結界は完全に解除されているようだ。

「リノス様、お暇しましょうか」

シディーが小さな声で促してくる。彼女は俺の前に進み出ると、ペコリとお辞儀をした。

「大変にお騒がせいたしました」

「いや、感謝するのは我らの方だ。……娘を、頼む」

「……承知しました」

気が付くと、ミークが俺たちの傍に来ていた。彼女は再びエルフ王に視線を向けると、しばらくの間、その姿勢のままで居続けた。その目には涙が溜まっている。

しばらくすると彼女はコクリと頷き、両手でゴシゴシと目をこする。そして、次の瞬間にはいつものミークの顔に戻っていた。

「さあ、戻ろうぞ」

俺は注意深く魔力を集中させて、転移結界を張った。結界が発動する瞬間、エルフ王がスッと頭を下げたような気がした。

「……おおう」

思わず嘆息が漏れてしまった。目の前には、いつもと変わらぬ帝都の屋敷の庭が広がっていたからだ。見慣れた景色だが、何故か懐か

しい感じがする。まるで数年ぶりのような感覚を覚える。

……ひょっとして、何年も経っていたりして？　浦島〇郎の話もあるしな。

そんなことを考えながら、俺はゆっくりと母屋の勝手口の扉を開けた。

……とても静かだった。まるで、誰も居ないかのような静けさだった。俺はまさかと思いながら、ダイニングの扉を開けた。そこには、黙々と朝食を食べるリコや子供たちの姿があった。

「あっ！　おとうさん！　おかえりなさい！」

俺を見つけたのはエリルだった。彼女は椅子から飛び降りると、脱兎のごとく俺に向かってきた。その彼女の後をアリリアやイデアたちが続いている。

「おとうさん！」

エリルとアリリアが、ほぼ同時に俺の胸に飛び込んでくる。この二人をまとめて抱っこするのは久しぶりだ。こんなに重たかったっけと思いながらも、全力で抱きついている二人の娘を抱っこする。

「おねーちゃん、僕も！　僕も！」

足元で息子のイデアが両手を差し出している。俺は二人の娘を下ろして、彼を抱っこする。

「おかえり、おとーさん」

「ただいま。とうたんがいない間、ちゃんとママの言うことを聞いていたかい？」

俺の言葉に彼はコクリと頷く。何と可愛い息子だろうか。思わず彼の頭をわしゃわしゃと撫でる。

「……おかえりなさい」

子供たちの後ろからリコが笑顔で迎えてくれる。ああ、何と癒される笑顔なのだろう。

「ただいま、リコ。心配をかけたね。メイたちの姿が見えないけれど……」

「もう出かけてしまいましたわ。とても心配していましたから、知らせてやりませんと……」

「ああ、そうだな。ちょっと研究室に顔を出してくるよ」

「朝食は？」

「いや、まだなんだ。実はお腹がすいていてね」

「では、用意しますわ」

「すまないな」

ふと見ると、シディーの許にはピアトリスが寄ってきていて、彼女に抱きついている。そんな娘を愛おしそうに抱きしめているシディ

ーの表情は、穏やかそのものだ。

リコの朝食に舌鼓を打った俺は、アガルタに転移して、メイやマトカルたちに無事に戻ったことを報告する。色々と仕事が溜まっているので、それを片付けたかったが、何となく今日は仕事をする気が起こらず、早々に屋敷に引き上げることにした。

屋敷に帰ると、ミークの姿がなかった。すでに、おひいさまの許に転移したのだそうだ。彼女はしばらくはそこで過ごすそうで、折に触れて我が家にやってくるつもりのようだ。

「……ご主人」

突然、ゴンが話しかけてくる。人化した姿ではなく、白狐の姿だった。それを見つけたアリリアがいたずらをしようと近づいて来るが、彼女はビクンと体を震わせたかと思うと、一目散に外に出ていってしまった。俺の後ろには、真剣な表情をしたリコがいたのだ。

「おひいさまからの伝言でありますー。心から、感謝する、とのことでありますー」

彼はゆっくりと俺たちに向かって頭を下げた。その姿から、おひいさまから丁重に謝意を伝えるよう命じられていることがよく見て取れた。どうやら、俺がアガルタに出かけている間に、エルフ王からおひいさまたちとの取引を再開する旨の連絡があったらしい。

「……さて、これからエルフたちはどうするんだろうな」

俺はリコと向かい合わせになってダイニングのテーブルに腰かける。彼女はチラリと庭の方向に視線を向ける。外からはソレイユの優し

い歌声が聞こえてきている。子供たちと共に、一緒に歌を歌っているようだ。

「今すぐにはいかないかもしれませんが……。これからゆっくり、国を開いていくのだと思いますわ」

「そうなってくれれば、いいんだけれどな」

「きっと、大丈夫ですわ」

「へえ、イヤに言い切るね」

「女のカンというやつですわ」

そう言ってリコはクスリと笑う。

「ところでリコ、大丈夫か？」

「何が、ですの？」

「昨日は寝てないんじゃないか？」

メイから聞いた話では、リコは昨夜は一睡もせず、ダイニングのテーブルに座ったまま俺の帰りを待っていたらしい。きっと疲れているに違いないのだ。

「いいえ。少し寝ましたわ」

「せっかくだ、ちょっとお昼寝をしないか。俺も昨日は全然寝ていないんだ」

「……お昼寝など、子供みたいですわ」

「たまにはいいだろう」

俺は席を立って離れに向かう。リコも俺の後ろに付いて来る。

「あ、先にお風呂いただきました」

二階に上がると、タオルでゴシゴシと頭を拭くシディーに出会った。彼女は見るからに眠そうな表情をしている。どうやら、限界まで頭脳を使ったらしい。俺はゆっくり休むように彼女に伝えると、あとはよろしくお願いしますと言って、部屋に行ってしまった。

「……はあ～。やっぱり自宅のベッドが一番落ち着くな」

ゴロンと横になった俺の傍で、リコがベッドに腰かけながら、俺を眺めている。

「今回は、本当にシディーに助けられたよ。魔法が使えなくなったんだ。俺の魔力を封じ込めるんだから、やっぱりエルフは凄いな。それ以上にすごかったのがシディーでさ。ものすごい推理を見せたんだぞ。やっぱり連れて行ってよかったよ。シディーがいなければ、間違いなく俺は帰って来ることができなかった。……リコ？」

見ると、リコがベッドに腰かけた姿勢のまま、コックリコックリと居眠りを始めていた。俺はゆっくりと起き上がって、彼女の肩をそっと抱く。全く目覚めようとはしないリコ。俺は彼女をベッドに寝かせて、腕枕をする。まるでそれを待っていたかのようにしがみついてきた彼女の寝顔を見ながら、俺はゆっくりと目を閉じるのだっ

た……。

第四百二十九話　おかえり！（後書き）

第十四章、完結です。ちょっと冗長になってしまった感が強く、反省しています（汗）。次章はもう少しコンパクトにまとめていきたいと思います。次週は肩の凝らない間話を数話挟みまして、新章に突入したいと思います！

第四百三十話　女の勘

「ああ、いらっしゃい」

「本日分を取りに伺いました」

「あ、用意ができています。こちらです」

「ありがとうございます。あ、今日は小豆が入っているのでしょうか？」

「はい。いい小豆が入りましたので、使ってみました。僕としてはとてもいい感じに仕上がったと思うのですが……。よければ、味見されますか？」

「……うん！　美味しいです！　なんて上品なお味でしょう。これならばお二人もお喜びになられます」

「そうですか。そう言っていただけると嬉しいです」

仲睦まじい会話を交わしているのは、ポーセハイのドーキとターマだった。タナ王国との戦いの後もこの二人はミーダイ国に住み続けていた。ドーキの作るお菓子は評判を呼び、わざわざ遠方から買い求めに来る客もいるほどだった。だが、元来儲ける気のない彼は、自分が納得する菓子しか作らず、よって一日に生産できる数は限られてくる。そうしたこともあって、彼のお菓子は予約なしでは手に入れることが難しい状態で、その予約もすでに、半年先まで埋まっているという状態だった。

その一方で、菓子作りのクオリティーの向上に余念のない彼は、様々な試行錯誤を試みていた。その中で彼は試作品を作り、それを客に味見をさせることがよくあった。客の中には、その試作品を目当てに店を訪れる客も多く、そうした人々がミーダイ国に逗留することも多く、その彼らが落とす金が、この国に潤いを与えていたのだった。

忙しい日々の中で彼は、帝様の朝食を作ることだけは忘れなかった。帝様夫婦からの信頼も厚く、彼は御所で行われる儀式の食事一切を受け持つ役割にも任じられていた。そんな彼と帝様夫婦を繋いでいるのが、ターマだった。

彼女は皇后さま付きの医師として絶大な信頼を得ていて、皇后さまの体調管理はもちろん、先に生まれた皇太子の健康管理も担う役割を担っていた。

彼女は毎朝、ドーキの店を訪れて、朝食を取りに来る。その際、仲睦まじく会話を交わすその姿は、傍から見ると完全に恋人同士、もしくは夫婦のようも見えた。

きっとこの二人は結婚するに違いない。そんな期待を周囲に持たせる二人……。ミーダイ国の人々は、温かく二人を見守っていたが、中にはそうではない、お節介もいた。町衆の代表格である、ショゲツだ。

彼女はじれていた。早く二人が結婚しないものかと。そうすれば自分も帝様や皇后さまにもっとお近づきになれる。彼女自身、オワラ衆の一人として帝様や皇后さまの警護を担いたいという夢があった。だが、生来のおしゃべりの性格により、その夢は諦めざるを得なか

ったという過去を持っている。少し歪んだ愛情ではあるが、帝様たちの役に立ちたいという思いは、誰よりも強かったのだ。

「おおおお、鈍なこと」

店の小僧から報告を聞いたショゲツは、呆れた声を漏らす。おそらく二人は相思相愛。ただ、二人とも奥手のために、なかなか関係が進まないのだ。何とかして、二人を添わせることはできないか……。そんなことをぼんやりと考えていた彼女に、一つの考えが閃く。

「せやせや、アテとしたことが。打ってつけの人がおましたやないか」

パチパチと手を叩きながら、彼女は立ち上がる。そして、店の者に出かけることを告げ、いそいそと着替えを済ませるのだった。

彼女が向かったのは、兄のイッカクのところだった。おそらく今日は夜警のために、屋敷にはいるだろう。そう考えた彼女は、真っすぐに実家に向かった。

「……」

一切表情は変えないものの、腕を組みながら妹を睨みつけるイッカク。その兄を恐ろしいと思うものの、必死で自分を鼓舞しながら、ショゲツは口を開く。

「ドーキはんとターマはんが夫婦になれば、帝様も皇后さまも、それはそれは安心されるに違いおへん。せやから、兄上から帝様と皇后さまに言うておくれやす。二人を夫婦にするように……」

「……」

「兄上かて、二人が夫婦になったら、うれしいやおへんか？」

「……興味なし」

「そないやから兄上はアカンのどす。もっと、男と女の機微に敏感にならなあきません。せやよって……」

「帰れ」

「え？」

「我、興味なし」

「帝様と皇后さまは心配やおへんのか？」

「関係なし」

「関係なして……。何も難しいことを考えんでもよろしいのやで？　帝様と皇后さまに、ドーキはんとターマはんを夫婦にしたら、それはそれはええ夫婦が出来上がるんとちゃますか？　って言うたらええのや。そないしたら、お二人は、そらええこっちゃって言うに決まっています。そこから話が盛り上がることもあります。兄上も仏頂面ばっかりしとらんと、ちょっとは気の利いたことを言えなあきまへんえ？　せやさかいに……あれ？」

気が付けばイッカクの姿はなかった。彼女は大きなため息をつきながら、ゆっくりと立ち上がり、そのまま屋敷を後にした。

◆◆◆

「これはお珍しい。一体どうされたのです？」

驚きの声を上げているのは、ドーキだった。彼の目の前に立っているのは、何とショゲツだった。

「ドーキはんに聞きたいことがおましてな」

「何でしょう？」

「ここではちょっと……な？」

「わかりました」

店の奥の部屋に通されたショゲツは、単刀直入に質問する。

「ドーキはん、アンタ、心に決めたお人はおますのか？」

「え？」

「いや、失礼を承知で聞いているのや。何や知らん、ここ最近のアンタはんを見ておりましたらな、どうも、心に決めたお人がおるんやないかと……そない思いましたんや」

「は……はあ……」

「まあ、他人の色恋に色々と口を出すのんは、あんまり行儀のええことやないんどすけれど、アンタはんはアテらの大事な仲間どすから、失礼を顧みずに言わせてもらいます。アンタ、心に決めたお人

がおるんやったら、ちゃんと言いなはれ。せやないと、お相手も失礼になります」

「失礼って……」

「アンタはんは知らんやろうけれどな。お相手も、待ってはりますんえ」

「え？　待っているって……」

「まあ、アテもお話したことはあらしまへんけど、これは女の勘どす。間違いない。お相手は、アンタはんからの言葉を待ってはります。せやからな、ドーキはん」

「い……いや、そうは言っても……。彼女には仕事もありますから……」

「何を鈍なことを！」

思わず大きな声を上げてしまった。ショゲツは上品に口元を抑えて、辺りをキョロキョロと見廻す。そして、ドーキに顔を近づけて、声を殺しながら口を開く。

「アテはアンタはんを心配していますのんえ？　ここ最近、体調が優れへんのやおへんか？　言わいでもわかります。きっと、寝られてぇしまへんのやろ？　アンタはんに倒れられたら、帝様が悲しまれます。それに、お相手も……。ドーキはん、アンタはんは最早、一人の体ではおへんのやで？　アンタはんにもしものことがあったら、多くの人が悲しみますのんえ？　せやさかいに、こんなことを言いますのや。大丈夫。アテが保証します。お相手はアンタはんの

ことが好きですわ。せやなかったら、アテもこんなことは言いに来まへんがな。思い切って言うてみなはれ。心が軽くなりますえ？」

「は……はあ」

戸惑うドーキ。だが、ショゲツはそんな彼ににこやかな笑みを浮かべている。そして、帰り間際、クルリと振り返った彼女は、彼に向かってグッと親指を立てた。

「間違いない。間違いおへん！」

そのあまりにも自信に満ちた表情は、繊細で用心深いドーキをして、何とかなるのではと思わせるものがあった。彼は彼女に向かって大きく頷いた。

……もう一度、真剣に話をしてみようか。オワラ衆ともつながっているショゲツ様のことだ。何の根拠もなく、こんなことを言いに来るとは思えないしな。

彼は右手をギュッと握り締めながら、心の中で決意する。明日、話し合いに行ってみようと。運命の歯車が、音を立てて動き出そうとしていた……。

第四百三十話　女の勘（後書き）

本日、『結界師への転生①』のコミック版が幻冬舎、バーズコミックス様より発売となりました！　書店に寄ってはポストカードの配布（３種類あり）も実施されています（無くなり次第終了）。ＳＳ「ファーストキス」も収録して、リノスとエリルのほのぼのとしたエピソードを描いています。是非、手に取ってご覧いただければうれしく思います。

第四百三十一話　勝負の行方

その数日後、ドーキの姿は、アガルタ大学医学部の門の前にあった。彼は大きく息を吸い込み、そして、ゆっくりと吐き出す。気合を十分に入れて、キャンパスの中に入っていった。

彼の足取りは、全く迷いを感じさせない。一直線に、目指す目標の許に向かって進んでいった。

「失礼します」

声をかけて扉を開ける。するとそこには、机に突っ伏すようにして作業をしているポーセハイの姿があった。これは、言うまでもなくローニだ。

彼女の魔力は十分に感じ取ることはできた。やり方によっては、彼女のすぐそばに転移することだってできたのだ。だがそれは一度、怒られている。同じ轍は踏むべきではない。

彼女はこの大学で研究の傍ら、チワンの助手として働いていたのだった。この日も、研究のレポートを仕上げるために不休不眠での作業の最中だったのだ。

だが、そんなことはドーキにはわからない。彼は再び息を大きく吸うと、部屋中に響き渡る大きな声で彼女を呼び掛けた。

「ローニ！」

「……！？」

突然大声を出されて驚いた表情を浮かべるローニ。やがて彼女は持っていたペンを置き、座ったままドーキにゆっくりと話しかける。

「何の用ですか？」

「僕と結婚してくれないか」

「……」

「子供の頃から、ずっと君をお嫁さんにしたいと思っていたんだ」

「……」

「だからローニ、結婚してくれ。僕たちで、家庭を作ろう」

「帰って下さい」

「え？」

「その件は、お断りしたはずです。私は忙しいのです。帰って下さい」

「ロ……ローニ」

ドーキの呼びかけも空しく、彼女は黙ってペンを取り、再びカリカリと文字を書き始めたのだった。

◆　◆　◆

「あれ？」

大学の構内に、フラフラとまるで酒に酔っているかのように歩く男がいた。それを最初に見つけたのは、この大学の学長であるメイだった。彼女をして、その男がドーキであるとは全くわからなかった。それほど彼は茫然自失の状態となっていたのだった。

「……そうですか。それは、大変でしたね」

ドーキを何とか説得して、学長室に連れて来たはいいものの、話の内容を聞いてメイはかける言葉が見つからなかった。今のローニは忙しい。彼女の研究の成果が世に出ようとしているところなのだ。正直、その仕事を応援してやりたい気持ちが、メイの中ではいっぱいだったのだ。

「ローニさんは今、忙しいのです。なかなか結婚を考える余裕はないかもしれません。どうでしょう？　今の仕事が落ち着いてから、改めてお話をしてみるというのは？」

「はい……。僕もわかっています。わかっていますけれども……。ううっ……ううう……」

「ドーキさん……」

「申し訳ありません、メイ様。少し……少しだけ……泣きます。本当に、ごめんなさい……」

そう言って彼は、体を震わせ、声を殺して泣き始めた。

◆◆◆

「う〜ん。それだけ期待させられた結果がこれじゃ、そりゃショックだよな」

そう言って、腕を組んでいるのは、リノスだった。ドーキは、メイの前で号泣したあと、彼女の住む帝都の屋敷に連れて来られていた。そして、彼女から事情を聴いたリノスとリコが彼の前に座り、これまでの経緯を聞いたのだった。

「それにしても、あのショゲツのオバハン。一体何を根拠にそんなことを言ったのか……。男心を弄ぶようで、何だか許せないな」

「いいえリノス。ショゲツ様はさておいて、ドーキも悪いですわ」

そう言って窘めるのはリコだ。彼女は聡明な眼差しをドーキに向けながら、ゆっくりと頷いている。

「そうです。冷静に考えれば、僕が悪かったのです。忙しいローニのことも考えずに……」

「好きという気持ちはよくわかりますけれど、やはり、ローニのことも考えてあげないといけませんわ。夫婦になろうとするのならば、猶更ですわ。人は一人では生きていけないのです。誰かの助けられて生きているのです。夫婦となれば、互いが支え合わなければすぐにダメになってしまいますわ。今回はいい勉強になりましたわね。これで、ローニに気遣うことを勉強できたのですから」

「だけどリコ、今後、ドーキにチャンスはあるのか？　完全に嫌われちゃったみたいだけど」

「う〜ん。愛の告げ方も不味かったですわね……。ローニも女性です。どうせ愛を告げられるのであれば、いいムードで告げられたかったと思いますわ」

「え？　そこ？」

「女性にとっては、大事なことですわ」

「そうなんだ……」

リノスは、勉強になりますといった表情を浮かべながら、リコの話に深く頷いている。

「ただ……。これから二人の関係を修復しようとすると……難しいですわね」

「いえ、いいんです。僕、諦めます。元々、縁がなかったのです」

「そうは言ってもドーキ、諦められるか？　難しいと思うぞ？　いや、完全にローニと離れることができるのであれば、それは可能かもしれないけれど、お前たちポーセハイは、寄ると触ると集まりを持つだろう？　そんなときにローニに会わないということはできないだろう」

「でも……でも……仕方がありません」

「そうは言ってもだな……。真面目で繊細なお前のことだ。きっと夜も眠れなくなるんじゃないのか？　一生に一度の恋って決めた恋だろう？　回復までには時間がかかるぞ？」

「仕方が……ありません」

「う～ん。リコ、何とかならないか？」

「そうですわね……」

リコは、目を閉じて天を仰ぎながら、何かを考えている。その表情はとても美しいものだった。その様子をじっと見ていたメイが、遠慮深げに口を開く。

「ローニさんはとても優しい方です。とても強く見えますけれど、とても気遣いのできる方です。ドーキさんが誠心誠意思いを伝えれば、きっとわかってくれます。今回はたまたまタイミングが悪かっただけです。私の方からも、フォローを入れておきます。ですから……」

「いいえ、メイ。それは無用ですわ」

突然リコの声がする。驚いて視線を向けてきたメイをじっと見つめたリコは、静かに口を開いた。

「ドーキのフォローを入れるのは無用です。むしろ、ローニのことは諦めたと言った方がよろしいですわ」

「リコ様……そんな……」

「ドーキ、あなたもできるだけローニには素っ気ない態度で接してくださいな」

「わかり……ました」

「ただし、それは一週間だけです。一週間なら、できますでしょ？」

「え……？　どういうことでしょうか？」

「私に作戦がありますの」

「作戦？」

「上手くいくかどうかはわかりませんが……。やってみる価値はあると思うのですわ」

「は……はあ……。僕にできるかな？」

「ダメで元々ですわ。今の段階では確実にローニにフラれてしまいますわ。そうならないように……」

リコはドーキにこれから実施するべき作戦を、丁寧に伝えていく。

「……たったこれだけのことですわ。できますでしょ？」

「ま、まあ、それは、僕にとっては願ったり叶ったりですが……」

「やってみてくださいな。次の作戦は、一週間後にお伝えしますわ」

「わ……わかりました」

まるで狐につままれたかのような表情を浮かべながら、ドーキは屋敷から転移していった。その様子をリコは、少し笑みを浮かべなが

ら見送っていた。

その夜、リノスはリコに、作戦の詳細を尋ねた。

「なあ、あんなことで、本当に上手くいくのか？」

「わかりませんが……。ローニの良心に賭けてみるしか手はありませんわ」

「そうかもしれんけど……」

「ところでリノス」

「何だい？」

「先ほど、ドーキに一生に一度の恋が破れたときの話をしていましたけれど、あなたの場合は、どんな恋だったのです？　聞かせていただけまして？」

「え？　何の話でしょう？」

「とぼけないでくださいませ。いや別に怒っているわけではありませんわ。リノスが破れた一生に一度の恋……聞きたいと思ったのですわ。いつのことです？　どのようなお方？」

……それは前世の話で、しかも高校生の時の話だ。好きだった女子に思いを伝えることもできずに終わった恋だった。そんなことが言えるはずもなく、彼はオロオロとしながら、必死で言葉を絞り出す。

「聞いた話だよ。ホラ、将軍が……な。ラファイエンスが言ってい

たんだよ。あのジイさん、本当に色々な色恋を経験していてな……」

「本当に？」

「ほ、本当です。俺の初恋はリコだったんだ。これは本当に嘘じゃない。本当に、リコが初めて好きになった女性だったんだ。あ、初恋って言うのは基本的に叶わないと言われているけれど、俺の場合は叶ったな。ツイてるな、俺は。初めて好きになった女性と結婚できたんだから」

「……それは、私もですわ」

「あの……今でも、本当に愛しています。大好きです」

「私もですわ」

「リコ……」

そう言って、二人は抱き合った。部屋の明かりが落ちたのは、その直後のことだった……。

第四百三十二話　琥珀の月

「……！？」

最近、何かおかしい。そんなことを考えながら首をひねっているのは、ローニだった。彼女の心の中は、その長い耳に現れる。今、その耳は見事に「！？」という形になっていた。

そんなことを感じるのには訳がある。ドーキが一切自分に話しかけてこなくなったからだ。

会うといつも真っ先に自分の傍に寄ってくるドーキ。それがうざったいと思ったことは数え切れず、何とかして離れてくれないものかと常々考えていたのだが、今の彼は、彼女の思いを叶えるかのように、何も言ってこない。挨拶もしなければ、話しかけても来ない。あまりにもギャップがありすぎて、彼女自身、戸惑いを覚えていたのだ。

「どうですか、最近の仕事は？」

思わず、ドーキに話しかけてしまった。いつもなら、目を輝かせてマシンガントークが始まるのだが……。この日の彼の対応は、あまりにも素っ気ないものだった。

「ああ、まあ」

……それだけですか？　いつものドーキはどこへ行ったのです？

そんなことを心の中で呟きながら、ローニは彼を見つめる。だが彼

は、スッと彼女から視線を外し、目の前にいるターマと話をし始めた。

二人は盛り上がっている。クスクスと笑い声を上げながら、何やら会話を楽しんでいる。そんな様子を見ながら、ローニは何とも言えない感情を心の中で押し殺した。

……まあ、いいでしょう。ドーキもうまくやっているようですし。これで私も、頭を悩ませることが一つ減ったのです。よしとしましょう。

そう思ってはみたものの、彼女の心の中には、釈然としない感情が残り続けた。

それ以降も、ドーキはローニに対して、徹底的に素っ気ない態度であり続けた。これはリコの作戦だったのだが、それを実行しているドーキ自身も、かなり精神的負担が大きい作業だった。リコの言った一週間という期限を明日に控えたその日、彼はリノスの屋敷を尋ねた。

「明日で最後です。あとは、何をすればいいのでしょう?」

目の下にクマを作り、明らかに憔悴しているドーキ。そんな彼をリノスは、心配そうな表情で眺めている。

「ご苦労様でした。よく頑張ったと思いますわ。辛かったですわね」

リコが優しく彼に言葉をかける。

「いいえ。これまで全く話しかけてくれなかったローニが、話しか

けてくれるようになったのです。それだけでも、十分です」

「とはいえ、好きな女性ともっと話をしたかったでしょうに……辛い役割をさせましたわね」

「いいえ、十分です。そのお陰で、ターマさんが僕に何かと気遣いをしてくれるようになりましたから……」

「てゆうかドーキ。ローニがダメなら、そのターマという人でいいんじゃないのか？　確か、皇后さまに仕えているポーセハイだろ？」

「いいえ、リノス様。彼女には既に、心に決めた人がいます。僕が彼女を好きになることなど、あり得ません」

「え？　そうなんだ……。やっぱり同じポーセハイか？」

「……違います」

「え？　それじゃ、誰なんだ？」

「ええと……その……」

「まあ、言いたくなければ言わなくていいが」

「まあ、そのうち明らかになることなので……遅かれ早かれだと思います。その……イッカクさんです」

「はあ！？　イッカク？　あの、オワラ衆のイッカク？」

「はい。すでに、将来を約束しているようです」

「マジか……。相当年が離れているんじゃないのか？」

「確か……ターマさんより15か16くらい離れていると思います」

「はああ……」

「元々、ターマさんには恋人がいたのですが、それをイッカクさんが振り向かせたのです」

「マジで？？　あの、何にも喋らないあの男が……どうやって口説いたんだ？　しかも彼氏持ちの女性を……」

「まあ、愛というものは得てしてそういうものですわ。二人は運命の赤い糸で結ばれていたから、引きあったのですわ。そんなことよりも、ドーキのことですわ。では、最後の作戦をお伝えしますわ」

「よ……よろしくお願いいたします」

ドーキはスッと姿勢を正す。その姿を見ながらリコは、明日の作戦を丁寧に語り始めた……。

◆　◆　◆

その日は満月の夜だった。いつも以上に月が大きく見える。そんな月あかりの中を一人、歩く男がいた。言うまでもなく、ドーキだ。彼は手に包みをぶら下げていて、それが彼の歩調に合わせて、ゆっくりと揺れている。

その足取りは、とある部屋の前で止まった。彼は扉をノックして、

ゆっくりと開く。

「あれ？　ドーキ？」

驚いた表情を見せているのは、ローニだった。彼女は帰り支度を整え、今まさに大学の部屋を出ようとしていたところだった。

「ローニ、外に出てみない？」

「？」

ドーキは無言で部屋の外に設えられたバルコニーに出ていく。彼女も怪訝そうな表情を浮かべながら、彼の後に付いていく。

「ローニ。お腹がすいていないかい？　よかったら、お弁当を食べないかい？」

「……」

確かにお腹はすいている。ドーキは手に持っていた包みをテーブルの上に置き、それを開けていく。中には、美味しそうな料理が詰め込まれていた。彼女が大好きなから揚げも入っていた。

「少し、いただきましょうか」

そう言って彼女はお弁当に手を伸ばす。から揚げを一つつまんで、口の中に放り込むと、何とも言えない旨味が口の中いっぱいに広がる。……美味しい。リノス様のお屋敷でごちそうになるから揚げも美味しいが、このから揚げも美味しい。うん、気に入った。

そんなことを考えながら彼女は、次々と料理をつまんでいく。そんな様子を愛おしそうな表情で眺めていたドーキは、突然、口を開く。

「ごめん、ローニ。君に謝らなきゃいけないことがあるんだ」

突然のことで、ローニは目を見開きながら、コクコクと頷く。何と言葉を返していいのかがわからないのだ。

「この一週間、君のことを忘れようと頑張ったけれども……やっぱりできなかったんだ。申し訳ないけれど、僕の、お嫁さんになってくれないか？」

「ううう……」

「そのお弁当は、全部僕が作ったんだ。毎日、君にお弁当を作るから……。僕のお嫁さんになってくれないか？　……大好きなんだ」

「あ、う、お、え……」

ローニはしばらく戸惑いの様子を見せていたが、やがて、目を左右に動かしながら、コクリと頷いた。その瞬間、ドーキは膝から崩れ落ちるようにして、その場に突っ伏した。

「よ、よかった～」

「一体、何なのですか、これは？　理解ができません」

ローニが呆れた表情を浮かべながら、話しかける。ドーキは申し訳なさそうに、口を開く。

「怒らないで聞いて欲しいんだけれど……実は、リコ様に相談したんだ」

「リコ様に！？」

「ローニに振られた後、リコ様に相談したら、一週間、ローニに素っ気なくしろと言われたんだ。そうすればローニは、自分の断り方が悪かったんじゃないかと思うだろう。そう思ったときに、もう一度結婚を申し込めって……」

「……何と言う。で、このお弁当というわけですか？」

「いや、このお弁当は、僕が考えたんだ。リコ様は、ロマンチックな場所でもう一度言えと仰ったんだけれど……」

「それがこの、バルコニーですか！？」

「見てごらんよ、ローニ。空を」

見上げた空には、まるで吸い込まれそうな程に大きく、美しい琥珀色の満月があった。そのあまりの美しさに、ローニはしばし我を忘れた。

「満月は、望みを叶えてくれるって言うから……。もう一度言うね、ローニ。君を幸せにしたいんだ。だから、僕の、お嫁さんになって、下さい」

彼女はチラリとドーキに視線を向けたが、やがてすぐに空の満月に視線を向けた。そして、しばらくの沈黙の後、ゆっくりと頷きながら口を開いた。

「月が、綺麗ですね……」

ドーキがローニを伴って、リノスの許に訪れたのは、それから数日後のことだった……。

第四百三十二話　琥珀の月（後書き）

次回もう一話、間話を挟みます。新章は６／１１からスタートする予定です！

５／２４に発売しましたコミック版、『結界師への転生①』が増刷しました。ありがとうございます。拙作に関わっていただいた方全てに、御礼申し上げます！　とらのあな様、アニメイト様、書泉様で配布されているポストカードも残り僅かのようです。ご希望の方はお早めに！

第四百三十三話　千里の道も一歩より

「う～ん」

眉間に刻めない皺を刻み、腕を組みながら天を仰いでいるのは、リノスの妻であるコンシディーだ。彼女の目の前には、一抱えほどもある木箱が置かれていた。

彼女の許にこの箱が届いたのは、エルフの里から帰還して約一ヶ月経った頃だった。さも大儀そうにゴンが運んできたこの木箱……。エルフ王からおひいさまを経由して贈られたと言われるこの箱の中には、真っ茶色に変色した金属の欠片が数個入っていた。訝るシディーに、ゴンは衝撃の一言を放った。

「それが、エクスカリバーだそうでありますー」

「うえっ！？」

聞けば、伝説の宝剣と言われたエクスカリバーは、数百年の間に完全に朽ちてしまったのだという。エルフ王からの伝言によれば、この剣の切れ味を保つためには、膨大な魔力と共に、エルフの血を注がねばならず、元々血を流すことを極端に嫌うエルフは、その手入れを怠っていたのだ。加えて、エルフ王・ホンノワイチの、この里では争いごとは起こさないという信念もあって、切れ味鋭い宝剣は存在する意味がないとされたために、現在のこのような姿になってしまったのだという。

シディーは、手を震わせながら朽ち果ててしまったエクスカリバー

の欠片を手に取る。手にはペッタリと錆のようなものが付着する。彼女は残念そうな表情を浮かべながら、それを再び箱の中に返した。

……とはいえ、調べてみる価値はあるかもしれない。

そう思い直してみたものの、この錆びた鉄くずからどうやって昔の切れ味を調べればいいのか。シディーは悩んでいた。錆びを取って、もう一度研ぎ直して……。だが、すでに剣の中身まで穴が開いているこの状態では、そうした作業ですらも耐えられない危険性が多分にあった。

「まずは、成分を調べてみるか……」

誰に言うともなくそう呟いた彼女は、足早に部屋を後にしていった。

彼女が向かった先は、メイの部屋だった。彼女は突然部屋に入ってきたにもかかわらず、いつもの柔和な笑みで、シディーを迎えた。

「そうですか……。でも、成分を調べるのは私も賛成です。伝説の名剣、エクスカリバーがどのような物質でできているのかがわかれば、それを新たに作り出せる可能性はありますから」

彼女はアガルタ大学でその研究をしようと提案し、さらに、都にいるドワーフたちも参加してもらい、協同で研究する案を出した。シディーにとっては願ったり叶ったりの話であり、彼女はすぐさま賛成したのだった。

調べてみるとすぐにわかったのは、この剣は、信じがたい強度を持っているということだった。不純物が全くない鋼……しかも、硬度の異なる鉄を組み合わせて作られていたのだ。これには、シディー

が驚きの声を上げた。

「何て言う複雑な作りなのかしら……。こんな純度の高い鋼をどうやって作り出せば……。いや、できないことはないはずだわ」

その日から、シディーの鍛冶師としての魂に火が付いた。

彼女は来る日も来る日もドワーフの工房に通い、純度の高い鋼を生み出そうと試行錯誤した。娘のピアトリスの育児が疎かになるかと思いきや、彼女は娘を連れて工房に通う。そして、そこで手の空いているドワーフたちに面倒を見させながら、研究に没頭したのだった。

一見すると、育児放棄のようにも見えるが、ドワーフたちは公王の孫たるピアトリスを可愛がり、それこそ、「姫様、姫様」と呼んで、目に入れてもいたくないほどの可愛がりようを見せた。ピア自身も、まるでおもちゃ箱をひっくり返したような工房を気に入り、まるでそこは、保育園のような様相を呈していたのだった。

工房に通い続けること一ヶ月。ついに彼女は純度の高い剣を作り出すことに成功した。しかも、刃に当たる部分には硬度の高い鉄を用い、内側の芯に当たる部分には、硬度の低い鉄を用いた。シディーの見事な計算によって絶妙のバランスがとられたこの剣は、比類なき剣となるのは間違いなかった。あとはこの剣を磨きに磨いて切れ味を増せば、エクスカリバーに勝るとも劣らない剣が出来上がる。彼女はそう確信していた。

それから一週間。ドワーフたちが精魂込めて磨き抜いた剣がついにできあがった。だがシディーは念には念を入れ、細微にわたるまでチェックを行ったのだ。剣はもちろん、その鞘に至るまで、まるで

重箱の隅をつつくようなチェックぶりは、深夜にまで及び、口うるさい老ドワーフたちも、これには閉口する他なかった。

剣を携えて屋敷に戻ったのは、明け方近くだった。あまりに集中しすぎていたために、軽い頭痛を覚えつつ、一緒にいてやれなかったピアトリスにも悪かったと反省しながら、彼女は離れの扉を開けた。そして、階段を上り、自分の部屋に向かう途中、夫であるリノスの部屋の前で足を止めた。

……この剣を、早くリノス様に見ていただきたい。

きっとこの剣を見れば、リノス様は喜ぶに違いない。何て素晴らしい剣なんだ……シディーありがとう！　今後は、この剣を俺の傍に置くことにするよ！　そんな風に喜ぶリノスの姿が目に浮かぶ。そのとき、彼女の脳裏に、閃くものがあった。

……そうだ。リノス様の枕元に、これを置いておこう。そうすれば、目覚めたときに見ていただけるはずだわ。

そう考えた彼女は、静かに寝室の扉を開ける。すると中から、女性の小さな声が聞こえてきた。

「あっ、あくっ、あぐ、うっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ」

「メイ……メイ……」

……メイちゃんとリノス様の声。これって、つまりは、あれ、だよね？

シディーの体が硬直する。まさかそんな最中に、そーっと寝室に忍び込んで、剣を枕元に置いてくるなどと言う芸当はできるはずもないし、やってはいけないことだというのは、十分にわかっている。

彼女はゆっくり、音を立てないように細心の注意を払ってドアを閉めようとする。そのとき、部屋の中からリノスの、思いがけない声が聞こえてきた。

「メイ……メイ……大丈夫か、メイ……」

「!?」

思わず扉を開けてしまった。見ると、リノスが隣で寝ているメイに話しかけている様子が目に入った。一瞬の間をおいて、メイがゆっくりと体を起こす。

「ああ……すみません。夢を……見ていました」

「夢？」

「何か巨大な……巨大なものに……踏みつぶされるかと」

「疲れているんじゃないのか？　……って、シディ？」

リノスがギョッとした表情でシディーを見つめる。彼女はまるで射すくめられたかのようにその場に固まる。

「何だ……戻ってきていたのか……。お帰り」

「ええと、その、あの……」

「あれ？　シディーちゃん、手に持っているのはもしかして……。エクスカリバーですか？」

メイが笑顔で尋ねてくる。形のいい、大きな乳房が丸見えだ。彼女はどう答えていいのかがわからず、コクコクと頷いたり、首を傾げたりしている。

「うわぁ、是非、見せてください」

一糸まとわぬ裸のまま、メイがベッドから降りてこちらにやってくる。何と言う均整の取れた体だろう。そんなことを考えているシディーに、メイは目をキラキラさせながら、彼女が持っている剣に手をやる。

「見せてもらっていいですか？」

シディーは無言でメイに剣を差しだした。彼女はゆっくりと剣を鞘から引き抜いていく。

「ううん？」

全裸のメイが、両目を真ん中に寄せながら、まるで舐めるように刀身を眺めていく。そのあまりにも異様な光景に、シディーの体はさらに硬直する。

「……粗が、ありますね」

メイから予想もしない言葉が飛びだした。粗があるとは心外だ。そんなものはあるはずがない。

「この剣、魔力は通せますか？」

「ど……どういうこと？」

「私も何度か作ったことがあるのです、この剣を。クエイト・レガダンス製法で作りましたね？　そうなのです。これが一番強度があるのです。ですが、これは岩石など、硬度の高い物を数回斬ると折れてしまう可能性が高いです。その原因は、精製した鋼にムラが生じるためです。それを均一にするために、魔力を流し込む必要があります。私も、ご主人様に魔力を流し込んでいただいて、ホーリーソードを作ったのです。ちなみに、この剣を作るときに、デイガの石は混ぜましたか？」

「混ぜて……ない」

「デイガの石を使えば、魔力を伝えることができるのですが……」

そう言いながらメイは剣を鞘に仕舞い、シディーに返した。彼女はそれを受け取りながら、ため息を漏らす。

「お言葉だけどメイちゃん、これはエクスカリバーの成分を分析した上で作った剣なのよ。これ以上の剣は世の中に存在しないと思うんだけれど……。それに……ゴメン、服を、着て、くれないかな……」

シディーの言葉に我に返ったメイは、恥ずかしそうに体を隠しながら、ベッドに戻っていった。

結局、シディーの作った剣は、ドワーフ公王が預かる形となり、彼

の許で、さらに研鑽が積まれることになった。だが、公王は密かにリノスに連絡し、彼の持つ愛刀、ホーリーソードを拝借したいと申し出た。そして、その剣とシディーの剣を見比べ、瞬時にして、ホーリーソードの出来栄えに軍配を上げたのだった。

その後、公王は技術の粋を尽くして、シディーの剣を鍛え直したが、彼をして、ホーリーソードの出来栄えを超えることはできなかった。

この剣は、代々の公王に密かに引き継がれ、天下最強の剣に仕上げるべく、長い年月をかけて鍛えられることになった。

まさかこの剣に、そんな未来が待っているとは、このときのシディーもリノスも、知る由もなかった……。

第四百三十四話　あにいもうと

「何？　エルフ共が？」

「ああ。山を降りるそうだ」

「降りてどうする？」

「知らん。あの里を出たい者は出てもよし。出たくない者は出なくてもよいという命令が発せられたのだ。つまりは、エルフたちの好きにしてよい、という触れが出たのだ」

「ホンノワイチはどうするのだ？」

「それもわからん。用心深いヤツのことだ。しばらくはあの山を動きはすまい」

「……エルフも所詮、知能の低い連中だったか」

◆　◆　◆

リノスが治めるアガルタ王国から遥か数百キロ南に位置するルワザン島。活発に活動しているレイス火山の影響で、大変温暖な気候である一方で、そこから発せられる有毒ガスのために、生物がほとんどいない死の島と化したこの場所で、二匹のドラゴンが顔を近づけて話し合っていた。

その体は漆黒の鱗で覆われている。彼らはドラゴンの中で最も狡猾

と言われる黒龍だった。

基本的に黒龍は、アガルタの北に位置するジュカ山脈に住んでおり、その数は数十匹と言われている。これは過去、フェリスたちクルルカンと縄張り争いを起こした際に、その大半が討伐されてしまったことにより、その数を激減させていた。現在はクルルカンとの間で停戦協定が結ばれているために、攻撃される危険性はないものの、彼らとしては昔の繁栄を取り戻すのは悲願と言えた。

その中で、最も活動的であったのが、ツネだった。彼は常にクルルカンへの対抗心を燃やし、そのために多くの掟――例えば、結婚相手は族長が決める――に縛られることで、自由が全くないジュカ山脈にいることをよしとしなかった。彼は楽園を求めて兄弟を連れて山を去り、はぐれ黒龍となって、絶海の孤島であるこの島に移り住んだのだった。

誰の干渉も受けず、気ままに過ごす日々……。彼らは気心の知れた五人の兄弟と共に、悠々自適の生活を送っていた。海から獲れる魚は無尽蔵であり、飢える心配はなかった。そんな彼らに接触してきたのが、エルフたちだった。彼らはヘイズという化け物に再び襲われることを恐れるあまり、なりふり構わずその対策法を考えていた。平身低頭となって教えを乞うエルフに対して、人跡未踏の地に住むことをアドバイスしたのは、他ならぬ彼ら黒龍だった。

彼らの考えを理解し、即座に行動に移ったエルフたちを、彼らは好意的に受け入れていた。何かあればまた、知恵を貸してやらぬでもない……。彼らがそんなことを考えたのは、エルフ以外の種族ではあり得なかった。ようやく、自分たち龍族と同等……とまではいかずとも、それに類する存在であると認めていたエルフたちが、フィルコン山脈から出ることを決意した。ツネにはわからなかった。せ

っかく安全で平和な日々が約束されているにもかかわらず、何故、むざむざ自身を危険に晒すのか。あれだけ我々の考えに共感していたエルフたち……。その彼らが考えを翻すなど、彼には予想もしていないことだった。

彼は、目の前で控えている弟のラアルに、兄弟たちにこのことを知らせるよう命じたのだった。

しばらくすると彼の許に、一匹の黒龍が舞い降りてきた。唯一の雌である妹のシャリオだった。彼女は音もなくツネの前に降り立つと、挨拶もそこそこに早口でまくし立ててきた。

「兄様、エルフが里を出るというのは本当でしょうか？」

「そのようだ」

「この数百年間、頑として里を動かなかったエルフが、どうして突然そのようなことを？」

「わからん。奴らもただの下等な種族であったということかもしれんな。ただ一つわかっているのは、アガルタのリノスという男が関わっていると言うことだ」

「リノス……。また、あの男……」

その男の名前は、ここ数年の間、彼ら兄弟の中で何度も聞く名前だった。特に、彼ら兄弟の興味を引いたのは、黒龍にとって仇敵ともいえる龍王と戦い、命を長らえたという事実だった。過去、彼らは総力を挙げて龍王に挑み、引き分けていた。そのために現在の彼らは、龍王からの情報を得ない代わりに、その干渉から逃れることが

できているのだ。一族の総力を結集して、やっと引き分けに持ち込めた龍王に一人で挑み、死なずに生きているという事実は彼らをして、驚愕せしめるものだった。

彼ら五匹の兄弟が力を合わせれば、龍王を葬り去ることは可能だろう。しかし、個々で戦うとなると明らかに相手の実力が上回る。そんな龍王を、そのリノスという男は一人で戦い、殺されることなく今を生きている。彼らにとってリノスは、数少ない興味の対象であると言ってよかった。

「兄様、私をそのリノスという男の許にお遣わし下さい」

「何？　何をする気だ？」

「一度、会ってみたい」

「会ってどうする？」

「使えそうな男であるならば、我らの許に連れて来る」

「待て。リノスという男は、龍王と戦うスキルのある男だ。下手に関わるとその男どころか、龍王まで敵に回すことになる。やめておけ」

「でも、本当にこのままでいいのか、兄様？」

「どういう意味だ」

「そのリノスという男……このまま捨て置いては、何か、我らの禍根になりはせぬだろうか」

「……」

「私を、その者の許にお遣わし下さい。見て参ります」

ツネは妹の顔をじっと見つめる。その瞳はキラキラと輝いていて、一点の邪心も見られない。彼は心の中で嘆息を漏らす。

……全く、困ったものだ。一度興味を持つと、トコトンまで追求する。一体誰に似たのか。

兄弟の中で最も高い能力を持つ可能性のあるこの妹だが、その好奇心の高さはある意味、危険を伴うものであることを、この兄は承知していた。とはいえ、反対すればするほど、妹はアガルタに向かおうとするだろう。この状況を上手く収めるためにはどうすればよいか……。彼は思考する。

「行かせてやればいいではないか」

不意に声が聞こえた。これは次男であるロイスだ。兄弟の中で桁外れに残忍で執念深い性格であり、その双眸にある女性的な怪しい光が、その性格を示していた。ツネは再び心の中で嘆息を漏らす。

「ほら、中の兄様もそう言っておいでだわ。だから、ね？　兄様？」

「行ってくるがいい。そして、その者を連れ来るのだ」

「食べようとしていますね、中の兄様？」

「ああ。スキルの高い者を食せば、俺のスキルが上がる。そうでな

くとも、人族を食らうなどいつぶりであろうか……。だから、な？」

「承知しましたわ、中の兄様」

そう言って彼女は空高く飛び上がった。ツネが止めようとするが、彼女は兄の声を無視してドンドンと島から離れていく。

「まあよいではないか、兄者」

「……」

彼は小さくなっていく妹の後姿を眺めながら、悪い胸騒ぎを抑えることができず、弟を睨みつけるのだった。

◆◆◆

「ラ～ララ～。ラ～ララ～。ランランラ～ララ～」

帝都にあるリノスの屋敷。その庭で機嫌よく歌を歌っているのは、娘のアリリアだった。彼女はソレイユからいろいろな歌を教わり、毎日庭に出てはそれを謳うことを日課としていた。今日はまだ、覚えたての曲を練習しているのだ。まだ歌詞は覚えられていないが、その美しい調べは心を和ませるものだった。

「ええっと、この後は何だっけ？」

彼女は頭をポリポリと掻きながら、空を見上げる。抜けるような、雲一つない青空だ。

「う～ん。忘れちゃった。マミーに教えてもらおう」

マミーは弟のセイサムに授乳している最中だ。だが、かなり時間も経った。もう終わっている頃だろうと考えた彼女は、先程のメロディーを口ずさみながら、屋敷に向かって歩き出した。そのとき、彼女の耳に、聞きなれない音が聞こえてきた。

バチッ、バチチチチ！！

何かがはじけるような音が聞こえる。驚いて振り向いた彼女が見たものは、驚愕の光景だった。

何と、一匹のドラゴンが、空に浮いていたのだった……。

第四百三十五話　引き取っておくれやす

薄水色の鱗を持つ巨大なドラゴンが、アリリアを睨みつけている。
一方のアリリアは、何が起こっているのかが理解できないのか、ポカンとドラゴンを眺め続けている。

「ゴアァァ……」

ドラゴンは、何とも言えぬ不気味な泣き声を上げたかと思うと、ゆっくりとアリリアの傍に降りてきたのだった。

◆　◆　◆

「！？」

アガルタにあるリノスの執務室から鈴の音が聞こえた。部屋の前で警備をしていた兵士が、慌てて扉を開ける。そのとき、リノスはすでに立ち上がり、転移結界を発動しようとしているところだった。

「すまんが少し留守にする」

「どちらへ？」

兵士の質問には答えず、彼は姿を消した。誰も居なくなった執務室を、兵士は茫然と眺め続けたのだった。

◆　◆　◆

俺の結界が破られた。しかもそれは帝都の屋敷だ。しかも破り方が最小限だったのだ。これは相当のスキル持ちでないとできないことだ。

俺の結界は、ＬＶ５のスキルを持つ数名の魔術師が全力で攻撃すれば、破ることができる。だが一度や二度の攻撃でどうにかなるものではない。短くて５回。あるいはそれ以上の攻撃が必要になる。それだけの威力を持たせるためには、そこいらの魔術師では不可能なことだ。俺は一瞬、エルフたちが襲ってきたのではないかと思った。自分たちだけが通れる最小限の穴をあけるなど、神級を超えるレベルの持ち主でないとできない。俺自身でもそんな芸当は難しいだろう。

帝都の屋敷にはリコを始め、俺の大切な家族が住んでいる。まさかその家族に被害が及ぶのでは……。そんな不安を感じていた俺の目の前に飛び込んできたのは、予想もしない光景だった。

「はい、あ～ん」

「ゴァァァ」

「えらいねー。もう一つ、あ～ん」

「ゴァァァ」

何と、アリリアの前に巨大なドラゴンが立っていて、しかもそいつは、アリリアから餌をもらっていた。餌と言っても、庭に生えている雑草だ。アリリアは楽しそうにたんぽぽを与えているが、あれはそんなに美味しくないはずだ。俺は目の前の状況が理解できないまま、思わず口を開いた。

「……何やっているんだ？」

「あ、おとうさん、おかえりー」

両手を上げながらアリリアがパタパタと走ってくる。俺は彼女を抱きとめると、そのまま抱っこをする。

「何をやっていたんだ？」

「おままごと」

「おままごとだぁ？」

俺は目の前のドラゴンに視線を移す。彼はじっと俺たちを見据えている。

「てゆうか、なにをやっているんだ？　……龍王？」

俺の言葉に、ドラゴンはピクンと体を動かしたかと思うと、みるみるうちに人化し始めた。

「……我を呼んでおいて、その言い草は何だ！」

……逆ギレかい。

◆　◆　◆

帝都の屋敷のダイニング。そのテーブルには龍王が座っている。彼は屋敷の中を珍しそうにキョロキョロと眺めていて、かなりの挙動

不審だ。その彼に向かい合うようにして、俺が座り、その隣にリコとソレイユが座っている。アリリアは俺の膝の上だ。

「アリリアが龍王様を呼びだした……そう仰るのですね？」

セイサムを抱っこしながらソレイユが口を開く。その言葉に龍王はゆっくりと頷く。

「アリリア、どんな歌を歌ったの？」

「え？　この間、マミーに教えてもらったやつだよ。『もりのまもりがみさま』」

「歌ってみてくれる？」

コクリと頷いたアリリアは、楽しそうに歌い始めた。俺が聞くと、単なる歌なのだが、ソレイユはそれを目を閉じながら耳を傾けている。

「ここまでしかわかんない。続きをマミーに教えてもらおうと思ったの」

「よく覚えたわね。それに、とっても上手よ」

「エヘヘ」

ソレイユが優しくアリリアの頭を撫でる。その姿勢のまま彼女はスッと俺に視線を向ける。

「今、聞きましたら、なるほど、龍王様がお見えになるのがわかる

気がします」

「どういうこと？」

「アリリアは、私たちサイリュースに近い音域が出せるのです。この子は全く意図していなかったのですが……。たどたどしくはありますが、『最強のドラゴンは、我の前に出でよ』と聞こえます」

「マジで？」

「はい。しかも、声の主が何の邪念も持っていませんので……。龍王様がその声を聞いて姿を現しても、何の不思議もありません」

「はああ」

呆れる俺を、龍王はそれ見たことかという表情で眺めている。俺はオホンと咳払いをして、龍王に向かって口を開く。

「すまなかったな、龍王。もう帰っていいぞ」

「なっ、何？」

「どうやら手違いでお前を呼びだしてしまったようだ。ご苦労だった、よろしく引き取っておくれやす」

「貴様、我をバカにしているのか？」

「リノス、失礼ですわよ」

リコが俺たちの間に割って入る。彼女は申し訳なかったという表情

を浮かべながら、龍王に一礼する。

「せっかくお見えになったのですから、食事でも上がってらして下さいませ」

「食事？　そんなものは、いらん」

「左様ですか……。あなた様もお忙しいところでしょうに……。大変申し訳ございませんでした」

「全く……何なのだ」

「せっかくだから龍王、ソレイユもいることだし、神龍様に会って帰るか？」

「な！　バカな！　神龍様にお目通りするなど！」

「わ～い、神龍君に会いたい！」

「それではお呼びしましょうか。リコ様、申し訳ありませんが、セイサムをお願いいたします」

「まあ、体調は大丈夫なのですか、ソレイユ？」

「はい、体調はまだ万全ではありませんが……。今まで神龍様を呼びだしていませんでしたので、久しぶりにお姿を拝見したいと思っていたところです」

「待て貴様ら！　神龍様をそのように軽々しく扱うな！　我ら龍族の守り神様なのだぞ！」

「固いこと言うなよ龍王。娘も会いたがっているんだ。あ、そうだ、ぜんざいを作ろうか？　せっかく来ていただくんだから、何かおもてなししないとな。龍王、お前もぜんざい食べるか？」

「イランと言っているだろう！」

「え～神龍君は美味しいって食べてくれるのに、りゅーおーくんは食べないの？」

「う……そういうことでは、ない」

「じゃあ、ぜんざいたべよう！」

青い顔をさらに真っ青にする龍王と、大喜びのアリリア。何だか二人の対比が面白い。結局、ソレイユの体調もあって神龍様を呼びだすことはせず、龍王にはお帰りをいただいた。ただ、ヤツが帰る際に、アリリアと二人で実に物騒な会話を交わしていたのが、俺にとっては気がかりだったが。

「りゅーおーくん、またあそぼーね」

「いつでも呼ぶといい」

「今度はおいしゃさんごっこしよう？」

「よいだろう」

……うちの娘に変なことをしやがったら、絶対に許さんからな。そう心に固く誓った俺は、さらに結界を強化して、愛刀であるホーリ

ーソードの切れ味を増すように、メイにお願いしたのだった。

◆　◆　◆

この龍王の出現には、アガルタに向かっていたシャリオに、少なからず動揺を与えた。

「……このとてつもない気配は、龍王？　まさかこれほどとは。しかし、アガルタとは全く別の方向に出現している？」

彼女は万里を見渡すことができるその龍眼で、龍王の気配を感じた場所を凝視する。

「……あれが龍王。その傍にいる子供は、何だ？」

ドラゴン族の頂点に君臨する彼が、羊獣人の子供と戯れるなど、信じられないことだった。一体あの子供は何者なのか、あれは一体、誰の住まいなのだろうか。彼女の好奇心に火が付いた。

まずはそこに向かおう、そう考えたそのとき、龍王の姿が消えた。彼の気配は、彼女の能力をフル活用しても追うことができなかった。

「あそこに行けば龍王が……。いや、私一人では分が悪すぎる。仕方がない、まずは当初の予定通り、アガルタに向かうとするか……」

誰に言うともなく一人、呟いた彼女は、その体躯をアガルタの方向に向けたのだった……。

第四百三十六話　善意の第三者

アガルタの都の北東に位置するルノアの森。その奥深くに、一匹のドラゴンが羽を休めている。漆黒の体躯を持ち、二枚の大きな羽を持っていて、その姿は不気味さを感じさせる。

これは言うまでもなく、はぐれ黒龍のシャリオだった。彼女はグッタリと地面に倒れこむ。

……一体、何なのだ、あそこは。……こんなに疲れるなど、いつ以来だろう。

正直、手も足も出なかった。アガルタの都に入ることが全く出来なかったのだ。それどころか、城門から兵士が飛び出してきて、攻撃される始末だったのだ。

自分では完璧に運んだつもりだった。ドラゴンの姿ではいけないことはわかっていた。そのため、人化して都に侵入しようとしたのだ。とある女性に目を付け、それと同じように作り上げたのだ。どこからどう見てもひとりの少女……。だが、西の門を潜ろうとしたそのとき、体中に激しい痛みを感じて、前に進むことができなかった。生まれて初めて感じる痛み……。まるで、鱗の中を鋭い刃物で激しくえぐられるような痛みが体中を貫くのだ。これにはさすがのシャリオも悲鳴を上げてしまった。

一体何事かと集まる都の人々。そして、兵士たち。彼女はそんな人々を全く無視する形で、門の中に進もうとするが……。やはりすさまじい痛みがその体を襲い、再び彼女は絶叫とともにその場に蹲っ

た。

「おい、何かあの女、おかしいぞ」

「結界に阻まれている……ということは、邪悪な心を持っているということか」

「うむ、かなり高位の魔物かもしれん。マトカル様を呼ぼう」

知らせを受けたマトカルは、すぐさま精鋭部隊を率いて西門に向かった。

「……ただの少女ではないか？」

その少女を一目見たマトカルの、正直な感想がそれだった。禍々しさは一切感じず、褐色の、どこにでもいそうな少女だった。だが、自分と目が合ったとき、彼女の目から発せられる異様な光とその威圧感はタダ者ではなく、マトカルは瞬時に討伐を決意したのだった。

「油断するな、訓練通りせよ！」

兵士たちは訓練通りに槍を繰り出していく。まずは足元を重点的に攻撃する。もし、魔物が人化しているならば、翼を出すなどして空に飛び上がるからだ。だが、少女はそんなことは全くせず、流れる動きでその槍を見事に躱していく。

……やはり、タダ者ではない。

少女の体裁きを見たマトカルは、瞬時にこの個体が人間ではないことを察した。

「囲め！」

理想を言えば、気絶させて捕らえることだが、どうもそうも言っていられないようだ。彼女は、少女の命を奪う覚悟で攻撃命令を出す。だが、少女は脱兎の如くその場から逃亡を図った。

……速い。まるで風のような速さだった。それでもマトカルは馬を駆り、少女を追いかけてはみたが、その速さに馬の脚では追いつくことはできなかった。

シャリオは走った。人化を解けばさらに攻撃されるであろうことは、本能的に感じ取ることができていた。そのため彼女は、慣れぬ人族の体を駆使して、必死で駆けた。そして、気が付けば森の中にいた。彼女は周囲に気配がないのを確認して、人化を解いた。

シャリオは、自身の能力に自信を持っていた。兄たちよりも優れたスキルを持っていると思っていた。この世の中は、上には上がいるという兄、ツネの言葉が、ここに来てようやく理解することができた。

彼女は考える。何故、あのような痛みを感じたのかと。

ドラゴンは固い鱗に覆われているため、物理的攻撃はもちろん、魔法での攻撃も通じないというのが、彼女の考えだった。例外的に、兄たちドラゴンの力であれば、その鱗は砕かれる。彼女も兄たちの牙で、何度鱗を割られたのかわからない。だが今回は、鱗については全くの無傷であったにもかかわらず、その体に痛みを感じた。まだ、その痛みは体に残っている。

……どうやって、私に攻撃を加えたのか。

彼女は思考する。おそらく、鱗と鱗の間から魔力が入って、直接肉体に攻撃を加えたのか。

考えても答えは出ない。そのとき、彼女は何かの気配を感じ取った。これは……？

彼女の周囲には、不気味なほどに生き物の気配がない。この森にいる魔物は、彼女がドラゴン、しかも高位の黒龍であることを本能的に感じ取っていた。言わば、食物連鎖の最上位に位置する個体がいるのだ。その近くにいることは即ち、自身の死を意味する。そのために、森の魔物は、彼女から遠く離れた位置に避難していたのだった。

彼女は、注意深く気配探知のスキルを駆使して、近づいて来る者を探る。どうやら、馬と人間が近づいて来ているようだ。大抵の生き物は、自分の気配を察して距離を置いている。にもかかわらず近づいて来ているこの者たちは、相当のスキルを持っているか、ドラゴンの気配すら察することの出来ぬほどの低スキルかのどちらかだろう。気配探知からは、高いスキルは感じ取ることができない。だが彼女は、最悪の状況を想定して、ひとまず人化してその姿を隠すようにした。

しばらくすると、彼女の前に一台の馬車が現れた。そして、その馬車は、彼女のすぐ前まで来ると、ぴたりとその動きを止めた。

「あれ？　おい、どうした？　何だ？」

御者台で馬を操っている男が、頓狂な声を上げる。彼は御者台から

飛び降りて、止まっている二頭の馬に声をかける。

「おい、早くこの森を抜けなきゃならないんだ。こんなところで休んでいる暇はないんだよ」

「どうした、兄弟？」

馬車の中からもう一人の男が顔を出す。彼もまた、馬車から降りてきて、二頭の馬を優しく撫でる。

「俺たちゃ早くアガルタの都に着きたいんだ。あと少しでこの森を抜ける……。もう少し頑張ってくれろ」

「あれ……何だ、あれは？」

男の一人が、何かを発見したように、足早に歩き出す。そこには、褐色の少女が横たわっていた。

「どうしたんだ、兄弟？」

慌てて後を追ってきた男が声をかける。二人の目の前には、ワンピースのような服を着た、一人の少女が倒れていた。

「……女の子だ」

「そのまんまじゃねえか」

「何で、こんな森の中に？」

「知るもんか」

「どうする？」

「どうするって……あ、目が開いているぞ。おい、どうしたんだ？　何でこんなところで倒れているんだ？」

シャリオは何と答えていいのかわからない。まさか、これまでの経緯を語って聞かせるわけにもいかないし、話したところで、彼らに通じるとは思えなかった。

「きっと……奴隷として売られる途中に捨てられたのかもな」

「いや、冒険者かもしれねぇぞ」

「それにしちゃ、装備が全くお粗末だ」

「とりあえず、都に連れて行くべ。このまんまじゃ魔物の餌食になっちまう」

「……そうだな」

そう言って二人はシャリオを抱き起して、馬車の中に連れて行く。

「そーら、コイツを纏ってな」

男の一人が、馬車に積まれた箱の中から一枚の薄い布を差し出した。

「こいつはな、『ハイドのマント』と言って、魔力や気配を消してくれる優れもんだ。俺はシーバ。んで、こっちが、ダーオだ。二人で冒険者をやりながら、色んなところでいろんな物を売っているん

だ」

「まあ、冒険者って言うのは自称だ。ギルドに登録はしているが、最低ランクのFランクだ。実際は、こうやって魔物たちから身を隠しながら、色んな場所で仕入れたものを別の場所で売っている……言ってみりゃ商人みたいなものさ」

「お前さん、名前は？　……まあ、言いたくなければ言わなくていい。取りあえず、都まで送ってやっから、そこから先のことは、着いてから考えな」

そう言ってシーバは御者台の上に上がり、再び馬を走らせた。

この二人の善意が後に、世界を巻き込む大騒動に発展するなど、このときの二人には、知る由もなかった……。

第四百三十七話　鼻につく

アガルタの都の北門。その門の上には、アガルタの兵士数名が配置され、外の様子を見張っていた。「来る者拒まず」を公言しているアガルタにあって、この北門だけが特別な存在と言えた。

その理由は、門のすぐ外に広がるルノアの森にあった。この森は、コンシディーの実家であるニザ公国に通じる。公国を経てアガルタに向かおうとする冒険者や商人もいて、折に触れて魔物に襲われることもあった。そうした人々が助けを求めて森から飛び出してくることもあるため、この北門には、アガルタ軍の中でも腕利きの者たちが配置されているのだ。

そんな門の前に、シーバとターオ、そして、シャリオが乗った馬車がたどり着いた。彼らは何度もこの都に来ていたために、何の迷いもなく、警備をする兵士たちに手を挙げて挨拶を交わしながら北門を潜る。だが、シャリオにとってみれば、再びあの痛みを覚えねばならないことを考えると、のんびりとはしていられなかった。ただ、彼女にはアガルタの都に入りたい、王であるリノスを見てみたいという、湧き上がる好奇心が、どんな痛みにも耐えてみせるという覚悟を促していた。

門を潜る直前、シーバとターオが脱ぎ捨てた『ハイドのマント』がシャリオの目に留まった。彼女はそれらを手繰り寄せると、素早く自分の体にそれを掛け、少しでも自身の存在を消すように試みたのだった。

……ツっ！

やはり体中に痛みを感じる。だが、先日のようにのたうち回るほどではない。まだ、耐えられる。

必死で歯を食いしばるシャリオ。心の中で、都に入りたいと何度も繰り返す。雑念を一切消して、ただひたすらに願い続ける……。すると、しばらくすると、その痛みは嘘のように引いていった。

「さあ、着いたぞ」

男の声でシャリオは我に返る。恐る恐る馬車から顔を出してみると、そこには多くの人が行き交う大通りがあった。

「さて、お前さんのことだが、まずは宿屋に……って、おい！　どこに行くんだ！」

男の声に耳もくれず、シャリオは走り出していた。

「これが都！　アガルタの都！　すごい！　色々なものがある！」

彼女は真っすぐに商人街に向かって走っていた。その目に触れる色とりどりの食べ物……。珍しい物ばかりが溢れていた。彼女はそれらすべてに目を奪われていた……。

◆　◆　◆

「うん？　臭うわね」

ピクピクと鼻を動かしているのは、フェリスだった。彼女は書類から目を離して、周囲を伺う。目の前には、いつものように書類と格

闘するルアラの姿があった。

「……私じゃないですよ」

彼女は書類から目を離すことなく、吐き捨てるように口を開く。フェリスは顔をしかめながら、クンクンと鼻を鳴らす。

「臭い！　臭い！」

「だから、私じゃないですってばぁ！」

苛立ちを爆発させるようにルアラが立ち上がる。これでも身だしなみには人一倍気を遣っているのだ。

フェリスはじっとルアラを眺める。まだ、鼻は動かしたままだ。

「これは……臭気？　アンタじゃなさそうね」

「当り前ですよ！　それに、何が臭いんですか？　私には全然臭いませんけれど？」

「ちょっと、外を見てくるわ」

そう言って彼女は足早に部屋を出ていく。彼女が出ていった瞬間、外からいろいろな声が聞こえてくる。

「フェリス様！　押印はいただけましたでしょうか！」

「急ぎの書類なのです！　まだでしょうか！」

「フェリス様！　フェリス様！」

……まさか、仕事をサボろうとしている？

ルアラは一瞬、そんなことを考えたが、あのフェリス姉さまのこと。そんなことをしても仕事がたまるだけで何の意味もないことはわかっているはずだと思い直し、再び目の前の書類に目を落とした。

◆　◆　◆

「うん？」

俺は思わず顔を上げた。都に張っている結界に異常を感じたからだ。別に、結界が割られたわけでも、傷つけられたわけではなかった。何となく……。そう、言ってみるならば、体の中に異物が入った……そんな感じがしたのだ。

小さな塊を飲みこんでしまったような感覚……。そんな程度の違和感だったが、俺にしてみれば初めての感覚だった。

チリリリリーン

執務室の机の鈴を鳴らす。すぐに外で警備をしている兵士が入室してきた。

「すまないけれど、都の中を見廻ってもらえないかな」

「は？」

「いや、大丈夫かとは思うんだが、念のために、都の中を見廻って欲しいんだ」

「は……承知しました」

怪訝そうな表情を浮かべたまま、兵士は部屋を後にする。俺は再び書類に目を落そうとするが、そのとき、一つのアイデアがひらめいた。

再び立ち上がり、出窓に向かう。そして窓を開け、念話を飛ばす。

『サダキチ』

『お呼びでしょうか』

『都の中を見廻ってくれ』

『は？』

『いや、何もなければ何もないでいい。ちょっと気になることがあってな。一度、見廻ってくれないか』

『承知……しました』

サダキチは怪訝な表情を浮かべたまま、姿を消した。

「まあ、そういう反応になるわな」

俺はそんなことを一人呟きながら、再び政務に戻った。

◆　◆　◆

一方のシャリオは、商人街の奥深くまで歩いてきていた。ここは主

に、食料品を売っている区域だった。美味しそうな香りが彼女の鼻をくすぐる。

「お嬢ちゃん、何にする？」

店の主人の威勢のいい声が聞こえる。彼女は目の前の品に目が釘付けになった。何とそれは、大きな肉の塊だった。

それは木に刺さって、吊り下げられている。店主は器用な手つきでナイフを操って、その肉を薄くスライスしている。そして、その肉を何か布のようなものに挟んでいく。シャリオの後ろから次々と客がそれを買い求め、かぶりついていく……。彼女は何の迷いもなく、肉が刺さっている木に手を伸ばす。

「おい、何をするんだ！」

店主が大きな声を上げる。彼は叫びながらシャリオの手を掴んでいた。

……肉を奪い取ろうとした。が、それはピクリとも動かなかった。彼は必死でそれを取り戻そうとする。だが、何をどうしても肉は動かなかった。

ズルズルズル……。

声を上げる間もなく、店主は店から引きずり出されていた。彼の手の先には肉の塊があり、そして、それを掴んでいる少女の姿があった。彼女は自分の腕に掴まりながら引きずられてくる男には全く関心を示さず、目の前の肉を見て、舌なめずりをする。そして、大きな口を開けたかと思うと、ガブリと肉に食らいついた。

「うん！　うん！　うん！」

満面の笑みを浮かべながらシャリオは頷く。そして再び肉にかぶりつく。周囲の人が呆気に取られるのをよそに、彼女は瞬く間に肉を完食してしまった。

「あ……ああ……ああ……」

あまりの出来事に声も出せない店主。彼女はスッと左手を動かす。すると、その腕を掴んでいた店主が突然宙を舞った。

「うわぁ！」
「きゃあ！」

人々の悲鳴が上がる。何と店主はすぐ前の店の屋根に落ち、その勢いでその店も潰れてしまったのだ。

周囲の騒動には目もくれず、シャリオはキョロキョロと店を物色する。どれも美味しそうなものが並んでいる。ずっと長い間、はぐれ黒龍として自由気ままに過ごしてきた彼女に、人族の常識を問うのは無理な話だった。彼女は欲望の赴くままに足を進めようとする。

「見つけた！　アンタね、この臭いの正体は！」

突然、女性の声が聞こえる。見ると、目の大きい、若い女性がシャリオを指さしていた。

……ドラゴン？　……同種……ではない？

シャリオはその女性を見て、瞬時に彼女がドラゴンであることを見抜いた。彼女から発せられる気配がドラゴンそのものだったからだ。だが、目の前の女性は、自分の正体が見抜けないらしい。意味不明な言葉を話している。

「アンタ誰よ？　てゆうか、この騒動は何よ？　何者なの？　人間じゃないわね？　……邪悪な気配を感じるわ」

……うるさい。耳障りだ。

彼女は欲望の赴くまま、その不快の元を排除しようと体を動かした……。

第四百三十八話　回避

フェリスは、目の前の少女がまさか、ドラゴンであるとは全く考えてもいなかった。それほど、シャリオの人化は完璧だった。しかも彼女は、人化は初めてだった。初の人化でここまで完ぺきに近い状態にしている点を見ても、この黒龍の才能の高さを見ることができる。

だが、このシャリオをして、その体中から発せられる臭気を隠すことはできなかった。彼女が住んでいたルワザン島には、レイス火山という大規模な活火山が存在する。その噴火口から発せられる有毒ガス――まるで、卵が腐ったような臭い――は、シャリオの体中に染みついていた。とはいえ彼女は、ここに来るまでに毎日水浴びをして体を清潔な状態に保っていたが、フェリスの独特な嗅覚だけは、欺くことはできなかった。

結果的にフェリスは、彼女の発する臭いのお陰で、一命をとりとめることができた。

それはほんの一瞬のことだった。シャリオが人差し指をフェリスに向けた瞬間、その指がまるで槍のように伸びた。そして、フェリスの体に深々と突き刺さったのだ。

相手がドラゴン、しかも黒龍であると認識していれば結果は違っていただろう。だが、まさか相手が黒龍だとは認識していなかったフェリスは、反応が遅れた。だが、彼女から発せられる強烈な臭気のお陰か、目の前の少女に意識を集中していたために、とっさに回避行動を取ることができた。

フェリスの心臓を正確に狙ったシャリオの指は急所を外れ、彼女の脇腹を貫いていた。一命をとりとめたとはいえ。フェリスの体にはこれまで経験したことのない痛みが襲い、彼女は声を上げることもできずに、ゆっくりと膝を折った。

一方のシャリオは少々混乱していた。目の前の女が、どうして自分の攻撃を躱せたのかがわからなかった。この至近距離だ。あの兄たちでさえ、この距離から自分が攻撃を繰り出したらば、躱すことはできないだろう。しかも今回は、一切手を抜かずにやったのだ。相手が兄ならばわかる。だが、ドラゴンとはいえ、黒龍でもない種族に自分の攻撃が躱されるなど、考えもしなかったことだ。

彼女はもう一度、その指を目の前の女に向ける。女は膝を折って俯いているが、油断はならない。絶対に躱されないように……。そう心で唱えながら、彼女は女の頭をめがけて、再び攻撃を仕掛けた。

◆　◆　◆

「何!?　フェリスが?」

思わず声を上げてしまった。フェアリードラゴンのサダキチが、商人街で騒動が起きていると報告してきたのだ。しかもそこにはフェリスがいて、何やら女同士で諍い合っていると言うのだ。

「一体、何をやっているのか……」

そんなことを呟きながら胸騒ぎを覚えた俺は、サダキチに労いの言葉をかけた後、魔力を集中させた。

◆◆◆

「……ッ」

シャリオは思わず声を上げていた。指先に何か、とんでもなく硬いものが当たったような感覚を覚えたのだ。目の前の女を貫くことは……できていなかった。一体何が起こっているのか、彼女には理解ができない。そんなとき、彼女の肩にずしりと何かがのしかかる感覚を覚えた。

「一体、何をやっているんだ」

驚いて声のする方に視線を向けると、若い男が自分の肩を掴んでいた。誰だ、この男は？　そう思った瞬間、周囲から歓声が上がる。

「リノス様！」
「国王様！」

……リノス？　まさか、この男がこの国の王なのか？

……もっと大きな、強そうな男だと思っていた。だが、目の前にいる男は何なのだ。細くて小さい。こんな男は一捻りで倒せてしまいそうだ。

そんなことを考えていると、突然体が重くなった。そして、動くことができなくなった。

「フェリス、大丈夫か？」

男はシャリオに目もくれず、目の前の女のところに向かう。そして、

しばらくすると女の体が青色に光る。

「リ……リノス様、アイツはドラゴンです」

「ドラゴン？」

「間違いなく、ドラゴンが人化しています」

「どういうことだ？　お前の仲間か？」

「クルルカンはあんなに臭くありません」

「臭い……か？」

「メチャクチャ臭いです！」

男は怪訝そうな表情を浮かべながら、周囲を見廻し、そして、シャリオに向き直る。

「どうやらこの騒動の発端は、お前のようだな？　ちょっと来てもらおうか」

「私が来たときには、お店の人をブン投げていました」

「まあ、取りあえず事情を聴こうか……って、何だ？」

少女の体から黒い煙のようなものが出ていた。それはみるみる彼女を覆い、姿を隠した。その直後、まばゆい光が周辺を包む。

ゴアアアアアーーーー！！

耳をつんざくほどの咆哮が周囲に響き渡る。見ると漆黒のドラゴンが天に向かってものすごい勢いで上昇していた。

「な！　黒龍!?　どういうこと!?」

フェリスが頓狂な声を上げている。あまりにも大きな咆哮と、その体から発せられる異様な雰囲気に都の人々は逃げまどっている。

黒龍は上空に一旦留まったが、すぐに南の方向に向かって飛び去っていった。

「リノス様の結界を易々と破って逃げていくなんて……さすがは黒龍」

悔しそうな表情を浮かべながら、黒龍が去った方向を睨みつけているフェリスに、リノスは静かに声をかける。

「いや、結界は解除しておいた」

「何ですって?」

「結界を張って閉じ込めると激しく抵抗されるだろう。そうなった場合、この都が戦場になってしまう。多くの人々を巻き込むことになるから……な」

「……なるほど、さすがはリノス様」

「一体あれは何なんだ?　黒龍……って言ったか?　確か、狡猾さにかけては随一のドラゴンだったっけ?」

「はい。でも、黒龍はジュカ山から出ることはないのですが……。とはいえ、黒龍がこの都で狼藉を働いたのは事実です」

「そのことだが、一体どういうことなんだ？　詳しく話を聞かせてもらおうか？」

「はい……」

フェリスはリノスに促される形で、その場を後にした。都を歩きながら、リノスは黒龍が去った方向に視線を向けた。フェリスを襲う寸前に黒龍に張った結界はＬＶ４だった。なぜ、ＬＶ５の結界を張らなかったのか……。自分自身でも疑問だ。しかし、おそらくあのドラゴンはＬＶ５の結界でも破壊しただろう。そう思わせるだけの雰囲気が、あのドラゴンにはあった。

……あのドラゴンからも、話を聞いてやればよかったな。

そんなことを考えたところで、そいつはもう、ここには居ない。考えても仕方がないと思いつつ、彼は自身の執務室に向かって、歩みを進めた。

◆　◆　◆

……ゼェ、ゼェ、ゼェ。

一体、どこをどう飛んできたのかさえわからない。ここは一体どこだろう？　空に飛び上がって、周囲を見廻せば簡単に位置は把握できるのだろうが、そんな気分にさえ、シャリオはなれなかった。彼女は必死で呼吸を整えようと努める。

初めての経験だった。自分の攻撃が完璧に防がれていた。そして、一瞬とはいえ、体が動かなかった。どうにかしてその呪縛を解いてはみたものの、彼女はその体力の大半を使い果たしていた。

「上には上がいるのだ」

口を酸っぱくして諭していた兄の姿を思い出す。その言葉の意味が、ようやくわかる気がしていた。確かに自分は、あの男を見てタカを括っていた。だが実際は、あの男に自由を奪われた。もし、本気で自分を殺そうとすれば、間違いなく致命傷を負っただろう。……彼女はその聡明な頭脳で、先程の戦いを分析する。

……きっと、兄様はこうなることを予想していたのだわ。龍王と互角に戦うことのできる相手。私一人では太刀打ちできないのは、少し考えればわかるはずだ。過信しすぎていた。

そんなことを考えていたそのとき、何かとてつもない気配を感じた。

それは、ゆっくりと彼女の許に降りてきた。

「ずいぶんと大変な思いをしたのだな、シャリオ」

目の前に現れたのは、二番目の兄であるロイスだった。彼はニヤリと笑みを湛えながら、彼女の傍に近づいてきた……。

第四百三十九話　絵に描いた餅

「中の……兄様」

シャリオは息を整えながら、目の前の黒龍を見上げる。中の兄……ロイスはニヤニヤと笑みを浮かべながら彼女を見ている。この笑みは何か、面白いことを思いついたときの顔だ。ただそれは、兄が面白いと思うことであって、必ずしも自分が面白いと思えるかどうかは限らない……。そんなことを思いながら彼女は、兄の顔をじっと見つめる。

「どうだった、アガルタは？」

「……」

「リノスという男は？」

「わからない」

「だろうな」

中の兄は、フフフとまるで、笑いをこらえられないかのように声を漏らす。彼はぐるりと首を廻すと、あらぬ方向に視線を泳がせた。

「手も足も出なかった……違うか？」

「……」

「だが、さすがは俺の妹だ。よくあの場から逃げおおせた。あのままあの男と戦っていれば、間違いなくお前は死んでいた」

「……」

「あのリノスという男は結界師だ」

「結界師？」

「ああ、それも神級レベルだ。まあ俺や兄者であれば問題はないだろうが、お前ではおそらく、太刀打ちできまい」

「そんなことは、ない」

「ほう」

「私はアガルタの都から脱出している」

「うん？　どういうことだ？」

「中の兄様の話でようやく合点がいった。なるほど、結界が張られていたのか」

シャリオはゆっくりと体を起こす。

「都に入ろうとしたとき、体中に痛みを感じて入ることができなかった。そのときは人化していたのだ。人化を解いたら、体に痛みを感じることもなく、問題なく脱出できた。問題は、ない」

彼女はロイスに真っすぐな視線を向ける。その視線にロイスは応え

ず、フフと笑みを漏らすと、視線を合わせないまま、まるで独り言のように、小さな声で呟いた。

「あのリノスという男、我らの僕にしようではないか」

「僕？」

「我らの手下とするのだ。お前には、あのアガルタの都をやろう。我ら二人であの男と都を手に入れようではないか」

「……」

「その顔は、どうやってやるのだという顔だな。お前の考えていることは手に取るようにわかる」

「……我ら二人で、戦うのか？」

「バカを言え。我々が戦えば、あの男も都も何もかもが無くなってしまう。それに、我らがこれ以上動くと龍王と戦わねばならないことにもなりかねん」

「確かに、アガルタに向かう途中でとんでもない気配を感じた。あれと戦うとなると、我ら全員で事に当たらねばならなくなる……」

「さすがはシャリオだ。そうならないために、俺にいい考えがある。どうだ、一緒にやってみないか？」

シャリオはグルル……と、少し悩んだような素振りを見せたが、やがて、その透き通るような瞳をロイスに向け、まるで、宣言するかのように毅然とした態度で口を開く。

「事がなった暁には、あの都とリノスという男は私が貰う」

「何？」

「あの都の食べ物は美味しかった。きっと他にも美味いものがあるに違いない。あそこの食べ物は全て私が食べる」

「それはよいが、なぜ、男までお前のものにするのだ？」

「面白そうだからだ」

「面白そう？」

「フフフ、何かあの男は、面白そうだ。私のモノにする」

「それは構わんが、あの男は、我らがためのものにするのだ。そのことを忘れるなよ」

「わかっています」

シャリオはそう言うと体を起こし、背中の羽を大きく広げた。その様子を見ていた兄のロイスは、大空に舞い上がる。そして、彼女を促すようにして、北に向かって飛んでいった。その後を追うように、シャリオも大空に舞い上がった……。

◆　◆　◆

「では、行ってきます！」

そう言ってフェリスはしゅたっ、と敬礼をしている。その様子を俺は唖然としながら見守り、妻たちや子供たち、ゴンたちもポカンとした表情を浮かべている。唯一例外はルアラだ。彼女は完全に顔が死んでいる。

それは突然のことだった。あの騒動があった日、屋敷に帰ってきたフェリスが、突然こんなことを言い出したのだ。

……今から、ジュカ山に帰ります。

一体何事かと思い、戸惑う俺たちをそのままに、彼女はすぐに自室に戻ってしまった。しばらくすると彼女は旅に出る出で立ちをして俺たちの前に現れ、そして、こう言い放った。

「両親の許に行って来ます。ですので、しばらく帰ることができません」

あまりの突然のことに、俺は混乱してしまう。その中でリコは冷静にフェリスに対処する。彼女は手短にその理由を聞いていく。すると、フェリスの口から発せられたのは、驚愕の一言だった。

「最悪の場合、我々クルルカンと黒龍と全面戦争になる可能性があります。そうなると、すぐには帰ってくることができません」

「ちょっと待て、一体どういうことだ？」

フェリス曰く、その昔、クルルカンと黒龍はジュカ山での縄張り争いから全面戦争になったことがあるらしい。その際はクルルカンが勝利し、黒龍側には自身の縄張りから出ないことを約束させたのだそうだ。

「今日、都で私を襲ったのは、間違いなく黒龍でした。で、あれば、ヤツらは約束を違えたことになります。私は一旦山に戻り、両親に報告をして、族長様の判断を仰ぎたいと思います。仕事のことが気になりますが……」

「わかりました。そういうことなら、フェリスの仕事は、私が代わりますわ」

「すみません、リコ姉さま……」

そう言って彼女は敬礼をして、屋敷を後にする。その様子を俺たちは茫然と見送るしかなかった。子供たちも唖然としていて、一体何が起こったのかがわからないようだ。その中で、エリルがフェリスの後を追いかけていった。その後をシディーが追いかけていく。

しばらくすると、シディーに肩を抱きかかえられながらエリルが戻ってきた。彼女は目を真っ赤に泣きはらしている。そんな彼女に、シディーは優しく声をかける。

「大丈夫、すぐに戻ってくるわよ」

「だって……」

「母さんの直感がそう言っているのよ。大丈夫。フェリスちゃんはすぐに帰ってくるわ。……母さんが、嘘をついたこと、ある？」

エリルは黙ったまま、首を振る。その様子を見たシディーはニッコリと微笑む。

「フェリスちゃんが戻ってきたら、ご馳走を作ろう。エリルちゃんも手伝ってね」

その言葉に、彼女は笑顔で頷いた。

◆　◆　◆

アガルタの都から遥か北に位置するライドアイランド。四国と同じ面積を持つこの島は、冬は雪に閉ざされる。

この大陸を支配しているのは、バーリアル王国だ。当代の王であるロウサックは一人、部屋にこもったままある一点を見続けている。彼の視線の先には、巨大な世界地図が掲げられている。

ロウサックはゆっくりと立ち上がり、世界地図に近づいていく。そして、人差し指で自国のあるライドアイランドを指さした。

彼は心の中で恨み節を繰り返していた。これだけ大きな国でありながら、貧しさのために、全く注目されていない。本来、我が国はもっと、世界の一等国として賞賛されてよいものを……。

実際、この国の国土は肥沃な土地であった。作物の収穫高も、国民を養っていくには十分だった。だが、長年属していたクリミアーナ教国のお蔭で、その作物の三分の一を強制的に教国に寄付させられていた。それだけではない。この国の冬は厳しい。そのために、ありとあらゆるものが雪と氷に閉ざされる。最も頭を悩ませているのは、国中の港が凍りついてしまうことだ。そうなれば当然、船を出すこともできない。そうなると、ありとあらゆる物資が滞ることになる。それが、この国の成長を著しく阻んでいたのだった。

すでにクリミアーナ教国は滅んだ。教国を滅ぼした新・クリミアーナ教からは何も言っては来ていない。今が独立するチャンスであることは明白だった。だが、独立したところで、気候が変わるわけではない。この国を成長させるためには、冬でも凍らない港を確保することが必須だった。

「お前の望みを、叶えてやろうか？」

突然、男の声が響き渡る。驚いたロウサックが、声のした方向に視線を向けると、そこには一組の男女が立っていた……。

第四百四十話　意外とエライ？

「ただいま帰りました……」

フェリスが帰ってきたのは、出発してからわずか二日後のことだった。俺は憔悴して帰ってきた彼女を見て、これは追い返されたのだなと思った。

クルルカンは基本的に、脱皮が終わって成竜として認められると、一旦、山を降りなければならない。そして、世界のどこかで修業をして、己の魔法をＬＶ５にまで引き上げないと帰ることが許されない。フェリスはようやく風魔法がＬＶ４に達したところだ。まだ、群れに戻る資格はないのだ。

だが、話を聞いてみると、ちゃんと群れには迎え入れられたのだと言う。黒龍が約束を違えるという緊急事態であるために、例外として認められたのだそうだ。彼女は両親を通じて族長にその旨を報告し、これから先のことについて指示を待ったのだそうだ。

「すぐに黒龍側から連絡があって、約束を違えることはしていないと言うのです」

「何じゃそら？　都で見たあのドラゴンは、黒龍ではないというのか？」

「いいえ。間違いなく黒龍です」

「じゃあ、何でだ？」

「わかりません。私は一旦山を降りて、リノス様の許で待機せよという命令を受けましたので、こうして戻ってきたというわけです」

そう言って彼女は大きなため息をついた。

「そうか。行って戻ってだから、ほとんど休めていないんじゃないのか？　疲れただろう。まずはゆっくり休め」

「はい。ありがとうございます」

彼女はまずは風呂に入ると言って、自分の部屋に向かって行った。アリリアなどが、一緒に背中を流そうかと言っていたが、彼女は一人で入ると言っていた。いつもなら子供の面倒を喜んで見てくれるのだが……。よほど疲れているのだろう。

フェリスが風呂に入っていると、シディーが屋敷に戻ってきた。彼女はフェリスの帰還を聞くと、傍にいたエリルに向かってウインクを投げた。そして、腕まくりをして、ペーリスに視線を向けた。

「ほら、言った通りだったでしょ？　ペーリスちゃん、これから夕食を作るんでしょ？　私も手伝うわ。今夜はたくさん作った方がいいみたい。いつもの倍……いや、三倍は作った方がいいわ」

シディーの言葉に、ペーリスはキョトンとしている。

「大丈夫。私を信じて。エリルちゃん、手伝ってくれる？　アリリアは弟たちと遊んであげてくれるかな？」

シディーがテキパキと指示を出していく。エリルは最近拵えた自分

専用のエプロンを付けてキッチンに向かって行った。こうしてみると、もう完全に彼女はお姉ちゃんになった。その様子を満足げに眺めながら、俺はアリリアと共に子供たちと遊ぶ。

◆　◆　◆

「ふう～。もう食べられません……」

腹を抑えながら天を仰いでいるのはフェリスだ。風呂から上がり、食事となったが、いつも以上の空腹と疲れを抱えた彼女をもってしても、今日拵えた料理を全て平らげることはできなかった。テーブルの上には、まだ高く積み上げられたから揚げや、まだ手付かずのサラダ、大量のパンやスープが残っている。基本的に出された食事は全て食べるというのが我が家のルールだが、今日は特例としてお残しを認めなければならないかもしれない。

ちなみに、体調不良などで食欲がない場合もあるので、出された料理を絶対に全て食べなければならないというわけではない。基本的に、箸をつけた料理は食べなければならないが、箸をつけていないものは、最悪、残してもよいことにしている。我が家のルールは、そこまで鬼ではないのだ。

とはいえ、この残った料理をどうするか。まあ、無限収納に入れておけば、非常用の食糧にはなる。そんなことを考えている俺の目の前で、シディーは悠然と座っている。

そのとき、俺の結界が破られるのを感じた。これは……また、アイツだな。

渋々外に出てみると、人化した龍王が立っていた。俺はため息をつ

きながら、ヤツに話しかける。

「こんな時間に何しに来た。今は一家団らんの時間なんだよ。邪魔をしないでくれるかな。それに、いちいち結界を破って来るのは、やめてもらえないかな？」

「何を言うのだ！　あの結界を破らずして、どうやってここに来るのだ！」

「いや、俺の結界は一応、邪心のない者は通れる仕様になっているんだ。で、あるにもかかわらず結界を破って入ってくるということは……」

「貴様、何が言いたいのだ？　龍王たる我に対して……」

「あっ！　りゅーおーくん！」

屋敷からアリリアがパタパタと飛び出してきた。これ、こんな生き物に近づくんじゃない。アホになるよ……そう言おうとした俺を遮るようにして、アリリアは口を開いた。

「遊びに来てくれたの？　遊ぼ遊ぼ！」

「よし、いいだろう」

「わーい」

「オホン」

咳払いが聞こえたかと思うと、龍王の背後から二人の男が姿を現し

た。二人とも初老の男性で、片方は髪が赤く、もう片方は黒髪だ。だが、コイツの場合、目が鋭く、その瞳の奥には憤怒の感情がありありと見てとれた。

二人は龍王の傍まで来ると、恭しく片膝をついた。

「そうだ。我は遊びに来たのではない。そなたにこの者が、申し開きをしたいと言っておるのだ」

龍王は黒髪の男に向けて顎をしゃくる。それを受けて男は、その鋭い眼差しを俺に向けた。

「我は黒龍族の族長、カンナンス。我が一族がそなたの都を襲ったと聞いたが、我らは一切預かり知らぬこと。その点、ご承知おき願いたい」

「黒龍の族長？　まさか？」

「クルルカンから黒龍が約束を違えたと我の許に報告があった。だが、黒龍は断じて知らぬと頑なに言い張る。我も調べてみたが、黒龍に嘘偽りは見えぬ。それ故、この者たちを連れて来たというわけだ」

「クルルカンの族長、グレイブだ。貴殿のことは聞いている。我が一族の者が世話になっている。今後ともよしなに」

赤い髪の男がそう言って俺に頭を下げた。

「ぞ……族長様！？」

俺の背後で頓狂な声が聞こえる。見ると、フェリスが屋敷から飛び出してきていた。彼女は俺の傍まで来ると、彼らと同じように片膝をついて、頭を下げた。

「黒龍を見たというのは、そなたか？」

龍王が威厳のある声でフェリスに話しかける。

「はい。確かに、都で見ましたのは黒龍です。間違いありません」

「そんなはずはない！」

黒龍の族長が声を荒げる。その彼に、フェリスは一歩も引かず言い返す。

「いいえ、絶対に黒龍です。それはリノス様もご覧になっています。それにあの臭い……黒龍でないと、あんな鼻が曲がりそうな臭いは出すものですか！」

「臭い？　我らにそのような……。まさか……。その臭いとは、何かが腐ったような臭いか？」

黒龍の族長の言葉に、フェリスはゆっくりと頷く。

「……ツネたちか」

「ツネ？」

「ああ、我ら黒龍には掟を破って山から出た者がいる。それがツネを筆頭とする四匹の黒龍だ。だが、奴らはあの島から出ないことを

条件に命を助けたのだが……。まさか奴らが……」

黒龍の族長は、唖然とした表情を浮かべていたが、やがて龍王に向き直り、深々と頭を下げた。

「龍王様、誠に恐れ入りますが、我らにヤツらを討伐することをお許しください」

「討伐、と言うことは、山を降りると言うことか」

「その通りです」

「それは……認めるわけにはいかん」

「龍王様！」

「この始末は、我が付けよう」

「何と、龍王様、御自ら……」

クルルカンの族長が驚いた表情を浮かべている。その様子をチラリと見た龍王は、ゆっくりと頷く。

「このことは、全て我に任せよ。よいな」

「はっ」

「ははっ」

二人の族長は恭しく龍王に向かって頭を下げた。その様子を見ながら彼は再び顎をしゃくる。すると、二人の姿がゆっくりと消えてい

った。

「聞いての通りだ。今回の黒龍の一件は我が始末をつける。そなたたちは手出しは無用だ」

「うわーりゅーおーくん、カッコイイ！」

アリリアが思わず声を漏らす。その言葉がうれしかったのか、彼の体が薄い桜色に染まっている。

「それにしても龍王……」

「何だ、不服でもあるのか？」

「いや、不服はない。ただその……。お前さん、意外と偉いんだな」

「何ッ！？　誰に向かって！！」

龍王の体が、薄い桜色から、炎のような色に変わった……。

第四百四十一話　新メンバー

「りゅーおーくん、乱暴はダメよ！」

体を真っ赤に染めて怒る龍王に向かって、アリリアが人差し指を天に向け、腰に手を当てながら注意をしている。

「う……。わ、わかった……」

まるでお姉ちゃんに怒られた弟のように、龍王は恐縮してしまっている。そんな彼にアリリアは遊ぼう遊ぼうと言って屋敷に招こうとする。

「アリリア、もう、夜も遅いから、また今度にしよう」

「ええ～。りゅーおーくんとお風呂に入りたい」

「ダメだ。絶対にダメだ」

……イカン。娘にマジギレするところだった。いつもと違う俺の様子に、アリリアが少し慄いている。

「いや、龍王も忙しいからね。彼のお仕事の邪魔をしてはいけないよ」

「……うん、わかった。じゃあ、りゅーおーくん、また今度ね」

「ああ、いつでも呼ぶといい」

俺はフェリスに屋敷に帰るように促す。彼女はスッと頷き、アリリアと手を繋いで屋敷に向かって歩き出した。よほど龍王と遊びたかったのだろうか、アリリアは後ろ髪を引かれるように、何度も振り返りながら戻っていった。

「お前、ウチの娘に手ぇ出したら、マジぶっ殺すからな」

「何を言っているのだ貴様は……」

龍王が呆れたような表情を浮かべている。いや、こういう男が油断ならないのだ。家に帰ると龍王が座っていて、いきなり「お父さん」などと呼ぶ……。何だお前は早く帰れと追い返そうとするが、アリリアがこの人と結婚する……なんて言い出すんだ。ダメだ、ゼッタイにダメだ。それにいきなりそんなことを言われても……。お父さん、実は、この人の子供がお腹の中にいるの。何だと!?　俺は許さん、絶対に許さん！　ウチの娘に何てことをしてくれたんだ。まあまあリノス、アリリアが幸せならそれでいいではないですか。リコ、何を言っているんだ……って、メイもシディーもソレイユも、マトも……知っていた？　え？　いつから？　付き合い始めから？　もう3年も交際している？　ウソ、マジか？　え？　うん、確かに2年前にアリリア、俺にマフラー編んでくれたよね。あれ試作品？　あの後編み直して龍王にあげたの？　マジか……知らなかったの、俺だけだったんだ……。

……きけ。……している。……おい、我の話を聞かんか!!

突然龍王の絶叫が聞こえる。ああ、イヤなことを考えてしまった。てゆうか龍王、お前だけは絶対に許さんからな!

「何だ、貴様？　我に殺気を向けるなど！　我に挑むのならば、来るがいい！」

無限収納からホーリーソードを取り出そうとするが、出てこない。そうだ、メイに預けてあったんだ。あれじゃなきゃ、龍王の鱗は斬れないだろう。……チッ仕方がない。今日はやめておこう。

「何だ！？　来んのか！？　……全く、何と手のかかる男なのだ貴様は！　早くどうにかせよ！」

「どうにかせよって、何をだ？」

「さっきから言っておるではないか！　あのドラゴンは貴様の許にいるのではないのか！　我が助けてもよいが、そなたの許にいるのであろう？　そなたが助けるのが筋ではないのか？」

「さっきから何を訳のわからん話を……って、あれ？」

龍王が指さす先に視線を移すと、何やら人影が動いている。まるで匍匐前進をするかのように、ゆっくりと俺たちのところに向かって来ている。

近づいて見ると、それは少年だった。顔が腫れ上がっている。随分と派手にやられている。

「おい、どうした君、大丈夫か？」

「しっかりと手当てをしてやるのだ。全く……」

そう言って彼は空に飛び上がった。俺は龍王に向かって舌打ちをし

ながらも、目の前の少年に声をかける。

「う……う……み……ハ……」

「しっかりしろ！」

俺は少年を負ぶって、屋敷に向かって走り出した。

◆　◆　◆

「……」

あまりの光景に、誰も言葉を発することができなかった。ただ一人、フェリスだけは、眉間にものすごい皺を寄せながら、目の前の光景を睨み続けている。

山と積まれたからあげ、サラダ、パン……。それがみるみるなくなっていくのだ。さらに、寸胴いっぱいに用意されたスープも、まるで水を飲むかのような勢いでなくなっていく。

少年を屋敷に連れて帰り、回復魔法をかけると彼はすぐに意識を取り戻して立ち上がり、目の前の料理を見つけると、まるで何かに取り憑かれたかのように、それらを口に放り込んでいった。

全て手づかみで食べていく少年。大きな寸胴鍋も軽々と持ち上げて口に運んでいく。そして、テーブルの上に用意した料理は、瞬く間になくなってしまった。

「ふぅ……。落ち着いた」

一体君は……そう話しかけようとしたとき、少年がクルリと俺たちを見廻し、申し訳そうな表情を浮かべながら、口を開いた。

「すみません……おかわり、ありますか？」

「いい加減にしなさいよ！」

フェリスがものすごい形相で怒りをあらわにする。そのあまりの剣幕に、子供たちがビビってしまっている。

「フェリス、まあ、落ち着け」

「でもっ」

「取りあえず、こちらはどなただ？」

「「え？」」

フェリスと少年がハモりながら、同じ表情を浮かべている。一体どうしたのだろうか？

「あの……覚えて……ないのですか？」

少年が涙目になっている。俺はポリポリと頬を掻きながら、必死で記憶を辿る。

「……ラースです」

「ええっ！？　ラース？　お前、ラースか？」

「はい……」

「いやぁ、久しぶりだなぁ」

「あの……今気づいたんですか？」

「あ、いや、その……。いや、以前見たときより少年らしくなっているから、ちょっと、わからなかったや。ハハハ……」

ラースはジトッとした目で睨んでいる。俺はオホンと咳払いをしながら、彼に再び話しかける。

「で、何しに来たんだ？」

「何しにって……脱皮が終わったので、お世話になろうと……」

「あー」

思わず天を仰ぐ。確かそんな約束をしたような記憶がある。

「今はダメって言っているじゃない」

フェリスが腕組みをしながら、ラースに近づいていく。

「今は忙しい時なの。黒龍が約束を違えたって聞いたでしょ？　そんな時期に……」

「さっき龍王様が、それについては対応するって言ってたよ？」

「そうは言っても、今、リノス様は忙しいの。アンタを面倒見る余

裕なんてないのよ！　だから山に帰りなさい！　まだ山に居てもいいでしょ！　それか、他のところに行くか、どちらかにしなさい！」

「そんな……姉ちゃん……」

「まったく……あれだけボコボコにしたのに、ここまでたどり着くなんて……体だけは丈夫なんだから！」

二人のやり取りを見ながら俺は、リコを筆頭とする嫁たちに視線を向ける。メイやソレイユは仕方がないんじゃないでしょうか、といった表情だ。マトカルは好きにすればいいという表情だ。シディーは人差し指を顎の下に当てている。何かを推理している？　そしてリコはラースの様子をじっと見守っている。

「ちょっとよろしいかしら？」

突然リコが口を開く。全員が彼女に視線を向ける。

「ラースさん、あなたをわが家に迎えることは吝かではありませんわ。しかし、我が家では必ず何らかの仕事をしてもらうことになりますわ。あなたは、何か得意なものがおありかしら？」

「得意な……もの？」

「例えば、あなたのお姉さんのフェリスは、書類チェックに抜群の能力を発揮していますわ。ルアラは暗算……。何でもいいのですわ。計算でも、料理でも……何がお得意かしら？」

「ええと……」

重苦しい沈黙が流れる。それが無意味だと言わんばかりに、リコが口を開く。

「一つ、問題を出しましょうか。ある牧場に、毎日一定量の牧草が生えるそうですわ。さて、この牧場に牛を２０頭放したら１０日間で牧草を食べ尽くし、１５頭放したら、１５日間で牧草を食べつくしたそうですわ。では３５頭を放すと、何日で食べつくすことになるでしょうか」

「……」

ラースは天を仰ぎながら考えているが、なかなか答えが出てこない。

「リコ様」

その様子を見るに見かねたのか、シディーが声をかける。

「きっと大丈夫です。根拠はありませんが、彼をこのお屋敷に置いた方が、いい未来が待っている気がします」

「……そうですか。シディーがそう言うなら」

リコとシディーは顔を見合わせながら頷いている。そしてリコは、メイたち家族全員に視線を向ける。皆、頷いている。彼女はそれを確認すると、俺に向き直った。

「よろしいかと思いますわ」

「……ということだ、ラース。ただし、さっきもリコがいったが、ウチは働かざるもの食うべからず、だ。何らかの仕事は、してもら

うぞ？」

「……ハイ！　ありがとうございます！」

彼は元気よく返事をして、丁寧に頭を下げた。

その夜、ラースはフェリスの部屋で寝ることにして、俺たちはそれぞれの寝室に向かった。

俺はリコと子供たちと共に風呂に入る。

「ふぅ～。それにしてもリコ、どうしてラースにあんな問題を出したんだ？」

子供たちを風呂から上げ、二人で湯船に浸かりながら、俺はリコに話しかける。

「料理を手づかみで食べていましたでしょ？　色々と教育が必要かなと思ったのですわ。まずは、どのくらい基礎学力があるのかを知ろうと思ったのですわ。ある程度学力があれば、フェリスやルアラの手伝いができますでしょ？」

「なるほど」

「ただ……ちょっと二人の手伝いは難しそうですわね。彼には色々なことを経験しながら、できることを見つけていくのがいいと思いますわ」

「そうか……。俺はてっきりリコがダメだと言うと思っていたんだ」

「フフフ。実は最初、私もどうしようかと思っていましたのですわ」

「じゃあ、何で？」

「あの問題の答えと一緒ですわ」

「答え？」

「まっ、５日（いっか）」

第四百四十二話　回りくどい

ヒーデータ帝国の宮城（きゅうじょう）。その謁見の間では、皇帝である、ヒーデータ・シュア・ヒートが厳しい表情を浮かべていた。温厚篤実な彼をして、このような表情は非常に珍しい。その彼の前には弟であるヴァイラス公爵が、蒼白な表情を浮かべながら立ち尽くしている。

「それは一体、いつのことじゃ？」

「ハッ……。知らせによりますと、およそ5日前とのことです」

「帝国にとっては、誠に由々しき事態だの」

「はい……。場合によっては、帝国の浮沈にかかわるかと存じます」

「黙って見過ごすわけには、いかぬの」

「はい。早急にご対応いただければ」

「わかった」

「あの……陛下」

「何じゃ？」

「アガルタの義兄上にも、この旨を……」

「いや、それには及ぶまい。此度は我らだけで十分であろう」

「畏まりました」

ヴァイラスは恭しく一礼をし、スッと後ろを振り返った。そこには片膝をついて畏まる一組の男女の姿があった。二人は、彼に倣うように、深々と皇帝に向かって頭を下げた。

◆　◆　◆

アガルタの都にも、チラチラと粉雪が舞うようになった。俺は執務室の窓をぼんやりと眺めながら、来し方を振り返っていた。

もうすぐ今年も終わりだな。何だか今年は慌ただしかった。そのお陰で、誕生日パーティーを開くことができなかった。俺はいくつになったんだ？　２７歳か……。自分の年齢もすぐに出てこなくなるほど、色々なことに忙殺されていたんだな。来年はもう少し、のんびりしたいものだ……。

そんなことを考えていると、扉がノックされる。入室を促すと、何とクノゲンとリコが連れ立って入ってきた。

「リコ……？　何？　どうしたの？　クノゲン？　何？」

別に何もやましいことをしていないのだが、何故かリコの姿を見ると焦ってしまう。いや、決してリコにビビっているわけじゃないぞ。怒られるのが怖いからじゃない。てゆうか、怒られることをした記憶は……ない。心当りがあるとすれば、エリルやアリリアたちに、ママには内緒だと言ってケーキを食べたくらいだ。まさか、それがバレたのか？　オヤツの時間以外に食べてしまったからな……。いや、エリルたちが秘密をバラすとは思えない。いや、待てよ？　も

しかしてシディーが気付いたのか？　で、問い詰められて白状したと。うん？　それならクノゲンがここにいる説明がつかないな。ええと……何だ！？

「ずいぶん目をキョロキョロさせておいでですが、大丈夫でしょうか？」

クノゲンが心配そうな表情を浮かべている。俺はハッと我に返り、コホンと咳払いをして席に着く。……リコ、そんな目で俺を見ないでくれ。

「忙しい政務の中、時間を取らせてしまって申し訳ありませんわ。ちょっと相談したいことがあるのですわ。クノゲンの意見も聞きたいと思いましたので、同席してもらいました」

「相談？　何だい？」

「バーリアル王国が軍を動かしたのですわ」

「バーリアル王国？」

リコはクノゲンに視線を向ける。それを受けて彼は、手に持っていた紙を机の上に広げてバーリアルの位置を指さす。

「ついひと月前、王都を出発したバーリアル軍は海を渡り、隣国のワーロフ帝国のドルガを攻撃しました。そして、現在もここを占領しています」

「ここは……。いいところに目を付けたな。ここを押さえれば、この国は好きなときに東に向かうことができる。やり方によっては、

ヒーデータを急襲することもできるな。それに、南から侵攻された場合には、砦としていい働きをしそうだな」

「さすがはリノス様。まさしくその通りだと思います。ここはワーロフ帝国の中でも最大規模の港があります。ここを押さえられると、これまでのように広く交易ができなくなるので、帝国としてはある意味、喉元に刃を突き付けられた形になりますな」

「どうして両国は争っているんだ？」

「それが、よくわからないのです」

「うん？　どういうことだ？」

「一応、バーリアル側の言い分としては、自国の兵士がワーロフ帝国の兵士に殺された。そのために攻撃したというものなのですが……」

「それなら、罪を犯した兵士を罰すればそれで済むじゃないか」

「そうなのですが……」

「まあ、戦いを仕掛ける理由は何でもいいってことかな？」

俺の言葉に、クノゲンは苦笑いを浮かべている。

「リノスに相談と言うのは、このことなのですわ」

「ほう、相談とは。俺たちに何か関係があるのか？」

「攻撃されたワーロフ帝国は、ヒーデータ帝国と縁戚なのです」

「え？　そうだっけ？」

「ヴァイラスに嫁いでいるのは、ワーロフ帝国皇帝の娘ですわ」

「あーそうだっけか。確か、かなり美しい方だったよね？」

リコはゆっくりと頷く。二度ほど宮城（きゅうじょう）でお目にかかったが、大人しそうな上品な人というイメージがある。

「ワーロフ帝国は数度にわたってドルガ奪還を試みましたが、いずれも失敗しています。そして、ヒーデータに援軍を要請しましたが、これも失敗しているのです」

「連合軍を組織しても勝てないのか……。兵力は？」

「ワーロフ、ヒーデータ連合軍５万に対して、バーリアル軍は１万とのことです」

「はああ。それだけの兵力差があるのに……か。こんなことは言いたくないが、ワーロフとヒーデータの司令官が余程ポンコツか、バーリアル側に余程、指揮能力の高い司令官がいるか、どちらかだな」

「おそらく、そのどちらもでしょう」

クノゲンが頬をポリポリと掻きながら、苦笑いを浮かべている。

「ワーロフ側の司令官は存じませんが、ヒーデータの司令官は、ライッセン将軍ですからな」

「ライッセン？」

「ラマロン軍との戦いの際、イルベジ川で睨み合っていたときの……」

「ああ、あのオッサンか。確か、ラファイエンスの後任で北方方面軍の司令官になったんだっけ。まだいたのか？」

「終生現役武官としての待遇を受けておりますからな。本人が辞めると言わない限り、基本的にはあのままでしょう」

「でも、戦いに勝てないんじゃ、司令官としての意味はないだろう？」

「その通りなのです」

そう言ってクノゲンは、遠慮がちにリコに視線を向ける。

「相談と言うのは、兄上から内々に援軍の要請があったのですわ」

「何でリコのところに？　直接俺に言えばいいじゃないか」

「リノスはアガルタの国王ですわ。直接兄上がリノスに頼むと、国と国の話し合いになってしまうのですわ。表に出したくはないからこそ、兄上はタウンゼット妃を通じて私に書簡を送ってきたのです」

そう言ってリコは、俺に手紙を渡す。そこには、皇太子であるアローズの近況が書かれており、許嫁であるエリルと会えることを楽しみにしていると書かれてあった。

「うん？　これだけじゃ、俺たちに援軍を求める内容かどうか、わからないじゃないか」

俺の言葉にリコは少し戸惑いの表情を浮かべたが、やがて真っすぐな瞳を向けてきた。

「これは……リノスだから言うのですが、実はこれは暗号なのですわ」

「暗号？」

「ヒーデータ帝国の皇族同士が手紙をやり取りする際、内容によっては、別の意味を持たせることがあるのですわ。今回のこの書簡は、援軍を要請するものですわ」

リコの言葉に、クノゲンが続く。

「表向きは膠着状態であるとされておりますが、どうやら、連合軍は大損害を受けて撤退したようですな」

「で、アガルタ軍に援軍を要請してきたというわけか？　堂々と援軍を要請するならまだしも、こんな回りくどいことをしなきゃならない理由が俺にはわからないな」

「相当焦っているのでしょう」

「ほう」

「察するに、数で勝る連合軍は、確実に勝てると踏んで戦いに向か

ったのでしょう。だが、敗れた。ドルガと言う要地に居座られるのが、ワーロフもヒーデータにも耐えられないのでしょうな。一刻も早くこの地を奪還したいが、二度の失敗は許されない……。とはいえ、両国とも面子がある。だからこのような回りくどいことをしているのでしょうな」

「何だかなぁ」

「リノス……」

「何だい、リコ？」

「一度、兄上に会って下さいませ」

「……そうだな」

「これは私の勘ですが……。兄上は何か思うところがあってこのようなことをしているのだと思いますわ。きっと、リノスに内々に会いたいのではないかと思うのですわ」

「わかった。リコがそう言うのなら……」

俺は再び窓の外に視線を向ける。雪が激しくなってきていた……。

第四百四十三話　秘密のお願い

三日後、俺は久しぶりにヒーデータ帝国の宮城（きゅうじょう）を訪れていた。当然お忍びだ。リコからタウンゼット妃への返書をフェアリードラゴンに持たせると、三日後に陛下の私室に転移して来るように暗号が来たのだ。

正直、こういうやり取りはあまり好きではない。リコのことは微塵も疑ってはいないが、やろうと思えば、アガルタの情報を帝国に流すことができてしまうのだ。

そんな少し複雑な感情を胸に秘めながら、俺は陛下の私室に転移した。すると部屋には陛下しかいなかった。宰相閣下さえいないのだ。

「突然、呼び立ててすまぬの」

ゆったりと椅子に腰かけた状態で、彼は俺に椅子に座るように勧める。いつもの煌びやかな服装ではなく、ガウンのようなものを着ている。こんな砕けた様子の陛下は初めて見た。

「エリル殿は元気かな？」

突然、娘のことを聞かれる。予想していなかった質問に、俺は少し戸惑う。

「え……ええ……息災です」

「そうか。一度、遊びに連れて来るがよい」

「は……」

「アローズと一度くらい会わせておいた方がよかろう」

「は……はあ」

「我が息子、アローズとエリル殿は許嫁じゃ。親同士が決めた婚儀とはいえ、輿入れまで顔を合わせぬというのは、互いによくはあるまい」

「……」

「我が国には、イザエモンという貴族の子弟が学ぶ学校がある。アローズは来年、そこに入学させる。もし、よければ、エリル殿もそこに入れてはどうじゃ？」

「ええと……」

「将来的に我が国に嫁ぐのじゃ。早いうちから、帝国の貴族たちと交流を持っておくことに越したことはない。イザエモンに通う者たちは、我が国の貴族の子弟を始めとして、帝国が懇意にしている国々の貴族の子弟の者たちじゃ。将来、国を動かす地位に就く者も多い。そうした者たちと子供の頃から知己を得ておくのは、エリル殿の将来にとって有益に働くであろう。全く知らぬ土地に嫁いで来るよりは、はるかにマシであろうがの」

「あの……陛下、何の話で？　そのためにわざわざ俺をここに呼んだのですか？」

「……これは、私としたことが。いや、呼び立てたのは他でもない」

陛下はオホンと咳ばらいをしながら立ち上がると、机の引き出しを開け、中から何やら取り出した。そして、それを俺の座るテーブルの上に広げた。

「これは？」

「ドルガの新しい地図じゃ」

俺は地図をじっと眺める。何やら、赤い線と黒い線が描かれているのが見える。

「この線は？」

「赤い線が堀、黒い線が城壁を指す」

「……めちゃめちゃいい砦じゃないですか」

俺の言葉に、陛下はゆっくりと頷く。

「しかも、その堀と城壁は、ここ一週間で作られたものなのだ」

「いっ……一週間！？」

思わず大きな声を上げてしまった。俺は周囲を警戒する。どうやら誰も居ないようだ。

「この、ドルガという街は、どのくらいの大きさですか？」

「大体１０㎞四方と考えてよい」

「そんな街に一週間で堀と城壁を築くなんて……化け物だ……」

この俺でさえも、全力を出しても完成できるかどうか……いや、無理だな。不休不眠でやればどうにかなるかもしれないが、完成する前に倒れてしまう。

「……相当の魔術師がいると見て、間違いなさそうですね」

「ああ。それもあるが、何より私が注目しているのは、この堀と城壁の位置じゃ。ここにこんなものを作られては、攻める手立てがない。リノス殿はどう攻める？」

「……」

地図だけでは何とも言えないが、見る限りでは、弱点らしきものは見当たらない。

「これは、力攻めは難しいですね。やっても、相当の犠牲が出ますね」

「で、あろうの。相談と言うのは、そのことなのじゃ」

「まさか俺にこの街を奪還せよというのではないでしょうね？」

「……」

図星か。何ともムシのいい話だ。これは相当に難しい仕事だ。

「北方方面軍の総司令官であるライッセンは、十万の兵を増援してくれと言ってきおった。どうやら、数を頼んで押し包もうという腹らしい。そんなことをすれば、我が方の損害はどのくらいになるのか……。下手をすれば、全滅する可能性すらある」

「……同感です。やるとすれば、兵糧を断って日干しにする他はないでしょう」

「だが、この街には港がある」

「補給路は万全というところでしょうか」

「そうだの。海上を封鎖するのは難しい。我が帝国が全兵力をもってあたれば、できぬことはないが……」

「いや、そこまでしては、国民が動揺するでしょう」

「その通りじゃ」

陛下はゆっくりと息を吐き出しながら、改めて俺に視線を向ける。

「ライッセン然り、ワーロフ帝国軍も然り。ヤツらはドルガを単なる一都市としか見ておらん。先の作戦の失敗を顧みようとせず、徒に同じ失敗を繰り返そうとしておる」

「そうなると、敵はますます勢いづきますし、このドルガを拠点に、ワーロフ帝国を侵攻していくことができますね」

「その通りじゃ。事は一刻を争う。このままあの者どもに任せておっては、ワーロフは灰燼に帰し、我が国は喉元に刃を突き付けられ

たも同じとなる。従ってリノス殿、そなたにこの作戦を頼みたい。タダでとは言わん。皇帝御料の半分を渡そうではないか」

「コウテイゴリョウ？」

「詳しくはリコレットに聞くがよい」

「……わかりました。ただ陛下、いつの間にそのような軍事知識を得られたのですか？　見事な慧眼かと思います」

「私ではない。ダイアナじゃ」

「ダイアナって……」

「ヴァイラスの妻じゃ。なかなかに軍事に精通しておる。あの顔で、軍のことに興味があるらしい」

そう言って陛下はカラカラと笑った。俺はその様子を見ながら、再び地図に視線を向けていた。

「ただこの砦……全く隙がありませんね。隙のない城は落としやすい……って誰かが言っていた記憶があるな。さて、ここを攻めるとなると……」

俺は顎に手を当てながら考える。やりたくはないが、これだけの砦……一度、見てみたい気がする。興味心が湧き上がってきた……。

そんな俺の様子を、陛下は満足そうな表情で眺めていた。

◆
◆
◆

「どうだ。我ながら壮観な眺めだ」

そう言って満足そうな表情を浮かべているのは、ロイスだった。彼は人化し、鎧を装備していた。その彼の隣で、地面に片膝をついているのは、妹のシャリオだった。彼女も同じく鎧を装備しているが、肩で息をしているためか、時おりカシャリカシャリと鉄が触れ合う音が聞こえてくる。

……全く、中の兄さまは、無理なことをさせる。

彼女は兄の無茶ぶりに呆れ返っていた。次々と堀と城壁を作ることを命じられたかと思えば、さらにその堀に細工を施せと命じられたのだ。

一見、簡単な仕事であるように見えた。兄の命令は、単に堀の中に溝を掘れと言うものだったからだ。だが、兄が見本で作ったものを見ると、それはかなり複雑な形をしていて、同じものを作り上げるのに、苦労したのだ。

そんな彼女には目もくれず、ロイスは新しく作った堀と城壁に視線を向ける。

「全く問題ない。完璧だ。さあ、仕上げに入ろうか」

彼は左手に魔力を集中させる。するとそこに、小さな火の玉が生み出された。それはゆっくりと彼の手を離れたかと思うと、突然高速で海の方向に向かって行った。

海と堀との境目から火柱が上がる。一瞬の間をおいて、爆発音と衝

撃が伝わってきた。

海から大量の水が流れ込み、瞬く間に堀は海水で満たされた。ロイスはそれを満足げな表情で眺めている。

「これで完成だ。この砦を見れば、必ずアガルタ王リノスは動く。これを見て食指を動かさぬ男は、取るに足りぬ凡将だ。優秀な男であれば、この砦の魅力がわかるはずだ」

そう言ってロイスはカラカラと笑う。そんな兄の様子を、シャリオは呆れたような表情で眺め続けた。

第四百四十四話　淫夢

白亜の城……その中の一室では、一糸まとわぬ肌を晒している、十名の男たちが整然と並んでいた。

筋骨隆々……。それだけではない。若さと美貌を兼ね揃えた、えり抜きの男たちだ。これだけの美々しい男たちが並んでいる姿は、まさしく壮観な眺めと言えた。

その男たちの前には、一人の女性が立っていた。彼女も彼らと同じく、一糸まとわぬ肌を晒している。

女性は、目の前に林立する男たちを満足げに眺めている。そして、ゆっくりと一人の男に近づくと、その体に唇をつけた。そうして彼女は、男たちの体を一人一人、丹念に賞味していく。

どのくらいの時間が経っただろうか。男たちは相変わらず微動だにしない。そのときふと、女性が男たちに目配せをした。すると、その中で最も屈強に見える男が、軽々と女性を抱え上げた。そして、その体勢のまま、彼女をゆっくりとベッドまで運ぶ。

まるで、二十人は一緒に寝られるほどの巨大なベッド……。その真ん中に彼女はゆっくりと横たえられた。その周囲には男たちが素早く控える。

「始めなさい」

女性の一言が発せられるや、男たちが一斉に彼女に襲いかかった。

凄まじい酒池肉林の光景が展開される……。

「……！」

女性はゆっくりと目を開ける。そこには、朝日が燦々と差し込んでいた。

「……また、だわ」

誰に言うともなく彼女は呟く。ここ最近は毎日このような淫らな夢を見る。その度に彼女は胸が締め付けられるような気持になる。いけない。こんな夢を見るようではいけない……。自分にそう言い聞かせながら、ゆっくりと頭を振る。

「お目覚めでしょうか？」

召使いと思しき女性が、恭しく彼女の傍にやって来て控える。その目はまるで、神を見るかの如く憧れの眼差しを湛えていた。

「少し、水浴びをします。着替えは、その後でいいですよ」

「畏まりました。あの……恐れ入ります。一つ、お知らせしたいことがございます」

「何でしょう」

「先ほど、書簡が参りました」

「書簡？」

「はい。アガルタ王様からの書簡でございます」

「……後で読みましょう」

「承知しました。それではあるじ様、水浴びが終わりましたら、お呼びください」

「その呼び方はやめてくださいとお願いしたはずです」

「でっ……でも……」

女性は戸惑いの表情を浮かべる。それはそうだ。目の前にいるお方は、神なのだ。絶対に侵すべからずの、この世を救うべき神なのだ。だが、彼女は、あるじ様は名前で呼べという。恐れ多い気持ちが湧き上がってくる。だが、その美しい眼差しはじっと向けられている。女性は、勿体ないという気持ちを押し殺すようにして、必死で口を開く。

「承知、しました。ヴィエイユ……様」

戸惑いの表情を浮かべながら退室していく女性の姿を眺めながら、ヴィエイユはクスリと笑みを漏らす。そして、ゆっくりと起き上がり、部屋に備えられているバスルームに向かった。

冷水を頭からかぶり、火照った体を覚まさせる。それから、何度も体に冷水をかける。これは彼女の習慣で、真冬でもこれは続けられる。しばらくすると彼女は、柔らかい布を手に取り、まるで磨き上げるようにして自分の体に擦りつけた。

「……ふう」

一連の作業が終わると、大きなため息をつきながら、鏡の前に立つ。我ながら美しい体をしていると思う。毎日冷水で磨き上げた体だ。まるで芸術品のように均整が取れている。

……この体を見て、ひれ伏さない男はいない。ただ一人を除いて。

彼女の脳裏には、アガルタ王リノスの顔が浮かんでいた。いつの日か、あのお方を自分の前に跪かせてみたい。泣きながら、自分を抱く許しを乞わせてみたいものだ。そうなれば自分は、名実ともに世界の王となれる……。

そこまで考えたとき、彼女の体が無意識に震えた。どうやら、寒さには勝てないらしい。もう少しこの素敵な妄想に浸っていたい欲望を抱えながら、彼女は予め用意されていた下着に手をかけた。

テキパキと身支度を整え、再び鏡の前に立つ。姿勢、身だしなみ、気品……一分の隙のないことを確認して、彼女は手を叩く。

「お呼びでございましょうか」

「執務室に向かいます。アガルタ王様からの書簡を持って来てください」

「承知しました」

召使いの女性の言葉に鷹揚に頷いた彼女は、足早に部屋を後にする。執務室まではそう遠くはない。彼女は部屋に入るや、自身の机ではなく、その前に設えられているソファーのような椅子に腰を掛けた。

周囲には、彼女の到着を待っていたかのように、近臣たちが控えている。一瞬の間をおいて、召使いの女性が一通の書簡を持ってきた。彼女はそれを受け取り、ゆっくりと目を通していく。

「……うふふ」

ヴィエイユは、リノスから送られた書簡を見て思わず笑みを漏らした。傍に仕える近臣たちは、そんな彼女に視線を向けることはないが、体全体で彼女の動きや心を感じようと意識していることは、手に取るようにわかる。

「ご褒美には、何をいただこうかしら」

誰に言うともなく彼女は呟く。その声を聞いて近臣たちは、主人の機嫌がいつも以上によいことを瞬時に察するのだった。ヴィエイユは、一枚の紙を取り出し、カリカリとそこに何かを書き入れるのだった。

◆◆◆

「……女狐め」

辛辣な言葉とは裏腹に、その表情には笑みが漏れていた。ヴィエイユからの書簡を手にしている、リノスだ。彼は困ったなという表情を浮かべながら、視線を宙に泳がせている。

「『ご褒美次第です』か。なかなか言うようになったな、あの小娘。俺の本気度を試していやがるのかな？　う～ん。から揚げ一年分では……おそらくダメだろうな。敢えて俺の体を差し上げますって書いた方がヤツは喜ぶんじゃないか？」

そんな言葉を吐きながら、彼は目を閉じて何かを考える。

「まあ、ヴィエイユが動く、動かないで作戦の内容が大きく変わってくるが……。ま、ダメもとだ。動かなければ動かないなりに、別の方策を考えればいい」

彼はそう呟いて、机の引き出しから一枚の紙を取り出し、そこにカリカリと何かを書きこみ始めた。

「ちょっとくらい意地悪をしてもいいだろう。これが読めれば、面白いんだがな」

そんなことを言いながら、彼はクスリと笑う。そして、ゆっくりと立ち上がったかと思うと、執務室の窓を開け、フェアリードラゴンを呼びだした。

◆　◆　◆

「……で、どんな返事をなさったのです？」

そんな問いかけをしているのは、リノスの妻のリコだった。彼女の傍らには、夫によく似た面立ちの子供が大の字になって眠っていた。言うまでもなく、二人の子供のイデアだった。

ママ大好きっ子の彼は最近、リコと一緒でなければ眠らなくなっていた。彼女はそんな息子の甘えん坊ぶりに不安を覚えていたが、リノスのそうしてやってくれという頼みもあり、一方でこの息子のかわいさのあまり、ついついそれを許してしまっていた。ただ一つの救いは、イデアはリコが添い寝すると、たちまちのうちに眠りにつ

いてくれる。その幸せそうな寝顔は、リコをして、心から癒してくれるものがあった……。

リコはまるで宝物を抱くように、大切そうにイデアを抱き上げて、傍らにある子供用のベッドに運ぶ。そして、優しく毛布を掛け、その柔らかな頬にキスをしてやる。しばらくの間、愛おしそうにその寝顔を眺めていたが、やがて彼女はリノスの待つベッドに戻ってきた。

「あまり無理はしないでくださいませ」

そう言いながら彼女はベッドに入り、リノスの胸に顔をうずめた。

「無理はしていないよ」

「それならばよいのですが……。どんな返事をなさったのです？」

「うん？　こんな感じで返したんだ」

リノスは枕元にある紙を手に取り、そこにカリカリと文字を書き入れ、それをリコに渡した。そこには、こんな文字が書かれていた。

うしてやる
とかいない
んつのぞに
けみをみか
せこよてい

リコはしばらくの間、紙を眺め続けていたが、やがて、アッと声を上げたかと思うと、呆れたような表情を浮かべながら、手に持っていた紙をリノスに返した。

「いけませんわ。こんなことをして」

「わかったか……。さすがはリコだな」

「少し考えれば、すぐにわかりますわ」

「そうか……。悩むと思ったんだけれどな……」

さも残念そうな表情を浮かべながら、リノスは紙をクシャクシャと丸め、くず入れに投げ入れた。

「でも、そんなことを考えつくリノスが、私は大好きですわ」

「……ありがとう」

「うふふ」

リコはにっこりと笑って、リノスの胸に顔をうずめた。その彼女の体を、リノスは優しく抱きしめた……。

第四百四十五話　ワーロフ帝国軍

一夜にして目の前の景色が変わっていた。その現状を理解するのに、しばらくの時間を要していた。

「……」

唖然とした表情を浮かべているのは、ヒーデータ帝国北方方面軍軍団長である、フレイラップ元帥だ。彼は口をあんぐりと開けたまま、両目を激しく動かし続けていた。

「申し上げます」

「……」

伝令の声に全く反応することなく、ただ、その場に立ち尽くす元帥。その様子を幕僚たちは不安そうに眺めている。

「申し上げます」

「……聞こえている。何だ」

伝令の兵士は、片膝をついて控えながら、心の中で舌打ちをしていた。

……元帥ともあろうお方が、兵士たちの前で呆けた面を見せるなど、あってはならないことだろう。

そんな失望とも侮蔑ともつかぬ思いを押し殺しながら、彼は早口でまくし立てる。

「ワーロフ陣営より、軍議を開きたいとの申し出が参りました」

「……すぐに行くと伝えよ」

「ハッ」

伝令が下がっていくが、元帥は茫然とした表情を崩すことなく、目の前の光景を眺め続けていた。

◆◆◆

一方のワーロフ帝国の陣では、幕僚たちが集まって軍議を重ねていた。

「わかりました。皆がそう言うのであれば、しばらくは静観することといたしましょう」

にこやかな笑みを浮かべているのは、一人の女性だった。副総司令官のシーワだ。彼女は類まれなる統率力でワーロフ帝国軍を再編し、帝国軍を世界でも稀に見る軍隊に育て上げたと言われている。

大抵、司令官に任に当たる者は、士官学校などを卒業した専門的な教育を受けた者が任官する。そのため、その任に当たる者は自ずと、貴族や軍事を担当する家の者が就くことになる。だが、ワーロフ帝国においては、そうした身分制度を徹底的に否定し、完全能力主義を導入していた。その中心となったのが、総司令官である、ゲシカナ将軍だった。彼は若い頃から、軍における身分制度撤廃を唱え、

能力主義を導入することに全力を傾けた。その努力は功を奏し、ワーロフ帝国軍ではあらゆる階層に立身出世の道が開かれることになった。能力さえあれば、出世できるという希望は帝国国民の向上心を高め、国内に活力を生み出すに至ったのだ。シーワ副総司令官は、ゲシカナ将軍のまさに右腕として、その非凡な能力を発揮し、厚い信頼を得ていたのだった。

居並ぶ幕僚たちは、厳しい選抜試験を潜り抜けてきた言わば、エリートたちばかりだった。彼らの軍議は大変に活発だ。ワイワイと意見を述べ合い、それをまとめながら作戦を立てていく。だが、一見すると、活発な議論が重ねられているようにも見えるこの軍議は、よく見ると、発言しているのは、幕僚たちの半数程度であり、残りの幕僚たちは口をつぐんだままだ。

「では、皆さ～ん。しばらくお休みくださぁ～い。フレイラップ元帥がお見えになりましたら、またお呼びしますねぇ」

甘ったるい声で幕僚たちに声をかけているのは、これも女性だ。小柄で、クリクリとした愛らしい目をしている顔立ちをしているこの女性は、司令官の一人である、ギギだ。彼女は副総司令官のシーワの妹であり、姉に勝るとも劣らない指揮能力を持っていた。彼女は両手を胸の前で合わせながら、幕僚たちに愛想のよい笑みを振りまいている。

「では、皆の者。しばらく休憩とする」

ゲシカナ将軍の声で、幕僚たちが頭を下げる。それを満足げに眺めた将軍は悠々とその場を後にした。その後ろを、シーワ副総司令官とギギが追っていく。

三人の姿が消えると、重苦しい沈黙が訪れる。誰一人として、その場を去ろうとする司令官はいなかった。

「のんびりと休憩などしていて、よいものか」

重々しく一人の司令官が口を開く。まるで相撲取りのような体躯を持ち、巨漢と言う表現がまさに適当なこの男は、帝国軍の先鋒を務めるチャンだった。彼は幕僚たちを見廻しながら、まるで問いかけるようにして口を開く。

「ドルガの様子は皆も見ただろう。空堀と思っていたところに、水を張られてしまった。落とすことはさらに難しくなった。我々が手をこまねいているうちに、敵は着々と準備を整えつつある。我らがこのまま何もしないでいることは、敵にさらに準備を整える機会を与えているにすぎぬ」

彼は、隣に控える幕僚に視線を向ける。

「オイ、ワーカ。お前はどう思うのだ？」

先程からずっと腕組をしていた男に、チャンは語りかける。

「そりゃ、私だって何とかしたいですよ。でも、司令官殿は俺の意見など聞きはしませんやね。やって無駄なことは、やらないでおくのが一番でさぁ」

「あんな女狐の言うことを聞いておっては、我らは犬死するぞ」

「まあ、そうしないように、何とか知恵を絞るしか手はありませんやね」

「手立てはあるのか？」

「ないことはありませんが、バレると厄介なんですよね……」

「取りあえず、お前の作戦を聞こうか。オイお前たち、絶対に上にバラすなよ」

チャンの言葉に、幕僚たちは大きく頷いた。

◆　◆　◆

「……さあ、ヒーデータはどう出るかな？」

「帝都に十万の援軍要請をしたようですし、きっと、今以上の大軍を送り込んでくるでしょう」

「そうか。攻撃は、ヒーデータの援軍が到着してから、だな」

「ええ。我らが血を流すのは最小限に留めませんと」

総司令官室の中で会話を交わしているのは、ゲシカナ将軍とシーワ副総司令官だった。椅子に座りながら口を開いている将軍の前にシーワは立ち尽くしている。その彼女の体には、ゲシカ将軍の手がまるで這い廻るように触れられている。その手を払いのけようともせず、シーワは言葉を続ける。

「ただ、我々が全く血を流さないと言うのも、外聞が悪いですわ。ある程度の犠牲は必要ですね」

「まあ、そうだろうな。それについては……任せる」

そう言って将軍は彼女を抱き寄せ、荒々しく鎧を脱がせていく。その様子をシーワは冷たい目で眺め続けていた。

既に将軍は男性としての役割は担えない状態だった。とはいえ、欲望はある。彼は女性の肌を見て、そこに手を触れることで、その欲望を抑えている。それを十分に承知している彼女は、心の中で嘯いていた。

……ただ、触らせるだけで私の思い通りに動いてくれるのなら、いくらでも触らせてあげる。

彼女は優しく将軍の頭を抱きしめた……。

◆　◆　◆

「はぁ～い、どうぞぉ～」

甘ったるい声が部屋の中から聞こえる。それを受けて、一人の男が素早く部屋に入ってきた。

「遅～い。何をしていたんですかぁ～」

ギギの声に、男は体を震わせる。司令官の一人であり、補給を担当するトーイッツだった。彼は見目麗しい顔立ちを真っ赤に染め、恥ずかしそうに俯いている。そんな彼の前に、ギギは仁王立ちをするようにして、立ち尽くす。

「で、他の方の動きわぁ？」

「ええと……。チャン司令官が、一刻の猶予もならぬと」

「それでぇ？」

「ワーカ司令官が、作戦を立てられまして……」

「へ～え。詳しく教えてくださぁい」

彼はオドオドとしながら、先程聞いた話を語って聞かせる。ギギの眉間にシワが刻まれていく。

「相変わらず、あの二人は的外れなことを考えますねぇ。ま、いいでしょ。あの二人については、私が何とかしましょう」

ギギの声に、トーイッツはひたすら俯きながら、体を震わせている。そんな彼の様子を見たギギはクスリと笑みを浮かべる。

カシャン……カシャン……プチ……プチ……フワサ……。

トーイッツの耳に、そんな音が断続的に聞こえてくる。しばらくすると音は聞こえなくなり、静寂が訪れる。

「さあ、どうぞぉ」

ギギの声が突然響き渡る。それと同時に、彼女の右手がトーイッツのあごの下に添えられた。彼女は彼の顎をクイッと上げる。そこには、一糸まとわぬ裸になったギギの姿があった。

「ご褒美です」

「でっ……でも……」

「休憩時間は、たっぷりありますからぁ」

その言葉を聞いた彼は、まるでロボットのようにたどたどしい動きで、ギギの体を抱きしめたのだった……。

第四百四十六話　食えない女

結局、ヴィエイユからは、期日を過ぎても何も言ってこなかった。どうやら、俺が送った文章を解読できなかったようだ。あれから五日待ってみたが、彼女からは何のアクションも見られなかった。

「さてさて、ヴィエイユが動かないとなると、どうしようかね……」

俺は執務室で一人、そんなことを呟きながら、天を仰ぐ。そのとき、窓の外にサダキチの姿が見えた。俺は窓を開けて彼を迎え入れる。

『どうした？』

『バーリアル軍が兵を動かしました』

『ほう』

『ドルガの北、ヒヤマという場所に砦を築き、そこに兵を入れました』

『何？』

俺はワーロフ帝国の地図を手にして、それを机の上に広げる。

「また、えらいところに砦を築いたな……。これで、バーリアル軍は秘密裏に海に出て、ヒーデータを攻めることが可能になったわけだ。まあ、いきなりそんな乱暴なことはしないだろうが、陛下は頭の痛い問題がまた一つ増えたことになるな」

誰に言うともなく、俺は呟く。

『ご苦労だった、サダキチ。引き続き、バーリアル軍の動きを見張ってくれ』

『はっ』

『あ、あと、ヴィエイユの所に誰か行かせてくれ』

『すでに、見張りを入れております。特に動きらしい動きは……』

『そうじゃない。ヴィエイユ本人のところに、誰か行かせて欲しいのだ。俺へ手紙を出そうとしているかもしれないんだ』

『承知しました』

俺はサダキチに干し肉を与える。彼はそれを口にくわえると、スッとその姿を消した。

「それにしても、実に優秀な指揮官がいるんだな、敵には。きっと、新しく作った砦も、色んな仕掛けを施すのだろう……。やっぱり、実際に行ってこの目で見ないと、何とも言えないよな……」

そんなことを呟きながら、俺は椅子に座る。そして、再び天井を向いて、目を閉じる。

「あとは、皇帝御料の問題だな……」

リコに聞くと、皇帝御料とは、ヒーデータ帝国皇帝が所有する財産

のことらしい。何かコトが起こったときに、国家予算が足りなくなることがある。その時のために、毎年国家財政の数パーセントを、皇帝御料として蓄えているのだそうだ。

今回陛下は、その半分を持って行けと言った。その額たるや、アガルタの国家予算の十年分に相当するのだという。その話を聞いたリコの目がキラリと光ったのを俺は見逃さなかった。きっと彼女の中には、その金の使い道が頭の中ではじき出されていたのだろう。

それだけの報酬が約束されたとはいえ、ワーロフ帝国が破れ、国が蹂躙されてしまえば元も子もない。あくまで俺の予感だが、今回の敵は、これまでとは一味も二味も違う気がする。下手をすれば、俺たちも痛打を被りかねない予感がするのだ。

「援軍……か。どうせなら、少数精鋭だよな」

俺は小さく呟くと、机の上の鈴を鳴らす。そして、外に控えている兵士に、クノゲンとマトカルを呼ぶように伝えたのだった。

◆◆◆

「あの……誠に恐れ入ります」

会議をしている最中、兵士の一人が申し訳なさそうに執務室に入ってきた。一体何事かと、俺たちは顔を上げる。

「お……お客様が……お見えです」

「客？　誰だ？」

「私です。ごめんくださいませ」

兵士の後から入ってきたのは、何とヴィエイユだった。予想外のことに、俺は思わず固まる。

「これはヴィエイユ様、お久しぶりですな」

俺の狼狽ぶりをよそに、クノゲンがにこやかに声をかける。彼女はこぼれるような笑みを彼に返している。

「突然の訪問、お許しくださいませ。手紙でやり取りをしておりましては、時間がかかって仕方がありません。そのため本日は失礼も顧みず、お邪魔させていただきました」

そう言って彼女はスタスタと俺の傍にやって来る。純白の、チャイナ服のような衣装を身に着けている。胸元は隠れているが、その豊満な乳房はしっかりと形が見える。下着は着けていないのだろうか。そんなことを考えていると、兵士の一人が、椅子を持って来る。彼女はにこやかに礼を言って、俺の隣に座った。

「アガルタ王様、お久しぶりでございます。お会いしたかったですわ」

そう言いながら、彼女は俺の太ももに左手をスッと乗せる。俺はすぐに立ち上がり、机に向かい、そこに置かれている鈴を鳴らす。すぐに兵士が入室してくる。

「すまないが、飲み物を持って来てくれないか。俺は温かいミルクでいい。他は……同じものでよさそうだ」

兵士は恭しく一礼をして、部屋を出て行った。

「さて、どこまで話をしたっけな？　その前にヴィエイユ、よく来たな。以前に会ったときより、さらに美しさに磨きがかかったように見えるな」

「ホホホ、ご冗談を。アガルタ王様、心にもないことを言わないでくださいませ」

「そんなことはない」

「お話に全く心がこもっておりませんわ」

「そうか？　まあいい。ところで、何をしに来た？」

「先日のお手紙の返事を申し上げに参りました」

「返事？」

「はい。我が新クリミアーナ教国は、アガルタ王様にお味方いたします。ご指示に従い、我が海軍を派兵いたします」

「……そうか。そうしてくれれば、助かる」

「具体的には、どのように致せばよろしいのでしょう？」

俺は机に広げている地図を指さす。

「この海峡を封鎖してもらいたい。特に、補給船は絶対に通さないようにしてもらいたい」

「そのくらいのことでしたら、造作もないことですわ」

「そうか。お前のいる所……アフロディーテだっけ？　そこからこの海峡まで、船でどのくらいかかる？」

「約……二週間と言ったところでしょうか」

「そうか。ならば、すぐに立ち返って準備にかかってくれ。俺たちも、ヴィエイユ達が到着する頃に合わせて動くことにしよう」

俺の言葉に、クノゲンとマトカルはゆっくりと頭を下げる。

「ところで、アガルタ王様」

「何だ？」

「報酬の件ですが……」

「結局、期日までに何も言ってこなかったな。俺の手紙に書いた暗号は解けなかったのか？」

「いいえ。解けました。真ん中の文字を先頭に、ぐるりと右回りに読んでいけば、すぐに答えは出ました」

「……相変わらず、食えない女だな」

「報酬は考えましたが、アガルタ王様が承知するものは思い浮かびませんでした。そこで、私から提案がございます」

「提案？」

「是非、アフロディーテにお越しください。以前よりも美しく、機能的な都市に生まれ変わっております。そしてそこで、学会を開いていただきたいのです」

「学会？」

「以前、アガルタ王様とメイリアス様が発表されたではありませんか。あの学会を、新装なったアフロディーテで開催いただきたいのです。無論、全世界の国々に声をかけていただいて構いません」

「ハッハッハ。考えたな。全世界の国々から人々を呼んでおいて、アフロディーテの繁栄を見せようってか？　宣伝効果としちゃ、抜群だわな。……いいだろう。ちょうど、フラディメ国のリボーン大上王から学会開催の要請が来ていたところだ。前向きに検討しよう」

俺の言葉に、ヴィエイユは恭しく頭を下げた。

「ところでヴィエイユ。お前、どうやってここに来た？　それに……この迎賓館に入るためには、許可がなければ入れないはずだが？」

俺の言葉に、彼女はニコリと微笑む。

「こちらには、アフロディーテにおいでになるポーセハイにお力添えをいただきまして、転移して参りました。そして、こちらには、これを見せて、中に入れていただいたのです」

そう言って彼女は懐から一通の書簡を取り出す。それは、俺がヴィエイユに宛てた書簡だった。

「警備の方には、私が誠心誠意ご説明申し上げましたら、ご理解をいただきました。ご納得いただけないこともあろうかとは思いますが、どうぞ、兵士の皆様を罰せないでくださいませ」

「マジで、食えない女だな、お前は」

そう言って俺は、呆れた表情を浮かべながら、ゆっくりと首を振った。

第四百四十六話　食えない女（後書き）

『結界師への転生』コミカライズ第七話、本日公開です（ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ？ｃａｔｅｇｏｒｙ＝１４）

こちらも是非、ご覧ください！

第四百四十七話　道草

「……全く問題ありませんね」

落ち着いた声で微笑みを浮かべているのは、アガルタ王リノスの妻の一人であるメイリアスだった。彼女は机の紙にカリカリと何かを書きこんでいる。その彼女の前に立っているのは、誰あろう、ヴィエイユだった。

彼女はリノスとの会談を終えた後、メイの診察を望んだ。以前罹患したルロワンスの状態を確認したいというのが理由だった。リノスは苦笑いを浮かべながら、好きにするがいいといって、家来の一人にメイの許に案内するように命令したのだった。

メイはヴィエイユに会うなり、お元気そうで何よりですと言って、満面の笑みを浮かべながら彼女の手を握った。その手は温かく、とても軟らかかった。

……知的レベルは最高レベル。臆病、ではなく謙虚。覚悟したときの行動力は抜群。

ヴィエイユは笑顔でメイと会話を交わしながら、そんなことを考えていた。これは、彼女の悪癖にして最高の武器であり、この卓越した人物観察能力のおかげで、今の彼女があると言ってよかった。

一糸まとわぬ裸の状態で、彼女はじっとメイの横顔を観察する。ペンを動かすその顔は情愛に満ちている。世間で「聖女」や「大賢者」と呼ばれるだけあって、体中から知性が溢れ、同時に、何とも言え

ぬ優しさがにじみ出ている。この女性は、何度も命の危機に晒される……と言った、人には言えない苦労を重ね、乗り越えてきた。毒薬を作り、多くの人を死に追いやった罪で犯罪奴隷にまで堕とされたのだ。そこから現在の地位を築いたのは一体何だったのか……。ヴィエイユは聡明な頭脳を駆使して思考する。

「あ、ごめんなさい。服を着ていただいて構いません」

気が付けば、メイの真っすぐな瞳が向けられていた。その目には、自分の体には全く興味を示していないことがよく見て取れる。磨きに磨き上げたこの体は、女性でさえも陶然とさせる自信があったのだが、彼女には全く通じていないようだ。

「ここ最近、私も年を取りました」

「ご冗談を」

ゆっくりと衣装を身に着けながら、ヴィエイユは呟く。メイはニコリと微笑みながら返答している。

「いいえ。1～2年前までは、私の体を見れば、女性でさえもうっとりとしたものですが、ここ最近はそういうこともなくなりました。肌が衰えているのでしょうね」

「そうでしょうか……。触診しましたが、お肌の状態はとてもいいと思います。適度に水分を含んでいると思います。きっと、日々、丁寧にお手入れをされているのでしょう。わかります」

……この方は、性的なことに興味がないのだろうか？

あまりにも的を射た答えに、思わずヴィエイユはそんなことを考えてしまう。いや、だが、この女性は、アガルタ王との間に娘をもうけている。それどころか、その腕、顔、首筋……。体の隅々にまで瑞々しさが溢れている。これは日々の生活が充実している証拠だ。ヴィエイユの経験上、こうした人物を篭絡することは難しい。心に付け入るスキがないからだ。

服を身に着けながらふと、この聖女は、夫とどのような夜を過ごしているのだろうかと想像する。

白衣に隠れているが、その体はとても豊満であることがよくわかる。この顔のタイプは、唯々諾々と夫の望むままになっていることは少ない。むしろ、自分から積極的に求めに行くこともあるはずだ。一方でメイリアスの持つ明晰な頭脳をもってすれば、夫の心を敏感に読み解くことは難しくないだろう。察するに彼女は、夫の欲望を敏感に捉えてその望みをかなえつつ、自分の欲望も上手に満たしているのだろう。ヴィエイユの脳裏に、この夫婦の姿態が鮮やかに描き出される。

……いけないいけない。そんなことを考えては、ね。

そう自分に言い聞かせながら、心の中で苦笑いを浮かべる。心を落ち着かせるために、息を大きく吸い込む。

「もう少し、楽しまれたらよいかと思います」

不意にメイがそんなことを言い出す。さすがのヴィエイユをして、その言葉の意味がわかりかねた。

「何となく、ですが、ヴィエイユさんは少し頑張りすぎている気が

します。たまにでいいですから、仕事や色々な雑務を一切忘れて何かを楽しむ時間を作られてはどうでしょうか？　何でも構いません。美味しいものを食べる、いい景色を観る、気の合う友人と楽しくおしゃべりをする……。そんなことで構いません」

メイの言葉に、ヴィエイユは戦慄する。ここ最近見る、淫らな夢の原因がわかったような気がしたからだ。まさかこの女性は、自分の心の中をすべてを見透かしているのではないか……。一瞬そんな不安を覚えたが、ヴィエイユは素早く頭の中を切り替える。

「そうですね。ご助言、感謝申し上げます」

にこやかに頭を下げて、ヴィエイユはその場を辞した。

◆　◆　◆

アガルタ大学の職員に案内されながら、ヴィエイユは静かに廊下を歩いていた。思ったような結果は得られなかったが、これは想定内だ。できれば、アガルタ王の情報を得たかったというのが正直なところだ。だが、リノスとメイの夫婦仲は順調であるらしいことがわかった。これまでで得ていた情報では、リノスの最愛の妻はリコレットということになっていたが、どうやらそれは一概には言えないようだ。妻の役割には色々とあるが、メイはどちらかと言えば、夫に癒しを与える役割を担っているのだろう。こういう女性は男性に好かれるし、アガルタ王もその例に漏れないだろう。

……メイリアスというカード。最悪の場合に、使える。

長い廊下を歩きながら、そんなことを考える。だが、その切り札は諸刃の刃だ。使い方を間違えると、その身を破滅させる可能性が高

い。かつてクリミアーナ教国が犯した、あのときのように……。

慌てない慌てない。まだ、時間はある。ゆっくり綻びを探せばいい。

リノスの篭絡を悲願とするヴィエイユ。その目的が世界の王になるためであるのか、彼の愛を受けたいという欲望であるのか……。彼女自身も、今は明確に意識をしていなかった。それがわかるのは、まだ先のことだった。

突然、ヴィエイユの頭に閃くものがあった。彼女は少し胸をときめかせながら、前を歩いている大学の女性職員に声をかける。

「あの、恐れ入ります。一つ、ご案内いただきたいところがあるのですが」

怪訝な表情を浮かべて振り返る職員に、ヴィエイユは満面の笑みで口を開いた……。

◆◆◆

「すごい……上手だ……君は、本当に初めて？」

「初めてだって言っているじゃない」

「その割には……」

「さあ、次はあなたの番よ」

「任せてくれ。全く痛くないようにしてみせる」

「……ッ！　いっ……痛い！　ちょっと……抜いて……」

「嘘だ。痛くはないだろう？」

「痛い……わよ……血が出ている。一旦抜いて」

「……すまない」

ヴィエイユの目の前には、二人の男女の姿があった。女性は眉間に皺を寄せながら不機嫌さを露わにしている。一方の男性は、さも、申し訳なさそうな表情を浮かべながら白い、布のようなものを女性に渡そうとしているが、思いっきり拒否されている。

「さあ、もう一回よ」

「でも、血が……」

「大丈夫。もう一回……」

「ううう……」

困ったような表情を浮かべているのは、サンダンジ国の皇太子であるシンだった。彼の手には注射器が握られている。

「あの……何をされているのですか？」

ガラス一枚を隔てたところから、ヴィエイユはその光景を見ていた。二人の男女が互いの腕に注射を打ち合う姿は、彼女の理解を超えるものだった。

「練習です。医者になるためには、注射の技術は必須です。我がアガルタ大学では、患者に痛みを与えずに注射をする技術を徹底的に習得させています」

「回復魔法をかければ事は済むのではないですか？」

ヴィエイユの言葉に、女性職員は一切表情を変えずにゆっくりと首を振る。その様子に彼女は少し圧倒されながらも、再びガラス越しに見えるシンたちに視線を向けた。

オドオドと自信なさげに、女性と共に注射の練習をするシン。その様子を見て、ヴィエイユはクスリと笑みを漏らすのだった……。

第四百四十八話　解釈

結局、ヴィエイユはシンに一言の言葉もかけることなく、アガルタ大学を後にしていた。彼女は、彼の振る舞いを見るにつけ、その心を奪うことは簡単だと確信した。彼の心はすでに奪っている。もう一度、自分が甘い声で愛を囁けば、彼はすぐに全てを投げ出すだろう。だが、今はそのときではない。それは、一番タイミングのいいときにすればいいことだ。

それよりも、先にやるべきことがある。まずは、それをいかに早くやり遂げるかが肝要だ。

そんなことを考えながら彼女は、自身の城に戻っていった。

◆　◆　◆

「……？　何を言っているのだ？」

「ですから、新しい砦が築かれております！」

怪訝な表情を浮かべているのは、ヒーデータ帝国北方方面軍団司令官である、ライッセン元帥だ。彼は食事の最中であったためか、スプーンを持ったまま、固まっている。そんな彼に伝令は、冷たい視線を向けながら言葉を続ける。

「ドルガの北西に突然、砦が築かれているのです！」

「……」

元帥はまだ、言葉の意味がわからないといった表情を浮かべながら、隣の幕僚に視線を向ける。

「どの辺りだ？」

「はっ、失礼します」

幕僚の声に、伝令の男は立ち上がり、机の上に広げられた地図を覗き込む。

「この辺りになります」

「どちらかと言えば、ドルガ……というよりも、バーリアル本国を防衛するための砦……か？」

「規模としては大きくはありませんが、堀で囲まれていますので、かなり厄介であるかと思います」

「昨日までは、なかったのだな？」

「左様です」

「わずか一日で……」

幕僚は驚いた表情を元帥に向ける。彼は黙々と食事を摂っていた。

「閣下、いかがなさいます？」

「ううん？　ドルガの後方に位置する砦であろうが。放っておけ」

「しかし……ここに砦を築かれると、西からドルガを攻撃することが困難になります」

「それで？」

「ドルガを落すことが難しくなります」

「それは、我らには関係のないことだ」

「何と言われます？」

「我々はあくまで援軍に来ておるのだ。ドルガをどう落とすのかを考えるのは、ワーロフ側だ」

「お言葉ですが閣下、我らも援軍に来ている以上、ある程度は作戦に関与しませんと、ワーロフ側に我らはいいように扱われる恐れがあります」

「拒否すればよい」

「は？」

「我らが気に入らぬ作戦であれば、拒否すればよいのだ」

そう言いながら彼は、傍らにあったグラスを手に取り、グイっと一気に飲み干した。そんな彼を、幕僚と伝令は茫然とした表情で眺め続けた。

◆　◆　◆

「どうだ。我ながら見事な出来栄えだ」

そう言って笑うのは、黒龍であるロイスだった。その隣には妹のシャリオが控えている。

「中の兄さま……。あまり派手にやりすぎると、龍王に……」

「お前は気が小さいのだな」

ロイスはそう言ってカラカラと笑う。龍王に気付かれぬように最小限の力でやっているのだ。この自分が、そんなドジを踏むことはない。そんなことを考えながら、彼は眼下に広がる砦に視線を向ける。

我ながら、なかなかの出来栄えだ。海水を曳いて堀に水を溜めたことで、この砦も難攻不落となった。ドルガとこの砦……。この二つの要塞があれば、ワーロフ帝国が陥落するのは時間の問題と言えた。

「しかし、骨のない奴らだな。てっきり、死に物狂いでこの砦を奪いに来るかと思ったが、敵に動く気配は全くない。この砦の意味がわからんのか、それとも何か策があるのか……。きっと前者だろうな」

そう言って彼は再びカラカラと乾いた笑い声をあげる。

「だが、これは見る者が見れば、必ず惹かれるはずだ。シャリオ……お前が目を付けた男は、どうだろうな？」

「必ず気付く」

「ほう、やけに言い切るな」

「必ず、気付く」

大きく頷く妹を横目で見ながら、ロイスは目の前に広がる広大な大地に視線を泳がせた。

◆　◆　◆

「砦……か」

敵が新たに砦を築いたという報告は、ワーロフ側にも伝わっていた。腕を組みながら天を仰いでいるのは、ゲシカナ将軍だった。彼自身も、敵が何ゆえにこのような位置に砦を築いたのかがわかりかねていた。

「まあ、一日でこれだけのものを拵えるのですから、それなりに重要な意味があるのでしょう」

そう発言するのは、副総司令官であるシーワだった。彼女は一つの違和感を覚えていた。ドルガの北西……しかも、バーリアルに近い位置に砦を作っている。一見すると、本国を守るために作られたように見えるが、きっとそれだけではない。何かがあるはずだ……。だが、考えても答えは出ない。彼女は喉に魚の骨が刺さっているかのような、何とも言えない感覚を覚えながら、居並ぶ幕僚たちに視線を向ける。

「ところで、ヒーデータからの増援の状況は？」

……彼女の質問に答えるものは誰も居ない。

「すぐに確認してください」

彼女の言葉に、幕僚の一人が恭しく頭を下げ、足早に部屋を後にしていった。その後、シーワは次々と指示を出していく。やがて、部屋にはゲシカナ将軍とシーワ副司令官、その妹のギギ、チャン司令官、ワーカ司令官、トーイッツ司令官の六人が残った。

「この砦……やり方によっては、我らを挟み撃ちにすることができないか？」

チャンが突然声を上げる。彼はじっと地図に視線を向けていたが、やがて立ち上がって、地図を指さす。

ドルガとこの砦に兵を二分する。そして、ドルガ側から船で南に下れば、我らの背後に回ることができる。そうしておいて、この砦から残りの一隊で我らを突けば、挟み撃ちとすることができる」

「その可能性は？」

「何？」

シーワ副総司令官が不機嫌そうな声で質問している。その刺々しい物言いに、チャン司令官も思わず不愉快そうな声を上げる。

「可能性はどのくらいですか？　絶対と言い切れますか？」

「絶対など……言い切れるわけがなかろう」

「私たちは兵士の命を預かっているのですよ？　そんな不確かな作

戦を実行することはできないでしょう？」

「何も俺の作戦を実行しろなどとは言っていない。あくまでその可能性があるのではないかと言っているのだ」

「チャンさんは司令官です。司令官の言葉は重いのですよ？　あなたは単に提案しただけだと言われましたが、先程の物言いは完全に言い切っていました。まるで、自分の作戦が正しいかのように言っておいででした。気を付けてください？　私が副総司令官だからこうして注意ができますが、それ以外の方ですと、その意見は採用される恐れがありますよ？　言葉の使い方には細心の注意を払ってくださいと、前々からお伝えしていますよね？」

シーワの声に、チャンは眉間に皺を寄せながら彼女を睨みつけている。その隣に控えているワーカ司令官は、目を閉じながら小刻みに首を左右に振っている。

「チャン、お前は歴戦の戦士だが、今は司令官という重い立場だ。昔とは違うのだ。立場の違いを意識するのだ」

ゲシカナ将軍の言葉に、チャン司令官はゆっくりと頭を下げた。

しばらくして、司令官たちが戻ってきた。全員が揃ったのを確認したシーワ副総司令官は立ち上がり、よく通る声で全員に語りかけた。

「先ほどの砦の話ですが、このままでは我々は挟み撃ちにされる可能性があります。ドルガの部隊が海を南に下れば、我々の背後を突くことができます。そのとき、砦の部隊が我々を襲うと、我々は前後に敵を受けることになります。そうならないように、一刻も早くヒーデータの援軍が必要になります。キーグさん、ヒーデータ側は

何と言っていましたか？」

「ハッ、まだ、本国より増援の一報は来ていないとのことでした」

「急がせてください」

「はい、すでにそのように申し伝えました」

「わかりました」

満足そうな表情を浮かべるシーワ。その彼女をチャンは鋭い目で睨みつけ、隣に控えるワーカは、苦笑いを浮かべるのだった……。

第四百四十九話　出向

「フム……なるほど。そなたがそう言うなら、余は何も言わん」

顎に手を当てながら俺を眺めているのは、陛下だった。俺は今、ヒーデータ帝国の宮城（きゅうじょう）に来ていた。陛下の両隣には、宰相閣下とヴァイラス公爵が控えている。その公爵の隣には、見目麗しい美女が控えていた。公爵の妻であるダイアナだ。

俺は陛下に、ワーロフ帝国のドルガ奪還に当たっては、現地調査をしたいと提案した。地図だけではどうしようもなかったのだ。僅か一日で築かれたという砦も気になっていた。直感的に、アガルタの精兵を伴ってドルガまで出張するよりは、まずは、信頼する者を連れて現地を見て、作戦の詳細を考えた方がいいと考えたのだ。人知を超えた都市と砦だ。やみくもに手を出すのは避けた方がいい。

陛下は俺の言葉に大きく頷いている。そして、宰相閣下と公爵に視線を向ける。二人とも同意を示すかのように恭しく頭を下げている。

「アガルタ王様」

美しい、凛とした声が聞こえた。これはダイアナだ。目がとても美しい。吸い寄せられそうだ。

「不躾ながらお尋ね申し上げます。お連れになるのは、どの御方でございますか？」

「まず、アガルタ軍総司令官のクノゲンを連れて行きます。それと

……妻の一人である、マトカルを連れて行きます」

「御三方だけ……でしょうか？」

「何か？」

「もう一人、お連れになった方がよろしいかと存じます」

「その理由を承りましょうか」

「三人ですと、一人が反対意見を言っても、残りの二人に押し切られる危険性があるからでございます。それでなくとも、アガルタ王様とマトカル様はご夫婦……。四人ですと、同じ状況になった場合、残りの一人が仲裁に入るか、助けに入ることができるからでございます」

「……なるほど。では、もう一人、連れて行くことに致します」

「フレイラップには増援軍と共に、アガルタより数名の軍関係者を派遣すると言っておく」

「お言葉ながら陛下」

言葉を続けようとするダイアナを、ヴァイラス公爵がとどめている。

「公爵、よい。余も、ダイアナ殿の意見を聞きたい。のう、義弟殿？」

陛下が俺に賛同を求めてくる。俺も同じ気持ちだったので、ここは恭しく頷いておく。

「先ほど、陛下は元帥様に、アガルタより軍関係者を派遣すると言われましたが、それはおやめになった方がよろしいかと存じます」

「ほう、では、何と言えばよい？」

「元帥様は援軍を求めておいでです。軍勢が来るものと考えておいででしょう。ですから、たとえ僅かでも、軍勢を差し向けると言われた方が、士気は上がるかと存じます」

「何と……帝国の増援軍では足りぬと申すのか？」

「恐れながら……。聞けば元帥様は十万の軍勢を希望されたとか。今回、派兵されるのは二万と聞き及びます。これでは、元帥様の士気が落ちるのは必定。そうならないためにも、アガルタの精兵が援軍に来ると言われた方がよろしいかと存じます。練度の低い二万の烏合の衆より、百戦錬磨の一千の兵士の方が役に立つこと……元帥様も十分承知のはずでありましょうから」

彼女は美しい眼差しをスッと俺に向ける。

「アガルタ王様も、ある程度の兵士はお連れになった方がよろしいかと存じます。そうなさいませんと、突然一団を預けられて指揮を執れと言われる可能性がございます。思い通りに動かない軍勢……指揮官にとってこれほど扱いにくいものはございませんでしょうから……」

「ハッハッハ！　なるほど、言われる通りですね。わかりました。アガルタの精兵を連れて行きましょう」

「すまぬな、義弟殿」

「いえいえ。ダイアナ様は素晴らしい慧眼をお持ちです。俺も勉強になりました。……ヴァイラス様、あなたはいい奥様をお持ちになりましたね。大事になさってください」

俺の言葉に公爵は、戸惑いながら頭を下げた。

「陛下としては、願ったり叶ったりの展開になったのではないですか？」

俺は意地悪そうに尋ねる。その質問が予想外だったのか、陛下はキョトンとした表情を浮かべている。

「陛下としては、俺たちアガルタに軍勢を出させたかった。だが、立場上それは言いにくかったでしょう。だが、ダイアナ様のお蔭で、それが叶った……。違いますか？」

「フッ……フハハハハハ！　そうじゃな。その通りじゃな」

そう言って陛下は、ダイアナに向き直る。

「この度のこと、感謝する。これからも我らを助けてくれ」

陛下の言葉に、ダイアナは恭しく頭を下げた。

◆　◆　◆

アガルタに帰った俺は、早速、クノゲンとマトカルを呼び、陛下とのやり取りを報告する。

「兵士を連れて行くのは賛成だ。私もそれがいいと思っていたところだったのだ」

「何だマト、それならそうと言えばいいじゃないか」

「いや、一度リノス様が決定されたことだ。言うとしても、人のいないところで……」

「ベッドの中で言うつもりだったのか？」

「なっ……そっ……いや……」

マトカルは顔を真っ赤にして俯いてしまった。どうやら図星だったようだ。何だか俺も恥ずかしくなってきた。そんな俺たちをクノゲンは笑顔で眺めている。

「オホン、ただ、兵士を連れて行くことは賛成だが、司令官をもう一人となると……誰を連れて行くべきだろうか」

「まあ、指揮能力で言えばラファイエンスだが、あの人はもう、引退してしまっているからな」

「そうですな。兵士の訓練が今のあのお方の生きがいになっておりますからな」

「と、なると……」

「ルファナちゃんを連れて行こうか」

「我が妻を……でしょうか？」

俺の提案にクノゲンが目を丸くして驚いている。

「彼女はかなり指揮能力が高いと俺は見た。こういう人知を越えて作られた城塞や砦を見る機会は滅多にない。今後も軍務を続けるのであれば、見ておくに越したことはないだろう」

「は……はあ……」

「それに、愛する夫が長い間留守にするというのは、彼女にとっても寂しいだろうし、クノゲン、お前自身にもいらぬ疑いがかけられてはたまらないだろう？」

「そ……それは……」

「俺がマトを連れて行くのは、そのためでもあるんだ」

俺はクノゲンにウインクをする。彼は笑顔で頷いている。

「それに、お前たちは新婚旅行をしていないだろう？」

「シンコンリョコウ？」

「まあ、何だ。せっかく結婚したんだ。夫婦としての思い出を増やすには、いい機会だろう」

俺はマトカルにも視線を向ける。

「マトも、二人っきりでどこかに行くっていうのはなかったんじゃ

ないか？」

「別に……私は……」

「せっかくだ、俺たちも旅行をしながら何か、思い出を作ろう」

「う……う……」

マトカルは顔を真っ赤にして俯いている。アガルタの都からドルガまで約一週間の行程だ。サダキチに転移石を持たせれば、わずか数秒でそこに転移することはできるので、何も無理をして行軍をする必要なないのだが、俺としては、どうせ軍勢を連れて行くのであれば、ヴィエイユの到着と合わせたいという思いがあったのだ。

「兵士たちの選抜は、クノゲンとマトに任せる。えり抜きの精鋭たちを連れて行くが、将来的に見込みのある者も選んでもらって構わない。規模は一千とする。兵たちには……出向と言っておけ」

「出向？　出兵……ではなく、か？」

「ああ。時と場合にはよるが、戦闘する気はないんだ」

「すまないリノス様、出兵と出向、何が違うのだ？」

「行った先で戦いをするのが出兵、ブラブラ行って帰ってくるのが出向だ」

「なっ……何と……」

「とはいえ、一応は遠征だ。単なる物見遊山にならないように、気

をつけないといけないな」

俺の言葉に、クノゲンとマトカルは、戸惑いながらも、ゆっくりと頭を下げた。

第四百五十話　意図

ワーロフ帝国軍の陣で、四人の男女が黙ったまま視線を宙に泳がせていた。ゲシカナ将軍、シーワ副総司令官、ギギ司令官、トーイッツ司令官の四人……。彼らは視線を合わせることなく、それぞれがただ、それぞれがあらぬ方向に視線を泳がせていた。

「まあ、仕方がないだろう」

口を開いたのは、ゲシカナ将軍だ。彼は大きなため息をつきながら、周囲を見廻す。

「仕方がない、ではいけないでしょう」

不機嫌さを隠そうともせず発言しているのは、シーワだ。いつものような甲高い声ではない。低く、気だるそうな声だ。

「ううん。困りましたねぇ」

ため息をついているのは、ギギだ。四人は、ヒーデータ側からの回答を受けて急きょ、集まっていた。当初の十万の援軍要請は見送られ、代わりとして、二万の援軍とアガルタから一千の援軍を送るというのが、ヒーデータ本国からの回答だった。

「すみません……」

トーイッツ司令官が、申し訳なさそうに項垂れる。別に彼が悪いわけではないのだが、シーワとギギの姉妹が醸し出す雰囲気が、どう

しても彼を臆病にしてしまっていた。そんな彼をジロリと睨みながらゲシカナ将軍は口を開く。

「まあ、これは戦いだ。仕方がない」

「将軍、我々は何もしていないのですよ？　なのに、ドルガを突然奪われているのですよ。どう考えても不条理でしょう？　そんな不条理なことに、どうして我が国の兵士の命が奪われなければいけないのです？　先だっての戦いで、我らは数千の犠牲者を出しているのですよ？　こんなことで再び死なねばならない兵士たちが、可哀想です」

「しかし、ドルガは奪還せねばならない」

「……ヒーデータがまさか援軍を拒否するとは思わなかったですね。意外と、あの国もケチなところがあったのですね」

シーワはそう言いながら、再び視線を宙に泳がせた。

「ギギ」

「はぁい、副総司令官」

「周辺の国々に書状を出しなさい」

「書状？」

「援軍を要請するのです」

「はあ……」

「規模は三千以上。なるべく早くに急行して欲しいと書き添えなさい」

「承知しました。すぐに準備をして、早馬を飛ばしますぅ。トーイッツさん、お願いできますか？　近隣の……早馬で一日の距離にある国々全てに書状を遣わしてくださぁい。我が国と友好関係のない国でも問題ありませぇん。あ、差出人は、副総司令官の名前でお願いしますぅ。出来上がったら、持って来てください。添削してあげますから。すぐに準備にかかってくださぁい」

「はっ、はっ、はい」

彼はオドオドとしながら立ち上がり、その場を後にしていった。

「おい、シーワ。どうするつもりなのだ？」

「ヒーデータ軍十万が来ないのであれば、我々の兵力を投入せざるを得ないでしょう。しかし、兵数は多ければ多いほどよいのです。だから、兵数を揃える必要があるでしょう？」

「……そうだな」

ゲシカナ将軍は、シーワの言葉の意味がよく呑み込めないという表情を浮かべながらも、ゆっくりと頷いた。その様子を見ながらシーワは、不機嫌そうな表情を浮かべながら、腕を組むのだった。

それからしばらくして、ワーロフ軍の幕僚が一堂に集められた軍議が開かれた。そこで、ゲシカナ将軍は、ヒーデータからの援軍が当初よりもはるかに少ない規模となることと、それを見越して立てて

いた作戦を遂行させるために、周辺国に援軍を求めることを伝えた。
幕僚たちはその声に、恭しく頭を下げる。

「集めた軍勢は、誰が指揮するのだ？」

チャンが腕を組みながら呟く。

「私が指揮しましょう」

笑顔で言葉を返したのは、司令官の一人である、ガイミだ。若さと聡明さが溢れた彼の風貌を見たシーワは、ニコリと笑みを浮かべる。

「では、ガイミさん。お願いできますか？」

「承知しました」

「え？　大丈夫（でぇじょうぶ）か？」

突然声を上げたのは、ワーカだった。彼はキョトンとした表情を浮かべながら、言葉を続ける。

「援軍の軍勢……。つまりは、周辺国から集まった軍勢で構成された部隊じゃねぇのかい？　どのくらいの規模になるのかはわからねぇが……。一体どれだけの国に援軍要請を出したンだい？　３０！？　すべての国が応じるとは思えやせんが、少なく見積もっても数万の規模にはなりまさぁね。軍勢とはいえ、言ってみりゃ、寄せ集めの部隊だ。そんな部隊を指揮するのには、相当の能力が必要になると思うが、お前ぇさんは大丈夫かい？」

「……大丈夫です」

「……そうかい。寄せ集めたぁはいえ、派遣されてくる者の中にゃ、海千山千の者もいらぁね。百戦錬磨の指揮官もいるかもしれねぇ。そんな者たちを束ねていくなんてぇ芸当は、相当難度が高けぇと思ったンだが、お前ぇさんは、大丈夫なンだな？」

ワーカの言葉に、ガイミは押し黙る。

「ちょっと、ワーカさん」

低い、ドスの効いた声が聞こえた。シーワ副総司令官だ。彼女は口元には笑みを湛えながらも、一方で鋭い眼差しをワーカに向けている。その様子を彼はチラリと横目で見たが、やがて視線を外した。

「あなたのそのやり方は、若手を潰しますよ。前にも同じようなことがありましたよね？　あなたのその物の言い方は、若手を萎縮させます。ここにはおいでになりませんが、ヒラス元帥閣下も、あなたの言い方は若手を潰すと言っておいででしたよ」

「ほう、そりゃ初耳でさぁ」

ワーカは苦笑いを浮かべながら、腕組みをする。その姿勢のまま彼は、ガイミに視線を向けた。

「すまなかったな。俺のものの言い方は、若手を潰すそうだ。まあ、勘弁してくんな。今回は、お前ぇのいい経験にもなるだろうよ。やってみるがいい。俺ぁ、賛成だよ」

彼の言葉に、ガイミは戸惑いの表情浮かべながら頭を下げた。

◆◆◆

「よーし、出発するか」

アガルタの都では、一千の兵士を従えたリノスが出陣しようとしていた。彼は鎧に身を包み、ゆっくりとした足取りで兵士たちの許に歩いていく。その周囲には都の人々が見送りに来ており、王の姿を一目見ようと押すな押すなの騒ぎになっていた。

彼はそんな群衆に右手を挙げて応えながら、ひらりと愛馬に跨り、歩みを進めた。その後ろをクノゲンとルファナが従い、さらにその後ろをマトカルが進んでいく。

その様子を兵士たちともに見送る、一人の老人の姿があった。ラファイエンスだ。彼はニコニコと機嫌の良さそうな笑顔を浮かべながら、手を振っている。

「将軍も出陣したかったのでは？」

傍らに控えていた兵士が声をかけてきた。彼はゆっくりと首を振りながら口を開く。

「いや、最近はそんな気が起こらん。私も年を取ったのだろうな。以前は、どんなに危険な戦いでも、出陣となれば胸が躍ったものだがな……」

彼は眼前を過ぎゆく兵士たちを眺めながら、フッと真面目な表情を浮かべる。

「ただ……この度の戦い……。規模が大きすぎる。軍勢の数が多す

ぎるのだ。多くの軍勢が集まれば、必然的に大きな戦いになる。そんな中に巻き込まれねばよいのだがな……」

「恐れながら将軍、今回は出兵ではなく、出向と伺っておりますが……」

「フフフ。我らに戦う意思はなくとも、巻き込まれてしまえば、戦わざるを得まい？　まあ、リノス殿のことだ。その辺は上手くやるだろう。何と言っても、クノゲンとマトカルを連れているのがいい。この二人を従えていれば、道を誤ることはないだろう」

そう言って彼は大きく頷いた。

リノスの率いた軍勢は都を出ると、真っすぐに北に向かって移動し、ニザ公国を目指した。彼らはニザを経由して東に向かうルートを選択しており、このリノスの決断は、どちらかと言うと奇異の目で見られていた。

マトカルはリノスの後ろから彼を追いかけていたが、やがて休憩を取るために森の近くで軍を休めたとき、その真意を聞こうと、彼の傍に足を進めた……。

第四百五十一話　秘密の作戦会議

リノスは、森の中で一人、何かを物色していた。マトカルはその後姿を怪訝な表情で眺める。

「リノス様」

「おっ、何だ、マトか」

少し驚いたような表情を浮かべるリノス。彼はフッと笑みを浮かべると、手招きをして彼女を呼んだ。

「何をしているのだ？」

「いや、いい感じのものがないかなと思ってな」

「いい感じのもの？」

不思議そうな表情を浮かべるマトカルに、リノスはクスリと笑みを漏らす。

「で、今、見つけたんだ」

そう言って彼はあらぬ方向を指さす。

「これは……切り株？」

「そうだ。マトの体ならちょうどよさそうだ。入ってみるといい。

結界を張ってやるから、鎧を脱ぎな」

「こっ……ここでするのか？」

「バカ野郎。そうじゃない。こうするんだ」

リノスは苦笑いを浮かべながら、中が空洞になっている切り株に手をかざす。すると、彼の手から勢いよく湯が飛び出してきた。

中にみるみる湯が溜まっていく。彼はそれを満足そうな表情で眺めながら、マトカルに視線を移した。

「さあマト、入ってみろ」

彼女は無表情のまま彼を見つめていたが、やがてゆっくりと鎧を脱いで、一糸まとわぬ裸になった。

「……」

「どうだ？」

「……悪くは、ない」

「そうだろう？」

リノスはニコニコと笑みを浮かべながら、彼女を見ている。マトカルは恥ずかしそうに身をよじりつつも、体の底から湧き上がる心地よさに、大きなため息をついた。

「よくこんなことを思いついたな……」

「以前、やったことがあってな。好評だったんだ」

「以前？　誰に……だ？」

「エリルお嬢様さ」

「エリル……お嬢様……」

「ああ。俺が奴隷時代に世話になった方だ。世話になった……というより、俺がかなり世話をした記憶しかないが……まあ、世話になったんだ。そんなお嬢様が、このルノアの森で中が空洞になった切り株を見つけてな。湯を張って中に入ったらえらく気に入ったんだ。血が全身を駆け巡る……なんて言っていたな」

彼は遠い目をしながら、懐かしそうに口を開いている。そんな様子を見ながらマトカルは、ゆっくりと彼から視線を外し、周囲を眺める。

とても静かな時間が流れる。ボーっと森の木々を眺めていると、心の底から癒されていくのを感じる。こんな感覚は初めてのことだ。

「もう少し、お湯を熱くしようか？」

リノスの言葉に、マトカルは我に返る。もしかして、弛緩した表情を見られてしまったか……。少し頬を赤らめながら、彼女は無言で頷く。

ジワジワと体の周りの温度が上がっていく。それに比例して、体中のコリや疲れが解けていくような感覚を覚える。マトカルは再び大

きく息を吐き出した。

「仕事に子育てにマトは頑張っているからな。たまにはこういう休憩も必要だと思ったんだ」

リノスのその言葉に、マトカルは顔を赤らめながら口元まで湯に浸かる。

……どのくらいの時間が経っただろうか。刻々と彩を変える森の木々や鳥たちの鳴き声に存分に癒されたマトカルは、ゆっくりと立ち上がった。

「もう十分だ。ありがとう」

マトカルの声に、リノスは再び笑顔を返した。

「……リノス様は入らないのか？」

鎧を身に着けながら、彼女は夫に話しかける。彼はゆっくりと首を振っている。

「さすがに俺の体じゃ小さすぎるよ」

「そうか……私ばかり、すまない」

「いや、いいんだ。それに、この鎧だからな」

そう言いながら彼は鎧をコンコンと叩いた。確かに、この鎧はメイとシディーの二人でしか着せられないほどの複雑な仕様になっている。おいそれと脱ぐわけにはいかないのだ。

「ところで、リノス様はどうして北に進路を取っているのだ？」

「何だマト。藪から棒に」

「少し理解ができないのだ。ワーロフに向かうのであれば、南から行けばよいではないのか。ガルビーに行き、そこからヒーデータの帝都に向かい、そこからワーロフへ……」

「そうだな。その方が効率的だ。帝都の屋敷にも帰りやすいしな」

「ではなぜ……」

「秘匿したいんだよ」

「秘匿？」

「俺たちの動きをできるだけ秘匿したい」

「理由を聞いても？」

「そうだな……」

リノスはゆっくりと息を吐き出すと、スッとマトカルを抱き寄せた。彼女は予想していないこともあって、ピクリと体を震わせる。

「ドルガにいるのはおそらく、とんでもない頭脳とスキルを持ったヤツだと俺は睨んでいる。しかも、その相手はどうも戦いを大きくしようとしている節がある。普通は、余程の自信がない限り、戦いを早く終わらせようとするものだ。敵は、自信があるように見える

が……果たしてそうだろうか。何だか、俺の勘があのドルガという街は危険だと言っている気がしてならないんだ」

「リノス様の勘は正しいかもしれないが……危険、だろうか？」

「ああ。地図を見た限りだが、あのドルガという街……欠点が全くない。それこそ、人々が逃げることもできないくらいのな。大体、城にしろ砦にしろ、必ず逃げ道は作るものだ。あの、ジュカ城だって湖が逃げ道だったんだからな」

「なるほど……」

「そんな危険な街を落そうとしているんだ。いかに大軍勢で攻めても、相当の被害が出るだろう。俺なら力攻めはせずに他の方法を考えるが……。どうもワーロフは力攻めで落とそうとしているらしい。最高の指揮官と最高の防御力を備えた街……。余程、注意してかからないと、手痛い反撃にあう。かなり厄介だぞ」

「リノス様が言わんとしていることは理解できる。でも、なぜ、北の進路なのだ？」

「ワーロフ軍はドルガの南に陣を張っているな？　ヒーデータ側から行けば、必然的に俺たちは南側に陣を張ることになるだろう。それは避けたいんだ」

「すまない、よくわからない」

「大軍勢の中に紛れてしまえば、俺たちも戦いに巻き込まれる。周囲が突撃しているのに、俺たちだけが突撃しないわけにもいかないだろう。そうならないためにも、アガルタ軍は、少し離れた位置に

陣を張ろうと思うんだ。北側……ニザを迂回して東に進めば、必然的にドルガの西側に出られる。そこにはまだ、軍勢はいない。そこで適当なところに陣を張ればいい」

「なるほど」

「それに……ヴィエイユたちも来るからな。そいつらと連携が取れやすい位置に陣を張る必要がある。意外とこの戦い、ヴィエイユがカギを握っている気がするんだ。そうだな……山の上に陣を張るか……。あと、できれば、俺の存在も秘匿しておきたいな。ある程度使えるヤツだと知られれば、色々と面倒ごとを背負わせられる可能性もある。結界を張るくらいなら問題ないが……。どうも俺は、厄介ごとを引き寄せるスキルを持っているようだからな。それだけじゃすまない気がしてならないんだ」

「……」

「ヒーデータ側には、アガルタからは一千の兵を出すとは伝えているが、俺が行くとは伝えていない。だからマト、表向きのこの軍勢の総司令官はお前が務める格好にしてくれ。あとで兵士たちにもそれは伝えよう。……そんな顔をするな。お前にすべてを委ねようとは思っていない。俺もクノゲンもいるんだ。せっかくの機会だ。楽しんでやるといい。まあ、詳しくは現地に着いてからだ。それまでは、ゆっくりと旅を楽しもう。俺は、アガルタ軍の兵士を一人も死なせるつもりはない。もちろん、マト、お前もだ」

そう言って彼はマトカルを強く抱きよせたかと思うと、彼女の頬に優しく手を添える。

「うん？　何だか、肌がスベスベしていないか？　切り株温泉は、

美肌の効能もあるのかね？」

不思議がりながら、ゆっくりと頬を撫でるリノス。その一方でマトカルは、顔を真っ赤にしてゆっくりと俯いた。

第四百五十二話　ウエスギケンシン

低く垂れこめた雲が空を覆いつくしている。何やら天変地異が起こりそうな気分になるような空模様だが、ワーロフ帝国軍副総司令官であるシーワの表情は、明るかった。

彼女は手元の報告書を満足げに眺めていた。一枚一枚の報告書に目を通しながら大きく頷いている。

彼女の許には、援軍要請を出した国々から続々と援軍を送る旨の返答が寄せられていた。帝国の西側の国々に片っ端から送ったのが功を奏したのか、すでに、七か国から要請を受けるという返事が届き、続々と到着していたのだった。

各国は、彼女が出した、最低三千の規模の軍勢という条件も呑んでくれていた。現在のところ二万を超える規模の援軍を得ることができている……。彼女の頭の中で、その軍勢をどう使おうか……そんなことを考え始めたそのとき、空から一通の書簡が落ちて来た。

そこにいた全員が、あまりの予想外のことに固まる。シーワは周囲の幕僚たちに視線を向けるが、誰も反応を示さない。彼女はトーイッツに視線を向けると、無言のまま顎をしゃくった。彼はビクンと体を震わせたが、やがてオドオドとした様子で立ち上がり、まるで熱いものを触るかのように、注意深くその書簡を手に取った。彼はシーワにそれを渡そうとするが、彼女は再び顎をしゃくる。その意図を察して彼は、ゆっくりと書簡を開き、中身を確認し始めた。

「ア……アガルタ軍一千が、到着したようです」

「アガルタからの書簡ですか？」

「だと……思われます」

「見せて」

シーワはトーイッツの手から書簡をひったくると、無表情のままそれに視線を向ける。

「オランザルタ山の麓に、アガルタ軍が到着したようです。すぐに伝令を遣わせてください」

彼女は周囲の幕僚たちを一瞥すると、無表情のまま言葉を続ける。

「来援いただいた各国の皆様と軍議を行います。皆さん、準備をして下さい」

その表情には、先ほどまでの機嫌の良さそうな雰囲気は、微塵もなかった。

◆　◆　◆

ちょうどその頃、リノスたちはワーロフ帝国内に到着していた。彼はしばらく周囲を伺うと、マップを展開させて周辺の地形を調査した。そして、近くにある海を望む山の頂上に陣を張ることにしたのだった。

「……意外と波が静かな海だな」

「そうですな。晴れた日には対岸の大陸が見えますからな。海自体が狭いので、波も高くなりにくいのでしょうな」

水平線を眺めるリノスの後ろで口を開いているのは、クノゲンだった。彼はゆっくりと周囲を見廻している。

「それにしても、さすがですな。ここからですと、遥か彼方にドルガの街を望むことができますし、新しく作られた砦も、ここからなら一望できます。陣を張るにこれ以上ふさわしい場所はありませんな」

「いや、たまたまだ。そういう意味では、俺たちはツイているな」

そう言って二人は笑みを交わし合う。

「ところで、ここまでの道中は楽しかったか？」

「ええ。妻もあまり多くは語りませんが、それなりに満足しているようです」

「まあ、夫婦の思い出を増やせたのなら、今回の出陣の目的の半分は達成できたも同然だ」

「ハハハ、ご冗談を」

「ハハハ」

「冗談はそのくらいにして、今後のことを話し合いましょう」

笑い合う二人に割って入ってきたのは、ルファナだ。彼女は顔を真

っ赤にしながら、二人に視線を向けている。その後ろにはマトカルも控えていた。リノスはにっこりと笑うと、二人に向かって声をかける。

「そうだな。今後のこと……といっても、今のところは待機だ。敵の出方を待つ」

そのとき、兵士の一人が彼らの前に現れ、片膝をついた。

「申し上げます。ワーロフ帝国側より、軍議を開くので本陣にお越しいただきたいとの使者が参りました」

「何と……ワーロフはもう、我々の動きを察知したのか。かなり優秀な情報網を持っているのだな」

「いいやマト、俺が知らせたんだよ」

「リノス様が？」

「ああ。この山に登る前にサダキチに手紙を持たせたんだ」

「……それで、か」

「ワーロフ側は驚いているだろうな」

「……」

「せっかくだから、軍議に行くとするか」

「承知しました」

「待ってくれ」

「どうした、マト」

「私を連れて行ってくれ」

「クノゲンではなく、か？」

「一応、この軍の総司令官は私だからな。それに……」

「それに、何だ？」

「……」

マトカルは顔を真っ赤にして俯いている。その様子を見てリノスは、もうしばらく二人っきりの時間を過ごしたいのだろうなと解釈した。そんなことを考えると、目の前のマトカルがたまらなく可愛らしく思えてくるのだった。彼はゆっくりと頷くと、マトカルと共にワーロフの陣に向かおうと促す。

「さてと、その前に準備をしないとな」

彼はそう言いながら懐から一枚の布を取り出した。

「マト、この端っこを持ってくれ。……じゃ、行くぞ」

リノスが布の端を持って引っ張ると、それがスルスルと広がっていく。すると、薄いわりに意外と大きな布が広がった。彼はそれを丁寧に二つ折りにしたかと思うと、ゆっくりと布を頭に巻き付け始め

た。そして、目の部分だけを残して、その顔をすっぽりと布で覆ってしまった。

「リノス様……なぜこんなことを……」

「一応、俺の存在を秘匿するためだ。ソレイユとメイが作ってくれたものでな。魔力感知のスキルで俺を捉えることができにくくなるそうなんだ。上杉謙信みたいで、カッコイイだろう？」

「ウエスギケンシン？」

「ああ、知らないよね。軍神って呼ばれた武将なんだけどな。いや、こっちの話だ。あ、謙信は顔まで覆っていなかったっけな。このスタイルはどちらかと言うと、大谷吉継か？　まあいいや。謙信と言うことにしておこう」

そんなことを言いながら、リノスは腰に差しているホーリーソードをゆっくりと抜き、切っ先を天に向けた。

「運は天にあり、鎧は胸にあり、手柄は足にあり。死なんと戦えば生き、生きんと戦えば必ず死するものなり。その決意を以て二心無きことを神に向かって誓うは、不要なり。我こそが……我こそが、軍神なり。……なんてね。あれ？　どうした？」

周囲の兵士たちが彼を見て固まっている。マトカルもルファナもクノゲンも、目を丸くして驚いている。リノスはそんな周囲に視線を向けながら、戸惑った様子を見せる。

「うっ……うおおお！」

「うおおおお～～！」

「うおおおおおお！！」

突然兵士たちから声が上がる。その声はすぐに大きくなっていき、リノスの周囲は大歓声に包まれた。彼は戸惑いながらも兵士たちを抑えようと、剣を鞘に仕舞い、両手を挙げて応える。だが、兵士たちの興奮は収まらず、彼らは両手を突き上げて大声を上げている。

「「「リノス！　リノス！　リノス！　リノス！！」」」

「おい、クノゲン、マト、ルファナちゃん。黙って見ていないで、何とかしてくれ」

焦ったリノスの声を受けて、我に返ったクノゲンたちが大声で兵士たちを宥めているが、なかなかその興奮は収まらない。

「おいマト、お前も何とかしてくれよ」

「ううう……」

「どうしたんだ？　俯いて……。体調でも悪いのか？　……マト？」

「う、う、う……」

「大丈夫か？」

心配そうな表情を浮かべながら、リノスはマトカルの顔を覗き込む。彼女は顔を真っ赤にしながら、右手を胸の前で握り締めている。

「……した」

「え？　何だって？　兵士たちの声がうるさすぎて聞こえないんだ」

「……なおしたのだ」

「なおした？　何をだ？」

マトカルは真っ赤な顔のまま顔を上げ、リノスをキッと睨みつけた。

「ほっ、惚れ……惚れ直したのだ！　何度も言わせないでくれ！」

再び俯くマトカル。その様子を見てリノスは、嬉しそうに笑い声をあげるのだった……。

第四百五十三話　正論

「お集りの皆様、遠路はるばるご苦労様でございました」

満面の笑みを浮かべながら挨拶をしているのは、シーワだった。彼女は、集結した援軍の諸将との最初の軍議を開いていた。その隣にはゲシカナ将軍が控え、周囲にはチャン司令官をはじめとした幕僚たちが控えていた。

軍議の席はロの字型に組まれ、援軍の諸将にはそれぞれ、ワーロフ軍の幕僚たちがその両側に着座しているという、一風変わった物だった。

「我が国は現在、大変な危機を迎えております。バーリアルの理不尽な侵攻を受け、ドルガという地を奪われております。我々としては一刻も早くドルガを奪還したく思っております。何卒、皆さまのご助力を賜りたくお願いを申し上げる」

ゲシカナ将軍はそう言って頭を下げる。彼の言葉を受けて、シーワ副総司令官が言葉を続ける。

「この度の戦いにつきましては、基本的には我々帝国軍が担わせていただきたいと思います。従いまして、各軍の陣立てや攻撃、撤退などはこちらで決めさせていただきたいと存じます。指揮命令系統が乱れることは、敗北につながります。このこと、何卒ご了承くださいませ」

彼女の言葉に言葉を発するものはいない。その様子を見ていたシー

ワは、隣に座るゲシカナ将軍に視線を向け、そして、ゆっくりと頷いた。

「ただし、我々は最も効率的で効果的にドルガを奪還したいと考えております。そのために、皆さまからのご意見も多くいただきたいと思っております。是非、こうした軍議を重ね、お知恵を拝借しながら作戦を立案したいと考えております」

満面の笑みを浮かべながら、彼女は援軍の諸将に視線を向ける。皆、一様に頷くばかりで、言葉を発する者は一人もいない。

「早速ですが、何かご意見はございますか？」

シーワの声が響き渡る。

「……特にご意見もないようですので、この度の、お集まりいただいた皆様への陣立てをお伝えさせていただきます。とは言いましても、今のところは特に移動していただく必要はございません。皆さまの優れた戦略眼のお蔭をもちまして、既にドルガの包囲は完了しております。まずは、現在の場所でお留まりいただき、我々からの命令をお待ちください。とはいえ、せっかくこうして皆様と集まることができたのです。まずは、自己紹介などをしまして、互いのことを知り合いたいと存じます」

彼女の言葉が言い終わった直後、ワーロフ側のガイミたち若い司令官が素早く紙とペンを配っていく。そこにゲシカナ将軍とシーワはカリカリと何かを書きこみ、慣れた手つきで三角形に折ると、そこにはまるで、ネームプレートのようなものができあがっていた。

「はい、このようにしていただければ、ネームプレートができあが

ります。それぞれの所属、階級、名前などを書いていただければと存じます。こうして紙に書きますと、一目瞭然でございますわ。詳しくは、我が帝国の者にお聞きください」

シーワの声を受けて、援軍の諸将の隣に控えていた若い幕僚たちは、色々と指導を始めた。彼らは戸惑いながらも、幕僚たちの勧めに応じ、紙にカリカリと書き込み始めた。

「すまないが、これには意味はあるのだろうか？」

突然、女性の声が聞こえ、その場にいた全員の視線が集中していく。口を開いたのは、マトカルだった。

「こんなことをしている暇はあるのか。一刻も早くドルガの奪還に動くべきではないのか？」

彼女の声に、その場の空気が凍りついていく。

「あなた様は……ああ、アガルタ軍の御方ですね？　お名前は確か……」

「マトカルだ」

「確か、アガルタ王様のお妃さまであらせられましたね。お初にお目にかかります。私は、ワーロフ帝国軍副総司令官のシーワと申します。ご挨拶が遅れまして申し訳ございません。お詫び申し上げます」

「いや、そんなことはどうでもいい。まずは……」

「どうでもいいというお言葉は、遺憾千万に存じます。これには意味があって行っていることでございます」

「意味がある？」

「私はドルガの奪還を、効果的に効率的に行いたいと申し上げました。そのためには、色々なお方の知恵が必要です。ですが、ここに集まった諸将が互いを知らぬ間柄では、意見を言い合うことはできぬかと思います。ですから、こうして互いが話しやすい状況を作っているのでございます。その点をどうぞ、ご理解くださいませ」

「すまない。ドルガの奪還はワーロフ帝国の事案だろう。本来であれば、貴国の責任においてかの地を奪還するのが筋なのだ。それができぬから、ヒーデータ帝国をはじめとする各国に援軍を要請しているのだろう。ならば、その援軍の諸将に対して、いつまでドルガを奪還したいのか、どういった戦術をこれまで取ってきたのか、ドルガにいる敵の兵力、その装備……など、共有する情報はたくさんあるはずだ。そうしたこともせず知恵を借りたい、などと言われても、我々は意見の出しようがない。むしろワーロフ帝国軍はドルガ奪還について万策が尽きているのか？」

「お待ちください、マトカル様」

声の主はゲシカナ将軍だ。彼はマトカルにじっと視線を向ける。

「ワーロフ帝国軍総司令官のゲシカナでございます。仰ることも一理ありますが、我々は、多様な意見を尊重しながら作戦を立案することを旨としております。誠に僭越ながら、ここはワーロフ帝国でございます。我が国には我が国のやり方がございます。何卒、ご理解くださいますように」

彼の表情は笑みを浮かべているが、その言葉の端々に、我々のやり方に従えと言わんばかりの圧力を感じさせる言い方だった。だが、マトカルは怯まなかった。彼女はさらに言葉を続ける。

「私は、作戦の立案はワーロフ側が行うべきだと考えるが、今の将軍の話が国家としての方針であるのであれば私は否定しない。私として、作戦案を出すことは拒否しない。だが、我々にそうさせたいのであれば、まずは情報が必要だ。何の情報もなく意見を出せと言われても、単にうわべだけの意見しか出すことはできないだろう。こう言っては何だが、私には貴国のやり方は、多くの人の意見を集約しているように見せて、実は、ワーロフ帝国の思惑通りにコトを進めようとしているようにも見える。そして、何か作戦に不備があったり失敗があったりした場合は、諸国に責任を押し付けるのかという懸念も……」

「マト……」

小さな声で彼女を諭したのは、隣に座る男だった。顔を白い布で巻き、腕を組みながら首を左右に動かしている。マトカルはその声にピクンと体を震わせると、みるみるその顔に赤みが差していく。

「すっ……すまない……私としたことが……少し、言い過ぎた……」

よく見ると、隣の男の手がマトカルの尻を優しく撫でているのだが、周囲の人からはその光景が見えない。ゲシカナ将軍もシーワも、その様子を怪訝な表情で眺めていたが、やがて、二人は諦めたように大きなため息をついた。

「まあ何だ。今日は顔見せということで、お開きでどうでしょうか

？」

白い覆面の男が、周囲を見廻しながらくぐもった声で話しかける。その声に反応する者は誰もいなかった。彼はゆっくりと頷くと、隣に座るマトカルを促してゆっくりと立ち上がり、一礼をしてその場を出て行った。

その様子をゲシカナ将軍とシーワ副総司令官は、鋭い視線を向けながら見送っていたが、一方で、彼らの側に控えるチャンとワーカ司令官は、小刻みに頷きながら、その様子を見送っていた。

「……皆さま、ネームプレートはできましたでしょうか？　今後も軍議の際にそれを使いますので、恐れ入りますが、それらは我が軍の者にお渡しいただきたく思います」

ワーカの言葉に、若い幕僚たちが散らばっていく。彼女は幕僚たちの行動を見ながら、マトカルたちが立ち去った方向に再び鋭い視線を向けた……。

第四百五十四話　偵察

「すげぇな……」

目の前の光景に、俺は思わず声を漏らしていた。それほど、ドルガという街の防衛体制は、完ぺきなものだった。見事に配置された堀と城壁……。これを打ち破るのは至難の業と言えるだろう。

今、俺はイリモの背に跨り、上空からドルガの街を見下ろしていた。当然、周囲には結界を張ってあるし、そこには空の色と同化する効果を付与しているために、敵が俺たちを発見する心配はないと言ってよかった。

それにしても、見れば見るほど、立派な要塞だ。敵はこれを一週間で作り上げたのだという。まさしく、敵ながら天晴と言った仕事ぶりだ。そんな有能な魔術師がいること自体、かなりの脅威であるはずなのだが、なぜか俺の心の中は、そうした感情よりも、一度、そんな優秀な魔術師に会ってみたいという思いが湧き上がっていた。

いやいや、今は戦いの最中だ……。そうやって自分に言い聞かせながら湧き上がる感情を押し殺す。

「ちょっ……くすぐったい……」

突然声が聞こえる。これは、マトカルだ。彼女は俺の前に座り、カリカリとペンを走らせている。

当初、このドルガの偵察には、俺一人で行くつもりだった。だが、

俺がイリモに跨ったのを見たマトカルが、自分も行くと言い出したのだ。

「ただ、ドルガを見るだけ……なのか？」

「何だマト、他に何かあるのか？」

「その情報を皆に共有しないのか？」

「うん？　どういうことだ？」

聞けばマトカルは、軍人時代に斥候の訓練を受けたことがあり、実戦でも何度も経験しているのだという。その際に、自分が見た情報を正確に上官たちに報告することを徹底的に教えられたのだそうだ。

「一人だと、その者の感情や価値観が入ってしまい、正確な情報が伝わらないことがあるのだ。そのために、偵察は複数人で行くのが基本なのだ」

確かに、マトカルの言うことにも一理あると考えた俺は、彼女もイリモの背中に乗せ、ドルガの街に向けて飛び立ったのだった。

「落ちるなよ、マト」

「大丈夫だ」

彼女を背中から抱きしめながら呟く。マトカルは手に持っていた板に紙を載せ、そこにペンでドルガの街を写生しているのだ。

「……上手いな」

「見たものをそのまま書き取るスキルは、軍人として必須だ」

そんなことを言いながら、彼女は手際よく街の風景を描いていく。最初はラフに描いていたが、そこから少しずつ手を加えていく。すると、まるで写真に写したかのような、見事な絵ができあがっていく。

「……すまない。揺らさないで欲しい」

誰に言うともなく呟くマトカル。その声を聞いてイリモは翼を調整したのだろうか。上下に揺れていたのが、ピタリとやんだ。俺も思わず彼女をギュッと抱きしめる。

「リノス様、それは、大丈夫だ」

そんなことを言いながら彼女は苦笑いを浮かべている。俺は彼女の写生を邪魔しないように、ゆっくりと彼女の肩に顎を載せ、目の前のドルガの街を観察し始めた。

……見れば見るほどに、見事な要塞だ。俺ならば、どう攻めるだろう。いや、攻められないな。あの堀と城壁の位置だ。あそこに弓矢と魔術師を配置すると、十字砲火を食らうことになる。余程の軍勢をもって攻めかからないと、突破は難しい。そう言った意味で、ライッセンが十万の援軍を要請したのはある意味で正解だ。数を頼んで全方向から攻めかかり、中の兵士たちの疲労を待つというのも作戦の一つではあるだろう。ライッセンはそこまで考えていなかっただろうが。ただそれは、あまりにも犠牲が大きすぎる。その作戦を取るべきではない。と、すれば、どう攻めればいいだろうか。

何と言うか、この要塞を見ていると、不思議な感覚にとらわれる。何としても、この要塞を攻め落としたいという感覚になる、何とも言えない魅力があるのだ。できれば俺が先頭を切ってこの要塞に切り込みたい。そして、何としてもここを陥落させてみたいと思わせるのだ。

「恐ろしいな」

俺の興奮を窘めるかのように、マトカルが静かに呟く。俺は彼女を抱きしめたまま、目だけを動かして彼女を見つめる。

「見事な要塞だ。難攻不落と言っていいだろう。これは、軍人としての血が騒ぐ」

「やっぱり、マトもそうか？」

「いや、以前の私ならば、全知能、全能力を駆使してこの要塞を落そうとしただろう。だが、今はそんな気持ちになれない」

「ほう、そうか……」

「子供を産んでしまったから……か。血は騒ぐが、今はむしろ、攻めるべきではないという思いの方が強い」

そう言いながら彼女は、描いていたドルガの絵を丁寧に懐に仕舞った。

「あの要塞に手を出すべきではない。地味だが、大軍をもって要塞を囲み、海を封鎖して食料を断って日干しにする他はないだろう。その上で、敵に内通者が出るように仕向けて行くのが、一番の策だ」

「なるほどな。確かにそうだ」

「ただ、もう一つ策がある」

「ほう、何だ？」

俺の質問に彼女は応えず、ゆっくりと視線を俺に向け、じっと俺の目を眺める。

「リノス様のスキルを……全力を出せば、あの街を一瞬で灰燼に帰すこともできるだろう」

「あー」

確かに。例えば今、俺がこうしてイリモの背中から全力で攻撃をかければ、あの街は一瞬で何もなくなるだろうし、そうする自信もある。だが、直感的にそれをするべきではないという考えも、俺の頭の中にはよぎるのだ。

「それは、あんまりやらない方がいいな」

「私もそう思う。今回は、リノス様のスキルは徹底的に秘匿した方がいいと思う」

「どうしてだ？」

「女の、カンと言うやつだ」

「うふふ。実は、俺も同じことを考えていたんだ。マトも同じ考え

でいてくれて、うれしいよ」

そう言って俺は、彼女の頬にキスをする。マトカルは顔を真っ赤にしながら、俯いてしまった。その表情が、実にかわいい。

「さあ、帰ろうか」

「いや、ちょっと待ってくれ」

「どうした？」

「その……もう一つ、砦ができているだろう？　そこも一度、見ておくべきだと思うのだ」

「ああ。一夜でできたという、アレか」

「せっかくここまで来たのだ。見ておくに越したことはないだろう」

「そうだな」

俺はイリモに西に向かうように伝える。彼女は俺の意図をすぐさま察して、翼を西の方向に向けた。

「すっ、すまない。リノス様も色々とやりたいことがあったのだろうが……」

「いいや構わないよ。俺も、しばらくこうしてマトを抱きしめていたいと思っていたところだったんだ」

「ううう……」

マトカルは再び顔を真っ赤にしながら俯いた。そして、自身の腹に当てられているリノスの手に、やさしく手を添えた。

イリモの翼は高速で上空を移動する。二人の甘い時間は長くは続かず、マトカルは再び顔を上げて目の前に広がる光景を眺めた。

「……ここも、大変な要塞だな」

マトカルは心の中で唸っていた。先ほど見たドルガの街に勝るとも劣らない防衛態勢が敷かれていたからだ。彼女はそのあまりの見事さに一瞬、我を忘れた。

「予想以上だな。ここも、完璧な作りだな」

誰に言うともなくリノスが呟く。その声と共に耳にかかる彼の息遣いをくすぐったいと思いながらマトカルはゆっくりと頷く。

「これだけの要塞を二つも持つ国と戦わねばならんとは……厄介だな」

「ドルガを攻めれば、この要塞の兵から背後を突かれる。この要塞を攻めれば、ドルガから攻められる……。意外と、大軍をもって一気にドルガを抜くのも、逆に効果的かもしれないな」

「リノス様……」

「わかっている。力攻めは、不幸にしかならないからな。さて、どうするかな……」

「リノス様……その……息が耳に……くすぐったい……」

「ごめんごめん。すまないついでに、この要塞も写生してくれるかな」

「わ……わかった。もとより、そのつもりだ。ただ……耳に息をかけるのは、やめてくれ。集中できなくなる」

彼女は再び懐から紙を取り出し、目の前の砦を描き始めた。やめてくれと言ったのにもかかわらず、やはり耳に当たるリノスの息遣いをくすぐったいと思いながら、彼女はペンを走らせるのだった。

第四百五十五話　糾弾

アガルタの陣に戻ってくると、ルファナとクノゲンが何やら言い争っていた。よく見ると、プリプリと怒っているのはルファナの方で、クノゲンはそれを宥めているような雰囲気だ。

「今すぐ撤兵すべきだ！」

「そういうわけにもいかないだろう」

「こんなことは失礼の極みです。こんな国と関わり合うなど、許せない！」

「まあまあそう言わずに……」

そんな会話を交わしている二人に、俺はゆっくりと近づく。二人は俺の存在に気付くと会話をパッと止め、スッと一礼した。

「どうしたんだ二人とも。夫婦喧嘩は犬も食わないっていうぞ？」

「いえ……そういうわけでは……」

「どうしたんだ一体？　二人がケンカするなんて、珍しいじゃないか」

「いえ、別に喧嘩をしていたわけではないのです。ワーロフ側の……」

クノゲンの言葉を遮るように、ルファナが彼の腕を掴んだ。そして、ゆっくりと首を左右に振る。

「いや、まあ、取るに足らないことなのです」

「どうした？　何があった？」

「いいえ。こんなことはお耳に入れるまでもありません。お忘れくださいませ」

「何だ？　どうした？　気になるじゃないか」

クノゲンとルファナは顔を見合わせている。ルファナは小刻みに首を振っているが、クノゲンがゆっくりと首を縦に振る。それを見た彼女は、さも残念そうな表情を浮かべながら俯いた。

「実は先ほど、お二人がおいでにならないときに、ワーロフの陣に呼ばれたのです」

「ほう」

「てっきり軍議だと思いまして……。リノス様もマトカル様もおいでにならないので断ろうとは思ったのですが、緊急と言うことでしたので、妻を伴って赴いたのです。ですが、そこでは全員にこんなものが配られたのです」

クノゲンは懐から一枚の紙を取り出した。そこには、こんな文言が書かれていた。

『帝国にお集りの皆様。

ワーロフ帝国軍副総司令官、シーワでございます。

先日の軍議は、お疲れ様でした。少し感情的になってしまった場面があり、私自身、大人気なかったと反省しています。

ただ、なぜそう思ったのかをお伝えしておいた方がよいと思いますので、以下長文になりますが、お読みいただければ幸いです。

今回の戦いは、時間も限られた中で、出来る限り良い作戦を立案しようと努力しています。

戦の当事国であるのだから、当然と言えばそれまでですが、我が国だけの単独でやればもっと早くスムーズにできるにもかかわらず、より良い作戦とするためにも、この戦を「自分ごと」として考えることで、その内容を集まった国々の中でより浸透させるためにも、「開かれた軍議」の形で作ることにしました。その理由としては、この作戦には多くの兵士たちの命がかかっているからです。

現在、ワーロフ帝国には、十万近い軍勢が集まっております。作戦によっては、この兵士たちが全滅する恐れがあるのです。そのためには、より効果的な作戦を立案し、それを効率的に運用する必要があるのです。そのためには、「開かれた軍議」が必須なのです。

ただ、一部の国からはそういったことに対しての評価や労いが一切ない上に、一方的に指摘だけされ、議論や意見交換の場に面倒そうなご様子で関わられていることに、正直しんどいなと思っています。

今回、一部の国から出されたご意見には、せっかくお集まりいただいた国々への心境などを意識されたものではなく、「意味があるの

か」と言った表現のように、一方的に自国側が伝えたいことを伝えているような表現になっているように思います。

私はこの戦いに関わる全て者に理解しやすいように、難しい言葉は出来る限り使わず、一般的な表現になるように、一言一言かなり細かく意識して発言しています。まだまだのところはたくさんありますが……。

先日の軍議では、そういった感情が積み重なってしまったが故の対応でした。まだまだ器が小さく申し訳ありません。

今回の戦いは我が帝国とその他多くの国々が同じ場で議論をしながら作戦を立案するという協働の事案です。参戦いただいている方々で議論して、より良い作戦を作ることを面白いと思ってくださる方も多くいらっしゃいます。そういったプロセスにこそ、この戦いに一番の意義があるのではないでしょうか？

より良い「協働」のためには、お互いのことを尊重し合い、対等に議論して作っていくことが必要です。

我々ワーロフ帝国とその他の国々が協働していくためには、我々が変わらなければならないことは事実ですが、ここに集まった国々も会話や言葉の使い方も変わって行かなければなりません。より良い協働を生むためにも、一方的な会話ではなく、双方向の会話でなければならないと思います。軍議の場においても、双方向の対話が重要であることをご理解いただければ幸いです。

色々と勝手ばかりを書きました。

もし、これをお読みになった方で、本心とは違っていたのでしたら、

申し訳ありません。
その際はぜひお伝えください。ただ、私がそのように受け止めていることも事実ですので、そのことは事実として受け止めていただければ幸いです。

今後もどうぞよろしくお願いします』

俺のすぐ横からマトカルが覗き込んでいる。俺は少し迷ったが、その手紙を彼女に渡す。

「……」

マトカルはじっとそれを見ていたが、やがて大きく息を吐き出しながら、首を左右に振った。

「一体……この国は何をしようとしているのだ？　我々に何を求めているのだ？　私個人をこのように批判したところで、一体何になるというのだ？」

「いえ、マトカル様。このような者は相手にしなくてもいいのです」

クノゲンが宥めているが、マトカルは天を仰いだまま、じっと目を閉じている。

「だから言ったのです。見せるべきではないと」

ルファナが呆れたような表情で口を開いている。

「リノス様、恐れながら、ここは撤兵いたしましょう。このような国と関わりましては、我々が大きな被害が出ます」

「ルファナ、よさないか」

「まあ、待てクノゲン。それにしても……ひどいな。何を食えばこんなことを考えるのか……。イヤな女だな」

俺はため息をつきながら、マトカルが持っていた手紙を手繰り寄せる。

「何だかもっともらしいことを書いているが……。文末の『ただ、私がそのように受け止めていることも事実ですので、そのことは事実として受け止めていただければ幸いです。』という文言に全てが集約されている気がするな。私の思い通りに動いていないから、気に入らないという思いが、よく伝わってくる」

俺は手紙を折りたたみながら、クノゲンに視線を向ける。

「で、軍議はどうだった？　俺たちのことは何か言っていたか？」

「いいえ。表立って我々のことは話題に上がりませんでした。軍議につきましては、特に意見らしい意見も出ず、最終的には、ワーロフ側からの命令を待つことになりました。これは、私の推測ですが……。どうやら、数を頼んで総攻撃をかけるようですな」

「総攻撃か……」

「恐れながらリノス様」

「何だい、ルファナちゃん」

「このような堅牢な城塞都市に総攻撃をかけるなど、兵力がいくらあっても足りません。大きな損害が出ることは火を見るよりも明らかです。ですから、撤退しましょう」

「そうだな。俺も同意見だ。だが、このまま撤退することは難しいな」

「リノス様！」

「まあ、総攻撃の命令が来たら、上手く躱す方策を考えないとな」

「上手く……躱す……」

「こう言っては何だが、リノス様は軍神であらせられる。リノス様にすべてを任せておけばいいのだ」

「おいクノゲン、それはちょっと言い過ぎだろう？」

「そんなことはありません」

そう言って俺たちは笑い合う。だが、ルファナは何とも言えぬ表情で俺たちを眺めているし、マトカルは目を閉じたまま俯いている。俺はそんな二人に視線を向けながら、小さな声で呟く。

「さてと。おそらく、世界最強の防御力を誇る二つの要塞……。それだけじゃなく、獅子身中の虫もいるか……。まさしく針の筵状態ってやつか？　どうするのが、正解なのかな……」

俺の視線の先には、雲一つない青空が広がっていた。

第四百五十六話　味方

マトカルの様子がおかしいと最初に気付いたのは、エリルだった。彼女は、マトカルが帰ってくるなり、その様子がいつもと違うことを敏感に感じ取っていた。そして、それから片時も彼女から離れようとはしなかった。

特に何をするわけではない。ただ、マトカルの着替えを手伝い、マトカルの隣に座って食事をする……。ただそれだけのことだが、二人ともほとんど言葉を交わさないにもかかわらず、ずっと寄り添うようにしているのは、誰の目から見ても奇異に映った。

「マトちゃん、お風呂、入ろ？」

「ああ……」

そう言って二人は、弟のファルコを伴って風呂に消えていった。普段ならば、アリリアや他の弟や妹たちも、一緒に入ると言って後を追うのだが、この日の二人の雰囲気は、それすらも遠慮させるほど、異質なものだった。

「マトに……何かありまして？」

ソレイユやシディーが子供たちの相手をする中、リコが話しかけてきた。俺は再びダイニングの椅子に腰かけながら、その日あった出来事を語って聞かせた。

「まあ、お行儀の悪いことですこと」

リコが呆れるような表情を浮かべる。俺はゆっくりと頷きながら、マトカルを糾弾する内容が書かれた手紙を差し出す。彼女はそれをじっと見ていたが、やがてそれをテーブルの上に置き、ゆっくりと息を吐き出した。

「自分の思い通りにならなかったから、その怒りをこんな形でぶつけているのですね……。この、シーワと言う御方……。とても頭のいい御方だとは思いますが、何とも言えぬお行儀の悪さが、この文章の端々に見えますわ。なるほど、マトが落ち込むのがわかる気がしますわ。見る者を不快にする文章……。それが自分に向けられているとなると、余計ですわね。しかし……このシーワと言う御方、勿体ないですわね……」

「勿体ない……か。意外な答えだな。俺はてっきり、こんなものは相手にするなと言うと思ったんだが」

「相手にしないに越したことはありませんわ。このお方の眼鏡に叶わなければ、これからも、かなり不快な思いをすることになるでしょうから……」

「それは、俺も思う」

「リノス」

「何だい、リコ？」

「マトを……守ってやってくださいませね」

「そりゃ、守るさ」

「いいえ、リノスの考えていることと、私がお願いしたいこととはきっと、違いますわ」

「どういうことだい？」

「リノスは、マトを批判から守る……そう考えておいでですわね？　言わなくても分かりますわ。でも、それではマトの気持ちは汲んでいることになりませんわ」

「ほう、詳しく」

「本来のマトは、アガルタ軍の教育担当ですわ。今はその本来の仕事を投げ打って、ワーロフに赴いているのです。彼女は屋敷に帰って来てからも、報告書に目を通すなどして、自分の仕事をきちんとこなしていますわ」

「え？　マジで？」

「マトはアガルタのため、リノスのため、自分のためにもなると考えて、今回の戦いに赴くことを選んだのですわ。そして、ワーロフにとって力を尽くそうと考えていたのですわ。それが、こんな形で踏みにじられているのです。その気持ち、わかりまして？」

「……ヤル気は削がれるよね」

「でも、マトはそれを絶対に口に出しませんわ。そんな後ろ向きの自分を必死で鼓舞して立ち向かおうとしているのです。そんな彼女にしてやれることと言えば……」

「ちゃんと、マトにも味方がいる。気持ちを汲んでやる者がいると思わせてやること……」

「その通りですわ」

リコはにっこりと微笑む。そして、俺の耳元に顔を近づけてきた。

「今夜は、マトと一緒にいてあげてくださいませ」

「わ、わかった」

◆　◆　◆

「ふぅ～やっと寝たか……」

俺はスヤスヤと寝息を立てているエリルの顔を、優しく撫でる。生まれた頃はリコに似ていると思っていたが、最近ではあの、エリルお嬢様に面立ちが似てきたようにも思える。成長すれば、あんな感じになるのかと思うと、楽しみのような、そうでもないような、なんとも複雑な気持ちになる。

そんなことを考えながら俺は、メイに念話を飛ばす。彼女はすぐに寝室に入ってきて、エリルを優しく抱きかかえた。もう、ベビーベッドには入らないくらいに大きくなった。その成長が俺には素直にうれしく思える。

メイはスッと頭を下げると、エリルを抱えたまま寝室を後にしていった。

「……リノス様」

「どうした、マト？」

「今夜はその……一人で寝かせてもらえないだろうか」

「そうだな。今夜はゆっくりと休むといい」

「すまない……」

そう言ってマトカルはベッドから降りようとする。俺は思わずその手を掴む。背中を向けたままの彼女の体が、ピクンと震えた。

「マト、大丈夫だからな。絶対に、大丈夫だ」

「……」

「お前は、本当に頑張っている。俺たちのこと、アガルタのこと、兵士たちのこと……子供たちのこと。いつも気にかけてくれているのを俺は知っているつもりだ。お前はお前なりに精いっぱいやってくれている。ワーロフのことも、お前なりに力になろう……そう考えてくれていることも、俺はわかっているつもりだ。だからマト、大丈夫だ」

「……ありがとう」

「ただ、あのシーワという司令官……惜しいな。ここは一つ、彼女に教えてやらなければならないな」

「教える？　何をだ？」

「世の中は自分の思い通りにはいかないってことをさ。そして、思い通りにいかないからこそ、面白いんだってことをさ」

「……すまない、よく、わからない」

「まあ、任せておけ。俺に考えがある」

俺の言葉に、彼女はゆっくりと視線をこちらに向ける。

「……リノス様、意地悪な顔をしている」

「そうか？　いい男だろう？」

「……やっぱり、一緒に、寝ても、いいか？」

「もちろんだ」

彼女はゆっくりと俺の許に戻ってきた。そして、俺の胸に顔をうずめた。

この日のマトカルは、珍しく目をつぶったまま俺の愛を受け続けた。いつもは、彼女の目を見ていると、その瞳の奥に炎が燃えているのを感じる。それがマトカルの反応そのものなのだが、この日はそれを見ることができなくて、少し戸惑った。

だが、目を閉じたままでも彼女の表情でそのときの心境は十分に察することができた。彼女はいつもとは違って俺に抱きついたまま離れようとはしなかった。シーワの仕打ちが、相当にショックで、悔しかったのだということは、肌を合わせていると、十分に伝わってきた。俺は何度も彼女の耳元で、大丈夫だと繰り返した。その度に

彼女は、ありがとうと呟き、俺を抱きしめてきた。

どちらかと言えば受け身だったマトカルが、いつもとは違う反応を見せたこの日の夜は、時間が経つにつれて、俺自身も燃え上がらせた。そんな濃厚な夜は、俺とマトカルの心を深く通わせたのだった。

◆◆◆

「……！？」

目が覚めると、すでに朝になっていた。部屋がとても暖かい。ここは……。

「おはようございます、エリルちゃん」

不意に声が聞こえてきた。ゆっくりと顔を上げると、そこには、お母さん――メイの優しい顔があった。エリルは慌てて体を起こす。

「マトちゃんは？」

「朝早くに、出かけましたよ。お父様も一緒にお出かけになるから、エリルちゃんが一人になるからって、ここに連れてきました」

ゆっくりと見廻すと、そこは見慣れた部屋があった。少し鼻を突く古い紙と薬品の臭い……。だが、それは決してイヤな臭いではなく、何かを学ぼうと思わせる不思議な臭いだ。

ふと横を見ると、妹のアリリアが大の字になって眠っている。いつもの朝がそこにあった。

「大丈夫です。マトちゃんは、あなたのお父様が守って下さいます。今日は、いつものマトちゃんに戻って帰って来ます。……昨日はずっとマトちゃんと一緒にいてくれて、ありがとうね。とっても、助かりました」

母の優しい笑みが、エリルの心を癒していく。彼女は大きく頷いたかと思うと、母に向かってゆっくりと口を開いた。

「今日の夕食は、私もお手伝いするね」

「ええ、是非、そうしてください。私も、今日は早く帰って来て、ペーリスちゃんを手伝います。二人で、とびっきりのご馳走を作って、マトちゃんを迎えてあげましょう」

「うん」

とびっきりの笑顔で返事を返すエリル。その表情を、メイは優しい笑顔で眺め続けた。

第四百五十七話　開戦の火ぶた

「さて、皆様よろしいでしょうか？　それでは、各テーブルの代表となる方は、それぞれのご意見を発表願います」

よく晴れた冬空の下、シーワの機嫌の良さそうな声が響いていた。

ワーロフ帝国側からの要請で開かれた三回目となる軍議は、これまでに見たこともない形式で行われていた。通常、軍議はロの字型、もしくは、戦争当事国と援軍に赴いた国々の諸将が向かい合って行う形式で行われることが一般的だった。だが、今回に関しては、全ての諸将がチームごとに分けられ、少人数のグループが形成されていた。さらにそのグループには、必ずワーロフ帝国軍の司令官が入り、彼らの意見の取りまとめを担っていたのだった。

この日の軍議では、帝国側から提示されたドルガの地図や軍勢の配置図などをもとに議論がなされたが、集まった諸将たちは戸惑いのために、なかなか意見らしい意見を述べるものは少なかった。それでも、ワーロフ側の司令官たちは、巧みに質問を投げかけることで、諸将たちから意見を引き出していったのだった。

シーワの呼びかけに、ワーロフ側の司令官たちが意見をまとめた紙を片手に、彼女の許に集まっていく。そして、手際よく、それぞれのグループで出された意見を発表していくのだった。

◆　◆　◆

「総攻撃をかけるんか～い」

呆れたような表情で天を仰いでいるのは、リノスだった。その隣では、マトカルが一切表情を変えずに、目の前の男に視線を向けている。彼らの前にいるのは、ザルブというアガルタ軍の司令官の一人だった。

「まあ、ご苦労だった、ザルブ。随分とファンキーな軍議だったな」

「ふぁんきー？」

「いや、珍しい軍議だったな。まあ何だ。こんな軍議は金輪際経験することはないだろう。貴重な経験をしたと思っておくといい」

「は……はあ……」

「何なら、我がアガルタ軍でも、その手法を取り入れようか？」

「ご冗談を！　戦いにおいては、即断、即行動が肝要であると思っております。ダラダラと意見を交わしている暇など、ないものと愚考します。戦いは、指揮官の優劣で決まると考えます。作戦を立案するのは基本的に、戦いの前段階で行うべきものなのです。敵が眼前にいるときにするべきものではありません」

ザルブのその言葉に、リノスはフッと笑みを漏らす。

「そうだな。俺もその意見に概ね賛成だ。まあ、今回の軍議は戸惑っただろうし、やりにくかっただろう。しんどい仕事を押し付けて悪かったな。下がってゆっくりと休んでくれ」

ザルブは一礼して、彼らの前を辞していった。

「総攻撃……か」

「心配するな、マト」

「しかし……」

「大丈夫だ。ちゃんと策は考えてある」

「……」

心配そうな表情を浮かべるマトカルに、リノスはニコリと笑いながら、ウインクを投げかけた。

◆　◆　◆

「来ないな……」

一方、ドルガでは黒龍であるロイスが苛立っていた。その隣には、妹のシャリオが控えている。

ロイスの目論見では、ワーロフ帝国側は、援軍が集まればすぐにでも総攻撃をしかけてくると考えていた。その上、アガルタ王リノスがいるのならば、猶更、その攻撃は早まるものだと考えていたのだ。ともすれば、リノス一人でも、この街に攻撃を仕掛けてくるだろう……そんなことさえ考えていたのだった。

「……完璧に作りすぎて、気後れしたか？」

ロイスは誰に言うともなく呟く。それを見たシャリオは無表情のま

ま、ゆっくりと息を吐き出している。

「お前の言いたいことはわかっている。あれだけ働かせておいて、その言い草はないだろう……。そう考えているな？」

「当たらずとも、遠からず、です」

「フハハハ」

ロイスは空を見上げながら、カラカラと笑う。彼はフワリと浮き上がると、ゆっくりと周囲を見廻し始めた。

「中の兄さま、あまり動かれますな。人化しているとはいえ、そのような姿を見られれば、我々の存在が疑われる」

シャリオの声を受けてロイスはゆっくりと地上に降りてくる。

「見えんな」

「中の兄さま？」

「アガルタ王リノスらしき者が見当たらん」

「……」

「龍王と対峙する程の男だ。その魔力たるや我らに勝るとも劣らぬものであるはずだ。しかしながら、そんな膨大な魔力は一切感じられない。これはどういうことだ？」

「フフフ」

「何がおかしい、シャリオ」

「中の兄さまとしたことが」

「何？」

「我々と勝るとも劣らぬ能力を持っていれば、己が能力を隠すスキルを持っていても、何の不思議もないはずだわ」

「この俺の眼でさえも……欺くか？」

「龍王と互角に対峙する男と言ったではありませんか。中の兄さまは、龍王の気配を感じることはできますか？」

「何を言うか！　近くにいれば、たとえ龍王と言えど、俺の眼を欺くことはできぬはずだ」

「……」

「まあいい。アガルタ王リノスがいればそれでよし。いなければいないなりに、楽しみ方はある」

そう言ってロイスは、ニヤリと笑みを漏らした。

◆　◆　◆

それは、突然のことだった。

ワーロフ帝国に援軍に来ていた国の一つである、マーダー王国軍。

その彼らの前に、一人の兵士が忽然と現れたのだ。敵……であることは認識できたものの、その男が一体何のためにここに現れたのか……彼らはその真意を測りかねていた。

男の手には石が握られていた。彼はそれをポンポンと投げては掴み、投げては掴みと弄んでいたが、やがてフッとマーダー側の陣地に向けて投げ入れた。それはとんでもない速度で兵士の一人に向かって行く。

「ぐわっ！」

マーダー王国軍の兵士の一人が、突然倒れる。見ると、男の投げた石は、正確に兵士の眉間を割っていた。騒然とする王国軍を尻目に、男は再び石を拾って、マーダー側に投げる。

「ガッ！」

再び兵士の叫び声が聞こえたかと思うと、まるで人形のように兵士の体が宙を舞った。

「おのれ！　我らを舐めるな！　かかれ！」

指揮官の命令一下、男に向けて魔法と弓矢が雨あられと降り注ぐ。男の命はここで潰えたかに見えた。

「みっ、見ろ！」

男の周囲には無数の矢が刺さっており、魔法での攻撃のためか、周囲には大きな穴も開いている。だが男はニヤニヤと笑みを浮かべながら立ち尽くしている。そして、先程と同じく、無造作に石を投げ

る。

「ガハッ！」

指揮官の男のすぐ隣にいた兵士が、眉間を割られて倒れる。その様子を見た男は、満足げな表情を浮かべる。そして、マーダー王国軍を指さして、人差し指をクイクイと曲げ、かかって来いと言わんばかりに挑発する。

「おっ……おのれ……」

指揮官の声が聞こえたのか、彼は再びニヤリと笑い。踵を返してゆっくりと歩き始めた。

「我々をここまでコケにするとは……許さん！　全軍、打って出よ！　あの男の首を獲れ！」

指揮官の号令一下、マーダー王国軍四千が突撃を始めた。

◆◆◆

「何？　突撃が始まっただと？」

驚きの表情を浮かべているのは、ワーロフ帝国のゲシカナ将軍だった。彼は眉間に皺を寄せながら舌打ちをする。その様子を見ながら、伝令は言葉を続ける。

「ハッ、どうやら、マーダー王国軍が敵の挑発に乗ったようです。それを見て、隣に在陣しているマダイラ帝国軍も、ドルガに向かって突撃を始めました」

「すぐに兵を引かせるのだ！」

「お待ちください」

声を上げたのは、シーワ副司令官だった。彼女は幕僚たちに視線を向けながら、ゆっくりと口を開く。

「どうせ、遅かれ早かれ、総攻撃を行うのです。いい機会ではありませんか。これを機に、総攻撃を仕掛けましょう」

「しっ、しかし……」

「皆さん」

ゲシカナ将軍の声を遮るように、シーワは声を上げる。彼女はスッと立ち上がり、まるで宣言するかのように声を上げる。

「総攻撃に移ります。皆さんは、ヒーデータをはじめとする各国に総攻撃に移るよう伝えてください。くれぐれも、使者などを立てずに、できるだけあなた方が赴いてください。いいですね？」

「ちょっと待て、何故、我々が直接赴かねばならんのだ？　伝令を飛ばせばいいではないか？」

「チャン司令官、わかっていませんね？　総攻撃を仕掛けるのですよ？　兵士の命が少なからず失われるのですよ？　そんなお願いに上がるのです。相応の者が行って頭を下げるのが礼儀と言うものではないのですか？」

「それでは、我々が総攻撃に移るのが遅れるかと思いますが？」

「ワーカさん。その心配には及びません。あなた方が帰陣したら、そのまま総攻撃に移っていただいて結構です」

「そ、それでは……」

「ギギ」

「はぁい」

シーワは言葉を続けようとするワーカ司令官の言葉を遮り、妹のギギに視線を向けた。

「アガルタには、あなたが行きなさい。わかるわね？」

「承知しましたぁ」

にこやかに返事をするギギ。そんな二人のやり取りを、チャンとワーカの二人は、呆れた表情で眺め続けていた。

第四百五十七話　開戦の火ぶた（後書き）

『結界師への転生』コミカライズ版第八話が公開されました（ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ？ｃａｔｅｇｏｒｙ＝１４）無料公開は２０１９／０９／０３　１２：００まで。是非、チェックしてみてください！

第四百五十八話　え？　何だって？

リノスが陣取る山の頂上からは、その戦いの様子がよく見て取れた。突然、歓声が上がったかと思うと、一軍がドルガに向かって突撃を始めた。それに釣られるように、周囲にいた軍も突撃を開始したのだ。

だが、その他の軍勢は動く気配を見せず、どうやらこれは、一部の軍勢が抜け駆けしようとして突撃を始めたのだなと解釈した。しかし、時間が経つにつれ、ドルガを囲んでいた軍勢が次々に突撃を開始し始めた。さすがにこれは、リノス自身も驚きを隠しきれなかった。

「なんじゃこりゃ？　総攻撃をかけるとは聞いていたが、こんな段階的に行うのか？　てっきりいっせーのーで、で行うと思っていたんだが……」

彼はその様子を上空から確認しようと、イリモのところに向かう。そのとき、兵士の一人が、彼の許に足早に駆け寄ってきた。

「申し上げます。ワーロフ帝国軍司令官、ギギと名乗るお方がお見えです」

「ワーロフの司令官？　何だ？」

リノスはマトカルと顔を見合わせる。彼女は彼に視線を向けたままゆっくりと頷く。

「いいや、マト。お前は出なくていい。隠れていろ」

「な？　そんなわけには……」

「大丈夫だ。ほらよ」

彼はマトカルに向かって、何かを呟きながら手をかざす。

「これでマトの姿は俺以外の人間には見えなくなった。一応、声は聞こえるから、黙っていてくれな」

リノスは、傍らに控えている兵士に、マトカルの姿が見えないことを確認すると、いそいそと布を顔に巻き始めた。そして、準備が整うと、指をクイクイと動かして、ギギを連れてくるよう指示を出した。

程なくして現れたギギは、鎧を装備した男性を伴って現れた。同じ指揮官である、トーイッツだ。二人はキョロキョロと周囲を見廻していたが、やがて不思議そうな表情を浮かべながら、ギギが口を開いた。

「恐れ入りますぅ。マトカル様は、どちらでしょうかぁ？」

「ああ、マトカルなら、席を外しているんだ。御用の趣を承ろうか？」

「あのぉ……失礼ですが……あなたは？」

「俺？　俺は、アガルタ王リノス……の友人かつ右腕と言われているとかいないとか……。まあ、その、なんですよ。その何がどうと

いうわけではありませんけれども……そう、あれなのですよあれ。そんな感じです」

「恐れ入ります、お名前をお聞かせいただいても、よろしいでしょうか？　先日、マトカル様のお隣においでになられていたのは承知しているのですが……すみません」

トーイッツが遠慮しながら質問してきた。リノスが視線を向けると、オドオドとした様子で、視線を地面に向けてしまった。そんな彼をチラリと見たギギは、キッとした視線をリノスに向けた。

「それじゃぁ、お前さんたちは、俺の名を、知らねぇのかい？　……知らざぁ、言って聞かせやしょう！　俺の名前わぁ……ええと……スノリ。スノリたぁ、俺のことだぁ」

「……階級を伺っても？」

「階級ぅ？」

戸惑うリノス。だが、その背後からマトカルの小さな声が聞こえてきた。

『……大佐』

「大佐だ」

「なるほど、スノリ大佐……で、よろしいでしょうか？」

「しまった。大佐であれば、シ○アを名乗ればよかった。ああ、いい。気にするな。こっちの話だ。赤い彗星を名乗ってもいいが、仕

事が三倍できると思われるというのもな。うん、スノリ。スノリでいい」

一人で納得するリノスを、まるで汚いものを見るかのように、ギギは嫌悪感を露わにしている。その表情のまま、彼女は言葉を続ける。

「恐れ入りますがぁ。ちなみにィ、マトカル様の階級を伺っても？」

「うん？　マトカルの階級？」

『ワーロフ帝国派遣軍総司令官とでもしておいてくれ』

「ワーロフ帝国軍、総司令官とでもしておいて」

『いや、違う』

「いや違う！　うん？」

キョトンとした表情を浮かべるギギとトーイッツ。その表情を見て、リノスも首をかしげる。

「あのぉ……マトカル様のぉ階級は……。総司令官、ということで、よろしかったでしょうかぁ？」

「それでいいみたい」

「承知……しましたぁ。それでは、総司令官様にィ直接お伝えしたいので、待たせていただきますぅ」

「いや、それには及ばない」

「どういう意味ですかぁ？」

「君たちの声はちゃんと聞こえているはずだ」

「言葉の意味がよくわかりませぇん」

「その……何だ。色々あって、今はここに出られないのだ。あなたなら、わかるでしょ？　わかりますよね？　ね？　ね？」

「よくわかりませんがぁ……」

「そこは察していただきたい。察していただきたいのです」

ギギとトーイッツは顔を見合わせていたが、やがて、仕方がないという表情を浮かべて、再びリノスに視線を向けた。

「それではぁ。我々はぁ、本陣よりの使者でありますぅ。私の言葉わぁ、すなわちィ、ワーロフ帝国軍総司令官、ゲシカナ将軍のお言葉とお心得くださぁい。貴国に要請いたしますぅ。今、ただ今をもってぇ、全軍でぇ、ドルガをぉ、攻撃くださぁい。以上ですぅ」

「え？　何？　もう一度」

「ですから、全軍でドルガを攻撃いただきたいのです」

トーイッツが毅然とした態度で、ギギの言葉を繰り返す。その言葉を聞いて、リノスは固まる。

「ドルガの、どこを？」

「とにかく、攻撃していただきたいのです」

「だから、どこを？　城門なのかしら？　城壁なのかしら？」

「どこでも結構です」

「そりゃまた乱暴な」

「とにかくぅ！」

苛立ちを隠し切れない様子で、ギギは両手を握り締めながら、口を開く。

「アガルタ軍はぁ！　すぐに山を降りてぇ、ドルガをぉ、攻撃していただきたいのですぅ。堀を渡りぃ、城壁を越ぇ、ドルガの街にぃ突撃していただきたいのですぅ！」

「まあ、落ち着きなさいよ。要は、ドルガには堀と城壁がありますね？　それらを越えて、街の中に突入しろと。なるほど。で、突入したら、何をすればいいのです？」

「そのときはぁ、改めて指示を出しますぅ！　まずはぁ、ご出陣くださぁい！」

「だから落ち着きなさいって。ええと、話を整理しますよ？　我々は……」

「いい加減にしてくださぁい！　何度言えばわかるんですかぁ！　突撃するんですぅ！」

「うるせぇよ」

リノスが口を開いた瞬間、ギギとトーイッツの膝がカクンと折れ、二人はゆっくりと倒れた。

「リ……リノス様……」

「大丈夫だマト。眠らせているだけだ。おい、伝令！　伝令！」

「しかし……」

「心配するな。俺に任せておけ。ちゃんと考えがあるんだ」

「あの……どなたとお話で？」

気が付くと、伝令の兵士が怪訝な表情で見つめている。リノスはオホンと咳払いをして、傍らで意識を失っているギギとトーイッツに視線を向ける。

「ああいや、ええと……。そうだそうだ。ワーロフ帝国から来た使者が、お疲れなのかしらね？　気を失ってしまったのだよ。そのために、使者が伝えようとした内容がよくわからない。すまないが、何人かで力を合わせて、この二人を帝国の本陣に連れて行ってもらえないだろうか。そして、この二人が俺たちに伝えようとしていたことは何か……。聞いてきてはもらえないだろうか？」

「ハッ……。ご命令とあれば、喜んで」

「そうか、頼むよ。助かる」

伝令の兵士は一旦その場を離れ、すぐに数名の兵士を伴って戻ってきた。そして、ギギとトーイッツを担架に乗せ、その場から運び出そうとする。

「ああ、山の下は総攻撃が始まって、軍勢が入り乱れているからな。気をつけろ。ゆっくりと、安全なルートを通って行け」

リノスのその声に兵士たちは恭しく一礼し、二人を運んでいった。

「リノス様……そんなことをして……」

「いや、いいんだマト」

「しかし……」

「今、俺たちが動くわけにはいかないんだ。今、動けば俺たちは犬死だ。それがわからないマトじゃないだろう？」

「……」

「総攻撃に加わっている国々には悪いが……。この戦いは勝たねばならない。そのためには、もう少し時間がいる」

顔に巻いている布のためにその表情は伺い知ることはできないが、リノスのその体中から発せられるただならぬ気配は、マトカルの心臓を高鳴らせるものだった……。

第四百五十九話　大敗

冷たい北風が吹きつけてきた。体が芯から冷えていくのを感じるほどの冷気を含んだ風だ。その寒さに耐えながら、ワーロフ帝国軍の本陣では幕僚たちが無言のまま控えている。

彼らの眼前には、じっと目を閉じ、腕を組みながら天を仰ぐゲシカナ将軍と、その隣で、気だるそうな雰囲気を隠そうともせず、無表情のまま手元の紙に視線を落とすシーワ副総司令官の姿があった。

「一万……五千……。これは、正確な数字ですか？」

鋭い目つきで幕僚たちを睨みつけるシーワ。その彼女に視線を向けるものは一人もいない。

「どうなのですか？」

「せ……正確な数字です」

若い幕僚が声を振り絞るようにして答える。その様子を見て、シーワはさらに言葉を続ける。

「どうやって、この数字を出したのですか？」

「どう……やって？」

「先ほど、正確な数字かと私は聞きました。あなたは、正確な数字と答えました。では、この報告書に書かれている数字が正確なもの

であるという根拠を聞いているのです」

「各国の陣に赴きまして、死者の数を聞いてきました。我が軍につきましても、各隊から死者の数を報告させ、その数をまとめています」

「正確に数えたのですか？」

「は？」

「正確に数えたのかと聞いているのです」

「そこまでは……」

「ということは、正確な数ではない、ということになりますね？」

「いや、そんなことを言われましても……」

「私は正確な数字が知りたいのです。ですから、報告された数字が正確かどうかを確認したのです。あなたは、正確である、と報告しました。ですが、今の話では、正確でないということでした。あなたは、私に虚偽の報告をしたことになります」

「おい、いい加減にしないか」

間に入ったのは、チャン司令官だった。彼は巨体を大儀そうにゆすりながら席に座り直す。

「今、ここで論じなければならないのは、そんなつまらないことではないだろう」

「つまらない？　つまらないとは何ですか？　人が死んでいるのですよ？」

「今は、戦争中でさぁ。人が死ぬのは当然でさぁ」

ワーカ司令官も言葉を続ける。彼はゆっくりと息を吐くと、優しい口調で語りかけた。

「今、俺たちが考えねばならないのは、一刻も早くドルガの奪還することです。今回の作戦は明らかに失敗です。同じ轍を踏まぬよう、新たな作戦を立てることこそ肝要かと思います」

「ならばワーカさん、あなたが次の作戦を立案してください」

「は？」

「そこまで言われるのであれば、ワーカさんが立案してください。よい作戦を期待しています」

「ちょっと待て、それは話が違うだろう」

「では、チャン司令官。あなたもワーカさんと一緒に作戦を立案してください」

「おい！」

「まあ、待て。落ち着け」

声をかけたのはゲシカナ将軍だった。彼はゆっくりと幕僚たちを見

廻しながら、口を開く。

「死者の正確な数を把握することは、理に適っている。各国は死者の数を多めに報告するものだ。多くの国が来援しているこの状況下……。正確な実数を掴んでいけば、自ずと報告された人数よりは減るだろう。死者が一万五千と一万では、兵士たちの士気が全く異なるだろう。シーワはその点を考えているのだ」

そこまで言うと、彼はチャン司令官とワーカ司令官に視線を向ける。

「それに、そろそろお前たちで作戦を立てることも必要だろう。いつまでも、私やシーワ、ギギが作戦を立てているようではいかんだろう。チャン、ワーカ、早急に作戦を立案しろ」

そう言って、ゲシカナ将軍は席を立つ。それに倣うようにシーワ副総司令官、ギギ司令官、トーイッツ司令官が立ち上がり、皆でその場を後にしていった。残る若い幕僚たちも次々にその場を去り、その場には、チャン司令官とワーカ司令官の二人が残るのみとなった。

「……作戦の失敗を、今回も検証せんとは、どういうことだ」

チャン司令官が巨体をゆすりながら嘆く。彼が嘆くのも無理はない。昨日決行した総攻撃は一万人以上の死者を出すという大敗を喫していたのだ。前回、ヒーデータ帝国と行った総攻撃の死者はおよそ五千。それを上回る死傷者を出していた。

「同じ失敗を、繰り返していますからね……」

ワーカ司令官も、チャンに同調するように、ため息をつく。

彼らからしてみれば、ただ単にドルガに突撃するだけの、到底戦略とは言えない作戦を、一度ならずも二度までも実行して、結果、大敗を喫しているのだ。しかも、被害の大半は援軍に駆け付けてくれた国々に集中しており、その国々が不満を抱いているのは、火を見るよりも明らかだった。

彼らは、ドルガの奪還という課題に加えて、各国々との関係をどうしていくのか……。そうしたことを考えながら、同時に深いため息をつくのだった。

◆　◆　◆

「……中の兄さま、もうそろそろ」

「わかっている」

一方、ドルガの街では、黒龍であるロイスとシャリオだった。シャリオは呆れたような表情で兄であるロイスを眺めている。

彼女の目の前には、山と積まれた兵士の死体があった。それを、人化を解いたロイスが片っ端から食らっていたのだった。

「うん、人間は、いつ食っても美味い。シャリオ、お前も食え」

「いや、私はいい」

「ふっ、遠慮深い奴だ。この味を知らんとは、ずいぶんと損だぞ？」

「損でもいい。早く人化してくれ、中の兄さま。私の結界も限界だ」

「……仕方がないな」

さも惜しそうに、ロイスは人化を開始する。それを見ながらシャリオは安堵したような表情を浮かべる。

……まったく、中の兄さまの能力を抑える結界を張るのは、疲れる。

そんなシャリオにチラリと視線を向けたロイスは、表情を硬くしながら、小さな声で呟く。

「それにしても、攻撃がなかったな」

「攻撃？」

「フフフ。昨日、大規模な攻撃があったばかりではないか……そう考えているな？　違う。アガルタ王リノスが攻撃してこなかったという意味だ」

「ああ……」

シャリオは昨日の戦闘を思い出していた。北、東、西……。三方向から大軍で総攻撃をかけられた。彼女は、最も敵の多い西側にいて、指揮を執っていた。

敵は何のためらいもなく、彼女が作った堀に向かってきた。そして、その堀に足を取られて身動きが取れなくなった。そこを城内から弓矢と魔法で攻撃を仕掛けると、面白いように敵を討ち取ることができた。思い描いていた以上の、大勝利だった。

それはロイスが指揮していた北側でも同様で、当然、東側でも大勝

利を収めることができていた。彼らは指揮を執りながら、その中で最も能力の高い者を探し続けていた。だが、彼らの鑑定スキルと、優れた「目」をもってしても、龍王と同格の、恐るべき能力を持った者を見つけることはできなかった。

「まあ、敵も己の能力を封じるスキルを持っていてもおかしくはない。だが、それでも、攻撃となれば話は別だ。必ず己のスキルを使わねばならないだろう。しかし……そんな高い能力は全く感じなかった」

「まさか、ここには来ていないのでは？」

「いや、そんなことはない。アガルタ軍が到着しているのは確認している」

ロイスはそう言って顎をしゃくる。その方向には確かに、アガルタが陣を張る山があった。

「アガルタ王、リノスは必ずいる。どこかに隠れているはずだ……」

「中の兄さま、あまりやりすぎると、龍王に……」

「わかっている。心配するな」

そう言って彼はニヤリと笑う。

「まあ、しばらくは攻撃もないだろう。それまで、人間どもを食らいながら、次の作戦を考えるとしよう。さて、どうするかな……」

楽しそうに笑みを浮かべるロイス。その様子を見ながら、シャリオ

は何とも言えぬ不安を、心に覚えるのだった……。

第四百六十話　おしおき決定

一方、ワーロフ帝国の本陣では、司令官のチャンとワーカが、腕を組みながら天を仰いでいた。彼らは微動だにすることなく、ただただ、天を仰ぎ続けていた。

「で、どうするのだ、ワーカ」

苛立ちを隠そうともせず、チャンが口を開く。その声を聞いて、ワーカがゆっくりと姿勢を正す。

「どうもこうもありませんやね。取るべき手段は一つでさぁ。あのドルガという要塞は、食料を断って日干しにするほかはありませんや。ですが、敵は海を背にしています。海から食料を運び込まれれば、いずれ我々が枯渇してしまいまさぁ」

「そんなことはわかっている。何度も軍議で提案したではないか。それをあの女狐が全て否定したのではないか」

「う～ん」

「結局、あの女は我々が邪魔なのだ。我々を排除したいのだろう。スーノのときのように」

「……」

ワーカはゆっくりと目を閉じた。それはちょうど一年前。彼らの戦友であった指揮官の一人が自ら命を絶ったのだ。それは今でも、二

人の心の中に深い傷として残っていた。

スーノ司令官は、正義感の強い男だった。ちょうど一年前、シーワ副総司令官が、幕僚の一人を更迭しようとした。理由は彼女の意向に沿う働きができていないというものだった。その幕僚を教育したのが、他ならぬスーノ司令官だった。彼は、シーワに対して、その考え方は間違っていると諭した。だが、それを機に彼は、シーワ副総司令官とゲシカナ将軍から重箱の隅を楊枝でほじくるような指摘を受け続けることになったのだった。

チャンとワーカは、必死で同僚を庇ってみたが、二人の指摘は留まるところを知らず、結局、スーノ司令官は疲弊し、最後に自ら命を絶ったのだった。

「俺たちも、スーノと同じ運命をたどるのかもな」

「そういうわけには、いきませんやね……」

そのとき、伝令の兵士が現れ、彼らの前で膝をついた。

「ハッ、申し上げます。総司令官殿がお呼びです」

「来たか……」

誰に言うともなく呟いたのは、チャン司令官だ。彼はすぐに伺うと返事をして、大儀そうに巨体をゆすりながら立ち上がった。

「逃げられるところまで、逃げねばならんな」

「……まあ、軍人には褒められない行為ですがね」

「嫌味を言うな、ワーカ」

そんな会話を交わしながら、二人はその場を離れた。

◆　◆　◆

「で、作戦は？」

ゲシカナ将軍の隣には、予想した通り、シーワ副総司令官が座っていた。それだけでなく、ギギ司令官とトーイッツ司令官もその場に同席していたのだった。他の若い幕僚たちがその場にいないことが、彼らにとって唯一の救いと言えた。

二人は俯いたまま何も答えない。答えても無駄であることはわかっているし、この場はただ、無言でいることが一番の策なのだ。

「シーワが聞いているのだ、何故、答えないのだ」

ゲシカナ将軍の声が聞こえるが、二人は何もしゃべらない。

「そうやって黙るのはやめないか。我が軍は活発に意見を交わしながら作戦を立案していくことをよしとしているのだ。お前たちはいつも黙ったまま何も言おうとはしない。それが、我が軍の司令官たるものの態度か」

将軍はゆっくりと息をつくが、二人は目を合わそうともせず、俯いている。そんな二人を見ながら彼は、再び口を開く。

「作戦を立案するうえで、何か悩みがあればなぜ我らに聞きに来な

いのだ」

ワーカの方がピクリと動いた。それを見たゲシカナ将軍とシーワ副総司令官は顔を見合わせる。

「どうせ、作戦など立案できていないのでしょ？　ならば、私から指示を出しましょう。二人で、アガルタの陣に行ってください」

「……！？」

予想していない指示だったために、二人はキョトンとした表情を浮かべながらシーワの顔を見た。その様子を無表情で彼女は眺めている。

「先日の攻撃で、被害を受けていないのはアガルタだけです。他の援軍を送っていただいた国々は皆、被害を受けています。アガルタだけがのうのうと静観するというのは、許されません。あなた方は何としてもアガルタを動かし、攻撃に参加させてください」

「攻撃に参加、とは、いつ攻撃を行うので？」

ワーカ司令官の声に、シーワ副総司令官はフッと鼻を鳴らした。

「いつ、どこを攻撃するのかは、あなた方が決めてください。その上で、アガルタにその案を持って行ってください」

「ちょっと待て。おかしくはないか？　我々が作戦を立案して、アガルタがそれに同意したとして、お前が反対すれば、意味がなくなるではないか」

「そうならないように、ちゃんとした作戦を立ててください」

「いや、それはおかしいですやね。我々は構いませんが、もし、チャン司令官殿の懸念が現実になれば、我が国はアガルタの信頼を失いまさぁ。アガルタの信頼を失うことは、ヒーデータの信頼を失うことになりますぜ？」

「ヒーデータと我が国は縁戚ですよ？」

「いいや、そうとも言い切れんだろう。アガルタを甘く見積もるな。あの国はヒーデータだけでなく、ニザ、ラマロン、フラディメ、ミーダイとつながりがある。それに、タナ王国を支配下に置いている。クリミアーナも……」

「わかっていますよ？　そのくらい？　ですから、そうならないように、あなた方がちゃんとした作戦を立てれば、問題ないのです」

「あのなぁ」

「まあ、待て」

険悪な空気に割って入ったのは、ゲシカナ将軍だった。彼は皆を見廻しながら、ゆっくりと口を開く。

「チャンの言うことも一理ある。この二人が立てる作戦だ。必ずしも軍議に耐えうるものを上げてこられるとは限るまい。では、ギギ。お前がこの二人の作戦立案に加われ」

「はぁい、わかりましたぁ」

仕方がない、という表情を浮かべながら返事をするギギ。そんな彼女を前に、チャンとワーカの二人は、死んだ魚のような目をしながら、ゆっくりと息を吐き出すのだった。

◆　◆　◆

アガルタ軍の陣に、ワーロフ帝国軍から使者が到着したのはそれから数時間後のことだった。

「どうされたのだ、一体」

口を開いたのは、マトカルだった。彼女は目の前に並ぶ三人を無表情で眺めている。

「ええと……本日伺いましたのは……」

口ごもっているのは、チャン司令官だ。彼は巨体を揺らせ額の汗を拭っている。その彼の後ろでは、ギギが冷たい目で様子を眺めている。

「本日は、お願いがあって参りました」

意を決したように口を開いたのは、ワーカ司令官だった。彼はマトカルとその横に座るリノスに交互に視線を向けながら、落ち着いた声で言葉を続けた。

「明後日の早朝、ドルガに向けて再度、総攻撃を行うこととなりました。つきましては、アガルタ軍には、その先陣をお願いいたしたく参った次第です」

「ほう、俺たちに先陣を、か？」

声を上げたのはリノスだ。顔を布で覆っているために声が若干くぐもってしまっていて、聞き取りにくいが、彼の眼を見ると、どうやらその布の下では、笑みを浮かべているように見える。

「はい。アガルタ軍の勇猛さは近隣諸国に知れ渡っております。その精強なるアガルタ軍が先陣を切ってドルガに突撃すれば、自ずと士気は上がり、他の軍勢も我先に突撃を敢行することかと存じます」

「それはお安い御用だが、前回の作戦と変わらない気がするが、何か改善された点はあるのかな？」

「ドルガの外堀は、前回の突撃でかなり水位が下がっております。今回は堀を超えることは難しくないと考えています」

「堀を越えて、城壁を越えて、どこまで進むのだい？」

「一気に、ドルガを占領します」

「前回とそう変わっていない気がするが？」

「ご懸念もありましょうが、どうか、我らの、ドルガ奪還に、ご協力、いただきたく、お願い、申し上げます」

ワーカが何とも言えぬ表情で頭を下げる。その様子を見ながらリノスは、呆れたように声を上げる。

「前回、君が言っていた作戦と変わらない気がするけれど、それでいいのかな？」

彼の視線の先には、ギギの姿があった。彼女は一瞬、リノスと目を合わせたが、すぐに視線を逸らせた。

「申し訳ありませんがぁ。黙っていていただけますかぁ？」

「何？」

「我々はぁ、マトカル様にお願いしているのですぅ。一介の司令官であるあなたにぃ、お願いしているわけではありませぇん」

ギギはそう言って、まるで睨みつけるようにマトカルを見た。

「私は反対だが……。リノス様の判断を仰ぎたい」

「えっ？　リノス様？」

「ああ、言っちゃったよ」

リノスの声と共に、ギギがまるで崩れ落ちるように、その場に倒れこんだ。

「俺の存在は秘匿しろと言っていただろうに。お、し、お、き、決定だな」

そう言いながらカラカラと笑うリノス。その光景を、チャンとワーカは驚愕の表情で眺めるのだった……。

第四百六十一話　要請、お受けします

口をあんぐりと開けたまま固まっているチャンとワーカに、リノスはゆっくりと声をかける。

「その……何とかという女性……名前忘れちゃった。その、小ダヌキちゃんには眠ってもらった。起きたら、介抱してやってくれ」

「そ……その……リノス様と言われると……アガルタ王……」

「そうだ。バレちゃ仕方がないな。あなた方は、この小ダヌキちゃんとは少し違うようだ。むしろ、この小ダヌキを嫌っているな？　まあ、この小ダヌキもあなた方を嫌っているようだが。だから、眠らせずにおいた。だが、俺の存在は秘匿しておいて欲しい。できるかな？」

二人は顔を見合わせていたが、やがて深く頷いた。

「そうしてもらえると、うれしい。ところで、先程の話だが、本気で作戦を決行しようと思っているのか？　どうも、あなた方二人からはそんな雰囲気を感じなかったけれど？」

「さすがはアガルタ王様。見事なご慧眼です。実は……」

「ああ、喋らなくていい。ちょっと待ってください」

リノスは手でチャン司令官の話を遮り、その体勢のまま動かなくなった。言うまでもなく二人に「鑑定スキル」を発動しているのだが、

二人はそんなことは知る由もなく、ただじっとリノスに視線を向け続けている。

「……なるほど、色々とご苦労がおありになったようで。あなた方はこの作戦には反対なのかな？」

「賛成する理由がありませんやね」

リノスの声に反応したのは、ワーカ司令官だ。彼は首を左右に振りながら言葉を続ける。

「大体、何の反省もなく、むやみやたらに突撃を繰り返しているだけでさぁ。それでドルガが奪還できたら、我々軍人はいりませんやね」

「では、あなた方はどうするべきだと考えているのかな？」

「我々は、食料を断って日干しにする他はないと考えております。あんな堅牢な城塞都市、攻撃すればするほど、味方の損害が増えますやね」

「なるほどな。俺も、同意見だ。しかし、あなた方の副総司令官様は、どうしてこんな無闇な突撃作戦にこだわるのかね」

「いくら大軍で囲んだといえども、ヤツらには海がありまさぁ。海から補給されれば、ほぼ永遠に奴らはドルガを維持することができやす。そうさせねぇためにも、大軍で一気にドルガを抜く……というのが、あの方の腹でさぁ。まあ、そうした方が派手ですし、戦果も強調できやすがらね」

ワーカの話をじっと聞いていたリノスは、大きく頷く。彼はしばらく倒れているギギに視線を向けていたが、やがて、ゆっくりと息を吐き出すと、再びチャンとワーカに向き直った。

「あなた方も大変だな。わかった。ワーロフ帝国からの要請を受けようじゃないか」

「え？　どういうことです？」

「突撃するんだよ」

「……正気ですか？」

「二日後だろ？　いいよ。二日後、確かに俺たちは突撃する。あなた方の副総司令官殿に、そう言っておけばいい」

チャンとワーカは顔を見合わせていたが、やがて、戸惑いを隠そうともせずに、オドオドとした様子で頭を下げた。

「……ううん。あれぇ？」

そのとき、彼らの後ろで倒れていたギギがむっくりと起き上がった。彼女は不思議そうに周囲を見廻している。

「おい、大丈夫か？」

「……」

「突然倒れたので驚いたよ。前にも君は倒れていたな。どこか体の調子が悪いんぢゃないか。一度、医者に診てもらうといい。よけれ

ば、アガルタに来ないか。アガルタの都にはメイリアスという世界一の名医がいる。よければ紹介しよう。メイリアスだったら、よいツテがある」

全く抑揚のない言い回しで喋るリノス。そのためにギギは言葉の意味をよく飲みこめずにいた。キョトンした表情を向ける彼女に、リノスはカッと目を見開いたかと思うと、さらに早口でまくし立てた。

「ちなみに、だが、メイと名医はかけてないからな。そこだけは間違うなよ。以前にそんなことを言ったヤツがいたが、それをパクっていると思われるのは心外だ。断じてパクったわけじゃない。いいな？」

「アガ……いや、お話はよくわかりました。よくわかりました」

チャン司令官が巨体を大儀そうに揺らして一歩下がり、スッと頭を下げる。それを見たリノスは立ち上がり、まるで宣言するかのように声を張った。

「二日後、我がアガルタ軍は、突撃を敢行する」

「この度のご決断、感謝申しやす。この上は本陣に立ち帰りまして、総司令官たるゲシカナに報告させていただきやす」

チャンに倣うようにワーカも一歩下がって頭を下げる。その様子を、リノスは満足そうに頷いている。二人はまだ状況が飲みこめていないギギを促しながら、その場を後にしていった。

「……大丈夫でしょうか？」

リノスとマトカルの二人だけになったのを待ちかねたように、クノゲンとルファナが入ってきた。彼らはリノスの傍に座ると、辺りを憚るように周囲を見廻す。

「で、どうだった？」

「はい。調べましたところ、ヒヤマに新しく築かれた砦には、およそ五百の兵士が詰めているようです」

「さすがはクノゲン。調べが早いな。だが、五百……か。少ないな」

「察するところ、バーリアル軍が割ける人数がその位だったのでしょう」

「兵の士気はどうだ？」

「旺盛ですな。先日のドルガでの大勝利が伝わって、士気は上がっているようです」

「そうか」

クノゲンの話を聞きながら、リノスは懐から一枚の紙を取り出す。それは以前、マトカルが描いた要塞の絵だった。

「ここは確か……堀の幅がかなり広いんだったな。ということは……」

リノスは顎に手を当てながら、じっと絵を見ていたが、やがて大きく頷くと、スッと顔を上げた。そして、再び懐に手を入れたかと思うと、一枚の紙を取り出し、そこに何かを書き入れ始めた。

「サダキチ」

リノスの傍に、突然フェアリードラゴンが現れる。二人は見つめ合いながら何かの言葉を交わしていたが、やがて、先ほど書いていた紙をドラゴンに手渡した。

「一体何をなさるおつもりで？」

「何、簡単なことだ。ヴィエイユにちょっとしたお願い事を、ね」

「ははぁ、また何か、意地悪なことを考えつかれましたな？」

「酷い言い方だな、クノゲン。真剣に考えているんだ。上手くいけば、一兵も損ずることなく、あの新しく出来た砦を奪うことができるかもしれないんだ」

「ほう、詳しく承りましょうか」

「つまりは、だな」

リノスがマトカルの書いた絵を指さしながら、作戦の詳細を伝えてゆく。

「……なるほど。それならば、敵は驚くでしょうな」

「そんなに上手くいくものだろうか」

「いや、ルファナ。成否は問題ではない。それをやることこそに意味があるのだ」

「クノゲン殿、よくわからないが……」

「う～ん、説明すると長くなるが……」

「ルファナちゃん、それは、クノゲンにゆっくりと教えてもらうといい」

「リノス様、また、意地悪そうな顔になっていますぞ」

「顔は隠しているだろうに。おかしいな。ラファイエンスのマネをしてみたんだが、何かしっくりこないな」

「将軍とリノス様では、格が違いますぞ？」

「ひどいな、それ」

そう言って二人は笑い合う。その様子を女性たちは無表情で眺めていた。しばらくすると、リノスはクノゲンにルファナを連れて下がるように促し、二人はその場を後にしていった。

「では、私は兵士たちに準備をするように伝えてこよう」

そう言って立ち上がろうとするマトカル。だが、彼女の頬に、スッとリノスの手が伸びた。

「なっ！？」

「それは明日でいい」

「だが……」

「もう日暮れだ。後のことは、クノゲンとルファナちゃんに任せておけばいい。俺たちは帝都の屋敷に帰ることにしよう」

「まだ、早くないか？」

「ファルコが寂しがっているだろう。昨日も、一昨日も帰るのが遅かったからな」

「……」

「少なくとも、今日と明日の攻撃はない。敵から攻撃を仕掛けてくる可能性は極めて低いだろう。それならば、早く帰って休んだ方がいい」

「……わかった」

マトカルはゆっくりと頷く。それを見たリノスは、ゆっくりと立ち上がり、右手を地面に向けて転移結界を張ろうと魔力を集中させようとする。

「リノス様」

「どうした？」

「今日は、すまなかった」

「何が？」

「その……秘匿するべきリノス様の存在を、バラしてしまった」

「ああ、いいよ。あの小ダヌキは少し記憶を弄らせてもらったが、二人の男たちは信頼できる。間違っても、俺のことをバラすヤツらじゃない。大丈夫だ。しかし、あの小ダヌキとその姉ちゃんは意地悪だな。敢えて曖昧な指示を出すことで、俺たちの兵力を削ごうとしている。それだけじゃない。ワーロフ側が思っていた動きと違うとか何とか言って、因縁を付けやすいようにもしているんだ。まあ、見事と言えば見事だが……。奴らは完全にマトを敵と認識しているようだな。それに……あの、チャンとワーカの二人も、敵と認識されて、排除されようとしている。可哀想といえば、可哀想だ」

「……すまない」

「いや、いい。マトは間違っていない。気にするな。……でも、おしおきはするからね？　今夜は寝かさないよ？」

「えっ！？」

マトカルの顔がみるみる赤くなっていく。その様子を可愛らしいと思いながら、リノスは転移結界を発動させたのだった。

第四百六十二話　敵か、味方か

ドルガの西、ヒヤマに築かれた砦の中は、静寂に包まれていた。ここにはおよそ、五百の兵士が詰めているが、その全員が、海を呆然と眺めていた。彼らの視線の先には、まるでクジラのような巨大な船が、海を埋め尽くしていたのだ。

その様子は、リノスが陣を張る山の上からもよく見ることができた。

「まさか、あんな巨大な船を作っていやがったとは、予想外だな。意外とアイツは、グランド〇インにでも出て、海賊王にでもなる気なのかね？」

そんなことを呟いているのは、リノスだった。彼の声を聞いて、傍にいたクノゲンはチラリと視線を向けたが、その言葉の意味を分かりかねたのか、苦笑いを浮かべながら、再び視線を海に向けた。

「解せないな……」

誰に言うともなく呟いたのは、マトカルだった。彼女は首をゆっくりと左右に動かしながら、海に浮かぶ船団を丁寧に観察している。

「なぜ、あの砦の近くに船団を展開しているのだ。二十……四十隻もの船があるのだ。あの砦を抑えるならば、数隻で事は足りるだろう。どうして、ドルガに向かわないのだ？」

「ああマト。俺がそう指示を出したんだよ」

「リノス様が？」

怪訝な表情を浮かべるマトカルを、リノスは満足そうな笑みを浮かべながら、ゆっくりと頷いた。

◆　◆　◆

同じ頃、ワーロフ帝国軍にも、巨大な船団が現れたという報告がもたらされていた。

「一体どこの軍勢なのですか、それは？」

「わかりませぇん」

眉間に深い皺を刻みながら口を開くのは、副総司令官のシーワだ。その彼女の傍には、困った表情を浮かべた、妹のギギが控えていた。

「今朝、突然、ヒヤマの海に船団が現れましたぁ。それ以降の状況は、不明ですぅ」

「船の帆に国の紋章などは？」

「ありませぇん」

「まずはその船団が何者かを調べなさい」

「全力を挙げて、調べていますぅ」

シーワは忌々しいという表情を浮かべながら、砦の方角を睨みつけた。

「バーリアルに、あれだけの船団が組織できるとは思えない……。援軍……？　であれば、まず、我々に連絡があるはず……」

ブツブツと独り言を呟きながら、シーワは頭脳をフル回転させる。だが、彼女の聡明な頭脳をもってしても、沖に現れた船団が何者であるのかを特定させることは、できなかった。

◆　◆　◆

「……くあぁぁ」

思わずあくびが漏れてしまう。眠りについたのが、今朝がただったからだ。ちょっと、頑張りすぎた。

マトカルに「大好き」と言わせようとしたのだが、なかなか言ってくれなかったのだ。夫婦になって数年経つが、俺は彼女から「好き」や「愛している」と言った言葉を聞いたことがなかった。唯一、「惚れている」という言葉を二度ほど聞いたくらいだ。そこで、昨夜はお仕置きと称して、「大好き」というセリフを言ってもらおうと思ったのだ。

だが、それがなかなか困難だった。俺のお願いに、彼女は首を振ったのだ。曰く、「恥ずかしい」と。そんなことを言われては、俺の男としての本能に火がついてしまう。結局、明け方までかかって、やっとそれを言ってもらったのだ。

思えば、アホなことをしたものだ。もっといいムードを作って、彼女が愛を囁ける雰囲気を作ってやるべきだった。昨夜のことをリコが聞けば、たっぷりとお小言を頂戴することになるだろう。

……それにしても、マトカルは可愛らしかった。いつもとは違って目を閉じたまま、眉毛をピクピクと動かしながら、「愛……して……いる」と呟いたあの姿は、ヤバイくらいに可愛らしかった。

そんなことを考えながら、目の前のマトカルに視線を向ける。彼女は平静そのものだ。睡眠時間は三時間もなかったのではないか……。だが、そんな様子は微塵も感じさせない。

「失礼します」

よく通る美しい声で、俺は現実に引き戻される。ふと見ると、そこには一人の女性が立っていた。ヴィエイユだ。彼女は空色の、動きやすそうな戦闘服に身を包んでいる。これは、どこかで見た記憶がある……。

「お久しぶりでございます、アガルタ王様。ご指示により、我ら新クリミアーナ軍四万、ただいま参じました」

「ヴィエイユ、よく来てくれたな。まさか、あんな巨大な船をこれだけ多く建造していたとは思わなかった。なかなかやるな、お前も」

「ホホホ。お褒めに預かり、光栄でございます。これも全て、兵士たちのためを思ってのことですわ」

「ほう、どういうことだ？」

「ただでさえ窮屈な海の旅……。せめて、休息するときくらいは、広い部屋を与えたい。そう思ったのです」

「で、あんなバカでかい船を建造したと。やるな」

俺の言葉に、ヴィエイユはニコニコと機嫌の良さそうな表情を浮かべる。聞けば彼女はポーセハイの転移を使わずに、この陣まで来たのだという。海から小舟を使って浜に上陸し、あの砦の間近を通ってここまでやって来たのだそうだ。どうやら、彼女が身に着けている青い服はマジックアイテムのようであり、気配や魔力を隠す効果があるようだ。この俺でさえ、ちょっと妄想していたとはいえ、目の前に現れるまで彼女の気配を感じることができなかったのだ。相当のアイテムを身に着けていると考えていい。さすがは、世界最大規模の教団の総帥と言ったところか。

「道中、砦を見て参りましたが、かなり堅牢であると感じました。これから、どのように戦いを進めていかれるのでしょう？　よろしければ、ご教授くださいませ」

「そうだな。俺たちは明日、あの砦に向かって突撃する予定だ」

「は？　突撃……ですか？」

「そうだ」

「我々は、何を致せばよろしいでしょうか？　海から攻撃を……？」

「そうだな。明日の早朝、船をあの砦のギリギリまで寄せてもらいたい。攻撃は、追って指示を出す」

「畏まりました」

「ところでヴィエイユ。お前はどうやって自分の船に帰るんだ？」

「馬に乗って帰りますわ」

「一人……で来たのか？」

「はい。一人で参りました」

「相変わらず、向こう見ずだな、お前は」

「一人の方が気楽ですし、それに目立ちませんわ」

そう言って彼女はケラケラと笑う。俺は大きなため息をつきながら口を開く。

「では、お前の船まで送ろう。帰りに襲われでもしたら、色んな意味で面倒くさいことになる」

「まあ、送っていただけるのですか？」

ヴィエイユの表情が見たこともないくらいに、明るくなる。

「お前の船は？」

「白い屋根の船でございます」

「わかった」

俺は兵士を呼んで、指示を与える。彼は一瞬ポカンとした表情を浮かべたが、やがてハッと畏まると、足早にその場を後にした。

「もしかして、あのペガサスで送っていただけるのでしょうか？アガルタ王様と二人っきりで空の旅とは、この上のない喜びですわ」

嬉々とした様子を見せるヴィエイユ。そのとき、先程の兵士が戻ってきて俺の前で片膝をついて、拳ほどの大きさの石を差し出す。

「ご苦労様、ありがとうね。……サダキチ」

すぐにフェアリードラゴンが現れる。同時に、俺の手が光る。俺は石をサダキチに渡すと、その直後に彼は姿を消した。ヴィエイユはポカンとした表情で眺めている。

「ほらよ」

俺は彼女に懐から、小さな石ころ出して、渡した。

「これ……は？」

「転移結界石だ。これに魔力を通せば、船まで戻れる」

「……感謝、申し上げます」

何とも言えぬ表情を浮かべるヴィエイユに、俺はさらに言葉を続ける。

「ところでヴィエイユ。お前のその服は、どこかで売っているものなのか？」

「いいえ。特別に誂えさせたものですわ」

「だとしたら、すぐに変えた方がいい」

「……？　どういうことでしょうか？」

「それ、ナウ〇カだろ？　あちらのファンは厳しいからな。凄まじい批判にさらされる前に、デザインを変えた方がいい。それに、権利関係もややこしいぞ？」

「……恐れ入ります。お言葉の意味がわかりかねます」

「……そりゃ、そうだな」

そう言って俺は、乾いた笑い声をあげる。そのとき、俺の許に兵士がやって来て、来客を告げた。それは、ワーロフ帝国軍の、三人の司令官だった……。

第四百六十三話　さぁて、始めますか

「失礼いたしますぅ」

甘ったるい声で俺たちの前に現れたのは、確か、ギギとかいう、ワーロフ軍の女司令官だ。きっとこの女子は男子からモテるに違いない。男子に手っ取り早くモテるのは、ぶりっ子をするのが一番だ。この女子はそれがわかっている。その反面、他の女子からは蛇蝎の如く嫌われているだろう。きっと、というか、確実にマトカルは彼女のことが嫌いだ。そして、ヴィエイユも嫌うだろう。だが、この小ダヌキにとっちゃ、女子から嫌われることなど問題ではない。男子からモテることが最優先なのだろうから。

そんなことを考えている間に、ワーロフ側の司令官がマトカルに挨拶をしている。俺は完全に置いてけぼりかい、と思ったが、表向きはこの軍勢の総司令官はマトカルと触れているので、彼女にまず挨拶をするのが当然だ。今の俺は一介の大佐という位置づけだ。返す返すも、シ〇アを名乗らなかったのが悔やまれるが、そうするのであれば、この鎧を赤く染めなくてはいけなくなる。メイやシディーは何と言うだろうか。意外と赤のカプリ〇ーンも格好いいかもしれない。

「よろしいですかな？」

俺の妄想をかき消すかのように、目の前に巨漢が立ち尽くしていた。これは、チャンだ。隣にはワーカがにこやかな笑みを浮かべている。どうやらこれから、打ち合わせに入るようだ。俺は促されるまま、クノゲンとルファナを伴って、席に着く。

「明日の朝、アガルタ軍におかれては、ドルガへの突撃を開始していただきます。アガルタ軍の突撃を契機に、他の部隊も一斉に突撃を開始いたしますので、よろしくお願いいたします」

チャンの言葉に、ワーカがさらに言葉を続ける。

「あっしらワーロフ軍は、今夜のうちにドルガの南西に移動しやす。つまりは、アガルタ軍の隣に陣取ることになるわけでやす。我々は、全力で、アガルタ軍への援護射撃を致しやすから、安心して突撃なさってくださいやし」

「援護射撃……か」

ルファナが無表情で呟く。その声に、チャンとワーカはバツの悪そうな表情を浮かべながら、ええ、まあ……と言葉を濁している。

「……何なのですか、この方々は」

いつの間にか俺の隣にちゃっかりヴィエイユが座っている。彼女は俺に顔を近づけて、小声で話しかけてくる。

「まあ、色々あるんだ。後で、説明するよ」

「ともかくぅ」

俺とヴィエイユのヒソヒソ話が癪に障るのか、小ダヌキが声を張っている。

「明日わぁ、アガルタ軍のお手並みをぉ、拝見したく思いますぅ。

我々もぉ、後学のためぇ、明日はこちらにィお邪魔させていただきますぅ」

「……クスッ」

「……笑うんじゃないよ」

小ダヌキの喋り方がツボにはまったのか、ヴィエイユが思わず笑みを漏らしている。そんな彼女を俺は小声で窘める。その様子が彼女には気に入らないらしい。俺たちに視線を向け、少し声を張り気味にして、話しかけてきた。

「そちらの御方はぁ、どなたでしょうかぁ？　お初にお目にかかりますね？　私、ワーロフ帝国軍司令官、ギギと申しますぅ」

彼女の声に、ヴィエイユは反応を示さず、涼しい顔で薄い笑みを浮かべている。

「恐れ入りますがぁ、こちらは、どちらの御方でしょうかぁ？」

小ダヌキが周囲を見廻しながら口を開いている。だが、その声に反応する者はいない。

「もしかしてぇ、あの船団に関係のあるお方でしょうかぁ？　で、あれば、あれは、どちらの方でしょうかぁ？」

「ご想像に、お任せしますわ」

やさしい、だが、凛とした声でヴィエイユが答える。まるで、お前と私では格が違うのだと言わんばかりの雰囲気を醸し出している。

とはいえ、実際にそうなのだから仕方がない。この小ダヌキでは、一万回戦ってもヴィエイユには勝てないだろう。彼女もそれを察したのか、しばらく俺たちを睨みつけていたが、やがてその視線をマトカルたちに向け、一気にまくしたて始めた。

「明日はぁ、突撃をしていただきましたらぁ、まず、堀を越え、城壁を越えてくださぁい。しかる後、城壁を壊し、それで堀を埋めてくださぁい」

「ぶワッハッハッハ！」

「ホホホホホ」

思わず俺とヴィエイユが同時に笑い声をあげてしまった。小ダヌキはそんな俺たちをキッと睨みつけていたが、話しかけてくることはなく、その視線をマトカルに向けた。

「よろしくお願いいたしますっ！」

「……我ら、アガルタ軍は明日、確かに突撃を行う。それで、よろしいかな？」

落ち着いた、だが、威厳のある声でマトカルが返答する。

「よろしくお願いいたしますぅ」

小ダヌキはそう言って、立ち上がり、チャンとワーカを促して、足早にその場を後にしていった。

「……リノス様、これでよいだろうか」

「ああマト。それで十分だ。さて、これから俺たちの作戦会議に入ろうか」

俺の声を受けて、クノゲンが机の上に地図を広げた……。

◆　◆　◆

翌日の早朝、俺たちの前には、前日の三人が控えていた。この寒空の中、夜明け前にやってきたらしい。らしいというのは、そのとき俺は帝都の屋敷でソレイユに抱きしめられながら幸せな眠りについていたのだ。そんなこととは露知らず、俺はいつもの通り朝風呂に入り、朝食を摂り、一家団らんの時間を過ごして出勤してきたのだ。こんなことを言えば、重役出勤のように聞こえるが、到着したのは８時３０分頃だ。決して遅い時間ではない。だが、俺とマトカルの姿を見るや、小ダヌキは鋭い視線を投げつけてきた。

「おはよう、ございますぅ」

「ああ、おはよう。清々しい、朝だね」

「それでは、今すぐ攻撃に移って下さぁい」

「藪から棒だな。まあ、わかった。準備もあるから、外で待っていてくれるかな？」

聞けば、小ダヌキたちは二時間もここで待っていたそうだ。クノゲン曰く、別に緊急の事態でもないので、敢えて俺たちを呼びにはやらなかったのだそうだ。待ちぼうけを食らわされた小ダヌキは随分イライラしていたそうだ。彼女に同情する余地はないが、一緒にいたチャンとワーカの二人には察するに余りある。俺はクノゲンに、

二人とその部下の兵士たちには温かい、美味しいスープを差し入れるように言っておいた。

「サダキチ」

俺の声を聞いてすぐに現れたサダキチに、懐から手紙を出して渡す。彼はそれを受け取るとすぐに姿を消した。

「さぁーて、やりますか」

そう言って俺は、マトカルとクノゲン、ルファナを促して、陣を出た。俺はイリモに跨り、ゆっくりと山を下る。その後ろから三人も愛馬に跨りながら付いて来た。やがて目の前に広い平原が現れた。そこには、小ダヌキたちと、彼女らが連れて来たのであろう百人近い兵士たちが控えていた。その近くに、すでに山を降りていたアガルタの兵士たちの姿もあった。

「整ィ～列ぇーつ！！」

マトカルの大きな、よく通る声が草原を駆け抜けていく。その声の直後、今までバラバラだった兵士たちが素早く俺たちの前に集まり、ものすごい速さで整頓していく。実に見事な光景だ。これだけ見ても、アガルタ軍の練度の高さを伺い知ることができる。

そんなことを考えていると、隊列の中から一人の兵士が小走りに走り寄ってきて、挙手の礼を取った。

「報告します！　アガルタ軍一千、全員、整列完了しました！」

「よぅし！」

マトカルが張りのある、いい声で返事をして、兵士たちの前に進み出る。

「よく聞け！　全軍、これから突撃する！　陣形は昨夜伝えた通りである！　遅滞することなく、迅速に動け！　以上である！　……続け！」

マトカルがゆっくりと馬を進める。その後ろを、俺たちも付いていく。そのとき、チラリと小ダヌキたちに視線を向けてみたが、彼女は俺たちを睨みつけたまま微動だにせず、チャンとワーカは、不安そうな面持ちで、俺たちを眺めていた。

第四百六十四話　愚策？

「申し上げます。西側に軍勢が展開しております。山から下りてきたところをみると、アガルタ軍のようです。攻撃が始まるようです！」

伝令の兵士が片膝をつき、早口でまくし立ててくる。その彼の視線の先には、ロイスとシャリオの姿があった。彼らは西の方向を見つめながら、無言で立ち尽くしている。

「……来たか。おそらく前回と同じように、盲目的に突撃してくるのだろう。全軍に迎え撃てと伝えろ」

「ハッ」

シャリオの命令を受けて、兵士は脱兎の如くその場を後にしていった。

「中の兄さま、私も持ち場に……」

「待て」

「兄さま？」

ロイスは先ほどから体勢を変えず、ひたすら西の方角を眺め続けている。彼は鋭い眼差しを向けていたが、やがてその表情を崩し、ニヤリとした笑みを浮かべた。

「アガルタ王らしき者はいないようだな……。しかし、何だあれは？」

ロイスの視線の先には、ゆっくりとこちらに向かって歩を進めて来る一軍があった。その軍勢は少しずつ小規模の隊に分かれていき、やがて、少しずつ隊を斜めにした格好で陣形を整えた。

「あれで、この要塞を攻撃するつもりか？　うははは。戦ってみれば、噂ほどにもないな。あの軍を指揮しているのは、かなりの凡将だぞ？」

カラカラと笑い声をあげるロイス。そんな兄の隣でシャリオは、一抹の疑問を感じていた。

……勇猛で鳴るアガルタ軍が、果たしてこのような愚策を取るのだろうか？

そんな彼女の疑問は、すぐに氷解することになった。隊列を整えたアガルタ軍はゆっくりとこちらに向かって来ていたが、弓矢や魔法が届くギリギリの位置で突然その歩みを止めた。

訝る将兵たち。だが、そのとき、アガルタ軍の隊列がぐるりと向きを変え、元来た方向に向かって突撃を始めた。

「な……何だ？　引き返していく……のか？」

兵士たちは唖然として、アガルタ軍の動向を見守った……。

◆　◆　◆

その頃、ヒヤマの砦では蜂の巣をつついたような騒ぎが起こっていた。

兵士たちの目の前には、目もくらむような大きな船が迫ってきていた。その船の両舷からは大砲と思われる筒が伸びており、隊列を整えながら、それらは正確にこの砦の方向を向いていた。わずか五百の兵士たちは、その大砲からの攻撃に備えるための防御態勢を構築しようとしていたが、何の手立てを講ずることもできなかった。

「兵士たちを持ち場に付かせろ！　この砦の防御態勢は盤石だ！　ちょっとやそっとの攻撃ではびくともしない、安心しろ！」

声を荒げているのは、この砦の守備を任されている司令官だった。安心しろと言っても、あれだけの大砲を目の前にしては、その言葉は全く説得力を持たなかった。海からの一斉射撃を食らえば、たちまちこの砦は灰燼に帰すことは明白だったからだ。そのとき、彼の前に一人の兵士が走り寄ってきた。

「司令官殿、あれを、あれをご覧ください！」

兵士の指さす方向に視線を向けると、何と、ドルガに向かったはずの軍勢が、こちらに向かって突撃を始めていたのだ。彼は悔しそうに歯を食いしばる。

「しまった！　ヤツらの狙いは最初からこの砦だったのか！」

「司令官殿！」

兵士が絶叫にも似た声を上げている。山の上に陣取っていたアガルタ軍が今朝、下山して整列したときは、この砦を攻撃するものと思

っていたが、彼らはその意に反して、ドルガに向かって歩を進めていった。ホッと胸を撫で下ろしたのも束の間、今度は海に展開していた船団が、ゆっくりとこちらに向かって来たのだ。彼は砦の守備兵全員に海からの攻撃に備えるように命令を下したところだった。

アガルタ軍は、斜めに隊列を組んでいる。これは、この砦を側面から攻撃するつもりであることは明白だった。いかに堅牢な要塞とはいえ、手薄なところを複数の場所から攻め込まれては、陥落することは目に見えていた。

それに、アガルタ軍が突撃してきたということは、昨夜、この砦の前方に展開しているワーロフ軍も突撃してくることは容易に想像できる。さらには、他の軍勢までも……。そう考えると、この砦が蹂躙された挙句、自分を含めた、ここを守る兵士全員が全滅することは、誰の目から見ても明らかなことだった。

司令官である自分はもちろん、真っ先に血祭りにあげられるだろう……。そう考えると、彼の体は無意識のうちに震えていた。

そのとき、頭上から一枚の紙が落ちてきた。訝りながらそれを拾い上げて、中身を見てみると、こんなことが書かれてあった。

『降伏すれば、兵士全員の命を助けます。　――アガルタ王・リノス追伸：降伏の際は、全員に美味しい食事をご馳走します。皆さんに、口福という幸福を約束します』

司令官の男は一瞬眉間に皺を寄せたが、やがて、傍に控えていた兵士に早口で指示を与えた。

◆　◆　◆

アガルタ軍のこの動きを、ワーロフ軍側は、理解することができないでいた。

てっきりドルガに向かって突撃すると思い込んでいたギギは、その動きを、目を丸くしたまま、無言でじっと見据えていた。同時に、彼女の傍に控えていたチャンとワーカの司令官も、その動きをただ見守るしかなかった。

「え？　う？　あ？」

ギギの口から頓狂な声が上がる。彼女らの目の前では、信じられない光景が広がっていた。何と、アガルタ軍が隊列を整えながら、ヒヤマの砦に入っていったのだ。

「入って……行きましたやね？」

不思議そうな表情を浮かべながらワーカが呟いている。だが、彼の言葉に反応する者はいない。一体何が起こったのか……。ただ茫然とヒヤマの砦を眺める他はなかった。

しばらくすると、砦から数人の騎士が現れ、ゆっくりとギギたちのいる陣所に向かってきた。彼らは近くまで来ると、大音声を上げて、こんなことを伝えてきた。

「アガルタ軍総司令官のクノゲンと申します。ヒヤマの砦は先ほど、我々に降伏いたしました。現在、特に大きな問題は発生しておりませんので、援軍の類は不要です。まずは取り急ぎ、ご報告いたします。それでは！」

そう言うと彼は踵を返し、従えていた兵士たちを伴って、砦に戻っていった。

「えっと……あの砦は、アガルタ軍が落とした……。それで、よごさんずか？　よござんすね？　それでは、あっしらは……帰陣しやしょうか？」

ワーカがチャンに促す。それを受けて、チャンは巨体をゆすりながら馬の轡に手をかけた。

「ヒヤマの砦をアガルタ軍が抑えたとならば、戦いの展開も変わってくるだろう。ここは一旦本陣に帰って、作戦を練り直さねばならないだろう。ワーカ、お前の言う通り、帰陣するとしよう」

彼は馬に乗りながら、まだ信じられないという表情を浮かべたままのギギに向かって声をかける。

「おいギギ、何をしている。置いていくぞ」

「受け取りましょう」

「何？」

「あの砦を……受け取るんです」

「何を言っているのだ、お前は？」

「あの砦に、我が帝国の兵を入れるのです。それに……アガルタは命令違反を犯しています。突撃を……敢行していませぇん。今すぐアガルタ軍を詰問しなければなりませぇん！」

少しずつ現実を理解し始めたのか、ギギの口調が少しずつ荒くなっていく。そんな彼女を、チャンは忌々しそうに眺めながら、ゆっくりと口を開く。

「そんなことは後だ。今、そんなことをしてみろ。アガルタがあの砦を放棄して帰国でもされたらどうするのだ。我々は三百の兵士しか連れて来ておらぬのだぞ？　それだけの手勢であの砦が守り切れるか？　中にはバーリアルの兵士たちも多くいるのだぞ。我々だけの手勢で押さえきれる数ではないぞ。あの砦はアガルタに任せておけ。百戦錬磨の兵士たちだ、十分にあの砦を守り切るだろう。それよりも先に帰陣して、報告をするべきだろう。違うか？」

チャンの言葉に、ギギは鋭い視線を向けていたが、やがて無言のまま馬に跨り、そのままワーロフ軍本陣に向かって行った。

「全く、子供か、アイツは！」

忌々しそうに呟きながら、チャンは馬に鞭を入れる。その様子を、ワーカは苦笑いを浮かべながら眺めていたが、やがて彼も、兵士たちに引き上げの命令を出しながら自分の馬に鞭を入れ、本陣に向かって行った。

第四百六十五話　それぞれの思惑

ヒヤマの砦が陥落したという報を受けたドルガでは、兵士たちが激しく動揺していた。海に展開していた巨大船団がこちらに向かって移動を開始していたのだ。これで海を封鎖されてしまえば、バーリアル本国に戻ることはできなくなる。兵士たちが動揺するのは、当然のことと言えた。

「引き上げじゃ！　今すぐ本国に向けて引き上げるのじゃ！」

オロオロと動き回りながら声を上げているのは、バーリアル王国軍の総司令官であるエルサックだった。彼は、国王であるロウサックの実弟であったが、これまで何の功績も上げることができず、どちらかと言えば、王族の中でも冷遇されていたのだった。その彼が、ドルガの攻撃と防衛の司令官に任じられているのは、彼に大きな功績を上げるチャンスを与えたいという王の思いがある一方、たとえ戦死したとしても問題にならないという点が一致していたからだった。

そんな彼に対して、シャリオは冷たい視線を投げかけていた。その一方で、兄のロイスはニヤニヤと下卑た笑みを彼に向け続けていた。

「まあ、落ち着け。王弟殿」

まるで子供を宥めるかのように、彼は声をかける。だが、エルサックの動揺はおさまらなかった。

「これが落ち着いていられるか！　我らはこのドルガで孤立するこ

とになるのだぞ！　そうなれば、我らは死ぬしかないではないか！」

「そうにはならん。安心しろ」

「な……何だと？　あの船を見ろ！　大砲を積んでおるそうだぞ！　あれで狙われでもしたら……」

「結界を張ればよい」

「結界……」

「このドルガを覆うくらいの結界は張ることができる。安心しろ」

「攻撃は……それで防ぐとして、問題は食糧だ。食糧が尽きる前に……ぐっ」

気が付けば、エルサックの頭上にロイスの手が添えられていた。彼は目を見開きながらロイスの顔を眺める。

「お前が狼狽えてどうするのだ。落ち着いているのだ。お前には、まだまだやってもらわねばならないことがある」

ロイスの言葉を聞きながら、エルサックは視線を宙に泳がせていた。

「中の兄さま……」

「ここはそろそろ、潮時だ」

「……」

「シャリオ、我々はヒヤマに向かうぞ」

「ヒヤマへ？」

「そうだ。アガルタ王・リノスはそこにいる」

「どういうことだ？」

「アガルタ軍のあの動きを見ただろう。あんなことを考えつくのは、普通の人間では有り得ん。おそらく、相当のスキルを持った者が指揮しているはずだ。ということは……」

「アガルタ王がいる、そういうことか」

シャリオの言葉に、ロイスはニヤリと笑みを漏らす。

「どんな手段を使ったのかは知らぬが、まあ、向こうも龍王クラスのスキルを持っている。自分のスキルを秘匿しているのだろう。となれば、向こうが出てこないのならば、こちらから出向けばよい」

「そうだな……。だが、兄様、このドルガはどうするのだ？」

「知らん。籠城するもよし、包囲を食い破って国に帰るもよし、好きにすればいい」

そんなことを言いながらロイスは、何かを考える素振りをしている。そして、再びニヤリと下卑た笑みを浮かべると、ゆっくりと頷きながら口を開いた。

「よいことを考えた。せっかくだ。派手に行こうじゃないか。そう

すれば、我々も人目に触れずにアガルタの陣に向かうことができるだろう」

ロイスの笑顔に、シャリオは一抹の不安を覚えながら、ただじっと、兄の様子を眺め続けた。

◆　◆　◆

ちょうど同じ頃、ワーロフ帝国の本陣でも、幕僚たちが集まって作戦会議が行われていた。表向きは作戦会議ではあったが、その議論の大半は、チャンとワーカの両司令官の怠慢を糾弾することに費やされていた。

「で、どうするのです？」

相変わらず不機嫌そうな表情を隠そうともせずに発言しているのは、副総司令官のシーワだ。彼女は無表情で俯いているチャンとワーカの二人に一瞥をくれたかと思うと、再び幕僚たちに視線を向ける。

「せっかく占領した砦を、受け取りもせずに帰陣するとは……。今現在、あの砦はアガルタ軍が維持しているのでしょう？　わずか一千の兵であの砦を維持しているのです。五百の敵兵を抱えたままで維持しているのです。今このとき、ドルガから軍勢が打って出て、同時に砦の敵兵が反乱を起こしたらどうなります？　アガルタ軍は全滅する可能性とてあるのですよ？　チャンさんもワーカさんも、どうしてそこまで考えが及ばないのでしょうね？」

シーワの話に、誰も追従する者はいない。そんな中、チャンは心の中で嘯いていた。

……敵は無血開城をしているのだ。敵兵が反乱を起こす確率など、限りなくゼロに近いではないか。それに、ドルガから兵が打って出る？　バカな。蟻のはい出る隙間すらなく包囲されている中で、どうやって打って出るのだ。それこそ、ヤツらは犬死だ。そんなこともわからんのか、この女は。

「この二人に任せたのが、間違いだったな」

誰に言うともなく呟いたのは、ゲシカナ将軍だった。その声にチャンは爆発しそうな感情を覚えたが、必死でそれを押し殺した。

「ああした、他国の軍勢を操るためには、相応の指揮能力と外交能力が必要だったのだ。我が軍を見渡せば、それができるのは、私とシーワを除けば、ギギくらいのものだろう」

「私が行きましょう」

大きなため息をつきながら、シーワが口を開く。その言葉にゲシカナ将軍は大きく首を振る。

「いや、イカン。それでは、何かコトが起こったときに、常に私やお前が対応せねばならなくなる。そうならないために、チャンとワーカの二人にやらせたのではないか」

「でも、この二人では無理でしょう？」

「うむ……」

「今回は、私がやりましょう」

シーワはそう言うと、ヤレヤレという表情を浮かべながら立ち上がる。

「ギギ、トーイッツさん、二人は私の副官として付いてきてください」

「はぁい、承知しましたぁ」

「わっ、わっ、わかり、ました」

二人の返事を聞いたシーワは、俯いたまま微動だにしないチャンとワーカに視線を向ける。

「チャンさん、ワーカさんも、付いてきてください」

意外な言葉だった。予想だにしなかった言葉に、二人の司令官は思わず顔を上げる。その様子を無表情で眺めながら、シーワは言葉を続ける。

「あなた方に、一万の軍勢を与えます。ヒヤマの砦の接収が終わった後、あなた方はドルガ突撃の指揮を執ってもらいます」

「な……」

「元々、あなた方には、ドルガ攻略の作戦立案をお願いしていましたよね？　あれからどのくらい経ちました？　もう、十分作戦は練られていることでしょう。兵一万を預けます。考えていたその作戦を遂行してください」

「待て、一万とは……。一万の兵士を犬死させるつもりか！」

「犬死させないだけの作戦を立ててください？　もう、十分に立っているはずですよね？」

「貴様……」

「チャン、ワーカ」

ゲシカナ将軍が口を開く。そこにいた全員の視線が彼に集まる。

「この戦いが始まってから、お前たちは何もしていない。帝国軍人であるならば、手柄の一つでも立ててねば何とするのだ。……何だその目は。このままではお前たちは、何もしなかった司令官として汚名を被ることになるのだぞ？　そうならないように、汚名を雪ぐ機会を与えてくれたシーワに感謝するのだ」

……俺たちに、死ねというのか。何十年も仕えてきた部下に対していう言葉か。俺は、こんな人のために、命を捧げてきたのか。

チャンは泣きたかった。思わず顔を背けると、そこには、ワーカの顔があった。いつもは飄々とした表情を浮かべている彼だが、このときばかりは、眉毛をピクピクと動かしながら、必死で怒りを抑えようとしているように見える。

……こうなったら、華々しく、死ぬしかないか。

若い頃から目をかけ、面倒を見てきたワーカを道連れにするのは悪いとは思うものの、チャンの腹は、諦めにも似た感情に満たされていった……。

第四百六十五話　それぞれの思惑（後書き）

コミックブースト様にて、拙作のコミカライズ第八話が公開中です（ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ？ｃａｔｅｇｏｒｙ＝１４）。無料公開は１０／１　１２：００まで。是非、チェックしてみてください！

第四百六十六話　詭弁

同じ頃、ヒヤマの砦では、リノスたちがバーリアル王国軍の捕虜たちを引見していた。

「……なるほど。お前たちは訳も分からず出撃を命じられたと言うのだな？」

落ち着いた声で話しかけているのは、マトカルだ。彼女の傍には、リノスとクノゲン、そして、ルファナが控えている。そんな彼女らの前には、二人の男が畏まっていた。彼らは、自分たちのことを、これまでこの砦を守備していた指揮官のクピと、その副官のトマイと名乗った。彼らは、マトカルの質問に唯々諾々として答えていた。

「よくわかった。それにしても、この砦をよくこの五百の兵士で守り抜いた。ご苦労だったな」

「お褒めに預かり光栄です。ですが、私たちは何もしてはおりません」

「いや、我々の降伏勧告に素直に従い、砦を明け渡した。あなた方は五百の兵士の命を救ったのだ。ご自身の決断を、誇られるといい」

マトカルのその言葉に、二人は何とも言えぬ表情を浮かべながら、頭を下げた。

「ところで、一つ聞いていいかな？」

声をかけたのはリノスだ。相変わらず顔の大半を布で覆っているために、その表情はわからないが、機嫌の良さそうな声は、二人の警戒心を緩ませるのに十分だった。

「はい、我々が答えられる内容でしたら、何なりと」

「ドルガを守っているのは、どんな方かな？」

「エルサック公爵殿下です。国王陛下の弟君にあらせられます。どんな方と言われましても……」

二人は顔を見合わせていたが、やがて、クピが言葉を選びながら口を開く。

「一言で申し上げれば、穏やかな方です。些細なことで部下を叱り飛ばすこともありますが、涙もろいと申しますか、情に厚いところがあるお方です」

「なるほど。その王弟殿下が総司令官に居座っていられるのは、その情の厚さがあったればこそかな」

そう言ってリノスは、クックックと笑う。そして、再びクピたちに向けて言葉を続ける。

「他には？　軍師のような者はいないのか？　つまり、軍の指揮や作戦を助言するような者だ」

「それは……」

「いるんだな？」

「我々には、よくわからないのです」

「わからない？」

「はい。今回のドルガ攻略作戦において、突然二人の指揮官が王の命令で付けられたのです。何でも、他国では負けなしの凄腕の方だそうで……。ただ、その二人は、我々と関わることはほぼありませんで……。常にエルサック様の近くに仕えておいででした」

「その二人が、そうなのかもな」

「は？」

「いや、こっちの話だ」

リノスはそう言うと、マトカルに向かって小さく頷いた。それを受けて彼女は、再びクピとトマイの二人に向き直る。

「わかった。まずはご苦労だった。また何かあるときは呼ぶかもしれないが、まずはゆっくりと休んでくれ」

そう言って彼女は、二人に退出を促す。

「ああ、お昼にはカレーを振舞うから、楽しみにしているといい。カレー知らないかな？　アガルタ名物の料理だ。美味しいぞ。腹いっぱい食べるといい」

リノスの言葉に、二人は戸惑いながら頭を下げた。

そのとき、兵士の一人がリノスたちに近づいて来て、片膝をつく。その状況を察して、クピとトマイの二人は、アガルタの兵士たちと共にその場を後にしていった。

「どうした?」

「ハッ、申し上げます。ただいま砦の外に、ワーロフ帝国軍副総司令官のシーワと名乗る女性が参っております。他に、四名の方がお見えです。それに……」

「それに、何だい?」

「約一万の兵士が外に待機しております」

「きっと、この砦を受け取りに来たのだろう……リノス様?」

マトカルの声に反応せず、リノスは天を仰いでいる。やがて、視線を兵士に向けた彼は、通せと小さな声で呟く。

「さて、いよいよ真打のご登場か? どうなるかね?」

そんなことを言いながら、彼は腕組みをしながら、小刻みに頷いている。

やがて、兵士に案内されて、ワーロフ帝国軍のシーワたちが入室してきた。シーワは、マトカルを一瞥すると、無表情のまま少しだけ頭を下げ、そのまま彼女のちょうど正面に座った。それが合図であったかのように、彼女の両隣にギギとトーイッツが座る。チャンとワーカの二人は、その後ろで立ったままで控えている。

「そんなところで立っていないで、座ったらどうだい？」

不意にリノスが声をかける。二人は一瞬、ギクッとした表情を浮かべたが、やがてその視線をシーワに向ける。だが彼女は一切二人に視線を向けることなく、不機嫌そうに小さなため息をついている。

「あなた方二人は、この砦を陥落せしめた陰の功労者だ。そんなところに突っ立っていないで、どうぞ、こちらに」

そう言ってリノスはクノゲンに目配せをする。彼は兵士に命じて、新たな椅子を用意させ、それらをリノスの傍に置かせた。そして、二人を手招きして、そこに座らせた。

「で、御用の趣は？」

何の前置きもなくリノスが口を開く。その声からは、怒りとも不愉快ともつかない、負の感情がありありと見てとれた。その様子が癪に障ったのか、シーワが一切の感情を込めない声で口を開く。

「この度は、砦の奪還、ご苦労様でございました。まずは御礼申し上げます。この度はチャンとワーカの二人が無礼を働きましたこと、お詫び申し上げますと共に、この砦を受け取りに参りました」

「無礼？　何のことだ？」

「貴国がこの砦を占領しているにもかかわらず、チャンとワーカは受け取りもせず、帰陣してきました。占領してから、これまでの時間、多大なるご苦労をおかけしたかと存じます。お詫び申し上げます」

「いや、別に苦労はしていない。むしろ、この二人の判断は正しい。占領直後にやってこられては、こちらとしては甚だ迷惑だ。な？」

リノスがマトカルたちに視線を向ける。彼らはゆっくりと頷く。

「それはたまたまであって、本来であれば、傍に我が軍の者が控えているのですから、占領後は速やかに砦を受け取るものですわ」

「本来は、ね。だが今は戦闘中だ。その状況に応じた臨機応変の対応が必須だろう」

「お言葉の意味がわかりかねます」

リノスはピクリと体を動かし、すぐに傍に控えていた、チャンに視線を向ける。

「どうしてこうも話がわからないんだ？」

「いっ……いえ……」

「そもそも俺たちはあなた方に、援軍の類は不要だと伝えたはずだ。それは、この砦にワーロフ軍の人数を割くよりも、ドルガ奪還に全力を尽くすべきだと思ったからだ。俺は、アガルタ軍が突撃を敢行すれば、ワーロフをはじめとした、全軍がドルガ突撃の総攻撃を行うと聞いていた。しかし、俺たちが突撃を敢行しても、誰も動かなかった。この砦が奪還した直後に突撃を敢行すれば、それなりの成果はあっただろうに……。間違いなく敵は動揺していただろう。そこに付け込む絶好の機会だったんじゃないのか？」

「詭弁ですね」

「何？」

「そもそも、アガルタ側は約定違反をしているのですよ？　我々はそれを一切不問にしようとしているのに、そのような詭弁を弄されますと、こちらとしても、考えを改めねばなりませんね？」

「約定違反？　何のことだ？」

「我々は、貴国に対してドルガに突撃せよと要請していました。しかるに貴国はドルガへの突撃を敢行せず、このヒヤマに向かいました。この約定違反も、戦場での臨機応変の対応と言われるのですか？　で、あれば、とんでもないことだと思います。今回はたまたまこの砦を落せたからよいですが、もし、砦が落とせなかった場合、他の軍勢が突撃を敢行していた場合、アガルタを含め、さらに多くの死傷者が出ることになったでしょう。我々は兵士の命を預かっているのです。あなた方の勝手な振舞いは、多くの人命を失うことになりますよ？　それとも、アガルタでは兵士は駒の一つとして、命のことなど考えていないと言われるのでしょうか。だとしたら、アガルタの名声は地に落ちることになります。私は、そうはしたくないのです。アガルタには、すばらしい国であってもらいたいのです」

「失礼いたします」

シーワの話を遮るように、一人の女性が入室してきた。それは何と、ヴィエイユだった。

……また、ややこしいときに、やってきたな、コイツは。

リノスは心の中でそんなことを思いながら、小さく舌打ちをしてい

た……。

第四百六十七話　天女か悪女か

にこやかな笑みを浮かべて登場したヴィエイユは、ゆっくりと周囲を見廻す。白いチャイナ服のような衣装を纏っているので、体のラインがもろに見える。乳房の形はもちろん、よく見ると突起も見え……るのだろう。俺は素早く視線を逸らせていたために、よくは見えなかったが。

傍に控えているチャンとワーカは、ヴィエイユの姿にポカンと口を開けている。トーイッツは、俯いてはいるが、その視線はガッチリとヴィエイユを捕えている。瞳孔が開き切っているように見えるが、大丈夫だろうか。

一方のシーワはそんなヴィエイユに軽蔑の眼差しを向けている。その隣に控えるギギは、鋭い視線を彼女に投げかけている。昨日のことが、よほど根に持っているらしい。

そんな様子に、満足そうな表情を浮かべながら彼女は、あろうことか、トーイッツの隣に座った。俺から見ると、すぐ右側にチャンとワーカが控え、テーブルにはヴィエイユと、少し離れたところにトーイッツが座っている。そして、正面に視線を移せば、不機嫌そうな表情を浮かべるシーワがいて、その左隣には、相変わらずヴィエイユを睨んでいるギギがいる。そのまま視線を移していくと、ルファナちゃんの姿が目に入る。その左隣がクノゲン、そして、俺の隣がマトカルという並びだ。

「で、お前は何をしに来た？」

俺の問いかけに、ヴィエイユは嬉しそうな表情を浮かべながら、言葉を返す。

「ホホホ、何とご挨拶ですこと。決まっています。次のご指示をいただくために参りました」

「そうか……」

「こちらの御方は？」

俺の言葉を遮るようにしてシーワが口を開く。俺が喋っている途中でしょうが……。

「ホホホ、名乗るほどの者ではございません」

「私は、ワーロフ帝国軍副総司令官のシーワと申します。あなた様の所属は？」

「ホホホ」

「無礼ではありませんか？　私はこうして名乗っているのです。名も名乗らずに、突然押しかけてきてこの場に座り込むなど……」

「私は、あなた様の指図を受ける者ではございません。それに、あなた様には、興味はございませんわ」

ヴィエイユの言葉に、シーワの表情がさらに強張る。彼女は視線をスッと俺たちに向けた。怖いよ……。てゆうかヴィエイユ、あまり怒らせるんじゃないよ……。

「ところで、今はどのようなお話をなさっておいでだったのですか？　何やら、突撃するとかしないとか、そんな言葉が聞こえていたようですけれど？」

「あなたには、関係のないことでしょう？　今は作戦会議中です、関係のない方は、退出していただけませんか？」

シーワがヴィエイユに絡んでいくが、彼女は歯牙にもかけずに、俺に視線を向けている。

「こちらのワーロフ側の方々は、俺たちがドルガに向けて突撃をすると言ったと言われるのだ。だが、俺はそうは言った覚えがない。まあ、言った、言わないの水掛け論をしていたというわけだ」

「そのお話でしたら、私、よく覚えておりますわ。確か……そちらのワーロフの御方、昨日おいででしたわね？　そのときは確か……『我らアガルタ軍は、確かに明日、突撃を行う』と言っておいででしたわ。ドルガに突撃をするとは一言も言っておいでではありませんでした。そうですわね？」

突然話を振られたギギは、顔を真っ赤にしている。

「どうだったでしょうかぁ？　そこまで詳しくは、覚えていませぇん」

「おや、これはこれは。国同士の戦略を決める話し合いにもかかわらず、その内容を覚えていないとは、それでよく司令官が勤まりますわね？　それとも、自分の都合の悪いことはすぐに忘れるか、都合のいいように解釈するのが、お国のスタイルなのかしら？」

「しっ、失礼な……」

「そもそも、この話し合いの時間が、とても無駄ですわ」

「……」

シーワが殺意を込めた目でヴィエイユを睨んでいる。だが、彼女はそんなことは全く意に介さずに、言葉を続ける。

「せっかくこの砦を占領できたのに、どうして総攻撃をかけなかったのでしょうか。千載一遇の機会でしたのに。砦の引き取りなど、戦いが済んでからでも十分に間に合うことでしょう。総攻撃は今からでも遅くはありませんでしょ？　それを実行せず、副総司令官たるあなたが幕僚たちを率いてこの砦を受け取りに来ている……。随分と悠長なことをなさるのですね？　ワーロフ帝国は、この戦いに本気で勝つ気があるのですか？　ドルガを奪還する気があるのですか？」

「我が帝国の戦略に、あなたの指図を受ける覚えはありません。先程から、我々に対しての罵詈雑言……これにつきましては、帝国軍総司令官のゲシカナを始めとして、皇帝陛下、および、援軍をいただいた各国、ひいては、ヒーデータ帝国皇帝陛下、そして、アガルタ国王様にも報告させていただきます。我が軍はおめおめと手をこまねいているわけではございません。これから、そこに控えるチャンとワーカの二人が、一万の軍勢を率いてドルガに突撃いたします。我が帝国軍の戦いぶり、とくとご覧ください！」

「ええと……シーワさんと言われましたか？　それは、正気で言っておいでなのでしょうか？」

「どういう意味でしょうか？」

怒りをあらわにするシーワに対して、ヴィエイユは突然笑い声をあげる。手を口にかざしながら笑うその姿までもが、実に洗練されている。

「ホホホホホ！　これは面白いですね！」

ヴィエイユは満面の笑みを浮かべながら、周囲の者を見廻し、そして、さらに言葉を続ける。

「今のお話を聞かれましたでしょうか。何と浅はかな話でございましょうか。無知……無知なるが故の振る舞いと行動でございますわ。しかし……仮にも司令官を名乗るのであれば、無知と言うのは寧ろ、罪となるかと存じます。これはあくまで私からの助言ですが……そういうことは、あまり、なさらない方が、よろしくてよ？」

ヴィエイユの言葉に、シーワの瞳孔がキュッと縮んだ。そんな彼女を一瞥した彼女は再び俺に笑みを向け、その直後、スッとチャンとワーカの二人に視線を向ける。

「あなた方も、大変ですわね。あのハリネズミのような要塞に、僅か一万の兵で突撃するのですから。あなた方は、ご自身の命を落とすことより、一万の兵士たちの命を心配されているのではありませんか？　わかりますわ。誰が好き好んで、一万の兵士……言ってみれば、家族も同然の部下たちを犬死させることができましょうか。その悔しさと苦しみ、よくわかりますわ」

彼女の声に、チャンは俯き、肩を震わせている。その様子を満足げな表情を浮かべながら彼女は再び、シーワに向き直る。

「察するに、あなたはこの二人がお嫌いなのですね？　そのために、この二人を亡き者にするために、一万もの兵士を犬死させるのですね？　随分と、優秀な司令官なのでしょう。ある意味では、尊敬しますわ。うふふ」

ヴィエイユの言葉に、シーワは体を震わせている。

「確かに私は、あなたの言われる通り、この場にいるべきではございませんでしたわ。こんな愚かな作戦を聞かねばならなかったのですから。それがわかっていたら、すぐにこの部屋から出ましたものを。ね、そうは思いませんか？」

彼女はスッと隣のトーイッツとの距離を詰める。予想外のことに、彼は体をピクンと震わせて、首をすくめながら俯いてしまった。

「で、確実に全滅する突撃作戦は、いつ決行されるのですか？」

「全滅するかどうかわぁ、やってみなければ、わからないと思いますぅ。チャン司令官と、ワーカ司令官は、歴戦の軍人ですぅ。間違っても、兵士を犬死させることは、ないと思いますっ！」

「ホホホ。随分おめでたい頭脳をしておいでなのですね？　そう思っているのは、あなただけですわ。ここにいる全員が、この作戦は確実に失敗すると思っておりますわ」

そう言って、ヴィエイユは俺たちに視線を向ける。それを受けて、クノゲンとルファナはゆっくりと頷いている。俺も、同意見だ。

「ですわよね。あなた様も、そう思われますでしょ？」

ヴィエイユがトーイッツの顔を覗き込むように、同意を求めている。よく見ると、彼女の胸が彼の腕に密着していて、手が握られている。彼はオドオドとした様子で、小刻みに頭を動かしている。

「あなた様は、お優しい方なのですね。ご自身の思いはさておいて、ワーロフ帝国の威信を第一に考えておいでなのですね？　素晴らしいわぁ。私、そんな男性が大好き、ですわ」

大好きという言葉を、彼の耳元で囁くように呟いている。やめなさいよ、男子の心を弄ぶのは。

「いや、そうとも限るまい。やり方によっては、犬死どころか、ドルガを奪還できるかもしれないぞ」

声の主は何と、マトカルだった。マト、一体、何を言い出すんだ…？

第四百六十八話　マトカルの決意

翌日、ドルガの街の周辺は、霜がビッシリと大地を覆う寒い朝を迎えていた。だが、街の中は、そんな寒さを感じる余裕もない程の、緊張とざわめきに包まれていた。

つい三十分程前、街の西側にゆっくりと軍勢が現れた。彼らはそこで立ち止まったが、しばらくすると、何度も大音声を上げ始めた。威嚇とも鼓舞ともつかぬ男たちの大声……。その様子を見ていた、バーリアル王国軍の参謀の一人であるデンザは、瞬時にその軍勢が決死隊であると察知した。すぐさま彼は、総司令官であるエルサックの許に向かった。

「何？　決死隊？」

「はい。あの気勢の上げ方……これまでとは違った者たちと見受けます」

「で、どうすればよい？」

「守りを厳重にして、決してこの街から出ぬよう兵士たちに厳命を下されるのがよいかと存じます。おそらく奴らは、死に物狂いで攻撃を仕掛けて参りましょう。堀と城壁を突破されぬよう、厳重に防御を固めることが肝要です」

エルサックは傍に控えているロイスとシャリオに視線を向ける。シャリオは相変わらず無表情だったが、ロイスはニヤニヤと笑みを浮かべながら、小刻みに頷いた。それを見たエルサックはデンザに向

き直り、深く頷く。

「では、そうせよ。ドルガを全力で防衛せよと、全軍に告げよ」

デンザは恭しく一礼して、その場を辞した。敵の大音声はここでもかすかに耳に届く。その声を聞きながら彼は、気持ちをいつも以上に引き締めるのだった。

この大音声は、アガルタ軍とバーリアル軍、総勢二万の兵士たちから発せられているものだった。彼らの前にはマトカルが立ち、訓示を与えていたのだが、その訓示は兵士たちの意気を大きく高揚させるものだった。

マトカルには心中に期するものがあった。その様子は隣で見ていたリノスにはよく感じ取れたし、並々ならぬ覚悟でこの戦いに赴こうとしていることがよくわかった。

前日、マトカルはシーワやヴィエイユを退出させた後、リノスやクノゲンたちに、自身が考えている作戦を伝えた。それはかなりの危険を伴うもので、リノスたちは賛成するのを躊躇った。だが、マトカルの決意は固く、何としても、ドルガ奪還の作戦を任せて欲しいと言って譲らなかった。

マトカルがここまで主張するのは珍しいことだった。リノスは、決して兵士を無駄死にさせないことを条件に、マトカルの主張を受け入れたのだった。

マトカルはドルガの手前で進軍を止め、一旦、軍勢を整頓するように命令を下した。

「一体何のための整頓なのです？　これには、意味があるのですか？」

冷たい表情で口を開いているのは、ワーロフ帝国軍副総司令官のシーワだった。彼女は前日の軍議の後、一旦自陣に戻ったが、アガルタ軍の出撃に合わせて、わざわざ再び出向いて来たのだった。彼女の傍には妹のギギとトーイッツが控えていて、軍勢の様子を無表情で見守っていた。

そんな彼らに対して、リノスもマトカルも、一切視線を向けずに、完全無視を決め込んでいた。シーワはその態度も気に入らなかった。彼女一人が、イライラとした雰囲気を醸し出していたのだった。

「せっかくここまで順調に進軍してきたのです。この勢いのまま突撃すればいいでしょう？　まさか陣立てを行うのですか？　それでしたら、進軍しながらでもできるのではないですか？　今は……」

シーワが眉間に皺を寄せながら絶句する。語りかけていたマトカルは、彼女に一瞥もくれないどころか、右手をスッと上げて、さも、煩いから黙れと言わんばかりの対応を取ったのだ。しかも、彼女の隣に控えている覆面姿の男が、シーワに向かって人差し指を口元に当てている。あまりの扱いに、シーワは思わず絶句したのだった。

そんな彼女をマトカルは歯牙にもかけず、チャンとワーカの二人が整頓が終わったという報告に来ると、一旦リノスに何やら耳打ちをした後、ゆっくりと馬を兵士たちの前に進めた。

「これより、この軍勢の指揮は私が執る。皆、己が持つ力を最大限に発揮せよ！」

兵士たちが「おう！」と大声で答える。そんな彼らをゆっくりと見廻しながら、マトカルは言葉を続ける。

「我らは軍神を将に頂く軍勢である！　アガルタ軍、ワーロフ帝国軍の中で最精鋭の者たち、すなわち諸君たちが軍神の軍勢として戦うことを許されたのだ。その名に恥じぬよう、選ばれし者たちの腕前を、とくとこの戦いで見せようではないか！」

「おお～！」とアガルタ軍の兵士たちから一糸乱れぬ大歓声が上がる。

「加えてこの度は、ワーロフ帝国軍の諸君も、我々と共に戦うこととなった。ワーロフ帝国軍諸君！　諸君らにおけるこの一戦は、恥を雪ぐ戦いである。祖国を蹂躙され、領地を奪われ、それを奪還するために多くの血が流された。諸君らの中には、かのドルガで生を受けた者もいるだろう。これまでの戦いの中で、家族や友人を失った者も多くいるだろう。本日までの戦いは、お世辞にも優位に進めてこられたとは言い難い。だが、今回は違う。我らアガルタ軍と、諸君たちが共に、ドルガを奪還するのだ。作戦の詳細は各司令官に伝えている。諸君たちはその指示に従って欲しい。必ず、必ずドルガを奪還する。ただし、今作戦においては決して死に急ぐな！　危機と見たら、撤退することも視野に入れて作戦に当たれ。今作戦は、諸君らの軍人として大きな経験となるだろう。従って諸君らの死は、アガルタとワーロフの戦力低下につながる。その点を肝に銘じて、戦うのだ！」

兵士たちの低い、唸るような声が巻き起こる。その声を聞きながら、マトカルは馬上でゆっくりと剣を抜き、その切っ先をドルガの街に向けた。

「我らこれより、ドルガ奪還作戦を行う！　諸君、戦いとはこうやるのだという見本を、ここに集まりし者たちに、見せつけようではないか！」

兵士たちから大音声が上がる。その声は大地を震わせ、周囲にいたシーワやギギたちワーロフ帝国の者たちは、思わず耳を塞いだ。

そんな彼女らには目もくれず、マトカルは馬を進める。その後ろからイリモに乗ったリノスが追いかける。

「マト」

馬を止めたマトカルのすぐ隣にリノスはやってきた。そして、周囲に見えないように結界を張った。

「どうしたのだ？」

「結界を張り直す」

「そんなことは別に……」

「いや、ドルガにはとんでもない魔術師がいる。念には念を入れておいた方がいい」

そう言って彼は、マトカルに結界を張り直す。

「よし、これでいいだろう」

「ありがとう。だが、別にここまでしなくてもよいものを……ツっ」

突然リノスがマトカルの体を抱きしめる。彼女はピクンと体を震わせる。

「マト、お前は死ぬ気だろう。死ぬなよマト。死んだら、許さんからな」

そう言ってゆっくりと体を離したリノスは、素早くマトカルの唇を奪った。

「わっ……わかった……」

顔を真っ赤にしながら俯くマトカルを、リノスは真剣な表情で眺めていたが、やがて、周囲に張っていた結界を解除すると、足早にクノゲンたちの許に戻っていった。マトカルは大きく息を吸い込むと、ゆっくりと馬首をドルガに向けた。

「……相変わらず、お熱いですな」

戻ってきたリノスに、クノゲンは笑顔で話しかける。そんな彼にリノスは、小首をかしげて、少しおどけたような様子を見せる。

「もし、何だったらクノゲン、お前のとこにも結界を張ろうか？」

「ハッハッハ、お願いすることもあるかもしれません。そのときは、よろしくお願いします」

「ハッハッハ」

二人の様子を見ていたルファナは、ゆっくりと視線を外し、ドルガに向けて進む軍勢を眺めた。マトカルはチャンとワーカの二人に馬

上から何か指示を出していた。そして、その指示を受けた二人はすぐさま軍勢の中に合流していった。しばらくすると、男の大声があちこちに上がったかと思うと、軍勢が三つに分かれていく。

「……変わった陣形ね。中央の部隊の規模が極端に少ない。あれはアガルタ軍かしら？　とすると、両側に展開しているのは、我がワーロフ軍ということかしら？　アガルタ軍が囮になる作戦？　まあいいわ。アガルタ王のお妃さまのお手並み拝見……ね」

フフンと鼻を鳴らすシーワ。彼女はチラリとそこに残っているアガルタの兵士たちに視線を向けた。そこには、顎に手をやりながらドルガを眺める覆面姿の男と、髭面の男、そして、その男たちに何やら話しかけている鎧姿の女性が目に入る。馬に跨る三人が何やら話をしているが、二人の男からは緊張感はまるで感じられず、その様子に、シーワは改めて彼らに侮蔑の視線を向けるのだった。

第四百六十九話　挑発

三つに分かれた軍勢はドルガに向かって進軍していく。その途中、突然チャンとワーカの二人が指揮する部隊が、それぞれ北と南に進路を変えた。残るマトカルが率いるアガルタ軍一千だけが、ドルガの正門を目指して真っすぐに進んでいく。

この光景は、バーリアル側にとって、奇異な動きに見えた。

正門を指揮する司令官であるデンザはこの動きを見て、正面の部隊は罠であると認識した。小勢だが、一糸乱れぬ歩調でこちらに向かって来ているのを見ると、おそらくかなりの練度を持つ部隊なのだろう。敵は、この部隊に攻撃を集中させ、その隙に北と南に展開した軍勢が、ドルガを攻撃すると考えた。

そうきたか。だが、この規模の軍勢では、ドルガの堀と城壁は越えられない。とはいえ、決死隊であれば、死に物狂いで向かって来るだろう。兵士たちが油断せねばよいが……。

そんなことを考えていると、正面に向かってきた軍勢が、弓矢や魔法が届くギリギリのところで、その動きを止めた。そして、中から一騎の騎士がゆっくりと進み出てきた。

その騎士は兜を身に着けておらず、近づいて来るにつれ、その顔がはっきりと認識することができた。

……あれは、女？

ドルガの兵士たちから、声にならない声が漏れていく。一体、何をしようとしているのか、彼らにはわかりかねていた。

実際、北と南に展開している軍勢は、その規模の大きさもあってか、まだ移動中であり、戦闘態勢が完了していないように見えた。そんな中で、ただ一人、しかも、女性の騎士がやって来るということは、戦いの常識に照らしてみても、あり得ないことだった。

……もしや、使者か？

そんなことをデンザが考えたとき、女性の騎士が声を上げた。

「私は、アガルタ王、バーサーム・ダーケ・リノスの妻であるマトカルと言う者だ。バーリアル軍の総司令官であるエルサック公爵殿下と、一対一の果し合いを申し入れたい！」

よく通る、美しい声だった。デンザは兵士たちに攻撃を仕掛けてくるまで、こちらから攻撃してはならぬと命令して、エルサックの許に向かった。

「……何？　女？」

報告を聞いたエルサックは、視線を宙に浮かせた。彼の後ろには、ロイスとシャリオが控えていて、相変わらずシャリオは無表情だが、ロイスは、何やら面白そうだと言った表情を浮かべている。

「その女は何と言っておるのだ？」

「総司令官殿と一対一の果し合いを行いたいと言っております」

デンザはてっきりエルサックは一笑に付すと思っていた。だが、彼の予想に反してエルサックの顔はみるみると青ざめていった。

「……その女、捕らえよ」

「は？」

「捕らえるのだ。余、自ら捕えてくれる。敵兵の規模は？」

「お、おそらく一千程度かと」

「ならば余は、それに倍する五千の兵をもって女を囲み、捕らえてくれる」

「お、お待ちください。このドルガを出ると仰せですか」

「奴らを囲んで、すぐにこの砦に引っ張り込めば、問題あるまい」

「し、しかし！」

「馬を曳け！」

そういうや否や、エルサックは立ち上がって部屋を出て行こうとする。デンザは後ろに控えていた二人に、総司令官殿を止めてくれと目で合図をする。

「ハッハッハ、公爵殿。五千などと中途半端なことはせずに、一万の軍勢で囲みなされ。そうすれば、女の一人や二人、すぐに捕らえられるだろう」

そう言って彼は立ち上がり、驚いた表情を浮かべるシャリオを促して、エルサックの後に続いた。彼らの後姿をデンザは、呆然とした表情で見送った。

しばらくすると、ドルガの正門付近が俄かに騒がしくなった。いよいよ来るか？　と思いつつ、マトカルは気を引き締める。不思議なくらいに恐怖心はない。これまでは死を覚悟して戦場に赴くことが多かったが、今回に限って言えば、死の予感が全くない。むしろ、絶対に今回の作戦を成功させねばならないという自負と、成功に導く自信が漲っていた。

一方のエルサックも、気持ちを高揚させていた。彼は正門に向かいながら、本国への帰還の可能性が生まれたことに、心を躍らせていたのだった。

……アガルタ王の妻を捕らえることができれば、それを人質にして、交渉することができる。ワーロフとアガルタは縁続きだ。決して粗略には扱えない。それに、勇猛で鳴るアガルタ軍の司令官を捕らえたとなれば、我がバーリアル軍の威信も上がる。本国に帰ればきっと、名将と呼ばれるのではないか。少なくとも、無駄飯ぐらいなどという蔭口は叩かれぬようになるだろう。バーリアル王家の中での地位向上には、大きく役立つことは確実だ。そんなことを考えながら、彼は足早に正門に向かう。

彼は到着するとすぐに門の上に上り、状況を確認した。なるほど、一人の騎士がポツンと佇んでいて、その後方に一軍が控えている。規模もかなり少ない。これはすぐに捕らえられるだろう。そう確信した彼の耳に、マトカルからこんな声が聞こえてきた。

「総司令官のエルサック公爵は、バーリアル王家の中でも、不肖の

王族と噂に聞くが、やはり左様か？」

エルサックの中で、何かがはじけた。それは事実ではあったが、彼の前では言ってはならぬ一言だった。

「敵は寡兵だ！　今だ！　今のうちに攻め立てろ！　あの女を捕えるのだ！」

エルサックは声を枯らしながら叫んだ。彼にとって、目の前の戦いは負ける要素のない、勝つものだと決め込んでいた。彼にはこの戦いは、遊びのように思われた。エルサックの下知に従って、バーリアル軍は門を開き、そこを守っていた兵士たちが次々とマトカルに向かって出撃していく。それを見届けた彼女は馬首を返して後退していく。そして、それと入れ替わるように、後方に控えていた軍勢が、彼女の前に繰り出してきた。彼らは見事に統率の取れた動きでマトカルの周囲を囲み、迫り来るバーリアル軍を迎え撃ちながらゆっくりと後退していく。

「攻めよ！　攻め立てよ！」

エルサックはそう言いながら自らも馬に乗り、城門の外に駆け出して行った。それを見たデンザはすぐさま自分も馬に乗り、エルサックを追いかけた。彼は追いかけながら必死で兵を退いて陣を整頓するように進言した。だが、エルサックはその言葉を上の空で聞いていた。目の前の敵を追うのに夢中で、デンザの言葉は耳に入らなかった。

彼はエルサックの馬の轡を抑えて、大声で叫ぶ。

「お退き下さい！　ドルガを出てはなりません！　総司令官殿！」

エルサックはデンザを睨みつけた。わかったような顔をして、自分に退けと命令してくる彼が憎らしかった。家来のくせに、バーリアル王家の王族たる自分に向かって……。エルサックは怒鳴り返した。

「誰の命令であろうと余は退かぬ。戦場には応変の処置というものがあるはずだ。今だ、今を置いて勝利はないのだ！」

エルサックは馬に鞭を当てるが、デンザに轡を取られている馬は走ることができず、デンザを中心にして円を描いた。

「馬の轡を放せ！　放さぬか！」

エルサックは鞭を振り上げてデンザを殴ろうとした。

敵の中から反撃のどよめきが上がったのは、そのときだった。

ちょうどその頃、ロイスとシャリオは馬に乗って、ドルガの外に駆け出していた。

「中の兄さま、一体何を」

「決まっているだろう。引き上げるのだ」

「あのドルガはどうするのだ？」

「先ほども言っただろう。守るも放棄するも、奴ら次第だ。まあ、ドルガを出てしまった以上、ヤツらに勝ちはないがな。とはいえ、あの公爵殿には、精神魔法で少しばかり、己への高揚感を高めておいた。あとはあの公爵殿が何とかするだろうし、最早、俺の知った

ことではない。本当はもっと派手にいきたかったのだけれどな。まあ、この辺が潮時だろう」

「我々はこれからどこに向かうのだ？」

「決まっているだろう。アガルタ王、リノスの所だ」

「……」

「どうやらヤツはあの軍勢の中にはいないようだ。となれば、ヒヤマにいるに違いない。ヤツを攫って、俺たちのパーティーの総仕上げといこうじゃないか」

不敵に笑うロイスを、シャリオは不安そうな面持ちで眺めていた。

空はすでに、晴れ渡っていた。

第四百七十話　攻防

エルサックはアガルタ軍の中に起こったどよめきと、鉄の鎧が擦れる不気味な音を聞いて馬を進めるのを止めた。退却しつつあったマトカル率いるアガルタ軍が反撃に出たのだ。そればかりではなく、チャンとワーカが率いるワーロフ帝国軍の一隊が背後に廻りこんで、エルサックの退路を断とうとしていた。

エルサックは思わず馬の轡を掴んでいるデンザの顔を見た。ドルガを出てはいけないという進言を聞き入れなかったために、いま眼の前に重大な事態が起こったのだ。だが、エルサックはそれを危機だとも危急だとも思わなかった。ロイスがかけた精神魔法の効果で、気分が異常に高揚していた。たかがアガルタ軍の千や二千、バーリアル王国軍が蹴散らしてくれるわと強気な姿勢を見せたものの、腹背に敵を受けたいま、どのような手を打つべきかに迷っていた。

「総司令官殿、モローズ殿の隊に合流されるのが、唯一の策かと存じます」

デンザが進言する。モローズ隊は、エルサックの周辺を警備している隊だった。彼らは左後方にいた。正門に通じる橋をちょうど渡ったところまで押し出してきていたのだ。周囲を敵に囲まれぬうちに取る処置とすれば、左に向かって後退し、モローズ隊に合流して、そのまま橋を渡って正門に引き上げるしかなかった。今となってはそれもかなり難しいことだったが、それが被害を最も少なくする手段であることは、誰の目を見ても明らかだった。

「なに、モローズ隊に合流しろ、モローズに助けを求めろと言うの

か！　……ここな、無礼者めっ！」

エルサックは鞭を上げて、デンザの頬を打った。デンザはドルガの正門の守備を任されている司令官だ。これまでの数度の総攻撃を見事に防いできた有能な指揮官だった。彼の一族は有能な軍人を輩出する家系であった。デンザは打たれた頬に反射的に手をやったまま、馬上のエルサックを睨んでいた。

……あまりにも無慈悲なななされようだ。現状がわからんのか。これを、兄である国王陛下が聞かれれば、何と思われることだろうか。

デンザの眼は、そう言っていた。

デンザは国王であるロウサックが信任している軍人の一人だ。そのデンザのきつい眼にあうと、エルサックは、第二の鞭を振るうことはできなかった。デンザはエルサックがひるんだ隙に、馬の轡を取って、モローズ隊へ向かって走り出した。

「ひけっ！　モローズ隊に合流しろ！」

デンザはそう叫んでいた。エルサックが言うべきことを、デンザが言ってしまっていた。これは明らかに越権行為だったが、周囲にいた兵士たちには、それは少しも越権行為には見えなかった。そんな命令を下さなくても、この場合はこれより外に手段はなかったのだ。

エルサックの馬首がモローズ隊の方向に向くと、エルサック隊全隊は、そこに活路を見出したかのように退き始めた。

だが、チャンとワーカが指揮するワーロフ帝国軍の騎馬隊が、モローズ隊とエルサック隊の間に割り込んできた。まるで、彼らがこう

した動きを取ることを予想していたかのような、見事な連携だった。エルサック隊は、完全包囲に陥った。

「今だ！　今が勝機だ！　全軍攻撃せよ！」

マトカルは馬上で叫んだ。

デンザはただひとえにエルサックを救出しようと焦っていた。彼が討たれれば、この戦いは負けてしまうのだ。そのためにデンザは、自ら敵の中に身を晒して、敵の注意を引き付けようとした。

一万近い、しかも統制の取れていない軍勢が我先にドルガの正門を目指しているために、エルサックの部隊は大混乱に陥っていた。その兵士たちの間に、わずかな退路が生じた。デンザはそこにエルサックの馬を引き入れた。デンザはそこで、馬の轡をエルサックの近習の一人に渡していった。

「あとは私が引き受ける。お退きなさい」

デンザはそのとき、死ぬ覚悟をしていた。エルサックの鞭に打たれた頬のあたりに残っているかすかな痛みが、彼にいまなすべきことを教えたようだった。デンザは馬上で槍を構えて、寄せてくるアガルタ軍を待っていた。退いていく中でただひとり、突っ立っているデンザの姿はやや異様だった。

「私は、ドルガ正門部隊の指揮官であるデンザと言う者だ！　マトカル殿、私と勝負せよ！」

彼はあわよくば、敵の大将であるマトカルの首を獲ろうと考えた。彼女の首を獲ることができれば、少なからず敵に動揺が走るだろう。

その隙に乗じて、エルサック以下、バーリアル王国軍の兵士たちをドルガに退かせようと考えたのだ。

だが、その声はマトカルには聞こえなかった。彼はアガルタ軍の兵士たちの槍を一度に受けねばならなかった。デンザはその槍を相手に、阿修羅のように暴れ回った。その様子は、マトカルの目に留まった。

「敵の大将を狙うのだ。他の者には目を向けるな！」

マトカルはそう命令を下したが、鼻先で槍を振り回すデンザを放っておくわけにはいかなかった。アガルタ軍の動きが止まった。

エルサックの目の前では、ドルガに入ろうとする軍勢と、それを阻止しようとするチャンとワーカのワーロフ軍との間で、大乱戦となっていた。モローズ隊は動くに動けない状態にあった。下手に動けば、ドルガの正門を敵に突破される恐れがあるのと同時に、彼らも、ワーロフ軍の攻撃に手を焼いていて、エルサックの軍勢を救援するだけの余力はなかった。

エルサックはチラリと視線を後方に向ける。デンザはおよそ二十人の味方と共に、アガルタ軍の渦の中に取り込められていた。

「生きようと思うな、死ね。俺と共に死んでくれ！」

デンザは絶叫しながら戦っていた。死ぬ覚悟で暴れ回っているために、さすがのアガルタ軍の兵士たちも手を焼いた。彼らはリノスの結界石を装備しているために、実質的な被害はなかったが、それでも、死に物狂いで暴れ回るデンザになかなか槍をつけられずにいた。

視線を正面に戻そうとしたそのとき、エルサックの頭に閃くものがあった。

彼は包囲している部隊の中で、右翼に展開している部隊が最も手薄と見た。そこは、チャンが指揮する部隊であったが、彼らは、エルサックの軍勢を攻撃しながら、同時に、モローズの部隊にも攻撃を仕掛けていた。その上、隙あらばモローズの部隊を打ち破って、ドルガに突入しようとしていたため、陣形がやや延びているように見えたのだ。

エルサックは周囲の兵士たちを連れて、チャンの部隊に攻撃を仕掛けた。エルサックとチャンの部隊は絡まり合ったまま廻り出した。そのまま廻り続ければ、エルサックの部隊の一部は、チャンの部隊の横をすり抜け、危機を脱せられるはずだった。しかし、マトカルは冷静にその様子を見ていた。彼女はそうやすやすと、エルサックの策には乗らなかった。

「皆の者、続け！」

彼女はそう叫ぶと、暴れ廻るデンザを兵士たちに任せて、自らは部隊を引き連れてエルサックの部隊の横腹をついた。そのあまりの素早さに、エルサックはその攻撃に対して、気付くのが遅れた為に、部隊は大混乱に陥った。

◆　◆　◆

「……申し上げます！」

リノスの許に伝令が息を切らせながら控えた。彼はゆっくりと頷いて、兵士に報告を促す。

「マトカル様、敵の総司令官であるエルサック将軍を討ち取りました。併せて、デンザという敵の司令官も討ち取りました。お味方は引き続き、ドルガに向けて攻撃を継続中です」

「ご苦労だった」

リノスは顔色を変えず、ただ、淡々とした様子で、兵士にねぎらいの言葉をかけた。

「全軍に総攻撃をかけよと触れて廻りなさい」

声の主は、シーワだった。彼女は顎をしゃくり、傍に控えていたギギとトーイッツに促す。

「では、私はこれで」

「待て」

その場を去ろうとするシーワが怪訝そうな表情を浮かべる。彼女らを止めた覆面姿の男は、腕を組み、あらぬ方向に視線を向けている。その態度は、シーワの癪に障るものだった。

「我々は忙しい……」

「死にたくなければ、動くな」

まるで、死にたければ勝手にしろと言わんばかりの態度だった。その彼の視線の先に、二人の騎兵が向かって来ているのが見えた……。

第四百七十一話　ハイ、カッキーン

馬を駆る男女が、みるみるうちに近づいて来る。クノゲンやルファナも、ただ、呆然と二人がやって来るのを眺めている。周囲にいる兵士たちも、下知がないためにどうしていいのかがわからず、ただ、戸惑いながら事の成り行きを眺めている状態だった。

だが、俺にはわかる。この二人はタダ者ではないことが。二人を鑑定してみたが、こんな結果が表示されていたのだ。

ヒミツ
ＨＰ：ヒミツ
ＭＰ：ヒミツ
ヒミツ　ナイショ
ヒミツ　ナイショ
ヒミツ　ナイショ
ヒミツ　ナイショ
ヒミツ　ナイショ
ヒミツ　ナイショ
ヒミツ　ナイショ
ヒミツ　ナイショ
ヒミツ　ナイショ
ヒミツ　ナイショ
ヒミツ　ナイショ
ヒミツ　ナイショ
ヒミツ　ナイショ
ヒミツ　ナイショ
ヒミツ　ヒミツ　ヒミツ

ヒミツ：ナイショ　ナイショ　ナイショ
ヒミツ：ナイショ
ヒミツ：ナイショ　ナイショ

これは男の方のスキルだが……何ともイラつかせる表示だ。ただ、持っているスキルが半端ではない。半分以上のスキルＬＶをカンストしてしまっている。これに対し、女の方のスキルは、こんな感じで表示されている。

（´ﾍﾟ｀）テヘ♡
ＨＰ：☆５
ＭＰ：☆５
頼光　ＬＶ？
総司　ＬＶ？
紫式部　ＬＶ？
天草　ＬＶ？
土方　ＬＶ？
北斎　ＬＶ？
始皇帝　ＬＶ？

経済、推嫁

経済：頼光、総司、土方、天草
推嫁：紫式部、始皇帝

数こそ少ないが、持っているスキルの大半はカンストしてしまっている。専門性が高いと言えるかもしれない。ただこのスキル、うむ、

まあ、何とも……という感じだ。言いたいことはたくさんあるが、敢えて何も言わないことにする。

そんなことを考えていると、二人は俺たちの近くまで来て、その動きを止めた。

「何者だ」

ルファナが声をかけるが、二人は何も答えない。男の方はニヤニヤと笑みを浮かべながら、ゆっくりと俺たちを見廻している。一方の女性の方は、何とも言えないような表情で男を眺めている。

「バーリアル軍の御方か。まずは、名乗られよ」

ルファナが毅然として話しかけるが、相変わらず男はニヤニヤと笑みを浮かべたままだ。

「お粗末だな」

不意に男が口を開く。笑みを浮かべたままで喋っているので、不気味さが尋常ではない。ヤツはゆっくりと俺に視線を向けた。

「それで姿を隠したつもりか？　それにしてはお粗末だな。身に着けている鎧、剣から発せられる気配が、他の者とは段違いだ。……アガルタ王、リノス」

目の前の女性がギョッとした表情を浮かべている。後ろに控えているシーワ以下、ワーロフの連中の気配も変わった。俺は大きなため息をつく。

「一体何を言っているのかわからないな。というよりお前たち、何だそのスキルは？」

俺の声に、二人はキョトンとした表情を浮かべている。

「特にお前！　『ナイショ』『ヒミツ』って何だ？　そのまんまじゃないか。もう少し何とかしろよ。センスの欠片も感じさせないな。龍王の方はダサイ上にイタイが付くが、努力の跡は垣間見えるだけまだマシだ。見習わなくてもいいが、その姿勢は学べ」

俺はフンと鼻を鳴らして男を一瞥し、隣の女性に視線を向ける。

「ところで、お前はどれだけ回したんだ」

「……」

「いや、褒めているんだ。いいセンスをしている。大変だっただろ？　いや、大変ってこともないか。どれだけタマを溶かそうとも、引ければ、引いた瞬間に、全てが報われるからな。いや、よく頑張った。努力したんだな。別にいいじゃないか。誰に何と言われようとも、テメエの金じゃないか。それに、この『経済』ってスキルがいいな。『経済』って書いてガチャと読ませるんだろ？　そうだ、その通りだ。廃課金者と揶揄するヤツもいるだろうが、お前たちはガチャを廻しながら、世界の経済を廻しているのだ。お前たちが世界を支えているのだ。プライドを持つといい」

「……中の兄さま、コイツは何を言っているのだ？　気が狂れているのか？」

「さあな」

「その通り！」

「何？」

「『推し』という字をよく見て見ろ。『人を狂わせる』と書いてあるだろう。いや、皆まで言わなくてもいい。推しを目の前に正気でいるというのは、無礼に値する。わかる。わかるぞ～。人気のないところで、ブツブツと推しの名前を呟きながら、もしくは部屋の中で一人、推しの名前を叫びながらガチャを廻すという、狂気という名の最大の礼を尽くして推しをお迎えしたのだろう？　……尊いだろう？　そう、尊いのだ。推しが出た、いや、出てくれたあの瞬間の尊さ。全身から変な液体が噴出するだろう？　お前はきっと、そんなエクスタシーを何度も味わってきたな？　わかる。わかるぞ、俺には。ちなみに俺の嫁は北斎だ。見た瞬間に思ったね。『お前や』と。北斎こそが至高なんや。異論は認めん、断じて認めんからな！　おい、ムスカにゴミのようにと形容されたうちの一人である隣の男にも教えておいてやれ。さっきからポカンとしてるやないかい！」

……あれ？　何だこの空気は？　何、このアウェイ感？

「……オホン。すまない、喋りすぎた。少々疲れているようだ。家に帰ったら、医者に相談しようと思う」

「……中の兄様、この男は本当に、アガルタ王リノスなのか？」

「間違いない」

「さて、私には何のことだか……」

「なぜ、龍王のことを知っている？」

「オフゥ？　龍王殿のことでござるか？」

「龍王の、しかも、ヤツのスキルのことを言っておったな？　それを知っているということは、相当のスキルだということだ。それに、身に着けている鎧や剣に対して、表示されているスキルが『結界ＬＶ２』だけとは、不自然にも程があるぞ。うまく己の魔力などは隠しおおせているが、肝心の詰めが甘いな。……アガルタ王、リノス！」

「やはりお前ら、ただのネズミじゃないな？」

「誰でもよい」

その瞬間、男の姿が消えた。

ガキーンという音が聞こえた。気が付けば、男の顔が俺の至近距離にまで近づいていた。しかも、宙に浮いている状態だ。そして、相変わらず下卑た笑みを浮かべている。

「俺の攻撃を防ぐとは、やるな？　結構本気でやったのだがな」

そんなことを言いながら、宙に浮いたままゆっくりと元の位置に下がっていく。ヤツは俺を殴ってきた。そう、シンプルに拳で殴ってきたのだ。ただし、その速度があまりにも高速で、とんでもない攻撃力だった。瞬時の動きで、周囲にいた者は見えなかっただろう。俺ですらも、衝撃を受けて初めてわかったのだ。

正直言って予想外の攻撃だった。てっきりヤツは魔法で攻撃して来

るものと踏んでいたのだ。その体からは凄まじい魔力を感じるし、背が高く、細い体躯をしていることから、肉弾戦というイメージを持てなかった。むしろ、その隣にいた少女の気配が不気味で、そちらを意識していたこともあるが、まさか目にもとまらぬ速さで移動して殴ってくるという選択肢は、全く考えていなかった。

しかも、ヤツの攻撃は俺の結界を砕いていた。龍王ですら手を焼く硬度を誇る結界を、一撃で粉砕したのだ。だが、瞬間的に結界は張り直されていた。砕けた瞬間に破損部分を修復する効果を付与していてよかった。

密かにホッと胸を撫で下ろす俺を見据えたまま、ヤツは隣に控えている女性に声をかける。

「見たか。とんでもない結界を張る男だ。アガルタ王リノスに間違いない。シャリオ、やるぞ」

女性の気配が変わった。彼女はゆっくりと馬から降り、冷たい表情を俺に向けた。

「お前たち、離れていろ。できるだけ遠くに逃げろ」

俺の言葉が言い終わると同時に、周囲が黒い煙に覆われた。クノゲンの「退けぇ！」という声が響いている。同時に、兵士たちが素早く移動する音が聞こえてくる。

「無駄だ！」

「ギャうっ！」

甲高い悲鳴が起きたかと思うと、二人の男女が飛び出してきた。彼らは上空高く舞い上がっていく。

「中の兄さま、違う。女だ！」

シャリオの声で、二人の動きが止まる。ロイスは肩に担いでいる者の顔を覗き込む。そこには、口を大きく開けて気を失っている女性の姿があった。

「何だコイツは！　アガルタ王リノスではない」

「中の兄さまぁ！」

シャリオの絶叫にも似た声で我に返ったロイスの目の前には、天馬に跨る男が剣を振り上げていた。ロイスは思わず目を見開いた。

第四百七十二話　激突

ロイスは反射的に右腕で防御の態勢を取った。

気が付くと、その右腕が、ゆっくりと宙を泳いでいた。目の前には、剣を振り切った姿勢を取る覆面姿の男――アガルタ王リノスの姿があった。

自分の腕が斬られる……あり得ないことだった。黒龍の中でも、自分の鱗は最高硬度を誇っている自信があった。それだけではない。彼は魔力をその体に纏わせ、それを凝固させることで、「見えない鎧」を纏って、さらに防御力を高めていたのだ。たとえ龍王と言えど、自分に致命的なダメージなど与えられない――そう考えていたロイスにとって、目の前の状況は、すぐに信じることができるものではなかった。

「ガッ……」

右腕に衝撃が走る。見ると、リノスが剣の切っ先を天に向けていた。その瞬間、ロイスの右腕全体が空を飛んでいた。目を見開いて固まるロイス。リノスはその隙を逃さず、彼の脳天をめがけて剣を振り下ろした。

……だが、その瞬間に、ロイスの姿は消えていた。リノスは舌打ちをしながら手綱を操り、イリモを地上に向けた。

「ホッホッホッホぉ～。思った以上にやるのだな」

左腕に抱えていたギギをポンと地面に放り投げながら、ロイスは笑みを浮かべている。左手で失った右腕部分をポンポンと触りながら、コクコクと頷いている。妹のシャリオはその後ろで、何とも言えぬ表情を浮かべながら、ロイスに視線を向けている。

「やはり、ただの人間じゃないなおまえたち。まあ、あれだけのスキルを持っているんだ。人間なわけはないか。ということは、お前たちは、今、世間を騒がせている黒龍だな？」

イリモに跨りながら地上に降りてきたリノスが、剣を向けながら二人に話しかけるが、彼らは全く反応しようとしない。

「中の兄さま……」

「わかっている」

短い会話を交わしたかと思うと、ロイスの右腕がどんどん再生されていく。彼は右手をゆっくりと動かしてその動きを確かめながら、視線をリノスに向けた。その目には、憎悪が宿っていた。

「シャリオ、やるぞ」

ロイスの言葉に、シャリオは仕方がないという表情を浮かべながら頷く。

「動かん方がいいな」

不意にリノスの言葉が聞こえる。気が付くと彼らの周囲には、真っ黒い小さな球体がいくつも浮かんでいた。ロイスはその球の一つに手を触れる。

突然、鈍い爆発音と共に地面が揺れた。黒煙が立ち上る中、ロイスはニヤリと笑みを漏らしている。球を掴んだ彼の右手は、吹き飛んでいた。

彼は不敵な笑みを浮かべながら、一歩一歩、リノスに向けて歩を進める。その度に爆発が起こり、地面が揺れる。気が付けばロイスの体は両腕が吹き飛び、体中を穴だらけにした、凄惨な姿になっていた。だが、彼は相変わらず笑みを崩そうとせず、たどたどしくはあるものの、その歩みを止めようとはしなかった。

「フッ、フフフフ」

不気味な笑い声が聞こえたかと思うと、ロイスの体がカッと光った。その瞬間、彼の体は元に戻っていた。

「死ね！」

気が付けば、ロイスの体はリノスの頭上に浮いていた。彼はこぶしを握り締め、リノスを殴りつけようとしているように見えた。

「ぬうん！」

咄嗟にリノスはマントを引きちぎり、それをロイスに投げつけた。マントがロイスの全身に巻き付く。それを見逃さず、リノスは剣でロイスの体を貫く。

「なっ？」

そこにロイスの姿はなかった。ふと背後に気配を感じる。そこに視

線を向けると、何と、ロイスの姿があった。

「その程度か」

ロイスの指から鋭い爪が伸びて、リノスとイリモの体を貫く。何か硬いものを貫く感覚が手から伝わってくる。悪くはない、感覚だ。

「どうした、もう終わりか？　フフフ、安心しろ。殺しはしない」

バリン

何かがはじける音がした。同時に、シャリオが目にもとまらぬ速さで、あらぬ方向に向けて走っていく姿がロイスの目に入った。

「うおっ！」

突然、男の声が聞こえる。視線を向けてみると、そこには、手刀を食らわせようとするシャリオと、それを右手で受け止めているリノスの姿があった。彼はいつの間にか馬から降りていた。ロイスは思わず目の前にいたはずのリノスに目を向ける。

……そこにあったのは、大きな岩だった。彼の爪は、その岩に深々と突き刺さっていた。

「兄さま、逃げろ！　逃げて！」

シャリオの絶叫にも似た声で我に返る。見ると、シャリオの体から黒い煙が出ているのが見えた。人化を解除しようとしているらしい。

「……サマニハ……ノゴキゲ……クニゾン……ツリマ」

シャリオの腕を掴んだリノスが小さな声で呟いている。シャリオの周囲が桃色の球体に覆われて、声が急速に遠ざかっていく。彼女は苦しそうに首を振っている。そのとき、リノスの左手がロイスに向けられた。彼の耳にパリパリと不気味な音が聞こえてくる。

ゴアァァァァー！！

凄まじい咆哮が響き渡る。ロイスの体が黒い煙に包まれたかと思うと、そこには巨大な黒龍が姿を現した。禍々しい気配をまき散らしながら彼は、憎しみを込めた目でリノスを睨みつける。

「この俺を惑わせる幻覚を使うとは、貴様を見誤っていた。この礼は必ずさせてもらうぞ」

「バカ野郎、逃がすか！」

リノスの左手が紫色に光った。だが、ロイスは踵を返すと、どんどん空に向かって上昇を始めた。

「くっそ！　俺の結界を破りながら進んでいきやがる！　やっぱり無詠唱じゃ無理か！　ああ、詠唱が間に合わん！」

悔しそうなリノスの声。その彼をあざ笑うかのようにロイスの姿は空に消えた。

リノスは、ロイスが立ち去った方向を忌々しそうに眺めていたが、やがて、シャリオに視線を向けた。

「やはり黒龍だったか。お前には聞きたいことがある。心配するな。

大人しくしていれば、危害を加えたりはしない」

シャリオは片膝をついた姿勢のまま、リノスに憎しみの視線を投げかけた。

「……リノス様」

不意に女性の声が聞こえた。ふと見ると、そこには、アガルタ軍の兵士数人を従えたマトカルの姿があった。

「何だったのだ？　さっきのは。ドラゴンが……空に……」

「ああ、後で説明するよ。気にするな。終わったことだ」

「そうか……。私の方も、終わったぞ。ドルガの占領を完了した」

そう言って彼女は馬を降り、リノスの側に近づいて来る。その右手には、白い包み袋が握られていた。マトカルはリノスの傍まで来ると、片膝をついて包み袋を地面に置き、それをゆっくりとほどいた。

……現れたのは、男の生首だった。男は目を開いたままだった。虚ろな目で、男はリノスを見つめていた。

「バーリアル王国軍総司令官である、エルサック公爵だ。身に着けていた鎧や剣から、本人であることは間違いないと思うが、念のため、首実検をして欲しい」

「……わかった」

リノスはそう言うと、身に着けていた兜を脱ぎ、顔に巻いている布

をほどき始めた。

「もう、顔を隠す必要もないだろう」

リノスはほどいた布を懐に仕舞うと、スッと後ろを振り返った。そこには、こわばった表情を浮かべながら固まるシーワと、ぐったりと倒れているギギ。その彼女の傍らで片膝をついて介抱しているトーイッツの姿があった。

「アガルタ国王、バーサーム・ダーケ・リノスだ。これからドルガに向かい、首実検を行う」

彼の言葉に誰も反応する者はいない。リノスは、シーワたちを一瞥すると踵を返して、地面に置かれている生首に手を合わせ、それを丁寧に包み直す。そしてそれを、近づいて来たクノゲンに渡した。

「クノゲン、ルファナちゃん、ドルガに向かおう」

リノスは二人にそう言うと、後ろに控えている兵士たちに向けて声をかける。

「すまないが君たち。この彼女を……運んでくれないか」

彼の視線の先には、相変わらず憎しみの表情を向けている、シャリオの姿があった。

「大丈夫だ。そんなに重くはない……はずだ。無理ならば、馬に乗せて運んできてくれ」

そう言うとリノスはマトカルの肩にスッと手を置いた。

「マト、よく生きて帰って来てくれた。よくやってくれた」

そう言って彼はマトカルを抱きしめた。彼女は驚いた表情を浮かべたが、やがてその顔を真っ赤にしながら、ゆっくりと目を閉じた。

第四百七十三話　戦いのあと

ドルガの街には、イリモに乗って走ること約３０分で到着することができた。正門に近づくにつれて、兵士の死体が増えていく。そして、予想通り正門付近では死屍累々の様相を呈していた。

門を入ると、ワーロフ帝国軍の兵士たちが整列して、リノスたちを出迎えていた。その先頭には、二人の男の姿があった。チャン司令官とワーカ司令官だ。彼らはリノスたちが到着すると、彼らの前に膝をついて出迎えた。

「そのお姿は……アガルタ王リノス様ですね。お目にかかれて光栄でございます」

「うん？　ああ、そうだったな。今までは顔を隠していたから、わからなかったかな、チャン司令官。バーサーム・ダーケ・リノスだ。今後もよしなに頼む」

リノスの言葉に、二人は恭しく頭を下げた。

「アガルタ王様、マトカル様の采配もさることながら、お二人のお人柄にも、感服いたしやした」

「ハハハ、世辞はいい」

「ハハハ。では、早速、街をご案内致しやす」

ワーカが立ち上がり、イリモの轡を取った。リノスはゆっくりと頷

いた。

ふと、沖合を眺めると、そこには、ヴィエイユが率いている船団が海を完全に封鎖していた。船から飛び出している大砲がずらりと並んでいるのが、実に壮観だ。リノスは後ろに控えている兵士に視線を向け、あの船団にドルガを占領したことを伝えるよう指示を出した。

案内されたのは、総司令官が使っていた建物だった。元々は、この街の長が使っていた建物で、古くはあるが、趣のあるいい屋敷だった。中に入ると、広いホールのような作りになっていて、そこにはワーロフ軍とアガルタ軍の将兵たちが整然と整列して、リノスたちを出迎えていた。

その彼らの前には、後ろ手に縛られた状態で跪いている数人の男たちがいた。整列していた兵士の一人が近づいて来て、ここに居並んでいる者たちは、バーリアル王国軍の司令官たちだと報告する。リノスはチラリとその男たちを見ると、兵士たちに縄を解くように命じた。

「アガルタ王様、それは……」

驚いて止めに入ろうとするチャン司令官に、リノスはニコリと笑みを返す。

「身に寸鉄も帯びていない。彼らが無様な抵抗を見せることはないだろう。な？」

リノスは囚われている男たちに視線を向ける。彼らは一斉にリノスから目を逸らし、俯いた。

縄目が解かれたことを確認したリノスは、彼らに椅子を与えるよう指示を出し、自らも椅子を用意して腰を下ろした。

「アガルタ国王、バーサーム・ダーケ・リノスだ。諸君らとはこうした形で出会ってしまったが、これまでのドルガを防衛してきた戦いぶりは見事だった。今回はたまたま運が我々に向いたためにこうした結果となったが、恥じることはない。これまでの働きは、大いに誇っていい」

リノスの言葉に、バーリアル王国軍司令官の全員が俯いたまま、ピクリとも動かない。彼はオホンと咳ばらいをして、さらに言葉を続ける。

「さて、諸君たちに協力してもらいたいことがある。首実検だ」

司令官たちの数人が顔を上げる。リノスはその様子を見ながら、クノゲンに視線を向けて、コクリと頷く。クノゲンは両手で大切そうに抱えていた布の包みを彼らの前で広げた。

「バーリアル王国軍の総司令官、エルサック殿で間違いないかな？」

リノスの問いかけに、誰も反応する者はいない。だが、数人の司令官が小さく頷いていた。それを見てリノスは、大きく頷く。それを受けてクノゲンは、エルサックの首を再び丁寧に布に包んだ。

その後、アガルタ、ワーロフ両軍が討ち取った将兵の首実検が行われ、丁寧に首帳に記入されていった。その中には、エルサックを最後まで守り通そうと奮闘した、デンザの首も含まれていた。

最後の首実検が終了したそのとき、それを待ちかねたように、一人の女性が部屋に入ってきた。真っ白い純白のドレスに身を包み、妖艶さを漂わせた女性――ヴィエイユがにこやかな笑みを湛えながら、リノスに向かって歩いて来た。彼女に気付いたバーリアル王国軍の将兵は一様に目を見開いて固まっている。それと同時に、チャンとワーカの二人も、ヴィエイユの姿を目にして、あんぐりと口を開けて見入っていた。

彼女のすぐ後ろから、鎧兜に身を包んだ数名の兵士も従っていた。彼らが身に纏う鎧兜は全員、ヴィエイユと同じ白で統一されており、その周囲だけが妙に明るい雰囲気を醸し出していた。

「この度は大きな勝利を収められまして、祝着至極に存じます。あまりのうれしさに、取るものも取りあえず、はせ参じました」

「世辞はいい。まあ、だが、今回の勝利は、お前たちなくしては成しえなかった。感謝するぞ、ヴィエイユ」

「お褒めの言葉、嬉しゅうございますわ。ですが、私どもは、今回は何もしておりませんわ」

「いや、あれだけの船団を仕立ててここまで来てくれたのだ。それだけでも十分な働きだ。この礼はきっと、させてもらうぞ？」

「ホホホ、ありがとうございます。そう言っていただけると、嬉しゅうございますわ。では、お言葉に甘えまして、恐れ入りますが、船にて待機している我が軍の兵士たちを、このドルガとヒヤマの砦に上陸させてもよろしゅうございますか？　何しろ、船での長旅……。兵士たちも疲れておりますから。ご迷惑になるようなことは致しませんわ」

「……」

リノスはスッとチャンとワーカに視線を向ける。彼らもどうしていいのかがわからず、二人で顔を見合わせている。リノスはフッとため息をつくと、ゆっくりとヴィエイユに視線を向ける。

「まあ、そう言われてしまっては仕方があるまい。ただし、布教はするなよ」

「ホホホ、そのようなことを致すつもりはございませんわ。心配性ですこと。ですが、私は、そんなアガルタ王様が大好きでございますわ」

そう言ってヴィエイユは笑い声をあげた。

彼女は傍に控えていた兵士の一人に目配せをすると、彼は一礼をして部屋を出て行った。それと入れ替わるようにして、一人の兵士が彼らの許に近づいて来た。

「ハッ、申し上げます。ただいま、正門前にて、シーワ副総司令官殿、ギギ司令官殿、トーイッツ司令官殿が到着されました。間もなくこちらにお見えになります」

チャンとワーカの二人の表情が強張る。その様子を見てリノスは、思わず苦笑いを浮かべる。

しばらくすると、シーワたちがゆっくりと入室してきた。ギギはトーイッツに負ぶさっていて、意識はありそうだが、体調はすこぶる悪そうだ。

彼女は部屋の中を見廻すと、ゆっくりとリノスの許に近づいて来た。

「ご苦労様でございました」

リノスは腕を組んだままチラリと彼女を見たが、すぐに視線を外した。

「この度のドルガ奪還、ワーロフ帝国軍を代表しまして、感謝申し上げます。お陰様を持ちまして、我が国も元の平穏な日々が戻ることかと存じます。ドルガ、またはヒヤマの砦につきましては、私共で対処させていただきます。どうぞ、陣をお引き上げになっていただいて結構でございます」

「今、陣を引き上げるわけには、いかないな」

「……これは異なことを。アガルタ王様のお言葉とは思えませんわ。ドルガ、ヒヤマは、我らワーロフ帝国の領土でございます。速やかにお引き渡し願いたく存じます。それが、世間の常識というものですわ」

「無礼者」

まるで囁くように、侮蔑するかのような女性の声が聞こえる。シーワはその声の主に視線を向ける。そこには、ヴィエイユがいた。

「戦の当事国であるあなた方はもとより、援軍に赴いた国々が総出でかかっても落とせなかったこのドルガと、ヒヤマの砦を、アガルタ軍がほぼ単独で奪還しているのです。その労を労わないばかりか、すぐに引き渡せとは、そんな無礼な口上は古今東西を見ましても、

初めてのことですわ」

「あなた様は確か……お名乗りにならなかったと記憶しておりますので、お名前は存じませんが、あなた様に無礼などと言われる覚えはございません」

「申し遅れました。私、新・クリミアーナ教国教皇、ジュヴァンセル・ヴィエイユと申します」

シーワの顔が、一瞬で凍りついた。その様子を見て、ヴィエイユは薄く笑った。

「これよりドルガには、我らクリミアーナ海軍の者たち四万が駐留いたします。長い船旅での航行……。兵士たちも疲れております。況や、これまで戦闘を重ねてこられたアガルタ軍をや。あなた方のために、我ら新・クリミアーナとアガルタ軍は力を尽くしたのです。まずは、その労を労い、十分な休息を与えるのが筋でしょう」

ヴィエイユの言葉に、シーワは何かを言おうとしたが、彼女はそれをさせず、さらに言葉を続ける。

「それに、あなたは確か、副総司令官ではなくて？　あなたの振る舞いは、一国の王たる我々に対して取るべき対応でしょうか？　立ったままで、我々に命令をする……。一国の王に対して、このワーロフ帝国では、副総司令官ごときが対等に話をするのが仕来りなのでしょうか？　であれば、何とお行儀の悪い国ですこと」

ホホホとまるでシーワをあざけるように笑うヴィエイユ。その様子を横目で見ながらリノスは、ゆっくりと目を閉じるのだった。

第四百七十三話　戦いのあと（後書き）

コミカライズ第１０話、ただいま無料公開中です（ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６）。２０１９／１０／２９　１２：００までは無料で読めますので、是非、チェックしてみてください！

第四百七十四話　策謀・・・？

結局、俺たちアガルタ軍は、早々にドルガを退去した。シーワは顔を引きつらせながら、お心のままに逗留くださいと言っていたが、気分が悪かったし、ヤツへの当てつけへの意味も込めて退去したのだ。マトカルも兵士たちも、そのことについて全く異論を言わなかった。野営になるが、俺の結界がある。むしろ、海からの北風が吹きつけるドルガにいるよりは、結界の中にいた方が快適だからだ。

だが、ヴィエイユ達に関しては話が違ってくる。彼らはこの寒風吹きすさぶ中、船団を仕立ててここまでやって来ている。戦闘に参加しなかったとはいえ、バーリアル王国軍を牽制してくれた働きは、見事と言ってよかった。

最終的に、新・クリミアーナ軍は、ドルガとヒヤマに五日間逗留することになった。ヴィエイユのこの提案は、シーワに反論の機会を与えなかった。しかも、食糧を持ち込んで、それらを街の人たちに配給するとまで言い放ったのだ。さすがにこれには、シーワも黙る他はなかった。

ドルガとヒヤマには、チャンとワーカの両司令官が、それぞれの軍勢を率いてヴィエイユたちが引き上げるまでの期間を管理することになった。これらはすべてヴィエイユが考え出したことで、俺は一切意見を言わなかった。ヤツのことだ。色々と考えているのだろう。だが、鑑定スキルを発動させても、心の中を見ることができなかったのは、何らかのマジックアイテムを持っているのだろうか。

ドルガを出た俺たちは、歩いて十分ほどの距離にある小さな森の中

で休息を取った。そこで、兵士たちを労うべく、バーベキューパーティーを行うことにした。本来ならば、チャン、ワーカたちと共に乾杯をしたかったが、シーワがいる中でそんなことをする気持ちにはとてもなれなかったし、ヤツらも嫌がるだろう。とはいえ、ささやかではあったが、このパーティーは大いに盛り上がった。何より、アガルタ軍の死者がゼロというのが、何とも誇らしかった。

俺は肉を焼き、野菜を焼きながら、周囲の者たちにそれらを振舞う。そして、盛り上がりが落ち着いた頃、調理した食材をもって、ある場所に向かう。

……そこには、結界に閉じ込められている少女がいた。言うまでもなく、黒龍の一人だ。彼女は俺の姿を見つけると、相変わらず憎しみの表情を浮かべた。

「腹減ってないか？　よかったら、食べな」

焼いた肉と野菜が盛り付けられた皿を差し出すが、一切反応を示さない。ただただ俺を睨みつけている。

「お前さんは確か、アガルタの都で騒動を起こしたヤツだな？　黒龍であるお前さんが、どうして俺を狙う？」

「……」

「逃げて行った黒龍……あれはお前の兄で間違いないか？」

「……」

「この戦いも、お前たちが起こしたのか？　一体何のためだ？」

「……」

「……ま、言いたくなければ言わなくていい」

彼女は一切俺との対話を望んでいないことがよく見て取れた。鑑定スキルを発動してみたが、彼女の過去は一切覗き見ることはできなかった。これまでいろんな場面で助けられてきたこのスキルだが、ここ最近は効かないことが増えた気がする。一瞬、俺の能力が落ちたのかと思ってしまうくらいだ。

そんなことを考えながら、皿を少女の許に置く。食べたければ食べればいいし、食べたくなければ食べなくていい。

俺は踵を返して、皆のいる許に向かった。

一方、その頃、ドルガの街では、リノスが予想もしなかった出来事が起こっていた。

ベッドに一人の女性が横になっている。これは、ワーロフ帝国軍司令官のギギだ。彼女は虚ろな表情のまま、天井を眺めている。その彼女の傍には、一人の男の姿があった。同じ司令官のトーイッツだ。

リノスたちがドルガを退去した後、彼らもシーワと共にこの街を後にするつもりだった。尤も、シーワ自身はここにとどまり、ヴィエイユはもちろんのこと、チャンやワーカの二人にも睨みを利かせたいと考えていたのだが、如何せん彼女一人ではなにもできることはない。その上、来援の各国との調整も行わねばならず、いつまでもここにいることはできなかった。ヴィエイユが現れたのは、そんなときだった。

彼女はギギの様子を見ながら、彼女をこの街に置いていくようにと提案した。ギギは明らかに衰弱しており、この寒風の中、ワーロフの本陣まで向かえば、さらに悪化する可能性があった。そのためヴィエイユは、ギギをこの街で治療し、新・クリミアーナ軍が撤退した後で、彼女を迎えに来ればよいと言ったのだ。その言葉に、シーワは忸怩たる思いを抱きながら、妹をこの街に残すことに決めたのだった。

だが、彼女もバカではない。側近のトーイッツを、介添えという名目でこの街に残したのだ。当然彼に、ヴィエイユ、チャン、ワーカたちの動向を監視することを命じることも忘れなかった。

こうしてシーワは、何とも満たされない感情を抱きながら帰陣していった。

心配そうにギギを見つめるトーイッツ。その背後に、人影が近づいて来た。

「何も心配することは、ありませんわ」

声の主は、ヴィエイユだった。トーイッツはオドオドとした様子で、彼女から視線を逸らせる。そんな様子をヴィエイユは満足げな表情で眺めている。

「我が軍には、世界最高の医師が数名従軍しております。こちらの方も、数日以内に回復することでしょう」

「あ……ありがとう……ございます」

「あなた様は、お優しいわね」

そう言いながらヴィエイユは、トーイッツの隣に立つ。腕と腕が触れ合いそうな距離だ。その体からは何とも言えぬよい香りが鼻をくすぐる。彼は片膝をつこうとするが、ヴィエイユは右手でそれを制した。

「本当に、この方を愛しておいでなのですね？」

「いっ……いえ……そんな……ことは……」

「他に好きな方でもおいでになるのですか？」

「そんな……」

「あなた様に限って、そんなことはありませんわよね」

そう言ってヴィエイユはホホホと笑う。トーイッツは彼女の意図がいまいち飲みこめないのか、ビクビクと両目を激しく左右に動かしている。

「あなた様に、いくつかお聞きしたいことがありますの」

「は……はい？」

「いいえ、難しいことではありませんわ。そちらの……ギギ様を一刻も早く回復させて差し上げたいのです。医師もそう申しております。ですから、いくつか質問をさせていただいても、よろしいかしら？」

「そ……そういうことであれば……お答え、致します」

「ありがとうございます。ここでは何ですから、こちらにどうぞ」

ヴィエイユは満面の笑顔を見せながら、右手を差し出してトーイッツに同行するよう促す。それを待っていたかのように、いつの間にか部屋に二人の医師が現れ、彼らと入れ替わるようにギギのベッドの傍に控えた。

「……」

ギギは何か言葉を発しようとしたが、それはできなかった。体中が熱かった。おそらく、かなりの高熱が出ているのだろうということはわかっていた。そして、あの女――ヴィエイユに関わっては危ないということを、彼女は直感的に感じていた。それをトーイッツに伝え、余計なことを言わないように……むしろ、自分の傍から離れないように……と、伝えたいと思っていたが、体は言うことを聞かなかった。

いつしか、彼女の口元には、白いガーゼのような布が被せられていた。そこからは、鼻を少しつく、薬品のような香りが付けられていた。これは一体何……。そんなことを考えながら、彼女は深い眠りに落ちていった。

第四百七十五話　りゅーおーくん、再び

俺とマトカルが帝都の屋敷に帰ったのは、翌朝のことだった。森の中で兵士たちと共に夜遅くまで騒ぎ、そのままそこで仮眠を取ったのだ。

しばらくここで過ごすことも考えたが、さすがに息子のファルコが寂しがるだろう。マトカルを連れて一旦、屋敷に帰った。それに、俺にはやらねばならないこともあった。

屋敷に入ると、ちょうど朝食の時間だった。

「あ、おとうさん、お帰り！」

そう言って子供たちが走り寄ってくる。次々と息子と娘たちを抱っこしてやる。何とも至福の時間だ。ふと隣を見ると、エリルがとてもうれしそうな顔で、マトカルにお帰りと言っている。そんな彼女を、マトカルも穏やかな表情で見つめている。

「おかえりなさい」

「ただいま、リコ」

「朝食は？」

「まだなんだ」

「では、テーブルについてくださいな。今から朝食を食べようと思

っていたところですわ」

いつもと変わらぬ、穏やかな表情でリコが出迎えてくれる。何とも癒される瞬間だ。俺は兜をメイに預け、鎧姿のまま食卓に座る。

「おとうさん、剣……」

エリルが俺に両手を差し出してきた。どうやら、ホーリーソードを仕舞ってくれるらしい。

「重いからな、気をつけろよ」

そう言って俺は彼女に剣を手渡す。だが、さすがに彼女の力では剣を持ちきれずに、よたよたとしている。俺は笑顔を浮かべながら、剣を手に取る。

「さすがにまだ無理だな。でも、ありがとう。まだ、この剣は使うから、今はいいよ」

エリルはさも残念そうな顔をしながら、自分の席に戻った。そんな娘を可愛いと思いながら俺は、朝食に手を伸ばす。

ワイワイと皆で喋りながら、いつもの賑やかな朝食が始まる。子供たちもよく食べているが、皆、お行儀がいい。まだ小さいピアトリスなども、上手にスプーンとフォークを使って食べている。リコをはじめとする妻たちの躾がとても行き届いている証拠だ。

子供たちは俺が身に着けている鎧に興味津々だ。これは、メイのお母さんと、シディー母さんが作ってくれた鎧で、とっても動きやすいんだよと説明してやる。イデアが、お父さんがいらなくなったら、

ボクが貰う～などと言っている。一方で、マトカルの周囲では、エリルとアリリアが彼女の話を聞いている。特にエリルは、戦闘の話に興味津々だ。さすがに、首を打ち落とすなどのグロい場面は話さずに、上手く話をまとめているようだ。アリリアは、黒龍の話に興味があるらしい。どんな大きさだったのか……などと目を輝かせながら質問している。

そんなことをしていると、朝食の時間は終わり、リコたちがテキパキと後片付けに入っていく。シディーが鎧を脱がせましょうかと言ってくるが、それを丁重に断る。

「アリリア、ちょっと、手伝ってくれるかな？」

俺はホーリーソードを携えて、アリリアを呼ぶ。彼女はフェアリにじゃれついていたが、俺の声を聞いて、キョトンとした表情を浮かべている。そんな彼女に微笑みを投げかけながら、手招きをする。そして同時に、ソレイユにも目配せをして、こちらに来るように促す。俺はゆっくりと裏庭に出た。

後に続いて、アリリアが元気よく飛び出してきた。その後ろで、息子のセイサムを抱っこしながらソレイユが現れ、さらに、ファルコを抱っこしながら、マトカルも現れた。

少し、仰々しくなってしまったなと思いつつ、俺は彼女らを引き連れて馬小屋に向かう。

そこには、ジェネハを筆頭とした、数十羽のハーピーが待ち構えていた。全員、ジェネハの周囲に集まっている。

『すまぬな。この者のただならぬ気配に、家族が集まってきてしも

うた』

「おお、さすがにハーピーだな。コイツの気配が分かるのか」

俺は妙に感心しながら、ジェネハの周囲を固めるハーピーたちに視線を向ける。全員の顔が緊張しているように見える。俺はクスリと笑みを浮かべながら視線を移すと、そこには昨日捕えた、褐色の少女――黒龍の姿があった。

相変わらず彼女は俺に憎しみの視線を向けている。その視線と、体に纏う雰囲気が尋常ではないために、妻たちも慄いている。母に抱かれている子供たちは泣き出してしまった。仕方なく、マトカルもソレイユも屋敷に戻ってしまった。

「この人が黒龍？　カッコイイー」

頓狂な声を上げているのは、アリリアだった。彼女は目をキラキラさせながら、興味深そうに周囲をウロウロしている。

「ねえねえ、黒龍ってどんなの？　ドラゴンになってみてよ」

顔をギリギリまで近づけてアリリアは話しかけている。そのあまりのフレンドリーぶりに、少女も少し戸惑い気味のようだ。

「アリリア、お願いがあるんだ」

「なあに、お父さん？」

「龍王を呼びだして欲しいんだ」

「えっ？　りゅーおーくん？」

「そうだ。呼びだしてくれないかな？」

「遊んでもいいの？」

「う～ん。ちょっと、話があるんだ。遊べるかどうかは、その後次第だな」

「う～ん。わかった。いいよ」

龍王という名前を聞いて、少女の表情が明らかに強張る。この黒龍のことについては、龍王が預かる話になっていた。俺としても、自分が対応するよりもこれに関しては龍王に対応させた方がいいと考えたのだ。

そんなことを考えながら俺はアリリアに視線を向ける。彼女は俺をじっと見ていた。どうやら、龍王を呼びだしていいか確認しているようだ。俺はゆっくりと頷く。

「森の～守り神様は、いつも～私たちを、見守ってくれる～♪」

屈託のない歌声が裏庭に響き渡る。何と言うことはない、ただの子供の歌声に聞こえるが、黒龍の少女の様子が明らかにおかしい。

「やめて……やめて……やめて……」

目をギュッと閉じて、まるで恐怖におびえるかのような様子だ。俺の張った結界で身動きが取れないためか、とても苦しそうだ。

「ラララララ～ラーラララララ～ランランラーラララー♪」

少女には目もくれず、アリリアは楽しそうに歌い続けている。

「あれ？　おかしいな？」

突然、アリリアが歌うのをやめて首をかしげてしまった。

「マミー。どこか間違ってた？　りゅーおーくんが出てきてくれないよー」

困った顔で母屋の方向を見るアリリア。そこには優しい笑みを浮かべたソレイユが立っていた。

「おかしいわね。全然間違っていないわよ。とても上手に歌えているけれど……」

「どうして？　どうしてだろう？」

「どうしてだろうね」

二人は首をかしげている。まあ、来ないなら来ないでいい。さて、この黒龍の少女をどうするか……そんなことを考えていると、突然地面が揺れた。

……結構大きな揺れだ。震度４くらいはあるんじゃないだろうか。屋敷の棚から物が落ちてこないかが心配だ。

そのとき、屋敷に張っている結界にヒビが入っていくのを感じた。思わず俺は舌打ちをする。

パキィィィィーン。

何かが折れるような、高い金属音が響き渡る。

「ぎゃあ！」

同時に少女から悲鳴が上がる。見ると口を開けてぐったりとしている。どうやら、気を失ってしまったようだ。

「りゅーおーくん！」

アリリアの声が上がる。見るとそこには膝をついた状態で、肩で苦しそうに息をする龍王の姿があった。

「……貴様、どういうつもりだ」

鋭い眼光で俺を睨みつけてくる龍王。何て忌々しいヤツだ。

「どういうつもりだと聞いているのだ！」

「お言葉の意味がわかりかねますが？」

「貴様、我を……我のみに反応する結界を張っていただろう！　我を呼んでおいたにもかかわらず、結界で我を拒否するとは、どういうつもりだ！　それにその鎧、剣……我を倒そうという腹か！　いいだろう、来るがいい！　相手をしてやる！」

「何を訳のわからんこと言っていやがるんだ。邪念のない者は結界を通れる仕様だと言っているだろう。決してお前だけを対象に結界

を張っていたのではない。その結界は解除して……おいたと、思う。たぶん、おそらく、きっと。今確認したが、解除されている。ああ、解除されているとも」

「貴様、どれだけ我を侮辱すれば気が……許さん！」

龍王の両手が光り出した。マジで攻撃してくるつもりか……？　俺は思わずホーリーソードの柄に手をかける。

「りゅーおーくん、乱暴はダメ！」

アリリアの厳しい声が飛ぶ。その瞬間、龍王の両手の光が消え、彼は立ち上がり、腕組みをして大きく頷いた。

「そうだ。乱暴は、いかん」

「えらいねー。じゃあ、遊ぼ？」

「いいだろう」

「じゃあまた、おいしゃさんごっこしよう？」

「よし、やろう」

……ちょっと待て。おいしゃさんごっこ？　しかも、また、って言った？　龍王、お前、まさか、ウチの娘を？　……許さん！

俺はゆっくりと剣を抜きはらった。

第四百七十六話　神龍様、再び

「何だ貴様！　剣を我に向けるとは……。それにその殺気！　いいだろう、かかってくるがいい！」

龍王が一歩前に出て俺と対峙する。コイツはブッ殺さねばならないが、その前に、確認しなければいけないことがある。

「お前、ウチの娘に何をした？」

「何を言っているのだ？」

「おいしゃさんごっこ……。お前、ウチの娘にどこまでしたんだ？　ことと次第によっちゃ、ひと思いに倒してやらんこともない。正直に話せ」

「何もしていない」

「何ぃ？」

「はい、お薬ですよ～」

俺と龍王が対峙している中に、アリリアが割り込んでくる。彼女は手に草を持っていたが、それを龍王に差し出す。彼はそれを掴み取ると、ポイと口の中に入れた。

「えらいですね～。それは、お腹の痛みを取るお薬ですよ～。じゃあ、今度は元気になるお薬を上げましょうね～」

そう言ってアリリアは、パタパタと庭を走り回る。

「……おいしゃさんごっこって、それ？」

俺の言葉に、龍王はゆっくりと頷く。

「今食ったのって、雑草だよな？」

「そうだ」

「美味いか？」

「美味いわけはない」

「……」

思わず絶句してしまう。まさか、龍王はひたすら雑草を食べさせられているのか？

「はぁ～い、お薬ですよ～」

アリリアが走り寄ってくる。手には小さい泥団子が数個乗っている。龍王はそれを受け取ると、表情を一切変えることなく、口の中に放り込んだ。

「苦いのばっかりじゃお薬が嫌いになるから、たまには甘いお薬も出しましょうねー」

「……」

アリリアの言葉に、龍王はコクコクと頷いている。俺はゆっくりとホーリーソードを鞘に仕舞うと、丁寧に頭を下げた。

「うちの娘が……すまんかった」

「……」

チラリと頭を上げてみると、龍王はアリリアから渡されたタンポポを無表情のまま食べていた。

◆　◆　◆

「うむ、確かに黒龍だ」

アリリアとのお医者さんごっこが一息ついた頃、俺は龍王を馬小屋に案内した。既に少女の意識は回復していて、彼女は龍王を見るとギョッとした表情を浮かべた。

「貴様はツネの妹だな？　懐かしい顔だ」

「何だ、知り合いか？」

「ああ。昔、この女の兄たちと戦ったことがある」

「マジで？」

「そのときは兄たちの後ろに隠れていたのだが、まさかこんなことを仕出かすとはな」

そう言って龍王はクスクスと笑う。

「貴様、名前は何と言う？」

「……」

「我の質問に答えぬのか？」

「そなたたち兄弟とは、今一度戦わねばならぬようだな」

「殺せ」

「……」

「殺すがいい」

「いい覚悟だ」

龍王の右手が光り出した。彼は俺に視線を向ける。どうやら、張っている結界を解除しろと言っているようだ。

「本当に殺すのか？」

「この者は我が龍族の掟に叛いた。一度ならずも二度までもだ。そんな者を生かしておくわけにはいかぬ」

「……」

「りゅーおーくん、ダメよ！」

突然アリリアの声が聞こえる。見ると、アリリアが腕を組みながら何故か、ふんぞり返っていた。

「アリリア、危ないから家に入っていなさい」

「そのドラゴンはとってもいい子だから、乱暴しちゃダメ！」

そう言ってアリリアはパタパタと俺たちの許に走ってきたかと思うと、黒龍の少女の前に立ちはだかり、両手を大きく開いた。

「ダメ。このドラゴンを傷つけちゃダメ！」

「アリリア……」

彼女の瞳には、強い覚悟が見て取れた。それを目の前にして俺は、そこをどきなさいとは言えなかった。

「りゅーおーくん、わかった？」

「よし、いいだろう」

えっ、いいの？　と思わず言ってしまいそうになるほどに、アッサリと龍王は引き下がった。だが、どうするこの黒龍？　かなりのスキル持ちだし、このまま放置すると言うのも違う気がする。絶対俺たちには手を出さないと約束させて、解放する……か？

そんなことを考えていると、龍王が突然、とんでもないことを言い出した。

「神龍様におすがりしてみよう。アリリア、神龍様を呼びだしても

らえぬか？」

「うん、いいよ～。マミーに頼んでみる」

そう言って彼女は再び、パタパタと屋敷に向かって走っていった。

俺は思わず大きなため息をつく。

「龍王」

「何だ？」

「ウチの娘を呼び捨てにするの、やめてくれない？　姫様……せめて、アリリアさんと呼んでくれないかな？」

「何を言っておるのだ、貴様は……」

龍王が呆れているような、怒っているような、何とも言えない表情で俺を眺めている。そんな彼を俺は、ちょっと怒りを込めた目で睨み続けた。

しばらくすると、アリリアの手を引きながらソレイユがやって来た。その後ろからリコとシディーがやって来た。マトカルは……ペーリスたちと子守をしているらしい。

怪訝な表情で黒龍を見るリコ。一方でシディーは何やら頷きながら黒龍を眺めている。何となく、だが、彼女の直感で、このドラゴンの優秀さを感じ取ったらしい。そんな中、ソレイユは神龍様を呼びだすべく、詠唱を始めた。

「……マミーの歌、すごい」

思わずアリリアが感嘆の声を上げる。俺にはただ、ブツブツと呪文を唱えているようにしか聞こえないのだが、彼女には独特の音感で、何やら感じるものがあるらしい。ふと龍王に視線を向けると、彼は目を閉じて、気持ちよさそうな表情を浮かべながらソレイユの詠唱に聞き入っていた。キメぇという言葉を、必死で飲みこむ。

「我の前に出でよ！」

ソレイユの声と共に、静寂が訪れる。そのとき、龍王がゆっくりと目を開けたかと思うと、片膝をついて、頭を下げた。どうやら、神龍様が現れるらしい。

「お～う、久しぶりなのらー」

甲高い声が聞こえたかと思うと、神龍様が俺の隣に立っていた。全く気配探知にもかからずに、ここまで俺に近づくのだ。そのスキルたるや、完全に俺を凌駕している。

「神龍くーん！」

アリリアが大喜びで神龍様に駆け寄っていって、ギュッと抱きしめる。神龍様もうれしそうだ。

「あのね、神龍君。りゅーおーくんが、お願いがあるんだって。聞いてくれる？」

「おーう、なんらー？　言うてみるのらー」

アリリアに抱きしめられている……というより、完全にガッチリと

腰を決められているように見えるが、神龍様はご機嫌な様子で、龍王に話しかけている。

「恐れながら、この黒龍のスキルを封じていただきたく存じます」

「う～ん、黒龍？」

神龍様は黒龍の少女に視線を向ける。彼女は顔を歪ませながら、神龍様を見つめている。

「ほほう、我がわかるのか？　よいセンスをしているのらー。……うーん？　お主に興味があったようじゃな？」

神龍様はスッと俺に視線を向ける。

「龍王と互角に戦うことのできる男に、興味を持ったのらな。そして、アガルタという都にも興味を持ったのらー。うんうん。元々は頭の良い、純粋なドラゴンなのらー。……兄にそそのかされたのらな？　可哀想なドラゴンなのらー。だが、犯した罪は償わねばならぬのらー。よいよい。しばらくはこのドラゴンのスキルを封じることとするのらー」

神龍様は人差し指を天に向ける。すると、黒龍の少女の体が真っ白に光った。

「そなたの純粋さに免じて、最低限のスキルだけは残してやるのらー。しばらくは、罪を償うのらー」

「神龍様、罪を償うと仰りましたが、どのようにして？」

「うーん。そうらな……」

「家にいればいいよ！　お家のお手伝いをすればいいのよ」

アリリアが神龍様に話しかける。その声に、彼も機嫌の良さそうな笑みを浮かべる。

「そなたに、任せるのらー」

「わぁい！」

思わず俺はリコに視線を向ける。彼女は顎に手をやった状態で、黒龍を眺めている。そして、何かを決めたように、大きく頷いた。

「取りあえず、こちらの方の処遇については、考えますわ。それより、せっかくお出ましいただいたのです。是非、食事でも召し上がっていってくださいませ、神龍様」

「おーう。久しぶりに、甘いものを食べたいのらー」

「承知しました」

リコは恭しく一礼をする。そして、ゆっくりと黒龍の少女の許に向かう。

「聞いた通りですわ。あなたの処遇についてはこれから考えますが……。まずは、食事でも召し上がりなさいな。今朝から何も食べていないのではなくて？」

黒龍はしばらくリコを眺めていたが、やがて、視線をゆっくりと外

した。その様子を見てリコは、俺に目配せをした。どうやら、この少女を連れてくるようにと言っているようだ。

神龍様と龍王を従えて屋敷に向かうリコの背中が、とても神々しいものに見えた。

第四百七十七話　スイーツパーティー

とある孤島の森の中で、一匹の黒龍がただ一点を見据えていた。これは、はぐれ黒龍の一人であるロイスだ。彼の視線の先には、帝都のリノスの屋敷があった。

「……」

一瞬、彼の眼がカッと赤く光る。そして、首をぐるりと廻し、再び同じ方向を睨みつける。

……龍王とあの精霊。まさか、あんなものを従えていたとは、完全にヤツの戦力の見積もりを誤っていた。さて、どうするかな。

ロイスはゆっくりと息を吐きながら、深く思考する。

……こういうことは、他の者に手伝わせるのが一番だ。

そのとき、彼の頭の中に、閃くものがあった。彼はニヤリと下卑た笑みを浮かべたかと思うと、背中の翼を大きく動かして、上空に浮かび上がった。そして、ゆっくりと南の方向に向かって飛び去っていった。

一方、リノスの屋敷では、賑やかなお菓子パーティーが始まっていた。

リコ、シディー、ペーリスたちが中心となって、神龍様に食べていただくためのスイーツを大量に作っていたのだ。また、子供たちは

久しぶりに現れた神龍様を見て大喜びで、皆で仲良く遊んでいるのだった。

龍王はダイニングの椅子に腰かけながら、神龍の様子を驚きの表情で眺めている。それはそうだろう。龍族の守り神にして、高いスキルを持つ彼が、ほっぺをつねられ、ペチペチと顔を叩かれるなどしているのだ。彼からしてみるとそれはあり得ない光景であったが、とはいえ、神龍様自身が楽しそうにしているので、敢えて何かを言う必要もないと判断していたのだった。

そんな彼の隣にはアリリアが控えており、折に触れて彼に色んなものを与えようとしていた。彼は勧められるままにそれを口に入れる。特に美味しいものではなかったが、それでも、彼は一言の文句も言うことなく、彼女が持って来るものを口に運ぶ。

そんな様子を見ながらリノスは、ワーロフ帝国に残してきたクノゲン以下、一千のアガルタ軍の動きを気にしていた。特に大きな動きはない。何かあれば、そこに残してきたフェアリードラゴンがすぐさま彼に注進してくる手はずになっていて、今のところそうした動きは見られない。だが、彼の心の中には、ヴィエイユとワーロフ帝国軍のシーワのことが気がかりだった。

そんな空気を察したのか、マトカルが一旦様子を見に行くと言って、転移結界のある部屋に向かって行った。

「リノス様、鎧を脱がせましょうか？」

マトカルが出かけたのを見計らっていたかのように、シディーが小声で話しかけてくる。確かに、このダイニングで鎧を着用して帯剣している姿は、どう見ても異質だ。彼はゆっくり頷くと、シディー

を伴って自室に戻っていった。

「……ふう。終わりました」

手早くリノスから鎧を脱がせたシディーは、最後に彼から兜を受け取り、それを鎧台に持って行く。リノスは首を左右に動かし、腕をグルグル回しながら、首と肩のコリをほぐす。

「リノス様、おかえりなさい……」

彼の胸にシディーがスッと顔をうずめる。彼の反射的に、両手をシディーの背中に廻す。

「昨日は風呂に入っていなかったから、汗臭いだろう」

「いいえ。リノス様のことです。今朝、屋敷に戻る前に顔と首……肌が出ている部分を濡れた布で拭かれましたね？　ですから……そんなに汗臭くはないです」

「シディーは何でもお見通しだな」

「エヘヘ」

「ところで、あの黒龍の少女、どう思う？」

「う～ん」

彼女は人差し指を顎の下に持っていって、小首をかしげる。

「イヤな予感は拭えません。いえ、あの少女が何かを起こす……そ

んな予感はしませんが、あの子がきっかけで、何かイヤなことが起こる気がします」

「なるほど。どうすればいいかな？」

「う～ん」

シディーは目をギュッと閉じて悩みだしてしまった。こうなると長いのだ。

「まあ、月並みだが、結界を強化して邪念のある者を排除することにしようか。また、何かいい考えが思い浮かんだら、是非教えてくれ」

「わかりました」

「……ぜんざいが、できましたわ。落ち着いたら、降りてらっしゃいな」

部屋の外でリコの声がする。リノスはシディーと顔を見合わせる。

「取りあえず、ダイニングに、行こうか」

「そ……そうですね」

何となく気恥ずかしい雰囲気から逃れるように、二人は寝室を出た。

ダイニングに降りると、お菓子パーティーが始まっていた。神龍様がものすごい勢いでケーキを食べている。1ホールくらいの大きさがあるのだが、それを二口くらいで食べている。同時に、丼鉢に盛

られたぜんざいを、まるで水を飲むような勢いで食べている。その食いっぷりは、見ているだけで爽快感さえ感じる。

その隣では龍王が、アリリアに勧められるままにお菓子を食べている。コクコクと頷きながら食べているところを見ると、美味しく食べているのだろう。

子供たちも、ソレイユやペーリスたちと共に大喜びでお菓子を食べている。テーブルの上ではフェアリがパタパタと飛び回り、何とも騒々しい限りだ。そんな中、ポツンと黒龍の少女が、その様子を眺めている。リノスは彼女の隣にゆっくりと腰を掛ける。

「よかったら食え。美味いぞ？」

「……」

彼はテーブルの上に載っているカステラに手を伸ばして、彼女に差し出す。シャリオはしばらくそれを眺めていたが、やがてゆっくりと手に取り、ポイと口の中に放り込んだ。

「……ううう！？」

「どうした？」

「美味しい！」

「だろ？　もっと食え」

リノスはそう言って、腰にぶら下げている無限収納を手に取り、そこからカステラを出していく。山と積まれたカステラ……。それを

少女は無我夢中で食べていく。と同時に、神龍様もカステラに手を伸ばす。数十本はあったカステラが、瞬く間になくなってしまった。

リノスはその様子を満足げに眺めながら、次々と無限収納から食べ物を出していく。ぜんざい、あんぱん、ケーキ、クッキー……。それらが出されるたびに子供たちから歓声が上がり、と同時に、神龍様とシャリオがそれらを片っ端から食べていく。

「美味いのらー」

「うん、うん、うん」

幸せそうに頷きながらスイーツを頬張るシャリオ。その姿は一見すると、ただのあどけない少女そのものだった。

「……リノス」

「何だい、リコ？」

突然リコがリノスに耳打ちをする。彼は訝し気にリコに視線を移す。

「この黒龍、とても賢いですわ」

「え？」

「ご覧になって下さいませ。誰にも教えてもらわずに、フォークを使ってケーキを食べていますわ」

確かに、少女はいつの間にか右手に皿を、左手でフォークを持ち、器用にフォークを使ってケーキを食べていた。

「エリルやアリリアの様子を見て覚えたのですわ。最初は手づかみで食べていましたが……。手をペロペロと舐めていたのが、手が汚れるのを嫌ったのですわね。いつしかああやって食べるようになりましたわ。これは……きちんと教育をすれば、相当の人物になりますわ」

リコの話に、シディーも深く頷いている。

「メイとシディーに預けてはどうでしょうか。きっと、二人ならば、彼女に良い刺激を与えられると思いますわ」

「わかった。リコがそう言うのなら」

俺の言葉に、リコは深く頷いた。そして、後ろに控えていたシディーに目配せをすると、さりげなく少女の側に近づき、何やらボソボソと話を始めた。シャリオは最初こそ、鳩が豆鉄砲を食ったような表情を浮かべていたが、やがて、彼女らの話に真剣に耳を傾けた。

「……わかった」

シャリオが大きく頷く。その彼女の手を、リコとメイがギュッと握った。

シャリオが正式に屋敷の住人になることが発表されたのは、その夜のことだった。

だが、俺は知らなかった。このとき、ヴィエイユが驚きの戦略を、着々と進めていたことを……。

第四百七十八話　罠……？

……一体、何がどうなったら、こんなことになるんだ？

俺は今、左手の指でこめかみを抑えながら、頭の痛みを取ろうとしている。だが、その痛みは増すばかりで、収まる気配は全くない。

目の前には、ワーロフ帝国軍のチャンとワーカの司令官が片膝をついて畏まっている。その後ろには、捕虜となっているバーリアル王国軍の将校たちが同じようにして控えている。全員の眼が、真剣そのものだ。あまりの雰囲気に俺は、圧倒されてしまっていた。

隣に控えるマトカルも、クノゲン、ルファナ夫婦も絶句したままだ。ヴィエイユは……いない。そう言えばついさっき、帰国すると言ってこの部屋を出て行ったのだった。

……せっかく、無事にコトが済むと思っていたのに、どうしてここまできて、こんな展開になるかね？

俺は思わず天を仰ぐ。一体、どうすればいいのだ？

◆　◆　◆

これまではとても順調な日々だった。ドルガを退去して、森の中で一夜を過ごした俺たちは、早速アガルタに向けて撤退しようと準備を進めていた。そのとき、ワーロフ帝国軍の本陣から使者がやって来て、ドルガに戻ってくれと懇願されたのだ。出て行けと言ったり、戻れと言ったりと、一体どっちなんだと言いたかったが、使者の男

が頭を地面に擦り付けるようにして懇願したことから、仕方なくドルガに戻ることにしたのだ。

しばらくすると、シーワを伴ったゲシカナ将軍が現れてドルガ奪還の礼を述べ、シーワの無礼な振舞いを詫びた。その上、俺とヴィエイユを帝都に招待して、皇帝直々に礼を述べ、歓待したいという案まで出してきた。あまりの見事な掌返しに、さすがに開いた口がふさがらなかった。

後で聞くと、ヴィエイユが俺の知らないところで、やんわりと脅しをかけたらしい。

言うまでもなく、ヤツが率いる教団は、世界最大の信徒数を誇る。ということは、彼女の一言で、信徒たちを暗殺者に仕立てることも可能なのだ。２４時間３６５日暗殺者に怯えねばならない生活というのは……まず、耐えられる者などいないだろう。ヤツはシーワにそれとなく、自分はそのくらいのことが出来ちゃうのよと仄めかしたそうだ。

そしてさらに、信者を使ってワーロフ帝国、とりわけ、ゲシカナとシーワのネガティブキャンペーンを張ることもできると伝えたのだそうだ。全世界に、自分たちのある事、ない事、ない事を吹聴されてはたまらない。その上、ワーロフ帝国の威信自体も地に落ちるのだ。どんなバカでも震え上がるというものだ。

そうしたこともあって、ゲシカナ将軍とシーワは、取るものも取りあえず俺たちの許にやって来た。皇帝直々の……というのは、この短期間にさすがに皇帝に直接許可を取るのは難しく、ハッタリであることは明白だったが、そのくらいのことが自分にもできるのだという、ゲシカナとシーワの必死の背伸びであるように見えた。

俺はその必要はないと言ってみたものの、二人は帝都から宰相である、サンマルコ・ローゼンハイムが到着するまで、ドルガに留まって欲しいと言って聞かなかった。聞けば二週間もかかるのだという。彼らには俺やヴィエイユが余程暇に見えたらしい。

礼は、ヒーデータ帝国の陛下に言ってくれと、彼らの要請を突っぱねた。そして、一刻も早く帰国したいのだと主張したのだ。

そんな中、兵士たちに休息をとヴィエイユが間に入る形で、当初の予定通り五日間はこのドルガに滞在することになった。その後もゲシカナとシーワは色々と提案してきたが、結局、二人の意見は全く容れられず、ヴィエイユの要求通りにコトが進むことになった。そのときは、別に俺たちアガルタ軍が先に撤兵しても、何の問題もないだろうにと思っていたが、その真意を今になって知ることになった。

ちょうど五日後、ヴィエイユは先に撤兵すると言って部屋を出て行った。ゲシカナとシーワが間もなくドルガを受け取りに来るというのに、どうして今になって逃げるようにして撤退するのだという俺の嫌味に対して、彼女は、自分がいたら、二人の不快を増長させるだけだと言って笑った。これ以上、ワーロフ側を刺激しても何の意味もないと言って、ゲシカナとシーワと顔を合わせるのを拒んだのだった。

だが、それは彼女の策略だった。

衝撃の報告がもたらされたのは、それからしばらくしてからのことだった。何と、ヒヤマの兵士たちが反旗を翻したというのだ。

当初の予定では、ゲシカナとシーワが率いるワーロフ帝国軍がヒヤマを接収し、捕虜たちをしかるべき場所に移す手はずになっていた。だが、帝国軍がヒヤマに到着すると、城門が閉じられ、彼らを一歩たりとも中に入れようとはしなかった。それどころか、弓矢を放って抵抗してくる有様で、さすがにこれには帝国軍は大いに戸惑ったのだった。

砦の中には当然、帝国軍もいる。その帝国軍ですらも、ゲシカナ将軍たちに弓矢を向ける有様だった。

彼らはヒヤマの接収をあきらめて、ドルガに馬首を向けた。俺にその報告が入ってきたのは、ちょうどそんなときだった。

チャンとワーカ、そして、バーリアル王国軍の指揮官たちが揃って俺たちの前に現れて、畏まった。一体何事かと思っていると、チャンが衝撃の一言を放つ。

「ヒヤマの城門を閉じさせました。同時に、このドルガの城門も閉じさせました。ワーロフ帝国軍の接収を拒否したく思います」

「え？　どういうことだ？」

「誠に恐れ入りやすが、アガルタ王様に、たってのお願いがございやす」

「何だい？」

「あっしらを……このドルガとヒヤマとともに、アガルタ王様の旗下に加えていただけやせんか？」

「何？」

「ここワーロフにおりましては、あっしもチャン司令官も、首を斬られるのを待つだけでさぁ。それに……ここにいるバーリアル王国軍の諸将も、ロクな扱いは受けねぇと考えやす。そのために……」

「ちょっと待て。お前たちが俺の旗下に入る？　おかしくはないか？　あくまで俺たちはワーロフの援軍に来たのだ」

「仰ることはごもっともでやす。しかしながら……」

「恐れながら、我らバーリアル王国軍は、ワーロフ帝国に降伏したわけではありません。アガルタ軍に降伏したのです。あなた方の戦略の見事さ、そして、節度ある軍人としての振る舞い……それらに敬意を表して我らは、あなた方に降ったのです」

「そんなことを言われてもだな……。お前ら、ヴィエイユに何か吹き込まれたな？」

「……」

俺の一言に、全員が顔を見合わせている。面倒くさいので鑑定スキルを発動させる。

……見事の一言に尽きた。彼女はワーロフ帝国の司令官の一人であるトーイッツから、ヒヤマとドルガを接収した後の戦略を喋らせていたのだ。それによると、チャンとワーカの二人については、軍令違反の罪を着せて更迭し、さらには命を奪おうと考えていたのだ。そして、捕虜たちについては、バーリアル王国との交渉の人質とする予定だった。だが、おそらく王国は交渉に応じないだろう。そう

なった場合は、捕虜たちをヒヤマとドルガを修復させるための要員として活用しようと考えていたのだ。言ってみれば強制労働で、彼らが死ぬまでコキ使う気でいたのだ。

そして、ドルガとヒヤマの修復がなった暁には、あわよくばバーリアル王国に攻め込もうという算段だった。無茶苦茶と言えば無茶苦茶だが、そんな無茶を平気でやろうとしていたこの国の軍幹部たちのアホぶりが、何とも恐ろしかった。

……それにしてもヴィエイユ。お前、俺を困らせて一体何を考えているんだ？　お前の狙いは、一体何だ？？

第四百七十九話　私、待つわ

「ハッハッハ、前代未聞だの、それは」

機嫌の良さそうな笑みを浮かべているのは、ヒーデータ帝国の陛下だ。俺は取るものも取りあえず、宮城（きゅうじょう）に転移していた。サダキチに陛下の許に書簡を持たせたのだが、彼はすぐに返書を持って帰ってきた。そこには、すぐに会うので自室まで転移して来いと書かれてあった。……この陛下（ひと）はヒマなのだろうか？　と一瞬思ったが、返信が早い仕事のできる男なのだと思うことにする。

陛下の私室に転移すると、突然の訪問だったにもかかわらず、陛下のその隣には宰相閣下が控え、さらにはヴァイラス公爵、そして、その妻であるダイアナが控えていた。書簡のやり取りを始めてから三十分も経っていないのにこの速さ。この連携の良さは一体何なのだろうか。

そんなことを考える俺を尻目に、陛下は顎を手で撫でながら宰相閣下に視線を向ける。

「さて、どうするかの？」

「由々しき事態と考えます。一歩間違えば、我が帝国とワーロフ帝国は戦争になります」

「ライッセン以下、ワーロフにいる我が国の軍勢は？」

「はい。三日前に撤退を始めると連絡がございました。おそらく、

ワーロフからは出ているものと推察します」

「まずは、我が軍の位置を確かめよ」

「ハハッ」

「陛下、恐れながら……」

「控えないか、ダイアナ」

口を出そうとしたダイアナに、ヴァイラス殿下が厳しい表情で窘めている。だが、彼女は一切表情を変えず、一呼吸おいて、ゆっくりと口を開いた。

「ワーロフ帝国の皇帝陛下に、親書を送られてはいかがでしょうか」

「親書、か」

陛下の言葉に、ダイアナはコクリと頷き、一瞬だけ俺に視線を向けた。

「アガルタ王様に無礼を働いたゲシカナとシーワの態度に怒って、司令官たちが反旗を翻していると聞いた。大変に心配している……と」

「なるほど。聞いた話ということで処理するか」

「ご明察に存じます。何か手助けできることがあれば言ってもらいたい……といった内容でよろしいかと存じます」

「フフフ……。そうやって、遠回しに圧力をかける……か。相変わらず、面白いことを考えるの」

ダイアナは、一切表情を変えずに、さらに言葉を続ける。

「話を承りますと、あの二人はアガルタ王様に対して、数々の非礼を働いております。それに対して、ワーロフ帝国は何の謝罪を行ってはおりません。それどころか、ドルガ、ヒヤマを陥落した恩賞についても、何の提案もございません。何より、チャンとワーカの二人の現役の司令官が、ゲシカナとシーワを見限って、アガルタ王様の許にはせ参じたいと申しております。二人の総司令官としての資質のなさが、すでに露呈されております。ワーロフ帝国にとっても、軍を再編する、ちょうどよい機会になるかと存じます」

陛下はチラリと宰相閣下に視線を向ける。彼はしばらく考える素振りをしていたが、やがてゆっくりと頷いた。

「ワーロフの宰相、サンマルコ・ローゼンハイムに書簡を送りましょう」

「え？」

思わず声が出てしまった。驚く俺に、宰相閣下はゆっくりと口を開く。

「あくまで内々の話として処理するのだ。おそらく宰相の許には、援軍に赴いた国々から直接的、間接的に苦情が寄せられているだろう。他国の援軍に壊滅的な被害を与えておいて、自国の兵力は温存しているのだからな。だが、ワーロフから見れば、自国の軍勢を失わずにドルガとヒヤマを奪還せしめた二人を重い罪に罰することは

できぬ。しかし、アガルタ王とヴィエイユ教皇に直接無礼を働いたと言うのであれば話は別だ。ワーロフ内では、ゲシカナ将軍とシーワ副総司令官の責任を問う声があるはずだ。彼らを追い落とすいい口実になろう」

「そんなにうまくいきますか……」

「まあ、足を引っ張ろうとする連中は多くいる、ということだ」

宰相閣下は厳しい表情を浮かべたまま、口を真一文字に結んでいる。その様子は、これ以上彼に対して話しかけるのを躊躇わせるのに十分だった。

「ゲシカナとシーワは、すぐにでも解任するべきなのです」

ダイアナが毅然とした様子で口を開く。

「そもそも、部下から信頼されていない者が総司令官の任に就くなどは、軍としての体制を成していませんわ。二人は軍事として必須のスキルである、人格と経験が欠落しております。だから、無意味な突撃作戦などを敢行するのです。やはり、軍の総司令官には、それにふさわしい人格と実績のある者が就くべきですわ」

「それは、余も頭が痛いの」

陛下が苦笑いを浮かべながら、頭を掻いている。そんなダイアナにヴァイラス公爵が近づいて、耳元で何かを囁いた。その雰囲気から察するに、かなり厳しい口調で小言を言っているようだ。

「……大変、ご無礼を致しました」

ダイアナはスッと俺たちに頭を下げる。その様子を陛下はニコニコと笑みを浮かべながら眺めている。

「よいよい。後のことは余に任せてくれ。決して悪いようにはせぬ」

ダイアナは陛下に一礼をすると、踵を返して部屋を出て行った。ヴァイラス公爵も、彼女を追いかけていく。

「それにしても、すごいお方ですね。ワーロフ帝国はあの方のご実家でしょうに……。それをまるで対岸の火事のように言われるとは……」

「最早、自分はヒーデータの人間であると我々に言いたいのかもしれぬの」

「はあ……」

「ああ見えてダイアナは、実に気の利く、優しい女性での。余もヴァイラスに良い嫁が来たと喜んでおるのだ」

「まあ、お二人の仲はよいようですし、公爵様が上手くダイアナ様を抑えているようですから、心配はしていませんが……」

「表向きはの」

「え？　どういうことです？」

「夜は、ダイアナに見事に抑え込まれておるようだぞ？」

「……」

思わず口を開けて固まる俺を見て、陛下はカラカラと大声で笑い始めた。

◆◆◆

同じ頃、ゲシカナとシーワが率いるワーロフ帝国軍は、ドルガの前で立ち往生していた。何しろ、城門は固く閉ざされており、城壁からは弓矢を構えた兵士たちが、いつでも攻撃を仕掛けられる態勢を整えていた。ドルガの堅牢さは、先の攻撃で骨身にしみていた。さすがのゲシカナとシーワをして、自らの旗下の兵士たちにドルガに突撃せよという命令を下すことは躊躇われた。

「どうするのだ、シーワ！」

苛立ちを募らせながらゲシカナ将軍が声を荒げている。そんな彼にシーワは、冷たい視線を投げかけていたが、やがて周囲の幕僚たちに視線を向けた。

「元の陣地に引き上げましょう」

「引き上げてどうするのだ！」

「まずは、静観しましょう」

「何？」

怒りを込めた視線を向けて来るゲシカナ将軍を一瞥したシーワは、周囲の幕僚を促して、馬首を元の陣地の方向に向けた。

彼女には一つの勝算があった。ドルガの街には、妹のギギとトーイッツが残っているはずだ。トーイッツの知らせでは、ギギの体調はかなり回復してきているのだという。この二人ならば、おそらくドルガにいるであろうチャンやワーカを動かしながら、上手く事を治めるだろう。きっと、近いうちに、ドルガから何らかの知らせがあるはずだ。これからのことは、それを受けてから考えればいい。彼女の脳裏には、ドルガとヒヤマの奪還についての青写真が描かれつつあった。

「ちょっと」

「ハッ」

馬を走らせながらシーワは、近くに控えていた若い司令官に声をかける。

「ドルガに矢文を放ちなさい」

「矢文？」

「今、神妙にドルガを明け渡せば、命は助けると。そして……いや、待って」

……もしかしたら、ギギがすでに動いているかもしれない。そうなると、あの子の邪魔をしては、可哀想だ。少し待ってみるか。……三日、三日待とう。三日経って何も連絡がなかったら、そのときは別の方策を考えよう。ドルガさえ奪還できれば、ヒヤマなどは、落ちたも同然だわ。

彼女は馬を走らせながら、手をヒラヒラさせて、何でもないという素振りをして、傍に控えていた幕僚を下がらせた。

この、三日の猶予が、シーワたちの命取りになった。

第四百八十話　驚きの展開

気だるそうな表情を浮かべながら、シーワは息を吐き出した。チラリと見た視線の先には、ゲシカナ将軍がイビキをかいて眠っている。

結局、妹のギギからは何の連絡もなかった。ドルガもヒヤマも、あれからは全くと言っていいほど、何の動きも見られなかった。

この三日間、兵士たちには休憩を取らせながら、いつでも出撃できるように準備をさせていたものの、シーワの腹の中では、少なくても一両日中には、ギギやトーイッツから何らかの報告があるものと確信していた。それが、見事に裏切られる形となった。

一方で、ゲシカナ将軍は焦燥を募らせていた。彼は、おそらくギギやトーイッツからの連絡はないだろうと断じた。むしろ、ドルガとヒヤマに対して一気に攻撃を加えるべきだと主張した。それは彼の軍人としての勘だったが、それに対して根拠を求めるシーワの質問には、答えることはできなかった。

結局、将軍の提案を実行したうえでのデメリットを理路整然と語るシーワに反論することができず、ワーロフ帝国軍はこの地に留まり続けることになったのだった。

ゲシカナ将軍は、心の底から湧き上がる、何とも言えないイヤな不安感に苛まれ続けた。その不安を解消するために、ゲシカナ将軍はシーワの体にそのはけ口を求めた。

彼は性の欲望が強い男だった。だが、若者のような体力はなく、す

でに男性としての能力は衰えていた。そのために彼は、執拗にシーワの体を弄んだのだった。

これには、さすがのシーワも音を上げそうになった。何しろ、朝から晩まで、下手をすると、眠っている最中に起こされて求められるのだ。これまでに経験したことのない、何の喜びも感じられない行為は、彼女にとっては苦痛以外の何物でもなかった。

シーワは、絶対の自信を持つ理路整然とした説明能力を駆使して、将軍の説得を試みたが、彼の欲望を抑えることはできなかった。むしろそれは、彼をさらに苛立たせることにしかならず、その度に彼女は力づくで押し倒されることになった。

この二人の関係性も、すでに破綻しようとしていた。

「皆を召集してください」

疲れた体を引きずりながら、シーワは兵士に命令を下す。男はハッと畏まり、足早にその場を後にしていった。元いた部屋には、裸のままベッドで眠りこむゲシカナ将軍がいるはずだが、彼女は再びその部屋には戻らなかった。

しばらくして、幕僚たちが集められ、軍議が始まる。そのとき、突然伝令が飛び込んできた。

「ハッ、申し上げます！　帝都より、リーカン伯爵さまが……勅使としてお見えになりました」

「勅使？」

怪訝な表情を浮かべるシーワ。伝令はそんな彼女に一礼をすると、素早くその場を立ち去った。それと入れ替わるように、端正な顔立ちの男が現れた。彼は、シーワたち幕僚を一瞥すると、挨拶もなしに、ゲシカナ将軍を呼ぶようにと命令した。そして、全員がそろったことを確認すると、懐から一枚の紙を取り出して、大声で読みだした。

「全軍、すぐさま帝都に帰還せよ。ワーロフ帝国皇帝、ワーロフ・ガーワ・ミーシン」

キョトンとするゲシカナ将軍以下、幕僚たち。そんな彼らを満足げな表情で眺めていたリーカン伯爵は、早口でまくし立てる。

「国家の一大事が起こっています。一刻も早く帰還してください」

そう言って彼は、足早にその場を去っていった。

ゲシカナとシーワはしばらく顔を見合わせていたが、やがて、シーワが苛立ったようすで口を開いた。

「何なのですか、あれは？　ドルガとヒヤマで反乱が起こっているのに、それを捨てて帰還しろとは……そんな命令を下すなど、間違っています」

「恐れながら副総司令官殿、勅命とありましたから、すぐさま帰還された方がよろしいかと……」

若い幕僚が、遠慮がちに進言してくる。そんな彼にシーワは冷たい視線を投げかけていたが、やがて、不機嫌そうな表情を崩そうともせずに、隣に座っていたゲシカナ将軍に視線を向けた。

彼は大きなため息をつくと、まるで吐き捨てるかのように、口を開いた。

「勅命である。全軍、引き上げだ」

「お待ちください。ドルガにはギギとトーイッツがまだおります。二人を救いだしてから、引き上げましょう」

「……」

将軍はしばらくシーワを眺めていたが、やがて、彼女に視線を向けたまま、ゆっくりと口を開く。

「シラウラス」

「ハッ」

「ドルガに向かえ。そして、ギギとトーイッツを引き取って来い」

「承知いたしました」

「全軍、帝都に向けて引き上げる。すぐに準備をするのだ！」

ゲシカナ将軍の言葉に、シーワ以外の全員が頭を下げた。

◆　◆　◆

帝都に戻ると、そこでは、勅使として訪れていたリーカン伯爵が出迎えに来ていた。彼はゲシカナとシーワが到着するとすぐに宮殿に

来るようにと促した。

「それでは、衣服を改めて……」

「いえ、そのままで結構です」

「そうは申されましても……」

「皇帝陛下からの火急のお召しです。そのままで結構ですから、まずは宮殿へ。私も同行いたします」

リーカン伯爵の言葉に、ゲシカナもシーワも顔を見合わせていたが、やがて彼の勧めに応じる形で、旅装のまま皇帝の住まう宮殿に向かった。

だが、リーカンが向かった先は宮殿ではなく、カーウンジ伯爵の邸宅だった。ゲシカナとシーワが伯爵家の屋敷に入った直後、屋敷の門が静かに閉じられたのを見て、二人はようやくおかしいと気が付いた。

屋敷の広間には、宰相であるサンマルコ・ローゼンハイムが待っていた。驚く二人に、ローゼンハイムは冷たい視線を向け、手に持っていた書簡をゆっくりと読み上げた。

「余は、汝らが逆心を抱きしことを承知す。この上は、両名に対し、その身を捕え、カルコロム牢獄への幽閉を命ず。ワーロフ帝国皇帝、ワーロフ・ガーワ・ミーシン」

皇帝からの命令に驚く二人に、ローゼンハイムは一切の情を感じさせない声で、淡々と説明を始めた。

「まず、我が国に侵略してきた、バーリアル王国が滅亡したのは……。その顔は全く知らぬと言った感じだな。ちょうど二日前、新・クリミアーナ教国軍によってバーリアルは占領された。そして、その教皇から親書が届いたのが、昨日の朝のことだ。そこには、新・クリミアーナ軍は、我が国を攻撃すると書いてあった」

ゲシカナとシーワは目を丸くして驚いている。そんな二人を一瞥したローゼンハイムは、さらに言葉を続ける。

「我が国を攻撃する理由は、先のドルガ、ヒヤマでの戦いにおいて、シーワ副総司令官に、教皇自身が、アガルタ王と共に大層な無礼を働かれた。その恥を雪ぐため、我が国を根絶やしにするのだと言う……」

「お待ちください！　私は別に無礼など……」

「おだまりなさい」

ローゼンハイムの目に殺意が宿っていた。そのあまりの迫力に、シーワは言葉を失う。

「そして、クリミアーナからの書簡が届いたのと同時に、ヒーデータ帝国より、皇帝の親書が届けられた。そこには、アガルタ王、バーサーム・ダーケ・リノス陛下が大層心を痛めておいでだと書かれてあった。何でも、ヒヤマを奪還し、ドルガを奪還したにもかかわらず、我が帝国軍からは何の労いもなく、占領した砦から追い出されたと言うではないか。アガルタ王自身は気にしていないと言うが、アガルタ国内で、我が国に対する不満が大いに高まっているそうだ」

「お待ちください。その……無礼を働いたことが、どうして、私やゲシカナ将軍に逆心があるということになるのです！　お言葉の意味がわかりかねます！」

必死に言葉を絞り出すシーワに、ローゼンハイムは再び言葉を続ける。

「ゲシカナ総司令官、シーワ副総司令官。この度の戦いで、我が国の信用は地に落ちている。自軍の将兵は犠牲にせず、徒に他国の軍勢を犠牲にした……。それだけではない。アガルタ、クリミアーナ両国の国王に無礼を働き、さらに、せっかく奪還したドルガとヒヤマを、己が部下に裏切られて……」

「ですから、ドルガとヒヤマは、私とゲシカナ将軍で奪還してご覧に入れますわ！　この度は、我が帝国軍で奪還いたします。ですから……」

「無駄だ」

「無駄、ですって？」

「新・クリミアーナが、我が国を攻めない条件が、ドルガとヒヤマの割譲なのだ」

「何ですって？」

「今の我が帝国では、新・クリミアーナ教国と事を構えて勝てる見込みはない。かの国に対抗できるのはアガルタのみ。だが、そのアガルタの我が国に対する心証は著しく悪い。もし、クリミアーナと事を構えたとしても、アガルタが我らの側に立つとは思えない。従

って……苦渋の決断ではあるが、我らは、新・クリミアーナ教国の条件を受け入れることとした」

「そんな……。でも、でも、それが、私とゲシカナ将軍の反逆の理由にはならないでしょう！　作戦失敗の責任は負えど、国家に対する反逆には……」

必死で弁明するシーワを憎々し気に眺めていたローゼンハイムは、まるで彼女を黙らせるように、突然パンパンと手を二回叩いた。

「ちょうど、新・クリミアーナ教国の使者が、この屋敷に来ている。会ってみるといい」

「……失礼します」

ローゼンハイムの隣に現れたのは、一組の男女だった。その姿を見て、シーワは驚愕のあまり言葉を失った。

何と、新・クリミアーナ教国の使者として現れたのは、トーイッツとギギだった……。

第四百八十一話　まさかの提案

「は？　お前、今、何て言った？」

俺は思わず目を見開いて固まった。それほど、予想だにしなかった提案だったのだ。

目の前には、にこやかな笑みを浮かべたヴィエイユがいた。チャンとワーカらがドルガとヒヤマに立てこもってから四日後、ヴィエイユが突然、アガルタの都に現れたのだ。

彼女はポーセハイと共に転移してきた。ヴィエイユ曰く、ドルガ出兵に際して、優秀な医師を乗船させたとのことで、その中で、新・クリミアーナの首都であるアフロディーテで共同研究をしているポーセハイも数名、乗船していたのだと言う。

「突然の無礼、お許しくださいませ」

兵士に案内されて謁見の間に現れたヴィエイユは白いボレロのような上着に、これまた白いスカートをはいて現れた。一見すると、どこかのシスターかと思われる佇まいだが、頭にベレー帽のようなものを載せているので、どちらかと言うと、神官のような格好と言ったところか。いつものエロさは、微塵もない。

「ずいぶんと忙しくしているようだな。そんなときに、よくアガルタに来られたな」

彼女がここにやってくる前に、俺はヴィエイユが船団を率いてバー

リアル王国に向かったことを掴んでいた。てっきり大きな戦いになるだろうと思っていたが、意外にもそうした戦いにはならず、彼女ら一行は悠々とバーリアル王国の首都に入っていったのだった。

「いいえ。忙しくなどしておりません。逆に、暇を持て余しているのです」

しゃあしゃあとこの娘は心にもない事を言ってのける。鑑定スキルで覗き見てみたが、それこそ、彼女はほとんど寝ていない。次から次へと矢継ぎ早に指示を出し、上がってきた報告を分析しながら、さらに指示を出す……。わざわざワーロフに五日間も逗留した訳がようやくわかった。彼女はドルガにあって、着々とバーリアル王国侵略の戦略を立てていたのだ。それから約十日……。ヴィエイユの睡眠時間は二十四時間を下回っているのだ。俺には到底できないことだ。

「バーリアル王国の首都を陥落させたようだが、そこの統治をほったらかしにして大丈夫なのか？」

俺の言葉に、ピクリと彼女の肩が動く。だが、表情は全く変わらない。

「陥落……。何の話でございましょう？　我々はバーリアルに戦争をしに行ったわけではありませんわ。表敬訪問をしたのです」

「表敬訪問？」

「もともとあの国は、クリミアーナ教を信仰していた国でした。しかし、私の代になってからは、アフロディーテとの距離が遠かったこともありまして、疎遠になっておりました。せっかくワーロフま

で出てきたのですから、そのついで……ではありませんが、バーリアルを訪問したのですわ。かの国の信仰の厚さを確認できて、安心いたしました」

「お前には呆れるほかはない」

彼女自身が直接手を下していないので事の詳細はわからないが、バーリアルでは皇帝が座っていたと思われる豪華な玉座に腰を下ろし、集まった人々に笑顔で命令するヴィエイユの姿が見えていた。察するに、皇帝以下、主だった者たちは粛清されたか、幽閉されているのだろう。

「で、突然やって来た理由を聞こうか」

「はい。折り入ってアガルタ王様にお願い申したいことがございます」

「何だい？」

「ドルガとヒヤマを、アガルタの領土としていただきたいのです」

「うん？　言っている意味がよくわからんが？」

「この度、私共は、ドルガとヒヤマの地を、ワーロフ帝国から割譲されたのです」

「え？　何の話だ？」

「事実でございます。ですが、私共では、あの地を統治することができないのです。そのため、ドルガとヒヤマをアガルタにお譲りし

たく、お願いに上がった次第です」

「は？　お前、今、何て言った？」

「ワーロフは、アフロディーテからは遠くございます。それに、バーリアル王国の中にも、信仰心の足りぬ者が多くございまして、我々はそちらの改善に注力したく思います。そうなりますと、ドルガとヒヤマの統治は疎かになります。そうなるよりは、アガルタ王様にお任せした方が、我々にとっても都合がよいのです。それに……」

「それに、何だ？」

「ドルガ、ヒヤマに立てこもる者たちは、アガルタ王様に心酔しております。あの、チャンとワーカの司令官、およびバーリアルの捕虜たち……。そうした方々を、我々の手で統治することは、かなりの困難を伴いますわ。ですから、アガルタ王様に、かの地の統治をお願いする次第でございます」

「そんなことをしたら、あのシーワとかいう司令官が黙っていないだろう？」

「その心配には及びませんわ。すでにあの女は、終わっておりますわ」

「殺したのか？」

「いいえ。命までは奪っておりません。ただ、相応の罰を与えただけでございます」

「何をした？」

「あの女は、アガルタ王様と私に対して無礼な振舞いを致しました。相応の辱めを受けさせたのですわ。……ホホホ、アガルタ王様が想像されるようなことはしておりませんから、どうぞ安心くださいませ」

そう言って彼女は機嫌よくカラカラと笑った。

「ドルガとヒヤマの統治、お願いしてもよろしゅうございますか？」

「……」

「アガルタ王様が首を縦に振っていただきませんと、あそこにいる者たちは遠からず死を迎えることになりますわ」

「どういう意味だ？」

「ドルガとヒヤマだけで、あそこに詰める兵士たちはもとより、民衆の食料を十分に供給できるとは思えませんわ。そうなれば、遠からず反乱が起こり……」

「わかった。皆まで言うな。要は、お前は、ドルガとヒヤマの面倒を見る気はない、そう言いたいのだな？」

「その通りでございます」

「イヤな女だな、お前は」

「嬉しゅうございます」

「嬉しい？」

「良きにつけ、悪きにつけ、私と言う存在が、アガルタ王様の脳裏に刻み込まれたのです。これを喜ばずして、何と申しましょうか」

「もういい。下がっていいぞ。あ、その前に……メイのところに、行け」

「お妃さまのところへ、でしょうか？」

「ああ。これは、俺からの命令だ」

「承知しました」

ヴィエイユは満面の笑みを浮かべて、部屋を後にしていった。俺は念話を通じてメイに連絡を取り、ヴィエイユによく眠れる薬を処方するように頼んでおいた。

「もうすぐクノゲンたちが帰ってくる……。また、アイツらをワーロフに行かせるのか？　バカバカしい。ああ～どうしてこうも、厄介ごとを持ち込むかね……」

俺は、頭をガリガリと掻き毟りながら、思わず天を仰いだ。

◆　◆　◆

一方、ルワザン島のツネの許には、一匹の黒龍がゆっくりと舞い降りてきていた。言うまでもなく、弟のロイスだ。

「兄者、大変だ。シャリオが捕らえられた」

「何？　シャリオが？」

「ああ。アガルタ王リノスと戦闘になった。そのとき、シャリオがヤツに捕らえられたのだ」

ツネは気配探知を駆使してシャリオの気配を感じようと努めた。だが、彼の力をもってしても、妹の行方を掴むことはできなかった。

「まさか、シャリオが……」

「いいや兄者。シャリオは生きている」

「なぜ、そう言い切れる？」

「見えたのだ。人化した状態のままで運ばれていくシャリオの姿を。おそらく、奴らは龍王にシャリオを引き渡すはずだ」

「……」

「龍王はシャリオを詰問するだろうが、妹のことだ。喋るまい。それの状態が数日に及ぶと……」

「もういい」

「兄者、一人で助けに向かおうとしているな？」

「……」

「水臭いぞ。今こそ我ら兄弟が力を合わせるときではないか。シャ

リオの居場所は俺が知っている」

「案内しろ」

「待て兄者。俺に、いい考えがある」

ニヤリと笑うロイス。そんな弟の様子を、ツネは鋭い視線で眺めるのだった……。

第四百八十一話　まさかの提案（後書き）

黒龍編、ここで一旦終了します。間話を三つほど挟みまして、黒龍編～激闘編～を開始する予定です。どうぞ、お楽しみに！

第四百八十二話　淫夢②

顔まわりに寒さを感じて、ゆっくりと目を開ける。夜明け前のようで、部屋はまだ、薄暗い。

ゆっくりと深呼吸をすると、吐き出した息が白い。それほど、この部屋は寒いのだ。

ゆっくりと毛布で顔まわりを隠す。これで、もう少し眠れるはずだ……。部屋の寒さとは打って変わって、体はほのかな温もりに包まれている。とても心地いい。もう少し、この感覚に包まれながら眠りたい……。

そのとき、何か強い力で抱きしめられる感覚を覚えた。

「ヴィエイユ……」

耳元で男の声が聞こえる。その声を聞いて、思わず笑みが漏れるが、敢えて何も言わずに、眠ったふりをする。

「ヴィエイユ……ヴィエイユ……ヴィエイユ」

男は、まだ半分眠りについている状態なのだろう。だが、にもかかわらずその手は、ゆっくりと体の上を這い廻り始めた。

「うふっ、うふふ……」

思わず笑い声が漏れてしまった。いけないいけない。と自分に言い

聞かせる。

ベッドで眠っているのはヴィエイユだった。一糸まとわぬ裸で、毛布にくるまっている。その彼女の後ろには、これも一糸まとわぬ裸の状態で、左手を伸ばして彼女に腕枕をし、右手でその体を抱きしめている男性の姿があった。

男の手が、ゆっくりと彼女の体を撫でていく。

「きれいな肌……。まるで、絹のようだ……」

「嘘ばっかり……」

「本当だ……」

男の手は止まらない。だが、ヴィエイユはゆっくりと男の手を掴んで、その動きを止めさせた。

「これ以上は、いけません」

「どうして……」

「私はまだ、寝るのです」

「俺は、我慢できない……」

「じゃあ、一つ、お願いを聞いてくれますか？」

「ああ、何でも聞こう」

「お妃さまたちを……全員、追い出してください」

「何？」

「お妃さまたちがおいでになる限り、私はいつまでたっても、あなた様の一番の女にはなれませんわ」

「世界で一番お前を愛している」

「そのお言葉は何度もいただきました。今度はその証拠を見せてくださいませ」

「わかった。お前の望むようにしよう。安心しろ」

「ありがとうございます……キャっ」

気が付くと、男がヴィエイユに覆いかぶさってきていた。彼はヴィエイユの顔をじっと見つめながら、まるで喘ぐように呟いた。

「この胸、この体……。全て俺のものだ。俺は、お前なしでは、生きていけない……」

げっそりとやつれた頬……。そして、目の下には濃い隈を作っている。その男は……アガルタ王のリノスだった。そんな彼に対し、ヴィエイユは満面の笑みを浮かべる。

「ヴィエイユ……」

リノスの唇が、ヴィエイユの体中に押し付けられていく。くすぐったいような、心地よいような、何とも言えぬ感覚に包まれながら、

ヴィエイユは得も言われぬ充足感に満たされていった。

……これで、すべては私のものになった。何もかもが、私のものになるのだわ。

「うふっ、あはっ、あははっ」

心の底から湧き上がる喜びを抑えきれずに、彼女は思わず笑い声をあげる。そして、その両手をリノスの背中に廻す。彼は、我慢しきれなかったように、ヴィエイユの体をせわし気にまさぐる。

「なっ……」

リノスが驚きの声を上げる。驚いた彼の表情を見ながら、ヴィエイユはゆっくりとリノスの上にのしかかるようにして、覆いかぶさった。それはまるで、リノスを上から押さえつける形だった。

「ヴィ……ヴィエイユ……」

まるで何かを懇願するようなリノスの表情……。その情けない表情を見ながら、ヴィエイユは、心の中で満足して頷く。

……これこそが、天下を馬上で眺め渡す形だわ。あの、お爺様でも見ることが叶わなかった景色を、私だけが見ている。

ついに祖父を越えたのだ。あの祖父を……。そう考えると、彼女の心は何とも言えぬ充足感で満たされていった。彼女はゆっくりと目を閉じる……。

「ヴィエイユ様……」

突然女性の声が聞こえる。驚きながら目を開けると、女性が心配そうな表情を浮かべていた。見慣れた景色……どうやらここは、自分の寝室のようだ。

「ヴィエイユ様……お目覚めになられましたか」

心から安堵した表情を浮かべる女性。この女性は、いつも自分の身支度を手伝ってくれている下女の一人だ。名前は……思い出せない。

「……ううっ」

思わず声が漏れる。何とも言えない倦怠感があった。だが、いつものそれとは違う。よく寝たという充足感がある。

ゆっくり体を起こす。隣に寝ていたはずのリノスの姿は、すでになかった。

「……リノス様は？」

「は？　恐れ入ります、今、何と……？」

「リノス様……」

「あのっ……。アガルタ王様でございますか……？」

「……」

ゆっくりと周囲を見廻す。窓からは燦々と太陽の光が差し込んできている。見事に整頓された、いつもと変わらぬ寝室の光景だ。

……夢？

相変わらず倦怠感が体を包んでいる。喉が渇いている。水……と言おうとしたとき、彼女の目の前に、水の入ったコップが差し出された。

「……」

無言でそれを受け取り、グイっと飲み干す。冷たい水が喉を潤していく。

「……美味しい」

「よろしゅうございました。お目覚めにならないので、本当に心配いたしました」

女性は、今にも泣きだしそうな顔をしている。そうだ。アガルタに行った帰りに、大学に立ち寄ったのだ。そこで、メイリアスに軽い診察を受けた。そして、睡眠不足を指摘されたのだ……。

「この薬を飲めば、ぐっすりと休めると思います」

優しい笑みを浮かべながら、メイリアスは小さな紙包みを手渡したのだった。

正直言ってヴィエイユは、メイリアスが差し出した薬の効果を信用していなかった。彼女自身も、八方手を尽くして眠りの効果のある薬を探させていたのだ。だが、そのどれも効くことがなかった。

彼女には一つの悪癖があった。一旦、深く集中してしまうと、眠れなくなってしまうのだ。それはそれで、彼女にとってはメリットもあるのだが、眠れない日々が続くことによる体調の悪化は、諸刃の刃と言えた。

きっとこの薬も効きはすまい……。そんなことを思いながら、半信半疑でメイリアスの薬を口にしたヴィエイユだったが、どうやら思った以上に熟睡できたようだ。

「今、何時ですか？」

「11時25分でございます」

「11時？」

12時間以上寝たことになる……。これだけの睡眠時間を取ったのは、これまでの彼女の中で、なかったと言ってよかった。

ゆっくりと体を起こして、ベッドから降りる。薬のためか、体がフラフラする。

「お危のうございます」

侍女が思わずヴィエイユの腕を取って支える。その瞬間、彼女はハッとした表情を浮かべながら、恭しく畏まる。

「ご無礼を」

「いえ、いいのです。助かりました」

そう言いながらヴィエイユは浴槽に向かう。そこには、いつでも湯浴みができるように用意が整えられていた。彼女はいつもの通りそこで湯を浴び、冷水でその肌を磨き上げる。

「……」

自分の姿を鏡で写してみて、ヴィエイユは息を呑んだ。まるで、輝くような白い肌がそこにあったのだ。一瞬、彼女は自分の姿に見惚れた。

浴槽から出てきたヴィエイユを見て、侍女は目を見開いて固まってしまった。

「下着を、用意してもらえるかしら？」

「えっ？　あっ、はい……ご無礼を……」

顔を真っ赤にしながら、侍女はその場を立ち去る。そして、用意された下着と衣装を身に着けたヴィエイユは、再び鏡の前に立つ。

「きれい……」

背後で侍女の声が聞こえる。

「あなた、名前は？」

鑑越しにヴィエイユに話しかけられた侍女は、一瞬、体を震わせる。

「この部屋を掃除してくれているのは、あなたですね？　これだけ清潔にしてもらっている人の名前を知らないのは、失礼になります。

お名前を聞かせてください」

「サ……サリエラでございます」

「サリエラさんね。これからも、よろしくお願いしますね」

「かっ……畏まりました」

顔を真っ赤にしながら頭を下げるサリエラ。その姿を鏡越しで眺めながら、もし、この肌を男たちが見たらば、どうなることだろうか。きっと、全員が息を呑むに違いない。

そんなことを考えていると、空腹感が襲ってきた。ヴィエイユは、部屋を出て、執務室に向かう。今日はそこで、食事を摂りながら、これからのことを考えてみよう……。

何となく、ではあるけれど、今日は何かいいことがありそうな予感がしていた……。

第四百八十三話　処断

そこは完全な独房だった。

四方を囲む冷たい石の壁。板の台に毛布一枚のベッド。隅に辛うじて腰の周りだけを囲むトイレの柵があって、中には少し大きめな穴が開けられていた。

埃とアンモニアの形容しがたい悪臭が鼻をつく。そんな部屋の中で、眉間に皺を寄せながら鉄格子にしがみついている者がいた。シーワだ。彼女はまだ事態が把握できないでいた。

予想もしていないことの連続で思考が追い付かなかった。なぜ、自分に逆心の疑いがかかっているのか。そして、新・クリミアーナの使者として現れた妹のギギ、トーイッツ……。

それを考える間もなく、気が付くと、周囲に体格の良い軍人が二人近づいて来て、無言でシーワとゲシカナ将軍を連れ出した。よく見るとその二人は、シーワの顔見知りだった。彼女の意のままに動かず、閑職に追いやった下士官だった。その彼らに手を離せと命じたが、彼らは無言のまま二人を部屋から引きずり出した。

その様子を宰相のローゼンハイムは冷たい目のまま眺めていた。そして、妹のギギは、薄ら笑いを浮かべていたのだ。

あのギギがなぜ……。気の弱かった妹が……。いつも私を追いかけていた妹が自分を裏切るなど、考えられないことだった。

……まさか、ドルガで何かあったのでは？　ギギに何か、そして、トーイッツにも。

彼女の胸の中に、激しい衝動が突き上げてきた。

「誰か！　誰かいないの！　私はシーワです！　私は、副総司令官です！　私に対して、誰もこんなことはできないはずだわ！　ここから出しなさい！　ギギを、ギギを呼びなさい！　誰か！」

つかつかとやって来た看守が、鉄の格子を掴んでいるシーワの掌を短い棒でぶった。

「うっ！」

苦痛に呻くシーワへ顔を近づけて、憎々し気に口を開く。

「あんた、考え違いをしちゃいかんよ。あんたは、今は副総司令官でも何でもないよ。ただの罪人だよ。これから厳しい取り調べを受けなくちゃならない犯罪者だよ。今の帝国軍の総司令官は、リガワ・イージ閣下だよ」

「りっ、リガワ？」

意外な名前だった。その男は、宰相のローゼンハイムの部下で、有能な官吏だったが、甲高い声と、女の腐ったような、陰険なものの言い方をするために、シーワは嫌悪感すら抱いていたのだ。軍務経験のない彼がなぜ、帝国軍の総司令官に任じられたのか。そんなことをしたら、軍が混乱するのは目に見えていた。シーワは掌が紫色に腫れているのも忘れて、また鉄格子につかまって怒鳴った。

「だっ、誰がそんなことを決めたのです！　私の許可なしに」

「誰って皇帝陛下だよ。それとも次の総司令官を、アンタが任命するとでも決まっているのかい？」

シーワが答えに窮して黙っていると、その看守は再び口を開いた。

「大人しくさえしていれば、ローゼンハイム閣下は、情けも慈悲もあるお方だ。寂しがり屋のアンタのことを考えて、少しは寂しさが紛れるように、寒くないようにと今、差し入れ品がご到着だよ」

鎧姿の男に、髪の毛を掴まれて引きずりまわされるようにして、老人の男が現れた。彼は後ろ手に縛られていたが、やがて、シーワの前にやって来ると、手をほどかれ、無理やり腰をかがめるような姿勢を取らされて鉄格子をくぐらされた。その瞬間、男にその腰を蹴飛ばされた。

「うっ」

つんのめるようにして老人が中に入ってきた。

「あっ、あなたは」

シーワは四つん這いになっている老人を眺めながら、呻くように口を開いた。

肩で激しく息をしているのは、つい先ほどシーワと共に連れ出されたゲシカナ将軍だった。シーワと同様、身に着けていた鎧や剣は取り上げられ、ほとんど下着姿のような格好になっていた。しかも、すでに激しい取り調べを受けたのか、顔が紫色に腫れあがっていた。

「将軍……このお姿は……」

「いきなり……部屋に放り込まれた。……取り調べも何もなしで、いきなり……殴られたのだ」

余程悔しかったのか、将軍の肩が震えている。そして、ポタポタと雫が落ちる音が聞こえてくる。尊大だが若々しく、元気に動き回る壮年の男の姿はどこにもなく、ただの老人がそこにいた。

そのとき、向こうからローゼンハイムが、五、六人の男に護衛されてやって来た。故意か偶然か、牢の鉄格子の扉があいていた。ゲシカナはズボンとシャツだけの姿でいきなり飛び出した。

「おいっ……ローゼンハイム、これはどうしたことだ」

飛びつくようにしてまくし立てるゲシカナだったが、しかしそれよりも先、筋骨隆々の大男に首のところを押さえられ、うちわのような大きな手で両頬をびしゃんびしゃんと張られた。

「こら、ゲシカナ。宰相閣下に乱暴を働いちゃいかん」

ゲシカナの唇は切れ、歯は折れ、鼻からは二筋の血が出た。相当に強力なビンタだった。

その様子を、軽蔑の眼差しで見つめていたローゼンハイムは、冷静に口を開いた。

「ゲシカナ殿、おめでとう」

拳で血を拭いながら、ゲシカナは返答する。

「何がおめでとうだ。こんな目にあわせておいて」

「しかし、あなたには死刑が予定されていたのだよ。しかし、新・クリミアーナ教国からまたしても圧力がかかった。教皇から親書が届き、あなたとそこにいるシーワを助命するように頼んできたので、それをのむことにした」

意外な話だった。どうして新・クリミアーナ教国が自分たちの命を助けようとするのか。その厚意はありがたいとは思うが、だからと言っていい顔もできず、ゲシカナがむーっとしていると、ローゼンハイムはゆっくりと口を開く。

「教皇の助命要請がなければ、あなたらのような、何ら国家の役に立たない悪徳軍人は、即刻打ち首が適当と思っていたのだがね」

冷たい目のまま、ローゼンハイムはさらに言葉を続ける。

「その代り、今日中に帝国を出てもらう。そこにいるシーワと夫婦となってな」

「何ですって？　……宰相様、私とゲシカナ将軍を国外に追放して、軍の実権を握るおつもりですか。あなたは、この帝国を自分の思うままに操ろうと考えているのですか！」

「君たち二人が夫婦となり、以後、新・クリミアーナ教国における指定地で一切の公的活動をしないという誓約を行えば、刑を免除されて、出国を許される」

ローゼンハイムは、無表情のまま答えた。その表情は彼女らに速やかな決断を促しているように見えた。シーワはただ、項垂れるしかなかった。

「受け入れるようです」

「はぁい、わかりましたぁ」

ローゼンハイムの声に続いて、聞きなれた声が聞こえた。見るとそこには、いつの間にか妹のギギとトーイッツの姿があった。

「ギギ！　ギギ！　あなたは……ぐっ」

思わず飛び出して、ギギに飛びつこうとしたシーワだったが、やはりローゼンハイムを警護する男に取り押さえられてしまった。そんな姉の様子を、ギギは薄ら笑いを浮かべながら眺めている。

「ギギ……あなたは……どうしたと言うの？　トーイッツ、トーイッツ！」

シーワの呼びかけに二人は全く反応しない。トーイッツは、何度も瞬きをしながら、呆然とシーワを眺めている。

「ギギ……ドルガで、何があったの？」

「私はぁ、選ばれたのですぅ」

「選……ばれた？」

「この世の生き神様であらせられるぅ、教皇聖下からぁ、祝福をう

けぇ。こんな私にぃ、聖下わぁ、お側に仕えることぉ、お許しくだされたのですぅ」

「教皇……聖下？　あの……ヴィエイユとかいう……」

「無礼者っ！」

信じられないことだった。ギギがものすごい剣幕で叫んだかと思うと、突然シーワの頬を打った。親にさえあげられたことのなかった彼女にとって、妹のその行為は、激しく心を傷つけるものだった。

「あなたのようなぁ、下賤な者がぁ、教皇聖下の御名を呼ぶなど……不敬なっ！　神を冒涜することわぁ、許しませんからっ！」

「ギギ……」

もはや目の前にいる女性は、シーワが知っている従順な妹ではなかった。ありありと軽蔑の視線を向けているギギの姿を見ながら、シーワはただ、涙を流すしかなかった……。

第四百八十四話　みつかった

「うん？」

眉間に刻めない皺を刻みながら腕組みをしているのは、リノスの妻の一人である、コンシディーだった。彼女の目の前では、愛娘のピアトリスが機嫌よく朝食を摂っていた。

彼女は、ドワーフの血を継いでいる者らしく、母親と同じ緑色の髪で、きつい天然パーマがかかっている。シディーは、この愛娘のために、髪の毛をストレートにする液体を開発してみようか……。そんなことを考えていたとき、ちょっとした違和感を覚えたのだ。

一見すると、いつもと変わらぬように見えるピアトリス。だがシディーは、心に覚えた違和感を解明せずにはいられなかった。この愛娘に何か、よからぬことが起こっている気がしてならなかった。

彼女はじっと娘を観察し続ける。母親の心配をよそに、ピアトリスはオムレツを、フォークを使って上手に食べている。

「ピア、ちょっとおいで」

「はぁーい」

娘が食べ終わるのを待って、シディーは彼女をお膝の上に抱っこする。

「ピア、あーんして」

「あーん」

屈託のない笑顔を見せながら、ピアトリスは大きな口を開ける。

「……メイちゃん」

「どうしました、シディーちゃん」

「ピアのここ……」

「……あっ、虫歯になりかけていますね」

「やっぱり……」

シディーは大きなため息をつきながら娘を膝から降ろす。パタパタと走っていく娘の背中を見ながら彼女は、メイに虫歯の治療を頼むのだった。

幸い、ピアトリスの虫歯は軽いもので、歯を抜いたり削ったりする必要はなく、メイが処方した薬を歯に塗れば問題ない程度のものだった。その報告を聞いて、シディーはホッと胸を撫で下ろした。ドワーフにとって虫歯は厄介な病気の一つだったからだ。

通常の人間とは違い、見た目は幼く見えるが、体の丈夫さは人間をはるかに上回るのがドワーフだ。だが、そんな彼らをして、もっとも恐れる病の一つが虫歯だった。

ドワーフは人間と違って歯の生え変わりというものがない。そのため、生まれたときからの歯を生涯使い続ける。そんな彼らだが、一

旦虫歯にかかると、人間よりもはやい速度で進行していく。そのため、虫歯になるとすぐに歯がボロボロになる者が多いのだ。

ピアトリスは人間とのハーフであるものの、その風貌はどう見てもドワーフそのものであり、ドワーフの血が色濃く表れている。母親のシディーはこの子が生まれた瞬間に、この娘はドワーフ寄りであることを見抜いていたため、虫歯に関しては常に注意を払っていたのだ。

このリノス家においては、リコの躾がいいために、子供たちは食後の歯磨きを欠かすことがなかったため、虫歯などになったことがなかった。どうしてピアトリスだけが虫歯になるのか。シディーは目を閉じて考える。

答えは、すぐに出た。

シディーはいつものように、ピアトリスを連れてアガルタの都にあるドワーフの工房に出勤する。ここ最近は、ここの工房で作られる製品の質の良さが口コミで広まり、色々なところから注文が殺到しつつあった。そのため、工房では人手不足に陥ることがあり、その手伝いとしてシディーも出勤していたのだった。

特にシディーの技術力は、この工房の中でも群を抜いていて、難しい作業の仕上げは必ず彼女の手に委ねられていたのだ。

「おお、おいでなさいませ。姫様も。そして、王子様も」

老ドワーフが満面の笑みを湛えながらシディーとピアトリスを迎える。この日は、イデアも伴っての出勤だった。彼はドワーフのこの工房を気に入り、よくピアと共に工房で遊びながら何かを作るのを

楽しみとしていた。

「二人とも、遊んでらっしゃい。ケンカしちゃだめよ」

「はぁーい」

イデアが元気よく答えて、妹のピアトリスの手を引いて歩いていく。この兄妹の仲はすこぶるよかった。喧嘩をするなとは言ってみたものの、二人が喧嘩をする可能性は皆無だ。何より、イデア自身が父、リノスによく似て優しい気性の持ち主であるため、姉たちには可愛がられ、弟や妹に対しては、とても面倒見の良い子供だった。

シディーはしばらく遊ぶ二人を眺めていたが、やがて、傍に控えている老ドワーフに視線を向ける。

「すまないけれど、ナンブツとリンショック、そして、サンカクを呼んでちょうだい」

不思議そうな表情を浮かべながら頭を下げる老ドワーフ。そんな彼をシディーは腕を組みながら眺める。

「一体何じゃ？　このクソ忙しいときに」

ブツブツと文句を言いながら三人のドワーフがやって来た。彼らは以前、シディーの命令でエルフの里まで旅をしたドワーフたちだった。長旅を経験することで、何か彼らが変わることを期待していたのだが、その効果はほとんど見られず、相変わらず彼らは隙を見てはサボろうとするのだった。

とはいえ、腕はいい三人だ。そんな彼らにシディーは、ため息をつ

きながら口を開く。

「あなたたちに聞きたいことがあるんだけれど」

「何じゃぞい？」

「ピアに、お菓子をあたえていたりしないわよね？」

「……何の話じゃぞい？」

「ピアが虫歯になりかけていたのよ。色々と考えた結果、おそらくここで、誰かに、甘いものを、結構な頻度で、与えられているからじゃないかと思ったのだけれど？」

「……それが何で儂らなんじゃ？」

「よくいなくなるじゃない、あなたたちは？」

「しっ、失礼な！　儂らがまるで、仕事を、しとらん、みたいな、言い方は、やめて欲しいぞい！」

ナンブツの言葉に、二人の老ドワーフも頷く。だが、明らかに挙動不審だ。目が完全に泳いでいる。

「わかったわ。ただ、これからピアをここに連れて来るのは、よすことにするわ」

「ど、どういうことじゃぞい？」

「別にこの工房が原因と言っているわけじゃないけれど、ピアが虫

歯になりかけていたのは事実だわ。あんなに小さい子供が虫歯にかかる事の重大さは、あなたたちもわかるわよね？　だからしばらくピアはここには来させないで、様子を見ることにするわ」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！」

「何かしら？」

「ということは、姫様には会えんということになるのかの？」

「そういうことになるわね」

「それは殺生というものじゃ、大姫様！」

「そうじゃ。姫様は儂らの癒しなんじゃ。その癒しを奪い取るとは大姫様、ひどいなされようじゃぞい！」

「大姫様、頼むから、儂らから姫様を取り上げんでくれ！」

「……ちょっと、その、大姫様って呼び方、やめてくれない？」

「何を言うんじゃ！　姫様が二人いるとややこしいぞい！」

「姫様ももう年じゃろう。大姫様と呼んでもらえるだけでもありがたいことじゃ。まあ、いい歳をして、いつまでも姫様という呼び方にこだわるのも、どうかと思うがの」

「……チッ」

「舌打ちはやめた方がええのう、大姫様。姫様がマネをしたらどう

するんじゃ」

「そうじゃぞい。また、ミンシ様に怒られるぞい」

「……」

三人の老ドワーフを睨みつけるシディー。そのとき、ピアの可愛らしい声が響き渡った。

「じい！　じい！」

「おお姫様～。ジイはここにおりますぞい」

三人はシディーに目もくれず、いそいそとピアの許に向かい、彼女を抱っこする。そのとき、ナンブツが懐から何かを出して、ピアの口の中に放り込んだ。

「ちょっと！　今、何を食べさせたの？」

「う？　あ？　なっ、いや、ちょっと……」

「見せなさい」

シディーはナンブツの懐の中から紙袋を取り出す。それは、一見すると、ハチミツのようなものを固めて作ったものだった。

「何を食べさせているのよ！」

「いっ、いや、薬を……」

「薬ぃ？」

「いや、ハチミツは体にええと聞くからの。その……姫様のお体を心配して……」

ナンブツの言い訳を聞きながら、シディーは固形のハチミツを口の中に放り込む。

「あっま～い！　こんなものをピアに食べさせていたの？」

「ううう……」

「これだけ甘いものを食べていたとなると……それは、虫歯にもなるわね……」

シディーは慄いた表情を見せる三人に向かって、腕を組みながら口を開く。

「これから、ピアに物を与えるのは禁止します。それができないのなら、ピアをここに連れて来るのはやめます」

「う……う……う……」

「それにこれ、ハチミツじゃないわね。ハチミツのように見せかけているけれど、砂糖を溶かして、何か薬品のようなものを加えているわね。だからこれは、正確に言うとハチミツじゃないわ」

「何と言うことじゃ！　高い金を出して買ってきたのに！」

頭を抱えて悔しがるサンカク。そんな彼を横目で見ながら、ナンブ

ツはガックリと膝を折った。

「これが本当の、見つかったら（蜜買ったら）お終い、というやつじゃ……」

第四百八十五話　秘策

とある大陸の山の中。そこは大きな火山があり、火口からは噴煙が常に上がっている。その火口の中では一匹の黒龍が羽を休めていた。

所々にマグマが溜まっている灼熱の中、黒龍は目を閉じたまま微動だにしない。一見すると死んでいるようにみえるが、よく見ると、その体がゆっくりと上下に動いているのがわかる。

この黒龍はロイスだった。リノスとの戦いのあと、彼はここにやって来た。

自身の戦略がここまで外れたことは、彼のこれまでの中ではなかったことだった。アガルタ王リノスを攫うことが失敗しただけでなく、妹のシャリオまで捕らえられた。妹の行方はわからないままだが、おそらくリノスか龍王の許にいることは容易に想像がつく。

「龍王……」

思わず彼は小さな声で呟く。リノスと龍王、そして、この二人をはるかに超える力を持つ精霊……それらを相手に戦い、勝利することは難しい。だが、彼には一つの策があった。それをどのように実行するのか……彼はこの灼熱の中で、ずっとそれを考えていた。

……今度ばかりは失敗は許されない。完璧に事を運ばねばならない。

そんなことを考えながら、彼は思わず笑みを漏らす。これが上手くいけば、龍王とリノスに勝利することができるだろう。そうなれば、

この世界は思いのままに動かすことができるのだ。

……さて、まずは、準備に取り掛かるか。

ロイスの眼が開かれ、目に不気味な光が差した。彼はゆっくりと翼を広げると、音もなく空に向かって浮き上がった。

◆　◆　◆

「一体何をしていたのだ！」

怒りをあらわにしているのは、長兄のツネだった。久しぶりに現れたと思ったのも束の間、ロイスの口からシャリオが龍王に捕らえられたという報告がなされたのだ。

「まさか、アガルタ王リノスと龍王が手を組むとは思っていなかった……」

「……」

「それに、兄者も感じただろう。龍王をはるかに凌駕する気配を」

「あれは一体何だったのだ？」

「精霊だ」

「精霊？　あんな巨大な気配を持つ精霊などきいたことがない」

「おそらく神龍さまではないか」

「まさか……」

「相手が龍王であれば、考えられぬことではない」

「……」

「どうする、兄者？」

「どうする、とは、どういう意味だ？」

「このままでは、我らは龍王たちに滅ぼされるぞ。座して死を待つのか？」

「その言い方は、何か策があるということか」

「ああ、ある。我ら兄弟が一枚岩になって対抗すれば、龍王、アガルタ王リノスを倒すことができるだろう。そして、シャリオを取り戻すこともできる」

「……一枚岩になって対抗とは、どういうことだ。何をするつもりだ」

ロイスの表情が下卑た笑顔に変わる。それを見てツネは一瞬イヤな予感を覚えたが、気を取り直して、弟の言葉に耳を傾けた。

「では兄者、他の兄たちも呼んでもらえないか」

「何だと？」

「先ほども言っただろう。我ら兄弟が一枚岩になって戦わねばなら

ぬと。であれば、全員で策を練らねばならないだろう」

「……」

「兄者、腹の中で、ロイス、お前が集めろ。そう考えているな？兄者の考えていることは手に取るようにわかる。だが考えてもみろ、他の兄たちが俺の話を聞くと思うか？　ラアルの兄たちを説得できるのは、兄者しかいないだろう」

ロイスの言葉をツネは黙って聞いていたが、やがてゆっくりと羽を広げると、音もなく上空に舞い上がった。その様子を見ながらロイスは、再び下卑た笑顔を見せた。

◆　◆　◆

数時間後、ロイスの許には、四匹の黒龍が集まっていた。すなわち、長兄のツネ、次兄のラアル、そして、ロイスの弟であるターチャとショースが目の前に控えていた。

「ツネの兄者から話を聞いたが、シャリオが龍王に攫われたそうではないか。早く助けに行かねばならぬ。すぐにでも行かねばならぬな、ショース」

「その通りだ。兄者たちが手を出す必要はない。ここは俺一人で十分だ」

弟たちの会話を聞きながら、ロイスは不敵な笑みを浮かべる。

「甘いな、お前たちは」

「何だと？」

「相手はあの龍王だ。そして、それに匹敵する男までもが相手なのだ。お前一人で龍王を倒せるのか？　龍王一人でも手を焼くのに、それがもう一人いるのだ。しかもその一人は人族だが、尋常ならざる強さだ。これはいかに言ってもわかるまいが、俺は直接ヤツと戦ったからわかるのだ。この俺の腕が、斬られたのだからな」

ロイスの腕が斬られたという言葉を聞いて、弟たちは絶句している。狡猾さと防御力に関しては兄弟随一の力を誇るロイスなのだ。その彼の鱗を切り裂いて、腕を切り落とすなど、考えられないことだった。

「我ら兄弟の中で一番、頭の回転の速いシャリオが捕らえられたのだ。それだけで敵のスキルの高さはわかるというものだ」

「……」

絶句する皆に、ロイスはゆっくりと口を開く。

「俺に作戦がある。シャリオを取り戻し、我ら兄弟が龍王に攻撃されぬ作戦がな」

「……聞こう」

「まずはここにいる全員が人化する」

「人化？」

ツネが怪訝そうな表情で尋ねる。そんな兄に、ロイスは下卑た笑い

を浮かべる。

「ああそうだ。人化して、この島を出るのだ」

「出てどうする？」

「ある場所に向かう」

「ある場所？」

「それは、付いてきてもらえれば分かる」

「待て」

口を挟んだのは、次兄のラアルだった。兄弟の中で最も慎重で思慮深い兄だ。ロイスが一番苦手とする兄だった。

ラアルは兄弟の中ではひときわ、異彩を放つ存在だった。話をしても彼が発言することはあまりなく、大概は兄たちやロイスたちに任せていた。ただ、任せっぱなしというわけではなく、発言する時はかなりしっかりと意見を言った。無口な男で、滅多に口を開くことはなかったが、たまさかの一言には盤石の重みがあった。

彼は森の中でじっと思考していることが多かった。何を考えているのかはロイスには全く伺い知れなかった。そうした悠々とした態度を取るこの兄が、ロイスは苦手意識を通り越して、嫌いですらあった。

だが、他の兄弟たちは、このラアルに対して文句の一つも言わなかった。そうした態度を見てロイスは、我々がしっかりしていればい

いのだと考えていた。一番しっかり者の長兄、ツネと比較して、極端なほどに茫洋として見えるラアルには、近づきがたい何かを感じていた。

その一方で、この兄とシャリオとの仲は良かった。ただ一方的にシャリオが喋るだけの間柄だったが、彼女はこの兄を気に入り、折に触れて彼との接触を持った。ラアルもシャリオを邪険に扱うことはなく、表面的には仲の良い兄妹に見えた。

「シャリオの気配は感じないが、どこにいる」

「それは言えない」

「何故だ」

「言えば、兄者たちは、すぐさまそこに向かおうとするからだ」

「どうしてそう言い切れる?」

「兄者たちが、予想もしていない場所だからだ」

「アガルタではないのか」

「違う」

「何?」

何かを言おうとするラアル。だが、ロイスはグルルと鳴き声を上げて、彼の言葉を遮った。

「俺のことを疑わしいとは思っているだろうが、一度、俺に騙されてみてはくれないか。我々が力を合わせれば、間違いなくシャリオは奪還できるのだ。俺はシャリオの居場所については、大体見当がついている。まずはそこに行き、シャリオの生存を確認しようではないか。そして、俺の作戦を聞いて欲しい。やる、やらないはそこで決めてもらって構わない。どうだ？」

兄たちはただ、沈黙している。そこに再びラアルが口を開く。

「なぜ、我らは人化しなければならないのだ」

「龍王に悟られないためだ」

「龍王に」

「そうだ。俺たちがこの姿のまま移動すれば、必ず龍王は気付くだろう。ヤツのことだ。この島を警戒しているに違いない。その奴に気取られないために、できるだけ気配を消してこの島を離れなければならない。島を離れる前に龍王に見つかれば、それこそ俺たちは、滅ぶ」

ロイスはじっと長兄のツネを見た。彼はゆっくりと息を吐き出し、ぐるりと首を廻した……。

第四百八十六話　聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥

一方その頃、リノスの屋敷では、アリリアが喜びの声をあげていた。

「うわぁ！　かわいい！」

目をキラキラと輝かせながら、パチパチと手を叩くアリリア。その視線の先には、小型のドラゴンがいた。

大人の腰の高さほどの大きさで、その体は漆黒の鱗に覆われている。これは言うまでもなく、先日、リノスによって捕らえられた黒龍のシャリオだった。

彼女は、久しぶりに人化を解除してみて、驚いた。まさか、自分の体が十分の一の大きさになっているとは、思いもよらなかったからだ。

いつもとは違う視点……。目の前の子供が、大きく見える。あまりの予想外の光景に、シャリオはしばらく現実を受け入れることができなかった。

「まるで生まれたての仔竜みたいだ」

腹を抱えて笑っているのは、ラースだ。そんな彼の頭を、姉のフェリスが思いっきり叩いている。

「いい加減にしなさいよ！　バカ笑いはやめなさいっていつも言っているじゃない！」

「いってぇな！」

「何よ」

「二人とも、ケンカしちゃだめよ」

フェリスとラースに、アリリアが両手を腰に当てながら胸を張る。
その様子にフェリスは苦笑いを浮かべる。

「最近特にお姉ちゃんらしくなったわね」

「エヘヘ」

ちょっと照れくさそうに笑いながら、アリリアはシャリオに向き直る。

「……」

シャリオは茫然と目の前に並ぶ人々に視線を向ける。正直、この屋敷に来てからというもの、毎日が信じられないことの連続で、未だにその状況を理解するのに、思考が追い付かないのだ。その中でも、もっとも彼女を戸惑わせているのが、情報不足だ。相手のことが、全くわからないのだ。

元々シャリオには、優れた魔力探知、気配探知能力に加えて、優秀な鑑定スキルを持っていた。それらを駆使することで、彼女は目の前に現れるモノや生き物が何であるのか、自分に害のあるものかどうかを的確に把握することができていた。それどころか、次から次へと入ってくる情報をいかに処理するかに、注力せねばならなかっ

たほどだ。

それが、今は、何もわからなかった。頭の中に、何の情報も浮かび上がってこないのだ。

この状況に、シャリオは戸惑いを通り越して、うっすらと恐怖に似た感情を抱いていた。目の前に現れる者たちの情報がわからないために、直感に頼る彼女の予想は、ことごとく外れていたのだ。

例えば、フェリスに小突かれているラース。彼女は彼を最初見たとき、愚鈍な少年であると断じた。だが、実際の彼は、恐ろしい腕力を持っていて、巨大な岩などを片手で軽々と持ち上げることができていた。それもそのはずで、彼は、黒龍一族が唯一勝てなかった相手である、クルルカンだったのだ。その事実を知ったとき、シャリオは愕然としたのだった。

一対一の戦いであれば、シャリオはこのラースに勝つ自信があった。だが、一族の力を結集した戦いとなれば、この力は脅威だ。優秀な指揮能力を持った者に導かれれば、彼は恐ろしい戦力となるのは、明らかだった。実際、彼はドルガとヒヤマに赴き、先の戦いで破損した城壁や堀を、その腕力で瞬く間に修復してしまったのだ。彼がクルルカンと知っていれば驚くことはなかったが、その話を聞いた当初は、なかなか信じることはできなかった。

今のシャリオは、ある意味では目が見えず、力もないという状態と言ってよかった。彼女の周囲を囲む者たちの中で、一人でも、その気になれば簡単に彼女を瀕死の状態にすることができると言ってよかった。

「エヘヘ」

シャリオの心境をよそに、アリリアが嬉しそうにシャリオの背中に乗り、その手を首に廻して抱きついてきた。この小さな娘を振り落とすことは難しくはないだろう。だが、それをすると、どんな目に合わされるのかわからない。そんな不安が頭をかすめる。

「何をしているのです」

突然、女性の声が聞こえる。その声を聞いた途端、背中に乗っていた少女が慌てて地面に降りて、直立不動の姿勢を取った。

「さあ、朝食ができましたわ。食べましょう」

一人の美しい女性がにこやかな笑みを浮かべながら近づいて来た。この人は、アガルタ王リノスの第一夫人であるリコレットだ。ここに来た当初から、この屋敷にいる者たちは、なぜかこの女性の言うことをよく聞く。自分を捕えたアガルタ王、リノスでさえ、この女性の言うことには唯々諾々として従う。

別に、巨大な魔力を感じるわけではない。ラースのように恐ろしい腕力があるわけでもない。ただの、小柄な人間の女性にしか見えない。それこそ、今の自分でも、倒せてしまうのではないかと思うくらいだ。そんな女性に、龍王と対等に渡り合うことのできる、アガルタ王、リノスが従うのか。シャリオは不思議でならなかった。

「まあ、かわいいドラゴンですこと」

リコレットは、人化を解いたシャリオを見て、優しい笑みを浮かべている。そんなリコレットの瞳を、シャリオはじっと見つめる。

「その姿では、食事も不便でしょう。人化しなさいな。それとも、体調でも悪いのかしら？」

「……」

シャリオはリコレットを見つめたまま、人化を開始する。

「さて、食事にしましょう」

人化を見届けたリコレットは、ゆっくりと踵を返して、屋敷に向かって歩いていく。その後ろを、アリリアたちが付いていく。シャリオも、仕方なく彼女らの後に付いて行った。

「では、いただきます」

アガルタ王、リノスの声で朝食が始まる。この屋敷では、食事を摂るときには必ずリノスの声で始められる。たまに、彼がいないときには、先のリコレットが食事の合図を出す。こんな光景すらも、シャリオには信じられないことだった。

なぜ、皆で揃って食事を摂らねばならないのか。腹が減ればそのときに食事を摂ればいいではないか。にもかかわらず、時間を決めて、その通りに皆が集まり、料理に手をつけずに、ただ、大人しく声がかかるのを待ち、食事を始める。これに何の意味があるのか、彼女にはわからなかった。

加えて、この屋敷で出される食事はとても美味しいもので、シャリオとしては早く口の中に放り込みたい衝動に駆られるのだ。最初はその欲望を押し殺すのが大変で、いつも隣に座るフェリスに手を掴まれ、窘められていたのだ。

さらには、目の前の料理を不思議な道具を使って食べるという行為も、彼女を戸惑わせた。手があるのに、なぜわざわざこんな使いにくいものを使って食べねばならないのか。見よう見まねで道具を使って食べてはいるが、それが何を意味するのか、彼女にはわからなかった。

「わからないことは、聞けばいいのですわ」

不意にそんな声が聞こえた。話をしているのは、リコレットだった。彼女は娘のエリルに視線を向けている。

「わからないことを、わからないままで進めてしまうと、とんでもない間違いを犯すことにもつながるのです。わからないことは、すぐその場で解決するべきですわ。たとえ、人様に笑われてもいいのです。笑われるのは、一時のことですわ」

「そうだな。『聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥』と言うからな。わからないことがあれば、ドンドン聞けばいい」

そう言ってリノスも頷いている。二人の様子を見ながら、エリルは無言のままゆっくりと頭を下げた。

……そうか。わからなければ、聞けばいいのだ。

何か、シャリオの胸に、閃くものがあった。その一方で、また、一つの疑問が生まれた。

……この娘は、なぜ、黙っているのだ？

シャリオの視線の先には、黙々と食事を口に運ぶエリルの姿があった。何か、わからないことがあるのではないのか。にもかかわらず、彼女はどうして何も聞こうとしないのか？

……よし、彼女に聞いてみよう。

シャリオの眼が、キラリと光った。

第四百八十七話　察する

「う、う、う」

シャリオの前で、エリルは困った表情を浮かべながら答えに窮していた。彼女の質問があまりにも素直すぎたからだ。

それは唐突だった。食事が終わり、部屋に戻ろうとしたエリルにシャリオが近づいて来た。

「ちょっといいか？」

「え？」

「さっきは、何を聞きたかったのだ？」

「それは……」

「わからないことがあれば聞けばいいと言っていた。聞けばいいではないか。どうして聞かないのだ？」

「う、う、う」

戸惑うエリルに、リコレットが心配そうな表情で近づいて来た。

「どうしたのです、エリル？」

「……何でも、ない」

「何か、聞きたいことがあるのではなくて？」

「……大丈夫、です」

シャリオはリコレットと思わず顔を見合わせる。そんなとき、リノスの声が聞こえた。

「エリル、いいよ。すまないけれど、ファルコ君の着替えを手伝ってくれないか」

その声に、彼女はコクリと頷き、パタパタと走りながらダイニングを後にした。

「マト、すまない」

「わかった」

リノスに促されるようにマトカルが立ち上がる。その腕には、小さな男の子が抱かれていた。

「一体何なのだ、今のは？」

「うん？」

シャリオの言葉に、リノスはキョトンとした表情を浮かべる。

「どうして、あの人に謝ったのだ？　何か悪い事でもしたのか？」

「いや、そうじゃない」

リノスの言葉が全く飲みこめないシャリオは、首をかしげる。

「マトカルにエリルのことをお願いしたんだよ」

「何？」

「エリルは、聞きたいことがあったのだろう。でも、リコや俺には言い出せなかったのだよ。でも、マトなら言いやすいだろう。そう思って、お願いしたんだ」

「お願いする、などとは言っていなかったではないか」

「そこは、阿吽の呼吸というやつだ」

「アウンノコキュウ？」

リノスは、困った表情を浮かべながら、ポリポリと頬を掻いている。

「つまりはだな、関係が深まれば、自ずと伝えたいことがわかると言うやつだ」

「ふぅん？」

「お前たち黒龍は、相手のことを察する……みたいなものはないのか？　例えば、機嫌が悪そうだ、とか、体調が悪そうだ、とか」

「機嫌が悪そうだ、というのはわかる。怒っているからな」

「いや、そうじゃなくてだな……」

リノスは腕組みをしながら天を仰いでしまった。その様子を横目で見ながら、リコレットが口を開く。

「あなた方黒龍にはわからないかもしれませんわね。ただ、我々人間の世界では、暮らしを共にすればするほど、言葉ではなく、雰囲気や感覚で相手の考えていることがわかるものなのですわ」

「え？」

「言葉にするのは難しいのですけれど……。知らない人には、すべてを説明しなければなりませんが、気心が知れてくると、何となくわかり合えて来るのですわ。例えば……あれを取って下さいな、と言っても、あなたには何のことだかわかりませんわよね？　しかし、暮らしを長い間共にしていれば、それが何であるのかがわかるようになるのですわ。あなたも、同じ種族同士で、そういうことはなかったかしら？」

「スキルを使えば、大体わかる」

「スキルは必要ないのですわ」

シャリオは、スキルを使わずに相手のことがわかるなどということが信じられなかった。だが、実際目の前では、リノスがエリルの様子を見て、マトカルに指示を与えていた。後にこれが「察する」ということをシャリオは教えてもらった。このとき以降、彼女は相手を察することに注力するようになったのだった。

一方、エリルの母親であるリコレットは、娘が何を聞きたかったのか、なぜ、そのことを自分に言ってこなかったのか、一抹の寂しさ

を覚えながら、思いを馳せるのだった。

同じ頃、マトカルの部屋では、エリルとマトカルが短い会話を交わしていた。

「シャリオちゃんのスキル、高い？」

「ああ」

「どのくらい？」

「おそらく、フェリス殿を超える」

「……わかった」

エリルは慣れた手つきで、ファルコのおむつを替えている。

「ありがとう、助かった」

「ん」

エリルにとって、マトカルは一番話しやすい相手だった。あまり多くは語らない母――。それが、彼女にとって最も居心地がよかった。

物心ついた頃から彼女は、鋭い感性を身に着けていた。そのために、相手の考えていること、感情の起伏などを敏感に読み取ることができた。さらには、優秀な頭脳を持っていた彼女は、いわゆる『一を聞いて十を知る』ことのできる女性だった。そのために、少し話を聞けば、相手が言わんとしていることを理解することができたのだ。

だが、その優れたスキルのために、生みの母であるリコレットについては、苦手意識を持っていた。ママ――リコレットは、一つの事柄を聞くと、その全ての情報を伝えようとする。それが、彼女にとっては苦痛だった。――そこまで言わなくても、わかる、と。

例えば、父、リノスが持ち込んだ「箸」という道具。これの使い方を説明するのに、リコレットとマトカルでは、全く異なるのだ。

リコレットの場合、箸という道具はどのように使えばよいのかという説明から、それを使うことの意味、上手な使い方……そうしたことが次々と説明されていく。そして、幼い子供については、わざわざ膝の上に乗せ、手を取って使い方を教えるのだ。これは、エリル以下、子供たち全員に行われたことで、いわばリコの行儀作法の教え方は、この家の名物となりつつあった。

彼女の教え方は辛抱強かった。できるまで、何度でも膝の上に子供を乗せ、手を取って教え続ける。そして、できれば満面の笑みで褒めるというものだ。こうしたやり方は、どちらかと言えば不器用な子供たち――イデアやピアトリス――たちにとっては、とても心に響くものだった。また、フォークや箸など、食べ物を扱う道具で遊んだり、いたずらをしたりしたとき――主に、アリリアがそれをするのだが――なども、ママのお膝に座らされて、もう一度、その使い方を教えられる。だが、生来器用なエリルは、ママのお膝に乗る前に、ある程度の使い方を習得することができていた。彼女にとっては、手取り足取りの説明は必要なく、ただ、悪かった点を指摘して、どうすれば改善できるのかを教えてもらうだけでよかったのだ。

対してマトカルの場合、まずは自分が使って見せて、相手に使わせる。そして、上手くいかない場合は、どうすればうまくいくのかを端的に教えてくれるのだ。

リコレットの説明も、単に長いだけではなく、的を射た内容で、説明を受ける側がとても分かりやすいものなのだが、如何せん、エリルにとっては、その説明の半分も聞かないうちに内容が把握できてしまい、あとの説明については、単に自分が思った内容を確認するだけの作業となるのだ。幼い彼女に、それを心の中で上手に処理していくだけの手法は、まだないといってよかった。母、リコレットの振る舞いが、深い愛情のものであることを彼女が悟るのは、まだ先のことだった。

とはいえ、リコレットの懇切丁寧な話し方は、他の子供たちには好評だった。とりわけ、弟のイデアとピアトリスは、母の話を興味深そうに聞いていた。彼らにとってリコレットは、とても丁寧に説明してくれる、なくてはならない、やさしいママだった。

しばらくして、シャリオはマトカルから呼び止められた。

いつもの鎧姿に身を包み、帯剣したマトカル。これからアガルタに出勤するその直前に、彼女はシャリオの前で足を止めた。

「エリルに、色々教えてやってくれ」

「え？」

それだけ言うと、マトカルはスタスタと屋敷を出て行ってしまった。

……教えるって、何をだ？

シャリオは戸惑いの表情を浮かべる。しかしこれが、シャリオとエリルの仲を急速に結び付け、二人は大親友になるきっかけとなるの

だが……。そんな未来は、誰も想像すらしていないことだった。

第四百八十八話　相談

【リノス（結界師・２８歳）ＨＰ：５４７９４　ＭＰ：７００１２】

結界魔法ＬＶ５　火魔法ＬＶ５　水魔法ＬＶ５　風魔法ＬＶ５　雷魔法ＬＶ５　土魔法　ＬＶ４　回復魔法ＬＶ５　生活魔法ＬＶ２　詠唱ＬＶ５　鑑定魔法ＬＶ５　剣術ＬＶ５　ＭＰ回復ＬＶ５　気配探知ＬＶ５　魔力探知ＬＶ５　魔力吸収ＬＶ５　肉体強化ＬＶ５　回避ＬＶ５　行儀作法ＬＶ４　教養ＬＶ５　麻痺耐性ＬＶ５　毒耐性ＬＶ５　精神魔法ＬＶ５　精神耐性ＬＶ５　黒魔術ＬＶ５　加護ＬＶ５　洞察ＬＶ５　空間魔法ＬＶ３

＜軍神＞　＜知神＞　＜大魔神＞　＜鉄人＞　＜鉄腕＞　＜闘将＞　＜智将＞　＜名伯楽＞　＜人心収攬＞

軍神：剣術ＬＶ５、雷魔法ＬＶ５、風魔法ＬＶ５　知神：鑑定魔法ＬＶ５、回復魔法ＬＶ５　大魔神：黒魔術ＬＶ５、精神魔法ＬＶ５　鉄人：精神耐性ＬＶ５、毒耐性ＬＶ５、麻痺耐性ＬＶ５　鉄腕：肉体強化ＬＶ５　闘将：火魔法ＬＶ５、水魔法ＬＶ５　智将：詠唱ＬＶ５、ＭＰ回復ＬＶ５、魔力吸収ＬＶ５　人心収攬：加護ＬＶ５　教養ＬＶ５　結界魔法ＬＶ５　気配探知ＬＶ５　魔力探知ＬＶ５　回避ＬＶ５　洞察ＬＶ５

「う～ん」

目をぎゅっと閉じながら天を仰いでいるのは、アガルタ王リノスだった。彼は、執務室の椅子に腰掛け、腕組みをしながら、先ほどから何やら考え事をしている。机上には、自身のスキルが殴り書きされた紙が載っている。

「何でなんだろうなー」

誰に言うともなく、彼は呟く。眼を開き、足を組みなおして、両手を頭の後ろで組みなおす。

「まあ、考えても分からんものは分らん。しゃーないな」

そんな独り言を言ったかと思うと、彼は机の上の紙を懐にしまって立ち上がった。

その次の日、彼の姿は、帝都の屋敷の庭にあった。傍にはゴンが従っていたが、なぜか彼は大きなため息をついていた。

「どうしても、でありますかー？」

「ああ。ゴン、行きたくなければ、本当に来ないでもいいぞ」

「そうもいかないでありますー。吾輩の姿がなければ、あの変態女官共が、吾輩を呼び出す口実を与えることになるでありますからなー」

その声にリノスは苦笑いを浮かべる。

◆◆◆

「おお、久しいのう」

機嫌のよさそうな声を出しているのは、おひいさまだ。だが、彼女の様子に反して、その前に座るリノスの表情は強張っている。それもそのはずで、おひいさまはいつもの九尾の狐の姿ではなく、人化

した状態だったからだ。

萌えのツボを完全に押さえた姿のおひいさま。ゆらゆらと揺れる九本の尻尾が、そのクオリティーの高さをさらに高めている。

「なんじゃ、どうしたのじゃ？」

「あっ、いえ、その……」

「うふふ、妾の姿に驚いておるな？　さもありなん。妾のこの姿……巷の男どもは皆、心を奪われるようじゃからの」

おひいさまは、クックックと笑っている。その様子を見て、傍に控えていた女官の千枝と左枝が、とてもお美しゅうございます、などと追随している。話を聞けば、たまにこの姿で巷に出没して、色んな男たちからナンパされるのを楽しんでいるのだという。ふと後ろに視線を向けると、ゴンがおひいさまを呆然とした表情で眺めている。どうやら、彼もその姿に魂を奪われているようだ。

「で、今日訪ねてきたのは、何の用じゃな？」

おひいさまの声で、我に返る。

「本日は折り入って相談がありまして」

「ほう、相談とな」

「はい。それにつきまして、まずはお土産を……」

「おお！　待ちかねたぞよ！」

目をキラキラ輝かせるおひいさまと女官たち。その様子を見ながら彼は、無限収納から大きな箱を取り出す。ふたを取ると、中には底に緑色の葉っぱが敷き詰められた、透明な寒天のようなものが入っていた。

「これは、何じゃえ？」

「葛を固めたものです」

「くず？」

「はい。百聞は一見如かず。まずは、食べてみてください」

彼はよっという掛け声とともに、箱をひっくり返した。すると、蓋の上に真四角の大きな透明な塊が落ちてきた。彼は葉っぱをきれいに取り払うと、その上から真っ黒い、ドロドロとした液体をかけていく。

「どうぞ、お食べ下さい」

おひいさまは、訝しそうな表情を浮かべながら鼻を近づけて匂いを嗅いでいたが、やがてチラリとリノスの顔を見ると、口を大きく開けて葛にかぶりついた。

「……上品じゃ。程よい甘さじゃ」

「気に入っていただけると、うれしいのですが」

「気に入ったぞよ」

「ありがとうございます」

「この菓子は、妾にこそふさわしい。千枝、左枝、今回は、そなたたちへの下げ渡しは、無しじゃ。すべて妾が食すぞよ」

「そんな、おひいさま……」

「ええい、黙りゃ。ああそち、この葛……を、あと百個ほど持って来るのじゃ」

「百個は……難しいですが、いくつかご用意して、近日中にお供えしましょう」

「たんとじゃ。たんとじゃぞよ」

「承知しました。あ、千枝さん、左枝さん、そんなに気を落とさないでください。ちゃんと、あなた方へのお土産もありますから」

「おおさすがリノス様。わかっておいでじゃ」

リノスは無限収納から、二つの小さい木箱を取り出す。その中には、緑色のゼリーのようなものが入っていた。

「これは、わらび餅と言います。きなこをかけて召し上がってみてください」

彼女らは勧められるままにきなこをかけ、わらび餅を口の中に放り込んだ。

「ほう、餅のような食感ですが……。何とも程よい甘さで……」

「冷たくて、美味しゅうございます」

二人は顔を見合わせながら笑みを交わしている。その様子を、おひいさまが横眼でじっと睨みつけている。

「大丈夫です。おひいさまの分もありますから」

そう言って彼は、木箱をおひいさまに手渡す。彼女は、満足そうな笑みを浮かべながら、それを受け取った。

「で、相談というのは、何じゃえ?」

おひいさまは口をもぐもぐさせながら話しかけてきた。弾力のあるわらび餅をかみ切るのに、少し苦労しているようだ。

「はい、他でもありません。スキルのことです」

「スキルのことじゃと?」

「はい。御存じのとおり、俺はかなり高いスキルを持っています。ただ、最近、そのスキルがうまく使えていない気がするのです」

「どういうことじゃえ?」

「例えば、鑑定スキルですが、今までは、スキルを発動すれば、その人の過去から考えていることまで手に取るように分かったのですが、最近では、人によって、それができない場面が多く見られるようになったのです」

「つまりは、過去や考えが読めぬ、ということかえ？」

「その通りです」

おひいさまは、フムと唸ったかと思うと、手についたきなこをペロペロと舐めながら、何かを考えている素振りを見せた。

「理由は簡単じゃ。そなたの腕が落ちたのじゃ」

「腕が落ちた？」

「考えてもみよ。いくら最強の剣士と言えど、修行も何もせぬでは、その腕は落ちていくであろうが」

「なるほど……。でも、スキルを見ると、相変わらずＬＶ５と表示されているのですが……」

おひいさまはフゥとため息をつくと、まるで、噛んで含めるような言い回しで説明を始めた。

「確かにそなたは、ＬＶ５のスキルを持っているのじゃろう。じゃが、そのスキルを上手くいかせておらん、ということじゃ」

「上手く……活かせていない……」

「特に鑑定スキルは、注意深くその者のことを観察することが必要じゃ。そなたが見えぬと言っていた者……鑑定するときに、注意深くその者を鑑定するようにしたかえ？」

「……一瞬発動させただけです」

「それ見よ。それでは、高レベルのマジックアイテムや高位の魔術師にかかってしまえば、見えなくなることもあろう。また、相手のスキルが高ければ高いほど、よくよく注意して見ねば、間違った情報が表示されることも多い。故に、鑑定スキルを発動するときは、よくよく注意して見ることが必要じゃ」

「なるほど……心当りがあります」

「そうじゃろう。今一度、おのれのスキルを見直し、注意深くそれらを使ってみるのじゃ。さすれば、そなたの悩みは解決に向かうであろう」

そこまで言うとおひいさまは、リノスの後ろに隠れていたゴンに向って手招きをする。キョトンとした表情を浮かべながら前に進み出てきた彼に、おひいさまはスッと右手を差し出した。すると、ゴンの身体が黄色い光に包まれた。

「あれ？」

気が付くと、おひいさまたちの姿はそこになかった。その瞬間、部屋の外から男の怒鳴り声が聞こえてきた。

「おひいさま！　おひいさま！　どこにおいでじゃ！　おひいさま！」

ガラリと障子が開かれると、そこにはサンディーユが立っていた。

「ここにおいでか！　まだ爺の話は済んでおりませぬぞ。今日はた

っぷりと小言を聞いていただく！」

「え？　え？　ちょっと？」

サンディーユはゴンの腕をつかんだかと思うと、彼を連れて部屋を出ていってしまった。その様子を、リノスは唖然とした顔で見守っていた……。

第四百八十九話　邪魔するな！

その頃、リノスの屋敷では、黒龍のシャリオが庭に出て空を眺めていた。

「……」

彼女の視線の先には、うろこ状の雲が広がっていた。その様子をじっと観察し続けている。

「何をしているの？」

背後から声がする。振り返ってみると、そこにはリノスの娘である、エリルの姿があった。シャリオは彼女を一瞥すると、再び空を見上げた。

「嵐に……なる」

「え？」

誰に言うともなく、シャリオが呟く。その答えがあまりにも意外だったのか、エリルが思わず声を上げた。

「お天気、いいけれど……」

「いや、この雲が出ると、近いうちに嵐になることが多い」

「すごいね。どうしてそんなことを知っているの？」

「どうして……。何度も見てきたからだ。嵐になると色々なものが飛んでくる。眠りを妨げられる。だから、嵐の前に、風や雨を凌げるところに移動せねばならない」

「すごいね、シャリオちゃんはいくつなの？」

「数えたこともない」

「ふぅ～ん」

二人の間に沈黙が流れる。シャリオは再び視線を空に向けた。そして、エリルも彼女と同じように視線を空に向ける。穏やかな時間が流れる。

「シディー母さんに聞いてくる」

そう言ってエリルは屋敷に戻っていった。その後ろ姿を見ながら、シャリオはこの娘の間合いの良さを感じていた。

しばらくすると、エリルを伴ってシディーが庭に出てきた。彼女は、右手の人差し指をあごの下に当てながら、空に視線を向けた。

「うん、確かに、嵐の予感はするかな。でもこれは……自然に起こるものではない気がするわね」

「え？　どういうこと？」

「私もよくわからないけれど……。何だか人為的に……つまり、誰かが無理やり嵐を起こそうとしている気がするわね」

シディーの言葉に、エリルは目を丸くして驚いている。そこに、シャリオがやってきた。

「確かに、この冬になろうという季節に、嵐が来るというのは経験したことがない。なるほどな。魔力を使って、天候を変えている可能性はある」

「そんなこと、できるの？」

「ああ、可能だ。だが、それには途方もない魔力が必要だ。今、私は、スキルを奪われてしまって、よく把握できないが、元の状態に戻れたら、多少は天候を変える自信はある。もっとも、少し雨を降らせる程度だが」

「今のシャリオちゃんの話からすると、嵐を呼ぶとなると、相当の魔力が必要になるわね。でも……そんな巨大な魔力は一切感じないし、私の直感にも反応しないわ。ここは……リノス様が戻られたときに、一度、お話してみるのがいいかもしれないわね」

「何か、悪いことが、起こるの？」

不安そうな表情を浮かべるエリル。その彼女に、シディーはニコリと笑顔を向ける。

「心配しないで。あなたのお父さんが、何とかしてくれるわ。大丈夫よ」

その言葉に、エリルはホッとした表情を浮かべる。だが、シディーは感じていた。何とも言えぬ嫌な予感があることを。それをどうし

ても、エリルには伝えることができなかった。

◆　◆　◆

「……なるほど」

リノスが屋敷に戻ってきたのは、夕方近くになってからのことだった。リノスもゴンも何だか疲れていて、ダイニングのテーブルに腰掛けるなり、二人は大きなため息をついた。

彼らが戻ってくると、すぐに夕食が始まり、ワイワイといつものようなにぎやかな食事となる。シディーは天候のことをいつ、リノスに話そうかとタイミングを計っていたが、子供たちの面倒を見ながら相談することは、困難と言えた。そこで彼女は、リノスが風呂に入るタイミングを見計らって、相談することにした。

子供たちを風呂から上げ、ピアトリスたちの体を拭き、パジャマに着替えさせる。この一連の作業はリノスの妻たちが行ってきたが、今ではエリルとアリリアが手伝ってくれるようになって、その労力は大幅に少なくなっていた。マトカルはファルコを抱っこしたまま部屋に戻り、着替えを終えた子供たちは、パタパタとリコの部屋に走っていく。今夜はリコが絵本を読んで寝かしつける日なのだ。

風呂の中では、リノスとソレイユが入っている。シディーはいそいそと服を脱ぎ、取っ手に手をかけた。そのとき、中から艶めかしい声が聞こえてきた。

「ハッ、ウフッ、アーッ。アッアッアッアー」

……え？　お風呂の中で？　いや、ソレイユなら、可能性はなくは

ない。……てゆうか、声が外まで丸聞こえだけれど。

さすがに、二人の時間を邪魔するのは憚られる。彼女はゆっくりと扉から離れようとする。

「うわっ！」

自分が脱いだ服に足を取られて、シディーは思わず尻もちをつく。そのとき、風呂の扉が開いて、一糸まとわぬソレイユの裸体が現れた。

「シディー。どうしたの？」

「え、あ、う、ごめんなさい。邪魔する気は、ないの」

「何のこと？」

「ううう……」

「一緒に入りたいのなら、入ってくればいいじゃない。さ、入りましょ」

ソレイユに促される形で、シディーは顔を真っ赤にしながら、風呂場に入った。

「ハッハッハ！　シディーとしたことが、とんだ早とちりだな」

リノスは湯船につかりながら、大爆笑していた。何と、艶めかしい声だと思っていたのは、ソレイユの歌声だったのだ。彼女はリノスの疲れが癒える歌を少しばかり歌っていたのだと言う。

「誰だって、あんな声を聞いたら……」

「私は、いつでもどこでも、大丈夫ですよ」

顔を半分まで湯船に着けているシディーを横目に、ソレイユはリノスに腕を絡ませて、その豊満な胸を押し付けている。リノスは少し戸惑った表情を浮かべながら、シディーに視線を向ける。

「リノス様、実は、相談がありまして」

「相談？」

「私は、外したほうがいいかしら？」

「いえ、居てもらって大丈夫。実は今日のお昼に……」

シディーはその日あったことをリノスに説明する。彼は顎に手を当てながらそれを聞いていたが、やがてゆっくりと立ち上がり、空の様子を見てみようと言った。

リノスは着替えを済ませると、シディーとソレイユを伴って庭に出た。空に視線を向けるが、星は見えない。おそらく薄い雲が空を覆っているせいなのかもしれない。

リノスはじっと空を眺め続けている。ときおり、首を左右にゆっくり振りながら、まるで空に何かを探しているかのようにじっと視線を向け続けた。

「……確かに、感じるな」

誰に言うともなく、リノスが呟く。その首筋には汗が光っていた。
彼は空を眺めたまま、さらに言葉をつづける。

「……とても微弱だが、空全体に、魔力を感じる。待てよ？　一種類じゃないな？　……二つ……イヤ、三つか？　複数の魔力が混ざり合っている……か？　これは……どこから……うん？　結構遠い……か？」

「ウワッハッハッハ」

突然、笑い声が響き渡る。驚いて視線を向けてみると、そこには何と、龍王が立っていた。

「我を阻む結界が張られておらんと思っていたら、皆で我を出迎えるとは、殊勝ではないか。褒めてやるぞ」

その言葉に、リノスは舌打ちをしながら、龍王をにらみつける。

「馬鹿野郎、邪魔すんじゃねぇよ！」

「何だと？」

「せっかく空を覆う魔力を辿っていたのに、わからなくなっちまったじゃねぇか。それに一体何だ、こんな夜更けに！　お前、まさか、夜這いでもかけに来たんじゃないだろうな」

「よばい？　何だそれは？　今日は話があってきたのだ」

「話だぁ？　言っておくが、娘はやらんからな」

「何を言っているのだ！」

彼は腕を組みながら、長い尻尾をするりと動かしたかと思うと、勢いよくそれを地面に叩きつけた。バシン、といい音が響き渡る。そして、リノスに鋭い視線を向けながら、ゆっくりと口を開いた。

「黒龍の、ツネたち兄弟全員の姿が消えたのだ」

第四百九十話　不必要？

「何？　どういうことだ？」

怪訝な表情を浮かべる俺に、龍王は表情を変えることなく、さらに言葉をつづける。

「ツネたち黒龍兄弟は、今、住んでいる島から離れないことを条件に群れから離れることを許されている。掟厳しい奴ら一族にとってこれは、破格の待遇だった。だが、奴らはそれを破り、姿を消した」

「……ウチにいる、あのシャリオを取り戻しに来るつもりか」

「おそらくは、な」

「わかった……」

とすれば、黒龍たちは全力で俺たちに攻撃を仕掛けてくる可能性が高い。このことをシャリオに伝えて、対策を練らなければならない。屋敷を見つめながらそんなことを考えていると、龍王がニヤリと笑いながら何度も頷いている。

「何だ、どうした？」

「貴様、わかってきたではないか」

「うん？　何が？」

「フフフ。さあ、我を案内せよ」

「もしもし？　何を言っておいでです？」

「何を……？　貴様、我をこの屋敷に迎えるのではないのか」

「え？　何て？　おかしいな。耳がおかしくなったのかしら？」

龍王はゆっくりと腕組みをしながら、顎をクイッと上げる。明らかに怒っている様子だ。

「我がこの屋敷に逗留して、襲ってくるツネたちを撃退してやろうというのが、わからんのか？」

「……お気持ちは大変ありがたいのですが、間に合っています」

「ほう、では、貴様一人で、ツネたちを相手にできるとでもいうのか？」

「……いえ、その件につきましては、まだ、検討段階でございまして、これにつきましては、問題の重要性を鑑みますと、やはり議論に議論を重ねまして、慎重に結論を出したく存じますので、今しばらくの猶予を頂戴いたしたく、思う次第でございます」

「猶予？　貴様、そのような時間があるとでも？」

「ご指摘は誠にごもっともではございますが、先に申し上げました通り、問題の重要性が高いという観点から、すぐに結論を出すべき事案ではなく、限られた時間の中で十分に議論を重ねた上で、結論を出すべきものと承知致しております。その点をお汲み取りいただ

きまして、今しばらくのご猶予を頂戴したく思う次第でございます」

龍王の首がカクンと横に倒れる。見ていてちょっと面白い光景だが、そんな俺たちの様子を見かねたのか、シディーがスッと寄ってきて、クイクイと俺の袖を引っ張る。

「……遊んでいないで、結論を先に言ったほうがいいと思います」

何とか、国会の答弁みたいな感じで煙に巻こうと思ったが、厳しいようだ。そう考えると、あんな答弁を繰り返すことができる人たちは、基本的に頭が良いのだろう。頭脳の使い方は激しく間違っている気がするが。

「その点については、大丈夫だ。お引き取り下さいましな」

「……貴様、何を言っているのか、わかっているのか？　ツネたちを甘く見ないほうが良い。少なくとも、この我と拮抗するだけの力を持っているのだ。貴様一人の力では手に余ることは明白だ。この屋敷が襲われれば、貴様は妻や娘を守りながら戦わねばならないのだぞ。そこにいる、若いドワーフやサイリュースに被害が及ぶやもしれぬのだぞ？」

「若いだなんて、そんな……。事実、若くはありますけれど……」

シディーが両手を頬に当てながら、顔を赤らめている。……そこじゃないだろう。

視線を龍王に戻してみると、ヤツは腕を組みながらドヤ顔をしている。コイツの魂胆は分かっている。そういって屋敷に入り込み、アリリアに近づこうとしているのだ。何て大胆不敵なヤツなのだろう

か。こんな虫を入れてしまえば、どんなことになるだろうか……。
ああ、想像するだけでも恐ろしい。

俺はコホンと咳払いをすると、彼に向けて、噛んで含めるように話を始める。

「龍王、お前はお前なりに考えてここに来たのだろう。その行動力は褒めてやっていい。だが、そこから先はダメだ。俺を説得しないとな」

「何だと？」

「忘れていないか？　我が家には、神龍様がいることを」

「なっ！？」

龍王が目を見開いて驚いている。どうやら、本当にその選択肢は頭の中になかったようだ。

「シャリオの兄たちのスキルに関しては、俺も認識しているつもりだ。まさか、こんなに早く行動を起こすとは思ってもみなかったが、彼らに関しては、神龍様のお力添えをいただこうと思う。ご苦労だったな、龍王。知らせてくれたことには、感謝する。まあ、何だ。ちょっと今はゴタゴタして、おもてなしはできないが、しばらく時間をおいてから、来ればいい。そうだな……いや、三千年後にでも改めて来るといい」

俺はそう言いながら、右手をヒラヒラさせて龍王に帰るように促す。
彼は無表情のまま、俺を睨んでいる。

「……ぬうん」

突然、彼が両手の掌を合わせたかと思うと、苦しそうな声を上げた。
その直後、彼の両手がまばゆいばかりの光に包まれる。

すぐに光は収まった。気が付くと、龍王の掌に小さな水晶玉のようなものが載っていた。彼はそれをスッと俺に差し出す。

「何だ、これは？」

「龍玉だ」

「リュウギョク？」

「我とつながることのできる玉だ。これに魔力を通せば、すぐに我は駆け付けるであろう」

「手前どもには、必要ございませんが？」

「貴様にはなくとも、アリリアにはあるだろう！」

「何ぃ！？」

「アリリアは我を呼ぶとき、いつも長い詠唱をしているだろう！あんな幼い子供に、長い詠唱をさせるのは酷であろう。我の龍玉を与える。これでいつでも、我を呼ぶといいとアリリアに伝え……コラ、貴様！」

俺はその玉を、思いっきり遠くに投げていた。

◆◆◆

「まあ、そんなことが……」

龍王の作った龍玉をメイは珍しそうに眺めている。あの後、龍王は再び掌に龍玉を出して俺に渡してきた。当然俺はそれを遠くに投げるが、龍王はさらに龍玉を作り出した。さすがに見かねたシディーとソレイユが間に入り、受け取るだけは受け取ることにしたのだった。

シディーたちと相談した結果、アリリアに渡すかどうかは一旦メイに相談したほうがいいだろうということで、俺は取るものもとりあえずメイの部屋を訪れたのだった。

彼女は机に向かって、何か書いている最中だった。その傍らのベッドには、アリリアが幸せそうな表情を浮かべながら、ぐっすりと眠っている。俺はその寝顔に癒されながら、メイにこれまでのことを話して、龍玉を彼女に渡した。

正直、気持ち悪い。この球を通して、龍王がいつでもここにやって来ると考えると、吐き気すら催してくる。ウチの娘に近づく男の虫は、何としても駆除しなければならないのに。

そんな俺の心配をよそに、メイは龍玉を、何か虫眼鏡のようなものを使って、じっと観察している。そして、机の上にあったビーカーのようなものを取り出して、そこに水を注いでいく。

「メイ？」

彼女はニコリと笑うと、その中に龍玉を入れた。しばらくすると、

玉から小さな泡が出ているのが見えた。

「何だ、これ？」

「おそらく、この玉から空気が出ているためだと思われます」

「え？」

「調べてみないとわかりませんが、おそらくこれは、キングロックだと思われます」

「キングロック？」

「周囲を浄化する効果のある石です。これを持っていれば、寿命が延びると言われています。おそらく、この玉から出る空気が、周囲を浄化していると思います。私も一度だけ見たことがありますが、とても珍しいものです」

「マジで？」

「大国の皇帝に代々引き継がれるような、とても貴重なアイテムです」

「はぁぁぁ……」

「龍王様がこちらにおいでになるかどうかはさておいて、アリリアはまだ魔法は使えませんから、龍王様に連絡を取ることはできないかと思います。この子にも、あまり龍王様のお手を煩わせないように言い聞かせないといけませんね。それよりも、せっかくいただいた、このような素晴らしいもの……。アリリアに持たせていれば、

この子だけでなく、バーサーム家にとってとても有益だろうと思うのですが……」

メイは優しく微笑みかける。その表情は、俺の心の不安をゆっくりと溶かしていくものだった……。

第四百九十一話　天変地異

次の日、ヒーデータ帝国の帝都は、激しい大雪に見舞われた。晩秋のこの時期に雪が降るのは珍しい。ましてや、大雪となると、それはこの国に住む長老でさえ記憶にないという程の珍しさだった。

リノスが起床すると、辺り一面が雪景色になっていた。しかも雪はドンドン降り積もっている。あまりの天気の変りぶりに、リノスは驚きを隠すことができなかった。

「やはり、嵐になった」

空を見上げながら呟いているのは、シャリオだった。その彼女の後ろで、大きく頷いているのは、リノスの妻の一人である、シディーだ。

「昨日、空に魔力を感じたが、やはりアレが原因だったか」

「やっぱり、兄たちの力が働いている」

「……」

リノスは無言のままシャリオを見つめる。ダイニングに集まった家族全員が、彼女に視線を向けている。そんな様子を見廻しながら、シャリオはゆっくりと口を開く。

「こんなことができるのは、おそらくターチャとショースの兄さまたちだ」

「ターチャとショース……」

「兄さまたちは、天候を操る魔法が得意だ。二人であれば、天候がこれだけ変わるというのも頷ける」

「これだけ雪を降らせて、奴らは一体、何を考えているんだ？」

「わからない。ただ、魔力を消耗するだけのことだ。何のためにこれをしようとしているのか、私にもわからない」

「……邪悪なものを感じます。早くこれを止めないと、大変なことになります」

シディーがいつになく真剣な表情で話しかけてくる。そのとき、屋敷の玄関の扉を激しく叩く音がした。

「誠に恐れ入ります！　ヒーデータ帝国皇帝の勅使、セオーノです！　アガルタ王様に、お取次ぎを願います！　誠に恐れ入ります！　お取次ぎを願います！」

あまりにも切羽詰まった声だったために、慌てて玄関に向かおうとしていたペーリスを止めて、リノスは一人で玄関に向かった。

「おお、アガルタ王様……」

「久しぶりですね、セオーノさん」

「ハッ……」

この人は、リノスがジュカ王国からヒーデータ帝国にやってきたときに、帝都を案内してくれた人だった。その後も、彼が結界石屋を始めたり、スーパーを開業したりしたときも、よく顔を出してくれていた人であった。だが、リノスがアガルタの国王になってしまってからは疎遠になってしまっていて、本当に久しぶりに会うことができたのだった。

ちなみに、結界石屋もスーパーもちゃんと営業していて、繁盛している。結界石は当初はリノスが作っていたが、今は何と、ゴンがそれを作っている。リノスが彼にその製造方法を教えたのだが、なかなかマスターするのに時間がかかったものの、今では結界ＬＶ３までのであれば、問題なく作ることができるようになっていた。彼の色町での遊び金は、この売り上げから出ているのだ。

色々と積もる話もあるが、セオーノの切羽詰まった様子が、その話をすることを躊躇わせた。彼はリノスの顔を見て安心した表情を浮かべていたが、やがて片膝をついて、畏まった。

「至急の用向きでございますため、ご無礼の段、お許しください」

「そんなに畏まらないでください、セオーノさん。まずは中に……」

「恐れ入ります。こちらで結構です。アガルタ王様に、陛下より至急のお願いがございます」

「承ります」

「恐れ入りますが、この帝都全体に、結界を張っていただきたく、お願いに上がった次第です」

「もしかして、この天候が……」

「その通りです。すでに一宮城＜きゅうじょう＞の周辺には深く雪が積もり、雪かきすらできない状態です。私も、こちらに来るまでに帝都の様子を見てまいりましたが、雪のために道が寸断されている箇所も多くございました。おそらく、帝都のあちこちでも同じ状況かと思われます。このままでは、帝都の機能が完全に停止してしまいます」

「わかりました。今すぐ結界を張りましょう」

そう言うとリノスは外に出て、空を見上げる。スッと手を出すと、その手の上にみるみる雪が積もってくる。彼は小さなため息をつくと、目を閉じて詠唱を開始した。

「……止んだ」

セオーノが小さな声で呟く。先ほどまで降っていた雪が嘘のように止んでいた。だが、空は相変わらず真っ黒い雲で覆われていて、何とも言えぬ不気味さを感じさせる。

「これで、これ以上雪が降り積もることはないと思います。結界の外面には、熱を持たせてありますので、雪は結界に当たるとすぐに溶けてなくなるかと思います」

「ありがとうございます。陛下もこれで、安心なされるかと思います。あの……それで……」

「何でしょうか？」

「私とともに、陛下の許にいらしていただけませんでしょうか？」

「え？　どういうことです？」

「その……宰相様が仰るには、アガルタ王様はきっと、帝都に結界を張って下さるだろうと。それが済んだら、すぐに陛下の許にお越しいただきたいと伝えよと。アガルタ王様ならば、私と一緒に転移してくださるはずだと」

「……何という。わかりました。少しお待ちください」

リノスはそう言うと、踵を返してダイニングに戻っていった。彼はそこを抜けて離れにある自室に向かう。そこには、リコがエリルら子供たちとともに控えていた。

「リコ、今から陛下のところに行ってくる」

「まあ、兄上が？」

「至急会いたいそうだ」

「わかりましたわ。それでは、着替えを……」

「ああ、頼む」

リコはいそいそと衣裳部屋に向かっていった。その彼女を追いかけて、子供たちも付いて行く。

「アリリア」

リノスに呼び止められたアリリアは、キョトンとした表情を浮かべる。そんな彼女にリノスは手招きをして呼び寄せ、懐から龍王から贈られた龍玉を取り出す。

「これは、龍王からアリリアに渡してくれと頼まれたものだ」

「ええっ？　りゅーおーくん、来てくれたの？」

「ああ。夜遅くに来たんだ。アリリアは寝ちゃっていたな」

「ええー。つまんないの」

「その龍王からアリリアに、これを渡してくれと頼まれたんだ。大切に持っておくといい」

アリリアはリノスから龍玉を受け取ると、不思議そうな表情を浮かべてそれを見ていたが、やがて、大切そうにそれを持って、パタパタと部屋を出ていった。

……あ、あの玉に、魔力が通らないように結界を張っておけばよかった。

もし、アリリアがあの玉に魔力を通せば、龍王はあの玉から出てくるのだろうか？　そんなことを考えていると、リコが子供たちを伴って、部屋に戻ってきた。

「これと、これを着てくださいませ」

「ありがとう。助かるよ、リコ」

彼は子供たちに手伝ってもらいながら、いそいそと服を着替える。
それが終わると、彼はリコに視線を向ける。彼女はじっとリノスの様子を見ていたが、やがて、ゆっくりと頭を下げた。それを見て、彼は行ってくると言って、部屋を後にした。

セオーノと共に、陛下の許に転移する。彼はさも、申し訳なさそうに陛下の私室に転移してほしいと言って頭を下げた。リノスは仕方なく、彼を伴って陛下の私室に転移する。

「おお、ようやく来たか。遅かったではないか」

陛下は、リノスの姿を見ると大きなため息をついた。その周囲には、宰相閣下、ヴァイラス公爵が控えていた。彼らも椅子に腰かけていて、待ちくたびれたという感じがありありと見て取れた。

「申し訳ございませんでした。雪のため、難渋をいたしまして……」

セオーノが片膝をつきながら、深々と礼をする。

「よいよい。そなたも、苦労であったの」

「ハハッ。勿体なきお言葉」

陛下は優しい笑みを浮かべていたが、すぐに真顔になってリノスに視線を向けた。

「まさか帝都にこれほどの雪が降るとは、予想外であった。すまぬが、知恵を貸してもらいたい」

「俺でよければ、何なりと」

「この雪を解かすためにどうすればよいかの。このままでは帝都が雪に埋もれてしまう」

「そうですね。そうなりますよね」

「アガルタは大丈夫であろうか」

宰相閣下が陛下とリノスを交互に見比べながら口を開く。

「そうですね。何かあれば知らせが来るはずですが……。特に何もないので、問題ないと思いますが、一度、確認しようと思います」

「それがよい。アガルタの状況を確認してから再び、こちらに戻ってきてもらえまいか？」

「わかりました」

そう言って、リノスはアガルタの都に向けて転移した。

第四百九十一話　天変地異（後書き）

Ｃｏｍｉｃブースト様にて、『結界師への転生』コミカライズ１１話が公開されています（ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ？ｃａｔｅｇｏｒｙ＝１４）。１２／３１１２：００まで無料公開中です。ジュカ王国編の最終話、是非、チェックしてみてください！

第四百九十二話　現状確認

アガルタに転移した直後、俺は、呆気にとられてしまって、しばらく動くことができなかった。それほどアガルタの都は、予想外の光景だった。

結論から先に言ってしまうと、アガルタは普段と何も変わっていなかった。ヒーデータの帝都とは別世界かと思ってしまう程の平穏さだった。

完全に拍子抜けしてしまい、ポカンと口を開けながら執務室の窓から都を眺めていると、いつものように、俺の到着を待ちかねていた兵士たちが、決済をいただきたいと言って、机の上に書類を置いていく。

「あと、昨日の夜、ラマロン皇国のカリエス将軍から書簡が届きました」

そう言って兵士の一人が、分厚い書簡を差し出す。そこには、年が明けたら、アガルタ軍とラマロン軍の共同軍事演習を行いたいと書かれてあった。俺はその書簡を丁寧に畳み、兵士に差し出す。

「これは、マトのところに持って行ってくれ。よく相談して、実施してくれと伝えてくれ」

「承知しました。それともう一点。使者の申しますには、来年早々に、カリエス将軍が元帥となられ、アーモンド司令官が総司令官に就任されるそうです。どうやらカリエス将軍は、現役を退かれるよ

うです」

「そうか。新総司令官就任のお披露目も兼ねている……か。それなら、俺も行かなければならないかな。せっかくだ。ラファイエンス将軍も連れて行こうか。将軍にその旨も伝えてもらえないかな」

「承知しました」

「リノス様、あと、フラディメ国のリボーン大上王様より書簡が届きました」

差し出されたものを見ると、厳重な封蝋が施されていた。あのジイさんが送ってくる書簡は、いつもこんな感じで、大仰なのだ。一見すると、何かとてつもない重要な内容が書かれているように見えるのだが、中身はさしたることのないことが多い。今回もそんな感じだろうと思いつつ、封を切る。

中には、太くて立派な字で、フラディメ国における学会の日程を決めたい、と書かれてあった。普通のペンで書いているはずなのだが、どうしてこうもゴシック体のような太い文字が書けるのだろうか。

そんなことを思いながら、この書簡も丁寧に畳み、兵士に差し出す。

「これは、メイのところに持って行ってくれ」

「承知しました。あとは……」

「すまない。今日の予定でキャンセルできるところは、できるだけキャンセルしてほしいんだ」

「は？」

「ヒーデータ帝国で大雪が降っているんだ。フェリスやルアラから聞いていないかな？」

「はい、ヒーデータから内々に勅使が来たことは伺いましたが、大雪というのは……」

「ああそうか。帝都ではとんでもない雪が降っていてな。ちょっとえらいことになっているんだ。俺はその対策に当たらねばならないんだ。もし、緊急のことがあれば、フェリスかルアラ……。もし、二人の機嫌が悪いようなら、メイかマトに言ってくれて構わない」

「し……承知しました」

兵士たちが退室すると、俺は執務室の窓を開けて、フェアリードラゴンのサダキチを呼び出す。

『……というわけなんだ。アガルタとその周辺の国を見廻って、天候と状況を調べてもらえないかな』

『承知しました』

そう言って、サダキチは姿を消した。そして、わずか一分ほどで戻ってきた。

『ヒーデータ帝国の帝都に入ることができませんでした』

『うん？　どういうことだ？』

『帝都の近くまで行くと、何かに押し戻されてしまって進むことができませんでした。おそらくあれは、結界のようなものが張られていると思われます』

『そうか。そんな雰囲気は感じ……いや、空に魔力が覆っていたのを感じた。それかな？　で、アガルタとその周辺の国々はどうだった？』

『全く問題はありません。雪は降っていませんでした』

『そうか、ご苦労だった』

そう言って俺は、サダキチに干し肉を与えて下がらせた。

……結界と大雪。シャリオの兄たち黒龍が動いているのは確かだろう。てっきり直接何らかの攻撃を加えて来るかと思っていたが、どうもそうではないらしい。それよりも何か、とんでもない計画が実行されようとしている。そんな予感がするのだ。

そのとき、執務室のドアがノックされた。入室を促すと、入ってきたのは何と、リコとソレイユだった。

「な……一体どうしたんだ？」

「リノス、申し訳ないのですけれど、すぐに帝都の屋敷に戻ってきてほしいのですわ」

「どういうことだい、リコ？」

「シディーが倒れたのですわ」

「何だって？」

「突然体を震わせて……。何か邪悪なものが近づいていると言って蹲ってしまったのです。それで、今はベッドに寝かせて様子を見ているのですが、シディーは一刻も早く、リノスを屋敷に呼び戻して欲しいと、呪文のようにつぶやき続けているのです。それで……」

「そうか。わかった。そんな緊急のことなら、念話で伝えてくれればよかったのに」

「やっぱり、伝わっていなかったのですわね」

「え？　どういうことだ？」

「私もソレイユも、リノスに何度も念話を送ったのです。しかし、リノスからは何の返事もなかったので、心配して見に来たのですわ」

「念話が通じない……。いや、でも転移結界は発動しているんだな？　ということは……」

「リノス、考えているところ申し訳ないのですが、一刻も早く、帝都の屋敷に戻ってほしいのですわ」

「わかった。でも、ソレイユまで来ることはないだろうに。子供たちのこともあるだろう」

「そうなのです。私は屋敷にいようと思ったのですが、シディーがどうしても二人で行けと言いまして……。一人では危険だから、と」

「そうなのか？　まあ、シディーがそう言うのならば、仕方がないな」

「安心してくださいな。子供たちの面倒はペーリスとシャリオが見てくれています。それに、エリルとアリリアも手伝ってくれていますわ」

「そうか。あの二人も、もう立派なお姉ちゃんになったな」

俺は少し、胸に寂しさを覚える。もう、あの二人を抱っこしてやることもなくなるのだろうな……。

そんなことを考えていると、ふと、リコとソレイユの視線に気づく。いかんいかん。まずは帝都の屋敷に戻らねば。

「じゃあ、屋敷に戻ろうか。あ、そのまえに、ヒーデータの陛下にアガルタの様子を報告してくるよ」

「わかりましたわ。早く戻ってきてくださいませね」

そう言ってリコとソレイユは部屋を出ていこうとする。

「ああ待て、リコ」

リコは不思議そうな表情を浮かべながら振り返る。

「結界を張っておこう」

「結界？　今、張っているのではないのですか？」

「いや、新たに張りなおす」

「はあ……」

「シディーの言っていることが気になるんだ。邪悪なるものに、リコやソレイユが傷つけられては堪らないからな。屋敷に帰ったら、シディーの結界も張りなおそう。メイやマトのもやりたいが……。二人にはすまないが、屋敷に帰ってきてからやり直そうか」

「わかりましたわ。そうしてくださいませ」

俺は二人の結界を解除して、新たに結界を張りなおす。今回は丁寧にイメージして結界を張る。ファルコ師匠の「魔法はイメージが大切」という言葉を思い出しながら……。

「ふう、終わったよ」

「ずいぶん時間がかかりましたわね」

「ああ。今回は特別に、丁寧に結界を張ったんだ。すまない、時間を取らせた。すぐに屋敷に帰ってやってくれ。俺もすぐに帰る」

リコとソレイユはとてもうれしそうな表情を浮かべながら、部屋を出ていった。

そのときの俺は、全く気付いていなかった。とんでもない間違いを犯していたことを。そして、このときのことを深く後悔することを……。

第四百九十二話　現状確認（後書き）

２０１９年最後の投稿となります。今年もお世話になりました。どうぞ皆さま、よいお年をお迎えください！

第四百九十三話　不満

「なるほどの。我が国だけか……」

俺の報告を聞いた陛下は、ゆっくりと息を吐きながら天を仰いだ。

その様子からは、予想通りという雰囲気を感じ取ったが、一方で、これから先のことをどうするのか、今のところ打つ手がないと言った感情も見て取れた。

「後のことは、宰相らとともに考えるとしよう。すまぬがまた、手助けを頼むこともあるやもしれぬ。そのときは、よしなに頼む」

そう言って陛下は笑みを浮かべた。俺は無言のまま頭を下げた。

その後すぐに帝都の屋敷に帰ると、何やら騒がしい雰囲気になっていた。見てみると、リコが困った表情を浮かべていた。

「ねえ、ちょっとくらいいいでしょ？」

「いけません」

「だからどうして？」

「シディー母さんがいいというまで、いけませんわ」

「窓を開けるくらいいいじゃない」

「いけませんわ」

リコとアリリアがそんな会話をしている。二人は俺に気が付くと、スッと話をするのをやめた。

「どうしたんだ？」

「アリリアが外で遊びたいと言ってきかないのですわ」

「うん？」

窓の外を見ると、雪がかなりの高さまで降り積もっている。アリリアに視線を向けると、彼女は口を真一文字に結んで、ふてくされている。

「マミーはどこに行ったんだい？」

「知らない」

そう言って彼女はプイっとそっぽを向いた。聞けば、リコたちがアガルタから帰って来てからは、子供たちを外出させないようにしているとのことだった。この時間帯は、子供たちは外で遊んでいる時間だ。しかも、これだけ雪が積もっているのだ。雪合戦や雪だるまなどを作って遊びたいというアリリアの気持ちもわからなくはない。

ちなみに、ソレイユは離れに行っているのだという。息子のセイサムに授乳するのと同時に、シディーの様子も見てくれているのだという。

「そうか。アリリア、外は危ないから、今日のところはお家の中で遊んでおくれ」

だが、アリリアはスネたまま何もしゃべらない。そんな彼女の傍にはフェアリが寄り添っているが、彼女はそのフェアリにも背を向けたままだ。

ふと視線を移すと、エリルとシャリオが心配そうに俺たちの様子を見ている。

「あれ？　ファルコとイデア、そして……ピアは？」

「ファルコはペーリスがオムツを替えていますわ。もうすぐ戻ってきますわ。イデアとピアは、シディーがアガルタのドワーフ工房に連れて行くようにと言っていましたので、リノスのところに行く前に、連れて行ったのですわ」

「はああ」

どうやら、アリリアは弟と妹だけが外に出ることができて、自分だけが外出できないのが納得できないようだ。

「アリリア、今日はとうたんはお休みだから、一緒に遊ぼう。おままごとでもしようか？」

「……」

完全にアリリアはスネてしまっている。ふとリコを見てみるが、彼女は放っておけという表情を浮かべている。とはいえ、このままでは……。

俺はしばらく考えてみるが、彼女の機嫌を直す方法が思い浮かばな

い。そのときふと、一つの考えが頭をよぎったが、それはよろしくないことなので、いかんいかんと頭を振った。

「どうしたのです？」

リコが怪訝な表情を浮かべている。俺は思わず苦笑いを浮かべた。

「いや、どうしたらアリリアの機嫌が直るかなと思って考えていたんだが……ちょっと、イヤなアイデアを思いついてしまった。いかんいかん」

「イヤなアイデア？」

「ああ、アリリアの機嫌は直ると思うが、どうもな」

「まあ、言ってみてくださいな」

リコが真面目な表情で尋ねてくる。その雰囲気に何だか圧倒されてしまう。

「まあ、その、何だ。龍王が来れば……」

「えっ？　りゅーおーくん？　りゅーおーくんに会いたい！」

アリリアの顔が見る間に笑顔になる。俺は目を閉じて、ゆっくりと首を振る。どうして、あんな動物のことを思い出してしまったのだろう。俺としたことが……。

フッとリコを見ると、彼女は申し訳なさそうな表情を浮かべながら、アリリアと俺を交互に眺めている。

「龍王様には申し訳ないのですが……。今回ばかりは、お出まし願いましょうか……」

……反対しないんだな、リコ。もしかして、俺の知らないところで、アリリアと龍王が仲良くするのを応援していたりするんじゃないのか？　挙句の果てに、彼はいい人だから……なんて言い出すんじゃないか。そんなことを考えていると、何だか、涙が出てきた。いやいや、今は不穏な状況だ。一人でも戦力になる者をと考えてくれているに違いない。龍王は……外で待機させるか……。

「じゃあ、りゅーおーくんを呼ぶね？」

アリリアはそう言って歌い始めた。そのとき、張っている結界に反応があった。

ただならぬ雰囲気を出してしまったのか。アリリアの声が止んで、ダイニングは静寂に包まれている。結界は破られてはいない。だが、確かに、何者かがこの屋敷の周囲に張っている結界に入り込んでいるのがわかった。

邪念は感じなかった。だが、何とも言えぬ違和感がある。まるで、少し大きめの固形物を飲み込んでしまって、喉に閊える……そんな感覚だ。

「……リノス？」

話しかけてくるリコの話を、右手で遮りながら、俺は目を閉じて、その違和感の正体を解明しようと、精神を集中させた。

「……あれ？」

そのときアリリアは、庭先に黒い物体が落ちていることに気が付いた。庭一面が雪に覆われた白銀の世界。その真ん中に、まるでシミのように映る黒い物体……。それは小刻みに震えているように見えた。その瞬間、黒い物体が、ゆっくりと立ち上がった。

それは小さな子供だった。黒いコートのような服を着て、肌は浅黒い。一体、どうして子供がこんなところに……？　アリリアは直感的に、この子供は森の中で迷子になり、この屋敷の庭に迷い出て来たのだと解釈した。

突然降ったこの大雪だ……。この子は親にはぐれてしまったのだろうか。きっと困っているに違いない。困っている人がいたら助けてあげる……それが、母・メイリアスとリコレットの教えだった。彼女は思わず外に飛び出して行った。

「大丈夫？」

子供はアリリアの問いに答えず、ただじっと、彼女を見据えている。その双眸は青色で、爛々と輝いていた。

「……お前が、龍王を操る女か」

「え？」

予想もしていなかった言葉に、アリリアは思わず固まる。そのとき、目の前の子供が、ピョンと飛び跳ねるように横に動いた。

「アリリア、離れろ！」

背後から父・リノスの声がした。反射的に彼女は後ろを振り返る。その直後、彼女の背中越しに一匹の黒龍の姿が浮かんできていた。

「ゴゥアァァァァァァァ～～～～！！」

耳をつんざくほどの咆哮が周囲に響き渡る。その直後、黒龍は一旦空に向かって飛び上がったが、やがてその巨体を急降下させ、大きな口を開けて、まっすぐにアリリアに向かってきた。黒龍が発する禍々しい気配……彼女は恐怖のあまり、その場から動くことができなくなった。

「アリリア！」
「アリリア！！」

複数の男女の声がした。ふと見ると、離れの屋敷の勝手口からソレイユが、母屋からはリコレットと父・リノスが飛び出してきているのが見えた。

「ゴアァァァッ！」

黒龍はアリリアの頭上を通り過ぎて、ソレイユの方向に向かった。

「キャッ！！」

ソレイユの絶叫が響き渡る。その瞬間、彼女の体は黒龍に飲み込まれていた。

「ソレイユぅ！！」

今まで聞いたことのない怒気とも憎悪ともつかないリノスの声が響き渡る。黒龍は突然方向を変えて、天高く上昇していく。

「ぬあぁぁぁぁっ！」

リノスは素早く上空の黒龍に向かって掌をかざす。その瞬間、邪悪な気配を感じて、彼は瞬間的にその場を飛びのく。

「ちぃっ！」

彼の居た位置に、何か細い、鋭いものが伸びていた。視線を移すと、そこには子供が手をかざしていて、その指先から細く、鋭いものが伸びてきていた。リノスは無限収納から素早くホーリーソードを取り出す。

ふと見ると、子供のもう片方の手がアリリアの方向に延びていた。

「リコ、アリリアぁ！　離れろぉ！」

リノスの声が響き渡る。その瞬間、上空にいた黒龍が突然急降下を始めた。その視線の先には、アリリアの姿があった……。

第四百九十三話　不満（後書き）

Ｃｏｍｉｃブースト様の「ここから始める異世界村２０１９ベスト５」（ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｆｅａｔｕｒｅｓ／４３）にて、拙作が第４位にランクインしました。これも偏に、読者の皆様のおかげと、厚く御礼申し上げます。

第四百九十四話　懇願

リノスの指先から小さな、黒い球体が、高速で褐色の肌を持つ子供の許に向かっていく。彼は一瞬、ギョッとした表情を浮かべ、その直後、とんでもない速さでそれを躱した。だが、リノスから放たれた球体は、正確に追いかけていく。

「ちいっ！」

憎しみとも怒りともつかない声が聞こえてくる。だが、この一瞬のやり取りが、運命を分けた。リノスが気付いたときには、上空の黒龍がアリリアのすぐ傍に迫っていた。

「……！！」

声にならない声を上げようとするリノス。そのとき、視界に金色の、フワフワしたものが映った。

それは、妻のリコレットだった。

彼女は両手でアリリアを突き飛ばした。宙に浮くアリリア。その瞬間、リコの体は、黒龍に飲み込まれた。

「リコぉぉぉぉぉぉ！！」

リノスの絶叫が響き渡る。リノスは右手のこぶしを握り締めながら、それを上空の黒龍に向ける。その瞬間、その腕が紫色に光る。

「アルラ、パーセンドリア、リーイッヒ、レゼベルグ……」

リノスの詠唱に呼応するかのように黒龍の周囲が紫色に包まれ、その色は徐々に濃くなっていく。だが、黒龍の姿は少しずつ透けていく。

「逃が……さん！」

しかし、まるでリノスをあざ笑うかのように、黒龍の姿は消え去ってしまった。

「……」

呆然とするリノス。そのとき、リノスの耳にバチバチと何かがはじける音が聞こえてきた。

そこでは、黒い子供が上空を高速で移動しながら、両手をクロスする形で防御態勢を取っていた。黒い子供の周囲には黒い煙のようなものが漂っているが、リノスの放った黒い球体がその煙に触れるたびに、パチパチという音を生み出していた。

子供は後ろ向きに飛行しながら、その球体から必死で自身を防御しようとしているが、それはまるで、吸い付くようにして離れない。

「グッ……ぐわぁぁぁ！」

子供が歪み切った表情を浮かべながら、叫び声を上げる。その瞬間、身体が炎に包まれ、その体を地面に叩きつけた。

「……」

リノスは動かない。ホーリーソードを片手に握ったまま、呆然とした表情で視線を向けている。そこは、高く積もった雪を一瞬で解かして、地面が露出していた。だが、そこに倒れているはずの子供の姿はなかった。

「やはり、強いな」

気が付くと、地面に叩きつけられたはずの子供が、宙に浮いていた。体中から黒い煙を出しながらも、腕を組み、尊大な姿勢でリノスを睨みつけていた。

「この姿ではやはり無理がある。ここは……うっ！」

パチッと小さな音がしたかと思うと、子供がどさりと地面に落ちた。リノスは相変わらず、呆然とした表情で眺めていたが、よく見ると、口元が小さく動いている。リノスは、ひたすらに詠唱していたのだ。

リノスは詠唱したまま、表情を崩さずに、ゆっくりと子供の許に歩いて行く。一歩を踏み出すたびに、子供の周囲を囲んでいる赤い靄のようなものが光を放ち始めていた。

「ぐっ……ぐあぁぁぁ」

リノスが近づくたびに、子供の表情が歪んでいく。一体、何が起こっているのかがわからなかった。子供の体がとんでもない力で締め付けられている。

この、子供の正体は、ロイスの長兄であるツネだった。ツネは、今、自分に起きている現象を信じることができなかった。

すでに人化は解除しているはずだった。にもかかわらず、自身の体は、元の子供のままだ。なぜ、人化が解除できないのか。そして、体にはジワジワと熱を感じる。これも、ありえないことだった。

もともと、その体を覆う鱗は、とても丈夫なものだった。加えてツネの場合は、鱗自体に魔力を通すことができるために、暑さ寒さを自由にコントロールすることができた。しかし、今は違う。ジワジワと周囲の熱が上がり、熱さを感じるようになってきた。先ほどから必死で体温を下げようとコントロールしているが、自身の力を遥かに凌駕した力で熱を加えられている気がしてならなかった。

そのとき、すぐ傍に気配を感じた。それは、アガルタ王、リノスだった。

リノスは全くの無表情でツネを眺めていた。そして、その表情を一切変えることなく、手に持っていた剣を振るった。

……ツネの右手が宙を舞った。リノスは続けて剣を振るう。すると、左手も宙を舞った。

……このまま、切り刻まれるのか。

信じられないことだった。体の硬度には絶対の自信があったのだ。人化しているとはいえ、自身の魔力の動きはちゃんと把握できていた。すでに、体中に魔力を行きわたらせて、体を硬化していた。にもかかわらず、リノスは易々とこの体を切り裂いている。一体、何が起こっているのか、ツネの頭は混乱していた。

リノスは相変わらず無表情のまま、ツネに剣を向けている。やがて

リノスは、剣の切っ先をツネの顔に向けた。

「殺してやる」

確かに、ツネにはそう聞こえた。リノスからは殺気は感じないが、確かにそう言った。それは実に不気味だった。

「リノス様、ダメェ！」

突然、女性の声が響き渡った。ふと見ると、緑色の髪の毛を持つ小柄な女性が、よろめきながらこちらに向かってきているのが見えた。その後ろでは、もう一人の、青色の髪の毛を持つ女性があらぬ方向に駆け出していく。

「リノス様、ダメです」

「放せ、シディー」

シディーと呼ばれる女性が、リノスの腕をつかんでいる。彼女はハアハアと荒い息遣いをしながら、リノスを睨んでいる。リノスは、全く視線を向けようとはしない。

「リノス様、ダメです。この黒龍を殺しては、いけません」

「放せと言っているだろう」

「リノス様！」

「やかましい！！」

突然リノスの絶叫にも似た声が響き渡った。リノスは思い出していた。あの、バーサーム家の悲劇の光景を。彼を育ててくれたご主人様、エルザ様を、師匠であるファルコを、心から分かり合えたお嬢様……エリルを、バーサーム侯爵を、摂政殿下を、一匹のドラゴンが食らったあの光景が、脳裏に思い出されていた。

あの時と同じことが今、目の前で繰り返されたのだ。沸々と湧き上がるドラゴンに対する憎しみが、彼の心の中を支配しようとしていた。彼は、剣を握る手に力を籠める。

そのとき、シディーの体が、スッとリノスの前に回り込んできた。そして、彼女はリノスの胸に顔を押し当て、両手を背中に廻して、抱きついた。

「リノス様……。大丈夫です。大丈夫ですから。心を落ち着けてください。リノス様、大丈夫です。この私が言うのです。リノス様、リノス様、リノス様……」

シディーの声がどんどんと涙声に変わっていく。彼女は泣きながら、さらに言葉を振り絞る。

「リノス様、リコ様も、ソレイユも、きっと大丈夫です。私の直感がそう教えてくれています。ただ……二人が……二人を守るためには……この黒龍が必要なのです。この黒龍を殺してしまっては、なりません。リノス様、お気持ちはよく、よくわかります。ですが、ですが、どうか、どうか、怒りを鎮めてください。お願いします。お願いします……」

「シディー……」

リノスはそう呟きながら、がっくりと膝を折った。その表情は相変わらず、無表情のままだった。

シディーはリノスに抱き着きながら、心に小さな痛みを覚えていた。リノスの怒りを鎮めるためについたウソ……。彼女の直感は、この黒龍を殺してはならないと伝えていたが、リコやソレイユのことまでは伝えていなかった。だが、このままでは確実にリノスは黒龍の命を奪う。そう判断したシディーは、咄嗟に嘘をついたのだった。

そんな心の痛みを隠すように、シディーは何度もリノスの名を呼び続けるのだった……。

第四百九十五話　アリリア視点

体の震えが止まらなかった。体も思ったように動かない。何より、顔を上げることができなかった。

今、目の前では、シディー母さんとペーリスお姉ちゃんが忙しそうに動き回っている。いつもなら屋敷の中を飛び回り、何かあると慰めてくれるフェアリの姿はここにはなかった。彼女はアガルタやクルムファルにいる家族に、先ほど起こった事柄を伝えるために、転移していったのだ。

フェアリが屋敷を出る……。アリリアのこれまでの人生の中で、一切なかったことだ。いくらアリリアや姉のエリルが誘っても、頑として屋敷の敷地内から出なかった彼女が、出ていったのだ。

……大変なことをしてしまった。

彼女は、自らが起こしてしまった事の重大性に押しつぶされそうになっていた。目の前で、ママとマミーが黒龍に飲み込まれた。自分が外に出さえしなければ、ママの言うことを聞いてさえいれば、こんなことは起こらなかったのだ。

……これから、もっと大変なことが起こるかもしれない。

きっと、ものすごく怒られるに違いない。そして、下手をすれば、この屋敷を追い出されるかもしれない。そうなれば、一人で生きていくしかなくなる。一人では生きてはいけない。

そんなことを自問自答していると、震えが止まらなかった。

「アリリア……」

先ほどから、傍でじっと見守ってくれているエリルお姉ちゃんが声をかけてくれたが、アリリアは反応することができなかった。何より、エリルお姉ちゃんのママがいなくなってしまったのだ。お姉ちゃんにも申し訳ないし、何より、ママが大好きだった弟のイデアに申し訳がない。彼は今、ドワーフ工房に行っているが、帰ってきたらきっと、悲しむに違いない。そして……自分を恨むに違いない。

アリリアは押し寄せる不安に、頭が爆発しそうだった。今の彼女には、頭を抱えながら、ただ震えるしかなかった。

フッと顔をあげてみる。目の前には、テーブルに呆然と腰かける父・リノスの姿があった。いつもは陽気な優しい父――おとうさんが、こんな表情を浮かべる姿も初めてだった。彼はあらぬ方向に視線を向けたまま、微動だにしない。

「りゅーおーくん……」

アリリアは小さな声で呟く。りゅーおーくんならば、今の状況を解決できるかもしれない。もしかすると、家を追い出されても、彼がいれば何とかなるかもしれない。だが、彼を呼び出すのには、マミーから習った歌を歌わねばならなかった。

彼女はその歌を歌ってみようと口を開いた。だが、歌うことはできなかった。声が……出ないのだ。それに、仮に彼がここに来たとしたら、おとうさんが怒ってしまうのは目に見えていた。今のお父さんを怒らせると、とんでもないことになる……。アリリアは直感的

にそれを感じ取っていた。

彼女が龍王の姿を思い浮かべるとき、まず頭をよぎるのは、彼の鱗がこすれる音だった。アリリアには人間には聞き取れない音を聞き分けるスキルが備わっていた。彼女のその鋭敏な聴覚は、ドラゴンの鱗がこすれる音さえ聞き取ることができたのだ。

彼女はその音を聞くのが好きだった。フェリス姉ちゃん、ラース君、フェアリ、サダキチ……。彼女の周囲にいるドラゴンたちは皆、たとえ人化をしていても、耳を澄ませるとカリカリと小気味いい音が鳴っていた。アリリアはその音を聞くのが大好きだった。そして、その中でも、最も美しい音を奏でていたのが、龍王だった。

龍王の鱗の音は、キィーン、キィーンというまるで鈴のような美しい響きがする。アリリアはその音を聞いた瞬間、このドラゴンは信用できると無条件に思えたのだ。だが、先ほど、ママとマミーを飲み込んだドラゴンは違った。ジャリッ、ジャリッという、なんとも不快で不気味な音だった。ドラゴンとは、心地の良い音を出すものだと思い込んでいたアリリアにとって、黒龍――ロイスの音は衝撃以外の何物でもなかった。

そんな彼女の耳に、聞きなれた音が聞こえてきた。これは……フェリス姉ちゃんだ。そう思ったとき、屋敷の勝手口が勢いよく開かれた。

「リノス様！」

フェリスはリノスの前に畏まり、何やら話しかけている。その後ろではルアラが蒼白の表情で控えている。リノスは、呆然とした表情を崩そうともしないまま、フェリスにボソボソと何事かを話してい

る。

突然、フェリスが屋敷を出ていった。しばらくすると、アリリアの耳に、ギリッギリッと、何だか苦しみを連想させるような音が聞こえてきた。彼女は思わず耳をふさぐ。

「ええいっ！」

今まで聞いたことのない、憎しみがこもったフェリスの声が聞こえた。気が付くと、アリリアのすぐ目の前に、一人の少年が床に叩きつけられているのが見えた。フェリスはその少年に馬乗りになり、彼の髪の毛をつかみながら憎々しげに口を開いた。

「あんた達、何てことするのよ！　一体、何の恨みがあるっていうの！　帰しなさいよ！　リコ姉さまと……ソレイユ姉さまを……帰しなさいよ……帰しなさいよ……」

フェリスの声がどんどんと涙声になっていく。少年は、すでに両手を失っているにもかかわらず、その眼は爛々と輝き、体の上のフェリスを睨みつけていた。そして、その傍らには、同じ黒龍のシャリオが呆然とした表情で立ち尽くしていた。

しばらくすると、どんどん家族の者が帰って来て、屋敷内は騒然となった。ママとマミーがいなくなったと聞いて、弟のイデアや妹のピアトリスは泣くかと思いきや、二人とも気丈にも冷静にその事実を受け入れようとしていた。だが、やはりショックは隠しきれずに、二人とも体を小刻みに震わせていた。

シディー母さんが皆にこれまでのことを説明し、これからのことを話し出すと、屋敷の中はさらに騒然とした雰囲気に包まれた。アリ

リアは椅子に座ったままさらに頭を抱えてうずくまり、小さな体をさらに小さくする。

……誰も、彼女に声をかける者はいなかった。実際は、アリリアの姿があまりにも気の毒すぎて、声をかけるのが憚られていたのだが、アリリアにとっては、今の状況は孤独以外の何物でもなかった。

突然、騒然としていた屋敷内が静寂に包まれた。ふと顔をあげてみると、皆が同じ方向に視線を向けている。

コツ……コツ……コツ……。

足音がゆっくりとアリリアの許に近づいてくる。

「アリリア……」

声のした方向に視線を向ける。目の前には母であるメイリアスがいた。いつもと変わらぬ表情を浮かべている母……。その顔を見たとき、初めて彼女の眼から涙が溢れだした。

「お母さん……ごめん……なさい。ごめん……なさい……」

そのとき、メイが無言のまま優しく、アリリアを抱きしめた。その途端、アリリアは堰を切ったように号泣し始めた。何度も何度も謝るアリリアを、メイは優しく抱きしめ続けた。

メイはアリリアを抱っこすると、ゆっくりとリノスの許に向かっていく。そして、彼の前に神妙に畏まった。

「ご主人様……申し訳……ございません」

リノスはメイに全く視線を向けず、相変わらず、あらぬ方向に視線を泳がせている。

「アリリアのことは……ご主人……様？」

リノスが視線を泳がせたままゆっくりと立ち上がっていた。彼はゆっくりと目を閉じると、まるで耳を澄ませるようにゆっくりと首を傾けた。

「ごしゅじ……」

メイが言葉を発しようとした瞬間、リノスがスッと右手を挙げて言葉を遮った。彼の厳しい表情に全員が注目している。屋敷内が緊張感に包まれる……。

「メイ」

どのくらいの時間がたっただろうか。リノスがゆっくりと口を開く。そして、眼を開けて、周囲を見回し、最後にアリリアに視線を向けた。

「アリリア。安心しろ。リコとソレイユは……。ママとマミーは、生きている……」

屋敷内の雰囲気が、今までとは別の緊張感に包まれていく……。

第四百九十六話　光明

「生きて……いるって、リノス様……」

リノスの言葉に反応したのは、ペーリスだった。彼女はリコとソレイユが飲み込まれた一部始終を目撃している。その彼女をして、二人が生きているなどということは、信じられないことだった。

だが、リノスはその瞳に強い光を湛えていた。その様子は、彼の言葉が嘘ではないことを如実に物語っていた。

「必ず、必ず生きている」

「でも、リノス様……」

ペーリスはリノスと周囲にいる人々を交互に見比べながら、口を開く。その様子を察して、メイが口を開く。

「先ほど、シディーちゃんから事のあらましは聞きました。リコ様とソレイユさんは、噛み砕かれたわけではなく、丸呑みされたのですよね？」

「はい、そう見えました」

ペーリスが戸惑いながら返答する。

「と、すれば、生きている可能性もありますが……」

メイはそこまで話すと、静かに視線をリノスに向けた。彼女としても、リコとソレイユが生きている可能性は、限りなくゼロに近いと思っていたのだ。

ドラゴンと言う生き物は、何でも食べることができる。かなり毒性の強いものでも分解してしまう強い胃液を持っている。従って、人間がひとたびその中に飲み込まれると、わずか数分でその身は溶けてしまうのだ。しかもドラゴンは、飲み込んだ食べ物から徹底的に養分を吸収しようとする。そのため、リコとメイの体はロイスの腹の中にあるにはあるだろうが、その形はもはや、人間の形にはなっていないことは、容易に想像できたのだった。

しかし、リノスは生きていると確信を持って言う。その根拠がどこにあるのか、メイは無言のまま、彼に説明を促す。

「俺が二人に張った結界が、ちゃんと機能している」

リノスは短い言葉でそう言い切った。その様子は自信と安堵の表情が浮かんでいた。

「ちゃんと、二人の魔力を感じることができた。二人は、俺の結界に守られて生きている。ただ……」

そこまで言うとリノスは言葉を切り、ダイニングの床に転がされている黒龍のツネに視線を向けた。

「二人を食らったドラゴンが、どこにいるのかが、まるでわからないんだ」

ツネはリノスと目を合わせたまま、微動だにしない。どうやら、話

をする気はないのが、誰の目に見ても明らかだった。

「空間……」

不意に声が聞こえた。声のする方向に視線を向けると、そこには、シャリオの姿があった。

「中の兄さまは、空間魔法を極めている」

「シャ、シャリオ！」

ツネが目を見開いている。余計なことは言うなと言わんばかりの様子だ。だが、彼女はツネを一瞥すると、冷静な表情で話を続ける。

「中の兄さまは、作り出した空間の中に潜んでいる。そこを突き止めるのは、困難だ。それに……飲み込まれた者が生きているかどうかを判断するのも……」

「いや、生きている。絶対にだ」

シャリオの言葉に、リノスは即答する。そのあまりに自信に満ちた態度に、シャリオは驚きの表情を浮かべる。

「ただ……全力で気配探知と魔力探知を発動しても、ヤツがどこにいるのか、全く見当もつかないんだ」

「中の兄さまはきっと、この屋敷の近くにいるだろう」

「何？　なぜそう言い切れる？」

「きっと、あの黒龍はアリリアを狙っているのだと思います」

シディーが毅然とした態度で口を開く。その言葉に、シャリオは大きく頷く。

「中の兄さまの狙いは、この子だ。何の迷いもなく、サイリュースとこの子供を食らいにいっていた。確実に、もう一度この子を食らいに来るだろう」

「わっ、私が……私が……」

アリリアが必死の形相を浮かべながら、まるで懇願するように口を開くが、シディーはゆっくりと首を振った。

「残念ながら、アリリアが囮になる作戦は、失敗する気がするわ。母さんの直感が、そう言っているわ」

みるみるアリリアの顔がくしゃくしゃになっていく。彼女はメイの胸に顔をうずめて、声を殺して泣き始めた。

その様子を見ながら、リノスはゆっくりと口を開く。

「というのが一番の問題は、あの黒龍の空間を破る方法がない、ということだ。ヤツは全力で張った俺の結界を何のダメージもなくすり抜けた。あれは空間魔法のせいなのだろう。あの魔法を何とかしなければ、リコとソレイユを救うのは難しい……」

「……空間を斬る剣を作ればよいと思います」

メイが即答する。リノスが、得心したような表情に変わる。

「空間を斬る剣、か……」

「はい。これはあくまで理論上のことで、実際に試したことはないのですが……」

「リオエの理論……ね？」

シディーが口をはさんでくる。メイはゆっくりと頷く。

「約９００年前に唱えられた理論です。天才鍛冶師であるリオエ・オーラが唱えた理論で、実現不可能と言われています。ジャルガランの石を溶かして剣を作るのですが、完全に均等になるように剣を打たねばなりません。そのうえ、鋭い切れ味を持たせなければならないので、一人や二人の鍛冶師では……」

そこまで言うと、シディーの動きがぴたりと止まった。

「どうした、シディー」

「できる、かも、しれません。ね、メイちゃん？」

シディーはメイに視線を向ける。彼女はゆっくりと頷いた。

「世界最高の切れ味を誇る剣は、すでに存在します。リノス様がお持ちの、ホーリーソードです。それを元に剣を作れば……」

「ホーリーソードに、溶かしたジャルガランを塗って、鍛え上げるのです。ただし、均一に鍛え上げねばなりませんので、世界最高峰の鍛冶スキルが必要です。ドワーフ王様に協力いただければ、ある

いは可能かと思います」

「それなら、大丈夫だわ」

シディーが自信満々に胸を張る。

「お父様が断る可能性は、万に一つもないわ。大丈夫、私が説得してみせるわ。お父様が鎚を打ち、私とメイちゃんが介添えをすれば、きっと、空間を切り裂く剣は作れるはずよ。ただ……」

「ただ、何だ、シディー？」

「それを作り上げるまでに、一週間はかかります」

「一週間……」

リノスの表情が一気に曇る。リコとソレイユが生きている確信はあるが、彼女たちが飲まず食わずの状態で一週間もの期間を過ごせるかと問われれば、答えは否だった。リノスは思わず唇を噛んだ。

「ちょっと待って、シディーちゃん。人数を増やせば、その期間は短縮できるのではないでしょうか？」

「お言葉だけどメイちゃん、お父様や私、そして、メイちゃんくらいのスキルを持った鍛冶師は、世界中どこを探してもいないと思うけれど……」

「いいえ、一人いらっしゃいます。ガルトー様です」

「お兄様？」

「はい。先日、ガルトー様からアガルタ大学に解剖用のメスが十本贈られてきました。それらはすべて、ガルトー様がお造りになったそうです。すべてのメスが均一な厚さと見事なキレ味に仕上がっていました。失礼な話ですが、そのスキルは、ドワーフ王様と比較しても、遜色のないものだと思います」

「なるほど、お兄様ね……」

シディーは人差し指を顎の下に当てて、何かを推理するようなポーズを取る。しばらくすると彼女はゆっくりと頷いた。

「お父様とお兄様……そして、私とメイちゃんが代わる代わるに打てば、時間はかなり短縮できるわね……。今からすぐにかかったとして……三日。三日あれば、できると思います」

「シディー。すぐにかかってくれ」

リノスの決断は早かった。彼はシャリオにロイスの空間魔法のことを詳しく教えてくれと頼み、床に転がっているツネにも、知っていることを話せと命じた。そして彼は、家族全員に視線を向けながら、ゆっくりと、落ち着いた声で口を開いた。

「これからは、かなり危険な戦いになりそうだ。家族……特に、子供たちは、どこか安全な所に避難させよう。少し離れ離れになるけれど……な」

彼の言葉に、全員が息を呑んだ。

第四百九十七話　一家離散

それからリノスは、子供たちをどこに避難させるのかを決めていった。

ファルコとその母であるマトカルは、アガルタの迎賓館に避難させることにした。そこには、エリルも帯同するように指示を与えた。これは言うまでもなく、エリルがマトカルになついていたためだが、リノスは、彼女の心境を察して、マトカルの育児を手伝ってやってくれとだけ伝えた。その言葉だけで、エリルは父の思いを察して、力強く頷いたのだった。

次に、ピアトリスについては、母であるコンシディーがドワーフ公国に戻るために、一緒に連れて行くこととした。ドワーフ公王は、娘と孫の帰国を喜び、空間を切り裂く剣の製作についても快諾してくれたのだった。

だが、その話を聞いたピアトリスは意外にも、公国に行くことを嫌がった。

「どうして？　おじいさまのところに行くのよ？」

「や！」

「母さんも一緒よ？」

「いや！　いや！」

泣きながら首を振るピアトリス。彼女は椅子から飛び降りると、兄であるイデアの許に駆けていく。そして、彼の腕に絡みつくようにして抱きついた。

「にーにと一緒じゃなきゃ、やだ」

妹に抱き着かれたイデアは困った表情をしている。母であるリコレットがいなくなったと聞いて、一番ショックを受けているのが、彼なのだ。だがイデアは健気にも泣いたり、取り乱したりすることはなく、ただじっとその場に控えていた。とはいえ、その顔は蒼白になっていて、何らかのケアを行う必要があることは、誰の目にも見ても明らかだった。

「シディー」

リノスが落ち着いた声で話しかける。彼はじっとシディーに視線を向けながら、言葉を続けた。

「すまないが、イデアも一緒に……」

「承知しました。考えてみましたら、私も、父も、そして、メイちゃんも……ピアの傍にはそんなに居てやれないと思います。イデア君には申し訳ないですが……」

その言葉に、リノスはゆっくりと頷く。

「イデア」

「はい」

「すまないが、ピアと一緒にドワーフ公国に行ってくれないか。シディー母さんは忙しいから、ピアの面倒を見てやってくれないか」

「……」

「とうたんは、これからママ達を迎えに行く。とうたんがいない間、妹を守ってやってくれ」

イデアは目を泳がせていたが、やがて、ゆっくりと頷いた。

「イデア、お前は男の子だ。とうたんがいない間は、お前がこの家を守るんだぞ。お姉ちゃんや妹たち、弟たちのことを守るんだぞ」

リノスの言葉に、イデアは力強く頷いた。

しばらくするとリノスは、メイとアリリアを伴ってアガルタの迎賓館に転移した。メイの腕には、赤ん坊が抱かれていた。言うまでもなく、ソレイユが生んだ、息子のセイサムだった。

謁見の間につながる扉を開けると、そこには、一人の麗しき女性が立っていた。まるで、二十代のような若々しい姿、そして豊満な肉体……。そこにいたのは、サイリュースの族長であり、ソレイユの母でもあるヴィヴァルだった。

彼女はリノスたちに気が付くと、にこやかな笑顔を浮かべてみせた。娘であるソレイユが黒龍に飲み込まれ、いまだ生死がわからない状態の中、彼女自身も必死で平静を保とうとしていることが、よく見て取れた。

「族長様、この度は……大変申し訳ありません。ただ……ソレイユ

は、生きています。これは間違いありません」

「左様ですか……」

ヴィヴァルは、表情は崩さないものの、纏っていた雰囲気が明らかに変わる。その様子を見て、リノスはゆっくりと頷く。

「必ず、必ず、ソレイユを取り戻して見せます。ですから……」

「わかっております。アガルタ王様が言われることです。どうして我らがそのお言葉を疑いましょうか。ソレイユが戻るまでの間、この子……セイサムにつきましては、お任せください」

そう言って彼女は両手を差し出した。その手に、メイは抱いていた赤ん坊を大切そうに渡した。

ヴィヴァルはニコリとほほ笑むと、彼女の周囲が緑色に光りだした。そして、それはゆっくりと赤ん坊の体を包んでいく。

「もうこれで大丈夫です。ご安心ください」

ヴィヴァルの声に、メイが心底ほっとした表情を浮かべる。実は、リノスの子供の中で最もケアが必要だったのは、このセイサムだった。

サイリュースは、精霊と契約することで命をつないでいる。すなわち、精霊たちがあらゆる病気の抵抗力となってくれているのだ。だが、まだ赤ん坊であるセイサムは精霊と契約することはできない。従って、母であるソレイユが契約している精霊――神龍様――が、彼の抵抗力となっていた。

しかし、ソレイユが黒龍であるロイスに飲み込まれてしまった直後から、セイサムの体には異常が見られていた。彼の体中には赤い湿疹が見られ、時間を追うごとに体調が悪化していった。

サイリュースの性質を知っていたメイは、すぐさまアガルタにあるサイリュースの里に転移し、族長であるヴィヴァルに状況を説明した。彼女は全くうろたえることなくメイの話を聞き、すぐさまセイサムを連れて来るようにと言った。しかも、直接この里に連れてくるのではなく、アガルタの迎賓館の謁見の間と、連れてくる場所を明確に指定した。これは、各国の使者や貴族たちをもてなす謁見の間が最も清潔な状態に保たれていることを知っていたためであり、セイサムの状況を考えると、それが彼の体調をこれ以上悪くさせない最も有効な策をヴィヴァルは導き出したのだった。

実際、セイサムを迎賓館に運び込むとき、すでに彼は肺炎に近い状態になっていて、命の危険すらあったのだ。まさしく、このやり取りは、一人の赤ん坊の命を救い、そして、アガルタという一国の命運を分けることにもつながった。

顔中に出ていた湿疹がゆっくりと消えてく。それに比例して、セイサムの呼吸も落ち着いていった。それを見たヴィヴァルはゆっくりと頷いた。

「それでは、早速里に戻ります。ソレイユが帰るまでの間、この子は必ず私が守り通して御覧に入れます」

「族長様……よろしくお願いします」

頭を下げるリノスとメイに、ヴィヴァルは優しい笑みを向ける。そ

して、その後ろに縮こまるようになって控えているアリリアにも、彼女は優しい笑みを投げかけた。それを見たアリリアは、無言のまま頭を下げたのだった。

屋敷に帰ると、そこにいたのはペーリスとシャリオの二人だけだった。

「シディー姉さまも、マト姉さまも、それぞれ転移していかれました。フェリスちゃんとルアラちゃんは仕事に戻りました。ラース君もゴンさんも……」

「仕事に戻ったか」

「はい」

「そうか。色々世話をかけるな、ペーリス」

リノスはふと、視線をダイニングの隅に向ける。そこには仰向けに寝転がった、黒龍のツネの姿があった。目を閉じて、まるで死んだかのような様子だ。張ってある結界の影響で体を動かすことはできなくなっている。ツネ自身もそれをよくわかっているようで、無駄な抵抗をする気はなさそうに見えた。そんな彼を一瞥した後、リノスは再びペーリスに視線を向ける。

「いいえ。大丈夫です。それよりも、アリリアちゃんが……」

ペーリスはアリリアに視線を向ける。彼女はシャリオが怖いのか、母であるメイの後ろに隠れている。

リノスはアリリアに視線を向けながら、心の中でため息をついてい

た。この子を、メイと共にドワーフ公国に連れて行くべきかと悩んでいたのだ。

「シャリオ」

「何だ？」

「お前の兄貴は、このアリリアが一人になったら、襲いに来るだろうか」

「ああ、襲いに来る。それだけではない。アガルタ王リノスの命も狙っているだろう」

一切の迷いを感じさせない即答ぶりだった。その様子にリノスは少し驚いた表情を浮かべる。一方のシャリオは、表情は沈んでいるものの、その眼の奥は爛々と光っていた。その様子を見て、リノスは彼女に向き直った……。

第四百九十八話　懺悔

「なぜ俺を狙うんだ？　確か、お前も俺を狙っていたよな？　何故なんだ？」

「それは……」

リノスのまっすぐな視線に、シャリオは一瞬、その視線を外した。だが、すぐに視線を戻した。

「私は、アガルタ王リノスという男に興味があった」

「俺に興味？」

「ああ。少し前に、数百年間もの間、頑として山を下りなかったエルフたちが山を下りたと知った。それは、リノスという男の仕業だと聞いた。しかもその男は人族だという。人族はエルフが最も嫌う種族。その人族がエルフを動かした。だから、どんな男なのか興味があった」

「興味があるのなら、会いに来ればよかったじゃないか」

「優秀な人間であれば、スキルの高い人間であれば、攫って私の許に置こうと考えていた。だが、アガルタの都に入るのに苦労した。そして、色々な邪魔が入って、思ったようにいかなかった」

「……そのために、ワーロフとバーリアルの戦争を仕掛けたのか？」

「いや、それは中の兄さまだ」

「……あの戦争で、結構な数の兵士が死んだんだぞ？　クソだな、お前の兄貴は」

「中の兄さまは、アガルタ王リノスを食らいたかったのだ。スキルの高い者を食らえば、自らのスキルが上がると中の兄さまは信じていた」

そう言うと、シャリオはゆっくりと視線をダイニングの隅に向けた。そこには、相変わらず仰向けのまま目を閉じているツネの姿があった。

「……やはり、シャリオ、お前を島から出すのではなかった」

「……」

ツネの低い、そして、悔恨の情を含んだ声が朗々と響き渡る。リノスは大きなため息をつきながら、ゆっくりとツネに視線を向ける。

「やはり、そのロイスという黒龍は、最終的には、俺を狙うのか？」

「おそらくは、な」

「お前も、俺を食らいに来たのか？」

「違う」

「何？」

「私はただ、妹のシャリオを取り戻しに来ただけだ」

「取り戻しに来ただぁ？　取り戻しに来た者が、リコやソレイユ…俺の大事な家族を食らうというのはどういうつもりだ！？」

「龍王がシャリオを捕らえたと聞かされていた。それに……神龍様と思しき精霊までも現れていた。私はシャリオがひどい仕打ちを受けていると思っていた。だから、早く取り戻さねばならないと思ったのだ。……たった一人の妹だからな。まさか、ロイスがこんなことまで考えているとは、この私にも考えが及ばなかった」

「ええい！」

リノスは苛立ちを隠そうともせず、大股でツネのところに歩いて行く。そして、目をカッと見開いたまま、その状態で固まってしまった。その様子を、そこにいた全員が固唾を呑んで見守った。

一体、どのくらいの時間が経っただろうか。リノスがようやく目をギュッと閉じたかと思うと、踵を返してゆっくりとメイたちの許に戻ってきた。

「起きろ。結界は解除した。椅子に座るといい」

「ご主人様……」

「メイ、心配しなくていい。鑑定してみたが、あの黒龍は、俺たちを襲う気持ちはなかった。ただ、純粋に、このシャリオを取り戻したかっただけだ。それにしても、ロイスという黒龍……。マジで腐っていやがるな」

リノスは大きく深呼吸をして、ゆっくりと椅子に座る。その彼に倣うように、ツネはゆっくりと起き上がり、目の前の椅子に腰かけた。

「両手がなければ、不便だろう。そらよ」

リノスが掌をツネに向ける。その直後、彼の身体が緑色に光る。よく見ると、今までなかった彼の両手が、復活していた。ツネは表情を一切変えることなく、自身の両手を眺めている。

「見事だ」

「世辞はいい。まずは、確認だ。俺の質問に答えろ。お前のほかの兄弟……。弟たちはどこにいる？」

「わからんのだ、それが」

「何だと？」

「いくら気配探知で探ってみても、二人の弟たちの居場所はわからないのだ。おそらく、ロイスの拵えた空間の中にいるのだろう」

「そいつらも、騙されている……か」

「おそらく、シャリオが無事でいることも、私の状況も……知らないだろう」

そこまで言うと、ツネは居住まいを正して、真剣な表情をリノスに向けた。

「この上は、私がシャリオとその娘を守ろう」

「何ぃ？」

「せめてもの罪滅ぼしだ。私がこの二人の傍にいれば、ロイスはおいそれと手を出すことはできないだろう」

「兄様の気配探知と魔力探知能力は、私を遥かに凌駕する。中の兄さまが空間を出た瞬間に、おそらく兄様の気配探知に引っかかるだろう。それに……一対一であれば、兄様は中の兄さまに負けることはない。安心すればいい」

「この度の不始末はすべて私の不徳の致すところ……。本来ならば、私がロイスを討たねばならないが、ヤツが空間を出ない限り、それは難しい。それゆえ……」

「お前がアリリアを守る……か」

そう言うとリノスは、フッと笑みを浮かべる。

「アリリアは……娘は俺が守るよ」

「……」

「だが、今の状況は、一人でも味方がいたほうがいい。幸い、この黒龍は信頼できそうだ」

そこまで言うとリノスは、スッとメイに視線を向ける。

「メイ、シディーたちと剣を作る作業があるんだろ？　アリリアを連れて、ドワーフ公国に向かってくれ」

「私、ここにいる！」

突然、アリリアの声が響き渡る。彼女はメイの前に進み出ると、体を震わせながら言葉を絞り出す。

「ここで、ママと、マミーを待ってる。それに……」

「それに、何だい？」

「おとうさんが、一人になる。お母さんも、お姉ちゃんもいないし……。だから、だから、私が、お父さんの傍にいなきゃ……」

「駄目よ、アリリア」

メイがゆっくりとひざを折って、アリリアを背中越しに抱きしめる。アリリアは堪えきれなくなったかのように、声を殺して泣き始めた。

「お父様は、これから大事なお仕事があるの。だから、お母さんと一緒にシディー母さんの所に行きましょう。ね？」

メイはアリリアを抱きしめながら、優しく頭をなでる。そして、その態勢のまま、リノスに視線を向ける。

「ご主人様、申し訳ございませんでした。アリリアは、私と共にドワーフ公国に連れて参ります。恐れ入りますが、この後のことは……。ご主人様？　ご主人……」

見ると、リノスが右手でメイの言葉をさえぎっていた。

「待ってくれ。ちょっと、待ってくれ。涙が……涙が溢れてきて、喋れないんだ……」

◆　◆　◆

結局、アリリアは帝都の屋敷に残ることになった。これは、ツネの勧めもあったのだ。

「ロイスの空間を斬る剣を作っている所に、その娘を連れて行くのはよしたほうがいい。もし、その娘が襲われでもしたら、最悪の場合、その剣までも失うことになる。ロイスは、その娘が一人になる瞬間を狙っているはずだ。今は、父親か龍王が、その娘の傍にいたほうが良い」

その言葉に、シャリオも同意する。リノスは、アリリアをこの屋敷に残すことを決意したが、当然、彼女には強力な結界を施すことも忘れなかった。

メイが最小限の荷物を持ってドワーフ公国に出発する直前、彼女は再びアリリアを傍に呼び寄せて抱きしめた。そして、しばらくの間、無言でアリリアを見つめ続けた。

「うん……」

アリリアの小さな声が、まるで出発を促す合図であったかのように、メイはスッと立ち上がり、リノスたちに一礼した後、屋敷を出ていった。

メイが出ていくと、途端に屋敷の中が物寂しく感じられた。いつもは子供たちの声が響き渡り、妻たちの笑顔が咲き乱れていたダイニ

ングが、静寂に包まれているのだ。その雰囲気は異様とも言えた。
それはアリリアも感じたようで、彼女は無言のまま父であるリノスの手を握った。

「大丈夫だ。ママも、マミーも生きている。必ず、必ず、連れて帰るからな。そして、アリリアも、必ずお父さんが守ってやる。早くみんなが戻ってこられるようにしないとな」

リノスはまるで、自分に言い聞かせるように呟く。その声にアリリアは握る手に力を込めながら、ゆっくりと頷くのだった……。

第四百九十八話　懺悔（後書き）

コミカライズ『結界師への転生②』の発売がいよいよ明日、１／２３に迫りました。絶賛、予約受付中です！また、購入者にはオリジナルポストカードが付いて来るフェアも開催予定です！

（詳細は、下記をご覧ください）

ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｇｅｎｔｏｓｈａ－ｃｏｍｉｃｓ．ｎｅｔ／ｎｅｗｓ／２０２０／０１／２００１１６０３．ｈｔｍｌ

第四百九十九話　かへり見すれば月傾きぬ

「……」

真っ暗な空間の中、一匹の黒龍が、一点を見据えたまま微動だにしないでいた。ロイスだ。彼は心の中で唸っていた。

……ツネの兄貴の気配が消えない。一体、どういうことだ？

ロイスの計画では、ツネとリノスが戦っている間に、龍王と神龍を操る者を食らうというものだった。長兄ツネのスキルは相当高いものだが、アガルタ王リノスと一対一で戦っては、最終的には敗北するだろうと予測していた。とはいえ、すぐにやられる兄ではない。二人の戦いは相当に長引くだろう。その間に二人を食らい、あわよくば隙を見て、リノス自身も食らう……彼は腹の中で、そういった青写真を描いていた。

計画は順調だった。だが、最終的に食らうことができたのは、神龍を操る者と、全く予想もしていなかった人族の女性のみだった。あと一歩、すんでのところで邪魔が入った……。ロイスはゆっくりと息を吐きだす。

……まあよい。神龍を操る者を食らうことができたのだ。俺のスキルは相当に上がっていることだろう。一度、試してみたいものだ。しかし……ツネの兄貴が生きている間は、あまり動かぬほうがよさそうだ。どうやら、深手を負っているわけでは、なさそうだしな。

ロイスは感じていた。ツネの気配は、普段とまるで変っていないこ

とを。今の自分のスキルがどれほど上がったのか、それを試すのに、兄のツネは格好の相手ではあった。だが、確実に仕留められる自信は、まだなかった。それに、アガルタ王リノスと龍王はまだ健在だった。ロイスが姿を現せば、下手をするとこの三人をまとめて相手をしなければならない可能性すら出てくるのだ。

……余程の決定的なチャンスがない限りは、動かぬほうがよいな。まあいい。しばらくは、この空間でゆっくり休むことにしよう。この空間は、誰にも見つけることはできぬ。ここにいれば、安全だ。

そう心の中で呟いて、ロイスはゆっくりと目を閉じた。

◆　◆　◆

一方その頃、ドワーフ公国では、ドワーフ王、ニザ・デューク・エイモンが無念無想の境地にあった。

彼は全裸となって滝に打たれていた。深夜0時頃から約四時間、ずっと滝に打たれ続けている。これを彼は、夜が明けるまで続けるつもりでいた。その後、自身の工房に戻って火を入れることになっていた。そこでは、息子のガルトー、娘のコンシディー、そして、アガルタ王リノスの妻の一人であるメイリアスが、彼の帰還を待っている。彼が戻り次第、いつでも作業にかかれる態勢を整えているはずだった。

空間を斬る剣を拵える……コンシディーからその話を聞いたとき、彼は心から興奮した。そんな剣はこの世には存在しない。だが、メイリアスとコンシディーが導き出した理論は、それを具現化するための説得力があった。しかもそれは、世界最高レベルの鍛冶スキルが必要であることを、彼は瞬時に理解した。そして、それを鍛え上

げることのできるのは、自分以外にはいないと、心の中で断じたのだった。

興奮した。ワクワクした。可能ならば、鍛冶師としてこれほど名誉なことはない。

今すぐに作業にかかろうと逸るコンシディーを、ドワーフ王は窘めた。本音を言えば、彼自身も今すぐにでも作業を始めたかった。だが、興奮した状態で剣を打てば、必ず手許を狂わせることを彼は知っていた。そのため、その興奮を冷まし、氷のような冷静さを取り戻すべく、彼は敢えて滝において行を行うことを決めたのだった。

まるで肌を刺すような、凍てつく寒さの中、彼はじっと目を閉じたまま微動だにしない。一体、どのくらいの時間が経っただろうか。フッと目を開けて見ると、目の前には今まさに、朝日が昇ろうとしている光景が広がっていた。

「……」

彼は思わず滝から離れ、眼下に広がる光景に目を奪われる。吐く息が白い。そして、彼の体からは白い煙が立ち上っている。森の奥から徐々に姿を現してくる朝日は、彼の心をスッと落ち着かせていく。

……心は落ち着いた。工房に、帰ろう。

彼はくるりと朝日に背を向けて、山を降りようと歩を進めた。そのとき、ふと空を見上げると、空はまだ暗かった。

「!?」

不思議なこともあるものだと思いながら、空を見渡していく。すると、東の方向にはまだ、満月が煌々と光を放っていた。

……儂を中心にして、朝と夜の世界が分かれているのか。

今、森の奥に沈もうとしている月は、未だ優しい光を放っている。そして、振り返れば、まるで森が焼けているかのような真っ赤な光が昇ってきている。自然が織りなす奇跡のような光景を見て、ドワーフ王は、何だか体が軽くなったような気分に包まれた。これまでにない、最高の剣が打てそうな予感がしていた。

工房に戻ると、すでに三人がいつでも作業にかかれるように準備を整えていた。ドワーフ王はゆっくりと頷くと、ガルトーとコンシディーが向こう槌を打とうと彼の前に控えた。王は愛用の槌を手に取り、ホーリーソードを鍛え直し始めた。

トンテンカン、トンテンカン、と一定のリズムで剣を打つ音が聞こえてきた。メイはその様子を見ながら、この三人が全く同じ強さで剣を打っていることに気が付いた。そして、この剣が、空間を切り裂く天下無双の剣となることを確信した。

鍛え直しとはいえ、その工程にはいろいろな工程がある。だが、この三人は全く言葉を交わすことなく、ただ黙々と、数多くの工程をこなしてく。およそ数時間後、コンシディーとメイが交替した。シディーはそのまま休息をとることなく、子供たちの許に向かう。それすらも、二人は言葉を交わさなかった。

「ほう」

作業を開始し始めてから約半日経った頃、ドワーフ王が初めて声を

上げて手を止めた。メイの作業が、王の予想を超えた手法だったからだ。

「亡くなった……父が教えてくれたものです」

「フフフ、懐かしいな。そう言えば、儂が若い頃によくやっておった手法だ」

「もし、他の手法があれば、それに従いますが……」

「いや、時間はかかるが、メイリアス殿の手法でやったほうが、丁寧に仕上がる。いかんな。慣れというものは。無意識に楽をしようとしておった」

ドワーフ王の言葉に、メイはゆっくりと頭を下げた。

ドワーフ王と息子のガルトーは、丸二日間、不眠不休でホーリーソードを打ち続けた。交代を申し出て、休息するよう勧めるメイやシディーの言葉に二人は頑として応ぜず、ただひたすらに剣を打ち続けた。

「灯りを消せ」

作業を始めて丸二日が経った頃、突然、ドワーフ王が口を開いた。すでに彼とガルトーは精魂を使い果たしたような表情を浮かべていた。その様子を見ながら、メイとシディーは工房の灯りを落とす。

……奇跡のような光景が広がっていた。

何と、ホーリーソードから銀色に輝く仄かな光が、まるで煙のよう

に立ち上っていたのだ。そのあまりの神々しさに、四人は無言のまま剣を眺め続けていた。

「……父上」

ガルトーが静かに口を開く。彼に全員の視線が集まる。

「まだ、作業をなさいますか？」

「ガルトーお主は、どう思う」

「これ以上の作業は無意味かと存じます。さらに作業を進めますと、逆にこの剣の切れ味が悪くなるかと存じます」

「……儂も同意見じゃ」

「うまくいきましたか、父上」

シディーがゆっくりと息を吐きだしながらドワーフ王に尋ねる。彼は表情を一切変えないまま、小さな声で呟いた。

「たぶん、な」

ドワーフ王は疲れ果てていた。だが、その出来栄えはこれ以上ないものであると確信していた。

「あとはこの剣を研ぐだけです。それについては、私とメイちゃんで……」

娘のコンシディーが口を開いた。その言葉に、ドワーフ王は無言で

頷く。おそらく、この二人ならば万に一つもしくじりはするまい。おそらく、あと、数時間もあれば、この剣は完成するだろう……。

彼はゆっくりと息子のガルトーに視線を向ける。

「ガルトー、ようやった。しばし休み……最後の研磨はそなたに任せる。次代のドワーフ公国王として、さらに己の技術を研磨せよ」

ガルトーはゆっくりと頭を下げた。この瞬間、ガルトーは次期ドワーフ王に内定した。後に、歴代のドワーフ王の中で、最も高い技術力を持つと評価された、「神工・ガルトー王」誕生の瞬間であった……。

第四百九十九話　かへり見すれば月傾きぬ（後書き）

１／２３にコミック版『結界師への転生②』が発売されました。
これも偏に、皆様のおかげと厚く御礼申し上げます。
ＷＥＢ版、書籍版とは少し異なるエピソードが収録されていまして、さらには、新たに書き下ろしたショートストーリー「メッセージ」も同時に収録されています。初代エリルとリノスとの心温まるエピソードに仕上げました。是非、手に取ってご覧いただければと思います。

第五百話　　よく来てくれ・・・た？

気が付くと、目の前にママがいた。ママ……。そう言おうとしたとき、強い力で突き飛ばされた。どんどん体がママから離れていく。そのときのママは……ニコリと笑っていた。その瞬間、目の前に真っ黒いものが通り過ぎた……。

ジャリッ、ジャリジャリジャリッ、ジャリジャリジャリジャリ……。

不快な音と共に、ママの姿が消えた……。

「ママっ！」

……目を覚ますと、そこはベッドの上だった。

「大丈夫だ、大丈夫だよ。アリリア」

目の前には、父・リノスが横たわっていた。彼は優しくアリリアの頭を撫でる。

「ううっ、ううっ、ううっ」

涙が次から次へと溢れてくる。この二日間というもの、アリリアはいつもこんな調子で、少し眠っては悪夢で起こされるということを繰り返していた。最初の頃は、起きた直後に号泣していたのだが、ここに来てようやく、そうしたことはなくなっていた。だが、それでも、自然と溢れてくる涙は、止めようがなかった。

アリリアの傍には、必ず父・リノスの姿があった。彼はアリリアを自分のベッドに寝かせて、付きっ切りで見守っていたのだった。リノス自身にとっても、眠れぬ夜を過ごしていたために、彼女が目を覚ますときは、いつも一緒に目を覚ました。

「大丈夫、大丈夫だ」

もう何回聞いた言葉だろう。だが、父の「大丈夫だ」という言葉は、アリリアの心をやわらげていく。彼女は小刻みに体を震わせながら父に抱き着き、再び目を閉じるのだった。

明け方、アリリアは再び目を覚ました。このときは、涙は出なかった。

彼女は起き上がり、じっと耳を澄ませる。聞こえてくるのは、父の穏やかな寝息だが、彼女には何か感じるものがあった。

「来たっ！」

突然、アリリアは誰に言うともなく声を上げた。その声にリノスは目を覚まし、アリリアに視線を向ける。

「どうした、アリリア？」

「来た……来てる！」

「あっ、どこへ行くんだ！」

アリリアは突然ベッドから飛び降りると、パタパタと走って寝室を出ていってしまった。リノスも慌てて彼女の後を追う。

「アリリア、危ないから屋敷に入りなさい！」

彼女は一目散に離れの入り口から飛び出し、庭の真ん中に突っ立った。こんなところをロイスに狙われてはひとたまりもない。リノスは慌ててアリリアの許に近づき、彼女を抱っこする。

「アリリア、どうしたんだ？」

リノスの言葉には答えず、アリリアはじっと空を眺めている。そして、右手を耳に当てて、何かを聞き取るような素振りを見せた。

「何か……聞こえるのか？」

「ううん。何も聞こえない。でも、確かに、確かに来てる気がする」

リノスは目を閉じて気配探知と魔力探知を発動させて、周囲を入念に調べる。だが、こちらに向かって来る者は感知できない。

「アリリア……」

リノスはアリリアを見つめるが、彼女は北の方角をじっと見つめたまま微動だにしない。

外は相変わらず黒い雲が低く垂れこめている。これは、ツネの弟たちが魔法で拵えた天候なのだそうだ。リコたちが襲われてからは、雪が降ることはなかったが、空は全く晴れる気配がなかった。ツネ曰く、おそらく弟たちはすでに、天候を操ることは止めているだろうとのことだった。と、いうより、あれだけの雪を短期間に降らせたために、魔力が枯渇している可能性が高いのだという。天候が回

復しないのは、あまりにも強い魔力が込められていたために、それが晴れるまでにある程度の時間がかかる……。リノスは、黒い雲を見つめながら、そんなツネの言葉を思い出していた。

周囲はまだ、雪が残っていて、まるで冷蔵庫のような寒さだ。結界を張っているとはいえ、いつまでもここにいるわけにはいかない。一旦屋敷に戻ろうと言おうとしたとき、リノスの気配探知に反応があった。

「……これは!?」

思わず頓狂な声を上げる。その声にアリリアも反応して、リノスの腕から飛び出さんばかりに体を伸ばしている。

「りゅーおーくん!」

アリリアが絶叫にも似た声を上げた。上空には人化した龍王の姿があった。彼はリノスたちを見つけると、ゆっくりと二人の許に下りてきた。

「待たせた」

「りゅーおーくん……」

アリリアは目に涙をいっぱいにためている。その様子を見たリノスは、ゆっくりと息を吐きだす。

「別に待ってはいないが……何しに来た?」

「よかったな。喜べ」

「何？　アホかお前。この状況を喜べるわけはないだろうが」

「貴様！　我に対して何という口を利く！」

「やかましい。こっちはそれどころじゃないんだ。アリリアが待っていたのはまさか……お前だったのか。人騒がせな」

そう言ってリノスは踵を返して屋敷に戻ろうとする。だが、アリリアはリノスの腕の中でジタバタともがいて、飛び出そうとする。

「違う、おとうさん」

「何、違う？」

「りゅーおーくんは、来てくれたの」

「……そのまんまやないかい」

「りゅーおーくん、ずっと……動いてた？」

アリリアの言葉に、龍王は大きく頷く。その様子にリノスは訝し気な表情を浮かべながら、再び踵を返した。見ると龍王は満足げな表情を浮かべながら、何度も頷いている。その笑顔はリノスの心を逆なでするものだったが、彼はぐっと堪えて、努めて冷静に言葉を絞り出した。

「動いていた……？　一体、何をしていたんだ？」

「フフフ、聞きたいか？」

「……いや、間に合っていますので、結構です」

「貴様っ！」

「おとうさん……」

リノスと龍王の間で殺気が漲ってきていた。その様子をアリリアは呆れた表情を浮かべながら、交互に視線を向けている。

「おとうさん……おうちに、入ろ？　外……寒いよ？」

「……そりゃそうだ。さすが俺の娘だ。ええこと言うた」

リノスは頷きながら踵を返し、ゆっくりと屋敷に向かって歩き出した。

「ほほう、その気配は、ツネ……か」

龍王は屋敷に入るなり、ダイニングにいたツネとシャリオ兄妹に視線を向けた。彼は笑みを浮かべているが、その眼は全く笑っていなかった。その様子をツネは無表情で眺めていた。

「貴様ら黒龍が起こした今回の騒動……覚悟はできているのだろうな？」

「ああ。これも全て私の不徳の致すところだ。存分に成敗するがいい。ただし、今は止めてもらいたい」

「何を言うか。今更命乞いか？　問答無用だ」

「ダメ、りゅーおーくん！」

龍王の体が銀色に光った瞬間、アリリアの声が飛んだ。龍王はツネを睨みつけたまま、固まっている。

「乱暴しちゃ、ダメ！」

「そうだ。乱暴は、いかん」

そう言うと、龍王の体から光が消えていく。彼は腕組みをしながら、ゆっくりと頷く。その様子を見ながらリノスは、大きなため息をつく。

「龍王、お前マジでアホだな。こんなところで暴れられたら、この屋敷が壊れちまうだろうが。空気読めないなら、帰ってもらえないか？」

「貴様っ！」

「恐ろしいな……」

にらみ合うリノスと龍王。そのとき、ツネが小さな声で思わず呟く。その言葉があまりにも意外だったのか、龍王が思わずツネに視線を向ける。

「龍王に指図するとは……。しかも、その命令を龍王は唯々諾々として受け入れている……。恐ろしい娘だ……」

驚愕の表情を浮かべるツネ。その様子を見ながら龍王は照れ臭そう

に笑う。一方のリノスは、チラリとアリリアに視線を向けた後、満足そうな笑みを浮かべながら、何度も大きく頷いていた。

「ねえ、りゅーおーくん」

アリリアの声が沈黙を破る。龍王はスッとアリリアに視線を向ける。

「何をしていたの？」

「少し時間がかかったが、ようやく見つけることができた。この我を欺くとは、不敵なヤツだった。上手くやっていたとは思うが、我の眼はごまかせん。フフフ……だが、褒めてやってもいい」

「龍王、一体何が言いたいんだ？　結論を先に言え、結論を」

リノスの言葉に、龍王は憤怒の表情を浮かべたが、やがてニヤリと笑みを漏らした。

「ロイスたち黒龍の居所が、知れたのだ」

「何？」

「上手く隠れていたので、少々苦労はしたのだがな。だが、間違いない。ロイスを含めた黒龍全員の居所がわかったので、それを急いで伝えに来たのだ」

龍王の言葉に、リノスは呆気にとられていたが、やがて普段の表情に戻ると、ゆっくりと口を開いた。

「それは……よくやってくれたと言いたいところだが、その前に、

リコたちが襲われたときに助けに来られなかったのか？」

「……」

「まさか、気が付いたらもうコトが終わっていて、慌てて黒龍たちを探したんじゃないだろうな？」

「そんなことはない。龍王たる我が、そんなことをするわけがない。まさかとは思っていたが、本当にやるとは思わなかった……などと言うわけはない。言うわけはないだろう！」

「逆切れかい」

……ドヤ顔の龍王。リノスはそんな彼からゆっくりと視線を外した。

第五百一話　りゅーおーくん、活躍？

ロイスたち黒龍兄弟は、三ヶ所に分かれて隠れていると龍王は言う。

「キオイ山、カミヤ山、オモト山の三ヶ所だ」

「すまん龍王……どこだ、それは？」

俺の一言に、龍王は目を丸くして驚いている。貴様、そんなことも知らないのか……よくそれで今まで生きてこられたな、きっとそう思っているに違いない。だが、知らないものは知らないのだ。

「貴様、それでも……」

「龍王、お前の言いたいことはわかる。だが、言うな！」

龍王の表情が歪む。この生き物は、自分の感情がモロに表情に出るようだ。わかりやすい。そんなことを思いながら俺は、膝の上に載っているアリリアに声をかける。

「アリリア、今、龍王が言っていた山は、どこにあるのか知っているかい？」

「ううん。知らない」

俺は大きく頷く。

「龍王、すまんが、アリリアもわからないようなんだ。この娘にも、

わかるように説明してもらえないかな。この娘が理解できれば、きっと俺も理解できる」

龍王は仕方がないという表情を浮かべたかと思うと、人差し指をテーブルの上に置いた。その直後、ガリッという耳障りな音が聞こえた。

「待てぇ！　何しやがんだ！」

龍王は爪でテーブルを引っ掻いていた。よく見ると、少し傷がついてしまっている。どうやら、ヤツはこのテーブルの上に地図を描こうとしていたらしい。これがリコにバレたら、どんなに怒られることか……。ああ、変な汗が出てくる。いや、やったのは龍王だ。俺じゃない。アリリアもいるし、他に証人はいっぱいいる。よし、大丈夫だ。俺が怒られることはない。

ゆっくりと深呼吸をしながら、何度も頷く俺を、龍王は驚きの表情で眺めている。コイツは自分が何をしようとしているのかがわかっていないらしい。これだから、アホは困るのだ。やはりコイツはアリリアに近づけないほうがいい。教育上、よろしくはないだろう。

そんなことを考えながら、仕方なく龍王に紙とペンを渡す。

「ほれ、ここに書け」

だが龍王は目の前に置かれた紙とペンをじっと見つめている。

「どうした？」

俺の声に、彼は仕方がないという表情を浮かべながらペンを握る。

そして、紙になにやら地図を描き始めた。

「……龍王、お前、ペンの持ち方、変わっているな」

「何？」

明らかに怒りを湛えた表情を向けてくる。いや、変わっているものは変わっているのだ。ペンを握るようにして持つ人は何度も見たことがあるが、龍王の持ち方は親指の付け根でペンを挟んでいるのだ。まあ、地図を描くことはできるのだろうが、何だか見ているこっちが気持ち悪い。

「りゅーおーくん、違うよ」

見かねたアリリアが右手を出して、龍王からペンを受け取る。

「こうやって、二本の指で持って……親指は、こう」

ゆっくりと、実にわかりやすくアリリアがペンの持ち方を教えている。さすがは俺の娘だ。

龍王は無言のままアリリアからペンを受け取ると、彼女に教えられた通りに二本の指でペンを挟み、親指を添え……たかと思いきや、結局元の変わった持ち方に戻ってしまった。なんでやねん……。

そんな俺の心の動きなどどうでもいいと言わんばかりに、龍王はペンを動かして地図を描いていく。

「三匹の黒龍のうち、一匹はここ、もう一匹はここにいる。そして、もう一匹は……ここにいる」

「……」

眉間に皺が寄っていくのが自分でもよくわかる。龍王がペンで指し示したところは、三ヶ所ともテーブルの上だった。お陰で、テーブルが汚れてしまった。一体、紙に書いた地図はどこを描いたものだったのだ？

「……へぇ、遠くにいるんだね」

アリリアが声を上げる。え？　この龍王の描いた地図が解読できるのか？　俺は思わず彼女の顔を覗き込む。

「すごいじゃないか、アリリア。この地図がわかるのか？」

「うん。これって、お家でしょ？　ここが森で、ここが山？」

アリリアの言葉に、龍王が満足そうに頷いている。正直、イライラする。この屋敷の周辺地図を描いてどうするんだ。どうして、世界地図のような全体が見渡せる地図を描かなかったんだ？　そんな疑問を口にする俺に対する、龍王の答えが実に振るったものだった。

「フハハ、この屋敷には何度も来ていたからな」

……ついつい、鮮明に記憶にあるこの屋敷の周辺図を描いてしまったらしい。ドラゴンとはとても知能の高い生き物と言われているが、コイツにはもはや、アホという言葉以外、形容する言葉が見当たらない。その上、どうやら龍王は、俺の知らないところで何度もこの屋敷の周辺をウロついていたらしい。しかも、結界に触れないギリギリのところを飛んでいたそうだ。そしてさらには、俺の気配探知

と魔力探知に引っかからないように、細心の注意を払っていたようだ。これは推測の域を脱しないが、以前の俺ならばともかく、リコたちが攫われて以降は、探知スキルに神経を尖らせていた。それを掻い潜ったということは、龍王のバカは全身全霊をもって娘をストーキングしていたことになる。その意気やよし、と言いたいところだが、惜しむらくは、スキルの使い方を激しく間違えている。これは、キツいお仕置きが必要なようだ……。

「やっぱり来てくれていたんだ！」

アリリアが嬉しそうな声を上げる。龍王も満面の笑みで頷いている。気持ちの悪いこと、この上ない表情だ。

「だって、りゅーおーくんの音が、何となく聞こえた気がしてた」

「「音？」」

思わず龍王とハモってしまった。咳ばらいをしながら俯いてしまう。

彼女の耳には、龍王が発する独特の音が聞こえているらしい。その耳をもってしても、龍王の接近は感覚的にしかわからなかったらしい。ヤツにはＬＶ５の隠密スキルがあるのかもしれない。

聞けばヤツは一日に４、５回はこの屋敷の近くを訪れていたらしい。彼は、黒龍たちのかすかな気配を感じ取りながら飛び回っていて、たまたまその進路にウチの屋敷があったために、たまたま何度も来ることになってしまったのだそうだが、その言葉は全く信用がならない。むしろ、言い訳をするならばもっと工夫するべきだった。ヤツは明確にウチの娘を狙っていると確信した。

とはいえ、ヤツはリコたちを飲み込んだロイスの居所を掴んでいる。本音を言えば、この馬鹿ドラゴンは今すぐにでも塵に変えたいが、今はそうも言っていられない。このドラゴンの力が必要な状況だ。神は時に実に無茶な試練を与えてくれる。仕方がない。あとでアリリアには、龍王が手を触れた瞬間に、その体が一瞬で溶けるほどの高熱を発する結界を張ることにして、まずは話を進めよう。そう思った俺は、改めて龍王に向き直る。

龍王の話では、どうやら、二匹の黒龍は帝都の近くにいるらしい。一匹は、この屋敷から西の方向に十キロ程進んだ森の中にいて、もう一匹は、南に十五キロ程進んだところにいるらしい。そして、残るもう一匹は、この屋敷からはるか北にある山の中にいるのだと言う。

「ここって、もしかして……」

「ヒヤマの砦のすぐ近くだ」

「なるほど」

突然、シャリオが口を開く。皆の視線が彼女に集中する。

「だから、か」

「すまんシャリオ、一人で納得しないでくれ。俺達には、わからん」

俺の言葉に、シャリオはハッと我に返ったような表情を浮かべた。

「……あそこは風の通り道なのだ」

「風の通り道？」

「春になれば西から東へと風が吹き、冬になると北から強い風が吹く」

「……当り前じゃないのか？」

「わからぬヤツだ！」

龍王がじれったそうに口を開いている。正直、お前にそんな口を利かれたくは、ない。

睨みつける俺を一瞥した龍王は、仕方ないという表情を浮かべながら、ゆっくりと口を開く。

「あの場所は常に風が吹いている。しかも、今の時期は強い北風が吹き続けている。そのせいで、魔力も気配も探知するのが難しくなる。高いスキルを駆使することはもちろん、余程注意深く探知せねば、ヤツの存在は見つけられぬ。実際、最も発見に時間がかかったのがロイスであった。我ながら、よく見つけたものだ」

龍王がドヤ顔で頷いている。だが、すぐに真顔になり、今度は落ち着いた声で口を開いた。

「ただ、一つ問題がある。ヤツらの居所は知れたが、隠れている空間から出す方法がない。自分から出てきてくれるのが一番良いが、それは期待できまい……」

「龍王」

「何だ？」

「心配するな。ヤツらが隠れている空間……それを斬る剣が、もうすぐ完成する」

「何……だと？」

龍王が体を震わせながら驚いている。それって、そんなに驚くようなことか……？

第五百二話　できた！

その頃、ドワーフ公国の公王専用工房では、張り詰めた緊張感に包まれていた。

その場にいる四人の息遣いが聞き取れるほどの静寂の中、三人の視線はドワーフ公王ただ一人に向けられていた。

眉間に深い皺を刻みながら、彼は一振りの剣を眺め続けている。外は雪が舞っているが、彼の体からは幾筋もの湯気が立ち上っていた。

時折、剣の角度を変えると、キラキラと剣が光を反射する。その光はすでに、異様な輝きを放っていた。

「父上……」

沈黙に耐えられないかのように、公王の息子であるガルトーが口を開く。その声に公王はピクリと体を震わせたかと思うと、その鋭い視線を彼に向けた。その視線に射竦められたのか、ガルトーは沈黙したまま、公王を凝視し続ける。

「いかが、で、しょう、か」

ガルトーの呼吸が荒い。必死で言葉を絞り出している。それもそのはずで、公王による剣の確認作業は、すでに四時間を超えているのだ。この二日間、飲まず食わずの不眠不休で作業してきた彼らにとって、体力は限界を迎えようとしていたのだ。

公王は剣を握りしめたまま、相変わらずガルトーを睨みつけていたが、やがて、ゆっくりと息を吐きだしながら、コクリと頷いた。

「……よいだろう」

「父上……」

ガルトーの言葉と共に、部屋の中に張り詰めていた緊張が緩んでいく。その声を聞いて、メイとシディーは、まるで崩れ落ちるかのようにその場にしゃがみこんだ。

「コンシディー、見事であった。そしてメイ殿……。そなたが導き出した理論は、完璧であった。褒めてとらす」

公王の言葉に、二人は無言で頭を下げた。

公王が手放しで他人を褒めるということは、なかったことだ。その彼をして、今回の出来栄えと理論立ては文句のつけどころのないものだった。通常であれば、コンシディーなどは涙を流して喜ぶほどのことなのだが、彼女は疲労困憊して、目の下には濃いクマが表れていた。それはメイも同様で、彼女も、公王から称賛された喜びより、無事に剣を作り上げることができたことへの安堵感が強かった。

そんな二人の様子を、公王はじっと眺めていたが、やがてその視線を息子のガルトーに向けた。

「最後の研磨……儂は正直、無理だと思っておった。じゃが、この出来栄え……。剣には一点の曇りもない。一心不乱に剣を磨き上げたそなたの腕……見事であった」

「ち……父上……」

ガルトーはがっくりと膝をつき、肩を震わせた。その様子を公王は、何度も頷きながら眺めている。

「これからも頼むぞ、ガルトー」

「ハッ……」

「コンシディーも、これから兄を助けてやってくれ」

公王の言葉に、シディーは無言で頷いた。

「さて、この剣を早く婿殿に届けるのじゃ」

公王は剣を大切に鞘に納め、それをメイの前に差し出した。彼女はそれを無言のまま両手で受け取り、恭しく頭を下げた。

「……父上」

「何じゃ」

シディーとメイが退出し、二人きりになったとき、ガルトーが不意に口を開いた。公王は二人が出ていった扉に視線を向け続けたままだ。

「あの剣で、本当に空間は斬れますか？」

「わからん……」

公王は弱々しく呟く。そんな彼にガルトーは不安そうな眼差しを向ける。

「じゃが、我々はすべてのことを完璧にやり切った。あれ以上のものはもうできまいて……」

彼の言葉に、ガルトーはゆっくりと頷いた。

◆　◆　◆

メイとシディーは、出来上がったばかりの剣を携えて、帝都の屋敷に通じる転移結界のある部屋へと急ぐ。二日間、ほったらかしにしている子供たちのことが心配だが、それよりもこの剣を、早く夫の許に届けることが先決だった。二人は無言のまま、足早に宮殿の廊下を歩いて行く。

帝都の屋敷に着き、ダイニングに通じる扉を開けると、そこでは夫・リノスと龍王が激しく罵りあっていた。

「何を言っていやがるんだ、このバカ龍が！」

「何だと貴様！　誰に向かって……！」

「お前だ、お前！」

リノスは龍王を指さしながら、さらに言葉を続ける。

「ウチのメイとシディーが作るんだ、絶対大丈夫に決まっているだろう！　何にも知らんお前が、勝手なことを言うな！」

「無理なものは無理だと言っておるのだ！　龍王たる我ができぬのだ、他の者に出来るはずがない！」

「アホかお前。お前は何にもできないだろうが！」

「何ィ？　我をここまで侮辱するとは！　いいだろう！　かかってくるがよい！　我の力……見せてくれる！」

龍王の体が銀色に光り始める。そのとき、アリリアの呆れたような声がダイニングに響き渡った。

「りゅーおーくん、乱暴はダメ」

龍王は一瞬、体を震わせたが、やがて体から光が失われていく。それを見たアリリアは、スッと、父・リノスに視線を向ける。

「おとうさんも、ケンカは、ダメ！」

アリリアはリノスと龍王を交互に見比べていたが、やがて、リノスのヒザの上からピョンと降りると、左手を腰に当て、右手で天井を指さしながら、口を開く。

「乱暴したり、ケンカしたりするなら、私は、遊んであげないからね？」

アリリアの言葉に、リノスは呆気にとられている。一方の龍王は、じっと視線をアリリアに向けていたが、やがて、落ち着いた声で口を開く。

「わかった。乱暴は、しない」

アリリアは満足そうに頷いている。その光景をシャリオとツネの兄妹は驚愕の表情で見守っていた。

「ご主人様……」

「何だ……って、メイ！？」

リノスが振り返ると、そこにはメイとシディーが立っていた。予定よりずいぶん早く戻って来ていたために、彼は驚きを隠すことができなかった。だが、メイの手に一振りの剣が握りしめられているのに気が付くと、ゆっくりと立ち上がって、彼女らの許に歩いて行く。

「でき……たのか？」

「はい、先ほど完成しました」

「ありがとうメイ。よくやってくれた」

リノスの言葉に、二人はゆっくりと頭を下げる。そして、メイはまるで宝物を渡すように、恭しく手に持っていた剣をリノスの前に差し出した。彼はそれを無言で受け取ると、しばらく剣をじっと眺めていたが、やがてゆっくりと剣を鞘から引き抜いた。

「リノス様」

「何だい、シディー」

「その剣には、魔力が通せます。魔力を通すと、空間が斬れるはずです」

「ほう……」

リノスは剣の鞘に魔力を込める。だが、剣には何の変化も見られない。彼はさらに剣に魔力を込めていく。

「……けっこう魔力を込めたんだけれどな」

一見すると、何も変わっていない気がする。その様子を見たメイが、ゆっくりと口を開く。

「申し訳ありません。どのくらい魔力を込めれば、どの程度の空間が斬れるのかは試していません。しかし、確実に、その剣に魔力を通せば、空間を斬ることはできるはずです」

メイの澄んだ瞳は、説得力があった。リノスはゆっくりと頷くと、剣を鞘にしまった。

「ありがとう。よくやってくれた。メイ、シディー。……二人とも、ずいぶん疲れているな。全く休んでいないんじゃないのか。少し、休め。何か食べるか？」

リノスの言葉に、二人は無言で首を振る。

「えっ？　ええっ？」

気が付けば、リノスはシディーをお姫様抱っこしていた。みるみるシディーの顔が赤みを帯びていく。そんな彼女に笑みを浮かべながら、彼はシディーを伴って離れに消えていった。

しばらくすると、リノスは一人で戻ってきた。そして、メイに向き直ると、彼女に優しく声をかける。

「シディーは部屋で休ませた。メイも休め」

「はい。それでは、部屋で休ませていただきます」

ゆっくりお辞儀をして、彼女は一人でダイニングを後にした。そして、離れの扉を開けようとしたそのとき、彼女の体が宙に浮いた。

「ご……ご主人様？」

気が付けば、メイはリノスにお姫様抱っこをされていた。戸惑うメイに、リノスは笑顔で声をかける。

「ここから先は、俺の仕事だ。メイ、よくやってくれた。お礼にはならないかもしれないけれど、せめて、こうやって部屋まで運ばせてくれ」

そう言って彼はメイの額にキスをした。その瞬間、メイの体から力が抜けた。久しぶりに味わう心地いい感覚に、メイは思わず時が止まればいいと願うのだった……。

第五百三話　迎えに・・・

「それじゃあ、早速、出かけるか」

ダイニングに戻ってきたリノスは、誰に言うともなく、そう呟いた。
彼は周囲を見回していたが、やがてアリリアに視線を向ける。

「アリリア、ペーリスお姉ちゃんは？」

「迎えに行ったよ」

「迎え？」

アリリアの話では、ペーリスはドワーフ公国に預けてあるイデアとピアトリスを迎えに行ったらしい。それを聞いてリノスは思わず嘆息を漏らした。本来ならば俺が行かねばならないのだが、リコとソレイユを一刻も早く取り戻さねばという思いが先立ってしまった。これは、大いに反省するべきことだ……。そんなことを考えながら、彼は大きく深呼吸をする。

「じゃあアリリア。イデアとピアが帰ってきたら、ペーリスお姉ちゃんと一緒に、弟と妹の面倒を見てやってくれな。それに、お母さんとシディー母さんは眠っているから、あまり騒がないように、な」

彼の言葉に、アリリアは小さく頷く。それを見て、満足そうに頷いたリノスは、龍王に視線を向ける。

「すまないが龍王、黒龍たちの許に案内してくれないか」

「いいだろう。付いて来るがいい。貴様のスキルで、我の飛行に付いてこられるか？」

「いや、俺は空を飛べないが……」

「貴様……空も飛べぬ分際で、我と対等に話をしておったのか！無礼にもほどがあるぞ！」

「龍王……言いたいことは百を超えるが、今は言わないでおいてやる。イリモに乗って行くから、案内しろ」

「イリモ……あのユニコーンペガサスか。あのような駄馬では我の速度には付いては来られぬ」

「お前なぁ。優しさってのはないのか？　それに、うちのイリモはかなり優秀だ。お前なんかよりずっとな」

「我をあのような駄馬と比べるのか……。いくら何でも……」

「アリリア」

リノスは龍王の言葉を遮ったかと思うと、アリリアの居る方向に向き直る。そして、両手を広げながら呆れたような表情で彼女に話しかける。

「おバカなりゅーおーくんに、とうたんに優しくしなさいって言ってやってくれ」

「りゅーおーくん、優しくしないと、ダメよ」

「そうだ、優しくせねば、ならん」

龍王は腕組みをしながら何度も頷いている。そんな彼をリノスは怪訝な表情で眺めている。

「私が行こう」

突然、口を開いたのは、黒龍のツネだ。彼はスッと一歩踏み出すと、龍王とリノスの二人に交互に視線を向けながら口を開いた。

「私が乗せて行こう」

「待て。そなたがここを動くことは、許さん」

龍王が言下に却下する。だが、ツネは不敵な笑みを浮かべながら反論する。

「龍王ともあろう者が、私が弟たちに寝返るのが怖いのか？」

「何？」

「龍王、貴様は、私が弟たちと結託して戦いを挑んでくる……と懸念しているのだろう。それは杞憂だ。ただ私は、弟たちを救いたいのだ」

「救う、だと？」

「ああ。特にターチャとショースの二人の弟は救いたいのだ。彼らはただ、シャリオを取り戻したかっただけなのだ。その思いをロイ

スに利用されたに過ぎない。おそらく二人は、何も知らされぬまま、ロイスの作った空間に閉じ込められているのだろう。そんな弟たちを救い出し、事実を伝え、そして……元の生活に還らせてやりたいのだ」

「それは、許さん」

龍王は腕組みをしながら、冷たい視線をツネに投げかけている。彼は少し俯くと、ゆっくりと語膝をつき、その視線をアリリアに向けた。

「龍王と心を合わせし姫よ。我が願い、どうか聞き届けていただきたい。我が弟たちの命、奪わないでいただきたい」

そう言って彼は頭を下げる。その様子を隣にいたシャリオは、見ていられないとばかりに、スッと目を背けた。

「りゅーおーくん、許してあげよ?」

アリリアが屈託のない声で口を開く。龍王は一切表情を変えないまま、毅然とした態度で口を開いた。

「そうだ。許そう」

「どっちやねん」

思わずリノスが呟いたが、龍王は全く気にしていない素振りですましている。一方、ツネは片膝をついたままリノスに視線を向ける。

「アガルタ王、私の背に乗られるがいい」

リノスは無言のまましばらく、ツネの眼をじっと見つめ続けた。このときすでに彼は、鑑定スキルを発動していた。

……ツネの心の中は、一点の曇りもなかった。ただひたすらに、弟たちを助けたいという純粋な気持ちに溢れていた。

「……わかった。お前にかけている結界を解除しよう。ただし」

リノスは一旦言葉を切り、一瞬だけツネから視線を逸らせたが、再び彼に視線を戻す。

「ロイスの命は、奪うことになるぞ」

「承知している。もともとこの騒動は、ロイスが起こしたものだ。ヤツは、命でもって償うほかはないと考えている」

「いい覚悟だ」

ツネの体が紫色に光る。彼は不思議そうに周囲を見回す。結界が解除されたかどうかが全くわからなかったのだ。通常、敵対心が込められた結界を張られると多少の息苦しさや居心地の悪さを感じるもので、それが解除された瞬間は、体が軽くなったような感覚を覚えるが、今回は全くそういうことはなかったのだ。そんな彼の疑問を察してか、リノスが声をかける。

「ちゃんと結界は解除した。ウソだと思うなら、外に出て人化を解除してみるといい」

その言葉にツネは頷き、ゆっくりとダイニングの勝手口に向かう。

彼が外に出たとき、子供たちの手を引いてこちらに向かって来る女性が目に入った。彼女はツネの姿を見ると、一瞬体を震わせたが、ツネがゆっくりと頭を下げると、子供たちを伴っていそいそと屋敷に入っていった。

イデアたちを連れたペーリスがダイニングに入ると、リノスが帯剣しているところだった。彼はペーリスたちに気が付くと、ニコリと優しげな笑みを浮かべた。

「ペーリス、ありがとうな。お前には一度、ちゃんとお礼をしなきゃいけないな」

そう言うとリノスは、ゆっくりとその場にしゃがみ、ペーリスの傍にいた息子のイデアに声をかける。

「とうたんはこれから、ママとマミーを迎えに行ってくる。イデア、とうたんが留守の間、この家に男の子はイデア一人になる。お姉ちゃんや妹のこと、守ってくれよ」

ママを迎えに行くと聞いた途端、イデアの表情がパッと明るくなった。彼は父に向かって大きく頷く。その様子をリノスは満足げに眺めていたが、やがて、アリリアとシャリオに視線を向ける。

「すまないけれど、子供たちのことを、頼む」

「では、私はラマロン皇国に……。マトちゃんとエリルちゃんを……」

「すまないな、ペーリス。そうしてくれ」

リノスは優しげな笑みを浮かべていたが、やがて真剣な表情となり、龍王に視線を移して、ゆっくりと頷いた。

「では、行ってくる」

「早く帰って来てね、お父さん！　りゅーおーくん！」

アリリアの声が、二人の背中越しに聞こえてきた。龍王は振り返って力強く頷き、すぐにリノスの後を追ってダイニングを出ていった。

庭に出ると、そこには巨大な黒龍が控えていた。グルグルと首を廻しながら、まるでストレッチをしているように体を動かしている。

「さあ、行こうか。龍王、案内を頼む」

「フハハハハ。我の速度についてこられるか？　手加減はせんぞ？」

「心配ない。地の果てまで追いかけてみせる」

ツネの言葉に、龍王はニヤリと笑みを浮かべながら、ゆっくりと浮き上がった。

「アガルタ王、背中から落ちぬようにな」

「わかっている」

そんな短い会話を交わしながら、ツネの体もゆっくりと浮き上がっていく。

「まずはキオイ山に向かう」

そう言うや否や、龍王がとんでもないスピードで飛行していく。その様子にツネは少し呆れた表情を浮かべたが、やがてぐるりと首を廻すと、彼もまた、とんでもないスピードで龍王の後を追いかけて行った。

……その頃、リノスの屋敷では、不眠不休でホーリーソードを鍛え上げたコンシディーが深い眠りについていた。そんな彼女が突然、小さな声で物騒な言葉を呟いた。

「ううん……。ダメ、リノス様……。全員……死んじゃう……」

第五百四話　淵となりぬる

「くっ……くぅぅぅ……」

俺は思わず声を漏らしていた。ツネの飛行速度が予想超えたものだったからだ。一瞬でも気を抜けば、背中から放り出されそうだ。

必死に背中から生えている角に捕まる。風景が風のように流れていくために、一体、どこを飛んでいるのか、見当もつかない。

そのツネの飛行が突然止まった。ゆっくりと周囲を見回すと、眼下に広大な森が見える。ここに、ツネの弟がいるのだろうか？

「やるではないか」

突然、龍王の声が聞こえる。気が付くと、龍王が腕組みをしたまま空から降りてきた。

「結構本気で飛んだのだがな」

龍王は不敵に笑う。そんな彼をツネは無言のまま眺め続けている。

「どうだ、感じぬか？」

出し抜けに龍王が口を開く。どうやらこの森の中にツネの弟がいるらしい。俺は気配探知と魔力探知を駆使して、黒龍らしき者の気配を探る。だが、かなり集中しても邪悪な気配や、強大な魔力を感じることはできなかった。それはツネも同じらしい。彼はキョロキョ

ロとあたりを見廻していて、少し戸惑っているように見える。

そんな俺たちを龍王は満足そうに眺めている。人が戸惑っている様子を見て、何が楽しいんだか。

俺が睨んでいるのに気付いたのか、龍王は一瞬、顔をしかめたが、やがてゆっくりとある場所を指さした。そこには滝があった。

「あの滝の中に何か……そうか、滝の奥に洞窟か何かがあって、そこに潜んでいるのか！？」

そう言って俺は滝に精神を集中させて、再び気配探知と魔力探知を発動する。だが、そこからは何も感じることはできなかった。

「何も……感じないな」

ツネも龍王が指さした方向を凝視しているが、やはり、何も感じないらしい。一点を見据えたまま、微動だにしないでいる。

「どこを見ているのだ？」

龍王が呆れたような声を上げた。その言い方が、俺の癪に障った。

「どこって、お前が指さしたところだろうが。気配探知と魔力探知を発動してみたが、何も感じないぞ？　本当にあそこに黒龍がいるんだろうな？」

「いる。よく見るのだ」

「……全くわからん」

「ええい！　世話の焼けるやつだ！」

そう言って龍王は下降していく。ツネも仕方ないといった感じで、彼の後についていく。龍王が降り立ったのは、巨大な滝のほとりだった。かなり高いところから水が落ちているらしく、周辺には薄い霧が立ち込めている。普段ならば、マイナスイオン全開の癒しの空間なのだろうが、生憎、今の俺にはそれを感じる余裕はない。

「何も感じないぞ？」

「どこを見ているのだ？　ちゃんと見るがいい」

「さっきから一生懸命滝を見ているだろうが。まさか龍王、実は滝じゃなかったんですなんて言った日にゃ、マジでぶっ飛ばすからな！」

「何をバカな！　我の指さす方向を見るがいい！　一体どこを見ているのだ！」

よく見ると、龍王の視線は俺たちに向いているが、右手が滝壺を指している。いったいこれはどういうことだ？

「そうか、あの滝壺の中にいるのか！」

突然ツネが頓狂な声を上げる。その様子を龍王は満足げな表情を浮かべながら、言葉を続ける。

「この滝は、千数百年間流れ続けている。そのお陰で、この滝の下には大きく、深い淵となっているのだ。黒龍のターチャは、この淵

にいる」

俺は早速、気配探知と魔力探知、そして、鑑定スキルを発動させる。気配と魔力は感知できなかったが、鑑定スキルに反応があった……というより、見えたのだ。一匹の黒龍が、この淵の中に入っていく様子が。

「うっ……ツツツツ……」

頭がズキズキする。思わず頭を押さえてうずくまる俺に、龍王が声をかけてくる。

「三つのスキルを同時に発動するとは器用なヤツだ。そんなことをすると、頭が溶けてしまうから、やめることだ」

どうやら、かなり体に負担のかかることをしていたらしい。俺は深呼吸をして、ゆっくりと立ち上がる。

「クッ……ターチャ……」

隣ではツネが顔を歪ませている。いや、歪んでいる気がするのだ。ドラゴンになると、全く表情が変わらないので、なかなか気持ちを推し量るのが難しい。ツネ曰く、弟のターチャに念話を送ってみたが、全く反応がない。彼にはちゃんと見えているようで、聞けば、このツネには千里を見渡す力があるのだという。その力で、空間に閉じこもっている弟の存在を、何とか見つけることができたのだそうだ。

「この黒龍は出てくる気はないのか？」

「出たくても出られないのだろう」

「何？」

「この空間は、おそらく術者か解除できなければ出ることすらできぬ。しかも、外からは一切の情報を遮断されている状態なのだろう。我がいかに接触を試みようとも、全く反応がなかった。これは我の推測だが、今、この黒龍は眠っているのだろう。そして、眠りから覚めると再び天候支配の魔法を使う。魔力が切れれば再び眠りに落ちる。ロイスが来るまでそれを繰り返すのだろう」

「そこまでして、何で？」

「そこまでしても、シャリオを取り戻したいのだ」

誰に言うともなく、ツネが呟く。彼は深いため息をついた。

「我ら兄弟にとってシャリオは唯一の妹。そして、最も能力の高いドラゴンだ。我ら一族の未来は、シャリオにかかっていると言っていい。その妹を取り戻すのならば、このくらいの犠牲は容易いものだ」

「……そうか。まあ、事情はわからんでもないがな。とはいえ、どうやってコイツを外に出すかだな」

そんなことを言いながら俺は、ホーリーソードの柄に手をかけ、ゆっくりと刀身を引き抜いていく。

「ほう……」

龍王が思わず嘆息の声を上げる。屋敷の中で見たときにはさほどは感じなかった剣が、この森の中、寒さで冴えわたった空気に触れると、何とも言えない雰囲気を放つ。磨きに磨き、研ぎに研がれた刀身は、鏡面さながらにものを映し出している。そして、剣から発せられる匂いと沸(にえ)が、なんともいえない神韻を醸し出していた。刃と地肌の境に細微な銀砂が浮き出ていて、これを見ていると何だか、魂を吸い取られそうな感覚に陥る。俺は思わず刀身から目を逸らす。

「ええと。メイたちの話では、これに魔力を通すと空間が斬れるって言っていたな……」

そんなこと言いながら俺は、剣に魔力を通す。そのとき、刀身で反射した太陽の光が、水面をなぞった。

「うん？」

淵の中に、一匹の黒龍がいるのが浮かび上がってきた。こちらに背中を向けたまま、微動だにしないでいる。龍王が言った通り、眠っているのかもしれない。

俺はゆっくり息を吐きながら、黒龍を凝視する。コイツがいるのは、淵のかなり深いところだ。数十メートルはあるだろうか。そんな遠いところを斬るのは難しいだろう。ここはひとつ、水に潜って、至近距離に近づいて斬らねばならないだろうか……。

俺は剣に魔力を通しながら、大上段の構えを取る。斬るとすれば、横に払うよりも、袈裟懸けに斬るほうが威力はあるだろう。例えば、こんな感じに……。

「ええいっ！」

気合を込めて剣を振るう。すると、一筋の光が黒龍に向かっていったかと思うと、その瞬間、ドラゴンの体が真っ二つに割れた。

「え？」

俺が驚きの声を上げるのと、巨大な水柱が上がるのが同時だった。気が付くと目の前には胴を真っ二つにされた、巨大な黒龍が浮かび上がってきていた。

「おお……ターチャ……」

何とも言えない、ツネの悲しみを込めた声が聞こえる。あまりのことに俺はしばし呆然と、ホーリーソードの刀身を眺める。

「マジか……すげぇ……」

「全く、何をしておるのだ、貴様は！」

龍王の声が聞こえる。彼は腕組みをしながら首を左右に振っている。

「殺さぬのでは、なかったのか！」

「仕方がないだろう！　俺だってこの剣の威力を知らなかったんだから！　てゆうか、何でここに連れて来たんだ？　優先順位から行けばロイスのところが先だろう、このバカ龍が！」

「何を言うか！　ここが最も接触しやすかったのだ！　貴様たちのことを思ってここに連れてきた我の思いをフイにするとは……全く、何という男だ！」

最も接触しやすかったって、マジか……？　この調子だと、ラスボスのところに行くには、どんな仕掛けをクリアしなきゃいけないんだ？？

第五百五話　やらかした

結局、ターチャの躯は森の中に埋葬された。兄であるツネは終始無言でその光景を見守っていた。まあ、それはそうだろう。俺だって自分の兄弟があんな埋葬のされ方をされたら、こんな感じになる。

埋葬自体は、実にあっさりとしたもので、すぐに終わってしまったのだ。これをやらかしたのは、龍王だ。

彼は無造作にターチャの躯を川の中から片手で拾い上げたかと思うと、それをズルズルと森の中に引っ張っていき、もう片方の手を地面に向けたかと思うと、一瞬のうちにそこに大穴をあけた。そのとき、かなり大きい音が鳴り響いてしまい、森の中の鳥や獣たちが脱兎のごとく周囲から逃げ出していった。

そんなことは全く気にも留めず、龍王はターチャの躯をぽいっと穴の中に投げ捨て、残っている躯を淵から拾い上げ、それも穴の中に投げ入れた。そして、両手を躯に向けたかと思うと、真っ赤な火の玉を出して発射して、一瞬のうちに躯を焼き尽くしてしまった。この間、一分もかからなかったのだ。

弟との最後の別れをする暇もなく、まるでゴミを燃やすかのように淡々と葬られてしまったのだ。彼が無言のまま呆然とするのもよくわかる。

「さて、次だ」

全く何事もなかったかのように、龍王が口を開く。コイツには憐憫

の情というものはないのだろうか。

そんな俺の気持ちなど知ったことではないと言わんばかりに、彼は腕組みをしながらフワリと浮き上がった。

「我らも……行こう」

まるで絞り出すように、ツネが口を開く。俺は無言で彼の背中に乗った。

「……すまん、ツネ。今度は、うまくやる」

「……」

何とも気まずい雰囲気のまま俺たちは再び、龍王の後を追いかけた。

◆　◆　◆

「うおっ！」

突然龍王が上空で止まった。それに釣られてツネも急停止した為に、俺はあやうく彼の背中から投げ出されそうになる。

必死で背中の角に捕まりながら、一体何事だと龍王に視線を向けるが、彼は何やらキョロキョロと周囲を見廻している。まさか……迷っているのか？

「まよっているわけではない」

龍王は済ました顔をしているが、言葉のイントネーションがかなり

おかしい。明らかに動揺しているじゃないか。コイツは心の動きを隠すのが実にヘタクソだ。

「ちなみに、どこに向かおうとしていたんだ？」

「ショースのところだ」

「ロイスじゃないだろうなということは薄々わかっていたが……。俺が聞きたいのは、どこのどんな場所で、どんなところに隠れているかという点だ。何か特徴はないのか？」

「山の中だ」

見れば眼下に山々が連なっている。あたり一面森だ。俺は心を落ち着けながら、言葉を続ける。

「どんな山だ？」

「森に囲まれているのだ」

「そのまんまやないかい！」

マジで説明下手なのか、俺をおちょくっているのか、ちょっと判断がつかない。後者なら全力でボコるところなのだが、この振る舞いはどうやらマジで道に迷ってしまっているらしい。

「……見つけたぞ」

突然ツネの声が聞こえる。龍王が驚いた表情を浮かべている。え？　マジで見つけはったんですか、兄さん……。彼の表情からはそん

な感情がうかがえる。だがツネは目を見開いて驚いている龍王を放っておいて、ゆっくりと下降していく。

……深い谷だった。いったい、どのくらいの深さがあるのかがわからなかったが、突然、ツネの体が揺れて衝撃を覚える。そこは、大小さまざまな石がゴロゴロしていて、とても足場の悪そうなところだった。もともと、川でも流れていたのだろうか？

「フハハ、よく見つけたな」

龍王が他人事のように呟きながら降りてきた。全く世話の焼けるヤツだ。俺は地上に降り、腰に差しているホーリーソードを引き抜く。そして、それに魔力を込め、まるで円を描くようにしてゆっくりと剣を振るう。

「偃月殺法……」

「何？」

「龍王、お主は儂の剣では斬れぬと思ぅているであろう。しかし、儂は、斬れる……」

「……」

眠〇四郎のモノマネ、結構上手いと思うんだけれどな。……市川〇蔵、知らんよね？　いや、知らなきゃいいんだ。これができただけで、大満足だ。やっぱり、わかんないか。……何をキョトンとしているんだ？　ついて来いよ？　置いていくぞ？

「何をしているのだ？」

龍王が怪訝な表情で尋ねてくる。仕方がない。長くなるが、眠〇四郎こと市川〇蔵と偃月殺法について説明してやるか。そう思いながら視線を向けると、龍王が俺を睨みながら、あらぬ方向を指さしている。

「黒龍がいるのは、あそこだ」

「早く言えよ」

龍王が指さしている方向に向き直り、改めてホーリーソードに魔力を通して、偃月殺法の構えを取る。すると、一匹の黒龍の姿が現れた。

……少し小ぶりなドラゴンだった。俺たちが認識できるのか、顔はこちらを向いている。よくみると、そいつは震えていた。

「ショース。助けに来た。もう大丈夫だ」

ツネが話しかけるが、ショースは微動だにしない。その瞳は意外と美しく、一種の純粋さを感じさせるものだった。俺は剣を構えながら、ゆっくりと黒龍に近づく。

「あっ、待て！」

気が付くと、ショースの姿がどんどんと透けていく。まさか、ここから転移しようとしているのか？

「待て、ショース！　話を聞け！」

ツネが首をぐるりと廻しながら叫んでいる。俺は咄嗟に剣を振るう。

「ベライン・ボーグ！」

俺が剣を振るったと同時に、龍王の声が聞こえる。その瞬間、ショースの体がグニャグニャに曲がっていくのが見えた。そして、まるで風船がはじけるように、その体が消え失せてしまった。

「……え？　何だ？」

思わず呆気にとられてしまう。一体、何がどうなったのかが把握できない。それはツネも同様で、彼は全く微動だにせず、一点を見据えたままだ。俺はゆっくりと龍王に向き直る。

「おい、一体、何がどうなったんだ？」

「……」

「目逸らしてんじゃねぇよ。こっち向けよ、オイ」

「散ってしまったな」

龍王がそっぽを向きながら、小さな声で呟く。

「散った……って……お前……」

「手加減したつもりだったのだがな……」

「てことは、まさか……」

「ショース……」

ツネの、何とも形容しがたい嘆息が漏れる。まさか、自分の弟が目の前で倒されるとは、さすがの彼も思っていなかったのだろう。彼の心中は察して余りある。

「龍王、お前、どうするんだよ」

「どうする？　何をだ」

「何をだじゃねぇよ。別に殺さなくたっていいじゃないか！　何で殺した！」

「貴様が悪いのだ」

「何、俺？」

「貴様がショースの空間を切り裂くから、我のベライン・ボーグがまともに当たってしまったのだ。かわいそうに、怯えているにもかかわらず……だ」

「龍王、お前、自分が何を言っているのか、わかっているのか？」

「何を言うか！」

龍王は尻尾を勢いよく地面に叩きつける。そして、俺とツネの二人に交互に視線を向けながら、堂々と言い放った。

「あれしかなかったのだ。あれが、一番の、最善の策だったのだ」

「お前なぁ……」

「考えてもみよ。ショースは転移しようとしていた。一刻も早くあの空間を破壊する必要があった。と、すれば、魔力を強く籠めねばならぬだろう。とはいえまさか、貴様の剣があそこまで早く空間を切り裂くとは我も思わなんだ。我の予想の上をいくとは……やるではないか」

龍王の乾いた笑いがこだまする。俺は舌打ちをしながら、隣で茫然自失となっているツネに小声で話しかける。

「龍王のバカ、一発、ぶん殴っておこうか？」

「……」

「……近いうちに、娘のアリリアに頼んで、龍王にはキツイお仕置きを執行しておくよ」

俺の言葉に、ツネは小さく頷いた。

第五百六話　空間魔法

「さて、ロイスのところに向かうとするか。……おい貴様、何をしている？」

龍王がちょっと苛立ったような表情を浮かべている。俺はそんな彼を一瞥しただけで、すぐに視線を外した。

今、俺は風魔法を駆使して、木を切っている。刃のように研ぎ澄ませた風が、一本の木を切り倒し、それに付いている枝を払い落した。そしてそれをきれいに削り、形を整える。風魔法は、俺の手の中で発動してくれるし、イメージさえしっかりしていれば、かなり使い勝手がよいものなのだ。

そんな俺の姿を、ツネは唖然とした表情で見守っている。一方の龍王は、完全に怒っている。ヤツの言いたいことは手に取るようにわかるが、敢えて無視することにする。

「こんなもんか……」

そう呟く俺の手には、一本の太い棒が握りしめられていた。それを勢いよく地面に突き刺す。

「せめてもの、お詫びだ。このままでは、あまりにも可哀そうすぎる」

そう言って俺は片膝をついた。

「一体、何をしているのだ！」

龍王が怒りを抑えきれなかったかのように、怒気を帯びた声で話しかけてくる。

「墓を作っているんだよ」

「墓……？」

「ああ。ショースの墓だ」

そう言って俺は、ゆっくりと手を合わせ、小さな声で般若心経を唱える。

「……何を言っているのだ？」

ツネがようやく口を開いた。さすがの彼も、お経はわからないらしい。

「ちゃんと、あの世に行けるように……おまじないみたいなものだ。次に生まれ変わるときには、もっと、幸せに……ってな」

ツネはわかったようなわからないような表情を浮かべていたが、やがて、グルルと声を上げたかと思うと、その場に腹ばいになって寝転がった。何となくだが、彼自身も弟の供養をしようとしているのだろう。

「また今度、ターチャの墓も作りにいかないとな」

俺の言葉に、ツネは無言のままだった。

「せっかくだ。一つ、話しておこう」

突然、龍王が口を開いた。死んだ黒龍たちのことを偲んでいるのに、全く無粋なヤツだ。そんな俺の姿を、彼はニヤリと笑みを浮かべながら眺めている。

「今のうちに、そなたの得意な結界を張ることにしようか。そうでなければ、ロイスの許に行くことはできぬ。喜べ、褒めてやろう」

「は？　仰る意味がよくわかりませんが？」

キョトンとする俺に、龍王はさらに不敵な笑みを投げかけてきた。

◆◆◆

「……」

その頃、ロイスは二人の弟の気配が消えたことを感じ取っていた。おそらく二人は、倒されたのだろう。だが、自分の作った空間が破壊されたとは、考えたくはなかった。

ロイスは自身の空間魔法に絶対の自信を持っていた。これを破れる者は、いない。おそらく見つけることすら、不可能なはずなのだ。今回、弟たちに与えた空間は、かなり丁寧に作りこんだ、ロイスの中でも自信作の一つだったのだ。

「おびき寄せられた、か」

弟たちの気配を探る一方で、ロイスは龍王と兄のツネ、そして、リ

ノスの気配を正確に感じ取っていた。

まさか、兄者が……な。

ロイスは心の中で思わず呟く。彼の当初の計画では、兄・ツネは龍王もしくはリノスに倒されているはずだった。それがまさか、龍王とリノスと行動を共にしているのだ。これは、彼にとっては予想を大きく超えるものだった。

いや、無理やり引き回されているのか？

ロイスや弟たちの居所を吐かせるために、無理やり連れまわされている……。その可能性もなくはなかった。ただ、兄貴は弟たちの居場所を知らない。その可能性は、低いと言っていいだろう。とすれば……。

「兄貴のヤツ、裏切ったか……」

自身が作り出した空間の中で、ロイスは誰に言うともなく呟き、そして、不敵な笑みを浮かべる。何をどう、言いくるめられたのかは知らないが、そう考えれば、龍王らとともに行動を共にしていることの説明がつく。

……待てよ？　……いや、やめておこう。

ロイスの脳裏に、一瞬名案が浮かび上がったが、彼は即座にそれを否定した。

一瞬彼は、リノスの屋敷を襲おうと考えた。龍王とリノス、そしてツネは行動を共にしている。しかも、弟たちの所まで出張っている

のだ。ということは、あの屋敷はもぬけの殻ということになる。龍王を操る少女を食らう、絶好のチャンスだ。

だが、あの三人が結託しているとなると、このような愚策を取るだろうか、という疑念が心の中で湧き上がる。何か、罠を仕掛けているとも考えられる。

……陽動作戦かもしれぬ。

あの娘を囮に、自分をおびき寄せる……。考えられぬことはない。むしろ、龍王であれば、そのくらいのことをするのは十分考えられる。上手く効率的にあの娘を捕らえられればよいが、少しでも手こずると、龍王に捕まる危険性がある。空間に逃げ込めば逃げられる自信はあるが、それとても、瞬間的に作れるわけではない。そう考えると、今、あの娘を襲いに行くべきではないという結論を、ロイスは導き出していた。

「慌てることはない。間違っても、ヤツらはここにたどり着くことはできない。見つけられたとしても、俺の空間を破壊することは、たとえ龍王であってもできぬことだ……」

再び不敵な笑みを浮かべながら彼は呟く。とはいえ、弟二人がどのようにして倒されたのか、彼の心の中に一抹の不安がよぎる。……まさか、自分の空間が破壊されたのか？　再びその考えが頭の中をかすめたが、龍王ですらも破ることのできない自分の空間が、破壊されるとは到底思えなかった。

ロイスは生まれつき空間魔法を操ることができた、稀有なドラゴンだった。彼自身も空間魔法を気に入り、それをおもちゃ代わりにして利用していたのだ。そんな空間魔法は、何度となくロイスたち兄

弟を救ってきた。

まず、黒龍一族から離れることを決断したとき、この空間魔法のお陰で兄弟は命を長らえることができた。後から後から追ってくる黒龍たちを、空間の中に隠れることで何度もやり過ごしたのだ。さらには、彼らの離脱を認めない龍王との戦いになったときも、ロイスの空間魔法は彼らを助けた。

龍王の強力無比な攻撃を食らい、傷ついた兄弟たちを空間の中に匿い、傷を治癒し続けた。そのため、龍王との闘いは長期間にわたる不眠不休のものとなり、皆、ギリギリのところまで追い詰められたが、ついに、龍王の追手から逃れることに成功し、一族からの脱退を勝ち取ることに成功したのだった。

あれからずいぶんと月日が経ったが、龍王が空間魔法を会得したとは思えない。魔法……特に空間魔法に限っては、持って生まれた才能がモノを言う。これまでの中で、自分ほど空間を自在に操る者を見たことがなかった。

空間魔法の有効性が発揮できるのは、ＬＶ４以上からだ。それ未満のＬＶでは、せいぜい「無限収納」のように、何かをため込むことのできる空間を作り出すことができるくらいで、空間の作成者がその中に入ることはできない。ちなみに、リノスが奴隷時代、バーサーム夫人から貸与された無限収納は、ＬＶ２の空間魔法で作られている。どこにでもある皮の袋の中に魔法で作られた空間があり、そこにモノを詰め込むことができる仕様になっている。

これがＬＶ４以上になると、作成者自身もその空間に入ることができるようになるのだ。加えて、その中身に関しては、気配探知と魔力探知が利かなくなるという利点も生まれる。そしてさらに、ＬＶ

５ともなれば、他の魔法と同時に使うこと、つまり、魔法の効果を付与することができるのだ。従って、回復魔法が操れる者であれば、空間に入ればたちどころに傷が回復する効果を付与することができたりもするのだ。

ただ、それを行うに当たっては、膨大な魔力を消費することになるため、ロイス自身も、おいそれとＬＶ５の空間魔法を乱用することはできないでいた。

……まあ、いい。ここにいる限り俺に負けはない。じっと機を伺うことにしよう。

ロイスはゆっくりと目を閉じ、しばしの眠りについた……。

第五百七話　龍王ＶＳリノス

「褒めてやるだぁ？　龍王、俺はお前に褒められることは何もしてはいないが？」

本当にコイツと話をしていると、イライラすることがよくある。話がよく、飛ぶのだ。突然、出し抜けに話題を変えるために、こちらが戸惑うことがしばしばある。

「何を言うか、貴様のスキルを褒めているのだ。喜ぶがいい」

「ああん！？」

全くもって龍王の言葉の意味が分からない。彼はそんな俺を見て、少し残念そうな表情を浮かべた。

「ロイスの許に行くためには、貴様のその結界スキルが必要になる。貴様のこのスキルだけは、褒めてやってもよい」

「どういうことだ？」

「まあ、詳しくは来ればわかる。今、結界を張るがいい」

「結界を張るっていったって、どんな結界を張るんだ？　そこを説明してもらわないと、結界の張りようがない」

「察しの悪いヤツだ」

その言葉が、俺の癪に障った。

「いい加減にしろよ、お前」

「何？」

「お前の話はいつも一言少ないんだ。お前、自分の言っていることが誰にでもわかると思ったら大間違いだぞ？　わからないヤツだって大勢いるんだ。相手がちゃんと理解しているかどうかを見極めながら喋れ。それが優しさってもんだ。お前にはその、優しさがない」

龍王はキョトンとした表情を浮かべている。わからないようだ、俺の言っている言葉の意味が。噛んで含めるようにして理解させることもできなくはないが、今は時間がない。一刻も早くリコとソレイユを救出しなければならない。仕方がないが、今回は、アホは放っておくことにしよう。

「で、どんな結界を張るんだ？　……どんな効果を付与するのかと聞いているんだ。魔法をレジストするのか、それとも衝撃を吸収するのか、物理的な攻撃を防御するのか……どれなんだ？」

「そこまで言わねばならんのか？」

「お前なぁ。俺は今からどんな所に行くのか知らないんだぞ？」

「我を鑑定せぬのか？」

「……」

返答があまりに予想外すぎて、思わず絶句してしまった。その手が

あったかと思う一方で、いや、やはり対話を通してのコミュニケーションは必要だとも思う。……何とも言えぬ、複雑な心境だ。ああ、こんなとき、リコが傍にいてくれたら、ちゃんと整理して、俺が理解できるように説明してくれるのだが。

一抹の寂しさを覚えながら、俺は龍王に鑑定スキルを発動する。

……見えへんやないかい。鑑定をブロックしていやがる。こうなりゃ俺も意地だ。何としても見てやる。そう思いながら俺は、魔力と意識を龍王に集中させる。

……見えてきたのは、深い洞窟だった。いや、これは？　上空から見ているので、地面に大きな穴が開いているのか？　いや、違う。これは、山だ。山頂に大きな穴が開いているのだ。そこに入っていくと、巨大な空間になっている。そしてさらに奥に進むと、何やら赤い光が見えてきた。これは？

……マグマか？　まさかここは、マグマ溜まりか？

思わず鑑定スキルを打ち切り、龍王に視線を向ける。彼は少し表情を険しくしながら、俺を眺めている。

「わかったか」

「……」

「ロイスは、その中にいるのだ」

「え？」

「すさまじい高温の中に、ヤツはいる。従って、貴様の場合は、近づくことすらできぬ。それでも近づこうとすれば、その身は焼き尽くされ、骨すらも残らぬだろう」

てっきり、マグマ溜まりにいると思っていたが、まさか、マグマの中にいるのか？　まったく、ドエライところに隠れたものだ……。

「従って、結界を張る必要があるのだ」

「……なるほど、よくわかった。マグマの発する高温を防御する結界を張ればいいんだな。ちょっと骨が折れるが、できないことはない。ちょっと待っていろ」

「いや、我に結界を張る必要はない」

「何？」

「我の鱗は、どのような熱でも耐えうるのだ。この黒龍もな」

龍王はチラリとツネに視線を向ける。彼はゆっくりと龍王から視線を外す。意外と嫌われているじゃないか、龍王。

「わかった。それでは、俺にだけ結界を張ることにするよ」

「待て」

「何だよ」

「我にも結界を張るのだ」

「お前、今、結界を張る必要はないと言っていたじゃないか」

「それは熱の話だ。我とそこの黒龍にも結界を張る必要はあるのだ」

「それを早く言いなさいよ。で、どんな結界を張るんだ？」

「我らの行動を秘匿する結界だ」

「うん？　そのくらいの結界は自分でも張れるだろうに」

「……」

「どうした？　何で黙っているんだ？」

「苦手なのだ」

「何？」

「結界はあまり、得意ではない」

「はあ？」

「そもそも、結界などというものは、弱き者が己や、他の弱きものを守らんがための魔法。我には必要のないものだ。事実、これまで結界が必要であったことなど、皆無であった」

龍王はドヤ顔で話している。それって、胸を張って言うことかよ……。

「しかし、貴様の結界スキルは実に優秀だ。単なる防御用の魔法と

しか思っていなかったのだが、貴様のスキルを見るにつけ、攻撃など、色々な用途があるのがわかった。我もこれから、結界スキルに注目してもよいやもしれぬ。そういうことで……貴様には、この龍王様に結界を張る栄誉を与えようというわけだ。喜ぶがいい」

俺は唖然としながら龍王の話を聞いていたが、やがて踵を返して、ツネの方向に向き直り、気を取り直して、元気よく口を開く。

「では、お前に結界を張ろうか。気配を消す効果を付与するが、他に何か希望する効果はあるか？　遠慮なく言ってくれ」

「オイ、貴様！　順番が違うだろう！　まず我に結界を張らんか！」

怒りをあらわにする龍王を、俺は思いっきりガン無視した。

◆
◆
◆

「ふぅ……。ハイ、終わり」

「全く……」

面倒くささを隠そうともせずに俺は龍王の許を離れる。一切相手をせず、無視し続けていたら、まるで子供みたいにスネやがり、今から一人でロイスの許に向かい、ヤツを倒すと宣ったのだ。

鑑定スキルのお陰で、ロイスが隠れている場所はおおよその見当がついたが、勝手にロイスを倒されるのは困る。ヤツの腹の中には、リコとソレイユがいるのだ。もし、何かの間違いで二人に傷でもつけられた日には、悔やんでも悔やみきれないことになる。そうなった場合は当然、龍王には死ぬよりも辛い罰を与えるのは言うまでも

ないのだが。

面倒くさいことこの上なかったが、仕方なく、ヤツにも結界を張っておいた。ただ、コイツの場合は体に内包されている魔力が膨大で、これを隠すためには相当の魔力が必要になった。ヤツ自身も一応は気配探知と魔力探知に引っかからないように、結界を張ることはできるようだが、如何せん慣れていないためか、実にお粗末な結界しか張ることができないようだ。一応、彼の名誉のために言っておくが、一応、彼の結界スキルもＬＶ５だ。だが、おひいさまの言葉を借りれば、腕が落ちている状態だ。これでは、気配探知と魔力探知に優れた者であれば、彼のことはすぐに察知できてしまう。

龍王はまだ、ブツブツと文句を言っている。結界を張るのにどれだけの時間をかけるのだ……などと言っているようだ。だが、ヤツは知らない。俺の張った結界は、完全にヤツの気配と魔力を消してしまうものだ。ヤツを見失えば、見つけることはかなり難しくなる。俺はツネに再び向き直る。

「すまないが、今まで以上に龍王を見失わないようにしてくれ。見失うと、ちょっと大変になる。……そして、龍王」

「何だ。まだ何かあるのか？」

「俺たちが見失わないように、常に後ろに気を使いながら、飛べ」

龍王の眼がピクピクと動いている。そんな彼を一瞥して、俺はさらに言葉を続ける。

「さあ、一刻も早く、ロイスの許に向かおう」

そう言って俺はツネの背中に乗り込む。龍王は無言のままゆっくりと上空に浮き上がった。

出発する直前、俺はリコとソレイユに張っている結界に意識を向ける。場所はわからないが、確かに、二人の心臓は動いているし、ちゃんと呼吸もしているのがわかった。

「リコ、ソレイユ。今、行くからな」

その言葉が合図であったかのように、龍王は空の彼方に飛び去って行く。そしてツネも、龍王の背中を追いかけるべく、大きな翼をはためかせた。

第五百八話　　見つけた！

「……なんじゃこりゃ」

俺は思わず声を漏らしていた。ロイスが潜んでいる場所が予想をはるかに超えた場所だったからだ。

今、目の前には、巨大なマグマ溜まりがあって、地底深くから真っ赤な液体がゆっくりと溢れてきているように見える。まさか、ヒヤマの砦の近くに、こんな火山があるなどとは思いもよらなかった。

一見すると、小さな穴が開いているようにしか見えなかった。三メートルくらいだろうか……。その中に龍王が入っていったのを見たときは、休憩でもするのかと思った程だ。だが、中に入ってみると、意外に広く、しかも深い空間が広がっていた。ライトの呪文を唱えて周囲を明るくしてみたものの、底が全く見えない。しかも、龍王の姿も見当たらない。

間違いなく底に向かっていったのだろうと考えて、どんどん地下に進んでいく。だが、行けども行けども底に着かない。しかも、進むほどに穴が広がっていっている。そして、なにやら広い空間にたどり着いた。

「遅いではないか」

不意に龍王の声が聞こえる。暗くて姿が見えないので、さらにライトを出していく。すると、驚きの光景がそこには広がっていた。

……そこはまるで、中をくりぬいたかのような、巨大なドーム空間となっていた。ゴツゴツとした黒い山肌がとても不気味だ。そんな俺たちを、龍王は笑顔で見つめている。

「だから、後ろからくる俺たちに気を使えと言っただろう。一人で勝手に先に行きやがって……」

「何を言うか。遮るもののない一本道ではないか。我の姿を見失うことなどあるまい。現に貴様は我の後をついてきたではないか」

「あれは勘だ」

「フフフ。まあ、そんなことはどうでもよい。ロイスがいるのはここではない。この、さらに奥だ」

「はあ？」

まだ底があるのか？　不思議がる俺を横目で見ながら、龍王はゆっくりと下降を始めた。コイツを鑑定したときには、まさかここまで深い場所まで潜っているとは思わなかった。それだけヤツは高速で移動していたということなのだろうか。そう考えると、龍王はロイスの気配を探知して、最短距離でここまでたどり着いたのだろうか。で、あれば、ヤツの探知能力は俺を凌駕していることになる。単なるポンコツ野郎と思っていたが、もし、そうなのであれば、龍王の評価を上方修正しなければならない。

龍王の姿がどんどんと小さくなっていく。俺を乗せているツネも、彼を見失うまいと後を追って奥へと進んでいった。

徐々に空間が狭くなってくる。しばらく進んでいくと、再び何やら

広い場所に出た。その遥か先は真っ赤に染まっていた。どうやら、マグマ溜まりに着いたようだ。

「まさか、二重構造になっていたのか、この火山は……」

思わず俺は声を漏らす。火山というと、火口があって、そのすぐ奥にマグマがあると思い込んでいたが、こんな火山もあったのだ。妙に感心してしまう。

マグマ溜まりからは、強風が吹き上げてきている。おそらくこの風もとんでもない温度なのだろう。生身の人間がこんなところに来たら、一瞬で死んでしまうのは容易に想像できる。温度もさることながら、火山には有毒ガスが発生すると聞いたことがある。そんな状況下では、最上位種のドラゴンクラスでなければ、近づくことさえ難しいだろう。こんな環境でも、龍王は涼しい顔をしているし、俺を乗せているツネも、全く動揺した様子はない。さすが、といったとこだろうか。

どうやら、あのマグマの奥にロイスがいるらしい。俺は精神を集中させて、このマグマ溜まり全体に鑑定スキルを発動させる。

「……」

ロイスの姿は、見えなかった。かなりの魔力を持っていかれたので、少し体がだるい。ゆっくりと息を吐きだしながら、呼吸を整える。

「まさか……この場所に鑑定スキルを？」

ツネが驚いたような声で話しかけてくる。俺の魔力の流れを感じたのだろうか。気配を消す結界を張っている……ということは、必然

的に魔力の流れも消しているのだが、そんな状況下でも俺の鑑定スキルの発動を感知したとすれば、コイツのスキルも相当高いことになる。

「ああ。だが、ロイスの姿は見えなかった」

「相変わらず、器用なことをする奴だ」

龍王がふんぞり返りながら話しかけてくる。俺は無言でヤツを眺める。

「ずいぶんと膨大な魔力を使ったのだろうな。貴様が鑑定スキルを発動していたのが、我にもわかったぞ」

……マジか。龍王にも俺の鑑定がバレたということは、もしかしたら、ロイスに俺の存在がバレたのかもしれないな。そんなことを思っていると、突然、龍王が大きな笑い声をあげた。

「ハアッハッハッハ！　心配することはない。おそらく、ロイスはまだ、貴様の存在には気づいていない」

どういうことだと、首を傾げる。そんな俺に、龍王はさらに言葉を続ける。

「ロイスがいるのは、この奥深くだ。そこで貴様の魔力を感じるのは不可能だろう。この我でさえ、この距離にいてやっと貴様の鑑定スキルを認識できたのだ。ここからさらに深いところに隠れているロイスには、貴様を感じることはできまい」

「……それを聞いて安心した。だが、龍王。お前、そんなに大声を

出して大丈夫か？　その声で、ロイスに俺たちの存在がバレはしないか？」

「そんなわけはないだろう……」

龍王はさも、残念そうな表情を浮かべる。俺としてはちょっとした皮肉を言ったつもりなのだが、ヤツには通じていないようだ。

……少し、魔力が回復してきたようだ。俺は再びマグマ溜まりに視線を向け、そこに気配探知と魔力探知を発動させる。イメージとしては、マグマ溜まりに気配を探知する縦の線を描きながら、魔力を探知する横の線を描くというものだ。それを上下左右にゆっくり動かしながら、底の方に移動させていく。

額にねばい汗がジワジワと浮かび上がってくるのがわかる。ズルズルと魔力が削られていくのも感じる。だが、そんなことは一切構わずにさらに精神を研ぎ澄ませる。

「……捉えた」

俺は思わず呟く。マグマ溜まりの奥……ほぼ、地底に近い場所でわずかな反応があった。どうやら、巨大な正方形の箱があるようだ。その中には、巨大な魔力が内包されているのを感じる。いた。ロイスだ。ロイスに違いない。……だが、待てよ？　何だ、この感覚は？

「……水？」

どうやらロイスは、巨大な正方形の空間の中に、水を張っているようだ。一体、何のために水などを張っているのだろう。まさか、熱さから逃れるためだろうか？

魔力探知と気配探知を終わらせる。目を開けてみると、龍王がドヤ顔を浮かべている。

「いたであろう、ロイスの奴が」

俺はゆっくりと頷く。

「ああ、ただ、よくわからないことがある。ロイスがいることは確認したが、どうやらヤツは空間の中に水を張っているみたいなんだ。これはどういうことだ？」

「水？」

声を上げたのはツネだ。彼はしばらく沈黙していたが、やがて、呆れたような声を上げる。

「ロイスの奴、考えたな」

「どういうことだ？」

「水を張ることで、己を攻撃されないようにしている」

「どういうことだ？」

「ロイスの空間が破壊されれば、その瞬間、中の水が噴き出す。そうすれば、爆発する。下手をすると、この山自体が一瞬で消し飛ぶだろう」

「何だ、それ？　それってヤバくないか？」

俺は思わず龍王に視線を向ける。ヤツは相変わらず笑みを浮かべている。

「龍王、お前もしかして、そのことをわかっていて、敢えてロイスを攻撃しなかったのか？」

「……何の話だ？」

「え？」

「わけのわからぬことを言っていないで、攻撃するがいい。まずはヤツの空間を切り裂くのだ」

俺は思わず、天を仰いだ。

第五百九話　仕切り直す

一旦、俺たちはマグマ溜まりの外に出た。ツネの言葉があまりにも物騒すぎたからだ。

龍王は納得いかない、といった表情を浮かべている。口元がモゴモゴ動いているので、ブツブツと文句を言っているのだろう。下手をするとこの山自体が吹っ飛ぶというのだ。ということは、あのマグマが大量に噴出したり、大量の火山灰が噴出したりする可能性だってあるということだ。いくら俺でも、それがどれほどの大惨事を引き起こすのかくらいのことは想像できる。

山が爆発すれば、その土や石が周辺の森や街に飛んでいくだろう。下手をすると、ヒヤマの砦は火山灰などのそれらが降り注いで、埋もれてしまう可能性すらある。それだけじゃない。富士山の噴火だったか、火山灰がかなり遠くの地域まで飛んでいき、作物に甚大な被害を及ぼしたとか……。それに、有毒ガスも広く放出されるかもしれないし、考えねばならないことが多くある気がしてならない。

「ロイスの奴め……」

ツネが誰に言うともなく呟く。その声はある種の憎しみを感じさせた。

「ちょっと待っていろ。この山全体に結界を張る。もし、爆発しても、火山灰などが散布されない硬度を付与する。あ、有毒ガスも……」

「無駄だ」

「え？」

「おそらく、この山が爆発すれば、ロイスも生きてはいないだろう」

「何？」

「この山が消し飛ぶほどの爆発だ。ロイスの鱗でも防御できるか……」

「自爆覚悟で、あそこに隠れているというのか？」

「いや、弟のことだ。あそこにいれば、手出しができぬとわかっているのだろう。もし、攻撃されたら、爆発と同時に別の空間に逃げようと考えているかもしれぬな」

「……」

ヤツの腹の中にはリコとソレイユがいる。ヤツの体が傷つくことは避けねばならない。さて、どうするか……俺は、眼下の火口に視線を向ける。

「何をしている」

龍王の声が聞こえる。思わず彼に視線を向けると、明らかに怒りを湛えた表情で俺を睨みつけている。

「ロイスを倒さぬのか？」

「いや、だから。ヤツの空間を斬れば、この山が大爆発を起こす可能性があるだろう」

「別に構わんだろう」

「構わんって……お前……」

龍王は不思議そうな顔をしていたが、ふと何かを思い出したかのような表情を浮かべた。

「なるほど。これは……我としたことが迂闊であった」

龍王が腕組みをしながら、一人で頷いている。俺はゆっくりと息を吐きだす。

「そうだろう。おいそれとヤツを攻撃できないだろう？」

「ああ。ヤツを攻撃すれば、爆発したときに我らの動きを感づかれる。そうなれば、また、ヤツは逃げるだろう。そうなれば、探すのは困難になる。今回のような偶然が起らん限りはな」

「そこ？　いや、そこじゃなくてだな……。てゆうか龍王。今、偶然って言ったよな？　まさか、ロイスを見つけたのは、お前のスキルで見つけたのではなくて、たまたまだったってことか？」

「なっ！？　そっ、そんなことは……ないっ！　断じてないっ！　鑑定など、するなっ！」

「たまたまかい」

龍王はキッと俺を睨みつけている。俺は呆れながら視線を外した。

「一旦、仕切り直した方がよいな」

ツネが誰に言うともなく呟く。

「ロイスの居場所は把握できたのだ。ヤツには我々の存在は気付かれていない。となれば、ヤツはここを動くことはないだろう」

その言葉に、俺は戸惑いながら頷く。

「ここに転移結界を張る。いつでも……というか、すぐに対策を考えて、戻ってくることにしよう」

俺の言葉に、ツネはゆっくりと森に向かって下降を始めた。龍王も、仕方がないといった雰囲気を醸し出しながら俺たちの後に続く。

「リコ、ソレイユ……。ちょっとだけ待っていてくれ。必ず……必ず助けるからな……」

俺はロイスが潜む山を睨みながら、転移結界を発動させた。

◆　◆　◆

「そうですか……」

ちょっと緊張した面持ちながら、ホッとしたような雰囲気を出しているのはメイだった。彼女だけではない、帝都の屋敷にいた全員が、同じような表情を浮かべていた。

ただ今の挨拶もそこそこに、俺は椅子に腰かける。ツネもここに着くとすぐに人化していた。今回は、子供ではなく、白髪交じりのオッサンの姿になっていた。当然、屋敷に入った瞬間、全員が、何、このおじさん？　という表情になった。それを見た彼は、少し戸惑った表情を浮かべたが、やがて再び人化して、子供の姿に戻った。

メイたちにこれまでのことを説明する。二匹の黒龍は救うことができずに、結局命を奪うことになったことも話した。シャリオは一切表情を崩さずに話を聞いていたが、隣に座っていたエリルが、そっと彼女の手を握っていた。何と優しい娘だろうか。それを見て俺は少し、泣きそうになった。

「自分を責めることはない。兄さまたちには気の毒だが……これも運命（さだめ）だ」

シャリオには、俺が申し訳なくて泣きそうになっていると思ったらしい。まあ、敢えて否定することもないと考えて、そこは何も言わないことにする。

「よくぞ、攻撃をとどまっていただきました」

ホッとした表情を浮かべているのは、シディーだ。彼女は娘のピアを抱っこしながら、何度も頷いている。

「きっと、リノス様が攻撃していたら、山は吹っ飛び、あの周辺の国々は大惨事になっていたと思います。ね、メイちゃん」

メイも真剣な表情で頷いている。

「山全体が崩壊する危険性もさることながら、世界中に影響を与え

る可能性があります。実は、黒龍が隠れているオモト山は、遠い昔に大噴火を起こしたことがあります。そのときは確か、世界中が不作に陥って大量の餓死者を出したと聞いています」

「そうだ。あのときは、実に難渋した」

声を上げたのは龍王だ。彼は噴火の頃を知っているらしい。

「目が開けられず、呼吸もしにくくなって、困ったのをよく覚えている」

「龍王、それ、いつの話だ」

「三千年程前だ」

「さっ、さんぜんねん！？」

「ディラ？」

「そうなのです。その頃、ドワーフ公国も不作になったのですよね。ただ、そのときは当時のドワーフ王の娘であるターニャ王女が大量に栽培していたディラを国民に与えて、危機を逃れたのですよね」

「あの……よくご主人様が作られるふかし芋と同じ種類のものです」

「ああ、なるほど。確かにあれは、痩せた土地でも育つからね。さすがはドワーフ族だな。そんな食べ物を事前に栽培していたなんて」

「いえ、それが……。当時、ディラを好んで食べていたのはターニャ王女だけでして……。その他は誰も食べなかったのです。王女は

いつでもディラが食べられるように、王族専用の畑を作って、そこに大量のディラを育てていたのです」

「はああ、怪我の功名というやつだな」

「そんな話はどうでもいいのです、リノス様。リコ様とソレイユを助けなければなりません」

「ああ、そうだ、その通りだ」

俺はオホンと咳払いをして、姿勢を正す。

「今、ロイスはマグマ溜まりの中に潜んでいる。攻撃することは難しい。となれば、他にどんな方法があるだろうか」

「……おびき寄せるしか方法はない」

口を開いたのはシャリオだ。彼女の爛々と光った目がとても美しい。

「それも一度は考えてみたが、お前の兄、ロイスがあの空間から出ることはあるのか？　ツネに聞いたが、別に食事を摂らなくてもいいんだろう？　あ、呼吸をするときか。呼吸をしに外に出るときをねらうのか？」

「いや、中の兄さまのことだ、ちゃんと呼吸ができるようにしているはずだ」

シャリオ曰く、ロイスの空間は二重構造になっている可能性が高いのだという。つまり、水が湛えられた空間の中にロイスがいるという構造だ。自分の空間は絶対に破られないという自信もありながら

も、最悪の状況を考えた対応をしているようだ。実に悪知恵が働く黒龍だ。

「ただ、どうやっておびき寄せるか、ですね」

メイが落ち着いた声で話しかける。シディーは左手でピアを抱っこしながら、余った右手の人差し指を顎の下に当てている。シディーの名推理が始まっているようだ。

「ひとつだけ、方法がある」

口を開いたのは、シャリオだ。彼女はじっと俺を見据えたまま、言葉を続ける。

「ただ、これはかなり危険を伴うのだが……」

俺は姿勢を正して、彼女の次の言葉を待った。

第五百十話　ロイス視点

「……」

真っ赤な灼熱の中、ロイスはゆっくりと目を開けた。彼の張っている気配探知に、反応があったからだ。

……これは、龍王とアガルタ王？

確かに、間違いなかった。二人は、ロイスが潜む山の中腹を徒歩でゆっくりと登ってきていた。

「……考えたな」

ロイスは自分が作り出した空間の中で、思わず呟いた。龍王とリノスがその気になれば、ロイスの探知に察知されることなく動くのは、簡単なことだった。だが、二人は敢えてそうせずに、気配探知に引っかかるように仕向けているのだ。二人の接近が探知されれば、逃げられるのは明らかなのになぜ、こんな愚策を取るのか。ロイスはその明晰な頭脳を駆使して考え、その答えを導き出した。

……一見するとお粗末に見えるが、二人の行動は、裏の裏をかく、考え抜かれた行動だ。これも全てはあの、龍王を操る娘を守らんがための行動だ。

ロイスは心の中で、そう呟く。そして、二人に対して気配探知と魔力探知をさらに集中させた。そのとき、頭の中に閃くものがあった。

「……俺の意識を集中させようとしているのか」

そう呟きながら、ロイスはニヤリと笑みを漏らす。そして、二人に集中させていた探知を一旦切り、彼らとは全く異なる方向に探知を発動させる。

龍王とリノスは、二人に意識を集中させることで、あの娘をどこか遠くに逃がそうとしている……。

そう考えたとき、あの娘を一体どこに隠そうとしているのかという疑問が湧き上がってくる。龍王とリノス、二人が愚策を取ってでも逃がそうとしている場所……。彼は、少し心を躍らせながらリノスの屋敷を中心に、探知を試みる。すると、その屋敷から南に下ること数百キロの地点に、何やら違和感があった。

「……ここはもしや、ルワザン島？　レイス火山？」

何とそこは、元々ロイスが兄妹たちと暮らしていた島だった。その事実を知ったとき、ロイスは思わず吹き出しそうになった。その場所は、彼の頭脳をもってしても、予想することができなかったからだ。

「俺の元々の住処に逃げるとは……」

相変わらず下卑た笑みを浮かべながら、彼はその違和感を解明しようと試みる。どうやらそれは、火山の火口付近から感じるようだ。そこに意識を集中させてみると、何やら魔力とは違う、不思議な力が集まっているように感じた。

「これは……もしや、精霊？　……サイリュースか？」

ロイスは少し前に食らったサイリュースのことを思い出していた。確か、この種族は精霊を操ることができたはずだ。とすれば、ルワザン島のレイス火山に集まっているのは、火の精霊か……。

「考えたな」

思わずロイスは呟く。これならば、相当のスキルを持っていたとしても、見つけることは困難だろう。だが、一つだけ手落ちがあった。その部分だけ、温度が異常に高いのだ。

一瞬、新たな噴火口ができるのではと考えたが、どうやらその可能性は少なそうだった。それよりも、高い温度と共に、微弱な魔力を感じる。それが、違和感を生み出しているのだ。

「おそらく、急ごしらえなのだろうな。その割にはよく考えられているが……惜しいな」

ニヤニヤと笑いながら、ロイスは呟く。そして同時に、この娘を食らうことができると確信した。

ロイスはこの娘のことを考えると、何とも言えぬイヤな予感が湧き上がってきて、それが心に張り付いて離れないのだ。小さな羊獣人の娘……食らったところで、何の腹の足しにもならないし、自身のスキルが上がるとは到底思えない。だが、あの娘を食らうことによって、この、何とも言えぬ不快な感覚を解消できると考えていた。

あの娘のことを知ったときから、自分の直感がこの娘は危険だと教えていた。それは、初めて龍王と対峙したときの感覚と同じだったのだ。何としても、この小さな娘を排除しなければならない。同じ

ように脅威を感じたサイリュースは食らうことができた。だが、この娘を食らうことには失敗した。それ以来、この娘のことは、頭を離れたことがなかったのだった。

龍王を操る娘を食らいに行こう……。問題は、いつ、この空間を出るかだった。

……ギリギリまで引き付ける。

再びロイスは龍王とリノスに意識を集中させる。二人が自分に肉薄し、攻撃を仕掛けてくるそのときに空間を使って、あの娘のところに転移する。そして、電光石火で攻撃を仕掛ける。

腹の内は決まった。

ロイスは気配探知と魔力探知にさらに集中する。二人はゆっくりと山を登ってきていて、ここにたどり着くまでには、まだ少しの時間がある。

「しかし、なぜ、この場所がわかったのだ」

ロイスは、自分の空間には絶対の自信があった。たとえ龍王と言えど、この場所を突き止めるなどはできないことだった。だが、実際に二人はこの場所に向かってきている。一体、何故だ。

……もしや、俺の魔力を探知したのか？

ふとそんな考えが頭をよぎる。このとき、ロイスは兄・ツネの言葉を思い出していた。

「上には上がいるのだ」

何度も兄に立ち向かい、その度に屈服させられた。そのとき必ず兄はこの言葉を口にした。相手は龍王とリノスだ。二人のスキルを合わせれば、ロイスの力を遥かに凌駕する。その力を持ってすれば、いくら空間魔法に自信があるとはいえ、見つかる可能性はゼロではないと言えた。

……それに、空間魔法を使うのも久しぶりだ。

全力で空間を組み上げたのは、数百年ぶりのことだ。そのときは確か、龍王と戦った時だった。しかも、龍王はロイスの組み上げた空間を見ている。数百年間全く使っていなかった空間スキルだ。確かに、腕は少しは落ちているかもしれない。しかも、相手は龍王……。この空間の位置が特定される可能性は、ないとは言い切れない。

ロイスの心に不安が生じる。もしかすると、この世界のどこに逃げても、龍王たちは追いかけてくるのではないか。そして、最終的には自分は倒されてしまうのではないか……。そこまで考えたとき、彼はぐるりと頭を廻して、頭を切り替える。

……いや、ここにいる限りは大丈夫だ。この空間に攻撃を仕掛けた瞬間に山が大爆発する。そうなれば、龍王と言えど、無事には済まないはずだ。それに……この空間を破れる者はいないのだ。そう、あの龍王ですら、俺の空間は破れなかった。それが人間ごときに破られるはずはない。

そう考えると、ロイスの心は次第に落ち着きを取り戻していった。しばらくして、龍王とリノスが火口付近にまでやってきた。

二人はしばらくその場にとどまっていたが、やがて、ゆっくりと火口の中に入ってきた。この火山は二重構造になっている。果たしてそれに気づくかと思っていたが、二人は、最初のマグマ溜まりがあったところで、その動きを止めた。

二人はしばらくその場所を動かずにいたが、やがて、ゆっくりと再び下降をはじめて、ロイスの居る場所へと近づいてきた。そして、ロイスが潜むマグマ溜まりのすぐ上に到着したのだった。

……二人は、じっとマグマ溜まりを見つめていた。ロイスには、その表情まで十分に読み取ることができた。龍王もリノスも、驚きと絶望の入り混じった、複雑な表情を浮かべている。

ロイスの心に、何とも形容しがたい満足感と優越感が湧き上がってくる。龍王とアガルタ王・リノスに勝ったのだ。自分は勝ったのだ。

大声で叫びたい気持ちを押し殺しながら、彼は体内の魔力を集中させた……。

第五百十一話　選択肢

龍王とリノスの表情を見ながら、ロイスはマグマの下に向かって空間を拵えていく。二人が動く気配はない。ロイスは、彼らがこの空間を攻撃することができないのだと確信した。

……そこで、指をくわえて見ているがいい。

ロイスはほくそ笑みながら、マグマの下へ下へと移動していく。このマグマ溜まりは、ロイスが元いたルワザン島のレイス火山に通じている。この中を移動していけば、最短距離で、あの龍王を操る娘の許まで行くことができるのだ。

「勝った。俺は勝ったのだ」

ロイスは大声をあげながら、マグマの中を移動していった。

◆　◆　◆

ちょうどその頃、マグマ溜まりの上では、二人が厳しい表情を浮かべながら口を開いていた。

「気配が……消えた……？」

「何？　気配探知にも魔力探知にも全く反応がないが……わかるのか？」

「いや、何となく、だ」

「何となく……か。いや、油断はならない。もう少し、ヤツの気配と魔力を探知してみよう」

二人は再びマグマ溜まりに視線を集中させた。

◆　◆　◆

一方のルワザン島のレイス火山では、男女の大声が響き渡っていた。

「無茶ばっかり言うんじゃねぇやな！」

「だから、さっきから大丈夫だと言っているだろう」

「大丈夫とか大丈夫じゃねぇとかじゃねぇやな。土台、無理な話だぁな」

背中に羽を持ち、赤い髪の毛を揺らしている少女と、体中に炎をまとったトカゲのような生き物が、にらみ合っている。これは、サイリュースのイリサルと、彼女が契約している火の精霊であるサラマンダーだった。

二人の周囲は、真っ赤な炎で包まれていた。時折そこから、火柱が空に向かって立ち上っている。

「あのな、嬢ちゃん。俺っちの炎とマグマとじゃ、モノが違うんだ。今ここで噴火が起こってみろ。俺っちも嬢ちゃんも、すぐに溶けちまうんだぜ。こんな場所は早くおさらばするに限るってもんだぁな！」

「そんなこと言わずに、もうしばらくこのままでいておくれよ」

「いいや。俺っちにはわかるんだ。もうすぐこの山ぁ火を噴く。そうなりゃ、俺たちは一巻の終わりだぜ？」

「だからさ。そうならないように、リノス様が結界を張ってくれているんじゃないか」

「バカ言うねぇ！　いくら結界を張ったからと言って、マグマの熱を防ぐことなんざできやしねぇよ」

「だからそこは大丈夫だっていっているじゃないか！」

「でぇじょうぶなら、俺っちを呼ぶ必要なんざありゃしねぇやな。そのままここにいりゃいいじゃねぇか。何だって俺っちがこんなことをしなきゃならねぇんだい！」

「それには色々訳があるんだ。すまないけれど、お前にそれを説明している余裕はないんだ」

「……ったく。いつも嬢ちゃんの頼みは、無理ばっかりだぁな！」

そう言ってサラマンダーは、フワフワと上空に上っていく。そして、周囲を囲んでいる炎と一体化していった。

イリサルはゆっくりと息を吐きだしながら、チラリと後ろを振り返った。

「来た。来たぞ」

イリサルが振り返ると同時に、男の声が聞こえる。目の前には、結界が二つ張られていて、二つともが真っ黒に塗りつぶされて、中を窺い知ることはできない。そのうちの一つから、声が聞こえている。

「間違いない。ロイスだ。ロイスがこちらに向かっている。おい、聞こえているのか？　聞こえていたら返事をしろ。おい！　まさか寝ているんじゃないだろうな！　寝るな！　起きろ！」

男の怒号が響き渡ると同時に、地面が大きく揺れた。振動に合わせて、周辺の空気が震えているのが伝わってくる。

「嬢ちゃん！　山が噴火するぜ！　おいらぁもう、ごめんだ！」

「あっ、こら、待て！　サラマンダー！」

イリサルの言葉もむなしく、周囲の炎が突然消えた。そのとき、火山の火口から火柱が上がった。

「ゴワァァァァァァ～～～！！」

爆発とも咆哮ともつかぬ音が響き渡る。あまりの音に、イリサルは思わず耳をふさいで蹲った。

◆　◆　◆

レイス火山の火口から飛び出したロイスの眼に、最初に飛び込んできたのは、一人のサイリュースと、二つの黒い球体だった。それを見たロイスは、すぐさま探知を発動させる。やはり、微弱な魔力を感じる。どうやら、このどちらかに龍王を操る娘がいるようだ。

……両方食らってやる。

ロイスはニヤリと笑みを浮かべながら右手の球体に向かって急降下を始めた。目の前にドンドンそれが迫ってくる。だが、それを食おうとした瞬間、全身に衝撃が走った。

「ハアッハッハッハ！！」

気が付くと、ロイスの口が何か強力な力で掴まれていた。見ると、目の前には龍王が右手でロイスの口を掴みながら、大笑いしていた。

「久しぶりだな、ロイス。まさか貴様がこのようなことをするとはな。いや、貴様だからこそ、このような愚かなことをしでかしたというべきか。だが、浅はかであったな。こうして我に捕らえられし今、そなたはもはや逃げられぬ。今ここで、我の手でそなたの命を奪……」

気が付くと、ロイスの口元が銀色に光っていた。そのとき、その口元から、強烈なブレスが吐き出され、龍王は遥か彼方に飛んで行った。

「まさか龍王が……！　なるほど、あの娘を守ろうと、龍王が傍にいたか！　だが、それも終わりだ」

ロイスはその体をもう一つの球体に向け、再び口を開けて向かう。

……まるでスローモーションのように、風景が展開していく。ロイスの視界に、何か黒いものが飛んでいるのが見えた。それは、よく見ると、黒龍と思しきドラゴンの手だった。

なぜ、黒龍の手が自分の傍を飛んでいるのか、不思議に思ったロイスは、その手を凝視する。やはり、ドラゴンの手だ。一体これは、誰の手なのだ？

そんなことを思いながら、ゆっくりと視線を元に戻すと、そこには、一人の人族の男が、剣を振りぬいている姿が見えた。

……これは、誰だ？

確かに記憶にある顔だ。だが、名前が思い出せない。その男の目は見開かれており、完全に獲物を仕留めようとしている目だった。

男は両手で剣を握り、大上段に構えた。直感的にロイスは、この男は剣で俺の脳天を割ろうとしていると感じた。

ロイスは体をひねって、男の斬撃を躱す。だが、躱したと思ったその瞬間、己の左後ろ足に激痛が走った。

「ゴオアッ、ゴオアッ、ゴオアッ……」

まるでギリギリと締め付けられるような痛みが全身を貫いていく。立ち上がろうとするが、立つことができない。咄嗟に、背中の羽を使って飛び上がる。

……気が付くと、自分の前左足と後ろ左足がなかった。それらは、地面に転がっていた。さっき見た黒龍の手は、自身の手だったのだ。

ふと見ると、さっきの男が、剣を鞘に納めた状態で腰を落とし、いつでも斬れる態勢を整えた状態で、忌々しそうにこちらを見ている。そのとき、ロイスはようやくこの男のことを思い出した。

……アガルタ王、リノス！？

そう思った瞬間、ロイスは、自分自身が龍王とリノスの罠に落ちたことを理解した。そして、即座に二つの選択肢が頭をよぎった。

……攻撃か、撤退か。

左前後ろ足を失ったとはいえ、まだ翼は健在だ。動くことはできる。アガルタ王リノスは空を飛ぶことはできないようだ。もし、空が飛べたとしたならば、先ほどの攻撃を上空でも続けただろう。それができぬから、あのような表情になっているのだ。

ロイスは素早く気配探知と魔力探知を発動させる。龍王はブレスによってかなり遠くまで飛ばされている。ここにたどり着くまでには、数分の時間が必要であるようだ。

……この男を、食らおう。

ロイスはそう決意した。この男を食らえば、己のスキルは上がることだろう。龍王とのことは、そのあとに決めればいい。

ロイスはそう考えながら、眼下のリノスを睨みつけた……。

第五百十二話　リノスＶＳロイス

上空のロイスの姿がゆっくりと消えていく。どうやら、空間の中に身を隠したようだ。俺は再びホーリーソードを魔力を通しながら鞘から抜く。そして、円を描くようにして動かしていく。ヤツの弟のターチャを発見したときのように。……だが、ロイスの姿は見えない。

直感的に、消えた場所から移動したのだと察した俺は、目を細める。魔力探知と気配探知を同時に発動させる。

ヤツが消えた所を中心に、注意深く周囲を探る。……いた。ずいぶんと遠くに移動していた。小さな、極小な魔力と気配を捉えた。ロイスに間違いない。

剣を再び鞘に仕舞い、居合い抜きのような態勢を取る。この剣の放つ雰囲気……とりわけ、魔力を通したときの雰囲気は尋常でないものがある。あまりこの剣をロイスに見せ続けると、危険を察知してヤツは移動してしまう可能性がある。そのために、できるだけこの剣を隠した方がいいと考えたのだ。

本能的に、この勝負は一瞬で決まると感じる。チャンスは一度。しかも、ヤツの体ではなく、首を飛ばす。ここでヤツを倒せなければ、リコとソレイユを取り戻すのは難しいだろう。

ロイスにさらに意識を集中させる。ヤツはゆっくりと俺に近づいて来ている。正直言って、無防備だ。警戒しているようだが、自分の空間が破られることなど微塵も思っていないのだろう。もし、それ

が頭の中にあるようなら、近づいては来ないだろう。

ホーリーソードの切れ味は抜群だ。ヤツの前足と後ろ足を片方ずつ切り落としたが、まるで紙を切るかのような感覚だった。

そのとき、大きな気配を感じた。これは……龍王だ。

ヤツには気配を秘匿する結界を張ったはずだが、それでもヤツを感じる。察するところ、全力でこちらに向かっているのだろう。ロイスの微弱な魔力を捉えようとしているのだが……ちょっと、コイツの気配が邪魔だ。

再びロイスに意識を向けると、ヤツの気配が消えた。消えたというより、見失ってしまった。

意識を集中し直す。ヤツは必ず俺を狙ってくる。根拠はないが、確信はある。だとすれば、性急に動くはずだ。どこだ。どこにいる？

◆　◆　◆

……こっちだ。

ロイスはリノスに向かって右側に位置を取った。彼にも龍王がすさまじい速さでこちらに向かってきているのが感じ取れていた。アガルタ王リノスを食らうのは、今このときしかない。自分のスキルは上がっているはずだが、この男を食らえばおそらく、龍王を凌駕することができるのではないか。この男を食らって龍王に戦いを挑む……。勝てればよし、適わぬのであれば、また、空間を使って逃げればいい。

そんなことを考えながらロイスは口を開ける。目の前のリノスは、剣を抜く態勢をとりながら、目を伏せている。この位置ならば、確実にこの男を飲み込むことができる。おそらく、この男は剣を抜きざまに斬ろうとしているのだろう。だが、それができるのは、斬る対象が自分の右側にいるときだけだ。今、ロイスはリノスの左側、しかも真横に位置している。抜きざまに斬ることは不可能だ。男はまだ、ロイスに気づいていない。

……勝った。

この至近距離だ。今の態勢のまま剣を抜いたとしても間に合わない。何かをしようとした瞬間に、その体は腹の中に入っている。ロイスは大きく息を吸い込み、全力でリノスに向けて飛びかかった。

その瞬間、リノスの頭が少しだけロイスの方向に向いた。

……遅い。そう思いながら口を閉じると、顔全体に衝撃が走った。

◆◆◆

ロイスの気配を感じるのと、体が動くのが同時だった。突然、俺の左上に大きくて邪悪な気配を感じた。しかもそれは、俺と僅か数十センチの距離にあった。

普通に斬っても間に合わない。瞬時にそう悟った俺は、左手で剣の柄を握っていた。そして、体をロイスの方向に向けながら剣を抜き、そのまま左手一本でロイスに斬りつける。

……まるで、粘土を斬っているような感覚を覚えた。このままではダメだ。無意識のうちに右手で剣の反りの部分を押さえるような態

勢を取って、そのまま力を籠めた。

何か、軟らかいものを斬っているような感覚を覚えたが、やがて、何だか体がフワっと軽くなった。

目を開けて周囲を確認する。俺の目の前には、目をカッと見開いたドラゴンが倒れていた。その近くには、ドラゴンの口が転がっていた。

ゴヒュゥゥゥ～～ゴゴゴゴグボォォォォ～～。

何とも気味の悪い音が聞こえてきた。見ると、ロイスが気味の悪い音を出しながらのたうち回っていた。口の部分がないので、全く別の生き物のように見える。気味の悪さがハンパではない。

ロイスはゴロゴロと転がっていたが、やがて羽をパタパタと動かし始めた。すると、その体がフワリと浮き上がった。それと同時に、その体が小さく青色に光った。みるみる口の傷が塞がっていく。だが、失った部分を再生するには至っていない。どうやら、ヤツの回復魔法のＬＶは４以下のようだ。

そのとき、ロイスの体がゆっくりと透けて行くのが見えた。この期に及んで、まだ空間に逃げようとしているらしい。俺は再びホーリーソードを振るう。

粘土のような感触……。力を籠めると、剣がゆっくりとロイスに向かっていく。その様子を見たヤツは目を見開いて驚いている。己の空間が目の前で破られているのだ。驚くのも無理はないのかもしれない。

ホーリーソードはロイスの頭をかすめて、背中に向かう。そして、そこに生えている四枚の羽を一枚一枚切り裂いていく。

ゴヒュヒュヒュヒュヒュ～～～。ゴボォォォォォォォ～～～。

突然、耳をふさぎたくなるようなイヤな音と共に、ロイスが地面に叩きつけられた。まるで蛇のようにのたうち回っている。

「ちいっ！」

悔しそうな声が聞こえる。気が付くと、目の前には龍王が立っていた。ヤツは腕組みをしながら顎をクイッと上げ、厳しい表情で俺に話しかけてきた。

「これは……ロイスか？　貴様がやったのか？」

「ああ」

「余計なことを」

「何ぃ？」

「この者は、龍王たる我が成敗せねばならんのだ。余計なことをしおって！」

「何を言っていやがるんだ。お前、コイツのブレスにふっ飛ばされていたじゃないか。成敗するなんて、よく言えたな」

「貴様、我の力を見くびるな！　我が本気を出せば、ロイスの一人や二人……」

「じゃあ、もっと早く本気を出せよ」

「なっ！　貴様……」

龍王の体が真っ赤に染まっている。どうやら、「激おこ」の状態らしい。完全に逆切れだ。

ゴブォッ、ゴブォッ、ゴブォッ、ゴブォッ……。

ロイスの苦しそうな声を上げている。龍王はゆっくりと彼に視線を向ける。

「……なるほど、ロイスの口と羽、そして、前後ろ足の一部を切り裂いたのか。これならば逃げることはおろか、動くこともできまい。貴様にしては、よくやったではないか」

「あのなぁ、龍王。何にもしていないお前が、何でそんな上から目線で喋れるんだ？　お前の頭の中はどんな構造になっているんだ？」

俺の言葉に、龍王は満足そうに頷いている。俺の皮肉は耳に入っていないようだ。そのとき、龍王の右手が銀色に光っているのが見えた。

「待て龍王、お前何をする気だ！」

「何を言っているのだ。ロイスにとどめを刺すのだ。邪魔をするでない」

「やめろ、待て！」

龍王は不思議そうな表情を浮かべながら首を傾げる。

「まさか、貴様がロイスの命乞いをするとはな」

「命乞いとかそう言うことじゃない。コイツの腹の中には、俺の妻たちがいるんだ。まず、リコたちを救い出すのが先だろうが。お前の今の攻撃じゃ、このドラゴンが消えてしまうだろうが」

「そういうことは、早く言うがいい」

「お前な……」

「文句を言っていないで、早く救い出すがいい。このロイスも苦しんでいる。早く楽にしてやったほうがよいだろう」

……心の中で舌打ちをする。どうしてだろう、コイツと話をしているとイライラする。いや、こんな生き物より、リコとソレイユだ。まず、二人を助けないと。

俺はホーリーソードを握り締めながら、ロイスの前に立つ。……ヤツは泣いていた。とてもきれいな瞳から、大粒の涙が流れていた。その姿は一瞬、俺に剣を振るうのを躊躇わせるものだった。

第五百十三話　そこまでする？

「どうした？　何をしている？」

俺の後ろで龍王が口を開いている。姿は見えないが、その声の抑揚で考えていることは手に取るようにわかる。目の前に獲物がいるのに、どうして躊躇うのか……意外と度胸のないヤツだ。そう考えているのだろう。

目の前のロイスは、相変わらず紫色の美しい瞳から涙を流し続けている。キューキューと鳴き声までがかわいらしいものになってきていた。それに呼応するように、大きな体躯がゆっくりと上下している。

……いや、まずリコとソレイユを救い出すことが先決だ。

俺は首を振りながら、自分にそう言い聞かせる。間違いなくこのドラゴンの腹の中に二人はいるはずだ。ということは、まずロイスの首を落として、そこから……。

「ええい、何をしておるのだ！」

苛立ちを爆発させるようにして、龍王が俺の前に進み出る。見ると、ヤツの右手が銀色に光っている。

「おい、何をするつもりだ！」

「貴様の妻たちを助けてやろうというのだ」

「何？」

「貴様、ドラゴンの体を知っておるのか？」

「ドラゴンの体？　どういうことだ？」

「わからぬやつだ。ドラゴンの体の中を見たことがあるのかと聞いておるのだ！」

「あるわけがないだろう」

「やはりな……」

龍王が呆れた声を上げている。コイツは俺に背を向けたままだが、どんな表情を浮かべているのかくらいはわかる。きっと、バカにしたような笑みを浮かべているに違いない。

そんな俺の気持ちを察したのか、龍王はチラリと俺に視線を向けた。やはり、笑っている。

「種類にもよるが、アウンサリダーの体躯を持つドラゴンは、八つの胃袋を持っている。それぞれに強力な胃液を持っているために、下手に切り裂くと貴様ら人間では手が付けられなくなる」

「いや、俺には結界があるから問題ないが」

「そうであったな。……いや、だが、聞け！」

龍王は再びロイスに視線を向けると、まるで暗唱するかの如く、滔

々と語り始めた。

「我らドラゴン族は大きく分けて四つの種類がある。このロイスのようなアウンサリダーをはじめとして、クルルカン、ビルムプラン、エフエスハイがそうだ。その中でも最も複雑な内臓をしているのがアウンサリダーだ。一方で、最も単純な構造をしているのがエフエスハイ、貴様ら人間とほぼ、同じ構造をしているのがクルルカンだ。従って、最も人化が得意なのがクルルカンだ。ビルムプランは、どちらかと言うと海に住むことが多いために、魚と同じ構造をしている者が多い。因みに我は、どの種類にも属してはおらぬ。いや、すべての種類の構造を持っていると言ったほうが正しいか。通常ではあり得ぬことだが、クルルカンとアウンサリダーの血を継いだ父と、エフエスハイとビルムプランの血を継いだ母……この二人のお陰で、我という希少種が生まれたのだ。従って、我のような者は金輪際生まれてはこぬだろうな」

そこまで言うと龍王はハッハッハと大声をあげて笑い出した。そして、再び俺に振り返ると、ドヤ顔で口を開く。

「そういうことだ」

「え？　何が？」

「わからぬやつだ！」

龍王の体が赤く染まる。怒っているらしい。いや、キレられても困るのだが。

戸惑う俺には全く構うことなく、龍王は再びロイスに視線を戻し、腕を組みながらさらに口を開いた。

「もう一度言うから、よく聞くがいい。我らドラゴン族は大きく分けて四つの種類がある。このロイスのようなアウンサリダーをはじめとして、クルルカン、ビルムプラン、エフエスハイがそうだ。その中でも最も複雑な内臓をしているのがアウンサリダーだ。一方で、最も単純な構造をしているのがエフエスハイ、貴様ら人間とほぼ、同じ構造をしているのがクルルカンだ。従って、最も人化が得意なのがクルルカンだ。ビルムプランは、どちらかと言うと海に住むことが多いために、魚と同じ構造をしている者が多い。因みに我は、どの種類にも属してはおらぬ。いや、すべての種類の構造を持っていると言ったほうが正しいか。通常ではあり得ぬことだが、クルルカンとアウンサリダーの血を継いだ父と、エフエスハイとビルムプランの血を継いだ母……この二人のお蔭で、我という希少種が生まれたのだ。従って、我のような者は金輪際生まれてはこぬだろうな。ハッハッハ！」

龍王は再び俺に視線を向ける。

「わかったな？」

「お、おお……まあ、その、何だ。わかった。うん、大体わかったよ」

俺の返答に、龍王は満足そうに頷いている。

「今の話を、アリリアに聞かせてやるのだ。きっと喜ぶだろう」

クックックと龍王は嬉しそうな表情を浮かべる。断る……という言葉を必死で飲み込む。龍王の言葉をアリリアに伝えるなんて、そんな気色の悪いことができるわけがない。いや、よく考えれば、さっ

きの龍王の話は全く覚えていない。アリリアに伝えること自体が無理な話だ。

龍王は相変わらず笑みを浮かべたまま、ロイスに視線を向けている。右手の光もそのままだ。彼はロイスの傍に行き、ゆっくりと片膝をつく。それと同時に、ロイスの瞳に恐怖の色が見て取れた。

「きゅー、きゅー、きゅー」

必死で声を振り絞りながら、体を小刻みに震わせている。そんな彼の様子を見た龍王は、フッと鼻で笑い、侮蔑の表情を浮かべる。

「今になって命乞いか？　ロイス、貴様にはドラゴンとしての誇りはないのか。いや、それすらも策略か？　フフフ。人族ならばまだしも、そんな子供だましは我には通用せぬ」

「ギギギギギギギュ～～～～」

突然、今まで聞いたこともないような声が聞こえてきた。見ると、ロイスが目をカッと見開いている。必死で何かを我慢しているように見える。よく見ると、何と、龍王の右手がロイスの腹に突き刺さっている。

「うん？　この辺だったと思うのだが……違うか。ええい！」

「ギョギャギャギャギャギャ～～～～！！」

再びロイスの絶叫が響き渡る。何と、龍王の右手はロイスの腹を切り裂いていた。真っ赤な腸が見えていて、正直グロい。だが龍王はそれを頷きながら眺めている。

「ここが胃だ。この裏にも胃がある。貴様の妻たちは、おそらくそこだろうな。因みに、ここが心臓だ」

そんなことを言いながら龍王は手を動かしていく。その都度、ロイスの体がまるで跳ねるように動く。その体を龍王は左手でがっちり抑えている。

グチュグチュと気味の悪い音が響いている。ロイスの体が小刻みに震えている。先ほどまで耳に響いていた絶叫はもう聞こえなくなっている。声を出すこともできないようだ。どうやら、呼吸ができていないらしい。

「うん？　おらんな。本当に貴様の妻たちはまだ生きておるのか？」

龍王が苛立ちながらロイスの腹の中をまさぐっている。俺は魔力探知と気配探知を発動させる。……ちゃんと結界の反応があった。そして、リコもソレイユも結界の中で生きている。

「ちゃんと生きている。胃の中にいないのか？　だとしたら……」

「いや、胃はあと一つ残っている」

「……じゃあそこだろう」

ぶ然とした表情を浮かべる龍王。ドラゴンの胃液は強力で、ピンポイントで取り出さなきゃいけなかったんじゃないのか？　結局、ロイスの腹の中は龍王の手によって生体解剖され、グチャグチャにされてしまった。ロイスは……まだ生きているようだが、瀕死の状態と言ったところだ。

龍王はため息をつきながら、ロイスの腹の中に手を入れる。……龍王の動きが止まった。

「どうした？」

「……」

「まさか……何もないのか？」

「ぬうわぁぁぁぁぁ！」

突然、龍王が叫び声を上げた。予想外の行動に、俺は思わず眼を見開いて固まった……。

第五百十四話　遅かれ早かれ

……ドチャッ！

叫び声と共に、龍王がひっくり返った。それと同時に、何かが叩きつけられる音が聞こえた。一体何だと思いながら見てみると、そこには、ロイスの体から赤黒い巨大なズタ袋のようなものが飛び出してきていた。

それは、地面に触れるとすぐ、ボコボコと不気味な音を立てながら土を溶かしていく。見る見るうちにそこには土の池が出来上がってきていた。一方の龍王はすでに起き上がり、両膝をついた状態で、その様子を眺めていた。

「さあ、見てみるがいい」

顎をしゃくって、俺を促す龍王。ここまでやったんだから、最後の胃袋もお前が確認すればいいじゃないかと思うが、ヤツは俯きながらブツブツと何かを呟いている。すると、その両手がほのかな光に包まれる。まさか、回復魔法をかけているのだろうか？

「……よかったら、エクストラヒールをかけてやろうか？」

「……いらん」

「いや、別に、そのくらいのこと……」

「イランと言っているだろう！」

「意外に、回復魔法が苦手なのか？」

「苦手？　苦手とはどういう意味だ？　まるで我にできぬことがあると言いたいのか？　フハハハ片腹痛い！　そもそも我らドラゴン族は、傷を負うなどと言うことはあり得ぬのだ。仮に傷を受けたとしても、すぐにそれは回復する。それほどの体を持つ我らに、回復魔法などと言う軟弱なものを身に付ける必要はないのだ！」

ドヤ顔の龍王。どう見ても、言い訳にしか聞こえないのは、気のせいだろうか？

「ほらよ」

俺は何も言わずエクストラヒールをかけてやる。龍王はしばらく両手を眺めていたが、やがて、小さな声で呟いた。

「気が利くではないか」

俺はそんなバカ龍には目もくれず、目の前のものに視線を向ける。相変わらずボコボコと気色の悪い音を立て、湯気を出しながら地面を溶かしている。本音を言えば、龍王に何とかしてもらいたいが、ヤツはそんな気はサラサラないらしいのがよく伝わってくる。龍王の様子では、こいつはかなり分厚いものらしい。それを俺が手でやるのは時間がかかって仕方がないだろう。そう考えた俺はゆっくりとホーリーソードを抜き、剣を水平に構える。

……ピュッ！

剣を振り抜き、胃袋の表面を斬ってみる。切っ先からは、分厚いも

のを斬ったという感触はない。ただ、胃袋の表面を撫でたような感覚が伝わってきていた。

反射的に刃こぼれを確認する。地面を溶かすほどの胃液だ。このホーリーソードも溶かしてはいないかと少し、不安になったが、刃こぼれの類は一切見当たらなかった。さすがに、メイとシディーたちが鍛え上げた剣だ。

再び視線を移すと、巨大な胃袋に一筋の線が入っていた。さすがにあのくらいでは切り裂けないのかと思ったそのとき、その傷が少しずつ開いていくのが見えた。

「リコぉ！　ソレイユぅ！」

リコとソレイユが膝を抱えるような態勢で胃袋に収まっていた。剣で胃袋を切り裂いて、二人を何とかして助け出す。

「リコ！　リコ！　リコ！　ソレイユ！　ソレイユ！　ソレイユ！」

二人を抱き起してみるが、一切反応がない。だが、ちゃんと生きている。結界を通してそれは伝わってくるし、二人の心臓に耳を当ててみたら、ちゃんと動いている。

「ちょっと待っていろ！」

そう言って俺は転移結界を発動させる。

帝都の屋敷に帰ると、誰も居なかった。

「リノス様……」

俺の気配を感じ取ったのか、二階からペーリスが降りてきた。

「リコ姉さまとソレイユちゃんは？」

「見つかった。でも、意識がないんだ。メイは？」

「まだ……眠っていると思います。今からすぐ起こして……」

「いいやそれには及ばない。アリリアは？　ほかの子供たちは？」

「マトカル様が……お屋敷にいると、子供たちが落ち込むと言って、アガルタに連れて行かれました」

「アガルタに？」

「街に連れて行きました。止めたのですが、きっとリノス様は黒龍を倒して帰ってくるから大丈夫だと……。それに、私に休むようにと……」

「わかった。さすがマトだな。じゃあ、ちょっと行ってくる」

「リノス様、どこへ……」

ペーリスが言い終わるのを待たずに俺は再び転移結界を発動させた。

「……うおっ！？」

突然現れた俺を見て驚いているのは、ポーセハイのチワンだった。

彼は、アガルタの都に作られたアガルタ大学の医学部で教鞭をとり

ながら、附属病院の院長も勤めている。忙しいのは百も承知だが、今の俺には、彼の力が必要なのだ。

「どうされました、リノス様？」

「すまんが、ちょっと来てくれ」

「えっ？」

「リコとソレイユが」

「見つかったのですか！　それは、よかったです。で、ご容態の方は？」

「生きてはいるが、眠った状態なんだ」

「わかりました。では、ローニも呼びましょう」

「すまん」

チワンは目を閉じて少し俯く。その直後、彼の眉間に深い皺が刻まれた。その状態のまま、沈黙が流れる。

「チワ……」

「行きましょう」

「え？」

「リコ様とソレイユ様がおいでのところはどこでしょうか？」

「いや、あの、ローニは……」

「クビです。破門しました」

「え？」

「さあ、参りましょう」

そのとき、部屋の隅の空間がゆっくりと歪んでいく。そしてすぐにローニが現れた。

「一体何なのですか。いきなりクビだの破門だのと……あっ、リノス様！」

ローニの耳がピンと伸びる。そんな彼女をチワンは一瞥したかと思うと、吐き捨てるように呟いた。

「今すぐ出ていけ。今日中に荷物をまとめて出ていくんだ」

「ですから、一体何なのです！」

「食事と人の命、どちらが大事なんだ！」

「人の命？　何の話ですか？　いきなり食事中に今すぐ来い、などと言われても、すぐに行けるわけはないでしょう！」

「黙れ！　もう、お前とは師匠でもなければ弟子でもない」

「ちょっと……」

「はい、それまで」

俺は問答無用で転移結界を発動させた。

「……うっ、ゴホッゴホッ！！」

レイス火山の麓に到着した途端、二人は激しく咳き込み始めた。俺は慌てて二人に結界を張り、回復魔法をかける。

「くっ……はあ、はあ、はあ……」

「すまんな。説明している時間がなかったので、無理やり連れてきた」

二人は周囲を見廻しながら、呆然とした表情を浮かべている。

「すまんが、リコとソレイユを見てやってくれないか」

「ええっ？　リコ様とソレイユ様！？」

ローニの耳が「！？」の形になっている。彼女はキョロキョロと周囲を見廻す。

「ローニ、あそこだ。あそこに……」

視線を移した先には、龍王が片膝をつきながら、ソレイユの体をペタペタと触っているのが見えた。そして、ヤツはあろうことか、リコの体に手を触れようとした。

「てめぇ！」

叫ぶのとホーリーソードを抜くのが同じタイミングだった。俺はヤツを脳天から唐竹割に斬りつけた。だがヤツは両手で剣を受け止め、いわゆる真剣白刃取りの態勢を取った。

「貴様……何を……するのだ……」

「汚ねぇ手で俺の嫁の体を触るんじゃねぇ！　二人に触れていい男は、俺だけだ」

「貴様……何を言って……」

「リノス様、やめておくれよ！」

女性の絶叫にも似た声が聞こえる。声のした方向に視線を向けると、そこにはイリサルが立っていた。

「龍王様は、お二人の体についた胃液を、ずっと払っていてくれていたんだよ」

「何！？」

よく見ると、龍王の両手から煙が出ている。ロイスの胃液で指がやられているようだ。

「……それを早く言えってんだ」

俺は剣を鞘に納めながら呟く。そのついでに、龍王にエクストラヒールをかけてやる。彼はブツブツと何かを言っていたが、敢えて何

も言わないことにする。

「リノス様、恐れ入ります！」

チワンの声で我に返る。チワンとローニはすでにリコたちの傍に居て、二人を観察している。

「触診しますので……」

「わかった、一旦、帝都の屋敷に運ぼうか」

「お願いします」

俺は両手から湯を出して、リコとソレイユの結界についたロイスの胃液を洗い流していく。粗方きれいになったと思い、龍王に視線を向けると、彼はゆっくりと頷いた。俺はリコとソレイユを肩に担ぎ、立ち上がる。そのとき、地面が大きく揺れた。

「火山が爆発するな」

誰に言うともなく龍王は呟く。彼の後ろには、ロイスの姿があった。腹の中を引っ掻き廻されているにもかかわらず、まだヤツの体は小刻みに上下していた。

「とどめを……」

俺の言葉に龍王は静かに首を振った。

「遅かれ早かれだ。すぐに、この場を離れたほうがよい」

その直後、火口から火柱が立ち上った。俺は無言で転移結界を発動させた。

第五百十五話　後ろ髪

「あっ、リノス様……。リコ様、ソレイユ様！」

帝都の屋敷に着くと、ペーリスがいた。彼女はリコとソレイユの姿を見て、喜びとも戸惑いともつかぬ声を上げた。同時にフェアリがパタパタと俺の周囲を飛び回っている。そんな二人にゆっくりと頷き、離れに向かう。

「ローニ先生？　あっ！　おとうさん！」

二階に上がると、エリルがいた。突然現れたローニやチワンに驚いていたが、俺の姿を見て、すぐにパタパタと走っていった。

まず、ソレイユの部屋に行き、彼女をベッドに寝かせる。それと同時に、メイや子供たちがドヤドヤと部屋に入ってくる。

「マミー！　マミー！」

アリリアが取るものも取り合えずといった感じで飛び込んできて、ソレイユの手を握るが、すぐにメイに引き離されていた。彼女はアリリアを後ろから抱きしめながら俺に視線を向け、ゆっくりと頷く。それを受けて俺はソレイユに張っていた結界を解除する。

それを待っていたかのように、ローニがソレイユの脈を取る。

「ローニさん、ソレイユさんは私が……。リコ様を」

「そうですか。よろしくお願いします」

メイがローニと入れ替わるようにして、ソレイユを触診する。アリリアが心配そうにのぞき込んでいる。

「大人しく、していなさい」

メイの優しくも厳しい声が飛ぶ。彼女のまっすぐな瞳は、何としてもソレイユの命を救うという覚悟が見て取れた。それと同時に、邪魔をするものは何人たりとも許さないという迫力も滲ませていた。だが、そんな彼女の振る舞いは、アリリアにとってはショックだったらしい。みるみるその表情が歪んでいく。

「大丈夫だ。任せておくのだ」

突然、龍王が口を開く。ウチのプライベートスペースに入り込んでいやがったのか、そんなことを考えていたそのとき、アリリアの目から涙が溢れだした。

「りゅーおーくん……」

アリリアは涙をぬぐいながら泣いている。その様子を龍王は満足そうに頷いている。いつの間にか、エリルがアリリアの背後に回り込んで、彼女を抱えるようにして抱きしめている。何て優しいお姉ちゃんなのだろう。さすがは、俺の娘だ。

「リノス様」

ローニが促してくる。俺はゆっくりと頷くと、その場をメイにまかせて部屋を後にする。

「マト、頼むぞ」

「えっ？」

部屋を出る直前、ドアの前にいたマトカルに声をかける。息子のファルコを抱っこしたまま彼女は、キョトンとした表情を浮かべている。龍王のヤツがアリリアに変なちょっかいを出しやがったら、斬れと言いたかったが、敢えて何も言わないでおいた。マトのことだ。龍王が何かおかしなことをすれば、何とか対応してくれるだろう。

俺は足早にリコの部屋に向かう。後ろから息子のイデアとピアトリスがパタパタと追いかけてくる。

「リコ……」

ベッドに寝かせて、結界を解除する。ローニが脈を取り、触診をしていく。

「ママ……ママ……」

イデアが小さな声でリコを呼んでいる。だが、彼女は安らかな寝顔を浮かべたまま微動だにしない。

「ローニ……どうなんだ、リコは。ソレイユは」

「触診しただけで何とも言えませんが、脈拍は落ち着いています。引き続き、診察を続けます」

「頼むな、ローニ……」

俺はイデアを背中から抱きしめながら、ローニの様子を見守る。彼女は懐から聴診器を取り出して装着する。そして、リコの胸元に手を伸ばしたかと思うと、スッと俺に視線を向けた。

「ここはローニにまかせて、我々は外に……」

チワンが落ち着いた声で話しかけてくる。俺は後ろ髪を引かれる思いで、部屋を出ていこうとする。

「いやだ、ママと一緒にいたい！」

そのとき、イデアが強い調子で口を開いた。いつもは親の言うことを聞く温厚な子供なのだが、こんなにはっきりと主張をするのはとても珍しいことだ。

「イデア……ローニ先生の邪魔をしては……」

「ママと一緒にいたい」

初めて見る息子の様子に俺は戸惑ってしまった。思わずローニに視線を向ける。彼女はゆっくりと頷いた。俺は片膝をついて、息子を抱きかかえるようにして両肩に手を添える。

「じゃあ、ママを守ってくれるかい？」

イデアは力強く頷いた。俺は頼むよと言って、チワンと共にその場を後にした。娘のピアトリスも、そこにいるのが当然と言った表情で俺を見送っていた。何となくだが、この二人はローニの邪魔になるようなことはないだろうという確信があった。

「いかがでしたか？」

ダイニングに戻ると、ペーリスが心配そうな表情で話しかけてきた。その後ろでは、イリサルが椅子に腰かけていた。

「ソレイユはメイが、リコはローニが診察してくれている。詳しくはわからないが、リコの場合は、脈拍は安定しているとローニが言っていた」

「きっと、大丈夫です」

ペーリスが安堵の表情を浮かべる。世界最高の名医が診ているのだから、大丈夫だと彼女は笑顔を浮かべる。その表情は何となく、俺を安心させた。

「お茶でも入れましょう」

ペーリスは俺とチワンに椅子に座るよう促して、キッチンに向かっていく。テーブルの椅子に腰を下ろすと、何とも言えぬ安堵感が湧き上がってくる。ああ、やっと帰ってきたのだなという感覚に包まれる。

「何かあれば、ローニから念話が飛んできます。それまでは、待ちましょう」

チワンが少し笑みを浮かべながら話しかけてくる。その表情からは、二人に任せておけば大丈夫だという雰囲気が見て取れた。その様子は、俺を安心させるのに十分だった。

ふと視線を向けると、イリサルがゆっくりとお茶を飲んでいた。彼女もかなり無理を聞いてもらって協力してもらったのだ。

「すまないな、イリサル。あと、お前が契約している精霊にも……」

「気にすることはないよ。あのくらいのことなら、いつでもお安い御用だ。それよりも、ソレイユ様が心配だ」

「まずは、族長様に、一応ソレイユが助かったことを伝えるか」

「それなら、私が里に伝えるよ」

「そうか……。世話をかけるな。里に帰って、一息ついたら、屋敷に帰って来るといい。お礼をするよ」

「気にしないでいいよ。それじゃ、私は里に戻るよ。ソレイユ様が心配だけれど……」

そう言ってイリサルは立ち上がった。そのとき、彼女がキョロキョロと周囲を見廻し始めた。

「どうした？」

「いや……何だか、すごく癒される音が……」

「癒される？」

不思議に思いながら、耳をすましてみる。確かに、かすかな音が聞こえてくる。これは一体……。

チワンは何のことだかわからないらしい。ペーリスは相変わらずキッチンにこもったままだ。俺はイリサルと顔を見合わせる。

どうやらかすかに聞こえる音は外から聞こえているようだ。離れにつながるドアを開けると、幼い少女の歌声が聴こえてきた。

「集まる水が溶けあって～豊かな川となるように～♪　心合わせて助け合おう～♪　温かいまなざし～♪　やさしい声～♪　精霊たちは～私たちの力の泉～♪　私たちを元気にしてくれている～♪　みんな～そろって～手を組もう～♪」

これはアリリアだ。俺には幼い少女の歌声にしか聞こえないが、イリサルは目を閉じてじっと歌声に耳を傾けている。

「イリ……」

話しかけようとするが、彼女は手をスッと上げて俺の言葉を遮る。

「すごい……。まるで、心が洗われるようだ……」

イリサルは声に耳を傾けながら、両手を胸の前で組み、何かに祈るようなポーズを取っている。その表情は恍惚に浸っているようにも見える。何だか、周囲の雰囲気もほのぼのとしてきたように感じる。アリリアは相変わらず歌い続けている。

「風吹き渡るこの土に～♪　緑の若木たくましく生い立つ～♪　やさしく強く我らも伸びよう～♪　みんな～そろって～手を組んで～♪　輝く……」

突然、アリリアの声が止んだ。その瞬間、周囲の雰囲気が一変した



第五百十六話　おはよう

一瞬、周囲がまばゆい光に包まれた。俺とイリサルは思わず顔を見合わせる。

そんな俺たちに目もくれず、アリリアはパタパタと走って離れに入っていった。俺たちも彼女に続く。

足早に階段を駆け上がる。ソレイユの部屋の扉は開けられていて、その付近にはマトカルらが控えている。皆、俺たちに気が付くと、いそいそと扉から離れていく。

「ソレイユ……」

ベッドには、ぐったりとした表情を浮かべているが、確かに目を開けているソレイユの姿があった。その彼女の手を、アリリアが両手でしっかりと掴んでいる。

「マミー……マミー……」

小さな声で、まるでソレイユに囁くようにしてアリリアが口を開いている。そんな様子を、ソレイユは優しい眼差しを向けている。

「ソレイユ……よかった……」

ベッドのすぐ傍で俺は崩れ落ちるようにしてへたり込む。そして、アリリアの手の上に自分の手を乗せる。ソレイユは穏やかな笑みを浮かべている。

「意識は取り戻しましたが、憔悴したままです」

メイが申し訳なさそうに説明する。つい先ほど、ソレイユは目覚めたらしいが、衰弱が激しいためか、喋ることができないでいるらしい。すぐに水を与えてはみたが、ごく少量しか飲むことができず、容態としては、未だ予断を許さない状況なのだという。回復魔法をかけようと提案してみたが、おそらく効果はないのだという。

「今からアガルタ大学に行きまして、栄養価の高い食べ物と薬を取りに行ってきます」

「いや、ちょっと待って」

出ていこうとしたメイを止めたのは、イリサルだった。彼女はメイとソレイユを交互に眺めながら、言葉を続ける。

「薬よりも、里に戻ったほうが遥かに回復は速いはずだよ」

イリサルは自信満々に答えている。彼女曰く、サイリュースの里には、何と言っても族長様がいる。彼女の契約する森の精霊は最上位クラスであり、サイリュースとの付き合いも長い。族長様に頼めば、ソレイユの体調はすぐに回復するのだそうだ。

「食べ物や薬を使ったら、回復までに一週間以上かかってしまうだろう？　それなら、族長様に頼んだ方が、絶対にいいよ！」

そう言ってイリサルは胸を張る。その様子を見てメイは少し考えていたが、やがて、ゆっくり頷くと、よろしくお願いしますと言って深々と頭を下げた。

念のため、ソレイユに確認を取ってみたが、彼女もやはりコクリと頷いた。善は急げとばかりに、俺はソレイユをお姫様抱っこする形で抱き上げる。

「マミー……マミー……」

アリリアが今にも泣き出しそうな顔で付いてくる。そんな彼女にイリサルはウインクをしながら優しく話しかけた。

「大丈夫。二日もあれば戻ってくるよ。それまで、いい子にして待っていなよ」

その言葉に、アリリアはゆっくりと頷いた。そのとき、ソレイユが小さな声で呟いた。

「アリリア……」

「マミー！」

「お歌……。とっても……上手……だった、わよ……」

アリリアは心から嬉しそうな表情を浮かべながら、何度も頷いた。

「うむ。良い歌だった。我も感じ入ったぞ」

何故か龍王が腕を組みながら、偉そうに胸を張っている。いつまでコイツは家にいやがるんだ。

バカ野郎、早く帰りやがれと言いたかったが、今はソレイユの容体

を回復させることが先決だ。バカ龍は無視することにして、俺はソレイユを抱っこしたまま、ゆっくりと階段を降りていく。後ろからメイとイリサルも付いて来た。そして俺たちは、そのまま外に出て、転移結界を発動させる。

サイリュースの里の入り口は、森に閉ざされたままだった。まだ、俺たちの来訪に気が付いていないようだ。

「ちょっと待って」

イリサルがスッと目を閉じて、ブツブツと呟いている。すると彼女の体の周囲に炎が取り巻いた。

「よーし、任してくんねぇ。お～い、今帰ぇったよ～！　入れてくんねぇ！」

イリサルが契約しているサラマンダーが現れて、大声で叫んでいる。すると、目の前を覆っていた森がゆっくりと消え、サイリュースの里の入り口が見えてきた。

「……ずいぶんと古典的なんだな」

「何がだい？」

「いや、こっちの話だ」

そんな会話を続けながら、里に入っていく。すると、俺たちの気配に気づいたのか、数名のサイリュースたちがフワリと降りてきた。

「ソレイユ様！」

心配そうな表情を浮かべるサイリュースたち。この真冬のさ中だが、相変わらず彼女たちは薄着だ。体のラインがモロ見えだ。

「族長様は今、セイサム様を世話しておいでです。ご心配には及びません。ソレイユ様は私たちが必ず回復させて御覧に入れます」

サイリュースの一人がそう言うと、ソレイユの体がフワリと浮き上がった。そして彼女は四人のサイリュースに囲まれるようにして、里の奥に消えていった。

「もう、安心だよ。ソレイユ様が回復したらまた、報告に伺うよ」

「そうか……。このお礼はさせてもらうな。ありがとうな、イリサル」

俺は礼を言いながらも、やはりソレイユのことが気になる。それはメイも同じようで、じっとソレイユが消えた先を眺めている。

「大丈夫だって！　さあ、リノス様も疲れているだろう？　お屋敷でゆっくりと……もできないか。ただ、これから先は、私たちの仕事だよ。メイ様、はやくリノス様をお屋敷に……。さもないと、他のサイリュースたちが、リノス様を誘惑しちゃうよ」

メイはクスリと笑みを浮かべながら頭を下げる。そして、俺と腕を組むと、まるで諭すように口を開いた。

「ご主人様……ここは、引き揚げましょう」

その言葉に、俺はゆっくりと頷いた。

◆◆◆

再び屋敷に戻る。ダイニングには行かずに、再び離れに向かう。リコの容体が気になるのだ。

部屋に入ると、リコは安らかな寝息を立てていた。その傍にはチワンとローニが控え、そして、息子のイデアがじっと母の顔を眺めていた。ピアトリスは、イデアの隣で椅子に座らされていて、コックリコックリとうたた寝をしているところだった。

「チワン、ローニ、リコの容体は？」

二人は顔を見合わせていたが、やがて、チワンがゆっくりと口を開いた。

「ただ、眠っているといった状態です。ただし、三日近く飲まず食わずの状態だったのを考えますと、あまり楽観はできない状況です」

「リコ様には水分を少し摂っていただきましたが、眠っている状態ですので、どうしても少量になります」

チワンとローニの話を聞きながら、俺はリコの手を握る。小さいが、ほんのりと温かい。いつものリコの手だ。真っ白で、まるで白魚のような、きれいな手だ。その手を俺は両手で包み込むようにして握り締める。

「リコ……リコ……」

呼びかけてみるが、反応はない。ただ安らかな寝息が聞こえてくる

のみだ。

俺の帰りを知った家族たちが集まってきた。皆、リコの邪魔にならないように、静々と集まってきている。そんなちょっとした優しさが、何とも言えずありがたかった。

「アリリア、歌ってみてはどうだ？　この者も目を覚ますのではないか？」

龍王が口を開いている。このバカ龍はまだいやがったのか。睨みつける俺を、龍王も睨んでいる。マジで一度、本気で戦ってやろうか？

「りゅーおーくん、静かにしよう」

アリリアが人差し指を口元に当てている。何ていい娘なのだろう。それを見た龍王は、大きく頷いている。

「そうだ。静かにするのだ」

……何で俺に言うのだ？　ちょっとイラッとしたが、今はこのバカ龍を相手にしているときではない。リコだ。リコを目覚めさせるのが、先決だ。

だが、いつまでたってもリコの様子は変わらない。皆、じれてきているのがよくわかる。このままではいけないと判断した俺は、皆を一旦部屋に帰そうと決意する。そのとき、息子のイデアが不意に口を開いた。

「ママ、おはよう。おはよう、ママ……」

リコの目が、ゆっくりと開いた……。

第五百十七話　平穏な時

「リコ！　リコ！」

慌ててベッドにしがみつくようにして、リコの傍に行く。彼女はぼーっとした表情のまま天井を眺めている。

「ママ！　ママ！　ママ！」

イデアやアリリアたち子供らが枕元に集まる。その声が耳に届いたのか、リコはゆっくりと視線を向ける。

「……まあ、イデア、アリリア」

小さな声だが、確かに子供たちの名前を呼んだ。どうやら大丈夫そうだ。リコはゆっくりと俺に視線を向けてくる。

「……リノス」

「リコ……よかった……」

何だか涙が出てくる。そんな俺に彼女はニコリと微笑みながら、静かに口を開いた。

「……久しぶりに、よく、寝ましたわ」

その言葉を聞いて俺は、笑いながら泣いた。

◆◆◆

リコの容体は、すぐに回復した。水分を摂り、軽い食事を摂ると再び眠り、夕方になると起きてきた。そして、家族と一緒に軽く食事を摂った。少しやつれてはいたし、ヨタヨタしながら歩いてはいたが、チワンやローニたちに言わせれば、しばらくすれば元の通りに生活できるだろうということだった。

リコはロイスに飲み込まれたことを覚えていなかった。ただ、アリリアを救わねばならないという強烈な使命感を感じたことだけは覚えていた。アリリアを突き飛ばして彼女を救った直後に、黒龍に飲み込まれたのだよと説明してみたが、リコは不思議そうな表情を浮かべたかと思うと、アリリアに向かって乱暴なことをしてしまってごめんなさいねと言って謝る始末だった。

まだ夢うつつの状態が少し残っている状態だったため、早めにリコを休ませることにした。風呂に入ってゆっくりと休むように勧めると、息子のイデアがリコの手を取って風呂に連れて行こうとする。リコが居ない間、余程寂しかったのだろうか。彼はリコが目覚めてからずっと母親の傍に付きっ切りだ。

そんな息子が愛おしいのか、リコはイデアやピアトリスらと共に風呂場に向かっていった。さすがに負担になりはしないかと思ったが、メイの好きにさせたらいいという言葉に従って、特に何も言わないでおいた。

突然呼び出してしまったチワンとローニには十分にお礼をしておいた。特にローニは、食事中を邪魔してしまったこともあって、屋敷で存分に食事を振舞った。夫であるドーキも呼んで、二人腹いっぱいに食べてもらったのだ。

そして夜、ベッドで一人横になりながら、俺はようやく一息つくことができた。本当に怒涛の数日間だった。いや、ドルガとヒヤマを巡る戦いに巻き込まれてからのことを考えると、本当に気の休まることのない日々が続いていた。

「……しかし、よく、厄介ごとに巻き込まれるな」

誰に言うともなく、そんな言葉を呟く。今回の日々があまりにも濃厚だったからか、これから先、こんなことがまた起こるかと思うと、何だか不安になってくる。

ただ、救いは、リコもソレイユも無事に戻って来てくれたことだ。エルザ様や摂政殿下、侯爵様やエリル、ファルコ師匠……。バーサーム家の人々は皆、亡くなってしまった。あのときと比較すると、心へのダメージは遥かに少なくて済んだ。

「ふう……」

俺は大きなため息をついて項垂れる。もう、家族が危機に晒されるようなことは起こらないでほしい……。そんなことを心の中で祈っていると、寝室の扉がゆっくりと開いた。部屋に入ってきたのは……メイだった。

「メイ……どうした？」

俺の問いかけに、メイは申し訳なさそうな表情を浮かべている。

「その……眠れなくて……」

「どうした？　……そんなところに立っていないで、こっちにおいでよ」

メイはゆっくりと近づき、そして、俺の隣に体を横たえた。

「アリリアは？」

「シディーちゃんのところで寝ています」

「シディーと？　何で？」

「食事が終ってからずっと、シディーちゃんにドラゴンの生態について質問していまして……。あまりにも戻ってこないものですから、シディーちゃんの部屋に見に行ったら、そこで寝ていました。シディーちゃんも、このままここで寝かせましょうと言ってくれまして……」

「ピアは？」

「リコ様のところで寝ているようです」

「ピアもか？　リコのところはイデアとピアと三人で寝ているのか？　リコは眠れていないんじゃないのか？」

「私も同じことを心配しましたが、シディーちゃんは大丈夫だと……」

「……まあ、シディーが言うなら間違いないだろう。それにしてもアリリアはどうして、シディーのところにドラゴンのことを聞きに行ったんだ？　ドラゴンのことなら、フェリスやラース……シャリ

オらに聞けばいいだろうに。まあ、龍王と言う手もあるが、あれは……役に立たんからお勧めはしないけれどな」

ふと見ると、メイがクスクスと笑っている。どうしたのだと聞く俺に、メイは笑顔のまま口を開く。

「大丈夫です。アリリアと龍王様はご主人様がお考えになっているようにはならないと思います」

「うん？　どういうことだ？」

「アリリアにとって龍王様は、あくまで仲のいい友達の一人です。龍王様はどうやら、アリリアの声を聞くと無条件で従ってしまうようです。ですから、あまり心配されることはないと思います」

「そんなこと……どうしてわかるんだ？」

「だって……私の娘ですもの」

「……そんなものか？」

「そんなものです」

メイの澄んだ瞳は、何となく納得させるものがあった。俺は体をベッドに横たえながら、ふと、ロイスのことを考えた。

「……一度、ヤツの様子を見に行ってみるか」

思わず呟いた俺の言葉が意外だったのか、メイはキョトンとした表情を浮かべている。

龍王に腹を切り裂かれ、中を散々にかき回されたのだ。しかも、火山の噴火もあった。ヤツが生きている可能性はゼロに等しい。だが、万が一のこともある。生きていたらこれほど厄介なヤツもいないのだ。

そう思いながら俺は目を閉じて、ロイスがいた方向に魔力を集中させる。当然ながらロイスの気配や魔力は感じることはできなかった。ずいぶん距離も離れているし、ヤツが万全の態勢で本気になれば、これだけ距離の離れている俺から姿を隠すことは容易にできることだ。

「ご主人様、ご主人様……」

メイの声でふと目を開ける。目の前には、メイが心配そうな顔をしていた。俺は思わずすまないと謝る。

「ちょっと、考え事をしていた」

「黒龍のことでしょうか？」

「……よくわかったな」

「何となく、そう思ったのです」

メイはそう言いながら、俺の手をゆっくりと握る。

「ご主人様の心配は、現実にならないと思います」

「なぜ、そう言い切れるんだ？」

「もし、何か事が起こるのであれば、真っ先にシディーちゃんが気付くと思います」

「あーなるほど。シディーの直感か」

「そうです。今回のことも、シディーちゃんはある程度予見していました。きっと、何か起こることがあれば、シディーちゃんが教えてくれると思います」

「そうか……そうだな。シディーが何も言ってこないということは、今のところは、心配ないってことだな。ありがとうメイ、それを聞いて安心したよ」

そう言って俺はメイの手を握り返す。彼女は少し、嬉しそうな顔をした。

「じゃあ、寝るか」

「……ハイ」

俺は優しくメイを抱きしめた。体から伝わる彼女の温もりは、俺の心の疲れをゆっくりと癒してくれるような気がした。

一方、シディーの寝室では、今まさにベッドに入って眠ろうとしてるシディーが、眉間に刻めない皺を刻みながら固まっていた。

「……あれ？　何だか、えらいことが起こりそうな予感がするな」

彼女は注意深く、今感じた直感を分析していく。そして、ゆっくり

と息を吐きだすと、誰に言うともなく呟く。

「まあ、何とかなりそうね」

そう言って彼女はベッドに横になった。シディーの直感は当然のごとく当たった。その頃、ルワザン島のレイス火山は二度目の大噴火を起こし、大量の火山灰が上空に巻き上げられていた。

それらの火山灰は広範囲にわたって降り注ぎ、海を越えて多くの国々に被害を与えた。特に農作物への被害は甚大で、一部の地域では数年にわたって食糧不足の状態が続くことになるのだった。

そうした状況をシディーは的確に予測していき、アガルタをはじめとする国々が支援に乗り出して、リノスたちアガルタの名声はさらに高まっていくのだが……。そんな未来が待ち受けていることを知らないリノスたちは、久しぶりに訪れた平穏な時間を、ゆっくりと堪能するのだった……。

第五百十七話　平穏な時（後書き）

黒龍編はこちらで終了です。ありがとうございました。

ロイスにつきましては、次話の間話で触れます。その後は新章に突入。一部ファンの皆様の熱い要請にお答えしまして、ヴィエイユにスポットを当てた物語を展開する予定です。お楽しみに！

第五百十八話　ロイス後日談

ルワザン島のレイス火山。数日前に大噴火を起こしたこの島は、降り積もる火山灰に埋もれていた。同時に、火口付近ではいくつもの溶岩ドームが形成され、いつ火砕流が発生してもおかしくない状況だった。それに加えて、火山から噴出される有毒ガスが、島全体を覆っているため、この場所に近づくことはまさに、自殺行為と言えた。

そんな、ある種のこの世の地獄とも思えるような島に、一組の男女が降り立っていた。二人はしばらく、もうもうと黒煙を上げ続けるレイス火山を眺め続けていた。

「……大丈夫か？」

初老の男性が隣の女性に声をかける。一見すると少女のような風貌をしているが、体に纏う雰囲気は、少女のそれではない。ある程度のスキルを持つ者であれば、すぐにただ者ではないことを看破できる程の空気感を、その二人は纏っていた。

男の問いかけに、少女はゆっくりと頷く。その表情は少し苦しそうだ。

「今のお前の体では、この環境には耐えられぬのではないか。苦しいならば……」

「問題ない。行こう……」

少女は男の言葉を遮って歩き出す。

島に訪れたのは、黒龍のツネとシャリオの兄妹だった。二人は元のドラゴンの姿ではなく、人化した姿でこの島を訪れていた。しかも二人には龍王の監視が付いていた。もちろん、龍王の姿はここにはない。彼は、この島から離れた場所で、気配探知と魔力探知を使って二人を監視していた。

この兄妹がルワザン島に赴いたのには理由がある。弟であるロイスの死をこの目で確認したかったからだ。ロイスは死んだという龍王とアガルタ王リノスの言葉が、二人にはどうしても信じることができなかった。

龍王の話では、ロイスは腹を切り裂かれ、臓物を引きずり出されたのだという。その上、この火山の爆発……。通常で考えれば、たとえドラゴンとはいえ、生きることは難しい。だが、二人にはロイスが死んだとはどうしても思えなかった。

狡猾さにおいては群を抜いていたロイス。敵を欺くためならば、どんな手段も厭わない性格であることを兄妹はよく知っていた。それだけに、二人はどうしてもロイスの死を確認したかったのだった。

だが、それには龍王が首を縦に振らなかった。二人を己の監視下に置くと言って、譲らなかったのだ。

ツネとシャリオは、龍王から死一等を減じられていた。それは、先の戦いで龍王とリノスに味方して、大いに功績をあげたことによるものだった。

ロイスが潜んでいたマグマ溜まり……。そこに、龍王とリノスの影

武者として赴いていたのが、彼らだった。二人にはリノスの結界が張られていたが、その中でも己の気配を消すように努めると同時に、ロイスに気取られないよう、自身のスキルを徹底的に秘匿し続けた。そのために二人は、飛べば僅か数十分で到達できるにもかかわらず、わざわざ山の麓から徒歩で山を登り、ロープを使用などしてマグマ溜まりまで赴いたのだ。

その成果もあってロイスは、近づいてきた二人を龍王とリノスと誤認して、ルワザン島に向かった。まさしく、ツネが描いたシナリオ通りに事が運び、リノスたちはロイスを倒して、リコとソレイユを奪還することができたのだ。リノスが愛する妻を取り戻せたのは、まさしく、ツネのお蔭と言ってよかった。そのため、彼らの命は助けられたのだった。

だが、ロイスの死については、この兄妹と龍王達との意見は真っ二つに割れた。あの状況下で生きることは難しいという龍王。そして、二人を遥かに凌駕する気配探知能力と魔力探知能力を有するリノスが、その力を駆使してロイスの気配を探ってみても、何の反応も見られないことを説明しても、この二人は納得しなかった。

何としても、この目でロイスの死を確認したいと懇願する二人に、龍王はにべもなく首を横に振り続けた。

「じゃあ、りゅーおーくんが一緒に行ってあげれば？」

助け舟を出したのは、リノスの娘であるアリリアだった。彼女はツネとシャリオの前に進み出ると、まるで教師が生徒に諭すかのようなポーズで語り始めた。

「二人とも、遅くならないうちに帰ってくること。人にめいわくを

かけないこと。悪いことをしたら、ごめんなさいってあやまること。いい？」

彼女の言葉に、二人は戸惑いながら頷いた。その様子を頷きながら見ていたアリリアは、龍王に向き直る。

「りゅーおーくんは、お兄ちゃんらしく、ツネくんとシャリオちゃんをちゃんと連れて行ってあげること」

「よいだろう」

「乱暴しないこと」

「乱暴は、しない」

「お行儀よくすること」

「お行儀よく、しよう」

「やさしくすること」

「やさしく、する」

まるで姉が弟に諭すような場面だった。その光景をツネはぽかんと口を開けながら眺めていた。あの龍王が、羊獣人の少女の言葉を、唯々諾々として受け入れているのだ。ツネにとってこれは、考えられない光景だった。

ツネの知る龍王は、歯向かう者には容赦がない恐ろしい存在だった。一族全員が、彼によって葬り去られたことも一度や二度ではなかっ

た。まさにドラゴン族の頂点に君臨する者であり、彼に歯向かうことはすなわち、一族全員の死を現すものだった。

ところが、だ。目の前の龍王は、少女の言葉に素直に従っている。それだけではない、彼は少女の言葉を必ず守る。羊獣人の少女からは、支配的な雰囲気は微塵も感じられず、一方的に龍王が少女に従っているように見える。この関係性も、ツネには理解することができなかった。

ともあれ、少女の鶴の一声でルワザン島行が許可された。しかも、リノスが、スキルが奪われているシャリオに結界を張って送り出してくれたのだ。さらに都合のいいことに、島のすぐ近くまで来ると、龍王は目がしょぼしょぼするので、二人に付いてくることを断念したのだ。

「我の探知能力から逃れられると思うな？　逃げようなどと、変な気を起こさぬことだ」

そう言って龍王は不敵に笑う。だがツネには逃げる気持ちは毛頭なかった。彼はただ、弟の死を確認したいという思いの方が強かった。

ツネはシャリオと二人で無言のまま歩いて行く。リノスたちがロイスと戦った場所は、おおよその見当がつく。二人はその場所に向かって最短距離を歩いて行った。

「……ロイス、か」

突然、ツネが乾いた声を上げた。目の前には、巨大な黒い塊があった。

一見すると、巨大な岩のように見える物体……。だが、ツネにはわかった。これが、ロイスの躯であると。

「……マグマがここまで溢れ出たのか。それが中の兄さまの体を飲み込んだのか」

誰に言うともなくシャリオが呟く。よく見ると、ロイスの躯の先は、地面が真っ黒に染まっていた。

「……」

ツネは無言でロイスの体を覆っている、冷えた溶岩を取り除いていく。すると中から眼を見開いたまま絶命しているロイスの姿が現れた。

「……哀れな」

ツネは思わず目を背ける。ロイスの腹は切り裂かれ、その中には大きな石が詰まっていた。

「……噴石が腹の中に。相当熱かっただろう。これは、中の兄さまは、堪らなかっただろうな」

シャリオも少し顔をしかめている。事実、ロイスはリノスたちが転移した直後に起こった火山の爆発に巻きこまれた。その上、降り注ぐ噴石と火砕流が、龍王に引き裂かれた腹に容赦なく降り注ぎ、内臓を焦がしていった。ロイスは叫び声も上げることができぬほどの苦しみを与え続けられた後、押し迫るマグマに身を焦がしながら絶命したのだった。

「兄さま、どうする？」

シャリオがまっすぐな眼差しでツネを見つめる。彼は少し考える素振りをしていたが、やがて首を左右に振りながら口を開く。

「いや、このままにしておこう。ロイスが死んでいれば、墓を作ろうと思っていたが……。このままにしておくのがよいだろう」

「……私も、そう思う」

そう言ってシャリオも頷いた。

「あとは……ラアルの行方だな」

「……」

兄妹の中で最も思慮深いラアルは、混然と姿を消していた。ロイスにどこに連れて行かれたのか、その行方は知れなかった。龍王もリノスも、ラアルのことには一切触れないところをみると、おそらく、彼らに気づかれることなく、その身を隠しているのだろう。

「奴が死ぬとは思えぬからな」

「ラアル兄さまのことだ。静かに暮らしたいのだろう」

「そうかもな」

ツネはスッと空を見上げる。まあ、そのうちどこかで会えるだろう……そんな確信がツネの心にあった。

数百年後、このロイスの体から緑色の芽がいくつも芽吹き、やがてそれは大きな木に成長していった。その木には甘い果実がなり、幻の果実と呼ばれるようになるのだが……。そんな未来が待ち受けているとは、このときのツネとシャリオには知る由もなかった……。

第五百十九話　汲み取る

新・クリミアーナ教国の教都、アフロディーテ。白で統一されたこの都市が、いつになく活気づいていた。

その理由は、これまで停止されていた大規模な人事異動である「ジモーク」が復活することだった。世界中から主だった信者が集められ、このアフロディーテに迎えられる者と去る者が決まるのだ。すでに街には夥しい数の信者が集まり、活況を呈していた。

この都市は、前教皇、ジュヴァンセル・セインが討たれた際に、大きく破壊されている。現教皇であるヴィエイユは都市を再建するにあたり、都市の色は白のまま残したが、その町並みは、これまでの雑然としたものから機能的で統一的な様相に改められた。港から教皇神殿まで伸びる広く、まっすぐな道。その両側に並ぶ建物の高さはすべて統一され、見事な景色に変わっていた。また、信者たちが住む場所も細かく定められ、物資の流通と人の流れが効率的に行われるよう工夫が凝らされていたのだった。

海を越えてやってきた信者たちは、この都市の様子を見て驚いた。そしてすぐに、これがヴィエイユの手腕であることを悟ると、この世の生き神である教皇の住む神殿に向かって、祈りを捧げるのだった。

実際、ヴィエイユの手腕は見事の一言に尽きた。都市の再建計画もさることながら、全世界に散る信者たちの心を完全に掴んでいた。彼女は己が信頼する枢機卿を全世界に派遣し、前教皇であるジュヴァンセル・セインの醜聞を吹聴させると同時に、ヴィエイユ自身の

素晴らしさを強調させた。彼女はそうした話を信徒たちに流布しながら、徹底的に信徒たちに対して支援を行った。そうすることで、クリミアーナ教の信徒たちは、以前よりも増して信仰心を厚くしていった。

時はきた――そう判断したヴィエイユは、全世界に向けてジモークを行うことを宣言したのだった。

翌日、アフロディーテの大聖堂に、教徒たちが一堂に会していた。彼ら、彼女らの視線は教皇であるヴィエイユに向けられている。正確には、彼女から視線を外すことができないでいた。それほど、ヴィエイユの美貌は輝きを放っていたのだった。

陶然とする信徒たち一人一人に、ヴィエイユは視線を向けていく。彼女と目が合うと、ある者は思わず視線を外し、ある者はさらに目を丸くする。ヴィエイユはジモークが行われている間、一人一人違うその反応を楽しんでいた。

淡々と進められていくジモーク。前教皇の頃は、発表によっては会場内がどよめくなどの反応が見られたが、今回はそれは皆無と言えた。不平不満を口にする者もいなかった。

ちょうど、ヴィエイユが全ての信徒と目を合わせ終わった頃、ジモークは終わりの時を迎えていた。そして、それを待っていたかのようにヴィエイユは口を開いた。

彼女の口からは二つの事柄が発表された。一つ目は、二ヶ月後にここ、アフロディーテにおいて、「学会」を実施することだった。これには、クリミアーナ教国としては苦い思い出がある。それを今になって再び開催することに、疑問を持つ者も多かった。だが、彼ら

の懸念は、ヴィエイユの一声で雲散した。

「確かに、以前このアフロディーテで開催された学会で、我々クリミアーナの威信は地に落ちました。しかし、その威信は、失墜したままでもいいのでしょうか？　私は、今こそ、我らは、以前の輝きを取り戻すべきなのです。そのための準備はもう、完了しております。我々は、貴族の間で流行するライパートメント病の特効薬を開発することに成功しました」

場内に大きなどよめきが起こる。ライパートメント病とは、世界中で、なぜか貴族の間で流行する病で、激しい虚脱感に襲われると同時に、体、特に手足が痺れて歩行困難となり、最終的には死に至るというものだった。その原因の解明と特効薬の開発は急務とされていたのだが、どの国をもってしても、その開発には至らなかった。それを、この新・クリミアーナ教国が開発したというのだ。もしこれが本当であれば、全世界を揺るがすニュースとなることは間違いなかった。

再び過去の威信を取り戻せるかもしれないという期待感が、会場内に満ちていく。その様子をヴィエイユは満足そうに眺めている。

「静粛に！　……その学会ですが、世界各国から国賓の方々がお見えになります。くれぐれも粗相のないようにお願いいたします。その警備については、ライアガート枢機卿にお願いすることにします」

「お待ちください！」

突然、ヴィエイユの言葉を遮った者がいた。教皇の言葉を遮る……。クリミアーナ教徒にとってこれは、不敬に当たる行為だ。だが、声の主は、そんな後ろめたさは微塵も感じさせず、自分の席を離れた

かと思うと、堂々とした足取りで、ヴィエイユたちが居並ぶ舞台の前に進み出た。そして、片膝をついて、恭しく一礼した。

「これはラッカー様。一体どうなさいました？」

男はスッと顔を上げる。身の丈は優に百八十センチを超える大柄な巨漢。口元には顎ひげを蓄え、その表情は精悍そのものだ。彼はヴィエイユの問いかけに、嬉しそうな表情を浮かべながら返答する。

「そのお役目、是非、この私に賜りたく存じます」

「いえ、それには及びません」

ヴィエイユは柔和な表情を浮かべてはいるものの、その瞳の奥は冷たい光を湛えている。

「ラッカー様サブクリナー王国には、先のバーリアル王国への遠征でも大きなお力添えをいただきました。今回もお手を煩わせるわけには、参りませんわ」

「いいえ、教皇聖下。我がサブクリナー王国は、古くからクリミアーナ教国軍の先鋒を勤めております。教皇聖下が申されました、先の戦いにおいても、我が軍は先鋒の誉れにあずかりました。言わば、我らは百戦錬磨の軍勢でございます。各国の君主の皆様をお守りするのは、我が軍を置いて他にはございません」

ラッカーの言葉を受けて、ヴィエイユはニコリと微笑む。

「その通りです。我が軍の先鋒を勤めるのは、貴国を置いて他にはございません。歴代にわたる我が教国への貢献には深く感謝申し上

げます。ですが、今回はどうぞお休みくださいませ。間違っても、争いに発展することはございませんわ」

「では、せめて、教皇聖下の御身だけでもお守りしたく存じます」

「ありがとうございます。そのお気持ちだけで十分ですわ。確かに、ラッカー様がお傍についていただきますと、身の安全は保障されるでしょう。ですが、その様子を見た他国の方々はどうお思いになりますでしょうか。今回は単に学会を開催するだけでございます。徒に、各国を刺激する必要は、ございませんわ」

ラッカーはゆっくりと立ち上がり、なおもヴィエイユを見つめ続けている。会場内に不思議な沈黙が流れる。

「私は、教皇聖下の御ために、この身を捧げることが何よりの幸せなのでございます。どうか、この私の思いをお汲み取りください」

「承知しました」

「これからも私は、教皇聖下に害をなす者を排除してまいります」

まるで周囲に宣言するかのような口ぶりだった。ラッカーは恭しく一礼すると、ゆっくりと自分の席に戻っていった。その様子を見ながらヴィエイユは、誰にも悟られることなく、ゆっくりと息を吐きだしていた。

ヴィエイユはこのラッカーが生理的に嫌いだった。彼を見ていると、以前、自分を襲おうとしたある国王のことを思い出すのだ。

でっぷりと肥った体。脂ぎった顔。そして、鼻をつく口臭と体臭…

…。男性として受け入れることのできる点が微塵もなかった男だ。その男に乱暴に裸にされ、危うく操を奪われそうになったのだ。その経験はトラウマとなって残り、今でもヴィエイユの心の傷となっていた。

いけないいけないと自分に言い聞かせつつ、ヴィエイユはこのジモークを進めるべく、頭を切り替えるのだった……。

第五二十話　親子の思惑

三月の暖かい風がやさしく吹き続ける中、新・クリミアーナ教国の教都であるアフロディーテでは、ある種の異様な光景が出現していた。普段は、白で統一された衣服を身に付けた信者たちで行きかうため、遠目からは光が放たれているように見える大通りが、赤、青、黄色……といった色が点在して、一見すると通りが汚れているように見えるのだ。これは、ここで開催される「学会」に参加するために訪れた者たちが纏う衣服の色がそう見せているのだが、彼らが纏う原色の衣装は、白で統一されたこの都市の景観を崩していた。

これには訳がある。濃い原色の衣装を身に付けている者たちは、過去にクリミアーナ教国から干渉を受けるなどして、この国に遺恨を持つ国や団体の者たちだった。彼らは、白を国と教団の色とするクリミアーナに対抗する形で、敢えてそれとは違う色、しかも、できるだけ派手に、濃い色合いのものを身に付けていた。これは、彼らのささやかな抵抗を示すためのものだったのだが、実際にヴィエイユの住む教皇神殿から見下ろすと、彼らの衣装は、まるで聖都と位置付けるアフロディーテを汚しているかに見えた。この光景を見て、不快感をあらわにする枢機卿も少なくはなかった。

だが、ヴィエイユはそんなことは歯牙にもかけず、淡々と学会の準備の進捗を確認していた。そして、水も漏らさぬ警備体制と、万全の準備が整ったことを確認して、満面の笑みを浮かべるのだった。

そのアフロディーテの沖合には、多くの船がひしめき合っていた。その中をひときわ大きな船が二隻、ゆっくりと港に向かっていく。そこに掲げられている旗を見れば、船はヒーデータ帝国とフラディ

メ王国のものであることがわかる。

先頭を走るフラディメの船。その後ろを悠然と進んでいるヒーデータの船。まるで、フラディメがヒーデータを道案内するかのようなその光景に、人々は思わず注目する。

「あ、アフロディーテが見えました。もうすぐ到着するようですね」

「早いな」

太陽の光をまぶしそうに手で遮りながら口を開いているのは、アガルタ王の妃の一人であるメイリアスだ。彼女は懐かしそうな表情を浮かべながら、アフロディーテを見つめている。

その傍らでぶ然とした表情を浮かべているのは何と、フラディメ王国のリボーン大上王だった。彼もまた、メイと同じようにアフロディーテを眺めているが、その表情には悔しそうな感情がありありと現れていた。

一方、フラディメ王国の船には、国王であるメインティア王が機嫌のよさそうな表情を浮かべながら、目の前に迫るアフロディーテを眺めていた。その彼の後ろでは、小さな子供がパタパタとデッキの上を走り回っていた。

「もうすぐ到着するぞ」

不意に男性の声が聞こえた。メインティア王はスッと視線を移す。そこには、アガルタ王、リノスの姿があった。そして、彼の隣には、緑色の髪の毛を持つ女性……。お妃の一人であるコンシディーが寄り添っていた。

その二人の許に、先ほどまで走り回っていた子供が、まるで飛び込むようにして駆けてくる。きつい天然パーマのかかった、緑色の髪を持つ少女……。リノスとコンシディーの間に生まれた娘、ピアトリスだった。リノスはその娘を大事そうに抱き上げる。

「とうたーん。全然見つからないよー」

ピアトリスは抱き上げられた父の肩につかまりながら、キョロキョロと周囲を見廻す。そんなリノスたちの許に、メインティア王は静かに近づいていく。

「まだ、見つからないのかい？　体の大きな倅だ。すぐに見つかりそうなものだが」

メインティア王は笑みを浮かべたまま周囲を見廻す。

「ちょっとやそっとじゃ見つからないと思いますよ。な、シディー」

口を開いたのはリノスだ。彼は隣のコンシディーと顔を見合わせながら頷いている。そのとき、彼らの頭上から大きな声が聞こえた。

「父上！」

「あっ、オンサール君、見つけた！」

ピアトリスがあらぬ方向を指さす。そこからは、大きな樽があり、その中から子供が首だけを出していた。これは、メインティア王の息子であるオンサールで、彼はしまったという表情を浮かべながら顔をしかめていた。

「なるほど、大きな樽の中に隠れていたか。それではなかなか見つけることはできないね」

「父上……出られないです。助けてください」

「仕方のない奴だ。しかし、やらないよりはやった方がいい。経験になるからね」

メインティア王がオンサールを樽から引き揚げた直後、それが合図であったかのように、船はゆっくりと向きを変えた。

「それにしても、こんなに順調な旅になるとは思わなかった。きっと、ここでの学会は大成功に終わるだろうね」

目の前に迫るアフロディーテを眺めながら、メインティア王は誰に言うともなく呟く。

「順調……ね。まさか、俺たちの船を待ち伏せているとは思わなかったですけれどね」

リノスの言葉に、メインティア王は驚いたような表情を浮かべる。

「何を言うんだい。偶然さ」

リノスは胡散臭そうな表情を浮かべながら、メインティア王を見つめる。彼には、リノスたちがアフロディーテを出発する日を知らせていなかったばかりか、前回同様、ヒーデータ帝国の船に乗って行くことすらも伝えてはいなかった。当初、リノスたちは転移結界を使ってヴィエイユの許に向かおうと考えていた。だが、一度船に乗

ってみたいというピアトリスやシディーのおねだりを聞く形で、彼は船で移動することにしたのだった。この決断には、屋敷にいては色々と仕事に追われがちなメイを学会発表に集中させることができるという考えもあってのことだった。それを決めたのは、出発の直前だったが、ヒーデータ帝国はリノスたちの乗船を歓迎したのだった。だが、彼らののんびりとした船旅は三日前、突然急変した。何と、リノスたちが乗る船の前に、一隻の船が現れたのだ。それが、フラディメ王国の船だった。

「いや、君たちに出会えて助かったよ。何しろ、あんな狭い船の中で父と一緒に過ごさねばならないのは、苦痛以外の何物でもないからね」

そう言ってメインティア王はカラカラと笑う。実際、大上王はリノスたちを見つけるや否や、船を横づけにして自ら船に乗り移ってきた。そして、メイを見つけるとそのまま話し込み、自船に戻ろうとはしなかった。さらに大上王は、同船していたヒーデータ帝国のヴァイラス公爵の勧めを受けてそのままヒーデータの船に泊まり込んでいた。さすがに、寝室まで押し掛けることはなかったが、夜は同船していたポーセハイのチワンと遅くまで語り合っていたのだった。

大上王の知的好奇心は凄まじく、常にリノスたちを質問攻めにした。そのあまりの迫力にリノスとシディーは早々に音を上げた。そこに声をかけてきたのが、メインティア王だった。彼はこっちに来ないかと二人を誘った。メイには悪いと思いながらもリノスとシディーはピアを連れてフラディメの船に移った。そこには、メインティア王の息子であるオンサールがいた。

てっきりアガルタの都で暮らしていると思っていたリノスは驚いたが、メインティア王は何事もなかったかのように、後学のために息

子も同行させると言って笑った。そのあまりのタイミングの良さに、リノスは、メインティア王と大上王が示し合わせたのではないかと考えた程だった。

メイと喋りたい大上王、そして、その大上王から離れると同時に、息子のオンサールとピアトリスを近づけ、ゆくゆくは二人を結婚させたいと望むメインティア王。二人は示し合わせたわけではなかったが、結果的には、この親子の望む通りの展開となっていた。

そんな、色々な思いを乗せた二隻の船は、ゆっくりと港に入港していった……。

第五百二十一話　ご案内

アフロディーテに到着してすぐ、俺たちは教皇神殿に案内された。船は神殿の地下に停泊しているので、移動距離はものの数分だった。

多くの船舶がひしめく港を横切るような形で、俺たちの船は進んでいった。先には小さな案内船が先導していたのだが、船影が全く見られない場所にどんどんと案内してくのだ。一瞬、何かの罠かと思った程だ。だが、その不安はすぐに払しょくされた。ふと見ると、巨大な白亜の城の真裏に船は進んでいた。

その城のすぐ下には小さな穴のようなものが見えた。案内船はそこに向かって進んでいく。当然、俺たちの船もそこに向かって進んでいく。穴の中はまるで船のドッグを思わせるような、巨大な造りになっていて、いつの間にこんなものを拵えたのかと思った程に、そこは設備が整えられていた。

船が停まり、下船を促された俺たちは、ゆっくりと桟橋を渡っていく。しばらく行くと、人影が見えた。ヴィエイユだ。彼女は俺たちを見つけると、嬉しそうな表情を浮かべながら恭しく一礼した。

「お久しぶりでございます。皆様をお迎えできて、光栄でございますわ」

……本当かよ。心の中で苦笑いを浮かべながら彼女の言葉を聞く。メイもシディーも、淡々と彼女の挨拶を受けていく。その中で、意外にまともな返答をしたのが、メインティア王だった。

「いや、このような晴れがましき会に招待いただいたのは、我が国にとって誉れ高いことだ。これだけの規模の学会を開催されるにあたっては、色々とご苦労も多かったことでしょう。多大なるお骨折りをいただいたこと、感謝申し上げる」

おお、このバカ殿、やればできるじゃないかと思わず彼に視線を向ける。メインティア王は、お互い、有意義な時間を楽しみましょうと言って、ヴィエイユと握手を交わしている。大上王はその隣で、鋭い視線を投げかけている。きっと、ヴィエイユに心を奪われはしないかと警戒しているのだろうが、その心配は皆無だ。この殿様は、美女には興味がない。むしろ、心配なのはヴァイラス公爵の方だ。この人は、実に女好きだ。当然、ヴィエイユについては裏も表も知っているはずだが、油断はならない。気が付いたら、心を奪われていましたという状態になりかねない。実際、二人が握手をする場面では、視線を絡ませ合って、濃密な雰囲気を作り出していた。

「あれ？　グラリーナさんの姿が見えないようですが？」

ヴィエイユが俺たちを見廻しながら声を上げる。この学会には、グラリーナも招待されていたのだが、今回は参加を見送ることにしていた。元々、このアフロディーテで研究をしていたが、彼女はある意味で、この国を裏切っている。アフロディーテでは、グラリーナを知る者も多いだろう。もし、彼女が襲われでもしたら、精神的に相当なショックを受けるだろう。俺には結界があるので、肉体的な攻撃は防御できるが、精神的な攻撃に対しては結界では防御できない。それもあって、グラリーナの参加を見送ったのだった。

実際彼女は、アガルタ大学の医療研究所で多くの薬を開発して成果を上げている。メイにとっても良き相談相手であり、彼女はアガルタにとって欠くことのできぬ人材となっていた。

「グラリーナさんは、今回は不参加です」

ヴィエイユの問いかけに、ローニが毅然と返答する。ヴィエイユは笑顔を崩すことなく、応用に頷いている。

「グラリーナさん本人は参加したかったのですけれど、私が差し止めたのです」

ローニの言葉に続いて、メイが口を開く。メイの参加を差し止めたという言葉が意外だったのか、ヴィエイユはキョトンとした表情を浮かべながらメイを眺めている。

「実は……グラリーナさんは身ごもられたのです」

「えっ？　マジで？」

思わず声が漏れてしまった。そんなことは初めて聞いた。確か、結婚したとは聞いていたのだが、まさか身ごもっているとは思わなかった。

そんな俺にメイは優しい眼差しを向けてきた。

「お伝えするのが遅れまして、申し訳ございませんでした。元々、懐妊の兆候はあったのですが、はっきりと判明したのが、こちらに出発する直前でして……」

「あっ、いや、おめでたいことだ。体を大事にするように伝えてくれ」

俺の言葉に、メイはゆっくりと頭を下げた。

ヴィエイユは、ご案内しますと言って、スタスタと歩き始めた。俺たちも彼女に付いて行く。すると、リボーン大上王が大股で俺たちを追い越していき、ヴィエイユの隣に並ぶ。そして、学会の開催について感謝の言葉を述べ、さらに、彼女に向けて持論を展開し始めた。

……メチャメチャ難しい話だった。要は、知識の共有という作業は、すべての人種や思想の違いを超えるものだ。その最も効果的な方法がこの学会という場なのだ、と言うのを強調しているのだとメイが教えてくれた。ヴィエイユは、ええ、そうですわね、仰る通りですと言いながら相槌を打っているが、おそらく聞いていないだろう。

階段を上がっていくと、広いホールのような場所に出た。ヴィエイユの説明では、今宵、学会の参加者を集めてのパーティーが開かれるのだという。それまでは、教皇神殿の一室で休息するように勧められた。断る理由もないので、従うことにする。

ヴィエイユは自ら先頭に立って、俺たちを部屋に案内した。そこはまるでスイートルームのような、豪華絢爛な部屋だった。部屋に入るとすぐに広いリビングがあり、そこを中心に、ベッドルームが六つも用意されていた。さらに部屋には風呂、トイレが完備しているなど、まさに至れり尽くせりの部屋になっていた。

「どうぞ、こちらからアフロディーテの景色をご覧ください」

部屋の説明を終えたヴィエイユが、リビングの窓の前に立つ。巨大なガラスがはめ込まれた窓……。そこから見下ろす景色はまさに、絶景と言えた。美しい海、白で統一された見事な都市。まるで、計

算されつくしたかのような景色に、俺は思わずため息をついた。

「ほほう、無駄なところが一切ないね」

誰に言うともなく呟いているのは、メインティア王だ。その言葉にヴィエイユは恐れ入りますと言って頭を下げている。一方、リボーン大上王は、余計なことを言うなとばかりに、メインティア王を睨みつけている。

「アフロディーテは一度、破壊されましたが、驚異的な速さで復興しました。その際、以前の様式を改めまして、人やモノが機能的に行き来できるように、効率的な都市として生まれ変わったのです」

「まさに、難攻不落の都市じゃな」

リボーン大上王が口を開く。彼曰く、周囲を海に囲まれているだけでなく、都市の入り口である港が桝形になっているだけでなく、そこからこの教皇神殿まで、至る所に桝形が配置されていて、どんなに大軍勢で攻めても、この神殿までたどり着くことはできないだろうとのことだった。その言葉に、ヴィエイユはにこやかに頷いている。

メインティア王は笑みを浮かべながら窓の外を眺めていたが、やがて、口ひげを撫でながら俺に向き直った。そして、首を少し傾けてみせた。どうやら彼は、この都市には何の魅力も感じていないようだ。

彼の意図が読み取れなかったのか、ヴィエイユは不思議そうな顔をしている。何だか、ヘンな間が開いてしまった。

そのとき、絶妙なタイミングで数名の女性が入ってきた。どうやら俺たちの世話をするスタッフのようだ。ヴィエイユはその彼女らを紹介して、何かあれば彼女らに何でもお命じ下さいと言って、その場を後にしていった。

その後ろ姿を眺めながら、シディーは人差し指を顎の下に当てて、何かを考え始めた……。

第五百二十二話　シディー、ヴィエイユを分析する

「……シディー、どうした？」

俺の声に彼女はハッとした表情を浮かべる。こんなシディーを見るのは、初めてのことだ。

「えっと……すみません」

顔を赤らめながらシディーは俺に抱き着いてきた。ここは、俺たちの屋敷のベッドルームだ。

ヴィエイユの案内を受けた後、それぞれの部屋を割り振り、荷物を運び込んだ。そして、豪華な夕食を振舞われたあと、旅も疲れもあるために、皆、早々に部屋に引き上げることにしたのだった。当然、俺たちは転移結界で帝都の屋敷に帰る。だが、メイはローニとチワンとの三人で、明日の打ち合わせをすると言って、しばらく部屋に留まると言ってきた。仕方がないので、打ち合わせを終えたらすぐに屋敷に転移して来るように言って、俺とシディーは先に帰ったのだった。

ところが、屋敷に帰ると、今度はシディーの様子がおかしくなった。何だかずっとボーっとしていて、話しかけても、上の空なのだ。こんなことは、今までなかったことだ。

風呂から上がり、寝室に向かうと、シディーがいた。仰向けになりながら、呆然と天井を眺めている。一瞬、ベッドに入ることを躊躇ったが、少し気を使いながら俺もベッドに入ることにする。

いつもは、俺がベッドに入ると、シディーは手をつないでくるのだが、この日はいくら待ってもそれがない。てっきり寝たのかと思って顔を覗き込むと、初めて俺の存在に気が付いた。本当に彼女は、俺が隣にいるのも気が付かないほどに、集中していたのだった。

「さっきから、何を考えているんだ？」

「……ううう、その」

「うん？」

「あの、ヴィエイユさんのことです」

「ヴィエイユ？　ヴィエイユがどうした？」

「何だか、変な視線を感じるのです」

「変な視線？」

「何と言うか……その……観察されているというか……。ただ、興味本位で観察されているという視線と共に、憎しみの視線も感じるのです」

「憎しみの視線？」

「はい……。これまでは、興味本位で見られていると感じることが多かったのですが、今回は、その……何というか、複雑な視線を感じるのです」

「そうか……。俺の探知にはそんな奴は引っかからなかったけれどな。まあ、ヴィエイユのことだ。俺の探知をすり抜けるマジックアイテムを装備している可能性はあるけれどな。ちょっと待て……そうなるとメイのことが……。あっ、ちゃんと屋敷に帰って来ている。風呂に入っているな。大丈夫だ」

そのとき、シディーがスッと手を繋いでくる。俺もその手をやさしく握り返す。

「私たちを観察したいというのであれば、自分の懐……。つまり、教皇神殿に私たちを招待するというのはわかります。ただ、憎しみの感情があるのであれば、自分の住まう場所には入れないと思うのです」

「どうしてだ？　憎い相手ならばむしろ、己のテリトリーに入れて一網打尽にするという手段は効果的だと思うけれど？」

「いいえ。ヴィエイユさんの性格上、それはしないと思います。あの人は、己が嫌う者が自分のテリトリーに入ってくると、強い不快を感じる人です」

「そんなものかな？」

「特に今回はそれを強く感じました。あの方の立場がそういう感情を強めているのかもしれません」

「で、シディーは、ヴィエイユがどうして嫌いな俺たちを自分の住まいに招待した理由を考えていたと」

「はい……どうしても説明がつかなかったものですから……。あの

方は、相手の戦力を読み誤るようなことはしない人です。リノス様や私たちに攻撃を仕掛けたところで失敗するのは目に見えています。ですから、むしろ、ご自身の優秀さを私たちに誇示する、あわよくば、ヴィエイユという一人の女性に興味を持ってもらおうというのが今回の意図であると思うのです。それは、間違いないと思います」

「だとすると、憎しみの視線の説明がつかない……」

俺の言葉に、シディーはゆっくりと頷く。

「ヴィエイユは何を考えているのだろうな」

「ただ……」

「ただ、何だ、シディー？」

「直感的に、今回の学会は穏便に終わりそうな気がするのです。そして、リノス様やメイちゃん、私たちにも被害はない気がするのです」

「じゃあ、別に心配ないじゃないか」

「そうなのですけれど……。やっぱり……」

「気になる、か？」

「はい……」

「じゃ、少し気分を変えようか」

そう言って俺は、シディーを優しく抱き寄せる。彼女はギュッと目を閉じて、顔を赤らめている。

「それとも、今夜はゆっくり眠るかい？」

俺の言葉に、彼女は小刻みに顔を振った。

ゆっくりと、彼女の着ているパジャマを脱がしていく。これもいつものことだが、シディーは絶対に自分から服を脱がない。敢えて聞くことはないが、妻たちの中で、自分から服を脱いだことがないのは、シディーだけだ。

瞬く間に彼女は一糸まとわぬ姿になった。そのとき、シディーが小さな声で呟く。

「……ごめんなさい」

「うん？　どうした？」

「こんな体で……」

「何を今さら……。俺は、シディーの体は大好きだよ」

「ううう……」

「何ていうかその……抱き心地が最高なんだよな。すべてがちょうどいいというか、俺の腕の中にきれいに収まってくれるというか……シディー？」

よく見ると、シディーの体が小刻みに震えている。そして、顔が真

っ赤に染まっている。

「ごめん。……灯りを消そうか」

シディーはゆっくりと頷いた。この夜のシディーは、なかなか俺を離さなかった。ずっと俺に抱き着いたままだったのだ。こうした場ではほとんど自分を表現しない彼女が、精いっぱいの主張をしたのだ。そんなシディーを愛おしく思いながら、俺は彼女を強く抱きしめた。

◆　◆　◆

同じ頃、教皇神殿の一室では、ヴィエイユが数名の枢機卿と何やら打ち合わせを行っていた。

「教皇聖下……そ、それはあまりにも……」

一人の枢機卿が驚きの声を上げた。そんな彼の表情をヴィエイユはいたずらっぽい目で眺めている。

「何か、問題があるかしら？」

「教皇聖下が常に背中を曝すというのは……」

「いけませんか？」

「そっその……警備上の都合もございます。もし、襲われでもしましたら……」

「あら？　そういう心配がないように、万全の警備態勢を敷いてい

ると言っていたのは、誰だったかしら？」

ヴィエイユの声に、枢機卿はオロオロとしながら頭を下げる。

「お待ちください、教皇聖下」

別の枢機卿が口を開く。ヴィエイユはスッとその男に視線を向ける。

「ライアガート枢機卿が申されることも一理ございます」

「……」

「ライアガート枢機卿がお考えになった警備体制は万全です。ですが、常に教皇聖下が背中を曝している状態では、ライアガート枢機卿の気の休まる時間がございません。それは我々も同じでございます。誠に恐れ入りますが、教皇聖下におかれましては、こちらで学会の推移をお見守りいただきたく、お願い申し上げます」

枢機卿はゆっくりと机の上を指さす。そこには、明後日に行われる学会の見取り図があった。ヴィエイユはしばらくその図面を眺めていたが、やがて、ある場所を指さした。

「それでは、私はここで、学会の様子を見ることにします」

彼女が指さしたのは、座席の一番後ろの席だった。

「ここならば、学会の全体が見渡せます。それに……誰にも背中を曝すことはありません。当初、私が希望した一番前の席よりは、遥かにあなた方の心配は軽減されると思いますけれど？」

「……」

枢機卿たちは顔を見合わせている。そんな彼らの様子を満足そうな表情を浮かべながら、ヴィエイユは眺めている。

「発表者の後ろに座るのは、どうしても全体を見渡せません。それに……この席は、先代教皇が座っていた席……。あのような俗物の塊が座っていた席に、私は座りたくありません。私は、常に信者と共にありたいのです」

ヴィエイユの言葉に反論するものは、誰もいなかった。

第五百二十三話　やきもち

学会発表の前日、新・クリミア＝ナ教国の教都、アフロディーテでは、参加者を招いたささやかなパーティーが開かれた。立食形式で、ビュッフェスタイルのパーティーではあったが、そこに供された食事や飲み物、調度品の全てが、世界各地から集められた超一流のものが使用されていて、ヴィエイユのセンスの良さが存分に発揮されていた。

参加者はその料理に舌鼓を打ちながら、それぞれが思い思いに時間を過ごしていた。とはいえ、時間が経つにつれ、その会場内には二つの大きなグループに分かれていた。言うまでもなくそれは、ヴィエイユを中心とするクリミアーナ側と、メイを中心とするアガルタ側のグループだ。それはまさに、この世界の勢力図を如実に表していた。

二つのグループの持つ雰囲気は全くの正反対なものだった。

ヴィエイユを中心とする、クリミア＝ナ側は、全員がまず、教皇に挨拶を述べ、そして、この学会の開催を称賛した。そして、ヴィエイユが話を始めると、全員がおしゃべりを止めて彼女に注目した。その様子はまさに、ヴィエイユという一人の女性を中心とした結束の固さを物語っていた。

一方のアガルタ側は、言うなれば自由そのままの雰囲気だった。ある者――サンダンジのニケ王――などは、メイとの再会を喜び、彼女の手に優しくキスをしている。その様子を夫であるリノスが目を丸くして睨んでいる。その隣では、リボーン大上王が研究者たちと

熱い議論を交わしていて、それは違うだの、そんなことはないだのと言った言葉が飛び交っている。

そうかと思えば、息子のメインティア王は部屋の隅で悠々と酒を飲みながら、このパーティーの様子――好みの女性――をスケッチしているし、ローニはローニで供されている食事を片っ端から口の中に放り込んでいる。その集団には、連帯感というものは全くないようにも見えた。

この様子を冷徹な眼差しで見つめている男がいた。サブクリナー王国の国王であるラッカーだ。彼はヴィエイユの近くに陣取りながら、パーティーの様子を眺めていた。右目でヴィエイユの一挙手一投足を捉えながら、左目でパーティーを見ていたのだった。

相変わらず、彼が神と崇めるヴィエイユは美しく、何の不安も感じていないように見え、彼は大きな満足感を得ていた。このパーティーの警備は、このラッカーが指揮しているのだ。

一見すると何でもないこのパーティーは、彼の指示により、水も漏らさぬ警備体制が敷かれていた。部屋には武装した兵士は一人もいないが、研究者に紛れた彼の部下たちが、常に目を光らせていたのだった。今のところ不穏な動きをする者はいないが、彼の左目は常にアガルタ陣営に向けられていて、怪しい動きがないか目を光らせていたのだった。

……このまま奴らを攻撃すれば、まさに一網打尽。我がクリミアーナ教国が世界の頂点に立てるというのに。

ラッカーは心の中で呟く。この部屋には、アガルタとその同盟国の要人がすべて参加していると言ってよかった。こんな機会は金輪際

訪れることはないだろう。真にクリミアーナ教の教えを世界に広めるためには、この機を逃すべきではないと思う。だが、肝心のヴィエイユにはその気はないらしい。いつもの通りゆったりと、鷹揚に振舞っている。それだけではない。彼女からは、アガルタ側に対して不要な刺激を与えることは厳禁されていた。それどころか、彼らを丁重にもてなすように命じられていたのだ。

ラッカーは心の中で舌打ちをする。そのとき、アガルタ側から数名がこちらに向かって来るのが見えた。何とそれは、アガルタ王リノス本人とその妃であるメイリアス、コンシディー、そして、一組の男女がそれに続いていた。

「ちょっと、ごめんなさいね」

飄々とした様子で、アガルタ王リノスがこちらの輪の中に入ってくる。そのあまりに予想外の振る舞いに、人々は飛びのくようにしてリノスから離れていく。気が付くと、教皇・ヴィエイユまで、真っすぐな一本道ができていた。ラッカーはヴィエイユを守るべく、さりげなく彼女のすぐ近くに寄った。

「すまんな、ヴィエイユ。俺たちは部屋に戻ることにするよ」

「どうされました？」

「いや、明日の準備などがあるからな」

「まだまだお話したいことが山ほどございましたのに……」

「それはまたの機会にすることにしよう。それにしても、美味い料理だった。さすがだな、ヴィエイユ」

「お褒めにあずかり、光栄ですわ」

ヴィエイユは恭しく頭を下げる。そして、顔を上げた直後、彼女は頓狂な声を上げた。

「まあ……シン様！　お久しぶりでございますわ」

彼女はツカツカと一人の男の許に向かう。浅黒い肌をした若い男だ。その後ろには、心配そうな表情を浮かべる犬獣人の女性の姿があった。

「お久しぶりでございます、教皇聖下」

男は恭しく一礼した。

「そのように畏まらなくてもよろしいですわ、シン様。我々、真・クリミアーナ教国とシン様のサンダンジ王国は、かつてアガルタ王様とタナ王国を葬った同士ではございませんか。以前のようにヴィエイユとお呼びくださいませ」

そう言ってヴィエイユはシンの服の裾をスッと掴む。一見すると二人は恋人同士に見えるような振る舞いだった。

「ところで、こちらのお方は？」

ヴィエイユの視線が、シンの後ろに控えていた犬獣人の女性に向けられる。女性は一瞬、たじろいだ表情を浮かべたが、やがて、スッと一礼して、口を開く。

「ご挨拶が遅れまして申し訳ございません。アガルタ大学で研究をしております、ジャニスと申します」

「ジャニス様……。新・クリミアーナ教国のヴィエイユと申しますわ。ジャニス様はシン様の……助手か何かのお方ですか？」

「いいえ」

突然シンが、ヴィエイユの手を優しくほどきながら口を開く。その声にヴィエイユは思わず彼に視線を向ける。

「彼女は私の同僚です。かけがえのない方です」

「……左様でございますか」

「私は、このジャニスさんと将来、結婚したいと思っております」

「……シン君！」

女性が思わず声を上げている。同時に、リノスも目を丸くして驚いている。一方で、メイとシディーは優しい笑みを浮かべている。その様子を見たヴィエイユは冷たい笑みを浮かべている。

「サンダンジ王様、ご子息のご婚約、おめでとうございます」

突然ヴィエイユがニケに向かって口を開いた。ニケは何とも言えぬ表情を浮かべながら、ゆっくりと言葉を絞り出す。

「その話については、追々に」

ニケに満面の笑みを向けたヴィエイユは、再びシンに視線を向ける。

「おめでとうございます。クリミアーナ教国を代表しまして、お祝いを申し上げますわ。サンダンジ王国も、素晴らしい王太子妃殿下を迎えられて、後は安泰でございますわね」

「お言葉ですが、私は、王太子の位を降りようと思っております」

「え？」

「幸い、兄弟はたくさんおりますし、優秀な弟たちが多くおります。サンダンジの将来につきましては、弟たちに任せたいと思っております。私は、このジャニスさんと共に、市井の医師として、人の命を救いたく存じます」

ヴィエイユは少し驚いた表情を浮かべたが、やがていつもの表情を取り戻し、ゆっくりと口を開いた。

「左様でございますか。それは、よろしゅうございました」

このとき、ラッカーは感じていた。ヴィエイユの心の中に怒りとも憎しみともつかぬ感情が芽生えていたことを。彼は、ヴィエイユからこの浅黒い男を殺せと命じられるのを待っていた。だが、彼女は彼の予想に反して、アガルタ王リノスに向けて、口を開いた。

「アガルタ王様」

「何だい？」

「この学会が終わりましたら、慰労会を開催いたします。そのとき

も是非、ご参加くださいませ」

リノスはしばらく考える素振りを見せていたが、やがてよいだろうと頷くと、妃たちを伴って部屋を後にしていった。

……やはり、アガルタ王を愛しているのか。

ラッカーは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。人にはわからないだろうが、彼には確かにわかった。ヴィエイユの目は、明らかにリノスに対して愛情を抱いていた。わかってはいたことだが、その事実を目の当たりにしたラッカーは、心の中で激しい嫉妬の炎を燃やすのだった。

第五百二十四話　ヴィエイユの分析

新・クリミア―ナ教国で開催された学会は結果的に、歴史に残る成果を残し、後世まで語り継がれるものとなった。

学会はまず、クリミアーナ教国側に属する二つの国の発表から始まり、それぞれの国が不治の病と言われていたエフリーテ熱病と、なぜか十代の少女だけに発症し、突然死を招くファインザー症の特効薬を開発したと発表した。

当然、これらの発表については、以前のような不確かな検証ではなく、誰が見ても納得できる証拠を積み上げての発表だった。

次に発表したのは、フラディメ国だった。リボーン大上王自らが登壇し、理路整然と研究成果を述べていった。アバタだらけの顔に、鋭い眼光……。威圧感を備えたその風貌に加えて、満場の会場を圧する大声に、聴衆は水を打ったように静かになった。

大上王が発表したのは、木を鉄のような硬度を持った物質に変える手法だった。

木に含まれる水分を、魔法と特殊な機械を使ってゆっくりと蒸発させ、同時に、木材を圧縮していく。すると、その木は鉄を遥かに凌駕する硬度を持ったものに生まれ変わるのだ。大上王が壇上で行う実験に、聴衆は驚きと大きな関心を向けたのだった。

続いて登壇したのは、アガルタだった。リノスの妃であるメイが登場すると、自然に会場から満場の拍手が沸き起こった。あまりの盛

り上がりぶりに、メイは少し戸惑いながらも、傍らに控えていたシディーに促される形で発表を始めた。

アガルタが披露したのは、「土団子」だった。

この土団子の中には、いくつもの種が入っている。この団子を大地に撒くと、そこに最も適した種が根付き、作物を実らせるというものだった。折も折、ルワザン島のレイス火山が大噴火し、その降灰によって世界中の作物が大ダメージを受けていることもあって、この発表は大いに関心を集めた。メイとシディーは、この土団子はどんなやせた土地でも、必ず何らかの作物が実るものであり、しかも、今回はこれを希望者には無償で提供すると発表したのだった。これには、会場が揺れんばかりの大きな歓声を上げたのだった。

そんな盛り上がりを見せる中、会場の最後列に陣取ったヴィエイユは、登壇した者たちの話を聞きながら、発表者たちの性格を冷静に分析していた。とりわけ、彼女が視線を向けていたのが、メイとシディーだった。

……相変わらず、メイリアス王妃は美しいわね。活力に満ちている。肌の色つやのみずみずしさは言うに及ばず、その喋り方、声のトーン、振舞い方……。すべてにヴィエイユは注目する。メイからは迷いというものが全く感じられない。そして、その眼は慈愛に満ち溢れていた。

……すべての人間関係がうまくいっている証拠ね。幸せなお方。

ヴィエイユは心の中でそう呟く。彼女の分析では、メイのようなタイプの女性は、己の意見を否定されることに強いストレスを感じる。

さらには、明晰な頭脳を持っているために、相手の、周囲の思いを敏感に汲み取ることができるために、知りたくもないことを知ってしまい、ストレスを感じることも多いのが特徴だ。

これはつまり、ヴィエイユにとっては、もっとも御しやすい性格と言えた。だが、今のメイリアスには付け入るスキがない。ヴィエイユは心の中で大きなため息をつく。

彼女はメイリアスを見据えながら、夫であるリノスとの閨房を想像する。

自ら服を脱いで裸になるメイリアス。そして、リノスの待つベッドに体を滑り込ませる。待ちきれないように、いそいそと服を脱いで裸になるリノス……。最初は夫の好きなようにさせているが、しばらくすると自分が上になって、その欲望を満たしていく……。

……きっと、アガルタ王様もお上手な方なのね。

そんなことを考えながら、ヴィエイユは思わず笑みを漏らす。以前夢で見た、自分に組み敷かれながら情けない声を出すリノスの姿を思い出したのだ。きっと、あのお方も、私の夢と同じように、メイリアス様に組み敷かれて……。

ふと視線を移すと、そこには淡々とメモを取るアガルタ王、リノスの姿があった。彼は発表者の後ろに控えて、相変わらず議事録を取っている。そして、彼の頭上には、クリミア―ナ教国の枢機卿たちが、この学会の行方を見守っている。

「それでは、この土の成分につきまして説明します」

壇上ではメイに代わってシディーが説明していた。彼女の凛とした声が会場内に響き渡っている。その様子を見ながらヴィエイユは、コンシディーの分析を始める。

……自信満々に見えるけれど、これは、自分の弱みを隠すため。弱みを握ってしまえば、このドワーフも、御しやすい。

ヴィエイユはコンシディーの様子をじっと眺め続けている。きびきびとした動き。メイリアスと同様、理路整然とした話しぶりは、全く隙のないように見える。

だが、ヴィエイユから見ると、その隙のなさは逆に、踏み込まれたくない内面を持つ証拠だ。彼女はコンシディーを眺めながら、その内面を分析していく。

……体、かしら？　ドワーフは基本的に成長が遅い。女性は特に幼児体型のまま成人する場合が多い。それに、この女性はドワーフ特有の強いくせ毛ではない。きっと……それを何かで矯正しているのね。この人には……豊満な肉体が手に入ると持ち掛ければ、ある程度、こちらの話を聞いてくれるかしら？

そこまで考えてヴィエイユは、スッとリノスに視線を向ける。そして、リノスとコンシディーを交互に見比べながら、さらに分析を進める。

……意外と、あのドワーフの幼い体を、アガルタ王様は気に入っているのかもしれないわね。

ヴィエイユの目がスッと細くなる。リノスのお妃たちの顔と姿を思い出してみると、同じタイプの女性は一人としていない。おそらく

もっとも相性がいいのが正妻であるリコレットだろう。どんな姿態も厭わないのがソレイユ……。唯々諾々とリノスの言うがままになっているのが、このコンシディーだろう。

ヴィエイユの脳裏に、リノスとコンシディーの閨房が描き出されていく。

こちらにおいでと言われて、恥ずかしそうにベッドに入るコンシディー。そんな彼女を優しく抱きしめるリノス。すでにコンシディーは目をギュッと閉じている。そんな彼女のパジャマをゆっくりと脱がしていく。それに伴ってコンシディーの顔にどんどんと赤みが差していく。

……まるで、生娘のようね。そういう初々しさが、アガルタ王様の心を捉えているのかしら？

そんなことを考えながら、ヴィエイユはさらに想像を加速させる。リノスにすべてを任せたままじっとしてるコンシディー。そんな彼女の体を存分に賞味するリノス。抱きしめながら耳元でボソボソと愛の言葉をささやくと、きっと、顔をさらに赤らめて夫にしがみついているに違いない。

「……以上です」

コンシディーのひときわ凛とした声で、ヴィエイユは我に返る。その瞬間、会場内が大歓声とともに大きな拍手に包まれた。次々と人々が立ち上がりながら拍手をして、彼女らを讃えている。ヴィエイユも立ち上がって、パチパチと拍手を送る。

そのとき、壇上のコンシディーと目が合った。

コンシディーはじっとヴィエイユを見つめている。まるで、今まで妄想していたことを見透かしたような視線を向けていた。

……あれ？　気づかれてしまったかしら？

ヴィエイユが心の中でそう呟いたとき、コンシディーの表情が少し変化した。

……あまり、そんなことを考えてはダメよ。

コンシディーの表情はそう言っているように見えた。ヴィエイユは思わず笑みを漏らす。

会場内の参加者は、ヴィエイユのこの表情を、アガルタへの賛辞――今回は負けを認めた――と受け取った。だが、会場の隅で、その巨体を柱に隠しながらじっとヴィエイユを観察していたラッカーは、眉間に深い皺を刻んでいた。そしてその視線は、壇上のリノスに向けられた。

当のリノスは壇上で、ひたすら速記に励んでいた。

第五百二十五話　休日

新・クリミアーナ教国の教都、アフロディーテで開催された学会は、全ての発表が終わり、この日は特に予定のない休日とされていた。ある者はアフロディーテの観光を楽しみ、ある者は研究者同士で議論を交わし合うなど、参加者は思い思いの一日を楽しんでいた。

とはいえ、参加者の中には、国を動かす地位にいる者も多い。そうした者たちは、これを機会に多くの国々と交流を持とうと動いていた。これは言うまでもなく、他国の情報を得ると同時に、軍事や内政的の協働も画策していたのだ。

そうした国々がまず、足を向けたのはクリミアーナ教国とアガルタだった。しかし、この両国は多忙を理由に訪問を断っていた。クリミアーナ教国は、教皇であるヴィエイユの代わりに枢機卿たちが対応し、自国の魅力を存分にアピールしていた。一方、アガルタと誼を通じたいと考えていた国々は、アガルタの同盟国や関係の深い国、すなわち、ヒーデータ帝国やフラディメ国、サンダンジ王国に足を向けたのだった。

その中で、もっとも友好的に接したのが、ヒーデータ帝国のヴァイラス公爵だった。彼は持ち前の人当たりの良さを発揮して、訪れる者たちを笑顔でもてなした。如才のない彼は、相手の国々のことを誉めつつ、提案された要求については、必ず兄であるヒーデータ帝国皇帝および、義兄であるアガルタ王リノスに伝えましょうと答えるのだった。

こんな状況下にあっても、フラディメ国のリボーン大上王は、訪れ

る者に矢のような質問を浴びせ、多くの情報を得ることに精を出した。彼としては、メイリアス王妃とゆっくりと学問に対する議論を行いたいと思っていたが、留まることを知らない知的好奇心のために、訪れる者を拒否することができないでいた。

一方、リノスたちは、メインティア王とニケ王と共に、アフロディーテにあるとあるレストランにいた。彼らの前には、ニケの息子であるシンが、犬獣人の女性を伴って控えていた。これはシン自身が希望したことであった。

当初彼は、父であるニケとの話し合いを望んだ。だが、それを聞いたニケはまず、リノスに同席を求めた。彼曰く、自分の性格上、事と次第によっては、息子を斬る可能性がある。そうしないために同席してほしいと願い出たのだった。それを聞いたリノスは即座にその申し出を受けるとともに、メイにも同席するように促したのだった。

当初は四人で話し合いをする予定だったのだが、その情報をどこで聞きつけたのか、四人が外に出ると、メインティア王が供も連れずに一人で現れた。そして、自分も一緒に行くと言ってのけたのだった。

そのときの四人にはリノスの結界が張ってあり、表向きは全くの別人に見えていた。にもかかわらず、メインティア王は易々と見破ってみせた。訝るリノスに、メインティア王はいつもの笑顔を浮かべながら口を開いた。

「そりゃわかるさ。どこをどう見ても一般の市民だからね。いや、街中だと全く分からなかっただろう。だが、この教皇神殿に一般人が入り込んでいるのはどう見てもおかしいだろう？　それに……皆

が一緒に行動しているように見えるが、全く会話をしている雰囲気がなかったからね。ひょっとしてと思ったのだよ」

そんな彼に対して、ニケ王は、今回は遠慮していただきたいと丁寧に断りを入れたのだが、そのニケにも、メインティア王は飄々と口を開いた。

「どうやら、男と女の話のようだね？　それならば、私がいた方がいい。自分で言うのも何だが、男女の仲については誰によりも詳しいと自負している」

そこまで言うと、彼は突然声を変えて、威厳のある雰囲気を醸し出した。

「それに、全くの第三者の中立的な視点が必要になるときも、あるのではないか？」

そのあまりの変容ぶりに驚いたのか、ニケは不承不承ながらメインティア王の同行を許したのだった。

◆　◆　◆

「この度はお忙しいところ、お時間を割いていただきまして、感謝の言葉もございません」

皆が席に着くと、シンが申し訳なさそうに口を開く。その隣では、犬獣人のジャニスが、小さくなって項垂れている。そんな様子をニケは冷ややかに見つめている。そんな沈黙に耐えられないかのように、リノスがゆっくりと口を開いた。

「いや、いいんだ。本来ならば君と父上の話し合いのところに、俺たちがしゃしゃり出ているんだ。すまないね」

リノスの言葉に、シンは深々と頭を下げる。

シンはリノスたちの前で、ジャニスと結婚したいこと、サンダンジ国の王とはならずに、一介の医師として生きていきたいことを誠実に語った。だが、その言葉に対して父であるニケは、怒りを抑えた声で諭した。

「シン、貴様のために、どれだけの者が命を落としたと思っているのだ。それもすべて、お前を次の王とするためだ。我の跡を継いで、サンダンジの国を隆盛に導くためだ」

「お言葉ですが父上。父上の跡を継ぐ者は、他にいくらもおります。私でなくとも勤まります」

「シン……貴様……」

「私は、一人でも多くの人の命を救いたいのです。アガルタに来て、多くの仲間、多くの患者と接するうちに、本当にそう思えたのです。それに、ジャニスの故郷では医師が不足しています。彼女は、故郷の人たちの、一人でも多くの命を救いたいと願ってアガルタに来ました。今ではその力量は我々を遥かに凌駕します。私は、彼女と共に、彼女の故郷で医師としてこの命の限り、働き続けたいのです」

「……黙って聞いていれば、そのような夢物語を、よくもぬけぬけと申しおったな」

ニケの額に青筋が浮き出ている。彼は憤怒の表情のまま、誰に言う

ともなく呟いた。

「このようなことになるのであれば、アガルタになど、行かせるのではなかった」

「……誠に申し訳ございません」

メイが何とも言えぬ表情で頭を下げる。そのとき、まるで耐え切れなかったように、犬獣人の女性が口を開いた。

「私が……私が……アガルタから去ります。シン君の前から消えます。ですから……」

「その必要はないんじゃないかな？」

突然口を開いたのは、何とメインティア王だった。彼はいつものように機嫌のよさそうな表情を浮かべながら皆を見廻す。

「見たところ……君はその若者に惹かれているね？　隠さなくてもいい。それに、その若者もこの女性に惹かれている……。言わば相思相愛の二人だ。いいじゃないか、似合いの夫婦になるだろう」

「メインティア王、これは我が国の問題だ。黙っていていただこう」

「あなたに、発言する資格はない」

メインティア王の言葉に、ニケは目を丸くして驚いている。そんな彼にニコリと笑みを向けると、メインティア王はさらに言葉を続けた。

「そもそも、あなたがご子息をアガルタに向かわせたのは、彼の性根を叩き直すためだと聞いている。だとしたら、それは大成功ではないか。アガルタには感謝の言葉を言いこそすれ、アガルタに文句を言うなどとは、失礼の極みではないか」

「……」

「よいではないか。自分の息子が、生涯を賭けてやり遂げたいものを見つけたのだ。今、彼は自分の力で立って歩きたいと言っているのだ。子が親から自立するのは、大きな成長だ。それを喜ばずして、何としようか。あなたは国の行く末を案じているだろうが、それは杞憂だと思うよ。代わりになるような人材はいくらもいるものだよ」

「ニケさん！」

リノスの言葉と同時に、ニケは立ち上がってその場を足早に後にしていた。そんな様子を戸惑いながら見守るリノスたち。一方のメインティア王は、ニコニコとさらに機嫌のよさそうな笑みを浮かべるのだった。

この様子はすぐさま教皇神殿にいるヴィエイユの許に報告されていた。これを聞いたヴィエイユはゆっくりと天を仰いだ……。

第五百二十五話　休日（後書き）

Ｃｏｍｉｃブースト様で、『結界師への転生』コミカライズ最新話が公開中です。５／５まで無料で読めますので、退屈しのぎに是非、チェックしてみてください。リコ様が、うっすらと登場しています（笑）。

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ？ｃａｔｅｇｏｒｙ＝１４

第五百二十六話　妄執

ヴィエイユの許には、日々、膨大な情報が世界中から集められる。それらの情報を取捨選択し、分析していくのが彼女の最も重要な仕事であった。クリミアーナ教国の歴代教皇は、人間離れした情報処理能力を以ってその仕事にあたり、それができなくなると、その座を他者に譲り渡すことが暗黙の了解となっていた。そのため、その座に固執する者の中には、麻薬に近い薬を常用することでその処理能力を維持する一方、そうした薬によって命を縮めた者や、己の処理能力の低下を最後まで認めなかったために、命を奪われた者もいた。幸い、ヴィエイユはまだ若く、歴代教皇の中でも最高の頭脳を有していたため、今のところ、彼女の座が脅かされる心配は皆無と言えた。

とりわけ、この都では、信徒全てがヴィエイユの目となり耳となって、訪れた国々の情報収集を行っていた。その精度は高く、どの国の使者が、どこで、何を買ったかというところまで調べ上げられていたのだ。その彼女の許に、アフロディーテで交わされた、とある市民の会話が届けられた。

明らかに一般市民の話す内容ではない会話……。彼女はこれがアガルタ王リノスたちの会話であると瞬時に見抜いたが、その内容は自身を愕然とさせるものだった。

……シン様、やはり、王太子の位をお捨てになるのね。

ヴィエイユの脳裏に、自分の傍を離れようとしなかった、彼のことが鮮やかに思い出される。自分の体に触れたいが、父やアガルタ王

の目もあってそれができず、必死でその欲望を押さえていた姿……。ヴィエイユの髪の香りを嗅ぎながら、興奮を隠しきれなかったあの、何とも言えない表情……。その光景が次から次へと思い出される。

正直、ヴィエイユには、シンの心を虜にする絶対の自信があった。確かに、会うのは久しぶりで、自分への思いが冷めている可能性はあった。だが、ヴィエイユは、自分の今の姿を見ればすぐにその恋の炎を燃え上がらせることができると考えていた。しかし、彼の心の中にはすでにヴィエイユの存在はないらしい。報告によれば、父であるニケに王太子の位を退くことを宣言し、この犬獣人の女性と共に医師として生きていく許しを乞うている。

……あんなお方の、どこがいいのかしら。

はっきり言って、目立つタイプの女性ではない。ヴィエイユの聡明な頭脳をもってしても、その顔をはっきりと思い出すことはできないでいた。言ってみれば、それだけ印象に残らない地味な女性だったのだ。

数万の信徒の羨望を一身に集める自分ではなく、シンがそんな目立たない、地味な女性を選んだことに、ヴィエイユはある種の怒りを感じていた。

ヴィエイユは、あの犬獣人の女性の魅力を分析してみるが、答えは出ない。彼女は、枢機卿の一人を呼び出し、この女性について調べるように命令を下した。

……これで、サンダンジに大きな穴が開いたことになる。

彼女の思惑では、シンを王位に就け、その彼を操りながら、周辺国

はもとより、アガルタの情報を得ようと考えていたのだ。当然、シンの心の内を知っているリノスたちは、彼に重要な情報を与えるとは思えないが、それでも、国と国同士のつながりはある。それを利用すれば、ある程度の情報は得られるものだ。だが、今のヴィエイユには、シンという眼を失ったことによって、アガルタとその同盟国の情報を得ることが難しくなったのだった。

ヴィエイユは一旦思考を止めて天を仰ぐ。処理しなければならない情報は、これだけではないのだ。彼女は素早く頭の中を切り替えて、目の前にある書類に目を通し始めた。

その犬獣人の女性についての情報は、すぐに集まった。名前をジャニスといい、アガルタ大学の研究室で働いている。丁寧で着実な仕事ぶりが評価されており、メイリアス王妃からの信頼も厚い……とあった。

……どちらかと言えば奔放なシン様。もしかして、自分と真逆の女性に惹かれたのかしら？

そんなことを考えている間に、ヴィエイユは次の手を打つべく、思考を開始していた。

「……ラッカー様を呼んでください」

ヴィエイユの突然の声に、傍に控えていた女性は、恭しく一礼する。

◆　◆　◆

「お召しにより、参上しました」

鼻を大きく膨らませて、ラッカーはヴィエイユの前に現れた。ヴィエイユの姿を見て欲情していることを、彼女は瞬時に見抜いていた。

そんな彼を心の中で侮蔑しながらも、表情には一切出さずに、淡々と口を開く。

「明日の慰労会ですが、会場の外を警備してください」

「会場の外……でございますか？」

「会場の外です。部外者が入り込まぬように、お願いします」

「畏れながら教皇聖下」

ラッカーが姿勢を正して、真剣な表情をヴィエイユに向けている。

そんな彼にヴィエイユはにこやかな表情を向ける。

「今、ここアフロディーテでは、我らに仇なす者たちが集まっております。その者たちをまとめて討ち果たす好機かと存じます」

「その必要はありません」

「教皇聖下！」

「少し、お考え下さいラッカー様。もし、ここで騒ぎを起こすと、我らは世界中を敵に回すことになります」

「その点はご安心ください。クリミアーナ教国に歯向かう者は、私が全て討伐してご覧に入れます」

「必要ありません」

「教皇聖下……」

「戦わねばならぬときが参りましたら、その節はお願いいたします」

「……」

「以上です。どうぞ、お下がりください」

ラッカーはヴィエイユを見据えたまま微動だにしない。彼女はそんな彼に、忙しいのだから早く去ってくれと促すように、首を少し傾ける。

「教皇聖下、一つ、お尋ねしたいことがございます」

「……何でしょう？」

「教皇聖下に仇なす者……。我らクリミアーナ教国の脅威となる者を、私が葬り去りましたら……私を、教皇聖下のお傍に置いていただけますでしょうか？」

「……どういう意味でしょうか？」

「あの仇敵を……アガルタ王をこの世から葬り去れば……」

「フフフ。あなた様では、不可能です」

「それは百も承知でございます。それ故、申し上げております。私が、アガルタ王の首を挙げたそのときは……」

「私は、ここアフロディーテにおいて乱暴狼藉は厳禁すると申しました。それに、アガルタ王様と事を構えるつもりはありません」

「それは重々承知しております。ここアフロディーテで騒動を起こす気は毛頭ございません。それに、アガルタと事を構えるときは、わが国だけで行います」

……このお方、本気で言っているのかしら？

ヴィエイユは心の中で唸った。ラッカーがいかに勇猛な男でも、彼の持つ軍勢では、アガルタと事を構えて勝てる見込みは万に一つもないのだ。それがわからぬ男ではなかったはずだ……。そんなことを思いながら、ラッカーの顔を眺めると、彼の目には不気味な光が宿っていた。

……このお方とは、しばらく顔を合わさぬほうがいいわね。

ヴィエイユは決断する。目の前の男は、完全に恋に支配されてしまっている。こういう場合は一度、会わないという冷却期間を置くことが、最も効果的な方法であることを彼女は知っていた。

……ここまでになってしまうと、私の命令を聞くどころか、暴走してしまうわね。私もまだまだね。もう少し、効果的にコントロールしていかないと。

そんなことを考えながら、ヴィエイユはゆっくりと息を吐きだす。その様子を見たラッカーは、ヴィエイユから目を離すことなく、腰だけを折って一礼した。その瞳には相変わらず不気味な光を宿していた。

ラッカーが立ち去ると、ヴィエイユは目を閉じて何かを考え始めた。
その脳裏には、リノスの妻であるメイリアスの顔が浮かんでいた…
…。

第五百二十六話　妄執（後書き）

Ｃｏｍｉｃブースト様で、『結界師への転生』コミカライズ最新話が公開中です。５／５まで無料で読めますので、退屈しのぎに是非、チェックしてみてください。リコ様がかわいいです（笑）。

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ？ｃａｔｅｇｏｒｙ＝１４

第五百二十七話　説得

その翌日、大盛況のうちの幕を閉じた学会の慰労会が、アフロディーテの教皇神殿に於いて開催された。ヴィエイユのセンスが隅から隅まで行き届いた会場内は、癒しの雰囲気に溢れていた。それもあって、参加者たちはたちまちのうちに打ち解け合い、会場内では議論の花が咲き誇っていた。

供される料理も、山海の珍味を集める一方で、ごく庶民的な料理も用意され、王族から一般市民までが楽しめる仕掛けが施されていた。そのお陰で、この会場内では身分に囚われることのない、自由な場が作り出されていた。一見するとここには、争いという雰囲気は微塵もなく、平和そのものの世界があった。

とはいえ、やはりこの慰労会の主役となるべき人物はいて、人々は自然とその人物に吸い寄せられるようにして集まっていった。気が付くと、会場内は三つのグループに分かれていた。

一つ目は、言うまでもなく、ヴィエイユを中心とするグループだった。彼女を中心として、クリミアーナ教を熱烈に信仰する者たちが集まり、口々に彼女を褒めたたえた。そんな彼らの中心にあってヴィエイユは、にこやかな笑みを浮かべながら、会場内に油断のない視線を向け続けている。

もう一つは、リノスを中心とするグループだった。ここには、クリミアーナ教国に敵対する勢力が集まっていた。皆、口には出さないものの、この世界最大の版図を誇る教国に対抗する唯一の国であるアガルタの庇護を受けたいという思惑があり、加えて、今回の学会

でも証明された、世界一の技術大国にして医療技術も他国の追随を許さぬこの国から、少しでも支援を受けようと躍起になっていた。

そんなある種特殊な雰囲気を放つこのグループにおいて、リノスの傍にはコンシディーがピタリと寄り添っていて、挨拶に来る人々をじっと観察し続けていた。リノスはリノスで、にこやかに応対しつつ、不要な一言で言質を取られぬように、細心の注意を払っていて、その振舞い方は見事の一言に尽きた。

これは言うまでもなく、シディーが念話でリノスにアドバイスを与えていたためであり、彼女は挨拶に来る人々を直感で判断して、何か疚しい思いを抱くものに関しては、徹底的に表面上の振る舞いをするよう、念話を送り続けた。

結果的に、多くの人々が訪れたリノスのグループでは、信頼に足ると判断された者はわずかな数であり、夥しい欲望や邪な思いを感じ続けたシディーは、ズキズキと刺すような頭痛を覚えるのだった。

そんなグループとは全く異なる雰囲気を持つグループがあった。その中心にはメイがいた。

ここでは、どちらかと言うと身分の低い、一介の研究者たちが集まって議論を交わしていた。互いに質問し合い、教え合いながら、和気あいあいとした空気感を醸し出している。メイの隣にはリボーン大上王がピタリと寄り添い、メモを取りながら何度も頷いていた。最初こそ、この大上王の風貌に委縮する者もいたが、彼の果てなき知的好奇心に刺激されて、人々は胸裏を開いていく。

そんな中、やはりメイの振る舞いは人々の注目を集めた。常に慈愛に満ちた笑顔を浮かべながら人々の話をじっくりと聞き、必要とあ

れば自身の知識を惜しげもなく与える。すべての研究者を尊重し、自らも学ぼうとするその姿勢は、「大賢者」の名にふさわしいものだった。

そのとき、突然、ヴィエイユが一人、ゆっくりとメイの許に向かって歩いてきた。彼女が歩を進めるごとに、人々が彼女を避けていく。リノスはそれに気が付いたが、周囲に人がいるために、動くことができない。彼はスッと視線をあらぬ方向に向ける。そこには、テーブルの傍で皿を持ち、供された料理に舌鼓を打つメインティア王がいた。その隣には、ローニの姿もあった。リノスは彼らに目配せをして、メイを守るように伝える。それを察したローニが、素早くメイに向かって動き出す。一方のメインティア王は、心配ないという笑顔を見せて、再び皿に盛りつけている料理に視線を落とした。

「メイリアス様」

楽しそうに談笑するメイの会話を打ち切らせるように、ヴィエイユが口を開いた。スッと顔を挙げたメイに、まるで姉に甘えるかのように、ヴィエイユは体を摺り寄せた。

「学会のことについて折り入って、相談したいことがあるのです」

「相談？」

「はい」

「おお、よいことじゃ。世界の知識レベルが上がるのであれば、このリボーン、協力は惜しみませんぞ。どのようなお話しじゃな？」

リボーン大上王が、ずいっとメイの前に進み出て、ヴィエイユと対

峙する。その様子にヴィエイユはニコリと、いたずらっぽい笑みを浮かべた。

「ありがとうございます、大上王さま。とても心強いお言葉ですわ。しかし、今回は、メイリアス様と女性同士でお話をしたいのですわ。恐れ入りますが……お察しくださいませ」

キョトンとする大上王。その隙にヴィエイユはスッとメイの手を取り、その場から連れ出そうとする。リノスの近くにいたサンダンジのニケが足早に彼女たちの許に向かう。だが、ヴィエイユはメイにヒソヒソと耳打ちをすると、二人は部屋の隅に消えていった。その数秒後、ニケがその場に行くと、二人の姿は忽然と消えていた。

『メイ、メイ、大丈夫か？』

『大丈夫です。すぐに戻ります、ご安心ください』

リノスは念話でメイに語り掛けながら、「マップ」を展開して、彼女の位置を確認する。どうやら、この会場の壁向こうに二人はいるようだ。

◆◆◆

「突然、このようなところにお連れして申し訳ございません」

わずか六畳ほどの大きさの小部屋。そこには、豪華な長椅子が一脚だけポツンと置かれていた。石を積み上げて作られたこの建物の中に、まさかこんな隠し部屋があるとは思わず、メイは何とか驚きを隠しながらも、この部屋をゆっくりと観察する。

「ここは、私の別荘なのです」

「別荘……？」

「ここ教皇神殿にいましては、常に人目に触れますので、なかなか気の休まるときがないのです。そこで、たまにこの小部屋に参りまして、ゆっくりと気持ちを落ち着けるのです」

ヴィエイユはそう言って、長椅子にゆっくりと腰を下ろす。そして、メイにも座るように促した。お互いの膝と膝が触れ合うか触れ合わないかの至近距離……。そんな中でヴィエイユはメイの目をじっと見つめる。

「メイリアス様に折り入って、お願いがあります」

「はい、何でしょう？」

「少しの間で結構です。この、アフロディーテに、逗留いただけませんか？」

「え？」

メイの眼が見開かれていく。突然のことで戸惑っているのが、ヴィエイユには手に取るようにわかる。

「ご承知の通り、先のレイス火山の大噴火で、周辺国には大量の火山灰が降り注ぎ、多くの国で農作物が壊滅的な被害を受けております。おそらく、今年は近年にない食糧不足となるでしょう。私は、この事態が数年は続くと予想しております。そのために今、我々もまた、アガルタと同様、火山灰で荒廃した土地でも生育する食物を

開発しております」

ヴィエイユの言葉に、メイは興味深そうな眼をしながら、ゆっくりと頷く。

「我々が開発しておりますのは、短期間で生育する食物です。種を植えて数日で発芽し、さらに数日で実を付ける……。夢物語のようなお話に聞こえるかもしれませんが、我々はその研究に全力を挙げております。もちろん、人体に影響がないことは確認しなければなりません。その前段階として、我々は一つの花を開発しているのです」

「……花？」

「そうです。短期間で成長して花を咲かせる……。そして、環境の変化や気候の変化にも強い花……。それが、あと一歩のところで完成するところまできているのです。これが成功すれば、その技術を応用して、短期間で生育する食物を作ることはそう難しくはありません。ただし、それにはさらなる高度な技術が必要になります。メイリアス様、誠に恐れ入りますが、一ヶ月で結構です。一ヶ月間、このアフロディーテに逗留いただいて、お力をお貸し願えませんか？　お願いいたします」

そう言ってヴィエイユは深々と頭を下げた。その彼女を見るメイの息遣いが、少し荒くなっているのを、ヴィエイユは敏感に感じ取っていた……。

第五百二十八話　開けちゃならない箱

「すぐに学会に提案しましょう」

「え？」

ヴィエイユにとっては、全く予想もしない答えだった。思わず、目の前に座るメイリアスを二度見したほどだ。彼女は瞳をキラキラさせながら、少し興奮した面持ちで言葉を続けた。

「そのような素晴らしい技術は、もっと多くの人々と共有するべきです。その方が、より効果の高いものができます。それに、そうすることで、技術力も飛躍的に向上します」

「そ、その通りですが、これはまだ実験段階で……」

「で、あれば、なおさらもっと多くの国々と共有するべきです。色々な角度から実験を行えば、成功率は上がります。さあ、今、お集りの皆様にこのことを共有しましょう」

そう言ってメイは立ち上がる。ヴィエイユは思わずメイリアスの手を握る。

「おっ、お待ちください。世界に共有する前に、我々は、その花の効果がどれほどのものかを把握しておかねばなりません。そのためのお手伝いをメイリアス様にお願いしたいのです。まずは、我々が開発しました花の効果を、メイリアス様の眼で、確認していただけませんか？」

「それはむしろ、やるべきではありません」

「えっ……」

「そうしたことは、私個人が行うべきではありません。どうしても、限られた者たちだけで効果を確認しなければならない状況はあります。ですが、今は状況が違います。世界各地から優秀な学者が、技術者が、ここアフロディーテに集まっています。今、ここで、ヴィエイユさんたちが開発された花を、その手法を食用に転用するという構想を発表すれば、必ず、全員が協力してくれることでしょう。特にフラディメ王国のリボーン大上王様などは、協力を惜しまないと思います。すべての人類にとって、この技術は多大な恩恵を受けることができる可能性を秘めた花……。それは、世界中から飢えという悲しい出来事を無くすことができるかもしれません。それほどの技術です。早く完成させるべきです。そのために、ここに集まった皆で共有するべきです」

そこまで一気にまくしたてると、メイは再び長椅子に座り、やさしい眼差しをヴィエイユに向けながら、彼女の手を握った。

「さあ、参りましょう。皆様の待つ部屋へ」

「……ありがとうございます」

ヴィエイユはそう答えるのが精いっぱいだった。それほど、彼女の頭の中は混乱していた。全く予想もしない反応だった。まさかメイリアスが、ここまで自己主張をしてくるとは、思ってもみなかったからだ。

……そうだ。あのときも、そうだった。

以前、このアフロディーテで開かれた学会。メイリアスは珍しく怒りをあらわにしたことがあった。そのときの光景が鮮やかにヴィエイユの脳裏に思い出された。

知らなかったわけではない。メイリアスのようなタイプが情熱を燃やすと、とんでもない行動力を発揮することは十分に知っていた。だが、実際のメイリアスは、自分の想像をはるかに超える行動力を示した。まだ、確立されていない技術を、全世界に公開せよというのだ。そんなことはできるわけがないし、たとえ、そう思ったとしても、それをすぐさま行動に移すなど、並の人間ならばまず、考えもしないことだろう。だが、目の前のメイリアスは、キラキラと目を輝かせながら、何のためらいもなくそんな非常識な事柄をやろうとしているのだ。

……開けてはならない箱を開けてしまった感じね。それにこの雰囲気、何だか、ラッカー様と似ているわね。

生理的に受け付けないあの男と、メイの行動がピタリと一致したような感覚を覚えて、ヴィエイユの体は無意識のうちに震えた。彼女はその動揺を悟られまいと、努めて冷静さを装う。

「我々が開発しました花……それは、次回の学会で発表することに致します」

「ヴィエイユさん」

「正直申し上げて、我々はその効能の確認が疎かでした。メイリアス様の言われることはもっともですが、我々にも立場というものが

ございます。検証が疎かなものをお目にかけましては、我々の信用は地に落ちることになります。我が教国は一度、信頼を失墜しております。同じ轍を二度と踏みたくはございません」

「……わかり、ました」

いかにも残念そうな表情を浮かべるメイリアス。その視線は、ヴィエイユに何とも言えぬ敗北感を与えた。

「貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました」

そう言ってヴィエイユは立ち上がり、壁に近づくとゆっくりとそこに手を触れた。すると、部屋が小刻みに揺れ、しばらくすると、壁の一部が消えて慰労会の会場に通じる通路が現れた。

「どうぞ」

にこやかな笑みを浮かべてヴィエイユはメイリアスに退出を促す。彼女はゆっくりと立ち上がり、部屋を後にする。

「ヴィエイユさん……？」

依然として先ほどの部屋から出ようとはしないヴィエイユに、メイリアスは怪訝な表情を浮かべる。

「私はもう少し、こちらで休んでまいります。お気遣いなさらないでください」

そう言ってヴィエイユは深々と頭を下げた。その瞬間、入り口には壁が現れ、彼女の姿が消えた。

◆　◆　◆

ヴィエイユの許から戻ったメイリアスは、すぐさまリノスの許に向かった。だが、会場に戻ると、彼女を待ちかねていた参加者たちに再び囲まれ、メイリアスは容易に動くことができなかった。

結局、彼女は会がお開きになってやっと、リノスの許に行くことができた。そこでは頭痛に苦しむシディーの姿があり、リノスの判断で彼らはすぐさま帝都の屋敷に転移したのだった。

シディーの頭痛を和らげる薬を調合したり、帰りを待ちわびていた子供たちの世話をしたりと、息つく暇がなかった。そして、リノスと二人っきりになれたのは、風呂場だった。

二人で体を洗い合い、湯船につかりながら、ヴィエイユとの話し合いをリノスに報告する。彼はしばらく天を仰いで何かを考えていたが、やがて、少し真剣な表情を浮かべながら、口を開いた。

「その花、もしかすると、ヴィエイユは他国を侵略するために使おうとしていたのかもな」

夫の言葉に、メイリアスは息を呑む。彼女自身も、リノスがそんなことを考えるなど、予想もしないことだったからだ。

「その花が、成長が早く、枯れないものだったとしてだ。その上で、再生能力に優れていたとなれば、これはかなり厄介だぞ？　切ろうが抜こうがそこから再生してしまうのであれば、国中がその花で埋まってしまうだろう？　そうなると、その国は滅びることになるだろう」

「ですが……。それは……ヴィエイユさんの国でも同じでは……」

「アイツのことだ。その対策くらいは考えているだろう。例えば、その花を枯らせることのできる薬品か何かを開発しておけば……。花の繁殖に困る国に、それを売りつけるだけで、クリミアーナは膨大な利益を得ることができる」

「そっ……そんな……」

「まあ、あくまで俺の予想だけれどね。ヴィエイユがそこまで考えているのかは、正直わからないな。ただ、メイを別室に連れて行って、二人で話し合いをしたことを考えると、アイツの狙いは、メイを何とかしたかったのかもしれないな」

「私を、でしょうか」

「いや、これも俺の推測の域を脱しないが、もし仮に、メイがヴィエイユに心酔したとすると、その効果は計り知れないだろう。メイの言葉なら、多少おかしいと感じたとしても、大抵の人は信じるからな。俺だって、メイに真剣に意見されれば、やっぱり聞いてしまうだろう。まさかとは思うが、メイの信用に付け込もうと考えていたとすれば、あの小娘……キツイお仕置きをしなきゃならないな」

そう言って、リノスは人差し指をスッと立てて、まるで銃を撃つような仕草をする。その様子を見ていたメイリアスは、リノスの手をそっと握る。

「そのようなことには、絶対になりません」

「……そうか」

「私は、ご主人様の奴隷です。ご主人様以外の、誰のものにもなるつもりもありません」

「メイ……。だがな、お前はもう、俺の奴隷じゃない。俺の妻だ。もう二度と俺の奴隷だなんて、言わないでくれ」

「……承知しました」

「メイ、無理だけはするなよ。それに……何かあれば相談してくれな」

「はい。そのお言葉をいただけただけで、心強いです。ご主人様に、これからも、甘えさせていただきます」

そう言って彼女はリノスの腕にしがみつく。リノスはその体を、優しく抱きしめた。

第五百二十九話　戦力分析

【アガルタ軍】

総兵力数：約二万。

兵士は農民や市民を戦時に動員することはなく、全員が軍務に専従している。そのため、訓練はよく行き届いており、兵士一人一人のスキルは高い。これまで、タナ王国、バーリアル王国との戦いと、大きな戦いを経験しているため、兵士全員が百戦錬磨である。

軍構成：アガルタ王リノスの許、大きく分けて二つの軍団からなる。軍団長には、アガルタ王リノスの妃の一人であるマトカルと、クノゲンがその任に就いている。なお、アガルタ軍の総司令官は、クノゲンが就任している。主に、攻撃時の指揮はマトカルが執り、防御時の指揮はクノゲンが執る傾向があるが、二人の指揮能力は、アガルタ王リノスに勝るとも劣らぬ程に高い。

装備：結界石、黒鎧、長槍、魔法銃

兵士全員が結界石を装備しているため、物理的攻撃および魔法での攻撃は通じにくい。騎馬隊は槍を装備し、歩兵隊は長槍を装備している。併せて、歩兵の一部は魔力を溜めて攻撃する武器も携帯している。その威力は大きい。それは魔力のない者でも扱うことが可能。

特徴：軍勢の移動速度が極端に速い。結界によりほとんどの攻撃が無効化されてしまうため、兵士の損失が極端に少ない。世界最強の軍勢と言って過言ではない。

◆　◆　◆

ラッカーはアフロディーテにある屋敷の自室で、報告書を眺めながら、大きな溜息をつき、その大きな体躯を頑丈な椅子に預けた。我が国の軍人の分析力は群を抜いて優秀だと思う。一切の誇張も、脚色も、王たる自分に媚びへつらう姿勢は微塵もなく、ただ淡々と、冷静にアガルタの戦力を分析している。言わば、この相手の戦力を正確に見積もる能力こそが、ラッカー率いるサブクリナー王国の強みと言えた。

しかし、だ。アガルタ王リノスがこの世にある限り、ヴィエイユ様の心がこちらに向かうことはない。絶対にないと言ってよかった。よしんば、リノスがこの世から消えたとして、ヴィエイユ様が自分に振り向いてくれる可能性は未知数だ。だが、ラッカーには、根拠のない自信があった。必死で、誠心誠意、教皇聖下に尽くせば、必ず振り向いてくれるはずだ、と。

……寝ても覚めても、ヴィエイユへの思いがねばりついていた。

初めてその姿を見たときから、ラッカーの脳裏には常にヴィエイユがいた。少しでも近づくために、どんなに危険な戦いであっても、先頭を切って戦場を駆け抜け、クリミアーナに、ヴィエイユ様に敵対する者を倒してきた。その功績により、彼は教皇の近くに控えることが許された。そのため、ラッカーは、ヴィエイユの身辺を警備しながら、折に触れてその姿を盗み見ていた。もはや彼は、どうにかしなければ気が狂れるところまで、ヴィエイユの美貌に追い詰められていたのだった。

それほどまでに思いを寄せるヴィエイユ様……。だが、噂では、彼女はアガルタ王リノスに思いを寄せていると言われている。彼としては、それは決して受け入れられない、何としても否定したいところだった。だが、学会でのヴィエイユ様の振る舞いは、明らかにリ

ノスに対して恋心を抱いていると思わせるものだった。口さがない者は、ヴィエイユ様はその美貌を以ってリノスを篭絡し、アガルタを支配下に置こうと考えているのだと言う。そんなことはして欲しくはない、それならば、自分がアガルタ王と戦い、勝利すればいいのだと思うものの、どうしても、彼は思い描いてしまうのだった。彼女があの男に抱かれる光景を。

真っ白い体を、乳を、尻を、リノスに差し出すヴィエイユ……。その少女のような無垢な体を、心ゆくまで賞味するリノス。やがて、ヴィエイユ様はリノスの逸物で貫かれる……。

そんなことはあろうはずがない。そう言い聞かせながら、彼は頭を振る。こんな苦しい思いに苛まれるのはやはり、あの男……アガルタ王がいるせいだ。あの男さえこの世から葬れば……。

ヴィエイユ様はやはり、自分が傍に居て、お守りしなければならない……。我こそが、ヴィエイユ様を守るべくこの世に生を受けたのだ……。思いが昂じて、ラッカーはそれが定めだと思い込むようになっていた。

「誰ぞある」

すぐに家来の一人が入室してきて、恭しく一礼する。その彼にラッカーは、重々しい口調で命令を下した。

「軍の主だった者たちを集めよ。軍議を開く」

家来は一瞬、キョトンとした表情を浮かべたが、やがて、再び一礼すると、部屋を後にしていった。

◆◆◆

「国王様……それは……」

約三十分後、サブクリナー王国軍の主だった幹部四人が、ラッカーの前に控えていた。彼らはラッカーの言葉に、返答することができないでいた。

「もう一度言う。アガルタに戦いを仕掛ける」

「……」

「アガルタ王、リノスの首を獲る」

「畏れながら」

発言したのは、サブクリナー王国軍の総司令官を勤める、サネナだった。ラッカーと共に常に軍勢の先頭を走って敵に突撃していく猛将だ。彼の顔には夥しい傷があり、その醜悪な面相は、一度見た者の記憶から決して消えることがない程だった。

サネナはさも残念、と言った表情を浮かべながら、静かに、まるで幼な子を諭すかのように口を開く。

「我々が本日、国王様に上奏しましたアガルタ軍の報告書は、ご覧になられなかったのでしょうか？」

「いや、読んだ。中立的な視点で書かれた、優れた報告書であった」

「で、あれば、なぜ……」

「アガルタ王、リノスは、何としても、この世から抹殺せねばならない」

「お気持ちはよくわかります。痛いほどよくわかります。しかし、アガルタ軍と事を構えて、我らサブクリナー王国軍が勝てる見込みは、万に一つもございません」

「刀槍や魔法の攻撃が通じぬ軍勢に、我らだけでは勝機はないか？」

「その通りでございます」

ラッカーは苦笑いを浮かべる。王であれ誰であれ、このサネナは正しいと思うことを臆せず述べる。そこには、王の命を守り、ひいては、サブクリナー王国を何としても守るのだという矜持を感じさせる。そんな彼をラッカーは頼もしく思いつつも、己の心底を察してくれぬことに少し、苛立ちを感じていた。

「畏れながら、アガルタのどこを攻撃なさいますので？　よもや、アガルタの都を急襲する……などとお考えではありますまいな？」

「それは無理な話だ。アガルタの都に向かうのであれば、南からであればラマロン皇国、北からであればニザ公国、そして……大きく迂回して東から向かうのであればヒーデータ帝国を経由して行かねばなりますまい。つまりは、アガルタの都に向かうのであれば、必ずかの国の同盟国を通らねばなりません。我らの動きは丸見え……。おそらく、アガルタに入る前に、ラマロン、ニザ、ヒーデータのいずれかの軍勢と戦わねばならなくなります」

司令官の一人が口を開く。そんなことは言われなくともわかってい

ると、ラッカーは顔をしかめる。

「アガルタの地図を持て。いいから、持てと申すに！」

苛立ちを隠しきれないラッカーは、声を荒げながら部下に命じる。程なくして、彼の机の上に、アガルタの地図が広げられた。

「……見れば見るほどに、見事な防御態勢よ。東西南北、すべてに同盟国もしくは属国が控えていて、人ひとり、アガルタに入られぬ態勢を整えておる。だが……隙は必ずある。必ずな……」

ラッカーは、集まった司令官たちを見廻しながら、人差し指で地図を指さした。その先にある街の名前を見て、司令官たちは言葉を失った。

「ここじゃ。アガルタ王リノスをおびき出せるとすれば、ここしかない」

「こ……国王様……。アガルタ王をおびき寄せたとしても、我らに勝算は……」

「案ずるな、サネナ。策は、ある」

ラッカーの言葉に、サネナたち司令官は、思わず顔を見合わせた。

第五百三十話　よくわからない

「は？　何て？」

意味がわからなかった。どうして、こんなことになったのだ？　思わず聞き返してしまった。

ここは帝都の屋敷だ。ダイニングには俺をはじめとして、家族全員が集まっていた。子供たちもそれぞれの母親の膝に抱かれていたり、傍にくっついていたりしている。いつものにぎやかな風景は、そこにはなかった。

俺の目の前には、ラースがいた。よくわからないといった表情をしている。俺もおそらく、彼と同じ顔をしているのだろう。

「何で戦わなかったのよ」

腕を組み、呆れたような表情を浮かべているのは、ラースの姉のフェリスだ。そんな彼女にラースは、さも不満ありげに返答する。

「戦おうと思ったさ。でも、マトカル様が退けと言ったんだよぉ」

全員の視線がマトカルに注がれる。彼女は息子のファルコを抱きながら、俺たちを見廻している。

「私が報告を受けたときには、すでに砦の大半が制圧されていた。戦っても勝てぬわけではなかったが……無駄な犠牲が増えると判断した。そのため、ラース殿にすぐに撤退せよと伝えたのだ」

「アンタは本当にバカねぇ。敵が攻めてきたことに気がつかなかったなんて」

「何を言うんだい姉ちゃん！　ちゃんと気づいていたさ。でも、まさか砦に攻めて来るなんて思いもよらなかったんだ。海から船で静かに、ゆっくりと近づいてきたから、てっきり食料や燃料が尽きたんだろうと思って……それで、城門を開けたんだ。そしたら、いきなり兵士が上陸してきて……」

「まあ、何はともあれ、ラースを含め、アガルタの者にケガ人がいなくてよかった。ご苦労だった、ラース。危険を察知して、兵士をかくまったお前の判断は間違ってはいない。あとは、俺たちに任せてくれ」

俺の言葉に、ラースは悔しそうな表情を浮かべたまま、ゆっくりと一礼した。

占領されたのは、ラースが守っていたヒヤマの砦だった。そこをサブクリナー王国の者が占領したのだ。ここを占領されてしまうと、すぐ近くにあるドルガの街が危なくなる。アガルタからの補給が断たれてしまうからだ。

「まあ、ドルガへの補給は、最悪の場合、陛下に頼んでヒーデータから船で輸送してもらうことにしよう。今のところドルガの食料の備蓄は……」

「問題ない。三か月は籠城できるはずだ」

「そうか。マト、ドルガには城門を固く閉じて防御に徹するように

伝えてくれ。間違っても、ヒヤマの砦に攻撃を仕掛けようなどとは思うなと伝えてくれ」

「わかった」

俺はマトカルに向かってゆっくり頷くと、俯きながら大きな体を小さくして控えているラースに視線を向ける。

「気を落とすな、ラース。お前が精魂込めて修復したヒヤマの砦……。奪われた悔しさはよくわかる。できるだけ、損傷させないように、奪い返して見せるからな」

俺の言葉に、ラースは再びゆっくりと頭を下げた。

◆　◆　◆

ヒヤマの砦を占領されてから二日。俺はアガルタの都にある迎賓館の執務室で、敵の戦力分析を行っていた。目の前には、ヒヤマの地図が広げられ、それをクノゲンとマトカル、そしてルファナが俺と一緒に眺めている。

「……一体、敵さんは何をしたいのでしょうな？」

クノゲンが首をひねる。報告によれば、サブクリナー王国軍の総勢は、およそ三万。これは、サブクリナー王国が動かせる最大の兵数なのだそうだ。言ってみれば、サブクリナーは、全兵力をもってヒヤマの砦を攻撃したことになる。

彼らは優に十日もかけて、海路にてヒヤマの砦を目指していた。彼らは、今はクリミアーナが治めている、ヒヤマの砦の目と鼻の先に

ある、旧バーリアル王国に向かうと主張していた。確かにこの国の情勢は不安定で、しばしば反乱が発生して、小競り合いが続いていた。てっきり、大軍を派遣して、反乱の芽を摘もうとしているのだと思っていたら、実は狙いはヒヤマの砦だったというオチだ。

しかし、よくわからない。この砦を陥落させたところで、誰も得をしないのだ。確かに、ドルガを防衛する俺たちにとっては、喉元に刃を突き付けられた状態なのだが、サブクリナーにとってみれば、言わば敵中の中に楔を打ち込んだはいいが、ほとんど補給ができない状態だ。一番近い旧バーリアル領から支援はできないことはないが、国内が不安定な状態であるために、満足な支援はできないだろう。

「我々をおびき出そうとしているのか？」

突然口を開いたのは、ルファナだ。彼女は首を傾げながら腕を組んでいる。その姿はなかなか美しかった。

少し話がそれるが、ここ最近、ルファナちゃんはキレイになった。クノゲンと結婚した当初はさしたる変化は感じなかったが、先の黒龍との闘いくらいから、劇的に美しくなった。リコ曰く、夫婦仲がうまくいっている証拠なのだという。それはそれでめでたい限りなのだが、ときおり、ハッとするほど美しい表情をすることがある。兵士たちの中に、彼女に心を奪われる者が現れはしないかと、余計な心配をしてしまう。

おっと、そんなことを考えていたら、全員の視線が俺に集まっていた。いかんいかん。姿勢を正さねば。

俺たちをおびき出して一網打尽にする……。アリと言えばアリだ。

ただそれは、俺たちがヒヤマに向けて出陣して、戦いを挑むのが前提だ。そうではなく、ニザやヒーデータと共同して、ヒヤマの砦を囲んでしまえば、彼らはなす術もなく飢えるしかなくなるのだ。

「失礼します」

突然、兵士の一人が入室してきた。何事かと思いながら視線を向けると、彼はスッと一礼して、よく通る大きな声で口を開いた。

「申し上げます。ただ今、新・クリミアーナ教国教皇、ヴィエイユ様がお越しになりました」

「え？」

「ヴィエイユ様の顔を知っている者が確認し、ご本人と確認ができました。今、応接室にお通ししておりますが、いかが取り計らいましょうか？」

「……また、出し抜けに来る奴だな。では、謁見の間に通してくれ」

「承知しました」

兵士が去ると、俺は思わず天を仰いだ。

程なくして、俺たちは謁見の間に向かった。そこには、ヴィエイユがたった一人で控えていて、さも、申し訳なさそうな表情を浮かべながら、佇んでいた。

「この度は、大変なご迷惑をおかけしまして……」

「迷惑っちゃ迷惑だが、それよりも、俺にはなぜ、今回この戦いを仕掛けられたのかが、全くわからないんだ。すまないがヴィエイユ、説明してくれないか？」

「仰せはごもっともでございます。今回の戦いは、すべて、私に原因があるのです」

「お前が、原因か……」

「ハイ……」

ヴィエイユは、今回の騒動に至った経緯を切々と語り始めた。サブクリナー王国の国王であるラッカーはヴィエイユに執心していること。彼は俺をこの世から排除すれば、ヴィエイユの傍に仕えられると思い込んでいること。彼の思いを知りながら、明確に拒否することなく、中途半端な対応を取ってしまったために、今回の騒動を招いてしまったこと……。そんな話を、ヴィエイユらしく、理路整然と語っていった。

「そのために、今回の騒動が起きてしまいました。何とお詫びをしてよいものやら……」

「いや、別に詫びるには及ばないが……」

「いいえ。それでは、私の気持ちが収まりません。アガルタ王様のお気が済むのであれば、私はどのようなことも致すつもりでございます」

ヴィエイユの言葉に、ルファナちゃんの気配と表情が変わった。どうやら、ヴィエイユのぶりっ子ぶりに、イラッときているようだ。

確かに、この娘の振る舞いは、同性から見ると、男に媚びているように見えるのだろう。そういう女子は確実に同性に嫌われる。だが、そういう女子が一番男子にモテる。うん、不条理な世の中なのだ。

相変わらずヴィエイユは俺に、潤んだ眼差しを向けている。そんな彼女に向って俺は、手を叩きながらゆっくりと口を開く。

「何だ、よかったじゃないかヴィエイユ。それを聞いて安心したよ。お前、その、ラッカーとかいう国王と結婚しろ。そこまでお前のことを思ってくれているんだ。きっと、一生をかけてお前を幸せにしてくれるだろう。お前がラッカーの愛を受け入れてくれれば、この戦いはすぐに終わる。心配するな。結婚式には参加させてもらう。何なら、新婦側の友人としてスピーチをしてもいい。よかったら、この迎賓館を結婚式場に使うといい。ここ、結構いい式場だぞ？そうそう、このクノゲンとルファナちゃんも、ここで式を挙げたんだ。いい結婚式だった、あれは」

俺はクノゲンに視線を向ける。だが彼は、ニコリと笑みを浮かべながら戸惑ったように首を傾げている。

「お断り申し上げます！」

突然、ヴィエイユの絶叫が響き渡った。驚いて視線を向けると、彼女は泣きそうな表情を浮かべながら首を振っていた。

「あのお方と一緒になるなど……。絶対にイヤです。それだけは、絶対にイヤです。イヤです……本当にイヤです……」

……そこまで拒否ってやるなよ。俺はその言葉を必死で飲み込んだ。

第五百三十一話　名将

一方その頃、ヒヤマの砦ではラッカーが諸将を集めて軍議を開いていた。

「まさか、無血開城できるとは思いもよらなかったな」

一兵も失うことなくヒヤマという堅牢な砦を陥落せしめるという勝利を得たが、ラッカーの表情に笑顔はない。それどころか、眉間の皺は深くなるばかりだった。そんな彼の心中を察してか、居並ぶ司令官たちは、ただ黙って王に視線を向け続けている。

「さて、これからどうなさいます？」

口を開いたのは総司令官のサネナだった。彼は淡々と、だが、すべてをあきらめたかのような口ぶりでラッカーに話しかける。その雰囲気は、この戦いの最後は、自分の命と引き換えに終わらせようという覚悟を感じさせた。

「待つ」

「何と……言われました？」

「待つのじゃ。アガルタ軍の、アガルタ王リノスが来るまで、待つのじゃ」

「畏れながら……。アガルタ軍が動かねばどうなります？」

若い司令官が思わず口を開く。その彼にラッカーは鋭い視線を向ける。

「必ず、動く。己が領土を蹂躙されておるのだ。この恥を雪がずして、何とするのだ。それにここを抑えられれば、ドルガの運命は風前の灯火。アガルタとしては、何としても我らを排除せねばならんのだ」

「畏れながら国王様、ヤタが申し上げたいのは、アガルタ軍が、アガルタ王本人が動かず、ニザ、ヒーデータ、ラマロンの各国が軍勢を派遣し、このヒヤマをとり囲めば、我らは自落するということです。いかに、食料を十分に積んでいるとはいえ、それらは未来永劫まであるものではありませぬ……」

「サネナ、皆まで申すな！　わかっておるわ！」

まるでハエや蚊を追い払うように、ラッカーは手でサネナの言葉を払いのける。そして、スッと立ち上がると、血走った眼で司令官たちを睨みつけた。

「アガルタ軍の動きから目を逸らせるな。ヤツは動く。必ず動くはずだ！」

ラッカーの言葉に反論する者は、一人もいなかった。

◆　◆　◆

「大変失礼しました。少し、取り乱しました」

ヴィエイユは髪形をささっと整えながら、ボソボソと呟いた。何と

も言えぬ変な空気になってしまった。

「あのお方だけは、本当に、生理的に嫌いなのです……。あの顔……。あの体臭……。ああ、いやだ……」

「そこまで嫌うことはないんじゃないか？　ほら、まあ、何だ。見てくれはさておき、体臭なんかは香水でも使えば何とかなるものだし……。よかったら、ウチのソレイユが持っている香水をあげようか？　あれ、結構評判がいいみたいなんだ」

「お気持ちだけ、受け取らせていただきます」

……ヴィエイユの眼が怖い。これ以上このネタを引っ張ると、本気で怒られそうだ。俺はオホンと咳払いをして、話題を変えようと努める。

「とはいえ、俺の命を狙うのに、ヒヤマを攻めるのか。アガルタの都じゃないんだな」

「こう言っては何ですが、ラッカー様は、非凡な将器をお持ちの方です」

ヴィエイユはいつもの表情を取り戻していた。愛嬌のある眼……しかし、その眼の奥は全く笑っていない。そんな表情を讃えながら、彼女はさらに言葉を続ける。

「ラッカー様は、我がクリミア―ナ教国軍の先鋒を勤めるお方です。単に、やみくもに突撃するのではなく、敵の弱点を瞬時に見抜き、そこをめがけて突撃していきます。ご家来も勇猛な方が多く、今のところ、我が軍が勝利し続けていられるのは、あのお方のお蔭と言

って過言ではありません。我が教国にとりましては、タナ王国のヴィル様と並んで、名将の誉れ高きお方です。そんなお方ですから、敵の戦力を見誤ることは致しません。アガルタの都を攻めなかったのは、勝てる見込みがないからでございます」

「……嫌いな男の割には、よく見ているな、ヴィエイユ」

「ええ。それとこれとは別ですから」

「そういうものかな？　で、どうしてヒヤマなのかな？」

「ヒヤマはドルガ防衛の要……。ここを占領できれば、ドルガを落とすことはそう難しくありませんから」

「まあ、陸と海から囲めば、ドルガはどうにもならないだろうが、ラッカーは単独で攻めているんだろう。その作戦は難しいと思うけれどな」

「とはいえ、アガルタ王様としましては、このままラッカー様を放置しておくわけには、参りませんでしょう？」

「まあ、ね」

「恋に狂ったラッカー様のことです。アガルタ王様をおびき寄せるために、ドルガへの攻撃を仕掛ける可能性もありますわ。そうなれば、何の罪もないドルガの人々は少なからず、迷惑を被ることになりますものね」

「……」

「アガルタ王様のお心の内は、よくわかりますわ」

ヴィエイユは妖艶な笑みを浮かべている。沈黙する俺を見て、図星をついたと思ったのか、彼女はさらに言葉を続ける。

「しかし、ご安心くださいませ。ラッカー様がドルガを攻める可能性は少ないと考えます」

「ほう、そうか」

「はい。ラッカー様の狙いは、アガルタ王様ただお一人です。今回の戦いは、アガルタ王様そのものを討ち取るための戦いなのでございます」

「ほう、ヒヤマやドルガではなく、この俺の首が欲しいか……」

「私を手に入れるためには、アガルタ王様が邪魔だとお考えなのです。ですから、ラッカー様は精鋭をもってアガルタ王様の本陣を衝く戦法を取るに違いありません。軍団と軍団との戦いではなく、アガルタ王様お一人を狙っての戦いとなるでしょう」

「……ヴィエイユ」

「はい」

「お前はさっき、ラッカーを名将と言ったな？」

「はい、申しました」

「名将とは案外、足元が見えないんだな」

「は？」

「今回の戦いは、俺たちアガルタの勝ちだ。きっとラッカーは、俺たちとの戦いでことごとく敗れて、すべてを失うだろう」

「……勝った、と申されましたか？」

「ああ、勝った。お前たちクリミアーナの連中は、どうも大将首を狙う傾向にあるな。そんな戦い方はもう終わっているんだ。今は、軍団と軍団の争いのはずだ。敵の軍団を制圧してはじめて勝利したと言えるのだ。軍団を引き連れているにもかかわらず、大将首だけを狙うなど、愚の骨頂もいいところだ。いい例が、あのヴィルだ。ヤツは俺の首だけを狙って戦いを仕掛けてきた挙句、軍団を失った。結果的に今、タナ王国国王・ヴィルは、この世に何の力もない存在になった」

俺の言葉をヴィエイユは、目を丸くして驚いていたが、やがて、先ほどの妖艶な笑みを浮かべた。

「アガルタ王様に、私の情報は無用でございました。確実に、アガルタ王様はラッカー様に勝利なさいますわ」

「まあ、そんなことはどうでもいい。俺には一つ、心配事があるんだ」

「心配事……でございますか？」

「ああ。同じ男として、大好きになった女性……嫌われていたとしても、その女性が諦められない気持ちはわからなくはない。そんな、

言ってみれば純粋な男の子の気持ちを何とかしてやりたいという気持ちが、俺にはある。可能ならば、二人きりで酒でも飲みながら、相談に乗ってやりたいものだ」

ヴィエイユの顔から笑みが消え、まるで俺を軽蔑するかのような表情に変わった。

「まあ、お前の気持ちもわからなくはない。俺から、何としてもラッカーと付き合えと言うことは、ない。まあ、せっかくアガルタに来たんだ。メシでも食って帰るといい。おみやげに黄金鳥の唐揚げでも持って帰るといい」

「お心遣い、感謝申し上げます」

そう言って一礼すると、ヴィエイユはプイと背を向けて、そのまま部屋を出ていってしまった。

「……で、どうするのだ？」

ヴィエイユの姿が消えてすぐ、マトカルが口を開いた。俺は玉座に体を預け、天井に視線を漂わせる。

「行かねばならんだろうな」

「やはり。ヒヤマに出陣するのか……」

「さてね。前線には出ずに、ヒヤマの近くの草原で、マトの膝枕で昼寝をするのも、悪くないな……」

マトカルの顔が、一瞬で赤くなった。

第五百三十二話　どういうこと!?

「アガルタ軍が動いたか！　それを指揮するのはアガルタ王リノス本人か！」

ラッカーはそう叫びながら立ち上がった。彼にとって、待ちに待った報告だった。

アガルタ軍が都を出発したのは、およそ三日前のことだった。アガルタの都からこのヒヤマに至るまでは、最短で五日。早ければ明後日にはアガルタ軍と刃を交えることができる。もしかすると、あの軍勢のことだ、もう少し早く到着するかもしれない……。そう考えたラッカーは、全軍に準備を整えるよう命じた。

「全軍、緊張して待て」

彼の前に控えていた伝令は、スッと一礼すると、脱兎の如く部屋を飛び出していった。

アガルタ軍がヒヤマの西、およそ十㎞離れた山の麓に到着したという報告があったのは、それから三日後のことだった。ラッカーはすぐさま斥候を出し、アガルタの動きを確認した。すると、彼にもたらされたのは、意外な報告だった。

「……なに、アガルタは兵を散らしているというのか!?」

すぐさま招集した軍議の席上、ラッカーは頓狂な声を上げた。その言葉に、司令官の一人が反応した。

「はい、まずは地図をご覧ください」

そう言って男は机の上に地図を広げ、それを司令官たちがのぞき込む。

「アガルタ軍到着以来、八方に放った斥候らの情報を総合しますと、まず、ヒヤマの西側十㎞の草原に三千、南側十㎞の草原に三千、ドルガとの間にそれぞれ、二千、二千、一千の軍勢が配置されております。そして……西側のコパス山にいまだ後詰として五千の兵力を残しているものと思われます」

「すると、しめて一万三千の軍勢か……」

司令官の一人が、誰に言うともなく呟く。その言葉に、ラッカーは大きく頷く。

「敵は、なにゆえこうも各地にのんべんだらりんと、兵を散らしているのか？」

若い司令官の一人が口を開く。その言葉を受けて、総司令官のサネナが身を乗り出した。

「さて、そこだ。アガルタ軍の狙いは、戦線を拡大して我らを混乱させようとしているとしか、思えん！」

「……此度の戦は、そのようなことはどうでもよい」

ラッカーが低い声で呟く。その瞳には不気味な光が宿っていた。

「問題は、アガルタ王リノスがどこにいて、それをどう攻撃するかだ。アガルタ王の首を獲れば、この戦いは終わりだ」

「……すると、国王様が言われていた作戦とは、アガルタ王お一人を狙うということでしょうか？」

「その通りだ、サネナ」

「事は上手く運びましょうか？」

「どういう意味だ？」

「アガルタ王リノスを討ったとして、我らは無事にこのヒヤマから撤退できましょうか？　おそらく、アガルタ軍には、クノゲン、ルファナという司令官が従軍しているでしょう。一万三千の兵力と言えば、アガルタ軍はおよそ七割の兵力をこちらに向けていることになります。下手をすると、妃の一人である、マトカル司令官も従軍している可能性すらございます。アガルタ王を討ったところで、これらの一騎当千の司令官たちが、必ず我らを追尾してくるでしょう。我らも、無事では済むますまい」

「サネナ、貴様、何が言いたいのだ？」

「アガルタ王一人を狙って攻撃するという国王様の作戦は、見事かと存じます。しかし、仮にアガルタ王を討った後のことを考えますと、我らは手痛い反撃にあう覚悟をせねばなりません。さて、どうしたものか……」

「アガルタ王の首を挙げしときは、おそらく、我が軍はアガルタの精鋭たちに囲まれているだろう。だが、安心するがいい。そのとき

は、余が先頭を走って、血路を開いて見せよう。貴様らも、絶体絶命の中、余が血路を開いて脱出した場面を何度も見ているはずだ。此度も、それをやって見せようというのだ。安心するがいい」

サネナはラッカーの言葉をじっと聞いていたが、やがて、ゆっくりと息を吐きだすと、何度も頷きながら口を開いた。

「そのお言葉を聞いて安心いたしました。国王様の勇猛ぶりは、我らは何度も拝見しておりますし、その強さは誰よりもよく知っております。国王様が先頭に立って血路を開いていただければ、兵士たちの多くは命を保てましょう。ご安心ください。そのときの殿は、私が勤めます」

ラッカーはその必要はない、と言いたかったが、その言葉を思わず呑み込んだ。サネナの視線が、あまりにも鋭かったからだ。彼の言いたいことは、よくわかる。己の恋のためにサブクリナー王国軍を動かしている。こんなことをしていては、人心は離れるばかりだ。早く目を覚ましてくれ……。きっと、そう思っているに違いない。だが、その瞬間、彼の頭の中に浮かび上がるのは、あの、ヴィエイユの笑顔だった。あの天使のような笑顔……。小柄な割に豊満な体……。あの笑顔を、体を、何としても手に入れたい……。そのためには、アガルタ王リノスの首を何としても挙げねばならない……。ラッカーの眼に、不気味な光が再び宿る。

「何としてもアガルタ王リノスの居所を探せ。すべてはそれからだ」

彼の言葉に、司令官たちは無言で頭を下げた。

数時間後、ラッカーの許には、アガルタ軍の情報が次から次へともたらされていた。敵は歩兵が中心で、騎馬隊はごくわずかだった。

ラッカーはてっきり、アガルタは騎馬隊を中心とした編成で来ると睨んでいた。すぐさま彼は、後詰として後方に陣を張っている部隊をよく調べるようにと指示を出した。

報告によれば、アガルタの歩兵は、全員が黒い鎧を装備し、槍を装備していた。その槍も、長槍とごく短い槍を装備する者の二通りあると言う。

「おそらく、短い槍を装備している者は、タナ王国のヴィル様の軍を葬った新兵器を装備しているだろう。それらは……。ヒヤマとドルガの間に配置された部隊が持っているようだな。おそらく、この部隊がヒヤマを攻撃するときの主力なのだろう。遠方から攻撃を仕掛けて、ある程度、我らの戦力を削いだところで、長槍隊が突っ込んでくる。そして、壁や堀を超え、城門が開いたところで、騎馬隊が突撃してくる……。およそ、アガルタの作戦はこんなところだろう。敵ながら見事な作戦だ」

そのとき、司令官の一人がラッカーの許に飛び込んできた。

「申し上げます！　ただ今、我が先手隊の者が、コパス山を偵察しましたところ、アガルタ王リノスの姿を確認したとのことでございます！」

「見つけたか！」

ラッカーは目の前に広げられた地図に視線を向ける。

「アガルタ軍の配置は見事だが、己を守ることは頭になかったようだな。コパス山の前方に配置したのが長槍隊だけとは……。天は、主神様は我らに味方したぞ！」

ラッカーはスッと顔を上げると、まるで怒りにも似た大声を上げた。

「全軍出撃だ！　アガルタ王リノスを討てっ。敵はアガルタ王ただ一人！　首を獲った者は望みの褒美を与える！」

ラッカー率いる軍勢は勢いよくヒヤマの砦を飛び出していった。

だが、彼が砦を出てしばらくすると、伝令の一人が大急ぎで彼の後を追いかけてきた。

「国王様、お待ちください！　国王様ぁ！」

忌々しそうな表情を浮かべながら、ラッカーは馬を止める。伝令は、ハアハアと苦しそうな息をしながら馬を降り、ラッカーの前に膝をついた。

「申し上げます！」

「どうしたのだ！」

「ヒヤマの東に展開している軍勢は、アガルタ王自身が指揮している軍勢であることがわかりました！」

「何っ！　コパス山の一軍は囮だとそう申すのか！」

「国王様ぁ！」

激高するラッカーに、新たな伝令が現れ、彼の前で膝をつく。

「申し上げます！　ヒヤマの正面に展開している軍勢……。そこに、アガルタ王リノスの姿を見つけました。本軍は、正面の軍勢です！」

「な、なに！？　アガルタ王リノスが、三人もいると申すのか！」

ラッカーの怒号が、広い草原に響き渡った。

第五百三十三話　表敬訪問！？

「な、何かの間違いだ！　そのようなことがあってたまるか！」

ラッカーは、周囲に向けて怒鳴り散らす。その一方で、彼は前面に展開しているアガルタの長槍隊の動きを、注意深く観察していた。遥か数キロ先に見える黒い塊……。その一団がこちらに突撃してくるのであれば、すぐさま防御態勢を取らねばならない。だが、アガルタ側に動きは見られない。彼は再び視線を自軍に向けた。

「どいつもこいつも、どこに目を付けておるのだ！　もう一度、斥候を出して調べ直させろ！」

「いや、国王様」

総司令官のサネナが、兵士たちをかき分けるようにしてラッカーの前に進み出る。

「ひょっとして、あり得ることかもしれませぬ」

「何だと？　貴様は我を愚弄するのか！」

「決してそのような」

サネナは驚いたような表情を浮かべながら首を振る。そして、再び真面目な表情を浮かべると、声を低く落として、さらに言葉を続けた。

「アガルタ王リノス……。かの王は別名、結界王と呼ばれております」

「……」

「国王様もご存じの通り、結界スキルは極めれば、一切の攻撃を受けつけぬ防御力を持つと同時に、結界内の環境を自由に変えることができると言われております。従って、全くの他人に結界を張り、アガルタ王に見えるように効果を付与することも可能であるかと思われます」

「それは神級のスキルと言われておるものだ。我が主神様であらせられる、クリミアーナ様をもってしても得ることが叶わなかったスキルだ。それを、アガルタ王が取得していると言うのか？」

「冷静になってお考え下さい、国王様。アガルタ……とりわけ、その都には強力な結界が張られております。邪念を持つ者は都に入ることができませぬ。あれだけ広大な都市に結界を張ることができるのです。それは相当の使い手と考えてよろしいかと存じます」

「確かに、そうだ」

「国王様！」

ラッカーが冷静さを取り戻したそのとき、馬に乗った伝令が大急ぎでラッカーの前に近づいてきた。

「申し上げます！」

「何事だ」

「ただ今、ヒヤマの南門が、アガルタ王リノス自ら率いる軍勢に攻められ、苦戦中です。至急、援軍を願いたいとのことです！」

「何だと！？」

「国王様、南門を攻めている軍勢をアガルタ王自身が指揮しているか否か、事の真偽は別にして、あそこを押さえられますと、我らは退路を断たれることになります。ここはひとまず、ヒヤマに向かい、南門を攻めている軍勢を蹴散らして、砦に引き上げることが肝要かと存じます！」

ラッカーは悔しそうな表情を浮かべながら、ギリギリと歯を鳴らしていたが、やがて将兵たちを見渡すと、低い声で、まるで呟くように口を開いた。

「やむを得ぬ。全軍、ヒヤマに向かえ。撤退する」

その言葉を受けて、サブクリナー王国軍はすぐさま、馬首をヒヤマに向けた。

砦の南門を攻めていたアガルタの部隊は、ラッカーたちが到着すると知るや、すぐさまその場から撤退していった。そのために、彼らは無傷で砦に引き上げることができたのだった。

だが、撤退を完了して、先ほどのアガルタ軍の攻撃についての報告を聞いて、ラッカーは驚きを隠すことができなかった。アガルタ軍は、南門を包囲すると、新兵器の魔銃を使って攻撃を仕掛けてきた。しかもそれは散発的で、迫力に欠けるものだった。しかし、その命中精度は高く、アガルタが放った攻撃は、全弾、サブクリナー王国

の兵士に命中していたのだった。

当然、守備兵たちも手をこまねいていたわけではなかった。砦の中から弓矢と魔法を放ったが、アガルタ兵には全く通じず、攻撃は彼らが装備している鎧と結界石に全て阻まれていたのだった。

南門を守備していた兵士たちは、アガルタの攻撃の精度の高さに驚くと同時に、その守備力の硬さに接したことで、恐れを抱く者も少なくなかった。そんな兵士たちにラッカーは大声で鼓舞する。

「恐れるな！　今、この砦には、我がいる！　我がいる限り、この戦いは負けることはない！　思い出すのだ！　今までの戦いを！　我が敗れたことがあるか？　我がいる限り、この戦いに負けはないのだ！」

彼の自信に満ちたその振る舞いは、兵士たちに何とかなるという思いを抱かせた。だが、その直後、矢継ぎ早に到着した伝令らの一言で、兵士たちの士気は激減することになる。

「申し上げます！」

「何じゃ！」

「砦の西門に、アガルタ王リノス自ら率いる軍勢が向かっております」

「！？」

「申し上げます！　先ほど南門から撤退していったアガルタ王率いる一軍が、再びこちらに向かっております！」

「申し上げます！　東側に展開しておりましたアガルタ軍が、東門に向けて移動を始めました！　指揮するのは、アガルタ王自らとのことです！」

「申し上げます！」

「もうよい！　聞きとうない！」

顔を真っ赤に紅潮させながら、ラッカーは絶叫する。その表情はすでに、歪み切っていた。だが、伝令の一人は、そんな彼に向かってさらに言葉を続けた。

「いいえ、国王様、これだけは聞いていただかなくてはなりません。先ほど、本国より緊急の使者が参りました。ヴィエイユ教皇聖下が、我が国を表敬訪問するために、アフロディーテを出発したとのことです！」

「な、なに！？」

「先の戦いを慰労するために、教皇聖下自らが我が国に赴かれ、国王陛下をはじめ、サブクリナー王国の民に祝福を与えるとのことです！　すでに、ご一行はアフロディーテを出発しております。国王様、一刻も早くのご帰国を！」

「教皇聖下がアフロディーテを出発したのは、いつのことだ！」

「二日前とのことでございます！」

「ふ、二日前！？」

「教皇聖下のご使者を迎えてすぐ、宰相、ロン・ザン・エルバー様が早馬を仕立てられました。夜に日を継いで駆け抜けた使者が、先ほど到着してございます！」

「国王様！　一刻も早くお戻りを！」

そう言いながら、総司令官のサネナが、ずいっとラッカーの前に進み出る。

「教皇聖下御自ら我が国を訪問なさるこのときに、国王様がおいでにならないのは、失礼の極みとなります。教皇聖下に、何度も表敬訪問を奏上していたのは、他ならぬ我が国自身なのですから！　兵を返されませ！　サブクリナー王国へ！」

「う、う、う……。おのれ……アガルタ王、リノス……」

ラッカーは大声を上げたかと思うと、腰に差した剣を抜き払い、それまで自分が座っていた椅子を真っ二つに叩き割った。彼はしばらく肩を激しく上下させていたが、やがて息を整えると、剣を鞘に納め、居並ぶ司令官たちに視線を向けた。

「全軍、引き揚げよ。砦の外はアガルタ軍に包囲されている。従って、撤退は海路を進むこととする。すぐに兵士たちを乗船させよ。乗船が完了した船から北に向かうのだ。バーリアル王国を迂回して、サブクリナーに向かうのだ」

「お言葉ながら国王様、それでは日数が……」

「それが、兵士を最も安全に帰国させられる」

「ですが……それでは、教皇聖下のご訪問に間に合いませぬ」

「サネナ」

「はっ」

「早馬を仕立てよ」

「早馬……でしょうか？」

「アフロディーテから我が国までは船で五日。おそらく今、ヴィエイユ様の船はビルモ帝国に向かっている頃だ。明日はビルモの帝都、エモシーンで休息をとられることだろう。早馬をビーモのエモシーンに向かわせるのだ。そこで教皇聖下にお目通りして、今回の表敬訪問を……延期していただきたいとお願い申し上げるのだ」

「……承知、致しました」

「事は一刻を争う。すぐさま撤退準備にかかれ！」

ラッカーの言葉に、司令官たちはスッと頭を下げた。

第五百三十四話　単騎にて

サブクリナー王国軍の撤退準備は迅速だった。兵士たちは瞬く間に自身の荷物を準備し、統率の取れた動きで、砦のすぐ裏手の港に停泊している船に乗り込んでいった。

ラッカーは兵士たちの様子をじっと見守っていた。その表情に乱れはなく、まるで、訓練を見守っているかのような佇まいだった。そんな彼を、司令官たちは、ただ黙って見守っていた。

「国王様、どうぞお船へ」

総司令官のサネナが乗船を促す。だが、ラッカーはサネナの顔を、無言のままじっと見つめる。

「……国王様？」

「サネナ、先に乗船するがよい」

「何を言われます！　国王様が乗船いただかねば、我々は乗船することができませぬ！」

「サネナ、貴様、我が船に乗り込んだ後、このヒヤマに残ろうと考えておるだろう？」

サネナの顔が歪む。その様子を見て、ラッカーはニヤリと笑みを浮かべる。

「貴様のことだ。アガルタにこの度の戦いのことを詫び、その上で自ら命を絶とうと考えておるであろう。フフフ。貴様とは長い付き合いだ。そのくらいのこと、手に取るようにわかるわ」

そう言ってラッカーは苦笑いを浮かべる。

「この度の戦い、アガルタには全く……」

「必要ない」

「国王様！」

「アガルタに詫びる必要などないと申しておる。アガルタとて、我らの侵攻に気づかず、易々とこの砦を奪われている。そんなことで、どうするのだ？　敵が侵攻してきたのであれば、全力で撃退するものだ。しかし、アガルタはそれをしておらぬ。準備を怠ったアガルタも悪いのだ」

ラッカーの言葉に、サネナは何とも言えない表情を浮かべる。

「すぐに乗船せよ。貴様が乗船せねば、我はここを動くことはない」

「総司令官殿、国王様の申される通り、先にご乗船ください。総司令官は我が国軍の要です。我々も国王様と同じ気持ちでございます。ですから……」

まるで、縋り付くかのような目で、若い司令官がサネナを見つめている。そんな彼の瞳に促されるように、サネナは一礼して踵を返し、船着き場に向かって歩き始めた。

「皆、国王様を、必ずお守りするようにな」

彼は誰に言うともなく呟いた。その声に、若い司令官たちは小さく頷く。

「さあ、引き揚げようぞ。アガルタ軍の攻撃は、いまにも始まるやもしれぬ。皆、急げ」

そう言って、ラッカーは歩き出した。

彼が向かったのは、船着き場ではなく、砦の中にある馬小屋だった。そこには、彼の愛馬がつながれていた。

「待たせたな、ムラク。さあ、行こうぞ」

「国王様、しばしお待ちを！」

愛馬の轡に手をかけたラッカーに、司令官の一人が口を開いた。

「ムラクは、私が船に連れて参ります。国王様はどうぞお先に船へ」

「大バカ者……」

「はっ……」

ラッカーは寂しそうな表情を浮かべながら、司令官を窘めた。

「そなたが轡をもってムラクを曳いていくよりも、我が背に乗って行けばすぐではないか」

そう言ってラッカーは愛馬の背にひらりと跨った。

「そなたたち、一刻も早く乗船せよ」

「国王様!?」

「王都で会おう!」

「国王様!」

ラッカーは愛馬の手綱を引くと、船とは真逆の方向に駆けだした。その後を、司令官と護衛の兵士たちが全速力で追いかけて行った。

サネナが、その報告を聞いたのは、乗船する直前のことだった。

「何だと!?　国王様を頼むと申したではないか!」

目の前の伝令は彼の言葉を聞いて項垂れてしまった。この兵士に何を言ってもどうなるものでもない。そう思い直したサネナは、すぐさま頭を切り替える。

「国王様を追え!　……雲のごとく消えてしまった?　探せ!　探すのだ!　砦の外もくまなく探せ!」

そう命じておいて、サネナは踵を返して、砦に向かって走り出した。

「国王様の乗るムラクは、すこぶる足が速い……。見失わねばよいが……」

そう呟きながら砦の門をくぐり、全速力で城壁の上に上がったとき、

西の方角から歓声があがった。ふと見ると、そこには、奇妙な光景が広がっていた。

西側に展開しているアガルタ軍の中に、ぽっかりと大きな穴ができていた。歓声はどうやら、そこから起こっているようだ。

その穴は大きくなったり小さくなったりしながら、徐々に北に向かって移動している。よく見ると、その穴の中心には、一人の騎馬武者の姿があった。

「国王様！　国王様ぁ！」

城壁の上からサネナは声の限りを尽くして叫んだ。だが、その声は届いていないらしい。彼はすぐさま、周囲の兵士に命令を下す。

「まだ乗船していない者は、すぐに砦の外に出ろ！　国王様を救出に向かう！　急げ！」

「おっ、畏れながら……」

「何だ！」

「兵士たちの乗船はほぼ、完了しております。すでに大方の船は出港しております……」

「……今、砦にいる者だけでいい！　全員外に出ろ！」

サネナは大声で叫びながら城壁の階段を足早に降りていった。

一方、アガルタ軍の中にとり囲まれたラッカーは、力の限り槍を振

るっていた。だが、そんな彼に兵士たちは近づいて来ることはなく、一定の距離を保ちながら、十重二十重と彼をとり囲んでいた。

「ぬぅわぁぁぁぁぁ！！」

ラッカーは絶叫と共に槍をアガルタ軍に向けて投げつけた。だが、それすらも、兵士たちに躱されてしまった。彼はぜえぜえと肩を激しく動かしながら息を整えていたが、やがて、愛馬からひらりと降りると、足早に兵士たちの許に近づいて行った。

「我は、サブクリナー王国国王、サブクリナー・エパス・ラッカー三世である。我は今、ここで、アガルタ軍に降伏する。さあ、我を捕らえて、末代までの手柄とするがよい」

そう叫ぶと彼は、腰に差している剣を手に取ると、それをポンと草原の上に投げ捨てた。そして、そのままドカッと地べたに胡坐をかいて座ると、腕を組んで天を仰いだ。

敵の大将を捕虜としたとリノスに報告があったのは、それからしばらく経ってのことだった。

「敵の大将を捕らえた？　本当に、本人か？」

「顔を知っている者がおりませんで、本人確認に手間取りましたが、サブクリナー側から、このような書簡が参りましたので、おそらく、サブクリナー国王で間違いございません」

伝令は懐から一通の書簡を取り出して、リノスに手渡した。そこには、殴り書きされた文字で、アガルタ軍に捕らえられたのは、サブクリナー王国の国王であること、そして、その彼の助命を嘆願する

内容が手短に書かれてあった。

「アガルタ王の情けにお縋りしたい……か。で、その大将は今、何をしている？」

「ハッ。腹が減ったと言いまして、今、食事を召し上がっておいでです」

「何じゃそら？」

リノスは呆れた表情を浮かべながら、天を仰いだ。国王単独で敵陣に突っ込んでくるなどというのは、経験上、聞いたこともなかった。

「しかし、敵とはいえ、よく生きていたな。兵士たちに討ち取られる可能性の方が高かったろうに……」

「いや、ある意味で、敵の思い通りの展開かもしれないな」

口を開いたのは、マトカルだった。リノスは後ろに控えている彼女に視線を向ける。

「思い通り？　わざわざ捕らえられに来たってことか？」

「聞けば、敵の大将はリノス様の命を狙っているそうではないか。リノス様一人を狙うのであれば、軍勢を率いて攻撃するより、我々の懐に飛び込んだ方が可能性はある。そのために、わざわざ降伏して見せたのではないか。降伏すれば、首を討つことはできない。捕らえて、将に引見させねばならない。相手が国王であれば、なおさらだ」

「やっぱり、俺がヤツを引見しなきゃいけないかな？」

「当然だ。それが、国王たるものの勤めだ」

「……なんか、イヤだなぁ」

「リノス様の結界があれば、大丈夫だ」

「わかった。では、その、ラッカーをここに呼ぼうか。なあ、マト」

「どうしたのだ？」

「ヤツがここに来るまでの間、膝枕してもらっていい？」

「それは、ダメだ」

マトカルはゆっくりと首を振る。その顔には仄かな赤みが差していた。そのかわいらしい表情を見てリノスは、心を落ち着けるのだった……。

第五百三十四話　単騎にて（後書き）

５／２６にＣｏｍｉｃブースト様にて、『結界師への転生』コミカライズ第１３話が公開されました。リコ様が、美しい！　是非、チェックしてみてください。６／２　１２：００まで無料公開されています。

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ？ｃａｔｅｇｏｒｙ＝１４

第五百三十五話　重篤

「……準備ができました」

伝令がきびきびとした動きで俺の許に控え、頭を下げた。正直、あまり気乗りがしない。ただただ、イヤな予感がする。別に、命の危険性を感じるような予感はしないが、何というか……。何も悪いことをしていないにもかかわらず、体育教師に職員室に呼び出されたような、そんな感覚を覚えるのだ。

ラッカーはすぐ近くに連行されてきていた。気配探知と魔力探知を使うまでもない。ヤツが来たことはすぐにわかった。何というか……。獣のような気配を感じるのだ。それは兵士たちも同じなのだろう。ラッカーが近くにやってきたとき、俺の傍に控えていた兵士たちが、キョロキョロと周囲を伺ったほどだ。

俺はため息をつきながら、重い腰を上げる。その後ろではマトカルが付き従っている。正直、マトを抱きしめたい。きっと癒されることは間違いない。一旦心を落ち着けてヤツと対峙したいが、さすがに彼女は首を縦には振らないだろう。

最悪、ヤツに気配を消す効果を付与した結界を張るか……。そんなことを思いながら、俺は歩を進めた。

白い幕に囲われたところに、ラッカーは控えていた。国王ということで、縄などは打たれておらず、粗末だが椅子に腰かけていた。ただ、ヤツの周囲には兵士たちが控えていて、命令があればすぐに攻撃に移ることができるようになっていた。

俺と目が合うと、ラッカーの表情が一瞬にして変わった。

……正直、無知そのものに見えた。知性というのがかけらも感じられない、鈍重な顔をしていた。

いや、待て。コイツは一応国王なのだ。バカ殿も確かにいるが、この男はそれなりの功績を立てている、それなりの男だと聞いている。あまり勝手な判断をしない方がいい……。そう、自分に言い聞かせる。

予め準備されていた席に腰を掛ける。俺の着席を見届けて、すぐ横に控えていたマトカルとクノゲンが着席する。ルファナちゃんは、この引見の警備担当になっているために姿はない。彼女は、幕の裏、ちょうど、ラッカーの背後にいて、こちらの様子を窺っている。

「サブクリナー王国国王、サブクリナー・エパス・ラッカー三世殿で、お間違いないかな？」

クノゲンが静かな声で問いかける。ラッカーは俺を睨みつけたまま、ゆっくりと頷く。

「ヒヤマの砦は、我が国の領土である。それを、何の通告もなく攻撃された理由を承りましょうか」

クノゲンの問いかけに、ラッカーは体を震わせた。

「戦いを始めるのに、理由など、ない」

「ほう」

「欲しいから奪い取る。それだけである」

「あなた様は、サブクリナー王国国王であると同時に、新・クリミアーナ教国軍の軍務担当の地位に就いておいでです。この度の軍事行動は、クリミアーナ教国の意向を受けてのものでしょうか」

「下らぬことを聞くな」

「……」

「我の行動が、クリミアーナ教国……、ヴィエイユ様の意向を受けていないことは、その方たちが一番よく知っているだろう」

クノゲンはゆっくりと俺に視線を向けてきた。これ以上、聞くことはないといった表情だ。

「アガルタ国王、バーサーム・ダーケ・リノスです。この度の戦いは、実に不幸な戦いだったと思います。俺たちの兵士の被害はゼロだったが、貴国の兵士たちの中には、少なからず命を落とした方もいる。その方々に、深く哀悼の意を表します」

「敵であるにもかかわらず、死んだ我が国の兵士たちに哀悼の意を示していただけるとは……。感謝する」

ラッカーはそう言ってゆっくりと頭を下げる。その瞬間、彼の体がピクリと動いた。

「……」

「ラッカー様、どうなさいました？」

一切動かなくなったラッカーに、クノゲンが声をかける。だが彼は、無言のままだ。

「ラッカー様……」

「今、ヤツは動くことができない。結界を張ったからな」

「リノス様……」

「隙あらば俺に掴みかかろうとしている。少し面倒なので、自由を奪わせてもらった。安心するといい。首から上は動かせるようになっている」

俺の言葉を受けて、ラッカーはゆっくりと顔を上げる。その瞳は赤く濁っていた。

「イヤな男だな、貴様は」

「……」

「死んだ兵たちに哀悼の意を表するだと？　そう言いながら貴様は、我のことを笑っているのだろう。己の欲望で軍勢を動かし、挙句、兵の命を失わせた。そんな我を貴様は手玉に取り、一兵も失うことなくこの戦いを収束せしめた。さぞ、爽快であろうな」

「そうでもないな」

「殺せ」

「何？」

「殺せと言っておるのだ」

「あのなぁ……」

「もはや我に生きる望みなどない。貴様の命を奪うことはできぬ。どうあがいても、我の苦しみが消えることはない。ならばいっそ、貴様の手で我を葬ってもらいたい」

「勝手なことを言うな。お前とヴィエイユの話に巻き込まれたこっちは、いい迷惑をしているんだ。言っておくが、俺の命を奪ったところで、ヴィエイユの心は動かないと思うぞ？」

「ふっ、それは、ヴィエイユ様の心を貴様が完全に奪っているからか」

「いや、そうじゃない。俺はヴィエイユには興味がない。いや、むしろ、お前とヴィエイユが上手くいって欲しいと思っているくらいだ。だがな……ヴィエイユはお前のことは、あんまり……なんだよな。どうにかならないものかね、全く。俺も、お前のことはよく知らないから、推しようがないんだ。因みに聞くが、もし、ヴィエイユと付き合えたとして、お前はヴィエイユに何をしてやるつもりだ？」

ラッカーは俺をじっと見据えたまま、沈黙している。息遣いが荒くなってきている。

「わっ、我は……」

「え？　何？」

「抱きしめたい」

「へ？」

「抱きしめて……あの、小さな、柔らかい……フワフワしたあの体を思いっきり抱きしめたい。力の限り抱きしめたい。抱きしめ続けたい」

「あの、ちょ、おま……そういうことじゃなくて……」

「放しはせぬ。死ぬまで放しはせぬ。あの美しい顔を……唇を……何時間もかけて吸い続けたい……。あの美しい肌をすべて我のものにしたい。形の整った見事な乳房を……一点の曇りもないあの肌を、尻を、足を、腕を、体の全てを、隅々まで我が舌で清めるのだ。誰のものにもならぬように……。すべてを我がものとするのだ。そして、死ぬまで、いや、死んで主神様の許に参っても、生まれ変わってもヴィエイユ様のお傍に仕えるのだ。我が、未来永劫、我がヴィエイユ様をお守りするのだ……。我がヴィエイユ様を幸せにするのだ」

ラッカーの話を聞いていると、あまりの執着心に、気分が悪くなってくる。こんな感情を腹の中に持っていたのか……。あのヴィエイユのことだ。ヤツがそんな思いを抱いているのを、薄々と感じていたのだろう。この男も、ヴィエイユの前ではその欲望を押さえていたのだろうが、完璧にコントロールができていなかったのだろう。きっと、それとなく漂う雰囲気が、ヴィエイユに伝わってしまっていたために、彼女はこの男を毛嫌いしていたのだ。女性は、そうい

う雰囲気は敏感に察するものだ。

ふと、隣に控えているマトカルに視線を向ける。彼女は冷静そのものので、淡々とした表情のまま、ラッカーを眺めている。

「ううう……教皇聖下……。ヴィエイユ様……ヴィエイユ様……」

気が付くと、ラッカーは人目もはばからずに滂沱の涙を流し始めていた。相撲取りのような大男が、子供のように泣いている……。何とも不細工だが、ここまで人を好きになることができるその純粋さは、貴重にも感じる。

「こりゃ大変だな。この病気は、なかなか治せないな」

「病気？　この王は、病気に罹っているのか？」

俺の言葉に、マトカルが反応した。かなり予想外だったと見えて、驚いた表情を浮かべている。

「そうだ。病気だ。それもかなり重篤だ」

「病名は？」

「決まっているだろう。恋煩いさ」

マトカルは、ゆっくりと俺から視線を外した……。

第五百三十六話　愛こそすべて

「まあ、お帰りなさい。どうしましたの？」

帝都の屋敷に帰ってくると、リコが俺の顔を見るなり声を上げた。

どうやら、相当疲れた顔をしていたようだ。あまり、心配をかけてはいけないので、何とか元気な様子を取り繕うが、リコの眼はごまかせなかったようだ。

「食事は後にして、先にお風呂にします？」

「いや、大丈夫だ。お腹はすいているんだ。食欲があるってことは、元気な証拠だ」

「そうですの……」

リコはわかったような、わからないような、複雑な表情を浮かべている。そんな俺たちの様子など関係ないとばかりに、子供たちが出迎えてくれる。この子たちの笑顔を見ていると、本当に癒される。少し元気をもらった俺は、着替えのために離れに向かう。後からマトカルとシディーが付いてくる。

「どうされたのです？　何か、本当に疲れておいでですが……」

「いや、大丈夫だ。美味いものを食って、ゆっくり寝れば回復するよ」

鎧を脱がせながらシディーが心配そうに話しかけてくる。鏡を見て

みるが、普段とそう変わらない気がする。そんな俺にシディーが言葉を続ける。

「様子はいつも通りですけれど、何というか……気配が、気だるそうな雰囲気をまとっています。これは……何か、気色の悪いものでも、ご覧になりましたか？」

「さすがだな。そんなことまで、わかるのか……」

シディーの直観力には敵わない。俺はため息をつきながら、首を左右に振る。

「一体、何をご覧になったのです？」

「まあ、本当に気色の悪い話だからな。食事の前にする話じゃない。まあ、食事が終わって、子供たちが寝静まった後にでも、話すとしようか」

俺の言葉に、シディーは小首を傾けた。

ダイニングに戻ってくると、食事の用意ができていた。パン、サラダ、スープ、パスタ、肉料理……。いつもの我が家の食卓だ。そう言えばしばらく、刺身を食べていないことに気がついてリクエストしてみる。この世界でも刺身は食える。もっとも、食っているのは俺たち家族だけなのだが。この世界では生魚を食べるという習慣がほとんどなく、リコたちに刺身の美味さを理解してもらうのに、かなりの時間がかかった。だが、一度食べてもらって、その美味しさを実感してもらうと、彼女らはすぐに馴染んでくれたのだった。

醤油はないのだが、ペーリスとリコたちが色々試した結果、醤油ら

しきものはできあがっていて、それを使うことにしている。醤油をムラサキと言うように、我が家で使う醤油も紫色だ。最初見たときは、一瞬、毒でもあるんじゃないかと思ったが、食べてみると、マイルドな醤油風味で、なかなかの味わいなのだ。

「せっかくお刺身を作るのでしたら、天ぷらも揚げましょうか」

「おお、いいなリコ。リコの天ぷらも久しく食べていないな。是非、お願いするよ」

そんな会話を交わしながら、楽しい夕食の時間は過ぎていく。皆、笑顔なのが何ともうれしい。フェリスやラースの見事な食いっぷり……。エリルがお姉ちゃんらしく、弟や妹の世話を甲斐甲斐しくしている光景……。おしゃべりしながらも、とても上品な振る舞いで食事をしているリコやメイたち……。そんないつも見慣れた光景が、俺の心の疲れを和らげてくれた。

そんな食事がすみ、子供たちを風呂に入れながら、ゆっくりと湯船につかって体の疲れを取る。子供たちももう、大きくなってきているために、風呂に入れるのはかなり大変になってきている。今日はマトカルとメイと三人で子供たちを片っ端から洗っていく。ただ、最近はエリルとアリリアが手伝ってくれるので、俺はこうしてゆっくりと湯船につかることができている。そんな娘の成長に目を細めながら風呂から上がると、子供たちは部屋に戻っていく。その後を、メイとマトカルが付いて行く。今夜は、この二人が子供たちを寝かしつける担当なのだ。

さすがに疲れているだろうと察したリコが、代わりましょうかと提案するが、マトカルは大丈夫だと言って、部屋に向かってしまった。あんな気色の悪い話を聞いてなお、疲れの色を見せないのは、本当

に感心する。ラマロン皇国で受けた厳しい軍人訓練はダテではないようだ。

ダイニングでお酒を飲みながら寛いでいると、リコ、シディー、ソレイユの三人がパジャマ姿で現れた。三人とも、とてもいい香りがする。どうやら、今夜は三人一緒に風呂に入ったようだ。

「で、ラッカー様はどうなったのです？」

席に着くとすぐにシディーが口を開く。俺は酒の入ったコップをテーブルに置いて、ゆっくりと話し出す。

「今、ヤツはドルガの街に連行して、そこで軟禁されている」

「ヒヤマの砦はどうなったのです？」

「ちゃんと占領したさ。サブクリナー軍も抵抗することなく引き上げてくれたお蔭で、無血占領することができた。ルファナちゃんが、しっかりと警備を固めているはずだ」

「自国の王が捕らわれているのに、奪還する動きはなかったのですか？」

「なかった。大半の兵士がすでに船に乗り込んでいて、出港してしまっていたこともあるだろうが、残っていた兵士たちに、ラッカーの命は保証すると伝えたら、大人しく引き上げていったよ」

「アガルタ軍と戦っても勝ち目はないと、ちゃんと認識していたのですね。意外に、戦力分析が正確にできる軍勢だったのですね」

「そうだろうな。ただ、連行されていくラッカーを、草原に跪きながら見守っていたのは、ちょっとかわいそうだったな。ラッカーが通ると、皆、自分の名前を大声で叫ぶんだ。『国王様、サネナでございます！』、『国王様、レイ・ケリーでございます！』みたいな」

「王として、臣下から慕われているのですわね」

「そうなんだ、リコ。本来のラッカーは、有能な王だと思うんだ。ただ、ヴィエイユに恋してしまってから、かなり、おかしな男になってしまっている」

「おかしなこと？」

「そうなんだ……」

俺は、ラッカーが語った言葉をそのままリコたちに伝えた。さらに、ヤツが号泣した後、俺たちに語ったヴィエイユへの妄想も伝えた。

ラッカーは、一度、肌を重ねたならば、ヴィエイユを虜にする自信があるのだと言う。言葉は悪いが、最初はヴィエイユの体を思いの分だけ弄んで、その後、自分のものとする。そうなれば、あとはもう、自分から離れられなくなるのだ……そんなことを、ヤツは誰に言うともなく呟いていた。一見すると、フラディメ王国のメインティア王と似ているが、どういうわけか、彼の場合は、ラッカーほどの嫌悪さは感じない。見た目が、すっきりと上品だからだろうか……？

「それは、いけませんわ」

リコが呆れたような、さも、残念と言った表情で口を開いた。シデ

ィーもリコの言葉に、大きく頷いている。

「ラッカー様は、ヴィエイユさんを単なる欲望を満たすだけの存在としてでしか、見ていないのですわ。今のリノスのお話を聞く限りでは、ラッカー様にヴィエイユさんへの愛情は感じられませんわ」

「ああ、確かにそうだな」

「そのような、欲望を満たすだけの対象としてでしか見ていない御方を受け付けないヴィエイユさんの振る舞いは、理に適っていますわ。女性は誰だって、自分のことを大事にしてくれる方と一緒に時間を過ごしたいと思うものですわ」

確かにそうだと、俺は頷く。そう言えば、メインティア王は、この世のスケベ大明神と呼んで差し支えない程の好色だが、彼は女性に対して愛情がある。例え、無理やりベッドに引きずり込んだとしても、そのアフターケアは万全なのだろう。それを証拠に、彼が手をつけた女性から、メインティア王の恨み節を聞いたことがない。なるほど、愛の有無がその違いなのだろう。

「そうだな。リコの話でようやくヤツに感じていた嫌悪感の理由がわかった気がするよ。ヤツには、愛情ってやつを、噛んで含めるようにして教えてやらねばならんな」

「リノス様」

突然、ソレイユが口を開いた。彼女はいつも以上に色っぽい目つきをしながら、俺を眺めていた。

「今回のこの件、私にお任せいただけませんか？」

「何？　何か、策でもあるのか？」

「ウフフ……」

ソレイユは何やら嬉しそうな表情を浮かべている。それを見ながら俺は、一抹の不安を心に覚えるのだった……。

第五百三十七話　あきらめきれぬとあきらめた

「……この度の格段のお働き、心より感謝申し上げますわ」

「ハッ、ありがたき幸せでございます」

「この度のラッカー様のお働きに、私は、目を奪われておりました。あなた様にずっと見とれておりました」

「……はっ」

「私は、強いお方が大好きなのです。ラッカー様のような強いお方が……。どうぞこれからも、微力な私をお助け下さいませ」

「ハハッ。教皇聖下の御為ならば、いかなる犠牲も厭うものではございません。何なりとお申し付けください」

「心強いですわ、ラッカー様……」

「ハッ……」

ふと、目が覚めた。白い壁、白い天井……。一瞬、アフロディーテの屋敷かと錯覚したが、壁や天井にシミを発見して、ここがアフロディーテでないことを思い出す。ラッカーは、大きなため息をついて、大儀そうに体を起こす。

ぼんやりと部屋を見廻す。そうだ、私は囚われの身となったのだ……。そんなことを考えながら、昨日の出来事を思い返す。

……アガルタ王の前に出ると、突然体が動かなくなった。それまで実行に移すべく、練っていた策が全く役に立たなかった。

「これから、どうすればよいのか……」

ベッドに体を起こした状態のままで、彼は呟く。まさかこんな状態で生きながらえるとは、思ってもみなかった。

ラッカーは、この戦いを起こしたときから、心に期するものがあった。この戦いで華々しく死のうと考えていたのだ。

ヴィエイユ様のことは、どうしても諦められない。だが、彼女の心がアガルタ王に向いていることは事実だ。そして、どれだけ待とうとも、その心が自分に向けられることはないということも、わかってはいる。だが、それでも、どうしても、彼女のことをあきらめることができなかった。

むろん彼とて、これまで何度もあきらめようと努力を重ねてきた。武芸に精を出してみたり、国内の政治に心を砕いてみたり……。挙句は、他の女性に目を向けることで、彼女を忘れようと試みてきた。だが、それらは全くと言っていいほど、効果を見せなかった。彼は、ヴィエイユ様のことついては、すでに、あきらめることをあきらめた心境に至っていた。

ヴィエイユ様のことを思うと、今でも心が張り裂けそうになる……。そんな苦しみを抱えたまま、このまま時を過ごしていくのは、彼にとって耐えられないことだった。この先も、ヴィエイユ様とは顔を合わせるだろう。病気や何かと理由を付けて会わないようにすることもできなくはないが、それはそれで、また、別の苦しみを生む。

会えば会ったで、あの天使のような笑顔を手に入れたい、傍に置いておきたいという思いに苛まれるし、会わなければ会わないで、今、彼女はどうしているだろうかという不安とともに、アガルタ王と逢瀬を重ねているのではという妄想に苛まれる……。すでに彼は、精神的に相当追い詰められた状態にあった。

強いお方が好き……。確かにヴィエイユ様はそう言われた。その言葉通り、今、彼女の心は世界最強の王と一部で言われているアガルタ王に向けられている。この自分など、かの王の足元にも及ばないと思われている。

しかし、ラッカー自身は、一対一の肉弾戦に持ち込めれば、勝機は十分にあると思っていた。アガルタ王は、これまでの戦いの歴史を見れば、兵の運用と魔力には十分に長けた男であることは間違いなかった。だが、あの華奢な体を見るにつけ、力勝負はどうも苦手なようだ。家来に調べさせた結果を見ても、アガルタ王自身が刀槍を取って自ら戦ったという記録は見られなかった。そこで彼は、至近距離に近づいて、不意打ちという形に勝機を見出していた。

たった一人でアガルタに降伏し、王の前に引き出される。そのときまでに、先に自ら丸腰となって、抵抗する意思のないことを明らかにしておく。そうなれば、敵はある程度の扱いをせねばならなくなる。罪人のごとく身動きができない程に縛り上げたり、周囲に抜剣した兵士たちを配置したりすることは、礼を失する。アガルタも、そのようなことで、国の評価を貶めることはしないはずだった。

丸腰となり、戦意を喪失している者を引見するときは、どうしても気が緩む。そこに、付け入るスキが生まれる。己が全力の力を込めて、アガルタ王を殴りつける。周囲の兵士も黙ってはいないだろうが、あの華奢な体だ。数発も全力の拳を叩き込めば、命を奪えるだ

ろう。むろん、ラッカー自身もただでは済まないだろうが、兵士の武器を奪い取り、暴れるだけ暴れれば、アガルタ軍に少なからず被害を与える自信はある。そんな中で命を落としたとあれば、サブクリナー王国の名に傷が付くことはないだろう。運よく、馬でも奪って逃げおおすことができたならば、儲けものだ。そのときは、正々堂々とヴィエイユ様に愛を告げ、その体を抱きしめるのだ。ヴィエイユ様は、おそらく自分を殺すだろう。だが、あの体を抱きしめて死ぬのであれば、それはそれで本望だ。

だが、その夢も泡と消えてしまった。死ぬこともできずに、囚われの身となってしまった。アガルタ王は、自分の命を奪わないと言った。この先、国へ帰ったとしても、誹りは免れないだろう。それよりも、おそらくもう、二度とヴィエイユ様に会うことはないだろう。

会わなければ、忘れる……。家来たちが何度も言って聞かせてくれた言葉が頭の中をよぎる。確かに、会わなければ、ヴィエイユ様への思いは薄らいでいくだろう。この苦しみから解放されると思うと、少しホッとする反面、ヴィエイユ様なしの人生を、この先どう歩めばいいのか……。何の希望もなく、ただ、生きる屍のごとき日々を送らねばならないのかと考えると、彼はため息をつくほかなかった。

いつまでも寝ているわけにはいかない。ラッカーはベッドから離れ、部屋を出て、風呂場に向かう。

部屋には誰も居ない。元々ここは、ドルガの街を警備する隊長が詰めていた部屋だと聞かされていた。ベッドルームに風呂場、トイレなど、生活に必要な最低限の設備が整っている。とはいえ、その建物の中にいるのは、ラッカー一人だ。彼の人生の中で、家来が一人もいない生活など、初めてのことだった。

ある種の新鮮さを覚えながら、彼は風呂場で裸になり、水瓶から水を汲み、頭からかぶっていく。ふと見ると、部屋の隅に、体を拭くための布と、着替えが準備されていた。昨夜は……風呂にも入らずに寝たのだった。そんなことを思いながら、一心不乱に水をかぶる。そして、体を拭き、新しい服に身を包んで、部屋を後にした。

風呂場を出ると、大きなテーブルのあるダイニングが目に入る。そこには、いつの間にか、鎧姿の兵士が控えていた。その気配に全く気付かず、ラッカーは思わず驚きの表情を浮かべた。

「昨夜は、よく眠れましたか？」

小柄な、髭面の男が笑顔で話しかけてきた。確かこの男は、クノゲンと名乗る、アガルタ軍の総司令官だ。

「いきなりこの部屋に連れて来られて、戸惑いもあったでしょう。まあ、ゆっくりなさってください。朝食をお持ちしました」

兵士たちが、テーブルの上に食事を並べていく。

「食事は三度、こちらに持って参ります。着替えと汚れた洗濯物は、朝に回収と交換をいたしますので、ご協力のほどを」

まるで旧友に話しかけるかのような口ぶりだ。一国の王に対する対応ではない。だが、自分は囚われの身なのだ。文句を言う資格はない。

そんなことを思いながら、黙って椅子に座るラッカーに、クノゲンはさらに言葉を続けた。

「明日の午後、リノス様がこちらにお見えになるそうです。それまでは、ゆっくりとお寛ぎください」

アガルタ王が明日、自分の許にやって来る……。その意図が、ラッカーには全くわからなかった……。

第五百三十八話　回数こそ大事

クノゲンが言っていた通り、アガルタ王リノスは翌日、ラッカーの許を訪れた。

勝者が敗軍の将の許にやって来る、という行為は、ラッカーにとっては予想もしない出来事だった。通常であれば、自分を召し出せばいいのだ。わざわざ、軟禁されている部屋にやって来る必要はない。一瞬、アガルタ王は自分に死を与えるために来るのではないか、そんなことを疑ってみたが、それなら尚更、部下にやらせればいいことであって、わざわざ王自ら出向くことなどない。それに彼は、ラッカーの家来たちの前で、お前たちの王の命は保証すると約束しているのだ。単なる口約束で、気が変わって……ということも、考えられないではないが、世情では、この王は約束したことは必ず守ると言われている。おいそれと、自分の命を奪うことはないだろう。

そう考えると、ますますアガルタ王がこの部屋にやって来る意図がわからない。

「いや、すみませんね。お寛ぎのところ」

クノゲンに案内されて入室してきたリノスは、ラッカーの顔を見るなり、そんな挨拶を交わした。勝者が敗者を引見しているのにもかかわらず、なぜ、アガルタ王がこんなへり下ったものの言い方をするのか、ラッカーの頭は混乱していく。

さらに、彼の頭を混乱させたのは、アガルタ王が二人の女性を伴っていたことだ。一見して、二人は女性であるということはわかった

が、そのうちの一人は、ローブのような衣装を着て、フードを目深くかぶって顔を隠していた。ローブを着込んでいるとはいえ、小柄で、華奢な体つきであることが見て取れたことから、この者は女性であると判断していた。

一方のもう一人の女性……。これは、目が覚めるほどに美しかった。何とも色気のある眼。そして、豊満な肉体……。まるで、体のラインを強調するかのような薄手の衣装を纏ったその姿に、ラッカーは少なからず欲望を覚えた。

「あ、紹介しますね。こちらは、妻のソレイユです」

「アガルタ王リノスの妻、ソレイユでございます。以後、お見知りおきを」

女性はそう言って、恭しく一礼する。アガルタ王の妃と聞いて、ラッカーは冷静さを取り戻した。サブクリナー王国の王として、威厳ある対応をせねばならない、そう考えて背筋を伸ばしてみたものの、頭を下げたソレイユの、胸の谷間がモロに目に入ってくる。ラッカーは必至で自制しようとしたが、くぎ付けになったその視線を外すことはできなかった。

シドロモドロになりながら、やっとのことで、紋切り型の挨拶を交わす。ラッカーは、アガルタ王が何を言い出すのか、少し緊張した面持ちでその言葉を待っていた。だが、リノスは、この部屋の居心地はどうだ、とか、食事は口に合うか、などと、至極どうでもいいことばかりを聞いてくる。業を煮やしたラッカーは、思い切って、彼の真意を聞こうと口を開いた。

「ところで、本日お見えになられたのは、どのようなご用件であろ

うか？」

リノスは一瞬、オホンと咳払いをしたが、やがて、隣に控えているソレイユと視線を合わせると、ゆっくりとラッカーに向かって口を開いた。

「実はですね、一つ、相談したいことがあるのです」

リノスは横を向いてスッと頷く。すると、ローブを着込んでいた小柄な女性が、ゆっくりとフードを取り、その顔を見せた。その瞬間、ラッカーは言葉を失った。

……目の前には何と、ヴィエイユが座っていたのだ。

◆　◆　◆

ソレイユが、お任せ下さいと言った次の日、彼女は一人のサイリュースを屋敷に連れてきた。

「この者は、リジアと申します。イリサルほどではありませんが、この子も火の精霊と契約していまして、炎を操ることができます」

リジアと呼ばれたサイリュースは、少し照れたような表情を浮かべながら、頭を下げた。

「この子も、そろそろ、子供を授かりたいのです」

「あの……そんなことを、俺に頼まれてもだな……」

「ウフフ、リノス様にお願いしているのではありません。そこはご

安心ください」

「そ、そうか。すまない、色々とややこしくなる状況を想像してしまった」

俺は咳払いをして、居住まいを正す。ソレイユはそんな俺を楽しそうに眺めている。からかうんじゃないよ、全く。

「この子も、何人かの殿方と交わって、色々と努力をしているのですが、なかなか思ったような結果がでておりません。そこで、昨日お話しいただいたラッカー様の許に、この子をお仕えさせてはと思ったのです」

「え？　待て。いや、それは止めた方がいいんじゃないかな。ヤツは、変態だぞ？」

「変態……。ウフフ、別に、加虐的な嗜好がある御方ではないのでしょう？　単に性欲が旺盛なだけでございましょう？」

「まあ、それはそうだが、旺盛といっても、俺たちの想像をはるかに超える化け物だぞ？　言ってみれば、マシーンだぞ、あれ？」

「ましーん？」

「いや、その、何だ。まあ、実際のヤツのプレイを見たわけではないから、絶対とは言い切れないが、それでも、考えていることは、かなりのアレだぞ？」

「考えているだけで、実際のところはわからないでしょう？　ですが、お話を聞いたところ、ラッカー様はかなりお強くていらっしゃ

るご様子。で、あれば、そちらの方が、我々としては理想的なのです」

「え？　そうなの？」

「回数……」

「え？　何だって？」

リジアと呼ばれた少女が、小さな声で呟く。これも予想していなかった言葉だったので、思わず聞き返してしまった。

「回数を重ねないと結果は出ない。持続力はないに越したことはないけれど、大事なのは回数。一日に十回以上できるのが理想」

「じゅ……十回って……まさしくマシーンじゃないか。そんなことできるヤツ、いるの？」

「まあ、リノス様の口からそんな言葉が出るなんて、意外ですわ」

「待て、ソレイユ。俺はそんな獣じゃないはずだ」

「セイサムを授かったときなど、それは、もう……」

「あーあのときね」

そうだ、呪いがかかっていたのだ。確かに、あのときは性欲にハイパーブーストがかかっていたが、そこまでではなかったはずだ。いや、一晩中だったから、回数としちゃ……。

「う、オホン」

「つまり、我々サイリュースは、それ程、子供を授かる可能性が低い種族なのです」

いつしか、ソレイユの表情が真面目なものになっていた。その話は以前、聞いたことがある。

「そのために我々は、男性を虜にする術を磨いてまいりました。このリジアも、相応の能力を身に付けています。我々サイリュースには、火の精霊と契約できる者はわずかしかおりません。この子の子供には、その能力が受け継がれる可能性が高いのです。それゆえ、一族にとっても、この子の将来は、とても大切なのです」

ソレイユの言葉に、リジアは大きく頷く。単にエロだけではないようだ。

「それに、お相手となる御方の能力も重要です。聞けばラッカー様は、王としては優秀な御方とか。リノス様がそう言われるのであれば、まことなのでしょう。であれば、このリジアのお相手として、問題ございませんわ」

「そうか……。ただ、問題は、ヤツがリジアを気に入るかだが……。サイリュースには優れた術があるが、ヤツも今は、かなり重い恋の病を患っているからな……おいそれと、他の女性に気移りするかな？　拒否された場合は、どうするんだ？」

「その心配はございません」

ソレイユは自信満々に答える。彼女はスッとリジアに視線を向ける

と、ニコリと微笑んだ。

「よくご覧ください、リノス様。このリジア、誰かに似ていると思いませんか？　髪型と……髪の色を金色に変えれば、あの方に似ていると思いませんか？」

「うん？　髪の色を金色に……？」

俺は目を細めて、じっとリジアを眺める。

「あ、もしかして、意外と、ヴィエイユに似ている？」

俺の言葉に、ソレイユは大きく頷いた。

第五百三十九話　仕官先

一瞬、ラッカーの呼吸が止まった。思わず、ヴィエイユ様と声を上げそうになったが、すんでのところで自重する。こんなところに、ヴィエイユ様がおいでのわけはないのだ。そう思い直して、彼は再び背筋を伸ばす。

「これは……アガルタ王の姫君であられたか……」

「姫……？　いや、俺に、こんな大きな娘はおりません。妻のソレイユの里の者です」

「この者は、リジアと申しまして、サイリュースの里におりましたものでございます。この度、そろそろ里の外に出して、研鑽を積ませることとなりました。つきましては、よい主人にお仕えさせたく色々と思案しているところなのです」

ソレイユが、艶めかしい視線をリジアとラッカーと交互に向けながら、口を開く。その様子を見ながらラッカーは、ごくりと唾を飲み込む。

「では、誰ぞに仕えたいと……」

「はい……」

ラッカーの言葉に、リジアが毅然とした態度で答える。そんな彼女を横目で見ながらリノスは、髪の色と衣裳を変えるだけで、こうもヴィエイユに似るものかと、心の中で感心する。一体、どこで学ん

だのか、返事をするとき、少し小首を傾けるヴィエイユの癖まで、そっくりと身に付けていたのだ。

目の前のラッカーは、平静を装ってはいるが、折に触れて目が泳いでいる。動揺しているのが、丸わかりだ。そんな中、扉がノックされ、クノゲンたち数名の兵士が入室してきた。手には何やら、お膳のようなものを持っている。

「何もおもてなしはできませんが、よければ、お召し上がりください。私のむさくるしい給仕は、どうぞご勘弁を」

そう言って彼は、お膳をテーブルの上に並べていく。そこには、見たこともないような料理が並んでいく。そして、彼の傍には、美しい白磁の壺と、盃が置かれた。

「さ、リジア。ラッカー様にお酌を。これは、我がサイリュースの里で作ります酒でございます。どうぞ、ご賞味くださいませ」

ソレイユに促されてリジアは立ち上がり、ラッカーの傍に寄る。だが、彼は顔を強張らせながら、まるで喘ぐようにして、言葉を絞り出す。

「いっ、いや、我は……酒など……」

「ご遠慮には及びません。ラッカー様は、お酒には大変造詣が深いお方と聞いております。我がサイリュースが作りますお酒……。是非、そのご感想をお聞かせ下されば、嬉しく存じますわ」

「あ……ああ……」

まるで夢遊病者のように、呆然とした面持ちで、彼は盃を手に取る。
リジアはゆっくりとその盃に酒を注ぐ。ラッカーは、呆けたようにリジアを眺めながら、手に持つ盃を口元に運んだ。

……体の芯が、カッと熱くなった。その直後に、鼻腔に何とも言えぬ芳香を感じる。強い、だが、美味い酒だ。ちょっとした甘みを感じる。……好みの酒だ。これならば、いくらでも飲めそうだ。

空いた盃に、リジアはさらに酒を注ぐ。ラッカーはリジアに視線を向けたまま、ゆっくりとそれを飲み干す。するとまた、リジアは盃に酒を注ぐ。それを再びラッカーは口元に運ぶ。

「リジア、そんなに飲ませてしまっては、ラッカー様がお倒れになってしまうわ」

「これは、失礼いたしました」

「いっ、いや……美味い酒だ……。我は……このくらいでは酔うことはない。心配なされるな……」

「でもラッカー様、顔に赤みが差しておりますわ」

「こっ、これは……酒ではなく、その……」

「まあ、リジアの美しさに、照れておいでですの？」

「いっ、いや、そんなことは……」

「ウフフ。正直な御方……」

ソレイユとラッカーのやり取りを見ていたリジアが、くすくすと笑う。

「おかしい……」

その笑顔に、ラッカーは記憶があった。これは、ヴィエイユ様が、アガルタ王と話をしているときにだけに見せる笑顔だった。二人で何かボソボソと話をしているときに、不意に漏らすその笑顔……。その、天使のような笑みに、ラッカーは何度癒されたことだろうか。あの笑顔を手に入れたい……。日夜思い描いたあの笑顔が、目の前にあるのだ。彼の鼓動は高鳴った。

「もっ、もし、よければ、我がサブクリナー王国で仕えてみなさらんか？」

思わず口に出してしまった。ラッカーはしまったと思いながら、リジアから視線を逸らせる。自分は今、囚われの身なのだ。そんな男に、そのようなことを言う資格など、ない。

「ありがとうございます。しかし……」

ソレイユが口ごもる。確かに尤もだ。戦に敗れた者のところへなど、大事な同胞を向かわせることなどありえない。だが、どうしてアガルタ王夫婦は、自分にこのリジアを目通りさせたのだろうか。そんな疑問を持ち始めたそのとき、ソレイユがさらに言葉を続けた。

「リジアにつきましては、クリミアーナ教国からもお誘いを受けておりまして……」

「なっ、ああ。教皇聖下の許でお仕えするのであれば、それが一番

であろう」

「それが、ヴィエイユ様ではなく、ライアガート枢機卿という御方なのです」

「なっ！？　ライアガート！？」

「はい。何でも、ヴィエイユ様の傍近くにお仕えされる方と聞いております。先だって開催された学会では、要人警備の責任者に任じられたお方と伺っております。このお方から、リジアを仕えさせないか……。留学という形で、ライアガート様のお住まいで寝起きしながら、アフロディーテで色々と学んではどうかと、熱心にお誘いを受けているのです」

「ヤツになど、やらぬ！」

気が付けば、ラッカーはリジアの手を握っていた。思わず手を離して俯く。そんな様子を、ソレイユは笑顔で見守っている。

「実は、本日、お邪魔しましたのは、ライアガート様のことをお尋ねしたかったのです。リジアは私にとりましても、妹のような者でございます。できますれば、この子を大切にしていただける御方の許に行かせたく思いますので……」

ラッカーは必死で呼吸を整えながら、ライアガートという男が、いかに卑屈で、女々しく、教皇であるヴィエイユ様の権威をかさに着た小心者であるかを説明した。そして、ラッカーが治めるサブクリナー王国が、いかにリジアにとって有益であるかを話し、もし、サブクリナーに来るのであれば、王たる自分が責任をもって世話をしようとまで言ってのけた。すでに、ラッカーの脳裏からはヴィエイ

ユの存在は消えていた。喋るうちに、ラッカーは自分の説明に酔ってしまい、男とはいかにあるべきか、と持論を展開する始末だった。そんな彼を、ソレイユとリジアは優しい眼差しで眺め続けている。

「じょ、条件を承ろうではないか！」

「え？」

いきなりの話で、驚いて目を丸くする二人を見ながら、ラッカーはリノスに視線を向ける。

「今、我は囚われの身である。我を解放し、国に帰還せしめるための条件を承りたい」

「条件……ですか？」

「領土か、金か」

「いや、俺はどちらも興味がないです」

「まさか……我の首、と言われるのか？」

「いえいえ、そんなことは全く考えていません。いや、好きな時にお引き取りいただいて結構です。確かに、ヒヤマはあなた方によって占領されましたが、俺たちの損失は実質ゼロです。別に何か償いをしてもらおうとは思っていません。すでにあなたは、数名の部下を失い、こう言っては何だが……ヴィエイユとの関係も距離ができるでしょう。それだけのペナルティーが科されているのですから、特に俺から何か求めるものはありません。それよりも、あなたの帰りをひたすら待つ家来がいると聞いています。クノゲン！」

リノスから声が上がると、すぐさま扉がノックされ、クノゲンが入室してきた。

「クノゲン、ラッカー王の家来たちは、どこにいる?」

「はい。総司令官のサネナ殿が数名のご家来と共に、ヒヤマの港の沖でずっと待機しています」

「早く、あなたを慕うご家来の許に帰ってあげてください。いや、あなたをここにとどめおいたのは、このリジアをどこに仕えさせようかという相談に乗ってもらいたかったのです。つまらないことで、時間を取らせましたが、まあ、このリジアは、あなたに仕えさせるのがよさそうですね。どうぞ、大事にしてあげてください。敢えて言えば、俺の要求がこれだと思ってください」

そう言って、リノスは立ち上がる。

「あなたの帰国を待って、リジアをそちらに向かわせます。今後ともどうぞ、よしなにお願いします」

その言葉にラッカーは、目を丸くしたまま、ゆっくりと頷いた。

第五百四十話　解放

ラッカーは程なくして、サブクリナー王国に帰国した。王都では数万の民衆が出迎えて、その帰還を祝った。その光景は、ラッカーの心に深く刻み込まれた。

大歓声の中、彼は居城へと通じる道を、馬に乗ってゆっくりと進む。そのすぐ後ろを、総司令官のサネナがピタリと付いている。

「ご覧ください、この民衆たちを。この国に住む者は皆、国王様をお慕い申し上げておるのです」

サネナのその言葉の裏には、ヴィエイユに執心せずに、国内の事柄にもっと目を向けよという諫言が隠れていることを、ラッカーは理解していた。それは痛いほどにわかっている。国内には問題が山積していて、すぐに対応せねばならない問題も多かった。特に、ルワザン島のレイス火山で起こった大噴火は、この国にも影響を与えていて、とりわけ農作物への影響が懸念されていたのだった。学者たちの話では、向こう数年間は不作になるだろうと言われているのだ。

だが、頭ではわかっていても、やはり、ヴィエイユ様のことを思うと、心が張り裂けそうになる。一瞬だけでも、一目だけでも会いたい……。いや、会えずとも、ヴィエイユ様がおわす、教皇神殿に行きたい。行けば、中に入りさえすれば、ヴィエイユ様と顔を合わせる可能性はある……。

ラッカーはふと、我に返る。目の前には、相変わらず声援を送る民衆たちがひしめいている。そんな彼らを前に、ヴィエイユ様のこと

を考えてしまった自分が情けなく、彼は思わず苦笑いを浮かべるのだった。

リジアがラッカーの許に到着したのは、それから、十日ほど経ってのことだった。

リジアがたった一人で居城に到着したと聞いて、ラッカーは驚きを隠さなかった。アガルタからサブクリナー王国まで、船で十日はかかる計算だ。しかも、彼女は一人で船を乗り継いでここまでやって来たのだと言う。サイリュースとはいえ、女性であることには変わりがない。女性が一人、船旅をして、全く遅れることなく、十日で到着したその行動力に、ラッカーはいたく感心したのだった。

到着して早々、目通りしたリジアは、居並ぶ家来たちの前で、堂々とこんなことを言ってのけた。

「この国に来るまでに、色々な国を見てまいりましたが、この、サブクリナー王国は、とても美しく、私はとても気に入りました。多くのことが学べそうな気が致します。非才なる身ですが、よろしくお引き回しのほどをお願い申し上げます。国王様の前でこのようなことを申し上げるのは不躾ですが……私は、この国で骨を埋めてもよいと思っております」

そのあまりにも正直な物言いに、眉を顰めるものも多くいた。だが、若い家来たちは、リジアの美貌に目を奪われる者も多く、これを好機として、彼女に積極的にアプローチをしようとする者も多く見られた。

ラッカーは、そうした動きを見るにつけ、まるでヴィエイユ様が家来たちに汚されるような気がして、我慢がならなくなった。程なく

して彼は、リジアを後宮で学ばせると発表した。表向きは、皇后付きの女官として仕えさせるという名目だったが、彼の好色さを知る家来たちは、一人もその言葉を信じなかった。後宮には十人もの側室がいるが、その中に、リジアというサイリュースが一人加わったのだと、誰もがそう思ったのだった。

ラッカーは、リジアに手をつけないでおこうと心に決めていた。彼女はアガルタからの預かり者だ。そんな彼女に手をつけたとあっては、周囲の聞こえが悪い。彼女は後宮でしばらく行儀見習いをさせるのだ……。

しかし、事は彼の思い通りには進まなかった。後宮に住む彼の妻たちは、リジアを彼の寝所に召すことに反対するどころか、全員が賛成するありさまだった。彼女らからしてみれば、強い性欲と共に、キツイ体臭、そして、流れ出る彼の大汗にまみれながら過ごす夜は、苦痛以外の何物でもなかった。そのため、彼女らは結託して、リジアに王の寝室に向かうよう勧めたのだった。

武勇優れた王として、民衆の人気を集める彼だが、不幸なことに、家庭には恵まれていなかった。

夜、寝室に向かおうと廊下を歩くラッカーの目の前に、不意にリジアが現れた。彼女は白い衣装を纏っていて、それは、ヴィエイユがいつも着ている服のデザインに酷似していた。ラッカーは一瞬、ヴィエイユ様がおいでになったのかと錯覚したほどだ。すぐにそれはリジアだと気が付いたが、彼はもう、心の中に湧き上がる欲望を抑えることができなかった。

ラッカーは無言でリジアの手を取ると、そのままベッドルームに連れ込んだ。

リジアはすべてのことを承知していた。ラッカーに命じられてもいないのに、淡々と服を脱ぎはじめた。

ラッカーは見ていた。サイリュースは絶世の美女だという評価を得ているという。確かに、それだけの容貌姿態の持ち主だ。それだけではない、どの角度から見ても、ヴィエイユ様によく似ている。きっと、あのお方も、こんなふうに脱ぐのだろうと思わせるような振る舞いだった。リジアの体は、彼が肌を重ねたどの女性よりも、遥かに凌駕したものだった。ラッカーの鼓動が高くなっていく。

ラッカーは裸になった。

リジアはためらうことなく、彼の前に跪いた。すでに男を知っているのか、彼女はラッカーが命じる前に、彼が望むことを汲み取って動いていた。ラッカーはその察しの良さに驚きながら、彼女の動きをじっと見ていた。

……もしかすると、ヴィエイユ様も、アガルタ王に、こんなことを？

一糸まとわぬ姿で、アガルタ王の命令に唯々諾々として従うヴィエイユ様の姿が脳裏をかすめた。その瞬間、彼の心の中に、激しい嫉妬の炎が燃えあがった。

ラッカーはリジアをベッドに横たえた。

小さいが、形の良い乳房に唇をつけた。リジアの体が震えて、高いうめき声を立てた。しばらくすると、リジアは下半身を激しくくねらせた。上下左右に尻を振っている。うめき声が、叫び声にかわりつつある。

ラッカーは、時間をかけてリジアの体を賞味した。彼の舌が届かないところはなかった。リジアは忘我の境地にあるように、ずっと叫び続けている。

ラッカーはリジアをうつ伏せにした。盛り上がった尻だ。体の正中線が見事だった。金髪が躍っている。

ややあって、リジアの叫び声が途切れ途切れになった。どのくらい、彼女の声が響き渡っていただろうか。突然、ラッカーの獣のような咆哮が聞こえたかと思うと、部屋は静寂に包まれた。

ラッカーはリジアの体を抱きしめながら、この女性の体を自由にしているつもりで、実は彼女に自由にされているような夢路を辿っていた。リジアは、ほんの一呼吸か二呼吸するだけの休息をとると、以前にも増して、激しくラッカーにそれを求めた。

リジアとの肌の触れ合いの面積が広がり、何もかも彼女の肌に包み隠されてしまったように、ラッカーには感じられた。リジアの限りなき愛撫は休む暇なく続けられた。

リジアは、ラッカーの男としての能力を繰り返して呼び起こす法を知っていた。それは秘儀とも言えようか。身を捨てた奉仕と表現したらよいであろうか。ラッカーは女性という海の中に溺れ果てたような気持になった。

どれほどの時間が経っただろうか。飽きることのないリジアの体の感触をまるで呆けたように味わいながら、ラッカーは女性の体の偉大さを知った。選ばれた女性の体は、男をひれ伏させる力を持っている。男に君臨する、異様な神韻を秘めている……。

そんなことを思いながら、ラッカーはリジアの体を抱きしめたまま、深い眠りに落ちた。

第五百四十一話　ヴィエイユ、焦る

「サイリュース？」

思わず頓狂な声を上げてしまった。ヴィエイユは、自分を落ち着かせるために、小さく咳払いをして、手元の報告書にもう一度、視線を落とした。

およそひと月前、ラッカーの許にサイリュースが迎えられた。その後、彼は昼となく夜となくこのサイリュースを愛撫しているのだという。

「何ということ……」

ヴィエイユは思わず天を仰いだ。サイリュースと言えば、アガルタが手厚く保護している種族だ。実際、アガルタ王の許には、サイリュースの族長の娘が嫁いでいる。しかも、その種族は男性を虜にする手練手管を身に付けていると言われている。そのサイリュースに、あろうことか、ラッカーが篭絡されたのだ。ヴィエイユにとってはまさに、お株を奪われた形だった。

「ひと月……」

ヴィエイユは、目を閉じたまま誰に言うともなく呟く。そんな彼女を、数名の枢機卿が不安そうな表情で見守っている。

まさか、そんな女性がいるとは……ヴィエイユ自身、予想もしていないことだった。

ラッカーが皇后をはじめ、数ある側室から避けられていることは、かなり前から把握していた。サブクリナー王国の教徒は、国王の居城深くにも入り込んでいて、ラッカーの動きは逐一報告されていた。むろんこれは、サブクリナー王国に限ったことではなく、クリミアーナ教を信仰する国はもちろん、それ以外の国においても教徒が王の傍近くに入り込み、情報収集にあたっているのだ。

彼を取り巻く女性たちは、できるだけ彼と肌を合わせないように、色々と苦心していた。たとえ、彼に召されたとしても、なるべく早くその時間が終わるように願っていた。そのため、ラッカーは常に一抹の寂しさを心に抱えていたのだ。

権力で女性の体を自由にすることはできても、その心まで自由にはできていない。そこがラッカーに付け込む隙であり、ヴィエイユはそれを上手に利用して、彼の心を掴んできたのだった。

しかし、サイリュースはそんな彼を受け入れ続けている。ラッカーの心の隙を埋めているのだ。しかも、その女性は、ヴィエイユ自身に酷似した容姿をしているのだという。唯々諾々としてラッカーに従う、自分に似た女性……。ラッカーの心がこちらに戻っては来ないのは、火を見るよりも明らかだった。

このサブクリナー王国は、後宮のすべてを取り仕切る総取締役を務める女性が敬虔な教徒だった、彼女は、一変したラッカーの閨房での生活を詳細に報告してきていた。

まるで、獣のような姿態がそこには書かれてあった。タガが外れたかのように、ラッカーはサイリュースの体を何時間にもわたって愛撫し続けていた。特に、尻への執着は常軌を逸していた。その様子

は、ヴィエイユをして、一気に読み進めることができずに、数回、報告書から視線を外したほどだ。ラッカーには、その異常性だけでなく、巨大な体から発せられる体臭や大汗といった難点もある。それらに何時間もまみれながら攻められるというのは、ヴィエイユにしてみれば、身の毛もよだつ行為だったが、彼の許に仕えているサイリュースは、ひと月間もその状況に耐え続けているのだ。これは、ラッカーの体質や体臭を問題としていないと考えるのに十分だった。

ラッカーのサブクリナー王国は、教都・アフロディーテの西側に位置していて、教都の要となっている。ここがアガルタに靡いたとなると、ヴィエイユにとっては、喉元に刃を突き付けられたも同然となるのだ。

「今の、サブクリナー王国の状況は？」

「ハッ。宰相であるエンパス様が滞りなく進めておいでです」

「エンパス様、あとは……サブクリナー王国軍の参謀長であるリオネット様、プラボム教育総監に対して、教皇親書を発行します。早急に届けてください」

「きょ、教皇親書を、臣下の者に発行されるのですか！？」

「何か問題でも？」

「畏れながら……教皇親書は、国を代表する者、すなわち、国王や皇帝に発行されてまいりました。臣下の者に発行された前例は、ございませんが……」

「前例にこだわっていては、何もできなくなります」

「しょ、承知いたしました」

動揺しながら頭を下げる枢機卿を一瞥したヴィエイユは、すぐさま紙とペンを取り出し、カリカリと何かを書き始めた。そして、ひときわ大きな金印を取り出して、ゆっくりと押印したのだった。そこには、こんな文言が書かれていた。

『ラッカー様のご様子が優れないと聞き、心を痛めております。この上は、遠くアフロディーテの地で、ラッカー様が一日も早く回復されることを主神様にお祈り申し上げます。その間、王を助け、国を導いている貴君の働きに、大きく心を打たれております。貴君はサブクリナー王国の柱石です。主神様のご加護がありますよう、私よりも偏に、お祈り申し上げます』

……この親書がどれほどの効果を発揮するのかはわからないが、ひとまず、政治と軍の高官を抑えたことで、あの国に楔を打つことはできるだろう。

枢機卿らを下がらせたヴィエイユは、執務室で一人、目を閉じたまま天を仰いだ。

ここ最近、物事が思い通りに進んでいない……。メイリアスの抱き込み、シンの心離れ、そして、ラッカーの心変わり……。事が思い通りに進まないだけならまだいい。だが、状況はヴィエイユにどんどん不利な方向に進んでいっているのだ。

まるで、真綿で首を締められるような感覚……。この先、アガルタはどんな手を打ってくるのか、皆目見当もつかない。何と言っても、あの王には全くと言っていいほど野心がない。それだけに、ヴィエ

イユは対処に困るのだ。彼女は、人の欲や隙に付け込むことで、その地位や勢力を拡大してきたからだ。

領地、金、女性……。およそ、世界の王たちの持つ欲望はこの三つに分類される。だが、アガルタ王は、そのどれにも興味を示さない。それは言うまでもなく、それらの欲が全て満たされているからだ。旧ジュカ王国の広大な領土をそっくり継承し、さらにそれを発展させている。その上、周辺国とは強固な同盟関係を築いているために、直接侵略される危険性は少ない。さらには、五人の美女が傍に侍り、性に関する欲望も十分に満たされているようだ。

そのアガルタを支配下に治めることができれば、この世界を制覇したのも同然となる。アガルタ王の心を奪えるのであれば、この体を差し出すことは問題ではない……。これまで、何度も繰り返してきたことだが、全く成功の糸口すら見えない。

正直、ラッカーが篭絡されてしまったのは、大きな誤算だった。彼がこのままクリミアーナ教国と距離を取り、最悪の場合、クリミアーナを裏切るとなると、それは大きな脅威となる。

……ラッカーを傍近くに置いておくべきだったか。ヴィエイユは一瞬、そんなことを考える。手を握りながら、甘い言葉をささやいておけば、こんな状況にはならなかったのではないかと考えてはみるものの、それをしては、自分自身の身を危険にさらすことは、報告書を見るまでもなく想像がつく話だった。

……止まってはいけない。止まっていては、状況が好転することはない。不利な状況に置かれたのであれば、とにかく動くのだ。動けば、突破口が見えてくる。

ヴィエイユの脳裏に突然、そんな言葉がよぎった。これは、祖父である、ジュヴァンセル・セインがいつかの時に口にしていた言葉だった。

……まさか、こんなときに、あのおじいさまの言葉を思い出すなんて。

ヴィエイユは一人、苦笑する。あれだけ憎んだ祖父が、まさかここに来て知恵を貸してくるとは……。何とも皮肉な話だと思いながら、彼女はゆっくりと目を開ける。すると、壁に掛けてある巨大な世界地図が目に入った。

……さしあたって、動くとすれば、どこの国かしら？

ヴィエイユの聡明な頭脳が、ゆっくりと次なる対象を探し始めた……。

第五百四十一話　ヴィエイユ、焦る（後書き）

横恋慕編、ここで一旦終了です。間話二話を挟みまして、七月より新章に入る予定です。今のところ、ヴィエイユをまだ描きたいという欲求がありますので、次章も彼女が登場する予定です。どうぞ、お楽しみに！

第五百四十二話　大公と大公妃

砂漠の中を、一台の馬車が走っていた。その中には、一組の老夫婦が無言のまま座っていた。

夫の肌は浅黒く、顔に刻まれた深い皺は、それまでの人生の苦労がありありと現れていた。一方の妻はいわゆる犬獣人で、夫と同様、その顔には深い皺が刻まれているが、目に讃えられた優しい光は、この女性が慈愛に満ちた人であることを示していた。

炎天下の中、馬車は速度を落とすことなく進んでいく。やがて、その行く先には大きな街並みが見えてきた。

「あなた……」

女性が思わず呟く。男は無言で徐々に迫ってくる街並みを眺めていたが、やがて、絞り出すように口を開いた。

「三十五年、ぶりか……」

その声には、万感の思いと戸惑いが入り混じった、複雑な思いが込められていた。

馬車に乗っているのは、サンダンジ王国の国王、ニケの長男であるシンと、その妻のジャニスだった。シンにとっては、三十五年前、新・クリミアーナ教国の教都、アフロディーテにおいて、父・ニケの前でジャニスと結婚し、王太子の位を降りると宣言してから、初めての帰国だった。

アガルタ王リノスとその妻、メイリアスの説得もむなしく、ニケは頑として二人の結婚を許さなかった。そのうえ、ニケはシンに使者を遣わし、親子関係の断絶を宣言して、王族の身分を剥奪するとともに、国外追放を言い渡したのだった。もはやお前とは親でもなければ子でもない。この先は自由に生きて野垂れ死ぬがいい。ニケは使者を介して、そんな言葉を伝えたのだった。

ニケの態度は一貫して強硬だった。シンを着の身着のままで放り出しただけでなく、一切の援助を行わなかった。ニケからしてみれば、この息子のために、多くの国民が命を落としたのだ。その魂に報いることなく、王太子としての責任を全うすることもなく、自分の好きな道を選んだ息子の振る舞いは、サンダンジを預かる王として、到底許せるものではなかった。

むろん、サンダンジ国内では、シンに対して同情する者も多くいた。彼らは、国外に追放されたシンに、せめて「大公」の称号を与えてはどうかとニケに提案した。また、王太子の位を降りたとはいえ、シンはニケ王の血のつながった息子だ。そんな彼が貧苦の末に野垂れ死んだとあっては、サンダンジ王国の名に傷が付く。せめて、日々の生活に困らぬように恩給を支給してはどうかと提案する者も多かった。

しかし、ニケは頑として首を縦に振らなかった。その理由は、ニケ王の妻である、王妃オブワーの強い意向も働いていた。彼女は、シンに「大公」の称号を与えれば、自ずとその妻であるジャニスは「大公妃」となる。それだけは、何としても認められぬといって譲らなかったのだ。

王妃にしてみれば、妻のジャニスは、憎しみの対象以外の何物でも

なかった。手塩にかけて育てたかわいい息子を寝取った女……。それが、どこぞの国の王族であるならば話はわかる。だが、ジャニスは単なる平民の娘だ。そんな氏素性もわからない女に、この国の王族の一員として迎え入れるなど、到底受け入れられぬ。それこそ、サンダンジ王国の恥となると、ニケの前で繰り返し息巻いたのだ。そんなこともあって、結局シンは、何の支援もないまま国を追われたのだった。

だが、当のシン本人はそのことについて、全く意に介することはなかった。むしろ、ジャニスと共に医療の道に進むことを喜んだのだった。当初は、罪悪感に苛まれたジャニスも、リノスや、妻のメイリアスたちから説得されて、シンと夫婦になる道を選んだ。その後、この二人は、アガルタ大学の研究室で、医療の腕を磨いた。

二人は、あるときを境に、世界中の無医地区を訪れ、そこで医療活動を行うようになった。短くても半年、長いときは数年にわたって滞在し、多くの人々の命を救うとともに、医療に従事できる人材の育成にも努めたのだった。

二人の活動は称賛を受けたが、その内実は、決して楽なものではなく、苦労の連続だった。基本的に彼らは患者から金をとることはなく、その活動は貴族など裕福な家から得る報酬や、寄付などによって賄われていた。そのため、活動当初は常に資金不足に見舞われ、そのために、救える命が救えなかったこともしばしばだった。

また、常に病人と接する生活は、折に触れて二人を病の床に押しやった。伝染病などに罹患することも多く、危篤状態になったことも一度や二度ではなかった。だが、そんなときは決まって、アガルタから救いの手が差し伸べられた。彼らは常に、アガルタ王リノスが見守っていて、その活動は、サダキチたちフェアリードラゴンが逐

一報告していたのだった。

そうしたこともあって彼らは、世界各国で優秀な医師を育てることに成功した。そして、二人が夫婦になってちょうど三十五年が経ったとき、不意にサンダンジ王国から招待を受けたのだった。

それは、シンにとっては祖母に当たる、ゲム王太后生誕百周年記念式典を開催するにあたり、現在のサンダンジ国王であるエベスが、二人を招待したのだった。

すでに父であるニケは隠居しており、ジャニスを激しく嫌ったオブワー王妃は数年前この世を去っていた。エベスは、わざわざ二人に勅使を派遣して、礼を尽くして式典へ招待した。当初は返事を渋っていたシンだが、アガルタ王リノスと王妃メイリアスに説得される形で、サンダンジ王国に向かうことにしたのだった。

サンダンジ王国は、シンが国を出たときと、何も変わってはいなかった。まるで、時間が止まったかのような感覚に陥ったほどだ。彼が子供の頃に過ごした宮殿もそのままで、彼は懐かしさのあまり、しばしの間、動くことができなかった。

「先生、お懐かしゅうございます」

宮殿に入り、謁見の間に通された直後、壮年の男に声をかけられた。二人は最初、この男が誰だかわからなかったが、彼の首筋に刻まれた傷を見て、ようやく思い出した。何と彼は、十数年前に二人が手術をして助けた男だったのだ。そのときはまだ、少年の面影が残る青年だったのだが、それが今や一人前の立派な男に成長していたのだった。

聞けばこの男は、二人が治療を終えてしばらく、世界中を放浪しながら医療の腕を磨いたのだという。そして数年前、ここサンダンジ王国に流れ着き、すでに死期の迫ったシンの母であるオブワーの治療に当たった。それ以降、彼はこの王国で王族付きの医師として活動していて、どうやら、二人の帰国も、この男の口添えが発端となったようだった。

その後、シンたち夫婦は、現王であるエベスに謁見し、丁寧なもてなしを受けた。そして、王族たちとあいさつを交わした。その中には、懐かしい顔も多くあり、彼らは皆、シンとの再会を喜んだ。

不意に、人々の会話が止んだ。気が付くと、白髪の老人が、両脇を抱えられながら、たどたどしい足取りでこちらに向かって来るのが見えた。

「父上……」

誰に言うともなくシンが呟く。その老人は父のニケだった。顔色は悪く、その顔には死相が現れていた。彼の余命が幾ばくも無いことは、火を見るより明らかだった。

ニケは用意された椅子に、大儀そうに腰を下ろした。その直後、シンは無意識に父の手を取り、脈を取った。妻のジャニスも、ニケの前に畏まり、その表情をじっと観察している。

「……アガルタ王は、メイリアス王妃は、息災か」

「私どもも、久しくお目通りしておりませんが……ご息災かと思われます」

「……年を取ったな」

「……お互いさまでございます」

「……我をどう診る？」

「長くもって、三月かと」

「……言うではないか。我の命は、あと、ひと月とは持つまい」

「……」

ニケはシンとジャニスの顔を交互に見比べていたが、やがて、フッと笑みを漏らすと、弱々しい声で口を開いた。

「よくぞ、戻ってきた。最後に、そなたらに会えて、我は、満足だ」

「父上……」

「エベス、ようやった。褒めてとらす」

ニケの言葉に、エベス王は無言で頭を下げた。再びシンに視線を向けたニケは、ニコリと笑みを浮かべた。

「これで、よかったのかもしれぬな。何もかも、これで、な……」

シンとジャニスは、じっとニケに視線を向け続けた。

その後、シンには正式に「大公」の称号が与えられ、妻のジャニスには、「大公妃」の称号が与えられた。そして二人には、サンダン

ジ国王より直々に恩給を出すことが伝えられた。二人はそればかりはと固辞したが、父・ニケの懇願によって、ようやく首を縦に振ったのだった。

ニケはそれからふた月後にこの世を去った。父の死を見届けたシンは、再びサンダンジ王国を出て、無医師地域での活動に戻った。彼にはサンダンジ王国から手厚い支援が行われ、二人の活動はさらに多くの人の命を救うこととなった。

それからさらに十年後、シンとジャニス夫婦は、旅先でこの世を去った。満開の桜が咲き誇るその木の下で、二人は手を取り合いながら、まるで眠るようにして亡くなっていた。そのあまりの美しいさまに、人々は二人をその木の下に埋葬し、その死を悼んだ。

二人が眠る桜は、その後も、見事な花を咲かせ続けたのだった……。

第五百四十二話　大公と大公妃（後書き）

コミカライズ版、第１４話が無料公開中です。リコ様が、かわいい（笑）。

６月３０日まで無料公開中です。是非、チェックしてみてください！
ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ？ｃａｔｅｇｏｒｙ＝１４

Ｐ．Ｓ　次話では久しぶりにりゅーおーくんが登場する予定です。お楽しみに！

第五百四十三話　ツヤのある歌

「白い雲～♪　高き山の峰～♪　春の命が澄み渡る風に乗って運んでくる～♪」

リノスの屋敷の庭先で、機嫌よく歌を歌っているのは、娘のアリリアだ。彼女は庭に咲いている花を摘み、それを器用に編んで王冠を作っている。

「フェアリ～。フェアリ～」

「きゅ？」

名前を呼ばれたフェアリが、お花畑の中からひょっこりと顔を出す。彼女がこの屋敷に来てから丹精込めて育てた花は、毎年見事な花を咲かせるようになっていた。今ではその範囲は広がり、庭の一角は見事なお花畑に生まれ変わっていた。この場所は、フェアリだけでなく、リノス家の家族もお気に入りの場所であり、天気の良い日などは、わざわざお弁当を拵えて、この花を見ながら食事を摂ることもよくあった。

パタパタと羽をはばたかせながら、フェアリはアリリアの許に飛んでいく。アリリアは、今作ったばかりの花で作った王冠を、フェアリの頭の上にスッと載せた。

「これ、あげるね～」

「きゅー」

嬉しそうに、アリリアの傍を飛び回るフェアリ。そんな彼女を嬉しそうに眺めながら、アリリアは再び花を摘みだす。今度は、マミーに編んであげるのだ。

「青い青い空の下～♪　降り注ぐ太陽の光浴びて～♪　大地に命が芽吹いていく～♪」

屈託のない歌声に、フェアリは羽を休めて聞き入る。何とも、心が洗われるような歌声だ。彼女はアリリアが歌う歌が大好きだった。

そんなフェアリと同様に、アリリアの歌に聞きほれている者がもう一人いた。龍王だ。彼は、アリリアから少し離れた場所に立ち尽くしながら、その歌声に耳を傾けている。しばらくすると、彼の前に、忌々しい男が突然現れた。言うまでもなく、リノスだ。彼は龍王にさも、困ったと言った表情を浮かべながら、口を開く。

「またお前か……。気配を感じたのでもしやと思ったが、案の定だ」

「また、とは何だ！」

「いい加減に、ウチの娘をストーキングするのは、止めてもらえないかな」

「すとーきんぐ？　何だそれは？」

「付きまとうなということだ」

「付きまとう？　何を言っているのだ！　アリリアは我に傍を離れるな、そう言っているではないか！」

「ああん？」

リノスは機嫌よく歌っているアリリアに視線を向ける。どう聞いて見ても、単に子供がお遊戯のような歌を歌っているだけにしか聞こえない。

「あのな、龍王。お前、もう少し上手にウソをつけよ。言うに事欠いて、アリリアがお前に離れるな、何て言うわけがないだろう」

「何を言うか！　貴様は耳が悪いのではないか！　よく聞いてみよ。確かに、『龍王よ、決して私の傍から離れてはならぬ』と言っているではないか！」

「……いいや、全く」

「あの、サイリュースを呼べ」

「何？」

「あのサイリュースならば、聞き取ることができるはずだ。貴様では話にならん！」

そう言って龍王はスタスタと屋敷に向かって歩き出したが、すぐにその歩みを止め、リノスの方に振り返った。

「その前に、結界を解除するのだ」

「何？」

「わかっている。貴様がこの屋敷の周囲に我にだけ反応する結界を秘かに張っていることを。それを今すぐ解除するのだ」

「いいや、お前に反応する結界など、張ってはいないが？」

「で、あれば、これは何だ！」

龍王の右腕が銀色に光ったかと思うと、彼はまるで正拳突きのようなポーズで、拳を繰り出した。

「……何をやっているんだ？」

「……器用だな」

「……お言葉の意味が、わかりかねますが？」

「我がクラリオルソ・サエル・リンダパウラオルを放つ瞬間に、結界を解除しおったな？」

「いや、だから、元々結界など張っていないのだが？　それに何て？　クラリ？」

「クラリオルソ・サエル・リンダパウラオルだ」

「もう少し、わかりやすい名前にならんのか、それ？」

「何を言っているのだ！　名前を変えてしまえば、クラリオルソ・サエル・リンダパウラオルにならぬではないか！」

リノスは、思わず天を仰いだ。

龍王は案内も請わずに、ずんずんと屋敷に向かって進んでいく。その姿を見つけたアリリアが、大きな声を上げた。

「あっ！　りゅーおーくん！」

パタパタと龍王の許に近づくアリリア。その様子を龍王は満足そうな表情を浮かべながら頷いている。

「えっ？　マミーを呼ぶの？　いいよ！　じゃあ、座って待っていてね！」

アリリアが全速力で離れに向かって走っていく。龍王はまるで、自分の家かのように、何のためらいもなく勝手口を開けて屋敷に入っていった。

「……ちょっと、教育的指導が、必要かな？」

そんなことを呟きながら、リノスはポキポキと指を鳴らしながら、屋敷に向かって歩き出した。

「まあ、龍王様！　お久しぶりでございます」

リノスが勝手口から屋敷に入ると、ソレイユが息子のセイサムを抱っこしながら、恭しく一礼していた。その後ろから、リコがマトカルの生んだ息子のファルコを抱きながらダイニングに入ってきた。リコはリノスの眼を見ると、ゆっくりと頷いた。ここは自分が収めるので、安心してください……。彼女の眼はそう言っているように見えた。

そうは言っても、リノスとしては、アリリアのことが心配でならない。彼はダイニングに入ると、堂々と椅子に腰かけている龍王の隣に座った。それを見て、リコとソレイユは顔を見合わせていたが、やがて、リノスたちとは向かいの席に二人は座った。アリリアは、リコとソレイユの間に、ちょこんと腰を下ろしている。

「突然の龍王様のお越し……どうなされました？」

「アリリアが我に『傍を離れるな』と言っているのだが、この男にはそれが聞こえぬらしい。そこで、そなたに、我の話が真実であると、この男に言い聞かせてやってほしいのだ」

「まあ……」

ソレイユは一瞬、ぽかんとした表情を浮かべたが、やがて、アリリアに向き直って、どんな歌を歌ったのかと声をかけた。アリリアは、足をパタパタさせながら、先ほど歌っていた歌を歌いだした。

……やはり、リノスの耳には、単なる少女の歌にしか聞こえない。だが、ソレイユは目を閉じて、厳しい表情を浮かべながら、アリリアの歌に耳を傾けている。

「……確かに、『最強のドラゴンよ、我が傍に居て、我を守れ』と聞こえます」

「マジで？」

驚くリノスの隣で、龍王は腕を組みながら満足そうに頷いている。

「俺には、単に子供の歌にしか聞こえないが……リコはどうだ？」

「私も、リノスと同じですわ」

「だよな」

「アリリアには、独特の音域を出すことができますから……」

ソレイユが困ったような表情で口を開く。アリリアは一体何のことだかわからないといった表情を浮かべている。

「貴様らにはわからぬだろう。アリリアの歌は、選ばれし者しか、聞き取ることができぬ。これこそが、心に響く歌なのだ。我に助けを求める心情が、切々と伝わってくるではないか」

龍王は目を閉じたまま、うんうんと頷いている。

「切々とした心情みたいなものは、子供では歌えないだろう」

「負け惜しみか？　確かに、貴様では、これほど心を揺さぶる歌は歌えまいて」

「そんなことはないだろう。演歌なんかいいものだぞ。例えば……」

リノスは、コホンと咳払いをすると、右手の握りこぶしを口元にもっていき、左手の握りこぶしをゆっくりと廻しながら歌い始めた。

「お～だやかっさと～き～びしさンがっ♪　あンのひとンに♪　くっついているぅ～♪」

リノスの歌声を聞いた全員が、驚きの表情に変わった。だが、彼は

それに気づくことなく、さらに歌を続ける。

「海ィわぁ～伊勢ぇのぉ～♪　海は伊勢ぇのお～鳥羽の海ィ～♪」

「やめい！」

突然、リノスに龍王の殺気が向けられた。それと同時に、リノスは龍王に強力な結界を張った。

パアン！

まるで風船が破裂するかのような音が聞こえた。その瞬間、リノスの張った結界が砕けた。そして、それが合図であったかのように、リコとソレイユに抱かれていた子供たちが大声を上げて泣き出した。二人は慌てて立ち上がりながら、子供をあやしている。

「リノス！　何ですの、今の歌は！」

「何って……リコ……。演歌じゃないか。『鳥羽ノ海』って……知らない？」

「リノス様、その歌はちょっと……」

ソレイユが首をすくめながら、まるで懇願するかのように口を開いている。一方のアリリアは、腹を抱えて笑い転げている。

「キャハハハハハ！　おとうさん、今のなに？　おもしろーい」

三者三様の反応を見て戸惑うリノス。そんな彼に、龍王は肩で息をしながら、怒気を込めた声で話しかける。

「貴様、あのような歌、二度と歌うでないぞ！　特にアリリアの前で歌うでない！」

「なっ、失礼な！　なんで演歌を子供たちの前で歌ってはいけないんだ！」

「まるで死へ誘うようではないか！　そのような歌、二度と歌うでない！」

「何だと！？」

「まるで今宵、誰かが亡くなると感じさせる歌だ！」

「今宵誰かが亡くなる歌？　……なるほど、龍王。お前、意外とよくわかっているじゃないか」

「わかっている？　何をだ！」

「要は、ツヤ（艶・通夜）があるってことだろう？」

第五百四十四話　露骨な挑発

ルワザン島のレイス火山で起こった大爆発は、ここ、フォーアル大公国においても、甚大な被害をもたらしていた。

フォーアル大公国は、ルワザン島の西、およそ１５０㎞に位置する島国だった。国土はおよそ、６０００㎢であり、日本でいえばちょうど、山口県と同じ面積であると言えた。四方を海に囲まれていると同時に、島の中央にはキャラット山がそびえていて、そのためか、国土の大半は山林で平野部が小さく、人々は首都であるブーゲに肩を寄せ合うようにして生活していた。

一見すると、貧しい小国に見えるこの国は、山から湧き出る豊富な地下水を利用して棚田を作り、味の良い作物を生産することができた。加えて、四方を囲む海からの海産物や山林から獲れる山の幸のお蔭で、自給自足の生活が十分に維持できていた。

気候も温暖そのもので、風水害などに晒されることもほとんどなく、国家としては比較的安定した運営がなされていた。

しかし、レイス火山の大噴火は、この国の様相を一変させた。降りしきる火山灰は、棚田の作物をすべて枯れさせ、飲み水として利用していた湧き水も、数日間飲むことができない有様だった。

大公国を治めるテイスト大公は、すぐさま対策を講じた。宮殿内に備蓄していた食料と水をすべて、民衆に分け与えたのだ。元々、国の規模自体が小さかったのと、機能的に作られた都市機能も相まって、大公の支援は即座に国中の民衆に対して行きわたったのだった。

一旦、危機は脱したものの、この国の将来には深い闇が影を落としていた。すでに、収穫する予定の作物はすべて壊滅的なダメージを受けていたため、今年の農作物の不作は確定的であり、しかもそれは数年に及ぶという試算まで出ていた。大公国がこれまで守り通してきた、自国民による自給自足の生活が崩れるのは、時間の問題だった。

そんな中、水平線の彼方に、一艘の巨大な船が姿を現した。

初めて見る巨大な船。しかも、何の前触れもなくフォーアル大公国に向かってきている。報告を聞いたテイスト大公はすぐさま兵士たちを非常招集し、海岸線に防衛線を築くように命じた。

そんな彼らをあざ笑うかのように、巨船はフォーアル王国の海岸線を掠めるようにして進路を東にとった。

「見ろ！　あれは……クリミアーナの紋章だ！」

兵士の一人が大声を上げて叫ぶ。船の帆には、確かに、クリミアーナ教国の紋章が刻まれていた。兵士たちの動揺をよそに、船は東へと進路を取った。

「何っ！　クリミアーナ教国であると！？」

報告を聞くや否や、テイスト大公は怒りをあらわにしながら玉座から立ち上がった。この十年間の間、何度も町々に現れては、己の信ずる神を布教し続けてきた者たちだ。幸い、この国の人々は、他国の人々との交流に対しては消極的だった。そのせいもあって、クリミアーナ教国に傾く者は少なく、彼らは国の東の端に小さな村を作

り、そこで身を寄せ合うようにして生活していたのだった。

クリミアーナ教国の船は、その同胞たちが住む町に船首を向けていた。教国が彼らの支援に乗り出したのは、明らかだった。そして、次から次へと入ってくる情報は、大公をさらに激怒させた。何と、船からは夥しい量の食料品が運び込まれているというのだ。

「一体どういうつもりだ！　我らと戦いでも始めるつもりか！」

「いえ、決してそのような意図はないと思われます」

家来の一人が大公の前に進み出て、恭しく述べる。彼は男を鋭い眼差しで睨みつけている。

「今回は、単に同胞を救助するための船でございましょう。ヤツらは、鼻つまみ者として国中から嫌われております。おそらく、本国に連絡を取り、救援物資を求めたのでありましょう」

「余は、この国に住む者に余すことなく、平等に、物資を配れと命じた。その命令を守らぬ者が、いたというのか？」

「いいえ。決してそうではございません。我らは確かに、大公様のご命令通り、クリミアーナの者たち全員に物資を届けております」

「では、この度の仕儀は、いかなるものなのじゃ」

「それは……。彼らも不安なのでありましょう。今回は、大公様からお情けをいただきましたが、今後はどうなるのかわかりません……。それならば、先に本国に連絡して、支援を受けておこうと考えたのではないかと、愚考いたします」

「……」

「ともあれ、今回のクリミアーナの船は、単に食糧物資の輸送でございます。我らと事を構えるつもりは、ないかと存じます」

大公の心には、一抹の不安があった。クリミアーナの者たちは、二十人にも満たないはずだ。そんな、僅か二十名足らずの同胞のために、わざわざ巨大な船を仕立てて、このフォーアル大公国まで遠征するだろうか。

「馬を曳け」

大公は取るものも取り敢えず愛馬に跨り、クリミアーナの者たちが住む村を目指した。そこでは、百人近い屈強な男たちが、船から次から次へと荷物を村に運び込んでいた。

……あれほどの積み荷、この村の者たちに与えるのには、多すぎないか？

中身を窺い知ることはできないが、おそらくあれは小麦か何かだろう。目の前ではすでに、数十を超えるそれが運び込まれている。たかが二十人に満たないこの村であれば、あれだけの量を食べつくすのに、一年はかかるだろう。そこまで考えたとき、大公の頭に閃くものがあった。

……もしや、わが国が食糧不足に陥ったとき、あの食糧を供出しようとしているのか。そうなれば、奴らの国民からの心証はよくなる。布教しやすくなる。

大公の背中に冷たい汗が流れた。彼を追ってきた家来たちの声など、全く耳に入らない。彼の頭の中には、クリミアーナ教の旗を持った国民が宮殿を包囲する光景が浮かび上がっていた。それだけは何としても、避けなければならない……。

「大公様！」

突然の大声で我に返る。気が付けば、周囲には百を超える兵士たちが、彼の傍に控えていた。

「ご覧ください大公様。クリミアーナの者たちに、戦支度をしている者は一人もおりません。これで、我が国を攻めるということは……」

「いや、奴らは我らに戦いを挑むつもりだ。奴らを今すぐ追い返すのだ」

「なっ、何と仰せられます公王様！　そんなことをすれば、クリミアーナは黙っておりません。必ずや大軍を仕立てて、我が国に攻め寄せてまいります。そうなれば、我が国は滅びるしかございません」

「……」

「ご懸念には及ばぬかと存じます、公王様。クリミアーナが我が国で何か事を起こそうとしている、確たる証拠があるわけではございません。まずは、様子を見てはいかがでしょうか」

「……」

テイスト大公は、胸に湧き上がる不安をぬぐい切れぬまま、家来た

ちに促される形で、馬首を宮殿に向けた。

しかし、それから数日後、首都において事件は起こった。

深夜、数名の者が首都の町中を小走りに進んでいた。彼らは、ある住居まで来ると、懐から拳大の袋を取り出し、それを無造作に家の中に投げ入れた。そして、すぐにその場を後にする。そんなことを、彼らは何回となく繰り返したのだった。

夜が明けると、首都の中は騒然となった。いくつかの家々に限って、何と、金が入った袋が投げ込まれていたのだ。これを手にした者の中には、あまりのことに、腰を抜かすものまで現れた。

袋の中には、親指ほどの大きさの金が五十個ほども詰め込まれていた。これだけの金があれば、この都市では約、一年間は優に暮らすことができる。腰を抜かす者が出ても、不思議はなかった。

調べてみると、金が投げ込まれて家々には、一つの共通点があった。クリミアーナ教の者たちに比較的好意的に接していた者たちだったのだ。その報告を聞いたテイスト大公は思わず天を仰いだ。

……これは、クリミアーナ教国からの挑発だ。おのれ、余に対してよくも露骨な挑発を。

そう思ってはみたものの、大公にはそれに抗する手段が見つからなかった。彼の頭の中には、数日前に思い描いた最悪の場面が、再びかすめていたのだった……。

第五百四十五話　小心な公爵

次の日から、首都のとある一角で、クリミアーナ教徒による市が開かれた。

市と言っても大規模なものではなく、いわゆる露店であり、見栄えはあまりよいものではなかったが、米や小麦といったものをはじめ、日持ちのする乾物などが多く売られていた。それらは破格の値段で売られており、それを見た周辺の店は、動揺を隠さなかった。

首都に住む者は、当初はクリミアーナの店を警戒して、近づく者は僅かだった。だが、そこで売られている品物が相応にいい品質のものであることがわかると、少しずつ人々が訪れるようになり、ひと月後には、この店は大繁盛するようになっていた。

こうなると、周辺の店には客足が絶える。そのために、赤字を覚悟で価格を落とすか、さもなければ、閉店するのかの選択を店側は迫られることになっていた。

店側も手をこまねいていたわけではない。彼らは、商業組合を結成していて、その組織は、大公国の貴族たちと深いつながりを持っていた。彼らは力のある貴族たちに窮状を訴え、クリミアーナの店を排除するように求めた。

貴族たちはクリミアーナに対し、様々な妨害工作を試みたが、その悉くが失敗に終わった。最終手段として力づくでの妨害も試みたが、それもあっさりと排除された。彼らは、移動する際に剣などで襲われたが、素手にもかかわらず、暴漢たちを完膚なきまでに叩きのめ

して見せたのだ。

そうした動きは逐一、大公であるテイストに報告されていた。徐々に首都の人々から信頼を集めていくクリミアーナ。さらには、クリミアーナから金を与えられた者は、積極的に周辺の店で品物を買い、もはや、店側は彼らなくしては店舗を維持できない状況になっていた。言わば、この国はある意味で、クリミアーナ教国に食料という首根っこを押さえられた状態になっていた。

大公・テイストはいよいよ危機感を強めた。これを盾に、クリミアーナ教国から無理難題を突き付けられれば、この国はあの教国に従わざるを得なくなるのだ。

……何とかして、あの者たちを排除せねばならない。

テイストは心の中でそう考えてはいたが、いざ、それを行動に移すとなると、二の足を踏んだ。すでに、クリミアーナの連中は首都の人々から人気を得ている。この者たちを排除すれば、一気に市民の信頼を失うことになる。そうなれば、この国は内乱になる。まさに、クリミアーナの注文通りの展開となるだろう。おそらく、この国の動乱に乗じて、クリミアーナは兵を繰り出し、その国を占領して属国とするのだ。それは、その昔、世界各国で見られたクリミアーナの常套手段だった。

教国からの干渉を避けるためには、どうするべきか。テイスト大公は、公国の主だった者たちを集めて、対策会議を開いた。

会議は意外にも、クリミアーナを秘密裏に排除しようという意見が大勢を占めていた。中でも、ファンスト侯爵は、それを強硬に主張していた。

「策はございます。誰にも悟られずに、クリミアーナの者たちを葬ればよいのです。なぁに、民衆には、クリミアーナ本国で緊急のことが起こったために、一旦、全員が帰国したと言えばいいのです。私にお任せください。夜陰に紛れて、すぐにカタをつけて御覧に入れます。停泊している船につきましても、私の手の者に、船を操ることができる者もおります。クリミアーナの者たちの死骸を船に運び込み、そのまま沖まで出て、そこで船を沈めてしまえば、何の証拠も残りません」

ファンスト侯爵は、公国軍を統括する役割を担っている家だった。その侯爵が自信満々に胸を張っている。そのため、集まった者たちは、侯爵の意見に賛同する者が多かった。大公は他にも意見のある者はいないかと促してみたが、誰も答える者はいない。

「……あの」

弱々しく口を開いたのは、大公の弟であるハーツ公爵だった。常に兄に隠れて、周囲に流されるままに生きてきた男が自らの意志で口を開いたのだ。あまりのことに、その場にいた全員が彼に視線を向けた。

「こっ、こっ、これは、ゆっ由々しき事態かと思われます」

ハーツ公爵はそこで一息つくと、ゴクリと唾を飲み込み、さらに言葉を続ける。

「侯爵は、クリミアーナを秘密裏に排除すると言うが……。それは、何度も失敗している。うっうっうっ上手くいくとは……思えぬ。もし、もし、もし失敗したら、わっ、我が公国は、めっ滅亡する……」

「仰ることはよくわかりますが、では、公爵様はどうせよと言われるのですか」

ハーツ公爵の意見にじれたハーツ侯爵が、苦々しく口を開く。そんな彼とは一切目を合わせず、ハーツ公爵はさらに言葉を続ける。

「たっ、他国から、しっ支援を募るのです……」

「お待ちください公爵様。我が公国は、この百年間、どの国からも支援を受けてはおりません。すべて、自国で必要であるものは自国で賄ってまいりました。他国に一切迷惑をかけてこなかった……。これが、我が公国の誇りではありませんか！」

貴族一人が立ち上がって主張する。その意見に集まった大半の貴族が頷いている。だが、公爵は一切怯まなかった。

「でっ、では、民を食わせるだけの余裕が、こっ、この公国にはあるのか」

その言葉に、誰もが皆、沈黙する。

「ようわかった」

大公が重々しい口調で口を開く。彼は俯きながらオドオドしているハーツ公爵に視線を向けた。

「他国からの支援と言ったな？　具体的には、どこに支援を頼むのだ？」

「あっ、アガルタでございます」

「アガルタ……」

「せっ、世界中で、くっ、クリミアーナの干渉を、しっ退けられるのは……」

「もうよい」

大公はハーツ公爵の意見を遮り、目を閉じて沈黙した。

大公には弟が言わんとしていることが、よくわかった。アガルタは世界でも有数の食糧生産大国だ。しかも、火山の噴火で被害を受けている国々に、痩せた土地でも実をつける種を無償で提供している。しかも、アガルタ王リノスは、世界最強の軍を持ちながら、その性格は極めて温厚だと言われている。その上、クリミアーナの干渉を退けるという実績も持っている。今のこの国が結ぶとすれば、打ってつけの相手だ。

大公は目を開けると、再びハーツ公爵に視線を向けた。

「して、支援を願うと言っても、タダでとはいくまい。我らからは何をアガルタに差し出すのだ」

「……」

「どうした、ハーツ？」

「……むっ、娘のセルロイトを、アガルタに、人質に、やっ、やります」

ハーツ公爵の言葉に、大公は言葉を失った。そして、いつもは寡黙な弟が、なぜ、このときになって積極的に発言をしているかの理由が、理解できたのだった。

……娘を、セルロイトを守りたいのか。

弟のハーツ公爵は、家族を大切にする男だった。とりわけ、一人娘のセルロイトには惜しみない愛情を注いでいた。大公にとって姪にあたるセルロイトは、父に似て寡黙で、あまり表に出ようとはせず、どちらかと言えば内向的な性格だった。とはいえ、両親からきめ細かく育てられたことによる行儀のよさや、体から溢れる知性は、この娘がひとかどの人物であることを十分に表していた。

そのセルロイトには最近、男性の影がちらついていた。相手は、クリミアーナの枢機卿であるマタカという男だった。涼やかな目元を湛えた、一見して人のよさそうに見える男……。それが、セルロイトと夜な夜な公爵の屋敷で逢瀬を重ねているというのだ。

このことは、ハーツ公爵の妻から、内々に大公に報告されていたことだった。その一方で公爵は、屋敷で、マタカとセルロイトの驚愕の会話を偶然耳にしていた。

「セルロイト、私の命令は絶対だ。服従を誓えるか」

「誓います」

「お前は私の奴隷となるのだ」

「よろこんでなります」

あの、温厚で優しかった娘が、まさかそんなことになっているとは……。公爵は、その言葉を聞いたときに、愕然とすると同時に、心の中に小さな炎がメラメラと燃え上がったのだった。

……何としても、娘を救わねばならない。

その強い思いは、大人しかった公爵を動かした。この気弱な男の、小さな動きが、のちのこの公国を救うことになるのだが、そんなことは、この小心な公爵には知る由もなかった……。

第五百四十六話　運命の出会い？

それから三日後、大海原に一隻の船が北に向かっていた。

船の上には一人の女性が呆然と立ち尽くしていた。フォーアル大公国のハーツ公爵の娘であるセルロイトだ。げっそりとやつれた体、目の下には濃いクマを作っていて、一見すると重い病に罹っているかのように見える風貌だった。

正直、彼女は死にたかった。このままこの身を海に投げてしまいたかった。マタカ様なくしては、今の自分など生きている意味はない。

だが、その身を海に投げられない事情が彼女にはあった。叔父である大公の特使としてアガルタへ向かうことを命じられたのだ。そして、アガルタにおいて、かの国が持つ農業技術の習得を命じられたのだった。

「国民の命がかかっている」

叔父、大公の言葉に、セルロイトはイヤも応もなかった。その場で大公宮殿の一室に閉じ込められ、二日後には船に乗せられて出港したのだ。

せめて、マタカ様に一目会いたかったが、それは許されなかった。

これには、父のハーツが絡んでいることをセルロイトは察していた。父はマタカ様と関係を持つことに反対していた。この一連の動きはすべて、父が仕組んだものなのだろう。だが、セルロイトにとって

マタカは、自分を理解してくれる唯一の男性だった。彼を失うことは、彼女の人生の終わりを意味していた。

正直、こんなことはやりたくはない。全く知らぬ人たちの許に行くのだ。それだけではない、新しい技術を学んでこなければならない。ということは、多くの人と接しなければならないということだ。

幼い頃から彼女は、人と話をすることが苦手だった。大公の姪として、多くの人々と接することが生まれながらに義務付けられていた身にとっては、日々の生活は地獄に似た苦痛を伴うものだった。

それでも彼女は、苦痛を必死でこらえながら、幼い頃から与えられた仕事をこなしてきた。だが、十四歳になったとき、それは限界を迎えた。部屋から一歩たりと、出ることができなくなったのだった。

心配した父や叔父が手を尽くして、あらゆる名医を呼んで治療にあたったが、彼女の症状は改善することはなかった。とはいえ、日が経つにつれて、自室からは出られるようになり、屋敷の庭までは出ることができるようになったが、門から外はどうしても出ることができなかった。

彼女自身、それではいけないという思いはあった。我が家は公爵家だ。叔父はこの国の主である大公なのだ。その一族に連なる自分が、このままではいけない。このままでは、父はもちろん、叔父様も誹りを受けることになる……。だが、そう考えて自分を鼓舞すればするほど、その体は硬直してしまうのだった。

そんな中、彼女はたまたま食事で出されたデザートの種を戯れに庭に埋めてみた。すると、それが発芽したのだ。彼女はそれに水をやり、成長を見守った。季節は春だった。

夏が過ぎ、秋になると、小さな芽は成長して、夕食で食べたデザートと同じ実をつけた。それはそれほど美味しくはなかったが、セルロイトは人生で初めて大きな達成感を感じた。それ以降、彼女は植物を育てることに夢中になった。

あれから五年。ハーツ公爵家の庭の一部は、セルロイトによって耕された畑と化していた。彼女は日焼けすることも厭わず、ただ黙々と畑の世話をやり続けた。元々勤勉で研究熱心だった彼女は書物を読み漁り、植物たちがいかにすれば効果的で効率的に育つのか、試行錯誤を繰り返したのだった。

そんな彼女を両親は、温かく見守った。すでに二十歳を超えた身。十四歳以降、家庭教師を付けて、必要最小限の読み書きや振舞い方は身に付けてはいるが、貴族としてお披露目されることもなかったため、嫁ぐことも難しいだろう。両親は彼女をこの屋敷で一生暮らすことになる覚悟を決めていたのだった。

そんな彼女に転機が訪れたのは、ちょうど一年前のことだった。

新・クリミアーナ教国の使者がハーツ公爵の許を訪れ、彼の兄である大公に目通りを願った。教国は、何年も前から大公への面会を求めていたが、もともと他国との交流を是としていない大公は、クリミアーナと積極的に交流を持つことを嫌った。とはいえ、新年の挨拶だけは使者を引見するなど、必要最低限の交流は保っていた。

この日も、使者の男は、新年の挨拶をする上での打ち合わせがしたいと言って、公爵の許を訪れていた。新年と言っても、まだ三ヶ月も前のことであり、公爵は訝りながらも男たちを引見した。そんなことは知らず、セルロイトは畑に実をつけた植物たちを見て、達成

感を感じていたところだった。

「おお、メルモリの実がなっている」

突然、男性の声が聞こえて、セルロイトは思わず声のした方向に視線を向けた。そこには、見慣れない服を着た若い男が立っていた。

男はマタカと名乗り、笑顔を見せたかと思うと、ゆっくりと畑に近づいてきた。

「クラワサン……メガオ……グーホイ……。素晴らしい、よくこれだけのものを育てたものだ。これはすべて、あなたが育てられたのですか？」

マタカは笑顔で話しかけてくるが、突然のことで動揺しているセルロイトは、返答することができない。マタカはそんな彼女に頷きながら、再び畑に視線を向ける。

「素晴らしい……。特にこのメガオの成長ぶりはどうだ。これが大きくなるためには、丁寧に芽を間引いてやらねばならない。種がたくさんあるために、たくさん発芽するのですが、一番成長している芽だけを残して間引いてやらねば成長しないのですよね。よく知っていましたね。それに……常に新芽を間引き、葉についている虫を丁寧に取り除かねば、ここまで大きく成長させることは難しい。毎日丁寧に世話をされたのですね」

「私……の……畑……ですから」

セルロイトは必死で答える。まさに、この男の言うとおりだったからだ。メガオという植物……これは、とても濃厚な甘みを持つ果物

だ。市場に出回ることはほとんどない。栽培が難しいということもあるが、見た目がグロテスクであるために、誰も食べようとはしないのだ。

だが、セルロイトは乱読した書物の中から、この果物がとても美味で、その昔はこの果物を巡って国同士が争いになったことを知っていた。

あるとき、大公にたまたまこのメガオが献上された。だが、彼はそれには手をつけず、父であるハーツ公爵に下げ渡された。父もこの果実には興味を示さず、ゴミとして捨てようとさえしていたのだった。だが、セルロイトは父に頼み込み、この果実を引き取った。実自体はすでに腐食が始まっていたため、とても食べられたものではなかったが、彼女は種を丁寧に取りだして、庭の畑に撒いたのだった。そして、苦労して育てること数年、やっと大きな実をつけたばかりだったのだ。

誰も興味も持たず、理解もしてくれなかったことを理解してくれる人が現れた……。セルロイトの心に何か温かいものが溢れた。

「よっ、よっ、よく、ご存じ……なのですね」

「私も、こうした植物を育てることが好きなのです」

「そ……そうなの、ですか」

「色々な植物を育ててまいりましたが、こちら様のように、丁寧に世話をすることができずに枯らせてしまうことも多いのです。いや、ここまでおやりになっているのを見ると、何だか心が躍ります」

マタカは満面の笑みを浮かべながら、口を開く。端正な顔立ちだ。どこかの国の王子や貴族の子弟と言っても差し支えない程の美貌だ。セルロイトは思わず目を背ける。

「こちらのお屋敷には、大公様への新年のご挨拶の打ち合わせで、よく足を運びます。そのときには、また、こちらの畑にお邪魔させてください。それに……育てている植物に少し、わからないことがあるのです。次に参りました際には、是非、ご教授いただけると嬉しいです」

そう言って、マタカはその場を後にしていった。セルロイトはその後ろ姿を見送りながら、何か、運命的なものを感じていた。

第五百四十七話　悲壮な覚悟

「おーい。ガルビーの港が見えたぞ～！」

船頭の大声でセルロイトは目を覚ました。夜、なかなか寝付くことができずに、夜明け前になってやっと休むことができたのにもかかわらず、僅かな時間で起こされてしまった。彼女はため息をつきながら、大儀そうに体を起こす。

これが、自分の寝室であったら、どんなに素晴らしいことだろう。そんなことを思いながらも、何をバカなことを考えているのだと自分を諭す。もう、後戻りはできないのだ。

頭の片隅からは、マタカのことが離れずにいる。あのお方はどうしているだろうか。そんな思いが頭をかすめる。

二人の仲は突然進展した。実際は、マタカがセルロイトに迫って、一方的にその欲望を満たしたにすぎず、お世辞にも二人に愛が通じていたとはいい難いものだった。だが、マタカは、何もできず、ただ、ベッドのシーツを固く握りしめ、目を閉じていた彼女の耳元で、まるで独り言を言うように、「素晴らしい」や「こんな女性は初めてだ」と囁いた。セルロイトにとって、その言葉は素直に嬉しいものだった。

「あなたを抱けば、心が落ち着きます。あなたは、私にとって必要なお方です」

全てのことが済み、溢れ出る涙を拭うセルロイトに、マタカはそん

な言葉をかけた。子供の頃から思い描いていた恋愛とはかけ離れた結果となったショックもあった一方で、誰かに必要とされたことの嬉しさが、彼女の心の中を満たしていった。

それからセルロイトは、両親の眼を盗んで、マタカと逢瀬を重ねるようになった。会う回数に比例して、マタカの要求は増えていったが、セルロイトはその全てを受け入れた。それこそが彼女の愛だった。

「お前の体なしでは、私は生きてはいけない」

帰り際、セルロイトの細い体を抱きしめながら、マタカは耳元で必ずそう呟いた。もうあの言葉を聞くことはないのだろうか。父の手によって完全に引き離されてしまった今、マタカはどうしているだろうか。困りはしていないだろうかと考えてはみたものの、今となってはどうしようもない。セルロイトができることは、何一つなかった。

「お待たせいたしやした。到着でごぜぇやす！」

部屋の外から、船頭の威勢のいい声が聞こえた。セルロイトは慌てて荷物を準備して、船室を後にした。

「お嬢様、行ってらっしゃいやし。お早くお戻りになさってくださいやし」

髭面の船頭が、白い歯を見せて笑顔を作りながら頭を深々と下げる。セルロイトは、オドオドと一礼して、そそくさと船を降りていった。

ガルビーからアガルタの都までは、馬車での移動となる。セルロイ

トは車窓から見える景色を呆然と眺めながら、これからのことを考え始めた。

全てが初めてづくしだ。初めて会う人々、初めての環境……。上手くやっていける自信は全くない。きっと、すぐに部屋から出られなくなるだろう。そうなった場合、世界中に名声を轟かせているアガルタをしくじることになるのだ。そのダメージは計り知れないだろう。大公国の評判が地に落ちることは間違いない。父はもちろん、叔父の大公様にも迷惑がかかる……。

きっと、二度と故郷に戻ることはできないのだ。

そこまで考えて、セルロイトは愕然とする。もっと、父や母と語り合っておくべきだった。出港するときに、母が秘かに船室にやってきて、体だけは大事にしなさいと、自分が大事にしていたストールを肩にかけてくれた。その母に礼の一つも言わず、ただ無言で頷いてしまったことを、心から悔いた。せめて一言、ありがとうを言っておくべきだったと……。

部屋から出られなくなったときは、死ぬしかない。せめて、公爵家の娘として、大公の姪として恥ずかしくない死に様を見せねばならない。セルロイトは、体を震わせながら、窓の外に視線を向けた。山に映えた太陽の光がまぶしかった。

◆　◆　◆

「……何ということだ」

表情を歪ませながら、舌打ちをしているのは、新・クリミアーナ教国の枢機卿であるマタカだった。彼はセルロイトの行方を捜してい

たが、その行き先がアガルタと知って愕然としていたのだった。

完璧に事を運んだつもりだった。すでに、支配下に置いたと思っていたセルロイトだったが、まさか父の公爵や叔父の大公が、彼女を避難させるとは思いもよらなかった。

全てが計画通りに進んでいた。マタカ自身、ここまで上手くコトが運んだのは、初めてのことだった。それだけに、セルロイトのアガルタ行きを知ったときの衝撃は大きいものがあった。

彼女の姿態が頭をよぎる。どのような命令も、彼女は唯々諾々として受け入れた。眉毛をハの字にしながら、恥ずかしそうに身をくねらす姿が、鮮やかに思い出される。マタカにとって彼女は実に優秀な奴隷だったのだ。

だが、事態は彼を窮地に追い込んでいた。セルロイトを篭絡したという事実は、大公の心証を著しく害しているのは、火を見るよりも明らかだった。間違いなく、大公はクリミアーナ教の排除に動くだろう。そうなった場合の対策を考えねばならない。

それと同時に、セルロイトがアガルタに向かったという事実にも対応しなければならない。単に物見遊山に出かけたというわけではない。大公の特使として赴いているのだ。当然、この国での自分たちクリミアーナの活動が記され、アガルタから支援を乞う書状を携えていることだろう。そうなれば、マタカは完全に追い詰められることになるのだ。

……アガルタ王から、教皇聖下に、間違いなくこの事実が告げられることになる。

ヴィエイユ教皇聖下のことだ。きっと、フォーアル大公国にいる枢機卿全員を更迭するだろう。それが一番手っ取り早い解決方法だからだ。そして、新しい枢機卿を送り込むのだ。そうなれば、自分は世界の最果ての国に飛ばされることになる。教都・アフロディーテに帰ることは、二度となくなるのだ……。

マタカは首を振りながら、これまでの考えていたことを忘れようとする。そのようなことにならないためには、どうするべきか。彼は頭の中を切り替えようとする。

……セルロイトだ。ヤツさえ何とかなれば。

マタカの心の中に、どす黒い思いがムクムクと溢れてくる。セルロイトさえアガルタ王に会わなければ、何とかなるのだ。大公は我々を排除しにかかるだろうが、この首都には楔を打ち込んである。クリミアーナ教を信仰する者と力を合わせれば、ひと月やふた月程度持ちこたえることは可能だ。その間に本国に連絡を取り、援軍を頼めば、逆にこの国を支配することも可能になってくる。

マタカはゆっくりと立ち上がると、部屋の隅に行き、そこで蹲るようにして腰を下ろした。床の板を外すと、床下から瓶を取り出した。中には小さな黒い球体がいくつも詰められている。彼は中からその一粒を取り出すと、瓶を再び戻し、床の板を元通りに直した。

外に出ると、黒い雲が空を覆っていた。今にも雨が降り出しそうな空模様だ。マタカは忌々しそうに空を眺めていたが、やがて、靴で地面を掘り始めた。

やがて、地面にこぶし大くらいの穴が掘られた。彼は手に持っていた黒い球をその中に入れ、人差し指を出して、詠唱を始めた。

……ボウッ。

マタカの人差し指から炎が地面に向かっていく。すると、彼の掘った穴から、黒々とした煙が立ち昇った。これは、赴任地において何か緊急の事柄が起こったことを示すシグナルだった。ただこれは、己の解決能力の低さを表す行為として捉えられることが多く、教国内では評価の下がる行為として認知されているものだった。

「……背に腹は代えられない」

マタカはモクモクと立ち昇る煙を睨みつけながら、小さな声で呟いた。彼自身も、悲壮な覚悟を腹の中で固めていた……。

第五百四十八話　必死の対策

マタカは、懐に手を伸ばすと、一枚の紙とペンを取り出し、そこに何やら書き始めた。まるで、殴り書きをするように乱暴な書きぶりだ。彼は一旦ペンを止めると、手許をじっと見つめる。

「よし、これでいい。あとはこの狼煙が見えてくれればいいのだが……」

煙を睨みながら、目の前に広がる大海原に目を凝らす。しばらくすると、ポツポツと雨が降ってきた。マタカは手に持っている紙を、大事そうに懐に仕舞う。

「何をしているのです！」

背後で男の声が聞こえた。振り返ってみると、同じクリミアーナの服を着た男が、こちらに向かって走ってきていた。同じ枢機卿である、ツガキだった。

「マタカ……あなたは何ということを……。この狼煙は、緊急信号ではありませんか！」

「ツガキ枢機卿。私の独断で狼煙を上げましたことをお許しください。まさに、我々の命にかかわることが起こったのです」

「何ですって？」

「あのセルロイトが、事もあろうにアガルタに……」

「アガルタ……まさか……」

「そのまさかです。大公はおそらく、セルロイトを通じてこの国の窮状をアガルタ王に訴えて支援を得ると同時に、我々の排除も要請するでしょう」

「マタカ、あなたはどうしてもっとセルロイトを監視しておかなかったのですか！」

「そのお叱りを受けるのは、後にしたく思います。今、我々がやるべきことはひとつ。セルロイトをアガルタ王に会わせないことです」

「……」

ツガキ枢機卿は唇を噛んだ。マタカの言う通りだったからだ。彼は無言で水平線の彼方に視線を向ける。

どのくらいの時間が経っただろうか。二人の男は海を睨みつけたまま微動だにしないでいた。服はすでにビショビショになり、固く握りしめた両手の拳からは、ポタポタと滴が垂れていた。

「……来た！」

周囲は薄暗くなりかけている。水平線の彼方からは何も見えない。だが、マタカはじっと目を凝らしたまま、前につんのめるようにして歩を進める。

「私には何も見えないが……」

ツガキ枢機卿は海に向かって呟く。そのとき、何か、声が聞こえたような気がした。

「キェアッ！　キェアッ！」

突然、カン高い声が空に響き渡った。気が付くと、体長二メートルはあろうかという巨大な首長鳥が空を飛んでいた。鳥は翼をはためかせながら二人の間に降りてきた。マタカは懐から小さな袋を取り出し、それを鳥の鼻先に差し出す。すると、鳥は首を地面に付けるようにして寝そべった。

マタカは鳥の足元に近づいて、何やら探し物をしている。

「よしっ！」

彼は体を起こすと、懐から先ほど書いた紙を取り出し、それを鳥の足元に近づけた。そこには、小さな瓶のようなものが括りつけられていた。マタカはその中に紙をねじ込んだ。

「さあ、急いでくれ！　事は一刻を争う！」

マタカは手を大きく振り上げる。それが合図であったかのように、首長鳥は大きな声で嘶いたと思うと、翼を大きくはためかせて空に舞い上がった。

「急げ！　急ぐのだ！」

マタカの声が、低く垂れこめた黒い雲に吸い込まれていった。

彼らの前に現れた鳥は、ナウェイと呼ばれる首長鳥で、その大きな

体躯に似合わず飛行速度がかなり速い鳥だった。鳥類の中で天敵と呼べるものはほとんどいないため、クリミアーナ教国では、この鳥を緊急時の連絡手段として活用していた。この鳥は、各支部の本部で飼育されており、いつでも活用できるように準備されていたのだった。

フォーアル大公国を飛び立った首長鳥は、荒天をものともせず、自慢の翼で大空を疾駆した。そして、そこから飛び立つこと約二時間で、クリミアーナ教国南グレダフル支部の本部に到着した。

「おお！　帰ってきたぞ！」

クリミアーナの宗教服を纏った男たちが、建物の中から飛び出してくる。彼らは慣れた手つきで鳥を大人しくさせ、足元の紙を取り出した。そこには、こんな文言が書かれていた。

『フォーアル大公国のセルロイト女史が、アガルタの都に向かった。至急、この女を消されたし。主神様を冒とくし、教皇聖下を冒とくし、クリミアーナ教国を滅亡に導こうとする者なり』

さらにその紙片の裏側には、セルロイトがいつ頃フォーアル大公国を船で出港したのかといった情報や、セルロイト本人の特徴や似顔絵が記されていたのだった。

「大変だ。これは、支部長様に報告せねば」

男たちはマタカから送られた紙を携えて、急いで建物の中に向かった。

「……フム。これは由々しきことですね」

すでに頭頂部の髪の毛が薄くなり、口ひげと顎ひげを蓄えた、初老の男性が、小さく頷きながら口を開いた。彼の眼は左右に激しく動き、何かを考えている様子がうかがえる。

「支部長様……」

部下たちの不安そうな表情をチラリと見たが、やがて、スッと視線を手元に向けると、誰に言うともなく呟いた。

「船で出港したとなると、ここ数日は晴天でしたし、波も穏やか。南から強い風が吹いていたことを考えると、大体速度は……。フォーアルからガルビーまでの距離は……。そして、ガルビーからアガルタの都までは……馬車で移動でしょうか。となると、馬車の速さは……。出発した日付で考えると……。すでに、ガルビーには到着しているとみてよさそうですね。最悪の状況を想定すると……。すでにガルビーを立って都に向かっている可能性がありますね。ただ……ガルビーから都まで向かうためには、一旦どこかで野営する必要があります。マタカの手紙から察すると、女の一人旅。夜を徹しての移動はやらないでしょう。とすれば、最短で明日の昼には都に着くという計算になりますね」

支部長の言葉に、部下たちは息を呑んでいる。この男は複雑な計算をすべて暗算で行っているのだ。その明晰な頭脳は、恐るべき正確さでセルロイトの動きを読んでいた。

「ちょっと待っていなさい」

彼は机の引き出しを開け、紙とペンを取り出したかと思うと、一切の迷いなくペンを走らせた。そして、ものの一分も経たないうちに

書き上げたかと思うと、それを小さく折りたたんだ。

「これをすぐにアガルタのボンイサオ男爵の許に送りなさい。男爵の屋敷には、一晩あれば十分に着くことができるでしょう。問題は、男爵が私の意図を理解できるかという点と、間に合うかどうかという点ですね……」

男は誰に言うともなく、小さな声で呟きながら、紙を部下に差し出す。それを受け取った部下たちは足早にその場を後にしていった。

「ああ、ジアエ。お待ちなさい」

名前を呼ばれた若い男が、踵を返して男の許にやって来る。

「あなたに一つ、頼みたいことがあります」

「はい」

男は再び引き出しから紙を取り出し、そこにサラサラと何かを書き始めた。

「これを、アフロディーテの教皇聖下の許に届けてください。あ、あとは、このマタカの書簡も一緒に送ってください」

「はい、承知しました支部長様。明日中に教皇聖下の許に届きますよう、手配いたします」

「お願いします」

ジアエと呼ばれた男が、足早に部屋を出ていった。支部長は立ち上

がり、アフロディーテの方向に向かって、静かに祈りを捧げた。

「……主神様、教皇聖下。天道に背く者に、死を」

男は大きなため息をついた。

同じ頃、とある屋敷の一室で、若い女性がスヤスヤと寝息を立てていた。隣には、夫とみられる男が、同じように静かに寝息を立てている。女性は、男の掌に顔を載せた状態で、眠りについていた。

不意に、女性の眼が開いた。彼女はムクリと起き上がり、息をひそめて周囲を窺っている。

「……邪悪な、邪悪な気配がする」

闇の中で一人呟いているのは、アガルタ王リノスの妻である、コンシディーだった。

第五百四十九話　察知

コンシディーは、息をひそめて、全身の神経を研ぎ澄ませる。先ほどの感覚は一体何だろうか。彼女は注意深く分析を始める。

こうした感覚を覚えたのは初めてではない。過去、一体どんな事柄でこの感覚を覚えたのだろうか、コンシディーは注意深く記憶を辿っていく。

……これは、家族の危機ではない。家族の危機ならば、夢に現れるはずだ。そうではない。

そこまで考えたとき、彼女の脳裏にある光景が鮮やかに思い出される。

あれは、まだ幼い頃のことだった。とある王国から来た使者が、無残にも殺されたことがあった。コンシディーの胸がキュッと痛んだ。

その女性は、コンシディーにとって、あこがれの女性だった。初めて、こんな人になりたいと思わせた女性だった。

リインカーネと呼ばれたその女性は、聡明で美しかった。青色の瞳を持ち、その双眸には深い知性を湛えていた。その上、まるで、濡れているかのような美しい髪を持ち、豊満な体を持っていた。彼女と初めて会ったときのことを、コンシディーは鮮明に覚えている。

背筋をしゃんと伸ばし、美しい髪と豊満な胸を揺らしながらこちらに向かって歩いてくる姿は、気品と上品さに溢れていた。その周囲

を圧倒する美しさは、彼女の周囲の空気までもが変わっているかのように見えた。

父のドワーフ公王に使者として赴いてきたリインカーネ。彼女は廊下でたまたま会ったコンシディーに対しても、とても丁寧にあいさつをしてくれた。

「何かの薬を使っているのですか？」

挨拶もそこそこに、コンシディーから出し抜けに質問され、小首をかしげたリインカーネ。すぐに質問の意図を察した彼女は、満面の笑みを湛えながら、小さな声で、他の人にはナイショですよと呟いてから、ヘルオウスの樹液で髪を洗っているのですよと教えてくれたのだった。

当時、ドワーフの娘らしく、きつい天然パーマで、まるで爆発に巻き込まれたかのような髪形をしていたコンシディーは、早速、ヘルオウスの樹液を取り寄せて髪を洗い始めたのだった。

コンシディーとリインカーネが仲良くなるのに、時間はかからなかった。リインカーネはコンシディーの質問に、何でも答えてくれた。聞く話と言えば、髪の毛や肌の手入れのこととといった、主に美容関係のことだったが、リインカーネはドワーフ公王の公女としてではなく、まるで、実の妹のように接してくれたのだった。そのために、コンシディーは彼女に心を開き、実の姉のように慕っていた。

リインカーネは、ドワーフ公国に武器や防具を大量に買い付けるために派遣された使者だった。彼女の国では政権争いが激化しており、リインカーネは、反国王派に属して、現在の体制を崩壊させようとしていたのだった。そうした事情もあって、父であるドワーフ公王

は当初は首を縦に振らなかったが、リインカーネは何度も公王の許を訪れ、粘り強く説得と交渉に当たったのだった。

彼女は、公女たるコンシディーに対して、公王に口添えをして欲しいなどといったことは一切言わず、あくまで一人の友人として徹した。あまり自身の国のことについて多くを語らなかった。ただ、本来は、とても肥沃な土地を持った素晴らしい国なのだということを、繰り返し語るのみだった。コンシディーも、その気配を察して深くは聞かなかったが、地平線の彼方まで作物が実るのだという話に、心を躍らせていたのだった。

コンシディーが邪悪な気配を感じたのは、そんなときだった。

宮殿の廊下を歩いていると、突然、邪悪な気配を感じた。驚いて周囲を見廻してみたが、そこには女官長のミンシがいるのみだった。コンシディーの振る舞いに心配したミンシの声も聞かず、彼女は震える体を自身両手で抱えるようにして部屋に向かった。

その日は、リインカーネが来る日だった。コンシディーは、彼女に会えば、この邪悪な気配からも少しは解放されるだろうと、その到着を心待ちにしていた。だが、コンシディーにもたらせたのは、リインカーネが亡くなったという知らせだった。

彼女は宿屋の部屋で、無残に惨殺されていた。その知らせを聞いた瞬間、コンシディーは、肉体の一部を失ったかのような感覚を覚えたのだった。

そのときと同じ感覚……。今のコンシディーに、リインカーネほど心を許した友人はいない。家族以外の選択肢を考えても、思い当たる人がいない。

……もしかして、これから出会う人ってこと？

そう考えたとき、コンシディーの心に何か、納得いくものを感じた。そうだ、きっと、そうだ。とすれば、これから出会い、自身に大きな影響を与えるかもしれない人が危機に瀕している。これは、何としても救わねばならない。

「リノス様……リノス様……リノス……うわっ」

隣で静かに寝息を立てている夫を起こそうと、体をゆすっていると、突然抱きしめられて、ベッドに倒された。リノスはかなり強い力でコンシディーを抱きしめている。

「……うう～ん。俺は世帯主だ～」

「ちょっ、リノス様、リノス様……」

コンシディーは必死で体を動かしながら、彼の腕の中から抜け出そうとする。だが、リノスはさらに強い力で彼女の小さな体を抱きしめる。

「ちょっと……苦しい……苦しい……」

僅かに自由になる首を必死で動かす。そのとき、体がスッと軽くなった。

「どうした、シディー……」

リノスが眠そうな目で周囲を見廻している。コンシディーは大きく

深呼吸をして、息を整える。

「まだ……夜中じゃないか」

「リノス様、起きてください。起きてください」

「どうしたんだよぉ」

「恐れ入りますが、気配探知と魔力探知を発動させてください」

「気配探知と魔力探知？　発動しているよ？」

「違います。アガルタの国全体にです」

「国全体!?」

突拍子もない話に、リノスがようやく体を起こす。彼は眠い目を擦りながら、ベッドの上で正座をする。

「一体、どうしたんだ？」

「邪悪な気配を感じるのです。恐れ入りますが、リノス様の気配探知と魔力探知を使って調べていただきたいのです」

「邪悪な気配？　……わかった」

コンシディーの真剣な表情を見て、リノスはゆっくりと目を閉じた。寝室が静寂に包まれる。

どのくらいの時間が経っただろうか。部屋はリノスの息遣いの音以

外、何も聞こえてこない。コンシディーはじっとリノスの様子を見守っている。

「うん？」

リノスが声を上げたかと思うと、眉間に深い皺が刻まれた。再び静寂が訪れる。

「……何か、大きな鳥が、アガルタの北に向かっているな」

リノスは目を開くと、あらぬ方向に視線を泳がせている。どうやら、マップを展開しているようだ。彼のそれは、コンシディーには見ることができないが、どうやら、邪悪なものがアガルタに入ったことは、間違いないようだ。

「……ここは、確か、ボンイサオ男爵の領地じゃないのか」

「ボンイサオ男爵……」

シディーの体に、悪寒が走る。どうやら、この男爵が、邪悪な予感に関係しているらしい。

「リノス様……」

気が付くと、彼はベッドから降り、ゆっくりと窓を開け放った。外には、見事な満月が煌めいていた。

「サダキチ」

突然、フェアリードラゴンが姿を現した。リノスは、顔を近づけて、

言葉を続ける。

「夜中にご苦労だが、ボンイサオ男爵の領地に向かってくれ。何やら、大きな鳥がそこに向かっているようなんだ。その鳥と、男爵を監視してくれ」

彼の言葉を聞き終わると、小さなドラゴンは姿を消した。

「……リノス様、ありがとうございます。何だか安心しました。きっと、大丈夫だと思います」

「ちょっと、キナ臭いにおいがするな。俺の方でも、注意深く見守ることにするよ」

「お願いします」

「さあ、寝ようか」

「はい」

リノスは窓を閉めて、再びベッドに入った。コンシディーは、いつものように、リノスの掌の上に顔を載せ、眠りにつくのだった。

第五百五十話　木こり　実ハ……

……さま。……たさま。……お館様。

ボンイサオ男爵は顔を歪めながら目を覚ました。部屋は暗い。まだ、夜が明けていないようだ。

こんな時間に何事だと思いながら体を起こす。ふと、寝室の扉から小さな音が鳴っていることに気づいた。おそらく、執事のルルエンが遠慮しながらノックしているのだろう。

彼はベッドから出ようとする。そのとき、ギリギリと歯ぎしりをする音が聞こえる。相変わらず行儀の悪い女だと舌打ちをしながら、思わずベッドに視線を向ける。薄暗い中、仰向けに寝ている女性が目に入った。前夜に戯れに屋敷に呼んだ女性だった。

以前ならば、もっと若い女を侍らせることができたのだ。一つ命令を下せば、領地内から選りすぐりの生娘が送られてきたのだ。それが今は、こんな商売女しか呼ぶことが許されない。それもこれも、あの、奴隷上がりの国王のせいだ。

ボンイサオは忌々しそうに舌打ちをしながら、扉を開ける。そこには、さも困ったような表情を浮かべたルルエンが立っていた。

「何だ、こんな夜更けに」

「クリミアーナの……フリーマン支部長から緊急連絡が参りました」

「フリーマン支部長！？」

思わず大声を出してしまった自分に驚きながら、男爵は素早く寝室を出て、ダイニングに向かう。広い屋敷だが、使用人らしき者の姿は見えない。ジュカ王国時代は、行儀見習いという名目で、領地から美しい娘をメイドとして雇っていたが、ジュカが滅びて以来は貧苦を極めていた。そのため、今では古くから仕えている年寄りの女中が二人と、執事のルルエンのみとなっていた。

領地から多くの者が逃げ出してしまったため、年貢が取れないと同時に、この男爵のプライドの高さから、新しく即位した奴隷上がりの国王、リノスに頭を下げることができず、国からの支援も受けられない状況下で、ボンイサオ男爵家は急速に没落していった。日々の糧にまで事欠く有様にまで追い詰められたそのとき、救いの手を差し伸べたのがクリミアーナ教国だった。

旅人に扮した男が現れたのは、数年前のことだった。男は男爵に多くは求めないことを告げ、教国からの要請に応えさえしてくれれば、最低限の資金を提供すると持ち掛けたのだ。男爵は、多くは求めないというその言葉を信じて、彼は協力を約束したのだった。

男の言葉通り、クリミアーナ教国側からは無理難題を押し付けられることは全くなかった。聞かれるとすれば、アガルタの作物の生育状況であるとか、世界で流行っている病の罹患状況といった、情報の質としては外部に漏らして何の問題もない事柄のみだった。

とはいえ、折に触れて、フリーマンと名乗る教国の支部長から届けられる書簡には、冷や汗をかくことが多かった。男爵の行動がつぶさに調べられており、それに対して遠回しの注意が添えられ、改善されなければ、支援の打ち切りと国王リノスに報告する旨のやんわ

りとした脅迫も添えられているのだった。

教国の情報収集能力の高さに驚愕した男爵は、しぶしぶその行動を改めていった。教国からの支援が打ち切られれば、彼は破滅する。従わざるを得なかった。

そんな教国から緊急連絡が来たという。そういうものがあるというのは聞いてはいたが、まさか自分の許に送られてくるというのは、全く想定外だった。男爵は心に湧き上がる不安を押し殺しながら、ルルエンが差し出した紙を受け取る。

そこには、この手紙を受け取ったらば、男爵の屋敷からおよそ十分の距離にある木こりのエデボに渡すように書かれてあった。そして、その後はエデボの指示に従うようにと書かれてあった。

「エデボ……？　あの偏屈なエデボか？」

男爵が驚くのも無理はない。エデボは偏屈な男で、領内では有名だった。細身の体でありながら、切り出した大木を一人で小屋まで引きずっていく。話しかけても、必要最低限の返答しかせず、周辺の住民とほとんど交流を持たない男だった。領主である男爵にも、対応を変えることはなく、それどころか、彼の度重なる増税命令も無視するほどの男だった。

確かにこの男は、ジュカが滅びた直後に住み着いた男だった。てっきり、他の土地から逃れてきたのだろうと考えていたのだが、この文面を見る限り、彼はクリミアーナ教国とつながりを持っているのは間違いなさそうだった。男爵は、目の前に控えているルルエンに視線を向ける。

「緊急連絡でございますから、一刻を争うことかと思います。お館様、すぐにエデボの許に行かれた方がよろしいかと」

男爵は手元の書簡とルルエンを交互に眺めていたが、やがて、面倒くさそうな表情を浮かべながら、服を着替えるとルルエンに命じた。

馬を飛ばしてエデボの許に向かう。外はまだ、真っ暗だ。こんな時間にあの男は起きているのだろうかと思いながら馬を駆っていると、遠くの方に明かりが見えてきた。まさかとは思ったが、そこはまさしく、エデボの小屋だった。

「領主のボンイサオだ。入るぞ！」

男爵はそう言って乱暴に扉を開ける。中には、エデボがベッドの上で体を起こしていた。男爵はエデボの鼻先に、クリミアーナから届いた書簡を突き出す。男は一切表情を変えずにそれを受け取ると、中を検め始めた。

「一体何なのだ。お前も、クリミアーナの者だったのか？　まったく……どいつもこいつも儂をコケにしおって……」

「黙れ」

低く、ドスの効いた声だった。驚いてエデボに視線を向けると、彼はゆっくりとベッドから降り、天井から吊り下げているランプの許に、書簡を近づけた。

男爵には、彼の行動が全く理解できなかった。その一方で、彼のただならぬ雰囲気は、男爵をして声をかけさせるのを躊躇わせた。

「よく来た。誉めてやろう」

不意にエデボが口を開いた。目だけをギョロリと男爵に向けている。その不気味さに、男爵の体は震えた。

「フリーマン支部長の緊急連絡を受けて来たのだな？　しかし何故だ。私に直接送ればよいものを。……なるほどな。だから、お前を寄こしたのか。さすがはフリーマン支部長だ」

そう言ってエデボはニヤリと笑みを漏らす。

「よく来たな。お陰でお前は命拾いをした。あと五分遅かったら、お前の命はなかった」

「エッ……エデボ……」

「今、目の前にいるのは、新・クリミアーナ教国ヴィエイユ教皇聖下の親衛隊副隊長、ジゴロ・ジレットだ。今からお前は私の指揮下に入った。私の命令は教皇聖下の命令と思うことだ。命令に背けば、殺す」

男の全身から発せられる殺気が尋常ではなかった。その迫力に男爵は思わず頷いた。

「私がここに戻るまで、ここを動くな。心配するな。夜明けまでには帰ってくる。私が帰ってきたとき、お前の姿が見えなければ、殺す。簡単なことだ、わかったな？」

ジレットの言葉に、男爵はコクコクと頷く。ジレットは、手に持っていた書簡をランプの中に差し込んだ。すぐにそこには火がついて、

書簡は勢いよく燃え出した。彼は燃えている紙を無造作に床に放り投げた。そして、片膝をついて座ったかと思うと、床の板を剥がし、中から細い剣を取り出した。まるで、儀式で使う装飾用の剣のような、金細工が施された鞘だ。それを腰に差すと、彼は無言のまま小屋を出ていった。

突然、外から馬の嘶く声が聞こえた。そして、蹄の音が聞こえる。どうやら、ジレットは男爵が乗ってきた馬に跨り、どこかに出かけたようだ。

まるで狐につままれたように男爵は呆然とその場に立ち尽くす。ガランとした、必要最低限のものしか用意されていない部屋……。こんな粗末な小屋で、数年にわたりあの男はここに住んでいたのだ。彼はここでこの領内のことをつぶさに調べて、クリミアーナに報告していたのだ。その精神力は、尋常ではない。

男爵の顔が徐々に青ざめていく。彼はなす術もなく、そこに立ち尽くすしかなかったのだった……。

第五百五十一話　オオカミ少年？

漆黒の闇の中、無人の草原をジレットは一人馬を駆る。

緊急信号には、結界村にいるであろう痩せた、小柄な女を殺せとあった。文字数が限られているために、情報は必要最小限しかない。そこから想像力を働かせて、指令を理解するしかないのだ。だが、厳しい訓練を受けて来たジレットは、支部長であるフリーマンの意図を完全に理解していた。

緊急信号が送られたのであれば、事は急を要する。結界村にいる痩せた小柄な女を見つけ次第命を奪い、そのまま南に逃走する……。彼の頭の中には、これからのことが明確にイメージできていた。

結界村には程なくして到着した。ここは、旅人に解放されているために、警備の兵士などは配置されておらず、誰もが自由に使うことができる。だが、兵士はいなくても、この村を管理する者はちゃんと置かれていて、不届き者が狼藉を働くことがないように目を光らせていた。

この結界村は、ギルドによって管理されていた。

リノスが結界村を旅人たちに開放した直後に、ギルドはこの村の管理をしたいと彼に要請した。それをリノスは快諾し、それ以降、この結界村はギルドの管理下に置かれたのだった。それ以降、ギルドはこの村で起こる様々な問題に対応しながら、旅人にとって使いやすい施設となるように、骨を折ってきたのだった。

ジレットは結界村に着いてまず、そこを訪ねた。村のすぐ近くに石を積み上げた二階建ての小さな小屋が見える。そこが、ギルドだった。

扉を開けると、すぐにカウンターが見える。椅子が二つあり、その奥に猫獣人の老人がこちらに視線を向けていた。

「お泊りかね？　空いているところを使うといい。ちなみに、結界の中は土足厳禁だ。後に使う人のことを考えて、キレイに使ってくれ」

「すまんが、人を探しているのだ」

「人を？」

老人は面倒くさそうな表情を浮かべながらカウンターに近づいて来て、どかりと椅子に座った。それを見て、ジレットも椅子に座る。

「この村に、細くて小柄な女性が泊まっていないだろうか」

「知らんな。ここはギルドだ。泊っている連中のすべてを把握しているわけではない」

「では、女性は泊っているのか？」

「お前さんは一体、何を聞きたいんだ？」

「昔の仲間がここに来ているらしいのだ。久しぶりにこの国に来ていると聞いた。どうせ泊るのなら、家で泊ればいいと思ったのだ」

「そうかい。では、見せてくれないか」

老人はジレットに右手を差し出す。その意図が呑み込めず、彼は首を傾げる。

「冒険者カードさ」

老人の言葉に、ジレットは苦笑いを浮かべる。冒険者カードはすなわち、ギルドの使用許可証を兼ねている。クリミア＝ナ教国の親衛隊に所属する彼にはこれまで、必要とはしなかったものだ。

「カードがないと、ダメかね？」

「当り前さ。ここはギルドだ。冒険者のための施設だ」

「冒険者カードのない者は、ここで仲間を探してはダメかね？」

「探したければ探すがいい。ただし、泊っている者たちの迷惑になることは止めてもらいたい」

猫獣人の老人は、目をカッと見開いてジレットを威嚇する。彼は、苦笑いを浮かべながら、ゆっくりとその場を離れた。

外に出ると、東の空が少し赤みを差しているのが見えた。夜が明けるまでにこの仕事を終わらせねばならない。ジレットはゆっくりと周囲を見廻す。

夜明けが近いためか、徐々に結界村の全体が見えてきていた。漆黒の闇の中よりも、仕事はしやすい状況となっている。彼は急いで、対象の女性を探す。目の前には、夥しい数の結界があり、黒いもの

もあれば、透明で中が見えるものもある。言うまでもなく、中が窺い知れないものが、すでにそこで人が休んでいることになる。数は少ない。

とはいえ、一つ一つの結界を確認していては、夜が明けてしまう。結界の中にいる者全員を効率的に外に出すにはどうしたらよいか……。しばらく考えた彼は、懐から小さな瓶を取り出した。そして、中に入っていた液体を周辺にまき散らした。

ジレットはブツブツと小さな声で詠唱をする。すると、彼の手から小さな火の玉が周囲に向けて飛び出した。その直後、結界村のあちこちから火の手が上がった。

「火事だ！　火事だぞ！　火事だ！　逃げろ！　逃げるんだ！」

ジレットはそう叫びながら、結界村を走り回る。中が窺い知れない、黒い結界を拳で叩きながら声を上げる。火が消えてしまうまでが勝負だ。彼は迫真の演技で、人々に危機を訴える。次々と結界から人々が顔を出し、ぞろぞろと外に出てくる。ジレットは腰に差した細い剣に手を添えながら、人々を注意深く観察する。

フッと足元に視線を向ける。すると、結界の中から金色の長い髪が見えた。細い肩……。女性であることは間違いない。ジレットは剣を抜き、その首に向けて剣を振り下ろそうとした。

その瞬間、ジレットの記憶は途切れた。

◆　◆　◆

セルロイトは、結界から頭だけを出して周囲を窺っていた。

火事だと叫ぶ男の声で目が覚めた。船旅の疲れが出たのか、結界の中で横になるとすぐに眠ってしまったようだ。この中は暑からず寒からずの、ちょうどいい温度になっている。どんな仕掛けがしてあるのか、セルロイトには皆目わからなかったが、ともあれ、居心地はとても良い空間だった。なにより、中に入ると、結界が黒く変色して、外から中が窺い知れなくなるのは、実に好都合だった。お陰で彼女は、人の目を気にすることなく休むことができたのだった。

深い眠りから突然起こされたため、まだ思考が追い付かないが、火事が起こったのだという。場合によっては逃げねばならない。セルロイトは気だるさを感じながらも、周囲に視線を向ける。焼け焦げた匂いが鼻を衝くが、炎は見えない。彼女はゆっくりと結界から出て、周囲を窺う。

冒険者風の男が、ドヤドヤとあちこちに集まっている。どうやら、ボヤ騒ぎで、特に大きな火事ではなかったようだ。

「朝っぱらから、何て人騒がせな」

ブツブツと文句を言いながら、冒険者風の男たちが引き上げていく。それを横目で見ながら、セルロイトはふと空に視線を向けた。東の空が真っ赤に染まっている。

「雨になるかもしれないわね……」

誰に言うともなく呟いた彼女は、再び結界の中に戻った。まだしばらくは休めそうだ。そう考えながら体を横たえ、目を閉じる。そのまま彼女はまどろみの中におちていった。

◆◆◆

「まったく、とんだオオカミ少年だな。てゆうか、少年というよりオッサンだけれどな。まあ、心が少年ということで、オオカミ少年としておこうか」

ジレットの耳に、男の声が聞こえる。声の雰囲気から若い男であることがわかる。だが、それ以上のことはわからないでいた。

体が動かない。目の前には石畳が見えるのみだ。一体、ここがどこなのかもわからない。ジレットは混乱しそうな頭を必死で落ち着けながら、努めて冷静に現状を分析しようとした。だが、彼の豊富な経験をもってしても、今、自身が置かれている状況を理解することができなかった。

確かに、剣で女性の首を刎ねたはずだった。だが、気が付けば転がされていた。感覚的に、先ほどの結界村での出来事から、そう時間はたっていないことくらいのことはわかる。一瞬のうちに攻撃され、引き倒されたのか。であれば、地面は土のはずだ。結界村は草原の真ん中にあったのだ。今、目の前に見えるのは石畳だ。己が立てた仮説の説明がつかない。

必死で落ち着けようとする気持ちとは裏腹に、頭の中はどんどん混乱していく。せめて、首だけでも動かすことができれば、もう少し、情報が得られれば……。そんなことを考えながら必死に目を左右に動かす。だが、見えるのは石畳のみだ。

突然、体に悪寒が走る。無意識のうちに体が震える。これは一体何だ……。そんなことを考える彼の背後で、一人の男がジレットを睨みつけていた。

その男は、アガルタ王、リノスだった。

第五百五十二話　到着

目の前の男は、微動だにしない。だが、何とかして体を動かそうとしているのがよくわかる。だが、俺はこの男を自由にする気はない。

二度寝をしようと、すこしまどろんだそのとき、寝室の窓がノックされた。どうやらサダキチが来たようだ。何事かと窓を開けると、ボンイサオ男爵が怪しい動きをしていると報告があった。何でも、男爵の領地から早馬が出たのだという。しかもそれは、結界村で停まっていると報告してきた。

同時にシディーが起きてきて、その小さな手で俺の腕を掴んだ。ふと顔を見ると、何も言わず無言のまま頷いた。これは何とかせねばならない。着替える間もなく俺は、結界村に転移したのだった。

村に着くと同時に、「火事だ！」という声を聞いた。目つきの良くない男が、結界を叩きながらこちらに向かって来る。確かに、遠くでは炎らしきものが見える。男の声で人々が結界の中から出てきていた。

ふと、男の動きが止まった。ヤツは腰に着けていた剣を抜いたかと思うと、それを素早く振り上げた。その瞬間、俺は男に結界を張り、自由を奪った。

男の足元に金髪の女性が顔を出していた。頭だけしか見えないので、顔はわからないが、男はこの女性に明確な殺意を覚えていた。俺は男の襟首を掴むと、すぐさま都に転移したのだった。

着いたのは、アガルタ軍の司令部の中庭だった。中庭といっても石畳が敷き詰められていて、主に出陣式などの儀式のときに使われることが多い場所だ。そこに、男を転がす。

うつ伏せにされたまま、男は小刻みに頭を震わせている。どうやら、周囲の状況を確認しようとしているようだが、全く体が動かないために、相当焦っているようだ。

色々と聞きたいこともあったが、面倒くさいので鑑定スキルを発動させて、この男の過去を覗き見た。

……一言で言って、凄まじい人生だった。人生のすべてをヴィエイユに捧げたような男だった。

あくまで、ヴィエイユを神と崇め、彼女の命令を達成することを生きがいとしてきた。先のラッカーといい、この男といい、ヴィエイユに人生を狂わされた男は、相当の数に上るのだろう。

この男は多くの人間を殺めてきている。お陰で、「呪い」ＬＶ３が付いている。なかなかの殺人鬼ぶりだ。そのために、普段の人交わりが困難になってしまっている。元々はヴィエイユの傍に仕えて汚れ仕事をしていたが、この男がいるだけで、周囲の雰囲気がギスギスしたものになる。結局、ヴィエイユからアガルタに潜伏するよう命じられて、数年のときを過ごしていたようだ。

おそらく、ヴィエイユはこの男の能力を高く買っていたのだろう。それはそうだ。命令を下す前に、あの娘の心を察知して邪魔な存在を消してくれるのだから。あの娘としては、傍に置いておきたいだろう。とはいえ、この男を傍に置いておくと、己の気品と美しさを損なう恐れがある。そこで命じたのがアガルタへの潜伏だ。この男

ならば、アガルタの情報をつぶさに調べるだろうし、最悪の場合、俺への鉄砲玉としても使える。男の過去からは、ヴィエイユのそんな意図も読み取れた。

さらに鑑定を進めると、この男は、つい数時間前に、クリミアーナから緊急信号を受け取っていた。ボンイサオ男爵の許に向かったドラゴンから受け取った書状を、男爵自らがこの男の許に届けていたのが、それだ。これは、教国が存亡の危機に瀕した際に送られるもののようで、受け取った者は、万難を排してミッションを達成しなければならないもののようだ。

クリミアーナからのミッションは、一人の女性の命を奪えというものだった。どうやらこれが、シディーが感じた邪悪な気配であるようだ。俺はため息をつきながら、鑑定を終了させる。

男はすでにすべてをあきらめたのか、まるで死んだように微動だにしないでいる。俺は男に声をかけずにその場を後にする。しばらく歩くと、歩哨に立っている兵士たちを見つけた。彼らは俺を見つけて怪訝な表情を浮かべていたが、やがてリノスだと気付くと、見事な挙手の礼を取った。

「すぐそこに一人の男が倒れている。いや、いわゆる殺し屋だ。今は俺の結界を張っているので身動きが取れない状態だ。しばらく、牢屋に閉じ込めておいてくれ。あ、自決する可能性もなくはないから、十分注意してな」

俺の言葉に、兵士たちは再び見事な挙手の礼を取り、足早に男の許に駆けていった。その様子を見ながら俺は天を仰ぐ。

「さて、あの男、どうするかな？　愛するヴィエイユの許に帰して

やったほうがいいのかね？　ただ、そうなるとヴィエイユが彼を始末しちゃうかな。腕は立つから、呪いを解除してどこかで働くか？

……まあ、クノゲンやマトと相談しなきゃいけないな」

そんなことをひとり呟きながら、俺は転移結界を発動させた。すでに日が昇り始めていた。

◆　◆　◆

セルロイトを乗せた馬車は、昼過ぎになってアガルタの都に到着した。馬車は都を進み、洗練された大きな建物の前で停まった。彼女は迎えに出た兵士に、大公からの親書を手渡して、自らが使者であることを告げ、懐からもう一通の書簡を取り出した。兵士はそれを受け取ると、中を検めた。

「ハッ、承知いたしました。遠路はるばる、お疲れ様でございました。我が王に取り次ぎます故、どうぞ、中でお休みください」

兵士は一旦詰め所に戻り、しばらくして戻ってくると、馭者の男に指示を与える。程なくして馬車は動きだし、建物の中に入っていった。

「いらっしゃいませ。お部屋までご案内いたします」

馬車から降りると、見目麗しい美女が出迎えていた。そのあまりの美しさに、セルロイトは思わず目を逸らせた。女性は笑みを浮かべながらセルロイトを案内する。その背中には羽が生えていた。

案内された部屋は、シンプルだが居心地のいい空間となっていた。セルロイトは呆然と部屋を眺めていると、案内の美女と入れ替わる

ように、緑色の髪を持った小柄な女性が現れた。

「迎賓館の館長を勤めますミンシと申します。この度は遠路はるばるお疲れ様でございました。どうぞ、こちらでゆるりとご休息くださいませ」

彼女はゆっくりと頭を下げる。優雅な所作が見事だった。おそらく、どこかの王に仕えていた方だろうか。そんなことを考えているセルロイトに、ミンシは、昼食は摂ったかと聞き、そして、この部屋の使い方や迎賓館のルールなどをテキパキと説明した。

「それでは、昼食をお持ちしますので、しばらくお待ちください」

ポツンと一人残されたセルロイトは、部屋に設えられた一人用のソファーに腰を下ろす。これから自分はどうなるのだろう。一体、どんなことがこの先、待ち受けているのだろうか……そんな考えが湧き上がってくる。だが、不思議なことに、強い不安感は湧き上がってこなかった。むしろ、何となく、ではあるが、この国では楽しいことが起こりそうな予感すらしていたのだった。

「やっぱり、国が変わったからかしら。それとも、旅の疲れのためかしら」

セルロイトは誰に言うともなく呟く。シックで落ち着いた部屋の中で、彼女はゆっくりと目を閉じた。こんなとき、マタカ様がいらしたら、彼は何と声をかけてくれるだろうか。きっと、すべてを私に任せておけ、お前は何も心配することはないのだと言って、抱きしめてくれたに違いない。そして、強く抱きしめた後、せわしげに自分の体を求めてきたに違いない。

彼との交わりは、すべての不安から彼女を解放してくれた。だが、
そのマタカはここにはいない。そんなことはわかっているが、それ
でも、セルロイトは、マタカとの思い出に浸り続けるのだった……。

第五百五十二話　到着（後書き）

コミカライズ１５話が公開されました。８／４　１２：００まで無料公開中です。ゴンとおひいさまが登場！　是非、チェックしてみてください！（ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ？ｃａｔｅｇｏｒｙ＝１４）

第五百五十三話　謁見

アガルタに到着したその翌日、セルロイトはアガルタ王に謁見した。

謁見の間に通された彼女は一人、リノスの到着を待っていた。豪華だが落ち着きのある広い部屋で一人、彼女はぼんやりと目の前にある玉座を眺めていた。今の彼女には、不安も期待も、何にもなかった。

「お待たせしました」

突然、男の声が聞こえた。驚いて顔を上げると、優しげな男がこちらに笑顔を向けながら、玉座に向かって歩いて来ていた。その後ろから、美しい女性が三人付き従う。小柄な緑色の髪を持った女性を先頭に、妖艶な色気を漂わせた女性が続き、最後に羊獣人の女性が現れた。彼女らはセルロイトを見ると皆、一様に優し気な笑みを投げかけた。

「いや、お待たせして申し訳ありませんでした。アガルタ王のリノスです」

およそ王とは思えない程の気さくさで、男は話しかけてきた。噂には聞いていたが、まるで、旧友との再会を喜ぶかのような振る舞いは、セルロイトの予想を超えたものだった。そのために、彼女はこれまで幾度も練習してきた挨拶の言葉を忘れてしまった。

「あのっ……こっ、こっ、こっ……」

なかなか言葉が出てこない。そんなセルロイトを、リノス以下全員が、慌てることはないといった雰囲気で見守っていた。

「いやぁ、堅苦しい挨拶は止めにしましょう。どうも俺は、堅苦しいのが嫌いでしてね。ええと……何か、書簡を預かっておいででしたっけ？」

リノスの声にセルロイトは体を震わせる。そして、アタフタと懐から大公の書簡を取り出した。

「……」

書簡を手に持ったまま、セルロイトは固まる。こうした場合、王に取り次ぐ者が書簡を受け取るというのが習わしなのだが、この謁見の間には、それらしきものの姿が見当たらない。この場合、どうしたらいいのか。セルロイトはキョロキョロと周囲を見渡すほかなかった。

「ああ、では、拝見しましょう」

あろうことか、王自身が玉座から立ち上がり、こちらに向かって歩いてきた。彼はセルロイトのすぐ傍までくると、優しげな笑みのまま右手を差し出した。

「あ……え……あ……あ……」

言葉にならない言葉を絞り出しながら、やっとのことで書簡を彼に手渡す。男は書簡を一撫でして、中の手紙を取り出した。厳重に封蝋されている書簡だ。セルロイトの国では、そうした書簡は、専用のナイフで丁寧に、優雅に破かれて中を取り出していたが、この王

はそうしたことは一切せず、ほんの一瞬で中身を取り出して見せた。彼女はその仕掛けが全くわからずに、頭の中はさらに混乱するのだった。

「……なるほど。貴国も火山の噴火の影響がおありなのですね。承知しました」

男はそう言うと、書簡を持ったまま玉座に戻っていった。そして、後ろに控えていた羊獣人の女性にそれを渡すと、小さな声で何やら声をかけた。女性は書簡を恭しく受け取ると、じっとその中身を検める。

……もしかして、このお方が、「大賢者メイリアス」かしら？

セルロイトが驚くのも無理はなかった。彼女の『大賢者メイリアス』のイメージは美々しい衣装を纏い、大きな杖か何かを持っているというものだった。母国、フォーアル公国では賢者と呼ばれ、国民から尊敬を集めている者は三名いたが、彼らのいで立ちがまさにそうしたものだったからだ。だが、目の前にいる女性は、セルロイトの母親が自宅で来客時に着用するような衣装を纏っている。とても、アガルタという世界最強国の王妃には見えない。だが、その双眸には凛とした知性を感じさせるし、全身から感じる優しげな雰囲気は、とても好感が持てた。

「承知しました」

書簡を読み終わったメイリアスは、リノスに向かって恭しく一礼する。そして、手に持っていた書簡を、さらに隣に控えていたお妃たちに手渡す。

「それでは、セルロイトさんは、アガルタ大学の留学生という形でお迎えしましょう」

そう言って女性はセルロイトに向き直る。

「アガルタ大学を預かりますメイリアスでございます。どうぞ今後ともよろしくお願い申します」

「あっ、あっ、ああ……」

やっぱり、この人が大賢者メイリアスなのだ……。そう思いながら、何とか頭を下げる。そんな彼女にメイリアスはさらに言葉を続ける。

「書簡を拝見しますと、セルロイトさんは農業にご興味がおありだとか……。アガルタ大学では色々な作物を育てています。是非、私も、セルロイトさんから色々なことを学ばせていただければと思います」

「そっ、そんな……私など……」

「テイスト大公様が書簡の中で、セルロイトさんへ大きな期待を寄せておいでです。私も知っていることは全てお伝えいたします。お互い、学び合いましょう」

「はい」

……何だか、ものすごく大きなことができるような気がした。この女性の許で是非、学びたい。セルロイトは心の中でそんなことを考えていた。

「遅くなりました」

突然、女性の声が聞こえる。視線を向けると、そこには絶世の美女がアガルタ王に向かって歩いてきていた。彼女はアガルタ王の隣の玉座までやって来ると、セルロイトに向かって、にこやかに話しかけてきた。

「アガルタ王リノスの妻、リコレットでございます」

これまでセルロイトが会った女性の中で、最も美しい女性だった。美しい金髪に真っ白い肌……。まさに大国の王妃と呼ぶにふさわしい気品を備えた女性だった。こんな女性になれたら……。セルロイトは思わず心の中で唸った。

リコレットは、優雅な振る舞いで玉座に腰を下ろす。その彼女に、セルロイトが持参した書簡が手渡される。

「なるほど……では、メイの許に？」

「はい。アガルタ大学の留学生という形で、共に学んでいきたいと思います」

リコレットは大きく頷く。

「困ったことがあれば、いつでも力になりますわ。ところで……フォーアル大公国への支援は、どうするのです？」

「ああ。一万人分の食糧を支援しようと思う」

リコレットの問いに、リノスが即答する。だが、彼女は天を仰いで

何かを考え始めた。

「メイ。カウワサイの種はどのくらいあるのですか？」

「四トンほど備蓄があります」

「では、そのうちの半分をフォーアル公国に送ってはいかがですか？」

「なるほど。あれはやせた土地でも生育するな。わかった。リコの言う通り、カウワサイの種も送ることにしよう。セルロイトさん」

突然、アガルタ王から名前を呼ばれて、セルロイトは体を震わせる。

「テイスト大公に、食糧支援と共に、カウワサイの種を送ることを知らせてください。あの種は食べても美味しいですが、できるだけ土に撒いて、作物として育ててから食べるようにとお伝えください」

「わっ、わかりました」

セルロイトは思わず笑みを漏らす。カウワサイの種は、叔父である大公・テイストの大好物だからだ。二トンもの種が送られたとなると、叔父は大喜びするに違いない。あの叔父のことだ、数十kgは自分のためにヘソクリをするに違いない。書簡で戒めなければならない。

だが、叔父がカウワサイの種を好物にしているということは、ほぼ、近い家族でしか知らない事柄だった。まさか、そんなことまでこのアガルタは把握しているのだろうか……。そう考えると、自分はとんでもない国に来たのかもしれない。

期待と不安が入り混じる複雑な感情を胸に、セルロイトはアガルタ王たちに視線を向ける。相変わらず彼らは優しい笑みを浮かべている。そのとき、不意にアガルタ王が口を開いた。

「まあ、色々とご苦労なされたようですが、アガルタに来られてよかったのではないでしょうか。しばらく時間が経てば気持ちも落ち着くことでしょう。これからのことは、それから考えてもよいと思います。ここでの暮らしが充実したものになるように、俺も、妻たちも協力しますからね」

そう言って彼はニコリと笑みを浮かべる。その笑みはなぜか、セルロイトの不安感を軽くするものだった……。

第五百五十四話　お前の負けだ

「それでは、早速、アガルタ大学にご案内します」

メイはそう言って、セルロイトの許に行き、彼女を連れて部屋を出ていった。その様子を見送りながら俺は、大きなため息をつく。

かなり長い間、あのセルロイトという女性に鑑定スキルを発動させていた。彼女の過去を覗き見た俺の感想は、とても家族に愛された幸せな女性というものだった。確かに、自信のなさが先立ってしまって常にオドオドしているが、こういう女性を嫁にすると、男は間違いなく幸せになるだろう。そう感じさせるほどに、この女性の家族は素晴らしいものだった。

ただ、この彼女の優しさは時に、不運を招く。こうした優しげな女性は狙われやすい。あの、クリミアーナのマタカという男に唆されたのがいい例だ。

愛する娘を、姪を、このアガルタに無理やりにでも来させたのは、大正解と言える。会えなくしてしまえば、人は忘れるからだ。今はマタカとの仲を引き裂かれたことによるショックで辛いだろうが、それは最終的に素敵な思い出になる。

「よかった……これで、もう安心だわ」

誰に言うともなくシディーが呟く。彼女の直感では、このセルロイトという女性は、シディーにとっても大きな影響を与える女性なのだという。絶対に失ってはならない女性……。シディーがそこまで

言い切るのだ。それは、何としても救わねばならない。どうやら、彼女のミッションは果たされたようだ。

「かなり、繊細なお方とお見受けしましたわ」

リコが、セルロイトが去った方向を眺めながら呟く。その表情からは、彼女もあの女性に親近感を覚えたようだ。俺は鑑定スキルで覗き見たことを伝える。

「……まあ、それはお気の毒ですわね」

リコが少し俯きながら口を開く。シディーも無言のまま俯いている。そんな中、ソレイユだけが相変わらず妖艶な笑みを浮かべている。

「きっと、大丈夫です」

「ほう、言い切るなソレイユ。何か根拠でもあるのか？」

「女性は失恋すると、美しくなるものです。それに……今は苦しいでしょうが、新しい恋が見つかると、すぐに忘れますわ。大丈夫です。あのお方ならば、優しい殿方に見染められて、幸せな結婚をすることでしょう」

ソレイユの言葉に、リコは大きく頷いている。一方で、シディーはよくわからないといった表情をしている。二人の反応がまるで違うのが、何だか少し可笑しかった。

「ママぁ。終わったぁ？」

突然、子供の頓狂な声が響き渡る。視線を向けると、そこにはイデ

アとピアトリスが、扉からぴょこんと顔を出してこちらを覗いていた。

「ちゃんとお部屋で待っていなくてはいけませんわ」

そう言ってリコは玉座から立ち上がって、二人の許に向かう。その後をシディーも追う。

「ママ～」

イデアが走り寄ってきてリコに抱きつく。それを見て、ピアトリスもシディーに走り寄ってきて抱きつく。二人とも本当に母親が大好きだ。

「リコ様、お着替えを」

ソレイユが皆に近づきながら声をかける。それを受けてリコは頷き、イデアに大人しく待っているのですよと声をかけて、その場を後にしていった。イデアはソレイユと手を繋いで、リコの後姿を見送っていた。

「さて、ママの着替えが終わったら、二人とも屋敷に帰るんだぞ。とうたんはまだ、お仕事があるからな。シディー、ソレイユ。頼んだぞ」

俺の言葉に、二人は頷く。俺は再びセルロイトが出ていった扉に視線を向け、ソレイユが言っていたことが現実になればいいなとふと思った。そんな先のことはわかりはしないのだが、何となく俺は、あの女性が幸せになるような予感がしてならなかった。

事実、セルロイトは後年、アガルタ大学で教鞭をとる男と結婚し、幸せな家庭を築くことになる。一回り以上も年の離れた男との結婚、さらに、公爵の娘と一介の研究者という身分違いの恋に、その報告を聞いた両親も大公も驚愕するのだが、二人の幸せな表情を見るにつけ、最終的に彼らは、快く二人の仲を認めるのだった。

そんな未来が待っていることとは露知らず、セルロイトは相変わらずオドオドとした様子で、メイに連れられてアガルタ大学に向かうのだった。

◆　◆　◆

リコたちと別れた俺は、アガルタ軍の本部に転移した。

地下の一室の扉を開けると、そこにはマトカルと兵士数人が控えていた。その視線の先には、今朝がた結界村で捕らえた男が転がされていた。

「どうだ？」

俺の問いかけに、マトカルはゆっくりと首を振る。

「今のところは全く問題ない。何も喋らないし、水さえ飲もうともしない」

「そうか。まあ、なかなか難しいわな」

男は結界が張られているために、体を動かすことができない。辛うじて口だけは利けるようにしていて、水くらいは飲めるようにはなっているのだが、男は水どころか、一言も口を利いていないのだと

いう。

俺はこの男の処遇をどうするべきか迷っていた。本来ならば、国外追放とするところなのだが、この男はヴィエイユから全幅の信頼が置かれている。男が連絡を断てば、ヴィエイユのことだ、また新たな要員を送り込んでくるのは目に見えている。きっと、この男よりもさらに巧妙に、俺の眼を欺いてくるだろう。そうなると、色んな意味で面倒臭いことになる。

ヴィエイユに突き出すことも一瞬考えたが、きっとあの娘のことだ、しらばっくれるに決まっている。それをしたところで、何の意味もないのは火を見るよりも明らかだった。

俺は男の前でしゃがみ込み、うつぶせの状態で寝ている男を仰向けにした。相変わらずじっと目を閉じたままで、何も話をする気はないらしい。

「捕らえたはいいものの、何とも扱いが困るヤツだな。下手に野に放つと、この腕だ。アガルタ以外の国に潜伏して、色々と裏工作を続けるだろう。とはいえ、殺してしまうと、色んな意味でややこしくなる。一生独房の中に閉じ込めていくわけにもいかんしな……」

そのとき、男の表情が変わった。何と、ニヤリと笑みを漏らしたのだ。この男は知っているのだ。自分が殺されないことを。そして、俺が対処に困るのを見て、楽しんでいるのだ。

「悪いことは言わん。早く私を解放したほうがいい」

俺の感情を見透かしたように、男が口を開く。

「マト、ご苦労だった。下がっていい」

「……いいのか？」

「大丈夫だ。ご苦労だった」

マトカルは、無表情のまま部下たちを連れて部屋を出ていった。

「お前の負けだ」

俺の言葉に、男はゆっくりと目を開けて、明らかに侮蔑の表情を浮かべた。負け惜しみを言うなと言わんばかりの表情だ。そんな彼の顔に、俺はそっと手を当てる。

「お前が舌でも噛み切って死んでしまえば、俺はさらに困っただろう。だが、お前はそれをしなかった。生きてヴィエイユの力になりたいと思った。その愛の深さには敬意を表するが、しかし、その愛ゆえに、お前は負けたのだ」

そう言いながら男に魔力を込める。使ったのは、精神魔法だ。

「成功した。お前は、狙った女の命を、計画通りに奪った。お前の計画は、完璧に成功したんだ。」

「成功……した。成功……した。成功した……」

俺はそっと手を離した。男はぼんやりと視線を泳がせながら、うわ言のように何度も成功したと呟いている。俺は男の胸ぐらをつかむと、転移結界を発動させる。行先は、男を捕らえた結界村の外れだった。

「……何ともやりきれんな。もっとうまい方法はなかったかね」

そんなことを呟きながら男から手を離す。地面に投げ出された男は、相変わらず空に向かって視線を泳がせている。おそらく、あと五分もすれば正気に戻るはずだ。

俺は精神魔法の中に、毎晩、眠ったときに、事細かに一日の行いを日記にして記すよう命令を込めた。これでヤツの行動は全て詳らかになる。鑑定では追えなかった、この男の背後関係を洗おうと思ったのだ。

正気を取り戻したこの男は、すぐに緊急信号を送った主に命令を完遂したと返事を送るだろう。そして、何事もなかったかのようにアガルタから出ていくことだろう。

……毎日の日記は、サダキチたちに受け取らせるか。あとついでに、この男を監視させるか。そういえば、この男の帰りを待っているボンイサオ男爵はどうしようか。……それは、放っておこう。

そんなことを心の中で呟きながら、俺は転移結界を発動させ、都の執務室に帰ったのだった。

第五百五十五話　唇を噛む

白で統一された建物が立ち並ぶ教都・アフロディーテ。その中心にある教皇神殿の一室で、ヴィエイユが唇を噛んでいた。

教皇の執務室。豪華で広いその部屋には、彼女以外誰もいない。そのため、人前では決して見せることのない狼狽した感情を露わにすることができていた。

よりにもよって、アガルタの国内で暗殺が行われていた。あの国に関しては、教皇である自分の許可がない限りは、一切の活動を行うことを禁じていた。にもかかわらず、コトは行われた。そしてそれは事後報告という形で、ヴィエイユの許にもたらされていたのだった。

彼女はじっと報告書を眺める。一字一字を噛みしめるようにして読み込んでいく。これを作成した者たちの、自らの行為を正当化しようとする心の動きが、文間から手に取るようにわかる。篭絡したと思っていた女性がその家族によって遠ざけられ、アガルタに送られてしまった。まさに、策士策に溺れるとはこのことだ。

そこまで考えて彼女は、苦笑いを浮かべる。私も、人のことは言えないな……と、少し自虐的な気持ちになる。

相手を篭絡して心を奪い、己が意のままに操る……。これまでヴィエイユが世界中で駆使してきた手法だ。これは、彼女が優れた観察能力を駆使して観察し、研究を重ねてきたこともあって、いわゆる、「人の心の動き」をいくつかのパターンに分類し、それぞれの対処

方法を確立することができていた。それらを彼女は、布教する際の手法の一つとして取り入れていた。これは大きな効力を発揮する反面、大きなトラブルを引き起こす一因ともなっていた。

特に、自分の容姿に自信を持つ者は、相手を篭絡してしまうと、その関係を維持しようとして、相手だけに意識を集中してしまう傾向にあった。

人の心は、周囲の環境によって作られる……。ヴィエイユが多くの修羅場を乗り越えて導き出したこの説……。それを丹念に伝えても、どうしても油断が生じてしまい、相手の周囲を観察することが疎かになる。今回のマタカとセルロイトの事柄は、まさに、周囲の観察を怠った結果であると言えた。

ヴィエイユにとっての最大の誤算は、親衛隊の副隊長であるジレットが動いたということだ。彼の風貌はさておき、その腕に関しては、部下の中では全幅の信頼を置いている男だ。その彼がわざわざ出向いて、セルロイトを暗殺したのだという。ジレットならば、上手くやり果せるだろう。だが、実行したのはアガルタの国内での話だ。いかに汚れ仕事を専門に行ってきた彼をもってしても、あの王の眼を掻い潜ることができるという確信が、ヴィエイユにはなかった。

「とはいえ、このまますむ、とは思えないわね……」

ヴィエイユは思わず呟く。彼女の心の中には、何とも言えぬ不安感が湧き上がっていた。

正直、あのアガルタ王には勝てる気がしない。出会った当初は、何ということのない、単なる優男だと思っていた。だが、あのお方に近づけば近づくほど、その存在は遠くになっていくように感じる。

事実、ヴィエイユは常にあの王に出し抜かれ続けていて、彼女自身、あの王に対しての有効な策が導き出せないでいた。今のクリミアーナ教国の方針としては、アガルタとはできるだけ事を構えず、ひたすら情報収集に専念すると、つい最近、部下たちに指示したところだった。

今、ヴィエイユ率いる新・クリミアーナ教国は西側に空いた大穴をどうやって埋めるかに躍起になっていた。ラッカー率いるサブクリナー王国が、すでにコントロール不能の状態に陥っているのだ。

言うまでもなく、国王であるラッカーは、アガルタから迎えたサイリュースの虜となっていた。この種族は容姿端麗にして、男性を篭絡する手練手管に優れていると言われている。その噂に違わず、まるで獣のようなラッカーを篭絡し続けている。

サブクリナー王国は、いわゆる絶対君主制だ。国王が統治の全権能を有して、自由に権力を行使する。そのため、クリミアーナ教国としては、国王さえ押さえておけば、その国はもはや、教国の自由になったも同然だったのだ。

だが、今回ばかりはそれが仇となった。国王であるラッカーが操ることができないという状況は、一つの属国を失ったと同じ意味となる。

サブクリナー王国から教都アフロディーテまで、船で僅か一日の距離だ。遮るもののない一本道……。もし、ラッカーが寝返り、彼が率いる精鋭三万がこのアフロディーテを目指したとなると、このヴィエイユが心血をかけて作り上げた都は、一日も持ちこたえることができずに灰燼に帰すことになるのだ。

ヴィエイユとしても、そのようなことにならぬように、方々に手を打っていた。王国内の政治と軍を治める者たちに直接的、間接的に指示を与え、心が離れぬように取り組んでいた。だが、肝心のラッカー自身が首を縦に振らない。ヴィエイユの数度にわたるアフロディーテへの出頭要請も、国内の状況が混乱しているという理由で、その命令を拒否するありさまだった。

確かに、現在のサブクリナー王国は、ルワザン島のレイス火山の大噴火の影響を受けて、作物に甚大な影響を受けている。おいそれと国王自らがアフロディーテに伺候している状況ではないだろう。だが、以前のラッカーであれば、どんな状況であっても、要請があればすぐにアフロディーテまで飛んで来る男だった。その彼が、ヴィエイユの要請を断るのだ。彼女はもちろん、クリミアーナ教国の幹部が衝撃を受けたことは、言うまでもなかった。

ラッカーは相変わらずリジアと閨房で過ごし続けていた。だが、午前と午後の数時間は政務を執り、驚異的な情報処理能力で、決済を行っていた。どうやら彼は、時間を決めて政務を執ろうとしているらしく、そのために、優先順位を決めて決済を行っているようだった。そのせいもあって、サブクリナー王国は特に大きな乱れもなく、何とか現在の体制を維持し続けているのだった。

ちなみに、後宮の総取締役からの報告によれば、ラッカーはリジアと閨を共にする前に、必ず湯浴みをしていた。彼は自分の体だけでなく、リジアの小柄な体を、まるで宝物を磨くようにして洗うのだと言う。あの、樋熊のような毛むくじゃらの手が、体中をはい回るのだ。ヴィエイユにとっては身の毛もよだつことだが、とはいえ、それをすることで、彼のキツイ体臭は幾分か緩和される。それを勧めているのは、リジアであることは火を見るよりも明らかだった。ラッカーは徐々に、体だけでなく心までも、このサイリュースに操

られつつあるのだ。

アフロディーテの西側の防衛が急務となった中、注目されたのが、フォーアル大公国だった。この国は長い間鎖国の状態にあり、クリミアーナ教国との関係も長い間、必要最小限にとどめられていた。教国にとってみれば、小さい島の、何の力もない小国であり、取り立てて注目もされなかった国だったが、この国は、サブクリナーとアフロディーテのちょうど中間に位置していた。もし、ラッカーが教都に向けて軍を発したとき、砦となるのは、この国しかなかった。クリミアーナ教国は、このフォーアル大公国を盾として使おうと考えたのだ。

とはいえ、サブクリナーの精鋭を相手にすれば、この小国は半日、もって一日しか持ちこたえられないだろう。だが、それだけの時間があれば、周辺国からの援軍は間に合うのだ。今の教国にとって、それが残された唯一の防衛手段と言えた。

幸いにして、フォーアル大公国に付け入るスキはあった。ヴィエイユ自らが手を下すほどのことでもなかったために、今回は部下たちに任せたのだが、それが裏目に出た形となった。

「さて、どうするべきか……。このままにしておくわけには、いかないわね……」

ゆっくりと椅子に体を預けて、目を閉じる。そのとき、不意にヴィエイユの頭をかすめるものがあった。それは、彼女の祖父である前教皇、ジュヴァンセル・セインの面影だった……。

第五百五十六話　しばらく浸りたい

「失敗は、失敗のままで終わらせるから失敗なのです。その失敗を成功に導けば、それは失敗ではなく、成功となるのです」

祖父、ジュヴァンセル・セインが事あるごとに口にしていた言葉だ。この言葉のお蔭で、彼の部下は無理難題を押し付けられ、多くの者が命を落としていた。

ヴィエイユの脳裏に、笑顔でその言葉を口にする祖父の光景が、鮮やかに蘇っていた。彼女は眼を開けて、大きなため息をつく。

祖父の言うことは確かに一理ある。だが、お爺様の考え方は半分は合っているが、半分は間違っている。現在は失敗に見えても、将来的にそれは成功であるかもしれないのだ。今、現在の状況が彼の思い通りでなかったとしても、それを失敗と決定づけるべきではない。

そう考えたとき、彼女の脳裏に一つのアイデアが浮かんだ。

「ウフフ……ウフフ……」

ヴィエイユはいたずらっぽい笑みを浮かべながら、笑いをかみ殺す。今、自分が考え付いたアイデアが、まさに、祖父そのものだったからだ。

やはり、私はお爺様の孫なのね……。

そんなことを思いつつ、彼女は手に持っていた報告書を机に置き、

両手を鳴らした。すぐに秘書を務める女性が現れる。

「お呼びでございましょうか」

「ロン・エスロテル枢機卿を呼んでください」

「畏まりました」

恭しく一礼して女性は下がっていった。ヴィエイユは再び目を閉じて、椅子にその体を預けた。

◆　◆　◆

「お召しにより、罷り越しました」

しばらくすると、ヴィエイユの前に、白髪の男が現れた。その後ろには、女性の枢機卿が控えていた。男はヴィエイユの前で畏まると、じっと彼女の眼を眺めている。これは、数多いクリミアーナ教徒の中でも、かなり珍しいことであると言えた。

信徒の大半は、ヴィエイユの前に出ると、彼女から視線を逸らせる。場合によっては、俯いたまま一切視線を合わせない者もいるほどだ。彼ら、彼女らにとって生き神に等しいヴィエイユは、目を合わせるだけで不敬と感じる。そのため、ヴィエイユに真正面から目を合わせて話をすることができるのは、枢機卿の中でもわずか数人と限られていた。

ロン・エスロテルは、何の邪心も感じさせないキラキラした瞳を、真っすぐに向けている。ヴィエイユはその瞳を眺めながら、ゆっくりと口を開く。

「フォーアル大公国に派遣しているマタカ枢機卿、および、南グレダフル支部の支部長であるフリーマン枢機卿からこのような書簡が届きました」

「はい。私も読みましたが、言葉がございません」

男はさも気の毒、と言わんばかりの表情を浮かべている。そんな彼にヴィエイユはさらに言葉を続ける。

「南グレダフル地域の管理をお任せしているのは、あなたです。ご意見を伺おうと思います」

「……」

男は、ヴィエイユの問いに応えない。しばらくの間、沈黙が流れたが、やがて彼は、姿勢を正して、再びヴィエイユに視線を向けた。

「書簡からは、支部長のフリーマンは、己が最大限の力を尽くしたという感情がよく見て取れます。また、マタカにつきましては、責任を追及されることを恐れている……そんな感情が見て取れます」

ロン・エスロテルの言葉に、ヴィエイユは表情を変えずに彼を眺め続けている。

「私としましては、とりわけマタカにつきまして、挽回の機会を与えたく存じます」

「挽回の機会？」

「はい。このままですと、マタカらフォーアル大公国に派遣しました者たちは、遠からずかの国を追われることになりましょう。とはいえ、かの国は我が教国にとりまして、西の要となるところ……。このまま態度を硬化されては、我が国にとってもよろしくはございません。そこで、マタカらには時機を見て再度、フォーアル大公国に向かわせ、挽回の機会を与えたく存じます」

ロン・エスロテルの言葉がいまいちよくわからないといった表情を浮かべながら、ヴィエイユは少しだけ首を傾げる。

「教皇聖下のご懸念はごもっともでございます。しかしながら、マタカ枢機卿は、主神様の加護をいただいております。二度の失敗はないと心得ます」

「……そこまで言われるのならば、よいでしょう。では、具体的に、どのようにするつもりなのでしょう？」

「まず、最も大切なことは、フォーアル大公国から退去を命じられる前に、マタカらをかの国から引き揚げさせることかと愚考します。退去を命じられる、もしくは、軍勢を向けられてマタカらが討たれるようなことになれば、彼らに挽回の機会を与えることは難しくなります。もっとも、彼らが、かの国で討たれれば、それを口実に我らは軍を向けることができます。我々としましては、その方がありがたくはありますが」

ロン・エスロテルは、真顔のままゆっくりと頷く。その様子をヴィエイユは、無表情のまま眺め続けている。

「まずは、教皇聖下におかれましては、フォーアル大公国に、派遣している枢機卿を引き揚げさせる旨の、親書を送っていただきたく、

お願い申し上げます」

「それは吝かではありませんが、具体的に、マタカ枢機卿には何をなさるおつもりなのでしょうか？」

「それにつきましては、彼自らの口から説明させるのがよいかと考えます。ご懸念には及びません。あの男ならば、必ず教皇聖下の御意を適えて御覧に入れます」

「ロン・エスロテル枢機卿」

「はっ」

「私の質問に、お答えください」

ロン・エスロテルは、しばらく沈黙していたが、やがて、仕方がないという表情を浮かべたかと思うと、小さな声で口を開いた。

「恐れ入りますが、お人払いを」

「この部屋には、私とあなたしかおりませんが？」

「いいえ。扉の後ろに一人おります」

ヴィエイユの眼が少し開かれる。彼女は小さなため息を一つつくと、扉の向こうに向かって声をかける。

「オーレリーさん。下がって結構です。用があれば、呼びます」

秘書のオーレリーは、忠誠心の塊のような女性だった。敬虔なクリ

ミアーナ教の信徒らしく、ヴィエイユを神と崇め、彼女をサポートすることに無上の喜びを感じていたのだ。そのために、ヴィエイユの声が聞こえる位置に控えているのが常だったのだ。今回も、彼女が手を鳴らしたときに、すぐに応対できるように扉の後ろで控えていたのだ。彼女のその気遣いが、素直にうれしかった。

だが、そんな感情は面に出さず、ヴィエイユは相変わらず無表情のままだ。そんな彼女に、ロン・エスロテルは小さな声で呟いた。

「アレの試作品が完成しました」

ヴィエイユの眼が大きく見開かれる。

「ついに、完成したのですか」

「はい。ただ、完成とは申しましても、実際に使用したわけではございません。我が国……とりわけ、アフロディーテで使用しますと、想定外のことが起こる可能性がございます」

「で、あれば、どこか安全なところで……。まさか？」

ヴィエイユの言葉に、ロン・エスロテルは大きく頷く。

「かの国はまさに、打ってつけではございませんか」

「なるほど。そういうことですか」

二人は顔を見合わせながら、ゆっくりと頷き合った。すでに、ヴィエイユの頭の中には、これから先にとるべき戦略が次々と浮かんできていた。

……上手くいけば、アガルタに勝利できるかもしれない。

軍勢を派遣するでもなく、策を弄するわけでもなく、これが上手くいきさえすれば、アガルタはクリミアーナなしでは国として維持することができなくなるのだ。即ちこれは、アガルタを支配下に置いたも同然となる。と、なれば、自ずとクリミアーナ教国は、この世界の頂点に君臨することになる。

ロン・エスロテルを下がらせたヴィエイユは、再び目を閉じて椅子に体を預けた。久しぶりに湧き上がってくる希望という感情……。彼女はこの心地いい感覚に、しばらく浸っていたいと強く願った。自然、その表情は緩み、彼女は無意識のうちに笑みを浮かべるのだった……。

第五百五十七話　呆然とした表情

大公・テイストは、呆然とした表情を浮かべたまま固まった。目の前の光景が、俄かに信じられなかったからだ。

規模は小さかったとはいえ、そこには家があり、畑があり、一つの村がそこにはあった。だが今、大公の目の前にはただ、何もない荒れ地が広がるのみだった。果たして、あの村は一体どこに行ったのか。村から火の手が上がったという報告は受けていない。つい三日前まであった村が、忽然と姿を消したのだ。常識では考えられない事柄に大公は驚きと共に、ある種の恐ろしさを感じていた。

それは、突然のことだった。クリミアーナ教国から、教皇親書を携えた者が現れたのは、まさに三日前のことだった。クリっとした愛嬌のある、頭の禿げあがった小柄な男が、ニコニコと笑みを浮かべながら大公の前に現れ、まるで宝物を持ち運ぶようにして、教皇からの親書を手渡した。そこには、当たり障りのない内容が書かれており、最後に、クリミアーナ教国内においても、火山の噴火による被害が出ており、復興のために、派遣している枢機卿を本国に呼び戻す旨が書かれてあった。

男はこれまで世話になったことを丁寧に述べ、そそくさとその場を辞していった。大公からすれば、そんなことをわざわざ言いに来る理由がわからなかった。それよりも、愛する姪を弄んだ男を無傷のままで、本国に帰国することに、口惜しささえ覚えていた。

そして、クリミアーナの村が忽然と消えていると報告があったのが、つい二時間ほど前のことだ。村の全てが完全に消え失せているとい

う部下の報告を、最初は理解することができなかった。だが、部下の悲壮な表情を見て大公は自ら馬を走らせたのだった。

この三日の間に、あの建物を解体したのか？　いや、前日まで村はあったと部下は報告している。僅か一日の間に、建物を壊し、畑を壊して元の景色に戻したのか。大公は、崖の下に広がる浜辺に視線を向けながら、混乱する頭を必死で落ち着けようとしていた。

同じ頃、一艘の船が大海原をゆっくりと進んでいた。その甲板には、二人の男が水平線の彼方に視線を泳がせていた。

「この度は、大変なお骨折りをいただきまして、ありがとうございました」

さも、申し訳なさそうに頭を下げているのは、マタカ枢機卿だった。彼の前には、公王の許に使者として赴いた、禿げあがった小柄な男だった。彼は、ニコニコと笑みを浮かべながら、口を開く。

「なぁに、このくらいのこと、お安い御用です。私の力がお役に立てれば、これに優る喜びはありません」

「ははっ。それにしても、まさか、あのような仕掛けが施されているとは、大公をはじめ、フォーアルの者たちは思いもよらないかと存じます」

「フフフ」

「信者たちの家はすぐに壊すことができましたし、我らが寝起きしていた建物は、組み立て式ですのですぐに分解することができましたが、まさかその後に布を張り、そこに絵を描くとは……。この私

にはとても思いもよらないことでございました」

「うまく、騙されてくれればよいのですが。あそこには、あなた方が心血を注いで作り上げた畑があります。あのまま放っておけば、畑は踏み荒らされてしまうでしょう。そうなれば、色々と……ね」

「はい。まさに仰る通りでございます」

「あの村に通じる道は破壊しましたね？　であれば、村は断崖絶壁の下……。おいそれとは近づけないでしょう。それに、あのようなお土産もあります」

男は船室の入り口に視線を向ける。船底では、あの村で暮らしていた敬虔な信徒たちが祈りを捧げているのだ。

「男女合わせて十名ですか。あそこまで、主神様の教えをよく教え込みましたね。あなたに取りすがって、号泣しながら一緒に連れて行ってくれと懇願していた場面は、実に美しかったですよ」

「ははっ、恐れ入ります。皆、えり抜きの信者たちですから。捲土重来の際は、彼らが役に立ってくれることでしょう」

「そうですね。そうなるように、アフロディーテでさらに研鑽を積ませましょう」

マタカと小柄な男はニコリと笑みを交わす。彼らを乗せた船は一路、教都・アフロディーテを目指したのだった。

そのさらに三日後、マタカたちと入れ替わるようにアガルタからの使者が到着した。待ちに待った使者の到着に、大公は取るものも取

り敢えず、使者を迎えた。だが、アガルタから送られた使者はたった一人だけであり、しかもその男は、手ぶらの状態で大公の前に現れた。

「お初にお目にかかるでありますー。私は、アガルタ王リノスの傍近くに仕えます、ゴンと申す者でありますー」

一見して、怪しい風体の男だった。アガルタという世界に冠する国の使者とは到底思えなかった。通常であれば、美々しい衣装に身を包み、手に持ちきれぬほどの進物を持って現れるのが使者の常だ。だが、目の前の男は、旅人のような服に身を包み、勲章も佩いていないばかりか、国王からの親書すらも持ち合わせていなかった。本当に、アガルタ王の使者なのだろうか。そんな疑いを大公は持ったが、この謁見の間に通っているということは、宮殿を守る兵士たちの厳しいチェックを受けてきているのだ。まさか、兵士たちが得体のしれない力で操られたわけではあるまい。そんなことを考えながら、大公は男に対峙していた。

ゴンと名乗る男は、紋切り型の挨拶を述べていたが、やがて、大公の顔色を窺うような素振りを見せたかと思うと、ニコリと笑みを浮かべて、さらに言葉を続けた。

「これは、失礼したでありますー。吾輩のこの格好が、この場にふさわしくないために、お疑いを持たれていることは重々承知でありますー。まずは、これをご覧いただきたいのでありますー」

男は懐から小さな石を取り出すと、それをゆっくりと床の上に置いた。すると、石の周囲の景色がゆがみはじめ、しばらくすると、一人の優男が現れた。

「お初にお目にかかります。アガルタ王リノスです。今、目の前にキツネ男がいるかと思いますが、そいつは俺の部下です。信用してあげてください。フォーアル大公国には、アガルタからできる限りの支援をさせてもらおうと思っています。詳しくは、目の前にいるゴンに聞いてください。あ、あと、セルロイトさんは元気に暮らしています。アガルタ大学に無事入学しました。取り急ぎ、ご報告まで」

それだけ喋ると、男は姿を消した。大公は口をポカンと開けたまま、呆然とした表情を浮かべている。

「ええと……よろしいでありますか？」

「あっ、ああ。失礼した。今のは一体……」

「我が王の結界スキルを付与した結界石でありますー。我が王が、こちらの方が伝わるだろうという配慮でありますー」

「さ……左様か」

「本来であれば、古式の慣例に則った方法でお目通りするのが筋かとも思ったのでありますが、時間を無駄にしたくなかったので、失礼を顧みず、吾輩の意見でこのような形を取らせていただいた次第でありますー。ご無礼の段、お詫び申し上げるでありますー」

そう言って男は、深々と腰を折った。大公は姿勢を正して、男をじっと眺めている。

「それでは、早速本題に入るでありますー」

男は数歩後ろに下がると、懐から別の石を取り出した。そして、何やら詠唱を始めると、先ほどと同様に、石の周囲が歪み始めた。しばらくすると、石のあった場所に、夥しい食糧が現れた。それは次々と現れ、謁見の間を埋め尽くすほどの量となった。

「こっ、これは……」

驚く大公に、男は頷きながら口を開く。

「約一万人分の食糧でありますー。もし、足りぬのであれば、遠慮なく言ってほしいでありますー。それから、こちらの袋は、カウワサイの種が詰まっているでありますー。やせた土地でも実をつけるでありますから、よければお使いいただければと思うでありますー」

男はさらに場所を移動しながら、何かを探す素振りを見せる。しばらくすると、あったあったという声を上げたかと思うと、大公に向かって、作物の一部を指さしながら口を開いた。

「こちらが、泥団子であります」

「泥団子？」

「アガルタが開発したものでありますー。これを畑に撒けば、その土地に合った作物が育つ種でありますー」

男はそう言うと、周囲を見廻しながら、さらに言葉を続けた。

「ということで、恐れ入るでありますが、どなたか吾輩に、畑を貸していただけぬでありますかー。この泥団子の種の撒き方と育て方をご教授するでありますー」

このとき、大公は初めてこの男がこんな格好をしているのかを理解した。すぐにこの国で種を撒き、一刻も早く作物を実らせて、食糧不足を招かぬようにしようとしているのだ……。

大公は、心が何か、温かいもので満たされていくのを感じていた……。

第五百五十八話　見返り

フォーアル大公国に向かったゴンがアガルタに帰還したのは、一週間後のことだった。帰ってきたのが夕方だったために、夕食後、子供たちが寝静まった後に、家族全員で彼の話を聞くことにした。

ゴンの報告では、大公国の土壌のダメージは、予想以上に軽いものだったらしい。とはいえ、今年収穫する予定であった作物はほぼ全滅で、ゴンは今年の収穫はあきらめて、来年の収穫に向けて色々と対策を講じるとのことだった。

「泥団子が根付けば、来年の収穫はかなり回復するはずでありますー」

そうは言うものの、確実とは言い切れないために、数か月に一度程度、メイが現地に赴いて状況を見ることになった。彼女には土精霊のノームが付いている。メイとノームがいれば百人力だ。メイも乗り気になっていて、是非、お手伝いさせてくださいと言っている。

「メイちゃんがフォーアルに行くのは賛成だけれど、姿は変えた方がいいと思うな」

口を開いたのはシディーだ。今のメイは、世界中にその名を轟かせている大賢者だ。聖女、と呼ぶ人も多い。そんな人が行ったとなると、大公国内は上を下への大騒ぎとなる。おそらく、下にも置かない丁重なもてなしをされると同時に、色々と相談事を持ち込まれることも予想される。そうなると、本来の目的である大公国内の農業復興に集中できなくなる、と言うのだ。

メイは謙遜して、そんなことはありませんと言うが、俺もシディーの意見に賛成だ。メイのことだ。頼まれればイヤと言わずに抱え込んでしまうことが容易に想像できる。そうなれば徹夜続きのオーバーワークになりかねない。それで体を壊してしまっては、元も子もない。

「いや、今の状況は特に問題が発生していないのでありますから、メイ殿が出向くまでもないのでありますー。吾輩の手に余るようであればまた、相談するでありますー」

「わかった。それでは、フォーアルについてはゴンに任せることにする。いいな、ゴン。メイ、ゴンが困った状況になるのであれば、そのときは頼むな。」

俺の言葉に、二人は頷く。

「これからゴンさんをフォーアルに派遣し続けるとなると、今のままではダメだと思います」

フェリスが全員に視線を向けながら、落ち着いた声で話しをしている。それに、ルアラが反応する。

「お姉さまの言う通りです。メイ姉さまとゴンさんがフォーアルで農業復興に携わるのは賛成です。ですが、それに対する見返りを求めた方がいいと思います」

「見返り……か」

俺は腕を組んで考える。というのも、フェリスやルアラの意見では、

ルワザン島のレイス火山の大噴火で被害を受けた国々が、今後もアガルタに食糧支援を要請してくる可能性が極めて高いのだという。アガルタ自体は火山の噴火の直接的な被害はなかったが、支援を求めてくる国々全てに対応することはできない。

「やはり、お金か、その国が持つ技術や特産物がいいと思います」

「それを、こちらから要求するのか……」

「はい。何も、リノス様が直接使者に言う必要はないと思います。それは、私やフェリス姉さまにお任せくださ い」

「どう思う、リコ？」

俺は隣に座るリコに視線を向ける。彼女は澄んだ瞳をじっとルアラたちに向けている。

「難しい問題ですわね」

リコの言葉に、フェリスとルアラはゆっくりと頷く。リコは目を閉じて何かを考えていたが、やがて眼を開いて、言葉を続けた。

「フェリスやルアラの言うことも、もっともですわ。フォーアル大公国に多量の食糧支援をしたということが他国に知られれば、食糧不足に悩む国々から支援を要請されることでしょう。ただ、アガルタの食糧も無尽蔵にあるわけではありませんわ。アガルタ一国ですべての国々に応対するのは難しい……。しかし、そこで見返りを求めるのは、私はするべきではないと思いますわ。今回は……いろいろな国々にお願いしてみてはいかがでしょうか？」

「いろいろな国々にお願い？」

「今回の大噴火……。被害を受けていない国々も多くありますわ。このアガルタ周辺の国々はほぼ、無傷ですわ。その国々から少しずつ食糧を支援してもらうのです」

「……なるほど。各国々から一旦アガルタに食料を集めて、それを救援要請してきた国々に対して分配する、か。それだったら、結構な数の国に対応できるかもしれないな」

「では、私はリボーン大上王様に手紙を書きます」

「ああ、メイ。きっと、メイからの要請だったら、大上王はすぐさま支援してくれるだろう。すまんが、よろしく頼む」

「では、私は、ニザの父にお願いしてみます」

「ああ、そうしてくれ、シディー。よかったら、ピアを連れて行くといい。公王様も孫の顔を見たいだろう」

「はい、ありがとうございます。父も喜びます」

「では、俺はヒーデータの陛下に会ってお願いしてくるとするか。フェリス、ルアラ。お前たちは、被害の少なかった国々に対して、食料の支援をお願いする書簡を出してくれないか」

俺の言葉に、二人は黙って頭を下げた。

「フェリス、ルアラ」

「……ハイ、リコ姉さま」

「ありがとう」

「……え？」

「二人とも、アガルタのことを本当に、真剣に考えてくれたのですわね。嬉しかったですわ」

「……」

フェリスとルアラは顔を見合わせている。いつもは厳しいリコから、まさか褒められるとは思わなかったようだ。

「もし、他国に食料を支援するときは、アガルタ軍が担当しよう」

突然、マトカルが口を開いた。皆、彼女に注目する。

「リノス様の転移結界を使えばいいのだろうが、それをしてしまうと、一瞬でコトが終わってしまう。アガルタとの距離にもよるだろうが、食料の輸送は兵士のいい訓練になるのだ」

「どういうことだ？」

「国が変われば、土地も変わる。高い山、広い川、ぬかるんだ土地……。色々なところを歩くことによって、経験を増やすことができる。地図だけを見て作戦を立てる……そんな兵士には育てたくないのだ」

「ハッハッハ」

思わず俺は声を上げて笑った。そんな俺を見て、マトカルはキョトンとしている。

「いや、すまんすまん。なるほど、マトらしいな。わかった、それについては、ちょっと考えることにしよう」

そこまで言うと俺は腕を組み、少し声を落として、さらに言葉を続けた。

「実は、クリミアーナはそうしているんだ」

「本当か？」

「ああ。もっとも、ヤツらは訓練目的ではないけれどな」

「どういうことだ？」

「クリミアーナの兵士たちが食糧を輸送する。そのときに、国の在り様をつぶさに調査するんだよ。作物の生育状況、人々の暮らしぶり、兵士たちの練度……。そして、弱点をあぶり出して、そこを突破口にその国を支配下に置いていくんだ。ヤツらは食糧はタダで支援するけれども、その見返りに国を取るんだ。まさに、タダほど高いものはないってやつだ」

俺の言葉に、マトカルは固まってしまっている。

「まあ、俺たちはそこまでする必要はない。何かあれば、サダキチたちに調べてもらえばいいんだ。あとは、作物が腐らないように気を付けてもらえればいい」

「その点でしたら、ご安心ください。精霊たちに協力を仰ぎます」

口を開いたのは、ソレイユだ。彼女曰く、支援に赴く際はあらかじめ、その国に住む精霊にアガルタの作物を腐らないように守ってもらうように要請するのだという。神龍様と契約しているソレイユが頼めば、大抵の精霊は言うことを聞いてくれるらしい。

「まあ、支援を要請してきた国から見返りを求めたいというのは本音だが、俺たちは敢えてそれをしないことにする。それによって、俺たちに恩を感じてくれれば上々だ。バカな、甘い考えだという批判を受けるのは覚悟の上だ。欲すれば与えよ。俺たちは、これでいく」

俺の言葉に、全員が頷いた。

後にこの作戦は功を奏し、アガルタは多くの物資の調達に成功する。そして、それらを惜しげもなく要請してきた国々に分け与えた。その結果、アガルタとその友好国は固い絆で結ばれることになる。

ちなみに、物資を支援する際、精霊に要請するために、ソレイユは多くの国に赴いた。もっとも、彼女は転移結界を使って移動していたのだが、たまたま、精霊に要請している場面を旅人などに目撃されることがあった。そこでは、ソレイユのあまりの美貌が目を引き、背中に翼を持った美しい天女が舞い降りたと噂になった。後に、いくつかの地域では、天女伝説として受け継がれることになるのだが、そんなことは、今のリノスたちには、知る由もなかった……。

第五百五十九話　いい報告、悪い報告

「オイ見ろ！　芽だ！　芽が出ているぞ！」

フォーアル大公国の農場で、男の大きな声が響き渡った。その声に、周囲にいた人々がドヤドヤと集まってきた。彼らの目の前には、畑一面に緑色の芽が出ていた。

「あー。予想以上の速さで芽吹いたでありますなー」

皆と同じように喜びの声を上げているのは、ゴンだった。彼は周囲に笑顔を振りまきながら、大きく頷いている。

「これは、フキワダシの芽でありますなー」

ゴンは地面に顔を寄せて、芽吹いているものを丁寧に観察した。そして、この芽がフキワダシであると断じた。集まった人々の顔が笑みに変わる。フキワダシは外見と味がジャガイモに似ていて、しかも成長が早く、その上、大量に収穫が望める作物だった。もしかすると、今年の収穫に間に合うかもしれない。人々の間に、そんな期待感が広がっていた。

「では、大公様にお知らせしてきます」

一人の男がそう言って、馬に跨った。彼はゴンたちに笑顔を見せながら、きっと、大公様もお慶びになりましょうと言って、大公宮殿に向かって馬を走らせた。その背中を、人々は笑顔で見送った。

◆◆◆

同じ頃、大公宮殿の一室では、大公・テイストが眉間に深い皺を刻んでいた。彼の目の前には、植木鉢に植えられた一輪の花が置かれていた。

「……一体、どういうつもりだ」

大公は顎髭を撫でながら、誰に言うともなく呟く。

「書簡には、これまで、我が国において、クリミアーナ教徒に対する厚いご恩情に感謝するとあります」

「……」

傍に控えている男が、書簡と大公とに交互に視線を向けながら口を開いている。その言葉を聞きながら大公は、湧き上がる怒りを抑え込んでいた。

……何を言っておるのだ。我が姪であるセルロイトを篭絡しただけでなく、天災に付け込んで、我が国を混乱に陥れようとしていた国が、よくそんなことが言える。ご恩情などと……。余はクリミアーナめらに温情をかけたことなど、一度としてない。

彼は目の前に置かれた花に視線を向ける。まるで、アジサイのような花だ。その下に、意外に太い茎が伸びている。何とも言えぬ、よい香気が、鼻をくすぐる。

「書簡には、この花は、『友好の花』と言うもので、クリミアーナ教国秘蔵の花とのことです」

「秘蔵の花……。ヤツらの言うことは、信用できぬ」

「ハッ……。この花は、すばらしい香気を持ち、また、そう簡単には枯れぬ強い生命力を持つ花なのだそうです。そうしたことから、クリミア―ナ教国との友好を、幾久しく持ち続けるという意味が込められているそうです。しかも、この花は気温によって色が変わるようで、その変化も楽しんでいただきたい。そう書簡に記されておりました」

「気温によって色が変わる……。つまりは、クリミアーナはいつでも変化するという意味ではないのか。今は誼を通じているが、時と場合によっては、いつでもその態度を変化するということではないのか」

「大公様……さすがに、そこまでは……」

「今までのクリミアーナの歴史を見れば、そうではないか」

「ハッ……」

「つまりは、この花を贈る意味は、この花の生命力のごとく、未来永劫、我が国をクリミアーナの支配下に置く……暗にそう意味しているのではないのか」

「……」

大公の鋭い視線に耐えられず、男は思わず彼から視線をそむけた。

「このような縁起の悪い花、すぐに捨てよ」

「お待ちください、大公様。この花は教皇親書と共に贈られております。教皇親書……つまりは、ヴィエイユ教皇聖下自らが我が国に贈られた品物……。無下に扱いますと、クリミアーナが我が国に難癖をつける口実を与えかねぬかと存じますが……」

男の言葉に、大公はさらに眉間の皺を深くする。

「ならば、どこか適当なところにでも、仕舞っておくがいい。二度と余の前に、このようなものを持って来るな」

大公の言葉に、男は無言で頭を下げる。そんな彼に、大公はさらに言葉を続けた。

「あと、今後は、めと言え」

「は？」

「め、と申すのじゃ」

「め……でございますか？」

「今後、余の前では、ヴィエイユ教皇聖下、などと言うでない。ヴィエイユめ、と呼ぶのじゃ。あの者は、国を惑わす疫病神じゃ。そのような者に、聖下などと敬称を付ける価値などない。わかったか」

「ハッ、ハハッ」

不機嫌さを隠そうともしない大公。そんな彼にこれ以上居ることは、さらに小言を食らうことになる。それを十分に知っている彼は、鉢

植えに植えられた花を恭しく持つと、足早に部屋を後にしていった。そんな彼の後姿を見ながら大公は、苦々し気に舌打ちをするのだった。

「失礼いたします」

男と入れ替わるようにして、また別の家来が入室してきた。大公は険しい表情を崩そうともせずに、入ってきた男を睨みつける。そのあまりの様子に、男は少し後ずさりした。

「何だ！」

「あの……報告がございます」

「いい報告か、悪い報告か」

「よい報告です」

「後にせい」

「は？」

「悪い報告であれば、すぐに対応せねばならぬこともあろう。しかし、良い報告であれば、後で聞いても差支えはなかろう」

「し、承知しました」

男は踵を返して立ち去ろうとする。そんな彼の背中越しに、大公の声が飛んだ。

「いや、待て！」

「ハッ」

「気が変わった。報告せい」

「はっ……ハハッ」

男は改めて畏まると、姿勢を正して、大公に向き合った。

「報告いたします。先日、アガルタより届きました種が、本日芽吹きました」

「なに、まことか！？」

眼を見開きながら大公は立ち上がる。その予想を超えた行動に、目の前にいる男は顔を強張らせる。

「ハッ……私がこの目で見てまいりました。間違いございません」

「……そうか。種を撒いて僅か三週間で芽吹いたか。さすがはアガルタの作りし種じゃな。して、芽吹いたのは、何の種じゃ？」

「ハッ。ゴン殿の言われますには、フキワダシであろうと」

「フキワダシか」

大公は満足そうに頷くと、再びゆっくりと椅子に腰を下ろした。彼は目を閉じて、少し笑みを浮かべながら何度も頷いた。

「フキワダシならば、秋の収穫に間に合うな。何とかなるやもしれぬな……。ウム、ご苦労であった。下がってよい」

大公は機嫌のよさそうな声に変わっていた。それを確認した男は、ホッと胸をなでおろしながら、恭しく一礼した。

◆　◆　◆

「……まあ、何ですの、これは？」

頓狂な声を上げているのは、フォーアル大公国の侍従長、リルレインの妻であるパッソだった。万事が派手好きな彼女は、主人が持ち帰った不思議な花に目を止めた。リルレインは小さなため息をつきながら、手に持っていた鉢植えをテーブルの上に置いた。

「クリミアーナ教国からの進物だ。粗略に扱わぬように」

「クリミアーナ？　なにゆえ、あの国から進物が？」

「おそらく、セルロイト様の一件についての詫びだろう。教皇親書にはそのようなことは一切書かれていなかったがな」

「まあ……」

パッソは大仰に驚いて見せる。セルロイトのことは表向きは一切の秘密とされているが、噂好きの貴族の間では、最早、公然の秘密となっていたのだった。

「確かに……。セルロイト様は、クリミアーナの殿方にかなりの仕打ちをされていたとか……。確か、お小水を……」

「これ、滅多なことを口にするでない」

夫のリルレインに窘められて、彼女は思わず口に手を当てる。彼は相変わらず不機嫌さを醸し出している。そんな雰囲気を変えようと、彼女はテーブルに置かれた花に視線を向ける。

「それにしても、美しい花ではございませんか」

「何でも、『友好の花』といって、クリミアーナ秘蔵の花だそうだ」

「まあ……。それはそれは。それに、とてもいい香りがしますわね」

「教皇からの贈り物だ。我が家で預かることになった。くれぐれも丁重に扱うのだ」

「わかっておりますわ。それにしても、いい香りだこと……」

パッソは花に顔を近づけて、鼻をぴくぴくと動かしながら、香りを楽しんだ。そのとき、彼女の頭の中に、一つのアイデアが閃いた。

……これはきっと、大きな話題になるわね。

パッソには一つの確信があった。彼女の顔には、無意識に笑顔が浮かんでいた……。

第五百六十話　化かし合い

それからしばらくして、フォーアル大公国内において、リルレイン侍従長の妻であるパッソのことが話題になった。理由は、彼女が纏っている香りだった。

彼女とすれ違うとき、わずかだが鼻腔に、何とも言えぬ上品な香りがする。人々は思わず足を停め、その香りが一体どこから来ているのかを探す。そして、振り返ると、意気揚々と廊下を歩くパッソの姿を見て、彼女が醸し出す香りであると気付くのだ。

「奥様、今、お付けになっている香水は、どちらのものでございましょう？」

パッソはここ数日、大公国の要人の妻たちが日々開くお茶会に呼ばれるたびに、そんな質問をされていた。彼女はそれに対して、香水などは付けておりませんと笑顔で否定する。あら、ご謙遜を。いえいえ、本当に何も付けておりませんの。そんな会話があちこちで、まるで判で押したように繰り返されたのだ。確かに彼女は香水をつけていたわけではない。ただ、お茶会に着て行く衣装を、あらかじめ『友好の花』の傍において、その香りを移していただけだった。にもかかわらず、それはまるで、高価な香水であるかのような香りを、いつまでも醸し出し続けたのだった。

……やっぱり、思った通りになったわ。

貴婦人たちの称賛の言葉を聞きながら、パッソは心の中でほくそ笑む。夫は侍従長という、大公様の傍近くに仕える身分だが、その内

実は火の車だった。貴族とはいいながらも、所有する領地は狭く、そこから上がってくる税だけでは、食べていくのがやっとという有様だったのだ。貴族の典型のような性格である夫は、万事にわたって鷹揚で世情に疎く、自身の収入を上げる取り組みについては、ほとんど関心を示さなかった。夫はそれでよいかもしれないが、貴族たちと付き合いのある妻のパッソにとっては何かと物入りのことも多く、さらに、元々から贅沢で華やかなことを好む彼女にとって、夫の収入は到底、その欲望を満足させるものではなかった。

パッソは、目の前で笑みを浮かべながら楽しそうにおしゃべりをする貴婦人たちを見て、この香りは売れると確信した。この上品な香りに加えて、クリミアーナ教国が秘蔵している花というブランド力……。これらを巧みに利用すれば、リルレイン家には巨万の富が転がり込むに違いなかった。

「それでは、ごめんあそばせ」

パッソはお茶会が終わるとすぐに席を立ち、外に待たせてあった馬車に乗り込む。馭者には、自宅ではなく、ファンタジック公爵の屋敷に向かうよう、指示を出した。この公爵夫人とパッソは無二の親友だった。親友……と言っても、それはパッソが一方的にそう思っているだけで、実際は、公爵夫人にパッソが強いあこがれを持っているだけの関係だった。

ファンタジック公爵は、フォーアル大公国随一の蓄財家であり、その生活は豪勢を極めていた。広い屋敷に美しい庭。そこには四季折々の花が咲き乱れ、その中で公爵夫婦は絢爛豪華な衣装を常に纏いながら生活していた。一見すると、このファンタジック公爵家こそがこの国の主であるかのように見える豪華さだった。

パッソを乗せた馬車は、そのファンタジック公爵家の屋敷に滑り込んだ。

「突然押しかけまして、申し訳ございません」

笑みを浮かべながら頭を下げるパッソに、公爵夫人は鷹揚に頷く。

「いいえ。私も退屈していたところなのです。よく訪ねてくれました」

「ありがとうございます。本日は奥様に折り入ってご相談申し上げたいことがございまして……」

「ほう、相談？」

「はい。実は……」

パッソはまるで、内緒話をするように、夫人に顔を近づけて、小さな声で話を切り出した。それは、今、彼女が纏っている香りを、夫人に渡したい、というものだった。

「……あなたの香り、を？」

「左様でございます」

パッソは力強く頷きながら、夫人の眼をじっと見つめる。

「私はこの香りをとても気に入っております。しかしながら、こうした上品な香りは、それにふさわしいお方が纏うべきだと思いますの。私ごときが申し上げるのは、甚だ恐縮ではございますが……」

彼女は、この上品な香りは、奥様のような方にふさわしいのです、とこれまでの柔和な表情を一変させて、真面目な顔でそう言い切った。公爵夫人は大テレに照れながら、その必要はないと言って微笑んだが、その瞳の奥がキラリと光っているのを、パッソは見逃さなかった。

「実は、私が纏っております香りは、先だってクリミアーナ教国から贈られた、『友好の花』の香りですの」

「ええっ!?　クリミアーナ教国?」

公爵夫人は大仰に驚く。誰よりも噂好きなこのお方が、あの教国から大公に贈りものがなされたことを、知らぬわけはないのだ。だが、パッソはそんなことはおくびにも出さず、さらに言葉を続ける。

「はい。あの忌まわしき国から、大公様に贈られた花でございます。今は、私の屋敷で預かっておりますの。クリミアーナは、あの……セルロイト様を……した、我々にとりましては、敵とも言える国……。しかしながら、かの国は世界に冠たる大国でございます。さすが、と申しますか、まさか、このような香りのする花を贈ってくるとは、私も思いもよりませんでした」

「……」

パッソの言葉に、夫人はゆっくりと頷く。

「その花を、我が屋敷でお預かり申しております。いいえ、本来ならば、そのようなものを我が屋敷でお預かりするべきではないのでございます。しかるべきところで預かるのが筋だと思いますの。し

かし、大公様からの命令で仕方なく……。とはいえ、このお花には、これだけの上品な香りが致しますの。ここ最近、いつもこの花の香りを服に付けて外出しておりますけれども、かなり評判がよろしいのです。ただ……私には合いませんの。ですから奥様、是非、この香りを、奥様だけのものになさってくださいまし」

公爵夫人の表情が、ゆっくりと柔和な笑みに変わっていく。パッソも、同じように相好を崩して、笑みを浮かべる。

「では、具体的に、どうしましょうか？」

公爵夫人の笑みの中、目の奥が鋭く光っている。彼女は乗り気のようだ。

「奥様のお衣装をいくつか拝借したく存じます。それに、私が、香りを移してまいります」

「……わかりました。ラナカ」

そう言って、公爵夫人は手を打った。すぐに、執事服に身を包んだ老紳士が現れ、彼女の傍で畏まった。

「私のパーティー用のドレスを十着、パッソさまに預けてちょうだい」

「畏まりました」

「それに、お菓子もお付けして」

「承知しました」

執事が下がると、公爵夫人は、懐から扇子を取り出して、パタパタと自分を仰ぎだした。

「『友好の花』とは、見たことがないのだけれど、どのような花かしら？」

「そうでございますわね……。薔薇の花によく似てございます」

「薔薇……。ホホホ、上品な香りがする理由が、わかる気がするわね。花……ということは、時期が来たら枯れて、種が残るのかしら？」

「そうでございますね。詳しく調べて見ねばわかりませんが、薔薇と同じであれば、挿し木ができるかもしれませんわ」

「挿し木……。まあ、事はどうあれ、花から種が出て、それがこの大公国に根付くというのは、自然なことよね」

「誠に、その通りかと存じます。花が増えますと、それらで香水が作れるかと存じます」

「まあ、あなたの付けている香りが、香水になるなんて、何て素敵なことでしょう」

公爵夫人の表情がぱああと明るくなる。彼女は両手を胸の前で合わせながら、ゆっくりと何度も頷く。

「そうなれば、この素晴らしい香りを、色々なお方に分けて差し上げることができるわね」

「左様でございます。まさしく、奥様にしか、できぬことかと存じます」

「ホホホホホ」

「オホホホホホ」

二人の女性の、機嫌のよさそうな笑い声が、長い間部屋中に響き渡った。

第五百六十話　化かし合い（後書き）

ｃｏｍｉｃブースト様において、コミカライズ１６話公開中です。リノスとリコ様の運命の（？）出会いです。９／１　１２：００まで無料で読めますので、是非、チェックください！（ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ？ｃａｔｅｇｏｒｙ＝１４）

第五百六十一話　化かし合い②

屋敷に戻ると、パッソは早速、友好の花の挿し木を始めた。　この花は薔薇に似てはいるが、複数の小さな花が集まってできているもので、例えて言えば、アジサイのような形態をしている。挿し木が有効かどうかはわからないが、見た目が薔薇に似ているので、パッソは直感的に、薔薇と同じ育て方をすれば、育つのではないかという閃きがあった。

幼い頃から花好きだった彼女は、屋敷の庭で花を育てるのを趣味としていた。その中でも特にお気に入りが薔薇の花で、毎年丁寧に世話をしながら、コツコツとその数と品種を増やしてきた。パッソの夢は、この屋敷を薔薇が咲き乱れるようにすることだった。今はまだ、他の花々と一緒に、庭の一部でひっそりと咲いているだけだが、やがては、貴族の間で薔薇を育てる専門家として名を成したいという野望を心の中に秘めていた。

この庭に、四季折々の花が咲き乱れ、その中にひときわ薔薇の花々が咲いていれば、どんなに素敵なことだろう……。そうなれば、いつでも貴族の奥方たちを、大きな顔をして屋敷に招待できる。きっと、皆、その光景を気に入るはずだ。すぐに、貴族たちの噂になる。そして、皆、こぞってこの屋敷にやって来るだろう。うまくすれば、王妃様もこの屋敷にお見えになるかもしれない……。

貴族の奥方たちの中心に自分がいる光景が、パッソの脳裏に描き出される。王妃様が、感激の表情を浮かべながら、すばらしい庭ですね。大公宮殿の庭も、こんなふうにならないかしら……。そんな言葉を呟いている。微力ながらお手伝い申しましょうか、是非、お願

いするわ。王妃とそんなやり取りがパッソの頭の中で展開される。そして、自分は王妃の傍近くに仕える……。そうなれば、こんな貧乏生活とはおさらばできるのだ。美しいドレスをうんと着て、美味しいものを食べたいだけ食べられる……。彼女の胸は高鳴る。

そのとき、彼女の眼に、「友好の花」が目に入った。

見れば見るほど薔薇に似ている。それに、この香気……。薔薇と同様、この花も、この庭に咲き乱れれば、どれだけ素晴らしいだろう。きっと、薔薇のあの、気高い香りとよく合うはずだ。薔薇とこの花が数多く育てば、それらの香水を作って売れば、大儲けができるはずなのだ。

「いけない、いけない」

そこまで考えて、パッソは誰に言うともなく呟く。そして、苦笑いを浮かべながら、さらに言葉を続ける。

「友好の花の香水は、ファンタジック様がお作りになるのだわ。ただ……試作品を作るのは、私の役目になりそうね。それを多めに作れば……。それに、あの奥様も、その辺はちゃんとわかってらっしゃる方……。香水が売れれば、必ず私にも、何らかの恩恵を授けてくださるわ」

彼女は、手を顔の前でパチンと合わせると、目の前にある友好の花に手を伸ばした。

花が折れないように、優しく扱いながら、丁寧に観察していく。そして彼女は、その中から手ごろな茎を一本切り取り、葉などを切り取った後、それを庭の土に植えた。割合に茎がしっかりしているた

めに、花は天に向かって咲いている。パッソはそれを見て、安心したように声を上げる。

「まあ、何とか折れずに咲いているわね。これで生育してくれれば御の字なのだけれど……ダメで元々だわ」

彼女は傍にあった井戸から水を汲み、花に与えた。

庭に挿した「友好の花」は、それから三日経っても枯れることはなかった。それどころか、小さな花からは香気が漂ってきていたのだ。これには、さすがのパッソも、驚きを隠さなかった。

「もしかして、もう根付いたってことかしら……？　だとしたら、恐ろしく生命力の強い花ね……」

彼女は、部屋で保管している友好の花から、さらに茎を数本切り取って庭に植えた。そして、それらに水をやった。

「この花たちが全部根付いてくれるのかしら。だとしたら、うれしいけれど……」

そこまで考えて、パッソはハッと顔を上げる。

「そうだわ！　忘れていたわ！　奥様からお預かりした衣装に香りを移さないと！　確か……一週間後にお納めする約束だったわね。こんなことはしてはいられないわ」

パッソは女中を呼んでこの庭の花々の世話を頼むと、慌てて屋敷の中に戻っていった。

一週間後、パッソは意気揚々とファンタジック公爵夫人の許を訪れた。馬車には、友好の花の香りを移しとった、夫人から預かった衣装が積まれていると同時に、鉢植えに植えられた友好の花が、彼女の手元にあった。

「まあ、何と素敵なことでしょう」

預けた衣装を検めながら、ファンタジック夫人は顔に満面の笑みを湛えていた。衣装にはどれも、すばらしい香気が焚き込められてあり、その香りが周囲に漂っていた。この衣装と香気を身に纏えば、間違いなく、今度の舞踏会で自分は話題になるだろう。その時の光景が、公爵夫人の頭の中にはっきりと浮かび上がっていた。

「あの……奥様……」

遠慮深い声が、夫人を妄想の世界から現実に引き戻す。見ると、パッソがゆっくりと紙包みをテーブルの上に置いているのが目に入った。彼女はゆっくりそれを剥がす。すると、中から、薔薇によく似た小さな花が一輪、鉢植えに植えられていた。

「これ……は？」

「友好の花でございます」

「まあ、これがあの……」

「左様です」

パッソは、大切なものを扱うかのように、丁寧に鉢植えを夫人に差し出す。

「薔薇を育てるときのように、挿し木をしてみましたら、根付きましたようで……」

「まあ……」

夫人は大げさに手を添えながら口を開けて、驚く仕草をする。そんな彼女をチラリと見ながら、パッソは話を続ける。

「どうぞ、奥様に差し上げます」

「よろしいの？」

「はい。まだ、どれほど育つのかはわかりかねますが……」

夫人は満足そうに頷くと、鉢植えを手に取り、それを顔の近くまで引き寄せた。

「……まだ、香気は薄いかしら？」

「はい。これらの小さな花がたくさん集まって、友好の花を形作っておりますから……」

夫人は話を聞くと、鉢植えをテーブルに戻し、それをそっとパッソに向けて押し出した。

「奥様……？」

「まだしばらくは、あなたに香りのことをお願いしなければならないわね」

「ハッ……」

「あなたのお気持ちはよくわかったわ。友好の花は、きちんと育ってからいただくことにするわ」

「左様ですか……」

「これからも、お願いね」

夫人はスッと立ち上がり、パッソの許に静かに近づいた。そして、彼女の手を両手で握り、ゆっくりと頷いた。

夫人の許を退出したパッソは、屋敷の玄関前で呼び止められた。

「リルレイン夫人」

振り返ると、そこにはファンタジック家の執事であるスーリーが立っていた。彼は恭しく一礼して近づいてきた。

「恐れ入ります。奥様からリルレイン様に折り入ってお願いがありまして、言付かってまいりました」

「左様ですか」

「奥様におかれましては、今度の舞踏会でお使いになる道具全てに、あの香りを焚き込めていただきたいとの仰せでございます」

「道具、すべて？」

「はい。誠に不躾ながら、それらのものを馬車でお持ち帰りいただきたくお願い申します。いえ、準備はできております」

パッソはいきなりの要請に戸惑いながらも、承知したと伝える。すると、彼の後ろから、大小様々な箱を携えた男たちが、パッソの馬車に向かって歩いて行った。

「あと、こちらは、奥様からでございます。お口に合いましたら、幸いでございます」

スーリーの手には小さな、まるできんちゃく袋のようなものが握られていた。それを彼はスッとパッソに手渡し、再び一礼して、その場を辞していった。

馬車に揺られて帰路につきながら、パッソは先ほどスーリーから手渡された袋を開けて見た。そこには、豆粒の大きさの金がぎっしりと入っていた。それを見た瞬間、彼女の眼が見開かれた。

パッソは、呼吸を整えるべく窓の外に視線を向けた。だが、湧き上がる興奮は、さらに彼女の呼吸を乱れさせたのだった……。

第五百六十二話　咲き乱れる

それから一週間後、パッソの屋敷の庭には、「友好の花」が咲き乱れていた。

あれからすぐに、挿し木を増やしてみたところ、たちどころに花は根付き、一週間後にはちゃんと「友好の花」が育っていた。今では、窓を開けると、すばらしい香気が鼻をくすぐるようになっていた。

「……何ということを」

その光景を見て絶句しているのは、パッソの夫であるリルレイン侍従長だった。

「あら、別によろしいじゃありませんか」

オロオロとうろたえる夫を横目に見ながら、パッソは満面の笑みを浮かべる。そんな彼女を夫は苦々しそうに一瞥する。

「何がよいのだ。クリミアーナから贈られた花を勝手に……」

「枯らせるよりはよいでしょう」

「……」

「もし、枯らせてしまえば、あなたは大公様からどのようなお叱りを受けるかもしれないですわよ？」

「そっ……そうだが……」

「それがどうですの？　今では、あの花がこれだけ見事に咲いているのです。クリミアーナから贈られた花がもし枯れたとしても、ここに替りはいくらでもあるのです。私は喜ばれこそすれ、お叱りを受ける覚えはございませんわ」

「別に、私は、怒ってなど、いない」

「あら、じゃあよろしいじゃございませんか」

「いや、このことが大公様に知れたら……」

「知れたところで、何か、問題が？　よろしいじゃございませんの？」

「そうはいかない。こうしたことはきちんと大公様に報告しなければならない。さもないと、どのようなお咎めを受けるか……。やはり、詳細に報告しなければならない。一体、いつからこのようなことをしている？　詳しく話してもらおうか」

「その必要はないと思いますわ。それに、大公様への報告は、あなた様が勝手になされればよろしいですわ。ただ……。クリミアーナから贈られた花を、枯れたときのために少し増やしたくらいで、咎められることなどあるでしょうか。むしろ、枯れさせてしまう方が、あなた様にとってよろしくないことになると思いませんこと？」

「ど……どういうことだ」

「考えてもごらんなさいまし！」

パッソは、目を覚ませとばかりに、夫の顔の前で手を叩いた。驚いて後ずさりをするリルレイン侍従長。そんな彼にパッソは侮蔑の眼を向ける。

「あのクリミアーナのことです。友好の花が枯れたと知れば、どんな無理難題を吹っかけてくるのかわかったものではないではありませんか！　花を枯れさせたのは、クリミアーナと誼を深める気のない証拠だとか言って、我が国を攻撃する口実にしかねませんでしょう？　そうはお思いにならなくて？」

「ううっ」

「まあ、大公様に報告するかどうかはお任せしますわ。私は、別に報告の必要など、ないと思いますわ。……また、そんなお顔をなさる。わかっておりますわ。報告するのは、あなた様の義務、お仕事ですものね。報告しないというのは、あなた様にとって不忠になるかもしれませんが、ただ……あの花がもし枯れたときは、さすがの大公様もお心を乱すに違いございませんわ。そのとき、あなた様がこの花を差し出せば、大公様はどれほど喜ばれることでしょう。そのときこそ、不忠が却って忠義になって、あなた様の評価が大きく上がるのではないですか？」

パッソの言葉に、リルレイン侍従長は悔しそうに俯いている。彼は無言のまま踵を返して、屋敷を後にしていった。そんな夫の姿を見てパッソは、呆れたようにため息をついた。

夫を見送った彼女は、その足でファンタジック公爵家に向かった。その手には、成長した友好の花を携えていた。

挿し木をするとすぐに根付き、成長も早いと聞いた公爵夫人は、喜びを隠さなかった。彼女はテラスの窓を開けると、広大な庭を眺めながら、今にここがこの花で咲き乱れるのですねと、誰に言うともなく呟いた。そして、彼女は踵を返してパッソに視線を向けると、次回のオルデマ・ピルゲでは、私の隣にお座りなさいなと勧めた。

オルデマ・ピルゲとは、この国の主だった貴族の妻たちが開いている定期的な集まりで、言わば婦人たちの情報交換の場であった。表向きは、菓子などを食べながら楽しくおしゃべりをする会だが、実情は、この会を主宰するファンタジック公爵夫人による派閥の集まりと言ってよかった。彼女らは、他の貴族たちの噂噺に興じる一方で、派閥の長であるファンタジック公爵夫人の忠誠心をこれでもかと見せつける。この公爵夫人の口添えがあれば、夫の出世は約束されたものとなる。彼女の夫は、先代大公の孫に当たり、現大公とはいとこの関係にあった。王位継承権の第三位を与えられると同時に、この国の内政と軍事に深くかかわっていたのだ。

今、パッソの目の前で、夫人は次回のオルデマ・ピルゲでは隣に座れと命じた。それは、とりもなおさず、この夫人の右腕となれと命じられたと同じ意味を持っていた。パッソの心は高鳴った。これで、夫の出世は間違いない。それに伴って収入は格段に上がるだろう。それに加えて、香水の製造と販売をこの夫人と共同で行うのだ。巨万の富を手にする可能性は、十分にあった。

パッソは立ち上がって、深々とお辞儀をし、夫人に、これからもよろしくお願いしますと、声を震わせた。そんな彼女を夫人は満足そうに眺め、やがて、手をパチパチと鳴らした。

すぐに若い男が入室してきた。夫人は男に、この鉢植えの花を、この庭一面に植えなさいと命じた。男は訝ったが、パッソが丁寧に挿

し木のやり方を教えると、大きく頷きながら、承知しましたと言って部屋を後にしていった。

「これからも、どうぞよろしくね」

「もちろんでございます、奥様」

そう言って二人は笑みを交わし合った。

しかし、問題はすぐに発生した。ファンタジック公爵邸の庭に、友好の花を植えてから二週間後、その屋敷は想像を絶する悪臭に包まれていた。理由は、当然のことながら、庭に植えた花だった。

この花が発する強い香気が、風に乗って常に屋敷に入ってくるのだ。いかによい香りとはいえ、あまりにも濃い臭気と化したそれはもはや、住人にとっては不快なものでしかなかった。

「一体、何なのです、これは！」

ハンカチを顔に押し当てながら夫人は声を荒げる。彼女の目の前には、庭一面に咲き乱れる友好の花の姿があった。

まさに壮観の一言に尽きた。毎日、この屋敷に仕える下男たちが花から茎を切り取り、それを挿し木していたのだ。花はいくら茎を切っても、不思議なことに、次の日にはきちんと元通りになっていた。下男たちはそれを訝りながらも、主人の言いつけを忠実に守り、これほどの数の花を庭中に植え付けたのだった。だが、それが仇となった。想像を絶する香気がそこから発せられ、もはや臭気と言って過言ではない、強烈な香りが鼻を突いてくる。

「奥様、これだけの香りなのです。早速、香水を作ってみてはいかがでしょう？」

顔をしかめながらも、努めて冷静に振舞う執事。そんな彼を夫人は一瞥すると、数本だけの花を残して、あとはすべて刈り取るようにと命じた。

それで、臭気の問題は解決したかに見えた。だが、その数日後、屋敷は再びあの強烈な臭気に包まれた。そして、窓の外を見たファンタジック公爵夫人は思わず動きを止めた。なぜなら、刈り取ったはずの友好の花が、庭一面に咲き乱れていたからだ。

公爵夫人は、すぐさま下男に命じて、庭の友好の花をすべて刈り取るように命じた。しかし、またしても三日後、庭には元の通り、友好の花が咲き乱れていた。しかも、庭の隅に捨て置いた友好の花がそこで根付き、花を咲かせていたのだ。

「庭を……庭を焼き払いなさい！　徹底的に焼き払うのです！」

夫人の絶叫にも似た声が響き渡った。これによって、公爵夫人が精魂を込めて作り上げた自慢の庭は灰燼に帰した。赤い夕陽に照らされた焼け野原を見て、彼女は滂沱の涙を流した。

そしてさらに数日後、憂鬱な気持ちのまま窓を開けた夫人は、驚きのあまりその場に倒れ伏した。彼女の目の前には、焼き払ったはずの友好の花が、元の通り、咲き乱れていたのだった……。

第五百六十三話　まだ終わらない！

「なっ……まこと……か……」

大公・テイストは必死の思いで言葉を絞り出した。と同時に、その顔が苦悶に歪んだ。いつもは負の感情を出さず、泰然自若としているように心がけているのだが、今、耳にした報告は、そんな日頃の努力を簡単に水泡に帰すものだった。

大公の前には、二人の男が、ただひたすらに頭を垂れている。侍従長のリルレインと、ファンタジック公爵だ。

いつもはシャンと背を伸ばし、大公宮殿の廊下を我が物顔で闊歩している二人が、まるで捨てられた子犬のように体を震わせ、ひたすら許しを請いている。とりわけ、公爵の姿は哀れだった。いつものように美々しい衣装を纏うこともなく、シンプルな黒い、まるで葬儀に参列するかの衣装を身に付けていた。彼を飾っていた勲章などの類は一つもなく、単なる壮年の男が一人、大公の前で項垂れているのだ。

そんな二人を睨みつけながら、大公は背筋に冷たい汗をかいていた。まさに、フォーアル大公国存亡の時が迫っているのだ。彼の頭の中には、国中が友好の花で埋め尽くされ、その花の傍に、枯れ果てた作物や、苦悶の表情を浮かべた人々の躯が晒されている光景が描き出されていた。しかもそれが、近いうちに現実になる確信が彼にはあった。

二人からの報告では、友好の花が、想像を超えた勢いで爆発的に増

えているとあった。大公はそうした事態を、当初は理解することができなかった。だが、リルレインが預かった花を切り取り、挿し木をして増やしていったという報告を聞くと、即座にその花の持つ危険性を理解した。

おそろしく繁殖能力と生命力の高い植物……。しかも、数に比例して香気が臭気に変わるほどの香り……。このまま放置すれば、間違いなくこの国は亡びる。すでに、ファンタジック公爵家とリルレイン侍従長の屋敷の庭は、その花で埋め尽くされ、周囲にひどい悪臭を放とうとしているのだ。

「友好の花が他に根付いていないか、すぐさま国中を調べるのだ」

まるで、あたりを憚るように小さな声で大公は命じる。彼の眉間には深い皺が刻まれており、そのあまりの迫力に、二人はオロオロと頭を下げ、その場を後にしようとする。そんな二人を彼は呼び止めた。

「待て。まだ命令は終わっておらん。友好の花の本体は、リルレイン、まだお前の屋敷にあるのか？　……で、あれば、急ぎそれをアガルタに送るのだ。ハーツ、ハーツはおらんか！」

「は……はは っ。これに……」

ビクビクと体を震わせながら、弟のハーツ公爵が進み出て、大公の前に控えた。いつものようにオドオドとした態度だが、その眼の奥は爛々と輝いていた。それを見て大公は、大きく頷いた。

「友好の花は、お前がその手でアガルタに運ぶのだ。まず、セルロイトにその花を見せ、その後にアガルタ王に謁見するのだ。セルロ

イトならば、その花がいかに危険なものであるのかを、理解するはずだ」

「かっ、かっ、かっ、畏まりまし、た」

「すぐに立て」

「は……ははっ！」

「ああ待て。お前ひとりでは心もとない。お前の妻のメルモも連れて行け」

「ハハッ！」

およそ初めてではないかと思われる程の大きな声で、ハーツ公爵は返事をした。その様子に大公は大きく頷き、顎をしゃくって、退出を促した。

「それでは、我々も……」

ハーツ公爵の退出を見届けると、ファンタジックとリルレインが恐る恐る退出しようとする。そんな二人を大公は再び呼び止める。

「待て！　私の命令はまだ、終わってはおらん！」

「ハハッ」

「お前たち二人は、私の許可が出るまで、屋敷に戻ることを厳禁する。本日の昼までに、必要最低限の荷物だけを持って、この大公宮殿に移るのだ」

「ええっ！？」

「ボールズ！　ボールズはおらんか！」

あまりにも予想外の命令に、鳩が豆鉄砲を食ったような表情を浮かべる二人に構うことなく、大公は部屋の外にまで聞こえるくらいの大声を出した。しばらくすると、頭をツルツルに丸め、軍服に身を包んだ、体格のいい壮年の男が入室してきた。

「お召しでございますか」

「ウム。これから、この二人をそれぞれの屋敷に送るのだ。しかる後、本日の昼までに、最低限の荷物だけを持たせて、この宮殿に連れてくるのだ。その後、この二人の屋敷を、アリすらも入れぬほどに、厳重に封鎖するのだ」

「ご命令は厭いませんが……」

ボールズと呼ばれた軍人は、思わず傍で固まっている二人に視線を向ける。

「事は一刻を争うのだ！　いいから言う通りにせい！　それと同時に、全ての軍を動員して、国中から布を集めるのだ！」

「布……でございますか？」

「そうだ。布だ」

「かっ、畏まりました……」

ボールズは目を白黒させながら、相変わらず固まっている二人の貴族に退出を促す。そしてその後、国中から集められた布は、二人の屋敷をグルグル巻きにするために使われた。

大公が懸念したのは、その悪臭と共に友好の花の種や花粉が拡散したり飛散したりすることだった。もし、花粉などが風に乗って飛散すると、まさしくフォーアル大公国は、大公が想像した通りの地獄絵図となる可能性が高い。彼は今、打てるべき手はすべて打ち、この国を守ろうと固く決意していたのだった。まさしく、フォーアル大公国とクリミアーナ教国との、形を変えた戦争の火ぶたが切られたのだ。

だが、それから三日後、フォーアル大公国が混乱するのを知っていたかのように、クリミアーナ教国から使者が訪れた。国をここまでの混乱に陥れておきながら、しゃあしゃあと謁見を求めてくるクリミアーナに対して大公は激怒し、使者には会わぬと言って、部屋に引きこもってしまった。彼にしてみれば、使者に会えば即座にその者を斬り捨ててしまう恐れが多分にあった。彼自身、感情をコントロールして、冷静に対処する自信がなかったのだ。

とはいえ、相手は教皇の勅使としてこの国に赴いてきている。それを追い返すことは即ち、クリミアーナを敵と見なしたと同じ意味になるのだ。そうなれば、あの国に戦端を開く機会を与えることになる。そうなればこの国は、なすすべもなくクリミアーナに蹂躙されるのは目に見えていた。

仕方なく、クリミアーナの使者については、ファンタジック公爵とリルレイン侍従長が対応に当たることとなった。それについては、反対意見も多かったが、二人は何としても恥を雪ぎたい、クリミア

ーナの使者から、友好の花の対処方法を聞き出して見せると主張して、その役に当たったのだった。

「やあ、しばらくぶりでございますな」

使者として現れたのは、以前、教皇親書を携えてきた男だった。小柄で禿げ上がっているが、常ににこやかに愛嬌のある笑みを振りまいて、一見、人のよさそうな人物に見える。だが、その両目は激しく上下左右に動いていて、この国の内情を一つでも多く知ろうとしていた。

彼は、大公・テイストが病のために臥せっていると聞き、大仰に驚いてみせた。

「何と！　それは心配ですな。我がクリミアーナ教国は、世界最高の医師を多く抱えております。よろしければ、大公様の許に遣わしましょう」

そんなことは断じて受け入れないのはわかっているはずだ。で、あるにもかかわらず、ぬけぬけとそんなことを言うこの男の豪胆さに、ファンタジック公爵とリルレイン侍従長の二人は、思わず苦笑いを浮かべる。

だが、使者の男は、そんな様子を気にすることもなく、ダラダラと当たり障りのない話を続けた。やれ、クリミアーナの教都であるアフロディーテでは、日差しが強くて困るだの、教皇聖下は最近、野菜のスープ料理にご執心であるだの、彼らにとっては至極、どうでもよい話ばかりだった。

のらりくらりとした使者の態度に業を煮やしているのを感じたのか、

男は鼻をピクピクと動かして、何やら匂いを嗅ぎ始めた。

「何やらいい香りが致しますな。これは、もしや、友好の花の香りでは？　おお、そういえば、あの花はどうなりましたか？」

やっと本題に入れる……。二人の男は姿勢を正して、使者と向き直った。

第五百六十四話　その意図は……

「実は……少し増やしてみたのです」

リルレイン侍従長は、怒りと動揺が悟られないように、努めて平静を装いながら口を開いた。その様子を、使者の男は満足そうな表情を浮かべながら頷いている。

「ええ。あれは「友好の花」。あの花の数が増えれば増えるほど、我々クリミアーナ教国との友好が深まります。どんどん増やしてください」

……どの口がそんなことを言うのだ。侍従長は大声で叫びだしたい衝動を必死でこらえていた。

「しかし、あなた方も人が悪い」

リルレインに替わって、ファンタジック公爵が口を開く。彼の言葉が意外だったと言わんばかりに、使者の男は眼を見開いて、驚いた表情を浮かべる。

「何とご挨拶なお言葉でございましょう。あの友好の花は、我がクリミアーナ教国が秘蔵する花でございます。四季折々に花の色を変え、さらには、すばらしい香気を持ちます。教皇聖下にあらせられましても、あの花を特にお気に召しておられまして、いつもお傍に置いておいでなのです」

「ああ。確かに、あの花の香気は素晴らしいものだった。妻も大変

に気に入っていた。今は、少々、迷惑だが」

公爵の言葉に、男は恭しく一礼する。

「だが、まさかあの花に、あれほどの繁殖力と生命力があるとは、思わなかった」

「ほほう、それは……」

「とぼけるな」

公爵のドスの効いた声が響き渡る。その隣で、リルレイン侍従長も、男を睨みつけている。

「貴様らの魂胆は見えている。あの花を我が国に植え付け、その驚異的な繁殖力と生命力、そしてあの濃い臭気をもってこの国を覆い、滅亡に導こうとしていたのだろう。だが、そうはいかぬ」

「いえ、我が国にはその意図はございません。確かに、友好の花は……」

「もうよい」

「……」

「我々は、あの花がこれ以上繁殖できぬように、完璧に手を打った。貴様らの企ては失敗したのだ」

「左様でございますか、それならば話は早ぅございます」

「何？」

いつしか、使者の表情から笑みが消えていた。彼はこれまでの甲高い声から一転して、落ち着いた声で語り始めた。

「あの花の繁殖を抑えたと承りましたが、差し支えなければ、どのようになされたのでしょう。お教え願えませんか？」

「……」

「すべての花を抜き、焼いてもまだ、花は咲き続けている。違いますか？　……どうやら図星のようですね」

男は満足そうな笑みを浮かべると、大きく頷いた。

「いかに完璧に対処したとしましても、あの花の消し方を知っているのは、我々のみでございます」

「我々の対応が不十分だというのか！」

「ええ、残念ながら。おそらく、時が経てば、花は再び爆発的に増えていくかと存じます」

「貴様らは一体、何のためにこのようなことをする！　一体何が望みだ？」

「お話が早くて恐れ入ります。我々の望みは、貴国との交易でございます」

「交易？」

「左様でございます。我がクリミアーナ教国は、領土も狭く、資源も少なくございます。我が国が生き残るためには、多くの国と交易を行い、必要なものを常に買い揃えていく必要がございます。交易を行う国が増えれば、それだけ、我が国の命が長らえられるのでございます」

「たかが交易を行うためだけに、クリミアーナはあんな恐ろしいものを我が国に寄こすのか」

「そうでもしませんと、貴国は我々の話に耳を傾けぬでしょう」

「よくそのようなことが言えるものだ！」

公爵の怒号が部屋の中に響き渡った。だが、使者の男はそんなことは意に介さないとばかりに、これまで通り落ち着いた声で、話を続ける。

「我が国は今、先の火山の噴火におきまして、甚大な被害を受けております。これは世界中で同じことが言えるかと存じます。このままでは、世界的に食糧危機に陥ることは目に見えております。そのために、我々は、短期間で育ち、しかも、強い生命力を持つ作物を開発しようと試みております。それが、貴国に差し上げました、友好の花でございます。この度は、貴国に対して大いなる迷惑となったかと存じます。しかし、そのお陰で、この花の効果と効率的な活用方法がよくわかりましてございます」

「我が国を、実験台に使ったというのか……」

「有体に申し上げれば、そうなります。しかし、我々は貴国を亡ぼ

す意図は毛頭ございません。貴国を亡ぼすのであれば、何で私が使者として赴きましょう。国が亡びるまで傍観すれば、事は足りるのです」

使者の男は、わかったか、と言わんばかりに、二人の眼を交互に見つめる。

「本日、私がこちらに赴きましたのは、貴国に生えているナイエ草。あれを我々に売っていただきたい。そのお願いに上がった次第です」

公爵と侍従長は顔を見合わせた。ナイエ草は、この国の山の上に生えているコケのような草で、それを煎じて飲めば、疲労回復に効果があると言われている薬草だった。

「我々が開発しようとしている作物の種を作る際に、そのナイエ草を混ぜ合わせれば、さらに効率的なものが作れるという研究成果が出ております。しかし、残念ながら、ナイエ草が生えているのは、世界広しといえども貴国のみ。その貴国は、我々を含む諸外国とは長い間交易を断ってこられた。そんな貴国に、我々の話を聞いていただくためには、このような手段を取るしか方法がございませんでした。お許しください」

使者の男は、そう言って深々と頭を下げた。

「また、貴国に対しまして、我が国の枢機卿が無礼を働きましたことについても、深くお詫び申し上げます。我が国としましても、あのようなことを致すつもりは毛頭ございませんでした。無礼を働きました者は厳しく罰することといたします」

そこまで言うと、使者の男は沈黙する。そして、ファンタジック公

爵とリルレイン侍従長を交互に見比べながら、再び柔和な笑みを浮かべた。

「我が国としては、貴国との友好を切に望んでおるのです。そうすることで、この世界を救いたいと考えているのです。その証としまして、今、貴国に生えている友好の花をすべて駆除してご覧に入れます。ええ。見返りなどは一切いただきません。すべて、我が国の費用でやらせていただきます」

「それならば……」

思わず口を開いたリルレイン侍従長を、ファンタジック公爵が押しとどめた。彼は侍従長に向かってゆっくりと頷くと、使者の男に向き直る。

「これは、我々が判断できることではない。大公様にご判断いただくこととする」

「ええ、よろしゅうございます。よいお返事を期待しております。我々は、貴国との交易を切に希望しておりますが、それは決して私利私欲のためではございません。そのこと、よろしく大公様にお伝えください」

「その前に、一つ、聞きたいことがある」

「はい、何なりと」

「あの友好の花を、どうやって葬り去るのだ」

「……」

「それを明かさねば、大公様は首を縦には振らぬ」

使者の男は、少し考える素振りを見せたが、やがて、ゆっくりと一礼をして、侯爵たちに視線を向け直した。

「ごもっともな仰せです。なに、簡単なことです。あの花をＬＶ５の火魔法で焼き切るのです」

「ＬＶ５の火魔法……」

「はい。私どもには、火魔法を極めた者がおります。その者に、友好の花をすべて、葬り去らせます」

ファンタジック公爵とリルレイン侍従長には、その言葉に説得力を感じていた。世界でも数名しかいないというＬＶ５の火魔法の使い手ならば、花の実も種も、根までも完全に焼き尽くすだろう。

「そのことも含めて、大公様に申し上げることとしよう」

「はい。何卒よろしくお取り計らいのほどを。よい返事を、期待しております」

そう言って男は一礼して、その場を後にしていった。

「公爵様……」

リルレインが、何とも言えぬ表情で公爵に視線を向けた。だが、彼はそんな侍従長を鋭い眼差しで睨みつけた。

「クリミアーナは確実に我が国を狙っている。花の駆除を口実に、無理難題を吹っかけてくるのは目に見えている」

「しかし……」

「ともあれ、これは、我が国の命運がかかっている。大公様に決断していただくほかあるまい」

公爵の言葉に、リルレイン侍従長はゆっくりと頭を下げた。

第五百六十五話　もう一つの意図

大公・テイストは、ファンタジック公爵とリルレイン侍従長からの報告を、ただ、黙って聞いていた。

普段であれば、報告の最中では矢継ぎ早に質問が飛んで来るのが常なのだが、この日の大公は、ただ黙って二人の報告に耳を傾けていた。そのあまりの静けさに、二人は不気味さすら感じるほどだった。

「……以上でございます。いかが、いたしましょう」

リルレインが恐る恐る尋ねる。大公は眉間に皺を寄せたまま、じっと彼を睨みつけている。

「大公様、畏れながら……」

ファンタジック公爵が言葉を発したその瞬間、大公はスッと手を挙げて遮る。一見するとその様子は、まるで、怒りを限界まで堪えているかのように見えた。……大声で怒鳴られる。二人は同時に覚悟を固めた。だが、予想に反して、大公は静かな声で口を開いた。

「ベルクナイを呼べ」

「は？」

「専属医のベルクナイを呼べと申すに」

「おっ、お体の加減でも……」

「いいから言う通りにせい！」

大公の大喝一声に、リルレインは直立不動の姿勢を取る。そして、ピョコンとお辞儀をすると、大慌てで部屋を飛び出していった。一人残されたファンタジック公爵は、ただオロオロとその場に立ち尽くす他なかった。

◆　◆　◆

「お召しにより、参上しました」

しばらくして、小柄で髭面の男が、大公の前に進み出て控えた。彼は鋭い眼差しを大公に向け、現在の状態を丁寧に観察しようと努める。

「ベルクナイ」

「ハッ」

「余は重病だな？」

「はっ？」

予想外の大公の質問に、ベルクナイは眼を見開いて驚く。顔の色艶もよく、一見すると健康そのものに見える。とても重病を患っているようには見えなかった。

「明日をも知れぬ、重病じゃな？」

「……」

「余の顔をよく見よ、ベルクナイ」

大公は鋭い眼差しを向けながら、ゆっくりと、大きく頷いた。

「……左様でございます。大公様は、重病であらせられます。明日をも知れぬ、重病であらせられます」

「……左様か。ファンタジック、リルレイン」

「はっ、ははっ」

突然、名前を呼ばれた二人は、慌てて直立不動の姿勢を取った。大公はゆっくりと椅子から立ち上がりながら、彼らに再び視線を向ける。

「そういうことじゃ」

「おっ、おっ、おっ、おそれ……畏れながら……」

大公の言葉の意味がわからず、リルレインがカクカクと体を震わせながら、必死で言葉を絞り出す。その様子を見た大公は、さも、情けないといった表情を浮かべながら首を左右に振る。

「余は明日をも知れぬ重病じゃと、クリミアーナの者に伝えるのじゃ」

「畏れながら……そのように伝えて、使者の者は納得するでしょうか？」

「知らぬ。帰国したいと申すのであれば、帰国させてやれ。この国に留まりたいというのであれば、それも構わん。ただし、この宮殿から外に出ることは厳禁する。厳しい監視を付けよ」

「……」

リルレインは、大公の言葉の意味がいまいち呑み込めないのか、ぽかんと口を開けたままだ。

「リルレイン」

「ハハッ」

「余は出かけるぞ。準備をせい」

「お出かけ……でございますか？　一体、どちらへ？」

「アガルタじゃ」

「あっ、アガルタ？」

「余、自らアガルタに参り、アガルタ王に謁見して、この国の窮状を訴えるのだ」

「お待ちください！　古来より我が国では、大公様が海を渡ったという前例はございません！」

「前例？　そんなものに縛られていては、我が国は滅ぶ。それしきのことが、そなたにはわからんのか？」

「……」

ただ、オロオロと首を左右に振るリルレイン侍従長。そんな彼を一瞥した大公は、隣に控えているファンタジック公爵に視線を向ける。

「余がアガルタに行って戻るまでの間、何としても、余がこの宮殿にいると見せかけよ。余の病状については、このベルクナイから皆に説明させよ。ベルクナイ」

「ハッ」

「そなたは今日より、我が寝室にて寝起きせよ」

「……承知いたしました」

「お待ちください、大公様」

「何じゃ？」

ファンタジックの声に、大公は面倒くさそうな表情を浮かべた。彼の機嫌は極めて悪い。だが、公爵は再び大喝されるのを覚悟で、口を開いた。

「一体、何をなさろうとしているのか、我々には皆目見当もつきません。恐れ入りますが、我々にも、わかるように説明していただけませんでしょうか」

大公は天を仰いだかと思うと、大きく息をつき、やがてゆっくりとファンタジックに視線を戻した。

「まずは、アガルタに礼を言わねばなるまい」

「……」

「かの国は、セルロイトに持たせた書簡を読んですぐに、我が国に食料を支援してくれた。しかも、この秋には実をつけるであろうカウワサイの種までも、送ってくれた。しかも、大量にじゃ」

「畏れながら、礼であれば、わざわざ……」

「聞け。余がアガルタに向かう理由は、それだけではない」

「……」

「当然、我が国に蔓延するあの、「友好の花」の始末についても助言を受けるつもりじゃ。すぐには解決できぬやも知れぬ。だが、アガルタであれば、セルロイトであれば、我が国の窮状を何とかするのではないかという予感が余にはある。アガルタは世界に冠する大国じゃ。周辺のヒーデータ帝国、ニザ公国と深い誼を通じ、ラマロン皇国を膝下に置いている。加えて、フラディメ王国、ミーダイ王国、サンダンジ王国とも友好関係にある。それだけの国々と関係があるのだ。もしかすると、クリミアーナの言う、火魔法ＬＶ５のスキルを持つ魔導士を呼び寄せることができるやも知れぬ」

「なるほど……大公様の慧眼には感服いたしました」

「バカ者。余がアガルタに参る理由はもう一つある」

「もう一つの理由……でございますか？」

「ああ。余はアガルタに参ることで、クリミアーナの心胆を寒からしめるのだ」

「くっ、クリミアーナの、でございますか……」

ファンタジック公爵は眼を見開いて驚いている。まさに今、クリミアーナに飲み込まれようとしている国家の一大事に、大公は逆に、クリミアーナの心胆を寒からしめると言う。そんなことが果たしてできるのか……。彼は思わず呆れたような表情を浮かべる。だが、大公はそんな様子を気に留めるでもなく、さらに言葉を続ける。

「考えてもみよ。クリミアーナが我が国と交易を望んでいる？　バカな。あの国の力をもってすれば、ナイエ草など簡単に手に入れられる。あの狙いは、我が国をその膝下に置くことにある。友好の花を使って、我が国を隷属させるのが、あの国の本来の狙いじゃ」

「まっ……まさか……」

「少し前、我が国の西にあるサブクリナー王国がアガルタに戦いを挑み、敗れ去ったのは知っておるだろう」

「ハッ。確か、あの戦いは両者痛み分けと聞いておりますが……」

「それはクリミアーナが吹聴した情報に過ぎぬ。実際、サブクリナーは国王自身が捕らえられておるのだ。これを敗北と言わずして、何と言う」

「しっ、しかし、サブクリナー王は無傷で解放され、アガルタはクリミアーナと事を構えるのを恐れて、何の補償も要求しなかったと

聞いております」

「ファンタジック。そなた、もっと世情を読む訓練をせよ。無傷で解放されているにもかかわらず、なぜ、サブクリナーはクリミアーナに船を出さぬのだ？」

「そっ……それは……」

「これまで、定期的に我が国の沖合に見えたサブクリナーの船が、ここ最近見えぬ。ということは、表向きはアガルタと痛み分けと見せかけておいて、その内実は、アガルタに寝返っておるのだろう」

「まさか……」

「サブクリナーは、クリミアーナにとっては西の要。そこが崩れたとなると、あの国は喉元に刃を突き付けられたも同然となる。西の備えを強化するためには……まず、我が国を膝下に置くのが、最も手っ取り早いであろうが」

「は……ははっ」

「余は、クリミアーナの連中に一泡吹かせてやるのだ。我が国がアガルタと同盟関係を結んだと知れば、あの国は慌てる。西への備えがさらに手薄になるからな。それに、攻めたくても攻めることができぬ。我が国を攻めれば、アガルタと事を構えることになるからな」

「よ……ようやく、合点が参りました……」

ファンタジックとリルレインはがっくりと項垂れる。だが、その胸には、一抹の希望の光を見出していた。

「この国が生きるか死ぬかは、余の動きをクリミアーナに悟られぬことにかかっている。それ故、お前たちの任務は重大じゃ。わかるな？」

大公の言葉に、二人は大きく頷いた。

第五百六十六話　選択肢

翌日、フォーアル大公国の港から、一艘の船が出港していった。表向きの理由は、重病を患う大公・テイストを治療する医師を招へいするためと触れ回られていた。そこには、大公・テイスト自身が乗り込んでいて、いつもの衣装とは異なり、貴族が普段着用する衣服に身を包んでいたものの、顔などを隠すことはなく、堂々と船に乗り込んでいった。

この計画が大公の口から発表されると、当然のごとく、ファンタジック公爵とリルレイン侍従長は反対した。彼らは、夜陰に紛れてこの国を出ることを強く提案したが、大公は頑として自分の意見を譲らなかった。

大公は、出港はあくまで日中に、堂々と行われるべきだと主張した。夜陰に紛れてコソコソと事を行えば目立つ。それに、この国にはクリミアーナ教国の使者が来ているのだ。当然のごとく、大公以下、国の主だった者を監視しているだろう。秘密裏に事を行えば、彼らのことだ。必ず嗅ぎつけてくるに決まっている。で、あればむしろ、堂々と事を行った方が、彼らを欺くことができるだろう。大公は口元を幾分緩めながら、そんなことを言ってのけた。

大胆不敵とはこのこと……。リルレイン侍従長は心の中で唸っていた。国の一大事であるこの時期に、そのようなことを実際にやろうとする大公の腹の太さに驚嘆すると共に、もし、これが露見したときのことを考えると、心の中は鬱々たるものがあった。

そんな彼の背中を押したのは、やはり、大公の一言だった。

「小さな嘘はすぐバレるが、大きなウソはバレにくいものだ。どこの世界に、重病だと触れ回っている者が堂々と船に乗り込んで出港するのだ。そのようなこと、誰も考えつかぬだろう」

確かにそれはそうだ。まるで、子供がつくような嘘だが、国家の一大事にそのようなことをする者は、確かにいないだろう。リルレインの心の中に、何だか面白そうだという感覚が芽生えた。

「そなたらは余が明日をも知れぬ重病であると言い続ければよいのだ。あとは知らぬ、存ぜぬと突っぱね続ければよい。簡単な仕事だ。楽にやれ」

そう言うと彼は、近習の者を呼び出して急いで荷造りをするようにと命じたのだった。

「余は、アガルタ王と直接話をして、今後のことを決めてくる。……そのような心配そうな顔をするな。余自ら赴くのじゃ。何も決めてこないという愚策を取るつもりは、毛頭ない」

そう言って彼は足早に自室に戻っていった。

廊下を歩きながら大公は、最悪の場合、アガルタの支配下に入ることも考えていた。何としてもクリミアーナに一泡を吹かせるのだ……。彼の心の中には、メラメラと復讐の炎が燃え上がっていた。誰よりも愛するこの国を、国民を、そして、姪を……何としても守るのだ。彼は固く心に誓うのだった。

◆　◆　◆

「明日をも知れぬ重病……でございますか？」

数日後、大公宮殿を訪れたクリミアーナの使者は、怪訝な表情を浮かべた。彼の予想を超えた返答だったからだ。

「ちなみに、病名を伺っても？」

「原因不明だ」

「先だっても確か、ご病気でお目見えが叶いませんでしたね？」

「それ以降、さらに重篤になったのだ」

ファンタジック公爵はにべもなく答える。使者の男はゆっくりと頭を下げると、まるで、赤子をあやすかのような優しい声を出して語りかけてきた。

「それは……誠にお気の毒な事でございます。我がクリミアーナ教国には優秀な医師が……」

「必要ない」

「……」

「すでに、優秀な医師を派遣してもらうよう、要請をしたところだ」

「……どちらに？」

「フラディメ王国だ」

「フラディメ？」

使者の男の声が上ずっている。彼の頭の中に全くなかった選択肢だった。

「リボーン大上王は、不治の病から復活なされたと聞いている。そのために、かの国では大上王の指導の許、優秀な医師を育成しているともっぱらの評判だ」

「左様でございますか……」

「そうした理由により、先日のお話のお答えはできかねる。あしからず。なに、大公様が回復なされれば、すぐにご命令をいただけるだろう。それまでは帰国なされるなり、我が国に留まるなり、自由になされるがよい」

「……畏まりました。また、改めてお返事させていただきます」

男はそう言ってその場を辞していった。

「……大丈夫でしょうか？」

心配そうな表情を浮かべているリルレインを一瞥したファンタジック公爵は、大きなため息をついた。

「やるしかないだろう」

「……」

「我々も汚名を雪がねばならない。何としても、やり遂げるしかな

いのだ」

「……承知しました」

リルレインはゆっくりと頭を下げた。

◆　◆　◆

一方、使者の男は、自室に戻ると、足早に机に向かった。一体何事かと目を丸くしながら近づいて来る部下たちを手で制した彼は、懐から紙を取り出し、そこにカリカリと何かを書き始めた。

「……えっ！？」

「……」

思わず声を上げた男を手で制すると同時に、人差し指を口元に持って行って、静かにするように促す。

「……」

使者の男は、無言で紙を広げて見せる。そこには、こんな文字が書いてあった。

『大公が重病であるらしい。至急、真偽を調査せよ』

それを見た部下たちはコクリと頷く。そのとき、一人の部下が、男が持っている紙を恭しく受け取り、そこにさらに文字を書き加えた。

『教皇聖下への報告は？』

使者の男はゆっくりと首を左右に振った。真偽のほどを確かめてから報告しろというゼスチャーだ。その意図を汲み取った部下たちは、スッと踵を返して、部屋を後にしていった。

使者の男は、ブツブツと何かを呟くと、突然、手に炎が上がり、持っていた紙に燃え移った。

大公の病状についての情報は、すぐに集まった。とはいえ、それは限定的であり、確証が持てるものではなかった。

「大公の姿を見た者は？」

「おりません」

「……」

「主治医のベルクナイという者が、付きっきりで看病しているとのことです」

部下の報告を聞きながら、使者の男は腕を組みながら天を仰ぐ。そこに、もう一人の部下が部屋に戻って来て、彼に近づいて、耳打ちをする。

「……何？　船が？　行先は？」

「わかりません。ただ、貴族のような者が従者を連れて乗り込んでいったようです」

「……」

男は再び目を閉じて考える。貴族風の男が船に乗って出港したとあれば、行先はフラディメだろう。先ほど聞いた、ファンタジック公爵の話の内容と一致する。と、なれば、大公が重篤な状態であるというのは、あながちウソではなさそうだ。だが……。

そこまで考えて、男はゆっくりと目を開ける。大公のような国の王が病気で倒れたとあれば、その情報は徹底的に隠ぺいされるのが常だ。それを、何のためらいもなく自分に教えたというのは、どうも腑に落ちない。しかも、クリミアーナとフォーアル大公国は、半ば敵対関係にある。そんな国に、国家の大事をおいそれと明らかにするだろうか。答えは、否だ。

現在、この国は友好の花に席巻されようとしている。いかに手を尽くそうとも、花の繁殖を止めることは不可能だ。フォーアルとしては、我々クリミアーナの要求を受け入れて国を開くか、座して滅亡するかの二者択一しかない。あの大公のことだ、後者を選択するということはまず、あり得ない。となれば、フォーアルはクリミアーナと手を組む他、ないのだ。

……まさか、アガルタからの支援に望みをかけているのか？

使者の男の口元が緩む。

「……いずれにせよ、何とも判断がつきませんね。もう少し、状況を見定めなければ。それまでは、静観ですね」

誰に言うともなく、男が呟く。それを聞いた部下たちは、一斉に頭を下げるのだった……。

第五百六十七話　悪夢再び

ヴィエイユは、ゆっくりと目を覚ました。喉がカラカラに乾いていて、なぜか、目を開くことができなかった。

「み……水……」

闇の中で、言葉を絞り出すのがやっとだった。口の中も乾ききってしまっている。上手くしゃべることができない。それどころか、口を閉じることすらできない。どうやら、顎が外れているようだ。

一体なぜ……？　眠っている間に顎が外れるなど聞いたことがない。だが、口を開けたまま一晩を過ごしたというのであれば、この喉の渇きは納得がいく。

……医師の、サムターン博士を呼ばねば。

そこまで考えたとき、ヴィエイユは体が全く動かないことに気付いた。まるで金縛りにあったように腕や脚がピクリとも動かない。辛うじて、首だけが少し動くだけだ。

ヴィエイユは現状を確認しようと、必死で目を開けようと試みる。しかし、彼女の両目は、まるで糊で張り付けられているかのように固まっていて、ピクリとも動かなかった。それでも彼女は、辛うじて動く首をゆっくり左右に振りながら、両目を開けようともがく。

その甲斐あってか、やっと左目が徐々に開いてきた。その目に飛び込んできたのは、信じられない光景だった。

何と、ヴィエイユが精魂込めて建設した都市、アフロディーテのあちこちから、火の手が上がっていた。それは徐々に燃え広がっているようにも見え、炎は少しずつこの教皇神殿へ向かってきているようにも見える。

……一体なぜ？

彼女は、はあはあと呼吸を乱しながら、ゆっくりと周囲を伺う。沖合を軍船と思われる船がびっしりと埋めていた。まさか、どこかの国がこのアフロディーテに攻め込んできたのか。いや、それはあり得ない話だ。このアフロディーテの防衛体制は完璧だ。そう考えたとき、ヴィエイユはハッと気が付く。そうだ。ラッカー率いるサブクリナー王国が、コントロールできない状態になったのだ。それで、仕方なくフォーアル大公国を隷属させようとしたのだ。あの国はどうなったのだろうか。確か、使者を向かわせたはずだが……。

そこまで考えたとき、ヴィエイユは自身の体が宙に浮いていることに気が付いた。これはどうしたことだと、さらに周囲を伺うと、何と、十字架のようなものに両手・両足を打ち付けられて、教皇神殿の壁に吊るされていることに気が付いた。よく見ると、彼女の近くには主だった家来たちが、同じように十字架にかけられて吊るされている。皆、まるで人形のように動かない。

ふと気が付くと、己の服がビリビリに破けていることに気が付いた。下着は剥ぎ取られて、形の良い乳房や、下半身が丸見えの状態だ。それに、太ももから足首にかけて、なぜか血のようなものが付いている。一体、何があったのか……。

体に痛みらしきものは感じない。というよりむしろ、体の感覚が全

くない。どうやらマヒしてしまっているようだ。

「フッフフ。ハッハッハッハッハ……」

老人の高らかな笑い声が響き渡る。一体誰の声だろう。ヴィエイユには、その声に懐かしさを感じる。声の出どころを探すと、彼女の足元に、黒い鎧を装備した兵士たちがこちらを見上げているのに気付いた。そして、その中心に、白い服を着た二人の男性の姿を見つけた。

でっぷりと肥った体。禿げあがった頭。そして、髭……。それは、ヴィエイユの祖父、ジュヴァンセル・セインだった。

「お……おじい、さま……」

必死で声を絞り出すが、彼にその声は届いていないらしい。祖父はヴィエイユを見上げながら、満足そうに頷いている。ふと、その隣に控えている、もう一人の、白い服を着た男が目に入った。

「カ……カッセル！？」

何故、カッセルがここに居るのか。彼は自らの手で討ち取ったはずだ。それに、おじい様もだ。二人とも確かに、自分がこの手で命を奪ったのだ。どうして……？　ヴィエイユの頭は混乱する。

「姉さま。いい姿ですね。それに、そんな哀れな姿になっても、やはり姉さまは美しい。こんなことなら、もっともっと楽しめばよかった……」

カッセルの言葉を聞きながら、ヴィエイユは徐々に記憶を取り戻し

ていく。そうだ。執務室で報告書に目を通していたとき、突然兵士たちに乱入されたのだ。その兵士を率いていたのがカッセルだったのだ。カッセルはニヤニヤと下卑た笑みを浮かべながらヴィエイユの髪の毛を掴んだかと思うと、いきなり彼女をその場に引き倒したのだ。そして、有無を言わせずに衣服を剥ぎ取り、彼自身も裸になったのだ。

それから先は、断片的な記憶しかないが、ヴィエイユは確かに、カッセル以下、そこにいた兵士たち全員の慰みものになった。そして、兵士たちに蹂躙され続けるヴィエイユの姿を、カッセルは満面の笑みで眺め続けていたのだった。

「姉さま」

カッセルの声で、我に返る。相変わらず彼はニヤニヤといやらしい笑みを浮かべている。

「さあ、これからが本当のお楽しみの時間です。もう、放しませんよ、姉さま」

イヤだ。誰があなたなどと。私は、まだまだやらねばならぬことがあるのです。まだまだ。まだまだ……。

その瞬間、体が軽くなり、景色が変わった。全身が汗に濡れていた。いつもの、寝室だ。夢だったのか……。

ヴィエイユはゆっくりと、注意深く両手を握って、体が動くことを確認する。足も動かしてみる。ちゃんと、自由に動かすことができる。

彼女は息を整えながら、自分の体に異常がないか、ペタペタと体中を触っていく。

「お目覚めでございますか？」

突然の女性の声に、ヴィエイユは思わず体を震わせる。ふと見ると、そこには侍女であるサリエラの姿があった。

「水を……」

言葉が言い終わらないうちにサリエラは動いて、水を差しだす。ヴィエイユは起き上がってそれを受け取り、グイッと一気に飲み干した。

「ふぅ……」

サリエラの手がスッと伸びてくる。ヴィエイユは彼女に持っていたコップを渡す。すぐに、再び水を湛えたコップが差し出される。それをゆっくりと飲み干す。

「ありがとう」

「はい……」

サリエラは恭しくコップを受け取ると、次の指示を待つように、その場に控えた。だがヴィエイユはその彼女にチラリと視線を向けただけで、いつものようにベッドから降りたかと思うと、窓に向かって歩き出し、そして、勢いよく開ける。

朝日がまぶしい。手で光を遮るようにして、眼下に広がる教都の姿

を眺める。いつものように、整然と配置された美しい街並みが広がっている。

ヴィエイユは大きく深呼吸をする。風の流れに乗ってきた潮の香りが、何とも清々しい。

「湯浴みをします」

「はい。準備はできております」

サリエラの声に頷くと、ヴィエイユは足早にバスルームに向かう。すぐさま服を脱ぎ、一糸まとわぬ姿になる。

自分の体を鏡に映して、隅から隅までを確認する。汚れや穢れは見当たらない。いつもの自分の体だ。ヴィエイユはゆっくりと頷くと、手に持っていたタオルで、自分の体を擦り始めた。まるで、何か汚れたものを落とすかのように、いつも以上に丹念に、その体を清め始めた。

それが終わると彼女は、朝食も摂らずに、執務室に向かった。朝のあいさつに訪れた秘書のオーレリーや枢機卿たちを制して、彼女は少し強めの口調で命じる。

「ロン・エスロテル卿を呼んでください。すぐにです」

「はっ、ははっ」

いつもとは違う教皇の様子に、皆、戸惑いながら部屋を後にしていく。誰も居なくなった部屋で一人、ヴィエイユは小さな声で呟く。

「何か……イヤな予感がする。私は……負けられない。おじい様やカッセルのように、負けるわけには、いかない……」

ヴィエイユの眼差しに、鋭さが増していった……。

第五百六十八話　ある出会い

アガルタにやって来て、二週間が経とうとしていた。セルロイトは、目の前に広がる畑を見て、ゆっくりと息を吐きだした。

目まぐるしい日々だった。アガルタ王との謁見を終えてすぐ、アガルタ大学に案内された。大学と言っても、都の中にあるキャンパスではなく、連れて行かれたのは都の外にある農場だった。

そこは地平線の彼方まで広がる広大なもので、セルロイトは噂には聞いていたものの、まさかこれほどの規模とは思いもよらず、思わず口をあんぐりと開いて、呆然とその場に立ち尽くした。

そこでは種々様々な作物が育てられていた。セルロイトをして、初めて見る種類もいくつもあった。彼女は久しぶりに胸をときめかせながら、畑の作物を眺めていた。

その様子を見た聖女・メイリアスは、明日からしばらくこの畑に通ってみてはどうかと提案された。彼女の説明によると、この畑には研究者が滞在する宿泊施設もあるらしい。そこに泊まりながら畑を観察し、セルロイトが育ててみたいと思う作物を見つけてはどうかと提案されたのだ。セルロイトに、断るという選択肢はなかった。

次の日、迎賓館から宿泊施設に荷物を移したセルロイトは、早速、アガルタ大学の畑を歩き回った。そこで育てられている作物は、セルロイトの好奇心を強く刺激した。そのため彼女は、来る日も来る日も畑に出かけて歩き回ったのだった。この日も、聖女・メイリアスは忙しい仕事の合間を縫って、セルロイトのために案内役を買っ

て出てくれた。その優しさに恐縮しながら、彼女は畑の作物たちに目を奪われた。

「これは……シーングの実！？」

突然、セルロイトが声を上げた。それもそのはずで、そこには本で読んだ「幻の実」と言われる果実が、畑一面になっていたのだ。真っ赤な、一見するとトマトのような果実が林立した畝に鈴なりになっている。

「よくご存じですね」

畑の中から声がしたかと思うと、シーングの実の間から、年の頃は三十代だろうか。真っ黒に日焼けした少し背の高い、細身の男性がスッと顔を出した。眼には何とも言えぬ愛嬌があり、その上、深い知性を湛えていた。

「私は、アガルタ大学で研究をしています、ヤンノーリと言います」

「あっ、あっ、あっ……ええ……ああ……」

突然話しかけられたために、言葉がうまく出てこない。そんな彼女に、ヤンノーリは優しく微笑みかける。

「ヤンノーリさんは、このアガルタ大学で研究を続けながら、学生たちに農業を教えていただいています。とても丁寧に教えていただけるので、学生たちからの信頼も厚いのですよ」

メイがそう言って紹介する。ヤンノーリは恐縮しながら、顔の前で手を振る。

「そのような……。買い被りすぎですメイ様」

「事実ですもの。それよりも、シーングの状況はいかがですか？」

メイの声に、ヤンノーリの顔が曇る。

「このように実をつけるところまでは、何とかなったのですが……。やはり、味となると、とてもとても……。本来のシーングの実は甘いのですが、ここでなった実は、ほとんど甘みがありません」

彼はそう言って、無造作にシーングの実を取り、服でゴシゴシと磨くと、それを二人の前に差し出した。メイは何のためらいもなくそれを取り、口に運ぶ。セルロイトもそれに倣って、シーングの実を手に取った。

「……確かに。ほのかな甘みは感じますが、書物に書かれてあるような、「溢れ出る甘味」というわけではありませんね」

「そうなのです。色々と手を変えてみてはいるのですが、やはり、甘みだけはどうしても……」

そのとき、セルロイトが出し抜けに口を開いた。

「あ……甘味であれば、みっ、水の量を……調整すると……いいと思います」

「水……ですか？　水は十分に与えていまして、これ以上与えますと、音が腐ってしまう恐れがあるのですが……」

「ぎゃ、逆です」

「と、言うと？」

「みっ、水を……ギリギリまで……与えないの、です」

「……」

「かっ、乾燥した、日差しの強いところで……育てると……甘く……」

セルロイトは、自宅の庭で作物を育てた経験を丁寧に語った。その話をヤンノーリは頷きながら真剣に聞いていたが、やがて、何か得心したような表情を浮かべた。

「なるほど。確かに、砂漠など、痩せた土地で育った作物には、甘みのあるものもありますね。そうか……。これまで、エルカリーナさんにお願いして、湿度などを細かく調整してもらっていましたけれど、むしろそれは悪手だったのか……」

「エルカリーナ？」

何故か、思わず声に出てしまった。セルロイトは戸惑いながら、思わず手で自分の口元を覆った。その様子に、メイは優しい笑みを向けた。

「この農場は、サイリュースの皆さんに協力していただいているのです。エルカリーナさんは、森の精霊と契約していらっしゃるので、湿度などを操ることが得意なのです」

「サイリュース……森の精霊……」

「この農場は、森や空気の精霊と契約されているサイリュースの皆さんが手伝ってくれています。あと、土精霊のノームさんにも、手伝っていただいているのです」

「そうじゃ。儂が見ておるから、この農場の作物はよく育つんじゃ」

突然、老人の声が聞こえた。ふと足元を見ると、小さな老人が胸を張りながら、セルロイトに視線を向けていた。

「ここは元から土の成分がよいところだったんじゃ。そこに、サイリュースたちが、作物ごとに湿度や温度を管理してくれとるから、とても育ちやすいんじゃ。ところで……エルカリーナちゃんはどこにいったんじゃ？」

「今、クワラカの畑に行っています」

ヤンノーリが笑顔で答えている。どうやら、この二人はかなり前からの知り合いのようだ。

「何じゃ、つまらんのう。あの、エルカリーナちゃんの形のいい乳が見られると思っておったのに……。まあ、メイちゃんに会えたから、よしとするかの」

「ノームさん」

メイリアスが呆れたような表情を浮かべている。貴族社会で育ったセルロイトにとっては、女性の体について、あけすけに話題にするのはとても行儀の悪いことだと教えられてきていた。そのため、こ

の小さな老人の傍若無人な態度に、どう接していいのかがわからずに、目を白くさせていた。

「メイ様〜。メイ様〜！」

突然、男性の大声が響き渡った。驚いて声のした方向に視線を向けると、そこには馬に乗った若い男性がこちらに向かって手を振っていた。男の隣には、一台の馬車が控えていた。

男は馬から降りると、こちらに向かって走ってきた。彼は息を整えながらメイリアスの前で畏まった。

「やはりこちらでしたか。リノス様からの伝言です。すぐに、セルロイト様を連れて、迎賓館までお越しくださいとのことです」

「セルロイト様を連れて？」

「はい。セルロイト様にお客様とのことです」

「私に……？」

セルロイトは不安そうな表情でメイリアスに視線を向ける。この国に来ていることは、フォーアル大公国でも数人しか知らない。にもかかわらず、この自分に客とは……。一瞬、マタカ様かと思ったが、あのお方がこのアガルタに来るわけはない。来たとしても、会わせてくれるとは思えない。となれば、一体誰が……。

そんな彼女に、メイは優しい視線を向け続けている。彼女はゆっくり頷くと、控えている男に視線を向けた。

「わかりました。では、今からセルロイト様を連れて迎賓館に向かいます。ご主人様にそう伝えてください」

「承知しました。あそこに馬車を連れてきております。あれに乗ってお越しください。それでは、私はリノス様にメイ様のお言葉を伝えてまいります」

そう言って彼は、再び走り出し、馬に乗って駆け出して行った。それを見送ったメイは、セルロイトに向かって頷き、馬車に向かおうと促す。

「セルロイトさん」

不意に名前を呼ばれた。声の主は、ヤンノーリだった。彼はセルロイトの手を取ると、両手で優しく握りしめた。

「ありがとうございます。あなたのお蔭で、私の研究が一歩、前に進みそうです。感謝いたします」

セルロイトの細い手を握った彼の手は、とても温かかった。

第五百六十八話　ある出会い（後書き）

コミカライズ第17話が公開されております。9／29　0：00まで無料で読めますので、ぜひ、チェックください！　今回はペーリスが登場します。これがまた、カワイイ……（笑）。

https://comic-boost.com/series?category=14

第五百六十九話　花の香り

馬車に揺られながら、セルロイトは、まだ手に残るヤンノーリの温もりを感じていた。彼女にとって、男性の手は冷たいもので、まさか、あんなに温かいものだとは思わなかった。実際、彼女を抱いたマタカは、事あるごとに、セルロイトの体が温かいと褒めた。彼の冷たい手が、自分の体温によって温められていくその行為こそが、セルロイトにとっての愛情だった。

「どうしました？」

メイリアスが優し気に話しかけてくる。セルロイトは、オドオドと俯く。この立派な女性の前で異性のことを考えていた自分が、恥ずかしかった。そんな彼女の心を見透かしたかのように、メイリアスは口を開く。

「ご安心ください。きっと、大丈夫ですよ」

何が大丈夫なのか、セルロイトは理解することができなかったが、メイリアスの話を聞いていると、不思議に大丈夫だと思えてきた。彼女は再び顔を上げる。

「あの……。私へのお客様と……うっ、伺いましたが……」

「そのようですね。私も、どなたがお見えなのか、知らないのです」

「そっ……そうですか……」

不安そうな表情浮かべるセルロイトに、メイリアスは、そっと手を添える。

「大丈夫です。私たちを呼んでいるのは、アガルタ王・リノスです。ご主人様が呼んでいらっしゃるのでしたら、大丈夫です。そもそも、悪しき者をご主人様は我々に引き合わせたりはしません」

メイリアスの言葉を聞いても、セルロイトはなおも不安だった。おそらく、これから会う人は、初めて会う人なのだろう。上手くしゃべることができる自信がなかった。きっと、言葉が出てこずに、相手に不快な思いをさせるのだろう。そんなことを考えると、彼女の心は鬱蒼としたものになった。

「大丈夫ですよ。私が、ついていますから」

メイリアスは優しくセルロイトの手を握った。彼女の手は、ヤンノーリと同じで、とても温かかった。その温もりは、心の不安を少し軽くしてくれるように感じた。

◆◆◆

迎賓館に到着すると、そこでは、館長であるミンシが待っていた。

「ささ、どうぞ。お客様がお待ちです」

「あっ、あっ、あっ、あの……きっ、着替えを……」

「そのままで結構です」

「でっ、でも……おっ、お客様……。それに……汚れ……」

「問題ございません」

ミンシは笑顔のまま、スタスタと廊下を歩き始めた。戸惑うセルロイトに、メイリアスが優しく微笑みかけて、一緒にいきましょうと促した。

「やあ、突然呼び出して、申し訳ありませんでした」

扉を開けると、そこには、ソファーに腰かけて、満面の笑みを浮かべた、アガルタ王・リノスの姿があった。その隣には、小柄な女性が控えていた。確かこの方は、アガルタ王様のお妃さまの一人だ……。そう思ったとき、セルロイトの目の前に、一組の老夫婦が座っているのが見えた。

小柄な白髪の男性と、同じく小柄な白髪の女性。その女性から漂う香りに、セルロイトは覚えがあった。

「お……お母様!?　お父様!?」

セルロイトの声に振り向いた老夫婦は、まさしく両親だった。母はいつもの通り、落ち着いた表情で彼女を眺めている。一方の父は、彼女の姿を見て、今にも泣きだしそうな表情を浮かべている。もしかすると、二度と会えないかもしれないと思っていた両親に、こんなに早く再会できるとは思わなかった……。自然と、セルロイトの両目から涙が溢れた。

「おい、こっ、こんなところで、なっ、泣くヤツが、あっ、あるか……。げっ、元気そうで、あっ、安心……したっ……」

父の声が涙声に変わっている。セルロイトは言葉が出てこずに、何度も頷く。

「さ、セルロイトさん……」

メイリアスが両手で彼女の肩を抱きながら、両親の間に座らせる。セルロイトが座ると、母は何も言わずに、彼女の手を握ってくれた。その手もまた温かく、そして、母は握るその手に力を込めていた。それだけで、この母がどれほど心配していたのかが十分に伝わってきた。セルロイトは、何も言うことができず、ただ、涙を流すしかなかった。

「まさか、セルロイトさんのご両親がお見えだったとは……私も驚きました」

リノスの隣に腰かけながら、メイリアスが笑顔で口を開く。リノスは少し小首を傾けながら、笑みを浮かべる。

「いや、少し驚かせようと思ってね。ただ……まさか、こんな感動の再会になるとは思わなかったな。少し、反省している」

「アガルタ王様、何とお礼を申してよいやら……」

ハーツ公爵夫人が恭しく一礼する。その様子に、リノスは手を振って答える。

「いやいや、こちらこそ、差し出がましいことをしました。お許しください」

「お母様、お父様……。どうしてアガルタに？」

セルロイトが目を真っ赤にしながら、二人に話しかける。父のハーツ公爵は、スッと彼女から視線をそらせて、そっぽを向いてしまう。

「あなた……。どこを向いているのです。ちゃんと説明しませんと……」

「わっ、わかっている。いっ、今、説明する……。なっ、涙が、止まらんのだ……」

そんな夫の様子に、夫人は呆れたように顔を左右に振っている。そして、さも申し訳ないと言わんばかりに、彼女は深々と腰を折った。

「お気になさらないでください」

口を開いたのは、メイリアスだった。公爵夫人は真っすぐな視線を彼女に向ける。

「我が夫、リノスも、よく泣いております。殿方はどうしても、娘のことになると涙腺が弱くなるようです」

「おいおい、俺がいつ娘のことで泣いた？」

「この間も、エリルちゃんが作った玉子焼きを食べて、泣いておいででした」

「あれは……本当に美味かったんだ。泣くくらいに、美味かったんだ……」

「ホホホ……」

メイとリノスのやり取りを見て、公爵夫人は思わず笑みを漏らした。その様子に、その場の空気が、とても和んだものになる。

「さっ、さて……。ほっ、本題に入ろう」

ハーツ公爵が涙を拭いながら、傍らに置いていたカバンを、いかにも大儀そうに持ち上げて、テーブルの上に置く。

「しょ、書簡でも申しましたが……」

「ああ。「友好の花」ですね？」

「さっ、左様です……」

公爵は鞄を開けようと手を添えた。そのとき、シディーが口を開いた。

「お待ちください。その前にリノス様、このカバンに結界を張って下さい」

リノスは、シディーに言われるがままに結界を張る。シディーの指示は、微に入り細を穿つもので、リノスは呻き声を上げながら、何とか結界を張り終えた。

「ふぅぅ……。では、どうぞ」

リノスに促されて、ハーツ公爵は戸惑いながらカバンを開いていく。それはとても厳重なもので、カバンの中には密閉された箱が入っていて、その中には、さらに何重にも布が巻かれていた。それを公爵

は丁寧に丁寧に外していく。

「……こちらです」

「……邪悪な気配がする」

シディーの声が低くなる。彼女は、この花から放たれている禍々しい雰囲気を、敏感に感じ取っていた。彼女は、花をまるで舐めるようにして観察していく。それにつられて、メイも花に顔を近づけて観察し始めた。二人の美女が、一本の花にまるで、まとわりつくようになっている姿は、かなり異様と言えた。

「……これが、枯れることなく増え続ける花ですか。とてもいい香りがしますね」

リノスも遠目から花を眺めている。確かに、彼の言う通り、花からはすばらしい香気が立ち昇っている。

「メイちゃん」

不意にシディーが口を開く。彼女は眼を閉じて花の香りを嗅いでいる。

「この香り……ラサカの香りがしない？」

「……そうですね。確かに、少し香りますね」

二人は顔を見合わせながら頷いている。リノスはよくわからないという表情を浮かべながら、二人に向けて口を開く。

「二人とも、その、ラサカって何だい？」

リノスの質問に、二人は顔を見合わせていたが、やがて、シディーがゆっくりと口を開く。

「花、茎、種……全てに毒が含まれる花です。生命力が極めて強い花としても知られています」

シディーの目が、鋭さを増していく……。

第五百七十話　保管場所

「ただ、この花の形はラサカそのものとは大きく異なります」

シディーは友好の花をじっと見つめながら、ゆっくりと口を開く。

彼女の言葉に、メイが頷いている。

「ラサカの形は、百合の花に似ています。花びらの色は茶色で、遠目からでもすぐに見つけることができます。シディーちゃんの説明の通り、花、茎、種に強い毒性がありますが、香りがとてもよいために、その昔は香水として利用されていたこともあります」

「でも、今は……？」

「ご主人様のご想像の通り、その香りを嗅ぎすぎると、思考力が低下したり、ひどくなると幻覚や幻聴を覚えたりします。現在では、興奮を緩和する薬として活用されているくらいです」

「なるほど……。ちょっと待ってね」

そう言って俺は、この花に鑑定スキルを発動させる。

「あれ？　この花、毒はないみたいだぞ？　ただ……やはり、生命力は強いみたいだな」

「生命力が強い……」

俺の言葉に、シディーが納得の表情を浮かべながら頷いている。

「あくまで私の直感ですが、この花からは極めて強い邪念を感じます。むしろ、この国に入れるべきではないくらいです」

「おっ……お父様……どうして、こっ、こんな花を……」

セルロイトは驚きの表情を浮かべながら、父のハーツ公爵に視線を向ける。そんな物騒な花をどうしてこのアガルタに持ち込むのだ……。そんな表情を浮かべる彼女に、公爵は切々とフォーアル大公国の状況を説明した。

「そっ……そんな……」

「せっ、セルロイト」

「はい」

「大公様は……。まず、こっ、この花をお前に、みっ、見せろと仰せだった」

「わっ、私に？」

「おっ、お前ならば、こっ、この花の危険性を理解するはずだ……と」

セルロイトは無言のまま、じっと花を眺める。そして、花を近づけると、クンクンと匂いを嗅いだ。

「……たっ、確かに、香りは、ラサカの香りです。しっ、しかし……ラサカの生命力があって……それが、さらに強くなっているとす

ると……恐ろしい」

セルロイトの言葉に、公爵はゆっくりと頷く。

「わっ、我が国は、こっ、この花のお蔭で、危機に瀕している。セルロイト……アガルタ王様……どうか、どうか、わっ、我が国を……お救い、ください」

俺は、わかりましたと言って、しばらくあらぬ方向に視線を泳がせる。

公爵の言っていることは、真実だ。切っても焼いても次々に生えてくるこの花。下手をすれば、世界を滅ぼしかねない程の可能性を持っている。俺は、この花を贈ってきたクリミアーナ……ヴィエイユの心底を推し量ってみた。

あの小娘は極めて頭がいい。きっと、この花の繁殖を止める方法を開発しているのだ。それをタテに、各国々をその支配下に置こうと考えているのだろう。それはきっと、このアガルタも含まれる。いや、むしろ狙いは、俺たちかもしれない。

「メイ、シディー」

俺の声に、二人は真剣な眼差しで視線を向けた。澄んだ瞳が、美しい。俺は少し声を張り気味にして口を開く。

「全力で、この花のことを調べてくれ」

「承知しました」

メイが力強く答える。それに倣う形で、シディーが深々と頭を下げる。

「セルロイトさん」

「はっ、はっ、はっ、はい」

「お願いがあります」

「なっ……何なりと……」

「妻たちの……。メイとシディーを、手伝ってやってもらえませんか」

「……」

セルロイトはキョロキョロとあたりを見廻している。俺のお願いに、どう答えていいのかわからないようだ。そんな彼女に、隣に座っていた母親が、ギュッと彼女の手を握る。セルロイトは一瞬、ビクッと体を震わせたが、やがて、フーッと息を吐くと、じっと俺の眼を見ながら、力強く頷いた。

「それでは、この花を早速、アガルタ大学に運びましょうか」

メイが周囲を見廻しながら口を開く。その言葉に、シディーが力強く頷く。

「そうね。でも、この花はかなり厄介だわ。保管には相当気を付けないと……。この花でアガルタが占領されてしまうなんてことは、あってはならないことだからね」

シディーは真剣な表情を浮かべていたが、やがて、にっこりと笑って、周囲を見廻した。

「でも、ご安心ください。私の直感が、そんなことにはならないと伝えてくれています。そして……我々は、必ず、解決に導いて見せます」

シディーの目が、キラリと光った。

◆　◆　◆

「……あれ？　どうした？　休憩は？」

「……」

驚いた表情を浮かべているのは、ポーセハイのリルラだ。彼の目の前には、ぶ然とした表情を浮かべている、同じポーセハイのシュヤが立ち尽くしていた。

二人は、アガルタの医療研究所に勤務する者たちだった。ここには不思議な部屋がある。部屋は四方すべてを壁に囲まれていて、外部から人が入ることはおろか、中から出ることもできない部屋だ。だが、転移術を会得しているポーセハイたちであれば、部屋には自由に出入りできる。言ってみれば、ポーセハイ専用の休憩部屋が用意されているのだ。

シュヤは、三十分ほど前に宿直を終えて仮眠を取りに部屋に転移していた。彼は眠そうに目を擦りながら、まるで、絶望の淵に叩き落されたような、情けない声をあげた。

「隣が煩くて……眠れやしないよぉ」

「隣？　お前の隣って、確か……ローニさんじゃなかったっけ？」

リルラの声に、シュヤはコクリと頷く。

「ローニさんって、今日は非番じゃなかったっけ？」

「知らないよぉ。ローニさんじゃなければ、きっと、誰か別の奴が勝手にローニさんの部屋を使っているんだろう。迷惑な話だよ。ベッドに横になってウトウト仕掛けたら、突然、アレを始めちゃってさ……。煩くて寝れやしない……」

「アレって？」

「……俺の部屋に来ればわかるさ」

リルラは、よくわからないといった表情を浮かべたまま、シュヤと共に彼の部屋に転移した。すると、その直後から、女性の大きな声が彼の部屋に響き渡っていた。

「まだまだ！　もっと！　もっと！　もっとぉ！！」

リルラは思わずシュヤに視線を向ける。彼は、ヤレヤレといった態度で、両手を広げて首をすくめた。その直後、部屋に男の情けない声が響き渡った。

「まっ、まだやるのか？」

「まだまだ！　もっとやってください。もっとです、もっと、もっと、もっとぉ！」

「もっ、もう、このくらいで……」

「いっぱいかけてください！　いっぱいかけてください！　いっぱいかけてください！」

部屋の中にいたのは、リノスとシディーだった。二人は、シディーの提案で、四方を壁に囲まれたこの、アガルタ医療研究所に転移してきていた。

シディーはこの、友好の花が拡散しないように万全の準備を整えるべきだと主張した。そのために、この花を人が寄り付かない場所で保管することを提案した。そこで選ばれたのが、この部屋だった。

一応、空気口を備えているとはいえ、この部屋で保管すれば、花の花粉などが外部に漏れる可能性は低い。シディーはさらに、この部屋に強力な結界を張るようリノスに求めた。それは、結界の中が一定の温度で保たれるのはもちろんだが、この花に関する花粉や胞子、種子といったものを、完全に除去するというもので、とても難度の高いものだった。さすがのリノスのスキルをもってしても、すぐにはできないもので、もう少し、イメージが明確になるように再度、メイたちと打ち合わせをすることになったのだった。

一旦、この部屋から先ほどの応接室に戻ろうというリノスに対して、シディーは、体にこの花の花粉などが付いている可能性があると言って、徹底して「クリーン」の魔法で体を清めることを提案した。賛成したリノスは魔法をかけだしたが、シディーは何度も何度もそれを求めたのだった。

そんなこととは露知らず、リルラとシュヤは、隣から聞こえてくる声に耳を傾けながら、大きなため息をついていた。

第五百七十話　保管場所（後書き）

『結界師への転生』コミック版がこのたび、コミックシーモア―様が主催する「コミックシーモア・電子コミック大賞２０２１」にノミネートされました（ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｃｍｏａ．ｊｐ／ｃｏｍｉｃ―ｐｒｉｚｅ／ｉｓｅｋａｉ／）

拙作の他にも、素敵な作品が数多くノミネートされております。是非、ぽちっと投票いただければ幸いです！

第五百七十一話　来ちゃった

友好の花を封じ込める結界は、その翌日に張ることができた。シディーの話は難しすぎて要領を得られなかったが、そこは、メイが優しく説明してくれたおかげで、何とか完了させることができた。要は、結界を出るときに「クリーン」魔法が二十回連続でかけられる効果を付与すればよかったのだ。こんなことで、あの花の拡散が防げるのかという疑問も残るが、シディーが納得しているので、これでいいと思うことにする。

メイ、シディー、そして、セルロイトの三人は、次の日から花の研究にとりかかった。

研究と言っても、その花の生命力を確認するために、最初は花を繁殖することから始めた。その作業は実に簡単で、花の枝を折って、鉢植えに挿すだけなのだ。これで本当に繁殖するのかと思ったが、ハーツ公爵はこれで繁殖するのだと言う。

ちなみに、この公爵夫婦にも、後でクリーンの魔法をかけておいたのは言うまでもない。友好の花は、フォーアル大公国から持ち出される際に、布で厳重に巻かれていて、繁殖の対応は十分になされていたが、取り敢えず、ということで魔法をかけておいた。シディーは特に何も言わなかった。

そして、その三日後に確認して見ると、確かに、花は鉢植えに根付いていた。数日もすれば、花は立派に育ち、友好の花を咲かせるのだという。そして、それは現実のものとなった。

あまりの見事さに俺は言葉を失ったが、メイとシディー、セルロイトは、別の意味で言葉を失っていた。実験のために、鉢植えを増やし、一旦挿し木をして、それを抜いた鉢植えにも、友好の花が咲いていたからだ。

「話には聞いていたけれど、実際に目の当たりにすると、背筋が寒くなるわね……」

シディーはそう言って、両手で自分の体を抱きしめていた。

ちなみに、花が咲くまでの間、保管している部屋は改造されて、使い勝手のよい部屋に改められていた。特に、何をしたというわけではない。隣の部屋も実験室にするために、壁をぶち抜いただけだ。あとは、必要な実験道具を運び込むくらいで、それは、俺の転移結界を使ったので、作業自体は短時間で済んだ。

ただ、この部屋はもともと、ローニが休憩室として使っていたところで、休む場所がなくなってしまったのには、少し悪いことをした。基本的にこの部屋には私物を持ち込むことは禁止されていたため、彼女のもの自体は少なかったのだが、それでも、突然自分の部屋を奪われたと聞いたときは、彼女は明らかに落ち込んだ姿を見せた。

だが、チワンの計らいで、彼女は宿直を免除されて、日勤となった。いつも家事万般を任せっきりにしている夫のドーキを少しでも手伝えと言われて、彼女はさらに落ち込んでいた。仕方がないので、しばらくは屋敷に夫婦で夕食を食べに来いと言って、ようやく機嫌を直したのだった。

花の危険性がわかった三人は、早速研究に入った。しかし、研究を始めたその翌日、フォーアル大公国から、思ってもみない人物がア

ガルタにやってきた。何と、テイスト大公自らが、アガルタにやってきたのだ。これにはさすがの俺も驚いた。

さらに驚くことに、この大公は、船でガルビーの港に着くと、自ら馬に乗ってこの都までやってきたのだ。通常、こうした国王クラスが訪問するとなれば、一旦、ガルビーで休息してから一日かけて都までやって来るものなのだが、この大公は、ガルビーに到着しても、自分の身分を明かさず、単にフォーアル大公国の使者であると名乗り、馬を飛ばしに飛ばして、半日もかけずに都に到着したのだ。そのため、彼が本人であることを確認するのに、少し手間取ってしまった。

この本人確認で役に立ったのが、大公の実弟であるハーツ公爵だ。彼は、大公が到着したと聞いて、即座にそれは偽報であると断じた。ただ、それでもと、兵士の懇願に渋々応じる形で席を立った公爵は、大公を目の前にして腰を抜かしてしまった。そんな彼を見て大公は、周囲が驚く呵々大笑をして、大喜びだったらしい。

本来ならば、色々な面倒臭い手順を踏んで対面となるところだが、大公はお忍びで来ていると言って、そうした格式ばった対面を断ってきた。それよりも、早く俺に会いたいということで、メイとシディー、そして、セルロイトを迎賓館に呼び、さらには帝都の屋敷からリコにも来てもらい、迎賓館の会議室で対面と相成った。

「突然、罷り越して申し訳なかった。フォーアル大公国の大公・フォーアル・ルイーズ・テイストである。お目にかかれて光栄でありますぞ」

俺を見るなり大公は、大股で俺の許に近づき、力強く手を握ってきた。何となく、リボーン大上王と同じ匂いのするオジサマだ。

彼はメイに丁寧にあいさつをし、大賢者・メイリアスに会えたことを心から喜んだ。そして、シディーの姿を見て、彼は驚きの一言を放った。

「アガルタ王におかれては、このような姫がおいでになったのか。もう、将来は決めておいでか？」

「え？　どういうことです？」

「可能ならば、こちらの姫を、我が息子、トリファに貰い受けたいが、どうであろうか？」

「いや、あのですね……」

大公にシディーが俺の妻であることを伝えると、彼は目を丸くして驚いていた。

「こっ……このような若い女子を妻に……か。アガルタ王も、隅に置けぬな」

「いや、彼女はドワーフでして……。ドワーフ族は、外見上はほとんど年齢を取りませんから……」

そう言って説明してみたが、大公はそれでも信じられないという表情を崩さなかった。実際、シディーの年齢は、大公とそう変わりはないのだが……。一方のシディーは、大テレにテレていたが、やはり嬉しそうで、顔を真っ赤にして喜んでいた。

「遅くなりましたわ」

遅れてリコが部屋に入ってきた。そのとき、大公の表情が一変した。口をあんぐりと開けて、呆然とリコを眺めている。いつもとは違って、少し小ぎれいな衣装に身を包んでいたのだが、それでも、彼女の美しさは、饒舌な大公を黙らせるのに十分だった。

リコのお蔭で、その場が落ち着いた。俺は皆に席に着くように促す。

「いや、突然、押しかけて申し訳がなかった。先日、貴国に我が弟ハーツが、友好の花を持ち込んだと思うが、状況はいかがであろうか」

「はい。メイリアスとコンシディー、そして、セルロイトさんの三人で、この花の繁殖を止める手立てを試しているところです。まだ実験を始めたばかりで……」

そのとき、大公が両手を上げて、俺の言葉を遮る。彼は何度も頷きながら、口を開く。

「その花の繁殖を止める手立ては、聞いてきたのだ」

「え？　聞いてきた、とは？」

「クリミアーナから使者が参ってな。ＬＶ５の火魔法で焼き切れば、花は消滅するとぬかしおったのだ」

「ＬＶ５の火魔法、ですか？」

「そうじゃ。ＬＶ５と言えば、世界中を探しても片手で数えるくらいの人数しか扱える者はおらんじゃろう。クリミアーナは、その魔

術師を抱えておるそうな。それで、花を消す代わりに、我が国との交易を求めてきおったのだ。じゃが、儂は、あの国を信用しておらん。おそらく、あの国の狙いは、我が国を属国とすることじゃ。儂は、そうはさせたくはない。そのために、儂自ら貴国に参り、協力を願いに上がった次第なのじゃ」

大公はそこまで言うと、スッと立ち上がり、ペコリと腰を折った。

「頼む。貴国であれば、ＬＶ５の火魔法を扱える魔術師の心当りがあるのではないか。で、あれば、その者にあの花を消してもらうように頼んではもらえまいか。無理な願いであること、食糧支援を受けておきながら、このような願いをするのは不躾であることは重々承知している。じゃが、儂は、フォーアル大公国を守りたいのじゃ。民を救いたいのじゃ。それに……あの、クリミアーナの連中に、一泡吹かせたいのじゃ。頼む……。あの花を消してくれれば、我が国は、貴国の属国となってもよいと思っておる」

「いや、お手をお上げください。別に、俺はフォーアル大公国を属国にしようとは考えていません。今まで通り、対等に付き合っていただければ十分です。お話はわかりました。一度、検討してみます。まずは、旅のお疲れもあるでしょうから、こちらでお休みください」

俺はセルロイトに視線を向けて、大公を連れて行くように促した。

彼らが退出するのを見届けて、俺はメイたちを連れて、友好の花が保管されている部屋に転移した。そして、栽培されている花を一つ選ぶと、それに結界を張り、その中で、火魔法ＬＶ５を発動させた。

花は一瞬で土と共に消え去った。だが、その直後、シディーが重々しく口を開いた。

「……まだ、残っている気がします。しばらく、結界を解除しないで待ちましょう」

……やっぱり、そんなに簡単に、コトは進まないよね。そんなことを考えながら、俺は大きなため息をついた。

第五百七十一話　来ちゃった（後書き）

『結界師への転生』コミック三巻の発売が、１０／２４に決定しました！　Ａｍａｚｏｎ等でただ今絶賛予約受付中！！

第五百七十二話　これから

友好の花を、火魔法ＬＶ５で焼き切ってからさらに三日が経った。結界の中には何の変化も見られなかった。やはり、クリミアーナの言った通り、強い火力で焼き切ってしまえば、この花は消滅するようだ。

この結果を見ても、シディーの表情は晴れなかった。彼女の胸の中には、未だ不安が解消されていないのだ。

その気持ちは俺にもよくわかる。友好の花を、こうした完全に隔離した状態の中であれば、火魔法で対応することは可能なのだが、大地に広がった友好の花を焼き切るのには、それこそ、とんでもない魔力を必要とする。まあ、俺ならばある程度の対応は可能だが、かといって、それも限界がある。今は、フォーアル大公国だけが被害を受けているが、これが世界中に広がるとなると、いくら俺でも対応はできないだろう。

それに、広範囲に広がった花を焼き切ったとしても、その土地に与えるダメージも相当なものになる。花は駆除したが、それ以降、その土地は作物が全く取れない荒れ地になりましたという結果にもなりかねない。さらには、駆除に失敗すると、そこにはまた、あの花が咲き乱れることになる……。そんなことを考えると、頭が痛くなってくる。

それにしても、ヴィエイユは上手いことを考えたと思う。ＬＶ５の火魔法を扱える魔術師を抱えているとはいえ、その範囲は限られているだろう。ということは、花が繁殖する速度に合わせて、駆除す

る範囲をコントロールできれば、その国は永遠にクリミアーナの属国にすることができる。奴らの意向に逆らえば、花は無限に繁殖して、国が滅んでしまうのだ。

あの賢い小娘のことだ。いきなりアガルタに手を出してくるとは思えないが、アガルタに味方する国を一つ一つ、あの花を使って属国化していけば、最終的にこのアガルタも呑み込めると考えているに違いない。

◆　◆　◆

「一体、ヴィエイユは何をやりたいのかね？」

その夜、子供たちが寝静まり、リコたちと屋敷のダイニングで今日の報告を聞いていたときに、俺は思わずそんな言葉を呟いた。

世界を制覇したいという野望を持っているのはわかる。しかし、もし、その野望が完遂された後、あの娘はこの世界をどうするのだろうか。その未来像が、俺には全く見えてこない。

「おそらく、二つありますわ」

口を開いたのは、リコだ。全員の視線が、彼女に向けられる。リコは、皆の顔を見廻しながら、さらに言葉を続ける。

「一つが、この世界の王になるということ。もう一つが、リノス、あなたですわ」

「俺？」

「きっと、あなたを超えたいと考えているのですわ」

「俺を屈服させられれば、世界制覇の夢は大きく近づくと考えているのかな」

「それもあるでしょうが……。どちらかと言えば、あのお方は、好きな殿方を屈服させることで喜びを感じるのでしょう」

「やっぱり、ドSだな、あの小娘」

「ドエス？」

「いや、こっちの話だ。じゃあ、俺があの小娘の前で這いつくばって許しを乞えば、あの娘は満足する……か」

「おそらく、は」

「まあ、それで世界が素晴らしい方向に向かうのであれば、いくらでも頭を下げるけれども……。いくら俺が這いつくばっても、いい方向に行くとは思えないな」

俺の言葉に、シディーが深く頷く。

「それをするなら、リコの前でやったほうがまだマシだ」

「……」

「ゴメンゴメン。リコは、そういうタイプの男子は、どちらかというと嫌いだよな。ちゃんと自分を持っていて、リコと対等に話ができる男でなければ、強い男じゃなければ恋愛の対象にはならないか

な」

「そんなことは、ありませんわ」

リコの顔に赤みが差している。その表情がとてもかわいい。

「とにかく」

リコがテレを隠すかのように、姿勢を正しながら言葉を続ける。俺も、彼女に倣って姿勢を正す。

「これも、私の推測の域を脱しませんが、ヴィエイユさんが世界を制覇しようとしている一番の要因は、あの方自身の身の安全を保障しようとしているところにあると思うのですわ」

「身の安全？」

「あのお方は、常に命を狙われてきましたわ。お身内の方が、同じ身内によって殺されるのを見てきたのです。誰も信用ができないその中で、自分の身の安全を保障するためには、ご自身が一番になるのが最も手っ取り早いと考えているのですわ」

「なるほどな。自分が天下を取ってしまえば、命を狙われなくて済む……。いや、でも、天下を取ったとしても、寝首を掻こうとする輩は消えないだろう。むしろ、今度はそれに怯えてしまって、行きつく先には最悪の暗黒政治になる可能性が高いと思うけれどな」

「そう信じるしか、それを信じないと、あのお方は前には進めないのでしょう……」

「そんなものかな。まあ、ともあれ、あの花については、一筋縄ではいかなさそうだ。明日、大公にはＬＶ５の火魔法で、あの花は駆除できたということは伝えよう。ただ、それを伝えたところで、フォーアル大公国が救えるわけではない。まあ、最悪の場合、俺があの国に赴いて駆除しようとは思うが、それよりも、魔法以外の方法で、あの花を駆除できる方法が見つけることが重要だ。メイ、シディー。大変なことは重々承知しているが……頼むな」

俺の言葉に、二人はゆっくりと頷いた。

「これは……私の直感ですけれども……。何とかなりそうな予感はしています」

「そうか。シディーがそう言うのなら、きっと、いい方法が見つかりそうだな」

「きっと、大丈夫です」

シディーのその声に、全員が頷いた。

◆　◆　◆

ちょうど同じ頃、アガルタの迎賓館の一室では、フォーアル大公国の大公テイストと、その弟であるハーツ公爵一家が、顔を揃えていた。

「儂は、近日中に帰国しようと思う。長く国を空けるわけにはいかんからな」

彼の言葉に、ハーツ公爵は深く頷く。

「ハーツ、そなたも一緒に帰国せよ」

「はっ、はっはい」

「セルロイト」

「はい……」

「頼むぞ」

「……」

「そなたの双肩に、フォーアル大公国を背負わせるのは酷であることは承知している。しかし、今はそなただけが頼りじゃ。頼むぞ」

セルロイトは、オドオドとしながら、頭を下げる。

「メルモ殿」

大公は、セルロイトの隣に控えている母親に視線を向ける。彼女は真っすぐな視線を大公に向けている。

「一つ、頼まれてくれぬか」

「大公様の仰せであれば、何なりと」

「ウム。誠に大変ではあるが……。ここ、アガルタに残り、セルロイトを助けてやってくれぬか」

「叔父様……」

セルロイトは思わず顔を上げて大公を見た。彼はチラリと彼女に視線を向けて、小さく頷いた。

「単に留学であれば、この国で一人で暮らすというのもよいと余は思っておった。しかし、これから先、セルロイトは世界最高の知識を持った者たちの許で働かねばならぬ。その負担は想像に難くない。すまぬがメルモ殿、この国に残り、セルロイトを助けてやってもらえぬか。そなたならば、セルロイトの肉体的、精神的な負担を和らげられるであろう」

「……承知しました」

「お母様……」

メルモは表情を一切変えることなく、娘のセルロイトに視線を向けた。そして、彼女の手を優しく握りながら、小さな声で話しかけた。

「頑張るのですよ、セルロイト。お母様が、ついています」

セルロイトの両目から、涙が溢れてきた。彼女は母の手を両手で握り締めながら、何度も何度も頷いた。

泣きながらセルロイトは、心の中で覚悟を決めていた。何としても、あの花を駆除して見せると。これまで、両親に心配しか掛けてこなかった自分だが、ここで、両親に孝行をするのだ、と。

セルロイトは、母の手を握るその手に、力を込めた。

第五百七十三話　結界石の効果

翌日、大公・テイストはリノスに謁見を申し出た。

「突然、お呼び立てして、申し訳なかった」

「いえ、お気になさらないでください。俺はいつでも大丈夫ですから」

「そう言っていただけると、助かる。いやなに、余は本日、帰国しようと思っておってな。その挨拶をしようと思ったのじゃ」

「そうですか……。何もおもてなしもできませず……」

「そのようなこと……」

大公は目をギュッと閉じながら首を振る。彼は大きく息を吐きだすと、真っすぐな視線をリノスに向ける。

「アガルタに来て、正解じゃった」

「……」

「まだ、あの花の打開策を見出していないのに、そのようなことを言われても、返事のしようがないことは、余もよくわかっているつもりじゃ。じゃが、貴殿は、何かやってくれそうな気がする。きっと、大丈夫じゃと思わせてくれる。そういった人物とはなかなか巡り合えるものではない。余が我が儘を言って国を出たのは、正解じ

やった」

大公は満足そうな笑みを浮かべながら頷く。その様子にリノスは、どう答えていいのかがわからず、何とも言えない表情を浮かべる。

「それに、セルロイトも……な」

「……」

「メイリアス殿、コンシディー殿……。貴殿の奥方も相当の人物じゃ。あの方々の許で学ぶことができるのじゃ。セルロイトの人生も開けていけよう。あれは本当に優しい娘じゃ。その優しさとひたむきな努力は、きっと、あれを幸せに導くじゃろう……」

そう言って大公は遠くを見つめる。リノスは、懐に手を伸ばすと、拳大の石を取り出した。

「大公様、どうぞ、これをお持ちください」

「これは？」

「結界石です」

「結界石？」

「ええ。この石の中にＬＶ５の火魔法が封じ込められています」

「なっ！？」

「結界の解除方法はゴンに伝えてありますが、くれぐれも取り扱い

には、注意してくださいね」

「……」

大公は信じられないといった表情でリノスを眺めている。ＬＶ５の火魔法といえば、小さな街を一瞬で灰燼に帰すほどの威力だ。そのようなものがこの石に封じ込められているというのは、信じられないことだった。そのとき、大公の頭の中に、以前聞いた話が思い出された。

「そう言えば聞いたことがある。アガルタの兵士は石を装備していると。そのために、兵士に攻撃が通りにくいのだと。と、いうことは、その石に……」

「そうです。兵士たちに持たせているのは、結界スキルを付与しています。……別に大したことではありません。この結界石はアガルタではお金さえ出せば簡単に手に入れられます。主に商人や冒険者たちが、魔物や盗賊に襲われたときのために持っているほどです。もっとも、ここで売っているのは、結界スキルを付与したものだけで、火魔法の効果を付与したものは売っていません」

「と……いうことは……」

「大公様のためだけに、作りました」

「……かっ、かたじけない」

大公は深々と頭を下げる。それに対してリノスは、両手を振って恐縮する。

「面を挙げてください、大公様。ＬＶ５の火魔法の効果を付与しているとはいえ、その威力は最小限に抑えてあります。効果を発揮するのはおそらく、数メートル四方でしょう。ですが、俺たちの方でも、ＬＶ５の火魔法であの花を焼き切ってみたのです。そのときはあの花は消滅しました。きっと、お国でも大丈夫だと思います。燃える範囲や程度をゴンに見てもらい、それから、あらためて火魔法の結界石を送りましょう。それで、解決に向かうと思います」

「ありがとう……。ありがとう……」

大公は再び、深々と頭を下げた。

その後、大公は用意された馬車には乗らず、早馬でアガルタの都を後にした。一刻も早く帰らねばならぬと言って、取るものも取り敢えず、手綱を握ったのだった。その彼には、弟であるハーツ公爵も従っていた。彼は兄に振り回されて迷惑をしている一方で、子供の頃以来となる兄弟での野駆に心が躍っているのか、その表情は穏やかで笑みさえ浮かんでいる有様だった。

「それでは」

大公は短い挨拶を済ませると、すぐさま馬を走らせた。その後ろを弟のハーツ公爵が、見事な手綱さばきで兄の後を追いかけていった。

「何とも……兄弟で馬の扱いが上手いな」

リノスは唖然とした表情で、大公兄弟が出て行った後を眺めていた。

◆

◆

◆

ゴンから連絡があったのは、それからわずか数日後のことだった。
大公は大急ぎで帰国すると、すぐさまゴンを呼び出して、結界石を使った。ファンタジック公爵家の屋敷の庭に咲き乱れた友好の花……。そこは布で厳重に密閉された状態に置かれていたこともあって、中は花の臭気で満たされていて、呼吸をすることさえ困難な状況だった。大公は専属の結界師全員を動員して屋敷に結界を張ると共に、大公自身にも結界を張らせた。しかし、それでも花の濃い臭気を完全に除去することはできず、彼は顔をしかめながらその場に立ち会った。

ＬＶ５の火魔法ということもあって、集められた結界師たちは悲壮な覚悟で結界を張り続けた。一歩間違えば自らも焼き尽くされる可能性がある。しかも、大公が臨席しているのだ。彼らは、これまでには感じたことのない程のプレッシャーと戦っていた。

そんな中、ゴンはリノスから贈られた結界石を発動させた。それは、一瞬火柱が上がったがすぐに収まり、周辺にあった花は全て消えていた。それを見た大公は、無言のままゆっくりと手を叩き続けたのだった。

大公は早速、リノスに対して報告と丁寧な礼を書き添えた書簡を送った。そして、すぐに結界石を追加で送ってほしいと要請したのだった。

◆◆◆

リノスは大公からの書簡を読んで、何度も頷いていた。これで、友好の花の対策はできた。あとは、燃え残しのないように、効率的に完全にあの花を焼き尽くすことができる結界を張らねばならない……。そんなことを考えながら、彼は執務室の机に置かれた鈴を鳴ら

す。

「お呼びでしょうか」

「ああ、すまないけれど、石を用意してもらいたいんだ」

「畏まりました。いつもの、アガルタ軍の本部に運べばよろしいでしょうか」

「うん、それでいい。拳大の石を二百個ほど用意してくれ」

「承知しました」

男が下がると、リノスはうーんと背伸びをして、肩に手を置きながら首を左右に振る。石に込める結界のイメージをさらに考えようとしたそのとき、突然、執務室の扉が開いた。

「ご主人！」

「おお、何だゴン。どうした？」

「大変でありますー」

「何があった？」

「友好の花が、増えているのでありますー」

「花が増えた。そうか……。この間大公に贈った結界石を二百個用意しようと思っていたんだけれど、もっと増やした方がいいか？」

「そういう問題ではないのでありますー」

「何？」

「とにかく、一度、見るのでありますー」

ゴンは懐から結界石を取り出した。これは……転移の効果を付与した結界石だ。彼はリノスの腕を掴むと、結界石を床に置いた。

「……ここは？　……うわっ！」

ものすごい臭気が鼻をつんざいた。目を開けることすらも困難だった。リノスは必死で周囲の結界を張り直す。

「……くっ。何だったんだ？　……って、あれ？」

彼の目の前には、友好の花が咲き乱れていた。そして、その頭上は、なにやら白い幕に覆われていた。

「ゴン、ここは？」

「フォーアル大公国のファンタジック公爵の屋敷の庭でありますー」

「え？　それって……確か、大公が書簡に書いてあった場所じゃなかったか？」

「大公からの書簡が届いたのでありますかー」

「ああ。俺が送った結界石を使ったら、見事に花が消えたとあった。それで、追加の結界石を送ってくれと書いてあった」

「そうでありますかー。しかし、その必要はなくなったでありますー」

「どういうことだ？」

「その結界石を使ったのが、この庭でありますー」

「え？　花……消えてないじゃないか」

「その通りでありますー」

ゴンはリノスから視線を外すと、大きなため息をついた。

「残念ながら、ご主人の結界石は、効果がなかったのでありますー」

彼の言葉に、リノスの目が見開かれた……。

第五百七十四話　立てこもり

「ご主人……」

ゴンが戸惑いの表情を浮かべながら、俺に視線を向けている。彼の顔をチラリと見て、取り敢えず、任せていろという意味を込めて頷く。そして、再び目の前の花たちに視線を戻す。

確かに、アガルタ医療研究所での実験では、花は完全に消え失せていた。あのときのイメージを思い出しながら俺は結界を張り、ＬＶ５の火魔法を発動させる。

……一瞬で花は消え去った。目の前には、真っ黒の地面だけが広がっている。

「同じでありますー」

ゴンの弱々しい声が聞こえる。俺が持たせた結界石を発動させたときと同じ様子であるらしい。そのときも、花は全て消え失せて、大公たちと大喜びをしたのだというのだ。

「何となく、ではありますが、また、数日経つと、あの花が……」

ゴンの言葉には真実味があった。俺はすぐさま決断する。

「メイとシディー。そして、セルロイトをここに呼ぼう」

「……」

ゴンは無言のままゆっくりと頭を下げた。俺はその様子を見ながら、転移結界を発動させた。

◆　◆　◆

「……」

数十分後、俺は三人の女性を伴って、再びこの場所に戻ってきた。彼女たちは、俺の話を聞いて驚いた表情を浮かべたが、すぐに冷静さを取り戻して、現場を見に行きましょうと答えた。メイとシディーの応対が全く同じで、少し驚いたくらいだ。対して、セルロイトは、一体何が何だかわからないといった表情を浮かべて、ただ、ポカンと俺を眺めていた。

現場に着いてまず、シディーが鋭い視線を花に向けて、小さな声で「邪悪……」と誰に言うともなく呟いた。その言葉にメイが反応する。彼女はゆっくりと膝をついて、目の前の土を丁寧に観察する。それを見たセルロイトが、メイと同じように土を観察する。シディーは真っ黒い地面に視線を向けたまま、忙しそうに両目を動かしている。

やがて、メイは掌に載せていた土をサラサラと地面に落とすと、パンパンと手をはたいた。彼女の両手から土煙がフワリと舞い上がる。

「こりゃ、何とも……じゃな」

突然、老人の声が聞こえる。よく見るとメイの足元に、彼女が契約している精霊のノームが現れていた。

「お呼びだてして、申し訳ありません」

「いやいや、メイちゃんの頼みじゃ。いつでも呼んでくれて構わん」

「ありがとうございます。この目の前に広がる土……どう思われますか？」

「どうもなにも、これは土ではない。火山灰じゃ。土の上に火山灰が積もっておるので、あんまりよいとは言えぬな」

「同感です」

メイとノームは何やら難しい話を始めてしまった。セルロイトはその二人の会話にじっと耳を傾けていて、時おりコクコクと頷いている。どうやら、この専門的な会話が理解できるようだ。

対して、シディーと言えば、腕組みをしながらまだ、黒い土に視線を泳がせている。

「なあ……」

「邪悪な気配しかしない」

俺の言葉を遮るようにして、シディーが突然口を開く。彼女はスッとゴンに視線を向けると、さらに言葉を続けた。

「ゴンさん。リノス様の結界石を使って花を消したのは、ここだけですか？」

「いや、もう一か所あるのでありますー」

「そこに案内してください」

「えっ？　いや、そこは……」

「何か問題でも？」

「はぁぁぁ……」

ゴンはさも困ったという表情を浮かべた。一体どうしたんだと訝る俺たちに、彼は一つだけ条件があると言って、再び俯いた。

「条件、って何だ？」

「我々全員に、結界を張ってほしいのでありますー」

「結界？　張っているだろう？」

「そうではなく、別人に見える結界を張ってほしいのでありますー。あの……かなり、人が、多いので……」

なるほど、それならば仕方がない。俺のことを知っている者もいないとは限らない。アガルタにいるはずの俺やメイ、セルロイトがこのフォーアル大公国にいるのがバレれば、色々と厄介なことになる可能性が高い。あ、そういえば、セルロイトに転移結界のことを秘匿するように言うのを忘れていた。あとで、メイから優しく説明してもらおう。

そんなことを考えながら、俺は全員に結界を張り直す。

「それでは」

結界を確認したゴンが、懐から転移結界の効果を付与した結界石を取り出して地面に置く。すぐに景色が変わる。その瞬間、俺は驚きの声を上げた。

「何じゃこりゃぁ！」

目の前には何百という武装した兵士たちが、俺たちに背を向けて立っていた。あまりにも予想外の光景に、思わず声が出てしまった。しかも、俺の声を聞いた途端、兵士たちがバッと振り返ってしまい、何とも気まずい雰囲気になってしまった。

「何だ、お前たちは。下がっていろ」

邪魔をするなと言わんばかりの表情を浮かべながら、兵士の一人が面倒くさそうに言葉を吐き捨てる。よく見ると、彼らの前には白亜の大きな屋敷が建っていた。

「……ご主人、ご主人」

ゴンが俺の服の裾を引っ張りながら、小さな声で呟く。彼は俺たちを少し離れた所に連れて行く。

「何なんだ、あれは？」

離れて見ると、布で覆われた、かなり大きな建物を兵士たちがビッシリととり囲んでいる。物々しさが半端ではない。

「ファンタジック様……」

突然、セルロイトが口を開いた。彼女は両手を口に当てたまま、呆然と屋敷を眺めている。

「その通りでありますー。あれは、フォーアル大公国のファンタジック公爵の屋敷でありますー。友好の花が咲いている、もう一つの場所でありますー」

「てゆうか、何で兵士たちに囲まれているんだ？」

「大公様が、あの屋敷を完全に閉鎖せよとお命じになったのでありますが、それを受け入れぬ者が、あの屋敷に立てこもったのでありますー」

「はあ？　何じゃそりゃ？　立てこもっているのは、誰だい？」

「公爵夫人でありますー」

「……」

ゴンの話によると、とりわけ、あの屋敷の庭に友好の花が咲き乱れているのだという。彼は、大公たちの立ち合いの許、リルレイン侍従長の屋敷の庭に咲いている友好の花を駆除し、その後で、あのファンタジック公爵の屋敷に向かった。その庭は広大で、しかも、至るところに友好の花が咲いていたのだという。リルレインの屋敷では、ひと塊で花は咲いていたために、一瞬で駆除できたのだが、この公爵家の庭では、ばらばらに花が咲いていたために、駆除するのに苦労したのだという。そのとき、大公の鶴の一声で、屋敷の庭を丸ごと焼き払うことになり、ゴンはそれを忠実に実行したのだそうだ。

一面に焦土と化した庭を見て、公爵夫人は呆然自失の状態になったそうだが、すぐに、真っ黒になった庭に、次々と草花を運び込ませて庭園の体裁を整えさせたのだという。屋敷には布が巻かれているので、太陽の光は遮断されているために、草花はそう長くはもたない。それでも夫人は、この屋敷を離れるようにと勧める夫の言葉にも耳を貸さず、何かに取りつかれたかのように、草花へのこだわりを捨てず、日々、せっせと庭の復旧にいそしんだ。だが、友好の花は再び咲いてしまった。当然、大公はこの屋敷の出入りを禁止したのだが、彼女は頑としてそれを受け入れなかった。業を煮やした大公は兵士を派遣して、強制排除に乗り出したというわけだ。

「こう言ってはなんだけれど、立てこもっているのは女性一人だろう？　すぐに排除できるんじゃないのか？」

「それが、そうもいかぬらしいのでありますー」

「どういうこと？」

「結界師が中にいるらしく、屋敷に入ることさえできぬそうでありますー」

「へ？」

よく見ると、確かにこの屋敷全体にＬＶ３の結界が張られている。確かに、これでは通常の人間では、この屋敷に入るのは難しいだろう。俺から言わせれば、まだまだムラのある結界だが、まあまあの結界だ。

「……取り敢えず、この結界、解除した方がいいよな？」

俺の言葉に、ゴンが戸惑いながら頷く。ふと見ると、メイもシディーもゆっくりと頷いている。

「仕方がないな」

そう言って、俺は屋敷に向かって歩き出した……。

第五百七十五話　すべて、予想通り

「ちょっと、ごめんなさい」

「何だ、貴様は！」

俺は手刀を切りながら兵士たちの間を縫うようにして進んでいった。取り押さえられるかと思ったが、兵士たちは俺に罵声を浴びせるのみで、掴みかかって来る者は一人もいなかった。

まるでモーゼのように、俺が進んでいくと人垣が割れていく。そして、屋敷の門が見えてきたそのとき、一人の男が腕を組みながら俺の前に立ちはだかった。

「……何者だ？」

「通りすがりの者です」

「その体から発する気配が尋常ではない。貴様、名前は何という？」

「ええと……あれですよ。それですよ。それが、下らんものでして……ええと、私の名は……ゴンベエ……」

「ゴンベエ？」

「ええ。ナナシノ・ゴンベエと申します」

「ナナシノ・ゴンベエ……聞かぬ名だな」

「ええ。それはもう、いつもカミさんに怒られてばかりいる、ケチな男ですから」

男は胡散臭そうな表情を浮かべながら、俺をまるで値踏みするように、ジロジロと眺め続けている。この俺のことを全く信用していないのだろう。左足を一歩後ろに引いている。これは、俺が少しでも変な動きをすればすぐに抜剣して、斬りかかろうとしていることを意味している。

俺にはわかる。この男は、このフォーアル大公国の軍勢の中でも、かなりの上位クラスに入る剣の使い手だ。鑑定スキルを発動していないので詳しいことはわからないが、マトカルと戦えば、勝てはしないまでも、かなり彼女を苦しめるだろう。

男の体から、ジワジワと殺気が漂ってくる。あまり、長居をしない方がよさそうだ。俺はスッと人差し指を天に向ける。

「はい、どうもすみません。お邪魔しました」

俺はくるりと背を向けて、メイたちのいる所に向けて歩を進める。

「待て」

振り返ると、先ほどの男が腰を落として、剣の柄に手をかけている。

「貴様、何をした」

「別に何も」

「嘘をつけ。貴様、何をしにここに来た」

「いえ、結界を……ね」

「結界？」

「この大きな建物全体に結界が張られていると聞いたのでね。どのようなものかを見に来たのですよ。しかし、どうやら結界は張られていないようです。いや、どんなものかを見たかったのですが、残念です」

男は驚きの表情を浮かべながら、振り返った。その瞬間、俺はメイたちの許に向かって、小走りに歩き出していた。

やがて兵士たちが屋敷に向かって突撃を開始していった。俺はメイたちを促して、その場を離れた。

◆◆◆

「……完全に、消えています」

ファンタジック公爵の屋敷を離れてすぐ、俺たちはメイの提案でアガルタ大学に転移していた。言うまでもなく、俺が結界内で消滅させた友好の花の様子を見るためだ。

メイは結界を解除させると、懐から細長い紙を取り出して、ゆっくりとそれを振った。全員が息を呑んで彼女の動きに注目していた。しばらくすると、メイはじっとその細長い紙を見つめていたが、やがて、俺たちを見廻しながら、友好の花は完全に消えていると言ったのだ。

「この紙は、友好の花に内包されているクニアンに反応します。友好の花が少しでも残っていると、この紙は紫色に変わります。ですが、この部屋では反応しません」

そう言って彼女は懐から、紫色に染まった細長い紙を取り出す。これは、リルレイン侍従長の屋敷で採取したときのものだそうだ。

「しかしメイ、時間が経てば花が生えてくるということは……」

「ありません」

「本当に？」

メイが自信をもって頷いている。その隣で、シディーも大きく頷いている。この二人が言い切るのだ。間違いはないのだろう。

「でも、ここでの駆除は上手くいったのに、どうしてフォーアルのそれは駆除できなかったんだ？」

「それは……全力で調査せねばなりません」

「私が感じた、イヤな予感は、これだったのね……」

メイは目を爛々と輝かせながら口を開いている。この花の秘密は、彼女の知的好奇心を強く刺激しているようだ。対して、シディーは己の感性の鋭さに納得したかのように何度も頷いている。

「とはいえ、このままじゃヤバイだろう。フォーアルに咲いているあの花を何とかしないと、な」

「そうですね……。できれば、現地で研究するのが一番なのですけれど……」

メイの言葉を受けて俺は、スッとゴンに視線を向ける。

「このことは、大公様の耳には入っているはずでありますが、直接お目にかかっていないので、どのような感情をお持ちなのかは、わかりかねるであります！」

「まあ、いい感情でないのは確かだな」

「アガルタは信用できぬ、と言われて、我々の出入りを禁止される可能性は高いであります！」

「そ、そんなことは、あっ、ありま……せん」

口を開いたのはセルロイトだ。彼女は両手を胸の前で組み、まるで神に祈るようなポーズのまま、さらに言葉を続ける。

「おっ、叔父様は……。大公様は……あっ、アガルタのことを、信頼……して、おいでです」

彼女の眼は、嘘をついているようには見えなかった。その真っすぐな瞳は、俺を黙らせるのに十分だった。

◆◆◆

「……謝ってしまえば、いいのですわ」

誰に言うともなく呟いているのは、リコだった。彼女は、息子のイデアを子供用のベッドに寝かしつけ、いつものようにその頬にキスをしてから、俺のベッドに入ってきた。

あの後、すぐに結論を出せなかった俺は、少し考えさせてくれと言って、一旦屋敷に戻った。それから色々と、フォーアル大公国の友好の花をどうするべきかについて考えていた。一旦、親書を送って段階を踏むべきか、それとも、ゴンやメイたちに別人に見える結界を張って、すぐさまその駆除に取り掛かるのか……。どんな手を打てば、最も効果的に駆除できるのかを考えていたのだ。

だが、リコはまず、謝るべきだと主張した。それは、俺も考えていたが、俺が頭を下げてしまうことの影響を考えると、なかなかそれを実行する勇気は持てなかったのだ。しかし、リコはそんな俺の心中を完全に見抜いていた。

「あなたが頭を下げたところで、大きな影響はないと思いますわ」

「……そうか？」

「むしろ、大公様の面子も立ち、リノス、あなたの評価も上がると思いますわ」

「そんなものかな」

「考えてみるといいのですわ。アガルタの国内での実験は、確かに成功しているのでしょう？　で、あるにもかかわらず、フォーアル大公国では駆除できていない……。で、あれば、フォーアル大公国で駆除実験を行うべきなのですわ。それは、取りも直さず、アガルタのそれと、フォーアルのそれとは別物と考えるべきですわ。それ

がわかっただけでも、解決に向けて一歩前進しているのです。フォーアルの大公様は、セルロイトさんが言うように、そんなことで怒るような方とは思いませんわ。むしろ、リノスが頭を下げることで、さらに信頼してくれると思いますわ」

「……わかったよリコ。明日、早速、フォーアルに行ってくると」

「メイとシディーも連れて行くといいのですわ。あと、セルロイトさんも」

「ゴンはいいのか？」

「当然、ゴンも連れて行くのですわ」

リコは優しく微笑む。何とも癒される表情だ。本当に、この女性と結婚してよかったと心から思える瞬間だった。

俺は優しくリコの体を抱きしめた。

翌日、早速俺はテイスト大公の許に向かった。突然、アガルタ王が来たということで、大公宮殿は上を下への大騒ぎになったが、何とか大公に面会することができた。

俺はフォーアルの友好の花が駆除できなかったことを詫び、メイたちを派遣して、この国で花の駆除に当たりたいと大公に願い出た。……彼は涙を流しながら俺の手を握り、よろしくお願いすると言って、涙を拭った。

全ては、リコの予想した通りになった。そして、俺たちは、フォーアル大公国で、友好の花の駆除に乗り出したのだった……。

第五百七十五話　すべて、予想通り（後書き）

コミック結界師への転生③が１０／２４に発売されます。それに伴い、発売記念フェアが開催されます。

ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｇｅｎｔｏｓｈａ－ｃｏｍｉｃｓ．ｎｅｔ／ｎｅｗｓ／２０２０／１０／２０１０１６０４．ｈｔｍｌ

是非、チェック下さいませ！

第五百七十六話　ヒント

薄暗いファンタジック公爵の屋敷の庭……そこには一面に友好の花が咲き乱れていた。一見すると実に美しい光景だが、そこには、常人では耐えられない程の濃厚な臭気が立ち込めている。

そんな中、庭の一角には一筋の光が見えていた。そのすぐ傍では、一人の女性が蹲っている。決して花の臭気で倒れていたわけではない。ただじっと、花を観察していたのだ。

その女性は、セルロイトだった。彼女は転移結界を使って、アガルタからこのフォーアル大公国まで移動してきていたのだった。

彼女の手元には、少し大きめに作られたランプと、一輪の友好の花が咲いている鉢植えが置かれていた。これは、アガルタから持ってきたものだ。クリミアーナ教国から贈られた本株からわけられた花……。教国からの使者が言ったように、ＬＶ５の火魔法で駆除できるはずだった花だ。だが、このフォーアル大公国で咲き誇る友好の花は、駆除できなかった。その原因を突き止めるべく、セルロイトは故国に赴いていた。

彼女は鉢植えの花と、目の前に咲き誇る花を入念に比較して、観察し続けていた。だが、何を、どこをどう見ても同じ花だ。確かに、葉の形や茎の太さなど、細かい点で違っている点はある。だが、基本的な花の形状においては、今、彼女が持つ花と目の前の花は同じものであると断じざるを得なかった。

彼女はゆっくりと天を仰ぐ。視線の先には、白い布が何重にも重な

っていた。この花の臭気は元より、種や花粉の飛散防止のために、さらに布を厚く巻きつけられたこの屋敷は、太陽の光を遮断して、まだ昼間であるにもかかわらず、夕暮れのような暗さとなっていた。

「もう一度、考え直そう」

セルロイトは誰に言うともなく呟く。そして、彼女は懐から転移の効果を付与された結界石を取り出し、それを発動させた。

◆　◆　◆

「そうですか……」

セルロイトからの報告を聞いたメイリアスは、優しげな笑みを浮かべながら、労う。本来はこのメイリアスとコンシディー、ゴンらと共にファンタジック公爵家の庭に赴くところだったのを、セルロイトが何としても一人で行かせてほしいと我が儘を言ったのだ。そんな彼女の意思をメイリアスは尊重してくれ、夫であるアガルタ王に頼んで、転移結界の結界石を持たせてくれただけでなく、屋敷中に蔓延する悪臭などの対策を付与した結界も張ってくれたのだ。

セルロイトには、直感的に、あの屋敷の花が、友好の花とは別物であるという考えが閃いていた。きっと、丁寧に観察すれば、その違いが判るはずだ。そう考えていた自分の甘さが露呈した形となっていた。事は一刻を争う中で、時間を無駄にしてしまった……。何度も謝る彼女にメイリアスはあくまでも冷静に、優しい言葉を投げかけ続けた。

「見ただけではわからないというのが実証されただけでも進歩です。セルロイトさんが半日かけて観察した結果です。とても価値のある

報告です」

セルロイトは、メイリアスの優しさに感謝していたが、その感情を上手く表現する言葉が見当たらずに、ただただ頭を下げ続けることしかできなかった。

失意のまま、彼女は部屋に戻る。そこには、母が夕食を用意して待っていてくれた。母は、今日はどんなことがあったのか、などとは聞かずに、淡々と食事を済ませ、風呂に入って寝るようにと勧めた。きっと母は、今日あったことなどお見通しなのだろう。しかし、それでも、知っていて敢えて知らないふりをしてくれたことに、セルロイトは深く感謝した。

翌日、セルロイトはアガルタ大学の農場に向かった。そこでは、ヤンノーリが黙々と農場の手入れをしていた。

眼前に広がる真っ黒な土……。これは土に十分な栄養が行き渡っていることを示している。この土に種を撒けば、大抵の作物は順調に生育するはずだった。

「やあ、いらっしゃい」

セルロイトの姿を見つけたヤンノーリは、そう言って白い歯を出して笑みを浮かべた。彼は布で手を拭きながら、ゆっくりと彼女の許にやってきた。

「メイリアス様から聞きました。友好の花の駆除方法を研究なさるとか」

彼の言葉に、セルロイトはオドオドとした様子で頷く。

「私も微力ながらお手伝いさせてください」

ヤンノーリの言葉に、セルロイトはどう答えていいのかがわからなかった。単なる社交辞令であるとは思うが、彼の澄んだ瞳は、それだけではないと思わせる何かがあった。とはいえ、自分に彼を研究に加えるなどと言う権限があるわけもなく、応とも言えず、否とも言えず、セルロイトはただ、俯くことしかできなかった。

そんな彼女に笑顔を向けていたヤンノーリは、くるりと踵を返して、畑に向かって歩いて行った。そして、畑から何かを掬い上げると、それをそのままセルロイトの許に持ってきた。

「フォーアル大公国は、火山灰の影響で、農地が荒廃していると聞きます。聞けば、あの国で友好の花は爆発的に増えているのだとか……。もしかしたら、痩せてしまった土地が関係しているのかもしれませんね。生き物は種の保存が脅かされたときに、爆発的に種を増やそうとしますから……。このアガルタのように、養分をたっぷり含んだ土だったら、もしかしたらあの花も、そんなことにはならなかったのかもしれませんね」

ヤンノーリは、そこまで言うと、ゆっくりと首を振る。

「いや、これは失礼しました。何も知らない私ごときが、勝手なことを言いました。お許しください」

彼は手に持っていた土を地面に落とすと、パンパンと手を叩いて土を払い落とし、スッと一礼して、踵を返した。

「土が違う」

「えっ？」

突然呟いたセルロイトに、ヤンノーリが驚いた表情を浮かべながら振り返る。

「確かに……確かに……ここと……ファンタジック……公爵様のお庭の土は……違う。それかも、それかも、それかもしれません」

セルロイトは無意識にヤンノーリの手を握っていた。

「あっ、あっ、あっ、ありがとう、ございます」

そう言って彼女は急いでその場を後にしていった。その彼女の後姿を、ヤンノーリは姿が消えるまでじっと見送り続けた。

◆◆◆

「土……」

セルロイトはすぐにメイリアスの許に取って返し、ファンタジック公爵家の庭の土を調べたいと申し出た。その言葉を聞いた彼女は、宙に視線を泳がせた。

「メイちゃん」

不意に扉がノックされて、一人の少女が入室してきた。これは、アガルタ王リノスの妻の一人である、コンシディーだった。彼女はセルロイトの顔を見ると、この間はお疲れさまと言って、笑顔を見せた。その表情はセルロイトの心を少し癒した。

「どうしたの？　何か閃いた？」

メイリアスの様子を見るなり、コンシディーはそんな言葉を口にした。彼女は知っていた。メイリアスが宙に視線を泳がせているときは、何かを思いついたときであることを。己が立てた仮説を頭の中で検証しているのだ。

「シディーちゃん。フォーアルの土……何かあると思います」

「土！？」

コンシディーは一瞬、驚いた表情を浮かべたが、すぐに真面目な表情に変わり、人差し指を顎の下に当てて何かを考え始めた。

「メイちゃん……。確かに、あの国は大量の火山灰が降り積もっているわよね。アガルタとの一番の違いは、そこだわ。……うん、土に何かあるかもしれないわ。調べてみましょう」

コンシディーの言葉に、メイリアスは大きく頷く。

「では、早速、今からフォーアルに向かいましょう」

「いっ、いっ、今から、ですか？」

突然の話に、セルロイトは思わず声を上げる。だが、二人の妃は目を輝かせながら力強く頷いた。その様子を見て、セルロイトも、何かの覚悟を決めたように力強く頷いた。その彼女の脳裏には、優しい笑みを浮かべる、ヤンノーリの顔が浮かんでいた……。

第五百七十七話　笑顔

色とりどりの果実が実をつけていた。どれも見事な出来栄えだ。セルロイトは心の底から満足していた。自分の思い通りに作物が育ち、実を付けてくれたからだ。

彼女は愛おしそうに果実を撫でる。これはルーフという極めて希少な果実だ。甘味と酸味がバランスよく口の中に広がり、さわやかな口当たりが特徴だ。美味しさもさることながら、これには滋養分が豊富に含まれていて、その昔は万病に効く薬とまで言われていたものだ。それが、彼女の目の前に所狭しとなっている。これらは、アガルタとフォーアルの市場に並ぶのだ。きっと、皆が健康になるに違いない。

セルロイトはポケットから小さなナイフを取り出して、それをルーフの茎に当てる。すぐにその実が掌の上に落ちてきた。彼女はそれを腰に取りつけている籠の中に入れる。すぐに籠はいっぱいになったが、果実はまだまだ収穫されるのを待っている。

「手伝おう」

不意に彼女の隣に人影が見えた。よく見るとそれは、ヤンノーリだった。彼は満面の笑みを浮かべながら、ルーフの実を収穫していく。その様子を見て、セルロイトは、何とも言えぬ幸福感で満たされていた。そうだ、一緒に苦労してこの果実を育てたのだ。色々と大変なことや上手くいかないことも多かったが、この人と一緒にいられて、本当に幸せだ……。

そのとき、フッとセルロイトは目を覚ました。

……夢？

ぼんやりとした頭で、彼女は周囲を確認する。そうだ、ここは、自分の部屋だ。確か、お母様がいたはずだ……。そんなことを考えながら眼だけを動かして母を探すが、その姿は見えない。

何とも言えない倦怠感が全身を包んでいた。そうだ、昨日の夕方、コンシディー様に、すぐに帰って休むように言われて、半ば強制的に部屋に帰されたのだ。それで、部屋に帰って、お母様と少し話をして……そのまま寝たのだ。それから……そうだ、翌日の朝、出勤しようとしたら、体が動かなかったのだ。確か、熱があると言っていた……。

徐々に記憶が戻っていく。セルロイトはこの数日間、ほぼ不眠不休で働き続けていた。今、彼女が高熱を出して動けなくなったのは、それが原因であることは明らかだった。

メイとシディー、そして、セルロイトは、フォーアル大公国で採取した友好の花と土を持ち帰り、それをアガルタで培養してみた。花はすぐに増えた。それらをリノスの火魔法で焼き切ってもらい、しばらく様子を見てみた。すると、アガルタの土を用いて培養した花は芽を出さなかったが、フォーアルの土で培養した花は芽を出した。これにより、火山灰が混ざった土においては、友好の花は生命力をさらに強くすることが明らかになった。

メイたちは早速、この花の駆除方法について研究を始めた。セルロイトは夢中になって、その打開策を見出そうと研究に没頭したのだった。

対策がないではなかった。リノスが地中深くまでＬＶ５の火魔法を放てば、この花は消滅することが、メイたちの調査で明らかになっていた。だがそれは諸刃の剣だった。花が消滅すると同時に、その土も死んでしまうのだ。

それは不思議な光景だった。リノスが火魔法を土に向けて放つと、そこは粘土のような土になった。固く、粘り気のある土……。それは作物が育つ環境でないことは、一目瞭然だった。それに、リノスの火魔法をもってしても、一度に駆除できる範囲は狭く、本気で駆除するためには、何度となくそれを行う必要があった。そのため、結論としては、最悪の場合にはリノスの魔法を使うが、まずは、花を駆除する方法を見出そうということになったのだった。

ちなみに、当のリノスは、研究熱心なメイとシディーに付き合わされて、何度も土中に火魔法を打ちこむ作業を強いられた。一旦魔法を放ってしまうと、メイとシディーはその結果を確認する作業に没頭してしまうため、リノスは一人取り残される形となった。そのため彼は完全にスネてしまい、屋敷に帰っても一言も口を利かずに部屋に閉じこもるという状態になった。ただ、それを察したリコが一計を案じ、彼を優しく労わると同時に、メイとシディーが涙目で謝ると、すぐに機嫌を直したのだった。

そんな状況下の中、セルロイトは花を駆除するために様々な実験を行った。朝早くから夜遅くまで、まさしく寝食を忘れての実験……。そんな彼女に母は何も言わず見守り続けていた。部屋に帰れば、必ず温かい食事を用意してくれていた。そして、朝も体にいいものを選んだ食事が食卓に並べてくれていた。

そんな母に心の中では感謝しつつ、研究をつづけたセルロイトだが、

体は確実に疲弊していった。そんな彼女をシディーは一目見て、これは危ないと断じた。鉢植えに植えられた友好の花に、セルロイトは色々な薬剤を注入していた。その中にはかなり毒性の強いものまであった。毒には毒を持って立ち向かおうとする姿勢がそこにはあった。そんな彼女の手はかすかにふるえていたが、その手を小さな手が力強く握った。

「……！」

「ちょっと、止めようか」

「あ……」

突然のことで言葉が出てこないセルロイトに、コンシディーは真剣な眼差しを向けていた。目元がトロンとしている。顔全体も腫れぼったい。シディーは瞬時に過労からくる発熱であると見抜いた。

「今日はもう、帰って休もう」

「でっ……でも……」

「大丈夫。てゆうか、私の直感だけれど、今の状態でこの実験を続けても結果は出ないと思うな。帰ってゆっくり休んだ方が、いいアイデアが出ると思う。騙されたと思って、今日は一旦帰ろう」

コンシディーの瞳には確固たる信念が見て取れた。セルロイトはその迫力に飲まれる形で、すごすごとその場を後にしたのだった。

いいアイデアどころか、体が動かないではないか。こんな状態では、アイデアも何もあったものではない。そんなことを考えながら、セ

ルロイトはぼんやりと天を仰ぐ。そのとき、人の気配を感じた。彼女は直感的にそれがヤンノーリだと思った。

「大丈夫？」

顔をのぞかせたのは、母だった。驚きのあまり眼を見開く彼女をじっと見つめながら、母は優しく手を額に載せた。冷たい手が、何とも心地いい。

「まだ熱があるみたいね。いきなり慣れないことをするから、こんなことになるのです。今日はゆっくりと寝ていなさい」

そう言って母は、彼女の額に濡れたタオルを置いた。

「ああ、そうそう。先ほど、アガルタから使者が来たのよ。あなたが体調を崩したと聞いて、差し入れを持って来てくれました。少しでいいから、食べなさい」

母はそう言って、セルロイトの口元に赤く色づいた食べ物を差し出した。それは、シーングの実だった。ほのかな甘い香りが鼻をくすぐる。セルロイトはゆっくりと口を開ける。

冷たい果実が口の中に放り込まれた。噛みしめると、上品な甘さが口の中いっぱいに広がる。これは、ヤンノーリが研究していた作物だ。甘味が足りないと言っていたが、どうやら研究は成功しつつあるようだ。きっと、ヤンノーリがこれを使者に持たせたのだろう。

「これは、とても滋養分があると聞いています。まだ、食べられる？」

母の問いかけに、彼女はゆっくりと頷く。心なしか、体の気だるさが少し軽くなったような気がしていた。

結局、セルロイトは、母が用意してくれたすべてのシーングの実を平らげた。久々に味わう満足感と共に、彼女は再び深い眠りに落ちた。体調が戻ったら、ヤンノーリさんにお礼に行かねば……。眠りに落ちる直前、彼女はそんなことを考えていた。その脳裏には、やはり太陽のような笑顔を見せる、彼の姿が描かれていた……。

第五百七十七話　笑顔（後書き）

コミック版、『結界師への転生③』が発売中です！　とらのあな様もしくは、電子書籍を購入いただきますと、オリジナルポストカードが付いてきます。特典をご希望の方はお早めに。それに合わせて、『結界師への転生①』も現在割引中です。これを機会に、是非、チェック下さい！

第五百七十八話　心の内

セルロイトの熱は、翌日には下がっていた。彼女はゆっくりと体を起こし、大きく息を吐き出す。相変わらずけだるさは残っているが、動けないことはない。そんなことを考えながらベッドから降りる。

……まるで、宙に浮いているかのような感覚を覚えた。フワフワと、体が軽い。

きっと、熱のせいだ。そう言えば、一昨日からほとんど食事を摂っていない。そのために、体重が減ったのだろう。そんなことを考えながら、一歩一歩、ゆっくりと歩みを進める。

「大丈夫？」

部屋の扉を開けると、母がいた。テーブルの上には、フルーツを中心とした食事が用意されていた。母はまるで、自分が起きてここに来るのをあらかじめ知っていたのだろうか。思わずそう考えてしまう程、母は万端に準備を整えていた。

椅子に座り、用意された食事を口に運ぶ。甘い果実たちがとても美味しく感じる。みずみずしい果汁が体の中を駆け巡るような感覚を覚える。

「ごちそう、さま」

久しぶりに美味しいと感じた食事だった。無言のまま皿を下げ、背中を向けている母に心から感謝を込める。

「湯浴みをしていらっしゃい」

背中を向けたまま、チラリとセルロイトに視線を向けた母は、そう言って再び背中を向けた。

命じられるままに、浴室に向かう。彼女にあてがわれた部屋には、キッチンはもちろん、風呂とトイレ、そしてバスルームが完備していた。当然そこは、一介の留学生が使用を許される部屋ではなく、本来は大学の教授たちのために建設された建物の一室だった。そこには、フォーアル大公国の公爵令嬢にして、大公の姪という身分が影響していることは明らかだった。そうしたことを十分に承知しているセルロイトは、学長であるメイリアスやアガルタ王リノスに感謝しつつ、何としてもその優しさに報いたいという思いを強くしていた。

セルロイトは浴室に入ると、ゆっくりと服を脱ぎ、一糸まとわぬ裸になった。彼女の目の前には大きな浴槽が設えられてあり、そこには少し熱めの湯が湛えられていた。これも母が準備してくれたのだ……。そう考えると、セルロイトの胸は熱くなった。

軽く湯浴みをしてから、彼女は浴槽に体を漬けた。温かい湯が全身を包む。何とも言えない心地よさだ。目を閉じて、ぼんやりとその感覚に浸る。セルロイトの頭脳がゆっくりと動き出す。

フォーアル大公国から持ち帰った友好の花には、種々の毒物を注入してみた。当然、枯れた花もあるが、それらはきっと復活することだろう。あの花の根を、文字通り根絶やしにしなければ、あの花は枯れることがない。ＬＶ５の火魔法というのは、土中にある根を完全に焼き切るのに、もっとも効率が良いからだ。

どうにかして、あの花の根を消滅させる方法はないものだろうか。

そこまで考えたところで、彼女は思考を停止させる。何となくだが、友好の花が繁殖し続ける原因を掴むことができた。あとはそれをどう解決させるかだ……。セルロイトの心が、少しワクワクしてきていた。彼女は、実家での家庭菜園の経験を通して、問題の原因を突き止め、それを解決させることの面白さを知っていた。それが、このアガルタという国で、故国を救うことにもつながる仕事になるかもしれないのだ。セルロイトは、生まれて初めて、自分がこの世に生を受けた意味を見出そうとしていた。

「よしっ」

誰に言うともなく呟いた彼女は立ち上がり、あらかじめ用意されていたタオルを手に取り、体を丹念に拭いていく。ふとそのとき、鏡に映る自分の姿が目に入った。

相変わらず、貧相な体をしていると思う。ガリガリに痩せこけた体……。胸にはあばら骨が浮き出している。女性らしい乳房もほとんどない。体だけを見れば、痩せた男性と見まごう者もいるだろう。ただ、股間に生えた濃い陰毛に男性としてあるべきものがないために、女性の体をなしているに過ぎない。

これまでは、自分の体が嫌で仕方がなかった。その体を唯一褒めてくれたのは、マタカだった。この世でただ一人、自分を愛してくれる存在だと思い込んでいた彼だが、もう二度と会うことはないだろう。その事実を認識した当初は、もう誰も自分を愛してはくれないのだと悲嘆にくれたが、今はもう、それはどうでもいいことだった。彼女は新しい目標を見つけていた。何としても、クリミアーナから

の干渉を退けるのだ。あの花を、根絶するのだ。セルロイトの心に、炎が灯り始めていた。

その彼女の変化は、母親も敏感に感じていた。これまでは風呂に入ると、必ず娘は涙を流していた。必死で声を殺して泣いていたが、時おり漏れる嗚咽は、隠しても隠しきれなかった。その鳴き声が、ここアガルタに来てからは聞かれなくなった。母はすでに娘の心が回復したことを知っていた。そして、フォーアル大公国にいた頃とは、別人のように成長したことを感じていた。

これまで引っ込み思案だった娘が、自分の力で人生を歩もうとしているのが、母は嬉しかった。顔には出さずとも、愛する娘の未来を、全力で応援しようと心に決めていた。きっと娘は、浴室から出てくると、今日は大学に向かうというだろう。何も言わずに、いかせてやるつもりだ。ただ、体力は完全に回復しているとは思えない。せめて、甘みのあるものを持たせて、体力が低下しないようにしてやらねば。母親は、傍にある果物用のナイフを手に取った。

◆◆◆

同じ頃、帝都の屋敷では、メイとシディーが眉間に皺を寄せながら向かい合っていた。

「やっぱり、ダメですか……」

「うん。全部を確認したわけじゃないけれど、直感的に、上手くいかないって感じるの。ただ、あくまで私の直感的なものだから、最終的には目で見て確認しなければならないけれど」

「いえ、シディーちゃんがそう言うのであれば、おそらく実験は失

敗です」

「うう～ん。土を調べてみたんだけれど、火山灰の入った土に関しては、かなり深いところまで根が伸びているわ。焼き切るにしろ、溶かすにしろ、相当深いところまでやらないと根絶は難しいわね」

「そう、ですか……」

メイの視線が珍しく左斜め下を向いている。これは、彼女が打開策を考えつかないときに見せる仕草だ。いつもは即断で決断してく彼女にとって、この姿を見せるのは、数年ぶりのことだった。きっと、いくつかの方策は頭の中にあるのだろう。だが、それが果たして成功するかどうかの確証がないのだ。いや、おそらく失敗するだろうと考えているのだ。そんなものを果たして実行するべきかどうかを迷っているのだ。しかし一方でこれは、フォーアル大公国、ひいては世界の危機を表していた。この問題が解決できなければ、世界はクリミアーナ教国の膝下に置かれる可能性が大きく高まるのだ。

だが、シディーは意外にも不安を感じてはいなかった。最初から直感的に感じていた、この問題は解決に導かれるだろうという気配は全く変わっていなかったからだ。むしろ、解決までの距離は近い。あと一つ、何らかの事柄がわかれば、この問題は解決するだろうとさえ思っていた。ただ、その足りないもう一つの事柄が何であるのか……。シディーの心の中は、何とも言えぬもどかしさで満たされていた。

「そういえば、セルロイトさんの様子は……」

メイから不意に質問が飛んできた。聡明なこの人をして、まだ判断がつきかねているのだ。そこで、一旦話題を変えて、もう一度この

問題を考えようとしているのだ。シディーにはメイの心の動きが、手に取るようにわかった。

「昨日は結構な熱が出ていたけれど、今日は出てくるんじゃないかな」

「そうですか。それでは、セルロイトさんのご意見も聞いたうえで、今後の対策を立てましょうか」

メイのその言葉に、シディーはゆっくりと頷いた。

第五百七十八話　心の内（後書き）

結界師への転生コミカライズ最新話が公開されています（ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ？ｃａｔｅｇｏｒｙ＝１４）。是非、チェック下さい！　次話あたり、「みんな大好き僕らのメイちゃん」が登場でしょうか（笑）。　また、コミック三巻が絶賛発売中です。こちらも、是非、チェック下さい！

第五百七十九話　お礼

「行ってまいります」

ドアの前で、深々と腰を折って母に挨拶をする。アガルタに来てから、母には感謝しかなかった。だが、面と向かってお礼を言うのは気が引けるために、せめて、母が幼い頃から口を酸っぱくして言ってきた事柄をきちんとこなすことで、セルロイトは彼女なりに感謝を示そうとしていた。

母は、何も言わず、スッと頭を下げただけで、淡々とセルロイトを見送った。一見すると娘には関心がなさそうだが、そうではないことは彼女自身が一番よくわかっていた。こうして、自分のことを無言で見守ってくれる母の気持ちが、ありがたかった。

部屋を出て、廊下を進む。まだフワフワとした感覚は残っているが、研究を進めたいという思いが強い。まずは、メイリアス様とコンシディー様と打ち合わせをしなければ。彼女は二人に報告するための内容を頭の中で反芻し始める。

階段を降り、地下に向かう。地下の一室に、友好の花が保存されている部屋に行くための転移結界が張られているのだ。これは秘密とされていて、部屋の結界について知っているのは、アガルタ王リノスと王妃のメイリアス、コンシディー、そして、セルロイトの四人だけだった。

結界スキルに転移の効果があるということは、書物を読んで知っていたが、まさか、本当に習得している人間がいるとは思ってもみな

かった。セルロイトの感覚では、転移結界は結界スキルを極めた老人のようなものが使うというものだったが、実際には、自分とそう年齢の変わらない若い優男であるアガルタ王が、こともなげに転移結界を張ってみせたのだ。そのスキルを目の当たりにした瞬間、セルロイトは直感的にこの国とこの王は敵に回してはならないと悟った。きっと、この王は世界を滅ぼすことができる能力を持っている。そう考えると同時に、安心感を覚えるという不思議な感覚に囚われた。見るからに優しそうな王の表情は、恐怖ではなく、むしろ、これからの未来に対して期待感さえ感じさせたのだった。

そのアガルタ王は、セルロイトにただ一言、この転移結界は秘密にしてくださいねと言った。その表情には疑いというものを微塵も感じさせなかった。その証拠に、彼は、あなたなら大丈夫だと言って笑みを浮かべたのだ。もとよりそんなことは言うつもりはなかったし、言えば色々と難しい問題が発生するだろうことは容易に想像できていた。そんな中でのアガルタ王の発言は、これだけのスキルを持つ王から信頼されているのだとセルロイトに感じさせた。この瞬間、彼女は何としてもこの国の役に立つことを決意したのだった。

地下に続く階段を降りていたそのとき、セルロイトの脳裏に不意に、ヤンノーリの笑顔が思い浮かんだ。そういえば、昨日は使者を介してお見舞いの品をもらっていたのだ。お礼を言わなければならない。だが、メイリアス様とコンシディー様との話しもある……。セルロイトは足を停めて考える。

「……」

気が付けば、元来た階段を彼女は上がり始めていた。二人との打ち合わせの前に、彼にお礼を言うべきだと直感的に思ったのだ。

建物を出て、真っすぐにアガルタ大学のキャンバスに向かう。そこには、乗合馬車の停留所があった。

総合大学の名前を冠するアガルタ大学は、当初用意されていた都の中のキャンバスでは集まる学生を収容しきれず、都の外にいくつかのキャンバスを建設していた。ヤンノーリが普段研究を行う農場は、北門を出てすぐの、ルノアの森の近くにあった。

この停留所から農場までは、馬車でおよそ三十分だった。ヤンノーリの許に行って挨拶を済ませ、すぐに帰ってくれば、午前中にお二人と打ち合わせができるはずだ。きっと、お忙しい方々だ。今、自分があの研究室に行ったところで、誰も来てはいないだろう。先に、挨拶を済ませるのだ。そう自分に言い聞かせるようにして、セルロイトは馬車に乗り込んだ。

年老いた猫獣人の馭者が、ジロリとセルロイトを睨む。彼女は男にゆっくりと頭を下げる。それが合図であったかのように、馬車はゆっくりと走り出した。

このキャンバスから農場に向かうものはほとんどいない。そのため、セルロイトはいつも馬車の中で一人の時間を過ごすことができていた。馭者の男も無口で、これまで彼女は男と言葉を交わしたことが一度もなかった。乗り込んで、お辞儀をして馬車が動き、農場に着いたら止まる。男にお辞儀をして降りる。馬車は一旦都に戻っていくが、その二時間後には、きっちりと農場に戻って来て、セルロイトの帰りを待っているのだった。

ゴトゴトと馬車は石畳の上を進んでいく。道は美しく整備されていて、人が通る道と馬車が通る道ときちんと区別がなされている。こうした機能的な城塞都市を建設していることから見ても、このアガ

ルタと言う国の国力の高さが見て取れる。

セルロイトは、車窓から都の景色を眺めるのが好きだった。道には様々な人々が行き交い、店には豊富な品物が並んでいる。それらを見ていると、自然と心がワクワクしてくるのだった。聞けば、この辺りは数年前、ラマロン皇国の侵攻を受けた際に、多くの人々が命を奪われた場所だったという。その際、家々は焼かれ、この周辺は廃墟同然となった。現在の繁栄ぶりからは俄かに信じられない話だが、その荒廃からアガルタは目を見張る速さで復興を遂げて現在に至っている。きっと、アガルタと手を携えれば、フォーアル大公国もさらに繁栄するはずだ。できれば、街並みの作り方も学びたい……。

馬車は北門を抜ける。すると、これまでの景色が一変する。賑やかだった風景が、森と広々とした大地に変わる。その大きなギャップも、セルロイトは好きだった。

ほどなくして、車窓から白い建物が見えてきた。アガルタ大学の農場に到着したのだ。

「すっ、すぐ……すぐに、もっ、戻りますから」

「……」

セルロイトの言葉に、馭者の男はじろりと彼女を見て、ゆっくりと頷いた。急いで馬車を降りて、ヤンノーリの農場に向かう。

彼の姿はすぐに見つかった。畑の真ん中で、天を仰いで立ち尽くしていたのだった。

「あっ、あのっ……」

声をかけるセルロイトに、ヤンノーリはゆっくりと視線を向けた。
彼には章中落胆の表情が浮かんでいる。

「ああ、いらっしゃい。お体の様子は……」

「大丈夫です。いっ、いただいた……シーングの、おっ、お礼に……」

彼は優しい笑みを浮かべると、ゆっくりと頷いた。ふと見ると、そこには食い荒らされたシーングの実が散乱していた。

「こっ、こっ、これ……は？」

「フェリーラットの仕業です」

「フェリーラット」

雑食系のネズミで、放っておくと果実はもちろん、葉や茎までも食べてしまうものだ。ただし、このネズミは、美味なものしか食べないために、これに齧られた果実は、美味なものであるという証明にもなるために、農家にとっては、対策に困る動物なのだ。

ヤンノーリさんが作ったシーングはとても美味しかったのです。フェリーラットが食べるのもよくわかります。

そんなことを心の中で思ってみるが、言葉が出てこない。それに、ヤンノーリはスッとその場に座り、じっとシーングの実を眺めている。

「実が……かなり食べられてしまいました……。あと一歩で収穫できたのですけれど……。それに、これだけの果実が食べられたのです。相当数のネズミがいると思ってよいでしょう。これから、ネズミ対策です。やれやれ……」

ヤンノーリはあらぬ方向に視線を泳がせたまま、大きなため息をついた。きっと、彼が育てた他の果実も被害を受けていることは、容易に想像できた。苦労して育て、収穫間近であった果実が被害を受けたのだ。彼のショックは察して余りあるものだった。

セルロイトは、お礼もそこそこにその場を辞した。帰りの馬車に揺られながら彼女は、何とかフェリーラットの対策はできないかと考えた。そのとき、フッと彼女の脳裏に、一つのアイデアが浮かんだ……。

第五百七十九話　お礼（後書き）

コミックシーモア様にて、「みんなが選ぶ電子コミック大賞２０２１」（ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｃｍｏａ．ｊｐ／ｃｏｍｉｃ｜ｐｒｉｚｅ／ｉｓｅｋａｉ／）にて、この『結界師への転生』がノミネート中です。拙作の他にも魅力的な作品が多くノミネートされています。是非、投票にご参加ください。

コミック『結界師への転生③』絶賛発売中。それに合わせて、『結界師への転生①』の電子版が３０％オフにて販売中です。まもなくキャンペーンも終了します。これを機会に是非、コミック版にも触れてみてください！

第五百八十話　予兆

「そうですか……。承知しました」

セルロイトの報告を聞いたメイリアスは、大きく頷いた。たどたどしい説明で、果たして伝わっているだろうかと不安がるセルロイトに、メイリアスは彼女が言った事柄を、実に明快にまとめて繰り返して言ってみせた。

「セルロイトさん、もし、よかったら、これを参考にしてください」

不意にメイリアスからノートを手渡される。そこには、実験の経過が詳細に記されていた。彼女は、実験ノートの書き方を丁寧に教え、こうすれば、誰にでも伝わりやすい説明ができるようになりますと言って、笑顔を見せた。

「なるほど」

思わずセルロイトは頷く。これならば、喋らなくても自分の実験が伝わりやすい。彼女はメイリアスのノートを食い入るように見つめた。

「どうぞ、それはお貸しします」

「あっ、ありがとう、ございます」

セルロイトは丁寧に礼を言い、ノートを抱きしめるようにして立ち上がった。そして、試したいことがあると言って、友好の花が植え

られている鉢植えの前に立った。

「う～ん」

そこでは、コンシディーが額に手を当てながら何かを考えていた。目をギュッと閉じて天を仰いでいたが、ふと目があき、セルロイトと視線が合った。

「だっ、大丈夫、ですか？」

セルロイトの言葉に、コンシディーはフッと笑みを漏らしながら頷く。

「何か、打開策はあるのよ。何となく、上手くいきそうな気がするんだけれど、それが何かが思いつかないのよ。ああ、何か、気持ちが悪い……」

聞けば、コンシディーはセルロイトの研究を引き継いで、さらに多くの毒物をこの花に注入したのだという。だが、彼女の直感はそれが解決に結びつくとは伝えなかった。

万策尽く……。まさに今のコンシディーは、そんな状況にあった。

セルロイトは、代わりましょうと言って、コンシディーが座っていた椅子に座り直した。そして、カバンの中から小箱を取り出し、それを注意深く開けた。

「うわっ」

突然、小動物が踊りだすように箱から飛び出した。思わずコンシデ

ィーは声を上げる。

飛び出してきたのは、小さなネズミだった。黄土色の毛に覆われた、フェリーラットがちょろちょろと机の上を走り回っている。やがてネズミは鉢植えにピョンと飛び乗ったかと思うと、スンスンと鼻を動かして、友好の花の香りを嗅ぎ始めた。

「あっ」

セルロイトは思わず声を上げた。フェリーラットが花の茎をかじり始めたからだ。

いつの間にか、メイリアスとコンシディーが鉢植えを覗き込んでいた。三人は息を殺してじっとネズミの動きを見守る。

どのくらいの時間が経っただろうか。三人は息を殺してネズミの動きを凝視している。ネズミはすでに土の中に潜り込んでいて、ごそごそと土が左右に揺れていた。

「……！」

三人の息が止まった。友好の花がゆっくりと倒れ、そして、ゆっくりと白く染まっていったのだ。

三人は互いに顔を見合わせている。目の前には、まるで石膏で固めたかのような花の姿があった。

セルロイトは恐る恐る花に触れてみた。すると、花は音もなく崩れ去った。

メイリアス、コンシディー、セルロイトの三人は、再び無言のまま顔を見合わせる。やがて、誰と言うともなく、三人は無言のまま手を取り合った。

「フェリーラット……」

まるで、喜びをかみ殺すように、コンシディーが呟く。その瞳には爛々とした光が宿っていた。

「農場です……。ヤンノーリさんの……」

「今すぐ行きましょう」

メイリアスの声に、三人は同時に立ち上がった。

◆◆◆

「え……」

メイリアスらの姿を見たヤンノーリは眼を見開いて固まった。彼は片膝をついて、フェリーラットに食い荒らされた果実を片付けているところだった。

「ネズミは？」

コンシディーの声に、ヤンノーリは口をポカンと開けたまま、ただ頷いている。彼女は男から視線を外して、周囲を見廻している。

「……何となく、だけれど、相当数のネズミがいるんじゃないかな」

「では、罠をしかけましょう」

「わかったわ、メイちゃん。任せておいて」

そう言ってコンシディーは足早に農場を後にしていった。メイリアスはその後ろ姿を見送ると、ヤンノーリに突然押しかけてきた非礼を詫び、もしかすると、フェリーラットが友好の花を撲滅するカギを握っているかもしれないことを、丁寧に説明した。

「そのために、できるだけ多くのフェリーラットを捕まえようと思います」

「はぁぁ……そう、ですか……。まあ、ご覧の通りの有様です。コンシディー様も言っておいででしたが、ネズミはかなりいると思われますので、好きなだけ捕まえていただければ……。」

メイリアスの話に、まるで夢に浮かされたような表情を浮かべながら、ヤンノーリは頷いている。

「や……ヤンノーリさんの作物が、すっ、すばらしい、です、から、たくさんのネズミが、獲れます」

セルロイトが笑顔で話しかける。そんな彼女に、ヤンノーリは大きなため息をつきながら、小さな声で呟く。

「あの……何も私は、ネズミのために育てているわけでは……」

ヤンノーリの困った表情を見て、セルロイトは思わずケラケラと笑った。その表情はとても明るく、その笑顔によって、彼は心が癒されていくのを感じた。

◆◆◆

同じ頃、ヴィエイユは教皇神殿の執務室で、一通の書簡に目を通していた。それは、フォーアル大公国から送られた報告書だった。

そこには、大公・テイストが重病に臥していること、その平癒のために、フォーアルはフラディメ王国のリボーン大上王に医師を派遣してもらうための使者を送ったこと、大公の病状に関しては徹底的に秘匿されているために、病状については不明だという内容が記されてあった。

ヴィエイユはフッと笑みを漏らす。

フォーアルの使者は間違いなくアガルタに向かったのだ。大公はアガルタに助けを求めたに違いない。と、すれば、あの王のことだ。きっと、フォーアルに手を貸すはずだ。

まさに、注文通りの展開だった。あの花のことを知ったアガルタ王はどんな顔をするだろうか。おそらく、呆れた顔で、何と言うことをするのだと言ってくるに違いない。

ヴィエイユにとって、友好の花がどのようにしてアガルタ認知させるのかが一番重要だった。単に生命力の強い花というだけでは、あの王は興味を持たないだろう。いかにそれが世界規模で影響を及ぼすのかを知らしめることが重要だと考えていた。きっと、フォーアルの使者から聞く、あの花の危険さは、さぞ迫力があるだろう。できることなら、自分もその場にいて聞いて見たかったものだ。

アガルタが本気になれば、あの花を駆除することは十分可能だろう。

だが、ヴィエイユにとっては、そうしたカードをクリミアーナ教国が持っていることを認知させることが第一の目的だった。それはどうやら達成されたようだ。しかも、フォーアルの友好の花は未だに咲き続けているのだという。花の実験としても、十分な成果が得られていた。

さて、このカードを使って、アガルタとどのように交渉していくべきか……。ヴィエイユの視線が鋭さを増していく。彼女の頭の中では、友好の花を使わない、と言うカードの見返りに、アガルタに何を求めるかを考えていた。

……私とあの王が関係を結べればいいのだけれど。

だが、友好の花を使用しない見返りに、自分を抱いてくれと言うのは、いくら何でもおかしな話だ。ヴィエイユは思わずクスリと笑みを漏らす。

「あれ？」

そのとき、ヴィエイユの服のボタンの一つが音もなく落ちた。彼女はそれを拾い上げると、無造作に机の上に置いた。ふと見ると、目の前に控える若い枢機卿が、顔を真っ赤にしながら、あらぬ方向に視線を向けている。

外れたのは、胸元のボタンだった。胸の谷間が見えてしまっている。彼女は自分の胸と、目の前の枢機卿の交互に視線を向けながら、いたずらっぽい笑みを浮かべるのだった。

第五百八十一話　結論は……？

メイ、シディー、セルロイトの三人は、ヤンノーリの畑から捕らえた数十匹のフェリーラットを伴って研究室に戻った。

いろいろ調べてみると、フェリーラットは種類によって友好の花に対する反応が異なることがわかった。場合によっては、全く花を興味を示さない種類もいたのだ。三人は、毎日のようにフォーアル大公国のファンタジック公爵邸の庭に赴いて、友好の花を採取して研究室に運び込み、フェリーラットに与え続けた。

その実験台となるネズミは、リノスが懸賞金をかけたこともあって、アガルタの国内から続々と都に集められた。元々、畑の作物を荒らすために、農家では駆除の対象となっていた生き物だ。それが捕らえると懸賞金が貰えるというのだ。農家の人々にとっては、一石二鳥の話であり、そのために、多くの人の手で、それも主に子供たちが小遣い稼ぎに喜んでネズミが捕らえられたのだった。

続々と研究室に送り込まれるフェリーラット。その大量のネズミに、三人の女性は片っ端から友好の花を与えていった。

早朝から深夜まで、寝食を忘れて実験を続けること三日間、三人は、どの種類のネズミが友好の花に興味を示すのかを、ある程度特定するに至った。

「……つまり、オスで、かなり老境に近いネズミが、あの花を食らう確率が高くなるということか」

リノスは三人の女性から提出された報告書に目を通しながら、誰に言うともなく呟く。その言葉に、メイがゆっくりと頷く。

「反対に、若いオスはほとんどあの花に興味を示しませんでした。さらに言うと、メスに関しては、全くと言っていいほど、あの花に興味を示しませんでした」

「どうして、年老いたオスのネズミだけがあの花に興味を示すのだろう？」

「それは……」

メイはチラリとセルロイトに視線を向ける。それを受けて、セルロイトが一歩前に進み出た。

「おっ、おそらくは、花の香り……かと思います」

「花の香り？」

「ねっ、ネズミは嗅覚が優れています。でっ、ですが、こっ、この友好の花は、香りが強すぎます。でっ、ですから、わっ、若いオスは……」

「なるほど。香りがキツすぎて、興味を示さないというわけか」

「ただ、老境のネズミは、一旦花を食べ始めると、その根まで完全に食べつくします。そのために、花の拡散は抑えられると考えます」

シディーが大きく頷きながら口を開く。

「根まで食い尽くすか……。相当美味しいのかな」

「きっと、そうだと思います」

「ドリアンみたいだな」

「どりあん？」

「……知らないよね。いや、そういう食べ物があるんだよ。こっちではあるのか……。いや、ないな。見たことがないからな。ドリアンって食べ物があったんだ。ものすごい臭気を放つ食べ物だけれど、食べると意外に美味しいんだよ。そういう感じかな」

「う～ん」

シディーが眉間に刻めない皺を刻みながら、人差し指をおでこに当てている。これは、彼女が何かを思い出そうとしているときのポーズだ。全く知らないことならば、彼女は目をギュッと閉じて天を仰ぐ。彼女は実家のニザにいるときに、リノスが言うような食べ物を食べた記憶があった。それを、思い出そうとしていたのだ。

「言ってみれば……オオイノシシの肉ですか？」

「まあ、あれは臭みがあるな……。そんな感じだと思ってもらっていいと思うよ」

「う～ん」

シディーはわかったような、わからないような表情を浮かべている。このままこの話を引っ張ると、さらに彼女が混乱しそうだと判断し

たリノスは、メイに視線を向ける。

「で、フェリーラットが食べると、花が白く凝固すると聞いたけれど……」

「はい。それについても原因が判明しました」

メイは大きく頷く。すると、それが合図であったかのように、セルロイトがあらかじめ用意してあった冊子をリノスとメイに手渡した。

「すべてを説明すると長くなりますので、かいつまんで説明しますと、フェリーラットの唾液には、レイサルトが８％、カルトルが４％含まれています。対して、友好の花には、香気の基となるリーエンスの成分が、何と６４％も含まれています。あの……ここまでは、大丈夫でしょうか？」

メイの言葉に、リノスは少し戸惑いながら頷く。

「……よかったです。では、説明を続けます。そのフェリーラットの唾液と、友好の花に含まれるリーエンスの成分が反応して、凝固しているのです」

「なるほど」

「一般的には、レイサルトとカルトル、そして、リーエンスの成分がリーン反応するためには、その比率が４：４：２の割合と言われていますが、この友好の花に関しては、その比率でなくとも反応が起こることがわかりました。これはとても驚くべきことで、その原因については判明しておりません。ですが、今後の研究課題として追及していきたいと思います。そもそも、リーン反応に関しては、

私の知る限りおよそ８０年前からその研究は深くなされておりません。この反応比率も、当時の機器を使用して行ったものですから……」

「メイ、メイ……あの、メイちゃん？　ちょっと、ちょっといいかな？」

「あっ、はい。申し訳ありません。少し、喋りすぎました」

「いっ、いや、いいんだ。で、その花を凝固する……え？」

リノスが話をしている最中に、セルロイトが別の資料を彼の前に差し出した。リノスは戸惑いながらそれを受け取り、目を通す。そこには、彼には全く理解できない、難解な数式が書かれていた。

「あの……これは？」

「はっ、花の凝固……可能性を、計算しました」

「ええと……結果的に、これは、何パーセントで起こるのでしょう？」

「根を、完全に、食べつくした場合は、百パーセントです」

「百パーセント？」

セルロイトはゆっくりと頷く。

「あくまで、計算上の確率としてですが、おそらく、それは合っていると思います。私の直感がそう教えてくれているのです」

「シディーがそう言うなら、間違いはないだろうな。ただ……」

リノスは腕組みをしながら、視線をあらぬ方向に向ける。

「問題は、安定感だよな。花を枯れさせる条件を持ったネズミを見つけ出すのは、大変そうだし、そういうネズミを育てるというのも時間がかかりそうだよな。あ、あれか。一度花を食べ始めると、根まで食い尽くしてくれるんだよな？　ということは、ネズミの嗅覚を……うおっ！」

突然、リノスの目の前に一枚の書類が差し出された。ふと見ると、そこには、書類を持ったセルロイトの姿があった。

「えっと……これ、は？」

「きゅっ、嗅覚を減退させる方法、です」

「……さすが、余念がないな」

リノスは半ば呆れながら、差し出された紙を受け取り、目を通す。そこには、さらに彼の理解を超えた内容が書かれていた。

「ええと、つまりは……」

「つまりは、オキサライトを使えば、ネズミの嗅覚を減退させることができるのです」

「オキサライト？」

「リガリルとファラサイト、コレンキタラ、ライゾラレル……それぞれを二倍に希釈して……」

「メイ、メイ。いいから。うん、大丈夫だ。結果的に、それはできたんだよな？」

「はい。ただ、ご主人様がご指摘の通り、安定感はありません。個体によって、差が出ているのが現状です」

「つまりはだ。フェリーラットの嗅覚を減退させれば、ネズミは友好の花を食べる。根まで食べればほぼ確実に、あの花は枯れる。今は、ネズミが花を食べるために最も効果的な嗅覚の減退方法を探っている。そういうことかな？」

「その通りです」

「うんわかった。詳しく説明してくれるのはありがたいんだが……。今後は結論だけでいいよ。……ネズミだけに、難しいことは、俺にはよくわからないでチュ」

「プッ……アハハハハ」

リノスの言葉に笑い出すメイ。一方でシディーは強張った表情をリノスに向ける。その後ろで、セルロイトは、メイに優しくハンカチを差し出すのだった……。

第五百八十二話　香り

俺は、ため息をつきながら、手に持っていた分厚い報告書を机の上に置いた。書いてある内容に関しては、半分も理解できないが、要は、友好の花を撲滅させる目途がついたということなのだろう。

ふと、執務室の窓に視線を向ける。そこには、フェアリードラゴンのサダキチの姿があった。俺は窓を開けて、彼を室内に入れる。

『で、どうだった？』

『あらゆるところを見ましたが、それらしきものは見当たりませんでした』

俺はほう、と声を漏らしながら、顎の下に手をやる。サダキチの返答が予想した通りだったからだ。

彼に命じていたのは、新・クリミアーナ教国の教都であるアフロディーテをつぶさに観察しろというものだった。言うまでもなく、あの都における友好の花の状況を調べさせたのだ。サダキチの報告によれば、あの都にはそうした花は全くと言っていいほど生えていなかった。念のため、クリミアーナに属する国々も調べさせたが、そこにも、友好の花らしき花は見当たらなかったのだという。

『ご苦労だった。ところでサダキチ』

『はい』

『あの、友好の花の香りはどうなんだ？』

『どう、と言われますと？』

『いや、いい香りなのか？』

『いいえ、全く』

『お前たちフェアリードラゴンは花を食べるんだろ？　友好の花は食べないのか？』

『……食べませんね』

『なんで？』

『何で……と言われましても……。あまりいい香りではありませんから、食欲がわきません』

『あまりいい香りではない？　どういうことだ？』

『いい香りと言えばいい香りなのですが、香りが強すぎるのです』

『なるほど』

『美味しそうな香りとはまた違います。ただ、とても特徴のある香りですので、見つけるのは簡単です』

『特徴ある香り、か』

『そうですね……。リコレット様の香りに似ています』

『リコの？』

『はい。リコレット様の香りを、とてもとても濃くしたような香りなのです』

『そうなんだ……。わかった。ご苦労だった』

俺の言葉を聞いた瞬間、サダキチの姿は消えた。そのとき、執務室の扉がノックされた。入室を促すと、アガルタ大学の職員が部屋に入ってきた。この男は、大学の副学長だ。

「失礼いたします。メイ様からのご伝言です。友好の花の駆除方法について、目途が立ちました。その最終実験を行うために、本日は研究室に泊まり込むとのことでございます」

「そうか……。ということは、シディーとセルロイトちゃんも一緒かな？」

「左様でございます」

「わかった。ご苦労だけれども、セルロイトちゃんのお母さんにも、そのことを伝えてくれないかな」

「畏まりました」

男はそう言って恭しく一礼して、その場を後にしていった。

帝都の屋敷に帰ると、ちょうど夕食ができたところだった。子供たちの出迎えに笑顔になりつつも食卓に着く。今日はメイとシディー

はお仕事だと言うと、ペーリスとソレイユが彼女らの分をお弁当にして作ってくれる。それをマトカルが持って行こうと言ってくれる。その言葉を受けて、エリルが私も一緒に行くと言って、二人は連れ立って出て行った。

マトカルとエリルは、十分ほどで帰ってきた。二人が帰って来るまで、俺たちはもちろん、子供たちも、食事には手をつけずに和やかに談笑していた。その光景を見ながら俺は、感動していた。本来ならば、先に食事に手をつける子供がいてもおかしくないのだ。場合によっては、泣いたり騒いだりすることもあるだろう。だが、ウチの子供たちはそうしたことが全くない……あ、アリリアがからあげをつまみ食いしている。……どうやら、俺以外は気づいていないようだし、これはノーカン。見なかったことにしよう。

皆が揃って、いただきます、となる。今日のメニューは、ビーフシチューだ。カースシャロレーの肉をじっくりコトコト煮込んでいるので、コクがあって実に美味い。パン、サラダ、そして、何故かオムレツが付いている。

シチュー、パン、サラダはお代わり自由だ。主に、フェリスとラース姉弟がよく食べるために自然と作る量が多くなる。特に夜はよく食べるために、いつの間にか好きなだけ食べられるようなシステムが出来上がった。意外に思われるかもしれないが、これまで料理が余るというのはなかった。リコを筆頭とする妻たちとペーリスの腕がいいのだろう。

今日の食事は特に美味しいために、子供たちもドンドンお代わりをしている。リコもビーフシチューをお代わりしている。一番食べているのはアリリアだが、彼女は肉ばかりを食べようとしている。コラコラ、ジャガイモやにんじんも食べなきゃいけない。

そんなこんなで食事が終わり、お風呂タイムになる。子供たちがドヤドヤとバスルームに向かう。その後ろを俺も付いて行く。

風呂場はまるで戦場のような騒ぎだ。そんな中、俺は子供たちを片っ端から洗っていく。とはいっても、エリルはもう、自分でちゃんと全部ひとりでできる。少し寂しいが、娘の成長ぶりが頼もしく思える。一方でアリリアは、いつまで経っても俺に甘えてくる。これはこれで、よしとする。

子供たちが上がって、やっと一人の時間になる。俺は湯船からお湯を抜く。その間に、自分の体を洗う。そのときちょうど、リコが入ってきた。

相変わらず、彼女の肌は美しい。ちょっとドキドキしていると、リコは俺の隣に座って、自分の体を洗い始めた。

いつも不思議に思うが、彼女は風呂のマナーも見事に洗練されている。そうした教育を受けたのだろうか？

「入浴の所作？　いいえ、そんなものはありませんわ」

「そうなの？　てっきり、そういうものがあると思っていた」

「そもそも、入浴など人に見せるものではありませんわ。ただ……お風呂とはいえ、常にだれかに見られていると意識して入浴する……。そんなことくらいですわね」

「で、あれば、リコの入浴の所作が美しいのは、才能かな」

「ご冗談を」

そんなことを言いながら、俺は浴槽に湯を張る。我ながら見事な温度調整だ。

リコと二人、ゆっくりと湯船につかる。体の疲れが溶けていくようだ。ふと、昼間のサダキチの会話を思い出す。俺はゆっくりとリコの髪の毛に鼻を近づける。

「何ですの？　どうかしたのですか？」

「……いや。あの友好の花が、サダキチたちフェアリードラゴンには、リコの香りがするらしいんだ」

「私の？」

「ああ。で、ちょっと香りを……」

「やめてくださいな」

リコは照れた笑みを浮かべながら俺から離れ、そのまま風呂から上がってしまった。仕方がないので、俺も上がることにする。

寝室で寛いでいると、リコが入ってきた。イデアも一緒にいるかと思ったが、彼女一人であるらしい。

「あれ？　イデアは？」

「マトの部屋で寝てしまいましたわ」

「じゃあ、マトはエリルとイデアと……？」

「ええ。三人で寝ると」

「ファルコもいるのに、大変じゃないか？」

「ファルコはエリルが面倒を見てくれるので、問題ないとマトが……」

「何と……いい娘だ……」

「泣いているのですか？」

「……いや。そんなことはない。断じてない。大丈夫です」

リコは優しげな笑みを浮かべながらベッドに入ってきた。自然と、彼女を抱きしめる。

「……今更だけれど、確かにリコは独特の香りがするな。上品な香りだ」

「……先ほどの話ですの？」

「ああ。いつものことなので気に留めなかったけれど、これはリコの体臭かな？」

「どうでしょうか……」

リコは俺の腕からすり抜けると、じっと俺に視線を向けた。

「リノス」

「何だい？」

「友好の花のことです」

「ああ」

「メイとシディー、そして、セルロイトさんのお蔭で、あの花の繁殖は何とか食い止められそうですが、リノスはあの花を、ヴィエイユさんをどうするおつもりなのですか？」

「ああ、その話だけれど、一応は考えてあるんだ。……ちょうどいい機会だ。リコ、相談に乗ってくれないか」

俺の言葉に、リコは真剣な表情で頷いた。

第五百八十三話　前進

「ヴィエイユには、お仕置きをするつもりでいる」

リコは真っすぐな視線を向けながら、俺の手を握る。

「いや、別に、妻にするつもりはない」

「……奴隷か何かになさるの？」

「いや、そのつもりもない」

「まさか……命を……？」

「それをするつもりもない」

「では……どんなお仕置きを？」

リコの手に込められていた力が徐々に緩んでいく。まだ、彼女の中では、俺があの小娘に手を出す可能性があると思っているようだ。

「うん、できるかどうかはわからないけれど……」

俺の話を聞いた直後、リコが跳ね上がるようにして飛び起きた。

「それでは、クリミアーナ教国は内乱になりますわっ！」

「……そうなるかも、しれないな」

「ヴィエイユさんに対する罰ならばまだしも、それでは、あの国に住まう者たちにまで類が及びますわ。私は反対ですわ」

「そうならないように、ヴィエイユには条件を出すつもりだ。それに……最悪、内乱になった場合は、俺が助けに出ようと思う」

「……」

リコはじっと俺を見つめていたが、やがて、ゆっくり息を吐いて俺の腕に体を預けた。俺は彼女の背中を撫でながら、言葉を続ける。

「あの小娘は、フォーアル大公国を実験台に使った。あの国が受けた被害は甚大だ。下手をすると、国が亡びる可能性すらあった。メイとシディー、そしてセルロイトがあの花の駆除方法を確立しなければ、多くの人が餓死したかもしれないんだ。そんなものを拵えるなんて、正気の沙汰じゃない」

「きっと、そこまでしてでも、リノス、あなたの興味を引きたかったのですわ」

「そうだな。おそらくあの小娘の狙いは、抑止力だろう」

「抑止力……？」

「ああ。世界を滅ぼすかもしれない花を所有していると俺たちに思わせることによって、俺たちが、アガルタが敵に回らないようにしたいのだろう。あわよくば、俺たちを膝下に取り込もうとする目論見なのだろう」

「……」

「その目論見は外れようとしている。それだけでも、あの小娘はショックを受けるだろうが、俺はそれだけで終わらせる気はない。ただ……。このお仕置きは、ヴィエイユにダメージを与えると同時に、俺たちも憎まれる可能性があるってことだ」

「そう、ですわね」

「ちょっとまた、厄介ごとを引き寄せる可能性もある」

「きっと、大丈夫ですわ」

「そうかい？」

「確かに今まで厄介なことがありましたけれども……。それを乗り越えたときは必ず幸せが訪れました。今回も、きっと、そうなりますわ」

「……ありがとう」

「……」

「頑張るよ、リコ」

「何があっても、私は、あなたの味方ですわ」

俺は再びリコの体を優しく抱きしめた。彼女の体から立ち昇る上品な香りが、俺たちの未来は大丈夫だと思わせた。

◆
◆
◆

同じ頃、フォーアル大公国では、メイたちによる最後の実験が行われようとしていた。ライトの魔法が煌々とファンタジック公爵邸の庭を照らし出している。そこには、友好の花が所狭しと生えていて、とてつもない濃厚な香気が立ち込めていた。

通常であれば卒倒してもおかしくない香気だが、リノスの張った結界のお蔭で、メイたちは何の問題もなくその場所で作業することができていた。

「それでは、始めましょうか」

メイの言葉を合図に、シディーとセルロイトは、背後に置かれた木箱の許に向かう。

「メイちゃん」

シディーの声と共に、メイが飛びのくようにしてその場を離れる。それと同時に、二人は木箱のふたを開けた。

ゴトゴトと、何か硬いものが転がるような音がする。よく見ると、木箱の中から夥しい数の小さな生き物が飛び出してくるのが見えた。フェリーラットだ。

メイの指揮で、アガルタ大学の研究チームは、フェリーラットの嗅覚を減退させる薬品を開発していた。ここに運ばれたフェリーラットは、その薬品を投与されていたのだった。

ネズミたちは一目散に、友好の花に向かっていっている。黒い塊が

庭に向けてものすごい速さで移動していく姿は、ある種の異様さを感じさせた。

薄暗い闇の中、不気味な音が響き渡った。言うまでもなく、ネズミたちが友好の花をかじり始めたのだ。ある者は花の茎に歯を立て、ある者は土を掘り返していく……。そんな光景がこの庭中で行われているのだ。

そんな中、シディーは庭を見ながら、小さく拳を握り締めていた。彼女にはわかっていた。この実験が成功に終わることを。

「大丈夫よ。絶対、大丈夫」

シディーは、隣で不安げな表情を浮かべているセルロイトに向けて口を開いた。彼女は両手を胸の前で組んで、まるで祈るようなポーズを取っていた。

「……ゼッタイ？」

シディーの言葉に、セルロイトは驚いたような表情を浮かべる。その様子に、シディーは満面の笑みで頷いた。

子供の頃から、セルロイトは母から言葉遣いについて厳しい躾けを受けていた。特に母が嫌ったのは、「絶対」という言葉だった。

「絶対、などという言葉は、生涯の内で何度も使う言葉ではありません」

そう言って諭した母の厳しい表情は、今でも彼女の脳裏に鮮明に残っている。母が最も嫌った絶対という言葉。それを、コンシディー

様は何のためらいもなく、そして、自信満々に言ってのけた。コンシディー様は、母のように言葉について厳しく諭されたことは、おそらくないであろうことは想像できる。だが、それでも、彼女の雰囲気からは、生涯何度も使う言葉ではない言葉を今、使うべきなのだということを、セルロイトに教えてくれているような気がした。

「そ……そうですね。ぜ……絶対、絶対、絶対、大丈夫ですよね！」

生涯で初めてではないかと思われるくらいに、セルロイトは声を張った。その様子に、シディーは一瞬、驚きの表情を浮かべたが、やがて、元の笑顔に戻り、大きく頷いたのだった。

「さて、結果が出るまで、しばらく時間がかかります。夕食にしましょうか」

メイが庭の様子を気にしながら、二人に向かって話しかけてきた。そう言えば、朝から何も食べていなかった……。二人はふと顔を見合わせる。

「私、お腹がすいてきちゃった」

「じっ、実は、私も……」

「朝から何も食べていなかったものね！」

そう言いながら二人はケラケラと笑い合った。メイはそんな二人に優し気な眼差しを向けていたが、やがて、一旦研究室に戻りましょうと言って二人を促した。

「うわぁ、美味しそう！」

研究室に戻って、早速食事の準備にかかると、シディーが思わず声を上げた。まだ温かいビーフシチューとパン、サラダ、そして、ふかふかのオムレツがマトカルの手によって届けられていたのだ。メイも空腹だったのだろう。三人はしばらく無言で、用意された食事を味わった。

シディーはふと、目の前に座るセルロイトに視線を向けた。さすがに公爵家の娘らしく、食事の所作がとても上品だ。

「なっ、何か？」

視線に気づいたセルロイトが驚いた表情を浮かべながら話しかけてきた。シディーはスプーンを置いて彼女に向き直る。

「とっても食事マナーがいいって思っていたのよ」

「そっ……そんな……」

「いいえ、セルロイトさんの所作はとても優雅ですよ。私たちも見習わなければいけませんね」

メイが笑顔で話しかける。セルロイトは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「いいの、いいの、気にしないで。私、子供の頃から母や乳母のミンシによくマナーが悪いって怒られていたのよ。だから、他の人のマナーが気になっちゃって……」

「こっ、コンシディー様でも……おっ、怒られることが……？」

「あるわよ～。子供の頃なんかしょっちゅうだったわ。ミンシには、今でも怒られるのよ。そんなはしたないことをして、お子様が真似をしたらどうするのですって、ね」

「そっ、そうなの、ですか……。いっ、意外です……」

セルロイトは、食事を味わいながら、誰でも簡単に優雅に見えるスプーンとフォークの使い方を、シディーに教えていった。彼女はそれを興味深そうに聞き、目を輝かせながら丁寧に礼を言った。コンシディーとセルロイトはこの瞬間から、大親友になったのだった。そして、セルロイトの運命も、大きく動き始めた瞬間でもあった……。

第五百八十四話　不思議な光景

チチチチチチチ……。

鳥のさえずりが聞こえてきた。セルロイトはふと目を覚ます。

いけない、眠ってしまった。届けられた夕食に舌鼓を打ち、和やかに談笑していた記憶はあるが、それから先は覚えていない。おそらく、そのまま眠ってしまったのだ。今、座っているのはまさに、夕食を摂ったときの場所だ。彼女は慌てて体を起こした。そのとき、自身の体が毛布に包まれていることに気が付く。きっと、メイリアス様かコンシディー様がかけてくれたのだ。

恥ずかしさと申し訳なさで、今すぐにこの場を逃げ出したい感情に襲われたが、それをすることはできないし、そんなことをするつもりは毛頭なかった。彼女は覚悟を決めて立ち上がり、メイとシディーの姿を探した。

二人はすぐに見つかった。ベランダから庭に出ると、ほのかな光の中に、その姿を見つけることができた。

そのとき、セルロイトは不思議な感情を覚えた。確かに、夜は明けている。頭上から柔らかい太陽の光が注いでいたからだ。だが、この屋敷は何重もの布に巻かれていて、そのために、入ってくる光はごくわずかで、庭は常に薄暗い。どうしてこんなに明るいのか。そう思ったとき、メイとシディーが同時に彼女の方向に振り返った。

「おはようございます」

「おはよう」

二人は満面の笑みを湛えていた。だが、その顔には疲労の色が色濃く出ていた。セルロイトは自分だけが休んでしまった申し訳なさでいっぱいになりながら、足早に二人の許に駆け寄る。

「す……すみません……でした……」

「いいえ、気にしないでください。私もシディーちゃんも、休みましたから」

「セルロイトちゃんは病み上がりだから、休んでいていいのよ」

二人は屈託のない笑顔でそう言うが、その表情を見れば、二人は不眠不休で実験の様子を見守っていたことは明らかだった。

「実験は……花は……わっ、私も……」

「見てください」

メイが笑顔を崩すことなく、クルリと踵を返す。それに釣られる形で、セルロイトは庭の方向を見た。

……庭が、真っ白に光っていた。それは不気味でもあり、美しくもある不思議な光景だった。セルロイトは呆然とその光景を眺めていた。

「あの……は、花は……」

やっとのことで言葉を絞り出す。そんな彼女の細い肩に、コンシディーが優しく手を添えながら話しかけてくる。

「なくなったよ、全部」

「ぜ……全部？」

「そう、全部。友好の花はきれいになくなったわ」

「ほ……本当……ですか？」

「うん。私の直感が教えてくれているわ。この庭からは、邪悪さは全く感じないわ」

「……」

セルロイトの眼から涙が溢れてくる。その様子に、シディーは少し慌てた様子で言葉を続けた。

「いや……あくまで、私の直感だから。本当に大丈夫かどうかは、メイちゃんに聞いてね」

「いいえ、大丈夫です」

メイがにこやかに返答する。そのとき、メイの足元から小さな老人が姿を現した。

「全く問題なかったわい」

「本当ですか？　ノームさんにそう言っていただけると、心強いで

す」

「うむ。しかし、じゃ。ここの土は死んでしまっておるのう。ここで作物を実らせるのには、大変な苦労をするじゃろうて……」

悲しそうな表情を浮かべているのは、メイが契約している土精霊のノームだ。彼は両手を腰に当てながら、庭を呆然と眺めている。

「メイちゃん……」

「はい」

「あとは、水も注意せねばならん」

「水……でしょうか？」

「ああ。水も、酸が強くなっておる」

「わかりました」

老人とメイは二人で頷き合っているが、セルロイトには、その内容がいまいち呑み込めないでいた。そんな雰囲気を察してか、シディーが話しかけてきた。

「水が酸性になると、イヤな臭いが発生するのよ」

「は……」

「それに、この庭の土にも、酸の割合が高くなってしまっているから、作物が育ちにくいのよ」

「へ……へぇ……」

セルロイトの眼が見開かれていく。その様子を見て、シディーはさらに説明を続ける。

「この庭……まあ、この国全体に言えることだけれど、火山灰が降り積もってしまったために、土に酸が多く含まれてしまっているわ。火山灰って言うのは酸の成分が多く含まれているからね。そうなると、なかなか作物が育ちにくくなる。特に、このお屋敷の庭は、リノス様の火魔法でかなり焼かれてしまっているから、酸の割合が高くなってしまっているのね」

「この白いものは……火山灰、でしょうか？」

「ううん。これは花が枯れた残骸と、あとは、フェリーラットの死骸よ」

「し、死骸？」

「ある一定量の花の成分がネズミの体の中に取り込まれると、ネズミはショックで死んでしまうことがわかったのよ。……ああ、これは、セルロイトちゃんが熱を出して寝込んでいたときに分かったことなんだけれどね。で、ついでこの間、オサシニンを注入すると、ショック死したときに、花と同じように死骸も白い灰になることがわかったのよ。ただ……それは、強い酸を含むから、このお庭はもう……」

「と……いうことは、このお庭で花を育てることは……難しい……」

セルロイトの脳裏に、幼い頃に一度だけ見たこの庭の見事な光景が思い出された。あのときは、母が公爵夫人のお茶会に招待された際に、一緒に連れて行ってもらったのだ。広く、見事に整備された庭に、色とりどりの花が咲き誇る景色に、セルロイトは感動したのだった。

もう、ニ度とあの景色を見ることはない……。

そう考えたとき、セルロイトは胸が締め付けられる思いがした。そのとき、老人の声が再び庭に響き渡った。

「何と！　それは本当か、メイちゃん！」

老人は驚いた表情を浮かべながらメイに視線を向け続けている。メイはゆっくりとしゃがみ込むと、目の前の土を掌の上に載せながら口を開いた。

「おそらく、ですが、高い確率で可能です」

「一体、どうするんじゃ！」

「酸とは逆のものを注入するのです。それで、この土は中和されます。その液体はすぐにでも作り出せますから」

「さすがじゃのう、メイちゃん」

メイはニコリと微笑んだ。ノームはクルリと振り返ると、セルロイトに向かって口を開く。

「細い姉ちゃん！」

「……！」

突然大声で話しかけられたために、セルロイトは無意識に体を震わせる。

「よかったのう。これで、この庭は元通りになるぞ」

「は……あ、ありがとう、ございます」

ここは私の庭ではないのだが、と思いながらセルロイトは頭を下げる。ノームは満足そうに頷きながら、庭に消えていった。

「さて、シディーちゃん、セルロイトさん。土を持って帰りましょうか」

「……？」

メイの言葉の意味がいまいち呑み込めず、セルロイトはキョトンとした表情を浮かべる。

「フェリーラットで友好の花が枯れることはわかりました。ただ、枯れた後の花に関しては、まだ何も調べていません。土を持ち帰って、念のために調べたいと思います」

その言葉にセルロイトは大きく頷き、シディーは笑顔で頷いた。

結果的に、持ち帰られた土からは、友好の花の成分は検出されなかった。その後、しばらくファンタジック公爵邸の庭は放置され、花が再生するかどうかを注意深く観察した。だが、結局花は生えて来

ることはなく、これをもってフェリーラットが友好の花を撲滅する手段であることが証明された。

そして、メイたちは、さらに効果的な撲滅方法を確立するべく研究を続けた。それはセルロイトの献身的な研究によってわずか数日で確立されたのだった。その最終試験は、リルレイン侍従長邸の庭で行われ、セルロイトが用意したフェリーラットは、ファンタジック公爵邸のそれとは比較にならぬほどに速く花は枯れたのだった。

およそ千ページにわたる、友好の花を撲滅するための報告書がリノスに提出されたのは、それから数日後のことだった。

第五百八十五話　今すぐに！

フラディメ王国の首都、オービッゼ。アリスン城の一角に建てられた屋敷では、リボーン大上王が目を閉じながら天を仰いでいた。

いつもは、鋭い眼光で周囲を威圧し続けるこの大上王が、このような表情を浮かべることは珍しい。幸いにして、部屋には彼の他には誰もいない。だが、部屋の外では、家来たちが緊張した面持ちで控えていた。それもそのはずで、大上王は丸一日、自室から出ていないのだ。

食事もとらず、水も飲まず、トイレにも行かずに自室にこもり続ける大上王。いつもは、忙しそうに動き回り、家来たちを怒鳴りつけることもしばしばであった彼が、こんな状態になっているのは、極めて珍しいことだった。すでに夜は更けて、深夜の時間帯だ。家来たちは心配を通り越して、不気味ささえ感じていたのだった。

当然、家来たちも、折に触れて大上王の様子を確認していた。だが、彼はわかったような、わからないような返事を返すのみで、さらに何かを言おうものならば、その鋭い眼光を家来たちに向けて威圧するのだ。そのために、大上王には誰も、何も言えない状態となっていたのだ。

部屋の中で大上王はひたすら書簡に目を通していた。眉間に皺を寄せながら、分厚い書簡を睨みつけるその姿は、怒りさえ感じさせた。

その書簡の送り主は、アガルタ王リノスだった。家来たちは最初、その書簡の分厚さを目の当たりにしたとき、イヤな予感がしたのだ

が、それが当たった形となった。一体、あそこには何が書かれているのか、家来たちはただ、固唾を飲んで見守るほかはなかった。

大上王はゆっくりと目を開ける。そして、再び書簡に手を伸ばすと、パラパラとそれをめくり始めた。あるところまで来ると彼は手を止めて、書簡に見入る。それを繰り返すこと数度、彼は再び天を仰ぎながら大きく息を吐き出した。

彼の心は満たされていた。これまでの人生の中で、初めて味わう程の満足感だった。

大上王が目を通していたのは、メイがリノスに提出した報告書だった。友好の花を駆除する実験結果と、それに関する考察が記されていた。その内容は実に明快であり、そこには、折に触れて絵図が記されていて、それがさらに、この報告書の内容を充実させていた。

見事だった。全く、疑問も反論も挟む余地がなかった。これほどの証拠を揃えられていては、納得するしか術がなかった。

加えて、その報告書には、大上王が知らない技法までも記されていた。フェリーラットが友好の花を駆除する最適な手段である点を見つけ出したことに感嘆すると同時に、酸化した土や水を中和する術は、大上王の知的好奇心を刺激してやまなかった。さらには、汚れた水を、ある程度まできれいにする方法までも記されており、若い頃、汚水の問題で散々苦労した彼にとっては、目からウロコの方法がそこに記されていたのだった。

メイが導き出した手法は、汚れた水に空気を送り込み、しばらくそれを放置すると、汚れた物質は沈殿していく。そして、その上澄みの水からさらに不純物を取り除いて、再利用可能なものにするとい

うものだった。大上王は、液体をしばらく放置すれば、成分が分離して沈殿していくということは知っていたが、それをさらに進化させて、水自体を再生するという手法を確立したことに、驚きとある種の悔しさを感じたのだった。

およそ千ページにもわたる報告書は、一言一句丁寧な字で書かれている。折に触れて字体が変わっているのは、書き手が変わったからだろう。そのメイリアスではない者も、見事な字でこれを書いている。その字体からは、何の邪念も、悪意も持たず、大いなる自信が横溢していた。

「ううむ……」

大上王は思わずうなり声を上げる。こんな報告書を、こんな論文を書いてみたい。そんな強烈な欲求が彼の心の中に湧き出していた。

「うむっ！」

彼は立ち上がると、勢いよく自室の扉を開けた。

「うわわっ！」

家来たちが戦慄の表情を浮かべている。だが、大上王はそんな彼らを一顧だにせずに、スタスタと廊下を足早に歩いて行く。

「あっ、あのっ、大上王様、どちらへ？　大上王様、大上王様！？」

後ろから追いかけてくる家来を完全に無視しながら、彼は歩みを進めていく。

◆◆◆

「……これはお珍しい」

大上王が向かった先は、息子であるメインティア王の居室だった。彼はガウンのようなラフな服を着て、何か、温かいものを飲んでいる様子だった。彼の手には小さなコップのような茶色い容器が握られていて、そこから湯気が立ち昇っていた。

その様子に、大上王は少し怯んだ。話に聞いていた事柄と、全く違っていたからだ。

大上王には、息子のメインティア王は、夜となく昼となく複数の女性が傍に侍り、ほとんどの時間を裸で過ごしていると報告されていた。そうしたことを極端に嫌う大上王はこれまで、息子の居室を訪れたことはなかった。だが、目の前にいる息子は、部屋着とはいえ、きちんと衣服に身を包み、それなりに整えられた髪と髭を蓄えた紳士然とした男性が座っていたのだ。そのあまりのギャップに、豪胆で鳴らした大上王もさすがに虚を衝かれた形となった。

そんな父を、メインティア王はノホホンとした表情で眺めている。彼は手に持っていた容器を口に近づけ、ズズズと音を立てて何かを飲んでいる。音を立てずに食事をするというのは、当たり前の常識だ。その行儀の悪さに大上王は思わず顔をしかめた。

「……何と行儀の悪いことだとお思いでしょう？　しかし、これはアガルタ王から教えていただいた作法でしてね」

予想外の名前が出たことで、大上王はキョトンとした表情を浮かべる。そんな父の姿が可笑しいのか、彼は微笑を浮かべながら、さら

に言葉を続ける。

「私も最初見たときは驚きましたが……。こうやって、空気と共にお茶を口に含めば、何とも言えぬ甘みと香気が口の中に広がるのです。父上も、お飲みになりますか？」

自分が応というわけはないことは百も承知のはずだ。それを知っていてそんなことを言う息子を、食えぬヤツだと思いながら、大上王は口を開く。

「このような夜更けだというのに……側室は侍っておらんのか」

「一旦、終わらせたのですよ」

「終わらせた？　何が終わったのだ」

「一回戦が」

メインティア王はニコリと微笑む。大上王の顔が強張り、この世のものとは思えぬほどの恐ろしい形相に変わった。

「……儂を、連れて行くのだ」

「連れて行く？　どこへ？」

「アガルタじゃ」

「何をしにおいでです？」

「お前には関係ないことじゃ。説明したところで、そなたにはわか

らぬ話じゃ」

「お言葉ですが父上、アガルタに参るためには、相応の時間がかかります。船や馬車も……」

「転移できるであろうが！」

大上王の大音声が響き渡る。メインティア王は思わず顔をしかめ、周囲にいた従者たちは直立不動の姿勢を取った。

「どういう方法を取っているのかは知らぬが、お前が転移を使ってアガルタと往復していることは知っている。それを使って、儂をアガルタに転移させるのだ」

「今宵は遅うございます。また、明日にでもお話を承り……」

「今、すぐにじゃ！」

「父上……。今は夜更けです。今、アガルタに行ったとしても……」

「ならば、いつじゃ」

「ですから明日また、お話をお伺いしましょう」

「……明日、か。では、六時じゃな」

「は？」

「六時に出発する。それまでに、準備を整えい」

「父上？」

「ライスレイト！　ライスレイトはおらぬか！」

「はっ、ここに……」

突然、扉が開き、一人の初老の男が入室してきた。彼は、恐ろしい速さで大上王の傍に駆け寄ると、見事な所作で彼の前に控えた。

「ライスレイト、お前はこの部屋の前で、王の動きを見張るのだ」

「はっ……」

「儂が朝、この部屋に来るまでに、王を一歩もこの部屋から外に出すな」

「……」

「ちょうどよい。時間まで、もう一度、あの報告書に目を通すこととしよう。うむ。聞いておかねばならぬことを、まとめておこうか。フッフッフ」

まるで悪魔のような笑みを浮かべながら、大上王は頷く。彼は踵を返すと、大股で部屋を後にしていった。その後ろ姿をメインティア王は呆然とした表情で見送るのだった。

第五百八十六話　怒ってる？

ビックリした。一体何事かと思った。

朝、いつもの通りアガルタに出勤すると、兵士たちが俺の到着を待ちかねていた。フラディメ王国のメインティア王とリボーン大上王が来ていると言って、困った表情を浮かべていたのだ。

その報告を聞いたとき、俺は二人が連れ立ってアガルタにやって来る理由がわからなかった。しかも、報告によれば、二人は転移結界を使ってやって来たのだと言う。ということは、余程のことがあの国で起こったのかもしれない。そう判断した俺は、取るものも取り敢えず、二人が待つ迎賓館に向かったのだった。

「これはアガルタ王、久しぶりじゃ。いきなり押しかけてきて、すまぬことをした」

俺の姿を見るなり、大上王は立ち上がって大股で俺のところまでやって来て、力強く手を握った。何もそんなに力を込めなくてもいいのに、全力で握ってきたのだ。しかも、距離が近い。その圧力たるや、生半可なことではない。

チラリと視線を移してみると、メインティア王が魂が抜けたような状態になっていた。いわゆる、放心状態というやつだ。いつも笑みを浮かべながら、余裕たっぷりに振舞うこの王にしては、珍しい姿だ。

大上王は俺の手を握ったまま放さず、ほぼ無理やり自分が座ってい

た席まで俺を移動させた。そして、俺を座らせると、目をギラギラと輝かせながら口を開いた。

「友好の花を駆逐する報告書、読ませていただきましたぞ」

「え？　もう、ですか？　あれは昨日お送りしたはずでは？」

「そうじゃ。早速、読ませていただきましたのじゃ。見事の一言に尽きますな。さすがはメイリアス殿じゃ。大賢者にふさわしい内容であった」

……ヒマか、このジイさん。メイから提出された報告書は、そのあまりの分量と内容の多様さに、俺では理解することができずに、結局、結論だけを口頭で聞いたのだ。そして、その夜はメイと一緒に寝る予定だったのだが、彼女はベッドの中でも報告をしようとするので、無理やりキスで口をふさいで、そのまま押し倒したのだった。

……いや、確かに、乱暴な振る舞いであったことは認める。だが、考えても見て欲しい。一糸まとわぬメイの体がそこにあるのだ。誰が我慢できようか。あの顔で、あの澄んだ瞳で、少し顔を上気させたメイの顔が目の前にあるのだ。数式がどうの、化学反応がどうの、といった、難しい話を聞いている場合ではなかったのだ。

メイも十分に説明したかっただろう。うん、それはわかる。ナイス・ガイ、ならば、彼女の話をゆっくりと聞きながら、優しくその髪の毛を撫でただろう。そして、甘い言葉をささやきながら、「メイはすごいね」などと言うセリフを吐くだろう。俺も本気を出せばそのくらいのことはできるのだが……すまん、昨日の俺には、できなかった。

言っておくが、メイは怒ってはいないはずだ、たぶん。俺のことを大好きだと言ってくれたし、俺もウルトラ優しくしたのだ。見せるわけにはいかないが、それは、声を大にして言っておきたい。

……すまない。現実に戻ろう。目の前に座る大上王と対峙しなければ。

「……という点には、このリボーン、殊の外感心しましたぞ。あれは実に見事じゃった。うむ、見事じゃった。あの報告書には、褒めるところしかない」

「……父上」

メインティア王が、さも迷惑と言わんばかりの表情で口を開いている。大上王はその息子に鋭い視線を投げかけたが、すぐに元の表情に戻り、懐から数枚の紙を取り出して、俺の前に置いた。

「本来ならば、メイリアス殿にお会いして、聞いておきたかったのじゃが、メイリアス殿もお忙しいじゃろう。すまぬが、これを、メイリアス殿にお渡し願いたい」

「ええと、これは？」

「ウム。報告書を読んで読み込んで、その上で儂に理解できなんだ個所がいくつかあってな。儂の理解がこれでよいのかどうかを確認したいのじゃ。それに、友好の花を駆除するためには、フェリーラットを使うとあった。我が国でもこのネズミには大きな被害を受けておってな。その昔、儂がこのネズミをおびき寄せる罠を考え出したのじゃ。それは今でも、我が国で活用されておる。僭越ながら、その手法もここに書いておいた。メイリアス殿、ひいては貴

国のためになろう」

中身を見てみると、これまた難解な内容がビッシリと書かれていて、俺の理解では到底追いつかないものだった。

「これは……妻でしかわからない内容ですね」

俺は思わず苦笑いを浮かべる。ふと大上王を見ると、彼は目を爛々と輝かせながら俺に視線を向けている。何という圧力だ。何だか、呼吸が苦しくなってくる。メインティア王が首を振っている。どうやら、この親父を早く何とかしてくれと言っているようだ。俺は目を閉じて魔力を集中させて、メイに念話を送る。

『メイ、メイ』

『はい、どうされましたか？』

『リボーン大上王が来ているんだ』

『え？　アガルタにですか？』

『そうなんだ。メイの報告書を昨日、サダキチに命じて大上王に送ったんだけれど、それを読んで今、アガルタに来ちゃったんだ』

『……』

『でね、メイの報告書を読んで、理解できないところがあるらしいんだ。それをまとめた紙を受け取った。そこには、フェリーラットを効果的に捕まえる方法も書かれているらしいんだ……』

『是非、それは拝見したいです。もし、大上王様さえよろしければ、大学にお越しいただきたいです』

『え？　いいの？』

『もちろんです。今、シディーちゃんとセルロイトさんもいますので、大上王様にお答えすることは十分に可能かと思います』

『セルロイトちゃんに大上王を会わせるのか？　大丈夫か？　このジイさん、圧力凄いぞ？　セルロイトちゃん、気絶しないか？』

『ご冗談を』

メイの声は何だか嬉しそうだった。俺は少し寂しさを覚えながら、目を開ける。

「もし、大上王様さえよろしければ、妻のいるアガルタ大学においでになりますか？」

「何と！　儂のために、メイリアス殿が時間を割いてくれるというのか？」

「ええ。問題ないと思います」

「ううむ！　ううむ！　さすがはアガルタじゃ。うむ、行き届いておる。行き届いておいでじゃ！」

大上王はスッと立ち上がり、満足そうな表情を浮かべて天を仰いだ。俺は兵士を呼び、彼を大学まで案内するように小声で命じた。大上王は兵士たちに案内されるままに、部屋を後にしていった。

「やれやれ、助かったよ……」

大上王の姿が消えた瞬間、メインティア王は、椅子にダラリと体を預けた。その態勢のまま彼は俺に視線を向け、さらに言葉を続けた。

「大変だったのだよ。いきなり夜に寝所に踏み込まれて、そのまま部屋に閉じ込められたのだ。そして、朝六時キッチリに父上がやって来て、私と共にアガルタに転移するよう命じたんだ。転移するなんて一瞬だろう？　それからずっとこの部屋で父上と一緒だったんだ……君ならわかるだろう？　私の苦しみが」

「まあ、お疲れ様と申し上げるほかはないですね」

「全く、父上の体はどうなっているんだろうね？　どこにあんな体力があるものかね？」

「よく似ていると思いますよ。親子だなと思いますもの」

「私と父上が？　よしてくれよ、私は母上に似たのだ」

「まあ、見てくれはそうかもしれませんが、中身は大上王様ですよ。だって、女性のこととなれば、昼も夜も関係なく働けるじゃありませんか」

「イヤなこと言うね、君は」

「まあ、せっかくアガルタに来たのです。このまま帰るつもりはないのでしょう。どうぞ、オンサール君に会って遊んでやってください」

「ああ、元よりそのつもりだ。しばらく、この国に厄介になるつもりだから、よろしく頼むよ」

そう言ってメインティア王は足早に部屋を出て行ってしまった。

俺はフッと笑みを浮かべたが、少し気になることがあったので、再び目を閉じてメイに念話を送る。

『メイ、今から大上王がそちらに向かう。頼むぞ』

『……承知しました。お任せください』

『メイ……』

『はい、何でしょうか』

『昨日のこと、怒っていない？』

しばらくメイから念話が途絶えた。心の中に、不安が湧き上がってくる。

『ご主人様』

『はい』

『全然、怒っていません。昨日は……とても、よかったです。大好きですよ、ご主人様』

メイの言葉を受けて、俺はスッと目を開けた。今日は何だか、いい

ことが起こりそうな気がした。

第五百八十六話　怒ってる？（後書き）

コミカライズ版１９話、１２／１　１２：００まで無料公開中です。メイちゃんが、かわいらしく描かれています。是非、チェック下さい！（ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ？ｃａｔｅｇｏｒｙ＝１４）

コミックシーモア様で展開中の、「電子コミック大賞２０２１」。異世界部門で『結界師への転生』がノミネートされています。１１／３０まで投票受付中！　誰でも投票できますので、是非、ご参加ください！

第五百八十七話　心配はいらない

それから一週間後、俺は、アガルタ軍本部の広場に来ていた。ここは基本的に兵士たちの訓練に使われる場所だが、この日は、そこには人影は見られずに、辺りは閑散としていた。

フッと空を見る。雲一つない晴天だ。だが、俺の心は晴れてはいなかった。

気を取り直して、再び視線を広場に向ける。

「サダキチ」

一瞬の間をおいて、フェアリードラゴンのサダキチが姿を現す。その直後、彼の後ろに数十匹のフェアリードラゴンたちが姿を現した。

『……多いな』

『手の空いている者、全員を集めました』

『うん、これだけいれば十分だ』

俺は右手を地面に向けて転移結界を張る。すると、そこに数十本の友好の花が現れた。

『それでは、この花をそれぞれ持ってくれるかな』

俺の言葉に、フェアリードラゴンたちは両手に花を握っていく。す

ぐ近くだが、光の速さで移動できるのだから飛んでいけばいいと思うのだが、彼らはペタペタと足音を鳴らしながら歩いて花を取りに行く。何だかペンギンみたいでかわいい。俺の周囲が和んだ空気になっている。

彼らは相変わらずペタペタと足を鳴らしながら、元居た場所に戻って整列する。この光景をドラゴン好きのアリリアが見たらきっと、悶絶するだろう。

『……ええと、それでは、よろしいでしょうか』

ほっこり和んでいるところに、サダキチの声が聞こえてきた。俺はハッと我に返る。

『……オホン。君たちのミッションは、先にサダキチに伝えたとおりだ。難しいこともあるかと思うが、万難を排してミッションをコンプリートして欲しい。健闘を祈る。以上だ』

……何だ？　フェアリードラゴンたちがキョトンとしている。しまった。言葉が難しすぎたか？　俺はもう一度咳払いをして、彼らに向けて口を開く。

『本日の作戦は、サダキチから聞いていることと思う。困難を伴う作戦ではあるが、万難を排して遂行してほしい。健闘を祈る。以上だ』

『あの……』

『何だ、サダキチ』

『困難を伴うと言われましたが、今回の作戦は、さほど難しいとは思いませんが……』

『そうか。それならばいい。だが、無理をする必要はない。時間をかけても構わんから、作戦を完了させてほしい』

『あの……心配は、いりません。三分あれば十分かと……』

『ほう、言うじゃないか。では、見せてもらおうか、フェアリードラゴンのスキルとやらを。全員出撃せよ』

三分って言いやがった。俺としてはかなり気を使ったつもりなのだが、彼らにそれは無用だったようだ。割と難しいミッションだと思うんだけれどな。それを三分とはサダキチも強気に出たものだ。まあいい。お手並み拝見といこうじゃないか。いや、別に時間がかかっても構わないんだ。三分で完了できなかったからと言って、責めたり怒ったりすることはない。それよりも、全員が失敗なく、生きて帰ってくることが重要なのだ。だから……あれ？

『おい、どうした？　なぜ全員出撃しないんだ？　早く……』

『いえ、完了しました』

『え？　命令を出してから、一分も経っていないんじゃないのか？』

『ええ。そんなに難しい作業ではなかったものですから……』

俺が綿密に考えた作戦を、作業と言いやがった……。いや、ここで動揺を悟られるわけにはいかない。気合を入れるんだ。

俺は背筋を伸ばし、整列しているフェアリードラゴンたちに向けて、少し大きめの声で口を開く。

『諸君たちの働き、ご苦労だった。作戦の結果が楽しみだ。褒美については後日、君たちの里に届けよう。解散！』

俺の言葉と同時に、フェアリードラゴンたちは一瞬で姿を消した。

「さて、どうなるかね」

ふと空を見上げる。そこには、先ほどと変わらぬ、見事な快晴が広がっていた。

◆　◆　◆

リノスの作戦決行から二週間後、アフロディーテの教皇神殿では、ヴィエイユが一通の報告書に目を通していた。それは、フォーアル大公国に派遣していた、枢機卿からのものだった。

そこには、テイスト大公の病が平癒したことと、大公国が新・クリミアーナ教国との国交断絶を宣言した旨が記されていた。

ヴィエイユは目を細めながら報告書を眺める。クリミアーナ教国が全力でかかれば、フォーアル大公国は二日ですべてを失う。で、あるにもかかわらず、教国と国交断絶を宣言するという強気の発言は、どこからくるのだろうか。その答えはすぐに見つかった。

……フォーアルとアガルタが手を結んだ？

ヴィエイユは一旦報告書から目を離し、スッと窓の外を見た。太陽

の光が柔らかに差し込んできている。そこに広がる大海原は見事だ。波も穏やかで、そこには平和そのものの光景が広がっている。

だが、ヴィエイユの心臓は鼓動が速くなっていた。イヤな予感がする。彼女は壁に掛けてある巨大な世界地図に視線を向ける。

フォーアルがアガルタに付いたとなると、このアフロディーテは三方から包囲されている格好になる。まさに、敵中の中の最前線にこの教都が位置している格好となるのだ。

東側のサンダンジ軍が海を北上して、北方からの軍勢をけん制する。その間に、西側のラッカー率いるサブクリナー軍がアフロディーテに向かう。我々は全力でラッカーを迎え撃つ。そうしている間に、アガルタ本軍がこの教都を突く……。そうなれば、勝ち目はない。

そこまで考えて、ヴィエイユはフッと笑みを漏らす。下らない。そんなことは、あろうはずはないのだ。そのとき、一人の枢機卿がまるで転がるようにしてヴィエイユの執務室に飛び込んできた。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

「ど……どうしたのです、エルモイル枢機卿？　落ち着いてください」

彼は顔面蒼白だった。何か、とんでもないことが起こったのはそれで充分察することができる。だが、ここで狼狽えてはいけない。ヴィエイユは自分にそう強く言い聞かせて、できるだけ余裕たっぷりに見えるように、肩を張った。

「も、申し上げ、ます」

彼はそこまで言うと、両目を激しく左右に動かしたかと思うと、何かを口ごもり、そのまま項垂れてしまった。

「どうされたのですか？」

努めて笑顔を浮かべながら、優しい言い回しで、彼に報告を促す。若い枢機卿は肩を動かしながら息を整えていたが、やがて意を決したように、顔を上げた。

「アフロディーテの至る所に、友好の花が生えています」

「……え？」

「アフロディーテの、至る所に、友好の花が生えているのです。それも、一カ所や二カ所ではありません。今、確認したところでは、およそ十二カ所において、友好の花が生えていることが確認されました。目下、調査中ではありますが、花の数はさらに増えるものと思われます」

「なぜ、友好の花がこのアフロディーテに？　まさか、研究所から飛散したのでしょうか？」

「原因はわかりません。それも調査中です」

「わかりました。友好の花が生えている場所の把握と、流出した原因を特定してください」

「は……はは っ」

「それと……オルファレス大魔導士を呼んでください。……いえ、オルファレスさまに、すぐに友好の花を駆除してもらうよう伝えてください」

「し……承知いたしました」

枢機卿はまるで飛び上がるようにして、ヴィエイユの許を去っていった。パタパタと彼の足音が遠ざかる。

「きょ……教皇聖下……」

ヴィエイユの身の回りを世話する女性が、心配そうな眼差しを向けている。ヴィエイユはフッと笑みを浮かべると、彼女に向けてゆっくりと口を開く。

「何も心配はいりません。大丈夫です。何も、心配は、いりません」

まるで自分に言い聞かせるようにして、彼女は何度も頷く。そして、椅子から立ち上がると、勢いよく窓を開けた。潮の香りのする、いい風が彼女の体を包み込む。

「いい風だわ」

ヴィエイユはこのとき、自分の運命が終わりに近づいているような感覚に囚われていた……。

第五百八十八話　動き出す

それから一ヶ月後、新・クリミアーナ教国の教都、アフロディーテは閑散としていた。

いつもは、白い衣装を纏った者が多く行き交い、賑わいを見せているこの街が、今では一人の姿も見当たらなくなっていた。

これは、教皇・ヴィエイユの命令で、教都には厳しい外出制限を設けているためだった。言わば、この都には戒厳令が敷かれ、住民は自由に外出することができなくなっていた。

その理由は言うまでもなく、この都のあちこちに生えている友好の花だった。数十カ所に生えたこの花は繁殖し、その範囲を確実に拡げていたのだ。

これに対して、ヴィエイユも手をこまねいていたわけではなかった。ＬＶ５の火魔法を使うことができる魔導士を惜しげもなくつぎ込み、花の駆除に当たらせていた。加えて、クリミアーナ医学研究所にも、花の駆除方法を早急に確立するように命令していた。だが、当初は有効とされた火魔法での駆除は早々に失敗し、駆除方法についても暗礁に乗り上げていた。ここに至って、教国内では万策尽く、の感情が湧き上がり、一部の枢機卿からはこの教都を捨てて、別の地への遷都を進言するものまで出る有様だった。

しかし、ヴィエイユにこの教都を捨てる考えは微塵もなかった。彼女は花の駆除に全力を注ぐ一方で、これ以上花が拡散しないよう、最大限の手を打った。その最たるものが、教都に住む者たちへの外

出禁止令だった。

ヴィエイユが恐れたのは、人々の好奇心から花が持ち去られ、それが別の場所で根付いていくことだった。人々の往来を最小限にとどめ、生えてきた花を焼却し続けることで、何とか拡大を抑えることに成功していたのだった。

ただ、聡明なヴィエイユにはわかっていた。この手段がいつまでも効果を発揮する物ではないことを。この問題を解決するためには、一刻も早く、花の駆除方法を確立することだった。

一方で彼女は、フォーアル大公国の動向にも注意を払っていた。これまで沈黙を貫いてきたあの国が、突然掌を返したかのように、クリミアーナに対して強硬な姿勢に出たのだ。その最たる者が、クリミアーナ教の信者の国外追放だった。枢機卿を追放するのであれば、まだわかる。だが、己の国民を追放するのだ。大公がクリミアーナとの決別を考えているのは、火を見るよりも明らかだった。

この姿勢はおそらく、友好の花の駆除方法が確立されたからであるとヴィエイユは考えていた。そこには、アガルタの支援があることは容易に想像がつく。一体、どんな手段を使ったのか。妃であるメイリアスをはじめとして、このクリミアーナに勝るとも劣らない学者がアガルタにはいる。それらの英知を結集させて、魔法以外の駆除方法を確立したのだとヴィエイユは確信していた。ただ、それが一体、どんな方法であるのかは、さすがの彼女の頭脳をもってしても、想像することすらできなかった。

日々刻々と彼女の許には、友好の花の状況が報告されてくる。そのどれもが芳しいものではなく、彼女はイライラを募らせていった。

「教皇聖下、お願いがございます」

突然、男の声が聞こえた。彼女の前に立ったのは、枢機卿のロン・エスロテルだった。彼は相変わらずヴィエイユの眼をじっと見つめてくる。そんな彼に心の動揺や葛藤を悟られまいと、彼女はできるだけ余裕のある雰囲気を醸し出しながら、ゆったりと話しかける。

「何でしょうか？」

「誠に恐れ入りますが、マタカ枢機卿をアガルタに派遣いただきたく、お願い申し上げます」

ロン・エスロテルの言葉の意味がいまいち理解できずに、ヴィエイユは返答に窮した。

マタカ枢機卿は、フォーアル大公国の大公であるテイストの姪であるセルロイトを篭絡し、己の意のままに操ろうとしたものの失敗し、這う這うの体でこのアフロディーテに逃げ帰っていた。今は、次の任地が決まるまで自宅において待機している状態だった。そんな彼を、こともあろうにアガルタに向かわせるというのだ。ヴィエイユが理解に苦しむのは、自然なことと言えた。

ロン・エスロテルは、そんな彼女の心情を十分に察しているかのように、まるで噛んで含めるような言い回しで、言葉を続ける。

「私が調べたところによりますと、アガルタには、セルロイトがいるとのことです」

「そのような情報は、どこから入手されたのでしょう？」

「それは申し上げられません」

「では、その情報を信じることはできません。お下がりください」

「お待ちください、教皇聖下。……わかりました。申し上げます。アガルタのボンイサオ男爵でございます」

「ボンイサオ男爵？」

「左様でございます。あの、ジレットが領内で諜報活動を行っておりました、あのボンイサオ男爵でございます」

「なぜ、ボンイサオ男爵がそのような情報を？」

「フリーマン支部長が、かねてから連絡を取り合っておりました。彼には、フリーマンを介して、アガルタの情報を可能な限り報告するよう求めておりました。男爵はわざわざ都に出向いて情報収集を行いまして、そこで、アガルタ大学において、アガルタ王の妃であるメイリアスが、何かの研究に没頭しているとの話を入手しました。そこには、セルロイトの容姿に酷似した女性が傍についているとのことでございました」

「わかりました。しかし、どうして、ボンイサオ男爵からの情報を私に秘匿する必要があったのでしょう？　疑問ですね」

「失礼しました。ボンイサオ男爵につきましては、ジレットが担当しておりました。その彼の許可なしにフリーマン支部長と私は、男爵に対して指示を出しておりました。言わば越権行為をしたのでございます。その罰は甘んじて受ける所存でございます」

ロン・エスロテルは涼やかな目でヴィエイユを眺めている。彼女は腹の中で食えぬ男だと呆れていた。今、彼を罰すれば、貴重な情報を報告した者を罰すれば、信徒たちにどのような影響を与えるのか、考えるまでもなかった。

……この情報の信ぴょう性如何で、この男の処分はどうとでもできる。

ヴィエイユはそんなことを考えながら、白髪の男と対峙する。

「マタカ枢機卿をアガルタに派遣する件については、一度、検討します」

彼女の言葉に、ロン・エスロテルは恭しく頭を下げた。男が下がり、執務室に誰も居なくなったのを確認すると、ヴィエイユはゆっくりと手を二回鳴らした。

「お呼びでございますか」

ヴィエイユの秘書を務める女性が現れる。その女性に、彼女は凛とした声で命じる。

「着替えを用意してください。出かけます」

「お出かけ……でございますか？　あの……どちらへ？」

「取り急ぎ、着替えを用意してください。それと……研究所から、アロン様を呼んでください」

「アロン様？」

「医学研究所で勤務している、ポーセハイのアロン様です」

「し……承知いたしました」

女性は恭しく頭を下げてその場を後にした。

◆◆◆

「今、かい？」

「はい」

俺はため息をつきながら兵士の顔を見る。彼は真剣な眼差しを俺に向けている。それはそうだろう。ヴィエイユが突然、アガルタ軍本部の入り口に現れたのだから。兵士たちがいるのもお構いなしに転移してきたようだ。小娘の傍には、困った表情を浮かべたポーセハイがいたらしい。おそらく、ぶりっ子全開でヴィエイユから無茶なお願いをされたのだろう。彼には休暇と癒しの時間を与えるようチワンに言っておくことにしよう。

ヴィエイユは戸惑う兵士たちに堂々と名を名乗り、緊急のことだと言って、俺に面会を求めているのだという。俺は兵士に応接室に通すよう命じて、ゆっくりと立ち上がった。

「さて、お仕置きの時間、だな」

空は曇っていて、今にも雨が降り出しそうな天気だった……。

第五百八十九話　無茶苦茶

応接室に入ると、ヴィエイユは立ったまま俺を出迎えた。その表情は硬く、何かの決意を秘めているようにも見えた。

「まあ、立ち話も何だ、座れ」

着席を促されて、ゆっくりとヴィエイユはソファーに腰を下ろした。いつものような色気のある雰囲気はない。白い衣装を纏ってはいるが、胸元を強調してはおらず、ごく、シンプルな、清楚さを強調した衣装だ。

その彼女の後ろでは、戸惑いの表情を浮かべているポーセハイがいた。聞けば、ヴィエイユが強硬に彼を同席させたいと言い張ったのだとか。教皇だけに強硬な姿勢ってか？　そんな下らぬことを考える。俺はポーセハイの彼に、別室で休むようにと勧めたが、ヴィエイユは彼を目で制して、その場所にとどまらせた。

「どうした、ヴィエイユ」

俺は半ば呆れながら諭すが、彼女はキッとした目で俺を眺める。

「いえ、ご心配には及びません。時と場合によりまして、すぐにアフロディーテに帰還せねばなりませんので」

「ずいぶん、忙しそうだな」

「ええ。お陰様で」

何とも冷え冷えとした沈黙が部屋を重苦しくしている。ヴィエイユは相変わらず俺に視線を向けたままだ。何かを話したいらしいが、そのきっかけをつかめないでいるらしい。いつもズケズケとモノを言うこの娘にしては、珍しい光景だ。

「で、今日は何だ？」

「友好の花の駆除方法をお教えいただきたくお願いに上がりました」

ヴィエイユは一気にそうまくし立てて、再び俺に真っすぐな視線を向けた。いきなり本題から入ってくるところをみると、アフロディーテでは、俺の予想を超える速さで花が拡散していっているのか。そんなことを考えたとき、ヴィエイユが突然口を開く。

「我がアフロディーテにおける友好の花の拡散は、今のところ防ぐことができております。しかしながら、花の完全な駆除までは至っておりません。このままでは我が教都は、友好の花に飲み込まれてしまいます。従いまして、アガルタ王様にその花の駆除方法を教えていただきたく、緊急に参った次第です」

「ほう、俺たちが……」

「アガルタが友好の花の駆除方法を確立したことは、容易に想像がつきます。そして、我が国にあの花を拡散させたのも、アガルタであると確信しております。このようなことができるのは、世界広しと言えども、アガルタ王様のみであると信じております。私は、アガルタ王様が友好の花を我が教都に拡散させたことに関して、とやかく言うつもりはございません。ただ、このままでは我が教都は、我が国は滅んでしまいます。それは何としても避けねばなりません。

それ故、本日は花の駆除方法をお教えいただきたくお願いに上がった次第でございます。そして、その条件を承りたく、お願い申します次第です」

「条件……か」

「はい。私は、今回、アガルタ王様に完全に敗北いたしました。花の駆除方法をお教えいただけるのであれば、どのような条件でも受け入れるつもりでございます」

「どのような条件でも、か？」

「はい」

「俺の奴隷になれと言われれば、なるってか？」

「喜んでなります」

「死ねと言えばどうするんだ？」

「喜んでこの命を差し出します」

「お前の嫌いなラッカーに抱かれろ、と言われれば、どうする？」

「……致し方、ございま、せん」

「……そこは即答しろよ」

やはり、ラッカーは生理的に嫌いらしい。ちなみに、だが、ラッカーはソレイユからの報告によれば、サイリュースのリジアとそれは

それは仲良くやっているらしい。むしろ、今、ヴィエイユが乗り込んでいったとしても、歯牙にもかけないかもしれない。そんなことを考えていると、再びヴィエイユの声が聞こえた。

「条件を承りたく存じます」

雑談などは一切する気がないらしい。早く条件交渉を終わらせて、すぐにアフロディーテに取って返したいようだ。相変わらずこの娘の機を見るに敏な姿勢は、感心する。

友好の花が拡散する可能性が極めて高いアフロディーテの現状は確かに、ヴィエイユにとって危機的状況だろう。だが、その状況を短期間で脱することができれば、この娘の評価は大きく跳ね上がることになる。ヴィエイユは今の災いを転じて福となそうとしているのだ。というより、それをすることでしか、今の地位にいられないことが、この娘は正確に理解していた。

早く条件を言え。彼女の眼がそう言っている。俺は大きなため息をつきながら、ゆっくりと口を開く。

「どうやら今のお前は俺と雑談をする気はないようだな。まあ、いいだろう。条件を出そう」

ヴィエイユの背筋がスッと伸びる。そして、その表情がさらに強張った。

「ネズミのフェリーラットをクリミアーナ教国に販売する」

ヴィエイユがキョトンとした表情を浮かべている。少し、頭も右側に傾いている。どうやら、俺の答えが予想外のものだった上に、内

容もいまいち理解できないようだ。

「友好の花の駆除に最も効果があるのは、フェリーラットであることがわかったのだ。取り敢えず、メイたちが用意したネズミを使って実験をしたところ、フォーアル大公国の友好の花は完全に駆除された。完全に、だ。どういう仕組みで花が枯れたのかは俺は知らんが、完全に花は枯れた。その、花を枯れさせることのできるネズミを、お前たちに販売しようというのだ」

「承知しました。お値段はいかほどでしょう？」

「ネズミ一匹に対して、大金貨千枚だ」

「千枚……承知しました」

ヴィエイユの顔が強張っている。俺がサダキチたちに命じて持ち込ませた友好の花は数十本だったが、今は確実に二百本を越えている。この娘のことだ。アフロディーテにおける友好の花の数は把握しているだろう。その上で、およそ二十万枚の金貨であれば、懐は痛むだろうが、出せない金額ではないと踏んだのか、相変わらず表情は強張っているものの、その双眸には光が宿っている。ちなみに、この世界における大金貨一枚の価値は、日本円にして一千万円だ。

「それでは、そのネズミを一千匹頂きたく、お願い申します」

「一千匹？」

「左様でございます」

大金貨にして百万枚だ。日本円に換算するといくらになる？　ええ

と……十兆円か。小国の国家予算に匹敵する額だが、この娘は、別にローンの相談をしてくることもなく、それを支払うと言っている。まあ、クリミアーナの支配地域からかき集めれば、何でもないのかもしれない。

「わかった……と言いたいところだが、あいにくそんなに数はいないんだ。そうだな……取り急ぎ、百匹を用意しようか」

「承知しました。すぐに代金は持って参ります。恐れ入りますが、先に一千匹分の代金をお支払いさせてくださいませ。そして、ネズミが用意でき次第、早急にアフロディーテに送ってくださいませ」

「待て」

「はい？」

「ネズミの販売数はこちらが決める。販売時期もこちらが決める。そして、販売価格も、俺が決める。それが、条件だ」

「え？」

ヴィエイユは一瞬、キョトンとした表情を浮かべたが、やがてすべてを理解したのか、徐々にその顔が青ざめていった。

「もう一度言う。俺からの条件は、新・クリミアーナ教国は、アガルタからフェリーラットを未来永劫、購入し続けなければならない、というものだ。その販売数、販売時期、販売価格はすべて、アガルタが決めることとする。それに対して、新・クリミアーナ教国は一切の交渉権も拒否権も認められない。以上だ」

「そ……そんな……無茶苦茶な……」

ヴィエイユはそこまで言うと、口をポカンと開けたまま固まってしまった。

第五百九十話　引き金を引く

それからヴィエイユは約三十分、部屋に居座った。別に反論したり、交渉しようとしたりしたわけではない。ただ、オロオロとした様子を見せて、時おり俺に何か話そうとする……。そんなことを繰り返していたのだ。

いつもの余裕たっぷりで、自信満々に振舞う様子は微塵もなく、これがあの、クリミアーナ教国を率いる教皇かと思われる程の姿だった。そこには、単なる少女がいるだけだった。

結果的にヴィエイユは、しばらく考えさせてくださいと言って、その場を去ろうとした。俺は敢えて何も言わなかった。ヴィエイユに残された道は二つしかない。俺の条件を受け入れるか、自力で友好の花を駆除する方法を確立するかだ。だが、後者を選択するには、あまりにも時間がなさすぎる。駆除方法を確立したときには、すでにアフロディーテが花で埋まっている。

遷都……という方法もないわけではないだろうが、それをすると、確実に彼女の求心力は低下する。激しい権力争いがクリミアーナの中で起こるだろう。花と権力闘争……。内に二つの敵を抱えてしまっては、いかにヴィエイユとはいえ、今の地位に留まるのは難しいだろう。

彼女は呆然とした状態のまま、力なく、傍に控えていたポーセハイに向かって何かを呟いた。すぐに彼女の姿は消えた。アフロディーテに帰ったのだ。

俺は念のため、ポーセハイの棟梁であるチワンに念話を送り、ヴィエイユを連れて帰ったポーセハイをフォローするように伝えた。彼は心配いりませんと言って笑っていた。

誰も居なくなった部屋を見廻す。見慣れた光景だが、何だか、部屋の雰囲気が変わったような気がした。

「何だかな、全く」

俺は思わずフッと笑みを漏らすと、ゆっくりと立ち上がって、いつもの執務室に帰った。

◆◆◆

「……やっぱり、心が痛みますの？」

小さな声で呟いているのは、リコだった。彼女は一糸まとわぬ姿で、俺の腕の中にいた。俺は図星を突かれてしまい、何も言うことができずにただ、リコの体を撫で続ける。

いつもながら、本当に美しい肌だ。こうして背中を撫でていると、心が落ち着いてくる。

「でも、後戻りは、できませんわ。リノスも、覚悟を決めませんと」

「そうだな」

そう言って俺は、抱きしめている腕に少し力を籠める。

……俺の心の内は、完全にリコに読まれていた。今回のことで、も

しかすると、いや、高い確率でヴィエイユは命の危険にさらされるだろう。その上、クリミアーナ教国内では、多くの人の命が危機に晒されるかもしれない。また、多くの人の命が失われるような事態を、その引き金を引いたかもしれないのだ。ふと、冷静になって考えたとき、やはり、俺の心の中は迷いと戸惑いが渦巻いた。

しかし、ヴィエイユのやったことは、到底許されることではない。これが一番の方法なのだ。そう何度も自分に言い聞かせた。

帝都の屋敷に帰り、家族に今日のことを伝える。俺としては、そうした迷いを一切見せずに説明したつもりだった。極めて冷静に、端的に、だ。

メイ、シディー、ソレイユ、マトカル……。皆、俺の決断に全幅の信頼を置いてくれているのがよくわかった。マトカルなどは、アフロディーテに内乱が起こったときのことを想定して、兵士の訓練をしておこうとまで言ってくれたのだ。マトにはそうしたことは一切言っていなかったのに、彼女はちゃんと俺の心底を理解してくれていた。

正直言って、うれしかった。言葉には出さないが、他の妻たちの優しさも伝わって、俺は救われた気持ちになったのだ。

そして夜、ベッドに入ると、リコがやってきた。イデアを連れているかと思ったが、今夜は一人だった。いつもはイデアと共にやって来て、川の字になって寝る。そして、色々なお話をしてやりながら、彼を寝かしつけるのがいつものパターンなのだが、この日はイデアを先にシディーの部屋で寝かせたのだそうだ。

シディーも快く迎えてくれたし、何より、妹のピアトリスが喜んだ

のだと言う。彼女はイデアお兄ちゃんが大好きで、いつもベッタリしている。リコや他の妻たちにも懐いていて、その愛くるしい笑顔も相まって、我が家のムードメーカになりつつあるのだ。

そんな話をしながらリコは、ブラシで髪の毛をとき、寝る準備を始める。てっきりそのままベッドに入ってくるかと思ったが、リコはそんな他愛のない話をしながら、着ているパジャマをゆっくりと脱いで、一糸まとわぬ姿になったのだ。

いつもとは違う展開に、少し動揺してしまった。ここ最近は、年齢を重ねてしまったという理由で、自分から服を脱ぐことはなかったので、余計にリコの体が、いつもよりも美しく見えた。心臓の鼓動が高鳴るのを、止めることができなかった。

確かに、いつものように、優しく唇を重ね合い、色々な言葉をささやき合いながら、優しく彼女を愛していく段取りとは違っていたのかもしれない。今から考えると、少し乱暴に、性急にコトを運んでしまったのかもしれない。すまなかった……そんな言葉を口にしようとしたとき、不意にリコが顔を上げて、じっと俺の顔を見つめた。

「……たとえ、世界中が敵に回ったとしても、私は、リノス、あなたの味方ですわ」

「……リコ」

「あなたが悪魔に魂を売ったとしても、私は、あなたの許を離れることはありませんわ。だからリノス、迷わずに……」

リコはそれ以上言葉を発しなかった。俺が、キスで彼女の唇を塞いだからだ。

◆　◆　◆

同じ頃、新・クリミアーナ教国の教都アフロディーテでは、枢機卿たちが戸惑いの表情を浮かべていた。教皇であるヴィエイユが、部屋から出てこないのだ。

クリミアーナ教国は、すべての決済を教皇が行うシステムとなっていた。そのため、ヴィエイユが執務室に現れない限り、決済が行われることはない。彼女の机の上には、朝から積まれた書類が山となっている有様だった。

「教皇聖下にあらせられては、本日はご不快か何かで？」

穏やかな笑みを浮かべながら、若い枢機卿たちに話しかけているのは、ロン・エスロテルだった。彼は、教皇神殿の執務室で途方に暮れる枢機卿たちに向かって、まるで労をねぎらうように、優し気な口調で話しかける。

「体調が悪いわけではないのですか？　ではどうして？　……まあ、教皇聖下もお疲れなのでしょう。たまには、休息も必要です。あなた方も大変ですね。今日はずっと教皇聖下のお出ましを待っておいでだったのでしょう？」

「ハッ……。何度もお出ましいただけるようにお願いに上がったのですが……」

「ほう、珍しいこともあるものだ。今までなかったのではないですか？　それだけお願いに上がったにもかかわらず、教皇聖下が一度も執務室においでにならなかったのは」

「ハッ……」

「まあ、そういうこともあるでしょう。このような珍しい場面に遭遇できたのです。あなた方は、大変に運がいい」

「そのような……」

「あなた方も、今日はおやすみなさい。お疲れでしょう。ここまで待っても教皇聖下はおいでにならないのです。もう、今日はおいでにならないと見てよいでしょう。もし、咎められたのであれば、私の名前を出していただいて結構ですから」

若い枢機卿を下がらせたロン・エスロテルは、部屋の中をぐるりと見廻すと、懐から一枚の紙を取り出して、じっと眺めた。そこには、マタカ枢機卿をアガルタに派遣するための内容が記されていた。

彼はフッと笑みを漏らすと、手に持っていた紙を再び懐にしまうと、ゆっくりと部屋を後にしていった……。

第五百九十一話　自信満々

ヴィエイユから返答があったのは、それから三日後のことだった。

彼女はたった一人で俺の前に現れた。そして、アガルタ王様からのご提案をすべて受け入れます、と敢然と言い切った。その顔に笑顔はなかった。

俺はあらかじめ用意させていた書簡を持ってこさせ、ヴィエイユにサインをするように命じた。そこには、先日俺が提案した内容が書かれていて、言ってみれば、契約書というわけだ。

ヴィエイユは、何のためらいもなく、そこにサラサラとサインを書き入れ、懐からスポイトのようなものを取りだして、自身の親指に当てた。すると、みるみる親指が赤く染まっていく。どうやら、あの器具で血を吸い出しているようだ。

彼女は赤く染まった親指を契約書に押し当てた。契約書は複数枚用意してあったのだが、ヴィエイユはまるで、流れ作業のごときスムーズさで、次々と血判を押していった。

その後、俺も契約書にサインをして、血判を押す。結果的に判を押した契約書は六枚になった。

それらの契約書は、それぞれが三枚ずつ持ち合うこととした。俺は、一枚はアガルタで管理し、あとの二枚は、ヒーデータ帝国とニザ公国で管理してもらおうと考えている。ヴィエイユは何も言わず、ただ大切そうに、製本されたその契約書を自分のわきに抱えていた。

「ヴィエイユ」

「はい」

「困ったことがあれば、言ってくるといい」

「心強いお言葉、感謝申し上げます。承知しました」

聡いこの娘のことだ。俺の言わんとしていることは、ちゃんと理解してくれているはずだ。

俺とヴィエイユは、淡々と事務手続きを済ませる形で、すべての調印を終えた。そして、隣室に控えていたリコとメイを呼び出し、その場でメイにネズミを百匹、アフロディーテに送るように命じた。

「ご厚情、感謝申し上げます」

ヴィエイユはその場で片膝をつき、見事な所作で俺たちに頭を下げた。リコもメイも、無言でゆっくりと頭を下げた。

クリミアーナ教国の教皇が俺に対して臣下の礼を取ったのだ。この瞬間から、クリミアーナ教国はアガルタの属国となった。

それと同じ頃、クリミアーナ教国の教都・アフロディーテでは、一人の男が出港しようとしていた。

「それでは、健闘を祈ります」

柔和な笑みを浮かべながら口を開いているのは、枢機卿の一人であ

る、ロン・エスロテルだった。その彼の視線の先には、悲壮感を漂わせた男が両手を握り締めていた。

「お任せください。必ず、やり遂げて御覧に入れます」

口を開いているのは、マタカ枢機卿だった。

現在の彼は、教皇・ヴィエイユの命令で自宅待機の状態にあった。だが、昨夜遅くにロン・エスロテルが直々に訪ねてきて、明朝出港する商船に乗ってアフロディーテを出発し、そのままアガルタに向かうようにと伝えてきたのだった。

それは教皇聖下も承知しているのだという。マタカは心の中で狂喜した。

……絶対の自信があった。セルロイトの心をもう一度奪うのは、簡単なことだと思った。

風の噂で、セルロイトがアガルタに留学し、そこで友好の花を撲滅するための研究に携わっていることは聞いていた。教国としては、その進捗状況を確認しなければならない。それがもし、確立されてしまっていたのならば、教国は今後の戦略を一からやり直す必要に迫られる。

マタカは他の枢機卿たちと同様に、アガルタが花を撲滅する方法を確立するためには、何十年の時が必要だろうと考えていた。ＬＶ５の火魔法で焼き切らねば亡ぼすことのできぬ花なのだ。いかにアガルタとはいえ、ＬＶ５の火魔法を扱うことのできる魔導士を育成するためには、時がかかる。その間に教国は、アガルタを含めた全世界の国々を膝下に抑え込むのだ。そう考えていた。

だが、ロン・エスロテルは違った。彼はアガルタが花を撲滅する手法を確立するのに、一年以内でやってのけるだろうと断言したのだ。

「アガルタには、聖女・メイリアスがおります。そのために、世界中から優秀な研究者があの国に集まっています。それだけではありません。ポーセハイをその支配下に置いているために、世界中から情報を入手することができるのです。加えて、ヒーデータ、ニザとは縁戚関係にあって、その関係は盤石。併せて、フラディメ、サンダンジといった、知的水準が極めて高い国々との交流も盛んです。それらの関係から、膨大な情報を集め、分析し、処理することがあの国では可能なのです。その力を使えば、一年以内に、花の撲滅方法を確立することは、ありうる話だと思います」

ロン・エスロテルのアガルタへの評価は、正鵠を射ていた。そのためにその言葉には説得力を帯び、マタカにも、彼の話が単なる大言壮語とは思えぬものを感じさせたのだった。

その研究の中心を担うのは、言うまでもなく、聖女・メイリアスだ。クリミアーナ教国にとっては、仇敵とも言える女だが、セルロイトはその聖女の許に留学しているのだという。マタカの心は躍った。

セルロイトを篭絡するのは、簡単だ。おそらく今頃は、無聊を囲っているに違いない。アガルタの都に入り、彼女の住まいを見つける。忍び込みさえすれば、あとは問題ない。最初はセルロイトを縛る。縛って、思いのたけあの体を弄ぶ。そして、犯す。セルロイトは声を立てる。好きという。あなたの奴隷になりますという。

マタカの脳裏に、セルロイトの裸体が描き出される。腕も体も細くて華奢な体……。胸も薄く、肉付きはほとんどないと言ってよかっ

た。ゴツゴツと骨っぽい抱き心地で、マタカがこれまで相手をしてきた女性の中で、最も評価が低かった。だが、彼に対する従順さと奉仕精神は、どの女性よりも優れていた。そのため、彼女との逢瀬は、マタカの欲望を十分に満たすものだった。

セルロイトの体を蹂躙したら、今の研究の進捗状況を報告させる。場合によっては、メイリアスへ目通りするよう図らせてもよい。スキがあれば、メイリアスの心を奪いにいくのもよいかもしれない。

彼はそんなことを考えながら、船に乗り込んだ。岸壁では、相変わらずロン・エスロテルが柔和な笑みを浮かべながら手を振っている。

……もう一度、必ず、ここアフロディーテに帰ってくる。

彼の視線の先には、白く輝く美しい街並みがあった。そして、その最奥には、天に向かってそびえ立つ教皇神殿が見える。マタカの視線はそこにくぎ付けとなった。

友好の花の情報を持ち帰り、そして、私は、教皇聖下のお傍に控える身分となるのだ。教皇聖下のお傍近くに侍りながら、あのお方を、肉体的精神的に癒して差し上げるのだ。この自分なら、それが可能だ。可能なのだ……。

船は徐々に岸壁を離れていく。船頭たちの声が喧しい。ふと視線を元に戻すと、相変わらず、ロン・エスロテルが柔和な笑みを浮かべたまま、マタカに向かって手を振っていた。

……私の手柄はおそらく、ロン・エスロテル枢機卿、あなたのものとなるのでしょうね。まあ、今回はそれでよしとしましょう。ただ、私も、タダでこのまま終わるつもりはありません。あなたには、こ

の恩は必ず返して貰いますからね。

そのとき、ロン・エスロテルが大きく頷いた。マタカは思わず顔を強張らせた。まさか、自分の心の内を、読まれたのだろうか。

……まあ、いい。私の心が伝わったのならば。

マタカは視線を空に向けた。これから向かう東の方角には、黒い雲が低く垂れこめていた。もしかすると、雨が降るかもしれない。

少し、イヤな予感がした。

彼は頭を小刻みに振って、その予感を頭から消し去ろうとした。そして、将来待っているであろう理想的な状況を頭に描きながら、船室へと向かった。

第五百九十二話　馭者目線

雲一つない昼下がり、セルロイトは一人、馬車に揺られていた。

アガルタ大学から農場に向かうための馬車……。相変わらずそこには、セルロイト一人しか乗っていない。その馬車を操る馭者の男は、ここ最近、この女性の雰囲気が変わったことを感じていた。

正直、初めてこの女性を見たときは、亡霊か何かと思った。げっそりとやつれた顔、針金のように細い体躯、そして、猫背……。およそこの女性からは生気というものは感じられなかった。あのときも、今日と同じ、よく晴れた昼下がりだった。

アガルタ大学から農場に向かう馬車は、ほとんど出ないと言ってよかった。農業を研究する学生は、農場近くの寮で生活しているため、このキャンバスから農場に向かう人は、一日でも数えるほどしかいない。しかも、そうした人たちの大抵は、朝か夕方に乗り込んでくることが多かった。言ってみれば、大学関係者が差し入れや郵便物の受け渡しのために利用するくらいだった。

男はこの仕事を気に入っていた。今の自分の体に合った仕事だと思っていた。

若い頃、男は冒険者として、世界中を旅していた。冒険者ランクＢを所有する、それなりの腕を持っていたのだった。

だが、寄る年波には勝てなかった。仲間が次々と抜けたり、この世を去ったりした。彼は一人になった。そのとき、若い冒険者のパー

ティーから声がかかった。自分の経験を若い彼らに伝えようと参加したが、それが仇となった。不覚にも、魔物の攻撃をまともに受けて、右足にマヒが残った。

こうなってはもう、冒険者としては活動できない。彼は引退を決意した。

危険と隣り合わせの生活から足を洗ったとはいえ、日々の生活は送らねばならない。しかし、冒険者しかやったことのない彼は、この先どんな仕事をするべきか、決めることができなかった。

剣の腕には自信があるが、それは、体が自由に動いたからこそできるもので、今となっては、立って若者に剣を教えることは難しい。その上、彼の剣は我流で磨いたもので、その剣には、流麗さも迫力にも欠けるものだった。

魔法も使えなくはないが、魔法使いには到底及ばない。つまりは、どれもが中途半端なスキルだったのだ。これでは、人に教えることはできない。

悩んでいる間に、冒険者時代に稼いだ蓄えはどんどん減っていく。そんなとき、ギルドで紹介されたのが、この仕事だった。

足が不自由であるために、頻繁に馬車に乗り降りすることはできない。だが、雇い主であるアガルタから示された条件は、一日数回、馬を操るだけでいいとあり、しかも、提示されている金額は、何とか生きていけるだけのものだった。彼は、物は試しにとその仕事をやってみることにした。

単調な仕事だった。朝に一度、昼に二度、大学と農場を往復するだ

けでよかった。しかも、馬車はほぼ無人だった。こんなことをしていて、この大学は大丈夫だろうか。馬を操りながら、彼は不思議で仕方がなかった。聞いた話では、アガルタ王のお妃の一人が、この馬車の運航を勧めたのだという。アガルタという世界に冠たる大国だ。金は無尽層にあるのだろう。だからこそ、こんなルートでも廃止されずに運行されているのだ。彼はそう思っていた。

セルロイトが現れたのは、そんなときだった。

昼からの便は、まず、人が乗ることはない。彼は大儀そうに馭者台に乗り込むと、馬を走らせようと手綱を握った。そのとき、何かの声が彼の耳に入った。よく見ると、すぐ傍に、一人の女性が立ち尽くしていた。

女性は帽子をかぶり、俯いている。その表情を窺い知ることはできない。スカートをはいているので、女性だとわかったくらいだ。何か小さい声で呟いている。彼はじっとその声に耳を傾ける。

「……の……農場に……農場に……いっ……いっ、いきたいの、です、けれ、ど」

農場に行きたい。確かに女性はそう言った。彼女はスッと顔を上げる。それを見て、男は言葉を失った。冗談でもなんでもなく、亡霊が出たと思ったのだ。

冒険者時代に彼は、亡霊を見たことがあった。倒れた仲間を介抱していたとき、不意にすぐ近くに、人の姿を見かけた。それは、ガリガリに痩せこけ、髭を生やし、杖をついた老人がニタニタと笑っていたのだった。男はその老人に何者だと問いかけようとしたとき、まるで、霞のように消えてしまったのだった。後にそれは、死んだ

者の魂が浮かばれずにさまよっている姿だと別の仲間から聞かされたのだった。

今、目の前にいるのは、女性で若くはあるが、見た目と雰囲気が、そのときに見た亡霊とよく似ていた。男は思わず息を呑んだ。

「あの……っ。のっ、のう、じょう、に、いっいっいっ、いきたいの、です、けれ、ど」

必死で声を振り絞っているのがわかった。本能的に、ここで怯えを出してはいけないと悟った。彼は無言で顎をしゃくる。女性は、安心したような表情を浮かべて、そそくさと馬車に乗り込んできた。

それ以来、女性はほぼ毎日のように馬車を利用するようになった。当然、会話は全くない。時おり、席に座る女性に視線を向けてみるが、彼女はただ、ぼんやりと車窓から見える景色を眺めているだけだった。

……まあ、アガルタの大学には優秀な人材が世界中から集まっていると聞く。あれだけ大きな大学なのだ。色んな者がいるのだろう。

男はそう思いながら、ただ黙々と日々の仕事を淡々とこなしていった。

そんな彼女は、最近、窓の外に目を向けなくなった。いつもノートを広げ、カリカリと何かを書いているのだ。

別にこの、名も知らぬ女性が何を書いているのか、といったことには興味がない。見てもわからないだろうし、見たいとも思わない。それよりも、馬車に乗るときと降りるときに、シャンと背を伸ばし

て、足早に歩いて行く様は、今までの彼女とは別人のようにすら思えるのだ。一体、なにがあったのか。馭者の男は、その女性に、少しだけ興味を持った。

この日も彼女は、カリカリと一心不乱にノートに何かを書いている。馬車はいつものように、農場の停留所に滑り込む。いつもは、たどたどしい声で、「あっ、ありがとう、ございます」と言って女性は馬車を降りる。すぐに帰るときには、少し待っていてくださいと言って降りるのだ。その言葉がないと、次の便で帰るというのが、暗黙の了解となっていた。

しかし、この日は、馬車が着いても、女性の声は聞こえなかった。ふと見ると、女性は一心不乱に、何かをノートに書いている。男は声をかけようかどうか、少し迷った。

「着いたよ」

男の声に驚いたのか、女性の肩が上下に揺れた。そして、まるで飛び上がるようにして立ち上がり、いそいそと荷物をまとめると、足早に馬車を降りていった。

……やれやれ。

男はゆっくりとため息をつく。都の中ならばいざ知らず、北門を出ると道は極端に悪くなる。大きく揺れもするし、場合によっては跳ねるような衝撃を受けることもある。そんな中で、何を書いているのか。そこまでして、書かねばならぬものは、何だろうか。

そんなことをぼんやりと考えていたそのとき、彼の耳に、女性の声が聞こえた。

「あ……あ……あのっ」

ふと見ると、先ほど馬車を降りたはずの女性が、そこに立ち尽くしていた。男はじっと彼女に視線を向ける。

「きっ、きっ、今日は……かっ、かっ、帰りませんから……」

そう言うと、女性はスッと俯いてしまった。よく見ると、彼女の首筋にほのかな赤みが差している。そうしているうちに、彼女はクルリと踵を返して、農場の方向に走っていってしまった。

……なるほど、男ができたのか。

男はニヤリと笑いながら天を仰いだ。相変わらず、いい天気だ。そんなことを考えながら、男は手綱を握り、馬を走らせた。不快な気持ちは微塵もなかった。むしろ、あの女性が幸せになるように、応援したいとさえ思った。男の心に、何か、温かいものが流れていた……。

第五百九十三話　お互いの心

馬車から降りたセルロイトは、ヤンノーリの許に向かう。彼は畑で相変わらず、作物を手に取り、その生育状況を確認していた。

「やあ、セルロイトさん」

彼女の姿を見つけると、ヤンノーリは白い歯を見せながら近づいてきた。セルロイトはゆっくりと頭を下げる。

「きょっ……今日は、フェリーラットを防ぐ……ものを、持って、きました」

彼女は、ゴソゴソとカバンの中から何かを取り出す。よく見るとそれは、ロウソクのような形をした、白い固形物だった。

「これ……は？」

ヤンノーリが不思議そうな表情でそれを手に取って眺める。よく見ると、真ん中に針のような突起が出ていて、何とも変わった形をしていた。

「そ……その突起に、火をつけます」

「火をつける？」

「あっ、いや、その……火をつけるといっても、別に、燃えるのではなく……」

セルロイトはヤンノーリの手から固形物を受け取ると、突起に自分の人差し指を押し当てた。そして、ブツブツと詠唱を行うと、その指先に小さな灯がともった。すると、しばらくすると、白い固形物から一筋の煙が立ち昇った。

「こっ、これを、畑に撒けば……」

セルロイトは煙の立っている固形物を、ヤンノーリに差し出す。彼は鼻をピクピクと動かしてその匂いを嗅いでいる。

「あれ？　何も臭わないですね」

「む……無臭になるように……しました」

セルロイトの説明では、この煙には、フェリーラットが嫌う香りが含まれているとのことだった。しかもそれは、人間には嗅ぎ取ることのできない香りなのだという。

「すごいですね。さすがはセルロイトさんですね。このようなものを作られるとは……」

「いっ、いえ……大上王様が……」

「大上王様？」

何と、この固形物はリボーン大上王のアドバイスで作られていた。彼は、メイとの会談を行った際、そのお返しにと、フェリーラットが嫌う香りを出す材料を教えてくれたのだった。セルロイトはそれを工夫して、球体のような固形物に仕上げたのだった。

「リボーン大上王様……。お目にかかったことはありませんが、とても向学心の強いお方と聞いています」

「はっ、はい……。何でもよく、ご存じで……。お顔は怖いですが……お心は、とても、真面目で、がっ、学問を愛する、お方、です」

「そうですか」

ヤンノーリはそう言って微笑む。セルロイトには一つの目標があった。今回のこの実験が成功すれば、ヤンノーリの畑はネズミの被害から守られると同時に、この手法を教えてくれたリボーン大上王にも報いることができるのだ。彼女としては、是が非でも、成功させたい実験だったのだ。

「で、こちらを、どうすれば?」

ヤンノーリは煙が出ている固形物をセルロイトの前に差し出す。彼女は、オドオドと彼の顔と手許を交互に視線を向けていたが、やがて、落ち着いた声で、口を開いた。

「なっ、投げてください」

「投げる?」

「はっ、はい。畑に……投げ入れて、下さい」

ヤンノーリは言われるままに、手に持っていた固形物を畑の中に投げ入れた。

セルロイトが持ってきた固形物は、全部で二十個あった。彼女はその全てに火をつけて煙を出し、さらに、持ってきたノートを広げて、ヤンノーリの前に差し出した。

「これは？」

「ちっ、地図、です」

「地図？」

「こっ、この農場の地図です。そっ、それに……置く場所も……」

よく見るととても精巧に書かれた地図だ。所々に、数字が記してある。どうやらこれは、畑の面積を記入しているようだ。しかもそれは、ヤンノーリが把握している面積とほぼ一致していた。彼は驚きを隠そうともせずに、セルロイトの顔を眺める。

「あの……。黒い、丸印に、そっ、それを置いて……」

よく見ると、畑の所々に黒い丸が書かれてあった。その数はちょうど二十個あった。

「そっ、そこが……一番、効果的になる……と……」

眉毛をハの字にしながら、セルロイトが口を開いている。一見すると、不安な面持ちに見えるが、彼女の眼は爛々と輝いていて、その自信のほどが伺えた。ヤンノーリは無言で頷き。地図を片手に、その固形物を置いて回った。

全ての作業が終わったのは、夕暮れになっていた。地平線の彼方に

夕陽が落ちていき、大地と畑を真っ赤に染めていた。その得も言われぬ幽玄な景色に、二人はしばし言葉を忘れて見入った。

しばらくすると、セルロイトは両手を合わせながら詠唱を始めた。しばらくすると、彼女の両手からまばゆい光が放たれた。どうやら、ライトの魔法を唱えたようだ。そして、周辺の木々を集めると、再び詠唱を開始する。今度は、右手から炎が地面に向かって迸った。それは、地面に集めた木々に燃え移り、あっという間に、焚火が出来上がった。

「わっ、私は、ここで、観察を、致します、から」

「観察？　ネズミの、でしょうか？　であれば、今日は帰って休まれて、明日の朝、お見えになればよいかと思いますが……。明日、作物が食い荒らされていなければ、あなたの実験は成功したと言えるのでは？」

「いっ、いえ。そっ、それもそうですが……。その……火が出ないかと……」

「あー」

セルロイトは、持ち込んだ固形物の効果については、ある程度の成果が現れるだろうという目算があった。ただ、固形物から発する熱が作物に影響を与えないか、出火しないかという懸念があった。彼女は一晩その様子を観察して、その効果が盤石なものであるという確証を得たかったのだった。

「なるほど。そんなことでしたら、私も手伝います」

「いっ、いえ……そんな……」

「こんなところに、女性を一人残してはおけません」

「……」

ヤンノーリは畑の中に入ると、無造作に作物をもぎ取っていった。あっという間に、彼の手にはいっぱいの野菜類があった。

彼は焚火の前に座ると、その中の一つを持って火の前に持っていった。しばらくそれを炙ると、無言のまま、セルロイトの方向にそれを向けた。

「どうぞ」

セルロイトは勧められるままに口に入れた。サクサクといい歯ざわりだ。これは、ギュンタというネギに似た植物だ。とても香ばしい香りが、口の中いっぱいに広がった。

「こいつは、生で食べてもいいですが、こうして、ちょっと火にあぶると、とても香り高くなります。採れたてでないと、この香りは楽しめません。どうです？」

「おっ、おいしい、です」

セルロイトはそう言いながら、カバンの中に、小さな箱を取り出す。ふたを開けると、美味しそうな料理が詰め込まれていた。

「じっ、実は、夕食を、持って、来たのです……」

彼女はそう言いながら、箱をヤンノーリの前に差し出す。彼は指で料理をつまむと、それをポイと口の中に放り込んだ。

「う……美味い！　何という味わい深さだ。これは、トマト？」

「そ……そうです……」

「そうですか。いや、トマトなら、こういう食べ方も、美味いですよ」

ヤンノーリはそう言いながらトマトを手に取る。二人は色々と話をしながら、即席で料理を作り合い、その出来栄えに舌鼓を打った。

「うわっ」

突然、セルロイトが声を上げた。見ると、空には満天の星空が煌めいていた。

「きれい……」

「本当に、きれいですね……」

二人は呆然と星空に見入り、しばし時間を忘れた。

どのくらい時間が経っただろうか。ふと目が合った。二人は思わず笑みを交わし合う。それから二人は椅子を用意して、そこに腰かけて畑の様子を見守りつつ、様々な話題を語り合った。そして、気が付けば、彼らの背後から朝日が昇り始めていた。

「朝……ですか。あなたのお話がとても面白かったから、時間を忘

れてしまいました。それにしても、何と美しい朝日だ……。こんな美しい景色は、いつ以来だろうか……」

二人は再び無言のまま、朝日を眺める。

「あなたとは、こうした感動を、これからもたくさん共有したい……」

ヤンノーリは朝日を眺めながら、誰に言うともなく呟く。それを聞いて、セルロイトはゆっくりと頷いた。

やがて、すっかり夜が明けた。ヤンノーリは簡単な朝食を拵えて、セルロイトと共にそれを味わう。二人とも無言のままだったが、心はしっかりと繋がっているのを、互いがちゃんと感じ取っていた。

「……それでは、お気をつけて」

馬車の迎えの時間が近づき、セルロイトは手早く身支度を整えて、ヤンノーリに深々と頭を下げた。彼も帽子を取って深々とお辞儀をする。

「また、すぐに、参ります……」

セルロイトはそう言って、踵を返した。彼女は小走りに停留所に向かっていった。ヤンノーリは息を吐きながら、あらぬ方向に視線を泳がせた。

そのとき、女性の短い悲鳴が聞こえた。それは、紛れもなく、セルロイトの声だった……。

第五百九十四話　君の名は

「農場に行く馬車は、これでしょうか？」

見慣れない男が話しかけてきた。馭者の男は、ジロリと睨みつける。

……冒険者時代からの癖だった。そうしないと、命にかかわることになる可能性があるのだ。特に、冒険者同士では、パーティーを組む相手のスキルや人間性を正確に把握しておかなければ、いざというときに命を落とすことになる。

その男は、見た瞬間に、関わってはならぬ者だと、馭者の男は判断した。彼が最も嫌う人種だった。

目の前の男は、にこやかな笑みを浮かべている。一見すると、人懐っこそうな、優し気な笑みだ。だが、それは作られたものであり、人格が自然に表情に滲み出たそれとはまったく異なるものであることを、馭者の男は正確に見抜いていた。

珍しい、な。

男は心の中で唸っていた。このアガルタ大学に通う学生は、貧富の差はあれど、その人間性については皆、それなりの者が多かった。学生全員を見たわけではないが、毎朝通ってくる学生は皆、行儀がよく、そして、優しかった。彼らは心の底に、自分たちは世界中の人々から注目されている存在であること、その視線や期待に応えられる人材にならねばならないこと、そうした人々の見本となるのだという意識を持っていることが、よく伝わってきた。

しかし、目の前の男はどうだ。明らかに、その柔和な笑みの奥では、この年老いた猫獣人の駅者を値踏みしようとしている。そして、己の目の前にいる男は、何の役にも立たないと踏んでいる。失礼を通り越して、呆れるばかりの、自分中心の考えを持った男だ。こんな男とは、付き合うべきではない。

駅者の男は、そんなことを考えながら、ゆっくりと頷く。優男は、大きく頷くと、懐から何かを取り出して、それを差し出した。

「これで、よろしくお願いします」

男が差し出したのは、金貨だった。三枚の金貨が、男の掌の上で、鈍い光を放っていた。

駅者の男はそれに目もくれず、体を引きずるようにして、馬車に向かった。優男は、相変わらず柔和な笑みを浮かべたまま、手に持っていた金貨を懐に仕舞い、後を付いてきた。

馬車を操りながら、駅者の男はチラリと、席に座る男に視線を向ける。腕を組み、足を組んで、顎をクイッと上げながら、車窓の景色を眺めている。

アガルタの都を楽しんでいる様子ではなかった。優しげな笑みを浮かべているが、その気配からは、何かを観察するような、何かを探しているようなものを感じた。

「ここには、初めてきましたが、元々ジュカ王国の王都だったのですよね。一度は大魔王に滅ぼされ、その上、ラマロン皇国に侵攻されて、この都は一度、廃墟のようになったと聞きます。それがここ

まで復興し、発展を遂げているのです。アガルタ王の手腕は、見事なものですね」

突然、男が誰に言うともなく呟いた。馭者の男は、それに対して、何の反応も示さなかった。優男はそれ以来、一言も話をしなかった。

馬車は程なくして、農場に着いた。馬車が停まると、優男はゆっくりと立ち上がって車から降り、目の前に広がる広大な景色にしばし見とれた。馭者の男は、こんな男とは早く離れたい一心で、馬車を都に帰そうと手綱を握った。

そのとき、女性の短い悲鳴が耳に入った。ふと見ると、優男が女性の前に立ちはだかっていた。

◆　◆　◆

信じられなかった。どうしてあの人がここにいるのかが、わからなかった。セルロイトの体はすくみ、そこから動くことができなかった。思わず、小さな叫び声を出すことが、精いっぱいだった。

彼女の目の前にいたのは、マタカだった。彼は、優しげな笑みを浮かべながら、ゆっくりと近づいてきた。そして、彼女の体を引き寄せ、強い力で抱きしめた。

「いっ……いや……」

「イヤだ？　何を言っているんだ」

マタカが耳元でささやいている。彼の息が耳に当たって、少しくすぐったい。彼は、セルロイトにだけ聞こえるような小さな声で、言

葉を続けた。

「お前は私の奴隷となったのだ。まさか、忘れたとは言わせないぞ？」

「うっ……うっ……」

「来い。お前には聞きたいことがあるのだ。心配するな。手荒な真似をするつもりはない」

マタカの手がセルロイトの胸を掴んでいる。彼女は身をよじって、そこから逃げようとする。

「フフフ。お前の体は全て知っているぞ」

マタカの手がセルロイトの下腹に伸びていた。そのとき、セルロイトの体がフッと軽くなった。

「ガハッ！」

見ると、マタカが胸を押さえて蹲っていた。視線を移すと、そこには、馭者の男が木の棒を右手に持ち、その先をマタカに向けていた。目が吊り上がっている。全身の毛が逆立っていて、ものすごい迫力だ。

「お……おじさん？」

「クッ……何を、する……」

「セルロイトさん！」

声のする方向に視線を向ける。そこには、ヤンノーリが肩で息をしながら、立ち尽くしていた。

「あ……あ……あ……」

蹲りながら、セルロイトは精いっぱいヤンノーリに向かって右手を伸ばす。体がすくんで動かない。唯一動かすことができるのが、右手だったのだ。

ヤンノーリは足早にセルロイトに近づくと、彼女の体をギュッと抱きしめた。

……とても温かい体だった。優しかった。セルロイトから滂沱の涙が流れ、彼の胸を濡らした。

「な……何だ、貴様たちは……」

「それは、こちらのセリフだ。何をするのだ、貴様は」

「お前には関係のないことだ。手を出さないでもらいたい」

マタカはゆっくり立ち上がると、再びセルロイトに視線を向ける。

「来い、セルロイト。来るんだ」

しかし、彼女はヤンノーリの胸に顔をうずめたまま、ずっと泣き続けている。その様子を見ながら、駅者の男は、落ち着いた声で口を開く。

「見ての通り、彼女は嫌がっている。ここは……」

「黙れ！」

優男の表情から笑みが消えている。冷たい、鋭利さを感じさせる顔に変わっていた。

「あの女は、私の奴隷だ。私と私の奴隷との話しだ。お前には関係ない。来い！　来るんだセルロイト！　忘れたとは言わせんぞ。お前は私の奴隷となると誓ったのだ。お前は、私の奴隷なのだ！」

「黙れ！」

野太い男の声が響いた。何と声の主は、ヤンノーリだった。

「この方は、素晴らしい方だ！　学問を愛し、作物を愛し、謙虚で、優しい素晴らしい女性だ！　その方を冒とくするのは、許さないぞ！」

マタカは一瞬、怯んだ表情を浮かべたが、やがてニヤリと下卑た笑みを浮かべた。

「その素晴らしい女性は、私の奴隷なのだ。教えてやろうか、その女がどんな姿態を取っていたのか？　おい、セルロイト、その男に教えてやらないか？　お前がどうやって私に仕えていたのか？」

セルロイトはヤンノーリの胸をギュッと握りながら泣き続けている。だが、マタカはその様子を見ながら、さらに言葉を続ける。

「さあどうした！　脱げ、セルロイト！　下着を脱ぐんだ。そして、

スカートをまくり上げろ！」

「やめろ！　何を言い出すんだ貴様！　……えっ？」

ヤンノーリが突然、ポカンとした表情に変わった。一体なんだ？
マタカがそう思った瞬間、彼の体が、ズシンと重くなった。

「あんまり、行儀の悪いことをするんじゃないよ、お兄ちゃん」

突然、耳元で声がした。驚いて振り向くと、そこには、見たことのない男が、マタカの肩を組んでいた。

「だっ、誰だ……」

「まったく……。シディーに言われてきてみれば、何ちゅうゲスい話をしているんだ。恥ずかしくないのか、お前はっ」

マタカは必死で男の腕から逃れようとしているが、全く体が動かない。マタカの顔が真っ赤に紅潮している。

「あ、すみませんね、皆さん。ええと、この男は私の方で預かりますから。皆さん、お仕事に戻って下さい」

男はにっこり笑いながら、口を開いている。そして、ヤンノーリに視線を向けると、さらに言葉を続けた。

「すみません、セルロイトちゃんのこと、よろしくお願いします」

「きっ、貴様、誰だ……」

マタカが必死に声を絞り出している。男はキッとマタカを睨むと、突然、大声で口を開いた。

「わっちの名を知らねぇのかい？　知らざぁ、言って聞かせやしょう……」

その瞬間、二人の男の姿が消えた。ヤンノーリと駅者の男は、呆然とした表情で顔を見合わせた。

第五百九十四話　君の名は（後書き）

コミカライズ『結界師への転生』、第二十話が１２／２９　１２：００まで無料公開中です。メイちゃんの幼い頃のエピソードが収録されています。是非、チェック下さい！（ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ？ｃａｔｅｇｏｒｙ＝１４）

あ、あと、メリークリスマス。

片岡直太郎。

第五百九十五話　男塾？

「アガルタのリノスたぁ、俺がことだぁ～！！」

目の前の男は、ポカンとした表情を浮かべている。我ながら見事な言い回しだと自画自賛したいくらいなのだが、この男にはそれがわからないらしい。残念だ。

俺は、セルロイトたちがいたアガルタ大学の農場から、アガルタ軍本部の空き部屋に転移していた。何故か、部屋が冷え冷えと冷め切っているような気がするが、あまり気にしないようにして、目の前の男と対峙することにする。

「さて、大体察しはつくが、お前は何をしにあそこに行った？」

「わっ、私は……」

「ああいや、喋らなくていい」

俺は目の前の男に、鑑定スキルを発動させる。当然、男には結界を張って自由を奪っておいた。

「……何ちゅう男だ」

俺は怒りを通り越して、呆れていた。血と汗と涙で懸命に……という言葉があるが、この男の人生は、血と汗と精液でのし上がってきた人生といって過言ではなかったからだ。

この男にとって、女性とは己の欲望を満たし、それが済むと利用するという存在であるようだ。互いに尊敬し合い、互いに愛情を通わせ合うという、ごく当たり前の男女の関係というものは、この男にはなかった。ただ女性を支配し、利用価値がなくなれば捨てる。ある意味でわかりやすいポリシーを持った男だった。

色んな意味ですごい男だと思うが、その中でも特にすごいのは、あれだけ女性を好き散々にしておいたにもかかわらず、捨てた女性から報復の類は一切受けていないことだ。別れ方が上手なのか、それとも、報復をすることすらあきらめさせる何かがあるのか……。別に知りたいとは思わないが、絶対に娘たちには近づけたくはない男であることは確かだ。

目の前の男は、必死で何かを言おうとしているが、結界を張っているために、体が動かない。どんどん男の顔が歪んでいく。

「お前の名前は、マタカというのだな。アガルタに来たのは、ヴィエイユの命令ではないのだな。ロン・エスロテル……？　何だか、この男もクセがありそうだな……」

男の目がどんどん開かれていく。その様子を見ながら、俺はさらに言葉を続ける。

「ここに来るまでに、何の対策もしなかったのか？　……なるほど。自分の顔は、アガルタでは誰も知らないだろうと思ったんだな。意外とワキが甘いんだな。相手の戦力を正確に見積もらないと、死ぬことになるぞ？」

男は何か必死で喋ろうとしているが、口を開くことができないので、ただ、体を震わせることしかできていない。

「……どうやら、お前の他に、セルロイトちゃんに近づこうとしている者はいないようだな。安心したよ。大ネズミは、お前一匹だったということか」

「……グッ……ガッ……」

「何だ。だったら、弁天小僧じゃなくて、荒獅子男之助でいくべきだったかな。タダのネズミじゃあんめぇがな……みたいな。いや、それだったら、取り逃がしちゃうから、ダメだな」

テヘヘと笑う俺に、マタカは慄きの表情を浮かべている。どうやら、俺の言っている言葉が全く理解できないようだ。

「さて、冗談はここまでにしておいて、お前をこれからどうするかだな。ヴィエイユの許に強制送還してもいいが、それをすると、確実にお前は死ぬことになる。今までの行いを考えれば、それも悪くはないと思うが、何か、違う気がするな……。ちょっと待っていろ」

俺はマタカを残して、アガルタの都にある、ドワーフ工房に転移した。

「お……おお。これは、リノス様……」

年老いたドワーフが恭しく出迎えてくれる。事前に連絡をしていなかったために、かなり戸惑っているようだ。

「すみません、突然押しかけてしまって。あの……シディーはいますか？」

「おお。大姫……いや、姫様でしたら、工房においでになります。お呼びしましょうか……」

「あ、いえ。大丈夫です。わかりますから」

そう言って俺は、工房の中に入っていく。シディーがいつもいる工房は、一番奥の部屋だったはずだ。

「シディー、入るぞ」

「ちょっと待ってください！」

ドアをノックして入ろうとすると、中からシディーの声が聞こえてきた。てっきり着替えでもしているのかと思って待っていたが、全くなしのつぶてだった。

「どうしたシディー？　入るぞ？」

「ちょ、ちょっと待ってください！　……うわわっ！」

「シディー！」

扉を開けると、シディーが紙に埋もれていた。慌てて駆け寄って、シディーを助け出す。

「大丈夫か？」

「ううう……」

彼女をお姫様抱っこしながら周囲を見ると、どうやら、埋もれてい

たのは、設計書か何かのようだ。

「どうしたんだ？」

「いえ……。直感的にリノス様がおいでになると感じて、部屋を掃除しようと……」

慌てて部屋を片付けたはいいが、ただ積んだだけなので、それらはあえなく崩れてしまったということらしい。

「あの……おろしていただいて、かまいません」

シディーが顔を赤らめながら呟いている。俺は咳ばらいをしながら、彼女を床に下す。

「珍しいですね、リノス様が工房においでになるなんて」

「いや、シディーが言っていたセルロイトちゃんのことだけれど、様子を見に行ったら、男に襲われそうになっていたんだ」

「やっぱり！」

「その男を捕らえて、今、アガルタ軍本部の一室に軟禁しているんだ。どうすればいいと思う？」

「う～ん」

シディーは右手の人差し指を顎の下に当てて、何かを考えている。しばらくすると、ゆっくりと頷きながら、俺に視線を向けた。

「マトカルに任せるのが、いいと思います」

「マトに？」

「はい。直感的に、マトカルならうまくまとめると思います」

「そうか、わかった。マトに相談してみるよ」

「あの……リノス様」

「何だい？」

「そういう内容であれば、念話でもよかったと思うのですけれど……」

「あー」

そりゃ確かに、そうだ。俺は一瞬遠くを見るような眼をして、すぐにシディーに視線を戻した。

「まあ、確かにそうなんだけれど、何となく、シディーの顔を見たいと思ったんだ」

「……」

シディーは顔を真っ赤にして俯きながら、拳で軽く俺の腕をつついた。

◆

◆

◆

「……わかった」

マトカルの許に転移した俺は、さっそく、捕らえた男の話を彼女に伝えた。マトカルはしばらく考えていたが、やがて、控えていた兵士を呼ぶと、ラファイエンスを呼ぶように命じた。

「どうして将軍なんだ？」

「捕らえたのは、男だろう？　男のことは、男に任せるのが一番だろう」

「そういうものなの？」

予想外の答えに戸惑う俺を、マトカルはすました顔で眺めている。

「いや、待たせたな」

しばらくすると、ラファイエンスが部屋に入ってきた。現役を退いたとはいえ、老いた感じは全くない。若い兵士の教育に専念していて、日々、彼らとともに体を動かしているせいだろうか。

彼はマトカルから話を聞くと、ニッコリと笑いながら、大きく頷いた。

「リノス殿は、その男をどうしようと考えておいでかな？」

「そこなのですよ、将軍。クリミアーナに強制送還することも考えたのですが、それですと、確実に殺されます。別に温情をかける相手ではないのですが、それは何か違う気がしていまして……」

「うむ。リノス殿の感覚は正しい。その男は、クリミアーナに送還するべきではない。私に任せてもらおうではないか」

「将軍……一体何をなさるおつもりで？」

「決まっている。男として、再教育をするのだ」

「再教育？」

「女性をモノのように扱うなど、言語道断だ。男子の風上にも置けぬ振る舞いだ。その男には、私が、男子としてどうあるべきかを、骨の髄まで叩き込んでやろう。顔を見ていないので何とも言えぬが、面構えはよいのだろう。で、あれば、紳士に生まれ変わることは可能だ」

「そ……そうなのですか？」

「なぁに、心配はいらん。そうだな……二年。二年でその男を紳士に変えて御覧に入れようではないか。万事、私に任せておくといい」

ラファイエンスは胸を張っている。その様子を見ながら、俺は小さな声で呟く。

「こりゃ、とんだ男塾になりそうだな……」

第五百九十五話　男塾？（後書き）

２０２０年最後の投稿になります。本年もありがとうございました。

来る２０２１年が、皆様にとって幸多き一年となりますよう、お祈り申し上げます。

どうぞ、よいお年を！

片岡直太郎

第五百九十六話　絶対

同じ頃、セルロイトは、ヤンノーリの腕の中にいた。

一体どのくらい泣き続けたのだろうか。いつまでも泣いている状況ではないことはわかっていた。だが、自然に涙が溢れてきて、止まらなかったのだ。

ちゃんと周囲の状況は把握できていた。アガルタ王様が転移してきて、マタカをどこかに連れて行ったことも、わかっていた。あの、温厚なアガルタ王様が大声を出していた。話をしている内容は皆目見当がつかなかったが、きっとあれは、何かの詠唱に違いない。聞いたことのない詠唱だとすると、もしかしたら、マタカを連れて地獄に転移したのかもしれない。

きっと、彼はもう、二度と現れないだろう……。

そう考えたとき、セルロイトは心から安堵した。そして、さらに涙が溢れて止まらなかった。

そんな彼女の背中を、ヤンノーリは優しく撫で続けた。そして、耳元で何度も何度も、「大丈夫です。絶対に大丈夫です」という言葉を繰り返した。一生にそう、何度も使うべきではないと教えられてきた「絶対」という言葉……。その言葉は、ヤンノーリを介して囁かれることで、セルロイトにさらなる安心感を与えた。きっと、大丈夫だ。絶対に、大丈夫だ……。彼女は心の中で、そう念じていた。

「まあ、仲良くやんな」

そんな二人の様子を見ていた駅者の男は、誰に言うともなく呟いて、その場を去っていった。あのオジさんにも礼を言わなければ。セルロイトは頭の中でそう考えていたが、しゃくりあげる息を押さえることで精いっぱいで、口を開くことができなかった。

やがて、ヤンノーリはセルロイトを自分の背に背負った。そして、ゆっくりと歩き出した。

……広い、そして、温かい背中だった。いつまでも、この背中に背負われていたいと思わせるほどに、心地のいいものだった。

一体、どのくらい歩いただろうか。突然、周囲が暗くなった。ゆっくり目を開けて見ると、どうやら建物の中に入ったらしい。階段を上っているようだった。

やがて、どこかの部屋の中にいるような景色に変わった。そのとき、セルロイトはベッドの上にゆっくりと寝かせられた。

ぼんやりと周囲を見廻す。周囲は本棚に囲まれているようだった。見たことのある書名もちらほら見える。興味をそそられる題名の本もいくつか見えた。本棚はとても整頓されていて、セルロイトは好感を持った。

「セルロイトさん……」

突然、彼女の視界に、ヤンノーリの顔が見えた。彼は、真剣な表情を浮かべていたが、それでも、その体からは柔和な雰囲気が醸し出されていた。

「私は、あなたを……幸せにしたい……」

彼の言葉に、セルロイトはゆっくりと頷く。根拠はないが、この男は、自分を幸せにするだろうという確信めいたものが、彼女の中にあった。

彼はゆっくりとセルロイトの唇を奪った。そして、彼女の服のボタンに手をかけた。

セルロイトは全く抵抗することなく、ただ成り行きにその身を任せていた。ヤンノーリの手は震えていた。その震える手で、セルロイトの衣服をぎこちなく脱がせていった。

一糸まとわぬ姿となったセルロイトは、ゆっくりと目を閉じた。ヤンノーリの息遣いが聞こえてくる。どうやら、彼も裸になっているようだ。

「……」

ヤンノーリが何もしてこない。不思議に思ったセルロイトがゆっくりと目を開けると、彼はじっと彼女の顔を見つめていた。

「……きれいだ」

不意にそんな言葉が聞こえた。一体誰のことを言っているのか？セルロイトは、まさか自分に向けられている言葉とは思わず、不思議な表情を浮かべる。

「本当に、きれいだ。何としても……何としても、あなたを、幸せに、したい」

そう言ってヤンノーリは優しくセルロイトを抱きしめた。

彼のたどたどしい、しかし、優しい愛撫は、セルロイトを戸惑わせた。

彼女にとって、男女の営みというのは、男が命じることを、その通りに動くというものだった。脱げと言われれば脱ぎ、命じられる姿態をそのまま取るというものだった。ひたすら耐えることこそが愛であり、そうしなければ男は満足せず、それができなければ、価値のない女性と見なされると考えていた。

しかし、ヤンノーリは違った。マタカのような服従を強要しなかったばかりか、必死でセルロイトに不快感を与えまいとしていた。その振る舞いは、彼の、何としても幸せにしたいという思いが伝わるものだったし、その覚悟のほどがよく見て取れた。

全ての行為が終わった後、セルロイトは彼の胸に抱かれながら眠りについた。

◆◆◆

「……」

翌朝、セルロイトは馬車に揺られながら、都の家路についていた。いつもと同じ時間に、馬車は農場にやって来ていた。乗る人がいないと発車しないこともあるのにもかかわらず、馬車はいつもの場所にちゃんと止まっていた。

部屋まで送っていくというヤンノーリを止めて、セルロイトは彼の

部屋を出た。そうしないと、彼から離れる自信がなかった。今日は、部屋に帰らねばならない。母に報告せねばならない。

いつもの馭者の男は、セルロイトに一瞥もすることなく、じっと彼女が乗り込むのを待っていた。そして、彼女が席に着くと、無言のまま馬車を走らせた。

馭者の男は都に着くまで、一切言葉を発しなかった。だが、彼の背中からは何となく嬉しそうな雰囲気が漂ってきていた。セルロイトはその背中を見ながら、ゆっくりと頭を下げた。

「ありがとう、ございました」

深々と頭を下げるセルロイトを、馭者の男はチラリと一瞥すると、ゆっくり馬車を走らせた。彼女はその馬車が見えなくなるまで、頭を下げ続けた。

いそいそと自分の部屋に向かう。人の流れに逆行しながら歩く風景に新鮮さを覚えながら、都の石畳の上を歩く。

「……ただ今帰りました」

部屋に帰ると、母は、彼女が帰るのを見通していたかのように、テーブルの上に朝食を並べていた。温かいスープと料理の香りが、鼻をくすぐる。

母は何も言わなかった。朝帰りした娘に怒りもしなければ、心配していた素振りすらも見せなかった。母の性格では、きっと昨晩は心配で一睡もしていなかったはずなのだ。にもかかわらず、淡々と朝食の準備を整えて待っていた姿は、少し、拍子抜けするものだった。

きっと、ものすごい質問攻めにあうだろう、そして、相当に叱られるのだろうと覚悟していた。だが、母はただ、「おかえりなさい」と言ったのみで、朝食をテーブルに並べ終わると、セルロイトに着席を促して、食事を摂り始めた。

「……お母様」

突然、口を開いたセルロイトにスッと視線を向けた母は、手に持っていたパンを皿において、姿勢を正した。それをみた彼女は、一気に口を開いた。

「明日から、ここには、戻らないと思います。好きな人ができたのです。私を、幸せにしてくれると思うのです。いえ、絶対に、幸せになると思うのです」

「そう……」

「お母様……」

「好きになさい」

「おっ、お母様……」

予想外の言葉に、セルロイトは絶句する。母は全く表情を変えず、淡々と口を開いた。

「あなたが自分で見つけてきた幸せです。自分で、そう決めたのでしょう。絶対に幸せにしてくれると感じた人なのでしょう。その方と、添い遂げなさい。お母様は、反対しません」

「……」

「セルロイト」

「はい」

「二つ、お願いがあるの。聞いてくれるかしら？」

「は……はい」

「これから、何か困ったこと、辛いことがあれば、必ずお母様に相談してちょうだい」

「はっ、はい……」

「娘が苦しんでいる姿を見るのは、親として辛いものです。お母様とお父様は、どんなことがあっても、あなたの味方です。遠慮せずに、頼ってちょうだい」

「……」

目を丸くして驚いているセルロイトに向かって、母はフッと笑みを漏らしながら、言葉を続ける。

「ようやく、幸せを掴んだのね。安心しました。あなたを何としても幸せにしたくて、子供の頃から喧しく言ってきましたが……。正直、あなたにはつらい思いをさせたのではと、申し訳なく思っていたのです。それが、やっと……。よかったわね、セルロイト」

「あっ、ありがとうございます……」

セルロイトの眼から涙が溢れてくる。その様子を見ながら、母も涙を流している。二人は手を握りながら、声を殺して泣き合った。

「あの……お母様……」

「なに？」

「もう一つのお願いとは、何でしょうか？」

「いいわ、もう。別に……」

「……気になります」

「できたら、週に何回かは、この部屋に帰って来てほしかったの。もう少し……私の娘でいてほしかったのよ」

「お母様……」

セルロイトと母親は再び抱き合いながら、しばらくの間泣き続けたのだった……。

第五百九十七話　絶望

広いホールの中に、人々がひしめき合っている。全員が白い衣装を纏い、片膝をついて頭を垂れていた。彼らの前には、金の玉座に座り、満足そうな笑みを浮かべている一人の女性の姿があった。言うまでもなく、それは、ヴィエイユだった。

「……教皇聖下」

初老の男性が恭しく彼女の前に進み出る。ロン・エスロテルだ。彼は、ヴィエイユに深々とお辞儀をすると、ゆっくりとした口調で報告を始めた。

「懸念されておりました、友好の花の問題でございますが、教皇聖下がお力添えいただいたおかげをもちまして、ここ、アフロディーテにおける花の問題はすべて解決致してございます」

ヴィエイユは鷹揚に頷き、にっこりと笑みを浮かべる。肌の色艶もよく、全身から精気が満ち溢れていた。

「そうですか。それはよかったですね」

「はっ」

「今回の件で、私は何も致しておりません。むしろ、昼夜を問わず研究に没頭していた、医療研究所の方々に、我々は礼を言うべきです。医療研究所の主だった方々には、永久的にこの、アフロディーテに留まっていただき、さらなる研鑽を積んでいただきたいと思い

ますが、いかがでしょうか」

ヴィエイユの言葉に、全員がさらに頭を下げる。どこからか、すすり泣く声が聞こえる。きっと、医療研究所の者が、むせび泣いているのだ。

ここ、教都・アフロディーテに永久に居住できるということは、クリミアーナ教徒にとって、一生の悲願と言えた。それが許されたものは、長い歴史の中でも、数えるほどしかいない。彼らが喜びのためにむせび泣くのは、当然と言えた。

「教皇聖下、もう一つ、報告がございます」

ロン・エスロテルがさらに言葉を続ける。ヴィエイユは、ゆっくりと彼に視線を向ける。

「アガルタ王、バーサーム・ダーケ・リノス様より書簡が届き、以前、教皇聖下に提示しました、友好の花に関する条項につきまして、それを白紙撤回したいとの旨、申してまいりました」

その言葉を聞いて、ヴィエイユは少し驚いた表情を浮かべた。

「あの、アガルタ王様がそのようなことを……。お支払する金銭のことでしたら、何の問題もありませんでしたのに……。そうですか。アガルタ王様には、承知したとお伝えください。あと……近日中に、二人でゆっくりとお話がしたいとお伝えください」

「ははっ」

ヴィエイユは、平伏する教徒たちを見廻しながら、ゆっくりと玉座

から立ち上がる。ふと、窓の外に視線を向けると、燦々と太陽の光に照らされた大海原が広がっていた。彼女はゆっくりと窓辺に足を進める。

視界の先には、白で統一された美しい街並みが見える。それらが太陽の光を反射して、まぶしく輝いている。その先に広がる大海原との景色が絶妙だ。まるで、絵画の世界に足を踏み入れた感覚を覚える。

……再び、戻ってきた、この場所に。何としても、世界の王となるのだ。

アガルタは、先の条約の白紙撤回を申し入れてきた。これで、クリミアーナとアガルタは対等関係に戻った。世界は近いうちに、クリミアーナとアガルタ、どちらかに属することを迫られるだろう。二極化となったこの世界を、どう動かしていくか……。アガルタと歩調を合わせていくことも悪くはない。この世界の秩序を破壊する動きをしなければ、あのアガルタ王が攻撃を仕掛けてくることはない。今回の一件で、その確証が得られたことは、大きな成果だった。

これまで何度も修羅場を潜り抜けてきたが、今回ほど、戦慄を覚えたことはなかった。

フォーアル大公国を傘下に組み込むために開発した友好の花が、まさか、己の首を絞めることになるとは、想像すらしていなかった。そしてまさか、その花を用いて、アガルタが教皇である自分を、クリミアーナを臣従させる動きに出るとは、考えてもいなかった。

だが、その危機は去ったのだ。友好の花の駆除方法が確立されたのだ。わかってみれば簡単なことだった。あの花を駆除する方法は…

…。

「教皇聖下」

不意に呼びかけられて、ヴィエイユは声の方向に視線を向ける。相変わらず、そこではロン・エスロテルが片膝をついて控えている。

「お目通りを希望している者がおります」

「そうですか。お通しください」

ヴィエイユの言葉に、目の前で控えていた者たちがスッと下がった。

「お久しぶりですね」

「……！」

ヴィエイユは声にならない声を出して固まる。その表情は凍りついていた。目の前に現れたのは、祖父であるジュヴァンセル・セインと従兄弟のカッセルだった。

「姉さま。ようやくですね。さあ、僕のものにッ！」

何のためらいもなくカッセルがツカツカとヴィエイユの許に近づき、彼女の首を締めあげた。彼にはちゃんと両手がついていた。

「グッ……なっ……」

「姉さま、ボクは姉さまを逃がしませんよ？　姉さま、姉さまッ！」

カッセルは残った手でヴィエイユの胸ぐらをつかむと、凄まじい力で彼女の服を切り裂いた。形の良い乳房が露わになる。カッセルはそれを荒々しく掴みしめた。

「いっ、いたっ……やっ……やめ……」

ふと、目が覚めた。気が付くとそこはヴィエイユの自室だった。彼女は右手で自分の首を絞め、左手で自分の乳房を握り締めていた。なぜかパジャマは着ておらず、一糸まとわぬ裸体でベッドに横たわっていた。

慌てて体を起こすと、ベッドの下には彼女のパジャマが脱ぎ捨てられていた。

「ゆっ、夢……」

心の中から安堵感が湧き上がってくる。だがその直後、彼女の怜悧な頭脳は、現実を認識し始めた。

……臨時枢機卿会議。

前日にアフロディーテにおいて召集された臨時枢機卿会議。そこでヴィエイユはアガルタと結んだ条約について説明を行った。当然、会議は大荒れとなった。呆然とする者、悔し涙に暮れる者、アガルタとの決戦を主張する者……三者三様の反応が見られたが、そこに参加した全員が、言葉には出さないものの、ヴィエイユの責任を問うているのは、誰の目から見ても明らかだった。その彼女を、ロン・エスロテルは最前列で、涼しい眼差しで見つめ続けていた。ヴィエイユは本能的にこの男は背くと感じていた。

会議は今日も行われる。ヴィエイユにとって、教皇という地位にとどまることができるか、できないかの瀬戸際でもあった。彼女は重い体を引きずるようにして、ベッドから降りた。

◆　◆　◆

「そんな簡単なこと、他の者にやらせればよいではないか」

リノスの前で訝しげな表情を浮かべているのは、黒龍のシャリオだった。彼女は、兄のツネと共にルノアの森の奥深くに住んでいた。その近くにはサイリュースの里があり、今の二人には里を守る役割を担っていた。

「う～ん。そうなんだけれどな」

リノスはポリポリと頬を掻いている。その様子をツネは無言のままじっと見守っている。

「これは妻のシディーの推薦でな。シャリオ、お前は神龍様に能力を奪われたとはいえ、頭脳は相変わらず抜群だろう。計算も早い。そこで、お前に頼むんだ」

「そんなことは、子供でもできる話だろう」

「まあ、そうなんだけれどな。その……何て言うか、お前は情に左右されないだろう？」

「情？　なんだそれは？」

「相手を可哀そうだと思う心だよ」

「何だそれは？　食べねば生きて行けぬ。強いから食べる。弱いから食われる。それだけではないのか？」

「そう。そうなんだけれどね……。どうしても、俺たちじゃそう割り切れない部分もあってな……」

シャリオは不思議そうな表情を浮かべる。そのとき、兄のツネが口を開いた。

「やってみるがいい。面白そうではないか」

「兄さま」

「面白くなければ、帰ってくるがいい」

「……わかった」

シャリオの言葉にリノスは満足げに頷き、龍王には話を通しておくと言って、その場を後にした。

後日、アガルタから、クリミアーナ教国に対する担当者が発表された。その名をシャリオと言い、一切の憐憫の情を挟まず、教国が維持できるギリギリの命令を出し続け、教国内で「鉄の女」の異名を取ることになるのだった。

クリミアーナ教国の長い受難が、始まろうとしていた……。

第五百九十八話　リコレット編～息子と娘～

目覚めると、まだ深夜の時間帯だった。リコはゆっくりと体を起こした。

ふと見ると、息子のイデアが大の字になって眠っている。その寝顔は幸せそのもので、それを見ているリコの心も癒されていくのを感じる。

夜明けまでまだ時間がある。もうひと眠りできそうだ。彼女はイデアに毛布を掛けて、再び横になる。そのとき、隣に寝ていたイデアがゴロリと寝返りを打って、リコの傍に寄ってきた。そして、彼女のパジャマの裾をキュッと握り、小さな声で呟いた。

「ママ……」

何と可愛いのだろう。リコは思わずイデアの体を優しく抱きしめる。

……この子は、私がいなくなれば、生きてはいけないだろう。

そんな考えが頭をよぎる。いや、そんなことはない。母親がいなくなれば、子供は強く育つ。きっと、自分がいなくなったとしても、この子は強く生きていくに違いない。もう一人の自分が心の中で諭している。

……まさか、この私が、そんなことを考えるとはね。

リコはイデアの頭を撫でながら、思わず笑みを浮かべる。親とは忙

しいものであり、子供のことに構っている余裕などないものだと思っていたが、自分が子供を産み、育ててみると、今は亡き両親の愛情がよくわかる。皇帝と皇后という重責を担っていたために、触れ合いが少なかったとはいえ、それでも、本を与え、衣服を与え、有能な家来を与えてくれていた。幼い頃はそうした愛情が理解できていなかったが、今、思い返せば、それらは全て両親の深い愛情の賜物であったことが、痛いほどによくわかる。

……今、お父様やお母様に会うことができたら、もっと多くのことを語り合えたでしょうに。

そんなことを思っても、もう両親はこの世にはなく、どうしようもないことだということはよくわかっている。

リコは、イデアの幸せそうな寝顔を見ながら、そっと、子供の頬を撫でる。息子の頬から伝わるほのかな温もりが、彼女の心を癒していく。夫は優しく、子供たちも元気に育ってきている。今の環境には何の不満もない。そう考えると、自分が子供の頃に思い描いた孤独に苛まれる未来予想図はことごとく外れ、全く意図しない人生を歩んでいる。彼女は己の人生の不思議を感じざるを得なかった。

一方で、息子がここまで母親に甘えているのを、このまま見過ごしてよいものだろうかという思いも湧き上がる。この子は将来、アガルタの王となる身なのだ。多くの家来を従えなければいけない身だ。今からそれなりの英才教育を行うべきでないのか。優秀な者に預けて、養育させるべきでないのか……。

「男の子は、徹底的に甘やかせ。そうすれば、強い男の子になる」

リコの心の中に、夫であるリノスの言葉が思い出される。最初、こ

の言葉を聞いたときは、全く信じることができなかった。これまでリコが受けてきた教育や、考え方とは真逆のものだったからだ。

基本的に貴族の家に生まれた者は、すぐに乳母に預けられて、両親とは離れて暮らすのが一般的だ。ヒーデータ帝国ではそれが当たり前であったし、リコもそうした教育を受けてきた。

だが、冷静になって考えてみると、両親から離れて育てられた兄は、幼い頃から気が弱く、周囲の目を伺うことが多かった。一方で、弟のヴァイラスは、皇位を継承しないとされたために、生みの母の手によって育てられた。彼は幼い頃から聡明で利発で、周囲の雰囲気を読む力に長けていた。この二人の兄弟の違いは一概に、育った環境が原因であるとは言い切れないかもしれない。しかしリコは、兄と弟のことを思い出すと、どうしても夫の言葉に納得してしまう自分がいたのだった。

……やっぱり、男の子のことは、よくわかりませんわ。

つくづく、男という生き物は不思議な生き物だと思う。どんなに悲しんでいても、落ち込んでいても、母親に抱きしめられればすぐに回復する。どんな慰めの言葉や態度よりも効果があるのだ。逆に、長女のエリルは、落ち込んでいる原因を突き止め、その明確な解決策を示してやらねば、なかなか回復することはないのだ。夫のリノスは、それがわからないらしい。いつもエリルが落ち込んでいると、ただ心配そうな表情を浮かべながらオロオロと周囲をうろついている。

エリルは同じ女性同士ということもあるだろうか、娘の考えていることは、言葉を交わさずともよくわかる。あまり自分には話しかけてこないのは、わからないことがあれば、最後に母親である自分に

聞こうと思っているからだ。

彼女は、母親の意図をよく汲んでいると思う。将来はヒーデータ帝国の皇后となる身だ。今から多くのことを身に付ける必要がある。それがよくわかっているために、メイやシディーたちによく質問している。マトカルによく懐いているが、それは相性のせいもあるだろうが、マトカルの答えを一言で言い切る点が、エリルには心地いいのだろう。

リコの頭の中が、エリルの未来に集中する。

将来的に、ヒーデータ帝国の皇后となるのであれば、兄の言う通り、早めに帝国の水に慣れておいた方がいいだろう。あの国には独特の風習がある。それらに早く馴染んでおく方が、エリルにとってはプラスに働く。それに、婚礼までにある程度の人脈を作っておく必要もある。

まずは、弟のヴァイラスを後ろ盾につける。彼に異存はないはずだ。そうして、弟の後ろに控えるグレモント家の人脈をすべて取り込めば、表立ってエリルを批判する者はいなくなるだろう。あとは、帝国軍をどう抑えるかだ。

それは、婚約しているアローズの役目だ。兄のことだ。おそらくある程度の年齢になれば、彼を帝国軍に入隊させるだろう。そして、そこで軍人教育を施しながら、同時に、皇帝としての帝王学を学ばせるつもりだ。

帝国軍に入隊するとなると、アローズはしばらくの間、寄宿舎で共同生活を送ることになる。その前にエリルとアローズの接点を持たせた方がよい。婚礼で初めて対面するという昔のような風習は、こ

の娘には合わないだろう。

……エリルはもうすぐ八歳。アローズは十一歳。きっと兄は、十三歳になるとアローズを帝国軍に入隊させるだろう。そうなると、エリルが彼と会うのは難しくなる。この一年間が勝負だ。

リコの頭の中に、色々な事柄が浮かび、そして、消えていく。

……エリルをヒーデータのイザエモンに入学させる前に、一度、アローズを交えてお茶会を開催するのがいいかしら。一度、リノスに相談してみよう。

そのとき、ふと、部屋が明るくなった。体を起こすと、窓から朝日が差し込んでいるのが見えた。

……私としたことが、ついつい考え込んでしまいましたわ。

リコは思わず笑みを漏らす。そのとき、隣に寝ていたイデアがパタパタと寝返りを打つと、ゆっくりと目を開けた。

「……ママ、おはよう」

「……おはようございます、イデア」

イデアは嬉しそうな表情を浮かべると、リコに抱き付いてきた。そして、ゆっくりと体を起こすと、目をゴシゴシと擦りながら、小さな声で呟いた。

「……お腹がすいた」

その言葉に、リコは思わずクスクスと笑い声をあげる。

「それでは、顔を洗って、お着替えをして、朝食にしましょう」

彼女の声にイデアはコクリと頷き、ベッドから飛び降りた。彼はパタパタと部屋の扉に向かうと、静かにドアを開けた。

「ママ、早く」

イデアに促される形で、リコはベッドから降り、傍らにあったブラシを手に取ると、それで自分の髪の毛を軽く整えた。

「さあ、お顔を洗いましょう」

リコはイデアと手を繋いで、バスルームに向かった。

第五百九十九話　ソレイユ編～女神～

時が止まった。少年は、呼吸をすることを忘れた。

深い森の中、目の前では、美しい女性が微笑んでいた。あらぬ方向に視線を泳がせながら、右手を差し出していた。彼女が何をしようとしているのかは全くわからなかったが、少年にとっては、どうでもいいことだった。

その女性には、背中に白い羽が生えていた。木漏れ日から差し込む日の光が反射して、キラキラと輝いていた。その女性を中心として、周囲の雰囲気が研ぎ澄まされていて、そこだけがまるで、別世界のような様相を呈していた。

真っ白い肌、金色に輝く髪の毛。それが風に揺れている。白い服を纏っているが、まるで体に吸い付いているかのようなデザインであるために、体のラインが丸見えだった。形のよい大きな胸、キュッとしまった腰回り……。少年の心臓の鼓動は早くなり、その眼は女性にくぎ付けとなった。

彼女は口元を小刻みに動かしている。何かと会話をしているようにも見えるが、その形のよい、真っ赤な唇が小刻みに動く様子は、少年の心臓の鼓動と連動しているかのような感覚を覚えた。

……ふと、女性が少年の存在に気付いた。彼女は少し驚いた表情を浮かべたが、やがて、にっこりと微笑んだ。その瞬間、少年の体は無意識のうちに震えた。

女性はゆっくりと踵を返すと、そのまま森の奥に消えていった。

ふと、我に返る。呼吸をしていないことに気が付く。少年は、鼻からゆっくりと空気を吸った。森の香りが鼻腔をくすぐる。

……空気とは、こんなにも美味しいものだったのか。少年は思わず心の中で呟く。肺いっぱいに吸い込んだ空気をゆっくりと吐き出す。そして、あの女性が立っていた場所に、恐る恐る近づく。

そこは、何の変哲もない場所だった。ただただ鬱蒼とした森が広がるだけの景色だった。

少年が見たのは、リノスの妻であるソレイユが、森の精霊たちに神龍様のパワーを与えていた場面だった。彼女は折に触れてアガルタ国内の森を訪ね、精霊たちと交流を持っていた。そうすることで、アガルタ国内の天変地異や異常事態を、森の精霊たちが知らせてくれることになっていたのだった。

だが、少年にはそんなことはわからない。今、目の前にいた美女の行方を捜して、彼は日が暮れるまで森の中を歩き続けた。

「まあ、どこに行っていたの、こんな夜になるまで！　山菜はどうしたんだい！」

森の中を歩き疲れ、クタクタになって帰宅した少年に、母親はそんな言葉を投げかけた。しかし、彼は母親の言葉には見向きもせずに、食事も摂らず、そのままベッドに入ってしまったのだった。

翌日から、少年の生活は一変した。

毎日彼は森の中に入って、日暮れまで散策するようになった。しばらく経つと彼は、部屋から一歩も出ない日々を送るようになった。母親からの問いかけには上の空で答え、ただ、紙に向かって鉛筆でカリカリと何かを書き、それを破るという行為を繰り返した。そんな息子を母親は気持ち悪がり、挙句の果てには、息子は気が狂れたのだと周囲に言いまわる始末だった。

ソレイユとの出会いから三ヶ月後、少年は母親に何も告げずに、忽然と姿を消した。母親は息子を探さなかった。こうなることは想定していたし、来るべき時が来たのだと、母親自身も納得したのだった。

少年は、山を一つ越えた町に向かっていた。そこに、看板絵師がいることを耳にしていたからだ。彼は人に尋ね歩いて、その看板絵師のいる工房に辿り着いた。

絵師であるミヨールは、そのときの光景を死ぬまで忘れなかった。真っ青な顔をした、ガリガリにやせ細った少年が、工房の前に立っていた。それはさながら、死神のようだった。

ミヨールは即座に少年の申し出を断った。だが、彼は引き下がらなかった。ミヨールからどれだけ罵声を投げかけられても頑としてそこを動かず、ただひたすらに、絵の勉強をさせてほしいと言い続けた。

ほどなくして、少年は工房の前でヘナヘナと座り込んだ。明らかに衰弱していて、ほとんど飲まず食わずの状態が長く続いていることは明らかだった。このままではこの少年は死んでしまう。ミヨールはその熱意に負ける形で彼を工房に迎え入れた。

工房に入った少年は、がむしゃらに働き始めた。どんな仕事でも一言の文句も言わず、ただひたすらに絵の修行に打ち込んだ。ミヨールや兄弟子たちの手元をじっと観察し、夜更けまで絵を描き続けた。そのせいもあって彼はメキメキとその腕を上げ、工房に来てから三年後には、彼は押しも押されもせぬ看板職人となっていたのだった。

子供のいなかったミヨール夫妻は、この少年を養子に迎え、この工房を継がせようと考えた。自身の生い立ちについてはほとんど語らないどころか、絵のこと以外では極端に口数の少ない男ではあったが、仕事に対する情熱と姿勢は、他の職人とは群を抜いていたし、当然、その腕前はミヨールと引けを取らないでいた。彼をこの工房の跡取りに据えたところで、職人たちから反対意見が出ることはないと言ってよかった。ミヨールは少年を呼び出し、自らの考えを伝えた。

しかし、少年は翌日、工房から姿を消した。親方のミヨールに感謝の手紙を残して。

それから数十年後、一枚の絵が競売にかけられた。『女神』と題されたその絵は、何とも言えぬ迫力に満ちていた。

森の中に佇む一人の美女。その背中には白い羽が生えていた。まるで、その美女が絵の中から浮き出てくるような作風は、集まった人々に強い印象を与えた。だが、評価は芳しくなかった。世間の流行が写実的な絵を求めていたのに対し、この『女神』は、奇をてらった絵であるとの評価が下されたのだった。

結局、絵は二束三文の値段で買われていった。ただ、絵の購入者は、フラディメ王国の者だった。

その男は、国王であるメインティア王から命令を受けて、世界中を旅しながら美しい絵画を購入していたのだった。

男はその絵を見て、純粋に美しいと思った。値段は二束三文だったが、絵の価値はどうでもよかった。要は、メインティア王が気に入るか、気に入らないかが重要だったのだ。

すぐさま帰国した男は、王にこの絵を見せた。メインティア王はしばらくこの絵を眺めていたが、やがて、その瞳から一筋の涙が溢れ出た。彼はすぐさま家来に命じて、この絵の作者をフラディメ王国に迎えようとしたのだった。

しかし、絵の作者はすでにこの世を去っていた。

齢わずか三十歳という若さだった。その枕元に飾られていたのがこの『女神』だった。

作者は身寄りがなく、近所づきあいも悪く、一日のほとんどを家にこもっていた。男は絵を描いて糊口をしのいでいたが、筆が遅く、生涯の中で描いた絵はわずか数十点しかなかった。それらも高値が付くことはなく、男は生涯を貧苦に喘ぎながら過ごしていたのだった。

だが、その死に顔は美しく、実に満たされた笑みを浮かべていたのだという。

「きっと、この作者は己の頭の中にある景色を、完璧に描くことができたのだ。さぞ、満足であったろう。通常ならば、頭の中に描かれた景色を描けずに、いかに妥協するかで苦しむものなのだが、この作者は、この絵に関してはそれが全くなかったのだろう。同じ芸

術を愛する身として、その領域に行けたこの作者を、羨ましく思うよ」

メインティア王は家来に命じて、この作者の絵を高額で集めさせた。それが噂となり、数年後、この作者の絵は、天井知らずの値段で、巷で取引されることとなった。

メインティア王は、フラディメ王国内にこの作者の墓を建て、彼の描いた絵を国宝として大切に保管し、未来永劫にいたるまで、その偉業を讃えたのだった……。

第六百話　　コンシディー編～初恋～

「エヘヘ……ウフフ……」

ここ最近、シディーの機嫌がすこぶるいい。いつも、こんな感じでとろけるような笑顔を見せている。何かいいことがあったのかと聞いてみるが、彼女の答えはいつも決まって、何でもないです、の一点張りだ。

リコやメイ、ソレイユやマトカルらに聞いてみたが、心当りはないらしい。もしかしたら、二人目を授かったのかと思ったが、どうもそうではないらしい。

「どうしたんだ、本当に？　何をそんなに嬉しそうにしているんだ？」

「ウフフ、ナイショです」

ナイショと言われてしまうと、さらに気になってしまう。俺は、いけないとわかっていても、ついつい鑑定スキルを発動してしまうのだった。

シディーの過去を覗き見て、驚愕してしまった。結論を先に言ってしまうと、彼女は他の男から告白されていた。結婚してくれとプロポーズされていたのだ。

だが、安心してほしい。おそらくだが、ＮＴＲの展開になることはないと思う。

というのも、その相手と言うのが、リオゼンタール王国国王の三男、カルナーメという男だったのだ。彼はアガルタ大学の留学生で、何と十三歳という若さだ。

アガルタ大学に十代前半の者が入学してくることはままあることで、特に、王族などは、幼い頃から英才教育を受けている者も多く、十三〜十四歳でも、大学教育についていくだけの学力を備えている者も多い。また、王族の中でもとりわけ、次男、三男となると、王位を継ぐよりはむしろ、国の重責を担う者として、高等教育を受けさせようという方針をとる国も多い。そのため、アガルタ大学の学生は、かなりの年齢幅が見られるのだ。

このカルナーメも、ご多分に漏れず、母国からは国を預かる者としてふさわしい人物となるよう期待されて、アガルタにやって来ていた。何のことはない。彼はシディーを自分と同年代の少女だと思い込んでいた。

「僕は、アガルタ大学に留学しているカルナーメと言います。君はどこの生徒ですか？」

シディーに初めて話しかけてきたときの、カルナーメの言葉だ。男の俺にはよくわかる。彼は、勇気を出してシディーに話しかけたのだ。およそ、十三歳とは思えない程の、しっかりした口上だ。

二人が出会ったのは、アガルタ大学の廊下だった。シディーはメイやセルロイトらと、友好の花の撲滅方法を研究するために、折に触れて大学に赴いていた時期だった。彼女は王族のような煌びやかな衣装にはあまり興味を示さず、外出するときはラフな、言ってみれば、冒険者のような動きやすい衣装を好んで着ている。しかも、彼

女はドワーフとはいえ、様々な努力によって、髪の毛をストレートにしている上に、ポニーテールといういで立ちだ。そういうこともあって学生たちは、シディーがお妃さまであるとは、全く気付かなかったらしい。実際、カルナーメが話しかけてきたときも、ズボンにシャツといった、ある意味学生らしいラフなスタイルだった。カルナーメがシディーを学生と見間違うのも、わからないではなかった。

だが最初、シディーは何のことだかわからなかったらしい。ニッコリと微笑んだだけで、スタスタとその場を後にしてしまった。その後、カルナーメは、シディーを見るたびに、「おはよう」や「こんにちは」といった挨拶をしてくるようになった。ただ、シディーはこれを単なる挨拶と思っていたらしい。いや、男の子としては、精いっぱい距離を縮めようと努力していたのだが……。

そんなことを繰り返すこと数度、ついに三日前、カルナーメは、シディーに一通の手紙を渡した。「こっ、これ、読んでください」と顔を真っ赤にしていたのが、何ともかわいらしかった。そして、その手紙には、こんな文章が書かれてあった。

「あなたのことを、好きになりました。僕と、将来、結婚してください」

……甘酸っぱい。甘酸っぱいじゃないか。今時、こんなことをする男の子がいたなんて、俺は心底嬉しく思った程だ。息子たちにも将来、好きな女の子ができたら、是非、おすすめしたい振る舞いだ。女子が受け入れてくれるかどうかはわからないが。

シディーにそれとなく聞いてみると、彼女は顔を真っ赤に赤らめながら、クネクネと体を揺らせた。

「そうなのです……。まさか、十代前半と間違われるとは思いもしなかったです……。どうしましょう？　私、そんなに若く見えますか？」

若い、というより、幼いということじゃないのか。そんな言葉が口をついて出そうになるが、必死の思いで飲み込む。そんなことを言った日には、きっとしばらくは口を利いてもらえなくなるだろう。

「ところで、どうするんだ？　その男の子のこと」

「どう、とは？」

「このままにしておくわけにもいかないだろう」

「ええと……そうですよねぇ」

同世代に間違われた嬉しさで、その後のことは全く考えていなかったらしい。取り敢えず彼には、何らかの返事をしなくてはいけないだろうということになったが、シディーの頭脳をもってしても、いい答えが思い浮かばなかった。

「ごめんなさいね。私はアガルタ王リノスの妻、コンシディーと言います。年齢は、五十手前です」

そんなことを言えば、彼の心はズタズタになるだろう。そんなことを言ってはいけない。では、何と言えばいいだろうか。二人で頭を抱えながら考えていると、そこにゴンがやって来た。彼は俺たちの話を聞くと、言下にこんなことを言ってのけた。

「シディー殿が、アガルタ大学にしばらく顔を出さないでおけばいいのでありますよー。会わなければ、忘れるであります、きっと」

いや、それじゃダメだ。勇気を振り絞った男の子には、ちゃんと答えを返してやらなければならない。そうしないと、女性不信になる可能性がある。俺はシディーに、何とか上手く断ってくれとお願いする。

「……う～ん、厳しいですね。『ごめんなさい』と言わずに、しかも、彼の心を傷つけずに断りの返事を言わないといけないのでしょう？　う～ん、しばらく考えさせてください」

シディーはそう言って部屋に戻ってしまった。

返事を伝えてくる、と言って俺の許にシディーがやって来たのは、次の日のことだった。彼女の中で、伝える言葉がまとまったらしい。朝食を終えると、彼女はいつもと変わらぬ表情を浮かべながら、屋敷を後にした。

「大丈夫ですわ。シディーなら、うまくやりますわ」

心配そうな表情を浮かべていたのだろうか、リコがそう言ってニッコリと笑った。

「それにしても、不思議ですわね」

「不思議？　何がだい？」

「まさか、そんな少年のために、リノスがそこまで心配するとは、不思議ですわ」

「そうかな」

「縁もゆかりもないお方……。子供とはいえ、怒りを覚えてもおかしくないことですのに……」

「そんなものかな。何となく、放っておけなくてね」

俺は前世での初恋を思い出していた。小学五年生の頃、好きだった女の子に思いを告げることができずに苦しい思いをしたのだ。だが、シディーに思いを告げた少年は、本当に彼女のことが好きだったのだろう。その純粋な思いに応えてやることは難しいだろうが、何とか、いい思い出として残してやりたいと思ってしまったのだ。まあ、一度くらいデートするくらいならば、許そうと思っている。

そんなことを考えていると、シディーが戻ってきた。屋敷を出てから三十分ほどしか経っていない。

「どうした、彼とは会えなかったのか？」

「いいえ。会えました。ちゃんと伝えてきました」

「ほう、何て言ったんだ？」

「難しいです、と。今は、どうにもならないです。と伝えました」

「……彼は何て言っていた？」

「謝っていました。好きになってしまって、申し訳ありませんと」

「本当に、シディーのことが好きだったんだな」

「ええ。少し、嬉しかったです」

「そうか」

「でも、私の直感ですが、彼は、とてもいい結婚をすると思います。私よりもずっと素晴らしい女性と知り合って、人もうらやむ家庭を築くと思います」

「シディーがそう言うのならば、そうなんだろうな。お疲れさまでした」

彼女はにっこりと微笑むと、工房に行ってきますと言って、再び屋敷を後にしたのだった。

第六百一話　相談

ラマロン皇国の宮殿の一室では、三人の男が天を仰いでいた。

「もはや議論は尽きた」

誰に言うともなく呟いたのは、宰相であるマドリンだった。彼は、巨体を大儀そうにゆすりながら座を直る。

「儂の案以外に、有効な手は、ない」

マドリンの視線の先には、ラマロン皇国軍元帥のカリエスと、総司令官であるアーモンドだった。二人は眉間に皺を寄せ、厳しい表情でマドリンを睨みつけている。

「皇国は、二つに割れるだろうな」

腹の底から絞り出すようにして、カリエスが口を開く。彼の額には、ねばい汗が光っていた。

「いや、元帥。儂の見込みでは、二つに割れるのは皇国軍だ。我々官吏の立場では、国が問題なく運営できればそれでよいのだ。寧ろ、国の運営が立ち行かなくなること、せっかくうまくいっている体制が崩れてしまうことこそが、我々の懸念するところなのだ」

「ううむ……」

カリエスは腕を組んで再び天を仰いだ。そのとき、彼の隣に控えて

いたアーモンドがゆっくりと口を開いた。

「私も、宰相様の意見に、賛成です」

「アーモンド……」

「致し方ありません。目先の利益に惑わされずに、国家百年の計を誤らないのが真の政治家と言うものです。マドリン様は百年先の未来を見据えていらっしゃる。そうではありませんか」

カリエスは苦虫をかみつぶしたかのような笑みを浮かべる。

「また、ラマロン皇国に、血の雨が降るのか」

カリエスはさも、残念そうな表情を浮かべながら、小さな声で呟いた。

◆◆◆

「なに？　マドリン宰相が？」

驚いた表情を浮かべているのは、マトカルだ。ついさっき、俺の許にラマロン皇国からの使者がやってきて、宰相自身が俺に会いたいと言ってきたのだ。

あの男がわざわざ都までやって来る……。何か、ラマロンの中で何かが起こったのだろうということは、容易に想像がつく。彼は、あの巨体でありながら、その身は多忙を極めている身だ。まさしくあの国は、あの宰相で持っている。その男がわざわざ職務を投げうってこちらまでやって来る……。その理由を使者に尋ねても、当を得

ない答えしか返ってこない。鑑定スキルで使者の過去を覗いてみたが、彼自身も、宰相から何としても俺に会う約束を取り付けてこいと言われているだけだ。

……確実に、良い話でない。

俺は使者が帰った後、すぐにマトカルを執務室に呼んだ。そして、宰相がやって来ることを伝えると、彼女は珍しく感情を露わにした。

「……一体、皇国で何が起こっているのだ？」

「うん、俺にもよくわからないんだ。一応調べてみたが、どこかの国に攻められているわけでもないし、国内で反乱と思しき動きも見られない。わざわざ宰相自らやって来る理由はなさそうなんだけれどな」

「ご機嫌伺いではないことは、確かだ」

「そうだな……。まあ、俺たちが顔を突き合わせて悩んでも仕方がない。宰相の話を聞いてから考えるとしようか」

「そうしよう。そのときは、私も同席させてほしい。何か、イヤな予感がするのだ」

「……わかった」

そう言ってマトカルは執務室を後にした。

数日後、マドリン宰相がやって来た。しかも、総司令官のアーモンドも一緒に連れて。俺は驚きを隠して、平静を装いながら二人に声

をかける。

「お久しぶりです。まさか、アーモンドさんもご一緒とは……」

アーモンドは微笑を浮かべながら、ゆっくりと頭を下げる。いつもは軍服を着込んでいるが、この日は宰相と衣裳を合わせて、貴族のような服を着込んでいた。一見すると、それなりの貴族に見えなくもない。ただ、その体から発する雰囲気がただ者ではなく、違和感が半端ではない。

チラリと隣に控えているマトカルに視線を向ける。彼女は、いつもと変わらぬ平静を装っている。

挨拶もそこそこに、宰相のマドリンが改まった表情で口を開く。

「アガルタ王様に一つ、お願いがございまして、この度、こちらに伺わせていただきました」

「承りましょう」

「単刀直入に申し上げる。ご子息のファルコ殿を、ラマロン皇国にいただきたいのです」

「は？」

「驚かれるのも無理はない。そして、無理なお願いであることは重々承知しております。しかし、皇国の未来がかかっております。思うところは色々ありましょうが、そこを曲げて、お願いを申し上げたいのです」

「すみません、話の流れが全く見えません。なぜ、倅を？」

「陛下のお命が、もう……」

マドリンはスッと俺から視線を外した。ラマロン皇国の皇帝は、かなり長い間、軟禁状態にある。軟禁といっても、好きな者は自由に買えるし、好きな女性たちに囲まれて悠々自適の生活だと聞いていた。確か、まだ若かったはずだ。五十代だったか？

「医師や魔術師にも見せましたが、すでに心臓が衰弱しておりまして、自分で動かす力がほとんどない状態なのです」

「はあ……」

アーモンドが冷静沈着に説明してくる。その言葉に、マドリンが再び俺に視線を向けた。

「お察しの通り、陛下がお隠れあそばせば、お世継ぎ問題が発生いたします」

「ええと、今の皇帝には何人の子供が？」

「男子で申し上げると、二人です」

「なるほど。その二人の骨肉の争いになりますか……」

「と、申しますか、お二人とも反アガルタなのです」

「へ？　そうなのですか？」

「マトカル様にとっては、兄君であらせられます。お二人の人物については、よくご存じかと……」

マドリンはその視線をマトカルに向ける。だが、彼女はゆっくりと首を左右に振る。

「私にはよくわからない。幼くして宮殿を出て、士官学校、ひいては皇国軍で勤務していたからな」

「マトカル様が皇国軍においでになった際、兄君の一人であらせられるオーハン様は、軍司令官のお一人でした。その人となりは、十分にご存知かと……」

「そうなのか、マト？　そのオーハンと言うのは、どういう人物なんだ？」

「……一言で言えば、軍人に向いていない」

「そうなのか？」

「自分の都合のいい情報は取り入れるが、都合の悪い情報は聞き入れない癖がある」

「左様。それがために、オーハン様は後宮警備隊の司令官に転任なされたのです」

アーモンドが無表情のまま口を開く。どうやら、今の皇帝候補は、ラマロン軍にとってもあまり都合のいい人物ではなさそうだ。

「オーハン様とその弟君であらせられるクラハラ様は、お二人とも

反アガルタです。宰相様がいかにお諫めしても、頑としてその考えを変えることをなさいません。それどころか、アガルタに再度侵攻せよと妄言を言われる有様です。これは、お二人の近習が常に、耳触りのよい話のみを聞かせているからに他なりません」

「では、その二人のどちらかを近習から引き離して、マドリン宰相やアーモンド総司令官の許で養育してはどうなのです？」

「お恥ずかしい話ですが、それは何度も試みましたが……」

「なるほど……。しかし、そうは言っても、倅……ファルコを皇帝の養子にしたところで、国内の反発が強くなるのでは？　下手をすると、内乱になる可能性があると思いますが……」

「いいえ。我々は、ファルコ様を陛下の養子にするつもりなどございません」

「と、言われると？」

マドリン宰相は、巨体を大儀そうに揺らしながら、俺の前に進み出た。

「ファルコ様は、立派な陛下のお孫様であらせられます。陛下の血とアガルタ王様の血を受け継いだ、立派な皇子さまであらせられます。皇国の次の御位にお就きあそばすのに、何の障害がありましょうか」

「実は、お世継ぎ問題とは別に、我々には、もう一つ、やりたいことがあるのです」

宰相の後ろで、アーモンドが口を開いた。彼の眼には、鋭さが増していた……。

第六百二話　教えない？

「やりたいこと……とは、何でしょう？」

俺は努めて平静を装う。アーモンドの瞳が鋭さを増して、殺気を帯びてきたからだ。この男は、信念をもって大胆なことをしようとしている。しかもそれは、多くの人命が伴うものであることが伝わってくる。

「それは、皇国軍を、我ら軍人の手に取り戻すということです」

聞けば、皇国軍は皇帝の支配下にあるのだという。まあ、軍隊の位置付けというものは、そんなものだろう。ただ、ラマロンに関しては少し極端で、軍隊とは、国家を守るのではなく、あくまで、皇帝の親衛隊としての位置づけなのだという。そのために、皇帝の気まぐれで状況を無視した命令が下され、無益な戦いが起こることもしばしばであったらしい。

「やはり、軍人は、国家を守るために命を懸けるべきだと私は考えるのです。一人の人間の気分に振り回されるべきものではないと思うのです」

アーモンドの瞳に悲しみの色が滲んでいる。どうやら、ラマロン皇国軍内部では、俺たちでは伺い知れない複雑な問題があるらしい。

「皇国軍の内部についてはよくわからないですが、おそらく、王族や貴族が多く在籍しているんじゃないのですか？　組織を変えようとすると、それらの人々の説得も、大変かと思うのですが……」

俺の言葉に、アーモンドの眼が、キラリと光った。

「ええ。その通りです。かなりの困難を伴うと思います。ですが、マトカル様は、短くはない年月を皇国軍で過ごされたお方です。軍が抱える問題は、十分に理解しておいででしょう。詳しくは、マトカル様からお聞きなさるとよいかと思います」

「……」

「マトカル様……。あなたが皇国においでになったときのことを、私の口からアガルタ王様に申し上げるべきではない、と考えております。もし、マトカル様の口から申し上げにくいのであれば、私から申し上げますが、いかがでしょう」

「……」

マトカルは相変わらず黙りこくっている。その様子を見て、宰相であるマドリンが話に割って入る。

「まあ、本日はあくまで我々の願いを申し上げたまで。今すぐに返事を、とは申しません。お気持ちが固まったときにお気持ちを聞かせていただければ結構です」

マドリンは、どっこらしょと一人呟きながら、椅子から立ち上がる。

「私は、しばらくここ、アガルタに滞在するつもりです。色々と政治的なことで学びたいと思っておるのです」

……そんなことを全く思っていないことは、一目瞭然だ。この男は、

ギリギリまで俺たちの返答を待つつもりなのだ。しかも、単に指をくわえて見ているわけではなく、この迎賓館に居座りながら、このアガルタという国を観察しようとしているのだ。食えない狸とはこのことだが、まさしく彼は政治家らしい政治家といったところなのだろう。

マドリンとアーモンドが退室した直後、俺はマトカルに向けて口を開いた。

「マト、皇国軍の内部で何が起こっているんだ？」

「……断ろう」

「マト？」

「ファルコはこのアガルタで育てればいいのだ。彼の人生だ。彼に決めさせればいい。皇国に行くか行かないかは彼が決めればいいことだ」

そこまで言うとマトカルは、スタスタとその場を去ってしまった。

夜、屋敷に帰っても、俺は昼間のことが頭から離れなかった。マトカルはいつも通りの表情で食事を摂っていた。彼女の中では、ラマロン皇国のことは解決済みと言わんばかりの表情だった。

だが、俺は直感的にこの問題は解決せねばならないと考えていた。ファルコをラマロンにやるかやらないかは別として、アーモンドの言う、皇国軍を軍人たちの手に取り戻すという考え方は、多くの不幸せを生む予感がしたのだ。

シディーと目が合った。勘の鋭い彼女のことだ。俺が何やら考えていることがわかるのだろう。だが、彼女は敢えて何も言わずに俺から視線を外し、子供たちとの会話を続けた。

ふと、息子のファルコを見る。彼は二歳になって、たどたどしいが、フォークを使って食べられるようになっている。今日はリコの膝の上で、フォークの使い方を学んでいる。その両側にマトカルとエリルが控えていて、口元の汚れを取るなどしてもらっている。さながら、王子様だ。

食事が終わると、子供たちと共に風呂に入り、寝室に向かう。ベッドに入り、ゆっくりと目を閉じる。今日はリコの日だ。

……リコは、俺の話を聞いて何と言うだろうか。リノス、あなたが決めればいいことなのですわ、と言うだろうか。いや、子供の未来がかかっていることだ。家族で話し合うべきですわと言うだろうか。はたまた、そんなことはおやめなさいなと言うだろうか。

そのとき、寝室の扉が開く音が聞こえた。俺はゆっくりと目を開ける。だが、そこに立っていたのは、リコではなく、マトカルだった。

「あれ？　今日はマトだったっけ？」

俺の問いかけに、マトカルはバツの悪そうな表情を浮かべている。

「……リコ殿に、今夜は代わってくれと言われたのだ」

「……」

正直、こうくるとは思いもよらなかった。てっきりリコだと思って

いたのに……。俺は突然の変化に対応するのが苦手だ。ええと、これからのことを考え直さなくては……。

俺の戸惑いをよそに、マトカルはスタスタとベッドに近づき、俺の隣にやってきた。彼女はじっと俺の顔を眺めている。

いつもはさっさとベッドに入ってくるのだが、彼女は俺の顔を眺めたまま立ち尽くしている。うん？　入ってこないのかと思ったそのとき、マトカルはゆっくりとパジャマのボタンをはずしていく。

「えっと……マト？　どうした？」

「脱ぐのではないのか？」

「いや、そういうわけではないんだが……」

「……」

いつもはベッドに入ってきたマトカルと色々とおしゃべりをして、その流れで……という形になるのだが、その流れが削がれてしまった。目の前には、パジャマの前をはだけた状態のマトカルが立ち尽くしている。小さな乳房が露わになりかけている。

俺は毛布をまくって、ベッドに入るように促す。マトカルは無言のまま上着を脱ぎ、そのまま下着も取って、一糸まとわぬ姿になって、ゆっくりと俺の隣に身を横たえた。

「……別に脱がんでも」

「どうせ脱ぐのだろう？　それとも、今夜は体調が悪いのか？」

「いや、そういうわけでは……」

「……」

「なあ、マト」

「……」

「ラマロン皇国軍のことなんだが」

「……」

「アーモンドがやろうとしていることは大体察しがつくんだ。おそらく、粛清だろう？」

「私は、皇国軍の中でも下士官であった者だ。軍を離れて久しい。私には、よくわからない」

「とはいえ、俺よりはラマロンことを知っているだろう。それに、アーモンドが言っていたことも気になるんだけれどな？」

「……ッ！」

俺は彼女の背中に手を添える。その手をゆっくりと上下させると、彼女の体がビクンと波打った。そのまま掌で尻を優しく撫で、指でゆっくりとつつく。

「うっ……くっ……はっ……ううっ、そっ、そこは……」

「ああ、ゴメン。やめにしようか」

「ううっ……」

マトカルは顔を真っ赤にしながら、俺のパジャマの胸ぐらを強い力で握っている。彼女はゆっくりと顔を左右に振った。

「別に言いたくなければ言わなくていい。ただ俺は、あまり人が血を流すのを見たくもないし、聞きたくもないということだけだ。このままだと、多くの血が流れることになりそうだからな……」

「ふっ、はっ……はっ……はっ……」

マトカルの体温が徐々に上がってきているのがわかる。俺はマトカルの耳元で、ちょっとでいいから教えてくれる？　と耳打ちをする。彼女はコクリと頷く。俺は、彼女の体を強い力で抱き寄せた……。

第六百三話　睦言

「じゃあ、今夜はちょっと、頑張ろうかな」

マトカルの耳元で呟く。彼女の呼吸が荒くなっている。今夜は長い夜になりそうな予感がしていた。

俺は一旦マトカルから体を離すと、彼女を再びベッドに横たえた。相変わらず目を開けたままで、不思議そうな表情を浮かべている。いつも毅然とした姿勢を取っている女性が、俺だけにこんな表情を見せるのだ。なんだか嬉しさがこみあげてくる。

一方のマトカルは、いつもの俺とパターンが違うことで、これから何かが始まるのを察したらしい。ただ、何が始まるのかわからないために、少し不安らしい。俺のパジャマを掴んだまま離そうとしない。

「えっと……ここを、こうして、こうして……」

「ううう……」

「ここで……こうやって……ここを……よっと」

「くっ……くううう……」

「大丈夫か？　やめようか？」

マトカルは顔を真っ赤にしながら、潤んだ瞳で俺を眺め続けている。

どうやら大丈夫のようだ。

「あとは、ここを……」

「くはっ！　うっ、ふっ、くっ」

「ゆっくりと……」

「うわっ、ちょっ、わっ、あっ、はっ、あああ……」

……マトカルが初めて声を上げた。いつもは歯を食いしばって耐えているのだが、初めての感覚に少し戸惑っているようにも見える。やがて、全身が小刻みに震えたかと思うと、彼女はゆっくりと起き上がり、俺のパジャマの胸ぐらを両手で強く掴んだ。

「マト……？」

マトカルは俯きながら肩で息を整えている。彼女の荒い息遣いが寝室に響いている。

そのとき突然、マトカルが両手に力を入れ、俺のパジャマを乱暴に脱がせた。パジャマのボタンが飛び散って、床に叩きつけられている音が耳に張った。

「……ッ」

気が付けば俺はマトカルに組み敷かれていた。彼女は荒々しく俺の上にのしかかってきた。その彼女の体を、俺は再び強く抱きしめた。

◆　◆　◆

「……大丈夫か？」

「……ああ」

マトカルは俺の体の上でその身を横たえたまま、小さな声で呟いた。先ほどまでの、まるで火のついたような振る舞いが嘘のように、まるで子犬のような大人しい姿になっていた。

「……さっきのは、どうだった？」

「……別に」

「もう、やらないでおいた方がいいかな？」

「……任せる」

「いいってことかな？」

「……たまになら」

俺はマトカルの髪の毛を優しく撫でながら言葉を続ける。

「アーモンドたちは、明日も来るかな？」

「そうだな……」

マトカルは、ゆっくりと、まるで噛んで含めるような口調で、ラマロン皇国が抱える問題を話していった。その内容をまとめると、こんな感じだ。

ラマロン皇国軍は、皇帝が統帥権を持ち、すべての決定は皇帝の許可が必要となっている。当然、人事権も皇帝にあるが、実際は、皇帝を取り巻く貴族たちによって決められることが多いのだという。

そのため、ラマロン皇国軍の上層部は、貴族の息のかかった者が就任することが多く、こうした者の大半は、あまり能力的にすぐれない者が多い。従って、その尻ぬぐいは下士官が担当することになる。

こうした体制は、平時であれば何とか機能させることができるのだが、いざ、有事になると、脆く崩れ去るものだ。ラマロンが俺たちに大敗したのも、それが大きな原因だった。確かに、カリエスを押しのけて総司令官の任に就いたケーニッヒはそこそこ優秀だったが、その取り巻きをイエスマンで固めたために、彼の暴走を止める者がいなかったのだ。

その体制を何とか変えようと試みているのが、元帥であるカリエスだった。彼はラマロン軍を能力制にして、有能な者を将官に引き上げるべく努力していた。だが、貴族たちの反発は強く、今のアーモンドが総司令官に就任することも、相当骨を折ったらしい。

そんな貴族たちが、次期皇帝に、現皇帝の二人の子息のどちらかを望むのは、当然と言える。二人とも貴族よりの考えの持ち主で、貴族たちとしては、自分たちの意見が通りやすくなるからだ。そこをカリエスとアーモンドは懸念している。

今は宰相のマドリンを巻き込みながら、カリエス、アーモンドの二人で軍を押さえてはいるが、三人のうちの誰かが欠けると、現在の体制維持は困難となる。そうなると、貴族たちの暴走を止めることが難しくなると言うのだ。

アガルタの属国となったとはいえ、それは表面上であり、内部は以前の旧体制が維持されたままだ。貴族たちは基本的に、自分の利益しか考えない者が多い。現在のこの状況下でさえ、アガルタの傘下から脱して独立し、アガルタもしくはヒーデータに攻め込むべきだと考えている者が多いのだ。一体どうやったら、そんな夢が見られるのかが不思議だが、残念なことにそれが現実なのだという。

マトカル曰く、宰相のマドリンは、ああ見えて先が見通せる政治家なのだそうだ。おそらく彼の頭の中には、百年先のラマロン皇国を考えている。

「ファルコを皇帝の座に就けることで、貴族たちの不満は爆破する。むしろ、マドリンやアーモンドはそれを狙っているのだ。貴族や軍にはびこる不満分子をあぶり出して、一気に膿を出し切ろうというのだろう」

「そして、新たなラマロン皇国を作ろう、ってか……。ただ、それをすることで、あの三人は命を狙われるな」

「それは元より覚悟の上だろう。三人……いや、特にアーモンドは、そうなったとしても、生き残る自信があるのだろうな」

「ほう、逞しいな」

「あの男は、総司令官に就任してから、自分の身辺を警備する親衛隊を組織していると聞く。その数は年を追うごとに増えている。軍の中でも見込みのあるものを取りこんでいるので、戦闘力と優秀さはなかなかのものだ」

「さすがはマトだな。そこまで把握していたとはな。でも、どうして俺に教えるのをためらったんだ？」

「話をしなくとも、わかるだろう」

「まあ、ね。ファルコをそんなところにやりたくはないと思っているから、か」

「リノス様も、イヤではないのか……」

「イヤだよ。誰が好き好んで自分の息子をそんな危険なところにやりたいと思う。ファルコは、俺の大切な師匠の名前を与えた子だ。もう少し、俺の手元に置いて成長を見守りたい」

「少し、落ち着きがないところがあるが、きっと、ひとかどの人物になるだろう。私が、育ててみせる」

「そうだな。落ち着きがない……か。俺はそうは思わないけれど、もしそうだとしたら、本当に師匠譲りの子だな」

俺はそんなことを言いながら、在りし日の師匠の姿を思い浮かべる。確かに、せっかちな師匠だった。あれは俺がまだ修行を始めたばかりの頃。エリルが帰ってくるよりも前のことだった。両手に炎を纏わせた師匠が俺に対して口を開いていた。

「リノス、これから訓練を始めるぞ」

師匠がその言葉を言い終わるか終わらないかのうちに、両手から火球が俺に向けて放たれていた。当然、結界が間に合わず、俺は全身に大やけどを負って、その場に倒れ伏した。

「儂は両手からファイヤーボールを放つから、お前は全方向に結界を張ってそれを防ぐのだ。……結界を張るのが遅い！　何をやっているんだ、全く」

師匠がいようといまいが、二十四時間結界を張り続けようと決心をした瞬間だった。あのときの熱さは今でも鮮明に覚えている。俺は思わず笑みを漏らす。

ふと、抱きしめているマトカルの体が冷たく感じた。どうやら、汗のせいで、体が冷たくなっているようだ。

「マト、寒いだろう」

「いや、そんなことは……」

「あるだろう」

そう言いながら俺はマトカルを隣に寝かせ、体を毛布で覆う。左腕を彼女の首の下に潜り込ませ、右腕を腹の上に置く。

「少しは温かくなったかな？」

「十分だ」

マトカルは俺の手をギュッと握った……。

第六百四話　長期的戦略

翌日、マドリンとアーモンドから再び、時間を取ってほしいとの連絡があった。別に今日、今すぐというわけではない。ここ二日、三日の内で時間を取ってもらえればうれしいというものだった。

迎賓館の官長であるミンシに改めて聞いてみたところ、マドリンに疲れの色が見えているようだ。俺は彼らにゆっくり休むように伝え、会見の日程を翌日の昼過ぎに設定した。

その後、俺はリコにこのことを相談した。

「そうですの……」

執務室の机の前で、彼女は腕を組みながらあらぬ方向に視線を泳がせた。目がゆっくりと左右に動いている。リコの頭脳が、最適解を導き出そうとしている。やがて、視線が再び俺に向けられた。

「国同士の話で言えば、今回の話は、願ってもない好機ですわ」

「……」

「リノス、あなたの子供が、あなたの血を継いだ子供が、ラマロン皇国の主となるのです。これは、アガルタが労せずにラマロンを併合することを意味しますわ。戦わずしてアガルタは領土を拡大できるのです。こんなことは、めったにあることではありませんわ」

「ああ。そうだな」

「ただ……一人の父親、一人の母親として考えれば、幼いファルコを他国に出すのは、心苦しいですわ。私も同じ立場……。イデアを養子にと言われれば、私も苦しむと思いますわ」

「そうだろうな」

「それに、何と言っても危険ですわ。リノスが言うように、間違いなくラマロンでは国が割れることになりますわ。おそらく、規模はどうあれ、反乱が起こることも想定されます。たとえ、それが平定されたとしても、皇国内では火種がくすぶり続けることになりますわ」

「そうなんだ。そこなんだリコ。俺が一番懸念するところは。アーモンドはおそらく、不穏分子を徹底的に粛正するつもりだ。たとえそれが上手くいったとしても、結果的に憎悪の対象はファルコに向けられることになりはしないか。そうなると、将来的に大きな危機を抱えることになると思うんだ」

「その通りですわ。そこを上手くやらねばなりませんわ。失敗すると、憎悪の対象が、アガルタに向く危険性がありますわ。そうなれば、ラマロンがアガルタの敵国に廻る可能性が出てきます」

「そうならないためには、やはり、この話を断るべきじゃないかと思うんだ」

「ただ……それをすると、今度は国内から批判が出ますわね。こんないい話を何故受けないのか、という……」

「そんな批判、出るかな？」

「それはそうですわ。ただ、表立って批判する方は少ないと思いますわ。ヒーデータの兄上あたりは、嫌味の一つも言うでしょうが……」

「言う……かな？」

あの陛下のことだ。俺がさらに上を行く戦略を持っているのだろう？　くらいのことは言うかもしれないな。それをしばらくは言い続けられる……な。

そんなことを考えていると、リコがずっと俺に視線を向けていることに気づく。俺は姿勢を正して、彼女に向き直る。

「リコの意見を聞きたい」

「私は、ファルコをラマロンにやるべきだと思いますわ」

「……」

やはりそうか。国家レベルの話で考えれば、それは当然のことと言える。ただ、それでも俺は何となく割り切れない気持ちでいっぱいだ。甘いと言われればそれまでなのだが。

「ただし」

リコが言葉を続ける。瞳の奥に鋭い光が見える。

「それには一つ、条件を付けるのです」

「条件？」

「ファルコがラマロン皇国に行くのは、彼が成人した後とするのです」

「なるほど。基本的に俺たちの許で育てて、その間に、皇国が静かになるようにする……か」

「さらに言えば、今の皇帝の娘とファルコを娶せるのですわ」

「婚約……か」

「で、あれば、軍は難しいかもしれませんが、民衆に支持は得られますわ。皇帝の娘がファルコに嫁ぐ……。しかもその嫁ぎ先は、同じ皇国の血が入っている……となれば、安心感があるでしょうから」

「まあ、確かに、そうだな」

「もっとも注意を払わねばならないのは、皇国に住む人々ですわ。ただでさえ、民衆は、先のアガルタ侵攻で大きな犠牲を強いられています。決して、皇国軍に対する感情はよいとは言えないと思いますわ。そこにきて、また反乱が起これば、今度は民衆が蜂起する可能性がありますわ。そうなれば、軍も何もあったものではありませんわ」

「なるほどな。確かに。軍の反乱のことばかり考えていたが、やはり、考えるべきはそこに住む人々のことだよな。さすがはリコだ。ありがとう。俺の心の中で、納得いくものができたよ」

「よかったですわ」

リコはにっこりと、優しい笑みを浮かべた。

彼女が退室してから、俺は窓の外を眺めながら、しばらくぼんやりと物思いにふけった。一体どのくらいその姿勢を取っていただろうか。突然扉をノックする音に、ハッと我に返る。

入室を促すと、そこにはマトカルが立っていた。

「……マト、どうした？」

「リコ様から言われて来たのだ」

「なるほど。リコらしいな」

俺は苦笑いを浮かべながら、彼女をこちらに呼び寄せ、先ほどの会話を語って聞かせた。

「……そうか」

「マトには賛成しにくい話かもしれないがな」

「いや、そんなことはない。ファルコにとってもいい話だ。将来が約束されたわけだからな。一国の王になど、なろうと思ってなれるものではない。あの子には強運が備わっているのだろう」

「そうか……。ファルコが、嫌がらなければいいんだがな。何と言っても、師匠は束縛されることを極端に嫌う人だった。彼もそうならなきゃいいんだが」

「そうだな」

俺たちは笑みを交わし合う。しばらくして、マトカルが真剣な表情に変わり、ゆっくりと口を開いた。

「一つ、お願いがある」

「何だい？」

「ファルコが皇国に行くときは、私も付いて行くことを許してほしい」

「マト……」

「そのときは、このアガルタ軍の職を辞していくことになるだろう。心配はいらない。そのときのために、若い連中を育てていくつもりだ」

「いや、何もそこまでせんでも……」

「いや、注意するべきだ。皇国の姫を娶るのだろう？　であれば、後宮の干渉を受けることになる。あそこに住まう者たちは、まさに海千山千の女たちだ。意に沿わぬ者を抹殺するなど、何とも思わぬ連中だ」

「マト……」

「皇国の血が入っているとはいえ、ファルコの母は私なのだ。後宮の女たちは、私を皇帝の一族とは認めなかった。母の身分が低かったからな。そんな連中なのだ。ファルコが皇国に入ることに反対す

るのは目に見えている」

「……」

「軍の抑えは、アーモンドに任せておけば、何とかするだろう。だが、後宮に関しては、彼の力は及ばない。当然、マドリン宰相らにもその力はない。だから、私が行かねばならないのだ」

「色々と、面倒くさいんだな」

「王族とは、そんなものだ。だが、これは、皇国にとってはよい好機だ」

「そうなのかな？」

「これまで、あの国は何度となく改革を試みてきたが、その全てを軍と後宮によって封じられてきた。今回のことが成功すれば、少なくとも軍の改革は劇的に進めることができるだろう。あとは、残る後宮を改革することができれば、あの国は新しい皇帝の許で、真の発展を遂げることができるはずだ」

「そうか……。取り敢えず、マドリン宰相らには、今日の話をすることにしよう。向こうがそれを受けるか受けないかは自由だ。断られる可能性だってあるしな。それに、もし、受け入れたとしても、ファルコが皇国に行くのはまだ十年以上先の話だ。その間に色々と対策を打つこともできるだろうしな」

俺の言葉に、マトカルはゆっくりと頷いた。

第六百四話　長期的戦略（後書き）

コミカライズ第二十一話、２／２　１２：００まで公開中です！
是非、チェック下さい！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６

第六百五話　ひとまず、は

翌日、マドリンとアーモンドを引見した俺は、アガルタ側の提案を伝えた。そこには、リコとマトカルを同席させた。二人は驚くかと思いきや、意外なほどに落ち着いていて、一切表情を変えずに、俺の言葉を受け取った。

「……承知、いたしました」

まるで、噛んで含めるような言い方でマドリンが返答した。その隣でアーモンドは、ゆっくりと頷いている。

「今回の提案に関してですが、一つ懸念があるのですが、よろしいですか？」

「はい、何なりと」

「ラマロン皇国は、後宮の意向もなかなか強いと聞いています。マドリン宰相のこの話は、後宮の方々は承知しておいでなのですか？」

「……正直に申し上げまして、賛成は得られておりません」

「……」

「ただ、そちらに関しては、陛下がお隠れ遊ばされる前に、ある程度解決するかと思います」

「と、言われると？」

「今、陛下の御身は、我々の手の内にあるのです」

マドリンの言わんとしていることが、俺にはよく理解できない。それを察したのか、アーモンドが口を開く。

「これは、アガルタ王なればこそ打ち明けますが、我々は、陛下の御威光をもって、後宮と軍の改革を行うつもりなのです」

「と、いうと？」

「有体に申し上げれば、陛下の御威光をタテに、軍と後宮に命令を発するのです」

「それは、つまり……？」

「リノス」

リコが小さな声で、まるで俺を諭すように呟く。そして、マドリンとアーモンドに向けて、まるで労うような表情で口を開いた。

「お察し、しますわ……」

その言葉に、二人は深々と頭を下げた。

「いいえ。陛下がご存命のうちに、次期王が決定いたしました。このマドリン、ホッと胸を撫で下ろしております。アガルタ王様のご英断、心より感謝申し上げます。あとは、軍と後宮の改革ですな……。これは、私の責任で、何としてもやらねばならぬことなのです」

姿勢を正したマドリンが、言葉を続ける。その額には、汗が浮き出ていた。

「今、この状態で陛下がお隠れあそばせば、オーハン様かクラハラ様を次期皇帝とせねばならなくなりましょう。そうなれば、間違いなく後宮は皇帝と軍上層部にいる貴族たちを通じて、アガルタに対して戦いを挑むよう、けしかけてまいります。そしておそらく、軍の一部もそれに呼応するでしょう。それは、後宮という飼い犬が怖いために、外にいる魔物……いや、これは失礼しました。外にいるドラゴンクラスの強い者に刃を向けるような話となります。それだけは、何としても避けねばなりませんでした。私身にとりまして、最大の懸案事項が解決することが叶いました。改めて御礼申し上げます」

「しかし、だ。宰相殿。こう申しては何だが、今の皇国がアガルタに敵わないのは、火を見るよりも明らかだろう。なぜ、そのような話になるのか、私には理解できない」

マトカルが冷静な口調で話しかけてくる。マドリンは、まさにその通りと言わんばかりに、コクコクと頷きながら、彼女に視線を向ける。

「左様です。冷静になって考えればわかる話なのですが、後宮の女官たちは、狭い局面でしか物事を考えておりません。一年先、二年先だけを見据えて、皇国の国威の上昇を考えると、そうした考えが生み出されてしまうのです」

「そもそも、前提条件が間違っているのです」

口を開いたのは、アーモンドだ。彼は、さも残念と言わんばかりの

表情を浮かべながら、言葉を続ける。

「後宮もしかり、我々軍人もしかり。戦いのための前提条件を誤ると、国を亡ぼす事態を招く。アガルタとの戦いでそれを十分に思い知ったはずなのですが、未だ、そうした意見が軍からも出る。情けない限りです。もっともそうした意見は上層部から出されることがほとんどです。私を含め、あの戦いに従軍した者たち、アガルタと戦闘を共にした者たちは、アガルタ軍の強さ、恐ろしさはイヤという程知っております。下の者……。とりわけ、下士官の者たちは、そのことを十分にわきまえております。それが救いと言えば救いです」

……何ということだ。まあ、後宮がそうした考えになりがちというのは、何となくわかる。そういう場所は、そう簡単に出入りできるようなところでもなさそうだ。ずっと狭い空間に閉じ込められ、情報の少ない状況にあっては、そうしたスットンキョウな意見も出るのかもしれない。

ただ、軍の上層部がそれでは、国としては大問題だ。むしろ、これまで大きな反乱が起きなかったことが不思議なくらいだ。

そうなると、マドリンとアーモンドは、戦略家としてかなりのスキルがあると言える。これまでも、皇帝の権威を前面に押し立てて軍と後宮を抑え込んできたのだろう。その考え方は、理に適っている。これからも、マドリンとアーモンドの諜報力と情報力を駆使して、反乱を起こしそうな者を抑えていけば、最小限の被害でこれからのコトを済ませることが可能だろう。

「それにしても、お見事ですわね」

突然、リコの声が聞こえてきて、ハッと我に返る。彼女はマドリンとアーモンドを交互に見比べながら、言葉を続ける。

「よく、皇帝陛下の御身を後宮から出せましたわね」

「いいえ。単なる偶然でございます」

マドリンは笑みを浮かべながら、照れ臭そうに手を振っている。

「カリエス将軍……。いや、今は元帥ですな。かの方が、皇帝陛下の母君であらせられる皇太后陛下……いや、あのときは、大魔王が皇太后陛下に化けていたのですな。その皇太后陛下を討ちました際、陛下は錯乱なさいました。さすがの後宮も、暴れまわる陛下を抑えきれぬと思ったのか、その御身を、我々の手に委ねたのです。幸い、陛下の容体はその後、安定されたのですが、それ以降は、ブツブツと独り言を言われるのみで、まるで老人のごとく大人しくなられておいでです」

「まあ……。そんな陛下を、マドリン宰相様がお一人で？」

「ええ、まあ。しかしそれは、臣下として当然の勤めでございます」

「ただ、そのお陰で、宰相様はずいぶんと得をしておいでだ」

アーモンドがニヤリと笑みを浮かべながら口を挟む。マドリンは、汗を拭っている。察するところ、これまでこの宰相は、皇帝の権威をかさに着て、オイシイ思いをしているようだ。ただ、この宰相は、そうしたことを嫌味なく行っているのだろう。で、なければ、後宮の女官たちが黙っていないはずだ。何のかんのと理由をつけて、皇帝を後宮に呼び戻すように画策するはずだからだ。

一歩間違えれば、命を狙われる……いや、実際は何度となく命を狙われた経験があるのかもしれないが、表向きは、ラマロン皇国は平和を保ってきた。内部のゴタゴタを諸外国に悟られずに国を維持してきたこの宰相は、やはりかなり優秀な政治家と言える。

ただ、こうした話を聞いてしまった以上、息子のファルコを皇国にやるのは、二の足を踏んでしまう。たった今、彼が成人してから皇帝の座に就けてはどうかと提案したばかりなのに、その舌の根が乾かないうちに、お国の情勢がよろしくないので、考え直させてくださいと言うのは許されないことはよくわかっている。だが、師匠の名を付けたかわいい我が子だ。明らかに不幸せになる環境には、放り込みたくはない。俺は、そうした感情を込めながら、マドリンたちに対して口を開いた。

「まずは、ラマロン皇国が落ち着くように、お願いします。俺も、協力できるところは、協力しますので」

「……ありがとうございます」

マドリンは、満面の笑みを浮かべながら、恭しく一礼した。

第六百六話　コソコソ話

マドリン宰相とアーモンド司令官は、それから数日後、ラマロン皇国に帰っていった。彼らはアガルタに逗留している間、あちこちと出歩いて貪欲に情報を収集していた。マドリン宰相などは、あの巨体であちこちを動き回るのだ。それはそれでかなり目立っていたようだ。

一方のアーモンドは、ずっとアガルタ軍本部に通い続けていた。兵士の練兵を入念に観察していただけでなく、自分も一緒になって訓練を受けていたらしい。実際に経験しなければ、体にどれだけの負荷がかかっているのかがわからないとのことだ。それだけでなく、マトカルやクノゲンなど、軍の指揮官たちと話し合い、軍とはどうあるべきかについて議論を交わしていたらしい。まさに、軍人になるために生まれてきたような方だ、とはクノゲンの言葉だが、概ねそれは合っているような気がする。

あとは、あの国がマドリンたちの思惑通りに、コトが運んでくれればいいのだが……。

◆　◆　◆

「オイ聞いたか！」

「ああ。今聞いたところだ」

二人の男がとある一室で顔を見合わせている。男の一人は怒りのためか、顔が真っ赤に紅潮している。もう一方の男は、不安そうな表

情を浮かべていて、その顔色は蒼白だった。

話し合っているのは、ツカカ侯爵とシアキ侯爵だった。二人は、ラマロン皇国の中でも歴史ある名家の当主だった。ツカカ侯爵は軍の参謀に名を連ねており、もう一人のシアキ侯爵は、軍関係の物品調達を担う職に就いていた。シアキは言うまでもなく、ツカカも、参謀とはいえ、作戦会議に参加することは稀だった。言わば、二人は軍関係者とはいいながら、閑職と言ってよかった。

ツカカ侯爵は、顔を真っ赤にしながら、懐から一本の瓶を取り出し、グイッとそれを呷った。

「また呑んでいるのか。貴公も好きだな」

シアキは呆れたような表情を浮かべる。だが、ツカカは再び瓶を呷る。

「呑まねば平静でいられんではないか。事もあろうに、皇太子をファルコ殿に決めるというのは、一体どういう了見だ！」

ツカカは持っていた瓶を乱暴にテーブルの上に叩きつけた。シアキは心の中で、これだけの勢いで打ち付けられたにもかかわらず、ヒビ一つ入っていない瓶を見て、ずいぶん丈夫なのだなと考えていた。そんな彼の様子には構わず、ツカカはさらに言葉を続ける。

「そもそもだな！　ファルコ殿の母親はあの、マトカルだ。確かに皇帝陛下の血筋ではあるが、陛下からは皇族と認められなかった女だ。しかも、その亭主はあの、アガルタ王だ。奴隷上がりの男だ。そんな氏素性も定かでない男と、平民に堕ちた女との間に生まれた子供に、皇位を継がせるとはどういうことだ！　これでは、我が皇

国は完全にアガルタに併呑される形になるではないか！　宰相は気が狂れているとしか思えん！」

「き……貴公……言葉を謹んではどうか」

「構うことはない。この部屋にいるのは、私と貴様だけだ。どうということはない。それに、貴様も私と同じ腹だろう？」

「……」

「貴様だけではない。ラマロン貴族全員が同じ気持ちだ。なぜ、オーハン様かクラハラ様ではないのだ。あの方たちであれば、国のことも、我々貴族のこともよくご存じのはずだ。皇国にとって皇位を継ぐに最もふさわしいお方がおいでになるのに、なぜそんなことになるのだ！」

「……やはり、マドリン宰相か」

シアキが小さな声で呟く。それを聞いたツカカが、椅子を蹴るようにして立ち上がる。

「ああ、あの佞臣だ！　あのタヌキ野郎、陛下の権威を存分にかさに着ている。そもそも、陛下があの佞臣の許におわすのがいけないのだ！　やはり御身を後宮から出すべきではなかった」

「陛下には何度も宮殿にお戻りになるように奏上した。だが、陛下は頑として首を縦に振らなかった……」

「それとて、陛下御自らご発言になったわけではあるまい！　すべてあの佞臣を通してではないか！」

「噂によると、陛下はすでに話ができる状態ではないと聞いた……」

「そんなことは、とうの昔から噂されていることだ。だが、マドリンの奴……どこをどうしたものか、陛下の情報が一切出てこんのだ。ありとあらゆる方法を試してみたが、全くなしのつぶてだ」

「それは、マドリンの周囲を皇国軍が固めているからだろう」

シアキが小さな声で呟く。ツカカは思わず舌打ちをしながら、再び席に座る。

「総司令官の座を、あのアーモンドに渡したから、こんなことになるのだ」

「……」

「あのアーモンドも、平民上がりの男だ。それに、憲兵隊総司令官のシーバも、元々はアーモンドの副司令官だった男だ。コイツも平民上がりだ。平民ずれが、この皇国を好き勝手している。忌々しい限りだ」

ツカカはテーブルに転がっている瓶を取り上げ、再びそれを口に含む。

「なんとしても、この現状を変えねばならない。このまま捨て置けば、皇国は本当に滅ぶ」

「やはり、オーハン様かクラハラ様に立っていただかねば……」

「そうだ！　シアキ、貴様の言う通りだ！　オーハン様かクラハラ様に立っていただこう！」

「……貴公、落ち着かれよ。皆、そう思っているのだ。しかし、憲兵隊が監視の目を光らせている。今、オーハン様かクラハラ様に近づけば、反乱分子と見なされるだろう」

「ならば、このまま皇国は、あの佞臣の思うがままではないか！」

「むしろ、宰相殿が狙っているのは、そこなのかもしれぬ。オーハン様とクラハラ様に誰も近づけず、反乱の芽を摘もうと考えているのかもしれん」

「そうはさせるまい！　何としても、何としても、オーハン様かクラハラ様に立っていただくのだ！」

「……」

「他の参謀たちにも秘かに声をかけてみる。少し待っていろ」

ツカカはシアキを今夜、屋敷に来るようにと告げて、足早に部屋を後にした。

◆　◆　◆

同じ頃、アーモンドの許には、貴族たちの動きが逐次報告されていた。

「ほう、ツカカ侯爵とシアキ侯爵が、密談している……か。あの二人のことだ、心配はあるまい。ただ、ツカカ侯爵は、己の手は汚さ

ないかわりに、他力本願が強いお方だ。誰かを動かしてコトを起こそうとする可能性がある。ツカカ侯爵が動くとなれば、シアキ侯爵も動くだろう。そうなれば、軍関係者の何人かは動くことになるだろう。この二人から目を離すな」

アーモンドは目の前に控えた男に命じる。男は、皇都の往来を歩いている、ごく普通の一般人の格好をしていた。彼は直立不動の姿勢を取ると、挙手の礼をしてアーモンドの前を辞した。

「予想以上に早く動き出したな」

誰に言うともなく呟くと、傍に控えていた兵士に、憲兵司令官のシーバを呼ぶようにと命じた。

「シーバ、入ります」

入室してきたシーバは、アーモンドが座る机の前までやってきて、挙手の礼を取った。

「貴族たちの動きが、かなり活発化しているようだ」

「はい。その通りです。ここ数日は、貴族の屋敷で行われる食事会が激増しています」

「ハッハッハ。何ともわかりやすいな」

アーモンドは朗らかな笑みを浮かべていたが、やがて、眼光に鋭さを帯びた表情に変わった。

「貴族たちの動きに目を光らせよ。さらには、オーハン殿下とクラ

ハラ殿下の見張りも厳重にせよ。近づく者すべてに目を光らせろ」

「ハハッ」

「オーハン殿下もしくはクラハラ殿下のどちらかを戴いて挙兵に及べば、物怪の幸いだ。誰と誰がこれに加担するのか……。時を与えてじっくりと見極めようではないか……。あとで十把ひとからげで葬れば、手間も省ける」

アーモンドの言葉に、シーバはゆっくりと頭を下げた。

第六百七話　宰相マドリン

貴族たちの不穏な動きは、宰相であるマドリンの許にも報告されていた。

彼は執務室で一人、ぼんやりと窓の外に視線を泳がせる。

……軍と貴族たちは、予想通りの動きに出ていた。むしろ、そうした動きを的確につかんでいるにもかかわらず、表立って行動を起こしていないアーモンドたちが、予想外ですらあった。

おそらく、アーモンドはこのラマロンの膿を出し切るつもりなのだ。

そこまで考えたとき、マドリン宰相の胸は暗鬱となる。アーモンドが動いたそのときは、大規模な粛清が始まるからだ。そうなれば、貴族や軍の関係者から激しい憎しみを買うだろう。

……皇都の道端で、無残に惨殺された自分の姿が頭の中に浮かび上がる。

マドリンは大きく息を吐き出す。もとよりそれは覚悟の上だ。寝室のベッドで、家族に看取られながらこの世を去るという平穏な死を迎えることはできないだろう。ただ、その前に、為さねばならないことがある。

ラマロン皇国の体制は、何としても今、変えねばならない。そうしなければこの国は世界の中で後進国として取り残される。

マドリンは宰相に就任する前から、この国が衰退に向かっていることを正確に見抜いていた。彼は誰よりもこの国を愛していた。その愛する国が衰退していく姿を見るのは、彼には我慢ならなかった。

その原因は貴族と軍だった。前例の踏襲が基本とされていたために、国としての成長は停滞し、軍は貴族の意のままに操られ、己の出世の道具として無益な戦争を起こすこともしばしばだった。そうしたことで、将来ある若い命が失われていたのだ。

マドリンは成人すると、迷うことなく政治の世界に足を踏み入れた。そこは魑魅魍魎が跋扈する世界で、汚れ仕事にも手を染めざるを得なかった。身分の低い貴族出身であった彼だが、貴族たちの欲望を上手に叶えながら、彼は出世の階段を一歩一歩登っていったのだった。

その彼とがよく合ったのが、皇国軍のカリエス将軍だった。彼は名族の生まれであるにもかかわらず、その出自を鼻にかけることもなく、誰とでも友好的に付き合うことのできる男だった。しかも、皇国軍を改革せねばならないという考えは、マドリンと目指すものが驚くほど一致していた。

この二人が手を取り合うのに、時間はかからなかった。以降彼らは手に手を取り合いながら、この国のトップに上り詰めていったのだった。

マドリンは、アガルタの都の光景を思い出していた。これからの世界は、あの国が覇権を握っていくことになるのは明らかだった。実際にアガルタの街を、人を見て、彼はその考えが正しいことを確信していた。

アガルタは、生まれた家の身分に左右されない、言わば実力主義の国だ。どんなに低い身分に生まれたとしても、己の努力と才覚によって、希望する仕事に就くことができる。たとえ農民の家に生まれたとしても、軍人になることもできるし、商人になることもできる。才覚さえあれば、宰相になることも可能だろう。

そのためだろうか、アガルタでは頻繁に担当者が変わる。皇国内の官吏の中では、それについて不満を訴える者もあるが、担当が変わったことで何か大きな問題が起こったことはない。寧ろ、担当が変わることは、この国もあるのだ。そのために、各国に少なからず迷惑がかかる場合があることも、マドリンは知っている。

彼はゆっくり椅子から立ち上がり、窓辺に向かって歩いて行く。そして、そこから見える皇都の光景を見つめる。

美しい都だと思う。整ったよい街並みだ。だが、見てくれこそアガルタのそれと変わりはしないが、街の雰囲気はアガルタとは、全く異なっている。それは、活気だった。

アガルタの都は、活気に満ちていた。街の中では、色々な人の声が飛び交い、そこに住む人々の顔が生き生きとしているように見えた。そうした、一人一人の生きるパワーがあの都を活気あるものに彩っているのだ。それに比べて、この皇都はどうだ。貴族たちは落ち着いていると評しているが、そうではない。表向きは美しい街並みを繕ってはいるが、一歩路地に入ると、物乞いや春を売る女性たちがたむろしている。

それは今に始まったことではないが、そうした暗い雰囲気を、表通りの建物を美々しく飾ることで隠そうとしている。その傾向が最近強まってきていることを、マドリンは敏感に感じていた。もはや、

猶予はない。自分の目の黒いうちに、何とかしてこの国を立て直さねばならない。マドリンは窓の外に視線を向けながら、心の中で決意をあらためた。

さあ、仕事に戻ろう。そう自分に言い聞かせて踵を返すと、何と執務室の扉の前に、カリエス元帥が立っていた。

「考え事をしておいでかな」

にこやかな笑みを浮かべながら彼はマドリンにゆっくりと近づいてきた。

「いえ、なに、下らぬことです。元帥のおいでに気づきもせず、失礼しました」

「いやいや。扉をノックしても返事がない。確かに、執務室にいると言われたので、もしかすると、中で倒れているやもと思い、失礼ながら入らせてもらった。宰相殿が考え事をなさるとは、珍しいこともあるものだ」

「いやなに、最近年のせいか、考え事をすることが多くなりましてな」

そんな会話を交わしながら、二人は机の前に置かれたソファーに腰かける。

「顔色が優れぬな。働きすぎなのではないか」

「元帥こそ。お互いさまです」

「そうだな。お互い、もう若くはない。どこぞでのんびりと暮らすことも、考えねばなるまい」

「そうですな。元帥は、アガルタの都に行ったことはおありかな？」

「アガルタ？　……いや、ないな。ジュカ王国であった頃に、何度か行ったことはあるのだが、アガルタになってからは一度もない」

「一度、行ってみられるとよい。活気があって、よい街だ」

「アーモンドも同じことを言っていた。ずいぶんと刺激を受けていたな」

「お互い、体が空きましたら、一度、物見遊山に参りましょう。それも、なるべく早めに」

「ほう、いやに急くではないか。どうなされた？」

「アガルタ王がおいでになるときに行きませんと、我々は行きにくくなりますでな」

「どういうことだ？」

「あの王のことです。王位を自分の子息に譲らず、能力ある者に譲る可能性がある。そうなっては、我々はおいそれとアガルタに旅することができなくなる可能性がありますでな」

「ハッハッハ。宰相殿は最近、面白いことを言われるようになったな」

「恐れ入ります。ただ、我が国は、あの国を手本にして、これからの世の中を渡っていかねばなりますまい」

「そうだな。聡い国はすでに、優秀な者をアガルタに留学させていると聞く。何せ大賢者・メイリアスが直接教えているのだからな。我が国も……」

「ええ。そうですな……」

マドリンは苦笑いを浮かべる。ラマロン皇国も国費でアガルタに数名の若者を留学させていたが、それらはすべて貴族の次男・三男や平民出身の者たちだった。彼らは確かに極めて優秀で勤勉ではあったが、今の皇国の体制では、彼らが帰国しても国の中枢で働く可能性は低いと言ってよかった。

……あの、若い者たちに、国の行く末を託したい。

マドリンは、アガルタに送りだした者たちの顔を思い浮かべながら、心の中で呟いた。

彼らはアガルタで多くの知識を吸収してくるだろう。その彼らを国の中枢に迎えて経験を積ませる。当然、自分の知識、経験を余すところなく伝える。アガルタからファルコ様を皇帝に迎える頃には、若い者たちが国を動かしていくだけの体制が整っているはずだ。

「これから、忙しくなりそうだ」

カリエス元帥の言葉で、マドリン宰相は我に返る。

「ええ。まだしばらくは、骨を折らねばなりませんかな」

二人は笑みを交わし合う。その表情には少し、寂しそうな影が浮かんでいた……。

第六百八話　ツカカ侯爵

ツカカ侯爵は、馬車に揺られながらぼんやりと皇都の光景を眺めていた。その顔には疲れの色が色濃く出ていた。

……まったく、どいつもこいつも。

彼は心の中で呟く。ここ数日間、ラマロン皇国軍の参謀をはじめとして、多くの軍関係者と話をしたが、どれもよい返事を聞くことができなかった。彼らは、ツカカ侯爵の意見に賛成はするものの、誰も能動的に動こうとはしなかった。それどころか、声をかけた者の返答は、判で押したように同じものだった。

「動かれるときには声をかけてくれ。協力は、する」

皆、ツカカ侯爵と気持ちは同じなのだ。ラマロン皇国の次期皇帝に、アガルタからファルコ殿下を迎えるなどはとんでもないことであり、次期皇帝には、現皇帝の御子息であられるオーハン様かクラハラ様が就くべきである。だが、腹の中でそうは思っても、自分が旗頭となって動くことは御免被るというのが、貴族たちの偽らざる本音なのだ。

しかも彼らは、口には出さないものの、話を持ってきたツカカ侯爵が旗頭になればよいと考えている。ツカカ侯爵は動けば動くほど、己が次期皇帝決定反対の旗頭に祭り上げられる思いがしてならなかった。

……誰ぞ、先頭を切って皆を引っ張る人はいないものか。

彼は車窓に映る景色を眺めながら、ぼんやりとそんなことを考えていた。

「……様。……ナ様。旦那様」

野太い男の声で我に返る。ふと見ると、馭者が馬車の扉を開けたままこちらに視線を向けている。侯爵は舌打ちをして居住まいを正す。

「着いたら着いたと言え」

侯爵は馭者にそんな言葉を投げつけながら馬車を降りる。馭者は恭しく頭を下げるが、彼は侯爵の背中に向かって、ペロリと舌を出した。

「まあ、お帰りなさいまし」

出迎えた妻に、軍帽と剣を無造作に渡す。そして、自室に戻って軍服を脱ぎ、えんじ色のガウンに着替える。その格好のままダイニングに向かい、暖炉の前に置かれたロッキングチェアに腰かける。

そのタイミングを見計らうかのように、メイドのリリャンが酒をついだグラスをトレイに載せて持って来る。侯爵はそれを無言で受け取り、酒を少し舐めた。

いつもは、リリャンの尻か乳を撫でてその感触を楽しむのだが、ここ最近はそんな気にもならない。酒も最近は苦みを感じて、美味いと感じなくなった。

「この酒は、いつのものだ」

「先日、酒屋のフィラーさんに持って来ていただいたものです」

「フィラーに言うておくのだ。古い酒ではなく、新しい酒を持って来いと」

「承知しました」

リリヤンは無表情のまま一礼をして、その場を辞した。彼女の後姿を見ながら侯爵は、自分でも驚くほどに女性に対して興味を失っていることに気が付いて、愕然とした。

あれだけ執心したリリャンであったのに、何とかして、あの体をモノにしようとしていたのに、今はその気が全く起きない。男としての能力がもはや減退してしまったのだろうか。そんなことを考えながら彼は、リリャンの形の良い尻を横目で盗み見る。

妻の手前、侍女に手をつけるということはできない。精々、妻の眼を盗んで、体に触るくらいのことしかできないが、リリャンだけは、別だった。何度も口説いたが、彼女は無表情のまま無理です、と言い続けてきた。そのくせ、彼が体に触っても、いやな顔一つすることはないのだ。

どうにかして自分の寝室に連れ込めないものか……。彼女の部屋に襲いに行くことも考えたが、リリャンは他の侍女たちと同じ部屋で寝起きしている。彼が部屋に踏み込めばたちどころに騒ぎになるのは目に見えていた。だが、何としてもあの体をモノにできないものか……。

「あなた、お食事の用意ができましてよ」

突然、侯爵の思考を止めるようにして妻の顔が目の前に現れる。丸い、皺の増えた顔だ。彼は無言のまま立ち上がり、食卓につく。

目の前の料理を淡々と口に運ぶ。向かいに座る妻とは、食事中ほとんど話をすることがない。もっとも、妻は一人で何かを喋っている。その大半が下らぬ貴族のうわさ話だ。どこの子爵が昇進するだの、どこの男爵家が嫁を娶ろうとしているだの、彼にとっては至極、どうでもよい話ばかりだった。

「あ、そうそう。あなた、次期皇帝のお話、あれはどうなったのです？」

……どうでもいい話だった。もう、次期皇帝はファルコ殿下と発表されたのだ。それがどうしたと聞かれても、答えようがなかった。

「聞けば皆さま反対されているとか……。オーハン様やクラハラ様がおいでになるのに、どうしてそんことをなさいますのかしら。そうそう、今度、オーハン様のお妃さまがお茶会をお開きになるのです。行ってもよろしゅうございましょ？」

「ああ、行ってくるといい」

「あなたがお帰りになる前に帰ってまいりますわ」

……別に、帰ってこなくともよいのだ。深夜まで遊んで来ればよい。そうすれば、リリャンを寝室に連れ込むことができるのだ。だが、妻にはその気持ちを察しているのか、そう簡単に事を運ばせてはくれないようだ。

侯爵は料理を半分ほど残した状態で立ち上がる。

「まあ、もうよろしいの？　せっかくあなたの好きな鴨の肉を用意しましたのに……」

「少し、疲れているのだ」

「まあ、それは大変ですこと。あ、そうそう、聞けば、オーハン様も今回の決定には痛くご不満だとか。何とかして、このことを陛下に再考していただけないかと日々、嘆いておいでだとか……。お労しい限りですわ」

「私で協力できることがあれば、何でもするとお妃さまに伝えてくれ」

侯爵はそう言って席を立った。

それから数日後、ツカカ侯爵の執務室に、来客があった。

ラマロン皇国軍の参謀に名を連ねているとはいえ、この侯爵の許に人が訪ねてくるのは珍しいと言えた。軍事作戦を立案し、決定する作戦会議に参加することがなく、すべての事柄が決定され、ただ、承認するだけの参謀会議にのみ出席する彼に、軍人としての発言権はない。そんな何の力も持たない男を訪ねる者は、皆無と言えた。

そんな彼の許にやって来た男は、ハーノと名乗った。年のころは五十代だろうか。グレーの髪をきれいに整え、執事服のような黒づくめの格好をしていて、とても紳士的な男に見えた。

「で、この私に用とは何だ」

「はい。実は、皇国軍でお使いになっている紙……。現在は、ラワネスク商会のものをお使いかと存じますが、私共の扱います紙もお使いいただけないかと思いまして……」

「それならば筋違いだ。物品を扱う部局に言うがよい」

「ええ。ただ、局長をお勤めのオイル伯爵様は、ラワネスク商会をご贔屓にされておいででございまして、私共の話を聞いていただけないのです。誠に恐れ入りますが、侯爵様よりお口添えいただけないかと……」

ツカカ侯爵は小さく舌打ちをする。確かに、オイル伯爵は、子供の頃によく面倒を見てやった間柄だ。自分が声をかければ、イヤとは言わないはずだ。

「手前どもは、品質には自信を持っております。お値段も、ラワネスク商会よりも安価で提供することができます。私どもの商品を、一度お使いいただければ、きっと、お気に召していただける自信がございます」

ハーノは小脇に抱えていた包を、ツカカ侯爵の机の上に置いた。そして、包をとくと、中から白い、上質の紙が現れた。ハーノはそのうちの一枚を手に取り、侯爵の前に差し出す。彼は訝りながらそれを手に取る。

「……？」

よく見ると、白い紙の中に何か描かれている。それは文字だった。

『三日後の夜、貴君の屋敷に迎えの者を寄こす。我が屋敷に来られたし。――オーハン』

侯爵は思わず眼を見開いた。そのまま顔を上げると、ハーノは真剣な表情を浮かべながら、ゆっくりと頷いた。

第六百九話　予想した通り

ラマロン皇国宮殿のすぐ近くの堀端に、オーハン殿下の屋敷はあった。ツカカ侯爵は、馬車に揺られながら、屋敷の長く続く壁を眺めていた。

侯爵には、大体の察しがついていた。おそらく、オーハン様はこの私に、次期皇帝を自分となる活動の旗頭になれと言うのだろう。

彼はぼんやりとこれからのことを想像する。が、明るい未来像は浮かんでこない。

「はぁぁぁ」

侯爵は思わず、えづくような声を漏らす。一体なぜ、こうなってしまったのか……。

「侯爵様！」

「うわっ！」

突然、大声が聞こえて、彼は飛び上がらんばかりに驚く。ふと見ると、迎えに来た馭者の男が扉を開けて、柔和な笑みを浮かべていた。だが、その眼は全く笑っていなかった。

「どうぞ」

「……」

促されるままに侯爵は馬車を降りる。目の前には、広大な屋敷が広がっていた。

「ようこそおいで下さいました」

闇の中からもみ手をしながら、初老の男が現れた。彼は自らの名をスージと名乗った。言わずと知れた、オーハン殿下の侍従の一人だ。

彼は常に殿下の屋敷に詰めており、表舞台に出てくることは少ない。殿下が宮殿にお越しの際に、付き従っている彼の姿をたまに目にするくらいで、直接言葉を交わすのは、これが最初と言ってよかった。

「殿下が、首を長くしてお待ちです。ささ、どうぞ」

馬車を降りた場所から、屋敷に向かって一直線に道が伸びている。その両脇には、薄暗くてよくみえはしないものの、よく手入れされた生垣が植えられているのが見える。その道の真ん中を、スージはゆっくりと歩いている。

……この道を戻るときの私は、きっと、絶望しているのだろうな。

ツカカ侯爵は、思わず心の中で呟いた。

玄関に着くと、扉がひとりでに開いた。言うまでもなく、中で控えていた家人が開けたのだが、侯爵はそうした事柄にもいちいち体を震わせて反応した。

広いホールを抜け、真っすぐ廊下を進むと、突き当りにドアが見えた。スージはその前までくると、クルリと踵を返して、見事な所作

で扉を開けた。

「どうぞ」

恭しく頭を下げるスージを一瞥しながら中に入る。すると、目の前に巨大な暖炉が見えた。その前には大きなロッキングチェアが置かれていて、よく見るとその椅子から手がニュッと伸びていた。人差し指がクイクイと動いている。こちらに来いと言っているようだ。

「殿下に、くれぐれも粗相ございませんように」

スージは小さな声で呟きながら、扉を音もなく閉めた。

ロッキングチェアが小さく揺れている。そこには、大柄だが、少し小太りな男が、目を閉じながら揺れに身を任せていた。

「殿下におかせられましては、ご機嫌も麗しく、何よりとお慶びを申し上げ奉ります」

ツカカ侯爵は片膝をついて頭を垂れる。オーハン殿下の言葉を待つが、無言のままだ。彼はゆっくりと顔を上げて、殿下の顔を盗み見る。

「不快じゃ」

オーハンが目を閉じたままで口を開く。ツカカは慌てて頭を下げる。

「余は、ラマロン皇国皇帝、ラマロン・クロウ・フレインスの子息である。その余が、父亡き後の皇位を継ぐのに、何故このような策を弄さねばならん。そこらに、このようなことを話さねばならん。

不快じゃ」

「……ははっ」

「クラハラはどうしておる？」

「はっ……。特に何かをなされているというお話は、伝わっておりません」

「ヤツに皇位を継ぐ資格などない」

「……」

「考えてもみよ。あ奴は、軍事に関して全くの素人じゃ。軍の手綱を握れぬ皇帝など、笑止じゃ。違うか？」

「は……ははっ」

オーハン殿下の言うことはもっともだが、実際のところ、貴族たちは穏便で無口なクラハラ殿下を希望している。だが、そんなことは、この殿下の前では口が裂けても言うことはできない。

「余は、真に皇国の未来を憂いておる。お父上のお命は、もっていかほどじゃ？」

「それが……我々には、全く伝わってまいりません」

「そこらにもか……。マドリンの口の堅さは、さすがじゃな」

そう言って、オーハンはフフフと笑う。

「じゃが、マドリンがアガルタに向かったのじゃ。お父上のお命は長くもたぬと考えて苦しかるまい？」

「はっ……」

「そこを含め、爵位を持つ者の気持ちはよくわかっておる。次期皇帝に、あのアガルタ王とマトカルとの間に生まれた子供を就けるなど、神をも恐れぬ鬼畜の所業じゃ。そのようなことが許されるわけはない。違うか？」

「はっ。私めも、同感でございます」

オーハンはゆっくり頷くと、目を開いて、その視線をツカカ侯爵に向けた。

「して、そこらには、策はあるのか？」

「それが……」

「フン。どうせ、そのようなところじゃろうと思っておったわ」

オーハンはそう呟くと、ゆっくりと椅子から立ち上がった。

「今の動きを止める手立ては、二つしかない。一つは宰相であるマドリンの命を奪うこと。そして、もう一つが、ファルコの命を奪うことじゃ」

「畏れながら……」

「何じゃ？」

「ファルコ殿下は今、アガルタにおいでになります。あの国は、アガルタ王の結界により……」

「わかっておる」

「ハッ」

「じゃによって、狙うはマドリン一人の命じゃ」

「それも、試みた者がおりますが、屈強の皇国軍の者が警備をしておりますため、近づくことすらも困難であったと……」

「なにも、襲撃だけが手段ではあるまい？」

「と、申されますと？」

「色々あるであろうが。毒殺などはどうじゃ」

「それは……」

「まあよい。それはそなたらに任せることとしよう。余は、これだけは言っておく。父上亡きあと、この皇国の皇位を継ぐ意思はある。そして、余は、その資格がある」

「は……ははっ」

オーハン殿下は、ツカカをじっと睨んでいたが、やがて、無表情のまま手を二回鳴らした。すると、部屋の扉がノックされ、侍従のス

ージーが扉を開けた。

「どうぞ、ご案内いたします」

ツカカ侯爵は促されるまま、オーハン殿下に一礼して、部屋を後にした。

「殿下は、大変心を痛めておいでございます」

長い廊下を歩きながら、スージーは慇懃に口を開く。

「この皇国が、これまで高貴な血をもって代々治めてきたこの国が汚されることが、殿下には耐えられないのでございます。ええ。思いは、爵位を持つ皆様と同じなのでございます」

彼は、オーハンがどれほど心を痛めているのかを切々と語りながら、侯爵を馬車まで案内する。

「殿下は、ツカカ侯爵様に大いに期待しておいでございます。どうぞ、その見事な采配で、この国を導いていかれますことを、お祈り申しております」

スージーはそう言って馬車の扉を閉めた。

……やはり、予想した通りになった。

ツカカ侯爵は、車窓に映る景色をぼんやりと眺めながら、そんなことを思った。何か行動を起こさねば……。きっと、オーハン殿下のことだ。このツカカに全てを任せたと周囲の者に言うに違いない。その話は、瞬く間に貴族の間に広がるだろう。ラマロン皇国の貴族

たちの眼が、自分に注がれることになるのだ。何も動かなければ、殿下の命令に叛いたと言われかねない。そうなれば、家は潰れる。

そうわかっていても、この侯爵は、腹をくくることができなかった。むしろ、何とかして、この現状を変えずに、コトを納められないか……。彼はそんなことを考え始めていた。

だが、どう考えてみても、解決策は思い浮かばなかった。考えることに疲れた彼は、心の中で、自分に言い聞かせるようにして呟いた。

……しばらくは、様子見ということにしよう。色々な方と相談して、決めればよいのだ。まさか、殿下もすぐにとは言われないだろう。

そんなことを考えたそのとき、馬車が突然止まった……。

第六百十話　　こっちの方が……

「何だ！　どうした！」

ツカカ侯爵は思わず声を上げるが、その瞬間、しまったと心の中で舌打ちをする。この馬車は自分の家のものではない。オーハン殿下から差し向けられた馬車なのだ。とはいえ、車窓に視線を向けると、まだ皇都の街中だ。自分の屋敷ではない。

「いかがしたのだ」

侯爵は遠慮気味に馭者に向かって話しかける。だが、反応はない。一体どうしたのだと馬車の扉を開けようとしたそのとき、外に人の気配を感じた。

「失礼します」

突然扉が開き、武装した兵士が控えていた。ツカカ侯爵はこれでも、ラマロン皇国軍の参謀に名を連ねる男だ。その男に一介の兵士が話しかけてくるなど、この国では無礼なことと言えた。

「何だ貴様らは！」

上には慇懃無礼、下には傍若無人というこの国の軍人らしい態度で彼は声を上げた。だが、兵士の甲に刻まれた紋章を見て彼は、腰が抜けるほどに仰天した。

それは、皇帝の紋章だった。

この国でこの紋章を就けることが許されているのは、皇帝を除いて二人しかいない。すなわちそれは、先ほどお目通りしたオーハン殿下と、もう一人の子息であるクラハラ殿下だった。

「ツカカ参謀とお見受けいたします。我が主、クラハラ殿下が是非、お会いしたいと申しております。恐れ入りますが、我々と同道いただけますでしょうか」

言葉こそへり下っているが、彼らが有無を言わせぬ覚悟であることはよく見て取れた。扉の前に控えている三人の兵士の内、二人が腰の剣に手をかけているのだ。断ればここで、駅者もろとも命を奪うつもりなのだろう。

「わ……わかった」

ここで逃げ腰の姿を見せてはいけない。侯爵は動揺を必死で隠しながら、できるだけ尊大な態度を取りながら馬車を降りた。

「どうぞ、こちらへ」

兵士が右手を出して侯爵を案内する。周囲には数十名の武装した兵士が控えていた。彼らはツカカが歩き出すと素早く彼の周囲に集まった。

歩きながらふと、先ほど乗っていた馬車に視線を向ける。御者台に武装した兵士が二人上がっていて、そのうちの一人は剣を抜き、その切っ先を駅者に向けている。兵士はおそらく、駅者を脅しているのだろう。男がコクコクと頷いている。それを確認したもう一人の兵士が、男の手を取って、その上に何か袋のようなものを載せてい

るのが見えた。

「どうぞ」

兵士が案内した場所には、別の馬車が停まっていた。侯爵は無言でそこに乗り込んだ。

……もう、なるようにしか、ならん。

ツカカは腕を組みながら目を閉じた。彼はここに来て、流れに身を任せようと腹をくくった。

馬車は右へ左へと進路を変える。てっきり、クラハラ殿下の屋敷に向かうのだと思っていたが、それにしては時間がかかりすぎている。あの場所からであれば、ものの五分もあれば屋敷に着くはずだ。だが、馬車はかなりの時間走り続けている。

ツカカは目を開けて窓の外を見た。すでに月が空に昇っていた。車窓からは草原が見えていた。

……皇都から、離れたのか？

侯爵は窓に顔を付けるようにして、外の景色を見つめた。一体どこに連れて行こうとしているのか。そう考えたとき、馬車がゆっくりと止まった。

扉が開き、馬車を降りると、目の前に瀟洒な建物が現れた。訝る侯爵に、兵士の一人が小さな声で呟く。

「ここは、カルマタール離宮でございます」

カルマタール離宮とは、皇帝が生母である皇太后、ラマロン・クロウ・レイシスのために膨大な国費を注ぎ込んで作り上げた別荘地だ。母親思いの皇帝は、毎年年が改まるとここに皇太后と共にやって来て、しばしの休息を行うのがこの国の慣例となっていた。

ツカカは、噂には聞いていたが、この離宮に足を踏み入れるのは初めてだった。大変に見事な庭であるとは聞いていたが、振り返った先には広大な草原が広がっており、その規模の大きさに彼は圧倒されていた。

「どうぞ、ご案内いたします」

兵士の一人が傍にやって来て、彼を案内する。てっきり建物の中に入るのかと思いきや、兵士はスタスタとあらぬ方向に歩き出した。

建物を右手に見ながら、草原の中を歩く。ふと見ると、視線の先に大きな池が見えた。そこに、数名の人間が集まっているのが見えた。

「殿下、お連れ申しました」

人々の近くに来ると、案内をしていた兵士はスッと膝をついて頭を下げた。その声で、目の前の数名がこちらを振り返る。知った顔も何人かいる。その人の輪の一番奥にいる人物は、相変わらずツカカに背を向けている。クラハラ殿下だ。

「月が、美しいのぅ」

殿下の感慨深げな声が聞こえた。視線を向けていた者が慌てて振り返り、殿下の言葉に恭しく追随する。

「左様でございますな」

「水面に映る月が、何とも言えず幽玄ではございませんか」

彼らの声にゆっくり頷きながら、クラハラ殿下は相変わらず背を向け続けている。

「ツカカは、どうじゃ？」

突然、殿下に名前を呼ばれた侯爵は、慌てて膝をつく。

「私のようなむさくるしき軍人には、勿体ない景色でございます」

「フフフ、そうか」

クラハラ殿下は振り返り、大股でツカカの許に近づく。

「よく来てくれた」

「ハッ」

「せっかくオーハンの屋敷から開放されたにもかかわらず、我が許に伺候してもろうた。ご苦労じゃったな」

「いいえ。殿下の御為ならば」

「フフフ。ツカカ、本日ソナタを呼んだのは、そなたを労おうと思うてのことじゃ」

「はっ？」

「ご苦労であったの」

ツカカはクラハラ殿下の言葉の意味がわからず、ポカンとした表情を浮かべる。そんな彼を眺めながら、クラハラはクスクスと笑い声をあげた。

「オーハンに無理難題を頼まれたのであろう。言わずともわかる」

「……」

「あ奴のことじゃ。そなたを呼び出し、次期皇帝がオーハンとなるよう動けと命じられたのであろう」

「いっ、いや……」

「ハハハハハ。そなたは正直じゃな。顔に書いてあるわ」

クラハラ殿下がケラケラと笑う。それに伴って、周囲の者も笑い声をあげる。

「あ奴が次期皇帝に名乗りを上げるなど、笑止千万。ラマロン皇国の次期皇帝は、この私と決まっておるのだ。この私を差し置いて、あ奴が皇帝の位に就くなど、あり得ぬことだ」

「ハハッ」

「あ奴は、私より数時間早く生まれた、それだけで私を弟呼ばわりする。だが、私と奴は血筋が違う。皇后を母に持つ私と、妾腹の奴

とでは、どちらが上か、おのずからわかりそうなものじゃ」

周囲の者たちが、まことに、その通りでございますなどと言って追随する。ツカカは黙って頭を下げ続ける。

「私は、あ奴とは違う。己の部下を動かして皇位を継ごうなどとは思わぬ。皇位は、私の手で継いでみせる。今日そなたを呼んだのは、私を皇位に就けるように動けと命じるわけではない。安心せよ」

「ははっ」

「そなたには、皇国軍の抑えを任せたい」

「皇国軍を……」

「私が皇位を継ぐとなると、オーハンは黙ってはおるまい。間違いなく、皇国軍を動かして私の皇位継承を邪魔するであろう。そなたは、皇国軍の参謀に名を連ねておる。軍を抑えてもらいたい」

「は、ハハッ」

ツカカの頭の中で、色々な計算が行われる。……答えはすぐに出た。この殿下に従う方が、己の立場を危うくせずに済みそうだ。

「特に、元帥であるカリエスと総司令官のアーモンドの動きには注意してもらいたい。何かコトが起これば、すぐに私に知らせて欲しいのだ」

「ハハッ」

「頼りに思うぞ、ツカカ」

クラハラ殿下は、ニッコリと笑みを浮かべる。その顔を見ながら、ツカカは深々と頭を下げるのだった。

第六百十一話　今のところ……

「日和見ばかりか……」

アーモンドは執務室で苦笑いを浮かべていた。ラマロン皇国の貴族連中の動きは、彼の予想を大きく超えて、誰も動く者がいなかったからだ。

「ツカカ侯爵が気の毒と言えば気の毒だが、まあ、あの方のことだ。動きはするまい」

すでに彼は、ツカカ侯爵とシアキ侯爵をはじめとする、貴族たちの動きを詳細に掴んでいた。そこには、オーハン、クラハラの両殿下が、誰に、何を命じたのかというところまで把握することができていた。

まさに口ばかりだけの者ばかりだ。オーハン殿下に至っては、ツカカ侯爵だけでなく、役に立ちそうな貴族に片っ端から声をかけて、己の皇位継承を後押しするように命じていた。対して、クラハラも、オーハンが声をかけそうな貴族に接触し、誘いに乗らないように釘をさす動きを繰り返していた。

……まあ、皇国らしいな。

アーモンドは、心の中で呟く。彼の目論見では、少なくとも皇国軍の中で反乱の一つでも起こるだろうと予想していたが、そうした動きは今のところ見えない。これはつまり、軍上層部と下士官との意思の疎通ができていないことを表す。

貴族で固められた上層部と、言わば、平民からたたき上げが多い下士官とは、根本的に考え方が違う。貴族たちは下士官の兵士たちを己の駒として見なしているが、下士官たちは、そんな貴族たちを軽蔑している。従って、下士官の連中は、表面上は服従の姿勢を取っているが、腹の中では貴族たちに服従する気持ちは微塵もない。彼らは、戦いのプロであるという自負が強い。それは的を射ていて、貴族がいかに煽ろうとも、彼ら下士官がいないと、戦争はできないのだ。

アーモンドは満足していた。下士官は動かなかった。ということは、ラマロン皇国軍は今や、アーモンドの手中にあると言って過言ではなかった。彼は立ち上がり、マドリン宰相の許に向かった。

「……おお、総司令官。ちょうど、私もあなたのところに行こうとしていたのです」

「私の許に？」

「はい。ですが、お越しいただいたおかげで、手間が省けました。皇国軍のこと、よろしくお頼みいたします」

「どうことでしょうか？」

「いやなに、今から、陛下のご命令で、次期皇帝をファルコ様とすることを発表するのです」

「今から、ですか？」

「はい。この機を逸してはなりません。聞けば、皇国軍の者で……。

いや、下士官の方々で、オーハン殿下とクラハラ殿下に加担する者がいないと聞きました」

「宰相様は、それを、どちらから……」

「ホッホッホ、長く生きていますと、耳がよくなるのですよ」

宰相は肩をすくめて、いたずらっぽく笑った。

下士官たちの話は、つい先ほど、アーモンドの許にもたらされたものだった。それを、この宰相はほぼ同時に入手していたことになる。いや、ヘタをすれば、自分よりも先に、情報を入手していた可能性すらあるのだ。

アーモンドは、瞬時にカリエス元帥が情報を漏らしたのかと考えたが、それはないと言ってよかった。おそらく元帥は、今このときに、その報告を聞いているはずだからだ。アーモンドが部屋を出る直前に、部下に命じて、元帥に報告をさせたのだ。

……宰相は、皇国軍にも深い情報網を持っているのだな。

アーモンドは、薄々は感じていたことだが、あらためて、この宰相の優れた情報収集能力を目の当たりにして、ちょっとした寒気を感じた。

そんな彼に、マドリンは相変わらず柔和な笑みを浮かべている。

「さあ、これから忙しくなりますぞ。皇国軍のこと、よろしくお頼みします」

そう言うと、マドリンは、よっこらせと言いながら、立ち上がる。
そして、そのまま部屋を出て行った。

◆◆◆

勅書

天佑を保有し萬世一系の皇祚を踐たるラマロン皇国皇帝は昭に忠誠勇武なる汝有衆に示す。

朕茲に次期皇帝を、朕が孫子たるバーサーム・ダーケ・ファルコとすることを宣す。朕が百僚有司は励精職務を奉行し、朕が衆庶は各々其の本分を尽し、一心国家の総力を挙げて皇国の繁栄を達成するに遺算なからむことを期せよ。

御名御璽

◆◆◆

マドリンの行動は早かった。彼はアーモンドとの会談から、わずか三十分後に、次期皇帝をファルコとすることを発表した。その用意周到さにアーモンドは呆れかえり、すぐに部下たちに命じて、皇都の警備を厳重にするように命じた。

次期皇帝決定の報は、たちまちのうちに貴族たちに知れ渡り、上を下への大騒ぎとなった。渙発された詔勅には、現皇帝、ラマロン・クロウ・フレインス直筆のサインが記されており、そこにはご丁寧に、御璽まで押されているという念の入れようだった。これに異を唱える者は、皇帝への反逆、ひいては、国家に対する反逆となる。貴族たちは大いに動揺しながらも、多くの者は、声を潜めて成り行

きを見守るほかはなかった。

「うまくいきましたな」

カリエス元帥、マドリン宰相、そして、アーモンド司令官の三人は、宰相の自室で話し合いの場を持っていた。発表から二週間が経過したが、今のところ、表立って反対する動きは見られなかった。

「嵐の前の静けさ、でないことを祈るのみだ」

カリエス元帥は、そう言って遠くを見つめる。

「元帥は、このままでは終わらぬ、と」

「いや、そうは言っておらん」

「元帥の予感は当たりますからな」

マドリンはそう言いながら笑みを浮かべ、視線をアーモンドに向けた。

「用心するのに、越したことはありません」

その言葉に、アーモンドはゆっくりと頷く。その様子に、カリエス元帥は困ったような表情で手を振る。

「いや、大げさに考えなくてもいい。むしろ、過度な警備は、皇都に住む人々を戸惑わせるだけだ。今のままでいい。別に、何かコトが起こったわけではないのだ」

「お言葉ですが、元帥。コトが起こってからでは遅いのです。起こる前に、火種は消しておきませんと」

「相変わらず、アーモンドは厳しいな」

「……とはいえ、私が把握している情報によりますと、オーハン殿下は、今のところ目立った動きはありません。一方のクラハラ殿下は、ショックのあまり寝込んでおいでになるとのことです」

「大泣きされた挙句、錯乱されて、部屋に閉じ込められているという表現が正しいようですがな」

「……まるで宰相様は、見てきたようにお話になりますね」

「いやいや、あの殿下のご気性を考えれば、すぐに察しがつきます」

アーモンドは、チラリと宰相の表情を見たが、やがて、ゆっくり息を吐き出すと、さらに言葉を続けた。

「皇国軍ですが、ツカカ侯爵とシアキ侯爵をはじめとした、軍上層部につきましては、目立った動きはありません。とはいえ、あちこちで交流しているとの報告もあることから、監視の目は緩めぬように致します」

「そうしていただけるとありがたい。よろしくお頼み申します」

マドリンは恭しく頭を下げる。

「それにしても、宰相殿の手腕には驚かされる。あの勅書に記されていたのは、紛れもなく陛下の直筆。よく、あの勅書にサインをし

ていただけたものだ」

「ホッホッホ。まあ、たまたま、というところでしょうな」

「たまたま、とは？　今、陛下は人事不省の状態であると聞いている。そんな陛下がサインなどできるわけがないと思っていたのだが……」

「元帥も鋭いですな。いえ、たまたま、詔勅が私の手元にあった。それだけなのです」

「詔勅が手元に？　ますますわからん」

「いえ、かなり前のこと……。陛下が一度、病でお倒れになられたことがありました。そのとき、陛下より白紙の勅書を戴いていたのです。もし、万が一のことがあるときに備えて……。今回はそれを使わせていただいたのです」

「宰相殿の口車……、いや、根回しは、抜群だな」

カリエスの言葉が終わると同時に、一人の男が入室してきて、マドリンの耳元で何かを呟いた。宰相の表情が一変した。

「皆様、たった今、陛下が崩御あそばされました」

第六百十二話　お前に任せた？

皇帝が崩御したとの報を受けたラマロン皇国は、すぐさま、すべての国民が三日間の喪に服した。突然の発表であったため、とりわけ、皇都の人々は右往左往の大騒ぎであったが、貴族たちの動きは落ち着いており、宮殿内は比較的静かな状態であった。

「まあ、皇帝陛下の崩御は四十年ぶりだ。ご先代様のことを知らぬ者も多い。致し方ないだろう」

宰相のマドリンは、皇都の混乱を収束しようと注力していた。彼は、目の前に控える若い官吏たちを前にして、次々と指示を出していく。

「宰相様、お尋ねしてもよろしいでしょうか」

まるで、苛立ちを抑えきれないかのように、若い男が早口でまくし立てた。本来ならば、宰相の言葉を遮ることは、大変な失礼に当たる行為だ。だが、マドリンは落ち着いた表情を浮かべたまま、その若者に向き直った。

「このような慣習は、無意味かと存じます」

「ほう、そうか。しかし、我が皇国の皇帝陛下がお隠れ遊ばしたのだ。国を挙げて陛下の喪に服すのは、当然ではないか」

「国民は、大いに迷惑しております」

「だろうな。だからこそ、こうしてお前たち若い者に動いてもらっ

ている」

「お言葉ですが、宰相様。何も今すぐに喪に服さずとも、一週間後、いや、せめて三日の猶予を与えて、喪に服すようにしてはいかがでしょうか。そうすれば、皇都の人々は十分な準備をすることができます」

「ビーブル、いい加減にしないか！」

宰相の隣に控えていた初老の男が口を挟む。ビーブルと呼ばれた若い男は、明らかに不満そうな表情を浮かべたまま、じっと俯いた。

「いや、いい。よいのだ。ビーブルは世情に詳しい。よく国民の意見を聞いているからこその儂への意見なのだ。だが、今はお前と議論している暇はない。皆の者、よろしく頼むぞ」

マドリンの言葉に、彼の前に控えていた男たちが一斉に頭を垂れた。

「ビーブル、待て」

若者たちが退出する背中越しに、マドリンの声が響いた。若者たちは驚きの表情を浮かべたが、やがて、一人の男を残して、全員がその場を後にしていった。

「ホッホッホ、ビーブル、お前の考えは間違ってはおらん。それだけは言っておく」

マドリンは笑みを浮かべながら、若者に近づき、そして、彼の肩をポンと叩いた。

「常に、国民の目線に立つ。大事なことだ」

「宰相様……私は、この国は変わるべきだと思っております」

「うん？　そうか。儂も同感だ」

「いいえ。私は、宰相様とは全く異なる考えを持っております」

「儂とは、違うか」

「はい。私はこの際、新たな皇帝は立てるべきではないと考えるのです」

「何と……」

「これまでの歴史を鑑みますに、皇帝陛下の下される命令に、ロクなものはございません。先のアガルタへの侵攻もそうです。亡き皇太后陛下とケーニッヒ公爵らに唆された先の陛下が無理な命令を下されたおかげで、我が皇国は、アガルタの属国となり果てました。今や、皇帝制度は百害あって一利なしと言えます。宰相様、不敬を承知で申し上げます。次期皇帝など立てずに、我々だけで皇国を動かしていってはいかがでしょうか？　今ならば、皇国軍も……」

「いいや、そうはいくまい」

マドリンは、両手を上げてビーブルの言葉を遮る。

「もし、我々がそれをしようとしても、貴族たちが黙ってはおるまい。いや、お前の考えはわかる。今ならば、皇国軍を動かして貴族たちを抑え込めと言うのであろう。だが、国の体制をいきなり変え

てしまうのは、それこそ、皇国民を混乱させる。それはするべきでない、と私は考える。それに、皇帝制度は悪いものではない」

「……」

「そんな顔をするな。考えてもみよ。ラマロン皇国は八百年の歴史があるのだ。建国以来、我が国は連綿と皇帝の血を繋いできた。これは、世界中を見廻してみても、稀有な例と言える」

「しかし、それがために……」

「そうだ。皇帝に権力を集中しすぎてしまったがために、この国は多くの無益な戦を生み出した。そして、多くの兵士や民が命を落とした。それは、変えようのない事実だ。だが、使い方次第だと儂は思う。考えてもみよ。アガルタの属国となったとはいえ、皇帝陛下の詔勅は、儂の命令よりもはるかに効果がある。諸外国の使者は皇帝陛下と目通りが許されると大層喜ぶ。対外的に見れば、皇帝陛下がおわす国と言うのは、悪いものではない」

「宰相様は、皇帝の権限を形骸化する、と？」

「最終的にそうなればよい、とは考えておる。それに、皇帝陛下は、一朝一夕に作られるものではない」

「……」

「考えてもみよ。そうじゃな……。クリミアーナ教国のヴィエイユ教皇聖下を考えてみよ。確かに、あのお方の美貌は群を抜いているが……。能力的には、ヴィエイユ様は他国の王をはるかに凌駕しているが、同じ勲章を受けるとした場合、例えば、ヒーデータ帝国や

グルアジア王国の王と比較すると、どちらがお前は嬉しいか？」

「それは……」

「ヴィエイユ様でないことは、確かだろう。いや、そういうものなのだ」

「我々は、色々な弊害を乗り越えながら、皇帝という歴史を持っているのだ。我々がアガルタやクリミアーナに勝てるところと言えば、そこなのだ。これからは、その歴史を活用しながら、この国の行く末を決めてゆけばよい」

「お待ちください、宰相様。それはどういう意味でしょう？」

「儂が死んだあと、この国の行く末を、ビーブル、お前に託したい」

「おっ、お待ちください！」

「なぁに、儂もすぐに死ぬつもりはない。だが、人はいずれ死ぬ。そのときは、頼むぞ」

「……」

「今のうちに、皆と仲良くしておくのだ。むろん、軍の若い連中ともだ。そうせねば、いざというときに、協力してくれる者がいなくなる」

マドリンは、にこやかな笑みを浮かべたままビーブルを眺めている。彼は、その視線にくすぐったさを感じながら、ゆっくりと頭を下げた。

廊下を歩きながら、ビーブルは宰相の言葉が頭から離れずにいた。いつの日か、自分は今の職を追われるだろうと覚悟していた。だが、宰相は、自分が死んだ後のことを託すと言った。

きっとそれは、思ったことをすぐに表情と言葉に出してしまう悪癖のために、集団から浮きがちな自分を戒めるための、彼一流の指導なのだろうと思ってはみるものの、そのまっすぐな瞳は、言葉に嘘はないと思わせるのに十分だった。

……皇帝に権力を渡さず、我々が政治を司る。それは、一歩間違えば、破滅の道を選ぶことになる。

そんなことを考えながら、この若者の頭の中では、これから先、どのように動いてゆけば、その理想は達成できるだろうか考えていた。

……ファルコ様が即位されるのは、成人されてからであると聞いた。とすれば、十年以上の時間はある。この十年間の間で、それだけのことを為すためには……。

後に、マドリンの跡を継ぎ、ラマロン皇国の宰相となる男が、その手腕を発揮し始めるのは、それから数年後のことだった。

◆　◆　◆

「ふう……」

一方、ビーブルを見送ったマドリンは、自室の椅子に腰かけながら、ゆっくりと息を吐き出していた。皇帝が崩御した今このときが、一番大事な時だ。打てる手をすべて打たねばならない。

そう考えていたそのとき、部屋の外を警備していた兵士が入室してきた。彼は小走りにマドリンの許にやってくると、人目を憚るように、彼に耳打ちをしようと顔を近づけてきた。

「何をしているのだ。この部屋にはお前と私しかおらんぞ」

「しっ、失礼しました……。あの……その……」

「何だ。どうしたのだ。落ち着くのだ」

「あの……その……。部屋の外に、オーハン殿下とクラハラ殿下がお越しになっております」

「は？　何ィ！？」

マドリンは思わず椅子から立ち上がった。

第六百十二話　お前に任せた？（後書き）

コミカライズ２２話更新されています。２０２１／０３／０２　１２：００まで無料で読めますので、是非チェックしてみてください。相変わらず、メイとペーリスがかわいい（笑）。

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ？ｃａｔｅｇｏｒｙ＝１４

第六百十三話　二人の殿下

宰相の部屋に皇族がやって来る……。八百年の歴史を見ても、こんな珍事は初めてのことだった。

本来であれば、何か用事があれば、宰相であるマドリンを呼び出せば事が済むことだ。で、あるにもかかわらず、わざわざ彼の部屋までやって来るという理由が、マドリン自身にもわからなかった。

彼はすぐさま自席から離れてドアの前に移動する。それを待っていたかのように、彼の部下は扉を開けた。

「フム」

首をユラユラと左右に揺らさせながら、オーハン殿下が入室してくる。そのすぐ後ろからクラハラ殿下が冷たい笑みを浮かべたまま入室してきた。そして、その後ろから、もう一人の人物が入室してきたのが見えた。マドリンはその顔を見て、ギョッとした表情を浮かべた。

銀髪の小柄な女性が、にこやかな笑みを浮かべながら、オーハンとクラハラの後ろに従っている。

……ママ・ジュリエット。

ラマロン皇国後宮を統括する女性であり、「影の皇帝」とも言われる女性だった。亡き皇太后、レイシスに若い頃から仕え、深い信頼を得ていた。そのために、先だって崩御した皇帝の信頼も厚く、そ

の上、オーハン、クラハラ両殿下の教育係を任されていたこともあって、まさに、彼女が黒いものでも白と言えば白となる、隠然とした権力を持つ者として知られていた。

後宮取締役たる彼女が、表向きの場に出てくることは珍しい。マドリンは、彼女がここに来た意図を頭の中で想像する。

オーハンとクラハラの両殿下は、マドリンの机の前で並んで立ち止まった。その彼らのすぐ後ろに、ジュリエットが控える。マドリンからは、ジュリエットがオーハンとクラハラを従えているように見える。事実、この老女の返事が、そのまま両殿下の答えとなることは明らかだった。そうした点では、彼女は、ある意味では、この皇国の王であるとも言えた。

「宰相様におかれましては、御用繁多の中、突然押しかけまして、申し訳もございません」

人懐っこい笑みを浮かべながら、ジュリエットが口を開く。マドリンは心の中で、女狐がと罵りながらも、平静を装って返答する。

「何と勿体ない……。このようなむさくるしい場に、オーハン、クラハラ両殿下がお渡りいただきまして、このマドリン、恐縮の限りでございます」

「ホホホ。オーハン殿下とクラハラ殿下が、是非とも宰相様においでいただきたいと何度も申し上げても、お越しがないと嘆いておいでございました。私も陛下がおいであそばす頃から、何度もお時間を戴きたいと申し入れておりましたが、お忙しいという理由で先延ばしにされておりました。ここは、宰相様の許に直接赴いてみてはと殿下に申し上げましたところ、早速参ろうという話になりまし

て、こうして押しかけた次第でございます」

「左様でございましたか。このマドリンが不調法者でございます故に、殿下、並びにジュリエット様にこのようなご足労をおかけしましたこと、深くお詫び申し上げます」

……殿下が殿下がと言っているが、実はその言葉の主語は、ジュリエット、お前だろう。

マドリンは心の中で毒づきながらも、表情はさも、申し訳なさげな雰囲気を醸し出している。そんな彼の表情を、ジュリエットは相変わらず柔和な笑みで眺め続けている。

「単刀直入に参りましょう。次期皇帝のことでございます」

「はい。思うところは多くあろうかとは存じますが、陛下のご遺言でございますため、ここは何卒ご理解の程をお願い申し上げます」

「その件については、承知しております。殿下も私も、いえ、後宮をはじめとする、ラマロン皇国国民全員が、陛下のご遺言に叛くつもりは毛頭ございません」

「はっ」

「ただ、聞くところによりますと、次期皇帝に指名あそばされたファルコ様ですが、この皇国においでになるのは、成人されてからとか。それは、本当でございますか？」

「はい。アガルタ側からは、そう言って参りました」

「アガルタは、我らの宗主国でございます。その王様がそう申されたのです。我らは従う外はございますまい。宰相様も、ご苦労でございますわね」

「ははっ、ありがとうございます。これからも、懸命に努めてまいります」

「ママ、話がずれているよ」

クラハラ殿下が、呆れたような表情を浮かべながら、チラリとジュリエットに視線を向ける。彼女は両手を口に当てながら、目を丸く見開きながら大仰に驚いた。

「おお、私としたことが！　殿下のご臨席を賜りながら、無駄なおしゃべりをしてしまいました。いけませんね、年を取りますと」

彼女はスッと姿勢を正して、改めてマドリンに向き直る。

「ラマロン皇国八百年の歴史の中で、戦時を除いて皇帝が皇都におわさぬことは、なかったことでございます。しかも、ファルコ様が皇都においでになるのは、十年以上先のこと……。十年以上も皇帝のいない状況は、どう考えても異常ではありませんか？」

「はい。仰せはごもっともですが、何分にも陛下のご遺言には……」

「要は、次期皇帝に、ファルコ様を即位させればよいのでしょう？」

「はっ、左様ですが……」

「そのファルコ様がおいでにならぬ間、ここにおわしますオーハン

殿下とクラハラ殿下が皇帝の代理を務めるというのはいかがでしょう？」

「……は？」

「クラハラ殿下とオーハン殿下がそれぞれ七年間、皇帝の代理を勤めるのです。そうすれば、この皇国で起こりうる問題は全て、解決するかと存じます。そうなれば、後宮は全力で宰相様をお支え致しましょう。そして、ファルコ様をお迎えする準備を万端に整えて御覧に入れましょう」

……開いた口がふさがらなかった。あろうことか、ファルコ様が皇国に入るまで、オーハンとクラハラ殿下が皇帝代理を務めるのだと言う。彼らが即位したところで、問題は何も解決しない。仲の悪い二人のことだ。先に即位した方が、もう片方の派閥を潰しにかかるのは目に見えている。そうなれば、この国はさらに乱れるのだ。

おそらくジュリエットは、この二人の殿下の手綱を上手く握るつもりであるのだろう。そして、手綱を捌く自信があるのだろう。だが、この話は、この殿下とジュリエットだけの問題ではない。彼らから恩恵を受けようとする貴族や軍を巻き込むことになるのだ。この殿下に、貴族たちの欲望を上手にコントロールする手腕はないのだ。

マドリンは、柔和な笑みを浮かべながら、恭しく頭を下げた。

「ありがとうございます。それは全く考えもつきませんでした。なるほど、お二人が交互に皇帝代理にお就きあそばせば、貴族たちも軍の者たちも安心いたしましょう」

マドリンの言葉に、クラハラが満足そうな表情で頷く。

「うむ。さすがは宰相じゃ。すぐに手を打つのじゃ」

「ハッ。殿下のご意向をすぐさまアガルタ王にお伝えいたします」

「アガルタ王？」

「はい。アガルタは我が皇国の宗主国でございます。次期皇帝の件につきましても、そのお許しをいただきました。今回は、ファルコ様の戴冠式までの間、オーハン殿下とクラハラ殿下が皇帝代理として職にお就きあそばす。この名案を、アガルタ王に報告しまして、お許しを得たいと考えます」

「ま……待て。アガルタ王はその話を認めるのか？」

「それは、わかりかねます」

「宰相！　そなたは……」

オーハンの顔が真っ赤に紅潮している。それを感じ取ったジュリエットが、スタスタと二人の殿下の間を縫って、マドリンの前に進み出る。

「私がいま申し上げたお話は、この国にとって最も有効に働くものです。必ずお取り計らいください」

「ははっ。全力を賭しまして」

ジュリエットは、マドリンを一瞥すると、二人の殿下を伴って、部屋を後にしていった。

「尻尾が見えてきたか……」

マドリンは小さな声で呟くと、ゆっくりと自分の机に向かい、椅子に腰を下ろした。彼はあらぬ方向に視線を泳がせる。その双眸には、鋭い光が宿っていた……。

第六百十四話　毒の水晶

宰相との会談を終え、自室に戻ったママ・ジュリエットは、オーハンとクラハラの二人を前にして、満面の笑みを浮かべた。

「もう、何も心配することはございませんわ、殿下。この皇国は、お二人の手に委ねられたも同然ですわ」

「ああ。宰相も我々兄弟が皇帝の座に就くことに、全力を賭すと約束していた。これも、ママのお蔭だ」

オーハンは鼻を膨らませながら胸を張った。ジュリエットはその姿を見ながら、照れた様子を見せる。一方で、クラハラはそんな二人を呆れたような表情で眺めていた。

「いや、まだ、油断はできぬであろう。我々が担うのはあくまで、皇帝代理じゃ。皇帝に即位するわけではない」

クラハラの的を射た発言に、オーハンはぶ然とした表情を浮かべる。そんな二人にジュリエットは優しい眼差しを向けている。

「まあまあクラハラ殿下。確かに、殿下の申されることはごもっともでございますわ。ええ。確かに、皇帝の座にお就き遊ばすわけではございません。しかし、大事なことは、お二人の殿下が、代理とはいえ、皇帝の座に就くというのが大切なのでございます。お二人が皇帝の座におつき遊ばせば、必ず貴族たちは賛同いたします。現に、殿下たちの周囲では、多くの者がお二人を即位させようと画策していることを、この私の耳にも入っております。ファルコ様がこ

の国においでになるまで、十年以上の時がございます。それまでにこの国を、殿下なくてはどうにもならぬようにすればよいだけなのです。この私めも、後宮を挙げてお二人をご支援申し上げます。どうぞ、存分に腕をおふるい下さい。ええ。私が心血を注いでお育て申し上げたお二人なのです。必ず、お出来になります」

「ママ、任せておけ。私が皇帝の座にいる間、軍を完全に皇帝の支配下に組み込んで見せよう。私が皇帝の座を退いても、私なしでは軍は動かぬ。そうすればよいのだろう？」

オーハンはそう言って胸を張る。ジュリエットは満足げな表情を浮かべた。

「では、先に即位をなさるといい。私は、後からで構わぬ」

クラハラはそう言ってニコリと笑う。オーハンは、さも当然だといった表情を浮かべる。その様子を見ながら、クラハラは腹の中で嘯いていた。

……この男は何もわかってはおらぬ。軍をまとめる？　笑止な。元々から軍の中でも厄介者として扱われている貴様が、軍をまとめることなどできようか。おそらく、ヤツが皇帝代理の座に就けば、間違いなく国は荒れる。そのとき、私が混乱を収めるのだ。そうすれば、私の評価は上がる。そうしておいて、私の手に権力を集中させればよいのだ。十年もあれば十分だ。貴族、軍、後宮……その全てを私の掌中にすれば、あとから誰が来ようと関係などない。来たところで、何もできずに、尻尾を撒いてアガルタに帰ることになるのだ。

「……とはいえママ、宰相やアーモンドらの不穏分子らがおっては、

私が即位しても、かじ取りは難しいであろうがな」

オーハンの顔から笑みが消えていた。クラハラはさも、意外だと言わんばかりの表情を浮かべる。だが、そんな二人を前にして、ジュリエットは余裕たっぷりの笑みを浮かべていた。

「殿下、ご懸念には及びません。この私に、考えがございます」

「ほう、さすがは、ママだな」

「ええ。策はございます。殿下には、しばらくはご静観くださいますように」

「うむ、わかった」

オーハンは満足げな表情を浮かべると、隣に控えていたクラハラを一瞥して、足早に部屋を出て行った。

「ママ。私は、ママのことを信頼しているが、くれぐれも無理なことだけはしないでおくれ」

「ええ。承知しております。殿下にご迷惑になるようなことは、一切いたしません」

「そうか」

クラハラはやれやれといった表情を浮かべると、大きなため息をついて、その場を後にしていった。

「なかなかのお方たちですね」

誰も居なくなったジュリエットの部屋に、一人の男が入室してきた。ひげを蓄えた初老の男性……。均整の取れた体つきで、その肉体は服に隠れているが、鍛え上げられているのがわかる。

男はゆっくりとジュリエットに近づくと、優しげな笑みを浮かべた。

「さすがはジュリエット様です。お二人の殿下をあそこまで、見事に育てられましたね」

「いえいえ、私など……。ただ、お二人の仲があまりよろしくありません。できれば、手を取り合って、この難局に立ち向かっていただきたいのですが……」

「ご懸念はごもっともです。ですが、ジュリエット様がおいでになれば、お二人はきっと、手に手を取って、この国を導いていかれるでしょう」

「で、あればよいのですが……」

「きっと、上手くいくことでございましょう。そうそう。本日は、ご希望の品を持って参りました」

男はそう言うと、懐の中から、紫色の布で包まれた物を取り出し、丁寧にそれを広げた。中には、拳大の透明の石が包まれている。

「これ……は？」

「ギアリクリフトでございます」

「ギアリクリフト……」

「ええ。水晶の一種でございます。ただ、この水晶には毒がありますが」

「……」

「大丈夫です。触っていただいても問題はございません」

そう言うと男は、布にくるまれた石を手で掴み、ポンポンと掌の上で投げては掴みして、弄ぶ。しばらくして彼はそれをジュリエットの目の前に差し出した。彼女は少し躊躇いの表情を浮かべたが、やがて、恐る恐る石に向かって手を伸ばした。

「本当に、美しい水晶ですこと」

「ええ。観賞用としても十分使えるものです。ただこの水晶は、熱を通すと蒸発してしまいます」

「まあ……」

「そして、蒸発する際に出ます気体……これに毒が含まれているのです」

「ほう……」

「この毒の素晴らしい点は、無色、無味、無臭ということです。毒の濃度が低い場合は、めまいや咳、頭痛、嘔吐などの症状を起こします。まあ、風邪の症状と似ておりますから、大抵は軽い風邪をひいたと思うものが大半でございます。濃度が高くなりますと、昏倒

いたします。そうなればほぼ、命は助かりません。よく使われるのが、狭い部屋にあらかじめこの石を熱した状態でおいておき、そこに対象者を入れて一瞬で命を奪う……そんな話を聞いたことがございます」

「……難しい、ですわね」

「こちらをお使いください」

男は片手に持っていた、先ほどまで石をくるんでいた紫色の布を差し出す。

「この布には特殊な加工を施しております。魔力を通せば、発熱いたします。この石を布にくるんで魔力を通せば、毒の気体が発生するのでございます」

「ということは……。侍女に命じてこれを仕掛ければ……。狭い場所……。そうね、お手洗いなどよいかしら。宰相や総司令官は、部屋に専用のお手洗いがあります。そこにこれを忍ばせれば……」

「さすがでございます、ジュリエット様。それでしたら、毒の濃度もすぐに高くなりましょう。用を足しに入った瞬間に、命を失うものと存じます」

男の声を聞いて、ジュリエットの顔に再び笑みが浮かぶ。男はさらに話を続ける。

「宰相のマドリンと皇国軍元帥のカリエス、そして、総司令官のアーモンド。この三人を葬れば、皇国におけるアガルタ側の勢力は駆逐されたも同然となります。そうなれば、殿下たちの未来は洋々と

開かれたも同然ともなりましょう」

「ええ、まさにそうですわね」

「それでは、私は、この石……ギアリクリフトを近日中にいくつか持って参ります。お使いになる時期につきましては、ジュリエット様にお任せいたしますので」

「何から何まで、本当にありがとうございます」

「いいえ。ジュリエット様には色々とお世話になっておりますので、このくらいのこと、お安い御用でございます。我らクリミアーナ教国は、いつ何時でも、ジュリエット様の味方でございます」

「頼もしいですわ」

二人の笑い声が、部屋の中に響き渡った。

第六百十五話　宰相の狙い

リノスの許に、ラマロン皇国から早馬の使者が到着したのは、それから数日後のことだった。その書簡には、宰相であるマドリンが重病で臥せっていると書かれていた。

謁見の間で使者を引見したリノスは、宰相の回復を心から祈ると紋切り型の言葉を述べるにとどめた。それは、使者の男からは悲壮感や焦りと言った感情が微塵も感じられなかったからだ。

リノスの言葉を受け取った使者は、すぐに帰国すると告げてその場を後にしていった。

「マドリン宰相が病に臥せっているとなれば、あの国は混乱するんじゃないのかな」

リノスは隣の玉座に控えているリコに呟く。彼女はラマロンからの書簡に目を通しながら、目を閉じて何かを考える素振りをしていた。

「おそらく……混乱はないと思いますわ」

「と、すれば、この書簡は……」

「病に臥せっているのは事実でしょうが……明日をも知れぬ重病と言うのは、少し大げさかもしれませんわ」

「ラマロンはどうしてこんな書簡を寄こしたのかな」

「それは……。アガルタは手を出さないでもらいたいというメッセージかもしれませんわ」

「え？」

「もし、本当にマドリン宰相が重病であったなら、ラマロンは徹底的にその事実を秘匿すると思うのですわ。国の政務を預かる宰相が重病となれば、そこに付け込もうとする者は多くいるでしょうから……」

「確かに、な。それでなくとも、今のラマロンは政情不安だ。そんな時期に、マドリン宰相が倒れたなんて、口が裂けても言えないだろう。もし、それがバレれば、貴族たちが……あ」

「そうですわ。おそらく、この情報を流すことによって、反乱に与する者をあぶりだそうとしているのですわ。アガルタに使者を送ったのは、敵を欺くためだと思いますわ」

「……なるほど。本当に重病なら、同盟国であるアガルタに使者を送るのが自然だよな」

「リノス」

「なんだい、リコ？」

「ラマロンはアガルタの同盟国ではありませんわ。ラマロンは、アガルタの属国ですわ」

「いや、俺はそう思っていないが……」

「あなたはそう思っていなくとも、他国はラマロンはアガルタの属国であると思っていますわ。少なくとも、ラマロン自身は、アガルタの属国であると考えていますわ。それは、先の戦いで敗れたから……。敗れた後、自国の領土の一部をアガルタに割譲して、国として永らえているのです。敗北した国は、無条件で勝者に従うのが掟……。リノス、あなたが一言、皇国の王をファルコとする。異論は認めないと言えば、表向きの問題は解決しますわ」

「う～ん。俺はラマロンを属国と考えたことはないんだけれどな。あくまで、対等な同盟国と考えていたんだが……。やっぱり、俺の考えは甘いのかな」

「いいえ。むしろ、あなたのような王は珍しいですわ。ラマロンの国内に介入せずに、場合によっては援助まですする……そんな王は、古今東西を見渡しても、リノス一人ですわ。ただ……」

「ただ、何だい？」

「リノスのその優しさは、マドリン宰相やアーモンド司令官には伝わっていますが、貴族たちには伝わっていないようですわね。むしろ、彼らはあなたのことを、暗愚な王と捉えて、見下していますわね」

「放っておけばいいさ、そんな連中」

「しかし、彼らは隠然とした権力を持っている……。ラマロンの貴族たちが変わらねば、あの国は遠からず亡ぶ運命にありますわ」

「リコも、マドリン宰相と同じことを言うんだな」

「それはそうですわ。自分たちの利益しか考えない者が動かしている国が永らえたことなどありませんもの。それは、歴史が証明していますわ。私とて、ラマロンには滅んでほしくはないのです。マトの故郷でもありますから……」

「ラマロンは鉱物資源が豊富だ。今、シディーが通っているドワーフ工房から、様々な製品が生み出されて、莫大な利益を得ているのは、ひとえにラマロンのお蔭だ。あの国のお蔭で、アガルタの国庫は潤っている。それに工房からは精強な武器も生み出されている。まさにあの国は、アガルタにとって生命線にちかいものがある。その国が滅ぶと、アガルタは色んな意味で困ることになる、というのも理由の一つだな？」

「……意地悪なことを言わないで下さいませ」

「すまんすまん。いや、リコのお蔭で、これから先の動き方が決まった。ありがとう。リコが俺の傍にいてくれて、本当によかったと思うよ」

リノスの言葉に、リコはゆっくりと頭を下げた。

◆◆◆

一方、ラマロン皇国では、マドリン宰相がベッドの上で横臥していた。彼の目の前には、商人のようなかっこをした若い男が、ニコニコと笑みを浮かべながら立ち尽くしている。

「……何が可笑しい？」

マドリンはゲホゲホと苦しそうな咳をしながら、男を睨みつける。

だが男は全くひるむことなく、ゆっくりと口を開いた。

「あれだけご忠告申しましたのに、宰相様は全く警戒なさっておいでではなかった。自業自得です」

「フン……。警戒はしておった。事実、儂はこうして生きておるではないか。言っておくが、儂が臥せっておるのは、毒のためではない。風邪を引いたからだ」

「ハッハッハ！　面白いことを仰いますね。今まで風邪などひいたことのない宰相様が、突然風邪をひいて寝付かれた……。そちらの方が、ある意味で貴族の皆様に衝撃を与えられますよ」

マドリンは口をへの字に曲げて、プイッと男から視線を逸らせた。口には出さないが、油断をしていたのは事実なのだ。

アーモンド総司令官の部下を通じて、ママ・ジュリエットが暗殺を企んでいることは把握していた。しかもそれは、無味、無臭の毒を使うつもりであることも知らされていたのだった。アーモンドは、秘密裏に皇国軍に所属する結界師を彼の許に遣わしていたのだった。それが、目の前にいる男……ピルナだった。

ピルナは、表向きは宰相付きの官僚として働いていたが、その実は、彼の傍で結界を張り続けていたのだ。

彼は結界師として優秀な男だった。結界内を空気で満たし、外部からの空気を完全に遮断した。それだけでなく、毒を持ったものを結界内に入れないようにする効果まで付与していた。アーモンドは、この宰相のために、自らの秘蔵っ子とも呼べる男を派遣してくれていたのだった。

結界を張るのは、宰相が部屋の外に出るときだった。さすがのピルナをもってしても、二十四時間結界を張り続けるだけの魔力がなかったためだった。

その日、マドリンはどうも腹具合がよくなかった。自室で執務を執っていても、腹がグルグルと鳴り続けていた。そして、やがてゆるやかな便意をもよおしてきた。だが、彼は書き上げてしまわねばならぬ書類と格闘していた。今、手を止めてしまえば、せっかく頭の中で浮かんでいる内容を忘れてしまう恐れがある。できれば、これを書き上げてから手洗いに向かいたかったのだ。

だが、すぐに猛烈な便意に襲われた。彼はギリギリのところまで我慢したが、ついに立ち上がって手洗いに向かって、小走りに走り出した。

「宰相様、お待ちください、結界を！」

ピルナの声もむなしく、宰相は手洗いの扉を開け、すぐに中に入った。その直後、大きな耳鳴りを覚えた。彼は反射的に息を止め、すぐさま用を足して手洗いから出た。そして、部屋の空気を思い切り吸った。その直後、彼はめまいを覚えて、その場にガクンと膝をついたのだった。

「手洗いに毒が仕掛けられていたとは、私も気づきませんでした。あんなところで、宰相様はよく用を足せましたね。普通ならば、用を足す前にあの世に行きですよ」

「なぁに。あのくらいじゃ、儂は死なんさ」

「倒れたときに、即座にご自身を重病と発表しろと仰った。宰相様、あなたも相当な芝居者ですよ」

「これで、貴族がどう動くかだな。儂はしばらく、ここで動向を見守ることにする。よろしく頼むぞ」

宰相の言葉に、ピルナは微笑みながら頷いた。

第六百十六話　動き出す

宰相倒れる――その報は、瞬く間に皇都を駆け巡った。

国を預かる最高権力者が倒れたのだ。当然、宮殿内は混乱するかと思いきや、意外にその様子は見られず、皇都は比較的落ち着いた朝を迎えていた。

ラマロン皇国総司令官であるアーモンドは、執務室から皇都を眺めながら、眉間に皺を刻んでいた。

……宰相が重病であると発表されているのに、誰も動く様子がない。

アーモンドの予測では、一部の貴族が何らかの動きを見せると考えていた。だが、そうした動きは全く見られない。

彼はいつもの平穏な皇都に視線を向けながら、物思いにふける。そのとき、乱暴に部屋の扉を開ける音が響いた。

振り返るとそこには、血相を変えた兵士が、肩で息をしているのが見えた。

「何だ」

「も……申し上げます」

「ん」

「ただ今、宮殿より、皇都閉鎖の命令が出されました！」

「皇都閉鎖？　私は聞いてはいないが？」

「これをご覧ください！」

兵士がアーモンドに近づき、手に持っていた紙を手渡す。そこには、オーハンとクラハラの連名で、マドリン宰相が暗殺されそうになったこと、そのために、宰相が重体に陥ったことが記され、さらには、それは他国が放った暗殺者であると断定されていた。暗殺者は複数いるとされ、それらの者を捕らえるまでこの皇都を閉鎖すると記されていた。

「暗殺者を捕らえる……か。その気になれば、すぐに捕まえられるのではないか？」

アーモンドは呆れたような表情を浮かべる。宰相を毒殺しようとした犯人は、ほぼ間違いなくクラハラとオーハンの背後にいる、後宮総取締役、ママ・ジュリエットであることは間違いなかった。宰相の手洗いに毒を仕掛けることができるのは、宮殿内に勤める女官をおいて他にないのだ。

だが、とアーモンドは心の中で呟く。一体、この命令には何の意味があるのか。この命令を出したところで、結局、動くのは皇国軍なのだ。皇都の城門を警備しているのは、他ならぬ皇国軍だ。その総司令官である自分の承諾なくしては、兵士たちは一人として動くことはない。

アーモンドは、こんな命令に従うつもりなど、毛頭なかった。従って、この命令は全く意味をなさないものだった。

「申し上げます！」

アーモンドの思考を邪魔するかのように、大きな声が響き渡った。見ると、先ほどとは別の兵士が彼の前に控えていた。よく見ると、兵士の服の一部が血に染まっていた。

「どうした？」

「皇都の城門が、閉じられました！」

「何？」

アーモンドは怪訝な表情を浮かべる。彼の頭の中に、皇国軍参謀のツカカ侯爵の顔がよぎったが、あの男が命令を出したところで、従う者は皆無であるはずだ。もし、あの侯爵がそんな命令を出せば、すぐさまアーモンドの許に報告が来るはずなのだ。だが、目の前の兵士は、皇都の城門が閉じられたと報告している。城門には常時、十名の兵士を配置していて、交代で勤務させている。そのどれもが、それなりの腕を持つものばかりだ。

「閉じられたというのは、どういうことだ」

アーモンドは落ち着いた声で兵士に報告を求める。兵士は、挙手の礼を取り、息を整えながら口を開く。

「ハッ。突然、冒険者風の格好をした者が現れまして、オーハン殿下、クラハラ殿下の命令であると言いまして、無理やり城門を閉じようとしました。当然、我々はそうした話は聞いておりませんので、それを阻止しようとしました。しかし、彼らは武器を携帯しており、

我々に斬りかかって参りました。我々も応戦し、小競り合いになりましたが、彼らもかなり腕の立つものばかりで、我々は城門を守り切ることができませんでした」

「それで、お前以外の兵士たちの状況は？」

「ハッ。私は正門を警備しておりましたが、正門警備隊につきましては、負傷者が六名であります」

「その他の者は？」

「ハッ。無傷で撤退しました」

「負傷者の中に、お前は入っているのか？」

「ハッ。入っておりません」

「では、負傷者は七名だな」

「……」

「よくやった」

アーモンドは、兵士の眼をじっと見つめながら口を開く。兵士の眼から涙が溢れていた。

「負傷者を手当てをするために、お前たちは撤退を選択したのだろう。それでいい。あとは私に任せろ。お前は傷の手当てをしろ。誰か、この男の手当てを！」

男は兵士たちに連れられてアーモンドの許を辞した。彼は両手で目を抑え、必死で嗚咽を抑えているように見えた。

アーモンドは男が退室したのを確認すると、傍にいた兵士たちに視線を向ける。

「他の城門の状況をすぐに調べろ。そして、皇国軍を召集せよ」

アーモンドの周囲にいた兵士たちが、まるで蜘の子を散らしたように、部屋から飛び出していった。

◆　◆　◆

アーモンドの許に、次々と報告がもたらされる。皇都を守る三つの城門はすべて閉じられていた。そこには、正門を襲撃したものとも思しきものたちが関わっていた。彼らは相当の手練れだった。ラマロン軍兵士たちを圧倒し、易々と城門を占領したのだった。

「数は……およそ、五十足らず、というところか」

アーモンドは報告をメモした紙を眺めながら、誰に言うともなく呟く。

「警備隊の中でも、それなりの腕を持つ者たちを圧倒しているな……。だが、我が皇国軍の兵士たちも、見事なものだ。無理に相手にかかっていくのではなく、不利と見てその場から撤退している。相手の力量を正確に把握している証拠だ。この制圧の仕方を見れば、相手は相当の手練れだ。そんな者にかかっても、命を落とすだけだ。警備隊の兵士たちは、褒めてやらねばならない」

そこまで言うと、アーモンドは目の前に控えている兵士たちに視線を向ける。いずれも、彼の右腕、左腕ともいうべき優秀な指揮官たちだ。

「ローダ、シルマ、お前たちはそれぞれ百名の兵士たちを連れて、裏門と西門へ向かえ。精鋭を連れて行くことを忘れるな。私は、三百の兵士を連れて、正門に向かうことにする。残る者は、私が戻るまで外部から一切人を入れるな。カリエス元帥の指示に従うのだ。よいな」

アーモンドの言葉に、兵士たちはスッと頭を下げた。

「おそらく、正門の部隊を指揮する者が、総司令官だろう。どのような者か……見分してくれる」

アーモンドは誰に言うともなく呟いて、馬を曳けと命じた。

◆　◆　◆

皇都の正門前には、大勢の大衆が押しかけていた。

正門を守る男たちの中には魔術師がおり、両手に炎を纏わせた状態で、門をとり囲む市民を威圧していた。アーモンド率いる皇国軍は、見事な指示で押し寄せる市民を誘導し、正門前にはみるみる人影が消えていった。

「私は、ラマロン皇国軍総司令官、アーモンドと言う者だ。貴様たちは、何の理由をもって皇都の正門を占拠するのか」

人影が消えたのを確認したアーモンドは、馬に乗ったまま城門前に

進み出て、大声でまくし立てた。すると、冒険者の中から一人の男が進み出てきた。彼はアーモンドを見て、不敵な笑みを浮かべた。

「何を言うか！　オーハン様とクラハラ様のご命令を知らぬとは言わさんぞ！　皇都閉鎖の命令が下っているのにもかかわらず、軍は一向に動こうとしない。それ故、我々が城門を閉じたのだ！」

「城門の警備は、我ら皇国軍が承っている。お前たちは皇国軍のものではあるまい。そんなお前たちが、警備兵たちを傷つけ、城門を占拠するなど、認められたものではない。速やかに縛につくのだ」

「ウハハハハ。何を言うか。我らはツカカ侯爵様から、城門を占拠せよとの命令を受けている！」

「そうか。では、そのツカカ侯爵の上官である私から命じる。占拠をとき、縛に着くのだ」

「そうはいかん！」

男は纏っていたマントを脱いだ。首元に、小さい樽のようなものをぶら下げているのが見えた。

「我々を排除するのであれば、我々は自爆する。この爆弾を持っている者を、この皇都に数十名配置している。これから、爆発が起こるたびに、皇都のどこかが吹っ飛ぶだろう。嘘だと思うのであれば、やってみるがいい」

アーモンドは全くひるむことなく、右手をスッと上げた。すると、弓を構えた兵士たちが彼の前に整列し、男に矢を向けた。

「いいのか？　この爆弾を甘く見ないことだ」

男は両手で首にぶら下げている小さな樽を握った。その瞬間、樽が真っ赤に染まった。

「皆の者、退けぇ！」

アーモンドが大声で叫んだ。その瞬間、男の体から閃光が走った……。

第六百十七話　勅命

凄まじい轟音が響き渡った。その直後、熱波がアーモンドたちの体を通り抜けた。

「被害を報告せよ！」

アーモンドは素早く体勢を立て直すと、周囲の兵士たちに声をかける。彼の許でよく訓練された兵士たちは、すでに整列を整えていた。

「死者ゼロ！　負傷者ゼロ！」

「被害状況を調査！」

兵士たちが扇形に広がり、正門前を包囲する。かなり大きな爆発に巻き込まれたにもかかわらず、門を占領している者たちに傷を受けた者はいないようだった。彼らは、いつでも自爆できるように小さな樽を手に持ち、アーモンドたちを威嚇していた。

そのとき、爆発音が聞こえた。

音をした方向に視線を向けると、宮殿近くから黒い煙が立ち昇っているのが見えた。アーモンドはすぐさま決断した。

「退け」

彼の言葉が意外であったのか、兵士たちが目を丸くして驚いている。だが、アーモンドは冷静に言葉を続けた。

「聞こえなかったか。すぐさま退け」

アーモンドはそう命じると、馬首を宮殿に向けた。

◆　◆　◆

二度目の爆発が起こった現場では、さしたる被害はなかった。爆破されたのは、宮殿内の庭であり、芝生の一部が燃えた程度で、すぐに火は消し止められていた。アーモンドは現場を確認すると、さっさと皇国軍本部に引き上げていった。

「総司令官殿、いかがなさいますか？」

自室に戻ったアーモンドに、部下の一人がそんな言葉で話しかけてきた。男の顔に不安や戸惑いといった感情は微塵もない。何か決意を秘めた表情を浮かべていた。

「お前はどう思うのだ、ダイケ」

アーモンドの言葉に、ダイケと呼ばれた男は、スッと背筋を伸ばす。

「あの、正門前を占領している者たちを、一気に叩くべきであります」

アーモンドが言葉を発しようとしたそのとき、再び爆発音が響き渡った。しばらくすると、また再び爆発音が響き渡る。

「総司令官殿、また宮殿の方向から黒い煙が立ち昇っております！」

「すぐに調査に向かえ」

「はっ！」

部下たちが足早に退室していく。その様子を見ながら、アーモンドは目の前に控えているダイケに口を開く。

「まずは、西門と裏門に向かった者たちを引き上げさせろ。話はそれからだ」

彼の言葉に、ダイケはスッと頭を下げた。

裏門と西門の部隊が引き上げたことを確認したアーモンドは、部下に命じて地図を持ってこさせた。そして、爆発のあった場所に印をつけていった。

「総司令官殿……」

再びダイケが口を開く。アーモンドはジロリと男に視線を向ける。

「やはり、一気呵成に敵を叩くべきであります！」

「うん……」

「時を決めて一気に敵を叩くのです。皇都内に放たれた敵は、門を守る者の爆発を合図に、爆薬を仕掛けておるのでしょう。で、あれば、門を守る者たちの爆発を事前に防げば、皇都内の爆発は起こらぬでしょう。門を制圧してすぐに、皇都に紛れた敵を捜索するのです」

「それは、少し無理がある」

「総司令官殿……」

「ダイケ、お前の作戦は当を得たものであると言える。あの者たちはオーハン・クラハラ両殿下の命令で皇都を封鎖したと言っていた。両殿下から命令が下ったのは事実だろう。だが、我々皇国軍にはそのような命令は受けていない。従って、奴らを排除し、返す刀で両殿下と貴族たちの動きを封じる好機ではある。しかし、だ。我らが門を制圧したところで、皇都に紛れた者を見つけ出すのは、相当な困難を伴う。門が制圧されたと知ったとき、ヤツらはどんな行動を起こすのか、わかったものではない。私は、別に宮殿が壊れようと吹き飛ばされようと、そんなことはどうでもいいと考えている。私が最も懸念するのは、皇都に住む民衆に被害が及ぶことだ。それだけは、何としても避けたいのだ」

「では、総司令官殿は、どうせよとお仰せになるのですか」

「正門、西門、裏門を精鋭部隊をもって囲むのだ」

「……」

「敵がいかなる挑発を繰り返そうとも、手を出すことはならぬ。蟻のはいでる隙間もない位に、それぞれの門を囲むのだ」

アーモンドはそこまで言うと言葉を切り、傍に控えていた副官のシーバに視線を向けた。

「それと、アガルタ王に現状を報告してくれ」

「アガルタ王、でございますか？」

「そうだ。我らの宗主国に報告するのは、当然の義務だろう？」

「……総司令官殿、アガルタ王にお出ましを願うのですね？」

「ああ。あのお方が動かれれば、このような事態は一時間もあれば収束するだろう。両殿下の機先を制するのだ」

アーモンドの言葉に、シーバは納得の表情を浮かべながら、退室していった。

「ダイケ」

「はっ」

「お前の言っていることは正しい。だが、私は、被害を最小限に抑えた状態で、この事態を収束したいのだ。そうすることで、我ら皇国軍の皇都民に対する信頼度は大きく上がる。こんなことを言っては不謹慎だが……。今後、こうした事態が起こらぬとも限らぬ。今回のこの件は、我らにとってよい訓練だ」

「ははっ」

「そんな顔をするな。これは想像の域を脱しないが、おそらく、門を占領した者たちは、両殿下に忠誠を誓う者ではなさそうだ。当然、ツカカ侯爵らの手の者でもないだろう。あれは決死隊だ。一体、誰の手の者か、それを確認する必要がある。だが、皇都に爆薬を持って潜んでいる者は、おそらく門を占領している者程の覚悟はないだろう。それに、その爆薬も、それほど威力のあるものではないだろ

う。だが……それが皇都民に向けられるとなると話は別だ。住宅地の真ん中で爆破された場合、多くの死傷者が出るだろう。しかも、犠牲となるのは女子供だ。それは、避けねばならない」

「総司令官殿のお考え、よくわかりました」

ダイケの言葉に、アーモンドはゆっくりと頷いた。

「申し上げます！」

突然、兵士の一人が血相を変えて部屋に飛び込んできた。アーモンドは落ち着いた表情のまま、兵士を迎える。

「ツカカ侯爵が、お見えです」

「ツカカ侯爵？　……ずいぶん早いお越しだな」

「勅使としてお見えだということです」

「勅使？」

「ハッ。勅命を奉じてお見えだとのことであります！」

アーモンドは、こちらにお通ししろと命じて、立ち上がった。しばらくすると、ツカカ侯爵が胸を張り、大股で歩きながらやって来た。彼には十名の軍人が従っている。いずれも、下士官だが、貴族の子弟ばかりだった。

ツカカ侯爵はアーモンドの前に来ると、フンと鼻を鳴らした。

「勅使を迎えるのに、お前は自室を使うのか。全く……礼を知らんにも程がある。こういう場合は、しかるべき場所を選ぶものだ。例えば……」

「御用の趣を承りましょうか」

「アーモンド、貴様！」

若い仕官が目を吊り上げている。だが、ツカカ侯爵は手をスッと上げて男を止める。その表情には、余裕のある笑みを浮かべていた。彼は手に持っていた書簡を広げると、それを掲げて、少し頭を下げた。

「勅命である！」

侯爵の傍に控える士官たちが一斉に首を垂れる。だが、アーモンドたちは冷たい目で、その光景を眺めている。

「勅命である！　何をしているお前たち！　頭を下げんか！　不敬であるぞ！」

侯爵が意外だと言わんばかりの表情を浮かべる。だが、アーモンドたちは無言のままその場を立ち尽くしている。

「……まあいい。……オホン。勅命である。アーモンド・クロフォード、そなたを、ラマロン皇国軍総司令官の地位から解任する。その後任には、ラマロン皇国軍参謀、ラマロン・コサン・ツカカ侯爵を任じることとする。ラマロン皇国皇帝代理、ラマロン・クロウ・オーハン」

ツカカ侯爵は、勅書を読み上げると、それを丁寧に畳み、大事そうに懐にしまった。

「と、いうことじゃ。アーモンド。今よりそなたは、一介の平民じゃ。今すぐこの場から立ち去れ。それと、そこらにいる者たちも、すべての役職から解任する。お前たちも、今すぐ出て行くのだ。皇国軍の人事は、追って沙汰する」

「お待ちくだ……」

「待て」

アーモンドが言葉を発しようとしたそのとき、男の声が割って入ってきた。それは、ラマロン皇国軍元帥である、カリエスだった……。

第六百十八話　若さゆえの過ち

元帥は、ゆっくりとツカカ侯爵たちに近づき、ちょうど、アーモンドらと侯爵の中間地点に来ると、その歩みを止めた。それはまるで、侯爵一派とアーモンド一派の揉め事を裁定するかのような位置取りだった。

「で、侯爵。勅命が下ったと言ったな？」

少し笑みを浮かべながら、カリエス元帥は口を開く。その様子に、ツカカ侯爵は苦々しそうに眉間に皺を寄せながら、彼に向き直る。

「その通りです。たった今、皇帝代理であるオーハン殿下より、このような勅命が出されたのです」

そう言って侯爵は、懐から再び勅書を取り出して拡げ、カリエス元帥に向けて拡げた。元帥はそれをまじまじと眺めながら、顎を撫でている。

「これは……間違いではないか？」

「は？」

「間違いだ」

元帥は勅書を指さしながら、ツカカ侯爵たちに視線を向ける。それに釣られるようにして、侯爵の後ろに控えていた下士官たちも、元帥の背後に廻り、まるで睨みつけるようにして、勅書を凝視する。

「……元帥殿、別に、間違っているところはないかと存じますが？」

若い仕官が声を上げる。だが、元帥は首を振ってその言葉を否定する。

「お前はどこを見ておるのだ。よく見ろ。大きな間違いがある」

「……」

若い仕官は顔を見合わせながら、不思議そうな表情を浮かべている。そんな彼らに、元帥は舌打ちをしながら口を開く。

「わからぬ奴らだ。御名御璽がないではないか」

……何を言っているのだ、この元帥は。若い仕官たちの表情が一気にそんな感情を表した顔になる。そのとき、ツカカ侯爵が、まるで諭すように口を開いた。

「元帥、よくご覧ください。元帥ともあろうお方が、どうなされたのです。ここに、オーハン殿下直筆のサインと、印が押されているではありませんか」

「それは見えている。だが、侯爵。貴様は勅命が下ったと言った。これだけでは、勅命とは言えぬ」

「……ああ、それでしたら。確かに、皇帝陛下の御璽は押されておりません。しかし、オーハン殿下が皇帝代理の職にお就きあそばしたのです。古来より、皇帝に不慮のことがあり、皇帝の職務を代行する際は、その者のサインと印をもって御名御璽に充てるという先

例を、元帥ほどのお方が知らぬはずはございますまい」

ツカカ侯爵は、ニヤリと笑みを浮かべた。その表情からは、お前も年を取ったのだなという侮蔑にも似た雰囲気が汲み取れた。だが、一方の元帥は、キョトンとした表情を浮かべながら、侯爵を眺めている。

「いや、私が聞いているのは、アガルタ王の御名御璽がないということだ」

「は？　アガルタ王？」

元帥の言葉に、ツカカ侯爵と下士官たちは顔を見合わせている。そんな彼らに、元帥はさらに言葉を続ける。

「我がラマロン皇国は、アガルタ王国の属国となっている。これは、動かしようのない事実だ。本来であるならば、皇国の決定事項はすべてアガルタ王の裁可を受けねばならない。だが、これまでは、アガルタ王のご厚恩のお蔭で、亡き陛下に一任されていた。しかし、陛下がお隠れ遊ばした今、国の決定事項は、アガルタ王に裁可を仰がねばならない。この、オーハン殿下が、皇帝代理の職に就くというのは、いつ、アガルタ王の裁可を得たのだ。ラマロン皇国軍の元帥たる私は、聞いてはおらぬぞ。アーモンド、お前はどうなのだ？」

「ハッ。私も、アガルタ王が裁可を下したという話は、聞いておりません。私が、かの王と話をしておりましたのは、ご子息であるファルコ殿下を、陛下のお世継ぎとして迎えることのみでした」

元帥は、その場から一歩下がると、腕を組みながら、ゆっくりとした口調で口を開く。

「この命令書が勅書を名乗るからには、その文面には、アガルタ王の御名御璽が記されていなければならない。で、あるにもかかわらず、侯爵。貴様はそれを勅書であると名乗った。これは、不正に勅書を発行したことになる。国家反逆罪にも匹敵する、重罪だぞ」

元帥の言葉に、侯爵の顔が徐々に青ざめていく。

「いっ、いや、私は、ただ……」

「オーハン殿下の命令通りに動いただけだと言うのか？　であれば、なぜ最初に、殿下にこの事実を話して、その動きを止めようとしなかったのか。よしんば、殿下がお聞き入れにならぬときは、この元帥たる私に報告に来るのが筋であろう？」

「クッ……。しっ、しかし、元帥……。我々は……我が、輝かしきラマロン皇国は、いつまでもアガルタに従うわけには……。ここは、これを機会に……」

「アガルタの膝下から独立せよと言うのか？　バカバカしい。今、そんなことをすれば、この皇国はたちまち滅ぶのだぞ？　いざ事を構えるとなると、食糧、技術……アガルタからの供給が全て止まるのだぞ？　それでこの国はやってけるのか？　無理であることは、子供でもわかりそうなものだ。それに……オイ、お前たち。その眼は何だ？　まるで、アガルタと一戦交えてでも、皇国を独立させるべきだと言わんばかりだな？　やってみるがいい。万に一つも皇国はアガルタには勝てぬ。先の戦で私も、ここにいるアーモンドも、アガルタの強さは骨身に染みている。あのときの戦いに赴いた者たちは……おらぬようだな。その後のサンダンジでの戦やドルガでの戦に従軍した者……もおらんようだな。まだ、本格的な戦いに出た

ことのない若いお前たちには、言ってもわかるまいが、アガルタはお前たちが束になっても適う相手ではない」

元帥の言葉に、若い仕官たちは拳を握り締め、俯きながら震えている。

「……まずは、侯爵。その勅書は無効だ。それに、貴様は、勅書を偽造した疑いがある。侯爵を捕らえろ！」

「な……。ちょっと待て！　私はただ……。待て！　何をする！　私に触るな！　オイ、やめろ！」

暴れようとする侯爵を、アーモンドの部下が取り押さえて、後ろ手に縛りながら彼を外に連れ出していく。それを見届けた元帥は、目の前で狼狽えている若い仕官たちに視線を向ける。

「気の毒だが、お前たちも同罪だ。連れて行け」

元帥の命令で、外から兵士たちがバラバラと入室してきて、彼らを取り囲む。意外にも、若い仕官たちは抵抗することなく、唯々諾々と、促されるままに部屋を後にしていった。

「……アーモンド」

「ハッ」

「若い仕官たちに関しては……若さゆえの過ちだ。大目に見てやれ」

「認められるでしょうか……。自分自身の、若さゆえの過ちを」

「……」

元帥は、アーモンドの言葉に何も言わず、ただ、寂しそうな笑みだけを浮かべた。

「とはいえ元帥、ありがとうございました」

「なぁに。あのくらいのこと、何でもない」

「いいえ、助かりました。私が述べるより、元帥から言っていただいた方が、説得力が違います。それにしても、貴族たちの動きは素早いですな。いざ、誰かが旗振りに立つと、驚くほどの速さで実行に移してきます。それだけの行動力があるのならば、もっと他のことに使えば、我が皇国はもっとよくなっているでしょうに……」

「フフフ。貴族とは、そういうものだ。だが、アーモンド。お前は見事だった。貴族たちの動きを正確に掴み、事前の準備もほぼ、完璧だった。褒めてやっていい」

「何を言われますか。私は、皇都の門が占領されることなど、全く予想しておりませんでした。それに、宮殿内の爆発……それらを起こしている者たちの素性すら掴めておりません」

「それについては、心当りがある」

「と、言われますと？」

「私も、たまには仕事をしなければな。お前ばかりに仕事をさせていては、私の体もなまるというものだ」

元帥はアーモンドたちを見廻すと、少し真面目な表情を浮かべて、彼らに命令を下した。

「取り急ぎ、お前たちは、宮殿を封鎖するのだ。誰も入れてはならぬ。そして、誰も外に出してはならぬ。同時に、皇都に戒厳令を敷く。皇都民の外出を禁じるのだ。あとは……クラハラ殿下の屋敷を囲め。誰も入れるでない。誰も外に出してはならぬ」

元帥の言葉に、兵士たちはハッと承って、足早にその場を去っていった。元帥は再びアーモンドに視線を向けると、ニコリと笑いながら口を開いた。

「コトを起こすときは、準備は念入りに、仕留めるときは一瞬で、だ」

その言葉に、アーモンドは無言で頭を下げた。

第六百十九話　結果オーライ？

「さて、まずは、アガルタ王に連絡を取らねばな」

「それでしたら、先ほどシーバ殿が早馬を立てられました」

元帥の言葉に、アーモンドの部下が直立不動の姿勢を取って返答する。だが、元帥はそんな彼に優しげな笑みを浮かべる。

「いや、今回は早馬では遅かろう」

「ハッ。しかし……」

眉間に皺を寄せるアーモンド。だが、元帥は涼しい顔をしながら、アーモンドの後ろに控えている男に視線を向ける。

「ロダン、お前は連絡将校としての勤務もずいぶん長いな。何年になる？」

「ハッ、十年になります」

「本来、連絡将校などと言う仕事は、三年も勤めれば異動となるのだが、お前は相当その仕事が好きなのだな」

「お言葉ですが元帥、私は好き好んでこの仕事をしているわけではありません。命じられたので……」

「仕方なく、か。正直だなお前は」

そう言って元帥はカラカラと笑う。やがて彼は、視線をアーモンドに戻した。

「アーモンド。このロダンに、緊急連絡を教えてもよいかな？」

「なるほど……。そうですね。私も、元帥もこれから忙しくなるでしょう。アガルタへの緊急連絡手段を知っている者を増やすのは賛成です」

「そうか。ということでロダン。お前は退役するまで連絡将校のままだ。異動はない。ただし、アガルタとの緊急連絡の仕事もお前に任せることにする。お前のように、不器用で臆病で、野戦には向かぬ……だが口の堅い者こそがふさわしい仕事だ。どうだ、やってみるか？」

「……恐れ入ります。元帥殿、それは褒めておいでなのでしょうか、けなしておいでなのでしょうか？」

「……フフフ。私は、お前のそういうところが好きだぞ。よし、ついて来い。アーモンド、お前は先に行っているのだ」

「承知しました」

元帥はスタスタと歩き出す。ロダンと呼ばれた男は、渋々とその後を付いて行った。

彼は自室に向かっていた。元帥の執務室は、この建物の一番奥に位置している。部屋の扉を開けると、窓から太陽の光が燦々と降り注いでいた。

「こちらだ」

元帥は部屋を通り過ぎて、テラスの扉に手をかけた。ロダンは一体何が始まるのかがわからず、訝しげな表情を浮かべている。それもそのはずで、この部屋の外には、少し広めの庭があるくらいで、その他は何もなかったからだ。庭に何かの抜け道があるのかと疑ったが、そんなものを作ったところで、アガルタと連絡がつくとは思えなかった。

元帥は何の迷いもなく、テラスに降りていく。そこには、小さなドラゴンが、日向ぼっこをしながら転寝していた。

「げ……元帥、これは……？」

「これが、緊急連絡だ。お前はそこで待っていろ」

「……」

小さなドラゴンは、テラスの柱にもたれながら、コックリコックリと居眠りをしている。先ほどの緊張感が嘘のように、このテラスでは平和そのものの光景がそこにある。ロダンは、軽いめまいを覚えた。

「待たせたな」

元帥が一枚の紙を丁寧に折りながらテラスに降りてきた。そして、眠っているドラゴンに声をかける。

「ルーリー。ルーリー、起きないか」

ドラゴンはピクリと体を震わせたかと思うと、スッと首を持ち上げて、元帥に視線を向けた。

「ご苦労だが、これをアガルタ王に届けてくれ」

元帥から差し出された紙を、ドラゴンは片手で掴む。そして、立ち上がるとうーんと背伸びをして、首を左右に振った。

「ご苦労だが、よろしく頼む」

元帥は片手に持っていた干し肉をポイと投げる。ドラゴンは大きな口を開けてその肉を受け取った。その直後、ドラゴンの姿が消えた。

「げ……元帥……今のは……」

「アガルタへの緊急連絡だ」

「ドラゴン、ですよね？」

「そのようだな」

「……全く存じませんでした。まさか元帥がドラゴンを飼っておいでだとは」

「いや、あれは私の持ち物ではない」

「は？　しかし、今、ルーリーと……」

「私が勝手に呼んでいるだけだ」

「はぁ……」

「さあ、行こうか」

「え？　どちらに？」

「まもなくアガルタ王がやって来るだろう。我々が居ないのは都合が悪かろう」

「え？　どういうことでしょうか？」

「付いてくればわかる」

キョトンとした表情を浮かべるロダンを、まるで急き立てるようにしてカリエス元帥は部屋を出た。

「あの……元帥、よろしいでしょうか？」

「何だ」

「あのドラゴンは……」

「さっきも言ったであろう。アガルタへの緊急連絡だ」

「私には何のことやら……」

「あのドラゴンは、一瞬でアガルタに移動するのだ」

「え？」

「どのようなスキルを使っておるのかは知らぬが、事実だ。今頃、あのドラゴンはアガルタに着いて、アガルタ王に私の書簡を手渡しているころだ。もう、今頃は、先ほどのテラスに戻ってきているだろう。お前にも見せてやればよかったのだが、それをしていると、アガルタ王の出迎えに遅れる可能性がある」

「あの……アガルタ王は」

「来る。千里の道を隔てておるが、あのお方は、一瞬でアガルタと我が皇国を移動するのだ」

「……」

「ロダン、よく覚えておけ。戦いで最も重要なのは、情報収集能力と速さだ。正確な情報を掴み、それを素早く実行する。アガルタはその二つが群を抜いている。あの王は、数万の軍勢を一瞬で転移させる能力がある。これは誰にも言ってはならぬ秘密だ」

「は……ははっ」

「もっとも、アガルタ軍が世界最強の座に君臨していられるのは、王の転移能力だけではないがな。あの軍勢は、普段の移動においても、その速さは群を抜いている。我が皇国軍の精鋭部隊をもってしても、この皇国からアガルタまで、どれだけ急いだとしても三日がかかるが、アガルタ軍であれば、急げば二日でこの皇国に到達するだろう」

「ふ……二日、ですか？」

「ああ。おそらくは、な。それに加えてあのドラゴンだ。仮に我々がアガルタに叛いたとして、兵士の出撃準備が完了するまでに、三日はかかるだろう。だが、アガルタは我々が準備をしている間に、この皇都を占領することができるのだ。我々が束になってもアガルタには勝てぬわけが、わかっただろう」

「あ……ある程度は理解しておりましたが……」

「フフフ。大抵の者は、その程度だろう。況や、現状を理解しようとせず、己の都合の良い情報ばかりを取り上げようとする貴族たちに、この状況を理解できようはずもない。ロダン、お前にはそのアガルタへの緊急連絡を任せるのだ。この任務の重大性は、理解できるな？」

「は……ハハッ！」

カリエス将軍は、地下に通じる階段を降りていく。この下には、式典用の倉庫があった。

皇国で行われる閲兵式などの祭典が催される際に使う品々が納められている倉庫だ。どれもがそれなりの高級品であるために、倉庫には厳重に管理されており、入室も許可を受けた者でしか入ることが許されない場所だ。

この倉庫にロダンは何度か入ったことはあった。彼は一瞬、元帥はアガルタ王を迎えるための装飾品を取りに行くのではないかと思ったが、扉が開かれた瞬間、彼は目を丸くして驚いた。

何と、倉庫の中には、アガルタ王が立っていたのだ。

「遅いですぞ、元帥」

アガルタ王の傍には、アーモンド総司令官が控えていて、ニヤリと笑みを浮かべながらこちらを眺めている。その王の隣には、緑の髪の色をした少女が控えていた。

「いや、遅れまして、申し訳ありませんでした」

「カリエス将軍、お久しぶりです。反乱が起こったとありましたので、取るものも取り敢えず駆け付けました」

「ご足労感謝いたします。ああ、アガルタ王に紹介します。これに控えますのは、皇国軍の連絡将校であるロダンという者です。今後、彼も緊急連絡を担いますので、どうぞよしなにお願いします」

「そうですか。アガルタのリノスです。よろしくお願いします」

アガルタ王は気さくに右手を出してロダンに握手を求めてきた。彼はまるで機械人形のように直立不動の姿勢を取り、あたふたと彼の手を握った。

「よろしくお願いします」

王の隣に控えていた少女が、ニコリと笑みを浮かべて会釈する。ロダンは思わず口を開いた。

「ア……アガルタ王様にお目にかかれて、光栄であります！　本日は、ご令嬢を伴われてのお越し、心から歓迎申し上げます！」

「うん？　ご令嬢？　ああ、こちらは……いや、娘ではないんだが

……」

「え？」

「娘だなんて、そんなぁ……」

キョトンとした表情を浮かべるアガルタ王と、その隣で、頬を赤らめて照れている少女……。その様子を見ながら、ロダンは背中に冷たい汗をかいていた……。

第六百二十話　犯人捜し

……どうやら、最悪の事態ではなさそうだ。

俺はカリエス将軍たちの表情を見ながら、そう思った。彼が寄こしてきた文面が、今にも命が奪われそうな内容だったので、急いでラマロンに転移したのだが、どうやら彼らに一杯食わされたようだ。

ふと隣を見ると、シディーが大テレにテレている。俺の娘だと言われたことが、そんなに嬉しかったのだろうか。まあ、不機嫌になるよりは遥かにいい。

「まずは、説明申し上げましょう」

アーモンドがにこやかに笑いながら、俺たちを外に案内する。彼は扉を開けると外の様子を窺いながら、素早く外に出ると、すぐ前の部屋に俺たちを案内した。そこには、見事な玉座が置かれていた。彼はそこに俺を案内しようとする。

「いや……この椅子は……」

「何を言われるのです。アガルタ王をお迎えするのに、粗末な椅子に座っていただくわけには参りません」

「……」

俺は別に粗末な椅子でも構わないのだが。ただ、玉座はひとつしかない。俺がここに座ると、シディーが立ったままになる。

「じゃあ、シディーが座りな」

「えっ？　私？」

「そうだ」

「リノス様が座って下さい」

「俺が座ると、シディーが立ちっぱなしになるだろう。そんなのは嫌だ」

「いえ、でも、私が座ると、リノス様が立ちっぱなしになります」

「俺はそれでいい。世界で一番大切なシディーだ。シディーがここに座るべきだ」

「そんなぁ……」

メチャクチャ嬉しそうだ。ちなみに、どうしてシディーも一緒に来たかと言えば、たまたま、カリエス将軍の手紙を受け取ったところに、シディーも一緒にいたからだ。彼女は何かを感じたようで、私も一緒に行くと言って聞かなかったのだ。

俺たちがそんな会話を交わしている間に、ロダンと呼ばれた、新しく連絡役になった男が、いそいそと椅子を運んできた。少し小さめの椅子であるところを見ると……これはシディー用だろう。

「では、私はこちらに」

シディーが満面の笑みを浮かべながら用意された椅子に座る。俺も仕方なく、玉座に腰を下ろす。

「では、現在の状況を説明します」

アーモンドが口を開く。彼は簡潔明瞭に現在の状況を説明していく。

「う～ん」

俺はマップを展開して、この皇都の状況を観察する。なるほど、各門は赤く色が付いている。これは、明確な殺意を持った者がここを占領していることを表している。それよりも、宮殿内にいくつかの赤い点が見えることだ。数えてみると、十三あった。ということは、十三人もの爆薬を持った者が宮殿内にいることになる。

「これは……何とも厄介だな」

順序としてはまず、宮殿内にいる十三人を拘束していかねばならないだろう。それさえ済めば、門を占領している者たちを制圧することは難しくない。ただ、バラバラに散らばる十三人を一網打尽にすることはかなり難しい。俺のマップは、どこの誰が爆薬を持っているということまではわからない。これを辿っていけば本人に辿り着きはするが、一人一人を拘束していては、他の者に気づかれてしまう。そうなった場合、爆薬を持った者たちが一斉にそれを爆破させると、大変なことになるのだ。

爆発を最小限に抑える結界を張ろうかとも考えたが、どうもそれのいいイメージが沸かない。

取り敢えず俺は、皇都内の現状をアーモンドたちに伝える。彼は、

一切表情を変えずに、黙って頷いた。

「十三人か……予想外の数字だな」

口を開いたのは、カリエス元帥だ。彼は顎髭を撫でながら、あらぬ方向に視線を向ける。

「十三人もの人間をどうやって宮殿内に送り込んだのか。その上、どうやって爆薬を宮殿内に持ち込んだのか……」

カリエス元帥の脳裏に、あの後宮総取締役、ママ・ジュリエットの顔が浮かび上がる。

「ロダン」

「ハッ」

「ここ数ヶ月で、後宮に新しく入った者のリストは手に入るか」

「可能ではありますが、時間がかかるかと……」

「ううむ……」

カリエス元帥は腕を組みながら天を仰ぐ。そのとき、シディーが口を開いた。

「先に門を占領している者たちを制圧してはいかがですか？」

カリエスとアーモンドがキョトンとした表情を浮かべている。そんな彼らに、シディーは人差し指を顎の下に当てながら、さらに言葉

を続ける。

「あくまで私の直感ですが、どうも、今回の事件は、解決まで時間稼ぎをしようとしていると感じます。グズグズしていると敵の思うつぼになる可能性があります」

「しかしお妃さま、門を占領している者たちを制圧するのは簡単なことですが、それをしますと、宮殿内で爆発が……」

アーモンドが困った表情で口を開く。だがシディーはよくわかっているという表情を浮かべながら、言葉を続ける。

「要は、門を制圧している者たちが爆発物を使えなくすればいいのです。おそらく、門を制圧している者たちと、宮殿内に潜んでいる者たちは連絡を取る手段を持っていないのでしょう。ということは、門で何らかの動きがなければ、宮殿内の者たちは動くことができなくなります」

「しかし……いつまでも動きがなければ、宮殿内の者たちも怪しむんじゃないのか？」

俺の言葉に、シディーは大きく頷く。

「その通りです。ですから、宮殿内に潜んでいる者を確認する必要があります」

「どうやって？」

「リノス様がおいでになればいいのです」

「……要は？」

「リノス様のマップを見ながら、その十三人を特定するのです。宮殿内……といっても、そんなに広くはないでしょう。一日もあれば十分に特定できるはずです。確か、宮殿は軍が抑えているのですよね？　で、あれば、中に入ることは簡単ですよね？」

「ええ～」

呆れる俺に、アーモンドはパチパチと拍手をしながら口を開く。

「わかりました。それでは、我々は一日の間、門を制圧している者たちが行動を起こさぬように手を出さぬことに致します。アガルタ王様には誠にお手数ではありますが、何卒よろしくお願い申し上げます。お妃さま、大変な名案でございます。ありがとうございます」

シディーはにこやかな笑みを浮かべながら、ゆっくりと頷いた。

早速俺は、シディーと共に馬車に乗せられて、宮殿に向かう。ラマロンに転移してから一時間も経っていない。俺は戦闘を覚悟して来たのだが、完全に拍子抜けしてしまった。まるで、親戚の家に遊びに行ったら、色々と用事を言いつけられてしまった感じだ。

そんなことを考える俺の隣で、シディーは相変わらず人差し指を顎の下に当てながら、何事かを考えている。基本的に彼女がこのポーズを取って推理したことに関しては、今まで外れたことはないので、その点は安心している。ちなみに、今の俺たちには大工に見える結界を張っている。シディー曰く、宮殿内で爆発が起こっているのだから、それを修理するために大工を呼んだ……とても自然な流れだと言う。その意見に皆、賛成したのだった。

そのとき、馬車が宮殿に着いた。扉がゆっくりと開く。

「……！？」

宮殿の門を警備していた兵士たちが怪訝な表情を浮かべる。まさか、馬車から大工が降りてくるとは思わなかったようだ。そんな彼らに、俺たちの案内役を仰せつかったロダンが兵士たちに説明している。彼らは唯々諾々と門を開く。

俺たちの案内役をロダンに指定したのもシディーだ。これにもアーモンドたちは膝を叩いて納得していた。連絡将校が宮殿に向かうことは、何の違和感も持たれない。まさに彼は打ってつけと言えた。

宮殿に入ると、早速マップを展開させる。すぐ近くに爆発物を持った者がいるようだ。俺はスタスタとその者のところに向かう。

……それは、どこからどう見ても、単なる侍女だった。爆発物を持っているとは、到底思えない、どこにでもいるような、普通の女性だった。

第六百二十一話　犯人捜しは穏便に

その後も俺は、マップを活用しながら、爆発物を持っている者を次々と特定していった。その総数は十二名。全員に共通していたのは、とても真面目そうな雰囲気を持っていたということだ。

「これで、全員みたいですね」

最後の人物を特定し終わり、俺はゆっくりと息を吐き出す。この人も、爆発物を持っているとは思えない程の、人懐っこい印象を持つ女性だった。

彼女は、宮殿内のベッドのシーツなどを替える係の者だった。俺を見て笑顔で挨拶してくれる程の、とても行儀のよい女性だ。そんな彼女が、そんな危険なものを持っているとは到底考えられなかった。

ふと、後ろに控えているアーモンドに視線を向ける。彼は眉間に深い皺を刻みながら、俺が指摘した女性を睨みつけていた。

彼女は相変わらず、キビキビと働き続けている。回収してきたシーツを見事な速さで小さくたたみ、籠の中に入れていく。そんな彼女に俺は鑑定スキルを発動させた。

……別に、何と言うことはない人生だった。彼女は、毎月の給料をせっせと田舎の実家に送金していた。そして、残った給料で月に一度、皇都の料理店で食事をすることを楽しみにしていた。仲間や後輩たちとのつつましやかだが、それでも日々を楽しむ姿がそこにあった。

だが、約二週間前、彼女は一人の男に出会っていた。髭を蓄えた初老の男性だ。彼女の記憶は一旦、そこで途切れていた。

「あの……ちょっと、よろしいですか？」

俺は彼女にゆっくりと近づく。女性はキョトンとした表情を浮かべている。

「はい、何でしょうか？」

「いや、頭の上に、何かついていますよ」

そう言って俺は彼女の頭に掌を載せる。その瞬間、女性の体がビクンと震えた。

「アガルタ王様、何を？」

アーモンドが怪訝な表情で口を開いた。俺は彼に視線を向けると、黙って見ていろと目で合図しながらゆっくりと頷いた。

この女性には、精神魔法を発動させていた。この魔法は、対象者を精神的に操ることもできるが、逆に、操られている者を解除することもできる。この女性は、男と会った瞬間から記憶が途切れている。そのときに、何かの細工をされたのだろう。俺は精神魔法の特性を生かして、彼女にかけられた術を解明しようとしたのだった。

精神魔法のレベルを上げる。そのとき、俺の脳裏に不気味な男の声が聞こえてきた。

「……ノ……ツヲ……クハツ……ロ」

「リノス様……」

「しっ、静かに……」

俺はシディーに目配せをして、じっと目を閉じて脳裏に響く声に集中する。

「サンドメノ……バクハツヲアイズニ……バクハツサセロ」

「……彼女は三度目の爆発音を聞いたとき、爆発を誘導する術を仕込まれている」

「な……何と……」

アーモンドが眼を見開いて驚いている。そんな彼に視線を向けながら、俺はさらに言葉を続ける。

「おそらく、他の者も同じでしょう。ええと……ちょっと待ってください……。どうやら、一度目の爆発音を聞いてから三十日後に自動的に爆発物を起動させる術も仕込まれていますね。……何と、念の入ったことだ」

俺は呆れていた。この術を仕込んだものは、周囲の影響など全く考えていない。単に、この国を混乱させることのみが目的のようだ。

「とりあえず、俺が指摘したもの全員を集めてください。術を解除します」

「承知しました。ロダン」

「はっ」

「すぐに動け」

「ははっ」

「くれぐれも、手荒なことはしないでください」

その場を離れようとしたロダンの背中に向かって、シディーが声をかける。彼は体を一瞬震わせたが、俺たちの振りむくことなく、そのままその場を後にした。俺はその女性の術を解除する。

「さて、術をかけられている方々を解除しましょうか。そのあとは、占領されている門の制圧ですね」

「いや、それについては、我々だけでやりましょう」

「え？　そうなのですか？」

「アガルタ王は、術をかけられている者たちに対応いただくだけで十分です」

そう言って、アーモンドは頭を下げた。

シディーが手荒なマネをしないでくれと言ったにもかかわらず、ロダンはまるで連れ去るようにして、術がかけられている者を俺たちの許に連れてきた。特に女性は震えている者もいた程だ。それはそうだろう。聞けば、突然目隠しをされて、無理やり抱えられて連れ

て来られたのだという。これにはシディーが怒った。

術を解除し、連れ去られたときの恐怖も忘れるように魔法をかけている間、シディーはずっとロダンを叱り続けた。彼はピョコピョコと頭を下げながらその話を聞いていた。そして、その光景をアーモンドは笑みを浮かべながら眺めていたのだった。

ただ、このロダンという男は優秀だった。何をどう言い含めたのかは知らないが、その後、俺が指定した者たちは、唯々諾々と俺たちが控える部屋にやって来た。そのほとんどが女性だったのが、全員がまるで医者に診察してもらうかのように、よろしくお願いしますと言って、用意された椅子に座ったのだ。

そうしたこともあって、術の解除はとてもスムーズに済んだ。逆に、こちらが拍子抜けするくらいだった。

ちなみに、彼ら彼女らが持っていた爆発物は、それぞれが身に付けていたネックレスだった。そこには、小さな、赤い石が付いていたのだが、それに魔力を通すと爆発する仕組みになっていた。

この石はラマロンで採れる石で、俺も知っているものだった。シディー曰く、この石はかなり純度の高い状態で精製されていて、爆発の威力が増しているのだという。相当入念に精製されているらしく、この国で生産されたものではないと言うのだ。

「さて、宮殿内での爆発の心配がなくなりました。我々は早速、門の制圧に移ります」

アーモンドはそう言って部屋を出て行った。

「一体、どうするつもりなのだろう？」

俺は思わず口を開き、部屋に残っているロダンに視線を向けた。彼は首を横に傾げた。

「わからないのか……」

「私は……連絡将校なもので……」

「ところで、部屋に来た人たちは皆、すごく落ち着いていたけれど、どうやって連れてきたんだ？」

「いえ、その……」

「怒らないから、言ってごらんよ？」

「取材、と言って……」

「取材？」

「新聞で、宮殿で働く人のことを特集する、と。ついては、取材に協力してくれないかといいまして……」

「なるほど、上手いことやったな」

「恐れ入ります」

ロダンは照れながら頭を掻いた。

「さて……。ただ俺には、十二人に術を使った男の正体が気になる。

そいつを早く捕まえないとな」

「リノス様、あくまで私の直感ですが、その男はもう、ここにはいないかと思います」

「そうか……シディーがそう言うなら、そうなのだろうな」

「アガルタ王様、お妃さま、まずは元の部屋にお戻りください」

ロダンの言葉に、シディーが口を開く。

「私たちは、アガルタに帰りましょう」

「え？」

「きっと、門を制圧している者たちは程なく鎮圧されるかと思います。私たちはここにいるより、アガルタに戻ったほうがいいと思います」

「しかし、お妃さま……」

「いや、シディーの言う通り、俺たちはアガルタに帰ることにするよ。何か問題が起こったら、フェアリードラゴンを寄こしてくれ。実は、仕事をほったらかしにして来てしまっていたんだ」

そう言って笑う俺に、ロダンは目を丸くして驚いている。彼は、俺たちが転移した部屋に案内すると言ったが、この場所からでも転移はできるのでそれは不要だと伝えると、彼はぽかんと口を開けて固まってしまった。

「あ、言うまでもなく、俺が転移できるのは秘密にしてくださいね」

そう言って俺はアガルタに転移した。

「リノス様！」

転移した瞬間、名前を呼ばれて体がピクンと震える。転移した先は俺の執務室だが、そこには三人の兵士が控えていた。

「よかった……。大変なことが起こったのです」

「どうしたんだ？」

「ヴィエイユ教皇聖下がお越しになっています」

「なに、ヴィエイユが？」

「はい、しかも、ケガをなさっておいでです。それも、かなりの重傷です」

……一体、どういうことだ？？

第六百二十二話　本命は……？

取るものも取り敢えず、俺はヴィエイユの許に向かう。彼女は、迎賓館の一室に案内されていた。扉を開けると、そこは大混乱の様子だった。

部屋には、メイとローニの姿が見えた。まさかこの二人がいるとは思わなかった俺は、扉を開けた瞬間、固まってしまった。だが、二人は俺の様子に気づくことなく、何やら難しい言葉を交わし合っていた。

その二人の前には、ヴィエイユがベッドに腰を下ろしていた。髪の毛はほつれ、明らかに憔悴しているが、見たところ重傷というわけではなさそうだ。その彼女は、俺に気が付くと、ニコリと精いっぱいの愛嬌を含んだ笑みを浮かべた。

「ご主人様……」

ヴィエイユにつられて、メイたちも俺に気づいた。二人はヴィエイユの傍を離れて畏まる。俺は手を振りながら、そのままでいいと言いながら部屋に入った。

「突然押しかけまして……」

ヴィエイユは笑顔のまま口を開く。よく見ると、顔が蒼白だ。素人眼に見ても、かなり体調が悪いように見える。

「一体どうしたんだ？　その姿は……？」

「少し、油断いたしました」

「油断？」

「ええ。でも、大丈夫です」

「大丈夫って、お前……」

見ると、ヴィエイユの左の腕が紫色に腫れ上がっている。一見して、かなりの重症であることがわかる。

「ずいぶん痛そうだな。回復魔法で……」

「ムダです」

突然、若い男の声が聞こえた。ふと見ると、ヴィエイユの後ろに、ポーセハイが控えていることに気づいた。

「これは、グーリフの石でできた矢で受けた傷です。回復魔法では治癒できません」

「グーリフの石？」

「はい。カスタマ海で生息しているサンゴの一種です。強い毒性があり、それに触れるとひどく腫れ上がります。そして、しばらくすると、壊死が始まり、それが全身に転移していくのです。この石が厄介なのは、回復魔法では治癒ができないことなのです」

「大丈夫です。回復させる方法はあります」

メイが口を開く。彼女の双眸には、確固たる決意がうかがえた。

「ロアンバルトの粉と、応鳥の鱗粉、そして、ダロバストの石を砕いた粉を、１：４：５の比率で混ぜ合わせ、それを……」

「あの……メイ様」

ローニが口を挟む。彼女は、ヴィエイユの腕を握っている。かなり強い力で握っているように見える。

「説明をしている時間が惜しいです。早く、この方を大学に転移させませんと、手遅れになります」

「そうですね。ご主人様……」

「ああ。ヴィエイユを救ってやってくれ」

「畏まりました。お任せください」

そう言うと、メイとローニはヴィエイユと共に姿を消した。

騒がしかった三人が転移してしまったので、部屋の中が一気に寂しくなる。そこには、俺とシディー、そして、若いポーセハイの三人だけとなった。

「ところで、君は……？」

「はい、申し遅れました。私は、バディーと申します」

男はそう言ってスッと腰を折った。何と言うことはない、ちょっとした振る舞いだが、俺にはこの男の育ちの良さが感じられた。彼は、俺に対する非礼を詫び、どのような罰でも受けると言ってのけた。俺は君を罰する気はない、気にすることはないと言って、彼を宥めた。

「ヴィエイユは一体、どうしたんだ？　何があったのか、教えてくれるかな？」

「はい。実は……」

バディーと名乗った男は、理路整然とこれまであったことを説明した。彼はポーセハイ一族からクリミアーナの医療研究所に派遣された一人だった。かなり優秀なのだろう。ヴィエイユの主治医を勤めていた。

端的に言うと、クリミアーナ教国の教都であるアフロディーテでは、反乱が起こっていた。突然、ヴィエイユの私室に武装した兵士たちが現れ、問答無用で彼女に矢を射かけたというのだ。己が身を守ることにかけては、天才的な才能を持つヴィエイユを出し抜いたのだ。彼女自身の油断もあっただろうが、その彼女の眼を掻い潜った者がいたのだ。ある意味で、反乱の首謀者は頭が抜群にキレる者のようだ。

ただ、さすが、というべきか。襲われたとき、たまたまポーセハイのバディーが傍にいた。彼は瞬時に転移スキルを発動して、このアガルタまで避難してきた。もしかすると、ヴィエイユはこうした事態も考えた上で、ポーセハイを傍に置いていたのかもしれない。

彼はヴィエイユの傷を見た瞬間に、グーリフの石で傷つけられたも

のであると判断して、一族の長であるチワンに念話で連絡を取った。そこからの行動は早かった。すぐさまメイとローニが転移して来たのだという。そして、迎賓館の一室ですぐさま治癒に当たったのだと言う。

グーリフの毒は即効性があり、地元の漁師の間では、グーリフに触れたら、すぐにその指を切り落とせと言われているのだという。ローニがヴィエイユの腕を掴んでいたのは、毒が回るのを抑えていたのかもしれない。

「恐れ入りますが、私も、転移したく思います」

「ヴィエイユの許に行くのかい？」

「はい。私は主治医ですので、及ばずながらヴィエイユ様の治癒のお手伝いをしたく思います」

彼は手短に、ヴィエイユには恩があると言った。彼女はクリミアーナ医療研究所には惜しみなく金をつぎ込んでいたらしい。そのために彼は、とても恵まれた環境で医学を学ぶことができたのだそうだ。バディーは紋切り型の挨拶を述べると、すぐに転移していった。

「……きっと、ヴィエイユさんは、助かりますね」

シディーが誰に言うともなく呟く。俺はゆっくりと頷く。

「世界最高の名医二人が診ているんだ。そりゃ、治るさ。それよりも、あの、バディーというポーセハイ。彼はきっと、ヴィエイユのことが、好きだな……うっ」

突然、シディーが俺の脇腹に肘打ちを食らわせた。別に痛みはないが、想定外の行動だったために、思わず声が出てしまった。彼女は俺を横目で見ながら、小さな声で呟いた。

「無粋なことは、言わないの」

「……そうだね」

「あのバディーさんは、理性の力で恋心を抑えているのです。とても、誠意のあるすばらしい男性だと思います」

「同感だ。できれば、あの青年の恋が叶うといいな。いや、俺がヴィエイユに命じればいいのか。彼だったら、あの娘もイヤとは言わないだろう……って、シディー？」

ふと見ると、シディーが人差し指を顎の下に当てながら、何か物思いにふけっていた。彼女は誰に言うともなく、ポソッと呟いた。

「どちらかと言えば、こっちが本命？」

「え？　ヴィエイユも彼のことが？　だったら話は早そうだ」

「そっちじゃない！」

シディーは俺に鋭く突込んだ。

しばらくすると、メイからヴィエイユの治癒が終わったと念話があった。念のため、俺はシディーを伴って、アガルタ大学の医療研究所に向かった。案内された部屋では、左腕を包帯でグルグル巻きにされたヴィエイユの、痛々しい姿があった。

「どうだ、容体は？」

「はい。壊死した部分は手術で切り取りました。最小限で済みましたので、腕を切断する必要はありませんでした。傷が残らないように、最大限に注意しましたが、経過を見ないと……」

メイはそう言って心配そうな表情を浮かべる。だが、隣にいたローニやスタッフたちからは、メイの手術技術の高さを絶賛されていた。あれだけきれいに縫合したのだから、傷も残らないだろうというのが、彼らの一致した意見だった。

ふと、ヴィエイユに視線を向ける。彼女は相変わらず青白い顔をしていて、肩で息をしていた。どうやら傷が痛むようだ。

「大丈夫か？」

「……大丈夫、です」

「痛むのなら、回復魔法をかけてやろうか？」

「……ありがとうございます。そのお心遣いだけで、十分です」

「そうか」

「それよりも、腕に、傷が、残らないか……それだけが、心配で、ございます」

「そこ？　まあ、どうしてもというのなら、手はあるぞ。お前の腕を切り落として、その後、ＬＶ５の回復魔法をかければ欠損部分は

再生される。傷も残らない。どうだ？」

ヴィエイユの目が見開かれた。……あれ？　怒っている？？

第六百二十三話　お世話になる？

……変な間が開いてしまった。相変わらずヴィエイユはじっと俺を睨み続けている。

いや、可能なはずなのだ。やったことはないけれど。この小娘の腕をスッパリ切り落として、その瞬間に回復魔法をかける。欠損部分が再生して出来上がり、だ。

「どうした？　そんなに怒ることか？」

怪訝な表情を浮かべる俺に、ヴィエイユは予想外の言葉を放った。

「体に傷を、つけたくないのです」

「え？　何て？」

「体に傷を、つけたくないのです」

「体に傷をって……すでに付いているじゃないか。その腕……」

「これ以上、体に傷をつけたくは、ないのです」

「……よくわからん」

俺は思わずヴィエイユの隣に控えているメイに視線を向ける。彼女も少し困った表情を浮かべているが、コクコクと頷いているところを見ると、これ以上の議論は無駄であると言っているようだ。

「今後のことですが」

少し悪くなった空気を払拭するように、ローニが口を開く。彼女はシャンと背筋を伸ばして、まるで諭すような口調で俺たちに話しかけた。

「毒の状態と、患部を切除した傷の回復状況を丁寧に観察する必要があります。お立場上、難しいかとは思いますが、大学病院に入院いただき、術後の経過を見られるのがよいかと思います」

ヴィエイユは遠い目をして、何かを考えていたが、やがて、ゆっくりと口を開いた。

「それは、どのくらいの期間になりますでしょうか？」

「……大体、ひと月は必要かと思います」

「そうですか。では……ひと月、ご厄介になることに致しましょうか」

ローニが思わず俺に視線を向けた。ヴィエイユは確かに、ひと月ご厄介になると言った。ひと月もの期間、アガルタに逗留するということだ。この小娘のことだ、明日にはアフロディーテに戻りますと言うものだと誰もが思っていた。

俺たちの驚きをよそに、ヴィエイユは落ち着き払っている。そんな彼女に俺は、メイたち周囲の者に視線を向けながら口を開く。

「まあ、傷が傷だからな。せっかく時間ができたんだ。ゆっくりし

ていけばいい……と言いたいところだが、その前にヴィエイユ。一体何があったのか、話してもらわんとな」

ヴィエイユは冷たい笑みを浮かべて、スッと傍に控えるポーセハイのバディーに視線を向けた。それはまるで、彼からおおよその話は聞いたのだろうと言わんばかりだった。

彼女は目を閉じると、ゆっくりと息を吸い込んだ。

「結論を申し上げますと、アフロディーテで反乱が起こったのでございます」

「お前にしちゃ、らしくない結果だな」

「ええ。完全に油断しておりました。すべては私の不徳の致すところでございます。しかしながら、まだ、私は敗れたわけではございません」

「ほう、命がらがらアガルタに避難してきたのに、か」

「はい。アフロディーテを去る前に、緊急信号を打って参りました。必ず、アフロディーテを奪還してご覧に入れます」

「ほう、どうするんだ?」

「口で説明するより、実際にご覧になったほうがよろしいかと存じます。ひと月後、私がこちらを失礼するとき、アフロディーテを奪還してご覧に入れます。是非、私の采配をその眼でご覧になって下さいませ。ただ……」

「ただ、何だ？」

「アフロディーテでは激しい戦闘が予想されます。私も、指揮を執るので精いっぱいになることでしょう。こう申しては何ですが、アガルタ王様に流れ矢や魔法が襲う可能性が強くございます。御身を守る兵士をお連れになる必要がございます」

「いや、結界を張るので、問題ない」

「それでは困るのでございます」

「困る？　何がだ？」

「アガルタ王様に結界を張っていただいているという、いらぬ風聞が立ちます」

「どういうことだ？」

「私は、誰の手も借りずにアフロディーテを奪還したいのです。いえ、奪還する自信はあります。ですから、アガルタ王様には、できるだけそのスキルを使わずに、事の成り行きを見守っていただきたいのです。できますれば、これまで戦線を共にした方々……。ラマロンのカリエス様、サンダンジのニケ様やヒーデータのヴァイラス様などにもおいでいただきまして、その見届け人となっていただきたく存じます」

「お前、そんなことを言って……。いざとなれば、俺たちに加勢を頼むつもりだな？　抜け目がないな」

「いいえ。皆様に戦闘に参加いただく必要はございません。私の行

動に何か不審な点があれば、すぐに引き上げていただいて結構です。また、戦闘に巻き込まれそうになるのでしたら、ご自身の判断で撤退いただいて結構でございます。アガルタ王様には、転移スキルがおありになります。いざというときは、そのスキルを使って、皆様を安全な場所にお移し頂ければ結構でございます」

「お前なぁ、簡単に言うけれど、こっちにも事情ってもんがあるんだ」

俺の言葉にヴィエイユは答えず、ニコリと笑みを向けながら、言葉を続ける。

「ところで、友好の花につきましてですが……」

「あ、ああ」

「今よりも高い値段で取引してくださいませ」

彼女は少し意地悪そうな表情を浮かべたが、相変わらず目は笑っていない。半分は冗談だが、残りの半分は本気で言っているのだろう。

「なるほどな。それで経済的に反乱側を疲弊させようってか。お前らしいな。だが、それは担当が違う。まあ、担当にはその旨を伝えておこう」

「よろしくお願いいたします」

ヴィエイユは深々と頭を下げ、ゆっくりと頭を上げると、両手で口元を隠しながら、ふあああ、とあくびをして見せた。

「……少し、眠くなりました。まだ、治療は残っているのでしょうか？」

「いいえ。必要な治療は完了しています」

メイが優し気な眼差しを浮かべながら口を開く。ヴィエイユは大きく頷いた。

「恐れ入りますが、少し、休ませてくださいませ」

俺たちは顔を見合わせながら、その場を後にした。

結局、ヴィエイユは大学病院で入院することになった。本来であれば迎賓館で保護するのが妥当なのだが、彼女が受けた傷は予想以上に大変なものらしい。少なくとも十日間は術後の経過を見なければならないとのことで、万が一、彼女の容体が急変したことを考えると、大学病院での入院がよいだろうとの結論に達した。

当然、彼女の病室には結界を張ることになった。限られた者しか入れないように効果を付与しなければならなかったが、そうしたことは、バーサーム家で何度も経験してきたことなので、結界自体は割合早く張ることができた。

あれからヴィエイユはずっと眠っているらしい。その寝顔は、驚くほど安らかで、まだ少女のあどけなさを感じる程なのだという。

彼女の傍には、バディーが付きっ切りで看病しているのかと思ったが、そうではないらしい。彼は早速里に帰って、家族でしばらくそこで過ごすつもりらしい。意外とドライな性格だなと思ったが、彼はいつでも転移できるので、ヴィエイユが目覚めたと聞けば、すぐ

に転移して来るのだそうだ。

結界を張り終えた俺は、再び執務室に戻り、留守の間に何事も起こらなかったことを確認して、もう一度、ラマロンに転移しようとした。そのとき、シディーも一緒に行くと言い、俺の腕を掴んだ。

「シディーがもう一度行くことはないと思うぞ？」

「いいえ。私も行くべきです。直感がそう教えてくれているのです」

「これからまだ、何か起こるのか？」

「それは、わかりませんが……」

「俺の娘だと言われてうれしかったから、もう一度行って同じように言われたい……なんて思っていないよな？」

シディーはほっぺを膨らましながら、俺の腕をつねった。

第六百二十四話　ご覧あそばせ

再びラマロンに転移すると、そこには誰もいなかった。まあ、誰にも行くとは言っていないので、当然と言えば当然なのだが。

シンと静まり返った部屋。地下にあるためか、薄暗い。そうそう、ここに結界を張りに来たときは、こんな感じだったと、当初のことを思い出した。

ここに結界を張ったのは、ラマロン皇国軍元帥であるカリエスに要請されたからだ。あれは確か、タナ王国国王のヴィルとの戦いが終わった直後のことで、このラマロン皇国で戦勝祝いをやったのだ。

当然、そこにはサンダンジのニケや、ヒーデータの陛下も招待されていたが、さすがに二人は出席せずに、代理の者を立ててきた。ちなみに、ヒーデータからはヴァイラス公爵が勅使として赴いてきて、後に宮殿内で働く女性と仲良くなったことがバレてひと騒動になったことは、ナイショの話だ。

転移結界はそのときに張ったのだ。そして、カリエスにフェアリードラゴンを預けたのだった。そのときは、何と心配性なことだと思ったが、今になってみれば、彼の懸念は見事に的中したと言える。

俺はゆっくりと扉に向かって歩き出す。すると、外から何やら騒がしい声が聞こえてきた。扉に耳を当てて、外の様子を窺う。

……いや、別に扉を開けて堂々と外に出ればいいのだ。「アガルタのリノスです！　ちょっと気になるので、もう一度伺いました。カ

リエス元帥か、アーモンド総司令官はいらっしゃいますか？」と言えば、わかりましたと言って案内してくれるだろう。よし、そうだ。

俺はドアノブに手をかけて、扉を開けようとする。

「ダメ」

シディーが俺の手を掴み、するりと前に廻って抱き付いてきた。彼女はズリズリと俺を押して、扉から離そうとする。え？　まさか、ここで！？

「変なこと考えないの！」

シディーがスッと顔を上げて口を開く。ドスの効いた声……。ヤバイ、怒っている……。

「す、すみません」

「……今は、出ない方がよさそうです」

「そうなのか？　直感か？」

シディーはコクリと頷く。

「もうしばらく、ここにいた方がよさそうです」

「わかった。一旦アガルタに帰るか？」

「いいえ。五分もすれば大丈夫だと思います」

「そうか。ただ……」

「どうしました？」

「それまで、ずっと抱き付いているのか？」

「……オホン」

シディーは咳払いをしながら俺から離れた。薄暗くてよく見えないが、きっと、顔は真っ赤になっているはずだ。

しばらくすると、シディーがトコトコと扉に向かって歩いて行く。彼女は扉の前で立ち止まると、しばらくそのままの体勢で立ち尽くした。やがて、クルリと踵を返して俺に向き直ると、右手をクイクイと動かして俺を呼んだ。

彼女は俺が近づくのを確認すると、ゆっくりと扉を開けた。

「誰もいないな」

「ええ、そのようですね。私の直感は、正しかったのです」

シディーはそう言って胸を張る。いや、外に人がいるのかいないかくらいは俺でも判断できるし、何だったら、マップを展開させれば敵がいるのか味方がいるのかくらいはわかるのだが、そんなことを言った日には、シディーの機嫌が最悪になってしまうので、言うつもりは毛頭ない。……あれ？　また何か怒っているのか？　……まさか、俺の心を読んだのか？　いや、感覚的にわかるのだろう。敵わないな。一応、好きですと伝えておこうか。

……シディー、かわいいよ。髪型、特に決まっていてきれいだよ。大好きだよ。……あれ？　機嫌、直らないな。

シディーはツンとした表情のまま、スタスタと廊下を歩き出した。仕方なく、俺も彼女の後を付いて行くことにする。

彼女は何の迷いもなく、迷路のような廊下を進んでいく。一体どこにいくつもりなのだろうか。俺としては、早く誰かに到着を伝えて、カリエスかアーモンドに取り次いでもらいたいと思うのだが、シディーの足取りを見ると、そんなつもりは微塵もないようだ。

ふと、何やら出口のようなものが見えた。扉のないアーチ状の出口の先には、ホールのような部屋が見える。

出口までくると突然シディーの足が止まった。どうしたことかと思っていると、何やら男たちの声が聞こえてきた。

「西門の制圧、完了しました！」

「ようし！」

出口から覗いてみると、広いホールの奥に数名の兵士たちが控えていた。そのすぐ隣には机が置かれ、そこにアーモンドがいた。彼らは兵士の報告を聞きながら、時おり「ようし！」と威勢のよい声を上げている。

やがて伝令と思われる兵士はビシッと敬礼をし、回れ右をして小走りにその場を後にした。アーモンドは兵士たちと何やら話をしている。そのとき、突然女性の金切り声がホールの中に響き渡った。

「何をするのです！　放しなさい！　その手を放しなさい！　汚い手で触らないで！　放しなさい！」

声はアーモンドたちがいる後ろの廊下から聞こえてきている。しばらくすると、バタバタと足音が聞こえてきたかと思うと、数人の兵士たちが入ってきた。よく見るとそこには、一人の小柄な女性が兵士たちに肩と腕を掴まれて、まるで引きずられるようにして連れて来られていた。

兵士たちはアーモンドの前に来ると挙手の礼を取り、背筋をピンと伸ばしながら口を開く。

「ただいま、宮殿の封鎖を完了しました。ご命令通り、ジュリエット女史を連行して参りました」

「ご苦労だった」

アーモンドが静かに答える。その瞬間、再び女性の金切り声が響き渡った。

「アーモンド総司令官！　あなた方は、ご自分が何をしたのかわかっているのですか！　陛下がおいであそばす後宮に土足で踏み込み、あろうことか、この私を、このように乱暴に……」

「ジャスヒ・ジュリエット」

女性の言葉を遮るように、アーモンドの低い声が響き渡る。その迫力ある声に女性は言葉を失い、周囲が静寂に包まれた。

「本日、オーハン、クラハラ両殿下の名を語った賊が城門を制圧し、

皇都の封鎖を図った。それだけでなく、その者たちは宮殿内に爆発物を持ち込み、それを爆発させた。これは明らかな国家に対する反逆である」

「皇帝代理であらせられる、オーハン殿下のご命令なのですよ？　あなたこそ、何を言っておいでなのです！　勅命に逆らうのですか！　確か、あなたは勅命により解任されたはずです！」

「あれは勅命ではない」

「あなたは何を……」

「元帥殿からの説明は伝わっていないようですな。あれは勅命ではない。勅命を語った偽勅だ。現在の我がラマロン皇国は、アガルタの属国である。亡き陛下はアガルタ王からこの国を統治することを許されておいでだったが、そもそも、オーハン殿下が皇帝代理にお就きになることは、アガルタ王の承認を得ていない……」

「承認は得ています」

ジュリエットと呼ばれる女性は、俺が、オーハンが皇帝代理に就任することを承認したという。ハテ、そんな話は聞いたこともないし、やった記憶もない。

「アガルタ王に……」

「私には、証拠があります」

「ほう、では見せていただきましょうか」

「それは、後宮にございます」

「後宮の？　どこに？」

「それは、私しか知らぬ場所にあります。探せるものならば探してご覧あそばせ。私に口を割らせようとしても無駄です。私は絶対に話しません。嘘だと思うのであれば、やってご覧あそばせ。その代り、アガルタ王様からの承認が出た場合は、あなた方は首が飛ぶくらいのことではすみませんことよ？　さあ、それだけの覚悟があるのであれば、やってご覧あそばせ。やってご覧あそばせ！」

金切り声が耳に痛い。ご覧あそばせって何回言うんだよ。気が付けば周囲が再び静寂に包まれている。ジュリエットのあまりの剣幕に、アーモンドも若干引いているようだ。

そのとき、シディーがツンツンと肘で俺の腕を突いた。彼女に視線を向けると、シディーはパチリとウインクを飛ばした。

それは、俺に、行けってことか？？

第六百二十五話　感心

……仕方ない、では行くとするか。何だか、とても出づらいタイミングなのだが。

戸惑う俺にシディーはガッツポーズをするかのごとく、両手を握り締めながら、キラキラとした眼差しを向けている。今がチャンスですってか？

ゆっくりとアーモンドたちのいる所に向かう。アーモンドとジュリエットは、なにやらゴチャゴチャと話をしていて、収拾がつかないようだ。

「そんな見え透いた嘘をつくな」

「嘘ではありませんわ。アガルタ王様にでも何でも、確認なさるとよろしいわ！　アガルタ王様は確かに承認するという文をオーハン殿下にお送りになったのです。……ですから、私を後宮に戻せばよいのです！　今から……」

「あの……そんな記憶はないのですが……」

「黙らっしゃい！！」

凄まじい剣幕で怒鳴られてしまった。思わず体がビクッと震える。……怖い。目が完全に据わっている。怒ったお婆さんはここまで怖い顔をするのか……。

「アガルタ王！」

俺に気づいたアーモンドが、直立不動の姿勢を取った。それにつられて、周囲の兵士たちも同じように直立不動の姿勢を取った。ジュリエットは拘束を解かれてはいたが、状況が理解できないのか、キョトンとした表情を浮かべている。

「一体いかがなさいました？　おいでなさるのであれば、言っていただければお迎えに上がりますのに……」

「ああいや、気にしないでください。ちょっと気になったもので、来ただけですから。みなさんも、そんな畏まらずに、そのままそのまま」

俺は少し照れながら手を振る。兵士たちはどう振舞えばいいのかがわからず、少し戸惑っている。そのとき、シディーが俺の隣にスッと立った。

「これは、お妃さま……。まさか、お妃さまでおいでとは、このアーモンド、気が付かずに失礼を致しました」

そう言うとアーモンドは席を離れて俺たちの許にやって来た。そして、片膝をついて頭を下げる。後ろに控えていた兵士たちも慌てて彼に倣って、同じ姿勢を取った。

「お二人のお越し、心から歓迎申し上げます」

「いや、だから……」

俺は思わずポリポリと頬を掻く。ふと見ると、ジュリエットが胡散

臭そうな目で俺を睨んでいた。

「あ、初めまして。アガルタの、リノスです」

「控えい！」

突然、男のドスの効いた声が響き渡る。先ほどのジュリエットのときと同様、体がビクッと震える。突然大声を出すの、やめて欲しいのだが……。

「アガルタ王の御前ですぞ。ジュリエット殿、控えられよ」

アーモンドが迫力満点の声で女性を威圧している。ジュリエットは驚いた表情を浮かべていたが、フッと息を吸い込むと、まるで必死で自分を落ち着けるように、たどたどしく口を開いた。

「そ……そのお方が、アガルタ王様？　ずいぶん、子供じみた、お芝居を、なさるのね？　アガルタ王様が、こんな場所にお越しになるなど、あり得ないことですわ」

「いや、アガルタ王にはお忍びで皇国にお越しいただいていたのです」

「そ……そんな、子供だましの嘘！　私の眼はごまかせませんわ！」

どうやらジュリエットは必死でこの俺を、アガルタ王ではないと思い込もうとしているらしい。まあ、気持ちはわからなくはない。

「アガルタ王、無礼の段、平にご容赦を。この者は後で……」

「いや、別に構いません。ただ、先ほどから俺が承認したとかしていないとかの話になっていましたので……。別に俺は何も承認していないと言おうと思っただけです」

「左様ですか。念のためにお伺いしますが、アガルタ王様、あなた様は、我が皇国の皇帝陛下亡き後、そのご子息であらせられるオーハン殿下、クラハラ殿下に、皇帝代理の位に就くようお命じになった、または、そのことを承認されたご記憶はございますか？」

「いいえ。俺はそのような話は聞いていません。俺が聞いたのは、息子のファルコをこの国の皇位につけること。それは、マドリン宰相とアーモンドさん、あなたが直接アガルタにお越しになって要請されましたよね？」

「ハッ、その通りです。安心いたしました。おい、ジュリエットを連れて行け」

アーモンドの命令を受けて、彼の後ろに控えていた兵士たちが、再びジュリエットの腕を掴み、無理やり連れて行こうとする。

「ちょっと、やめなさい！　やめなさい！　手を放しなさい！」

「あの……この方をどうするおつもりで？」

「いやなに、宮殿内を爆破するように術を仕掛けた男と、このジュリエットは懇意だったのです。その男のことを吐かせなければなりません。詳細は、判明した段階ですぐにお知らせに上がります。アガルタ王様には、まずはゆっくりご休息ください」

「ああいや、待ってください。そうですか。では」

俺はジュリエットに近づき、鑑定スキルを発動させる。

……やはり思った通りだった。このジュリエットが、宮殿内に爆発物を運び込ませ、それを持つ人物を選定していた。

彼女は、宮殿内で最も勤勉に働く人物、特に女性をターゲットにしていた。目を付けた人物を自分の部屋に呼び、初老の男に引き合わせていた。そこで、彼女らは術にかかっていたのだった。

さらに過去をさかのぼれば、このジュリエット自身も、その初老の男性に術をかけられていたことがわかった。しかもそれは、二年も前のことだった。

「あなたに近づいてきた、髭を蓄えた、初老の……」

「ダメ！」

突然シディーの声が響き渡る。だから、突然大声を出すのをやめなさいって……。

驚く俺に、シディーは真面目な顔で口を開く。

「そのまま聞くのは、とてもイヤな予感がします」

「え？　男のことを聞いてはマズいのかい？」

シディーはこっくりと頷く。なるほど、このジュリエットにも術がかけられている可能性が高い。俺はスッと手を伸ばして、老婆の頭に掌を載せた。

「アガルタ王……」

アーモンドが口を開こうとしたが、彼はそれ以上言葉を発しなかった。俺が何をしようとしているのかを察したのだ。

ジュリエットに精神魔法を発動させる。すぐに彼女の眼がトロンとなる。少しずつ魔法のレベルを上げて、この老婆にかけられた精神魔法を探っていく。すると、違和感があった。何やら、この女性の体の奥から声が聞こえる。魔力をかけながらじっとその声に耳を傾ける。

「……ネ。シノ……ナヲキカレタラ……シタヲ……カンデ……シネ」

俺はさらに聞こえてくる声に耳を傾ける。額に汗が噴き出しているのがわかる。背中に汗が落ちているのがわかる。

「ふぅ～」

俺は大きなため息をついて、ジュリエットから手を離した。彼女の顔色は蒼白となっていて、今にも死にそうな表情をしている。

「アガルタ王様……」

「一応、彼女に掛けられている術は、解除しておきました」

汗をぬぐいながら、アーモンドに答える。彼はどちらかというと、俺よりも立っているのがやっとの有様であるジュリエットが心配なようだ。それはそうだ。彼女に死なれたら、この国を混乱に陥れた犯人に辿り着けないからだ。しかし、俺は彼に絶望的とも言える言

葉を吐いた。

「ただ、この方……。ジュリエットさんは、あの男に会ったときからの記憶が消されています」

「どういうことです？」

「この女性に術をかけた男は、相当な手練れですね。その男に会った瞬間から、この女性は意識を乗っ取られていました」

「な……何ですと？」

「こんなことができるのは、精神魔法の使い手の中でも相当なスキル……。差し詰め、ＬＶ４というところだろうか？　なるほど、こういう使い方もあったんだな……」

正直に言うと俺は感心していた。精神魔法は当然知っていたが、ここまで他人の意識を操れるものだとは思ってもみなかった。まあ、あまり使うことのなかった魔法だけに、解釈が浅かったのは否めないが。

そのとき、ジュリエットがゆっくりと床に倒れ伏した。兵士たちが駆け寄り、彼女の介抱を始めた。

「丁重に運べ。医師のランダスを呼べ」

アーモンドは的確に兵士たちに指示を出していく。俺はその光景を見ながら、この術者の正体に思いを馳せていた。こんな芸当ができる国は、一つしかないだろう。

……一度、アガルタに戻ってみるか。

第六百二十六話　美貌？

ジュリエットが搬送されている間にも、アーモンドの許には次々と伝令の使者が訪れていた。話の内容を聞いている限りでは、門を占領していた賊たちはすべて制圧されて、皇都は解放されたのだそうだ。加えて、皇帝代理の職に就こうとしたオーハンとクラハラはすでに、屋敷内に軟禁されているようだった。

反乱は鎮圧されたと判断した俺は、一旦アガルタに帰ると、アーモンドに告げた。

「ハッ。何もおもてなしをできなかった非礼を、どうぞお許しください。整列ー！」

アーモンドの号令が響き渡ると、周囲にいた兵士たちが、アッという間に彼の許に集まって隊列を整えた。

「アガルタ王様にー敬礼！」

一糸乱れぬ動きが見事だった。アガルタ軍の統率の取れた動きも見事だが、このラマロン皇国軍の動きも、それと遜色ない出来栄えだった。俺は片手を挙げて彼らの礼に応えた。そして、それがまるで合図であったかのように、シディーがスタスタと、俺たちが来た方向とは逆の方向に歩き出した。どこに行くんだと思いながら、俺も彼女の後に付いて行くことにする。

「……おい、シディー。どこに行くんだ？」

「……決まっています。アガルタに帰るのです」

「……転移結界の場所とは全然違う方向に進んでいないか？」

「……当り前です。あそこは、秘密の場所でしょ？　今はたくさんの人がいるので、あそこからアガルタに帰るのは、得策ではありません。むしろ、堂々と正面からこの建物を出る方がいいのです」

「そうか。わかった。シディーに任せるよ」

「リノス様、私の後ろを歩かないで、私の前を歩いてください」

「え？」

「こういうときは、男性が女性をエスコートするものです」

「いや、どこに行けばいいのか、わからんし……」

「私が後ろで指示を出します」

「……わかった」

シディーの指示は、このままひたすら真っすぐ進む、だけだった。

歩いてみると、なるほど、シディーの言う通りだった。俺がやってきたことは、すでに大半の者が知っているらしく。俺とすれ違う兵士はもれなく全員が足を停めて、挙手の礼を取った。確かに、シディーに誘導されていたら、格好がつかなかっただろう。

「……そこの角を、右に」

突然シディーから指示が飛んで、慌てて右に曲がる。そこには誰もいなかった。

「さ、転移結界を」

そう言いながらシディーが抱きついてくる。

「……ずいぶん嬉しそうだな」

「エヘヘ。兵士の一人が小さな声で、あの女の子、マジカワイイなって小さな声で言っていたのです。リノス様、聞こえませんでした？」

「……すまん」

「さ、人が来ます。転移結界を」

俺は促されるまま、アガルタに転移結界を発動させた。

◆　◆　◆

アガルタに帰ると俺は、再びヴィエイユが入院している大学病院に足を向けた。だが、彼女はすでに眠っているとのことで、話をすることはできなかった。一応、その寝顔を見てみたが、大国の王とは思えぬほどあどけなかった。日頃の彼女を見ていた者が、この姿を見ると、そのギャップで心を動かされる者も多いだろう。現にポーセハイのバディーは、ヴィエイユに片時も離れずに看病をしている。この寝姿までも計算されたものであったとしたら、この小娘は百年に一人出るかでないかの天才女優だろう。

そんな下らぬことを考えながら、俺はバディーに無理をせずに休むように伝えて、その場を離れた。

ヴィエイユはそれから、滾々と眠った。彼女が起きたのは、翌日の昼過ぎになってからだった。起きるとすぐに大量の水を飲み、その後手洗いを済ませて病室に戻って、すぐに遅い昼食を摂った。それが終わると湯浴みをしたいと言って、メイやローニたちのまえで惜しげもなくその肌を曝したのだという。当然そこには女性しかいなかったが、二人は何度も彼女を診察しているので、特にどう、ということもなかったが、他の看護師たちは、ヴィエイユの体を見て、ポカンと口を開けたまま動きを止めてしまったらしい。

そんな状況下でも、ヴィエイユ自身は淡々と用意された湯に布を浸しながら、丁寧に自分の体を拭き清めていった。そして、それが終わるとメイたちの診察を受け、再び眠りについたのだそうだ。

「大変申し訳ありません」

帝都の屋敷に戻ると、メイが開口一番そう言って頭を下げた。俺は気にすることはないと言って彼女を止め、家族そろっての夕食となった。その後、いつもは子供たちを風呂に入れるのだが、今日はそれをペーリスとフェリスに任せ、俺たちはダイニングで報告を兼ねた会議に入った。

「おそらくそれは、クリミアーナ教国の者でありますなー」

ゴンがさも困った、という表情で口を開く。彼は、ヴィエイユという統率者のいなくなった教国が、どんな暴走をしでかすかを懸念していた。その意見には皆、概ね賛成だった。

「今回のラマロンでの反乱は、陽動作戦だったのかもしれませんわね」

「陽動作戦？　あーなるほどな。リコの言う通りかもしれないな」

「ラマロンで反乱を起こして、アガルタの眼をそちらに引き付けている間にクリミアーナ教国内で反乱を起こし、ヴィエイユさんを殺害して教国を乗っ取る。アガルタが鎮圧に手こずっている間に態勢を整えて、アガルタとの戦いに備える……。そんなところではないかしら？」

リコの言葉に、皆が頷く。

「ただ、敵にとって誤算だったのは、ヴィエイユ殿を取り逃がしてしまったことと、アガルタが一日で反乱を鎮圧してしまったことだろう。おそらく敵は浮足立っていることだろう」

マトカルが静かに口を開く。皆、彼女の話に耳を傾けている。

「敵を叩くとすれば今だ。ただ、アフロディーテを占領している敵を追い出したところで、政情不安となることは否めない。そんなところにヴィエイユ殿を帰しても、また同じようなことが起こる危険性がある」

「いや、マト。確かにその通りだが、あの小娘のことだ。アフロディーテに帰った瞬間から、凄まじい粛清を行うだろう。俺はそっちが心配だ」

「あの……ヴィエイユさんは、ご自身でアフロディーテを奪還する

と言っておいでです」

「ああ、そうだったなメイ。そんなことを言っていたな。俺たちにそれを見せたいから、ご近所様お誘いあわせの上、是非ご来場ください……みたいなことを言っていたな」

「ヴィエイユ殿には、何か策があるのだろう」

「きっと、己の美貌を以って、反乱軍を跪かせたいのです」

「己の美貌？　どういうことだ、ソレイユ？」

「あの方はわかっておいでなのです。己の美貌が、今が人生の中で最も美しい時なのだと。その美貌を以って反乱を鎮圧すれば、クリミアーナの人々の記憶の中には永遠に、最も美しいヴィエイユさんの姿が刻み込まれるのです」

「……あの小娘ならば、そう考えている可能性はあるな。俺たちアガルタやサンダンジ、フラディメ、ヒーデータ……それらの軍勢の中でそれが成功すれば、クリミアーナだけでなく、世界中の男たちに、あの小娘の姿が刻まれるな。何とも稀有壮大な戦略だな。ハッハッハッ」

「笑い事ではありませんわ、リノス。そうしたことは、まず、本人に聞いてみてから議論するべきですわ」

「確かにそうだが、リコ。あの小娘が己の心の内を俺たちに吐露すると思うかい？」

「……」

「まあ、とはいえ、ヴィエイユが落ち着いてから話を聞くことにしようか。それまでは大変だが、ヴィエイユの身の安全を頼むな、メイ」

「承知しました」

「一層のこと、この帝都の屋敷に迎えてもいいかもしれませんわね。安全、となれば、ここが一番ですわ」

「別に構わないがリコ、あの小娘をこの屋敷に迎えると、間違いなくヤツは俺たちの寝室を覗いてくるぞ？　それはさすがに嫌だろう？　それに……娘たちに変な影響を与えられても困る。まずは、容体が落ち着いてからだな」

そのとき、扉が開いてエリルとアリリアがダイニングに入ってきた。

「お風呂、終わりました」

「おお、そうか。じゃあ、皆で寝るか」

俺の言葉に、妻たちは笑顔を見せながら、立ち上がった。

第六百二十七話　ヴィエイユの策略

ヴィエイユは、それから一週間、食っちゃ寝の生活を送った。

朝は六時に起床すると、まずは、コップ一杯の水を飲み干し、すぐに水で濡らしたタオルで体を拭き清めた。それが終わると、着替えを済ませて朝食を摂り、朝の健診を受ける。その後は再びベッドに戻って眠りについた。

昼頃になると再び目を覚まし、やはりコップ一杯の水を飲み干した後、昼食を摂る。それが終わると再びベッドに横になって眠りにつく。そして夕方、メイたちが健診に訪れる時間になるとキッチリ目を覚まして、彼女らの診察を受け、そのまま夕食となる。その後は、再びパジャマを脱いで裸になって濡れたタオルで体を拭き清め、それを終えるとベッドに入って就寝となる。こんな生活を彼女は一週間続けたのだ。よくここまで眠れるものだと、呆れかえる外はなかった。

ポーセハイのバディー曰く、ヴィエイユは極端なショートスリーパーであり、日頃は二時間程度の睡眠しか取らないのだそうだ。これは、クリミアーナ教国内では誰もが知る話であり、その労働時間の長さが教国を支えているのだと、信者の間では信じられていた。

だが、メイに言わせると、それは少し違うのだと言う。ヴィエイユは単に不眠症であって、眠ってもすぐに目覚めてしまうために、仕方なく、起きている時間は業務に費やしていたというのが真実なのだというのだ。

「そりゃ、確かに二時間の睡眠じゃ、もたないよな。俺だったら、確実に倒れているよ」

呆れる俺に、メイの答えは、ヴィエイユ自身も、そうした生活はかなり肉体と精神を疲労させていたようで、大学病院に担ぎ込まれたときは、グーリフの石で負った傷もさることながら、疲労の蓄積からくる内臓の不調が、かなり深刻な状態だったのだそうだ。

「あとひと月遅れていれば、ヴィエイユさんはおそらく、倒れていたと思います」

アフロディーテにも有能な医師はいるので、最悪の事態は避けられるはずだが、今、反乱が起こっている事態を鑑みると、アフロディーテで倒れてしまった場合、彼女の命はおそらくなかっただろう。そうした意味でもあの小娘は、とてつもない強運を持っている。

「だから、嫁に行けないのかもな」

そんなことを呟く俺に、メイは何とも言えない優し気な笑みを向けてくれた。

「やはり人は、規則正しい生活をするのが一番です。朝起きて朝日を浴び、昼は働き、夜は寝る。バランスの良い食事を三食しっかり摂ることができれば、そうそう病気になることはありません」

「確かにな。でもメイ、お前も気を付けてくれよ？　たまに徹夜しているだろう？」

彼女は申し訳なさそうに謝る。いや、別に責めているわけではないのだが……。メイ自身もいろいろな役割を担っているために、とん

でもなく多忙なのだ。母としてはもちろん、大学の学長、教師、医師、学者……そして、俺の妻、王妃としての役割。そうした役割を彼女は黙々とこなしている。それには、俺たちが見ていないところでの努力の賜物であることは知っているが、少し、頑張りすぎるところがある。もう少し、手を抜けるところは抜いてもよいと思うのだが、彼女の潔癖さがそれを許さないようだ。

少し空気が悪くなったので、俺は咳払いをして、さらに言葉を続ける。

「だが、不眠症……かどうかはわからないけれど、俺の奴隷時代のご主人様……エルザ様の夫のバーサーム侯爵は、三日寝ないで仕事をしていたと言われていたんだ。エルザ様自身も、侯爵様が眠っているところを見たことがないと言っていたんだが……。やっぱり、そういう人もいるのかな？」

「それは……あり得ないことだと思います」

メイ曰く、人が三日三晩働き続けることは不可能だというのだ。おそらく侯爵様は、人の見ていないところで睡眠を取っていたのだろうというのが、彼女の推測なのだが、侯爵様亡き今は、それを確認する術がない。これはあの世で会ったときに、聞いてみよう。

ヴィエイユは、入院が二週間を過ぎた頃から、リハビリと称して、左手の訓練を始めた。まだ患部に痛みが残っているらしく、左手を動かすと顔をしかめることもあるようだが、彼女は泣きごとひとつ言わず、黙々と訓練を続けていた。

それが始まると同時に、彼女は紙とペンを取り出して、カリカリと何かを書くようになった。最初は病室の窓から見える景色を写生し

ていたようだが、徐々に日記のようなものを書き出したのだと言う。看護師がその理由を尋ねると、眠りすぎて思考力が落ちている気がする。こうして、頭の中で考えた事柄を文章化することで、思考力を養っているのだと、もっともらしい答えが返ってきた。

だが、それは、ヴィエイユの策略だった。

彼女の入院がそろそろひと月になり、傷もかなり癒えてきたある日、ヒーデータの陛下から呼び出しを受けた。それと同時に、ラマロンのカリエス将軍から緊急連絡として、フェアリードラゴンが俺の許に一通のメモ書きを持ってきた。そこには、ヴィエイユから書簡が届いて困惑しているので、相談したいとのことだった。

一体いつの間に書簡を送ったのだろうかと思ったが、考えてみればあの小娘には、ポーセハイのバディーが付いている。彼を使えば、書簡の一通を送ることくらい容易くできてしまう。

ヴィエイユに事の真相を確認したかったが、それをすると時間がかかる可能性があったので、まずは帝都の陛下の許に向かう。転移すると、そこにはすでに宰相閣下とヴァイラス公爵も控えていた。

「ずいぶん遅かったの」

陛下はすこぶる機嫌のよさそうな雰囲気を醸し出していた。それとは対照的に、宰相とヴァイラス公爵は、戸惑いの表情を浮かべていた。

「突然呼び出して、済まなかったの」

「いいえ。あの……今日のお話しは、もしかしてクリミアーナの…

…？」

「さすがは義弟殿じゃの。図星じゃ」

「ヴィエイユは一体、何と言ってきたので？」

「物見遊山の誘いじゃ」

「物見遊山？」

「もうすぐ、今逗留しているアガルタより、アフロディーテに出発する。反乱軍を鎮圧するための出兵と書いてあった。おそらく歴史に残る戦いとなるであろうから、見に来ぬか。ヒーデータが援軍を出す必要はないが、御身を守る兵士は連れてくるようにと書かれてあった」

「……あの小娘」

「面白そうだの」

「陛下！」

「義弟殿も宰相や公爵と同じ顔をするの。しかし、鎮圧軍に見物を連れて行こうとは前代未聞だの。一歩間違えればヴィエイユ殿は、死ぬよりも重い恥辱を受けることになるところだが、この書簡の書きぶりは、相当の自信があるのだな」

陛下はそう言ってカラカラと笑う。まさかこのオッサン、わざわざアフロディーテに行くつもりか？

「その顔は、余が物見遊山に行くのは反対のようだの？　だが、余は見てみたい。見てみたいが、皆の気持ちもわからぬではない。そこで、じゃ。弟のヴァイラスを差し向けることとする。それでどうじゃ？」

「兄上！」

「義弟殿も行くのじゃ。安全じゃ。それに……しばらく帝国から姿を隠した方が、その方にとっても好都合ではないかの？」

陛下の言葉に、ヴァイラス公爵は悔しそうな表情を浮かべながら俯いた。またこの男は、オイタをやらかしたのか？

「兵は……三千程出そうかの？　義弟殿、よろしく頼む」

「いや、俺は行くつもりは……」

「いや、そなたは行ったほうがよい」

「どういうことです？」

「同じ書簡が、サンダンジのニケ王にも届けられているのだ」

「は？　ニケさんにも？」

「あの王は戦い好きじゃ。きっと喜んで出てこよう。だが、そこで戦闘に巻き込まれる……いや、あの王が参戦でもされたら、我らはクリミアーナの内紛に力を貸したことになる。そうなれば、ヴィエイユ殿の権威は跳ね上がる。それはあまり、よいことではないと思うがの」

陛下の言葉に、俺は思わず息を呑んだ。あの小娘がここまで考えていたのだろうか。だとすれば、やはりあの小娘は野放しにしてはいけない……。

「義弟殿には、アフロディーテでの戦いを静観しながら、ニケ王の動きに目を光らせてもらいたいのだ。頼めるかな？」

陛下の言葉に、俺は頷くよりほかはなかった……。

第六百二十七話　ヴィエイユの策略（後書き）

第十九章は今回で完結です。間話を数話挟みまして、第二十章　アフロディーテ奪還編（仮）を連載予定です。次話は、コミック四巻の発売日に合わせて、セルロイト、ヤンノーリ夫婦を描こうかなと思案中です。どうぞ、お楽しみに！

第六百二十八話　夫婦の一日

ヤンノーリ家の朝は天気に左右されない。ヤンノーリは起床、洗顔の後は戸を開けてじっと空を眺めてその日の天候を占う。それは雨の日も同じように行うのだった。

ヤンノーリが玄関の扉を開けると、キッチンでは妻であるセルロイトの動きがせわしくなる。それは彼女にとって、人参ジュースを作る合図でもあるからだ。

一年三百六十五日、ハチミツが入った特製の人参ジュース。ヤンノーリが食卓に着くと同時に、そのジュースが目の前に置かれる。「おはようございます」夫婦で朝の挨拶。飲み終わると同時にトーストが焼き上がり、朝食となる。

流れるように進む段取りと間の良さ。瞬く間に一式が揃って、約三十分の朝食が始まる。

副食も決まっている。一日おきにスクランブルドエッグ。他の日は目玉焼き、あるいは肉料理だ。夫であるヤンノーリが魚料理を好まないことを承知しているから、セルロイトは肉料理に腕を振るう。

朝食のトーストは薄めに切られていて、ヤンノーリはその一枚をまず半分に切る。最初の半分につけるのがピーナッツバター、またはジャム。残る半分はスクランブルドエッグなどと共に食べる。少し大きめのボウルに盛られた野菜サラダのドレッシングを選ぶのは、もちろんセルロイトだ。

夫婦の会話はほとんどなく、話すと言えば、その日の予定を確認し合うくらいのものだったが、ヤンノーリ自身はその状況に全く不満はなかった。セルロイトの察しの良さは群を抜いていて、彼が心の中で思ったことは、大抵は彼女に伝わるのだ。そのために、この無言の朝食は、彼にとってはむしろ、心地いい時間となっていた。

朝食が終わると、ヤンノーリは農場に出かける。彼は手ぶらで玄関に向かい、スッと後ろを振り返る。そこにはセルロイトが控えていて、彼は妻の細い体を決まって少し強めの力で抱きしめるのだった。

「では、行ってくる」

その言葉と同時に、セルロイトからカバンを手渡される。中にはこの日必要な物がすべて揃っている。ヤンノーリが寝ている間に、セルロイトが準備しているのだ。

夫を見送ると、セルロイトも身支度を整えて外に出る。アガルタ大学に出勤するためだ。

彼女は、結婚を機に、留学生という立場から、学長であるメイリアスの秘書という立場になった。秘書、といっても、活動するのは公式行事があるときだけで、それ以外の時間は、大学で好きな授業を受講することが許されていた。彼女はそうした活動を行いながら、メイリアスらにアガルタ大学の改善点を進言し、また、それらがどんな形で改善されているのかを報告していたのだった。

屋敷から歩くこと五分。ポツリと置かれたベンチの前で彼女は立ち止まる。しばらくすると、そこには大きめの馬車が停まる。すぐに中から若い学生たちが数人降りてきて、農場に向かって歩いて行く。言うまでもなく、アガルタ大学の学生と研究者たちだ。彼らは、こ

の大学で教鞭をとるヤンノーリの教え子たちでもあった。

「おはようございます」

誰もいなくなった、ガランとした馬車にセルロイトは乗り込む。何の返事も帰ってこないが、そんなことを気にすることもなく、彼女は席に座る。それが合図であるかのように、馬車はゆっくりと走り出す。

馬車を操るのは、猫獣人の男だった。彼とセルトイトは言葉は交わさないものの、まるで、親友同士のような感覚を覚えていた。そんな、何とも言えない居心地のよい空間で、ぼんやりと車窓の景色を眺めながら過ごす時間が、セルロイトは好きだった。

やがて、いつもと同じ時間ぴったりに馬車はアガルタ大学に到着する。馭者の男に礼を言って馬車を降りるが、彼からの返答はない。スッと帽子を下げるのが、彼流の挨拶なのだ。

大学に着くと、彼女は真っすぐにとある教室に向かう。そこでは、大学が開発した最新の農業技術を伝える講義が開かれていた。彼女は、講義が始まる五分前に教室に到着して、いつもの席に座る。その前の席には、貧乏ゆすりをしながら小刻みに体を動かす、小柄な老人が座っていた。フラディメ王国の、リボーン大上王だ。

彼は息子のメインティア王とリノスを説き伏せて、無理やり自分の隠居館からこの大学に転移結界を張らせていた。生来せっかちなこの大上王は、講義の一時間も前から大学に出勤し、その日に行われる講義を入念にチェックするのを日課としていた。そして、時間に余裕があると決まって図書館に向かい、そこで読書をすることにしていたのだった。

講義が始まると、大上王は凄まじい勢いでノートを取り出す。その様子を見ながら、セルロイトもまた、カリカリと講義の内容をノートに書き入れていく。しばらくすると、大上王の動きが止まった。これは、ペンのインクが切れたのだろう。セルロイトは、大上王の背後からスッとペンを差し出す。それを大きく頷きながら受け取る大上王。大上王にとっても、このセルロイトはなくてはならぬ学友の一人となっていた。

講義が終わると、セルロイトは自身のノートを大上王に手渡す。彼はそれに入念に目を通しながら、自分のノートに書き入れていく。そしてそれが終わると、彼は「ありがとう！」と大きな声で礼を言い、質問のために教授たちの控室に向かって行くのだった。

大上王を見送ると、彼女は学長室に足を向ける。昼食を準備するためだ。秘書になってからというもの、メイリアスの昼食はいつも、セルロイトの役割になっていた。

学長室でのメイリアスは、黙々と論文を読んでいるか、自身の論文を書いていることが多い。セルロイトはメイリアスの邪魔にならないように静かに入室して、備え付けてあるキッチンで昼食の準備を始める。ほとんどのものはお弁当として家から持ってきていたが、彼女はここで必ず、グレープフルーツジュースと温かいスープを作ることを欠かさなかった。

「ふぅ……」

メイリアスが思わず天を仰いだのを合図に、グレープフルーツジュースを差し出す。それが昼食の合図でもある。二人はお弁当を広げ、スープを用意しながら、世間話に興じる。

「メイリアス殿、おられるか！」

昼食時には決まって、リボーン大上王がやってくる。彼としても悪気があってやってくるのではなく、メイリアスに質問をするために来るのだった。そんな彼にも、セルロイトは持って来たお弁当を手渡して、一緒に食事を摂りましょうと話しかけるのだ。

「ううむ……。いつもいつも、そなたは行き届いておるな。ううむ……儂にも、このような家来が一人でもおれば……」

大上王はそんなことを言いながら、セルロイトの料理を口に運ぶ。そして、その日に聞いた講義の内容を皮切りに、よもやま話に花を咲かせるのだった。

昼食がすむと、セルロイトは昼からの講義に出席する。大体、ここでも大上王と一緒になる。それが終わると、大学内に設置されているフリーマーケットで食材や調味料を購入して、家路につく。帰るとすぐに夕食の準備だ。

ヤンノーリは大抵、七時に帰宅する。帰ってくるとすぐに風呂に入り、体の汚れを落とすのが習慣となっていた。セルロイトはその時間も計算に入れて、彼が席に着くと同時に料理が出せるようにタイミングを計るのだった。

朝食と同じく、瞬く間に一式が揃って、夕食となる。今夜は肉をたっぷりと入れた鍋料理だ。夫は黙々と、だが、嬉しそうに出された料理を口に運ぶ。

食事が終わると、洗い物はヤンノーリの仕事だ。その間にセルロイ

トは風呂に入る。

食器類を片付け、部屋の中を片付けると、ヤンノーリはパジャマに着替えてベッドに入る。それと同時に、セルロイトが風呂から出てくる。すでに彼女はパジャマに着替えている。

「おいで」

「はい」

セルロイトがベッドに入ると、彼は少し力を込めて彼女を抱きしめる。少し息苦しさを感じる程、全身が締め付けられる。その感覚が彼女は大好きだった。

やがて、枕元の灯が消える。こうして、ヤンノーリ家の一日は終わるのだった……。

第六百二十八話　夫婦の一日（後書き）

結界師への転生、コミック四巻が明日発売になります。一部の書店では、本日から販売されているようです。メイちゃんとペーリスがとてもかわいらしく描かれています。是非、ご覧ください！

次話は、二人の結婚するときのエピソードになる予定です。

第六百二十九話　二人の結婚

「結婚……？」

鳩が豆鉄砲を食ったような表情を浮かべているのは、父親であるハーツ公爵だった。彼の目の前には、妻と娘のセルロイトが控えていた。

妻からアガルタに留学しているセルロイトが帰ってくると聞いたのは、三日前のことだ。公爵は、「そうか」とそっけない返事をしたものの、その心の中は喜びで満たされていた。

……久しぶりに、娘に会える。

アガルタで会って以来、半年ぶりの再会となる。娘の顔を半年も見ないのは、これまでの人生の中で初めてのことだった。

楽しみで仕方がなかった。妻は多くを語らなかったが、もしかすると、アガルタの留学を切り上げて、国に帰ってくるのかもしれない。そうすればまた、娘とこの屋敷で暮らせるのだ。もう再び、自室に籠ることはあるまい。

屋敷に帰ってきたら、また庭の畑の世話をすればいい。アガルタの留学を続けるのであれば、それもよかろう。

そんなことを考えながら、彼は大公宮殿に向かう。そうだ、兄上にもこのことを報告しなければ。娘を可愛がっていた兄のことだ。すぐに連れてこいというだろう。

公爵はそんなことを考えながら、迎えの馬車に乗り込んだ。

それからセルロイトが帰宅するまでの間、公爵は全く落ち着かず、屋敷の中でソワソワと動き回った。娘が丹精込めて育てた畑は、公爵がその管理を引き継いでいたが、いざ、娘が帰ってくるとなると、その作物の生育状況が気になって仕方がなかった。作物の状況は以前と変わらないはずだったが、いや、もっと実を大きくして、娘をアッと驚かすことはできないものかと考えて、いつもより多めの水をやって家来に怒られた。

さらには、娘が帰ってくるのに、部屋が散らかっていては可哀そうだと思い、せめて掃除でもしてやろうと部屋の前まで行くのだが、もうすっかり女性として成長してしまった娘の部屋にはどうしても入ることができず、家来に何度も部屋をきれいにするように命じて、妻に怒られる。さらには、屋敷にいる間はせめて、娘の好きなものを食べさせてやろうと考えて、公爵自ら市に出向いて、大量の食材を調達してきて、またしても妻に怒られたのだった。

「少し落ち着かれませ！」

普段、感情を露わにしない妻が、このときばかりは怒気を帯びた声で公爵を宥めた。彼は仕方なく、自室で貧乏ゆすりをしながら、娘の帰りを待つほかはなかった。

三日後、屋敷に戻ったセルロイトは、まるで、別人のような女性となっていた。

「お父様、お久しぶりでございます。めっきり寒くなりました。お体の具合、いかがですか？」

いつもは不安げでオドオドした様子を見せていたのが、スッと背筋を伸ばして佇んでいた。父に似て、モゴモゴと口ごもりながら訥々と話していたのが、声は相変わらず小さいものの、はっきりと、淀みなく話をしていた。目には深い知性を讃え、凛とした女性の姿がそこにあった。

「お……おお……。あっアガルタでの暮らしは、じゅ、充実、しっしているようだな」

「はい。お陰様で……。アガルタ王様、メイリアス王妃様共に、とても良くしてくださっています」

「そっ、それは、よっ、よかった……。しっ、しばらくは、屋敷で、ゆっくりと、くっ、寛ぐといい。たっ、大公様も、おっ、お前の帰還を、たっ、楽しみにしておいでだ。明日にでも……」

「お父様、お願いが、ございます」

突然、お願いがあると聞かされて、公爵はポカンとした表情を浮かべる。娘が直接自分にお願いをすることなど、記憶になかったからだ。彼はゆっくりと頷いて、続きを促す。

「結婚、のお許しをいただきたいのです」

「は？」

娘は結婚と言った。確かにそう言った。聞き間違いではないはずだ。彼はそう思いながら、隣に座る妻を見た。彼女は大きく頷いている。

公爵は娘の話を、上の空で聞いていた。それほど、セルロイトの結婚に関しては、予想もしていない出来事だったのだ。おそらく一生をこの屋敷で暮らすに違いないと考えていた彼にとって、その事実はなかなか受け入れることができなかった。

それでも、相手の男については気になるところだ。彼はぼんやりと頷きながら、相手のことを聞いていた。

その相手とは、アガルタ大学で教鞭をとる農学者のヤンノーリという男だった。セルロイトとは二十歳近く年が離れている。どちらかと言えば、公爵と年齢はそう変わらなかった。彼の心の中に、以前の悪夢が蘇る。

「そっ、そっ、それは……。だっ、大丈夫、なのか……」

「とても誠実な人です。私を幸せにしてくださる方です」

「そっ、そんなこと、わかる、ものか」

吐き捨てるように口を開く公爵に、セルロイトは背筋を伸ばして、静かに口を開いた。

「私を、何としてでも幸せにしたいと言っていただきました。私も、彼を、何としてでも、幸せにしたいと、思っております」

「……」

娘の瞳に、嘘や偽り、後ろめたさと言った感情は読み取れなかった。それだけ、娘の決意が固いことを公爵は感じ取った。彼はゆっくりと隣に座る妻に視線を向けた。

「私も一度、お会いしましたが、とても誠実な方とお見受けしました」

「し……爵位は？」

「爵位？　そんなものをお持ちの方でございませんわ」

「し……爵位を、持たぬ……」

「ええ。しかし、アガルタ王妃であらせられるメイリアス様にお仕えされている方でございます。メイリアス様の信頼も厚いお方と聞いております」

「う……」

公爵は唸ったきり、言葉を発することができなかった。そして、大きく息を吸い込むと、あらぬ方向に視線を向けた。

「あ、明日……。たっ、大公様に、おめにかかり……。大公様の、おっお許しを……」

彼はそこまで言うのが精いっぱいだった。

翌日、公爵はセルロイトを伴って大公宮殿に向かった。馬車の中で二人っきりであったにもかかわらず、この父娘は一切の言葉を交わさなかった。セルロイトは少しシックなドレスに身を包み、薄化粧を施していた。その姿は父の眼から見ても美しいと思わせる風貌だった。だが、公爵自身は、突然突き付けられた娘の結婚話に、まだ気持ちが追い付かず、兄である大公が身分の違いを理由に、反対し

てくれぬものかとさえ思っていたのだった。

ほどなくして、馬車は宮殿に到着した。二人は案内されるままに、大公が待つ部屋に向かった。通されたのは、宮殿の奥にある、大公の私室だった。ガウンのようなラフな格好に身を包んだ大公は、セルロイトを見ると満面の笑みを浮かべながら、「よくぞ帰ってきた」と言って喜んだ。そして、矢継ぎ早に、アガルタでの生活について質問を投げかけた。

セルロイトはそれに丁寧に答えていく。その対応に、大公は目を細めながら聞いている。

「大公様、お願いが、ございます」

「うん？」

話しが途切れたとき、セルロイトが突然、居住まいを正して口を開く。大公もそれが予想外であったためか、彼にしては珍しく、キョトンとした表情を浮かべている。

「一生を添い遂げたいと、思う人が、できました。けっ、結婚を、お許し、ください」

「……よかろう」

あまりに拍子抜けする答えだった。てっきり、相手の素性を根掘り葉掘り聞かれ、反対されるであろうと予測していたのだが、それが大きく外れる結果となった。今度はセルロイトが、オドオドとせわしなく両目を左右に振っている。

「ハーツ」

「ハッ」

「お前は、反対であろう？　なに、隠さずともわかる。しかしな、セルロイトは自分で幸せを掴み取ろうとしているのだ。あの、セルロイトが、だ。儂は、このような日が来るとは思わなんだ。嬉しいではないか」

「……」

「元々、アガルタには人質にやったのだ。アガルタ王の手が付くことも覚悟したではないか。それが、まさか、アガルタで伴侶を自ら見つけてきおったのだ。己が自身で掴んだ幸せじゃ。きっと、うまくいくであろうよ」

大公の言葉に、公爵は黙って頭を下げた。

数か月後、セルロイトとヤンノーリは、アガルタの迎賓館で結婚式を挙げた。大公らごく身内の者と、アガルタからはリノスとリコ、そしてメイが参加しての、ごく内内だけの結婚式だった。純白のウエディングドレスに身を包んだセルロイトは、とても気品のある女性に見えた。

式が終わると、たまたまアガルタに訪れていたメインティア王がその話を聞きつけ、お祝いにと、新郎新婦の絵をその場で描いて二人に贈った。『花嫁』と題されたこの絵は、メインティア王の最高傑作のひとつに数えられ、それから百年の後、その絵は日本円で数億円の価値が付けられることになるのだった。

二人はその後、二人の子供にも恵まれて、仲睦まじく暮らしたのだった……。

第六百二十九話　二人の結婚（後書き）

コミック『結界師への転生④』発売中！　たくさんの応援コメント、ありがとうございます！

ＰＳ．次回もう一話間話を挟みます。

第六百三十話　面影

明るい日差しが差し込む部屋の中で、女性がベッドに横たわっていた。彼女はスッと首を持ち上げると、ゆっくりと体を起こした。

「お母様、寝ていてください」

一人の少女がベッドに小走りに駆け寄る。女性は優しげな笑みを浮かべながら、傍らのカーディガンを手に取り、自分の肩にかけた。

「大丈夫ですよ。今日は、大変調子がよいのです」

そう言うと女性は右手で少女の手を握った。彼女もそれに応えるように、両手で女性の手を握り締めた。

「心配いりませんよ。じきに、よくなります」

やつれてはいるが、女性の双眸には深い知性を湛えていると同時に、深い慈愛が滲み出ていた。少女は安堵の表情を浮かべた。

「お父様も、まもなくお戻りになることでしょう。お母様、早く元気になって、お父様をお迎えしましょう」

「そうね……」

女性はニコリと笑うと、左手で少女の頬を愛おしそうに撫でた。そのとき、彼女の脳裏に、ある場面が頭をかすめた。それは、旅立つ直前の夫の姿だった。

「……私は、必ずこのアフロディーテに帰ってくる」

夫は、彼女と娘を前に、そんな言葉を口にした。その表情には悲壮な覚悟が見て取れ、これから赴く場所が尋常ならざるところであることは、誰の目にも明らかだった。

実際、夫は絶海の孤島に赴こうとしていた。生き物が死に絶えた場所とも言われた島……。そこには、万病に効くとされるレクイナム草が生えていると言われていた。夫は両手で妻の手を強く握り、まるで自分に言い聞かせるように口を開いた。

「レクイナム草を持ち帰り、必ずお前の体を治して見せる」

「あなた……無理だけはしないでください。私は……安静にしていれば、よくなりますから」

「……」

夫はじっと妻の顔を見つめる。そんな彼に妻は優しい笑みを向けている。

「必ず、私は帰ってくる。そして、認めていただくのだ」

「あなた……」

「お父様！」

突然、少女の声が響き渡った。二人の前には、聡明そうな少女が小走りに駆け寄ってきていた。

「早く、帰って来てくださいね」

「ああ。すぐに帰ってくる。心配はいらないよ。私が帰るまで、お母様のことを頼んだよ」

「はい」

男はゆっくりと膝をつき、娘の体を抱きしめた。

「……お父様、痛いです」

「ああ。すまない。では……行って来るよ」

「行ってらっしゃいませ」

「行ってらっしゃいませ」

……娘と二人で見送った夫の後姿は、今でも鮮やかに脳裏に焼き付いている。あれから半年が経っている。夫からの連絡は途絶えたままだ。まさか、という最悪の光景が脳裏をかすめるが、彼女はそれを振り払うかのように、ゆっくりと顔を左右に動かす。その様子を、娘が不安そうな表情で眺めている。彼女は再び柔和な笑みを浮かべる。

「心配いりませんよ。大丈夫です。大丈夫ですよ」

「お母様……」

少女の眼にうっすらと涙が滲み出てくる。そのとき、母娘の不安を

打ち払うかのように扉が開けられ、この家に仕えるメイドが入室してきた。

「失礼します」

「どうしました？」

「教皇聖下からお薬が届きました」

「薬？」

「はい。レクイナム草の薬が完成したとのことで、先ほど使者の方がこれを届けてくださいました」

「レクイナム草？」

女性の顔がぱあああっと明るくなった。それは、夫が送ってきたものだろうか。いや、きっとそうに違いない。で、あれば、彼は生きていることになる。このアフロディーテに帰ってくるのだ。

女性の心の中に希望の光が灯った。夫にもしものことがあれば、体の弱い自分が娘を育てていくことができるだろうかという不安がいつも頭の片隅にあったのだ。実家を頼ることはできないでいた。母はすでに亡く、父は表向きは結婚に賛成しながらも、その心の内では結婚に反対していることはよくわかっていた。父のことだ。夫が亡くなったからと言って、娘を許す人ではないことは、十分にわかっていた。

だが、その父は、届けられたばかりのレクイナム草を寄こしてくれた。夫が帰ってきたら、二人の仲を認めるという意思表示ではない

だろうか。彼女の脳裏に、再び夫と娘との平穏な日々が描き出されていた。

「奥様、この薬、いかがなさいますか？」

「すぐに飲みます」

女性はそう言ってメイドから薬を受け取る。それは薄い紙の包みだった。おそらく中身は粉薬だろう。メイドが水をお持ちしましょうというのを手で制して、彼女はそれを両手で包み込みながら、まるで押し頂くようにして掲げた。

「ありがとうございます、教皇聖下。貴重なお薬をいただきまして、感謝の念に堪えません。教皇聖下、主神様……心から感謝申し上げます」

そう言うと彼女は丁寧に包みを広げ、中に入っていた白い粉薬を口元に持っていった。

「……」

ゆっくりと薬を飲み込み、大きく息を吐き出す。ふと見ると、娘が不安そうな面持ちでこちらに視線を向けている。

「大丈夫よ。もう、大丈夫。お父様が届けてくださった薬で……」

「……お母様？」

「私の体も、すぐに、元通りに、元気に……なることでしょう。そうしたら……グッ」

「お母様！？」

「そうしたら、お父様と三人で、また、暮らせます。そのときは、どこか、どこか、キレイな……グッ……グゥゥゥゥゥゥゥ……」

「奥様？　奥様？　奥様！　奥様！」

今まで聞いたことのないような呻き声を上げる女性。彼女は胸を抑えながらその場に倒れ伏した。メイドが必死になって彼女の背中を撫でるが、その苦しそうなうめき声は収まる気配がなかった。

「お母様！　お母様！　うっ！」

少女が必死の形相で母親に取りすがる。そのとき、腕に痛みを覚えた。ふと見ると、母の右手が少女の手を握り締めている。まるで骨が砕けるかと思うような力だった。この華奢な体をした母に、こんな力が残っていたのかと少女は驚きながら母親の手を握り返す。

「おっ……おとう……グッ……カハッ……」

「お母様！　お母様！　お母様ぁ！　いやぁぁぁぁぁぁ！！」

握り締めていた母の手の力がどんどん弱くなっていく。娘は必死になって母を呼ぶが、彼女はゆっくりとベッドに倒れ伏した。その後、母は目を覚ますことはなかった。

少女は呆然と母親の亡骸を眺めている。そのとき、足元から地鳴りが響いたかと思うと、ガラガラと床が崩れだした。

突然、真っ暗な深い穴が見えた。少女の体がまるで、吸い寄せられるようにしてその穴の中に落ちていった……。

「……お母様！」

ふと目が覚めた。天井の白い壁がイヤにまぶしかった。

ゆっくりと体を起こす。そのとき、左腕に包帯が巻かれているのに気が付いた。彼女はそこにゆっくりと手を添える。周囲を見廻すと誰もいない。思わずホッと胸を撫で下ろす。

「お父様……お母様……」

誰に言うともなく呟く。再び周囲を注意深く見廻して、誰もいないことを確認すると、彼女はさらに言葉を続ける。

「必ず、アフロディーテに、戻って見せます。この私を……ヴィエイユを、お守りください」

ヴィエイユは母の葬儀の場面を思い出していた。祖父である教皇、ジュヴァンセル・セインはハンカチで涙を拭きながら、娘の死を悲しんでいた。その時の言葉が、ヴィエイユには忘れられなかった。

「レクイナム草と聞いて与えた薬が、全く違うものだったとは……何ということでしょう」

祖父は娘が不憫だと言って泣いた。あの祖父が、素性のわからぬ薬を母に与えるわけがなかった。元々心臓の弱かった母に対して、その病気に効く薬が開発されたので、彼は母を人体実験に使ったのだ。さらには、レクイナム草を求めて旅に出た父は、旅先で飢えと病に

苦しみながら非業の死を遂げたのだった。

その事実を聞かされたとき、ヴィエイユは人並みの幸せを捨てた。徹底的に祖父が気に入る人物になり、必ず次期教皇の座に座ることに決めた。そのためには、どんな手段も使うと覚悟したのだった。

今、自分は、せっかく手に入れた教皇の座から引きずり降ろされようとしている。ここで退くわけにはいかない。何としてアフロディーテに戻るのだ。母と父が愛したあの都を、自分の手に取り戻すのだ……。

気が付くと、ヴィエイユは自分の眼から涙が溢れていることに気が付いた。彼女は思わず両手で目を覆った。その瞼には、優しい笑みを浮かべる父と母の顔が浮かんでいた……。

第六百三十話　面影（後書き）

次話より新章に突入します。どうぞお楽しみに！

ＰＳ　コミック最新刊『結界師への転生④』、お陰様で売れ行き好調のようです。一部では売り切れの店舗もあるようで、まだお手にされていない方、早めにお求めください！

第六百三十一話　教皇と信徒

クリミアーナ教国の教都、アフロディーテ。小高い丘の上に建つ教皇神殿の一室から、一人の男が窓の外を眺めていた。

雲一つない真っ青な空の下、燦々と降り注ぐ太陽に照らされて、街全体が光り輝いているように見える。過去に一度、この街はその半分が灰燼に帰したことがあるが、そのときの光景と比較すると、現在の街並みは実に機能的であり、かつ、見た目も十分に考慮された見事な出来栄えであると言える。

男は薄ら笑いを浮かべながら、街並みを眺め続けている。窓から入ってくる心地いい海風を眺めながら、水平線の彼方に視線を向ける。

「失礼します」

男の声が聞こえた。扉が開く音が聞こえ、足音が近づいて来る。

「ロン・エスロテル様」

名前を呼ばれて男は、ゆっくりと踵を返す。

「ただ今、ヨゼフ様がおいでになりました」

「通してくれ」

ロン・エスロテルの言葉を受けて、目の前に控えていた男は一礼して退室していった。それと入れ替わるように、口ひげを蓄えた初老

の男が入室してきた。彼は、ロン・エスロテルの前までくると、深々と腰を折った。

「申し訳、ありません」

「……そうか。ならば、仕方がないな」

ロン・エスロテルは、そう言いながら笑みを浮かべた。

教皇・ヴィエイユの襲撃計画は完璧だった。だが、最後の最後で詰めを誤った。まさか、ポーセハイが彼女を連れ去るとは思ってもみなかった。彼女にはグーリフの石で作った矢じりを仕込んだ弓矢がまともに腕に刺さっていた。通常であれば絶命は必至だったが、ポーセハイがいたとなると、その行き先はアガルタであることには間違いなかった。アガルタであれば、大賢者・メイリアスを擁するあの国ならば、グーリフの石の毒を取り除くことは、十分に可能だろう。

今、目の前で頭を下げている男、ヨゼフは、クリミアーナ教国の中でも指折りの精神魔法の使い手だった。ヴィエイユが五体満足でこれまで生きてこられたのも、この男の影の働きがあったればこそだった。この男をラマロン皇国に潜入させて混乱を引き起こし、アガルタ側の国々が、ラマロンに注目している間に、教皇を殺害するという計画だった。ヨゼフからは事前にその計画がとん挫したことを知らせる書簡が届いていた。

「ラマロンでの活動は、予想をはるかに超える速さで鎮圧されてしまいました。今頃は、おそらくこのアフロディーテに向かって討伐軍が編成されている頃かと思います」

ロン・エスロテルは無言のまま、ヨゼフの報告を聞いた。そして、誰に言うともなく、静かな口調で語りかけた。

「やはり、あのお方は、教皇聖下は、主神様に愛されておいでなのだな。我々の計画は完璧だった。だが、あの日、お傍にポーセハイがいたことで、最後の最後であのお方を取り逃がした……。偶然だった……。しかし、その偶然のお蔭で、あのお方は命を拾ったのだ」

「これから、いかがなさいますか。ロン・エスロテル大司教」

「何もしない」

「……」

「このまま、何もしないでおく。……残念だった。我々の手にかかってくれていれば、教皇聖下は教皇聖下として、神となられたのだが。惜しい限りだ」

ロン・エスロテルとて、最初からヴィエイユを襲う気持ちはなかった。寧ろこの男は、陰にいてこそ真価を発揮するタイプであり、裏でヴィエイユを意のままに操ろうと考えていたのだった。

だが、「友好の花」がクリミアーナ教を信仰する国々に広がると、その状況は一変した。ヴィエイユの説明では、アガルタとの共同開発によって、花を駆除するネズミが生まれたと発表されていたのだが、彼女はそれを属国に分け当たる際に、法外な金額を要求したのだった。

むろん、友好の花の被害を食い止めたい国々は、苦しい台所事情を抱えているにもかかわらず、唯々諾々としてその金を払い続けた。

加えて、教国内でも重税が課されるようになり、信徒たちの生活は圧迫され始めていた。人々は信じていた。自分たちが払う金で、より効率的な花を駆除する手法が確立されることを。だが、ヴィエイユはそれで得た金を、友好の花を撲滅するための開発費に投じることはせず、それどころか、各地から集められた膨大な金は、いつとはなしにその全てが消え去っていた。

ロン・エスロテルをはじめ、枢機卿たちは消えた金の行方を追った。ヴィエイユ本人に聞いても、のらりくらりと話をはぐらかすばかりで一向に埒が明かない。だが、彼らの力をもってしても、その金の行方を追うことはできなかった。

ヴィエイユとしても、アガルタから請求される金を支払うことで精いっぱいだった。取引ごとに変わるレートはいつも、教国が払えるギリギリの数字で設定されており、まさに敵ながらあっぱれといったやり方だった。

だが、ヴィエイユは金策に追われながらも、秘かに金儲けを企んでいた。

彼女は医療研究所を使って、難病と言われるストーマットの特効薬の開発に乗り出していた。これは心臓病に似た症状を発症する病気であり、三十歳を超えた女性に発症する例が多く見られた。実際、ヴィエイユの母もこの病を患っていた。

ヴィエイユは秘かに巨額の研究費用を投じて、この薬の開発を急がせていた。それが完成すれば、メイリアスにこの薬を高く買って貰うように持ち掛ける。彼女に説得する自信があった。聖女・メイリアスは、命が助かる確率の高い薬に関しては、金に糸目をつけない性格であることを見抜いていた。そこを上手にくすぐれば、彼女は

アガルタ王に進言してくれるだろう。あの王も、聖女・メイリアスの言葉は言下に拒否することができないはずなのだ。

しかし、彼女の思いは部下には伝わらなかった。本来であれば、巧みな弁舌で部下たちを説得するのだが、如何せん、このときのヴィエイユは忙しすぎた。大量の仕事に忙殺されてしまっていたために、部下たちとじっくり話をする機会を失っていたのだった。

ロン・エスロテルたちは、ヴィエイユの行動を疑い始めた。あのお方は初心を忘れ、俗物になり下がってしまったのかと。

教皇の位を手にするまでのヴィエイユは、神々しさに満ちていた。慈悲深く、誰に対しても気配りを忘れなかった。どんな些細な約束もちゃんと覚えていて、それを実行に移した。ミスが起こっても責めることはなく、その程度で済んでよかったですと言って笑い飛ばす度量もあった。

そんな彼女がここ最近、部下たちに隠れて何かをしようとしている。それが一体何であるのか。皆の疑念が頂点に達しようとしたとき、ヴィエイユの口から、思いもかけない発表がなされた。それは、医療研究所を拡充するというものだった。

教皇神殿のすぐ傍に建てられているその建物を拡張するのではなく、新たに別の場所に新築されるというもので、移転先に指定された場所は教皇神殿の敷地内で、広い中庭と定められた。しかも、その工事は昼夜を問わず突貫工事で行われるとされ、アフロディーテに居住する信徒全てに、何らかの使役を割り当てるよう指示されたのだった。

さすがに枢機卿たちは、この命令には反対した。友好の花を撲滅す

る薬品を作るのであればまだしも、今、この時期に医療研究所を拡充する必要はない。しかも、数百年前から信徒たちの憩いの場所であった中庭を潰してまで建てるものでもない。さらには、昼夜問わずの工事を行うなど、信徒たちにとってみればとんでもない話だった。これを公表すれば、アフロディーテが混乱することは目に見えていた。

だが、ヴィエイユは一歩も引かなかった。彼女は教皇命令を発動すると宣言した。それが出されてしまえば、信徒たちは従わざるを得なくなる。そこで、一計を案じたロン・エスロテルたちは、資材不足を理由に、その工事を三ヶ月延期することを提案した。

それは筋の通ったものだった。ヴィエイユは渋々ながら、その提案を認めた。当然、それ以上の延長は許さないということも忘れなかった。

時間稼ぎができたロン・エスロテルたちは、ヴィエイユの排除に向けて動き出した。彼らはもう、ヴィエイユを神の使いとして崇めていなかった。そして、その行動は意外にも堂々としたものだった。

この、ある種捨て身とも言える行動が、ヴィエイユの眼を掠める大きな要因となった……。

第六百三十一話　教皇と信徒（後書き）

４／２４発売の『結界師への転生④』、一部店舗では売り切れているようです。本当にありがとうございます！

第六百三十二話　ため息

ヴィエイユにとって、ロン・エスロテルたちの行動は、予想外のものだった。まさか、医療研究所建設のために集められた人やモノが、自分を襲うためのものであったなど、想像すらしていなかった。

これまでのヴィエイユであれば、どんな些細な細工でも見抜いただろう。だが、この時の彼女には、そこまで見通す余裕が全くと言っていいほど、なかった。

彼女は日々、予算書を眺める生活を送っていた。立てられた予算に対して、どれだけのものが執行されているか……。資金が潤沢であった頃は、部下に任せておけばよかったものが、アガルタとの契約のために、教国の財政は日を追うごとに傾いていた。とはいえ、これまでの教国の姿勢をすぐに改めることは、いかに彼女の才覚をもってしてもできることではなかった。友好の花を撲滅させるために金策を考える日々を過ごしていたのだった。

今、アガルタ大学病院のベッドで横になりながらヴィエイユは、この状況に至った原因を冷静に分析していた。自らに起こった出来事は、すべて自分に原因がある。思い当たる事柄は多くあった。

その中でも、最も大きな原因が、やはりあの「友好の花」だ。あれの活用を誤ったばかりに、今のクリミアーナの状況がある。それを主導したのは、紛れもなく教皇である自分自身なのだ。

……いっそのこと、すべてを投げ出してしまえれば。

誰もいない病室で、ヴィエイユは心の中でそう呟く。だが、今、それをしてしまえば、クリミアーナに従う国々の間で騒乱が起こることは目に見えていた。一歩間違えば、世界中が戦場となる最悪のシナリオが展開されてしまう。聡明なこの娘は、そのこともよく理解していた。

すでに打開策は考えていた。ただ、それには、アフロディーテを奪還することが必須の条件となっていた。

幸い、親衛隊の者たちは教都を脱出したと報告を受けている。それに呼応するように、教国中の親衛隊が集結してきているのだと言う。教国軍の中でも最精鋭の者たちだ。まだまだ自分は見捨てられたわけではない。

とはいえ、その軍勢は五千にも満たないだろう。おそらく、ロン・エスロテルのことだ。それに数倍する兵を集めていることだろう。その軍勢を打ち破る必要がある。

だが、アフロディーテは美しい都である一方で、強固な要塞でもあった。そこを打ち破るには、圧倒的な兵力差を以って蹂躙するか、もしくは、蟻のはいでる隙間もないくらいに厳重に包囲して、兵糧攻めにするほかはなかった。

この状況を打開し、勝利を収めることができれば、ヴィエイユは再び教皇としてアフロディーテに帰ることができる。そしてさらに自らの権威は高まるだろう。問題は、その後だ。

教皇に返り咲いても、これまでの状況は変わらない。あの条約を破棄しなければならない。

そう考えたとき、まず彼女の脳裏に浮かぶのが、アガルタ王との結婚という手段だ。併呑されるのではなく、あくまで対等な者同士としての結婚だ。そうすれば、世界に平和が訪れる。

ヴィエイユにとっても、アガルタ王リノスであれば、十分にこの身を捧げる価値のある相手だった。これまで守りに守り通した純潔と、磨きに磨き上げたこの体……並の男であれば、すぐに首を縦に振ってくれるだろう。

だが、あの王はどれだけ篭絡しても、全く彼女に靡くことはなかった。すでに五人の妃がいるのも理由の一つだろうが、最も大きな原因は別にある気がする。

あの王を篭絡するためには、何が必要だろうか。これまで何度も考えてきたことだ。おそらくあの王は、何か特異なスキルを持った者に興味を示すのかもしれない。彼の傍に侍る妃たちの顔を思い浮かべると、そんな結論に達する。彼女らになくて自分にあるものは何か……。それを考えたとき、ヴィエイユ自身は彼女らが持ってはいないものを導き出すことができなかった。

美貌、若さ、知性、母性、品性……。アガルタ王の妃たちは、男性が惚れる要素となるものを、それぞれが持っている。しかもそれが飛びぬけている。例えばリコレット。聡明さと品性では彼女に勝てる気がしない。メイリアスの知性は言うまでもなく世界一だ。ソレイユの美貌、コンシディーの若さ、マトカルの母性……。あの王の傍には、男性の持つ欲望が常に満たされている状態あるのだ。確かに、人族であるリコレットとマトカルは、そのうち老いてくるだろう。だが、彼女らの持つものは、年を取っても衰えるものではない。となると、時間をかければかける程、ヴェエイユ自身の老いがせまってくるために、待つという選択肢は悪手以外の何物でもなかった。

……この私を、ヴィエイユ・セインを価値ある者であることを、アガルタ王に認識させねばならない。そのためには、アフロディーテを見事に奪還して見せることが、必須だわ。

ヴィエイユは目を閉じたまま、そんなことを考える。彼女の心の奥では、教都を奪還する自信はあった。その戦略を頭の中で展開させる……。

◆　◆　◆

その頃、リノスの許には、サンダンジ王国からの早馬が到着していた。使者の男は、夜に日を継いでやって来たらしく、疲労の色が色濃く見え、今にも倒れそうな様子だった。

リノスは男にねぎらいの言葉をかけ、ゆっくりと休むようにと伝えたが、使者の男は返事をいただいて、すぐにでも帰国したいと言ってのけた。

仕方なく彼は使者が持参した書簡に目を通した。そこには、こんな文言が書かれていた。

『親愛なるアガルタ王殿へ

新・クリミアーナ教国教皇、ヴィエイユ教皇聖下よりの書簡を受け取った。現在逗留されているアガルタより、教都アフロディーテを奪還する軍を動かすとのこと。軍神様の武運を心から祈る。

さて、教皇聖下より、アガルタ王におかれては、その奪還作戦を見届けるために出陣なされる旨、聞き及んでいる。それに是非我が軍

も同行させていただきたく、使者を以ってお願いする次第である。

先の大戦以降、我が軍にも実戦経験のない者が増えた。今回のお話しは、我がサンダンジ軍にとっても、我にとっても、野戦のカンを取り戻す絶好の機会であると考えている。そんな機会を与えていただいたヴィエイユ教皇聖下とアガルタ王に、深く感謝する次第である。

出陣の日程等は決まっておいでと推察する。使者の者に伝えてもらいたい。また、どの程度の軍勢を編成なさるのかなどもご教授いただけると、幸いである。

サンダンジ王国国王　ニケ・サンダンジ』

書簡を読み終えるとリノスは、大きなため息をついて天を仰いだ。使者の男は体を小刻みに震わせながら、リノスの言葉を待っている。ややあって、リノスは重々しく口を開いた。

「予想以上、だな」

「そ、それでは、アガルタ王におかせられては、大軍を編成されるのでしょうか」

「うん？」

使者のトンチンカンな質問に、思わず小首をかしげる。

「お宅の大将は、ずいぶん鼻息が荒いようだね」

「……」

リノスの困ったような表情を見て、使者の男は息を呑んだ。

「まあ、何だ。今のところ、出陣の日程は全く決まっていないんだ。ニケさんには悪いけれど、言ってみれば、検討中というところだ。ということなので、ニケさんへの返答はしばらくかかりそうだ。すまないけれど、もうしばらく待ってもらえないかな。せっかくだから、この迎賓館の一室を使えばいい。それとも、まだ検討中ですっていうことも、すぐに帰って報告しなければならないかな？」

男はしばらく考えた後、お返事いただけるまで待たせていただきますと言って、その場を後にした。

リノスは再びニケの書簡に目を通しながら、呆れた表情を浮かべながら、ゆっくりと顔を左右に振った。

第六百三十三話　裏の裏

ヴィエイユが大学病院に入院してちょうどひと月が経った。メイやローニたちの努力の甲斐あって、彼女の腕の傷はほぼ完治した。痛みもとれ、腕も問題なく動かせるようになっていたが、よく見ると、腕には一筋の傷跡が残っていた。さすがに、世界一の名医をもってしても、完全にその傷跡を消すことはできなかった。

ヴィエイユは包帯が取れた直後、じっとその傷跡を眺めて、まるで何かを観察するかのようにしばらくの間微動だにしなかった。

「……この傷は、年を経ればなくなっていくのでしょうか？」

不意にヴィエイユが口を開いた。メイは彼女をじっと見つめながら、落ち着いた声で言葉を返した。

「はい。絶対、とは言い切れませんが、今の傷の回復状況を見ますと、おそらく数年後には、ほとんど傷跡はなくなっているかと思います」

「そうですか……。それを聞いて安心しました」

ヴィエイユはホッとした表情を浮かべながら、周囲の者を見廻す。

「本当に、ありがとうございました。皆様に、心から感謝申し上げます」

そう言って彼女はベッドの上から、深々と頭を下げた。そして、ス

ッと顔を上げると、今度は俺に視線を向けた。

「……何だ？」

「はい。そろそろ、出発しようかと存じます」

「え？　今からか？」

「……気持ちとしましては、今すぐにでも出立したいのですが、色々と準備もございますので、明日、出立させていただければと存じます」

「えらい急な話だな。まあ、いいだろう。バディー君に転移させてもらうのか？」

「いいえ。一人で参ります」

「は？　一人？」

「はい。バディー様には色々とお世話になりました。あの能力は緊急時でしたので、やむなくお世話になりました。今回は、傷も癒えましたことから、私一人で参りたく存じます」

「そんな……教皇聖下……」

ヴィエイユの言葉に、傍に控えていたバディーが目を丸くして驚いている。それはそうだろう。見目麗しい女性が一人で旅をするのだ。色んなところで、色んな人たちが、色んな声をかけてくることが容易に想像できる。彼女の持つアイテムを使えば何とかなるのかもしれないが、ほぼ、着の身着のままでアガルタにやって来ているため

に、今のヴィエイユは普通の女性とそう変わらない。まあ、弁舌が巧みなので、それで躱していくことは可能かもしれないが。

周囲の心配をよそに、彼女は落ち着き払っている。

「急なお願いで申し訳ございませんが、リコレット様をはじめとする王妃様たちにも、お別れのご挨拶を致したく存じます」

「……」

俺は思わず言葉を飲み込んだ。この娘は本心で言っているのだろうか。本気でアガルタから一人で旅立とうとしているのだろうか。いや、そんなことは言わずに、誰か供の者を連れて行け。バディー君に付いて行ってもらえ、いざというときには、彼の能力を使って転移するんだ。お金はあるのか？　ないなら少し持っていけ……。

そんな言葉が口を突いて出そうになる。きっと、リコたちも同じことを言うだろう。もしかして、それが狙いか？

言葉の裏では、この小娘は俺の出陣を促しているのではないか。ヒーデータは既に三千の兵士が準備を終えて、いつでも出陣できる態勢を取っている。サンダンジにしても、俺が出陣すると言えば、すぐに準備を整えるだろう。アガルタにしても、三千程度の兵士ならば、すぐに準備を整えられる。ヴィエイユはそこまで見通して、そんな芝居を打っているのだろうか。

そんな考えがグルグルと頭の中にめぐる。

「まあ、考えておく」

そう言って俺は、ヴィエイユの病室を後にした。

執務室に戻り、腕を組みながら考える。ヒーデータの陛下も、サンダンジのニケも、ヴィエイユのアフロディーテ奪還作戦に派兵することには賛成している。俺としても、陛下からニケを見張れてと言われている手前、アフロディーテに赴くのは吝かではない。ただ、何となく、俺のカンだが、すべてがあの小娘の描いた絵の通りに事が進むような気がしてならないのだ。それは何となく癪に障ることでもあるし、何より、あまり俺たちにとって良い結果をもたらさない気がするのだ。

俺は机の上に置いてある鈴を手に取り、リコを呼ぼうとする。が、それを鳴らすことなく、再び机の上に置いた。

「……これは、皆の意見を聞いた方がよさそうだ」

誰に言うともなく呟き、椅子から立ち上がった俺は、窓の外に視線を向けた。

その夜、帝都の屋敷に戻った俺は、夕食を済ませ、子供たちが寝静まった後で、妻たちにこのことを話した。

「……ヴィエイユさんが一人で行くとなれば、あの方の名声は上がるのではないでしょうか」

リコが口火を切る。その意見に、皆も同意見のようだ。

「もし、ヴィエイユ殿が旅先で万が一のことがあった場合、アガルタにとってもあまりいい結果にはならないだろう」

マトカルが口を開く。確かに、あの小娘がどこかで暗殺でもされたら、クリミアーナの反乱軍は喜ぶだろうが、彼女を慕う者たちからは激しく憎まれるだろう。それに、全世界から誹りを受けることは免れない。それはあまり得策とは言えない。

「もし、一人でおいでになる場合は、私にお任せください。精霊たちにヴィエイユ様を守るように命じます」

「なるほど、その手があったか」

思わず俺が口を開く。それであれば、ヴィエイユの安全性は格段に向上する。精霊たちと合わせて、サダキチたちに監視をさせれば、その動きは完全に掴むことができる。だが、シディーはその考えに待ったをかけた。

「いいえ、あの方のことです。どこかに転移結界を隠し持っている可能性があります。そうなると、さすがに精霊たちは動きを追えなくなりますし、フェアリードラゴンも、見つけるのにある程度の時間を要すると思います。一カ所だけならまだしも、複数の場所に転移結界が張られていると、見つけるのが困難になります」

「そうかもしれないが、俺はヴィエイユに転移結界の効果を付与した結界石をやった覚えはないけれどな」

「きっと、色々な手段を使って、手に入れているはずです」

シディーが自信ありげな表情を浮かべながら頷く。それが事実であるとするならば、どこまでも用心深い小娘だ。そこまでリスクマネジメントができるのに、どうして裏切りを見抜けなかったのだろうか。意外とヌケているところもあるのかもしれない。

気が付くと、妻たちが俺に視線を向けている。最終的な結論を出すように、促されているようだ。

「メイはどう思う？」

「私の意見など……」

「いいや、構わない。忌憚のない意見を聞かせてほしい」

「……」

メイは一旦俺から視線を外して、何かを考える素振りを見せた。やがて再び顔を上げ、知性の讃えた目で、じっと俺を見つめた。

「ヴィエイユさんを一人で旅に出すのは、医師としては反対です」

メイの凛とした声が響き渡る。とても説得力のある声だ。俺は彼女の声に耳を傾ける。

「傷が癒えたとはいえ、ヴィエイユさんの体力は完全に回復したとは言えません。一人での長い旅は、お勧めできません」

「なるほど、そういう意見もあるか……」

俺は腕を組みながら、天を仰ぐ。腹は決まった。

「そうだな。あの小娘を野に放つと、何をしでかすかわかったものではない。人の目の届くところにおいて、見張っていなきゃならないな。ご苦労だが皆、明日はヴィエイユが挨拶に来るだろう。すま

ないが、会ってやってくれ」

俺の言葉に、全員がゆっくりと頭を下げた。

第六百三十四話　話が早い

「どうぞ、こちらでお待ちください」

ヴィエイユは、アガルタの迎賓館の一室に通された。そこは何もないガランとした部屋で、彼女のためと思われる椅子が一つ、ポツンと置いてある状態だった。

てっきり謁見の間に通されると思っていたのだが、予想外の結果に少し動揺する。だが、それを表には出さず平静を装いながら、案内役のサイリュースに丁寧に礼を言った。

「まもなくリノス様が参られます。どうぞ、おかけになってお待ちください」

案内役の女性は、そう言って一礼して部屋を出て行った。ヴィエイユは女性が退室するのを確認してから、ゆっくりと椅子に腰を掛けた。

……相当、優秀な女性だ。おそらく、サイリュースの中でも上位に位置する者だろう。風貌からは知性を感じさせる。それも、相当な知性だ。本人の努力もあるだろうが、先天的に知能が優れているのだろう。こういうタイプの女性は、男性に好かれる。それも、優秀な男に、だ。サイリュースは、男性を篭絡する手段に長けているという。あの美貌とその手腕を駆使すれば、将来国を動かす有望な青年を取り込むことができる。そうなれば……。

そこまで考えて、ヴィエイユはハッと我に返る。いけないいけない

と自分に言い聞かせながら、フッと笑みを漏らす。興味のある人間を見てしまうと、分析せずにはいられないのだ。

実際、入院していたアガルタ大学病院のスタッフたちも、彼女の目を引く者ばかりで、日々分析していたおかげで、ヴィエイユは退屈することがなかった。だが、その一方で、スタッフたちのことがわかってくればくるほど、ヴィエイユはアガルタとの国力の差を思い知ったのだった。

彼女が最も驚いたのが、この病院に勤めているスタッフたちは、誰一人として心に闇を抱えていないことだった。皆がこの病院で働くことにプライドを持っており、それぞれが百戦錬磨の経験を備えていた。おそらくこれは、学長であるメイリアスが、この病院の中でも選りすぐりの者を配置していることは、容易に想像できた。しかし、そうした中でも、心に闇を抱えている者は、一人や二人は必ずいるものだ。それが、一人も見いだせなかったという事実は、ヴィエイユをして、想像すらしていないことだった。

これは、取りも直さず、アガルタという国が豊かであることを示している。翻って、クリミアーナ教国、わけても、教都アフロディーテに住む者を見ても、人心という点では、アガルタとは到底比較の対象にすらならなかった。

そのとき、扉が開く音がした。

「いや、待たせたな、ヴィエイユ」

アガルタ王・リノスの声が聞こえる。ヴィエイユはスッと背筋を伸ばして居住まいを正す。

部屋に一つの椅子しか置かれていなかったことから、来るのはアガルタ王一人、もしくは、お妃のうちの誰か一人と考えていたヴィエイユだが、足音の多さにふと周囲を見廻す。何とそこには、リノスの妻たち全員が控えていた。

サイリュースたちが椅子を持って入室してくる。彼女らはリノスやお妃たちの椅子を円形に配置し終えると同時に、その真ん中にテーブルを置き、その上にお菓子やお茶を並べた。

「ありがとう」

リノスが笑顔でサイリュースたちに礼を言う。それが合図であったかのように、サイリュースたちは一礼をして部屋を出て行った。

ヴィエイユは当惑していた。アフロディーテ奪還作戦のために、出立する挨拶をしに来たのだ。しかも、単なる挨拶だけで終わらせるつもりは毛頭なかった。アガルタがアフロディーテに出陣するという確約を取り付けると共に、その日程も確定させるつもりで来たのだ。お妃さまたちとお茶会をしに来たわけではない。

そんな彼女をよそに、リノスはテーブルに置かれた菓子をつまんでいる。

「おっ、これは、ドーキの店の新作か？　……やはり、美味いな」

お妃さまたちも、菓子をつまんだり、お茶を飲んだりするなど、思い思いに過ごしている。そのとき、不意にアガルタ王が口を開いた。

「ヴィエイユ、お前も食べろ。入院している間で少し痩せたんじゃないのか？　この菓子、美味いぞ」

……このままではいけない。完全に相手のペースに巻き込まれてしまう。この王に会話の主導権を握らせてはいけない。そのまま押し切られてしまうからだ。ヴィエイユは再び居住まいを正して、はっきりとした口調で返答する。

「ありがとうございます。しかしながら、私は本日、アフロディーテに向けて出立いたします。おもてなしいただくのは大変嬉しゅうございますが、私には時間がございません」

「ああ。ちゃんと準備はしてある。心配するな」

「……どういうことでございましょうか？」

「取り敢えず、お前をガルビーまで送る。筏船を使えば一日あれば十分に着く。アガルタの風光明媚な景色を楽しむといい。あ、夕方から夜のかけての旅もいいな。精霊たちの光の回廊は、言葉では言い表せないくらいに美しい光景だ。ソレイユ、頼めるかな？」

「はい。ご希望でしたら、いつでも」

ソレイユはニコリと笑みを浮かべると、そのままヴィエイユに視線を向けた。相変わらず、目じりの愛嬌が何とも言えない。その優しげな雰囲気に、思わず心を許しそうになる。ヴィエイユは心に活を入れる。

「お心遣いありがとうございます。ですが、昨日も申し上げました通り、私は一人でアフロディーテに向かいたく存じます。従いまして……」

「ハッハッハ。そんなことは他所に行って言え。お前の心底は見えている」

「……ッ」

リノスは笑みを浮かべながら、カップのお茶をすすっている。一方で、お妃さまたちの視線がヴィエイユ自身に向けられている。そんな状況を特に気にすることもなく、リノスは言葉を続ける。

「一人でアフロディーテに向かう……。そう言っておいて、アガルタからの支援を引き出そうとしているのだろう？　どこまで望んでいるのかまでは把握していないが、まあ、何だ。ガルビーまでお前を送り届ける。そして、船でアフロディーテに向かわせるつもりだ。……おっと、聞け。取り敢えず俺は、お前の誘いに乗ることにした。俺は、兵三千を連れてお前の戦ぶりを見物に行くつもりだ。当然、そこにはヒーデータの軍とサンダンジ軍を連れて行く」

「……お話が早くて恐れ入ります。そこまでおわかりであれば、腹蔵なく詳らかに申し上げます。私の身柄は、ハーネチアにお送り願います」

「ハーネチア？」

「アフロディーテから東におよそ１００㎞の位置にございます。ちょうど、サンダンジ王国の隣に位置する場所でございます。そこに、私の親衛隊五千が集結しております」

「なるほど。よくわかった。で、出陣はいつを予定している？」

「およそひと月後を予定しております」

「わかった。では、それに間に合うように取り計らおう。ひと月後、ハーネチアに、アガルタ、ヒーデータ、サンダンジ軍を集結させる」

「承知いたしました。重ねてのお願いになりますが、アガルタをはじめとする各国の皆様におかれましては、決して我々の攻撃に参加されませぬようお願い申し上げます」

「ああ。それは徹底しよう。一応、各軍は俺が結界で防御するつもりだから、攻撃を受ける可能性は低いが、もし、攻撃を受ける可能性があると判断した場合は、各軍の判断で離脱するように伝えておく」

「……お心遣い感謝申し上げます」

「まあ、よかったな、ヴィエイユ」

「……はい。私の心底をそこまで見抜いておられるとは、見事という外はございません」

「いや、よかったと言ったのは、お前の望みが叶ったということではない」

「……どういうことでございましょう？」

「あともう一月、休息できるということだ」

「……は？」

「ガルビーから船で出港したら、すぐにお前をアガルタ大学病院に

転移させる。そこでお前は、船がハーネチアに着くまで入院してもらう。メイに言わせると、まだまだお前は休息が必要みたいだからな。心配はいらん。お前の警備は、マトカルが担当する」

リノスの言葉に、メイとマトカルがゆっくりと頷いた。ヴィエイユの顔が少しずつ強張っていった……。

第六百三十五話　気づかなかった

その日の昼過ぎに、ヴィエイユはマトカルら、アガルタ軍に守られる形で都を出発した。

否も応もなかった。すでに準備は万端に整えられており、ヴィエイユはアガルタに転移してきた服のままで、筏に載せられたのだった。

筏では、マトカルが前方を見張っていて、ヴィエイユには常に背を向けていた。彼女の他には、二人の男が控えていたが、彼らはほとんど俯いたまま終始無言だった。ヴィエイユは、この二人はおそらく魔術師で、気配探知を発動させているのだと考えていた。確かに筏の上は全くの無防備で、対岸からの攻撃に備える必要があった。

むろん、ヴィエイユにはリノスから結界石が渡されていて、彼女には通常の攻撃は通用しない状態となっていた。とはいえ、その結界を掻い潜る者がいる可能性はあった。そのための兵士なのだろうと考えはみたものの、ヴィエイユはこの兵士にはまた別の任務が与えられているのではないかと疑っていた。

ヴィエイユは、ぼんやりと周囲の景色に視線を向ける。木漏れ日が美しい。周囲には人影もなく、川のせせらぎの音が耳に心地いい。時おり、鳥の鳴く声が聞こえてくる。よくみると、森の中から動物たちが顔を出していた。その様子を見て、思わず可愛らしいと口走りそうになった。

「さあ、そろそろ森を抜けますよ」

背後で男の声がする。視線を向けると、筏を操っていた男がこちらを見ながら笑みを浮かべている。先ほどまで帽子のようなものを被っていて、その風貌はわからなかったが、今はそれを取っている。ヴィエイユには、この男の顔に見覚えがあった。

……クノゲン総司令官。

何と、筏を操っていたのは、アガルタ軍総司令官であるクノゲンだった。ヴィエイユは予想外の男の出現に、思わず体を強張らせる。

……どこまでも、私の予測の上をいかれている。

動揺を隠し、平静を装いながら、心の中で舌打ちをする。

実際、コトはヴィエイユが計画した以上の成果だった。彼女は当初から、ハーネチアまでアガルタ軍に警備されながら移動することを目的としていた。本来、こうしたことは、直接アガルタ王に要請すれば事が足りるのだが、ヴィエイユはそのことで、アガルタに借りを作りたくなかった。ただでさえ、友好の花の一件で、クリミアーナ教国は窮地に追い込まれているのだ。ヴィエイユとしてはこれ以上、アガルタに弱みを見せたくはなかった。それよりも、まだまだこの女性は、アガルタと対等に渡り合える力があることを意識させて、それを教国の者たちに見せつける方が、今後のためになると考えていた。

アガルタ王から支援を引き出すのは、簡単だと考えていた。あの王は、頼まれればイヤとは言えない部分がある。女性に対しては、かなり甘い部分がある。その点を突けば、問題なくコトは進められると踏んでいた。

実際、ヴィエイユが一人でアフロディーテに向かうと発言したとき、アガルタ王は狼狽えていた。そして、言葉を飲み込んだのを見逃さなかった。

おそらく、自分の考えは彼に見抜かれただろう。だが、それを知った上で、一人で行けとは言える人ではない。あとはいつ、彼が支援を口にしてくるか、という点だけだった。それは、単に待っているだけでよかったはずだった。

だが、迎賓館の一室に呼び出され、彼の口から出たのは、思ってもみない事柄だった。ガルビーから船での移動では、ヴィエイユの身をアガルタ大学病院で預かると宣言したのだ。

確かに、体調は万全とは言えなかった。今でも少し倦怠感がある。だがこれは、安静にしていれば治るものだ。船の中でゆっくりと休めば、何の問題もないはずなのだ。

ヴィエイユは、船内でやろうとしていたことがあった。クリミアーナ教国とその属国に向けてメッセージを発信するつもりでいた。「私は、アガルタをはじめとする大軍を引き連れて、アフロディーテに帰還する」と。

メッセージを送る国は、多ければ多いほど効果を発揮する。ヴィエイユは船内から情報を小出しにしていくことで、クリミアーナ教国とその属国に、自分の存在がまだ健在であると知らしめたかったのだ。

そうすることで、反乱を起こしたロン・エスロテルらに加わる者たちを押さえ、可能ならば、自らの陣営に寝返らせるのが狙いだった。

連絡手段はあった。彼女の右手に光る指輪がそれだった。

その指輪には、鳥を使役できる効果が付与されていた。ヴィエイユがその指輪に魔力を通せば、トラフレという隼に似た鳥が彼女の周りに集まり、それらを使役することが可能になるのだ。

ただ、そのトラフレという鳥は、世界中に分布しているものの、主に海岸線で生息している鳥だった。試しにアガルタ大学病院で入院中に使ってみたが、飛来してきたトラフレは一羽のみで、それも、三回に一回程度しか飛来しなかった。

そのために、彼女はハーネチアまでの移動は船で行う必要があった。しかし、それが不可能になった。

アガルタ軍総司令官のクノゲンとマトカルがいるのだ。必然的に、ヴィエイユの傍に控えている男たちも、ヴィエイユを見張るための者であることは、誰の目にも明らかだった。

……迂闊なことは、できない。

ヴィエイユの本能がそう告げていた。命を取られることはないにせよ、ヘタな動きをすれば、コトが上手く運ばなくなることは、十分に理解できた。

……仕方がないわね。

ヴィエイユは心の中でそう呟きながら、ゆっくりと深呼吸する。何とも言えぬ、清々しい空気が、肺をいっぱいにしていく。

……まだひと月、猶予がある。

ヴィエイユは頭の中を素早く切り替えていた。ひと月の間に打開策を考えればよいのだ。根拠はないが、自信はあった。だが、そのことを考えようとするが、なかなか頭脳は思ったように働いてくれなかった。

……やっぱり、疲れているのかしらね。

そんなことを考えながら、彼女は自分が笑みを浮かべていることに気づく。幸い、マトカルらにはそれは気付かれていないようだ。彼女はちょっと肩をすくめてみた。そして、やはり、メイリアスの忠告を聞いて、あとひと月、大学病院で入院して、体調を完璧に戻そうと決意した。

「それ、御覧なさい。ここがこの川下りの中で、最もおススメの場所です。右手に高く連なる山脈が見えるでしょう？　日の光が十分に当たって、見事な景色です。これが冬になると、山頂に雪が積もって、それも格別に美しい景色となります。そしてそれ、左手に見えるのがバンザビ山です。これからこの筏は、あの山の渓谷を通っていきます。途中いくつか滝がありますので、その景色も壮大で見事です」

背後からクノゲンがご機嫌な様子で話しかけてくる。ヴィエイユは無言のままニコリと微笑む。

「こうした自然の景色は、心を癒してくれます。肉体的な疲れは寝れば回復しますが、精神的な疲れは寝ても回復しませんからな。下手をすると、十年近く疲れが取れない者もおります。そうした者たちには、こうした雄大な景色を見せて心癒し、あとは、面白い者や楽しいものを見せて、腹の底から笑わせることにしています。そう

すれば、心の疲れはよく取れる」

クノゲンの言葉が、ヴィエイユの心にグサリと刺さった。まさに自分は今、心が疲れている状態なのだ。ここ最近感じていた倦怠感の原因が、ようやくわかったような気がした。

……知ってはいたけれど、まさか、自分がそんな状況に置かれていたなんてね。

ヴィエイユはわざとらしく、カラカラと笑ってみせた。そして、もう一度、深く深呼吸をして周囲の景色を眺めた。

なるほど、美しい景色だ。今日一日は、何も考えない日にしても、いいかもしれない。

そんなことを思いながら、ヴィエイユはもう一度、ゆっくりと息を吸い込んだ。

第六百三十六話　ロン・エスロテル

「ほう、動いたか」

クリミアーナ教国の教都、アフロディーテ。白で統一された町の中で、ひときわ高くそびえ立つ教皇神殿の一室で、一人の男が窓の外に視線を向けながら、誰に言うともなく呟いていた。クリミアーナ教の枢機卿の一人であり、反乱軍の首謀者であるロン・エスロテルだ。

彼の後ろには、若い枢機卿が控えている。ロン・エスロテルはその彼に背を向けたまま、さらに言葉を続ける。

「思ったよりも遅かったな」

ロン・エスロテルらは、ヴィエイユがここ、アフロディーテに向けて出発するのは、アガルタに転移してから二週間後と予測していた。あの教皇のことだ。一刻も早くこの場所に戻りたいはずだ。矢で受けた傷は、その部分を抉り取るか、さもなければ腕を切り落としてでも戻ろうとするだろうと考えていた。

だが、予想していた二週間を過ぎても、ヴィエイユは動かず、ずっとアガルタの大学病院に入院したままだった。部下たちの中には、ヴィエイユが受けた傷は深く、重篤な状態にあるのではないかと言う者もいたが、ロン・エスロテルはその意見を言下に否定した。

ヴィエイユが逃げ込んだのは、アガルタなのだ。大賢者・メイリアスを要するアガルタの医療機関は世界一の技術力を誇る。猛毒とは

いえ、あの程度の傷ならば、アガルタの技術力をもってすれば、治癒することは十分に可能であると言えた。

ロン・エスロテルらとしても、手をこまねいていたわけではなかった。ヴィエイユの動向を探りながら、教国とその属国には、教皇を追放したことを告げ、すでにアフロディーテは占拠されたことを宣言していた。

そして、クリミアーナ教国は一年間の税の免除を宣言し、属国に対しては、教国に納める布施について、向こう一年間はこれまでの半額とする旨、通知していたのだった。

そんなことをすれば、アガルタに支払うべき友好の花を枯れさせるネズミの購入費が捻出できなくなるのだが、ロン・エスロテルらはアガルタにも、その辺の事情を伝えるべく使者を派遣していた。その使者は特使ということから、アフロディーテから出発させていた。そのため、アガルタには未だ、到着していなかった。

アガルタでのヴィエイユの容体は杳として知れなかった。クリミアーナは以前からアガルタの都に秘かに人を潜り込ませていたが、その者たちをもってしても、大学病院の中の様子は知れなかった。だが、これは想定の範囲内だった。

ヴィエイユは必ずアフロディーテに戻ろうとする。それを前提として、各国に派兵を求めていたのだ。

すでにアフロディーテの周囲には、ロン・エスロテルらを承認した国々から、続々と援軍が送られてきていた。それは教国内からも同様で、船団が海を渡って続々とアフロディーテを目指していた。その総数は数万に膨れ上がっていた。

ロン・エスロテルは、窓の外に広がる大海原を眺めながら、勝利を確信していた。問題は、どうやって勝利するのか。その一点のみだった。ヴィエイユは生きてとらえなければならない。そして、衆人環視の許でこれまでの罪状を白日の下に晒し、処刑せねばならないのだ。そのためには、海での戦いは避けるべきなのだ。万が一、海に落ちてしまえば、身柄を確保することは難しくなる。

ロン・エスロテルは、クルリと踵を返すと、目の前に控えている男に向けて口を開く。

「アガルタの都から筏で出発したとならば、行先はガルビーだろう。そこから船でアフロディーテに向かう算段だ。途中、親衛隊の兵士たちを吸収していくだろうから、おそらくここに到着するのは、ひと月後になるだろう。それまでに、教皇神殿の大門を強化しておくのだ」

「あの……港の防衛は、いかがしましょう?」

「なにもしなくていい」

「はっ?」

「上陸させてやれ」

「えっ?　それでは……」

「それでいいのだ。お前は、黙って言う通りにしていればいい」

「はっ……。しかし、港周辺に住む者たちは……」

「避難したい者がいれば、この教皇神殿に来るといい。まあ、あの教皇のことだ。ここアフロディーテに住む者に危害を加える可能性は極めて少ないだろうがな。ただ、上陸と同時に戦闘が発生する可能性がある。流れ矢や魔法に当たらないように気を付けるのであれば、家にいても構わない。自由にさせてやれ」

「し……承知しました」

若い枢機卿は一礼して退室していく。ロン・エスロテルその後ろ姿を見つめながら、不敵な笑みを浮かべるのだった。

彼は机の前に座ると、そこに拡げられている地図に視線を向けた。そこには、アフロディーテを中心とした地図が描かれていた。

ロン・エスロテルは、その地図を人差し指でゆっくりとなぞる。これは、ヴィエイユが取るであろう行動を予測したものだ。おそらく、あの女のことだ。真っすぐにここ、アフロディーテに攻め込んでくるだろう。そうなれば、間違いなく、ヤツの首を挙げられる。

ここアフロディーテを十重二十重にとり囲んで、ヴィエイユを捕らえる。アフロディーテに入った瞬間、あの女は終わるのだ。

問題は、アガルタの動きだ。アガルタ軍が全面的にヴィエイユに味方するとなると話は別になってくる。だが、アガルタ王がヴィエイユに味方する可能性は低い。どう考えても、火中の栗を拾う役割だ。クリミアーナの内戦に参戦しても、アガルタに利益は何一つとしてないのだ。

それを証拠に、ヴィエイユは数人の護衛と共にアガルタの都を出た

という。アガルタ王が味方に立ったのであれば、軍勢を編成してヴィエイユを送るはずなのだ。それがない、とならば、アガルタは積極的にヴィエイユを支援する気はないと見てよかった。

……あの女の弁舌をもってしても、アガルタ王は口説けなかったか。

思わず笑いがこみあげてくる。ロン・エスロテルは、クックックとこみあげてくる笑いを必死でこらえる。

アガルタ王様は、いつでも我々の味方です。

いつもそう言っていたヴィエイユの姿が思い出される。口ではあの王を篭絡しているかのように言っておきながら、その実は、常にあの王に出し抜かれていた。それを認めようとはせず、自分の姿を偽り続けた。それは、教皇のすることではない。

そこまで考えて、ロン・エスロテルは座っている椅子に体を預ける。歴代の教皇が座っていきた椅子だ。美しい装飾が施され、豪華なものではあるが、大きくて固い。快適とは程遠い椅子だ。しかしこれは、世界の王が座るべき椅子なのだ。

彼はその椅子に体を預けながら、来し方を振り返った。長い、実に長い道のりだった。教皇・ヴィエイユの信頼を得つつ、部下たちの信頼を長い時間をかけて築き上げた。最も難しかったのは、教皇の命令に反対しながらも、その信頼を失わないことだった。一歩間違えば、即死につながる危ない行為だった。これを繰り返すことで、部下たちからは厚い信頼を得ることになる。ロン・エスロテルは細心の注意を払いながらこれをやり遂げてきた。そして、それが今、功を奏した形となった。

彼は教皇という地位には興味がなかった。ただ、昔日の栄光を、あの、世界の王として君臨していたクリミアーナ教国を復活させたいと、彼は切に考えていた。教皇は、ヴィエイユは同じ志を持っていると思っていた。そのために彼は、これまでの人生のすべてをかけてきたのだ。しかし、彼女は口ではそう言いながらも、実際は、この教国をアガルタの属国とした。そんな裏切り者はいらない。事実として、クリミアーナ教を信仰する者の大半が、彼女を敵と見なしている。

ロン・エスロテルは、頭の中で、これからのクリミアーナ教国の未来を描いていた。それが具現化する可能性は、限りなく低いものであるとは知らずに……。

第六百三十七話　諦めた？　本当に！？

ヴィエイユの身柄は、出発したその日のうちに、アガルタ大学付属病院に帰ってきた。彼女は、アガルタの都からガルビーに至る道中の、風光明媚な景色を堪能しながら川下りを楽しみ、ガルビーでは船の上から水平線に落ちていく夕陽に、しばし言葉を忘れて見入った。

そんな充実した一日を過ごしたからだろうか、彼女は病院に帰ってくると出された食事をペロリと平らげ、入浴するとすぐに眠ってしまった。

マトカルやクノゲンの話では、移動中のヴィエイユには怪しい動きは見られなかったらしい。ただ、移動中は色々と考えを巡らしていたようで、心ここにあらずの状態になっていたときもあったらしい。

まあ、あの小娘のことだ。そのくらいは十分に予想できる。きっと、入院中も、わからないようにコッソリと何らかの動きを取るだろう。

俺は二人の報告を聞き終わると、ご苦労だったと言って下がらせた。もっとも、マトカルに関しては、その後すぐに一緒に帝都の屋敷に帰るのだが。

帰宅すると食事は終わっていて、子供たちはそれぞれの部屋に戻って寝ようとしているらしい。ペーリスが俺とマトカルの食事を温め直してくれる。マトカルが手伝おうと言うが、ペーリスは座っていて下さいと言って、笑顔を見せた。

今夜の夕食は、ラーメンにチャーハン、そして、唐揚げとサラダというメニューだった。

我が家のコック長、ペーリスは、作れるものは自分で作るという主義で、彼女はとうとうラーメンの麺とスープを自分で作り上げてしまった。元々、パスタの麺も自分で作るほどの腕前だったが、俺が何の気なしにラーメンの話をすると、それから数か月後、彼女は見事なラーメンを作ってのけた。さすがに、背油の量を多めにしたり、替え玉をしたりするサービスはない。いや、替え玉は頼めばやってくれるんじゃないか、そんな下らないことを思いながら、スープを口に運ぶ。

……美味い。あっさり系だが、何というか、味が二段にくる感じで、いくらでも飲めそうだ。

ラーメンとチャーハンには、ちゃんとレンゲもついている。これも俺のリクエストだ。

これもある日、俺が何の気なしに、こんな道具があれば便利だよねと言ったのがきっかけだった。最初、妻たちは何を言っているのか、理解できなかったらしい。リコはキョトンとした表情を浮かべていたし、メイは何とも言えぬ表情で俺の話を聞いていた。後でシディーに聞いてみたところ、メイの両目が上を向くのは、彼女の知らない事柄を考えているのだと教えてくれた。そのシディーは眉間に刻めない皺を刻みながら、人差し指を顎の下に当てて、何かを考えていた。ソレイユは、優しげな微笑を浮かべ続けていた。

それから数日後、メイからレンゲの試作品が上がってきた。まさか作るとは思わずに、驚きながら見てみると、何とも不思議な形をした代物が現れた。それは言わば、鉄のプレートを曲げた、スプーン

ともお玉ともつかぬものだった。取っ手の部分には無数の穴があけられていて、メイ曰く、軽量化を図るために開けたのだと言う。スープと食材が適量にすくえるよう計算し、しかも、強度が落ちないように細心の注意を払って作ったと言っていたが、残念ながら俺が求めていたものではなかった。

この世界にプラスチックは存在しない。そこで、木をくりぬいて作ってみてはと提案し、一生懸命レンゲの絵を描いた。ちなみに、俺は絵が得意だ。誰も褒めないし、俺が描いたものを当ててくれたことはないのだが、絵は得意なのだ。

妻たちは納得したような表情を浮かべたが、その次の日、突然、迎賓館にメインティア王が訪ねてきた。一体何だと思ったが、彼は数十枚にわたる絵を持参していた。

「いや、コンシディー殿から頼まれたのだ。この絵を、この世で使えるものに描き直してくれと。てっきりスプーンかと思ったのだけれど、スプーンではないと言う。お陰で、朝までかかってこれらを書き上げたのだ」

メインティア王が書き上げたものを無言で一枚一枚見てみる。すべてを見終わったとき、俺は首を左右に振りながら、呆れたように呟いた。

「そう、これが、レンゲ」

中にはいろんなレンゲが描かれていたが、その中に、まさにこれ、と言うものがあった。俺はそれを指さして、これがそれそのものだと言った。

「君ねぇ。描くのであれば、ちゃんとモデルを見なくてはいけないよ。……頭の中にあるものであればなおさらだ。頭の中でちゃんと描いて、それを忘れずに描かないと。感情のままに筆を走らせるから、こんな仕上がりになるんだ」

この王にしては実にまともなことを言われてしまった。彼は帰りがてら、そのレンゲを使った料理をお詫びに食べさせろと言っていた。そういえば、あの後何も送っていない。ラーメンとスープと具と、チャーハンでも贈っておこうか。

そんなことを考えていると、マトカルがほとんど食べ終わっている。軍人として訓練されたからだろうか、彼女は食べるのが本当に速い。俺も慌てて料理を掻き込む。

ごちそうさまをして、俺たちは風呂に入る。マトカル曰く、やはり、川下りをしている最中は、何者かに付けられていたと言うのだ。

「あくまで私の感覚だがな。場所によって、違和感のある視線を感じた。じっと、我々を観察しているかのような視線だ」

「そんなことまでわかるのか？」

「ああ。大抵、人は視線を向けても、数秒で視線を別の所に向けるものだ。だが、チラチラと我々を見て、その後ずっと我々を眺め続けている者が二人いた」

「きっと、クリミアーナの者だろうな」

「おそらくは、だ。リノス様の作戦が上手くいったようだ」

「まあね」

ヴィエイユがアガルタを出たことは、敢えてわかるようにしておいたのだ。それによって、敵の出方を見るためだ。俺とマトカルは、敵の出方をシミュレートしながら、ざっくりとした作戦計画を立てた。

風呂から上がって、寝室に向かう。そこには、ソレイユが控えていた。彼女は薄手のネグリジェを着込んでいて、ほとんど裸と変わらない格好をしている。大事な部分は隠れているので、言わば半裸の状態と言ったところか。これはいつものことだが、何回見ても、ちょっとした衝撃を受ける。

彼女は嬉しそうに俺の許に近づくと、さっと俺の胸の中に飛び込んできた。そして、顔を胸に埋めたまま。小さな声で呟いた。

「ヴィエイユさんは、諦めたようです」

「ほう、諦めた？　諦めきれぬと諦めたのか？」

「ウフフ、面白いですわ。もちろん、アガルタで行動を起こすことを諦めたようです」

「ほう。やはり、何かを企んでいたか」

「ええ。川を下っている最中は、心の中はその葛藤でいっぱいだったようです。精霊たちにもそれは伝わっておりましたから、それは相当なものだったでしょう」

「で、諦めたというのは……？」

「ある場所を境に、雰囲気がガラリと変わりました。穏やかな心になられたようです」

「そうか。ただ、あの小娘のことだ。またいろいろ何かやらかしそうだな」

「まあ、頭の回転の速いお方ですから……。ただ、メイ様が言われるには、とにかくあのお方は休ませたほうがよいとのことです」

「休む、というより、何らかの癒しを与えてやらないとダメなんじゃないか」

「確かに、私もそう思います。あの方も、私たちのような癒しの時間があればいいのですけれど……」

そう言ってソレイユは顔を上げた。気が付くと、彼女は一糸まとわぬ裸になっていた。一体いつ脱いだのだろうか。そんな俺を、彼女は上目遣いで眺めながら、ゆっくりと顔を近づけてきた……。

第六百三十八話　準備準備……

それから数日が経った。ヴィエイユは相変わらず病院のベッドで大人しくしている。

俺はヒーデータの陛下と連絡を取りながら、アフロディーテに出陣するための準備を進めていた。ヒーデータはいつでも出陣できる準備が整っていたし、サンダンジに至っては、表向きの報告はなかったが、サダキチたちに偵察させたところ、大規模な軍事演習を行っているらしい。今回は海戦となる可能性が高いために、海上訓練を主に実施しているようだ。あの王は、スキあらば参戦するつもりらしい。

アフロディーテに出陣するに際して、もっとも俺の頭を悩ませたのは、その司令官選びだった。マトカル、クノゲン、ルファナの三人が行くと言って聞かなかったのだ。困った俺は、ラファイエンス将軍に相談することにした。彼は何の迷いもなく、マトカルとクノゲンの二人を連れて行けと言った。

「連れて行く三千の兵士たちは、若い兵士たちが多いのだろう？」

「ええ。基本的に戦闘に参加する予定はありませんので、若い兵士たちを連れて行って、戦場を経験させようと考えています」

「で、あれば司令官は百戦錬磨の者を連れて行くに限る。理由は二つある。一つは、万が一、アガルタが攻撃を受けた場合だ。経験の少ない兵士たちだ、臨機応変の対応が採れぬ可能性がある。そのために、経験豊富な司令官を据える必要がある」

「なるほど。確かにそうだと思いますが、それであれば別に二人も連れて行くことはないと思うのですが……」

「いや、敢えて二人を連れて行くのだ」

「と、言うと？」

「二人の指揮命令のやり方を、若い奴ら共に学ばせるのだ」

「はああ」

自分は隠居だと言いながら、このオッサンの軍事におけるセンスは全く色あせていない。俺は少しうれしくなった。

マトカルとクノゲンの指揮の仕方は正反対だ。マトカルはよく通る声で、兵士たちを鼓舞しながら統率していく。まさに、男装の麗人そのもので、実に恰好がいい。彼女は知らないかもしれないが、意外と都の女性たちからも人気があるのだ。

一方のクノゲンは、情で兵士たちを統率していく。兵士たちと信頼関係を築いて、心を通わせていく。そのために、彼の命令はとても端的だ。兵士たちが彼の意向を汲み取り、状況に応じた対応を取るからだ。

二人の指揮に優劣は付けられない。マトカルは急ごしらえの軍勢でもそれなりに統率することができるが、その分、細やかな指揮を必要とする。クノゲンはクノゲンで、兵士たちとの信頼関係を築くまでにはやはり、ある程度の時間がかかる。そのために、急ごしらえの軍勢となると、烏合の衆になる可能性がある。将軍の意図は、二

人の良い部分を兵士たちに学ばせるところにあったのだ。

「わかりました。ありがとうございます」

「この戦いが終わったら、ポセイドン王のところにでも行こうではないか」

「そうですね。まだ五年経っていませんが、メインティア王にも言っておきます」

「楽しみにしている」

将軍の許を辞した俺は、すぐさま人を呼んで、マトカルとクノゲンに出陣の準備をしろと伝えるように命じた。出陣は三日後とした。

執務室に戻った俺は、ペンを取り、サンダンジのニケ王に向けて手紙を書いた。それを、サダキチに持たせて送った。大したことは書いていない。出陣の日程と、サンダンジへ寄港する予定日を知らせたくらいだ。あの王のことだ。船に乗り込んだ状態で俺たちを迎えるかもしれない。休憩などはできない可能性があるな、などと下らぬことを考える。

それが終わると、ヒーデータに転移する。行先は陛下の居室だ。

陛下はよほどのことがない限り、政務を執る時間と、奥で休まれる時間をキッチリと分けて生活している。政務を執るのは専ら午前中で、午後からは居室で過ごしていることが多い。昼イチであれば、かなりの確率で陛下に会うことができる。

「おお、義弟殿」

転移すると、陛下がにこやかに出迎えてくれる。この日は珍しく若い男がいた。これは……アローズ皇太子だ。

彼は突然現れた俺に、目を白黒させている。そんな様子に陛下は苦笑いを浮かべながら眺めている。

「これしきの事で驚いていては、とてもヒーデータの皇帝は務まらぬぞ」

「……」

アローズ皇太子はキュッと唇をかんで俯く。

「まあまあ陛下。いきなり人がやってきたら誰でも驚くものですよ。それにしても、アローズ殿下、大きくなられましたね」

俺の声を受けて、アローズは飛び跳ねるようにして立ち上がり、右手を胸に当ててスッと頭を下げる。

「これは、ご挨拶が遅れまして申し訳ございませんでした。アガルタ王におかれては、ご機嫌も麗しく、何よりとお慶び申し上げます」

「そんな固いっ苦しい挨拶はやめにしましょう」

「そうじゃアローズ。ここは謁見の間ではないのだぞ」

陛下の言葉に、アローズはオドオドと両目を左右に動かしながら、椅子に腰かける。

「真面目に育ってくれたのはよいが、どうも気が弱くてな」

「陛下に似たのでしょう」

「余か？　余は……」

「初めてお目にかかったときは、陛下も同じような雰囲気でしたよ。いや、それ以上でしたね」

「フフフ、痛い所を突いてくるではないか。まあ、こういう優しい男には、しっかりとした妃を持つに限る。近いうちにエリル殿を……。いや、アローズ。お前の方からエリル殿に会いに行ってはどうじゃ？」

「えっ？　いや……わっ、私は……」

「まあまあ陛下。そうした話はまた、時機を見てということで。本日伺いましたのは、アフロディーテに向けて出陣する日取りが決まりました。明後日に、アガルタ軍は都を出てガルビーに向かいます」

「左様か。では、軍には明日出陣するよう命じておく。ガルビーにて落ち合おうぞ」

「わかりました。では、私はこれで」

「うむ。よしなに頼む。ところで……ヴィエイユ殿はどうしておられる？」

「一応……休ませてはおります」

「うむ。この度の戦いが勝利するにしろ、敗北するにしろ、あのお方はこれからも忙しい日々を送りそうじゃ。今のうちに、ゆっくり休ませてやるとよい」

「はい。ありがとうございます」

俺は陛下に礼を言って転移結界を発動させる。転移する直前、アローズ皇太子が立ち上がって俺に一礼するのが見えた。とても好感の持てる少年だが……。いやいや、男は大人になるまで変わってしまうことがある。慎重に見極めなければいけない。

そんなことを思いながら執務室に帰ってくると、そこにはマトカルとクノゲンが控えていた。

「おお、どうした二人とも？」

俺の問いかけに、クノゲンは苦笑いを浮かべる。そのとき、マトカルが口を開いた。

「リノス様、クノゲン殿が、船での移動中は私にアガルタに帰れと言うのだ」

マトカルの言葉に、クノゲンは相変わらず苦笑いを浮かべながら、ポリポリと頬を掻いている。

「別に帰ってくればいいと思うぞ」

「いや、そういうわけにはいかない。連れて行く兵士たちは経験の浅い者が多い。海上に出るのも初めての者もいる。いい訓練の機会なのだ。私がアガルタに帰ってしまえば、夜間訓練ができなくなる」

「え？　夜間訓練するの？」

「突然襲われた時のために、三日に一度は……」

「兵士たち、現場に着くまでに疲れてしまわないか？」

「私もそう申し上げたのです。今回は経験を積むための戦いですから、そこまでする必要はないのではないかと……」

「俺もクノゲンの意見に賛成だ」

「リノス様……」

「いや、別に夜間訓練をするなと言っているわけじゃない。兵士たちはクノゲンの指揮力も学ばせたいのだ」

「クノゲン殿の指揮力……」

「つまりはだな……」

そのとき、扉がノックされて、外に控えていた兵士が入室してきた。

「申し上げます。ただ今外に、メイリアス王妃とローニ様がお目通りをしたいとお越しです」

「メイとローニが？」

俺は思わずマトカルらと顔を見合わせた……。

第六百三十八話　準備準備……（後書き）

Ｃｏｍｉｃブースト様にて、コミカライズ第２４話更新しています。今ではリノスにしれっと無茶ぶりをしてくる陛下が取り乱している貴重なシーンが見られます（笑）。

６／１　１２：００まで無料公開中です。是非、チェックしてみてください！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６

第六百三十九話　疲労か無双か

「失礼します」

そう言って入室してきたメイは、マトカルとクノゲンの姿を見て、ハッとした表情を浮かべ、また時間を改めますと言って扉を閉めようとした。俺はその必要はないと言って、彼女らを執務室の中に招き入れた。

「どうした、二人揃って。何かあったのか？」

「いえ……取り立ててどう、ということではないのですが……」

「結論から先に申し上げますと、ヴィエイユさんのことです」

遠慮がちに口を開くメイに対して、ローニは堂々と意見を口にした。俺は二人の真逆の対応ぶりを面白く感じながら視線を向けた。

「私たちは遠慮したほうがよいかな？」

「いいえ。マトカル様たちがおいでになっても、問題ございません」

ローニは二人に向かってそう言うと、俺に向き直り、ピョコンと頭を下げた。

「リノス様にお願いがございます」

「お願い？　何だい？」

「ヴィエイユさんの外出許可を頂きたいのです」

「外出許可？　別にいいんじゃないか？　わざわざ俺に許可を取らなくても、メイやローニがそれでよしと判断するなら、俺は構わないよ」

「いえ……ヴィエイユさんを外に出すとなりますと、いくつかの懸念があるのです」

「懸念？　どういうことだ、メイ？」

メイ曰く、ヴィエイユは人を篭絡する天才なのだという。あの小娘をアガルタの都で自由にさせれば、彼女に心酔する者を拵える可能性があるというのだ。

「え？　そんなに？　俺は全く理解できないが……」

だが、よくよく話を聞いてみると、アガルタ大学附属病院のスタッフには、ヴィエイユに心を傾ける者も出始めているのだという。とりわけ、若いスタッフにその傾向は顕著に見られると言うのだ。

「どういうこと？」

「あの方は、人の心を読む天才です。あの方と会話しますと、とても気持ちがよいのです。質問をしましても、その場の最適解を瞬時に導きだして回答されます。そして、相手の抱えている問題や悩みを素早く見抜いて同情し、それに対しても最適解を与えるのです」

「ああ……あの小娘ならば、そのくらい朝飯前だろうな。メイも少

し心が靡いたかい？」

「いえ……私は……」

「メイ様に関しましては、今はすべての欲が満たされている状態ですので、何も申し上げることはないと、ヴィエイユさんは言っておいででした」

「へえ～そうなのか」

「そんなことはないのですが……」

「ほう、メイが叶たいものや、欲しいものはあるのかい？」

「欲しいものは特にありませんが……。叶えたいことであれば、アリリアがもっと女の子らしく……エリルちゃんのような子にならないかとは思います」

「そうだな。アリリアはお転婆だからな。まあ、もう少し大きくなれば、女の子らしくなるだろう。ただ、一番問題なのは、アリリアじゃなくて龍王だ」

「龍王様？」

「あの野郎、いつも屋敷の上空に漂っていて、アリリアをストーキングしていやがるんだ」

「すとーきんぐ？」

「ずっとアリリアを付け回しているってことだ。あの野郎、一度ボ

コボコにしなくちゃならん。メイ、ホーリーソードの強化をお願いできるか？　できれば、遠方からでも攻撃できるように」

「それは……難しいかと……」

「オホン」

ローニの咳払いで我に返る。一体何の話をしていたんだ？　ああそうだ、ヴィエイユだ。どこから龍王の話が出てきたんだ。

「すまんすまん。話を元に戻そう。ローニはどうなんだ？」

「私は特にありません。ただ、与えられた役割を淡々とこなしているだけですので」

「そうだな。ローニもヴィエイユから付け込まれる要素はなさそうだよな。仕事は順調、家庭は円満。家に帰れば美味しい食事と優しいダンナ様が待っている」

「そんなことは、ありま、せん」

ローニが珍しく照れている。彼女は再び咳払いをすると、スッと俺に向き直った。

「ただ、そんなヴィエイユさんですが、正直申し上げまして、体調は回復しているとは言い難い状況です」

「そうなのか？」

「とりわけ重度なのは、睡眠不足です」

「睡眠不足？」

「はい。今は投薬によって無理やり眠らせています。しかし、最近はその効果も薄くなってきているように見受けられます。今、投薬している薬は、かなり強い薬でして、これ以上強い薬となりますと、胃や腸に相当な負担をかけることになります。私としましては、これ以上強い薬を投薬することは反対です」

「なるほどな。その、睡眠不足を解消する打開策はあるのか？」

「あくまで仮説ですが、その最も効果的な手法は、リラックスすることだと思うのです」

「リラックス？」

「あの方は、起きている間は常に精神を研ぎ澄ませています。頭の中で色々なことを考えておいでです。それがために、なかなか寝付くことができないと考えます」

「ほう、ということは……」

「何もかもを忘れることが大切かと思います」

「ははぁ。だから外出させて色々なものに触れさせて、いらぬことを忘れさせようと。ただ、それがあの小娘にできるかな？　ただ眠らせるだけなら、アガルタ軍で訓練を受けた方がいい気がするぞ？　なあ、マト？」

「そうだな。十㎞ほど走り、重装備で剣術訓練を受ければ、夜は泥

のように眠ることができるだろうな」

マトカルの言葉に、メイが苦笑いを浮かべる。どうやら、目指しているのは、そこではないらしい。

こんなことを言うとメイには怒られそうだが、あの小娘が弱っていれば、それに越したことはない。体調万全で無双状態になるよりは、ある程度弱っていてくれた方が、コントロールしやすいんじゃないだろうか。

メイが懸念するのは、このまま睡眠不足が続き、そこから体調不良を起こすことによって、重大な判断ミスを起こすのではないかというのだ。その矛先はアガルタでなくとも、クリミアーナ教国内に向けられる可能性が高い。そうなると、再び内乱が勃発する恐れがあるのだと言う。

「感情をコントロールできない状態に置かれますと、あのヴィエイユさんのことです。最悪の場合、恐怖政治を行う可能性が高くなります。そうなりますと、多くの人命が失われる可能性があります」

メイ曰く、ヴィエイユのようなタイプの人間は、どちらかと言えば体調万全で、無双状態にあるほうが、結果的にアガルタにとって有利な方向に進むだろうと言うのだ。その理由は、話が通じるか、通じないかの違いなのだと言う。

どういう状況であれ、アフロディーテに帰還したヴィエイユは、アガルタを仮想敵国として見なすだろう。そうなった場合、取るべき手段は二つだ。敵国とはいえ、その力の差が歴然である場合は、協調路線を取り、そうでない場合は、アガルタを攻撃対象として見なして、策を練る。今のところ、ヴィエイユの本心としては、アガル

タとの協調路線を取りたいと考えているようなのだ。

……で、あれば、この先のことを見据えて、ヴィエイユと男と女の関係になった方がいいのか？

そんな考えがふと、頭の中をよぎる。その瞬間、俺は首を振ってその考えを否定する。そんなことをすれば、あの小娘の思うつぼだ。というより、あの小娘で俺は興奮できるだろうか。……難しいな。ファンがこれを聞いたら、激怒するかもしれないが。

「要は、精神的な疲れを取る必要があるのですよ」

クノゲンが口を開く。彼もやはり、ヴィエイユの様子を見て、そんなことを感じたのだと言う。

「要は癒しですな。風光明媚な景色を見る、愛する人と同じ時間を過ごす……そんなことが、あのお方には欠けている気がします」

「そうです。まさにそれです。そのために、取り敢えずは街に出ていただいて、気分を晴らしていただいてはどうか、好きなものを買って、好きなものを食べて……そんな時間をお過ごしになれば、心が少しは晴れるのではと思った次第です」

ローニがそう言って頷く。俺は腕組みをしながら、天を仰いで考える。

……仕方ない。あの人に一度、相談してみるか。

第六百四十話　やっぱり色恋の話！？

「さて、行くとしますか」

俺はそう言って周囲を見廻した。目の前には、ラファイエンスがにこやかな笑みを浮かべながら頷いている。その隣にいるのは、メインティア王だ。この二人からは、やる気満々といった感情がありありと読み取れる。その一方で、後ろに控えている女性二人からは、何とも言えぬ倦怠感を感じていた。

二人の男の後ろに控えていたのは、ヴィエイユとルアラだった。ヴィエイユは、平静を装ってはいるものの、これから一体何が起こるのか、不安と戸惑いの感情が見て取れる。ルアラの方は、至極面倒臭いと言った表情だ。そう、俺たちはこれから、ポセイドン王の許に向かうのだ。

メイやローニが示した懸念を考えた結果、ポセイドン王の許に行くというのが俺の出した結論だった。ヴィエイユの精神的な疲れを取るためのリフレッシュだが、なまじっかな人間を交えると、ヴィエイユに篭絡されてしまう恐れがある。とはいえ、俺たちだけでは限界がある。で、あれば、どのような人材が適当であるかを考えたとき、今回の決断に至った次第だ。

まず、ラファイエンスだが、この人は色恋にかけては百戦錬磨の兵だ。ヴィエイユとも何度も会っているので、免疫もできているだろう。間違っても篭絡される心配はない。

メインティア王に至っては、篭絡される恐れは皆無と言っていい。

この王はB専だ。少しパンチの効いた女性でなければ興味を示さない。目鼻顔立ちが整ったヴィエイユに興味を示すことなど、天地がひっくり返ってもあり得ないと言っていい。

さらに、ポセイドン王だ。この人はラファイエンスなど足元にも及ばない、まさしくキングオブ色恋の方だ。ヴィエイユが篭絡されることは合っても、この王がヴィエイユの虜になる可能性はかなり低いだろう。

今回の趣向は、このメンバーで恋バナをしてみようというものだ。本来は女性同士が盛り上がるのだろうが、これと言ったメンバーが見当たらなかったのだ。

「では、行きます」

ルアラが面倒くさそうに海に入っていく。彼女には特別な有給休暇を与えているのだが、今の彼女には、休暇より仕事をしている方が楽しいらしい。

ルアラに続いて、メインティア王とラファイエンスが海に入っていく。その様子をヴィエイユは怪訝な表情で眺めている。

「さ、どうした。お前も来い来い」

「……」

俺に促される形で、ヴィエイユは注意深く海に向かって歩いて行く。ちゃんと結界を張っているので溺れる心配はないと説明しているのだが、どうも半信半疑らしい。だが、ここで音を上げるのは、彼女のプライドが許さないらしい。意を決して海の中に入っていった。

皆でルアラの後を追う。ヴィエイユは泳ぎは苦手かと思いきや、意外とスイスイ泳いでいる。ちゃんとラファイエンスたちに付いて行っている。最初、俺などは付いて行くことができずに苦労したのだが。

やがて、ポセイドン王の宮殿が見えてきた。さすがのヴィエイユも、こんな海の底に宮殿があるとは思わなかったようで、目を丸くして驚いている。そんな彼女に構うことなく皆、どんどん宮殿に向かって進んでいく。

今回も門番に止められることはなく、完全に顔パスで中に入ることができた。ルアラはさることながら、メインティア王に至っては、完全に顔を覚えられているようで、彼は気さくに門番に挨拶をしていた。

宮殿に入ると、案内も請わずに、どんどん廊下を歩いて行く。中は迷路のような作りになっているのだが、ルアラに言わせれば、父のいる場所は大体の見当がつくのだという。何の迷いもなく廊下を右に左に歩いて行くと、やがて、広い庭に出た。

「では、私はこれで。母の許に行ってきます」

ルアラはそう言ってこの場を去ろうとする。イヤ待て、ポセイドン王がいないじゃないか。そんなこと言っていると、庭の奥からゆっくりと一人の男が歩いているのが見えた。ポセイドン王だ。

「おお、兄上！」

メインティア王が頓狂な声を上げる。その声に、ポセイドン王は右

手を挙げて応える。

「皆、よく来たね。君も……よく来たね」

王はルアラに優しい眼差しを向ける。それを無表情で頭を下げて応えたルアラは、それでは失礼しますと言って、その場を後にしていった。

「まあ、座り給え」

王がそう言うと、半魚人のような男たちがテーブルと椅子を用意する。いつもながら、見事な連係プレイで、毎日練習しているのかと思うくらいの無駄のない動きだ。

「今日は、珍しい者が来ているね」

席に着くや否や、ポセイドン王がヴィエイユに視線を向けながら口を開く。彼女は椅子から立ち上がると、右手を胸に当てながらスッと足を折った。

「初めて御意を得ます。私はクリミアーナ教国教皇、ジュヴァンセル・ヴィエイユと申します。ポセイドン王様にあらせられましては、ご機嫌も麗しく……」

王はスッと右手を挙げてヴィエイユの言葉を遮る。彼女は少し驚いた表情を浮かべたが、やがて、いつもの表情を取り戻すと、ゆっくりと席に座った。

「いや、ようこそ我が宮殿においでくだされた。ジュヴァンセル・ヴィエイユ殿、歓迎する」

相変わらず凄まじい男前ぶりを見せながら、ポセイドン王はヴィエイユに話しかける。彼女も精いっぱいの笑みを浮かべながら、恐縮でございますと挨拶を返している。王はヴィエイユに笑みを向けていたが、やがてその視線を俺たちの方向に向けた。てっきり会話が続くと思っていたヴィエイユは、少し意外だと言った表情を浮かべたが、すぐに元の表情に戻る。

これも、彼女にとっては計算された振る舞いだ。その微妙な表情の変化は当然、ポセイドン王の視界に入っている。これが並の男ならば、ヴィエイユに再び話しかけるか、そうはしなくとも、彼女を意識してしまうのだが、さすがはポセイドン王というべきか。そんな素振りは微塵も見せずに、俺たちに向けて口を開いた。

「今日は女性を伴っての参上。何か、面白い趣向を考えているのかな？」

「さすがは兄上。今回は、こちらの女性を交えて、愛と恋にまつわる極上の話を致したいと考えた次第です」

メインティア王が嬉しそうに話をする。ポセイドン王は頷いていたが、スッとヴィエイユに視線を向けると、フフフと含み笑いを浮かべると、さらに口を開いた。

「見たところ、彼女はまだ、愛や恋というものが何たるのかを知らないね？」

……さすがはポセイドン王だ。一目見ただけで、それを見抜くとは。

俺は思わず大きく頷く。

「彼女はまず、恋を失う辛さや苦しさを経験したほうがよい」

「ほう」

思わず声が出てしまった。なるほど、ヴィエイユの美貌をもってすれば、大抵の男たちを篭絡することはできる。この小娘には、失恋の痛手を経験させるのがよいという意見に、俺も賛成だ。告白してフラれる。好きな子に恋人がいて泣く泣く諦める……そんな経験をしたらば、この小娘も少しは変わりそうだ。

ふとヴィエイユに視線を向けてみる。彼女はいつもの穏やかな表情を浮かべていて、まるで、心ここにあらずといった雰囲気だ。

「愛する人を失う苦しみ……今日は私が話そう」

「おお、兄上が！　これは僥倖！　兄上のお話が聞けるとは、我々は運がいい」

メインティア王が頓狂な声を上げて喜んでいる。確かに、この恐ろしく男前な王が経験した失恋話し……これは、俺も少し興味がある。

「そう、あれはいつのことだろうか……。今でも私の胸を締め付ける……」

まるで吟遊詩人のように王は語り始めた。俺たちはその話にじっと耳を傾けた……。

第六百四十一話　お古いお話し、みたび

「……」

ポセイドン王の話を聞き終わった直後、俺は思わず絶句してしまった。いや、これは王が悪いわけではない。俺の期待値が高すぎたためだ。だが、それでも俺は敢えて言いたい。ポセイドン王の前では言えないが、心の中で叫びたい。

そりゃ、フラれるわ、と。

王が切々と語ったのは、正妻であるアムピトリテとの別れの場面だ。アムピトリテ……トリちゃんは今、ラマロン海の深くに住み、未だ王の許には戻っていない。彼女は一時期、ポセイドン王への嫉妬から海を荒れさせていたが、今はルアラの歌声で慰撫されている。俺が披露したあの歌を、そっくりそのままルアラに移したのだ。本家本元のそれにはまだまだ程遠いが、トリちゃんは満足しているようなので、一応これでよしとしておく。ちなみに、ルアラにはその後、俺のレパートリーも数曲覚えさせた。その中でもトリちゃんが気に入っているのは、『初恋』という歌だ。色んな歌い手をイメージするかもしれないが、あの『初恋』だ。……うん、伝わったようで安心した。ただ彼女は、歌うんぬんよりも、耳障りがいいと言って喜んでいるが、これもよしとしておく。

……話を元に戻す。ポセイドン王が語った失恋話というのは、言ってみれば浮気がバレてトリちゃんが激怒し、自分の許を去っていったという話だ。しかも、浮気がバレたときの言い訳が振るっている。君も相手も、皆、私にとっては女神なのだ、と。男であれば一度は

言ってみたいセリフだ。

だが、王の誠心誠意の説得もむなしく、トリちゃんは泣く泣く彼の許を去っていった。ちなみに、泣く泣くとは、王の解釈だ。おそらく実際は、激怒の末、取るものも取り敢えず出て行ったのだろう。

そんな王の話を、メインティア王は目に涙を溜めながら聞いている。ラファイエンスも、ギュッと目を閉じ、腕組みをしながら聞いている。二人とも、似た経験があるらしい。

「ううむ……素晴らしい」

メインティア王が、参りましたと言わんばかりの表情で口を開く。ラファイエンスも深く頷いている。

「しかし、さすがは兄上ですね。そのような悲しいことがあったにもかかわらず、未だに奥方のことを思い続けているのですから。私など、去る者は追わず、の考えですので、そうしたことがありましても、すぐに新しい女性を見染めて、忘れることにしております。いや、いけませんね。もう少し深く女性のことを考えなければ」

「うむ。そうした出来事は確かに悲しいことだ。しかし、それを次に生かすことで、相手にも、自らにも幸せへと導くことができるのだ」

「なるほど、このラファイエンスも、感服しました」

三人の男たちは大盛り上がりだ。ふと、ヴィエイユに視線を向けてみると、彼女は相変わらず朗らかな笑みを浮かべているが、今の話が気に入ったようには見えない。……あ、あくびをかみ殺している

？　やっぱり、心には響かないか？

そんな彼女の雰囲気を、ポセイドン王は敏感に察したらしい。今の自分の話がウケなかったので、すこしヘコんでいるようだ。

「どうやら、ヴィエイユ殿には、気に入らなかったようだ」

「いいえ。そんなことはございませんわ。とても参考になりました」

如才ないヴィエイユはここでも最適解を返す。その彼女をポセイドン王は優し気な眼差しを向けている。

「それではアガルタ王、お願いできるかな？」

突然、メインティア王が口を開く。俺にお願い？　何のことだ？

「今の兄上のお話し……。私はとても感動した。この感動が覚めぬうちに、もう一つ極上の恋の話を聞きたい。お願いできるかな？」

「いやいや、そんな……。俺は全然……」

「勿体ぶるのはなしだ。さ、さ、話してくれたまえ」

バカ殿が目を輝かせて俺を見ている。ふと見ると、ポセイドン王が大きく頷いている。……あれ？　ヴィエイユが真っすぐな視線を俺に向けている。おいおい、突然言われても困るよ。

「いや、リノス殿、別に失恋の話でなくともよいではないか。今のポセイドン王様の話を超える内容は、なかなかないだろう」

……イヤ、将軍。フォローになっていませんって。……うわ。皆の視線が集中している。これは、ツライ。

目を閉じて考える。失恋の話……。失恋の話……。待てよ、一つあったな……。いや、あれは失恋か？　ただ、浮気がバレて恋人に呪われる話だ。失恋ではないよな。ええと……。

「と、取り敢えず、ですね。ええと、聞いた話ですので、思い出しながらの話になりますが……」

「構わない。ね、兄上？　……兄上もよいと仰せだ。さあさあ、聞かせておくれよ」

バカ殿の段取りの良さが無性に腹が立つが、俺は怒りを押し殺して、ゆっくりと口を開く。

「ええと……その昔、ある貴族の男がおりました」

「うんうん、それで？」

「その男は、身分が高く、端正な顔立ちで、大変に女性からモテました」

「うん、まるで兄上のようだ。それでそれで？」

「その男があるとき、零落した姫君の噂を聞きました。王族ではあるのですが、父親が早くにこの世を去ったために没落して、まだ若いのですが、一人寂しく暮らしていると言うのです」

「うむ、よくある話だ。そういう女性を私も口説いたことがある。

気持ちはわかるぞ」

……うるせぇな、このバカ殿。ちょっと黙っていろよ。

そんなことを考えながら、バカ殿の顔を睨んでみるが、彼は目をキラキラさせながら、話の続きを待っている。仕方がない。喋るだけ喋ることにしよう。

「……オホン。で、噂によると、その娘はなかなかの美人らしい。興味を持った男は、その女性の屋敷まで行ってみることにしたのです」

「うむ。そうでなくては。私も同じことをするだろう。それで？」

「で、屋敷に着いて見ると、顔は見えませんが、髪の毛がとても美しいのがわかりました。それを見て男は、なるほど美人に相違ないと、その屋敷に入り、女性を口説いたのです」

「うん、まるで、私を見ているようだ。ということは、その先は？」

「はい。無事に逢瀬を遂げました」

「そうだろう。まさか、それで終わりじゃないだろうね？」

「まあ、終わりのようなものです」

「……君は、自分で何を言っているのか、わかっているのかい？」

「ただ……」

「ただ、何だい？」

「朝起きて見ますと、女性がイメージとは全く違ったのです」

「どういうことだい？」

「痩せていて、顔は青白く、鼻が長くて、その鼻の先は真っ赤に染まっていたのです」

「それは……？」

「つまり、大変な不美人だったというわけです」

「……」

「その女性は、極端に世間を知らず、男に対しての対応もとてもよいとは言えず、男を戸惑わせるほどのものでした。しかし、女性は頑固なほどに純真な方で、本当に一途に男性のことを思い続けました。男もそんな彼女に情を抱いて、彼女の家に支援をすると共に、その女性を妻と認めて、自分の屋敷に引き取った……。これが、今回のお話しです」

話し終わっても誰も口を開く者がいない。変な静寂が不気味だ。バカ殿などは、俺に鋭い視線を投げかけている。

「……できることではない」

突然ポセイドン王が口を開く。彼は目を閉じたまま首を左右に振っている。

「逢瀬を遂げたとはいえ、不美人だった……。並の男ならば、己が顔を確認しなかったことを悔い、そのまま屋敷を後にするところが、その男はそうはしなかった……。何と、女性に純真さを認め、己の妻とした……。並の男ではない」

「私もそう思います。さすがはリノス殿、いいお話を持っておられる」

ラファイエンスが口を開く。そのとき、メインティア王が口を開いた。

「その女の容貌は！」

「ええっ！？」

「痩せていて？　顔が青白くて、鼻が長い？　鼻の先が赤い？　そのような女性、会ってみたい！　どこにいるのだ！」

「ええっ！？　いや、お話しですから……」

「言え！　どこにいる！」

……しまった。ヤツがB専だというのを忘れていた。目が怖い。

俺が口を開こうと思ったそのとき、ヴィエイユがスッと傍に寄ってきた。思わず俺は彼女に視線を向けた……。

第六百四十二話　深堀する??

ヴィエイユは俺の目の前まで顔を近づけてきた。目が鋭い。

「それは、どちらの殿方ですか?」

「どちらの、とは?」

「どの国のお方でしょうか?」

「どの国……と言われても、お話しだからな。特には……」

「ご冗談を」

ヴィエイユはフンと鼻を鳴らす。何だ、一体どうしたんだ?

彼女は俺からスッと離れると、元居た場所に戻り、椅子を掴んでズルズルと俺たちの所まで持ってきて座った。

「それは、アガルタ王様ご自身のことではございませんか?」

「俺?　バカなことを言うな。俺なわけないだろう」

「それにしましては、とてもお話が詳しくておいででした」

「そういう話なんだから、仕方がないだろう?」

「今のお話しは、空想で導き出せるようなものではございませんわ。

実際の経験がありませんと、そこまでのお話にはならないかと存じます」

「知らないよ、俺は。大体、お前も知っているだろう？　俺の妻たちの顔を」

「お妃さまではございませんでしょ？　どこかの国でお見染めになって、そのままその国でアガルタ王様の妻として暮らされているのではないでしょうか？」

「アホかお前。俺がそんなことをするわけはないだろう」

「アガルタ王様は、その女性を頑固なまでに純真と言っておいででした。また、男性が戸惑う程、行き届かないお方だとも言っておいででした。それは、実際に触れ合わなければわからないことではありませんか？」

「知らないよ……」

俺は授業でそう習ったんだ。確か、そうだったはずだ。いや、間違っているかもしれないよ？　でも、凡そは合っているはずだ。触れ合うとか触れ合わないとかではないのだ。そう書いてあったんだから仕方がない。確かあの話はモデルがいたんだっけな？　モデルがいたとしても、作者自身の体験を書いているわけではなかったはずなので、作者自身も聞いた話を書いているはずだ。と、すれば、やっぱりあの作者はとても有能だったんだな。

「どうなのです？」

俺がそんなことを考えていると、ヴィエイユが恐ろしい目つきで俺

に迫ってきた。エライ食いつきぶりだ。一体何があったんだ？

「ヴィエイユ殿」

ポセイドン王の声が聞こえる。ヴィエイユはハッと我に返ったような表情を浮かべる。

「これは……私としましたことが……失礼いたしました」

オロオロと彼女は居住まいを正す。一体どうしたんだ。彼女らしくもない振る舞いだ。そんな俺たちに、ポセイドン王は、優しい言葉をかけてくる。

「ヴィエイユ殿の気持ちはよくわかる。男という生き物は、己の好みでない女性を前にすると、途端に冷たくなるものだ」

「恐れ入ります。私の知識では、殿方は容姿の悪い者、容姿が衰えた者は見向きもしなくなるというものでございます。実際に、容姿の優れぬ者、容姿が衰えたために殿方の愛を受けられない、もしくは、受けられなくなった者たちを多く見てまいりました。今のアガルタ王様のお話しに出たお方は、私の常識を覆すお方でございます。本当にそのようなお方はおいでになるのでしょうか」

「そうだね。少ないだろうね」

ポセイドン王はにこやかな笑みを浮かべながら、ゆっくりと頷く。

「だが……」

「何でございましょう？」

「男の中には、必ずしも容姿だけで女性を判断しない者もいる」

「……」

「知性であったり、技術であったり、興味を持つ点は様々だ。かく言う私も、若い頃は容姿に目が行きがちだったが、年を取るにつれ、それだけではなくなってきた。同じ時を過ごす上で、居心地の良さなど、興味を持つ点が広がってきた。人は、何かしらの才能を持って生まれてくる。目の前の女性が持つ才能は何か。それを考えながら話をしていると、実に楽しくなるのだよ」

「左様でございますか……。しかしながら、まことに恐れ多いことではございますが、そのような殿方は、ごくごく少数であろうかと存じますが、如何でございましょうか」

「フフフ。そう言うのも道理だ。だが、世界中の男女を見て見るとよい。すべての男女が容姿端麗であろうか。容姿が優れぬものと容姿が端麗な者が結びつくことも多いのではないだろうか」

「……」

「まあ、心配することはない。あなたも、そのうち、わかることだ」

ポセイドン王はゆっくりと頷く。何だかよくわからないが、王が上手にこの場を納めてくれたようだ。助かった。

「アガルタ王様」

ヴィエイユが再び俺に視線を向けてきた。今度は何だよ。

「その不美人であった女性……そのお方のことを、頑なまでに純真と言っておいででした。どの点を見て、そう思われたのでしょうか？」

……また話を元に戻すのか。面倒くさいヤツだな。ええと、何だったっけな？

「ええとね。確かね、一度逢瀬を遂げた後、男はその女性の許にしばらく通わなくなるんだったっけな？　で、しばらくぶりに屋敷を訪れる、と。そのとき男は、きっと期間があいてしまったから、愛想をつかしているかもしれないなと思って訪れるんだけれど、その女性は会えたことを本当に喜ぶんだ。それを見て、本当にこの女性は純真なんだなと思ったんだ」

ヴィエイユは目を閉じて、何かを考えている。そして再び目を開くと、ありがとうございましたと言って、席に着いた。

「老い、とは美しいものだ」

ポセイドン王はしみじみとした声で口を開く。その声に思わず彼に視線を向ける。

「人族は特に老いが早い。だが、老いていくのは美しいものだと私は思う。確かに容姿は衰える。老いることによってさまざまなものを失っていく。しかし、失うと同時に、何らかのものを得ていく。例えて言えば、人族の一生は花に似ているかもしれないね。若いときには美しい花を咲かせるが、やがてその花も枯れていく。だが、その最後に一輪の美しい花が咲くことがある。それが、私にはたまらなく愛おしくなるのだ」

……何だかよくわからないが、とても含蓄のある話だ。ふとヴィエイユに視線を向けてみると、彼女は何か得心したかのように、コクコクと頷いている。すげぇな。この話を理解したのか？　やっぱりこの小娘は、頭がとてもいいようだ。

「これでどうだ！　こんな感じだろう！」

突然、頓狂な声が上がる。見ると、メインティア王が血走った眼で俺を睨んでいる。その右手には、何やら一枚の紙を持っている。何だと思って見てみると、そこには人物が描かれていた。

「君の言っていた女性は、こんな感じだろう？」

何やら俯いているなと思ってはいたが、まさか絵を描いていたとは思わなかった。俺は顔を近づけてその絵を眺めた。

……ぶっさいくな女性の顔がそこにあった。いや、これは女性ではない。妖怪か何かじゃないのか？

「ごめんくださいませ」

突然ヴィエイユが立ち上がって、メインティア王の許に近づいていく。彼女は絵をじっと見て、言下に否定した。

「こんなお方ではございませんわ。このお方には、気品というものを感じません。卑しくも王族の一員なのですから、そこには溢れる品がなくてはおかしいかと思います」

「なるほど。では、描き直そう」

メインティア王は、手に持っていた紙をクシャクシャと丸めて、それをポイと投げると、懐から新しい紙とペンを取り出すと、そこにサラサラと絵を描きだした。それはあっという間に仕上がった。

「もう少し、目じりが下がっているのでは？」

「いいや。目じりを上げると、美しさがなくなる。これでよいだろう」

メインティア王とヴィエイユの丁々発止のやり取りが続く。その様子を、俺は呆然と眺め続けた。ふと見ると、ポセイドン王とラファイエンスは、楽し気にその様子を見守っていた。

「……とても楽しゅうございました」

王の許を辞するとき、ヴィエイユはそう言って深々と頭を下げた。彼女は、これまでに見たこともないような笑みを浮かべていた。さらには、これまでとは全く異なる雰囲気を纏っているように見えた……。

第六百四十三話　手出すんじゃないよ

ポセイドン王の許から帰ってきた次の日から、ヴィエイユの生活は一変した。

彼女は毎日、アガルタの都に出ては美術館に足を運んだり、劇場で芝居を観たり、レストランで食事を楽しんだりしている。そして、その隣にはなぜか、メインティア王が付き添っていた。

意外な組み合わせだが、この二人は気が合うらしい。ポセイドン王の所で会話を交わしてから、この王は毎日アガルタに転移してきて、ヴィエイユを町に連れ出すようになったのだ。

一瞬、俺はこのバカ殿がヴィエイユに篭絡されたのかと思った程で、三日間連続で通ってきたときには、さすがにこの王を捕まえて話を聞いたのだった。そのときの彼の答えが、何とも振るっている。

「何を言っているんだい、君は。我々は単に芸術論を戦わせているだけにすぎないよ」

芸術論って何だ？　と思ったが、芸術論は芸術論らしい。メインティア王曰く、芸術とは狭義に解釈すると、絵画や演劇というものが該当するのだが、そうではなく、もっと芸術というものを広義に解釈して議論しているのだという、何だかよくわからない理屈だ。

俺はメインティア王に、手だけは出さないようにと言っておいたが、彼は軽蔑の眼差しを向けつつ、何を言っているんだと言って呆れた。一体、どの口がそれを言うのかと思っていたが、それは完全に杞憂

に終わった。

メインティア王とヴィエイユは、性別を超えて、友人としてのつながりを深めていった。

一方で、王が毎日こうして遊びに来ていて、国の体制は大丈夫かと思ったが、元々この王は政治に全く関心のなかった人物であったため、フラディメ王国では王が不在の間でも政治が滞らないように、宰相のアウッサイを中心に、ちゃんと体制ができあがっているらしい。ちょっとうらやましいし、アガルタもそういう体制を、とは思うが、考えてみると、別に俺がいなくても、リコやフェリス、ルアラがいれば、それなりにこの国は廻っていく。で、あれば、俺もたまには自由に振舞ってもいいかもしれないな、などと下らないことを考えてしまい、それではいけないのだと自分で自分を律してみる。

メインティア王がアガルタに通い始めて一週間後、王とヴィエイユは何と、ドワーフの工房に現れた。たまたまそのときはシディーがいて、二人の応対をしたのだが、その会話はプロであるシディーも舌を巻くほどのマニアックぶりだったと言うのだ。

「……一体、何をしに工房に行ったんだ?」

「カラの剣を見たいと言って来まして……」

シディー曰く、カラの剣とは、オリハルコンで作られた剣で、ドワーフ王国の宝物庫に保管されていた宝剣だと言うのだ。なぜそんなものがアガルタにあるのかと聞いたところ、工房でオリハルコンの剣ができないかと試行錯誤中であり、その見本として、父であるドワーフ王の特別の許しを得て借り受けていたのだと言う。それを見たいと言って二人が訪ねて来たとき、シディーは驚愕したのだそう

だ。

「本当に、誰にも言っていなかったのに、まさかこの二人の口からカラの剣の話が出るとは思いもよりませんでした」

「シディーの直感でも、見抜けなかったのか？」

「いえ……。少し前からイヤな予感はしていたのですが、まさかそんなこととは予想もしていませんでした」

「まあ、誰にも言っていないからと言っても、工房にいるドワーフたちは、その剣があることは知っているのだろう？　で、あれば、情報が洩れる可能性は高いんじゃないか？」

「絶対に、誰にも言わないようにと強く釘を刺したのですが……」

「絶対にしちゃいけないと言われれば言われる程、人はやりたくなるものだよ。例えば……これは絶対に言っちゃいけないよ？　俺は、妻の中でシディーが一番好きだ。……こう言われたら、言いたくならないか？」

「……ならないですよ。たぶん。そんなことを言ったら、リコ様たちが、大変なことになるのは目に見えていますから」

「そう思っていても、どこかでポロッと言ってしまうものだよ。そんな予感はしなかったか？」

「……」

「まあ、とはいえ、ドワーフたちの口が軽いとは思えないが、そん

な情報をどこからともなく仕入れてくるメインティア王の情報収集能力は侮れないな。いや、ヴィエイユか。あの小娘が裏で糸を引いたのかもしれないな。権謀術数に長けたヴィエイユのことだ。本気を出せばそのくらいの情報を収集することなど、朝飯前だろう。まあいい。取り敢えず、二人の行動はこれからも監視することにしよう。ところでシディー」

「はい、何でしょうか？」

「さっきの話は、あくまで例えば、の話だからな。絶対に人に言っちゃダメだぞ」

「……承知、しま、した。そんなこと、私が言うわけないじゃないですか、やだなーハッハッハ。でも、たとえ話でも嬉しいです。エヘヘ」

顔を真っ赤にしながら照れる彼女を見て、俺はちょっと嫌な予感を感じた。後日、その予感は的中して、寝ている最中にリコから叩き起こされて、実際、妻の中で誰が一番なのかを二時間にわたって詰められたのは、ナイショの話だ。当然、リコが一番と答えておいた。それはもう、何百回となくそう答えさせられた……のではなく、そう答えたのだ。そう答えないと寝られないから、ではなくて、俺は本心から、そう思っているのだ。

話を元に戻そう。

ヴィエイユがメインティア王と付き合う（？）ようになって二週間後、メイが神妙な面持ちで報告に来た。

「ヴィエイユさんの体調のことですが……」

「……その表情から察するに、あまり良い結果ではないのかな？まあ、毎日メインティア王と遊び歩いているからな。疲れが蓄積されているのかもしれないな」

「あの……そういうことではありません」

「どういうことだ？」

「劇的に改善されているのです」

「ハア？」

先日、念のためにと精密検査を行ったところ、以前とは比べ物にならない程の数値を叩き出したというのだ。今のヴィエイユの状態は、健康すぎるくらいに健康なのだそうだ。

毎日出歩くことによって、十分すぎるくらいに運動をし、そのお陰で食が進む。メインティア王との会話などで気分を晴らし、ストレスを解消させて夜、まるでスイッチが切れたようにして眠る。そして、十分な睡眠を取った後、目を覚ますといったサイクルを繰り返したことで、彼女は健康を取り戻したのだという。今の彼女はいつでも退院できる状態であるらしい。

これはメイにとっても予想外の回復力だったようだ。何となく、だが、ヴィエイユのこうした変化に、研究者としての血が騒ぐのだろう。もう少し研究してみたいという雰囲気が感じ取れる。もちろんそんなことは口に出しては言わないし、それをするメイではないことは、十分に承知している。

その一方で、メイの許に毎日のように通ってくるリボーン大上王は、息子の放蕩ぶりが気に入らないらしい。まあ、それはそうだろう。相手はあのヴィエイユなのだ。大上王としては、息子が篭絡されて、フラディメがクリミアーナの属国にならないかと気を揉んでいるらしいが、その可能性は極めて低い。大上王がメイを嫌いになるくらいの確率だと言っておけと伝えておいた。

「とは言ってもな。まだ、兵士たちは海上を移動中だ。今、ヴィエイユを退院させたところで、どうしようもないだろう」

俺は腕組みをしながら、天を仰ぐ。

「……そうだな。一度、ヴィエイユを呼んで、今後の展開の話を聞こうか」

メイは、わかりましたと言って、ゆっくりと頭を下げた。

第六百四十四話　どうするのだ？

翌日の夕方、俺はヴィエイユを執務室に呼び出した。そこには、マトカルとクノゲンも同席させた。

兵士に案内されて入室してきたヴィエイユは、憑き物が採れたような表情を浮かべていた。雰囲気が明るくなっていて、思わず何かいいことあったかと聞いてしまった程だ。だが、その問いに対して彼女は、不思議そうな表情を浮かべた。

「別に、どう、ということはございませんが」

「そうか。それならば、いい」

「ただ……」

「ただ、何だ」

「こちらにお世話になりましてから、とても充実した日々を送らせていただいております」

「そうか。それはよかった」

「はい。とりわけ、ポセイドン王様とメインティア王様とのお話が、とても楽しゅうございました」

「メインティア王とは、その後も会っているのだろう？」

「はい。とてもお優しい方で、毎日病室を見舞っていただいております」

「まあ、心配はしていないが、あの王は無類の女性好きだ。念のために気を付けておくといい」

「その心配はございませんわ」

ヴィエイユはきっぱりと言い切った。いつもの自信に満ちた表情ではなく、少し残念そうな表情だった。彼女は、さらに言葉を続ける。

「あのお方は、天地がひっくり返りましても、この私に欲情することはありません」

「ほう、お前の美貌をもってしても、ダメか」

「はい。殿方の中では、かなり珍しいお方と存じます」

彼女はキッパリとそう言い切った。やはり、少しはあの王を篭絡してみようと考えていたらしい。だが、その予想をはるかに超えて、メインティア王はヴィエイユに対して女性としての興味を持たなかった。これまで散々色仕掛けで男を篭絡してきた彼女にしてみれば、これは敗北に等しいことだろう。

「その代り、私は心の友を手に入れました。その結果に、大いに満足しております」

「心の友？　あの王を、か？」

「左様でございます。メインティア王様は、かなり聡明なお方です。

何より、人の才能を見抜く目に長けておいでございます」

「ほう。そんなことがわかるのか」

「はい。あのお方とお話をしまして感じますことは、とても心地が良いということです。疑問点を質問しますと、すぐに答えが返って参ります。その上、私の知らないことを、知らない世界を知っておいでです。逆に、私も、メインティア王様の知らない世界を知っております。互いの疑問点を詳らかにし、それについて議論を重ねて解決に導いていくことが、これほど楽しいとは思いませんでした。そんなお方とのご縁を結んでいただいたアガルタ王様には、深く感謝申し上げます」

「まあ、互いにとって有益な関係が築けたのなら、それはよいことだな」

「大丈夫でございます。アガルタ王様のご懸念の通りにはならないかと存じます」

「何？」

「アガルタ王様は警戒しておいででございますね。私とメインティア王様が懇意になり、フラディメ王国が、我が新・クリミアーナ教国と誼を通じるのではないかと……。最悪の場合、フラディメが属国化されてしまわないかと考えておいでなのではありませんか？」

「ハッハッハ。敵わないな、お前には」

「メインティア王様は、争いごとがお嫌いな方でございます。また、自国の家来や民を深く愛しておいでございます。いかに私が甘言

を弄しましても、あのお方は、笑ってお聞き流しになるだけでございます。どうぞご安心くださいませ。ただ、メインティア王様とは、これからも末永く友人としてお付き合いを致して参る所存でございます」

これほどあの王を誉めた者が他にいただろうか。俺は、あの王様もそう言われて幸せだなと言ったまま、しばらく絶句してしまった。

「オホン」

マトカルが咳払いをしている。クノゲンも苦笑いを浮かべている。俺は姿勢を正してヴィエイユに向き直った。

「ところで、今日、ここへ来てもらったのは他でもない。アフロディーテ奪還作戦のことについてだ」

「はい」

「報告によると、あと一週間でアガルタ・ヒーデータの連合軍はハーネチアに到着するとのことだ。その後の動きを確認したいと思ってな」

「承知いたしました。作戦の大綱は、以前申し上げた通り変更はございません。ハーネチアからの出陣は、アガルタ・ヒーデータ、およびサンダンジ軍の到着から二日後と考えてございます。ニケ王様はどちらにおいでございましょうか」

「まだ出陣していない。アガルタ・ヒーデータの両軍は、サンダンジのキビという港に寄港し、そこでサンダンジ軍を吸収してのち、ハーネチアに向かう段取りとなっている」

「承知いたしました」

「アフロディーテには、どのくらいの時間をかけて移動するのだ？」

「二日を考えております。先ほども申しました通り、道案内は私たちが行います。皆様は、我々の後に引き下がっておいで下さいませ」

チラリとマトカルに視線を向ける。彼女は大きく頷いている。特に作戦に無理な点はないようだ。

「で、肝心の奪還作戦だが、具体的にどうするのだ？」

ヴィエイユはしばらく沈黙した。特に何か迷っているような雰囲気はなく、頭の中で情報を整理しているように見えた。

「特に、策は弄さぬつもりでございます」

「というと？」

「基本的には、正面攻撃で、正々堂々とアフロディーテを奪還したく存じます」

「正面攻撃って……。相手の戦力は把握しているのか？」

「はい。おそらく、我々の数倍の兵力を要しているかと存じます」

「そんな敵に、正面突破か。まあ、お前らしいっちゃお前らしいな」

「ありがとうございます。それでもし、私が敗れ、海の上で命を散

らせましても、また、囚われの身となり、反乱軍の手で辱めを受けた後に処刑されるとしましても、それは私の運命でございますから、何ら悔いることはございません。ただ、ご見物いただいた皆様を戦渦に巻き込むことだけは避けたいのでございます。そのために一つ、お願いがございます」

「何だ。結界は張る予定だが？」

「はい。その件につきましては、先日承りました。いえ、大したことではございません。アガルタ、ヒーデータ、サンダンジの皆様には、くれぐれも、船の帆に国旗や紋章を入れていただくようお願い申し上げます」

「それについては、ガルビーでアガルタとヒーデータの船を見られたのではなかったか。どの船の帆にも、国旗が描かれていたはずだ」

マトカルが落ち着いた声で口を開く。ヴィエイユはその言葉に深く頷く。

「左様でございました。この私としたことが……。ただ、サンダンジ軍の船は確認しておりません。船が行き来する上に於いて、帆に国旗や紋章を描くのは、海を渡る上での必須の約束事でございますから、おそらく、ニケ様もその点は徹底しておいででございましょう。それならば、安心でございますわ。アガルタ、ヒーデータ、サンダンジ軍が攻撃されることは、間違ってもありませんわ」

「いや、戦場では何が起こるかわからない。我々も十分注意しながら、戦いの趨勢を見守ることにしよう」

「マトカル様の言われる通りでございます。是非、そうなさってく

ださいませ。ただ、反乱軍の首謀者である、ロン・エスロテルは、賢い者でございます。アガルタやヒーデータの軍を襲ったところで、彼らに益することは何もなく、ひいては、完全に敵に回すことになります。あの男が、アガルタ軍を攻撃することはないかと存じます。おそらく、部下たちにもその点は厳命しておるかと存じます」

ヴィエイユはフッと笑みを漏らすと、俺たちを見廻しながら、誰に言うともなく呟いた。

「願わくば、アフロディーテを奪還してのち、教皇神殿で、皆様と戦勝祝いを致したく存じます」

俺は思わず苦笑いを浮かべた。

第六百四十五話　おもてなし

ヴィエイユとの会談から五日後、アガルタとヒーデータの連合軍は、サンダンジ王国のキビ港に到着した。そこには、ニケが軍勢を揃えて到着を待っていた。さすがに俺も出ないわけにはいかないので、その時を見計らって、マトカルとヴィエイユを連れて、船の上に転移した。

「おお、アガルタ王！　ようこそ我がサンダンジ王国へ！」

港に降り立つと同時に、ニケがにこやかに出迎えてくれた。てっきり、ガチガチに鎧甲を装備して、いつでも戦闘に参加できる格好をしているかと思いきや、彼は正装で俺たちを出迎えた。

彼は、まるで抱きかかえんばかりに俺を出迎え、力強く手を握った。そして、ヒーデータのヴァイラス公爵とガッチリ握手をし、続いてマトカルと優しく握手をし、その手にキスをした。

「お久しゅうございます、ニケ王様。お目にかかれまして、恐悦至極でございます」

ここぞとばかりにヴィエイユが、光り輝くような笑みを浮かべながら挨拶をする。それにニケは両手を広げて、大げさに驚いてみせた。

「これはヴィエイユ殿！　なんという美しさであろうか！　以前より磨きがかかられましたな！」

「ご冗談を。ですが、アガルタ王様のお蔭を被りまして、ここふた

月ほど、食べて眠るだけの生活を送っておりました。お陰様で、体調もすっかり元通りになりましたが、長い間休んでおりましたので、いささか頭脳の方は錆び付いております。ニケ様にはご迷惑をおかけすることもあろうかとは存じますが……」

「何を言われる。この度の戦いは、ヴィエイユ殿が采配を振るわれると聞いている。我らサンダンジ王国軍、大いに学ばせていただきますぞ！」

ニケは俺たちに笑みを向けながら、こちらにおいで下されと言って、あらかじめ用意していた休息所に連れて行った。

休息所と言っても、テントを張った仮設のそれとは違い、大規模な、立派な建物だった。しかもそれは新築と思われる建物だった。ニケは休息所……などと言って謙遜していたが、突貫工事で作り上げた施設であることは、誰の目にも明らかだった。彼は会議室のような部屋に俺たちを通した。木の、とてもいい香りがする。

「事のあらましは、ヴィエイユ殿の手紙と、アガルタ王からの手紙で、大体は理解している。早速だが、アフロディーテの奪還における作戦を聞かせていただきたい」

席に着くや否や、ニケはそう言って机の上に地図を広げた。そこには、サンダンジ王国の周辺地図が描かれていた。

ヴィエイユは、承知しましたと言って、先日、俺たちに説明をした作戦を繰り返して説明した。

「……承知した。では、我らは、左翼を担うのだな？」

「はい。繰り返しになりますが、ゆめゆめ、サンダンジ軍は攻撃に参加されませぬよう、お願い申し上げます。さらに、攻撃を受ける恐れがありましたら、すぐに撤退くださいますよう重ねてお願い申し上げます」

「うむ。ただ、一つ懸念がある」

「懸念……でございますか？」

「もし、敵方から挑発を受けた場合、我らから攻撃をすることはならぬのか？」

「はい。くれぐれも挑発に乗らぬよう、お願い申し上げます」

「万に一つ、奇襲などで我が軍が攻撃を受けた場合、反撃することはならぬと言われるのか？」

「それは……」

「ヴィエイユ殿には申し訳ないが、我らから先制攻撃を行わぬことは約束しよう。しかし、攻撃を受けた場合、我らは反撃に転ずる。それは、了承してもらいたい」

「……承知いたしました」

ニケの眼がキラリと光った。彼の頭の中で、反撃に転ずるシミュレーションが行われているのがよくわかった。やはり、マップで常にサンダンジ軍の動きを観察しながら、サダキチたちにも上空から監視させなければならないなと、心の中で呟く。

その後、彼は地図上でアフロディーテ奪還作戦の兵棋演習を始めた。ヴィエイユの話を聞きながらそれを進めていくにつれ、ニケの表情は少しずつ険しくなっていった。

「待たれよ。それでは犬死だ」

ヴィエイユ率いる一軍が、単独でアフロディーテに突撃すると告げたとき、ニケは思わず口を開いた。

「私が敵の将であれば、アフロディーテを中心として、我々を囲むような陣形を組む。今聞けば、敵の勢力は我らの数倍になるという。我も手の者を使って調べさせたが、アフロディーテには続々と軍勢が到着していて、その数は優に五万近くに上るという。そんな中に単独で突撃すれば、間違いなく敗れる。アガルタ王はどう思われる？」

……実は俺も同意見だ。だが、ヴィエイユは落ち着き払っている。

「アフロディーテの軍勢が動けば、確実に負けますね」

「……どういうことだ？　すまぬ。アガルタ王の言葉の意味がわかりかねる」

「アフロディーテに集まった軍勢が、皆、やる気満々なのか、ということです」

「……」

「おそらく、アフロディーテに集まっている軍勢は、反乱軍の首謀者であるロン・エスロテルの要請によって集められたものでしょう。

その中には、仕方なく援軍を出している国もあることでしょう。特にクリミアーナの属国などはそうでしょう。そんな軍勢はおそらく、積極的に戦おうという意識はないものと思われます。まあ、言ってみれば、圧倒的にクリミアーナが有利とみた場合に参戦する軍勢が大半で、積極的に戦いに参加する軍勢は、意外と少ないのではと思うのです。で、あれば、ヴィエイユの軍勢だけでも何とかなるのではと思うのです」

「と、すれば、戦闘意欲の高い者が守るところは必然的に、アフロディーテというわけか」

ニケは顎を撫でながら地図を睨む。

「なるほど、読めたぞ」

ニケはニヤリと笑みを浮かべながら、ヴィエイユに視線を向ける。

「敵に気づかれる前に、電光石火の速さでアフロディーテを急襲すれば、戦闘意欲の低い軍勢はもちろん、上手くすれば、アフロディーテからの攻撃も最小限に抑えることができる。考えましたな、ヴィエイユ殿」

「いいえ。私の方こそ、ニケ王様にお目にかかって、よろしゅうございました。私の作戦では、敵軍の動向を注視しながらアフロディーテに向かおうと考えておりましたが、ニケ様の言われる通り、電光石火の速さで急襲すれば、我々の被害も最小限に食い止められるかと存じます。すばらしいお知恵を拝借できまして、本当に嬉しゅうございますわ」

ヴィエイユの言葉に、ニケはカラカラと大笑いしている。つい数年

前は、ニケの息子をヴィエイユが篭絡しようとして、二人の間は険悪な空気が流れていたのだが、そんなことはなかったかのような間柄になっている。何とも不思議なものだ。

議論はその後、夕方まで続いた。出立は明日の朝とし、アフロディーテに至るまでの海路を詳細に詰めたのだ。マトカルやヴァイラス公爵は積極的に発言していたが、俺はほとんど発言しなかったので、少し退屈してしまった。

議論がひと段落すると、ニケは俺たちをもてなしたいと言って別の部屋に案内した。そこには、半円形のテーブルが置かれていて、どこかで見たことのあるレイアウトだった。そうだ、ここは、鉄板焼きのお店の作りによく似ていた。テーブルははめ込み式になっていて、その下には鉄の網が備えられていた。

ニケは皆を座らせると、自らは俺たちの前に立った。その間、家来たちが野菜類やバカでかい肉の塊を運んできていた。ニケは肉の塊を自ら捌き、網の上で焼き始めた。

「以前、皆で作戦会議を行いながらやったあのバーベキュー。あれはよい。食材が最も美味いときに食べることができる。今夜は、我が振舞わせていただきたい」

そう言いながら、彼は焼いた肉や野菜を俺たちに配っていった。

……確かに美味かった。肉も野菜も、焼き加減が絶妙だった。かなり試行錯誤を繰り返したのだろう。だが、出された食材はすぐに口に運ばねば、ニケが食え食えとうるさかったため、なかなかゆっくりと食事を楽しむことはできず、俺は何とも言えない思いを押さえながら、淡々と料理を口に運んだのだった。

第六百四十六話　天気明朗、波低し

「父上」

「……」

「今日は、どうしたことでしょうか」

海の上に一隻の船が浮いていた。そこには、若い男と初老の男性が乗っており、とりわけ、若い男は怪訝そうな表情浮かべていた。

「全く魚が釣れないとは……このようなことは、初めてです」

男はじっと釣り糸を眺めながら口を開いた。普段であれば、数十匹の魚が釣れるのだが、この日は待てど暮らせど当たりはなく、ただ穏やかな波の音が響き渡るのみだった。

「父上……」

男は再び隣に座る初老の男性に声をかける。彼は釣り竿には目もくれず、水平線の遥か彼方に視線を向け続けている。

しばし無言の時間が流れる。父子の上空に一羽のカモメが飛来した。そのとき、初老の男性が口を開いた。

「メフィス」

「はい」

「水平線の彼方に、何か見えぬか。目は、お前の方がよかろう」

「え？」

男は父が指さす方向にじっと視線を向ける。よく目を凝らして見ると、一見すると入道雲のような、真っ黒いものが水平線の彼方に見えた。

「あれは……？」

男はさらに目を凝らして見てみると、それは雲ではなく、船のような形をしていた。

「こっ、これは……」

徐々にその姿が明らかになってくる。一隻だと思っていた船は見る間に数を増し、それは数十隻の船団であるように見えた。

「父上、あれは船です！　おそらく、ヴィエイユ……様の……」

「すぐに船を返せ」

初老の男性は落ち着いた声で口を開く。だが、息子は目を見開いたまま固まっている。

「メフィス、船をアフロディーテに返すのだ。ロン・エスロテル様に報告せねばならん。……メフィス！」

父親の怒鳴り声で、男は我に帰る。彼はオロオロとその場に座りな

がらオールを掴み、ゆっくりと舟を漕ぎだした。

◆　◆　◆

それから一時間後、アフロディーテの教皇神殿の執務室では、ロン・エスロテルが、じっと地図を眺めていた。彼の前には、三人の若い枢機卿が控えていた。いずれも見目麗しい美少年たちだ。

彼らは、息を殺すようにしてロン・エスロテルの一挙手一投足に注目していた。

「ミスティー」

「はっ」

名前を呼ばれた男が、まるで電流が流れたかのように体を震わせながら返答する。ロン・エスロテルは、相変わらず地図を眺めたままだった。

「全軍に告げよ。港の防衛に全力をあげよと」

「ははっ！」

命令を受けた男は、足早にその場を去っていった。ロン・エスロテルは、さらに命令を続ける。

「ビル」

「ハッ！」

「海上で待機している諸隊に告げよ。花火が打ちあがり次第、アフロディーテに突入せよと」

「承知いたしました」

足早に部屋を後にする男の背中をロン・エスロテルはチラリと見た。そこからは、何とも言えぬ期待感が漂っているように見えた。その様子に彼は、ニヤリと笑みを浮かべた。

「ウィーケン」

「ハッ」

ロン・エスロテルは、目の前に控えている男に視線を向けた。彼もまた、期待感で顔が紅潮している。

「この戦いの趨勢、お前はどう見る？」

「はい。万に一つも、我々に敗北はないかと存じます」

「その理由は？」

「我々は必勝の陣形を敷いております。賊軍がこのアフロディーテを攻めた瞬間に、我々は、蟻のはいでる隙間もない程に敵を包囲し、殲滅します。ヤツらは壊滅致します」

「もし、敵が動かなければどうする？」

「……申し訳ございません。お言葉の意味が分かりかねます」

「相手はあのヴィエイユだ。それだけではない。アガルタ王リノス、サンダンジ王のニケも援軍に赴いている。言わば、百戦錬磨の者がヤツの傍に控えておるのだ。我々の必殺の陣形を見て、動きを止める可能性もありうるだろう」

ロン・エスロテルは、意地悪そうな笑みを浮かべる。だが、ウィーケンと呼ばれた若い枢機卿は、表情を変えぬまま、ゆっくりと口を開いた。

「そのときは、逃がしてやればよろしいのです」

「ほう、あの女をのさばらせておく、と言うのか？」

「はい。逃げることは即ち、あのお方の死を意味します」

「……」

ウィーケンは、何のためらいもなく、そう言い切った。その眼はとても澄んでいた。

「ヴィエイユ様にとって最も大事なことは、ここ、アフロディーテを奪還することです。この教皇神殿に帰還することこそが、あの方の目的です。なぜならば、この教皇神殿を手中にしなければ、教皇として名乗ることはできず、名乗ったとしても、クリミアーナ教徒は誰一人として、あのお方を教皇とは認めぬでしょう。それがわかっているからこそ、あのお方はなりふり構わずここ、アフロディーテを目指しておいでなのです。ですから、間違っても、あのお方が撤退することはあり得ないと存じます」

「では、聞く。もし、我々が敗北した場合、お前はどうするのだ」

「自ら命を絶ちます」

「……」

「命を懸けて主神様の教えに叛いた者を排除したのです。自ら命を絶ちましても、主神様はお許しになるかと存じます」

その言葉に一切の迷いはなかった。ロン・エスロテルは、ニコリと満面の笑みを浮かべた。

「そうか。その覚悟であれば、よい。お前には期待している」

その言葉に、ウィーケンはゆっくりと頭を下げた。

◆　◆　◆

その頃、リノスの乗る船では、ヴィエイユ、ニケらが集まって軍議が開かれていた。船からは、水平線の彼方にアフロディーテがはっきりと視認することができていた。同時に、その周囲には、夥しい軍船がひしめき合っているのも、よく見て取れていた。

その光景に、ニケは興奮が抑えきれないのか、目を輝かせながら、ソワソワと体を揺らせていた。

「こうして見ると、壮観だな」

ニケが誰に言うともなく呟く。彼は机の上に広げられた地図と、目の前の景色を見比べながら周囲に視線を向ける。

甲板の上に設えられた机には、アフロディーテを中心とした地図が広げられており、そこには、リノスがサダキチたちを使って調べた、敵の陣立てが書き込まれていた。

「これではまさに我らは袋のネズミ、だな」

ニケが笑みを浮かべながらヴィエイユに視線を向ける。だが、彼女はその言葉に反応を示さず、悠々と、アフロディーテとは全く異なる方向に視線を向けている。彼女の視線の先には、イルカの群れが海の上を飛び跳ねていた。

ニケはスッと視線をリノスたちに向けた。リノスは呆れた表情を浮かべている。その隣では、王妃のマトカルがアフロディーテをじっと眺めている。一方、もう一人の従者であるクノゲンは、苦笑いを浮かべながら、ニケとヴィエイユの交互に視線を向けている。

「もう少し、後に下がったほうがよろしいのではないでしょうか」

口を開いたのは、ヒーデータのヴァイラス公爵だ。彼は手で陽の光を遮りながら、アフロディーテを眺めている。

「敵の陣容が視認できるということは、敵からも我々の位置が把握できることになります。ここは一旦引いて、敵から身を隠した方がよいのでは……義兄上?」

ヴァイラスの言葉に、リノスは苦笑いを浮かべながら首を振る。

「いや、ヴィエイユにはその考えは毛頭なさそうだ。そうだな、ヴィエイユ?」

リノスの問いかけに、ヴィエイユはやっと皆に向き直った。

「はい。このままで結構でございます」

「しかし……」

ヴァイラスの言葉に、ヴィエイユは笑みだけを返す。彼女はスタスタと船首に向かって歩き出し、しばらくの間、アフロディーテの方向を眺めた。やがて、クルリとリノスたちに向き直ると、相変わらずの笑みを浮かべたまま、彼女は口を開いた。

「天気は明朗。波も穏やかでございます。まさに、打ってつけの条件となりました。これより我々は、アフロディーテに向けて突撃いたします。皆さま、どうぞ、我々の後よりおいで下さいませ」

ヴィエイユはそう言うと、丁寧に頭を下げた……。

第六百四十六話　天気明朗、波低し（後書き）

Ｃｏｍｉｃブースト様にて、第２５話前編が公開されました。６／２９　１２：００まで無料公開中です。是非、チェック下さい。ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６

第六百四十七話　何だ、これは？

ヴィエイユの乗った船が、ゆっくりとアフロディーテに向かって動き出した。すでに、ニケの姿はない。彼はヴィエイユが船に乗り移るときに、一緒に自船に戻ったのだ。

「では義兄上、私も」

ヴィエイユが動き出したのを確認したヴァイラス公爵が、そう言って頭を下げ、その場を後にしていった。

「いつでも出発できます」

兵士の一人が俺たちの許に駆け寄り、そう言って直立不動の姿勢を取った。俺は左右の様子を確認する。

今のところ、サンダンジに動く気配はなさそうだ。あのニケのことだ。いつでも動き出せるように準備を万端に整え、俺が動き出すのを今か今かと待っているはずだ。船では、船員たちが忙しそうに動き回っている。対して、ヒーデータの船は、これから戦場に赴くとは思えない程に、何の動きもない。ヴァイラス公爵がまだ戻っていないのもあるだろうが、船の上には、人っ子一人見えない。

俺はゆっくりと前方に視線を向ける。ヴィエイユの船団が前進しながら、陣形を整えていた。

「ほほう。まさに、突撃するぞと言わんばかりの陣形ですな」

クノゲンが誰に言うともなく呟く。

ヴィエイユの船団は、言うなれば山型に陣形を組んでいた。どこで訓練をしたのだろうか、均一の距離を保ちながら帆も張らない状態で、ゆっくりと進んでいる。

「だが、あれでは火矢で攻撃を受けると、ひとたまりもないぞ」

マトカルが冷静な口調で口を開く。なるほど、確かに、火矢や火魔法で攻撃をされて、一隻の船が炎に包まれると、次々と周囲の船にも炎が飛び火しそうだ。

「いや、そんなことは全く考慮に入れてはいないのでしょう。アフロディーテに突撃するのが目的ですからな」

「しかし、あの速度では、ヘタをするとアフロディーテに到着する前に全滅してしまう危険性があるぞ。もっと俊敏に動かなければ」

「それは……我々の動きを待っているのでしょう」

そこまで言うとクノゲンは俺に視線を向けた。

「そろそろ、前進しましょうか」

その言葉に、俺はゆっくりと頷いた。

◆　◆　◆

「申し上げます！　賊軍の船が動き出しました！」

ロン・エスロテルは、小さな声で、来たかと呟くと、椅子から立ち上がって、足早に執務室を後にした。彼が向かったのは、ヴィエイユが寝室として使っていた部屋だった。

部屋に入ると、広くて大きな窓を勢いよく開け放つ。眼下には数十隻の船団が、アフロディーテに向けて進んでいるのが見えた。

雲一つない快晴。風も穏やかで、まさかこれから戦闘が始まるなど想像すらできない平和な光景が広がっていた。

「港を守る防衛隊には、敵が上陸してくるまでは、死に物狂いで攻撃せよと伝えろ。海上に停泊している部隊に、包囲する準備をするように伝えろ。あとは、花火の準備も怠るな」

ロン・エスロテルの命令を伝えるべく、傍に控えていた若い枢機卿たちが次々と部屋を飛び出していく。

「さて、私も出陣するか」

彼はそう呟くと、残った枢機卿たちを従えて、足早に部屋を出て行った。

準備を終えて神殿の外に出てみると、ヴィエイユが乗った船は、まだ遥か沖合にいた。ロン・エスロテルはニヤリと笑みを浮かべながら、周囲の者に向けて大声で口を開く。

「まだあのようなところにいるのか。なるほど、あの距離では、弓や魔法は届かない。しかし、あの速さでは、港に着くまでに日が暮れてしまうぞ？」

彼の言葉を受けて、周囲の者が笑い声をあげる。

ロン・エスロテルは、皆と同じように高笑いをしながら、その一方で、こちらに向けてゆっくりと進んでくる船団を眺めながら、ヴィエイユがこのような策を取る真意を測りかねていた。

船と船が、まるでひしめき合うようにして進んできている。帆は張られていない。おそらく、漕ぎ手が船を進ませているのだろう。陣形が崩れていないところを見ると、一糸乱れぬ動きを取っているのがわかる。見事な練度と言ってよかった。しかし、帆を使わずに移動するに際して、あの陣形を取る意味がわからない。疾風迅雷のごとく港を急襲するのであれば、あの陣形を取る理由はわかる。だが、今は昼間だ。しかも、あのような低速では、攻撃してくださいと言っているようなものだ。船が一隻でも炎に包まれてしまえば、次から次へと燃え移るだろう。

……もしかして、敢えて船を炎に包ませて、そのまま港まで突っ込んでくる気か？

正気の沙汰ではない。だが、それをすれば、少なからず港を防衛している者たちに動揺を与えられるだろう。巨大な六つの火の玉が港に向けて押し寄せるのだ。海上で控えている部隊も、おいそれとは攻撃ができないだろう。

「サルコ」

「ハッ」

傍に控えていた若い枢機卿が、片膝をついて応える。ロン・エスロテルは、その男に向き直ると、まるで噛んで含めるようにして命令

を下した。

「よいか。全軍に触れ回るのだ。敵が弓矢の射程距離に入ったら攻撃を開始するのではなく、敵の船が帆を張ったら、届かなくとも構わぬ。迷わず火矢と魔法を放てと伝えよ。できるだけ帆を狙うのだ。おそらく、船は次々と炎上するだろうが、手を緩めてはならぬ。港に辿り着く前に、撃沈させるつもりでやれと」

若い枢機卿は、ロン・エスロテルの命令を忠実に繰り返して言うと、承知しましたと言って、素早くその場を去っていった。

「よいか。港からの攻撃が始まったそのとき、花火を上げろ。総攻撃をかけるのだ」

ロン・エスロテルは、周囲に控えていた者たちに向けて命じる。皆、揃って頷いている。彼は満足げな表情を浮かべながら、再び港の方角に視線を向けた。

そのとき、ヴィエイユが乗る船に変化があった。

まるで示し合わせたかのように、同じタイミングで、一瞬にして六隻の船が帆を張った。

「こ……」

攻撃せよ、と言いたかったが、声が出なかった。何と、六隻の船の帆には、クリミアーナ教国の紋章が描かれていたのだ。

帆いっぱいに描かれた紋章。その後ろから、アガルタ、サンダンジ、ヒーデータの船が続いている。それぞれの船も帆を張っているが、

そこには、国の紋章が描かれていた。ロン・エスロテルの位置からは、まるでクリミアーナ教国が、アガルタ、サンダンジ、ヒーデータを従えているかのように見えた。

誰も声を発する者はいなかった。ただ、波の音とカモメの声が響き渡っていた。

船は速度を速めながら、港に向かって進んでいく。陣形は全く崩れることなく、一糸乱れぬ動きを取り続けている。

六隻の船が射程距離に入っても、弓矢はおろか、何の攻撃もなされなかった。

「何という……」

ロン・エスロテルが苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、腹の底から絞り出すような声を上げた。クリミアーナ教徒であれば、あの船に攻撃を加えることは断じてできない。あの船を攻撃することは即ち、主神様に向かって弓を引くようなものだ。そのようなことは、特にここ、アフロディーテに住む者であれば、絶対と言っていいくらいの、できないことだった。

船団はグングンと速度を速め、港に近づいていく。そして船は何事もなかったかのように、ゆっくりと港に入ってきた。

「退け。……港の防衛部隊を退かせるのだ。この教皇神殿まで引かせよ」

ロン・エスロテルの言葉に、誰も反応する者はいない。彼は怒気を帯びた声で、再び口を開く。

「退けと言っておるのが、わからんのかぁ！　早く引かせるのだ！」

その怒号に驚いたように、周囲にいた枢機卿たちがアタフタと動き出した。

「待て」

ロン・エスロテルは、傍を通った男の襟首を掴んで、体を引き寄せた。驚いた表情を浮かべる男に、彼は大声で怒鳴りつけた。

「何をしている！　花火を上げろ！　背後から襲えば、あの帆の紋章は見えまい！　早く花火を上げんかぁ！」

その表情はまるで、鬼の形相だった。

第六百四十八話　拍子抜け

まるで爆発音のような音が響き渡った。思わず音のした方向に視線を向ける。小高い丘の上に建つ建物付近から、白い煙が上がっているのが見えた。

「何か、爆発したのでしょうか？」

クノゲンが怪訝そうな表情で呟く。マトカルも、腕組みをしながら音のした方向に視線を向けている。

「何かの合図の可能性もある」

マトカルはそう呟くと、傍に控えている兵士に向かって口を開く。

「全軍に告げよ。敵が総攻撃をかけてくる可能性がある。油断するなと伝えよ」

伝令兵たちが脱兎の如く、その場を走り去っていった。

◆　◆　◆

ヴィエイユが乗った船は、一切の攻撃を受けることなく港に入った。相当な激戦を予想していた俺は拍子抜けをしてしまった。

だが、海上にはクリミアーナに従う国々の船がひしめいている。これらに総攻撃をかけられると、俺たちはひとたまりもない。

俺はひとまず船を停船させた。港に入ってしまえば袋のネズミになる恐れがある。そうならないために、港の動きが確認できる場所で、様子を見ることにしたのだ。

だが、しばらく待ってみたが、海上に展開している敵に動く気配はなく、港でも戦闘らしいものは行われなかった。ヴィエイユが率いている軍勢も上陸はせず、ただ静かに港に停泊していた。

妙な緊張感が漂っていたが、そんな中、一隻の小舟が俺たちの船に向かってきた。そこには何と、ヴィエイユが乗っていた。

「お陰様で、問題なく入港することができました。ありがとうございました」

満面の笑みで彼女は俺たちに頭を下げた。その後ろには、鋭い目つきで俺を睨みつける男が控えていた。俺はこの男に見覚えがあった。

「あれ？　君は確か……」

「……」

俺の問いかけに男は無言を貫いた。その瞳には、殺意に似た感情が見て取れた。

「この者は、私の親衛隊の副隊長を勤めております、ジレットと申します。以後、お見知りおきくださいませ」

ヴィエイユが間に入る。思い出した。アガルタにやって来た殺し屋だ。シディーの直感で動きを止めさせた男だ。

再び男に視線を向けると、彼はスッと視線を外し、頭を下げた。どうやら彼は俺と対話する気はなさそうだ。ヴィエイユに視線を向けてみると、彼女は相変わらず笑みを浮かべているが、その体からは、これ以上彼のことに触れてくれるなという雰囲気が滲み出ていた。

「それにしてもヴィエイユ、この敵だらけの中で、よく一人でここまで来られたな」

「ホホホ。ジレットがおりますから。それに、アガルタ王様から頂いた結界石がございます。この二つを備えていれば、何も怖くはございませんわ」

彼女はいたずらっぽく笑う。

「まあ、無事に入港できたのはよかったとして、これからどうするのだ？」

「そのことでございます。今後のことにつきまして、皆様と軍議を行いたく存じます。恐れ入りますが……」

「わかった。皆を集めよう」

「助かります」

俺は傍にいた兵士に、サンダンジのニケとヴァイラス公爵にこちらに来るように伝えるよう命じた。その間、クノゲンがヴィエイユらを船室に案内しようとしたが、彼女に控えていたジレットが、無用だ、と素っ気なく断った。男はヴィエイユ一人を置いてどこかに行ってしまった。ヴィエイユ自身もその行動を咎めることはなく、空を見ながら、飛んで来る海鳥たちを眺めていた。

やがて男は大きな傘と、黒板のような板を抱えて戻ってきた。そして、傘を広げると甲板の上に設置し、抱えていた板に触ると、何とそれが椅子になった。それを傘の下に置くと、ヴィエイユはさも当然のように、その椅子に腰を下ろした。ジレットは傘の外で、燦々とした陽の光を浴びながら、片膝をついて控えていた。

「……用意がいいな」

一連の様子を俺と共に見ていたマトカルが思わず呟く。俺は思わず苦笑いを浮かべる。

「まあ、紫外線はお肌の大敵だと言うからな。外見にこだわるヴィエイユらしい」

「シガイセン……？　よくわからないが、暑いのであれば日影に行けばよいだけだろう」

「まあ、そうなんだけれどね。ああやって優雅さを強調して、余裕のあるところを見せたいという思いもあるのかもしれないな。ところで、マトは日焼けは気にならないのか？」

「……すまない。質問の意図がわからない」

「そういえば、マトは日焼けしているけれど、肌はきれいだよな。何かケアしているのか？」

「ケア？　そんなものはしていない。冷たい水で顔を洗うくらいのものだ」

「そうか。日焼けするとシミになる……なんてよく聞くから、何か気を付けているのかと思ったんだが……」

「そんなことを気にしていては、軍人として勤めはできない。軍人たるもの、常に肌を陽に焼いておいておかねば、訓練をしていないと見られてしまう。それとも……リノス様は、陽に焼けた女は、王妃にふさわしくないと思っているのか？」

「いや、そんなことはない。むしろ、陽に焼けたマトの方が、俺は好きだ」

「同じ？　何がだい？」

「やはり、リノス様も同じなのか？」

「兵士の中には、陽に焼けた女を好む者もいる。その者たちの話を聞いていると、日焼けした部分と、陽に焼けていない部分の差が興奮する……と言っていたが……」

「いや、俺はそちら側ではない」

「……」

「オホン」

マトカルとくだらない話をしていると、クノゲンがやって来た。ヴィエイユに飲み物を出してきたらしい。相変わらず気の利く男だ。俺は丁寧に礼を言って、彼を下がらせた。

ヴィエイユに視線を向けると、彼女はちびりちびりと出された飲み

物を飲んでいるところだった。その後ろでは、ジレットが相変わらず、鋭い眼差しで周囲を威圧している。俺は、傍にいた兵士に冷たい水を持って来るように命じ、それをジレットの許に持っていった。

「せっかくだ、飲むといい」

「……」

「これから軍議だ。長い時間がかかるかもしれん。水分を補給しておくといい。心配などいらん。たぶん、おそろく、きっと、毒は入っていないはずだ。俺が自ら用意したわけではないからわからんが、きっと大丈夫な気がする。ちょうど飲みやすい冷たさだ。飲むといい」

「……いらん」

「……喉、乾いているだろう？」

「……」

「ジレット。折角です、いただきなさい。アガルタ王様手ずからご用意いただくなど、そのような機会は、なかなかあるものではありませんよ」

ヴィエイユが満面の笑みを浮かべながら口を開く。ジレットは一瞬、チラリとヴィエイユを見たが、やがてあきらめたように、そろりそろりと俺の持つグラスに手を伸ばした。

彼はじっとグラスの水を眺めていたが、突然それを口元に持っていき、一気にそれを飲み干した。

「美味いだろう？」

「……美味い」

「そりゃよかった」

俺はグラスを受け取ると、男に向けて笑みを向けた。彼は腕で口元を拭っていたが、俺とは目を合わせなかった。

そのとき、兵士の一人が足早に俺の許に近づいてきた。彼は、ニケが船に到着したと伝えて、すぐにその場を辞した。

その彼と入れ替わるように、ニケが姿を現した。

「おお、ヴィエイユ殿。この度は一体どうしたことか」

彼の姿を確認するや、ヴィエイユはゆっくりと立ち上がってニケの許に進み、彼の前でスッと膝を折った。

「申し訳ございません。激しい戦いになると覚悟しておりましたのに、敵からは全く攻撃がございませんでした。何はともあれ、無傷でアフロディーテに入港できましたのは、うれしゅうございます。これも偏に、ニケ王様のご威光の賜物ですわ」

「何を言われる。我々は何もしていない。拍子抜けだ」

「いいえ、これからが、本当の戦いでございますわ」

「うむ。そうだな。これから、だな」

そのとき、ヴァイラス公爵が到着したという報告があった。俺は軍議をするために、椅子と机を準備するように命じた。

第六百四十九話　船上での作戦会議

「やあ、皆様お揃いで。遅れまして、大変失礼いたしました」

ヴァイラス公爵が笑みを浮かべながら現れた。ニケはそれを待っていたかのように、スッと一礼すると、そそくさと用意された椅子に座った。それに釣られるようにして、俺たちとヴィエイユも椅子に腰を下ろす。

クノゲンが大きな紙を持ってきて、机の上に広げる。そこには、アフロディーテの地図が書かれてあった。

「ヴィエイユ殿が、無傷で入港できたのは幸いだ。だが、大きな問題が一つある」

ニケが地図を指さしながら口を開く。彼は、俺たちに視線を向けながら、さらに言葉を続ける。

「海上に展開している軍勢がこちらに向かって来ると、我々は完全に包囲されることになる。そうなれば、単に物見遊山というわけにはいかなくなる」

ニケはそこまで言うと、ヴィエイユに鋭い眼差しを向けた。

「ただ、今の段階で、攻撃されるのは、我々の船だ。その間に、ヴィエイユ殿は全力をもってアフロディーテを攻撃することができる。うまくすれば、アフロディーテを陥落させると同時に、ヴィエイユ殿に従わぬ者たちと、我々が消耗し合うことによって、漁夫の利を

得ることも可能となる」

「ホホホ。さすがはニケ様。そこまでは考えもつきませんでした。しかしながら、そうした展開にはならぬと存じます」

「ほう、その根拠は？」

「海上の軍勢が動いていないのが、何よりの証拠でございます」

ヴィエイユはニコリと微笑むと、海に視線を向けた。

「海上で停泊している軍勢は、言わば日和見でございます。積極的に動くつもりはないのでしょう」

彼女はそう言うと、再び俺たちに視線を向けた。

「しかし、これらが本当の戦いでございます。アフロディーテの奪還に手間取れば、海上の軍勢は攻撃に転ずるでしょう。そうなれば、今、ニケ王様が申された展開となります。失敗は許されません」

「そうだ。ヴィエイユ殿がアフロディーテ奪還に手間取る、もしくは、敗れでもしたら、海上の軍勢は雪崩を打って我らに攻めかかるであろう。ここは電光石火の速さでアフロディーテを陥落させることが肝要だ」

ニケはそう言うと立ち上がり、机の上の地図を指さした。

「アフロディーテは、教皇神殿に通じる道以外はすべて、細い道しかない。しかも、その道のすべてが教皇神殿につながっている。おそらく敵は、教皇神殿の前に全兵力を集結させているだろう」

「さすがはニケ様、私も同意見ですわ」

ヴィエイユの言葉に、ニケは大きく頷く。

「ただ、敵とヴィエイユ殿の軍勢は、数の上で拮抗している。となれば、丘の上に布陣する敵の方が、現状では有利であると言える」

彼の言葉に、今度はヴィエイユが大きく頷く。

「敵の大将がどのようなスキルを持っているのかは知らぬが、まともに攻めては、双方に大きな損害が出ることになる。ヴィエイユ殿のことだ。それは望むまい？」

「はい。その通りでございます。ですが……それを厭いましては、アフロディーテの奪還はおぼつきませんわ」

「いや、策はある」

「まあ」

「ヴィエイユ殿には承服できかねるかとは思うが、この策は、敵を効果的に殲滅させることができ、なおかつ、海上に展開する軍勢を怯ませることができる」

「ぜひとも、承りたいですわ」

「アフロディーテに火をかけることだ」

「……」

「港から街に向かって火矢や火魔法を放つのだ。ちょうど今は、南からの風が吹いている。言わば、神殿に向かって風が吹いていることになる。街に火を放てば、敵は遠からず火にのまれることとなろう。その上、アフロディーテが炎上したとなれば、日和見を決め込んでいる軍勢も戦意を完全に失うであろうし、事によると、我らに膝を折るものも出るやも知れぬ。ヴィエイユ殿は、アフロディーテが灰燼に帰すことは耐えられぬことではあろうが、我は、これが最も効果的な策だと思うが、どうであろうか？」

ニケの言葉に、ヴィエイユは目を閉じながらコクコクとゆっくり頷いた。やがて目を開けた彼女は、少し考えているような素振りを見せながら、口を開いた。

「ニケ王様の戦略、実に見事かと存じます。私も、できることならば、そう致したく存じます。ただ……」

「ただ……何であろうか？」

「アフロディーテを炎に包むのは、かなりの労力がかかるかと存じます」

「……」

「アフロディーテの街並みは、すべて漆喰を使って作られております。とりわけ前教皇……祖父、ジュヴァンセル・セインは、漆喰で建物を塗り固めるよう徹底致しました。そのため、アフロディーテは火に対する備えができずぎるほどにできております」

ニケの眉間に皺が寄った。ヴィエイユはそれを見逃さず、まるで縋

るような視線をニケに向けた。

「むろん、火による攻撃が不可能であるとは申しません。港に大量に油を撒き、それに火をつければ、いかにアフロディーテとはいえ、炎に包まれることでしょう。しかし、敵も黙ってはおりませんでしょう。火が放たれたと聞けば、全力で消火に当たって参りましょう。我々はそこに現れた敵を倒していけば、徐々に敵の勢力を削ることができるかとは存じますが、それですと、かなりの時間を要してしまいます。とはいえ、ニケ王様のご意見は、実に有意義なものでございます。作戦の選択肢の一つとして、検討いたしたく存じます。ありがとうございました」

そう言ってヴィエイユは丁寧に頭を下げた。その様子に、ニケは何とも言えぬ表情を浮かべながら、自分の席に着いた。

「ではヴィエイユ。お前の作戦を聞こうか」

俺の言葉に、彼女はスッと背筋を伸ばした。

「承知いたしました。いえ、取り立てて作戦らしい作戦はございません。港に上陸しましたら、全軍をもって教皇神殿に向かいます。神殿に向かう一本道を、隊列を組んで攻め上るつもりでございます」

「待たれよヴィエイユ殿。それでは、狭い道から奇襲を受ける可能性がある」

「ニケ王様の言われる通りでございます。私もそれは考えましたが、そこに兵力を割くよりも、港に上陸してすぐ、全軍で教皇神殿に向かう方が、効果的であると判断してございます」

「ならば、自軍が大きな犠牲を受けるのも厭わぬ、そう申されるのか？」

「左様でございます」

ニケは意外そうな表情を浮かべた。クノゲンは相変わらず苦笑いを浮かべている。マトカルは、そうしたいのならばすればいいといった雰囲気だ。ヴァイラス公爵は、こう言っては何だが……。我関せず、といった雰囲気だ。

「そこで、皆様にお願いがございます」

ヴィエイユの言葉に、全員の視線が彼女に集中する。

「我らに援軍のご相談か？」

すかさずニケが口を開く。その彼に、ヴィエイユは笑顔で首を振る。

「いえ、皆様への援軍要請ではございません。当初からのお願いの通り、皆様に戦いに参加いただくつもりは毛頭ございません。お願いというのは、他でもございません。我々の退路を断っていただきたいのです」

全員がキョトンとした表情になる。ヴィエイユはさらに言葉を続ける。

「我らはこれより上陸し、教皇神殿に向かいます。我が軍の兵士たちに臆病者はいないと信じますが、もし、敵軍に恐れをなして船に逃げ帰る者がおりましたら、恐れ入りますが、皆様の手で討伐いただきたいのです。むろん、それは私も同様でございます。敵を攻め

きれず、退却することがございましたら、遠慮なく討伐いただいて結構でございます」

「いや、待たれよヴィエイユ殿。戦いは時の運だ。勝つときもあれば負けるときもある。その上、撤退も立派な作戦の一つだ。退却してくる者を問答無用で討伐するなど、正気の沙汰ではない。アガルタ王、そうではないか」

突然話を向けられてしまった。俺は腕組みをしながら、ヴィエイユに視線を向けた。

第六百五十話　勝てる作戦？

ヴィエイユは、じっと俺の眼を見つめている。その瞳は美しく、一点の曇りもない。一見すると、悲壮な覚悟を決めているかのようにも見えた。

「ヴィエイユ」

「はい」

「退却は、俺たちの判断で行って構わない。そうだったな？」

「……左様でございます」

「そうか。それならば、いい」

俺の返答が意外だったのか、彼女はキョトンとした表情を浮かべている。そのとき、ニケが口を開いた。

「アガルタ王、貴殿は、ヴィエイユ殿が退却を開始した際は、我々も退却すると言われるのか。なるほど、それは良い案だ」

「いやぁ、別に俺はそう言うつもりで言ったのではありません。単なる確認です」

「謙遜なさらずともよい。うむ。ヴィエイユ殿には悪いが、貴殿が退却を始めた場合、我らは撤退させていただく」

「では、我々ヒーデータ軍も同じように撤退いたします」

ヴァイラス公爵が口を開く。彼はスッと俺に視線を向けると、まるで、俺にも同意を求めるかのように、ゆっくりと頷いた。

「承知いたしました。皆様の撤退に関しては、私から何も申し上げることはございません」

ヴィエイユが真面目な表情を浮かべながら口を開いたかと思うと、すぐに明るい表情となって、再び俺たちに向けて口を開いた。

「このアフロディーテ奪還作戦が成功した暁には、皆様と共に、教皇神殿で祝杯を挙げたく存じます。眼下にアフロディーテと、そこから広がる雄大な海を眺めながら飲む勝利の美酒は、格別かと存じます。どうぞ皆さま、私たちの後に引き続いて上陸くださいませ。もし、私たちが教皇神殿を陥落させました際は、使者を皆様方に派遣いたします。そのときは、ゆめゆめ攻撃などなさいませんようにお願い申し上げます。そうですわね……こちらに控えるジレット。このジレットを皆様方の許に遣わします。どうぞ皆さま、この顔をお忘れなきようにお願い申し上げます」

ヴィエイユに促されるようにしてジレットは立ち上がり、無表情のままこちらに向かって歩いて来た。彼は俺たちを一瞥して、ちょっとだけ頭を下げると、すぐに元の場所に戻っていった。

「それでは皆様、我々は攻撃準備に移ります。私どもは後詰の隊を残すつもりはございません。従いまして、皆様におかれましては、私共の軍勢の姿が見えなくなった頃合いを見て、上陸頂きたく存じます」

そこまで話すと、ヴィエイユは「では」と言って立ち上がり、ジレットを促してその場を後にした。

「何とも凄まじい覚悟、だな」

ニケが呆れたように呟く。それを受けて、ヴァイラス公爵が口を開く。

「何としてもアフロディーテを奪還したいのでしょう。アフロディーテと教皇神殿を抑えなければ、ヴィエイユさんは教皇の座を取り戻したことにはなりませんから。問題は、この戦いが終わった後のことです。おそらく教皇神殿を巡る戦いは壮絶を極めることになるでしょう。死屍累々となったアフロディーテを復興させるには、相当の時間がかかることでしょう。そうなった場合、ヴィエイユ殿は我々に支援を頼んでくるでしょうが、そのときは義兄上、どうなさいます？」

「いや、そのときにならないとわからないですね。それは、そうなったときに考えましょう」

「それにしても解せないな」

マトカルが呟く。全員の視線が彼女に集中する。

「教皇神殿への正面攻撃はよいとして、撤退する者を攻撃せよという意味がよくわからない。兵士たちの士気を上げるためか？　決死の覚悟を兵士に植え付けるためか？　そんなことをすれば、たとえこの戦いに勝利したとしても、兵士たちはヴィエイユ殿に深い恨みを持つだろう。それだけではない。その話に乗ると、最悪の場合、我々もはクリミアーナから深い恨みを買うことになりそうだ」

「まさしく、マトカル殿が言われる通りです。もしかすると、そうさせることで、ヴィエイユさんはこの戦いでの憎しみを、我々に向けようとしているのかもしれません」

ヴァイラス公爵が頷いている。俺は大きなため息をつきながら、皆を見廻す。

「まあ、ヴィエイユにはそれだけの自信があるということなのでしょう。おそらく、ですが、ヴィエイユの兵士たちに撤退してくる者は一人もいないでしょう」

「では、アガルタ王は、これからの展開をどのように進めていくおつもりか」

「ニケさんには悪いですが、俺は上陸するつもりはありません。今しばらくは、ヴィエイユの動きを静観するつもりです」

「静観、と言われるか……。やはり、海上にいる軍勢が気になるのだな？」

「まあ、それもあります。そうだ、一つ、ニケさんとヴァイラス公爵にお願いがあるのです。アガルタが撤退したときは、どんな状況かであろうと、皆さんは一旦、俺に倣って撤退してほしいのです」

「……」

「義兄上がそう言われるのであれば、私は従います」

「……アガルタ王は、ヴィエイユ殿を見捨てるおつもりか？」

「いえ、そうは言っていません。実は俺は、ヴィエイユがこの戦いに敗れる可能性は低いと考えています。あの小娘……こう言っては失礼ですが、あの小娘は、己の命を危険に晒すような作戦は採らない人間です。おそらく、確実に勝てる作戦を立てて実行するでしょう。ただ……意外と抜けているところがあるので、足元をすくわれる可能性も無きにしも非ず、ですが。まずは、戦いの動向を静観しましょう」

「ニケ王様も、思うところはおありでしょうが、我が王の言われることは、当ることが多いのです。悪いことは申しません。我が王の言う通りになさってみてください」

クノゲンが笑顔で口を開く。ニケは不承不承と言わんばかりの表情を浮かべながら、プイッとそっぽを向いた。思わずクノゲンと顔を見合わせながら、苦笑いを浮かべる。

「それにして、軍議と言うから集まったものの、結局軍議らしいことは何もしていないな」

マトカルが誰に言うともなく呟く。なるほど、確かにそうだ。俺は少し考えると、傍にいたクノゲンを手招きして、小さな声で指示を出した。彼はニコリと微笑むと、一礼してその場を後にしていった。

「どうやら、まだ、ヴィエイユたちは動き出しそうにありませんね。時間も時間なので、一旦食事を摂ってから、攻撃を開始するのでしょうかね。確かに、腹も減ってきました。皆さん、どうです、食事にしませんか？」

俺の提案にヴァイラス公爵は恭しく一礼する。対してニケはぶ然と

した表情で立ち上がった。

「我はまだ、空腹ではない。これより自軍に戻り、ヴィエイユ殿の動きを観察することにする」

「そうですか。それは残念です。いえ、皆でバーベキューをしようと思ったのですが……」

バーベキューという言葉に、ニケが反応する。やっぱり、大好きなんだな、それが。

「で、今回は、皆でバーベキューを楽しみながら、俺が鉄板焼きを作ろうと思っていたのですけれどね」

「義兄上、鉄板焼きとは、何でしょうか？」

「いや、単に鉄板を熱して、そこで料理をするのです。まあ、料理と言っても、肉や野菜、魚や貝を焼くので、基本的にバーベキューとそう変わらないのですが、それで肉を焼くと、肉汁が溢れてきて美味いのですよ。それに、コメやパスタを香辛料などを使って焼いた料理を作ろうと思っていたのですよ」

「ほう、それは面白そうだ。義兄上の手料理をいただくのは、かなり久しぶりです。是非、ご一緒させてください」

ヴァイラス公爵が笑顔でそう言って来る。ニケが鋭い目つきで俺を眺めている。

「鉄板で焼く肉と、バーベキューで焼く肉……どう違うのだ」

「それは……食べてみて比べていただくのがよいかと思います」

「……ならば、バーベキューの肉や野菜は、我が焼こう」

ニケはそう言って再びどかりと椅子に腰を下ろした。

第六百五十一話　勝てる戦い？

ロン・エスロテルは、教皇神殿の楼門の上に上り、眼下に犇めいている兵士たちに向かって、大声で鼓舞していた。

「我々はクリミアーナ教の教義によって育てられ、言わば、主神様はわれわれの母でもあり、姉でもある。その恩義に報いるに、このような忘恩的行為に出たのは何故であるか。かえりみれば、私は四十九年間、教国内で枢機卿としての待遇を受けた。その間、一片の打算もない教育を受け、又われわれも心からクリミアーナ教を愛し、もはやこの国の柵外にはない「真の理想郷」をここに夢みた」

ロン・エスロテルの声が響き渡る。その声に、兵士たちは息を殺すようにして、ただじっとその声に耳を傾け続けている。

「しかるに、前教皇、ジュヴァンセル・ヴィエイユは、我らが血と汗と涙で作り上げた理想郷をアガルタなどに売り渡し、私腹を肥やそうとした。しかもあの女は、この戦いにおいて、あろうことか、クリミアーナ教の紋章を掲げてアフロディーテにやって来た。これは、クリミアーナ教への冒涜、ひいては、主神様への冒涜に他ならない！」

兵士たちが頷いているのが、楼門の上からもよく見えた。ロン・エスロテルは、さらに声を張り上げる。

「きっと、奴らは、クリミアーナ教の紋章を盾に進軍してくるであろう。怯むな！　断じて怯んではならん！　敵の持つクリミアーナ教の紋章は、汚れた、奴らの手で汚されたものである！　斬れ！

燃やせ！　すべてを燃やし尽くしてしまえ！　その先鞭は私が付ける！　諸君たちは、その後に続くのだ！　裏切り者を殺せ！　殺すのだ！」

兵士たちから歓声が上がる。その光景を、ロン・エスロテルは満足そうな笑みを浮かべながら眺めていた。

「申し上げます！」

鎧を装備した若い枢機卿が、足早に近づいてきた。彼は息を整えながら、一気にまくしたてた。

「賊軍が港に上陸を始めました！」

「そうか、来たか」

港の方向に視線を向けると、確かに、続々と人が集まってきているように見える。ロン・エスロテルは眼下の兵士たちに向かって、再び声を上げた。

「いよいよ我々の聖戦が幕を開ける！　敵を十分に引き付けて、一気に叩くのだ！　攻撃の合図は、私が自ら放つ火矢だ！　全員、持ち場につけ！」

彼の号令一下、集まっていた兵士たちがゾロゾロと動き出した。

ヴィエイユたちの軍勢は港に上陸したものの、すぐに動き出すことはなかった。ロン・エスロテルはじっと港を眺めながら、傍に控えている者に声をかける。

「敵は必ず、この教皇神殿に向かって来る。私がヤツらに火矢を射かけたら、すぐに花火を上げるのだ」

若い兵士は恭しく一礼する。ロン・エスロテルの位置からは、海上に展開しているクリミア―ナ教国に従う国々は見えない。だが、彼は部下からの報告で、国々は相変わらず海上に停泊していることを知っていた。

一発目の花火が上がったにもかかわらず、国々は動くことはなかった。その事実にロン・エスロテルは少なからず衝撃を受けたが、やがて、彼らが日和見の立場を取ることを理解した。

相手はあの、ヴィエイユなのだ。万に一つ、我々が彼女に敗れた場合、ヴィエイユは、何のためらいもなく、自分を裏切った者たちを粛清することだろう。それは国レベルの事柄であっても、関係はない。今すぐに、とはいかずとも、将来的に激しい粛清の嵐に晒されることは、容易に想像することができた。

援軍に赴いた国々は、確実にロン・エスロテルたちが勝てると判断した場合にのみ、攻撃に移る腹なのだ。だが、それはそれで、ロン・エスロテルたちにとっては好都合であると言えた。

積極的に戦いに参戦し、ヴィエイユを捕らえるなどの大戦果を与えてしまっては、将来的にその国の発言力は強くなる。戦いの趨勢を自らが決することができれば、戦いに赴いた国々への恩賞を削ることができる。ある意味で、今の状況は彼らにとって都合の良い状況だった。

彼は沖に展開するアガルタの船に視線を向ける。敵ながら見事な陣立てだ。あの位置ならば、攻撃に参加することも、その場から撤退

することも自由自在に動くことができる。もし、海上に展開している軍勢が動き出したとしても、あそこであれば、攻撃の射程距離から逃げおおせることは十分に可能だ。逆に、ヴィエイユが有利と見て、攻撃に移ろうと思えば、一時間もかかることなく港に上陸し、攻撃態勢を整えることができる。斥候からの報告では、アガルタをはじめとする援軍は、未だ上陸する気配がないのだと言う。やはり敵方も同様に、積極的にヴィエイユに味方する気はなさそうだ。ということは、この教皇神殿での戦いが、今後の戦いの趨勢を決めるのだ。

ロン・エスロテルは、この戦いに勝つ絶対の自信があった。この教皇神殿の守りは鉄壁だった。もし、今、自分がいるこの門を突破されたとしても、神殿内は細い道が入り組んでいる作りになっている。しかも、ありとあらゆる場所から攻撃を加えられるような作りとなっている。ここを抑えている限り、彼らに負けはなかった。

ヴィエイユの軍勢が、坂を上ってこの門の前にやって来る。門を固く閉じて、彼らの侵入を防ぐ。敵の軍勢が坂を登り切ったところで、魔法と矢で攻撃を仕掛ける。この門が連なる城壁は、広場を囲むように扇形に作られている。そこから、魔法と矢を雨あられと降り注げば、敵は広場に累々と死体を築くことになるだろう。そうなれば、落伍し、逃げ出す兵士も出てくるだろう。そうなれば、敵はあっと言う間に瓦解する。兵士が壊走を始める。そのときが、攻撃に転ずる好機だ。城門を開き、全軍で逃げる敵を殲滅する。と同時に、花火が上がる。海上に展開している軍勢が我先へと動き出す。港の沖に展開しているアガルタらの援軍が、船首を返して撤退していく。そうなれば、勝利は確定したも同然だ。海上の軍勢が敵の退路を塞ぐ。あとは、大将たるヴィエイユを捕らえるもよし、本人が自決の道を選ぶのもよい。ただ、その身柄は確保せねばならない。

……あの女が、唯一抵抗できることと言えば、海にその身を投げることくらいだな。

ロン・エスロテルは、そこまで考えると、思わずクスリと笑みを漏らした。

「ロン・エスロテル様」

不意に名前を呼ばれて、思わず体を震わせる。声の方向に視線を向けると、厳めしい顔つきをした兵士が控えていた。

「ディールか」

男はスッと一礼すると、辺りを憚るように、小さな声で彼に話しかけた。

「一つ、気になることがありまして……」

「気になること？」

「放った斥候が、一人も帰って参りません」

「何？」

「賊軍が上陸したのを報告してきて以来、斥候が一人も帰って来ないのです」

「……」

放っている斥候は十数名に及び、それなりに訓練を受けた者ばかり

だ。しかも、彼らは教徒の衣装を纏わせて、完全に市井の人間として潜り込ませている。一人を除いて、全員が未帰還となるなど、到底信じられない話だった。

「もう一度、斥候を放て」

「……」

「敵軍の動きが、持ち場を離れることを難しくしているのかもしれん。もう一度斥候を放って、状況を確かめるのだ」

「承知しました」

男は一礼してその場を後にした。ロン・エスロテルは、港の軍勢に再び視線を向ける。先ほどと特に変わった様子は見られない。そのとき、敵に動きがあった。

港の軍勢がゆっくりと動き出したのだ。隊列を組んでいるのだろうか、丘の上からはやけに統制の取れた動きであるように見えた。ロン・エスロテルは、思わず拳を握り締める。

そのとき、周囲の兵士たちから歓声が上がった。一体何事かと周囲を見廻す。兵士たちの視線が港の方向にクギ付けになっている。再び視線を港に向けると、そこには驚愕の光景が広がっていた……。

第六百五十二話　心理戦？

まるで、何かの儀式が始まるような、そんな光景だった。

港から、旗を持った小規模の軍勢が小走りに教皇神殿に向かって来るのが見えた。ロン・エスロテルは瞬時に、それが総攻撃ではないことを見抜いた。それはまるで、使者がこちらに向けて動き出しているかのようにも見えた。

だが、ロン・エスロテルはその考え方をすぐに否定する。相手はあの、ヴィエイユなのだ。和議を結ぶなど、そんな考えは微塵も持っていないだろう。我々が死ぬか、さもなければ、ヴィエイユ自身がその身を散らすか、二つに一つしか道はないのだ。

こちらに向かってきた兵士たちは、少しずつその数を減じているように見えた。それもそのはずで、彼らは等間隔で並んだかと思うと、すぐに持っていた旗を高々と掲げた。それはまるで、ヴィエイユがこの教皇神殿に戻ってくるのを歓迎するかのような動きだった。

やがて最後となる二人の兵士が神殿前の広場に着いた。彼らは向かい合うと、全く同じタイミングで踵を鳴らして、持っていた旗を高々と掲げた。それは紛れもなく、クリミアーナ教国の紋章だった。

兵士たちは固唾を飲んでその光景を見守っている。神殿内は、不気味なほどの静寂に包まれていた。

……小癪な。

ロン・エスロテルは心の中で呟く。兵士たちにクリミアーナの紋章を見せつけることでその動揺を誘おうという作戦なのだろう。だが、同じ轍は踏まない。彼は部下に弓を持って来させ、そこに火をつけた矢をつがえて、直立不動の姿勢を取る兵士に向けて放った。

「……」

旗を掲げていた兵士が、声にならない声を上げながら、ゆっくりとその場に倒れ伏した。同時に、火矢の炎が男が持っていた旗に燃え移る。矢はどうやら首に当たったようで、兵士はほぼ、即死の状態であったようだ。

目の前で自軍の兵士が討たれたにもかかわらず、もう一人の兵士は動揺することなく、まるで人形のように旗を掲げ続けている。その様子はあまりにも不気味であった。

「何をしている、放て！　賊を討つのだ！」

ロン・エスロテルが周囲の兵士に向けて大声で叫ぶ。その声で我に帰ったのか、兵士たちはオロオロとしながらも弓に矢をつがえ、それを直立不動の姿勢を取る兵士に向けて放ちだした。

矢の数本が命中した。だが、それでも兵士はその場に立ち尽くしている。ロン・エスロテルは、さらに矢を放つように命じる。次々と矢が兵士に命中し、やがて男は、その場に倒れ伏した。

「見ろ！　クリミアーナ教に、主神様の教えに叛く賊の末路は、あの通りだ！」

ロン・エスロテルは、周囲の兵士に向けて叫ぶ。その直後、奇妙な

音が聞こえてきた。

ザッザッザッという音……まるで、軍隊が行進しているかのような音だ。その直後、広場の前に再び二人の兵士が現れた。彼らは先ほどと同様に向かい合って整列し、直立不動の姿勢を取ると、手に持っていた旗を高々と掲げた。彼らの足元には、先ほどの攻撃で命を失った兵士の亡骸が転がっている。彼らはそれに目もくれず、まるで人形のように同じ姿勢を取り続けている。

「何をしている！　討て！　討つのだ！」

ロン・エスロテルの命令に、兵士たちは再び矢を放つ。程なくして、数本の矢を受けた二人の兵士たちはその場に倒れ伏す。だが、しばらくすると先ほどの音が聞こえたかと思うと、再び二人の兵士が現れて、直立不動の姿勢を取り、旗を掲げた。

ロン・エスロテルは、眉間に深い皺を刻みながら、目の前の光景を睨みつけていた。確かに、敵の動きは不気味そのものだ。まるでアンデッドの如く、倒されても倒されても現れるその光景は、不気味以外の何物でもない。だが、兵士の数にも限りがある。そんなことを繰り返していては、先にヴィエイユの軍勢が尽きてしまう。

……我らの消耗を狙っているのか？

ロン・エスロテルは、はたと気付く。これはもしかして、我々の魔力や矢が尽きさせることが狙いではないのか？　一人の兵士を倒すのに、十数本の矢を使っている。そう考えると、兵士の半分を失う覚悟があれば、こちら側の矢は尽きる。兵士や魔術師たちも疲弊するだろう。その時を見計らって、総攻撃をかけるつもりなのだろうか。

……バカな。そんなバカげた作戦など、あろうはずがない。

ロン・エスロテルは、思わず首を左右に振る。いかにヴィエイユとはいえ、己に従った者たちに、人を人とも思わぬような扱い方をするだろうか。だが、すでに目の前では、四名の兵士たちの亡骸が転がっている。彼女はあの、ジュヴァンセル・セインの孫なのだ。あの教皇の血を引く者であれば、そのような作戦を取ることに何の躊躇もない可能性は十分にある。

「ロン・エスロテル様！」

突然、名前を呼ばれて彼は体を震わせる。動揺を表に出さないように注意しながら、声のする方向に視線を向ける。そこには、一人の若い兵士が立っていた。

「先ほど放った斥候が……一人も帰って参りません」

「斥候を放ってまだ、時間が経ってはいないだろう」

「しかし、敵軍の様子を確認したら、すぐに戻ってくるように命じたのですが……。今だ一人も帰って参りません」

「もう少し時間が経てば……」

「ロン・エスロテル様ぁ！」

兵士の絶叫にも似た声が響き渡る。声の方向に振り向くと、そこには、広場を全力疾走でこちらに向かって来る一人の男の姿があった。

「撃つな～！　サイ・ロンエスタルクだ！　撃つな～！　撃たないでくれ～！」

「あれは、斥候の一人です！　どうしてあのような……」

傍に控えていた男が、誰に言うともなく呟く。サイ・ロンエスタルクと名乗る男は、教皇神殿の門前までたどり着くと、まるで気の狂れたように門を叩いて、開門、開門と絶叫した。

「どうしたのだ。一体何があったのだ」

男を引見したロン・エスロテルは、呆れた表情を浮かべながら口を開いた。サイ・ロンエスタルクの表情は蒼白で、その体は小刻みに震えていた。相当な恐怖を体験したことは、容易に想像できた。

「こっ、これを……」

男は懐から一通の書簡を取り出した。そこには、ヴィエイユの直筆で、投降する者は罪は問わないが、抵抗する者は徹底的に排除すると書かれてあった。さらには、教皇に背く者は、その家族、親族まで天罰が下るであろうという一文が付け加えられていた。

ロン・エスロテルは、無言でその書簡を握りつぶした。

「みっ、皆さん！　武器を捨ててください！　降伏してください！　私以外の斥候は、全員殺されました！　このままでは、皆さんも同じ末路を辿ります！　悪いことは言いません！　皆さん、武器を捨てて降伏してください！　教皇聖下は、降伏する者を許すと言っておいでです！　皆さん！　悪いことは申しません！　降伏を！　降伏を！」

突然、サイ・ロンエスタルクが立ち上がって叫び始めた。彼は、周囲の兵士たちに取り押さえられながらも、叫ぶのをやめようとはしなかった。ロン・エスロテルは、無言のままゆっくりと腰に挿した剣を抜き払うと、それを叫び続ける男の喉笛に突き刺した。

「ガッ……ガハッ……こ……降伏……を……」

眼を見開き、まるで、断末魔の絶叫を挙げているかのような形相を浮かべながら、サイ・ロンエスタルクはその場に倒れ伏した。

兵士たちに抱えられるようにして、その亡骸は運び出されていく。そのとき、傍らに控えていた一人の男が、小さな声で呟いた。

「何と哀れな……。精神魔法で、操られていたのか……」

その言葉に、ロン・エスロテルは心の中で舌打ちをした。あのヴィエイユのならばやりかねん。そう思いながら周囲を見廻すと、兵士たちが明らかに動揺しているのが見て取れた。

彼は兵士たちを鼓舞しようと、再び楼門の上に上がろうとした。そのとき、港に集結していたヴィエイユの軍勢が、こちらに向かって動き出しているのが見えた……。

第六百五十三話　教皇聖下、バンザイ

ロン・エスロテルが、その動きを察知したのと同時に、見張りの兵士の絶叫にも似た声が響き渡った。

「来たぞぉ！　教皇聖下の軍勢が、動いたぞ！」

教皇神殿内の雰囲気がガラリと変わった。兵士たちが、これまでとは異なる緊張感に包まれているのがよくわかる。

「今こそ戦いのときが来た！　殺すのだ！　主神様を裏切った賊を、一人残らず殺すのだ！　武器を持て！　いつでも出られるように、戦闘態勢を維持しろ！」

ロン・エスロテルは、周辺の兵士たちを鼓舞しながら、楼門の上に向かう。なるほど、港にいた軍勢が、隊列を整えながらゆっくりとこちらに向かってきているように見える。ロン・エスロテルの心臓は鼓動を速めた。

……あの軍勢がこの広場に入ったその瞬間、奴らの命運は尽きる。雨のような弓矢と魔法の攻撃にさらされるのだ。敵の前衛を撃破することは問題ない。あとは、ヴィエイユがどこにいるのかを探し出さねばならない。ヤツのことだ。軍勢の中に紛れていることだろう。ヤツを討ち取ることさえできれば、あとは問題ない。一方的な掃討戦が始まるだけだ。この門を開くときは、ヤツの姿を捕らえたときだ。

ロン・エスロテルは、頭の中で追撃戦のイメージを繰り返し行う。

だが、相手はあのヴィエイユだ。どんな武器を隠し持っているのかはわからない。一応、そうした不測の事態も考慮に入れておくことにする。

ただ、彼には、ヴィエイユがこの教皇神殿に対して、積極的な攻撃を仕掛けることはできないと踏んでいた。ここには、スークレイの書をはじめとする、多くの宝物が収められている。この神殿を破壊することは、それらを失うということだ。さらには、この神殿自体が、クリミアーナ教国にとっての象徴以外の何物でもないのだ。それを破壊するということは、教徒の心の拠り所を奪うことにもつながる。先の戦いで、ヴィエイユが祖父、ジュヴァンセル・セインを討ったときも、この教皇神殿だけは攻撃を加えなかった。その時のことを知っているロン・エスロテルは、この神殿の防御を完璧なものとしている限りは、負けることはないと信じていたのだった。

実際、防御は完璧と言えた。負ける要素は何一つないと言ってよかった。

徐々にヴィエイユの軍勢がこちらに向かって進んできている。彼女との距離が近づくにつれて、ロン・エスロテルの心臓の鼓動が速くなっていく。早く来い。早くここまで登って来い……。彼は口の中がカラカラに乾きながらも、そんなことを考えていた。

だが、彼の期待に反して、その行軍の速度は遅速を極めた。まるで、ナメクジが這うように、ダラダラと進み、一向にこちらに到着することがなかった。

……まさか、油断させておいて、一気に速度を上げて教皇神殿を襲おうというのか？

そう考えれば、あの行軍の遅さも納得だ。この神殿広場に入る直前に突撃をかけ、我々の不意を突く。そうなれば、攻撃の手が緩まる。自軍の兵士の被害を最小限に抑えることができるだろう。

しかし、だ。いくら不意を突いたところで、この神殿に入るための門は固く閉ざされている。先の戦いの時のように、神殿内に裏切り者はいない。門は自力でこじ開けるほかはないのだ。

この門は特殊な加工をされている。木の中でも最も硬いワランの木を使ってできている。しかも、樹齢数百年の巨木を切り出して、そのままの形で門として使っているのだ。従ってその厚さも二メートル近くあり、そのために、物理的な攻撃はまず通らない。併せて、門の表面はプリルの石の粉末が塗りこめられていて、魔法の攻撃もレジストするようになっていた。言わば、鉄壁の門構えとなっていたのだ。この中にいる限り、ロン・エスロテルたちの負けはなかった。

じわりじわりと、ヴィエイユたちの軍勢がこちらに向かって進んできている。ちょうど、この教皇神殿まで半分の道のりに達したところだ。そのとき、ロン・エスロテルの耳に、なにやら歓声のような声が聞こえてきた。

その理由はすぐにわかった。何と、家の中に避難していたはずのアフロディーテの住民が外に出て、ヴィエイユたちを歓迎するかのように歓声を上げているのだ。ロン・エスロテルはわが目を疑った。

どうやって、アフロディーテの住民を味方につけたのか。今回の反乱は、ここ、アフロディーテの住民たちの協力があったればこその成功だったのだ。その住民たちが寝返るなどとは、想像すらしていなかった。ロン・エスロテルの頭の中は混乱した。

そんな彼らに追い打ちをかけるように、ここ、教皇神殿に通じる三つの道から、敵の兵士に引率されるようにして、アフロディーテの住民たちがゾロゾロとやって来た。細い道を一列になってこちらにやってくる姿は、まるで、この神殿に祈りを捧げにくるような光景に見えた。

瞬く間に、神殿前の広場は民衆で埋め尽くされた。その民衆を敵軍の兵士たちが引率しているらしく、気が付くと、神殿前の正門から、今、まさにヴィエイユが上ってこようとしている大通りまで、一筋の道ができていた。

あまりの手際の良さに、神殿内の兵士は声も上げずにただ茫然と、目の前の光景を眺めている。そのとき、ヴィエイユの本隊が丘を登って、この神殿広場に到着した。

兵士たちから、声にならない声が漏れる。何と、軍勢の先頭には、ヴィエイユ本人がいたのだった。

彼女は白い教皇服に身を包んでいた。まさに、教皇の就任式に着用したときと同じ衣装を着用していた。金で拵えた冠を被り、歴代教皇が儀式のときに身に付けていた金のメダル――神の涙――を身に付けていた。

それらは教皇神殿の地下に保管されているはずのものだった。一体、いつそれらは持ち出されたのか。いや、別の場所で新たに作ったのだ。ロン・エスロテルはその事実に気づいていたが、声を上げることができなかった。

ヴィエイユは神殿広場に足を踏み入れる前に一旦立ち止まった。そ

して、周囲に固唾を飲んで見守っている民衆をゆっくり眺めていた。やがて彼女は、スッと右手を挙げる。すると、後ろに控えていた兵士たちが、一斉にクリミア＝ナ教国の旗を掲げた。

それだけでない。その旗の後ろには、アガルタ、ヒーデータ、サンダンジの旗もひらめいていた。その旗が上がると同時に、神殿広場に通じる細い道からも一斉に旗があげられた。しかも、あげられた旗は、道ごとに、アガルタ、ヒーデータ、サンダンジと分けられていた。その中をヴィエイユはゆっくりとこちらに向かって歩き出した。

ロン・エスロテルからは、アガルタ、ヒーデータ、サンダンジの援軍が到着しているように見えた。アガルタ王・リノスもこの場にいるのではないか。サンダンジのニケや、ヒーデータの者も……。兵士たちに動揺が走った。教皇神殿からは、ヴィエイユがそれらの軍勢を従えているかのようにも見える。

「教皇聖下、バンザイー！」

突然、民衆の中から声が聞こえた。誰かが万歳を叫んでいる。その声は徐々に大きくなり、やがて、神殿広場はヴィエイユを讃える大歓声に包まれた。

……まるで、夢を見ているような光景だった。クリミアーナを危機に陥れたヴィエイユを、あの女を排除しなければ、この国の未来はないと、アフロディーテに住む者すべてが思ったからこそ、行動を起こしたのだ。まさかその民衆がそのヴィエイユを讃えるなど、ロン・エスロテルには、予想もしない出来事だった。

彼は首を激しく左右に振り、自らの思考を現実に引き戻そうとする。

そして彼は、矢を取って弓につがえ、ヴィエイユめがけて矢を放った。

しかしそれは、彼女のすぐ前で弾き飛ばされた。その瞬間、ロン・エスロテルはがっくりと膝から崩れ落ちた。

ヴィエイユの顔には、まるで、女神のような笑みが浮かんでいた……。

第六百五十四話　クリミアーナ教徒

ついに、ヴィエイユは教皇神殿の門前に到着した。だが、相変わらず門は固く閉じられたままだ。しかし、ヴィエイユに焦りの様子は見えない。相変わらず、勝利を確信したかのような笑みを湛えている。

一方、神殿内では、ロン・エスロテルが必死の面持ちで立ち上がろうとしていた。相変わらず広場からは、ヴィエイユを讃える万歳の声が聞こえてくる。

周囲を見廻すと、兵士たちが一様に不安そうな面持ちを浮かべている。その間も、伝令の兵士から次々と報告が入ってきていた。彼らの報告では、ヴィエイユは既に門の前に到着しているのだと言う。

「門の前に槍隊を整列させろ。整列が終わったら、門を開き、その瞬間、槍をヴィエイユに突き出せ。あの女の息の根を止めるのだ」

「しかし、ロン・エスロテル卿。お言葉ながら、教皇聖下におかせられては、何らかの結界が張られているものと思われます。槍隊の攻撃だけでは、通じぬものと推察します」

傍に控えていた若い枢機卿が口を開く。ロン・エスロテルは、血走った眼を彼に向けた。

「では、魔術師を配置して、槍隊の援護射撃を行うのだ」

「それも難しいかと存じます。おそらく、教皇聖下に張られている

結界は、アガルタ王が張ったものであろうかと推察します。で、あれば、魔術師の攻撃も防御するものと考えます」

「もういい！」

ロン・エスロテルは、腰に差している剣を抜き払うと、突然それを滅茶苦茶に振り回した。彼の周囲から人が離れていく。

「どいつもこいつも腰抜けばかりか！　貴様らはクリミアーナ教徒だろう！　クリミアーナ教徒だろう！　私と行動を共にするものはいないのか！　クリミアーナ教徒ならば、なぜ、自分を否定する教皇と戦おうとしないのだ！　自らを否定しようとする教皇に、正義の刃を振るおうとしないのだ！　それをしない限り、諸君は永久に救われないのだぞ！」

ゼエゼエと息を切らしながらロン・エスロテルは叫ぶ。彼は息を整えると、天を仰ぎながら大きく息を吸い込み、再び周囲に控える兵士たちに、落ち着いた声で語りかけた。

「今、門の前に居座る女は、アガルタ……このクリミアーナ教国を骨抜きにした国に従った者だ、ということを知らない者はあるまい。諸君の中に、俺と一緒に立つ奴はいないのか」

彼の話に、誰も反応する者はいなかった。兵士たちはただ、呆然と彼を眺め続けるだけだった。

「一人もいないんだな。それでもクリミアーナ教徒か！　それでもクリミアーナ教徒かぁ！」

ロン・エスロテルは、手に持っていた剣を鞘に仕舞うと、じっと目

を閉じて何かを考える素振りを見せた。そして、再び目を開けると、まるで慟哭にも似た声を上げた。

「諸君が、クリミア―ナ教国のために立ち上がらないと見極めがついた！　私の、クリミア―ナ教国に対する夢はなくなったのだ！　私はここで、私はここで、主神様の万歳を叫ぶ」

彼は楼門の手すりの上に上ると、そこから天に向かって大音声を上げた。

「クリミアーナ様万歳！　クリミアーナ様万歳！　クリミアーナ様万歳！」

彼は膝に手をついて、がっくりと項垂れる。肩が激しく上下している。兵士たちは固唾を飲んで、彼の背中を見つめている。

やがて、体を起こしたロン・エスロテルは、腰に差している剣を抜き払い、クルリと踵を返した。

「ヴィエイユには、あの女には、この私が正義の刃を振るう！　共に戦わんと思う者は、私の後に続くのだ！」

そう言って、ロン・エスロテルは、歩きだした。彼の後には三名の若い枢機卿が続いたが、他の兵士たちはただ、呆然と彼ら見守るだけだった。

神殿内でそんなことが起こっていることは、門の前にいたヴィエイユには伝わっていなかった。彼女はしばらくの間そこに立ち尽くしていたが、神殿内から何の反応もないことを見て取ると、ゆっくりと右手を挙げた。

「静まれ！　静まるのだ！　教皇聖下がお言葉を述べられる！　静聴せよ！　静聴せよ！」

ヴィエイユの傍に控えていた男が大声を上げる。その声につられるかのように、後ろに控えていた兵士たちが、口々に「静聴せよ！　静聴せよ！」と叫んでいく。

しばらくすると、神殿広場に集まっていた人々から万歳の声がやみ、広場は先ほどの喧騒が嘘のように静まり返った。ヴィエイユは、よく通る大きな声で、神殿内の兵士たちに向けてゆっくりと語りかけた。

「門を開けてください！　今、ここで、私に従うのならば、あなた方の罪は問いません。この私にも、落ち度があったことを認めます。しかしながら、あくまで抵抗するというのならば、あなた方はもとより、あなた方の親兄弟、親類縁者にいたるまで、罰を与えねばならなくなります。私は、そうは致したくありません」

ヴィエイユの声に、神殿内から反応はない。だが彼女は、さらに声を張り上げて、中にいる者たちに話しかける。

「さあ、門を開くのです！　これからもう一度、クリミアーナ教国を再建するのです！　昔日の、あの、活力に満ちたクリミア―ナ教国を、もう一度、皆で作り上げるのです！　そのためには、あなた方の力が何としても必要です！　さあ、門を開き、もう一度、皆と手を取り合うのです！　門を開くのです！」

そのとき、固く閉ざされていた門の中から、ドン、ドンと、何かを叩くような音が聞こえた。しばらくその場は静寂に包まれたが、や

がて、ゆっくりと神殿の門が開かれた。

誰も言葉を発する者はなかった。ただ、不気味なほどの静寂がその場を包んでいた。

やがてヴィエイユは、ゆっくりと神殿に向かって歩き出した。彼女に続いて、軍勢も神殿に向けて進み出した。

門に入った直後、ヴィエイユは目の前にロン・エスロテルが立ち尽くしているのを見つけた。彼は鞘から抜き払った剣を持って、ヴィエイユを睨みつけていた。彼女はゆっくりと彼に近づくと、無言のまま、そのすぐ横を通り抜けた。その瞬間、神殿を守っていた兵士たちは、次々と膝をついて頭を下げ、ヴィエイユに臣従の礼を取った。

ロン・エスロテルとその従者たちは、次から次へとやってくるヴィエイユの軍勢に、まるで押しのけられるようにして、道の隅の方に追いやられていった。そんな彼らの許に、一人の兵士がこちらに向かってきた。まるで風のような速さで足音を立てずに、男はやって来た。

鋭い目つきの男だった。ロン・エスロテルは、この男に見覚えがあった。

……ジレット？

ヴィエイユの親衛隊副隊長を勤めている男だ。だが、この男は基本的に敵国に潜入していることが多く、滅多に人前に姿を現す男ではなかった。やはり、この男が裏で動いていたのか……。で、あれば、これまでの行動がやけに準備がよかったのも頷ける。

そこまで考えたとき、ロン・エスロテルはガクリと膝を折った。

……体に力が入らない。これは、どうしたことだ？

ジレットの右手には、細い、千枚通しのような鋭利な刃物が握られていた。その刃物は、正確にロン・エスロテルの心臓を突いていた。

やがて、ロン・エスロテルはゆっくりとその場に倒れ伏した。ジレットは、彼の後ろの控えていた若い枢機卿たちを睨みつけると、ゆっくりと踵を返し、風のような速さでその場を去っていった。

やがて、ヴィエイユは教皇神殿に入り、その足で彼女は自室へと向かった。

そこは、自分がいたときと何ら変わらない状態だった。彼女は深く深呼吸して、部屋の空気を吸い込む。やっと、己がいる場所に帰ってきた。そんな思いが心の底から湧き上がる。

そのとき、バタバタとせわしない足音が聞こえたかと思うと、伝令の兵士が足早に彼女の許に近づいてきた。

「申し上げます！」

「どうしました？」

「沖合に停泊していた、アガルタ、ヒーデータ、サンダンジの船が、撤退を開始しました！」

「まあ……」

ヴィエイユはさも残念、と言った表情を浮かべながら、ゆっくりと首を振った。

第六百五十四話　クリミアーナ教徒（後書き）

アフロディーテ奪還編、終了です。また間話を数話挟んで、次章に移る予定です……。

第六百五十五話　好きよりもっと好き

「いや～いい湯だったな～」

心から癒された表情を浮かべながら、リノスは屋敷の廊下を歩いていた。この日はいつもと違って、広い風呂を一人で占領して、心行くまでゆっくりと湯船につかることができた。大抵は、子供たちと一緒に入ることが多く、皆を洗ってから、その後で妻たちと風呂に入ることが多かった。

皆でワイワイ言いながらの風呂もいいが、たまには一人で入る風呂も悪くないなと思いながら、寝室の扉を開ける。そこにはまだ、誰もいなかった。

今日は確か、リコの日だ……。そこまで考えて、リノスは思わず苦笑する。

そうだ、今からリコは風呂に入るのだ。彼女が寝室にいるわけはないのだ。

そんなことを思いながらベッドに入る。少し熱めのお湯に入ったので、まだ、全身が温かい。シーツの冷たさが逆に心地いい。

リノスの体の熱がじわりじわりとベッドに移っていくのを感じる。きっと、リコが風呂から上がって、ベッドに入ってくる頃には、ちょうどいい感じに温まっているのではないか。そんなことを考えながら、彼はトロトロと転寝を始めた。

「リノス……」

不意に名前を呼ばれて、フッと目を覚ます。見ると、ベッドの傍でリコが立ち尽くしていた。

ああ、いつのまにか寝てしまったのかと思いながら、彼はシーツを持ち上げて、彼女にベッドには行ってくるように促す。リコにしては珍しいことだ。あまりないことだが、リノスが先に寝入ってしまったときは、そのまま寝かせているのが常で、朝起きて、眠ってしまったと後悔することが多かったのだ。

リコはゆっくりとベッドに入ってきたが、そのまま横にはならず、その上でぺたりと座り込んでしまった。

「一つ、教えて欲しいことがあるのですわ」

「教えて欲しいこと？　何だい？」

「いつから、ですの？」

「何が？」

質問の意図がいまいち理解できず、リノスはゆっくりと体を起こしてベッドの上で正座をして、リコと向き合う。彼女は少し悲しそうな表情を浮かべている。

「いつから、一番ではなくなりましたの？」

「え？　どういうことだい？」

「今は、シディーが一番好きだと聞きました。いつから私は一番ではなくなりましたの？」

「ううー……」

思わず目をギュッと閉じて天を仰ぐ。だから言ったのに……。絶対に言っちゃダメだと……。

そうじゃないんだ、と説明しようとしたその瞬間、リコが堰を切ったように話し出した。

「いえ、別に怒っているわけではありませんわ。いつの日かそうなる日が来ると覚悟はしていました」

「いや、別に、そういう……」

「確かに、確かに、シディーは若々しいですわね。私もこのところ、少し年を取ったなと思っていたのですわ」

「いや、そんな……」

「お肌の張りもなくなってきましたしよく見れば小さな皺も出てきましたそれだけでなく肌の質も落ちてきたなと思いますし最近では少し太って来たなとも思っていたのですわそんな私とシディーを比較したら当然シディーの方が肌もきれいですし皺もありませんしなにより可愛らしいですからシディーに心が動いていくのがわかりますわただ気になるのはそれがいつからなのかということなのですわいえリノスを責めているわけではないのですわよそれがかなり前のことならばそれを気付けなかった自分の落ち度ですわただそれがここ最近のことならばもう少し私としても頑張らねばならないと思い

ますの別に何月何日から知りたいということではないのですわ凡そでいいのですわ大体のところ……」

「リコ、リコ、ちょっと……」

リノスは思わずリコを抱きしめる。少し強めの力で抱きしめながら、背中をさする。まずは、彼女を落ち着かせなければならない。だが、リコはリノスの予想を超えた力で、彼の腕を振りほどいた。

「聞いてくださいませ」

「聞く、聞くから落ち着いてくれ」

「いいえ。今夜だけはちゃんと聞いていただかなくてはいけませんわ。リノス、あなたは今、心の中で私のことを面倒臭い女だと思っていますわね？」

「うえぁ！？」

「わかっていますわ。はやくこの場から離れたい、と。ですから、私を抱きしめておいて、そのあと唇を奪い、服を脱がせてそのまま……そうしてしまえば、私は黙らせることができる。そう考えていますでしょ？」

「そ、そ、そんなことは、おっ、思って……」

「いますわね？　わかりますわ。でも、普段はいざ知らず、今夜はそう言う気分ではないのですわ」

「わかった。わかりましたから。まあまあ、待ってくださいまし。

ちゃんと、ちゃんと説明しますから」

リノスが両手を挙げて説得する。その様子に、リコはスッと居住まいを正した。リノスは、大きく深呼吸をすると、これまでのあらましを、まるで、噛んで含めるような言い方で説明を始めた。

「でも、それでは……ええ。……はい……それで……はい。……そ……はい」

リコが折に触れて口を開こうとするが、リノスはリコに言葉を挟ませずに説明を続けた。彼女は最初は怪訝そうな表情を浮かべていたが、やがて、何とも言えぬ表情になっていった。

「……それでは、あくまで、一つの例として、であって、本心ではなかった、と？」

「そうです。あくまで、一つの、一例として言っただけでありまして、それが、私の本心から申し上げたことではないのでございます。それにつきましては、彼女にご確認いただいて問題ございません。ただ、私と致しましては、その一例として述べましたことが、何故こうも独り歩きを致して、それがまるで私の本心であるかのようになっておりますのが、誠に不思議なことでございます」

「では、一度、シディーに確認しても、よろしいですわね？」

「ええ、ええ。是非、そうしていただきたいと存じます。まあ、これは、私の推測の域を脱しませんが、シディーにしましても、女性でございますので、夫から、それは例え一例であったとしましても、一番好きであると言われますと、やはり嬉しいものではなかったかと推察致すのでございます。その点につきましては、同じ女性であ

るリコもわかっていただけるものと思うのであります。その点をどうぞ、お含みおきいただきまして、お尋ねいただければ幸いかと存じます」

リコはしばらくじっとリノスを眺め続けていた。その沈黙に耐えかねるように、リノスは口を開く。

「あくまで、あくまで、私の一番好きなのは、リコです。リコが、一番、好きなのです」

「……何だか、無理やり言わせたみたいで、イヤですわ」

「そんなことはありません！　いや、いい機会でした。ここ最近、一番好きだって言っていなかった俺も悪かったのです。いや、申し訳ありませんでした。こういうことは、サボってはいけません。俺が毎日リコに一番好きだよと言っておけば、リコにこんな疑いを持たれるようなことはなかったのです。これからは、もっと、自分の気持ちを言っていきたいと思います」

リコの眼から一筋の涙が零れ落ちた。それを見て、リノスはビクンと体を震わせる。

「……いつの日か、いつの日か、リノスから愛想を尽かされる日が来ると覚悟していたのですわ。それが、まさか、今になるなどとは思っていなかったのですわ」

「いや、全然、愛想は尽きていないよ。今でも一番好きですよ」

「ううう……」

リノスはもう一度リコを抱きしめて、その背中を優しく撫でる。

「リコはよくやってくれている。本当に感謝しているんだ。俺は本当にいい妻を持ったと思っている」

「……」

リノスは一度体を離すと、リコの眼をじっと見て、再び口を開いた。

「リコ、好き……好きより、もっと、好きだ」

その瞬間、リコの顔がクシャクシャになって、彼女は声を殺して泣き出した。リノスは再び彼女を優しく抱きしめた。

リコの体を抱きながら彼は、泣いたリコも可愛らしいなと思いつつ、彼女の不安が和らいだ様子に、ホッと胸を撫で下ろすのだった……。

第六百五十六話　お母さんの朝食

リノス家の中で、最も早く起きるのがペーリスだ。彼女はこの屋敷のコック長であり、この屋敷のメニューの決定権を持っていると言って過言ではなかった。

彼女は毎朝六時に起床する。起きると、季節を問わず、冷水で顔を洗ってからパジャマを着替える。衣服を整えると、リノスが用意した転移結界に乗って市場に向かう。彼女が主に向かうのは、帝都の市場とラマロン皇国の市場だった。前者は肉を、後者は主に生魚を購入するのだった。この日、ペーリスが向かったのは、帝都の市場だった。

「おはよう、ペーリスちゃん」

「おはようございます！」

彼女がこの帝都の市場に通うようになってから、かなりの時間が経つ。以前は、この市場で様々な食材を購入していたが、ヤンノーリが野菜類を、彼の畑で獲れた新鮮な、旬の作物を届けてくれるようになって以降は、敢えてこの市場で肉以外の食材を購入することは減っていたのだった。

ペーリスは市場に着くと、挨拶を交わしながら、一軒一軒店を廻っていく。店側も、その日に仕入れた最高の肉を用意してペーリスを待っている。彼女は、目の前に置かれた肉に鼻を近づけて、クンクンと匂いを嗅いでいく。

見ると、店主の額にねばい汗が滲んでいる。これは、どこの店でも見られる光景なのだ。と、いうのも、ペーリスの目利きは正鵠を射ており、決してごまかすことはできないでいた。過去には、彼女を欺き、粗悪な品物を売りつけようとした店も少なからずあったが、ペーリスは決して判断を誤ることはなかった。それどころか、そうした店には二度と足を向けなかったために、そうした店は、自然に客足も遠のき、最終的に淘汰されていくのだった。

「うん、これとこれにします」

「まいどありー。金２００だよ」

「では、これで」

ペーリスは、よいと判断した食材に金は惜しまず、すべて店主の言い値で購入していた。それがどれだけ高額であったとしても、だ。ただし、彼女が法外な値段であると判断した場合は、そのときは購入するものの、その次からは足は遠のいた。そうしたこともあって、帝都の市場、とりわけ肉を売る店に関しては、適正価格で上質なものを売る店ばかりになっていたのだった。これはラマロン皇国でも同じであり、そうした意味で、ペーリスの存在は、粗悪な店を排除する役割を自然と担うことになっていたのだった。

ペーリスは次から次へと店を廻り、食材を購入していく。そして、それらを無限収納に納めると、満面の笑みを浮かべながら市場を後にした。買い物をしている時間は、わずか三十分にも満たなかった。

「ただ今帰りました……」

家人を起こさないように、少し遠慮がちに声をかけながら屋敷に入

ると、キッチンで誰かいるのを発見する。よく見ると、それはメイだった。

「ああ、メイちゃん」

「おはようございます、ペーリスさん」

メイは挨拶を交わしながら、竈から大きな壺のようなものを下ろそうとしていた。その光景を見て、ペーリスはすべてを察する。

「今日はお休みですか？」

「はい。少し研究が煮詰まってしまったので、今日はお休みにしました」

「そうですか。今、お肉を買って来ましたので、ちょっと焼きましょうか」

「そうですね、お願いします」

ペーリスがキッチンの奥に消える。メイは壺をテーブルの上に置いて、ゆっくりと蓋を取った。そこには、炊き立てのご飯があった。

彼女はその壺をひっくり返して、ご飯を取り出す。その後、彼女は野菜を取り出して、ザクザクと刻んでいく。ちょうど、ペーリスが肉を焼き始めたために、キッチンの中には、美味しそうな香りが漂っている。

「ペーリスさん、これ、どうでしょうか？」

メイがペーリスに立った今作った野菜の料理を小皿に載せて持っていく。それを一口食べたペーリスは、満面の笑みを浮かべてコクコクと頷く。

「うん、塩味が効いて、美味しいと思います」

「では、今日はこれを使います」

「あと、オオウネ魚の身も使いますか？」

「そうですね。アリリアが好きですので、それも使います」

そんな会話を交わしながら、メイは先ほどのご飯を置いているテーブルに向かう。彼女はそれに手を伸ばすと、せっせとおにぎりを作り始めた。

周囲には焼きあがった肉をはじめ、ペーリスが色々な具材を用意して並べていく。それに目をスッと伏せて礼を言いながら、メイは黙々とおにぎりを握っていく。

彼女にとってこの作業は、ただ無心になることができるため、頭の中をリセットするのにとても都合がよかった。その上で、具材の種類のバランスを考えながら作業をしていると、堪らなく楽しくなってくるのだった。

「わぁ！　今朝はおにぎりだね！」

突然、子供の頓狂な声が響き渡った。声の主はイデアだった。彼はダイニングから出ると離れに向かい、起きてきたばかりの兄弟たちに朝食のメニューを告げる。

「ええ？　おにぎり？　何が入っているの？」

パタパタと走り寄って来たのはアリリアだった。目をキラキラ輝かせながら、母であるメイの手元を見つめている。そんな彼女に、メイは優しげな微笑を返す。

メイの作るおにぎりは、子供たちにとっても大好評だった。皆の好きな具材が入っているのもさることながら、どんな具材が入っているのかは外見からはわからないために、子供たちは、ある種のゲーム感覚で朝食を楽しむことができるのだった。

加えて、この朝食は、普段行儀作法に煩いママ――リコレットの小言がほとんどないひと時でもあった。普段は、手づかみで食べようものなら、ママからたっぷり小言を言われるのだが、このおにぎりに限っては、手づかみで食べることを許されていた。子供たちにとっては、気軽に食事が楽しめる機会でもあったのだ。

ドヤドヤと皆がダイニングに集まってくる。朝食がおにぎりだと聞いて、皆、笑顔になっている。手伝いましょうと言って、ルアラやフェリスがキッチンに入っていく。その後からエリルが入っていく。

フェリスが大皿に盛られたおにぎりをキッチンから運び出してきた。子供たちから歓声が上がる。その後ろから、ルアラとエリルがサラダなどが盛られた皿を持って、テーブルに手際よく並べていく。そして最後に、残りのおにぎりと肉と野菜を焼いた料理を持って現れた。それを待っていたかのように、リノスとリコがダイニングに入ってきた。

「おお、今朝はおにぎりか！　よかったな、みんな」

リノスの声に、子供たちが両手を挙げて応える。その光景をリコや他の妻たちが、笑顔で眺めている。

「さあさあ、席につきましょう」

リコの一声で、皆が席に着く。そして、リノスの声で、皆で声を合わせていただきますと言って、リノス家の朝食が始まる。

「あっ、お肉だ！」

「お野菜だ！」

子供たちから声が上がる。それぞれ好みが違うため、皆で、中に入っている具を見せ合って、その見分け方などを話し合っている。その中でも、フェリスが一番見分けるのが上手なようだ。

「どうしてフェリスお姉ちゃんはわかるの？」

「エヘヘ、お姉ちゃんはお鼻がいいからわかるんだよ」

「じゃあ、何も入っていないのはどれ？」

「う～ん、これかな？」

イデアは何も入っていないさっぱり系が好みだ。フェリスに教えられたおにぎりを手に取って頬張ると、彼の好みのおにぎりだ。子供たちが次々にフェリスに話しかけていく。

「こらこら～お姉ちゃんに聞くのは禁止」

リノスが意地悪そうな笑みを浮かべながら子供たちを諭す。リコも妻たちも、それぞれ手づかみでおにぎりを頬張っている。その光景を見ながら、メイは何とも言えぬ幸せな気持ちに浸るのだった。

こうして、リノス家の一日は始まっていく……。

第六百五十六話　お母さんの朝食（後書き）

Ｃｏｍｉｃブースト様にて、コミック版最新話、第二十五話後編が無料公開中です。８／３　１２：００まで無料で読めますので、是非、チェック下さい！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６

次話から新章突入です！

第六百五十七話　問題児

男はゆっくりと席に着いた。それを待っていたかのように、目の前にサラダとスープが供される。

「……」

男はジロリと並べられた料理に視線を向ける。いつもと変わらぬ朝食のメニューだ。彼はスッと顔を上げる。その視線の先には、すぐ傍で朝食を摂る息子の姿があった。

貧乏ゆすりをしながら、まるで突っ伏すようにしてスープを飲んでいる。子供の頃から行儀よく、姿勢を正して食事を摂るように躾けてきたが、齢二十五を超えてもこの有様だ。男は毎朝繰り返されるこの光景に、辟易としていた。

この男の名前は、ロース・クエンツと言い、バナリスト帝国皇帝に仕える者だった。長い白髪を後ろでまとめ、立派なひげを蓄えた威厳のある風貌。細面ではあるものの、顔の青白さがその迫力を増している。

代々、このロース家は皇帝の毒味役を担う家柄で、その中には実際、命を落とした当主もいる。中には、当主の座に就いて僅かひと月後に、毒味を行った後で命を落とした者もいる。その際は、後を継いだ者がまだ幼児であったため、帝国が大いに混乱したこともあった。こうしたこともあって、ロース家では皇帝の命令により、単に毒味をするだけでなく、皇帝を暗殺しうる毒の研究も行っていた。

現当主である、ロース・クエンツの許にはありとあらゆる毒物が保管され、長年において研究に携わってきた。その研究成果は歴代当主随一と評価され、言わば、世界一の毒のスペシャリストと言って差し支えなかった。

彼はその眼と鼻と舌で、どんな毒物も見抜いてきた。とりわけ先代の皇帝は、領土拡張の野心が高く、積極的に近隣諸国に対して侵攻を行った。そのため、命を狙われることも多く、ロース・クエンツのお蔭で三度も毒殺から免れ、天寿を全うすることができていた。

先の皇帝が崩御し、現皇帝の体制に移行してのちは、周辺国との協和路線に大きく舵を切ったため、毒殺の心配はかなり低いと言えた。だが、ロース・クエンツは一切油断をしなかった。彼は一点一画を疎かにせず、真摯に己の職務と向き合い続けていた。そのため、皇帝はもちろんのこと、周囲に仕える家来たちからも信頼され、彼は帝国内でも強い発言権を持っていた。

一方、その息子であるロース・アルベは、父とは真逆の人物だった。幼い頃から母に甘やかされ、その母がこの世を去ってのちも、ロース家に仕える者たちから、坊ちゃん坊ちゃんと育てられたため、品性の欠けた男に成長していた。

そうした家来たちは今、ロース・クエンツによって全員遠ざけられ、父自らの手によって再教育が施されていたが、アルベの様子は一向に改善されることがなく、むしろ、父の前では卑屈に振舞うようになっていた。

クエンツは焦っていた。自分にもしものことがあれば、このロース家は滅びる。幸い、アルベは毒物に関しての興味はあり、それなりの知識を備えてはいたが、その品性の欠けた振る舞いは到底、皇帝

の傍で仕えることは難しいと言えた。

そんな父の視線に全く気付くことなく、アルベは、せかせかと料理を口の中に運んでいた。相変わらず右足をせわしなく動かしている。見かねたクエンツは、その振る舞いを窘めるかのようにして、少し大きめの咳ばらいをした。

ゆっくりとアルベの視線がこちらに向けられる。彼は、ビクビクした様子で父を眺めている。

「何度言ったらわかるのだ。食事のときは、体を動かしてはいけない。ゆっくりと、しなやかに、優雅に食事を摂るのだ。お前は、何年この家で暮らしているのだ。いい加減に改めないか」

もう、何度、この言葉を言っただろうか。そう言ったところで、息子に効果がないことは父であるクエンツはよく知っていた。だが、それは父として、親として、どうしても言わねばならぬことであった。

アルベは目を閉じたまま、じっと俯いている。彼としては反省の態度を取っているつもりなのだろうが、ただ、この態度はもう、何度も繰り返されてきたものだった。彼はただひたすら、そうやって父の怒りが過ぎ去るのを待っているだけだった。

一体どこで育て方を間違えたのか。息子の様子を眺めながらクエンツは心の中で呟く。この世を去ったもののことを言うのは憚られるが、やはり、妻に教育を一任したのがいけなかったのかもしれない。自らも、息子の教育に携わるべきだった。だが、そう思ってみても、過ぎ去った時間が戻るわけではない。いかに亡き妻や自分を責めたところで、今の状況を変えることなどできないのは、クエンツ自身

が一番よくわかっていた。

彼は息子の姿を見つめながら、心の中である決断を下した。この、ロース家に養子を迎えようと。

幸い、クエンツには二人の弟子がいた。その一人であるキスミという男に、彼は目をかけていた。この男ならば、自分の後を立派に継ぎ、この家を栄えさせてくれるだろう。おそらくキスミはアルベに気を使って、この話を断るだろう。だが、この家のことを考えた場合、それが最も適当と言えた。クエンツは、何としてもキスミにこの話を受けるよう説得しようと、固く心に決めた。

彼はやっとのことでスプーンを取って、目の前のスープを掬い、それを口元に持っていった。毎朝供されるコーンスープだ。コーンの美味さがよく引き出されている。先ほどから色々と考えすぎてしまったために少し冷めてしまったが、それでも十分に美味いスープであると言えた。

これはロース家に古くから仕えているコックのミーゼルの腕に他ならない。相変わらず彼はいい腕をしているなと思いながら、クエンツはフォークに持ち替えて、今度はそれでサラダを食べ始めた。

新鮮な野菜の旨味が口の中いっぱいに広がる。そのとき、彼はちょっとした胸やけを覚えた。

反射的にフォークを置き、顔を上げる。

「旦那様、いかがされました？」

給仕を担当しているバルハが心配そうな表情を浮かべている。クエ

ンツは右手を挙げて、問題ないと彼に伝える。

「いや、何でもない」

「……」

クエンツは再びスプーンを取ると、それでスープを飲み始めた。何故か、体にちょっとした悪寒が走る。彼は再びスプーンを置き、顔を上げる。

「……旦那様？」

「……いや、何でもない。少し、体が、な。疲れているのかもしれぬ……ヴォエ」

再び胸にむかつきを覚えた。先ほどよりも強い胸やけだ。思わずあらぬ声を上げてしまった。これはいけないと、クエンツはナプキンを手に取り、それを素早く口元に持っていく。バルハが心配そうな表情でこちらを覗き込んでいる。彼を心配させてはいけない、と、右手を挙げようとしたが、右手は挙がらなかった。

クエンツは胃の中から、まるで熱湯のような熱いものが湧き上がってくるような感覚を覚えていた。腹が焼けるように熱かった。いったいこれは、どうしたことだ……。そんなことを考えながら、彼の意識は遠くなっていった。

「旦那様！　旦那様！　旦那様！！」

バルハがオロオロしながら、クエンツの体を揺するが、その体はピクリとも動かなかった。その様子を見て、息子のアルベがゆっくり

と立ち上がり、父の許に近づいていった。

すでに父は目をカッと見開いたまま、固まっていた。もはや父がこの世にいないのは、誰の目から見ても明らかだった。

アルベは踵を返すと、スタスタとその場を後にした。背後からバルハが自分の名前を呼んでいたが、彼はその声には一切応えなかった。

足早に自室に戻り、鍵をかける。両手で口元を抑えながら、その場に蹲る。彼の肩は、小刻みに震えていた。

「つ……ついに、ついにできたぞ、究極の毒薬が。完全に……無味、無臭……。ぼ、僕は父さん……父さんを、超えた……。ついにやったぞ。ついにやったぞぉぉぉぉ！」

アルベはそう言いながら、ウヒヒヒヒと気味の悪い笑い声を上げた……。

第六百五十八話　見えない敵

その日を境に、アルベの姿が屋敷から消えた。父が残した金と、研究のために保存されていたいくつかの毒物を持って。

毒味役のロース・クエンツが死去したことは、バナリスト帝国内に大きな衝撃を与えた。だが、毒味役にはクエンツの弟子であるキスミを就任させることで、帝国の最大の懸案は回避されていた。

帝国内では、消えたアルベのことを心配する者も少なからずいた。しかし、積極的に彼の行方を追うことを主張する者は皆無だった。そして、アルベの姿が消えてひと月も経つと、彼のことを考える者は、誰もいなかった。

そんな彼がヒョッコリ姿を現したのが、隣国であるマトグラフ帝国だった。彼は父の名を語り、極秘の話があると言って、帝国の執政であるマス・イオンの許に現れた。形式的に父、ロース・クエンツが亡くなったことに対して哀悼の意を示すイオンの言葉を遮るようにして、彼は早口でまくし立てた。

「この国に、毒物が持ち込まれている。手を打たないと、大変なことになる」

突然の話に、マス・イオンは少なからず動揺したが、それを表に出すことはなく、努めて冷静にアルベに問いかけた。

「毒物……でしょうか。具体的には、どのような？」

「人が、大量に死ぬ毒だ」

「ほう」

「私は、その毒の……解毒剤を、作ることができる」

「一体誰が、そのような毒物を我が国に？」

「サルメだ」

「サルメ？」

「父の弟子であった者だ」

「そのサルメ……殿が、何故、我が国にそのような毒物を持ち込み、人を殺そうとなさるのか？」

「それは……とにかく、あの男は、この国で悪事を働こうとしているのだ。このまま放っておけば、多くの人が死ぬことになる。早く、解毒剤を作らねばならない。だが、それには金が要る。解毒剤を作るために、金五百を用意してもらいたい」

「……いきなりの話で、少し当惑しております。よしんば、毒物が我が国に撒かれるとして、その解毒剤はどのようなものでしょうか？」

「そんなことは……素人のあなたに説明しても、わからないことだ」

「そうですか……。毒物が撒かれれば、大勢の者が死ぬと言われましたね？　で、あれば、その解毒剤を大量に作る必要がありますね

？」

「そうだ。そのために金が要るのだ」

「なるほど、よくわかりました。しかし、大量の解毒剤を作るのに、お一人では大変なことでしょう。我が国にも優秀な薬師がおります。その者たちを遣わしましょう。その者たちと共に、解毒剤を作っていただきましょう。もちろん、資金は提供します」

マス・イオンの提案を、アルベは言下に否定した。この解毒剤は、自分を置いて作ることができないと言い切ったのだ。製造方法が確立していれば、ある程度の知識を持った者であれば製造することはできないのかと問うマス・イオンに、アルベは声を上げて反論した。

「何度も同じことを言わせないでもらいたい！　この解毒剤は、私でしか作ることはできないのだ！」

アルベはそう言って、席を蹴るようにして立ち上がり、その場を辞した。

彼はマス・イオンの屋敷を出たその足で、マトグラフ帝国の国境に向かった。後ろを何度も何度も振り返りながら、真っすぐに南に向かって歩き続けたのだった。

歩きながら彼は、どうやったら効率よく金を稼ぐことができるのかを考えていた。おそらく、マス・イオンのような持っていき方では、簡単に論破されてしまうだろう。下手をすれば、疑いをもたれて命を奪われるかもしれない。そうならないためには、どうするべきか。

「やるしかないな」

後ろを振り返りながら、アルベは誰に言うともなく呟く。

彼は自由に生きたかった。誰にも何も言われるでもなく、自分が思ったことを思い通りに生きてみたかった。それは誰もが一度は思うことではあるが、それをするためには相応の努力と、周囲を納得させるだけの実力と、それなりの運が必要であるものなのだが、このアルベは、そうしたことは一切考慮に入れることはなかった。

これまでの自分の人生は、抑圧と批判の日々だった。やりたいことはやらせてもらえず、些細なことで毎日のように怒られてきた。母や爺やが傍にいたときは、まだ自分のことを理解してくれる人がいたので、救いはあった。だが、母は既にこの世になく、爺やや彼に仕える者たちは、父によって遠ざけられてしまった。そのときの絶望感は、到底言葉で表せるものではなかった。

それからというもの、彼は常に父の眼におびえる生活を送らねばならなくなった。彼は父親が苦手だった。いつも泰然自若として、背筋を伸ばしている父。皺ひとつない服を着こなし、家でも優美に、優雅に振舞い続けた父。そんな父の傍には五分といることができなかった。

父が自分を疎んでいたことは、よくわかっていた。教えたことが教えた通りにできない不肖の息子と思っている。それはよく理解していた。ただ、アルベにも言い分があった。

彼は父の前に出ると、どうしても体の震えが止まらなかった。本人としては、必死でそれを抑えようと努力していたのだが、どうしても足の震えは止まらなかった。そんな自分の姿を、父は失望の眼差しで見つめていた。あの視線に晒されると、どうしても体が前かが

みになってしまう。父の言う、優雅に、優美に振舞おうとすればするほど、体は硬直していくのだった。

しかし、だ。私は父を超えたのだ。

そう思うことで、アルベの心は驚くほどに軽くなった。自分が作った毒は、父も見抜くことができなかった。どんな些細な違和感も見逃さなかった父の眼と、舌と、鼻を凌駕したのだ。この毒を見抜ける者は、この世にはいないのだ。

この毒薬を使い、大いに金を儲けてやる。アルベは足に痛みを感じながら、そんなことを考える。やるならば、効率的に金を儲けるべきだ。稼ぐだけ稼いだら、どこかに身を隠す。そこで、誰にも邪魔されない生活を送るのだ。美味い物をたらふく食い、美女を侍らせて、楽しく暮らすのだ。

アルベの脳裏に、何人もの裸の女性が跪いている光景が描き出された。鼻の穴が自然と膨らんでくる。

そのとき、背後で鳥が数羽飛び立つ音が聞こえた。

「うわぁ！」

思わず大声を上げ、その拍子に前につんのめるようにして転んでしまった。

素早く立ち上がって、周囲を確認する。後ろからは誰もついてきていない。だが、鳥が飛び立ったのだ。何事もなければ、鳥は飛び立つはずはなかった。もしかして、追手がすぐそこまで迫っているのかもしれない

「なっ、何だ……何だよ……」

慌てて立ち上がると、彼は小走りに走り出した。自分を追って来ている者は何者だろうか。剣術に長けた者か、魔法に長けた者か……。だが、それがどんな者であったとしても、今、ここで死ぬわけにはいかなかった。彼は痛む足を必死でこらえながら、さらに南に向かって走った。

しばらく走ると、街の光が見えてきた。彼はそこに向かって全速力で走った。

着いたのは、小さな町だった。広場には多くの露店が出ていて、人々で賑わっていた。アルベは、店の一つに近づいていった。

「いらっしゃい！」

「はあ、はあ、はあ……」

「どうしたんだい？」

「ここは、どこだ？」

「何だい、冒険者かい？」

「ここは、どこなんだ？」

「アラバだよ」

「アラバ……」

ちょうど、隣国との中間地点だった。国境までまだまだ距離がある。

「宿屋なら、そこだよ」

店主の男は、クイッと顎をしゃくる。アルベはヨロヨロと宿屋に向かって歩き出した。

彼は宿の中で一番安い部屋に泊まった。決して、自分がこの宿にいることを口外しないことと、誰も部屋に近づけないように宿屋の主に釘を刺して、取るものも取り敢えずベッドに倒れ込んだ。

まだ足は痛む。早くこの国を出なければ……。そんなことを考えながら、彼の意識はゆっくりと薄れていった。

第六百五十九話　何で私が……

目が覚めると、部屋は明るかった。すでに朝を迎えているようだった。アルベは、ゆっくりと体を起こす。

「イテテ……」

足と腰に、突っ張るような痛みを覚える。筋肉痛だった。ベッドに腰かけた状態で、大きなため息をつく。ゆっくりと立ち上がるが、体を動かすたびに痛みが走る。

やっとのことで扉を開けて、部屋の外に出る。冒険者だろうか、獣人たちがドタドタと廊下を歩いてくるのが見えた。彼らは、アルベを一顧だにせずにその場を通り過ぎた。その後ろ姿は、希望と躍動感にあふれているように見える。アルベは、思わず小さなため息をついた。

私も、あんな風に自由に生きたかった。そう思ったその瞬間、彼はハタと自分の境遇に気が付く。そうだ。あの父は死んだのだ。この手で葬ったのだ。もう、私は彼らと同じ、自由の身なのだ。

そう考えると、心が軽くなった気がした。彼は、思うように動かない足を何とか動かして階段を下りると、食堂らしき景色が目に入った。肉の焼けた美味そうな香りがする。その瞬間、激しい空腹感を覚えた。

まるで、吸い寄せられるようにして食堂に入る。そこで彼は初めて、今が昼食の時間であることに気が付いた。カウンターには初老の男

性が、まるで周囲の客を威圧するかのように、鋭い視線を向け続けていた。その前には、先ほど自分の前を通っていった獣人たちが控えていた。一体何をしているのかと眺めていると、彼らはトレイに載せた食事を持って空いている席に座った。

そのすぐ後ろに、若い冒険者風の男が、トレイを持って男性の前に進み出た。トレイの上には空の容器がいくつか乗せられていた。男性は、鋭い視線を男に向けながら、大きなスプーンのようなもので、慣れた手つきで空の容器に食事を盛り付けていった。どうやら、ここでは、あの男性に食事を盛り付けてもらわねばならないらしい。

アルベはすぐ近くにあったトレイを取り、そこに、空の容器をいくつか乗せて、あの男性の許に向かう。次から次へと料理が皿に盛られていく。だが、すべての皿に料理が盛り付けられることはなく、男の動きが止まる。アルベは思わず男の顔を睨みつけた。

男は鋭い視線をアルベに向けたまま、クイッと顎をしゃくった。お前に食わせるメシはこれ以上ない、と言わんばかりの態度だった。

無性に腹が立った。だが、力と力の勝負ではアルベに勝算はなかった。彼はすごすごとその場を後にした。

トレイを持って、空いている席に腰を下ろす。先ほどの獣人たちのすぐ近くの席だった。彼らはこれからどの町に向かうかを話し合っているようだ。獣人同士だからか、皆、楽しそうに会話を交わしている。その光景を見て、アルベはたまらなくなった。こんな仲間が欲しいかったのだ。まさに、彼が望んだ光景がそこにあった。

彼らとの距離はわずか、数メートルしか離れていない。しかし、心の距離は数千キロ以上だ。そんなことを考えながら、食べ物を口に

運ぶ。

不味くはない。だが、美味くもない食事だった。それでも、十分に腹は膨れた。

アルベは立ち上がると、体の痛みを我慢しながら部屋に向かう。そして、再びベッドに寝転がると、ぼんやりと天井を眺めた。

彼は少し迷っていた。当初の予定では、井戸に毒を投げ込む予定だった。町中が騒ぎに包まれるのを利用して隣国に逃げるつもりだった。もし、それをしてしまえば、あの獣人たちも死ぬかもしれない。彼らの命を奪えば、もう二度と、自分が望んだ事柄は手に入らないような気がしていた。気心の知れた仲間、温かい家族……。そんなものは金と名声が手に入れば、いくらでも手に入るものだ。もう一人の自分が心の中でそう囁いている気がする。実際、父がそうだった。多くの人に囲まれ、いつも美女を侍らせていた姿……。まさしく、父か金と名声の力で手に入れたものだ。あんな風に私もなるのだ……。

そんなことを考えていると、再び眠気が襲ってきた。アルベは考えるのをやめて、その睡魔に身を任せた。

◆　◆　◆

目が覚めたのは、夜だった。

体を起こして、周囲を見廻す。相変わらず体に痛みは感じるが、先ほどよりは少しマシになっている気がした。体が痛みになれたのかもしれない。そんなことを考えながら、ゆっくりとベッドから出る。

窓際に立って外を見る。そこには、満天の星空があった。思わず窓を開けて、身を乗り出すようにして空を眺める。

ひときわ光る一つの星があった。確かあれは、北を表す星だ。こんなにもくっきりと見えるのは珍しい。彼はしばし、星空の美しさに見惚れた。

不意に、今すぐこの宿を離れねばならないという感情が沸き起こった。マス・イオンの追手から逃れねばならないことを思い出した。人目を忍んで移動するには、打ってつけの状況だった。

彼はカバンを取り出すと、中から金貨を二枚取り出し、それを無造作にベッドの上に放り投げた。これだけあれば、あの店主も文句はあるまい。そんなことを思いながら、カバンを背負うと、ゆっくりと扉を開けた。

シンと一つの物音もしない静寂と深い闇があった。ふと見ると、階段に小さな明かりが灯っている。アルベは足音を立てないようにして廊下を進み、階段を降りる。宿屋を出ると、足早に町の外に向かう。

それから彼は、北を表す星を背中に見ながら、ひたすら道を歩き続けた。不思議と朝に感じた体の痛みは消えていた。だが、しばらく歩くと、徐々に足に痛みを感じた。

それでも彼は歩みをやめなかった。夜が明けきる前までに、隣国へ逃れたかった。そのとき、体に衝撃を感じた。

「ガハッ！」

思わず声を上げる。気が付くと満天の星空があった。ふと、耳に何かがものすごい速さで近づいている音が聞こえた。一体なんだ？そう思った瞬間、目の前が真っ暗になった。

「ああん！？　人族か？」

男の大声で我に帰る。どうやら手で顔を押さえつけられているようだ。皮の手袋をしているのか、何とも言えない獣の匂いが鼻を突く。乱暴に顔を押さえつけていた手がどけられた。目の前には、獣人の顔があった。アルベにはその顔に見覚えがあった。

……宿屋で見た獣人。

つい数時間前、宿屋の食堂で仲間たちと楽しそうに会話していた男だった。どうしてこの男がここにいるのだ？　アルベの頭は混乱した。

「どこがオークなんだよ、全く……」

そんな声が聞こえてきたかと思うと、数人が近づいてくる気配を感じる。よく見るとそれは、やはり昼間に見た獣人たちだった。

「ここまで一人で旅ができているってことは、オークの群れはもう遠くに行ってしまったんじゃないのか？」

「そうだな。その可能性が高いな」

「今日は引き上げないか？」

そんな会話がアルベの頭上で交わされている。彼はその光景を呆然としたまま、ただじっと眺めていた。

不意に体が軽くなった。アルベの体の上に乗っていた男が離れたのだ。獣人たちはアルベに何も言うことなく、その場を後にしていった。

ゆっくりと体を起こす。心臓がものすごい速さで波打っているのがわかる。乱れた呼吸を整える。そのとき、サラサラと水が流れる音が聞こえた。どうやら近くに川があるようだ。

それはすぐに見つかった。アベルは服を脱ぎ、下着一枚になって、川の中に進む。水の流れる音が聞こえるということは、この川は浅い証拠だ。父に教えてもらった知識だ。

川の水を手ですくい、顔と体を洗う。折に触れて痛みを感じるのは、転んだ拍子に、擦り傷でも負ったのだろう。そんなことを考えていると、無性に腹が立ってきた。

どうして私がこんな目に合わねばならないんだ。……そうだ。あの獣人どもだ。あいつらのせいで、私はこんなことになっているのだ。そう考えると、胸の中に渦巻いていた怒りが、殺意に変わっていった。

……私を怒らせたら、どうなるか、思い知らせてやる。

アベルは下着のままカバンの許に向かい、そこからいくつかの薬瓶を取り出した。さらに、小さなコップのようなものを取りだすと、その中に液体を注ぎ入れた。それを小刻みに振って中身をかき混ぜると、彼はその液体を川に注ぎ入れた。

素早く服を身に付ける。そして彼は再び、隣国に向けて歩き出した……。

第六百六十話　天使との出会い

体に大きな衝撃を感じて、アルベはふと目を覚ました。

ガヤガヤと騒々しい音が耳に入ってくる。どうやら、到着したようだ。彼は這うようにしてその場所から離れる。

アルベがいたのは、馬車の荷台だった。夜明け前にたまたま通りかかった馬車に声をかけ、近くの村まで乗せて欲しいと頼んだのだ。

馬車を操っていたのは、白いひげを蓄えた、いかにも頑固で偏屈そうな老人だった。男はアルベが差し出した金貨をじっと眺めていたが、やがてそれを彼の手からむしり取るようにして受け取ると、無言のままクイッと顎をしゃくった。

荷台には幌がかけられていて、外からは中の様子は伺い知れなかったが、そこには大きな籠の中に入れられた野菜がひしめき合っていた。彼はその間に何とか腰を下ろすと、ようやく一息つくことができたのだった。

青々しい匂いが鼻をくすぐる。それに少し酔いそうになりながらも、この忌まわしき場所を離れられる安堵感が少しずつ湧き上がってきた。馬車がその場所を一歩、また一歩と離れるごとに、彼は本当の意味で、これまでの色々な不幸な出来事から開放されていくように感じていた。そんな安堵感もあってか、彼はいつの間にか眠ってしまっていたのだった。

幌の隙間からは光が差し込んできていた。アルベはその端っこに手

を伸ばして、外の世界を見た。まぶしい光が目の中に飛び込んでくる。

しばらくすると、目が慣れてきたのか、周囲の風景が見えてきた。どうやら、かなりにぎわいのある街であることがわかる。人々がひしめき合っている。

アルベは荷台から降りると、足早にその場所から離れた。荷台に乗せてくれた老人に礼の一つも言わねばならないことはわかっていたが、どうもあの種の人間は苦手だった。彼は心の中で礼を言いながら、あてもなく街の中をぶらついた。

相当に広い街だった。食糧、衣服、装飾品……ありとあらゆるものが売られていた。雑然とはしていたが、街全体に活気が感じられた、アルベは直感的にこの街が気に入った。

……まだまだ金はある。この街でしばらく暮らして、これからのことを考えるとするか。

彼はそんなことを考えながら、宿屋を探す。昨日、川の中に放り投げたあの毒薬の効果もきになるところだ。おそらくあの川の水が流れ込んだ街は今頃、大騒ぎになっているだろう。その様子もこの街にいれば、自ずと聞こえてくることだろう。

そんなことを考えながら、彼はキョロキョロと周囲を見廻しながら宿屋を探す。そのとき、彼の眼に異質な集団が目に入った。

前からやたらと体格のよい二人の男が、周囲を威圧しながらこちらに向かってやってきた。よく見ると二人は腰に挿した剣に手をかけている。何か敵意を現した者は容赦なく斬るという現われのように

も見えた。

その男の後ろには、小柄な女性がいた。アルベはその女性の顔に釘付けになった。

抜けるような白い肌。クリッとした愛嬌のある眼。見事な金色の髪……。その昔、母から聞かされたおとぎ話に出てくる天使の姿によく似ていた。この世にこんな美しい女性がいたのか……。アルベはあんぐりと口を開けてその姿を眺めていた。

そのときふと、その行列が止まった。見ると、その女性がじっとこちらを見ているのに気が付いた。アルベはまさか自分に視線が向けられているとは思わず、一体誰を見ているのかと後ろを振り返ってみた。だが、そこには壁があるばかりで、人の姿は見えなかった。

視線を元に戻すと、再び女性と目が合った。彼女は相変わらずじっとアルベを眺め続けている。そのとき、女性に口元がスッと一文字に開いたかと思うと、彼女は白い歯を見せてニッコリと微笑んだ。

気が付けば、アルベの体は震えていた。

「お嬢様、何を……？」

女性の後ろから体格の良い男が声をかけていた。どうやら、彼女は後ろにも二人の男を従えていたようだ。

相変わらず女性は笑みを浮かべている。そして、ぱちりと片目をつぶった。

アルベの心臓の鼓動が速くなっていった。ドク、ドク、ドクとものの

すごい速さで心臓が脈打っていくのが自分でもわかる。彼は、ハアハアと生臭い息を吐きながら女性を眺め続けている。いや、その場所から動くことができないでいた。指先一つ動かすことすらできなかった。

女性は笑顔を浮かべたままアルベから視線を外し、前を向いてゆっくりと歩き出した。その彼女の動きに合わせて、前に控えていた男たちも歩き出す。アルベは呆然とその後ろ姿を見送った。

「おい」

突然、野太い男の声が聞こえたかと思うと、アルベは胸ぐらを掴まれていた。険しい表情浮かべた男の顔が至近距離にあった。

「お嬢様がお呼びだ。来い」

男はアルベの奥襟を掴むと、まるで引きずるようにして彼をどこかに連れて行った。

◆　◆　◆

「着いたぞ」

一体どのくらい歩いただろうか。実際は数分程度であっただろうが、アルベにとってはとてつもない時間に思えた。気が付くと、そこには広い庭を備えた大きな屋敷があった。

「こっ、ここは……」

「ミラルダ様のお屋敷だ」

「ミラルダ？」

「ジェリシーで最も力のあるお方だ」

「ジャリシー？」

「そうだ」

「あの、どうして？」

「お嬢様がお前を気に入られた。命が惜しかったら、言葉の使い方に気を付けることだ」

「あっ、あのっ……」

「来い」

アルベの言葉を遮るようにして、男は踵を返して歩き始めた。アルベは仕方なく男に付いて行くことにした。

大きな扉を開いて中に入ると、紫色の、さも豪華そうな衣装を着た男が目に入った。アルベを連れてきた男が片膝をついて控える。

「旦那様、ただ今帰りました」

「ああ。……その男は？」

まるで汚いものを見るかのような目で、男はアルベを眺めた。完全に疑いの目を向けられているのがよくわかる。アルベはその視線に

耐え切れず、おずおずと自分の足元に視線を下ろした。

「この者は、お嬢様が……」

「ミルワが？　またか……」

男は舌打ちし、苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべると、手をヒラヒラさせて、その場を去るように促した。控えていた男は再び立ち上がり、深々と一礼すると、アルベに向き直った。

「ついて来い。行くぞ」

アルベは再び男に従って歩き始めた。長い廊下を進んでいくと、ふと男が立ち止まり、部屋の扉を開けて中に入っていく。

「お嬢様、連れて参りました」

「入れ」

中から女性の声が聞こえた。男はアルベを手招きして部屋の中に入って来るように促した。

中には大きな天蓋付きのベッドが設えられていた。その中には、先ほど笑みを投げかけた女性がいた。

「では、私はこれで」

案内してきた男が恭しく一礼して部屋を出て行った。アルベはどうしてよいのかわからず、ただおずおずとしている他なかった。そんな中、ベッドの中から頓狂な笑い声が聞こえてきた。

「キャハハハッ！　何をそんなに怯えておる？」

相変わらず満面の笑みを浮かべながら女性は話しかけてくる。アルベはひきつった笑みを浮かべながら所在なくその場に立ち尽くしている。

「お前は大きな欲望を持っておるな？　いや、欲望の塊と言っていい。そうであろう？」

思わず図星を突かれて、アルベは体を震わせた。そんな様子を女性はケラケラと笑いながら眺めている。

「私にはわかる。単に欲望を抱いているわけではない。それができる何かを持っておる。私は、そんな男が大好きじゃ。言ってみよ。お前は何がしたい？　金か？　名誉か？　女か？」

「せ……世界中の女を……美女を並べて……私の……」

必死で言葉を絞り出すアルベの姿を見て、女性は再び頓狂な笑い声を上げた。

「キャハハハッ！　そうか。女か。気に入った。気に入ったぞ」

女性がベッドから降りて、アルベの許に近づいてきた……。

第六百六十一話　男になる？

「で、お前は何ができる？」

女性がそう言って顔をアルベの至近距離に近づけてきた。思わず後ずさりしそうになるが、女性は彼の背中に手を廻して、その自由を奪っていた。

「あのっ……どっ……」

挙動不審であるのは自分でもよくわかった。何をどう、喋ってよいものか……彼の頭の中は困惑していた。

目の前には絶世の美女がいる。こちらを見上げている彼女の鼻息が、アルベの頬に当たるのがよくわかるほどの至近距離だ。まるで、絵の中から抜け出したような美しい顔立ちで、アルベ自身の鼻息も荒くなっているのがわかる。心臓の鼓動が恐ろしい速さで波打っていて、彼女にも聞こえているのではないかと思わず思った程だった。そんな彼を、女性はニヤニヤと意地悪そうな笑みを浮かべながら眺めている。

「どうした？　早く言ってみるがよい」

女性の両手が背中から尻に降りてきた。その手は、アルベの尻をやさしく撫でている。彼は何とも言えぬくすぐったさを感じて思わず身をよじるが、その瞬間、女性はガッチリとアルベの体を捕まえるのだった。

「どっ、毒を……」

「うん？　何じゃ？」

「毒を、見分ける、ことが、できる」

「ふぅん？」

アルベの答えに、女性はよくわからないといった表情を浮かべた。彼女は少し小首をかしげた。そのとき、とても良い香りが彼の鼻をくすぐった。

「毒を……」

「毒？　毒を、どうするのじゃ？　毒を作ることができるのか？」

「ああ、作れる」

「ほう」

女性の眼がスッと開かれた。アルベはさらに言葉を続ける。

「私は、毒を作ることが、できる。それだけではない。毒を嗅ぎ分け、味を見分けることができる。それだけではない。解毒する薬も、作ることができる」

「……面白いの。私が見込んだ通りじゃ」

女性は満足そうな笑みを浮かべる。彼女は何かを考える素振りをしていたが、やがて、彼に視線を向け直すと、再び口を開く。

「この屋敷には、主人他、五十人の者が仕えている。その者をどのくらい殺せる？」

アルベは思わず息を呑んだ。まさかそのような話題が出てくるなど、想像すらしていなかった。

「どのくらいじゃ？」

「全員」

「全員？　それほど強力な毒か？」

「ああ。殺す自信がある」

「ほう」

女性はペロリと舌を出して唇を舐めた。その様子は、何とも色気のあるものだった。

「どのようにして殺すのじゃ？」

「どのようにして？　……皆に、毒を飲ませる」

「無理じゃな」

「……」

女性はアルベの傍から離れると、スタスタと先ほどまで寝ていたベッドに向かって歩いて行った。その上にピョンと飛び乗ると、ゆっ

くりとその身をベッドに横たえた。

「それで一度に五十人の者は殺せまい」

女性は相変わらず意地悪そうな笑みを浮かべながらアルベを眺めている。彼は反論しようとしたが、その言葉を飲み込んだ。

確かに、この女性の言う通り、五十人もの人間を一度に殺すことは困難だ。全員が一度に毒を呷るのであれば話は別だが、その状況を作り出すこと自体が困難だった。例えば、食事に混ぜたとしても、誰かが倒れた場合、食事を摂っていない者がいれば、すぐに逃げられるか、ヘタをするとアルベ自身に疑いの目を向けられることになりかねない。そんなことを考えれば考える程、何と浅はかな答え方をしてしまったのかと、彼は己の行いを悔いた。

そんな様子を女性はベッドで見つめながら、ケラケラと笑い声を上げた。

「キャハハハッ。お前にそんな大それたことができるとは最初から思っておらぬ。安心せい。毒が使えると申したな？　どのような毒じゃ？」

「……無味、無臭の毒だ。飲めばたちどころに命を失う」

「ほう」

女性の眼が再び見開かれる。黒い瞳が目をいっぱいに覆っている。まるで、吸い込まれそうな瞳だった。

「では、この館の主であるジャリシーは殺せるか？」

「……殺せる」

一人だけを殺すのであればわけはない。アルベは心の中で嘯く。その答え方が気に入ったのか、女性は再びケラケラと笑い声を上げた。

「じゃろうな。一人だけを殺すのであれば、造作もないことじゃ。しかし、お前は、無味、無臭の毒を持っていると言ったな？　ということは、井戸などに投げ込んでしまえば、大量の人間を殺すことができるな？」

アルベは無言で頷く。女性も満足そうな表情を浮かべながら頷いている。

「その毒の威力、見てみたい。お前、この屋敷の主をその毒で殺してみよ」

「……」

「どうした？　臆したか？」

「いっ、いや。その……いいのか？」

「よいもなにも。あの男は生かしておいてロクなことはない。早く死ぬのが、この世にとって一番よいのじゃ」

「いや……。そうではなくて……。主人が死んでしまえば、アナタは……」

アルベの言葉に、女性は腹を抱えた状態で、頓狂な笑い声を上げる。

「キャハハハハッ。相変わらず面白いことを言うのじゃな。あの男が死んだからといって、私が困ることはない。また、金持ちの男を見つけるだけじゃ。それよりも、じゃ」

女性は再びベッドから降りると、何の迷いもなくスタスタとアルベの許まで歩いてきて、再び顔を至近距離まで近づけてきた。今度はおでこが当たっている。

「お前と一緒にいた方が、何かと楽しめそうじゃ」

「……」

「お前、まだ、女を知らんのじゃろう？」

「うっ……」

「この主人を殺すことができたならば、私がお前を男にしてやろうではないか。どうじゃ？　悪くない条件じゃろう？」

そう言うと女性は数歩後ろに下がると、無造作に着ている服を脱ぎだし、瞬く間に一糸まとわぬ裸になった。アルベの眼が見開かれていく。

「どうじゃ？　この体を、お前は好きにできるのじゃ。あの男を殺せば、この私はおまえのものになってやってもよいぞ。どうじゃ？」

アルベは無意識のうちに、この女性に向かって走り出していた。小柄な体をひょいと抱き上げると、そのまま放り投げるようにしてベッドにその体を横たえた。

彼女は相変わらず意地悪そうな笑みを浮かべながらアルベを眺めている。彼は無言のまま乱暴に着ている服を脱ぐと、まるで獣のように女性の上に覆いかぶさった。

形のよい乳房に口を付ける。存分に賞味すると、今度はその乳に噛みついた。それだけでは飽き足らず、肩、腹、足など、ありとあらゆるところに歯を立てた。そんな異常ともいえる彼の愛撫に、女性は全く抵抗することもなく、声も上げることもなく、ただ、アルベの欲望にその身を委ねていた。

女性の体のあちこちに、アルベの歯形が刻まれていく。ややあって彼は、歯を立てた部分を舌で丁寧に舐め始めた。それだけでは飽き足らず、彼は女性の全身にくまなく舌を這わせた。

さすがにそれはくすぐったかったのか、女性は体をよじらせながらうつ伏せになった。そのとき、アルベはハッと息を呑んだ。

女性の背中には、小さな羽が生えていた。

子供の頃、無理やり連れて行かれた教会で、何度となく、飽きるほど聞いた神の使いである天使の姿だった。アルベは夢中で女性の背中をくまなく、全く飽きることもなく舌を這わせ続けた。それは明らかに、気が狂れた行為だった。

どのくらいの時間が経っただろうか。不意に女性が口を開いた。

「お前も、同じじゃな?」

驚いた表情浮かべながらアルベは顔を上げる。ふと見ると、女性の

表情に侮蔑の感情がありありと浮かんでいる。

「この館の主と一緒じゃな。長い時間をかけて舐め回す。そうでもしないと昂って来ぬのじゃ。お前も一緒なのか？」

アルベの体がカッと熱くなった。あんな中年と一緒にするな。自尊心が激しく傷つけられた。彼は再び女性を仰向けに寝かせると、その上に覆いかぶさった……。

第六百六十二話　初めて同士

「ウッ……クッ……」

静寂の中、男の悔しそうな声が響いていた。アルベはゼエゼエと肩で息をしながら、ゆっくりと女性から体を離した。

「何じゃ？　終わりか？」

「……」

アルベは悔しそうに唇を噛んだ。まったく予想もしていない状況だった。

経験はなくとも、男と女が何をするのかは知っていた。そうした本は持ってもいたし、何より、父は頻繁に自室に妾を呼び、己の欲望を満たしていた。その様子を何度も覗き見していたので、アルベはいざ、自分がそういう状況になったときは、十分に対応できると考えていた。

だが、実際には、思っていたことは何もできなかった。いくら奮い立たせても、彼の逸物はほとんど反応を示さなかった。それでも無理やり挑もうとしたが、結果は変わらなかった。

「まさか、こんなことになろうとは、私も予想もしておらなんだ」

女性は明らかに不満の表情を浮かべている。声も怒気を帯びている。

アルベはすごすごとベッドから降り、脱ぎ散らかしていた服をゆっ

くりと集めた。そして、下着を手に取ると、恥ずかしそうにそれを身に付けた。

ふと、ベッドに視線を向ける。女性は上半身を露わにしながら腕を組み、アルベを睨みつけている。やはり、形の整った美しい乳房だ。肌が透き通っている。だが、すでに彼女に対する欲望は萎え果てていた。

「これまで何人も男にしてきたが、お前のような者は、初めてじゃ」

「いやっ、その……」

「何じゃ？」

何故か体が震えていた。この女性の機嫌を損ねれば、自分が危うくなる可能性があることに気づいたのだ。この女性が襲われたと言えば、たちどころにアルベはこの館の男たちから取り押さえられ、袋叩きにされるだろう。下手をすれば、命を奪われるかもしれない。今、目の前にいる女性はまさしく、アルベの生殺与奪を握っている人物と言えた。

何とかしてこの女性の機嫌を取らねばならない。だが、適当な言葉が見当たらない……。

「きっ……」

「何じゃ？　はっきり言え」

「好きすぎて、無理だ」

「何？」

思わず言葉が出てしまった。一体、何を言っているのだろうか。だが、検証している暇はなかった。女性がベッドから降りて、スタスタとアルベの許に向かってきていた。

「お前いま、何と言った？」

「ううう……」

女性の顔が再び至近距離まで近づけられていた。おでこが当たっている。しかも、女性の方からグリグリとおでこを押し当ててきている。

「何と言ったのじゃ？」

「すっ、好きすぎて……」

「私のことが、好きすぎて使い物にならん。そう言ったのか？」

アルベはやっとのことで頷く。女性がニタリと笑った。

「そんなことを言ったのは、お前が初めてじゃ」

そう言うと、女性はアベルから離れ、腕を組みながらベッドに向けて歩き出した。まだ、一糸も纏わぬ裸のままだ。形のよい尻が上下に揺れている。

「これまでたくさんの男と交わってきた。私の心を掴むために、己の命を投げ出した者も多くいた。狙った男は、必ず私の前にひれ伏

した。泣きながら頭を下げて、一度でよいから私の体を抱かせてくれと言った者さえいる。そうした者たちは皆、涙を流して私の体を賞味したものだが……。好きすぎて使い物にならんと言った者はいなかった……」

女性は独り言を呟くようにして喋っていたが、やがてアルベに再び視線を向けると、腕を組んだまま仁王立ちのポーズを取った。

「どうじゃ？　まだ、お前は、この私の体を抱きたいか？」

女性の言葉に、アルベはゆっくりと頷く。彼女は満足そうな笑みを浮かべながら、さらに言葉を続ける。

「そうか。ならば、この屋敷の主を早く殺せ。その後でたっぷりと、お前の体を賞味しょうではないか。安心せよ。次は、ちゃんとできるようにしてやる。行け」

女性はクイッと顎をしゃくる。一刻も早くこの場所を離れて、あの主を殺さねばならないという、強迫観念にも似た感情が沸き起こった。彼はオロオロとしながら衣服を身に付け、まるでひったくるようにして自分の鞄を手に取ると、フラフラとした足取りで部屋の扉に向かった。

「早く帰ってくるのじゃ。楽しもうぞ。ケケケケケ」

扉を閉める際、そんな声が聞こえてきた。目の前には、広くて長い廊下が広がっていた。

◆
◆
◆

まるで魂が抜けたように、トボトボとアルベは元来た方向に歩き出した。廊下には誰もおらず、不気味なほどの静寂に包まれていた。

とてつもなく長く感じる廊下だった。先ほど案内されてきた際には、ものの一分とかからずに部屋に到着した気がしたが、今はその何倍も長い時間歩き続けているような気がしていた。

「おい、何をしている」

不意に呼び止められて、思わず足を停める。ふと顔を上げると、目の前には、先ほど自分を案内した男が、まるで足止めするかのように、アルベの前に立ちはだかっていた。彼は侮蔑に似た表情をアルベに向けている。

「何をしていると聞いているのだ。お嬢様のご用はもう、済んだのか？」

男の問いにアルベは答えることができなかった。喉が急速に乾くのを感じていた。声が出なかった。そんな彼に、男の表情がどんどんと強張っていく。

「答えないか」

「こっ、この館の、主に……」

「旦那様？　旦那様がどうしたのだ？」

「行けと……」

「お嬢様が、そう言われたのか？」

アルベは必死の面持ちで頷く。男はチッと舌打ちをすると、再び厳しい視線を向けてきた。

「旦那様に、なにをするつもりだ？」

「うっ、えっ、あのっ……」

まさか、毒殺するのだとは言えない。答えに窮していると、男は大きなため息をつきながら、面倒くさそうな雰囲気を醸し出しながら、さらに言葉を続けた。

「早く言わないか。旦那様も私も、忙しいのだ。お前ひとりに関わっている時間はないのだ」

仕方がないからお前の話を聞いてやるが、本来は、お前など話を聞くにも値しないと言わんばかりの態度だった。癪に障る態度だった。別に望んでこの屋敷に来たわけではない。そちらが勝手に自分をこの屋敷に連れてきたのだ。アルベの心にムクムクと怒りの感情が湧き上がった。

「薬を……体が、元気になる、薬を、この館の主人に飲ませろと……」

必死で声を絞り出す。その言葉に男は再び舌打ちをして、何とも言えぬ表情を浮かべた。

「またか……。お前は商人なのか？」

「ち、違う」

「では、何なのだ?」

「くっ、薬を、作る……」

「薬師か。何か証明できるものはあるか?」

男の問いに思わず口ごもる。正式に王室に仕えていなかったので、そうした身分証明書のようなものはなかったし、また、父の屋敷を出るときに、そうした者は持ち合わせなかったのだ。

何も答えないアルベに男は、再び大きなため息をついた。

「まあ、道を歩いていたお前を連れてきたのだ。そんなものは持っていないか。では、どこに住んでいる? 仕えている主人の名は?」

「……いない。旅の、者だ」

男は眉毛をハの字にしたかと思うと、両手を上げて首を少し傾けた。話にならないといった雰囲気がありありと出ていた。

男はアルベの前を通り過ぎると、先ほどの女性のいた部屋に向かって行った。そして、丁寧にノックをしたかと思うと、部屋に入っていった。

しばらくして部屋から出てきた男は、大股でアルベの許に戻ってきた。明らかに納得はしていないという表情のまま、彼は無言で顎をしゃくって、付いて来るように促した。

案内されたのは、応接室のような部屋だった。椅子と机が整然と配

置されている。

「今すぐここで、その薬を作るのだ」

男の声に、アルベは静かに持っていたカバンを机の上に置いた……。

第六百六十三話　こっちの方が

手早くカバンを開ける。中には、数本のガラス棒と、小さな瓶が整然と並べられている。父が外出するときにいつも持ち歩いていたカバンだ。オーラルケルフラジという熊に似た魔物の皮で拵えた逸品だった。

このカバンは衝撃に強いだけでなく、防刃性にも優れており、さらには、耐火性にも優れたカバンだった。もっとも、オーラルケルフラジは個体でもAランクに相当する魔物であり、倒すのが極めて困難な魔物だった。とりわけ、冬山での戦闘ではほぼ無敵の状態となり、夏場でも、この魔物を倒すには、目などの急所を一撃で突くほかに、有効な対策はなかった。

アルベの持つカバンは、そのオーラルケルフラジ一頭の毛を丸々使って拵えられたもので、その価値は日本円にして数千万円の価値があるものだった。

彼はそのカバンの中から無造作に三本の瓶を取り出した。そして、試験官のようなガラス棒を取り出し、それぞれの瓶から液体を注ぎ入れた。傍では、男がアルベの動きに怪しい点はないかと、じっとその手許を見つめているが、鮮やかに道具を扱うその手際の良さに、少し感心している様子だった。

「グラスを」

ものの一分とかからずに、アルベは左手を差し出して、薬が出来上がったことを伝えた。男は無言のままその場を離れ、しばらくする

と、小さなグラスを彼のすぐ傍に置いた。アルベは淡々とそこに作った液体を注ぎ入れた。

「これは……何の薬なんだ？」

男がグラスを持ち上げながら口を開く。アルベは手際よくテーブルに並べていた瓶を片付けながら、ぶっきらぼうに答える。

「元気になる、薬だ」

その言葉を聞いた男の動きが止まる。チラリとアルベを一瞥すると、そのグラスを鼻先に持っていき、クンクンと匂いを嗅いだ。ややあってグラスを離した男は、小首をかしげながら、さらにグラスに入った液体を、上下左右から眺めた。

「これは、どうやって飲む？　水で薄めるのか？」

液体から目を離さずに男は口を開く。相変わらず怪訝な表情を崩していない。

「そのままで、いい」

「元気になる、と言ったな？　どう元気になるのだ？」

「え？」

予想もしていない質問だった。思わず男に視線を向ける。

「どう、元気になるのだ？」

「そ……それは……」

男はじっとアルベを眺めていたが、やがて視線を手に持つグラスに移すと、誰に言うともなく呟いた。

「まあ、聞くだけ野暮、か」

そう言って男は踵を返して、グラスを持ったままスタスタと部屋を出て行った。

「はぁぁぁぁぁ～」

誰もいなくなったのを確認したアルベは、ゆっくりと息を吐き出した。何とも言えぬ臭気が鼻を突く。これが己の口臭だとは思いたくない程の臭いだった。

彼はスッと立ち上がると、扉の前まで移動して、耳を付け、外の様子を窺った。扉が厚いためか、何も聞こえてこない。彼はゆっくりと扉を開けると、顔だけ外に出して、キョロキョロと周囲を伺った。

廊下には誰もいなかった。左手にはおそらく、玄関につながると思われるホールが見えた。右手には、先ほどの女性の部屋に続く長い廊下が見えた。彼は一刻も早くこの場を離れるべきだと考えていた。

部屋を素早く出て、彼は廊下を右手に進んだ。

……違う。こっちじゃない。玄関に向かわねば。おそらくあの薬を飲んだこの館の主人は死ぬだろう。主人でなくとも、誰かが死ぬことだろう。そうなれば、真っ先に疑われるのは自分だ。あの毒薬を目の前で作ったのだから当然だ。だから、早く、一刻も早くこの場

を立ち去らねばならない。いや、すぐにでもここから逃げたい。

そんなことを考えていたものの、体はどんどん思いとは別の方向に進んでいく。

このまま引き返して……と考えてみたが、とてもそんなことをする気にはなれなかった。どこかに身を隠さねば……。そう思ったアルベは、目の前の扉を恐る恐る開けて見た。

中は真っ暗で何も見えなかった。静かに扉を閉め、キョロキョロと周囲を見廻す。

「こっちじゃ」

小さいが、確かに声が聞こえた。アルベはガバッと顔を上げ、周囲を伺う。

「早く入って参れ」

どうやらこの近くの部屋からのようだ。声の主は、あの女性だ。

アルベは周囲を見廻しながら、隣の部屋のドアノブに手を伸ばす。ゆっくり開くと、中から光が差し込んでくるのが見えた。直感的に、あの部屋だと察した。

素早く入って扉を閉める。すぐに天涯付きのベッドが見えた。そこに、先ほどの女性が横たわっていた。

一目散に女性に抱き着いた。女性はケラケラと笑い声を上げる。

「どうしたのじゃ？　うん？　震えておるな？　ヤツは死んだか？」

「しっ、知らない……わからない」

「わからない？　何じゃ、確かめておらんのか？」

女性の胸の中でアルベは必死に頷く。そのとき、部屋の外からドタドタと足音が聞こえてきた。アルベは両手に力を込めて、女性を強く抱きしめた。

「痛いではないか！」

フワリと体が浮いた感覚を覚えた直後、体に衝撃が走った。ふと見ると、女性が右足を伸ばしている。どうやら、彼女に蹴飛ばされたようだ。

女性はさも困ったといった表情を浮かべたかと思うと、ブツブツと何かを唱えながら、右手をクネクネと動かし始めた。それは、何か文字を書いているかのように見えた。

「お嬢様！」

野太い男性の声が聞こえたかと思うと、扉が勢いよく開かれた。すぐに、数名の男性が部屋の中に飛び込んできた。その中には、先ほどアルベと一緒にいた男の顔も見えた。

「何じゃ、騒々しい」

「お嬢様！　あの男はどこに行ったのです！」

「男？　知らん。何かあったのか？」

男たちは顔を見合わせていたが、やがて、アルベを案内した男が一歩前に進み出て、落ち着いた口調で話しかけた。

「お嬢様、大変申し上げにくいのですが、旦那様が、お亡くなりになりました」

「……」

「あの男が作った薬……。それを飲んだ旦那様は、突然苦しそうな声を上げて倒れられ、そのまま息を引き取りました」

「……そうか」

「こんなことは言いたくありませんがお嬢様、あの男はあなたがこの屋敷に連れてこいと命じられた者です。その上、あの男が作る薬を旦那様に飲ませろと言われたのも、あなたです」

「私にどうせよと言うのじゃ？　お前たちで私を嬲り者にするか？」

「今すぐここを出て行ってもらいたい」

「……ほう。私に散々あの主人の嬲り者にさせておいて、出て行けとは酷い話じゃ」

「十分に贅沢三昧を楽しんだだろう。今すぐ出て行け。さもなければ、命が……」

突然男がガクリと膝をついた。両手を首に当てている。まるで、自

分で自分の首を絞めているかのような光景だった。そんな様子を女性はニヤリと笑みを浮かべながら眺めていたが、やがて、掌を自分の口元に差し出すと、その後ろで狼狽えている男たちに向かって、フーッと息を吐いた。その瞬間、男たちはガクリと膝をつき、その場に倒れ伏した。

「キャハッ、キャハハハハッ」

女性が突然頓狂な声を上げて笑い出した。アルベは思わず女性に視線を向ける。

彼女は相変わらずニヤニヤと笑みを浮かべながら、その場に倒れ伏している男たちを眺めている。苦しんでいた男は、目をカッと見開きながら、口から泡を吹いて倒れていた。

「本当にあの主人を殺したのじゃな。やるではないか」

女性が満面の笑みを浮かべながらアルベに視線を向けた。彼の体が、ビクンと震えた。

「ここでの生活も飽きてきたところじゃ。これから先は、お前と暮らすこととしよう。そっちの方が面白そうじゃ。ウキャキャキャキャ〜」

女性の笑い声を聞きながら、アルベは軽い眩暈を覚えていた……。

第六百六十四話　僕となる誓い

「来い。来るがいい」

女性はアルベの手を取って、ベッドに連れて行く。一体彼女は何をするつもりだろうか。そんなことを考えている間に、彼はベッドの上で女性に組み敷かれていた。

彼女は淡々とアルベの服を脱がせていった。やがて、彼が一糸まとわぬ姿になると、女性もまた、自分の着ている服を脱いで裸になった。

傍では死体が転がっている。アルベは、この女性が何をしようとしているのかは十分に見当がついていたが、それは無謀な行為であると言えた。

確かに、戦場などで多くの人が殺し合う状況下において、人間の性欲は昂ることがあると言われている。死を目の前にしたとき、己の子孫を残そうとする本能が働くことは知っていた。だが、今の場合は状況が異なる。数人の死体が目の前に転がっているのだ。現に、アルベが首を左に傾けると、そこに転がっている亡骸が目に入るのだ。しかも男は眼を見開いたまま息絶えている。チラリとそちらに視線を向けると、この絶命した男と目が合ってしまうのだ。そんな状況下では、とても女性と睦み合う気分にはなれなかった。

だが、女性はそんなことはお構いなしに、アルベの唇を奪い、強く吸い始めた。あまりの痛みに声を上げそうになったが、その瞬間、女性の唇は離れた。見ると彼女は相変わらず意地悪そうな笑みを浮

かべている。そのまま彼女は、舌を使って、アルベの体を舐め始めた。

くすぐったいような、何とも言えぬ感覚を覚えて、彼は思わず体をくねらせる。女性は淡々と彼の体を、舌を使って愛撫していたが、やがて、彼の逸物をやさしく手で掴みながら、耳元に唇を近づけてきた。

「お前に殺して欲しい者がいる」

「こ……殺す？」

耳元に吹きかかる息にくすぐったさを覚えながら、アルベは必死の思いで口を開く。何故か、体の芯が燃えるように熱かった。

「そうじゃ。殺して欲しいのじゃ」

「だっ……誰を……」

「その者の名は、ソレイユと言う」

「そ……ソレイユ……？」

「そうじゃ。その者の命を奪ってもらいたい。お前ならば、誰にも気づかれることなく、あの女を始末することができよう。なに、私の力を使えば、十分に可能じゃ」

「そっ……それは……」

「まあ、詳しいことはこれを終わらせてからじゃ。フフフ……ちゃ

んと使えるようになってきたではないか」

「ふぅぅぅ……」

突然女性がアルベの体の上に跨ってきた。その瞬間、何とも言えぬ感覚が彼の全身を包み込んだ。女性はニヤリと下卑た笑みを浮かべながら、体の上で小刻みに、ゆっくりと腰を振っている。徐々に体の感覚が薄れていく……。そのとき、女性の手がアルベの首に伸びてきた。

「ぐえっ」

女性は、いきなり両手に力を込めてアルベの首を絞めていた。思わず声が漏れる。

「キャハッ、キャハハハハッ。やっぱりこれが一番よいわ」

アルベは苦しみに堪えながら直感的に、このまま意識を失うと、二度と目覚めることはできないだろうと感じていた。彼は必死に女性の両手を己が手で掴みしめた。それがまるで合図であったかのように、女性の動きが早くなった……。

◆　◆　◆

一体どのくらいの時間が経っただろうか。アルベは息も絶え絶えになりながら、ぼんやりと天井を眺めていた。

体中から汗が噴き出していた。暑い日でも、それほど汗をかく体質ではなかったのにもかかわらず、体は汗で塗れていた。ベッドのシーツが流れ出した汗でベトベトになっている。こんなことは、彼の

人生の中で初めての経験と言えた。

喉も乾いていた。水が飲みたかったが、全身を包む倦怠感で、起き上がる気力すらなかった。はあ、はあ、と自分の荒い息遣いが聞こえてくるのみだった。

「ぐっ……」

起き上がるために寝返りを打とうとするが、下半身の感覚はなく、その下半身は、まるで鉛のように重かった。必死で首を振りながら何とか体勢を変えてうつ伏せになる。力の入らない両腕に必死で力を入れて、上半身を起こす。

ふと目の前に、白いポットが置かれているのが見えた。水だ。水に違いない。必死で手を伸ばして、それを取ろうとする。

「何をしているのじゃ？」

突然女性の声が聞こえた。振り返る気力は彼にはなかった。すでに両腕は限界にきているのか、ガタガタと震えている。

「み……水……水を……」

必死で声を振り絞る。口の中がカラカラに乾いていた。上手くしゃべることができない。

「なに？　水？　キャハハッ。それは水ではない。水が欲しいのか。そうか」

後ろで女性の声がしたが、振り返ることができない。そのとき、い

きなり髪の毛を掴まれ、驚くほどの力でアルベは引きずられた。

「うわっ」

彼はまるで放り投げられるかのようにして、ベッドから転げ落ちた。鼻先に何とも言えぬ臭気がした。ふと見ると、先ほどまで自分たちの行為を瞬き一つせず睨みつけていた躯がそこにあった。この臭いがこの遺体からのものであるのか、それとも自分の臭いであるのか……アルベの脳裏にそんな思いが掠める。その瞬間、再び女性の声が聞こえた。

「水じゃ。ほれ」

「ぶわっ！」

アルベの顔に勢いよく水がかかった。思わず顔を背ける。先ほどまでの倦怠感が嘘のように、まるで弾き飛ばされたかのように体が俊敏に動いた。見ると女性が掌から勢いよく水を出していて、それが床を徐々に濡らしているのが見えた。アルベはまるで這うようにして彼女の許に近づき、口を開けて、掌から流れ出る水を受け止め、それを飲み干そうとした。だがそのとき、彼女は残った左手でアルベの顔を掴み、彼が水を飲もうとするのを遮った。

「うふふっ。そんなに水が飲みたいか？　飲みたければ誓うのじゃ」

「誓う？　何を？」

「これからお前は私の僕となるのじゃ。誓えるか？　誓うのなら、飲ませてやる」

「なっ……うっ……」

答えに窮していると、彼女の手から流れている水が、みるみる少なくなっていくのが見えた。アルベに迷いはなかった。

「誓う。誓うから……」

「私の僕となるな？」

「なる。なります」

「キャハハハッ。そうか、ならば、心行くまで飲むといい」

再び彼女の手から勢いよく水が溢れ出た。アルベは夢中でその水を、喉を鳴らして飲んだ。

ややあって、ようやく落ち着きを取り戻したアルベは、肩で息をしながらゆっくりと立ち上がり、ベッドに腰かけている女性に視線を向けた。

「早速じゃが、夜が明けたら出発するぞ」

「どこに、行くのだ？」

「アガルタじゃ」

「アガルタ？」

アルベは心の中で唸った。アガルタと言えば、現在では世界最強国と称される国だ。王であるリノスは結界を操る達人であり、そのた

めにアガルタには邪な者は近づくことさえできないと言われていた。さらには、アガルタが備える軍勢は、兵士の質と装備の質も世界トップクラスであり、数々の戦闘に勝利してきた百戦錬磨の軍団だった。その上、その妃には大賢者・メイリアスがいることから、彼女を慕って世界中から優秀な人材が集まる、軍事的文化的に最も優れた国と言ってよかった。その国に一体何の用があるのか。そんな疑問を持つアルベに、女性は薄ら笑いを浮かべながら、さらに口を開いた。

「お前が殺すのは、アガルタ王の妃であるソレイユじゃ」

「アガルタ王の妃!?」

「そうじゃ。あの王には、サイリュースの族長、ヴィヴァルの娘であるソレイユが嫁いでいる。そのソレイユを、殺してもらいたいのじゃ」

「でっ、できるわけが……」

「できる。私とお前が力を合わせれば、簡単にできることじゃ」

「しっ、しかし、アガルタは……」

「ついでに、アガルタ王も殺してしまえばよい。そうすれば、世界一の美女が手に入るぞ？　やってみる価値はあるぞ？」

そう言うと女性は再び頓狂な笑い声を上げた……。

第六百六十四話　僕となる誓い　（後書き）

『結界師への転生』コミカライズ、第２６話前編が公開されました！
８／３１　１２：００まで無料公開中です。ぜひ、チェック下さい！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６

第六百六十五話　殺意の理由

翌朝、一頭の馬に乗った男女が、真っすぐ南に向かっていた。言うまでもなく、アルベとその女性だった。馬を操るのはアルベかと思いきや、彼は馬を扱うことができなかった。だが、意外にも女性の方は、問題なく馬を扱うことができたために、手綱は女性が握っていたのだった。

「私の名はミルワと言う。サイリュースじゃ」

馬を操りながら女性は、誰に言うともなく身の上話を始めていた。アルベは女性の腰に手を廻して、その体にしがみつきながら、ただ黙って彼女の話に耳を傾けていた。

「サイリュースというのは、成人するまでに精霊と契約しなければならない。そうしないと死が訪れる。私が契約しているのは、空気の精霊ポープじゃ。この精霊は便利でな。空気の濃淡を操ることもできるし、臭いや香りを遠くに運ぶことができる」

ミルワの話は、アルベにとってまるで、おとぎ話を聞いているような内容だった。サイリュースと言う種族は聞いたこともなかったし、精霊と契約するなどということも、彼の常識では考えもしなかったことだった。

そんな彼のことなどお構いなしに、女性は語り続けた。

「お前の毒は、蒸発させても毒として有効なのか？」

「知らない。わからない」

「お前は薬師ではないのか？」

「……」

「まあいい。どこかで試してみればよいことじゃ。いや、待てよ？　毒があるということは、私が使役する精霊にも影響があるのではないのか？　え？　どうなのじゃ？」

「知らない。わからない」

「……まあ、よい。取り敢えずは、あのソレイユを殺せればよいのじゃ」

「……どうして、だ？」

「どうして？　決まっている。憎いからじゃ」

「……」

「あの女は、私を殺そうとした。だからじゃ」

「……」

「お前に我らサイリュースのことはわかるまい。我々は、成人するまでに精霊と契約せねばならないのじゃ。何故ならば、精霊と同化することによって、我々は生きる力を得ることができるからな」

女性の言葉に、アルベはただ茫然とした表情で耳だけを傾けている。

「じゃがあの女は……ソレイユは、せっかく私が契約した精霊を横取りした。お陰で私は死にそうになった……」

ミルワ曰く、彼女は何年もかけて様々な精霊に契約してもらうよう努力したのだと言う。その甲斐あって、とある森の精霊と契約することができた。しかもその精霊は、かなり上位の精霊であった。

サイリュースの地位は、契約した精霊のランクに比例する。即ち、上位の精霊と契約できれば、そのまま自分の身分が保障されるというものだった。この段階で、ミルワのサイリュースにおける地位は、次期族長を約束される程のものだった。

だが、それから一年後、突然ミルワは精霊から契約を一方的に破棄された。何の落ち度もなかったにもかかわらず、精霊側から一方的に契約を破棄されることは、とても珍しいことだと言えた。すでに成人となろうとしていたミルワは、この段階で、サイリュースの中では最底辺に堕ちることとなった。それよりも深刻だったのが、彼女の体だった。早く別の精霊と契約しなければ、死を受け入れるほかなかったのだ。

だが、彼女と契約してくれる精霊はなかなか見つからなかった。ようやく契約してくれた精霊は、先のそれよりも下のランクの精霊だった。

次期族長候補からの転落……。しかも、ミルワが契約していた精霊は、あろうことか、ソレイユと契約してしまっていた。精霊の横取りは、サイリュースにおけるご法度とされた行為だった。だが、ソレイユの行為は追及されることなく、不問に付された。

きっと、ソレイユは族長様の娘だから、罪を問われなかったに違いない。そう考えたミルワは、何もかもがバカバカしくなった。彼女は秘かに村を出ると、世界放浪の旅に出た。

村で学んだスキルによって、彼女は生活に一切困ることはなかった。強くて金のある男を誑かしては、贅沢三昧な日々を送った。その男が衰えたり、男自体に飽きたりすると、また別の男を探した。そうやって年月を経ていると、あるとき、ソレイユがアガルタ王リノスの許に嫁いだという噂を耳にした。

それは噂ではなく、事実だった。当時のアガルタはまだあまり認知されておらず、ラマロン皇国との戦いに勝利し、ラマロンを併呑した国であるという認識だった。言うまでもなく、ラマロンはもともとサイリュースの里があった国だ。あの国は貧しく、食料の生産量を上げるために、しばしば森を焼いて耕作地を広げていた。その影響を受けて、サイリュースも幾度か里を別の場所に移していた。

そんな見せかけだけの強国が滅びるのは時間の問題だと考えていたミルワは、ソレイユがラマロンに勝利した国の王に嫁いだと聞いて、特に何の感情も持たなかった。彼女が正妻でなく、側室として迎え入れられたというのも、ミルワの感情を刺激しなかった一因でもあった。

しかし、時を経るにつれ、アガルタは急速にその名声を高めていった。クリミアーナの干渉を退けたのを皮切りに、それから起こる様々な戦いにも勝利していった。と同時に、文化や技術レベルにおいても、世界の一等国としての地位を着々と築いていった。

決定的にミルワがソレイユに殺意を抱いたのは、彼女がアガルタ王の子供を産んだことだった。しかもそれが男子で、生まれてすぐ死

ぬのではなく、生きながらえていることだった。

言うまでもなくアガルタ王家には、イデアという皇太子がいる。ソレイユが産んだ子供は、その弟ということになる。だが、今のところ、アガルタ王家には男子はその二人しかいない。もし、皇太子のイデアに万一のことがあれば、ソレイユが産んだ子供が、アガルタの王となるのだ。それはひいては、ソレイユが王の母となることを意味する。そうなれば、彼女は世界の覇権を握ったも同然となるのだ。

そう考えたとき、ミルワは無意識のうちに体を震わせていた。そんな世の中で生きていくのは、死んでもイヤだ、と。機会があれば、何とかしてあの女の命を奪わねばならない。彼女はそのとき、そう覚悟した。

もう、何人目になるだろうか。金持ちのミラルダを篭絡して、その妾として、何不自由ない暮らしを送っていたときだった。このアルベが現れたのは。

普段のミルワならば、歯牙にもかけない男だった。自信なさげな表情と態度、なにより、清潔感を全く感じさせないみすぼらしさ……。だが、この男には、腹の中にどす黒い陰謀を秘めていることを、彼女は見逃さなかった。そして、直感的に、この男は役に立つと感じた。

その眼には狂いはなかった。この男は、無味・無臭の毒を作ることができた。あの用心深いミラルダを見事に毒殺してのけたのだ。本当に、無味・無臭の毒を作る腕を持った、恐るべき薬師だ。この男ならば、ソレイユを殺せる……。ミルワは腹の中でそう確信していた。

「お前は、美女を侍らして暮らしたい……。そう言っていたな？」

「……ああ」

「ならば、ソレイユと一緒にアガルタ王も殺してしまえばよい。あの王の妃はどれも、相当の美女であると聞くぞ。ソレイユはやれぬが、その他の女たちは、お前の好きにすればよい。それとも何か？　生娘でなければ、イヤか？」

「……イヤ」

「そうじゃろうな。お前は、お前の好みの女であれば、何でもよいという者だ。それが、年上であろうが、年下であろうが関係ない。ましてや、身分の差など、考えもせぬじゃろう。キャハハハハッ」

「……」

「ところで、お前は、何もせぬのか？」

「……何を、だ？」

「以前暮らしを共にした男は、常に私の体を求め続けた。こうやって馬に乗っている間も、私の体を愉しんだ。お前はせぬのか？」

アルベはその言葉に対して何も答えず、大きなため息をつきながら、天を仰いだ。

第六百六十六話　毒の名前

二人が旅に出てから、一ヶ月が経った。アルベたちは、クモハと言う街に入っていた。

この街はいわゆる、城壁に囲まれた街だった。ここは、四つの国の国境が接しており、交通の要所であった。そのため、ここには人や物が集まる物流の拠点であり、それだけに、この土地を巡っては古くから戦いが絶えなかったった。

現在この街を支配しているのはラブソ王国であり、英明で名高いネーファ二世の許、この街は飛躍的に発展を遂げてきた。

アルベは、さまざまな人種が行き交う街の様子が珍しく、終始、キョロキョロと忙しそうに首を左右に動かしていた。そんな彼の様子には興味がないと言わんばかりに、ミルワはただ一点を見据えて歩を進めていた。

彼女が探していたのは、宿泊する宿だった。この街で最も豪華な部屋を持つ宿を探していたのだった。

二人の旅は、快適そのものと言えた。泊まる宿は決まって、その街で一番の宿屋を選択した。当然、食事についても、その街で食べられる最も高価で、豪華な食事を選んだ。そのお陰でアルベは少し太った。一方のミルワは、体形に全く変化はなかった。彼女はいつも、アルベの食べる倍の量を食べていたのだが。

この日、二人が選択した宿屋は、まるで、お城のような作りをしていた。部屋は広く、ベッドも大きくて広かった。調度品も見事なものばかりで、まるで王族の部屋のような趣を備えていた。

二人が荷物を下ろしてしばらくすると、メイド姿の女性たちが入室してきた。そして、甲斐甲斐しく食事の準備をして、恭しく一礼してその場を去っていった。

二人は無言で席に着くと、用意された食事を黙々と口に運んだ。アルベは、父に口やかましく言われていたことが幸いして、嘘でもそれなりの作法に則って食事をしていたが、ミルワのそれはぞんざいなものだった。彼女とて、金持ちの妾として振舞う以上、そうした作法を身に付けているはずなのだが、アルベの前では、堂々と素の自分を曝した。彼女は、単に腹が満たされればよいと言わんばかりに次々と用意された食事を口に運ぶ。それはまるで、咀嚼もそこそこに食べ物を飲み込んでいるかのようにも見えた。

そんな彼女の様子に、アルベは全く興味がないと言わんばかりの態度を取り続けた。本音を言えば、これだけの美貌を持っているのだ。それなりの作法で食事を摂れば、もっと自分は彼女に心酔したに違いないだろうと思ったが、そんなことを言っても無駄なことはわかりきったことだった。

「お前」

不意に話しかけられて、アルベはスッと顔を上げる。目の前では、頬杖を突きながら視線を向けているミルワの姿があった。

「お前が作る毒、あれは何という名前じゃ？」

「名前？」

「そうじゃ」

「……」

そう言えば、そんなものはなかったと気付く。別に毒は毒でよいではないかとアルベは腹の中で嘯く。そんなものを付けたところで、何が変わることもないのだ。

「もし、ここであの毒を使って、多くの人が死ねば、あの毒の名前は、この街の名前……クモハになるな？」

彼女が一体何を言いたいのかの意図が掴めず、アルベは思わず顔をしかめる。その様子を見たミルワは、ケラケラと笑い始めた。

「キャハハハッ。もし、アガルタで、その毒で多くの人を殺したら、それはアガルタと呼ばれることになるな？　面白い。面白いではないか、キャハハハハッ！」

一体何が面白いのか、アルベには見当がつかなかった。ただ、ここはヘタに彼女に反論するべきではないことは、本能的に察知していた。

「お前のその毒、ソレイユと名付けようではないか」

「……」

ニヤリと下卑た笑みをミルワは浮かべている。アルベはただ、黙って彼女の表情を眺めていた。

「その毒で、精々多くの人を殺そうではないか。殺せば殺すほど、その毒が多くの人々に恐怖を与える。同時に、その毒を憎むことになる。すなわち、ソレイユという名前への憎しみが増すことになる」

そこまでして、そのソレイユという女性を貶めたいのか。アルベは自分のねじ曲がって性格は十分熟知していて、自分を超える偏屈な人間はそうはあるまいと考えていたが、目の前に座るサイリュースは、自分をはるかに超える、狂気すら感じる程のねじ曲がった性格だった。

アルベはふと、このミルワが憎むソレイユと言う女性に思いを馳せてみた。このひと月の旅路の中で、アガルタ王とその妃たちの情報はかなり集まってきていた。その中で、ソレイユと言う女性は、抜群のプロポーションと色香を持ち、彼女を見た男は総じて、その心を奪われるのだと聞かされていた。アガルタ王の妃に収まったのも、その色香のためであるというのが専らの噂だった。

そこまで言われる程の女性であれば、一度見てみたいというのが、正直な思いだった。だが、アルベはあまり体の大きな女性は好みではなかった。どちらかと言えば小柄な彼は、自分と同じような体格の女性が好みだった。加えて彼は、自身の能力にコンプレックスがあるためか、知的で聡明な女性を好む傾向にあった。そう考えたとき、自分の好みに合うのは、アガルタ王の正妃であるリコレットか、妃のコンシディーが適当と言えた。アルベの意識は自然と、この二人に注がれるようになってきていた。

「お前」

まるで、妄想の世界から現実に引き戻すかのような低い声が聞こえ

てきた。見ると、ミルワが明らかに不機嫌そうな表情を浮かべながらこちらを見ていた。

「他の女を抱くのは構わぬ。だが、それは、私を満足させてからじゃ」

「……」

「他の女のことを考える暇があるのならば、この私を満足させる方法を考えよ。……心配するな。ソレイユを殺すことができれば、お前は好きなだけ他の女を抱けばよい。ついでに、アガルタ王も殺すことができれば、お前は好きなだけあの王の妃を自由にしてよい」

「……」

アルベは一気に食欲を無くし、手に持っていたナイフとフォークを静かにテーブルの上に置いた。しばらくすると、メイドの格好をした女性たちが食器を下げにやって来た。彼女らはテキパキと片付けながら、隣に備えられているバスルームのバスタブに、魔法で湯を張っていった。その姿が見えなくなると、ミルワはいそいそと着ている服を脱ぎだした。それを見て、アルベもゆっくりと服を脱いだ。

「さあ来い。洗うのじゃ」

ミルワはそう言うとバスルームに向かう。彼女はバスタブに飛び込んで体を濡らすと、遅れて入ってきたアルベの前に仁王立ちになった。彼は旅の途中で手に入れた、体を洗うための液体が入った瓶を携えていた。彼はそこから液体を少し手に取ると、丹念にミルワの体にそれを塗り付けていく。まるで、何か大切なもの磨くかのように、丹念にそれを塗り込んでいった。

「明日は早く起きるのじゃ」

「……」

「この宿の近くに、井戸があったであろう？　あそこに、お前の毒……ソレイユを投げ込むのじゃ。あとは適当に、いくつかの井戸にも投げ込むのじゃ。できるだけ多くの者が殺せるように、たくさん毒を作るのじゃ。よいな？」

アルベは何も言わず、ただ黙ってミルワの体を洗う。その様子を承服したと理解したミルワは、アルベの手を止めるよう手で制した。

「立て。今度は私がお前を洗ってやろう。明日は、ソレイユの名が汚辱にまみれる記念すべき一日となるであろう。今宵はその、前祝じゃ」

そう言ってミルワは両手でアルベの顔を、まるで挟み込むようにして手を添えると、そのまま彼の唇を奪った。その小さな体をアルベは力強く抱きしめた。

第六百六十七話　やってみれば？

それから数日後、リノスの許に一通の書簡が送られてきた。送り主は、ラブソ王国国王であるネーファ二世だった。

そこには、クモハという街で多くの人命が失われたこと、それが、特定の井戸の水を飲んだ者に限られていることが記されていた。その井戸には、誰かが恣意的に毒を投げ込んだ可能性が高いこと、しかも、その毒の名はソレイユと言われている旨が記されていた。

書簡の中でネーファ二世は、クモハでは井戸の水の使用をすぐさま禁止し、いわゆる現場保存ができている状態であるために、できるだけ速やかにアガルタ大学の研究者を派遣して、毒物の特定をしてもらいたいと記されていた。

リノスは書簡を読み終えると、すぐに主だった者を集めて、緊急会議を開いた。

「一体何の毒物でしょうか？　何のかかわりもない者を大量に殺戮するなど……許されることではありませんわ」

真っ先に口を開いたのは、リコだった。彼女は皆の顔を見廻しながら、それぞれに発言を促す。

「う～ん。今のところ、そんなに嫌な予感はしないですね……」

シディーが腕を組みながら天を仰いでいる。

「私が行きます」

突然、メイが口を開いた。彼女の眼は凛とした光で満ちていた。

「ネーファ王様の書簡を見る限り、これは、マトグラフ帝国で起こった事案と酷似しています」

「マトグラフ？　あー」

リノスは思い出していた。ついひと月ほど前に、マトグラフ帝国の小さな町で、突如として多くの人が亡くなったという報告があったのだ。そのときは、特に要請などがなかったために、積極的に動くことはなかった。

ちなみに、この世界で突如として多くの人々が亡くなるという事例は珍しいことではなかった。突然強力な伝染病が発生することもあるし、また、強力な毒を持った魔物がそうした惨事を引き起こすこともあった。だが、今回の事例は、そのどれにも当てはまらず、明らかに人の手で恣意的に行われた大量殺人であると、ネーファ二世は断じていた。

「大抵の毒物は、口に含むと何らかの違和感があるものです。特に毒性が強ければ強いほど、その傾向は強くなります」

「ですがお姉さま、アニサキスの魚の肝は、とても強い毒がありますが、甘い味がします」

口を開いたのは、ルアラだ。彼女の言葉に、隣に座っているフェリスも頷いている。

「私たちクルルカンは大丈夫ですが、あの毒は、結構高ランクの魔物でも死んでしまう程強力な毒よね」

二人の意見に、メイは大きく頷く。

「確かにそうした毒もあります。しかし今回、ネーファ様からの書簡によりますと、水を飲んだ人々がバタバタと倒れていったとあります。アニサキスの毒は、摂取してから約二時間後にその症状が現れます。マトグラス帝国のそれと、クモハでのそれは、詳しく調べてみませんとわかりませんが、かなり毒性の強いものであると考えてよいと思います。これほどの毒であれば、思わず吐き出してしまう方もいらっしゃると思うのですが……。この書簡からはそうしたことは読み取れません。まずは、現地に赴いて毒の成分を調べる必要があります。それに……」

「ああ、アガルタ大学には、ネーファ王の令嬢が留学しているんだっけな？」

「はい。ご主人様の言われる通りです。もちろんそれもありますが、気になるのは、その毒の名前が……」

「ソレイユ、ってか？」

皆の視線がソレイユに注がれる。決して彼女を疑っているわけではない。単なる偶然なのだろうが、よりにもよって、なぜ彼女の名前が出たのだろうと、皆、不思議に思っているのだ。

そんな皆の空気を察してか、ソレイユがゆっくりと口を開く。

「メイ様、クモハには、私も同行いたします」

「ソレイユも行くのか？　いや、別に……」

「いいえ。ぜひ行かせてほしいのです。もしかすると、サイリュースが関わっている可能性があります」

「サイリュースが？　どうして？」

「きっと私に、恨みを持っている者ではないかと」

「ソレイユに恨み？　はぁ！？」

俺は思わず頓狂な声を上げる。サイリュースの里においてソレイユは、全員から尊敬の念を抱かれているのだ。恰好こそエロいが、神龍様と契約ができる能力の高さはもちろんだが、後輩の面倒見もとてもよいため、彼女のことを悪くいう者を見たことがなかったのだ。

「誰か、心当りがあるのか？」

リノスの質問に、ソレイユはニコリと可愛らしい笑みを返した。リノスは何かを察したのか、それ以上は何も彼女に問いかけなかった。

「わかった。では、ネーファ王の要請を受け入れることにする。メイ、すまないが、すぐにでもクモハに出立してくれ。連れていく者の人選は任せる。あとは……ソレイユ。お前も一緒に行ってくれ。言うまでもないことだが、くれぐれも無理をすることのないように。危険を感じたらすぐに撤退すること。国同士の調整ごとについては、こちらに任せて欲しい。いざとなったら、俺が出る。いいなみんな？」

リノスの言葉に、全員が頭を下げた。

◆　◆　◆

メイの行動は素早かった。その日のうちに人選を終え、自身は毒の研究をしている者一人と、秘書であるセルロイトを伴って、秘かにクモハに入った。

メイたちは魔術師のような衣装を身に付け、フードを目深くかぶって、街中を調査した。

クモハの街は、まるで廃墟のように人気がなかった。水の手が絶たれているのだ。人々が街を捨てて避難することは、十分に考えられることであると言えた。

街には、警備と思われる兵士たちが散見されるのみだった。彼らは決まって井戸の周囲に佇んでいて、その井戸に人が近づかないように監視していた。

「……これでは、よくわかりませんね。出直しましょう、メイ様」

メイの後ろから男の声が聞こえた。声の主は、テラシという男だった。まだ若いが、毒の研究を専門に行っていて、その博識ぶりではアガルタ大学随一と言えた。彼は、キョロキョロと辺りを見廻しながら、さらに言葉を続ける。

「ほとんど人影が見当たりません。ほら、兵士たちがチラチラと私たちを見ています。明らかに怪しまれています。下手をすれば、捕らえられるようなことになりかねません。ここは一度、アガルタに戻りましょう」

彼の言葉に、メイは言葉を絞り出すようにして口を開く。

「出直しては……。毒の効果が薄れてしまう可能性が、あります……」

「確かにそうですが、今はメイ様のお身が大事です。ここは……」

「やってみれば、いいと思い、ます」

突然口を開いたのはセルロイトだ。彼女はスタスタと歩き出すと、井戸を警備している兵士の前に立った。

「あの……水を、飲みたい、の、ですが」

兵士はセルロイトをまるで、舐めるようにして眺めていたが、やがて厳しい顔つきのまま、ゆっくりと口を開いた。

「ダメだ」

「……なぜ、でしょう、か」

「この井戸は、毒に侵されているらしい。飲むと死ぬんだ」

「ええ。そうなの、ですか」

一切抑揚のない棒読みのセリフ廻しだ。そんな彼女をテラシは心配そうに眺めている。

「水を、見ても、構いませんか？」

セルロイトの問いかけに、兵士はめんどくさそうな表情を浮かべたが、やがて、傍に合った釣瓶を手に取ると、勢いよくそれを井戸の中に投げ込んだ。そして、それをゆっくりと引き上げると、グッとそれを前に突き出して、セルロイトに見せた。

「ほらよ。何の変哲もない水だろう？　だがな、これは毒なんだ。間違っても飲むんじゃないぞ」

そのとき、セルロイトがスッと釣瓶の中に手を入れた。兵士は驚いた表情を浮かべて、手に持っていた釣瓶を井戸の中に投げ入れた。

「バカ！　触るんじゃない！　死にたいのか！」

「……失礼しました」

セルロイトはスタスタと歩いて、メイたちの許に戻ってきた。

「サンプルが、取れました」

彼女の手には、小さなガラスの容器が握られていて、そこには透明の液体が入っていた……。

第六百六十八話　隠しても隠しきれぬ……

メイたちは、そそくさとその場を離れ、そのまま街を出ると、転移結界を使ってアガルタ大学に戻ってきた。

すぐさまメイは、セルロイトが採取したサンプルを、テラシに分析するように命じた。彼は、頭をポリポリと掻きながら、承知しましたと言って研究室に戻っていった。

その夜、メイは事の顛末をリノスに報告した。

「スゲェな、セルロイトちゃん。よく手に入れたな」

ちょうど子供たちを風呂から上げて、二人でゆっくりと湯船に浸かっているときだった。リノスはザブザブと顔を洗い、大きく一息をつくと、ぼんやりと天井を見上げた。

「一体どんな毒なんだろうな？」

「分析の結果を見なければわかりませんが、見たところ水は透明で、無色でした。特に臭いらしいものも感じませんでした」

「そうか。無臭か……。何だか厄介そうだな。成分がわかれば、解毒剤が作れる……か？」

「そうしたいのはやまやまなのですが……」

そう言ってメイは俯く。その横顔からは、メイが直感的にこの毒物

に対する打開策がまだ、打ち出せていないことを告げていた。

「まあ、明日、正式にクモハに赴いて調査をしてから考えればいい。行き詰るようならば、シディーにも手伝ってもらうといいんじゃないかな？」

リノス言葉に、メイは言葉少なげに、ありがとうございますとだけ呟いた。

次の日、メイは昨日のメンバーに加えて、ポーセハイのチワンとソレイユを伴って、アガルタ大学からクモハに移動した。彼女らは街の外、城壁から少し離れたところに転移し、そこから徒歩でクモハに向かった。街に入るために設けられた門に近づくと、そこには二名の兵士が控えていた。よく見ると彼らは正装に身を包んでいた。

彼らはメイの姿を見つけると、正面を向いていた体勢から、互いに向き合う恰好を取り、「捧げ筒」のようなポーズを取った。言うまでもなく、前方からやって来る集団が、アガルタ王の妃一行であると承知しての行動だった。

メイたちが門の前まで来ると、大きな音を立てて門が開かれた。中には、門番と同様、正装に身を包んだ兵士たちが整列して、彼女らを迎えていた。そのとき、一人の男が駆け足で彼女らの前に近づいてきた。彼は、メイたちの前で停まると、カツンと音を鳴らせて踵を合わせると、素早く挙手の礼を取った。

「ハッ！　この度は、我が王の要請に応えて、遠路はるばるお越しいただきまして、恐縮の限りでございます。私は、クモハ防衛隊の指揮を執ります、ヨンフと申します！　不躾ながら、私が皆様を案内申し上げます！」

そう言うと彼は、クルリと廻れ右をして、ゆっくりと歩き出した。よく訓練された動きだった。メイたちは顔を見合わせたが、取り敢えず、ヨンフと名乗る男に付いて行くことにした。

彼は何を喋るでなく、ただ黙々と歩いた。すぐ先には井戸が見えている。てっきりそこに案内するのかと思っていると、彼は井戸の手前で右に曲がった。一体どこに連れて行く気なのかと思ったそのとき、皆の目の前に、椅子に腰かけた男が見えた。その後ろには、やはり正装した兵士たちが犇めいていた。

椅子に腰かけた男は、メイたちを見るとゆっくりと立ち上がった。これまで前を歩いていたヨンフは、その男に挙手の礼を取ると何かを言おうとしたが、その瞬間、男はスッと手を挙げた。

「お待ちしておりました、メイリアス王妃。ラブソ王国国王、ラブソ・レア・ネーファです」

男はそう言って近づいて来て、メイの前で足を停めた。そのとき、メイの後ろに控えていたセルロイトが、スッと片膝をつき、右手を胸に当てて畏まった。彼女につられる形で、チワンとテラシも同じように片膝をついた。ソレイユは、メイから一歩下がると、たったまま、胸に手を当てた状態で、少しだけ腰を折った。

「皆さん、そのように畏まらないでいただきたい。皆さんは我が国がお呼びした方々です。どうぞ、お立ち下さい」

ネーファ王に促されるように、三人は再び立ち上がった。王はそれを見ると、右手を胸に当てて、スッと腰を折った。

「この度は遠方のところ、わざわざのお越し。感謝申します」

「いいえ。そのようなこと……。多くの方々がお亡くなりになったと聞きました。アガルタ王・リノスも、その惨状を聞いて心を痛めております。非才なる身ではございますが、少しでもお役に立てますよう、協力いたす所存です」

そう言ってメイは、ネーファ王と同じように右手を胸に当て、スッと膝を折った。

「いや、大賢者・メイリアス殿にお越しいただいたのだ。百万の味方を得た気分です。どうぞ、よろしくお願いいたします」

「いいえ、こちらこそ」

「ところで、こちらは……？」

ネーファ王の柔和な笑みが、ソレイユに向けられている。ソレイユはニコリと微笑むと、ゆっくりと口を開く。

「申し遅れました。私は、アガルタ王・リノスに仕えます、ソレイユと言うものです」

「……ソレイユ」

一瞬、ネーファ王の表情が硬くなった。だが、すぐに元の表情に戻り、ソレイユに向かって一礼した。

「アガルタ王もお人が悪い。まさか、お妃さまを二人もお遣わしになるとは……」

「ホホホ、お気遣いなさらないで下さいませ」

そう言ってソレイユは妖艶な笑みを浮かべる。ネーファ王が気付かないのも無理はなかった。メイは、アガルタ大学学長が着用する、白のローブを着ていたのだが、一方のソレイユは、濃紺の、まるで修道女のような衣装を身に付けていた。一見すると、メイの侍女のように見えるその格好は、ネーファ王をして、まさかこの人が一国の王の妃であると認識させなかった。だが、その隠しても隠しきれぬ色気は、この聡明な王であっても、視線を外すことができなかった。

「……」

少し、変な間が開いてしまった。ネーファ王は、オホンと咳払いをすると、では、と言って、皆を井戸の前に案内した。

「毒が投げ込まれたのはこの井戸と、この先にある井戸の二つです。この井戸は豊富な水量があるため、ここから地下にある水路を通って、町中の井戸に水が送られているのです」

チワンが、失礼、と言って両手を合わせ、ライトの呪文を唱える。彼はその光の玉を、ゆっくりと井戸の中に落とした。

「なるほど、水が滾々と湧き出ていますね。……とても透明度の高い水だ。……下にあるのは……穴ですか？　あそこから、水を行き渡らせているのですね？」

チワンが井戸の中を覗き込みながら、誰に言うともなく呟いている。その様子を、ネーファ王は横目で見ながら、メイに向かって口を開

く。

「ところで、何か、おわかりになりましたか？」

「わかった……とは、どういうことでしょうか？」

「昨日、あなた方が持ち帰られた水のことです。さすがに、一晩では何もわからなかったのでしょうか？」

メイ、ソレイユ、セルロイトは、王の言葉に対して眉一つ動かさず、平静を装った。だが、テラニは、体を震わせて動揺を露わにした。そんな彼に王はチラリと視線を向けたが、やがて柔和な表情を浮かべながら、メイに視線を戻した。

「はい。現在分析中ですので、まだ何もわかってはおりません」

「そうですか」

「……なんでわかったんだ？」

テラニが小さな声で呟く。その声に、ネーファ王はクスクスと笑いながら、口を開く。

「この街は、私の命令ですべての井戸の使用を禁止し、住民たちを避難させ、街を閉鎖しました。この街にいるのは、兵士たちのみです。そんな状況下で街に入り、井戸に接触するなどということは、普通の者ではできないことです。アガルタ王ならば、いや、大賢者メイリアスならば、事前の調査に赴く可能性は十分にある。そう考えたのです」

「何と優秀な御方……」

ソレイユがスッと目を細めながら、誰に言うともなく呟く。その表情を見たネーファ王の心臓の鼓動が速くなっていた……。

第六百六十九話　ソレイユ視点

いけない、いけない、とソレイユは心の中で呟いていた。ネーファ王は明らかに自分に対して欲情していたからだ。

だが、この王は一瞬でその欲望を消し去り、平静に戻った。己の欲望を見事にコントロールすることができている。かなり、優秀な王であると言ってよかった。彼の眼には深い知性が宿っている。

こうした、優れた男性を見ると、無意識のうちに関心を引こうとしてしまう。我ながら悪い癖だと思うし、幼い頃から徹底して仕込まれた技術の恐ろしさを、彼女は感じていた。

とはいえ、この王と夫であるリノスを比べてみると、明らかに夫の方に軍配が上がる。初めて夫に出会ったときに感じた、何としても手に入れたいという欲望が起きることはなかった。

ネーファ王は、メイにこの街で起こった惨状を説明している。その様子を見ながら彼女は、全方位に向けて、サイリュースの気配を探っていた。

ソレイユと名付けられている毒物。これは偶然ではない。明らかに自分に対して憎しみを持つ者の仕業だ。その者の心当りが、ソレイユにはあった。

それはいずれも次期族長候補を争った者たちだった。ソレイユの脳裏に、三人のサイリュースの顔が浮かんでいた。

一人は、エスカリーナという、水の精霊と契約したサイリュースだった。彼女とソレイユは幼い頃から、いつも行動を共にするほど仲が良かった。

彼女は優秀だった。同世代のサイリュースの中で最も早く水の精霊と契約することができていた。また、長ずるにしたがって、その美貌にも磨きがかかり、ソレイユよりも色香のある女性に成長した。

しかし、エスカリーナが目を付け、篭絡を試みた男性が、あろうことか、ソレイユに恋慕した。彼は完全にソレイユの虜となり、事あるごとにソレイユを追いかけまわした。しかし、ソレイユにとっては、全く食指の動かない男であり、そうした男性の行為は、迷惑以外の何物でもなかった。

ソレイユとは完全に脈がないと知った男性は、失意のあまり自ら命を絶った。これに激怒したのが、エスカリーナだった。彼女は男を死に追いやったのはソレイユのせいだと思い込み、そのまま里を捨ててどこかに去っていった。一番の親友を失ったソレイユは落ち込み、しばらくは立ち直ることができなかったほどだ。

もう一人は、エレナというサイリュースだ。彼女は族長であるヴィヴァルが前に契約していた森の精霊と契約することに成功していた。族長が契約する程の精霊が認めた者で、言わばソレイユと次期族長候補を争った者だった。

しかし、ソレイユがリノスと結婚し、神龍様と契約したことで、次期族長候補からは外されてしまった。それ以降はふさぎ込みがちになり、サイリュースの里を留守にすることが多くなっていた。

そして、最後に脳裏をかすめたのが、ミルワの顔だった。

ソレイユは、心の中で先の二人が犯人であってほしくないという気持ちが強かった。とりわけ、エスカリーナは水の精霊と契約している。その精霊はかなり高位であったために、エスカリーナがその気になれば、そうした毒物を作り出す可能性はなくはなかった。

ソレイユは、ゆっくりとクモハの街を見廻しながら、小さな音で口笛を吹いていた。サイリュースの契約した精霊の動きがあれば、必ずそこに気配が残る。この街に毒物が投げ込まれてまだ、そう日は遠くない。ソレイユの能力を使えば、簡単にそれは見つけられるはずだった。

だが、精霊が動いた形跡は、全く感じることはできなかった。

やはりミルワ、か。

ソレイユは心の中でそう呟く。厄介だと思う気持ちと、やはりそうだったかという何とも言えない気持ちになる。彼女であれば、自分を追い落とすために手段は選ばないだろう。その上、空気の精霊であるポープと契約している。空気を操られると厄介だ。自分の痕跡を消すことができるからだ。

ソレイユは再び小さな声で口笛を吹く。今度は範囲を広げて、この街の外にまで探りを入れてみる。

……一瞬、ソレイユの動きが止まった。

「どうかされましたか、ソレイユ妃」

名前を呼んだのは、ネーファだった。彼は、相変わらず優しげな笑

みを浮かべながらソレイユに視線を向けていた。

「いいえ。初めて見る街で、珍しさからついつい、あちこちと眺めておりました」

「気に入っていただければ、こんなに嬉しいことはありません」

ふと見ると、メイたちがガラス瓶に井戸の水を詰めていて、ちょうどそれが終わったところだった。

「大変お待たせいたしました」

突然兵士の大声が響き渡る。見ると、ネーファ王の許に、一人の兵士が恭しく控えていた。彼の手には、大きなネズミのような生き物があった。

森の中によくいる大ネズミだ。もう一人の兵士が釣瓶を持って、井戸の中から水を汲み、その中にネズミを放り込んだ。

ネズミはしばらく暴れていたが、やがて、叫び声にも似た声を上げたかと思うと、勢いよく釣瓶から飛び出し、脱兎の如くその場を走り去ってしまった。

「やはり、ここの水は既に浄化されてしまっているようだ。さすがはメイリアス王妃だ」

ネーファ王は頷きながらメイに視線を向けている。メイは王の前に一歩進み出て、毅然とした声で口を開く。

「取り急ぎアガルタに戻りまして、採取した水の分析を行いたく存

じます。おそらく、ですが、この井戸は常時地下から水が湧き出している状態で、さらには、そこから地下の水道を通って各所に水が流れている状態です。従って、毒物がこの井戸に滞留している可能性は少ないと考えています。今回は、その予測に基づき、井戸の底の水を採取していますが、ここから毒物が検出される可能性は低いと考えます。ですから……」

「死んだ者の躯が必要となる、か」

「……はい」

「我が国の大事な臣民の躯を切り刻まれるのは、我が体を刻まれることと同じ……。だが、背に腹は代えられぬか……」

ネーファ王は、傍らに控えていた兵士に目配せをする。すると、兵士が立ち上がり、恭しく一礼して、その場を去っていった。

「我が軍の兵士の遺体を、提供しよう」

「……ありがとうございます」

メイはネーファ王に対して深々と一礼する。その後ろで、チワンは目を閉じて俯いている。念話で仲間に連絡を取り、戻り次第検死を行うことを告げているようだ。

しばらくすると、布にくるまれた、まるでミイラのようなものが四体運び込まれてきた。どうやらこれが、毒物を飲んで死亡した兵士の遺体のようだ。メイたちはその遺体に対して、スッと目礼をし、ソレイユもそれに倣う。

「それでは、早速アガルタに戻りまして、調査いたします。何かわかればすぐに、報告いたします」

「よろしくお願いします。期待しております」

ネーファ王は力強くメイの手を握った。彼女は少し戸惑った表情を浮かべたが、すぐに元の表情に戻り、ニコリと笑みを浮かべながら力強く頷いた。

「それでは、戻りましょうか」

メイがチワンたちに声をかける。彼はゆっくりと頷く。彼の傍にテラシが急いで近づいていく。

「瞬時に移動するスキルがあって、羨ましい限りです。ポーセハイを味方につけている以上、アガルタの地位は揺るぐことはない」

ネーファ王が誰に言うともなく呟く。メイはその声に対して何の反応も示さなかった。そのとき、ソレイユが口を開いた。

「すみません。少しだけ、待ってください」

彼女はスッと北の方向を向くと、声にならないような小さな声で、歌うような声を上げた。

「お待たせしました」

何とも言えぬ愛嬌のある笑みを浮かべながら、ソレイユは小走りでメイの許に向かう。

「それでは、失礼します」

メイをはじめ、全員がネーファ王に向けて一礼する。その瞬間、彼女らの姿はまるで、煙のように消え失せたのだった……。

第六百七十話　自ら、水から

それから二日後、リノスの許にメイは、クモハで提供された遺体の検死結果を報告した。驚くべきことに彼女は、きれいに清書された分厚い報告書までも携えていた。

リノスはその仕事ぶりに半ば呆れながらも、メイの説明にじっと耳を傾けた。

「結論から申しますと、今回、クモハで使用された毒は、これまでも見たことがない、いわゆる新種の毒物であると言えます」

「新種の毒物……か」

リノスは報告書に目を通しながら呟く。そこには、解剖した際の遺体の絵が描かれているなど、リノスでも理解できる内容が描かれている一方で、複雑な化学式や難しい言葉が羅列されていて、とても素人には理解できない内容がほとんどだった。

彼は提出された報告書を傍らに置くと、再びメイに向き直る。

「で、具体的には、どんな毒なんだ?」

「はい。極めて殺傷能力が高いというのが大きな特徴です。この毒が体内に入りますと、すぐに呼吸困難の状況に陥ります。ネーファ王様から提供されたご遺体は、すべて、直接の死因は窒息死でした」

「窒息死……か。打開策は……」

「はい。今のところは……」

「そうか。窒息死ということは、自発呼吸ができなくなるって言うことか……。空気を無理やり肺に送り込められれば話は別なのだろうが……」

「そうですね。そうした機器を開発するよう研究者に提案をしていますが、いつそれが実用化できるのかの目途は立っておりません。また、それが実用化されたとしても、果たしてこの毒に効果的に働くのかどうかは、未知数です」

「まあ、何もしないよりはマシだろうな。シディーらドワーフたちにも手伝ってもらうといいだろう。俺から話しておこう」

「……ありがとうございます」

「メイ」

「はい」

「大丈夫か？」

「……何が、でしょうか？」

「この二日間、全く寝ていないだろう？」

「……」

「いや、別に責めているわけじゃないよ。この毒に、かなり興味を

持ったんだな？」

「……今まで多くの毒に接してきましたが、このような強力な毒は初めて見ました」

「まあ、興味のあることを徹底して追及する姿勢は素晴らしいと思うが、やはり、不眠不休で仕事をするというのは心配だ。この報告書は、完成版ということでよいのかな？」

「はい。あとは……」

「いや、メイ。取り敢えず今日は休もうか」

「……」

「お願い。今日は、ゆっくり休んで？　ペーリスに美味しい食事を作ってと頼んでおくから。屋敷に帰って、美味しい食事を摂って、ゆっくり風呂に入って、そのまま寝ちゃってください。まだ日が高いから眠りにくいかもしれないけれど、ね？」

「……承知、しました」

「あと、きっとセルロイトちゃんやチワンたちも手伝ったんだろう？　二人にも休むように伝えてくれ」

「……承知しました」

メイはそう言ってリノスの許を辞した。執務室で一人になったリノスは、机に置いてあったもう一つの報告書に手を伸ばした。そこには、この毒を作ったと思しき男についての情報が記されていた。

◆◆◆

「マミー？」

同じ頃、リノスの屋敷では娘のアリリアが庭に出て、キョロキョロと周囲を窺っていた。庭で花を摘んでくるといったソレイユが、なかなか帰って来ないのだ。彼女の後ろから、フェアリードラゴンのフェアリもペタペタと足音を鳴らして付いて来た。

ソレイユはすぐに見つかった。花畑の真ん中で、あらぬ方向に視線を泳がせていた。思わず二人は顔を見合わせる。

「ねえ、フェアリ。マミーは何をしているんだろう？」

「きゅー？」

そのとき、ソレイユの歌声が聞こえてきた。その瞬間、アリリアは動くことができなくなった。

いつものマミーの歌は、楽しく、元気が出るような歌が多かった。静かな曲というのは、ベッドで歌ってくれる子守歌くらいのものだったが、今、マミーが歌っているのは、それとは違う、何か神々しさを感じさせる曲調だった。

あんぐりと口を開けたまま、アリリアは呆然とソレイユの歌う姿を眺め続ける。一体どのくらいの時間が経っただろうか。かなり長い時間、ソレイユは歌い続けている。だがアリリアはその歌声に飽きるどころか、いつまでも聞いていたいという思いに駆られていた。

「アリリア」

突然名前を呼ばれて、ハッと我に帰る。ふと振り向くと、そこにはメイリアスの姿があった。

「あ、おかあさん」

アリリアの声に、ソレイユは歌うのを止めてしまった。彼女はゆっくりと花畑から出てくると、メイに優しく微笑みかけた。

「おかえりなさいメイ様。ずいぶん早いお帰りですね」

「ええ。今日は早めに帰らせてもらいました。あの……昼食の準備ができたので……」

「ああ、もうそんな時間ですか。そういえば、お腹がすきましたね。一緒に戻りましょう」

そう言ってソレイユはスタスタと屋敷に向かって歩いて行く。その後ろをメイとアリリア、そしてフェアリが付いて行った。

「ねえ、おかあさん。マミーの歌、すごかったね」

「歌？」

「ほらぁ、あの凄い歌だよ～。ね、フェアリ？」

「きゅぅ～」

「ごめんなさい。お母さんには聞こえなかったわ」

「ええ～？　ねえ、マミー」

アリリアは走ってソレイユに近づくと、両手で彼女の左手を握った。

「マミー、あの歌、私にも今度教えて？」

「うーん、そうね。また、今度、ね」

ソレイユはそう言ってニッコリと微笑む。その笑顔はいつも以上に美しい笑顔だとアリリアは思った。その一方で、いつも歌を教えてくれと頼むと、喜んで教えてくれるマミーが、このときだけは歯切れの悪い返答したことに、彼女は何とも言えぬ不安な気持ちに駆られたのだった。

その頃、ラブソ王国の深い森の中で、一人の女性が蹲っていた。四つん這いの格好になりながら、ハアハアと肩を動かしながら苦しそうに喘いでいた。

女性の頭には小さな角があった。髪の色は水色で、透き通るような白い肌をしていた。その顔立ちは美しく、まるで、どこかの大国の姫のような気品を備えていた。

女性はやっとのことで立ち上がると、目の前にあった太い木の幹にもたれかかった。そして、空を見上げると、大きく息を吸い込み、吐き出した。

それを繰り返すこと数度、やっとのことで彼女は落ち着きを取り戻した。

「……ソレイユ……何ということを」

女性は誰に言うともなく呟いた。

信じられないことだった。すぐ近くにある湖。そこで彼女は休息を取っていた。衣服が濡れるのも厭わず、水の中に頭まで浸かり、そのまま仰向けになってプカプカと浮いていた。傍から見れば、異様な光景に違いなかった。だが、彼女にはその姿を他人に見られない、絶対の自信があった。

彼女の名はエスカリーナ。上位の水の精霊と契約しているサイリュースだった。彼女は精霊と契約しているおかげで、水の中にいるときは、自分の気配を完全に隠すことができた。その上、彼女は水に浸かることで、水から命の糧を得ることができた。言わば、エスカリーナにとって水の中に入ることは、食事の時間でもあり、休息の時間でもあった。

基本的に彼女は、水の中で生活することが多かった。この湖の水はとてもきれいで、地下から滾滾と湧き出す地下水は、人が飲んでもほとんど影響のないほどのものだった。エスカリーナは、この湖が気に入っていた。

そんな彼女に、突然、ソレイユの声が響き渡った。懐かしさを感じる余裕はなかった。その声には、彼女の圧倒する神々しさがあった。

ソレイユがアガルタ王・リノスの妃となったのは知っていた。だが、その声は、エスカリーナが知っている声ではなかった。

恐怖でも不快でもない感情……。どちらかと言えば、恐れ多くてその場にいるのが憚られる……。そんな感覚に囚われた彼女は、思わ

ず水から陸に上がり、本能的に耳を塞いだ。だが、ソレイユの声は彼女の脳内に流れ続けた。

「……ソレイユ……あなたは」

雲一つない青空に向かって、エスカリーナは呟いた……。

第六百七十一話　空を見る

ソレイユはこう言っていた。「あなたの力を借りたい」と。

サイリュースは、同じ精霊同士であれば、意志のやり取りをすることが可能だ。森の精霊同士であれば、相当距離が離れていても、精霊を介して意思をやり取りすることができる。だが、ソレイユから送られた意思は、到底、同じ精霊のものとは思えない感覚だった。

確かに、違う精霊同士であっても、意志の疎通はできなくはなかった。ただしそれは、どちらかのランクが大きく離れている場合に限られる。エスカリーナが契約している水の精霊は、かなりの上位種だ。水以外の精霊と契約している者がエスカリーナに意思を送ることは、族長のヴィヴァルの能力をもってしても、困難であると言えた。

これまでの彼女の生活は、平穏そのものだった。誰にも邪魔されない、自分だけの居場所と時間。過去の悲しい出来事は、ようやく忘れつつあった。

生涯の中で最も愛した男性と、最も心許せた親友との別れを経験したエスカリーナは、もう二度と傷つきたくないという思いから、人交わりをする気は全くなかった。

そんな彼女に、突然あの、ソレイユの声が届いたのだ。全く予想もしてなかった事態に驚くと同時に、ソレイユの声が纏う神々しさに、彼女は腰が抜ける程に驚いたのだった。

確かにソレイユは数年前、アガルタ王・リノスの妃となったことを風の噂で聞いた。二人の間にはめでたく子供も授かったことも承知していた。そのアガルタとここ、ラブソ王国とは、海を隔てた距離だ。どんなに急いでも五日はかかる距離なのだ。そんな距離を超えて意思を送ってくるなど、エスカリーナには考えられないことだった。

確か、ソレイユが契約していたのは、森の精霊だったはずだ。一瞬、水の精霊と契約をし直したのかとも考えたが、おそらく自分を超える精霊と契約できる可能性は低く、たとえ、自分と同レベルの精霊と契約できたとしても、あの神々しさの説明がつかない。何より、五日間もかかる距離を超えて意思を送るなどは、どう考えても不可能だった。

……まさかソレイユは、このラブソ王国にいるのだろうか？

森を抜けたところにある町、クモハで大きな騒動が起こったことは知っていた。今は、兵士たちが完全にあの町を封鎖してしまっていて、中に入ることはできないでいた。彼女は月に数度、あの町を訪れて、服や雑貨などを物色するのを楽しみにしていたのだ。

だが、もし、クモハにソレイユがやって来ていたら、必ずその気配を捕らえる自信がエスカリーナにはあった。しかし、彼女の感覚に、それと思しきものは一切引っかからなかった。

……もしかして、ソレイユも別の上位種と契約したのかしら？

彼女は、雲一つない青空を眺めながら、そんなことを考える。さらに、ソレイユは気になることを言っていた。サイリュースの里が滅ぶかもしれない、という話だ。しかもそこには、あの、ミルワが関

わっている。

ミルワは、何らかの強力な毒物を生み出したらしい。それを以て、近くのクモハの住民を虐殺したとソレイユは言っていた。この話を聞いたとき、彼女は一瞬、我が耳を疑ったが、相手がミルワと聞いて思わず納得した。彼女ならばやりかねないと思ったのだ。

ミルワはソレイユにライバル心を燃やしていた。それは、あの里にいた者ならば、全員が知っていることだった。

ミルワはソレイユに勝つための努力を惜しまなかった。その甲斐あって、何と、族長・ヴィヴァルに次ぐ精霊と契約することに成功したのだった。

称号持ち――アリストクラスと呼ばれる精霊と契約することは、非常な困難を伴う。何より、膨大な魔力を必要とすると同時に、その魔力を声に練り込ませて、精霊の興味を引かねばならなかった。

ミルワは修業を始めた当初から、「森の守護者」と呼ばれたアリストクラスの精霊と契約することを目指していた。それこそが、彼女の人生の目標の全てであると言ってよかった。そして、その努力は結実し、彼女はアリストクラスの精霊と契約することができた。

族長と同格の精霊との契約……それは、取りも直さず、彼女が次の族長候補に躍り出た瞬間でもあった。里の者たちからは常に一目も二目も置かれる存在となり、一部のサイリュースは、彼女に取り入ろうとする者まで現れた。

まさに、我が世の春を謳歌した瞬間だった。だが、その春は意外にも長くは続かなかった。突然、「森の守護者」の精霊は、一方的に

ミルワとの契約を破棄してしまう。その原因は、ミルワの堕落にあった。

精霊と契約してからの彼女は、一切歌うことを止めてしまった。ミルワからしてみれば、歌うことはいつでもできると考えていたのだが、契約した精霊はサイリュースに毎日歌って慰撫してもらいたいと考えていた。そんな中、精霊の耳に留まったのが、ソレイユだった。

彼女はどちらかと言えば不器用なタイプだった。歌もあまり上手には歌えなかった。そのために、なかなか契約してくれる精霊が現れなかったが、ある日突然、彼女は才能を開花させた。歌うコツを掴んだのだ。

ソレイユの歌は、他のサイリュースたちとは大きく異なっていた。無暗に魔力を込めるのではなく、その精霊が好む音に集中して魔力を込めて歌う。お陰で彼女には、複数の精霊から契約の話を持ち掛けられるまでになった。その中の一つが、あろうことか、ミルワが契約していた精霊だったのだ。

精霊側から契約を破棄された場合、精霊は二度と同じサイリュースとは契約しないことになっていた。ソレイユは周囲の勧めもあって、「森の守護者」との契約に同意したのだった。

ここに至ってミルワは、自らの立場はもちろん、命の危険にも晒されることになった。一旦、精霊側から契約を切られれば、周囲の精霊たちにその悪評は広まる。この里でミルワが精霊と契約できる可能性は、低いと言えた。そのために彼女は人知れず里を出た。

エスカリーナが知っているのは、ここまでだった。その後のミルワ

に関しては、積極的に情報を得ようとは思わなかったのだ。

……でも、あの子のこと。本気でやれば、精霊と契約することは簡単にできるはずだわ。もしかすると、かなりの上位種と契約したのかもしれない。

エスカリーナは心の中でそう呟く。クモハで撒かれた毒は、ミルワの仕業だとソレイユは言う。もし、それが本当であれば、ミルワは自分よりも上位の精霊、つまり、再びアリストクラスの精霊と契約した可能性が高い。そうでなければ、その気配を掴む自信がエスカリーナにはあった。

ここまで考えたとき、エスカリーナは木の幹を背にしたまま、ゆっくりとしゃがみこんだ。

一切気配を悟らせなかったミルワ。とんでもなく長い距離を隔てて意思を伝えてきたソレイユ。この二人との力の差は歴然だった。彼女の胸には、一抹の寂しさが去来していた。

ソレイユは、ミルワはその毒を以って多くの人を殺すだろうと言う。そして、その目的は、自分を殺すこと、さらには、サイリュースの里を滅ぼすことだと言っていた。まずはその毒のことを調べねばならない。そのためには、エスカリーナの力が必要だ。力を貸して欲しい。ソレイユはそう言っていた。

このまま傍観することはできるだろう。だが、あのミルワにサイリュースの里を蹂躙されるのは、我慢がならなかった。

確かに、ソレイユに対しての思いは消えてはいない。愛する者を奪われた傷は完全に癒えてはいない。だが、それでも、ミルワに里を

滅ぼされることを考えると、ソレイユの提案は受け入れざるを得なかった。

再びエスカリーナは、ゆっくりと立ち上がった。そして、深く深呼吸をすると、彼女は再び空を見上げた。

第六百七十二話　完全敗北？

それから数週間の間、ラブソ王国の周辺で、毒物による人の大量死が次々と報告されるようになった。それに合わせて、メイの所にはその毒の解明と解毒剤の依頼が次々と寄せられていた。

だが、その毒の解毒剤に関しての進捗は芳しくなかった。それでも、メイをはじめとした研究員たちの努力の甲斐あって、その毒の効力を軽減する薬を作ることには成功した。とはいえ、すべての人を救うことができるわけではないために、彼女はそれを、要請のあった国々に配布することを躊躇った。

それを強力に後押ししたのは、リコだった。彼女は躊躇うメイに、その薬があるだけで、人々は安心感を得ることができるのだと諭して、薬を要請のあった国々に惜しみなく配布させた。

同時にソレイユは、水と森の精霊と契約しているサイリュースを動員して、被害のあった国々に、彼女らを派遣して、そこで水の供給を行った。これは、各国々から大いに感謝され、サイリュースの評価を大きく上げることに成功したのだった。見目麗しき美女たちが甲斐甲斐しく働くその姿は、どの町でも彼女たちを人気者にした。中には、その国の王に見染められ、妃となる者もいた程だった。

一方、リノスは執務室でシディーと共に、被害のあった国々の地図を眺めながら、今後の展開を予測していた。シディーは地図をじっと眺めながら、両目を左右に忙しく動かしていた。

「おそらく、この毒の使い手は、最終的にはこのアガルタに向かっ

て来ると思われます」

「やはり、か」

「はい。このラブソ王国とその周辺で騒動を起こしておいて、その隙にアガルタに近づこうと考えているのでは、と」

「すぐにでも来るつもりかな？」

「いいえ。すぐには来ないでしょう。恐らくは、この毒の騒動が沈静化した頃を見計らって、アガルタにやって来るものと思われます」

「じゃあ、アガルタの都の結界を張り直さなきゃいけないな」

「いいえ。その必要はありません」

「うん？」

「どちらかと言うと、サイリュースの里が危ない予感がしますが、深刻な事態にはならないような気がします。このアガルタの都も同じです」

「そうか……。じゃあ、今俺たちが注力するべきことは、何だろうな？」

「被害のあった国々への対応は、リコ様とメイ様、ソレイユに任せておけばよいかと思います。リノス様は、マトカルと共に、いつでも軍を動かせるように態勢を整えておけばよいかと思います」

「アガルタ軍？　軍隊が出動する可能性があるのか？」

「う〜ん。何となく、そんな気がするのですよね……」

「わかった。マトにその旨、伝えておこう。ありがとうな、シディー」

そう言ってリノスは、シディーの頭をナデナデする。彼女はちょっと頬を赤らめながら、少し上目遣いでリノスを眺めた。

「あ、すまん。髪型が……乱れちゃうな」

「……まあ、たまには、いいです」

シディーは、工房で作業が残っていますからと言って、その場を後にした。執務室に一人残ったリノスは、改めて机の上に広げられた地図に視線を移す。

……なるほど、この毒の被害の拡大は、アガルタと反対方向だ。そうしておいて、アガルタに向かう、か。

リノスは顎に手を当てながらそんなことを考えていた。と同時に、早くこの毒の解毒剤を作らねばという感覚を覚えた。

実は、彼には苦い思い出があった。

ラブソ王国から提供された遺体については、リノスもその様子を見た。そのとき彼は、その遺体に向かって鑑定スキルを発動させていた。このスキルは優秀で、どういった死因で死に至ったのかを知ることができた。

スキルを発動してすぐ、この遺体は毒で亡くなったことはわかった。その後すぐ、彼の頭の中には複雑な化学式が展開されていた。それをメイに伝えようとしたが、彼にはそれをどう伝えてよいのかがわからなかった。ここに至って彼は、心の底から後悔した。もっと、勉強しておくべきだった、と。

鑑定スキルは、長時間発動していると頭痛を引き起こす。それは、情報量が多ければ多いほど、早くその痛みはやって来る。どうやらそれは、スキルを発動したものとの相性もあるようで、遺体を鑑定し、浮かび上がった化学式は、数秒眺めている間に、ズキズキと頭痛を引き起こした。お陰で彼は、その遺体の鑑定を僅か数秒で打ち切らざるを得なかった。ただ、そんな中でも彼は、化学式の一部を何とか紙に写していた。それをメイに渡すと、彼女は即座にそれを読み解き、ありがとうございますと、手短に礼を言って、走ってその場を後にしていった。メイたちが作った薬は、リノスのお蔭でもあったのだ。

もう一度、遺体を鑑定してみようか。そんなことを考えていたそのとき、執務室の扉がノックされた。入室してきたのは、何とソレイユだった。

彼女は、リノスに優しげな微笑を投げかけると、紹介したい者がいるので、謁見の間に来て欲しいと言った。紹介したい者がいるのならば、直接この部屋に連れてくればいいのにと思いながらも彼は、わかったと返事をして、ソレイユと共に謁見の間に向かった。

謁見の間に着くと、そこには一人の女性が膝をついて控えていた。リノスは畏まる必要はないから立つようにと促すと、女性はゆっくりと立ち上がり、顔を上げた。

……ソレイユに勝るとも劣らない美女だった。リノスは思わず息を呑んだ。

「紹介いたします。この者は、エスカリーナ。サイリュースでございます」

ソレイユの言葉に、エスカリーナは恭しく一礼した。

◆　◆　◆

否も応もなかった。まさか、ソレイユが神龍様と契約しているとは、予想もしていなかった。

エスカリーナは、空に向かって、ソレイユ、あなたの力になりましょうと、小さな声で呟いた。

「あなたなら、そう言ってくれると思っていたわ」

突然、ソレイユの声が響き渡った。あの、神々しい声と共に。思わずエスカリーナは腰を抜かして、ぺたりとその場に座り込んだ。

しばらくすると、ソレイユの気配を感じた。そして、彼女はすぐにエスカリーナの前に姿を現した。

「久しぶりね、エスカリーナ。会えてうれしいわ」

服が汚れるのも厭わずに、ソレイユは膝をついて、両手でエスカリーナの手を握った。彼女の眼からは涙が溢れていた。

ソレイユの手から伝わってくる手のぬくもりとその涙は、エスカリ

ーナの心をすぐに溶かした。彼女もソレイユの手を握りながら、滂沱の涙を流したのだった。

二人はそこで、これまでの生活を語り合った。まるで、昨日も会っていたかのように、二人は打ち解けて会話を交わした。ソレイユは、エスカリーナにクモハで起こった毒物の事件の話をし、それを解明できるのは、エスカリーナの精霊だけだと改めて説明した。彼女は協力することに同意した。

「それにしてもソレイユ、いつからクモハにいたの？　全然気配に気づかなかったわ」

「クモハ？　いいえ、一度あの町に行ったっきり、ずっとアガルタにいたわよ」

「え？　私に意思を送ってきたのは？」

「アガルタから送ったのよ」

「え？　ソレイユ、あなた、精霊は……？」

「私は、神龍様と契約しているの」

「え？」

その瞬間、ソレイユの体に、金色の光が取り巻いた。まさに、ソレイユの体から後光が差しているようにも見える、神々しい姿が現れていた。

エスカリーナは、すべての事柄に納得していた。これだけの精霊と

契約していれば、遥か遠方から意思を伝えることもできるだろうし、そこから一瞬で移動してくることも可能だろう。エスカリーナに勝てる要素は一つもなかった。

「ただ、神龍様をもってしても、水を詳しく分析することはできないの。これができるのは、あなたを置いて他にいないの。だから、お願い。力を貸して欲しいの」

エスカリーナは無言でソレイユの手を握った……。

第六百七十三話　お水！

エスカリーナは、再び顔を上げると、リノスに真っすぐに視線を向けた。

……大変な美女ではあるが、ソレイユとはまた違ったタイプの女性だった。ただ、どちらにも共通して言えることは、目に大きな特徴があることだった。

ソレイユの眼には、何とも言えぬ愛嬌がある。いかにも優しそうな、人のよさそうな雰囲気を醸し出している。言ってみれば、話しかけやすい女性であると言えたし、どのような者が話しかけても、丁寧に対応してくれそうな感じのする眼だった。

対して、エスカリーナの眼は、その双眸に深い知性を感じさせた。その眼はメイのそれと似ているが、彼女のはそれだけでなく、何とも言えぬ冷たさを感じさせる。そのせいか、彼女が纏う雰囲気は、どこか人を寄せ付けない、近づきがたいというものだった。

だが、エスカリーナは、リノスと目が合うと、すぐに視線を外して、オドオドと体を小刻みに震わせた。これは一見すると、男性と話をするのが苦手であるように見えた。

その様子を見たリノスは、心の中で、この女性は男性からモテるに違いないと呟いた。

「エスカリーナは水の精霊、しかも、上位種であるエイドと契約しております」

ソレイユがにこやかな笑みを浮かべながら紹介する。

「そうか……。その上位の水の精霊は、どんなことができるのかな？」

「はい。水を操ることができます。とりわけ、水の浄化と、水の成分を把握することに長けています」

「へえ～それはすごいな。ということは、このエスカリーナがいれば、あの毒の成分を解明することができる……か」

「はい。その前に、水に毒が含まれているかどうかも、判別できるかと思います」

「ということは？」

「はい。シディーに頼んで、毒の撒かれる場所を特定してもらいまして、そこにエスカリーナを忍ばせれば……」

「さらなる被害を防ぐことができる、ということか」

「ご賢察の通りです」

リノスは少し安心していた。再び毒の被害が起こると、もう一度遺体を鑑定しなければならなくなる。おそらく、高い確率で化学式は浮かび上がるのだろうが、あの強烈な頭痛に耐えなければならない。そうしたことが起こる前に惨事が起こることを防ぎ、さらには、その犯人を特定することができれば、あの頭痛に苦しむことのなければ、人々が被害に遭うこともなくなる。まさに一石二鳥だなと心の

中で考えていた。

「では、エスカリーナさん。事情はソレイユから聞いておられることと思います。是非、協力をいただきたいのですが……」

「承知……致しました」

「よろしくお願いいたします」

リノスは立ち上がると、エスカリーナに向かって歩き出した。そして、彼女の前までくると、スッと右手を差し出した。エスカリーナは、少し戸惑いながらその手をやさしく握った。

「では、ソレイユ。あとは任せていいかな？」

「はい。承知しました」

「いや、いい味方ができた。期待しているよ。あと、彼女は水を浄化させることができると言っていたな？　もし、今回の事件が解決したら、シディーの実家であるニザ公国の相談に乗ってもらうといい。あそこは水を浄化させるのに四苦八苦しているからな。もちろん、イヤなら断ってもらっても構わないし、協力してくれれば、ちゃんと礼はするつもりだ」

リノスはソレイユとエスカリーナに交互に視線を向けながら口を開く。そのとき、エスカリーナが小さな声で呟いた。

「……無理です」

「……無理、か。そうだな、いや、変なことを言って済まなかった。

忘れてください」

「いいえ。ニザの水だけは、難しいのです。時間がかかります」

「時間が、かかる？」

「はい。あそこの水は、金属系の物質で汚染されています。それらは川底に沈んでいますので、あそこの水をきれいにしようとすると、水だけでなく、川の底全体を攫う必要があります」

「なるほど。ということは？」

「川に流れだす前に、汚染物質を駆除する必要があります。それは、私の精霊の力で何とかなりますが、川全体をきれいにしようとすると、その、汚染されていない水で川底を洗い流さねばなりません。それには、長い時間がかかるのです」

「なるほど。そういうことか……」

「ですから、ニザの水をきれいにすることは、すぐには無理なのです。あの国以外であれば大丈夫なのですが……」

「ああ。そうなのですね。それは、精霊の力で何とかなるものなのですね？」

「もちろん、最初は精霊の力を借りますが、問題は、その後継続して水を浄化し続けられるかどうかです。それは、装置を使えば可能です」

「装置？　そんなものがあるの？」

リノスは耳を疑った。こんな華奢な体をした人が、水を浄化し続けられる装置を作り出せるのだろうかという思いが湧き上がる。彼の頭の中には、子供の頃に社会科見学で見に行った、大規模な浄水場のイメージが描かれていた。目の前の美女が、そんな大規模な施設を作ることができるようには、とても見えなかった。一瞬、そうした施設を作ることができる大工たちにツテがあるのかとも思ってみたが、ソレイユの話では、これまでは一人で暮らしてきたとだったため、その可能性は低いと言えた。

そんなリノスの心情を察したのか、エスカリーナは、ゆっくりと口を開く。

「装置と言いましても、簡単なものです。シバト、という箱型の施設です。私が全てを作ることはできませんが、私の言う通りに作っていただければ、その施設に汚れた水を通すことで、かなり浄化されます。それを流していただければ、川が汚染されることもありません」

「へえ……どんな施設なのです？」

「そもそも、水の汚れの原因となるものには、汚水中の固形物と水の中に溶け込んでいるユウツとがあります。シバトの中に入った汚水は、固形物は沈殿・浮上させることで分離したり、ろ材等でこしたりします。ユウツは、私の精霊が持つ力で除去します。因みに、シバトの中は三つの部屋に分かれていまして、汚水は、まずケロと呼ばれる部屋に入り、固形物を取り除くとともに、私の精霊がユウツを除去します。つづいて、もう一つのケロを通り、同じ処理を繰り返してから、バルキと呼ばれる部屋に入ります。ここでは、大量の空気を送り込みます。それは、人力で行っても結構ですが、それ

ですと、かなりの労力となります。従いましてそれは、空気の精霊と契約しているサイリュースに任せるのが得策です。ここで、私の水の精霊が、空気の精霊から送り込まれる空気の助けを借りて、溶解性物質を食べながら成長します。つまり、ここで大半の汚れを取ってしまうのです。そして汚水は、最後のケロに送り込まれます。ここで、汚れを食べた水の精霊たちは、その汚れを固めて輩出します。それは水よりも重いですから、時間が経てば、それらは水底に沈殿していきます。この段階まで来ますと、汚れた水は透明なものになっているのですが、最後にきれいになった水を消毒してから川に流せば、さらによろしいかと思います」

「……あ、そう」

先ほどまでオドオドしていたエスカリーナが、まるで人が変わったように饒舌に喋り出したために、リノスは呆気にとられながら、その話に耳を傾けていた。だが、その内容は、彼が理解できる範囲を大きく超えていて、その半分も理解することができなかった。

リノスはしばらく考えた後、エスカリーナに、メイとシディーにもう一度、同じ話をしてやって欲しいと頼み、そのままそそくさと謁見の間を後にした。

迎賓館の長い廊下を歩きながらリノスは、前世の頃、もっと勉強しておけばよかったと、心の底から悔いるのだった……。

第六百七十四話　感覚が狂った？

「一体、大姫様は何をしておるんじゃ？」

「知らん。下手に声をかけたら、怒鳴られるぞい。放っておくのが一番じゃ」

二人で顔を見合わせているのは、ドワーフ工房に勤めている、ナンブツとリンショックだ。彼らは部屋の扉の前で、声を殺しながら会話していた。そのとき、頓狂な声が聞こえた。

「じい！　じい！」

「おお～。これは姫様～」

彼らの前に現れたのは、ピアトリスだった。彼女はあらぬ方向を指さしながら、まるで、二人を呼んでいるかのような表情を浮かべていた。

「姫様、どうなされたのじゃ～。ここでは、静かにしておる方がええのじゃ～。うるさくしておると、コワ～イコワ～イ鬼ババアが出てきてしまうぞい～」

ナンブツとリンショックは、人差し指を天に向けて、それをこめかみに当てる。それを見たピアの体がビクリと震える。そんな姿も、彼らには愛らしく映る。

「にーたん、にーたん」

「にーたん？　何じゃ？」

「あ、ナンブツさん、リンショックさん」

声のした方向に視線を向けてみると、そこには、ピアの兄であるイデアの姿があった。

「おお～王子様。どうなされたのじゃ？」

「これが上手く曲がらないんだけれど……」

彼の手には、黒い、正方形のものが握られていた。一見するとそれは紙に見えるが、ナンブツとリンショックは、それを見た瞬間、ニコリと笑みを浮かべた。

「王子様、それは、黒鉄と言って、鉄よりも固いものじゃ。ちょっとやそっとの力では曲げることはできん」

「一体これをどうするつもりじゃぞい？　え？　これを空に飛ばせたい？　何を言うとるんじゃぞい？」

不思議がる二人に、イデアは紙飛行機を取り出して、彼らの前でそれを飛ばして見せた。

「お、おおう。何と言うことじゃ。今、フワリと空を飛びおった……」

「王子様、一体何じゃこれは？」

驚く二人にイデアは、これを父であるリノスが作ったこと、もっと長い距離を飛ばすために、軽くて丈夫なもので作ってみようとしたことを説明した。

「何と……こんな……紙切れを折ることで飛ばすとは……さすがアガルタ王じゃのう」

「感心しておる場合じゃないぞい！　アガルタ王は、言ってみれば素人じゃ。これができたのは、たまたまじゃろう。儂らなら、これをもっと遠くに飛ばせるはずじゃ。この黒鉄なら……。ウム、王子様。アンタはいいセンスをしておる。よし、儂らが手伝うぞい！」

そう言って、ナンブツとリンショックは、二人を連れてその場を後にした。

「……チッ、煩いわね」

部屋で舌打ちをしていたのは、シディーだった。彼女はまるで、机に突っ伏すようにして、テーブルに広げられた地図を眺めていた。

彼女が見ているのは、世界地図だった。彼女はそれを眺めながら、丁寧に地図の上を指でなぞっていく。

「う～ん」

眉間に刻めない皺を刻みながら、彼女は呻く。その、研ぎ澄まされた直感力をもってしても、次に毒物で被害が出る地域の特定ができなかった。

「……きっと、これはまだ、犯人が邪悪な感情を持っていないのか

も。でも、おかしいな。大量の人を殺すような者なら、相当な邪悪な感情を持っているものだけれど、全く感じない」

シディーは小首をかしげながら地図を眺める。彼女はふうーッと大きく深呼吸をすると、目を閉じたまま、天を仰いだ。

……不思議なくらいに、イヤな予感はしない。これほどの大惨事を起こしている者たちだ。その体からは、邪な感情が滲み出ているはずだ。だが、そうした感情は、全く感じ取れない。しかし、その一方で、アガルタや、サイリュースの里に危機が訪れるだろうと直感は教えている。これは一体、どういうことだろうか。

「上手く邪念を隠している？　私の直感でさえも感じ取ることができない程に？」

シディーは人差し指を、顎の下に当てながら呟く。それ程の使い手であるならば、もっと強い予感を感じるはずなのだが、直感は、そこまでの危機は伝えてきていない。十分に注意すればよい、程度のものだ。

「ひょっとして、私の感覚が狂った？　……いや、そうではなさそうね。ということは、アガルタやサイリュースの里に毒の攻撃が仕掛けられる可能性はあるけれど、被害は軽微か、ほとんど害はないってことか？　……いや、それはただ、私が感じられていないだけかも」

そんなことを自問自答していると、頭がズキズキと痛み始めた。彼女は両手でグリグリとこめかみをマッサージすると、再び大きく息を吐き出した。

「もう少し待ってみるか……。きっと、その者が近づくと、きっと何かを感じるだろうし。そのときに考えればいいことだわ」

そう言って、シディーは両手で頬をパチパチと軽く打って、目を覚めさせた。

「さあ～て、誰が鬼ですって？　あの声は、ナンブツとリンショックね？　全く……私を何だと思っているのかしら？」

彼女は立ち上がり、足早に部屋を後にした。

◆　◆　◆

「そろそろ飽きてきたのう……」

そう言って天を仰いでいるのは、ミルワだった。彼女は部屋に設えられたベッドで仰向けに横たわっている。その隣では、アルベが肩を激しく上下させながら、必死で呼吸を整えていた。

二人とも全裸だ。まだ陽も高いというのに、二人は食事を終えるとすぐに求め合っていた。いや、ミルワの方がアルベに奉仕を命じたと言う方が、正しいかもしれない。

何度も何度も求めてくるミルワに、アルベは疲労困憊していた。彼女の性欲は衰えることを知らず、こうして部屋に滞在しているときは、食事などの時間を除いては、常にアルベは奉仕を求められていた。そのため、一時は増加した体重も今では元に戻り、どちらかと言えば、以前より少し痩せた状態になっていた。

そんな彼の存在を全く無視するかの如く、ミルワはまるで独り言を

言うように、さらに言葉を続ける。

「美しい景色を見て、美味い物をたらふく食べ、欲しいものを買いたいだけ買う……そんな生活もそろそろ飽きてきたのう。何より、次はどの町に行くかを決めねばならぬ……というのが億劫じゃ。それに、次の町が決まったとしても、そこに行くまでの荷造りをせねばならん。そして、移動……面倒臭いのう……」

「じゃあ、どこかに定住すればいいじゃないか」

アルベが息を整えながら、まるで声を絞り出すようにして口を開く。その声にミルワは、フフンと鼻を鳴らした。

「そうじゃのう……定住か。悪くないのう。どこか景色の良い所で、のんびり暮らすというのもな」

ミルワはゆっくり起き上がると、あらぬ方向に視線を泳がせながら、小さな声で呟く。

「そろそろ潮時、というところか」

「潮時？」

「ああ。我らは明日、アガルタに向かうぞ」

「アガルタ……」

「そうじゃ。ソレイユを殺し、ついでにサイリュースの里の連中も殺す。それが終わったら、お前をアガルタに捨ててゆく。なぁに、アガルタ王を殺すまでは妾も手伝ってやる。それが済めば、お前は

残ったアガルタ王の妻たちを好きにすればよい。何なら、お前がアガルタ王を継いでもよいではないか。一夜にして、世界の王となれるのじゃぞ。興奮してこないか？　面白いのぅ。キャハハハハハ―」

「私を置き去りにして、アンタはどこに行くのだ？」

「うん？　妾か？　どこでもよいではないか。どこに行くかのぅ。温暖で、食べ物の美味い所がよいのぅ。海が見える広い屋敷で、体の大きい、屈強な男と共に、日々を送るのじゃ。お前みたいに弱い男ではなく、強い男と暮らすのじゃ。妾のこの小さな体を、バラバラにするような、激しい交わりをするのじゃ」

ミルワの表情が、みるみる下卑た笑みに変わっていく。その様子を見ながらアルベは、ゆっくりと目を閉じるのだった……。

第六百七十四話　感覚が狂った？（後書き）

結界師への転生コミカライズ、最新版が更新されました。１０／５　１２：００まで無料公開中ですので、是非チェックしてみてください！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６

第六百七十五話　到着、クルムファル

それから数日後、ミルワとアルベの姿は、船の中にあった。彼らが向かっているのは、ヒーデータ帝国のクルムファルだった。二人は一旦そこで逗留し、そこから南に下ってガルビーに至り、アガルタを目指すという計画を立てていた。むろん、この計画を立てたのは、ミルワだった。

彼女は、船室にいる間は、ずっとベッドに横になったままだった。一見すると、船酔いであるかのようにも見えるが、決してそうではなく、ミルワの食欲は旺盛だった。出された食事はすべて平らげていた。

アルベはその様子を、ぼんやりと眺めていた。何の感情も沸かなかった。ただ、流れに流されるままに彼は時を過ごしていた。

てっきり彼女は、船室の中でもアルベを求めてくるかと思ったが、意外にもそれは一度もなかった。どうやら、この狭い船室の雰囲気が、彼女の性欲を刺激しなかったようだ。

「港が見えたぞー！」

船上から船員の大きな声が聞こえた。ドヤドヤと人々の足音が聞こえる。今、二人がいるのは、狭いとはいえ、ベッドが二つ並んだ個室だった。この階には、およそ十室の部屋があった。そこに滞在している者たちが、こぞって甲板に向かって行った。

それに続いて今度は、船底からまるで、地鳴りのような音が聞こえ

てきた。船底で雑魚寝している者たちが皆、甲板に向かっているのだ。そのせいか、船がグラグラと揺れている。

「……もうすぐ着くようだ」

アルベは頭から毛布をかぶって寝ているミルワに向かって声をかける。彼女はその声に全く反応しない。彼は大きなため息をついて、再び彼女に話しかける。

「ちょっと、甲板に上がって来るよ」

「うるさい」

ムッとした。そんな言い方はないだろうと思った。だが、口に出すことはできない。そんなことをすれば、また、ややこしいことになるのがわかっているからだ。

彼は無言のまま部屋を出て行こうとした。そのとき、不意にミルワの声が聞こえた。

「悩んでおるのじゃ。静かにするじゃ」

「悩んでいる!?」

思わず頓狂な声を上げてしまった。およそ、悩みなどとは無縁だと思っていたこの女性が、まさか考え事をしているとは……。彼は無言のまま、彼女が横たわるベッドを眺め続けた。

まるで、頭まですっぽりと毛布を覆っているために、何か巨大な蛹のようにも見える。その眉が突然、ウネウネと動き出したかと思う

と、ミルワの顔が突然現れた。

「アガルタに入るには、もう一つの道がある。帝都を出て北に向かい、クシャナという街を抜けると、ジュカ山脈がある。そこを超えて行くのじゃ」

「山脈……？　山を越えるのか？」

「……」

ミルワはアルベの問いには答えず、じっと低い天井を眺めた。アルベは心の中で、そのルートは無理だと呟いた。そのジュカ山脈というのがどのくらいの標高があるのかはわからないが、山越えとなると、かなりの体力を使う。それをやり切る自信がアルベにはなかった。

「ジュカ山脈を越えると、ルノアの森が広がっておる。サイリュースの里は、そこにある」

「サイリュースの里……」

「そうだ。まずそこを壊滅させるのも面白いと思うが、あの山脈を越える手立てが見つからん。あそこには、多くのドラゴンが生息している。迂闊に踏み込めば、ドラゴンらにやられる。私は逃げおおす自信があるが、問題はお前じゃ。お前を連れて逃げ切る自信が妾にはない」

アルベは唇を噛んだ。何とも言えぬ敗北感が湧き上がってくる。そんな彼の感情など、知ったことではないと言わんばかりに、ミルワはさらに言葉を続ける。

「まあよい。クルムファルでゆっくりと考えるとしようではないか」

そのとき、船がグラグラと揺れ出した。ミルワは、ピョンとまるで飛び降りるかのようにベッドから飛び出した。

「着いたようじゃの。さあ、降りようではないか。退屈な船旅の終わりじゃ」

彼女の言葉を受けて、アルベはあらかじめまとめていた荷物を揃えていく。

「それらすべては、ホテルクルムファルに持って行けと命じろ。フフフ。あのホテルは皇帝も宿泊すると聞いたことがある。楽しみじゃ。金はまだまだある。できれば、皇帝が泊まる部屋に泊まってみたいものじゃ。きっとその部屋から見る景色は、見事なものじゃろうな」

そう言ってミルワは、ウキウキした表情を浮かべながら船室を出て行った。一人残ったアルベは、呆然と彼女が出て行った方向を眺め続けた。

◆　◆　◆

「う〜ん。いいではないか」

ホテルクルムファルに到着して開口一番、ミルワはそんなことを呟いた。確かに、これまで泊まったホテルとは、まったく趣が異なるホテルだった。

第一、このホテルは玄関まで向かう通路からして違っていた。

細い通路を歩いて右に曲がると、そこには雄大な滝が眼下に広がっていた。おそらくこれは、波が侵食してできたためだろうということはわかる。だが、その断崖絶壁の上に通路を作るという発想は、二人にとって驚天動地の事柄だった。

この滝の水が一体どこから来ているのか。海面からはかなりの高さがあるために、海の水ではなさそうだ。そんな光景を右に見ながら、通路を進む。さらに左を見れば、海に沈もうとする見事な夕陽が見て取れる。

そんな景色に見とれていると、目の前に大きな扉が見えてきた。そこに着くとゆっくり扉が開き、中からボーイやメイドが恭しく一礼して出迎える。まるで、どこかの王族を迎えるかのような丁寧さだ。

二人はロビーに通され、そこにあったソファーに案内された。どこの国でも、泊まる際にはカウンターで手続してきたが、このホテルにはそれが見当たらない。不思議に思っていると、見目麗しい若い女性が近づいて来て、ここで手続きをするのだという。彼女は丁寧にこのホテルのサービスを説明していった。

「妾は、皇帝の泊まる部屋に泊まりたい」

突然、ミルワがそんなことを言いだした。女性は全く狼狽えず、ニコリと笑みを浮かべながら頷く。

「ありがとうございます。恐れ入りますが、皇帝の間は現在、利用中でございます」

「利用中？　誰が泊まっておるのじゃ？」

「はい。皇帝陛下でございます」

「何と！　ヒーデータの皇帝が泊まっているのか？」

「これ以上は、申し上げられません。ご想像にお任せいたします」

彼女の見事な対応に、ミルワはそれ以上何も喋らなかった。

それでも、二人が選択した部屋は、このホテルの中でもかなり上位の部類に入る部屋だった。バルコニーに出れば、右手には遥か北にジュカ山脈を望むことができ、左手には雄大な海の景色を望むことができると聞いて、ミルワは迷うことなくその部屋を選択したのだった。

「では、ご案内いたします」

手続きが終わると、女性は立ち上がって二人を部屋に案内しようとした。だが、船から運び込んだ荷物が届いていない。訝しがってアルベがそのことを伝えると、彼女はニコリと微笑みながら口を開いた。

「お荷物につきましてはすでに、部屋に運び込んでございます」

本来ならば、荷物が彼らの前に運び込まれてきて、その後、ホテルの者が部屋に運び込むものなのだが、その予想を超えた動きに、アルベは言葉を失った。

広いロビーに出ると、ふと、壁に大きな絵が飾られているのを見つ

けた。アルベはその絵の前で思わず足を停める。

「この絵は何じゃ？」

「はい。アガルタ王妃であらせられます、リコレット様でございます」

「なぜ、アガルタ王妃の絵がここに飾られているのじゃ？」

「はい。このホテルクルムファルの設立者が、このリコレット様だからでございます」

女性は、このクルムファルという地が、元々はアガルタ王にヒーデータ帝国の皇帝陛下が与えたものであること、そして、その後もこの土地はアガルタが租借しているのだと説明した。

「ふぅ～ん。何やらややこしいのじゃな」

そう言って、ミルワは歩き出した。アルベは廊下を歩きながら、何度も何度も壁にかけられたリコレットの絵に視線を向けたのだった……。

第六百七十六話　何だお前は

上品な女性だと思った。まさに、大国の王妃とはかくやあらんと思わせる風貌だった。肖像画ということもあり、幾分かは美化されているものとしても、その体からは品性というものが横溢していた。確かに、アルベ好みの女性ではあった。だが、正直に言って、自分とは全く釣り合わないとも思った。

廊下を歩きながら想像する。美々しく着飾った自分が、あのリコレットの隣に並ぶ姿を……。

滑稽だと思った。どう考えても似合わない。よくて従者程度にしか見えないだろう。アルベは早々に思考するのを止めてしまった。

「おお、広い部屋ではないか」

大きな窓からは、大海原が一望できる。まさに太陽が水平線に吸い込まれるようにしている光景がそこにあった。

ミルワはバルコニーに出て、キョロキョロと辺りを見廻している。しばらくすると彼女は、一点を見つめたまま微動だにしなくなった。

アルベはベッドに腰かけながら、ぼんやりと彼女の姿を眺めていた。

やがて、彼女は部屋に入ってきて、どかりとベッドに大の字になって寝ころんだ。

「やはり、山を越えるのは、無理そうじゃな」

アルベは黙って彼女に視線を向ける。ミルワは、さも残念と言った表情を浮かべている。

「ジュカ山脈には、ドラゴンが多く生息しておる。妾があの山に入れば、すぐに奴らの餌食となる」

「ドラゴン……」

アルベはまだ、ドラゴンという生物を実際に見たことがなかった。色々な書物や人からの伝聞で、とても巨大で、知能の優れた生物であることは承知していた。その中には、人族と交流する種族もいる一方で、己が一族以外は敵と見なし、誰かれ構わず襲いかかる凶暴な種族もいることも認識していた。そんなドラゴンを、一度くらいは見てみたいとは思うものの、そこまで危険を冒してまで見たいとも思わなかった。彼にとっては、安全で平穏な旅を送ることができればそれでよかった。だが、ミルワはまだあきらめきれないらしく、目を閉じたまま、ブツブツと独り言を呟いている。

「……いや、待てよ？　ドラゴンを味方につけられれば、超えられる、か？　あの山に生息しているのは確か、クルルカンと黒龍……。イエロードラゴン、ベラトラフチア……。話が通じるという点で言えば、クルルカンと黒龍じゃな。しかし……。奴らは極めて頭がいい。特に黒龍は狡猾じゃと言われている。確か、あ奴らは人語を理解すると同時に、人化もできるという。そんな奴らを味方につけられれば、あの山は十分に越えられよう……」

ミルワはスッと目を開いて、アルベに視線を向ける。彼は相変わらず、ぼんやりと彼女の様子を眺める。

「お前の毒を上手く使えれば、可能性はあるか？」

彼女の言葉の意味がわからず、アルベはキョトンとした表情を浮かべる。

「お前の毒は、ドラゴンにも効くのか？」

「……わからない」

「……フン」

さも不満そうな表情を浮かべながら、彼女はプイッとそっぽを向いた。

「まあ、お前の毒がドラゴンに効いたとして、奴らを手懐けられるかどうかは、わからぬな。毒で脅しをかけるとしても、上手くいく予感が全くせぬ。無理じゃな」

吐き捨てるようにミルワは呟いた。

彼女にしてみれば、先にサイリュースの里を壊滅させることができれば、ソレイユに与えるダメージは計り知れないものとなる。そうして、精神的に大きなショックを与えた上で、さらに夫であるアガルタ王を殺し、最後にソレイユの命を奪うことができれば、長い間胸につかえた溜飲を下げることができるのだが、コトはそんなに上手くはいかないようだった。

バルコニーから見たジュカ山脈は、すでに、山頂には雪が積もっていた。あの山を越えるには、それなりの防寒対策が必要になる。その上で、ドラゴンたちに対峙しなければならない。

ミルワは、己一人であれば、気配を完全に消して移動する自信はあった。だが、今はアルベを連れている。二人の気配を完全に消しきる自信はなかった。加えて、高ランクであるクルルカンや黒龍たちは、かなり優秀な探知能力を持つと言われている。彼女にその探知を掻い潜る自信はなかったし、二人の体力では、あの山を越えることと自体が、命の危険性を伴うものだった。ドラゴンたちの目を掻い潜ったとしても、山を越える自信は、正直言ってなかった。

それでも何とかして、あの山を越えられぬものか。ドラゴンの背に乗せてもらえれば超えられるが……。彼女は考えを巡らせてみるが、良い案は一向に浮かんでこなかった。ふと目を開けると、アルベの顔が見えた。鈍重な表情だ。思考というものを一切していないかのように見える。彼の顔を見ていると、何だか無性に腹が立ってきた。

彼女は思いっきりアルベを蹴りつけた。あっ、と小さな声を出して彼はベッドから転がり落ちた。一体何をするのか。呆然とした彼の表情は、そう言っていた。足蹴にされているにもかかわらず、何の反応も示さない、その態度が、さらに彼女の癪に障った。ミルワはベッドから飛び降りると、彼の腹を思いっきり踏みつけた。ぐえっ！　という情けない声がした。

「お前は何にもせぬな！　少しは妾のことを気遣え！　ほんに、使えぬヤツじゃ！　お前は！　お前は！　お前はっ！」

彼の体を何度も何度も踏みつける。アルベは抵抗しなかった。ただ、体を丸めて、ミルワの足蹴に耐えていた。ただ、彼女の怒りが解けるのを待っているかのようだった。この男はいつもそうだ。決して自分で決断することはない。これまでのことは全てミルワが決めていた。それだけではない。彼はまるで人形のようになっていた。立

てと言われれば立ち、脱げと言えば脱いだ。どちらかと言えば、男たちに傅かれることに慣れていたミルワは、そんな彼の態度にうんざりしていた。しかも最近は、その様子が、まるでミルワにひれ伏しているように見せて、その実は、彼女を全く相手にしていないかのようにも見えていた。そんな彼の態度は、さらに彼女の怒りに火をつけた。

「何なのじゃお前は！　お前は何なのじゃ！　何がお前は！　何が！」

自分が一体何を言っているのかわからなかった。ただ、無性に腹が立った。何とも言えぬ孤独感が心の底から湧き上がっていた。

はあはあと荒い息を整えながら、ミルワはアルベを眺める。やがて、ゆっくりと体を起こしたアルベは、大きなため息を一つつくと、誰に言うともなく、小さな声で呟く。

「このホテルには、皇帝も泊っているのだろう？　あまり騒ぐと、いけない」

「皇帝など、はじめから、おらぬわっ！」

そう言うと彼女は思いっきりアルベの頬をぶった。パァン！　という乾いた音が響き渡った。

「あ奴らは、皇帝の部屋に泊まりたいと言った妾を、腹の中で笑っておった！　身の程知らずじゃと言って笑っておった！　お前はそんなこともわからんのか！　皇帝が逗留している？　皇帝が逗留しておるならば、他の者など泊めさせるものか！　このホテルに近づくことすら出来ぬわ！　どこまで愚鈍なのじゃお前はっ！」

アルベは一切抵抗の様子も見せず、反論することもなくただ、じっと無言のまま耐えていた。そんな彼の様子に、ミルワは不気味さすら覚えた。彼女は大きく息を吐き出すと、ゆっくりと首を左右に振った。

「立て」

ややあって、アルベはゆっくりと立ち上がった。彼の眼には光がなかった。呆然と、何か途方もない遠くを、彼の瞳は見つめていた。

「来い」

ミルワはアルベの胸ぐらを掴むと、彼をベッドに押し倒した。

「脱げ。……脱げと言うに！」

ミルワは荒々しくアルベの服を脱がせ、自らも裸になった。そして、彼の体に馬乗りになった。

相変わらず彼は、どこか遠くを眺めている。二人が楽しむ状態にはないように思えた。だが、意外にも、彼の逸物は怒張していた。

ミルワは無言のまま彼を責め始めた。ベッドがきしむ音だけが部屋に響いている。感動も、喜びも、何もなかった。ただ虚しさだけがそこにあった。

第六百七十七話　中心は……？

もう、潮時じゃな、と心の中で呟いた。

広いベッドの上、一糸も纏わぬ姿で毛布にくるまりながら、ミルワはそんなことを考えていた。隣では、同じようにアルベがその身を横たえている。彼はずっと彼女に背中を向けたままだ。

あれからずっと無言だった。あれだけ激しい逢瀬を遂げた後でも、全く満足感は得られなかった。コトが終わった後も、ミルワはさらに彼を求める気にならなかった。

その後、部屋に運ばれてきた料理を二人で食べたが、ここでも無言だった。

食事はとてもよかった。これまで旅してきた、どの料理店も及びもつかないくらいの味だった。特に驚いたのが、このホテルでは魚を生のまま出したことだ。さすがのミルワも一瞬二の足を踏んだが、給仕を担当したメイドが、絶対の自信を持って勧めてきたので、思い切って口の中に運んでみたところ、新鮮さとその味わいの深さに、彼女は久しぶりに心から料理を堪能したのだった。

供された料理はどれも美味だったが、アルベはそれらに一言の感想を言うこともなく、淡々と口の中に運び入れていた。そこには、彼女に対する当てつけでもなく、不満を言い出せずに沈黙している様子でもなかった。彼女はもはや、彼に対して怒る気力すらも失っていた。

その後、ミルワは湯浴みをするために、バスルームに向かった。いつもはアルベに体を洗わせていたのだが、この日はそんな気分になれなかった。

てっきり、盥が一つ置いてあるだけかと思っていたが、そこは部屋の外となっていて、大きな桶が一つあるだけだった。その桶には、休むことなく湯が注がれていた。最初、ミルワはこの装置が何であるのか見当がつかなかったのだが、桶のすぐ傍に看板が立っていて、そこには、この桶の中に入って体を温めろと書いてあった。

桶の中に入ってみた。少し熱めの湯だったが、体全体に血液が巡っていくような感覚に囚われる。これも、初めて味わう感覚だった。

これまで、バスタブが備えられていたことはあったが、そこはあくまで湯を溜めて、体を洗うためのものであって、体全体を湯の中に浸けてしまうという発想はなかった。そんなことをすれば、ヘタをすると、バスルームが水浸しになってしまうからだ。

しかし、このホテルでは、実に見事な仕掛けが施されていた。彼女が桶に入ると、当然のように湯が勢いよく溢れだしたが、それは床にまるで吸い込まれるようにして流れていった。よく見ると、床の板にわずかな隙間があり、湯はそこに流れていた。おそらく、この床の下を通って湯は、外に流れているのだろう。ミルワはその合理性に感心したのだった。

また、この湯の中から見る景色が見事だった。陽が落ちていたために、大海原を眺めることはできなかったが、空には満天の星空が広がっていて、彼女はしばらく時間を忘れて、その見事な光景に見入った。

ほーっと、何も考えずに、ただのんびりと時間を過ごす。こんな時間の使い方をしたのは初めてと言ってよかった。こんな暮らしも悪くはないなと、彼女は素直にそう思った。

ソレイユを殺したら、景色のよい場所に行こう。そして、こんな風に、湯に入りながら、のんびりと時を過ごそう。いや、むしろ、ソレイユのことなどどうでもよいではないか。あと数日間、ここに滞在して、美味い料理と湯に入りながら時を過ごしてもよい。その間に、次に住むところを考えてもよいではないか。ミルワはそんなことまで考えていた。

どのくらいの時間が経っただろうか。喉の渇きを覚えて、彼女はやっとのことで湯から上がろうとした。

部屋の隅に備えられたタオルを手に取ろうとしたとき、その傍に、ガラスのボトルが目に入った。ちゃんと、グラスも準備されている。どうやら水のようだ。

彼女はグラスに水を灌ぐと、それを一気に飲み干した。火照った体の中を、冷たい水が流れていくのがわかる。何とも美味しい水だと思った。彼女は再びグラスに水を注ぎ、もう一度それを煽った。

「ふぅ～」

満足だった。このままベッドに入れば、よく眠れるだろうと思った。これほど満ち足りた感覚を覚えるのは、本当に久しぶりだと言ってよかった。

裸のままバスルームの扉を開ける。そのとき、目の前に飛び込んできたのは、広いベッドの真ん中で、大の字になって寝ころんでいる

アルベの姿だった。

……無性に腹立たしさを覚えた。これまでの満ち足りた感覚がすべて、失われたような気がした。ミルワは無言のまま彼の許に近づき、その髪の毛を掴んで、ベッドから引きずり下ろした。

「バスルームで、体を洗ってこい！」

まるで幽霊のように、のそのそと体を起こして、重い足取りでバスルームに向かう。その行動そのものが、ミルワの神経を逆なでした。精霊を使って、後ろから空気砲をぶちかましてやりたい衝動に駆られたが、ちょうどそのとき、アルベの姿がバスルームに消えた。

フン、と鼻を鳴らしながら、ベッドに横になる。先ほどまでアルベが寝ころんでいたためか、何とも生暖かい。すぐに毛布の中は温まり、ミルワの体から汗が噴き出してきた。思わず毛布をけ飛ばすようにしてはだける。

ゴロゴロとベッドを転がって、ぬくもりのない部分を探す。ベッドの端にくると、ちょうどよい冷たさを感じて、そこで大の字になる。だが、片手と片足がベッドからはみ出してしまう。体を縮めてそこで丸まる。何とも言えぬ窮屈さを感じる。

まあよい。時間が経てば、熱を持っているところも冷めてくるであろう。そのときに、手足を伸ばして寝ればよいのじゃ。

そう心の中で自分に言い聞かせる。そのとき、バスルームの扉が開いて、アルベが出てきた。一体何事かと、ミルワは思わず彼に視線を向ける。

相変わらず、一切の感情を表に出さずに、淡々と、ゆっくりとした足取りで彼はベッドに向かって来た。そして、ベッドに寝転ぶと、その真ん中で彼は大の字になって天を仰いだ。

信じられなかった。彼の行動すべてが、理解することができなかった。

この男は、あの見事なバスルームを堪能しなかったのか。バスルームに消えてから、五分も経っていない。恐らく彼は、あの桶に浸からなかったのだ。服を脱ぎ、湯を何度か浴びて体を洗ってすぐにバスルームを出たのだ。

てっきり、あの素晴らしいバスルームの話で共感し合えるとさえ思っていたミルワは、愕然とした。しかも、この男は、堂々とベッドの真ん中で大の字になって眠ろうとしている。この私が、こんなベッドの端で丸くなっているにもかかわらず、だ。

これまでの行動を振り返れば、この私がベッドの端にいることなど、なかったことだ。にもかかわらず、この男はベッドの中心にいる。

……許せなかった。

ミルワは右手を挙げると、アルベに向かって空気砲を放った。彼は声を上げる間もなく吹き飛ばされ、ベッドから放り出された。

彼はしばらく蹲っていたが、やがて、無言のままムクリと立ち上がったかと思うと、スタスタとソファーのあるところまで歩いて行った。そして、そこに置いてある自分の鞄を抱きしめると、そのままそこで横になった。

ミルワはベッドの真ん中に移動すると、そこで毛布を取り、腹だけにそれを被せて寝っ転がった。背中から、何とも言えぬ温もりと湿り気が伝わってきた。正直言って、不快だった。

せっかくの満たされた感覚から、一気に不快な感覚に突き落とされたミルワは、腹の中で怒りを増幅させていた。そして、やはり、ソレイユを殺さねばこの留飲は下がらぬと心の中で嘯いた。

……ソレイユを殺したら、あの男もアガルタに捨てて行こう。

ミルワは固く心に誓った。

第六百七十八話　深夜の会話

深夜、リノスはゆっくりと目を覚ました。目だけを動かして、周囲を確認する。

しんと静まり返った寝室。まだまだ夜明けまでに時間がありそうだと思いながら、ゆっくりと息を吐き出す。

何か、喉の奥に引っかかるような感覚を覚えた。直感的に、これまでの毒物騒動を引き起こした者たちが、近くに迫っていると感じた。

彼は探知スキルを発動させる。一気に探知の範囲を拡大してみると、意外なところで強い殺意を持った者がいることがわかった。何とそれは、帝都の近くだった。

リノスの屋敷から帝都までは、イリモの翼を使えば三十分で行くことができる。もっとも、彼の結界スキルにある転移能力を使えば、一瞬で移動することができるのだが。

強い殺意を持つ者がいることは珍しいことではない。だがリノスは、深夜に帝都の周辺でこのような物騒な気配を発する者が、なぜか気になった。その者は帝都に向かってゆっくりと移動していた。

「……ん」

小さな声が聞こえた。隣で眠っていたシディーがゆっくりと体を起こす。

「あ、ゴメン、起こしちゃったか」

シディーはリノスの言葉に反応せず、ただじっとあらぬ方向を眺め続けている。

「シディー？」

リノスもゆっくりと体を起こす。彼女は大きく深呼吸をすると、目を閉じたまま小さな声で呟いた。

「……邪悪な、気配がする」

「シディーもか」

問いかけるリノスに、シディーはなおも反応を示さない。じっと俯いて、何かを考えている素振りを見せる。

「シディー？」

「……でも、邪悪な気配を感じるけれど、イヤな予感はしない？どういうことかしら？」

「……」

リノスは無言のまま、じっと彼女の様子を窺っている。シディーはしばらく何かを考える素振りをしていたが、やがて、目を閉じたまま、誰に言うともなく呟いた。

「ま、いいか」

そう言って彼女は隣のリノスに抱き着き、そのまま彼を押し倒した。

「し、シディー……」

「寝ます」

「いや、邪悪な気配は……」

「イヤな予感はしないので、問題ないと判断しました。おやすみなさい……」

「ええっ!?」

リノスの戸惑いをよそに、シディーはリノスの左手の中に顔をうずめると、そのまま毛布をかぶる。そのとき、寝室の扉がゆっくりと開いた。そこに立っていたのは、何とソレイユだった。

「ソレイユ……」

「お休みのところ申し訳ありません、リノス様」

「どうした?」

リノスの問いかけに、ソレイユはちょっとした笑みを浮かべながら扉を閉め、ベッドの傍まで近づいてきた。アリリアら子供らと寝ているためか、いつもの透けているパジャマではなく、ラフだが、しっかりとしたものを着ている。それでも、体のラインは丸見えだし、その体中から発する色気は、全くと言っていいほど隠しきれていなかった。ふと、シディーが再びゆっくりと体を起こした。それに伴って、リノスも体を起こす。

「ごめんなさいね、シディー。疲れているところに」

深夜であるにもかかわらず、ソレイユの顔は美しかった。てっきり、化粧でもしているのかと思ったが、後で聞くと、そうしたことは一切ないと言って彼女は笑った。

「ううん。大丈夫よ。疲れてはいないわ」

シディーはそう答えたが、やはり声に張りがない。まだ眠そうだ。そんな彼女にソレイユはニコリと笑みを浮かべると、少し声を落として、小さな声で呟いた。

「何回も何回もした後だから、とっても疲れているわよね。わかるわ。でも、心地いい疲れじゃない？　そんな中を起こしちゃって、本当にごめんなさいね」

「ちょっ、何回もって……そんなに、して……」

薄暗い中だが、シディーの顔が赤くなっていくのがリノスには手に取るようにわかる。そんなに激しいことを好むシディーではないことは、ソレイユも承知しているはずだが、敢えてそんなことを言って、シディーの反応を見ようとするオチャメさが、リノスの心を何とも和ませた。彼は隣で俯いているシディーの肩を左手で抱くと、その体を傍に引き寄せた。そして、右手で彼女の頭をポンポンと撫でる。シディーの体が強張っていく。どうやら、恥ずかしいようだ。

「で、どうした、ソレイユ？」

目の前で他の女性が抱きしめられているにもかかわらず、ソレイユ

は一切動揺を見せないまま、ベッドの傍に腰を下ろした。

「ミルワが、どうやら近くまで来ているようです」

「ミルワ……。ひょっとして、あの毒物の？」

リノスの言葉に、ソレイユはゆっくりと頷く。

「空気の精霊……しかも、かなりの上位種を近くに感じました。これほどの精霊と契約できるのは、サイリュースの中でもごく僅か……。ミルワとみて、間違いありません」

「そうか。俺もシディーも今、強い殺気を持つ者がいるのを感じたんだ。ということは、それがミルワかな？」

「いいえ。それは違うと思われます。ミルワ程の者が、そう易々と自分の殺気を感じ取られるようなことはしないと思います。空気の精霊と契約していますから、そうした感情は上手く精霊の力で隠していることでしょう。恐らくそれは、彼女に従う者の殺気かと思います」

「従う者？　ということは、事件の犯人は複数ということか？」

「はい。ミルワ自身が、あのような毒物を作り出せるとは思えません。きっと、毒物を作ることができる者を従えて、その者にやらせているのでしょう」

「そうか……。人数は、どのくらいかな？」

「おそらく一人。多くても二人でしょう」

「ほう。言い切るな」

「ミルワの性格上、大人数を従えて移動することはないと思います。一人、ないしは二人の下僕を従えていることでしょう。彼女の性格ならば、従う者は一人だけというのが、一番適当かと思います」

「そうか。確かに、俺が感じた殺気は一人だった。ということは、従者は一人か。では、その従者はなぜ、殺気を放っているんだろうか。もしかして、今から行動を起こそうとしているのか？」

「いいえ。それも違うと思われます。もし、本当に行動を起こすのならば、その殺気もミルワは空気の精霊を使って消し去ることでしょう。おそらく、帝都で行動を起こすつもりはないのでしょう」

「そうか……。しかし、不用心だな。殺気を放っている者をそのまま連れているなんて……。一体何に殺気を放っているんだ？　戦いの最中か？」

「おそらく、ミルワに対して殺気を放っているのでしょう。きっと、ずっと下僕として扱われ続けているので、従う者にも、そろそろ限界が来ているのであろうと思われます」

「仲間割れがはじまる、か」

「その可能性はありますが、おそらく、ミルワには勝てないと思われます。ミルワ自身も、それがわかっていて、その殺気をそのままにしているものと思われます。きっと、アガルタまでは遠いので、彼女自身も油断しているのでしょう」

「まあ、まさか帝都に俺たちの屋敷があるとは思わんよね」

二人はクスリと笑い合う。

「それで、リノス様に二つ、お願いがあります」

「お願い？　何だい？」

「はい。恐れ入りますが、ミルワとその従者を、私と共に監視してほしいのです」

「ああ。そういうことならばお安い御用だ。俺もそうしようと思っていたところだ」

「ありがとうございます。もう一つのお願いですが、サイリュースの里にしばらく帰ることをお許し願いたいのです」

「里へ、か」

「はい。契約しています神龍様のお力は、良い意味でも悪い意味でも、大変強力な精霊です。今はその存在を隠していますが、ミルワならば、帝都に入れば感づくかもしれません。それを避ける意味でも、しばらくはサイリュースの里に居ようと思うのです」

「そうか、わかった。そうしてくれ。それに、セイサムのことも……」

リノスの言葉に、ソレイユはゆっくりと俯き、小さな声で呟いた。

「本当に、申し訳、ございません……」

第六百七十九話　後悔先に立たず

ソレイユが里に戻ろうとしたのには、もう一つ理由があった。息子のセイサムがいるためだ。

彼女が産んだ男の子――セイサムは、病弱だった。しかもそれは、メイたち医師の手をもってしても、治癒できないものだった。

彼はしばしば、喘息に近い発作を起こした。その度に、彼はサイリュースの里に預けられていたのだった。

まだ幼いセイサムが起こす発作……。当初はその原因が全くわからずに、ソレイユはもちろん、メイやポーセハイのチワンたちも大いに困惑したのだった。そのとき、サイリュースの族長であり、ソレイユの母でもあるヴィヴァルが現れ、セイサムの症状が、精霊の力が足りていないことであると指摘したのだった。

理屈で言えば、サイリュースは契約する精霊のランクが高ければ高いほど、その肉体は強靭となり、その周囲にいる者もその恩恵にあずかることができるのだが、ソレイユに関しては例外で、彼女の契約する神龍様の加護が強すぎるために、まだ幼いセイサムには逆に、拒否反応を起こしてしまうというのが、ヴィヴァルの話だった。

そのため、セイサムが発作を起こすたびに彼は、祖母であるヴィヴァルの許に連れて行かれていた。ただ、サイリュースの里に入ると彼の発作は嘘のように収まり（治まり）、スヤスヤと寝息を立てるのが常だった。そして今も、つい二日前に発作を起こしたセイサムは里に連れて行かれていたのだった。

ソレイユは息子のことが心配でならなかった。母・ヴィヴァルのことは信頼もし、尊敬もしている。だが、こと、息子のことに関しては、自分の手で育てたかった。それに、サイリュースの里は女性ばかりだ。男性が知る必要のない、女性の醜い部分を幼い子供に見せることを、ソレイユは嫌っていた。

だが、その里は今、危機に瀕している。ミルワの攻撃の標的となる可能性が極めて高い状態にあった。この里が滅びてしまえば、息子のセイサムの命が脅かされることになる。里を守るのは、息子の命を守るのと同じ意味であると言えた。

リノスはソレイユに、謝ることはない。いつでも里に戻るといいと言って、笑みを浮かべる。ソレイユも、ありがとうございますと再び頭を下げた。

「では、そろそろ戻ります。アリリアたちが起きたら、私を探し回りますから」

「ああ、そうだな。そうしてやってくれ」

ソレイユは失礼しますと言って、その場を辞した。

「じゃあ、もう一回寝るか……って、シディー？」

リノスの腕に抱かれていたシディーは、スヤスヤと寝息を立てていた。彼は苦笑いを浮かべると、優しく彼女をベッドに寝かせ、自分もその隣で横になった。

◆◆◆

「……」

「……」

一組の男女が無言のまま、漆黒の闇の中を歩いていた。それは言うまでもなく、ミルワとアルベだった。

闇に包まれた中での旅は、余程腕のある冒険者か、厳重に警備を付けた旅人でなければ、通常は行わないものだった。だが二人は、そんな仰々しい装備も警備もない、まさに着の身着のままで歩いていた。

前を歩くのはミルワだ。その後ろをアルベが付いて行っている。二人は近すぎず、遠すぎずの距離を保ちながら、帝都に向かって歩いていた。

ミルワは足の痛みに耐えていた。歩きなれていない彼女の足は、すでにマメができていて、それが歩くたびに痛みを起こしていた。正直彼女は、徒歩で帝都に向かうという決断を下したことを、大いに後悔していた。

その原因は、他愛のないものだった。単に、ミルワがアルベと一緒の部屋で居たくないと思ったことだった。

朝、目覚めた二人は早速朝食を摂った。前日の夕食に勝るとも劣らぬ美味な食事だった。大いに堪能したミルワは、アルベを部屋に残して、ホテルとクルムファルの見物に出かけた。道々で男たちに色目を使い、数人の男からアプローチを受けながら、町で評判の店で昼食を摂った。

その後、色んな店を物色して、大いにリフレッシュをしたミルワは、ご機嫌でホテルの部屋に帰ってきた。そこには、ベッドの真ん中で寝そべりながら、じっと窓の外を眺めるアルベの姿があった。

この光景を見たミルワは、それまでの楽しかった事柄がすべて台無しにされたような気持になった。また、この男と時間を過ごさねばならないのか。そう考えた途端、彼女の心は何とも言えぬ倦怠感が沸き起こった。

「今すぐ出る」

咄嗟に放った一言だった。アルベがキョトンとした表情を浮かべた。今から出るのか？　彼の顔にはそう書いてあった。痛快だった。ここ最近、感情というものをほとんど現さなかった彼が、思わず戸惑ったのだ。何かの敵を討ったような感覚に囚われた。

「出るぞ！」

そう言って彼女は着の身着のままで、部屋を出た。その後ろからアルベが慌てふためきながら、ベッドから転がり落ちていた。

今すぐ出発するとホテルの者に伝えると、男は驚いた表情を浮かべ、もうすぐ日が暮れる。明日の朝に出立されてはと提案してきたが、ミルワはそれを言下に断った。支払いを済ませると、帝都まで馬車を使ってはどうかと提案され、彼女は大乗り気でホテル側の話に耳を傾けた。

馬車には色々な種類があり、二人乗りの小さい馬車から、まるで王族が乗るような大きな馬車まであった。どれも馭者と警備の者が付

いていると言う。ただ、夜間を走る場合は、それなりの腕を持った者を従事させねばならないため、料金も割高になるという話だった。

金の心配は全くなかった。ミルワはできるだけ豪華な馬車を仕立てて帝都に乗り込みたいと考えていた。そんなところに、アルベがやってきた。

慌てて荷造りをしたのだろう。服をだらしなく着込み、髪の毛もボサボサのままだった。その様子を見た瞬間、ミルワはこの男と狭い空間に閉じ込められて帝都まで移動する気にはなれなかった。彼女はホテルの者に徒歩で行くと伝え、席を立った。

クルムファルから帝都まで一日の距離だというのは知っていた。だが、彼女の足は、歩き始めてすぐに痛みを覚えた。しかし、休みたくはなかった。アルベに弱みを見せるのが癪だと思ったのだ。

痛む足をこらえながらミルワは歩いた。陽が落ち、辺りが暗くなったとき、目の前に川が現れた。体は汗にまみれていた。ミルワはそこで服を脱ぎ、川の中に入ってその身を清めた。

しばらくすると、アルベも服を脱いで川の中に身を沈めた。バシャバシャと水をはじく音がする。なんとも不快な音だ。このままこの男を置いて出発しようかと考えもしたが、痛む足はその決断を躊躇わせた。彼女は仕方なく、男が水浴びをするまでの間、ゆっくりと休息を取ったのだった。

ぼんやりと星空を眺めながら、彼女はなぜ、別の部屋を用意してもらおうとしなかったのか、馬車も別々に乗ればよかったのではないかと考えた。己の感情の赴くままに行動したことを悔いたが、さりとてここから引き返すこともできなかった。

ミルワ一人が移動するのであれば、空気の精霊であるポープを使っていく分かは楽に移動することもできた。空気砲であるエアバズーカを応用した形で、地面に向けて弱めの空気砲を打ち、その勢いで、地面から浮き上がりながら移動することも可能だった。だが、それは移動速度が極端に遅く、逆に精霊を使って移動速度を上げると、アルベが付いてこられない可能性があった。結局、ミルワは痛む足を我慢しながら、帝都に向けて歩き続けるしかなかったのだった。

「オイ」

歩きながらミルワは、後ろから付いて来るアルベに声をかける。反応はなかったが、ちゃんと声は聞こえていることは知っていた。彼女はそのまま言葉を続ける。

「毒の準備をしておけ。帝都で、使う」

アルベからの返答はなかったが、ミルワの双眸には、鋭い光が宿っていた。

第六百八十話　決行は……

ミルワとアルベは、夜が明ける前に帝都に到着した。

だが、都の門は閉ざされており、そこには武装した兵士二人が警備していた。ミルワはその一人に中に入れてくれるよう頼んだが、すげなく拒否された。帝都の門は、ここを含めて数か所設置されているが、どこも朝六時にならないと開くことはできないと説明された。

しかし、押し問答をするミルワたちのすぐ脇を、数人の男女が通り過ぎていく。彼らは、もう一人の兵士に何やら話しかけていたが、やがて、門の傍らにある小さな通用口が開かれ、そこを通って帝都に入っていった。

「何じゃ！　あの者たちは入っているではないか！」

「通行許可書を持っているのだ」

「通行許可書!?」

「ああ。許可書があれば、門を通すことができる。お前たちは許可書を持っていないだろう?」

兵士の言葉に、ミルワは黙る外はなかった。

仕方なく門の傍で待機することにする。ミルワの足はすでに棒のようになっていて、腰を下ろすのにも一苦労する有様だった。

ミルワは一刻も早くベッドの上でこの体を休めたかった。ここまで疲労したのは久しぶりだ。いつ以来だろうか……記憶を辿ってみても、思い出すことはできなかった。

腹も減っていた。可能ならば、あのホテルクルムファルの食事を食べたいが、贅沢は言っていられない。どこか一流のホテルで、美味い物をたらふく食べたい……。

そんなことを考えながら、ぼんやりと天を仰ぐ。空は明るくなりつつあり、もうすぐ日の出の時刻になるようだ。間もなくこの門も開くだろう。

そんなことを考えていると、ふと、隣に控えているアルベの姿が目に入った。彼はただ、俯きながら微動だにしない。一見すると、眠っているようにも見える。

ムカムカとした感情が心の中に湧き上がってくる。ミルワは思わず彼から視線を外した。

確かに、この男にはこの帝都で毒を撒くと伝えてあった。その毒は出来ているのだろうか。いや、そんな様子は全く見られなかった。きっと、自分の命令を受けて毒を作り始めるのだろう。命じられて作ったのでは、周囲の人に怪しまれるではないか。どこか隠れて作るのであれば話は別だが、この男のことだ。命じられたその場で毒を作るに違いない。となれば、どこか人目につかないところで毒を作れと命じなければならない。そこまで考えてやらねばならないのか……。

ミルワの心の中のイライラは、収まるどころか、どんどん増幅されていく。門番の姿がなければ、この男を張り倒しているところだ。

そのとき、まるで地鳴りのような音が鳴り響いた。見ると、門がゆっくりと開かれているのが見えた。ミルワは大きなため息をつきながら重い腰を上げ、やっとのことで、帝都に入ることができた。

早速ホテルを探す。当然、この帝都で一番良いホテルだ。それはすぐに見つかったが、ミルワのいる位置からは、かなり遠く離れた場所にあった。さすがにそこまで歩いて行く体力は、彼女には残っていない。ふと見ると、乗合馬車の停留所が見えた。ミルワは無言でそこに向かう。

まだ、馬車は到着していなかったが、停留所にはすでに列ができていた。彼女はその後ろに並ぶ。ほどなくして馬車がやって来た。人々はそこに吸い込まれるようにして乗りこんでいく。

「……」

ミルワが座る席はなかった。すべての席が埋まっていた。彼女は呆然と立ち尽くす。だが、人々は次々と乗り込んでくる。彼女はまるで押し出されるようにして、馬車の奥へと追いやられる。

立錐の地もない状態で馬車は動き出した。息苦しかった。知らぬ人々が至近距離まで近づいていて、他人の息が頭にかかって気持ちが悪かった。馬車が動き出して数秒で、ミルワは気分が悪くなった。やろうと思えば空気の精霊を使って、ここにいる全員を吹き飛ばすこともできたが、さすがにそれをすると騒動になるのはわかり切っていた。彼女は必死で苦痛に耐えた。

一方のアルベは、これだけ混雑した車内にもかかわらず、涼しい顔をして立ち尽くしていた。ミルワの怒りの導火線は爆発しそうにな

っていたが、必死でそれをこらえていた。もはやこの男は何をしても、ミルワの癪に障る状態となっていた。

約十分で馬車はホテルの前に着いた。やっとのことでそこから降りると、目の前には壮大な建物が目に入った。ここならば、サービスの質が高いのは疑いないだろう。ミルワはアルベのことなど全く気にすることなく、スタスタと入り口に向かって歩き出した。

ロビーは古いが、伝統を感じさせる気品が漂っていた。そんな雰囲気の中であるにもかかわらず、ミルワはまるで、食って掛かるようにホテルの者に早口でまくし立てた。

「部屋を用意して欲しいのじゃ。広くてきれいな部屋じゃ。バスルームの付いている部屋じゃ。金はいくらでも払う。その前に食事じゃ。すぐに食事も用意するのじゃ」

突然のことであるにもかかわらず、ホテルのスタッフは動揺を一切表に出さず、にこやかに、丁寧に対応する。テキパキと瞬く間に受付が終了する。そのとき、ミルワは何かを思い出したかのように、再びスタッフに詰め寄る。

「部屋を使うのは、私ひとりじゃ」

「……承知しました。こちらは、お連れ様ではございませんでしたか？」

「……ああ」

「承知しました」

スタッフの男性は、それでは、と言ってミルワを部屋に案内しようとする。ポツンと一人残されたアルベは、別のスタッフから何やら話しかけられていて、小さな声でボソボソと喋っているところだった。そんな彼に向かってミルワは、高飛車な物言いで口を開いた。

「部屋は決まったのか？　まだ？　相変わらず愚鈍じゃな。部屋が決まったらすぐに妾の部屋に来るのじゃ。荷物を置く前に来い」

ホテルのスタッフは冷たい笑みを浮かべていたが、やがてミルワに向かって、ご案内しますと言って、その場を離れるように促した。

部屋に通され、スタッフがその場を去ると、ミルワはベッドに横になった。空腹と睡魔が一度に襲ってくる。そのまま眠りたかったが、腹の底から迫りくる空腹感で眠れそうにもなかった。そんな中、ゴロゴロとベッドを転がっていると、部屋の扉がノックされる。やっとアルベが来たかと思いつつ、疲れた体を引きずるようにしてベッドから降りて扉を開ける。そこには、二人のメイドが控えていて、食事をお持ちしましたと言って、恭しく一礼した。

彼女らは入室すると、テキパキと料理を机の上に並べていく。用意されたのは、「アガルタ」という名前のビーフシチューだった。以前、アガルタ王リノスがこの帝都に逗留していたとき、何度もここに通ってこの料理に舌鼓を打ったことから、この名前になったとメイドは説明する。ミルワはそれを無表情で聞いていた。

メイドたちが下がると、彼女はパンを片手に、料理を次々と口に運び入れた。なるほど美味いビーフシチューだった。これならいくらでも食べられそうだ。そのとき、ドンドンと扉を叩く音がした。アルベであることは明らかだった。

食事を邪魔されたくなかった彼女は、座ったまま大声で扉に向かって口を開く。

「明日の朝じゃ。それまでに作っておくのじゃ。朝食を済ませたら、この部屋に来い」

返事はなかった。ただ、足跡がゆっくりと遠ざかっていくのをミルワは聞いていた。彼女は再び食事に取り掛かった……。

第六百八十一話　帝都の水

鳥のさえずりが聞こえてきた。ミルワはゆっくりと目を開ける。

窓から朝日が差し込んでいた。もう、朝か。心の中で呟きながら、ベッドの中で思いっきり背伸びをする。

毛布の中は温かい。部屋の中の気温は少し低いが、寒すぎるというわけではない。言ってみれば、一番心地よい温度に保たれていると言えた。

ぼんやりとした頭でミルワは考える。この仕掛けは一体どうなっているのかと。

驚きの連続だった。このホテルには、これまで彼女が見たこともない仕掛けが随所に施されていたのだ。

まず驚いたのが、手洗いだった。この部屋の手洗いは水洗式だったのだ。

これまで色々なところを旅してきたが、水洗式の手洗いは初めてだった。川の上に手洗いを作っていたことはあったが、部屋の中にこのような仕掛けの手洗いを設えていたのは、初めてだった。

大抵のホテルや宿屋は、部屋の外に手洗いがあるのが一般的だった。ヘタをすると、手洗い自体がなく、外で済ませなければならないところもあったほどだ。だが、ここでは部屋の中にそれを設置している。それだけでミルワにとっては十分に驚きに値するのだが、ここ

では、コックをひねれば水が勢いよく流れて汚物を流す……。圧倒的に清潔で快適だった。

次に驚いたのが、バスルームだった。ここでは、コックをひねれば湯が勢いよく飛び出す仕掛けになっていた。ホテルクルムファルのように、湯が滾々と湧き出るのではなく、コックによって水量が調節することができた。一体どういった仕掛けで湯が飛び出してくるのかが、彼女には全くわからなかった。

それでも、バスタブに湯を並々と溜め、手足を存分に伸ばして浸かっていると、体中の疲れが取れていくような感覚を覚える。やはりこれじゃ。次に住むところが決まったら、絶対にこの装置を付けよう。と心の中で呟く。

湯に浸かっていると、あのホテルクルムファルをわが物にできないかという欲望が、ムクムクと頭をもたげてきた。

確か、あのホテルの経営権はアガルタ王が握っていると聞いた。ということは、王が死ねば、あのホテルを手に入れるチャンスが生まれるのではないか。あのホテルを手に入れ、あそこで暮らすことができれば、最高だ。あそこの設備に、ここの仕掛けを加えることができれば、それこそ、最高の日々が過ごせる。そこで日々好きなことをして、好きなものを食らう生活を想像すると、ワクワクが止まらなかった。

満ち足りた気分でバスタブから上がり、上気した体もそのままに、タオルで体を拭きながらバスルームから出て、ベッドに倒れこむ。仰向けに寝転がったままぼんやりと天井を眺めていると、すぐに睡魔が襲ってきた。彼女はそれに身を委ねるように、部屋の灯りを落とし、毛布をかぶって眠りについたのだった。

それから一体、どのくらい眠っただろうか。十時間近くは眠ったかもしれない。体は少し気だるいが、心は満ち足りていた。

ゆっくりと体を起こして、傍らにあったグラスを手に取り、すぐ傍に備えられていた陶器から水を注ぐ。ゆっくりと味わうようにしてそれを含むと、何だか少し甘い味がする。水という飲み物は、こんな味がするものなのか。そんなことを考えながら、喉を鳴らして飲み干す。

大きく深呼吸して、辺りを見廻す。少し冷えた空気が肌に心地よい。彼女はベッドから降りると、もう一度思いっきり背伸びをした。

……何だか、すべての感覚が研ぎ澄まされているように感じる。何でもできそうな気がした。体中からエネルギーが湧き上がってくるような気がしていた。

服を着替え、窓の外に視線を向ける。朝日が帝都の景色を美しく彩っている。石畳が敷き詰められた町並みで、伝統を感じさせる。その雰囲気からは、世界の強国であるという威厳が伝わってくる。そんな町を大混乱に陥れるのも悪くはないなと考えると、心がワクワクしてくる。人々が苦しむ姿、バタバタと倒れていく人を見て叫び声を上げる人々……。世界の強国と称されるヒーデータ帝国の面目が丸つぶれとなるのだ。実に爽快だ。

そのとき、部屋がノックされる。アルベでないことは音でわかる。入室を促すと、昨日のメイドが恭しく控えていた。彼女らは朝食をお持ちしましたと言って、テキパキと食事の準備を始めた。メニューは、パンにサラダ、スープと肉料理だった。

朝から肉が出てくるのは初めてだった。これからコトを起こそうと考えていた自分にとって、最もふさわしいメニューだと思った。ミルワはホテル側の配慮の細やかさに驚きつつも、嬉しさを隠すことなく、満足そうな笑みを浮かべた。

早速、食事を口に運ぶ。美味い、と心の中で呟く。ホテルクルムファルに勝るとも劣らぬ味だ。特にこの肉の味わいがよい。柔らかく、噛めば噛むほど溢れる肉汁。その脂分をパンとサラダでリセットする。

瞬く間に料理を味わいつくすと、何とも言えぬ満腹感が彼女の体を包み込む。すべての準備が整った気がした。

ちょうどそのとき、部屋がノックされる。感覚が研ぎ澄まされているためか、それがアルベであることが瞬時にわかった。このタイミングで来るとは、あ奴も少しは気が使えるではないかと思いながら入室を促す。彼は俯いた状態で扉の前に立っていた。

相変わらず辛気臭いヤツだと思いながらも、今、包まれている心地いい感覚が怒りの感情が沸くのを抑止してくれている。ミルワは立ち上がるとツカツカと彼の許に向かい、すれ違いざまに声をかける。

「よし、行くぞ」

後ろでアルベがゴニョゴニョと言っていた気がするが、全く気に留めなかった。どうせ、荷物はどうしたとか、ホテルの支払いはどうするのだとか、下らないことを言っているのだろう。荷物はすでに無限収納の中に納まっているし、ホテルの支払いなど、これから起こることを考えれば、どうでもいいことだった。彼女は全く振り返らずに、ホテルを出た。

ブラブラと町を歩きながら、毒を撒く場所を探す。どうせなら、たくさんの人間が死ぬのがいい。そうすれば騒ぎが大きくなるし、その混乱に乗じて逃げることも容易になる。となれば、大きな井戸がいいだろう。

だが、探せど探せど、井戸は見つからない。大抵、そうしたものは町の中心部に置かれているものだが、それらしきものの姿がない。ミルワは目についた店の前で足を止める。

「いらっしゃい」

「すまぬが、水が飲みたいのじゃ」

「ウチはレストランじゃねぇよ」

「わかっておる。水が飲みたいじゃによって、井戸の場所を教えて欲しいのじゃ」

「井戸？　んなものぁねぇよ」

「井戸がない？　水はどうしておるのじゃ？」

「水？　あれさ」

店主が顎をしゃくる。見るとそこには、ホテルの部屋に備えられてあったコックがあった。どうやらそれを動かすと、水が出る仕組みになっているようだ。

「アンタら旅人かい？　この帝都じゃ、水はあそこをひねって出す

ものなのさ。喉が渇いているなら、勝手に飲んでも構わないぜ」

「何なのじゃ、一体……？」

「詳しくはわからねぇけれどよ。魔石が仕込まれてあってな。それで、地下に流れている水を汲み上げているんだ。昔は井戸を使っていたんだけれどな、今の陛下が即位されてから、水は地下から汲み上げるようになったんだ。その工事をタダでやってくれたんだから、有難てぇやな」

店主の言った言葉が半分程度しか理解できず、ミルワは目を白黒させている。そんな彼女に店主は、まるで噛んで含めるようにして説明してくれた。

彼の話では、この帝都の地下には飲み水用の水が流れていて、帝都の家々では、そこから水を汲み上げているらしい。そして、その水はどこから来るのかというミルワの声に、店主は、宮城の裏手にある建物に一旦水が集められるのだと説明してくれた。

「……ならば、そこに毒を撒こうではないか」

店主の許を辞してから、ミルワは誰に言うともなく呟いた。彼女は、はるか遠くにそびえ立つ皇帝の居城を睨みながら、笑みを漏らしながら言葉を続ける。

「恐らく、厳しい警備が敷かれておるじゃろうが、妾の精霊を使えば簡単に忍び込めよう。そこで、お前の毒を撒くのじゃ。一体、どのくらいの人間が死ぬじゃろうな。おい、作った毒のすべてを撒くのじゃ。よいな？」

「その……」

「何じゃ？」

「毒は……作れなかった」

「何じゃと！？」

「薬品が足りなくて、毒は作れなかった」

ミルワは足を止めて振り返った。彼女は呆気にとられたような表情を浮かべていた。

第六百八十二話　褒めてやれ褒めてやれ

「今のところ、全く問題はございません」

宰相のグレモントは、そう言って一礼した。その言葉に、皇帝であるヒートは鷹揚に頷いた。

「ノースエデンは、どうじゃ」

「はっ、そちらには帝国軍の二個大隊を派遣し、ネズミ一匹通さぬよう、警備を固めているところでございます」

「うむ。あそこは帝都の水瓶じゃからの。あそこがやられると、この帝都は死んだも同然となる。何としても、守り切るのじゃ」

「ははっ」

そのとき、部屋の扉が開かれ、家来の一人が入室してきた。男は一礼すると、素早く皇帝の許に駆け寄り、小さな声で何かを呟いた。

「なに？　すぐに通せ」

男は再び一礼すると、足早にその場を去っていった。

「陛下、どなたがお見えになったのでしょう？」

皇帝は宰相の問いかけに応えず、ニコリと笑みを向けるばかりだった。

「失礼します」

再び扉が開き、二人の女性が入室してきた。その姿を見た宰相が、ギョッとした表情を浮かべる。

「おお、久しいの」

女性は皇帝の言葉には答えず、静々と彼の許に歩いてきた。そして、すぐ近くまで来ると、見事な所作で深々と一礼した。

「陛下にあらせられましては、ご機嫌も麗しく……」

「よいよい、固っ苦しい話はなしだ」

皇帝は笑いながら手を振る。女性の一人は、強張った表情浮かべながら、手に布でくるまれた品物を持って控えている。皇帝は目の前に控える二人の女性交互に視線を向けながら、相変わらず穏やかな表情を浮かべながら、さらに言葉を続ける。

「余とそなたの仲じゃ。ここには宰相しかおらぬし、ここが余の私室であることはそなたも存じておろう。畏まる必要などあるまい」

「そうは申しましても……」

「ハッハッハ。相変わらず生真面目じゃのう、リコレット」

名前を呼ばれて、リコは再び恭しく一礼した。

「ところで、大きくなられたの、エリル殿」

皇帝の呼びかけに、女性はピクンと肩を震わせる。女性というよりは、まだ幼い少女だ。だが、彼女は両手で荷物を持っているにもかかわらず、見事な所作で一礼し、ゆっくりと口を開く。

「へ、陛下にあらせられましては、ご機嫌も麗しく、何よりとお慶び申し上げ奉ります」

エリルの言葉に、皇帝は少し大仰に驚くようなそぶりを見せながら、傍に控えている母親であるリコレットに視線を向ける。

「まだ幼いのに、これほどしっかりした挨拶を行うとは驚きだ。これはやはり、リコレットが教えたのかの？」

「はい……。まだ、手ほどき程度ですが……」

「教えも教え、覚えも覚えし、じゃの」

「いいえ陛下。まだまだでございます。お恥ずかしい限りでございます」

「何を言うかバカ者。我々がこのくらいの頃に、これほどの所作、振る舞いができたであろうか？　余は畏まって何も言うことができずに、父上や母上の後ろに隠れてばかりおった。そなたもまた、乳母の後ろに隠れてただ、覗き見ることしかできなかったではないか。親ができなかったことを子に強いるのはよくないことじゃぞ。この年齢で、これだけのことができれば立派なものじゃ。褒めてやれ褒めてやれ。褒めてやるのじゃ」

兄の言葉に、リコレットは何とも言えぬ表情を浮かべながら頭を下

げた。隣に控えていたエリルも、どうしてよいのかわからないといった表情を浮かべながら、母親に倣って、おずおずと頭を下げた。

そんな二人の様子を皇帝は嬉しそうな表情を浮かべていた。

「さてリコレット。本日参ったのは、何用じゃな？　単にご機嫌伺いというわけでもあるまい？」

「はい、兄上。実は、夫からこちらを預かって参りましたので、お届けに上がった次第です」

リコは隣のエリルにスッと視線を向ける。彼女はスタスタと皇帝に近づくと、ゆっくりと手に持っていた品物を差し出した。

「これは？」

「結界石ですわ」

「結界石……すると……」

「はい。ノースエデンの警備にお役立て下さいと、夫からの伝言です」

「何と……さすがは義弟殿じゃの。行き届いておるな」

「ありがとうございます。ただ……シディーが申しますには、ノースエデンが襲撃される可能性は低いとのことでございますが、万が一のことを考えまして、夫がこれを届けるようにと……」

「なるほどの。ありがたく使わせてもらおう。誰ぞある」

すぐに扉が開いて、家来が入室してきた。皇帝は男に手に持っていたものを手渡す。

「これをすぐにノースエデンに届けよ。義弟殿から贈られし結界石じゃ。だが、ゆめゆめ油断するなと申すのじゃ」

皇帝の言葉に男は恭しく一礼して、そそくさとその場を去っていった。

「義弟殿には、いつも世話になりっぱなしじゃの。あらためて、何らかの礼をせねばなるまいて」

皇帝は誰に言うともなく呟く。リコはその言葉に対しては口を開かず、ただ、小さく頭を下げた。

「まあ、せっかく来たのじゃ。ゆっくりしていくとよい。そうじゃ、誰ぞある」

再び家来の男が入室してくる。その彼に皇帝は、機嫌のよさそうな声で口を開いた。

「アローズを呼んでまいれ」

ほどなくして、一人の少年が男に連れられて入室してきた。上品で優し気な顔立ちは、大国の王子らしさを感じさせた。

彼は父の傍で控えると、無言のまま、右手を胸に当てた状態でリコレット母娘に対して一礼した。

「せっかくじゃ、アローズ。エリル殿と遊んで差し上げろ」

アローズはさも困ったという表情を浮かべながら、じっと父親を見つめている。対してエリルはじっと俯いたままだ。

「何じゃ、どうしたのじゃ？」

「……何をして遊べばよろしいのでしょうか、父上？」

「何でもよいではないか。外に出て遊ぶのもよし、その……何だ。お前が今、熱中していることを一緒にするでもよいではないか」

「今は、カタマリーベ戦史を読んでいますが……」

「戦史？　そんなものを読んでおるのか、お前は……」

皇帝は呆れた表情を浮かべる。そのとき、リコが口を開いた。

「……この宮城を殿下にご案内していただいたらどうかしら？　ね、エリル」

俯いている娘の顔を覗き込む。エリルはゆっくりと顔を上げて母の顔を見たが、どう返答してよいのかわからないといった表情を浮かべながら、少し首を傾げた。

「そうじゃ。アローズ、お前がこの城の中を案内してやれ」

父親の声に、アローズは目を細めながら、何かを考える素振りを見せた。

「どの辺りを案内すればよろしいでしょうか？」

アローズの言葉に、皇帝はさも残念、と言った表情を浮かべながら、まるで椅子から身を乗り出すようにしてリコに話しかけた。

「すまぬな。倅は生真面目すぎていかぬ」

「いいえ。大変聡明なお方であるとお見受けしましたわ。父親の言うことに唯々諾々と従うのではなく、ちゃんと理解しようとしておいでですわ。さすがはヒーデータ帝国の皇太子殿下であらせられますわ。兄上、どうぞ殿下を褒めてやってくださいませ」

リコの言葉に皇帝は、ヤレヤレといった表情を浮かべながら、ゆっくりと頭を左右に振った。

兄のもとを辞したリコは、宰相に案内されながら、宮城の長い廊下を歩きながら考えていた。もっとアローズにエリルを近づけた方がよかったのだろうか、と。

だが、明らかにアローズは乗り気ではなかった。あそこで敢えてエリルを近づけても、彼の心証を悪くするばかりで、何の進展も得られなかったはずだ。それに、エリルの性格上、そんな彼の機嫌を取り繕うようなことをやれと言うのは、無理な相談だと言えた。

とにもかくにも、エリルとアローズが面識を得られたのは、一つの成果だ。エリル自身も、立ち居振る舞いは、全く問題はなかった。少なくとも兄の心証を大いに上げられたはずだ。

「……それでは、アガルタ王様に、よろしくお伝えください」

いつの間にか、転移結界が張られている部屋に着いていた。リコは宰相に丁寧に礼を言ってから、結界の上に乗った。それにつづいて、エリルも結界に入ってきた。

見ると、娘の顔が少し青ざめていた。どうやら、極度の緊張状態にあったようだ。彼女はクルリと振り返ると、宰相に向かって一礼する。宰相は満面の笑みを返していた。

転移結界を発動させる直前、エリルは大きなため息をついた。緊張から解放されたとはいえ、気を緩めるのには早すぎる。恐らく今のため息は、宰相の目に留まったことだろう。やはりこの娘はまだまだだと思いながら、リコは屋敷へと戻るのだった。

第六百八十二話　褒めてやれ褒めてやれ（後書き）

コミカライズ最新話が公開されました。覚醒した陛下が格好良く描かれています。是非、チェック下さい！　無料公開は、２０２１／１１／０２　１２：００まで！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６

第六百八十三話　毒を撒く場所

結局、ミルワはヒーデータ帝国で何もすることができなかった。帝国の水瓶であるノースエデンには、近づくことさえできなかったのだった。

知れば知るほど、技術力の高い国だった。この国は、魔石と呼ばれる石を有効に活用して、上下水道を完備した驚くべき都市だったのだ。

この魔石は、水の流れを操ることができるもので、詳しいことはわからないが、魔力を通すと、水の流れを上下左右自由に操ることができるというものだった。元々、こうした魔石は帝国にあったが、それはポンプのように汲み上げる、つまり、水を上方向に動かすことしかできなかった。むろん、この石のお蔭で帝国は地下水をくみ上げることができたために、水に関しての苦労は皆無だったし、それが帝国を強国たらしめている要因の一つでもあった。

だが、リノスとメイは、その魔石に色々な種類の魔力を通すことで、水の流れを変えることが可能であることを発見した。その技術を彼らは惜しげもなく帝国に与え、皇帝であるヒートも、すぐさまそれを活用するべく動いたのだった。

その成果もあって、現在ではすべての水道が地下に埋められていたために、ミルワは毒を撒くことができなかった。無理をすればできなくはなかったが、そのためには、敷き詰められた石畳を剥がし、土を掘って地下に埋められている上水道までたどり着かねばならなかった。それをするにはあまりにも時間がかかる。彼女一人の力で

は無理な話であることは、誰の目にも明らかだった。

このヒーデータの帝都がこの状態であるならば、アガルタの都はこれと同等、もしくはそれ以上の施設が設けられていると考えてよかった。ミルワは己の計画が頓挫する、イヤな予感に苛まれていた。何もすることができず、ただオロオロとするばかりの自分……。そんな自分をあの、ソレイユが見たら、どんな顔をするだろうか。あの憎たらしい顔が、彼女の脳裏に鮮やかに描き出される……。

このままでは、ソレイユに恨みを晴らすばかりか、自身の身の上も危険にさらされる恐れがあった。ミルワはホテルのベッドに仰向けになりながら、ぼんやりと考える。

いつもの通り、一糸まとわぬ全裸だ。ベッドに大の字になっているので、本来隠すべき部分がすべて、丸見えになっている。とはいえ、この部屋には彼女の他は誰もいない。彼女は何の気遣いなく、思索に向けることができていた。

このままアガルタに向かわずに、どこか遠い場所に行くのも悪くはない。そんな気持ちが頭の中によぎる。アガルタに行ったところで、楽しいことはあまりなさそうだ。だが、せっかくここまで来たのだという思いもある。そんな気持ちのせめぎ合いを続けていると、何だか疲れてきた。彼女は一旦考えることを止め、目を閉じて大きく深呼吸した。

……美味い物を食べて、ゆっくり眠って、明日考えればよいのじゃ。

そんなことを心の中で呟きながら、体を起こす。窓の外を眺めると辺りは薄暗く、夕陽が差していた。

衣服を身に付け、部屋に備え付けられた鈴を鳴らす。しばらくすると、メイドたちが食事を運んできた。この日は、パスタのようなものの上に、溶けたチーズを載せたもので、チーズとソースが絡み合う濃厚な味わいで、満足のいくものだった。

食事を終え、メイドたちが片づけを終わると、バスルームに向かう。ゆっくりと湯を浴びて体を温める。そして、再びベッドに戻って、全裸のまま仰向けに横たわる。

……そういえば、あの男はどうしているじゃろうな。

ふと、アルベのことが頭をよぎる。まさか毒薬を作っていなかったとは、驚くのを通り越して、呆れるほかはなかった。結局、あれ以来彼とは口を利いていない。どうやら一人で帝都の町を物色して、毒を作る材料を仕入れていたようだが、今はどこにいるのかも知らない。恐らくこのホテルに帰って来てはいるのだろうし、精霊の力を使えば簡単に居場所を特定できるが、そんなことをする気にはなれなかった。

もし、アガルタに向かうのであれば、馬車の中であの男と一緒に過ごさねばならない。あの辛気臭い顔を見続けねばならないと思うと、何とも言えぬ疲労感が襲ってくる。アガルタまでは馬車で約三日かかる計算だ。三日もあの男と顔を突き合わさねばならないのだ。

大きなため息をつく。ああ、面倒くさい。そんなことを思ったそのとき、部屋の扉がノックされた。これは……アルベだ。

わざわざこの部屋までやって来る理由がわからない。下手をすれば、また殴られるかもしれないのは、十分に認識しているはずだ。にもかかわらずやって来るとは……。きっと、毒物を作れなくなった、

などというのだろう。そうなったらそうなったで、あの男をここに捨てていけばいいのだ。そんなことを考えながら彼女は、視線を扉に向けた。

「何じゃ！　入って来い！」

沈黙が流れる。自分の声が聞こえなかったのか、それとも恐怖で足がすくんで動けないのか……。外の気配を探ると、どうやら後者ではなさそうだ。そのとき、ゆっくりと扉が開いた。

「……」

相変わらず俯いた状態でアルベは立ち尽くしている。彼はゆっくりと入室してくると、スタスタと落ち着いた歩き方で近づいてきた。

「何じゃ」

「これを」

彼は手に持っていたものを差し出した。よく見るとそれは丸められた紙だった。ミルワは訝りながらそれを受け取り、広げてみた。そこには、何やら地図のようなものが書かれていた。

「何じゃこれは」

「アガルタの都だ」

「何？」

よく見るとそれは、アガルタの都が描かれた地図だった。ミルワは

じっとそれに見入る。

「アガルタはどうやら、川の水のようだ」

「川の水？」

「ああ。この地図を売っていた店主が、アガルタの都に行ったことがあるらしい。そこでは、川の水を都の中に引き入れて飲み水などに使っているらしい」

「ということは」

「ああ。その川は、都の北側の森から流れ出ている。つまり、上流から毒を撒けば、多くの人が殺せる」

「……」

アルベは黙ってミルワを眺め続けている。ややあって、彼女は小さな声で呟いた。

「毒は出来ておるのじゃろうな」

「できている」

「……明日、出発する」

「わかった」

アルベは踵を返すと、スタスタとその場を後にしていった。ミルワはその後ろ姿を見送ろうともせず、ただじっと地図に視線を向けた

ままだった。

「都に入る必要がないか」

突然、ミルワは誰に言うともなく呟く。その顔には、下卑た笑みが浮かんでいた。

「都に入らねば、アガルタの王の結界に警戒する必要もなくなる。川の上流に毒を撒いておけさえすれば、多くの人々の命を奪うことができる。さすれば、都の中は大混乱じゃ。上手くいけば、アガルタ王やソレイユを殺せるかもしれぬ。フフフ……。あ奴、役に立たぬ男じゃと思っておったが、たまには仕事をするではないか。キャハッ、キャハハハハッ」

アガルタの都の中で、累々たる死骸が築かれている場面が脳裏に描き出される。必死で陣頭指揮を執るアガルタ王とソレイユ。あの女のことだ、きっと、森の精霊を使って何とかしようと考えるのだろうが、きっと何もできはしないだろう。

民衆から糾弾されるアガルタ王とその妻たち……。挙句に、民衆が蜂起して、あの一家を皆殺しにすることになれば……。まさに昔、ジュカ王国の王が家来に叛かれて一族全員が殺された出来事と同じではないか。そうなれば面白い。本当に面白い……。

何と簡単な仕事だろうか。毒さえ撒いてしまえば、あとは高みの見物を決め込めばよいのだ。こんな楽な仕事はない。

「そうじゃ。民衆が蜂起するときには、あのバカが先頭に立てばさらに面白いのう。アガルタ王の妻たちを手に入れるために、バカが必死になって戦う……。面白い、面白いではないか！　キャハハハ

ハー」

ミルワはしばらくの間ベッドの上で、腹を抱えて爆笑し続けた。

第六百八十四話　見つけた？

翌日、ミルワとアルベは連れ立って帝都のホテルを後にした。
二人は馬車を調達すると、それに乗り込み、南へと進路を取った。
目指すはガルビーという港町だった。

元々ここは、ラマロン皇国の領地だったが、先の戦いでアガルタが勝利して、この土地を手に入れた場所だ。以前はそれほど大きな街ではなかったが、アガルタがこの土地を手に入れてからどんどん手が加えられて、今では大規模な港湾都市となっていた。

ガルビーに向かう馬車の中で、二人はほとんど会話を交わさなかった。だが、ミルワの方は割合機嫌がよく、車窓の風景を眺めながら目を細める姿が何度も見られた。一方のアルベも、車窓に視線を向けていたが、こちらは全く無表情で、ただ単に外の景色を眺めているだけだった。

アルベがこのような態度を取ることを、ミルワは十分承知していた。そのため彼女は、退屈な旅を覚悟していたが、意外にも、ガルビーに至るまでの道中には、大小様々な街があり、そこでは珍しいものが売っているなどしたため、意外にも彼女はその旅路を楽しんだのだった。

そして、陽も落ちて、辺りが漆黒の闇に包まれたころになって、ようやく馬車はガルビーに到着した。

早速、宿を探す。もちろん、この街で一番の宿屋だ。見つけたのは、

ここ最近建設された建物で、すべてのものが新しかった。

ダーケホテルと名付けられたこのホテルは、海が一望できるホテルとのことだったが、あいにく周囲は闇に包まれていたために、その眺望を楽しむことはできなかった。それでも、そこで供された食事は、好きなものを好きなだけ食べることができるシステムとなっていて、これは大いにミルワを喜ばせた。

広い食堂のテーブルに、大小様々なプレートが置かれていて、そこにいろいろな種類の料理が山と積まれていた。ホテルのスタッフ曰く、ガルビーには多くの国から様々な品物が荷揚げされるために、このような多様な料理を提供することができるとのことだった。それらはどれも見事な味付けで、ミルワは限界近くまでそれらの食事を楽しんだ。

部屋に戻って、バスルームに向かう。ここでも、ヒーデータと同じく、コックをひねれば水が飛び出す仕掛けが施されていた。どうやらこの技術は、ヒーデータとアガルタでしか取り入れられていないらしい。しかも、このホテルでは、バスタブが据え付けられていて、そこに湯を溜めて体を洗うことができた。それは、あのホテルクルムファルを思い出させた。

ミルワは湯をなみなみと溜めて体を温め、大いに満足して眠りについた。

翌朝、あいにくガルビーは雨模様で、部屋からは大海原を眺めることはできなかった。できることならば、あと数日はこのホテルに滞在して、この街を満喫してみたい欲望に駆られたが、今の彼女にはその余裕はなかった。ミルワは後ろ髪を引かれる思いで、ガルビーを後にした。

馬車はイルベジ川に沿って北に向かう。この川は春先には雪解け水が流れ込んで増水して、大河のようになるのだが、現在は落ち着いた流れとなっていた。ミルワはてっきりラマロン皇国内を移動してアガルタに向かうと思っていたが、川には広く、きれいな道が作られていて、馬車はそこを通ってアガルタに向かった。

「……懐かしいのう」

移動中、ミルワが不意に呟いた。アルベはスッと彼女に視線を移す。だが、ミルワは一切彼を無視した状態で、さらに言葉を続けた。

「あの山の向こうに、我らサイリュースの里があったのじゃ。よくこの辺りで遊んだものじゃ……」

ミルワの眼には、幼い頃、里を抜け出して遊んだ頃の景色がそのまま目の前にあった。どうかすると、あの頃一緒の遊んだ者たちがフワリと飛んで来るのではないかと思う程、そこは時が止まったかと思う程に、一切の変化が見られなかった。

あの頃は、ソレイユも一緒に遊んだのだ。飛ぶ速度が遅く、いつもミルワの後から付いて来たソレイユ。まさかこのソレイユが自分を超え、さらには世界一の大国の妃となるなど、想像すらしていなかった。それもこれも、ソレイユが自分が契約した精霊を横取りするから、こうなるのだ。あれさえなければ自分はサイリュースの里に留まっただろうし、次期族長として穏やかな日々が過ごせたのだ。

そこまで考えて、ミルワは苦笑する。例えそうなったとしても、今の自分はあの里に帰る気など毛頭ないのだ。あんなに窮屈な生活を送るくらいならば、むしろ、死んだ方がマシだ。

そんなことを考えていると、彼女の表情は自然と笑みを浮かべていた。一見するとそれは、実に不気味な光景であると言えたが、アルベはそれを見ても何とも思わなかった。

夕刻近くになった頃、不意に馬車が停まった。一体何事かと思っていると、馭者の男が荷台を降りて近づいてきた。

「こちらの結界村で休息なさいますか？」

「結界村？」

「ええ。アガルタ名物……と言っては何ですが、ここにはたくさんの結界が張られていますので、休息することができるのです。基本的に宿泊料はかかりません。ただ、旅人のために作られた施設ですので、汚したり散らかしたりすると怒られてしまいますが。村には店も出ていますので、金さえ出せば結構なものが食べられますよ」

結界村という名前は初めて聞いた。アルベに視線を向けてみるが、彼は何も答えない。恐らく知らないのだろう。

興味を覚えたミルワは、そこで休息を取ることにした。見るとそこには、小さな椀型の建物が無数に設置されていた。

近づいて見てみるとそれは、透明な硬いものでできていた。中には大人の男が三人ほど入ることのできるスペースがあり、毛布が数枚、部屋の隅に畳まれていた。

中に入ると、周囲が一瞬で暗くなった。外の様子を見ることもできない。一体何事かと思いながら中から出ると、不思議なことに、そ

の建物は再び透明になった。

「なるほど、中に入れば、外から見えぬようになっておるのか。何とも不思議じゃのう」

そんなことを言いながら彼女は、気の向くままに結界村を見廻す。どうやらここは、野営地に近い施設であるようだ。ただ、野営地よりもはるかに設備の整った施設であるようだ。遠くの方には長方形の建物が並んでいて、そこは手洗いだと馭者の男が教えてくれた。彼はここに何度も泊っているようで、手洗いだけでなく、バスルームも完備しているのだと教えてくれた。それはミルワがホテルクルムファルで経験した、温かい湯が常に浴槽に流されている形態であるようで、彼女はすぐさまここで宿泊することを決めた。

「ああいや、ただなお客さん。そこは皆で入る仕組みなんだ。そこは、大丈夫かい？」

「どういうことじゃ？」

聞けば、結界村のバスルームは大変広いが、希望する人は誰でも入ることができるために、他の種族の者たちも入って来るのだという。さすがに男女分けられてはいるものの、そこには、門番のような者がいて、使用方法について、細かく指摘されるのだという。慣れれば問題ないが、大抵の者は、そうした堅苦しいルールに縛られることを嫌って、利用する者は少ないという。

「……そうか。自由に使えぬのは、窮屈じゃのう。まあよい。体は布で拭けばよいのじゃ」

そう言ってミルワは再び周囲に視線を向けた。

「……あれはなんじゃ？」

彼女が指さす方向を見て、馭者の男が口を開く。

「あれは井戸さ」

「井戸……」

「ああ。水が飲みたければ、あそこの水を汲んで飲むといい」

「他に井戸はないのか？」

「あそこだけだ」

「ほう……」

ミルワの表情が下卑たそれに変わった。彼女は舌を出して自分の唇を、ペロリと舐めた……。

第六百八十五話　ナイスアプローチ？

ミルワはゆっくりと目を覚ました。清々しい朝だ。

毛布の中で思いっきり背伸びをする。よく眠れたという満足感が湧き上がる。

体をかがめて、出口から顔を出すと、朝日が結界村を照らしていた。空気が澄み切っているためか、結界村から見える山々の色合いが濃くなっているように見える。まさに、清々しい朝だと言えた。

予想以上によくできた結界だった。暑くもなく寒くもなく、結界内では常に一定の温度に保たれていた。その効果を付与した結界が、これだけ大規模に作られているのだ。アガルタ王・リノスという男の優秀さが証明されていた。

結界を張るスキルがある、というのは知っていた。そして、そのスキルを活用した結界師という職業があることも承知していた。だが、ミルワの知識では、結界師というのは、王や要人の傍に控えていて、その身を守るための職業というものだった。結界は張ることができても、精々数人、その範囲も狭いというものだった。

ただ、このスキルを極めれば、かなり自由に効果を付与できるもので一千年前に生きていた大結界師、キスエヒロは、結界内の人物を変えることができたと言われている。言わば、結界師としての優秀さは、結界を張る範囲の広さとどれだけ効果を付与できるかで判断されると聞いていた。

今、目の前に広がる結界村は、およそ数百の結界が張られている。しかも、付与されている効果も多い。これが、一人の結界師によって保たれているのだ。アガルタ王がどれだけ優秀であるのかは、一目瞭然だった。おそらく、有史以来、最も神に近いスキルの持ち主であると言えよう。

まともな者ならば、この王に楯突くことなど、考えもしないことだろう。しかし、ミルワはこれだけのスキルを持つ王を、出し抜いてみたいと思った。

ゆっくりと井戸に向かって歩く。そこには、数人の旅人が釣瓶を使って水を汲み上げているところだった。

「アンタもいるかい？」

釣瓶から水を容器に移している初老の男性が声をかけてきた。彼女はコクリと頷きながら、両手を彼の前に差し出す。

男は不思議そうな表情を浮かべたが、やがて釣瓶を手に持って、少しずつミルワの手に水を注いでいく。彼女は手に口を近づけて、ゆっくりとそれを飲み干した。

「……」

別に、どこにでもある水だ。とりわけ美味いとも思わないが、不味くもない水だ。

「この井戸は、かなり深いところまで掘っているようでな。全然底が見えないんだ」

男は誰に言うともなく口を開いている。そんな彼の言葉には反応せず、ミルワはスタスタと手洗いに向かった。それが済むと、井戸の周囲にある屋台に向かう。

パンの中に野菜や肉を詰め、それを油で揚げたものを買って頬張る。食事を摂りながら、ぼんやりと井戸の周囲に視線を向ける。

魔法が使えるものは自ら水を出すことができるので、この結界村で井戸の需要はあまりないように思えた。だが、この井戸は屋台の店主たちが主に使用していると同時に、意外にも、結界村を利用する者たちも利用していた。しばらくすると、井戸の周りは人だかりができていた。

旅人であろうか、やたらと体格の良い男が釣瓶を使って井戸から水を汲み上げ、それを傍にある大きな盥に注ぎ入れている。彼は一心不乱にそれを繰り返す。みるみるうちに、盥には水が溜まっていく。

人々はそこに群がり、ある者はそこから水をすくって飲み、ある者は桶のようなものを持ってきて水を入れ、洗濯を始める者もいた。

ふと、そこにアルベの姿を見つけた。彼はノロノロと井戸に近づいてきたが、人の多さに臆しているのか、ウロウロとその場をうろつくのみだった。

ミルワは彼に向かって、フッと息を吐いた。正確無比のエアバズーカだ。それは彼の頬に命中したらしく、アルベは頬を抑えながらたたらを踏み、尻もちをついた。

キョロキョロと周囲を見廻す彼。やがて、ミルワと目が合った。彼女は人差し指を彼に向け、クイクイと動かしてここに来るように命

じる。アルベは無表情のまま立ち上がり、ノロノロとこちらに向かって歩いてきた。

「出来ておるのか？」

出し抜けにミルワから問いかけられたアルベは、キョトンとした表情を浮かべる。そんな彼に彼女は、容赦なく蹴りを入れた。

「相変わらず愚鈍な男じゃ。できておるのか？」

「……」

アルベは無言のまま頷いた。殺気が伝わってくるが、この男には何もできないことは、ミルワは百も承知だ。

「出せ」

差し出したミルワの右手をじっと睨みながら、アルベはボソボソと聞き取れるか聞き取れないかの声で口を開いた。

「持って、いない」

その言葉を言い終わらないうちに、ミルワはその場を離れていた。彼女の視線の先には、馬車を操る駅者の男の姿があった。

「昼前に出発する」

ミルワの言葉に、駅者の男は無言のまま笑みを浮かべながら頭を下げた。彼女はそのまま男の前を通り過ぎると、先ほどまで使っていた結界に戻っていった。

◆◆◆

「さて、出発じゃ」

ミルワは満面の笑みで口を開いた。思ったより時間がかかってしまったが、仕方がなかった。本来ならば、もう少し早めに出発するはずだったのだが、いざ、出発しようとすると、どこからともなく小柄な老人が現れて、やれ、中を片付けろだの、ゴミは指定の場所に捨てろ、などと細かい注意を与えたのだ。

ミルワは思わず顔をしかめた。何故、こんな薄汚い老人にそんなことを言われなければならないのか。だが、老人の後ろには、体格の良い髭面の男がこちらを眺めていた。彼女にはわかった。この男がただ者ではない、ということが。

戦って勝てぬ相手ではなかったが、ミルワ自身も相応の被害を受けることが十分に理解できた。それほどの相手だった。

ここで早々を起こすのは得策ではない。彼女は反論せず、指示されたことをすべて、アルベにやらせた。彼は唯々諾々と作業していた。

車窓に視線を向ければ、結界村では、色々な人々が行き交っているのが見えた。おそらく、これから皆、昼食にかかるのだろう。それを察してか、屋台の店主たちも慌ただしく動き回っている。

彼女は両手に持った、あらかじめ購入しておいた、昼食用のパンを持って馬車に乗り込んだ。それを座席の上に置くと、目の前に座るアルベに向かって右手を差し出した。

「出せ」

彼は無言のままカバンの中から小さなガラス瓶を差し出した。ミルワはそれを受け取ると、何やらブツブツと唱え始めた。

同時に馬車がゆっくりと動き出す。ミルワの手に乗っていたガラス瓶がふわりと浮き上がった。空中で瓶のふたが外れ、中の液体が出てきた。てっきりそれが飛び散るのではないかと思ったアルベは、思わず身をよじるが、液体は空中でとどまったままで、まるで、アメーバーのようにウネウネと蠢いていた。一方、空になった瓶は、クルクルと空中で回転している。

ミルワは窓に向かってクイッと顎をしゃくった。すると、ひとりでに窓が開き、同時に、それまで漂っていたガラス瓶と液体が勢いよく外に向かって飛び出していった。それは空高く飛び上がったかと思うと、大きな弧を描きながら、まるで吸い寄せられるようにして井戸の中に入っていった。

一瞬の出来事だった。井戸の周囲にいた人々も気づいていないらしい。騒動らしき混乱が起こっている様子は見えなかった。

「さあ、どうなるかの。楽しみじゃ。キャハハハハー」

ミルワはまるで気が狂れたように、腹を抱えながら笑い続けた。アルベは彼女には視線を向けず、ただ、無表情のまま俯き続けていた……。

第六百八十六話　井戸の毒

「……！？」

リノスは突然、胸騒ぎを覚えた。直感的に敵が動いたのだと察した。その瞬間、彼は転移結界を発動していた。行先は結界村だった。

「あっ、リノス様？」

転移するとすぐに気づかれてしまった。この男は、この結界村を管理している者だ。だが、彼とおしゃべりをしている時間はない。猛毒が撒かれたのだ。ここに張った結界、とりわけ、井戸から不穏な雰囲気が感じ取れる。

話しかけている男を右手で制して、井戸に視線を向ける。すでに、男が釣瓶を使って水を汲み上げようとしているところだった。待て、その水を飲むなと叫ぼうとしたそのとき、突然井戸の傍に二人の女性が現れた。

それは、ソレイユとエスカリーナだった。

一見すると二人は、一糸まとわぬ裸のように見えた。リノスは思わず絶句して、その場に立ち尽くしてしまった。井戸の周囲にいる者たちも、突然のことで、皆が呆然としている。そんな中、ソレイユはよく通る声で口を開いた。

「ごめんなさいね、しばらく、この井戸の水を飲むのを、控えてください」

ソレイユはそう言うと、人懐っこい笑顔を見せた。皆、一体何が起こったのかがわからず、ただただ茫然とその場に立ち尽くしている。

やっとのことで、リノスは我に帰った。大急ぎでソレイユたちの許に向かう。

「ソレイユ、どうして……？」

「精霊の気配を感じたのです。しかも、かなり上位の」

「ああ、そうか。俺も結界に不穏なものを感じたので来たんだ。それにしても早いな。いつからここに居たんだ？」

「たった今です」

「今？　どこから来たんだ？　……サイリュースの里から？　転移結界を使わずに、か？」

「はい。神龍様のお力を使えば、このくらいのことは十分にできます」

「そ……そうか。すごいな……」

「やはりこの井戸、毒に侵されています。……ものすごい臭気です」

二人の会話を遮るように、エスカリーナが声を上げる。彼女は頭を井戸の中に突っ込むようにして、中を覗き込んだ。よく見ると彼女は、薄い衣を身に纏っていた。背中が完全に透けて見えてしまっているが、尻の部分は布が厚くなっているためか、丸見えというわけ

ではなかったが、それでも、布は体にピタリと張り付いているために、尻の形が完全に把握できてしまっている。

目のやり場に困りながら、リノスはソレイユに視線を向ける。彼女もまた、同じ衣を纏っている。胸と腰は露わにはなっていないものの、体のラインは丸見えだ。そう言えば、サイリュースの里では皆、この衣を纏っていたことを思い出した。

そんな夫を見つめながら、ソレイユはニコニコと優しげな笑みを浮かべている。

「今まで経験したことのない臭気だわ」

そんなこと言いながら、エスカリーナは顔を上げた。長い青色の髪を整える姿は、実に艶めかしい姿だった。

「あの……リノス様……」

男性の声で呼びかけられて、リノスはハッと我に帰る。彼はオホンと咳払いをすると、その場に呆然と立ち尽くしている人々に向かって、大声で口を開いた。

「皆さん、大変申し訳ありませんが、しばらくの間、この井戸の使用を禁止します。毒物が投げ込まれた可能性があるのです。水は、今から俺が用意しますので、しばらくはこの水を使って下さい」

彼はそう言うと、目の前にあった盥に手をかざし、ウォーターの魔法を唱えて、勢いよく手から水を注いだ。

「エスカリーナ」

夫の様子を見ていたソレイユが、エスカリーナに目配せをする。彼女はコクリと頷くと、スタスタとその場から離れていった。

いった何をするつもりかと思っていると、彼女はピタリと歩みを止めて、首を左右に振りながら地面を眺め出した。

「ソレイユ、一体何を？」

「ここに泉を作ります」

「え？　泉？」

「エスカリーナは水の精霊を操ることができます。彼女の力を使えば、ここに泉を作ることは簡単にできます」

二人が会話を交わしているその間に、エスカリーナの周囲からじわじわと水が湧き上がってきていた。彼女は少しずつ沈んでいく。それと比例するように、水かさはどんどんと増えていった。

やがて、リノスたちの目の前には、大きな池ができていた。エスカリーナは首まで水に浸かった状態で、顔だけを自ら出している状態だった。

やがて彼女は、ゆっくりとこちらに向かってきた。徐々に彼女の体が露わになってく。濡れた髪が何とも艶めかしい。同時に、水に入っていたために、彼女が纏う衣がピタリと肌に張り付いていて、見えはしなくとも、彼女の胸の形などがわかる状態となっていた。

男たちは息を呑んでその光景を眺めている。そんなことはお構いな

しとばかりに、エスカリーナは淡々と口を開いた。

「地下から水を汲み上げました。ここは水が豊富です。しかも、いい水が出ます。これならば、飲み水として使用しても問題ないでしょう。これからは、この井戸ではなく、こちらの泉をお使いください」

エスカリーナは無表情のまま、ぐるりと周囲を見廻した。男たちはあんぐりと口を開けたまま、コクコクと頷く他はなかった。

「リノス様」

「あっ、お、ああ」

突然名前を呼ばれたリノスは、ビクリと体を動かしながら声を出した。エスカリーナはスッと体を折って、さらに言葉を続けた。

「恐れ入りますが、こちらの井戸の水を調べたく存じます。毒に侵されていることは間違いありませんが、それが何であるのか、確かめる必要があります。……あの、リノス様？」

エスカリーナは怪訝そうな表情を浮かべる。リノスがなぜか、そっぽを向いているからだ。

「どうなさいました、リノス様？」

ソレイユが彼の傍に寄り、小さな声で話しかける。リノスはソレイユの衣の裾を掴みながら、呟くように口を開いた。

「屈むと……全部見えちゃうんだよ」

その言葉に、ソレイユはクスクスと体を震わせながら笑い声を漏らした。

◆◆◆

それからしばらくして、井戸の周囲は物々しい雰囲気に包まれていた。

アガルタの都からやって来たと思しき兵士たちが井戸の周囲を取り囲み、ネズミ一匹通さない鉄壁の防御態勢を敷いていた。その中では、メイとチワンをはじめとした、アガルタ大学の者たちは水を採取していた。

メイは採取した水に鼻を近づけて、その臭いを確かめていたが、やがてそれを口に含むとしばらく目を閉じていたが、やがてそれを別の瓶に吐き出した。そして、何度もうがいをして口の中を清めると、驚いた表情を浮かべながら口を開いた。

「あくまで私の感覚ですが、全くの無味・無臭です。本当に毒に侵されているのかすら、疑いたくなります。しかし、エスカリーナさんは、確かに臭気がすると言っておいでなのですね？」

メイの視線の先には、エスカリーナの姿があった。彼女は厳しい表情を浮かべている。

「臭いもさることながら、この毒は、かつて経験したことのない種類のものです。私が契約する精霊ですらも、その毒を特定することができません。こんなことは初めてです」

「そうですか。やはり、新種の毒ですね。わかりました。すぐに大学に持ち帰って、分析しましょう」

そう言うと、メイは懐から石を取り出し、小さな声で詠唱を始めた。それが合図であったかのように、アガルタ大学の面々が、彼女の傍に集まった。

しばらくすると、一瞬でメイたちの姿が消えた。それを確認したエスカリーナとソレイユもまた、雲霞のようにその姿を消したのだった。

一方、アガルタの都では、正門の前に兵士たちが整列していた。全員が剣を持ち、鎧を装備して臨戦態勢を整えていた。彼らの視線の先には、マトカルの姿があった……。

第六百八十七話　進路は北へ

「行くぞ」

マトカルは兵士たちに告げると、傍に控えていた愛馬に跨った。兵士たちは無言のまま、統率の取れた動きで進みだした。

一隊は、正門を出て北に向かった。目指すは、ルノアの森から流れ出ている川で、そこはアガルタの都に流れ込んでいた。

とある地点までやって来ると、彼女は行軍を止め、クルリと踵を返して、後ろに控えている兵士たちに向き直った。

「言うまでもないことだが、決して油断をするな。攻撃を受けた場合は、装備している盾で防御せよ。誰かが倒れた場合は、必ず後方に移動させ、空いている場所は、その周囲の者が埋めるのだ」

兵士たちの間に緊張が走る。そんな彼らを鼓舞するかのように、マトカルの声が草原に響き渡った。

「訓練を思い出すのだ！　お前たちならば難しくないはずだ。期待しているぞ！　立哨！」

号令一下、兵士たちが素早く動き出した。

◆　◆　◆

同じ頃、アガルタに向かう馬車の中では、ミルワの笑い声が響き渡

っていた。

「キャハハハハー。今頃、どのくらいの人数が死んでいるかのう。おそらく、あそこにおった者たちは、あの井戸の水を飲むはずじゃ。あの水でスープを作っておるかもしれぬのう。さすれば、どのくらいの者が死ぬのか……。ウフフ。その景色が見られないのが、実に残念じゃ」

目の前で笑い転げるミルワに対して、アルベは無言を貫いていた。彼は足元に視線を向けたまま、微動だにしない。そんな彼にはお構いなしとばかりに、ミルワはまるで、熱に浮かされているかのように、一人で喋り続けた。

「いや、意外と人は死んでおらぬかもしれぬのう。あの毒は、効き目が早い。毒を呷って苦しむ姿を見て、皆、動揺して水を飲まぬかもしれぬ。多く見積もって、二十人か三十人が死んだというところかのう。いや、それでも、あの結界村は大騒ぎじゃろう。驚くじゃろうのう。泣き叫ぶヤツもおるかもしれぬ。ハッハッハ。ああ～見てみたかったのう。想像するだけでも楽しいのう」

ミルワは、体を揺すりながら窓の外を眺めている。顔が紅潮している。かなり興奮しているのは、誰が見ても明らかだった。

ふと、彼女は目の前に座るアルベに視線を向けた。その途端、さも残念そうな面持ちで、彼女はため息をついた。

「これがお前でなかったならば、どんなによかったことじゃろうな。ああ……逞しい、筋骨隆々の男に抱かれたいものじゃ。こういうときは、獣のように襲いかかられるのがよいな。妾を力でねじ伏せて、荒々しく蹂躙する……。クックック……ワクワクするわぇ」

話を聞きながらアルベはゆっくりと顔を上げ、窓の外を見つめた。車窓からは草原が広がっていて、折に触れて徒歩で都に向かう人々の姿が見えた。

そのとき、不意にミルワの笑い声が止んだ。

「待て！　馬車を停めろ！　停めろと申しておるに！」

突然ミルワが叫びながら、馬車の壁を拳で激しく叩き出した。ややあって馬車の動きが止まり、駁者台から男が駆けつけてきた。

「どうなさいました、なにかございい……うわっ」

駁者を突き飛ばすようにしてミルワは外に飛び出した。アルベもすぐその後を追う。彼女は草原の彼方を見据えたまま、微動だにしない。眉間に皺が寄っていて、表情が厳しさを増している。

「何じゃ、兵士？　多い？」

アルベからはそのような光景は見えないが、確かに、ミルワは一点を見据えたまま動かない。彼女は誰に言うともなく、ブツブツと独り言を呟いている。

「あの結界村の騒動が、もう都に伝わったのか？　……ソレイユか？　まさか、ヤツは妾の行動を把握しているのか？　いや、そんなことはない。妾の動きをヤツには捉えられぬはずじゃ。ということは……アガルタ王か？」

草原にさわやかな風が吹き抜けているが、相変わらずミルワは厳し

い表情を崩すことなく、あらぬ方向に視線を泳がせている。

「おい、行先を変える！」

振り返りながらミルワは馭者に向かって大きな声を出した。男は驚いた表情を浮かべたが、必死に冷静さを取り繕いながら口を開く。

「か……畏まりました。どちらへ参りましょうか」

「北じゃ」

「北？」

「アガルタの都の北に、ルノアの森と呼ばれる場所がある」

「ルノアの森？　あそこは、魔物が数多く生息しておりますので……」

「わかっておる！　何もそこまで行けとは言っておらん！　その手前でよいのじゃ。場所は妾が指定する。そこに行ってくれればよい」

ミルワは懐から金貨を数枚取り出すと、それを馭者に投げつけるようにして渡した。男は慌ててそれを拾うと、ピョコンと一礼して馬車に戻っていった。

「おい」

男の後姿を見送りながら、ミルワはドスの効いた声で呟く。

「お前、毒はあるのか」

その問いかけにアルベは何も答えない。

「グズめが。今すぐ作れ」

ミルワはクイッと顎をしゃくると、スタスタと馬車に向かって歩き出した。アルベは無表情のまま彼女の後ろを付いて行った。

馬車の中は、先ほどまでとは打って変わって険悪な空気が漂っていた。アルベはただ、命じられるままにカバンから薬品を取り出して、毒を作り始めた。

ミルワはその光景を見ながら、改めて、彼の手際の良さに少し感心していた。

毒を作る、と言っても、ただ薬品を混ぜ合わせているだけに見えるが、細いガラスに薬品を注ぎ込み、それをガラス瓶に移す作業は一切の無駄がなく、この男が相当な腕前を持っていることを示していた。

用いられる分量は、薬品によって違うらしく、あるときには多めに、あるときには微量の薬品を用いながら、アルベは黙々と毒薬を作っている。これだけの腕があるのであれば、使い方によっては、多くの人を救うことができる男になるのではと思ってみたが、この男の気遣いのなさや、折に触れてみせる行儀の悪さは、その考えを説得しなかった。

やがて、瓶のふたを閉め、まるで儀式か何かであるかのように彼はそれをゆっくりと弧を描くようにして数回廻した。瓶の大きさを見ると、どうやら今回は多めの毒を作ったようだ。

「……できたのか？」

ミルワの問いに、アルベはコクリと頷く。彼女は厳しい表情を浮かべたまま、無言で窓の外に視線を移した。

程なくして、車窓から大きな城壁が見えてきた。どうやらあれがアガルタの都のようだ。馬車はそれを右手に見ながら進んでいく。しばらくすると、その城壁が少しずつ遠くなっていった。そのとき、車窓に兵士の姿が見えた。

「何じゃ、どうしたのじゃ」

ミルワが声を上げる。よく見ると、兵士たちは等間隔に並んで立っていた。剣と盾を装備して、臨戦態勢を敷いていた。ミルワは思わず馬車を停める。

外に出てみると、まるで人形のように兵士たちが川に沿って配置されているのが見えた。そして、川向うには兵士たちが固まっている一隊が見えた。それは騎馬隊で、見るからに無骨そうな兵士たちが整列して控えていた。その中に一人小柄ではあるが、白馬に跨る兵士がいて、まるで機械人形のように、ゆっくりと首を左右に振っているのが見えた。

ミルワは悟った。これは、毒を投げ込まれないための警備であるということを。完全にアガルタに警戒されているのだ。

ミルワは一瞬、歯を食いしばるような表情を見せたが、やがて下卑た笑みを浮かべた。そして、ヒヒヒと気色の悪い笑い声を漏らすと、アルベに向かって毒を出せと命じた。彼は大きな瓶から小さなグラ

スに液体を移し、それをミルワに渡した。

彼女は何やら詠唱を始めた。すると、掌に置かれていたグラスがフワリと浮き上がった。それはゆっくりと上昇していたが、やがて、キラリと光ると、その姿を消した。

「ミルワ」

突然名前を呼ばれた。声のした方向に視線を向けたそのとき、ミルワは眼を見開いて驚いた……。

第六百八十八話　逃亡

目の前には、見目麗しい美女が立っていた。一瞬でそれはソレイユだとわかったが、ミルワの知っている彼女ではなかった。

纏うオーラが、尋常ではなかったのだ。

ミルワが知っているソレイユは、少し控えめな女性だった。集団の中ではいつも、ミルワら活発な者たちの後ろから付いて来るような、そんな女性だった。だが今、目の前に立つ彼女は、しゃんと背筋を伸ばし、自信に溢れた表情を浮かべている。これは、本当にソレイユだろうか……？

「久しぶりね」

彼女の戸惑いをよそに、ソレイユは笑みを浮かべながら近づいてきた。無意識のうちに、足が震えてくる。恐怖心などは全くない。いったいこれはどうしたことか……。

ふと見ると、ソレイユの後ろに、もう一人女性がいるのが見えた。エスカリーナだ。

この二人は、反目していたはずだった。一体なぜ、この二人がここにいるのか。ミルワはさらに混乱した。

そんな彼女の心の内を見透かしたかのように、ソレイユは静かに口を開いた。

「ミルワ……あなたは、やってはならぬことをやったわね。詳しく話を聞かせてもらうわ」

「チッ」

瞬時にミルワの姿が消えた。皆が呆気にとられる中、ソレイユはあらぬ方向に向けて掌を向けて、ゆっくりと手を左右に振る。

「ガハッ！」

叫び声と共に、ミルワの姿が現れた。彼女はまるで吹っ飛んだかのように、その場に倒れ伏した。だが、すぐに起き上がる。その双眸には、深い憎しみが宿っていた。

直後にミルワの姿が再び消え失せた。しかし、ソレイユはゆっくりと首を左右に動かしていたが、やがて、掌を差し出した。その瞬間、まるで衝撃波を食らったかのような姿勢でミルワが現れた。

「ガッ、ハァァァ……」

ミルワは腹を抑えて蹲る。そんな彼女に近づきながらソレイユは口を開く。

「無駄よ。私からは逃げられないわ。あなたのことです。私との力の差が歴然としているのはわかるでしょう？　大人しく、私と共にサイリュースの里に来るのです。族長様がお待ちです」

「里には帰らぬ！　帰ったところで、族長は妾の命を奪うか、さもなくば、死ぬまでどこかに閉じ込めるじゃろう！　そんなのはまっぴら御免じゃ！」

ミルワは突然大空に舞い上がった。どうやら、空を飛んで逃げようとしているようだ。

「無駄だと言っているでしょ」

ソレイユはミルワに向かって、スッと手で何かを払う仕草を見せた。その途端、ミルワは浮力を失い、真っ逆さまに地面に落下した。地面に激突するかと思いきや、彼女はすんでのところで、ふわりと浮き上がり、そのまま地面に着地した。

「ソレイユ……そなた、一体、何の精霊と契約しておるのじゃ！妾のポープクィーンを捉えるなぞ、以前のそなたならば、できなかったはずじゃ！」

「ポープクィーン？　そんな上位の精霊と契約していたのね？　道理で気配が捕らえられないはずだわ。でも、あなたらしくもないミスをしたわね。サイリュースの里の近くで、精霊の力を使うなんてね」

「妾のことなど、どうでもよい！　ソレイユ、そなたは一体……」

「私は、神龍様と契約しているのです」

「な……神龍様！？」

ソレイユの体を、金色の細い糸が何本も絡みついているように見えた。ミルワは怯えたような表情を浮かべて数歩後ずさりしたが、やがて、がっくりと膝をついて項垂れた。

「さ、一緒に里に行くのです」

「ソレイユ殿」

いつしか、マトカルが軍勢を率いてやって来ていた。傍にいたアルベは、兵士に引き立てられようとしていた。

「マト、ご苦労様でした。この者は私が里に連れて帰ります」

「わかった。では、あの男は、こちらで預かることにする」

「……油断したな」

二人の会話を邪魔するように、低い小さな呟きが聞こえた。それは、ミルワの声だった。

「ソレイユ、詠唱！」

エスカリーナが叫んだ。その瞬間、ミルワの周囲が桃色に染まった。

「この屈辱は、忘れぬ！」

ミルワは目をカッと見開き、周囲の者を威圧する。ソレイユは詠唱を開始していたが、そんな彼女をあざ笑うかのように、ミルワの姿は消え失せた。

「……ぎゃぁ！」

遠くの方で叫び声が聞こえた。行ってみると、ミルワが口から泡を吹いて仰向けに倒れていた。

「いや、間に合ったな」

ミルワの傍には、リノスの姿があった。そこにいた全員が、驚きの表情を浮かべながら、彼に向かって一礼した。

「北門近くで異変を感じたので来てみたら、何だか、偉いことになっていたな」

「リノス様……ありがとうございます。危うく取り逃がすところでした」

ソレイユがホッとした表情を浮かべながら口を開く。そんな彼女を、リノスは柔和な笑みを浮かべて迎える。

「咄嗟に結界を張ったが、意外と上手く張れた。まだまだ腕は落ちていないな」

リノスはホッとした表情を浮かべる。

「ところでソレイユ。このサイリュースはこれからどうするんだ？」

「里に連れて帰ります」

「やっぱり、命を奪うのか？」

心配そうな表情を浮かべるリノスに対して、ソレイユはニコリと微笑む。

「いいえ。命を取るつもりはありません。ただ、ミルワの精霊との

契約を解除します」

「え？　そんなことができるのか？」

「はい。私の母……族長であれば、それが可能です」

「そうか。で、その後はどうするんだ？」

「その後のことは、このミルワに一任する形を取ります。里に残るのも、里を出るのも、彼女の自由です」

「……何か、あっさりとしているな」

「いいえ。サイリュースは精霊と契約しなければ死んでしまいます。ミルワの年齢ともなれば、精霊なしでは、ひと月と持ちません。彼女がこれから生きていくためには、何としても精霊と契約しなくてはいけません。そのためには、一刻も早く邪な心を改めて、精霊と契約しなくてはなりません」

「なるほど。必死で改心しなければ死んでしまうとは……うまいやり方、と言っていいのかな？」

リノスの言葉にソレイユは、ゆっくりと頭を下げる。そのとき、不気味な笑い声が辺りを包んだ。

「ヒャッヒャッヒャ……」

声を出していたのは、ミルワだった。彼女は起き上がろうと四つん這いの体勢になっていた。だが、体に受けたダメージが大きいためか、起き上がれないでいた。体を支える両手が、ブルブルと震えて

いる。だが、彼女は相変わらず下卑た笑みを浮かべながら、口を開く。

「おい、お前たち、よいのか？　こんなところで油を売っていて？」

ミルワは周囲を見廻すと、さも楽しそうだと言わんばかりの表情を浮かべながら、さらに言葉を続けた。

「毒は川に投げ込まれたのだぞ？　嘘だと思うならば、都に戻って見てみるがいい。今頃、バタバタと死んでおる頃じゃろうよ。このままここに居れば、さらに死者は増えよう。都に戻った方が、よいのではないか？　ヒヒヒ、どんな様子になっているのか、楽しみじゃ。お前らがどんな策を弄そうと、妾の勝ちは揺るがん。妾は勝ったのじゃ。勝ったのじゃ。ハアッハッハッハッハー！」

「あー喜んでいる最中に悪いが、毒薬って言うのは、これか？」

リノスの頓狂な声が響き渡る。見ると、彼の両手の上には、まるでアメーバーのようにグニャグニャと形を変えながら漂う液体と、小さなガラス瓶が浮かんでいた。

「なっ！？　それは……？　確かに妾は、その毒薬を川に……」

「入れられないように、川の上に俺が結界を張っておいたんだ」

「なっ……えっ？　そっ、それは……」

「残念だったな。お前は結界村で毒を撒いた瞬間から、俺に、ソレイユにその存在を把握されていた。ちなみに言っておくが、お前が結界村で撒いた毒だが、死んだ人間は一人もいない。それどころか、

美しい泉ができて、今はその水を利用している」

ミルワの顔色が、さっと蒼くなった……。

第六百八十九話　生き方の問題

リノスは、蹲るミルワを横目で見ながら、アルベの許に向かう。彼は兵士たちに囲まれる形で拘束されていた。

ただじっと俯きながら固まっていている。まるで、こうすることで、己に降りかかる困難が去るのを待っているかのようだ。リノスは静かに腰を下ろし、彼に話しかける。

「アガルタのリノスだ。ここ最近、あちこちで発生した毒の事件……。君かな？」

リノスの問いかけにアルベは答えない。そこにマトカルがやって来た。

「リノス様」

「おおマト。ご苦労だった。お陰で、毒の被害を食い止めることができた」

「いや、これもシディー殿のお蔭だろう」

「そうだな。まさに、シディーの描いた絵の通りになったな」

二人は顔を見合わせながら頷き合う。その二人の様子を、アルベは少しだけ顔を上げて、まるで、盗み見をするかのようにして眺めている。そんな彼の視線に気づいたリノスは、落ち着いた声で話しかける。

「君には色々と聞かねばならないことがある」

「わっ、私を……殺すのか？」

「そこまでは考えていないが、罪は償うべきだと俺は思う。君の身柄を引き渡すように要請されたときは、検討するつもりだ」

アルベはまるであきらめきったのか、目をギュッと閉じて、大きく息を吐き出しながら、天を仰いだ。

「きゃぁぁぁぁっ！」

突然女性の金切り声が響き渡った。それと同時に、巨大な魔力を感じた。視線を向けると、そこには、体を真っ赤に紅潮させたミルワの姿があった。

「やめるのですミルワ！　そんなことをしたら、体が……」

「ミルワ！」

ソレイユとエスカリーナが叫んでいるが、ミルワは聞く耳を持たなかった。

「妾は自由に生きるのじゃ！　精霊との契約を切られるなどまっぴらじゃ！　妾は逃げる。何としても逃げきるのじゃ！」

何か、彼女の空気が圧縮されているような感覚を覚える。マトカルが指示したのだろうか、兵士たちがばらばらと移動して、ミルワを包囲するように動いていた。

「ゴォアァァァァァー」

「はっ！」

リノスは、まるで柏手を打つかのように、目の前で両手を合わせた。その瞬間、ミルワの周囲が薄い青色に染まった。

「アァァァ……ア……ア……」

ミルワは白目を剥きながら、ガクガクと体を震わせた。そして、耐え切れないといった様子で、再びその場に倒れ伏した。赤く染まっていた体が、徐々に元の色に戻っていく。

「リノス様、一体何を……」

マトカルが目を丸くしながら口を開いている。そんな彼女に、リノスは落ち着いた声で答える。

「いや、ただ、眠らせただけだ」

「眠らせた？」

「ああ。胸を大きくしたり小さくしたりしていただろう？　相当大きく呼吸していたから、眠気を催す効果が効くんじゃないかと思ったのだが、案の定だったようだ」

リノスはホッとした表情を浮かべる。ミルワは眠気を必死で耐えているのか、体を震わせながら、何か、言葉にならない言葉を呟いている。

「このサイリュースはしばらくは動けないだろう。ソレイユ」

「はい」

ソレイユはミルワに近づくと、両手を腹に当てて、何か詠唱を唱えだした。

「あれ？　里に連れて行くんじゃなかったのか？」

リノスの問いかけに、ソレイユは全く反応せずに、ひたすら詠唱を続けている。無視されたことがショックだったのか、彼はマトカルの傍に寄り、彼女の裾を握って何やら引っ張っている。マトカルは無表情のまま、ソレイユの様子を見守っている。

ソレイユは、眉間に皺を寄せながら詠唱を続けている。彼女の周囲が金色の光に包まれていく。

「出でよ！」

威厳のある声が響き渡った。ソレイユを包んでいた光がフッと消え、これまでのことが嘘であったかのように、静寂が訪れていた。

彼女はふぅーっと大きな息を吐くと、ゆっくりと片膝をついた。

「ソレイユ、大丈夫か？」

彼女の許に駆け寄ろうとしたそのとき、ソレイユの体の陰から、小さな子供が顔を出した。

「おーう、久しぶりらー」

「し……神龍様！？」

白い衣装を纏った神龍様が、チョコチョコと動き回っている。リノスは驚きの表情のまま、彼に近づく。

「お久しぶりです」

「おーう。久しぶりなのじゃー」

「ソレイユ、どうして神龍様を？」

「はい、ミルワの能力を奪っていただくために、お呼びしました」

「え？　サイリュースの里に連れて行くんじゃなかったのか？」

「はい。そうしたかったのですが、ミルワのことです。里に連れて行くまでの間に、何をするかわかりませんから、ここで精霊と契約を切ろうと考えたのです」

「大丈夫なのか？　族長様には……」

「はい。母からは非常の場合は、私の判断に任せると言っていただいています」

ソレイユはスッとエスカリーナに視線を向ける。彼女はゆっくりと頷く。

「さて、神龍様。誠に恐れ多いのですが……」

「おーう。契約を切るのらなー？」

「左様でございます。どうぞ、お願いいたします」

神龍様はパタパタとミルワの許に走っていくと、その様子を確認するかのように、ちょこまかと周囲を動いている。まるで、小さな子供が甘えているようで、何とも癒される光景となっていた。

彼は振り向くと、再びソレイユの許にパタパタと走って帰ってきた。

「結界が張られているのらー。少し邪魔なのらー」

「それは……失礼しました」

ソレイユはスッとリノスに視線を向ける。

「あ……ああ。失礼しました。今、解除します」

「別にできなくはないのらが、そなたの結界はかなり強力なのれ、ヘタをすると、あの者が耐え切れぬかもしれぬからなー」

リノスはニコリと笑みを浮かべると、ミルワの結界を解除した。

「はあ……はあ……はあ……」

ミルワは肩で息をしながら、必死で体を動かそうとしている。だが、這うのがやっとの状態だ。それでも彼女はその場から離れようと、体を動かしている。

そんな彼女の許に、神龍様は再びパタパタと足を鳴らしながら走っていく。ミルワも、彼の持つ能力がわかるのか、その表情は恐怖の色がありありと浮かんでいた。

「ああっ……ああっ……ああっ……」

彼女は尻をペタッと地面に付け、まるで哀願するかのように、神龍様に向かって手を振る。彼はしばらくの間ミルワをじっと見つめていたが、やがて、彼女の頭を掌でポンと叩いた。

「終わったのらー」

彼は再びパタパタと足を鳴らしながらリノスたちの許に帰ってきた。正直言って拍子抜けする程にシンプルなものだった。神龍様は相変わらず機嫌のよさそうな表情を浮かべている。

「ありがとうございました。また、お礼をさせていただきます」

「おーう」

「神龍様、ありがとうございました。また、娘たちと遊んでやってください」

「おーう。いつでもいいのらー」

神龍様はそう言うと、まるで空気のようにその場から消えてしまった。リノスはソレイユと顔を見合わせながら頷く。

「ああっ……妾の……精霊が……ポープクィーンが……」

まるで消えそうな声で、ミルワが呟いている。彼女は相変わらず肩で息をしながら、天を仰ぎながら呟いている。

「彼女は、どうなる？」

「今はただの女性になっています。身柄は……こちらで放置しておいてよいと思います」

ソレイユは事も無げに言ってのける。

「このままですと、体力が低下するのに合わせて、抵抗力もおちてきますので、病気になりやすく、治りにくくなります。生きたいのであれば、一刻も早く他の精霊と契約せねばなりません。それは難しいでしょうから、少しでも命を長らえたいのであれば、サイリュースの里に戻るべきですし、逆に、敢えて死を選ぶのも彼女の生き方です」

リノスはその言葉を聞いて、小さなため息をついた。そのとき、アルベがゆっくりとミルワの許に向かっているのが見えた……。

第六百九十話　誰のせいでもない

男はまるで、亡霊のようだった。喜怒哀楽の感情を感じさせず、ただ、呆然とミルワに向かって歩みを進めていた。

リノスはその光景を不気味だと思った。何の感情も感じさせない人間は珍しい。彼は一抹の不安を覚えて、アルベの許に近づいた。

「ああ……ああ……」

ミルワは相変わらず、ゆっくりと首を左右に振りながら喘いでいる。サイリュースにとって命ともいうべき精霊との契約を切られたことが、余程受け入れられないらしい。これから直面する、命の危険性とも戦わねばならない。現実を受け入れられない、受け入れたくないという感情は、わからないではなかった。

アルベはミルワの近くまで来ると、足を止めた。彼は無表情のまま、その場に立ち尽くす。一方のミルワは、彼には反応せず、ただ、喘ぎ続けている。

アルベはゆっくりと腰のベルトに手をやった。その光景を見ながらリノスは、彼が何をしようとしているのかがわからず、不思議そうな表情を浮かべた。

彼はベルトを外すと、それを振り上げて、力任せに振り下ろした。破裂音に似た音と、女性の断末魔の絶叫が同時だった。

アルベはまるで熱に浮かされたように、ベルトでミルワの体を打ち

続けた。一心不乱に打ち続けたためか、ベルトは彼女の体、顔、足、腕といった、様々な場所に当たった。その都度、皮が皮膚に当たる何とも言えぬ音と、ミルワの絶叫が響き渡った。近くまで来ていたリノスは、思わず彼の手を取ってやめさせる。

「はあ……はあ……はあ……」

アルベは肩で息をしながら、ミルワを睨みつけている。彼女の服は破れ、そこから見える体は紫色に腫れ上がり、所々から出血している有様だった。必死で身を守ろうと、体を丸くしながら耐えている姿が、痛々しかった。

彼は尚もミルワを打とうとしていた。だが、リノスがガッチリ彼の腕を抑えていて、動かすことができずにいる。その瞳は赤黒く変色していて、深い憎しみがありありと浮き出ていた。

「もうやめろ」

リノスが静かに口を開く。アルベはゆっくりとリノスに視線を向ける。顔が歪み切っている。

「リノス様……」

ソレイユやマトカルらが傍に来た。彼女たちもあまりの光景に、言葉を失っているようだ。そのとき、ミルワがか細い声で呟いた。

「わ……妾にこんなことして……タダで済むと……」

アルベは無言のままミルワに視線を向けると、その頭を思いっきり蹴り上げた。ミルワは声にならない声を漏らし、両手で頭を抑えな

がらゴロゴロと転がっている。

「いい加減にしないか」

リノスは諭すように言いながら、彼を掴んでいる手に少しだけ力を籠める。アルベの顔がさらに醜く歪む。

「痛い……痛い……痛いいいいい」

まるで泣きそうな声でミルワは頭を抑えながら転がっている。やがて彼女は両手で頭を抑えたままで、懇願するような声を上げた。

「痛い、痛いのじゃ……。誰か、回復魔法をかけてくれ。早く、回復魔法をかけてくれ……」

彼女の言葉に反応する者はない。ミルワは顔を上げて、リノスに視線を向ける。

「そなた、妾に回復魔法をかけるのじゃ。回復魔法くらいは扱えるはずじゃ。早く妾に回復魔法をかけるのじゃ！」

その言葉に、リノスは無表情のまま、ただじっと彼女を見つめる。じれったくなったのか、彼女は視線をソレイユに向けて、さらに言葉を続ける。

「ソレイユ！　お前でも構わん！　妾に回復魔法を！　早く！　痛い、痛いのじゃ！」

だが、ソレイユもそんな彼女に何の反応も示さない。ミルワはポロポロと涙をこぼしながら、リノスたちを詰った。

「妾が……妾がこんなに苦しんでおるのに……皆で妾を嬲るとは……酷い、酷いではないか……」

リノスは呆気にとられた表情を浮かべる。何を言っているんだ、どの口がそれを言うのだと心の中で呟いていた。そのとき、ソレイユが口を開いた。

「ミルワ……あなたの身に起こっている出来事は、すべて、あなたが起こしたことなのよ」

「聞いた風な口を利くな！」

突然ミルワの絶叫が響き渡った。彼女は必死の面持ちで立ち上がると、憎しみを込めた表情を浮かべながらソレイユを睨みつけた。

「元々はお前が悪いのじゃ！　お前がいなければこんなことは起こらなかったのじゃ！　お前さえこの世に居なければこんなことは起こらなかったのじゃ！　そうじゃ！　お前が生まれてこなければ、多くの人は死なずに済んだのじゃ！　すべてはソレイユ、お前が悪いのじゃ！」

「ミルワ！」

怒気を込めた声が聞こえる。エスカリーナだ。彼女は目に涙を溜めながら口を開く。

「あなた、何を言っているのかわかっているの？　同じサイリュースじゃない！」

「そんなものは知らん！　エスカリーナ、お前も、惚れた男の命をこのソレイユに奪われているではないか！　どうしてヤツと一緒にいるのじゃ！　ソレイユが憎くはないのか！」

「ミルワ……」

ソレイユが落ち着いた声で口を開く。見ると、彼女の体がほのかに金色に光っている。瞬時にリノスは、ソレイユがこのサイリュースを殺そうとしていると感じた。だが、そこには憎しみといった負の感情は感じられない。むしろ、悲しさがそこにあった。彼女はそれを押し殺しながらミルワと対峙しているように見えた。

「あなたは自分のことしか考えていないのね……」

「何じゃと？」

「最初の……森の精霊との契約が切られたのは、私のせいではないわ。あなたが、精霊への歌を怠ったからだわ。そうでなければ、精霊は契約を切ることはないわ。それを知らないあなたではないはずよ」

ミルワは何かを言おうとしたが、ソレイユはさらに言葉を続けてその声を遮る。

「もし、あなたが本当に努力して、精霊との関係を密にしていたら、ポープクィーンも契約を切らなかったはずだわ。神龍様が契約解除を実行しようとしたとき、精霊は全く異議を唱えなかった。本当に精霊に気にいられていたならば、精霊側も契約解除を拒否したはずよ」

「うるさい！」

ミルワは絶叫した。だが、その声で体力が尽きてしまったのか、ヘナヘナとその場に崩れ落ちた。

「みんな……みんな、お前が悪いのじゃ……。みんな……」

そう言ってミルワは泣きじゃくった。ソレイユはブツブツと詠唱を始めた。すると、彼女が纏っていた金色の光がミルワの体に降り注ぎ、やがて、彼女の体を包んだ。

「ソレイユ、何をしたんだ？」

「はい、ミルワの行動を逐一監視できるようにしました」

「え？　そんなことが……」

「はい。神龍様のお力を使えば可能です。もっともこれは、精霊と契約できる者に限られます。サイリュース以外の者にもできないことはありませんが、距離が離れすぎてしまいますと、把握することが難しくなります。ミルワはしばらく、私が監視いたします。おそらく何もできはしませんが、何かコトを起こそうとするとすぐに伝わりますので、心配はいらないかと思います」

そう言ってソレイユはニッコリと笑った。彼女は再びミルワに視線を向けると、毅然とした口調で話しかけた。

「さあミルワ、これからのことはあなたに任せます。里に帰るもよし、自分一人の力で生きていくもよし。あなたの決断を私は尊重するし、これからのあなたの行動はすべて、見させてもらうわ」

その言葉に、ミルワは大声を上げて泣き出した。

「放してくれ……」

ふと、アルベが口を開いた。彼はミルワに視線を向けながら、小さな声で呟いた。だが、リノスはゆっくりと首を振った。

「それはできないな。君には色々と聞きたいことがある。このまま都まで連行させてもらう」

「放せと言っているだろうがぁ！」

アルベは大声を上げると、懐から黒い丸薬を取り出して口の中に放り込んだ……。

第六百九十話　誰のせいでもない（後書き）

Ｃｏｍｉｃブースト様にて、最新話第２８話公開中です。２０２１／１１／３０　１２：００まで無料で読めますので、是非、チェック下さい！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６

第六百九十一話　うまくはいかない

「放せ……」

腹の底から声を出していた。いや、声が変わっていた。男の呼吸が荒くなっている。歯を食いしばっているためか、歯がむき出しになっている。

「放せ」

男はリノスの手を振り払った。これにはリノス本人も驚きを隠さなかった。まさか、自分の手が振りほどかれるとは思わなかったからだ。

男はフラフラと数歩歩いた。肩ががっくりと落ち、今にも倒れそうだ。だが、その瞬間、男の体が何倍にも膨れた。体、足、腕……小柄だった体がみるみる大きくなり、二メートルを超える身長になっていた。人相は、憎しみを讃えた醜悪なものに変わっている。

「グガッ……グガッ……」

男は数度肩で息をすると、ゆっくりと屈んだ。骨がきしんでいるのか、体を動かすたびにバキバキと不気味な音がする。

突然、男が飛び上がった。一瞬のことだった。リノス以外の者は、男の姿が消えたと思った程だ。

まるで空を飛んでいるかのように、男は空に浮かんでいた。そして、

フワリと川の対岸に降り立った。男はチラリとリノスたちを見たが、すぐに態勢を整えると、ドスドスと音を鳴らしながら、北門の方向に向かって行った。

「都を襲う気だ！　全員北門に向かえ！」

マトカルの声が響き渡る。その声に我に帰った兵士たちが、馬首を北門に向ける。

「……転移結界」

リノスが呟くと、そこにいた全員の姿が消えた。

アルベは走りながら、どんどん近づいて来るアガルタの都を見て、拳を固く握りしめていた。思った以上に力がある。あれほどの跳躍力があったとは、嬉しい誤算だった。恐らくこの腕にも凄まじい力が宿っているだろう……。

心が躍っていた……。アガルタの都に乱入して、暴れるだけ暴れる。恐らく兵士たちに制圧されるだろうが、それまでの間に、アガルタの都をメチャメチャにしてやるのだ。男だろうと女だろうと子供だろうと関係ない。目の前の者をとにかく殴って壊す。兵士らが現れたら、この跳躍力を使って逃げる。そして、再び破壊を行う……。これまでのうっ憤をここですべて晴らすのだ……。そんなことを考えていると、門が見えてきた。そこには、数十名の兵士が見えた。

アルベは方向を変えて、都を守る城壁にむかって走り始めた。兵士たちが慌ててこちらに向かってきているが、関係ない。あの壁を超えて、都に乱入するのだ。

アルベは思いっきり地面を蹴った。フワリと体が浮き上がり、どんどん上昇していく。あっという間に城壁の高さを超え、眼下にアガルタの都が見える。何ともよい心持だ。

すぐに体は下降していく。アルベは全身に力を込めて、着地した瞬間から動くことができるように準備する。

パァン！

何かが破裂したような音が聞こえた。気が付けば、アルベの眼の前には雲一つない空が広がっていた。どうやら、地面に転がされているようだ。

一体どうしたことだ……。体が大きくなったために、起き上がるのが大変だ。まだ、この体に慣れていないためか、必死で体を動かして起き上がる。

「残念だったな」

不意に男の声が聞こえた。顔を上げると、目の前には、優し気な顔立ちをした男が立っていた。

……アガルタ王、リノス。

アルベは心の中で呟く。予想していたよりも、随分庶民的な格好をしている。イメージでは、美々しい衣装に身を包み、威圧的な口調で話をしているというものだったが、その男は、どこにでもいる普通の男と変わりのない風貌をしていた。

彼はアルベの目の前まで来ると、ゆっくりと頷きながら口を開いた。

「何か、薬のようなものを飲んでいたな？　その薬は、君が作ったものか？　……毒のこととといい、この体を大きくする薬といい、君には聞きたいことが山ほどある。すまないが、拘束させてもらうぞ？」

「ガアッ！」

アルベは立ち上がり、拳を握って全力でリノスに叩きつけた。勝てそうな気がしていた。こんな優男はひとひねりだと思っていた。だが、その優男はヒラリとアルベの拳を躱した。彼は二度、三度と拳を繰り出す。だが、リノスはまるで霞のようにゆらゆらと動いてその拳を躱した。

「無駄だ」

リノスがスッと至近距離に近づいてきた。アルベは思いっきり拳を繰り出した。その瞬間、何かが裂ける音が聞こえたと同時に、肩に激痛が走った。

「グオォォォ……」

呻き声を上げながら崩れ落ちる。ふと見ると、右肩が裂け、そこから夥しい血が噴き出ていた。

「やはりな。いきなり体を大きくしたにもかかわらず、そんな激しい動きをするから、体が付いていかなかったんだろう」

リノスは何かを呟いた。瞬時に肩の傷がふさがり、痛みが消えた。

信じられなかった。あの傷を一瞬で回復させるなど、回復魔法を極めた者でも難しいはずだ。それを、この男は一瞬で治癒したのだ。

……勝てない。アルベは心の中で呟いた。回復魔法が得意なだけだろうという感情が頭をかすめるが、これだけの回復魔法が扱えるのだ、他の魔法も相当に扱えると思って間違いはない。それに、先ほどの身のこなし……。相当の手練れであると言ってよかった。そんな男に、剣術はからっきし、魔術も中途半端な自分が勝てる要素は何一つとしてなかった。

アルベは本能的に逃げようと思った。立ち上がろうとしたが、体が動かない。どうしたことだと思っていると、リノスが再び口を開いた。

「君には結界を張らせてもらった。体は動かせないはずだ。このまま都に連行させてもらう。ちなみに、都全体にも結界を張ってある。君が都に入ることができずに吹き飛ばされたのは、俺の結界のせいだ」

確かにこの王は結界王と呼ばれていることを思い出した。まさか、そんな結界を張ることができたとは予想もしていなかった……。心の中に恐怖心が湧き上がる。都に連行されれば、どんな目に合うのかわかったものではない。これまで自分は人を殺してきたし、ミルワの命令とはいえ、多くの毒を拵えてきた。それがバレれば、死刑は免れないだろう。その前に、今呑んだ薬の副作用が襲ってくる。詳しくは知らないが、相当体に負担がかかるらしい。そのために死ぬ者も少なくない薬だ。

だが、体は力がみなぎっていた。全力を出せば何とかなる気がしていた。体を動かし、並外れた跳躍力で逃げれば、何とかなるのでは

ないか……。アルベは再び全身に力を入れた。

「ガァァァァー！」

断末魔の叫びが響いた。今度はアルベの右足の太ももが真一文字に裂けていて、そこから血が噴き出していた。しかし、すぐに傷はふさがった。見ると、リノスが呆れた表情を浮かべていた。

程なくして、兵士たちが近づいて来て、アルベに目隠しをした。視界を奪われた彼は、恐怖のあまり思わず叫んだ。

「私は、もうすぐ死ぬ。死ぬんだ！」

すぐに目隠しは外された。てっきり、静かにしろと殴られると覚悟したが、目の前の光景が全く違っていた。確かに、先ほどまで草原の中にいたのだが、一瞬のうちに部屋の景色に変わっていた。

一体何が起こったのか、理解できなかった。目の前にはリノスがいて、胸の大きな美女と何やら話をしている。しばらくすると、部屋の扉が開き、数人の白衣を着た男女と、羊獣人の女性が入室してきた。

「メイ、彼がそうだ。そして、これが毒物だ」

よく見るとリノスの手には、確かにミルワが投げ入れた毒の容器があった。それにはなぜか液体が入っていた。まさか、飛び出した液体をあの容器の中に詰めたのか？　そんなことを考えていると、白衣を着た者たちが、自分の周りに集まり、腕を何か濡れたもので拭いていることに気づいた。そしてその直後、注射器で何かを注射された。

その途端、アルベの体が軽くなった。両手足が動く。だが、その直後、体に力が入らなくなった。彼はゆっくりとその場に倒れ伏した。

第六百九十二話　収束に向けて

アルベはふと、目を覚ました。

何か怪しげな薬を投与された。直感的に毒ではないことはわかっていた。体の力が抜けたところを見ると、眠る薬ではないかと思う。だが、それは軽いものだったようだ。あまり眠った気がせず、すぐに意識は回復したと思っていた。

だが、彼の目に映ったのは、どこかの部屋の中と思われる風景だった。さらには、そこには二匹の黒いウサギがいた。体は全く動かなかった。

「おお、目覚めたようだ」

「メイ様とローニさんを呼んで来よう」

確か、外で拘束されたはずだが、一体、いつの間に運び込まれたのか。それに、この気味の悪い、人の言葉を喋るウサギたちは一体何者なのか……。そんなことを考えていると、アルベの意識は再び遠くなっていった。

◆　◆　◆

「……そうか」

リノスは小さな声で呟く。執務室の机の上には、分厚い報告書と数枚の書簡が置かれていた。彼は報告書を手に取ると、パラパラとペ

ージをめくった。そこには難しい論文が書かれていて、その内容は彼が理解できる範囲を超えていた。

彼の目の前には、メイとローニ、そして、リコとシディーの四人が控えていた。メイは申し訳なさそうな表情を浮かべている。そんな彼女にリノスは、少し困ったような表情を浮かべながら口を開く。

「メイ、そんな顔をするな。メイのせいじゃない」

「ハイ……」

彼女は自分を責めていた。アルベが使った薬は、その昔、メイが開発した物を改良したものだったからだ。

「メイは命じられて作っただけだ。作りたくて作ったんじゃない。無理やり作らされたんだ。だから、そんな顔をしないでくれ」

「そうですメイ様。このような薬を作れと命じた者が悪いのです。この責任は我々ポーセハイにあります。これからは、この薬の特効薬を開発すればよいだけの話です」

メイとは打って変わって、ローニは淡々としている。その比較が少し面白いと思いながらも、リノスは再びメイに視線を向ける。

「ところで、彼の容体はどうだ?」

「はい。三日間ほど眠り続けていましたが、つい先ほど、目を覚ましたとのことです。ただ、再び眠りに落ちているようです」

「心配ありませんメイ様。少しずつ眠る時間は短くなっていきます。

すぐに意識は完全に回復します」

「そうですね……」

「ところで、彼の体は？」

「今のところは……」

「これから彼はどうするのがいいかな？」

「おそらく、巨大化した体は元には戻らないと思います。ご主人様の回復魔法のお蔭で、何とか無傷の状態ではありますが、骨や筋肉にかかる負担は相当なものですので、このまま動き回れば、骨が折れるか、筋肉が裂ける可能性が極めて高いです。従いまして、おそらくはこのまま寝たきりの生活になると思われます」

「そうか……。彼の身柄を引き渡すようにと、ラバデ王国とバナリスト帝国から書簡が届いている。寝たきりとなると、引き渡しは難しいか？　リコはどう思う？　……リコ？」

リコはその昔、傍に仕えていたシューターに裏切られ、命の危険に晒されたことを思い出していた。あのときも、彼は体を巨大化させる薬を飲んで襲いかかってきた。それは今回、アルベという男が飲んだ薬と同じものだろう。メイの話では、薬を飲んだ本人も相当なダメージを受けるようだ。ということは、あの薬は誰も幸せにしない悪魔の薬であると言える。そんなものは、早く撲滅させなければならない……。彼女はそれを実現するための手段を、頭の中で考えていた。

「リコ？　リコ？」

「……ああ、ごめんなさい。少し考え事をしていましたわ。……ええと、彼の身柄の引き渡しですわね。リノスの転移結界を使えばそれは可能でしょうけれど、それは使うべきではありませんわ。両国には、現在の彼の容体を説明して、身柄の引き渡しを行うと、途中で命を落とす可能性があると言えばよいですわ」

「それで、両国は納得するかな？」

「納得はしないと思いますわ。ですから、条件を付けるのです」

「条件？」

「身柄の引き渡しは難しい代わりに、使者を送り、その者が事情を聴くのは許可するのですわ」

「なるほど。恐らく両国の望みは、彼の命を取ることではなく、あの毒をどうして撒いたのか、あの毒の製造方法を知りたいというのが第一だろうからな」

「はい。それであれば、両国は承知すると思いますわ。その書状は、私が作成しますわ」

「そうか。じゃあ、それはリコに任せることにする」

「こういうことを言っては何ですが、彼の作った毒の実物を持っているのは、アガルタだけですわ。その毒の成分と解毒剤を開発することができれば、アガルタだけでなく、全世界の役に立ちますわ。メイ……」

「はい、承知しています。その成分の解明と解毒剤の開発は、私も積極的にかかわろうと思います」

メイは背筋を伸ばして答える。その表情は真剣そのもので、メイの覚悟のほどがよく伝わるものだった。そのとき、皆の会話をじっと聞いていたシディーが口を開く。

「うん、その解毒剤はメイちゃんが関わる方がいいわ。直感だけれど、それを開発する過程は、ものすごく大きな役に立つような気がするわ」

「はい。頑張ります」

「すまないな。俺も手伝えればいいんだが」

リノスはポリポリと頭を掻いた。彼は少し前に、結界を使って、アルベの過去を覗き見ていた。ただひたすらに他人を妬み続けたこれまでだった。それはまたさておき、アルベが実際に毒物を作る工程も見ることができていた。ただ、その薬品はすべて透明であり、それらを入れている瓶もまた透明で、何が何であるのかの判断がつかなかったのだ。おそらく、アルベ自身にはそれらの瓶の中身が判別することができるのだろうが、他人が見ると、すべてが同じように見えていた。結局、毒物の製造に関して言えば、アルベ自身に聞く他はなかった。

その毒物については、メイの研究と並行して、アルベ自身にも問いかけて、穏便にその方法を白状してもらう方向性ではあった。最悪の場合、精神魔法を使って自白させることもできたが、メイの話では、それは最後の手段であり、それを使ったが最後、おそらくアルベの命はもたないということだった。

「あの……リノス様」

「どうした、シディー？」

「その彼の尋問ですが、リコ様にお願いしてはどうでしょうか？」

「リコに？　どうしてだ？」

「直感です。何となく、上手くいきそうな気がするのです」

「そうか。シディーの直感なら、上手くいく可能性が高いな。リコ、お願いできるかな？」

リノスの言葉にリコは少し戸惑いの表情を浮かべたが、やがて、承知しましたと言って頭を下げた。

◆　◆　◆

メイはリノスの許を辞したその足で、アガルタ大学の研究室に向かった。そこでは学生たちが、教授らと共に毒物の研究を行っていた。メイは学生たちに声をかけつつ、白衣を纏い、毒物の解明に取り掛かった。

同じ頃、ミルワはサイリュースの里で軟禁されていた。

里に戻るつもりは毛頭なかった。彼女は必死の思いでアガルタの都に入り、迎賓館に向かった。そこではサイリュースたちが働いていたからだ。彼女らに保護してもらい、何とか精霊の力を分けてもらおうとしたのだ。

しかし、彼女に手を差し伸べるサイリュースは一人もいなかった。ミルワは迎賓館の前で泣きじゃくるしかなかった。その彼女に手を差し伸べたのは、リノスだった。彼はミルワを中に入れると、ただ無言で彼女を眺め続けた。

てっきりミルワは、リノスが自分を品定めしていると思っていた。そうであれば、きっとこの男も、自分に欲情するに違いない。彼の奴隷になる覚悟はできていた。いや、むしろ、その方が後でチャンスが来ると思っていた。だがリノスは首を振ると、サイリュースの里に戻るように命じた。そして、気が付けば、里の入り口に座っていた。

ミルワは今、木の中に閉じ込められていた。闇が広がる世界だ。彼女は新たに精霊と契約するまで、そこから出ることができない身となっていた……。

第六百九十三話　容体

それから、アルベの容体は一進一退を繰り返した。

一時は意識を回復したが、その後すぐに彼の心拍数は徐々に下がっていった。このままでは心臓が停止する可能性は極めて高い状態であると言えたために、メイたちは回復魔法をかけつつも、折に触れて薬を投与し続けた。

だが、それでも彼の心臓は回復することなく、徐々に弱っていった。このままでは、血液を全身に巡らせることはできず、死を迎えることは明らかだった。メイたちは、新種の薬などを投与して、彼の容体を回復させようと努めた。

ある意味では、人体実験とも言える行為だった。だが、そのお陰でアルベの命は保たれていると同時に、こうしたアプローチは結果的に、この世界の医学の発展に大いに貢献したと言えた。

元々、メイが作った薬は、体の筋肉を短時間で爆発的に成長させるものだった。その副作用などは全く検証されていなかったが、今回、アルベの事案が発生したことで、その副作用の過程を詳細に調べることができていた。

一方のアルベにとっては地獄のような苦しみだった。何度も死の淵を彷徨い、その都度、強い力でこの世に引き戻される。併せて、眠っている間に見る夢は、決まって悪夢だった。彼は衰弱のあまり、もう、言葉も喋れなくなっていた。それでも、医師たちは治療をやめなかった。

メイは深く悩んでいた。彼が回復する可能性は低いと言えた。唯一手があるとすれば、リノスが回復魔法をかけ続けるというものだが、それとても、彼の命を寿命まで伸ばすことは難しいと判断していた。

彼女は、アルベが苦しみ続けていることをよく承知していた。本音を言えば、このまま穏やかな死を迎えさせてあげるのがよいと考えていた。だが、この薬の特効薬を開発せねば、おそらく、人の命を盾にした攻撃が行われる可能性もあり、実際に、某国では、この薬を活用した突撃部隊を編成して、戦争を有利に展開しようと画策しているという情報も入ってきていた。メイは、己が作り出したもので、罪のない人々が命を失うことが耐えられなかった。彼女は心を鬼にして、目の前の患者を延命させることに集中することに決めていた。

一方、リノスにも、アルベを延命させねばならぬ事情があった。ラバデ王国とバナリスト帝国が早速、アルベの事情聴取のための使者を送ってきていた。そのラバデ王国の使者は早々に到着して、アルベの尋問を行っていたが、彼は一切口をつぐんだまま何も言わず、状況は膠着状態にあった。併せて、彼の毒物で被害を受けた国から、彼の身柄の引き渡しを求められたり、毒物のことを聞かれたりと、色々と対処せねばならぬことが起きていた。

とりわけ、バナリスト帝国の鼻息は荒く、何としてもアルベの身柄を引き取ると、強い調子で書かれた書簡を寄こしてきていた。恐らくこの帝国は、道中でアルベが死んだところで知ったことではない、むしろ、早く彼の命を奪いたいと考えているようにも見て取れた。

リノスは、尋問の許しは与えたものの、アガルタも毒物の被害を受けそうになったために、アルベへの尋問とその毒物の解明を行う旨、

バナリスト帝国に返答していた。これは即ち、身柄の引き渡しを暗に拒否したもので、両国の間にはちょっとした緊張が走っていた。

その毒物に関しては、ポーセハイたちをして、最高傑作との呼び声高い代物であることがわかっていた。全くの無味無臭。毒物の常識ではあり得ないものをアルベは生み出していた。

その毒物の解明は困難を極めた。しかし、そこにエスカリーナが加わることで、意外にも、その解明は驚くほどの速さで進んでいった。

彼女が指摘したのは、まず、その毒物から発せられる臭いだった。その臭いは彼女しかわからないものだった。併せて彼女は、その毒物が色を持っていることまでも指摘したのだった。ポーセハイたちは、彼女の話から、そうした臭いや色の持つ物質を特定していったのだった。

毒の解明が進むにつれて、これは、想像を超えたものであることがわかった。大抵毒物を作るためには、色々な毒を混ぜて作ることが一般的だが、このアルベの作り出した毒物は、化学反応をさせて作り出したものだった。

彼自身は一切口をつぐんで話さないが、おそらくは、偶然出来上がったものであるというのが、ポーセハイたちの一致した見解だった。ただ、これを発見するために、膨大な実験を繰り返したことは明らかだった。

この報告を聞いたリノスは、大きなため息をついた。

「これだけのものを作り出すことができる才能があるのなら、それを、人を救う方向に使えば、彼は名声を得ただろうにな」

「得てして、人は自分の持つ才能には、気づかないものですわ」

リノスの前に控えていたリコが呟く。

「自分のこと、周囲のこと……。自分が思っていることと他人から見ているものとは、大きく違っていることが多いですわ。私も、自分の境遇は不幸だと思っていましたが、今から考えると、大きな愛情に包まれていたのですわ。この彼も……見方を変えられればよかったのでしょうが……」

リコの言葉に、リノスは大きく頷く。リコは、何かを決意した表情を浮かべながら、口を開いた。

「バナリスト帝国の使者による尋問も終わったようですわ。私の方でも、お話をしてみようと思いますわ」

「そうだな。まあ、喋らないだろうが……」

苦笑いを浮かべるリノスに、リコはフッと笑みを浮かべながら頭を下げた。

◆　◆　◆

アルベは夢を見ていた。自室で忙しく論文を書く夢だった。

世紀の大発見だった。あの気難しい父が褒めてくれたほどの発見だ。これを論文して世界に発表する。おそらく、世界が震撼するだろう。己の名声もうなぎ上りだ。父は自分の跡を継がせようと言ってくれた。帝国の中で大きな発言権も手中にできるだろう。早く、論文を

書き上げるのだ……。

筆が進まない。もどかしい。頭の中の展開に筆が追い付いていない。早く書かなければ。頭の中の内容を忘れてしまう……。早く、早く……。

ふと目が覚めた。やっぱり夢だったかと、絶望感が湧き上がる。何度も味わった感覚だ。唯一の救いは、目の前に誰もいないことだ。この間まで、目を覚ますと、何やら豪華な衣装に身を包んだ男たちの顔があった。

鼻持ちならない奴らだった。何を聞かれても、頑として口を開かなかった。奴らに自分の気持ちがわかるわけはないのだ。バナリストの使者などは、何としてもお前を帝国に連れて帰ると言って、ベッドから引きずり降ろそうとした。それを他の男たちに止められ、厳しく怒られていた。いい気味だと思った。

あのときは痛快だったなと思いながら、アルベは少し笑みを浮かべる。すぐに強い倦怠感と呼吸が苦しくなった。今では、少し体を動かしただけで、こんな苦しさを味わうようになっていた。思わず目を閉じて呼吸を整えようと努める。

死が近いと思う。で、あれば、早くあの世に行きたいと思う。だが、それは許されないらしい。一体いつまでこの苦しみを味わわなければならないのか。絶望感が深くなっていく。

そのとき、部屋の扉が開く音がした。足音が近づいて来る。アルベは、その足音がこれまで聞いたことのない音だと思っていた。

遅くもなく早くもなく。一定のリズムでこちらに向かって来る。心

地よいリズムだった。

足音が近づくにつれ、何かよい香りが鼻をくすぐった。これは、女性か？　香りのせいだろうか、相当に高貴な身分の女性であるような気がしていた。

足音が止まった。アルベはゆっくりと目を開けた。そこには、女神がいた……。

第六百九十四話　尋問

まるで、時が止まったかのような感覚だった。

美しい金色の髪、抜けるような白い肌、そして、整った顔立ち。双眸には深い知性が見て取れた。一見して、どこかの高貴な女性だとわかる雰囲気だった。アルベはこの女性の顔に見覚えがあった。

……絵の女性。

ホテルクルムファルで見た、肖像画に描かれていた女性に瓜二つだった。この女性がアガルタ王国の皇后、リコレットだ。アルベは心の中で呟いた。

リコレットは少し腰をかがめると、その美しい顔をアルベに近づけて、小さな声で呟いた。

「お加減は、いかがですか？　私は、リコレットと申しますわ」

……やはりこの人が。アルベはそう思いながら彼女を凝視する。

◆　◆　◆

一方のリコは、トラウマと戦っていた。

目の前に横たわる巨大な肉の塊……。その醜悪な表情は、シュータのそれと酷似していた。襲われたときの記憶が蘇ってくる。それに合わせて、彼に裏切られていた日々のことを思い出していた。

ゆっくり息を吐きながら、頭の中を切り替えようと努める。確かにあのときはショックを受けたし、命の危機にもさらされたが、その後は、予想もしなかったほどの幸せに恵まれている。そんなことを考えながら、彼女は目の前の男に向き直る。

「あなたに聞きたいことがありますの。よろしいかしら？」

リコの言葉に、男は少しだけ目を動かした。それはリコの提案に同意したという意味にとれた。

「単刀直入にお聞きしますわ。あなたが作り出したあの毒ですが、その製造方法と解毒剤の作り方を教えて欲しいのです」

しばらくの間沈黙が流れた。男はリコを見つめたまま微動だにしない。男の呼吸音だけが部屋に響き渡っていた。だが、その間もリコは男と目を合わせたまま動かず、男の方もまた、リコの眼をじっと見つめたまま固まっていた。ややあって、リコは静かな声で口を開く。

「……別に、言いたくないのであれば、言わなくてもよろしいですわ。ただ、あなたは結果的に多くの人を殺しました。その償いは、するべきだと思うのですわ」

その言葉に、アルベはゆっくりと視線を逸らせた。リコはなおも言葉を続ける。

「私も詳しくはわからないですが、あなたが作り出した毒は、最高傑作と評価されていますわ。全くの無味無臭……。これまでの常識では考えられなかったものだと聞いています。あくまで私の推測で

すが、あなたは幼い頃からご両親に、相当厳しく育てられたのではありませんか？」

その言葉に、アルベは反応した。ゆっくりと視線を再びリコに向けた。彼女は彼の眼をじっと見つめる。そして、ゆっくりと頷きながら口を開いた。

「お辛かったですわね」

アルベの眼から涙が溢れていた。彼はリコから視線を外すと、目を閉じて天井を向いたまま、静かに泣き始めた。

「そのお気持ち、よくわかりますわ……。しかしあなたは、それでもあれだけの毒を作れるだけの知識と腕を磨いたのです。並大抵の努力でなかったことは、容易に想像できますわ」

リコの言葉に、アルベはゆっくりと頷いた。

「父に……」

「え？」

「父に、何度も殺されかけた」

「まあ、そうだったのですか……」

アルベは泣きながら己の過去を訥々と話し始めた。

父であるロース・クエンツは、座学で学ばせるだけでなく、実際に毒物に触れさせることで、その知識を深めさせようとした。アルベ

は時に致死量ギリギリの毒物を与えられて悶絶し、泡を吹いて気を失うこともあったほどだ。

アルベは心の底で思っていた。父は毒物の授業と称して実は、人体実験を行っているのではないかと。自分が苦しんでいる様を父はいつも、無表情のまま眺め続けていたし、別段、解毒剤を飲ませることもしなかったし、労わりの言葉をかけることもなかった。

アルベはいつしか、この父を殺すことを人生の目標とするようになった。彼は自ら志願して、毒物の作成を行うようになった。

だが、父の毒に対する知識は彼の想像を大きく超えていた。何度毒を作っても、それが何で作られたもので、どういう効果を持った毒であるのかを一瞬で看破された。そして、時には激しい鉄拳制裁を加えながら、厳しい口調で彼を面罵したのだった。

リコはアルベの話にじっと耳を傾けていた。そして、時に大きく頷きながら真剣に彼の話を聞いた。

「ハア、ハア、ハア……」

既に体力が大幅に落ちているためか、アルベはある程度の所まで話をすると、息が上がってしまって、喋ることができなくなった。苦しい呼吸音が再び部屋の中に響き渡る。彼は肩を激しく上下させながら、それでも何か喋ろうと、口をパクパク動かしている。そんな彼を見ながらリコは口を開いた。

「相当お辛かったですわね。私も、随分辛い思いをしましたが、あなたほどではありませんでしたわ」

その言葉にアルベは再び涙を流す。

「ただ……こう言っては何ですが、お父様はもしかしたら、あなたに期待をしていたのかもしれませんわね」

アルベが驚いたような表情を浮かべてこちらを見た。そんなことは絶対にないと言わんばかりの表情を浮かべている。

「私も……両親からは愛情が注がれていないと思っておりましたわ。むしろ、両親は私を厄介者と思っていると思っておりました。そのときはわかりませんでしたが、今、親の立場になって見ると、両親がいかに私を愛し、心配してくれていたのかがよくわかるのですわ。確かに、あなたのお父上とは状況が異なるでしょうが……。ただ、これは私の勘ですが、あなたの父上様は、あなたに期待なさっていたのじゃありませんか？　あなたに厳しく接したのも、あなたに見込みがあったからではありませんか？　そうでなければ、人はあきらめるものですわ」

アルベの呼吸が再び激しくなってきていた。……彼は思いだしていた。確かに、毒物に関する知識は割合すぐに覚えることができていた。その、習い覚えた知識を駆使して、必死で父を殺すための毒物を一心不乱に拵え続けた。もしかすると父は、そんな自分の成長を見守っていたのだろうか？　いやそれはない。で、あれば何らかの言葉をかけたはずだ。父からは厳しい言葉以外は聞いたことがない。アルベは首を小刻みに左右に動かしながら、必死で己の考えを否定する。

「しかし、あなたは父上を超えたのでしょうね。おそらく、父上様は、あなたがこれほどの毒を作り出せるとは思わなかったでしょう」

確かにそうだ。私が作った毒は、あの父の鼻と舌を凌駕した。父は私の毒に気づかなかった。私の勝ちだ。アルベは心の中でそう叫んでいた。そのとき、リコがさも残念そうに口を開いた。

「惜しいですわね。その能力を、もっと別の方向で使えば、あなたは世界中の人々から尊敬されたでしょうに……」

アルベの動きが止まる。リコはさらに言葉を続ける。

「それだけの知識を、人の命を救う方向に向けることができていたら、もっとたくさんの人々の命を救えたでしょうに……。人の命を奪うのではなく、もっと別の方向に……」

ふと見ると、リコレットが悲しい表情を浮かべていた。彼女はその表情のまま、まるで諭すような口調で彼に語りかけた。

「あなたも薄々お気づきのことかと思いますが、あなたの命はもう、長くはありませんわ。その前に、人助けをしてみてはいかがかしら」

二人の間に沈黙が流れる。アルベはじっとリコを見つめたままだ。赤黒い瞳が輝いていた。

「ムリ……だ」

不意にアルベが口を開いた。腹の底から声を絞り出しているように聞こえる。アルベは大きく肩を動かすと、ゆっくりと口を開いた。

「あの薬は……解毒剤は……ない……」

二人の間に再び沈黙が流れた。

第六百九十五話　やっぱり幸せ

リコは相変わらず悲しそうな表情を浮かべている。アルベは深呼吸をすると、喋るのもやっとといった雰囲気を漂わせながら、さらに口を開いた。

「毒の、作り方は、私でしか、わからない……。説明は、できない……」

「では、体が動けば、毒の作り方を説明してもよいと思われているのですか？」

アルベはゆっくりと頷く。

「そうですか。それだけでも、十分ですわ」

リコの言葉に、アルベは意外だと言わんばかりの表情を浮かべる。

「実は、毒に関しては、アガルタ大学の者たちが、ある程度の所まで解析を進めているのですわ。では、大学の者をこちらに呼びますので、彼らに質問に答えていただけまして？　なるべく喋らずに、頷くだけで済むように言っておきますわ」

そこまで言うとリコはじっとアルベの眼を見た。彼は目を合わせず、ただ天を仰いでいた。

しばらくするとリコは、無言のまま踵を返して、その場を後にした。彼女が振り返った瞬間、何とも言えぬよい香りがアルベの鼻をくす

ぐった。これは香水の類ではない、この女性が持っている香りであることを感じていた。

去っているリコレットの背中を、アルベはぼんやりと眺めていた。おそらく、あの女性とはもう、ニ度と会うことはないだろう。そう考えると、もっと彼女と会話をしておけばよかったという後悔の念が湧き上がってくる。あんなことも聞きたかった、こんなことも聞けばよかった……。頭の中には、いくつかの下劣な質問も浮かんでくる。それを聞けば、あの女性はどんな反応を示すだろうか……。いや、きっと無表情のままだろう。まるで、その質問がなかったかのように振舞うだろう。そんな予感がしていた。

リコレットは部屋を出るとき、クルリと振り返ってアルベを見た。そして、静かに一礼して部屋を後にしていった。

アルベは満足していた。もう見られないと思っていたあの顔を最後に見ることができたのだ。普段ならば絶対に感じることはない。だが、今の自分は、こんな些細な出来事でさえも満足している。それだけ、心が弱っているのかなと思いながら、アルベはゆっくりと目を閉じた。

◆　◆　◆

その夜、リコは寝室でリノスが来るのを待っていた。彼女の目の前には、息子のイデアが大の字になって眠っている。その彼に甲斐甲斐しく毛布をかけながら彼女は、イデアの頭をやさしく撫でていた。

そのとき、パタパタと足音が聞こえてきた。これは、リノスの足音だ。

「いや〜いい湯だった」

タオルで頭を拭きながらリノスが部屋に入ってきた。彼はリコを見てニコリと微笑むと、ゆっくりとベッドに近づいてきた。

「もう寝たのか？」

彼はイデアの顔を覗き込みながら笑顔を見せる。

「ええ……。相変わらず、寝つきのよい子で助かりますわ」

「ベッドに入って一分も経たずに眠るよな」

「さすがにそんなことはありませんが……。一緒に寝て、おしゃべりをしていると、すぐに寝息を立てますわ」

「ウチの子は皆、寝つきがいいけれど、イデアは別格だな」

「そうかもしれませんわね……」

リノスはリコと顔を見合わせると、イデアを抱き上げて、すぐ隣にあるベッドに寝かせた。リコは再びイデアの顔を覗き込み、幸せそうな笑顔を浮かべると、その頬にキスをした。

ベッドではすでにリノスが横になろうとしている。リコは彼の傍に近づく。リノスはその体をやさしく抱きしめた。

風呂から上がって間もないためか、彼の体が温かい。その温もりに包まれながらリコはゆっくりと息を吐き出す。

「ところで、あの彼はどうだった？」

「……ええ。メイたちの話は聞いてくれるみたいですわ」

「そうか。さすがはリコだな」

「そんなことはありませんわ。結局、あの毒の解毒剤のことは聞き出せませんでしたし……」

「そんなことはない。リコは十分にやってくれた。ありがとう」

そう言うとリノスは、リコの頬に唇を寄せた。だが、彼女は浮かない顔をしている。

「どうした？」

「何となく、私の未来を観たのですわ」

「どういうことだい？」

「もし、あなたに出会わなかったら、きっと、私が彼のようになっていたのですわ」

「あんな醜悪な顔と体に、か？」

「いいえ、そうではありませんけれど……。悪い部分にだけ目を向けてしまって、自分で自分の境遇を悪くしてしまう。そして、周囲の環境を恨んで……」

「確かに、出会った頃のリコは、そんな感じがしていたな。何とい

うか、かなり刺々しいというか、背中に影を背負っているというか……。初めて、帝都の宮城であった時のことを思い出すよ。そうそう、あのとき俺は、宰相閣下に促されて、膝をついてリコに挨拶をしたんだ。その俺をリコは、膝をつく必要はないと窘めたんだっけな」

「そうですわね……。そんなことがありましたわね……。あのときの私は、周囲の者全員が敵に見えていましたわ。周囲の人たちのことや、私に向けられていた優しさに気づくことなく、自分が正しい、私の考えと行動を否定する者は悪だと思い込んでいましたわ。きっと、あのままの状態でいれば、私はお父様やお母様の愛情に気づかずに、命を落としていましたわ。そう考えると、恐ろしいですわ」

リコはそう言いながら、リノスのパジャマを掴む。その手をリノスは優しく握った。

「でもリコは、その優しさに気づけたじゃないか。あの彼も、どこかでそうしたことを気づければよかったんだけれどもな。ああ、その彼だが、さっき、メイが風呂の中で報告してくれた。毒の作り方に関しては、概ねメイたちが立てた仮説で合っていたようだ。あとは、毒の配合だけらしいが、そこだけは、彼は頑として口を割らなかったらしい」

「きっと、口で説明するのが難しいのですわ」

「それはメイも言っていた。恐らく彼は、感覚であの毒を調合していたみたいなんだ。薬品を扱う者からすれば考えられないことらしいが、彼はそれであの毒を作り出していたらしい。もしかすると、気候や気温や湿度で、微妙に配合が変わるのかもしれないな」

「そうですわね。きっと、メイたちが遠からず、その配合方法を明らかにすることでしょう」

「ああ。どうやら、何十通りもの配合を試みるらしい。まさしく人海戦術になるみたいだ。その内容を詳しく説明してくれたんだが、俺には全くわからなかった。お陰で湯あたりしそうになったよ。」

「まあ……。ウフフ、メイらしいですわね。ですが、また、メイが徹夜続きになるかもしれませんわ。気を付けないと……」

「ああ。その点はちゃんと考えてある。定時に帰るようにチワンやローニに言ってあるし、もちろん、メイにもさっきそれは言ったんだ。それに俺には秘策がある」

「秘策？　何ですの？」

「イデアを迎えに行かせる」

「まあ、イデアを？」

「イデアが迎えに行けば、メイもイヤとは言えないだろう」

「まあ、悪い人ですわ」

「何とでも言え」

リノスは笑いながら、部屋の灯りを落とした。

薄暗い中、リノスの体がこちらに近づいて来るのをリコは感じた。

リノスは再びリコの体を抱きしめる。リコはその温もりに包まれな

がら、心の底から幸せを感じていた。

ややあって、リノスの体が離れた。彼はやさしくリコのパジャマのボタンを外していく。彼女は恥ずかしそうに身をよじった。

「リコ、愛している」

「リノス、私もですわ」

リノスはリコを強めの力で抱きしめて、そのまま彼女をベッドに寝かせた。リコも、無意識のうちに彼の体に両手を廻していた。

全身を仄かな温もりが包んでいく。その温もりを感じながら、リコは彼と結婚して本当によかったと思うのだった……。

第六百九十五話　やっぱり幸せ（後書き）

第二十一章、完結です。ありがとうございました。

以後は間話を挟みまして、また、新章に突入します。どうぞお楽しみに！

第六百九十六話　偲ぶ会

「ほーじ？」

リコはキョトンとした表情を浮かべた。それを見たリノスは、苦笑いを浮かべる。

「いや……俺が育ったところでは、そういう言い方をするんだ……」

ポリポリと頬を掻きながら、困ったなという表情を浮かべる。リコとソレイユは顔を見合わせているし、メイは両目を天井に向けながら何かを考えている。シディーは右手の人差し指を顎の下に当てながら、何かを考えている。マトカルは……無表情のままだ。

周囲では子供たちが遊ぶ声が響き渡っている。だが、このダイニングのテーブルの周囲だけは、まるで時が止まったかのような静寂に包まれていた。

「つまりそれは、結婚式のようなお祝いということでしょうか？」

シディーが口を開く。皆の視線が彼女に集まっていく。

「う～ん。まあ、お祝いというわけではないけれど、皆で集まって故人を偲んで、思い出話に花を咲かせるというか……な」

リノスの言葉に、妻たち全員が天を仰いだ。

話しは数十分前に遡る。昼食が終わって、皆でワイワイと談笑して

いるときに、リノスがふと漏らした一言からこの話は始まった。

「そういや結婚したときにパーティーを開くのはよく聞くけれど、死んだ人を弔うイベントみたいなものはあまり聞かないよな？」

「え？　どういうことでしょうか？」

ソレイユが口を挟む。リノスは彼女に視線を向けながら、言葉を続ける。

「いや、ふと思ってさ。結婚の時には盛大に祝うけれど、死んだ人たちに対して何か偲ぶっていうのはないのかなと思ってね。ほら、例えば法事とか」

「ほーじ？」

リコがキョトンとした表情で口を開いた……。

◆　◆　◆

「そういえば、そうしたことはあまり聞いたことがないですわね」

リノスから法事についての説明を聞いたリコが、得心した表情で口を開く。死んだ人間を偲ぶというのは、肖像画に描いて飾るという程度で、特にイベントめいたことを催したという記憶はリコにはなかった。そんな彼女にリノスは笑顔で口を開く。

「そういうイベントをやってもいいかもしれないな。特に、エリルやイデアにとっては、ヒーデータの先帝陛下や皇后陛下はおじいちゃんとおばあちゃんだ。その話を聞くのは、二人にとってプラスに

なるんじゃないかな」

「そうですわね……」

「きっと、亡くなった人たちも嬉しいんじゃないかと思うんだ。子供や孫や子孫たちが、自分のことを偲んでくれるというのは。どうだろうか、何かやってみては」

「私は賛成ですわ。早速兄上に相談してみますわ。……であればリノス、バーサーム家の方々を偲ぶ会もおやりにならないと」

「……ああ、そうだな。ただ、侯爵様やエルザ様……ファルコ師匠やエリルお嬢様のことを知っている人も少ないからな」

「何を言うのです。リノス、あなたが言い出したことなのですよ。知っている人がいなくても、リノス、あなたが偲ぶことで、きっと侯爵様たちはお喜びになりますわ」

「そうだな、リコ。その通りだ。よし、バーサーム家の皆さんを偲ぶ会をやってみるか」

「わかりましたわ。その点もお任せください」

リコは笑顔で胸を張る。メイたちも皆、笑顔を見せている。ただ、その中でシディーだけは、相変わらず人差し指を顎の下に当てながら、何かを考える素振りをしていた。

次の日、リコは早速帝都の兄を訪ねた。

「おお、リコレット。今日はどうした?」

「はい、実は……」

リコは昨日リノスから提案があった法事について話をする。ヒートはうんうんと頷きながら聞いていたが、やがて、静かに口を開いた。

「まさか、そなたから父上と母上を偲びたいという言葉を聞くとは思わなんだぞ」

「……どういう意味でしょうか？」

「フフフ。むろん、そなたの提案は余も賛成じゃ。ヴァイラスや宰相らも呼んで、皆で盛大に父上と母上の思い出話に花を咲かせようではないか。だがリコレット、それだけではあるまい？　そなた、余の倅のアローズとエリル殿を近づけようと企んでおるのではないのか？」

「……それは、兄上。考えすぎですわ」

「そうか。まあ、余も、アローズとエリル殿が親しくなるのに越したことはないと思っておる。ただのう、あれは固くていかん。生真面目すぎるのも悩ましいの。ヴァイラスの爪の垢でも煎じて飲ませたいくらいじゃ」

「よろしいではありませんか。兄上に似たのですわ」

「何を言うか！　余は若い頃、それなりに名を馳せておったわ」

「それは初耳ですわ」

「まあともあれ、父上と母上の会は催すこととしよう。そのついでと言っては何だが、バーサーム家の会も催すとよい」

「この帝都で、でございますか？」

「アガルタの都でやってもよいが、今のアガルタの都には、亡き侯爵殿を知る者もおらぬだろう。帝都であれば、宰相のグレモントはファルコ殿と幼馴染であったし、侯爵殿とも面識がある。この宮城で開催するのがよいと思うがの」

「それは……夫と相談してみますわ」

「それに、アローズとエリル殿が近づく機会も増える。そなたにとっても、悪い話ではないと思うがの」

「……承知しました」

リコはそう言ってその場を辞した。

これらの偲ぶ会の開催は、リコの心配をよそに、トントン拍子で決まった。だが、バーサーム家の偲ぶ会については、リノスがアガルタの都での開催を主張して譲らなかった。彼は迎賓館での開催を企画し、招待する者も最小限に抑えた、内々での開催とすることにした。

リコはヒーデータの兄が反対する可能性があると懸念したが、それは杞憂に終わり、陛下は嬉々として参加すると表明した。彼に従うのは、グレモント宰相とヴァイラス殿下、そして、皇太子であるアローズだけということになった。

まず、ヒーデータ帝国で行われた先帝陛下を偲ぶ会は、豪華なものだった。リコレットの両親の肖像画が高々と掲げられ、その前で多くの貴族や他国の使者が集まり、談笑するものだった。供された食事も贅を尽くしたもので、結果的にこれは、帝国の力を内外に示す絶好の機会となった。

だが、あまりにも参加する人数が多かったために、エリルとアローズはまともに話をすることができず、二人の思惑は失敗に終わった。エリルは長時間緊張したのが影響したのか、屋敷に帰ってきたときには、蒼白の表情をしていて、リノスを大いに心配させたのだった。

それから一週間後、アガルタの都の迎賓館において、バーサーム侯爵を偲ぶ会が開催された。そこには、リノスの妻たちや子供たち、ゴン、ペーリス、フェリス、ルアラ、ラースなど、リノス家で過ごす者たち全員が参加していた。

会が始まる直前になって、シディーが慌てながら入室してきた。

「大変遅くなりました」

「どうしたんだ、シディー。心配したぞ」

「ええ。思ったより仕上げるのに時間がかかったのもですから」

「仕上げる？　何をだ？」

怪訝な表情を浮かべるリノスにシディーはニコリと微笑むと、今、入ってきた扉に視線を向けた。すると、扉が開き、一人の男が入室してきた。

「やあ、遅くなって済まなかったね」

現れたのは何と、メインティア王だった。リノスは慌てて口を開く。

「ちょっ、何であなたがいるのですか！？」

「何でって、ご挨拶だねぇ。頼まれたものを持って来たんじゃないか」

「頼まれたもの？」

メインティア王はスッと部屋の扉に視線を向けると、従者たちが大きな箱を大儀そうに部屋に持ち込もうとしていた。

彼らは王の指示に従って、それらを部屋の隅に設えた。箱は四つあり、すべてが長方形だった。

「さあ、これで開封してくれたまえ」

メインティア王は腰に差している短剣をリノスに渡す。彼は渋々ながら、それを使って箱を開封していった。その中には、長方形の木の板が収められてあった……。

第六百九十七話　倣ぶ会②

「板……？」

リノスは小首をかしげる。目の前に現れたのは、木目が美しい巨大な板だった。ふと、隅を見ると、何やら赤いものが付いているのが見えた。

「これって、もしかして大イタチを見せるってやつか？」

リノスは振り向きざまにメインティア王に視線を向ける。彼は、何言ってんだコイツ？　と言わんばかりの表情を浮かべている。そんな王を無視するかのように、リノスは口を開いた。

「ほら、これ、血でしょ？　大きな板に血が付いているから、大イタチって……。オイ、二人でヒソヒソ話をするのはやめろ」

彼の目の前では、メインティア王とシディーが顔を見合わせながら、ひそひそと何かを話している。メインティア王は呆れた表情を浮かべながら、リノスに視線を向けた。

「それは裏側だよ」

「……それを早く言いなさいよ」

リノスは頭をポリポリと掻きながら、巨大な板をぐるりとこちら側に廻した。目の前には、何やら黒く塗られた絵が見えた。彼は数歩下がって再び絵を見上げた。

「……」

「リノス様？」

リノスが固まったまま微動だにしない。心配したシディーが近づくと、彼は口をあんぐりと開けたまま、呆然と絵を眺め続けていた。

「……エ、エルザ様」

絞り出すようにリノスが呻く。彼の両目からは、涙が溢れていた。

◆　◆　◆

……見事な絵だった。まるで、エルザ様が今にも動き出すかと思うくらいに精巧に描かれていた。俺の記憶にあるエルザ様がそこにいた。思わずメインティア王に視線を向ける。

「どうしてあなたが、エルザ様を？」

「君の奥方だよ」

「え？」

俺の隣でシディーが照れた笑みを浮かべている。シディーはエルザ様を知っているのか？

「以前、リノス様がバーサーム家の方々の絵を描いたことがありました。その絵と、よく話されているバーサーム家の皆さんの話を総合して拵えました」

聞けば、シディーは頭の中でイメージを膨らませ、それをメインティア王に伝えてこの絵を描いてもらったのだという。俺は、まだ包装されている絵を次々と開封していき、中を検めた。そこには、侯爵様とファルコ師匠、そして、エリルお嬢様の姿が描かれていた。

それぞれの特徴をよく捉えていた。エルザ様は、シャンと背筋を伸ばし、両手を腹の前で組みながら、凛とした眼をこちらに向けている。口元には笑みを湛えていて、毎朝部屋にご挨拶に伺うときのエルザ様の表情だった。今にも、「おはよう、リノス」という声が聞こえてきそうだった。この絵を見ていると、あのお屋敷で暮らした日々が走馬灯のように思いだされる。そして、メイド長兼コック長のワラサさんやメイドたちの顔も……。

侯爵様は落ち着いた表情で描かれていた。視線をこちらに向けているが、その眼には慈悲深さがありありと現れている。

ファルコ師匠は、堂々とした立ち姿で描かれていて、鋭い視線をこちらに向けている。ああ、そうだ。これがファルコ師匠だ。俺に魔法を教えているときの師匠の顔だ。結界を張っているときに、魔力に集中していると、いつもこの顔で、「イメージするのをやめるな」と言って叱られたものだ。イメージをし続けろ。頭の中でイメージを展開し続けていくのだという教えは、今でも金言として心の中に残っている。

あ、そう言えば、この表情をする瞬間がもう一つあった。遊びに行くときだ。

「今から儂は出かけるからな！　すぐに帰ってくる！」

……すぐに帰って来た試しはなかった。いつも明け方近くになって、ベロベロに酔って帰ってくることがほとんどだった。師匠は仕事をしてきたと言っていたが、一体何の仕事をしていたのか……。うん、考えないでおこう。

そして最後に描かれていたのは、エリルお嬢様だった。彼女は、微笑んでいた。

優しい笑みだった。こんな表情を俺に見せたことはあっただろうか。俺の記憶にあるお嬢様はいつも凛としていて元気溌剌、たまに、意地の悪そうな笑みを浮かべている、というのが多い。ただ、この笑みは記憶にある。……そうだ。美味い物を食べたときの顔だ。

お嬢様の一瞬を切り取ったかのような絵だ。まさしく見事という外はなかった。俺は改めてメインティア王に向き直り、深く礼を言った。

「いや、本当に素晴らしい絵です。よくこれだけの絵が描けましたね。本当に、王にしておくのが勿体ない気がしますよ」

「それはそうだ。君の奥方の注文が厳しくてね。何度もやり直しをさせられたんだ。何せ、見たこともない人の絵を描くんだから、私も骨が折れたよ。まあ、気に入ってもらえたので、苦労した甲斐があったと言うものだ」

「ありがとうございます。このお礼はさせてもらいます」

「うん、期待しているよ。それより、君の奥方に感謝した方がいい。彼女がいなければ、この絵は生まれなかった」

メインティア王に促されるように、俺は再びシディーの許に向かい、彼女の手を取って礼を言った。

「シディー、本当にありがとう」

「エヘヘ。でも、私だけじゃありません。リコ様やメイちゃんも、バーサーム家の方々のことを教えてくれました。リコ様やメイちゃんにもお礼を言ってあげてください」

ふと見ると、リコもメイも嬉しそうな表情を浮かべている。俺は二人にも心から礼を言った。

その後、帝都から陛下らが到着して、ささやかなバーサーム侯爵一家を偲ぶ会が行われた。

挨拶もそこそこに、宰相閣下は侯爵様とファルコ師匠の絵の前から動かなくなった。彼にとって師匠は幼馴染であり、色々と思い出もあるのだろう。加えて、侯爵様は、ヒーデータ帝国とジュカ王国を戦乱に巻き込まないようにと、互いに知恵を出し合った言わば戦友のような人だ。その思い入れも、一入なのだろう。

もう一人、絵の前から動かない者がいた。娘のエリルだ。彼女もまた、エリルお嬢様の絵の前から動こうとしなかった。誰が話しかけても上の空で、そんな娘をリコはやきもきしながら見守っていた。その後ろで、皇太子のアローズは、何を言うでもなく、ただじっとエリルと一緒に絵を眺めていた。

「フフフ。まさしく、似合いの二人だの」

何故か陛下はご満悦だった。彼の眼には、エリルと息子が心を通わ

せているように見えているのだろうか。

陛下はリコを窘めながら、メイやソレイユと言った俺の妻たちに挨拶をしていく。如才のない彼は、妻たちの機嫌を取りつつ、その場を上手く盛り上げてくれていた。一方のヴァイラス殿下は、子供たちの相手役を買って出てくれた。どうやら彼は、子供が好きらしい。甥っ子と姪っ子たちと、無邪気に遊ぶ姿は、実に楽しそうだった。

そんな中、なぜかメインティア王は帰ることなく、しれっと会に紛れ込み、供された食事に舌鼓を打っていた。そして、ある程度腹が膨れると、今度は喋っている俺と陛下の間に入ってきて、飄々とした調子で話しかけてきた。

「お初にお目にかかります。フラディメ王国のフラディメ・ロスカーノ・メインティアです。お会いできて光栄です」

「おお、貴殿がメインティア王か。お噂はかねがね」

「いいえ、こちらこそ。陛下のご仁政は遠く、我が国まで聞こえております」

そんな調子で始まった二人の会話は意外にも盛り上がり、二人で爆笑し合うまで、それほど時間はかからなかった。メインティア王は陛下と他愛のない話をしながら俺に目配せをした。どうやら、ここは任せておけと言っているように見えた。

俺はその場をリコに任せ、ゆっくりと四枚の絵に視線を向けた。何となくだが、皆、とても満足している表情に見える。

「侯爵様、エルザ様、師匠、お嬢様……。俺はこんなに幸せになり

ました。これも偏に、皆さんのおかげです。ありがとうございます」

俺は小さな声で呟き、スッと頭を下げた。もう一度……もう一度、バーサーム家の人々に会いたい……。俺は心の中でそう呟いた。

第六百九十八話　琥珀色のお菓子

「う～ん」

眉間に刻めない皺を刻みながら天を仰いでいるのは、リノスの妻の一人であるコンシディーだ。彼女はアガルタの都にあるドワーフ工房の一室で、腕を組みながら天を仰いでいた。

彼女の前の机の上には、一枚の紙が広げられ、そこには大きな丸が描かれていた。

シディーは苦悩していた。頭の中に突然浮かんだこの図形……。これを何としても作らねばならないという思いに駆られていたのだった。

彼女の頭の中に浮かんだ丸いもの……。それが何であるのか、シディーにはある程度のイメージはついていた。それは、食べ物だった。甘い、それでなくしつこくない味わい……。色は琥珀で、少し硬めの歯ざわりだ。オヤツにちょうどいいもので、子供たちなどは喜んで食べるだろう。

ここまではイメージできていたが、さて、いざ作るとなると、一体何をどうしたらよいのか、彼女には見当がつかなかった。

玉子……ではない。何かもっと別の材料だ……。シディーの頭の中で、色々な素材が浮かんでは消え、浮かんでは消えしていく。

「……ツ……ツツツ……」

ズキズキと頭が痛みだす。シディーはこめかみを抑えながら、ゆっくりと首を左右に振る。

……こんなことなら、料理をもう少し勉強しておくべきだった。

どちらかと言うと、料理は苦手だった。やってできないことはないはずだ。ただ、背が小さいために、料理となるとなかなか大変なことが多い……と言うのを言い訳に、これまでキッチンに立つことはほとんどなかった。なにより、ペーリスのコックとしての腕が抜群で、シディーが入るスキがなかったのだ。

とはいえ、それはいい訳であることは十分に承知していた。いかにペーリスの料理の腕が優れているからと言って、すべて彼女にお任せをしていいわけがない。実際、リコ様もメイちゃんもソレイユもマトカルも、手が空いていれば積極的にキッチンに入って、料理を手伝っているのだ。

だが、シディーとて怠けているわけではない。ニザにいた頃のように、テーブルに座ってただじっと料理が出てくるのを待っているわけではなかった。間違っても、「料理はまだなの？」などと言うことはなかった。名誉のために敢えて言うが、これまでもそんなことは言ったことはない。そんな記憶はない。ただ、宰相のユーリーや、元女官長のミンシには確認しないで欲しい……。

話を元に戻す。

皆が料理をしている間は、決まって子供たちの世話を受け持っている。マトカルやソレイユの子供たちはまだ、乳飲み子だ。その彼ら

を時には抱っこし、時にはあやしながら食事ができるのを待っている。エリルちゃんやイデア君の手伝いを受けながらのこの時間は、シディーにとって至福の時間だった。

そんな彼女に最近、一つの目標ができた。この子供たちに、手造りの菓子を振舞ってやりたいと思ったのだ。

シディーはどちらかと言うと甘党だった。いや、ガチの甘党で、甘いものに目がなかった。とはいえ、ドワーフ族にとって虫歯は大きな脅威だ。そのために、幼い頃は、ミンシが手作りで作る甘さ控えめのお菓子を作るのを見るのが大好きだった。

……私も、大きくなったら子供にこうしてお菓子を作ってやりたい。

幼い頃に夢見たことを思い出す。幸い、ピアという愛娘を授かることができた。このピアをはじめとする子供たちに美味しいお菓子を振舞ってやりたい……。シディーは最近、そんなことを考えるようになっていた。そんなときに突然、頭の中に閃いたこの得体のしれない食べ物……。きっと、自分も、子供たちも幸せに導くお菓子である予感がしていた。

問題は材料だ。何を使うか……。お菓子なので、砂糖を使うことは確実だ。ただ、卵以外の材料を使うとなると、全く見当もつかない。

頭の中に描かれている菓子の色は薄い黄色だ。どうやってその色を出すのか……。その手法は直感は教えてくれなかった。

ペーリスに聞けばいいという考えもあるが、それもどうやら違うようだ。彼女は、料理は上手だが、お菓子作りはあまり行わない。次に料理好きという点でいくとメイちゃんだが、彼女も違う気がする。

相談すれば親身になってくれるが、おそらく、難しい化学式を書き出して、どのような素材を使えば琥珀色に変化するのかを追及するはずだ。

メイちゃんは忙しい。色々な仕事を抱えていて、そのようなことを考える暇はないはずだ。相談すれば恐らく、彼女は睡眠時間を削ってそれに当たるだろう。それは、するべきではなかった。

その他はどれも、どんぐりの背比べだ。リコ様、ソレイユ、マトカルに相談したとしても、明確な答えは得られないだろう。元女官長のミンシに相談するという手もあるが、間違いなく色々と小言を食らうことになる。絶対に答えが貰えるというのならば話は別だが、直感的にミンシは知らないと教えている。

……万策尽く。何とも言えぬ絶望感が心の中に湧き上がっていた。

彼女は頭の痛みもあって、早々にその場を切り上げて、屋敷に帰ることにしたのだった。

「あ、お帰り」

屋敷の扉を開けると、意外なことに夫のリノスがいた。こんな夕方に帰っているのは珍しい。彼は子供たちに囲まれながら幸せそうな表情を浮かべていた。そのとき、シディーの直感が働いた。

「この人だ」

思わず呟いた。今夜、彼に相談してみよう。彼女はグッと手を握った。

リノスと二人っきりになれたのは、風呂場でのことだった。子供たちが上がり、二人で湯船に浸かる。チャンスはこのときしかない。シディーは思い切って菓子のことを彼に伝えてみた。

「……カルメラかな？」

彼は事も無げにそう言った。カルメラ、という言葉は初めて聞いたし、一体どのようなお菓子なのか、見当もつかなかった。唖然とするシディーをそのままに、彼は一度作ってみるかと言って、早々にバスタブを後にしていった。

彼が取り出したのは、砂糖と水、そして、すりこぎのような棒だった。そして、メイちゃんが何か白い粉を持ってきた。彼は、ええと、確か……と言いながら、小さなフライパンのような鍋に水を張り、そこに砂糖を入れて火にくべた。

しばらくすると、砂糖水が煮立ち、何とも言えぬ甘い香りが広がっていく。その香りに誘われるように子供たちが集まってきた。彼は笑みを浮かべると、メイちゃんが持ってきた白い粉をその中に放り込むと、小さなすりこ木棒を使って素早くかき回し始めた。

一体何をしているのか、これからなにが出来上がろうとしているのか、皆、固唾を飲んで見守っている。ただ、飴色に沸騰していた液体は、シディーの頭の中に描かれていた琥珀色に変わっていった。それを見たシディーは、心をウキウキさせながらその成り行きを見守る。

「あーたぶん、もうすぐ膨らむよー」

かき混ぜながらリノスが口を開く。すると、飴色に沸騰していた液

体が、ふわりと膨らむ。鍋いっぱいに膨らんだために、きれいな円形になっていた。

……これだ！

シディーは心の中で叫び、思わず手を鳴らした。リノスはそんな彼女に笑みを向けながら、鍋の菓子を皿に移していく。

「懐かしいなぁ。さあ、食べてみろ」

リノスの勧めで、皆、次々に菓子を口にしていく。少し甘さが足りないとは思うものの、素朴な食べ物で皆、好評だった。

中でも最も気に入ったのがエリルだった。彼女は美味しい美味しいと言って、その大半を食べつくした。リノスはその様子を満足げに眺めながら、幼い頃、オジサンが作っていた光景を懐かしそうに話すのだった。

「これは、今後、私が作ります！」

シディーはそう宣言した。家族からは期せずして拍手が起こる。彼女は確信していた。この菓子が、この家族の幸せにつながるものだと。

後にこの菓子は、シディーの専売特許となり、リノス家の名物菓子となるのだった。特に、エリルにとっては、シディーと深い絆を築くきっかけとなるのだが……。そんな未来がこの菓子に待ち受けているとは、リノス家の誰もが、知る由もなかった。

第六百九十八話　琥珀色のお菓子（後書き）

コミック版『結界師への転生⑤』本日発売です！　リノスとリコのシリアスな表情が印象的な表紙となっています。是非、お手に取ってご覧ください！

拙作の販売累計が３０万部を突破したとのこと。これも偏に、皆様のお蔭でございます。心から御礼申し上げます。

第六百九十九話　聞いてないよ

ノーノ王国……。山間部に囲まれた盆地にその国はあり、食料の生産は低いものの、良質な馬が特産だった。そのため、この国の馬は高額で取引され、軍馬として世界中で活用されていた。王国は馬を売った金で食料などを購入し、何とか国としての体制を維持していた。

隣国には、セーファンド帝国が控えていて、このノーノ王国とは長きにわたって国境付近で小競り合いを続けていた。王国は、この帝国の肥沃な土地を手に入れることを悲願としていた。この国の一部でも手に入れられれば、王国の状況は劇的に改善するのだ。

だが、およそ三十年前に、帝国は国境に強固な城を築いた。石を積み上げて築かれたこの城はカーザ城と呼ばれ、王国が何度攻めてもびくともしなかった。とはいえ、この城を巡っての戦いは、王国側の必死の攻撃も功を奏して、帝国側にも少なからず被害を与えることができていた。

その後、両国は停戦協定を結び、現在に至る。だが王国は帝国への侵攻を諦めなかった。虎視眈々とその機会を窺っていたが、なかなかその隙を見出すことはできないでいた……。

◆　◆　◆

よく晴れた朝、ノーノ王国国王ホーボーンは、自らの弟であり、この国の宰相を務めるカボンを呼び出した。

「お呼びでしょうか？」

「うむ。そなた、聞いておるか？」

「……カーザ城のことでしょうか？」

「その通りじゃ」

カボン宰相は目を閉じて天を仰ぐ。彼は心の中で唸っていた。兄の考えていることが、手に取るようにわかるからだ。そんな弟の心境を知ってか知らずか、国王であるホーボーンは玉座から身を乗り出すようにして口を開いた。

「一週間ほど前から、カーザ城は改修工事が施されておる。単なる修繕ではない。大規模な工事じゃ。これは千載一遇の好機じゃ」

「確かにそうかもしれませぬ。しかし兄者、カーザ城を手に入れたとしても、我々の悲願は達成することはできませぬぞ」

弟の言葉に、ホーボーンは口をへの字に曲げる。いつもは国王様と呼び、常に兄である自分を立てる弟が兄者と呼ぶあたり、彼が危機感を持っていることは容易に察することができる。だが、国王として民の命を預かるホーボーンも、退くわけにはいかなかった。

「カーザ城を抜くことができれば、眼下にはあの肥沃な土地を手に入れることができる。カーザ城からセーファンド帝国の帝都までは、一つの砦もない。我らが疾風迅雷のごとくカーザ城を抜くことができれば、セーファンド帝国自体を併呑することも可能ではないか？」

「いや、それは難しい」

「何故だ」

「何度も申しているではありませんか。カーザ城を抜いたところで、セーファンド帝国はすぐさま大軍を派遣してあの城を奪還するに違いありません。帝都を落とすなど、夢のまた夢です」

「それが可能なのだ。今回はな」

「と、言われますと？」

「隣国のエルスモ王国のノマサ殿下より、援軍の約束を頂いた」

「……」

カボンは口をあんくりと開けて兄を見た。小心な兄にしてはよくやったと思う。東の隣国であるエルスモ王国は、セーファンド帝国と同等の勢力を誇る国で、馬の取引で最も重要な顧客だった。どんな条件でそのような約束を取り付けたのかは知らないが、そのエルスモ王国の次期国王であるノマサ殿下を動かしたのはお手柄だった。

だが、エルスモが動いたとしても、兄の悲願達成は難しいとカボンは考えていた。

「兄者、いかにエルスモの援軍を得たとしても……」

「二万じゃ」

「は？」

「ノマサ殿下は、我らが行動を起こせば、二万の援軍を送ると約束してくれた」

「ちなみに、ノマサ殿下にはどのような条件でそのような約束を取り付けられたので？」

「条件？　そんなものはない」

「いや、あのエルスモが無条件でそんなことをするはずがない」

「まあ、言ってみれば、祝儀だ」

「祝儀？」

「ノマサ殿下の妹君を、お前の妻とすることに決めたのだ」

「はぁっ！？」

「お前もそろそろよい年じゃ。ここらで一つ、身を固めよ」

「……」

「お前が幼馴染であるアルモと恋仲であることは知っている。だが、土台無理な話だ。お前は王族、アルモは母上に仕えていた侍女……。どう転んでもお前たちが夫婦になる可能性はない」

「いや、兄者、その話は……」

「いいや、もう決めたことじゃ」

「……」

「我らは行動を起こす。一刻も早くカーザ城に向けて兵を送るのだ。今、あの城はせっかく積み上げた石の壁を取り壊している。あの石の壁のない城など、裸城も同然じゃ」

「いや、そうであっても兄者、事はそんなに上手くは進まぬ」

弟の抵抗に、ホーボーンは苛立ちを覚えているのか、小刻みに貧乏ゆすりを始める。そんな兄の様子を見ながら、カボンはさらに言葉を続ける。

「確かに今、カーザに兵を進めれば、あそこを落とすことはできるだろう。しかし、帝国はそれでも我が国に勝てると確信しているのだ。だからこそ、ああして堂々と城の大規模改修を行っているのだ」

「それならば猶のこと好都合だ。敵は油断しているのだ。それを突いて何が悪い！」

「いや、カーザを落とされても帝国は、すぐに取り戻せると絶対の自信を持っているのだ。エルスモの軍勢二万が加われば、おそらく、アガルタとヒーデータがこの戦いに参戦する可能性が高い。そうなれば、我が国は滅亡するしかない」

「アガルタ？　ヒーデータ？　なぜ、世界に冠たるあの大国が我らの戦いに首を突っ込むのだ？」

「ヒーデータの皇帝と、アガルタの皇后の母親は、セーファンド帝国の先帝の娘だ」

「待て、その娘はすでにこの世にないのであろう？　アガルタとヒーデータが動く理由にはならんではないか」

「兄者は何もわかっておらんな。考えてみよ、自らの母者の出身の国から援軍要請をされれば、無視することは出来ぬ。特にアガルタが出てくれば、この戦いは厄介なものになる。兄者も知っている通り、あの国は、ヒーデータ、ニザと誼を結び、ラマロンをその膝下に置いている。それだけではない、あのクリミアーナまでも服属させている。あの国が本気で動けば、数万どころではない。数十万の軍勢が動くことになる。そうなったら、この国はアガルタの軍勢で埋まることになる」

「そんなことはないだろう。その娘の死で、セーファンドとヒーデータの縁は切れている。かの国らがセーファンドに援軍を出す義理はない。それにアガルタだぞ？　我が国とはどれだけ離れていると思っているのだ。どんなに急いでも、移動にはひと月はかかろう。その間に、すべてを終わらせればよいのだ」

「すべてを終わらせる？　どうするつもりだ？」

「カーザを落としてすぐに、セーファンドと交渉するのだ」

「何の交渉をするのだ？」

「決まっているだろう！　国境を決めるのだ。カーザの周辺の村々を我が国に併呑するのだ。セーファンドにとって、あの周辺の村々を失ったところで、屋台骨は揺らがぬ」

兄の言葉に、カボンはゆっくりと首を振る。

「お前は何を心配しているのだ！　言ってみれば、小国同士の小競り合いだ。こうしたことは過去、何度も起こってきた。そんなことに大国がわざわざ首を突っ込む理由はない。お前の心配は取り越し苦労だ。すぐさま兵を集めよ！　この戦いは余自ら指揮を執ろうぞ！　そうじゃ、その前にエルスモに援軍要請をせねば……。待てよ？　援軍を送ってもらうと同時に、花嫁も一緒に送ってもらえば一石二鳥ではないか？　わざわざ花嫁行列を仕立てずとも済むし、何より、エルスモの軍勢に警備されての移動じゃ。安全なことこの上ない！　ハッハッハ！」

ホーボーンは笑いながら玉座を立ち、その場を後にした。カボンは眉間に皺を寄せたまま、その後ろ姿を見送った……。

第七百話　援軍要請

それからひと月後、リノスの許にヒーデータ帝国から使者が訪れた。

その使者は、アガルタの都ではなく、リノスが住む帝都の屋敷に訪れた。しかもそれは、彼の義弟であるヴァイラス公爵だった。

突然の来訪に驚きながらもリノスは、妻たちと共に、ヴァイラスを迎えた。

「いや、突然押しかけてすみませんでした」

「いいえ、俺は別に構いませんが、一体どうしたのです？」

「実は、内々のお願いがありまして」

「内々のお願い？」

そのとき、リノスの隣に控えていたリコの気配が変わった。明らかに怒りの気配を醸し出している。それを敏感に察したヴァイラスは、慌てて手を振る。

「姉上、違いますよ！　姉上が想像しているようなことではありません」

「それならばよいのですけれど……。あなたのことです。また同じような過ちを……」

「同じような過ち？」

不思議な表情を浮かべるリノスに、ヴァイラスは照れたように、オホンと咳払いをする。リコはなおもヴァイラスに鋭い視線を向け続けている。

そんな雰囲気を変えようと、ヴァイラスは姿勢を正して、再びリノスたちに向き直った。

「実を言いますと、セーファンド帝国から援軍要請を受けたのです。しかも、我が国を通じて、アガルタ王国にも援軍を求めたい旨、書状に記されていました」

「セーファンド帝国？」

「……お母様の実家ですわ」

間髪を入れずにリコが口を開く。その声を待っていたかのように、ヴァイラスは懐から一枚の地図を取り出して、テーブルの上に広げた。

「我がヒーデータ帝国はここです。セーファンド帝国は、北東の海を隔てた大陸にある国です」

「ああ……ここは、バーリアル王国のある大陸の隣にあるんだな」

「左様です。まさしく、ライドアイランドの隣に位置しています」

「と、すると、ドルガから行くのが一番近い、か」

「そうなります。ドルガからですと、セーファンド帝国の帝都であるサンドまで、およそ二週間で到着します」

「二週間？　随分と時間がかかるんだな……」

「ええ。なにせ、セーファンド帝国は広いですし、この大陸を走っているジェラルド山脈が、五千メートルを超える標高なのです。ここを超えるのに、かなりの日数を要するのです」

「高い山か……。で、あれば、移動は大変そうだな。山をぶち抜くトンネルでも掘れば話は別だけれどもな」

「実は、トンネルはあるのです」

「あ、そうなのですか」

「ただ、人の手で掘っていますから、広さは限られていますし、大軍がその中に入ると窒息してしまうのです」

「なるほど、行き来はできるけれども……か」

「その通りです」

「では、援軍を送るとなると？」

「海からですね。このミカルという港町から陸路、帝都であるサンドに向かうのが一番です」

「それでも二週間もかかるのですか？」

「そうですね……この辺りは潮流が速く、しかも、北から南に向かって流れています。ドルガからミカルまでかなりの距離がありますし、舟を漕ぎ続けたとしても、相当の時間がかかります」

「で、どこまで援軍を送れと？」

「ここです。ノーノ王国と国境を接しているカーザ城です」

「おお、カーザ城ならば、私も聞いたことがある」

発言したのはマトカルだ。全員の視線が彼女に集まる。

「石を積み上げた高い壁を擁する難攻不落の城だと聞いたことがある」

「その通りです。今回は、この城を改修している際に、突如としてノーノ王国に襲われたのだそうです。元々、両国は国境付近で小競り合いを続けてきた間柄ですが、ここ最近は停戦協定を結び、比較的穏やかではあったのですが……」

「何でまた、突然攻撃を仕掛けてきたんだ？」

「帝国側がこの城の改修工事にかかったのです。積んであった石を一旦解体して、新しい石を積み直そうとしていたところに攻撃を受けたのだそうです」

「ああ、好機到来と見たのかね。停戦協定があるのに、随分と乱暴な話だな。で、戦況は？」

「帝国は、ハイザー司令官を中心に、一千の軍勢で城に立てこもっ

ているそうです。城を囲んでいるノーノ王国は五千の兵で攻めているようです。帝国は、一万の軍勢を帝都から繰り出しているとのことです」

「……なるほど。ちなみに、そのカーザ城には、水は出ますか？」

「水……ですか？　ちょっと私には……」

「あの辺りは山間の土地だ。おそらく、いい水が出るだろう」

マトカルが口を開く。彼女は愛息のファルコを抱っこしながら、ゆっくりと左右に揺れている。そんな彼女に笑みを投げかけながらリノスは、ゆっくりと地図に視線を落とす。

「で、あれば、この城は持ちこたえられるでしょう」

「それがそうとも言い切れないのです。ノーノ王国の隣国である、エルスモ王国が援軍を派遣したのです。その数およそ二万」

「二万？　それは、ちょっと……」

リノスは腕組みをして考える。数の上ではほぼ倍となる。軍勢の装備や士気、練度などの問題もあるが、数の上でいくと、セーファンド帝国に勝ち目はなかった。

「そうなのです。セーファンドの書状にも認められてありましたが、敵の狙いはカーザ城だけでない可能性が高く、下手をすれば、カーザ城を抜いた勢いで、帝都のサンドに迫ることになります」

「セーファンド帝国軍の規模はどのくらいですか？」

「全兵力を投入すれば、およそ五万というところでしょうか」

「五万、か。ちょっとやそっとでは負けることはなさそうだな」

「ええ。我々もそう思います。ただ、カーザ城が抜かれてしまうと、セーファンド帝国はかなりの打撃を被ることになります。なにせ、この城の周囲は、大規模な穀倉地帯ですから……。それが、軍馬で踏み荒らされるとなると、帝国としては、踏んだり蹴ったりと言ったところでしょう」

「なるほど。それでなくとも、帝国軍一万がカーザ城に救援に向かっている……。それだけでも、作物の被害は相当なものになるだろうからな」

「とはいえ、国が無くなってしまえば、すべてが水の泡になりますわ。何とかしてあげませんと……」

リコが悲しそうな表情を浮かべながら口を開く。リノスは再び腕組みをして考える。

「で、具体的に、陛下は俺に何を求めておいでなのですか？　ヴァイラス公爵を直接向かわせたということは、援軍を出せと言うことでしょうか？」

「できれば、義兄上に働いてもらいたい、と」

「ほう、では、俺に何をせよと？」

「はい。前置きが大変長くなりましたが、アガルタ王におかせられ

ては、このカーザ城を守りきるための力を貸してもらいたい。セーファンド帝国は、我が国にとって軍馬を供給する最大の国です。現在は婚姻関係は切れておりますが、まだまだこの国とは友好関係を保っていたいのだ。陛下はそう申されています」

「力……か」

リノスは唖然とした表情で、ヴァイラス公爵を眺める。彼も、何とも言えない表情でリノスに視線を向けている。

「力、と言われるからは、別に軍事力とは限らない、というわけですね？」

「……と、言われますと？」

「俺は、知恵を貸したいと思います」

「それは名案ですわ。さすがはリノスですわ」

口を開いたのはリコだ。彼女は胸の前で両手を合わせながら、ウキウキした表情で、さらに言葉を続けた。

「援軍要請に応えてヒーデータとアガルタの軍勢が向かえば、セーファンド帝国を救うことができるでしょうが、そうなると、国内は荒れ、下手をすれば、さらに大きな戦を引き起こすことにもなりかねませんわ。そうではなく、知恵を出すことによってうまくこの戦いを収めることができれば、被害は最小で済みますわ」

リコの言葉を受けて、リノスは腕を組みながら天を仰いだ。何とも言えない沈黙がその場に流れた。

「……わかりました」

諦めとも決意ともつかぬような言い回しで、ヴァイラス公爵は、さも申し訳なさそうにゆっくりと頭を下げた。

「ただ一つお願いがあります。そのカーザ城の地図があれば、見せてもらいたいのです」

「承知しました。おそらく、宮城の書庫にあるはずです。探してみます」

ヴァイラスの言葉に、リノスは大きなため息をついた。

第七百話　　援軍要請（後書き）

２０２１年最後の投稿となります。今年もお世話になりました。来年も是非、よろしくお願いいたします。どうぞ、よい年をお迎えくださいませ！

片岡直太郎　拝

第七百一話　カーザ城

「リノス様、今日の判断は正しいです！」

寝ようとしていたところに、シディーが口を開く。彼女はベッドの上に正座をして、両手で俺の手を握っている。

「正しい、か」

思わず苦笑いを浮かべる。俺にとっては関係ないっちゃ関係ない話なのだ。聞けば、セーファンド帝国は、リコと陛下の母上の実家とのことだ。俺にとっては義母の実家ということになるが、彼女はすでにこの世にはいない。理屈を言えば、セーファンド帝国とヒーデータ帝国との関係はすでに切れている。そんなところに、アガルタが援軍を送ったり、俺が手助けをしたりする義理はないのだ。

とはいえ、セーファンド帝国とは軍馬の購入先でもあるので無下にもできない。面倒くさいことこの上ないが、リコが喜んでくれたのが、俺にとってはせめてもの救いだった。

「アガルタが兵を出すのは、とても、とてもイヤな予感がするのです」

シディーの眼が真剣だ。よっぽどヤバイことになるようだ。

「これは私の想像ですが、セーファンド帝国は、ヒーデータとアガルタの援軍を期待しています。なぜなら、ヒーデータからは大規模な軍勢を期待できますし、アガルタ軍は、数は少なくとも、示威行

為としては十分すぎるくらいの効果を発揮するからです」

「まあ、アガルタ軍は全兵力を動員したとしても、二万が精々だ。そこにいくとヒーデータは十万くらいの軍勢は動員できるからな。数の上で優位に立つことはできるな」

「いいえ、セーファンド帝国が本当に欲しいのは、アガルタからの援軍です。たとえ、一千でもよいので、アガルタ軍を派遣して欲しいと思っています」

「俺たち、か」

「はい。リノス様も薄々はご存知かと思いますが、アガルタ軍一千が到着したとなれば、敵方の脅威は計り知れません。何ぜあの、クリミアーナ教国を撃破した軍勢が来るのですから、勝てる見込みはありません。それだけではありません。セーファンド帝国にとっては、アガルタが後ろ盾になっていると近隣諸国に知らしめることができます。つまりは……」

「セーファンドに手を出すと、アガルタが黙っていない、と。帝国の発言力は大きく増すことになって、後々、帝国周辺の国々の間で火種がくすぶることになる、か……」

「いいえ。私の直感では、世界を巻き込んだ大規模戦争に発展することになります」

「はあっ？　何で？」

「上手く説明はできないのですが、帝国周辺の国々が、こぞってこの戦いに参加する予感がしてなりません。それが引き金になって、

ヒーデータの軍勢も……」

「何だそりゃ？」

「ですから、リノス様が軍事力ではなく知恵を出すと言われたときには、心の中で上手い！　って叫んでました」

「そうなの？」

「はい。お見事です。最高の回答だったと思います。これで、多くの命が救われました」

シディーは俺の腕を掴みながらコクコクと満足そうに頷いている。その小さな手に、力が込められてきていた。

「あのさ、シディー」

「はい、何でしょうか？」

「ベッドに入っていいかな？　湯冷めしてしまいそうだ」

「あ……ああ、どうぞ。これは、私としたことが……」

シディーが顔を赤らめながら後ずさりしていく。俺はゆっくりとベッドに入って、その身を横たえた。いつもなら、シディーも横になるのだが、今日はどうしたことか、ベッドの上で正座したままだ。

「どうした、シディー？」

「ええと、あの……その……」

何故かモジモジしている。俺はニッコリ微笑むと、両手を彼女の体に伸ばし、パジャマのボタンを外そうとする。

「ちょっと待ってください！」

「えっ？　何？」

「あの……そういうことじゃなくて、お願いがあります」

「お願い？」

シディーが真剣な表情を浮かべているので、俺も起き上がって正座する。彼女はモジモジとしていたが、やがて意を決したように俺に視線を向けると、一気呵成に口を開いた。

「リノス様がカーザ城に行かれるときは、私も連れて行って欲しいのです」

「うん？　アガルタ軍を派遣すると、えらいことになるんじゃなかったのか？」

「そうなのですけれど……。何だか、リノス様はカーザ城に向かわれる気がするのです。そのときは、私を連れて行って欲しいのです」

「何で俺がカーザ城に行くんだ？」

「それは……わかりませんが、何となくそんな気がするのです。そして、そのときはマトカルがお供するような気がしてならないのです。ですから、そうなったときには、私を連れて行って欲しいので

す」

「うん……。まあ、時と場合によるが、考えておくよ」

「お願いします」

「どうして、カーザ城に行きたいんだ？　やっぱり、シディーが行った方が解決する……そんな予感がするのか？」

「まあ、そう、ですね……」

「……正直に言いなさい。……言わないと、優しくしないよ？」

「……水です」

「水？」

「カーザ城付近は、とてもいい水が出る予感がするのです」

「その水がどうしたんだ？」

「きっと、それで顔を洗うと、とてもお肌にいい気がするのです」

「えっ？　それって……」

「……それ以上は、言わないでください」

シディーは顔を真っ赤にして俯く。俺は半ば呆れながら、彼女をやさしく抱きしめる。

「まあ、この戦いが平和に解決すれば、それも可能だろう。そのためにもシディー、力を貸してくれ」

「……わかり、ました」

俺はそのまま彼女をベッドに横たえた。目をギュッと閉じて、両手を握り締めて小刻みに震えている彼女はかわいらしかった。

次の日、早速ヴァイラス公爵から、カーザ城の地図が見つかったとの書簡が届いた。俺は昼食後、マトカルを伴って宮城に赴いた。ちなみに俺は何も言っていなかったが、宮城に向かおうとするとマトカルが現れてお供すると言ってきた。何か俺の動きを見張られているのかと疑いたくなるほどのタイミングのよさだった。不思議に思って聞いてみると、何のことはない、ヒーデータから書簡が来たと、ちゃんと報告があったのだという。何とも報連相がしっかりしていると思わず苦笑いをしてしまった。

転移した先は、いつもの陛下の私室だった。そこには、陛下をはじめ、ヴァイラス公爵と、宰相閣下も控えていた。

「おお、すまぬの。わざわざ」

陛下がにこやかに出迎えてくれる。俺は少し困ったような表情を浮かべる。

「本当にそうですよ」

「まあ、せっかくじゃ。リノス殿の知恵を見せてもらおうかの」

陛下は飄々とした表情を浮かべながら、後ろに控えているヴァイラ

ス公爵に視線を向ける。彼は手に持っていた大きな地図を、机の上に広げた。

「……これは」

思わず絶句してしまった。そこには、まるで設計図かと思われる程に精巧に描かれたカーザ城の図面があった。いや、これは設計図だ。こんなものが、何でヒーデータ帝国に？

俺は思わず陛下に視線を向ける。彼はニコニコと笑みを浮かべ続けている。

「言うまでもないことだが、この図面が我が帝国にあることは、他言無用に願いたい」

宰相閣下が、真面目な顔で口を開く。なるほど。この優れた情報収集能力が、このヒーデータ帝国を世界の強国とならしめているのだろう。そんなことを考えながら、俺は静かに頷く。

「見ろ、城内の水路までちゃんと書き込まれている」

マトカルが思わず声を上げる。彼女は、複雑に書き込まれた設計図を眺めながら、あちこちと指さしている。どうやら彼女はこの設計図を読み解けるようだ。

「これは……山の湧水を城内に引き入れているのか？　飲み水として利用するだけでなく、排水用にも利用している。かなり豊富な水源があるのだな。これならば、ちょっとやそっとでは落ちることはない」

マトカルは頬りに頷いている。だが、問題はこの城に迫っている二万の援軍だ。さすがに二万の軍勢が到着すれば、一千の兵で持ちこたえるのは難しいだろう。

俺は腕組みをしながら、天を仰いだ……。

第七百一話　　カーザ城（後書き）

新年あけましておめでとうございます。どうぞ今年もよろしくお願い申し上げます。

この２０２２年が皆さまにとって、幸多き年となりますよう、微力ながらお祈り申します。

片岡直太郎

第七百二話　とまどい

セーファンド帝国――南北に長く四方を急峻な山々に囲まれ標高差もあることから、北部は豪雪地帯である一方、南部は比較的温暖であるなど、気候は多様性に富んでいる。その領土は広大であり、肥沃な土地からは様々な作物が収穫することができていた。

この国のもう一つの特徴が、「水の国」とも言われる、豊富な水源を要していることだった。国内には大小多数の河川が見られ、それぞれの河川が山々を侵食した地形も多数見られる。帝国はこれらの自然の恵みを上手に活用しながら、順調に国力を伸ばしてきていた。

現皇帝、セーファンド・カイン・ロウド四世は、荒っぽくて妥協心が薄く、短気で喧嘩っ早い性格だった。いわゆる感情家で、理屈は筋を通すことを徹底している。排他的で、他人を傷つけることもお構いなしな部分があるが、感受性が強く、ものに対する粘りに欠ける点が見られるが、優秀な家来によって支えられていた。彼の父である、コラニド・カイン・セーファンドは、激しい癇癪を持つ彼に、理性的・科学的で、合理的である思考を持ち、責任感が強い者たちを選んで、その家来に付けたのだった。

◆　◆　◆

「ヒーデータからの返答はあったか！」

皇帝コラニドは、額に青筋を浮かべながら家来たちに向けて言葉を投げつけた。彼は苛立っていた。そんな彼に、側に控えていた家来の一人が、落ち着いた声で口を開く。

「ございません」

「……なければ、再度使者をたてよ！」

「お言葉ながら陛下。先だって送りました使者が、ようやくヒーデータに着いた頃かと存じます。我らはヒーデータだけでなく、かの国を通じてアガルタにも援軍を出していただくよう求めております。ヒーデータが援軍を送る、送らぬ、を決めるのに数日、さらに、アガルタに使者を立て、そのアガルタが援軍を出す、出さぬ、を決めるのに数日を要しましょう。と、なれば、返答を頂くのに、どう急いでもあと数週間はかかるかと存じます。それに、我が国とヒーデータ帝国は、先帝陛下の御代には婚姻関係がございましたが、現在はすでに手切れとなっております。その国に何度も催促をするべきではございません」

至極まっとうな意見だった。だが、その正論が、皇帝コラニドの神経を逆なでしていた。

「ヒーデータの皇帝とアガルタの皇后とは、余と同じ血が流れておる。言わば、同族じゃ。その余の言を無下にはできまい。あの国たちが動けば、この戦は一兵も損じることなく勝利できるのだ！」

彼の言葉に賛同する者は一人もいなかった。齢は四十を超えているが、色は白く、幼い頃の美少年の面影を残した、気品ある顔立ちだ。細身に仕立てた口元の髭が、その品性を高めている。家来たちは一様に勿体ないと思っていた。黙っていれば、大国の皇帝として十分な姿なのだ。

一方のコラニドは、頭の中で様々な数字が浮かんでは消え、浮かん

では消えしていた。

カーザ城を救援するのは簡単なことだった。すでに一万の軍勢を向かわせている。ノーノの軍勢は粘り強く、しつこい。だが、数の上では圧倒的にこちらが有利だ。被害は出るだろうが、制圧することはできるだろう。問題は、その後ろから迫っているエルスモの軍勢だ。その数は二万と言われている。全兵力で当たれば負けることはないだろうが、こちら側も相応の被害を覚悟しなければならない。

まさか、エルスモが動くとは誤算だった。ノーノごとき小国がエルスモを動かすとは考えられなかったが、現に二万を超える兵がカーザ城に向かっているのだ。うかうかしていると、カーザ城を抜かれ、このセーファンド帝国が戦場となってしまう。そんな事態になれば、臣民から暗愚な王であるとのレッテルを張られることになる。

彼は周囲の者から、有能ではない、むしろ、皇帝としては無能であると見られていることを知っていた。だが、その評価は彼のプライドが許さなかった。皇帝としてその地位にいるからには、名君と呼ばれたい。そんな思いをずっと持ち続けていた。今、起こっているカーザ城の攻防は、自らの優秀さを示す絶好の機会だった。単に戦いに勝つのではなく、一兵も損じずにこの戦いを納めることができれば、自分の名声は大いに高まる。

皇帝コラニドの頭の中には、一つの戦略があった。それは、クリミアーナ教国教皇、ヴィエイユが、教都アフロディーテを奪還した際の作戦だった。彼女は一兵も損じずに、反乱軍が占拠した教都を無血開城せしめた。それは、アガルタ、ヒーデータの威信がモノを言っている。幸いにして自分は両国と血のつながりがある。これを利用してカーザ城を無血開城することができれば、兵を無駄死にさせることもないし、無駄な金を使うこともない。まさしく一石二鳥の

作戦だった。

しかし、家来たちは、両国が援軍を送って来ることについて懐疑的な見解を示した。もし、送ってくれたとしても小規模なものであり、戦いの役には立たない。とりわけアガルタが軍勢を送って来る可能性は、極端に低く見積もられていた。それは過去、アガルタの皇后であるリコレットとコラニドの息子、現在の王太子であるスラニドの縁談を断ったことがあり、リコレット本人におけるセーファンド帝国のイメージはよいものではないだろうと考えていたためだった。

むろん、このことはコラニド自身も十分に認識していた。だが、彼の考えは違った。過去は過去だ。リコレット本人はすでに、世界最強国であるアガルタの皇后としておさまっている。彼女の頭の中は、過去の遺恨ではなく、アガルタをどうこれから発展させていくことに注力しているはずだ。と、なれば、我が国と誼を通じることは、アガルタにとって損にはならないはずだ。皇帝自ら認めた書状は、必ず彼女の目に留まるはずだと考えていた。ここで両国から色よい返事をもらうことができれば、皇帝コラニドの卓越した外交力を示すことができる。彼は首を長くして使者の帰りを待ちわびていた。

とはいえ、兵の運用を間違えると、取り返しのつかない痛打を被ることになる。報告ではエルスモの軍勢の進軍速度は遅く、未だ、ノーノ王国の国境を越えたところだと言う。察するに、カーザ城の状況次第で動きを決めるのだろう。と、すれば、全兵力をもってカーザ城を囲む敵軍を蹴散らせば、この戦いはすぐに収束することは明らかだった。

……ヒーデータとアガルタが援軍を出す、という事実だけでも得られないか。

コラニドは心の中で呟いていた。両国が援軍を出すとしても、到着するまでには相当な時間がかかる。それは承知の上だ。だが、ここで両国が動いたという報があれば、味方の士気は大いに上がる。加えて、カーザ城を囲んでいるノーノの軍にも、エルスモの軍勢にも無言の圧力をかけることができる。そんなことを考えながら、側に控えている家来に視線を向けると、彼はコラニドの心などお見通しであるかのように、無表情のまま首を左右に振った。彼はさも不満、と言った表情を浮かべながら、小さく舌打ちをした。

そのとき、警備の兵士が一人、足早に彼の許に駆けよってきた。

「申し上げます」

「なんだ」

「城門に、このような書状が……」

兵士は戸惑った表情を浮かべながら、コラニドの側近に一通の書簡を手渡した。家来はそれを開いて読むと、同じように戸惑った表情を浮かべた。

「何だ、どうした?」

「いえ、その……」

「貸せ!」

まるでひったくるようにして、家来の手から書状を奪う。眉間に皺を寄せながら目を通したコラニドは、頓狂な声を上げた。

「……何だ、これは！？」

第七百三話　本物！？

書簡の送り主は、アガルタ王リノスとあった。しかも、そこにはたった一行だけの文章が記されていた。

「アガルタは貴国に対して、知恵をお貸しします」

皇帝コラニドは、しばらく書簡を眺め続けていたが、やがて、周囲に控える家来たちに視線を向けた。だが、彼らもまた、この書簡が示している意味がわからず、口を開く者は一人もいなかった。

「……この書簡を持って参ったのは、誰だ？」

コラニドは誰に言うともなく呟く。すると、目の前に控えていた兵士がスッと顔を上げた。

「ハッ。私は、リントと申します」

「お前の名を聞いておるのではないわッ！　この書簡をこの城に届けた者がおるであろう。その者は誰なのだ！」

「いえ……それが……気が付けば、あったのでございます」

「……そなたは、余を愚弄するのか？」

「いいえ、滅相もない！　門を警備しておりました兵士が、これを持って参ったのです。私も俄かに信じがたかったのですが、その兵が申すには、小さな物音がして振り返りましたら、この書簡が落ち

ていたそうなのでございます。門は二名の兵士で警備しておりますが、もう一人の兵も、その時間に門に入った者はいなかったと報告しております。また、門にはさらに二名の兵士が交代要員として控えておりましたが、その者たちも、門に近づいてきた者は一人もいなかったと申しております」

「……しかし、だ。実際にこの書簡は門番の背後に置かれておった。誰かが、兵士たちの目を掻い潜って、秘かにこの書状を忍ばせた。そう申すのか？」

「ハッ……。正直なところ、私も俄かに信じがたいことだと考えます。ですが、その書簡が置かれていたことは事実でございます。我々、門の警備を預かる者としましては、その書簡にアガルタ王の名前が記されていたことから、単なる戯言ではないと判断しまして、陛下の御前に持って参った次第でございます」

皇帝コラニドは再び、手に持っていた書簡に視線を向ける。割合にきれいな字で書かれていると思うが、これがアガルタ王からの手紙であるとは、俄かに信じることができなかった。まず、国璽が押されていない。通常は、国王からの書簡というものは、国王の名の下に、その国の印鑑が押されているものだが、これにはそれが見当たらない。また、文面もたった一行だけで、丁寧な説明とは全く無縁のもので、言ってみれば、これは単なるメモ書きに過ぎなかった。言い換えればこれは、これまでコラニドが目を通してきた国書の中で、最もシンプルな書簡であると言えた。卑しくも一国の主に贈るものとしては、ある意味では失礼極まりないものだった。確かに文面だけを見ると、どこかの町民が勝手に作ったものに見えるし、これを誰かのイタズラと断定するのは簡単なことだ。だが、彼は、この短い書簡が、単なるイタズラ書きにはどうしても思えなかった。

「これを、お前たちはどう思う？」

彼は周囲に控える家来たちに向けた口を開いた。彼らは一様に黙っていたが、やがて、その中で長老格となる男が、ゆっくりと口を開いた。

「アガルタからの書簡と見て、間違いはないと思われます」

「理由は？」

「はい。まず、この書簡が敵方からの策略であるという可能性はないものと判断いたします。我らを攪乱する、動揺させる手段としては、あまりにもお粗末すぎるからでございます。次に、我が臣民のイタズラ……という可能性も少ないと考えます。その理由は、臣民はカーザ城が包囲され、帝国軍の先発隊一万が出陣したことは知っておりますが、陛下がヒーデータ及びアガルタに援軍要請をしていることは知らぬことでございます。と、すれば、この書簡はアガルタ王からのものと考えてよいかと存じます」

「我が国とアガルタの距離の問題はどうじゃ？」

「はい。これは私の推測の域を脱しませんが、おそらく、鳥などの何らかの通信手段を用いて、この書簡を届けたものと思われます」

「アガルタにも、我らと同じ伝書鳩を使って情報を送り合う手段があると申すか？」

「それはわかりませぬ。しかしながら、アガルタ王国軍の移動の速さは、他国をはるかに凌駕しております。むろんそれには、我が国の優秀な馬たちも一つの理由にはなりましょうが、それだけでは、

噂に聞くような電光石火の移動はなしえないかと存じます。察するところアガルタには、我が国と同等、もしくはそれ以上の速さで情報をやり取りする手段を持っていると考えてよさそうでございます。とはいえ、返答の国書を作成するとなれば、相応の時間がかかりましょう。それに、国書を早急に作成したとしましても、それは大層仰々しいものとなりましょう。それを我が国まで運ぶとなると、どうしても時間がかかりましょう。と、すれば、この書簡は、早急に我が国に知らせるために用件のみを記した、アガルタ王からのものであると判断できるかと存じます」

実にもっともな答えだった。よしんば、この書簡に記されている字が、アガルタ王本人の者でなかったとしても、情報のみをやり取りして、この帝国内に潜ませた者に書かせればコトは足りるのだ。兵士に気づかれずにこの書簡をどうやって置いて行ったのかという疑問は残るが、まずは、これがアガルタからのものであると、彼は断じた。

「アガルタは軍勢ではなく、知恵を出す……か。となれば、アガルタ軍は動かぬということだ」

コラニドはまるで、自分で自分を納得させるかのように呟いて、大きく頷いた。

「と、なれば、ヒーデータの軍勢もアテにはできぬと考えた方がよさそうだな」

彼は苛立った表情を浮かべながら、椅子から立ち上がった。

「追加の援軍を送る外はないな」

コラニドは目をピクピクと動かしながら、周囲に控えている家来たちに向かって告げた。これは頭に血が上っているときに見られるクセであることは、家来たちは承知していた。こんなときに言葉を挟むと、さらに話がこじれることになるために、皆、一様に頭を下げたまま沈黙していた。

「第三軍と第五軍に、二日以内に出発せよと伝えよ。先発隊一万と合流して、早々にノーノの者どもを撃滅するのだ。総勢二万の軍勢だ。奴らを殲滅するのには十分であろう。エルスモの援軍が来る前に叩くのだ。ノーノの者たちを殲滅した暁には、全軍をもってカーザ城の改修に当たるのだ。さすれば、エルスモの軍勢も戦意を失い、自国へ退却するであろう。総司令官には、ブートを任ずる」

「お待ちください」

家来の一人が声を上げた。コラニドは話を遮られたことに腹を立て、口を開いた者を憎々し気に睨みつけた。

彼の視線の先には、知的な面差しをした若い男の姿があった。彼はまるで、諭すような口調でコラニドに口を開く。

「援軍を送ることにつきましては、さすがは陛下のご決断と感じ入りました。しかしながら、総司令官にブート殿を任じられるのは、お止めくださりませ」

「何故だ?」

「ブート殿は血の気が多く、感情にまかせて采配を振るいがちな点がございます」

「存じておる。だからこそ、ブートに行かせるのだ」

「……」

「ブートならば、これから向こう五十年間、ノーノの連中に我が国と刃を交えようと思わせぬようにすることができるであろう」

「では、陛下は無駄に命が失われてもよい、と仰せになりますか」

「そうは言っておらん。ブートの血の気の多さは、ノーノの者たちも十分に知っていよう。願わくば、ブートの名を聞いたノーノの連中が、そのまま引き上げてくれる可能性とてあるではないのか？余はそれも期待しておるのだ」

わかったか、と言わんばかりに、彼はクイッと顎を上げた。その彼に口を開く者は一人もいなかった。

第七百四話　目立たぬためには……

「ほう……。そうか……」

俺の目の前では、陛下が、鳩が豆鉄砲を食ったような表情を浮かべている。その隣に控えている宰相閣下と、ヴァイラス公爵も、同じような表情を浮かべている。何ともおかしな光景だ。

どうでもいいことだが、陛下とヴァイラス公爵は、驚いた顔がそっくりだ。母親は違うのだが、やはりこの二人は兄弟なのだなと思わせる。

「本当にそれでよろしいのでしょうか、義兄上……」

ヴァイラス公爵が、まるで絞り出すようにして口を開いた。

「まあ、そんなにどっぷりと入り込む気はないのです。一つ二つアイデアを出して終わらせようと考えているだけですから」

「……」

ヴァイラス公爵は口をポカンと開けたまま、陛下と宰相閣下に視線を向けた。相変わらず二人は、何とも言えぬ表情を浮かべている。

「ま、まあ、アガルタがそうしてくれるのであれば、我が国としては、特に何も言うことはないが……」

宰相閣下はそう言うと、まるで覗き込むようにして陛下の顔を見た。

彼はあらぬ方向に視線を泳がせながら、何か、物思いにふけっている。察するところ、ヒーデータとして、どのような対策を講じるかを考えているのだろう。

「わかった」

陛下はそう呟くと、ゆっくりと椅子から立ち上がった。そして、宰相閣下に視線を向けると、落ち着いた声で口を開いた。

「それでは、我が国からは、金三千を送ることとしよう」

「お言葉ながら陛下、セーファンド帝国は、我が国から援軍を求めておりますが……」

「ヒーデータの海はここ数日荒れておるために、兵士の輸送に時間がかかる。従って、取り急ぎ軍資金を送る……そんな口上でよかろう」

「畏まりました」

宰相閣下はそう言って恭しく一礼して、そのまま部屋を出て行った。

「リノス殿、くれぐれも無理だけはせぬようにな」

「承知しました」

陛下はさも申し訳ないと言った表情を浮かべている。俺はそんな彼に笑顔を向けた。

◆
◆
◆

結果的に、セーファンド帝国への支援は、俺自ら赴いて何らかの知恵を貸すことに決まった。俺一人で行って、すぐに帰ってこようと思ったのだが、それにはシディーが反対した。やはり、カーザ城の水を調べたいと言ってきた。

しかもそれに関しては、リコとソレイユ、そしてメイまでが賛成してしまっていた。リコとソレイユは、お肌にいい水、と聞いて食指が動いてしまったようだ。メイは研究者としての血が騒いだのか、その水の成分を調べたいと言ってきたのだった。

仕方なく、シディーも一緒に連れて行くことにした。

当然ながら、セーファンドに出かけていると言っても、毎晩転移結界を使ってこの屋敷に帰ってくる。のっぴきならない事情で現地に宿泊するときは、あらかじめ連絡を入れる。夕食がいらない場合も、必ず連絡を入れることを、リコから命じられてしまった。一応、一国を預かる王なのだが、中身は、そこら辺のサラリーマンと何ら変わらない。

で、俺の格好だが、やはり、素顔を曝していくのはよろしくないという意見で一致した。そこで、以前、ドルガの戦いで使った、ソレイユの布を今回も使うことにした。あれは実に便利だった。顔をぐるぐる巻きにしているにもかかわらず、息苦しさは全く感じなかった。ソレイユ曰く、あの布はさらに進化を遂げているらしく、何と、日焼け止めの効果もあるのだそうだ。まあ、それはどちらでもいいのだが。

問題はシディーだった。彼女をどうカモフラージュするかだが、基本的に彼女の顔を知っている者は少ないので、別に変装しなくても

よいのではないかと思ったが、意外にもセーファンド帝国とシディーの実家であるニザ公国は古い付き合いがあるらしく、帝国内にはシディーの顔を知っている者も少なくないのだそうだ。突然、アガルタ王の嫁がやって来たとわかると、色々と厄介ごとが巻き起こる可能性もあるので、やはり、彼女もある程度の変装をしていくことになった。

「それなら、私に考えがあります。ちょっと待っていてください。……決して、私の部屋を覗かないでくださいね？」

そんな物騒な言葉を言い残して、シディーはダイニングを出て行った。ピアたち小さい子供らが彼女を追いかけようとするが、そこはエリルが優しく引き留めていた。何としっかりした娘なんだ。我が娘ながら、いい女の子に育ったものだ。

「お待たせしましたー」

しばらくすると、機嫌のよさそうな声でシディーが帰ってきた。……何と彼女は、髪型を変えていた。

いつもはポニーテールにして、後ろの部分を三つ編みにしているのだが、それを何と、ツインテールにしているのだ。しかも、着ている服が、何かの制服？　のような格好だ。ちょっと待てよ？　この姿は、記憶がある。これは……？

「初〇ミク！？」

妻たち全員が振り返って俺を見た。その光景に俺も思わず驚いてしまい、絶句してしまった。シディーは不思議そうな表情をしているが、その格好は、それそのものだ。

「うわぁ……歌って踊れば、男子から人気が出そうだな……」

「何がですか？」

シディーが不思議そうな表情を浮かべている。子供たちは皆、唖然としている。それはそうだろう。いつものシディー母さんとはまったく趣が違うのだから。どう反応していいのか戸惑っているというのが正直なところだろう。

「ちょっと、歌って踊ってみてくれるかな？　すごくかわいいと思うんだけれど」

「え～」

シディーは困ったなという表情を浮かべながら、歌って踊り始めた。

……違う。違うんだシディー。そんなゆっくりとしたリズムじゃなくて、そんな、日本舞踊なゆったりとした舞じゃなくてだな。もっとアッテンポな曲で、元気はつらつと踊るんだ。ああくそ、前世にいる頃にもっと覚えておけばよかった。今の俺には、どんな曲だったか、どんな踊りだったのか全然覚えていない。うん、何とも惜しい限りだ……。

「いいよシディー。ありがとう。とてもかわいいよ」

「リノス様、全然そんなことを思っていませんね？」

「……ツ」

シディーに痛い所を突かれてしまった。いやでもこれは、誰が悪いわけではない。誰も悪くはないのだ。

「いいえ、本当に可愛らしいですわ、シディー」

リコが間に入ってくれる。彼女は本当にそう思っているのだろう。目がとてもやさし気だ。他の妻たちも、どうやらおおむね好意的に見ているようだ。メイとソレイユはニコニコと微笑んでいる。マトカルは……よくわからないと言った表情だ。

リコ、メイ、ソレイユがシディーを取り巻いて、色々と服のことについて話をしている。彼女は彼女で、少し照れながら答えている。

「これならきっと、私であることはわからないと思います」

シディーは堂々と胸を張る。うん、こう言っちゃなんだが、国王の妃には見えない。その一方で、冒険者にも見えない。この世界にはいない人種になってしまっている。前世の頃なら、秋葉原や、東京ビッグサイトのイベントで見かけたものだが、さすがにこちらの世界にはそう言った場所はないだろう。少なくとも、俺は知らない。

「ただシディー、この格好は目立ってしまいますわ」

リコが冷静に突っ込む。その言葉を受けてシディーはううっ、と呻き声を上げながら怯んでいる。そうなのだ。俺が顔を布で隠していく予定なのだ。言ってみれば、ある程度素性を隠していくのに、シディーのこの格好はすべてをぶち壊している。だが、シディーはどうしてもこの格好で行きたいらしい。彼女の眼がそう言っている。

「じゃあシディー、その上からローブを羽織っていきなさいな」

ソレイユが口を開く。なるほど、ローブですっぽりと覆ってしまえば、目立つことはなくなる。だが、シディーは不満そうだ。せっかく工夫したのに、それじゃ台無しになるじゃないかと目が訴えている。そのとき、ソレイユが口を開いた。

「いざという時に、ローブを脱げばいいのよ。いきなり中からその格好で出れば、可愛さも倍増するわよ」

「……しかたないなぁ。じゃあ、そうするわ」

シディーは顔を赤らめながら、頷いた。

第七百五話　　あれ、どうした！？

次の日、早速俺とシディーは、セーファンド帝国に向けて移動を開始した。

まず、帝都の屋敷から俺たち二人とイリモを連れて、ドルガに転移結界を使って移動する。以前、黒龍と戦った時に設置した転移結界が役に立った。ドルガの町の中には緊急連絡用として一つ設置しているが、町の外に設置したものは、特に活用することもないので、これは廃止しようと思っていたのだ。それがついついサボってしまってそのままになっていたのだが、それがこんな形で役に立つとは思わなかった。

ちなみに、先の黒龍との戦いのときに俺に預けられている黒龍のシャリオだが、ちゃんと彼女は働いている。しかもそこは、アガルタの本部、つまり、フェリスやルアラと同じ部署で働いているのだ。

神龍様に能力を奪われたとはいえ、明晰な頭脳はそのままで、しかも彼女は計算するのが異常な位早い。八ケタくらいの掛け算は、一瞬で暗算してしまう。そうしたこともあって、彼女はアガルタの財務を主に担ってもらっている。勤務態度もすこぶる真面目で、今のところ、無遅刻無欠席だ。彼女が入ったおかげで、フェリスとルアラはかなり仕事が楽になった。リコも折に触れて手伝いに行っているので、彼女らはほとんど残業せずに帰宅することができている。

話しを元に戻す。

そんなこともあって、俺はドルガまで一瞬で移動することができ、

そこからイリモの背中に乗って、セーファンド帝国を目指すことにした。イリモの翼の速さからすると、帝国までおよそ三時間で着く計算だ。何とも便利だ。

俺たちのいる場所からは海が見えるが、ここからわかるくらいに荒れている。風も強いし、波も高い。このドルガまで徒歩や騎馬でやってきて疲労困憊する中、この荒れた海を渡らねばならないと考えると、ゾッとしてしまう。

ほどなくして、俺たちはイリモの翼で上空に舞い上がった。シディーは俺の前にちょこんと座っている。俺はその彼女を抱きかかえるようにして座り、手綱を握っている。

上空は寒いので、結界を張って温め続けながら移動する。当然、そこには俺たちの姿が見えない効果も付与している。

荒れた海を渡ると、のどかな田園地帯が広がっている。すぐ目の前には標高の高い山がそびえ立っている。あそこを超えるのはさすがに難しそうだ。俺が心の中でそう呟くと、それを察してイリモは進路を西側にとる。標高の低いところを超えようとしているのだ。

しばらくすると、山間の深い谷が見えてきた。そこは真っすぐ北に延びている。イリモはその谷に入って、北に向かって進んでいく。

一時間ほど進んだだろうか、ふと右側の尾根に数十匹に及ぶ白い、中型のドラゴンが姿を現した。彼らは一様に俺たちに向かって咆哮を上げている。俺たちの姿は見えないはずなのだが。

何となく、だが、彼らの上空を進んでいるのが気に入らないような気がした。俺はイリモに少し高度を下げるように伝えた。すると、

咆哮はやんだ。

谷底には一筋の川が流れていて、その右岸には細い道が付いていて、そこを人々が旅をしていた。それを見ながら、この帝国に物資を運び込むのは、なかなか骨が折れそうだと考えていた。そう言えば、トンネルが掘られていると言っていたが、それはどこだろうか。見たところ、これだけ標高の高い山を貫くトンネルだ。掘るのに相当の苦労があったのではないだろうか。

そんなことを考えながら谷を飛ぶことさらに一時間、ようやく谷を抜けると、そこには広大な大地が広がっていた。思わず声が上がる。

「うわっ、すごい広いな」

「リノス様見てください」

シディーも思わず声を上げている。彼女が指さす方向を見ると、大小様々な川が流れているその中に、大きな湖があった。ひょっとして、この湖がこの国の水瓶なのだろうか、などと考えるが、確かこの国は豊富な水が出る国だったことを思い出して、思わず肩をすくめる。

なるほど、川の数が多い。それらはすべて山から流れ出ている。ということは、それだけ豊富な地下水が湧き上がっているのだろう。とすれば、もしかすると温泉も出るかもしれないな、などと考えていると、突然、大きな街が見えてきた。

田園地帯の中に突然現れた巨大な街は、バカでかいものだった。これがいわゆる、セーファンド帝国の帝都なのだろう。上空から見るとよくわかるが、都の西側に流れる大きな川を堀に見立て、そこか

ら都の周囲に縦横無尽の堀を築いている。言わば、日本の城郭によく似た造りとなっていた。南側だけ大きな堀が見当たらず、ここが弱点のように見えるが、直感的に南側から攻めるのはよろしくない気がする。この様子をマトカルに見せたら、彼女は何というだろうか。

イリモはさらに翼を動かして、北へ北へと移動する。驚いたことに、都を過ぎてもこの帝国は、ひたすらに田園地帯が広がっていた。と、考えれば、この国は大穀倉地帯を有していることになる。かなり豊かな国なのだ。

そのとき、ふと視線を下に向けると、眼下に俺たちと同じ方向に向かう一団を見つけた。どうやら、カーザ城に向かう援軍らしい。隊列を組んで、一定の速度で移動している。

「数としては、結構な人数じゃないのか、あれ。万を超えているんじゃないかな」

「そうですね……。ただ、私としては、あの軍勢からは安心感のようなものが感じられません。とは言っても、不安は感じませんので、どうなのでしょう。まあ、放っておいていいんじゃないでしょうか。それよりも、早くカーザ城に向かいましょう」

シディーにせかされるように、イリモは飛行速度を速めた。

◆◆　◆

「よーし、ここらで休憩だ」

ドルガを出てからちょうど三時間で、カーザ城のすぐ手前まで来る

ことができた。目の前には川が流れていて、そこでイリモは喉を潤している。俺は無限収納から人参をいくつか取り出し、彼女に与えた。

「はぁぁ、何かいいですね～。空気が美味しい」

シディーは気持ちよさそうに深呼吸を繰り返している。俺たちが降り立ったところは、山の中にある空き地だった。まるでキャンプ場のような開かれた場所で、上空から見るとここだけぽっかりと穴が開いているように見えた。

幸いにして全く人の気配はしない。どうやら魔物がいるようだが、高ランクの魔物の気配は感じない。精々、カースシャロレー程度の魔物で、ドラゴンクラスの魔物はいないようだ。

「よし、ここで準備をしよう」

「準備？」

「俺の顔を隠すんだよ。ちょっと待っていてくれ」

俺は懐から、ソレイユからもらった布を取り出して顔に巻いていく。すぐに顔は、布で覆われた。

「さてと。ここでの俺の呼び名を考えないといけないな。ドルガ戦では確か……スノリ大佐と名乗ったんだっけな？　同じ名前を名乗るのも何か芸がないしな……。かといって、大佐だけにシ〇アを名乗るのも、色んなところから怒られそうだしな。何せ、赤いものが一つも装備していない。となると……。そうだ、一層のこと、ケンシンと名乗ってみるか」

「ケンシン？」

「ああ、昔の武将の名前なんだ。……シディーは知らないよね。当り前だ。昔の、むかーしの武将だからな」

そう言うと俺は、背に挿しているホーリーソードを抜いて、それを天に向かって掲げた。

「運は天にあり、鎧は胸にあり、手柄は足にあり。死なんと戦えば生き、生きんと戦えば必ず死するものなり。その決意を以て二心無きことを神に向かって誓うは、不要なり。我こそが……我こそが、軍神なり。……シディー、どうした？」

「……何ですか、それ」

シディーがドン引きしている。あれ、おかしいな？　マトカルは惚れ直してくれたのだが。いや、あのね、これはね……と説明しようとしたそのとき、何かの気配を感じた。振り返ると、そこには、人が立っていた……。

第七百六話　飛んでいく？

全く反応できなかった。気づいたときには、俺の後ろに立たれていた。

こんな経験は久しぶりだ。俺は驚きを隠しつつ、ゆっくりと振り返る。そこに立っていたのは何と、エスカリーナだった。

サイリュースの里に居るはずなのに、なぜこんなところに、という俺の心の声が伝わったのか、彼女は無表情のまま口を開いた。

「ソレイユに手伝いに行けと言われまして」

「ええと、人違いじゃありませんか？　私は、ケンシンと言う、ケチな野郎でございます」

「お隠しにならなくても結構でございます。その顔を覆っている布は、サイリュースの里で作られたもの……。しかもそれは、私が仕立てたものでございます、アガルタ王様」

「あ、そうなの？　じゃあ、隠す必要もなかったわけだ。で、何だっけ？　ソレイユに何と言われたのだって？」

聞けば、俺たちがセーファンド帝国に向かうと聞いたソレイユは、彼女に同行するようにと勧めたそうだ。

「セーファンド帝国には、よい水が出るようだと聞きましたので……」

彼女は水の精霊と契約している。精霊はきれいな、よい水を好む。ルノアの森の水も決して悪くはないのだが、彼女としては、よりよい泉が沸く場所を求めているのだと言う。よい水に体を浸せば、それだけ彼女の体は浄化され、パワーも上がるのだと言う。

「それに……この国は遠いですから……」

ソレイユが俺たちに同行を進めたのは、水のことだけではなかった。何と、ラバデ王国のネーファ王から熱烈なアプローチを受け続けているというのだ。

イヤなら放っておけばよいではないかと思うが、その事実は全く知らなかった。言ってくれれば、やんわりと断りの返事くらいするのだ。さすがに、国王からの要請なのだから、相手も無下にはできないだろう。

「国王様からの使者が迎賓館に日参してきて、参っているのです」

今、エスカリーナの勤め先は迎賓館だ。それはごく限られた一部の者しか知らないはずだが、その情報がラバデ王国に漏れていることになる。これは由々しき問題だ。だが、使者も使者で、なにも日参することはないのだ。しばらく返事を待っている間、アガルタの都で羽を伸ばせばいいのだ。それをしないということは、相当な堅物か、もしかして……。

「それって、使者の男も迎賓館のサイリュースの誰かに、恋しちゃってるんじゃないのか？」

「その可能性はあります」

エスカリーナは淡々としている。確か、ラバデ王国の国王は、かなり知的でイケメンだという記憶がある。男前は何をやってもある程度は許されるものだと思っていたが、エスカリーナに関してはそうでもないらしく、彼女は真剣に嫌がっていた。

「ということで、しばらくの間、身を隠したいと思っていたところに、ソレイユがアガルタ王様との同行を勧めてくれまして……」

「う～ん、そうか。だけれども俺たちは基本的に、夜になると帝都の屋敷に帰ることになっているんだけれどもな」

「はい、聞いております。国王様がお帰りになるときに、私も一緒に里に帰ればと……」

「あーなるほど。ただなぁ。きれいなお姉さんと一緒にいると、心を奪われてしまわないかと思うんだが……」

「その点はご安心ください。私がアガルタ王様に何かを仕掛けることはあり得ませんし、逆に、アガルタ王様が私に興味を持たれたとしましても、私が王様に心奪われることは絶対にありません。天地がひっくり返りましても、それはあり得ないことでございます。ですから、どうぞ、ご安心なさってください。もし、王様の心が私に向けられていると感じたそのときは、すぐにこの場をお暇致します。そのような視線を向けられている中で同じ空気を吸うなどは、虫唾が走りますから」

……そこまで言わなくてもいいんじゃないか？　俺、何か、あなたに酷いことでもしましたか？　そんなことを考えていると、俺は無意識のうちにシディーの服の裾を握っていた。

「まあ、付いて来るのは構わないが、どうもその格好がなぁ……」

「その点はご安心ください。ソレイユがこれを持たせてくれました」

彼女はどこからともなく、一枚のローブを取り出した。これは、シディーが持っているのと同じものだ。彼女はそれをテキパキと着用する。フードを被ると、全く顔が見えなくなった。

「おお、すごいなこれ。全然顔がわからないよ。エスカリーナからは俺の顔は……見えてるんだ。至近距離まで近づいても顔が見えないってすごいな。一体どういう仕掛けになっているんだ、これ？」

彼女に近づいて色々と眺めてみるが、どういう仕掛けでそうなっているのかはわからない。……エスカリーナがイヤそうだ。いや、別に直接言われたわけではないのだが、何か、そんな気がする。

俺は彼女から遠ざかると、シディーに視線を向ける。彼女は察したのか、あらかじめ持ってきたローブに着かえる。着替えると言っても、今着ている服の上から羽織るだけなのだが。

「ああこれ、フードを被っている感覚がしませんね。すごいすごい」

フードの奥からシディーの声が聞こえてくる。何とも不気味な光景だ。

そんなこんなで、ある程度の休息を取ることができた俺たちは、再びイリモの背中に跨った。ただ、エスカリーナが乗る場所がないので困っていると、彼女は落ち着いた声で、事も無げに口を開いた。

「飛んでいきますから、心配なさらないでください」

「え？　飛べるの？」

「はい」

そう言うとエスカリーナは、人差し指を天に向ける。するとその先から一本の細い水色の糸が出てきて、俺の左手首に絡みついた。

「え？　これは……？」

「水で作りました糸です。よほどの衝撃を受けねば崩れることはありませんので、大丈夫です」

「ええと……この糸を俺に絡めて、そのまま飛んでいこうと……？」

俺の言葉に、彼女はコクリと頷く。

……イヤ、舐めてもらっちゃぁ困るんだ。イリモの翼はかなりの速度が出るんだ。こんな細い糸だったら、すぐに切れてしまうよ？　地面から近い所で切れればいいんだけれど、上空高く上がったときや、飛んでいる時に切れたら、地面に叩きつけられてしまうよ？

だが、彼女は自信があるのか、全く動揺や恐怖と言った感情を浮かべていない。まあ、最悪の事態を考えて、彼女に結界を張ることは了承してもらった。俺は彼女に、周囲と同化する効果と、衝撃を吸収する効果を付与した結界を張って、空に舞い上がった。

意外にもエスカリーナは俺たちにちゃんと付いて来た。体が軽いのか、それとも、軽くしているのか、彼女はまるで紙や薄布のように

たなびきながら俺たちについて来た。それは何とも異様な光景で、俺はあまり彼女に視線を向けないように努めた。

「あ、あれじゃないですか？」

程なくして、シディーから声が上がる。細い谷を抜けた山裾に、何やら人が集まっている気配がする。目を凝らして見てみると、どうやら砦のようなものが作られているのが見えた。あそこがカーザ城らしい。

イリモに留まってもらい、上空に留まりながら状況を観察する。カーザ城は細い谷の中に、山の斜面を削り取った形で作られていて、なるほど、ここはかなり攻めにくそうだ。川などは流れていないが、道が一番細くなるところを狙いすまして建てられているために、ここをノーノ側から大軍で落とすのは難しいと言える。とはいえ、よくよく見てみると、ノーノ側も、狭い道ながらもそこにびっしりと兵士を配置していて、間断なく攻め立てているようだ。どうやら、セーファンド側の消耗を狙っているようにも見えた。

そのとき、側にいたエスカリーナが、ハアハアと荒く呼吸をしていることに気が付いた。

「おい、大丈夫か？」

「ううう……」

「ちょっと一旦、降りようか？」

「……いい香り」

「は？」

「お水の、いい香りがする……」

俺は目を閉じて、思わず天を仰いだ。

第七百七話　少年のような司令官

取り敢えず、空から降りることにする。眼下には森が広がっているが、何とか俺たちが降りられる場所を選んで、着陸する。幸い、周辺には人の気配はなく、俺はここに転移結界を張ることに決めた。

そろそろ日も暮れる頃だ、一旦アガルタに帰ろうと声をかけようと振り返ると、シディーとエスカリーナは山を指さしながら、何か話し合っているところだった。

「あっちの方向よね？」

「そうですね、あちらから、かなりよい水の香りがします」

「本当によさそうね」

「ええ。間違いないと思います」

「楽しみだわ」

きっとこの二人は合わないだろうなと心密かに思っていたが、意外にも打ち解けている。まあ、二人がギスギスしていると、俺としても色々とやりにくいので、これはこれでよかったと思うことにしよう。

俺は二人に声をかけ、そこからアガルタに帰還した。

翌日、朝食を終えた俺は、シディーとエスカリーナを連れて、再び

カーザ城近くに張った転移結界に移動した。転移した直後、周囲に多くの人の気配を感じた。どうやら大軍がカーザ城に向けて移動しているようだ。おそらく昨日、上空から見た一団が救援に向かっているのだろう。

「じゃあ、俺たちも行くか」

二人は無言で頷く。さすがに空を飛んでいくわけにはいかないので、イリモは帝都の屋敷に残してきた。俺たちは森の中を進んでいく。

しばらく歩くと、先ほど移動していた一団が休息していた。俺たちの風体が珍しかったためか、兵士たちがガン見してきている。仕方がないので、一人の兵士の許に近づき、話しかけてみる。

「私はアガルタから参りました、ケンシンと申す者です。こちらは、セーファンド帝国の軍勢ですか？」

「……」

兵士は俺の顔を睨んだままゆっくりと立ち上がった。右手が剣の柄を握っている。完全に怪しまれているようだ。事と次第によっては、斬られかねない状況だ。

「いや、怪しいものではありません。アガルタから知恵を貸すために参りました」

「……」

兵士の顔がさらに険しくなる。周辺にいた兵士たちも立ち上がり、俺たちの許に近づいてきた。

「ああいや、邪魔する気持ちは全くありません。もし必要ないのであれば、引き取らせていただきます」

「何をしている！」

突然、男とも女ともつかぬ声が響き渡った。見ると、兵士たちの中から小柄な兵士が一人、こちらに向かってきている。装備している鎧などから、かなり高級な司令官と思われる。

「サーマ様、コイツら、怪しいです」

さっきまで俺を睨みつけていた男が、目だけを動かして話している。そこまで俺たちの風体は怪しいのだろうか。

「あなた方は一体、何なのですか？」

「……オホン、私は、ケンシンと申します。アガルタからやって参りました」

「アガルタ？　ケンシン？」

少年のような風貌をした司令官は、周囲の兵士と同じような怪訝な表情を浮かべる。

「サーマ様、自らをケンシンと名乗っております。どう考えても、まともじゃありません」

男は剣の柄に手をかけながら、グッと腰を落としている。すでにかなりの殺気を向けられている。それはシディーとエスカリーナも十

分に承知していて、彼女らは俺と少し距離を取っている。

「まあ、待て。待つのだ。アガルタからと言われましたね？　そしてケンシンと。どちらの流派でしょうか？」

……流派？　まさか、緋村〇心と間違えているのか、俺を？　飛天御剣流と答えればよいのだろうか。イヤイヤ待て。この世界にるろうにの世界はないはずだ。それに、俺のホーリーソードは逆刃刀ではない。飛天御剣流を名乗るには、無理がある。

俺が黙っていると、サーマと呼ばれた少年のような司令官は、ずいっと体を俺たちに近づけてきた。そして、よく通る声で、まるで噛んで含めるようにして口を開いた。

「私の知る限り、あまたある剣の流派の中で、最高の剣士は、剣聖・ガンボールであると承知しております。そのガンボールより上である剣の神、剣神を名乗るあなたは、一体何者なのでしょうか。アガルタからと言われましたが、アガルタ王国には新しく、剣聖・ガンボールを凌駕した、剣神を認めたということでしょうか。返答を承りたい」

……そこ？　いや、そんな大それたものじゃないんだが。あくまで、ナンチャッテ上杉謙信なのだけれど。何で話がそこまで飛躍するのだろうか。

「いえ……そういうことではなく、ただ単に、私の名前が、ケンシンということでして……。もし、ややこしいのであれば、別の名前にしましょうか？」

俺の言葉に、少年のような司令官は、何とも言えぬ表情を浮かべな

がら俺を眺めた。やがて、気を取り直した司令官は、スッと背を伸ばして、小さく会釈をした。

「これは失礼しました。先に承れば、アガルタから参られたと聞きましたが、一体、何用でしょうか」

「はい、アガルタ王様から知恵を貸すようにと言われまして……。もし、必要ない、ご迷惑と言われるなら、このまま帰りますので……」

「どうやってこの陣までたどり着いた？」

司令官の隣に控えている男が口を開く。相変わらず彼は、剣の柄に手をかけていて、俺に殺気を放っている。その周辺にいた兵士たちも、何ともイヤな殺気を放ってきている。

「この山の麓にはレリール部隊が陣を敷き、ここへは誰も通さぬよう万全の警備を敷いているはずだ。貴様たちは、どうやってレリール部隊の監視をすり抜けた？」

「それは……山中を抜けてきましたので……」

「ほう。このコマ山を越えたというのか。この山の尾根には、マルバーンの生息地となっている。彼らに襲われることなく、山を越えてきたというのか？」

「マルバーン？」

「銀の鱗を持つドラゴンだ」

「あー。あの白い中型のドラゴンか？　そうそう。ここに来る間、随分吠えられたよ。彼らは、かなり優れた探知能力を持っているようですね。俺も隠密行動には少々自信があるのですが、正確に俺の位置を捉えていたようで……いや、あれには驚きました」

目の前の兵士の顔が、少し驚いた表情に変わった。少し、俺の話を信じてくれたみたいだ。そんな雰囲気を察したのか、少年のような司令官がさらに口を開いた。

「リューベ、下がらないか。大変失礼いたしました。確かに、アガルタから我が国に対して、知恵を貸すと書かれた書状が届いていることは、私も承知しています」

「サーマ様、それは誠でございますか？」

「ああ、誠だ。陛下が私の目の前で書状をご覧になっておいでだった。ただ、届けられたものは国書ではなく、単なるメモ書きのようにも見えた。しかもそれは、人知れず城の門番の所に落ちていたと言われる。果たしてそれが本当にアガルタ王からの書状であるのかの信ぴょう性がなかったのだが……。実際、こうしてアガルタから人が参られたのだ。あの書状は本物であったと考えてよさそうだ」

サーマは再び俺たちに視線を向けると、右手を差し出しながら口を開いた。

「私は、セーファンド帝国軍の参謀をしております、カルエ・ルオ・サーマと申します。どうぞ、お見知りおきを」

「あっ、ああ。そうですか。私は、アガルタ王の傍近くに仕えます、ケンシンと申します。ええと、こちらは、私の相方の一人である、

シッ……デイトです。もう一人が……エス……タリアです」

俺の紹介を受けて、二人は戸惑いながら頭を下げる。俺は、力強く差し出された右手を握った。

「ところでケンシン殿、あなたは、アガルタ王様からの書状を携えておいででしょうか。もし、お持ちならば、見せていただきたいのですが」

俺からの書状？　何だそれ！？　何だか随分チェックの多い国だなぁ……。

第七百八話　総司令官

「ええと、何でしょうか、それは？」

俺の問いかけに、サーマはまたも不思議そうな表情を浮かべる。彼は少し困ったような顔をしながら、口を開く。

「通常は、王の勅命を受けて派遣される者であれば、王からの書状を携えているものですが……」

「危急のことでしたので……」

俺の後ろからエスカリーナが口を開く。サーマは口元に笑みを浮かべながら、彼女の方向に視線を向けた。

「すぐに出発せよとの命令でしたので、取るものも取り敢えず参りました」

今更ながらだが、エスカリーナの声が美しい。何だか、心が洗われるようだ。それは、サーマも感じているようで、彼の顔からは笑顔が消え、真面目な表情に変わっていた。

「確かに……。今は平時ではありませんね。大変失礼しました」

そう言って彼は、スッと腰を折って一礼した。

「それでは、総司令官殿の許に案内しましょう」

そう言って彼は、歩き始めた。

◆◆◆

程なくして陣幕が見えた。ここが本陣なのだろう。サーマは淡々とその中に入っていく。中は意外にも複雑な作りをしていて、グルグルと何周も廻らねばならなかった。別にいいのだが、こんな作りにしてしまっては、急を告げる使者などが来た場合、タイムロスが発生するんじゃないかと思ってしまうが、まあ、ここは何も言わないことにする。

「アガルタからお使者が到着しました」

突然、だだっ広い広場のようなところに出た。そこには、三人の男が山形になって座っていた。おそらく、一番奥にいるのが総司令官なのだろう。

サーマはスタスタと奥に座っている男の前まで歩いて行くと、片膝をついて控えた。

「アガルタの使者？」

男は怪訝な表情を浮かべている。パッと見、冷たい印象を受ける男だ。何となく面差しがサーマに似ている。もしかして、父親か？

「はい。アガルタから知恵を出すという書簡が参りました。その、知恵が到着致しました」

「と、なれば、あのふざけた書簡は、アガルタのものであったか……」

「父上……」

父上と言った。やっぱり親父だったんだな。ということは、この少年のような司令官も将来はあんな風になるのかと思っていると、総司令官が立ち上がって、大股で俺たちの許にやって来た。

「そなた、名は？」

「ケンシンと申します」

「ケンシン？　ふざけた名前だな」

ふざけているのか？　いや、俺としては真面目につけたんだけれどな。伝わらないのが実に残念だ。

ふと気づくと、総司令官が、後ろに控えているシデイーとエスカリーナを舐めるように眺めている。

「あ、こちらはシッデイト、こちらは、エスタリアです」

俺の紹介を受けて、二人ともゆっくりと頭を下げる。

「この者たちは……女か？」

「左様です」

「なぜ、顔を見せぬ。お主もだ」

「いや、それは……事情がありまして」

「事情？　一体何の事情があるのかは知らんが、いやしくも私はこの軍の総司令官だ。顔を隠したまま挨拶をするというのは、無礼だ。それとも、アガルタでは、そのような無礼がまかり通るような国なのか？」

「まあ、細かいことにはこだわらない国ではありますね」

「フン、奴隷上がりの男が主を務めている国だ。礼儀も何も知らぬのであろうな」

「まあ、国王はそうですが、その妻はヒーデータ帝国先帝の娘にして、現皇帝の妹です。それはそれは美しく、気品に溢れ、各儀礼に精通しています。彼女がいる限り、あまり行儀の悪いことはしないと思うのですけれどね。……うん？　何？」

後ろからシディーが、俺の裾を引っ張っている。リコのことだけじゃなく、自分のことも言えってか？

そのとき、エスカリーナが口を開く。

「帰りましょう」

「……」

「こんな無礼な男を助ける義理はありません」

「貴様、今、何と言った？」

総司令官の眉間に青筋が浮かんでいる。一体何を言い出すんだよ…

…。

「卑しくもアガルタ王様の命令をいただいて参っている私たちに、そのような無礼な振る舞い、許すことはできません。我々に暴言を吐くのは、アガルタに暴言を吐くのと同じ。それはすなわち、セーファンド帝国の言葉と受け取ります。すぐに立ち返りまして、アガルタ王様ならびに、ヒーデータ帝国の皇帝陛下に報告せねばなりません。おそらく、アガルタ、ヒーデータは言うに及ばず、ニザ、ラマロン、フラディメ、サンダンジ……それに、クリミアーナ教国らもセーファンド帝国の敵に廻ることでしょう」

「……待たれよ」

総司令官の顔が歪んでいる。痛い所を突かれてしまったという感情が見て取れる。司令官はできるだけ感情を表に出してはならないというのは、マトカルの言葉だが、彼女がいないのは彼にとって幸運だったと言える。彼女がいたならば、立つ瀬がない程に説教されていたことだろう。

「いや、言葉が過ぎた。先ほどの言葉は、取り消しをさせていただく」

苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべながら、総司令官は椅子に腰を下ろした。それを待っていたかのように、側に控えていた男が立ち上がり、兵士たちに手ぶりで指示を与える。すると、すぐさま兵士たちが椅子を持って現れ、俺たちに掛けるように促す。

「いや、ようこそおいで下さいました。私は、セーファンド帝国軍の参謀を務めます、ルワンドと申します。総司令官殿が疑われるのは無理もないのです。我々は、アガルタからの援軍や使者が到着す

るのに、少なくともあと二週間以上はかかると見積もっていたのです。それが、これほど早く到着するとは……」

「そんなに時間がかかっては、戦いが終わってしまうだろう」

少し声を落としていってみたところ、意外にも効果があったようで、ルワンドと名乗った男は、明らかに怯んだ姿を見せ、苦笑いを浮かべながら、所在なく座っていた椅子に腰かけた。

「で、ケンシン殿と申されたかな？」

突然、総司令官が口を開く。右手で顎髭を撫でながら、まるで俺を値踏みするかのような視線を向けてきている。

「アガルタ王は知恵を貸すと言われたが、具体的にどのような知恵を我らに貸していただけるのか？」

「まあ、それは現場を見てからになりますね」

「左様か。ご不明な点があれば、何なりとお尋ねになるがよい。まあ、言えぬこともあるが、知りうる限りのことはお伝えしよう。どのような知恵が出てくるのか、楽しみだ」

「父上……」

サーマが見かねて口を挟む。総司令官はチラリと彼に視線を向けたが、すぐに俺に視線を戻した。

「では、一つ、不明なことがありますので、教えていただけるとありがたいのですが……」

「ほう、何なりと」

「あなたのお名前を教えていただけませんか？」

「……」

総司令官の眉間に皺が寄った。そのとき、総司令官の後ろに張られた幕が跳ね上げられて、一人の兵士が全力疾走でこちらに向けて走り寄ってきた。

「申し上げます！」

「何だ」

「エルスモの軍勢が、動き始めました！」

「何ィ？」

総司令官は立ち上がって、肩で息をしながらその場に突っ伏すようにして控えている兵士に向けて口を開く。

「エルスモ軍の位置は？」

「おそらく、あと半日程度でこちらに到着するものと思われます」

「半日！？」

「軍勢の規模と移動速度の遅さから、おそらく、ノーノの王都であるリエンに入るものと思っておりましたが、リエンを前にして突然、

軍勢の速度を速めました。今、エルスモ二万がこのカーザ城に向けて殺到しております」

「不味いな。ということは、カーザ城を囲んでいるノーノの者たちがさらに攻撃を仕掛けてくる……か」

総司令官は、何かを考える素振りをしていたが、すぐに俺に視線を向け直した。

「そこもとであれば、何となさる？」

……いきなり俺に聞くんかい。

第七百九話　難攻不落

……無能だな。

こう言っちゃなんだが、それが正直な感想だ。たぶん、後ろに控えているシディーもエスカリーナも同じ感想を持ったことだろう。

敵が攻めてきているのだ。カーザ城を支援するのか、それとも退却するのか、答えは二者択一しかない。そして、その最終決断を下すのが総司令官という者の務めだ。今は一刻も早くその決断を下さねばならない。それをせず、ついさっき現れた男に相談している時点で、この男の司令官としての能力は、かなり低いと思って間違いはない。

ただ、己が無能であることを承知していて、俺に判断を仰ぐというのであれば、それは理解することができるが、残念なことに、この男は己の虚栄心を満たすために俺を利用しようとしているのだ。それを俺に悟られている時点で、この男はダメだ。

とはいえ、カーザ城には一千の軍勢が立てこもったままだ。まずは、彼らの命を救うのが先決だろう。

俺が黙っていると、情報が少なすぎて困っていると解釈したのか、総司令官の息子であるサーマが口を開いた。

「我らは現在、総勢二万の軍勢でカーザ城を支援しています。対して、ノーノ軍の軍勢は五千。しかし、エスルモの軍勢二万がこちらに向かっております。となれば、数の上では、我が軍は不利となり

ます。……地図を」

彼は部下に命じて地図を持ってこさせた。てっきり、私たちで指揮を執りますとでもいうのかと思ったが、どうあっても俺に意見を出させたいらしい。まあ、いいだろう、と心の中で呟きながら、地図に視線を向ける。

急峻な山の中に築かれたカーザ城は、大軍で攻め寄せるには難しい、まさに自然の要害を利用した見事な城と言えた。サーマの説明では、そこにさらに石を積んで防御力を強化しているのだという。ということは、元々あった地形に土を盛って手を加えているということだろう。

「ここから、カーザ城までの距離は」

「およそ五分もあれば。そこを曲がれば、すぐカーザ城が見えます」

サーマの指さす先には、川が大きく曲がっている。とすれば、ちょうどこの目の前にある山の裏手にあるということだ。

「では、取り敢えず、現場を確認しましょうか。時間もないことでしょうし」

「わかりました。私が案内いたしましょう」

そう言ってサーマは歩き出した。

河原のために、ゴツゴツとした石がそこら中に転がっている。足を怪我するかもしれないので、シディーとエスカリーナには結界を張っておく。俺たちが歩き出してもなお、セーファンド軍に動きは見

られない。

「全然動きが見えないですね」

「……」

俺の言葉にサーマは反応せず、淡々と歩き続けている。そんな彼にさらに言葉を続ける。

「後の一万の軍勢はどこにいるのです？」

「カーザ城の後ろに陣取って、城を支援しています」

「で、あれば、今の状態であれば、カーザ城が最前線になるということですね。このままだと、城が抜かれてしまう可能性が高くなりませんか？」

「……」

都合の悪いことは答えない主義なのだろうか、サーマはまたもやだんまりとなった。しばらく歩くと、目の前に切り立った崖の上に築かれた城が見えた。

小規模ながら、石を積み上げて作られた城は、見た目にも防御力が高そうだ。あの崖になっている部分にも石を積み上げて石垣を作れば、さらに防御力が高まるだろう、などと考えてしまう。

さらに目を凝らすと、城の先にある山に、何やら人影が見える。

「あれが敵です」

「……」

ふと左手を見ると、山の斜面に夥しい数の兵士が陣取っている。これが、セーファンド軍の先発隊一万なのだろう。そうしているうちに、目の前に城門が見えてきた。

サーマが近づくと、まるで自動扉のように門が開いた。ギギギギギーと重々しい音がする。

「どうぞ」

促されて中に入る。門番なのだろう。兵士の格好をしている男たちが控えていて、サーマと俺たちに挙手の礼を取っている。皆、かなり汚れている。これまでの戦いの凄まじさがひしひしと伝わってくる。

そこは石を積み上げて作られていた。察するに、元々あった地形に石を積んで、この部屋を作ったのだろう。それにしてはかなり広い部屋だ。兵士の休息場所だろうか。

サーマは奥にある階段を上がっていく。彼はスタスタと上がっていくが、かなり急な階段だ。シディー達が落ちないか心配だったが、特に問題はないようだ。シディーは高所恐怖症ではなさそうだし、エスカリーナに至っては、軽やかに階段を上ってきた。俺は高所恐怖症なのでガクブルだったが、女子二人の前でそんな醜態をさらすわけにはいかないので、必死の思いで階段を上った。

登り切るとそこは、小さな部屋になっていた。目の前に扉が見える。俺たちが上って来るのを確認して、サーマは扉を開ける。

「うおっ」

思わず声が漏れてしまった。目の前に滝があったからだ。どうやら、山から引いた水であるらしい。薄暗い通路を通ると、広場のような場所に出た。どうやらあの出入り口は秘密の通路になっているらしい。

目の前にはこれも石で作られた大きな水盤が備えられていて、そこに水が満々と湛えられている。水は常に流れているようなので、溢れてこないのかと思ったが、底に穴が開いているのだと後になって教えてもらった。

エスカリーナがその水を掬って飲む。シディーも両手を水盤につけて、水を含もうとしている。サーマは喉が渇いていると思っているのか、俺たちを無表情のまま眺めていた。

「「いい水」」

見事に女子二人がハモった。本当にいい水なのだろう。エスカリーナがほわわっとなっているのが、後ろから見ていてもわかる。二人は見合って頷き合っていた。

サーマが無言のまま歩き出す。それに釣られて、俺たちも歩き出した。

彼はそのまま外に出た。バルコニーのような作りになっている。ふとみると、石畳と土の部分が見事に分かれている。どうやら、この石畳の部分が石を積み上げて新たに作ったのだろう。と、すると、この城は小規模とはいえ、凄まじい数の石を積み上げて作られてい

ることがわかる。帝国はかなりの人員を割いてこの砦を築いたのだろう。ということは、ここは帝国にとって絶対死守せねばならない拠点なのだ。

バルコニーから眺めると、眼前に大きな川が流れていた。その川は大きく蛇行していて、この砦から先はS字を描くようにして北に延びている。川を渡った先には、広い場所があるが、河原なのだろう、石で覆われていて、素人眼に見ても移動し辛そうだ。あそこに軍勢を置いたとしても野営は厳しいだろうし、攻め寄せるにしても石に足を取られて思うように動くことはできないだろう。

砦の右手には急峻な山がそびえている。この上から攻撃を仕掛けるのは難しいだろう。対して、左手に視線を向ければ、ここはなだらかな山裾が広がっているが、セーファンド帝国軍がひしめいている。ふと見ると、川端に、これも石でできた低い塔のような建物が見えた。そこは砦の趣があるが、石が崩されていて、ほとんど使うことはできなさそうだった。察するに、帝国が改修していたのは、あの部分であるようだ。

こうして見てみると、なるほど、あの改修されている砦はいい位置に作らている。敵が川を渡ってくれれば、このカーザ城とあの砦から飛び道具を使えば、いわゆる十字砲火となって大打撃を与えられる。逆にあの砦を攻めれば、砦とこの城の間に弓隊でも配置すれば、敵の横腹を付くことができる。難攻不落と言われた理由がよくわかった。

改めて北の方角に視線を向ける。川を挟んだ向かい側の山にノーノ軍が陣取っている。あそこに二万の援軍が到着すれば、おそらく敵は総攻撃をかけるだろう。そうさせないためには、あの総司令官が率いる軍勢一万が、この城の前に広がる河原に陣取るべきなのだが

……。

俺は腕を組んで、目を閉じながら考えを巡らせた……。

第七百十話　余裕？

「……で、何かよい策は思いつかれたかな？」

カーザ城の見学を終えた俺たちは、すぐにセーファンド軍の本陣に戻った。その間約一時間程度だったが、本陣に動きらしい動きは見られず、辛うじて、先ほどまでは見られなかった幕僚数名の顔が見えていたことくらいだ。

その中に一人、ボロボロの状態になっている男の姿があった。

彼は総司令官から一番遠い席に座っていた。何か不満があるのだろう。ぶ然とした表情を浮かべ、右足をせわしなく動かしていた。

総司令官はそんな彼には構わず、幕僚たちを俺に引き合わせようとしていた。

「ケンシン殿、紹介しよう。セーファンド帝国軍……ッ」

俺は総司令官の言葉を右手を挙げて遮った。彼は一瞬、呆気にとられた表情を浮かべたが、すぐに苦虫を噛み潰したような表情を浮かべている。

「あちらの方は？」

「……」

「あちらの方は？」

俺は右手を挙げたまま、ボロボロの鎧を纏う男に視線を向け、口を開いていた。言ってみれば、総司令官を完全に無視した状態なのだが、直感的に彼の話を聞いたほうがよいと判断したのだ。

「……無礼であろう？」

「そんなことをしている時間はないと思いますが。……あちらの方は？」

総司令官は小さく舌打ちをした。俺は彼から視線を逸らしていたが、その音が聞こえてきた。よほど腹に据えかねているのだろう。

ただ、俺からすれば、この総司令官の動きは理解に苦しむ。あと半日程度で敵が到着するのだ。迎撃するにせよ、撤退するにせよ、準備を万端にしておかねばならない。ここには少なくとも二万の軍勢が居座っているのだ。で、あれば、その準備を完了するには数時間はかかる。きっとマトカルやラファイエンス、クノゲンなら、俺がいない間に陣立てを考えて、いつでも動ける準備を整えているはずだ。

残念ながら、俺の眼前では兵士たちが軍装を解いて、休憩している。今すぐ招集をかけたとして、完全に態勢が整うまで少なく見積もっても一時間はかかるだろう。そこから移動して陣立てを整えるのに数時間。その間に兵士たちに食事も摂らせねばならない。そう考えると、何もかもが遅すぎるのだ。

そんなことを考えていたそのとき、貧乏ゆすりをしていた男が立ち上がり、小走りにこちらに向かってきた。そして彼は俺の前に片膝をつき、一礼した。

「私は、カーザ城守備隊長、ホルムと申します」

「ホルムさんですか。私は、アガルタから参りました、ケンシンと申します」

「アガルタからですと!?　何と……援軍、感謝申します!」

「いや、援軍ではないのですよ。あくまで知恵をお貸しするだけなのです」

「左様ですか……。いや、アガルタのお方が味方に立っていただくだけでもありがたいことです。感謝申します!」

嘘、偽りのない真っすぐな目だった。頭の切り替えも早い。人のよさそうな雰囲気を持っているので、きっと、部下から慕われているのだろう。そうでなければ、いかに堅牢な城を擁しているとはいえ、五千の軍勢を一千の軍勢で釘づけにして、守り通しているのだ。軍人としての資質、指揮能力に関して言えば、総司令官よりこの男の方が優れているのは明白だ。

「先ほど、サーマさんの案内でカーザ城を見学させてもらいました。見事な城ですね」

「はい。お陰様で何とか、これまで持ちこたえることができました」

「ただ、エルスモ軍二万がここに迫っていると聞きました。数の上では敵が有利になりますよね?　何か、お考えはありますか」

「はい。こちらに」

彼は俺を促して、総司令官が座る席の後ろに立てかけられている木の板がある場所に向かう。俺の後ろから総司令官や他の幕僚たちも歩いてくる。そこには、カーザ城周辺の地図が掲げられていた。

「敵は二万ですが、幸いにもここは山間の地です。数の上では劣っておりますが、我らには地の利があります。一刻も早く、総司令官殿の率いられる軍勢を、この城の前に移動させるのです。さすれば、城の守りは盤石となります」

彼の作戦は、俺の思惑と一致する。それができれば、川が堀の役目を果たして、防御力は格段に上がる。川を渡って来たら敵を叩く……。長期戦にはなるかもしれないが、カーザ城救援という役目は十分に果たすことができるだろう。だが、その彼の意見に、幕僚の一人が口を挟んだ。

「ホルム！　貴様は総司令官殿に前線に出よと言うのか！」

いや、それがお前の仕事やん、と思うが、黙っておくことにする。一方のホルムは、その幕僚に対して、一歩も引かぬ姿勢を見せた。

「それがお嫌ならば、現在、裏山に布陣しておいでのラウネスク様率いる一万の軍勢が、リネン山に布陣しているノーノ軍を叩けばよろしいのです。数の上においては、我が軍が勝っております。リネン山を抑えることができれば、たとえエルスモ軍二万が到着したとて、容易に我が国には入って来られません」

至極まっとうな意見だ。思わず大きく頷いてしまった。というより、先発隊一万は何をしていたのだろうか。むしろ、すぐに対岸の山を抑えていれば、こんなに慌てることもなかったのではないかと思っ

てしまう。そのとき、総司令官が口を開いた。

「そんなことは百も承知だ」

「……」

わかってんのなら、早くやりゃいいじゃないか。心の中でそう呟いていると、彼は驚きの一言を放った。

「そんなことをすれば、我が軍に犠牲が出るではないか」

「「はあっ!?」」

……思わずホルムとハモってしまった。彼は、お前、何言ってんの？　と言わんばかりの表情を浮かべている。きっと俺も、同じような表情を浮かべているのだろう。

「総司令官殿は、自軍の将兵を消耗するのが、惜しい。そう言われるのですか？」

ホルムの顔が紅潮している。明らかに怒りを覚えている。そんな彼に、総司令官はフンと鼻を鳴らして、冷たい眼差しを彼に向けながら口を開く。

「我が軍の損失を最小限に押さえよ。それが、陛下のご命令である」

「バカな！　敵はもうそこまで迫っているのですぞ！　そんな悠長なことを言っておっては、勝てる戦いも負けてしまいます！　総司令官殿は援軍に来られたのでしょう？　カーザ城を救援に来られたのでしょう？　自軍の損失を考えていては戦いになりません！　こ

の二万の軍勢は、一体何のための軍勢なのですか！」

「ホルム！　黙らないか！　言葉が過ぎるぞ！」

幕僚の一人が、唾を飛ばしながら大声を上げる。そんな二人を、総司令官は右手を挙げて宥めた。

「ホルム、貴様の気持ちもよくわかる。だが、陛下のご命令は絶対である。そのために我らは、アガルタからの使者……いや、軍使を受け入れたのだ」

「……」

ホルムがものすごい目で俺を睨んでいる。いや、俺を睨まれても困るんだが……。

「それでは、ケンシン殿の策を承ろうか」

総司令官が涼しい顔で俺に話しかけてくる。この男は、何でこんなに余裕をかましていられるのだろうか。何か、起死回生の案でもあるのなら話は別だが、どうもそんなものはなさそうだ。今、まさにカーザ城の危機が迫っているというのに、それを察知する能力がないのは、明らかに致命的だ。

「いやぁ……難しいですねぇ……」

「フッ」

総司令官が明らかに俺を侮蔑している表情に変わった。彼は再びフン、と鼻を鳴らすと、側に控えているホルムに視線を向けた。

「ホルム、カーザ城に戻るのだ」

「……」

「お前は殺到するエルスモ二万の軍勢を引き付けるだけ引き付けるのだ。敵が攻め疲れたそのとき、我らは総攻撃をかける」

「なっ!?　ふざけ……」

「冗談としては面白いが、この状況では、笑うに笑えない作戦ですね」

俺の言葉に、総司令官が再び視線を向けてきた。その眼には、憎しみの色が見て取れた。

第七百十一話　論破

総司令官は口元に笑みを浮かべながら、俺に近づいてきた。かなり強い殺気を発している。コトと次第によっては、俺を斬ろうと考えている。

この男の考えていることは、手に取るようにわかる。俺を殺しても、戦闘に巻き込まれて、アガルタからの使者が死んでしまったとでも言えばいいと思っているのだ。それに、俺からいい案が出たとしても、最終的には自分の手柄としようと考えているのだ。そんな男にまともな指揮が執れるわけはない。確実に多くの兵士の命が失われることになるのは明白だ。

別に、俺やアガルタにとって、この帝国がどうなろうと知ったことではない話だ。確かに、軍馬の供給先が無くなってしまうのは残念なことだが、それは別の取引先を探せばいいだけだ。

とはいえ、俺はこのホルムという男が何となく気に入っていた。何とかして助けてやりたいと思わせる男なのだ。仕方がないので、この厄介ごとを引き受けることにした。

「知恵もなにもない方は黙っていただきたいですな。それよりも、早くこの場を離れた方がよいのではありませんかな？　これから、敵軍二万がここに殺到する。怪我せぬうちに、はやく帰られたほうがよい」

「いや、別に私は難しいと言ったまでで、知恵がないとは言っていませんよ」

「ほう、ならば承ろうではないか」

「ホルムさん、ちょっと教えてもらっていいかな？」

「ウヒャイ」

俺に話しかけられることを全く想定していなかったのか、返答がおかしなことになっている。そんな彼を微笑ましいなと思いつつ、俺は言葉を続ける。

「カーザ城は、水が豊富なようですね」

「はい、いい水が出ます」

「その水の手は止められますか？」

「と……止める、とは？」

「ですから、水が流れないようにできますか？」

「一体、何を言い出すのだ？」

総司令官が話しかけてくるが、俺は右手で彼の言葉を制する。予想通り、かなり怒っている。

「カーザ城の水は、山に沸いている泉から直接水路を使って引いています。しかもそれは、常に流れている状態ですので、止めるとなると、水路をせき止める他ありません……」

「ちなみに、その泉は、カーザ城から近いのですか？」

「いいえ。城から四キロ程上ったところにあります」

「四キロ！？　となると、山から水を引くのに、かなりご苦労されたのでしょうね」

「いや、まあ……」

「謙遜しなくてもいい。それをやった人たち全員が偉いですよ。生半可な工事ではなかったでしょう。いいえ、わかります。俺にはわかりますから」

「はっ……はあ……」

ホルムが照れている。顔を赤くして、頭を掻いている。褒められるのに慣れていないな？

「なるほど。で、あれば好都合です。私の作戦は、カーザ城の水の手を止めていただきたいのです」

「な……そんなことをすれば、我々は籠城できなくなります！」

「まあ、そうでしょうね。あなたがそう言うのであれば、まさしくそうなるのでしょう」

「いい加減にしないか！」

総司令官が大音声を上げる。彼はツカツカと俺のすぐ近くまでやって来て、体を寄せてきた。かなりの至近距離だ。何とも気持ちが悪

い。

「さっきから何を言っているのだ！　我々は忙しいのだ！　邪魔をするならば帰ってもらいたい！」

「ええ、帰れと言われれば帰りますが、私の作戦は聞かなくてもいいのですか？　一応、帝国軍に一名の死者も出さない作戦なのですけれどもね」

「必要ない」

「ああ、そうですか」

「貴殿のことは、アガルタ王に直接、私から報告させていただく」

「直接？　あなたが？」

「ああ。セーファンド帝国軍総司令官として、直接アガルタ王に抗議の書簡を送らせていただく。当然、ヒーデータ帝国皇帝にもだ」

「今、承りましょうか」

「何ィ？」

しまった。今の俺はケンシンだった。この会話の流れは不自然だ。やっちまったなと思っていると、絶妙のタイミングで、ホルムが口を挟む。

「お待ちください！」

「何だホルム。お前は黙っていろ」

「私は、ケンシン殿の作戦を聞いてみたく存じます」

「今の話を聞いてわからんのか！　この男は全くの素人だ！　そんな男の話を真に受けるバカがどこにいるのだ！」

「ケンシン殿、続きをお話しください」

「ああ、いいですかねホルムさん。じゃあ、地図で説明した方がわかりやすいですかね」

そう言って俺は、総司令官の席の後ろに掲げられている地図の許に向かう。総司令官たちも呆れた顔で付いて来た。

「恐らくノーノ軍は、エルスモ軍が到着してから総攻撃に移るつもりでしょう。そのときを見計らって、カーザ城の城兵は、一旦引き上げてください」

「何を言い出すのだ！　カーザ城をむざむざ敵の手に渡せというのか！　ふざけるな！」

「それと同時に、城の裏山に着陣している部隊も、そのまま山を登って下さい。そして、総司令官が率いる部隊も、この川下……。この川の支流と合流している地点まで撤退してください。しかる後、山を登った部隊は、カーザ城に水を引いている水路を止めてください。できるだけ、泉の近くがいいですね」

「と……いうことは？」

「水のないあの城で、二万五千もの兵士が幾日生きられるだろうか」

ホルムの眼が見開かれる。幕僚たちから声にならない声が漏れている。だが、総司令官は、その沈黙を破るように声を張り上げた。

「バカな！　やはり素人だ！　水路を断ったとて、この目の前に流れているジエ川から水を得られるではないか！　何を言うかと思えばバカバカしい！　もういいだろう！」

「ジエ川というのですね、この川は。この川の水もせき止めてしまいます」

「は？　何ィ？」

「懸念していたのは、この川をせき止めたとき、帝国に水が供給されなくなるのではということでした。ですが、地図を見るに、ここに支流が流れ込んできていますよね。ということは、このカーザ城周辺の川の流れを止めても、問題は起きない。そう判断しました」

「そ……そんな大それたこと、できるわけが……」

「ああ、それは俺がやりますので、安心してください。一応、土魔法も使えますので。うん？　なに？」

エスカリーナが俺の後ろに立って、小さな声で話しかけてきた。彼女は、山を崩して川を埋めてしまうというのだ。要は、水の力で土砂崩れを起こして川をせき止めるという、かなり乱暴な計画だった。

「……きっと、その方が色んな意味で上手くいく気がします」

シディーも小さな声で呟いている。まあ、それは後で考えることにしよう。

「しかし、だ。川の流れをせき止めたところで、上がってくる水位はどうするのだ！　たちまち水が溢れて、元の川に戻るのがオチではないか！」

「そうならないように、高い壁を作ります。これだけ標高の高い山です。かなりの水量をため込めるでしょう。まあ、錬成をちゃんとしないと崩れちゃいますから、その点は集中してやらないといけないので、ちょっと頑張らなきゃ、ですけれど」

「そのような戯言、信じられぬ。妄想でモノを言うな！」

「よっと」

俺は掌を地面に向る。すると、石だらけの地面から土が盛り上がり、俺の背丈ほどの円柱が出来上がった。それに錬成をかけて、硬度を持たせる。

「このくらいのことは、できるのですよ」

全員があんくりと口を開けている。この石だらけの地面から土を掘り起こすには相当の魔力が必要だ。さすがに彼らも、それは理解できているらしい。

「なるほど、名案ですね！」

ホルムが手を叩きながら頷いている。

「ケンシン殿ならば、堅牢な壁を拵えてくれるでしょう。完全に水の手を断ってしまえば、二万もの将兵は三日もあれば音を上げるでしょう」

「……待て！　そうなった場合、我らに死に物狂いの攻撃を仕掛けてくることは必定だ。そうなった場合……」

「そうなった場合は、もう一方の部隊が敵の背後を突けばよいのです」

「ううっ……」

「可能性として高いのは、総司令官の部隊への攻撃です。敵がその動きをしたら、間髪おかずに攻撃することが大切です。その連絡と連携は密にしてください」

「それでは、私はすぐに城に帰りまして、皆を引き揚げさせる手はずを整えます」

「ああ、そうしてください。皆さんも、よろしいですね？」

俺の言葉に、幕僚たちはオドオドとしながら、ゆっくりと頭を下げた。

第七百十二話　戦いの前に……

……さっきから総司令官の顔色が悪い。椅子に腰かけたまま、爪を噛み、貧乏ゆすりを繰り返している。リコが見たら、瞬殺されてしまうような光景だ。

「まあ、爪を噛むなんて行儀が悪いですわっ。その足の動きもやめてくださいませ。動揺しているのが周囲に伝わってしまいますわ。あなたは人の上に立つお方なのですから、そんな弱さを周囲に見せるべきではありませんわ。もっと落ち着かれませ」

……的な？　まあ、それはあくまで俺がやった場合の話で、今、ここにリコが居たとしても、彼女は無言のまま顔を強張らせて、そのまま踵を返して、帰りましょうと言うくらいだろう。

「うわぁぁ……リコ様はそう言います。本当にリコ様のモノマネが上手ですよね」

シディーも妙に感心していた。長く一緒にいれば、自然と似てくるものなのだろうか。

そんな俺たちは今、本陣を出て、河原の石に腰を掛けて、腹ごしらえをしている最中だ。周辺の兵士たちも一様に食事を摂っている。これから先に始まるかもしれない戦闘に向けての準備をしているのだ。

メニューはパンとサラダと、ビーフシチューだ。ペーリスが腕によりをかけて作ってくれたビーフシチューは、マジでほっぺたが落ち

そうなくらい美味いのだ。俺も作ることはできるのだが、この味は出すことはできない。レストランで出せば、間違いなく行列ができるだろう。

美味い美味いと言いながら、俺とシディーは料理に舌鼓を打つ。一応、エスカリーナも、俺とシディーの分を半分分けてあげている。彼女は相変わらず無表情だが、ガンガン食べているので美味いと思っているのだろう。二人ともここでもフードは取らない。というより、フードを付けているのを忘れているんじゃないかと思う程だ。

総司令官は、兵士たちの食事風景を睨みつけるばかりで、自分は一切食べようとはしない。お腹がすくんじゃないかと思うが、まあ、それは放っておくことにする。

日は高く昇っている。現在時刻は十三時を少し回ったところだ。ゴツゴツと比較的大きい石ばかりの河原だが、腰かけるのにはちょうどいい大きさだ。川音が何とも心地いい。天気もいいので、こんなところで、シディーの膝枕で昼寝でもしたら、さぞ気持ちいいだろうなと思っていると、突然シディーが口を開く。

「……ここでは、イヤです」

彼女に伝わってしまったらしい。しかも、何か間違った形で伝わっているように思うのは、俺だけだろうか。思わず苦笑いを浮かべてしまう。

そのとき、俺の頭上にヒラヒラと一枚の葉っぱが落ちてきた。

これはサダキチに命じてやらせたものだ。俺が指示するポイントをエルスモ軍が通過したら、葉っぱを落として知らせるよう、念話で

指示を出していたのだ。それは、俺の探索スキルにかかるギリギリの位置だった。

早速スキルを発動させる。エルスモ軍は行軍を止めて停止していた。察するところ、これまで馬で移動してきていたが、山が険しくなるにつれて道も細くなることから、隊列を整え直しているように見える。

二万もの軍勢が細い山道を進むのだ。地理に詳しければ、山の上で待ち受けて、大将のいる本陣を急襲するという手段が効果的だが、基本的に損害を出さないことが前提なので、それは難しいだろう。アガルタの兵士ならば結界石を装備しているため、ちょっとやそっとでは死なないと思うのだが、セーファンド軍の兵士たちでは少なからず被害が出るだろう。

「さて、行くか」

俺はシディーたちを促して、総司令官の許に向かう。あまり喋りたくはなかったが、作戦遂行のためだ、仕方がない。

彼の許には、幕僚の一人が控えていて、その男の腕には、ハトのような鳥が止まっていた。男は鳥の足に結わえられている紙を取り出して、総司令官に渡した。彼はそれを厳しい表情で眺めている。

「失礼します」

「何だ」

手に持った紙片から目を離さないまま、彼は口を開いた。俺は構わず言葉を続ける。

「そろそろ、城の裏山に配置している軍勢を、山頂に向けて移動させてもよいかとおもうのですが」

「何故だ」

「エルスモ軍が近づいてきているようですので」

俺の言葉に、総司令官はガバッと顔を上げ、俺の顔をじっと見つめた。

「なぜ、わかる？」

「まあ、その何と言いますか……」

総司令官は俺と手許の紙片とに交互に視線を向けている。そして、紙片を握りつぶすと、ジロリと俺に視線を向けたまま黙り込んでしまった。

「おそらく、あと三時間程度でエルスモ軍がここに到着するでしょう。先に、裏山の部隊を山の上にあげて、城の水を止めさせましょう。そして、水が止まったら、カーザ城の兵士を撤退させましょう」

総司令官は無言のまま俺から視線を外し、側に控えていた男を見た。男はすべてを察したと言わんばかりの表情を浮かべながら、口を開く。

「承知いたしました。その旨、伝令を飛ばします」

そう言って彼は踵を返した。

俺たちは挨拶もそこそこに本陣を出て、先ほど昼食を摂っていたところまで戻ってきた。裏山が何やらざわついている。陣を移動するための準備に入っているのだろう。そのとき、シディーがあくびをしているのに気づいた。

「……暇ですね」

「そうも言ってられないんじゃないかな？　対岸のノーノ軍の動きを見張らなくちゃならない。裏山の部隊が引いたことを察知して、攻撃に移らないとも限らない」

「その可能性は低いですね」

「直感か？」

「そうです」

シディーは事も無げに言ってのける。まあ、確かに、俺がノーノ側なら動かないだろう。これまで何度も攻撃を仕掛けても落ちなかった城だ。それに、裏山の一団が消えたからと言っても、その背後には本陣一万の兵が温存されているのだ。ただ、あんな総司令官を見てしまっては、もしかして、ノーノの側にもそんな者がいるんじゃないかと勘繰ってしまう。

さて、どうしようかなと思っていたそのとき、エスカリーナが小さな声で呟いた。

「……泉に行ってみたい」

「あっ、私も！」

それは難しいだろう。今、まさにセーファンド軍が移動を開始しているところだ。その彼らに付いて行くというのも、何だかなぁという話だ。

「……空を飛んでいけばいい」

「たぶん、あの城の水が湧き出ている泉は、かなりいい水です」

シディーが拳を握り締めながら話しかけてくる。いや、気持ちはわかるんだが……。

「泉の水は、汚れていない。だからこそ、水の持つ本来の力が得られる……」

エスカリーナの言葉に、シディーもコクコクと頷いている。

「いや、まあ、気持ちはわかるけれども……。ただ今、軍勢が移動しているからな。この戦いがひと段落したら、そこに行ってみよう。ね？」

「……大勢の男たちが、汚す可能性がある。その前に、行きたい」

まあ、確かに、その可能性は無きにしも非ずだ。大勢の男たちがそこで体を洗う、ヘタをするともっとハードなことをするかもしれない。そうすると、泉は汚れるだろう。これから泉から流れ出ている水を止めるのだ。汚れが滞留してしまうことも考えられる。

「それはないと思うな」

シディーが口を開く。彼女は、何かを確信したように、何度も頷いている。

「きっと兵士たちも、そんな無茶なことはしないと思うんだ。結局、その水が自分たちの飲み水になるんだから」

「……わかりました」

「その泉に行くときは、一旦お屋敷に帰って、大きな入れ物を持っていきましょう」

「そうだな……。まあ、折角だ。敵の動きを静観しながら、のんびりとここで待つことにしよう」

俺の言葉に、二人はゆっくりと頭を下げた。

第七百十三話　ファイヤーボール

しばらくすると、周囲では兵士たちの動きが慌ただしくなっていった。どうやらカーザ城から、兵士たちが引き上げてきているようだった。聞けば、一気に撤退すると、敵が攻撃に移る可能性があるから、とのことだった。まあ、兵士たちの安全を考えると、当を得た作戦と言えるだろう。

兵士たちは、十名単位の小集団で引き上げてきていた。皆、ボロボロだ。先に負傷者を救助するべきじゃないかと思うが、どうやら、そうした人たちは、先発隊が到着したときにすでに救出しているのだそうだ。

引き上げてきた兵士たちには、炊き出しが配られていて、ここにもいい匂いが漂ってきていた。俺たちは先ほど、ビーフシチューを食べたので、特に空腹感は覚えなかったが、兵士たちはやはり、腹が減っているのだろう。我先に炊き出しに向かって移動していった。

「誰か、火を起こしてくれ～」

どこからともなく男の声が聞こえる。見ると、兵士の一人がウロウロしながら、火を起こしてくれと周囲に訴えている。彼の傍には、薪が組まれていて、すぐ隣には、鍋のような物が置かれていた。察するところ、あの鍋で食事を拵えようとしているのか、単に湯を沸かそうとしているのかのどちらかだろう。俺は立ち上がると、その男の傍に近づいた。

「ここに火を起こすのかな？」

「え……ええ」

俺を見て彼は目を白黒させている。異様な風体の男が突然現れたので、驚いているのだろう。俺はそんな彼に目を細めながら、人差し指に小さなファイヤーボールを灯した。

「そらっ」

人差し指をクイッと動かして、小さな火の玉を薪の中に放り込む。程なくして、そこからちょっとした火柱が上がった。

「おお、こんなに早く火が起こるとは……。ありがとうございます！」

彼は体を深く折って一礼した。俺は礼には及ばないと言って、その場を後にしようとした。

「ちょっとあなた！」

女性の大声が聞こえて、思わず体が震える。目の前には、ローブを羽織った小柄な女性が仁王立ちしていた。彼女は厳しい顔つきで俺を睨んでいる。

「あなた、何をしているのよ！」

何だこの女性は。俺は善意で火を起こしただけなのだが、何が不味かったのだろうか。そんなに声を荒げることはないだろうに。

彼女は顔をゆっくり上下させている。ジロジロと俺を見ている。一

体何なのだろうか。

「見ない顔ね。どこの部隊なの？　どうして顔を隠しているの？」

「ええと、あの……」

「やめないか、ジュリア」

男の声がした。その方向に視線を向けると、そこにはサーマがいた。

「何よ、邪魔しないでよ」

「よせと言っているんだ。こちらは、アガルタから来られた方だ。失礼なことを言うんじゃない」

「アガルタぁ！？」

女性がのけぞるようにして驚いている。そんなに驚くことなのだろうか。

「あなた、アガルタから来たの？　ほんとにアガルタから来たの？」

……ち、近ぇな。そんなに目をキラキラさせて、一体どうしたんだ！？

「こちらの方は、アガルタ王からの命を受けて来られたケンシン殿だ。戦いには直接参加されないが、色々と助言いただくために来ていただいている。くれぐれも粗相のないようにしてくれ」

サーマが呆れたような表情を浮かべている。ジュリアと呼ばれた女

性は、サーマと俺を交互に見比べながら口を開く。

「どうしてアガルタの方がここにいるのよ」

「陛下がヒーデータとアガルタに援軍要請を出されたのだ。それを受けて、アガルタ王様が我らにケンシン殿をお遣わし下されたのだ。今回の作戦も、このケンシン殿のお知恵なのだ」

「カーザ城からの撤退がこの人の作戦なの？　バカじゃないの？」

……このジュリアという女性は、遠慮というものが全くないのか、かなりズケズケとモノを言う。まあ、悪い人ではなさそうだが、俺はちょっと苦手だ。本人を目の前にしてバカって、地味にヘコむ。だが、彼女はそんな俺に構うことなく、さらに言葉を続ける。

「あなた、私たちがどんな思いであの城を守っていたのか、わかっているの？　どれだけ苦労して守ったと思っているのよ！　それをむざむざ敵に渡すなんて……信じられないわ」

「だから何度も説明しただろう。敵をあの城に引き入れて、水の手を断って日干しにする。それが一番犠牲を出さずに済む作戦なのだ」

「……」

女性はキュッと唇を噛んで俯く。よく見れば、彼女のローブも結構汚れている。紺色だからあまり汚れは目立たないが、所々擦り切れている部分もあって、彼女自身も戦闘に加わっていたのがよくわかる。

「あとは、我々に任せておいてくれ。さ、下がって休んでくれ」

サーマはそう言って、彼女を下がるように促し、俺に向けて苦笑いを浮かべた。

「大変失礼しました。彼女は……ジュリアは、カーザ城に詰めていた魔術師の一人でして、この城がここまで持ちこたえられたのは、彼女らの働きのお蔭でもあるのです」

「そうですか。それならば、魔力も枯渇していることでしょう。どうぞ、ゆっくりとお休みください」

そう言って俺は会釈を返す。そのとき、ジュリアは何かを思い出したのか、ピクリと体を震わせたかと思うと、大股で俺の所までやって来て、顔を近づけた。

「あなたの魔法、あれは一体何なの？」

「何……と言われますと？」

「指先に炎を出していたわよね？　それをそのまま薪に放って火をつけたわよね？　あれは魔力を凝縮したんでしょ？　そんな高等技術、私の先生くらいしかできないわ。にもかかわらず、そんなに長く詠唱しているようには見えなかった。一体どうやったのよ？」

……そんなに難しいか、これ？　これはファルコ師匠に最初に習った魔法なんだけれどもな。

「いいかリノス。指先に魔力を集中させろ。炎が浮かび上がるのをイメージするんだ。体中の熱を指先に集めるようにイメージしてみろ。……そうら、炎が出ただろう。それでいい。今度はそれを指先

を離れて放り投げるようにイメージしながら、指を動かしてみろ。
……何で儂に向けて放つのだ！」

……懐かしい。そうだ、師匠はそのとき、手から火柱を出して俺のファイヤーボールを消したのだ。しかもその炎が思いっきり俺の所まで届いて、あやうく大やけどを負いそうになったのだ。反射的に結界を張ったので、全身軽いやけどを負うくらいで済んだのだが。

ただ、俺の服が燃えてしまってボロボロになってしまい、後で師匠はワラサさんに思いっきりシバかれていた。師匠、悶絶していたよな……。懐かしい思い出だ。

……ああ、いかん。現実逃避してしまった。目の前のことに集中しなくては。ジュリアは俺を睨んだままだ。

「いや、単なるファイヤーボールなので、そんなに難しいものではないですよ？」

「ファイヤーボール？　あれが？　ファイヤーボールって、掌の上で起こすものでしょ？」

「そうなのですか？　私は、指先に作るように教えられたのですが……」

「いつ習ったの？」

「六歳か七歳くらいだったかと」

「ああ、それでなのね」

女性は腕を組みながらコクコクと頷いている。何か、得心したらしい。

「火メイジになるための最初の訓練ね。それで納得がいったわ。指先に炎が出るイメージをするってやつね。普通はそこから、掌の上に炎を出す訓練を受けるのだけれど……。あなた、その訓練はしなかったの？　……ない？　じゃあ、それだけ習ってこれまでやってきたの？　へ～え～」

女性は腕を組みながらクイッと顎を上げた。

「じゃあ、あなた、火メイジとしてセンスがあるわね。小さいとはいえ、ファイヤーボールを投げることができているわ。我流でそこまでできたら大したものよ。いいわ、時間があるときに、私が魔法を教えてあげるわ。火メイジとして、基礎を叩き込んであげるわ」

……何か、また、厄介ごとの予感がしてきたな。

第七百十四話　援軍到着

「ところで、後ろにいるのは、あなたのお仲間？」

「いい加減にしないか、ジュリア」

尚も俺に話しかけてくるジュリアの肩を、サーマが掴んでいる。この二人は、随分仲がいいな。恋人のようには……見えない。幼馴染だろうか。

「……触らないで。焼くわよ？」

ジュリアが振り返りながら、右手の掌に炎を纏わせている。……どうやら、あまり仲は良くなさそうだ。

「ケンシン殿はお疲れなのだ。休ませて差し上げるのだ」

「何よ、喋れない程疲れているようには見えないけれど？」

サーマは何とも言えぬ表情を浮かべる。よくある、男子あるあるだ。口論では女性には勝てない。

「後ろの二人も、メイジみたいね？　属性は何？」

ジュリアは俺を飛び越えて、後ろに控えているシディーとエスカリーナに視線を向けている。だが、二人とも何も返答しない。エスカリーナはわからないが、シディーは何も答えないほうがよいと判断して黙っているのだろう。

「ちょっと、聞こえているの？」

二人が何も喋らないので、じれてしまったらしい。不要なモメごとは避けたいので、ここは俺が間に入ることにする。

「ああ、この二人は、俺の仲間です」

「それはわかっているわよ。その格好はメイジでしょ？　属性を聞いているの」

「それって、何か関係がありますかね？」

「あるわよ！　何を言っているのよ、決まっているじゃない！」

「そうなのですか……」

「当り前じゃない。メイジ同士は、お互いの属性を把握しなければならないわ。特に今は戦闘中よ。互いの属性を把握していなければ、攻撃や防御のプランが立てられないじゃない」

「ええと、あなたは、司令官で？」

「そうなのです」

サーマがずいっと前に出てきた。どうやら、彼女を早く下がらせたいらしい。頑張るんだ。

「このジュリアは、カーザ城に勤務する司令官の一人なのです。彼女の部下には数名の魔術師が配置されています」

「ほう、なるほど」

「これまでの戦いの中で、メイジたちの魔力は枯渇してしまったの。もし、再び戦闘になったときは、あなたのお仲間にも手伝ってもらいたいのよ」

「ジュリア！」

いい加減にしろと言わんばかりの表情を浮かべながら、サーワが彼女に向き直る。それはそうだろう、何ともド厚かましい要求だ。

さすがにジュリアも気づいたのか、ムスっとした表情を浮かべたかと思うと、スッと俺に向けて一礼した。

「すみません、言いすぎました」

「……」

俺は無言のまま、苦笑いを浮かべる。謝る彼女に、サーマは諭すような口調で話しかける。

「ケンシン殿たちは、あくまで我々に助言をするために来られたのだ。戦闘に参加いただくには、アガルタ王のお許しが必要だ。君は、戦闘になればそんなことは関係ないと思っているかもしれないが、これはあくまで国同士の約束だ。むしろ、戦闘になれば、ケンシン殿たちにはすぐにここから離脱していただく」

「わかったわよ」

相変わらず不貞腐れた表情を浮かべている。まあ、彼女はパッと見、美人に見えるので、男子からはある程度のわがままは許されるだろうが、女子からは……どうだろうか？　……エスカリーナは、完全に彼女を嫌っているな。彼女は自分のテリトリーに土足で踏み込んでくる人間を嫌う。このジュリアは完全にそれに当てはまっている。

「彼女はまだ見習いかしら？」

ジュリアの視線の先には、シディーの姿があった。小柄なので、見方によってはそう見えるかもしれない。そんな彼女に向かって、彼女はさらに言葉を続けた。

「うふふ、かわいいわね」

ニコリと笑顔を浮かべながら、彼女はその場を後にした。サーマは失礼しましたと言って頭を下げ、彼女を追いかけていった。

「いや～何だかなぁ、だな。……うおっ！」

振り向くと、シディーの眼が光っていた。彼女は右手の親指をグッと立てている。

「あの人は、いい人ですっ！」

俺は乾いた笑い声を上げた。

◆◆　◆

ノーノ軍総司令官のフナイは、エルスモ軍の到着を首を長くして待っていた。

すでに陽は傾きつつあった。このまま夜を迎えるのは得策ではなかった。夜襲の危険性があるからだ。

カーザ城の裏山に陣を張っていた軍勢が撤退していた。背後を固めている一万の軍勢はなおも健在だが、エルスモ軍と共同でかかれば問題ないはずだった。

あと一歩、あと一押しの所まで来ていた。カーザ城の硬く閉ざされた城門には深い亀裂が入っている。次に総攻撃をかければ、あの城門は開いたはずだった。そこに、援軍が到着した。

だがそれは、想定されていた事態だった。カーザ城への本当の総攻撃は、エルスモの援軍が到着してから行えと、国王・ホーボーンから命じられていた。フナイは大満足でその援軍を待っていた。

幸運なことに、セーファンド軍は、さらに追加の援軍一万を送ってきた。しかし、それでも、ノーノ軍との軍勢の差は五千ある。勝算は十分にあった。ここで、セーファンド軍を壊滅させることができれば、カーザ城だけでなく、セーファンド帝国の一部も切り取ることができる。そうなれば、自分の将来は安泰だ。フナイは来るべきバラ色の未来を頭の中で想像していた。

とはいえ、エルスモ軍はこの山の麓で行軍に難儀をしているようで、動きが悪い。フナイが恐れたのは、その間にセーファンド軍が総攻撃に移ることだった。いかに山の上に布陣しているとはいえ、二万の軍勢に攻められては、守り切るのは難しい状態だった。自分たちがこの場を放棄して撤退すれば、エルスモ軍も一緒に引き上げる可能性があった。彼らにしてみれば、そこまでして、ノーノ軍に肩入れする義理はないのだ。

しかし、そんな緊迫した状況はもう、終わりに近づこうとしている。伝令の話では、援軍はもうすぐそこまで迫っていると言う。

あとは時間との戦いだ。そんなことを考えていたそのとき、伝令が足早にフナイの前にやってきた。

「申し上げます！」

「援軍が到着したか！」

「左様です！　ノマサ殿下おん自らお越しなされました！」

フナイは立ち上がってすぐ傍に控えた。しばらくすると、ドヤドヤと足音が聞こえてきたかと思うと、数名の男たちがやって来た。

男たちの中に、ひときわ輝く鎧を装備した優男が見えた。銀に輝く鎧が美しい。きっとこの方がノマサ殿下だ。そう考えたフナイは、彼に向かって恭しく一礼する。

「初めて御意を得ます。ノーノ王国軍司令官、タデツ・フナイでございます。以後、お見知りおきをいただきたく、お願い申し上げ奉ります」

彼の声を受けて、優男がニコリと笑顔を浮かべた。

「丁寧なごあいさつ、痛み入ります。エルスモ・ガザイ・ノマサです。到着が遅くなり、大変申し訳ありませんでした」

「いいえ、何を仰います！　我が国にこれほどの援軍をお送りくだ

さり、国王様も大変お喜びでございます。ノマサ殿下おん自らお越しいただき、恐縮の限りでございます！」

「いや、自分の目で確認しなければ納得できない性格でしてね。周囲の者が止めるのも聞かず、自ら馬を駆って赴いてしまいました。まあ、こんなことは今回で止めにしようと思っています」

ノマサはそう言ってカラカラと笑った。そんな彼の背後から一人の男が進み出て、府内に向けて口を開いた。

「司令官殿、ノマサ殿下に戦況の報告を」

誰かと思えば、国王様の傍近くに仕えるマヒコという文官だった。鎧を着用していて一瞬、誰だかわからなかったが、顔を見れば、間違いなくマヒコだった。鎧を着慣れていないのか、何とも言えぬ違和感がある。それに、長時間ノマサ殿下に帯同していて疲れているのか、顔色が悪かった。

「それでは、現在の戦況をご説明申し上げます。どうぞ、こちらの地図をご覧ください」

フナイは立ち上がって、ノマサの顔を見た。彼は相変わらず笑みを浮かべているが、目の奥には鋭い光を湛えていた。フナイの体は、無意識のうちに震えていた……。

第七百十五話　一旦帰宅

カーザ城から、ホルムが率いる一隊が引き上げてきた。

「これが、最後の部隊です。今、城は無人の状態です」

彼はそう言って、城の方向を振り返った。その背中から、何とも言えない寂寥感が滲み出ている。これまで死に物狂いで死守してきた城を、むざむざ敵の手に渡すのだ。その言葉に尽くしがたい寂しさは、察して余りある。

だが、振り向いた彼は、そんな感情はおくびも出さず、にぱっと笑みを浮かべた。

「ご安心ください。水は止めました。城内には一滴の水も残っていません。それに、裏門に通じる道を封鎖しましたので、敵がすぐにこちらに向かって来ることはないと思います」

「そうですか。お疲れさまでした。ひとまず、体を休めてください。回復魔法をかけましょうか？」

俺の言葉に、彼は両手を振って遠慮した。治癒魔術師ならばセーフアンド軍にもいるし、そんなに疲れていないと言って、カラカラと笑った。そして、総司令官殿に報告してきますと言って、その場を後にした。

「偉い男だな」

思わず俺は呟いた。ホルムに従う者たちは、何となくだが、彼と深い絆があるように感じた。かなり部下から慕われているのだろう。

しばらくすると、カーザ城の方向から、まるで落雷のような音が聞こえてきた。マップで確認すると、やはり、ノーノ軍の攻撃が始まったようだ。それから十分もしない間に、男たちの歓声が聞こえてきた。どうやら、城が敵の手に落ちたようだ。

「カーザ城が敵に占領された～。城が落ちたぞ～」

城の方向から、一人の男がそんなことを叫びながらこちらに向かって走ってきた。セーファンド軍が放った斥候なのだろう。男は城が落ちたと叫びながら、本陣の方向に向かって走っていった。

セーファンド軍の兵士たちがざわついている。地面に腰を下ろしていた兵士たちが立ち上がっている。そのとき、本陣から数名の兵士たちが飛び出していくのが見えた。

「撤退だ！　撤退するぞ～！　すぐに準備せよ！　総司令官殿が出られる！　道を開けろ～！」

男たちは口々にそう言っている。その声を受けて、兵士たちの動きが俄かに騒がしくなった。本陣からは馬に乗った総司令官と、その後ろから、数名の騎士たちが出てくるのが見えた。総司令官は俺に一瞥をくれると、そのまま南に馬首を向けた。

総司令官に従う騎士たちの中から、一騎が俺の許にやってきた。サーマだった。

「馬上より失礼します。我らはこれより、ケンシン殿の指示された

場所まで撤退いたします。後のことは、よろしくお頼み申します！」

彼はそう言うと、慌てて総司令官の後ろを追いかけていった。

「さて、俺たちもやりますか。イリモを連れて来なきゃいけないから、一旦帝都の屋敷に帰ろうか」

そう言って俺は立ち上がり、山の中に隠してある転移結界に向かって歩き出した。

「ちょっと、どこに行くのよ？」

不意に話しかけてきたのは、ジュリアだ。彼女は腕を組んで仁王立ちになって、俺たちを睨みつけている。その後ろには、部下なのか、ローブを纏った女性数名が従っていた。

「あなたも撤退ですか？　どうぞお気を付けて」

質問には答えずに、スタスタと歩き始める。だが、彼女はそうは問屋が卸さないとばかりに、さらに俺たちに話しかけてきた。

「どこに行くのかって聞いているのよ。撤退するのは、そっちの方向じゃないでしょ。それに、少人数で山の中を歩き回るのは危険だわ。あなたたちは知らないでしょうけれど、夜になると、マルバーンが降りてくることがあるのよ。あのドラゴンに見つかったら、確実に食べられてしまうわ」

……おお、俺たちのことを心配してくれているのか？　意外に優しいんだなと思いながら、俺は彼女に向き直る。

「ええ。ありがとうございます。忘れ物をしましたので、取りに行くだけですよ。俺たちのことは心配なさらずに、どうぞ、先に撤退してください」

「……」

ジュリアは腕を組んだまま、なおも俺たちを睨んでいる。俺は彼女をそのままに、山の中に歩を進めた。

「……大丈夫です。追って来ません」

「何だか、面倒くさいな」

てっきり、ジュリアが追いかけてくるかと思ったが、どうやらそうでもないらしい。彼女らしい気配は感じない。俺は、二人を傍に寄せて転移結界を発動させた。

「まあ、お帰りなさいませ」

イリモの馬小屋に向かおうとしたそのとき、リコに出くわした。彼女は小走りに俺たちの許に駆けよって来ると、ケガはないかと言って心配していた。そして、エスカリーナに視線を止めた。

「こちらは……？」

「ああ。サイリュースのエスカリーナだ。ソレイユから、俺の傍につくように言われて、わざわざ来てくれたんだ」

「まあ、それはありがとう存じますわ。リノスの妻の、リコレットでございます」

リコはそう言って頭を下げた。彼女が何者であるのかを知っているのだろう。エスカリーナはフードを脱いで、その場で片膝をついた。

「アガルタ王国の皇后さまにお目通りできましたこと、ありがたいお言葉を頂戴しましたこと、この上のない喜びでございます」

「よしてくださいな。どうぞ、お立ちになって下さいませ」

リコはそう言うと、俺に再び視線を向けた。

「食事の準備ができていますわ」

「え？　もうか？　俺たちはもう一度、カーザ城に戻るんだが……」

「その前に、食事をしていらっしゃいな。さ、どうぞ」

俺たちは、リコに促されるままに屋敷に向かった。

その夕食はバーベキューだった。しかもそれは、庭でやることになっていた。

こういうイベントは子供たちのテンションが上がる。ウチでは、あらかじめ切り分けていた肉、野菜などを大皿に盛り、皆がそれぞれ好きなものを串にさして焼いていくというスタイルだ。よく見ると、子供たちそれぞれの性格が見えて面白い。

長女のエリルは、バランス型だ。肉や野菜を同じくらいの分量を食べている。嫌いなものもあるのだろうが、それも敢えて食べているように感じる。それだけでなく、彼女は俺たちの分も作って焼いて

くれる。何ともできた娘だ。

その逆を行くのがアリリアとイデアだ。二人は好きなものしか食べない。アリリアは肉。ひたすら肉。イデアは野菜、とりわけ、ニューロとよばれるアスパラガスのような野菜が贔屓だ。ただ、イデアは、まだ幼い弟や妹から人気があるので、彼はその面倒を見るのに忙しい。

妻たちも、子供たちの様子を気遣いながら、思い思いに食事を楽しんでいる。その中に一人、無表情のまま、淡々と食事を口に運ぶ者がいた。エスカリーナだ。

実はこれから俺たちは、再びカーザ城に向かうのだ。いわゆる残業というやつだ。

その前に腹ごしらえをして向かうことにしたのだが、エスカリーナも帝都の屋敷に招待したのだ。一旦サイリュースの里に帰って……と言うのも考えたが、それだと時間がかかるし、何より効率的ではない。それならば、一緒に屋敷に帰って、飯でも食って行けと言う話になったのだ。

エスカリーナは別に、食事を摂らなくても問題ないらしいが、皆が舌鼓を打ちながらバーベキューを楽しんでいるので、その珍しさも手伝ってか、戸惑いながらも調理した食材を口に運んだ。

皆の腹が膨れ、宴もそろそろ終わろうかとしていたのを見計らって、俺はシディーとエスカリーナに目配せをする。エスカリーナはまだ食べていた。アリリアのように、串に肉をうんと刺し、それを焼いたものを無表情で食べている。まあ、使っている肉がドラゴンの最高級のものなので、それはそれは美味いものなので、そうなるのも

わかる気がするが。

俺の視線に気づいた彼女は、肉をペロリと平らげると、無表情のまま俺の許にやって来た。

二人を連れて、イリモの許に向かう

「リノス」

不意に名前を呼ばれた。見ると、そこにはリコが立っていた。

「気を付けてくださいませね」

「心配ないよ。すぐに帰って来る」

「お風呂を沸かしておきますわね」

「ああ。そうしてくれ」

俺の言葉に、リコはスッと頭を下げた。

第七百十六話　水芸と錬成

転移すると、辺りは漆黒の闇だった。獣たちの鳴き声が聞こえてきていた。

探知スキルを発動するまでもなく、周辺に魔物たちがひしめいているのがわかった。突然現れた俺たちに、魔物たちが警戒態勢に入っているようだ。どいつもこいつも、ピクリとも動こうとしない。

遠くからドラゴンの咆哮のような声が聞こえてくる。やはり、夜はなかなか物騒な場所であるようだ。

早速、イリモを連れて森の外に向かう。そのとき、シディーが俺の袖を引っ張った。

「どうした？」

「あまり、私たちの姿を見せない方がいいと思います」

「あーそうだな。夜とはいえ、空を飛んでいる姿を見せない方がいいかもな。それに、魔物たちに襲われるのも面倒くさいしな。よし、わかった」

皆に結界を張って、姿が見えないようにする。むろん、気配や魔力が探知されないような効果も付与している。

「うえっ？」

森から出ると、人がいた。思わず声が漏れてしまう。何と、そこにいたのは、ジュリアだった。彼女は俺たちを睨みながら、腕を組んで仁王立ちしている。

「……まさか、俺たちを待っているんじゃないだろうな」

「きっと、そうだと思います」

後ろからシディーが口を開く。こんな漆黒の闇の中で女性一人が立ち尽くしているなど、沙汰の限りだ。命知らずとはこのことを言うのだろう。

だが、彼女は結界を張っていた。火メイジと名乗っていたが、ちゃんと結界も張ることができるとは、相当優秀な魔術師だ。ＬＶでいうと、２くらいか。完全とは言えないまでも、自身の気配を上手に消しているので、この漆黒の闇の中で彼女を見つけるのは、相当困難だろう。それもあって、彼女は森を睨み続けていられるのだろう。

「……行こうか」

俺はジュリアををそのままに、イリモの背中に跨った。続いて、シディーも乗ってきた。エスカリーナはコクリと頷いている。どうやら、すでに水の糸を張ったようだ。

音もなくイリモが飛び上がる。ジュリアの姿がみるみる小さくなる。彼女の魔力はもうすぐ枯渇する。そうなれば、結界もへったくれもなくなるのだ。彼女とて、バカではない。魔力が切れるギリギリのタイミングで結界を解除するだろう。そうなれば、そのまま撤退するしかなくなるのだ。

俺は無限収納から、非常食用のおにぎりと、ドラゴン肉のから揚げを取り出して、同時にとりだした皿の上に乗せた。

「サダキチ」

『……お呼びでしょうか』

「この皿を、地上にいる女性の許に届けてくれ。足元に置くだけでいい」

『承知しました』

サダキチはそう言って姿を消した。

「うえっ？」

地上から何とも言えぬ声が聞こえてきた。そりゃ、驚くよね。

イリモはその声が合図であったかのように、西の方向に向けて飛びだった。

途中、数多くの篝火が見えた。カーザ城だ。察するに、城を奪取できたことで浮かれているような雰囲気を感じる。何というか……城からの緊迫感のようなものが感じられない。気配探知で探ってみるが、城の周辺に兵士が出張っている気配はなかった。城への水の供給は止まっていると聞いていた。もし、それが本当ならば、水を確保するために兵士たちが動いてもよさそうなものだが……。眼前の川の水を利用すればよいと考えているのだろうか。

そんなことを考えていると、イリモの動きが止まった。どうやら、

俺が指示した場所に着いたようだ。しかし、辺りは漆黒の闇で、何も見えない。

「とりあえず、下に降りていただけますでしょうか」

いつの間にかエスカリーナが俺のすぐ傍に来ていた。驚いてしまって体が震えたが、そこは平静を装うことにする。

「ああ、わかった。イリモ」

俺の声に、イリモはゆっくりと下降を始めた。

そこは、深い森の中だった。俺たちが降りると、ザザザッという音が聞こえてきた。周辺にいた魔物たちが一目散に逃げだしたようだ。

エスカリーナはキョロキョロと周囲を見回していたが、やがて、ゆっくりと歩き出した。闇の中で彼女の姿はすぐに見えなくなった。気配探知を発動させてみたが、どうしたことか、彼女の気配を捕らえることができなかった。

「リノス様、ライトを出してもよいと思います」

シディーがそう言ってくれるので、早速魔法で掌にライトを出す。周囲が明るく照らされるが、エスカリーナの姿は見えない。

明るくして初めてわかったことだが、すぐ近くに小さな川が流れていた。サラサラと川音がするが、先ほどまで全然気がつかなかった。ふと見ると、地面に足跡が付いていた。どう見ても人の足型なので、エスカリーナのものに違いない。俺はイリモを連れて、その足跡を追いかけていく。

しばらく歩くと、数メートル先にエスカリーナの姿が見えた。彼女は俺たちの背を向けた状態で立ち尽くしている。何だよ、黙っていかないでくれよと言おうとしたそのとき、イリモが俺の肩を噛んだ。

「何!?」

思わず振り返る。そのとき、シディーの声が響き渡った。

「リノス様！　下！　下！」

思わず下を見ると、何とそこは断崖絶壁だった。一歩踏み出していれば、俺は谷底に真っ逆さまに落ちていた。慌てて後ずさりする。

エスカリーナは、宙に浮いていた。一体、どんな能力を使っているのか。おそらく、水の糸をどこかに結んでいるのだろう。

「ここだわ」

エスカリーナが誰に言うともなく呟く。よくみると、対岸の崖がすぐ近くまで迫っていた。ここをせき止めるのが、一番労力が少なくて済むということらしい。

彼女は宙に浮いたまま、クルリと体の向きを変えた。そして、両手を水平に上げると、その指先から数本の水が噴き出した。

「……危ないので、下がって下さい」

エスカリーナの言葉に従って、その場から離れて少し距離を取る。相変わらず彼女の指先からは水が噴き出し続けている。一見すると、

何かの水芸でもやっているような雰囲気だ。

しばらくすると、ドロドロと何とも言えない音が聞こえてきた。何かが解けているのかと思うような音だ。そして、その直後、俺たちの立っている場所が激しく揺れた。

「うわっ！」

いわゆるタテ揺れというやつだ。初めて経験する揺れで、思わず尻もちをつきそうになるのを、必死で踏ん張って耐える。シディーは……俺の腰にしがみついていた。

程なくして揺れが収まる。エスカリーナは俺たちに向き直ると、空中をゆっくりと歩いてこちらに戻ってきた。

「……終わりました」

無表情で、淡々とした話しぶりだ。恐る恐る崖の端っこまで行ってみてみるが、真っ暗で何も見えない。それどころか、谷底から何とも言えぬ異臭が漂ってきていた。俺は、皆に張っている結界に、異臭を消臭する効果も付与する。

ここからでは何もわからないために、一旦、イリモに乗って下に降りてみることにした。ゆっくりと下降していくと、あるところでイリモがピタリと動きを止めた。ライトを照らして見てみると、そこには土の壁のようなものがあった。

ただし、今のライトでは全景が見えるわけではないので、俺は魔力を集中させて、特大のライトを出して周囲を照らす。何とそこには、とんでもない高さの土の壁ができていた。およそ、数十メートルは

あるだろうか。

取り敢えず、谷底まで降りてもらう。そこから見た壁は、ものすごい迫力だった。

触ってみると柔らかい。水分をたっぷりと含んでいる。これは、早く錬成しないと、崩れてしまいそうだ。一旦崩れると、一気に崩壊してしまうだろう。こんなものをまともに食らった日には、確実にあの世行きだ。

俺は土壁に手をつくと、そこに魔力を集中させる。一気に水分を抜いて、土を硬化させるようにイメージする。そして、発動……。

グラグラと地面が揺れる。今度は横揺れだ。その直後、土壁から煙のようなものが噴き出して、周囲が真っ白になった。しばらくすると、そこには、まるでコンクリートで固めたかのような硬い、真っ黒な壁がそびえ立っていた……。

第七百十七話　種まき

「ま、これだけの高さの壁だ。相当量の水が溜まるんじゃないか」

誰に言うともなく俺は呟く。我ながらとんでもないものを作り上げたものだ。

「地面から、水が漏れています」

エスカリーナの声で我に帰る。それはえらいことだ。放っておけば、水圧でこの壁が崩壊してしまう。だが、どこから水が漏れているのか、皆目わからない。

「ちょっと待ってくれ」

指先に魔力を集中させて、炎を出す。魔力を込めているので、かなりの高温のものだ。それを足元の川に落とす。一瞬で周辺の水が蒸発する。

「ええと？」

壁の周辺をウロウロすると、ジワジワと水がしみ出している部分があるのが見えた。ここだ。俺は土魔法を使って錬成を強化する。しばらくすると、水のしみ出しはなくなった。

「よっしゃ、帰るか」

腰を上げて振り返ると、目の前にはまだ、川が並々と水を湛えてい

る。この戦いを早く終わらせるためには、この水もない方がよいだろう。俺はイリモに跨り、背中にシディーを乗せると、そのまま上空に飛び上がった。当然、エスカリーナも同じようについてくる。イリモには上空高くは飛ばず、地面から二メートルくらいのところを飛んでもらう。

「ちょっと悪いけれど、蒸発させるよ」

そう言って俺は、指先に魔力を集中させて、ファイヤーボールを作り出す。そしてそれを、眼下の川に投げていく。すると、一瞬のうちに川が干上がる。それを繰り返しながら、カーザ城に向かって進んでいく。

「うわっ、冷たい！」

突然、背後から声が上がる。見ると、シディーの背中にエスカリーナが座っている。

「……熱いの、キライ」

俺のファイヤーボールが熱すぎたようだ。まあ、さもありなん。水を一瞬で蒸発させているのだから。エスカリーナがこれだけ熱がるのだから、イリモもさぞ、熱かったろうと声をかけてみると、意外や彼女は全く熱くないという。水の精霊と契約しているので、熱に敏感なのだろうか。と、すると、彼女は日本の夏、とりわけ、夏の京都などでは生きていけないだろうなと、下らぬことを考える。いや、京都は水がきれいから、意外と生きていけるのかもしれないと考えていたとき、遥か先に灯が見えた。カーザ城だ。

「さて、ここらで気合を入れて、ファイヤーボールを連打しまっせ

〜」

人差し指を地面に向けながら、極小に圧縮したファイヤーボールを次々と出していく。カーザ城からは目立った動きは見られない。城を右手に見ながらさらに進んでいくと、暗闇の中から女性の叫び声にも似た声が聞こえた。

「ひゃぁ！　何ぃ〜〜？」

……もしかして、ジュリアか。さっき立っていたところとそう変わらない場所じゃないのか？　まさか、ずっとあの場所に立っていたのか？

……人の気配がする。一人だ。こちらに向かって走ってきている。当然、イリモの翼には追い付けないのだが、これはおそらく、いや、ほぼ間違いなくジュリアだろう。結界を解除して追って来ているのだ。何だか面倒臭い。

「ああ、これか」

俺の足元を照らすために、ライトを出していた。きっと、この光を見てジュリアは追いかけてきているのだろう。これは俺の失敗だ。

「よし、ここまでくれば大丈夫だろう」

俺はそう言うと、イリモに引き返すよう伝える。彼女は高度を上げ、ぐるりと旋回して元来た道を引き返す。途中、一つの気配とすれ違った。漆黒の闇の中なので顔は確認できなかったが、おそらく無事に自軍に辿り着くだろう。先ほどのファイヤーボールが功を奏したためか、魔物たちの気配が一切消えていた。きっと、森の中で静観

しているのだろう。今は、人間にとっては実に安全な時間帯だ。

「さて、帰って風呂に入って寝るか。エスカリーナもご苦労様でした」

俺の言葉に、エスカリーナはゆっくりと頭を下げた。そのまま俺たちは転移結界に乗り、帝都の屋敷に帰った。

「まあ、遅かったですわね。おかえりなさい」

屋敷の扉を開けると、リコが待っていた。俺の帰りを待っていてくれたのが、素直に嬉しかった。

「お風呂を沸かしていたのですけれど、冷めてしまっていますわ。今から温め直しましょう」

「ああいや、いいよ。自分でやるよ。リコは休んでくれ」

「承知しました。お言葉に甘えますわ。シディーもお疲れさまでした。一緒にお風呂に入って、ゆっくりと疲れを取ってくださいな」

「はい、ありがとうございます」

そう言ってリコは笑みを浮かべたまま、ダイニングを出て行った。

「さ、風呂入って寝るか」

「そうですね。なんか今日は疲れちゃいました。私、何もしていないですけれど」

「そんなことはないよ」

「早く水を採りに行きたいですね」

「そうだな。おちついたら、な」

そんなことを話しながら、俺たちは風呂場に向かった。

◆　◆　◆

ノーノ軍総司令官であるフナイは深い眠りについていた。

昨日は痛快だった。カーザ城の城門を突破して、一瞬のうちに占領することができた。敵はエルスモの援軍に恐れをなして撤退した後で、大将首を挙げることはできなかったが、そんなことはどうでもよかった。ノーノ王国の悲願が達成された瞬間だった。

ノーノ王国数百年の歴史の中で、宿敵セーファンド帝国に侵攻できた司令官は一人もいない。歴史に名を刻めたという満足感が、城内で催された祝宴において酒を煽らせた。

美味い、実に美味い酒だった。どちらかと言えば、あまり高級な酒ではなく、外を見ても、ただ石だらけの川と断崖絶壁の壁、そして、川……言わば無機質に近い風景だったが、昨夜呑んだ酒は極上のテイストに変わり、無機質な風景は百万ドルの景色に変わっていた。

エルスモのノマサ殿下も、実に満足そうだった。自分のことを、古今無類の名将と褒めてくれた。きっと、国王陛下からもお褒めの言葉をいただけるに違いない。もう、軍人として、自分の将来は保証されたも同然だ……。

そんな満足感に満たされたまま眠りについていた彼の耳に、騒々しい音が聞こえてきた。

「……殿。……司令官殿。……総司令官殿！」

折角の睡眠を邪魔されたために、彼は顔を歪めながら目を開ける。頭がズキズキと痛む。昨日は酒を飲みすぎた。しかし、それは仕方のないことだ。そんなことを考えながら、彼は視線を周囲に向ける。

ベッドの傍に、副官のタウが肩で息をしながら立っていた。顔が引きつっている。

「何だ、どうしたのだ」

さも面倒臭いと言わんばかりの態度で、彼は体を起こす。タウはそれを待っていたかのように、言葉を続ける。

「外が……外が、えらいことになっています！」

「外ぉ？」

「とにかく、バルコニーへ！　ノマサ殿下も向かわれています！」

一体何が何だかわからなかった。ふと胸に、いったん撤退したセーファンド軍がこの城を包囲したのかと思ったが、それをしたところで、我らに勝つことはできない話であるし、敵もそこまでバカではないだろう。確かに、この城には五千の兵士が詰めているが、この裏山にも、さらに二万の軍勢が駐留していて、万全の防御態勢を敷いているのだ。

そんなことを考えながら、ベッドから立ち上がる。相変わらず頭痛は続いている。軍服を手早く着て部屋から出る。タウは小走りに走って、早く来るように促している。フナイは間断なく襲ってくる頭の鈍痛に耐えながら彼の後ろを追っていく。

バルコニーに出ると、陽が上ろうとしているところだった。鳥の甲高い声が煩わしい。ふと見ると、エルスモ軍の一団が目に入った。その中心にはノマサ殿下の姿があった。

「いや、殿下。昨夜は……」

そこまで言って、フナイは絶句する。ノマサの表情が、いつもの柔和なものではなく怜悧なものに変わっていたからだ。

彼は無言のままバルコニーの外に視線を向ける。それにつられて、フナイも視線を向けてみた。

……そこには、石だらけの風景が広がっていた。

第七百十八話　包囲を打開せよ

信じられない光景だった。昨日まで眼前には川が流れていたのだ。それが跡形もなくなっていた。

川が流れていたと思われる場所には、黒い跡ができていた。まるで、悪魔か何かに、川が丸ごと吸い取られてしまったかのような光景が広がっていた。

フナイには、その現実が認識できなかった。夢を見ているような心地になった。そんな彼を現実に呼び戻すかのように、男の落ち着いた声が耳に届いた。

「城内に水はどのくらいある？」

口を開いたのは、エルスモ軍のノマサ殿下だった。これまで見せていた人懐っこそうな表情は一切なく、一見、無表情とも思えるような表情を浮かべていた。それが、フナイには不気味に感じられた。

「……水は？」

再び殿下が口を開く。フナイの頭脳がやっと回転し始める。そうだ、確か、城内に水はなかった。水をためていたと思われる水桶には全くそれはなかったし、水路にもそれは見られなかった。

「あっ……その……水は……ありません。ええ、水がなかったので……いや、とはいえ、元々持っていた水がありますので……いや、昨日は、川の水、そう、川の水を汲んだのです。それで、あとは、

酒を出して……」

「その、昨日汲んだ水はどのくらいある？」

「えっと……あの……確か、樽にいくつか……」

「この周辺に水が沸いている場所は？」

「山の上です、か、ね」

「今すぐこの周辺から、水をかき集められるだけかき集めるのだ」

「は？　え？　今、何と？」

「総勢二万五千の兵士がこの城とその周辺にいるのだ。今、この城に備蓄されている水では、兵士たちの渇きを潤すことはできない。全力で、周辺から水をかき集められるだけかき集めるのだ。さもないと我々は、この戦いを継続することはできない」

殿下の言葉が終わらないうちに、彼を取り巻いていた男たちが小走りにその場を後にしていく。フナイは目を白黒させて、その様子を見守るしかなかった。

時が経つにつれて、次々と状況が明らかになっていった。それらはすべて、彼らを絶望させるものだった。

だがノマサは、そんな中でも冷静さを失うことなく、現状を分析し続けた。しかし、一人の斥候がもたらした報告を聞いたその瞬間、彼は眉間に深い皺を刻んだ。それは、リネン山に高い土の壁が作られていたというものだった。

俄かには信じがたかった。それは、退路が絶たれたことを意味するのと同時に、そこは、深い谷となっていて、短期間の間に壁を作るような場所では決してなかった。

ノマサは最初、その報告を信じなかった。というより、単に、落石などで道が細くなった程度だろうと解釈していた。だが、兵士からの報告では、山の一部が抉れていて、おそらく山が崩れたのだろうと言うこと。さらには、山から流れ出た土が、数十メートルの高さにまで盛られ、完全に人の通行を遮断してしまっていること。しかもそれは、人為的としか思えないような作りであったことなどを聞くに及び、現在置かれている状況が、最悪の状況にあることを理解したのだった。

一方のフナイは、その顔から血の気が完全に引いていた。思考は完全に停止し、ただ、ノマサとその家来たちのやり取りを呆然と眺めている他はなかった。それは、彼が率いていた幕僚たちも同様で、彼らは固唾を飲んで、ノマサらの動きを注視していた。

ややあってノマサは、手を振って家来たちを下がらせた。そした、呆然とした表情で天を仰いだ。

「申し上げます！」

一瞬の静寂を破るように、男の声が響き渡った。見ると、一人の兵士が、全速力でノマサの前に走っていき、そのすぐ前で片膝をついて畏まった。

「裏山は……水源地は、セーファンドの軍勢で固められております！」

兵士の報告に、ノマサは反応を示さない。再び静寂が訪れる。

「……その数は？」

やっとのことで、ノマサが気だるそうな声で口を開く。彼の質問に、兵士は少しオドオドとした様子を見せたが、やがて、意を決したかのように、しゃんと背筋を伸ばした。

「はっ、……わかりかねます」

「わからない？　何故だ？」

「山の頂上は、セーファンド軍で完全に固められており、近づくことさえできませんでした」

「近づくことができぬからと言って、そのおおよその数はわかるだろう」

「はっ……」

「構わない。言うのだ」

「誠に恐れ多きことながら、もともとあの裏山には、セーファンド軍一万が陣を敷いていたと聞き及びます。恐らくは、その軍がそのまま山の頂上に陣取っていると愚考します」

「……ご苦労だった」

ノマサの言葉に、男はハッと答えて立ち上がり、一礼すると踵を返

してその場を後にした。

彼は頭の中で考えを巡らせていた。現在、自軍は完全に包囲された形となっていた。しかも、水の手を断たれた状態だ。このままの状態が続けば、この軍勢は一週間ももたないだろう。雨が降れば別だが、そんな不確かなものを計算に入れるべきではないことを、彼は冷静に判断していた。

この状況を打開するには、目の前のセーファンド軍を打ち破る外はない。このまま動かずにいることは即ち、自らの敗北を意味していた。しかもそれは、時間が経てばたつほど、可能性が高まるのだ。

攻撃するのであれば、裏山の頂上に陣取った部隊だ。むしろ、それをしなければ敗北すると言って過言ではなかった。斥候の話では、山の頂上には泉があると言う。それは、この城の水瓶を潤していた水に他ならなかった。そこに陣取る軍勢を打ち破り、水の手を確保すれば、退路が絶たれているとはいえ、戦いを継続することは可能だった。

だが、山の上の軍を攻撃すれば、下流に陣取る本隊と思われる軍勢が押し寄せてくるのは、火を見るよりも明らかだった。そうなれば、挟み撃ちに合うことになる。その結果は、考えるまでもないことだった。

……夜襲を仕掛ける。

ノマサは心の中でそう決断した。夜陰に紛れて、全兵力を以て、頂上に布陣する部隊を攻撃するのだ。地の利は圧倒的に不利だ。それ故に、全力で攻撃する必要があった。カーザ城の兵力は二万五千。頂上の軍勢は一万。数の上では圧倒的に有利だ。闇に紛れて山の中

を移動し、疾風迅雷のごとく敵を叩く……これしか方法はないように思えた。

彼はその決断を、ノーノ軍総司令官のフナイに伝えようと視線を向けた。だが彼はスッと視線を外した。ノマサの腹の中で怒りが沸々と湧き上がる。

……わざわざカーザ城を救援に来てやっているにもかかわらず、なぜこんな仕打ちを受けねばならぬのだ。そもそも、この男は何だ。今、置かれている状況が理解できていないのか。理解しているのであれば、なぜ、作戦の一つも提案しないのだ。援軍を頼んでおいて何もしないとは、この男は無能にもほどがある。

ノマサの怒りが伝わったのか、フナイは、キョロキョロとあらぬ方向に目を泳がせると、声を裏返しながら口を開いた。

「あ、え、う、も、もうすぐ、もうすぐ、雨……雨が、ふり、そうですな」

「何？」

「あっ、雨が、降りそうです。ええ、雨、が」

ノマサは空に視線を向けてみた。なるほど確かに、空は曇っていて、太陽は出ていなかった。

「やっ、山の天気は変わりやすいですからな。青天であっても油断はなりません。突然雨が降り出すこともよくあるのです。我らも、カーザ城を囲んでいる間、何度、突然の雨に遭遇しましたか……。この辺りは、本当に、雨が多いところなのです」

フナイはそう言って何度も頷く。ノマサはもう一度空を見て、ゆっくり目を閉じた。

……彼の心に中に、迷いが生じていた。

第七百十九話　戦況確認

その頃、俺はというと、執務室で仕事をしていた。

これでも一応、王という立場にいるために、それなりに仕事がある。大抵のことは、リコ、フェリス、ルアラ、そしてシャリオらに任せておけば問題ないのだが、どうしても俺の決済が必要なものも多くあって、それらを判断しなければいけないこともある。一応、戦時などで俺が都に居られない時のために、職務を代行できる者も決めていて、それはリコが担うことになっている。本来ならば、リコに丸投げしてカーザ城に赴きたいところなのだが、さすがにそれは、リコがいい顔をしなかった。

「アガルタとして知恵を出しているのですから、こちらの義務は果たしていますわ。何もリノスが毎日カーザ城に出勤する必要はありませんわ」

まあ、そうなんだけれどね。ただ、やはりこの戦いに関わってしまった関係上、俺はもう知らんもんね、テヘテヘ。とはなれないのだ。

併せて、シディーとエスカリーナの希望もある。取り敢えず、カーザ城の水の手を断つことには成功しているために、この戦闘はそんなに長くは続かないだろうという俺の目論見に納得したリコは、昼食後から夕食までの時間であれば、カーザ城に出勤することを許してくれた。むろん、俺がいない間、何かコトが起これば、リコに対応してもらうことも了承済みだ。

というわけで、昼食後に俺はイリモとシディー、そして、エスカリ

ーナを連れて転移結界に乗った。ちなみに、エスカリーナは朝から屋敷に出勤してきて、カーザ城に行く気マンマンだった。だが、こうした事情もあって、昼からの出勤になると言ったところ、不機嫌になるのかと思いきや、そのまま屋敷に居座って、子供たちの相手をしてくれていた。表情があまり変わらないので、あまり気持ちが読めないのだが、意外といい人なのだろう。

「さて、行くか」

転移結界を発動させると、目の前が一瞬にして森の中に変わる。その瞬間、俺は思わず声を上げそうになった。何と目の前に人の背中があったのだ。

転移する直前に、皆には気配を隠す効果と、姿が見えないようにする効果を付与した結界を張っていた。そうしないと、森の中の生き物たちが騒ぎだして、うるさいのだ。いや、本当に結界を張っていてよかった。

俺たちに背中を向けていたのは、女性だった。こちらを振り返った瞬間、俺はまたも声を上げそうになった。そう、ジュリアだったからだ。

彼女は俺たちに全く気付いていない。キョロキョロと周囲を見廻しながら、森の奥深くに入っていく。一体、何を探しているのだろうか。……まあ、大体の察しは着くのだが。

ふと見ると、シディーが完全に引いていた。エスカリーナは、相変わらず無表情だが、やはり、ジュリアの行動にドン引きしているようにも見える。

取り敢えず俺たちは山を下った。河原に出るとすぐにイリモに乗り、そのまま上空に上がる。

「いや、ビックリしたな。ジュリアは何をしていたんだろうな」

「きっと、私たちを探しに来たに決まっています」

「やっぱり、シディーもそう思うか？」

「はい。あの女性、かなり私たちに執着していますね」

「うわ～面倒くさいな」

「別に私たちを疑っているんじゃなくて、何というか……。その……放ってはおけないというか、そんな気持ちのようです」

「それ、かなり面倒臭いじゃん」

「……ですよね」

そんな言葉を交わしながら、俺たちは上空からカーザ城を観察する。敵に目立った動きはなさそうで、戦闘が行われた形跡もなかった。

一通り戦況を確認した俺たちは、川下に陣を張る総司令官たちのいる地点に馬首を向けた。

しばらく飛んでいると、その陣は見えてきた。山の中のことで、道が広くなったり狭くなったりしている。彼らはその道が狭くなったところを抜けた場所に陣を張っていた。

「おお、ここに陣を張ったか。まあまあだな。ここなら、敵の攻撃を受けるのに最善の場所だ。ただ、攻撃に移るとなると、少し時間がかかってしまうな。カーザ城から敵軍が裏山に向かって出撃したとき、攻撃に移るのに時間がかかってしまう……。俺なら、もう少し北側の川と川が合流している三角地帯に陣を張るけれどな。あそこなら、すぐ傍に森もあり、見通しもいい。敵が攻めてきたら、三角地帯に兵を集中させて防御すればいい」

そんなことを言いながら、俺は陣から少し離れた場所にイリモを着地させる。

さて、本陣に向かおうとしたが、シディーはイリモを連れて行かない方がいいと言う。確かに、あの総司令官の許には、徒歩で来たような体で話していた。ここでイリモを連れて行けば、確実に怪しまれるだろう。

俺は転移結界を張って一旦帝都の屋敷に帰り、イリモを馬小屋に帰らせた。そして、再び転移して、総司令官の許に向かった。

俺たちの姿を見ると、兵士たちが皆、動きを止めてじっと見てきた。今までどこに行っていたんだといった気持ちがよく見て取れる。そんな彼らの間を手刀を切りながら、どうも、こんにちは、失礼しますと言いながら進んでいく。

「貴様ら……」

突然声をかけられたので振り向くと、そこには見たことのある男が立ち尽くしていた。確か、セーファンド軍の幕僚の一人だ。名前はまだ知らない。

いわゆるガチムチの男だ。彼は大股で俺たちに近づくと、息を乱しながら話しかけてきた。

「どこに行っていたのだ」

「どこに？　ええと、山の中を……」

「山の中！？　一晩中山の中にいたのか？」

「まあ、そうですね」

「……よく生きていたな。いや、心配していたのだ」

彼の話では、この山は割と高ランクの魔物が住んでいて、山の頂上にはドラゴンも生息しているらしい。それらはたまに麓まで降りてくることがあり、冒険者など、単体で行動している者は、まず、それらの餌食になる可能性が高いのだと言う。

ランクの高い魔物は、ある程度の知能が身についているために、組織された軍勢であればまず、襲ってくることはないのだと説明してくれた。その代り、軍が壊滅してしまい、壊走状態になってしまうと、襲いに来る可能性があるのだとも教えてくれた。

「へえ～。では、負けると、かなり甚大な被害が出ますね」

「そうなのだ。これまで我らがノーノ軍を撃退できたのは、その魔物たちのお蔭でもあるのだ。奴らはカーザ城を攻める度に、少なからず魔物たちに襲われていた。そのせいもあって、我らは城を守ることができていた」

なるほどと頷きながら俺は、このセーファンド軍には、魔物を操る何らかの方法があるのではないかと考えた。

程なくして俺たちは総司令官たちがいる陣に通された。司令官は俺を見ると、忌々しそうな表情を浮かべた。

「一体今までどこに行っていたのだ？」

「まあ、森の中を、ね。少し道に迷ってしまいましてね」

「……そうか」

彼はそう言ってプイッとそっぽを向いた。

「ところで、戦況はどうでしょうか。見たところ、戦闘が行われた形跡はなさそうですが」

「今は静観中だ。それよりも、壁は上手く作れたのか」

「ええ。なかなかいい出来栄えだと思いますよ」

「……一つ、聞きたいことがある」

「ほう、何なりと」

「ここから北側の、カーザ城付近の川が干上がっている。まさかこれも、貴殿たちの仕業か？」

「ハッハッハ」

俺は明確な答えを言わずにおいた。このやり取りで、ある程度のことは察してくれただろう。

「ケンシン殿！」

大声で名前を呼ばれたので、体が震えてしまった。見ると、そこにはカーザ城のホルムがいた。

「まさか、一夜のうちに川の水が干上がるとは思いませんでした。てっきり、水をせき止めても、二万の軍勢が川の水を飲み尽くすまで二日はかかろうかと考えていましたが、さすがはアガルタ王がお遣わしになられた方だけあります。いや、恐れ入りました。これで、戦況は我らに少し、有利となりました」

「少し、ですか？」

「ええ、私はそう思っています。ここは行軍するのに足場が悪いのです。ご覧ください。カーザ城に向かうには、あの切通を通らねばなりません。大軍が行動するには、適さない場所なのです」

……この男の方が、遥かに戦況を正確に理解しているようだ。

第七百二十話　マジで言ってんの？

「これから敵は、どう出てくるでしょうかね」

俺の質問に、ホルムはニヤリと笑みを浮かべた。待っていましたと言わんばかりの顔だった。

「私が敵方の司令官ならば、今夜にでも夜襲をかけます」

「なるほど」

「裏山に陣を張るラウネスク様を、全兵力を以て叩くのです。そうすれば、水の手が確保できます。それさえできれば、籠城戦は可能ですし、食料が尽きぬうちは、あの城は落ちることはありません」

「そうなれば、あとは持久戦、か」

「左様です。まあ、私なら、撤退を考えずに我が国に攻め入って、領地を切り取れるだけ切り取りますがね。……おっと」

ホルムが突然首をすくめる。俺の後ろに総司令官が立っていたからだ。

「相変わらずよくしゃべるな、ホルム」

「……恐れ入ります」

総司令官の言葉に、彼はすごすごと後に下がった。その彼を忌々し

そうな目で追いながら、総司令官は誰に言うともなく口を開く。

「よく喋る者は、軍人には向かぬ」

「そういうものですかね？」

「そういうものだ」

「総司令官は、彼をあまり評価していないんだ」

「……」

「かなり優秀だと思うんだけれどな、彼は」

「……」

「もし、セーファンド軍が彼をいらない、というのであれば、アガルタにスカウトしちゃおうかな」

……総司令官の眼が怖い。ただ、ホルムをスカウトしてもいいと思うのは、俺の本音だ。彼の考えは、クノゲンによく似ている。彼がもし、アガルタ軍に入れば、さらに兵士たちの練度が高まるだろう。

「フッ、素人考えだな」

総司令官は吐き捨てるようにそう言った。ホルムの軍人としての資質を単に見抜けていないだけなのか、それとも、その資質に嫉妬しているのか、しかとしたことはわからないが、おそらく前者なのだろう。よくこれで、数万の軍勢を指揮する司令官が勤まるなと、腹の中で呟いてしまう。

「ところで、総司令官殿はこれからどうなさるおつもりで？」

「どうなさる、とは、どういうことだ？」

「いや……これから、セーファンド軍はどう動くおつもりでしょうか？」

「静観する」

「は？」

「ここで静観するのだ」

「あの……夜襲への備えは？」

「必要ないだろう」

「ありゃりゃ」

それは色んな意味でヤバくないか？　思わず声が漏れてしまった。相変わらず総司令官は俺に憎しみの視線を向けている。そんな彼は、まるで、噛んで含めるような言い回しで口を開いた。

「敵は、水の手を断たれた今、雨を待っているのだ」

「雨ぇ？」

「山の天気は変わりやすい。その天気の変り目を、待っているのだ」

「……あの、敵が水を獲得すると、攻めにくくなるのでは？」

「敵が水を手に入れる前に攻めるのだ」

「すみません、ちょっと、何を言っておいでなのかわかりかねますが……」

総司令官はフンと鼻を鳴らすと、俺に侮蔑の表情を浮かべながら、さらに言葉を続けた。

「雨が降れば敵は城を出てくるだろう。水を得るために、兵士たちが樽だの鍋だのをもって外に出てくるはずだ。その機会を逃さず、我らは城を攻めるのだ。不意を突かれた敵は、抵抗らしい抵抗もできぬまま、我らに斬られることとなる。我が軍の損害も最小に抑えることにもつながるだろうが！」

「おおおお～」

思わずのけぞってしまった。よくそんなことを考え付いたなと、別の意味で感心してしまう。これは逆に雨が降ってほしいなとさえ思う。カーザ城はどんなことになるのだろうか。攻撃を仕掛けたセーファンド軍はどうなるだろうか。見てみたい気はする。

シディーがクイクイと俺の裾を引っ張る。何だと思ってみてみると、彼女はゆっくりと首を左右に振った。

「雨は、降らないと思います」

「なぜ、そう言い切れる！」

シディーの言葉に、総司令官が噛みついてきた。シディーはキョトンとした雰囲気を醸し出している。何だコイツ、と思っているに違いない。そんな彼女に、彼はさらに言葉を続けた。

「空は曇っているだろうが！　なぜ、雨が降らないなどと言い切れるのだ！　……うおっ！」

総司令官が後ずさりをする。エスカリーナの体の周りを、水が螺旋状に立ち昇っていた。

総司令官は俺たちに憎々し気な視線を向けると、プイッと踵を返して、その場を後にしていった。

「……いや、失礼しました」

総司令官と入れ替わるように、サーマが俺たちの前に現れた。彼はさも申し訳ないと言わんばかりの表情を浮かべながら口を開く。

「我が軍としましては、できるだけ損害を抑えねばなりませんから……」

「損害を抑えることは結構だが、戦いに敗れてしまっては何にもならないでしょう。損害どころか、国を失うことにもなりかねませんよ？」

俺の言葉に、サーマは苦笑いを浮かべる。

「まあ、悪いことは言わないので、敵が夜襲をかけてくる可能性も視野に入れて準備した方がいいと思いますよ。こう言っては何だが、お宅の総司令官殿より、あの、ホルムさんの方がよほど戦況を把握

されているように感じます」

「ありがとうございます。ホルムと相談しながら、対策を進めます」

サーマはそう言って、ホルムの許に小走りに走っていった。

「あっ！　あなたたち！」

目の前に突然、ジュリアが現れた。ずいぶんローブが汚れている。かなり山の中をうろついたようだ。

「生きていたのね！」

そう言って彼女は俺たちに近づいてきた。

「一体どこに行っていたのよ！」

「……いえ、山の中を進んでいましたので」

「心配だから、ずっと待っていたのよ！」

「ああ、そうですか。それはすみませんでした」

彼女はキョロキョロと周囲を見回すと、ずいっと俺たちに体を近づけて、声を殺しながら口を開く。

「昨日のは……見た？」

「……何のことでしょう？」

「光の玉が空を走っていて、川の水を干上がらせたのよ」

「おおーそれは不思議なことだー。そんなことがあったのかー。それは、すごいことだー」

「……棒読みになっていますよ」

後ろからシディーが小さな声で呟く。いや、そんなことはないはずだが？

「……見ていないの？」

ジュリアが怪訝な表情で尋ねてくる。

「いや、森の中をー移動していましたのでー川のことはー見ていないですー」

「……そうなの？　まさかだと思うけれど、あれはあなたの仕業じゃないわよね？」

「へぇっ？」

「……まさかね。ただ、少人数で森の中を移動するのは危険だわ。あなたたちは知らないけれど、本当に森の中は危険なのよ。これからはせめて、兵士たちと移動して欲しいのよ。サーマにもそう言っておくわ」

「……ありがとうございます。見たところ、随分汚れていますね。もしかして、森の中で俺たちを探してくれたのですか？」

「ええ。昨日は魔力を使い果たしてしまったから、一旦ここに戻ってポーションを飲んで、陽が上ってからしばらくの間、森の中であなたたちを探してみたのよ。だって、せっかくアガルタ王様が遣わしてくれた方々なのに、ケガをして帰しては帝国の名折れだわ」

……めちゃめちゃいい人じゃないか、この人。うざいと言っていた自分を少し恥じた。彼女は腕組みをしながら、サーマのいる方向に視線を向けた。

「そもそも、あの男もあの男よ。使者の方々をほったらかして自分たちだけ先に撤退するんだから。使者の方々が亡くなられでもしたら、どうするのかしら？」

彼女は再び俺たちに視線を向け、さらに言葉を続ける。

「どうしても単体で動かなきゃいけないときは、私に言ってちょうだい。こう見えても、結界スキルも持っているから、私とそう離れなければ、問題なくあなたたちを守ることができるわ。そうだ、微弱な結界をあなた方に張っておこうかしら」

そう言って彼女は詠唱を始めた。それは、かなり長い時間がかかっていた。

「……あれ？　おかしいわね。結界が張れていないわ。どうして？」

理由は簡単です。ＬＶ５の結界の上に、ＬＶ２の結界は張れないのですよ……。

第七百二十一話　蝋人形？

ちょうど同じ頃、カーザ城を占領しているノーノ、エルスモ軍では、軍議が開かれていた。名目上は軍議だが、実際は、ノマサが一人で喋り倒していて、さながら、彼のトークショーのような様相を呈していた。

彼は今夜、裏山に陣取るセーファンド軍に夜襲をかけることを提案していた。それがいかに重要な作戦で、その成否がこの軍勢の生命をも左右することを熱心に説いていた。

だが、そこに集まった幕僚たちは項垂れるばかりで、誰一人、言葉を発する者はいなかった。通常であれば、幕僚の誰かが合いの手を入れたり、少なくとも頷いたりして、彼の言葉に反応を示すところだが、この時ばかりは、まるで人形のように固まり続けていた。

自軍ですらこのような有様なのだ。ノーノ軍の者たちに関しては…推して知るべしだった。

ノマサは不満だった。本来ならば、ノーノ軍がもっと能動的に動くべきなのだ。しかし、彼らは魂が抜けたように呆然しているばかりだった。その腹の内は読めていた。ひたすらに雨を待ちたいのだ。雨さえ降ればこの状況は打開できると考えているのだ。甘い、何とも甘い考えだった。つい先ほどまではその考えは容認できたが、今は状況が違う。このままでは放っておけば、この城は自落することは明白だった。

ノマサとしては、ここでおめおめと敵軍に投降するわけにはいかな

かった。彼は、心の奥底に秘めた思いがあった。何としてもそれを成就させたい……。それこそが、今の彼を動かしているモチベーションだった。むしろ、この危機的状況を脱することができれば、自分の名声は、エルスモは言うに及ばず、ノーノ王国、果ては、セーファンド帝国にも鳴り響くことになる。そうなれば、胸に秘めた宿願の達成に大きく近づくことになるのだ。

しかし現在、彼の声は虚しく石でできた小さな部屋の中に響き渡る。目の前で項垂れる、まるで蝋人形のように微動だにしない部下たちを鼓舞しようと、さらに声を張り上げる。

「これは、我らの命を守る戦いだ！　ひいては、我が国の荒廃にもかかわる一戦だ！　皆の者、奮起するのだ！」

そこまで言うと、大きく息を吸い、自らの感情を整える。もう一度、冷静になって居並ぶ幕僚たちに視線を向けるが、誰一人として、目を合わせてくる者がいない。

……気持ちはわからないではなかった。この戦いに未来が見いだせないからだ。たとえ、今夜の襲撃に勝利したとしても、故国に戻れる算段は今のところ立っていないからだ。

斥候たちからもたらされた、城の北西に一夜にして巨大な壁が築かれているという情報……。川の水を完全にせき止めているところを見ると、かなり頑丈に作られていることは、容易に察することができた。斥候たちは口々に、山の頂上まで高く、しかも硬く作られた巨大な壁だと言う。撤退するのであれば、早くその壁を取り壊さねばならない。さもないと、時間が経つにつれて壁の向こう側では水位が増し、壊すと鉄砲水が発生して、自軍に甚大な被害を及ぼすことは目に見えていたからだ。

ただ、ノマサは、それを逆手に取ることはできないかと考えていた。

もし、裏山を占領し、水を確保することができたら、そこを拠点とする。つまり、カーザ城を捨てようと考えていたのだ。

裏山の占拠がなってすぐに、北西の壁を壊しにかかる。完全に破壊できなくとも、壁の底に穴の一つでも開けることができれば、鉄砲水が発生する。そうすれば、川下に陣取ったセーファンド軍は確実に壊滅する。加えて、その水は帝国内に入り、大洪水を引き起こして、甚大な被害を出すだろう。その隙に、軍勢をまとめて撤退する……それがノマサの考えだった。

むろん、それにはある程度の自軍への被害も覚悟せねばならないし、もし、壁を壊すことができなければ、壊滅する可能性すらあった。

だが、そうであっても彼は、それが生き残る可能性が最も高い作戦だと信じていた。

幸いにして、ノーノ軍は多くの魔術師を従軍させていた。それらの大半は結界スキルを持っていると同時に、土魔法に長けた者もいた。エルスモ軍にも、そうした者たちが従軍しており、土魔法を操ることができる者は、全体で三百名近くにもなっていた。それらを総動員で切れば、壁に穴をあけることくらいは可能であると彼は考えていた。

しかし、そうするためには、今夜の夜襲の成功が絶対条件となる。このままでは、その達成は難しいと言わざるを得なかった。

ノマサは、小さなため息をつくと、幕僚たちを残して部屋を出た。

廊下には兵士たちが無造作に床に腰を下ろし、壁を背に持たれている。皆、俯いたままで微動だにしない。彼が側を通っても、挙手の礼すらしない。

本来ならばこれは、重大な軍規違反だった。それこそ、それを理由に処刑することさえできた。つい前日まで、このような無礼な振る舞いをする兵士は、エルスモ軍においては皆無だった。自分の姿を見た兵士たちは一様に、まるで機械人形のように背筋を正して挙手の礼を取っていた。それが今はどうだ、幕僚たちと同様、兵士たちも蝋人形と化した状態となっていた。

そのとき、目の前の兵士がスッと顔を上げたかとおもうと、ヨロヨロと立ち上がり、ぎこちなく挙手の礼を取った。その様子を見てノマサは、呆れたように口を開く。

「……しっかりしないか。何というザマだ」

「し……失礼しました」

彼は兵士を一瞥すると、バルコニーに向かって歩を進めた。後から幕僚たちがゾロゾロと付いて来ようとしたが、それを押しとどめ、一人にしてくれと言って、その場を立ち去った。

バルコニーから空を見る。曇ってはいるが、雨が降る気配はなかった。

最悪の光景が頭の中をよぎる。先ほど唱えた夜襲作戦が失敗し、この城に押し戻される。敵は攻撃を仕掛けて来ず、いたずらに日々を送る。完全に水の手を断たれた城内では兵士たちが騒ぎを起こし、もはや軍としての体制を維持することができなくなる。そうなれば、

あとは兵士たちが散り散りとなり、魔物やセーファンド軍の餌食となり、壊滅していく……。

己の首が敵の帝都で晒されている光景が脳裏に浮かび上がる。それを打ち消すように頭を左右に振り、心を落ち着ける。だが、その考えはどうしても現実になるような気がしてならなかった。

敵もバカではない。今夜、夜襲をかけてくることは予想しているだろう。夜襲は、敵が油断しているからこそ効果のあがる作戦であり、準備万端整った軍勢に対しては、ほとんど意味をなさない作戦だ。とはいえ、数の上では、ほぼ倍の差がある。勝算はそこにあった。

幕僚たちの不安もよくわかる。ただでさえ地の利がない場所だ。加えて、敵の陣立てもよくわかっていない。そこに夜中、攻撃を仕掛けるということは、相当なリスクを負うことを意味していた。もっと情報を集めてからでも遅くはないと言う彼らの進言も理はある。

ただ、ノマサは直感的に、仕掛けるのならば今夜だと感じていた。敵の動きを探るのは、攻撃を仕掛けると言っているようなものだ。その動きが悟られれば、敵はさらに防御を強化するだろう。そうなってからでは、作戦の成功率は格段に下がってしまう。日数を費やせばそれだけ、成功率は下がっていくのだ。

……何とか、兵士たちの士気を上げて、乾坤一擲の攻撃を敵にぶつけて、奴らを敗走せしめねば、先はない。

そんな覚悟にも似た感情を胸に、彼は大きく深呼吸をする。裏山の方角からは強い風が吹き下ろしていた。まるで、ノーノ・エルスモ連合軍が攻め入らないようにしているかのようだった。ノマサは再び頭を左右に振り、幕僚たちが控えるあの小部屋に向かって、歩を

進めた。

第七百二十二話　降伏勧告

結果を先に言ってしまうと、ノーノ・エルスモ連合軍は、カーザ城の裏山に陣を敷くセーファンド帝国軍に夜襲を仕掛け、負けた。

負けたと言ったが、実際は大規模な戦闘にはならず、小競り合い程度で終わったらしい。無暗に兵士を突撃させなかった敵側の司令官は、ある意味で優秀だ。

俺から言わせれば、セーファンド帝国にとっては、負ける要素のない戦いだ。自軍がこもる山の構造は知り尽くしているため、敵がどのようなルートで向かってくるのかは、手にとるようにわかるはずだった。侵攻ルートが把握できていたならば、あとはそこに兵士を配置するだけだ。どんなバカな司令官でも、そのくらいのことはできるだろう。

加えて、裏山の部隊には、カーザ城を守っていたホルムがいた。兵士の指揮能力がズバ抜けて高い彼が指揮していては、ノーノ・エルスモ両軍が勝つことは難しいだろう。

ただ、戦いというのはやってみなければわからないこともある。戦いに絶対というものはないのだ。戦いの趨勢はサダキチたちフェアリードラゴンが教えてくれた。突然夜中に現れたときは驚いたが、彼らの報告を聞きながら、万が一、セーファンド軍が敗れるようなことがあれば、すぐに向かうつもりでいた。

だが、その懸念は杞憂に終わった。サダキチの報告では、ノーノ・エルスモ連合軍は、セーファンド軍に攻撃を仕掛けたが、そのほと

んどは、敵陣に辿り着く前に討たれたらしい。帝国軍は、山の上から弓矢と魔法を放ち、敵を散々に打ち破ったのだ。連合軍は、総攻撃に移るかと思いきや、そのままさっさと山を下り、カーザ城に引き上げてしまった。戦闘時間はわずか一時間程度だった。

朝になってサダキチが再び現れた。俺はその後の様子を彼に聞いた。

『で、セーファンド軍の動きは？』

『全く動きません』

『裏山に攻撃を仕掛けたときは、本軍が城に突入したんじゃなかったのか』

『その準備をしていたようには見えましたが、結局目立った動きはありませんでした』

『そうか』

『ただ……』

『どうした？』

『マルバーンを刺激したようで、朝から奴らの鳴き声が山中に響き渡っています』

『マルバーン？　ああ、白い、中型のドラゴンか』

『はい。我々も、奴らの領域を犯したと思われたようで、随分威嚇されました』

『怪我などはなかっただろうな』

『はい、それは全く』

『そうか。ご苦労だった。下がって休んでくれ』

「あ、サダキチ！」

突然声が聞こえたかと思うと、部屋の外にアリリアが立っていた。彼女はパタパタと窓際まで走って来ると、ピョンと壁によじ登り、窓の前で立っていたサダキチを両手で抱きしめた。

「かわいい～サダキチ、かわいい～」

スリスリとサダキチの顔に頬ずりしている。サダキチ本人はどうしていいかわからず、むしろ迷惑そうだ。

「こら、アリリア。サダキチを放しなさい」

「いやよ。ねえ、サダキチ、私の子供になりなさいよ～」

「サダキチは忙しいんだ。放してやりなさい。それに、どうしてサダキチがいるのがわかったんだ？」

「教えてくれたの」

「教えてくれた？　誰に？」

「りゅーおーくん」

「あの野郎……」

俺は両手をアリリアに向けて、強力な結界を張ろうと目を閉じてイメージを膨らませる。

『く……くるしい……』

サダキチの声が聞こえる。見ると、アリリアがサダキチを全力で締め上げていた。彼はゆっくりと羽を動かしながら、何かを訴えている。

「アリリア、放しなさい。サダキチが苦しそうだ」

「ええ～」

不満そうな表情を浮かべながら、アリリアはサダキチから体を離した。彼はクイッと顔を天に向けると、ゆっくりと呼吸するように胸を膨らませた。

聞けば、ドラゴンの弱点は口なのだそうだ。彼らは鼻がないために、常に口呼吸をしている。そのために、口を完全にふさがれてしまうと呼吸ができなくなり、窒息してしまうのだと言う。

俺はサダキチにすまないことをしたと詫び、下がってよいと命じた。その直後、彼の姿は消え失せた。

「おとーさん、私もドラゴン欲しい。……おとーさん？」

「……いいことを聞いたな。メイに頼んで……ゴニョゴニョ」

後で聞いたが、そのときの俺の顔はとても悪そうな仕上がりだったらしい。いや、これもストーカーから娘を守るためなのだ。断じて、龍王自身が嫌いだからじゃないのだ。

その後も続々とフェアリードラゴンから続報が入るが、今のところ、戦場は落ち着いているのだと言う。俺は動向に注意を払いながらアガルタの都に出勤し、仕事を片付けた後、カーザ城に向かうことにした。時刻はちょうど、昼を過ぎたあたりだった。

帝都の屋敷で、シディー、エスカリーナと昼食を食べて、カーザ城に移動する。本陣についてみると、何やら兵士たちがざわついている。何事かと思って聞いてみると、何と、つい先ほど、カーザ城から敵兵が逃亡して、セーファンド帝国軍に降伏を申し入れたのだと言う。早速本陣に向かうと、総司令官を中心に幕僚たちが居並び、何やら緊迫した雰囲気を醸し出していた。

総司令官はジロリと俺を睨むと、低い声で、まるで俺を威嚇するように口を開いた。

「今までどこにいっていた?」

「森の中で……」

「……相変わらず命知らずだな」

「ええ。一応、昨夜の戦いの様子を調べていました。どうやら敵はすぐに撤退したようですね」

「……」

「敵が動いたときに、カーザ城に攻撃を仕掛ければよかったのに。そうすれば今頃城は奪還まで行っていたのでは？」

俺の言葉に総司令官は何も答えない。ただ、俺を睨みつけている。

「……ああ。自軍の損害を最小限に抑えなければいけないのでしたね。城攻めをすると、少なからず敵の抵抗にあうし、引き揚げてきた軍勢とも戦わねばならない。そうなると、下手をすれば千単位の被害が出る可能性すらありますからね」

幕僚の一人が、俺に向かってスッと頭を下げている。どうやら、もうこの辺で勘弁してやってくれと言わんばかりだ。その隣には、サーマが座っていた。彼も隣の幕僚同様、苦笑いを浮かべている。察するに、もぬけの殻となったカーザ城を攻撃しておくべきだった……といった議論が先ほどまで展開されていたようだ。

「先ほど、城から投降者が出たと聞きました。現在の状況を教えてくれませんか」

「現在敵は、城に籠ったままです。ただし、すでに城内の水は尽きており、これから大量の投降者が出る見込みです」

答えたのはサーマだった。俺は彼に向き直る。

「それでは、敵に矢文の一つでも送って、降伏を勧告してはいかがでしょう。命を助けて、本国への撤退を認めるとでも書けば、彼らも鉾を納めるのではないでしょうか」

「はい、そうしたいのですが……」

サーマはチラリと総司令官に視線を向ける。うん？　まさか、ヤツは反対なのか？

「手ぬるい」

視線で俺の心の中を読んだのか、彼は鋭い視線を俺に向けたまま、さらに言葉を続ける。

「そんな矢文一つで、敵がおめおめと我らに降るものか」

「……やってみればいいじゃないですか？」

「むろんそのつもりだ。ヤツらには、我らの恐ろしさを骨の髄まで味わせてやる」

総司令官は立ち上がると、側に控えている幕僚たちに向けて口を開いた。

「城に向けて矢文を放て！　明日の昼までに我らに降伏せねば、全員皆殺しにすると書くのだ！」

幕僚たちが戸惑っている。それはそうだ。そんな文言では、敵の態度を硬化させるだけだ。むしろそれは悪手中の悪手で、敵は死を覚悟した攻撃に移る可能性が高い。

だが、総司令官はそんな空気を察したのか、さらに言葉を続けた。

「矢文だけでは、我が軍の恐ろしさは伝わるまい。矢を放つ前に、投降してきた者たち全員の首を刎ねよ！　そして、その首を城の前

に並べるのだ！」

……お前今、何て言った？

第七百二十三話　相手の戦力

……正気か？

心の中で呟く。頭のネジが飛んでいる。まともな人間の言うことじゃない。

聞けば、投降してきた者は三十名を超えるのだと言う。それら全員の首を刎ねて、カーザ城の眼前に並べると言うのだ。どんな思考回路を通れば、そんな答えが導き出せるのか。昨日の晩に、変なものでも食ったのだろうか。

「……ありゃ、やっぱり付いているよ」

念のため、総司令官に鑑定スキルを発動させる。やはり、「呪いＬＶ２」が付いていた。

鑑定してわかったことだが、この男の人生は、負け続けた人生だった。子供の頃から、一番になれず、常に二番手、三番手を歩んできていた。別に、それはそれでいいんじゃないかと思うが、彼にとってはそれは屈辱であったようで、何としてもトップを取りたいと念じ続けている男だった。

そのために、何人かのライバルを殺していさえもいる。

よくここまで何事もなく生きて来られたと不思議に思うが、家柄の良さに助けられているのだろう。ちなみに、この男の曽祖父は、セーファンド帝国の皇帝に行きつく。つまり、彼は王族の端くれにな

るのだ。

その血筋の良さが幸いして、彼は遠征軍とはいえ、総司令官の地位に就くことができていた。まあ、彼にとっては幸運だが、帝国にとっては不幸以外の何物でもないのだが。

何より、彼に従う兵士たちが一番可哀そうだ。幕僚たちは彼の機嫌を取ればよいのだろうが、無理難題を押し付けられるのは兵士たちだ。イカれた男のイカれた命令で失う必要のない命が失われてしまうのだ。

「投降してきた者たちをここに引き据えろ。首を刎ねて、それをカーザ城に運ぶのだ！」

「お待ちください」

口を開いたのはサーマだった。彼は総司令官の前に膝をつくと、よく通る高い声で切々と説得を始めた。

「父上、どうかそのようなことはおやめください！」

「……」

「そのようなことをすれば、我が軍は未来永劫、ノーノ王国とエルスモ帝国に憎まれます。父上のお名前にも傷が付くことになります」

「お前は黙っていろ」

「いいえ、黙りません。父上はこの戦いを納めたいのですか、それともさらに拡大させたいのですか」

「むろん、この無益な戦いを納めるためだ」

「で、あれば、兵士たちの命を奪うのではなく、慈悲の心をもって接するべきです。さもないと……」

「サーマ、いつからお前は私に意見できる立場になったのだ？　随分、偉くなったのだな」

「……」

総司令官はフンと鼻を鳴らすと、クイッと顎をしゃくり、あらぬ方向に視線を泳がせた。もうこれ以上、お前の話を聞く気はないと言わんばかりの態度だ。

これでは埒が明かないと考えたのか、サーマはチラリと俺に視線を向け、小さな声で呟いた。

「……アガルタからのお方もおいでになりますれば」

その声を聴いて、総司令官はギロリと俺に視線を向けてきた。

「オイ、貴様。これからのことは他言無用だ」

「ほおぉぉぉ」

思わず声が漏れてしまった。それを言えば俺が言うことを聞くと思っているのだろうか。今までの話の流れから考えて、そんな可能性は皆無だとわからないのだろうか。わからないのだろうな、たぶん。

「わかったか！」

突然大声を出されたので、ビクッと体が震える。

「まあ、知ってしまったからなぁ……」

「何ィ？」

総司令官は目を吊り上げながら立ち上がると、大股で俺たちのいるところにやって来た。

「もう一度言う！　本日のことは他言無用だ！　アガルタ王には全く問題なかったと言っておけ！　わかったか！」

「……」

問題なかったって……。いや、問題ありまくりだって。言うなと言われても、一応、俺はアガルタの王なのだが。ここで正体を明かしてもいいかもしれないが……。いや、それをすると、さらに話がややこしくなるような気がする。

「もし、言えば、お前を殺す」

何も言わないのを無言の抵抗だと思ったのか、彼はさらに俺を恫喝してきた。怒りを通り越して、呆れかえってしまう。

そんな俺の心の声を読んだのか、彼はさらに言葉を続ける。

「貴様の命など、私の号令一下でどうとでもできるのだ。今、私が貴様を殺せと命じたら、たちどころに命を失うだろう。逃げようと

しても無駄だ。このセーファンド帝国軍一万の軍勢から逃げられるものなら逃げてみろ。貴様は……」

どうやらこの男では話し合いはできないようだ。俺は結界スキルを発動させる。

「うおっ！」

「きっ……消えた」

幕僚たちが動揺している。結界に姿と気配を消す効果を付与しただけなのだが、周囲の者たちは激しく動揺している。レベルの高い結界師ならば、このくらいのことはできるはずだが、彼らは接したことはないのだろうか。

そんなことを考えながら、俺はシディーとエスカリーナを促して狼狽える総司令官の背後に廻る。

「……」

結界を解除すると、俺たちの姿に気が付いた幕僚たちが、呆気にとられた表情を浮かべる。総司令官はキョロキョロと周囲を窺っていたが、幕僚たちの視線に気づいたのか、突然、ガバッと後ろを振り返ると、俺たちの姿を見て呼吸を止めた。

「……どうやら、皆さんに見つかることなく、この陣を抜けられそうですね」

総司令官の眼がピクピクと痙攣している。どうやら、グウの音も出ないようだ。そんな彼を一瞥しながら俺は、さらに言葉を続ける。

「相手の戦力を正確に見積もらないと、死ぬことになる」

俺はそのままサーマの所に向かう。

「捕虜たちは？」

「……あちらに」

彼はスッと視線を向ける。そこには陣幕が張られてあった。無限収納からホーリーソードを取り出し、それを抜いて天に向けて切っ先を向け、そのまま鞘に納める。その瞬間、陣幕が真っ二つに裂けた。

中には、男ばかりの兵士たちが後ろ手に縛られていた。あるものは転がされ、ある者は正座していた。先ほどまでの会話が聞こえたのか、全員の顔が青ざめている。

「せ……せめて、水を……水を、飲ませてくれ！」

一人の兵士が俺に向かって叫び声を上げる。恐らく、昨日から何も飲んでいないのだろう。そんな中で夜中行軍をして、敗れて帰って来ているのだ。それは余計に喉も乾くというものだろう。

片手を地面に向けて土魔法を発動させようとする。そのとき、エスカリーナがスッと前に出た。彼女は仕方がないなと言わんばかりに小さくため息をつくと、両手を前に水平に突き出した。

彼女の両手から大きな水の池が作り出されて、それが宙に浮いている。そこから小さな水の筋がいくつも飛び出した。

「お……おお……水だ……水だ……」

捕虜たちは立ち上がってヨロヨロとしながらこちらに向かってくる。後ろ手に縛られているためか、転びながらこちらにやって来る者も多い。

エスカリーナの許に辿り着いた者たちは、まるで呆けたように口を開けて一心不乱に、ゴクゴクと喉を鳴らして水を飲み始めた。中にはむせて咳き込む者たちもいる。何とも異様な光景がそこにあった。

しばらくすると、乾きが癒えたのか、皆、肩で息をしながら天を仰いでいる。相当美味い水だったようだ。エスカリーナが両手を合わせると、宙に浮いていた水はスッと消え失せた。彼女は無言のまま振り返ると、淡々とした足取りで元居た場所に戻った。

フードを被っているので様子はわからないが、きっと無表情のままだろう。

「……か、感謝する」

捕虜の一人が、呻くように口を開く。俺はその男をチラリと見て、そのまま踵を返して歩を進め、総司令官が座っていた椅子にどかりと腰を下ろす。シディーとエスカリーナは俺の後ろに控える。

誰にも言葉を発しなかった。まるで時間が止まったように、動く者は誰もいなかった……。

第七百二十四話　降伏させるには……

俺は幕僚たちに視線を向ける。彼らは一様に視線を合わせようとはしない。視線が合いそうになると、スッと目を伏せてしまう。その中で視線が合う者が二人いた。サーマとホルムだ。

サーマは困ったなといった表情を浮かべていて、一体どうするつもりだといった感情がありありと見て取れる。ホルムは、幕僚たちから離れたところに控えているが、じっと俺を見つめたままだ。その眼からは、何が始まるのだろうと、期待に胸を膨らませているようだ。

俺はサーマに再び視線を向け、顎を少し動かす。それで彼は察してくれたのか、仕方ないなという表情を浮かべたままこちらに向かってやってきた。

彼は並べられている椅子に座った。俺のすぐ前の席だ。そこは、元々彼が座っていた席だった。

彼に促されるように、他の幕僚たちも戸惑いながら元居た席に向かって行く。総司令官は、その場に立ち尽くしたままだ。激しい憎悪が俺に向けられているのをビシビシと感じるが、放っておくことにする。

「さて、ただ今総司令官殿が言われたことですが、皆さんは賛成なのですか？」

幕僚たちは何とも言えない表情を浮かべる。ふと見ると、ホルムが

首を伸ばしながら、鼻を膨らませている。

「何だい？　何か意見がありますか？」

ホルムに話しかけてみると、彼は驚いた表情を浮かべてアタフタと周囲を見回した。俺から話しかけられるのが意外なことだったらしい。

「いいよ、遠慮せずに言ってみてください」

「あの……私は……」

「そこでは話が遠いですから、こちらに来てください」

俺はサーマに椅子を用意するように言うと、彼は隣に控えていた幕僚に何やら呟いた。すると、その幕僚が立ち上がっていそいそと椅子を取りに行って戻ってきた。サーマに椅子を用意しろと命じる俺も俺だが、それを部下に命じて取りに行かせるサーマもなかなかの人物だ。

男は俺のすぐ前に椅子を置いた。いや、これでは、使者を引見する形だろう。セーファンド帝国軍におけるホルムの階級はよくわからないが、幕僚たちから離れたところに座っているのを見ると、階級自体は高くないのだろう。まあ、総司令官から遠ざけられているせいもあるのかもしれない。そんな彼に用意された席が、俺の目の前なのだ。能力の高い者がこんな扱いを受けているのを見るのは、何とも忍びない。

俺は立ち上がり、目の前に置かれた椅子を持つと、俺が座っている椅子のすぐ左隣にそれを置いた。つまりは、サーマと相対する位置

にホルムを迎える形となる。ただ、このままだと、ホルムは俺の後ろに控えることになるために、俺は自分が座っていた椅子を少し後ろにずらした。

「こちらに来てください」

ホルムは目を白黒させながら、居心地悪そうに用意された椅子に座った。その彼に、意見を言うように促す。

「あなたは、総司令官殿の言われることに賛成ですか？」

「う……私は、反対、です」

「なるほど。どうしたらよいと思いますか？」

「このまま放っておけばよいと思います」

「ほう、放っておく？」

「はい。すでに、投降してくる兵士がいる段階で、敵はもう瓦解していると見てよいと思います。このまま時間を過ごせば、さらに投降者は増えるでしょう。そうなれば、敵は放っておいても自落します」

「なるほど。で、サーマさんはどう思います？」

俺の言葉に、サーマはチラリと父である総司令官に視線を向けたが、やがてあきらめたように口を開いた。

「ホルム殿の意見に賛成です」

「そうですか。皆さんも同意見ですか？」

俺の言葉に、居並ぶ幕僚たちは目を伏せる。この状況で意見を言うことができる者は、相当胆力があるか、空気を読めないバカかのどちらかだ。敢えてこのような意見が出づらい場面を作ってみたが、本来はこんなことはやるべきではない。にもかかわらず、こんなことをしてしまっているのは、何ともイヤな男だと思う。

総司令官がゆっくりとこちらに近づいてきているのがわかる。彼は俺を斬る気だ。俺を殺し、シディーたちを殺し、捕虜たちを殺し、そして、カーザ城に立てこもった者たちを皆殺しにするつもりだ。そのくらいの強い殺気が向けられている。

奴は剣の柄に手をかけた。だが、そのまま固まってしまった。俺が結界を張ったのだ。

みるみる顔が紅潮していく。こめかみに青筋が浮き出ている。歯を食いしばって必死で体を動かそうとしているが、どうしても動かすことができない。

「すまないけれど、あなたにはこのままここで固まっていただきます。あなたが指揮を執れば、多くの人命が失われます。考えてもごらんなさい。捕虜三十人の首を斬れば、敵は降伏するどころか、死に物狂いになって抵抗するでしょう。ましてや、乾きで苦しんでいる者たちです。水を求めて、死をも恐れぬ攻撃を仕掛けてくるでしょう。そうなれば、セーファンド軍もタダではすまないでしょうし、ひいては、ノーノとエルスモが黙っていないでしょう。必ず報復の攻撃が行われます。そうなれば、この戦いは泥沼化する。帝国はこの先何年も戦いの中に身を投じることになる。それに、捕虜を殺し

たという悪評が全世界に広がることになる。そうなればこの国は孤立することになるが、それでもいいのか？」

総司令官の鼻息が荒くなっている。顔も赤いのを通り越して青ざめてきている。そんな彼に向かってさらに言葉を続ける。

「大体、戦いをやりたいのは皇帝や一部の司令官や貴族たちだろう。ここに居る幕僚や兵士たちは戦いなんて望んでいない。それは、敵も同じことだ。誰が好き好んで人を殺したいと思うものか。人を殺したいと思うのならば、同じように人を殺したいと思う奴らでやれ。人を巻き込むな」

俺は周囲を見廻しながら、少し大きめの声で、まるで宣言するかのように口を開く。

「アガルタの見解としては、先ほど総司令官が下した作戦は当を得たものとは言えず、むしろ、悪手であると断じる。ここは、恐怖や威嚇による制圧ではなく、情によって敵方に降伏を求める作戦を提案したいが、いかがだろうか」

俺の言葉に、幕僚たち全員が頷く。

「それでは、提案する。カーザ城に使者を立て、敵に対して降伏勧告を行う。条件は両軍双方の速やかなる撤退だ。それが容れられるのであれば、撤退する道を作ってもいい」

「畏れながら」

口を開いたのはサーマだった。彼は父親をチラチラ見ながら言葉を続ける。

「我らとしては、ノーノ・エルスモ両軍をこのまま無傷で帰すわけにはいきません。我が国は侵攻されております。それなりの代償を払ってもらわねば、我らとしても納得できませんし、何より、陛下がご納得なされないでしょう」

「そうですか。それならば、敵軍が降伏した暁には、ちょっとした強制労働を課しましょう。それでいいですか？」

「強制労働？」

「ええ。せっかくですから、穴を掘ってもらいましょう。大きな、大きな穴をね」

「穴……でしょうか」

「そう。カーザ城の前に大きな穴を掘ってもらいます。最終的に、上流に作った壁を壊さねばなりません。そうすると、ためていた水が一気に川下に向かって流れていきます。そのときのために、城の前に大きな穴を作っておけば、ある程度の水量は調整できるかと思うのです。それに、それをすれば、城の防御はさらに強くなりますから、一石二鳥ではないですか？」

俺の言葉に、サーマはゆっくりと頭を下げた。

「それでは、降伏勧告の使者は私が立ちましょう！」

ホルムが元気よく立ち上がった。俺は大きく頷いた。

第七百二十四話　降伏させるには……（後書き）

Ｃｏｍｉｃブースト様で、コミック版『結界師への転生』の最新話が公開されました。今回は、原作にも小説版にも掲載されていないオリジナルストーリーとなっています。リコの美しさとメイちゃんのかわいらしさが溢れる内容となっています。是非、チェックしてみてください！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６

第七百二十五話　師匠に礼を言う

この頭のネジが飛んでいる総司令官殿は、眠ってもらうことにした。今、彼は俺が張った結界の中で熟睡している。

彼が眠ってしまったので、セーファンド帝国軍の指揮は息子のサーマが執ることになった。と、いうより、なぜか彼が自然に総司令官のように振舞っている。

サーマの動きは迅速だった。裏山に布陣している部隊に使者を送り、同時に、皇帝に対して書簡を認めて、それを使者に持たせた。そして、兵士たちには休息をとるように命じ、一方で、カーザ城の動きから目を離してはいけないという命令を下すことも忘れなかった。

ホルムは意気揚々としてカーザ城に向かった。

彼は、捕虜の中から自分に帯同する者を選び、自身の部下たち数名と共に出発していった。同行する者は捕虜たちから立候補を募る形で決めていたのには感心した。立候補するということは、ホルムと一緒に説得する意志が強いことを現す。きっと、この交渉は成功するだろうと俺は確信していた。

ホルムが帰って来るまでには間がある。さてどうしようか。一旦帝都の屋敷に帰ろうと考えながら、一旦その場を辞す。周囲に誰もいなくなったのを見計らって、シディーが両手で俺の手を握ってきた。

「お見事です、リノス様。あの男の言う通り、兵士の首を斬って城の外に並べる……なんてことをした日には、全世界を巻き込む大戦

争になっていました」

「ええ！？　そんなに？」

「はい。あの男が兵士の首を斬れと言ったとき、確信に近い予感がしました。世界中で戦いが起こり、アガルタも、私たちも巻き込まれていました」

「おいおいおい……」

「今のところ、リノス様は全世界を掬った救世主です。さすがです。素晴らしいです」

シディーの今のところという言葉が気になる。まだこれから先、世界大戦を引き起こすフラグが立っているというのだろうか。俺はちょっと知恵を貸す程度で、あまり深く考えないでこの事案に首を突っ込んでしまった。やはり、厄介ごとを引き受けてしまう体質は、まだまだ健在のようだ。

とはいえ、俺にとっても、この戦いが長引くのはよろしくない。早く決着をつけて、普段の生活に戻りたい。そんなことを考えながら、これから先の展開を考える。

敵が降伏したら、城の外に出して水を与える。ある程度休息させたら、城の前に大きな穴を掘ってもらう。それには、セーファンド軍の者たちも参加させる。およそ四万人が全力で掘れば、短時間でかなり深い穴が掘れるはずだ。つるはしやスコップがなくて苦労するだろうが、そんなものは俺が土魔法でいくらでも錬成すればいい。

うまくすれば、陽が落ちるまでには、かなりの穴が掘れていること

だろう。そうなれば今夜は宴会だ。セーファンド、ノーノ・エルスモ軍、両軍皆で酒でも飲むのだ。まあ、司令官たちは色々と考えることもあるだろうから、別の場所に移動させておけばいい。皆で酒でも飲めば、自ずと打ち解けるというものだ。そして朝になれば、ノーノ・エルスモ両軍は撤退してもらう。俺が作った壁が問題だろうが、宴会の間に壁に階段を作っておいて、頂上まで上がれるようにしておけばいい。あとは、山の尾根伝いに国まで帰ってもらえれば、めでたくこの戦いは終了する。

「……まあ、そううまくはいかないだろうけどね」

そんなことを呟きながら、笑みを浮かべる。

「あ、あなたたち！」

突然女性の声が響き渡る。ジュリアだ。彼女は腕組みをしながら俺たちを睨んでいる。

「何をしているのよ」

「何をって……休息しろと命令がありましたので、どこかで休もうかと考えていたところです」

「ああ、そうなの。じゃあ、いいところがあるわ。こちらへどうぞ」

彼女はそう言うとスタスタと歩き出した。俺は思わずシディーとエスカリーナに視線を向ける。

「別にいいんじゃないでしょうか」

「……どちらでもいい」

二人とも拒否する理由はないようだ。まあ、休息する場所を案内してくれるのだろう。誰か、知らない人たちがたくさんいると緊張しちゃってイヤだな、などと考えながら彼女の後を付いて行くと、そこは人影のない、石だらけの河原だった。

「さあ、やるわよ」

「やるわよ、って、何を？」

「決まっているじゃない。魔法の練習よ」

「はあ？」

「言ったじゃない。火魔法を教えてあげるって」

……今ですか？　休憩するんじゃなかったのですか？　俺は思わずシディーたちに視線を向ける。ローブで顔が隠れて見えないが、どうやら二人とも戸惑っているようだ。

俺の戸惑いをよそに、彼女は真剣な表情で語りだした。

「魔法って言うのは、正しく使わないと命を縮めてしまうのよ。あなたはセンスがあるから我流で何とかなっているかもしれないけれど、それを長く続けてしまうと、ヘタをすると死んでしまうかもしれないのよ。だから、正しい魔法の使い方を伝えておこうと思ったのよ」

……そんなことを考えてくれていたんだ。ウザイと思ってしまった

俺を恥じる。そうか、魔法というのは、正しく使わないと命を縮めてしまうのか。そんなことはファルコ師匠は教えてくれなかったな。これまでかなり魔法を使ってきたし、今も魔力を使い続けている。ＭＰがほぼ、無制限に使えるので何も考えずにこれまで来たけれど、もしかすると、かなり寿命を消費してしまったのかもしれない。子供たちもまだまだ小さいし、ここで死ぬわけにはいかない。ここは、彼女の話を聞いておくことにしようか。

「いいかしら？　まず、魔法を使うのには、呼吸が大切なのよ」

「呼吸、ですか」

「そう、あなた、魔法を使うときには、どんな呼吸をしている？」

「何も意識したことはないですね」

「やっぱり……。いい？　魔法は呼吸が命なの。特に火メイジは大切なの。じゃあ、私が呼吸の見本を見せるわね？」

そう言うと彼女はスーッと息を吸い込むと、息を小刻みに吐き出し始めた。それを何度も繰り返していく。

「こうやって呼吸すると、お腹が動くでしょ？　こうやってお腹を動かしながら詠唱するの。そうすれば、体中に魔力が行きわたって、魔法が発動しやすくなるのよ」

そんなこと言いながら彼女は、掌を差し出して空に向ける。

「火を司る神よ。我が手にその聖なる炎を現し給え」

詠唱が終わると、彼女の掌からボウという音が聞こえ、そこから大きな火が起こった。まるで彼女の手が燃えているみたいで、何だか格好がいい。

「あなたはセンスがよさそうだから、すぐにこのくらいはできるんじゃないかしら。やってご覧なさい」

「あの……その呼吸をもう一度見せてもらってもいいでしょうか」

「いいわよ。鼻からゆっくり吸うの。吐くときは小刻みに吐き出すのがコツよ。これを繰り返していると、体中が温まって来るのよ」

……温まるか？　もしかしてそれは、イメージさせやすくするためのものじゃないか？

「あの……俺の師匠から習ったのは、体の中に流れる血を意識しろと教えられました。血は熱を帯びている。それが魔力だ、と。その熱を火や水に変えるイメージをするのだと教えられたのですけれど、もしかしてその呼吸は、熱をイメージしやすくするためのものですかね？」

「そんなことはないわ！」

俺の言葉を言下に否定される。ジュリアの顔が怖い……。

「血をイメージする？　バカなことを言わないで。確かに、血液は温かいけれど、それを炎に変える？　そんなことができるわけ……」

突然、彼女の右手の掌に炎が立ちのぼった。

「え？　ウソ……無詠唱で……」

ジュリアは目を丸くして驚いている。やはり、ファルコ師匠の教えは正しかったのだ！　やっぱりすごいや師匠は！　師匠、ありがとうございます！

俺は心の中で、丁寧に師匠に礼を言った。ジュリアは炎を消すと、顔をあらぬ方向に向けながら、小さな声で呟いた。

「かっ、変わった、やりかたね。まっ、まあ、こっ、こういう方法も、いっ、いいかもしれないわね……」

……思いっきり動揺してるやんけ。

第七百二十六話　初めて？　初めて？

ジュリアはその後、しどろもどろになりながら、俺たちに火魔法の使い方を説明した。相変わらず呼吸で体を温めて、詠唱によって魔法を発動するという理屈は変わらなかった。彼女は難しい魔法理論を折に触れて説明したが、要するにそれらは、イメージしやすいようにするためのものだと確信した。

例えば、長い詠唱。あれこそまさに魔法の使い手のイメージを膨らませるためのものだ。

「天地に漂う火の精霊たちを火の神の導きによってわが手に迎えん。その清き精霊の粋は世に害をなす悪獣毒者を霜に煮え湯を注ぐがごとく消滅させるだろう。精霊たちよ、来れ！……」

みたいな。実際はもっともっと長い詠唱をしていたが、俺の記憶力では覚えることができなかった。

こうした長い詠唱を行いながら、頭の中にイメージを膨らませ、呼吸によって体温を上げるイメージをしながら魔法を発動させる……。これがジュリアの魔法理論であろうし、おそらくは、この世界における魔法のスタンダードな運用方法なのだろう。

そう考えると、ファルコ師匠のやり方は異質だ。異端とされてもおかしくない理論だ。だが、その理論は実に明快で、使いやすいものだ。ただ、それがスタンダードになってしまうと、魔法を教える人たちが食いっぱぐれることになるだろう。

師匠は魔法大学で教官を務めていたと聞いた。あまりにも厳しい指導で辞める者が後を絶たなかったため、クビになったとのことだったが、それは自分の理論が学生に受け入れられなかったのも原因の一つではなかったかと思う。

俺に対しても、確かに厳しくはあったし、容赦はなかったために何度も死にかけた。ただ、ちゃんとフォローはしてくれた。自分の回復魔法のレベルを超える怪我は絶対にさせなかったし、どうして俺がその攻撃を食らったのか、どのように回避すればよかったのかを丁寧に教えてくれたのだ。ただし、言ったことを実行しなかったときは怒った。それはそれは怒った。あれは確か、ある程度魔法が使えるようになった頃か……。師匠に言われた通りやらず、自分の考えで魔法を使ってみようとしたとき、胸ぐらを掴まれたのだ。

「お前、儂が言ったことをどうしてやらない！　まずは教えられたことを教えられたとおりにやるのが最低限の礼儀だ。それができないのなら、破門するぞ！」

と激怒されたのだ。あのときの師匠は怖かった。マジで殺されると思ったのだ。……まあ、破門と言っても、別に弟子にしてくれと頼んだわけではないのだが、それはおいておくとして、全く魔法を使ったことのなかった俺が、ここまで魔法を使えるようになったことは、師匠の理論が正しかった証明だなと思う。

「ちょっと、聞いているの！」

ジュリアが声を上げた。驚いて体が震えてしまった。顔を隠しているので、俺の表情はわからないだろうが、取り敢えず目を細めて頷いておく。

「うわっ！」

またしても声が上がった。俺の後ろからだ。振り向いて見てみると、シディーの手から火柱が上がっていた。かなり慌てていて、必死で手を振って火を消そうしている。

バシャッ。

突然シディーの頭上から水が落ちてきた。そのお陰で彼女の炎は消えた。エスカリーナが水を操って消したのだろう。というより、水の精霊と契約している彼女は火が嫌いだ。それがすぐ隣で突然出現したのだから、ある意味で怒りもぶつけられたのかもしれない。

「……あ、ありがと」

けっこうひどい仕打ちに見えたが、シディーはそうは思わず、健気にお礼を言っている。そんな彼女たちを見て、ジュリアはまたしても声を上げた。

「もしかしてあなた、私の話を聞いて火魔法を使ってみたの？　初めて？　初めての火魔法かしら？」

あまりの勢いに押されてしまったのか、シディーは無言のままゆっくりと首を傾げている。完全に戸惑っている様子だが、ジュリアの勢いは止まらない。さらに言葉を続ける。

「せっかくだから、このまま私と一緒に火魔法の修行をしてみない？　帝国軍には火メイジが不足しているし、魔導士や魔法使いの中でも火メイジは少ないのよ。あなたはセンスがありそうだから、私たちと一緒に修業すれば、きっといい火メイジになるわ。皆で一緒

に修業した方が、スキルも上がりやすいわ！」

チラリと俺を見ながら話しているところを見ると、俺も一緒に修業の仲間に入れられているのか？　それは勘弁してもらいたいのだが……。

そんな俺の感情は全く汲まれずに、ジュリアはさらに言葉を続ける。次はエスカリーナに語り始めた。

「あなたは水属性？　やるじゃない！　詠唱が聞こえなかったけれど、まさか、無詠唱でやったの？　だとしたら、相当のスキルじゃない？　他にはどんな魔法が使えるの？　フロートは使えるの？　あの水を凍らせるやつよ？　ねえ、どうなのよ？」

……エスカリーナが怒っている。完全に嫌がっている。わからないのか？　殺気のようなものがビンビン伝わってくるのだが、ジュリアには感じないのだろうか。

「ちょっ、ちょっと、落ち着きましょうか……」

思わず声が出てしまった。俺の言葉に我を取り戻したのか、ジュリアはハッとした表情を俺に向けた。

「あ、ごめんなさい。あなたたちはアガルタの所属だったわよね……」

「まあ、機会があれば、魔法を、ねぇ……」

何とか当たり障りのない会話を交わして、このまま終わらせたいと思うのだが、俺の気持ちは伝わらないらしい。ジュリアはさらに話

しかけてきた。

「でもね、あなたと私と彼女が火メイジ、彼女が水メイジ、私の部下には、風、雷、あとは結界師と治癒魔術師がいるから、攻撃力に関しては、ほぼ、すべての属性が揃うわね。どんなヤツが来ても対応できるから、攻撃力に関しては全く心配がなくなるわ。あとは結界師と治癒魔術師ね。そこさえ揃えられれば、盤石の布陣になるわ。ねえ、そう思わない？」

思わず苦笑いを浮かべてしまう。まあ、そうかもしれないんだけれどもね……。

そのとき、俺の周囲を強風が駆け抜けた。見ると、シディーの足元から風が吹き上げているように見えた。これは……シディーが起こしたのか？

「あなた凄いじゃない！　火と風、二つの属性を操れるの？　まさか、私の話を聞いて……？」

「あうっ」

突然、シディーが膝から崩れた。これはきっと……ＭＰが枯渇したんだな。

俺は彼女の傍に近づくと、両手で小さな体を抱え上げると同時に、ＭＰをチャージした。

「ふぅぅぅぅ……」

彼女は大きく深呼吸をすると、ゆっくりと頭を下げた。風魔法は今

までほとんど使ったことがなかったはずだ。それを無理やり使ったのだから、そりゃＭＰも減るというものだ。一体どうしたというのだろうか。

「ちょっと、あなた今、何をやったの？」

ジュリアがずいっと顔を近づけてきた。いや、ちょっと待ってくれ、と俺はシディーから離れて彼女と距離を取る。

「何かの治癒魔法？」

「いや、倒れてしまったので、介抱しただけですよ」

ジュリアは完全に疑いの眼差しで俺を見ている。そのとき、シディーが口を開いた。

「ちょっと、立ち眩みがしてしまって……」

「そうなの？　大丈夫？」

「あ、はい。ありがとうございます」

「少し休んだ方がいいかもしれないわね。待ってて、毛布を取ってくるわ」

「あ、あの……」

「気を使わなくてもいいわよ。見た目も可愛いけれど、声も可愛いわね」

そう言ってジュリアはスタスタとその場を去っていった。シディーを見ると、やっぱり目が光っていた。コイツ、わかってんなと言わんばかりの雰囲気だ。

さて、一旦帝都の屋敷に帰って休もうかと話をしていたそのとき、俺たちの間を生暖かい風がすり抜けた。何だか、イヤな予感がした……。

第七百二十七話　一大事

エスカリーナがキョロキョロと周囲を見回している。彼女も、俺と同じものを感じたようだ。

「獣のニオイがする……」

「獣？」

「……獣。臭い」

そんな臭気は感じないが、エスカリーナには感じるらしい。シディーに視線を向けてみるが、彼女も感じないらしい。首を傾げている。

取り敢えずマップを展開させてみる。何と、俺たちの周囲には人間しかいなかった。山の中にすんでいるであろう獣たちの反応が全くなかった。

これはよくある現象だ。数万単位の軍勢が睨み合うと、獣たちは姿を消してしまうことがある。巻き添えを食わないようにと考えるのだろう。だが、高ランクの魔物が襲いに来ることもあるといえばある。先ほどのイヤな感じも、そのためだろうかと思ったのだが、どうもそれは違うようだ。

「早くこの戦いを終わらせた方がいいです。この戦いが長引けば長引くほど、多くの犠牲が出る……。そんな予感がします」

シディーが誰に言うともなく呟く。もちろん俺もそのつもりだ。そ

のために来ているのだ。

とはいえ、カーザ城に籠っている部隊の運命は最早、風前の灯火だ。敵は玉砕覚悟でセーファンド帝国軍に突撃するか、降伏するか、さもなくば、城内で乾き死にするしかない。その選択肢でいくと、余程気が狂れていない限り、降伏という選択肢が可能性をとるしかないのだ。

「さあ、取り敢えず、屋敷に帰ろうか」

そう言って俺は、俺たちの姿を消す結界を張って、転移結界のある場所に向かって歩き出した。

きっと、また、ジュリアは俺たちがいないことに気が付いて、あちこちと探し回るだろうが、まあ、見つかったときはシディーの体調が悪かったとか何とか言えばいい。そんなことを考えながら、山の中に入ると、突然目の前にサダキチが現れた。

『な、え？　どうした、サダキチ』

『一大事です』

『どうした？』

『どういうことだ？』

『マルバーンが集まっています』

『ここから南にある山の頂上に、マルバーンが集まっています。その数、二百です』

『それがなぜ、一大事なんだ？』

サダキチの説明によると、マルバーンというドラゴンは通常、数匹単位で集まって暮らしているらしい。それぞれの縄張り意識が強く、他者の縄張りを侵さない代わり、自分の縄張りも侵させない。普段はのんびりとした性格なのだが、ひとたび自分の縄張りが侵されると、死に物狂いで襲い掛かってくるのだそうだ。

そのマルバーンが集結している。これは、かなり珍しい現象なのだそうだ。サダキチはさらに言葉を続ける。

『おそらく、この戦いにおいて、マルバーンの縄張りを荒らしたのかもしれません。彼らはここを襲いに来るようです』

『ええと、ちょっと待て。襲いに来るっているのは……？　もしかして、ヤバイのか？』

『中型とはいえドラゴンです。ヤツらは知能は高くありませんが、空も飛べますし、ブレスも吐くことができます。それが二百匹で襲ってくるとなると、ここにいる人間は全滅する可能性すらあります』

『ご苦労だったサダキチ。お前からも、そのマルバーンに、俺たちは縄張りを侵す気持ちはないと伝えてくれないか？』

『そうしたいところですが、それは無理です。我々が近づくと、凄まじい形相で威嚇してきます。話を聞く余裕はないかと思われます』

『わかった。ご苦労だった。引き続き、マルバーンの様子を見張ってくれ』

『承知しました』

サダキチはそう言って姿を消した。

マップを展開して、その範囲を広げてみる。なるほど、端っこの方に赤く染まった部分が見える。どうやらこれがマルバーンらしい。

「逃げた方がいいです」

シディーの声が真剣みを増している。彼女は振り向きざま、空に視線を向けた。

「マルバーンの狙いは私たちです。このままだと、ここに居る者たちに甚大な被害が出ます。リノス様が結界を張って攻撃を躱すよりは、セーファンド軍、ノーノ・エルスモ両軍が逃げた方が、被害は最小限に住むような気がします。リノス様、戻りましょう。戻って、皆に逃げるように伝えましょう」

「わかった。でも、戻るのは俺だけだ。シディーとエスカリーナは一旦帰ってくれ」

「ええっ……でも……」

「帰るんだ」

「いや、私たちもいた方が、いいと思います」

「エスカリーナもか？」

「はい。そんな予感が……」

「わかった。でも、危険だと判断したそのときは、転移結界を張って帝都に帰らせるからな。いいな？」

シディーはコクリと頷いた。エスカリーナは無反応だったが、承知したと解釈した。

俺は踵を返して、足早に山を降りた。

「おお！　ケンシン殿！」

山から出ると、ホルムの一行に出会った。彼は笑顔で俺に手を振る。

「どうされたのです、こんなところで。敵の様子が気になりましたか？　大丈夫です。我々の降伏勧告は概ね受け入れられました。穴を掘ることも承知させました。人質を出すことは難色を示されましたが、作業が終わればすぐに撤退するとのことですので、司令官殿も納得されると思います」

そのホルムの許に俺は全速力で走っていき、サダキチから聞いた情報を伝える。その瞬間、彼の顔色が変わった。

「本当ですか？」

「ええ。情報の出どころは明かせませんが、確かな情報です」

「グレイ・サハラが……」

「グレイ・サハラ？」

「同じようなことが百年ほど前にあったのです。マルバーンが大挙して押し寄せてきて、人間たちを皆殺しにしたのです。そのときは数十頭と聞いていますが、今回は規模が大きすぎる……」

「すぐに逃げる準備を」

「おい！」

ホルムが周囲に控えていた者たちに向かって頷く。彼らは指示も聞かないうちに、散り散りに散っていった。

「私は、本陣にこのことを伝えます。さ、ケンシン殿も」

「俺とあなたでは足の速さが違うでしょう。先に行っていてください。大丈夫です、すぐに俺たちも追いかけますから」

「……わかりました。私の部下がカーザ城に先ほどのことを伝えています。追っ付け彼もこちらに戻って来ることでしょう。その彼を捕まえて、警備してもらってください。名前は、システといいます」

「システさんですね。わかりました。さ、早く」

俺の言葉に促される形で、ホルムは本陣に向かって走っていった。鎧を装備しているにもかかわらず、まるでなにも装備していないかの如く軽快な動きをしている。足も速い。足場の悪い道で、あれだけの俊敏さで動ければ大したものだ。

彼が高い身体能力を持っているのは、会った瞬間にわかった。歩き方からして違うのだ。

皆、重い鎧を身に付けているためか、その足取りは重々しい。だが、彼は、そんな鎧の重みを感じさせない歩き方をしていた。相当鍛錬したただろうし、幕僚たちからの扱いを見ると、一兵卒からの叩き上げだろう。

そんな彼とその部下たちだ。きっと、上手く兵士たちをまとめて逃がしてくれるだろう。

最大の懸念は、カーザ城に籠った兵士たちのことだ。おそらく、乾きが限界に来ている頃だろう。そんな中、撤退していくのは相当の負担だと言える。せめて、水のいっぱいでも飲ませてやりたいが、そんなことをしていては、マルバーンの襲撃の巻き添えを食ってしまう。

「エスカリーナ、カーザ城に雨を降らせることはできないか？」

「……できる。けれど、そんなにたくさんは、無理」

「そうなのか……」

そのとき、山の頂上付近に、夥しい数の鳥たちが、西の方向に向かって飛んでいくのが見えた。まるで、危険を告げるかのような鳴き声を上げていて、実に不気味だ。マルバーンが動き出したのかもしれない。

俺は再びマップを展開させた……。

第七百二十八話　マルバーン　ＶＳ　リノス

思わず呼吸が止まった。マップには、南側の山頂が真っ赤に染まっていたからだ。

一体なにがどうなっているのか。シディーの話では、ドラゴンたちの狙いは俺なのだという。俺が何をしたというのだろうか。

出来れば話し合いで解決したいところだが、奴らは話を聞く気がないとサダキチが言っていた。それは難しいだろう。

ここから逃げるのは簡単だ。すぐそこに転移結界があるからだ。それに乗りさえすれば、帝都の屋敷に帰れる。だが、それをしたところで、ドラゴンたちの怒りが収まるとは思えない。最悪の場合、この周辺が滅茶苦茶に荒らされてしまう。

中型とはいえドラゴンだ。ブレスも吐けるという。二百匹のドラゴンが暴れる光景を想像すると、カーザ城周辺の地形が変わってしまう程の被害が出るのは、容易に想像できる。

「……リノス様」

シディーが俺の後ろで声をかけてくれる。チラリと彼女の姿を見る。フードを被っているので、表情はわからないが、心配そうな顔をしているのは十分に伝わってくる。一方のエスカリーナは、いつものように淡々とそこに立ち尽くしている。おそらく、彼女もこの状況を何とかしたいと思っているはずだ。そうしなければ、裏山の水を手に入れることはできないからだ。と、彼女が左右に首を振り始め

た。

「うわっ、臭い」

右手を顔の前で振っている。よほどの臭いを感じるらしいが、俺には全く感じない。そのとき、大きな気配を感じた。

「ウワッハッハッハッハ」

何ともイヤな笑い方だ。この声には聞き覚えがあった。そしてそいつは、俺たちのちょうど真上にいる。

「うるせぇな、何だ！」

俺は舌打ちをしながら見上げる。そこには、龍王がいた。

「ハッハッハ。はぁっはっはっはっは！」

なぜか爆笑している。何がそんなにおかしいのか。とりもなおさず、イライラする。

ヤツはゆっくりと俺たちの近くに降りてきた。そして、ぐるりと首を廻すと、ニヤリと笑みを浮かべながら、口を開いた。

「どうだ、手伝ってやろうか？」

「……何を？」

「条件次第では、手伝ってやってもいい」

「だから、何を？　こっちは時間がないんだ。結論から言え」

「ぬぅぅぅ」

龍王は口元に笑みを浮かべたまま眉間にしわを寄せた。

「アリリアに張っている結界を解除するのだ。そうすれば我は……」

「断る」

「あの結界を解除す……」

「断ると俺は言った。帰れ」

「貴様……」

龍王は腕を組んでクイッと顔を上げた。娘にかけたくもない結界を張っているのは、すべてこのバカ竜のストーカー行為によるものだ。今でもコイツは毎日毎日アリリアの周りをうろついている。昼も夜も、だ。結界を解除すれば、それこそ娘を攫って行く……なんてもこともやりかねない。結界を解除することなど、あり得ない話だ。

「ゴォアァァァー」

空にドラゴンの咆哮が響き渡った。距離は近い。間もなく姿を現すだろう。それにしても、ホルムたちはちゃんと裏山とカーザ城の軍勢に伝えたのだろうか。兵士たちが動く気配が全くない。

「我に駆け引きを持ち掛けるとは、貴様、なかなかやるではないか」

……だからうるせぇよ。駆け引きって何だよ。これからドラゴンが襲撃に来るんだよ。黙っていろよ。

そんなことを考えつつも、龍王をガン無視する。

「……グエッ」

「うわっ！　臭い！　臭い！」

何とも言えぬイヤなうめき声を聞くと同時に、エスカリーナの絶叫にも似た声が気こえた。何だと思ってみてみると、龍王が口から紫色の小さな玉を吐き出しているのが見えた。エスカリーナは天を仰ぎながらその場をウロウロしている。

「ガァァァ……。ソールだ。これでよいだろう？」

「別にいらん、そんな気色の悪いもの」

「なっ……ソールだぞ？　しかも、我のソールなのだぞ？　これだけで国一つ買えるのだぞ！」

「だから、いらないと言っているだろう。別に金も国も、俺には必要ない」

「フフフ……負け惜しみを言うな。よいよい、これは好きに持っていくがいい」

……いや、本当に要らないんだが。てゆうか、空にドラゴンの姿が見えている。うおっ、羽虫のように夥しい数のドラゴンが空を飛んできている。これは、マジでヤバいんじゃないか？

ヤツらは正確に俺の許に飛んできている。どんどんその姿が露わになっていく。と、一匹のドラゴンが俺に向かって急降下してきた。口が大きく開いているように見えた。

「神結界」

結界を張ると同時に、ドラゴンがブレスを吐いた。ドンという鈍い音と同時に火柱が上がり、地面が震えた。

次々にドラゴンが急降下してきて、俺にブレスをぶつける。だが、俺の結界に傷一つつけることはできない。

ブレスを撃ったドラゴンは上空に舞い上がり、仲間と共に俺の様子を観察している。どうやらあれは小手調べのようだ。きっと、このすぐ後に、ヤツらの本気の攻撃が来る。

「うわぁぁぁぁぁぁ」

「わぁぁぁぁぁぁ」

突然兵士たちが、裏山とカーザ城から飛び出してきた。どうやら今の攻撃を見て、ようやく危険性を理解したようだ。兵士たちは散り散りになって逃げている。ある者は北の方向に、ある者は南に向かって走っている。

上空のドラゴン四匹が地上に降りてきた。奴らは兵士たちに向かって突撃を始めた。足はそんなに速くはないが、兵士たちの速度よりは速い。追いつかれるのは時間の問題だ。

「いかん、……雷撃っ！」

ドラゴンたちに落雷させる。空気を引き裂くような音と共に閃光が走る。ドラゴンたちは動きを止めたが、やがて、ジロリと俺を睨みつけたかと思うと、今度は俺に向かって突撃を始めた。

「シディーとエスカリーナはここに居ろ」

そう言って結界を出て、無限収納からホーリーソードを取り出す。ドラゴンたちに向かって走りながら剣を構える。一匹のドラゴンが間合いに入った瞬間、前足を大きく上げた。ブレスを撃つ姿勢だ。剣を一文字に振るう。動きが止まった。

そいつのすぐ脇をすり抜けると、二匹のドラゴンが俺に迫っていた。一様に頭を落として突っ込んでくる。俺は立ち止まって、一匹目のドラゴンに大上段から切りつける。そして、すぐに右側に飛ぶと、ちょうどそこに突撃してきた二匹目のドラゴンの首に向かって、剣を振り上げる形で切りつける。

どれもいい感触だった。振り返ってみると、一匹は首が宙を飛び、今まさに倒れ込む寸前だった。ドウ、という鈍い音を立ててドラゴンが崩れ落ちる。その瞬間、同時に二匹のドラゴンから血しぶきが上がった。一匹は頭を真っ二つにして、もう一匹は体の上半身と下半身を真っ二つにして、その場に崩れ落ちた。

「ガアァァ……ゴアァァァ」

残るドラゴンが、俺に向かって唸り声を上げている。

「俺に何の恨みがあるかは知らんが、俺はお前たちと争う気はない。

このまま自分の住処に帰れ。追ったりはしない。ただし、攻撃を加えるようならば容赦は……」

ドラゴンが動いた。速い。予想外の速さだ。あっという間に距離を縮められた。口が大きく空いている。俺は瞬間的に自分に結界を張る。同時に、ドラゴンが俺の上半身に噛みついてきた。左腕がすっぽりと口の中に入ってしまった。結界がなければ、確実に左腕を持っていかれるところだろうが、俺の結界がヤツの牙を通しはしない。

「……俺が喋っている途中だろうが！」

左手に魔力を集中させ、火魔法を発動させる。一瞬、口の中から火が見えた。そして、次の瞬間には、ドラゴンは口から煙を吐きながら、ゆっくりと倒れ伏した。

「ウワッハッハッハ。やるではないか」

龍王が嬉しそうに手を叩いている。まだいたのかコイツは……。俺はヤツを睨みつける。そのとき、龍王は再び腕を組みながらクイッと顎を上げて、笑みを浮かべた。

「我が貴様とドラゴンの間を取り持とう。どうだ？」

何だって……？

第七百二十九話　好かれてる？

龍王は相変わらず下卑た笑みを浮かべている。彼はゆっくりと歩き出すと、ちょうど俺とマルバーンたちの間に割って入る位置で停まった。

「我はドラゴン族の頂点に君臨する者。我の号令一下で、この者たちは大人しくもなるし、さらに攻撃的にもなるだろう。貴様とて、これだけの数のマルバーンを相手にするのは骨が折れよう。我が仲介してやってもよい。その代り……」

「ゴアァァァァ！」

龍王の言葉を遮るかのように、マルバーンが咆哮を上げた。上空にいた一匹が龍王めがけて急降下してきて体当たりした。ガキッという、金属がぶつかるイヤな音が響いた。だが、龍王はその場を動かず、相変わらず笑みを浮かべている。

「……攻撃されていないか？」

「攻撃？　貴様、何の話をしているのだ？」

お前、何言ってんの？　と言わんばかりの表情を浮かべている。確かに今、ドラゴンは攻撃を仕掛けたように見えたが、そうではなかったのだろうか。確かに、あれだけの勢いで突撃されたら、通常は吹っ飛ぶ。全く動いていないところを見ると、あれは何かの挨拶だったのだろうか？

そんな俺の疑問を打ち消すように、先ほど龍王に体当たりを食らわせたドラゴンが地上に降りて、前足で地面を掻いている。これはもしかして？　と思ったその瞬間、マルバーンがものすごい勢いでこちらに突進してきた。俺はホーリーソードの柄に手を添え、腰を落として態勢を整える。

ガキィーン！

再び金属がぶつかるような音が聞こえる。何とマルバーンは龍王に体当たりを食らわせていた。それも一度だけではなく、何度も頭を振って頭突きを食らわせている。だが、龍王には全く効いていないらしい。てっきりヤツは結界でも張っているのだろうと思っていたが、突撃を受ける度に体が動いているところを見ると、結界などは張っていないらしく、まともに攻撃を受けているようだ。

「ウワッハッハッハ。はぁーっはっはっは！」

攻撃を受けながらヤツは高らかに笑う。何がそんなに可笑しいのだろうか。

「何とも愛いヤツだ。そんなに我に会えたのが嬉しいか！　そこまでじゃれつくことはないのだぞ！」

え？　あれ、じゃれついているのか？　どう見ても攻撃を仕掛けているようにしか見えないのだが。ドラゴンの生態はよくわからない……。

相変わらずドラゴンは龍王に何度も頭突きを食らわせている。その様子を見ていた他のドラゴン数匹が、上空から急降下してきた。そして、次々に龍王に体当たりを食らわせていく。だが、相変わらず

龍王はノーダメージで高らかに笑い続けている。

「ゴァァァァァ」

新たに地面に降りてきたのは四匹だった。そのうちの三匹が龍王を取り囲み、後ろ足で立ち上がった。ブレスを撃つ姿勢だ。

「おい！　ちょっ……」

思わず声が漏れた。たとえ龍王とはいえ、三匹のドラゴンから同時にブレスを食らえば、無傷では済まないだろう。あまり好きではないヤツだが、それはさすがにヤバイと思ったのだ。

その直後、三匹のドラゴンから同時にブレスが放たれる。凄まじい爆風がこちらまで届いてきた。結界を張っていなければ、簡単に吹き飛ばされていただろう。チラリとシディー達に視線を向けるが、彼女たちも無事だ。シディーは両手を胸の前で組んで、心配そうな雰囲気を醸し出している。エスカリーナは呆然と立ち尽くしているように見えるが、きっと、早く終わらないかなとでも思っているのだろう。

一方の龍王は、相変わらず高らかに笑い続けている。ブレスを吐いた三匹は上空に上がってしまった。龍王に何度も頭突きを食らわせていたドラゴンもいつの間にか居なくなっていた。残る一匹がゆっくりと龍王に近づいているが、俺の眼からはどうやってもダメージを受けていないヤツに、手をこまねいているようにしか見えない。どうやって攻撃しようかと戸惑っているように見える。

「相変わらず甘えたがりだな、この種族は。だが、我は嫌いではない。存分に我に甘えるがいい」

龍王はそんなこと言いながら満足げな表情を浮かべている。どう見ても違うような気がしてならないが、ここは敢えて黙っておくことにする。そんな俺に龍王は再び口を開いた。

「どうだ？　我とマルバーンは深い絆で結ばれている。この者たちは我の号令一下でどうにでも動く。貴様がアリリアの結界を解除すれば、我はこの者たちにすぐに住処に帰るように命令しようではないか……」

気が付くと、残りの一匹が龍王のすぐ傍まで来ていた。そして、大きな口を開けたかと思うと、がぶりと龍王に噛みついた。

「……貴様とて、これだけの数のドラゴンを相手に戦うのは、無理というものであろう？」

ドラゴンに右肩を噛みつかれているのだが、そんなことは全く意に介さずに龍王はしゃべり続けている。そんな彼に、上空から二匹ドラゴンが急降下してきて、一匹は龍王の左肩に、もう一匹は龍王の頭にかぶりついた。

「意地を張らずに、結界を〇★△＊……」

頭が完全にドラゴンの口の中に入ってしまっているので、何かを喋っているようだが、モゴモゴ言っているだけで、何もわからない。まあ、聞く価値もない話なのはわかっているので、特に何かを感じることはないのだが。

龍王の右肩に噛みついているドラゴンの体から、灰色の光が見えた。それは徐々に光量を増していく。やがて、ズズズと何かが崩れるよ

うな音が聞こえたかと思うと、ドラゴンはまるで溶けるように崩れ落ちた。

「ゴ……ガ……★□△＊……！」

龍王が何かを叫んでいる。頭を噛まれているために、何を言っているのかはわからない。やがて彼は体を小刻みに動かしながら、右手で頭を噛んでいるドラゴンを掴んだ。

龍王の手が赤く光る。爆発音とドラゴンの悲鳴にも似た声が同時に響き渡って、何とも言えぬ音が耳に入って来る。見ると、先ほどまで龍王を噛んでいたドラゴンは、下半身だけになっていた。どうやら、噛んでいたドラゴンを火魔法か何かで吹き飛ばしたようだ。龍王の顔も黒くなっている。あれはもしかして、自分の火魔法でヤケドしたのだろうか？　いや、ヤツはそんなにバカじゃないだろう。そんなことを考えていると、龍王は右手を開いて自分の顔の前に持っていった。その手の周りが緑色に光る。あれはまさか、ヒールをかけているんじゃ……。

「喋れぬであろうが！」

龍王の顔が元に戻っていた。どうやら、火魔法で自分の顔も焼いたようだ。ああ、やっぱり、この生き物は絶対に娘に近づけてはならないと心の中で決意を新たにする。

「両手、頭を噛まれては、喋れるものも喋れなくなるではないかっ！　ええい！　放せ！　放さぬか貴様っ！」

左腕を噛んでいるドラゴンに向かって怒りをぶちまけている。だが、ドラゴンはなおも龍王を離さず、グゥゥゥ……と怒りに満ちた声

を上げたかと思うと、ぐるんと首を廻した。龍王の体が浮き上がる。

ドラゴンは龍王の体を噛んだまま、その体を地面に叩きつけた。土煙が上がる。今度は足に噛みついて、再び首を廻す。龍王の体がピラピラと何かに棚引いているように揺れている。それをまた、地面に叩きつける。それを何度も繰り返していく。土煙が濛々と上がり、その姿が見えなくなった。

「やめいと言うておろうが！」

土煙の中から怒号が聞こえ、一部が赤く染まった。その瞬間、ドン、という音が聞こえたかと思うと、ドシャッという音と共に、静かになった。

「……まったく。何なのだ、コイツらは」

土煙の中から龍王が現れた。彼は上空にいるマルバーンたちを睨みつけている。

「……全然好かれているようには見えないが？　むしろ、嫌われているんじゃないのか？」

「何っ！」

龍王はものすごい形相で俺を睨みつけた……。

第七百三十話　水を求めて

同じ頃、カーザ城を脱出したノーノ・エルスモ連合軍の兵士たちは、無我夢中で東に向かって逃げていた。

喉は乾ききっていた。前日の夜中行軍と戦闘の疲れもある。本来ならば、一歩も動けなくなる程に疲労困憊していたが、それでも彼らは、この世の地獄というべきあの光景から少しでも逃げたいという一念で、動かぬ体を必死で動かし続けていた。

数百匹のドラゴンが空を覆っていた。それだけでも十分に異様な光景であるのに、あろうことか、ドラゴンたちは地上に降りてきてブレスを放っていた。城からは、目の前の地形が変わっていく様をまざまざと見ることができた。

ここにいたら死ぬ……。城内の兵士たちは同時にそれを悟った。ついさきほど、セーファンド軍から使者が来て、降伏を受諾したばかりだ。もうすぐ水が届く……。一日千秋の思いでその到着を待っていたところに、グレイ・サハラが起こると知らされたのだ。

最初、その話を聞いたときは、城内の誰もが信じなかった。それは太古の昔の話であり、伝説化されたおとぎ話だったからだ。まさかそれが今、ここで起ころうとしているとは、どう考えても現実的ではなかった。

だが、セーファンドの使者は逃げろと大声で叫び続けた。まるで気が狂れたように叫ぶその有様は、現実味があった。まさか、本当に……そう思い始めたそのとき、空がドラゴンで覆われている光景を

目にしたのだった。

それを見た誰もが血の気が引いていくのを感じていた。当然、司令官であるフナイもノマサも、ただ茫然と空を見上げる他はなかった。逃げるべきである状況であることはわかっていた。だが、あまりにも現実離れしたその光景は、兵士たちの体を完全にマヒさせていた。その直後だった。ドラゴンたちの攻撃が始まったのは。

凄まじい爆音と揺れ。ここにきてようやく、城内にいた全員が、我先に城の外に向かって走り出した。ここにいたら、確実に死ぬことを、ようやく認識したのだった。

城を飛び出した兵士たちは当初、目の前の惨劇から少しでも距離を取りたい一心で逃げていた。それが、時が経つにつれて、水が飲みたいという一心でその体を動かすようになり、ひたすら元来た道を進んでいた。

だが、進めども進めども、水は見つからなかった。元々あった川の水は完全に干上がり、魚たちは死に絶え、異臭を放っていた。これは、セーファンド軍が川を封鎖したために起こった出来事であることは、すべての兵士たちが知っていた。ならば、その封鎖を解除すれば、水が手に入る。そして、故国に帰れるのだ。

干上がった川の、ゴツゴツと石だらけの道に足を取られながら、兵士たちは無言で進む。途中、体力が尽きて倒れ込む者も多くいたが、そうした者に手を貸すものはおらず、そのまま見捨てられた。

ようやくのことで、川をせき止めていると見られる壁に辿り着く。およそ、人間が作ったものとは思えぬほどの巨大で、固い壁だった。だが、兵士たちは、不思議に恐怖は感じなかった。むしろ、この壁

の先に求めていた水があるのだという希望に包まれていた。

気の早い者は、持っていた剣や槍で壁を壊そうと試みた。だが、それはどんな攻撃を加えてもビクともせず、傷一つつけることができなかった。

「どけ！　どけぇ！」

背後から男の絶叫にも似た声が聞こえる。人垣を押しのけて現れたのは、何と、エルスモ軍の総司令官であるノマサだった。

「魔法使いを集めろ！　魔法使いを集めるのだ！　魔法が使える者は集まるのだ！」

声が枯れきっていた。それでも彼は必死の形相で叫ぶ。彼もまた、渇きに耐えられない状況だったのだ。

ノマサの命令に対し、魔法が使える者たちはすぐに集まってきた。彼らは自分たちがこれから何をするべきかをわかっていた。命じられるまでもなく、土魔法が使える者は、壁に手をついて、その錬成を解こうと試みた。

だが、壁はびくともしなかった。しかし、水が飲みたいという強烈な一念は、彼らの能力を大きく超えた力を引き出させた。

まず、火魔法が使える者たちが壁に手をつき、熱を送り始めた。しばらくすると、壁から湯気が立ち昇ってきた。彼らは手にやけどを負いながら、ギリギリまで壁を熱し続けた。その間に、結界スキルを持った者たちが、土魔法が使える者に結界を張る。そして、やけどを負った者たちを、治癒魔術師たちがヒールをかけていく。

彼らの思いはひとつだった。別に、この巨大な壁を崩す必要はない。ただ、穴を、水が通る穴が開けばそれでよかったのだ。そうすれば、水が飲める。渇きを潤せるのだ。

別に誰が教えたわけではなかった。土で作られた壁……所詮は土で作られた壁なのだ。熱で錬成を溶かし、その部分を土魔法で削っていけば、おのずと壁に穴はあくだろう……。彼らの頭の中は、その考えで一致していた。

その考えは的中していた。高温となった壁に土魔法をかけると、その一部が少し崩れた。周囲の兵士たちから歓喜の声が起こる。再び火メイジたちが壁に熱を送る、熱を遮断する効果を付与された土メイジが壁を溶かす……。それを彼らは何度も繰り返した。

最初は固唾を飲んで見守っていた兵士たちも、時が経つにつれて、魔法使いたちを応援し始めた。やがてその声はひとつとなり、大音声が周囲の山々にこだました。

しかし、壁は固かった。メイジたちは限界を超えて魔法を駆使していたが、なかなか穴は開かなかった。だが、人ひとりがすっぽりと入るくらいの穴を開けることはできていた。中に溜まった土は、風魔法が使える者たちが、強烈な風を送り込んで土を掻きだしていた。あと一歩で壁に穴が開くのは、誰の目から見ても明らかだった。

火メイジが穴の中に入る。バタバタと足を動かしているが、やがてその動きが止まる。ＭＰが枯渇したのだ。彼が最後の火メイジだったのだが、これで壁に熱を送ることはできなくなった。二人がかりで足を掴まれて、穴から引きずり出される。すでに意識はない。

代わって土メイジが穴の中に入る。すでに顔色は蒼白だ。彼もまた、MPが枯渇するのはそう遠くないことを表している。つい先ほどまで、あれだけ盛り上がっていた周囲は、今はシンと静まり返っている。まさに、全員が祈るような気持で見つめているのだった。

ふと、魔法使いの足がバタバタと動いた。緊張が一気に高まる。男はなおも足をばたつかせている。そのとき、男の足元から、一筋の水が垂れているのが見えた。

兵士たちは無言のまま男の足を掴み、穴から引きずり出す。土メイジの顔は泥だらけだった。確かに、男の顔の泥は水気を含んでいる。穴に再び視線を向けると、そこには、二人の兵士が争いながら、細い筋となって流れている水を飲んでいる姿があった。

「どけ！」

「水だ！　水だ！」

兵士たちから歓声が上がる。と、同時に、兵士たちが我先にと穴に群がった。皆、水を飲もうと必死だった。ある者は蹴り倒され、ある者は引きずり出される。そんな騒乱の様相を呈していたそのとき、穴から勢いよく水が流れ出た。

「騒ぐな！　並べ！　並ぶのだ！」

声を上げたのはノマサだった。彼は水の出ている穴の傍まで来ると、兵士たちに整列するよう命じた。そして、一人五秒だけ水を飲むことを許すと言って、一番前に並んだ兵士に水を飲むことを許した。

兵士たちが並んでいく。ノマサは二列に並ぶようにと促した。だが、

それでも列は延々と後方まで続いた。

次々に兵士たちが喉の渇きを潤していく。徐々に穴が広がっているのか、水量が多くなっていく。当初は整然と列をなしていた兵士たちも、再び我先に水を飲もうと穴の周りに群がっていった。

そのときだった。地面が激しく揺れた。

壁から幾筋もの水が噴き出してきた。そしてその直後、轟音とともに壁は粉々に砕け、そこから大量の水が溢れだした。

……飲み込まれる。

ノマサの記憶は、ここで途切れた……。

第七百三十一話　決壊

龍王は俺に何か言いたげな表情を浮かべているが、それよりも上空のマルバーンたちの様子が気になる。先ほどから全体が少しずつ移動している。その様子が俺には、何か作戦めいたものに見えて仕方なかった。

龍王が口をパクパクさせているが、声が聞こえない。耳がおかしくなってしまったのかと思ったが、どうやらそうではないらしい。後でわかることだが、彼はこのとき詠唱していたそうだ。つまりは、魔法を放とうとしていたのだが、ヤツの視線は俺に向いていた。ということは、俺に向けて魔法をブッ放そうとしていたことになる。何ちゅうことをするんだと思ったりもするが、特に脅威らしい脅威を感じなかったので、まあ、魔法で攻撃されても大したことはないと信じるし、何だったら、どんな攻撃だったのか知りたかったという気持ちもあるが、得体のしれない攻撃を食らうのは少し気持ちが悪い。やはり、何事もなかったのをよしとする。

その龍王の上空には、マルバーンたちがさらに高く高度を上げていた。こちらの方がイヤな予感がする。俺はシディーたちにそこから離れるように合図を出して、その場を離れようと駆けだした。

そのとき、地面が激しく揺れた。

何だと思ったその瞬間、上空のマルバーンが急降下してきた。六体同時に急降下してきている。四体とも大きく口を開けている。俺はさらに龍王から距離を取る。

ドラゴンたちの口からまばゆい光が放たれる。それと同時に、再び地面が激しく揺れた。目の前が真っ白になる。

「ど……どうなっているんだ？」

バサッバサッとドラゴンたちの羽の音が聞こえる。その羽が起こした風のお蔭で、周辺の景色が見えてくる。シディーたちは……無事だ。反射的に伏せたのだろう、体を横たえながら、上半身を起こしてこちらを見ている。あ、右手を挙げた。どうやら大丈夫なようだ。

龍王は……みると、目の前に大きなクレーターができていた。どうやら、あの攻撃はドラゴンたちの渾身の一撃だったようだ。

「……まったく、何なのだ！」

龍王が片膝をつきながら上空を睨みつけている。もしかして効いたのか？　いや、効かない方がおかしい。地形がこれだけ変わる程の攻撃を受けたのだ。さすがの龍王も、致命傷とはいかないまでも、それなりのダメージを受けるだろう。

ヤツは立ち上がると、腕組みをしながらゆっくりと上昇してきた。そして、地面に着地すると、クイッと顎上げて上空を睨みつけた。

そのとき、サダキチが俺の前に現れた。

『一大事です』

『どうしたサダキチ』

『東の壁が崩れました。水がこちらに迫っています』

『なに？　そうか、ご苦労だった』

「シディー！」

サダキチが消えると同時に、俺はシディー達の許に向かって走り出していた。あの壁が崩れたということは、相当量の水がこちらに向かっていることになる。わずか数日とはいえ、水量はそれなりに溜まっていたはずだ。確実に鉄砲水となってこちらに向かっている。

二人とも俺の声に反応しながらも、川上の方向に視線を向けている。

「……危険」

エスカリーナがポツリと呟く。俺は転移結界を発動して、一旦帝都の屋敷に引き上げようとしたのだが、そのとき、体が宙を舞った。見ると、エスカリーナから水の筋が伸びていて、俺の体にまとわりついていた。特に冷たいとか、濡れているとかの感覚はなかった。シディーも同様に宙を舞っている。さすがにこれは予想できなかったのか、手足をバタバタさせて慌てている。何ともかわいらしい光景だ。

「ふぅぅぅぅ」

エスカリーナが深く息を吐き出す。彼女の足元から勢いよく水が飛び出し、上空に飛び上がった。マルバーンたちの動きが気になるところだが、彼らは俺たちに視線を向けているが、特に何か行動を起こすということはなかった。

ドサッという音と共に降り立つ。そこは切り立った崖の上だった。

龍王が腕を組みながらこちらを見ていた。お前ら、何やってんの？
と言わんばかりの雰囲気だ。

「……来る」

エスカリーナが呟く。見ると、川上の方向から水が流れてきていた。

それは思った程急流ではなく、比較的ゆっくりと流れてきていた。
一見すると、そんなに水量はなさそうだった。龍王の足元を濡らす程度だったのだが、みるみるうちにそれは増えていき、すぐに龍王の膝くらいまでの高さになっていった。

その水はドラゴンたちが開けた穴に落ちていく。どんどん水は溜まっていく。龍王も落ちていた。どうやら、水流に足を取られたらしい。だが、すぐに飛び上がってきて、高らかに笑い声を上げた。

「はっはっは。はぁーっはっはっは！」

……何がそんなに可笑しいのだろうか。てゆうか、うるせぇよ。

俺が睨んでいることなど知らぬとでも言わんばかりに、ヤツは再び腕を組んでクイッと顎を上げて決めポーズを取った。

「これは貴様の仕業か？　なかなか面白い趣向ではないか！」

全身ずぶぬれになりながら、大声で話しかけてくる。不気味だ。

川の水は一旦、大きな穴に吸い込まれた後、その場でじわじわと水量を増して、川下に向かってゆっくりと流れていった。

「あ、川下の人たちに鉄砲水がくるぞと伝えてやらないと」

「大丈夫」

俺の言葉をエスカリーナが言下で否定する。

「川下の別の川との合流地点でかなり水が溢れるけれど、そこには人はいないから大丈夫」

「……あ、そうなの？」

「川が曲がりくねっていたおかげで勢いが抑えられている。きっと大丈夫」

「……そうか」

ホッと胸を撫で下ろしたが、下を見てみると、ノーノ・エルスモ軍の兵士と思しき死体が流れてきている。

ふと、上空のドラゴンがどうなっているのかが気になった。慌てて視線を上空に向けると、彼らは高度は下げているものの、依然として上空に留まったままだ。この状態で攻撃されるのはマズい。俺の考えを察してくれたのか、エスカリーナは徐々に高度を下げ、地上に降りていく。

「……ありがとう。助かったよ」

エスカリーナに礼を言う。彼女はコクリと頷くと、大きく深呼吸をした。

「……お水」

「え？」

「早くお水に浸かりたい」

「エスカリーナさんも少し疲れているようです」

「ああ、わかった」

そうはいってみるものの、ドラゴンたちを何とかしなければならない。このドラゴンたちと戦うのか……。一匹一匹倒していては、日が暮れてしまう。やるのであれば、俺の最大パワーを使って、一気呵成に勝負をつけるべきだ。

そのとき、一匹のドラゴンが空から降りてきた。俺はホーリーソードを抜き払って攻撃に備えるが、ドラゴンは河原に降りてきて、じっと流れている川を見つめた。そして、川の中に入っていくと、おもむろにその頭を川の中に突っ込んだ。

すぐに顔を上げる。水気を飛ばすためだろうか、プルプルと顔を振っている。

「きゅいいいいいい～」

突然、耳を塞ぎたくなるほどの大音量で、ドラゴンは鳴き声をあげた。すると、上空にいたドラゴンたちが次々と地上に降りてきた。

あっと言う間に、周囲はドラゴンだらけになった。皆、川の中に入っていき、先ほどと同じく、川の中に顔を突っ込んでいる。川がド

ラゴンで埋まってしまった。何とも異様な光景だ。

ややあって、最初に降りてきたドラゴンが俺の許に近づいて来る。何故か龍王と俺の傍にやってくる。俺はホーリーソードを携えたまま、二人を睨みつける。

「ゴゥゴゥゴゥゴゥ～」

ドラゴンは何とも言えぬ声を上げた。どうやら俺に何か話しかけているようだ。

「争うのは止めにすると言っている」

龍王が通訳してくれた。一体、どういうことだ？

第七百三十二話　襲った理由

ドラゴンはなぜ、俺を襲おうとしたのかを語り始めた。それを龍王が同時通訳していく。要約すると、こういうことだった。

マルバーンは通常、山の頂上で暮らしている。彼らは基本的には何でも食べることができ、獣から山菜、果ては木の皮なども食べるのだという。

その中でも最も重要なのは、意外にも魚類なのだそうだ。

今回の戦いで、俺が川の上流をせき止めてしまった。その上、カーザ城周辺の川を干上がらせてしまったために、マルバーンの縄張りでは、魚が一匹も手に入らない状況となってしまった。

彼らは俺を初めて見たとき……見た、と言っても、そのときはイリモの背中に乗り、姿が見えないようにしていたので、正しくは感じたというべきか。そのときから、その存在は気に入らなかったらしい。曰く、勝つ気がまるでしなかったのだと言う。

マルバーンは、この周辺では食物連鎖の頂点に君臨する存在だ。彼らに勝つ者など存在しないはずだった。唯一あるとすれば、それは人族で、彼らが一致団結して数十万単位で攻撃を仕掛けてくるのであれば、あるいは、と考える程度だった。その人族をしても、一族すべての力を結集すれば勝てると彼らは確信していた。そんな彼らの前に俺が通りかかったのだ。気にならないわけはない。

一族すべてを滅ぼす力を持つ者が現れたことによって、マルバーン

たちは混乱した。だが彼らは、そのために無暗に攻撃を仕掛けて来るようなことはせず、俺の動向を気配探知と自らの能力をもって監視することにした。そうした意味で、彼らはそれなりの知性を備えていた。

俺に喋りかけているのは、マルバーンの族長だった。彼は己よりも圧倒的に力が劣る者を使役する能力を備えていた。彼は一族の中で最も優れたその力を使い、森の中に住む獣を使役して、俺の動向を監視していたらしい。

彼らは俺が川をせき止めてしまったことにより、魚を摂ることができなくなった。族長曰く、マルバーンは一週間魚を食べなければ、その力は半分以下に落ちるのだと言う。すぐに死ぬことはないが、力の落ちたドラゴンは、単体でいると山の獣たちの格好の餌食となってしまう。ある意味で俺の行動は、彼らの命を縮めることになってしまっていた。

ここに至って、マルバーンたちは二者択一の選択を迫られた。ひとつは、下流に向かい魚を得るか、上流に向かい、せき止められている壁の向こう側に行って魚を摂るか、という選択肢だった。

だが、どちらの方向にも人族がいた。それも、数万単位の規模でだ。さらに彼らは武装していた。一族の力を結集すれば何の問題もなく勝利することはできるが、族長は人族のしつこさを知っていた。もし、彼らを殲滅すれば、人族は何十年にもわたってマルバーンを攻撃し続けることになる。それは、彼らにとって厄介な出来事だった。

しかし、事は急を要していた。そんなとき、再び俺が現れた。族長は決断した。俺を倒し、カーザ城とその裏山に駐留する者たちを倒して、そのまま上流に向かい、魚を得ようと。

「それで攻撃を仕掛けてきたのか……。それは、すまなかったな……」

俺は族長に対して腰を折って詫びた。彼は必要な魚が得られたので、その件は水に流すと言ってくれた。

マルバーンたちが、川に入って潜っては浮き上がりを繰り返しているのは、魚を食べているのだった。

よく見ると、彼らはかなり手際よく魚を食べているのか、頭を水の中に入れると、すぐに顔を上げ、ブルブルと頭を振って水を切った後、羽をばたつかせて上空に舞い上がっていた。そして、すぐ後に控えていたドラゴンが川の中に入り、同じような仕草をして空に舞い上がるのを繰り返していた。

気が付くと上空にマルバーンの群れが出来上がっていた。あと少しで、彼らの魚の補給も完了するようだ。

「しかし、すまなかったな。突然襲われたから仲間の何匹かは倒してしまったけれど、群れは大丈夫なのか？」

俺の言葉に、族長は首を振る。どうやら、俺や龍王に攻撃を仕掛けたのは、一族の中でも血の気の荒い者たちばかりで、族長自身は皆に、指示があるまで動くなという命令を出していたのだそうだ。命令を無視した挙句、討たれてしまうような者は、敵の戦力を正確に見積もることができない未熟者であり、それはその者が悪いのだと言って、彼はゆっくりと首を振った。龍王は、討たれた者たちは一族の鼻つまみ者たちで、ちょうど厄介払いができて、よかったのだと言っていたが、果たして本当だろうか。

俺は取り敢えずお詫びの意味も兼ねて、何かできることがあったら言ってくれと族長に言うと、彼は、水の流れを元に戻して欲しいと言ってきた。どういうことかと聞いて見ると、ここ最近、下流の川の水質が著しく低下していて、かなり不味くなっているのだという。

詳しく話を聞いてみると、下流の水は上流から流れてくる水と、カーザ城の裏山から流れている水のお蔭で、水質を保っていたのだそうで、その二つの流れが遮られたために、飲み水の質が悪くなってしまい、マルバーンたちは元より、山に住む魔物たちはひどく迷惑しているのだと言う。俺はすぐに復旧にかかると言って頷いた。族長は何も言わず、ゆっくりと頭を下げた。

「ただ川の流れをせき止めただけなのに、こんなことになるんだな。今回は勉強になったよ」

そう言って頷く俺に、エスカリーナが口を開いた。

「水の流れは理由がある。変えるのは、あまりよくない。でも、裏山の水は、早くした方がいい。汚れている」

あ、そうだ。カーザ城に来たのは、裏山の泉の水を手に入れる目的もあったなと、今になって思いだす。シディーに視線を向けると、コクコクと頷いている。

「じゃあ、裏山の泉に行ってみるか。まずは状況を確認しなきゃいけないな。帝都の屋敷に戻って、すぐ準備をしようか」

俺の言葉に、二人はゆっくりと頷く。

「ウワッハッハッハッハ。はーっはっはっは！」

突然笑い声が起こる。龍王だ。ヤツは腕を組みながら、まるで勝ち誇ったように大声で笑っている。

「どうだ、我の手腕は」

「え？　何のことだ？」

「見事に、そなたとマルバーンたちの間を取り持ったであろう？」

「……どこが？」

「今、ここで仲を取り持ったではないか！」

龍王は怒りの表情を浮かべている。俺はゆっくりと息を吐き出しながら、噛んで含めるようにして口を開いた。

「あのなぁ。もしかして、マルバーンの通訳をしたことで仲を取り持ったと思っているかもしれないけれど、それだったらとんでもない思い違いだぞ？　通訳してくれたことには感謝するけれど、お世辞にも上手いとは言えないものだったぞ？　何度聞き返した？　それに、この際だから言っておくが、通訳するのにお前の感想はいらん。それに、折に触れて高笑いを挟むのもやめろ。話がわかりづらいんだ」

「貴様……よくもそのようなことをのうのうと……」

「ゴフゥ……ゴフゥ……」

突然、族長が龍王に向かって何かを言っている。てっきり、宥めてくれているものだと思っていたが、龍王の顔がどんどん紅潮してきている。

「何だと貴様！　邪悪な気配はこの者ではなく我だと言うのか！　この無礼者！　許さん！」

龍王はスッと踵を返すと、スタスタと川に向かって歩き出した。そして、しばらくすると他留まり、天を仰いだ。その瞬間、龍王がまばゆい光に包まれた。

見とそこには、三メートルほどのドラゴンが立っていた。その姿を見た上空のマルバーンたちが一目散に逃げだした。族長は、顎を地面に付けて蹲っている。

「ゴアァァァ～」

龍王がゆっくりとこちらに歩いてきながら大きな口を開けた。ブレスを放つつもりなのか？

「……おい龍王、大人しくしろ。大人しくするんだったら、アリリアの張っている結界のこと、考えてやるわけでもない」

「……」

龍王は無言のまま、すぐに人の姿に戻った。

第七百三十三話　だから違うって

龍王は渋々納得してその場を去っていった。マルバーンの族長は、逆に俺に礼を言って、その場を去っていった。アリリアの結界は解除することにした。二秒だけだが。結界がなくなると聞いて龍王は、満足そうな表情を浮かべながら空に舞い上がった。

「では、明日の朝だな。ウワッハッハッハ！」

こちらの都合を聞かずに、勝手に時間を決めてしまった。まあいいだろう。早起きをして、アリリアが寝ている間に結界を解除して、すぐに新たな結界を張り直すのだ。

ドラゴンたちが去ると、何とも不気味な静寂が訪れた。耳に入って来るのは風の音と川音だけだった。川に目を向けてみると、兵士たちのものと思われる衣服が浮いているのが見えた。

あの壁が崩れたのだ。おそらく、河原に沿って逃げた兵士たちはほぼ、水に呑まれただろう。そして、ある者は溺れ死に、ある者は、マルバーンの餌となっただろう。何とも言えぬ感情が心の底から湧き上がってくる。

「一旦、帝都の屋敷に帰ろうか」

俺の言葉にシディーは頷き、エスカリーナは首を傾げた。

「どうした？」

「……裏山の泉」

「ああ。また日を改めて……」

「行くなら今。誰もいない」

シディーに視線を向ける。彼女もゆっくりと頷いた。

あまり気乗りはしないが、取り敢えず裏山の泉に向かうことにした。歩いて登れないこともないが、時間がかかる。ここはご苦労だが、イリモの翼を借りることにした。

すぐに屋敷からイリモを連れてきて空に上がる。シディーの希望もあることから、大きな樽を無限収納に入れて来ることも忘れなかった。歩けば悠々一時間はかかる道のりだが、彼女の翼を使えば、ものの数分で着いてしまう。実に便利なユニコーンペガサスだ。

確かに上空から見ても、人の姿はない。気配探知を発動させてみるが、人も獣もいない。取り敢えず、泉の傍に降りてみることにした。

そこは実に不気味だった。生き物の気配がまるでない。静寂……というより、無音だ。初めて経験する雰囲気だった。

「……汚れてる」

エスカリーナは誰に言うともなく呟く。確かに、周辺は汚れている。ゴミだらけだ。一万人もの兵士たちが駐留していたのだ。それはそれで汚れるだろう。ただ、こう言っては何だが、散乱している者はみな、土に還るものばかりだ。それに、残飯類は山の獣や魔物が食べてくれる。今は離れてしまっているが、安全だとわかれば帰って

くるだろう。そう言った意味で、重大な環境汚染を引き起こす程の事でもない気がする。

だが、エスカリーナは泉に視線を向けたままだ。どうやら、この泉の水自体が汚れているようだ。

確かに、ここの水はせき止められている。その間、兵士たちが飲み水として使うだけでなく、体を洗ったり、その他、様々なことに使ったりしただろう。水が汚れるのも当たり前か。

水がせき止められている場所は、すぐにわかった。一カ所だけ石が積み上げられているところがあった。これを壊せば、水は流れ出るはずだ。

マルバーンが言っていたように、彼らの住む場所に隣接する川は、この泉の水質も影響を受けていると言う。であれば、早くこの堰を取り除いてやる方が、彼らにとってもよさそうだ。

「じゃあ、堰を壊してくるよ」

「ん」

俺はシディーに視線を向ける。彼女はコクリと頷いた。

では、行ってくると言おうとしたそのとき、エスカリーナがローブを脱いでいるのが見えた。彼女はフードを取ると首を横に振った。髪が揺れているのが何ともセクシーだ。

そのままローブを脱ぎ捨てると、彼女は身に付けている服までも脱ぎだした。下着の類は付けていないので、すぐにその素肌が露わに

なった。あまりの予想外の行動に、俺はあんぐりと口を開けたまま固まってしまった。

そんな俺の存在など意に介さず、エスカリーナは泉に向かって両手を差し出した。そこから水が飛び出たかと思うと、彼女はふわりと空に浮き上がり、そのまま空を飛んで、ちょうど泉の真ん中あたりに飛び込んだ。

「な……何なんだろうか」

「きっと、あの辺りで水が湧き出ているのだと思います。きっと、あそこなら水が汚れていないのでしょう」

「なるほどね」

この泉の深さはわからないが、エスカリーナに限って溺れるようなことはないだろうと思いつつ、俺たちは堰に向かう。

「……こりゃまた随分と厳重に作ったものだな」

石を積んだだけでなく、土まで入れて完全に水が出ないようにしている。カーザ城に入った敵軍に、一滴の水もやるつもりはなかったらしい。

「ええい、面倒くさいから、風魔法で吹き飛ばしてしまおうか。後で土魔法で補修すれば大丈夫だろう」

そう言って俺はそこから少し離れて、右手を差し出して魔力を集中させる。

ドン、と大砲を撃ったような音が響き渡った。堰が粉々に砕けて、そこから水が勢いよく流れだしていた。一気に決壊するかと思ったが、それはなかった。うまく魔力を調整で来たみたいで、セーファンド軍がつくった堰だけを破壊することができていた。

「うん、これで大丈夫だと思います。しばらくすると、汚れた水は泉の外に出て行きます。一日もすれば、元のきれいな泉に戻ると思います」

シディーの言葉に、俺は大きく頷いた。そのとき、奇妙な声が耳に入ってきた。

「ふぅぅぅぅ〜はぁぁぁぁ〜〜」

まるで、風呂に入っているかのような弛緩しきった声だ。見ると、泉の真ん中で仰向けに浮き上がりながら、エスカリーナが喘いでいた。

余程気持ちがいいのか、水に浮かびながら背伸びをして、口をぽっかり空けている。

「ああ〜。はぁぁ〜。うう〜ん。はぁぁぁぁぁぁ〜。あはぁぁぁぁぁぁ〜」

……何とも艶めかしいが聞こえてくる。絶世の美女が、丸裸で、泉の真ん中で喘ぎ声を上げながら悶えているのだ。これはエロい。めちゃくちゃエロい。

と、突然、シディーが体当たりしてきた。顔が怒っている。

「イヤらしいことを考えていたでしょ！　私はイヤですから。こんなところではゼッタイにイヤですから！」

……いや、そういうことではないんだ。うん、まあ、その、何だ。……俺だってイヤだよ。

俺は咳払いをして、目を閉じながら首を左右に振る。シディーはなおも俺を睨み続けている。何故か両手を後ろにやっている。俺が手を取って森の中に引きずり込もうと考えているとでも思っているのだろうか。バカバカしい。大体俺はこういう明るいところは苦手なのだ。薄暗いところがいい。それはシディーも知っているはずだ。一体何年俺と一緒にいるんだか……。

「絶対に、イヤ！」

「……大丈夫です。その点は、安心してください」

そう言って俺は踵を返して、イリモの許に向かった。

しばらくすると、エスカリーナが浮かんでいた場所から水柱が上がり、彼女が俺たちの許に戻ってきた。やはり全裸だ。目のやり場にとても困る。だが彼女はそんな俺の戸惑いをよそに、満足げな表情を浮かべながら口を開いた。

「私、ここに住む」

「はあ……」

「本当にここの水はキレイ。だから、ここに住む」

そう言って彼女は踵を返したかと思うと、再び泉に向かって飛び込んだ。ザブンという音と共に、その姿は消えた。水に入る直前、お尻がプルンと震えていたのは、やはりセクシーだった。

「帰りましょう」

「え？　水は？」

「また今度取りに来ればいいです。さ、帰りましょう。エスカリーナのローブはそこに置いておいて大丈夫です。後で回収するなり仕舞うなり、好きにするでしょうから」

「あ、ああ。……シディー、何を怒っているんだ？」

「別に、怒っていませんっ！」

……めっちゃ怒っているじゃないか。やっぱり俺がシディーにエロいことをしようとおもっているのだろうか。だから、それは、違うんだよ～。

第七百三十四話　泉のこれから

あれから二週間が経った。カーザ城周辺には、一切人が立ち入っていない状態らしい。

らしい、と言ったのは、俺が実際に現地に赴いて直接確認していないからだ。もう、別にあそこに赴く必要はないとの考えから、あれ以来、行っていないのだ。

では、その情報源は何かというと、エスカリーナだ。彼女は三日に一度、帝都の屋敷にやって来て、あの泉の水を届けてくれるようになっていた。

想像以上によい水だった。最初、シディーが大きな樽をもって水を汲みに行き、嬉々として屋敷に帰って来たのが始まりで、その水を飲んだメイが驚き、さらには、シディーが作った美容液のようなものを使ったリコとソレイユが驚嘆の声を上げた。

よくはわからないが、メイ曰く、この水は少し手を加えれば純水として使えるのだと言う。何の濁りもない水は研究や医療に使えるらしく、本来はそれを作り出すために、多くの工程を経なければいけないのだそうだ。

また、この水はシディーの予想通りお肌にとてもよいらしく、彼女が作った美容液は、お肌をツヤツヤにする効果があった。当然、そんなものをリコたちが見逃すわけはなく、それを使ったリコはすぐに自分の分と娘のエリルの分も作るようにシディーに頼んでいた。同時にソレイユはその水を使ってさらに香水なども作ると言って、

テンションを爆上がりさせていた。

ということで、たちまち我が家にとってなくてはならないものとなったこの水は、三日に一度、あの泉から水を持ってくるようになった。別に毎日でもいいんじゃないかと思ったが、メイが計算したらしい。割合大量に手に入れる必要があったので、あまりにも水を汲みすぎてしまうと、泉の環境が損なわれる恐れがあるのだそうだ。それで、泉の水位が下がりすぎず、クオリティーが維持できる丁度よい間隔が三日に一度というものだった。どうやって計算したのかは知りたいが、おそらく俺が聞いても一ミリも理解できないことはわかっていたので、敢えてそれは聞かないことにした。

で、当初は泉にはゴンが水を汲みに行くことになりかけていたのだが、幸運にもエスカリーナが水を運んでくれることになった。とはいえ、樽五十個分の水量だ。あんな華奢なエスカリーナでは無理だと思ったが、何と彼女は体の中に水を溜めることができるらしく、そのくらいなら心配はいらないと言って、身一つで帝都の屋敷にやって来た。

ずらりと並べられた樽に向かって彼女は両手を前に差し出す。まるでキョ〇シーを想起させるようなポーズだが、そんなことを考えているのは俺くらいだ。しばらくすると、彼女は両手を真上に上げる。その瞬間、バカでかい水の塊が上空に現れ、弾けた。ボン、という爆発音にも似た音が聞こえ、水がぶつかり合う音が聞こえたかと思うと、すでに樽の中は水で満たされていた。

なんとも迫力ある給水だった。見ていた子供たちは大喜びで、もう一回やってくれと言ってエスカリーナにまとわりついていた。さすがに二度目となると厳しいようで、彼女は無表情のまましばらくの間、手から水を出すなどして水芸を披露し、子供たちを喜ばせてい

た。

これだけの水を運んでくれるエスカリーナに対する報酬は、我が家の夕食に招待することだった。全く表情に現れないので、あまり気にいっていないのかと思っていたが、全く逆だったようだ。いい水があれば、メシを食わなくてもよかったんじゃないのかと突っ込みたくなるが、そこはグッと堪えることにする。

彼女と夕食を囲みながら、カーザ城周辺のこれからのことについて話をする。エスカリーナ曰く、泉の周辺には、獣たちは戻ってきているようだが、依然として人の気配はないと言う。

「まあ、あれだけの光景を見ましたからね。普通の人間だったら、近づきたくはないでしょう」

「やっぱり、シディーもそう思うか……」

俺は腕を組みながら天を仰ぐ。いや、あれは俺だけのせいじゃない、龍王のバカのせいもある。

ちなみに、あのバカ龍が吐き出した得体のしれない石は、超貴重なものなのだそうだ。

ドラゴン……特に上位種になればなるほど、体の中に石を生成するのだそうだ。その大きさは体の大きさに比例するのだが、石自体を生成する速度はかなり遅いらしい。龍王クラスの大きさで、数百年生きている個体になると、やっと子供の拳大程の大きさになるのだそうだ。

この石は、ドラゴンの属性にもよるが、人の寿命を延ばすのだと言

う。石自体にドラゴンの生命力が宿っているとされ、上位種のそれは、それこそ、天井知らずの値段で取引されるのだと言う。龍王が国一つ買えると言っていたのは、あながちウソではなかった。

とはいえ、俺には必要ないものだし、俺の傍に置いておけば、それを使って龍王が現れる可能性すらある。そんな物騒なものは速く捨てるべきだとは思うが、メイが研究したいと言ったので、それは丸ごと彼女にあげることにした。

さて、カーザ城のことだが、グレイ・サハラが起こった場所として、今後は人が立ち入らない地域になる可能性が高いのだと言う。太古の昔に起こったとされる場所は、今でも人が立ち入らず、物好きな冒険者か、周辺に住む木こりがたまに、木を伐りに来る程度なのだと言う。

「まあ、それはそれで、エスカリーナとしちゃ願ったり叶ったりじゃないのか。人に会わなくていい環境だからな。ただ、よかったら斧を準備しておくといいんじゃないかな」

「……斧？」

「木こりが木を伐りに来ることもあるだろう。そのとき、斧を泉に落とすかもしれない。そのときは、金の斧と銀の斧と鉄の斧をもって現れて、どれを落としたのかと聞いてみるといい。正直に答えた者には金と銀の斧を一緒に渡してやるんだ。嘘をついた者は、斧を返さずにそのまま消えてしまうんだ。そうしてやると……」

「……イヤ」

「え？」

「面倒臭い。絶対に嫌。そもそも、泉の中に鉄の斧を捨てるなんてダメ。そんなことをしたら、許さない」

「あ、いや……あくまで、たとえ話でして……」

エスカリーナの雰囲気が怖い。妻たちもポカンとした表情を浮かべている。まあ、確かに、この話はさすがに彼女たちは知らんわな……。

その光景を見ていたゴンが、しみじみと口を開いた。

「いやしかし、助かったでありますー。あれだけの樽に水を汲むのには、相当骨が折れるでありますからなー。吾輩一人でやるとなると、一体何時間かかることやら……。それがなくなったので、一安心でありますー」

そこまで言うと彼は、さも残念そうな表情を浮かべながら、さらに言葉を続ける。

「あれだけの樽に水を入れると聞いていたので、どんな方法で水を入れるのか、楽しみにしていたのでありますが、ちょっと吾輩の期待とは違ったでありますー」

「ほう、どんなものを期待していたんだ？　俺はあの入れ方で十分だと思ったけれどなー」

「吾輩はてっきり、あの美女が素肌になって樽の上に跨り、まるで排泄をするかのように水を入れてい……ぐふっ！」

気が付くと、隣に座っていたフェリスの右の拳がゴンの腹に深々と刺さっていた。彼女は、まるで汚いものを片付けるかのようにゴンの体をつまみ、ダイニングを後にした。子供たちは、エスカリーナと喋っていたので、気づいてはいないだろう。目にもとまらぬ速さ……。彼女はおそらく、転移結界のある小屋に歩いて行ったのだろう。行先は大体見当がつく。しばらくゴンは帰って来られないだろう。俺は空を見上げながら、小さな声で呟いた。

「何とか、水に流してやってくれ……」

第七百三十四話　泉のこれから（後書き）

Ｃｏｍｉｃブースト様にて、第３１話公開されました。リコ様とメイちゃんの裸の付き合い（？）のお話し。コミカライズオリジナルストーリーですので、是非、チェック下さい！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６

第七百三十五話　セーファンド帝国からの使者

それからしばらくして、アガルタに一通の書簡が届いた。それはセーファンド帝国からのものだった。

セーファンドの使者、カランと名乗った男は、美々しい衣装に身を包みながら、金の鳳凰をあしらった黒塗りの箱から、さも大事そうに書簡を取り出し、それをクノゲンに渡してその場を去った。当初は、アガルタの都を警備する警備隊長がそれを受取ろうとしたのだが、カランは、自らが持つ書簡を皇帝陛下の親書であるとして、それなりの身分の者が受け取るべきであると主張して譲らなかった。結局彼は、アガルタの者に迎賓館まで案内させてクノゲンを呼び出し、書簡を手渡したのだった。

「……ずいぶんと仰々しい書簡だが、書かれている内容は大したことないな」

執務室で書簡を読んだリノスは、つまらなさそうにそれを机の上に置いた。書簡は厳重な封蝋が施されていて、その中には高価な紙を三重に巻いて、書簡が保管されてあった。

「何と書いてあるのですか？」

クノゲンが苦笑いを浮かべながら口を開く。リノスは親指と人差し指で目を抑えながら、さも面倒臭そうに口を開いた。

「カーザ城救援の礼に使者を遣わす……それだけだ」

「ははぁ。それはまた随分とご丁寧なことで」

「ああ。たったそれだけのことで、別にこんなに大きな字で書かなくてもいいのにな。目がおかしくなるよ」

彼はそう言って書簡をクノゲンに渡す。

「プッ……。これはまた、大きな字で……。どうやら、セーファンド帝国の中でもそれなりの身分の方がお越しになるようですな」

「うん？　どういうことだ？」

「これだけ厳重に封蝋され、しかも書簡を納める箱の高価さ……。さらには、一介の兵士に渡さず、アガルタの中でもそれなりの者に渡すことを求めたところから考えますと、さすがに皇帝自ら……とはいかないまでも、王族の誰かがやって来るのでしょうな。これを渡すとき、使者の顔は明らかに不満げでした。おそらく、私ではなくマトカル様に渡したかったのでしょうな」

「はあ？　なんじゃそら？　何とも無礼な話だが、ある意味では一周廻って面白いな」

「まあまあ……。まずは、リコ様に聞いてみた方がよいかと考えますが……」

「そうだな。じゃあ、リコを呼んでくれ」

リノスは頬杖をつきながら、さもめんどくさそうな表情を浮かべ、大きなため息を吐いた。

しばらくするとリコがやって来た。彼女は書簡を一目見ると、眉間に皺を刻んだ。

「これは……セーファンド帝国の皇太子、デアル様、もしくはその弟君のハイザー様がおいでになるかもしれませんわ」

「デアル？　ハイザー？　誰だい？」

「デアル様はセーファンド帝国の皇太子で、軍事のトップですわ。弟君のハイザー様は、確か、カーザ城の総司令官を務めていたお方……。可能性としては、ハイザー様自らアガルタにお越しになる確率が高そうですわね」

「ハイザー？　知らないな。カーザ城の司令官はホルムじゃなかったのか？」

「実際はそうかもしれませんが、表向きは王族の誰かが城主であるとされていることが多いのですわ。そうした危険を伴う場所で経験を積んでいるように見せて、内外に優秀であると認めさせるために……」

「はぁぁ……面倒くさいことをするんだな」

「それが王族というものですわ」

「ふぅ～ん。で、あれば書簡に堂々と書けばいいじゃないか。ハイザー様がおいでになります、と」

「それを書けない事情があるのですわ」

「事情？」

「私も詳しくはわかりませんけれども、こうした書き方は珍しくはないのですわ。そもそも、王族の誰のなにがしが行く、と書いてしまえば、暗殺の機会を与えてしまう可能性があるのですわ。それに、その国の主に内々の相談事などがある場合に、こうした書き方をしてくる場合がありますわ。セーファンドとしては、先のカーザ城救援のお礼を述べるのを口実に、アガルタに何か願い事を言って来る可能性が否定できませんわ」

「ええ～さらに面倒臭いじゃないか～」

「とはいえ、使者を追い返すわけにはいきませんわ」

「……う～ん。じゃあ、リコも一緒にいてくれよな？」

「承知しましたわ。もしかすると、願い事については、私にあるかもしれませんし……」

「取り敢えず、話を聞いてからだな。何事もそれからだ。それにしてもこの書簡はわかりにくいな。一体テキがいつ来るのか、さえも書いていないじゃないか。せめてそれくらい書きなさいよ」

リノスは首を左右に振りながら、ゆっくりと天を仰いだ。

◆◆　◆

セーファンド帝国の正使がアガルタに到着したのは、それから三日後のことだった。やって来たのは、リコが予想したとおり、カーザ城の総司令官であるハイザーだった。彼は勲章でいっぱいになった

軍服を着込んでやって来ていた。その報告を聞いたリノスは、苦笑いを浮かべた。

「……予想した通りのポンコツ野郎の臭いがするな。面倒くさいな」

彼の隣にはリコが控えていて、その言葉に無言で小さく頭を下げた。

「……まずもってアガルタ王様におかれましては、ご機嫌も麗しく、何よりとお慶びを申し上げ奉ります。私は、セーファンド帝国皇帝ニコラドの末弟に当たります、セーファンド・レム・ハイザーと申します。以後お見知りおきの程を乞い願い上げ奉ります！」

リノスに謁見したハイザーは、開口一番紋切り型の挨拶を述べた。彼の後ろには二人の男が控えていて、さらにその後ろには、五人の男たちが少し離れたところに控えていた。片膝をつき、頭を垂れている。これまで多くの使者を謁見してきたが、大抵は皆、固まっていることが多く、あまり見られない様子だった。しいて言えば、ヴィエイユに会うときに似ていた。彼女の場合、クリミアーナ教国内では神と同様として扱われているため、臣下の者は傍に侍るのは無礼ということで、彼女の従者は少し離れたところに片膝をつき、頭を垂れて控えていることが常だった。

そんなことを思い出しながら、リノスはハイザーと対峙した。

「この度は貴国よりケンシン殿をお遣わし下さり、感謝の念に堪えません。お陰様を持ちまして我が国は、ノーノ・エルスモ両軍の侵攻を食い止め、駆逐いたしました。これも偏に、アガルタ王様のご助力の賜物と、厚く御礼申し上げます」

ハイザーはそこまで言うと、さも言いにくそうな表情を浮かべなが

ら口を開く。

「我が軍は勝利しましたが、誠に遺憾ながら、貴国から派遣いただいたケンシン殿とその従者の方々はお亡くなりになりました。本日はそのお詫びに参上した次第です」

「え？　亡くなったのですか？」

リノスは思わず頓狂な声を上げる。その声に、ハイザーはゆっくりと頷く。

「はい。アガルタ王様のそのご様子では、その報告は伝わっていなかったようですね。実は、カーザ城周辺ではグレイ・サハラが発生しまして、ケンシン殿以下、従者の方がはそこで命を落とされたのでございます。ケンシン殿はアガルタから遣わされた大事なお客人……。その方が我が国で亡くなられたのです。そのため我々は取り急ぎ参上した次第なのでございます。あ、これは私としたことが……グレイ・サハラをご存じではありませんでしたね。これは、私の失態でございます。そもそも、グレイ・サハラとは……」

ハイザーは長々とグレイ・サハラのことについて語り出した。その歴史から、その現象が起こると、どれほどの災害が起こるのか……そうしたことを弁舌さわやかにまくし立てていった。

ややあって彼は、コホンと咳払いをして、少し声を落として口を開いた。

「そこで、アガルタ王様に一つ、お願いの儀がございます」

……そうら来た。リノスは心の中で呟いた。

第七百三十六話　大笑い

「……」

俺は無言のまま視線を宙に泳がせた。わかっている。使者を目の前にしてこんな態度を取ってはいけないことを。きっと後でリコから叱られるだろう。使者から目を離してはいけませんわ、と。

だが、俺としてはそういう態度を取らざるを得ない程、このハイザーという男からのお願いというのがブッ飛んでいたのだ。きっと、リコにも俺の心中は察してもらえるはずだ。

ハイザーからのお願いというのは、大きく分けて二点だった。まず一点目というのが、アガルタとセーファンド帝国との軍事同盟の締結だった。

「グレイ・サハラを収束させたとはいえ、未だに隣国であるノーノ王国、ひいてはエルスモ帝国との緊張関係は続いています。おそらく、ノーノ王国は我が国への領土拡張の野望は捨てきれていないことでしょう。そのため、我が帝国としましては、さらなる軍事力強化を行う必要がございます。そのため、我らはこれまで同盟関係であったヒーデータ帝国との関係強化を行うと同時に、貴国との軍事同盟締結を締結したいと考えております」

……正直言って、この同盟に俺たちアガルタのメリットはない。別にアガルタは他国からの侵攻される危険性はないために、セーファンド帝国に援軍要請をすることは皆無と言っていい。帝国はその見返りに、食料や技術支援を申し出てきたが、それも必要はなかった。

食料に関しては十分に収穫があるし、何なら余ったものを他国に売っているくらいだ。さらに、技術支援というのも、帝国の持つ技術は治水を中心とした土木事業で、それらはシディーの実家であるニザ公国がその技術を持っていた。必要があれば、わざわざ遠く離れた国に頼むよりも、親戚づきあいのある隣国に頼むし、それが筋というものだろう。

むろん、そうした状況は相手側も承知しているようで、ハイザーは説明をしながら、貴国にとってあまり益はありませんが、と付け加える始末だった。

そこまでわかっていれば、わざわざ王族自ら出向いてお願いに来ることもないだろう。はっきり言って時間の無駄だ。ダメもとで俺に頼んでみて、あとはアガルタを見物して帰るのだろうか……と思っていたら、彼はさらに言葉を続けた。

「その同盟を結んでいただくために、我らは、アガルタ王様に、妹であるフリルを輿入れさせる用意がございます」

「……え？　輿入れ？」

「左様です」

「……誰に？」

「ご冗談を。アガルタ王様に、でございます」

「……」

思わず絶句してしまった。一体何を言いやがるんだ、この男は。チ

ラリと隣に座るリコに視線を向けてみたが、彼女も固まっている。リコすらも予想もしていなかった提案だったのだ。

呆然とする俺たちに、ハイザーはさらに言葉を続けた。妹であるフリルは十一歳であること。皇帝の側室の子供ではあるが、気品のある娘であること。皇帝はこの妹を目に入れても痛くない程に可愛がっていたが、アガルタとの同盟締結が成るのであれば、涙を呑んで輿入れさせると言っている……など、至極どうでもいい話を続けた。

大体俺には五人の妻がいるのだ。そこにさらにもう一人加えようとは全く思わない。それに十一歳の子供だ。いくらなんでも可愛そうというものだ。ヤツらはおれに光源氏ようになれと言いたいのかもしれないが、あいにく俺にそうした趣味はない。セーファンドからしてみれば、人質としてフリルをアガルタに送りこむということころだろうが、その子を貰ったとしてしても、アガルタにとって利益はなく、むしろ、百害あって一利なしとなることは明白だった。

「せっかくのお申し出ですが、俺としてはあまり興味の持てない話ですね」

思わずそんな言葉を口走ってしまった。本来ならば、検討しますと言って一旦お引き取りをいただき、後で色々と理由を付けて断りの返事を入れるのだが、このときばかりは、さすがにそんな余裕はなかった。

だが、ハイザーは怯まなかった。にこやかに笑いながら、さらに言葉を続けたのだ。

「我らはグレイ・サハラを収めたのです。つまりは、数百匹のドラゴンを蹴散らしたのです。本来であれば、グレイ・サハラが発生す

れば、我が国であれば国土の半分が灰燼に帰する程の被害が出るのです。アガルタに例えますと、国土の三分の二が焦土と化すほどの被害が出るのです。それを我らはカーザ城周辺だけの被害に留めたのです。言わば、我らは世界最強……とはいかないまでも、世界屈指の軍事力を有しているのです。その力をお貸しすると申しておるのです。これは、アガルタが他国から侵攻された際、もしくは、侵攻なさる際に大きな力となることは必定でございます」

「すまないけれど、アガルタの防御は十分に整っているし、他国に侵攻する気もない。そもそも……」

そこまで言って俺は言葉を切った。グレイ・サハラを納めたのは、お前たちではなくてこの俺だ、と言いかけてしまったからだ。彼らは俺がケンシンであることを知らないし、説明してもわからないと思ったからだ。とはいえ、グレイ・サハラが大きな被害なく収まったことをいいことに、それを自分たちの手柄にしてアガルタに売り込んでくる姿勢が気に入らなかったし、さらには、ハイザーの後ろに控えていた男が、ハイザーが類まれなる指揮官であり、カーザ城を防衛できたのも、この人あってのことで、アガルタとの戦いにおいては、このハイザーが自ら軍を率いて戦うと言ったときには、開いた口がふさがらなかった。

カーザ城が防衛できたのは偏に、あのホルムがいたからだ。あの戦いにおいて最も軍功があったのはホルムその人なのだ。この交渉の場において、ホルム自身が全権を委任されてやってくるのであれば、まだ話はわかる。まあ、それでも俺は承知しないだろうが、少なくとも、今のように不快な思いをすることはない。彼がいたら、あの時の戦いの思い出話ができるからだ。

……と、ハイザーから離れて控えていた五人の男たちが顔を上げて

こちらを見ていることに気が付いた。しかもその中には、ホルムがいた。思わず彼をじっと見つめてしまった。

そんな様子に気づいたハイザーはスッと後ろを振り返り、すぐにこやかな笑みを俺に向けた。

「私の手の者たちが失礼いたしました。これは……王妃様の美しさに見惚れてしまっていたようでございます。こらお前たち、控えるのだ」

ハイザーの言葉に、ホルム以下、五人の男たちが頭を垂れた。

「あの……あの方たちとお話をしても？」

「……はい。問題ございませんが？」

ハイザーはキョトンとした表情を浮かべている。俺は玉座から立ち上がると、真っすぐにホルムのところに向かった。彼はずっと頭を下げ続けている。俺は彼の前まで来ると、膝をついて彼の顔を覗き込んだ。

「あなたの名前は？」

「……ッ。これは、恐れ多い！」

彼はスルスルと下がっていってしまった。そんな彼を追いかけるようにして、俺は再び距離を縮める。

「……ッ」

「あなた、お名前は何と言いますか？」

「……ホ、ホルムと申します」

「ああ、ホルムさんね。カーザ城を守っていたホルムさんですね？」

ホルムは驚いた表情を浮かべながら顔を上げた。俺の顔をじっと見つめているが、再びハッとした表情を浮かべたかと思うと、慌てて顔を下げた。

「ああ、お宅のお使者たちから距離も離れているのでちょうどいい。ホルムさん、ハイザーさんが言っている内容、あれは本当のことですか？」

「へ？」

「あの人の言っていることは、本当ですかね？」

「いっ、いや……それは……でっ、殿下のおっ、おしゃることはほとととととととことことおおおおおお」

……俺は思わず声を上げて笑った。

第七百三十七話　俺だよ、俺だ

「一体どうなさいました？　ホルム、貴様は何をしているのだ！」

ハイザーが怪訝そうな表情で俺の許にやって来た。俺はいや、別に何でもないと言いながら玉座へと戻った。ホルムは借りてきた猫のように、体を小さくして控えている。

「私どものホルムに何か？」

「ああいや、ちょっと聞いてみたいことがありましてね。もう用は済みましたから、どうぞお気になさらずに」

俺の言葉に納得がいかないのか、ハイザーは怪訝な表情を崩さず、チラリチラリと後ろを振り返っている。何だか、憎々しげな表情が浮かんでいる気がした。

「どうされましたか？　あのホルムさんが何か？」

「いいえ。あの者は平民上がりなのです。本来ならば王族たる我らの傍に侍ることなど許されぬ者なのです。その者が奇声を上げる無礼な振る舞い……もっての外でございます」

「いえ、気になさらないでください。そう言われると、俺もあなたと口がきけないことになります。何と言っても俺は平民上がり。その上奴隷でしたから」

俺の言葉にハイザーのこめかみがピクピクと動いている。俺はそれ

に構わず言葉を続ける。

「ちなみに、ですが、あのホルムさんは、今回の戦いの中で、どのような働きをされたのでしょう？」

質問が意外だったのか、ハイザーは傍に控えている者と何やら話している。

「あの者は特に、なにもしておりません」

「え？　そうなの？」

思わず言葉が漏れてしまった。隣にいるリコに視線を向ける。彼女も、ああそうなの？　と言った表情を浮かべている。それはそうだ。カーザ城での話はすべて、ちゃんとリコに報告をしていたのだ。だから彼女は、ホルムがいかに優秀で、この戦いにどれほどの功績があったのかを知っている。

そんな俺たちの動揺をよそに、ハイザーはホルムに向かって下がるように命じた。彼は立ち上がると一礼して踵を返して、部屋を出て行こうとした。

「待て」

俺の言葉にホルムがピクリと体を動かして止まる。その様子を見ながら俺はハイザーに話しかける。

「彼は今後、どうなりますか？」

「どうなる？　どういう意味でございましょうか……」

「いや、彼は今後、セーファンド帝国でそれなりの地位に上るのでしょうか？」

「先にも申しました通り、あの者は平民上がりですので、アガルタ王様が仰る、それなりの地位となることはございません。それどころか、あの者は、戦いの最中は何もせず、あまつさえ、アガルタ王様に無礼な振る舞いを致してございます。このまま国に帰りましても、よくて降格、悪くすれば、軍籍を剥奪する可能性すらございます」

「ああ……そうなのですか。随分とあの彼を嫌っていらっしゃるのですね。であれば、連れて来なければよかったのでは？」

俺の言葉に、ハイザーはヤレヤレと言った表情を浮かべながら、面倒くさそうに返答した。

「そうしたいのはやまやまでしたが、あの者は、戦いの最中はずっとカーザ城に詰めておりました。その上、グレイ・サハラが収まった後、上官が引き留めているにもかかわらず、配下の者を連れてカーザ城周辺を調査しに参っております。我が方と致しましては、アガルタ王様より、お遣わしなされたケンシン殿の件についてご下問があった際にお答えをさせていただくべく、連れて参った次第なのでございます」

「ああ、そうなのですか。それではホルムさん、ケンシンの遺体は見つかりましたか？」

ホルムは小さくなって控えたまま、チラリチラリと俺を見ている。

「何をしている、よい。返答を許す」

ハイザーの隣で控えていた男が声を上げる。彼はビクビクと体を震わせながら顔を上げた。

「ざ、残念ながら、遺体は確認できませんでした」

「そうですか。ちなみに、何人でカーザ城に向かわれたのですか？」

「私を含めて、五人です」

「五人……あとの四人はどのような方ですか？」

「ひ……一人は、カトリと申します、私の部下です。もう一人が、エルトという男。これも私の部下です。二人とも私が初年兵の頃より教育した兵士です」

「ほう、その二人が危険な場所に共に赴いてくれた、と」

「はい……。私は止めたのですが、どうしても行くと言って聞きませんで……」

「なるほど。あなたは慕われているのですね。で、あとの二人は？」

「あとは……。カーザ城魔導士部隊の隊長であるジュリアという女魔導士です。これも止めたのですが、どうしても、と。何でも、ケンシン殿と共においでになった魔法使いたちのことが気になると言いまして……」

「なるほど。で、その魔法使いたちは……？」

「それが……」

「なるほどね。で、あと一人は？　何となく察しはつくのですが」

ホルムは怪訝そうな表情を浮かべつつ、ハイザーたちの様子を窺いながら、申し訳なさそうに口を開く。

「もう一方は……その……サーマ様と言いまして、総司令官殿のご子息であられますお方です」

「ほう、よく行きましたね。いや、おそらく、ジュリアさんに無理やり連れて行かれた、というところですかね？」

「はい。まさにそうなのです。サーマ様は最初は嫌がっていたのですが、ジュリアのやつが、アガルタからのお方の消息を確認しなければ大問題になる。そのときに責任を問われるのはあなたよと言いまして……。あれ？　どうしてそれを？」

ホルムは不思議そうな表情を浮かべていたが、敢えてそれを無視して、俺はハイザーたちに向き直る。

「このホルムさんは、セーファンド帝国に戻ると、軍籍を剥奪される可能性があると言われましたね？　となると、彼は職を失い、路頭に迷う可能性があるわけだ。そうですよね？」

「そういうことになります」

「そうなった場合、彼の次の仕事は決まっているのですか？　……決まっていない。そりゃ可哀そうだ。うん、そうなっては大変だ。

でしたらどうでしょう？　あのホルムさん、このアガルタにいただけませんか？」

俺の提案に、ハイザーは目を白黒させていたが、やがて不思議そうな表情を浮かべると、ゆっくりと口を開いた。

「……アガルタ王様がお望みであれば、どうぞ、お心のままに」

「そうですか。それはよかった。ではホルムさん、今日からあなたはアガルタ軍に就職です。ようこそアガルタに」

俺は立ち上がって拍手をする。ホルムは何が起こったのかがわからないらしく、口をポカンと開けたまま俺を眺めている。

「ちなみにホルムさん、あなたの収入をお聞きしても？　それと、現在の階級を教えてください」

「あ、う、え……。階級は……軍曹です。収入は……恥ずかしながら、金３０枚です」

「なるほどわかりました。あ、ちなみに、ご家族は？　アガルタに赴任するにあたり、どのくらいの日数がかかりますか？」

「家族は……おりません。一人身です。アガルタには……ほとんど荷物もありませんので、ひと月もあれば……」

「なるほどわかりました。あなたには、大佐として頑張ってもらいます。ちなみに、アガルタ軍での大佐の収入は、月給金１００枚です。アガルタ軍のクノゲンやマトカルを補佐する任務を任せたい。よろしく頼みます」

俺の言葉に、全員があんぐりと口を開けている。ホルムに至っては、目が完全に点になってしまっている。

「まだわからないのか。俺だよ、ほら、俺だ」

そう言いながら懐から布を出し、それで顔を覆っていく。

「あっ！　あなたは……もしかして……ケンシン殿ぉ？」

「どうもお久しぶりです。カーザ城では色々とお世話になりました。あなたと再会できて、とてもうれしいです」

「ケ……ケンシン殿……。ケンシン殿……。生きて……よかった。ほんとうに、よかった……」

ホルムはそう言って泣き崩れた……。

第七百三十八話　ホルムとジュリア

結果的に、俺とセーファンド帝国との話し合いは、彼らの提案をすべて拒否するという形で幕を閉じた。ただし、先の戦いで困ったことがあれば、支援を検討することと、作物などの取引にはいつでも応じるということで決着させた。

ハイザーは俺との交渉余地がないと悟るや、その交渉先をリコに変え、血のつながりをアピールしていたが、これも上手に断られていた。

それはそうだろう。自ら指揮も取らず、戦いの現場にすらいなかった男が、手柄を独り占めし、さも、これらの戦いを収束に導いたと吹聴するのだから、あきれ果ててものも言えないとはこのことだ。聞けばハイザーは、カーザ城主とは名ばかりで、ほとんどの時間を帝都で過ごしていて、城にやって来るのはひと月に一度、あるかないかだったのだと言う。カーザ城が襲われたときも現場にいなかったのはもちろん、救援にすら行こうとしなかったらしい。それでよく、あんなことが俺の前で言えたものだ。

結局のところ、セーファンド帝国は、アガルタとの何のつながりも持つことができず、大恥をかいただけで終わった。それだけでなく、優秀な指揮官を一人失うという大損害を受けて帰途に就いた。大損害というのは俺の感想であって、彼らがそう感じているかどうかは疑問だが。

ちなみに、スカウトしたホルムに関しては、アガルタに止め置くことにした。ハイザーたちはイヤな顔をしたが、このまま彼らと一緒

に帰らせれば、どんな嫌がらせをされるのか、わかったものではないからだ。最悪、命を奪われる可能性すらある。それを防止するために、敢えて彼をここに留めたのだった。

早速ホルムには、クノゲンとマトカル、そして、ルファナちゃんに紹介した。すでに俺から話を聞いていた彼らは、ホルムが来ると聞いて一様に喜んだ。とりわけ、クノゲンは彼を抱きしめんばかりに喜びを爆発させていた。

「いや、軍幹部には女性が多くて難儀していたのです。何しろ、口では絶対に勝てませんからな。あなたが加わってくれれば、これで二対二。勝負になると言うものです」

さすがにホルムは恐縮していたし、ルファナちゃんに怒られていたが、それでもクノゲンは嬉しそうだった。

当初は時機を見てセーファンドに帰国させようと考えたが、アガルタ軍の宿舎が気に入ってしまい、国には帰らず、ここにいると言い出したので、好きにさせることにした。

後日の話になるが、アガルタに転職したと聞いたホルムの部下たち十数名が、彼を追ってやってきた。どの男も一兵卒からたたき上げた者たちばかりで、クノゲンはすぐに採用を決めた。後に彼らはアガルタ軍の幹部となるのだが、それはまた、後日話をすることにしよう。

てっきりジュリアもアガルタにやって来るかと思ったのだが、彼女は来なかった。だが、一通の書簡を寄こしてきた。

彼女はケンシンがアガルタ王であることを人伝に知ったらしい。ち

なみに、セーファンド帝国内では、ケンシンという男の存在はないものとされていて、カーザ城の手柄はハイザーのものであると吹聴されているそうだ。当然、そんなことを信じないジュリアは、ダメもとで俺やシディーの行方を捜したというのだ。そんなときに、サーマの口から俺がアガルタ王であるということを聞いた。

仰天した彼女は、取るものも取り敢えず筆を執り、俺に対する非礼を詫びてきた。従っていた方々にも失礼なことをしたと書かれてあり、その方々もご無事であると信じるが、取り敢えず無事を祈っていると、何だかよくわからない、しかし、その焦りが十分に伝わる手紙の内容だった。

俺は彼女に対しては返信を送り、カーザ城での話は楽しかったことと、ずっと俺たちのことを心配してくれたことに感謝すると書いた。さすがに、従者の一人は俺の妻で、もう一人は、カーザ城近くの泉に住んでいるとは書けなかったが、二人とも無事で元気でいることは伝えた。そして最後に、俺は全く気にしていないので、あなたも気になされずに。もし、何かの機会で近くまで来られることがあったら、是非、アガルタに立ち寄って下さい。そのときはまた、色々とお話ししましょう。また会える日を楽しみにしていますと文末に付け加えたのだった。

すると、彼女はアガルタにやって来た。いや、もう、マジでビックリした。社交辞令で書いたつもりだったのだが、彼女はそう受け取らず、額面通り、アガルタにやって来て、俺に面会を求めた。

覆面で顔を隠していたから、俺の素顔はわからなかったためか、なかなか俺がケンシンであることを信じなかった。それどころか、ケンシン様はもう少し声が低かったと言い出すような始末で、さすがにこれには俺も呆れる他なかった。セーファンド帝国は、正直すぎ

るのが国民性なのだろうか。

ホルムと同じように覆面をして、ようやく彼女の誤解は解けた。これからどうするのだとの俺の問いに、彼女は魔法を勉強するために世界を放浪すると言ってのけた。そして、魔法を極め、将来は魔法大学を開いて、正しい魔法の使い方を教えるのだと言って目を輝かせた。それはよいことだと、一にも二にもなく賛成して、彼女を送り出した。

しかし、ジュリアは二日経っても、三日経っても出発することはなく、その様子すらなかった。で、聞いてみると、金がないなどと宣う始末で、その間抜けぶりには笑う外はなかった。

結局彼女は、メイが学長を務める、アガルタ大学でアルバイトをすることになった。俺は、ヒーデータ帝国の魔法学校に入学することを勧めたのだが、自信がないと言う。よくよく聞いてみると、ヒーデータ帝国の魔法大学は、世界中にその名を轟かせる名門校で、優秀な魔法使いが世界中から集まってくるのだそうだ。そこはペーリスが通っていて、かなり優秀な成績で卒業しているのだが、彼女は楽々そこを卒業してしまっていて、しかも、普通四年で卒業するところを、僅か二年で卒業してしまっていた。そのために、あまりレベルの高い大学ではないのだろうと考えていたのだが、どうも俺のイメージとは異なっていたようだ。

魔法大学には推薦がなければ入れないと言う。ペーリスのときも、俺が推薦したので、俺が推薦してやろうかと言ってみたが、ジュリアは頑なにそれを拒んだ。まあ、気持ちはわからないわけではないので、それ以上話をするのは止めることにした。

後に彼女は、薬草に興味を持ち、大学で出会った医者の卵と恋に落

ちて結婚することになる。彼女の夫はアガルタの国内で開業して、町医者となった。ジュリアは火魔法と薬草の知識を生かして、色々な薬を作り出すようになり、薬を調合し、処方してくれる病院として有名となるのだった。

むろん、そんな未来が待ち受けているとは、このときのジュリアには知る由もなかった。

◆　◆　◆

リノスは執務室の椅子に腰かけ、両腕を頭の後ろに回しながら、大きく息を吐き出した。彼の前にはリコが控えていて、夫の姿を優しい眼差しで見守っていた。

「いや～、やっとカーザ城の一件が片付いたな。意外に時間がかかってしまったし、予想以上の人命が失われた。ちょっと反省だな」

「秘匿しながらの行動でしたので、限界がありましたわね。でも、両国が全面戦争にならなかったのが、不幸中の幸いでしたわ」

「まあ、そうだよな。セーファンドのあの総司令官のことだ。とんでもない大虐殺を起こしかねないものな。あ……結局、あの総司令官の名前、聞くのを忘れていたや。まあ、終わったことだし、それはいいか」

そう言ってリノスは笑みを浮かべた。だが、彼は知らなかった。この戦いはまだ続くのだと。そして彼自身も再びこの戦いに巻き込まれてしまうことを……。

第七百三十八話　ホルムとジュリア（後書き）

第二十二章、ひとまず完結です。次週より間話を数話挟みまして、新章に突入いたします。

第七百三十九話　離れるな！

龍王は上空で腕を組みながら地上の景色を眺めていた。その顔は、何とも悩ましそうな表情を浮かべていた。

常に自信満々、傍若無人な振る舞いをする彼にしては、このような表情を浮かべることは珍しい。彼はその耳に聞こえてくる音を、じっと聞き取っていた。

『サイ……ン……ノ……バニ……ヨ……テ……ルナ』

彼は天を仰ぎながら、大きなため息をつく。それ見ろ、『最強のドラゴンよ、我の傍に居よ。決して離れるな』と聞こえるではないか、と小さな声で呟く。

その声の主は、リノスの娘であるアリリアだった。彼女は龍王の眼下で、歌を歌いながら花を摘んでいる。

「あかいお花は元気をくれる～♪　青いお花は落ち着いて～♪　黄色いお花はかしこさを～♪　ピンクのお花はやさしくなれる～♪」

アリリアは上機嫌で歌いながら花を摘んでいる。これは、彼女がソレイユから習った歌の中でも一番好きな歌であり、ほぼ毎日、この歌を歌っている。龍王にはどうしても、この歌があのように聞こえてくるために、彼女の傍を離れられないのだった。

……傍から離れるなと言われているので、離れることはできない。にもかかわらず、どうしてあの男は我の邪魔をするのか。

龍王は怒りとも無念ともつかない感情を押し殺す。彼の脳裏には、アリリアの父親であるリノスの顔が浮かんでいた。

彼はゆっくりと下降する。しかし、すぐに動きが止まる。彼女に張られている結界のためだ。

……厄介な結界だと思う。いや、厄介、とは言ったが、対応できないわけではない。我は龍王。竜族の頂点に君臨し、神龍様のお言葉を聞くことを許された者。そんな我が、人族ごときが張る結界に対応できないわけがない。本気……いや、本気を出すまでもない。ちょっと、グッと、はぁぁぁっと力を込めれば、こんな結界はいとも簡単に壊すことができる。力の入れ具合で、この結界はすぐに決壊するだろう。……うん？　結界と決壊？　同じ言葉ではないか。さすがは我だ。同じ言い方で二つの意味を持たせることができている。我がその気になれば、このくらいのことはできるのだ。そう言って彼は、ウワッハッハッハと満足そうに笑った。

いやいや、そんなことで喜んでいる場合ではない。アリリアだ。今も彼女は離れるなと言っている。この結界を解除せねばならない。

龍王は小さく息を吐くと、右手を差し出し、力を込めた。

パリッという何かがはじけた音が聞こえた。だが、結界はすぐに修復された。龍王はさらに力を籠める。パリッという音が聞こえる。だが、やはりその瞬間に結界は修復されてしまった。

「ふう……」

再び龍王は腕を組みながら天を仰ぐ。この結界をどうやって破れば

よいのか、見当もつかなくなっていた。数日前、あまりのことに激高してしまい、全力でこの結界に攻撃を仕掛けたが、やはり結界が壊れた瞬間にそれは再生されてしまっていた。

龍王は考える。これはもしや、結界が破られた瞬間に再生されてしまうのではないか。と、すれば、この結界が破られたと気付く前に結界を壊せば、中に入ることができるのではないか、と。

龍王は両手の人差し指に力を籠める。一瞬で切り裂くのだ。速さが勝負だ。彼は頭の中で何度もシミュレートする。背中の羽も最小限に折りたたんでいる。

「シャッ！」

叫ぶと同時に、結界に突撃した。ほんの一瞬、自分が通ることができる穴を開け、そこに全力で突撃したのだ。

「ううっ。はあっ、はあっ、はあっ」

地面に両手をつきながら、肩で息をする。どうやら結界を超えたようだ。我が……本気を出せば……このくらいの結界はたやすく……とっぱできるのだ……。龍王は必死で息を整えながら、そんな言葉を呟く。決して、息が切れているわけではない。ただ、空気を吸いたいだけなのだ……。

「あっ！　りゅーおーくん！」

心地いい音が聞こえた。アリリアが目を輝かせながらこちらに向かってくる。龍王は笑みを浮かべながら、ゆっくりと立ち上がる。

「久しぶりー！　どうしていたの？」

どうしていたのもこうしていたのもない。ずっとお前の傍に居たのだ。気づかなかったのか、と言いかけて、彼はその言葉を飲み込む。それを言えば、何かイヤなことが起こる予感がしたのだ。

「りゅーおーくん、これ、あげるねー」

アリリアは手に持っていた、花輪のようなものを龍王に差し出す。彼は頷きながらそれを受け取った。

……我を見た途端、こうして貢物を持ってくるのだ。この娘は本当に我のことを慕っているようだ。我のことを最強のドラゴンと言い、傍に居ろと言うあたり、やはりこの娘はわかっているな。龍王は心の中で呟いた。

アリリアは屋敷に走っていき、サイリュースを呼び出してきた。二人の会話が何とも心地いい音を奏でている。龍王は腕を組みながら目を閉じてその音に身を任せた。

「龍王様、わざわざのお越し、どうかなさいましたか？」

「ウワッハッハッハ」

思わず笑ってしまう程、心地の良い音だ。さすが、神龍様と契約しているだけはある。実に耳に心地いい音を奏でる。

龍王は何度か、この母娘が奏でる歌を聞いたことがある。実に美しい、心地いい音色だった。思わず眠ってしまう程の音だった。彼はもう一度、この二人の音を聞きたいと思うが、それをどう表現して

よいのかが、彼にはわからなかった。

「何かお食事でも召し上がりますか？」

「食事？　そんなものはいらん」

「じゃあ、あそぼ、りゅーおーくん」

「そうだ、遊ぼう！」

「では龍王様、何かあればお呼びください。アリリア、仲良くするのよ」

「うん、わかったー」

サイリュースはそう言って屋敷に入ってしまった。龍王は心の中で舌打ちをする。せっかくまた、あの心地いい音が聞けるかもしれぬと思っていたのだが……。

「じゃあ、りゅーおーくん、お薬を作ってあげるねー」

おくすり、というのは聞いたことがないが、この娘はきっと我のために何かを作るのだろう。こんな幼い娘が我に貢物を作ろうと言うのだ、何とも愛いではないか……。

そんなことを考えながら、龍王はアリリアの後を付いて行く。彼女は花壇の前まで来ると、花をいくつか摘み、その花びらをバラバラにし始めた。そして、石でそれをすりつぶしていく。

何故かはわからないが、龍王はその光景が何とも楽しいものに感じ

ていた。この娘の行動は、見ていて楽しい。そして、これも何故かはわからないが、この娘の言うことには、無意識に同意してしまうのだ。

だが、それに不快感はない。むしろ、大いに納得してしまっているのだ。龍王からしてみれば、不快や違和感がなければ問題なければ、考えるようなことではなかった。

アリリアはすりつぶした花びらに、土を混ぜてこねている。そして、それを石で叩いている。

「はい、できましたー。こなぐすりだけれども、飲めますかー？むずかしければ、水に溶かして飲んでも大丈夫ですからねー」

アリリアはそんなこと言いながら、粉状になった土を大きな葉っぱの上に乗せて差し出してきた。龍王はそれを無造作に口の中に放り込んだ。

「上手にのめましたねー。えらいねー。もう、りゅーおーくんはりっぱな大人だねー」

……ただの土だ。何の味もないが、土を食べたくらいで、ここまで喜ぶというのは、何とも愛いではないか。そんなことを考えていると、大きな気配を感じた。

「またお前か！　いい加減にしろよ！」

「あっ、おとーさん！」

龍王は心の中で舌打ちをする。またこの男だ。一体どこまで我の邪

魔をすれば気が済むのだ……。

そう考えた直後、龍王の体は、はるか上空に飛ばされていた。眼下ではアリリアが空を見上げて、手を振っている。

「ウワッハッハッハ……。またか……」

龍王は大きなため息をついた。彼はこの場を去りたかったが、『決して離れるな』と言われているので、この場を離れることはできなかった。彼は腕を組みながら視線を地上に向け、そのままの体制のまま、空を漂うのだった……。

第七百四十話　決意する

龍王は怒っていた。そして、これは、我が何とかせねばならないと、心に誓った。

話しは少し前に遡る。いつものように、上空でアリリアの傍についていると、一人の客人があった。その男は、優し気な風体をしており、アリリアとは顔見知りのようだった。

「あ！　ばいらすおにーちゃん！」

「こんにちは、アリリア。父上はおいでかな？」

「いるよー。またお話し？」

「そうなんだ。君の父上と母上……ママに相談があってね」

……距離が近い。あの距離では攻撃されたらダメージを受けてしまう。我のような固い鱗で守られているのであればよいが、あの娘にはそのようなものはない。これは危険な状態だ。もし、攻撃される素振りがあれば、我が守る外はない。

龍王は頭の中でそんなことを考えながら、力を溜める。この厄介な結界を破って彼女の許に行くためには、全力を出すほかはないのだ。

だがそのとき、屋敷の扉が開いて、アリリアの父親であるリノスが出てきた。彼は優男を歓迎するような手ぶりをしながら、何やら話をしている。

「ようこそヴァイラス公爵。今日は一体何用です？」

「ああ、わざわざのお出迎え痛み入ります義兄上。本日は、兄上…陛下が義兄上と姉上に相談事を伝えに参りました」

「相談事？　大体陛下のことです。ロクなものじゃありませんね？」

「いや……そうではない、と思いますよ？」

ヴァイラスと呼ばれた優男は、困った表情を浮かべている。そのとき、屋敷から女性が出てきた。

「あら、ヴァイラス。来ていたのですか」

「やあ、姉上。お変わりなく」

「この間来たばかりではありませんか」

「いや、これは手厳しい……」

優男はそう言って頭をポリポリと掻いている。どうもこの男はこの女性が苦手らしい。我程の者になれば、人族の考えていることなど、手に取るようにわかるのだ。対してこの女性の方は……この優男のことは、嫌い……ではないが、何か警戒しているようだ。いずれにせよ、我とアリリアのように深い信頼関係で結ばれているわけではなさそうだ。

龍王はそんなことを心の中で思いながら、この三人を観察する。しばらくすると、リノスが、立ち話では何だから……と言って、屋敷

に入るように促した。そのとき、彼が上空に視線を向けた。

「……チッ」

リノスは龍王と一瞬だけ視線を合わせると、小さく舌打ちをした。

「どうかなさいましたか、義兄上？」

「ああ、いやね。最近……というより、結構前から、娘のアリリアにずっと付きまとうヤツがいて、困っているんだ」

「え？　アリリアに、ですか？　誰です、それは？」

「誰って……。まあ、一言でいえば、アホですね。アホという字で体が作られているようなヤツです。斬ればそこから、アホ、と書かれた血が出て来るようなヤツです」

「はぁぁぁぁ……」

「リノス、そのような下品な言葉を使うべきではありませんわ」

「いや、わかっている。わかっているんだが、そう表現せざるを得ない、いや、その表現しか表現のしようのないような男なんだ。本当に困るよ」

「義兄上の結界で守ればよろしいかと……」

「結界を張っているんだが、それでもお構いなしに来やがるんだ。本当に、どうすれば来なくなるのか、知ってたら教えて欲しいくらいだよ」

「義兄上の結界をお構いなしとは……相当のスキルを持っているのですね！」

優男は大げさに驚いている。その様子を見ながらリノスはさらに言葉を続ける。

「もう、毎日だ。本当に、いつもいつも、アリリアに付きまとっているんだ。アリリアだって気持ちが悪いと思っているんだ。本当に、誰か、何とかして欲しいんだが、それも難しいだろうから、困っているんだよ」

「そう……ですか。私も何とかしたいと思いますが……」

優男はリノスとアリリアに交互に視線を向けながら、ポリポリと頬を掻いている。

「さ、ここでは何ですから、中に入りなさいな」

女性がそう促すと、二人は渋々と言った様子で屋敷の中に入った。

「アリリアはまだ遊ぶのですか？　お屋敷に入るときは、ちゃんと手を洗うのですよ」

そう言って女性は屋敷に入った。

「……」

龍王は腕を組みながら顎をクイッと上げて、天を仰いだ。目をギュッと閉じる。

……知らなかった。我がついていながら、アリリアがそのようなことになっていたとは。彼女が毎日、『最強のドラゴンよ、我の傍を離れるな』と言っていたのはこれか。なるほど、毎日毎日付きまとわれていては、恐怖を感じるだろう。我にはわかる。同じような状況に陥ったことがある。その苦しみは、よくよくわかる。

あれは何百年前のことだったか……。世界最高峰の山であるマオーミ山を住処としていた頃、その山に住むホワイトドラゴンらに付きまとわれて、難儀をしたのだ。毎日毎日我の許を訪れて、やれ、ソディアックらの横暴を静めて欲しいだの、人族が麓に作った砦を一緒に壊してくれなどと言って来たのだ。しかも彼らは時と場合を選ばず、昼も夜もやって来たのだ。さすがの我も腹に据えかねて、マオーミ山から住処を移したくらいだ。アリリアも、あのときの我と同じ状況になっているらしい。あんな幼い子供が、あのような、怒りとも恐怖ともつかぬ気持ちを常に抱いていると考えると、怒りの感情が沸々と湧き上がってきた。

「……これは、我が何とかせねばなるまい」

龍王はそう呟くと、ゆっくりと目を開け、眼下のアリリアに視線を向けた。彼女は花畑の中で遊んでいる。

龍王はふと考えた。あの父親は何をしているのか、と。

我に強力な結界を張ることができるのだ。我と同じように、いや、我以上の結界を張って、その付きまとう者を遠ざければよいではないか、と。そこまで考えて、龍王はハッとした。そうか、敵はその結界すら掻い潜る者なのだ、と。

以前からずっとアリリアの傍にいるが、それらしき者は龍王自身見たことがなかった。我の気配探知と魔力探知は世界一だ。その我の探知も掻い潜るような者なのだ。確かに、あの父親では対処は難しいだろう。

幸いにして、アリリアは付きまとわれてはいるらしいが、直接的な被害は受けていない。我の眼は千里をも見渡す。その眼でアリリアの体の隅々まで確認してみたが、触れられたり、掴まれたりしたような形跡はない。指先に小さな傷があるが、あれは、我に花を捧げたときにできた傷で、誰に傷つけられたものではない。

……それにしても水臭い男だ。ここに我がいるのだ。どうして頭を垂れて我に願いに来ないのだ。アリリアが苦しんでいる。平身低頭してお願いするのであれば、喜んで、とはいかぬが、まあ、いつも以上にアリリアを守ってやろうという気がないわけではないのだ。

そこまで考えて、龍王はハッと気が付く。あの父親は、我を巻き込まぬようにしているのでは、と。

なるほど我はドラゴン族の頂点に君臨する者。その我が、命を失うことはなくとも、何らかのダメージを受ける可能性はなくはない。そうなっては、ドラゴン族の未来に影響を及ぼす。神龍様のお言葉を聞く者がいなければ、危機を伝えられなくなってしまう。そうならないように、あの父親は自分で対処するつもりなのだ。先ほど我に向けた視線と、何やら音を鳴らしたが、あれはそういう意味だったのだ……。

龍王は満足そうな表情を浮かべながら、コクコクと大きく頷く。そして心の中で、その意気やよし、と呟いた。

「仕方がない、協力してやろうではないか」

龍王は誰に言うともなくそう呟いた。

「忙しい我だが、そなたの心意気に免じて、アリリアの警備をしてやろうではないか。これから探知に集中して、アリリアに付きまとう者の正体を見極めようではないか。そして、コトが起こらぬよう、我が守ろうではないか。ウワッハッハッハ……」

そう言って龍王は探知能力に力を集中させた。その心の中には、強い決意が宿っていた……。

第七百四十一話　ペット

リノスは、執務室の机で頬杖をつきながら、ため息をついていた。
この光景はここ数日、よく見られるもので、いつも真面目に仕事に取り組む彼にしては、珍しいことと言えた。そのため、家来たちは、王の周辺に何かあったのかと心配する程だった。

彼を悩ませている原因は、龍王だった。彼はここ数日、アリリアの傍から一歩も離れようとせず、ひたすら彼女に付きまとっているのだった。

これまでの龍王は、折に触れてアリリアの傍にやって来てはいたが、しばらくすると、どこへともなく消えていっていた。当初こそ、結界を破壊してアリリアの傍に寄ることもあったが、今の結界を張ってからは、そうしたことはほとんどなくなっていた。リノスはその状況に満足しつつ、己の結界スキルの向上も感じていたのだった。

だが、ここ最近は、龍王はその結界ギリギリのところに居座り続けている。食事も摂らず、水も摂らず、手洗いなども行かず、ただひたすらその場に立ち尽くしている。普通の人間ならばとっくに倒れているレベルだが、龍王はそんなことはお構いなしに、ただ、アリリアに付きまとっている。リノスは龍王の真意を測りかねていた。

いよいよ、アリリアを連れ去るつもりか、とも考えたが、そうであれば、これまでの間に何度もチャンスはあった。リノスは直感的に、龍王の狙いはそこではないと考えていた。だが、それ以上のことはわからなかった。彼は頬杖をつきながら、大きなため息をついた。

「……これは、俺一人で対処する問題じゃないな」

彼は誰に言うともなくそう呟くと、ヤレヤレと言った表情を浮かべながら、目の前に積まれている書類に手を伸ばした。

その夜、子供たちが寝静まった後で、リノスは家族をダイニングに集めた。

彼の前にリコ、メイ、シディー、ソレイユ、マトカルら妻たちが座り、その隣に、フェリス、ルアラ、ペーリス、ゴンが座る。ラースはヒヤマの砦に詰めていて不参加だ。というより、姉のフェリスが連絡するのを忘れていただけなのだが、ここでは秘密にしておく。

リノス家において、こうした家族会議が開かれるのは、かなり珍しいことと言えた。そのため、皆、一様に緊張した面持ちをしている。唯一、シディーだけは、ある程度の未来を予想しているのか、眠そうな表情を浮かべている。

「皆に集まってもらったのは、他でもない……」

重々しい口調でリノスが口を開く。その様子に、家族たちは居住まいを正す。

「みんなに知恵を借りたいと思っているんだ。……他でもない、あの、龍王のことだ」

その言葉に、皆、顔を見合わせている。そんな中、リノスはさらに言葉を続ける。

「あの龍王はここ数日、ずっとこの屋敷の上空に留まっている。狙

いは他でもない、アリリアだ。ヤツはアリリアの行動に従って、移動していっている」

「アリリアは基本的に、お屋敷の庭でフェアリと遊んでいますけれども……」

リコの言葉にリノスはゆっくりと頷く。

基本的にアリリアは出不精だった。息子のイデアと娘のピアトリスは、毎日のようにアガルタに赴くのとは対照的に、彼女は外出することをあまり好まなかった。外に出て花と戯れ、鳥の音や風の音を聞くのを好んだ。とりわけ、フェアリとは家族の中で最も仲が良く、常に彼女と行動をともにしながら、とりとめのない会話を楽しんだり、歌を歌ったりしていた。

当初はその行動範囲の狭さに心配をしていたが、今はそれが功を奏しているとリノスは考えていた。あちこちで歩くのであれば、それだけ龍王と接触する機会が増えることになる。そうなったとしても、娘を守り切る自信はあるが、この屋敷の敷地内であれば、確実に守り切る自信が彼にはあった。

「龍王のヤツは、アリリアが一歩右に動けば右に動き、左に動けば左に動く……。そんなことをここ数日繰り返しているんだ」

「……暇なのだな」

リノスの言葉に、マトカルが口を開く。その何の飾りもない、しかも、見事にその状況を端的に言い表した言葉は、そこにいた全員の視線を天に向けさせた。

「……これは、どう考えても尋常ではない。だから俺は、あのバカ龍を討とうと思う。皆に集まってもらったのは、その際に出る影響のことだ」

「あの……影響と、言われますと……」

メイが心配そうに口を開く。リノスは彼女に視線を向けながら、ゆっくりと頷く。

「一応、あれでも竜族の頂点に君臨する、と自称している。その自称ナンバーワンがこの世から消えた場合、どんな影響があるのか知っておきたいんだ。たぶん、おそらく、きっと、いや、確実に、十中八九、いや、絶対に、戦えば俺が勝つ。龍王はこの世から姿を消すことになる。なぜなら俺は、本気出しちゃうからだ」

彼の言葉に、再び家族全員が沈黙し、緊張した表情を浮かべる。彼が本気を出せば、ヘタをするとこの周辺の景観が大きく変わってしまうことが、容易に想像できるからだ。

「あの……龍王様がいなくなると、我々竜族は困ることになります……」

申し訳なさそうな声で発言したのは、フェリスだった。彼女は皆の様子を窺いながら、言葉を続ける。

「龍王様は、神龍様のお言葉を聞くことができる唯一のお方です。これまで、龍王様のお陰で、様々な災厄から竜族は守られてきましたし、竜族同士の争いを納められたこともあります。ですので、龍王様がいなくなる、というのは、ちょっと……」

「神龍様のお言葉なら、ソレイユが聞くことができる。ソレイユから竜族に伝えればいい。竜族同士の争いは、以前のヤツなら納められただろうが、幼子に心奪われている今、ヤツにそれができるとは思えない。やはり、一刻も早く駆除するべきだと思うが？」

「リノスの気持ちもわかりますが、アリリアはどう思っているのでしょう？　見たところ、楽しそうですが……」

リコの言葉に、リノスは腕組みをしながら口を開く。

「まあ、ある意味では面白い存在かもしれない。そう、見ているだけなら、面白い存在かもしれない。だが、そこはまだ子供だ。敵のゲスい本性を見抜くことはできない」

「……あの」

口を開いたのはソレイユだった。彼女は優しげな微笑を浮かべながら、話を続ける。

「アリリア自身は、その……こう言っては失礼ですが、龍王様のことは、ペットと同じ感覚で接しています。それに、龍王様自身も、リノス様が懸念されているような感情は抱いておらず、むしろ、アリリアに懐いている、と言った感覚ですから、そんなに心配はないと思われます」

「……ペット？　なるほど、道理だ。しかし、龍王がアリリアのペットたらんと考えているかは到底信じられん。根拠はあるのか？」

「私は神龍様と契約していますから、ドラゴンの気持ちがある程度わかるのです」

「……うーん」

リノスは腕組みをしたまま、目を閉じて天を仰いだ。そうしている間に、家族たちは、別に懐いているのであればいいのでは……と言った議論が交わされていた。

「リノス」

リコが静かに口を開く。ざわついていた部屋の空気が引き締まり、シンとした雰囲気となる。彼女はまるで諭すような口ぶりで、話を始めた。

「あなたのご懸念もわからないではありませんが、少し、考えすぎではなくて？　アリリアは龍王様に懐いていますし、龍王様もアリリアに懐いている……。そういう関係なら、そのまま二人を仲よく遊ばせればよいと思いますわ。それに、龍王様がお味方くだされば、さらに私たちにとっても有益になりますわ。アリリアにしてみても、龍王様が常にそばについてくださるのなら、最強の近習となりますわ」

「ううううん」

リノスは眉間に皺を刻みながら、体を左右に振った。

翌日、彼は結界を解除して龍王に地上に降りてくるように促した。そして、屋敷の中からアリリアを呼んだ。予想していないことだったためか、龍王は珍しく戸惑いの様子を見せた。彼はその動揺を隠すかのように、リノスに向けて声を荒げた。

「……何だ！　我は忙しいのだ！」

「……暇じゃねぇか。毎日毎日アリリアと同じ行動をとりやがって。そのどこが忙しいのだ。……まあいい。とりあえず、だ。お前をウチのペットとしてなら認める。言っておくが俺が言ったんじゃないからな。リコとソレイユが、家族みんながそうした方がいいと言うから、そうするんだ。感謝しろ。あとでウチの家族全員に礼を言いに行け」

「……貴様、何を言っているのだ？」

「わからないなかな。結界を解除すると言っているんだ。ただし、お前はペットとして扱う。アリリアに手を出したら承知しないからな。下僕が主人に逆らうことは許されん。逆らった瞬間にブッ殺すからな、いいな？」

「……当然だ。下僕が主人に逆らうなど、あってはならぬ。そんなことは言うまでもないことではないか。ウワッハッハッハ！」

「よーし、言ったな？　その言葉、忘れるなよ！」

「え？　おとーさん、りゅーおーくんと遊んでいいの？」

「ああ。可愛がってやりなさい」

「うわぁ！　ありがとう、おとーさん。じゃあ、りゅーおーくん、遊ぼ！」

「そうだ、遊ぼう！」

アリリアは花畑に向かって走っていく。その後を龍王は悠然と追いかけていった。その二人の姿を、リノスは腕組みをしながら、何とも言えぬ表情で見守るのだった……。

第七百四十二話　メイ、閃く

皆が寝静まった頃、リノスの帝都の屋敷の廊下に人影が見えた。ゆっくりと、音を立てずに廊下を歩く。その足は、とある部屋の前でピタリと止まった。

扉を開けて部屋の中に入る。小さな声で詠唱すると、部屋がパッと明るくなった。

そこにいたのは、メイだった。

彼女はさらに奥の扉を開ける。ムッとした湿気が体を包む。彼女はさらに詠唱してライトを出して部屋を明るくする。そこは、リノス家のバスルームだった。

バスタブを見ると、そこには水がなみなみと湛えられていた。これは、おそらくご主人様だろう。メイは思わず笑みを漏らす。

これは、研究でメイが遅くまで起きていたときに、よくリノスがやってくれていたことだった。最近はあまり遅くならないように、皆と一緒に寝ることを心掛けていたのだが、この日は、ついつい夜遅くまで本を読んでしまっていたのだった。

メイはキョロキョロと首を左右に振る。きっと、魔石がどこかにあるはずだ。……それは、バスルームの入り口に置いてあった。これに魔力を注げば、たちどころに熱を帯びて、バスタブを温めてくれるのだ。

しかもこの魔石は、バスタブがちょうどよい温度になるように温めてくれる。一体、どのような手法で作られているのか、メイには皆目わからない。単なる石にリノスが魔力を込めることで、色々な効果を付与できる――これは、アガルタの専売特許になっていて、重要な収入源になっている――という理論は、メイをして、何度聞いても理解できないものだった。

「こうしたい……っていうのを頭に描きながら、石に魔力を注入するんだ。そのとき、石の中心に向かって魔力をねじ込むように入れるのが、コツだ」

それは、石の小さな隙間に向かって魔力を注ぎ込むのか、どの程度の魔力を注入するのか。そうした具体的な、数字で示すことのできる証拠は皆無だった。

メイはリノスが用意してくれた魔石を手に取り、それに魔力を通す。ほんの少し、魔力を注入すれば効力を発揮するために、やろうと思えば子供でもちゃんと効果を発揮する優れものだった。

魔石をバスタブに沈めると、石からブクブクと泡が出てくる。水が温められている証拠だ。それを確認したメイは、隣の脱衣所に向かい、ゆっくりと服を脱ぎだした。

彼女の体が次々と露わになっていく、やがて、一糸まとわぬ裸になった彼女は、ふと、鏡に映る自分の姿に視線を向けた。

尻に赤い斑点のようなものが見えた。何かの病気の予兆だろうか。じっとその斑点を観察する。

特に痛みもない、しこりもない。何か、食べ物に当たったのだろう

かとも考えたが、すべて熱を通したものを食べている。その可能性は低そうだ。そのときふと、思いだした。

「……もしかして、ご主人様？」

ふと、昨夜のことに思いを馳せる。あのとき、付けられたのだろうか。メイの顔が少し赤みを帯びてくる。確かに、いつもは優しいご主人様が、昨夜は少し興奮気味だった。そのせいもあったのかもしれない……。

今夜、ご主人様はリコ様と一緒だ。昨日のようなことになっていなければいいのだが……。

そこまで考えて、彼女はフッと笑みを漏らしながら首を振る。何を下らぬことを……。と自分に言い聞かせながら、バスルームに向かう。

バスタブに手を浸けてみる。ちょうどよい温度になっている。彼女は桶で水を汲んで、数度体にかける。そして、備え付けられてあるシャワーのコックをひねる。

少し熱めの湯がシャワーヘッドから飛び出してくる。これも、リノスが作り出したものだ。

元々は、ヒーデータ帝国のホテルにあったものをヒントに作ったのだが、彼の作る魔石が埋め込まれていて、ほとんどオリジナルに近いものになっている。実に優れたもので、これもやはり、温度調整がちょうどよいものに設定されている。

メイ自身、こうしたものを作り出そうと考えたこともあるが、なか

なかそれは実現しなかった。そんな彼女を見てリノスはいつも、もう少し時代が追い付いてくれれば、何とかなると言って笑うのだった。

シャワーの湯を頭からかぶり、頭、体を洗ってゆく。そして、手早くそれを済ませると、彼女はその豊満な肉体をバスタブの中に沈めた。

いつも感じるが、本当に最高の瞬間だ。体の疲れが取れていくような、何とも言えぬ心地よさだ。メイは一人で入る風呂が大好きだった。この、自分だけの空間に浸ることで、ぼんやりと頭の中で考えを巡らせるのが、大好きだった。

眼を閉じて、ゆっくりと天を仰ぐ。頭の中に、色々な考えが浮かび、消えていく……。

「あっ」

思わず声が漏れてしまった。彼女の顔に水滴が落ちてきた。ゆっくりと目を開けると、天井に、今にも落ちてきそうな水滴がたくさん付いているのが見えた。

「……子供たちが喜びそうだわ」

思わず笑みがこぼれる。いつ降ってくるのかがわからない水滴から、どう逃げるのか……。子供たちがきゃあきゃあ言いながら逃げ回る姿が頭の中によぎる。何ともかわいらしい光景だ……。

そんなことを考えていると、バスタブに天井から数滴の滴が落ちてきた。ポチャン、ポチャンと何とも言えぬ可愛らしい音が響く。メイはさらに天井の滴をじっと見つめる。

あの滴の正体はもちろん知っている。水蒸気が冷やされているためだ。それにしても、この季節にこれだけの水滴がつくのは珍しいことと言えた。バスタブの温度と、天井の温度差が大きいのだろうか。

そこまで考えて、メイの頭にふと、とある光景がよぎった。それは、リボーン大上王が、焚火を拵えて、そこに石を入れていた場面だった。

「我がフラディメ王国では、寒さが厳しいですでな。皆、寒さを凌ぐのにこうやって石を温めて懐に入れますのじゃ」

大上王は、何とか国の民を寒さから守ってやりたいものだと言って、笑っていた。メイの頭の中に、この蒸気を利用して暖を取れないかというアイデアが湧き出ていた。

一番の問題は、どうやって蒸気を冷やさないか、だ。蒸気が冷えてしまうものではだめだ。それに、外気が入るのもよくない。気密性が保たれるものでなくてはならない。で、あれば、鉄などのものはダメだ。となれば……。

ゆっくりと体を伸ばしながら、メイは思考する。そのとき、とある物質が頭の中に閃いた。

「カルムゾン！」

そう言ってメイは立ち上がる。熱を通さず、さらには柔らかい物質であるために加工がしやすい。それで管を作って家の中に張り巡らせる。熱源は数か所、場合によっては一カ所でいい。何か大きな窯で湯を沸かし、その水蒸気を取り込んで家々に流せば、それなりの

暖がとれるのではないか。うん、これはできそうだ。

メイはバスタブから上がると、手早く体を拭き、自分の部屋に戻る。幸い、今日はアリリアはソレイユと一緒に寝ている。一人で作業をするのにはもってこいの状況だ。

彼女は椅子に座ると、ペンを握り、図面を書きだした。それはあまり悩むこともなく、一気に書き上げていく。メイのいつものやり方だ。一気に書いてしまって、そこから推敲していく……。だが、この日の彼女はいつになく冴えていた。頭の中で浮かんでいるアイデアに手が追い付いて行かない。それでも彼女は、全力で集中して図面を書き上げた。

「よし……明日、シディーちゃんと相談してみよう」

メイは満足げな表情を浮かべながら、筆を置く。ふと気づくと、一糸まとわぬ裸であることに気が付いた。途端に恥ずかしさが込み上げてくる。

彼女は静かに部屋を出ると、足音を立てないように廊下を歩いた。こんな姿を家族に見られたくはない。特にご主人様とリコ様には、見られたくない……。

もうすぐにバスルームのところまで来たとき、不意に隣のお手洗いの扉が開いた。そこにいたのは、何とリノスだった。

彼はメイの様子を見て、目を丸くしながら絶句していた。そんな彼にメイは、片手で胸を隠し、片手で下腹を隠しながら、戸惑いの面持ちで必死になって口を開く。

「あっ、あのっ、そのっ……。お風呂に入っていたら……お湯を使ったアイデアを思いついて……」

「風呂？　お湯？　アイデア？」

リノスは呆れた表情を浮かべながら、メイに諭すように口を開いた。

「要は、やかんにわく、ってか？」

リノスは、ゆっくりと部屋に向かって歩いて行った。メイはその後ろ姿を、呆然とした顔で見送った。

第七百四十三話　明け方のソレイユ

ソレイユはふと、目を覚ました。

ゆっくりと体を起こす。体には何も身に付けていない。素肌の状態だ。シーツから形のよい、大きな乳房が露わになる。

外はまだ薄暗い。隣を見ると、夫であるリノスが静かに寝息を立てている。普段ならもうひと眠りするところだが、この日はいつになく眼が冴えていた。

ソレイユは夫を起こさないように静かにベッドから出て、すぐ前に置いてある机に向かう。そこには、水の入ったポットが置いてあった。

歩くたびにその、形の良い乳が、尻が揺れる。彼女はグラスに水を注ぐと、グイッとそれを飲み干した。

美味しい水だ。さすがはエスカリーナが気に入るだけある。これまで飲んできた水とは、一味も二味も違う。だが、と彼女は心の中で思う。一番おいしい水か、と言われれば、答えは否だった。

ソレイユが人生の中で一番美味しいと感じた水……。それは数年前に味わったもので、その味は今でも鮮やかに思い出すことができる。水、というものは、こんなに美味しいものか、と彼女自身が驚いたほどだった。

ソレイユはふと、ベッドで寝息を立てているリノスの顔を見た。も

う、あんなことは二度とないのだろうか……そんな思いが心の中に湧き上がってくる。その瞬間、彼女は少し笑みを浮かべながら、ゆっくりと顔を振る。

……あれは、あのときだからできたこと。今やれ、と言われても、ちょっと無理だわ。

彼女は心の中でそう呟くと、フッと笑みを漏らした。

それは、息子であるセイサムを授かったときのことだった。

ちょうどそのときは、リノスがある呪いにかかっていた頃で、異常に性欲が高まっていた。普段は優しい彼が、まるで獣のように求めてきた時期だった。最初の頃はそれを嬉しく感じたし、ソレイユ自身も全力で彼の愛を受け止めていた。

だが、彼の体力は無尽蔵だった。さすがのソレイユも音を上げそうになるほどだった。

まず、寝室に入ると、まるでむしり取るようにしてパジャマを脱がされる。あるときなど、本当にパジャマと下着が破けてしまう程、彼は乱暴にソレイユに求めてきた。そうした光景が、さらに彼を興奮させたのか、また、ソレイユ自身も興奮したために、その夜は、いつになく激しく二人で求め合った。

それは明け方になっても終わらなかった。ソレイユは、何度か眠りに落ちそうになったが、夫は許さなかった。それでも彼を受け入れ続けたが、さすがの彼女も、今度は疲れからか、強い睡魔に襲われそうになった。しかし夫は、長いキスの後、さらに激しく彼女を求め続けた。

舌を絡め、唾液を吸われる……。折に触れて続けられるそれは、彼女の体から水分を奪い、喉がカラカラの状態に陥らせた。睡魔と渇き……。その状況は、さすがの彼女をして、リノスとの行為に集中させることができなかった。

やっとのことで、リノスが眠りに落ちた。まるで、すべての力を使い果たしたかのように、彼女の体の上に崩れ落ちる。ソレイユも眠りに落ちそうになったが、喉の渇きがそれを許さなかった。一刻も早く水分を摂らねば、命が危うい……そう感じさせるほどの危機感を感じていた。

やっとの思いで、夫の体の下から抜け出す。ベッドから降りるが、足に力が入らない。懸命に四股に力を入れて立ち上がる。そして、水の入っているポットに向かって必死で歩を進める。

まさか、こんな事態に陥るとは、ソレイユ自身も予想外だった。神龍様と契約して以来、体力は飛躍的に向上した。ちょっとやそっとでは、疲れを感じない体になっていたのだが、夫のそれは、神龍様の力すらも凌駕しているか、これまで向上したと感じた能力をすべて無効化していた。

まるでゾンビのように、よろよろとテーブルに向かう。部屋は肌寒い。普段ならば毛布をかぶるか、夫に抱き着いて暖を取るのだが、この日のソレイユにとっては、その寒さも火照った体にはちょうどよかった。

我ながら、色気も何もないと思った。普段ならば、恥ずかしそうに両手で胸と下腹部を隠しながら歩き、豊かな尻を見せながら水を飲んで、夫の興奮を誘うのだが、このときのソレイユには、さすがに

そんな余裕はなかった。というより、夫はすでに気絶に近い眠り方をしている。今は夫に気遣う必要はなかった。

やっとの思いでテーブルに辿り着き、グラスを手に取る。何故か、手が震えている。その手でポットを掴むと、激しく揺れて中の水が飛び出してきた。このままではすべての水が床に落ちてしまう。ソレイユは本能的に、ポットを持っていた右手を左手で掴んだ。

だが、相変わらず手は小刻みに震えている。ソレイユは、水をこぼさないようにゆっくりと、慎重に、グラスに水を注いだ。

ようやくグラスが水で満たされ、すぐにでもそれを飲み干そうとしたが、今度はポットを掴んだ手が離れない。何故かはわからないが、まるで指が吸い付いたようにポットの持ち手から離れないのだ。

心臓がものすごい勢いで脈打っていた。頭の中が一刻も早く水を飲めと命じているのがわかる。ソレイユは左手で、右手の指を一本一本、ゆっくりと、丁寧に取っ手から剥がしていった。

ようやく手が離れた。彼女は、まるで生まれたばかりの赤子を抱くようにして、両手でグラスを掴んだ。手は未だに小刻みに震えている。ソレイユは水をこぼさないように、ゆっくりとそれを持ち上げ、さらに、自分の口もそこに持っていった。

ゴク、ゴク、ゴク……喉を鳴らしながら一気に水を飲む。冷たいそれが喉を通り、体の中に入っていくのを感じる。その瞬間、水が体の隅々まで行き渡るような感覚を覚えた。

何とも言えぬ爽快感……。それと同時に、水の旨味が口の中いっぱ

いに広がる。思わず美味しい、と呟いた。

もう一度ポットを取って、グラスに水を注ぐ。今度は震えは来なかった。ちゃんと手も取ってから離れる。左手でグラスを掴み、それを口元に持っていき、ゆっくりと、味わうようにして飲み込む。

……やっぱり、美味しい。

いつもと同じ、ただの水……。それがこんなに美味しいと感じるとは、ソレイユ自身も意外だった。水分が全身を駆け巡っていく爽快感も、初めて体験する感覚だ。

はあぁぁぁぁ、はぁぁぁぁぁぁ、はあぁぁぁぁ……。

彼女は目を閉じて三度、深呼吸をした。体に入る空気までもが、この体を活性化させているような感覚に陥る。思わず、腰が砕けたようになって、ヘナヘナと床に座り込む。何故か、床は濡れてしまっていた……。

◆◆◆

夫は呪いが解けて以来、あのような激しく求めて来ることはなくなり、以前に増して優しく接してくれるようになった。別に不満はない。だが、強いて言えば、あのくらい、とまではいかないまでも、もう少し激しさがあっても悪くはないな、という気持ちもないわけではなかった。

確かに、あの呪いのお蔭で、セイサムという息子を授かることができた。だが、ソレイユとしては、もう一人、女の子を生みたいと言う希望があった。

サイリュースは、基本的に子供は一人しか生まない。二人生む者もいないわけではないが、そうした者は、里ではあまり歓迎されない。それは、サイリュースは女の子しか生まず、女性の数が増えれば、自ずと族長争いが激化するからだ。しかし、ソレイユはそれでも女の子を生みたかった。自分の能力を次代に伝えたかった。セイサムは男の子だ。自分のようには歌えないだろう。そうなれば、神龍様と契約することは難しい。

そんなことを考えていると、スッと夫の目が明いた。彼はキョロキョロとソレイユを探している。

「お目覚めになりましたか？」

「ああ……ソレイユ、おはよう。……相変わらず、色気のある姿だな」

彼の言葉を受けて、ソレイユはグラスを置いてベッドに戻る。

「まだ夜明けですが、もう一度眠られますか？　それとも、もうお起きになりますか？　リノス様のお好きになさってください」

「そうだな、そうし……」

ソレイユの唇が彼の唇を奪っていた。長い濃厚な時間が過ぎていく。

「……全然任せてないじゃないか」

やっと唇が自由になった彼は、何とも言えぬ表情を浮かべながら呟く。そんな彼にソレイユはニコリと微笑みかけた。

「うふふ。お任せ、します」

そう言って彼女は、再び彼の唇を奪い、その体に抱き着いた

第七百四十三話　明け方のソレイユ（後書き）

次週よりいよいよ新章突入です。お楽しみに！

第七百四十四話　その男、危険につき

「ぜ……全滅？」

信じられない、と言った表情を浮かべているのは、エルスモ帝国皇帝、エルスモ・カザイ・カーキだ。太い眉毛をハノ字にし、あんぐりと口を開けながら、呆然自失の姿を晒している。

彼の目の前には、宰相であるオクマが控えていた。何とも言えぬ表情で頭を垂れ続けている。

「に……二万もの我が軍勢が、全滅した、というのか……？」

皇帝は声を振り絞るようにして口を開く。彼にとっては、まさに青天の霹靂とも言える報告だった。そんな彼をチラリと見ながら、宰相オクマは、申し訳なさそうに返答する。

「はっ、はい……。先ほど参りました、ノーノからの使者によれば、エルスモ・ノーノ両軍二万五千の兵が、全滅したとのことでございます」

「……信じられん。二万五千であるぞ？　二万五千もの兵士が全滅するなど、一体何があったのじゃ？」

「はっ。それが、グレイ・サハラが発生し、それに巻き込まれた、とのことでございます」

「グレイ・サハラが！？」

皇帝が驚くのも無理はない。それは、太古の昔に起こったとされる大惨事で、今や伝説と化している現象だった。彼は最初、その話を信じなかったが、多くのドラゴンが空を埋め尽くしていた、などの報告を受けるにつれて、その表情はさらに落胆の色を濃くしていった。

皇帝を絶望させたのは、何より一人息子であるノマサ生存の可能性が皆無であるという点だった。

息子のノマサは幼いころから聡明だった。皇帝・カーキはこの息子の成長に大いに期待をかけていた。その息子が死んでしまったのだ。今後のエスルモ帝国に暗い影を落としていた。

エルスモ帝国は、広大な領土を擁しており、世界の中でも大国に位置付けられる国ではあったが、常に周辺国からの領地争いに巻き込まれていた。皇帝・カーキは、父である先代皇帝が広げた版図を維持するだけで精いっぱいであり、この国をさらに発展させていくことはできなかった。それ故彼の家来からの評価は低く、背かれはしないものの、軍事・外交両面で手腕を発揮し、エスルモ帝国の版図を拡大した父と比べて、能力は圧倒的に落ちると評されていた。

ただ、カーキは品の良さと、人の話をよく聞く度量の大きさがあった。家来たちの前で怒りの感情を表したことは皆無で、人当たりがよく、情に厚い人物であったため、彼を評価する者も少ないと同時に、敵に回るものも少なく、それが彼の治世を支えていると言えた。

一方で、息子のノマサは、幼いころから聡明さを発揮し、家来たちは亡き先帝陛下の再来としてこの子息に期待をかけるようになっていた。きっと、ノマサ殿下はエルスモを隆盛に導く名君となるだろ

う……それが、家来たちの一致した考えだった。

そのノマサ生存の可能性が極めて薄いというこの状況は、家来たちにも少なからず動揺を与えていた。皇帝・カーキにはノマサの他に後継ぎとなる男子はいない。残るは三人の娘たちと、皇帝の弟二人だが、いずれにせよ、ノマサに匹敵する能力を有してはいなかった。と、なれば皇帝の娘に婿を取り、その者に跡を継がせるという選択肢しかないが、それは、多くの家来たちからの反発を招くことになるのは、簡単に想像することができた。

「ま、まずは、情報を集めよ」

皇帝はそう命じるのが精いっぱいだった。彼には、今ここでノマサ亡き後のことを決める能力はなく、取り敢えず現状を先送りすることしかできなかった。

しかし、一週間後、その状況が一変した。何と、ノマサ生存の報告がもたらされたのだ。諦めかけていた皇帝以下、エルスモ帝国の者たちはその報告に狂喜した。

それからさらに一週間後、ノマサは兵士たちに守られながら、ようやく帰国の途に就いた。だが、帰ってきたノマサは、以前の彼ではなかった。

これまでの彼は、常に自信満々の雰囲気を醸し出し、気品と知性が横溢した人物だった。それが一変していた。目つきは鋭くなり、精悍な若者となって帰ってきた。これは、想像を絶する修羅場をくぐりぬけたきたであろうことは、誰の目にも明らかだった。

彼の生還は、奇跡的な偶然はもちろん、それだけでなく、多くの兵

士たちの命を犠牲なしにはあり得なかった。ノマサは、自分の命を守るために、兵士たちが命を投げ出す様を、嫌という程見てきたのだ。

そこには、長く彼に仕えてきた者たちも多くいた。彼はそうした者たちの命が失っていく様を、単なる家来たちの義務であると割り切るだけの冷酷さを持ち合わせていなかった。

崩壊した壁から襲ってきた水は、いともたやすく彼の体を押し流し、その意識を奪った。次に彼が意識を取り戻したのは、兵士たちの体の上だった。何とそこは、溺れ死んだ兵士の死体が折り重なっており、ノマサは偶然そこに、投げ出されるような形で流れ着いていたのだった。

川は断崖絶壁の底にあり、生き残った兵士たちは、その絶壁を登らねばならなかった。軽症で体力のある者が先に絶壁を登り、そこからロープを垂らして兵士を引き上げていく。ノマサは幸運にも、その存在に気付いた兵士たちのお蔭で、体を引き上げてもらえた。

彼は残りの兵士たちを川から引き揚げようと懸命になって働いた。だが、その努力もむなしく、せっかく助かった兵士たちも、体力が尽きた者たちから、次々に川の中にその身を沈めていった。

結局、助かったのは五百名近くの者たちだった。ノマサはその者たちと共に故国に引き上げるべく、元来た道を引き返した。

しかし、彼らの苦難はさらに続いた。折に触れて魔物たちが襲ってきて、彼らの退却は遅々として進まなかった。ほとんど休息をとる間もなく襲ってくる魔物たちとの戦いは、彼らを疲労困憊させ、さらには、飢えとの戦いも、さらに彼らの体力を消耗させた。

そんな中でも兵士たちはノマサの命を守ることを最優先とした。ある者は魔物たちに突撃してその命を散らし、ある者は自らの体を剣で突いて血を流し、あらぬ方向に走り去ることでその襲撃を躱そうと試みた。そうした者の中には、ノマサの近習を務めた者たちが多くいた。彼は幼いころから常に傍に居た者が一人、また一人と姿を消す様子を、ただ黙って見ている他なかった。

結果的に、ノーノ王国に辿り着けた者は、半数以下にまでも減っていた。

彼らを迎え入れたノーノ王国は、手厚く保護したものの、グレイ・サハラが起こったと聞いて、大いに動揺し、混乱した。ノマサは一刻も早く反撃に打って出るべきであると主張したが、その言が受け入れられることはなかった。彼らはまるで、厄介払いをされる形で、ノーノ王国からエスルモ帝国に送られたのだった。

道中、ノマサはずっと考えていた。このまま帰国したところで、大敗を喫し、多くの兵士の命を失わせた無能な司令官の誹りを受けることになるのは間違いない。父や近臣の者がそうした評価を表に出さないよう計らうことはできるだろうが、それでもノマサは自分自身が許せなかった。どうしても、この汚名を雪がねばならない。それに、自分のために死んでいった者たちにも申し訳がない。何としても彼らの敵を討ちたい。彼はどうしたらそれができるのかを考え続けた。

そんなとき、後から引き揚げてきた者から、あの戦いには、アガルタから派遣された者が関わっていたことを知った。ノマサは部下に、そのことをさらに詳しく調べるように命じた。

このままでは収まらなかった。セーファンドはもちろん、あの戦いで何もしなかったノーノの連中も滅ぼしたい。そして、アガルタがあの戦いに関わっているのであれば、アガルタにも何らかの制裁を加えねば、気がおさまらない……。

ノマサの心の中は、そんな感情に支配され続けていた……。

第七百四十四話　その男、危険につき（後書き）

一週間お時間をいただきました『結界師への転生』コミカライズ３２話、公開中です。
リコ様とメイちゃんの表情がかわいい……。是非、チェック下さい！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６

第七百四十五話　一体どこを？

ノマサが帰還して一週間後、ノーノ王国から使いがやって来た。使者に立ったのは、王弟であるカボンだった。彼は取るものも取り敢えずといった雰囲気を醸し出しながら、ノマサの前に立った。

「殿下の無事のご帰還……お祝い申し上げます」

カボンはそう言って腰を折った。誰も、何も口を開かなかった。不気味な沈黙が謁見の間を支配していた。

「いや、宰相……王弟殿の直々のお越し、ご苦労様でございます」

やっと口を開いたのは、エスルモ王国の宰相であるオクマだった。王弟自ら来ているのだ。本来ならば国王自ら言葉をかけるのが通例だった。よしんば、王が口を開かなくても、その息子たる王太子・ノマサが、何らかの挨拶を返すのが礼儀だった。

宰相ツーレは、カボンの心中を察していた。ノーノ王国とて、先の戦いで多くの兵士を失っている。漏れ聞くところでは、カーザ城を攻めた五千の兵はほぼ、全滅したという。五千と言えば、ノーノとしては動員できる全兵力のおよそ半分だ。おそらく、カーザに派遣した兵士は、その中でも最精鋭の者を選りすぐっていたはずだ。今やノーノは、半分死んだような状態にあると言えた。

ただ、この国にはツキがある。グレイ・サハラが発生したことは驚嘆するべき事実だが、そのお陰で、ノーノはセーファンド帝国から侵攻される可能性がなくなった。さすがに、グレイ・サハラが発生

した場所を通ってノーノに侵攻する勇気は、いかにセーファンドとはいえ、ないだろうと考えていた。

グレイ・サハラが発生場所は、何年にもわたってドラゴンたちの巣窟になると言われている。事実、その昔に発生した場所では今でも、多くのドラゴンが住み、住処に近づいた者たちを手当たり次第に襲い掛かっている。おそらくは、カーザ城付近もそうした状況になることが容易に想像できた。そんな場所に兵を進めるとなると、ノーノに辿り着く前に、大半の兵士が食いつくされてしまうだろう。そんなリスクを負ってまで侵攻する価値は、ノーノにあるとは思えなかった。

ツーレの目の前に控えている王弟・カボンには、近日中に王女・キルムが嫁ぐことになっている。言わば、両国は婚姻関係となる。この婚約がなければ、エルスモはもしかしたら、ノーノに侵攻していた可能性があった。宰相・オクマはそれには反対の立場だが、軍の関係者は声高にそれを主張していただろう。皇帝とノマサ殿下がそれを承認すれば、いかに宰相が反対を唱えても、エルスモは軍事行動を起こすことになる。だが、さすがに、すでに婚約が成立している国に対して手の平を返すというのは外聞が悪いし、とりわけ、軍事同盟を結んでいる隣国のカルートレン帝国がよい顔をしないことは、誰もが知っていることだった。

カルートレン帝国……。ちょうど、エスルモ帝国の東隣に位置する国であり、その国土はエスルモの五倍を有する。ただ、この国は山国であり、金や鉱石などは豊富に取れるが、小麦などの食料の収穫高はそれほど高くなかった。そのため、小麦が豊富に取れるエルスモは、折に触れてカルートレン帝国を支援し続けてきた。そうした信頼関係は数百年に及び、この両国は、互いの欠点を補い合う無二の友好国として良好な関係を築いてきた。

ただ、軍事力だけで言うと、エスルモはカルートレンの足元にも及ばない。この帝国が本気でエルスモに侵攻すれば、一週間も持ちこたえることができないと分析されていた。

とはいえ、それをすると、カルートレンはたちまち飢えることになる。侵攻の可能性は極めて低かったが、その軍事力を盾にエスルモの内政に干渉してくることがままあり、エスルモにとってはこの帝国は目の上のたん瘤の存在と言えた。

現皇帝であるトーゴは、まだ若年ながら穏やかで知的な人物だった。敬虔なクリミアーナ教の信者であったが一方で、それは時として狂信的とも言える側面を見せることがあった。

先年、教都・アフロディーテで反乱が起こった際、彼はその反乱に同調する者たち全員を粛清した。それのみならず、周辺国からカルートレンを通過してアフロディーテに向かい、反乱に加担しようとしたものを片っ端から捕まえ、殺害するということさえやってのけた。これはあまり表には出ていない情報ではあるが、ヴィエイユが反乱を鎮圧し、教皇の返り咲くことができたのは、こうした彼の助力も間接的に影響していたのだった。

皇帝トーゴは何より、信義を重んじる人物だった。その信義に反する行為にはあからさまに不満の声を上げる人物だった。もし、ここでエルスモがノーノに侵攻するとなれば、カルートレン帝国から圧力がかかるのは目に見えていた。

宰相オクマは、皇帝とその隣に控えているノマサに視線を向け、言葉をかけるように促す。そのとき、ノマサの眼がカッと開かれた。

「ノーノ王国には、責任を取ってもらわねばならない！」

彼の父である皇帝・カーキは、目を丸くして驚いている。

「……王子、何も今ここで、そのようなことを申さずとも」

父の言葉に、ノマサはチラリと視線を向けたが、すぐに目の前に控えるカボンに向き直る。

「父上は……皇帝陛下はあのように言っておいでだが、私は違う。私は、ノーノ王国を滅ぼしたいと考えている」

「お……お待ち、下さい」

カボンは必死の形相で言葉を絞り出す。そんな彼を睨みつけながら、ノマサはさらに言葉を続ける。

「ノーノは我々エルスモの者を多く死なせた。せっかく生き残った者たちを、治療もせずに死なせた。その口惜しさは、筆舌に尽くしがたい」

「お待ちください。その件につきましては、深く、深く、お詫び申し上げます。それは、我らの医師の数に対して、負傷者の数が多すぎたためでございます」

ノーノを滅ぼす……。まさかの言葉に、宰相オクマ以下、主だった者は、固唾を飲んでノマサの言葉を待った。彼は相変わらず、カボンを睨みつけている。

「……とはいえ、貴殿は、我が妹婿。ここで、ノーノを滅ぼせば、

妹も悲しむだろうな」

「は……ははっ……」

カボンは、その話は断ったはずだと言いたかったが、それはできないことだった。

「私とて、妹を悲しませたくはない。だが、ノーノを許したわけではない。今後、貴国には、それなりの責任を取ってもらう。さしあたっては……。我らが出陣する際は、必ず、全兵力をもって参陣してもらう。いいな？」

「ぜ……全兵力、と……」

「当然だ。ノーノは今、セーファンドから侵攻される可能性はなくなったのだ。全兵力を動員しても、問題ないだろう。違うか？」

「う……ははっ」

カボンはそう言って恭しく頭を下げた。宰相オクマは、ノマサの手腕を見事だと思ったが、一方で、こんなことを心の中で呟いていた。

……これでノーノは我が国に従属したも同然となった。しかし、殿下は一体どこを攻めるおつもりなのだろうか。この周辺国には、戦いの火種となるようなものは見当たらない。とすれば、どこかの国に遠征なさるのか？　そうなれば、隣国のカルートレン帝国に伺いを立てねばなるまいな。

「宰相」

突然、ノマサが口を開いた。ツーレは予想外のことであったため動揺したが、それを表に出さないように、ゆっくりと彼に向き直った。

「はっ」

「カルートレン帝国に使いを出せ」

「ははっ」

……やはりな。とオクマは心の中で呟く。一体どこを攻めると言い出すつもりだろうか。事と次第によっては、諫言申し上げねばならない。

そのとき、ノマサが再び口を開いた。

「併せて、セーファンド帝国にも使者を使わせ」

「「はあっ？」」

宰相オクマとカボンが同時に顔を上げた……。

第七百四十六話　ヴァイラス公爵、再び

「で、殿下、セーファンド帝国に使者とは、一体何をなさるおつもりでしょうか」

宰相ツーレは思わず声を上げた。ノマサは彼に鋭い視線を投げかけながら、まるで諭すように口を開いた。

「セーファンドに我が国と軍事同盟を結ぶよう要請するのだ」

「「軍事同盟ぃ！？」」

再び宰相ツーレとカボンが同時に声を上げた。それはそうだ。相手はついこの間まで戦っていた敵だ。ノマサの命が危機に瀕したのも、セーファンドのためだ。それに、王弟カボンのノーノ王国は昔から帝国と小競り合いを続けている。そんなエルスモにとっても、ノーノにとっても仇敵ともいうべき国と軍事同盟を結ぶとは、正気の沙汰とは思えなかった。

「説明は後だ。まずは使者を立てよ」

「しっ、しかし、殿下……」

「そのご懸念はごもっとも」

突然、男の声が聞こえた。ツーレとカボンは驚いた表情を浮かべながら、声をした方向に視線を向ける。そこには、藍色のボレロに身を包んだ、いかにも身分の高そうな男が立っていた。彼はよく整え

られた口ひげを撫でながら、ゆっくりと近づいてきた。宰相ノーノはこの男を知っていた。

「あ……あなたは……」

「フフフ。お久しぶりですな、宰相殿。今のノマサ殿下のご命令に驚かれるのも無理はない。その理由を私からお話し申しましょう」

男の言葉に、ツーレとカボンは顔を見合わせた……。

◆　◆　◆

それからひと月後、アガルタには冬の寒さが訪れようとしていた。もうすぐしばらくすると雪が降るだろう。都では皆、冬の準備を整えようとしていた。

リノスが住む帝都の屋敷でも、それは同じように行われていた。基本的に屋敷では張られた結界によって、温度は一定に保たれている。だが彼は、春夏秋冬の移り変わりを愛し、季節感を愉しむべく、夏は夏らしく、冬は冬らしく暮らすことを好んだ。そのためこうした時期になると彼は、休みのたびに庭に出て薪割りをすることにしていた。そして、冬が厳しくなるとそれらを暖炉に放り込んで火を起こし、そこでパンなどを焼いて食べることを好んだ。

この日も彼は庭に出て薪割りに精を出していた。子供たちは割られた薪を集めて小屋に持っていく。彼らも、冬の暖炉が大好きであり、アリリアなどはもう、今からでも火を起こそうと、リノスたちにおねだりをする有様だった。

そんな中、帝都の屋敷に一人の男が訪れた。ヴァイラス公爵だ。

彼はここを訪れる際は、必ず一人でやって来た。本来ならば馬車で優雅にやって来ることもできるのだが、この帝都の屋敷の存在を他人に知られては不都合が起こると考える彼は、常に一人でやって来ていた。ヒーデータ帝国内では、リノスは基本的にアガルタに在住しているものとされ、この屋敷はヒーデータにおけるリノスの別邸とされていた。

表向きはリノスの後見人である彼は、折に触れて、屋敷の管理という名目でここを訪れた。当然それは、兄である皇帝の意向を受けての訪問であったが、帝国内の貴族たちは、数限りない浮名を流したこの公爵は、妻に隠れて逢瀬を愉しむためにこの屋敷に訪れているのだと解釈して疑わなかった。そのため帝国内で、この屋敷にリノス一家が住んでいることを知っているのはごく一部の者に留まっていたのだった。

ヴァイラスは子供たちににこやかに挨拶すると、真っすぐにリノスの許にやって来た。彼は軽く会釈をすると、スッと近づいてきて、小さな声で、折り入ってお頼みしたいことがあるのですと言って、じっとリノスの目を見た。こうしたことはままあることであり、その大半はロクでもないことだった。リノスは、またか、という表情を浮かべながら、ヴァイラスを屋敷の中に招いた。

彼が来たとわかると、リコがいそいそとダイニングに入ってきた。ヴァイラスは、やあ、姉上と笑みを浮かべながら用意された椅子に座った。

ヴァイラスは、皇帝の密命を帯びていたとしても、必ずダイニングの椅子に座って、そのことをリノスとリコに伝えた。一応、屋敷には応接室があるのだが、彼は頑なにその部屋を使わず、いつもリノ

ス家の家族の眼に触れるこのダイニングで、皇帝からの要請を告げた。これは、リノスとリコとで密室に入ることによって、彼の家族に余計な不安を与えない配慮であるのか、姉であり、天敵でもあるリコと少人数で過ごすことを嫌ったのか、詳しいことは今もってわからない。

リノスとリコが席についたのを見たヴァイラスは、少し声を落として、ゆっくりと口を開いた。

「義兄上、姉上、お忙しい中恐縮ですが、明日、宮城にお越しいただきたいのです」

リノスは怪訝な表情を浮かべる。宮城に呼び出されるのはよくあることだが、大抵はリノス一人であり、リコを伴って、というのは珍しいことと言えた。

「リコも一緒に、ですか。それは……ああ、わかった」

リノスは腕組みをしながら頷く。

「エリルのことでしょう？　いや、まだ結婚は早すぎますよ。それに、ええと、何でしたっけ。ヒーデータの貴族が通う学校……そう、イザエモン。イザエモンにもそのうち行かせたいとは思いますが、今すぐ、というわけには……」

「いいえ、義兄上。そのことではありません」

「ほう、というと？」

「有体に申し上げれば、援軍のお願いをする可能性があるのです」

「援軍？　またですか？　今度はどちらに？」

「ヴァイラス」

半ば呆れ顔のリノスに変わって、リコが口を開く。ヴァイラスはスッと居住まいを正した。

「確かにアガルタとヒーデータは固い絆で結ばれていますわ。しかし、ここ最近援軍要請が多すぎるのではなくて？　この間も、セーファンド帝国にリノスが赴いたばかりではありませんか……」

「その通りです。その通りです姉上。しかし、今回は少々事情が違うのです」

「事情が違う？　どういうことなのです？」

「その……二日後、レアルが宮城にやって来るのです」

「……レアル」

リコの表情が一瞬にして強張った。リノスは話の内容が呑み込めないのか、目を白黒させている。

「ああ、義兄上には馴染がない話ですよね。レアルというのは、私の妹になります」

「妹？」

「はい。年齢は私と同じなのですが、私の方が先に生まれましたの

で、兄とされているだけなのですけれどね」

「年齢が同じ……ということは……」

「はい。レアルの母は、先帝の皇后……つまり、姉上の母上に当たられる方です」

「ああ、なるほど」

「そのレアルが明日、嫁ぎ先から内密に宮城にやって来るのです」

「ヴァイラス。もしかして援軍要請というのは……」

「お察しの通り、レアルの嫁ぎ先であるミトス王国が攻撃されているのです」

「ミトス王国が？　あの大国が攻められるなど……。一体どこの国が……？」

「はい。何でも、セーファンド、ノーノ、エルスモ、そして、カルートレン帝国が共同戦線を張って、ミトス王国を攻めているようです」

「セーファンド、ノーノ、エルスモは、ついこの間まで争っていた国々ではありませんか！　その国が連携してミトスを攻めるなど、考えられませんわ！」

「落ち着いてください、姉上。私も俄かには信じがたいことなのですが、兄上……陛下に送られたレアルからの手紙には、確かにそう書いてあるのです。そして、そこには、陛下と姉上、そして私に助

けを乞いたい、と書かれているのです」

ヴァイラスはそう言って懐から一通の書簡を取り出した。リコはそれを手に取るとじっと視線を向けたまま微動だにしなかった。それは、何度も何度もその書簡を読んでいるように見えた……。

第七百四十七話　王妃レアル

ヴァイラスが帝都の屋敷を訪れてからちょうど二日後、レアルはヒーデータ帝国の宮城にやって来た。あらかじめ謁見の間の隣の部屋に控えていたリノスとリコは、彼女が到着したという知らせを受けて、ゆっくりと立ち上がった。

レアルからの手紙では、ミトス王国は北、東、南の三方から攻められており、今は必死になって国境付近で防衛しているが、その防衛線を突破されるのは時間の問題であること。そうなれば、王都であり、居城でもあるプースはたちまち包囲されることになること、そして、現在の状況では、ひと月もすれば王都は敵に蹂躙されてしまうことが書かれてあった。リコの読んだ手紙のあて名はヒーデータ帝国皇帝であり、帝国からの最大級の援軍をお願いしたい、併せて、姉の嫁ぎ先であるアガルタにも同様の書簡を送っているため、できれば、両国で早急な支援をお願いしたいと書かれてあった。

リコは何度考えても腑に落ちなかった。セーファンド帝国とノーノ王国は長年の仇敵であり、その両国と、戦いを支援したエルスモも先の戦いで甚大な被害を受けている。唯一無傷であるのはカルートレン帝国だが、この国とミトス王国は長い間婚姻を重ねてきた歴史がある。この状況で突然カルートレンが動く理由がわからなかった。

確かに、この三国が連携するとなると、ミトス王国は大いに脅威だ。実際、手紙にもあった通り、すでに国境線は崩壊の危機に瀕している。だが、これまで何の問題もなく歴史を重ねてきた国々が突然、手のひらを返したように戦争に動いたその理由が、リコにはどうしてもわからなかった。

彼女の隣では、夫のリノスが心配そうな表情を浮かべている。彼は、ヴァイラスとの話が終わるとすぐに、フェアリードラゴンのサダキチを呼び出し、現状確認を行った。どうやら、レアルの言っている通り、ミトス王国の国境はどこも軍勢に囲まれていた。未だ大規模な戦闘は起っていないものの、総攻撃をかけられれば、陥落することは容易に想像できる有様だった。

ミトス王国にとって、今回の出来事はまさしく、青天の霹靂だったのだろう。援軍要請に、王妃たるレアル自らやって来るという事実が、その切迫感を如実に表していた。

謁見の間に入ろうとしたそのとき、兄であるヒートが姿を見せた。彼はリコたちに視線を向けると、ゆっくりと頷いた。そして、その後ろからは、弟であるヴァイラスが、養父であるグレモント宰相を伴ってやって来た。

ヒートは皆を促して謁見の間に入る。そこには、一段高くなった場所に椅子が三脚並べられており、そのすぐ前に、椅子が二脚並べられていた。

まず、皇帝であるヒートが上段の真ん中に座った。それを見たヴァイラスがヒートの左側に座ろうとした。その彼をリコが呼び止め、皇帝の上座に座るように促したが、彼は手を振って断った。

「上座には姉上が座るべきです。私は王族とはいえ、公爵ですから。本来はこの上段に座れる身分ではないのです。それに姉上は、表向きは義兄上の名代でもあります。上座にいていただかなくては、つり合いが悪いのです」

その言葉にヒートはカラカラと笑い声を上げ、二人とも早く座るようにと促した。

三人が着席したのを見て、宰相グレモントが、リコレットのすぐ前に置かれた椅子に座る。そして、その隣に用意された椅子にリノスが座った。

「……何だか、おさまりが悪いですね」

ヴァイラスが誰に言うともなく呟く。その彼を、ヒートがチラリと見て、小さな声で呟いた。

「仕方がなかろう。義弟殿は今、姿を隠しておるのだ。ここに一つだけ空席があるほうがおさまりが悪かろう。そなたとて、この王族の席に座れるのは、むしろ嬉しいことではないのか？」

そう言って皇帝はフフフと笑う。ヴァイラスは苦笑いを浮かべた。

ヒートたちとの事前の打ち合わせで、リノスは姿を消してこの場に参加することになっていた。ヒーデータからアガルタの都まで、どんなに急いでも二日はかかる計算だ。レアルからの手紙が届いたのが一昨日であったことを考えると、この場にリノスがいることは不自然と言えた。そのために、彼は姿を消してミトス王国の要請を聞くことになったのだった。

◆　◆　◆

「ミトス王国王妃、ミトス・ロークル・レアル様、お越しになりました！」

部屋の外から警備の兵士の声が聞こえた。皆、スッと居住まいを正す。それと同時に、謁見の間の扉が開かれた。

「……」

俺は思わず絶句してしまった。兵士に先導されてきた女性は、リコにあまりにもよく似ていたからだ。リコよりも少し小柄だが、その体躯からは気品が横溢している。目に深い知性を讃えている。この人はかなり賢いな、それが、俺が彼女に抱いた第一印象だった。

「兄上様……いえ、皇帝陛下、ヴァイラス兄様……グレモント宰相……そして、姉様……お懐かしゅうございます」

彼女はそう言って深々と頭を下げた。銀色のドレスと、頭にいただいた小さめのティアラが、体を動かすたびにキラキラと美しい光を放っている。その美しさはもとより、洗練された動きは、さすがに大国の王妃であると言えた。

「兄上でよい、レアル。……誠に久しいの。十五年ぶり、くらいか」

「左様でございます。この宮城で暮らしていた頃が、懐かしいですわ」

「うむ。それにしても変わらぬな。よく戻ってきた」

「まあ、兄上。お上手になられましたわね」

レアルは大儀そうに驚いた表情を見せる。彼女はすぐに隣に控えているヴァイラスに視線を向け、ニコリと微笑んだ。

「兄さまも、お変わりなく。ますます美しさに磨きがかかられましたわね」

両手を胸の前で組んで、目を細める姿は実にかわいらしかった。それは、ヴァイラス公爵も感じているようで、彼は大テレにテレてみせた。

「よしてくれレアル。もう私もずいぶん年を取ったのだよ」

「いいえ、兄さまは昔のままでございましたわ。私の大好きな兄さまが変わらずにいてくださって、本当に嬉しゅうございますわ」

陛下とヴァイラス公爵は顔を見合わせながら笑みを交わしている。その間彼女は、グレモント宰相に声をかけ、あなたも変わりませんね、お体はどうですか、などと話しかけている。

宰相との会話が一通り終わると、レアルはフッと息を吐き、リコに向き直った。

「姉様、お久しぶりでございます。まさかここに、姉様がおいでになるとは……正直申しまして、驚いております」

「ああ、リコレットは余が呼んだのだ。知っての通り、余の息子アローズと、リコレットの娘であるエリル殿は婚約しておる。二人の行く末について、たまにリコレットに宮城に来てもらって、相談しておるのだ」

レアルは陛下の言葉に大きく頷いていたが、やがて、フッと息を漏らすと、寂しそうな表情を浮かべながら口を開いた。

「姉様はよろしいですわね。気軽に宮城に帰って来られて……。私など、帰りたいと思っても、そう簡単に帰ることなどできませんわ。本当に、姉様はうらやましいですわ……」

彼女の言葉にリコは反論せず、優し気な笑みを浮かべている。

「……こちらは？」

突然、レアルが俺の方向を向いて口を開いた。目がバッチリ合ってしまっている。俺は思わず声を上げそうになった。

「ああ、いや、気にするな。帝国軍の元帥を呼ぼうと思ったのだが、余が差し止めたのだ」

陛下がすかさず助け舟を出してくれる。レアルは俺に視線を向けたまま、納得いかない表情を浮かべている。

「そなたの手紙を読んで、ここは気心知れた身内だけで話を聞いた方がよいと思ったのだ」

陛下の言葉に、レアルは再び元の表情に戻り、深々と頭を下げた。

「兄上のお心づかい、感謝申し上げます」

……何だろうな、この女性。何か、引っかかるな。

第七百四十八話　兄弟姉妹会議

俺の心配をよそに、レアルとの会話はどんどん進んでいく。

結論を言うと、現在、ミトス王国は周辺四か国から包囲されていて、その数は約十万に上るのだと言う。対して、ミトス側は兵力の最大動員をかけても、約四万なのだそうで、これでは衆寡敵せず、戦いにならないのだと言う。

俺はレアルの話を聞きながら、やり方によっては、何とかならない数ではないと考えていた。何より、ミトスには地の利がある。他国に攻め入っているわけではないのだ。自国内で戦うということは、敵を迎撃するのに打ってつけのポイントがあるはずだ。そこに敵を誘い込めば、寡兵でも何とかなることがある。しかも相手は十万という数ではあるけれど、軍勢自体は分散している。ミトスも、各方面に軍勢を分散させるよりも、防衛できる最低限の兵を国境に配置し、自分の傍に最精鋭の部隊を置いておく。そうしておいて、各軍勢を領国内におびき寄せて各個撃破すれば、相手は放っておいても瓦解する……と、そこまで考えて、俺は思わず苦笑する。別に、俺が防衛隊の指揮官を務めるわけではないのだ。

俺は別に、優秀な指揮官がいれば、何とかなるんじゃないかと思うが、陛下たちはそうは考えていないらしい。すぐさま援軍を送らねばならぬと相談を始めていた。

ヒーデータ帝国が最大級に動員できる兵士が十万。アガルタの最大動員兵数が二万。両国がこれだけの兵力を出せば、よほどのことをやらない限り、ミトス王国は救われるだろう。だが、陛下は、援軍

の数を二万と言ってのけた。

「すまぬの。これは、レアルだから言うのだが、我が帝国軍十万の中で、真に戦いの役に立つのは、二万の将兵なのだよ」

「……承知しております、兄上。古来より帝国は二万の傭兵が主に戦闘を担当し、残りの八万は志願兵と徴兵された兵士たちが占めておいででしたわね。しかし、その最精鋭の部隊を我が国に向けていただける……。兄上、心から、心から感謝申し上げますわ」

そう言ってレアルは、胸に手を当てながら一礼する。何となく、だが、この女性の思ったような回答は得られていないように思えた。やはり、全兵力をもって援軍に来てほしかったのだろうか。しかし、俺は陛下の決断は正しいと思う。十万もの兵士を動員するには、どうしても時間がかかる。自国を防衛するのであればまだしも、船団を仕立てて、しかもあの荒れた海を渡らねばならない。準備に時間もかかれば、兵糧を用意するのもかなり大変だ。そう考えれば、すぐに動ける精鋭部隊二万を差し向けるという陛下の決断は、実に当を得たものと言える。

「援軍の総司令官は、ヴァイラス、そなたに任せる」

「わっ、私がでしょうか？」

「不服か？」

「いえ……」

ヴァイラス殿下としては、そんな危険なところには行きたくないだろう。とはいえ、王族が行かねば表向きの示しがつかない。王族の

辛いところだ……。

「いいえ！　兄さまがお見えになる必要はございません！　帝国軍には指揮能力に長けたお方がおいでございましょう。そのお方に任せればよいのです」

レアルが心底心配しているといった表情で口を開く。そんな彼女を、陛下が優しく諭す。

「むろん、帝国軍を実際に指揮するのは、元帥の称号を持つ百戦錬磨の者だ」

「いいえ。今回の戦いは、兄上の予想を超えた激戦となると存じます。そんなところに兄上がおいでになれば、最悪、命を失う可能性もございます。ですから、何卒兄上のご出陣だけは……」

「フッフッフ。レアルは相変わらずヴァイラスが好きなのじゃな。そういえば子供の頃、そなたは、ヴァイラスのお嫁さんになると言っておったが、その頃から変わっておらぬの。今でも、ヴァイラスのことは好きであるようだ。の、ヴァイラス」

「はっ……はあ……」

ヴァイラス公爵は何とも言えぬ表情を浮かべる。まあ、カワイイ妹に懐かれて、嬉しはずかしと言ったところか。対してレアルは、陛下から視線を外していて、さも、図星を突かれたと言わんばかりの態度を取っている。

「ともあれ、我が帝国は、兵二万をもってミトス王国を救援する。その総司令官には、我が弟にして公爵たる、ヴァイラスを任ずる。

そなたは、帝国の国威を失墜せしめぬよう、励むのだ」

「し……承知致しました」

ヴァイラス公爵はオドオドしながら頭を下げた。そのとき、レアルがさらに声を上げた。

「兄さまの総司令官拝命は致し方ございません。しかし、であるならば、アガルタからは是非、アガルタ王様自らご出陣を願わしゅう存じます」

レアルの視線はリコに向けられている。彼女は無言のまま、じっと妹を見つめている。

「これレアル、無理を言うでない。リコレットはアガルタの皇后ではあるが、軍事的な権限は持っておらん。アガルタの最高司令官は、義弟殿の妃の一人であるマトカル殿だ」

「それはよく存じております。しかしながら、アガルタ王様は、姉様のお言葉を非常に重く受け止められると聞いております。私は、アガルタの実権を握っておいでなのは、姉様と考えております」

「いいえ」

不意にリコが口を開いた。レアルは少し驚いた表情を浮かべながら、リコの言葉を待っている。

「それは違いますわ、レアル」

「どう、違うのでしょう」

「私は夫から助言を求められれば、あらゆる知識、能力を駆使して助言しますが、夫がそれを求めていない限り、私から何かを言うことはありませんわ。従って、アガルタがどれほどの援軍を用意するのか、そもそも、援軍を出すのか出さないのかを決めるのは、夫リノスですわ。リノスが否と言えば否ですし、よしといえばよしになりますわ」

「ですから、姉様が……」

「追っ付け、あなたが出した手紙はアガルタに到着する頃ですわ。それを見て、王たるリノスが判断を下すことでしょう。私はその決定に従うのみですわ。むろん、本日のここでのお話しは夫に伝えます。ですから、アガルタからの返答は、少し先になりますわ」

「……姉様、一体どうなされたのです？」

「どう、とは？」

「何だか姉様は変わられました。以前のような姉様とは、別人のようですわ」

「そうでしょうか。私は全く変わったつもりはありませんけれど……。ただ、結婚して子供を授かり、色々なことを経験すると、自ずとその人間性も変わるのかもしれませんわね」

その言葉を聞いて、レアルはシャンと背筋を伸ばし、スッと腰を折った。

「援軍の件、姉様より、何卒、アガルタ王様にご進言願います」

その言葉にリコはゆっくりと頷いた。

◆　◆　◆

正直、リコは妹であるレアルの真意を測りかねていた。恐らく彼女の目的は援軍を得ることだろう。ただ、レアルの望みはそれだけではないのではないかと、直感的に感じたのだ。

子供の頃から妹は如才がなかった。思ったことを堂々と口にし、父であろうとおかしいと思ったことははっきりと口に出し、あからさまに嫌がられる部分があった自分とは違って、妹は決して人を不快にさせない賢さがあった。

そのため、亡き父も兄も、ヴァイラスも、レアルのことは可愛がっていた。彼女の周囲はいつも人がいて、実に華やかであり、まさに大国の姫と言って差し支えない様子だった。

そのためだろうか、生前父が、リコレットの縁組をミトス王国に持ちかけたとき、ミトスは縁組には承知したものの、その相手にはレアルを指名してきた。周囲の者は驚いたが、元々嫁いだところで、その家で冷遇されるのは目に見えていたため、当時のリコレットには結婚願望が皆無だった。そのため、この返答にも彼女はほとんどダメージを受けなかったが、妹のレアルは嬉々として輿入れしていったのだ。それは幼いころから、姉である自分に勝とうと激しいライバル心を燃やしていたことを、リコは知っていた。その姉よりも先に嫁ぐ……つまりは、一度は姉に勝利したレアルが今、窮地に立たされて、姉である自分に援軍を乞いに来ている。その心底は穏やかならざるものであることは、リコには手にとるようにわかっていた。果たして妹は、この戦いに勝利した暁に、何をもって姉である

自分に勝利したことを示そうとするのか……。

リコはその点について不安を覚えていた……。

第七百四十九話　戦闘方針

レアルは、援軍の件について、何卒よろしくお願いいたしますと再度念押しをして、その場を後にした。本来ならばアガルタ王様にお目にかかって、直接お願い申し上げねばならないが、国家存亡の危機に瀕しているため、すぐに帰国しなければならない。無礼をお許しくださいと伝えるよう言い残していった。

その話を聞いたとき、俺はこの女性は本当にアガルタからの援軍を求めているのだろうかと疑問を抱いた。本当に援軍が欲しいのであれば、俺だったら直接相手に話しかけて、誠心誠意お願いをするだろう。それをすることなく、単に陛下に伝言を頼んで帰ってしまう……。国家存亡の危機である状態で、一国でも早く帰国したい感情はわからなくはないが、どうも腑に落ちない。

レアルが退室したのを見て、結界を解除する。すぐにヴァイラス公爵が立ち上がって、俺にここに座る様に促してくるが、そこだと話がしづらいので、ここでいいと言って彼を座らせる。

「どうじゃな、義弟殿」

陛下がいつものように飄々とした表情で話しかけてくる。俺は腕組みをしながら考える。

「まあ、ヒーデータ軍が二万の兵を出すのであれば、アガルタもそれに近い軍勢を出さねばならないでしょう」

「うむ、そうか。すまぬの」

陛下はフッと息を吐くと、遠い目をしながら言葉を続けた。

「妹は……レアルは、多くの兄弟の中で、最も余に懐いてくれた妹だった。その妹が、兄上助けてくれと言ってきた……。余は、何としても妹を助けてやりたいのだ」

その言葉に俺は、無言のまま頭を下げた。

「そなたは、妹が直接頼みに来なかったことに、違和感を持っておることだろう。あれは如才のない妹でな。ヒーデータとアガルタの関係を熟知しておるのよ」

「関係……ですか」

「実際は、アガルタは独立した国家であるが、表向きは、ヒーデータ帝国の従属国家ということになっておる。妹は、余に頼んでおけば、余からリノス殿に援軍要請をすれば、アガルタは拒否できぬと考えておるのだ」

「……なるほど。確かにそうですね。俺は陛下に命じられてアガルタの国王をやっていますから」

「まあ、そう言うな。ただ……妹としては、アガルタには頭を下げたくないのじゃろうな」

「それは、俺が平民で奴隷上がりの……」

「いや、そうではない。おそらく、リコレットに頭を下げたくないのじゃろう」

「リコに？」

陛下はチラリとリコに視線を向ける。リコは陛下に視線を向けず、無表情のままだ。

「妹は、この城にいるときは、姉であるリコレットに勝とうと必死であった。だが、あれはリコレット程の才覚をもっていなかった。リコレットは一度教えたことは決して忘れぬ頭の良さがあったが、妹はそうではなかった……。それでも妹はリコレットに追いつき、追い越そうと必死であったな。一方のリコレットは、そんな妹を歯牙にもかけていなかった……」

「そんなことはありませんわ、兄上。私は……」

「妹の陰となり日向となり、力を貸そうとしていたと言いたいのであろう？　その姿勢が、さらにレアルの心に火をつけていたのじゃろうな」

「……」

「別に、リコレットが悪いと言っているわけではない。それは、明晰な頭脳を持って生まれた者の宿命というものじゃ。それは、落ち込むのではなく、誇るべきことじゃ」

陛下はそこまで言うと大きく息を吐き、誰に言うともなく呟いた。

「レアルは、負けを認める、ということを覚えると、さらに生きやすくなるのだがな。余計なプライドは、持たぬに限る……」

俺は、無言のまま頭を下げた。

◆　◆　◆

早速アガルタの都に帰った俺は、主だったものを集めて、ミトス王国に援軍を出すことを告げた。ちょうど、俺が帰ったすぐ後に、レアルからの書簡が到着した。

内容は、陛下に送られたものとそう変わりはなかった。ただ、アガルタ王様率いるアガルタ軍の到着を、心待ちにしているという一文が添えられていた。

「どうやら、俺自ら出陣しなきゃならないようだ」

「それはそうでしょう。我々では、アガルタ軍を手足のごとく操ることはできません」

俺の言葉に、クノゲンが反応する。皆が苦笑いともつかぬ、何とも言えない表情を浮かべる。

「問題は、ミトス王国の地理も、敵の状況もわからないということだ。イリモの翼で飛んで見に行ってもいいが……。ミトスの地図はあるかな？」

俺の質問に皆首を振る。

「持っているとすれば、ヴィエイユ様でしょう」

「あー」

クノゲンの言葉に、思わずのけぞる。確かに、あの小娘ならば、そうした情報は豊富に持っているだろう。ただ、彼女に何かを頼むと、その代償が高くつきそうだ。そう言えば最近会っていないが、元気にしているのだろうか。

「今回の戦いに、ヴィエイユは関わってはいなさそうだ。あまり巻き込むのはよくないな」

「いいえ、そうとも言い切れません」

口を開いたのはルファナちゃんだ。彼女は周囲を見廻しながらさらに言葉を続ける。

「参戦している、カルートレン帝国の皇帝は、敬虔なクリミアーナ教徒です。彼はヴィエイユ殿に心酔しています。先の戦いで、ヴィエイユ殿に敵対しようとした者全員を粛清した程のお方です。確証はありませんが、ヴィエイユ殿が背後にいる可能性は残しておいた方がよいかと思います」

「うーん、その可能性は低いんじゃないかな。ヴィエイユなら、もっと自分の存在をアピールするような気がするんだ……」

「あの……」

おずおずと手を挙げているのは、セーファンド帝国から転職してきたホルムだ。彼は周囲を見廻しながら、遠慮がちに口を開く。

「大体、でよければ、ミトス王国の地図は描けますが……」

「ほう、さすがだな。どうしてまた？」

「セーファンドとミトスは長い間、友好国として関係を続けてきました。若い頃、両国で共同軍事演習が行われまして、参加したことがあったのです」

「ふぅ～ん。共同軍事演習を行うくらい交流のある国同士が、どうして突然戦争状態になるのかね。俺にはよくわからないな」

「そうですね、それは私にも、わかりかねます……」

「この戦いは、やり方によっては、早く終わるかもしれないな」

誰に言うともなく呟いたのは、シャリオだ。黒龍らしく、人化すると、浅黒い肌に黒い瞳、そして黒髪になる。オシャレなどは一切興味がないようで、髪型もおかっぱ頭だ。そんな彼女が、無表情のまま口を開いている。

「早く終わる、とはどういう意味だろうか。もう少し詳しく」

「この戦いに参加している兵士の大半は、おそらく素人だ」

「ほう、なぜそう言い切れる？」

「十万の軍勢の内訳を考えてみた。作物の獲れ高から算出してみると、カルートレン帝国が四万、セーファンドが三万、エルスモが二万、ノーノが一万だ。参戦している国……特にエルスモとノーノは先の戦いで大損害を受けている。そんな中でこれだけの軍勢を整えるとすれば、農民たちを動員せざるを得ないだろう。言ってみれば、この両国の軍勢はほとんど訓練されていない烏合の衆である可能性が高い。それに、セーファンドも先の戦いで大軍を動かしている。

そこにきて今回の大動員……正直、戦いたくはないという気持ちが強いのではないだろうか」

「なるほど、戦う意思があるのは、カルートレン帝国四万だけというわけか……。シャリオの話が本当ならば、敵軍が国境線をなかなか突破できていない理由がわかる気がするな」

俺は腕組みをして少し考える。

「ヒーデータ軍も、仕方なくの出陣だ。積極的に戦うかどうかは疑問だ。ただ、士気の低い軍勢を打ち破れば、ヤル気のない者たちは放っておいても自落する……か。今回の戦いは、その線を狙うのがいいかもしれないな」

俺の言葉に、全員が無言で頭を下げた。

第七百五十話　意外な書簡

鳥の鳴き声がかすかに聞こえてくる。ここ最近は、これが目覚ましの合図だ。ゆっくりベッドからその身を起こす。すでに冬が近いためか、部屋の空気が澄んでいて、少し肌寒い。そんなことを感じながら、枕元に置いてある水差しを手に取り、ゆっくりと水を飲む。

ベッドから降りると、真っすぐにバスルームに向かう。

「おはよう」

「おはようございます……教皇聖下」

侍女に声をかけると、大きく体を震わせながら挨拶を返してくる。ヴィエイユはそうした反応が大好きだった。

バスルームの扉を開ける。すでに中は温かい。目覚めるのを察知した先ほどの侍女が、部屋を暖めてくれたのだろう。恐らく自分が起きる時間を予測して、部屋の温度を管理しているのだろう。実に優秀だと心の中で呟く。

服を脱いで一糸まとわぬ裸になる。隣の部屋には、バスタブが設えられてあり、中には湯が湛えられている。しかも、それは適温に温められていた。しかも、その中には彼女が好む香水が混ぜられているために、扉を開けると、実に良い香りが鼻をくすぐる。

ヴィエイユはゆっくりとバスタブに入り、その身を沈める。全身が温もりに包まれる。

毎回思うことだが、この入浴方法を考えたアガルタ王は素晴らしいと思う。教皇神殿を改築するとき、無理をしてこれを作ってよかったと、ヴィエイユは心からそう思っていた。一番の問題は、このバスタブの水をどこに排出するかだったが、栓を抜くと、石で作られた樋を通って、すぐ下の部屋に排出される仕組みになっている。そこには、大きな水槽が作られていて、浴槽とバスルームの湯は、すべてそこに集められる。

水槽に水が溜まると、すぐさま信者たちがそれを瓶に詰めていく。その水は、クリミアーナ教徒の間で、飲んでよし、付けてよしの万病に効く薬として、日本円にして一本十万円の値段で売られていく。これは薬としてだけでなく、家においておけば邪気を払う効果もあるとされているため、教徒の間で飛ぶように売れていく。しかもそれは、教都アフロディーテだけでなく、世界中のクリミアーナ教徒や、ヴィエイユに心酔する者たちが求めていく。今やこれは、クリミアーナ教国にとって重要な資金源となっていた。

湯に浸かりながらヴィエイユは何も考えず、ボーッとしている。こんな姿を教徒らに晒すわけにはいかないが、万に一つも、この部屋に誰かが入って来ることはない。ここはヴィエイユが唯一、人目を気にしないで己をさらけ出せる場所であった。

バスタブの湯で顔を洗う。この湯も瓶に詰められて売られていく……。そんなことを考えたとき、ふと、彼女の脳裏にある考えが浮かんだ。

……もし私がこの中で用を足してしまったとしても、皆はこれを買い求めるのかしら？

我ながらくだらないことを考えたものだと自嘲する。それをしたところで、誰もわからないだろうが、教皇が生気を込めた水として、これまでの十倍の値段で売っても面白いかもしれない。そんなことを考えていると、思わず笑いが込み上げてくる。

……そんなことをしてバレたら、また反乱が起こってしまうわね。

心の中でそう呟いて、彼女はバスタブから出て、すぐ隣に設えてある小さな水桶に手を入れる。……冷たい。だが、彼女はそれで顔を浸すようにして洗顔を始めた。そして最後に、その水を全身から浴びた。

脱衣所に戻って、そこに置いてある鏡に自分の姿を映す。体中が上気して肌がピンク色になっている。タオルを取り、丁寧に水分を拭いてゆく。我ながら美しい体だと思う。たまに侍女を呼ぶときがあるが、彼女らはヴィエイユの体を見て、必ず顔を真っ赤にして目を伏せる。ヴィエイユはその瞬間が大好きだった。

……この脱衣所をガラス張りにすれば、皆、どんな顔をするかしら。

そこまで考えて、彼女はくだらぬことだと自分に言い聞かせて、バスローブを身に纏い、部屋を後にした。

自室に戻ると、すでに朝食が準備されていて、侍女が給仕のために控えていた。ヴィエイユは無言で席に着くと、さっさと朝食を摂り始めた。

焼き立てのパンにサラダ、メインには、卵料理のときもあれば、ステーキの場合もある。この日はハムエッグだった。

バスローブのひもは緩く閉められているため、ヴィエイユの胸元はほとんど見えてしまっている。辛うじて乳首までは見えていないが、美しい乳房の大半は露わになっている。さらに彼女は足を組みながら食事を摂っているため、真っ白な太ももが見えてしまっている。侍女たちはその体を見まいと心がけているが、どうしてもその視線は胸と腰に行ってしまう。

朝食の最後は決まって、搾りたてのオレンジジュースだ。彼女はそれをグイッと一気に飲み干す。それが着替えの合図となっていて、侍女が下着と教皇服を持ってくる。ヴィエイユは立ち上がると、無造作にバスローブを脱ぎ、一糸まとわぬ裸になった。侍女たちから声にならない声が漏れる。

そんな視線は全く関係ないとばかりに、彼女は教皇服を手に取って、素早く身に付ける。下着は侍女の手にあるままだ。それを察して、彼女は優しげな表情を浮かべながら口を開く。

「今日は午前中だけ業務を行います。昼からはここで寛ぎます」

彼女の言葉に、侍女たちは一様に頭を下げた。

自室を出て、執務室に向かう。皆、最敬礼で彼女を迎える。それに右手を挙げて応えながら、椅子に腰かける。机には、盆にのせられた書簡が積まれていて、彼女はそれを片っ端から目を通していく。大体が、ご機嫌伺いの書簡だ。

「ん？」

一つの書簡に目が止まる。差出人は、カルートレン帝国の皇帝、トーゴからのものだった。

彼は敬虔なクリミアーナ教徒にして、ヴィエイユに心酔している男の一人だった。彼女としても、彼には大きな信頼を置いていた。その男からの書簡はてっきり、何かの貢物か、ご機嫌伺いかのいずれかと考えたが、そこに書かれていたのは、戦争の報告だった。

今、カルートレン帝国は、エルスモ、ノーノ、セーファンドと共に、ミトス王国を攻めているという。そこには、おそらくヒーデータ帝国とアガルタから援軍が来るであろうことが書かれてあった。そして、文末には、この戦いにおいて、必ずアガルタ王の首を討って御覧に入れますと書かれてあった。

ヴィエイユは書簡から目を離すと、スッと天に視線を泳がせた。

一体、何が起こっているのかがわからなかった。このような展開は、ヴィエイユすら予想もしていないことだった。一体何があったのか……。

加えて、この戦いでアガルタ王の首を獲るという。その可能性は極めて低いとヴィエイユは考えていたが、万に一つ、ということもある。そうなった場合、我がクリミアーナ教国は、昔日の勢いを取り戻せるのではないか……そんな期待感が胸に湧き上がる。

いや、たとえアガルタ王がこの世から消えたとしても、あの王に仕える者たちは極めて優秀だ。すぐに国が瓦解するとは思えない。王が亡くなったとしても、今の体制は維持されるだろう。

あの王が消えた後、誰がアガルタを動かすのか……。王子はいるが、どれも幼い。誰かが後見することになるだろう。そんなことを考えたとき、ヴィエイユの脳裏に一人の女性の顔が浮かび上がった。そ

れは、リコレットだった。

きっと彼女が王の後を継いで、政治を動かすだろう。なかなか厄介な相手だが、彼女は精神的に脆い部分がある。もし、彼女が精神的に参って、おかしなことをやりだしたら……。クリミアーナの復活は、意外と早いかもしれない。

……いけない、いけない。

ヴィエイユはそう言って自重する。そんな可能性は極めて少ないだろう。そんなことに時間を費やすのは、それこそ時間の無駄というものだ。彼女は持っていた書簡を脇に置くと、また、新しい書簡に手を伸ばした。

早く書簡を読み終えて、部屋に戻りたい……。下着を身に付けていないので、何だか寒く感じる。やはりこの時期は、下着は付けた方がいいと心の中で呟きながら、彼女は書簡に目を通すのだった。

第七百五十一話　効率的な救援

ホルムは会議の次の日に、ミトス王国の地図を持ってきた。

「……なるほど。海と山に囲まれた国、か」

南側に海を擁し、北側には高い山がそびえている。その上、東側にも高い山を備えていて、なかなか守りが固そうな国、というのが俺の第一印象だった。

ホルムの説明では、ミトス王国はこうした地の利を得ると同時に、肥沃な土地も持っていた。食糧の自給率は高く、加えて、海からは多くの海産物が獲れる。言ってみれば、かなり豊かな国なのだそうだ。それだけではない、高い山々からは多くの鉱物が獲れ、特に、この国は世界有数の金の産地だった。

「セーファンド、ノーノ、エルスモ、カルートレン……それぞれの配置は？」

俺の質問に、ホルムは困った表情を浮かべる。それはそうだ。さすがにそこまではわからないだろう。だが彼は、あくまで私の予想ですが、と前置きをして、敵軍の配置を説明し始めた。

「セーファンド、ノーノ、エルスモは、ミトスの北側に位置しています。各国の地理的状況を考えますと、そのまま南に下ってくるのが最も効率的であると考えます。となれば、ミトスの西側にセーファンド軍三万、北側にノーノ軍一万、東側にエルスモ軍二万が配置されているものと思われます」

「カルートレン軍は？」

「あの国は強固な海軍を持っています。察するに、ミトスの南側、つまり、ミトス海に軍勢を配置しているものと思われます」

「……なるほどな。国内に敵軍をおびき寄せて戦えばいいんじゃないかと考えたが、こうして見ると、なかなか難しい戦いだな」

俺は思わず苦笑する。敵がそれぞれ攻めてきてくれれば対処の仕様はあるが、総攻撃をかけられれば、一気に国を蹂躙されてしまう。どうやって敵を単体ごとにおびき寄せるか……そんなことを考えていたとき、ホルムが口を開く。

「この国にはもう一つ、利点にも欠点にもなる特徴があるのです」

「うん？」

「魔法が……効きにくいのです」

「どういうことだ？」

ホルムの説明では、数千年前、ミトス王国の北側の山が大噴火を起こした。大量の火山灰が上空に放出され、降り積もった灰は、周囲の国々を壊滅させる被害を与えたのだそうだ。特にミトスの被害は甚大で、国の七割の人間が死に絶えたと伝わっているのだそうだ。

その後、この国では不思議なことが起こった。魔法がほとんど効かなくなったのだ。発動はするが、その効果は通常の十分の一程度なのだと言う。しかもそれは、魔力の大きさに比例するようで、強い

魔法であればあるほど、その効果を減少させるというのだ。

「ですから、低級魔法……例えば、傷を治す回復魔法程度であれば有効ですが、魔導士を組織しての戦闘というのには、不向きな国なのです」

「魔法が使えない戦いか……。そういえば、以前あったな、そんな戦いが。あれは……タナ王国との戦いか」

あのときの戦いは、確かにしんどかった。ラファイエンスとオワラ衆に助けられたと言っても過言ではない戦いだった。今回も、オワラ衆を連れて行くべきだろうか。

「タナ王国との戦い！　存じております。ええ、文献で読みましたが、退却しながらタナ軍を迎撃しただけでなく、魔法の使える場所までおびき寄せて撃破したとありましたが、あれは本当なのですか？」

「ああ、まあ、概ねその内容で合っている」

ホルムの眼が少年のようにキラキラと輝いている。そんな目で見られると、何だか照れてしまう。

「タナ軍が使った、魔法を封じ込める道具は、まさにミトスで獲れる鉱石を用いて作られたものです」

「そうなのか……。だけど不思議だな。魔法の効果を減退させる効果のある鉱石があるのに、どうしてそれが世界中に流通しないのだろう。単に俺が知らないだけか？」

「いいえ、魔法の効果を減退させる鉱石……ピージェですが、ほとんど流通はしておりません」

「ほう、それはまた、どうして？」

「ミトスでしかその効果を発揮しないのです」

「何？」

「理由はよくわかりません。ピージェは黒い石なのですが、ミトスを離れると、その効果を失ってしまいます。学者の話では、ミトスの北側にある山……その昔、大噴火を起こしたナタダケ山に何らかの原因があると考えられているようですが、詳しいことは、今もってわかっていません」

「……なるほど。メイが聞いたら、喜んで調査に向かいそうな話だ」

俺は思わず苦笑する。そんな特殊な環境であるために、ミトス王国は一時期、神の加護を受ける国とされていたが、近年ではそれは否定されているそうだ。どうやらそこには、クリミアーナ教国の干渉があったようだ。

「ですから、ミトス王国は長い間、他国からの干渉を受けずにいたのです。魔法が使えず、肉弾戦のみでしか戦えない国との戦争は、兵士の消耗が激しくなります。誰も好き好んでこんな国と戦いたいとは思わないでしょう。それが今回突然、周辺国から攻められている・・・・。私には何が何だか、さっぱりわからないです」

ホルムはそう言って腕を組む。俺は彼に感謝とねぎらいの言葉をかけて、下がるように促した。

「……もし、ホルムの予想通りの陣が敷かれているのなら、これは蟻のはい出る隙間もない包囲だな。そうなった場合、どうやってこの国を救援するかな？」

俺はしばらくの間、地図を眺め続けた。

どのくらい時間が経ったのだろうか、扉がノックされる音で我に帰る。入室を促すと、マトカルが入ってきた。

「おおマト、どうした？」

「ミトス救援の軍勢を編成してみた」

そう言って彼女は一枚の紙を差し出した。そこには司令官の名前と軍勢の数、兵站の数などが記されていた。

「あれ？　ホルムたちの名前がないじゃないか」

思わず声を上げる。てっきり彼は従軍して、なんなら道案内として先鋒を勤めるのではないかとさえ思っていたのだが、マトカルは彼を留守居役とするつもりなのだと言う。

「本人は是非連れて行ってくれと鼻息を荒くしているが、敵方にはセーファンド帝国がいる。言うまでもなく、彼の故国だ。セーファンド軍の中には知り合いもいるだろうし、親類・縁者もいるだろう。そうなった場合、ホルムらは戦いにくくなるだろう」

「まあ、それはそうだがマト、ホルムを外したのは、別の理由だろう？」

「……」

「ホルムはさておき、彼の配下にいる者の誰かが、セーファンドに内通するかもしれない……そんなところか？」

「……さすがはリノス様だな。その通りだ」

「気持ちはわからなくはないが、俺はその可能性は低いと見ている。その理由は、ホルムらはセーファンドに何の恩義もないからだ。寧ろ彼らは、あの国に一泡吹かせたいと思っている。俺としても、あの国がいかに優秀な指揮官を失ったかを知らしめるいい機会だと思っているのだが……違うだろうか？」

「いや、リノス様がそう言われるのであれば、私は何も言うことはない」

「そうか。……ああ、マトも見るといい。ホルムが書いたミトス王国の地図だ。敵軍の陣立ても書いてあるが、あくまでホルムの推測だが、なかなか当を得たものだと思うんだけれどな」

俺の差し出す地図を、マトカルはじっと見つめる。

「……うん、おそらく敵もこのような包囲を敷いてくるだろう。これは、外れることを祈るが、セーファンド帝国軍が、この山の上に陣を張っていたら、救援はさらに厄介になる」

「……なるほどな。やはりマトは西側から救援に向かう、か」

「それが一番効率的だ。ヒーデータの軍船にカルートレンの船団を

牽制してもらい、その間にセーファンドを撃退するか、その陣の脇をすり抜ける。それができれば、ミトスを救援することができる。ただ、リノス様の魔法が使えない、というのが難点だが……」

マトカルの言葉に、俺は腕を組んで考え込んだ。

第七百五十二話　百人力

それから二週間後、俺たちはミトス王国の手前まで来ていた。

当初はニザを経由して海沿いに進もうと考えていたのだが、陛下からヒーデータの船で行けばいいとの話が来たので、それに乗ることにした。しかも、ヒーデータはガルビーまで迎えに来ると言う。それはかなり手間がかかると言って断ったのだが、すぐ近くの港に軍船が曳航されているのだと言う。そうであれば、とその話に乗った次第だ。

ガルビーならば、アガルタの都から船で行くことができる。ニザは山と森を進まなければならないので、兵士たちの疲労度が全く違ってくる。マトカルなどは、厳しい環境に兵士を置くべきだという考えだが、費用対効果を考えると、やはり、陛下の提案が一番効率がいいと判断したのだ。

それからの行程は順調そのものだった。ミトス王国周辺は基本的に海が荒れるのだが、今回は嘘のように平穏だった。折からの風を受けて、ヒーデータの軍船はスイスイと海を進むことができた。

俺はというと、いつもの通り、夜はマトカルと共に帝都の屋敷に帰っていた。最初こそは鎧兜を着けて移動していたのだが、ここ一週間はそれも着けずにいる。メイとシディーが精魂込めて作ってくれたこの鎧は、めちゃくちゃ格好がいいが、装着するのに時間がかかる。メイとシディーが二人かかりで三十分ほどかけて装着させるのだ。さすがに、出勤前と帰宅時に二人にそれだけの時間を割いてもらうのは気が引けたのだ。だが、最初の一週間は毎日鎧を脱いだり

着たりしていたせいか、二人が鎧を着せるスピードが格段に上がった。今では鎧を着せる時間は最初の半分くらいになっている。個人的には、鎧のパーツが飛んできて自動で着られればステキだなと思うが、さすがにそれは無理な話だ。いや、メイに相談すれば、真剣にそれを具現化しようと夜を徹して研究するだろうし、何とかするかもしれない。しかし、それはそれで、色々と問題が起こりそうなので、その希望は俺の心の中に仕舞っておくことにする。

船頭の話では、明日にはミトス王国が見えるらしい。そうしたこともあって、ヴァイラス公爵が俺たちの船に乗り込んできた。

「やあ、義兄上」

彼は俺を見るなり、にこやかに笑みを浮かべながら右手を挙げた。その後ろには、髭を生やした白髪の男が控えていた。

「紹介しましょう。ヒーデータ帝国海軍元帥、ライトップ・グレイジア将軍です」

「ライトップ・グレイジアでございます」

スッと腰を折ったその姿は、優雅さを感じさせた。ただ、優秀な指揮官が持っている独特の胡散臭さは彼からは感じられない。公爵はこの元帥と共に今後の打ち合わせをしたいと言う。

「我々ヒーデータ帝国軍は、海上にてカルートレン軍の牽制を行います」

席に着くなり、ライトップ元帥は出し抜けに口を開いた。どうやら、ホルムが予想した通り、ミトス海にはカルートレンの海軍がひしめ

いていて封鎖してしまっているらしい。まあ、それはお願いしようとしていたことであったので、取り敢えず頷いておく。同席している、マトカル、クノゲン、ホルムの三人も無言で控えている。

「ですから、アガルタ軍は好きな場所に上陸していただいて結構です」

そう言って元帥は胸を張った。

敵軍の配置を聞いてみたが、それはわからないと一蹴されてしまった。わからないのではなく、調べていないのだろう。まあ、ミトスには上陸する予定だったので特に言うことはないのだが、何となく彼の言葉の端々から、帝国軍は積極的にこの戦いに参加するつもりはないと言う雰囲気が見て取れた。そもそもこの戦いは、陛下の妹からの要請によるものだ。言ってみれば、ヒーデータにとっては親戚を助ける戦いなのだが、どうも、その気は薄いようだ。

その様子を察したのか、ヴァイラス公爵が口を開く。

「元帥、アガルタ軍が陸路でミトスに入ろうとしているとは限るまい。まずは、アガルタの作戦を承ろう」

元帥は一切表情を変えないまま、スッと一礼したが、何となく、ヒーデータの作戦は変更しないという雰囲気が滲み出ている。どうもこの人は、指揮官としてあまり優秀ではなさそうだ。

経験上、有能な指揮官は、飄々としていて捕えどころのない者が多い。それは裏を返せば、何を考えているのかがわからないという点に繋がる。そのために、相手は腹を探ろうと緊張もし、期待もするのだが、無能な指揮官は、心の動きを表情や雰囲気に出す傾向があ

る。あまり信じたくはないが、目の前に座る元帥は、どうも後者に当たるようだ。

「いいえ。我々はしかるべきところで船を降り、陸路でミトスに向かいます」

「……左様ですか」

公爵が何とも言えぬ表情を浮かべながら頷く。

「上陸の際は、我がヒーデータ軍が、全力で支援させていただきます」

「そうですね、よろしくお願いします」

俺の言葉に、元帥が大きく頷く。

「ところで元帥」

「はい」

「ヒーデータは牽制すると言われましたね？」

「はい。左様です」

「ヒーデータはどのようにしてミトスに入られるのですか？」

「うっ」

言葉に詰まり、目が泳いでいる。やはり、思った通り、海上で牽制

と称して動かず、高見の見物を決め込もうとしているのが丸わかりだ。

「まさかとは思いますが、アガルタがミトスに入り、王都……ええと、何て言いましたっけ？　ロークル？　その王都ロークルに入るのを待って上陸する……なんてことは考えていないですよね？」

「……」

元帥の目が鋭くなった。どうやら図星らしい。

「いいえ。そのようなことはございません」

ヴァイラス公爵がすかさず口を挟んだ。

「我が軍は海上に展開しているカルートレン軍を蹴散らし、ミトスに上陸いたします。義兄上がやって来る前に、ミトスの王都、ロークルに入ってご覧に入れます」

「そうですか」

「リノス様、そのようなこと、あるわけがないではありませんか」

口を開いたのはホルムだ。彼は飄々とした笑みを浮かべながら、さらに言葉を続ける。

「これから救援しようとするミトス王国は、ヒーデータ帝国皇帝陛下の妹君が嫁がれている国……。言わば、血のつながった妹を兄君がお助けになるという戦いです。ヒーデータ帝国軍が戦わぬことなど、あえり得ぬことではありませんか」

「なるほど、そうだな。これは失礼しました」

「いいえ……そんな……」

ヴァイラス公爵は困ったような表情を浮かべている。元帥はぶ然とした表情を浮かべている。ある程度は予想していたが、ヒーデータ帝国軍はあまりアテにはできなさそうだ。

ヴァイラス公爵たちが下船したのを待っていたかのように、サダキチが突然現れた。彼は一枚の紙を咥えている。

「……リノス様、何か起こったのか？」

マトカルが話しかけてくるが、俺は右手を振って心配ないという素振りを見せる。

「いや、ミーダイの帝様からの連絡だ。オワラ衆を派遣してくれる、とのことだ」

「おお、オワラ衆を」

「ああ。いないよりいた方がいいだろうと思って要請しておいたんだ。しかし、すごいことが書いてあるぞ、早速オワラ衆に助力を命じたので、貴殿がお着きになる場所にて出迎えるであろうと書いてある。ミーダイから海を渡り、山を越えしてミトスに向かうには、少なくとも二週間以上はかかると思うんだが、どうやらオワラ衆は俺の予想を超えた速度で、こちらに向かってくるらしい」

「それは……心強いな。イッカク殿が来られるのかな」

「そうだなマト。イッカクならそのくらいのことはやりそうだが…
…正直誰が来るのかわからん。ともあれ、オワラ衆が来てくれると
すれば百人力だ」

「リノス様」

「何だマト、改まって」

「何とか上陸する前に敵陣の位置を確認することはできないだろう
か」

「ああ、そのことなんだが、俺も同じことを考えていた。夜明け前
に、イリモの翼で見に行こう」

俺の言葉に、マトカルはゆっくりと頷いた。

第七百五十三話　敵情視察

早朝、まだ暗いうちに俺とマトカルは、軍船の甲板に転移した。一応、周囲に人がいないかを確認した上での転移だ。さらには、マトカルは念には念を入れて、前夜のうちに船を停止させ、見張りもクノゲンや信頼のおける者たちに交代させていたのだった。

転移してすぐ、イリモの背中に跨る。そして素早く空に舞い上がる。ふと甲板を振り返ると、クノゲンが、まるで大丈夫ですよと言わんばかりに、ゆっくりと手を振っていた。

ミトス王国は魔法の効果が大きく薄れると聞いていたので、俺は結界が使えないことを考慮して、寒さ対策をしてきていた。だが、マトカルはいつもの鎧を装備したままだ。寒くなるかもしれないよと言ったのだが、彼女は問題ないと言う。さすが厳しい訓練を詰むと、心頭を滅却すれば火もまた涼し、の境地になるのだろうかと、変に感心する。

夜明け前を選んだのは正解だった。結果を先に言ってしまうと、ミトス王国に入ってすぐ、俺の結界は役に立たなくなった。それまでは温度調整をしていたので、全く寒さなどは感じず、防寒用のコートを身に付けていた俺にとっては暑いくらいだったのだが、突然、急な寒さに襲われたのだった。

日の出近くになり、周囲が明るくなってくる頃に、視線の彼方に城壁に囲まれた巨大な都市が見えた。どうやらあれがミトスの王都であるロークルらしい。

ふと視線を落とすと、山の頂上一帯に篝火のようなものが点在しているのが目に入った。さらに視線を海に向けると、そこには大規模な船団が海上を埋め尽くしていた。どうやらあれが、カルートレン軍のようだ。

マトカルは懐に手を入れると、中から紙とペンを取り出した。どうやらこの様子をスケッチするようだ。俺は彼女の腹に手を廻して抱きしめる。

「寒いだろう？　こうしていれば、少しは寒さも和らぐと思ってね」

「……ありがとう」

マトカルが小さな声で呟く。

彼女はサラサラとペンを走らせていく。以前見たような精巧なタッチではなく、かなりラフな感じで描いている。それでも、風景画としてはかなり上手に描かれていて、思わず感心してしまう。

マトカルはそこに、何か印のようなものを書き加えていく。恐らく敵軍の位置を示しているのだろう。出来上がって見れば、実にわかりやすい戦況図が完成していた。

「これでいい」

「えっ？　もう？」

「ああ。結界が発動しないのだろう？　長居は無用だ。夜が明ける前にこの場を離れた方がいい」

マトカルの言う通りだ。俺はイリモの馬首を逆方向に向けた。

「それにしても上手いな、マトの絵は」

彼女を抱きしめながら、そんなことを呟く。マトカルは不思議そうな表情を浮かべながら、チラリと俺を見た。

「何も難しいことではないと思うが……。ただ、目の前にある景色を、そのまま紙に写し取るだけでいいのだ」

「いや、普通の人間にはできないぞ、それ。俺なんかすごーく時間をかけて描いたとしても、全く違うものが出来上がってしまう。マトは画家としてもやっていけるんじゃないか。一度、絵を描いてみるといい」

俺の言葉に、彼女は笑みを浮かべながら首を振る。

「それは無理だ。私には画家としての才能はない」

「そうか？　すごい才能だと思うけれどな」

「そう言ってくれるのは嬉しいが、私の絵には特徴がない。画家としては致命的だ」

「そうか……。特徴ねぇ……何となくわからなくもないな。でも、そんなことどこで勉強したんだ？　ラマロンの士官学校か？」

「いや、メインティア王だ」

「メインティア王ぅ！？」

思わず声を張ってしまった。耳元で大声を上げてしまったので、マトカルの体が一瞬、ビクッと震えていた。あまりにも意外な人の中が出てしまったので、ついつい声を出してしまった。ごめんねの意味も込めて、彼女の体をもう一度抱きしめる。

「メインティア王で勉強って……何をしたんだ？」

まさかあのバカ殿と個人レッスンで色んなことを……などと下らぬことを考えてしまう。あの王はB専だ。マトカルは……まあ、美形に入るだろう。いや、美形だ。あの王の好みに合うとは思えない。別に疚しいことはしていないと確信しているが、何故か心臓の鼓動が早くなっている。

「いや、別に何もしていない」

俺の感情を見透かしたのか、マトカルが呆れた様子で口を開く。その言葉で安心したが、まだ心臓の鼓動は収まらない。

「あの王の描く絵は、誰が見ても一瞬で、誰が書いたのかがわかる。あの精巧な描き方と言い、独特の色遣いと言い、あの王でしか描けない絵を描く。それが私にはない。私の絵は、訓練さえすれば、誰にでも描けるようになる。そんな絵に値打ちはない」

「う～ん。マトの言うこともっともだとは思うが……。いや、でも、この絵も実にわかりやすい。金を払う価値は十分にあると思うんだけれどな」

「……ありがとう。そう言ってくれると、うれしい」

マトカルはちょっと照れたような笑みを浮かべた。彼女がこんな笑顔を見せるのは珍しい。俺はこの笑顔を、とてもかわいらしいと思った。

◆　◆　◆

俺の魔法が回復したのを確認するとすぐに、イリモを地上に降ろして、そこから帝都の屋敷に転移した。屋敷ではちょうどリコたちが起きてきたところだった。ペーリスとルアラが朝食の準備をしようとしているところだった。子供たちが起きてきて、顔を洗うなどして随分と騒々しい。いつもの朝の光景だが、何だか今日はとても新鮮に映る。

手を洗い、顔を洗って、子供たちの着替えを手伝うなどしていると、朝食ができあがった。今朝は、パンとサラダとオムレツ、そして何とローストビーフのような肉が出た。我が家の食事はいつ食べても美味いが、今日の食事は格別だった。

食事を終えると、俺はリコたちに、しばらくは帰れないかもしれない。子供たちが寝る頃に帰らなければ、一緒に寝てもらって構わないと伝えた。リコは心配そうな表情を浮かべたが、特に何も言わずに、承知しましたと言って頭を下げた。

その後俺は、メイとシディーに鎧を着せてもらい、マトカルと共に軍船の俺の部屋に転移した。

甲板に出ると、クノゲンを筆頭に、主だった者たちが集まっていた。

「おはようございます。おお、鎧を装備されて、まさに臨戦態勢ですな。ご覧ください」

クノゲンが振り返る。その視線の先には緑の大地が広がっていた。

「この近くに小さな村があるそうです。港もあり、そこに上陸できそうです。その村からミトス王国まで、およそ二㎞とのことです」

クノゲンの言葉を受けて、マップを展開させる。ここでは十分に魔法を使うことができている。俺は素早く周囲を確認する。どうやら、敵らしい者はいないようだ。

「よし、ではその港に上陸しよう。くれぐれも村人の迷惑にならないように、頼んだぞ」

俺の言葉に、全員が頷いた。

船から降りると、そこには出迎えがあった。総勢五人、黒装束に身を固め、黒の頭巾をかぶっている。その真ん中に棟梁と思しき、ひときわ体の大きい者がいて、この男には見覚えがあった。

「やあ、イッカク。久しぶりだな」

「……斯様に候者は、イッカクではこれ無く候」

「あ、すまん。体つきがイッカクに似ていたものだから……。ええと、あなたのお名前は？」

「斯様に候者は、カルガの住人、ガシノサモンにて候。イッカクの末弟にて候。サモンとお呼び捨てあって苦しからず」

「あ、イッカクの弟さんですか。サモンさんですね。遠いところわ

ざわざ、ありがとうございます。アガルタのリノスです。どうぞよろしくお願いします」

俺の言葉に、オワラ衆全員が頭を下げる。サモンはご案内仕る、と言って、歩き始めた……。

第七百五十三話　敵情視察（後書き）

コミカライズ第３３話前編が公開されました。リコ様とメイちゃんのウェディングドレスが、かわいい！
是非、チェック下さい！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６

第七百五十四話　諸々我慢

イッカクの弟、サモンは無言のまま俺たちを村の外に連れ出した。

「……ここから先、魔法を使うこと能わず」

突然立ち止まったかと思うと、彼は草原の先を指さして呟くようにして口を開いた。

「よし、ここで軍議を開く。休息せよ」

マトカルがよく通る声で周囲にいる部下に命じる。すると、数名の騎馬武者たちが脱兎のごとく後ろに並んでいる兵士たちに命令する。マトカルに負けぬよく通る声で、休息せよと叫んでいる。

兵士たちはよく訓練されていた。立ちどころに野営の準備をはじめ、瞬く間にそれを完了させてしまった。

俺は結界を張って休息させようと思っていたが、マトカル曰くは、これから魔法の使えぬ場所に赴くのだから、ここで野営の訓練をするのは、ちょうどよい機会だと言う。クノゲンもホルムも一様に頷いているので、兵士たちのことは彼らに任せることにした。

「サダキチ」

すぐに彼は現れた。俺は彼に干し肉を与えながら命令する。

「ここから先は魔法が使いにくいのだそうだ。そうなれば俺はお前

と会話できなくなる可能性がある。取り敢えずお前たちは上空から敵の様子を見張ってくれ。何か敵に怪しい動きがあれば、知らせてくれ」

「承知しました」

サダキチはそう言って姿を消した。

「フェアリードラゴンたちが使えないのは、少々厳しいですな」

設えられた椅子に座りながら、クノゲンが口を開く。すでに俺の前にはテーブルと椅子が用意され、さらにはテントまで張られている。一体どこで訓練したのか、兵士たちの設営が実にテキパキと効率的で見事だった。

「まあ、そのためもあって、ミーダイの帝様にオワラ衆を貸してくれと頼んだんだよ」

そう言いながら、近くに控えているサモンに視線を向ける。彼は部下と共に片膝をついて控えている。

「それにしてもさすがはオワラ衆、早いな。ここにはいつ着いたんだ？」

「昨日に候」

「昨日？　ミーダイからここまでどのくらいで移動したんだ？」

「十日に候」

「十日!?　転移も使わずに?　めちゃくちゃ早いな。もしかして、移動の最中はずっと走っていたとか?　……走ってたんだ。凄まじい心肺機能だな。疲れは……ないの?　いや、無理しなくていいからね」

サモン以下四名の男たちは、全員オリンピックに出るくらいの運動能力を持っているようだ。察するに帝様は、オワラ衆の中でも選り抜きの者を派遣してくれたのだろう。

「敵情報については、オワラ衆にお願いするとしよう。頼むな」

俺の言葉に、オワラ衆は無言で頭を下げた。

「とはいえ、フェアリードラゴンを使えるに越したことはない。何とかならないものか」

マトカルが右手を顎に当てながら呟く。クノゲンも頷いている。

「アリリア様なら、彼らの言葉を聞き取られるのでは?」

クノゲンがいたずらっぽく笑う。バカも休み休み言えってんだ。可愛い娘を何でこんな戦場に連れて来なければならないんだ。アリリアの体に傷でもついた日には、メイがどんなに怒ることだろうか。普段温和な人が怒ると怖いのだ。下手をすると、俺と喋ってくれなくなる可能性すらある。ずっとメイに無視される……。考えたくもない状況だ。

「龍王様にお助けを願うことはできないだろうか」

マトカルが呟く。確かに、あのバカ龍ならばサダキチ達の言葉を理

解して通訳してくれるだろう。しかし、ヤツはバカだ。アホでできているのだ。体を斬れば、アホ、という文字が出てくるような生き物なのだ。何をするのか、わかったものではない。ただ……これからの戦いの展開を考えれば、龍王を傍に置いて、サダキチ達と意思の疎通を行うのはアリかもしれない。ここは、諸々を我慢して、龍王に助けを求める場面だろう。いや、助けを求める必要はない。ヤツは我が家のペットとなったのだ。主人からの命令なのだから、ヤツに拒否する権利はない。そうだ。

俺は大きく頷くと立ち上がって、小さな声で呟いた。

「……龍王、来い」

……現れない。おかしいな。ヤツは千里、万里先の声でも聞き取ることができると自称していた。まさか俺の声が聞こえないのだろうか。いや、単に俺の声が小さかっただけなのかもしれない。

俺はオホンと咳払いをすると、帝都の屋敷の方向に向かって声を張った。

「龍王～。龍王～～。りゅうりゅうりゅうりゅう龍王～♪　イエス、龍王、カモン！　カモンカモンカモン龍王～！」

……ヤツは現れない。それどころか、クノゲン、マトカル、ホルムがあんぐりと口を開けて俺を眺めている。完全に、お前、何やってんの？　っていう表情だ。

「……すまない。少し、疲れてるんだ」

俺はそう言って力なく椅子に座った。龍王来ねぇじゃん。嫌いか？

嫌いなのか、俺のこと。いや、きっと奴は己の能力を盛ったのだ。やっぱりな、そんな奴だと思ったんだ。バカ龍を信じた俺がバカだったのだ。

ふと顔を上げると、マトカルと目が合った。彼女は俺を見ながらスッと頷いている。きっとあれは、今夜は私が相手をするから、好きなだけ私を抱きしめるといい、と言っているのだ、きっと。いや、知らんけど。

「さて、軍議を始めようか」

気を取り直して皆に話しかける。俺の言葉に皆一瞬、ハッとした表情を浮かべたが、すぐに我に帰り、いそいそと席に着いた。

「これが今朝、上空から見た敵陣の位置だ」

マトカルが懐から戦況図を出して説明する。クノゲンとホルムの表情が厳しくなる。

「これは……」

ホルムがそう言って絶句する。彼にとっても、俺たちにとっても、そうなってほしくはないなと思っていた通りに敵が布陣していたのだ。

「我々の位置から考えますと、まずは眼前のセーファンド帝国軍と戦わねばなりませんが……。そうなると、帝国の北側に陣を敷いているノーノ軍が邪魔になりますね……」

ホルム曰く、俺たちがまともにセーファンド軍に攻撃を仕掛けると、

北側に布陣したノーノ軍に背後を突かれる可能性があるとのことだった。敵に悟られぬように脇をすり抜けられればいいが、気づかれてしまうと、俺たちは痛打を被ることになる。なるほど、そこまで考えてノーノ軍を配置しているとすれば、この戦いを指揮している者は、なかなか優秀であると言える。

「ところでマト、この海上に布陣しているカルートレン王国の軍勢だが、陸から離れすぎてやしないか？」

戦況図では、カルートレンの軍船は沖に停泊しているように書かれている。これでは、湾を封鎖していることにはならないだろう。

「ああそれでしたら」

ホルムが口を開く。全員の視線が彼に集まる。

「ミトス海は遠浅の海なのです。ですので、敵船はこのあたりにいるのでは……待てよ？」

彼はガバッと顔を起こすと、俺たち一人一人に視線を向けながら口を開いた。

「潮が引いたとき、つまり、干潮時になると、この辺りは一面の砂浜となります。今の時期の干潮はいつでしょうか。夜に干潮が起こるのであれば、我々はセーファンドの脇を易々と抜けることが可能です！」

ホルムの言葉に、クノゲンはおお、と嘆息を漏らしている。マトカルも大きく頷いている。

「サモン、早速ですまないが、ミトス湾の干潮がいつ起こるのかを調べてもらえないだろうか」

「承知」

サモンはそう言うと、後ろに控えている男に向かって頷く。すると男はものすごい速さで駆け出して行った。あっちは……先ほど通ってきた村の方向だ。

しばらくすると男は戻ってきて、サモンに耳打ちしている。

「干潮時刻は明後日夜明け前にて候」

「それでは、本日はここで野営して、明日、陽が落ちてから移動をはじめ、夜のうちに浜を抜けてしまおう。そして、夜が明けたら、全軍、ミトスの王都ロークルに向かって突撃するのがよいだろう」

マトカルの言葉に俺は、腕を組んで考えた……。

第七百五十五話　アガルタの陣立て

セーファンド軍の陣地から、草原の彼方にアガルタ軍の姿が見えた。

軍を率いる総司令官には、カーザ城を救援したときと同じ人物、即ちブートが勤めていた。その彼の傍には、子息であるサーマも控えていた。彼は蒼白の表情を浮かべながら、眼下に広がる草原を眺めていた。

そんな息子を一瞥したタブーは、フンと鼻を鳴らす。息子は心配が過ぎる。アガルタがいかに戦おうとも、この必勝の陣形は崩すことなどできないと確信していた。

彼らが陣を張る山の上からは、草原が広がっている。即ちそれは、アガルタ軍の動きが見えるということにつながる。ブートは頭の中でこれから起こるであろう戦いの場面が描き出されていた。

奴らのとるべき作戦は、このセーファンド軍に攻撃を仕掛けて来るか、この山を迂回して、干潮を利用して砂浜に出るかの二つだった。もし、後者を選択したのであれば、行軍は夜半になるはずだ。わざわざ、陽の高いこの時間に出てきたということは、セーファンド軍に攻撃を仕掛ける可能性が高かった。ブートは全軍に戦闘態勢を取るように命じた。

敵はどんな作戦を描いているのか、ブートには正直わからなかったが、こちらに攻撃を仕掛けてきたならば、北に陣を張っているノーノ軍が、アガルタの背後を突くことになっている。そうなれば、敵は袋のネズミとなる。どんなに精強な軍勢でも、崩壊は免れない。

そうなれば、まさにこちらの注文通りの展開だ。

ブートの頭の中には、寒風吹きすさぶ草原を、栗毛の駒に打ち跨って、真っ先に突撃する自分自身の姿が見えていた。彼の後ろを息子のサーマが追ってくる。その後ろから兵士たちが追ってくる……。

「雑魚どもには構うな。敵はアガルタ王ただ一人、一気に草原を突っ切って、アガルタ王の本陣に斬り込め！」

ブートは馬上でそう叫んでいる自分自身の姿を見た。

興奮してきた。自分の逸物が固くなってきていることがわかる。顔は覆面でわからなかったが、飄々とした、どこか舐め腐ったあの男をなぶり殺しにしてやるのだ。ついでに、帝国を裏切ったホルムらも血祭りにあげてやる。ヤツらの屍の上で、アガルタ王の首を高々と掲げている自分の姿を想像すると、鼻息が荒くなってくる。

兵士を呼んで水を持って来させて、一気に飲み干した。それでようやく気持ちを落ち着けることができた。

しばらくすると、方々に放っていた斥候から報告があった。どうやらアガルタ軍は、この山から約四キロ先に陣を張っているとのことだった。ブートは主だった司令官たちを連れて、山の頂上に上った。そこからは、彼方にアガルタ軍の旗が雲のように見えた。

斥候が戻ってきた。アガルタ軍は何と、昼食を摂っているのだと言う。それはブートの神経を刺激した。

セーファンド軍は、アガルタ軍の動きを察知してから臨戦態勢に入っている。当然、食事を摂る時間などなかった。司令官をはじめと

した兵士たちは、各々適当に食事を摂っていた。中には立ったまま食事を摂る者さえいた。いつ何時、出撃の命令が下るのかわからないために、落ち着いて食事などできなかったのだ。

「いつでも出てこい。いつでも相手になってやろうと言われているようなザマではないですか。このようにされて黙っていることは、面と向かって唾を吐きつけられて黙っていると同じことではありませんか！」

司令官の一人が鼻息荒くまくし立てる。

「唾どころではありません。舌を出され、尻をまくられ、せせら笑われたも同然のことです。このままやり過ごす手はない。総司令官殿からの出撃の命令がないならば、私は手勢を率いて突撃して、敵から首の百や二百を奪ってくる……」

「抜け駆けは許さん」

血気に逸る部下たちをブートは制した。

「アガルタ軍から目を離すな！　どんな些細な動きも見逃すな！」

ブートは声を荒げながら、部下に命じた。

アガルタ軍が動き出したのは、それからしばらくしてのことだった。彼らは部隊を二つに分けていた。一つは本陣と思しき部隊、もう一つは別動隊と思しき一団が、北に向かって出発したのだと言う。しかも、それを率いるのはアガルタ王の妃であるマトカルであるとのことだった。これは言うまでもなく、北の山に布陣しているノーノ軍を牽制するための動きであることは明らかだった。この動きは、

敵は完全にこちらの手の内を読んでいると考えてよかったし、ここに至って、セーファンド軍は単独でアガルタ軍二万と戦うことを余儀なくされていた。

そのアガルタ軍は、ゆっくりとその姿を現した。それに従って、彼らの陣立てが見えてきた。

「……敵ながら見事な陣形ですね」

息子のサーマが誰に言うともなく呟いた。ブートはフン、と再び鼻を鳴らしながら、眼下のアガルタ軍に視線を向けた。

敵陣は三段になっていた。前段には五隊が並び、中段に八隊、そして、本陣と思しき後ろには七隊が並んでいた。各隊の前にはそれぞれ旗が立ち並び、それらが一斉に北に靡いていた。午後になって、やや強くなった南風に各部隊の旗や幟が翩翻と翻っている様は見事だった。

敵はこの草原に兵力を集中して決戦を期待しているもののようであった。

ブートは、この大軍団に打ちかかる隙があるとすれば、どこだろうかと考えた。中段の左右、両翼の端の部隊を切り落とすことはやってできないことはない。その両翼端を、騎馬隊を中心とした突撃隊が襲えば、敵はその方に備えるために陣形を変えるだろう。つまりは、敵は両翼をさらに伸ばすことになる。そうなったとき、味方は全力を挙げて敵の前段中央に打ちかかれば、かなりの戦果を挙げることができるかもしれない。ただし、このとき、引き際を上手くやらないと、抱き込まれて全滅の憂き目を見る恐れがある。

ブートはそんなことを考えながら眺めていた。大きく迂回して敵の本陣を衝くという戦法は、この広い草原が戦いの場であることを考えると、かえって敵に警戒されて難しいと考えられた。味方が行動しやすいということは、敵にとってもたやすいことなのだ。

そのとき、風がピタリとやみ、翻っていた旗が一斉に垂れた。

敵の本陣あたりで、何か破裂音のような音が響き渡った。何かの攻撃の合図かと、ブートは身を固くして構える。セーファンド軍に一気に緊張が走った。

そんな中、しばらくすると、また、破裂音が響き渡った。

すると、それまで静かだった敵の陣形が急に動き出した。中段の八隊のうち、左右の翼端にいる二隊が廻れ右をして西に向かって駆けだした。と同時に全軍が南に向きを変えた。敵は四段になった。あっという間の出来事だった。

アガルタ軍は四段の構えとなって、南の海の方向に向かって進み始めた。セーファンド軍に対して、いつでもかかって来いという構えから、セーファンド軍を見限って、行軍開始の陣形に移り変わるまでの時間はほんの一呼吸する程の間であった。

皆が呆気にとられる中、サーマが膝をついて、重々しく口を開いた。

「父上、アガルタ軍の陣立ては誠に見事。この一糸乱れる動き様は、まるで調練でも見るようにあざやかなもの。陣立ては完全であってつけこむ隙はありません。敵は隙を作ろうと思えば、即座に隙を作ることができるでしょう。ですが、近づけば取り込められます。この際は一切の手立ては無用。残念ながら敵の動きを見守るより致し

方ないでしょう。待つことです。そのときを待つことです」

ブートはその声を聴きながら、視線をあらぬ方向に逸らせた。

第七百五十六話　アガルタの策

アガルタ軍二万の動きは、静かだった。セーファンド軍の斥候などいささかも気にかけず、歩武堂々と南に向かって行進していく様子は、サーマが調練のようだと言った通りだった。

「敵がうしろを見せた以上、我が方は山を降りて追撃する姿勢を見せた方がいいのではありませんか。なんにもせず、山に籠っているということは、いかにも、臆病風に吹かれたように見えます。山を降りたからと言って敵にすぐ駆け向かうのではなく、機があれば敵の背後に襲い掛かるためでございます」

若い司令官がブートに向かって口を開いた。その彼と同じことを進言する者が続いたが、ブートはうんと言わなかった。

「兵を山の下に降ろして待つのも、山の中で待たせるのも大して変わりはない。山を降りるということは、我が方の意図するところを敵に悟られる恐れがある。山を降りるのは、機が熟してからだ」

そう言ってサーマは血気に逸る司令官たちを宥めた。

実際、総司令官たるブートも、山を降りて敵に打ち向かいたい気持ちをこらえていた。耐え忍んでいた。彼は山を降りれば、止めるのも聞かずに、敵部隊の後を追っていく者が出てくるだろう。一人、二人ならいいが、五十人、百人という部隊となり、それが敵の重囲に陥ったとなると本隊を出して助けねばならない。それこそ、敵の誘いの手に引っかかることだった。

アガルタ軍は途中、幾度か休息を挟みながら、真っすぐ海の方向に向かって進んでいった。何度も小休止する様子をブートたちは訝しんだが、これはおそらく、ノーノ軍を牽制しているマトカルの部隊を意識しているためでしょうという、サーマの言葉に、黙って頷いた。

確かに、今ここで、セーファンドとノーノ軍勢に攻撃されたら、マトカル率いる部隊はひとたまりもなく壊滅する。しかしそれは、セーファンド軍の壊滅をも意味していた。もし、そうなったら、アガルタ本隊は馬首を返してこちらに向かって突撃を仕掛けて来るのは、容易に想像できるからだ。結果的に草原におびき寄せられた形となり、もしそこで、マトカル部隊が奮戦してその場を持ちこたえたならば、今度はセーファンド軍が挟み撃ちになることになる。そうなれば、この包囲網は完全に瓦解する。きっと敵はそれを狙っているに違いないと、ブートは心の中で呟いていた。

「我が命令があるまで、山を降りることは許さん。引き続き、アガルタの動きを見張るのだ」

夕陽が、地平線の彼方に落ちていこうとしていた。

セーファンド軍の斥候は、海岸伝いに潜んで、アガルタ軍の動きを見守っていた。五段構えで進んできたアガルタ軍は、海岸線にくると、急に進行速度が遅くなった。そこまでは草原だから編隊のまま行進できたが、まだ潮が引いていない海岸線にかかると道が狭くなり、横隊のまま進軍はできなくなった。四列縦隊に編成を変えて、一隊ずつ、海岸を進まねばならない。当然そこに渋滞が生じた。

「アガルタの最先頭の二部隊が、海岸を進み始めました」

という第一報が、あらかじめ配備していた斥候によってブートの許に報告された。すでに周囲が暗くなっていた。

この日、ブートは斥候の報告を迅速に伝達するために、海岸線一帯にかけて十カ所の中継所を置いた。最前線に配備された斥候は、探知した情報を紙に書いて、足の速い斥候に渡す。その男は、四～五百メートル先の中継所にいる斥候にそれを渡す。そこで人が変わって、次の中継所に走る。そして、馬が使えるところまで来ると、走り馬によってブートの許に送られる。このようにして、海岸からブートの許までの約十五キロを、およそ三十分で情報が伝えられた。驚くべき速さであった。

「本隊を中心にして、七隊が海岸を進み始めました」

という情報に続いて、

「敵の本隊を中に挟んで、七隊すべて海岸を進んでおります」

という情報がブートの許に届いた。

「今、我々が出撃しますと、確実にアガルタ王の首が獲れます」

一人の司令官の言葉に、多くの者が頷いた。

「四段になって行進中のアガルタ軍の、先頭二隊と第二段の本隊七隊、併せて九隊、合計約一万二千、ほぼ敵の半数以上は海岸に入りました。今こそ敵の後続部隊を突いて海に追い落とし、敵の混乱に乗じてアガルタ軍を葬り去る好機です」

と熱っぽい口調で出撃をすすめる者があった。

「だが、敵の先頭部隊および第二段の七隊合わせて一万二千が海岸に進むのに、四時間を要しているのは、少し遅すぎはしないだろうか」

とサーマが言った。時刻はすでに深夜に差し掛かろうとしていた。

「遅くはありません。海岸に入るのは一本道、しかも狭い上に夜で視界も悪い。大部隊の行進には不便です。そのくらいの時間がかかるのは当然でしょう。だからこそ、今攻撃しなければならないのです。砂地に入り込んだ敵は、満足な動きが取れなくなっています。そこを攻めずに他に策がありましょうか」

司令官の一人は、それでもまだ総司令官が出撃を渋っているならば、手勢を率いて山を降りるぞという意思を明らかにするために、彼の部下に対して、即刻兵を整えて山の下に集合するように命じた。

ブートとしても、総攻撃を命じたい気持ちでいっぱいだった。しかし彼は、このときになって、息子のサーマが言った一言が妙に気になっていた。アガルタの本隊が海岸に入るのに四時間もの時間を要したという点だ。敵が背後を気にして、もしくは、兵士たちに休息を取らせながらゆっくり進んだのか、それとも大軍を動かすのに苦心しているような擬態を演じたのか、はっきりしない。

……それが、我々をおびき寄せるための策だとすれば。

ブートの脳裏に冷たい光が差していた。

彼は当初、アガルタ軍は、深夜に行動するものだと予想していた。徒にこの山を攻めても、兵士たちを消耗させるばかりで、長い時間

足止めを食うことになる。それよりは、我が軍の脇をすり抜けるのが最も効率的だった。そのためには、深夜になるのを待って大急ぎで進軍して海岸まで向かい、そして、干潮になった頃を見計らって浜辺を進み、ミトスの王都、ロークルに向かうものだと考えていた。だが、敵はわざわざ自軍の姿を晒し、あまつさえ、悠々と我が軍の前を通り過ぎていった。

ブートは当初、敵がなぜ、このような動きをするのか、理解に苦しんだが、今ではっきりと敵の狙いを認識していた。奴らは間違いなく、我が軍を平地におびき寄せようとしているのだ。その手には乗らぬ。

ブートは立ち上がり、やや声を荒げながら、我が命令なくしてここを離れることは許さんといって、司令官たちを窘めた。サーマの言う通り、機を待つのだと言って、その場を離れ、彼は休憩用のテントに向かった。

■■■

「……申し上げますっ！」

男の金切り声にも似た声で、ブートは目を覚ました。素早く起き上がり、剣を携えて外に出る。目の前には若い男が片膝をついて控えていた。目は血走り、息はあがっている。何か尋常ではない出来事が起きたことは直感的に理解できた。

「敵襲です！　敵襲です！」

目を覚ませと言わんばかりの大声で、男が叫んだ。あまりの剣幕に、ブートの体は震えた。

「敵襲とは、何だ！」

「アガルタ軍が攻撃に転じました！　こちらに向けて、迫っております！」

「アガルタ軍！？　ヤツらは海岸を進んでおるのではなかったのか！」

「突然反転しまして、こちらに向けて突撃を開始しました。今、麓ではグリーレル司令官が必死の防戦を行っています。北に控えるノーノ軍に援軍の要請を願います！」

俄かには信じられぬことだった。そのとき、もう一人の伝令が飛び込んできた。

「申し上げます！　北側のノーノ軍が撤退しました！」

「は？　な、何ィ？」

「マトカル率いる別動隊に攻められたノーノ軍は、戦意を喪失して撤退しました！」

「ちょっ、な……え？」

ブートの表情が固まった。

第七百五十七話　お先真っ暗

「総司令官殿、ご命令を！」

目の前に控える男の大声で、ブートは我に帰る。

「援軍を要請するのだ！」

「は？　援軍？」

男はキョトンとした表情を浮かべながら、ブートの言葉を繰り返した。

「援軍要請の使者を立てるのだ！　行け！」

ブートの怒号が響き渡る。男はハッと頭を下げて、その場を後にした。それを見届けてブートは立ち上がり、テントを出た。

てっきり司令官たちが集まっているのかと思いきや、そこには誰もいなかった。アガルタ軍に攻撃されているとは思えない程の静寂に包まれていた。ひょっとして、先ほどの男は夢だったのではないか。そんなことを考え始めたそのとき、目の前に息子のサーマが姿を現した。

「父上、お指図を！」

一体何を言っているのだと、心の中で呟く。先ほど、アガルタ軍が攻勢に転じたときいたが、敵がどこを攻撃しているのか、その現状

は説明されていない。そんな状況下で指示など出せるはずはなかった。

「状況を説明せよ」

サーマは面倒くさそうな表情を浮かべた。その様子から、セーファンド軍が攻撃されたのは、直前のことではなかったことを察した。おそらく、アガルタ軍の攻勢が始まってすぐに、司令官たちは持ち場に急行したのだろう。そして、諸々の準備が整ってやっと、自分のところに知らせに来たのだ。

その采配を振るったのは、目の前に控える息子のサーマであることは明らかだった。他の司令官では、このようなことは絶対にできないだろう。それは越権行為にあたるからだ。下手をすると自分の首が飛ぶ行為だ。そんな、己の身を犠牲にしてまで自軍を守ろうとする者は、この帝国内には皆無と言えた。その中で、誰にも咎め建てされない人物は、息子のサーマを置いて他になかった。

彼は机に置かれている地図を指さしながら、丁寧に説明を始めた。

「およそ三十分前、放っていた斥候から、アガルタ軍が突如行軍を止め、こちらに向かっていると報告がありました。すぐさま皆に命じて、それぞれの持ち場に戻り、そこを堅守させています」

「アガルタ軍の位置は？」

「まだわかっておりません」

「二万もの兵士が向かっておるのだろう。わからぬ、とは何事だ！」

「今のところ戦闘に入ったという知らせは受けておりません。それに今は夜ですので……」

ブートはフーッと息を吐くと、視線を空に向けた。確かにまだ、夜明けにはまだ時間がありそうだ。深夜に入って気温が下がっているためか、空気が澄んでいるように感じる。そのため、空に煌めく星空が、いつも以上に美しく輝いているように見えた。

「しかし、だ。敵が攻勢に転じたのは、三十分も前の話だろう。で、あれば、アガルタの先頭部隊が我が軍に攻撃を仕掛けるか、または敵を視認して攻撃に移ってもよさそうではないか」

「……まあ、現在は夜です。周囲を明るくしてわざわざ己の位置を敵に知らしめるような愚策を取るとは思えません。おそらく敵は、漆黒の闇の中、我々の位置を確認しながら注意深く山を登ってきていると思われます」

「……と、なれば、明け方、周囲が明るくなってきたそのときが、いよいよ戦闘開始というわけだな」

ブートの言葉に、サーマはゆっくりと頷いた。これで納得がいった。自分を起こしに来なかったのは、戦闘開始が明け方になると見てのことだったのだ。で、あれば、自軍の防御を固めるのが最優先だ。私を起こしに来るのは、それが完了してからでいい。なるほど、この息子はよくわかっているなと、ブートは心の中で呟いた。

「我らは、ミトス側に通じる山道に兵士を集めております」

サーマの言葉に、ブートは大きく頷く。ミトス側からこの山に上がってくる道はそこだけだ。西側にも道があるが、そこからアガルタ

軍が上がってくる可能性は極めて少ない。西側にはマトカル軍がいるが、ヤツらはノーノの陣地を占領しているか、いまだ戦闘中であるずだからだ。で、あれば、ミトス側の道に兵力を割くのが効果的だ。現在、セーファンド軍は山の頂上付近を占拠している。朝になり、敵の姿が視認できれば、すぐに逆落としをかける。そうすれば、いかに精強なアガルタ軍であっても、タダでは済まない。まだまだこの戦いは我が軍が優位だと、ブートは心の中で呟いた。

「私は、山の頂上に上る」

「は？」

「わからんのか！　夜明けとともに指揮を執るためだ」

「承知しました。皆に伝えてまいります」

サーマの言葉に、ブートは顎をしゃくった。

すぐに兵士たちがやって来た。そして、サーマも伴って山を登る。登る、といっても、僅か数百メートルの距離だ。五分もあれば辿り着くことができる。

「……」

周囲を見廻してみると、辺りは漆黒の闇だった。だが、東の空は明るくなってきていた。水平線の彼方が徐々に明るくなっているのが見て取れた。もう少しで夜が明ける……。眼下には篝火が煌々と焚かれているのが見て取れる。これは言うまでもなく、セーファンド軍だ。もしかすると、アガルタ軍が持つ松明などが見えはしないかと思っていたが、ブートの眼にはそれは確認できなかった。

……とすれば、アガルタは一体どうやってこの山を登ってきているのだろうか。ゆっくりと、まるで地を這うように進んでいるのだろうか？　いや、今は干潮で、この山の麓には一面の砂浜が広がっている。もしかすると、アガルタ軍は、攻撃すると見せかけて引き返し、干潮で現れた砂浜に戻って、ミトスの王都に向かっているのかもしれない……。

そんなことを思っていたそのとき、兵士たちが騒ぐ声が聞こえた。すわ、戦いが始まったかと思ったが、どうやらそれは戦闘ではなく、兵士たちが言い争う声に聞こえた。

「何だ。何をしているのだ！　騒ぎ立てては、我が軍の位置が敵に知れてしまうだろう！　誰か言って静めてこい！」

ブートの命令を受けて、兵士の一人が脱兎のごとく駆けだしていった。

誰かが静めたのだろうか。騒ぎの声は収まって、周囲は再び静寂に包まれていた。夜は白み始めていた。

……何か、耳障りな音が聞こえた。ベリベリと何かが壊れるような音だ。と、同時に兵士たちと思われる歓声が起こった。

「何だ！　何が起こっている！　報告しろ！」

ブートは眼を見開きながら周囲を見廻す。

「申し上げます！」

兵士が全速力でこちらに走り寄ってくる。彼はブートの前で片膝をつくと、早口でまくし立てた。

「アガルタ軍の攻撃です！　アガルタ軍の攻撃が始まりました！」

「撃退せよ！　持ち場を離れるなと言え！」

「ハッ！」

男はすぐさま立ち上がり、元来た道を駆け戻った。周囲が明るくなり始めたのか、少し、状況が掴めてきた。どうやらアガルタ軍は、予想した通り、ミトス側の山道を登ってきているようだった。槍を突き出しながら突撃しているように見えるが、攻めあぐねているようにも見えた。

「よし、全軍に攻撃命令を出せ！　押して押して押して、アガルタ軍を押し戻せ！」

「総司令官殿！　あれを！」

司令官の一人の声で我に帰る。男の指すところを見ると、北側の尾根に黒い一団が犇めいていた。それは間違いなく、アガルタ軍だった。

「ま、まさか、北側の尾根を登ってきたというのか……」

その山頂にはノーノ軍がいたはずだが……。そこまで考えてブートはハッとする。そうだ、アガルタの別動隊に襲われて、ノーノ軍は撤退したはずだ。アガルタは最初からこの作戦を狙っていたのだ。徒に攻撃を仕掛けたりせず、一軍が北側の尾根を登るタイミングで

一斉に攻撃を仕掛けたのだ。このままではまずい。逆に、セーファンド軍が逆落としをかけられる危険性があった。

「申し上げます！」

ブートの思考を遮るかのように男の絶叫が響き渡る。伝令だ。男は肩で息をしながら口を開く。

「南側の間道を伝って、アガルタ軍の一軍が攻撃を仕掛けてきております。脇腹を突かれた我が軍はじりじりと後退しています！」

「全力で阻止せよと伝えろ！」

「承知しました！　あといま一つ。西側の山道からこちらに向かってくる一団がおります！　おそらく、アガルタ軍かと思われます！」

「父上！　それでは我らは完全に包囲された形となります！　父上！」

ブートの目の前が真っ暗になっていった・

第七百五十八話　マトカル視点

マトカルは馬を駆りながら、自らの指揮官としての未熟さを痛感していた。

頭の中では、バラバラに散らばっていたパーツが組み合わさり、一つの形を作ろうとしていた。まさか、リノス様はここまで考えて作戦を立てていたのか、しかもそれを一瞬で決断していた。まさに、軍神とはあの方のことを言うのだろう。心の中でそう呟いた。

当初マトカルは、干潮で干上がった砂浜を渡って、ミトスの王都ロークルに入ればよいと思っていた。そうしておいて、ミトス軍と共に、周囲を囲む敵を各個撃破していけばよい。幸いにして、海にはヒーデータの軍船が犇めいている。海からの攻撃はないものと考えてよかったし、セーファンドの北側に陣を敷くノーノ軍も、こちらから攻めかからぬ限り、その脅威は少ないと言えた。まずは、ロークルの北側に布陣するエルスモ軍を蹴散らし、その足で、セーファンド軍を撃破すればよいと考えていたのだ。

だが、リノスの作戦は違った。わざわざ包囲されている中に入ることはないと言って、マトカルの作戦を退けた。そして、まずは目の前にいるセーファンド軍を倒して行くと言ったのだ。

正直、その作戦にマトカルは反対だった。時間をかければかけるだけ、戦いは不利になるからだ。しかも相手は山に籠っている。そこを攻め落とするとなると、アガルタも相当の被害を覚悟しなければならないことを、彼女はよく承知していた。

しかし、草原に相手をおびき寄せることができるのであれば話は別だ。相手を完膚なきまでに叩き潰すことができれば、ミトスの王都までは遮るもののない一本道だ。それができればの話、だが。

そのマトカルの心中を知ってか知らずか、リノスは敵を草原におびき寄せると言い、マトカルに別動隊を率いるよう命じてきた。言うまでもなく、それはノーノ軍の牽制のためだ。敵が戦いに応じなければどうするのだ、という問いに対して彼は、それならば、戦いに引きずり込めばよいと言って、涼しい顔をしていた。そうしておいて彼は、セーファンド軍との戦いに備えた陣立てを語り出したのだった。

正直、その指揮は自分が執りたかった。だが、彼女はそんな感情を一切表に出さずに、淡々とリノスの指示に耳を傾けた。

「ではマト、戦闘が始まったら、フェアリードラゴンを寄こすから、よろしく頼むな」

リノスは最後にそんなことを言った。彼女はただ、黙って頷くしかなかった。

与えられた仕事は実に簡単だった。北の山に陣を敷くノーノ軍を眺めているだけでよかった。進軍していく味方の軍を遠目に眺めながら、彼女は自分の思い描いた通りに戦況が進んでくれることを祈っていた。

しかし、その祈りもむなしく、セーファンド軍が山を降りてくることはなく、味方は南に向かって進軍していった。もし、敵が山を降りてきたならば、ノーノを牽制しつつ、機会を見て、自らも突撃して敵の横っ腹を突こうと考えていた彼女は、ただ、空を見上げてた

め息をつくことしかできなかった。

敵が山を下りてこない場合の作戦は、海を廻り込んで、南側からセーファンド軍を攻撃するというものだった。問題は、敵に移動している姿がバレないかどうかという点にあったが、彼はオワラ衆が付いているから大丈夫だと言って胸を張った。その自信はどこから出てくるのか、彼女は疑問を持った。もし、失敗したならば、ヘタをするとアガルタ軍が全滅する可能性すらあるのだ。彼女は、リノスが立てた作戦が上手くいくようにと、心の中で祈っていた。

深夜、焚火で暖を取りながら休息していると、不意にフェアリードラゴンが目の前に現れた。マトカルは一瞬、我が目を疑ったが、ドラゴンは、ギャァと面倒くさそうに鳴いた後、再びその姿を消した。

「出撃する！　準備せよ！」

アガルタは間違いなく勝利する。根拠はないが、絶対の自信があった。命令が下るや、兵士たちは迅速な動きで準備を始めた。

彼女らは皆、片手に松明を掲げて、ノーノ軍が陣を張っている山に向かった。しばらくすると、山の中腹に篝火が見えた。ノーノの陣に間違いなかった。

「敵からも我々の松明は見えていることだろう。皆、松明を高く掲げて、ノーノの陣に突撃するのだ」

「マトカル様、それは……」

「あくまで突撃する姿勢だけだ。敵の陣の手前まで来たら、一斉に引き返す。ヤツらを少し、脅かしてやるのだ」

彼女の言葉に、皆、ニコリと笑みを浮かべながら頷いた。

ノーノ軍は、思った以上に脆かった。マトカルらが突撃を開始すると、兵士たちは我を先に逃げ出した。兵士たちが逃げてしまっては、指揮官たちも戦いはできない。兵士たちの後から、騎馬武者たちが逃げていく様は、可笑しさを通り越して、哀れですらあった。

「……弱いな。ノーノの兵は」

そう呟く彼女に、付き従っていた司令官の一人が口を開いた。

「聞き及びますと、ノーノの兵は、野良から集められた農民たちが大半だそうです。訓練も何も受けていない者たちからすれば、鎧兜を装備した騎馬隊が突撃してくるのは、我々が感じる何倍もの恐怖だったのでしょう。それに、彼らは死を恐れます。死んでしまえば、自分の田畑を耕す者がいなくなりますからね」

彼の言葉に、マトカルは無言で頷いた。

「では、我らは戻ろう。一旦山を降り、しかる後、セーファンドの陣に攻撃を仕掛ける」

マトカルのこの命令にはさすがに司令官たちも、驚きの表情を浮かべた。さすがにリノス様からそこまで命令されていないのではと言った兵士に対して、マトカルは自信満々の表情で口を開いた。

「リノス様であれば、必ずそうなされる。心配するな」

そう言ってマトカルは、馬に鞭を当てた。

フェアリードラゴンが現れたということは、アガルタ軍本隊が、セーファンド軍に気づかれることなく、目的の場所に達したのだ。そうなれば、あとは力と力の戦いになる。ここで、まだ無傷のマトカル隊が西側から山に攻め上れば、セーファンド軍を包囲する形になるし、敵は動揺することだろう。そうすることこそが、この戦いを優位に進めることになるとマトカルは考えていた。

その予想は正しかった。敵は西側にはほとんど兵士を配置しておらず、彼女らは易々と敵の背後を突くことができた。案の定、セーファンド軍は大混乱に陥った。この戦いは夜戦になると予想して準備してきた旗や幟のお蔭で、自軍同士が斬り合うこともなく、マトカルらは次々と敵を打ち倒していった。

やがて、兵士たちが武器を捨てて逃げだした。彼女は彼らのために道を開けてやり、逃げる者は斬らずにそのまま逃がしてやった。退路が開かれたと勘違いしたセーファンド軍は一気に瓦解した。次から次へと逃げる兵士たち、そして、それを押しとどめようとする司令官の怒号が響き渡り、戦場は混乱の様相を呈した。

朝日が昇り、周囲が完全に明るくなる頃には、すべての戦闘が終わっていた。

セーファンド軍の大半は逃亡し、残った者は、武器を手放して降伏の態勢を取った。マトカルらを見つけたリノスは、笑顔で手を振りながらこちらに向かってやって来た。

「おおマト！　敵の背後を突いてくれてありがとうな！　助かったよ！」

「いや、リノス様の命令にないことをしてしまった」

「そんなことはない。それでいい、それでいいんだ」

彼は満面の笑みを浮かべながら、マトカルとその部下たちをねぎらった。

「マトのお蔭で、思ったより早く敵が崩壊してくれた。アガルタの被害も、ケガ人こそ出たが、死んだ者は皆無だ。これもマトらのお蔭だ、ありがとう」

そう言って彼は、馬上のマトカルを抱きしめた。彼のその大胆な行動にマトカルは驚きを隠さなかったが、鎧越しではあるが、ジワジワと伝わる彼の温もりに、何とも言えぬ懐かしさを感じるのだった……。

第七百五十九話　捕らわれし者たち

「引き上げたぁ！？」

俺は思わず大きな声で、そんなことを口走ってしまった。周囲にいた者全員の視線が俺に集まっている。取り敢えず、オホンと咳払いをしておく。俺にとっては、それほど予想を超えた内容の報告だったのだ。

「詳しく調べてくれ」

俺の言葉を受けて、オワラ衆のサモンはゆっくりと頭を下げた。

「リノス様」

ちょうどそのとき、マトカルがやって来た。彼女はこの山の頂上にいる総司令官らを捕らえに行っていたのだ。どうやら、無事にコトがすんだらしい。

「その顔を見ると、特に何の問題もなかったようだな」

「ああ。総司令官を名乗る男が、訳のわからぬことを言っていたが、息子と名乗る男に説得されていた」

「あー、うん。何だか想像がつくよ」

そう言って俺は苦笑する。

当初、総司令官の捕縛は、ホルムが行くと言い出したのだが、俺はそれを却下した。ホルム自身は、お互いに顔も知っているので、話がしやすいだろうと考えていたのだろうが、むしろ逆だ。ホルムが捕らえに行ったならば、相手は激高して暴れる可能性すらある。そうしたことを知ってか知らずか、ホルムを制してマトカルが、自ら行くと言ってくれたのだ。

しばらくすると、シャツ一枚の姿になった男たち数名が連行されてきた。全員、後ろ手に縛られていて、両脇を兵士たちに抱えられている。

男たちは総勢十六名だった。その中には、サーマの姿もあった。

マトカルの指示で、全員が俺の前に座らされる。総司令官が俺の目の前に座らされている。彼は俺とは目を合さず、ただ、両目を忙しく動かして、動揺していた。

「アガルタ王のリノスです。初めまして……の方もいらっしゃれば、そうでない方もいらっしゃいますね。この度のこと……。戦場での勝ち負けは時の運だと思っています。今回はたまたま我々が勝ちを拾った形になりましたが、あなた方の戦いも、決して恥ずべきものではありませんでした」

俺はそう言って、用意された椅子に座る。毎回思うことだが、こうやって捕虜を引見するのは、何とも言えぬイヤな気分になる。一応、定型文のような挨拶を述べるが、相手は決して心中穏やかではないだろう。こうすることが礼儀となっていることとはいえ、これは変えた方がいいんじゃないかと思う。

そんな俺の気持ちを察したのか、サーマが口を開く。

「そのような堅苦しい挨拶はなしにしましょう、アガルタ王様。あなたは勝者なのです。我々をご存分に裁かれるとよいでしょう」

「そうですね、サーマさん。では、先にあなた方への処断を伝えましょう。まずは、縄目を解き、椅子を用意してくれ」

兵士たちは一瞬、虚を突かれたように体を震わせたが、やがてすぐに彼らの縄を解き、椅子に座らせた。マトカルは無表情のままだが、結界が使えないのにそんなことをして、襲われでもしたらどうするのだと心の中で思っているに違いない。だが、俺の周囲には、目には見えていないが、オワラ衆が控えている。それに、クノゲンらもいる。襲われる可能性は限りなく低いと見ているのだ。

捕えられた者たちは、ノロノロと椅子に座る。そのタイミングで、俺に一枚の紙が手渡される。捕らえた者たちの一覧表だ。見れば、司令官クラスの者はほとんどおらず、下士官や一兵卒の者が大半だった。察するに、総司令官に伝令や戦況を報告に来た者たちが、たまたま捕らえられてしまったのだろう。そう言った意味では、彼らはツイていないと言える。

その中で、思わず体を震わせる名前があった。総司令官の名前が、セーファンド・リイン・ブートと記されていたのだ。やっと、彼の名前がわかった。ブートさんというのですね……。

そんな総司令官は、まるで魂が抜けたようにグッタリとしている。

「俺からの処断は、総司令官及び司令官の職にある者以外は、好きな時間にお引き取りいただいて結構です。さすがにセーファンド帝国まで送り届けることはできませんが、もし、旅費の持ち合わせが

なければ、些少ですがお貸しします。返済は、気の向いたときで、出世払いでも結構です」

そう言って俺は、行っていいよというメッセージを込めて頷く。兵士たちが、解放の対象となる捕虜を促して下がらせる。彼らは俺の言葉が信じられないと言った表情を浮かべていたが、俺としては、そんな兵士たちの命を取ったところで得をするものは何もない。それよりも、故郷に帰って幸せな生活をしてもらった方が、百倍得になるというものだ。

「さて、残った方々には少し、聞きたいことがある」

俺の言葉に、司令官たちはスッと背筋を伸ばす。

「……殺せ」

小さな声が聞こえた。誰が言ったのかと思っていると、何とそれは、総司令官ブートの声だった。彼は体を震わせながら、さらに言葉を続ける。

「私の首を獲って、末代までの誉れとするがいい」

「いらない」

「……」

「あなたの首を獲ったところで、俺たちには何の得もない」

「……どこまで私を愚弄すれば気が済むのだ」

総司令官はガバッと顔を上げると、血走った眼で俺を睨みつけた。

「戦いに敗れ、あまつさえ縄目の辱めまで受けた。貴様はまだ私を嬲ると言うのか！」

ブートは肩で息をし、その双眸には深い憎しみが見て取れた。

「アガルタ王様」

口を開いたのは、サーマだ。彼は立ち上がっていた。

「何だい？」

「畏れながら、なぜ、私たちを、セーファンド軍を攻撃したのでしょうか？」

「何故……。ミトス王国を救援するのに、この山に居座るセーファンド軍と、その北側に陣を敷くノーノ軍が邪魔になると思ったからです」

「……我々には、全くアガルタ軍の動きが掴めませんでした。まさか、四方から攻撃されるとは思ってもみませんでした」

「まあね。それがバレていたら、今回の勝利はなかった。クノゲン率いる部隊が囮になっている間に、俺が率いる本隊が北側の尾根を登り、ホルム率いる別動隊が、間道を抜けて南側から攻撃を加える……。一番難しかったのが、三隊の動きを揃えなければならないことだった。どれか一隊が先行してもいけなかったのだけれども、皆、上手く動いてくれた。あ、西側から攻撃を仕掛けたのは、俺の命令じゃない。妻のマトカルが自発的にやったことだ」

サーマは目を閉じて天を仰いだ。

頂上からは、戦いの趨勢がよく見て取れた。本隊と思っていた正面の軍勢は確かに、あと一歩で逆落としをかけられるところまで押していた。だが、その直後、北側の尾根から攻撃を仕掛けられ、同時に、南側からも攻撃が仕掛けられた。続々とセーファンド軍に殺到するアガルタ軍はまさに、強者が弱者を駆逐する有様だった。サーマも、父のブートも、ただ、それを見ている他なかった。

部隊が大混乱に陥り、兵士たちが逃げ出そうと戦線が瓦解した直後、西側からアガルタ軍が現れ、戦場は悲鳴と絶叫がうずまく様相を呈した。兵士たちは我先へと逃げだし、あれだけ美しく隊列を整えていた軍勢が一瞬にして崩壊したのだった。

ここに至って、サーマたちがとるべき道は二つだった。一つは自決、もう一つは、捕虜となって辱めを受けるかのいずれかだった。彼は父に決断を促したが、父は眼を見開いて小刻みに震えたまま、何も喋らなかった。そんなことをしている間に、鎧を装備した女性が現れ、淡々とした口調で、自分はアガルタ王の妃のマトカルであること、王の名代でセーファンド軍の者を捕らえる者であることを告げ、サーマらを捕虜としたのだった。

眼を開けてアガルタ王を見る。サーマはようやく、セーファンド帝国は絶対にこの王には勝てないと理解した。そのとき、不意にアガルタ王が口を開いた。

「さて、あなた方に聞きたいことがある。これは、一切の嘘偽りなく答えて欲しい」

その言葉に、ブートを含めた全員が固まった。

第七百六十話　心はひとつ

ブートらセーファンド軍の尋問を終えたリノスは、無言のままその場から離れた。彼が向かったのは、元々、総司令官ブートが使っていた休憩用のテントがある場所だった。彼の後ろには、妻のマトカルを先頭に、クノゲンとホルムが続いていた。

「さすがに寒いな」

山の中に加えて、そこには人気が無かった。ふと見ると、ブートらが暖を取っていたと思われる焚火の跡があった。その傍らには、散乱した薪が落ちていた。ホルムはそれを素早く集めると、焚火の跡に持っていって、手早く火をつけた。少しずつ火の勢いが増していくにつれて、周囲が温もりに包まれていく。

「見事なものだな」

「いいえ、このくらいのことなど朝飯前です」

驚くリノスに、ホルムは笑顔で答える。そんな彼にマトカルが、他の兵士たちにその心構えと迅速に火を起こす方法を教えてやって欲しいと言い、ホルムは大テレにテレてみせた。

「さて、先ほどのことだけれども……」

リノスの言葉に、全員の顔が引き締まる。

「先ほどのセーファンド軍の連中の態度、ホルムはどう思った」

ホルムは、ときどきリノスからこのようなことを訊かれることがあった。マトカル、クノゲンといった大幹部の前で、司令官としての能力を試されているようで、決して気持ちのいいものではなかったが、ここで逃げを打つわけにはいかなかった。

「総司令官殿以下、あそこにいた司令官全員が我々の眼を見て、知らないと答えました。しかし、サーマ様のだけが、顔色が変わられて蒼白となり、我々から視線を外しました」

「ということは、サーマが真実を知っている、ということかな」

「いいえ、真実は、あそこにいた全員が知っているでしょう。むしろ、サーマ様がボロを出したおかげで、それが真実であると確信しました」

「では、俺たちはどうすればいいと思う」

「この山に留まるべきだと思います」

「敵が攻撃を仕掛けて来なかったらどうする。守りを固めて膠着状態となったらどうする」

「そういうことはありません」

「なぜ、ないと言える。海上にはカルートレン軍四万をはじめ、敵の兵力が無傷のままが健在だぞ」

敵軍の指揮官たちは大したことはないが、それでも、圧倒的な兵力は油断ができないとリノスは言ったのだ。

「はっ、もし敵が守りを強化するようなら、敵が何らかの動きを見せるような工夫をいたします」

「その手立ては？」

「ただ、この山に籠っておればいいと存じます。カルートレン、エルスモ軍は遠征軍です。豊富に食糧があるとは思えません。一方、我々には、リノス様の転移結界があります。魔法の使える場所にそれを張っていただき、そこから食糧を供給し続けられれば、我々はかなりの期間、ここに留まることが可能です。なぁに、敵が動かずにいられるのも、長くても一週間でしょう。数日のうちに、引き上げるか、攻撃に移るか……。何らかの動きを見せるものと思われます。我々は、敵の動きに注意を払い、その動きを見逃さぬようにすればよいでしょう」

リノスは、頷いた。いいとも悪いとも言わなかったが、ホルムの答え方に満足していることだけは、はっきりしていた。

「クノゲンはどう考える」

クノゲンは、ホルムにとって最もよき理解者であり、後ろ盾となっていた。突然、セーファンド帝国から部下と共にやって来て、いきなり大佐という地位に就いたホルム。当然、内部では様々なやっかみもあり、つらい立場に立つこともあった彼を、アガルタ軍に馴染ませたのは、ひとえにクノゲンの働きのお蔭と言えた。リノスはそのクノゲンが、ホルムのよき協力者となっているのを、心温まる思いで見ていたのだ。

「私も、ホルムと同じ考えですな」

クノゲンはホルムを立てた。リノスはその謙虚さに内心で満足しながら、

「さすが男同士、相通ずるものがあるようだ」

リノスはマトカルに言った。マトカル、クノゲン、ホルムの三人の司令官のうち、マトカルが一番の上位だから、彼女に同意を求めたのだ。

「ホルムの意見に同感だ。敵の動きを察知し、動きがあればすぐにこちらも行動に移すことが肝要だ。そうとなれば、この度の戦いは、敵にアガルタには絶対に勝てないと思わせる戦いでなければならない。少々の犠牲を払っても、敵の城の一つや二つを攻め取らねばならない。その城は……ここだ」

マトカルは懐から戦況図を取り出して拡げて指さした。それと同時に、クノゲンとホルムが確信を持った目で頷いた。

リノスは大きく頷いた。なんと賢い、気心のあった者たちであろうと思った。自分が一言も言わずとも、その胸中を、そこにいた者はすべて察していたのだ。このように、皆の心がピッタリ合ったときこそ、戦力が、倍にも三倍にも発揮されるのだ。リノスはふと、敵方の軍議を想像した。きっと、それぞれの思惑が交錯して結論が導き出せず、長たらしい軍議を重ねている姿が思い浮かんだ。思わず笑いが出そうになった。今回の戦いは間違いなく上手くいくという自信が、リノスの顔を明るくしていた。

「御免……」

突然、どこからともなく声が聞こえたかと思うと、黒い覆面をした大男が現れた。言うまでもなく、オワラ衆のサモンだ。彼はリノスも近くに寄ると、小さな声で何やら呟いた。

「……なるほど。よくわかった。下がって休んでくれ」

リノスの言葉に、サモンはゆっくりと頷いた。

「さて、では、ヴァイラス公爵を呼んできてくれないか。あの、元帥は呼ばなくていい」

リノスの言葉に、マトカルは無言で踵を返してその場を去った。

ちょうど陽が傾きかけた頃、ヴァイラス公爵がリノスたちの許にやって来た。

「お待たせしました義兄上。話は承りました。セーファンド帝国軍とノーノ軍を一日のうちに撃破するとは、さすが。アガルタ軍の強さは見事なものですね」

そう言って彼は柔和に笑った。リノスは空いている席に座るよう促して、出し抜けに口を開いた。

「ヴァイラス公爵、ヒーデータ帝国軍におかれては、海上よりカルートレン軍を攻撃していただきたいのです」

「……今すぐに、でしょうか」

「何も先制攻撃を仕掛けてくれとは言いません。カルートレン軍が動いたら、すぐさま攻撃を仕掛けて欲しいのです」

「……承知しました。義兄上、敵に何か動きがあるのでしょうか」

「今はないですが、おそらく、ここ数日のうちに何らかの動きがあると俺たちは見ています。アガルタ軍がこの山に留まる限り、それは確実に起ると考えています」

「承知、しました」

「元帥をはじめとして、帝国軍の司令官たちが攻撃に反対するかもしれませんが、そこを曲げて、攻撃に転じてもらいたいのです」

「……一体、どうなされたのです、義兄上」

「ミトス王国は、カルートレン、エルスモらと繋がっている可能性が高いのです」

「え？　何と言われました？」

「表向きは、ミトス王国は、カルートレン、エルスモ、セーファンド、ノーノの軍に包囲されているということですが、これらはすべて裏でつながっている可能性が極めて高いです」

「……一体何を根拠に」

「俺たちがセーファンド軍に攻撃を仕掛けたとき、ミトスの王都から騎馬隊数百機が出撃しました」

「……それは、アガルタ軍を援護するためでは」

「そう思いたかったのですが、彼らは俺たちがこの山を占拠したと同時に、引き揚げてしまいました」

「ま……まあ、ミトスは現在、包囲されていますから……」

「俺たちがこの山を占拠してはや一日が経とうとしていますが、ミトス側から使者の一人も寄こしていません」

「……」

「いま、調査中ではありますが、俺たちがセーファンドを攻撃したと同時に、この山から走り馬でミトスの王都に向かった者がいるようです。その者は再びこの山に帰ってきたようです」

「ま、まさか……」

ヴァイラス公爵の顔が青ざめていた……。

第七百六十話　心はひとつ（後書き）

ｃｏｍｉｃブースト様にて、コミカライズ３３話後編、公開中です！
リノスとリコの初夜？シーンの回です（汗）。バーサーム一家も久しぶりに登場！是非、チェックください！
ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６

第七百六十一話　長評定のさなか

同じ頃、ミトスの王都であるロークルでは、リノスが予想した通りの光景が繰り広げられていた。

ロークル城では、王妃レアルを中心に、ミトス王国軍の関係者が軍議を重ねていた。そこには、カルートレン帝国軍から派遣された二人の司令官と、エスルモ帝国からノマサが参加していた。

「なぜ、兵を引いたのだ！　あれではむざむざ、我らの策をアガルタに教えたも同然ではないか！」

「それこそ不自然の極み。まるで我らがアガルタの行動を事前に知っていたことになります」

「ただ、事実として、アガルタはハザ山、ヘズ山を占拠している。ここに居座られては、我々は喉元に刃を突き付けられたも同然。一刻も早く何らかの手を打たねばなりません」

「喉元に刃を突き付けられたとはどういう意味だ」

「ハザ山、ヘズ山からここロークルまでは遮るもののない一本道。アガルタがロークルに向かって突撃すれば、ヤツらは易々と王都まで攻め上ることができるではないか。貴様は何年軍に籍を置いているのだ。そんなこともわからんで、よく司令官などやっておられるな」

「何だと貴様、もう一度言ってみろ！」

「まあ、待て。待つのだ。何もアガルタに我らの策を悟られたと決まったわけではない。まずは、アガルタの様子を窺ってはどうか。今からでも遅くはない。使者を遣わし、お礼言上と称して、敵の様子を窺ってはどうか」

「そんなことをして何になる。アガルタはセーファンド、ノーノ軍を壊滅させているのだぞ。すでに捕らえた兵士から、我らの策を聞いておるわ」

「では、どうせよと言うのだ！」

「それを先ほどから散々話をしているのではないか！」

ロークル城の軍議は万事この調子であり、カルートレン帝国の司令官は無言のまま、ただ茫然と事の成り行きを見守っているし、ノマサは、今にも爆発しそうな感情を必死で押し殺していた。そんな中、王妃レアルは、無表情でただ、目の前の軍議を眺め続けていた。

「お……王妃。我らは、どうするべきであろうか……」

レアルの隣に控えていた国王、カインが小さな声で呟く。彼はただ、オロオロと不安を隠そうともせず、ただじっとレアルに視線を向けていた。

彼女は心の中で舌打ちをする。普段は優しく、気立てがよく、上品であるため、国王として威厳ある立場を保てていたが、こうした戦いの場においては全く役に立たない男だった。彼女としても、何らかの打開策を講じたかったが、正直、何をすればよいのかわからない。そこにきて、隣の夫は、事あるごとに彼女に話しかけて、思考

を邪魔するのだ。平時は、理屈で納得させさえすれば、唯々諾々と彼女の話を聞き入れてくれる、実に使い勝手良い男であったのが、今では、完全に足枷となっていた。ただ、こんな状況に陥るとは、レアル自身も予想もしていないことだった。

レアルは周到に周辺国の情報を把握し続けていた。ノーノとエルスモがセーファンドに攻め込み、敗れたこともいち早くその情報を入手していた。さらには、セーファンドにアガルタから軍事アドバイザーが派遣されていることも掴んでいた。

セーファンドは言うまでもなく、レアルの母であるエリザベートの出身国だ。そこにアガルタの者が遣わされたということは、取りも直さず、それを命じたのは兄であるヒートであることは明白だった。

レアルの頭の中に、姉であるリコレットが、アガルタ王に進言する姿が描き出される。事細かに指示を出す姉。それを従順に聞き入れる夫……。アガルタは万事このような様子で現在の隆盛を作り上げたのだろう。

悔しかった。姉を差し置いて、この大国ミトスの王妃として嫁いだことで、あの姉には勝ったと思っていた。姉は、あろうことか国家に反逆し、反乱を起こした。てっきりそのまま死を賜るものと思っていたところに、ジュカ出身の奴隷上がりの平民に嫁いだと聞いたときは、彼女は喜びを抑えることができなかった。あの気位の高い姉が、いくら侯爵の養子とはいえ、奴隷上がりの平民にその肌を許さねばならないのだ。苦悶の表情を浮かべながら夜な夜な男に蹂躙される様を思い描いては、レアルは溜飲を下げていたのだった。

彼女は幼いころから姉と比較され続けた。教えられたことは一度で覚え、何事も器用に身に付けていく姉に対して、レアルにはその器

用さはなかった。いくら勉強しても、知識や教養では姉には遠く及ばなかった。だが、その代り、彼女にはもって生まれた愛嬌というものがあった。そこで彼女は、従順な姫を演じることで周囲の評価を上げるよう努力した。その甲斐あって、ここミトスの王妃として嫁ぐことができ、ここでも先王の歓心を買うことに成功し、かなり自由に振舞うことができるようになっていった。

一方で姉は、気が付けば兄・ヒートの後ろ盾を得てアガルタという国家を樹立し、あれよあれよという間に世界最強国の王妃に上り詰めていった。勝てる見込みのない戦いを繰り返しては、必ず勝利していくアガルタ。レアルはその報告を聞くたびに、自分がこれまで築き上げてきたものが音を立てて崩れていく感覚に囚われていた。

いずれ、この国もアガルタに飲み込まれるのではないか。そんな懸念を持ち始めていたとき、先の戦いが起こった。ノーノ、エルスモは大損害を受けて撤退したが、エルスモの皇太子であるノマサは助かり、復讐の念を燃やしているという情報を得た。そのとき、レアルの頭の中に、ある作戦が閃いたのだった。

ノマサはセーファンドを打倒するべく憎しみの炎を燃やしている。それを利用する。先の戦いで、ノマサが敗れたのはセーファンドではなく、アガルタであることを伝え、真の敵はアガルタであり、アガルタを討伐することこそ、両国の懸念を払しょくすることに繋がり、ひいては、この世界を平和に導くことなのだ。そのために、このミトス王国にアガルタの軍勢を引き寄せ、一網打尽にする用意があるとノマサに伝えさせたのだ。

使者に立った近習のフィーゴは実にうまくノマサを焚きつけてくれた。ノマサは非常に優秀な男であり、瞬く間にノーノとセーファンド帝国を参戦に導いた。そしてレアルは、長年の友好国であったカ

ルートレンをも参戦させることにも成功した。あとは、アガルタをおびき寄せるだけだった。

コトはレアルが思い描いた通りに進んだ。唯一、ヒーデータに皇帝のヒートが参陣せず、もう一人の兄であるヴァイラスが来てしまったことが予想外だった。本来はこの戦いでヒートをも討ち取り、ヴァイラスを帝位につけることをも目論んでいたが、それは叶わなかった。ただ、レアルはヴァイラスの命を奪うつもりは毛頭なかった。ヒーデータには静観してもらい、アガルタが敗れた暁には、そのまま撤退してもらうだけでよかった。

レアルの立てた作戦はこうだ。王都ロークルの前面に広がる海は、干潮になると広い砂浜と化す。そこにアガルタ軍を引き入れて、王都の城壁の前まで進ませる。そうしておいて、ミトス、セーファンド、ノーノ、エルスモの三方から攻撃を仕掛ける。時間が経てばたつほど、アガルタは満ちてきた潮の中に追い込まれることになる。また、この国では魔法の効果が薄れる。アガルタ王はかなりの魔法の使い手であり、アガルタが装備している武器・防具も魔法の効果が付与されていると聞いているが、ここミトスではそれは封じられる。万に一つも負ける要素のない戦いだった。

しかし実際は、セーファンド、ノーノがあっさりとアガルタにしてやられ、逆にミトス側は大いなる脅威にさらされている。一体何故こうなった。どこで間違えたのか……。レアルがそんなことを考えていたそのとき、激しく机を叩く音が聞こえた。

それは、エルスモのノマサだった。

第七百六十二話　ミトス評定

「いつまでつまらない議論を重ねるつもりだ！」

ノマサの眼は吊り上がっていた。何かに取りつかれているような雰囲気を纏っている。その異様な雰囲気に、同席している者たちは思わず息を呑んだ。

「簡単な話ではないか。全兵力をもってアガルタに攻撃を仕掛ける。数の上ではこちらが有利なのだ。力攻めに攻めて攻めて、アガルタを徹底的に叩き潰せばいいのだ」

誰もノマサの話に反論する者がいない。

「皆が考えていることは、私には手に取るようにわかる。ある者は、アガルタ軍は精強だから、このくらいの兵力差など問題にしないのではないかと考え、ある者は、我が軍は戦いに慣れていないので、アガルタ軍と戦えば、太刀打ちできないのではないかと考え、ある者は、海上に展開するヒーデータ軍のために、カルートレン軍が使えない。そうなると、兵力差はアガルタとは変わらない。アガルタは山に籠っている。それを打破するためには少なくとも倍以上の兵力でもって攻撃するのが定石だ。それに則れば、今現在、残存兵力だけでアガルタに攻撃を仕掛けることは避けた方がいいのではないかと考えている。そして……」

ノマサは、ただ茫然と会議の成り行きを眺めている、カルートレン軍の司令官たちに視線を向けた。

「現状を維持すれば、そのうちアガルタは撤退するのではないかと考えている者すらいる！」

図星を突かれたためか、カルートレンの者たちの顔が強張る。その様子を横目で睨みながら、ノマサはさらに言葉を続ける。

「ここにいる者たちは、敢えて動かぬ理由を考えているようにしか私には見えない。今の状況で最悪の戦略とは何か。それは、動かぬことだ！」

「畏れながら殿下、静観も立派な戦略であると存じます」

口を開いたのは、ミトス王国軍の参謀長であるムタだった。彼は慇懃な態度で、まるで、噛んで含めるような言い回しでノマサに対して口を開く。

「よもやノマサ殿下ともあろうお方が、やみくもにアガルタ軍に対して突撃するべしであるとお考えではありますまい。そんなことをすれば、兵士を犬死させてしまいます。我らはできるだけ、効率的効果的に敵を殲滅せねばなりません。そのためにはまず、敵の状況を知ることが先決。畏れながら我が国は鍛え上げられた斥候部隊がおります。今、その者たちが全力でアガルタの現状を調べております。これからのことは、その結果を見てからでも、遅くはないかと存じます」

「その鍛え上げられた斥候部隊が、アガルタの現状を把握するためには、何日必要なのだ」

「少なくとも、あと数日の猶予をいただかねばなりません」

「それでは遅い！」

ノマサは両手で机を叩く。ドン、という大きな音が部屋に響き渡る。その音の大きさは、ノマサの抱える怒りをあらわしているかのようだった。

「お気持ちはよくわかります。痛いほどよくわかります。まさに殿下の言われる通りでございます。エルスモ軍は兵站に不安を抱えていらっしゃいますね。しかし、ご安心ください。食料に関しては、我が国がいくらでも都合いたしましょう。それであれば、持久戦にも耐えられます。ええ、十分に耐えられますとも」

ムタは猫なで声を出してノマサを宥める。そんな彼をノマサは、憎しみのこもった眼で睨みつけている。ムタには、ノマサの考えが手にとるようにわかっていた。この男は、ただ、アガルタ王の首を獲ることだけに執心している。だが、それでは勝ったとはいえないのだ。アガルタの軍団を制圧してこそ、勝利なのだ。アガルタ王の首を獲る、獲らないは問題ではない。一番の問題は、いかにアガルタ軍の心を折るか、なのだ。

そんなことを考えながらムタは、チラリと王妃レアルに視線を向けた。相変わらず気品ある顔立ちを崩すことなく、泰然とこの会議の成り行きを見守っている。王妃様の真の目的は、アガルタ王の妃にして、実姉であるリコレットに敗北感を与えることだ。確かに、アガルタ王の首を獲れば、このミトス王国の国威は上がり、さらには、リコレットに大きな心理的打撃を与えることができるだろう。しかし、リコレットの性格を考えると、彼女はその悲しみを乗り越えることだろう。そして、その暁には、間違いなくその聡明な頭脳をもって、このミトス王国に侵攻してくることだろう。そうなっては、アガルタだけではなく、ヒーデータ、ニザ、ラマロンをも敵にする

ことになりかねない。そうなれば、戦いは泥沼化する。それだけは絶対に避けねばならなかった。

ムタは考えていた。アガルタ軍を殲滅することができなくなった以上、最も効果的効率的な勝利を収めるためには、アガルタが食糧を切らして疲弊し、撤退するのを狙うほかない。撤退に移ったそのときを狙って追撃をかける。アガルタ王の首が取れれば理想的だが、もし、それができなくとも、アガルタ軍を壊滅させ、潰走に追い込めれば、目的は達成される。戦いは犬の扱いと一緒だ。吠えた犬を叩き潰すと、しばらくの間は犬は吠えて来ない。それと同じだ。

一方のノマサは、ムタとは真逆の考えだった。今、アガルタ軍には、アガルタ王リノスをはじめ、マトカル、クノゲンが参陣している。言わば、アガルタ軍を動かしている最高幹部が揃っているのだ。この三人を討ち取ることができれば、間違いなくアガルタは瓦解する。おそらく、アガルタ軍は軍としての体裁をなさなくなるだろう。後継者がいない……新興国が抱えがちな問題をアガルタも抱えている。この三人を討ち取ることができれば、アガルタは死んだも同然となる。それこそが、真の勝利と言えるのだ。

この二人の真逆の考えは、決して相容れぬものがあった。王妃レアルは、その状況を冷静に把握し、その打開策をひたすら考えていた。

「皆さま、少々気が高ぶっておられるようです。本日の会議はこれまでとして、また明日、あらためて話し合いをしはいかがでしょう」

突然、カルートレン軍の司令官が口を開いた。渡しに舟とばかりに、列席していた者たちが小さく頷いている。

「ムタの言う通り、アガルタの現状について我らは未だ情報を得て

いない。ムタ、そなたは急ぎ、アガルタの現状を調査した結果をまとめよ。それをもって明日、作戦を立てることとする」

レアルの言葉に皆が一様に頭を下げる。だが、ノマサだけは、ぶ然とした表情を浮かべながら、席を蹴るようにしてその場を去っていった。

同じ頃、ヒーデータ帝国の軍船においても、軍議が行われていた。

そこでは、ミトスのように喧々諤々とした議論が交わされることはなく、ただ、重苦しい沈黙が支配していた。ヴァイラス公爵とグレイジア元帥は無表情のままだ。その二人を気遣うように、他の司令官たちも沈黙を貫いている。

「何度も申し上げますが、我らはこの戦いに参加するつもりは毛頭ございません」

沈黙を破るように、グレイジア元帥が口を開く。彼の口調は、この議論はもう終わりだと言わんばかりだった。

「ひとつ、確認したいことがある」

ヴァイラス公爵が口を開く。グレイジア元帥は、露骨にイヤそうな表情を浮かべた。

「将軍、あなたはミトス王国と何かつながりがあるのではないか？」

「……仰る意味が分かりかねますが」

「ミトス王国……つまりは、我が妹レアルと、何かつながりがある

のかと聞いている」

「あろうはずがありません」

「そうですか。それでは、これは何でしょうか」

ヴァイラスは懐から数枚の書簡を取り出す。その瞬間、グレイジアの表情が一変した。そこには、グレイジアあての書簡が置かれていた。

第七百六十三話　アガルタの強さ

グレイジアの表情が険しくなっていく。

「将軍、あなたは元々、レアルの身辺警護を担当していた武官だったお方だ。その妹に泣きつかれて、断れなかった……そうではありませんか」

「……」

ヴァイラスの言葉に、グレイジアは無言のまま体を震わせている。

「兄上……。公爵様は兄上を責めているのではありません。むしろ、兄上を救いたいとお考えなのです。レアル様と帝国の板挟みになって苦悩していた……。そうでしょう、兄上」

口を挟んだのは、司令官の一人であるサカゲという男だった。兄であるグレイジアに勝るとも劣らぬ能力を持つと評されていたが、どちらかというと勇猛さよりも調整能力を評価される指揮官でもあった。

彼は身を乗り出すようにして言葉を続ける。

「兄上、帝国を出発するとき、我らは陛下より、アガルタの軍勢を当てにせず、帝国軍の力をもってミトスを救援せよとの命令を受けております。アガルタに戦功をあげられている今、我らは全力をもって眼前の敵を打ち破る外ないのです」

「お前は黙っていろ」

低い、怒りを必死で抑えている声が聞こえた。見ると、グレイジアの体が震えている。

「兄上！」

サカゲが口を開くと同時に、グレイジアは短剣を抜き、それを自身の喉笛に突き立てていた。まさに一瞬の出来事だった。グレイジアは目の前の机に突っ伏すような形で倒れている。そして、床には彼から流れ出た血がじわじわと広がっていた。

「……将軍の亡骸を」

ヴァイラスは努めて平静を装いながら、周囲にいた者たちに命じる。その顔は蒼白だった。

「このことは誰にも漏らすな。グレイジア将軍は、急な病で亡くなられた。兵士たちにそう伝えよ」

ヴァイラスの言葉に、そこにいた全員が頭を下げた。

自室に戻ったヴァイラスは、椅子に腰かけると同時に大きなため息をついた。懐からレアルの書簡を取り出して拡げてみる。美しい字だ。気品を感じさせる妹らしい字だった。

レアルから送られてきた書簡は三通あった。一通目が、まだ出陣する前に送られたもので、グレイジア将軍が赴くと聞いて喜んでいると書かれてあった。さらには、戦いはアガルタにまかせて、ヒーデータはできるだけ静観するように、無駄に兵士を失わぬようにと書

かれてあった。二通目は、ミトス海に着陣した直後に送られたものだろう。くれぐれも軍勢を動かさぬようにと釘を刺してあった。ヴァイラスは書簡のある部分に目を止め、小さな声で呟いた。

「……そのうち、将軍が驚かれるようなことが起こるかもしれぬ、か」

三通目は、アガルタがセーファンド軍に勝利した直後に送られたと見られ、戦いの様子を報告するとともに、決して軍を動かさぬよう再度釘を刺しているだけでなく、ヒーデータが動かなければ、カルートレンの軍船は決して動くことはないと書かれてあった。

リノスからこの書簡を渡されたとき、ヴァイラスは心臓が飛び出るほどに驚いた。これは間違いなく、グレイジア将軍が自室の引き出しに大事にしまっていたものだ。将軍が寝起きするのは、将校専用の部屋だ。ヴァイラスの部屋もそこにあり、将軍の部屋とは、廊下を隔てた向かい側にあった。このエリアの入り口には、兵士たちが二十四時間体制で警備しており、怪しいものは蟻一匹通さない態勢が敷かれていたはずだった。それを、あの義兄は手下の者を易々と忍び込ませ、この書簡を盗み取った。ヴァイラスは、アガルタの本当の強さを垣間見た気がした。

「リノス殿とは、何があっても争うべきではないな。命がいくつあっても足りぬし、なにより、この国などは数日で吹っ飛ぶであろう」

いつの日か兄、ヒートが戯れにそんな言葉を吐いた。そのときは戯言だと聞き流していたが、あの義兄が本気になれば、自分の命を奪うなど朝飯前のことであろうし、ヒーデータを併呑することも簡単であろう。そう考えると、ヴァイラスの背筋に冷たいものが流れた。

彼はパンパンと手を鳴らす。すぐにドアがノックされ、兵士が入室してきた。

「はっ、お呼びでしょうか」

「見張りを多く立てよ。アガルタの動きから目を離すな。アガルタが攻撃に転じたと同時に、我々も攻撃に移る。準備を怠るな」

「ハハッ」

「あ、それから。グレイジア将軍が急な病にて亡くなられた。よって、これからの指揮はこの私が執る。そう皆に触れてまいれ」

「承知いたしました！」

兵士が退室するのを見届けた彼は、再び椅子に自分の体を預ける。我が軍にももしかしすると、将軍以外の者も、ミトスの手が伸びているのではないか……。そんなことを考えながら彼は、呆然と窓の外の景色に視線を泳がせるのだった。

◆　◆　◆

それから二日後、クノゲンはリノスの許に呼ばれた。

「これを見てくれ」

リノスは上機嫌だった。椅子に腰かけながらゆさゆさと貧乏ゆすりをしている。これは、よほど嬉しいことがあったのだなと思いながら、彼は目の前の椅子に腰かける。机の上には、大きな地図が広げられていた。

そこにはミトスの王都、ロークルとその周辺の地図が描かれていた。

「これは……」

「どうだ、俺はいい出来栄えだと思うんだ」

クノゲンは息を呑んだ。王都の構造が詳細に書き込まれている。いや、詳しすぎると言ってよかった。しかも地図にはそれだけでなく、その周辺の地形も描かれていた。どこに山があって、どこに窪地がある……軍勢を進めるうえで、クノゲンたちが最も知りたい情報が書き込まれている。こんな地図を描けるものは誰か。クノゲンは考えてみたが、アガルタ軍の中でそれらしきスキルを持った者は見当たらなかった。

「これは……見事なものですな。一体誰が」

「マトだ」

「マトカル様!?」

「ああ。マトの下にオワラ衆を付けたんだ」

リノスの言葉にようやく納得がいった。なるほど、それならば可能だなと、彼は心の中で呟いた。

目の前のリノスは、地図を眺めながら満足げな表情を浮かべている。確かに不慣れな敵国での戦いにおいて、その地形などの情報を得るのは戦いにおける必須事項だが、それを情報把握能力の高いマトカルに命じ、さらには、その下にオワラ衆を付けて短期間にこれだけ

のものを作らせる判断を下したその能力の高さに、クノゲンは舌を巻いた。

さらには、オワラ衆を見事に使いこなしたマトカルの指揮能力も、もはや神業と言ってよかった。この瞬間、クノゲンはこの戦いの勝利を確信した。

「で、リノス様であれば、このロークル城をどう攻めますか」

「俺は、ここだな。裏門だ」

「ほう、搦手、ですか。それはまたどうして」

「敵が城を出て戦うところは、裏門……搦手以外にはないからだ。ここには地形上、大軍を差し向けることはできない。この城は城壁の高さに目を奪われがちだが、この地図を見ると、城の周囲には二重、三重の空堀がめぐらされていて、なおかつ、馬止めなのだろうな、柵もあちこちに作られている。とすれば、狙うのであればこの搦手だ。少数精鋭の兵がここに向かうとすれば、敵もやはり、少数精鋭をもって迎え撃つだろう。おそらく敵はここを決戦の場所と考えているんじゃないかな」

「なにも敵の言うなりにならなくてもよいかと思いますが」

「搦手に敵の精鋭を引き付けておいて、四方から堀を渡って城に攻め上ればいい」

クノゲンは危うく称賛の声が出そうになるのを抑えた。我が王は、この地図を見ただけで、必勝の作戦を考えつくのか……。絶対に自分にはできないことを、この王は易々とやってのける……。まさに

目の前にいる方は軍神そのものだとクノゲンは心の中で呟いた。

「申し上げます！」

「どうした」

兵士が飛び込んできた。彼は真っすぐな視線をリノスとクノゲンに向けた。

「ロークル城の前に軍勢が展開しております。その数、一万！」

「城攻めの前に、やることができたな」

リノスは嬉しそうな顔をして立ち上がった。

第七百六十四話　撹乱

城から出てきた軍勢は、エルスモ帝国軍であることが程なくして知れた。軍勢は一列になって真っすぐに、アガルタが陣を張る山に向かって行軍を始めた。

「エルスモ軍だけで、あとはなし、か」

マトカルが作らせた地図を眺めながら、リノスは呟く。そこに、ホルムが口を開く。

「敵は一万、我らは二万。数の上では我らが圧倒的に有利ですが……」

「が、何だい？」

「私が考えているような展開にはならないかと思います」

「ほう、詳しく」

「そうですね……。一般的な答えであれば、一万の軍勢を二万の軍勢で取り囲んで殲滅するというものです。敵は一列になって海岸を進んでいます。我らは山沿いに兵を展開させて、折を見て、一斉に叩く。そうすれば、敵は殲滅できるはずですが……」

「今回はそうなりそうもない、と」

「そうです。何となく、なのですが」

「うん、それでいい」

リノスはそう言ってクノゲンに視線を向ける。彼は満足そうな笑みを浮かべる。

「ホルムの意見を採用しよう」

「え？」

リノスの言葉に、そこにいた全員が驚きの表情を浮かべる。そんな彼らに対してリノスは笑みを浮かべながら言葉を続ける。

「山の麓に五千の軍勢を、一万の軍勢を四隊に分けて尾根に沿って配置するんだ。残りの五千は後詰としてここに残る」

「リノス様……ちょっといいだろうか」

マトカルが口を開く。リノスは無言のままゆっくりと頷く。

「おそらく敵の狙いはリノス様の首だ。ここ本陣に決死の突撃を敢行するつもりだ。自軍の倍以上の軍勢を相手にする場合、勝つのはそれしかない。軍勢を分散させてしまえば、それだけリノス様の守りが薄くなる。ここは本陣を固めるという意味でも、この山の守りを固めた方がいいのではないだろうか」

彼女の言葉に、リノスは大きく頷く。

「そうだな。マトの言う通りだ。おそらく敵は俺の首をめがけて突撃してくるだろう。ただ、こう言っては何だが、敵の大将はあまり

足元が見えていないんだな」

「……」

「考えてもみろ。ここはエルスモではなくて、ミトスだ」

「あ……」

リノスの言葉に、マトカルが眼を見開く。そしてその直後、彼女は恥ずかしそうに俯いた。

「そうだ。その作戦を成功させるためには、戦場の地理を把握しておかなければならない。エルスモがどこまで把握しているのかは疑問だが、今の行軍の状況を見ている限り、この国の、俺たちが陣を張っている山の地理を完全に理解しているとは思えない」

「なるほど。我らにはマトカル様が作られた詳細な地図がある。これを活用して敵を討つのですな」

「そういうことだ」

「では、リノス様。本陣はどこに置かれますか。やはりこの山で？」

「そうだな……。前線に出て采配を振るうもよし、ここでマトの膝枕で昼寝をするのも悪くはないが……。あ、その前に、一つやってもらいたいことがある」

リノスの言葉に、全員が頷いた。

◆

◆

◆

「目指すはアガルタ王の首ただ一つ！　アガルタ王の首さえとれば、この戦いは終わりだ！」

ノマサは馬上でそう叫んでいた。敵の本陣を目指して突撃を仕掛ける。兵士や指揮官などに構わず、ひたすらアガルタ王リノスに向かって突撃するのだ。やれ、作戦だの、士気だのは関係ない。遮二無二に突撃を繰り返すのだ。

「殿下、よろしいでしょうか」

見ると、白馬に乗った騎士が側に控えている。ノマサは発言を促すように男に視線を向ける。

「ミトスの斥候から報告がありました。敵は、ハザ山の頂上に五千、その前方に五千の兵を配置しております。さらに、コルゾ山に四隊を配置しています。兵数はそれぞれ二千五百とのことです」

「……アガルタ王の本陣は」

「それが、まだわかりかねます」

ノマサは露骨にイヤそうな表情を浮かべた。わからないはずはないだろう、何をやっているんだと言わんばかりの顔だった。その感情を敏感に読み取った男は、懐から地図を出してノマサの前に広げた。

「おそらく、ですが、アガルタ王自身は、このハザ山の頂上にいるものと思われます」

「思われる、とは何だ。貴様の私見などは聞いていない。アガルタ

王の本陣を調べろ。作戦はそれからだ。それにしても敵はなぜ、こんなにのんべんだらりと兵を散らしているのだ」

「おそらく、我々を包囲、殲滅するためかと思われます」

「フン、それならば好都合だ。早く本陣を突き止めろ」

「申し上げます！」

ノマサの許に小走りに走り寄ってくる男がいた。彼は片膝をつくと、早口にまくし立てる。

「アガルタ王の本陣がわかりました！　コルゾ山の最先端とのことです！」

「ほう、考えたな。ハザ山の部隊を囮に使ったか。しかし、二千五百の兵力では、我が軍一万の突撃を避けられん。皆、聞け！　コルゾ山のアガルタ軍を攻める！」

ノマサの号令一下、エルスモ軍は素早く陣形を整えた。

「申し上げます！」

早速突撃の命令を下そうとしたそのとき、一人の騎兵がこちらに向かってきていた。出鼻をくじかれたノマサは、思わず舌打ちをする。

「何だ！　どうした！」

「アガルタ王リノスは、ハザ山の前に布陣している部隊にいます！　コルゾ山の部隊は囮です！」

「何だと？　よし、よくやった。皆、ハザ山に向かう。突撃！」

ノマサの号令で、エルスモ軍は一斉に馬首を西に向けた。

アガルタ軍の姿は程なくして見えた。ノマサはまだ見ぬアガルタ王の首を獲ることだけを念頭において馬を操る。そのとき、彼の耳に男の声が聞こえた。

「アガルタ王は後方に移動したぞ！」

「アガルタ王は北だ！　北の陣にいるぞ！」

「後ろだ！　アガルタ王は後ろにいるぞ！」

頭が混乱する。一体何が何だかわからずに、ノマサは思わず突撃を停止する。

「誰だ！　敵は目の前だぞ！　アガルタ王の居場所を掴んだのか！　報告しろ！」

ノマサの絶叫にも似た声が響き渡る。だが、彼の声に反応するものはない。不気味なほどの静寂が訪れていた。

「殿下」

呼吸を整えながら、一人の騎馬武者が近づいて来る。ノマサの右腕にして、側近のクロフだ。彼は落ち着いた声で、まるでノマサを宥めるようにして口を開く。

「情報が錯綜しております。敵の作戦である可能性もございます。様々な情報を流して、我らを混乱させようという狙いかもしれません」

クロフが指摘した通り、エルスモ軍にはオワラ衆が紛れており、リノスの命令で、様々な情報を流していたのだった。

「殿下、一旦軍を引きましょう。このままでは徒に兵の士気をさげるだけです。あらためてアガルタ王の居場所を確認しましょう」

ノマサは何かを言おうとした。しかし、その声を遮るように、一本の矢が彼らの傍に落ちてきた。その直後、まるでエルスモ軍を取り囲むようにして、数十本の矢が落ちてきた。そこにはすべて、細い紙が結び付けられていた。ノマサは一瞬身構えたが、アガルタ軍の攻撃がないことを確認すると、クロウに目で矢文を持って来るように命じた。

『どうか、このまま退却してください。あなたの家族の待つエルスモに退却してください。我々アガルタは、できるだけあなた方の命を奪いたくないと思っています。退却する者は追いかけません。どうか、退却してください。あなた方を斬ろうとする指揮官は、我々が討伐します。ただし、我々に攻撃を仕掛けるのならば、容赦はしません』

怒りのためか、ノマサの顔色が見る見ろ青ざめていく。こんなふざけた矢文など……と言いかけて彼は目を見張った。兵士たちが少しずつ後退していたのだ。

「おい……何をしているのだ。何を……」

彼が言葉を言い終わらぬうちに、兵士たちが一気に後退を始めた。兵士たちだけではない、司令官の一部も兵士と一緒に後退しているのが見えた。ノマサは馬上で呆然とその光景を見るしかなかった……。

第七百六十五話　地の利がある

エルスモ軍壊滅。その報告を王妃レアルは無表情のまま聞いた。

彼女の心の中には、それ見なさい、思った通りだという感情と、一万の大軍を失ってしまったという焦りが同居していた。

まだ、エルスモが獅子奮迅の活躍をして、アガルタに大きな損害を与えたのであれば、この先の展望も開けてくるのだが、与えた損害は実質ゼロであり、エルスモが自落する形で敗北したという報告は、レアルをはじめとするミトス側に大きな衝撃を与えた。

レアルは、ノマサの作戦を愚策だと腹の中で笑っていた。だが、その一方で、その決死の攻撃はアガルタに大いに混乱させるであろうという目論見も立てていた。しかし、その予想は外れ、むしろ、家来たちの中には、あろうことか姉、リコレットに仲介を頼んではどうかと言い出す者も出てくる始末だった。

レアルの脳裏に、リコレットの顔が浮かぶ。

「そもそもこの戦いは、ミトス側が援軍を頼んだのではなくて？その援軍に赴いたアガルタとの仲介をせよとは、私には理解できませんわっ」

無表情のまま淡々と正論を述べる姉が容易に想像できる。そんな姉に頭を下げるなどは、何としてもできないことだった。そうやって相手を論破して、自分を上位に立てようとする姉の態度が、何としても気に入らないことだった。

あの高慢な姉の鼻をへし折ってやりたい。一度でよいから、あの顔が悔しさで歪む姿を見てみたい……。幼いころからそんな願望を持ち続けてきたが、今、彼女の脳裏に映る姉、リコレットは、いつものあの、無表情のままだ。

レアルはゆっくりと息を吐き出すと、頭の中を切り替えて、現状を把握しようと努める。

エルスモ軍が壊滅したとはいえ、ここロークルには、最大四万の兵力を動員できる。さらには、海上には無傷のカルートレン軍四万が控えている。総勢八万……。単純に考えれば、こちらが優位だ。

そこまで考えて、レアルは思考するのを止める。相手はアガルタだ。通常の戦い方が通用する相手ではない。そんな相手だからこそ、数を頼んで押し包み、一網打尽にするしか勝つ方法はないのだ。

今はそれができないが、方法が一つあった。それはヒーデータだ。あの軍が攻撃に移らなくとも、そのまま静観を決め込んでくれれば、まだ策はある。それであれば、海上のカルートレン軍も攻撃に移ることだろう。

そこまで考えていたそのとき、不意に隣に座る夫が話しかけてきた。

「王妃……今宵は、そなたの部屋に参るぞ」

一体何を言い出すのだ、この男は。そう考えるのと同時に、あからさまに嫌悪感を露わにしているのが自分でもわかった。

夫の気持ちもわからなくはなかった。彼の心の中は不安しかない。

このミトス王国がアガルタの馬蹄に蹂躙されるのではという恐怖にも似た不安を抱えている。それを少しでも鎮めたいがために今宵、自分の部屋に来ると言っているのだ。

確かに、いつものごとく笑顔で彼を迎え、愛をささやき、大げさに喜ぶふりをすれば彼の不安は、少しは和らぐことだろう。しかし、それをしたところで現状が好転するわけでもないし、不安を払しょくした彼が皇帝としての能力を発揮して、アガルタ軍を駆逐するわけでもなかった。レアルにとっては単に、ただ疲れるだけの仕事に過ぎなかった。

これまでは、物分かりのよい妻を演じることで、夫の心を母親や乳母から奪うことに成功していた。今や彼は、夜に側室の部屋に向かうときも、レアルの許しを得る状態だった。むろん、目端の利く彼女は、夫の母や乳母とも良好な関係を築いていたが、真に彼女のことを慮り、手を差し伸べてくれる者は、このロークル城内にはいなかった。

「王妃様」

不意に話しかけられて我に帰る。声のする方向に視線を向けると、参謀長が真剣な眼差しを浮かべていた。

「いかがなさいますか」

話を聞いていなかったために、思わず夫に視線を向けるが、彼もよくわからないと言った表情を浮かべている。その状況を察したのか、参謀長はゆっくりと口を開く。

「現在、ノマサ殿下はアガルタに囚われの身となっております。エ

ルスモと我らは同盟の間柄。このまま見過ごすわけには参りません。ノマサ殿下の身柄引き渡しの交渉の使者を送るべきかと存じますが……。何卒ご裁断を仰ぎ奉ります」

「……任せます」

「ははっ。承知いたしました」

「お待ちください、王妃様！」

突然声を上げたのは、若い男だった。ミトス軍一の出世頭と呼ばれる参謀、オダワだ。彼は顔を赤らめながら、少し怒気を帯びた声で口を開く。

「それでは、我らが敵対していることをアガルタに知らしめるようなものではありませんか！　今の我らは、アガルタに敵対していることを悟られてはなりません！　この度のエルスモの攻撃も、単にエルスモが独自で動いたという解釈で行くべきです！　使者を送るのには反対しませんが、それはあくまで、今回と先のセーファンド軍との勝利を賀する使者でなくてはなりません！」

「黙っておれ、オダワ！　それは先ほどから散々議論したではないか。すでにノマサ殿下が捕らえられたのだ。それ以前にもアガルタはセーファンド軍の将校らを捕虜としているのだ。我らの目論見は彼らの口を通してすでに筒抜けになっている。今更、そんな使者をおくったところで無意味だ。むしろ、正々堂々、ノマサ殿下の返還交渉を行い、これからの和平の道を探るのが肝要であるのだ」

「我らは負けたわけではありません。我が城内には手つかずの軍勢四万がおります。それに海上のカルートレン軍も……」

「もうよい。結論は出たのだ」

発言を遮られて、オダワはぶ然とした表情を浮かべる。

「もうよい、大儀である」

レアルは落ち着いた声で二人を嗜める。

「カルートレン帝国の皆様方の意見も承りたく存じます」

レアルは傍に控えている二人の男に視線を向ける。最初から期待はしていなかったが、そこにカルートレンからの使者がいる以上、社交辞令として彼らに意見を求めるのが礼儀だと思ったのだ。

二人は顔を見合わせていたが、そのうちの一人の男が、遠慮深そうに口を開いた。

「誠に畏れながら、王妃様におかせられましては、未だアガルタに膝を折るおつもりはないお考えである、と考えてよろしゅうございますか」

「無論です」

「左様でございますか。では、我々から一つ、提案がございます」

意外な言葉だった。これまで日和見を決め込んでいたカルートレンから、まさか提案という言葉を聞くとは思わなかった。

「誠に恐れ多いことではございますが、国王陛下並びに、王妃様に

おかせられましては、アガルタに降伏の使者を遣わされますよう、進言申し上げます」

あまりにも意外な言葉であった。まさか、降伏を勧告してくるとは思わなかった。レアルは絶句したまま男を睨みつける。当然、参謀長は黙ってはいなかった。

「何を言われるのです！　我々に降伏しろとは！　それは貴国の……」

「あ、いや、降伏するのはあくまで表向きのことです」

激高する参謀長を両手で制しながら、男は口を開く。

「降伏となれば、その条件などを話し合わねばなりますまい。その場所はここロークル城にするのです。幸いにしてここには四万の兵がいる」

「まさか……」

「左様でございます王妃様。降伏とはあくまで見せかけ。アガルタ軍をこの城におびき寄せ、そして、数を頼んで討ち取るのです」

「待たれよ、そんなことでアガルタは……」

「そうです。確実に仕留められるかどうかはわかりません。しかし、アガルタはこの城の中を知らぬと存じます。一方、貴国はこの城の裏の裏まで知り尽くしている……。地の利があると思われませんか？」

参謀長は絶句する。その彼を横目で見ながら男は、さらに言葉を続ける。

「ただしそれには一つ条件があります。ヒーデータ軍です。ヒーデータが動かず静観すること……。それであれば、この作戦の成功率は大きく上がります」

レアルの眼に、一筋の光が宿った。

第七百六十六話　空城の計？

リノスの許に、ミトスからの使者が訪れたのは、翌日のことだった。

使者は、ヒーデータ、アガルタ、カルートレン、ミトスの四者にて、今後の和平について話し合いたい。そのため明日昼にロークル城においでいただきたい、と言ってその場を後にした。

「どう思う？」

リノスはそう言いながら、目の前に控えるマトカル、クノゲン、ホルムの三人に視線を向けた。

「罠の可能性があるな」

まず、マトカルが口を開いた。彼女の言葉に、二人が頷く。

「交渉の場所が敵の城というのが気に入らない。これではどちらが勝者であるのかわからない」

「まあ、ミトスとしては、何としても負けを認めるわけにはいかないのでしょうな」

クノゲンが苦笑いを浮かべながら口を開く。

「今、勝ち負けにこだわると言うのは、全く状況が理解できていない証拠だ。現状を理解せず、己の勝手な考えで突っ走っているヤツほど怖いものはない。何をしでかすか、わかったものじゃない」

「まさに、リノス様の言われる通りですな。ちょうどあの使者が来る直前に、ヴァイラス公爵から、相談したいことがあるので、こちらに参りたいという伝言がありました。察するに、先ほどの使者は、我らの許に来る前に、まず、ヒーデータの陣に行ったのでしょうな。どうやら、何としても我々に最初に頭を下げたくはないようですな」

「……まあ、別にいいんだけどね」

「で、どうするのだ、リノス様」

「そうだな。嘘でも敵の城に乗り込むのだ。丸腰で行くというわけにもいかないな」

「あの……ミトス側からは、城の前までであれば、軍勢を伴って来てもよいとありましたが……」

「あんまりそれは、安心材料にはならないよな」

そんな会話を交わしているさなか、オワラ衆のサモンが姿を現した。

「おお、サモン。ご苦労だった。で、どうだった？」

「策あり」

「やっぱりそうか。聞こう」

リノスの言葉に、サモンはミトスの作戦を述べていく。

「なるほど。城の中に武装した四万の兵士が犇めいているか……。

敵は空城の計をやろうとしているのかな？」

「くうじょうのけい？」

「マトは知らないな。てゆうか、みんな知らないのかな？　似たような話はないのかな。敢えて城門を開け放って敵を城内に入れて叩くという戦法だ。敵の指揮官が優秀であればあるほど、何か策があるんじゃないかと錯覚して、城を攻めることはない。そういう心理的な虚を突いて城を守るという戦法だ。ただ、大抵は兵力の劣る方がこの作戦を採用するものだが、今回の場合は、兵力が勝る方がそれをやろうとしている。何だか、奇妙だな」

そう言って苦笑いを浮かべるリノスを、マトカルたちは呆然とした表情で見守った。

しばらくすると、ヴァイラス公爵がやって来た。彼はさも困ったと言った表情を浮かべながら、リノスの前に座る。

「単刀直入にお尋ねしますが、ミトスからの話、義兄上はどう思われますか？」

「罠だと思っています」

「……やはり」

ヴァイラスはゆっくりと首を左右に振った。

「ヒーデータ、アガルタ、カルートレン、ミトスの四か国で、和平について話し合いたいという口上は、いかにも不自然です。あの妹のことです。もし、義兄上と和平を望むのであれば、私を介して言

ってくるでしょう。それをせず、こんなことを考えるとは……やはり妹は……」

頭を抱えて項垂れるヴァイラスに、リノスは苦笑いを浮かべる。

「こう言っては失礼ですけれど、ヴァイラス公爵にすら、それが策略ではないかと疑われている段階で、この作戦は失敗したも同然ですね」

「義兄上はどうなさるのです？」

「色々と考えたのですけれどね。やはり、ロークル城を攻めようと思います」

「し……正気ですか？　敵は四万の兵力を有しているのですよ？　それに、海上には無傷のカルートレン軍四万が控えています。いくらアガルタ軍とはいえ、それらの敵を相手に勝てるとは思えませんが……」

「カルートレン軍は、ヴァイラス公爵にお任せしたいと考えています。何もすぐに攻撃してくれとは言いません。カルートレン軍が攻撃に移ったときは、お願いしたいのです」

「それは……承知しております」

「俺の読みでは、カルートレン軍は動かないでしょう。彼らは高みの見物を決め込んで、機会があれば、参戦しようと考えています。まあ、彼らが動くときは、俺たちが敗れるか、ヒーデータ軍が撤退したときでしょう」

「わっ、我らは断じて撤退などと……」

「その可能性がないと思うから、こうしてお話をしているのです」

リノスはフッと笑みを浮かべる。一方のヴァイラス公爵は、額にうっすらと汗をかいていた。

「もし……差し支えなければ、私を、アガルタの名代として、ロークル城に赴かせていただけませんか」

「え？　どういうことです？」

「おそらく、妹レアルの狙いは義兄上を討つこと。その機先を制して、義兄上はロークルには赴かず、私がアガルタとヒーデータを代表するものとして赴き、この和平の話をまとめてまいります」

「それは……危険ですね」

「そう、でしょうか？」

「仮に、ヴァイラス公爵が城内で命を奪われてしまえば、ヒーデータ軍は烏合の衆となります。ないも同然となります。そうなれば、カルートレンは間違いなく攻撃に転じるでしょう。そうなれば、俺たちは確実に負けることになります」

「まさか、妹が、私を……？」

「そのくらいのことをするものと考えておいて、損はないかと思います」

ヴァイラスの顔色がみるみる青ざめていく。

「この戦いから無事に帰るには、ミトスに一撃を加え、二度とヒーデータやアガルタに逆らえないようにしておくことなのです。ですから、俺たちが攻撃を開始したときには、ヒーデータも、カルートレンを攻撃して欲しいのです」

「は……はい……」

「前にも言いましたが、カルートレン軍を殲滅する必要はありません。ヒーデータに戦う意志ありという姿勢が伝わればよいのです」

「し……承知しました。この戦いは、我が妹レアルが引き起こしたもの。それの後始末をするのは、我らでなくてはならないと考えております。これまでの戦いは、すべて、アガルタのお蔭です。このままでは私は、皇帝陛下に合わせる顔がありません。幸い、ミトスに通じていた者はすべて排除しました。ヒーデータ帝国海軍の指揮権は私にあります。お任せください」

ヴァイラスはそう言って胸を張ったが、やはり顔色は悪く、青白いままだ。

「明朝、俺たちはこの山を降り、ロークル城に向かいます。むろん、敵の誘いに乗って城に入ることはせず、その手前で軍勢を止めます。俺たちが攻撃を開始するときは……フェアリードラゴンを差し向けます。ドラゴンが現れたら、カルートレン軍に攻撃を仕掛けてください」

リノスの言葉に、ヴァイラスはゆっくりと頷いた。

「さて、明日は本格的な戦いになるだろう。兵士たちをゆっくりと休ませろ。そして、できるだけ美味いものを、腹いっぱい食わせてやれ」

「承知しました。食事のことについてはお任せください。いつでもどこでも、最高に美味い食事を振舞っております」

ホルムはそう言って笑う。それにつられて、リノスも笑みを返した。

「さて、俺は一旦帝都の屋敷に戻る。留守の間、おそらく何事もないかと思うが、警戒を怠るな」

「承知した。念のため、リノス様に警備を付けさせてくれ」

マトカルがそう言って立ち上がり、側に控えていたサモンに警備を命じている。リノスは笑いながらその必要はないと言ったが、マトカルは頑として譲らなかった。

「では、明日の朝までには帰ってくる」

そう言ってリノスは、イリモの背に跨った。

第七百六十七話　戦場視察

王妃レアルは、じれていた。一体、どうなっているのだ、と。

彼女の前には、ミトス王国の軍関係者と、カルートレン軍の使者二人が控えている。だが、ヒーデータも、アガルタも、誰一人としてここに姿を現していないのだ。

早朝、アガルタ軍がこちらに向かってくるという報告を受けた。てっきりこの城に向かってくるかと思いきや、アガルタ軍はその手前で停止し、動かなくなった。

おそらく、ヒーデータの使者を待ち、共にロークル城にやって来るのでしょうという侍従の話を信じてみたが、待てど暮らせど使者は来ず、すでに時刻は十二時を指そうとしていた。時刻を昼と指定したが、通常であれば、最低でもその一時間前には城に到着し、諸々準備の上、会談に臨むものなのだ。そのため、ロークル城内は早朝から準備万端整えて、アガルタ軍を待ち受けていたのだ。

「一体いつになったら到着するのじゃ！」

レアルの言葉に、周囲の者たちは動揺している。とりわけ、宰相ムタは体を小刻みに動かしながら、湧き上がる不安を必死で抑えていた。アガルタだけでなく、ヒーデータも来ていないのだ。ということは、昨日立てた作戦が相手に気づかれている可能性がある。そうなっては、この戦いは泥沼化することになる。それだけは、避けたいと念じていた。

城の手前で停まったアガルタ軍が実に不気味だった。ヤツらは一体何をしようとしているのか。使者をやってみたが、間もなく参るの一点張りで、取り付く島もない。通常ではあり得ない応対だ。全兵力をもってアガルタを叩き潰してやろうかと、ほんの一瞬だけ考えてみたが、それはするべきではないと、彼の本能が告げていた。

人を見る目と状況判断能力は優れていると自負している。これまで権力の階段を上る過程で身に付けてきた、いや、身に付けざるを得なかった能力……。その、磨き抜かれた能力が、あの軍勢には手を出すべきではないと告げている。

なぜ今になって、こんな予感がするのか。宰相ムタにとって、初めての経験だった。王妃が立てた作戦を聞いた際は、間違いなく勝てると確信したのだ。セーファンド・ノーノの両軍が崩れたときも、危機は感じなかった。それがどうだ。バルコニーから、彼方に見えるアガルタ軍を見た瞬間から、冷や汗が止まらない。

ムタは頭の中をフル回転させる。これまでの一生の中で、これほど考えたことはないのではないか、そう思えるほどに、彼は全知能全能力を駆使して、これからのことを考えていた。

◆　◆　◆

リノスが到着したのは、ちょうどその頃だった。朝までには帰ると言ったにもかかわらず、この時間だ。普通の者ならば、どやしつけられ、下手をすれば懲罰の対象となるのだが、不思議なことに、誰もがこの王の遅刻について、不快を感じる者はいなかった。むしろ、王は自分たちの想像を超えたことを起こすのだろうという、期待感をもって彼の到着を待っていた。

当のリノスは、さも申し訳ないといった表情を浮かべながら帰陣した。リコレット様がなかなか放してくれなかったのだろうと揶揄する者もあったが、リノスは苦笑いを浮かべながら本陣に向かった。

そこでは、マトカルがじっとロークル城を眺めていた。

「やあ、マト。すまんすまん。ちょっと色々頼まれごとがあったんでな。遅くなった。……何だ、絵でも描いているのか？」

リノスの言葉に、マトカルはゆっくりと視線を向ける。

「ああ。あまりにミトスの使者が煩くてな。こうやって絵筆を握って絵を描いていると、頭の中が整理されるのだ。気にしないでくれ」

マトカルは手を鳴らして兵士を呼び、クノゲンとホルムを呼ぶようにと命じた。

皆が揃うと、リノスは現在のアガルタの陣立てを聞き、それでいいと言って満足そうな笑みを浮かべた。

「では、俺はこれから敵陣を見てくる」

リノスのこの言葉に、全員がギョッとした表情を浮かべた。そんな彼らにリノスはゆっくりと言葉を続ける。

「絵図を見たり、遠目から敵陣を見たりするよりも、実際、敵の城の近くに寄って、敵の気……つまりは、戦意を伺いたいんだ」

マトカルとクノゲンは驚きながらも、リノスの提案を認めた。ただし、警備の兵士は付けてくれとお願いをし、二人は相談して、アガ

ルタ軍の中でも最精鋭の者たちを警備に付けた。その数は総勢、三百に上った。

「あまり大勢連れて行っても、いざという時動きが取れなくなるからな。このくらいがちょうどいいよ」

そう言って彼は笑った。その様子をホルムは、目を丸くして見ていた。

大将自ら敵陣を見て廻るなど、彼の常識では考えられなかった。だが、この王は違う。自分で戦場を歩いて、敵の士気を確認すると言った。これならば、相手の強さを正確に見積もることができる。さらには、三百駒という兵の数も、実に理に適った数だ。王が号令すると、すぐに行動に移すことができる。まさに、進むも引くも、自由自在に動ける数だった。

「では、行ってくる。すぐに戻るよ」

そう言ってリノスは再び馬上の人となった。

いざ、現地に出てみると、やはり、マトカルの描いた戦況図と異なる点がいくつか見えてきた。中には絵図を見て想像したものとは全然違っていたものもあった。

高い城壁に囲まれているため、城の全貌はわからなかったが、折々に見える大小様々な門や物見櫓の位置から見て、建物は広い範囲に分布しているようだった。これに関しては、マトカルの書いた絵と同じと見てよいだろうとリノスは思った。

戦況図と実際がひどく違うのは、空堀だった。空堀は城の周囲に張

り巡らされていたが、想像以上に深く、広く作られていた。二重、三重の馬止めと思われる柵も、かなり堅牢に構えてあるように見えた。

「……珍しいことをするね。大抵、城壁に囲まれた城は、その外には全く無関心であることが多いんだがな。ここは、城壁の外にも防御施設を構えてある。ということは、最初から俺たちと戦う気が満々だったということだ」

リノスは誰に言うともなく呟く。

リノスらが城に近づくと、門や物見櫓から城兵の顔が次々と出ていて、リノス一行を監視した。リノスは時々立ち止まって、城兵を観察した。

「リノス様、立ち止まってはなりません。魔法が効きにくいとはいえ、弓矢の的になります」

兵士の一人が近づいてきて進言した。リノスは黙って頷き、馬を進めた。

ふと、城門から騎兵が飛び出してきた。城の守備兵なのだろう。鎧、甲を纏っていた。

「貴様ら一体、どこの軍勢か！」

怒気を帯びた声で男は話しかけてきた。リノスの周囲は、三百の兵で固められている。彼は男を無視しながら、悠々と馬を進める。

「その黒い鎧はアガルタか！　返答せい！　返答せよ！　返答なく

ば攻撃する！」

「いかにも我らはアガルタの軍勢である」

兵士の一人が威厳ある声で返答する。男は虚を突かれたのか、手綱を忙しそうに捌きながら、馬を落ち着かせようとしている。

「畏くも我らの王が通られるのだ。その道中の安全を確かめているのだ。臣たるものの勤めとして、当然のことだ」

「アガルタ王はいつ、到着なされるのだ！　我が王および王妃様がお待ちである！　早々に参られよ！」

「参るか参らぬかは、我が王がお決めになることだ。我らが決めることではない」

騎兵は忙しそうにアガルタ軍の周囲を行ったり来たりしながら、何かを喚き散らしたが、リノスは全く意に課さなかった。

「よし、そろそろ戻ろうか」

リノスがそう言って、馬首をアガルタ軍の方向に向けた。それに倣って、三百の兵士たちが一糸乱れぬ動きで、一斉に馬首を変えた。

「はあっ！」

リノスの掛け声と共に、イリモは走り出した。その周囲を、まるで図ったかのように等間隔で兵士たちが彼を守った。そのあまりの見事な動きに、騎士の男は呆然とその様子を見守るほかなかった……。

第七百六十八話　付け入る

突然、アガルタ軍から鬨の声が上がった。それと同時に、軍勢が動き出した。ロークル城の守備兵たちは、ただ茫然と、アガルタ軍の動きを見ていた。

王妃レアルは、アガルタ軍が攻撃を開始したと聞いて、信じられないといった表情のまま固まった。常に冷静沈着で、余裕たっぷりに振舞う彼女が、初めてみせた動揺だった。

アガルタの一軍が向かったのは、城の裏門だった。ロークル城には四万の兵士を配置していたが、ミトス側は、各城門を中心に、兵士を分散させて配置していた。今、裏門を守るのは三千の兵士たちであり、アガルタ軍とは圧倒的兵力の差があった。

だが、レアルは、アガルタが向かったのが裏門であると聞いてから、幾分か落ち着きを取り戻していた。そこには、ミトスの最精鋭の部隊が配置されていたからだ。

元々、ミトス軍が立てた予想では、アガルタが攻撃するのは、正門もしくは東側の門であると考えていた。そこにはそれぞれおよそ一万の軍勢を配置し、攻撃に備える一方で、裏門に最精鋭の部隊を配置することで、その部隊にアガルタの背後を突かせる狙いがあった。

さらに伝令からの報告では、アガルタ軍は全兵力をもって攻めているわけではなく、およそ五千の兵力で裏門を攻めていることがわかった。ここにきてレアルはようやく、いつもの冷静さを取り戻した。

「攻めさせるのです。我が軍が易々と崩されるとは思えません。攻めさせるだけ攻めさせて、疲弊したところを、東門の部隊を出して叩くのです。そうしておいて、全兵力をもってアガルタ軍を叩くのです。アガルタに、自らの愚かさを思い知らせるのです！」

この王妃の命令に、宰相ムタは一旦、王と王妃は避難するべきであると進言した。

「どこに逃げろというのです」

「逃げるわけではございません。一旦避難するのです。この戦いは、裏門が主戦場でございます。敵を引き付けるだけ引き付けるのです。そこは、王様と王妃様のお住まい近くでございます。戦闘に巻き込まれる可能性もございます。今すぐ王都を出て、山伝いにウヤ城にお移りになればよろしいかと存じます。山伝いの峠道には、既に道案内の者、数名を用意してございます」

宰相の言葉に、レアルはカラカラと笑い声を上げる。

「宰相としたことが、何と弱気な！　ここで戦う将兵を見捨てて逃げるとは……それが国を預かる者のすることですか？　将兵と共に戦うことこそ、この国を預かる者の使命というもの。そのような話、聞くも汚らわしいですわっ！」

そこまで言うとレアルは、隣に座る夫にスッと顔を近づけた。

……怯えが双眸に深く出ている。一刻も早くここを離れたいという思いが見て取れる。それではいけないのだ。彼女はじっと彼の眼を見つめながら、ゆっくりと、深く頷く。大丈夫だ、と目で訴えかける。彼はようやく頷いた。

「さあ、皆の者！　アガルタに我らが恐ろしさを骨の髄まで味わせてやるのじゃ！」

レアルの命令を受け、そこにいた者たちが慌ただしく動き出した。

レアルは心の中で、勝利を確信した。

◆　◆　◆

この日の戦いは、宰相が予想した通り、裏門、即ち搦手口においてもっともはげしい戦いが行われた。マトカルを司令官とするアガルタ軍は、次々と新手を繰り出して搦手を攻めた。

城内からは弓矢を揃えてアガルタ軍を狙い打ってきた。マトカルは兵士たちに鉄の盾を揃えさせてじりじりと城門に寄って行った。アガルタ軍が城門に接近して弓矢の死角に入ってしまうと、待機していた城兵が門を開いて一気に押し出してきて、アガルタ軍に襲い掛かった。そうはさせじと寄せてくるアガルタ軍に、城内からはさらに弓矢が雨あられと降り注ぐと、容易に近づくことはできなかった。

マトカルはその状況を冷静に眺めていた。その彼女の傍にはホルムが付いていて、片膝をつきながら言上した。

「無理押しは止めて、敵を城外へ誘い出すような方策を立ててはいかがでしょうか。敵を十分に引き付けておいて、突然反転して城内に付け入ることを考えてはいかがでしょうか」

付け入るとは、戦術用語だ。城内から出てきた敵を追尾して城内に入ってこれを攻め落とすことだ。

マトカルはホルムの進言に同意したが、さて、実際に敵をおびき出すにはどうすればいいか、すぐにはその策が思い浮かばなかった。

「敵を城外に誘い出してこれに付け入るためには、味方は搦手攻撃を諦めて空堀を渡り、城壁によじ登り、高壁を越えて城に攻め込むように見せかけたら如何かと存じます。敵は城壁の方の守備を厳重にすると同時に、必ずや搦手門を開けて、我が軍の背後を突くものと思われます。我が軍は敵に背後を突かれて混乱に陥ったように見せかけて、退けるだけ退き、敵の追手の足をできるだけ延ばしておき、突然反転に移り、敵兵と共に城内に付け入るのでございます。敵の弓隊も、敵と味方が一緒になって、ひしめき合って来るのに弓矢を射かけることもできますまい」

マトカルは大きく頷くと、よく通る声で口を開いた。

「よくわかった、ホルム。だがもし敵が付け入りの策に引っかからなかったらどうするのだ」

「城壁をよじ登り、上から縄梯子をかけ下げ、城壁を超えて城内に攻め込むのです。敵が動きを変えるようであれば、そのときはそのとき、臨機応変、策を変えたらよいかと存じます」

「臨機応変、策を変えるか。いいだろう。その作戦で行こう。では、クノゲンに伝令を差し向けてくれ」

「クノゲン様、ですか？」

「ああ。敵をおびき出してこちらに引き付けたそのときは、後詰しているクノゲンの部隊が、敵の横腹を突いてくれと伝えるのだ。攻撃命令はクノゲンに任せると伝えるのだ」

「は、ははっ！」

何と頭の回転の速い司令官であろうか。ホルムは心の中で唸っていた。アガルタ軍は、セーファンド軍とは全く異なる組織だ。上意下達が絶対であったセーファンドに対して、アガルタは王であれ司令官であれ、自由にモノが言える。そして、彼らは納得すればすぐにその意見を反映する。これがアガルタをアガルタたらしめている要因なのだ。リノス様やマトカル様は、進言を受け入れる前に必ず質問をする。その質問に答えられれば、採用となる。兵士たちは、進言する前に、どんな質問が飛んでくるであろうかと考え、そして、その解決策を考える。そんなことを繰り返していると、自分の作戦が果たして的を射たものであるかどうかが、自ずからわかるのだ。

そんなことを考えている間に、マトカルは矢継ぎ早に指示を出し、大きく腕を振った。

しばらくすると、裏門を攻めていたアガルタ軍は、にわかに攻撃目標を変えて、空堀を渡って城壁に攻め寄せていった。

裏門口の指揮を執っていたミトス軍のヒデナは、アガルタ軍がにわかに転身したのを見て、すぐ策ありと見た。

「敵は付け入り戦術を取ろうとしているようだな」

ヒデナは、彼と共に裏門口の守備に当たっているゴユウとイマサに言った。付け入りと聞いて二人は、驚いたようだった。アガルタの軍勢は空堀を渡って、城壁に押し寄せようとしていた。ゴユウにはどう見ても付け入りとは関係ないように思われた。付け入りを警戒するよりも、城壁によじ登って来る敵を防ぐことを考えるべきと思

った。

「味方の二百程を城壁に廻して、城壁をよじ登ってくるアガルタの兵に向かって石を落として防がせるようにしよう。二百だけで結構だ。アガルタの兵が、あの城壁の三分の二ほども登ったときこそ、われらは総力を挙げて城を出て、敵の後尾を衝くと見せて、実は攻め手の敵の司令官の陣を突き崩すのだ。この策は必ず成功する。恐らくこの指揮を執っているのは、マトカルか、クノゲンだろう。その首を獲ることができれば、敵は必ず浮足立つ。そのときこそ、我らが総攻撃をかけるときだ」

「攻め手の司令官の首を獲ると言われたが、その司令官はどこにいるのだ」

イマサが言った。

「見えないか。城の裏門の下の広場の向こうに、やや小高い丘があるだろう。あそこに、銀の鎧を装備した騎馬武者がいるだろう。騎士たちに囲まれている、あれだ」

ヒデナの指さす先には、マトカルの姿があった……。

第七百六十九話　付け入る②

イマサは、そう言われてはじめて気が付いたようだった。ロークル城は、アガルタ軍に囲まれつつあった。どちらを見ても、幟や旗ばかりだった。まさか意外に近いところに、マトカルの陣があるとは思わなかった。

「マトカルの陣にはおよそ五百……」

イマサが呟いた。そのときのイマサは、彼の手勢を率いてマトカルの本陣に駆け込もうと考えていたのだった。イマサはロークル城きっての勇将として知られていた。勇将の下に弱卒なしで、彼の右腕と言われているマユウと、左腕と言われているダタンはそれぞれ十人力と言われていた。

イマサが、マトカルの本陣およそ五百と呟いたとき、ハッとしたのはヒデナとマユウだった。ヒデナはイマサが呟くのを聞いて、イマサが抜け駆けの功名を狙うではないかと思ったし、マユウはイマサが向こう見ずの挙に出るのではないかと思った。

イマサは勇将であったが、自分の武勇をおごるためにしばしば軽率な行動に走ることがあった。マユウとダタンの二人の補佐があってこれまで大過なく過ごしてはきたが、今度の相手は大物だった。うっかり飛び出すと大変なことになると、マユウはそれを恐れていた。

城壁の下で鬨の声が聞こえた。

アガルタの兵たちが一斉に城壁によじ登ろうとした。城壁の上から、

城兵が石を投げ落としてそれを防いだ。その城兵に、矢が飛んだ。

「敵は本当に付け入りの戦術を考えているのだろうか」

ゴユウが言った。ゴユウだけでなく誰が見ても、アガルタ軍は本気で城壁を登って来るように見えた。

「どうも心配だ。私は、あっちへ行って見る」

ゴユウが言った。

「いや待て、敵はきっと、城壁の中ほどまで行ったところで、渋滞する。わざともたついて見せるのだ。こちらに敵の背後を襲わせようとするがための誘いだ。よく見ろ、城壁によじ登ってくる兵はせいぜい五百か六百だ。あとは、いつでも引き返すことのできるようにして待っている」

ヒデナにそう言われても、ゴユウは心配だった。ゴユウは城壁の方へ行って見ることを主張した。裏門の防備の指揮はヒデナが執ってはいるが、ゴユウにしてもイマサにしてもヒデナと同格の司令官であるから、ヒデナの思うようにはならなかった。この辺に指揮系統の不統一があった。

「もしかすると、ということがあるだろう。一応見てきた方がよいだろう」

ゴユウに強く言われると、ヒデナもそれを拒絶できなかった。ヒデナは見張り所を降りてゴユウと共に城壁の方に廻った。そのときヒデナは念のために十人の弓隊を連れて行った。

ヒデナとゴユウが、城壁のすぐ近くまで来たとき、裏門のあたりに歓声を聞いた。

「しまった！」

ヒデナは思わず叫んだ。イマサが彼の手勢三百を率いて城門を出たのだ。その声を聞くと同時に、城壁の下で破裂音が響いた。城壁の下に張り付いていたアガルタの兵はいっせいに引き返しにかかった。予定の行動であるだけに混乱はなかった。

「撃て！　あの空堀を渡って引き上げようとしている兵たちを狙うのだ！　アガルタの兵たちに弓矢を雨あられのように打ち込んでやれ」

ヒデナが命令した。それを受けて、弓隊が素早く城壁を登っていった。

弓隊はそれぞれ、おちついて逃げていくアガルタ兵を狙った。そのうちの一本がアガルタ兵に当たったと見えて、馬上の騎士がのけぞるように落馬した。

大地に落ちた兵士は土を掴んで起き上がり、すぐに愛馬に跨り、何事もなかったかのように、悠々とその場を去っていった。

イマサの率いる三百の軍勢はつむじ風のような勢いで、マトカルの本陣に攻めかかっていった。三百と五百、数の上ではマトカルの方が優勢だったが、ミトス一の剛の者と言われているイマサ、マユウ、ダタンなどが、マトカルの首一つを狙っての攻撃は勇敢だった。ここでは攻防がその処を変えた。攻める方がイマサで受けて立つ方がマトカルだった。

マトカルを守っていた兵士たちは、鬨の声を上げて坂を駆け下りてくるイマサの三百の軍勢が千にも二千にも見えた。

マトカル配下のカガは、彼女の危急と見て、彼の手勢を率いて正面に出た。そこで敵の勢力を一時的に持ちこたえさえすれば数においてこちらも優勢であるために、敵を跳ね返すことができると思っていた。

「本陣を離れるな！　マトカル様を守ることこそ至上である！」

カガはそう叫んでいた。

人と人の塊が大きな音を立てて衝突した。イマサは長槍を振るってマトカルの陣に突っ込んでいった。イマサの左右には、マユウとダタンが槍を備え、その後ろに彼らが鍛え上げた兵士たちが続いた。カガの軍勢はたちまち突き崩されて前備えに大きな穴があいた。

「退くな、退くな」

カガが怒鳴っても、崩れ出すとどうにもならなかった。カガの軍はマトカルの近くまで後退した。

「おお！　あそこに敵の司令官、マトカル殿がおられるぞ！」

イマサが叫んだ。白毛の馬に跨り、端然とこちらに視線を向けるマトカルの姿をイマサは見たのだった。

マトカルはイマサの声を聞くと、馬を下り、ゆっくりと腰に差している剣を抜いた。

「マトカル様、しばらく！」

「構うな！」

側に控えていた兵士たちが止めようとしたが、マトカルは彼らをを押しのけるようにして前に出た。血の槍を持って突進してくるイマサと目が合った。

「マトカル殿とお見受けいたす、我はミトス王国軍司令官、イマサ……」

そんなことを言いながら、イマサは血相ものすごく突っ込んできた。

「その首貰い受ける！」

そう言って突き出したイマサの長槍をマトカルは剣で跳ね上げた。イマサはマトカルがやはりただ者ではないと見て、槍を手音に繰り込んで構えを直した。すでに、マトカルの周囲には十数人の兵士が並んでいた。

マトカルとイマサの死闘が始まった。イマサの部下、マユウとダタンは、マトカルを守る兵士たちを相手にして戦った。

マトカルがイマサの出鼻を遮ったことによって、戦況は一変した。ひとたび攻撃速度が遅くなると、数の上において優勢なアガルタ軍にイマサの三百はじりじりと押された。

搦手門の方で鬨の声が上がった。ヒデナ、ゴユウらの軍勢が城門を開いて打って出たのだ。イマサの行動そのものは悪かったにしても、

イマサ以下三百を見殺しにするわけにはいかなかった。イマサの軍を助けるためには、城壁攻撃を止めて反転してきたアガルタ軍の主力をまず支え止めねばならなかった。そうしないと、イマサの軍が包囲される恐れがあった。

搦手門外では両軍の激しい戦闘が始まった。ヒデナの伝令がイマサのところに走って来て言った。

「お退きください。今が退きどき、これ以上深入りすると敵に付け入られます！」

だが、それはイマサの耳には入らなかった。耳に入っても退ききれる状態ではなくなっていた。マトカルはイマサの繰り出す槍をことごとく躱していき、隙を見ては、剣で正確に彼の急所を突いてきた。彼はじりじりと追い詰められていった。手に足に肩に、手傷が増えていった。額に受けた血が目に入った。視界が暗くなった。

突然体が動かなくなった。痛みはなかった。ふと見ると、すぐ前にマトカルの顔があった。甲を装備していないので、彼女の表情がイマサにはよく見えた。きれいな肌をしていた。なにより、彼を見据えるその眼が、とても美しかった。

イマサが戦死したという報が伝わると、ミトス勢は浮足立った。彼らはあまりにも深入りしたことに気がついた。

「退け！　退け！」

叫びながら城に逃げ込もうとする後ろを、アガルタの軍勢がぞろぞろ付け入って行った。

第七百七十話　占領

城門は間もなく打ち破られ城内は混乱に陥った。もはやヒデナの力をもってしても、どうしようもなかった。

城の搦手が破られると、城の諸方が破られ、アガルタの軍勢は四方八方から攻め込んできた。搦手は事実上落ちたのだ。こうなれば城兵およびその司令官は、自分自身のことを自分で決めねばならなかった。城兵はあるいは逃げ、あるいは踏みとどまって戦った。

王妃レアルは、裏門が破られ、アガルタが場内に進入したと聞いて、絶句した。

アガルタ軍は裏門から侵入し、その周辺を占領していた。裏門はもしものときに国王一家が逃げおおせるように作られた建物だ。つまりは、国王一家が住む後宮の近くにそれは作られていた。アガルタはその後宮を包囲する形で占領していたのだった。

アガルタの行動には一切の無駄がなかった。ということは、この城の中に、アガルタに内通した者がいる可能性が高かった。

「裏切り者は誰じゃ！　裏切り者を捕らえるのじゃ！」

後宮が占領されたとわかると、ロークル城は大混乱に陥った。その中でレアルは金切り声を上げて、裏切り者を捕らえろと連呼し続けていた。

だが、誰も彼女の声に耳を貸す者はいなかった。レアルの前に控え

る者たちは、次々と入って来る情報を整理することに忙殺されていたのだった。

「皆の者！」

突然、男の声が響き渡った。王妃レアルが信じられないと言った表情を浮かべた、そこには、国王たる夫が仁王立ちしていた。あれだけレアルが声を張り上げても一顧だにしなかった者たちが、全員彼に注目している。騒がしかった部屋が、一瞬のうちに静寂に包まれていた。

「助けよ！　マリアを助けるのじゃ！」

夫の言葉にレアルは愕然とした。マリアは、夫が今、最も愛を注いでいる妃だ。後宮には数名の妃の他に、彼の子供たちもいるのだ。何より、子供たちのことよりも、一人の愛妾のことしか考えられないことに、レアルは目のくらむ思いがしたのだった。

「皆の者、まずは、人質にとられた王子、王女たちを救出することを最優先するのじゃ」

レアルの言葉に、周囲にいた者たちはようやく自分を取り戻したかのような表情となった。

一方、アガルタに占領された後宮には、マトカルが赴いていた。

彼女の前には、フランという女官長が、憎しみを込めた目で応対していた。

フランは、アガルタの行為を無礼であるとなじり、今すぐここを立

ち退くようにと高圧的に迫った。その彼女に対してマトカルは、今のミトス王国は敗者であり、敗者にはいかなる権利も許されない。ただ、勝者の言葉に対して従うことしか許されていないと述べた。そして、その言葉が受け入れられないのであれば、剣で自決するか、毒杯を煽るかのいずれかしかないと伝えたのだった。

「……厳しすぎないか、それ？」

マトカルから報告を聞いたリノスは、何とも言えぬ表情を浮かべた。だが、マトカルは無表情のまま言った。

「ああいう手合いは、妥協するとつけあがる。あのくらいでちょうどいい」

「もしも、王妃や子供たちが自決でもしたら……」

「自決するなら、とっくにしているはずだ。覚悟があるのであれば、後宮が占領されるとわかった段階で、命を絶っているだろう。それもせず、私に高圧的な態度で接してきたのは、状況がわからぬ愚か者だ。そのような者に情けをかけると、限りなく要求を突き付けて来ることになる。どちらが勝者かわからくなるだろう」

「そういうものか……」

「もし、私の振る舞いが許されるものではないのであれば、遠慮なく仕置きをすればいい」

「遠慮なく、お仕置き……？」

「ああ。遠慮なく仕置きを……ッ」

突然、マトカルがリノスから視線を逸らせた。首筋に赤みが差している。

「では、今夜、お仕置きですね」

リノスは笑みを浮かべながら、その場を後にした。

◆　◆　◆

その頃ミトスは、後宮の奪還計画を練っていた。

アガルタ軍は、裏門に繋がる扉をたたき壊して、後宮に侵入していた。その建物に向かうには、長い廊下を渡っていかねばならず、その入り口の扉をアガルタは完全に封鎖してしまっていた。つまりは、今、この段階で後宮に向かうには、アガルタ軍が犇めいているところを通る外はなく、アガルタ軍を掃討する以外に救う道はなかった。

そのアガルタ軍は、裏門に軍勢を配置して、後宮を完全に固めていた。ミトスは残存する四万の兵で、一気に力攻めでアガルタに挑む他はなかった。だが、その作戦を巡って、ミトスはまたもや長い軍議を重ねていた。

ミトス軍は真っ二つに割れていた。一つは、全方位から一気にアガルタを攻撃して殲滅し、しかる後に後宮を解放しようとする考えであり、もう一つは、アガルタ軍を城外におびき寄せて殲滅するという考えだった。

前者は一刻も早く人質となった王子王女を救い出すべきだと主張し、後者は、慎重にやらねば、王子王女に被害が及ぶ可能性があると主

張して譲らなかった。

結果的に、この長評定がミトスの命運を左右することになった。

リノスをはじめ、マトカルやクノゲンらは、後宮を占領したその後が本当の戦いであると考えていた。彼らが最も恐れていたのは、四方八方からミトスの軍勢が襲ってくることであった。そうなれば、アガルタは包囲されることになる。いかに精強な軍勢であっても、自軍の倍の軍勢の包囲されてしまえば、勝つことは難しいのだ。

そのためリノスは、オワラ衆を使ってロークル城内のミトス軍の動きを見張らせていた。もし、軍勢が動き出してこちらの向かってくるようであれば、そのときは早々に城を出て、陣を立て直す考えであった。

だが、ミトスはいつまでたっても動かなかった。その間に、海上のヒーデータ軍が動いて、カルートレン軍を攻撃し、撤退に追い込んでいた。結局、カルートレン軍は、最初こそ抵抗したが、ヒーデータ軍が本気で殲滅しようとしていることを知ると、早々に船首を返して撤退行動に移ったのだった。カルートレン軍撤退の報は、ミトス側に衝撃を与えた。

まさか、動くはずのないヒーデータが動いたのだ。ということは、ヒーデータは、ミトスを敵とみなしたことになる。そのまま、海上のヒーデータ軍が、このロークル城に向かってくることは火を見るよりも明らかだった。

ヒーデータ軍は、夜のうちにミトス王国に上陸し、そのままロークル城に向かって行軍した。抵抗するものは皆無と言ってよく、ヒーデータは易々と城までたどり着くことができた。そして、アガルタ

と連携し、夜が明ける頃になると、ヒーデータ、アガルタの連合軍は、完全にロークル城の包囲を完了していた。

王妃レアルは一睡もすることなく朝を迎えていた。隣に座る夫も、同様だった。顔は蒼白で、双眸には深い怯えが見て取れる。先ほどからレアルの足や腰を撫でまわし続けている。レアルはその手を払いのける気力すらなかった。

退路は完全に断たれている。ここにきて、宰相の一旦城の外に避難するようにと進言したことを嘲笑ったことを悔いた。もし、夫と共に城から出ていれば、このロークル城に敵をおびき寄せ、殲滅する作戦を取ることができたのだ。今となっては、悔やんでも悔やみきれぬことだった。

四万対四万。数の上では互角だ。しかも、戦場はここ、ロークル城になる。一見するとミトス側が有利に見えるが、ミトスは退路を完全に断たれている。兵士たちの動揺も収まっていない。こんな状況で戦ってみても、勝利する可能性は極端に低いことは、レアルは十分に承知していた。

……死が近づいてきていることを、肌で感じていた。

「申し上げます！」

突然、兵士の声がした。驚いて視線を向けると、兵士は何か、困った表情を浮かべていた。

「あの……お客様が、お見えでございます」

「……客ぅ？」

レアルは頓狂な声を上げた。

第七百七十一話　あり得ないことだらけ

思いがけない話だった。今は戦争の真っ最中だ。総勢十万近い軍勢が犇めいている中で、来客があるなどとは、全く予想すらしていなかった。

自分自身でも、不思議そうな表情を浮かべていることがわかる。レアルは気を取り直して、目の前に控える兵士に向き直る。

「今、客と言いましたか？」

「ハッ」

「どなたです？」

「ヒーデータ帝国からのお使者が参っております」

何とも言えぬ怒りが湧き上がってくるのを感じる。それならばなぜ、使者が来たと言わないのか。この男は確かにお客様がお見えです、と言った。気が動転したのだろうか。だとしたら、この男は兵士として失格だ。兵士たる者は、いついかなる時でも、冷静沈着であらねばならない……。

「先ほど、お客様がお見えですと言いましたね？」

「……は、はい。申しました」

「で、今は、ヒーデータからのお使者が参った。そう言いましたね」

「申しました」

「なぜ、最初からお使者が参りましたと言わないのです」

「そ、それは……」

「私がそう言えと言ったのだよ」

狼狽える兵士の背後から男の声が聞こえた。姿を現したのは、何とヴァイラスだった。

「お、お兄さま！？」

「レアル、あまり兵士をいじめるものではないよ」

ヴァイラスは優しげな笑みを浮かべながら、後ろに控えている兵士に礼を言って、下がるように促した。

彼は部屋の中をゆっくりと見廻すと、よく通る声で口上を述べた。

「ヒーデータ帝国公爵、ヒーデータ・シュア・ヴァイラスと申します。この度は、この戦いの和平の使者として罷り越しました。どうぞ、お見知りおきを」

そう言って彼は優雅に一礼して見せた。

ヴァイラスは従者も伴わずに単身でこのロークル城に乗り込んできていた。その場に居合わせたミトス王国軍の幹部たちは、ただひたすらに驚いていて、声一つ上げることができなかった。そんな彼ら

を一瞥したヴァイラスは、優しい笑みのまま、レアルに向き直る。

「そういうことだ、レアル。この戦いを終わらせに来た」

「お……お言葉ですがお兄さま。今、我々とお兄様とは敵同士ではありませんか？　ヒーデータは、我らの盟友であるカルートレン軍を攻撃したと聞きました。それは、ヒーデータが我々に対して宣戦を布告したことになります……」

「もういい、レアル」

ヴァイラスの顔に憐みの感情が浮かんでいた。

「ミトス王国の策略は、すべて明るみになっている。アガルタ軍をおびき寄せ、ミトス、カルートレン、エルスモ、ノーノ、セーファンドの連合軍でアガルタを、アガルタ王の首を挙げようと画策していたのだろう。だが、ミトスを除くすべての軍勢が壊滅し、あるいは撤退した。もう、ミトスの策略は潰えたのだ。今、このロークル城は、我々ヒーデータとアガルタによって完全に包囲されている。悪いが、ミトスが勝つ可能性は、皆無だ」

……そんなことはやってみなければわからないだろう。レアルは心の中でそう呟いた。セーファンドとエルスモ軍が壊滅したときに、この策略が見破られたであろうことは想定していた。今、この危機を脱するには、ヒーデータとアガルタ軍を駆逐するほかなかった。しかも今、目の前にいる兄は、表向きはヒーデータ軍の総司令官なのだ。この兄を討てば、ヒーデータは瓦解する。グレイジア元帥と連携することができれば、今度こそアガルタを窮地に追い込める。そんな考えが頭をよぎったそのとき、ヴァイラスが衝撃の一言を放った。

「ちなみに、お前が連絡を取っていたグレイジア元帥は、亡くなった」

「何ですって！」

思わず立ち上がって声を上げた。自分でも驚くほどの声が出た。レアルの頭の中が真っ白になっていく。

「私は、ヒーデータ帝国の使者として赴いている。私の言葉は、ヒーデータ帝国皇帝の言葉と思っていただいて結構です」

ヴァイラスはそう言うと、スッと背筋を伸ばした。

「このミトス王国の王妃は、我が妹です。このままミトスと刃を交えるのは、兄妹が刃を交えるのと同じ。私は、それはするべきではないと考えています。そこで、この度の戦いを穏便に済ませたいと考えています」

「じょ、条件を承ろうではないか」

突然口を開いたのは、何と、ミトス国王、カインだった。彼は目を見開きながら、言葉を続ける。

「和平の条件を承ろう！」

「承知しました。しかしながら国王陛下、その条件は決まっておりません。いや、決めていないという方が正しいでしょうか」

「どういうことだ」

「その和平の条件を、これからミトス、ヒーデータ、アガルタの三者で話し合いたいと存じます」

「……」

「場所は、我がヒーデータ帝国の船内を考えております。アガルタ王はこのことに関しては承知なされました」

「お、畏れながら申し上げます」

宰相ムタがたずねた。彼の額には汗が浮かんでいる。

「その場には、アガルタ王おん自らおいでになるのでしょうか」

「はい。その通りです」

「と、なれば、我が方は、全権大使を立てるわけには……」

「いいえ、その点についてはこだわるつもりはありません。ただ、私とレアルは兄妹です。レアルと話をするのが、一番伝わりやすいとは思いますけれど。これはあくまで私の考えですが」

「し……しばらく、お時間をいただきたく、お願いを申し上げます」

「今すぐご回答をいただきたい」

「し、しばらく、しばらくのご猶予を……」

「こう申し上げては何ですが、今、貴国は後宮をアガルタに占領さ

れているのです。一刻も早くこの話をまとめて、後宮を開放することが先決ではないですか？」

「う……」

「もうよい、余が参る！」

国王カインは言った。そこにいた全員が呆気にとられた表情を浮かべている。

「お待ちください、陛下！」

「言うな！　使者殿が言われる通り、今は後宮を開放することこそが一番じゃ。一刻も早くマリアを助け出すのじゃ！」

カインはそう言うと、ヴァイラスに向き直る。

「和平交渉の件、承知した。場所も、ヒーデータの軍船であることも承知した。すぐに支度にかかってもらいたい。一刻も早く、じゃ」

「……承知しました。それでは、今からおいでになりますか？　すでに、アガルタ王は我が船に参っております」

「よしわかった、馬を曳け！　馬車を！」

そう言ってカインは城門に向かって歩き出した。その後ろを、宰相ら主だった者たちが追いかけていった。

一人残されたレアルは、呆然自失の表情を浮かべていた。そんな妹を、ヴァイラスは哀れな目で眺めていた。

◆◆◆

国王カインがロークル城を出発したのは、それから一時間後のことであった。結局、国王の他に、宰相ムタと王妃レアルが従うことになった。レアルの同行は、宰相の希望だった。彼は、彼女のヒーデータとの血のつながりが、この交渉で大きな役割を果たすと踏んでいたのだ。

結局、この三人は、ヴァイラスの馬車に同乗して船に向かっていた。ロークル城で馬車の用意ができなかったためだ。国王カインは、いつまで経っても準備ができないことに腹を立て、周囲の者たちに当たり散らした。それを見かねてヴァイラスが、自分の馬車で向かうことを提案したのだった。

奇妙な光景だった。敵同士が同じ馬車に乗っている。しかも、宰相ムタ以外は全員王族だ。王族でもない自分が同じ馬車に乗るなど、ミトス王国ではあり得ないことだった。しかも、宰相の隣に、ヴァイラスが座っている。今ここで、彼の命を奪うのは簡単のように思えた。そして、それをすれば、ヒーデータ軍は瓦解し、この戦いを有利に進められるのではないかとさえ思った。

だが、彼の本能が、それを止めた。宰相の判断は正しかった。ヴァイラスの乗る馬車はオワラ衆が操っており、何かコトがあると、すぐに彼を救い出す手筈が整っていたのだった。

程なくして、馬車は船に着いた。ヴァイラスは彼らを船内の一室に案内した。

「ようこそ」

「はあっ！？」

レアルはまたもや頓狂な声を上げた。

第七百七十二話　狸め！

レアルは眼を見開いたまま固まった。彼女の目の前には、長兄であるヒーデータ帝国皇帝、ヒートがにこやかな笑みを浮かべていた。

「あっ、兄上……どうしてここに……」

「この戦いを収めに来たのだ。このままでは、長引くと考えたのでな」

レアルにとって、全く想定の範囲外の出来事だった。まさかあの兄がこのミトスまでやって来るとは信じることができなかった。一瞬、影武者か何かではないかと疑ったが、目の前に座る男は、どこをどう見ても長兄であるヒートだった。

ヒートは立ち上がると、二人の間に挟まって戸惑うミトス国王カインに向かって右手を差し出した。

「お初にお目にかかる。ヒーデータ帝国皇帝、ヒーデータ・シュア・ヒートです」

「あ、う、ミトス王国国王、ミトス・ロークル・カインで、ある」

まるで人形のようにぎこちない動きで、カインはヒートの手を握った。

「うむ、今後ともよしなにお願いしたいものだ、義弟殿」

そう言ってヒートはニコリと笑った。

彼はカイン、レアル、宰相ムタを座るように促して、自らも椅子に腰を下ろした。ちょうど三人はヒートの真向かいに座った。そのヒートの左側にヴァイラスが腰を下ろした。

「リノス殿は、どうした？」

「はっ、間もなく参られます」

二人の会話を聞いていたかの如く、扉が開くと、そこに銀の鎧を装備した男が入室してきた。彼はヒートに一礼すると、彼の右側に腰を下ろした。

「義弟殿らは、リノス殿とは初めてかな？　ならば紹介しよう。アガルタ王国国王、バーサーム・ダーケ・リノス殿である」

紹介を受けた男は、無表情のままゆっくりと頭を下げた。

「こ、これは、アガルタ王にはご機嫌もよろしく、何よりとお慶びを申し上げます。私は、ミトス王国で宰相を務めます、ムロウ・ムタと申します。どうぞ今後ともお見知りおきの程を願い上げ奉ります。こちらにおいでの方が、我らミトス王国国王、ミトス・ロークル・カイン陛下であらせられます。そして、その隣においでになる御方が、ヒーデータ帝国皇帝の実妹にあらせられ、我がミトス王国の正妃であらせられます、ミトス・ロークル・レアル陛下であらせられます」

宰相ムタは立て板に水のごとく、隣に控える国王夫婦を紹介した。彼としては、せめてもの抵抗として、国王夫婦に威厳を持たせ、ア

ガルタよりも上位の家柄である点を強調したのだった。そして、その意を受けた国王夫婦は、いつものように鷹揚な振る舞いを見せていた。

その様子をリノスは無表情で眺めていた。心の中では、能書きが煩いなと呟いていた。

「さて、ヴァイラスにも伝えさせたが、わざわざ義弟殿とレアルにこの船まで来てもらったのは、この度の戦いを納めるためだ。いやなに、細かいことを言うつもりはない。貴国に対して、余は、今後、戦争を起こす際は必ず我がヒーデータ帝国の同意をもって開戦する旨を含めた、軍事同盟の締結を求めたい。それが成されれば、ヒーデータ軍並びにアガルタ軍は即時撤退を行う。どうであろうか」

「お、お待ちください……それは……」

宰相ムタが慌てて口を開く。だが、ヒートは彼を制して、さらに言葉を続けた。

「いや、この度の戦いは、余が妹レアルを止められなかったことにある。レアルはミトスの使者として、我が国に参った。そのとき、余が妹を止めておれば、このようなことにはならなかった。アガルタにも、ミトスにも、この戦いで犠牲になるものは出なかったであろう。これは、悔やんでも悔やみきれぬことだ。だからこそ、余は、開戦時に我らの同意を得て行う旨の軍事同盟の締結を行いたいのだ。これは、我らヒーデータ帝国の、皇帝である余への戒めでもある」

「しかし……」

「どうじゃな、義弟殿、レアル」

なおも食い下がろうとする宰相を無視して、ヒートはカインとレアルに視線を向けた。宰相ムタが懸念するのは至極当然のことであった。ヒートの言葉を額面通り受け取れば、ミトス王国は自分の意思で戦争を行うことができなくなるのだ。それはひいては、対外的には、ミトスがヒーデータの属国になったかのような印象を与えるものであり、国の執政を預かるものとしては、それは避けねばならないことだった。

もしそんなことを同意したならば、自分は宰相の地位を追われることになる。そんな同盟に賛同することなど、できるはずもなかった。

……もともと、この戦いを主張したのは、王妃レアル様だ。レアル様はこの戦いが終わった後、後宮を追われるか、下手をすれば自決を求められる可能性があるのだ。そんな王妃様と運命を共にするなど、何としても御免だ。そんなことを考えていると、宰相の頭の中に、ふと、とある考えが浮かんだ。

もしかして、ヒーデータ皇帝は、妹君を守ろうとなされている？

この軍事同盟が締結されれば、ミトスは今後、ヒーデータの顔色を窺い続けねばならない。となれば、王妃を粗略に扱えば、ヒーデータの態度を硬化させることになる。

……狸め。

宰相ムタは心の中で毒づいた。妹を守りつつ、ミトスを支配下におこうとする魂胆だ。しかも、ここで妹に恩を売っておけば、ミトスはしばらくはヒーデータの言いなりになる。優し気な笑顔の後ろに、とんでもない顔を隠し持っていると、宰相ムタは思った。

「そ、それを受け入れれば、後宮は解放していただけるのか？」

国王カインが、振り絞るような声で口を開く。ヒートは大きく頷いた。

「無論、である。昨夜一晩かかって、その同盟の骨子を作成した。乱筆はご容赦いただいて、こちらに義弟殿のサインをいただければ、すぐに兵を引かせましょう。よいかな、リノス殿？」

「ええ、構いません」

ヒートは懐から一枚の紙を取り出す。それをヴァイラスが受け取り、カインの目の前まで持っていき、ペンを渡した。カインは早速そこにサインを書き入れた。

「では、兵士たちに撤退するように伝えましょう」

「すまんな、リノス殿」

リノスは頷き、足早に部屋を出て行った。

「宰相殿」

突然、ヒートから呼ばれてムタは体を震わせた。ヒートは優しげな笑みを浮かべながら、ゆっくりとまるで諭すように口を開く。

「宰相殿の懸念はよくわかる。だが、余と義弟殿、レアルには血のつながりがある。我らには同じ血が流れている。その絆は何にもにも勝るものだ」

ヒートはそう言って胸を張った。宰相ムタはゆっくりと頭を下げた。

理屈を言えば、ヒート陛下とレアル王妃は母を同じとすることから、同じ血が流れていると言えるが、カイン国王の母はケアリー王妃だ。二人と同じ血が流れてはいないのだ。

たが、そんなことを言ったところで、国王はすでにサインを記入してしまっている。条約は調印されてしまったのだ。ヒート皇帝は、改めて条約文を送ると言っているが、その内容を大きく変えるのは難しいだろう。宰相ムタはその場で頭を抱えたい思いでいっぱいだった。

程なくして、リノスが戻ってきた。

「兵士たちに撤退命令を出してきました。すぐに後宮は解放されるでしょう。一応、占領していたときも、最低限の水と食料は届けていますので、ご安心ください」

「わ、我が妃、マリアは無事なのであろうな」

「ええ、体調が悪くなった方がいるという報告は受けていません」

「そ……そうか。穏便な取り計らい、感謝する」

国王カインの言葉に、レアルはあからさまに侮蔑の視線を向けた。

「さて、ヒーデータ、ミトス、アガルタの話し合いはこれで済んだ。聞くところによると、この戦いには、カルートレン王国が色々とよろしからぬ知恵を付けたと聞いている。ある意味で、この戦いの戦

犯は、カルートレンということになるかな」

ヒートはそう言ってフフフと笑った。

「さて、事はついでだ。残りの事柄もまとめてしまおう」

ヒートは隣のリノスに目配せをすると、リノスはパチパチと手を鳴らした。その合図を待っていたかのように、扉が開いた。

第七百七十二話　狸め！（後書き）

結界師への転生コミカライズ最新話、公開されました。是非、チェックください！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６

第七百七十三話　サイン会

鎧を装備した女性が入室してきた。キッと吊り上がった、見るからに意志の強そうな表情。小柄ではあるが、その体躯から放たれる人を圧するオーラは、一見してただ者ではないことがわかった。ただ、レアルはその女性を気に入らなかった。一目見て、さぞかし名のある将校であると感じると同時に、自分とは相容れぬ者であると心の中で断じ、軽い嫌悪感を抱いた。

そんなレアルの心の中など関係ないとばかりに女性は、アガルタ王のすぐ後ろに控えた。そして、淡々とした声で扉に向かって入られよ、と告げた。

「う」

宰相ムタが思わず声を漏らした。入ってきたのは何と、エルスモのノマサだった。さらにその後ろからは、セーファンド軍総司令官のブートとサーマ父子が入室してきた。

彼らは促されるまま、レアルたちの右側の席に腰を下ろした。

「……マトも座ったらどうだ」

アガルタ王が背後に控える女性に小声で話しかけている。だが、女性は毅然とした態度でその勧めを断った。

「……立ちっぱなしだと、疲れるだろう」

「いや、この者たちがおかしな動きをしたときは、私は斬らねばならない。座っていては、リノス様を守ることができない」

女性の言葉に、アガルタ王は照れた表情を浮かべた。

「さて、話の続きだ」

ヒートが苦笑いを浮かべながら口を開く。彼は傍らに座るノマサらに視線を向けながら、さらに言葉を続ける。

「ノマサ殿、並びにブート殿はそれぞれ、エルスモ、セーファンドの軍を司る立場にいる。つまりは、ある程度の条約交渉の権限を有していると余は見ている」

「……私は、そのような権限を有してはいない」

ノマサが小さな声で呟く。それはまるで、必死に屈辱に耐えているかのような雰囲気だった。それは、隣に控えるブートも同様で、よく見るとその体は小刻みに震えている。

レアルは彼らの心の中が手にとるようにわかった。彼らの置かれている立場はまさしく、自分も同じであったからだ。

しかも彼らは軍人だ。戦いに敗れ、そのまま捕虜となっている。その彼らがこうしてここに、勝者の前に引きずり出されているのだ。軍人にとってこれほどの屈辱はないだろう。

レアルは考えていた。これはヒート兄の考えなのだろうか、と。あの気の弱かった兄が、こんなことをするなどとは、考えられなかった。きっとこの兄の背後に、兄を操る者がいるのではないか。それ

はおそらく、ヴァイラス兄では決してない。この兄はこのような血も涙もないことをする人ではない。とすれば、誰か……。彼女の視線は隣に控えるアガルタ王に向けられた。

……姉様。

リコレット姉が、夫を動かし、さらにはヒート兄を動かしているのではないか。だとすれば、納得がいく。あの姉ならやりかねない。きっと、あの姉がこの出来事を主導しているのだ。もしかして姉は、この部屋の隣に控えていて、この会議に聞き耳を立てているかもしれない。きっとあの姉のことだ、自分を倒そうとした者に情けをかけることなどないだろう。最終的に、ここに集まった者たちは全員、命を奪われるのだ。

レアルの頭の中に、そのような考えが巡っていた。そして、いつしかその視線はアガルタ王に向けられていた。彼はレアルに視線を合わせず、淡々と、ノマサらを眺め続けていた。

「ご冗談を！」

レアルの思考を遮るかのように、ヒートが大きな声を上げた。思わず兄に視線を向けると、彼は満面の笑みを浮かべてはいたが、その眼は決して笑うことはなく、鋭い光を湛えていた。

「ノマサ殿は、エルスモの次期国王である方。これまであなたは父君に成り代わり、エルスモを牽引してきたと聞く。いや、謙遜には及ばぬ。あなたの勇名は、この私の耳にも届いている」

そこまで言うとヒートは、少し声を落として、まるでヒソヒソ話をするかのように話しかけた。

「いや、余はなにも、エルスモから領土の割譲や賠償金を取ろうというのではない。エルスモは先の戦いで二万の将兵を失い、さらには、この度の戦いでも大きな被害を受けている。言ってみれば、エルスモは被害者だ。違うか？」

ノマサは石のごとく固まっている。彼はどう答えてよいのかを迷っていた。そもそも、ノーノに援軍を送ったのは、最終的にはあの国を併呑しようと目論んでいたからなのだが、まさか、とは思うが、このヒーデータの皇帝は、そこまで見越して話をしている可能性があった。もし、そうであったとしたら、返答如何によっては、自分は斬られる可能性があるし、ヘタをすると、ヒーデータ、アガルタの連合軍とノーノの軍に攻撃される可能性すらある。この戦いのきっかけとなったのは、エルスモなのだ。それが明るみになった場合には、エルスモは滅亡するしかなくなるのだ。

ノマサの背中に、冷たい汗が流れていた。

「だからこそ余は、今後エルスモがこのようなことに巻き込まれぬようにしたいと思っているのだ」

ヒートはそう言って懐から一枚の紙を取り出し、そこにペンでサラサラと何かを書き入れた。

「ご覧あれ」

ヒートは手元にあった紙を傍に控えていた兵士に渡す。兵士はそれをノマサの許に持っていった。

『周辺国との不可侵条約について』

紙にはそう書かれてあり、その下には空白があり、さらにその下には、同意するという一文が書かれ、ヒートのサインが記されてあった。

「危急のこと故、詳しい条文は後で拵えるとして、まずは余は、エルスモ、ミトス、セーファンド、アガルタ、ヒーデータ、この五者が互いに争わぬ条約を締結したいと思っている。たった今、ヒーデータ、アガルタ、ミトスは不可侵条約を締結したところだ。余はさらに、先に述べた五か国の間で不可侵条約を結ぼうと考え、ノマサ殿たちに同席を願ったのだ」

ノマサは動かない。ヒートの言葉の意味を理解しているのかどうか、伺い知れない。宰相ムタはその話を聞いて、口から心臓が飛び出す程に驚いていた。

白紙の条文など、古今東西聞いたことがない。ヒート陛下は、詳しい条文は後で拵えると言った。ということは、ヒーデータの都合でいかなる内容も書き込めるということだ。そんな恐ろしい条文にサインするなど、まともな政治家ならば絶対にやらないことだ。

ヒート陛下はその笑顔の裏で、ミトス、エルスモ、セーファンドの生殺与奪を握ると言っているのだ。つまりは、この戦いに敗れた三国を、完全に支配下に置くと言っているのだ。不可侵条約という、一見すると互いの国に益ありと思われるエサをぶら下げておいて、その実は、この三国に無条件降伏を迫っているのだ。しかもそれは、巧妙に仕掛けられているわけではない。まるで、子供だましだ。ヒート陛下の意図は、ここにいるすべての者たちが承知している。要するにヒート陛下は、この戦いに加担した者たちを許さない、と言っているのだ。

「いかがかな？　余の考えに賛同してくれれば、ノマサ殿には早々に帰国していただく」

ヒートの声に押されるように、ノマサはペンを執り、サインを書き入れた。さらに兵士はそれを隣のセーファンドのブートの許に持っていった。

「畏れながら陛下に申し上げます」

サーマが口を開いた。顔色が真っ青だ。

「何だろうか」

「条文に関しては、これから拵えると承りました。その条文は、我らも共に考えさせていただけるのでしょうか」

「無論である。いずれ、使者を遣わそう」

「し、承知しました」

……甘い、と宰相ムタは呟いた。その彼の目の前で、ブートはサインを記入している。そしてさらにそれは、ミトス国王カインの許に届けられ、王は何の躊躇もなくサインを書き入れ、最後にそれは、アガルタ王の許に届けられ、彼はそこにサインを書き入れた。

「うむ。これで、この五か国の民の生活は守られた」

ヒートはまるで宣言するかのように口を開いた。

「さて、最後に、セーファンド帝国に一つ話がある。貴国には、領土の一部を割譲してもらう」

ヒートの言葉に、ブートとサーマの二人がガバッと顔を上げた。

第七百七十四話　War is Over

藪から棒の話だ。今の話の流れで行けば、この戦いに参加した国々には、領土の割譲や賠償金などは求めず、今の状態のままで撤退することにして、会議を終了するのではないのか。セーファンド帝国軍総司令官であるブートの顔には、そんな感情がありありと見て取れた。

だが、ヒートは厳しい表情を浮かべながら、すいっと前に体を乗り出した。

「もともとこの戦いは、貴国が我が国に援軍を要請したことから始まったのだ」

「いや、それは……」

「確かに、この戦いの戦端を開いたのは、エルスモとノーノである。しかし、我が国にとっては、貴国の援軍要請からこの戦いは始まったのだ。単なる援軍要請であったならば、余は何も言うことはなかった。だが貴国は、余が依頼したアガルタの使者を蔑ろにし、あまつさえ、その命を奪おうとした」

「そ、それは……」

「違うか？」

ヒートの少し怒気を帯びたかのような言葉にブートは絶句した。

「お待ちください」

慌ててサーマが口を開く。相変わらず蒼白な表情だ。ヒートはゆっくりと彼に視線を向ける。

「その点につきましては、深く、深くお詫びいたします」

彼はそう言って頭を下げた。ヒートは語気を緩めて、まるで諭すような口調で語り出した。

「何も余は、セーファンド帝国の多くの領土を割譲せよというわけではない。余は、カーザ城周辺の領有を放棄してもらいたいと思っているのだ」

「……」

ヒートの言葉に、サーマはあんぐりと口を開けている。

「あの地域では、グレイ・サハラが起こったのであろう？　ドラゴンの群れに襲われたことで、カーサ城周辺は大きな被害を受け、場所によっては地形が変わった、との報告を受けている。まさか、そのような場所に人が立ち入るとは思わないが、念には念じゃ。あの周辺を人の立ち入りを禁止して、二度とグレイ・サハラが起こらぬようにしてはどうかと思うのだ」

「は……はっ」

「むしろ、それを貴国から提案されたことにすれば、貴国にとっても益があると思うが、どうだ？」

「お……お言葉の意味がわかりかねます」

「もともとカーザ城周辺は人の立ち入りができぬ場所になっている。今回の一件で貴国がそこを割譲すると提案し、余はそれを断る。そうすれば貴国は、なかなか油断のならぬ国であるという評価になるのではないか。貴国は実質、全く領土を失うことなく、この戦いを納めたということになるのではないか」

そこまで言うとヒートは、いたずらっぽい表情を浮かべた。

「このままでは、貴国は我が帝国内において、裏切った国という評価となる。そうなれば余は、貴国との付き合いを変えねばならない。貴国は、亡き我が母の生まれた国だ。母はセーファンド帝国とヒーデータ帝国の関係が円滑となるようにいつも心を砕いておられた。ここで両国の関係が冷え込むと、母の意志が台無しになる。そのための策だ。わかってくれるかな？」

ヒートの言葉に、サーマは黙って頭を下げた。

「話は終わった。この戦いは、これにて終わりとする。ヒーデータ、アガルタの両軍は、今すぐ引き上げることとする」

そこまで言うとヒートは隣に控えているリノスに視線を向けた。

「これでよいかな、義弟殿？」

ヒートの言葉にリノスはゆっくりと頭を下げた。

◆　◆　◆

リノスが帝都の屋敷に帰ったのは、翌日の夕方のことだった。彼はいかにも疲労困憊と言った表情を浮かべながらダイニングに腰を下ろした。

彼は兵士をまとめるだけでなく、色々と裏で動いてくれたオワラ衆に手厚く報酬を渡すだけでなく、ミーダイ国の帝様に丁寧なお礼状を認めていた。さらに、撤収するにあたって、様々な取り決めを行い、すべての事柄を片付けてから帰宅していたのだった。

「ご苦労様でした」

食事を終え、風呂に入って戦いの垢を落とした彼は、ベッドルームに入るなり、大の字になって寝ころんだ。その隣にはリコが優しい笑みを浮かべていた。

「兄上のこと、本当にありがとうございました」

「ああ。まさか、あんなこと言う人だったとは正直、思わなかったよ」

「……」

「いや、褒めているんだ。正直、ミトスに連れて行けと言われたときは、ここまでうまく話をまとめるとは思わなかったんだ。きっと、妹さんを説得して、何とか停戦に持っていければ御の字だなと思っていたんだけれど、まさか、あの国々をヒーデータの支配下に置くとは思わなかったよ。あの人、もしかしたら、とんでもない大政治家になるんじゃないだろうか」

「確かに、兄上は幼いころから聡明で、父も期待をかけていました

わ」

「オドオドと気の弱かった昔とは、別人だよ」

「いいえ、むしろ、今の兄上が本来の兄上ですわ」

「え、そうなの？」

「兄は失敗をすることを恐れていましたわ。というより、失敗してはいけないと思い込んでいましたわ。しかし、今は失敗してもよい、むしろ、失敗すればそこから学べばよいとすら思っていますわ。その考えが兄の不安を払しょくして、積極的な行動をとらせているのですわ」

「一体、いつからそうなったんだ？」

「それはリノス、あなたがそうさせたのですわよ」

「え、マジで？」

「兄上はそう言っていましたわ」

「……俺はとんでもないことをしでかしたかもしれないな」

「そんなことはありませんわ。むしろ、ヒーデータにとっても、アガルタにとっても、有益に働いていると思いますわ」

「そうかなぁ。一番驚いたのが、俺が一旦屋敷に帰ってきたタイミングで使者が来て、宮城に呼び出されたことだ。一体どうやって俺が屋敷に帰ってきたのを知ったんだ？」

「それは、私が知らせたのですわ」

「リコが？？」

「ええ。兄上から、リノスが帰ってきたらお願いしたいことがあるので、知らせて欲しいと手紙を貰っていたのですわ」

「教えてくれよー。あれ、マジでビックリしたんだ」

「てっきりリノスに言っているものと思っていましたから……」

そこまで言うと彼女は、ゆっくりと夫の胸に顔をうずめた。

「妹は……レアルは、何か言っていまして？」

「いや、何も」

「どうして妹は私を……」

「ああ、その件なら聞いたよ」

リノスはそう言うと、リコの左手を握った。

「リコの指輪。メイメントの指輪だっけ？　これが欲しかったんだそうだ」

「この指輪が？」

「ああ。リコの母上が亡くなられたときに、父上にこの指輪を形見

として欲しいと要請していたんだそうだ」

「そう、でしたの……」

「でもこれは、母上の遺言があったので、父上はそれを受け入れなかった。その経緯を陛下が噛んで含めるように説明したら、大泣きしていたよ。どうも、彼女はリコがこの指輪を無理矢自分のものにしたと思い込んでいたらしい」

「では、この指輪はレアルに……」

「いや、それには及ばない。陛下が別の指輪を贈った」

「……」

「そして、このことをリコに言えば、きっとリコは指輪を妹に送るというだろうから、それには及ばないと言えとも言っていたよ」

「まあ……」

「まさしく、陛下の絵にかいた通りの展開になったな」

そこまで言うと、リノスは困った表情を浮かべ、少し遠慮するように小さな声で呟いた。

「この指輪の件だけれども……」

「はい」

「陛下は、エリルがアローズ殿下に嫁入りするときの結婚指輪にし

てはどうかと言っていたよ」

「まあ、そんな先々のことを……」

そう言ってリコは目を閉じた。

それから十数年後、リコの身に付けているメイメントの指輪は、ヒートが提案した通り、エリルが嫁入りする際に、結婚指輪としてヒーデータ帝国に送られた。それは長くエリルの左手薬指に収まり、折に触れて彼女を救うことになるのだった……。

第七百七十五話　一番得をした者

ヒートは帝都に帰るとすぐさま、ミトス並びにその他四か国との条約文の作成を宰相に命じた。その条約文は、わずか二日後に完成し、ヒートの許に上程された。

彼はそれを丁寧に確認して、承認を与えた。手直しは一切行わなかったし、それをする必要もなかった。彼は宰相以下、帝国の政治の中枢を司る者たちの優秀さを改めて実感するとともに、この国の強さを実感した。

「一週間後、これらの条約を締結するための使者を、リノス殿の許に差し向けよ」

「ははっ」

宰相はそう言って恭しく頭を下げた。

ヒートの側近の中には、二人の会話が理解できなかった者もいた。とりわけ、その話を聞いた軍人たちは一様に首をひねった。どうして使者をアガルタ王の許に差し向けるのか、と。

ヒートは頭の中で計算していた。ミトスに出陣していたエルスモ、セーファンドの者たちが帰国するまでの日数を。そして、彼らが帰国し、ミトスでの会談の結果を国王に報告するのを五日間と読んでいた。おそらく彼らは明日にでも帰国することだろう。そのタイミングでリノスの転移結界を使って使者を遣わせば、相手は動揺する。こちらのペースで交渉を行うことができるとヒートは考えていた。

……さて、両国の国王は、どのような顔をするだろうか。

きっと、エルスモ王はひどく狼狽するだろうが、ノマサが承知したと聞けば納得するだろう。問題はノマサだが、宰相らが懸念することは杞憂に終わるだろう。宰相はノマサが、ヒーデータとアガルタに憎しみを募らせて、さらに軍事行動を起こすのではないかと言っていたが、実際に見た彼は、敗北による屈辱のため体を震わせていたが、その眼に光はなかった。

ヒートは直感的に、この男はしばらくは、ヒーデータとアガルタに歯向かうことはないと感じた。彼は今、心が折れている状態にある。このエルスモを支配下に置く絶好の好機であると捉えたのだった。

一番の懸念は、セーファンドだ。ブートが皇帝に報告するだろうが、そう易々とあの国が首を縦に振るとは思えなかった。きっと大勢の使者を立ててくるに違いない。子息のサーマと約束した約束を最大限に利用しようとすることは明らかだったからだ。ヒートはこの条約締結に時間をかけるつもりはなかった。要は、皇帝を頷かせればよいのだ。

「誰かある」

「ハッ」

「サカゲをこれに呼んでくれ」

ヒートから命令を受けた侍従は恭しく一礼して、その場を後にした。しばらくすると扉がノックされ、侍従が一人の男を連れて入室してきた。その姿を見てヒートは思わず絶句した。

「……どうした、そのやつれ様は」

まるで別人かと思われる程に、男は憔悴しきっていた。いつもはシャンと背筋を伸ばし、明朗快活な振る舞いをする男が、見る影もない有様だった。

無理もない。ヒートは心の中で呟いていた。彼の兄はグレイジア元帥であり、その兄は目の前で自らの命を絶っていた。

元帥がレアルと通じていたことは明白だった。レアル自身もそれを認めた。彼女は元帥を通じてヒーデータ軍を操ろうと考えていたのだ。

帝国軍におけるサカゲの立場的は苦しいものだった。このままでは、彼は軍人を辞める可能性すらあった。だが、ヒートは彼に兄以上の才覚があることを感じていた。

「陛下……」

か細い声でサカゲが呟く。ヒートは彼に視線を向ける。

「誠に恐れ入りますが、この私めに、死を賜りますよう」

「やめよ、サカゲ」

「しかし……」

「そなたを罰すれば、余は自らも罰せねばならなくなる。そなたの兄、グレイジアを死に追いやったのはレアルだ。そのレアルは余の

妹である。責任は妹の策略を見抜けなかった余にもあるのだ」

「へ……陛下……」

ヒートはしばらく何かを考えていたが、やがて、優しい眼差しを浮かべると、まるで諭すようにサカゲに向かって話しかけた。

「サカゲ、どうであろうか。いっそのこと、名を変えてみては」

「名を……変えるのでございますか？」

「うむ。王族の中に、今は絶えてしまっているが、ガルータという家がある。そなた、ガルータの家を継ぎ、その名を復活させてくれぬか」

「は……」

「オウブ・サカゲをあらため、ガルータ・サカゲ。どうだ」

「はっ、陛下のお心のままに……」

「うむ、そうか。では、これよりそなたを、兄と同じ公爵に叙する。本日からそなたは、ガルータ・グライ・サカゲと名乗るがいい」

「何と……」

「そなたには、亡き兄のグレイジアの有していた領地をそのまま与える。むろん、家来もだ。ご苦労だが、これからも帝国のために働いてくれ」

「わ、私めに、そのような……」

サカゲの眼に涙が浮かんでいた。ヒートはゆっくりと頷く。

「あ、ありがたき幸せにございます。ガルータ・グライ・サカゲ。身命を賭して、陛下にお仕えいたします」

サカゲはそう言って深々と腰を折った。

「さて公爵、早速だが、頼まれてもらいたいのだ」

「はっ、何なりと」

「余の使者として、セーファンド帝国に行って欲しいのだ」

「承知しました」

「そなたは、先の戦いでアガルタ軍の戦ぶりを見ておるな？」

「ハッ、船からではありますが、その様子は見ておりました」

「うむ、ならば何も言うことはない。よろしく頼む」

「承知しました。時間をかけずに、かの国にサインをさせて御覧に入れます」

彼はヒートの心の中をすべて察していた。ヒートは満足そうに頷いた。

「ああ、将軍。セーファンドには、アガルタの義弟殿を介して行く

がよい。その際、これを義弟殿に届けて欲しいのだ」

ヒートはそう言って、懐から二枚の紙を取り出した。

「これは……」

「うむ。先の戦いのとき、ミトスのロークル城にて余が提案した不可侵条約の骨子だ」

「これを、アガルタに、でございますか？」

「ああ。義弟殿は結界を操ることにかけては天下一品だ。あそこほど、安全な場所はないではないか。先の戦いの礼であると言って渡してもらいたい」

「し、承知いたしました」

「フフフ。もしかすると義弟殿は、不思議そうな顔をするかもしれぬがな。だが、あそこにはリコレットがいる。リコレットには、余の存念は通じるであろうよ」

ヒートはそう言ってサカゲを下がらせた。

部屋に一人残ったヒートは立ち上がり、大きく背伸びをした。

「ああ……こういう政治向きの話は、肩が凝っていかんな。どこかでのんびり寛ぎたいが、なかなかそうもいかん。皇帝とは、不便なものだな」

そう言って彼は、窓の外を見た。

サカゲはこの後、セーファンド帝国に赴いて、わずか二日のうちに条約を締結させることに成功した。背後にアガルタの軍事力をちらつかせながら、相手の立場も尊重するという、剛柔自在の交渉術は、後々までの語り草となった。

帰国後すぐに彼はヒーデータ帝国軍最高司令官の任につき、長く帝国軍の指揮を執った。彼はその生涯をヒートのためにささげた。言わばヒートは、サカゲを改名させたその瞬間から、帝国軍を完全に掌握することに成功していたのである。

一方、そのサカゲによって届けられた二通の書簡は、高価な箱に入れられてリノスの許に送られた。彼はヒートの予想通り、不思議そうな表情を浮かべたが、それを見たリコは、その場で兄ヒートに対して、深い深い感謝を述べた。

彼女は夫に、アガルタの都の宝物庫で、厳重にこの書簡を保管するように提案し、彼もそれを承諾した。以後、この書簡は開封されないままアガルタにおいて保管され続けた。

やがてすぐにリノスもこの書簡の価値に気づいた。何も書かれていない白紙の条約文は、その気になれば、内容を自由自在に作ることが可能だ。そんなものを受け取るわけにはいかないと、リノスは以後、数度にわたってヒートに返還を打診したが、彼は頑として聞き入れなかった。それはヒートのリノスに対する信頼の高さを表す者であり、リノスはさらにヒートへの忠誠を誓うのだった。

結果的にこの戦いを通じて、最も多くの利を得たのは、ヒーデータ帝国皇帝、ヒーデータ・シュア・ヒートその人であった……。

第七百七十五話　一番得をした者（後書き）

憎悪連鎖編これにて終了です。また、間話を数話挟みまして、新章に突入します！

第七百七十六話　分析

アフロディーテ教皇神殿。ヴィエイユの執務室の机の上には二通の書簡が置かれていた。一つは分厚いもので、もう一つは薄いものだ。ヴィエイユはどちらを先に読もうかと思案していたが、ゆっくりとその手を薄い書簡に伸ばした。

書簡の差出人は、カルートレン帝国皇帝トーゴだった。そこには、先の戦いでミトス、エルスモ、ノーノの連合軍が、アガルタとヒーデータの連合軍に敗れたことが記されていた。その一方で、カルートレン軍は無傷であり、捲土重来を期して、必ずやアガルタに勝利すると書かれてあった。

ヴィエイユはそれを読み終えると、無表情のまま、もう一方の分厚い書簡を手に取った。それは、各国に住む信徒からの報告をまとめたものだった。それらはつぶさに戦闘の有様が記されており、さらには、その勝因と敗因が正確に分析されていた。

ヴィエイユは相変わらず無表情のまま、報告書を読み進めていく。部屋の中には誰もいない。彼女は存分に自分の世界に浸ることができていた。

報告書からは、戦闘の推移が手に取るようにわかった。これを書いた者は実に優秀だ。まるで、目の前で戦闘が展開しているような感覚を覚える。それほど克明に描かれた内容だった。

ゆっくりと報告書を机におくと、目を閉じて天を仰ぐ。

結果はわかりきっていた。並の者があの王に勝てるわけがないのだ。あの国の強さは、実際に戦った者でなければわからないものがある。果たしてこれが、自分だったらどうするだろうか……。

ミトスの王都であるロークルにアガルタを誘い込む作戦は、よく考えられていると感じる。たとえ、アガルタ軍といえども、足場の悪い砂浜、しかも、魔法が使えない状況であれば、四方八方から攻撃されれば、ひとたまりもないだろう。問題は、どうやってそこに引き入れるかだ。

ミトスの軍略は、その点がおざなりになっている。ノーノ、セーファンドの両軍を、こんなところに配置してしまっては、優秀な指揮官であれば、まず、この両軍を駆逐しようと考えるだろう。意外だったのは、アガルタ軍のおびき寄せ方だ。ヴィエイユはこの戦況図を見たとき、てっきりアガルタ軍はいったん撤退すると見せかけて、ノーノ、セーファンド軍をおびき出し、各個撃破したのだろと考えた。しかし、結果は違った。アガルタ軍は二手に軍勢を分け、一軍をノーノの牽制部隊とし、残る本隊でセーファンド軍が陣を張る山を迂回して、そして、夜襲をかけていた。さらに理解できないのは、ノーノを牽制していた部隊が馬首を返してセーファンドの攻撃に加わっていることだ。一体どのタイミングでアガルタ王はそれを命じたのか。牽制部隊はまるで、戦況を見ていたかのような動きだった。ヴィエイユはその指揮官の名前を見て、視線を天に向けた。

王妃マトカル。

言葉を交わした記憶はあまりない。必要最低限のあいさつ程度で、寡黙な女性という印象だ。だが、その顔ははっきりと覚えている。華奢で姿勢のよい佇まいで、いかにも軍人、という雰囲気だ。鋭い目つきで周囲に注意を払う姿は、美女ぞろいのアガルタ王の妃の中

で異色の存在であると言えた。

「確か、ラマロン王のお種、だったわよね……」

ヴィエイユは誰に言うともなく呟く。

この戦いの趨勢を決定づけた戦いは、間違いなくこのノーノ、セーファンド軍との戦いであるとヴィエイユは考えていた。その作戦成功の一番の要因は、この牽制部隊の動きだと彼女は睨んでいた。

……アガルタ王とこのお妃は、情が通じている。だから、かしら？

掾が通じ合うもの同士は、言葉を交わさずとも相手の心がわかるものだ。この戦いの勝利の要因は、そこにあるのだろうか。

ヴィエイユは目を閉じて考える。その脳裏には、この二人の房事が描き出されていた。

現役の軍人だ。それに加えてあの若さだ。体力は有り余っていることだろう。まるで弟を扱うように、アガルタ王に求めているのだろうか。唯々諾々とそれに従う夫……。いや、そうした関係性では、情は通い合わない。臣従関係であれば、従う側は受け身がちになる。この動きの説明がつかなくなる。

そこまで考えてヴィエイユは、目を開ける。

ということは、お互いの相性がよいということなのだろうか。互いが欲するものをうまく与え合っているのかもしれない……。

ヴィエイユの想像は、当たらずとも遠からずといったものだった。

実際、二人の相性はよく、リノスもマトカルも、その点に関しての不満は一切なかったと言ってよかった。

……きっとあの王様は、そちらの才能もお持ちなのかもしれないわね。

そんなことを考えていると、思わず笑いが込み上げてきた。一時期ヴィエイユは、自分の体をエサにして、あの王の気を引こうとしたことがあった。もしそれが成功していたならば……。自分が彼の虜になっている可能性も否定できなかったからだ。

いつぞや覗き見た、若い枢機卿の房事が思い出される。

それは快楽によって完全支配された世界だった。女性は組み敷かれるまま男の求めるまま、様々な姿態を取った。男はそれを見て興奮し、女性もその姿態を取ることで、さらに興奮を高めている様子だった。

その当時のヴィエイユには理解できない状況であり、一つの事例として、こういうこともあるのだなと思っていたのだが、下手をすると、自分がその女性側になる可能性もあるということなのだ。

……それはまさに、策士策に溺れるの典型だわ。

こみあげてくる笑いを必死で我慢する。しばらく彼女は肩を震わせていたが、やがて、我慢できなくなったのか、カラカラと声を上げて笑い出した。

とにかく、可笑しくて可笑しくて仕方がなかった。相手を虜にしようと試みた自分が、相手に虜にされているなど、本末転倒もいいと

ころだ。私に限ってそれはない。それはないと信じてはいるが、あの王はあらゆる常識を覆してきた男だ。自分が信じている事柄も、あっけなく翻す可能性を持っている。もし、自分が彼に組み敷かれ、彼なくしては生きていけぬほどになったならば、このクリミアーナ教国はどうなるだろうか。事と次第によっては、また、信徒たちが反乱を起こす可能性がある。今度は、先のような規模ではなく、世界中を巻き込んだ大騒乱となるかもしれない。そうなれば、自分は生きてはいないだろう。

……でも、あのお方のことだ。意外に教国のことについては関与してこないかもしれない。教国のことはお前に任せるよ、とサラッというだけかもしれない。

……それはそれで、つまらないわ。

愛欲にまみれた挙句、信徒に見放されて最後は命を落とす。そうなれば、自分の名前は後世まで語り継がれるであろうし、自分を主人公にした物語がいくつも作られることだろう。どうせ死ぬのであれば、そんな爪痕を残して死にたいものだ。彼女はそんなことを考えた。

ヴィエイユはふと考えた。自分はどんな最後を迎えたいのだろうか、と。大勢の信徒たちに惜しまれながら大往生を遂げるのがよいのか、大騒乱の中で命を落とすのがよいのか。

口汚く罵られ、罵詈雑言を浴びながら、若く美しい女性が白い肌を晒しながら首をはねられる……。そんな光景を想像したとき、ヴィエイユは自分の体が震えていることに気づいた。それは決して恐怖のために震えているのではないことを、彼女は知っていた。

「何を下らぬことを！」

ヴィエイユはまるで自分に言い聞かせるようにして、声を上げた。そのとき、扉がノックされて、若い枢機卿が恐縮しながら入室してきた。きっと彼は、ヴィエイユが物思いにふけっている様子を見て、しばらく外で控えていたのだろう。

彼女は、今の見たでしょ？　と言わんばかりに男に視線を向ける。だが男は、ヴィエイユから視線を外した。

ヴィエイユは気を取り直して、椅子に座りなおした。その様子は、いつもの威厳に満ちた教皇の姿になっていた……。

第七百七十七話　やるなら今

「我を呼ぶのは、どこのどいつだぁ！」

龍王は少し怒りを込めて声を上げた。だが、そこには誰もいなかった。

「ぬぅぅぅぅ」

龍王は歯ぎしりをしながら、何とか怒りを抑えようとする。ここで彼が怒り狂い、周辺に当たり散らせば、この地域の地形が変わることになる。それをすれば、アリリアとの約束を破ることになる。彼は常日頃からアリリアに、乱暴はダメよ、といわれ続けているのだ。

何とも無礼な話だ。この竜族の頂点に君臨する我を呼び出しておいて、もてなしもせず、誰もいないとは……。こんなことは、龍王の長い人生の中で初めてのことだった。

もしかして、我に恐れをなして逃げたのではないか、とも考えてみたが、どうやらそうでもなさそうだ。

どうしてそう言えるか。龍王を呼び出したのは、アリリアの父であるリノスだったからだ。

あの男は、この龍王を互角に渡りあえる唯一の存在と言ってよかった。負けはしないまでも、全力を出して何とか勝てる……。いや、我がその気になれば、一瞬であのような男など消し去ることができる……できればよいのだがな、と、そこまで考えて龍王は苦笑いを

浮かべる。

彼自身にも、負い目がないわけではなかった。リノスに呼ばれてからすでに、一週間の時が経っていたからだ。

我を呼んでおいて、たった一週間も待てぬのかという思いと同時に、さすがにちと、待たせすぎたなという思いもある。アリリアなど、呼んですぐ来なければ怒り出すのだ。彼女であれば、怒るのを通り越して、もう二度と呼んでもらえないかもしれない事案ではあった。

とはいえ、龍王にも言い分があった。それまでずっとアリリアと遊んでいたからだ。アリリアがここにいろというのだから仕方がなかった。龍王からしてみれば、いつも邪険に扱う身の程知らずなあの男と、いつも自分を頼って機嫌を取ろうとしてくるアリリアとを天秤にかければ、圧倒的に重視するのは後者だ。

……いつも我の機嫌を取ろうとしていない、ヤツが悪いのだ。

そうだ、その通りなのだ。そんなことを考えながら、彼は頷く。だがその一方で、あの男が怒っていないだろうか、という不安も少しだがある。もし、あの男が怒っているのであれば、再び戦うことになるかもしれない。いや、戦うだけであればいい。一番厄介なのは、また再びアリリアにあの結界を張られることだ。そうなれば、アリリアの傍に居ることはかなわなくなる。

……チッ。

龍王は思わず舌打ちをする。ここは、やりたくはないが、一言詫びを入れるべきか。

正直言うと、そんなことはやりたくない。誇り高き竜族の頂点に君臨する我が、人間ごときに頭を下げるなど、あってはならぬことだ。だが、これからのことを考えると、それが一番手っ取り早い気がする。

……人気のないところで、サッと謝ってしまうか。

そんなことを考えたとき、龍王の耳に心地よい音が聞こえた。

「……ノ……ヨ……バ……イ」

うむ、アリリアだ。最強のドラゴンよ、我の許に来い。そう言っている。行かねばならない。

龍王は羽を広げると、フワリと上空に舞い上がった。

自慢の翼で空を一気に駆け抜ける。我ながら素晴らしい速度だ。もう、アリリアの許についてしまった。

「あっ、りゅーおーくん。今日は何して遊ぶ？」

「ウワッハッハッハ」

相変わらずこの娘はいつも、会うと本当に嬉しそうな顔をする。龍王たる我を迎えるならば、こうでなくてはならない。そんなことを思いながら悦に浸っていると、またもやアリリアの声が聞こえた。

「今日はかくれんぼしよう！　りゅーおーくんが鬼ね！　目を閉じて～」

アリリアの言葉通り、龍王は目を閉じる。そして、しばらくすると、再びアリリアの声が聞こえた。

「もういいよ～」

眼を開ける。アリリアの姿はない。だが、龍王には優れた気配探知能力がある。すぐ前の花畑の中に潜んでいる。だが、すぐに見つけてはいけないのだ。しばらく探すフリをしないと、アリリアのご機嫌を損ねて、遊んでもらえなくなるのだ。

龍王としては、別にこの娘と遊ぶ、遊ばないは問題ではなかった。ただ、この心地よい音が聞けなくなるのは、何よりも惜しかった。

龍王は腕組みをしながら空を睨む。アリリアは相変わらず動かない。それはそうだ。動けば見つかってしまうからだ。さすがにこの娘はわかっているなと思っていると、不意に背後から男の声が聞こえた。

「何だ龍王、また来ているのか。早く帰れよ」

振り返らなくてもわかる。これは、アリリアの父親であるリノスの声だ。直感的に、龍王はやるならいましかない、と思った。

「悪かった、な」

この龍王が詫びの言葉を口にしたのだ。こんなことは何百年ぶりだろうか。自分の記憶をたどっても思い出せない。ずいぶん昔に神龍様のお告げを十分に伝えきれずに、多くのドラゴンが被害を被ったことがあったときに謝った記憶があるが、あれは事実だったのだろうか。もしかして夢かもしれぬなと思いながら、ちらりと後ろを見ると、そこには予想もしていない光景があった。

てっきりリノスは感動に打ち震えているものとばかり思っていたが、彼は眉間に皺を刻みながら、怪訝そうな表情でこちらを見ていた。まるで、「お前、何言ってんの？」と言わんばかりの表情だった。

一方のリノスも、龍王の言葉が意外だった。いつもは、ウワッハッハッハと笑うか、何を言うか！　と突っ込んでくるものだったが、今日の彼は一味違っていた。

確かに龍王は「悪かったな」と言った。それはどういう意味だろうか。額面通り受け取れば、彼は詫びを言ったことになる。アリリアの傍に居ることがダメなことであるとようやく理解したのだろうか。いや、このバカ龍に限ってそれはない。で、あれば、もっと早く気付いているはずだ。ということは、詫びを言っているという解釈はこの場合違う。

一体どういう意味なのだろうか。何か詫び言があるのかと思ってみたが、その心当りは思い出せなかった。ただ、このことを龍王に深堀すると、さらに話がややこしくなるような気がして、リノスは何も言わず、そのまま屋敷の中に入った。

ダイニングにはメイがいた。彼女は洗い終わった皿についた水滴を丁寧に拭きとっているところだった。リノスはそのメイの前に座ると、頬杖をつきながら口を開いた。

「なあメイ。悪かったな、という言葉は、どういうときに使うんだろう？」

「へ？」

意外な問いかけだったのか、メイは手を止めて、ポカンと口を開けてリノスを眺めている。

「いや、今外に龍王が来ているんだ。早く帰れって言ったら、奴め、悪かったな、って言ったんだ。どいう意味だと思う？」

「それは……単なる捨て台詞で、他意はないかと思いますけれど……」

「捨て台詞か……なるほどな」

「どうしても気になるのであれば、リコ様か、ソレイユちゃんに聞いてみてもよいかもしれません。龍王様に限ってないことだと思いますが、もし、何か邪念のようなものを感じたのであれば、シディーちゃんに相談してみてはいかがでしょう」

百点満点の答えだとリノスは思った。彼はありがとうと礼を言って立ち上がった。そして、その足で、シディーの部屋に向かった。

リノスの後姿を見ながらメイは、なぜ、彼がそんなことにこだわるのかがわからなかった。ただ、能力の高い者は、他者にはわからぬ部分にこだわりを見せることがある。ご主人様もきっと、そんな感じに違いないと、彼女は思いながら、元の作業に戻った。

龍王は大いに満足だった。これで結界を張られることはないだろう。これからも、アリリアの許にいることができる。

そのとき、アリリアがぴょこんと花畑の中から頭を出した。

「時間切れ～りゅーおーくんの負けね～」

やはり心地の良い音だ。龍王は思わずウワッハッハと笑い声を上げるのだった……。

第七百七十八話　ギブアンドテイク

リボーン大上王は、鋭い目つきで腕を組みながら考え事をしていた。

フラディメ王国の王都であるオービッゼ。大上王が住まうアリスン城内の隠居館では、家来たちが息を殺して彼を眺めている。大上王の目つきが鋭くなる原因の一つがこれだった。

別に彼は怒っているわけではなかった。国の行く末を真剣に考えているのだ。こういうときには誰か、「何かございましたか」などと言って、話し相手になってくれるのを待っているのだ。

だが、家来たちがまるで腫れ物に触るような扱いをするのは理由があった。これまでの大上王は、考え事をしている際に話しかけると、大喝する悪癖があった。家来たちは敢えて火中の栗を拾うようなマネをして、彼の機嫌を損ねるのは何としてもイヤだった。そのためにできるだけ距離を置くようにしていたのである。

一方の大上王は、アガルタでの生活を通して、人から話しかけられることに、妙な安心感を覚えるようになっていた。この大学の学生や職員は、大上王を恐れることはほとんどないと言ってよかった。どんなに厳しい表情をしていたとしても、皆、実にフレンドリーに話しかけてくるのだ。それは、大上王が折に触れて周囲の学生たちに知識を与え、彼らがわからない点を丁寧にかみ砕いて説明していたため、彼らに大いに受け入れられていたためだった。

学生たちは、最初こそ、教授らに大声で質問する少し話の長いこの老人を見て面を食らっていたが、やがて、彼の持つ含蓄の深さを認

め、尊敬の念を抱くようになっていた。

大上王は不思議で仕方がなかった。環境が変わればこうも違うものかと。

彼の知的好奇心がムクムクと頭をもたげてきた。この原因を追究したい。そんなこと考え始めると、その足は息子の部屋に向いていた。

「うおっ！」

無言で勢いよく扉を開けると、息子のメインティア王が頓狂な声を上げた。相変わらず気の弱い男だと思いながらよく見ると、王は全裸で、大柄の女性の膝の上に抱かれていた。

「何ぁにをしているのだぁ！」

部屋に響き渡る程の大音声を上げる。あまりの迫力に、王を抱えていた女性は、申し訳ございませんと言って、裸のまま逃げ出してしまった。

「父上、部屋に入るときは、ノックぐらいしてくださいよ」

さも面倒臭そうな表情を浮かべながら彼はガウンを羽織る。小さな声で、絶対大上王を通すなと命令していたんだけれどな、などと呟いている。その態度は、ますます大上王を苛立たせた。

「お前は一体、何をしておるのだ！」

この男は王なのだ。騎士の子供なのだ。まるで赤子のように裸の女性に抱かれるなど、あってはならぬ姿態だ。ついにこの男は気が狂

れたのではないか。そんなことを考えていると、メインティア王が、面倒くさそうに口を開く。

「いや、アガルタ王から聞いたので、試してみたのですよ」

「何っ！　アガルタ王！」

意外な人物の名前が出た。確かに、アガルタ王には息子ともども世話になっている。だが、あの一見優し気な好青年が、このような痴態を息子に勧めているとは、到底考えられなかった。

「胸の大きい女性に抱きしめられると、とても安心すると言っていましたよ。だから私も、試してみたのです。まあ、悪くはなかったですね」

「だからと言うて、何もあのような女子と！」

「ほっといてください」

豊満な女性ならば、側室たちの中にもいるだろう。そう言いかけて大上王は言葉を飲んだ。息子の側室たちの大半は、痩せていた。あのような豊満で、ふくよかな女性はほとんど見たことがなかった。

……また、新たな性癖を。

一体息子はどこまで堕落するのだろうか。大上王は暗鬱たる気持ちになった。

「アガルタ王だって、あのソレイユ王妃やメイリアス王妃とこのように……」

「バカなことを言うな！」

殺意にも似た感情が大上王の心の中を満たしていく。あのメイリアス殿がこのような痴態をとるなど、口が裂けても言うものではない。だがその怒りを前に、王は事も無げに言ってのける。

「だって、メイリアス王妃との間に、姫が生まれているでしょう」

だからと言って、あのような姿態を取っているとは考えらない。そんな言葉を飲み込む。このような話題に乗るのは、自らの価値も貶めるだけでなく、メイリアス殿の価値まで貶めるような気がしたからだ。

「で、父上。御用の趣は？」

さも面倒臭いと言わんばかりの表情で、メインティア王は口を開く。これはいつもの態度だ。もう慣れてしまっている。大上王は、淡々と疑問に感じたことを述べてみた。

「……そこ、ですか？」

残念そうな表情を王は浮かべている。息子がなぜ、こんな表情をするのだろうかと大上王は訝ったが、その直後、メインティア王から衝撃の一言が放たれた。

「それは、父上のこれまでの行いが、悪すぎたからですよ」

「なっ！？」

「家来たちの行動が緩慢だと言って、ハチの巣に石を投げて家来を襲わせたり、質問に答えられなかったからと言って、その者を傍から遠ざけたりしたではありませんか。そんなことをされると、家来たちからしても、父上から何をされるのかわかったものではないではないですか」

「そんな昔の話を……」

「昔でも今でも、父上がそういうことをやられた、というのは事実として残ります。私だってそうです。せっかく疲れを癒しているのに、こうして父上に踏み込まれては……」

「もうよい！」

大上王はそう言って席を蹴るようにして立ち上がり、そのまま部屋を後にした。

◆　◆　◆

「……」

翌日、メイと秘書であるセルロイトは思わず顔を見合わせていた。目の前に座るリボーン大上王が、明らかに元気がないからだ。

初めて見る光景だった。いつもは快活でよく喋る大上王が、今日は部屋にやって来るなり一言もしゃべらず、ため息ばかりをついている。昼食にもほとんど手を付けていない。これは何かあるなと考えていたそのとき、セルロイトが口を開く。

「……信念が、揺らいでいますか？」

彼女の言葉に、大上王が驚いた表情で顔を上げる。

「わ、わかるか……」

「ええ、な、何となく、ですが」

「ううむ……。本当に、そなたは、行き届いておる。行き届いておるのう……」

大上王はそう言って肩を落とし、ポソポソと昨日あった出来事を語り始めた。メイとセルロイトはじっと耳を傾ける。

「大上王様」

ややあってメイが口を開く。彼女は優しい眼差しで、彼に語りかけた。

「それは、とても大切なことだと思います。人は、何かをしてくれなければ、何も返してはくれないものだと私は考えています。自分に優しくしてくれるからこそ、相手も自分に優しくしてくれるのです。しかもそれは、相手に伝わらなければ、意味がないと思っています」

メイはそこまで言うと、少し寂しい表情を浮かべる。

「難しいと思います。私も、良かれと思ってしたことが、結果的に相手を苦しめてしまうこともあります。そして、思ったように相手に伝わらなかったときなどは、寂しく感じることもあります」

「メ……メイリアス殿でも、そのようなことがおありか！」

「はい。そのことで、悩むことはよくあります」

「ムムムムム……」

「でも、そこで諦めてしまってはいけないのだと自分に言い聞かせることにしています。相手の望むもの、欲しているものをどうやって聴き取り、感じ取ることができるのか、その試行錯誤を繰り返していかなければ、特に医療の発展は望めないと思っています」

「ううむ、その通りじゃ！」

「まずは大上王様、ご家来やお相手が、何を求めているのかを把握するところから始められてはいかがでしょうか」

「そうじゃな……。確かに儂は、一方的過ぎたのかもしれぬ。相手の望むことなど、考えてこともなかった。いや、メイリアス殿、感謝しますぞ。リボーン、この年ですが、何かまた、一つ成長するような気がしましたぞ！」

そう言って大上王は頷いた。そして、その日から彼は少し変わった。目に見えて、アリスン城内の家来たちの態度が変わってきたのは、それから数か月後のことだった。

大上王は心からメイに感謝した。やはり、あのお方は聖女と呼ばれるのにふさわしいお方だと改めて確信した。それと同時に、息子のような、房室であのような痴態をとることなど絶対にないと信じるのだった……。

第七百七十九話　押印依頼

ミンズ王国。カンワ大陸を治める国のひとつだ。この国は貧しく、王であるゲル・リイジは治世に対する興味を失いつつあった。政務は専ら、宰相を務めるムーラに任せっきりであった。

この国が国として何とか保っているのは、偏にこの宰相ムーラと忠実な家来たちに支えられているためであった。通常の国では、謀反や反乱が起きてもおかしくない状況であるにもかかわらず、勤勉で実直な宰相の下で、何とかこの国の民は飢えずに済んでいた。

とはいえ、国から取り立てられる税は厳しく、民は生きるか死ぬかのギリギリの生活を余儀なくされていた。

宰相ムーラは元々、低い身分の出身で、国政を預かる地位に上るなど夢のまた夢であった。それを、先王カツエに見いだされ、異例の抜擢を受けて現在の地位に就くことができた。さらには、優秀な者は身分を問わず登用したことにより、多くの者が高い地位に就くことができていた。だが、それが災いして貴族たちの反発を招き、ある者は他国に寝返り、ある者は王に刃を向ける者も現れ、ただでさえ収穫量が少ないこの国の国土は荒れ果てることになった。

そうした者たちを排除し、ようやく国が落ち着いた途端、先王は病に倒れ、その後をリイジが継いだ。彼は幼いころから血で血を洗う内乱の様子を見てきた。そして彼はそうしたことが大嫌いだった。どちらかと言えば、大人しく控えめな男であるリイジは、誰にも邪魔されない静かな生活を望んでいたのだった。

ここ最近のリイジの楽しみは、折に触れて届けられる世界各国の出来事を記した風説書を読むことだった。それを読みながら、頭の中で想像を膨らませることが大好きだった。もし、自分がその主人公であったなら……。そんなことを考えていると、時間を忘れて没頭することができたのだった。

その風説書で、彼の興味を捉えて離さない人物がいた。アガルタの王、リノスだった。奴隷上がりの平民から身を起こし、今や世界最強国と呼ばれる国の王となった男……。自分もそうなってみたい。世界最強国と呼ばれる国の王となり、思うがままの政治を行ってみたい……。風説書を読みながら、彼の想像は留まるところを知らなかった。

この日も彼は風説書に目を通していた。そこに、宰相ムーラが入室してきた。

「国王様」

「……」

書類を持ったまま、無言で目だけをこちらに向けている。これはいつものことだ。

「新しい法令がまとまりました。ご一読の程を」

「よい」

「ご一読いただきまして、問題なければ、承認印を……」

「よいと申すに。承認印ならば知っていよう。そなたが押せばよい」

「そうは参りません。国家の法令を承認できるのは国王様のみでございます。承認印は、国王以外は押せぬ仕来りとなっております」

「後で押しておく。そこに置いておけ」

国王リイジは面倒くさそうに手をヒラヒラさせた。その様子を見ながら宰相ムーラは、今日は機嫌がよさそうだなと心の中で呟いた。

国王が不機嫌なときは、会話も何もない。視線すら合わせない。ただ、沈黙が長く続くのみなのだ。承認印を押すことができるのは、自分以外いないことは百も承知のくせに、敢えてそんなことを言ってくるのは、機嫌がよい証拠であった。宰相は、書類を机に置きながら、言葉を続けた。

「何やら面白いことがございましたか」

「うむ。アガルタがな、またも勝利したぞ」

「左様でございますか」

宰相が大げさに驚いた様子を見せる。アガルタの先の戦いは聞いて知っていた。だが、そのことを言うと王は間違いなく不機嫌になる。ここで王の機嫌を損ねるのは得策ではないことを宰相はよく知っていた。

「ミトスがヒーデータに援軍を要請したが、結局アガルタに返り討ちにされておるわ！」

色々と突っ込みどころのある答えだ。頭の中で情報を色々と補完せ

ねばならないが、こうしたことはよくあることだ。宰相ムーラはにこやかに笑みを浮かべながら口を開く。

「はい。確かこの戦いは、ミトスがカルートレン、ノーノ、エルスモ、セーファンドの軍勢に包囲され、ミトスのレアル王妃が、ご実家であるヒーデータに援軍を要請したのでしたね。ヒーデータはアガルタにも援軍要請を行い、併せて四万の軍勢でミトスを救援しました。ですがこれはミトスの策略で、アガルタを殲滅するのが狙いでした。しかしアガルタは、それらの軍勢を各個撃破し、最終的にミトスの王都であるロークル城の一部を占領したのでした。最終的に、ヒーデータの皇帝陛下の仲介で、それらの国は平和不可侵条約を結ぶことで決着を見たのでした」

宰相の言葉に国王リイジは大きく頷いている。

「何より痛快なのは、アガルタ軍がノーノ、セーファンド軍を駆逐した場面だ。余もその戦場にいたかったぞ！」

その言葉に宰相は笑みを浮かべながら頷く。

「ううむ。アガルタは素晴らしいな。世界最強の軍隊を有しているだけでなく、その地理的条件も整っている。大規模な穀倉地帯を有し、豊富な金山銀山も有している。さらには、従属させているラマロンからは様々な鉱石が献上され、それらはニザに送られて強力な武器となってアガルタに帰ってくる。これでは、強くないわけはない！」

もう何度も聞いた話だが、宰相は笑みを崩さぬまま、大きく頷く。

「対外的にも隙が無い。隣接する国々とは婚姻によって誼を通じて

いて盤石だ。さらには、フラディメ、ミーダイ、サンダンジとも誼を通じていて、アガルタに攻め寄せるためには、幾多の国を抜かねばならない状況を作り出している。そして何より、クリミアーナだ。あの国を支配下に置いているのが、アガルタを世界最強国たらしめている所以だ」

「その通りでございます。一見するとアガルタの版図はヒーデータと同規模ですが、その影響力は、世界中に及んでいます。徒にあの国と争うべきではありません」

宰相はもうこのくらいでいいだろうと思いつつ、王に押印を促そうとした。だが、国王リイジは、とんでもないことを言い出した。

「我が国もアガルタと誼を通じればよいのではないか？」

「畏れながら国王様、我らには、アガルタと誼を通じるだけの要素がございません」

……できることならとっくにやっている、と宰相は心の中で呟いた。これまでアガルタとは全くと言っていいほど、交流を持っていなかった。今更、手ぶらで誼を通じてくれといったところで、断られるのは目に見えていた。

「何とかできぬのか。例えば、アガルタ王の息女を嫁に迎えられぬか」

「……難しいかと存じます。すでに長女のエリル姫は、ヒーデータ帝国のアローズ皇太子と婚約しているのは広く知られるところ。また、アリリア姫、ピアトリス姫も、おそらくどこかの国の王子と婚姻の話があろうかと存じます」

「我が子息、ワギとの結婚は難しいか」

「はい、残念ながら」

王太子のワギ様はすでに、二十三歳になろうとしていた。アガルタの姫たちとは年の差がありすぎる。ただでさえ馴染みのない国であるミンズ王国に、二十近くも年の離れた男に嫁に出すことなど、誰が考えてもあるはずのないことだった。

「他に方法はないか」

「畏れながら国王様。アガルタと誼を通じるのであれば、まずは我らからアガルタに何かを差し出さねばなりません。ですが、我が国は資源に乏しく、差し出すものがございません。私もアガルタと誼を通じて、技術などの支援を受けたいと考えますが、現状では難しいと言わざるを得ません」

国王リイジはさも残念そうな表情を浮かべた。宰相ムーラは、もうこのくらいでいいだろうと判断して、押印を促そうとしたが、リイジは驚くべき言葉を放った。

「よし、わかった。それでは、我が国は、隣国ヒダに侵攻する！」

第七百八十話　ダメダメ

「は？　今何と？」

予想もしていなかった言葉に、宰相ムーラは目を丸くして驚いている。そんな彼を一瞥した国王リイジは、さも面倒臭そうに口を開く。

「だからだ、隣国ヒダに攻め込むのだ」

「お、畏れながら、理由を伺っても？」

「今、そなたは、アガルタと誼を通じるのであれば、我が国から何かを差し出さねばならぬと言ったではないか！　その我が国は、アガルタに差し出すものはなにもない。で、あれば、差し出すものを拵える他はなかろう」

「そうかと言って、隣国に攻め込むなど……」

「それが一番手っ取り早い方法であろうが」

「国王様……」

宰相ムーラは、何とも言えぬ表情を浮かべる。目の前に座る男は何もわかっていない。事はそう簡単に進むものではないのだ。

「畏れながら国王様。確かに、隣国のヒダには多くの鉱物資源があり、それらを我らが手に入れることができれば、我が国は潤い、アガルタへの貢物も拵えられましょう。しかし、それをしたところで、

アガルタは我らからの貢物を受け取ることはないでしょう」

「なぜだ」

「我らが略奪者だからです。あの国は、他国から略奪したものを受け取ることはございません」

宰相ムーラはきっぱりと言い切った。雰囲気が先ほどとは違っている。言葉に重みがあった。本気でそれをやろうとすれば、命を賭して反対するという雰囲気がありありと現れていた。国王リイジは思わず押し黙った。

「お気持ちはよくわかります。痛いほどよくわかります。しかしながら、隣国ヒダはこれまで、我らと友誼を結んできた国でございます。確かにここ最近、ヒダの軍勢が国境付近の村を襲うことがあり、我が軍と小競り合いを起こしたことがございました。ただ、それだけの理由をもってヒダを侵略するのは、あまりにも無理があります。誠に恐れ多き事ながら、ヒダの正妃は、国王様の姉君に当たられます。この間も、姉君様にヒダ軍の管理をお願いする旨の書状を送ったところでございます。今ここで、我らがヒダに攻め込めば、それは野盗の類と同じことになります」

宰相の言うことはもっともだった。反論する隙が全く見つからなかった。国王リイジは苛立ちを隠そうともせず、持っていた風説書を乱暴に机に置いた。

「わかっておるわ、そんなこと！」

そう言って彼はガタガタと机を鳴らして、引き出しから印鑑を取ると、面倒くさそうに目の前に置かれた書類に捺印していった。

宰相がその場を辞しても、国王リイジはあきらめることができなかった。それに、なぜ宰相がアガルタと誼を通じることに、色々と難癖をつけて来るのかがわからなかった。ただ、友誼を結びたい、という書簡を送ることすらもダメであると言う。もし、書簡を送るのであれば、自らが使者となってアガルタの都に赴いてもよいのだ。

確か、フラディメなどは、実の父親をアガルタに向かわせ、今では同盟国の間となっている。で、あれば自らアガルタに赴けば、それなりの関係を築けるのではないか。そんなことを考えてみるが、宰相がうん、というわけはないことは、彼が一番よくわかっていた。

「誰ぞある」

国王リイジは声を上げる。すぐさま扉が開き、近習を務める家来が入室してきた。

「カグチ総司令官を呼べ」

「畏まりました」

そう言って家来はその場を辞した。

しばらくすると、初老の男性が入室してきた。ミンズ王国軍の総司令官を務める、カグチだ。彼はリイジの前にくると、恭しく挙手の礼を取った。

「お呼びと聞いて伺いました」

「うむ」

リイジは先ほど宰相ムーラに話をしたことと同じ内容を語った。だが、カグチ総司令官も、宰相と同じような反応を示した。

「なぜだ」

「ヒダを占領することは、やってできないことではありませんが、ヒダは、南方のケダイ王国とつながりがあります。ヒダを攻めると、間違いなくケダイが動きます」

「ケダイが動いたとて、我らが敗れる可能性は低かろう」

「戦いでは敗れる可能性は低いかと存じますが、ケダイはヒーデータと繋がっております。同盟国たるヒダが攻撃されたとなりますと、ケダイは確実にヒーデータに仲介を頼むことになりましょう。そうなれば……」

「だから何なのだ。ヒーデータが仲介に来たとて、無視すればよいではないか。まさか、ヒーデータが我が国に攻め寄せるわけはあるまい」

「ヒーデータ軍が動く可能性は低いとは思いますが、ヒーデータの我が国に対する心証は、確実に悪くなります」

「別に余は構わん」

「ヒーデータの皇帝の妹は、アガルタ王の正妃でございます」

「うっ……」

「こうした情報はすぐにアガルタに伝わるでしょう。よいことは伝わるのに時間がかかるものですが、悪い噂はすぐさま周囲に広がるものでございます。ヒーデータの心証を悪くすることは、アガルタの心証も悪くすることにつながり、そうなれば……」

「もうよい。よくわかった。大儀であった」

国王リイジは面倒くさそうに手を振った。

……一体何が難しいのか。リイジは何度考えても理解ができなかった。国王たる余が直々に出向くのだ。別に、援軍を寄こしてくれだの、資金を援助してくれだのと言うつもりはサラサラなかった。ただ、両国の発展、ひいては世界の発展のために、手を携えていきましょうと言うのが、何がいけないのか。

確かに、できることなら、アガルタの持つ技術力を提供してもらいたいという気持ちはある。アガルタにはニザ公国からドワーフたちが派遣されていて、ドワーフ村を築いていると聞く。そこでは良質な武器や防具が生産されているだけでなく、より効果的効率的に鉱物を生成する技術も開発されていると聞く。噂によれば、アガルタの技術を使えば、金などは数倍生産量が上がると言われている。そうした技術力を提供してもらい、我が国の鉱物の生産量を飛躍的に伸ばすことができれば、国は潤い、今のような窮屈な暮らしから脱却できるのだ。

また、あの精強な軍隊も魅力だ。アガルタの武器防具を提供してもらうことができれば、我が国はこの周辺国の中で一等図抜けた存在になることができる。そうなれば、国境付近の小競り合いは起らなくなるだろう。つまらぬことに頭を悩ますこともなくなるのだ。

「そうなるためには、我らから差し出すもの、か」

国王リイジの頭の中に、先ほどの会話がグルグルと繰り返された。
彼はもう、聞きたくないと言わんばかりにプルプルと首を振った。

同じ頃、カグチ総司令官は、宰相ムーラの許を訪れていた。

「……困ったものですな、国王様には」

ムーラは大きなため息をついた。カグチ総司令官も、同じようにため息をついている。

「どうなさるおつもりですか、宰相殿」

「どうもこうも、ヒダに侵攻などできるわけがない。そんなことをしたら、周辺の国々と敵対することになる。この周辺の国々とは、婚姻を重ねて互いに誼を通じ合ってきたことを知らぬ国王様ではあるまいに。それに、ヒダに侵攻したらば、最悪の場合、ヒーデータを敵に回すことになる。そうなれば、間違いなく我が国は滅亡するだろう。何とか、国王様の関心を別に向ける他はあるまい」

「とはいえ宰相殿、取り敢えず、友好の使者だけはアガルタに送った方がよいのではないか」

カグチの言葉に、宰相ムーラはゆっくりと首を振る。

「ならば、表向きの宗主国であるヒーデータと友誼を結ぶのはどうでしょう。ヒーデータと誼を通じておけば、自ずとアガルタと誼を通じるのと同じです。もし、事が起こったときには、ヒーデータを通じてアガルタとの仲介役を頼めます」

宰相ムーラは腕を組みながら、天を仰いだ。

第七百八十一話　イヤな予感

雲一つない快晴の中、一隻の船が南に向かって進んでいた。秋も深まってきたためか、風が冷たい。つい先日まで上着はいらないと思っていたが、場所が海上ということもあってか、何かを羽織らないと長い時間甲板には立っていられない。

ダンゴはそんなことを考えながら、水平線を眺めていた。空にはカモメが飛び、さらには、多くの鳥たちが飛んでいる。

鳥たちは越冬するために温暖な南に向かっているのだろうか。それとも、魚を捕らえるために集まっているのだろうか。そんなことを考えながら彼は、ぼんやりと空を眺める。

彼は今、ミンズ王国宰相、ムーラの命令を受けて、ヒーデータ帝国に赴く途中であった。

ダンゴ自身、その命令は青天の霹靂ともいうものであった。一体、ヒーデータ帝国と誼を結んで、何をするつもりなのか。最初、命令を受けたとき、彼は混乱した。

よくわからぬ命令だった。アガルタとの誼を通じたいが、その前に、ヒーデータと誼を通じるのだと宰相は言う。そんな回りくどいことをせず、直接アガルタに使者を遣わせばよいではないか、ダンゴは心の中でそう呟いた。だが宰相は多くを語らず、まずはヒーデータと誼を結ぶことを伝え、まずは、かの国と顔つなぎをするようにと命令した。

顔つなぎをする、とは、相手国と交渉相手を定めるということだ。当然それは、決裁権を持っている者が望ましい。ということは必然的に、ヒーデータ帝国の宰相クラスの者と連絡が取れる態勢を整えることが理想と言えた。

ダンゴはミンズ王国の中でも比較的、そうした顔つなぎの使者として他国に赴いた経験が豊富な男であった。使者に遣わされた理由はいまいちよくわからぬとしても、使者としてどう振舞うか、そのことに関しては彼自身よく理解していた。

少々のんびりしたところはあるが、頭の回転が速く、他人の懐に飛び込むことができる才能を持った男だった。その性格は温厚篤実な者で、ミンズ王国内でも、人格者として通っていた男だ。ダンゴ自身も、国の外に出て旅をすることが何よりも好きであり、まさしくこの仕事は、彼に打ってつけであると言ってよかった。

ぼんやりと空を眺めながら彼は思考する。こうして空を見ながら考えると、不思議に色々なことが思いつくのだ。

一番手っ取り早いのが、宰相グレモントだ。まずは彼に会ってみるか。タンゴは頭の中でグレモントどのように会話を運ぼうかと思案する……。

◆　◆　◆

宰相閣下自ら俺の屋敷にやってきた。これはとても珍しいことと言える。いや、初めてのことか。大抵はヴァイラス公爵がやって来る。最初、この話を聞いたとき、俺はイヤな予感が止まらなかったが、実際話を聞いてみると、それは実に拍子抜けする内容だった。

「……こんなこと言っては何ですが、そんなことなら直接言ってくれればいいのに」

俺の言葉に宰相閣下はゆっくりと頷く。

「いや別に、我が国がミンズ王国と誼を通じることは何の問題もないのだが、わざわざアガルタに誼を通じることを我が国に尋ねてきたことに、少し違和感を覚えてな」

そう言って彼は出されたお茶に手を伸ばした。

「いやなに、これは私の勘なのだ。もしかして、あの国とアガルタに過去、何かあったのではないかと思ったのでな」

「俺の記憶にはないですね」

そう言って俺は隣に座るリコに視線を向ける。彼女もゆっくりと頷いている。

「アガルタとミンズ王国は確かに誼は通じておりませんわ。互いに使者を遣わしたことすらありませんわ」

リコの言葉に宰相閣下はゆっくりと頷く。

「まあ、同盟国を通じて仲介を頼む、というのはよくあることだが、大体そうした場合は、婚姻などの場合が多いのだが、どうもあの国はそういう狙いではないらしい。単に誼を通じたいだけのようだな」

そう言って彼は立ち上がった。

帰り際、馬車に乗り込む直前に、宰相閣下は立ち止まって振り返り、ゆっくりと屋敷を見廻した。

「こちらは、にぎやかでよろしいな」

見ると庭で子供たちが遊んでいる。少し離れたところで龍王が腕を組みながらその様子を見ている。俺は反射的に心の中で、バカ龍そこを動くなと呟いた。

ふと見ると、彼の表情が何とも柔和なものに変わっていた。いつも厳しい表情をしている彼からは想像もできない様子だった。彼は無言のまま、馬車に乗り込んだ。

「……もしかして、宰相閣下は子供好きなのかな？」

「確かに、ヴァイラスはよく彼に助けてもらっていたみたいですわね」

もし、宰相という地位に就いていなければ、彼はいいおじいちゃんとして平穏な生活を送っていたのではないかと思った。ベンチに座りながら孫たちの遊ぶ姿に目を細めている姿が、何となく彼に最も似合っているのではないかと思った。

◆　◆　◆

一方その頃、ミンズ王国では国王リイジが側近のマムラを呼び出していた。

マムラは王の前だが、その表情は暗い。それもそのはずで、この王が嬉々として自分を呼び出すのは、大抵がロクでもないことが多か

ったからだ。

そんな彼の心情などまるで知ったことではないと言わんばかりに、国王リイジは口を開いた。

「よいことを思いついたぞ。これは私とお前だけの秘密だ。いいな」

マムラは以前にもこの言葉を言われたことがあったなと、心の中で呟いた。それはすぐに思い出すことができた。ずいぶん昔の話だ。まだ、王も自分も若者だったときのことだ。王が隣国の姫に惚れたのだ。何度アプローチしても返事さえもらえないにもかかわらず、王は彼女を諦められなかった。そこで、近習を務めていたマムラを呼び出し、いいことを思いついたと言って、その姫を攫う計画を打ち明けたのだった。

むろんマムラはその計画に反対した。そして、近習をクビになり、彼はしばらくの間無聊をかこつことになった。せまじきものは宮仕え、何か商売でも始めようかと考えていた矢先、先王のとりなしによって城に戻ることができたのだった。それ以来ずっとこの王に仕え続けてきているが、年に数回訪れる王の気まぐれの無茶ぶりに振り回される生活を送ってきていたのだった。

よほど下らぬ、いやもとい、良いアイデアが思いついたのだろう。目が輝いて鼻が膨らんでいる。王女を攫おうと計画したときと同じ表情だ。マムラは少し腹に力を入れた。

「ヒダに使者を派遣しようと思う」

「ええっ！？」

予想外にまともな話が出て、彼は逆に驚く。いや、ここで油断してはいけない。王の話を全部聞かねば油断してはいけないのだと自分を戒める。

「何を驚いている。ヒダとは長い間我が国と誼を通じてきた間柄だ。ご機嫌伺いの使者を遣わして何が悪い！」

「いいえ。何も悪いことではございません。失礼しました」

「うむ。では、ヒダに使者に立て」

「私が、でございますか？」

「お前を置いて他に誰がいるのだ！」

「宰相様はご存じなのでしょうか？」

「知るわけはないだろう！　お前がヒダに行くのは、誰にも悟られるな」

やっぱり自分の予感は当たっていたなと、マムラは心の中で苦笑する。彼はうんざりしながら口を開く。

「ということは、密使ということになりますね。ちなみに、ヒダには何と？」

「鉱山を調査させてほしいと言え」

「鉱山？」

「ヒダには豊富な鉱山があるだろう。それを調査させてほしいと言うのだ。採掘方法から採取方法まで詳しく聞いてくるのだ。そして、さらに効率的に鉱物を採取する技術を提供したいというのが、使者に立つ理由だ。あ、むろん、我が国の鉱山技師たちも連れて行くことを忘れるな」

「承知しました。ですが、それでしたら、宰相様にその旨をお伝えしてもよいのでは？」

「わからぬやつだ！」

国王リイジは目を閉じて首を振る。

「鉱山を調査するのは、我が国がヒダを征服したときのためだ。正確な埋蔵量がわからぬでは、貢物を拵えるどころではないであろうが！」

マムラは一瞬、めまいを覚えた。

第七百八十二話　悔恨と悪夢

ミンズ王国の宰相、ムーラは自室の窓からじっと月を眺めていた。
あの日も、こんな見事な満月の夜だったなと、心の中で呟く。

この日は宰相の幼馴染であり、最も信頼した男がこの世を去った日だった。彼は毎年、この日だけは食事を摂らず、水だけで過ごすことにしていた。不思議と、この日だけは腹が減ることはなく、いつもと変わらぬ一日を過ごすことができていた。

その心の中には、深い悔恨の念があった。その友の死は自らが命じたことであり、己の人生の汚点と言ってよかった。

あの頃の自分は若かった。いや、若かったという理由ではすまされない。明らかな失政だった。讒言を信じてしまい、最も有能な男を自らの手で葬ってしまったのだ。

……今頃、彼が生きていればどうなっていただろうか。きっと、この国はもっと良くなっているに違いない。ムーラは心の中で呟く。
彼には確信めいたものがあった。

あのとき、どうして彼の話を聞かなかったのか。国王様が殺せと命じたからか。いや、そうであっても、彼の話を聞いてから決断しても遅くはなかった。それに、彼がこの国に叛くなどということはあり得ないことだと、自分が一番よく知っていたはずだったのに……。

ムーラはもう一度深いため息をついた。

◆◆◆

「お父さん、早く帰って来てね」

「ああ。日が暮れるまでには帰ってくる。それまでいい子にしているのだぞ」

お父さん、と呼ばれた男は、ちょうど着替えの最中だった。シャツのボタンを止めながら、優しい笑みを浮かべている。その彼の後ろには、執事のような格好をした老人が、ジャケットを手に持って控えていた。

「旦那様、そろそろ」

「おおそうだ。早く行かなければ」

そう言って彼は老人からジャケットを受け取ると、慌ただしく扉に向かって歩いて行った。

「……あなた」

若い女性が心配そうな表情を浮かべている。男は右手を差し出して、その女性の頬に触れる。

「心配するな。ちょっとした誤解なのだ。きちんと説明すれば、何の問題もない」

「……」

女性の顔は暗い。そんな彼女を慰めようと思ったのか、男は少し大

きな声を出し、両手を広げて笑みを浮かべた。

「夕方までには帰ってくる。今夜はごちそうにしよう。カルポツアの肉があっただろう？　あれを今夜、皆で食べよう」

「あれは……お客様が見えられたときの……」

「そんなものはまた買えばいい。気が滅入っているときは、美味しいものを食べて憂さを晴らすのだ！」

「わかりました」

では行って来る。デルア、メルルのことを頼んだぞ。

「承知いたしました」

「リンデーズ、いい子にしているのだぞ」

男はそう言って屋敷を後にした。

それからどのくらいの時間が経っただろうか。キッチンでは、先ほどの女性が忙しそうに動き回っている。その隣には、老婆が彼女を甲斐甲斐しく手伝っている。

「奥様、サラダはお召し上がりになる直前でよろしゅうございますか？」

「ええ。そうしてちょうだい」

どうやら女性は肉の焼き加減を見ているようだ。この料理は肉の焼

き加減が重要であるらしい。厳しい目で、何度も火の中の肉を確認している。

そのとき、玄関のドアがノックされた。

「あれ、旦那様がお戻りになられたのでしょうか」

老婆が笑みを浮かべながら口を開く。だが、女性は怪訝な表情を浮かべる。

「旦那様がお戻りだったら、ノックなどしないわ。そのまま扉を開けて入って来られるはずだわ。お客様じゃないかしら」

「お客様……でしょうか」

そんな会話を交わしていると、まるで早く開けろと言わんばかりに、玄関のドアが先ほどよりも強い調子でノックされた。

「デルアさん、デルアさん。お客様がお見えのようですよ」

老婆が大きな声で階段に向かって口を開く。すると、慌てた様子で、執事のような老人が階段を降りてきた。

「こんなときにお客様とは……」

彼は身支度を整えながら、小走りに玄関に向かっていく。

「お待たせいたしました。どちらさまでございますか？」

その言葉が言い終わると同時に、まるで蹴破るように扉が開いた。

「な……なにをなさるのです！　どなたですか！」

玄関には鎧を装備した兵士たちが控えていた。一瞬にしてその場が緊張に包まれる。

「ちょっと、な……何を！」

老人が止めるのも聞かず、兵士たちは無言のまま屋敷の中に入ってきた。予想もしていなかった事態に、女性たちは短い悲鳴を放った。

「な……何をするのです！　我が家がラウスト家と知っての狼藉ですか！　何者なのです！」

女性が気丈に振舞う。だが、その彼女に対して兵士の一人が淡々と口を開く。

「ラウスト公爵は先ほど、国家反逆の罪で処刑されました」

「な……なんですって！？　しゅ、主人が……」

「あなた方は国家に弓引いた一族ということで、捕縛命令が出ております。まずは我々に同行いただく。抵抗しなければ手荒いマネをするつもりはない」

そう言って兵士は女性の腕を掴んで引っ張っていく。

「お母さん！」

そう叫んだ子供の前に、兵士が立ちはだかった。

「お前もだ。来い」

襟首を掴まれる。そして、そのまま犬のように引きずられていく。ものすごい力だった。どう抗っても逃げられるとは思えなかった。だが、少年は父と母の名を叫びながらそれでも、必死で両手両足をばたつかせた。

「坊ちゃま！」

老執事が追いすがろうとするが、兵士たちに押しとどめられる。老婆はどうしてよいのかわからず、胸の前で手を組んで、まるで祈るようなポーズを取っている。そんな二人を、兵士の一人はチラリと視線を向け、首をしゃくった。二人を抑えている兵士たちはゆっくりと腰に差している剣を抜いた……。

◆　◆　◆

「……ス。……ノス。……リノス」

眼を開けると、目の前にリコの顔があった。まだ、夜は明けていないようだ。

「大丈夫？」

両手で俺の顔を挟むようにしてリコが顔を近づけてくる。その手をやさしく握り返す。

「大丈夫だ。夢を……見ていた」

「随分うなされていましたわ」

「そうか……。何だか、あまりいい夢じゃなかったな」

「……」

リコはようやくホッとした表情を浮かべて、大きく息を吐いた。

「たまに、嫌な夢を見るけれど、リコに起こされたのは初めてかもしれないな」

「かなり苦しそうに呻いていましたわ。私も、リノスがあんな顔をするのを初めて見たものですから……」

「そうか……。悪夢ランキングでは上位に食い込んでくる内容だったけれど、一位ではなかったな」

「まあ……リノスの悪夢で一番怖かったのは、どんなものでしたの？」

「朝起きたら、みんなと言葉が伝わらなかった夢だ」

「まあ」

「俺は一生懸命喋るんだけれど、全く伝わらないんだ。リコもメイもソレイユもシディーもマトも喋っているんだけれど、全然知らない言葉で、何を言っているのかさっぱりわからないんだ。それどころか、みんなでモノを投げて俺を追い出すんだ。あれは……怖かったな。泣きながら起きたんじゃなかったかな」

「そんなことはあり得ませんわ」

「そうなんだけれどね……。何より、朝起きたら誰もいなかったから、本当に夢の通りになるんじゃないかとビクビクしながら起きたのを思い出したよ」

「誰が一緒にいたのです？」

「マトだったんじゃないかな」

「……早朝訓練で、先に起きて屋敷を出たのですね」

「今日はリコで助かったよ」

そう言って俺は彼女を抱きしめる。

「……懐かしい、とてもいい香りがする」

「……別に私は、何もしていませんわ」

「でも、とてもいい香りがするんだ。とっても癒されるよ……」

そう言いながら俺は再び眠りに落ちた。

第七百八十三話　ヒダの内情

ミンズの使者がヒーデータに着いたその頃、隣国ヒダにもミンズの使者が訪れていた。

ミンズ王国国王リイジの使者として、側近であるマムラとその子サンクが率いるミンズの兵二千は十手に分けられ、それぞれ先頭には侍大将が乗った騎馬が進んでいた。タカ郷に入るとカハラ川の川幅は広くなり、川の両側に点々と村落が見えた。

サシマ村に入るとすぐ、騎馬武者数騎が走ってくるのが見えた。騎馬武者は馬から下りて片膝をついた。

「我らはオイロ城の者でございます。主君ヒダ・キモリの命令によって道案内に参りました」

男はそう口上を述べ、それぞれの名を名乗った。

オイロ城というのは出城であり、城というよりも山城、砦の類だった。カハラ川に沿って敵がくる場合の見張り所を兼ねている小さな砦だった。キモリの五名の家来は早速、先頭に立ってマムラらを案内した。二千の軍は細長く伸びた道端に小休止した。

マムラはその五名を引見して言った。

「出迎えご苦労でありました。して、キモリ国王様はどこにおられる」

「お館様はオイロ城ににてご一行をお待ちしております」

「そこまで来ておいでなのか」

マムラは大きく頷いた。ヒダ王国国王キモリはこの周辺一帯……といっても、版図で言えばミンズ王国の倍に当たる領地を有している。ただ、その大半は山岳地帯であり、食料などの生産高は、ミンズ王国とそう変わりはなかった。ただし、その山々から掘り出される鉱物は、この国の懐を潤していた。そう言った意味では、長い間友好関係を結んでいるとはいえ、そう簡単にミンズ王国に膝を折る国ではなかった。

とはいえ、ヒダとミンズは共闘して敵を打ち破った歴史があった。今のヒダがあるのは、ミンズからの援軍があってのことであり、そのためにヒダの国王は代々、ミンズ王国に最大の礼を尽くしてきたのだった。

そのヒダにミンズ国王のリイジが兵を入れたのは、単にアガルタとの友誼を深めるための貢物を拵えるためではなかった。その以前からヒダが隣国のエスギロ王国と通じている証拠を握っていたためだった。

ヒダ王国国王キモリとその子テルリは親子でありながら意見を異にしていた。キモリはミンズ王国の友誼を優先して、名実ともにミンズ王国の同盟国としてその領地を安定させてきた。キモリの次男ブモリは留学という形でミンズ王国に送られており、ミンズの皇太子ワギと義兄弟の契りを結ぶほどに友好関係を進めていた。ところが長男のテルリは父キモリと違って、ミンズと友好を深めていると見せかけて、裏ではエスギロと手を握ろうとしていた。そういう二股かけた行動はこの世界においてはもっとも嫌われ、結局はどちらに

も信用されずに亡びるものという原則がわからなかった。父キモリは素直ではないテルリを嫌って、次男のブモリを後嗣に立てようとして、ミンズ王リイジおよび宰相のムーラに相談していた。

リイジはキモリの希望を入れてブモリをヒダに帰したが、ブモリは私がヒダの王位を継げば必ず兄テルリと争いが起こるから兄弟相争うことは嫌だと言って、ミンズ王国に帰っていた。

ミンズ王国宰相ムーラは、キモリの心情を汲んで、ブモリをミンズ王国の貴族として取り立て、キモリにはやむを得ぬ場合は分家から養子を立てたらどうかとすすめた。実際にキモリが分家からケイリという若者を養子に立てたのは、これから八年後のことであった。

テルリはエスギロとの国境であるチウジ城でこのことを知ると、刺客を差し向けて父キモリを暗殺し、同じ年の夏には養子のケイリをも殺した。そして、テルリがヒダの王位を継承することになった。だが、ヒダ王国はこの頃から目に見えて衰退していった。

それから二年後、ブモリがミンズ王国で起こった反乱に巻き込まれて戦死した。エスギロとミンズ、その他周辺国の中間地帯で何とか生き永らえようとしたテルリも、ブモリが戦死した三年後、隣国のミルキ王国と戦って戦死した。ここにヒダ王国は事実上亡びたのだ。

ヒダ王国のことを一足飛びに述べたが、これは後のことであり、現地点では国王キモリとテルリ父子の仲はまだ悲劇的なものになっていなかった。

ヒダ国王キモリは平静を装いながらも、わが子テルリがエスギロに通じているとミンズ王国に疑われていることをひどく気にしていた。特にその妻であるロアナは心を痛めていた。ミンズ王国とヒダ王国

がさらに友誼を深めるために嫁入りしたにもかかわらず、その息子が裏切り行為に手を染めていることは、何としても許せないことだった。彼女からしてみれば、息子の振る舞いは、実の両親は言うに及ばず、両国の安寧を願って婚儀を結ぼうとした人々への裏切り行為に他ならなかった。二人は何回も使者をチウジ城にやってテルリをたしなめ、一方でミンズ王国に使者を遣わして、「息子テルリに限ってそのようなことはありません。テルリがエスギロと通じたと言いふらしたのは敵エスギロの策略に間違いありません」と弁解していた。夫婦は弁解しながらも、心では、テルリの情けない心を嘆いていた。

そこへミンズ国王リイジから使者が来た。テルリがエスギロと通じている証拠は歴然としているが、一応事実を取り調べるために側近のマムラをそちらにやるからもし、申し開くことがあれば、マムラに言ってもらいたい、とリイジの書状には認めてあった。

リイジがヒダ侵攻を画策したのは、この点にあった。まさかその理由がアガルタに貢物をこしらえるためであるという至極下らぬものであったとしても、今、ミンズ王国がヒダに侵攻したとしても、その理由は十分周辺国を納得させるものだった。不幸にも、普段政治には興味を示さなかったリイジがこれをチャンスと見て俄然やる気を出していた。

一方、宰相ムーラは国王リイジの心だけでなく、ヒダ皇太子、テルリの心をもとっくに見抜いていた。彼はかなり前からテルリがエスギロに通じていること示す証拠を入手していた。だが、テルリを攻めるとなると、チウジ城に兵を出さねばならない。とすると、その道案内という先鋒にはキモリということになる。同族間の戦いは双方が嫌うだろうし、家来たちも二つに割れる。そうなると完全な武力制圧は難しい。完全に制圧しようとするならば、マムラだけでは

不足だ。もっと大軍を差し向けねばならない。宰相ムーラとしては、そんな戦いに自国の兵士を無駄にする気はさらさらなかった。今回、国王リイジがマムラをヒダに派遣することに対して気づかぬふりをしたのは、マムラの軍勢がテルリに対する示威運動になると読んだからであった。

宰相ムーラはその意思を部下であるソウネに言い含めて軍監としてマムラに付けていた。軍監即ち軍目付である。宰相ムーラの代理としてマムラ父子の傍にあって、戦いのやり方を見守り、必要な場合は助言もし、あとで宰相ムーラにその結果を報告する任務であった。

軍人ではない一介の貴族に過ぎないマムラ父子にとっては、このソウネという存在は誠に怖い存在だった。ソウネは宰相の側近中の側近である。つまり現在で言うならば、首相補佐官のようなものである。そういう者がついているのだから、あまり思い切ったことはできない。むろん彼らにとっても、国王リイジの意向を真に受けてヒダに侵攻し、周辺国との関係を滅茶苦茶にする気は毛頭なかった。むしろこの際は、特に大きな波風の立たぬようにして帰国することを願っていた。彼らは心の中で、なにからなにまでソウネに伺いを立ててからの方が無難であると考えていた。

「キモリ国王陛下がオイロ城まで出迎えに来られたとは、誠にもって鄭重なおもてなしですね」

マムラはそう言ってソウネの顔を見た。だが彼は何の反応も示さなかった……。

第七百八十四話　ヒダ王国王都

キモリは版図だけで言うならば、ミンズ王国の倍以上ある領地を有する国の王だ。そのキモリが最前線の砦に自ら出迎えたということは、ミンズ王国に対して最高の敬意を払ったことになる。通常ならば、戦闘中でもないにもかかわらず二千もの兵士を伴って入国してくるのは異例と言えた。見方によっては、ミンズ、ヒダ、両国の関係がこじれる可能性すらある行為であるが、ヒダにとってもそれを受け入れねばならない理由があった。

ヒダは長年にわたり国の北に位置するエスギロ帝国と小競り合いを続けてきた。帝国は虎視眈々とヒダを支配下におこうと、隙を見つけては領内への侵入を繰り返していた。そのためヒダは、ミンズ王国など周辺国と同盟をもってこの帝国からの侵略を退けてきた。だが、国王キモリの息子、テルリがエスギロと通じているのが明るみに出れば、現在の同盟は破綻することになる。キモリとしても、ミンズが二千もの兵を率いてやって来るのは癪に障っていたが、それを表だって言うことができない状況であったのだ。

一方のミンズ王国の使者であるマムラは、この無条件歓迎というべきヒダのもてなしを、そのまま受けてよいかどうかを悩んでいた。その辺のところは、相手の立場を考え、顔を立てねばあとあと困ることになる。難しいところなのだ。

相変わらず隣に控えるソウネは知らんぷりをしている。マムラはイヤなヤツだと腹の中で思いながら、いよいよ困り果てた表情を浮かべた。だが、マムラはちょっと考えただけですぐに適切な答え方をした。マムラは息子のサンクに向かって口を開く。

「そなたは十騎を連れてオイロ城に赴き、キモリ国王陛下に会って、お出迎えを感謝する旨を伝え、なにぶんにも、我らは長旅をして疲れておるので、今日中には王都であるカミオ城まで着くことはできませぬ故、国王様におかせられては、ひとまずカミオ城に帰還なされて、お待ちくださるようおすすめ申すのだ」

キモリの出迎えを感謝した上、改めて、本城に待つように言ったのは、キモリの体面を重んじての言葉であった。マムラのこの言葉に、ソウネは意外だと言わんばかりの表情を浮かべた。それは、己が頭の中で考えていた口上を、見事にマムラが代弁したことによるものであった。マムラは腹の中でざまあみろと嘯いた。そのソウネはすぐに先ほどの表情に戻っていた。

サンクは馬を飛ばしてオイロ城に行くとキモリに会って父マムラの言葉を伝えた。キモリは鷹揚に頷いてカミオ城に帰城した。

マムラ一行はカハラ川に沿って進み始めた。このカハラ川は東から北西に向かって流れている。北に向かうほど川幅は広くなり、川の流域の田畑も少しずつ増えていくが、決して広いところには出ない。ここらあたりの様子は川の周辺に僅かばかりの農地しかないミンズ王国とよく似ている。マムラに従う兵士たちは、自分たちの故郷とあまり違ってはいないなと感じていた。

カハラ川をずっと下ってイワトと呼ばれる地域に来ると、ここに第二の山城があった。テンモ城だ。これもいわゆる出城だ。テンモ城とそのすぐ近くにあるオタカ城などの城主がマムラ一行を迎えに来ていた。

マムラらはさらに下ってアソウと呼ばれる土地のアンズ城に来て一

泊することになった。アンズ城も山城であるから多くの者を泊めることはできず、兵士たちは付近の農家に分宿したり野宿をしたりした。

アンズ城は、王都であるカミオ城から約四キロメートル離れた場所にあった。

ヒダ王国は、王都カミオ城を中心として、四キロメートル以内に、ドウ城、ハヤタ城、マサモ城、ジリン城、アンズ城、オウニ城、スーワ城、カサ城などを設けていた。これらの城はすべてカミオ城を守るための山城だった。

ソウネは、それらの山城からそれぞれ挨拶にやって来る城主と名乗る者たちの顔を見ながら、この国の防御はニ、三十年は遅れているなと思った。

城砦をこまめにおいて防戦しようとした思想はもう古い。アガルタ軍が世界を席巻できたのは、よく訓練された兵士を備えた大軍勢で、一気呵成に戦いを進めるからだ。このような山城や山砦で大軍を防ぐことはできない。城を作るならばなるべく大きな城を作り、少なくても数十日は持ちこたえることができねば城としての意味がない。そういう時代になっていた。せいぜい一郡に一城が常識であった。現にアガルタをはじめとする、強国とよばれる国々はそうであった。アガルタは交通の要所となる場所に城を置いていて、どの城も、数千から一万人程度の軍勢をかかえこめる規模のものであった。

……とはいえ、国力としては我がミンズ王国とそう変わらぬのに、ヒダがどうしてこれだけの城砦を持つことができるのだろうか。

ミンズ王国の国力では、城砦併せて、三つ四つというところが適当

であった。全部で十二もの城砦にそれぞれ城主を置き、家来を置くことは大変なことであった。

……まさか、エスギロと応援を受けているのであろうか。

ソウネはそんなことも考えたが、どうもそうとも思われない。数年前にミンズ王国の援軍を得てチウジを攻め取ったキモリ父子も、チウジ城にテルリが入って以来は、親子でありながらあまり親密な仲とは言われなかった。テルリが父に金や物資を送ることは考えられない。しかも、これらの城砦は以前からあるものなのだ。

……やはりこれは噂のように、キモリが領地の他にそれの数倍に匹敵する鉱山を持っているからだろうか。しかしそれはそのうちわかることだ。

ソウネはそう考えていた。

翌朝、マムラ父子とソウネの三人は王都であるカミオ城に赴き、国王キモリに謁見した。カミオ城は台地の上にあり、眼下にカハラ川を見下ろす要塞堅固な城であった。

「遠路、わざわざのお越し、恐縮である。息子テルリのことについてはかねて書状をもって申し上げた通り、彼に二心ありとは思われぬ」

マムラは早速テルリの弁解を始めた。

「ところで、当のテルリ殿はどうなされました」

マムラが口を開いた。テルリがなぜここに出向いてきて自ら弁明し

ないのかと言いたいところだった。

「それがあいにく、チウジのほうに不穏な兆しがあって、城を離れることができぬのだ」

キモリは、その不穏な兆しというのを細かに説明した。要するに、テルリがエスギロに心を寄せているのは明白であった。エスギロがテルリらに奪われた所領を取り返したいから、色々と策謀を巡らせていることは当然考えられる。しかし、そのためにテルリが城を部下に任せてカミオ城へ出て来られないことはなかった。

「至急に走り馬を飛ばしている。テルリを呼び寄せるよう取り計らっているところである。息子が到着するには、三日ほど時間がかかると思われる」

キモリはこのミンズ王国からの使者が、息子テルリの状況を調べに来たのだと考えていた。そして、三日の時間を要するのであれば、彼らはこのまま引き上げるだろうと睨んでいた。だが、その予想に反して、マムラが口を開いた。

「承知いたしました。では、三日待つことにいたしましょう。いやなに、我が国王様におかせられては、テルリ殿のことをひどく心配しておられます。父親と息子は対立するもの。ただ、叔父、甥となればまた、話は別。叔父の小言ならば、テルリ殿の耳に入るだろうとの仰せでございます」

マムラの言葉に、キモリの表情が徐々に強張っていく。

「それでは、三日の猶予をいただいておりますので、我らから一つ、お願いの儀がございます」

「願いとは？」

「ヒダの鉱山を見せてもらいたいのです」

「鉱山を」

キモリはサッと顔色を変えた。

第七百八十五話　埋蔵量

それは、国王キモリにとって一番見てもらいたくないものだった。ヒダはカハラ川に沿う、ほとんど耕地らしい耕地もない狭い土地だ。この谷間に併せて十余の城砦を築き、しばしば隣国に押し出している。その原動力は鉱山にあった。鉱山から得られる収入によってヒダはこの地域に覇を唱えていたのだ。

「実は、我が国から鉱山に詳しい人々を連れてまいりました。何かとお尋ねください。きっと、今よりもさらに効率的に鉱物を採取できることでしょう」

マムラはそう言って、連れてきた鉱山技術者たちを紹介した。

ヒダは国内にいつくかの鉱山を持っていたが、本格的な採掘ではなく、昔ながらの原始的方法による鉱山経営であった。一方、ミンズ王国は、国内に鉱山を持っていたが、その規模は小さく、ヒダとは比較にならぬものであった。だが、その産出量は予想をはるかに超えたものだった。それは、優秀な技術者を育成して、より効果的効率的に産出量を高めているためであった。ヒダ国王キモリはかねてからその技術力に注目しており、その技術が導入できるのであれば渡りに船であると考えていた。

ちなみに、ミンズ王国の採掘レベルは、世界で見ても中の下であった。例えば、ミンズ王国には銀山が一カ所あるが、年間平均約三トンの産銀量である。一方、アガルタにも同規模の銀山があるが、そこでは年間約十一トンの産銀量を誇っている。メイの知識とシディー率いるドワーフたちの技術を駆使して、全く無駄のない採掘が行

われている賜物であった。

とはいえ、ミンズ王国の技術を導入すれば、ヒダの産出量は飛躍的に向上することは確実と言えた。国王キモリの心は揺れた。そこに、ソウネがさらに言葉を続けた。

「国王様、ご心配はご無用でございます。ここはヒダの領地。たとえこの地に数百万の金があろうとも、それを我がミンズ王国が横取りしようという気はございません。ただ、金、銀、その他諸々の鉱物があるのに掘らないで放っておくのは誠に勿体ないことでございますから、我が国の技術をお貸し申しましょうと、我が国王陛下は言っておいでなのでございます」

そこまで言うと、ソウネは声を落として、少し小さな声で語り出した。

「これは、国王様のお胸の中だけに止めておいていただきたいのですが、我らはアガルタと誼を通じることといたしました。いやなに、別に今の諸国との同盟関係を壊そうという気持ちは微塵もございません。ただ、アガルタは世界に冠たる技術大国。ドワーフ王の姫がアガルタ王の妃になっていることから、かの国はドワーフの技術を導入し、さらにそれを発展させております。鉱山に関する知識、技術も豊富でございます。現に、傘下に置いているラマロン皇国では、アガルタの技術を導入することにより、産出量が三倍に伸びたと言われております。我らも、アガルタと誼を通じて、その技術を導入しようとしているのでございます。その技術が導入されました暁には、貴国にも、その技術をお伝えいたしたいと、我が王は申しております」

国王キモリの胸は高鳴った。アガルタの技術が導入できるのであれ

ば話は別だ。そうなれば、産出量はどこまで伸びるだろうか。きっと、ラマロンの比ではあるまい。下手をすれば、十倍、二十倍の産出量になるのではないか。そうなれば、王都の周辺に城砦を築いてチマチマと国を守ることはない。豊富な資金を背景に山を削って耕作地を増やし、最新の武器防具を購入することができる。そうなれば人も増え、この国は豊かになるのだ。

だが、キモリとて馬鹿ではなかった。本当にミンズ王国がアガルタの技術を導入できるのかという疑問が湧き上がった。ラマロンはアガルタの傘下に入り、公表はされていないが、ラマロン王の娘を妃に差し出している。それだけのものがミンズ王国に用意できるとは到底思えなかった。

「して、そのアガルタの技術導入は、いつのことになろうか」

「しかとした時期までは明言できませんが、早いうちに、とだけ申し上げます。現に、我が国の使者がすでにアガルタに着き、かの国と交渉に当たっております」

「むむっ」

玉座に掛けていたキモリの姿勢が前のめりになった。実際、ミンズ王国の使者が向かった先はヒーデータ帝国であり、何事もなければそこには着いているだろうが、アガルタとの交渉はまだ先の話で、うまくいくともいかないともわからない状況であったが、かの国と交渉に当たっております、という言葉には盤石の重みがあった。

「よくわかった。なにぶんにもよろしく頼む」

キモリは大きく頷いた。

鉱山視察はその日に始まった。ミンズ王国からやってきた鉱山技師たちは、測定機器や測量台帳などをもって案内者の後ろに従った。

ミンズ王国の調査は細部にわたって行われた。現在採掘をしている鉱山はもちろんのこと、試掘程度に掘っている鉱山にまでその調査は及んだ。その上で、掘り出された鉱石は見本として整理された。

調査は三日経ったが終わらなかった。

「約束の三日が経ちましたが、テルリ様の姿が見えぬようですが……」

キモリに謁見するなり、マムラは言った。先に鉱山調査の件を報告することが先ではないかとキモリは腹の中で呟いたが、そんなことはおくびにも出さずに、さも困ったと言った表情を浮かべながら口を開いた。

「テルリは確かにこちらに向かっている。何分にも山を越えてくるために道も悪い。なかなか思ったようにはいかぬものだ。従って、あと二日待ってもらいたい」

マムラはそれでは約束が違う、テルリが姿を見せないならば、軍を率いてチウジ城に向かうと言ってのけた。あくまでの示威行為であったが、さすがにこれは軍監であるソウネが押しとどめた。

「いや、失礼しました。マムラは我が王から、何とか余の言葉をテルリ様に伝えてくれと言われていまして、ついつい主命を全うしようと焦ったようでございます。我らとて、これ以上貴国にご厄介になることもできませぬ故、誠に恐れ多きことながら、我らは失礼さ

せていただきたく存じます。なにぶんにも、テルリ様によろしくお伝えくださいますよう、お願い申し上げます」

実際テルリは、父キモリの厳命にもかかわらず、頑としてチウジ城を動こうとはしなかった。キモリとしても、このままミンズ王国の使者に居座られるのは迷惑以外の何物でもなかった。勿体を付けたソウネの言い方はあまり気に入らなかったが、これ以上深入りをされたくなかったキモリは、ホッと胸を撫で下ろしたのだった。

◆　◆　◆

マムラはミンズ王国に帰国すると、真っすぐに国王リイジの許に向かった。彼はヒダの鉱山の資料をまとめてリイジの前で報告した。

「ヒダの金銀などの保有量は、我が国の十倍にはなるでしょう」

マムラの言葉に続いて、鉱山技師の責任者を務めるアウベが結論を言った。

「その鉱脈の長いこと、鉱石の良質なること他に類を見ません。また、新鉱脈掘り当てのことも、きわめて容易でございます。我が国の鉱山技術をもって掘り進み、精錬を行えば、まず年間、五百万の金は得られましょう」

「五百万相当の金とな！？」

国王リイジは我が耳を疑った。それだけの金があれば、アガルタの貢物を拵えることなどいとも簡単にできるだろう。それだけではない。この国で資金不足のために断念したあらゆる事柄が可能となるのだ。リイジの胸は高鳴った。

「して、その仕事にいつ掛かれるのだ」

「いつでも取り掛かることができます。ご命令となれば、今すぐにでも」

「ムムム……」

リイジは唸りながら玉座から立ち上がった。

第七百八十五話　埋蔵量（後書き）

１０／２４にコミック６巻が発売されました！　リコちゃんメイちゃんが実にかわいらしく描かれております。また、原作にはなかったリコ、メイ、ペーリスのお風呂シーンも追加！　是非是非お手に取ってご覧ください！　電子書籍版は購入者特典ありです。どうぞよろしくお願いいたします！

第七百八十六話　アガルタへの貢物

結果的に、ミンズ王国国王リイジのヒダ侵攻は行われなかった。宰相ムーラが命を賭して阻止したのだ。

国王リイジはヒダ侵攻にこだわった。年間五百万と言われる金が得られるというマムラの言葉を真に受けたのだ。しかし、それをするためにはミンズ王国は多大な犠牲を払わねばならない。一歩間違えれば、これまで友誼を深めてきた周辺国から攻撃され、国が亡ぶ可能性すらあるのだ。

宰相ムーラはそれを、まるで子供に言い聞かせるように、噛んで含めるような口調で国王リイジに説明した。だが、金五百万に目がくらんだリイジは頑として首を縦に振らなかった。

「一気呵成に攻めればヒダは落ちる。それに、筋は通っておる。現に、ヒダ国王キモリの息子、テルリはエスギロに通じておることは明々白々じゃ。我が国との友誼を裏切ったのはヒダじゃ。そのヒダを征伐して何が悪い！」

「そのヒダは、テルリ様がエスギロに通じておることを認めてはおりません」

「何じゃと？」

「むしろヒダのキモリ国王様は、ご子息のテルリ様を必死でエスギロから守ろうとなされております。さらには、そのお心が通じぬそのときは、テルリ様を廃嫡し、別に養子を迎えるおつもりであられ

ます」

「廃嫡だと？」

「キモリ国王様は以前より私に内々にテルリ様のことをご相談なされておいでなのです」

「ムムム……」

「それはヒダの者は皆、知っております。にもかかわらず我らがヒダに侵攻することになれば、我が国は裏切り者として見なされます。ヒダの者たちは死に物狂いで抵抗しましょう。また、諸外国との関係も悪化しましょう。そうなれば、アガルタへの貢物を拵えるなどという悠長なことは言っていられなくなります。国の存亡をかけた戦いに巻き込まれることになるのです。国王様は我がミンズ王国とヒダ王国の多くの民の屍の上に立つことがお望みでございましょうか」

「……」

宰相の言うことは実にもっともなことであった。さすがのリイジもこれには黙る外はなかった。

ヒダへの侵攻は沙汰止みになったが、ちょうどそのタイミングで、ヒーデータに使者にやったダンゴが帰国してきた。彼はヒーデータ帝国宰相、グレモントの言葉を、そのままリイジとムーラに伝えた。

「何と、アガルタと誼を結ぶのに、貢物はいらぬと申すのか！」

国王リイジは喜色満面の笑みを浮かべた。そのリイジの言葉を宰相

ムーラが止める。

「いえ、そうはいっても、国と国の話になるのです。それなりの品物を持っていくのが礼儀というものでございます」

「クッ」

相変わらず頭の固い男だとリイジは腹の中で嘯いた。だが、そうは言っても、この国が何とか国としての体面を保てているのは、この宰相の力量があったればこそであるために、リイジはその言葉を飲み込まざるを得なかった。

「グレモント宰相様は、アガルタ王様はそうした体裁にこだわるお方ではないとの仰せでした。友誼を結びたいと言う国を邪険に扱うことはないとのことです。来るもの拒まずのお方であるとのことでした」

「ならば、すぐに使者を送るのだ。我が国と友誼を結び、アガルタの持つ技術を我が国に提供してもらうのだ。そうなれば、我が国は豊かとなるであろう！」

国王リイジの目が輝いている。よくない兆候だった。

「うむ、よいことを思いついたぞ！」

「あいやしばらくお待ちくださいませ」

国王がよいことを思いつくときは、ロクでもないことが多いという事実は、宰相ムーラも把握していることだった。彼が敢えて国王の言葉を遮るという無礼な振る舞いをしたのは、これ以上彼に喋らせ

て、周囲の者が振り回されるのを防ぐためであった。

「何だ！」

国王リイジは不満をあらわにする。この男はいつもそうだ。せっかく余がよいことを思いついたのに、いつもそれを邪魔する。これが余でなければ、この男はとっくに首を刎ねられているところだ。

そんな彼の心の内など知らぬとばかりに、宰相ムーラは言葉を続ける。

「物事には順序というものがございます。我らはアガルタと全く関係がございません。まずは使者を遣わして友誼を結びたい旨を伝え、アガルタの使者を我が国に招待せねばなりません。技術提供云々の話は、まだ先のことでございます。まずは、ダンゴがヒーデータ帝国宰相、グレモント様とつながりを作ってくれました。このつながりをもって、アガルタとの交渉は可能になりました。ダンゴ、ご苦労だった」

宰相ムーラはダンゴに労いの言葉をかけて下がらせた。実際、ダンゴの働きは実に優秀なものであった。何のツテもないヒーデータ帝国に単身乗り込み、短期間で宰相グレモントと交渉するまでに漕ぎつけたのだ。これはダンゴ以外にはできぬ芸当だった。国王リイジはその価値に全く気づいてはいなかったが、宰相ムーラはこの男を高く評価し、厚い信頼を寄せていたのだった。

宰相ムーラは頭の中で、アガルタとの交渉を考えようとしていた。使者となるのはもちろん、あのダンゴをおいて他にない。彼ならば、上手くすればアガルタ王と直接交渉するところまで持っていくかもしれない。何と言っても、ヒーデータのグレモント宰相のツテがあ

るのだ。グレモント宰相の娘は先代ヒーデータ帝国皇帝の妃であり、その息子は宰相の養子となっている。その養子の姉は、アガルタ王リノスの正妃であるリコレット王妃だ。さらには、その養子の兄は現ヒーデータ帝国の皇帝なのだ。これほど強いツテはどこを探しても得られるものではなかった。

「では、すぐにでもアガルタに使者を送らねばならぬな」

突然、国王リイジが頓狂な声を上げた。もとよりそのつもりであった宰相ムーラはゆっくりとリイジに向き直る。

「そのことでございます。使者は……」

「余自らが参るぞ」

「は？　今、なんと？」

「余自らが参ると申しておるに！」

「国王様おん自ら！？」

「アガルタの国を、アガルタの都を余自らの目で見て確かめたい」

「お、お待ちくださいませ」

「言うな！　アガルタと友誼を結ぶのには、何かの手土産が必要なのであろう？　で、あれば、余自らアガルタに赴けば、これほどよい手土産はないではないか。アガルタにとっては、その気になれば余の命を奪うこともできるのだ」

この国王様にしては、珍しく筋が通っている意見だった。宰相ムーラは一瞬言葉に詰まった。腹の中で、ごくたまに正論を言ってのけるこの国王に、ちょっとした腹立ちを覚えていた。

そんな宰相の様子に気づくこともなく、国王リイジはさらに言葉を続けた。

「余自ら参るのじゃ。返礼の使者には、アガルタの中でもそれなりの者がやってこようの。返礼の使者には、アガルタ王自ら我が国に来かもしれぬな。そうじゃ。できれば、メイリアス王妃とコンシディー王妃を伴って我が国においでいただこうではないか。そして、我が国の鉱山や鉱石を見ていただき、助言をいただこうではないか。うむ、それであれば、余が自ら参る価値はある」

「こ、国王……」

「アガルタに参るのであれば、何より楽しみなのは、正妃たるリコレット殿だ。傾国の美女であるという。結婚以来アガルタ王はリコレット王妃を未だ放さぬというではないか。世界に冠たるアガルタ王の心をとらえて離さぬ女子とは、どれだけの美女であるのか。余自ら見分してくれるわ。フハハハハハ」

部屋に響き渡る程の国王リイジの高笑いを聞きながら、宰相ムーラは心の中で舌打ちをしながら、ゆっくりと目を閉じた……。

第七百八十七話　余裕、なし

それから三日後、国王リイジは馬車を仕立ててアガルタに向かった。

宰相ムーラをはじめとした家来たちの諫言は一切耳に入らなかった。彼は誰が何と言うと、アガルタに向かうの一点張りで、何と自分でその準備を始めたのだった。

それはお世辞時にも準備とは言えない代物だった。彼は近習たちに命じて、お気に入りの品物を集める、例えば、普段枕元に置いている宝石や、愛用している椅子、パジャマなどの日用品を集めただけに過ぎなかった。

だが、国王リイジは本気だった。それらのものを集め、馬車を仕立てればアガルタに行けると思い込んでいた。

国王のこの振る舞いに、宰相ムーラは頭を抱えた。この王の頭の中には、国政を顧みるという言葉はなかった。

とはいえ、家来たちは国王リイジの頑固さはよく知っていた。彼が実際に行動を起こしてしまえば、それを止めるのは並大抵のことではないのだ。

宰相ムーラはそのわがままぶりに眉を顰める一方で、この難事をプラスの方向に持っていくことはできないかと考えた。そして、その答えはすぐに出た。

部下たちは全幅の信頼を置くことができる者ばかりだった。アガル

タとミンズの距離は往復でひと月近くかかる。ひと月ならば、宰相がいなくても、なんとか国を運営していけるだろうという感覚があった。

今後のミンズ王国のことを考えたとき、宰相のいない中で国家運営を行うことができるか否かを見定めるよい機会でもあった。宰相自身も、これから先何十年とこの職にとどまるつもりはなかった。ある程度のところまで来れば、若い世代に引き継ぎ、楽隠居をしたいという思いも心にあったのだ。今回のこのアガルタ訪問は、来るべき未来を見据えたよいリハーサルになると考えていた。

宰相ムーラは決断した。そして、そこから準備を完了させるまでは早かった。

宰相代理には、彼の右腕とも言われるガレラを任じ、諸事万般を任せた。そして、アガルタ往復に必要な食糧、衣装、その他諸々の事柄を、彼はわずか一日で整えてみせたのだった。

そのお陰もあって、国王リイジは上機嫌でアガルタへの旅路についた。彼に従うのは、宰相ムーラと国内でも腕利きの者二十名がその後に従った。

旅はとても順調だった。何のトラブルも起こらなかった。国王リイジは、日一日と近づくアガルタへの到着に、さらに心を浮き立たせた。

宰相ムーラは旅に出る前に早馬を仕立てていた。もちろんその任に当たったのは、ヒーデータ帝国との折衝役を担ったダンゴだった。遠路はるばるヒーデータから帰国した彼を、ほとんど休息させずにアガルタに向かわせるのは申し訳ないと思ったが、ダンゴは不満を

一切口にせず、その任に着いた。

宰相は旅の途中でも、通過する国々に対して連絡を怠らなかった。彼は敢えて国王リイジが直々にアガルタに赴くことを告げていった。ミンズ王国とアガルタが友誼を結ぶことを喧伝することで、ミンズ王国の国威を向上させようとしたのだ。

宰相のこの強かさは、吉とでた。とりわけ、ミンズと同盟関係にある国の中には、わざわざ護衛の兵士を差し向けて、国境付近まで国王一行を送るという国まで現れた。そこまでせずとも、こちらが頼んでもいないのに食料や水を供給しようとする国が多くあった。みんな、どの国も、アガルタと友誼を結んだそのおこぼれにあずかるために、恩を売っておこうとしたのだ。これは宰相ムーラが予想した通りのことだった。

……万が一にも、国王様がアガルタ王を怒らせて国交断絶、さらには我が国が侵攻されることになれば、これらの国々は雪崩を打ってアガルタに味方するだろうな。

宰相は車窓に映る景色を眺めながら、ぼんやりとそんなことを考えていた。普段ならば、そんなことはあり得ないと苦笑いの一つも浮かべるのだが、国王に関しては、その可能性がなくはなかった。特に自他ともに認める美女好きである国王様が、アガルタ王にお妃に会わせてくれと言い出す可能性は十分にあった。それが理に適っていればよいのだが、欲望を丸出しにしてそんなことを言った場合、相手の心象が悪くなるのは火を見るよりも明らかだった。それに、アガルタの国政を取り仕切っているのはリコレットであり、軍事を掌握しているのはマトカルと、いずれもアガルタ王の妃だ。場合によっては、この二人が出てくる可能性も否定できない。もし、そうなった場合、国王様が何を言い出すのかが予想できなかった。

宰相ムーラの懸念はそこにあった。旅の道中に関しては、ほとんど心配事はないために、快適な旅ではあったが、アガルタに近づくにつれて、彼の心の中にはその不安が増していった。

ミンズ王国を出て半月後、ようやく一行はガルビーに到着した。

「これがアガルタか！」

船を降りるなり、国王リイジはそんな声を上げた。宰相ムーラは、まるで子供に言い聞かせるように、口を開く。

「確かにここはアガルタの領土ですが、王都ではございません。ここからアガルタまでは約二日かかります」

「わかっておるわ、そんなこと！　無礼者め！」

一瞬にして国王リイジの機嫌が悪くなる。その理由はわかっていた。空閨のためだ。

齢五十を超えている宰相ムーラは、別に女性がなくても過ごせるし、兵士たちは国王を守るという使命を遂行しているために、そうした心配はなかったが、国王リイジに関しては、そうした欲望を抑え込む経験が不足していた。常に城の中にいて、ほぼ初めてである外遊であったため、半月間の空閨は彼にとっては経験したことのない期間だった。宰相はそれを十分に分かっていたため、どこかでそれを発散させようかとも考えたが、身分を明かしての旅であるために、それはそれで難しかったのだ。

普段の宰相であれば、どこかで秘密裏にそうしたことを発散させる

手筈が思いついていたが、彼自身も、精神的に若干不安定になっていた。

その理由は、国王リイジの放漫な散財にあった。ミンズ王国は決して豊かな国家ではない。この旅とて、潤沢な資金があるわけではなかった。そんな状況を、まるで知ったことではないとばかりに、国王リイジは散財を続けた。特に大きかったのは、アガルタに向かうための船だ。

カンワ大陸には、多くの船会社があるが、国王はそのなかでも最も格式の高いケイダという船を使うことにこだわった。この会社は、王族専用の船を運航しており、それは豪勢を極めた船で有名だった。

国王リイジは風説書を読みふける中で、この船のことを知っていた。そのために、アガルタまでの船旅をケイダの船を使うことを主張して譲らなかったのだ。

確かに、贅を尽くした船だった。食事もよく、国王も大満足だった。ただ、その費用が宰相ムーラの予想をはるかに超えた額だった。まさしく、ゼロの桁が一桁違っていたと言ってよかった。

きっと国王様は、帰りの船もこのケイダの船を使うと主張するだろう。だが、その費用はない。それどころか、アガルタに逗留する費用も怪しいのだ。

国王との謁見を申し込む場合、到着してから数日かかることも珍しくはなかった。逗留する宿もそれなりの格式のあるところにせねばならないことを考えると、アガルタの都への逗留は三日が限度だった。

宰相ムーラはふと振り返って、これまで乗ってきた船を見上げた。実に美々しい船だ。だが、最初聞いていた金額と、求められた支払額が大きく違っていた。納得できなかった。国王様は払えと言ってしまったので、払わざるを得なかったが、一体、何がこれだけの差異を生むのかが、彼にはわからなかった。

「何をしておるのじゃ、行くぞ！」

国王リイジの言葉に宰相は我に帰った。彼は何とも言えぬストレスを感じながら、馬車に乗り込んだ。

第七百八十八話　さらに、余裕なし

二日後、国王リイジ一行はようやくアガルタの都に着いた。

ようやくあこがれたアガルタの都に到着して、国王リイジの機嫌は最高によいだろうと思いきや、彼の不満は爆発寸前だった。激しく貧乏ゆすりをしながら、今にも叫び出しそうな感情を必死で抑えていた。

何より不満だったのは、あの結界村だった。仮にも王族を迎えるような施設ではない。よくわからぬ透明な半円形の建物が犇めいていて、事もあろうに、その中で寝るようにと言ってきたのだ。

この国王たる私に、地べたで寝ろという。そんな無礼なことを言われたのは生まれて初めてだった。さらには、そこを管理する者が、他の王族ももれなくそうしているといってきたことだ。

理解できなかった。何故に、地べたなどで眠らねばならないのか。これはもしかしてアガルタの策略ではないかと思った。こうして地べたで寝かせることによって屈辱を与えるのではないか、と。

これは、宰相ムーラの不手際があった。アガルタの都に向かう王族たちは大抵、結界村で眠ることはない。乗ってきた馬車の中で眠るか、ガルビーを朝早くに出発して、夕方に都に着くようにするのだ。慌てて出発した宰相一行は、さすがにそこまで調べることができていなかった。もっともこれは、宰相たちの責任ではない。折に触れて先に進むよう促す国王もその原因の一端を担っていた。

結局国王リイジは、嫌々ながら結界村で眠ることになった。彼はその屈辱感でその夜は眠ることができなかった。

そんな思いまでして辿り着いたアガルタの都だが、中に入るのにかなりの時間を要した。それもそのはずで、ミンズ王国は国王の到着をアガルタ側に知らせていなかった。これはかなり例外的なことであった。通常ならば、使者が先に訪れ、誰が、いつ到着するのかを通知するものなのだ。

むろん、宰相ムーラは先にダンゴをアガルタに向かわせていた。だが、国王リイジのせっかちぶりは、先に出発したはずのダンゴに追いついてしまうという有様だった。一行は結界村でダンゴに追いついた。しかも一行が到着したときは、ダンゴはすでに結界の中で眠りについていた。翌朝、宰相と顔を合わせたダンゴは、飛び上がる程に驚いたのだった。

ダンゴは取るものも取り敢えずアガルタの都に向かった。だが、一刻も早くそこを離れたかった国王リイジは、準備もそこそこに出発してしまったのだった。

◆　◆　◆

「私はミンズ王国の使者、ダンゴと申します。この度は、我が国王ミンズ・ルーズ・リイジがアガルタ王国と誼を通じたく、国王自ら罷り越します。私はその勅使でございます」

「アガルタの都の守備隊長を務めます、ロウエンと申します。はるばるのお越し、痛み入ります。まずは迎賓館にお通りください。そちらで、ラウダと申すものがおりますので、彼にその旨を仰ってください。貴国の国王様自らおいでになると言われましたが、いつお

越しになる予定でございますか」

「あと一時間もすれば」

「は、今、何と？」

「非常にせっかちな国王様でございまして、あと一時間もすれば、こちらに到着なされるかと思います」

「一時間後ぉ！？」

これまで数多くの使者と応対してきたロウエンも、さすがにこれには驚いた。彼はすぐにダンゴを迎賓館に案内し、ラウダに引き合わせた。ラウダは、リノスの予定を管理している者だ。そのラウダも、あと一時間ほどで国王一行が到着すると聞いて驚きを隠さなかった。

「……できましたら、もう少し、余裕をもっておいでいただきたかったですね」

ラウダの言うこともっともだった。ダンゴはひたすら頭を下げる他なかった。

この日のリノスの予定はオフであった。彼は家族と共に過ごす時間を何よりも大事にしていた。そうした場合、リノスに連絡を取るのは緊急事態のときのみだった。ラウダは緊急事態ではないと即決した。それはそうだ。まったくかかわりのない国の国王が自分の勝手な都合でやってきているのだ。こちらが彼に合わせる道理などまったくないと言ってよかった。

ラウダはミンズ国王一行を、迎賓館に逗留させるべく、館長のミンシに打診した。だが、この日の迎賓館は満室だった。唯一、リノスの部屋が空いているが、さすがにミンズ国王一行をその部屋にいれることはできなかった。仕方なくラウダは、都にあるホテルの空き部屋を探して、こちらから連絡があるまで、そこで待機するようにダンゴに伝えたのだった。

これらの話がまとまるまで、優に一時間を要していたのだった。

◆　◆　◆

突然の訪問にもかかわらず、それらの事柄をわずか一時間程度ですべてを決定したラウダとダンゴは実に優秀であると言えた。だが、国王リイジにとっては、そんなことは知ったことではなかった。彼は次々に都に入ってく馬車を眺めながら、ひたすらにイライラを募らせていたのだった。

そして、ようやくダンゴが戻り、都に入ることができた。しかし、その都の中も人ごみでごった返しており、国王リイジが乗った馬車は遅々としてすすまなかった。

「一体どうなっておるのじゃ！」

ついにリイジは怒りを爆発させた。だが、いかに怒りを爆発させても、その状況が変わるわけではない。同乗していた宰相ムーラが必死になってリイジを宥めていた。

彼は車窓に目を向けるよう勧めた。今、目の前に移る景色は、世界最強国アガルタの都なのだ。人族だけでなく、多種多様な者たちが犇めいている。町からは活気にあふれた様子が手にとるようにわか

る。

「ご覧くださいませ、国王様。やはり、世界に冠たる国の都は違いますね。町中が活気にあふれております」

「……それは我が国の王都が衰退している、そう言いたいのか？」

「……」

まさしく取りつく島はなかった。宰相ムーラはこれ以上言葉をかけると、国王のイライラに火に油を注ぐものだと考えて、これ以上言葉をかけることを止めた。

正直、宰相はうんざりしていた。どこまでもワガママな国王様に嫌気がさしていた。国王の勢いに押されて国を出たことを、心から悔いていた。

やがて、馬車は緩やかな坂道を登り切り、ゆっくりと右に曲がった。ノロノロとすすんでいたが、すぐに止まってしまった。すると、またもや国王リイジが声を上げた。

「何だ！　どうした！　まだ着かぬのか！」

いつもならば宰相ムーラが宥めるところだが、彼自身ももはや心が折れていた。知ったことではないと言わんばかりに、ムーラは車窓に視線を向けた。

「はやくはやく！」

不意の子供の声が聞こえた。小さな子供が坂道を上がりながら叫ん

でいる。

「坊ちゃん、あんまり遠くに行っちゃいけねぇよ」

子供の後ろから、褌を締め、裸の上に半纏一枚羽織った小柄で恰幅の良い男が、肩に木材を担ぎながらゆっくりとした足取りでこちらに向かってきている。子供がそれを待ちきれないのか、ピョンピョンと跳ねながら男が来るのを待っている。

「もう、先に行くよ～」

子供はそう言ってこちらを振り返った。その瞬間、宰相ムーラの呼吸が止まった。

「リンデーズ！」

「何っ！　リンデーズ？」

ムーラの言葉に国王リイジが反応した。彼はムーラの傍までやって来て、体を密着させるようにして、外の景色を覗き込んだ。ちょうど馬車は子供のゆく手を遮るようにして停まっている。子供は、前を塞ぐ馬車に少し戸惑っているようで、首を左右に振っている。

「リンデーズ？　リンデーズではないか！　生きておったのか！」

国王リイジはそう言うと、素早く馬車から降りた。

「国王様！」

リイジが馬車を降りた直後、宰相ムーラも彼の後を追って馬車を降

りた。国王リイジは子供の目の前に立っていた。その子供は一体何が起こっているのかがわからないのか、ポカンとした表情でリイジを眺めていた。

「貴様……生きておったのか！　ここな、無礼者め！」

国王リイジは顔を真っ赤にして怒鳴った。

第七百八十九話　もっと、余裕なし

突然怒鳴られた子供は、体を震わせている。その顔には怯えの表情が浮かんでいる。それはそうだろう。そんなことを考えながら、宰相ムーラは馬車を降り、素早く国王リイジの許に向かう。

「ラウスト一家は処刑したのではなかったのか！」

宰相の姿を見るや否や、国王リイジは怒鳴り散らした。そんな彼を面倒臭いと思いながらも、宰相はゆっくりと口を開く。

「落ち着いてください国王様。ラウスト一家の出来事は、もう、二十年以上前のことになります」

「見ろ！　リンデーズが生きておるではないか！」

国王リイジの指さす先には、小さな子供が今にも泣きだしそうな顔でこちらを眺めている。

「リッ……」

宰相は思わず言葉を飲み込んだ。車窓からは似ているなと思ったが、こうして目の前で見ると、処刑した、いや、処刑してしまった莫逆の友、ラウスト・ヴォーズの息子、リンデーズに瓜二つだった。

活発で明るい子供だった。父によく似た風貌で、わずか六歳だったが、その風貌には知性と品性を備えていた子供だった。宰相の頭の中に、子供の手を引きながら、幸せそうな表情を浮かべていた親子

の姿が、鮮やかに蘇った。

「やいやい、坊ちゃんに何をしやんでぇ！」

男の怒号で我に帰る。見ると、先ほど坂を上りながら子供を追いかけていた男が、顔を真っ赤にしてこちらに小走りに向かってきていた。でっぷりと肥った体。素肌に褌一本を締め、半纏一枚を羽織ったいで立ちで、肩に木材を担ぎながら走ってくる有様は、何とも言えぬ迫力があった。

「坊ちゃんに指一本でも触れてみろィ。この俺が許さねぇぞ！」

「何ィ、下郎めが！」

国王リイジは腰に差している剣を抜き払った。

「国王様！」

宰相はそう叫びながら国王の前に出た。ここはミンズ王国ではない。アガルタなのだ。他国の都で刃傷沙汰を起こせば、たとえ国王と言えどタダで済むわけはない。ミンズ王国が世界に冠たる強国であれば話は別だが、吹けば飛ぶような小国の王であっては、下手をすれば縄目を受ける可能性すらあるのだ。だが、国王リイジは止まらなかった。こちらに向かってくる男に向けて、歩を進めようとした。

「け、ケンカは、ダメだよ……」

怯えている子供が、小さな、絞り出すような声で呟いた。国王リイジの眉間に皺が寄った。

「無礼者め！」

「国王様！」

「坊ちゃん！」

国王リイジの言葉に続いて、二人の男の声が同時に聞こえた。そのときの国王は、目の前の子供に向かって剣を振り下ろしていた。

褌の男が肩に担いでいた木材を放り投げ、それらが道に散らばる音と同時に、国王の剣から、何か金属同士がぶつかるような音が聞こえた。

「……クッ。なっ？」

子供は首をすくめ、目をギュッと閉じている。国王の剣はその子供のすぐ手前で止まっていた。

「け……結界……」

宰相ムーラは誰に言うともなく呟く。その瞬間、宰相の体は宙を飛んでいた。

地面に叩きつけられた衝撃で我に帰る。ふと見ると、すぐ隣に国王が倒れていた。

「坊ちゃん、大丈夫（でぇじょうぶ）か！　坊ちゃん！」

子供は火がついたように鳴き声を上げている。その子供を先ほど突撃してきた褌の男が抱きかかえるようにして必死に話しかけている。

「国王様！」

あとからやって来た馬車から、国王の警備兵たちが降りてきて駆け寄ってくる。彼らは国王の無事を確認すると、すぐに腰に差している剣を抜き払った。

「待て、騒ぎを起こすな！」

宰相は起き上がりながら兵士たちに命令する。だが、国王リイジの怒りは収まらなかった。

「斬れ！　この者どもを斬れ！」

「待て！　剣を納めろ！　騒ぎを起こしてはならん！」

宰相は必死で叫ぶ。ここで騒ぎを起こせば、アガルタまで来た意味はなくなるのだ。だが、国王リイジにその認識はなかった。彼は、兵士たちに対して、斬れ斬れと叫び続けた。

「何をしておるのだ！　斬れ！　この者どもは我に狼藉を働いたのだ！　斬れ！　これは主命だ！　王の命に逆らうのか！」

「てめえらぁ！」

突然男の大声が響き渡る。見ると、先ほどまで子供を介抱していた男が、手に角材をもって仁王立ちしている。その子供はなおも泣きじゃくっている。男の毛だらけの肌が赤く上気している。

「俺っちの大事（でえじ）な坊ちゃんをよくもやってくれたな！　大きいこと

を言うようだが、ギャッと生まれてこの商売（しょうべぇ）になってから、ヒーデータの帝都は言うに及ばず、ガルビーを股にかけ、ジュカの山に腰を掛け、ルノアの森の木を楊枝に使い、アガルタの都の水で面ぁ洗ったお兄（あに）いさんだ！　うぬらのようななまくら野郎に、大事（でえじ）な坊ちゃんを傷物にされてたまるものかい！　さあ、ここからがうぬが番。どいつもこいつも足腰立たねぇようにしてやるから、そう思え！」

男のあまりの見事な啖呵に、皆が一瞬唖然とした。

「大丈夫か」

「おとうさん！」

気づけば、先ほどまで泣いていた子供が、男に抱き着いていた。

「大将（てぇしょう）！　……すまねぇ。あっしが付いていながら」

「いいんだゲンさん。気にしないでくれ」

角材を持っていた褌男が申し訳なさそうに頭を下げる。

「貴様ら一体、何者だ」

子供を抱きかかえた男が怒りの形相を浮かべながら、国王リイジたちに話しかけてきた。そのとき、国王が頓狂の声を上げた。

「ヴォーズ！　貴様、ヴォーズではないか！　死んだのではなかったのか！」

隣に控えていた宰相も、口をあんぐりと開けている。それほど、目

の前の男は、反逆罪で処刑したラウスト・ヴォーズ公爵に瓜二つだった。

「ヴォーズ？　何を言っているのか俺にはわからんが？　そんなことより、なぜお前たちは子供に剣を向けた。剣を向けただけでなく、子供を斬ろうとしただろう。俺の結界がなければ、この子は間違いなく大けがを負っていた。下手をすれば死んでいたかもしれん。事と次第によってはお前たち、それなりの罰を覚悟してもらうぞ」

「ヴォーズ、貴様、誰に向かって言っておるのだ！」

「お待ちくださいませ、国王様。ヴォーズの件は、もう二十年も前の話になります。今、目の前においでになる御方は、似ているとはいえ、全くの別人でございます」

宰相の言葉に、国王リイジは何とも言えぬ表情を浮かべる。

「まずは国王様、剣をお納めください。皆も剣を納めるのだ」

国王はぶ然とした表情を浮かべていたが、やがて、面倒くさそうに剣を鞘に納めた。兵士たちも彼に倣って剣を納めた。

「いや、失礼した。私はミンズ王国で宰相を務めますムーラと申す者。こちらは、ミンズ王国国王様であらせられます。どなたかは存じませぬが、色々と手違いがありまして、このような騒動になりました。いや、そちらはご子息かな？　ご子息に手荒なマネをしてしまったこと、深くお詫び申し上げる」

そう言って宰相は深々と腰を折った。だが、角材を持った男は承知しなかった。

「何を言いやがんでぇ、この唐変木！　手前ぇら有無を言わずに坊ちゃんに斬りかかりやがって！　坊ちゃんが一体何をしたって言うんでぇ！　詰まらねぇことをぬかしぁがぁると、ただぁおかねぇぞ！　この出し殻野郎のドブ板野郎のタレ味噌野郎め、すっこみやがれ！」

「もういいよ、ゲンさん。もうすぐ警備隊の連中がやって来る。マトに命じておいたんだ。来るのが遅くなって、申し訳なかったな」

「大将（てぇしょう）！　……すまねぇ」

そのとき、坂の下から白馬に乗った騎兵が、数十人の兵士を連れてこちらに向かって来るのが見えた。全員が黒い鎧と槍を装備していて、その光景は異様だった。やがて彼らは国王一行を取り囲むようにして並んだ。

「おおマト、ご苦労だった」

「この者たちか、狼藉者というのは。よし、全員、アガルタ軍本部に連行しろ」

命令を受けた兵士たちが一斉に槍を国王一行に向けた。よく見ると、白馬に乗った騎士は、どうやら女性のようだった。宰相ムーラは必死になってその女性に口を開く。

「し、しばらく、しばらくお待ちを……。我々はアガルタ王に謁見するために参りました……」

「貴様たちの目の前にいるお方が、アガルタ王、バーサーム・ダー

ケ・リノス様である」

女性の言葉に、宰相は目を丸くして固まった。

第七百九十話　翻って、余裕なし

その後、国王リイジ一行は、アガルタ軍本部に連行された。

アガルタ軍の動きは見事の一言に尽きた。気がつけば、国王一行は槍を構えた兵士たちに完全に包囲されていた。しかも、兵士たちが放つ気配が尋常ではなかった。戦っても間違いなく勝てない、そう思わせる迫力と圧力があった。

ミンズ王国の兵士たちは唯々諾々と連行に応じた。そして、国王リイジ、宰相ムーラ、勅使ダンゴらは馬車に乗ることを命じられ、彼らはそのまま白馬に乗った騎士に先導される形で、アガルタ軍本部に連行されたのだった。

馬車の周囲にはアガルタ軍の兵士たちが並び、彼らが逃げられぬようにしていた。それを見た宰相は舌を巻いた。馬車は人が歩く速さで進んでいる。だが、兵士たちは一糸乱れぬ動きで付き従っていた。槍と鎧を装備しながらこれだけの統制の取れた動きができるのは、相当な訓練を詰んだ証である。宰相ムーラはこれまで、アガルタ軍の強さは、魔法を跳ね返す効果を付与した装備品があるためだと解釈していた。だが、今目の前で統制の取れた動きで周囲の者たちを圧倒しながら進む兵士たちの姿を見て、彼はアガルタ軍の本当の強さの秘密を垣間見た気がした。

一方の国王リイジの考え方は違った。白馬の騎士が進むたびに人々が次々と道を開ける様子を見て、最初からこの騎士に先導を頼めばよかったのだと思っていた。

程なくして一行はアガルタ軍本部に着いた。ここも見事な作りだった。迎賓館か何かと見紛う程の立派な建物だった。そこで国王以下全員の剣は没収され、取り調べが行われた。取り調べ、と言ってもそれは簡単なもので、姓名と所属を確認される程度だった。

国王リイジと宰相ムーラ、そして、勅使のダンゴの三人は別室に通された。そこにはベッドが設えられてあり、誰かの寝室のようであった。国王リイジは豪華さはないが、最低限のものが揃ったその環境に満足した。彼は部屋に案内してきた兵士に向かって話しかける。

「ああ、これ。先ほど我らを先導してきたあの騎士は、何という者じゃな」

「あのお方はマトカル様である。アガルタ王のお妃さまにして、アガルタ軍最高司令官であらせられるお方である」

「何と……」

国王リイジはさも、残念そうな表情を浮かべた。マトカルという名前は知っていた。風説書によく出てくる名前だ。アガルタ軍を勝利に導いたことも一度や二度ではない司令官だ。女だてらに兵士たちに命令を下している様から見て、タダ者ではないと感じてはいたが、まさかそれがあの、マトカル司令官だとは思わなかった。それを知っていれば、話しの一つもできたであろうに……。国王は心の中でそう呟いていた。

「左様か、それは惜しいことをしたのう。だが、また、あのマトカル殿にお会いできるときも来ようの？」

「国王様……」

リイジの質問に兵士は答えなかった。彼は、ただ淡々とした様子で、リイジたちに向けて説明を始めた。

「あなた方はこのアガルタの都で狼藉を働いた罪で拘束されています。先に承れば、あなた方はミンズ王国国王一行ということで、それなりの要職にある者、即ち、国王、宰相、勅使の三方はこの部屋で逗留することを特別な計らいをもって許可されておりますが、扱いは、罪人となります。その旨、承知ください」

「この度のことは、幾重にもお詫びいたします故、何卒穏便のお計らいを……」

宰相ムーラはそう言って頭を下げた。だが、兵士は宰相を一瞥しただけで、何も答えようとはしなかった。

「奥にベッドが二つあります。ここは来客を迎えるための部屋です。ゆめゆめ部屋の備品を壊したり汚したりはしないでいただきたい。手洗いとバスルームはそちらにありますから、お使いください。ただし、許可があるまでこの部屋から出ることを禁じます。それでは」

男はそう言って踵を返して退室した。その直後、何か巨大な錠が卸されるような音がして、すぐに静かになった。

「……本当に閉じ込められたのでしょうか」

ダンゴが不安そうな面持ちで口を開く。

「ああ。国王様が斬りつけたのは、アガルタ王の第一王子たるイデア様だ。命を取られなかっただけ、よかったと思わねば。ただし、

今後の展開ではどうなるかわからぬがな……」

宰相ムーラはそう言ってチラリと国王を見た。彼は顎を撫でながら、あらぬ方向に視線を泳がしている。

「それにしてもよく似ておったな」

「……」

アガルタ王が、二十年以上前に処刑したラウスト公爵に似ていたと言っているのだ。宰相の胸がドキリと鳴った。だが彼は、今はそんなことを考えている時ではないと思い直し、思考を切り替える。

まず、命を守ることを考えねばならない。事もあろうに、アガルタの次期国王となる王子に斬りつけたのだ。アガルタからどのような要求をされるのかが、わかったものではなかった。アガルタは味方の国にはとても優しいが、敵に回った国への厳しさは世界中が知るところだ。よくて、傀儡政権となり属国に組み込まれるか、悪くすると、軍勢を差し向けられて滅ぼされる可能性すらある。

そこまで考えて、宰相はいや待てよと、心の中で呟く。アガルタはどちらかというと力技で相手の国を屈服させることを好まぬ国だ。力づくで屈服させたのは、ラマロン皇国くらいのものだろう。その他は、経済を支配して裏から支配していく手法を好む。クリミアーナ教国がそのいい例だ。あの国は、国家予算のおよそ半分以上の賠償金を支払い続けている。結果的にそれはクリミアーナ教国の自由を奪い、国力と影響力の低下をなさしめた。我が国もそのようなことになるのであろうか……。正直言って宰相は、アガルタの出方がわからなかった。

「宰相」

国王リイジが話しかけてきて思考が中断された。宰相は心の中で舌打ちをしながら、国王に向き合う。

「そなた、本当にラウスト一家を処刑したのか？」

「……」

「ラウスト一派を処刑したのは、二十数年前……。それは余もよく覚えている。しかし、だ。あのアガルタ王の風貌は、死んだヴォーズにそっくりであった。そして、その子息たるイデア王子は、ヴォーズの息子のリンデーズに瓜二つであった。他人の空似という言葉があるが、かくも人はあのように似るものか。余はヴォーズの遺体は検分したが、息子のリンデーズの遺体を検分した覚えがない。宰相、そなた本当に、リンデーズを処刑したのか？」

「そ、それは……」

「答えよ。正直に答えるのだ。もし、そなたがリンデーズを生かしていて、それがあのアガルタ王である、というのであれば、我らの活路は見いだせる。それどころか、このアガルタに来た甲斐があったというものじゃ」

「あのリンデーズが生きていれば、活路は見いだせる、と？」

「そうじゃ。だが、そのためには、リンデーズが処刑されなかったという事実が必要じゃ。どうなのじゃ。リンデーズをどうした？」

「う……それは……」

「言え、言うのだ」

「……実は、リンデーズとその母であるメルルは、秘かに国外に逃がしてございます」

「うむ、そうか！」

「ただし、逃がしはしましたが、その後の行方は把握しておりません」

「よくやった！　褒めてとらす！」

国王リイジは膝を打って喜んだ。喜色満面の笑みを浮かべながら、何度も頷いている。

「確か、あのアガルタ王は奴隷上がりであると聞いた。ということは、そなたがリンデーズを国外に逃がした後、奴隷の身分となり、それが今のアガルタ王となった。そういうことになるな？」

「そこまではわかりませぬ」

「いや、そうだ。きっとそうに違いない。うむうむ、ようやった。褒めてとらす。あとはこの余に任せておくがよい！」

そう言って国王リイジは呵々大笑した。その様子を見て宰相ムーラは、何とも言えぬ不安を覚えた。

第七百九十一話　どう帰らせる？

一方、うちに帰ってきたイデアは、リコの顔を見るなり、安心したためか、再び火が付いたように泣き出した。さすがのリコも、その様子を見て戸惑っていたが、彼が斬りつけられたと聞いて、怒りをあらわにした。

別に怒鳴ったり取り乱したりすることはなかったが、その体から発せられる怒りの感情は、周囲の者を黙らせた。リコがここまで怒りの感情を出すのは珍しい。いや、俺も初めて見た、といってもよかった。

「で、その方々をどうするおつもりですか？」

イデアを抱きながらリコは声を落として口を開いている。怖い。マジで怖い。だが、このまま黙っていることもできないので、俺は小さな深呼吸をして、ゆっくりと説明する。

「取り敢えず、アガルタ軍本部に閉じ込めている。今後のことは、皆で相談して決めるつもりだ」

「そう、ですの……」

「リコの考えも聞かせてほしい」

「リノスにお任せしますわ」

「……そうか」

……心の中では、八つ裂きにしろと思っていますよね。絶対に許さない、って思っている。リコの気配があまりにも迫力がありすぎて、正視できない。思わず隣に控えているメイに視線を向ける。彼女は悲しそうな表情を浮かべながら、小さく頷いた。

ついさっきまで、子供たちの声で賑やかだったダイニングが、とんでもない静寂に包まれている。子供たちも誰もしゃべらない。あの活発なアリリアでさえ、目を左右に動かしながら、何とも言えぬ表情を浮かべている。その隣にいる龍王も笑みを浮かべているが、何も喋ろうとしない……って、何でお前がここにいるんだ。ペットは外だろうが！

「う～ん、命を奪う、というのはしない方がいいかもしれませんね」

不意にシディーが口を開く。彼女は、右手の人差し指を顎の下に当てて、いつもの「考えるポーズ」を取っている。

「どちらかと言うと、このまま穏便に国に帰ってもらう方がいい気がします」

「特に賠償なども求めずに、お帰りを願う、か」

「むしろ、すぐに出て行け、でいいと思います」

「そうか……」

シディーはそう言うが、俺はそれだけでは手ぬるいと思っていた。我が子が襲われたのだ。何らかのペナルティーは負ってもらわねばならない。そもそも、イデアがなぜ襲われたのかがわからない。た

だ、倅が何か失礼を働いたのが原因ではないと断言できる。この子は人を不快にしたり悲しませたりするようなことをする子ではない。

そのとき、勝手口が開いてマトカルが帰ってきた。彼女はいつもと違うダイニングの雰囲気に一瞬、足を止めたが、表情は一切変えなかった。彼女は鎧装備のまま、剣を片手に椅子に腰かけた。

「事のあらましを聞いてきた」

そう言って彼女は周囲を見廻す。それはまるで、安心しろと言っているように見えた。彼女のその声がまるで合図であったかのように、皆、それぞれの席に着いた。

……龍王がキョロキョロとしている。まさか、お前も座ろうとしているのか？　イデアの席が空いているが、まさかそこに座るんじゃないだろうな。そこに座った瞬間、マジでぶっ殺すからな。

俺の気配に気づいたのか、ヤツはアリリアの座る椅子の後ろに控え、腕を組んだ。出て行けよと言いたかったが、まあ、今日のところはこれで勘弁してやる。

「まず、結論か先に言うと、イデアには全く落ち度はなかった」

マトカルらしい説明だった。一切無駄のない、明確な話だった。それを聞いて、俺も大いに納得する。リコも当然だと言った表情を浮かべている。

「イデアに斬りつけたのは、ミンズ王国国王であるリイジという者だ」

「ミンズ王国……聞いたことがないな」

「それはそうだ。これまでアガルタとは一切付き合いのなかった国だ」

「そんな国の王がなぜ、アガルタに？　そして、どうしてイデアを斬りつけたんだ？」

「リイジ王がアガルタに来たのは、友誼を結ぶためだ。ただ、この王は前触れもなく、いきなりやって来ている。信じられぬことではあるが、事実だ。そして、イデアを襲った理由は、元々大工のゲンさんと痴話げんかをしていて、そこにイデアが止めに入った。それが気に入らなかった、というのが理由だ」

「まあ」

「バカか」

リコと俺の言葉がほぼ同時だった。そんなことで剣を抜き、子供に斬りつけたのか。あきれ果ててものも言えないとは、このことだ。

一つ心配なのは、リコがイデアがゲンさんのところに遊びに行くことを禁止しないかということだ。このところイデアは、ゲンさんの工房に行くのがお気に入りだ。木を自由に加工して色々なものを作る、ということにハマっている。この間などは、木でパズルを作ってきた。俺はそうやって手で作品を拵えるという経験はとても大事だと思っているし、ゲンさん自身も、イデアをとてもかわいがってくれている。これからもそうした関係が続けばいいのだが……。

「……眠ってしまいましたわ」

見ると、イデアがリコの腕の中で静かな寝息を立てていた。泣き疲れたのだろう。先ほどまで泣いていたのが嘘のように、安らかな寝顔だ。俺はリコの膝からイデアを抱き上げると、このまま寝かせようと言って、寝室に向かった。俺の後ろから、リコもついてきた。

イデアはリコの部屋ではなく、俺の寝室に寝かせることにした。ここならば、ベッドが広いし、寝やすいと思ったのだ。

靴を脱がして、イデアをベッドに横たえる。いつ見ても、この子の寝顔は癒される。それはリコも同じようで、彼女は愛おしそうに彼の頭や顔を撫でている。

「しばらくイデアの傍にいますわ」

「……ああ、そうしてやってくれ」

俺の言葉にリコはゆっくりと頷いた。そのまま二人を残して部屋を出て、ダイニングに戻る。俺が席に着くのを見計らって、マトカルが再び口を開く。

「今回のことは、イデアにとっては不運だったが、一つ、いい経験になったと思うことだ」

マトカルの言葉の意味がわからないのか、皆一様に不思議そうな表情を浮かべる。

「イデアは将来、アガルタの王位を継ぐ男だ。王位を継ぐということは、それだけ命を狙われる可能性が高まる。いざというとき、剣に怯えて身動きが取れない、などということはあってはならない。

剣で狙われる、斬られるという経験ができたことは、後々の人生に有益に働くだろう」

「まあ、それは、また別の話だ」

「そうか。話がそれた。本題に戻ろう。一つわからないことがある。リイジ国王が折に触れて言っていた言葉だ」

「何だい？」

「リノス様が、ラウスト公爵の息子であり、本来は、リンデーズという名前であるということを繰り返していた」

「ああ、確か、俺にもそんなことを言っていた気がするが、あいにくそのどちらも俺の記憶にない」

「そうか。ただ、ミンズ王は、リノス様に会って話がしたいと言っていた」

「会ったところで、何をするつもりだ？」

「それはわからない。ただ、宰相を名乗る男が、何としてもリノス様にお詫びしたいと何度も繰り返していた」

「う～ん」

「ただ、彼らはアガルタの都で騒動を起こしただけでなく、子供に対して刃を振るった。アガルタの法に照らし合わせれば、国外退去の処分が妥当だ。だが、一方でそれを起こしたのは、一国を預かる者だ。ある意味では、アガルタに対して攻撃を加えたとも取れる行

為だ。アガルタがミンズ王国に対して賠償金などを求めることは可能だ」

「特に会うこともなく、このままお引き取りでいいんじゃないですかね。友誼を結びに来たと言っても、アガルタがミンズ王国と付き合っても、あまり利益はないと思いますよ」

シディーが腕組みをしながら口を開いた。俺も思わず腕組みをして、天を仰いだ……。

第七百九十二話　会いたい、会いたい

その夜、イデアは大変だった。昼の一件がよほどショックだったのか、眠りはするものの、しばらくすると号泣しながら目を覚す、というのを何度か繰り返した。その度にリコは彼をやさしく抱きしめていた。

「……ミンズ王様は、どうするおつもりですか？」

イデアを抱きしめながらリコは、小さな声で呟いた。彼をこうやって眠らせるのは、二度目のことだ。

「このまま帰国してもらおうと思っている」

「……」

「賠償金や領土の割譲なども考えたけれど、そういう関わりを持つだけでも何だかイヤなんだ。金輪際あの国とは付き合わないつもりだ」

「……私が気になるのは、あの国がリノスの故郷かもしれない、という点ですわ」

「どういうことだい？」

「帰りたくはないのですか？」

「話をしたかもしれないけれど、俺は奴隷になる前の記憶が全くな

いんだ。気がつけば、奴隷商人の馬車に乗せられていた」

「そうですの……」

優しげな笑みを浮かべながらリコはイデアの顔を覗き込んでいる。
彼は再び眠ったようだ。

その寝顔は、子供の頃の俺と実によく似ている。こんな子供を奴隷として売ったヤツはどんなヤツだろうか。いや、むしろ、どうしてこんな幼い子が奴隷として売られてしまったのか、俺はその理由が知りたいと思った。

リコは甲斐甲斐しくイデアに毛布を掛け、おでこにキスをして、彼の手を握りながらその身を横たえている。本当にリコはイデアを愛しているのだというのがよくわかる。それは俺も同じだ。本当に優しい子なのだ。弟妹達には優しく、姉たちもとても可愛がられている。ああ、きっと、遠からずこの家はイデアが中心となって盛り立てていくのだろうなと感じさせるほど、人望のある子供なのだ。俺としては、今回の一件は忘れて、このままスクスクと育って欲しいと願うばかりだ。

ゆっくりとベッドに横になる。リコも目を閉じて眠ろうとしている。
俺も目を閉じて眠ろうとしたが、目が冴えてしまっている。

仰向けに寝転がりながら以前見た夢のことを考える。あれは、俺が転生する前、つまり、リンデーズと呼ばれた子供の頃の記憶だったのだろうか。確か、父親は死んだと兵士は言っていた。何となく、今日のあの王が喚いていた話と一致してくる。そういえば、母親らしき人……名前は確か、メルルとか言ったか。その母親はどうなったのだろうか。

そんなことを考えていると、眠ってしまったのか、気がつけば朝になっていた。周囲を見廻すと、隣に寝ていたはずのリコとイデアの姿はなかった。どうやら俺が寝過ごしてしまったようだ。

顔を洗い、着替えてダイニングに降りる。皆で朝食中だった。寝過ごしちゃったよ、などと言いながら席につく。イデアは……やはりまだ、元気がない。いつもは色々と喋りながら周囲を明るくしている彼が無言で食事を摂っている。心なしか、顔色も良くないように見える。俺はリコに目配せをして、彼の傍にいて欲しいと伝える。リコは無言で頷いた。

イデアのことを心配しながら転移結界に乗り、アガルタに向かう。迎賓館の部屋を出ると、待ちかねていたように館長のミンシが走り寄ってきた。聞けば、大工のゲンさんが朝早くから来ているのだと言う。一体何事かと思いながら彼の待つ部屋に行ってみると、ゲンさんは俺を見るなり立ち上がり、深々と頭を下げた。隣にはおかみさんもいて、彼女もゲンさんと同じように深々と腰を折った。

「大将（てぇしょう）、坊ちゃんのこと、本当にすまねぇことをした」

「いいんだ、ゲンさん。イデアは無傷だ。今日は大事を取って休ませているが、また、遊びに行くだろうから、そのときはよろしく頼むよ」

ふと見ると、ゲンさんの顔が腫れ上がっている。一体どうしたと聞くと、おかみさんにブン殴られたのだと言う。

「本当に……ウチの人は喧嘩っ早いから、坊ちゃんがあんなことになって……」

どうやらおかみさんは、あの暴力王にゲンさんが先にケンカを売ったと思ったらしい。俺も現場を見ていないからわからないが、イデアの話では、突然怒鳴られていた彼をゲンさんが助けようとしてくれたらしい。その話をすると、おかみさんはホッと胸を撫で下ろしていた。

「坊ちゃんが危ねぇから助けに入ったら、剣を抜いて斬りやがったんだ、なんて言うもんだから……。私ぁてっきりこの人が喧嘩を売ったもんだとばっかり思っていたんだけれど……」

「だから何回も言っているじゃぁねぇか。本当に坊ちゃんが危ねぇと思ったから、俺っちは体を張って坊ちゃんの前に立ったんだ。それが、あの野郎……」

「大将（てぇしょう）、あっしをあの野郎に会わしておくんなせぇ！　あっしがたっぷり小言をいいやすから。なぁに、心配には及ばねぇよ。大人しく聞き分けりゃあよし、ガタガタ御託をぬかしぁがぁるなら、ゲンコの一つや二つ食らわせて、黙らせてやりますから！」

そのとき、おかみさんの左腕が目にもとまらぬ速さで振り抜かれた。ゲンさんは無言のまま前のめりにその場に倒れ伏した。

「バカだねぇ、この人は。そんなことをしたら、今度は血で血を争うことになるじゃないか」

おかみさんは俺に向き直ると、再び深々と詫びを言って、今度改めてお詫びをさせてもらいますと言った。だが俺はそれには及ばないと答え、隣で気を失っているゲンさんを褒めてやってくれと言って、彼に回復魔法をかけた。意識を回復したゲンさんに、先ほどのおか

みさんとのやり取りを説明していたそのとき、扉がノックされ、クノゲンが入室してきた。

「リノス様、こちらにおいででしたか」

彼は少し困った表情を浮かべている。その様子を察したゲンさん夫婦は何度もお辞儀をしながら部屋を後にしていった。彼らの退室を見届けると、クノゲンはさらに言葉を続ける。

「ミンズ王国の国王が、リノス様に会いたいと言っていまして……」

「何だ、詫びを入れたいと？」

「詫びを入れたいと言っているのは宰相の方でして、何としてもリノス様に会って直接お詫びを申し上げたいと、手を合わせて懇願しております。一方の王の方は、リノス様に話したいことがあると言っているのです」

「俺に話したいこと？」

「はい。彼が言うには、リノス様のお父上のことについて、話をしたいと言っています」

「父……か」

「どうなさいます？」

「はっきり言って、俺には実の父親の記憶はないんだよな。俺にとって父は死んだファルコ師匠であり、バーサーム侯爵様だ。今更、記憶にもない父親の話をされても、な」

「では、会わずにこのまま追い返しますか。あの王は、マトカル様にも会いたいと言っていますので、マトカル様から国外退去の旨をお伝えいただきましょうか」

「マトに会いたい？　何のために？」

「さあ……。リノス様と会うついでに、マトカル様にも会いたいと言っておいででした。理由を聞きましたが、色々と尋ねたいことがあると言っていまして……。何をお尋ねになるのかと聞きましても、一切お答えになりません。それでは話になりませんと見張りの者が言ったところ、王はぶ然とした表情を浮かべていたとか……。さすがに隣に控えていた宰相が間に入って事なきを得たようですが、マトカル様に報告すると、会ってもいいと言われまして……」

「へえ……。それはまた、思ってもみないことだな。マトのことだから、てっきり忙しいから無理だと突っぱねるかと思ったけれどな」

「私もそう思いましたが……。マトカル様は、会うついでに、私が国外退去の命令を下そうと言われまして、リノス様にその許可を頂きに来た次第です」

「う～ん」

俺は思わず腕を組みながら天を仰いだ。

第七百九十三話　ミンズ王の言い分

結果的に俺は、ミンズ王に会うことにした。

大事な息子を斬りつけた犯人にもう一度会うのは乗り気ではなかった。だが、マトカルがあの王に会うと言う。何だか、一人で会わせるのはいけないと思ったのだ。

もちろん、マトカルに何か危害が加えられる可能性は、限りなくゼロに近い。彼女には俺の結界が張っているのはもちろん、ミンズ王たちの武器はすべて押収されている。よしんば、俺の結界がなくても、あの王たちがマトカルを襲ったところで、確実に彼女は完封するだろう。気になるとすれば、罵詈雑言を吐いてマトカルを辱めるという点だが、それすらも彼女は一切表情を変えず聞き流すような気がする。であれば別に、俺が同席する必要はないのだが、それでも俺を行動に駆り立てたのは、あの王が、俺が転移する前の人格、リンデーズの父親のことを話したいと言っていた、という点だった。

その話を聞いてから、俺の胸の奥でモヤモヤが止まらないのだ。頭では別に会う必要もないと思っているのだが、どうしても心のモヤモヤが収まらない。はっきり言って気持ちが悪い。これは俺の直感だが、深層に住むリンデーズが聞きたいと言っているような気がしてならないのだ。

クノゲンに俺も同席すると言うと、彼は苦笑いを浮かべた。そして、国外退去の処分はマトカルから言い渡すので、俺は一切口を開く必要がないと言って部屋を出て行った。

ミンズ国王一行は、謁見の間に通されることになった。俺が決めたわけではない。万事、クノゲンが取り仕切ったのだ。マトカルが俺の執務室に迎えにきて、一緒に部屋に向かう。特に話をすることもなく、無言のまま二人で歩く。言っておくが、別にマトカルと喧嘩をしているわけではない。俺たちの仲はすこぶる良好だ。この間だって、二人の愛を確かめ合ったところだ。……特に愛している、と言った言葉はなかったような気がするが。いや、良好だ。良好なのだ。

部屋の前まで来ると、クノゲンが待っていた。彼に促されるまま入室すると、そこにはすでに国王一行が待っていた。俺の姿を見るなり、宰相と勅使は片膝をついて深々と頭を下げたが、国王はその場に立ち尽くしたまま、ニタリと笑った。察するところ、詫び方を習っていないのだろう。

「アガルタ王にあらせられましては、麗しきご尊顔を拝し、恐悦至極に存じ上げ奉ります」

俺が玉座に着くや否や、宰相が紋切り型の口上を述べる。彼にはここで言い渡される処分の内容を知らないのか、何卒鷹揚のお取り計らいの程……などと、命乞いに近い内容を喋っていた。そんな宰相の必死の言葉を、隣に突っ立つ王は、満足そうな笑みを浮かべながら頷いている。この男は自分の置かれている立場がわかっているのだろうか。

「では、処分を申し渡す」

宰相の言葉が切れたタイミングを見計らって、マトカルが口を開く。宰相はまだ喋りたそうな顔をしていたが、喋ったところでどうなるものでもないので、これはマトカルのファインプレーと言っていい

だろう。彼女は一呼吸置くと、無表情のまま言葉を続ける。

「そなたたちを国外退去処分とする。本来ならば賠償金もしくは領土の割譲を求めるところだが、アガルタ王の特別の思し召しをもって、国外退去のみとする。ただし、」

マトカルは控えている者たち一人一人に視線を向けた。宰相と勅使はゴクリと唾を飲み込んでいる。

「今後十年間は、アガルタへの入国を禁ずる」

……それは、ミンズ王国の者全てに適応されるのか、という疑問を持ったが、要は、ほとぼりが冷めるまで付き合いを求めて来るなという意味なのだろう。

「は……はっ。寛大なご処置、感謝申し上げます」

「話はこれで終わりだ。下がって、すぐさま帰国の途に就かれたい。一時間以内にこのアガルタの都から退去することを併せて命ずる。以上だ」

「待て」

口を開いたのは、ミンズ王国の国王だ。彼は笑みを浮かべながら胸を張っている。一体、何なんだこの男は？

「以上だ。下がられよ」

「余は、そのアガルタ王……いや、リンデーズに話がある」

「国王様」

宰相が間に入ろうとするが、国王は、まるで宰相をはねのけるように右手を大きく振った。

「リンデーズ、余は、そなたを、許して遣わす。許して遣わすぞ」

国王は満面の笑みを浮かべている。俺は一体何のことだかわからず、キョトンとする。マトカルに視線を向けるが、彼女もこの王が一体何を言っているのかがわからないのだろう、首を傾げている。

「何をしている！　余は、そなたを許すと言っておるのだ！」

「一体何を言っているのかわからないが。それよりも、早くお引き取り下さい」

「無礼者！」

王はこれまで以上に尊大な態度を取り始めた。そんな彼を宰相と勅使が必死で宥めている。だが王は全く意に介さない。

「余は、そなたを許すと言っておるのだ。そなたの父、ヴォーズは国家に反逆した罪で処刑されておる。そなたはその息子である。本来ならば父と共に処刑される身であるが、余の特別な計らいをもって許すと言っておるのだ！」

よくわからない。何か変なものでも食べたのだろうか。昨日の晩は何を食べた？

俺が全く反応しないことにいら立ったのか、王はさらに言葉を続け

る。

「二十数年前、余は、ヴォーズ一家を処刑せよと命じた。しかしながら、この者が余の命令に反し、そなたとそなたの母メルルを国外に逃がしたと言う。今、そなたがここにこうして生きているということは、余の命令に反していることになる。本来ならばそなたは死なねばならぬ。しかし、だ。そなたのこれまでの功績に免じて死一等を減じ、罪には問わぬと言っておるのだ。それがわからんのか！」

「あいにく俺には、リンデーズの記憶はない。俺は、バーサーム・ダーケ・リノス。俺の両親は、今は亡きジュカ王国侯爵、バーサームご夫婦である」

俺の言葉が予想外だったのか、王は目を丸くして驚いている。そんな中、宰相が口を挟む。

「お控えください国王様。これ以上事を荒立ててはなりませぬ。我らは早くここを出て、一刻も早く帰国せねばなりませぬ」

「その必要はない！」

「国王様！？」

「本日よりここを余の住まいとする。出て行く必要などない！」

「ちょっ……国王様、何を言っておいでなのですか！」

「わからんのか！」

王は宰相を一喝すると、大股で俺のいる方向に向かって歩き出した。

すぐさま傍に控えていた兵士たちが手に持つ槍で王を押しとどめる。だが彼はなおも前に進もうとする。

「無礼者！　貴様ら、この私を誰だと思っておるのだ！　無礼者め！　どけ！　どくのだ！」

「つまみ出せ」

マトカルが一切の感情を込めない言葉で命令を下す。その声と共に俺も立ち上がり、部屋を出て行こうとする。

「待てリンデーズ！　待て！　そなた、世界中を敵に回すつもりか！」

世界中を敵に回す？　どうして？　思わず王に視線を向ける。彼は兵士たちに押さえつけられながら、必死で声を振り絞る。

「余にこのような無礼な振る舞いを続けると、必ず世界は敵に回るぞ！　アガルタは世界中を敵に回すことになるのだぞ！　わからんのかリンデーズ！　よく考えろ！　よく考えるのだリンデーズ！」

何なんだコイツ、と心の中で思いながらマトカルを見る。彼女も首をひねっている。

「貴様は、ラウスト家は、余の家来である！　余がそなたを許したことにより、ラウスト家は再び余の家来に戻ることを許されたのだ！　従ってリンデーズ、そなたは、ただ今この時をもって、余の家来に戻ったのだ！　今、余にこのような振る舞いをしている者たちは、そなたの家来であろう！　この者どもは、そなたは主君である余に無礼を働いていることになるのだぞ！　それがわからんのか！

早くこの者たちを下がらせるのだ、この無礼者め！」

……この男は一体、何を言っているんだ??

第七百九十四話　覚悟はあるか

「国王様、お静まり下さい！　何卒、何卒、お静まり下さい！」

宰相が飛び出してきて、必死にミンズ王に懇願している。

この目の前で喚き散らしている男は、人の子供を剣で傷つけようとしたのだ。王様だから許されるよね、などという問題ではない。下手をすればイデアは死んでいたかもしれないのだ。そんなことをやらかした男が、罪に問われずに国に帰っていいという破格ともいえる温情判決を貰ったのだ。感謝されこそすれ、罵倒される謂れはない。

だが、相変わらずミンズ王は喚き散らしている。お前の父親は俺の家来。その息子は当然俺の家来だ。昔、お前ら一家を罪に問うたが、いまここで許してやることでお前は俺の家来に戻ることができた。だから今の俺はお前の主君だ。という理屈を繰り返している。

アホ、という言葉以外形容する言葉がない。

しかし、彼は本気だ。自分の主君を裏切る国を他国が許すわけはない。家来は主君に尽くすべし、という世界の常識を覆す者は、必ず滅ぼされるのだと喚き散らしている。アガルタの宗主国として、俺たちを意のままに操ろうとヤル気満々だ。

気持ちはわからないではない。詳しくは知らないが、ミンズ王国は国土も広くなく、どちらかと言えば小国の一つだ。きっと、財政的にも潤沢ではないのだろう。そんな国が、アガルタというそれなり

に名の知れた国の上位に立ち、自由に操ることができると考えれば、それは頭の中がお花畑になるだろう。

だが、よしんば俺がそれに合意したところで、この王の望む形にはならない。そんなことを考えていると、突然マトカルが口を開いた。

「つまりは、貴殿はアガルタ王の父の主君であり、一旦その家族を罪には問うたが、それを許すことで再び自らの家来となる。そうなれば、貴殿は、ミンズ王国はアガルタという国の宗主国となる、ということか」

「……その通りだ。従ってリンデーズは余の家来となる。その玉座に座るのは、この余であって、リンデーズではない。さあ、そこから下りろ！　そして、余に膝をついて首を垂れるのだ！」

「それは、あり得ないことである」

「なっ!?　何故だ！　ええい！　貴様と話しているのではない！　余は、リンデーズに申しておるのだ！　リンデーズ！　リンデーズ！」

「先ほども我が王が申した通り、リノス様はすでに旧ジュカ王国侯爵、バーサーム家に養子に迎えられている。貴殿のお話しが事実であったとしても、すでに貴殿と我が王との主従関係は切れている」

「なっ、バカな！」

「それに、貴殿の言われるリンデーズと呼ばれる者が、我が王であると言う証拠はどこにもない」

「証拠ぉ？　証拠ならばある。それ、その顔だ。余が処刑したヴォーズにそっくりである！　これ以上の証拠があるか！」

「それは証拠とは言わない。証拠とは、百人が百人、納得するだけの眼に見えるもののことを言うのだ。それを今ここで出すことはできるか？　貴殿の話は、それこそ子供でも言えてしまうことである。そのような言葉を信じる者など、いない。それに、現在のアガルタの宗主国はヒーデータ帝国である。我が王はヒーデータ帝国皇帝の命令によってアガルタを治めている。貴殿の理屈に従うのであれば、リノス様が貴殿の家来に復するのであれば、ヒーデータ帝国は別の王を立てることだろう。それが受け入れられぬというのであれば、ヒーデータは貴国に侵攻することになる。そうなれば、アガルタと同盟関係を結んでいるニザ公国も、ラマロン皇国もヒーデータに味方する。さらには、クリミアーナ教国もヒーデータ側に付くだろう。これらの国々は、背後にヒーデータという大国が控えているからこそ、アガルタと友誼を結んでいるのだ。もし、貴殿の言う通りの結果となれば、真っ先にクリミアーナ教国がミンズ王国に侵攻することだろう。貴国に衰えたとはいえ、クリミアーナの大軍と対峙する覚悟はあるのだろうな？」

「な……」

国王リイジは眼を見開いたまま固まった。

◆　◆　◆

リイジは戸惑っていた。自分が思い描いた光景と全く異なる状況が生まれつつあった。彼はてっきり、アガルタ王＝リンデーズが渋々ながらも自分に従うと思っていた。本音を言うと、すぐにでもアガルタを併呑したかったが、さすがにそれをすると色々問題が発生す

ることは予想できていた。とりあえずは今の体制のままで、ミンズ王国は宗主国としてアガルタを操ろうと考えていたのだった。

だが、目の前のアガルタ王＝リンデーズは、キョトンとした表情を浮かべたまま、自分の言葉を理解しなかった。それどころか、側に控えていたマトカルが、ミンズ王国とアガルタは全く関係がないと言い切ってしまった。この二人には、主従という関係など一切知らぬという態度に見えた。

これまであたり前だと思っていた関係が、世界が、完全に否定されているような気がした。昨日まで頭の中に描いた光景が、ガラガラと音を立てて崩れていくような感覚を覚える。

美々しい玉座に座る自分。その前には、リンデーズが恭しく控えている。その後ろには世界の王たちが片膝をついて控えている。自分が世界の頂点に立つ光景……それは幻に終わったのだ。

このまま突っ張れば、自らをはじめとしたミンズ王国が亡ぶ。彼の頭の中には、クリミアーナをはじめとした世界各国の軍勢が押し寄せる光景が描き出されていた。黒い鎧を装備した兵士たちに、なす術もなく蹂躙されていくミンズ王国……。マトカルの言葉は、それが近い将来起こるであろうと思わせる真実味があった。国王リイジは、がっくりと両膝から崩れ落ちた。

宰相ムーラは、小さな声で、誠に申し訳ございませんと何度も何度く繰り返しながら、ピョコピョコと頭を下げていた。

「一つ、聞きたいことがある」

不意にアガルタ王が口を開いた。彼はスタスタと国王たちの前のや

って来ると、片膝をついて彼らに話しかけてきた。

「俺にはリンデーズの記憶はありませんが、その父親であるヴォーズさん、と言いましたか。彼は一体なぜ処刑されてしまったのです？」

リノスの問いに、国王リイジは半ば憎しみを込めた目で睨みつけたまま押し黙った。そのとき、宰相ムーラが口を開いた。

「あなたのお父上……。いや、失礼しました。ヴォーズ……ラウスト公爵は、ミンズ王国国軍の総司令官でありました。今、こちらにおいでになります、国王様と従兄弟の関係にあるお方でした」

「そうですか……。なぜ、処刑されることに？」

「それは……国軍の改革を独断でなさろうとしたからです」

「ほう……」

「今から思えば、公爵の話は筋が通ったものでした。ですが、その当時は、国軍の指揮権を掌握して、国王様に反旗を翻す準備をしているように見えたのです」

「具体的に何をしようとしたのです？」

「もともと我が国の軍勢は貴族が担っておりました。王の命を受けた貴族たちが、自らの領地で徴兵して集まるというものでした。ですが公爵はそれを廃止して、軍隊を独立した組織として、広く兵士を募り、そこで兵を訓練するという体制に変えようとなされたのです」

「いわゆる、兵農分離というやつですね」

「へいのうぶんり？」

「あいや、続けてください」

「公爵は自らその国軍の長になろうとされていました。今から考えれば、確かに公爵の考えは効率的ではありますし、準備などを考えますと、それを考えたものが主導していくというのも理に適っていると思います。ですが、その当時の我が国の貴族たちは……」

「時代を先取りしすぎたのか……」

リノスはさも、残念そうにゆっくりと首を振った。

第七百九十四話　覚悟はあるか（後書き）

コミカライズ最新話、公開されました。
ラース初登場です。チェック下さい！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６

第七百九十五話　ラウスト・ヴォーズ公爵

「思えば、あのときの私は若かった……。いや、そんなことは理由にはなりませんね。公爵様の話も聞かず、王の命令に従って彼の命を奪ってしまった……。いや、悔いても悔いきれないことです」

宰相は懐かしそうな表情を浮かべながら、遠くを見つめた。

「アガルタ王様、あなた様が我が国の公爵、ラウスト・ヴォーズ様のご子息であるという証拠はございません。しかしながら、あなた様は亡き公爵様に生き写し、そして、あなた様のご子息であられるイデア様も、幼き頃の公爵様のご子息、リンデーズ様に生き写しでございます。私は、目に見える証拠はありませんが、あなた様がリンデーズ様と信じて疑いません。いや、これは私からのお願いでございます。これから私がお話しすることは、リンデーズ様にお話しすることでございます。お聞き苦しいこともあろうかとは存じますが、この老いぼれのお話しをお聞きいただきとうございます」

宰相ムーラはそう言うと、居住まいを正した。

「あなた様のお父上、ラウスト・ヴォーズ様は、それはそれは立派なお方でございました。誰よりも学び、そして、誰よりも強かった。強者にありがちな、己の力を過信することはなく、常に謙虚で、誰に対しても優しさのあるお方でございました」

宰相の話を聞いた王は、フンと鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

「私事で恐縮でございますが、私は、貴族の出身ではございません。

平民上がりの者でございます。そんな私を、先王様がお目にかけてくださり、国政を預かる職につけていただきました。そんな私でございますので、いろいろと大変なことも多うございましたが、そんな私の話を聞いてくれたのが、ラウスト公爵様でございました。今、私がこうして宰相という身に添わぬ職を全うできているのも、公爵様のお導きあってこのとでございます。僭越ながら私は公爵様を、心の友と思っておりました」

「……なるほど。それだけ人望の厚い人であれば、それをやっかむ者も出てくるでしょうね」

「その通りでございます。ただ、公爵様は王族であらせられますので、表立っての批判などはございませんでしたが、ただ、国軍を組織して、自らがその総司令官の任に当たろうとなされた……そのときばかりは、多くの者が声を上げましてございます」

「なるほど。で、そちらにおいでの王様に粛清された、というわけですね」

俺の言葉に、ミンズ王は鋭い視線を投げかけてきたが、俺はそれを無視する。

「なるほど。よくわかりました。ところで、どうしてそのリンデーズが奴隷に売られてしまったのでしょうか。それと、その彼の母親はどうなりました？」

「……これはあくまで私の推測ですが、あなた様の母上に当たられますメルル様、そのご実家があなた様の存在を疎ましく思っていたからであると考えます」

「ほう」

「私は取り急ぎ、メルル様とリンデーズ様を船に乗せてワラビ大陸にあるレジェンという街に送りました。レジェンには我が国が懇意に取引をしているカーサという商会がありました。そこにあなた様をお匿いするようにお願いをしていたのです」

「カーサ……」

カーサ商会の名前は知っていた。かなり大きな商会で、このアガルタにも出入りしているはずだ。そして、ワラビ大陸というのは、このアガルタのある大陸から南にある大陸だ。ミンズ王国のあるカンワ大陸からはかなり離れている。船でどのくらいかかるだろうか……。いずれにせよ、かなり長い船旅になったはずだ。

「ただ、メルル様のご実家は、反公爵派でございました。そして、カーサ商会とも深いつながりのある家でございました。メルル様の父君であるトロップ公爵はその件について最後まで何も言われませんでしたが、おそらく、そのカーサ商会に命じてあなた様を奴隷として売ったのではないかと推察致します。私が受けた報告では、お二人は船旅の途中で流行り病で亡くなられたというものでした」

「なるほど。ワラビ大陸からラマロンまで船で一日もあれば到着する。そこから皇国を通ってジュカに入る……辻褄が合うな」

俺には一抹の疑問があった。俺が奴隷に売られたのは六歳のときだ。そんな子供が奴隷とはいえ、長い旅路に耐えられるものではないだろう。その点が気がかりだったのだが、そういう話であれば、六歳の子供でも何とか旅ができるだろう。

正直、あのときはパニくっていたので、あまり自分の周囲を確認しなかった。覚えているのは、メシが不味かったということと、馬車に乗っていた奴隷たち……。全員女性だったと記憶している。その中で喋ったのは一人だけだが、その女の子も、俺と喋るのがさも面倒臭いと言わんばかりに、すぐに横になってしまっていた。で、翌日はジュカの王都に着いていた。

色々と記憶を辿ってみるが、思い出すのはあの奴隷商人の男……確か、ガイムとかいったかな。あの男の怒鳴り声が煩すぎて、それしか記憶に残っていない。ただ、バーサーム家に引き取られたとき、俺の体を見たワラサさんが、あのファルコの下で修業するのにその体であればもたない。だから、たくさん食えと言って、色々な料理を食わせてくれた。美味かったので、出されるものを片っ端から食べたが、それだけ痩せていたのだろう。そう言えば俺は割合好きなものを食べているが太らないのは、幼い頃、あまり食べていないのが原因なのか、などと考えてしまう。

「アガルタ王様」

宰相の声で我に帰る。彼は目にうっすら涙を浮かべながら、振り絞るような声で俺に話しかけた。

「ラウスト・ヴォーズ公爵様は、本当に、本当に、素晴らしいお方でした」

そう言うと宰相は鼻をすすり、両手を目に当てて泣き出した。その光景を見て俺は、何となく嬉しくなった。一人の男が手放しで称賛する男……一度会ってみたいと思った。

「これは……できぬことではありましょうが……機会があれば、ア

ガルタ王におかせられましては是非、我が国にお越しいただきとうございます。もしかしたら、何かを思い出されるかもしれませぬ」

宰相はそう言って寂しそうな笑みを浮かべた。俺はそれに対して言葉が見つからずただ、苦笑いを浮かべるしかなかった。

宰相ムーラとミンズ王リージは、マトカルに促される形でその場を後にした。ミンズ王は最後の最後まで不満そうな表情を浮かべていた。別に礼を言うでなく、謝るでなく、ただ、不満そうな表情を浮かべていた。その様子を見て俺は、哀れな男だと思った。

「ミンズ王国に一度、行って見てもいいかもしれないな」

二人を見送った後、誰に言うともなく呟いた。マトカルは小さく頷いた。

「そうだな。あの宰相が言っていた通り、何かを思い出すかもしれない。イリモの翼を使えば、数日あれば行って帰ってくることができるだろう」

「そうだな」

そう言って俺は、目を閉じた。

◆　◆　◆

ミンズ王リイジと宰相ムーラ、そして、彼らに従う兵士たちは、慌ただしく出発の準備を整えて、まるで逃げるようにアガルタの都を後にした。彼らは結局、当初予定していたことを一つも実行できずに帰国の途に就いた。国王リイジはさぞ、不満げな表情を浮かべ、

周囲の宰相らに当たり散らしているかと思いきや、彼は上機嫌で馬車に揺られていた。

「宰相、そなたはよくやった」

突然話しかけられて宰相ムーラは怪訝な表情を浮かべる。

「そなたが、アガルタ王に我が国に来るよう申したのは、褒めてとらす」

「……あくまで可能であれば、でございます。実現は不可能に近いでしょう」

「いや来る。あの王は間違いなく我が国に来る。考えてもみよ。自身の父親のことを知りたいと思うのは子として当然のことだ。あの王は間違いなく来るぞ、我が国に」

「はぁ……」

また、つまらぬことを考えているのか。宰相は心の中で呟いた。だが、今はこの王と冷静に話をする自信がなかった。彼はゆっくりと車窓に視線を向けた。そこには見事な青空が広がっていた……。

第七百九十六話　心にもないこと

ミンズ王たちがアガルタを離れて一週間が経った。

心配されたイデアの心の傷は癒え、彼は再びゲンさんの工房に遊びに行くようになった。彼が訪れた日は大変だったらしい。ゲンさんとおかみさんは泣き、弟子たちは大喜びして、そのままドンチャン騒ぎの宴会になったのだそうだ。

彼がゲンさんの工房に行くことをリコは咎めなかった。いつもと変わらぬ様子でイデアを送り出してくれた。きっと心の中では色々と思うところはあっただろうが、それを一切表に出さずに平静を保っていた彼女を俺は、強い女性だと思い、改めて尊敬の念を抱いた。

そして、俺はというと、ミンズ王国に向かうための準備を進めていた。

色々と調査をしているが、どうやらイリモの翼を使えば、四日あれば往復できるようだ。四日、といってもそれは、イリモが全力で飛行しての計算だ。それを考えると彼女はかなり体力を消耗することになる。それを考えると、一週間は時間を取った方がよいだろうと判断した。

ということで俺は、一週間の休暇を取るべく仕事の調整を進めている。さすがに平時にそれだけの期間仕事をしないというのは、色々と問題が出てくる。特に、フェリスやルアラなどからは、表立ってはないが、確実に心の中で色々な負の感情が燻ぶっているはずなのだ。

俺の仕事ならばリコに代行させればいいと言う者もいるだろうが、それはリコに完全に拒否された。それをするのは最後の手段、例えば俺が意識不明の重体に陥るなどの場合であって、今、それをしてしまうと、今後も自分が国政を代行するのだと周囲の者に印象付けてしまうことになる。そうなれば、権力闘争の原因にもなりかねないと言って説得されてしまった。どうやら過去、ヒーデータ帝国において、そうした事件があったようだ。リコはそれを踏まえて、悪しき先例を作るべきではないと考えているようだった。

と、いうことで、今の俺は猛烈に仕事をしている。フェリス、ルアラ、そしてシャリオらといつになく会話して、仕事を進めていっている。今さら言うまでもないが、この三人は本当に優秀だ。

特にシャリオは、頭の回転がズバ抜けている。何事も一瞬で答えを導き出す。同じドラゴンとして、フェリスもかなり優秀なのだが、その彼女を完全に凌駕している。フェリス自身も、このままでは寝首を掻かれてしまうと感じたのか、家でリコと二人で何やら話をすることが多くなった。ちょっと心配になったが、リコはようやく勉強する気になったと言って喜んでいたので、これはこれでよかったのだと思うことにする。

そんな中、アガルタの都に一人の来客があった。俺は半ばうんざりした気持ちで、その客を迎えた。

「お久しぶりでございます」

「……何しに来た」

目の前に現れたのはヴィエイユだった。ポーセハイの転移能力を使

ってやって来ていた。この娘はアフロディーテにいるポーセハイを完全に支配下に置いているんじゃないだろうかと思うほどに、彼らの能力を活用している。少し前にそのことが気になったので、チワンに気を付けるようにと言ってみたが、彼は笑って取り合わなかった。ローニにも言ってみたのだが、彼女も同じような反応で、全く心配ありませんと言い切ってしまった。

どうやらポーセハイには、俺たちにはわからない固い絆があるらしい。

そのヴィエイユが来たと聞いて俺は、リコにも同席を頼んだ。何だか、二人っきりでこの娘と会ってはいけない気がしたのだ。

謁見の間に入ると、ヴィエイユが待っていた。いわゆる教皇服というのだろうか。純白の服を纏っている。俺はこの小娘の性格を知っているので大丈夫だが、初めて見る男子は、心を奪われてしまう者が多いんじゃないかと思わせる程の美しさだ。というより、この娘は、自分を美しく見せる術を完全に心得ている。いつも研究しているのだろう。きっと、転生前の世界に行けば、アイドルとして、タレントとして、かなり売れるだろうな、男子にはモテるだろうが、女子にはメチャメチャ嫌われるだろう、などと下らぬことを考える。

俺の質問に対してヴィエイユはさも呆れた、と言った表情を浮かべた。

「ご挨拶でございますね。それはもちろん、アガルタ王様にお会いたかったからですわ」

……オイオイ、隣にはリコがいるんだぞ。それは、リコに喧嘩を売

っていることにならないか？

ふと隣に視線を向けるが、リコはそんなことは全く気にしていないとばかりに、笑みを浮かべている。むしろ、久しぶりに会えてうれしいと言わんばかりの表情だ。

俺は咳払いをしながら、ゆっくりと玉座に座る。

「で、用向きは何だ」

「アガルタ王様は、ミンズ王国に向かおうとされていますね？」

「うん？」

さすがに耳が早いなと心の中で呟く。ミンズ王の一件は一週間ほど前のことだ。それがすでにヴィエイユの耳に入っているということは、このアガルタの都にもクリミアーナの信徒が入り込んでいるのだろう。というより、この娘は、いついかなるときでも、俺の一挙手一投足に注目しているのだろう。

「……少し、痩せたか？」

話題を変えようと思わずそんな言葉を口走ってしまった。と同時に、心の中でしまったと呟く。これはまるで、図星を突かれたと言っているも一緒の行為だ。

「ええ。このところ少し痩せました。毎日三食しっかり食べているのですけれど、全く太る気配がありません。それどころか、少し痩せてしまうのです。もう少し食べる量を多くした方がよいのでしょうか」

「そうだな。どちらかというと、もう少しふっくらした方が、かわいいと思うぞ」

「オホホ。ありがとうございます」

心にもないことを、と思っている。それは俺も同じだ。間違いなく食事にメチャメチャ気を付けているだろう。太らないように、自分の美しさが衰えないように細心の注意を払っているはずだ。でなければ、こんな仕上がりにはならないだろう。

ふと隣のリコを見る。そう言えばリコは食事を制限しているわけでも、何か肌の手入れをしているわけでもないが、その肌は輝き、相変わらず体にはシミ一つない。体型も結婚してから全くと言っていいほど変わっていない。むしろ、美しさが増している印象がある。リコはリコで、俺の知らないところで色々と努力しているのだろうか。そんなことを考えていると、視線に気づいたリコが怪訝そうな顔で口を開いた。

「何か？」

「いや、キレイだなと思いまして。俺は、リコの方がいいな」

「まあ」

リコとヴィエイユが同じタイミングで口を開いた。リコは嬉しそうだが、ヴィエイユは、お前、私が目の前にいるのに、よくもそんなことを言いやがったなと言わんばかりの雰囲気だ。でも、実際に自然に美しいリコの方がいいのだから仕方がない。嘘だと思うなら、皆に聞いてみるといい。

「本日はアガルタ王様とお取引がしたいと思い、伺いました」

ヴィエイユの凛とした声が部屋に響き渡る。一瞬で空気を変えられてしまった。俺は思わず居住まいを正す。

「結論から先に申し上げます。私どもは、現在アガルタにお支払いしております賠償金を減額していただきたく、お願いに上がりました」

ほう、やはりかなり苦しいのだな。と心の中で呟く。クリミアーナはシャリオの計算によって、国を維持できるギリギリの金額を支払わされている。そうしないとあの花で国が埋め尽くされるからだ。その花を駆除してくれるネズミを毎月購入しているのだが、ヴィエイユはそれを賠償金と言ってのけた。

「私どもは、アガルタ王様がなぜ、奴隷として売られたのかその全てを知っております。その情報お伝えする代わりに、賠償金の額を減額いただきたいのです」

ヴィエイユの顔は自信に満ちていた。何だか、キライな顔だ……。

第七百九十七話　思いがけぬ提案

「いや、間に合っていますので、結構です」

間髪入れずに返答する。ヴィエイユは一切表情を崩さなかった。さすがと言えばさすがだ。俺の答えが想定の範囲内であったのか、はたまた、想定外のことであったのか、その表情からは読み取ることができない。

「左様でございますか……。残念でございますわ」

両目を閉じて首を振るヴィエイユ。いや、だから、可愛くないんだって。他の男なら騙せるかもしれないが、俺はお前の裏の顔を知っているんだ。どう振舞っても、それを覆すことはできないんだ。

「あなた様のお母上様は、生きておいででございますのに」

「それで？」

「……」

さすがにこれには驚いた表情を浮かべる。お前、マジで言ってんのか、という表情だ。ああ、俺の知っているヴィエイユの顔だ。

ヴィエイユにとっては伝家の宝刀であったろうが、俺には全然関係のない話だ。会いたいか会いたくないかと言えば、会って話はしてみたいと思う。ただ、それをしたところで、それだけの話だ。まあ、母親としては、自分の生んだ息子、リンデーズに会いたいとは思う

だろうが、きっと、会ったところで感動の再会とはならないだろう。泣き崩れる母親に対し、俺は、ああそうですか……と言ってそのまま、という光景が目に浮かんでくる。

「アガルタ王様は、母上様に会いたいとは思わないのでしょうか？」

ヴィエイユの目つきが鋭くなっている。何と答えれば正解なのだろうか。ここでイヤ、俺には関係のない人だもん、などと答えれば、この娘は世界中にアガルタ王は情のない人だと言いふらすだろう。そこまでせずとも、それに近しいことをして、アガルタの評判を落としにかかるだろう。逆に、いや、本当は会いたいのですと言えば、待ってましたとばかりに、この娘は交渉に入って来るだろう。それはそれでややこしい……。

「宰相は死んだと言っていたが」

「それは表向きの話でございますわ」

「そうか。会いたいか会いたくないかで言えば、会いたい」

「それでは……」

「いやそれは、お前の力を借りずに、俺一人の力で探したいのだ」

「……」

「お前から母の話を聞きたいのはやまやまなんだー。しかし、そうすると、母を政治の道具として扱うことになるぢゃないかー。俺は、母を、政治という汚い世界に巻き込みたくはないのだー」

……あれ？　リコ、どうしたんだ？　何でそんな目で俺を見るんだ？

「承知しました」

ヴィエイユはさも、納得しましたと言わんばかりの表情で頷いている。きっと腹の中ではそんなことは一切思っていない。

「私の負けでございますわ」

そう言って彼女は小さなため息をついた。そして、真っすぐな瞳で俺を見据えた。

「わかりました。それでは、私の知っている限りのことをお伝えいたします」

この小娘にしては珍しく引き下がった。いや、これはきっとパフォーマンスだ。この後でこの娘は、さらなる交渉にかかろうとしているのだ。

そう考えた俺は居住まいを正す。

ヴィエイユの話は、先日ミンズ王国の宰相から聞いた話とあまり変わりはなかった。ただ、彼女はカーサ商会に奴隷の売買履歴を調べさせたらしい。そこで、六歳の子供の売買があったことを突き止めていただけでなく、その売主が母親メルルの実父であるトロップ公爵であることも突き止めていた。

「これがこの証拠でございます」

彼女はそう言って懐から一枚の紙を取り出す。ガバッと胸をはだけ

て、乳が見えるか見えないかのギリギリのところまで体を見せている。並のおじさんなら、サービスショットで大喜びになるのだろうが、俺には全く効かない。彼女の腹の中がわかりすぎていて、そんな気持ちにはなれないのだ。毎回毎回こうした色仕掛けを仕掛けて来るのだが、全く成果は上がっていない。ヴィエイユ自身もそれはわかっているはずだが、なぜ、それでも同じ手段を繰り返すのか、俺にはさっぱりわからない。まあ、根っからの変態なのだと言ってしまえばそれまでなのだが。

ヴィエイユから手渡された紙はボロボロになっていて、何を書いているか判別しにくくなっているが、そこには奴隷を一人売ったことと、それに同意するサインが記されていた。

俺が奴隷として売られてしまった母親は慟哭したらしい。それはそうだろう。俺にとってみれば、イデアを勝手に奴隷に売られたようなものだ。怒り狂うだろう、何とかして取り戻そうとするだろう。だが、女性一人の力ではどうしようもなかったことは想像に難くない。

それで、母親は今、父の下で暮らしているらしいが、俺が売られてから一言も口を利かず、部屋に閉じこもりっきりなのだそうだ。父としては早く俺のことを忘れさせて、どこかに再婚させたいと思っていたらしいが、どうもそれどころではなかったようだ。

「で、その母親は今、どこにいる？」

「ミンズ王国のトルアという田舎町で逼塞しておられます」

「なるほど」

ミンズ王国に行ったら、訪ねてみてもいいなと思った。そのとき、ヴィエイユはが口を開いた。

「そこで、アガルタ王様に提案がございます」

「うん？　提案？」

「左様でございます。アガルタ王様、いかがでございましょう。我々クリミアーナ教国と共に、ミンズ王国に侵攻しませんか？」

「な……何を言っているんだ？」

「アガルタ王様にとって、ミンズ王国にはお母上様がおいでになり、その救出という名目であれば侵攻する十分な理由になります」

「それで？　クリミアーナが侵攻する理由は？」

「多くの我が教徒が殺されましてございます。その報復でございます」

「何だって？」

「ミンズ王国では、我が教徒を皆殺しに致しました。何の科もない者たちでございます。その者たちを皆殺しにされましてございます。教国としましては、このまま捨て置くわけにはまいりません」

「それは気の毒だが……。だが、その教徒たちはミンズ王国で布教しなかったか？　ミンズ王国が止めるのも聞かず、強引な布教をしなかったか？」

「致してございません」

「ミンズ王国にこだわる理由は何だ」

「別に、こだわってはおりません」

「クリミアーナ教国の信徒が殺されるのは、ミンズ王国に限ったことではないだろう」

「……」

「それを敢えてミンズ王国に侵攻すると言うのは、俺には解せんな」

「……さすがはアガルタ王様。騙せませんね」

ヴィエイユの顔つきが変わった。本性が現れてきている。

「承知いたしました。では、アガルタに兵を出してくれとは申しません。その代り、我らがミンズ王国に侵攻することを黙認していただきたいのです。正直申しまして、我がクリミアーナ教国の財政状況は苦しゅうございます。現在の我らでは、教徒たちを救うこと自体も難しくなりつつあります。我らとしましては、さらなる力を得る必要があります」

「それで、ミンズ王国に侵攻すると」

「左様です。あの国は、我が教徒を虐殺しただけでなく、もはや国家としての体をなしておりません。国王であるリイジ様は政治に全く関心がなく、もっぱらあの国の政治は、宰相ムーラ様が行っておいでです。あのお方がいなくなれば、あの国は乱れます。その前に

我らが侵攻し、教徒と国の民を救いたく存じます」

「で、ついでに俺の母親も救う、というわけか」

「はい。何よりも先んじてお救い致したく存じます」

「ヘタクソ」

「……」

「相変わらず下手だなお前は。交渉の手順としては見事なものだ。俺の母親が狙いと思わせておいて、実は……という手法。だが、俺には通用しない。お前の狙いはミンズ王国でも、俺の母親でもないだろう。ミンズ王国が生産する鉱物だろう」

ヴィエイユはなぜかニコリと微笑んだ……。

第七百九十八話　白々しい話

ちょっとつかみどころのない笑みだ。図星を突かれて戸惑っているようにも見えるし、俺の反応が想定内だと言っているようにも見える。まあ、一言で言ってしまえばイヤな笑みだ。

ミンズ王がアガルタを去ってから、俺はミンズ王国のことを調べさせていた。

王国のあるカンワ大陸は、色々な鉱物が獲れる土地であるらしい。特に金と銀が獲れる。まだ、採掘や精錬技術が低いので生産高自体は高くはないが、アガルタの最新式の技術を導入すれば、その生産高は飛躍的に伸びるだろうとの報告がなされていた。

正直言って、ヴィエイユの眼の付けどころというか、嗅覚の鋭さに驚くと同時に、クリミアーナ教国はそこまで追い詰められているのかと、少し哀れに思った。まるで、カラカラに乾いた砂漠の中でオアシスを求めてさ迷っているようなものだ。真綿でジワジワと首を絞められているような状況なのだろうなと心の中で呟く。

「やはり、アガルタ王様には勝てませんね……」

観念したような、しかし、俺を見下しているような表情だ。お前ごときがよくぞ私の心底を読んだ、という感情を表しているかのようにも見える。いや、やはり観念しているのか……？

ヴィエイユは大きなため息をつくと、ヤレヤレと言わんばかりに、目を閉じたまま首を振った。

「ご明察でございます」

先ほどまでの笑みが嘘のように真剣な眼差しに変わる。あまりのギャップに少し、恐怖感を覚えてしまう。

「正直申しまして、私共の財政状況は厳しいと言わざるを得ません。何と申しましても、アガルタにお支払いしている賠償金が一番の問題でございます。できることなら、そうした出費は抑えたく存じますが、そうしますと、私共の国はあの忌まわしき花に埋め尽くされることになります。さらには、その花が他国に拡がれば、世界中の国々が迷惑を被ることになります。そのため、私共はあの花を駆除できるネズミを、未来永劫購入し続けなくてはなりません」

……自業自得じゃないか、という言葉を飲み込む。まるでクリミアーナが世界の犠牲になってアガルタに賠償金を支払っているような言い方だが、元々あんな物騒な花を生み出したのはクリミアーナだ。それをもって世界を席巻しようとして失敗して、今の状況に陥っているのだ。そこに憐憫の情を感じることなどない。

「ミンズ王国のあるカンワ大陸は、豊富な鉱物が獲れるのでございます。今は技術がないために生産高は低くございますが、我らの技術を導入すれば、その生産高は飛躍的に伸びると確信しております」

「そんなことのために、ミンズ王国に侵攻するのか。まさに自分のことしか考えていないな。もし、お前たちが侵攻したときに、ミンズ王国の民がどれほど迷惑を被るのか、考えてみろ」

「大丈夫でございます」

「何が大丈夫なんだ！？」

「侵攻すると申しましても、何も軍勢を差し向けるのではございません。内部から崩壊させて、我らと心を同じくするように致しますので、ミンズの民が被害を受けることはございません。むしろ、我らと心を合わせた方が、あの国の民は幸せになるかと存じます。それに……」

「それに、何だ」

「カンワ大陸の国々は、互いに婚姻を結んでいるなどして、同盟関係にあります。ミンズ王国を傘下に置けば、自然に他の国々も我らに追従することになります」

「いや待て、逆だろう。ミンズ王国がクリミアーナに侵攻されたとわかれば、全力を挙げてカンワ大陸の国々は、クリミアーナを排除しにかかるだろう。……うん？　まさか、それが狙いか？　ミンズ王国を傘下に置いて、他の国々が侵攻してくるように仕向ける。そうしておいて、それらの国々を打ち破っていけば、カンワ大陸全体を支配下に置くことができる……」

俺の言葉にヴィエイユはさも、驚いたような表情を浮かべた。

「そこまで見抜かれましては、もはや打つ手はありませんね」

「だから、ヘタクソなんだって」

「……」

俺の言葉にヴィエイユは不思議そうな表情を浮かべる。

「表情の作り方は見事だが、お前の言葉にはハラがない。ハラがないから、お前の言葉は真実味がないんだ」

「ハラ……？」

「お前、本気でそんなことを考えていないだろう」

「そんなことはありません」

「ウソつけ。お前が本気で侵攻を考えているのであれば、わざわざ俺のところまで来ないだろう。俺に知られないようにコッソリやるはずだ。とぼけて聞いていればペラペラと……。お前の狙いは何だ。正直に言え」

「私がミンズ王国に侵攻を考えているのは事実でございますわ。そして、アガルタ王様のお母上様をお救い申し上げたいと言うのも事実でございます」

「しらぁ切るのもいい加減にしろい」

「は？」

「誰が見しょとて色よく染めた、この遠山の桜吹雪はすべてお見通しなんでぇ」

「仰る意味がよくわかりませんが……」

「わからんでいい。ちょっとやってみたかっただけなんだ。今の話は忘れてくれ」

「……」

ヴィエイユは怪訝そうな表情を浮かべている。よく見ると視線がリコに向いている。ふと隣のリコを見ると、彼女はゆっくりと頷いている。

「まあ、何だ。お前がミンズ王国に侵攻するかしないかは勝手だが、そうなると俺も、なにもしないまま傍観するということはできないな」

「……」

「そう言えばヴィエイユ。お前、風呂の水を瓶に詰めて売っているそうだな」

「さあ……」

「隠すことはない。別に無理やり売りつけているわけじゃないんだろう？　買う奴の気持ちもわからないではない。ファンにとっちゃ、推しの入った風呂の水なんざ、聖水も同じだ。俺もあの、ロックの兄貴のものなら何でも欲しいと思うからな。金さえあれば、全種類のグッズをコンプリートしたいと思ったものだ」

「ろっくの？　こんぷ？」

「あ、いや、こっちの話だ。まあ何だ。昔の役者で、水入りと言って、天水桶に張られた水の中に飛び込んで、そこからあふれ出た水を瓶に詰めて売ったことがあると聞いている。飛ぶように売れたんだってな。それと一緒だろう。ヴィエイユ、ミンズ王国への侵攻を

諦めるのなら、その風呂の水に関しては見逃してやってもいい」

「クッ……」

「どうする？」

「……先ほどの話は、聞かなかったことにしてくださいませ」

「ミンズ王国へは……」

「何の話でございましょう？」

「……可愛げのない奴だな」

「オホホホ」

ヴィエイユは白々しい笑い声を上げた。俺は腕組みをしながら、何とも言えぬ表情でその様子を眺めた。

「話は変わりますが、アガルタ王様に一つお願いがございます」

「何だ」

「ソレイユ様は色々な香水をお作りになっているとか……。しかもそれを販売なさっていると聞きました。誠でございますか？」

「ああ、そうだ。結構人気があるらしい」

「そうでございましょう。こちらの迎賓館に入りましたら、とても良い香りが鼻をくすぐりました。聞けばそれはソレイユ様がお作り

になった香水だとか……。こちらで使われている香水を是非、求めて帰りたく存じます」

「好きにすればいいが……。だが、どうした突然？　いきなり香水などと……」

「以前から興味があったのでございます。それに先ほど、アガルタ王様より水を売るお許しが出ましたので、今後はその水にこちらで求めた香水を混ぜたく存じます。きっと、信徒たちも癒されることと存じます。もちろん、お代金はお支払いいたしますから、ご安心くださいませ」

「わかった。館長のミンシに伝えておくから、好きなだけ買って帰るといい」

「ありがとうございます」

そう言ってヴィエイユはその場を後にした。

◆　◆　◆

「あいつ一体何しに来たんだ？」

訝りながら俺はリコと共に控えの間に設えられた椅子に座る。

「きっと、クリミアーナの財政状況がよくないのは本当ですわ」

「まあ、そうだろうな。ということは、もしかしてアイツは、あの風呂の水を見逃して欲しいがためにあんなことを……？」

「私もよくわかりませんが、あわよくばミンズ王国に侵攻したいと考えていたかもしれませんわね」

俺は腕組みをしながら小さな声で呟く。

「今回は、一本取られちゃった……か？」

第七百九十九話　いざ、ミンズ王国へ

ミンズ王国に帰国した直後から、宰相ムーラは残務整理に追われていた。信頼する部下たちに国政を任せていたとはいうものの、やはり彼が決断し、決裁しなければならない事案が数多く残されていたのだ。彼はそれらを丁寧に片付けながら、アガルタへの旅費などの清算にも追われた。

結果的にアガルタへの訪問は大赤字だった。ただでさえ苦しい財政状況の中で決行した旅であったにもかかわらず、国王の放漫な金の使い方は、国家財政を破綻寸前に追い込んでいた。

だが、本来ならば命を取られても文句の言えないことをしたにもかかわらず、五体満足で帰って来られたことをよしとして、この生来真面目な宰相は文句ひとつ言わず金策にも乗り出していた。その彼の許には秘かにクリミアーナ教国から資金援助の話が持ち掛けられていて、今、ミンズ王国ではそれを受け入れるか否かの激論が交わされていた。

宰相ムーラは最初からその話には反対だった。何より条件が良すぎる。無利子で国家財政に匹敵する額を貸し付けるというのだ。その担保に何を取られるのか、想像しただけでも恐ろしいと彼は思っていた。

しかし、目の前に積まれた大金に、若い政治家たちは鼻息を荒くした。まだまだ経験の浅い者たちで、それは仕方のないことではあったが、彼らには若さと行動力がある。たちまち同志を募って宰相たちに抵抗しようと試みるようになっていた。ヴィエイユがリノスに

語ったミンズ王国侵攻計画は水面下で、着実に動き出していた。

もっともヴィエイユにとっては、ミンズ王国が崩壊しようとしまいと、それはあまり大きな事柄ではなかった。寧ろ彼女はその可能性は低いと見ていた。だが、カンワ大陸は鉱物資源の宝庫だ。ミンズ王国を足掛かりに、大陸全土を掌握して、その資源を丸ごと己のものとすることができれば、教国の財政状況は大いに改善する。むろんそれがリノスたちにバレれば、ネズミの値段が爆上がりするのは見えていたが、ヴィエイユ自身には、それがすぐにバレるようなことをするつもりはなかったし、かなり長期にわたってその目をごまかし続ける自信があった。

ヴィエイユは、ミンズ王国への策略に期待はしていなかったが、楔だけは打とうと考えていた。宰相ムーラはその影響を肌で感じながら、この国を守ろうと決意していた。リノスの知らないところで、ミンズ王国とクリミアーナ教国の間で、高いレベルの政治戦争が起ろうとしていたのだった。

そんな、国内が日々緊張感が高まりつつある中でも、国王リイジはご機嫌だった。彼はリノスがこの国にやって来ることを信じていた。そして、この国を守ろうと決意していた。リノスの知らないところで、ミンズ王国とクリミアーナ教国の間で、高いレベルの政治戦争が起ろうとしていたのだった。

無責任と言えば無責任な考え方だ。だが、国王リイジにとっては、一度見た夢を手放すことはできなかった。政治にかかわる能力もなく、軍事を司る能力もない、ただ退屈な日々を送るだけであった男が、世界の王になる可能性を一瞬なりとも感じてしまったのだ。彼はその夢にしがみつくことでしか、生きる希望を持てなかった。

彼は近習に命じて、港の警備を強化させた。そして、アガルタの船を見つけたならば、すぐに自分に知らせるようにと命令した。彼の頭の中には、青い顔をして自分の前に畏まるリノスの姿が映し出されていた。あのマトカルが、リノスがいかにリイジに忠節を誓おうとも、ヒーデータ帝国とその同盟国が許さないといったが、そんなことは関係ない。リノスが王として強権を発動すれば済むことだ。ヒーデータらが何かを言ったところで、アガルタの兵を動かして討伐すればよいだけだ。煩い者どもを倒したのちに、自らが世界の王となるのだ……。リイジはそんなことを考え続けていた。もはや彼は妄想の壁越しにしか生きられず、現実で生きていくことは困難な状況に陥ろうとしていた。

◆　◆　◆

そんな中、リノスはイリモの翼を使ってミンズ王国に向かっていた。周辺は暗く、漆黒の闇の中、彼は海面スレスレを飛んでいた。

ミンズ王国への移動は専ら夜に行った。子供たちが寝静まってからイリモと共に移動して、日が昇る前に帝都の屋敷に帰るという行程だった。これは、シディーの勧めによるものだった。

あまり大っぴらにユニコーンペガサスに乗って移動するべきではない。彼女は真顔でそう言い切った。その意見に皆が一様に頷いた。加えて彼女は、海面ギリギリを飛行するように勧めた。特に根拠はないが、そうした方がいいという意見を受け、リノスはそれを受け入れた。

確かに、シディーの言う通り、海面スレスレを飛ぶと、イリモの飛行速度が上がった。どういう理由なのかはわからなかったが、どうやら常に追い風が吹いているようで、お蔭でイリモは翼を酷使する

ことなく、順調に旅をすることができていた。

そのために、旅の行程は予想よりも早く進んでいた。当初は夜に飛ぶので時間がかかると予想して、ミンズ王国到着まで五日と予想していたが、僅か二日で想定の半分以上の距離を稼ぐことができていたため、三日目の深夜にはミンズ王国に到着していた。

彼らが到着したのは、ミンズ王国の南端だった。王都まではかなり距離がある。取り敢えず人目を避ける場所を探して、転移結界を張り、そのまま帝都の屋敷に帰った。

イリモを馬小屋で休ませて、屋敷の中に入る。皆ね静まっているために、屋敷の中は静寂に包まれていた。皆を起こさないように、静かに歩く。離れに向かい、階段を上ると不意にリコに出くわした。

「……おかえりなさませ」

リコは一瞬驚いた表情を浮かべたが、すぐにリノスの許に駆け寄り、どうしたのですかと言って手を握った。彼は心配ないと告げ、思ったより早くミンズ王国に着くことができたと言って笑みを浮かべた。

「そうですの……。お風呂に入って、ゆっくり休んでくださいませ」

リコに促される形でリノスは風呂に向かう。体を洗って湯船に浸かり、全身を温める。そうしておいて、寝室に向かうと、リコが甲斐甲斐しくベッドの準備をしていた。リノスは礼を言って、リコも寝るようにと促したが、彼女はゆっくりと首を振った。

「目が冴えてしまいましたわ」

「すまないな。何だか起こしちゃって……」

「気にしないでくださいませ。どうも家族が揃わないと、なかなか寝られないのですわ」

「何だかすまないな」

「いいえ。若い頃から寝られないことには慣れていますから、このくらいは何でもありませんわ。イデアと一緒に寝ましたから、四時間は寝ています。十分ですわ」

「そうか……。睡眠不足は色々よくないと聞くからな。まあ、明日からはちゃんと夜には帰ってくるつもりだから」

リノスの言葉にリコは笑みを浮かべながら頷く。

「ところで、ミンズ王国は……」

「ああ。暗くて全然わからないが、おそらくミンズ王国の南端に到着したようだ。夜が明けたら、周辺を調べてみるつもりだ」

「そうですの……。リノス、ミンズ王国に行ったらまず、お母様の許に行ってくださいませ」

「どうしてだ？」

「お母様がどれほど喜ばれることか……。母親のご心中、察してあげてくださいませ。場所はわかっているのでしょ？」

「ああ、うん、まあ、そうだな」

ベッドの傍の椅子に二人腰かけながら、リノスは天を仰ぐ。

「母親に会うのは最後でいいと思っていたんだけれどな。会ったところで思い出すとは限らないし、向こうも俺が息子だと信じないかもしれないしな。でもまあ、リコがそう言うのなら、先に言ってみるよ。……リコ？」

見るとリコがコクリコクリと眠りだしていた。リノスはフッと笑みを浮かべながら彼女を抱えてベッドに寝かせた……。

第八百話　的、な

ミンズ王国トルア村。周囲を山に囲まれており、人が往来するのは不便な場所だ。とはいえここは、王国内でも数少ない農園が広がる土地であり、比較的恵まれた場所であると言えた。

難点と言えば、盆地にありがちな、夏は暑く冬は寒いという気候条件が挙げられるが、そこに住む人々は、そうした環境を愉しみながら生きるすべを身に付けていた。

そんなトルア村に、ひときわ目立つ邸宅がある。言うまでもなく、領主であるトロップ公爵の屋敷だ。だが、領主たる公爵がこの館を訪れることはまずないと言ってよかった。王都からこのトルア村までは馬車で二日かかる距離だ。山をいくつも越えねばならず、王都からここまでやって来るのはかなりの重労働と言えた。もう、老齢に達した公爵が、老躯に鞭を打ってこの村までやって来る理由はなかったし、今の公爵の体力からしてみれば、この村に訪問することなど、とんでもないことであると言えた。

その屋敷には、一人の女性が住んでいた。女性と言ってもすでに老境に達しようという年齢で、髪には白いものが目立っていた。その女主人はほとんど人前に姿を見せることはなく、そして、言葉を発することもなかった。村人は、この屋敷の主人が公爵の娘であることも知っていたし、その娘が、ラウスト公爵の妻であることも、彼女の身に何が起こったのかもすべて承知していた。そのために彼らは、この女主人とこの屋敷には極力関わり合いを持たないように努めてきた。だが、その事件からはや、二十有余年の歳月が過ぎようとした今、そうした感情は薄れ、若者の中には、ほとんど姿を見

せず、また、言葉も発しない女主人に対して興味を持つ者まで現れてきていた。

彼らの中には屋敷に忍び込もうとする者もいたが、屋敷の高い壁と頑丈な門に阻まれて、それは失敗に終わっていた。彼らは所詮何のスキルも持たぬ田舎の者が太刀打ちできるものではないと悟り、いつしか、そうしたちょっかいをかけることはなくなっていた。

◆　◆　◆

この屋敷には、主人の他に五人の者が住んでいた。執事であるアルバート、その妻であるエリオット、そして、メイドである、フラン、マミウス、リウムだ。執事のエリオット夫婦とメイドのフランは、あの事件の直後にトロップ公爵から命じられて、その娘であるメルルに仕えていた。彼らはメルルの世話をすると同時に、その行動を監視して公爵に報告する義務も負っていた。だが当のメルルは食事のときと入浴のとき以外は基本的に部屋に閉じこもるばかりで、外出はおろか、ほとんど口さえきこうともしない有様だった。結果的に彼らは、同じような内容を毎回、父であるトロップ公爵に報告し続けることになるのだった。

「あーフラン。ちょっと村で紙とインクを買って来ておくれ」

執事のアルバートがメイドのフランに声をかける。齢七十を超えているが、その姿は矍鑠としており、まだまだ衰える気配は見せていない。頭は禿げあがり、口ひげを蓄えた小柄な老人は、どことなく人懐っこそうな笑みを浮かべている。

「そうしたことは、マミウスかリウムに言ってくださいよ。私は足が痛いんだから」

ソファーに深々と腰を掛け、編み物をしながらフランが呟く。さも足が痛いと言わんばかりに編み物の手を止め、足をさする。その隣では、アルバートの妻であるエリオットも、同じように編み物をしている。

この女も年を取ったな……。フランの様子を見ながらアルバートは心の中で呟いた。でっぷりと肥った体。齢五十を過ぎてなお、これだけの体躯をしていれば、なるほど足も痛めそうなものだと思いながら、彼はマミウスとリウムの姿を探す。

「マミウス、リウム」

二人の名を呼ぶと、リウムが姿を見せた。この彼女もこの屋敷に来て十年が経つ。王都の公爵の屋敷でメイドとして働いていたが、いつしか主人の手が付くようになった。それが奥方様にバレ、危うく命を取られそうになったために、公爵は彼女をこのトルア村に送った。

リウムもこの屋敷に来て十年が経つ。すでに三十も半ばを超えて、ここに来たときのような若さは失いつつある。当初こそ公爵も娘の様子が気になったのか、リウムに未練があったためか、年に二度、三度はこの屋敷を訪れて、リウムと逢瀬を愉しんでいたが、ここ数年は全く足を向けることはなくなっていた。アルバートはこの女性を哀れだと思いながらも、命じられた仕事はそつなくこなすこの女性を信用していた。彼は気さくな笑みを浮かべながら、リウムに口を開く。

「ちょっと村で紙とインクを買って来ておくれ」

「承知しました」

「マミウスはどうした？」

「メルル様の部屋です」

「そうか」

手早く身支度を整えて屋敷の玄関に向かうリウムの後姿を見送りながら、二階に通じる階段に視線を向ける。今頃マミウスはメルル様の着替えを手伝っている頃だろうか。彼女は何とかメルル様に心を開いてもらおうとしているが、未だにその成果は出ない。マミウスはこの家の中では一番若い女性だ。年齢も三十を越したばかりだ。冒険者として旅をしていたが、足に怪我を負ってこの村で療養していたところをアルバートと出会い、ここで働くように勧めたのだ。

彼女は気さくな性格で、すぐにこの屋敷の住人達とも馴染んだ。だが、その彼女をもってしても、メルル様の心を開くことは叶わなかった。すでにこの屋敷に仕えてから四年の歳月が経とうとしていたが、口もきいてもらえないどころか、目すら合わせてもらえないでいる。アルバートはその彼女の心中を察すると、何とも言えない気持ちになるのだった。

そうしていると、二階から足音が聞こえてきて、マミウスが姿を現した。メルル様の服を持っているその顔はどこか浮かない。やはり今日もダメだったかと心の中で呟いていると、先ほど村に使いにやったはずのリウムが戻ってきた。

「アルバートさん……その……お客様がお見えです」

「お客様？　どなたです？」

「それが……よくわからないことを言っているのです」

「よくわからない？　どういうことです？」

「メルル様の……たぶん、身内の方……と」

「たぶん身内の方？　変な言いようですね。お名前は何と言うのですか？」

「その……リンデーズ、的な、と」

「リンデーズ！？」

まさか、とアルバートは思わず玄関先に視線を向けたが、いやいやと思い直す。リンデーズ様は確か、奴隷商に売られたと聞いた。六歳の子供が奴隷商に売られたのだ。生きている可能性は皆無と言っていい。それに、今聞けば、リンデーズ的な、という言い方は何という言い草だ。本当のリンデーズ様であれば、ちゃんと名乗って出るはずだ。

まったく、我々をバカにしている、と心の中で呟きながら、アルバートは玄関に向かう。リウムもリウムだ。そんな男は冷やかしか何かに決まっている。どうしてその場で追い払わないのだ……。

そんな怒りの感情を抑えながら彼は玄関の扉を開けた。そこには冒険者風の格好をして、白馬を従えた男の姿があった。男はアルバートに背を向けながら、左手で手綱を持ち、右手で馬の顔を撫でていた。それを見て彼は直感的にこの者は悪い男ではないと感じたが、

同時に、これはリンデーズ様ではないとも感じた。

「どなたです？　当屋敷に何の御用でしょうか？」

少し怒気を込めた声で男に話しかける。その声に驚いたのか、男は驚いたように少し体を震わせたが、やがて、ゆっくりとこちらに向き直った。

「いや、すみません。ちょっとお尋ねしたいことがありまして……」

その男の風貌を見てアルバートは固まってしまった。

その男の風貌は、主人メルル様の夫、亡きラウスト公爵に瓜二つだった……。

第八百一話　ご機嫌伺い

公爵様、という言葉をアルバートは必死で飲み込む。ラウスト公爵は二十数年前に亡くなったはずだ。その亡骸を彼は見ていた。

だが、目の前に現れた青年は、どこからどう見てもラウスト公爵に瓜二つだった。しかしアルバートはここで、心の中で自分に言い聞かせる。騙されてはならない、と。

これだけ容貌の似た者だ。何か、当家を騙そうとしているのかもしれない。気を許してはならない……。

アルバートは小さく息を吐くと、毅然とした態度で口を開いた。

「当家に何用でございますか」

「ああ、お忙しいところすみませんでした。こちらに、メルル様、がおいでになると聞いたのですが……」

「何の御用でございましょう？」

アルバートはメルルがいるともいないとも言わなかった。この村の者に聞けば、メルル様が屋敷にいることなどすぐに知れようものだが、それを敢えて口に出さぬことで、彼は警戒心を解いていないことをこの若者に示したのだった。

「ええと、何と言いますか、どうやら俺は、メルル様の息子、リンデーズであるみたいなのです。一応、顔を見せた方がいいのではな

いかと思いまして……」

何とも言いにくそうな表情を浮かべ、ポリポリと頬を掻いている。

アルバートは首を傾げた。

……この青年は一体、何を言っているのだ？

どうしてそんなに回りくどい言い回しをするのか。息子のリンデーズと名乗ればよいではないか。そんな言い回しでは、怪しまれるだけなのに、どうして敢えてそんな話をするのか。アルバートは一瞬、この青年は我々をバカにしているのかと思ったが、その風貌と雰囲気からは、どうやらそうではなさそうであるように見えた。

そんな彼の心中を察したのか、青年はさらに言葉を続ける。

「あ、怪しい男だと思っていますよね。ええ、怪しいと思います。私がリンデーズですと名乗ればいいと思っているでしょうが、ちょっとそうもいかない事情がありまして……。う～ん、難しいな」

一体何が言いたいのか。アルバートは怪訝そうな表情を浮かべる。

それを見た青年は、何か意を決したような表情を浮かべた。

「実を言いますと俺には、子供の頃の記憶がないのです。俺の記憶にあるのは、六歳のときに奴隷として売られ、奴隷市に出されたところから始まります。幸運にも良い主人に巡り合えまして、ここまで大きくなることができました。俺にとって両親は、奴隷の身分から救い出してくれたご主人様ご夫婦だと思っていますが、つい先ごろ、親切な人がいまして、こちらのミンズ王国のこと、ラウスト公爵のこと、そして、その妻であるメルル様のことを教えていただき、俺がその息子リンデーズであることを教えてくれました。こう言っ

ては何ですが……俺も妻を迎え、子供を授かりました。親として子供に会いたい気持ちはよくわかります。メルル様も、もしやと思いまして、こちらまで参った次第です」

アルバートは、気づかぬうちに口をあんぐりと開けていることに気づいて、慌てて居住まいを正す。なるほど、この青年の言うことは辻褄が合っている。だが、本当にリンデーズ様なのだろうか。確かにリンデーズ様が奴隷商に売られたのは六歳のときだ。さすがにその現場は見ていないが、メルル様から引き剝がされるようにして売られていったのだと聞いている。何もそこまでせずとも、とは思ったが、一介の執事が口を出したところで、どうなるものでもなかった。

彼はリンデーズが奴隷商に売られたと聞いて、その子供の死を覚悟した。幼い子供に奴隷の生活はもつまいと思ったのだ。目の前の青年は、幸運にも良い主人に巡り合えたと言った。その可能性はなくはないが、まさか、目の前の青年がそうであるとは、考えられなかった。

アルバートは迷った。このままこの青年をメルル様に会わせてよいものだろうか、と。会えばメルル様はどんな反応を示されるだろうか。全く反応しないかもしれないし、喜びのあまり号泣する可能性もないではなかった。

今、この、平穏な生活を壊すこともないのではないか……。そんな考えが頭をよぎる。その気持ちを察したのか、青年が口を開いた。

「また、明日か明後日にもう一度参ります。まずは、リンデーズは元気だとお伝えください」

そう言って青年は一礼して、手綱を引いて白馬と共にその場を去っていった。アルバートはまるで狐につままれたような感覚で、その青年の後姿を見送った。

呆然としたまま彼は屋敷の中に戻る。マミウスが、先ほどの男の人はどうなりましたかと聞いてきたが、上の空で返事を返す。彼女は怪訝そうな表情を浮かべながら、再び玄関に向かっていった。

「どうしたのです？」

ソファーに腰かけたアルバートに、妻のエリオットが声をかける。

「ああ、うん、いや……」

エリオットの編み物の手が止まっている。一体何があったという表情だ。その視線に耐えられないかのように、アルバートは立ち上がる。

「メルル様のご機嫌伺いに行ってくる」

「は？」

エリオットにとっては予想外の言葉だ。主人がメルル様のご機嫌伺いに行くなど、めったにないことだった。一体どうしたことだと思いながら、彼女は夫を見送る。

「……失礼いたします」

メルル様の部屋の扉をノックして部屋に入る。相変わらずメルルはぼんやりと窓の外を眺めている。まるで人形だ。

アルバートは胸が締め付けられる思いだった。いかに言葉をかけようとも、いかに心を込めてお仕えしようとも、このお方の心を開かせることはできない。きっとこのまま言葉を交わすことなく、このお方は生涯を終えるのだろう。そう考えると彼は、この女性が哀れで仕方がなかった。

「本日は良い天気でございます。雲一つない青空でございます。よろしければ、お庭に出て御覧ください。本当に、雲一つない、見事な青空でございます……」

メルルの反応はない。まるで、自分の声など聞こえていないかの如くだ。

「あの……その……。これは、お耳に入れるかどうかを迷ったのですが……。その……先ほどお玄関先に、リンデーズを名乗る若者が現れました」

メルルの様子は変わらない。アルバートはさらに言葉を続ける。

「ええ、あの……むろん、むろん追い返しました。ええ。リンデーズ様が生きているとは……。いや、リンデーズ様を語るとは不届きな男でございます。本来ならば捕えて、首を刎ねてもよかったのですが、あまり騒動を起こしてもと思いまして……。ただ、その、こう申しましては何でございますが、その……その男の風貌が、亡き公爵様、ラウスト公爵様に瓜二つでございました。私も危うく、公爵様と声を出しそうになったほどでございます。……ええ、まあ、何でございますね。どこかで似ている、などと言われたのでございましょう。それを真に受けて当家に参るとは……。何か、金でもせびろうと……」

「・・・」

「は？　今、何と？」

「・・・」

メルルが口を開いた。何を言ったのかは判別できない。だが、確かに言葉にならない言葉を話した。相変わらずアルバートに背を向けたままだが、彼は狼狽えながら、必死で言葉を絞り出す。

「あっ、その……いや、ええと、おっ、お通りいただこうと、お通りいただこうと、いや、お通り下さいと言ったのでございますが、何やらその、用事があるとかないとかで、行ってしまわれました。いや、行ってしまわれましたが、また、明日か明後日には、当屋敷に寄ると、ええ。当屋敷に寄ると言っておいででした。奥様、あの青年が、リンデーズ様を名乗る青年が見えました際は、お通ししてよろしいでしょうか？」

アルバートの言葉にメルルは何も言わなかった。彼はこれは是が非でも連れてこいという意味なのだろうか。いや、そうに違いない。そんなことを考えながら彼は、深々と頭を下げるのだった……。

第八百二話　久しぶりの森の中

深夜、俺は再びトルア村を訪れていた。ここから、ミンズ王国の王都に向かうためだ。

村はずれの山の中、しかも、真夜中ということで、周囲には魔物の気配が数多く感じられる。

「意外とこの周辺は、危険地域じゃないか」

そんなことを呟きながらイリモの背に跨る。突然現れた俺の気配に反応して、森の中がざわついているのがわかる。山頂付近にはAランククラスのドラゴンのような個体もいるようだ。こういうヤツらは知能が発達しているので、突然襲い掛かって来ることはないが、自分の縄張りが荒らされたと判断した場合は全力で阻止しにかかる。面倒なことにならない前に、ここを離れるのが一番だ。

山道まで出るとすぐに飛んでもらう。俺たちが上空に舞い上がると、鳥たちが鳴き声を上げて飛び上がってきた。どうやら、起こしてしまったようだ。

申し訳ないなと思いながら王都に向かう。ふと右側を見ると見事な満月だった。月を愛でながら空を飛ぶなど、何とも風流ではないか。そんなことを考えているとふと、脳裏にメインティア王の顔が浮かんだ。あのバカ殿ならば、この光景を何と評すだろうか。

まあ、どうせ下らないことしか言わないだろうなと思いつつ、眼下を見ると、カースシャロレーの気配を感じた。結構な数だ。幼い頃、

エリルと共にルノアの森で狩りをしたことを思い出す。そう言えば最近、カースシャロレーの肉を食べていない。狩っていこうかとも考えたが、今はミッションを遂行することが先だ。ちょっと残念な気持ちを抑えながら先を急いだ。

二時間ほど飛んだだろうか。ミンズ王国の王都と思われる建物が見えた。窪地の中に、いくつもの光が犇めいていた。下降して見るとどうやらそれは篝火のようで、魔物除けというのもあるのだろう。王都を囲む形で篝火が焚かれていた。上空から見るとそれはきれいな円を描いているように見える。たぶんこれは、王都に住む者も、況やあのミンズ王自身も知らないだろう。山の高台に展望台でも作ってこの光景を見せれば、ちょっとした観光名所になるかもしれない。

そこまで考えて俺はフッと笑みを漏らす。展望台を作ったとて、森には多くの魔物が犇めいている。夜中に森を移動するなど魔物に食われに行くようなものだ。そんな危険を冒してまで見るような光景ではなかった。

取り敢えず魔物の気配が薄い場所を探して着陸する。王都の中に着陸してもよかったのだが、そこはシディーがやめておいた方がいいと言っていた。そのときはよくわからなかったが、こうして実際自分の目で見ていると、彼女の言っていることがよく理解できる。この都は、狭い土地に無理やり作ったのだろう。かなり建物同士が密集している。そんなところに、夜とはいえ、空から人が降ってきたとなると騒ぎになる可能性が高い。これはシディーの言う通り、王都の外から正攻法で入るのが正解と言える。

着陸した場所は、冒険者たちが休憩用に使うのかと思うほど、開けた草原だった。開けたと言っても、精々十畳くらいのスペースしか

ないのだが、俺たちが休憩するのには十分な広さだ。一応そこに転移結界を張っておく。まあ、あまり使うことはないだろうし、使うようなことがなければいいなと思いながら作業を進める。

結界を張って俺たちの気配を消して、イリモに餌をやる。俺も屋敷から持ってきた弁当を広げて腹ごしらえをする。ペーリスが腕によりをかけて作ってくれたサンドイッチだ。一口食べて美味い、と言った。

そのサンドイッチを頬張りながら深呼吸をする。魔物たちの気配が煩いが、森の中なので空気が澄んでいる。何だか、ここにいるだけで健康になれそうな気すらする。

先ほど上空から王都の様子を見てから、胸が再びざわつきだしていた。やはり、俺の体が、本能が反応しているのだろう。ということは、やはりリンデーズはこの都に帰りたかったのだろう。

六歳の男の子が、ましてや、何不自由ない公爵家の御曹司が突然母親と引き剥がされて奴隷として売られたのだ。リンデーズの心境は察して余りある。相当不安だっただろうし、恐ろしくもあっただろう。何より、王都に、父と母の許に帰りたかっただろう。俺にはリンデーズの思いがよくわかる気がするのだ。

ふとそんなことを考えていると、夜が白み始めていた。俺は立ち上がって、王都に行く準備を始めた。

準備と言っても、リュックを背負うくらいのものだ。一応俺は、アガルタのダーケ商会の職員という身分を名乗ろうとしている。世界各地を渡り歩き、その土地土地の美味い物を仕入れてくるバイヤー、キキョウヤを名乗るつもりだ。その身分証明書も発行してもらって

いる。

「さて行くか」

イリモを促して森の中に歩を進める。おそらく、三十分も歩けば、王都に着くはずだ。結界に気配を消す効果を付与しているので、魔物に狙われる危険性は低い。まあ、ちょっとしたピクニックになる予定だったのだが、しばらく歩くと、カカズという魔物に出会ってしまった。

カカズは言わば巨大な蛇だ。とぐろを巻いて俺たちの進路をふさいでいる。たまたま周囲を見廻していたら俺たちを見つけたのか、それとも、ここで寝ていたら俺たちが現れたのかは定かではないが、気味の悪い鳴き声を上げながらこちらを睨んでいる。

毒蛇だけに、そこをどく、のではないかと洒落てみるが、どうも相手にはその気はないらしい。大きな口を開けて俺たちに襲い掛かってきた。

勝負は一瞬で着いた。俺が発動した、研ぎ澄まされた風の刃がカカズの顔を切り刻んでいた。

カカズは毒を持っているので、その身は食べることはできない。あるいは毒を抜けば、意外にその身は食べられるんじゃないかと思っていると、そこはカカズの巣だったのだろうか。あちこちからカカズが現れてきていた。

戦って勝てない相手ではないが、そのあまりの気色悪さに戦意を喪失してしまい、慌てて俺たちの姿を消す効果を結界に付与して、その場を切り抜けた。途中、何匹かは俺たちの存在に気付いて襲い掛

かってきたが、問題なく討伐できた。

ようやく山道に出ることができたときにはすでに、周囲は明るくなっていた。まあ、時間的にも王都の門が開くであろう時間になっていて、ちょうどよかったのかもしれない。そんなことを思いながら歩を進めていると、王都の門が見えてきた。アガルタのそれと比べるとかなり小さい。大型のドラゴンならば易々と打ち破れそうな作りだ。

門は閉じられている。まだ開門の時間ではないのかと思っていると、すぐ横に通用門と書かれた入り口があるのが見えた。少し押してみると、難なく門は開いた。

中には二人の兵士が控えていた。彼らは俺に怪訝そうな表情を浮かべながら近づいてきた。

「何だ貴様は」

「えっ……いや、こちらに入りたいのですが……」

「今、門から入ってきたな？　まさか、森を抜けてきたのか？」

「ええ、まあ、はい」

「夜通しこの森を通ってきたのか？」

「ええ、まあ、そうです」

兵士が驚きの表情を浮かべる。

「……冒険者か？　冒険者カードを出せ」

「いえ、冒険者ではありませんで……。私は商人です」

「商人!?　商人風情がこの森を夜、抜けてきたというのか？」

「はい」

「何者だ、貴様……」

俺は自分がダーケ商会のものであること、取り敢えず、アガルタには強力な魔物除けのお守りがあるなどと適当な嘘を並べておいたが、兵士はさらに疑いの目を向けてきた。

「どうやってミンズ王国に入った」

「どうやって？」

「国王様の命令により、我が国の港にはアガルタより参った者は必ず報告せよとのお達しがなされている。今のところ、アガルタの者が港に着いたという報告はなかったはずだが……」

……面倒くさいことになってきたな。

第八百三話　不思議な感覚

兵士は俺に疑いの目を向けている。ああいかん、思っていることが表情に出てしまったようだ。とはいえ、手荒なことはしたくはない。ここは話し合いで解決するようにして、最悪の場合、精神魔法を使うことにしよう。

「ええと、別にアガルタの船で移動したのではありませんから」

「どこの船を利用しようと、我が国に入国する際は、必ず身分の確認があるはずだが。それとも身分の確認はされなかったというのか？」

「いいえ、されました」

全くされてはいないのだが、ここで狼狽えるとさらに疑いが増すことになる。ここはハッタリをかまして、堂々と嘘をつく。

「身分証明書を出せ」

求められるままに身分証明書を出す。兵士はそれをじっと睨んでいたが、相変わらず疑いの目で俺を睨みつける。

「確かに、アガルタとは書いていないな。だが、貴様はアガルタのダーケ商会の者であると名乗った。アガルタから来たのではないのか」

「ああ、そのことでしたら。ダーケ商会の本店はアガルタにありま

す。本来私は本店に勤務する者なのですが、私の仕事は、世界各国を廻って美味しいものや珍しいものを仕入れてくることでして、ほとんどアガルタには帰らないのです。とはいえ、便宜上、アガルタの名前を出せば、大抵の関所は通過できますので、その……いつもの癖と言いますか……」

「では貴様はどこから来たのだ」

「ええと……クリミアーナ教国のアフロディーテです」

「クリミアーナ教国……」

虎の威を借る狐ではないが、取り敢えず周辺にある大国と言えばヴィエイユのところだ。あの小娘はこの国にちょっかいをかけようとしていたようだが、まさかもう実行してはいないだろうと思っていたが、兵士はさらに疑いの目を向けた。

「まさか貴様、クリミアーナの間者ではあるまいな!?」

「そんなまさか。本当に間者であれば、こうして堂々と名乗りはしませんよ」

「ちょっと待て」

兵士は指を口元に持っていくと、ピイーッと口笛を吹いた。すると、どこからともなく二人の兵士が現れた。

「少しお前を調べさせてもらうぞ」

「ええっ!?　ちょっとちょっと!」

◆◆◆

「……よし、行っていい」

「ううう……」

ようやくお許しが出た。取り調べは三十分くらいだっただろうか。手荷物検査をされ、身体検査をされたのだが、この身体検査がヤバかった。俺の体のありとあらゆるところを調べられたのだ。

別に下着を脱がされたわけではなかったのだが、兵士が二人がかりで俺の体のありとあらゆるところを触りまくったのだ。むろん、股間も触られた。尻も触られた。しかも、割と丹念に、だ。

こう言っては何だが、痴漢被害にあった人の気持ちが少しはわかる気がした。あんなことをされれば、体が硬直してしまって、声を上げるなどとてもできない。もう、あんな思いをするのは二度とイヤだ。たぶんこの国にはもう、来ることはないだろう。

一刻も早く屋敷に帰って、風呂に入って体の汚れを落としたい気分に駆られたが、ここまで来た以上、一応、ラウスト公爵家を確認しなければここまで来た意味がない。仕方なく俺はイリモと共に王都の中を進んだ。

狭い街だった。高い城壁に囲まれた中は雑然としていた。ヒーデータの帝都のように、しっかり道路で区切られたわけでもなく、アガルタのように居住区が整理されているわけでもなかった。門を過ぎると道が二つに割れていて、その正面が商店が軒を連ね、道の左右が居住区となっているようだった。

それぞれの建物は、石を積んで建てられていて、その高さや大きさはどれもまちまちだった。雑然とした感想を持ったのはおそらく、こういう点だ。ふと視線を上に向けてみると、小高い山が見えて、そこには大きめの家が犇めいていた。そしてその奥には、ひときわ大きい建物があった。おそらくあれが王の住む城なのだろう。

あの宰相が言っていた。ラウスト公爵家の屋敷は、主人が亡くなって以降誰も住んでおらず、空き家になっていると言う。もう二十年以上前の話なので、建物は相当老朽化しているだろうし、下手をすれば、幽霊屋敷になっている可能性もあるが、取り敢えずはそこに行ってみることにする。

街はあまり活気がなかった。俺が通っても店からは何も声がかからない。これがヒーデータやアガルタであれば、いらっしゃい、の一言くらいは必ずあるものなのだが。

街を通り抜けると、急な坂道が現れた。道の両側には、段々畑のように家々が並んでいる。ここらあたりは、建物の大きさや高さが一定になってきているので、この辺は割と、身分の高い人たちの家なのかもしれない。

あの宰相は、ラウスト公爵の家には大きな木があると言っていた。それはすぐに見つかった。城の手前に、大きな木が不自然に生えていた。どうやらあれのことらしい。

その木を目印に俺とイリモは進む。ずっと上り坂なので、歩くスピードはゆっくりだ。だが、歩を進めるうちに、何となくだが、俺はこの景色に見覚えがある感覚に囚われていた。

やがて、突然道が悪くなった。確かに道らしきものはあるのだが、突然草が生い茂っていて、まるで、人の進入を拒むかのような荒れ地が現れた。どうやらこの先が、公爵の屋敷らしい。

俺とイリモに結界を張り直す。気配を隠す効果と同時に、完全に姿も消す効果を付与する。そして、結界の強度も増しておく。草で怪我でもしたら大変だ。

腰の高さまで歩く草をかき分けかき分け進む。これが夜だったらいい肝試しになるところだ。そうやって進むこと数分、ボロボロに朽ち果てた屋敷が見えてきた。

朽ち果てたと言っても、そこは石でできた屋敷だ。蔦に覆われ、苔むしているだけで、容易には崩れ落ちそうにはない。玄関と思しき扉は締まっている。窓も閉じられている。そこからは、完全によそ者の侵入を拒むかのような雰囲気が醸し出されている。

直感的に、俺は昔、ここに住んでいたという感覚を覚えた。この目の前の広場で走り回ったであろうこと、おそらく、あの屋敷の裏手には井戸があり、そこには一人で近づいてはならないと言われたであろうことが、何となく思い出された。

閉まっている玄関の扉に手をかける。ベリッというイヤな音と共に、扉が倒れてきた。慌ててそれをよける。中を見るとそこはダイニングになっていて、床に敷かれている木が腐っていた。

中に入るのは危ないなと感じる。だが、俺はこの屋敷に見覚えがあった。暗くて見えないが、あのダイニングの奥には廊下があり、その突き当りが両親の寝室になっていたはずだ。大きなベッドに、親子三人川の字になって寝ていた場面が、かなりリアルに思い出され

た。その手前には左右に部屋があり、それぞれこの家の者が住んでいたはずだ。

ダイニングの右側にはキッチンがあり、そのさらに奥には風呂と手洗いがあるはずだ。風呂は大きな盥が置かれてあり、石でできたカマドと机があり、昼はそこで洗濯をしていたはずだ。

「確かに俺は、ここにいたな」

思わず誰に言うともなく呟く。そうだ。きっと、俺は、リンデーズはここにいた。幸せな暮らしを送っていたのだ。

玄関先で思わずしゃがみ込む。ふと、自分の両目から涙が溢れていることに気づいた。ああ、リンデーズは、本当にこの屋敷に帰りたかったのだ。やっと、やっと自分の家に帰ってくることができたのだ。

懐かしい感じがする。幸せな感じがする。初めて味わう感覚だった。きっと、こんな生活であったであろうイメージが、確信に近い感覚で頭の中に次々と描かれる。俺はしばらくその感覚に浸り続けていた。

どのくらいの時間が経っただろう。ゆっくりと立ち上がって、再び屋敷の周囲を見廻す。何とも言えぬ満足感だ。リンデーズがそう言っているような気がする。

「じゃあ、母親の屋敷に向かうか」

俺は誰に言うともなく、そう呟いた。

第八百三話　不思議な感覚（後書き）

コミカライズ最新話、本日公開されました！　フェリス登場！！
これまたかわいい……。
ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｓｅｒｉｅｓ／１１６

第八百四話　いよいよ

「そうか、来たか！」

ミンズ王国国王リイジは、膝を打って満面の笑みを浮かべた。目の前には宰相であるムーラが控えている。

「来た、と仰いますと？」

「わからんのか！　その者がリンデーズだ。アガルタ王だ」

「いえ、それはあり得ません」

「何故だ！」

ぶ然とした表情を浮かべながら、国王リイジは宰相を睨みつける。そんな彼に宰相は小さなため息をついて、ゆっくりと、まるで子供に諭すかのような口ぶりで話しかけた。

「我らが帰国してまだ一週間ほどしか経っておりません。アガルタ王が我が国にやって来るには時が早すぎますし、そもそも、あの王が我が国にやって来ることはあり得ません」

「己の故国であろうが！　己の故郷に帰りたいと思うのは、当たり前のことであろうが！　それに、そなたも言っておったではないか！　我が国に帰ってくれれば、何かを思い出すであろうと！」

「確かにそうは申しましたが、アガルタ王のお立場を考えますと、

我が国にやってくる可能性は極めて低うございます」

「左様なことはあるまい！　我らがアガルタを出たすぐ後で出発すれば、ちょうど今日あたりに着くころであろうが！」

「よくお考え下さい国王様。アガルタ王は自ら政務に携わり、アガルタの意思決定の全てに関わっていると聞きます。そんなお方がおいそれと国を出られましょうか？　よしんば、我が国を訪問する意志を示されたとしても、それはご家来たちがお止めし、お諫めすることでしょう。何よりアガルタ王は聡明でいらっしゃいます。自らが長期間国を離れれば、どのようなことが起こりうるかはよくご存じのはず。そんなお方が、おいそれと遠国である我が国に訪問するなど、お考えになるはずがございません」

「……それは、余に対する皮肉か？」

「いいえ滅相も」

「確かに余は、政務には携わらず、宰相たるそなたに任せてはいる。だがそれは、そなたに任せておけば、より国の事柄が早く進むであろうとの判断であるからだ」

「……ありがとうございます」

あまり喜べない褒め言葉だ。それは自らが無能であると言っていることと等しい。自らが仕える主君が自分で無能であると言っている様を喜ぶ家来はいない。

「そのアガルタから来た者を、余の前に連れてまいれ」

「国王様……」

「余、自ら見分してくれる」

「おやめくださいませ」

「何故だ！」

「報告によれば、一介の商人であるとのことでございます。城門前にて、兵士たちが丁寧に取り調べ、怪しいところはなかったと報告しております。そのような者を御前に呼ばれて、何をなさるおつもりですか」

「アガルタ王であるかどうかを検分するのだ」

「それはあり得ません」

「その者は一人で夜中、ルワルドの森を超えてこの王都にやって参ったと聞く。そのような者が単なる商人であるはずがない。アガルタの中でも相当な手練れか、アガルタ王自身である可能性が高いではないか！」

「よくお考え下さい、国王様」

宰相ムーラはため息をつきながら口を開く。国王リイジは口をへの字に曲げ、プイッとそっぽを向いた。

「森の魔物は、カルワサの鈴をつけておれば、大抵の者は寄って参らぬことは国王様もよくご存じのはず。報告を聞けばその者は、世界中を廻っているとのこと。カルワサの鈴を知らぬわけではないで

はありませんか」

「しかし、だ！　その名前がキキョウヤというのは、怪しいではないか！」

「変わった名前の者はいくらでもおりましょう。国王様は、その者を呼んで、何をなさろうとしておいでなのですか。もしアガルタ王様であった場合、なにをなさろうというのですか」

「思い出したかどうかを確認するのだ！」

「思い出す……。この国で暮らしていたことを思い出し、国王様への忠誠心をも思い出したかどうかを確認されるのですか？」

「その通りだ」

「もしアガルタ王様がリンデーズであり、この国で暮らしていたことを思い出したとしても、国王様の望む結果にはなりません」

「何だと！」

「リンデーズがこの国を離れたのは、六歳のときです。六歳の子供が、国王様への忠誠心を持っていたとは思えません。よしんば思い出したとしても、むしろ、己の父が殺され、母と引き離されたことで、国王様を深くお恨みすることになるでしょう。そうなれば、アガルタとその同盟国は我が国に侵攻……。そうはならなくとも、何らかの、経済的な制裁が加えられるられる可能性が高うございます。国王様はそれでもよいと、仰せなのですか」

宰相ムーラの言葉に、国王リイジは苦虫を噛み潰したような表情を

浮かべる。それを見た宰相は、すこし優し気な物言いで、まるで諭すように話しかける。

「お気持ちはわかります。痛いほどよくわかります。しかしながら国王様、その夢はお捨てください。我が国にとって利益となることはありません。それよりも、国内のことに目をお向けください。我が国には国王様に忠節を尽くす者たちが多くおります。この国が浮き上がるも沈むも、国王様のお心一つでございます」

宰相の言葉に国王は再び、顔を背けた。

◆　◆　◆

アルバートは緊張した面持ちで椅子に腰かけていた。

昨夜は一睡もできなかった。屋敷に尋ねてきたあの青年が何かを引き起こす……。そんな直感にも似た、しかし、ある種の確信に近い思いが彼にはあった。

よい予感ではなかった。別に命を取られるようなことはあるまいが、確実に、この屋敷に住む者たちの生活は一変する。それも悪い方に、だ。少なくとも、今までのような平穏な暮らしはできなくなるかもしれない。そんな予感に苛まれていた。

いつもと変わらぬ景色だ。妻はいつものように広めのソファーにデンと座ってあれこれと指示を出している。メイドたちは無駄のない動きでテキパキとそれぞれの仕事をこなしている。

アルバートはこうした光景をあまり良くは思っていなかった。妻などは全く動こうとはしない。少しは自分で動いたらどうなのだと思

っていたが、こうした光景はもうすぐ見られなくなるのだと思うと、彼は胸が締め付けられる思いがするのだ。

元々若い頃からアルバートは直感が鋭かった。とりわけ、人の生き死に関してはさらに鋭さを発揮した。病人などは医師を呼ぶまでもなかった。見ると大抵の人は、命を長らえるのか、これが寿命であるのかを感じることができた。

そうした自分の能力を疎ましく思ったこともある。だが、この田舎にやって来てからは、そうした直感は鋭さを失いつつあった。人と交わりが少なくなったせいでもあろうか。メイドが村の男とよからぬ関係になったり、屋敷を訪ねて来る者に邪心があったりする場合などに直感力が働くくらいで、その他は平穏そのものと呼べる日々が続いていた。

だが、昨日あの青年を見て以来、彼の直感力は研ぎ澄まされてきていた。メイドたちの一手先が手にとるようにわかる。それだけでなく、あと数時間もすれば、あの青年がやって来るであろうことが、何となくわかるのだ。

「アルバートさん」

昼食用の食材を村に買いに行くために出かけたメイドが戻ってきた。いや、買いには行っていない。玄関先でおそらくであったのだろう。アルバートには、次の言葉がわかっていた。

「お通ししてください」

「え？」

怪訝そうな表情を浮かべるメイドに、アルバートは微笑む。

「昨日のお方が来られたのでしょう？」

「は……はい。でも、アルバートさん、お顔の色が優れませんよ。今日はお休みされては……」

「いいえ、大丈夫。大丈夫ですよ」

彼は立ち上がると、側に掛けていたジャケットを羽織った。

第八百四話　　いよいよ（後書き）

２０２２年最後の投降となります。今年もお世話になりました。どうぞ皆さま、よいお年をお迎えください！

第八百五話　思いもよらぬ展開

アルバートはまず先にメルルの許に向かった。部屋の扉をノックして中に入ると、そこにはいつもと変わらぬ姿勢で椅子に腰かけている主人の姿があった。相変わらずこちらには背を向けたままだ。だが、アルバートはフッと息を吐き出すと、一気呵成に口を開く。

「奥様、ただ今お玄関先に、昨日の青年……リンデーズ様が見えました。これよりこちらにお通し申し上げます」

メルルは黙ったままだ。そんな彼女に一礼して、彼は部屋を出た。

玄関を出ると、昨日の青年が立っていた。その彼にアルバートは毅然とした態度で応対する。

「お待ちしておりました。どうぞ、お通り下さい」

男は軽く会釈をすると、隣に控えていた白馬に、少しだけ待っているようにと言った。その言葉がまるで理解したかのように、馬はブルルと嘶いた。

アルバートは真っすぐに青年をメルルの部屋に案内した。それが最善であると彼は確信していた。というよりむしろ、彼は自らが感じていた予感が、どのような形で具現化するのかを知りたかった。あまりよい未来ではない予感ではあったが、それが明らかになれば対策も打てる。彼は早く、これから起こりうる未来に対して対策を考えたかった。アルバートの心はそんな感情に支配されていた。

「こちらがメルル様のお部屋になります」

アルバートは青年に視線を向けたまま、右手で扉をノックした。中から返答はないが、彼は何のためらいもなく扉を開けた。

「どうぞ」

青年は促されるままに部屋の中に入る。アルバートはそれを見届けると、静かに扉を閉めた。

◆　◆　◆

薄暗い部屋だ。まあまあ広い……十畳くらいだろうか。ベッドとクローゼット、小さな机と椅子……。だが、部屋には人の姿はない。ふと、部屋の真ん中に、小型のロッキングチェアのような肘掛け椅子があるのが見えた。頭……が見える。もしかしてここに座っているのか？

俺は恐る恐る椅子の前に回り込む。するとそこには、髪を結い上げた老婆が座っていた。

彼女の視線の先を見ると、どうやら正面に設えられた窓、そして、その先の景色を見ているようだ。景色と言っても、彼女の視線は上を向いているので、空しか見えない。だが、俺も背をかがめて窓を見てみると、そこには、雲一つない見事な青空が広がっていた。

「見事な快晴ですね」

思わず呟いてしまった。ちらりと隣の老婆を見るが、俺には全く視線を向けない。ただぼんやりと窓の外を眺め続けている。

正直、予想外の出来事に戸惑っていた。何十年かぶりの親子の対面だ。母親のメルルが俺に抱き着き、号泣する……。そんな場面を予想していたのだが、この有様は何事だろうか。まるで、傍らに人無きが如しだ。人形のように動かない。耳をすませば呼吸音が聞こえてくるので、死んではいないのはわかるのだが。もしかして彼女は、精神が破壊されていて、廃人同然になっているのだろうか。

村の人の話では、全く喋りはしないものの、年に何回かは屋敷の外に出てくるのだと聞いていた。そうしたことから、落ち込んではいるものの、一般的な生活はできているのだろうと考えていた。ところが、目の前の老婆はどうだ。本当に屋敷の外を出歩くような人には見えない。村人が見たのは、本当にメルルだろうか。彼女に似た、それとも、別人を彼女だと思っているのではないか。

そんなことを考えていたそのとき、何かの音が聞こえた。

「……」

人の声、か？　部屋の外から誰か声をかけているのかと思い、思わず扉に視線を向けるが、どうもそうではないらしい。すると再び、何かの声が聞こえた。

「……」

……もしかして、メルルが喋ったのか？　声にならないような声だ。彼女の口元を見てみるが、ピクリともしない。

「ええと、今、何かを仰いましたか？」

問いかけてみるが、何の返答もない。正直、コイツは困った。一体、何をすれば正解なのだろうか。

残念ながら幼いころの記憶を失っておりまして、しかとしたことは言えないのですが、どうやら私はあなたの息子のリンデーズであるようです。母であるあなた様が生きておいでになると聞き、まずは伺った次第です……。などと近況を報告して、今日はこれぎりとして、今度で直して参りますと言って失礼しようか、そんなことを考えていたそのとき、メルルの視線がゆっくりと俺に向いた。

「……」

彼女はじっと俺の顔を見つめているが、相変わらず言葉を発しない。彼女と見つめ合ったまま、時間が過ぎていく。

どのくらいの時間が経っただろうか。実際は五分くらいだっただろうか。体感的にはかなり長い時間見つめ合っていたように思えた。彼女の眼は澄んでいてとてもきれいだった。目や顔の周りに刻まれた皺が何とも痛々しい。俺はその沈黙に耐えかねて、取り敢えず今日はと言おうとしたとき、不意にメルルが口を開いた。

「あなた、誰？」

「え……。誰って……」

「誰？」

思わず言葉に詰まる。まさか、そんな聞き方をされるとは思わなかった。しかし、戸惑ってばかりではいけない、そう思った俺は、気を取り直してこの老婆と向き合う。

「あの……俺は、幼いころの記憶はありませんが、ある人の話で、あなたの息子のリンデーズであると聞きました。それで……」

「リンデーズ、では、ない、わね」

ぼんやりとした表情のまま、静かに、そして、淡々と彼女は口を開く。リンデーズではないと言われてしまった。まさか、他人の空似だったのか。だとしたら、とんでもない失礼な話だ。

「そ……それは、すみません。いえ、その……そっくりだという人があったものですからつい、そうではないかと思ってしまいまして……。大変失礼しました」

「いえ、あなたは、確かに、リンデーズ、だわ」

……一体何を言っているんだこの人は？　今さっき俺がリンデーズではないと言ったばかりじゃないか。どうなっているんだ？

「あなたは確かにリンデーズ。私と、公爵様の宝物。リンデーズ……」

彼女の眼からは一筋の涙が頬を伝っていた。彼女はゆっくりと居住まいを正すと、座ったまま体ごと俺に向け、両手を伸ばして俺の顔に触れた。そして、顔を近づけてきて、じっと見つめた。

「……」

メルルは再び沈黙した。部屋の中が再び重苦しい空気になる。彼女の呼吸する音だけが聞こえている。

「俺は奴隷として売られましたが、とても優しいご主人様に買われ、その家で養育されました。大変なこともありましたが、いい人たちに囲まれて大きくなることができました。その方々とはお別れしてしまいましたが、俺にとっては、そのご主人様ご夫婦を親と思ってこれまで生きてきました」

メルルは動かない。人形のように固まったままだ。俺はさらに言葉を続ける。

「今、俺はアガルタという国にいます。幸い、愛する人に巡り合えて結婚し、子供も授かりました。機会があれば、俺の屋敷においで下さい。妻と子供たち、あなたの孫に是非、会っていただきたいです」

……我ながらイヤだと思った。恐らくメルルは帝都の屋敷に来ることはないだろう。いや、この状態では来ることができないだろう。もし仮に屋敷に来たとしても、今の状態ではまるで、腫れ物に触るような扱いになる。リコをはじめとする妻たちに負担がかかるし、子供たちも気を使うだろう。例えメルルが屋敷に来たいと言ったとしても、時機を見て……と言い訳して彼女を呼ぶことはないとわかっていながら、そんな社交辞令を言ってしまっている。何て臆病でイヤなヤツなのだろう。

そんな自己嫌悪に陥る俺に、メルルは不意に口を開いた。

「やっぱり、リンデーズでは、ない？」

「……ええと。あのですね」

「クボタモツ……？　誰？」

俺は思わず彼女から離れた。

第八百五話　思いもよらぬ展開（後書き）

あけましておめでとうございます。どうぞ本年もよろしくお願いいたします！

第八百六話　かみ合わぬ話

……久しぶりにその名を聞いた。そう。転生する前の名前だ。

頭が混乱する。俺が転生者であることは誰にも言っていなかったことだ。今は亡きエルザ様、侯爵様、エリル、ファルコ師匠はもちろん、リコやメイたち家族にもそのことは知らないはずだ。なのにどうしてこの老婆がそのことを知っているのだ。

反射的に結界を張る。物質的な攻撃に対する耐性を極限まで高めたものだ。冷静に考えれば、そんな結界は意味のないことであるのはすぐわかることなのに、俺は無意識にそんな結界を張っていた。

何としてでも守らねばならない。そんな強い感情が心の中に湧き上がっている。何を守るのか、自分か、家族か……。そんな明確なものではない、ただ、守らねばならないという感情だけが心にあった。

メルルは相変わらずぼんやりと、腕からすり抜けた俺を眺めている。一体この老婆は、俺の何を見たのだ？　鑑定魔法で過去を読んだのだろうか。

何とも言えぬ恐怖心を感じる。だが、本能レベルでこの目の前の老婆は倒さねばならない対象ではないことだけはわかっていた。

「俺は、バーサーム・ダーケ・リノスと言います。今は亡きジュカ王国の宰相を務めておいでであった、バーサーム家に養子に迎えられ、今は、この名前を名乗っております」

咄嗟にそんな言葉が口をついて出た。一体、誰に対して、何のためにそんなことを言っているのだと心の中で呟く。だが、目の前の老婆は、相変わらず澄んだ瞳で俺を眺めたままだ。

何とも言い得ぬ恐怖を感じる。この沈黙が怖い。何とかしてこの状況を脱しなければ……。そんなことを考えていたそのとき、不意にメルルが沈黙を破った。

「……リンデーズでは、ないわね」

彼女はそう言うと再び椅子に深く腰掛け、目を閉じて天を仰いだ。

「……わかっていたわ」

メルルは誰に言うともなくそう呟いた。その声からは諦めとも悲しみともつかぬ、何とも言いようのない感情が読み取れる。

「だって、私の子供ですもの。私が愛情のすべてを注いで育てた子供ですもの。その子が生きているか、死んでいるかくらいは、わかるものです」

メルルはそう言うと、ゆっくりと息を吐き出した。

「アルバートがリンデーズが来たと言ったとき、もしもと思っていたのですけれど……。やっぱり、ね」

彼女はそう言うと目を開けて、再び俺に視線を向けた。

「でも、あなたはリンデーズね。しかし、リンデーズではない。どうしてかしら？」

「あの、一つ聞いてもよろしいでしょうか」

俺の言葉にメルルは無言のままだ。だが、その澄んだ瞳は、何でも聞けばよいと言っているように見えた。

「さきほど、クボタモツと言っていらっしゃいましたが、あれはどういう意味でしょうか。いや、意味というのはおかしいか……。何かを見てそう言われたのでしょうか。それとも、何かそういう言葉をお聞きになられたのでしょうか」

「知らない」

実にあっさりとした答えだった。じゃあ、さっきのあれは何だったのだ？

「頭に浮かんだのです」

「……え？」

頭に勝手に俺の転生前の名前が浮かんだというのか。第六感というやつだろうか。俺の恐怖感はさらに増していた。

「先ほども申しましたが、俺の記憶は六歳の時から始まります。気がつくと草原にいました。奴隷商の馬車に乗って移動していたようです。そこには数名の同じ、奴隷として売られた人たちがいました。その中の一人の話では、売られてきたときの俺は、大声で泣きじゃくっていたそうです。その後もずっと泣き通しだったと。そして、不意に馬車から落ちた。頭から落ちたので心配していたのだと聞かされました。俺の記憶は、そこから気がついたところから始まるの

です」

「そのときに……リンデーズは死んだのですね」

「……」

「そのときにリンデーズは死んで、全く別の人物として生まれ変わったのでしょう。それが今のあなた……。そう、それで、ようやく納得ができました」

メルルは再び目を閉じて天を仰ぐと、大きく深呼吸した。

「あなたはリンデーズであってリンデーズではない。しかし、あなたはこうして私の許を訪ねてくれた……。きっと、リンデーズがそうさせたのかもしれないわね」

「……そうかもしれません。実は、こちらに来る前に王都に行き、ラウスト公爵のお屋敷を見てきたのです。そのとき、記憶にはなかったのですが、何だか懐かしい感じがしました。そして、その屋敷の構造が手にとるようにわかったのです。気がつけば俺は、涙を流していました。今、こうしてメルル様とお話ししていますが、先ほどから懐かしい感じがしてなりません。おそらく、リンデーズが喜んでいるのだと思います」

俺の言葉に、メルルはゆっくりと頷いた。

「きっと、早く自分の許に来て欲しい……。そういっているのね」

彼女はそう言って笑みを漏らした。

「私の命はそう長くはありません。でも、死ぬ前にこうしてあなたに会えてよかったわ。礼を言います。ありがとう」

俺はゆっくりと一礼した。そんなことは仰らずに、どうぞご自愛ください。よければ、アガルタの都にもお越しくださいという言葉を飲み込んだ。その言葉は言うべきではない。何というか、野暮な気持ちがしたのだ。

俺は無言のまま部屋を後にした。

階段を降りると、先ほどの執事が待っていた。彼は俺を見るなり、メルル様はどうでございましたかと言った。俺は、少しだけお話ししまして、お礼を言われました。リンデーズには似ているけれども、リンデーズではないと言っておいででした。俺も、その言葉を聞いて何だか安心しました。ということで、俺はもう、失礼しようと思います、と言って、玄関に向かった。執事は俺の言葉を聞いて、入れ替わるように階段を上がっていった。

「待たせたなイリモ」

そう言って彼女の頭を撫でる。ふと、振り返って、メルルの住む屋敷を眺めてみた。……何となく、暗い感じがした。俺は心の中でもう、この屋敷に来ることはないだろうし、このミンズ王国自体にも来ることはないと思った。そして、イリモの背に跨ると、転移結界のある場所に向けて彼女を走らせた。

◆　◆　◆

屋敷に帰ってくると、皆が笑顔で迎えてくれた。一歩中に入って、ああ、俺のいる場所はここなのだなと実感した。

いつものように皆で食事を摂り、風呂に入る。寝室で一人、ベッドの上で大の字になって寝っ転がりながら、ぼんやりと今日のことを考える。今夜はメイの日だ。彼女は色々と片付けがあって、遅くなりがちだ。そういうこともあって物思いにふけることにした。

と、そのとき、扉が開いてシディーが入ってきた。どうしたと言うと、彼女はメイと変わってもらったのだと言う。珍しいこともあるものだと、その理由を聞くと、彼女はベッドに上がってきて、俺の前で正座の姿勢を取った。

「何だか、雰囲気が変わったので……」

「雰囲気？　そうか？　いつもと変わらないけれどもな」

「いいえ、違っています。私だけじゃなく、みんなそう思っています。何というか……軽くなりました」

「ああ、そうか。それはいい意味か？」

「いい意味でもあり、悪い意味でもあります。何というか、その……怒りに触れたらすべてを無くすだろう……という気配ではなくなりました」

「そんな雰囲気があったのか？」

「はい。でも今はなくなっています。その……普通の人になったというか……」

「そうか。まあ、ミンズ王国では色々あったからな。でも、そんな

に心配することじゃない。ちゃんと心の整理はついている。大丈夫だ」

「きっと私もそう思っていました。ただ、雰囲気が変わられたので確認しようと思って……」

「今の俺は嫌いになったかい？」

俺の質問にシディーは一瞬キョトンとした表情を浮かべたが、やがて頬を膨らませて、そっぽを向いた。その首筋にはほのかな赤みが差していた……。

第八百七話　対面時間

クリミアーナ教国教都、アフロディーテ。その教皇神殿では、分厚い報告書が作成され、今まさにヴィエイユの許に提出されようとしていた。

執務室の机に書類を並べて、ペンで何やらカリカリと書き込んでいる。その雰囲気は、何やら嬉しそうだ。

「失礼します」

若い枢機卿が恭しく一礼して入出する。ヴィエイユはチラリと彼を見てペンを置き、居住まいを正した。

「報告書を持って参りました」

「ご苦労様です」

彼女は人懐っこい笑みを浮かべて、若い枢機卿の労をねぎらう。その彼は一切表情を崩すことなく、失礼しますと言って一礼し、部屋を後にしていった。

その後ろ姿を眺めながらヴィエイユは、実に優秀な男だと心の中で呟いた。

大体の男は、必ず彼女の胸元に視線を向ける。そうなるように、少し小さめの服を着ているのだ。彼らからは、ヴィエイユの胸の形がよくわかる状態だ。どんな男でも、この至近距離であればたとえ一

瞬であっても、その視線はヴィエイユの胸に向けられる。だが、今の男はそれが全くなかった。女性に対して興味がないのか、または、見ていないようで見ているのだろうか……。

きっと、私を含めた風景全体を見ているのかしらね。

ヴィエイユはクスリと笑みを浮かべながら、そんなことを考える。自分にその欲望を悟られないように、色々と対策を練ってきたのかと考えると、あの若い枢機卿が何とも可愛い存在に思えてきた。

彼女はゆっくりと目の前に置かれた報告書に手を伸ばす。そして、それを一枚一枚丁寧に読みだした。

誤字脱字の類はない。ヴィエイユの許に届けられる報告書は、必ず複数の校正が入っている。そのため、そうしたものは皆無と言っていいのだが、至る所に違和感を覚える箇所があった。これは、文法的に間違っている部分や、辻褄が合わない部分が修正されているのだ。ヴィエイユはこうした修正をあまり好まなかった。こうした部分には、書き手が勢いに任せて書いた場合が多い。得てして、そうした、文法的にはメチャクチャである文章が、真実を描きだしていることがある。彼女は部下たちにそうした点はできるだけ修正せずに報告するようにと言ってあるのだが、なかなかその意図は伝わっていないようだ。

彼女はため息をつきながら、報告書を読み進める。その内容は、アガルタ王に関してのことだった。

彼は秘かにミンズ王国を訪れていた。それだけでなく、ミンズ王国のトルア村にも訪れていた。言うまでもなく、その村には彼の母親が住んでいた。

報告書には、アガルタ王の行動を記載すると同時に、それらを調べた者たちの考察が書かれてあった。それは、ミンズ王国の情勢からアガルタの情勢などから、多くの人間関係など、多岐に渡っていた。それがために、この報告書が膨大な量になっていたのだ。ヴィエイユは、最初の十ページ余りを読んで、この報告書には価値がないと断じた。

アガルタ王は、人の力を超えた力を持つ方だ。そんな人間を、凡人たる枢機卿たちが分析できるわけはない。それができる資格を持つ者は、アガルタ王と相対した経験のある者だけだ。

ヴィエイユは一瞬、この報告書を読むのをやめようかと思ったが、とはいえ、これだけの情報量だ。有益なものが書かれている可能性は否定できない。彼女は思い直して、再び報告書に視線を向けた。

いわゆる斜め読みというやつで、考察の部分はどんどん読み飛ばしていく。そして、あるところに来ると、ヴィエイユの手が止まった。それは、アガルタ王が母の住むトルア村を訪れた部分だった。

報告書には、およそ三十分屋敷に滞在したとあった。短すぎないか、という疑問がまず先に頭の中に持ち上がった。二十数年ぶりに親子が対面する、ましてや母と子が対面するのだ。三十分などで済むはずがない。

ヴィエイユは報告書をめくりながら、アガルタ王がミンズ王国の王都を訪れた際の記事を探した。そのとき彼は、ラウスト公爵の屋敷の方向に向かい、しばらくの間そこから出て来なかったと報告されている。それがどれほどの時間滞在していたのかは記されていないが、その後すぐにトルア村に現れたのを見ると、おそらくそこで、

幼い頃の自分思い出したか、何らかのきっかけを掴んだに違いないことが想像できる。そうでなければ、母親の住むトルア村まで行くことはないからだ。

……一体、トルア村で何があったのか。

ヴィエイユは報告書を机に置き、椅子に体を預けて天を仰ぎ、目を閉じて想像する。

……母親に自分の息子ではない、と言われてしまったのかしら。

だとすれば、僅か三十分で母子の対面が終わった説明がつく。だが、アガルタ王は別段落ち込んだ様子もなく屋敷から出てきたとある。それ以上の事柄を書き込まなかったのは、普段と変わらぬ様子であったのだろう。男が母に拒絶されて平静を保てるものだろうか。

もっとも、母親と会話が成り立たなかった、というケースもある。報告書では、母親であるメルルは、年に数回は屋敷の外に出るものの、全く言葉を発しないとあった。もしかすると、ほとんど自分の意思を持たない状況になっているのかもしれない。そう考えると、対面時間が短いのも納得できる。

「……まあ、しばらくあのお方の動向を見ましょうか。今回のことで心に傷が付いているのであれば、何らかのほころびが見えるはずだわ。それが見えるまで、静観ね」

ヴィエイユは誰に言うともなく呟く。彼女は再び報告書を手に取ると、パラパラとページをめくり始めた。

「……ほう、ミンズ王が政務に参加する意志を示した？　無能の典

型であるあのお方が、一体どうした風の吹き廻しかしら。……きっと、あの宰相が説得に成功したのね」

ヴィエイユはクスリと笑うと、再び目を閉じて天を仰いだ。

それはそれで、ミンズ王国としては万々歳の出来事だ。これで少しは、あの宰相の心労も和らぐことだろう……。そんなことを考えていると、彼女の心の中にムクムクといたずら心が芽生えてきた。

……確か、ミンズ王は隣国のヒダに侵攻しようとしていたわね。確かヒダは、鉱物資源が豊富な国。何だかこのまま幕を下ろしてしまうのは、勿体ないわね。

彼女はそう考えると、目の前の壁に設置されている巨大な世界地図に視線を向ける。しばらくそれを眺めていた彼女は、何かを閃いたのか、やおら頷くと、側に有ったペンを取り、紙にカリカリと何かを書き入れた。

しばらくすると彼女はパンパンと手を叩いた。すぐに若い男が入室してくる。ヴィエイユは彼に紙を手渡しながら、嬉々とした声で口を開く。

「これを、マインサーブ枢機卿に渡してください。渡すだけで結構です」

「畏まりました」

男は恭しく一礼して部屋を後にした。

……やっぱり見たわね。

ヴィエイユは心の中でそう呟いて笑みを浮かべた。男の心を掴むのは簡単だわと嘯いて席を立ち、背伸びをする。そして、執務室を後にしてそのまま自室に戻った。

「これは……お早いお帰りで……」

いつも仕えてくれている侍女が慌てて頭を下げる。彼女はその様子に満足げな表情を浮かべた。

「これから風呂に入ります。準備を」

「承知、いたしました」

彼女はそそくさとその場を後にして、バスルームに向かう。ヴィエイユも彼女の後を追う。

侍女は急いで魔法でバスタブに水を溜めていく。先にバスルームの掃除を終えていてよかった。教皇聖下が入浴の間に、寝室の掃除を終わらせるのだ。そんなことを考えながら、小さなファイヤーボールを出してバスタブに沈める。すぐにそこから湯気が立ち昇ってきた。

右手をバスタブに入れて湯加減を確認する。少し熱めの、教皇聖下が好む温度だ。準備ができた振り返ると、そこには一糸まとわぬ裸を晒しているヴィエイユの姿があった。

「しっ、失礼……しました」

「待って」

慌ててその場を去ろうとする侍女を止め、ヴィエイユはその体を見せつけるように仁王立ちのポーズを取った。

「私の体は、どうかしら？」

「……この世のものとは思われぬ、誠に、美しいと、存じます」

顔を真っ赤にしながら、チラチラと体に視線を向ける彼女を見て、ヴィエイユは満足げな表情を浮かべながら、下がっていいと命令した。

誰もいなくなったバスルームで一人、湯に浸かりながら彼女は誰に言うともなく呟く。

「アガルタへ付け入るスキは、まだまだなさそうね……」

第八百七話　対面時間（後書き）

ラウスト・リンデーズ編これにて終了です。また、間話を数話挟みまして、新章に突入する予定です！

第八百八話　あげもの①

ミーダイ王国。火山口の中にできたオーガ一族が住む国だ。以前、タナ王国の侵攻にあい、国家存亡の危機に瀕したが、アガルタ王リノスの助力もあり、現在は以前のような平穏な日々を取りどしていた。

「ではオク、行って参るぞ」

この国の王である帝様は、笑顔で部屋を後にしていった。言うまでもなく、政務を執るためだ。その後ろ姿を妻である皇后さまは恭しく一礼して夫を見送る。その膝には、二人の間に生まれた男の子が抱かれている。彼はまだ父親が恋しいのか、両手をピンと伸ばして、父親が行くのを止めようとしている。そんな様子を皇后さまは幸せそうな笑みを浮かべながら見守っている。

皇后さまの膝に抱かれていた男の子が不意にそこから飛び出し、トテトテとおぼつかない足取りで父親の後を追う。だが、すぐにぺたりと転んでしまった。彼は起き上がると、大きな声で泣き声を上げた。そんな彼を皇后さまは再び自分の膝の上に抱き、あやし始めた。程なくして赤子は泣き止み、母親の胸元に顔をうずめる……。

そんな幸を絵にかいたような光景を見守る者がいた。黒装束に身を包んだ女性……。言うまでもなく、皇后さまを警備するオワラ衆のキュアライトだ。顔を頭巾で隠しているため、その表情は伺い知れないが、今の彼女からは、皇后さまの膝に抱かれている子供がかわいくて仕方ないと言った感情がよく見て取れる。それを証拠に、彼女の頭巾から覗く目が、とろけそうになっている。

「キュアライト」

「はっ」

不意に皇后さまに話しかけられて、彼女はいつもの冷静さを取り戻す。一旦平伏し、スッと顔を上げると、皇后さまはいつになく真剣な眼差しで彼女を見据えていた。

「願いの儀があるが、そなた、聞いてくりゃるか？」

「ははっ」

皇后さまは皇子を胸に抱いたまま、こちらににじり寄ってきた。そして、キョロキョロと周囲を見廻し、誰もいないことを確認すると、小さな声で呟く。

「あ……あげものを、あげものを、所望じゃ」

「……」

予想外の要求だった。皇后さまが言っている意味はよくわかる。そしてそれは、この御所の中にいては、入手がかなり難しいものだ。

皇后さまが所望する「あげもの」とは、言わば「からあげ」のことだった。それも、黄金鳥のから揚げだ。さらには、彼女は揚げたての、アツアツのそれを好む。つい先日、アガルタ王が遊びに来た際に持ってきたお土産のそれを食べたそのときから、皇后さまはその美味しさが忘れられなかったのだ。

しかし、御所の規則は厳しい。基本的に帝様や皇后さまといった、身分の高い人は肉は食べない仕来りになっている。唯一許されているのは魚肉であり、その他は野菜を中心とした精進料理が主食となっている。アガルタ王が持ってきたからあげも、帝様は手を付けずに、家来たちに下げ渡した。だが、皇后さまはその美味しそうな香りに我慢ができずに、キュアライトに頼んで無理に手に入れてもらったのだ。そして、その唐揚げを二人で隠れるようにして食べたあの味が忘れられなかった。

それはキュアライト自身も同様で、チャンスがあればもう一度食べたいと思っていたところだった。とはいえ、御所でからあげが食べられないわけではない。皇后さまが一言命令すれば、家来たちは不承不承ながらもそれを作ってくれることだろう。だが、そうしたところで、皇后さまが望むからあげは手に入る可能性は極めて低かった。

御所で作る場合は、黄金鳥ではなく、鶏の肉になる。それはまあ許せるとして、最も皇后さまが嫌うのは、冷めたからあげになることだった。御所では毒味役がいる。せっかく揚げたてのそれを作らせたとしても、数人の毒味役を経て彼女の許に届く頃にはすっかり冷めて、固くなりかけているのである。皇后さまが求めているものとは、程遠い代物なのだ。

皇后さまのお願いは、キュアライトにとって無茶と言えるものだった。それがバレれば、彼女とてタダでは済まない。お頭のイッカクから大目玉を食らうことはもちろん、最悪の場合、オワラ衆をクビになる可能性すらあった。しかし、キュアライトも、皇后さまと思いは同じであり、チャンスがあればもう一度食べたいと思っていた。そうした意味もあり、皇后さまのお願いは彼女にとって願ったり叶ったりのものであった。

しかし、この計画は、実行に移す直前に失敗した。国境の関所にはオワラ衆が配置され、蟻の這い出る隙も無かった。そして彼女は、お頭のイッカクから呼び出された。

「からあげは、無用」

たった一言だが、それは彼女と皇后さまの希望を打ち砕く重みを持っていた。

万策尽く、かに思えたが、チャンスはやって来た。何と、帝様が先のミトス王国との戦いの慰労会に招待され、アガルタに向かうというのだ。

帝様と共にアガルタに同行するものは三名いた。一人はオワラ衆のお頭であるイッカク。これは帝様の警備を担うと同時に、先の戦いではオワラ衆を派遣していたことから、その礼を兼ねて招待されていた。残る二人は、ポーセハイのドーキと町衆筆頭のショゲツだった。キュアライトは、ここがチャンスと踏んだ。

彼女は秘かにショゲツの許を訪ね、皇后さまからの手紙を秘かにアガルタ王に渡して欲しいと頼んだ。その理由を聞いたショゲツは、カラカラと機嫌のよさそうな笑い声を上げた。

「なんや、そんなことどすか。お安い御用やけど、そんな回りくどいことをせんでもよろしゅうおすがな。アテが兄上に話を付けたらよろしいのやろ？　まあ、心配せんかてええ。アテとあのイッカク兄上は、幼いころから仲良う育った間柄や。アテが頼んだら、兄上のことや、渋々ながらも許しておくれやろ。任しとき、任しとき」

ショゲツは密書を懐に仕舞いながら胸を張った。その自信満々の様子にキュアライトは、一抹の不安を覚えた。

数日後、帝様一行がアガルタに出発した。以前のように山を越え海を渡る旅ではない。アガルタ王が張ってくれた転移結界に乗るだけだ。ひとたびそこに乗れば、迎賓館に転移する段取りになっている。何とも便利になったものだ。

帝様は機嫌のよさそうな表情を浮かべている。久しぶりにアガルタに行けることが、嬉しくてならないようだ。だが、その後ろに控えているイッカク兄弟を見て、キュアライトは激しく落ち込んだ。

二人は目を合せようとはしなかった。それどころか、二人の間に微妙な距離ができていた。誰がどう見ても、この二人の間には険悪な空気が流れていた。

そんな様子に帝様は気付かず、淡々と、マロが帰るまで留守を頼む、とか、帰ってくるのは三日後になろう、などと話している。ふとそのとき、キュアライトとショゲツの眼が合った。

ショゲツはチラリとイッカクの顔を見ると、さも憎々しいと言わんばかりの表情を浮かべながら、ゆっくりと顔を左右に振った。その様子を察したイッカクがショゲツを睨みつける。彼女はプイッとそっぽを向いてあらぬ方向に視線を泳がせる。イッカクはなおも彼女を睨み続けた。そこからは、二人の間に憎しみに近い感情が生まれていることが伺えた。

ふと、二人の視線が同時にキュアライトに向いた。ショゲツは無表情のまま顔を小刻みに左右に振っている。一方のイッカクは、鋭い眼差しを彼女に向け続けていた。キュアライトの背中に何か、冷た

いものが流れた。

……近いうちに、田舎に帰らねばならぬ。

彼女は心の中でそう呟くと、田舎に住む母にどう言い訳をしようかと、考えをめぐらすのであった……。

第八百九話　あげもの②

キュアライトは皇后さまに、からあげを手に入れることは難しいこと、おそらく自分は皇后さまの傍を離れることになるかもしれないと、包み隠さずに報告した。しかし皇后さまは、残念そうな表情を浮かべたものの、ゆっくりと顔を左右に振った。

「私のわがままのために、すまぬことをした。そなたのことは、悪いようにはせぬによって、これからも私を守ってたも」

その言葉に、キュアライトはゆっくりと頭を下げた。

◆　◆　◆

「……ふ～ぅん。何だか色々と大変なんだな」

ショゲツから手渡された密書を読みながら、リノスは何とも言えぬ表情を浮かべた。

「そうどすのや。簡単な話を、ややこしくしているだけどす」

さも不満そうな表情でショゲツは口を開く。彼女は懐から取り出した扇子を開いて、パタパタと仰ぎ始めた。

「別に、鳥のおあげさんの一つや二つ皇后さまが召し上がったところで、何ほどのことがおますのや。先例がないとか何とかいいやすけど、そんなもん、黙っとったらわからんこっちゃ。ホンマに、ホンマにあの兄上は頭が固ぅおすわ」

そんなショゲツに、リノスは苦笑いを浮かべる。

「まあ、そうかもしれないけれど、先例は大事にしなきゃいけないというイッカクの気持ちもわからなくはないな。まあ、俺としては、自分の料理したものが気に入ってもらえているので、嬉しい限りなんだがな」

そう言って彼は笑みを浮かべた。だが、せっかくキュアライトが託してくれたこの密書も、このままでは台無しになってしまう。それはそれで可哀そうだと考えたリノスは、額に手を当てて何か考える素振りをしている。

「何を考えてあらしゃいますのや。別に考えることなどおへん。アガルタ王様、あんさんが帝様に皇后さまにからあげをやっておくれやす、と言ってもろたらええことどす」

「……まあ、そうだな」

リノスはそう言って苦笑いを浮かべる。彼は再びキュアライトからの手紙に目を通すと、ニコリと笑って、誰に言うともなく呟く。

「ああ、だから、ダメだったんじゃないのか？」

「へ？　なにがどす？」

キョトンとした表情を浮かべるショゲツ。その彼女にリノスはいたずらっぽい笑みを浮かべながら、ウインクを返すのだった。

アガルタの都で行われた慰労会は、ささやかながらも、心のこもっ

た、とてもアットホームなものだった。そこで用意されたものはいわゆるバイキング形式のもので、数多くの食材が並び、参加者はそこから好きなものを好きなだけ食べることができた。しかも、食材の前には料理人が控え、常に新鮮で温かい食事が供されるようになっていた。

このシステムを一番気に入ったのが、ヒーデータ帝国皇帝ヒートとミーダイ王国の帝様だった。ヒートは量こそ食べないものの、並べられた料理に興味津々で、次々とそれらを口の中に放り込んでいた。それは帝様も同様で、彼は料理を一つ一つ珍しそうに眺めていたが、やがて、選んだ料理を味わうようにしてゆっくりと食べていた。

そんな様子をヴァイラス公爵は何とも言えぬ表情で見守っていた。彼はこうした場でガツガツ食べることを行儀の悪いことであると考えていたため、あらかじめある程度の食事を済ませてきていた。

「何をしておるかヴァイラス。お前も食べろ食べろ」

ヒートが笑みを浮かべながら促す。ヴァイラスは苦笑いのまま、ゆっくりと頭を下げる。

「せっかく料理を作ってくれておるのだ。できる限り食さねば失礼に当たる」

そう言ってヒートは笑顔を浮かべながら料理に手を伸ばす。

この慰労会の参加者は、アガルタとヒーデータ、そしてミーダイの参加国の者たちだった。リコレットらリノスの妻たちはある程度のところまで来ると次々と姿を消し、そこにはリコレット一人を残すのみとなった。

皆の腹が満たされてくると、自然と皆の話は政治的な内容となっていった。とはいえ、常から誼を通じる国々であるために、お互いの近況と国の状況を話し合うといった、情報交換が主な話題だった。そんな中、リノスはミーダイの帝様の傍に寄ると、少し声を落として、まるで内緒話をするかのように話しかけた。

「近日中にミーダイに伺っても構いませんか？」

「おお、アガルタ王が見えられるとか。マロは一向に構わぬが……。して、何用あって我が国へ？」

「いやなに、皇后さまに少し頼まれましてね」

「オクに？　……はて？」

「いえ、少し食材を手に入れてくれと頼まれましてね。健康になる食材ですので、ご安心を。それをお届けしたいのですよ」

「おお……そういうことであれば、全く問題ない。むしろ、わざわざお持ちいただかぬでも、我が方から人をやるほどに、その者に……」

「いえいえ、たまには俺も、ミーダイの緑豊かな風景を見たいのです」

その言葉に帝様は、笑顔で頷いた。

◆　◆　◆

それから三日後、リノスは約束通りミーダイ王国を訪れた。彼は布で包まれた塊を小脇に抱えて笑顔で現れた。

「いや、すみませんね。お忙しいところお邪魔しまして」

「何の、遠慮は無用じゃ。して、それがオクの所望するものかの？」

「ええそうです」

「オクに聞いてみたが、恥ずかしいと言って答えてくれぬのじゃ。マロも何を持って参ったのか、楽しみにしておったのじゃ」

帝様は自ら先頭に立って皇后のいる部屋に案内した。彼の後ろにはオワラ衆のイッカクが付き従う。

「ささ、入ってたもれ」

案内された先には、皇后さまが皇子を抱きかかえた状態で座っていた。その後ろには、キュアライトが所在なさげに座っていた。

「オクよ、参られたぞよ」

そう言って帝様は、皇后さまの隣に座った。

「え……遠路はるばる、私めの我が儘をお聞きいただき、恐縮でおじゃります」

「いいえ、気にしないでください。俺の料理が口に合って嬉しいです」

「……」

皇后さまは皇子を抱きかかえたまま、恥ずかしそうに俯く。そんな彼女に笑みを向けながら、彼は腰に下げている小袋を取り出し、そこから鍋や鉄板のようなものを取り出した。

「これは無限収納と言いましてね。ずいぶん昔の人が拵えたものだそうです。おそらく空間魔法が練り込まれているのでしょうが、えらいもので、現在では誰も作ることができないそうです。こういうものが普及すれば、もっといろいろと便利になるのですけれどね……」

そんなことを言いながら彼は、テキパキと準備を整えていく。

「さて、皇后さまのご所望のものを持ってきました」

そう言って包み紙を開けると、そこには肉の塊があった。

「御待ち候らへ」

イッカクが口を開く。彼はリノスの前にずいっと体を寄せて、まるで諭すような口調で話しかけた。

「帝様、皇后さまには、肉は不要に候」

「ああ。それは聞いている。これは大丈夫なんだ」

そう言うとリノスは皇后さまに視線を向ける。

「本日はドラゴンの肉を持ってきました」

「御待ち候へ」

なおも食い下がろうとするイッカクをリノスは手で制す。

「確か、帝様と皇后さまが食べてはならないのは、牛、豚、鳥の肉だろう？　魚の肉はいいんだろう？　ドラゴンの肉は？」

「……」

「別にそれは食べちゃダメなリストには入っていないんだろう？」

彼は帝様に視線を向ける。帝様も首をひねっている。

「割と肉って大事なんだぞ。体を温めるし、体力もつく。特にドラゴンの肉はエネルギーが付く。ウチもよく食べるんだ」

そんなことを言いながらリノスは手早く肉を切り、卵とパン粉を付ける。同時に、フライパンに油を敷き、魔法で火を起こして温める。

肉をフライパンに入れると、何とも言えぬ香ばしい香りが漂ってきた。それを引き上げて紙の上に置いて油を切り、一口サイズに切り分けると、あらかじめ持ってきた皿に盛りつけ、それぞれの前に置いた。

「せっかくじゃから、マロもいただこうかの」

そう言って帝様はドラゴンのカツを口の中に入れる。

「……美味い！　これは、なんと美味じゃ！　おお、オクよ、そな

たも食べよ」

「は……はい」

皇后さまも続いてドラゴンのカツを口に運ぶ。その瞬間、彼女はとても幸せな表情を浮かべた。どうやらとても美味しいらしい。

皇后さまに促される形で、キュアライトもそれを口の中に運ぶ。途端に頭巾から覗いている眼が、とろけそうになっている。彼女は何度も頷きながらそれを次々に口に運ぶ。

「せっかくだからイッカク、お前も食べろ」

リノスに促され、不承不承の雰囲気を漂わせながら、イッカクはそれを口の中に運んだ。

「……美味し」

「だろ？」

「……おお、確かに、帝はドラゴンの肉を食べてはならぬという掟はない。今後は、マロもドラゴンの肉は食そうぞ。のう、オク」

帝様の言葉に、皇后さまはゆっくりと頷く。そして、リノスに深々と頭を下げて礼を言った。

「誠によろしきものを……。心から礼を申しまする。したが、私が所望したのは黄金鳥じゃが、どうしてドラゴンの肉を……」

「ああ、簡単です。それでは取り上げられる（鳥揚げられる）こと

になりますから……」

その言葉に、イッカクは思わず吹き出した。

第八百十話　三等分

「う～ん……」

リノスの屋敷のキッチン。テーブルの前に置かれた椅子に腰かけ、腕を組みながら天を仰いでいるのは、ペーリスだ。彼女がこんな様子を見せるのは珍しい。

リノス家のコック長として、今やこの家の食事のメニューの全権を任されている彼女は常に、美味しい料理を作ることに余念がなかった。そのためにいい食材を手に入れることはもちろん、味の研究も怠らなかった。主人のリノスからは無理をする必要はない、休暇はいつでもとっていいと言われているが、彼女は突き詰めれば突き詰めるほど奥の深いこの料理という世界に、どっぷりとはまっていた。

そんな彼女の頭を悩ませているのは、スープを入れる皿のことだった。

リノス家の者は皆、色々な食材がテーブルに並ぶのを好む。それはペーリスにとって、自分の料理の腕前を披露することができる願ったり叶ったりのことだった。たくさんの種類の料理をいかにスピーディーに、効率よく作り、そして、味も落とさないか……。そんなことを考えながら料理をするのが大好きだったのだ。

そんな彼女にはやりたいことがあった。数種類のスープを同時に飲ませることだ。

実はそれは一度試みたことがあった。だが、それはあまり評判がよ

くなかった。スープを飲み終わった後、別のスープをそのさらに入れてしまうと、味が混ざる。スープを飲むごとに皿を変えればよいという考えもあるが、それだと、皿の枚数が増えてしまって、あまりよいとは言えなかった。

ただ、このスープの種類がたくさん出すというアイデアは、子供たちから大好評だったし、残り物を使うことができ、さらに、美味しく仕上げることができるために、ペーリスにとっても都合がよかった。

「そうだ、皿を分ければいいんだ！」

突然、アイデアが閃いた。皿に仕切りを設けて、数種類のスープが一枚の皿で飲めるようにすればいい。二つ……いや、三つに区切れば、子供たちは喜ぶだろう。一種類でよい、というのなら、一枚のスープ皿でいいのだ。それは自由に選んでよいという形にすればいい。

「ええと、形はこうして……」

彼女は紙にアイデアを書いていく。だが、あまり気に入る形ではなかった。何より、それぞれの形がいびつだ。できれば、正確に三等分したものを作りたい……。

「こういうことは、メイさんに聞くのが一番ね」

そう言って彼女はキッチンを後にして、メイの部屋に向かった。

しばらくすると、シディーがやってきた。キッチンにいつもいるペーリスの姿が見えない。買い出しにでも行ったのかと訝りながらキ

ッチンを覗くと、机の上に何か紙が置いてあった。

「なに、これ？」

紙には不思議な形が描かれた。円形……だろうか。何かの文様にも見える。ペーリスを探してみるがいない。きっとこれはペーリスが書いたものだろう。一体、何のためにこれを書いたのだろうか。

そのとき、シディーの頭に一つの答えが閃いた。

「もしかして、家紋かな？」

よくよく考えてみれば、リノス家には家紋がない。大抵の王家には厳めしい家紋があるが、この家にはない。一度、リコ様がリノス様に進言していたが、そのときは、またの機会に……といってそれ以降、沙汰止みになっていた。

「まさか、ペーリスちゃん……」

シディーはいびつな形が描かれた紙をギュッと握り締めた……。

◆　◆　◆

「へぇー。こうやって描くのかぁ」

一方のペーリスはメイの部屋で驚きの声を上げていた。メイは読書をしていたが、ペーリスのお願いにイヤな顔一つせずに笑顔で頷き、紙とペンを取りだした。メイはコンパスを使って円を描き、そこに定規を使って三等分する直線を書き入れた。

「これです、これです。ちゃんと三等分できていますね！　ありがとうございます！　早速、これでお皿を作ってもらいます」

ペーリスはそう言って部屋を後にした。

メイは机に置かれたコンパスを片付けようと手に取った。ふと、この道具を使うのは久しぶりだと思った。彼女はもう一度コンパスを使って紙に円を描いてみた。

とてもシンプルな道具だが、便利なものだ。これを作った人は素晴らしいと思いつつ、今書いた円を眺める。

……そう言えば、円を三等分するのであれば、なにもあの形だけではないわね。

確かに横に線を引いても三等分することはできる。他にもいろいろ方法はありそうだ。そういうことを探してみても面白いかもしれない。やはり、数学は面白い……などと考えていると、再び部屋の扉がノックされた。

てっきりペーリスが戻ってきたのかと思って入室を促すと、入ってきたのはシディーだった。彼女の手には一枚の紙が握りしめられている。

「ねえメイちゃん。アガルタの家紋を作ろうと思うんだけれど……」

「家紋？」

「ほら以前、家紋を作る作らないっていう話をリノス様とリコ様がしていたでしょう？　アガルタもそれなりに大きくなってきたとこ

ろだし、そろそろ家紋を作った方がいいんじゃないかって思ったんだけれど……」

そう言ってシディーはメイの許に握り締めていた紙を広げた。そこにはいびつな円の中に、数本の直線が引かれていた。その一部は三角形となっているものもあった。

「これ、ペーリスちゃんが書いたんだと思うんだけれど……。ちょっと彼女の書いた形に色々と書き足してみたんだけれど、何か、いいアイデアないかな？」

正直、突然のことでメイは面を食らっていた。だが、シディーが直感的に行動を起こすときは、失敗もあるが、大きな成功につながる場合も多い。きっとこれは、何かにつながるかもしれないと思い、広げられた紙に視線を向ける。

……これはきっと、先ほどのお皿のアイデアだ。自分で描こうとして描き切れずに、私のところに来たのだ。それをシディーに伝えようとしたそのとき、円の中に描かれている三角形が、正三角形に見えた。しかもそれは、二つ描かれている。

メイの頭の中に何かが閃いた。正三角形の頂点から線を引くと、そこは直角となった。さらに線を引くと、直角三角形となった。この三角形を組み合わせていけば、今まで見たこともないような、円の三等分ができるのではないか。

「メイちゃん？」

「ええと、まずはこの円の面積を出して。そして、この三角形の面積を出すと……」

突然メイが定規をもって円の中に三角形を描きだし、その面積を求め始めた。シディーは一瞬面を食らったが、彼女としても数学は嫌いではない学問だ。むしろ、得意なものの一つに入る。彼女はメイの作業にじっと眺める。

「あ、それ。直角二等辺三角形になるよね」

「え？　どこです？」

「ほら、そこから補助線を引くと……」

「あ、本当ですね」

「メイちゃん」

「はい」

「何をするつもり？」

「ああ、ごめんなさい……。さっきペーリスさんが円を三等分する方法を教えて欲しいと言ってきたので教えたのですが、もしかすると、三角形や他の図形を組み合わせると、別の方法で三等分できるんじゃないかと思いまして……」

「え？　何それ、面白そう……。いいえ、できるよ。根拠はないけれど、できそうだよ」

「そうですよね！」

二人はそれから時間を忘れて熱中していった。

◆　◆　◆

「リノス様、お話があります」

リノスがダイニングの椅子に腰かけながら夕食ができるのを待っていると、メイとシディーが一枚の紙をもってやって来た。二人は何か清々とした表情を浮かべている。

「どうした？」

「家紋の案ができました」

「家紋？」

訝りながら渡された紙を見ると、そこには円が描かれ、その中には複雑な図形が組み合わされていた。さらには、円の外には複雑な数式が書き込まれていた。

「これは形はいびつですが、正確に三等分されています。それは、この数式を見れば明らかです。アガルタも、色々な種族の者が集まっている国ですが、それぞれが協力し合うことで、円満な国になるようにという願いを込めています。どうでしょうか？」

「あ、ああ……考えておく、よ」

リノスは何とも言えぬ苦笑いを浮かべて返答した。これを家紋に採用するのはいいのだが、果たしてこれを具現化できる者がアガルタにいるのか……。リノスの心には、そんな心配がよぎっていた……。

第八百十一話　マナー

「大帝陛下におかせられましては麗しきご尊顔を拝し、恐悦至極に存じ上げ奉ります」

「うむ、苦しゅうない。ああ、皆の者も苦しゅうないぞ。楽にいたせ」

国王リイジは上機嫌だった。目の前に並んでいるのはいずれも、一国の王たちだった。それらの者が全員、深く首を垂れている。一人一人に視線を向けてみるが、誰もリイジを見ていない。皆、一様に視線を床に向けているのだ。

その彼の前に控えているのは、アガルタ王リノスだ。彼は緊張した面持ちで首を垂れている。

「リンデーズ」

「あの、大帝様……。恐れ入りますが、今の私の名は、バーサーム・ダーケ・リノスでございます」

「存じておるわ」

リイジはカラカラと声を上げて笑う。そして、優しい眼差しを浮かべると、リノスに向かって語りかけた。

「これよりそなたは、元の名であるリンデーズを名乗るがよい。そなたの父と母が付けてくれた名じゃ。それにその名は、余とそなた

を繋ぐ名前でもある。ここらで今は絶家となっているラウストの名を復活させるのじゃ。それが、亡き父への供養でもあろがな」

「はっ、承知いたしました。それでは畏れながら、本日ただ今をもって、私は遅々の名跡を継ぎ、ラウスト・ダーケ・リンデーズと名乗らせていただきます」

「うむ。そうせい、そうせい」

「大帝様の深いお情けを頂戴しまして、喜びに堪えません。本日は至らぬ点も多いかとは存じますが、どうぞ、お寛ぎいただければと存じます」

「うむ、苦しゅうない。苦しゅうないぞ」

リイジはそう言って高らかに笑った……。

◆　◆　◆

「……」

気がつくとリイジはベッドに横たわっていた。先ほどの光景は一体何だったのだろうか。彼はぼんやりとした頭を働かせようとする。

いつもの自室だ。毎日寝起きしている自室だ。周囲には誰もいない。先ほどの光景は夢だったのか……。

リイジは起き上がると、大きなため息をついた。

一度、現実になるのではないかと期待した夢だ。宰相からはその夢

はあきらめろと諭されたが、リイジにとっては、諦めても諦めきれない夢だった。

……いや、世界の王になるという夢が完全に終わったわけではない。あのリンデーズが思い出せば、あるいは。

リイジは決心した。別に口に出すことはしないが、世界の王となる夢は心の中に持ち続けようと。その準備をしておくくらいは、文句はないはずだ。

そんなことを考えながら、では、何を準備すればよいのか。彼の頭の中には、アガルタで面会したあの、リンデーズ夫婦の光景が描き出されていた。

特に目についたのが、あのリコレットという女性だった。その振舞い方や佇まいは、まさに、大国の皇后と言って差し支えなかった。別にあの女性をどうこうしたいという思いはない。むしろ、リイジにとって一番苦手とする女性だ。しかし、あのちょっとした仕草や振る舞いは、リコレットはもちろん、その隣の夫まで、神聖にて犯すべからず存在であると思わせていた。

……余が身に付けるべきはあれじゃな。

リイジは心の中でそう呟いた。そして、ゆっくりと手を二回鳴らした。

「……」

誰も来なかった。それはそうだ。これまで手を鳴らして家来を呼んだことはない。いつもは起きたらすぐに部屋を出て顔を洗う。たま

にそれをしないこともあるが、ともかく、朝起きたら部屋を出て着替えの間に向かう。そこに家来が控えていて、着替えを済ませ、朝食となるのだ。だが彼はそれでも、もう一度手を鳴らしてみた。

「お呼びになりました？」

侍女が、ノックもせずに扉を開けて顔をのぞかせた。ペリアだ。もうこの城に仕えて長い。すでに初老に差し掛かろうとしている女性だが、その表情からは、つまらないことをして仕事の邪魔をしないでくれと言った感情がありありと見て取れた。

「……」

手を鳴らして人を呼んでみたが、特に用事はない。さて、どうしようかと考えていると、ペリアは少し怒気を帯びた声でリイジに話しかけた。

「早く着替えちゃってくださいな。朝食もできていますから、早く食べちゃってください」

彼女はそう言うとバタンと扉を閉めた。リイジはゆっくりと首を左右に振った。

これがアガルタであったならばどうだろうか。きっと、美しい女官が現れて、おはようございます国王陛下と恭しく一礼するに違いない。そして、その日の予定を述べ、朝食を運んでくるに違いない。それに比べて今のあの振る舞いは何だ。まるで家人への振る舞いではないか。

以前のリイジであれば、ペリアを怒鳴りつけたことだろう。だが、

今の自分は違う。世界の王たらんと決心した自分は、そんな行儀の悪いことをしない。逆に、礼儀を教えてやるのだ。

そんなことを考えながら彼は服を着替え、執務室に向かう。椅子に腰かけるが、特に何もやることがない。しばらくそのままでいると、宰相が慌てた表情を浮かべながら入室してきた。

「何かございましたか、国王様」

何かございましたかと言われたが、特に何もない。朝食を済ませてから執務室に足を運ぶのはかなり久しぶりのことだ。宰相が慌てるのも無理はない。

「相談がある」

「そ、相談!?　何の、でございますか?」

そんなに慌てることだろうか。国王たる自分が宰相に相談することがあっても不思議ではないではないか。そんなことを思いながらリイジは口を開く。

「余も少し、行儀作法を見直そうと思ってな」

宰相ムーラは安心した表情を浮かべる。

「それはよいことかと存じます。で、何の行儀作法を習われるので?」

「何の?　行儀作法に種類があるのか?」

「はい。例えばテーブルマナーであるとか、立ち居振る舞いであるとか……。まずは国王様、いつものガニ股で大股で歩かれるのを直してみてはいかがでしょうか」

「余はそのような歩き方はせぬ」

「……」

「寧ろ、世界の王としての振る舞いを身に付けたい」

「は？」

「いや、王として威厳のある振る舞いを身に付けたいのだ」

「承知しました。では、城下に人を募ってみます」

「うむ、苦しゅうない」

「……」

宰相は何とも言えぬ表情を浮かべながらその場を後にした。

その講師はすぐに見つかった。たまたま訪れていたルワラル王国の使者であるロムロス女史がその役を買って出てくれたのだ。宰相ムーラは早速彼女を国王リイジに紹介した。

「何も難しく考える必要はございませんわ。行儀作法は、習慣でございます。私が基本的なことをお伝えしますので、国王様は毎日それを繰り返すだけでよろしいのですわ」

ロムロス女史はそう言って笑みを見せた。そのさわやかな笑顔に、国王リイジはたちまち心を開いた。

◆　◆　◆

「まずは立ち姿です。背中をピンと伸ばします。肩を張ったほうがよろしいですわ」

「こ……こうか？」

リイジは早速そう言って背筋を伸ばす。だが、いつも姿勢の悪い彼がいきなり背筋を伸ばすと、腰や肩に痛みが走る。

「違う！　腰！　腰ィ！」

ロムロスは懐から短い鞭のようなものを取り出して、それで強かにリイジの腰を打った。予想外の痛みに、彼は顔を歪める。

「そ……そのような手荒な……」

「これが一番手っ取り早いのです。痛みがあれば、矯正も早いものです。さ、国王様」

リイジは困惑しながら背筋を伸ばし、肩を張る。

「そうそう。そうでございますわ国王様。その調子です」

「お……おお」

「姿勢は大事でございます。何より健康にもよろしゅうございます。

私は仕事柄色々な国にお邪魔しますが、最も姿勢が美しかったのは、クリミアーナ教国のヴィエイユ教皇聖下でございました。国王様にはその美しい姿勢をご伝授申しますわ」

「う……ああ……」

国王リイジは程なくして練習を諦め、いつもの生活に戻った。

第八百十二話　王様ごっこ

「なに、隣国ヒダにおいて謀反が発生したか！　うむ、それはいかんな。すぐに軍勢を派遣するのだ」

「なに、アキツにおいて作物が不作とな。ううむ、領民どもは苦しかろう。ああ、よいよい、儂が命じてな、食料を届けさせるほどに。ええい、言うな。儂の命である」

そんな話が聞こえてくるのは、国王リイジの部屋からだ。一見すると、心を入れ替えて国内の政治に向き合っているのかのように見えるが、部屋の中にはリイジ以外は誰もいない。彼は椅子にふんぞり返って座りながら、誰もいない部屋の中で一人、そんなことを呟き続けていた。

言わば、「王様ごっこ」だ。他人が見れば噴飯物の光景だが、リイジは割と真剣にその芝居を演じていた。

その様子は周囲の侍女たちもすでに気がついていた。だが、彼女たちは敢えてそれに触れようとはせず、見て見ぬふりを決め込んでいた。そしてリイジをまるで、腫れ物に触るように扱うようになっていた。

宰相ムーラはその話を聞いたとき、ようやく政治に関心が芽生えたかと少し期待を持ったが、リイジは相変わらず部屋にこもったまま執務室に出てくることはなかった。彼は再び期待を裏切られる形となったが、それもいつものことで慣れたことだ。宰相ムーラは自分にそう言い聞かせて、頭の中を切り替えた。

国王様は気が狂れた……。

リイジの周囲の者たちは一様に、そんなことを言い合うようになっていた。

◆◆◆

そんな中、リイジに話しかけて来る者がいた。ベリアだ。彼女はいつもと変わらぬ様子でリイジに接していた。

「国王様、今夜はどうなさいますので？　エルモ様ですか？　カレン様ですか？」

「どちらでもよい」

「ではエルモ様でよろしいですね？　で、エルモ様がダメならカレン様でよろしいですね？」

ベリアの言葉にリイジは何の反応も示さない。このところ、妃たちも彼の伽に応えることがなくなっていた。それもあってリイジはイライラを募らせていた。

「たぶん、どちらの方もおいでにならないでしょうけれど」

「黙れ！」

ベリアの一言が国王リイジの逆鱗に触れた。彼は怒りをあらわにしながら立ち上がった。

「余はそなたに国外追放を命じる！　今すぐこの国から出て行け！」

「出て行けと言われれば出て行きますよ。ええ。私ももう年ですしね。そろそろ楽隠居したいと思っていたところですよ。私は大丈夫ですが、国王様は大丈夫ですか？」

「何がだ！」

「今、この城の中で国王様に話しかけられるのは私だけですよ。私がいなくなれば、誰も国王様に話しかけることはなくなりますよ。それどころか、何とかお妃さまを説得して、国王様の伽をしていただくようにする者もいなくなりますが、それでもよろしゅうございますか？」

「きっ、貴様は、なっ、何を……」

ベリアはフンと鼻を鳴らすと、それまでリイジが座っていた椅子にドカリと腰を下ろした。

「思えば長くなりましたね。私がこのお城にお世話になってから。ええ？　リイジちゃん」

ベリアはそう言うと大きなため息をついた。

「私をクビにするのは結構だけれどね。私にこの城にいてくれと頼んだのはアンタだよリイジちゃん。忘れたとは言わせないよ」

その言葉にリイジはバツの悪そうな顔をしてプイッとそっぽを向く。

「また年端もいかなかった私を手籠めにして……」

「待て！　お前が誘ったのだろうが！　儂はお前に誘惑されたのだ！　お前は生娘ではなかった！」

「フッフッフ。私が男にしてやったんだよねぇ。今となりゃ懐かしい話だわね」

ベリアはカラカラと笑い声を上げる。その様子をリイジは歯ぎしりをしながら睨みつけている。

「でもね、私にこの城にいてくれと頼んだのは、アンタだ。それは間違いないよ。正妃のジワラ様との間を取り持つ者が私しかいないと言って拝み倒したのは、アンタだよ」

「そ、それは……」

「それにアタシがこの城にいるのは、先代陛下の頼みもあるんだ。正妃のジワラ様をしくじれば、ご実家のカルワサ帝国から侵攻される可能性があったからねぇ」

「カルワサはもう滅んだ。今は……」

「それだけじゃないよ。先帝陛下とお妃さまは私に、リイジを頼むと言っておいでだったんだ。だから私ぁ嫁ぐことを諦めてアンタに仕えたんだ」

……どの口がそれを言うのだ、という言葉をリイジは飲み込んだ。このベリアは若い頃、色々な男に色目を使っていたのだ。結局、その派手な男遊びのために、誰もこの女を嫁にしなかったのだ。

そんなリイジの心は知らないとばかりに、ベリアは言葉を続ける。

「それにね、アンタとお妃さまたちの仲を取り持っているのはアタシだよ？　そんなアタシによくもそんな口が利けたもんだね。アタシがいなくなれば、本当にアンタの伽を勤めてくれる者はいなくなるんだよ？　それでもいいのかい？　アンタのことだ。若い侍女たちを力づくで手籠めにしようとするだろうけれど、お生憎様。シアルもレイもそれなりに腕が立つからね。大人しそうに見えるけれど、腕っぷしじゃあアンタは勝てないよ」

「貴様……」

「あのね、リイジちゃん」

ベリアは立ち上がるとスッと顔をリイジに近づけた。彼は思わずのけぞる。

「気持ちはわからなくはないけれど、もう、王様ごっこは止めたらどうだい？」

「……」

「いや、別にやるなと言っているんじゃぁないよ。やってもいいけれどもさ、もっと小さな声でおやりよ。あんな大声でやられちゃあ、こっちも何か怖いんだよ。いや、別に盗賊のような怖さじゃあないよ。何だろうね……。突然脱ぎだすような怖さを感じるんだよ。わかるかい？」

「くっ……」

「私ぁ悲しいんだよ。アンタはアンタでこの国のことを真剣に考えている。だけれども、他の皆はそんなことを知らないんだ。アンタをバカな王様だと思っている。この国のことなど何にも考えちゃいないと思われている。あの、アガルタ王の一件だってそうだろう？　アンタはアガルタよりも上位の王様になれると思ってた。それは間違いないだろうけれど、アンタはそうなればこの国が、周りの国がもっと豊かになるし、そうできると考えてた。だからあのアガルタにこだわるんだろう？　今までの王様ごっこだってそうだ。単に自分の欲望を満たすだけじゃないだろう？　この国と周りの国々のことを考えてのことだろう？」

「ううっ」

「気持ちはわかるよリイジちゃん。あんただって最初は国政に関わろうとしたんだ。でも、アンタの意見や考えはことごとく否定された。それがためにアンタは国政に携わるのを止めたんだ。自分は必要ないと思ったんだ。そりゃそうさね。誰だって自分の考えを否定されりゃ、やる気はなくなるってもんだわね」

ベリアの言葉にリイジは唇を噛みながら、泣きそうな顔になっている。

「でもね、リイジちゃん。アンタは国王なんだ。アタシは一介の侍女だけれど、アンタは国王なんだ。他の者たちにはできないことができるんだ。他の人間がどれだけ努力してもてにいれられない地位を手に入れているんだ。励めば励んだだけのことはあるんだよ。それにね、今の宰相のムーラ様は、アンタに国政に携わってほしいと思っているんだ。昔のようなことはないと思うよ？」

そこまで言うとベリアは両手でリイジの両肩を掴んだ。

「どうだろうね、ここらで一つ、王様ごっこじゃなく、本当の王様をやってみたらどうだろうね。アンタの傍でずっと見続けてきたアタシが言うんだ。間違いはないよ。騙されたと思って、もう一度頑張って見なよリイジちゃん」

ベリアはそう言うと、リイジのほっぺにキスをした。

「期待してるよ、リイジちゃん」

ベリアは笑みを浮かべると、そのまま部屋を後にしていった。リイジは服の裾で何度も頬を拭いていた。

◆　◆　◆

「話はしといたよ」

「ありがとうございます」

ベリアの目の前には宰相ムーラがいた。彼はゆっくりと頭を下げた。

「まあ、どうなるかわかんなけれどね。あのリイジちゃんのことだから、しばらくは執務室に行くんじゃないかね」

「十分です。ありがとうございます」

「このお礼は期待しておくよ、ムーちゃん」

ベリアは人差し指で唇を抑えると、その指を宰相ムーラの頬に当てた。そして彼女は機嫌のよさそうな笑みを浮かべながら、その場を

後にしたのだった……。

第八百十三話　分断

リボーン大上王、メインティア王父子が治めるフラディメ王国の西隣には、ケダカ王国と呼ばれる国がある。フラディメと同規模の国土を有し、山に囲まれた国でありながら、そこから産出される金と名馬の産地として世界に名を馳せていた。さらには前王、ケダカ・イン・ザヌドは英明を轟かせた名君であり、これまで国境付近で小競り合いを続けてきた周辺のフラディメとサンダンジとの関係を和平に導いただけでなく、殖産興業を起こして国力を飛躍的に高めた王として知られていた。

その名君・ザヌド王がこの世を去ってすでに五年。後を継いだビオン王は前王の政治路線を継承して周辺国とは平和的に付き合っており、表向きは何の問題もないように見えていた。だが、内部ではあることを巡って家来たちが反目し合い、のっぴきならない状態となっていた……。

◆　◆　◆

「……それでは、宰相様はあくまで我々の意見に反対なされるおつもりなのですね？」

そう言って眉間に皺を寄せているのは、アトベだった。その隣には、ガサカという男も控えていて、アトベと同様、宰相に鋭い眼差しを向けている。一方の宰相マガタは、そんな視線を歯牙にもかけないといった様子で、あくまで冷静に彼らに向き直った。

「先ほどから申している通り、ジンの砦に手を出すべきではない」

ジンの砦とは、およそ十年前にオークによって占領された砦だった。前王・ザヌドは兵を出して砦を奪還するべきであるという周囲の意見に押される形で兵を出したが、結果的にその砦に攻撃を仕掛けることはなく、以来そこはオークの巣と化していた。

宰相マガタが砦の奪還に反対するのには理由があった。その砦の周囲はオークの集落がいくつもあり、いわゆるオークキングと呼ばれる上位種がいるとされている地域であった。前王が奪還軍を向けた際、その総司令官の役にあったのがこのマガタであり、彼は王に無断で攻撃中止命令を出し、砦から撤退していた。

通常ならば敵前逃亡を問われる行為である。むろん、マガタは死を覚悟したが、前王ザヌドは逆に彼の采配を褒め、実は自分も同じことを考えていたと言って笑った。そして王はそれ以降マダカを傍に置き、懐刀として彼を重用したのだった。

「無理に力押しで砦に兵を向ければ、間違いなくオークは反撃に打って出てくる。元はと言えば、我が軍の兵士が無差別にオークの集落に攻撃を仕掛けたために反撃にあい、結果として砦を奪われたのだ。その砦に兵を向けることは、オークたちを大いに刺激することになる。彼らが一斉に蜂起した場合、その数は優に万を超えよう。それらが攻撃に転じた場合、我が国だけでなく、周辺国たるフラディメ、サンダンジにも被害が拡大する可能性がある。そうなれば取り返しのつかぬことになる。それは先王様も懸念されていたことではないか」

「確かに先王様の時代はそうでした。しかし、今は時代が違います。斥候の知らせによれば、ジンの砦にはオークの姿はほとんど見られないとのことです。そこに兵を送り、占領して何が悪いのです。元

々は我らの砦ではありませんか。無人の砦であれば、オークを無駄に殺すことにもなりません」

「そうであっても許さぬ。それに、貴殿たちが何故、あの砦にこだわるのかが私にはわからない。あの砦をオークに渡したところで、我が国が被る被害は軽微だ。国の屋台骨が揺らぐことはないではないか」

「……」

宰相の言葉に、アトベとガサカは黙り込む。宰相の言葉はもっともなことであった。だが、この二人にも、あの砦を奪還せねばならない理由があった。

アトベとガサカの二人は、現王・ビオンの近習として長く仕えてきた。そのビオン王は、父王に比べて劣るというのが専らの評価だった。二人はそれが口惜しくてならなかった。確かに先王は優れた政治手腕でこの国を隆盛に導いた。おそらく将来は中興の祖として語り継がれることだろう。だが、二人から見てもビオン王は政治的にも軍事的にも先王に劣るところは何一つとしてなかった。むしろ、武芸においては、先王を遥かに凌ぐ力量を備えていた。その世間の評価を覆す最も効果的な方法は、成果を出すことだ。先王の時代に失われた砦を奪還することができれば、ビオン王の評価は一変する。二人はそう考えていた。

それに、彼らが砦にこだわるのにはもう一つの理由があった。それは、砦の奪還を提案したのは、ビオン王自身だったからだ。アトベとガサカとしては、王の望みを何としてもかなえてやりたかった。

それは最初から負ける戦いではなかった。敵はオークだ。豚のよう

な猪のような顔と体躯を持ち、確かに力は強いが、頭脳は人族には到底及ばない。相手が何千、何万を擁したとしても、五千の軍勢を揃えて力押しで一気呵成に砦を攻撃すれば、一日もあれば十分に奪還できる。さらには、軍勢を増援すれば、森の中に巣食うオークどもを壊滅させることさえ可能であると踏んでいた。

一方で、宰相マガタをはじめとする先王から仕えてきた宿老たちは、最初からその意見には反対だった。それは、先王が遺言として残した、「みだりに戦いを仕掛けてはならぬ」という言葉のためだった。それは単に遺言としてではなく、宿老たちにはその意味がよくわかっていた。

ジンの砦周辺は、ムービの森と呼ばれる広大な森林地帯に囲まれている。そこにはオークをはじめとする様々な魔物が住んでいた。この魔物たちは、自分の縄張りを荒らさぬ限りは、みだりに人族に攻撃を仕掛けて来ることはなかった。だが、一旦縄張りを荒らされると、彼らは命を懸けてそこを守ろうとし、侵略者たちを根絶やしにするまで執拗に攻撃を加えてくる。さらには、その縄張りは複雑に絡み合っているために、オークを攻撃したつもりであっても、別の魔物の縄張りを侵してしまう可能性が高かった。そうなれば、敵はオークだけではなくなる。それがわかっているために、先王はもちろん、宿老たちは現状維持を主張しているのだった。そして、宿老たちには、若かりし日にオークたちと戦った経験があった。彼らはあの魔物の執念深さをイヤという程に知っていた。それがために、あの魔物は敵に回すべきではないと考えていたのだった。

だが、アトベとガサカ、そしてビオン王たちはオークと戦った経験がなかった。そのために、彼らには宿老たちの言葉は耳に入らず、むろん、先王が残したもう一つの遺言である、「何事も宰相マガタに相談せよ」という言葉の意味も理解することがなかった。宿老た

ちは先王と共に数多くの戦いに出、多くの困難を共に乗り越えてきた実績があった。それだけに、ビオン王ら若い者の言うことは、あまりに非現実的な話でしかなかった。

……この佞臣めらが。

宰相をはじめとする宿老たちは、目の前で鋭い視線を向け続けているアトベとガサカの二人を眺めながら腹の中で、そんな言葉を呟いていた。彼らからすれば、この二人は獅子身中の虫と言ってよかった。彼らこそが現王を堕落させ、国を危うい方向に導こうとしている張本人であると映っていた。一方でアトベやガサカらにすれば、目の前で冷たい眼差しを向け続ける老人たちは、目の上のたん瘤であり、ビオン王が真の政治を行うためには、一刻も早く排除するべき者たちであった。特に宰相であるマガタは、先王から「我が眼」と評されたことをかさに着て、ビオン王の政策をことごとく否定する厄介者であった。

一見一枚岩に見えているこの国の内部では、宿老たちと若い王とその側近たちの間では深い溝ができつつあった。そしてそれが、歴史に名を遺す事件に発展していくのであった……。

第八百十四話　追いかけっこ

ケダカ王国国王ビオンは、城の馬場にいた。愛馬に跨り、思いに任せて馬を走らせていた。

彼はどちらかと言えば、体を動かすことが好きな男であった。こうやって思いのまま馬を駆っていると、嫌なことがすべて吹き飛んでいくような感覚を覚えるのだった。

「国王様。国王様！」

自分を呼ぶ声がする。せっかくの時間を邪魔されたビオンは軽く舌打ちをする。馬を止めると、小走りに近づいて来る者が見えた。近習を勤めているアラタだ。

「申し上げます。アトベ様とガサカ様が戻っておいでです」

片膝をついて控えているアラタに、国王ビオンは鋭い視線を向けながら口を開く。

「何か言っておったか」

「いいえ、何も……」

ビオンはフンと鼻を鳴らすと、馬首を返して馬を走らせた。

◆　◆　◆

自室に戻ると、アトベとガサカが控えていた。その様子をチラリと見ると、ビオンは少し笑みを浮かべた。

「首尾はどうであった？　フフフ。言わなくてもわかる。お前たちの顔に書いている。うまくいきませんでした、とな」

そう言って彼はカラカラと笑った。アトベとガサカはさも悔しそうな表情を浮かべながら、身を乗り出すようにしてビオンに語り出した。

「笑い事ではございません国王様。宰相以下、老人たちは全く我々の話に耳を貸そうと致しません。まったくもってヤツらは国王様を蔑ろにしております」

「フフフ、さもありなん。老人たちは父上の遺言に囚われておるからな。ご遺言の叛くのは先王に叛くこと……。その言葉を何度聞いたことであろうな」

国王ビオンはフッフッフと苦笑いをする。ふと見ると、彼の表情はいつしか引き締まったものとなっていた。

「だが、自国の領土がどんどん魔物に浸食されておると言うのに、そのまま何もせぬ、というのは、全くの敗北主義である。そのような了見で、先祖に申し訳が立とうか」

ビオンは目の前に控える二人に、まるで諭すような口ぶりで語りかけた。

「我が国の今があるは、先祖が苦労して国土を切り開かれたからだ。その先祖の血と汗と涙で開いた国土を、あろうことかオークら魔物

によって浸食されている。これを国の恥と言わずして何とする。受けた恥は……雪がねばならぬ」

国王ビオンの言葉に、アトベとガサカの二人はゆっくりと頭を下げる。

「そこで、です。国王様」

ガサカが懐から紙を取り出して、机の上に広げた。そこにはジンの砦の周辺地図が描かれていた。彼は砦を指さしながら言葉を続ける。

「斥候からの報告によりますと、現在、ジンの砦にはオークらの姿は見えないとのことでございます。ヤツらは砦を放棄したのです。無人の砦に兵を送って何が悪いことがありましょうか。今すぐ兵を送るべきです」

「うむ。砦はよいとして、その周辺はどうだ？」

「ハッ、落ち着いているとのことでございます」

「国王様」

これまで黙って聞いていたアトベが静かに口を開く。国王ビオンとガサカはアトベに視線を向ける。

「今こそ砦を奪還する好機かと存じます。砦はもぬけの殻なのです。別に国軍を動かす必要はないでしょう。国王様の親衛隊一千で十分でしょう。速やかに砦を占領し、しかる後に砦を難攻不落の要塞とするのです。さすれば、国内の国王様への評価は大きくかわりますし、老人たちの眼も覚まさせることができるかと存じます」

国王ビオンは大きく頷くと、馬を曳けと大きな声で命じた。

◆　◆　◆

国王ビオンが親衛隊を連れてジンの砦に向けて出陣したと聞いて、宰相マガタは顔色を変えた。彼はすぐさま国軍に命じて国王の後を追うように命じた。

「愚かな……。砦にオークがいないからと言って、ヤツらが砦を放棄したことにはならぬ。それはあくまで我ら人族の価値観だ。オークらはあの砦を自身のものであると認識している。そこに兵を向けて占領したとなると、ヤツらは必ず蜂起する。我々を縄張りを荒らす侵略者と見なすだろう。急げ、何としても国王様をお止めするのだ！」

宰相の言葉を最後まで聞くことなく、宿老たちは動き出していた。

一方の国王ビオンは、ジンの砦までの最短距離を進んでいた。道なき道に馬を走らせていたため、通常よりもかなり早く距離を稼ぐことができていた。彼はチラリと後ろを振り返りながら、自らが鍛えた親衛隊の出来栄えに満足していた。

率いている一千の親衛隊は、全員が馬に乗っていた。その一千の騎馬隊は、通常ならば通ることのない悪路も、全く問題なく進むことができていた。さらには、川なども飛越するなど、かなりの練度の高さも示していた。

国王ビオンは少し後悔していた。別にこの出陣に後悔していたわけではない。もっと多くの兵士を連れて来るべきだったと考えていた。

宿老・シュリが総司令官を勤める国軍と、自らが鍛え上げた親衛隊の馬術の練度は、天と地ほどの差がある。おそらく国軍の騎馬隊はこのルートを進むことはできない。国軍を、あのシュリの老人を連れてきていれば、彼らは親衛隊の練度に舌を巻くことだろう。そして、そうした兵を訓練することができる国王の手腕に注目することだろう。そうなれば、これまでのような物言いは影をひそめることだろう。何とも惜しいことをしたものだ、と彼は心の中で呟いた。

ジンの砦を陥落させるのは赤子の手をひねるよりたやすいことだ。単に兵を砦に入れるだけでよいのだ。それこそ、子供でもできる芸当だ。それだけに、単に砦を取り戻すだけでは、あの老人どもを黙らせることはできない。まるで風のごとく、まさに疾風怒濤の速さで砦を陥落させてこそ、あの老人たちを黙らせることができるのだ。彼が道なき道を進んで、一刻も早く砦に辿り着こうとしているのは、そうした狙いがあった。

「国王様」

疾駆する彼の隣に馬を進めて来る者がいた。マキだ。近習の一人として使えているが、馬を操る腕前はその中でもピカいちの男だ。王の隣に馬を進めるなど、本来は無礼な行為に当たるが、国王ビオンは全く構うことはなかった。

「何だ、マキ」

「まもなく日が暮れます。この先はムーブの森に差し掛かります。一旦兵を休めて、砦には明朝にはいられてはいかがでしょうか」

「フッ。マキとしたことが。朝まで待っていては、老人どもに追い

つかれるわ。このままジンの砦まで進む」

「で、あれば国王様。本日はジンの砦に入られまして、そのまますぐに森を出られませ。砦には我が国の旗を立てれば十分でございましょう。恐らく我らの後はシュリ様が追いかけて来ることでしょう。そのシュリ様と合流して明日砦に向かわれませ」

「いや、砦に入ってそのままとどまる」

「国王様、それは危険……」

「わかっておるわ。砦に入ってしばらく待てば、シュリの老人が追いかけてこよう。我らは砦でシュリら国軍の兵士たちを迎え、しかる後、城に戻ることとする」

「シュリ様は追いかけて来られるでしょうか」

「どういう意味だ」

王の双眸に殺気が宿っているのをマキは見た。彼は咄嗟に言葉を飲み込んだ。

「いえ……。我らは彼らの予想を超える速さで進んでおります。国軍の足では、我らに追いつくのは朝になるかと……」

「フ、フフ、フハハハハハ！」

国王ビオンは機嫌のよさそうな声で笑うと、愛馬に鞭を当て、さらに速度を上げた。マキはその後ろ姿を見守りながら、強い後悔の念を覚えていた。

……夜になって我らがムーブの森に入ったとなれば、シュリ様たちは森に入ってこない可能性がある。その間に魔物たちに攻撃されたら、我らは袋のネズミになる。

マキは頭を左右に振りながら、そんなことはないと自分に言い聞かせた。だが、その不安は杳として消えることはなかった……。

第八百十五話　ジンの砦

国王ビオンが率いる一軍は、程なくしてムーブの森に着いた。太陽はすでに西の方向に傾き始めていた。

「国王様、これより先は私が先導いたします」

森の前で馬を止めたビオンの前に一人の男が進み出た。斥候隊長のカルワだ。国王ビオンはその必要はないと言いかけて言葉を飲み込んだ。

ジンの砦までは一本道であると聞いた。だが、目の前には鬱蒼とした森が広がるばかりで、そうした道らしいものは見当たらなかった。こうした深い森の中に入るときは注意しなければならない。方向がわからなくなり、ヘタをすると中で遭難する可能性すらあることを、彼は幼い頃の座学で学んでいた。

「砦までは一本道で、道に迷うことはありませぬ。しかし、獣道でございますゆえ、かなり狭くなっております。私が先導しますので、国王様はその後からおいで下さい」

カルワの言葉に、国王ビオンは鷹揚に頷く。

一軍はカルワの先導に従って、二列縦隊でムーブの森に入った。森の入る直前から獣臭が鼻をついた。それは、中に入るとさらに強くなった。

森の木々は高く、それがために陽の光がかなり遮られていた。まだ

外は明るいのに、森の中は薄暗かった。国王ビオンは本能的にこの森の危険性を察知したが、目の前を悠然と走るカルワの馬を見ていると、引き返せとは言えなかった。

一軍は粛々と道を進む。どのくらいの時間が経っただろうか。突然、カルワが馬を止めた。

「ジンの砦に到着しました」

よく見ると、石を積み上げたような建物が目の前にそびえていた。カルワは馬を降りて砦に近づき周囲を伺っていたが、やがて国王ビオンの前にやって来ると、片膝をついて彼を見上げた。

「どうやらオークらはいないようでございます。砦を接収しましょう」

ビオンはゆっくりと頷き、周囲にいた者たちに旗を持てと命じた。

ビオンらは手に松明を持って砦に入った。もともとこの砦は、隣国であるフラディメ王国との国境を示すために作られたものだった。そのため砦自体は小規模なもので、二十人程が入ると、そこはいっぱいになった。残った兵士たちは周辺から木々を集めて篝火を焚きだし、砦の周囲を固めた。

中は散らかってはいるが、予想したほど汚れてはいなかった。長くオークらの巣と化していたために、中はそれこそ彼らの糞尿で悪臭が立ち込めているのではないかと思ったが、どうやらそれは杞憂であったようだ。

だが、まったく人の手が入っていなかったために、床は土で汚れ、

壁は蔦に覆われていた。国王らは足元に注意を払いながら、一歩ずつ屋上に繋がる階段を上った。

「おお……」

屋上に出ると思わず声が漏れた。森の彼方に見事な夕陽が落ちていく光景が広がっていた。その美しく雄大な景色に、国王一行はしばしの間見とれていた。

「さ、国王様」

カルワの声で我に帰る。国王ビオンは右手をスッと上げる。すると、周囲に控えていた者たちが恭しく国旗をそこに立てかけた。

「ただ今をもってこのジンの砦は、我がケダカ王国の許に還った！」

ビオンの声に、兵士たちは歓声を上げて応えた。その大音声は、この広い森全体に響き渡るようであった。ビオンは満足そうな笑みを浮かべながら頷いた。

万感の思いがビオンの心の中にあった。この素晴らしい夕焼けの景色と森に響き渡る雄々しき大音声……。これを肴に酒を飲むことができれば、どんなによかったことだろうか。たとえ、街中で売られている安い酒であっても、この景色の中であってはおそらく、極上の酒に生まれ変わるだろう……。国王ビオンはいつも愛飲している酒を持参しなかったことを心から後悔した。

「国王様」

不意に話しかけて来る者がいた。マキだ。彼は片膝をついて畏まり

ながら、ビオンに真っすぐ視線を向けた。

「まもなく日が暮れます。いかがなさいますか？」

「……老人どもは」

「未だ姿が見えませぬ」

「……」

「国王様、先にも申しましたように、国軍の者どもは我らの予想をはるかに下回る速度でこちらに向かっているものと思われます。このままでは、国軍が我らに合流するのは深夜になる可能性がございます」

「深夜、か」

「はい。シュリ様らはこの砦に向かうことでしょう。しかし、深夜に森の中を行軍するなどは自殺行為です。我ら親衛隊のように高い練度があれば別ですが、今の国軍では……」

「ふむ。マキ、貴様の言う通りかもしれぬ。練度と士気の低い兵士たち、加えてそれを指揮するのは老いぼれのシュリ総司令官だ。どの程度の軍勢を連れてきているのかは知らぬが、多くの兵が命を落とすやも知れぬな」

「左様でございます。ここは我らが森の外でシュリ様たちを出迎えてはいかがかと存じます」

国王ビオンは顎髭を撫でながら、何かを考えていた。そのとき、ア

トベとガサカが王の前に控えた。

「何をお考えになることがあるのです国王様。我らはこの砦に留まればよろしいのです」

「アトベ様！」

「マキ、貴様は優しすぎる。総司令官のシュリ殿には、己が力を知ってもらわねばならぬだろう」

「……」

「国王様、この砦でシュリ殿をお待ちなさいませ。確かに森の中を夜中行軍することで、何名かの兵士は命を落とすことでしょう。しかしそれは、兵の練度の問題であって、その程度の兵士しか育成できなかった総司令官に責任があります。ここは、シュリ殿を追い落とす好機でございますぞ」

「お待ちください」

「国王様！」

なおも引き下がろうとするマキを押しとどめるように、アトベは国王ビオンに決断を促す。

「しからば、しばしここでシュリの爺を待とうぞ」

国王の言葉に、その場にいた者は全員、静かに頭を下げた。そんなことをしているうちに、日が暮れたのか、辺りは徐々に暗くなっていった。

国王のいる周囲にも篝火が焚かれた。おそらく、今はこの砦全体が篝火が焚かれているので、遠目からも砦の様子がよくわかる状態になっている。国王ビオンは、シュリの老人がこの砦を発見するのは、そう遠くない時刻だと考えていた。

そのとき、犬の遠吠えのような音が聞こえた。それは単なる魔物の本能から発せられた鳴き声であるかのようにも聞こえ、また、何かの合図であるかのようにも聞こえた。

◆　◆　◆

「国王様はムーブの森に入られたというのか！」

馬上で怒りをあらわにしているのは、総司令官のシュリだった。彼はキリキリと歯ぎしりをしながら、夜目に黒々と見えるムーブの森を睨みつけた。

「愚かな……。夜の森の中は魔物どもが跋扈する世界。人族が太刀打ちできるものではない」

シュリはそう言って天を仰いだ。

だが、彼は軍勢を率いて森に入るような愚策は採らなかった。まず、宰相マガタに急使を立て、国王が森に入ったことを伝えた。彼が使者に命じたのはたったそれだけだった。先王の頃から数多くの修羅場をくぐってきた宿老たちには、多くの言葉はいらなかった。宰相マガタは国王が森に入ったと聞いた瞬間から、最善の対策を打つことだろう。それはむろん、国王が森の中で死んだ場合のことも含めて……。

そうしておいてシュリは、森の周囲に篝火を焚かせた。それは森の中から魔物たちが出てくるのを防ぐと同時に、中にいる王とその親衛隊に、国軍の位置を知らせる意味もあった。もし彼らが魔物に襲われた場合、この篝火は救援部隊がいるという目印になる。そうしておいてさらにシュリは、国軍の中でも最も腕の立つ者を五名集め、その者たちにジンの砦に向かうように命じた。

「魔物たちが動き出す前に国王様をお連れするのだ、急げ！」

ちょうどそのとき、再び遠吠えが聞こえた。

第八百十六話　襲撃

パチパチと篝火が焚かれる音が響いている。聞こえてくる音といえばそのくらいだ。闇と共に静寂が訪れていた。そして、気温が急激に下がってきているのを感じる。国王ビオンは、兵士たちに命じてこの砦の周囲に篝火を焚かせたことに満足していた。火が燃えている間は、兵士たちも凍えることはない。彼らはこの炎で暖を取り続ければよいのだ。

ビオンはゆっくりと天を仰ぐ。空には満天の星空が広がっている。いつも見ている星だが、空気が澄んでいるためか、いつもより大きく見える気がする。何とも美しい景色だ。

息を吐き出しながら、視線を篝火に向ける。ゆらゆらと炎が勢いよく立ち上がっている。彼はぼんやりと剣の柄に己の肘を当てながらそれを見つめていた。

……癒されていた。これは王宮では絶対に味わえぬ感覚だ。ビオンはぼんやりと、この森の中に、いや、この砦を自らの別荘にしてもよいかもしれぬと、漠然と考えていた。

そのとき、ピィーという甲高い音が聞こえた。まるで、鳥の嘶きのような音……。国王ビオンは我に帰った。

一体何の音だ……。漆黒の闇の森に視線を向けたその瞬間、彼は頭に衝撃を感じた。思わずたたらを踏んで倒れ込む。と同時に、近くにあった篝火が、まるで弾けるようにして消えた。

「伏せろ！」

誰かの声が聞こえた。周囲からは兵士たちの呻き声が聞こえてきていた。

……一体何が起こったのか。国王ビオンは頭に鈍痛を感じながら現状を把握しようとする。

「結界師！　結界師ィ！　国王様をお守りしろ！」

この声はマキだ。すぐさまカイ、レンの二人の結界師がピタリとビオンの体にくっつく。二人は同時に詠唱を始めた。

「国王様、結界を張りましたので、もう大丈夫です」

カイはビオンに肩を貸しながら口を開く。先ほどの衝撃は一体何なのかと頭に手をやると、ぬめりとした感覚を覚えた。

「ライトを。誰ぞライトを」

国王ビオンが命じると、程なくして魔法使いによってライトが照らされる。彼らの周囲には、夥しい数の丸太が散らばっていた。そしてビオンは自らの右手を見てギョッとした。そこには血がベッタリと付いていた。

おそらくこの丸太が飛んできて、それが頭に当たったことは容易に想像できた。だが、一体誰がこんなことを……。そんなことを考えた瞬間、砦が魔物に囲まれていることに気づいた。

砦の外にはすでに倒れ込んでいる兵士も見える。だが、大半の者は

戸惑いながらも臨戦態勢を取ろうとしていた。

「……どうやらオークらに囲まれているようです。ただ……まだ完全に包囲されてはいないようです。国王様、退くなら今です」

マキが周囲を見廻しながら進言してくる。オークらは両手に丸太を持っている。彼らは何のためらいもなくその丸太を兵士たちに投げつけた。

「うわっ」
「ギャッ」

兵士たちの呻き声が聞こえる。国王ビオンの体に何か熱いものが流れた。

「応戦せよ！」

「国王様！」

「応戦せよ！　我に続けぇ！」

国王ビオンはマキが止めるのも聞かずに、腰に差していた剣を抜き払って砦から飛び出していった。

「国王様をお止めしろ！　カイ、レン、貴様たちは国王様から離れるな！　国王様を森の外にお逃がせするのだ！　国王様を森の外に！　国王様を森の外にお連れするのだ！」

マキは絶叫にも似た声で周囲の者に命じた。

オークらはそれぞれいびつな木の枝を持って襲ってきた。ただやみくもにそれで叩き潰そうとしてきた。戦術も何もありはしなかった。そんなオークを倒すのはいとも簡単なことだった。だが彼らは斬っても斬っても溢れだしてきた。一体何匹のオークがいるのか、全く見当がつかなかった。

「退け！　退けぇ！　森の外に退けぇ！」

程なくしてマキがそう言いながらビオンの許にやって来た。彼はビオンの前に立ち、襲って来るオークを切り倒しながら、退け退けと繰り返していた。

「さ、国王様、退きましょう！」

結界師のカイとレンの言葉に促されるように、彼は森の中に入っていった。

国王の一団は彼を守るようにしながら、オークを切り倒しつつ森の中を進んだ。だが、オークらはすぐに彼らに追いつき、襲ってきた。どうやら森の外に出るための一本道は、オークらによって完全に封鎖されているようだった。仕方なく彼らは森の中の道なき道を進むより仕方がなかった。

漆黒の闇の中を移動するには困難を極めた。敵はオークだけではなかった。折に触れて魔物たちの襲撃にあい、その都度、兵士たちは魔物を切り伏せながら森の中を進まねばならなかった。むろん、国王ビオン自身にも魔物は攻撃してきたが、結界師の張る結界に守られていたため、彼自身は大きな傷を負うことはなかった。

一体どこをどう進んでいるのか、誰もわからなかった。ただでさえ

遅い行軍に加えて、オークたちは執拗に攻撃を仕掛けてきた。彼らが逃げるところ逃げるところに、オークらは待ち伏せしていた。その都度、彼の親衛隊が身を挺してオークらと戦った。気がつけば、国王ビオンの周囲には数名を残すのみとなっていた。

「……こ、国王様」

結界師のカイががっくりと片膝をついた。程なくしてレンも膝をつく。どうやら二人の魔力が枯渇したようだ。兵士たちは二人に肩を貸しながら、国王の許に運んだ。

「しばらく休めばまた、結界も張ることができましょう」

兵士のその言葉は、そのまま国王ビオンに向けられたものでもあった。幸い、先ほどからオークの襲撃が止んでいる。ここは一息入れようと、国王を中心に皆が腰を下ろした。

「何名いる？」

「……十四名でございます」

「マキはいかがした」

「……」

「……」

「アトベとガサカは」

「……死んだか」

誰も何も答えようとはしない。国王ビオンは心が締め付けられる思いがしていた。自ら鍛え上げた一千の兵が僅か十四名まで減っているのだ。しかも、一千の兵の中には、幼いころから仕えてくれた、言わば彼にとって竹馬の友とも言える者たちも多くいた。今、目の前にいる者たちの中には、そうした者たちの姿は見えない。皆、国王を守るため、身代わりとなって戦い、死んでいったのだ。

死が近づいているのがわかる。今になって宿老たちの言っていた言葉が胸に刺さる。少なくとも、彼らの話を聞いてさえいれば、こんなことにはならなかったのだ。何とか時間を戻せないか……。などと思ってみるが、そんなことはできないことであるということは、誰よりも自分自身がわかっていた。

……せめてマキの言うことを聞いていれば。

マキは森を出て、シュリたちを待てと言った。まさにその通りだった。しかも彼は、自分の心中を察して言葉を変えて二度、同じことを言ってくれていた。せめて、日が落ちる前に砦を出ていれば、こんなことにはならなかった。

「こ……国王様……」

兵士の一人が怯えにも似た声を上げながら立ち上がる。ふと見ると、オークらが現れていた。彼らは音もなく現われ、いきなり襲って来るという傾向があった。だが、今の彼らはブタのような鳴き声を上げながら、じっとこちらを眺めていた。よく見ると、森の中に鋭く光る眼がいくつも見えた。彼らは確実にこの一団の命を奪おうとしているのがよくわかった。

「ブオッ」

気味の悪い鳴き声を上げながらオークらが動いた。兵士たちは剣を抜き、国王を守ろうと立ち上がった。

しかし、多勢に無勢だ。次々と兵士たちは倒されていく。そんな中、一匹のオークがビオンの目の前に立ち、手に持った丸太を振り上げた。

「ひっ、ひぃぃぃぃ……」

殺される、と心の中で呟いた。その瞬間、強い力で彼は後ろに引かれた。それと同時にオークの丸太は振り下ろされ、空を切った。

「国王様！　生きておいででしたか！」

……助かった。国王ビオンの眼からは、涙が流れていた。

第八百十七話　脱出

男はビオンの背中から両手を廻して、彼を抱え込むようにして後方に引きずっていった。そのビオンと入れ替わるように二人の男たちが飛び出していき、目にもとまらぬ速さでオークらを切り伏せていった。

「退け！　退け！　このまま真っすぐに走れ！」

ビオンの背中越しに男が絶叫している。振り返ってみてみると、彼にはその男に面識があった。確か、ペルスという男だ。いつもシュリの傍に仕えている初老の男で、あまり喋らない、大人しい男だという印象がある。そんな男が、このような死地に赴いてきたことが意外だった。

「さ、国王様、立てますか？」

ペルスはビオンを抱きかかえるようにしながら立たせる。だがペルスが手を放すとビオンは、フニャフニャとその場に座り込んでしまった。どうやら、腰が抜けてしまっているようだ。

「テル！　タタ！」

ペルスの声がすると、ビオンの体がものすごい力で引き上げられる。そして、両脇に衝撃を感じた。気がつくと彼は二人の男に両肩を抱えられていた。

「さ、国王様。ここを抜ければシュリ様がお待ちです」

そう言って二人はビオンの体を引きずるようにしてその場を離れた。
ふと振り返ると、ペルスは剣を抜いてオークらを切り伏せようとしているところだった。彼は安堵感と恐怖感がごちゃ混ぜになった感情を抑えきれずに、ただただ涙を流すしかなかった。

「国王様ぁ！」

男の大声で我に帰る。どのくらい歩いただろうか。かなりの時間歩いたような気がするが、記憶が定かではない。もしかすると気を失っていたのかもしれない。そんなことを考えながら、慌てて周囲に視線を向けると、すでに森を脱出したと見えて、目の前には草原が広がっていた。兵士たちが駆け寄ってきているのが見える。ここにきてビオンはようやく命が助かったという確信を持つことができた。そう考えると、再び涙があふれて止まらなくなった。彼は俯きながら声を殺して泣いた。

「国王様、よくぞご無事で！」

体がふんわりとした温もりに包まれた。これは……国軍の兵士が装備しているマントだ。どうやら兵士の一人がビオンの肩にかけてくれたようだ。

ドドドドと、まるで地鳴りのような音が響き渡る。見ると多くの騎馬武者がこちらに向けて走ってきていた。彼らはビオンの手前で停まった。その中から小柄だがやたらと体格のよい男が飛び出すようにして走ってきた。総司令官のシュリだ。禿げあがった額、側頭部に残った白髪交じりの髪の毛……。ビオンが嫌っていた髪型だった。その男が大股でこちらに歩いてくる姿は、頼もしくもあり、恐ろしくもあった。

「ご無事か、国王様！」

シュリはビオンの目の前まで来ると、どっかりとそこに腰を下ろした。だがビオンはシュリの顔を見ることができず、ずっと俯いていた。フーフーとシュリの息遣いが聞こえてくる。それは怒りの感情を押し殺しているようにも聞こえたし、ただ単に、重い鎧を装備しながらここまで歩いてきたために息が乱れているだけのようにも聞こえた。

「全軍、撤退の準備を！」

シュリは大声でそう命じると、素早く立ち上がった。国王ビオンに気遣いの言葉も、ご機嫌を取るような言葉もなかった。それだけで、ビオンにはこのシュリという男がこれまでになく激怒していることがよくわかった。

「こっ、国王様ぁ。生きておいででしたか～」

何とも弱々しい声が聞こえた。見ると、ヨロヨロとした足取りでこちらに向かって来る者がいた。よく見るとそれはアトベとガサカだった。二人はビオンのすぐ傍まで来たその瞬間、シュリがアトベを殴りつけた。声を上げることもできないままアトベは地面に倒れ伏す。その様子をガサカは眼を見開きながら、必死で声を絞り出す。

「なっ、何をなさるのです！」

「やかましい、この佞臣めらが！　国王様は生きておいでではないか！　何が国王様は亡くなられただ！　結局、貴様たちは国王様を守ろうともせず、真っ先に逃げたのではないか！　そんな者どもが

国王様の傍に寄るなど汚らわしい！　散れ！　散れィ！」

「わっ、私はただ……」

「ただ何だ？　貴様らは日頃からやれ国王様が大事だの、国王様をお守りせねばならぬとほざいておったではないか！　それが何だ！　二人して逃げおってからに！　国王様大事と思うのであれば、なぜ国王様についておらなんだ！　国王様の盾となって死ななかったのだ！」

「そ……それは、先ほど説明したではありませんか！　我々は国王様とはぐれ……」

「言い訳するな！」

シュリの鉄拳がガサカの顔面を貫いた。彼は両手で顔を抑えながらがっくりと両膝をつく。その手からは血が滴り落ちていた。

「誰ぞ馬を！」

悶絶するアトベとガサカなど知ったことではないと言わんばかりに、シュリは大声を上げた。程なくして一頭の馬がやってきた。

「国王様を馬にお乗せしろ」

「さ、国王様……」

再び兵士たちに両脇を抱えられながらビオンはやっとのことで馬に跨る。そのとき、股間にひやりとしたものを感じた。鞍が冷え切っているためであろうと思っていたが、ふと尻に手を伸ばしてみると、

そこはべっとりと濡れていた。程なくして手からは強烈な臭気が立ち昇ってきた。気づけば股間も濡れている。あまりの恐ろしさに無意識のうちに粗相をしてしまったようだった。

ビオンは悔しさと情けなさでいっぱいだった。もはや、王である威厳も資格もなかった。彼は消えてなくなることができるのであれば、今すぐ消えてしまいたい思いに駆られていた。

そんな彼の感情を無視するかのように、総司令官シュリは兵士たちに大声で号令を下した。

「ジュザとチーテは国王様をお守りしながら先に行け！　残りは儂と共に一気にコロギ川まで退く！　そこで森から出てくる魔物たちを食い止めるのだ！」

そう言うとシュリは、何の前触れもなく国王ビオンの馬に鞭を当てた。驚いた馬は嘶きながら駆けだした。ビオンは振り落とされそうになりながらも必死で手綱につかまり、何とか体勢を立て直すと、兵士たちに守られながら、そのまま草原の彼方に消えていった。

かすかに地面が揺れていた。馬たちが慄いているのがわかる。そんな様子にシュリは苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべながら、キョロキョロと周囲を見廻している。彼は重い鎧を纏っているとは思えぬほどの機敏な動きで、自らの愛馬に跨った。

「来るぞ。凄まじい追撃戦を覚悟しておけ」

シュリはまるで自分に言い聞かせるように、小さな声で呟いた。周囲にいた兵士たちは、さらに顔を強張らせた。

「行くぞ！」

シュリは大声で叫びながら自らの馬に鞭を当てた。

◆　◆　◆

宰相マガタは執務室で国王救出の報を聞いた。彼は大きく頷くと、「ご苦労だった」と伝令兵にねぎらいの言葉をかけて下がらせた。その机の上には一枚の紙が広げられていた。彼はペンを取ると、無造作に紙に一本の線を書き入れた。そこには国王が亡くなった場合に次の王となる者の名前が書かれていた。

マガタはパンパンと柏手を打った。すると、外に控えていた兵士が扉をノックして入室してきた。

「シュリ殿はどれほどの手勢を率いてジンの砦に向かわれたのかな？」

「ハッ、五千の兵でございます」

「足りぬな。留守役はおそらくブゼン……か。そなたご苦労ではあるが、ブゼンの許に参り、動員できる全兵力をもってシュリ殿を救援に向かえと伝えてくれ。おそらくシュリ殿はムーブの森の手前にあるコロギ川に陣を張っているはずだ。そこに向かえと、な。急げ」

「ハッ」

兵士は一礼してその場を後にしていった。宰相マガタは疲れた表情を浮かべながら、体を椅子に預けて、天を仰いだ……。

第八百十八話　一夜明けて

国王ビオンはゆっくりと目を開けた。最悪、と言って差し支えない目覚めだった。

これまで経験したことのない程のダルさを感じる。加えて、強い空腹感も感じる。このままもう一度眠りたいという欲求と、食欲を満たしたいという欲求が、彼の体の中で暴れまわっていた。頭はまだぼんやりとしていたが、この空腹感を満たさねば眠ることはできないことは認識できていた。彼はゆっくりと起き上がった。

……見慣れた景色がそこにあった。それはそうだ。ここは王宮の寝室。彼が毎日寝起きしている場所だ。

ビオンは大きなため息をついた。昨日のことは夢であって欲しいと強く心に願ってみたが、それをしたところで現実は変わらない。

昨夜のことをゆっくりと思い出してみる。夜にムーブの森を出発してから、一度の休憩を取ることなく馬を走らせ、朝方になってようやく居城に辿り着くことができた。王宮に着くとすぐに彼は大量の水を飲んで渇きを潤すと、すぐさま湯を沸かさせて入浴した。まるで汚いものを洗い流すように、彼は何度も何度も頭から湯を被った。そして、それがなくなると、自ら魔法で水を出し、火魔法を使って湯を沸かした。そうしておいて再び彼は湯を被った。

ようやくバスルームから出てくると、脱衣所にはそれまで着ていた服は片付けられていて、彼がいつも寝るときに着用しているガウンが置かれていた。それを急いで着てそのままベッドに入り、眠った。

そこまで考えてビオンは唇を噛んだ。あの服には粗相したときに便と尿がそのままになっていて、かなりの悪臭を放っていた。おそらくあれは侍女のメアリーらが片付けたのだろうが、悪臭に顔を歪めながら彼女らはそれを処理したのだろう。きっと心の中で何と弱き王であることかと落胆し、軽蔑したことだろう……。ビオンはこの寝室から出るのがイヤになった。

だが、彼の空腹はそれを許してはくれなかった。仕方なく、手を鳴らして侍女を呼ぶ。

「お目覚めでございましょうか」

現れたのはライザという侍女だった。彼女はいつもと変わらぬ様子でビオンの前に現れた。その様子は少し彼を安心させた。

「うむ、食事を……持ってきてくれ」

「承知いたしました」

「かなり空腹なのだ。すぐに食べられるものを持って参れ」

「承知しました」

ライザはそう言って一礼し、部屋を後にした。ビオンは部屋に設えられたポットを手に取り、中に入っている水をグラスに注ぐ。そして、それを一気に飲み干した。

美味い水だった。体が水を欲しているのがわかる。ここにきて彼は初めて喉が渇いていることを認識した。

やがてライザが軽食を運んできた。サラダとパン、ハムと魚を塩漬けにしたものとミルクが添えられていた。ビオンはそれを一気呵成に口の中に放り込んだ。

腹の虫が落ち着くと、ようやく頭脳が働き始めた。彼は窓に行き、カーテンを開けた。外は薄暗かった。

「……今、何時であるか？」

皿を片付けているライザに向かって尋ねると、彼女はシャンと背筋を伸ばした。

「ただ今五時半でございます」

「朝の、か？」

「……いいえ、夕方、でございます」

「左様か」

まだ目覚め切れていないのか、さもなくば、何か病に侵されたのかと自問自答する。居城についたのは明け方だったのだ。普通で考えれば目覚めたのは夕方のはずだった。だが、ビオンのこれまで経験したことのない深い眠りは、彼の時間の感覚を狂わせていた。

「夕食はいかがなさいますか？」

「……この部屋で摂る。酒を持ってきてくれ」

「承知しました」

「……宰相は、どうしておるか？」

「昨日からずっとお城においでございます。……お部屋にお呼びなさいますか？」

「いや、いい。……何か言っていなかったか」

「特にお話しはございませんでしたが……。女官長のサラ様に確認……」

「いや、いい。なければよいのだ。下がってよい」

「承知しました。失礼いたします」

ライザはそう言って再び一礼して部屋を後にしていった。

正直、ビオンは誰にも会いたくはなかった。できればしばらくの間、この部屋にこもっていたかった。ライザはいつもの通り接してくれたが、昨日のことはおそらく、侍女たち全員の耳に入っていることだろう。さらには、妃たちの耳にも当然入っていることだろう。これまで強い王という姿勢を貫いてきた自分だ。後宮の者だけでなく、国全体の者たちに強き王である、先王よりも強い男であるという姿勢を示してきた。だが、今回の一件でそれは脆くも崩れたのだ。ビオンは他の家来たちに会わせる顔がなかった。

ビオンは頭を抱える。なぜ、ジンの砦から早く出なかったのか。森の中でシュリたちを待とうとしたのか。それさえしなければ、今でも強き王であることができたのだ。

ふと自分の部屋を見廻す。見慣れた景色、いつもの部屋だ。つい先日も、この部屋に愛妾を呼び、ベッドで雄々しく彼女を攻め立てたところだ。だが今の彼には、そんなことをする気持ちがまったく起こらなかった。

これから自分は嘲りと嘲笑の中で生きていかねばならないのか……。しかし、それはできない相談だ。何としてもこの恥を雪がねばならない。だが、今の彼にはその方法を考え出すことはできなかった。

しばらくすると、先ほどのライザが夕食を持ってやって来た。ビオンはテーブルの上に並べられた料理をものすごい勢いで平らげ、と同時に、用意された酒を、まるで水でも飲むような勢いで飲み干した。味も何もなかった。ただ、料理を腹の中に入れ、酒の力で現実から逃れようとしていた。

ライザに食器を片付けさせると彼は再びベッドに入り、そのまま眠りについた。だが、何度も迫りくる悪夢にその眠りは妨げられ、結局朝まで彼はほとんど眠ることができなかった。

◆　◆　◆

「……落ち着かれたようで、安堵いたしました」

ビオンの目の前には、宰相マガタが控えていた。疲れの色が色濃く出ている。この二日間、ほとんど不眠不休で過ごしていると言わんばかりの様子だった。その彼の傍には二人の男が控えていた。バミとサカダだ。二人とも先王から仕えてきた宿老で、煮ても焼いても食えぬ者たちだった。昨日の一件を聞いてこの二人は、満を持してこの場にやって来たような様子を見せていた。

「まず、現在の状況から説明申し上げます」

この三人を前に、国王ビオンは一人で対峙していた。いつもそばにあったアトベとガサカの姿はない。生きているのか、死んでいるのかすらわからない。報告を求めたいが、目の前に控える三人の宿老たちは、そんな質問すら許さないという雰囲気を纏っていた。

「シュリ殿率いる国軍はコロギ川一帯に陣を張り、ムーブの森から出てきた魔物たちと交戦中であります」

「戦闘中？」

「左様です。あの森の魔物は執念深くございます。早馬の知らせでは、オークだけでなくゴブリンや大牛などの姿も見えるようです。おそらく数日もあれば撃退できるでしょうが、また、時間をおいて魔物たちは森から出てくるでしょう。となりますと、しばらくはコロギ川一帯の軍勢を引き上げることはできなくなります」

「魔物たちは、なぜ、そのような……」

「我々が侵略者だからでございます。魔物たちは侵略する者を許しません。彼らが気の済むまで攻撃を繰り返します。その昔、我々はあの魔物たちと戦ったことがございます。あのときは確か、沈静化するまで三年の月日を擁しました」

「さ……三年？」

「今回も、その程度の時間はかかると我々は考えております」

「……」

それは三年間は国軍を動かせないことを意味していた。この間に他国からの侵略を受ければ、この国はなすすべもなく蹂躙されるのだ。ビオンの背中に冷たいものが流れた。

「まずは隣国であるフラディメとサンダンジに対して急使を派遣しております」

「お、おお……。我が国が侵略された際の援軍要請だな？」

「いいえ。かの国々もおそらくムーブの森の魔物たちに襲われることになります。それを知らせるためのものです」

「は……何ィ？」

国王ビオンは、頓狂な声を上げた……。

第八百十九話　近隣諸国

宰相マガタは落ち着いた声と表情で国王ビオンを見つめている。これまで見せたことのなかった様子だ。普段とは違った雰囲気に、ビオンは息を呑んだ。

「まず、国王様にあらせられては、国内は言うに及ばず、ムーブの森の状況をお調べあって、もし、フラディメ、サンダンジに被害が及んでいる場合は、国王様自ら両国にご訪問いただき、両王にこの度のことをお詫び申し上げると共に、今後の対策をお決めいただきたく存じます」

わざわざ余自らが出向いて頭を下げろというのか、という言葉をビオンは飲み込む。宰相の言い方はさも、フラディメとサンダンジに甚大な被害が出たかのようだ。それがわかるのはまだ先のことだろう。そんなことを思ってみるが、それを言ったところでどうなるものではなかった。

そのとき、ドタドタと足音が聞こえた。

「失礼します」

勢いよく扉が開かれると、そこには鎧を装備した兵士が立っていた。

「国王様、ご無事でしたか」

にこやかに笑みを浮かべながら男は入室してくる。国王ビオンはこの男の顔に記憶があった。

「貴様は……」

思い出した。ムーブの森でビオンを助けた兵士・ペルスだった。オークの返り血を浴びたのだろうか、よく見ると鎧がかなり汚れている。彼はスッと腰を折ると、まるで噛んで含めるような言い方で口を開いた。

「申し上げます。シュリ総司令官殿からの伝言です。ムーブの森からの魔物たちの攻撃は止みました。我が軍は休息に入っております」

「おお……」

国王ビオンは思わず立ち上がって、胸の前で手を合わせた。だが、宰相マガタはゆっくりと首を振る。

「ご苦労だった。シュリ殿にはくれぐれも油断するなと伝えてくれ。オークら森の魔物たちは夜行性だ。おそらくこれからしばらくは夜襲があるだろう。くれぐれも気を付けるように伝えてくれ」

「畏まりました」

「そ、そなたが生きておるということは、我が親衛隊の者たちも生きておる者が多いのか？　アトベとガサカはいかがした」

国王ビオンの言葉に、ペルスは踵を鳴らして直立不動の姿勢を取る。

「残念ながら、親衛隊の生存者は、わずか四十七名でございます。その中で無傷で助かった者はわずか十名です」

「十名……。マキは、カルワはいかがした」

「残念ながら……」

「アトベとガサカは？」

「その二人につきましては現在、牢につないでおります」

宰相マガタが静かに口を開いた。ビオンは何かを言おうとしたが、マガタはそれを押しとどめるように言葉を続ける。

「あの二人は国王様を捨てて逃げだしております。それだけでなく、救助したシュリ殿に国王様が身罷られたと報告し、一刻も早く撤退するように進言しました。国王様をお守りせず、己の保身を優先するような者は、この国には必要ございません」

「ま、待て。まさか二人を処刑するというのではあるまいな！」

「……いいえ。そのつもりはありません。あれでも幼いころから国王様をお育てした者たちです。これまでの忠義に免じて、死一等は減じて、国外に追放する予定でおります」

「……」

「次の動きにつきましては、フラディメ、サンダンジの状況を確認次第ということになります。国王様にあらせられましては、それまでの間はゆっくりとお休みください」

宰相マガタの言葉に、国王ビオンはただ、頷くことしかできなかった。

◆　◆　◆

ケダカ王国で発生したこの事件は、宰相マガタが予想した通り、隣国のフラディメ、サンダンジに影響を及ぼしていた。特にフラディメは被害が発生しており、ムーブの森近くにあるワウルという町は、オークらの襲撃により甚大な被害を受けていた。

フラディメに何かあったのかもしれないと気付いたのは、メイとその秘書を務めるセルロイトだった。ほぼ毎日のように大学の授業に顔を出し、メイたちと昼食を共にするのを何よりも楽しみにしていたリボーン大上王が、三日ほど姿を見せなかった。大学の学生や教授たちは、論文でも執筆しているのだろうと考えていたが、メイは何とも言えぬ胸騒ぎを覚えていた。

彼女は夫であるリノスに、フラディメの様子を確認して欲しいと願い出た。彼は嫌な顔一つせずに転移結界に乗って、リボーン大上王とメインティア王の住むアリスン城に向かった。そこではまさに、蜂の巣を突いたような騒ぎとなっていた。

「すぐに軍勢を派遣しろ！　オークどもを殲滅するのだ！　竜騎兵を出陣させるのだ！」

リノスの目の前には、鬼の形相で部下たちに大声で命令を下すリボーン大上王がいた。そのあまりの迫力に人々は逃げ惑うように動き回っている。リノスの存在に気付く者は、一人もいなかった。

「お、おお！　アガルタ王ではないか！」

リノスの存在に気付いた大上王が、鬼の形相のまま大股で彼の許に

近づいて来る。眉間に深い皺を刻み、血走った目のまま口元だけは笑みを浮かべている。不気味、という言葉以外表現できない程の表情だ。彼はリノスの腕を鷲掴みにすると、来てくれと言って引きずっていった。

「すまぬが一つ頼みがある」

大上王はリノスを広いテーブルの前に連れて行った。そこには、フラディメ王国の地図が描かれていた。

「数日前、ワウルの町がオークらに襲撃された。ヤツらはこのムーブの森に住んでおる。そこから人里に降りてきて街を襲い、食料などを奪っていきおった」

「へぇ……。俺のイメージでは森の魔物は、森に入らない限り積極的に人を襲わないというものでしたが……」

「その通りじゃ。しかし、我が国の隣国に位置するケダカ王国から急使が来て、かの国で大規模な魔物との戦いが起こったらしい。そのために周辺国は注意されたし、と言ってきおったが、時すでに遅し、じゃったわ」

「なるほど。で、俺に頼みとは？」

「このムーブの森全体に結界を張ってもらえぬか」

「え？　森全体に、ですか？」

「一週間でよい。一週間、魔物たちを森の中に閉じ込めておけば、やつらも諦めるじゃろうて」

「よしましょう、父上」

声のした方向に視線を向けると、そこには、メインティア王が立っていた。彼は相変わらずのほほんとした様子で、鷹揚な雰囲気のまま口を開く。

「あんな広大な森に結界を張るなど、いかにアガルタ王とは言え、かなりの負担になります」

「お前は黙っておれぇ！」

大上王の大音声が響き渡る。そのあまりの声量に、リノスとメインティア王は耳を塞いだ。

「だって、一週間で魔物の動きが収まる保証はどこにもないのでしょう？　もし、一週間で魔物の動きが収まらないときはどうするのです？　アガルタ王にずっと結界を張り続けてもらうのですか？」

メインティア王の言葉に、大上王は歯ぎしりをしながら震えている。

「父上、私は兵を出すことは反対しません。しかしそれは、ワウルの町を救うための派兵です。町を復興させるための派兵であるべきです。それに、被害を受けているのはわが国だけではないでしょう。サンダンジも被害を受けているかもしれません。ここはせっかくアガルタ王がおいでになるのです。我らとサンダンジ王と顔を突き合わせて話をして、情報交換をするべきであると考えますが、いかがでしょうか。森に結界を張る、張らないは、それから決めてもよいのでは？」

大上王は凄まじい形相でメインティア王を睨みつけていたが、やがて踵を返して家来を呼び、兵士たちにまずはワウルの町を復旧させることを第一とせよ、と命じた。そしてさらに、くれぐれも森からの魔物の襲撃には注意せよと命じた。

「バカ殿かと思っていたら、意外とヤルときにはやるんですね」

「何か言ったかい？」

「いいえ、何も」

大上王は相変わらず怒鳴り声を上げながら部下たちに指示を与えている。そんな様子を二人は苦笑いを浮かべながら眺めるのだった。

第八百二十話　飛べる

リボーン大上王は指示を出し終わると、黙って俺たちを睨みつけた。
それを見たメインティア王が口を開く。

「では、サンダンジに行こうじゃないか。父上もそう言っておいでだ」

「いや、サンダンジに行くと言いましてもですね。あそこに転移結界は張っていないのですよ」

「あれ？　君のことだから、何かのときのために転移結界を張っているんじゃないのかい？」

「……」

「だろう？　だったら、それを利用すればいいだけじゃないか」

「ニケさんが住む王宮からかなり離れているのですよ」

サンダンジに張っている転移結界は、タナ王国との戦いの際に張ったものと、テタムという港町に張ったものの二つしかなかった。二つのうちのどちらが王宮に近いかと言われれば、それは砂漠のそれだ。だが、そこは本当に砂漠の真ん中にある。そこから王宮までは徒歩となる。俺は歩けるが、大上王とこのバカ殿はさすがに無理だろう。それでも行くというのであれば構わないが、かなりの強行軍になるのは火を見るより明らかだ。

となれば、テタムに転移するしかないのだが、そこから王宮までは馬で半日かかる。タナ王国との戦いが終わった後、ニケさんがアガルタ軍をその港町まで送ってくれたのだが、彼はずっと俺たちの傍にいたために、手ごろな場所に転移結界を張ることができなかったのだ。

「ポラルを！」

突然、大上王が大声を上げたので、思わず体を震わせる。家来たちがアタフタと動き回っている。一体何が始まるんだ？

「畏れながら大上王様、ここに、呼ぶのでございますか？」

「いいから連れて来い！」

「ははっ」

家来が驚きに満ちた表情で大上王に話しかけるが、彼は顔を真っ赤にしながら怒鳴りつけた。これはいわゆるパワハラなんじゃないかと思うが、この世界にそんな言葉や考えはないのだろうな、などと下らぬことを考える。

程なくして一頭の中型の、白い体躯と翼をもったドラゴンが連れて来られた。首に縄を括りつけられていて、家来がそれを引いている。……そういえば、昔見たアニメで、そんな場面があったな。モル……何とかというアヒルだかガチョウだかよくわからない白い鳥がいたな。確か……何とかの大冒険っていう題名だったと記憶しているが、詳しい内容は思い出せない。グーグルで調べれば一発なのだろうが、あいにくこの世界にはそれはない。残念な限りだ。顔立ちを見ると、何となく賢そうな顔をしている。ふと見ると、大上王が不

敵な笑みを浮かべながらこちらを見ている。

「これに乗って行くがよい。」

聞けば、このドラゴンは大上王専用のドラゴンで、ハーメリアスという種族らしい。フラディメ王国が備えている竜騎兵用のドラゴンの中でも最も賢く、ちゃんと人間の言葉を理解する知性も持ち合わせているのだという。

「では、私はここでお見送りをしますよ」

得意満面で説明する大上王に、メインティア王が出し抜けに口を開く。再び大上王の表情が、この世のものとは思えぬほどの恐ろしい形相となった。

「お前も行くに決まっておろうがぁぁぁぁぁぁ！！」

「ギャー」

大上王の大声にドラゴンが首を振っている。それを家来たちが手綱を持ちながら必死で抑えている。このジイさんの声はドラゴンさえもビビらせるのだなと妙に感心していると、メインティア王が顔を歪めながら口を開く。

「ポ、ポラルに乗れるのは二人までしょう。父上とアガルタ王しか乗ることができませんよ」

「いや、乗れる」

「乗れはするでしょうが、飛べませんよ」

「いや、飛べる」

「無理ですよ父上」

「無理も何もない。このフラディメ王国の国王はお前なのだ！　お前が行かずして何とするのだ！」

「わ、わかりました。では、私とアガルタ王でサンダンジに参ります。父上はここで……」

「バカ者！　儂も行く。そなただけには任せておけぬ」

「ですから父上が」

「皆で参るのじゃ！」

「ですから飛べませんって。父上が飛べるのであれば話は別でしょうけれどもね。あ、アガルタ王、君は魔法が得意だからもしかしたら飛べたりするのかな？　……あ、それはできないんだ。ならば私か父上が残るよりほかは……」

「問題ない。飛べる」

「飛べませんって」

二人は飛べる、飛べないの議論を繰り返している。俺はぼんやりとそのやり取りを眺めながら、どちらも色んな意味でブッ飛んでいるので、本気を出したら飛べるんじゃないかと考えていた。

◆◆◆

結局、俺たち三人は無事にサンダンジ王国の王宮に辿り着くことができた。飛んでみなければわからないというリボーン大上王に押し切られる形で砂漠に転移したものの、そこはとんでもない砂嵐だった。慌てて結界を張り、ドラゴンに乗って飛んでみたが、やはり三人の大人はかなりキツかったらしく、飛行は上がったり下がったりを繰り返して、かなり安定性の欠けるものだった。だが、このドラゴンは頑張った。何かに取りつかれたかのように必死で翼を動かして俺たちを運んでくれた。まさにこの王宮には飛んできたと言っても過言ではなかったのだ。

これは後になったわかることなのだが、ドラゴンが必死で飛行した理由は俺にあったらしい。俺には龍王の臭いが染みついていたらしく、あのバカ龍の臭いは、ドラゴンたちにとって恐怖を感じるものらしい。そのために、このポラルというドラゴンは必死で翼を動かしていたのだ。何だか、悪いことをした。

ちなみに、フェリスやラースらは、俺に染みついた龍王の臭いは気にならないらしい。どうやら、ヤツの臭いは上位種には効かないらしいのだが、別に何もしていないのにドラゴンたちから嫌われるというのは本意ではないので、近いうちにメイやソレイユに頼んで、その臭いを消す香水を作ってもらおう。

そんなことを考えながら、王宮までの道を歩く。ドラゴンを連れているのが珍しいのか、道ゆく人が皆、俺たちに視線を向ける。割かし混んでいるのだが、俺たちの姿を見ると皆が道を開ける。まるでモーゼの十戒みたいだ。

「何だ貴様らは！」

王宮に近づくと、中から兵士たちが飛び出してきて俺たちを威嚇する。それはそうだろう。何の前触れもなくドラゴンを連れた者たちが現れたのだ。そりゃ兵士たちは驚くよね。

「フラディメのリボーンじゃ。サンダンジ王に取り次いでくれ」

リボーン大上王がずいっと前に進み出て、兵士たちと応対する。迫力が尋常ではない。その圧に押されてか、兵士たちもさらに緊張度を高める。

「フラディメのリボーン？　まさか！　フラディメ王国のリボーン大上王がこちらにおわすわけはない。怪しい男だ！」

「何ッ！　貴様、もう一度言ってみろ！」

「ちょっと、すみませんね」

慌てて俺が前に出る。大上王に俺に任せてくださいと手で制して、改めて兵士たちに向き直る。

「いや、本当に俺たちはフラディメからドラゴンに乗ってやってきました。ムーブの森で異変があったと聞きまして、大上王とメインティア王自らこちらに参りました。嘘だとお思いならば、王宮の中に大上王やメインティア王の顔を知っておいでの方もいらっしゃいましょう。その方にご覧いただければ、わかると思います」

兵士の一人が訝りながら王宮に入っていき、一人の初老の男を連れてきた。男は俺たちを見るなり、飛び上がるようにして驚いた。

「まさか……本当に我が国においでくださされましたか！」

「いや、すまぬな。危急の事態……」

「我が王がかねてからお会いしたいと申しておったのです。ようこそおいで下さいました、アガルタ王様。どうぞどうぞ、ご案内いたします」

男の言葉に兵士たちは顔を見合わせていたが、やがて背筋をしゃんと伸ばして、挙手の礼を取った。

「……」

大上王は何とも言えぬ顔をしていて、それが実に恐ろしかったのだが、さらにその後ろではメインティア王が必死で笑いをこらえていた。俺は彼に笑うんじゃないよと目で制しながら、案内されるまま、王宮に入った。

第八百二十一話　できますけれど？

俺たちを案内した男はキマと名乗り、この国の侍従長であると説明した。リボーン大上王と面識があったかどうかはわからなかった。その理由は、彼がずっと俺に話しかけていたからだ。侍従長クラスであれば、隠居したとはいえ一国の王が直接来ているのだ。挨拶の一つをしてもおかしくないし、むしろそうするべきなのだが。

キマ侍従長の話を聞きながら、そんなことを考えていると、彼が突然立ち止まった。

「国王様、アガルタ王様がお見えでございます」

廊下のド真ん中、しかも、目の前には壁があり、左右の通路がわかれている場所だ。この人は一体何を言い出すんだと固まっていると、突然目の前に扉が現れた。キマ侍従長は笑みを浮かべながら、どうぞと言って扉を開けた。中にはニケ王が一人、椅子に座ってこちらを眺めていた。

「おお！　アガルタ王、久しいな。会いたい会いたいと思っていたところだった。よくお越し下された」

ニケは貫頭衣のようなラフな服装をしていた。おそらくこれは彼の部屋着なのだろう。

彼は俺の手を力強く握った。至近距離で見ると、相変わらず褐色の肌の男前だ。

「おお、大上王殿。誠にお久しぶりで」

ニケは俺の傍を離れると、後ろに控えていた大上王の傍に向かい、手を握った。彼は軽く握手をしたが、大上王はその手を両手で力強く握り返していた。その様子を見たメインティア王が、スッと視線をあらぬ方向に逸らせた。笑うんじゃないよ……。

大上王は何かを喋りたそうだったが、ニケは素早く彼の許を離れると、メインティア王の傍に向かった。

「貴君がメインティア王であらせられるか」

「はい、フラディメ・ロスカーノ・メインティアと申します。初めてお目にかかります」

そう言ってバカ殿は見事な所作で一礼し、ニケの手を握った。

「本日こうして伺ったのは、ムーブの森のことについてじゃ」

大上王が出し抜けに口を開く。ニケは目で承知したと答え、家来たちに椅子を持って来るように命じた。

「我が国のワウルという町が、森から出てきた魔物たちに襲われた。貴国はいかがであろうか。我が国の被害は……」

椅子が運び込まれ、喉を潤すための冷たい水……といっても、少し甘かったので、砂糖かハチミツのようなものが入れられているかもしれない。それを大上王は一気に飲み干すと、畳みかけるように口を開いた。ニケはそれを黙って聞いている。

「父は嫌われているのだよ」

俺の隣に座っているメインティア王が小声で話しかけてくる。大上王が喋っているのに聞かなくていいのかという俺の考えなど知らないとばかりに、彼はさらに言葉を続ける。

「君も知っての通り、父の話は長いのだよ。自分の言葉に酔ってしまうのだ。それだけじゃない。ひとたび怒り出すと、自分の言葉で怒りを増幅させていくから手が付けられないんだ。さっきのキマ侍従長……。彼などは何度も我が国に来ていて、父の顔を知らないわけはないんだ。でも彼は一言も父と話をしなかっただろう？　それだけ父は嫌われているのだ。その父が嫌われているということは、我が国が嫌われているということにつながる……」

「オイ！　なにをコソコソと喋っておるのだ！」

大上王がこちらを睨みつけている。眼力がハンバではない。怖い……。

「いいえ、何も」

「何を喋っておったのだ！　こちらは……」

「我が国の被害は、軽微だ」

大上王の言葉を遮る形でニケが口を開く。おお、ニケさん、ナイスファインプレーだ。

「我が国でムーブの森に一番近い町は、カンの町である。しかしながら、魔物たちが飛来したのは数羽のみで、警備隊によって撃退し

たという報告を聞いている」

「飛来？　まさか、飛行できる魔物が襲来したというのか？」

「ムーブの森を出ると砂漠地帯が広がっている。そこには、サンドワームらの多くの魔物が生息している。魔物たちが森から襲来したとしても、カンの町にたどり着くまでに、それらの魔物の餌食となるだろう」

「はぁぁ。で、あれば、サンダンジはあまり関係……」

「何ということじゃ！」

俺の言葉を遮る形で、大上王が大声を上げて立ち上がる。

「飛行できる魔物まで出てくるとは……。あそこにはハーピーの巣があると聞く。それらが一斉に森から出て、近隣の町を襲うとなれば……」

大上王の顔が珍しく青ざめている。ニケも眉間に皺を寄せたままゆっくりと頷いている。

「あの……要は、ムーブの森のいるハーピーが大人しくしていれば、いいのでしょうか？」

俺の言葉に、大上王とニケがキョトンとした表情を浮かべる。お前、何を言ってるんだ？　といった顔だ。

「……まあ、そういうことになる。先ほども申した通り、我が国は砂漠に囲まれている。オークらが襲撃してくる可能性は低い。我が

国にとっての脅威はハーピーの大規模での襲来。これが最も懸念するところだ」

ニケの言葉に、大上王も頷く。

「ムーブの森に住まうハーピーは百を超えるという。それらがサンダンジと我がフラディメに襲来するとなると、その被害は……。我が国の竜騎兵を全軍、その防衛に裂かねばならぬか……」

大上王が悔しそうな表情を浮かべながら、パチンと手を叩く。

「わかりました。では、ハーピーたちは俺の方で動かないように、何とか説得してみます」

「な……何ィ？」

大上王が目を丸くして驚いている。完全に俺の答えが予想外だったようだ。それはニケも同じであったようで、驚きの表情を浮かべながら口を開く。

「せ……説得と言われたか……。後学のために、どうやって説得するのか……承ろうか」

「私の屋敷に、ジェネラルハーピーがおります。彼女に説得させます。ジェネラルハーピーはハーピーの中でも最上位になるのでしょ？　彼女の言葉なら、たぶん聞き分けてくれると思います」

「な……何と言われた!?　ジェ、ジェネラルハーピー？」

「はい。ジェネハと名付けて、俺の屋敷の庭で飼っています。あ、

あと、彼女に従うハーピーたちも屋敷の裏の森に住んでいます。ハーピーって見た目は不気味ですが、生まれたばかりのハーピーはとってもかわいいんですよね」

「ジェネラルハーピーを、飼って、いる？」

「ええ。たまにウチの子供たちを乗せて空を飛んだりしていますよ」

俺の話に、ニケは信じられないと言った表情を浮かべている。

「き……貴殿は人間離れしていると常々思っておったが……。まさか、そんなことまでやっているとは……。ジェネラルハーピーと言えば、数千の軍勢を全滅させるほどの魔物であるが……。それを飼うとは、いったいどうやって……？」

「いえ、たまたま俺が庭でビーフシチューを作っていたら、ジェネハの娘がそれを盗もうとして、寸胴鍋をひっくり返したのですよ。あれは作るのに時間がかかりましてね。もう一息で完成するところだったのですよ……。で、俺がブチ切れてハーピーを丸太で張り倒したら、次から次へと襲ってきましてね。来たハーピーを片っ端から張り倒したら、いつの間にかウチのペットになっていました。あのビーフシチュー惜しかったな。本当に、じっくりコトコトじっくりコトコトじっくりコトコトじ

りコトコト煮込んだのに……。あれ？」

見ると、大上王とニケが口をポカンと開けたまま眺めている。俺は咳払いをすると、小さな言葉で呟いた。

「すみません。最近ちょっと、疲れているのです……」

第八百二十二話　面倒臭いお願い

ニケと大上王がドン引きしている。対して、メインティア王は後ろを向いて笑いを必死でこらえている。いや、肩が震えているので、笑っている。コイツは笑っていやがるのだ。

そのとき、扉がノックされて、俺たちを案内してきたキマ侍従長が入室してきた。

「国王様、ケダカ王国国王、ビオン様より国書が参っております」

「ほう」

ニケは差し出された手紙を受け取り、無造作に封を破いて中身を取り出した。しばらくの間、部屋が何とも言えぬ静寂に包まれた。

「ビオン王が我が国に来たいとのことだ。先のムーブの森の騒ぎについて、お詫びを申し上げたいとのことだ」

ニケは誰に言うともなく呟く。彼はしばらくの間、何かを考えていたが、やがて、ゆっくり息を吐き出すと、静かに口を開く。

「詫びに来るなどど……。我に詫びたところで、ムーブの森の騒動が収まるわけではあるまい。それよりも、騒動を納めることに注力するべきであろう」

「ウム、その通りじゃ」

ニケの言葉に、大上王が素早く反応する。

「詫びに来るのであれば、すべてのコトが収まってから来ればエエのじゃ。とはいえ、あの森の魔物の被害を一番被っておるのは他でもない、あのケダカ王国じゃ。もしかするとビオン王は、森の騒動を納めるための援軍を要請しに来るやもしれませんぞ」

「ウム。大上王殿が言われる通りかもしれぬ。おそらくこの国書は、貴国にも届いていると思われるが……。大上王殿はどうなさるおつもりか」

「ウム、そのことじゃ。我が国の方針は決まっておる。最も優先させるべきは森の鎮静化じゃ。そのためにできる手は何でも打つつもりじゃ。ケダカ王国と協同することで、森が静かになるのであれば、喜んで手を貸すつもりじゃ」

「我も同意見だ。フラディメ、サンダンジ、ケダカ……この三国が連携して森を抑えねばならぬだろう。とすれば、ビオン王がわざわざ両国に向かう必要はない。どこかの町で三国の王が落ち合い、そこで話し合いをすればよい。候補とするならば……」

「別にそんな回りくどいことをしなくてもよいのではありませんか？」

突然、メインティア王が口を開く。ニケと大上王の話に割って入るとは驚きだ。いい根性をしているな、このバカ殿は。ふと見ると、大上王の体がわなわなと震えている。これは……耳を押さえた方がよさそうだ。

「お前は、黙っとらんかぁぁぁぁぁ！！」

俺が耳を押さえるのと同時に、大上王の大声が響き渡る。さすがのニケさんも顔を背けている。

「で、ですから、そんな回りくどい……」

「黙っておれぇ！」

「い、いや、大上王殿。メインティア王はフラディメの国王だ。我は、フラディメ国王としての、意見を聞いてみたい」

「いや、倅は……」

「よい。問題ない」

ニケはリボーン大上王を目で制し、そのままメインティア王に視線を向けて発言を促した。彼はスッと腰を折ってニケに一礼すると、オホンと咳払いをして、ゆっくりと口を開いた。

「なにもそんなことをなさる必要はないと思います。我らには、人知を超えたお方がいるではありませんか。ここに」

メインティア王の視線が俺に向いた。オイ、どういうことだ？

「何をバカなことを！　アガルタ王の手を借りるべきではないと儂に意見したのはお前ではないか！　それを今になって力を借りようとは何だ！」

「いや何も私は、父上のように、ムーブの森全体に結界を張ってもらおうなどとは考えていません。むしろもっと効率的にコトを運ぼ

うと考えているのです」

「効率的にコトを運ぶぅ？」

「はい。先ほどアガルタ王はムーブの森に住まうハーピーたちを説得すると言っていました。であれば、森の魔物を扇動している者がいるはずです。その者に話をしてもらえばよいのではありませんか？」

「森の魔物を扇動している者がいると言われたが、それは何者か？」

「わかりません。ただ……。ここ数日の魔物たちの動きを見ていますと、単に怒りに任せた攻撃を仕掛けているとは思えません。きっと、この騒動を指揮している者がいるはずです。それが誰かはわかりませんが、その者を探し出し、納得させることができれば、森の騒動は収まることでしょう。そうなれば、我がフラディメも、サンダンジも兵を出して戦うこともないし、兵を無駄に死なせることもありません。どうでしょうか？」

「そ……そうなれば、我が国としてはありがたいことだが……」

ニケ、リボーン大上王、メインティア王の三人の視線が一斉に俺に向いた。しかも、バカ殿は笑みさえ向けてきている。

「いっ、いや……そんなことは俺には……」

「できるとも、君なら」

「あのなぁ」

「ジェネラルハーピーを森に向かわせるのだろう？　そのときに、森のハーピーに聞いてみて欲しいんだ。この騒動を扇動している者は誰か、と。その正体が明らかになればよし、徒労に終わるのであれば、それはそれで諦めて別の策を練ればいい。とりあえず今回は、それで協力してもらえるかな？　タダでやってくれとは言わないよ。私たちをここまで乗せてくれたポラル。あのドラゴンを君に進呈しようじゃないか。ポラルだけじゃない。ポラルと共に、我がフラディメが持つ最も優秀なハーメリアス三頭を併せて進呈しようじゃないか。それでどうだい？」

「オイ貴様！　何を勝手なことを言うのだ！　ハーメリアス四頭など！」

「いいえ父上。これは我が国にとっても利があることです」

「何だと！」

「アガルタ大学ではドラゴンの生態を研究しようという動きがあります。そこに我らのハーメリアスを送るのです。そうすれば、アガルタ大学がハーメリアスの生態を研究してくれます。ただでさえ、繁殖と調教が難しいこのドラゴンを、アガルタが研究してくれることになります。それを、父上が、メイリアス王妃から直接学べば……。我が国にとっても、ね？」

「メ……メイリアス殿がドラゴンを研究しようなどとは儂は聞いたことがない。よしんば、研究するとしても、それには長い時間がかかろう。儂が生きておる間に……」

「完成します。アガルタですよ、父上。あの、聖女にして大賢者メイリアスが率いるアガルタ大学の研究者が研究するのです。その結

果が出るのはすぐだと思いませんか？」

「う……。お前の言葉は軽い。信ぴょう性がまるでない。そんなことでは……」

大上王はブツブツと何かを言いながら俯いた。それを見たメインティア王はニコリと笑う。

「と、いうことで、どうだろうか。よかったら、今の話をメイリアス殿にしてもらえるだろうか。メイリアス王妃が興味がない、と言われるのであれば、今の話は忘れてもらって構わないよ」

俺は無表情のまま、ゆっくりと頷いた。そんな俺をニケが驚いた表情で眺めていた。察するに、メイと大上王が意外と親しい関係にあるのが、意外だったのだろう。

◆◆◆

早速、屋敷に帰ってメイに聞いてみた。ちなみに、ニケの許から帰るときに、近くのオアシスに降りて転移結界を張ってきた。どうせまたニケさんのところに行くだろうし、そのときまた、あのポラルに大きな負担をかけるのはかわいそうだと思ったのだ。

さて、そのメイだが、きっと困った表情を浮かべるのだろうなと考えた俺の予想は外れ、彼女は喜んだ。顔をぱぁぁぁっと明るくして喜んでくれた。両手で俺の手を握り、抱きついてきて喜びを表してくれたのだ。これでは、あのバカと殿の要請を断ることはできない。仕方なく俺は、イリモの隣に住んでいるジェネハに、ムーブの森に住むハーピーの説得と、この騒動の主を聞いてくれと頼んだのだった。

第八百二十二話　面倒臭いお願い（後書き）

結界師への転生コミカライズ最新話公開中です。是非、チェック下さい！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｃｏｎｔｅｎｔ／００３９０００１

第八百二十三話　いつもと違う

「では、行ってくるぞよ」

そう言ってジェネハは大空に舞い上がった。俺は家族と共にその姿を見送った。

ジェネハ曰く、ムーブの森に住まうハーピーたちを説得するのは、さほど難しくはないと言う。相手は彼女の後輩にして、部下に近い関係であるらしい。言ってみれば、ジェネハが重役クラスに対して、相手は係長クラスなのだそうで、一言やめろと言えばコトが済むのだそうだ。

本来ならば、ジェネハ自ら赴くような案件ではない。だが、森の騒動を指揮する者を調べるということであれば、彼女自ら行くのが手っ取り早いのだそうだ。

「あの森にはクラロマウスがおるからな。ちょうどよい」

クラロマウスは大型のネズミで、真っ黒い体躯をした、かなり獰猛な魔物だそうだ。素早い上に力も強く、魔物ランクもBランクに指定されている。個体を倒すにもなかなか手ごわい相手なのだが、それが群れで行動しているので、一旦目を付けられてしまうと、逃げ切るのはなかなか難しい。ハーピーも、個体で対応するとなると、敗れる可能性もあるほどの魔物らしいのだ。

だが、ジェネハは全く問題ないという。むしろ、その肉が美味で、彼女の大好物なのだそうで、久しぶりに美味い肉にありつけると言

って、嬉々として出かけていったのだ。

そのジェネハは、翌日に屋敷に帰ってきた。疲れた様子も見せず、淡々とした様子だった。ただ、その足には大きな黒ネズミが二匹掴まれていて、実に不気味だった。これがいわゆるクラロマウスらしい。彼女は土産だと言ってそれを無造作に放り出すと、森からハーピーたちが飛び出してきてそれに群がった。彼女らは美味い美味いと言ってそれを食べていたが、到底子供たちに見せられるような光景ではなく、俺は思わず苦笑いを浮かべながらその光景を見守った。

「ムーブの森のハーピーたちは動かぬことを約束させた。妾の到着が一日遅れていたら、あ奴らは攻撃を開始しておった。危ないところじゃった」

ジェネハの話によると、ムーブの森に生息する百羽のハーピーは、三つに別れてそれぞれ、フラディメ、サンダンジ、ケダカに攻撃を仕掛けるつもりだった。特にケダカとフラディメには、大部分のハーピーが投入される予定であったとのことで、ジェネハの言う通り、一日彼女の出発が遅れていれば、あの国々は大惨事になっていた。ある意味では、あのバカ殿の提案は、この三国を救ったことになる。

ただ、疑問なのはなぜ、ハーピーがそんな騒動に加担することになったのか、ということだ。それはジェネハが説明してくれた。

「この騒動を指揮している者は、マモ、というオークキングじゃ。ヤツは森に住む魔物たちに、人族への復讐を説いておる」

聞けば、ケダカ王国国王ビオンは、ムーブの森に侵攻したときと撤退するときに、オークだけではなく、多くの魔物たちの領域を犯したらしい。当然、領域を侵された魔物たちは、その者を排除するべ

く動いた。だが、幸か不幸か、国王はその場を逃げおおせた。魔物たちはその後を追ったが、王国軍に討伐された。

この騒動で、いわゆるランクの低い魔物たちは、オークらと同様、森の外に出て人族を襲撃したが、ランクの高い者たち、言わば、知能が優れている者たちは静観していた。そうした魔物たちに、オークキングであるマモは、再び人族の襲来があること、そのときは、今回のような規模ではなく、さらに大きな規模となるであろうことを説き、やられる前にやれとけしかけたのだそうだ。その言葉に、割かし多くの魔物が賛同しているのだそうだ。しかし、ジェネハがハーピーたちを説得し、人族が森に侵攻する意志がないことを伝えたことで、おそらく高ランクの魔物たちが動く可能性は低くなったのだと言う。

「あ奴らも、できるだけ争わずに生きていたいと思っておるからな。穏便に暮らすのが一番じゃ」

そう言ってジェネハは頷いた。

さて、森の魔物たちは説得できつつあるが、問題はオークキングのマモだ。彼の心は侵略者憎しで凝り固まっているのだと言う。他の魔物たちに協力を断られたとしても、彼は最後まで抵抗を続ける覚悟なのだそうだ。

「それは、己が得た地を侵略されておるからな。マモの気持ちもわからんではない」

とはいえ、今はその砦はオークらのものになっているのだ。もし、ケダカ王国側がその砦を放棄してオークらのものと認めれば、コトは収まるんじゃないかと思うが、さすがにジェネハにはオークキン

グの気持ちまではわからなかった。

「ま、ケダカの王様に聞いてみてから後のことは考えるか。ありがとうな、ジェネハ」

俺はそう言って、ジェネハを労った。

◆　◆　◆

ケダカ王国国王ビオンは、使者が到着してから二週間後にフラディメ王国にやって来た。俺からすれば遅いの一言だが、ケダカ側にしてみれば、魔物たちの襲撃を受けながらの訪問となるために、色々と準備が大変であったようだ。

現れたのは、国王ビオンと宰相マガタ、そして、二人に従う者十名といういで立ちだった。対する俺たちは、リボーン大上王父子とニケ王、そして俺という三人での出迎えとなった。

フラディメのアリスン城の一室に通された俺たちは、部屋に入るや否や、宰相マガタの謝罪を受けた。

「リボーン大上王陛下、並びに、メインティア王陛下には、我が国の騒動のために、大変なご迷惑をおかけしました。誠に、申し訳ございませんでした」

宰相マガタが深々と腰を折る。それに続いて、従者たちが深々と腰を折る。国王ビオンは少し頭を下げただけだった。この人は喋らないのかと思っていると、国王ビオンがゆっくりと口を開いた。

「我が国におけるムーブの森の状況は、今のところ、大規模な魔物

の襲来はなく、膠着状態であると言える。我が国軍が森を包囲しているため、今後も大規模な襲来はないと思われる。安心されたい」

その言いように、ビオンの隣に控えていた宰相マガタがチラリと視線を向けた。それはそうだろう。詫びに来た者の態度ではない。リボーン大上王が怒鳴り散らすかと思ったが、意外に彼は冷静だった。

「ウム、それを聞いて安心した。じゃが儂は、森の鎮静化はまだまだ先であると考えている。我がフラディメ王国は引き続き、森の動向を見守ることとする」

大上王の言葉に、ビオンはゆっくりと頷く。

「まずは、今後のケダカ王国の取り組みを伺いたい」

大上王の言葉に、宰相マガタが口を開く。

「我が国も、大上王陛下のお考え通り、まだまだ沈静化には程遠いと考えます。従いまして、国軍を配置しまして、森からの襲撃に備えたいと考えます」

「いや、兵を引かれてはいかがかな？」

出し抜けにメインティア王が口を開く。国王ビオンと宰相マガタが、コイツ、何を言っているんだと言う表情を浮かべる。

「森の魔物の大半は、森から出て我々を襲うことはないと聞いている。我々を襲撃しようと考えているのはオークキングくらいだ。このオークキングを説得できれば、すぐさま兵を引いたほうがよいと私は考える。徒に、森の魔物たちを刺激するべきではない」

「お、畏れながら、そのお話しは、一体どこから……」

「宰相殿の懸念はもっともだ。それは、私からではなく、隣に座るアガルタ王に聞かれたらいいんじゃないかな。ちなみに、アガルタ王の隣に座られているのは、サンダンジのニケ王様だ」

「あ……アガルタ王様、ニケ王様……。まさか……」

「そのまさかだよ。貴国にとっても、我が国を出た後でサンダンジに行くのは苦労だ。そう思ってニケ王様においでいただいた。アガルタ王は、我が国が無理を言っておいでいただいたのだよ」

……どうしたんだ？　いつものバカ殿じゃない。立派な王様になっているじゃないか。俺は思わず、メインティア王の顔を覗き込んだ。

第八百二十四話　メインティア王、語る！

俺の視線は感じているはずだが、メインティア王は涼しい顔をしている。そのとき、国王ビオンが立ち上がった。

「これは、失礼した。アガルタ王とニケ王の武勇は、我が国にも聞こえている。とりわけ、アガルタ王におかせられては、一度、お会いしたいと思っていたところであった。まさか、ここでこうして会えるとは思いもよらぬことであった。以後、よろしくお頼みしたい」

そう言って彼はテーブルを廻り込み、ニケと俺の傍にやって来た。それを受けてニケが立ち上がる。そうなると俺も座ってはいられないので、彼に続いて立ち上がった。

「サンダンジ王国のニケである」

ビオンが差し出した手を、ニケが握り返す。ビオンは無言のまま頷いた。そして、彼は俺の前に手を差し出した。

「アガルタのリノスです」

俺は軽くビオンの手を握ったが、彼はかなり力を込めて握り返してきた。……何となく、嫌いな感じだ。何だろうな、この男。すごく上からの対応だよね？

ビオンは俺の眼を見ながら頷き、再びスタスタと歩いて席に戻っていった。ケダカ王国の宰相マガタはひやひやした様子を隠そうともしない。対して、リボーン大上王は眉間に深い皺を刻みながらビオ

ンの一挙手一投足に注目している。メインティア王は……微笑を浮かべたままだが、何となく冷たさを感じる笑みだ。

「アガルタ王にお尋ねしたい」

席に着くやいなや、ビオンが出し抜けに口を開く。この男の全身から発せられるオーラというか、勢いが半端ではない。何となくあまり話をしたくないなと思いながらも俺は、この男に視線を向ける。

「先ほど、メインティア王がオークキングを説得する、と言われたが、具体的にどのように説得なさるおつもりか」

「まあ、俺の傍には、魔物の言葉を解する者がおりますので、その者を通訳として交渉するつもりです」

「その条件は」

「条件、ですか？」

「そうだ、条件だ」

「特に考えていませんね。サンダンジ、フラディメに関しては、森の魔物たちを攻撃する意志はないことを伝えるつもりです。おそらく、貴国も魔物たちと争う意思はないと考えておりますので、その旨を伝えるつもりでおりますが」

「つまりは、現状のまま矛を納めよと言われるおつもりか？」

「はい。そのつもりです」

「それでは余は民衆から笑いものとなる」

「国王様！」

ビオンの言葉を宰相マガタが遮る。だが彼は宰相を睨みつけたかと思うと、再び俺に視線を戻して、さらに言葉を続ける。

「森の中にあるジンの砦……。あれはもともと我が国の砦である。あの砦の返還を、条件に加えていただきたい」

「いや、元々あなた方があの砦を攻撃したために、森の中で騒動が起こったと聞いていますが？　その砦を返せとは、オークたちは納得するでしょうか？」

「納得する、しない、ではない。あの砦は元々我が国のものである。我が国の先祖が森を開拓し、血と汗で作り上げた砦である。ケダカ王国を預かる身として、それをむざむざ魔物たちに渡したとあっては、先祖に顔向けができぬ」

「……お気持ちはわかりますが、今は森の騒動を納めることが第一なのでは？　砦の話を持ち出すと、さらに話がややこしくなる可能性があります。やはりここは、現状のまま兵を退く、ということでいかがでしょうか」

「それはできぬ。もし、あの砦を失えば、我が国とフラディメの国境も不明確なものになる」

「いや別に、我が国はそこにはこだわりませんよ。ね、父上？」

メインティア王が口を挟む。彼に話しかけられた大上王は、苦虫を

かみつぶした表情を浮かべているが、何も言わないところを見ると、概ね彼の意見に賛成なのだろう。

「それよりも、アガルタ王が言われる通り、我が国は、森の騒動を納めることこそが第一であると考えます。ジンの砦がオークに渡すことで彼らの怒りが収まるのであれば、是非、そうしていただきたい」

そのとき、ドン、という鈍い音が聞こえた。見ると、大上王が厳しい表情を浮かべながら隣のメインティア王を睨みつけている。これ以上、つまらぬことを言うなということだろう。それを理解したのか、メインティア王は、ニコリを笑みを浮かべながら、ビオン王に視線を向けた。

「笑い者、大いに結構」

そう言ってニケが口を開く。ビオン王が驚いた表情でニケに視線を向ける。

「どういう意味であるかな」

「どういう意味もない。砦一つ失うことが、何ほどのことがあろう。その砦一つで、多くの人命が救われるのであれば、そうするべきであろう。そもそも、その砦一つ失うことで、ケダカ王国にどれだけの被害があろうか。砦を確保することで得られる利益と、砦を放棄することで得られる利益……。どちらが有益であろうか」

ニケの言葉に、ビオンは悔しそうな表情を浮かべながら俯いた。ビオンとしても、ここは退くことができなかった。砦の奪還に失敗しただけでなく、親衛隊の大半を失った。さらに、いい年をして、恐

怖のあまり粗相をするという恥までかいたのだ。彼としては、ここで何としてもアガルタ王を説得して、ジンの砦を奪還する方向に持っていきたかった。そうすることで、アガルタを説得し果せたという実績と、砦を奪還せしめたという実績を作ることができる。そうなれば、老人たちが口を挟む機会は減ることになる。しかし、コトは彼の考える方向には進まなかった。

「あくまで貴国がジンの砦の奪還にこだわると言うのであれば、今回、アガルタ王にお願いした停戦についての交渉は、一旦破談という形を取らざるを得ませんね」

メインティア王の言葉に、宰相のマガタがギョッとした表情を浮かべる。

「そして、改めてアガルタ王には、我がフラディメとサンダンジに関して、ムーブの森に侵攻するつもりはないことをオークキングに伝えてもらう。ニケ王様、それでよろしいでしょうか？」

「ウム。我が国はそれで構わん」

「おっ、お待ちください、メインティア王さま！」

宰相マガタが身を乗り出すようにして口を開く。彼の顔は蒼白になっている。

「もとより我が国も、ムーブの森が沈静化することが第一と考えております。今一度、我が王と話をいたします故、しばらくの猶予を……」

「今、ここで決めてもらいたいんだけれどもね」

「ツ……」

メインティア王が笑みを浮かべたまま決断を迫る。宰相マガタは、ジロリとビオンを睨んだ。彼は全く視線を合そうとはせず、むしろ、じっと俺を睨みつけている。

「……もし、アガルタ王の交渉が不調に終わった場合」

「成功するさ」

ビオンの言葉をメインティア王が遮る。ちょっと待て、何の根拠があって成功するなんて言うんだ。勝手なこと言うんじゃないよ。ほら、ビオンが怒っているじゃないか……。

「相手は魔物である。話が通じるとは限るまい……」

「アガルタ王はすでに、ムーブの森に住むハーピーたちを説得しているんだ。オークキングも無事に説得してくれると、私は信じているけれどね。ニケ王様もそうでしょう？」

話を振られたニケは小さく頷いている。ビオンの表情がますます厳しくなる。

「とはいえ、不調に終わることもあろう。もし、不調に終わったら……」

「それはそのときに考えればいいんじゃないかな？　確かに、結果はわからないからね。無事に済むかもしれないし、逆に、オークキングが激怒するかもしれない……。その対策は、時と場合によるも

のだろう？　であれば、結果を聞いてから考えればいいんじゃないかな？　アガルタ王はどう思う？」

バカ野郎、俺に話を振るんじゃないよ。見ろ、ビオン王の顔がメチャメチャ怖くなっているじゃないか……。

第八百二十五話　ニケ、語る

「ま、まあ、私としましては、やってみなければわからない、としか言えないですね」

俺の言葉に、メインティア王がカラカラと笑い声を上げる。

「ハッハッハ！　君らしい言い方だ。まあ、確かにそうだね。やってみなければ、わからないよね。私は失敗することなど微塵も考えていないけれど」

「まあ、そうなれば、いいですね」

「いい加減にせんか！」

いいタイミングで大上王が口を挟む。彼は大きなため息をつくと、ゆっくりと口を開いた。

「我らはアガルタ王に魔物との仲介を頼んでいる立場じゃ。必ず成功させてくれ、などと言える立場でもない。況や、それに条件を付けられる立場でもない」

大上王の言葉には盤石の重みがあった。結果は問わない。交渉してくれるだけでありがたいという思いが、よく伝わる。メインティア王は首をすくめて、申し訳なかったという表情を浮かべている。ニケもその通りだと頷いている。ケダカ王国の宰相も大きく頷いている。だが、国王であるビオンの態度は少し違った。彼は少しいらだった様子を見せながら、両手をテーブルにつき、体をずいっと前の

めりにした。

「大上王殿の申されようは、その通りである。では、言い方を変えよう。アガルタ王の交渉に関しては何も言うまい。だが、我らは常に最悪の事態も想定しておかねばならない。つまり、アガルタ王の交渉が不調に終り、森の魔物たちの活動がさらに活発となった場合、フラディメ、サンダンジの両国はいかがなさるおつもりか。まさか、魔物たちに自由に国土を蹂躙させてよい、とはお考えにはなるまい。森の魔物たちの動きが活発になったそのときは、余は、全兵力をもって魔物どもと戦うつもりである。貴国らは、いかがであろうか」

ビオンの言葉に、ニケが口を開く。

「そのときは、我らも戦う外はあるまい」

その言葉に、ビオンは満足そうに頷く。

「それを聞いて安堵した。さて、もし先ほど申した最悪の状態に陥った際は、フラディメ、サンダンジ、我がケダカが連携して森の魔物たちと対峙することを提案したい」

「それは、どういう意味かな?」

メインティア王が冷たい笑みを浮かべている。何とも薄気味悪い表情だ。だが、ビオンは一切怯まず、少し声を張りながら、堂々とした様子で口を開いた。

「つまりは、三国で新たな同盟を結ぶことを提案したい。いや、ここにはアガルタ王もおいでになるのだ。可能ならば、今、ここで顔を合わせている国同士が盟を結び、備えれば、ムーブの森の魔物ど

もを殲滅し、あの森を領土とすることも可能であると余は考える」

「はあ？」

いかんいかん。思わず声が漏れてしまった。しかし、えらくブッ飛んだことを言う男だ。それは何か？　アガルタも一緒に戦ってくれということか？　バカも休み休み言え。何で俺たちがその戦いに参加しなきゃならないんだ。よしんば、俺が賛成したとしても、マトカルやクノゲンが許さないだろう。この王は自分の立場がわかっているのだろうか。一体、何を食えばそんな考えになるのだろうか。

「……」

誰も声を発する者がいない。メインティア王に至っては、先ほどの冷たい笑みのまま、大上王に視線を向けている。お父上、このバカ殿、どうしましょう、と言わんばかりの様子だ。

「……国王様、その件につきましては先ほど、メインティア王様が言われた通り、アガルタ王様の結果を見て決めればよろしいかと存じます。それにアガルタは、この問題に無関係でございます。アガルタ王様は善意でこの問題に力をお貸し下されているのでございます。ゆめゆめ、それをお忘れなきように願い上げます」

もう、喋ってくれるなと言わんばかりの表情で、宰相マガタが口を開く。その彼に、一瞬だがビオンが殺気を放った。それはニケも感じたようで、彼は呵々大笑しながら白い歯を見せた。

「ウワッハッハッハ。ビオン王は随分勇ましいことだ。まるで、若い頃の我を見るようだ」

「……」

「おそらく、若い頃の我であれば、ビオン王と同じことを考え、そして、同じことを言ったであろう」

「今は違う、と言われるのか？」

「うむ。年を取るとな。どちらかと言えば、守りに入ろうとするのだ」

「……」

「ビオン王にとっては、我の言葉は敗北主義のように聞こえるであろう。いや、そうだ。その通りだ。我は老いて敗北主義となってしまった」

「ニケさん、そんな……」

「よいのだ、アガルタ王。事実である」

ニケは己を蔑みながらも、なんだかとても楽しそうな顔をしている。

「我も若い頃は、己が領地・領土を増やそうと情熱を燃やしたことがあった。そのために何度、こちらにおわすリボーン大上王と刃を交えたことであろうか。砦の一つ二つを巡って血眼になって戦っておった。少しでも領土を広げることこそが国を富ませる手段である、ひいては、我が王としての存在価値であると信じて疑わなかった」

ニケは懐かしそうな表情を浮かべながら、あらぬ方向を眺めている。リボーン大上王は無表情だ。あまり思い出したくない過去なのかも

しれない。

「だが、いくら領土を広げようとも、我が国は豊かになることがなかった。むしろ、人は国を離れていった。何故だかわかるか？」

ニケは視線をビオンに向ける。彼は何とも言えぬ表情を浮かべている。察するに、ニケの言葉の意味がわかりかねているようだ。だがニケはそんなことはお構いなしとばかりに、さらに言葉を続ける。

「度重なる戦いで、人々は疲弊しきっていた。皆、戦いのない国を求めて国を去っていったのだ」

ニケはそう言うと、大きなため息をついた。

「人がいなければ国は衰退する。人はいても、人の心が離れれば国は乱れ、衰退していく。国内で騒乱が起こったとき、それに気づいたがもう遅かった。いつしか奪った国土は奪い返され、あまつさえ、自領の一部を失うことにもなった。きっと、そこにおいでの大上王殿は、それがわかっていたのだろう。一気に反撃に転じ、各個撃破していかれたのは見事であった」

「フン、昔の話じゃ。再び同じ状況となれば、結果はわからぬわい」

「フフフ、ご謙遜なさるな。……失った領土を取り戻したいと思ったが、それは家来たちが許さなかった。いや、なにより、我が国に住まう民衆たちがそれを許してくれなかった。我は悩んだ。もはや、王としての資格はないのではないか。何のために生まれてきたのであろうかと苦悶した。だが、王としてどう生きるべきかを教えてくれたのは、敵であったフラディメ王国であった。散々、我が国と戦いを交わしていながら、フラディメは着実に国力を高めていった。

一体何故か。我はこの国を観察することにした。そうすると、我と明らかに違う点があることに気づいた」

ニケは笑みを浮かべながら、まるで大上王の顔を覗き込むように前のめりになった。だが、リボーン大上王はプイッとそっぽを向いた。

「フラディメは……。リボーン大上王は、何よりも人を大切になされておいでであった。どうすればフラディメに住む民が災厄に会わず、豊かに暮らせるだろうかと、自ら学び、実践なされていた。これを聞いたとき、我は頭を殴られたような衝撃を受けた」

ニケは優しい眼差しをビオンに向けると、まるで諭すような口ぶりで話しかける。

「それ以降、我は領土の拡張を止め、民が、人々がいかに我が国で生きやすい環境を作るかに注力した。サンダンジが何とか今の体制を維持しているのも、それがあったからであると信じている。ビオン殿、そなたの国にかける情熱は素晴らしい。我以上であると言える。どうであろうか。その熱い情熱を、国の中のことに向けられてはいかがであろうか」

ニケの言葉に、ビオンはバツの悪そうな顔をした。その一方で、隣に控える宰相マガタは、ハラハラと涙を流していた……。

第八百二十六話　若い若い

国王ビオンは、ぶ然とした表情のまま部屋を後にした。どいつもこいつも……と腹の中で呟いた。そして、自らが知る、あらん限りの下劣な言葉で、その部屋にいた者たちを罵った。

全くふざけた連中ばかりだった。目の前に座るメインティア王……。ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべながら人をバカにしてくる。フラディメ始まって以来の愚劣な王であるという評価は、全く正しい。あんな輩に我が心など伝わるわけはない。

サンダンジのニケ王も、知ったようなことばかりを言う大バカ者だ。一体、我の何を知っているというのか。そもそも、サンダンジとケダカでは国の状況が違う。我が国に国を捨てるような愚か者は皆無なのだ。まるで我が国が、国王たる我が、民衆から見捨てられるようなことを言うが、国内でそのような兆候は今まで見たことなどない。貴様ら三等国と一緒にするな。確かにこれまでは、タナ王国を撃退し、クリミアーナ教国のヴィエイユ教皇を助けるなどして名を挙げているが、所詮それは運で掴んだ勝利なのだ。今でもその内実は、いつ滅んでもおかしくない国なのだ。それを証拠に、彼の王太子はアガルタに留学という名目で追放されているという。自国の、自らの家族でさえも心を掴めぬ男なのだ。そんな男が、我のことを語る資格などない。

アガルタ王……。あんな軟弱な男に何ができようか。あれは本当に噂に聞いたアガルタ王なのだろうか。品性のかけらもなく、強さの片りんも感じない。一瞬で握りつぶせそうだ。あのような男は、我が親衛隊に入れば、一日で音を上げることだろう。あんな男に何が

できようか。

唯一話がわかりそうなのは、あのリボーン大上王だが、明らかに人の話を聞くような人間ではない。己の意見を最後の最後まで押し通そうとする男だ。話し合いが通じるような者ではない。

そんな者たちに、我が国の宰相は涙まで流して首を垂れ、協力を懇願していた。あれがケダカの宰相であろうか。亡き父上がいらっしゃれば、激怒されるに違いない。

……あの男は、殺さねばならぬ。

国王ビオンは心の中で粛清を決意した。国内で多くの血が流れることを覚悟した。しかしそれは、自らの信念を持ってやらねばならぬと、彼は心の中で覚悟した。

強烈に彼の腹の中から何とも言えぬ、どす黒い欲望が噴き出してきた。目の前には、部屋に案内するための侍女が静かに歩いている。ふと、この女性を剣で真っ二つに斬りたい衝動に駆られた。むろん、そんなことをするわけはないが、この衝動を沈めるには、女を抱くに限る。だが、ここはフラディメ王国だ。そのようなことが許されるわけはないことは、よくわかっている。身の回りの世話をする女性は連れてきているが、どれもこれも醜女ばかりだ。到底その欲望を満たすことはできない。これは明らかにあの宰相マガタの差し金だ。

……トウシがいてくれたら、な。

ビオンは心の中でそう呟く。幼い頃の彼には、三人の傅役がいた。すなわちそれは、オヤマ、トウシ、そして現在の宰相であるマガタ

だった。

マガタは、一度言ったことは決して曲げぬ男であり、ビオンが最も苦手とする男だった。そして、もう一人の傅役であるオヤマも、好きになれない、言わば面倒臭い男であった。ビオンが彼の忠告を守らないと、オヤマは剣を抜いてビオンに差し出し、私の言うことが聞けぬのであれば、斬ってくれと言うのだ。実際、その剣で本当に斬ろうと思ったことも一度や二度ではなかったが、父が存命中の頃であり、彼はひたすら耐えるしかなかった。

そんな中、ビオンの心に寄り添ったのが、もう一人の傅役たるトウシだった。彼はよく、酒を持ってビオンの前に現れ、いや、大変ですな、などと言いながら酒をつぎ、慰めてくれるのだった。そして、頃合いを見て、マガタやオヤマの言っていることも一理はあります。彼らには私の方からうまく言っておきますから、ここは私の顔を立てて、わかったと言っていただけませぬかと、あくまでビオンの立場を尊重した物言いをしてくれたのだった。そのトウシが今、ここにいてくれたらば、己の立場も大きく違っていただろう。彼は心の中で大きなため息をついた。

その頼みとするトウシはもうこの世の人ではなかった。彼は父が見罷る直前に病に倒れ、そのままこの世を去ったのだった。

トウシがいてくれたら……。彼さえいてくれたら。あの者だけが、我の心をわかってくれた……。ビオンは心の中でそう呟いたが、それは、亡き父が敢えてそうした者たちを傍に置き、ビオンの教育を事細かに指示していたということを彼は知らなかった。そのために彼は、今も残る二人の傅役、とりわけ、宰相の地位にあるマガタに対して、憎しみとも絶望ともつかぬ思いを強くしていった。

……あの者にわが心はわからぬ。いや、わかろうともせぬのだ！

ビオンは思わず舌打ちをする。その音に驚いたのか、侍女が立ち止まって振り返った。

「あ、いや、何でもない」

女性はニコリと微笑むと、再び静かに歩き出した。ビオンはこの女性を美しいと思った。

改めに見廻すと、このアリスン城に仕える女性たちは皆、美しい者たちばかりだ。選りすぐりの者たちと言ってよかった。この国の王は、日ごと夜ごと、女性たちを閨に召して、酒池肉林の日々を送っていると聞いた。この美女たちを目の前にすれば、それも致し方ないことであるとビオンは考えた。できようことなら、今、目の前を歩いている女性の手を引いて寝所に引きずり込み、その衣を引きちぎって欲望の限りを尽くしたいと思う。見ればまだ、男を知らぬと見える。そのような者を蹂躙し、己のものにしたいと思う。最初は苦痛と苦悶の表情を浮かべるだろうが、そのうち、我の胸の中で許しを請いながらすすり泣くようになるのだ……。

鼻息が荒くなってきた。己の逸物が固くなってきているのがわかる。それを悟られまいとビオンはあらぬ方向に視線を彷徨わせた。

◆　◆　◆

「どう思う、あの国王？」

メインティア王が軽蔑の表情を浮かべながら口を開く。それはそうだろう。この王が一番嫌うタイプの男だ。まあ、俺自身もあまり好

きなタイプではないが。

「まだ、お若いのよ」

ニケが優しげな笑みを浮かべながら呟く。その言葉に、大上王が反応する。

「いや、若いからと言うて、あのまま放っておけば、間違いなくケダカは崩壊する。崩壊せなんだとしても、あの国は大いに乱れる」

「認めたくないものだな、自分自身の若さゆえの過ちというものを、という言葉を……」

「いや、儂はアガルタ王のことを申しているのではない。そなたは、何も過ちを起こしてはおらぬ。自らを卑下することはない」

……大上王に真面目に突っ込まれてしまった。いや、何とも恥ずかしい。

「まずは、アガルタ王には、ご苦労ではあるが、魔物との交渉をよろしくお願いしたい。うむ、我が国ができることなれば、何でも言ってくだされ。今日はせっかくこうしてニケ王とアガルタ王が、我がアリスン城においで下されたのだ。酒でも酌み交わしながら、旧交を温め合おうぞ」

そう言って大上王は立ち上がり、ニケも立ち上がる。それに釣られるようにして、俺も立ち上がった。

「……あのビオン王、人物は嫌いだけれど、女性を見る目はあるね」

廊下を歩いているとき、不意にメインティア王が話しかけてきた。

「あの女性、とてもいいね。ふくよかで特徴ある顔をしている……。実に美しい。閨でじっくりとその体と顔を眺めてみたいものだね。何とかならないかな？」

「じっと視線を向けて、ニコリと微笑めばいいんじゃないですか？」

「ほう、意外な答えだね。そんなことで彼女の心が掴めるだろうか？　……一度、やってみるよ」

メインティア王は笑顔で頷く。俺は面倒くさいなと思いながら、ゆっくりと息を吐き出した。

第八百二十七話　探しものは、見つけにくいもの？

大体、女性を視線でオトすというのは、とんでもない男前だけに許された特権であって、並みの男がやるとむしろ、嫌われる要因ともなり得る。あのコ、ずっと私のことを見ているんだよね、とか、ずっとエロい目で私を見ている、とか言われて、女子たちのヒソヒソ話のネタになるのだ。あのバカ殿も、そうやってビオン王の侍女たちに笑われればよいのだ。ちなみにこの手法は、その昔の映画俳優が言っていた言葉だ。敢えて名前は伏せるが、その当時の写真をみると、それはそれは男前で、これなら、じっと見つめられた女性は恋に落ちるだろうと思わせる顔立ちだ。

話を元に戻す。その後、大上王に招かれた俺たちは、広いダイニングのような場所で食事を共にしながら酒を酌み交わした。最初は、ムーブの森についてなどの真面目な、政治的な内容だったのだが、酒が進み、興が乗ってくると、大上王とニケはメイの話題で盛り上がった。大上王は望めばすぐにメイに会えること、メイがいかに聡明で気立てがよい女性であることを滔々としゃべり、ニケはニケで、メイの外見がいかに美しいものであるかを切々と語っていた。俺はというと、その二人の話を苦笑いを浮かべながら聞いていた。確かに妻のことを誉められて悪い気はしないのだが、二人とも度が過ぎる。まるで完璧な女性であるかの言い方は、誇張という表現では済まないほどのものだった。メイはあれでも、おっちょこちょいな部分もあるし、苦手な部分ももちろんある。特に彼女は、一人で没頭することが好きなタイプで、多くの人と交わりながら何かを作り上げるというのが、実はあまり好きではないのだ。特に、集中して作業しているときに話しかけられると、むろん、嫌な顔をすることはないのだが、その後はかなり疲れてしまう。察するに、それまで保

っていた集中力を一気に引き上げようとしているのだろう。屋敷に帰ってくると、顔色が悪くなっていることがままあるのだ。そういう点では、メイは時間をかけて完璧なものを作り上げるけれど、その分、自身の精神と肉体をすり減らしているために、あまり多くのことを頼みにくいのだ。

その点で、何もかもを最もそつなく、見事に仕上げるのはリコだ。彼女に任せておけば失敗はないと全幅の信頼を置くことができる。とはいえ彼女にも苦手な部分はあって、攻撃されると弱い、という点があるのだが。まあ、あまり妻たちのことを言うとあとで怒られそうなので、この辺でやめておくことにする。

メインティア王は気がつくと姿を消していた。少し嫌な予感はしたが、大上王とニケが盛り上がりすぎて、それを考える時間はなかった。帝都の屋敷に帰ったのは、夜も更けてからになった。

家族は皆、寝てしまっていた。部屋に入るとまだ明るかったが、ベッドにメイが眠っていた。そうだ、今日はメイの日だったのだ。どうやら待ちくたびれて眠ってしまったようだ。俺は彼女を起こさないようにライトを消して部屋を出て風呂に入り、再び戻ってきた。ベッドに入ると、メイが静かな寝息をたたえていた。

ふと、彼女の顔を見たくなった。悪いなと思いながらライトを出して周囲を明るくする。彼女を起こさないように、魔力は調整して明るさを暗めに設定する。

美しい寝顔だった。邪な感情など微塵もない、とてもきれいな寝顔だった。なるほど、聖女と呼ばれる理由がよくわかる気がした。こんな姿は大上王やニケがいかに頑張ろうとも、見ることは叶わない。俺だけに許された、特別な時間だ。そう思うと、何とも貴重な時間

であるような気がしてきた。

そういえば、結婚以来、こうやってまじまじと寝顔を見るのは初めてな気がした。俺はしばらくの間、メイの美しい寝顔を眺めていた。

◆　◆　◆

翌朝、朝食を摂っているときに俺は頓狂な声を上げた。皆、一様にポカンとした表情で俺を見ている。普段あまり感情を露わにしないエリルも、キョトンとした表情を浮かべている。その理由は、ゴンが行方不明と聞いたからだ。

「いない？」

ゴンは魔物の言葉を解する能力を持っているために、魔物との交渉はヤツを伴って行こうと考えていたのだが、これでは俺の計画が頓挫してしまう。確かに最近、ヤツの姿を見ていないなとは思っていた。それは、ここ最近俺が忙しく、生活が不規則になっていたからだ。てっきり昼は懸命に働き、夜には家族と一緒に食卓を囲んでいるものだとばかり思っていた。だが、リコの話では、ここ三日間帰って来ていないのだと言う。

「どこにいったんだ？」

「大体察しは着くのですが、私の予想したところにはいませんでしたわ」

「まさか……アイツまた、大人の遊園地に……」

「ともかくこれからゴンを探しますわ。最悪の場合は、私が参りま

すわ」

「リコが？　いや、それは止めてくれ。リコにもしものことがあったら……」

「きっと見つかりますわ。ただ、リノスと共にムーブの森に行けるかどうかが気になるのですわ」

「……どういう意味でしょうか」

「ともかく、参りますわ」

「どこへ？」

リコは目でついて来いと合図をしたので、俺は無言のまま彼女の後に付いて行った。リコは転移結界のある小屋に向かうと、何の躊躇もなくそれに乗った。そこは……おひいさまのお屋敷に通じる結界だった。

「ほほう。ゴンが行方不明とな。うむ、妾に任せておくがよい。眷属の分際で妾から逃れられる術はないわぇ」

おひいさまはそう言って目を閉じた。彼女に従う女官の千枝、左枝も、何の心配もないと言った表情を浮かべている。ちなみに、ちゃんとお土産は用意した。ありあわせのものだが、とにかく俺の持つ無限収納にあるお菓子類を皆、差し出したのだ。

「……捕らえたぞよ。ホッホッホ、しゃらくさい術を使いおって」

おひいさまの声と同時に、ゴンが天井から降ってきた。

「いっ、痛いでありますなー。吾輩を誰だと思ぇぇぇぇ、ヒック」

ヤツは酔っていた。強かに酔っていた。酒の匂いが辺りに立ち込めている。

「三日三晩も居続けで飲み続けるとは、そなたも偉くなったのう。……まだ酔っておると見ゆる。目を醒まさせてくれようぞ」

おひいさまがクイッと顎をしゃくると、側に控えていた千枝、左枝がスッと立ち上がり、音もなくゴンの傍に寄った。まさに一瞬の早業だった。千枝が片手で、まるで汚いモノを処理するかのようにゴンを掴むと、二人は音もなく部屋を出て行った。その様子を見てリコは、深々と頭を下げた。

その直後、部屋の外から叫び声が聞こえた。ギャーともウォーともつかぬ、腹の底から出された叫び声だった。しばらくするとその叫び声はゴメンナサイの声に変わり、それはいつまでも続いて、止むことがなかった。

「あっ、あの……。一体、何をやっているので?」

「心配ない。単に酒を抜いておるだけじゃ。ホッホッホ」

「さ、叫び声が、先ほどから止まりませんが……」

「叫び声? ハテ、妾には一向に聞こえぬ」

「う……」

「心配するな。程なくして帰宅させようほどに、そなたたちは先に戻りゃ」

「でっ、でも……」

「さ、リノス。帰りましょう」

「え？　リコ……」

「帰りましょう」

ものすごい笑顔で言われてしまった。まるで、魂が抜けてしまったかのように俺は呆然と立ち上がる。するとリコはキュッと腕を組んで、まるで俺を引きずるようにおひいさまの屋敷から連れ出した。

それからしばらくしてゴンは帰ってきた。彼はうつ伏せのままずっと泣いていた。しばらくすると、アリリアが寄ってきて、ゴンの体に花から摂った絵具で落書きを始めた。それを咎める者は誰もおらず、程なくしてゴンは、虹色の狐となった……。

第八百二十八話　割かし、責任重大

ゴンは俺とムーブの森に行くことを嫌がった。おひいさまの眷属を辞めると言って聞かなかったのだ。まあ、それはいつものことなので、しばらく経てばコロッといつもの彼に戻るだろうと思っていたが、三日経ってもそれは直らす、四日目にはついに荷物をまとめ始めた。

「お世話になったであります」

夕食後、彼はそう言って家族の前で頭を下げた。思わぬ話に皆、キョトンとした表情を浮かべている。

「……誰も、止めぬのでありますかー」

ゴンは悲しそうな顔をした。止めるも止めないも、突然のことで、皆、呆気にとられているのだ。

「ご苦労様でした」

そんな中、口を開いたのはソレイユだった。彼女は愛嬌のある笑みをたたえながらゴンを眺めている。

「出て行く、というのであれば、あなたの意思を尊重します。でも、本当にそれでよいのですか？　ただのキツネになってこの、厳しい世界で生きていく覚悟はあるの？」

「う……」

ゴンは思い出していた。白狐になるまでの、野生にいた頃のことを。決して楽な生活ではなかった。そして、二百年の時を経て、ようやく白狐になれたときの喜びを噛みしめたときのことを思い出していた。

「リノス様をはじめ、私たちはあなたがこの家にいてくれることに、何の不都合を感じてはいません。むしろ、いてくれた方がいいと思っています。しかし、あなたが出て行く、というのであれば、私たちは止めません。この家にいるのかいないのかは、あなたが決めることです」

ゴンは無言のまま項垂れる。その様子を見て俺はソレイユを、意外に喧嘩が強いんだなと思った。

「三日後、俺はムーブの森に向かう。ついてはゴン、お前に魔物たちの通訳を頼みたい。どうだ」

俺の言葉に、ゴンはゆっくりと頷いた。それと同時に、家族の皆が一気に息を吐き出した。全員、息を詰めて事の成り行きを見守っていたのだ。ゴンが出て行くのを止めたことを知って、一安心といったところだ。

「リノス様、ムーブの森には、私もお連れください」

出し抜けにソレイユが口を開く。これも予想していなかったことなので、俺は驚きの表情を彼女に向けた。

「私をお連れくだされば、魔物たちの動きも大人しくなるでしょうし、オークキングとのお話しも円滑に進むと思います」

そう言って彼女は胸を張った。リコが何かを言おうとしている。ふと見ると、その隣に座っていたシディーが大きく頷いている。いつもの彼女の直感が大丈夫だと言っているのだろう。その様子を見たリコが言葉を飲み込んだ。マトカルは……いつもと変わらぬ表情だ。メイはどうしてよいのかわからないと言った表情だ。

「じゃあ、ソレイユ。一緒に来てくれるかな？」

俺の言葉に、彼女は笑顔で頷いた。

◆　◆　◆

そして三日後、俺とゴン、そしてソレイユはムーブの森の入り口に立っていた。

森には、フラディメから入ることにした。理由は三つあって、一つが大上王が何としてもフラディメから入ることを主張して譲らなかったことと、フラディメには一応、ムーブの森の地図があることと、そして最後は、単純にアリスン城からムーブの森までの距離が近かったからだ。

ニケのサンダンジからも行けないことはなく、ニケも一応はサンダンジから入ることを提案したのだが、サンダンジは砂漠を超えて行かねばならないし、かなりの時間がかかってしまう。まあ、イリモの翼を使えば一日あれば行けてしまうのだが、最終的に大上王の勢いに押されてしまった形となった。

ケダカ王国のビオンは結局、特に俺たちに何も言わないまま帰途に就いた。その一方で、宰相のマガタは、何度も何度も俺たちに礼を

言っていた。ビオン国王は、この宰相の柔らかい物腰とものの言い方を少しは学んだ方がいいんじゃないかと思ったが、もちろんそれは口には出さなかった。

リボーン大上王は、俺たちをムーブの森に送るにあたり、完全武装の三千の兵士を揃えていた。その兵士たちに守られながら馬車で送られたのだが、何故かそこにメインティア王も乗り込んできた。この国の国主として兵士を指揮して俺を守るのだと言っていたが、それは表向きの話で、内実は大上王から無理やり送るように言われたからであることは明らかだった。ただ、こうした軍事的な事柄は極端に嫌う男が、大上王の命令とはいえよく承知したなと思っていると、彼は馬車が走り出すや否や、嬉しそうに話を始めた。

「いや、大成功だった。さすがはアガルタ王だね」

馬車の中には俺とソレイユしかいない。あ、ゴンは俺の膝の上にいる。彼はソレイユがいるにもかかわらず、饒舌に語り出した。

「ビオン王の侍女だけれどもね、名前はセネ、と言うんだ。私がじっと彼女を見つめて眼が合うと、ニコリと微笑む……。そうすると彼女は顔を赤らめながら私に視線を向けるんだ。そのとき思ったね。これは脈があるなと。それで彼女を私の部屋に呼んだんだ。ビオン王に伝えてもらいたいことがあると、ね。彼女は私の部屋にやって来たんだ。そうなればあとは簡単な話だ。やさしく彼女の美しさを褒めて愛を確かめ合う……。いや、すばらしい女性だった。久しぶりに心が高ぶったよ。いや、君には本当に感謝するよ」

……冗談だろう、という言葉を飲み込む。国王付きの侍女に手を付けた……。一歩間違えば戦争の口実になるような話だ。それに、こう言っては何だが、あんなにふくよかな女性をやっつけたというの

か。この王はある意味ではメンタル最強という称号を与えていいのかもしれない。

ドン引きする俺の隣で、ソレイユは、それは素晴らしいですね、などと言って相槌を打っている。こう言っては何だが、ソレイユが至近距離で正面に座っているのだ。大抵の男は挙動不審になるのだが、この王は全くそうした様子は見られない。察するに、本当にソレイユに興味がないのだろう。この王のB専ぶりは、筋金入りだ。

ちなみに、ソレイユの衣装は、白い布を体に巻き付けたようなデザインだ。胸などの大事な部分は布を厚くしているのだが、彼女は当然ながらノーパンノーブラだ。光の加減によっては、胸の形が完全に見えてしまうこともある。そのために、よく訓練されているフラディメの兵士も、目で彼女の姿を追っているのがよくわかる。そんな様子にソレイユは満足感を得ているのだが、今、目の前に自分に全く興味を示さない男が座っている状況は、彼女にとってはどうなのだろうか。

そんな俺の心配をよそに、二人は恋バナで盛り上がっている。そのとき、スッとソレイユが足を組んだ。チャイナドレスのようにスカートの両脇にスリットが入っているので、真っ白な太ももが露わになる。思わず俺は視線を逸らせるが、メインティア王は全く気にもしていない。

「そういえば、俺たちがムーブの森に入った後は、あなたはどうなさるおつもりで？」

雰囲気を変えようと別の話題を振る。メインティア王は不思議そうな表情を浮かべた。

「すぐにアリスン城に戻られるのですか？」

「いや、君たちが出てくるまで森の外で待機する予定だ。あのビオン王の懸念が全く的外れなものだと証明しなければならないからね」

「いや、俺の交渉が上手くいく確率は……」

「いや、うまくいくさ」

「そんな根拠もないのに……」

「君なら大丈夫さ。父上もニケ王も全幅の信頼を置いている。いままで不可能を可能にしてきたじゃないか。これまでの事柄と比べれば、簡単な仕事じゃないか」

「そんなことはないですよ」

「随分謙遜するんだね。フフフ。帰国する日のビオン王の顔を見たかい？　ものすごい顔をしていたよね、クックック。隣の宰相に、ムーブの森からの魔物の襲撃に備えろと急使を立てさせていたよね。それが無駄であること、ひいては、彼の考える方向性が間違っていると気付かせるのにちょうどいいじゃないか。それがわかっているから、あの宰相も何も言わなかったんだ。この交渉は、あのケダカ王国の未来も変えることになる。しっかりとやっておくれよ」

「……何を言ってやがんだ」

俺は思わず天を仰いだ……。

第八百二十九話　森の中のピクニック

ムーブの森に着いたのは、すでに陽も傾きかけている頃だった。空が真っ赤に染まっていて、実にきれいだった。きっと明日は天気になる。絶好の洗濯日和になるだろうな、などと下らぬことを考える。

「ああ、いい景色だ。確か今夜は満月だったね。この様子ならきっと、見事な月が出るだろうね」

メインティア王はそう言って、家来が用意した椅子に腰を下ろし、懐から紙と筆を取り出して、赤く染まった空をスケッチし始めた。その家来たちは慌ただしく動いて、メインティア王の傍に火を起こそうとしている。どうやら彼はここで俺たちの帰りを待つらしい。魔物に襲われる可能性があるというのに。

正直、この王の振る舞いに俺は感動していた。いつ帰ってくるのかが俺自身にもわからないのだ。下手をすれば、四日、五日の時間がかかるかもしれない。この王のことだ。きっと明け方になれば引き上げてしまうのだろうが、それでも、この危険地帯で俺の帰りを待つという姿勢を示してくれたことに、感動を覚えてしまったのだ。だが、この気持ちも、すぐに裏切られることになる。

「あ、すまないけれど、私たちに結界を張っていってくれないかな。明日の朝まで持てばいいよ」

……俺に結界を張らすんかい。お前たちの傍には結界師はおらんのかい。いや、いるじゃないか。お前とお前とお前、結界師じゃないのか？　その姿はどう見ても結界師じゃないか。自分のところの王

だろう。アンタらが守りなさいよ。

結界師の格好をしたヤツらは、俺と目を合わせようとしない。まあ、気持ちはわかる。一晩中結界を張り続けるしんどさは、同じ結界師としてよくわかる。でも、そこを怖がっちゃぁスキルは上がらないんだよ。ぶっ倒れるまで魔力を使い果たしてこそ、魔力は上がっていくんだ。俺なんか何度ぶっ倒れたか、わかったもんじゃない。

心の中でそんなことを愚痴ってみるが、それをしたところで、どうにもなるわけではない。そう自分に言い聞かせて、俺は無言のまま、周囲に結界を張った。

兵士たちからおおっ、という歓声が上がる。どうだ、これだけ広範囲の結界はあまりお目にかかったことはないだろう。そこの若い結界師たち。この結界を見て、よく勉強するのだ。

「リノス様」

ソレイユの声で我に帰る。ああ、いかんいかん。普段見せないブラックリノスが顔を出していた。いいや、そんなこと考えちゃいけないよね。世のため人のために尽くす男であらねば。

そんなことを考えながら、俺はムーブの森に向き直る。何とも禍々しい気配のする森だ。今にも魔物たちが飛び出してきそうな雰囲気だ。

ゴンが俺の肩から下りてきて、森の入り口で止まる。スンスンと鼻を鳴らしているところを見ると、どうやらオークキングの臭いを探り当てているらしい。

「……随分、魔物が多いでありますなー」

ゴンの嗅覚をもってしても、オークキングの臭いをかぎ取るには難しいらしい。それだけ魔物の数が多いということだ。これは油断できない。

ふと見ると、ソレイユがゆっくりと歩いてゴンの傍に近づいていく。彼女はゴンに何かを言うと、スッと両手を挙げて、何かを迎え入れるようなポーズを取った。

一瞬の静寂の後、彼女の体から金色の筋がいくつも立ち昇っているのが見えた。その光量は増していき、彼女が纏っている白の衣装が、いつしか金色の、神々しいそれに変わっていた。

「ソ、ソレイユ」

思わず彼女の傍まで歩を進める。彼女は少し笑みを浮かべながら、真っすぐに森を見つめている。すると、俺たちの目の前に、薄緑色の球体のようなものが現れた。まるで、霞のような、水蒸気の塊のようなものだ。

「ようこそおいで下さいました、ソレイユ様。我ら一同、心より歓迎申し上げます」

とても美しい声がその球体から聞こえてきた。俺は驚きを隠さなかったが、ソレイユは落ち着いた様子で、笑顔で頷いている。

「お出迎えご苦労様です。我らはこれよりオークキング、マモの許に参ります。すまないけれど、道案内をお願いします」

「お安い御用でございます」

緑の球体はそう言うと、ホワホワと森の中に消えていった。

「さ、参りましょう」

「ソレイユ、今のは……」

「森の精霊です。私は元々森の精霊を契約していましたので、話すことができるのです。さすが神龍様ですね。精霊の中でも最上位の者が現れました。これで、森の中は安全です」

彼女はそう言ってニッコリ笑い、スタスタと森の中に入っていった。

俺も慌てて後を追う。

「……吾輩、別にいなくてもよかったのでは？」

ゴンが俺の肩の上でそんな言葉を呟いた。

森の精は的確に俺たちを案内してくれた。決して悪路を選ばず、獣道ではあるけれど、ちゃんと道がついた場所を選んでくれていた。

そして何より、ソレイユの体がら発せられる金色の光が、俺たちの周囲を照らしてくれているので、暗い森の中を歩くのに何の支障も感じなかった。彼女は森に入ると、周囲の目など知ったことではないとばかりに俺の腕に抱き着き、胸を押し付けてきた。

「こうして二人っきりで歩くのは、久しぶりですねー」

「おいおい、ピクニックに来ているんじゃないぞ。それに、二人っきりじゃない。ゴンもいるからな」

「ああ、そうでした。それは失礼しました。ゴンさんがいなければ、森の中で一休みもできたのに……」

そう言ってソレイユはさも、残念そうな表情を浮かべる。森の中で一休みならばいつでもできそうなものだが、彼女が言っているそれは、そういう意味ではなく、そういう意味なのだろう。

俺はオホンと咳払いをしながら、森の中を歩いていく。途中、ぬかるんだ場所があるなどして足を取られかけたが、何とか無事に歩くことができた。途中、魔物の襲撃を覚悟していたが、それはなく、本当に暗い森の中でのピクニックになってしまった。これは、俺の張っている結界というより、ソレイユが発する神々しい光とその気配で、魔物たちが寄り付かなかった、いや、寄り付いてこられなかったと言った方が正しいだろう。

どのくらい歩いただろうか。体感的には三十分くらいだろうか。突然、森の精が消えた。

「どうやら着いたみたいですね」

ソレイユの体を纏っていた光がスッと消えた。彼女は俺にライトを出すように促した。掌に魔力を集中してライト、今回は少し大きめのライトを出すと、目の前には大きな洞窟があり、そこからオークたちがゾロゾロと出てくる様がはっきりと見えた。それを見たゴンが俺の方から飛び降りて、オークらに向かって何か話しかけた。

「……話すことなどない、と言っているであります～」

ゴンがそう言って後ずさりを始めた。見ると耳がピンと立ち、尻尾

もピンと立っている。これはかなり警戒している証拠だ。確かに、オークらから発せられる気配が、殺気が尋常ではない。今にも俺たちに飛びかからんばかりの様子だ。

一頭のオークが片足を踏んで地面を鳴らしだすと、他のオークたちも次々とそれに倣って地面を鳴らしだした。その足踏みで地面がかすかに振動しているのが伝わってくる。いよいよ襲って来るのか。俺は握りこぶしを作り、そこに魔力を集中し始めた。

そのとき、足踏みが止んだ。

「下がれ、と言っているでありますー。オークキングが出てくるようでありますー」

ゴンが正面を向いたままで口を開く。すると、穴の中から何やらデカイものがゆっくりと姿を現した。全長、三メートルの巨大な体躯を持った魔物……。どうやら、コイツがオークキングらしい……。

第八百三十話　森の仲間たち

オークキングはじっと俺たちを見下ろしたまま、微動だにしない。何となく、だが、俺の戦闘力をはかっている……。そんな気がする。だとすれば、この魔物はそれなりの知性を備えていると言える。

初見の相手に対して、その戦闘力を読み解く、というのは、戦いをする中での鉄則だ。己の力を過信してただやみくもに突っかかって来るような相手ならば御しやすいが、相手のスキルを読み解いた上で対策を立てて攻撃してくる相手は気を付けなければならない。

オークキング・マモは、ブウブウといびきのような鳴き声を上げながらひたすらに俺たちを眺め続けている。しかもその視線は、俺、ソレイユ、ゴンの三人に均等に向けられている気がする。どうやら、バカではないらしい。

マモは何故か、鎧のような防具を装備していた。他のオークらが布一枚巻きつけただけの、ほとんど裸と変わらない様子であるだけに、馬子にも衣裳というか、何とはない威厳を漂わせている。

彼は右手に太い丸太を持っていた。これを森の中で振り回されると厄介だなと考える。振り回したところで周囲の木々に当たって武器として役に立たないだろうという考えもよぎったが、その木々をへし折りながら攻撃してくる雰囲気がその体躯から満ち満ちていた。

「……中に入れと言っているでありますー」

ゴンの声と共に、オークキング・マモはクルリと踵を返した。

オークの集落は、洞窟の中にあると思っていたが、そこは、木や石で組み上げた高い壁に囲まれているだけだった。その内側にオークの住処と思われる掘っ立て小屋が犇めいていた。ふと頭上に視線を向けると、空が見えた。雨が降ってきたらどうするのだろうか。集落一帯が水浸しになるだろう。それに、排水はどうなっているのか。それを上手くやらないと、たちまちこの集落は冠水してしまう。それに、疫病なども流行りやすくなる。

そんなことを考えていると、オークキングの動きが止まった。彼の目の前には大きな焚火があった。火柱がまるで空に吸い寄せられているかのように揺らめいている。彼はその前にどっかりと腰を下ろした。どうやら、一応は俺たちの話を聞く気らしい。

「今回のこの森の騒動ですが、フラディメ、サンダンジの両国については、今もこれからも、この森を攻撃する意志はないとのことです。併せて、ジンの砦を所有するケダカ王国も、攻撃の意思はなく、現状のまま騒動を納めて欲しいと言っています」

俺は一気にそう言った。ゴンが通訳している。オークキングは微動だにしない。その顔からは、俺たちの話を聞いているようでもあり、一切聞く耳を持たないという雰囲気も感じられ、その心の中を図ることはできなかった。

「……あの建物は、我々のものだ、と言っているでありますー」

あの建物、とはジンの砦のことだろう。まあ、ビオン王の気持ちに寄り添えば、何とか頑張ってその砦を取り返すように交渉するべきなのだろうが、別にあの王に何か恩義があるわけでなし、正直なことを言えば、あまり好きなタイプではないので、特にその点は何も

言わず、あなた方が所有してもらって結構ですとゴンに伝えさせた。

マモが何かを喋っている。それをゴンが言い返している。二人の会話の内容は全くわからない。おいゴン、通訳しなさいよ。

「……自分たちだけでなく、多くの森の仲間たちの領域が荒らされた。人間たちを許すことはできないと言っているでありますー」

「それじゃ、話は終わってしまうな。どうすれば許してもらえるんだ？」

俺の言葉をゴンが再び通訳する。マモはしばらく考える素振りをしていたが、やがて、ゴンに短い言葉を伝えた。

「……踏み荒らした森を元の形に戻せ、と言っているでありますー。……ちょっ、吾輩が喋っているときに喋るとわからなくなるでありますー。ええ？　うん。うん。ええ。ええ。えええっ？」

ゴンは首だけをオークキングに向けてその話を聞いていたが、やがて俺に視線を向けると、困った表情を浮かべながら口を開いた。

「どうしましょ？」

……バカ野郎。マモが何を言っているのかを通訳しなさいよ。こっちはわからないよ。

どうやらオークキングは、人間たちの町や村を襲って、あらゆるものを強奪する意志を持っているようだ。そうしないと、森の仲間たちは納得しないと考えているらしい。そのとき、ソレイユが自分の腕を俺の腕に絡めてきて、耳元で小さな声で呟く。胸がひじに当た

っている。……柔らかいなぁ。

「……森の魔物たちは、これ以上争いたくないと思っているようです。どうしてもオークが人間を襲うというのであれば、ハーピーたちが黙っていないと言えばいいと思います」

ソレイユの言葉をそのままゴンにオークキングに通訳させる。彼は少したじろぐと、俺に鋭い眼差しを向けてきた。……うん？　眼が合わないな。彼は……ソレイユを見ている、か？

そのとき、マモがグルルルと何とも言えない呻き声を上げた。よく見ると、彼の顔はやけどの跡だろうか、頬のあたりにケロイドのような傷跡があった。腕や足にも深い傷を負った形跡が見られる。彼もそれなりに苦労して今の地位に上り、一族を率いているのだろう。

「ハーピーがいかに動こうとも、我々は人間を許すことはできないと言っているでありますー」

「……強情ねぇ。嫌いだわぁ」

ソレイユが誰に言うともなく呟く。彼女は右手の掌をスッと天に向ける。するとその手から金色の光が起こり、一瞬だけ周囲を明るくした。それに驚いたのか、俺たちを囲んでいたオークたちが持っていた木や斧などを握り締めていた。彼らからは殺気が放たれている。

「ソレイユ、何をしたんだ？」

「……オークキングも同じことを聞いているでありますー」

俺たちの話に、ソレイユは愛嬌のある笑みを浮かべながら口を開く。

「森の精霊たちに命じて、ケダカ軍が踏み荒らした場所を元に戻させました。おそらく一日あれば、大抵のところは元に戻っているはずです。それに、森を踏み荒らしたのは人間だけではなくて、あなたたちもかなりの部分を踏み荒らしているわ。奪われた砦を奪還するために行動を起こしたことは理解できるけれど、それでも、やりすぎじゃない？」

俺と腕を組みながらソレイユの気配がどんどん変わっていく。これは……殺気か。何だか怖いな。女子が怒ると、やっぱり怖いな……。

それはオークキングにも伝わったようで、彼はさらに鋭い眼差しを俺に向けた。ソレイユは全くひるまずにさらに言葉を続ける。

「踏み荒らされた森は再生させました。あなたの条件はこれで叶えられたはずよ。失われた砦はあなた方の手に戻り、森も再生された……。これ以上あなた方が戦う、というのであれば、今度は森の魔物たちが黙っていないはずよ。あなた方オークらは人間だけじゃなく、森の魔物たちとも戦わなくてはならなくなるわ。そうなっては、あなた方が勝てる要素は何もなくなるんじゃないかしら？」

ソレイユの言葉をゴンが一生懸命通訳している。マモが右手に握る丸太への力が強くなっているのがわかる。怒りにまかせて俺たちを襲う可能性がある。今の結界の硬度でも十分対応可能だが、一応張っている結界の硬度を上げた。

「グッ、グフゥゥゥゥ～」

突然マモが大きく息を吐き出した。彼は頭を左右に振っている。

「わかった。これ以上人間を攻撃するのはやめる、と言っているでありますー」

「おお……」

どうやら交渉成立のようだ。ソレイユを連れてきてよかった。彼女かいなければ、交渉はもっと難航していただろう。

さあ、帰ろうかと思っていると、オークキングはゴンに何かを言っている。ゴンはしばらく無言のまま俯いている。

「おいゴン、どうしたんだ。オークキングは何て言っているんだ？」

俺の言葉にゴンは、さも言いにくそうに口を開いた。

「……人間への攻撃は止めるが、一つ条件がある。……その女をここに置いていけ、と言っているでありますー」

第八百三十一話　アイ・ラヴ・ユー、ＯＫ

「ああん？」

俺はオークキングを睨みつける。それは、どういう意味だ？

「うふっ、フフフフフ」

ソレイユが笑い声を上げる。今まで見たことのない表情だ。何とも可愛らしい。

「私を、どうするつもりですか？」

「……決まっている。俺の女にするのだと言っているでありますー」

「はあ？」

思わず声を上げる。ある程度の知性があると思っていたが、それは俺の見込み違いだったようだ。夫のいる前でその妻を寄こせとは、なかなか過激なことを言ってのける。コイツは全く俺にビビっていないということだ。舐められたものだ。

「オークはときとして、人間の女性を襲うことがあるでありますー」

ゴンが申し訳なさそうな表情で呟く。そんな顔をするな。お前が悪いんじゃない。それに俺はソレイユをこんな魔物に渡すつもりはさらさらない。それはおそらく、ソレイユも同じ気持ちだろう。

大体、こんな大柄な魔物がソレイユを襲えるものだろうか。まあ、相撲取りでも大丈夫な方法があるらしいので、それを使えばできないことはないのだろうが、それでも、ソレイユの体では無理があるだろう。

オークキングに視線を向ける。興奮しているのか、鼻息が荒く、体が赤くなっている。これは……戦いになりそうだ。

俺は覚悟を決める。このオークキングを倒し、襲って来るであろうオークどもを皆殺しにする。もはや話し合いでどうなるレベルではない。

そのとき、ソレイユがさらに俺の腕に絡みついてきた。彼女は相変わらず可愛らしい笑みを浮かべている。

「私、イヤだわ。あなたとじゃ、イヤ」

まるでオークキングをバカにしたような言い方だ。ゴンが通訳するのを躊躇している。だが、オークキングは雰囲気で彼女の言葉の意味を理解したようだ。

「……その女を置いていくのであれば、ご主人と吾輩は無事に帰すと言っているでありますー」

「無理だな。話にならん。ソレイユも嫌がっている」

「……ええと、どう言えばよいでありますかー」

「私が絶対にイヤだと言っていると言えばいいわ」

そう言ってソレイユが頷く。ゴンはその通り通訳したらしい、オークキングの体が真っ赤に染まり、彼はガバッと立ち上がった。

「女を置いていかなければ、お前たちは皆殺しだと言っているでありますー」

「……やっぱりこの魔物、キライだわ。私たちに攻撃を加えたら最後、この集落に住むオークは全員殺されてしまうというのに、それすらわからないのね」

「いや、別に皆殺しとは……」

「アラ、襲ってきたら倒さなくてはならないですよね？　そうであれば、この集落のオークは一匹残らず殺されてしまいますわ。リノス様もそのお覚悟を固められていたのではないですか？」

「……まあ、ね」

「ウフフ。そういうリノス様が、私は大好きです」

ソレイユはそう言うと、仁王立ちしているオークキングに視線を向けた。まさに、天を衝く大男とはこの魔物のことを言うのだろう。俺たちが座っているせいもあるが、本当にデカイ。

「私は強い男が好きなのです。あなたとリノス様……比べる対象にすらならないわ。本当に強い男は一目見て、リノス様の強さを見抜くものです。この私ですら、このお方は他の方と違うとわかったのに、あなたはそれすらわからなかった。そんなお方に私は、興味はありません」

「あの……相手にはどう伝えればよいでありますか……」

「キライだと言ってやればいいのよ」

「ええ～」

ゴンがドン引きしている。それはそうだろう。それを言えば間違いなくオークキングは怒る。そして、戦いになる。ゴンは穏便にコトを納めたいらしい。

「んんん、もう。自分でやるわ」

じれたソレイユがそう言うと、彼女は目を閉じてブツブツと何かを唱え始めた。どうやら詠唱をしているらしい。程なくして、彼女の体から金色の筋がいくつも立ち昇った。これは……俺の知っている者の気配だ。もしかして、神龍様を呼び出すのか？

「グッ、グォォォォ……」

オークキングが何とも言えぬ呻き声を上げている。見ると少し狼狽えているように見える。

「おバカなあなたにもわかるでしょ？　この私を自分のものにしたかったら、力づくでいらっしゃい。リノス様を倒し、そして、私をねじ伏せるの。でも、できないでしょ？　今の私の力が、どれほどあなたと違うのか、わかるわよね？　私程度の者をねじ伏せられない者が、リノス様に太刀打ちできるわけはないでしょう？　さあ、大人しくしなさい。この森で大人しく暮らしていくことを約束すれば、私たちはこのまま引き上げます。どうかしら？」

ソレイユが勝ち誇った表情を浮かべている。それは嫌味な点が一つもない表情だった。うん、好きな人は好きな表情だ。

ふと見ると、ゴンがオークキングに向かって何やら、一生懸命語りかけている。どうやら、今のソレイユの言葉を通訳しているようだ。

確かに、ソレイユから発せられる気配が尋常なものではない。彼女に触れでもしたら、一瞬で炭になってしまうような雰囲気なのだ。まあ、それが本当なら、彼女に腕を組まれている俺はかなりのダメージを食らっていることになるのだが。

ただ、俺にはわかる。この気配は、ソレイユがある程度本気を出してきていることが。何とか俺の結界で防ぐことのできるレベルだ。とはいえ、大抵の魔物ではソレイユに触れることさえできないレベルではあるのだが。彼女と同等に戦えるのは、シャリオら黒龍クラス、いわゆるS級ランクの魔物くらいだろう。

さすがのオークキングもその凄まじい圧力に慄いている。むろん、俺たちを取り囲んでいるオークらもしかりだ。中には尻もちをついている者さえいる。

「このまま引き取ってもらって結構だ、と言っているでありますー。人間をみだりに襲わないとも言っているでありますー」

ゴンが頓狂な声を上げた。どうやらわかってくれたみたいだ。全く、世話を焼かせやがって。

オークキングは天を仰ぎながらゆっくりと息を吐き出すと、ドスンと、尻もちをつくような格好で腰を下ろした。少し地面が揺れた気がした。その様子をソレイユは満足げに眺めている。

「オークキングが、その女はお前の妻かと聞いているでありますー」

「ああ。羨ましいだろう」

「……羨ましい。そんな美しい女性を妻にしているご主人が羨ましいと言っているでありますー」

「アーラ、可愛いところもあるのね」

そう言ってソレイユはオークキングに向かってウインクを投げた。

ふと見上げると、俺たちの真上に見事な満月が現れていた。美しい月だ。まるで、吸い寄せられるんじゃないかと錯覚するほどの、冴え渡った月だった。きっと、あのメインティア王も森の外でこの月を眺めていることだろう。あのバカ殿は、この月を見て、どんな感想を述べるのだろうか……。

ふと、森の外で待っているメインティア王のことが気になった。確かあのバカ殿は、夜が明けるとアリスン城に帰ると言っていたな。ということは、夜が明けてしまえば、俺たちは置いてけぼりを食らわされるということだ。早く帰らねばならない。

「じゃあまあ、話はまとまったようだし、帰るか」

「ええ、そうですね。……月がとってもきれいですわね」

「……死んでもいいな」

「どういう意味です？」

「……いや、こっちの話だ。気にしないでくれ」

「あの～。オークキングも同じことを言っているでありますー。今夜は殊更月がきれいだ、と」

見と、オークキングも天を仰いでいる。気持ちを静めているのか、何度も深呼吸をしている。そんな彼を見て、ソレイユはゆっくりと口を開いた。

「手が届かないから、キレイなのですよ」

第八百三十二話　ラヴ・イズ・オーヴァー

同じ頃、ケダカ王国の王都では、フラディメから帰国した国王ビオンもまた、天空に冴え渡る月を眺めていた。

帰国してからの彼は、まるで人が変わったかのように大人しくなった。後宮に引きこもったまま、宰相らとの対話を拒否し続けた。ただ、国王たる彼が政治に携わらなくとも、ケダカ王国自体は何の問題もなかった。宰相マガタらがいつもの通り政務を行い、表向きは普段と変わらない日常だった。

ビオンは後宮に引きこもると、皇后をはじめとした、自らに仕える六人の妃たちに片っ端から伽を命じて、昼となく夜となく妃たちを愛撫し続けた。ただ、それは愛の交換とは程遠いもので、単にビオンが心の底に溜めていた憤懣を吐き出すための行為でしかなかった。彼は妃が現れると、会話もそこそこにベッドに引きずり込み、荒々しく、まるで剥ぎ取るように衣装を脱がせて襲い掛かった。それはまさに獣の行為と言って差し支えなく、ある者には力づくで組み敷き、ある者には、その白い素肌が赤くなるほどに噛みつくなどした。そんなひとりよがりの行為に妃たちの中には泣き出す者もあり、嫌悪感を露わにする者さえいた。とりわけ、皇后であるエレナは堂々とビオンに向かって、もう二度と同衾しないと言ってのけた。そんな彼女にビオンは無言のまま再び襲い掛かった。ただでさえ彼の乱暴な行為で、服が破れていたのに、再び受けた行為で、エレナの服はズタズタになった。結局彼女はほとんど裸に近い状態で、侍女たちにまるで抱きかかえられるようにして、泣きながらビオンの部屋を去っていった。

妃たちとの行為を何度繰り返しても、満足することがなかった。それどころか、行為に及べば及ぶほど、彼女らの心が離れていくのがよくわかった。と同時に、彼の心の中には虚しい感情が溢れ出るようになっていった。

もともと妃たちの房室での反応は薄く、そのほとんどが身じろぎもせずに彼の愛を受けていた。彼女たちの中には、早くこの時間が終わってほしいと願う者もいて、そうした感情は触れ合う肌を通じて何とはなしにビオンは感じていたが、今回のことで彼女らとの関係は修復不能となり、二度と触れ合うことはないと実感していた。

そんなことを考えながらぼんやりと月を眺めていると、寝室の扉がノックされて、一人の若い女性が入ってきた。名前は知らないが、知っている顔だ。そう、皇后エレナ付きの女官だ。

彼女は全裸のビオンの姿を見ると、サッと目をそらした。そして、先ほどビオンによって脱ぎ散らかされたエレナの服をテキパキと集めると、スッと一礼してその場を去ろうとした。

「待て」

ビオンの声に女性はビクッと体を震わせる。そして、おそるおそる振り返った。彼女はチラリとビオンの体を見たが、すぐに視線を外して俯いた。その姿勢は、羞恥ではなく、侮蔑の感情であることを、ビオンは敏感に感じ取った。

ビオンは自分の体を見た。鍛え上げた体だ。しかし、その体には、全身に体毛が張り付いている。これこそが雄々しき男の象徴であると彼は考えていたが、どうやらこの女性はそうではないらしい。ビオンの心にまたもや、どす黒い感情が渦巻いた。

「そなた、名は？」

「……」

「名は、何と申す」

「……お許しくださいませ」

「そなた、国王が名を尋ねておるのに答えぬのか。不敬であるぞ」

「……」

「不敬である。罰を与える」

ビオンの言葉に女性はスッと顔を上げた。罰を与えるという言葉が意外であるといった表情を浮かべている。

「脱げ」

「……は？」

「服を脱いで、裸になるのだ」

「……」

女性は明らかに戸惑いの表情を浮かべた。突然のことで思考が追い付いていないようだ。そんな彼女にビオンはさらに言葉を続ける。

「我が命令に叛けば、そなたはもちろん、エレナも、それに仕える

者全員を処刑する」

女性の表情がサッと変わった。怒りとも侮蔑ともつかぬ表情だ。だがビオンは怯まなかった。彼は本気だった。宰相や老臣たちが何と言おうとエレナたちを処刑する。自らが剣を振るって彼女たちの胸に剣を突き付けるのだ。諸外国との関係が悪くなるという考えも頭をよぎったが、そんなことは知ったことではないと頭の中で一蹴した。

彼の覚悟を感じ取ったのか、女性は悔しそうな表情を浮かべながら俯いた。そして、小さな声で、お許しくださいませと呟いた。

「ならぬ。脱げ。脱ぐのだ」

「……」

女性はしばらく固まっていたが、やがて、俯いたままゆっくりと右手を左肩に伸ばした。と同時に、彼女がせっかく集めた、今ではボロ布同然のエレナの衣装が音もなく床に落ちた。プチ……プチ……プチ……と留め具を外す音がする。女性の手は震えていた。

ややあって彼女は上着をはだけた。中には胸を隠す布が巻かれていた。そうした女性の下着を見るのが初めてであったビオンは、新鮮な感覚を覚えた。

女性はなおも俯いたまま、スカートに手を伸ばす。しばらくするとそれがストンと床に落ちて、真っ白い二本の足が露わになった。それはどの妃よりも白かった。ビオンは思わずゴクリを唾を飲み込んだ。

その下腹部には、やはり胸と同じような布が巻き付いていた。だが女性は両手で肩を掴んで胸を隠すと、その場にしゃがみこんでしまった。

「どうした、何をしている。脱げ、脱ぐのだ！」

「お許しくださいませ。もう、これ以上は……」

女性が蚊の鳴くような声で、必死に声を振り絞りながら返答する。だが、ビオンは許さなかった。彼は大股で女性の前まで来ると、胸を隠している腕を掴み、自らの体の許まで引き寄せた。

「あっ、いっ……」

女性はなおも残っている左手で胸を隠そうとする。だがビオンは右手で胸の布を掴むと、力を込めてそれを引き剥がした。

単に体に巻き付けられていただけなのだろう。それは意外なほど簡単にほどけた。女性はすぐに左腕で露わになった胸を必死で隠そうとする。だが、ビオンは手に持っていた布をかなぐり捨てると、再び右手で彼女の下腹部を覆っている布を掴むと、それも一気にむしり取った。

女性は一糸まとわぬ姿になりながらも、両足をぴったりと閉じて、なおも抵抗する姿勢を見せた。女性の左手を掴んでいた手を放す。彼女はぺたりと床にしゃがみこんだ。その彼女の体を軽々と抱え上げると、ベッドに荒々しく投げ出し、その小柄な体に覆いかぶさった。

「いやっ、やめて！　やめてください！」

必死で抵抗する女性の両手を右手で押さえる。興奮してきた。今度こそ満足できそうな気がする。ビオンの鼻息が荒くなっていく。だが、女性は必死の抵抗をやめなかった。顔や体を必死で動かして逃れようとする。ビオンは残る左手で女性の細い首を掴んだ。

「大人しくせいと言うに！」

全力で締め上げてはいないが、鍛え上げたビオンの腕で掴まれているのだ。女性は相当に苦しいらしく、苦悶の表情を浮かべた。その彼女は苦しい息の中、必死で言葉を絞り出す。

「くっ、苦しい……。助けて……。助けて……。お父様、助けて……。お父様、お父様……」

……父上。

ビオンの脳裏に、在りし日の父の姿が思い出された。思わず掴んでいた手の力が抜けた。女性は彼の体をすり抜けると、素早くベッドから降りた。そして自分の服や下着を集めながら小走りに部屋の扉の前まで行くと、ビオンを振り返ることなく、部屋から出て行った。形のよい、真っ白な尻が強烈に彼の脳裏に刻み込まれた。

先ほどまでの騒動が嘘のように部屋は静寂に包まれている。ビオンは呼吸を整えながら、どっかりと仰向けに寝っ転がった。ふと窓を見ると、先ほどまで見ていた見事な月が見えた。その優しくも美しい月の光は、ビオンの心を徐々に落ち着かせていった……。

「月は美しいが……その周りは闇……。まさに我の境遇と同じであるな……」

第八百三十三話　僕が僕であるために

ビオンは呼吸を整えながら、まるで呆けたように空を眺め続けた。彼は月ではなく、漆黒の闇ばかりを眺めていた。それがまさに、これから先の自分の人生を象徴しているような気がしたのだ。

もはや誰も王とは認めないだろう。もともと心を寄せていなかった老臣たちは、さらに侮ることだろう。さらには、妃たちの心も離れた。今のことで、おそらく女官たちも自らを王と認めることはなく、侮蔑の視線を投げかけて来ることだろう。

彼の脳裏には、先ほど襲おうとした女官の顔が浮かんでいた。

……きっと、民衆も我を王と認めるまい。

すべてはあの、ムーブの森での戦いに敗れたのが、今の状況を作り出したのだ。あの戦いに勝ってさえいれば、いや、オークらを皆殺しにしないまでも、ジンの砦を奪還したという事実だけがあれば、これまでどおり国王としていられたのだ。ビオンは闇を睨みながら、死んだ近習のマキの言葉を思い出していた。彼の言う通りにさえしていれば……。そう心の中で呟いてみるが、それはもう、どうにもならないことだった。

「力が欲しい……。我に力が……」

ビオンは思い出していた。ついこの間まで、鍛え抜かれた親衛隊を率いて軍事訓練に勤しんでいたときのことを。勇ましかった。あの雄々しい自分を取り戻したい……。ビオンは心の中でそう願った。

だが、実際のところ、彼に仕えていた親衛隊は、無傷で残ったのは、たった四名のみとなっていた。あとは傷を負い、治癒魔術師の力で回復魔法をかけさせているが、その多くが軍務に戻れる可能性は低いと言わざるを得ない状態だった。

サンダンジのニケが、知ったような顔で、国内の増強に努めてはどうか、などとほざいていたが、それができるのであれば今頃とっくにやっているのだ。この国では、国王がいかに発言しようとも、あの宰相マガタらに否定され、政治を行うことはできない。それを可能とするためには、あの老臣たちを抹殺せねばならない。

だが、とビオンは思う。マガタを殺すのは簡単だ。彼の許に行き、一刀のもとにその首を斬ればコトが済む。彼は文官だ。剣の腕などありはしない。何の抵抗を受けることなく、首を刎ねることができるだろう。ビオンにはその自信があった。

しかし、マガタの首を刎ねたところで、残る他の老臣たちが諫めに来るのはよくわかっている。特に、国軍の総司令官たるシュリは、あの禿げ頭を真っ赤にして怒ることだろう。そして、最後の最後まで楯突くことだろう。そうなれば、下手をすれば内乱ともなりかねない。さすがのビオンにも、この国をそんな状況にするべきではないことはよくわかっていた。

「やはり、勝たねばならぬ。勝つことでしか、我は王として認められぬ……」

ビオンは誰に言うともなく呟く。在りし日の父の顔が思い出される……。

息子の眼から見ても父は、素晴らしい王だった。誰もが父を尊敬してやまなかった。それはつまり、父が戦いに勝ち続けたからだ。一度や二度、状況不利のために兵を引き上げることはあっても、最後には必ずこのケダカ王国に勝利をもたらしてきた。そのために父は家来からも民衆からも厚い支持を集めていたのだ。

その一方で今の自分はどうだ。老臣たちは誰一人として言うことを聞かず、挙句の果てには、侍女にも抵抗される有様だ。そんな自分の境遇を考えると、ビオンは自分が哀れで仕方がなかった。

遠からず自分は宰相マガタの手で王位を剥奪されるかもしれない。次の王には、従兄弟のペオラクトになると言われている。ビオンはペオラクトを次期後継者に任命した覚えはなかったが、自らがジンの砦に赴いた際、最悪の状況を想定したマガタが、自分にもしものことがあったそのときは、すぐさま王位に就くようペオラクトに要請していたと聞いている。

王位を剥奪されたらば、どうなることだろうか。この王宮内の一室、もしくは辺鄙な田舎町で、誰とも会わず、誰とも喋らず、軟禁状態に置かれている未来が思い浮かぶ……。そんなことは断じて許されることではない。それは父への裏切りであり、先祖の名を辱める光景だった。

「勝つのだ、勝つのだ、勝つのだ！」

まるで自分を奮い立たせるようにベッドから起き上がり、ビオンは何度も呟く。この状況を打破するためには、勝たねばならない。老臣たちが、民衆たちが納得する勝利を得なければならない。その勝利とは明確だ。あの、ジンの砦を奪還することだ。

「誰かある！　……誰ぞおらぬか！　誰ぞある！」

大声で叫んでみるが、誰一人現れない。ビオンは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべながら舌打ちをする。先ほど襲おうとしたエレナ付きの侍女の一件が、早くも後宮中に知れ渡り、侍女たちがビオンを恐れていることは明らかだった。

そんな様子を情けないと思いながらも彼は、ベッドの上に脱ぎ散らかしたガウンを羽織り、そのまま部屋を出て足早に執務室に向かう。

侍女たちはビオンの姿を見ると、ギョッとした表情を浮かべて、誰もが一様に目を逸らせた。

執務室に入り、どっかりと椅子に腰を下ろす。すぐに侍従が入室してきた。侍女を襲おうとした話が耳に入っているのだろう。明らかに戸惑いの様子を彼は隠さなかった。そんな彼にビオンは苛立ったように口を開く。

「親衛隊の者たちを呼んでまいれ」

「は？　親衛隊……でございますか？」

「同じことを言わせるな。ロア、ニモ、ルクス、モコの四名をここに呼べ」

「かっ、畏まりました」

しばらくすると、ノックと共に四名の騎士が入室してきた。全員の顔が強張っている。ビオンは四名それぞれの眼を見ながら、ゆっくりと口を開く。

「そなたたち、今の状況は、どうじゃ？」

誰も答える者がいない。親衛隊はほぼ壊滅している。そんな状況下で彼らには何かの仕事を与えられるわけはなく、そこにいる全員が無聊を囲っていることは誰の目にも明らかだった。

「余がマキの言を聞き入れておれば、このような有様にはならず、そなたたちにも肩身の狭い思いをさせずに済んだものを……。すまぬことをした」

「こ……国王様」

ルクスが一歩前に進み出るが、次の言葉が出てこない。彼らも、ケダカ王国軍の中では冷ややかな視線で見られていて、まさに身の置き所のない状態だった。そんな彼らにビオンはさらに言葉を続ける。

「我らが我らであるためには、勝たねばならぬ。いや、勝ち続けねばならぬのだ。余はこれより、失ったものをもう一度取り戻すべく行動するつもりじゃ。そなたたち、もう一度、余と共に戦ってくれるか」

「も、もちろんでございますっ！」

ルクスが間髪入れずに答える。残りの三人も一様に頷く。その様子を満足そう目で眺めていたビオンは、声を殺して呟く。

「では、早速明日にでも行動を起こすこととする。詳細は……」

ビオンの言葉に、ルクスらはおお、と思わず声を漏らし、互いに顔

を見合わせながら頷いている。彼らの眼には一筋の希望の光が宿っていた。

「あの……恐れ入ります」

不意に口を開く者があった。モコだ。入隊順でいけば最も経験の浅い男だった。彼はさも、申し訳なさそうな表情を浮かべている。

「なんだ、モコ」

王の問いかけに彼は一瞬躊躇する素振りを見せた。その彼をルクスが目で答えろと促した。彼は恐る恐る口を開く。

「あの……。確か魔物たちとは現在、アガルタ王様が交渉に当たっておられると聞いておりますが……」

「では聞くがモコ、そなたはあのアガルタ王が魔物との間で上手く話がまとめられると思っておるのか？」

「そっ、それは……」

「どうなのだ」

「正直、難しいと考えます」

「そういうことだ」

「ただ……」

「ただ、何だ」

「その……アガルタ王様の状況を確認された方がよいのでは、と」

「必要ない」

「は、ははっ」

「万に一つの成功の見込みのない話じゃ。むしろ、アガルタ王自身が今、どうなっているのかすらわからん。もしかすると、森の中を逃げ回っているかもしれぬ。ならば、我らが早く動けば、アガルタ王を助けることにもつながる。違うか？」

ビオンの言葉に、モコはゆっくりと頭を下げた……。

第八百三十四話　一心不乱

翌日の夜更け、ビオンは親衛隊の四人と共に王宮を出発した。

「国王様、どちらへ！」

ビオンの背中越しに、門番の絶叫にも似た声が聞こえた。彼は振り返ることなく一言、遠乗りじゃと呟くと、愛馬に鞭を当てた。その後ろを親衛隊が付き従った。

ビオンが王宮を出たことは、程なくして宰相マガタの許に伝えられた。彼はその報を聞くと驚いた表情を浮かべながら立ち上がった。

「遠乗り！？　この深夜にか。どちらに向かわれたのだ」

彼はビオンが向かった先が、ムーブの森の方角であることを知ると、悔しそうな表情を浮かべた。

「シュリ殿の許に急使を立てよ。……いや、それでは遅い。緊急信号を送れ。国王様の乗るレンシルはすこぶる足が速い。急げ、急ぐのだ！」

普段は温厚な宰相が滅多に見せない狼狽えた姿に、兵士は体を震わせながら一礼した。

誰もいなくなった執務室で一人、マガタは、まるで崩れ落ちるようにして椅子に腰かけた。国王様はどうしてこうも次から次へと問題を起こすのだろうか。昨夜も昨夜で、皇后さまに乱暴を働いただけ

でなく、その侍女を手籠めにしようとした。皇后エレナは女官を通じてこの国を出て実家に帰ると通達してきた。それはそうだろう。彼女は実家であるラフトス帝国とこの国の和平のために嫁いできた。その彼女を国王様は蔑ろにしたのだ。それはつまるところ、ラフトス帝国に喧嘩を売ったことになる。しかも、国王様が手籠めにしようとした女官は、皇后が実家から連れてきた者で、彼女が子供の頃から近習として仕えてきた女性であり、皇后が最も信頼する者の一人だった。しかも彼女はすでに結婚が決まっていた。国王様との一件が表に出れば、彼女の結婚も破談になる可能性が高く、もしそうなれば、あの女官は命を絶つ可能性すらあった。それでなくとも心に大きな傷をつけた彼女が今後、どんな行動に出るのかさえわからない状況ですらあった。

皇后エレナは本気だった。実家であるラフトス帝国に使者を立てようとしていたのだ。それをすんでのところで留め、宰相マガタが最も信頼する男である侍従・ヒビを後宮に差し向けて、エレナを何とかなだめすかしているところなのだ。このままエレナを帰しては、間違いなくラフトス帝国はこのケダカに対して敵対する。そうなれば、小麦などの食料が入って来なくなる。主食たる小麦の大半はラフトスに依存しているケダカ王国はまさに、国家存亡の危機に瀕するのだ。

むろん、小麦は他の国から仕入れることができるが、ラフトスからのそれは、ビオンとエレナの婚儀が成ったことを喜んだラフトス王が、ほとんどタダ同然の値段で送ってくれているものだった。そのためにケダカ王国は国家財政に余裕を持たせることができていた。もし、それが入って来ずに、他国から仕入れるとなった場合、この国の財政は遠からず破綻することになるのだ。宰相マガタとしては、ここはどうあっても、エレナに帰国をとどまってもらう外はなかったのだ。

そんな彼の気持ちも知らないで、国王は遠乗りと称して深夜、ムーブの森に向かっている。それは明らかに単なる遠乗りではなく、ムーブの森に何かを仕掛けようと考えていることは明らかだった。せっかくアガルタ王が森の鎮静化のために動いているさなかに、もしまた、騒動が勃発すれば、今度こそ、フラディメもサンダンジもこの国を見限るだろう。しかも、アガルタにも見限られることにもなる。アガルタに見限られれば、それはヒーデータにも見限られることになる。そうなれば、ケダカ王国は全世界から信頼を失うことにもなるのだ。そうなればこの国は亡ぶしかなくなる。宰相マガタには、最悪の状況を迎えたこの国の未来が見えていた。

彼は頭を抱えながら机の上に突っ伏した。正直、これからどのような手を打てばよいのか、彼自身にもわからなかった。気がつくと、無意識のうちに涙が溢れていた。

「……ご先代様。……こっ、国王様」

彼は誰に言うともなくそう呟いた。ご先代様がいらっしゃれば、こんなとき、どんな命令を下すだろうか。いや、そもそもご先代様は、こんな無謀な行動を起こすはずはなかった。

マガタはフッと笑みを漏らす。

「……バカ者、マガタ程の男がわからぬか！」

彼の脳裏に突然、声が響き渡った。ああ、そうだ。懐かしい……。ご先代様が自分を叱責なさるときによく言われた言葉だ。この言葉を聞くと、不思議に頭が冴える感覚を覚えたのだ……。

マガタは大きく息を吐き出すと、椅子に身を預けたまま天を仰いだ。

……今更私がどう動いたところで、国王様の動きは止められまい。あとはシュリ殿に任せる他はない。

宰相マガタは心の中でそう呟くと、静かに寝息を立てて、しばしの眠りに落ちた。

◆　◆　◆

夜が白み始めていた。国王ビオンは一心不乱に馬を駆り続けていた。

彼は全身に大汗を描いていた。呼吸が乱れていた。同時に、彼を乗せて走る愛馬の呼吸も大きく乱れていた。もはやこの馬も限界を迎えようとしているのは明らかだった。だが彼はそれでも手綱を緩めることはなかった。

ふと、眼前に大きな川が見えた。コロギ川だ。ということは、この近くに国軍が陣を敷いているはずだ。

ビオンは馬を止めて周囲を見廻す。それらしき影はない。ただ、自分の呼吸音と、馬の呼吸音だけが響いている。

ふと後ろを振り返ってみるが、付いてきているはずの四人の親衛隊の姿はない。落伍したことは明らかだったが、彼らがどこではぐれたのかは、彼自身にもわからなかった。

視線を戻すと、対岸に数人の騎馬武者が見えた。彼らはしばらくこちらを眺めていたが、やがてゆっくりとした足取りでこちらに向かってきた。

「やはり、国王様であらせられましたか」

騎馬武者の一人がそう言って馬を降りて片膝をついた。それに倣って、男に従う者たち全員が馬を降りて片膝をついて頭を垂れた。

「シュリの許に案内せい」

彼らは自分がここにやって来ることを知っていた。ビオンは咄嗟にそう思った。それはある意味で想定された出来事だった。彼は呼吸を整えながら、目の前で畏まっている男たちに視線を向ける。彼らは顔を見合わせると、ビオンにご案内しますと言って、ゆっくりと立ち上がった。

彼らは立ち上がったまま微動だにしないでいる。それはつまり、馬に乗るように促しているのだと解釈したビオンは、後ろを振り返って乗馬しようとする。だが、愛馬は横臥して荒い息を繰り返していた。こんな姿を見たのは初めてだった。ビオンはその様子をしばし見つめていたが、やがて舌打ちをすると、小さな声で呟いた。

「……駄馬が」

そのとき、騎兵の一人が進み出て、愛馬の前に膝をつき、腹を撫で始めた。そして、控えていたもう一人の騎兵が空いている馬の轡を取ってビオンの前まで連れてきた。

何とも恥ずかしい思いに囚われた。無意識にやってしまったこととはいえ、さすがにそれは王の言うセリフではなかった。ビオンは用意された馬に跨ると、その場をそそくさと離れるようにして馬を進めた。

騎兵たちはすぐに追いついてきて、ビオンを案内した。川を渡り、丘に上がると、眼前に広大な森が広がり、その前には国軍が犇めいているのが見えた。

「国王様ぁ、いかがなされた」

陣に着くと、まるで待っていたかのようにシュリが現れた。いつもは不敵な笑みを浮かべて現れる彼が、このときばかりはそれはなく、眉間に皺を刻んだ、緊迫した表情を浮かべていた。ビオンはその顔を睨みながら、ゆっくりと馬を降りた。

第六百三十五話　バーサーム・ダーケ・リノス

ビオンは、ゆっくりとした足取りでシュリの許に向かう。そして彼は静かな声でシュリに向かって言葉をかける。

「……ご苦労であった」

その言葉が意外であったのか、シュリは一瞬キョトンとした表情を浮かべた。だが、その後すぐに発したビオンの言葉に、シュリは再び眉間に深い皺を刻んだ。

「いま、ただ今をもってそなたの任を解く」

「……どういう意味ですかな？」

「これよりこの軍は、我自らが指揮を執る」

「この軍勢を使って、何をなさるおつもりで？」

「……」

「ムーブの森に入り、ジンの砦を奪還する……などと言われるのではあるまいな？」

ビオンはシュリを睨みつけたまま、無言を貫く。シュリは目を閉じると、ゆっくりと頭を左右に振った。

「お止めなされ。以前と同じ轍を踏むおつもりか。よしんば、国王

様自らがここにいる軍勢を従えてジンの砦に向かおうとも、国王様は勝てぬ。森の魔物には勝てぬ。また、以前のごとくオークらに攻められて袋叩きにされるのがオチじゃ。この間は、粗相をしたくらいで済みましたが、次はそうはいきませんぞ」

そのとき、ビオンは剣を抜いてシュリの胴を払った。シュリは微動だにせずにその剣を受けた。

金属がぶつかる鈍い音がした。その瞬間、ビオンの剣が折れ、切っ先が天を舞った。

「儂の鎧は、そこいらの作とはモノが違うんじゃ。儂を殺したければ、首を刎ねなされ」

シュリは不敵な笑みを浮かべながら、右手をポンと自分の首に当てた。ビオンは折れた剣を無表情で眺め続けていた。一見すると、シュリの言葉など全く聞いていないかのように見える。

何とも言えない空気がその場を支配していた。周囲に控える兵士たちはどうしてよいのかわからず、皆、固まってしまっている。一方のシュリは、ビオンに斬られたことなど、まるでなかったかのように不敵な笑みを浮かべ続けている。ややあってビオンはゆっくりとシュリに視線を向けた。

「王に対して、不敬である」

「……」

ビオンの言葉に対してシュリは沈黙を貫いた。その不敵な笑みは、ビオンをバカにしているようでもあり、また、呆れているようにも

見えた。ビオンはしばらくの間、シュリの顔を眺めていたが、やがて視線を外すと、まるで宣言するかのように周囲の兵士たちに向けて口を開いた。

「もう一度言う！　これよりこの軍勢の指揮は余が執る！」

誰も答える者はいない。寒々しい空気が、重苦しくその場を支配していた。

「これまで総司令官の任にあったシュリは、ただ今をもってその任を解き、王に対する不敬を働いた罪で、死罪を申し渡す。誰ぞ、このシュリを捕らえよ！」

ビオンの言葉が虚しく響き渡る。彼の命令に誰も反応を示さない。ビオンの顔がみるみる青ざめていく。

「貴様ら！　王の命なるぞ！　主命なるぞ！　主命に叛けばどうなるのかわかっているのであろうな！　そなたたちは言うに及ばず、そなたらの親兄弟、親類縁者皆が死罪となるのだぞ！　貴様たち、それでもよいのか！」

兵士たちは微動だにしない。ビオンの声が、徐々に荒々しくなっていく息遣いだけが聞こえてきていた。

「国王様、一つ、確認したいことがある」

口を開いたのはシュリだった。彼は先ほどの笑みとは打って変わって、まるで鬼のような形相をしていた。そのあまりに恐ろしい顔に、ビオンはやや怯んだ。

「ここにいる兵士たちだけでなく、その親兄弟親類縁者も罰する、命を取ると言われたが、それは本気で言っておいでか?」

ビオンは無言のままシュリを睨みつける。だが、この老司令官は一切怯まなかった。それどころか、彼はまるで怒号のような声を上げながら言葉を続けた。

「ここにいる数千の兵士だけでなく、その親兄弟親類縁者の命まで取ると言うことは、この国に生きとし生ける者全ての命を取ると言うことになるのですぞ? 本気で言っておいでか!」

ビオンの体から殺気が漲っていた。顔が歪み切っていた。兵士たちは初めて見る王の姿に戸惑いを隠さなかった。

「それに、この軍勢を率いて何をするつもりじゃ! どうせ、奪われたジンの砦を奪い返しに行くつもりじゃろう! だが、それをしたところで、我々はオークらには勝てん! それがなぜわからん! オークらの執念深さは身をもって知ったじゃろうに! なぜ、同じ轍を踏もうとする。なぜ、敢えて同じ失敗を繰り返そうとするのだ!」

シュリはそこまで言うと、フッと息を吐き出して、まるで吐き捨てるように呟いた。

「もっとよく考えんか」

「ぬぅわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁー!」

突然ビオンが大音声を上げた。さすがのシュリも、その大声に少し驚いた表情を浮かべた。ビオンはなおも叫び続けた。まるで、腹に

溜まったものをすべて吐き出すかのように叫びつづけた。

彼は、はあはあと肩で荒い息をしながら、近くにいた兵士に向かって走り出した。そして、兵士の持っていた松明を奪うと、再びムーブの森に向かって駆けだした。

「おい、何をするつもりじゃ！　やめ……」

ビオンは持っていた松明を森に向かって投げつけた。火の塊がクルクルと回りながら、ゆっくりと、まるで吸い寄せられるように森に向かった落ちていった。

カーン。

まるで、木と木がぶつかったような乾いた音が鳴り響いた。見ると、ビオンが投げた松明が、こちらに向かって跳ね返されていた。そこにいた者全員が何が起こったのかがわからず、呆気にとられた。

「け……結界？」

兵士の一人が誰に言うともなく呟く。よく見ると、森全体に結界が張られているのが見えた。

「へえ～。冴えているね」

突然、頓狂な声が響き渡る。見ると、ビオンの近くに一台の馬車がいつの間にか現われ、そこから数人の人間が降りてこようとしていた。

「やっぱり、月の光というのは、人間の感性を研ぎ澄ます効果があ

るのかね」

「ハッハッハ。そんなことはないと思うけれども……。でも、昨日のあの月の見事さは、確かに何か別の何かを芽生えさせるかのような美しさだった。君と言う通りかもしれないね」

馬車から降りてきた二人の優男が、そんなことを話しながらビオンの許に近づいていく。その後ろには、金髪の美女が付き従っていた。

「もう、そのくらいにして、やる、もの、だ、よ」

男の一人がそう言ってビオンの前に立ち止まる。その後ろで、もう一人の優男が、呆れたような表情を浮かべながら立っている。

「きっ、きっ、きっ、きさ、きさ、きささささ、貴様は……」

「オークキングは説得した。だから、余計なことをしないでもらいたい」

男はそう言うと踵を返し、シュリの許に向かって歩いてきた。彼はシュリらの前で立ち止まると、キョロキョロと見廻しながら口を開いた。

「ええと……あなたがこの軍の司令官……でしょうか?」

その言葉に、シュリは戸惑いながらもコクコクと頷く。その様子を見た男は、少し安堵したような表情を浮かべると、再び辺りを見廻し、周囲の兵士にも聞こえるような大きな声で口を開いた。

「オークキングの説得には成功しました！　森の魔物たちは、人間

が森を侵略しない限りは、みだりに人間を襲わないことを約束しました！　思うところもあるかと思いますが、現状のまま兵を引いてもらいたい。ここにいるケダカ軍の引き上げをもって、この騒動は終わりです！」

その言葉が意外だったのか、兵士たちは顔を見合わせている。そんな中、シュリは戸惑いを隠そうともせず、目の前の男に話しかけた。

「す、すまぬが、貴殿は、どちらの、お方であろうか……？」

その問いかけに男は意外だと言わんばかりの表情を浮かべたが、やがて真顔になり、シャンと背筋を伸ばした。

「申し遅れました。私、アガルタから参りました、バーサーム・ダーケ・リノスと申します」

第八百三十六話　二枚落ち

シュリは眼を見開いて固まっている。それほど、この青年の発した言葉が、全く想定外だったのだ。

「バ、バーサーム・ダーケ・リノス……？　そう、言われたか？」

「はい。アガルタの、バーサーム・ダーケ・リノスです」

「あの……アガルタ王、か……」

「さっきからそう言っているじゃないか」

メインティア王が笑みを浮かべながら口を開く。そんな彼をリノスは苦々しい顔つきを浮かべながら振り返る。

「我々が突然現れたから戸惑っているんだ。そんなことを言うもんじゃないよ」

その言葉に、メインティア王は申し訳なかったと言わんばかりに、首をすくめた。リノスは再びシュリに向き直ると、落ち着いた声で話しかけた。

「おそらく森の魔物たちは、こちらから手を出さない限り襲ってくることはないでしょう。軍勢を撤退させて大丈夫です」

「ハ……ハハッ！」

シュリはブルブルと体を震わせると、数歩後ずさりして、そのままペタリと座り込み、両手を天高く上げたかと思うと、そのままゆっくりと平伏した。その彼の様子を兵士たちは呆然と見守っていたが、彼が平伏するや、馬に乗った者は下馬し、兵士たちは持っていた槍などを地面に置いてシュリの後に続くように片膝をついて頭を垂れた。その様子にリノスは慌てたような表情を浮かべる。

「いやいや、そんなことはやめてください。どうぞみなさん、顔をお上げください」

「ま、まさか、アガルタ王が我が国においであそばしているとは知らず、無礼な振る舞い、ナト・シュリ、心よりお詫びを申し上げる」

「いや、別に無礼な振る舞いなどされていませんから。俺は全くそんなことは感じていませんから」

「畏れながら、総司令官殿は以前からアガルタ王にあこがれておいでなのです」

畏まっている兵士の一人が口を開く。彼は傍で地面を頭にすりつけるようにして平伏しているシュリに優しい眼差しを泣けかけた。

「総司令官殿は、アガルタ王様の戦いを手本にしておいでなのです。とりわけ、先のミトス王国との戦いは、今回の魔物たちとの戦いの手本と致しておるほどでございます」

「へ……そうなのですか」

「はい。アガルタ軍がセーファンド帝国軍を攻められたとき、盾部隊を先頭にお攻めになったかと記憶しております。その盾部隊は、

全く隙間を作らず、しかも、盾を揃えて突撃していったと聞き及びます」

「ああ、そうそう。盾と盾の間に隙間があると、そこが隙になります。槍で攻撃されるでしょうし、大きな丸太などで突っ込んでこられると、どれだけ精強な兵士を揃えても、崩壊してしまいます。ですから、アガルタではその訓練は繰り返し行っていますね」

「やはりそうでしたか。あ、申し遅れました。私はシュリ総司令官の副官を勤めます、チヤ、と申します。我らはアガルタの戦いを参考に、盾部隊の訓練に力を入れております。今回の騒動で魔物たちから領土を守れたのも偏に、この盾部隊の防御があったればこそでございます。おい」

チヤが後ろに控える兵士に合図を送ると、盾を持った兵士たちが一斉に立ち上がった。そして、司令官と思われる男を先頭に、一糸乱れぬ動きで川べりまで移動した。男が合図をすると、兵士たちは一斉に盾を構えた。

「……見事だ」

思わずリノスは呟く。まるで、アガルタのそれと何の遜色もない出来栄えだったからだ。チヤは満足そうに頷いた。

「お褒めの言葉を預かり、恐悦至極でございます」

「これならば、オークたちが襲ってきたとしても十分に食い止められますね。その盾の後ろから弓隊や魔術師たちが攻撃を仕掛ければ、魔物たちは近づくことすら出来ないでしょう」

「アガルタ王のお褒めにあずかり、このシュリ、感激でございますぅ」

老司令官は泣いていた。鼻をすすりながら、何度も涙を拭っていた。そんな彼をリノスは困ったなといった表情で眺めている。

「国王様ぁ！」

突然男の絶叫が響き渡った。驚いて見ると、四名の騎馬武者が下馬しようとしているところだった。彼らは小走りにビオンの許に向かうと、彼を取り囲むようにして片膝とついて畏まった。

そこにいた全員が、ビオンの一団に注目した。彼らはやがて立ち上がると、ゆっくりとリノスらのいる場所に向かって歩いてきた。

ビオンは、リノスの存在などまるで眼中にないかの如く、彼の傍を通り過ぎ、シュリの前までやって来た。

「引き上げじゃ。そなたらのことは、追って沙汰をする」

「国王様ぁ、お言葉ですが、何か、忘れてはいませんか？」

「……」

「そちらにおいでのアガルタ王様に、お礼を述べてくだされ」

「……」

「国王様も聞かれましたな。アガルタ王様がオークキングを説得していただいたことを。さらに、森に結界を張り、国王様が森に火を

放とうとしたことを止めていただいた……。もしあれが森の中に入っておったら、再び森は騒動を起こしたでしょう。そのときは、今回のようなものではなく、もっと大きな規模の……」

「黙れ。そのようなことは後じゃ」

「いいえ、なりません。今、ここで礼を述べてくだされ。アガルタ王様はこの国を救ってくれたんじゃ。その国の恩人に対して、国主たるあなたが礼を述べるのは当然のことじゃ！」

「そうしたことは、このような草原で述べることではない！　しかるべく使者を遣わし、その上で……」

「そんなまどろっこしいことをしていたら、礼一ついうのに何年かかるのだろうね」

ビオンの言葉をメインティア王が遮る。ビオンは殺意を含んだ眼差しでメインティア王を睨みつける。

「たかが礼一ついうのに、何をそんなに勿体ぶる必要があるのか、私にはわからないね。ケダカ王国というのは変わった国だね」

「我が国は、貴国とは違う。我が国には、我が国のやり方がある」

「クックック」

メインティア王は笑いをこらえるかのような仕草をした。それは、完全にビオンをバカにした振る舞いであることは、誰の目にも明らかだった。

「やめなさいよ。一歩間違えたら、フラディメとケダカとの間で戦争になるでしょうが」

「フラディメとケダカ、ではなく、ケダカとフラディメ、である。ここはケダカ王国である」

「そこ？」

リノスは呆れたような表情を浮かべ、両目を天に向けた。その様子を見て、メインティア王は二人に背中を見せると、大声を上げて笑い出した。

「引き上げるぞ！　準備をせよ！」

ビオンは兵士たちに向き直ると、大声でそう命じた。そして、正座をしているシュリに視線を向けると、憎しみを込めた目で睨みつけた。

「シュリ、貴様の総司令官の任は解く。そして、死罪を申し付ける。もし、騎士としての誇りがまだあるのであれば、今ここで命を絶て」

「それは……できませんな」

ビオンは大きく息を吐き出すと、再びリノスに視線を向けた。

「そう言えばアガルタでは、他国の司令官を自軍の将兵として迎えておるそうな。どうであろうか、この老いぼれをアガルタで預からんか」

「それは願ってもないことですね。ただ……」

「ただ、何であろうか」

「このお方がケダカを去れば、この国は崩壊しますけれど、それでも大丈夫でしょうか」

「……どういう意味であるかな？」

「見たところ、この方はこのケダカ軍の飛車角……。それを失うと二枚落ちになりますが、そうなると、今以上に厳しい局面に立つことになります。このシュリさんはこの国のまさに、柱石であるように見受けられます。この方がこの国を去ると、この方に付いて行く方が後を絶たないでしょう。アガルタとしてはケダカ王国の優秀な司令官が丸ごと取り入れられるので、願ったり叶ったりのことですけれど、ケダカ王国のことを考えると、素直にありがとうとは言えませんね」

「いい加減にせんか！」

シュリはそう言うと、ゆっくりと立ち上がった……。

第八百三十七話　うたのお姉さん

老司令官の剣幕に、思わずゴメンナサイと言ってしまいそうになった。だが、彼の視線は俺ではなく、ビオン王に向いている。まあ、それはそうだよね。あまりにも無礼だよね、この男。一発ギャフンと言わせて欲しいものだ。

そんなことを考えていると、シュリは大股でビオン王の許に向かう。すぐに王の後ろに控えていた四人の男が前に進み出て盾を作る。シュリはその前で止まると、周囲に聞こえるように大きな声で口を開く。

「騎士たるものは常に品よくあれ。周囲の手本となるように振舞え。ご先代様が口を酸っぱくして言っておいでであった言葉だ。よもやお忘れではあるまい！」

シュリの声は怒気を帯びていた。後ろ姿からでもかなりの迫力なのだ。真正面から対峙しているビオン王とその従者たちは、かなりの恐ろしさだろう。だが、ビオン王はいささかも怯まずに言葉を返す。

「それがどうした！　今の我が国の王は、余である！」

「国王であれば、国王らしい振る舞いをなさいませ！」

「不敬な……不敬である！　国王に対して、あまりにも不敬な振る舞いである！　父上の治世を支えた者を気取り、王を侮辱する無礼者め！　斬れ！　この老いぼれを斬るのだ！」

「国王様！　もとより儂の命などどうでもよいのだ！　本来はご先代様の後を追いたいとすら願っていたのじゃ。どこで斬られようが構わん。しかし、だ。これだけは聞いてもらいますぞ！　礼を失すれば国は亡ぶ。我が国を救ってくれたお方に対して礼を尽くさぬとあっては、我が国の者にも示しがつかぬことになります。国王様はつまり、我が国の者であっても、国を救った者に対して礼を尽くさぬということになる。そのような国王様に、誰が仕えたいと思うか！　よっく考えなされ！　貴様ら！　国王の親衛隊ならば、なぜ命を賭して国王様に諫言せぬのだ！　よく考えろ！　よく考えるのだ！」

ビオンは相変わらず憎しみを込めた目でシュリを睨みつけている。一方、国王の前で盾になっている四人の男たちは狼狽えた様子を見せている。そんな家来に苛立ったのか、ビオンは目の前に立つ男の背中を蹴り飛ばした。男はあっ、と声を上げて、うつぶせに倒れる。

「斬れぇ！　斬れと言うに！　シュリを斬れ！」

ビオンのあまりの剣幕に恐れをなしたのか、残る三人の男がオロオロしながら抜剣した。だがシュリはいささかも怯まなかった。

「貴様ら、本当に儂を斬る気か？　斬れるか、儂を？　お前たちのそのなまくらで、この儂の首が落とせるか？　斬ってみぃ！　さあ、斬れぇ！」

いつしかシュリの後ろには国軍の兵士たちが固めている。一触即発の状況だ。殺気が渦巻いている。男たちの剣がシュリに向けられた瞬間、国軍の兵士たちは彼らを許さないだろう。俺の目の前で内乱が起こるのか。それはあまり見たくない。何とかしなければ……。

「これは一体どういうことだい？　私にはさっぱりわからないね。あの、老司令官は、何が言いたいんだい？」

メインティア王が、さもイヤだと言わんばかりの顔をしている。腹の立つ顔だ。今の話を聞いてわからないとはどういうことだ。結局聞いていないのだろうが。俺はバカ殿の顔には視線を向けないまま口を開く。

「要するに、わかりやすく言うと」

「うん、わかりやすく言うと？」

「国王さん、ほなら言うといたるがの、あんたははじめから、儂らが担いどる神輿やないの。国がここまでなるのに、誰が血い流しとるんや。神輿が勝手に歩ける云うんなら、歩いてみいや。儂らの云うとおりにしたってくりゃ、儂らも黙って担いだるがの！　って言ってるんですよ」

「はあ？　なんだいそれ？」

「……まあ、知らないでしょうね。古い話だからね」

「そんな話があるのかい。何だか、面白そうだね。……ほら、すごい目で睨んでいるよ」

メインティア王が言う通り、ビオンの鋭い眼差しがこちらに向いている。……と、シュリたちも俺を眺めている。おおう、皆の視線が俺に向いている。何とも恥ずかしいな……。

「今のは、どういう意味で、あるかな？」

ビオンがゆっくりとこちらに向かって歩いてくる。おお、怖い。すごい迫力だ。

彼は俺のすぐ傍まで来ると、声を押し殺すようにして口を開く。

「これは、我が国の問題である。黙っていて、もらいたい」

「一つ、確認したいことがある」

「……何だ」

「あなたは先ほど、俺に、アガルタに対してしかるべき礼をする、そう言いましたね？」

「ああ」

「では、今、その礼を貰いたい」

「何？」

「アガルタへの礼として、そこにいるシュリ総司令官の命と身分の保証を求めます」

「……」

「なるほど、その手があったか！　相変わらず君は頭がいいねぇ」

メインティア王が頓狂な声を上げる。うるせぇよ。でも、悪い気はしない。

対して、ビオンは右のこめかみがピクピクと動いている。彼は顔を歪めながら、振り絞るように声を上げる。

「その件は、我が国の、問題である。貴国への礼は、追って、使者を、遣わす。それまでは……」

「それは貴国の都合だろう？　相手が喜ぶことをするのが礼じゃないかな」

メインティア王がビオンの言葉を遮る。だからやめなさいって。本当に殴られるよ？

「黙っておれ、このバカ王が！」

ビオンの怒りが爆発した。顔を真っ赤にして、肩を激しく上下させている。だが、普段大上王のキレっぷりをみているためか、メインティア王にはあまり効果がなかったようだ。彼はノーダメージのまま、ビオンを眺めている。

「なっかよくしましょ～♪　君も私も仲良し仲良し～♪　手を手を取り合ってニコニコニッコリ笑ったら～♪　心はすぐに晴れやか～♪　エヘヘ、オホホ、ハハハのワハハのアッハッハ～♪　君が笑うと相手も笑顔～♪」

突然、そんな歌声が聞こえた。見ると、ソレイユが優しげな表情を浮かべながら、手で拍子をとり、歌いながら俺たちに近づいて来る。歌詞は単純だが、その歌声は耳に心地いい。何だかこの感覚は記憶にある。それは……。そうだ、うたのお姉さんだ。

ソレイユの優しい歌は、ビオンの怒りのボルテージを下げたらしい。
まあ、確かに驚くよね、突然歌を歌われたら。

ビオンは何が起こっているのか理解が追い付いていないらしい。ポカンと口を開けて、ソレイユを眺めている。そんな彼の傍まで近づくと、ソレイユはニコリと笑みを浮かべた。

「わかるわ、あなたの苦しみ」

「な……は……？」

「一生懸命考えて、一生懸命やろうとしたのよね。でも、誰もわかってくれなかった。この国をよりよくしよう、強くしよう、どこにも負けない国にしようと考えていたのに、全然それがうまくいかなかったのよね。一生懸命勉強して、一生懸命訓練してきたのにね。頑張っても頑張っても、わかってもらえなければ、どうしていいのかわからなくなっちゃうわよね。その苦しみ、よくわかるわぁ」

ソレイユは胸の前で手を組みながら、何度も頷いている。ビオン王はまるで呆けたように、口をあんぐり開けたままだ。……って、オイ。お前どこ見ているんだ？　ソレイユの胸元を見ているんじゃないか？

そんなヤツのエロ視線を知ってか知らずか、ソレイユはビオンをしばらく無言のまま眺め続けていたが、やがて、小さな声で口を開いた。

「……辛かったわね」

見る見るうちにビオンの顔が伸び、目から滂沱の涙が溢れだした。

彼は最初こそ必死で我慢していたようだったが、すぐに嗚咽にも似た声を上げ、そして、まるで子供のように泣きじゃくった。

正直、見るに堪えない光景だった。あまりにも醜い光景だった。大の大人が、一国の王が、ついさっきまで突っ張り倒していた男が、四つん這いになって泣いている。これは、ひどい……。

ソレイユはビオンの傍で腰を落として慰めるポーズを取っている。まるで、駄々をこねる弟を宥めるお姉さんのようだ。

彼女はビオンに二言三言言うと立ち上がり、俺たちの許に還ってきた。

「リノス様、あとは、よろしくお願いします」

……え？　俺？

第八百三十八話　期待しすぎ？

……面倒くさいな。

思わず心の中でそう呟いた。そのとき、なぜか、シディーの横顔が頭の中を掠めた。

今でもそうなのだが、シディーは夜、二人っきりになると、それまでの能弁が嘘だったようにおとなしくなる。全身を固くして、顔を真っ赤にする。一見すると、俺と一緒にいるのがイヤなのかと思うほどだ。

リコをはじめ、妻たちと寝るときは、大体、そのときの雰囲気というか、流れで進んでいく場合が圧倒的だ。というより、夜、俺と一緒に寝るということは、まあ、そういうことなのだ。

ただ、シディーの場合は違う。その直前まで機嫌よく喋っていたのにもかかわらず、明かりを消して抱きしめると、体を固くする。シーツを思いっきり握り締めて、何かに耐えようとする姿勢を取る。別に俺はイヤだという者を無理やり何とかしようとは思わない。イヤなら別にいいよと言うのだが、彼女は必ず首を振る。

色々とアプローチを変えてみたのだが、彼女のそうした態度は変わらない。体を固くしているために、パジャマを脱がせるのも一苦労だった。場合によっては泣きだすこともしばしばで、そうなると営みどころではなく、抱きしめて、泣き止むまで背中を撫で落ち着かせたこともあった。彼女とはそのことで何度も話し合ったのだけれども、大丈夫の一点張りで、そのときはさすがに面倒臭いなと思っ

たのだ。

一瞬だが、俺は彼女を実家のニザに帰そうかとも考えた。その危機を救ったのは、リコをはじめとする妻たちだった。彼女らは折に触れてシディーの悩みを聞き、俺とシディーの間を取り持ってくれた。妻たちがいなければ、もしかしたら、俺とシディーは別れを選んでいたかもしれなかった。

結果的にシディーの場合は、その体にコンプレックスを持っていたことがわかったので、それを解消するべく色々と努力した結果、さすがに涙を流すことはなくなった。体を固くするクセは今でも変わらないけれども。

ただ今は、そんな彼女を愛おしいと思うし、普段は的を射た意見で大いに助けてくれている。今となっては、彼女は、我が家になくてはならない存在となっている。……きっと今頃、シディーはくしゃみをしているかもしれないし、直感の鋭い彼女のことだ。誰かが自分のことを考えているかもしれないと、体を震わせているかもしれない。

そんなことを考えながら、俺は目の前で泣きじゃくっているビオン王に視線を向ける。正直、何と声をかけていいのかわからない。ただ、俺とビオン王の間では気持ちは通じ合っている。彼は俺のことが嫌いだし、俺も彼のことが嫌いだ。まさに、相思相愛の関係であると言える。

ふと、隣に控えているメインティア王に視線を向ける。彼は冷淡な笑みを浮かべている。イヤな顔だ。だが、この状況を導き出したのは紛れもなくこのバカ殿であり、ある意味では彼は、このケダカ王国を救った男であると言える。

きっかけは、本当にこの男の一言だった。オークキングとの交渉を終えて森を出ると、まだ夜が明けていなかった。この王は家来たちに松明を灯させて俺たちを迎えてくれた。むろん、この男も一睡もせずに俺たちの帰りを待ってくれていた。もっとも、暇だったようで、絵を描いている最中だったが。

早速アリスン城に引き上げようとしたところ、この王はケダカに向かおうと言い出した。曰く、オークキングとの交渉がまとまったことを早く伝えてあげた方がいいだろう、と。

そんなことは使者をやれば済む話で、当然それは家来の方が言ってくれたが、この王はその言を即座に退け、俺が行くべきだと主張した。

「ケダカの者たちは、森の魔物たちがいつまた襲って来るのか怯え続けているのだ。そんな彼らに対して、単純に交渉は成功しましたという言葉だけで、彼らの怯えは収まらないだろう？　彼らのためにもここは、アガルタ王自身が行って話をしてやるのが一番だと思うけれどね。あ、あと、可能性は少ないだろうが、オーク以外の魔物が襲ってくる可能性は否定できないから、万難を排して、しばらくの間、この森に結界を張ってくれないだろうか」

……俺が行く必要はあるか？　結界いる？　とそのときは思ったのだが、ソレイユが一緒に行くといい、メインティア王も一緒に行くと言ったので、渋々ながら森を大きく迂回してケダカ王国までやって来たのだ。それで、到着してみれば、先のあの内輪もめだ。ビオン王の松明が森に投げ込まれていれば、また厄介な話になった可能性が高い。

ここ最近のメインティア王は、ちょっとした覚醒状態にあるような気がしてならない。そんな彼のことだ、目の前のビオン王の醜態に、なにか感じるものはあるだろうかと思いながら視線を向けてみるが、相変わらず彼は冷たい笑みを浮かべたままだ。

「うん。ここは君が話をした方が、うまく話はまとまると思うね。私はあの王に嫌われているし、私も彼は嫌いだ」

……俺も嫌いなんだよね、という言葉を飲み込む。そんなことを言った日には、単なる悪口大会になってしまう。

俺は咳払いをすると、ゆっくりとビオン王の許に向かい、相変わらず四つん這いになって嗚咽している彼の前で片膝をついた。

「まあ、気持ちはわかります。わかりますけれど、これは捉え方の問題だと思うのですよ」

俺の言葉に、ビオンはゆっくりを視線を向けてきた。眼は充血し、顔が真っ赤に紅潮している。酷い顔だ。彼は何かを言おうとしたので、慌てて口を開く。

「わかりますよ、あなたの思いは。欲望ではなく、真に国のためを思って行動を起こされた。まさしく、一国の王を預かる王の振る舞いかと思います。ただね、家来の皆さんも、決してあなた憎しで言っているわけではないと思うのですよ。彼らとて、真にこの国の行く末を考えてのことだと思うのです。この問題のややこしいところは、お互いの言い分が正しいという点にあります。どちらかが間違っていれば、話は簡単なのですが」

「……何が言いたい」

「きっとあなたは、自分の意見を否定されたことに対して怒りを覚えているのではありませんか。その気持ちはよくわかります。この俺も、よく提案したことを否定されることはよくありますから。でも、そのとき俺は思うのですよ。意見が出てよかったな、と」

「……」

「俺は、アガルタの皆が俺の言葉を唯々諾々と受け入れる状況になれば、アガルタは終わると思っています。だって、俺の意見が間違っていても、そのまま進んでしまうということでしょう。俺は王としての教育も何も受けてはいません。そんな俺が、自分の思い通りにコトを進めよう、また、進められる状況になれば、国が崩壊すると思いませんか」

「……貴国と、我が国は、違う」

「確かに。ただ、俺が見たところ、あなたはここにいるシュリ総司令官をはじめとする、家来たちに期待をしすぎているんじゃないかと思うのですが、違いますか？」

「……シュリたちに？　この我が？　……バカな」

「俺にはそう見えるのですけれどもね。家来たちは無条件に自分の意見に賛同するものだ、と。その期待が裏切られたからあなたは怒っている。違いますか？」

「それは、家来として、当然のことである」

「王の行動が間違っていても、ですか？　では聞きますが、あなた

はそれだけ優秀な王なのですか？」

「……」

「こう言っては失礼だけれども、そんな万能な王様なんてこの世の中にいないんじゃないでしょうか。上手くいっている国の大体は、王と家来が支え合う体制ができている気がします」

「それでは、そなたは、我に対して、家来たちに操り人形になれ、そう申すのか」

「そうは言っていません」

「平行線だねぇ」

メインティア王が口を挟んでくる。うるせぇよ。

そのとき、一気の騎馬武者がこちらに向かって来るのが見えた。男はひらりと下馬すると、全速力でこちらに向かってきて、ビオンの前で片膝をついた。

「ハッ、申し上げます！　緊急信号がございました！　国王様には早急に王宮にお帰りを願います！」

……何だ、一体何があった!?

第八百三十八話　期待しすぎ？（後書き）

コミカライズ最新話、公開中です。ルアラ登場！　めちゃくちゃ可愛く仕上がっています。是非、チェック下さい！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｃｏｎｔｅｎｔ／００３９００１

第八百三十九話　あっさりと……終わる？

「一体何事じゃ」

「わかりません！　国の一大事を知らせる緊急信号でございました！　国王様、一刻も早く……」

……突然、周囲が緊迫し始めた。国の一大事と男は言っていたが、一体何が起こったというのだろうか。

「国王様ぁ！　まずはお引きくだされ！　全軍、撤退する！」

ビオンと使者の男は二人で何やらゴニョゴニョと話をしていたが、それでは埒が明かないと判断したのか、シュリが大声で兵士たちに命令を下した。それを受けて兵士たちは迅速に撤退の準備に移った。

「お礼の一つもできぬまま、アガルタ王様の御前を下がりますのはこのシュリ、痛恨の極みでございます。しかしながら、国家存亡の危機が訪れておる今、我らは一刻も早く王都に帰還せねばなりません。ご無礼の段、平にご容赦くだされ」

シュリはそう言って平伏すると、老人とは思えぬ機敏な動きで用意された馬にひらりと跨った。

「儂の命があれば、またお目見えいたしましょう。そのときは、色々な話を聞かせてくだされ！」

そう言って彼は馬に鞭を当てる。その彼に続いて、五千の軍勢が一

糸乱れぬ動きで付き従った。

「おお……。よく訓練されている」

目の前を通る兵士たちを見て、俺は思わず言葉を漏らした。まるで、アガルタの軍勢を見ているようだったのだ。

兵士たちの動きを眺めていると、ふと、視線の先に、乗馬したビオンの姿を見つけた。彼は四人の騎馬武者に守られながら、じっと俺たちを見つめていた。

「何があったのかはわからないけれども、大変だねぇ。まあ、無理をしない程度に頑張ってくれたまえ。もし、困ったことがあったら、遠慮なく言ってくればいい。私がアガルタ王に取り次いであげよう」

何を思ったのか、メインティア王が大声でビオンに話しかける。マジで殴られるからやめなさいってば。

さぞかし気分を害しているだろうと思いつつ、彼の様子を窺っていると、ビオンは無表情のままクルリと馬首を返して、引き揚げていく兵士たちと共に去っていった。

「相変わらず、可愛げがないね」

メインティア王が誰に言うともなく呟く。それを受けてソレイユが、心の中でお礼を言っていますよと、なぜかビオンをフォローしている。一体どうしたんだと思わず視線を向けるが、彼女は涼しい顔で、男の子は素直じゃないわねぇ、などと呟いている。

「さあ、森の騒動も終わったことだし、帰るとしようか。君たちを

一晩中待っていたから、眠くて仕方がないよ」

メインティア王が両手を天に向けて、うーんと背伸びをする。

「君たちはどうする？　転移結界があるから、ここからアガルタに帰るかい？　もし希望するならアリスン城まで一緒に帰るけれど、帰ったら間違いなく父上が待ち構えている。どうしても父と話をしたいかい？」

「いや、遠慮しておきます」

「じゃあ、ここで別れよう。また、近いうちに訪ねさせてもらうよ。その前に、父がそちらに行くだろうけれど、そのときはよろしく。あ、メイリアス王妃がいらっしゃるから、その点は大丈夫かな」

メインティア王はそう言って大いに笑った。

「あ、そうだ。一つ確認するけれど、ムーブの森の入り口に転移結界は張ったのかい？」

「……いいえ。張っていませんが」

「これは君としたことが！　いや、別に森が沈静化するのであれば問題ないんだ。しかし、あのビオン王だ。何をしでかすかわかったものじゃないだろう。もしもに備えて、森の入り口に転移結界を張っておいてはどうだろうか。損はしないと思うけれどもね」

「まあ、そうですね。では、一旦俺たちもフラディメに戻りましょうか」

「いや、それだと時間がかかるだろう？　どうせ入り口はどこも同じなんだ。もう、ここに張ってしまっていいんじゃないか」

「はあ……」

まあ、使うこともないだろうと思いつつ、俺はその場に転移結界を張った。

「じゃあ、私はここで失礼するよ」

そう言ってメインティア王は踵を返すと、馬車に向かって歩いて行った。

「何ともアッサリしているな。いや、別にいいんだけれども、ただ、こう……何だ。一応、フラディメ、サンダンジ、ケダカの三国を救ったんだ。で、あれば、もっとお礼を言ってもらってもいいと思うんだけれどもな」

俺はメインティア王の後姿を見ながら、そんなことを呟く。そうなのだ。何か、あっさりしすぎているんだ。ああ、やってよかったな、という達成感が今一つないのだ。ビオン王に至っては色々とインネンを付けられたこともあって、心証は悪い。今まで一番しっくりこなかった出来事だ。

そんな俺の、何とも言えぬ感情を汲み取ったのか、ソレイユがスッと体を寄せてきて腕を絡めてきた。

「メインティア王様は、気を使ってくれたのですよ」

ソレイユがそう言って嬉しそうな笑みを浮かべる。彼女は俺に体を

摺り寄せてくると、さらに言葉を続ける。

「こうやって、私とリノス様を二人っきりにしてくれたのです」

「どういうこと？」

「……」

ソレイユはじっと俺の眼を見つめている。

「まさか、二人で、今から……？」

「はい」

「服を脱いで……？」

「はい」

「いや……。朝ですし。明るいですし」

「アラ、森の中でも全然かまいません」

「いや、森には魔物がいるでしょうが。オークに見つかったら、あのオークキング、発狂するぞ」

「では、リノス様の結界の中で」

「はあ？」

「外からは見えないようにして、中からは見えるようにしていただ

くと、とても開放感があっていいじゃありませんか」

「まあ、それはそうだけれども……。ただ、それには色々と準備がいるな」

「準備？」

「ほら、濡れたものをこう……拭くやつとかさ……」

「あー。確かに。私は持っていませんね……。リノス様の無限収納には、ありませんか？」

「あいにく、その手の類のものは切らしているようだ」

「まあ、何とかなります。ええ、何とかな、り、ま、す。私にいい考えがあります。それは、終わってからのお楽しみ、です」

そう言ってソレイユは俺の頬にキスをした。俺は彼女の背中に手を廻す。

「う～ん。やっぱりここだとキツイな。準備に時間がかかりすぎる。やっぱり、屋敷に戻ろう」

「ええ～？　それじゃ、いつもと変わりませんわ。お屋敷に帰ると、子供たちもいますし……。せっかくですから、いつもと違う環境でしましょうよー」

「気持ちはわかるが……。でも、やっぱり屋敷の方がいいな、風呂に入るのなら」

「へ？　風呂？」

「ここで風呂に入るとなると、地面を掘らなきゃいけないだろうし、そうすると時間が、な。それに、タオルも何もないんじゃ、上がってから色々と大変だ。やっぱり、屋敷の風呂に入ろう。……うん？　どうした、ソレイユ？」

彼女は俺の胸に顔をうずめると、コンコンと頭で俺の胸をやさしく打ち付けた。彼女のツノが胸に当たって痛かった。

結局俺たちは帝都の屋敷に帰り、そのまま風呂に入った。そこで俺はソレイユに思いっきり襲われて、えらい目を見ることになった……。その様子は……想像に任せる。

◆◆◆

「陛下、いよいよでございますね。よくご決断なさいました。私はもう、心が躍って仕方がございません」

「……兵はいかほど集まる見込みじゃ」

「はっ。ざっと五万は越えようかと」

「うむ。ケダカ王国とその国王ビオンを屠るには十分な数じゃな」

「ケダカの年寄どもはビオンに手を焼いておる様子。何せ、未だ若輩者ゆえ、己の力を過信しすぎておるのでございます」

「おとなしゅう年寄どもの言うことを聞いておるビオンならば、余はわざわざケダカに出兵することなど、考えなんだ。先帝亡き後、

用心せねばならんのはあの年寄どもじゃ。あの者どもは数え切れぬ修羅場を先帝と共に切り抜けてきた者たちじゃ」

「確かに、年寄衆はどの一人が先帝の跡を継いでもおかしくない、歴戦の者たちでございます」

「我らの戦いは、ビオンと年寄どもの分断を察知することで、すでに始まっていたと言ってよい」

……そのとき、ぽつぽつと雨が降り始めていた。

第八百四十話　であることとすること

ほぼ、丸一日をかけてビオンらは王都に帰還した。王宮に戻るとそこは、まるで蜂の巣をつついたような状況で、執務室に入ると、そこには重臣らが顔を揃えていた。

「ダオラ帝国が動いたとは誠か！」

ビオンは王都に戻る道すがら、伝令兵から今回発せられた緊急信号についての報告を受けていた。それは、海を隔てた隣国であるダオラ帝国が軍勢を発したという知らせだった。

ダオラ帝国とは、ビオンの父ザヌドの時代に刃を交えていた国だった。その頃のケダカ王国の版図は現在の半分程度しかなく、その残り半分はダオラ帝国が支配していた。ザヌドはそのダオラ帝国と粘り強く戦い、そして勝利し、彼らを海を向こうの本国に追いやっていた。

ダオラ帝国も粛々と撤退するはずもなく、幾度となく海を越えて失地を回復しようとケダカに侵攻してきた。だが、先帝ザヌドはある時は海上で撃退したり、ある時はケダカにダオラ軍を引き込んだりしながら、その侵攻を退けてきた。それから約十年の間、ダオラからの攻撃は止んでいたが、今回の騒動を見て好機と捉えたのか、ダオラ帝国皇帝、ガノブは全軍に出動命令を発していた。

ダオラ帝国動く、の報は、ケダカ王国にとっては寝耳に水のことであり、そうした準備をしていなかった王宮内は上を下への大騒ぎとなった。だがその一方で、ビオンらのいる執務室は、異様なほどの

静寂に包まれていた。

宰相マガタは、ビオンが席に着くと地図を取り出し、現在のダオラ帝国の状況を説明し始めた。

「ダオラ皇帝ガノブが帝都であるフギミノを一昨日、軍勢を従えて出発したとの報が入りました」

「その数は」

「およそ二万五千」

二万五千、と聞いてビオンは安堵した。今現在、ケダカ王国が動員できる兵力は三万弱。その規模であれば、兵数においては有利であり、十分に撃退できると彼は踏んでいた。だが、宰相マガタは冷静な口調で言葉を続ける。

「現在の兵数は二万五千程度であると予想されますが、我が国に侵攻してくるのであれば、その数はおよそ五万を超えるものと思われます」

「ご……五万……？」

「これまでのダオラとの戦いを考えますと、彼らは一旦、帝都フギミノから真っすぐ南に下ってキザカに至り、そこで各地から進発した軍勢を吸収して渡海してきます。我が国に侵攻するのであれば、それが最も安全かつ最短の行程でございます。おそらく、皇帝ガノブの率いる本軍は明日にはキザカに到着することでしょう」

「で、我が国に攻め寄せるまでにはいかほどかかる？」

「およそひと月と考えております」

「ひと月！？」

ビオンにとって意外な言葉だった。彼はダオラ帝国軍がこのケダカに殺到するのは、一週間以内と考えていた。なぜ、ひと月もの間をかけるのか、彼は理解に苦しんでいた。宰相マガタはそんなビオンの心底を見透かしたように、さらに言葉を続ける。

「はい。我々はそう見ております。単に我が国に攻め寄せるだけであれば、一週間もあればこの王都まで攻め上れましょう。しかし、ダオラは今回、確実に我が国を占領し、併呑しようと考えていると我々は見ております。そうなれば、食料、武器の類を十分に準備せねばなりません。また、今回の出陣はそうした目的ですので、おそらくダオラは全兵力をもって我が国に攻め寄せるものと推察します。そうなれば、すべての兵が到着するまでに十日はかかりましょうし、それだけの準備をかの国はしていないために、準備をするだけでひと月近くの日数がかかると予想します」

「それならば……」

そう言いかけてビオンは言葉を飲み込んだ。ダオラ帝国の北東に位置するラフトス帝国に、もぬけの殻になったダオラ帝国の帝都を突いてもらうよう要請すればよい、と考えていたが、それは叶わぬことであった。

ラフトス帝国は、正妃・エレナの故郷であったからだ。

先の出来事でラフトス帝国がケダカに援軍を出す可能性は皆無と言

えた。それどころか、これまでの同盟を破棄して、エレナを返せと言ってくる可能性すらあったのだ。ここに至ってビオンはようやく己のしたことを深く反省した。長い間、ケダカとラフトスの間に挟まれ、緊張状態にあったダオラ帝国が、まるで耳をそばだてるようにして両国の内情を探るのは当たり前のことであり、そのどちらかに何らかの綻びが見えたのであれば、すぐさまそこを突いて来ようとするのは、少し考えれば誰もがわかる話であった。

「国王様、どうなさいますか」

宰相マガタは敢えて何も言わず、ビオンに決断を委ねた。それは、ビオンを国王である状態とはせずに、ビオンを国王とする行為につながるものであった。

「……シュリはいかがした」

ビオンは即答を避けた。そこに彼の生来持っている気の弱さがあった。その弱さのために、その弱さを隠そうとするあまり、強力な行動に出て失敗を繰り返していた。老臣たちはすでにそれを見抜いていたが、ビオン自身は未だそれに気が付けていなかった。

「国王様より死を賜ったとして、自宅に戻っております」

マガタが一切感情を込めずに口を開く。

「ま、まさか、自決した、というのか」

「未だその報告を受けてはおりませんが、国王様より死を賜ったと聞いております。シュリ殿のことです、武人らしく、今頃は……」

マガタの言葉にビオンは体を震わせたが、すぐにその可能性は低いと断じた。確かアガルタ王の前でシュリは命があったら話を聞かせてくれ、と言っていた。ということは、彼は易々と死を選ぶつもりはないということだ。

「シュリを、シュリの爺を呼んでまいれ。今すぐにじゃ」

「恐れ入りますが、何のために、でしょうか」

「知れたことである！　シュリは国軍の総司令官である。ダオラが侵攻してくる今、シュリの意見も聞こうということだ」

「畏れながら国王様、シュリ殿は総司令官の任を解かれたと聞いております」

「戯言じゃ」

「は？」

「戯言を申したまでじゃ。すぐにシュリを呼んでまいれ」

マガタは何とも言えぬ表情を浮かべた。ただ、これ以上彼を追い込めば再びへそを曲げることにもなりかねない。国王としては最大に譲歩しているのだ。そう感じた彼は部下に、すぐさまシュリを召し出すよう命令を下した。

程なくしてシュリは執務室に現れた。ムーブの森から帰還したそのままの格好で、よく見ると、その鎧にはビオンが剣で斬りつけたときの傷が入っていた。シュリは用意された席に無言のままどかりと腰を下ろし、腕を組んだ。

「シュリ、ダオラが我が国に攻め寄せようとしておる。何か考えがあれば、申せ」

ビオンの言葉にシュリは大きく息を吐き出すと、その体をずいっとビオンの方向に向けた。

「儂はただ、国王様の命令に従うのみじゃ」

彼はそう言うと再び元の姿勢に戻った。シュリはこの部屋に来るまでに、ここでどんな会話がなされたのかを使者を通して聞いていた。宰相マガタは敢えて何も言わず、国王に決断を委ねたのだと言う。マガタは国王と共にこの国と心中するつもりだ。そうであれば、自分が出る幕ではない。彼はそう考えていた。

……ダオラが動いたことは予想外じゃったが、国王様をここで本物の王とする絶好の機会じゃ。ここで本物の王にならなければ、遠からずこの国は亡ぶ。となれば、今亡ぶのも同じことじゃ。

シュリは心の中でそう呟いていた。

一方のビオンも、老臣たちが決断を委ねた意味を理解していた。本当に王としてふさわしい人物かどうかを見定めようとしている。自分がこの国の王として認められるかどうかのラストチャンスであった。ビオンは目を閉じて大きく深呼吸した。

第八百四十一話　大爆笑

ビオンは心を落ち着けて、再び机の上に置かれた地図に視線を向ける。そのときの彼の脳裏には、亡き父の言葉が浮かんでいた。

……戦をするときには、相手の視点に立って考えよ。

自分がダオラ皇帝ガノブの立場であれば、この国をどう攻めるか。答えはすぐに出た。一点突破だ。海から攻撃を仕掛けてケダカ軍を蹴散らし、王都に向かって攻め寄せる。変に策を弄すよりも、シンプルな作戦が効果的だ。

では、そのダオラ軍を阻止するためには、どうしたらよいか。その答えもすぐに出た。彼らの上陸時を狙う外はない。一旦上陸されてしまえば、数を頼んで押し包まれる。広い草原地帯の拡がるこのケダカ王国にとって、それは避けねばならない状況だった。

「海岸線に我が軍勢を配置し、ダオラ軍を迎え撃つ。火矢と魔法を駆使し、船ごと沈められるよう……」

そこまで言ってビオンは絶句する。それは上手くいけばよいが、敵は十分な準備をしてこの戦いに臨む。とすれば、その対策を練っていることを念頭に置かねばならない。それに、その作戦を採用すると、ケダカ軍の戦線は自ずと伸びることになる。そうなれば、どこかを突破されれば、そこを中心に攻撃され、敵に背後を突かれることになる。そうなれば、ケダカ軍はビオン以下、屍を野原に晒すことになるのだ。

ビオンの思考はここで停止する。思わず顔を上げて老臣たちに視線を向けた。彼らは皆、一様にビオンに視線を向け、無言を貫いていた。老臣たちの眼は冷ややかなものに見えた。彼は再び地図に視線を落とす。

……フラディメとサンダンジが動いてくれれば、あるいは。

南からこの二か国が敵の横腹を突いてくれれば、戦況は逆転する。数の上でも互角か、優位に立つことができる。だが、ビオン自身の振る舞いによって、この頼みとする両国からの援軍は望めそうにもなかった。

……万策尽く、ではないか。

ビオンは心の中でそう呟いた。もはや、国の存亡をかけて海岸線で戦う外はない。

ふと、ビオンの脳裏にアガルタ王の顔が浮かんだ。決して王には見えない優男だ。本当にあのアガルタ王であるかどうかも疑わしい。だが、彼の、意見が出るだけでもありがたい、という言葉が、妙にビオンの脳裏にこびりついて離れなかった。

「……余は、全兵力をもって海岸線に陣を敷き、ダオラ軍を迎え撃つ以外にはないと考える。だが、この作戦は、非常に危険であると考える。一歩間違えば、間違いなく我が国は滅亡する。そこで、皆の意見を聞きたい」

冷たかった老臣たちの視線が、温かいものに変わった気がした。何となくだが、皆、何とも懐かしそうな表情を浮かべている気がする。そのときふと気がついた。自分の意見を述べてから家来たちに問い

かける……。これは亡き父が軍議でよく見かけた光景だったことを。

「私めも同感でございます」

宰相マガタが口を開いた。彼は一礼すると、シュリに視線を向けた。

「国軍の総司令官はシュリ殿だ。ご意見を承りたい」

「……儂も同意見じゃ。だが、これは大博打だ。しかも、勝てる公算の少ない大博打だ」

シュリの言葉に皆が頷く。彼は腕組みをしたまま天を仰ぎ、そして、誰に言うともなく呟いた。

「せめて、援軍があれば、な」

「それは余も考えた。だが……。余は自らの落ち度により、フラディメ・サンダンジ両国との絆を損じてしまった。両国からの援軍の見込みはない」

ビオンの言葉に誰も答えない。重苦しい空気がその場を支配した。

そのとき、なぜか彼の脳裏にメインティア王の姿がよぎった。いつも人を馬鹿にしたようなニヤニヤした笑みを浮かべているあの姿……。一体なにが可笑しいのか。その顔を、姿を見るだけで不快感を覚えていたあの顔が、今は不思議なほど落ち着いて彼のことを考えられていた。

……何かあったら言ってくるといいよ。アガルタ王に取り次いであげるよ。

そんな言葉がふと思い出された。確かに、あのメインティア王は自分に向けてそう言った。アガルタが動けば状況は劇的に変わる。

「アガルタじゃ」

思わずそんな言葉が口をついて出た。皆、一様にギョッとした表情を浮かべている。そんな中、宰相マガタが呆れ顔で口を開く。

「アガルタが、どうなさいました」

「アガルタに、援軍を要請する」

「お気は確かですか国王様。アガルタ王には、国王様が多くの無礼を働いたと聞いております。アガルタの心証はよくはございませんでしょう。そこに援軍を出してくれと言ったところで、我らのためには動きますまい」

「いや、フラディメに仲介を頼む。我が引き上げる際、フラディメ王からアガルタへ仲介してもよい、との言葉を聞いておる」

「それは社交辞令でございます」

「いや、そうとも言えぬだろう」

口を開いたのはシュリだった。彼はビオンのいる方向に体を向けた。その眼は爛々と輝いている。その異様とも言える様子に、ビオンの体は震えた。

「国王様ぁ、これまでの非礼を詫び、地面に這いつくばってアガル

タ王におすがりすれば、あるいは上手くいくやもしれぬ」

「……！」

部屋の空気が緊張に包まれる。それほど、このシュリの発した言葉は意外なものだった。

「シュリ殿、すまぬが、どういうことなのか、説明してもらいたい」

「確かに、国王様はアガルタ王に対して暴言を吐いてはいる。が、儂の見たところ、アガルタ王は心の広いお方であると見た。国王様が心から詫びれば、粗略には扱わぬだろう」

「しかしシュリ殿、フラディメに使者を送り、そこからアガルタに使者を送ってもらったとして、それには膨大な時間がかかるのではないか。そんなことをしていたら、我が国は……」

「考えても見られよマガタ殿。我らは、コロギ川の畔で両王とお会いしたのだ。お二人は馬車に乗って我が国まで参っておいでだ。となれば、アガルタ王はフラディメに戻られた……」

「フラディメに使者を遣わせば、あるいは……」

「アガルタ王様の許に届くやも知れぬ。さすれば、ダオラの襲来とほぼ同時に援軍が到着する……。ギリギリだな、シュリ殿」

「ああ。それもうまくいけば、の話じゃがな。可能性としては高くはない。高くはないが、我らだけでダオラの軍勢を迎え打って撃退できる可能性と比べれば、遥かに高い可能性ではある」

「国王様！」

宰相マガタがビオンに視線を向ける。彼だけでなく、その場にいた全員の視線がビオンに向いていた。

そのビオン自身もたった今、同じことを考えていた。彼は大きく頷きながら口を開く。

「うむ。もし、アガルタからの援軍を引き出すことができれば、アガルタを動かすことができれば、サンダンジ、フラディメも動こう。彼らとて、隣国である我が国が他国に蹂躙されるのを見るのは面白くはあるまい。そうなれば、ヤツらはダオラと一から関係を築かねばならぬ。そんな面倒なことはできるだけ避けたかろう」

そう言うとビオンはフッと笑みを浮かべた。だが、すぐに元の緊迫した表情に戻ると、さらに言葉を続けた。

「だが、それをするためには、アガルタ王を動かさねばならぬ。その使者は……余、一人で赴く」

「国王様、おひとりで？」

宰相マガタがキョトンとした表情で口を開いた。マガタにとっても、ビオンの発言は全く予想外のものだった。

「我が愛馬レンシルならば、明後日の夕刻までには辿り着こう。その前に、ガーラ鳥に書簡を持たせるのだ。あの鳥ならば、アリスン城まで一日で飛んでいくであろう。すぐにかかるのだ」

「お待ちくださいませ、国王様ぁ」

「言うなシュリ。貴様のことだ。国軍の兵を連れて行けというのだろうが、それは無用だ。我一人でよい。この際、我についてこれぬ兵士は邪魔になるだけだ」

「いや、そうではない。国王様、私も供にお連れくださされ」

「爺が？　やめておけやめておけ。アリスン城に辿り着く前にくたばってしまうわ。丸二日間、ほとんど休まずに、なおかつ飲まず食わずで馬を駆るのだ。そなたの年では無理じゃ。大人しくここで戦いの準備をせよ」

「いや、国王様。そんなことは部下に任せておけばよいのだ。儂は、アガルタ王と約束したんじゃ。命があればもう一度会いましょうと。なに、このシュリ、まだまだ若い者には負けませんぞ」

「フッ、爺が……ほざきよるわ」

そう言ってビオンはフフフと笑う。それに釣られてシュリも笑う。いつしか二人は大声で笑い合っていた。

その光景を見た宰相マガタは、直感的に上手くいきそうな気がしていた……。

第八百四十二話　急げ急げ

ビオンとシュリはすぐに愛馬に跨り、王宮を出発した。帰城してからわずか六時間後に再び出発するという慌ただしさだった。

二人は最低限の水と食料だけを持って出発していた。ビオンの愛馬レンシルは、疲れも見せずに快調に走り出していた。この馬とても、かなり疲れているはずなのだが、ビオンの当てる鞭に粛々と従ってくれていた。

ふと、背後に視線を向けると、そこにはシュリが一定の距離を保ちながらビオンを追って来ていた。

正直言って意外だった。鎧を装備した老司令官など、すぐに振り切れると考えていた。だが、シュリの表情はまだまだ余裕がありそうに見えた。ビオンは愛馬にさらに鞭を当てて速度を上げた。

……どのくらい走り続けただろうか。王宮を出たのが夕刻のことだ。今や陽はすっかり落ちて、周囲は漆黒の闇に包まれている。だが、勝手知ったる自国の道だ。自分がどの辺りを走っているのかくらいは十分に把握できていた。

近くに川がある。一旦そこで休息しよう。ビオンは馬首の向きを変えた。

川の畔に着くと、彼は下馬して馬に水を与えた。愛馬もまた、喉が渇いていたのだろう。一心不乱に水を飲んでいた。その様子を見ていると、不意に背後に人の気配を感じた。シュリだった。彼もまた、

愛馬の手綱を引きながら川に入ろうとしていた。

「ここで休息を取ったのはお見事ですな、国王様ぁ。この先は、コロギ川まで水を与える場所がない。ここで休息を取らねば、国王様のレンシルは途中でひっくり返っておった」

シュリはそう言いながらビオンの許にやって来ると、その隣にドカリと腰を下ろした。二人は懐から持参した食料を取り出し、黙々と食べ始めた。サラサラと川の流れる音だけが聞こえていた。

「爺」

不意にビオンが口を開いた。シュリは顔だけを向けて聞く姿勢を取った。

「我のレンシルについて来るとは、馬を扱うのが上手いではないか」

「何を今さら……。国王様に馬の乗り方を教えたのはこの儂じゃ。国王様に負けるほど耄碌はしておりませぬ」

「そう、か」

「儂などまだまだですぞ。国軍の中には、儂よりも馬の扱い方が上手い連中は数多くいる。こう言ってはなんじゃが国王様。儂が鍛え上げた軍勢は、なかなかのものですぞ」

「それならば、先のムーブの森の騒動で、国軍は我が鍛えた親衛隊に追いついてこれなんだではないか。それで精鋭と言えるか」

「お言葉ですが国王様ぁ。国王様の率いた親衛隊は全員が騎馬隊で

した。国軍には騎馬隊もおりますが、歩兵隊もおります。食料なども運ぶ荷駄隊などもおります。騎馬隊だけであれば、国王様に追いつくことは簡単ですが、彼らと連れているとなるとそうは参りません。ですが、国王様たちに遅れること僅か三時間でムーブの森に到着した我らは、なかなかのものだと思われませんか。国王様たちは道なき道を進んでおられたようですが、我らは整備された道を進んだのです。これだけ見ても、我らの優位性が示せるというものじゃ」

「フッ、爺が、ほざきよるわ」

そう言いながらも、ビオンはシュリの言葉に納得していた。ムーブの森、ジンの砦に急ぐあまり、道なき道を進んだ。結果的にそれが親衛隊たちを疲労させ、魔物たちとの戦いの敗北の要因となったことは否めなかった。

二人はしばらくの間無言のまま流れる川を見つめていた。ややあってビオンは立ち上がり、自らの愛馬の手綱を握った。

「時間も限られておる。爺、休憩はしまいじゃ。これからは本気で馬を駆る。落伍するでないぞ」

「フフフ、望むところじゃ」

シュリは不敵な笑みを浮かべながら、彼もまた、愛馬に跨った。

◆◆◆

ケダカ王国のビオンからの緊急伝令が届いたとの報を知らせたのは、何とメイからだった。しかもそれは、リボーン大上王自ら知らせに来たのだと言う。取るものも取り敢えずアガルタ大学に向かうと、

その大上王が俺の到着を待ちわびていた。

「いや！　すまぬな！　忙しいところを！　ケダカ王国存亡の危機じゃ。お許しくだされ！」

随分興奮している。声がデカイ。そんな大きな声を出さなくても十分聞こえるっちゅうねん。

そんな俺の様子を苦笑いしながら眺めていたメイが、一枚のメモを俺に手渡す。そこには手短に、ダオラ帝国が侵攻してきたこと、国家存亡の危機であること、フラディメに、アガルタへの仲介を頼みたい旨のことが書かれていた。

大上王の大音声をものともせず、メイの秘書を務めるセルロイトが地図を持ってきて机の上に広げる。大上王は満足そうに大きく頷いた。

「緊急伝令が届いたのは、つい先ほどのことじゃ。おそらく、ケダカの使者はムーブの森を迂回するようにして我が国、我が城にやって来るはずじゃ。ケダカに侵攻しておるダオラ帝国はここにある。海を渡ってケダカに侵攻するつもりじゃろう。国家存亡の危機とあるからは、おそらく、ダオラは全兵力をもってケダカを攻めておるのじゃろうて」

「なるほど。現状は、どうなのでしょうか」

「詳しいことはわからぬが、おそらく、ダオラの侵攻を知った直後に我が国に緊急伝令を発したのであろう。とすれば、今まさに攻撃を受けておるというわけではなさそうじゃ。侵攻までにしばらくの時間がありそうじゃが、それが一週間なのか十日なのか、そこまで

はわからぬ」

「ケダカは俺に何をして欲しいと言っているのでしょう」

「察するところ、アガルタに援軍を頼みたいのじゃろう」

「援軍？　アガルタからケダカまで軍勢を率いていくとしても、かなりの時間がかかりますよ？」

「そこじゃ。果たしてケダカがアガルタに何を求めようとしておるのか、儂らもしかとしたことはわからぬ。すまぬがアガルタ王におかれては、もう一度、アリスン城にお越し願いたい」

「はあ……」

「おそらくケダカはアガルタ王がまだ、アリスン城にいると踏んでこの伝令を寄こしたのじゃろう。確かに、普通で考えれば、ムーブの森からアガルタ王は我が城に向かったと思うのは自然のことじゃ」

てっきりあの国のことは終わったことだと思っていた。またあの王とかかわりを持たねばならないと思うと、少し憂鬱になってくる。だが、この大上王の様子では無下に断るわけにはいかないようだ。

「わかりました。では、明日の朝にでも……」

「なるほど、ここに通じていたんだねぇ」

俺の言葉を間の抜けた声が遮る。転移結界のある部屋から何と、メインティア王が姿を見せた。ここに大上王が来ているのはわかっているはずなのに、どうしてわざわざここにやって来たのか。そんな

俺の疑問など知ったことではないとばかりに、彼はスタスタと俺たちの前まで歩いて来ると、スッとメイの前で腰を折った。

「いつも父がお世話になっております。フラディメ王国国王として、メイリアス王妃には深く感謝申し上げます」

「い……いえ、そんな……」

「なぁにをやっておるのだお前わぁぁぁぁぁ！！」

大上王の大声が響き渡る。あまりの声量に空気が震えている。その威力は抜群で、俺はもちろんのこと、メイも耳を押さえてしまっている。

「う……すまん。失礼した」

大上王が顔を赤らめながら咳払いをする。メインティア王はさすがで、すでに両手で耳を覆っていた。

「何しに来たんです？　まさか、うちのメイに大上王のお礼を言いに来たわけじゃないでしょう？」

「ハハハ、まさか。たまたまメイリアス王妃にお目にかかれたので、ご挨拶をしたまでだよ」

「一体何をしに来たのだ、お前は！」

「ああ、そのことです。アガルタ王、すまないけれど、今すぐ来てもらえないかな？」

え？　今すぐ？　……何で？　どこに？

第八百四十三話　お嫌い？

メインティア王は地図が広げられている机の前に座る。メイの秘書を務めるセルロイトも彼に釣られるようにして椅子に座る。そうなると、立っている俺たちが不自然に思えてくる。仕方なく、俺もメインティア王の隣に座る。そして、メイが俺の隣に座り、ちょうど俺とメインティア王の真正面に大上王が腰を下ろした。

……大上王の圧力がハンパではない。思わず椅子を引っ張ってメイの隣に移動しようかと考えていたそのとき、メインティア王が口を開いた。

「恐らく、昨日の夕刻にケダカの使者は王都を立ってアリスン城に向かっていることだろう。と、すれば、今頃ムーブの森の入り口付近まで来ていることになると思うんだが、違いますか？」

メインティア王がチラリとメイに視線を向ける。彼女は傍にあった紙の切れ端に、カリカリと何やら書き込み始めた。それを大上王がのぞき込んでいる。おいジイさん、近すぎないか？

メイが書いているのは数式だった。きっとあれだ。速度と距離から時間を割り出しているのだろう。

「そうですね。メインティア王様が仰る通りだと思います」

「見事じゃ」

メイの言葉にかぶせるように大上王が呟く。彼は腕組みをして満足

そうに頷いている。メイの書いている数式を理解したのだろうか。だとすれば、やはりこのジイさんはかなり勉強ができる人だ。

そんなことを考えていると、メインティア王が安心した表情を浮かべながら口を開く。

「いや、ありがとうございます。私はどうもそう言った計算が苦手でね……。メイリアス王妃がいらして下さって、助かりました。お礼を申し上げます」

「いえ、そんな……」

メイが少し照れながら頭を下げる。うん、かわいい。そういうつつましやかなメイが好きだ。

「ということでアガルタ王、来てもらいたいんだ」

「え？　いや、だから、どこに？」

「察しが悪いねぇ、君は。ムーブの森の入り口に転移結界を張っただろう？　ちょうど今頃、ケダカの使者がその付近を通過しているはずだ。うまくすれば、そこで使者に会うことができるはずだ」

「別にそこまでせんでも……」

「いや、これは私の勘なのだけれど、ケダカの使者を我がアリスン城に入れない方がよいような気がしているんだ。追い返すなら城の外、それも、ケダカ王国内である方がいい」

「え？　ケダカはそんな無理難題を押し付けてくるのですか？」

「それはわからないけれどもね。あくまで私の勘だ」

「バカなことを言うな！」

大上王が真っ赤な顔をしながら立ち上がる。彼は大股で俺たちの許まで歩いて来ると、声を落としながら口を開いた。

「国の使者を城で迎えるのに何の不都合があろうか。そもそも、外で使者を迎えるなど、無礼も甚だしい。ふざけたことを言うな」

……怖い。マジで怖いこの爺さん。チラチラ俺を見るんじゃないよ。それを言っているのは、アナタの息子さんです。俺は関係ありませんから。

ちょっとあなたのお父さん何とかしなさいよと、メインティア王に視線を向けるが、彼はあらぬ方向を見ている。オイ、どこを見ているんだよと、視線の先を追ってみると、彼は何とメイに視線を向けていた。その様子からは、どうやら、ウチの親父に何とか言ってやってくださいよと伝えているように見える。メイもどうしてよいのかわからないといった様子だ。

「メインティア王様の、言う通りに、なさった方が、よいかと思います」

小さな声でポソポソとセルロイトが口を開いた。大上王が驚きの表情を浮かべながら振り返り、そして体を震わせた。

きっと、お主は黙っておれぇと大音声で一喝しようとしたのだろうが、セルロイトのあまりにも華奢な姿を見て、それを思いとどまっ

たのだろう。確かに、大上王の大声をまともに浴びれば、彼女は折れてしまうかもしれない。

「問題ない、かと、存じます」

セルロイトはそう言って一礼した。何故だろうか。彼女の言葉には説得力があった。この俺でさえも、ああ、そうかもしれないなと思ってしまった程だ。

大上王はガバッとメイに視線を向けた。本当にこの娘の言葉は大丈夫かと言っているようだ。その彼にメイはゆっくりと頭を下げる。もう、こうされては、さすがの大上王も反論の余地がなくなったらしく、彼は俺たちに向き直ると、口の中で何やらムニャムニャ言いながら胸を張った。どうやら、納得はしていないが、お前たちの好きにやるがいいと言っているようだ。

「では、すまないけれど、転移してもらえないかい？　ああ、父上は来なくて結構です。大丈夫です。アガルタ王が付いていますから」

大上王は何かを言おうとしたが、それよりも前にセルロイトがゆっくりと頭を下げ、メイもそれに倣って頭を下げたので、大上王はさらに口をもごもごと動かしながら、体を震わせた。

大上王が倒れないだろうかと心配しながら転移結界を発動させようとすると、不意にメインティア王がそれを止めた。

「ちょっと待ってもらえるかな」

彼はそう言うとスタスタとセルロイトの許まで歩いていくと、鼻と鼻が触れ合うのではないかと思うほどに顔を近づけた。

「ほう、なかなか美しいじゃないか。そなた、名は何と申す？」

「やめい！　その者はすでに夫ある身じゃ！　それに、アガルタ王とメイリアス殿の前じゃ！　バカなことは止めよ！」

大上王が怒りを爆発させる。先ほどから怒りを抑えていたので、その勢いもあって声のデカさが半端ではない。俺もメイも思わず耳を塞いだ。

だが、このバカ殿はそんなことは一切関係ないとばかりに、ずっとセルロイトの顔を眺め続けている。そして、ゆっくりと唇を近づけようとしたそのとき、セルロイトが口を開く。

「私は、セルロイトと、申します。が」

「……が？」

「私を抱かれますと、離れられなくなりますし、私もお離しませんけれど、大丈夫ですか？」

「……」

思ってもみない言葉だった。てっきり強く拒否するものだと思っていたのだが……。それはメイも同じだったようで、目を丸くして驚いている。

メインティア王はしばらくの間、無言でセルロイトを眺め続けていたが、やがてゆっくりと彼女から距離を取ると、クルリと振り返った。その表情からは悔しさや怒りといった感情は見えず、むしろ、

参ったな、一本取られたなといった表情に見えた。

「お待たせしたね。さ、転移結界を発動させてくれたまえ」

俺は彼が側に来ると、渋々ながら転移結界を発動させた。

◆　◆　◆

二人の姿が消えると、大上王は大きく息を吐き出した。今まさに姿が消えるその時まで、息子の視線がセルロイトに向けられていたのを、大上王は不気味に感じていた。

「そなた、しばらくの間、どこかに身を隠すのじゃ。メイリアス王妃、どうかこの娘を、どこかに……」

「大丈夫、かと、思います」

大上王の心配をよそに、セルロイトは淡々とした様子で口を開いている。その彼女に大上王は狼狽を隠そうともせずに、さらに言葉を続ける。

「そなたは知らぬのじゃ。あのバカ息子の女ぐせの悪さを。あきらめの悪さを。今にあやつはここに戻ってきて、そなたの腕を取って無理やり、引きずってでも……」

「きっと、大丈夫で、ございます」

「なぜ、そう言い切れる？」

「メインティア王様は、絵を、お描きになると、聞きました。しか

も、その絵を描かれるときは、誰も部屋に入れず、お一人で描かれると、聞いております」

「た、確かに、息子は絵を描くときは一人で部屋に籠って描いていると聞いているが……。それが今の話と、一体何の関係があるのじゃ」

「メインティア王様は、干渉（鑑賞）されるのが、お嫌いでしょうから……」

「うふっ、アハハハ」

メイが思わず笑い声を漏らした。その飾り気のない笑顔とセルロイトの落ち着き払った様子を見た大上王は、呆気にとられた様子で、ゆっくりと椅子に腰を下ろした。

第八百四十四話　臥して臥して

ムーブの森の入り口に転移した。目の前には美しい草原が広がっていた。ついこの間も来たばかりだが、覚えているのは、このバカ殿の無礼な振る舞いと、ビオンの怒鳴り声だけだった。あらためて、こうして落ち着いて風景を眺めていると、意外と心落ち着く景色だ。

時刻は午前十時を廻ったところで、草原の草花はまだ、朝露に濡れている。何とも清々しい光景だ。隣のバカ殿はさぞかし満足しているだろうと思いながら視線を向けていると、彼は照れた表情を浮かべながら、自分の頭を叩いていた。

「どうしました？」

「いや……私も、まだまだだなと思ってね」

「やっとそこに気づかれましたか」

「うん？　どういうことだい？　たぶん、君が考えている内容と、私が考えている内容は違っていると思うけれどね」

「一体、何をお考えで？」

「いや、先ほどの女性だよ。セルロイト、と言ったかな」

「ああ……。何か、すごいことを言っていましたね。私を抱けば離れられなくなる……みたいな」

「そうなんだ。私の見たところ、彼女はかなり好色だけれども、それを自分自身で抑えていると見たんだ。そうした押さえていた欲望を解放してやりたいと思ったのだけれどもね、まさか、あんなことをあけっぴろげに言うとは、全く予想もしていなかったことだよ」

「でも、いつものあなたなら、そんなことお構いなしに口説くじゃないですか。今回は全く襲わなかったですけれど、どうしました？」

「いや、あの女性は、自分でも言う通り、一度契りを結ぶと離れなくなるだろう。そうなると、我がアリスン城の後宮はまた騒動になる。もう、そういうのは御免でね……」

「何ちゅう贅沢な」

「贅沢かい？　私からすれば、君が一番贅沢な状況だと思っているけれどもね」

「……まあ、ね。最高の妻たちですよ」

「……君は何もわかっちゃいないね。色事を愛する者からすると、君のお妃たちは、すべての要素が揃っている」

「どういうことです？」

「フフフ。あ、やって来たようだよ」

メインティア王が笑みを浮かべながら顎をしゃくる。見ると、草原の彼方に、こちらに向かってくる者が見えた。その姿は徐々に大きくなっていく。どうやら二人の騎馬武者が向かってきているようだった。どうやらその姿は、ケダカ王国国王、ビオンで間違いなさそ

うだった。

「すごいな。まさにベストタイミングじゃないですか。兄さん、すごいですやん」

俺はそう言いながらメインティア王に視線を向ける。彼は機嫌よさそうに笑みを浮かべている。

俺たちの姿に気づいたのか、二人の騎馬武者が方向を変えてこちらに向かって来る。その姿は……やはりビオンだった。彼は俺たちに前で馬を止めると、まるで夢でも見ているかのように、呆然とその場に立ち尽くした。彼は顔から滝のような汗をかいていた。そして、はあはあと苦しそうに肩を上下させながら呼吸を整えていた。

「おお！　やはりアガルタ王様であられたか！」

突然、男の絶叫にも似た声が聞こえてきて、思わず体が震えた。見ると、ビオンの後ろから鎧を装備した禿げあがった男が現れた。この人は確か、シュリとか言った、総司令官だ。

彼はひらりと馬を降りると、大股で俺たちの許に駆け寄ってきた。そして、どかりと腰を下ろすと両手を天に向け、そのままばたりと倒れ込むようにして平伏した。

「やはり、アガルタ王様であられた！　このようなところでお目にかかれて、このシュリ、歓喜の念に堪えませぬ！」

「あ、いやいや、顔を上げてください」

俺はそう言って老司令官を抱き起す。彼は俺を見るとニコリと、実

にいい笑顔を浮かべた。そして振り返って、まだ馬上にいるビオンに声をかけた。

「国王様ぁ！　何をしておいでじゃ！　アガルタ王様がおわしますぞ！　馬を降りられませい！」

その大声でビオンは体を震わせると、おずおずと馬を降りてこちらに歩いてきた。相変わらず肩を上下させながら呼吸を整えている。すでに体力は限界を迎えようとしているようだ。

「まだまだですな、国王様ぁ。それしきのことで息が上がるようでは」

シュリが言葉を言い終わると同時に、ビオンはまるで崩れ落ちるようにしてその隣に座り込んだ。

「この度は我ら、アガルタ王様にお願いの儀がございまして、罷り越しました。まさか、このようなところでお会いできますとは思いもよりませなんだ。察するところ、我らの緊急伝令をお受け取りあそばしてからすぐ、こちらまで出向かれたのでございましょう。そのご厚情、臥して、臥して、御礼申し上げます」

老司令官はそう言って再び平伏した。ビオンはただ、目だけを俺たちに向けたままだ。疲労が色濃く出ている。頬はこけ、髭は乱れ、目には深いクマができている。

「ずいぶん疲れているように見えます。まずは水でも飲んで落ち着いてください」

そう言って俺は掌から魔法で水を出す。シュリはそれをありがたい

と言って、両手で水を掬って飲んだ。ビオンに向けると彼は、口を大きく開けて、喉を鳴らしながら直接それを飲んだ。その様子をシュリは苦笑いを浮かべながら眺めている。

「ずいぶん行儀が悪いことじゃが……。お許しくだされ。国王様は昨日の夕刻王都を出られてから、不休不眠で馬を駆り続けて来られたのじゃ。それもこれも、一刻も早くアガルタ王様、メインティア王様にお目にかかるため」

「話を承ろう」

俺はそう言って二人の前に座った。メインティア王は腕を組みながら立ち尽くしている。アンタも座りなさいよと、彼のズボンを引っ張る。彼は仕方がないなと言う表情を浮かべながら、ゆっくりと座った。両足を横に投げ出して座っている。女子か。

「結論から、申し上げる」

突然ビオンが大声で口を開く。ビックリするじゃないか。だが、そんな俺の驚きなど意に介さず、彼は言葉を続ける。

「我が、ケダカ王国に、援軍を、出して、いただきたい。何卒、何卒、力を、お貸しいただきたい。この、通りだ」

そう言って彼は平伏した。その様子を見ていたシュリは、よくやったという表情を浮かべ、そしてすぐにビオンに続いて、俺たちに向けて平伏した。

「我が国は、ダオラ帝国の侵攻の危機にございます。思うところはおありでございましょうが、アガルタ王様、メインティア王様のお

情けを持ちまして、何卒、我が国に援軍を派遣していただきたく、お願い、申し上げ、奉ります」

シュリは頭を地面にこすりつけている。何とも哀れで心が痛む。

「ダオラのケダカ侵攻はいつだい？　兵の規模は？」

メインティア王が低い声で訊ねる。おお、何とも威厳があるが、その女子座りのせいで、その威厳も半減している。だがビオンはそんな彼に対しても、平伏したまま受け答えをしている。

「我々の見たところ、侵攻はおそらくひと月後、兵の総数は五万と予想している。ダオラは今、国中から兵を集めていると見ている」

「ひと月かぁ。アガルタから援軍を出すとなると、ギリギリだねぇ」

メインティア王は俺に視線を向けるとウインクをした。意地の悪い奴だ。転移結界を使えば、そんなに時間はかからないことを知っているくせに……。

そのメインティア王の言葉を聞いたビオンはガバッと顔を上げると、真っすぐな瞳で俺たちを見据えた。

「先の……。お二方への無礼の段は、臥して、臥してお詫び申し上げる。この程度でお二人の溜飲が下がるとは思えぬが、何卒……。我が国を……我が国の民を、お救い下され」

そう言って彼は頭を下げた。

……なぜか心を打たれてしまった。あの、傲慢不遜だった男が、こ

こまで頭を下げているのだ。本当に反省したのだろうことが、伝わってきた。

ふと、隣のメインティア王に視線を向けると、彼は意地悪そうな笑みを浮かべていた……。

第八百四十五話　余計な誇り

「さあ、どうしようか」

目の前で平伏しているビオンに視線を向けながら、メインティア王が呟く。ビオンの肩が震えている。察するに、彼にとっても屈辱的なことなのだろう。

「わかりました」

思わず俺はそう呟く。その瞬間、ビオンがガバッと顔を上げた。

まあ、甘いのだろう、俺は。散々、傍若無人な振る舞いをしてきた男に、ただ単に頭を下げられたくらいで国を動かして助けようとしているのだ。甘いと批判されても仕方ない行為だ。まあ、それは甘んじて受けることにしよう。

「アガルタ王が動かれるのだ。我がフラディメ王国も、動かねばならないね」

出し抜けにメインティア王が口を開く。腕を組んだまま言うんじゃないよ。

「おお、フラディメ王国も、我が国に……」

シュリが泣きそうな顔をしている。そんな彼に、メインティア王は大きく頷いた。

「と、なれば、サンダンジ王国も黙ってはいないだろうね。きっと、黙っていてもニケ王も援軍を出されるだろう」

「何と……ありがたい」

「よかったね。これで、ケダカ王国は救われた」

……いや、まだ戦いは始まっていないだろう。そんなことは、敵を撃退してから言うものであって、今、言うことではないだろう。

そんな俺の思いを察したのか、メインティア王は笑みを浮かべながら言葉を続ける。

「きっと、我々は何もしなくていいと思うよ。アガルタ軍が参戦していると知ったら、敵は粛々と引き上げるだろう。よほどのバカか戦闘狂でない限り、攻撃を仕掛けて来ることはないだろう」

「いや、でも、敵の大将が戦闘狂である可能性も、ないとは言えないでしょう」

「どうだい？」

メインティア王はそう言ってビオンらに視線を向ける。ビオンは戸惑った様子を見せたが、シュリが目を輝かせながら口を開いた。

「ダオラ帝国皇帝ガノブは、戦好きではありますが、単なる戦好きではございません。私もその昔、この皇帝と刃を交えましたが、状況判断は優れたお方と見ております」

「じゃあ、安心だね。ケダカ軍が三万。我々フラディメ軍が一万、

サンダンジ軍一万、そして……アガルタ軍一万が揃えば、ダオラ軍はすぐに撤退するだろうね」

「……そんなにうまくいきますかね？」

「いくさ。わからないかい？　兵の数はもちろんのこと、敵軍にアガルタ軍がいるのだ。どんな国でも撤退するさ。兵力差が十倍違うのであれば、また状況は変わってくるかもしれなけれど、たとえ、兵力が十倍違っても、アガルタ軍ならば撃退するだろうけれど」

「買い被りすぎですって」

「君は本当に謙虚、というか、己の力を低く見積もりすぎる嫌いがあるねぇ。まあ、それはいいことだけれど、あまりそれが過ぎると、嫌味になるから気を付けた方がいい」

「はあ……」

メインティア王に説教をされてしまった。ただ、この王はたまに本質を突いたことを言う。今回は、心にとどめておくことにしよう。

「では、早速我々は準備に入ろう。ダオラ軍がケダカに殺到するのは、ひと月後だと言ったね？　我々はゆっくり準備することにしよう。あ、サンダンジには私から連絡しておくことにするよ。君のところはあまり時間がないけれど、遅れないようにしてくれたまえ。何せこの戦いは、アガルタが来る、来ないで、大きく変わってしまうからね」

メインティア王はそう言うと、再び視線をビオンらに向けた。

「では、ここで別れよう。本来であれば、夜を徹して馬を駆り続けて来られたあなた方をもてなすのが筋なのだろうけれど、こういう状況だ。一刻も早く戻られて、軍備を整えられた方がよいだろう」

「ハハッ、ご厚情、感謝申し上げます」

シュリがそう言って頭を下げる。彼は、隣に控えているビオンに何かを促している。察するところ、国王であるあなたからも礼を言ってくれと伝えているのだろう。

「か……感謝、する」

ビオンは泣いていた。溢れ出る涙を拭おうともせずに俺たちに礼を言った。その様子を見ながら、メインティア王が誰に言うともなく口を開く。

「誇りを持たないことだね。つまらない誇りを持たないことだ。そうしたつまらない誇りを捨てると、色んなことが上手くいくものだよ」

そう言って彼は俺に視線を向け、ニコリと微笑んだ。

「この戦いが終わったら、ニケ王も呼んで、この四人で祝杯をあげてもいいかもしれないね。ほら、なんて言ったっけ。君が発案して、ニケ王が気に入っているあの料理方法で」

「バーベキューね」

「そうそう。そのバーベキューで」

「……それでは、我らはこれにて、失礼いたします」

シュリはそう言って立ち上がった。彼に続いてビオンも立ち上がった。彼らは俺たちに一礼すると、ひらりと馬に跨り、元来た道を走り出した。

「じゃあ、よろしく頼むよ」

二人の後姿が見えなくなると、メインティア王はそう言って笑みを浮かべた。

◆　◆　◆

アガルタに戻り、ケダカ王国に援軍を差し向ける旨を伝える。唐突の話であったにもかかわらず、マトカルやクノゲンらは一切動揺することなく、唯々諾々として俺の命令に従ってくれた。さぞかし準備や何やらで大変だろうと思い、マトカルを労うと、彼女からは意外な答えが返ってきた。

「いつでも出陣できるように準備しておくのは、軍人として当然のことだ。一万程度の兵を出兵するなど、造作もないことだ。もちろん、軍船もいつでも出港できるように準備している。やれ、と言われれば、明日の朝にでも出発可能だ。いや、先の戦いの後で、兵士たちはどこか弛緩しているような雰囲気を感じていたのだ。往復二月程度の遠征ならば、そうした緩みを引き締めるのにはちょうどいい」

思わずさすが、と心の中で唸った。彼女は根っからの軍人であるらしい。

マトカルらはそれで済んだが、リコたちはさすがに心配した。夜、リコと二人っきりになったときなど、出兵する理由、場所、兵数、兵が進むルート、補給路……などなど、その昔習った５Ｗ１Ｈもかくやと思わせるほど詰められた。お陰でその夜は寝るのが遅くなってしまって、翌日はすこし寝過ごしてしまった程だ。リコとしては、俺のことを散々侮辱した国を支援するにあたって、こちらがさらに誹りを受けないようにしたかったのだろう。

アガルタ軍は着々と準備を整え、すぐにケダカ王国に向けて出発した。総司令官にはマトカル、副官としてホルムが付いていた。

いつもの通り、俺とマトカルは夜になると転移結界で帝都の屋敷に帰ってくるという段取りだ。マトカルはあまりそれをよしとはしていないようで、屋敷に帰ってくるのは三日に一度のペースになっている。

ダオラ帝国軍の状況も、アガルタに戻った直後から把握し続けている。サダキチらフェアリードラゴンらに監視させているが、今のところ主だった動きはない。ただし、続々と兵士は集めていて、シュリが言った通り、ダオラは本気でケダカを併呑するつもりらしい。

アガルタ軍が都を出発して半月が経った頃、俺の許に来客があった。

「何だよ……」

思わずそんな言葉が口をついて出た。現れたのは、ヴィエイユだった。

「ご挨拶ですわね。久しぶりにお目見えできましたのに」

「俺は忙しいんだ。今回は何の用だ」

「ダオラ帝国が、ケダカ王国に侵攻しようとしております。それに対して、アガルタは援軍を送ったと聞いております」

「相変わらず耳が早いな。その通りだが」

「いかがでございましょう。私がこの戦いの仲介をいたしましょうか」

「うん？」

「ダオラ帝国皇帝、ガノブ陛下は敬虔なクリミアーナ教徒でございます」

「なるほど。教皇たるお前が停戦命令を下せば、侵攻は止めにするだろうってか？　で、その代り賠償金を負けてくれということか」

「ご明察のとおりでございます」

「無理だな」

俺の一言に、ヴィエイユはニコリと微笑んだ……。

第八百四十六話　普通の女の子

ダオラ帝国がケダカ王国への侵攻の動きを知ったとき、ヴィエイユは正直、我が耳を疑った。それほど、この動きは予想外のものだった。

だが、彼女は眉一つ動かさずにその報告を聞いていた。従って、側近たちは、教皇が動揺したなどとは微塵も感じなかったであろう。

ダオラ帝国の動向と共に、今回の動きにつながった理由もまた、明らかにされた。それは言うまでもなく、ケダカ王国に付け入るスキができたためだ。そしてそれは、国王ビオンがジンの砦の奪還に失敗したことがきっかけであることが同時に報告された。

ヴィエイユは明晰な頭脳で分析する。答えはすぐに出た。国王ビオンと家来たちの心に乖離が発生したのだと。

「ポーセハイのサザさまを呼んでください」

報告を聞くやヴィエイユは部下にそう命じた。若い枢機卿が怪訝な表情を浮かべる。

「何をなさるおつもりですか」

「この戦いを止めます。そのためには、一刻も早く行かねばなりません」

「どちらに、でございましょうか」

「もちろん、アガルタです」

アガルタ、と聞いて、その若い枢機卿は意外であるという表情を浮かべた。その直後、隣に控えていた年長の枢機卿に彼は睨まれ、ひどく恐縮した様子を見せた。教皇の命令には、一切の疑問を持たずに遂行する――クリミアーナ教国、とりわけ、教都アフロディーテにおいては着任から徹底的に叩き込まれる約束事――この若い枢機卿は、それを怠っていた。

本来からすれば、この若い枢機卿の行為は大きな減点となる。下手をすると、近日中に転属となる可能性すらある出来事だ。少なくとも、次回のジモークでは確実にアフロディーテを追われ、環境の厳しい地域に配属になることは間違いなかった。

だが、ヴィエイユはこの青年の行為に、いささかの不快感を持たなかった。むしろ、その正直な態度はさわやかさを感じる程であり、彼女はこの枢機卿に好感すら抱いていた。

ほんの一瞬だが、彼女はこの若い枢機卿を自分の傍に置いて世話をさせようかと考えた。毎日、この磨き上げた体を見せつける。彼はきっと、目のやり場に困り、当惑し、何もできないだろう。そして、自分の体を見たならば、当然欲情することだろう。だが、教皇と枢機卿という眼に見えぬカベのために、彼はこの体に指一本触れることができない。その苦悩する様を間近で見られるのだ。ヴィエイユの心は昂った。

しかし彼女は、そうした邪な感情を一瞬で心の中に閉じ込めた。周囲にいた枢機卿全員に視線を向けながら、ゆっくりと立ち上がり、落ち着いた声で命令を下した。

「すぐにサザさまをここに呼んでください。この戦いを止めるために、アガルタに参ります。おそらく、それには四～五日の時がかかるかもしれませんが、必ず停戦させてみせます」

その言葉に、若い枢機卿がピョコンと一礼し、脱兎のごとく駆けだした。

◆　◆　◆

不気味だ。ヴィエイユの笑みが実に不気味だ。一体何を考えているのか……。

だが、ここで動揺を悟られるわけにはいかない。そうなれば、ヤツはそこを突いて来ることだろう。そうはさせてはならない。

「と、言うことで話は終わりだ」

「恐れ入りますが、今回のこの戦い……。アガルタ王様はどうお収めになるおつもりですか？」

「どう……とは？」

「この戦い、私がガノブ様に撤退命令を出せばすぐに収まる話でございます。最も効率的な方法であろうかと存じますが……」

「俺たちも戦うつもりはない」

「まあ……」

「アガルタと同時に、フラディメ、サンダンジからも派兵する予定だ。それらの軍勢が集結するのを見たら、さすがのダオラ帝国軍も戦端を開こうとはしないだろう」

「なるほど。アガルタ軍を見れば、ガノブ様も兵を退くだろう、そうお考えなのですね」

「まあ、そうあってくれれば御の字だな」

「承知しました」

ヴィエイユはさも、わかったと言わんばかりの表情を浮かべる。彼女は口を真一文字に結びながらコクコクと頷いている。

「賠償金を減額していただける好機と思ったのですが……。そういうことであれば、今回は私の出る幕ではございませんね」

「……ヴィエイユ。お前、一体何しに来た？」

「無論それは、この戦いを収めるためでございますわ」

「そんな殊勝なことをするヴィエイユか？　いつものお前なら、互いに争わせて弱ったところを掠めとる、そういう作戦を取るだろうに」

「何とヒドイ言われ様ですこと！」

ヴィエイユはさも驚いたと言わんばかりに、目を丸くして驚いた。そして、右手を左右の眼に当てて、泣いている様子を見せる。

「私はただ……。クリミアーナ教を信仰する国々の和平のために、民のために申し上げているだけですのに……」

「ウソ泣きはいい。話は終わりだな」

「お待ちくださいませ。一つ、お願いの儀がございます」

「そぅら来た。何だ、一体」

「まるで私に腹案があったかのような言い様でございますね。おやめくださいませ。今、思いついたのでございます」

「はぁ？」

「何もアガルタ王様に迷惑をかけるつもりは毛頭ございません。二～三日の間、私をこのアガルタの都に逗留させてくださいませ」

「……何て？　もう一回」

「しばらくの間、アガルタに逗留させていただきたいのです。最近、色々と立て込みまして、正直、少し疲れているのです。ここアガルタでゆっくりと時間を過ごしたいのですわ」

「それならいいところを紹介しよう。フラディメという国にアリスン城というアトラクションがある。そこはきっと面白いと思うぞ」

「いいえ。面白さを求めているわけではございません。癒しを求めているのでございます。正直なことを申しますと、普通の、同世代の女性と同じようなことをしてみたいのです」

「普通の女の子に戻りたいってか。そんなセリフが昔あったような……」

「聞けば、私と同じ世代の女性……。多くは結婚し、子供を産み、育てている方もおいでしょうが、まだ一人身のお方は、街で買い物をし、美味しいものを食べ、自由に人生を謳歌していると聞きます。私も一度くらいはそうした自由を味わいたいのでございます。幸い、このアガルタの都は、私にとりましては馴染みのある場所でございます。また、治安も世界一よいと思っておりますので、私の身が危険に晒されるようなこともないかと存じます。誠に恐れ入りますが、私のワガママ、聞いてはいただけませんでしょうか」

「えええ……。ちょっと待て、考えさせてくれ。まずは……館長のミンシに部屋に案内させるから、そこでお茶でも飲んで待っていてくれ」

俺の言葉に、ヴィエイユは笑顔で頷いた。

◆◆◆

……まさか、そう来るとは思わなかった。動揺してしまった。それを、ヴィエイユに完全に悟られてしまった。

正直、ヴィエイユの狙いがわからない。アガルタの都で自由を味わう？　そんなことは望めばいくらもできることじゃないのか。一応は、アイツはクリミアーナ教というカルト宗教の親玉なんだ。ちょっとゆっくりしたいと言えば、いつでもできるんじゃないのか。

そんなことを考えながら俺は帝都の屋敷に転移した。

「……気持ちはわかりますわ」

リコに相談すると、意外な答えが返ってきた。そんな小娘、追い返しなさい、っていう答えを期待していたんだが……。

「教皇ともなれば、常日頃から人の眼に晒されますわ。たまには、自分のことを知らない場所に行って、好きなだけ自分を開放してみたいと考えるのは、無理からぬことですわ」

「そ……そういうものかな。何か策略があるんじゃないかと思ったんだが……」

「その可能性は低いと思いますわ。数日間であれば、迎賓館においでいただいてよろしいのではなくて？　心配なら、マトに頼んで人を付ければよろしいかと思いますわ」

リコの言葉に、俺は無言で頷いた……。

第八百四十七話　不思議そうな表情

リノスからアガルタへの逗留が認められたヴィエイユは、極端なほどに喜びをあらわにし、リノスに丁寧に礼を言った。その様子を彼は、胡散臭そうな表情で眺めていた。

彼女はその日から迎賓館を出て、アガルタの町を散策し始めた。当然彼女には、クリミアーナ教国の教皇であるという立場から、警備の者が密かにつけられていた。だが、ヴィエイユはそんなことは全く意に介さず、己が望むままに行動し続けた。

ブラブラと町を歩きながら店を物色し、気に入ったものがあると気軽に店の者と会話し、交流した。

アガルタに逗留するにあたってヴィエイユは、リノスに一つのお願い事をしていた。それは、普通の女性がする格好をしたい、というものだった。

確かに、彼女が身に付けている、いわゆる教皇服と呼ばれる純白の衣装はとても目立つもので、なおかつ、その胸元には大きなクリミアーナ教国の紋章が刻まれていた。ただでさえ、ヴィエイユの華やかな顔立ちで目立つところを、その衣装をまとって外に出てしまえば、たちまち彼女の身分がバレてしまう。そうしたこともあってリノスは、渋々ながらその申し出を許可した。

彼は迎賓館の館長であるミンシに命じて、そこに勤める女性スタッフに、ヴィエイユの服を用意させた。その意を受けて、迎賓館のサイリューたちが街に出て、ものの小一時間でヴィエイユの衣装を

整えた。ヴィエイユは大喜びで衣装を選んだ。

正直、ヴィエイユは驚いていた。特に採寸されたわけでもないのに、サイリュースの女性たちは、ピタリと合う服を用意してきた。しかも、そのデザインや色も、好みに合うものだった。一方で、いくつかの服は、彼女の趣味に合わないものもあった。だが、サイリュースたちは是非一度身に付けてみろという。その言葉に従ってみると、意外に自分に合うことがわかり、彼女は新たな自分を発見することができた。

そうしてたちまち、上品な娘ができあがった。一見すると、軍や政府の高官の娘のようで、どうみても、世界を牛耳る大国の一つを率いる女王には見えなかった。

「これは何ですか？」

「お好み焼きだよ」

「お好み焼き？」

「そうだよ。アガルタの名物さ」

美味しそうな匂いに誘われて、ヴィエイユは思わず店先で店主に声をかけた。店主の男はリノスの意を受けてお好み焼きを開発し、店を開いていた。そして折に触れてリノスから注文を受けて昼食のためのお好み焼きを作っていたのだった。

「この生地の上に色んなものを乗せて焼くのさ。野菜、海産物、肉……。好きなものを選ぶといいよ」

ヴィエイユは店主と巧みに会話して、リノスがいつも頼むメニューをオーダーした。そして、出来上がったものは、彼女の予想を超えたもので、その人生の中でも初めて見る代物であった。

「あいよ。お待ちィ」

真っ茶色の丸い物体の上に、真っ黒いソースがかかっていて、グロテスクそのものの風貌だ。本当にこのようなものをアガルタ王は食べているのだろうかと思ったが、そんな様子はおくびにも出さずに、ヴィエイユは笑顔で受け取った。そして、同時に渡された木で作られたフォークを使って、それを口の中に運んだ。

「ん、美味しい！」

その言葉には嘘偽りはなかった。小麦粉が焦げる香りが口の中いっぱいに広がり、その直後に野菜と海産物の旨味が舌の上に拡がる。さらに、焼かれたパスタが、何とも言えぬよいアクセントになっている。ヴィエイユは大満足で、その料理を味わった。

雑然とした店の中、店主とそのおかみさんの威勢のいい声が響き渡る中で、ヴィエイユは嬉々としながら食事を楽しむ。アフロディーテの教皇神殿では絶対にありえない状況だった。むろん、彼女自身もこうした環境の中での食事の経験がないわけではなかったが、それは、記憶を辿らねばすぐには思い出せないほど過去の出来事になっていた。

店に訪れている客たちも、ヴィエイユにあまり関心を向けて来ない。これも彼女にとっては予想外の出来事だった。生まれ持った美貌に加えて、毎日節制と磨きをかけた肌のお陰で、彼女の容姿はたとえ、ごく一般的な、ありふれた格好をしていたとしても、その体からは

隠しても隠しきれぬ色気が立ち昇るのだった。しかし、ここアガルタでは、そんなヴィエイユであっても、あまり人目を引くことはなかった。それは、迎賓館のサイリュースたちが折に触れて町に出ているのがその原因だった。サイリュースの里の中でも選りすぐりの美女たちが迎賓館には送られてきており、そういう極めて容姿端麗な女性を見慣れたアガルタの町の人たちにとっては、ヴィエイユは特に強い興味を引く存在ではなかったのだった。

彼女は懐からお金を出して、きちんと支払いを済ませた。その後も、色々な店に顔を出しては、気に入ったものを次から次へと購入していった。彼女を監視する役目を負った者たちは、一体どこにそんな金を仕舞っているのか、買い求めた品物はどうやって保管しているのか疑問に思ったが、それは、無限収納のようなものを持っているのだというリノスの説明に納得するのだった。

当初警戒されたヴィエイユの動きには、怪しい部分は微塵も見られなかった。その様子を聞いたリノスは不思議そうな表情を浮かべたが、相手が相手であるだけに、油断は禁物であり、どんな些細な動きも見逃さないようにと命令を下した。

◆　◆　◆

ダオラ帝国皇帝ガノブは、ケダカ王国に向かう船中で常に上機嫌の様子を見せていた。色々と行動の制限を受けざるを得ない船中であるにもかかわらず、彼は不満を一切言わなかった。彼らに取っての宿願である失地回復と、ケダカ王国の併呑が現実のものとなりつつあるその状況が、彼とその家来たちを高揚させていたのだった。

「言うべきことは何もない。風のごとき速さで上陸せよ。目の前にはケダカの軍勢が控えておろうが、たとえどのような攻撃を受けよ

うと、決して退いてはならぬ。上陸を完了次第、目の前のケダカ軍に攻撃を加えよ。敵が退却すれば、そこに向けて全兵力をもって総攻撃を加えるのだ」

間もなくケダカ領が視認できる距離までやって来ると、ガノブは家来たちを集めて軍議を開いた。軍議、と言っても、議論を交わす場ではなく、皇帝ガノブが一方的に命令を下す場であった。だが、家来たちはその命令に一言の口も挟まなかった。それだけ、主従の意思統一が見事になされていたのだ。

ダオラ軍の者たちは、勝利を信じて微塵も疑わなかった。それだけ入念な準備を行い、それらがすべて完了していたのだ。負ける要素は一つもない。あとは、どのようにして歴史に残る大勝利を演出するか、という点だけだった。それを描きだすのは家来たるものの仕事ではない。それは、我らが皇帝陛下の手によって描かれるべきものであると、ガノブの前に控える者たち全員の一致した意見だった。

「……以上である。全員、奮励努力せよ」

皇帝ガノブはいつもと同じように、自身の命令を締めくくった。そのとき、一人の幕僚が一礼して口を開いた。

「陛下、質問がございます」

「何だ」

「もし、第一陣の攻撃でケダカ軍が総崩れとなった場合、第二隊を率いる我らは、どこを攻撃すればよろしいでしょうか」

ガノブはその質問が意外であるという表情を浮かべたが、やがてフ

ッと吹き出すと、呵々大笑した。

「ハッハッハ！　それは余も考えておらなんだ。左様であるな。攻撃目標がなくなってしまえば、そなたたちは攻撃を行うことができぬ。その可能性は多分にある。いや、これは余の落ち度じゃ、許せ許せ」

そう言ってガノブは再び呵々大笑した。それに釣られて家来たちも声を上げて笑う。

「ハッ、申し上げます」

そのとき、伝令兵が足早に現われ、ガノブらの前で片膝をついた。

「どうした」

「敵影が見えました。海に……軍勢が展開しております」

「海ィ？」

皇帝ガノブは再び、不思議そうな表情を浮かべた。

第八百四十八話　出現

伝令からの報告を聞いたガノブは一瞬、自国の勝利を確信した。だが、すぐにその考えを否定した。海上に陣を張るという行為は明らかに悪手であり、国家存亡をかけての戦いを行う上で、絶対に選択しない、いや、してはならない陣形だった。

ガノブはケダカへの侵攻を悲願としてきたその一方で、その王であるビオンの能力は認めていた。それは、ビオンが、前王が亡くなって以降、失地回復を試みたガノブの侵攻をすべて退けてきたことによるものだった。

勇敢さと狡猾さを併せ持つ男……それがガノブのビオンへの評価だった。その一端は、彼に仕える老臣たちの支えもあっただろうが、それでも、僅かの兵を引き連れて、まるで決死隊のごとく突撃してくる様に、彼は好感を持っていた。

そのビオンの軍勢が海上に展開しているのは解せなかった。兵力はダオラ軍が圧倒している。そんな軍勢を海で出迎えるとすれば、ダオラを上回る火器を備えている可能性があった。だが、周辺のフラディメ、サンダンジからは距離を置かれ、頼みとする老臣たちの心も離れてしまっている今、ビオン一人でそのようなものを備えられるとは、到底考えられないことであった。

「海に展開している軍勢は、確かにケダカ軍か」

ガノブは伝令に尋ねた。だが、兵士は困惑した表情を浮かべながら口を開く。

「それは……わかりません。ただ、沖合に軍勢が展開しているのを視認したのみでございます」

「引き続き見張りを怠るな」

ガノブはそう言って伝令を下がらせた。

実際、ダオラ帝国の見張り兵が視認した軍勢は、マトカル率いるアガルタの軍船だった。彼女は驚異的な速さでケダカ王国に到着していた。

リノスは軍船に戻ってくるたびに、予想を超えた速さで進む船の動きに満足していた。マトカルを褒めると彼女は無表情のまま、いい風が吹いているからだと言うのみだった。実際、この時期は強い北風が南に向かって吹くことが多く、マトカルはその風を巧みに利用して軍船を驚異的な速さで進ませたのだった。

むろんこれは、普段から行われている訓練の賜物でもあった。アガルタ軍はガルビーの荒れた海で常に訓練を行っているために、その操舵術は世界屈指のレベルに達していた。そうした、自然の力と技術力をアガルタ軍は上手に取り入れていたのだった。

アガルタ軍が予想以上の速さで到着したと聞いたビオンは、腰を抜かすほどに仰天した。彼は当初、その報告を信じなかった。そして、自ら愛馬レンシルを駆ってダオラ軍を迎え撃つ海岸線までやって来て、自らの目でその姿を確認したのだった。

ケダカ軍の士気は俄然上がった。総司令官シュリは軍勢を率いて海岸線に赴き、そこで野戦築城とも言うべき土木工事を敢行した。む

ろん、そのような付焼刃的なもので殺到するダオラ軍を食い止められるはずもなかったが、こうしたシュリの何としても国を守るのだという姿勢は、ケダカ軍の士気をさらに高める効果を発揮していた。

彼らは折に触れて、これからやって来るであろうダオラ軍に対して、徹底的に抗戦するのだという姿勢を示すために、水平線に向かって勝鬨を上げ続けた。

ダオラ軍は徐々に明らかになってきた敵の陣容を見て驚愕した。彼らは沖に控えているのがアガルタの軍船であることがどうしても信じられず、危険を承知で小舟をだして、アガルタ軍の存在を確認したほどだった。

「アガルタ軍が参戦しているとは、誠か！」

皇帝ガノブは激高していた。可能性のまるでないことが起こっていた。ケダカ王国国王ビオンに散々無礼な振る舞いを受けていたアガルタが参戦する理由が見当たらなかった。むろん、ケダカがアガルタを動かす力など、あろうはずはなかった。

ガノブは伝令にもう一度よく確認しろと命じた。そのとき、一人の幕僚が口を開いた。

「畏れながら陛下、もし、沖の軍船がアガルタであったとしましたら、どうなさるおつもりでございましょうか」

「どういう意味だ」

「我が軍は、アガルタに攻撃を仕掛けますか」

「何を言っているのだ、アルド。我らはむろん、戦うに決まっておろう。アガルタ軍に我が軍の手並みを見せてやる良い機会ではないか。もし、我らがアガルタ軍に痛打を与えることができれば、我が国の国威向上にもつながり、ひいては、ヴィエイユ教皇聖下の信頼を得ることにもつながる……」

「うるさい」

アルドを嗜めていた師団長の言葉を、皇帝ガノブが遮った。彼は苛立ちを隠そうともせず、足を小刻みに動かしながら、小さな声で呟く。

「少し、黙れ」

その声に、幕僚たちは静まり返った。

しばらくすると物見が戻ってきた。幕僚の一人が直にその任についていた。

「陛下、ただ今戻りました。沖に停泊している軍船は、アガルタ軍に間違いございません。帆に国の紋章がなく確認するのに時間を要しましたが、乗船していた兵士たちは全員黒い鎧を装備しておりました。加えて、海上であるにもかかわらず、軍船はまるで図ったように等間隔に並んでおりました。これだけの練度の高い軍勢を擁するのは、アガルタ以外に考えられません」

皇帝ガノブはチラリと幕僚に視線を向けた。それは皮肉か、という言葉を飲み込んでいた。彼は遠くに視線を泳がせて、心を落ち着けようと試みた。だが、そのとき幕僚の一人が口を開く。

「陛下、目の前のケダカ軍に攻撃を仕掛けましょう。ケダカの者どもを斬って斬って斬りまくり、しかる後、一気に退くのです」

「カルキ殿、気持ちはわからなくはない。ここまで来てから手ぶらで帰ることはできぬという思いはわかる。だが、我らが攻撃を加えているその間に、アガルタが動けば我らは袋のネズミとなる。このまま撤退するのが一番の得策だ」

口を開いている幕僚に向かって、アルドが再び口を開く。

「いや、カルキ殿の作戦にも一理あるやもしれません」

「アルド！」

「アガルタには果たして、我々と戦う意思はあるのでしょうか。ケダカに、また、その周辺国に、ひょっとしたら、ヒーデータに頼まれてイヤイヤのなれ合い出陣かもしれません。そうであればアガルタが動く可能性は低い。さすがに我らがケダカの奥深くまで攻め込めば、アガルタも動く可能性はあるでしょうが、我らがケダカに一撃を加えて撤退する程度であれば、アガルタは動かぬと存じます」

「あーっ！　あれをご覧ください！」

兵士の一人が頓狂な声を上げる。通常であれば皇帝の耳を汚したとして、不敬罪の対象となる行為だが、兵士の顔色を見て、幕僚たちは思わず立ち上がった。

そこには、南の方向から夥しい軍船が近づいてきているのが見えた。マストの上で望遠鏡を覗いている兵士が大声で叫んだ。

「西の方向に軍船―！　サンダンジ……サンダンジ王国軍ー！　西の軍船は、サンダンジ王国軍―！」

「サ……サンダンジ王国軍！？　何故だ！　ケダカとサンダンジは国交を断絶したのではなかったのか！」

「さらにー！　さらにー！　西側に軍船ー！　西側に軍船ー！　軍船は……フラディメ王国―！　西にフラディメ王国の軍船―！」

兵士の大声が響き渡る。幕僚たちの顔が青ざめていく。その様子を冷静に観察していた乞うてガノブはゆっくりと立ち上がり、水平線の彼方に視線を泳がせる。

完全に視認することはできないが、確かに南と北西に船が蠢いているのが見えた。

「……こうなってはもはや衆寡敵せず。戦にならぬわ。一気に退く。すぐに撤退の準備をせよ！」

ガノブはそう言ってぶ然とした表情を浮かべながら席を立った。

「無念……ケダカを目の前にして撤退とは……」

幕僚の一人がまるで、吐き捨てるようにつぶやく。その彼の背中を、同僚の幕僚がポンと叩いた。それが合図であったかのように、幕僚たちは大急ぎで撤退の準備に入った。

同様に、皇帝ガノブの後姿には悔しさと寂しさが滲み出ていた。その様子を見ていたアルドは、自らの感情に流されずに冷静な判断を下した主君に、改めて尊敬の念を抱いた……。

第八百四十九話　終わり？　終わってない？

「敵が……退いていきますね」

俺の傍に控えている兵士の一人が、そう呟く。彼はアガルタ軍の中でも最も目のよい男だ。俺は全く視認できないが、彼には見えるらしい。

この彼には悪いが、俺は早速マップを展開させて、今の状況を把握する。確かに、海上に展開していた夥しい軍勢が踵を返して西の方角に向かっている。

「察するところ、ダオラ軍は、我がアガルタ軍を迂回して本国に戻るつもりなのだろう」

マトカルが無表情のまま口を開く。それは、もし攻撃するならば、ダオラ軍が船首を北に向けたそのときに襲えば、敵の脇腹を突く形となり、殲滅することも可能であるという意味も含んでいる。だが俺は大きく首を左右に振る。

「いや、ダオラ軍を攻撃する意志はない。撤退したいヤツはそのまま退かせてやればいい」

俺の言葉を受けたマトカルは、側に控えていた兵士に視線を向けると、無言のまま頷いた。すべてを察した兵士は一礼して立ち上がり、船内に消えていった。

「それにしてもマト、俺たちも危なかったな。あまり船の速度が速

すぎるというのも問題だな」

俺は意地悪そうな笑みを浮かべながらマトカルに問いかける。彼女は相変わらず無表情なままだ。

実際、アガルタ軍はダオラ帝国軍と鉢合わせする可能性があった。ダオラ軍は真っすぐ南に向かってケダカ王国に侵攻したが、俺たちアガルタ軍も南進していたが、ケダカに向かうには、ある地点で東進しなければならない。当初の予定では、ダオラ軍が着陣しているその横をすり抜ける計画だったのだが、アガルタの船があまりにも早すぎたために、ダオラ軍が侵攻する速度とかち合ってしまった。幸いにもそれを事前に察知して慌てて船を止めてダオラ軍の進軍を見送ったからよかったものの、もしも海上で鉢合わせでもして戦闘になったら、それこそ余計な面倒ごとをしょい込むことになりかねなかった。

マトカルは相変わらず無表情なままだ。別段、特に反省しているような雰囲気はない。本当に反省していれば、詫び言の一つも言う女性だ。それがなく済ましているということは、何事もなかったので問題ないと思っているか、それだけ船を操る練度が上がっていることに満足しているかのどちらかだろう。

そんなことを考えていると、ダオラ軍の船影は水平線の彼方に消えていった。てっきり俺たちが視認できる距離を取りながら撤退していくと思ったのだが。一応、己の武威を見せつけて、なめんじゃねぇぞと威勢を張りつつ撤退した方が得策だと考える王や司令官が多いと思っていたのだが、どうやら敵の大将はそうしたことよりも、自軍を敵の目から隠すという選択を取ったようだ。

「ダオラ帝国の皇帝もなかなかやるようだ。あれではダオラ軍の様

子はわからない。我々の姿を見てすぐに撤退した決断力と言い、自軍をできるだけ敵の目の晒さないという抜け目のなさは今後、注意が必要だろう」

マトカルが誰に言うともなく呟く。その様子をホルムが苦笑いを浮かべながら眺めている。

「まあ、刃を交えることがなければいいな」

俺は思わずそう呟いた。

その後、サンダンジのニケ王がわざわざ俺たちの船にやって来て、戦勝の祝いを述べた。別に俺たちが戦ったわけでもないのに祝いを言われる筋合いはなかったが、ニケが驚くほどに上機嫌だったために、その言葉を飲み込んだ。

ニケはアガルタがこの戦いに参戦することには半信半疑だったらしい。ただ、フラディメのメインティア王直筆の書簡が届いたこと、そこには、フラディメ軍も出陣すると書いてあったことから、渋々ながら出陣を承諾したのだという。

「実はここだけの話、我が軍はあまり軍装が整っておらなんだ。もし海戦にでもなっていたら、我らの船はなすすべもなく海の藻屑と消えていたであろう」

そう言って彼は笑ったが、後で聞いてみるとそれは単なる彼の謙遜で、実際はいつでも戦えるように準備万端整っていたらしい。さすが自他共に認める戦闘好きだ。そうした準備に全く抜かりはなかった。

俺とニケがそんな話をしている最中に、フラディメ軍はさっさと撤退してしまった。彼らに取っては本当に行ってこいの行程になっていた。さぞかし兵士たちは疲れたことだろう。

しばらくすると、ケダカ側から軍使が派遣されてきた。しかもそれは、総司令官たるシュリが直々にやって来た。彼は俺とニケの顔を見ると、まるで神を崇めるかのように平伏した。

「この度は、我が国の危機をお救い下さりまして、感謝の言葉もございません。また、ニケ王様にあらせられましてはこのシュリ、久しく御意を得ませなんだ。ご無礼の段、平に平にお許しくださりませ」

「相変わらず息災そうだな、シュリ殿」

「ははっ、丈夫だけが取り柄でございます」

シュリはそう言って顔を上げると、ニケと二人笑みを交わし合った。

後で聞いてみると、シュリは若い頃、サンダンジ王国に留学していたのだそうだ。そして、そこで当時王太子であったニケと知己を得ていたのだそうだ。

当時のニケは手の付けられない程の暴れん坊で、若かりし頃のシュリは正直、かなりビビっていたらしい。だが彼は王の御前試合で対戦したニケを完膚なきまでに叩きのめしたらしい。それ以後二人は言葉を交わし合うようになり、友人のような関係を結んでいたらしい。

ちなみに、シュリの奥さんはサンダンジの女性なのだそうで、王宮

に仕えていた見目麗しき美女なのだそうだ。ニケ曰く、泣きながら奥さんを口説き落としたのだそうで、一見すると無骨一点張りに見えるこの老司令官にも、かわいいところがあるのだなと妙に感心してしまった。

とはいえ、ニケとシュリがそこまで仲良しだったのであれば、最初にニケのところに援軍を要請すればよかったじゃないかと思ったが、それはそれでまた、違う話になるのだそうだ。俺の話を聞いたときのニケの話が振るっている。曰く、ケダカにはシュリ殿がいるのだ。我が援軍を出さなんでも、シュリ殿一人がおればダオラ軍の一つや二つ、簡単に撃退できただろうとのことだった。

「まずは、両王様、そして兵士の皆様には、このまま南に下っていただき、サトと申す港町に入っていただきたくお願いを申し上げます。そこで、我が王がお待ちでございます。サトには国王の別荘地がございます。そこに皆様をお招きして、我が王自ら御礼を言上するとの口上でございます」

俺は正直気乗りがしなかったが、ニケは大きく頷いているために断りにくい雰囲気だった。結局、俺たちは勧められるままに、サトの港に入った。到着するや否や、ビオンは早速船に乗り込んできて、援軍出兵の礼を丁寧に述べた。あのプライドの高い男はどこへやら、ちゃんと片膝をついて、俺とニケに挨拶をしていた。その様子からは本当に心から感謝しているのがよく伝わってきた。

彼はすぐにでも俺たちを離宮に迎えたいと言っていたが、すでに夕刻も近づいていることから、一旦兵士を休ませて、明日世話になりたいと提案すると、彼は頷き、明日の昼前に迎えに来ると言って帰っていった。

ニケが下船した後、俺は兵士たちにゆっくり休むように命令を下し、マトカルと共にアガルタの都に一旦帰った。

迎賓館の俺の部屋にメイとシディーを呼び寄せて鎧を脱がせてもらう。マトカルは帝都の屋敷で鎧を脱ぐと言って、俺が脱がされる光景をじっと眺めていた。そんなとき、館長のミンシがノックと共に入室してきた。

「畏れながら、ヴィエイユ様がお目通りを願っております。リノス様が帰還されたら、すぐに会いたいと言っておいででした。何でもダオラ帝国についてお話があるそうです」

「ええ～」

「……一応話を聞いた方がいいと思います」

シディーがすかさずそう言う。それを聞いてマトカルが、戦いのことについてならば、私も話を聞くと言い出した。

結局、あまり気乗りはしなかったのだが、マトカルと二人でヴィエイユと会うことになった。あまりの面倒臭さに俺は、思わず大きなため息を漏らした……。

第八百五十話　招待する？

ヴィエイユの部屋に向かうと、彼女は大仰に驚いてみせた。

「まあ、アガルタ王様とマトカル王妃が直々に……何と畏れ多いことでしょう」

何を白々しいことを、と腹の中で呟く。彼女は迎賓館の中でも最も良い部屋を与えられているため、そこには応接間が設えられてあった。

いわゆるホテルで言うスィートルームだ。迎賓館の最上階に位置して、部屋が四つもある。専用の出入り口もある。これまででここに泊った人と言えば、ヒーデータの陛下くらいのものだ。確かそのときは、ベッドが柔らかすぎて眠りにくかった、などと贅沢なことを言っていたことを思い出す。

彼女は俺たちが椅子に座るのを待ってから、自身もそこに座った。

「で、何だ」

「ダオラ軍は引き上げましたでしょうか」

思わずマトカルと顔を見合わせる。予想していた質問ではあったが、このタイミングで放り込まれるとは予想していなかった。

「どうして今、それを？」

「ウフフ。さすがはアガルタ王様。ダオラ軍は撤退したのですね。ちゃんとお顔に書いてございますわ」

「ああ。ダオラは撤退した。それがどうした」

「実は、差し出がましいこととは存じましたが、私からダオラ皇帝に撤退命令を出しました」

「……そうか」

「アガルタをはじめ、他の国々の皆様とは戦闘になりませんでしたか？」

「一切なっていない」

「それはよろしゅうございましたわ」

「おいヴィエイユ」

「はい？」

「何が目的だ？」

「目的……。この戦いを早く終わらせたかったのですわ」

「だったらどうして初めからそうしない」

「それは……」

「もしかして今回の戦い、初めからお前が仕組んだんじゃないのか

？」

「そんなバカな。いかに私とはいえ、そのような回りくどいことをする者ではございません」

「回りくどいことをしているじゃないか」

「この戦いはダオラ皇帝ガノブ様が起こしたものに相違ございません。正直申しますと、私はちょっと、ガノブ様に意地悪をしたかったのでございます」

「意地悪ぅ？」

「この度の戦い、私はアガルタ王様がケダカ王国に援軍に立たれた瞬間に、ダオラの勝利はないと確信しておりました。それはそうでございましょう。今のアガルタ軍に正面を切って戦いを仕掛ける国がありましょうか。アガルタ軍が参戦していることを知ったダオラ軍はすぐに撤退するに違いございません。そこで私は、アガルタ軍とダオラ軍が相見えるそのときに、ダオラに撤退せよと命令書を届けたのです」

「……ダオラにとっちゃ、泣きっ面に蜂、と言いたいところだが、そのダオラの皇帝からすれば、お前の命令書を見たところで、何のこっちゃの話になるだけだと思うぞ」

「いいえ、きっとガノブ様には私の思いが伝わります。あのお方、ずっと私に求婚なさっておいでなのですが、きっと私の命令書を見て、それを諦めることかと存じます」

「はあ？　何じゃそら」

「何としても私を手に入れたかったそうでございますわ。強いお方が好きなのですとお伝えしますと、ご自身の逸物の大きさを自慢なさり、挙句の果てには毎日五～六回の性交が可能であるとまで言って参りました。正直、とても迷惑で、気味が悪かったのです」

「そりゃ、お前が思わせぶりな態度をとるからだろうが。……でも、いいんじゃないか、それでも。それだけ愛されているってことだ。な、マト」

隣のマトカルに視線を向けるが、彼女は相変わらず無表情のままだ。

「まあ、こういうお話しは聞くだけならば面白いかとは存じますが、その当事者となりますと、そこから受ける心理的な不快感は大変なものになります。ご想像くださいませ」

「まあ、気持ちはわからんではないが、俺からすれば、どっちもどっちだな。強い男が好きときいて、己が逸物の大きさを自慢するかね。そこじゃないだろう。まあ、俺は一切興味がないが、ちなみに聞いておく、そのガノブの大きさって言うのはどのくらいだ？」

「ご想像にお任せします」

ヴィエイユはそう言って自分の両手で自分の肩を抱いた。その姿を見ながら俺は、意外にウブなところがあるんだなと思いつつ、これも芝居なのかと、警戒感を強めた。

「ま、お前さんのスケベな問題も解決したようだし、ケダカも救われた。まあ、めでたしめでたしってことで、俺たちはそろそろ戻らせてもらう。お前も好きなタイミングでアフロディーテに帰るとい

い」

「そのことにつきまして一つ、お願いがございます」

「何？　まだ何かあるのか？」

「ええ。せっかくアガルタに来たからには、是非、アガルタ王様の手作りのからあげを食べたく存じますわ」

「あーめんどくせぇな。考えておく」

そう言って俺たちはヴィエイユの部屋から退出した。

マトカルは相変わらず無言のままだ。二人、黙ったまま帝都の屋敷に通じる転移結界のある部屋に向かう。

そのとき不意に、マトカルのお腹がグルグル鳴った。彼女は驚いたように体を震わせると、思わず両手で腹を押さえた。

「す……すまん……」

「何だマト、お腹がすいていたのか」

「う……。リノス様が作るからあげのことを思い出していたら、急にお腹がすいてきてしまった……」

「そう言えば最近、揚げ物パーティをしていなかったかな」

「そうだな……。きっと子供たちは喜ぶだろうし、なにより、ペーリス殿のいい休憩になる」

「確かに、な。じゃあ、明日……はダメだから、明後日にでも揚げ物パーティをしようか。リコにも聞いてみよう」

俺の言葉に、マトカルはフッと微笑んだ。

早速屋敷に帰って提案してみたところ、予想以上に皆が喜んでくれた。妻たちの中には太るからイヤだとか、胸焼けしちゃうのでちょっと……とは言う者もいるんじゃないかと思ったが、そうした声は一切聞かれず寧ろ、大きな戦いにならずに済んでよかったことへのお祝いの意味も込めて揚げ物パーティをやろうということになった。何だかよくわからん理屈だが。

ペーリスが大喜びで明日、肉を仕入れに行くと言って張り切っている。そんな中、ヴィエイユのことがふと頭をかすめた。俺はリコにそのことを相談してみた。

「お呼びになっても大丈夫ですわ」

これまた意外な言葉が返ってきた。てっきり、あまりものを持っていっておあげなさいなと言うと思っていたのだが、リコは帝都の屋敷に呼べと言う。そんなことをしたら、子供たちの誰かが彼女に洗脳されてしまいやしないかと思ったが、リコは自信をもって、そんな子供はこの屋敷にはいませんわときっぱりと言い切った。メイや他の妻たちにも聞いてみたが、皆、一様に賛成するばかりで、不快感を表す者は一人もいなかった。

……もしかして、俺以外全員がヴィエイユに洗脳されているんじゃないか。そんな下らないことを考えてしまった。彼女がウチに入った瞬間、家族全員が教皇聖下バンザーイなどといわないだろうか。

もし、それが本当に起きたとしたら、それはまさにコントの世界だ。

そんなことを考えながら、子供たちと一緒に風呂に入り、パジャマに着替えて寝る準備を整える。その日はマトカルの日だったが、何故か部屋にはシディーがやって来た。

「あれ？　どうしたんだ？　今夜はシディーか？」

「マトが明日早いので替わってほしいと……。イヤなら他の方を……」

「イヤなわけはないだろう。全然」

シディーは無表情のまま俺のベッドにやってきた。

「なあ、シディー。ヴィエイユのヤツ、ウチに入れて本当に大丈夫だろうか」

「大丈夫なんじゃないですか？」

俺の心配をよそに、彼女は事も無げにそう言い切った。

「むしろ、呼んだ方がいいと思います。何となく、ですが、あの女性、何か悩みを抱えている気がするのですよね……」

「ええ～？」

何だかまた、面倒ごとに巻き込まれそうな気がしてきた……。

第八百五十一話　自分を出す

サトにあるケダカ王国の離宮での戦勝パーティーは、割とあっさり終わった。相変わらずニケはバーベキューの焼き方に徹していたし、俺は食べる専門といったところだった。それに、あろうことか、フラディメのメインティア王はその場を欠席し、代わりにその近習を勤めるパターソンがやって来ていた。

このパターソン、ついこの間まで大上王とメインティア王の間に挟まれて精神をすり減らしていたが、今ではこの二人からの信頼厚く、副宰相まで上り詰めていた。だが、腰の低さは相変わらずで、彼は会う人会う人にペコペコと頭を下げ続けていた。後で聞いみたが、やはり腰痛持ちだそうで、彼には内緒でコッソリ回復魔法をかけておいたが、あの調子だと再発するのは時間の問題と言えそうだ。

会場にはやはり、国王ビオンを中心に、ケダカ王国の主だった者たちが顔を揃えていた。マガタ、と名乗る宰相が頭を深々と下げて俺に礼を言ったのを皮切りに、ケダカの者たちが次々と俺の前で頭を下げ続けるのは、あまり気持ちの良いものではなかった。アガルタからは俺とマト、そしてホルムが参加したのだが、このホルムが実にいい働きをしてくれたのだ。

俺たちにはどうしても、あわよくばアガルタと関係を結ぼうとする者たちが多く訪れる。そうした者たちをホルムは上手くおだてて追い返してくれていた。さすがは年の功、といったところだ。

時間が経つにつれ、このホルムは何故かニケと連携を図り出して、最終的には、ビオン以下、ケダカの主だった者たち全員をニケの前

に座らせるという離れ業をやってのけた。そのニケは、居並ぶ者たちを眺めながらご満悦の表情で、いわゆる鉄板焼きを始めた。

彼曰く、肉の部位によって焼き方、焼き加減を変えるとさらに美味くなるし、その部位も斬り方によって味が変わるのだと力説していた。要は口うるさい焼肉屋のオヤジで、客には一切焼かせず、自分が焼いて振舞うスタイルだ。

ただ、さすがにその料理の腕前は見事で、彼の料理を口にした者は一様にその美味さを絶賛していた。俺も味わったが、肉によってレア、ミディアム、ウエルダンと変えていて、しかもそれらが噛むと肉汁が口の中いっぱいに広がって結構なお味で、何とも美味しゅうございました。

と、このように、ほとんどがニケの独壇場でこの会はお開きになった。ビオンは最後に俺の前に来て丁寧に頭を下げた後、これからは宰相らと協力して国を復興させていくと言った。その彼の後ろで言葉を聞いていた宰相マガタやシュリらは、ホッとした表情を浮かべていた。一方で、マガタはさすがに宰相と言うだけあって、今度はケダカからお礼の使者をアガルタに送ると言ってきた。そうして俺たちと関係を築きたいのだろう。断るのも失礼なので、それはそれで頷いておいた。

そして翌日、いよいよヴィエイユが帝都の屋敷にやって来た。彼女は俺の予想とは裏腹に、完全に一人の女子となって供される料理を楽しんだ。子供たちとも遊び、しかも、子供の扱いが上手かった。体が弱く、結構人見知りなファルコなど、最後はずっとヴィエイユの膝の上に乗っていたほどだ。

政治的な生臭い話は一切出さず、世間話と美容の話が中心だった。

リコたちとの会話にケラケラと開けっぴろげに笑い、出された料理を片っ端から食べ、アリリアとからあげの取り合いをし、そしてまた笑う。正直言って初めて見るヴィエイユの一面だった。これを前面に出していけばいいのに、とさえ思った程だ。

楽しく、賑やかな、でも穏やかなひと時だった。夜が更けてくると、ヴィエイユは子供たちから泊っていけと誘われ、かなり悩んでいた。やがて寂しそうな表情を浮かべると、やはり帰ると言って立ち上がった。その帰り際、見送る俺たちを名残惜しそうに何度も振り返りながら転移結界に乗って帰っていった。

「なあ、今日のヴィエイユって、どう思った？」

ベッドに横たわりながら俺はリコの背中越しに声をかける。彼女は鏡の前で髪をといていた。櫛が当たるたびに美しい金髪が優しげに揺れている。

「……きっと、あの姿が本来のヴィエイユさんなのではないでしょうか」

そう言うとリコは櫛をおいて立ち上がり、静々とベッドに入ってきた。俺の前にはイデアが大の字になって静かな寝息を立てている。ママが来るまで待っていると言っていたのだが、今日のヴィエイユとの交流で遊び疲れてしまったようだ。

リコはそのイデアの隣に体を横たえた。ちょうど親子川の字になって寝ている形だ。

「教皇と言う立場ですから、虚勢を張らねばならないことも多いと思いますわ。いえ、それが日々の大半であると言っても過言ではな

いのではないかしら」

「まあ、ね。ヴィエイユの地位を狙う者もゼロではなさそうだしね」

「そんな中で、なかなか自分を出すのは難しいですわ。たまには本当の自分を開放して、日々のことを忘れることも大切ですわ。ヴィエイユさんは久しぶりに自分らしくいられたので、今夜はよく眠れてかもしれませんわ」

「そういうものかな。俺も割と虚勢を張る方だと思うけれど、それとはレベルが違うってか……？」

「そうですわね……」

ふとリコを見ると、彼女は眠っているイデアを愛おしそうに眺めている。まさに母親の顔になっている。その様子は、何とも幸福感に溢れたものだった……。

◆　◆　◆

「ふう……」

迎賓館に帰ってきたヴィエイユは、大きなため息をつきながら、ベッドに腰を下ろした。その表情はリノス家で見せていたそれとは打って変わって、いつものヴィエイユの表情に戻っていた。

自ら敵の懐に入り込み、その弱みを握るというのは、ヴィエイユの特技であり、最も自信のある事柄の一つだった。だが、今回のアガルタ王宅訪問は、正直言って失敗と言わざるを得なかった。リノス一家は平穏そのものであり、一切の問題がないように見えた。

相手が相手だけに、ヴィエイユは下手な小細工は一切抜きにして、完全に自分をさらけ出し、その場を愉しむことに徹した。正直言って、楽しすぎて途中から当初の目的を忘れてしまった程だ。

ベッドにゴロンと横になりながら、彼女はああいう幸せの形もあるのだなと心の中で呟いていた。大体、側室を持つ家は大なり小なりの問題を抱えている。女性が一人の男性を共有しているのだ。そこには恨みや嫉妬が必ず発生する。そこが狙い目で、ヴィエイユが付け込むべきところだったのだ。

しかし、リノス家はそうした負の感情を一切感じなかった。妻たち子どもたちは互いを尊敬し合っているのがよく感じ取れた。こんな家庭は前代未聞と言ってよかった。

できれば、自分もあんな家庭に生まれたかった。いや、正しく言えば、あんな家庭に生まれていた。亡くなった両親は仲が良く、互いが互いを認め合い、尊敬し合っていた。

でも……。と彼女は心の中で呟く。さすがのヴィエイユをもってしても、そんな家庭を自ら作ることはできないと考えていたし、そんなことをするつもりは毛頭なかった。今の地位を保ちながら平穏な家庭を持つなど、贅沢すぎることだ。その希望を周囲に知られた瞬間、ヴィエイユは教皇の地位を奪われることになることは、よく理解していた。

……まあ、アガルタ王様のご家庭に、一切の隙がないということがわかっただけでも、大きな成果だわ。

彼女は心の中でそう呟くと、う〜んと背伸びをして、大きなあくび

をした。いけないいけない、なんてはしたない……。そんなことを考えているうちに、強い眠気を催した。まだ、風呂にも入っていないのに……。だが彼女はその眠りには勝てず、着の身着のままの状態で、眠りに落ちたのだった。

第八百五十二話　ケダカ王国その後

この戦いの後、ケダカ王国国王ビオンは変わった。自らの考えを至上とすることはなく、老臣たちとの対話を重視する姿勢を取るようになった。

また彼は、先の戦いで共同戦線を張ったアガルタ、フラディメ、サンダンジに対してさらなる同盟関係を求めなかった。それは老臣の一人が主張していた政策だが、ビオンはそれを採用せず、結果的に他の老臣たちも彼の考えに賛同したのだった。

その代り、ビオンが力を入れたのは、この三国に対しての人的交流であり、彼はケダカ王国のなかでも選りすぐりの者を、その国々に留学させた。とりわけアガルタには、アガルタ大学に若者を留学させただけでなく、アガルタ軍にも派遣した。これは、国軍総司令官のシュリの主張によるもので、佐官クラスの高級参謀から、まだ軍人になりたての者まで、幅広い軍歴を持つ者が選ばれていた。

アガルタ軍への派遣は当初、アガルタ側が難色を示すと考えていたが、アガルタは、マトカルは何の躊躇もなくその者たちを受け入れると返答してきた。これにはシュリが驚きを隠さなかった。

軍内部に他国の者を入れる、ということは、軍機密が漏れる可能性が高い。そんなリスクを伴う行為であるにもかかわらず、リノスとマトカルは易々と許可してきた。それは、アガルタ軍の自信の表れでもあるが、同時に、ケダカ側への信頼の現われであるとビオンらは理解した。後日になって知ることだが、アガルタにはそうした要請が各国から寄せられているが、それを受け入れている国はごく僅

かであったのだ。

ビオンは周辺国に対して、心のつながりを作ろうと取り組む一方で、国の内部にもそれを作ろうと試みるようになった。

彼はまず、税を軽くして国民の負担を和らげるよう取り組んだ。そして、城内に備蓄してあった籠城用の兵糧の半分を高い値段で売り、それを国庫に充てた。反対する者はいなかった。皆、アガルタ、フラディメ、サンダンジとの友好関係を続けている限り、他国からの侵攻はないと信じていたのだ。

数年後、アガルタの留学を終えた者たちが帰国してきた。彼らは鉄の精製と溶接技術を学んでおり、ビオンに対して、鉄の船を作ることを提案した。それに対して彼は、溜めていた金を惜しげもなく彼らに使った。

彼らの技術は画期的だった。とりわけ、鉄と鉄を張り合わせる際の溶接技術は世界屈指と言え、かなり分厚い鋼鉄を完璧に溶接する技術を備えていた。

これまでは、熱い鉄を組み合わせるためには、鉄に穴を開け、そこに太い鉄の釘を打ち込んで潰すという手法が採られていた。これは確かに鉄は組み合わせることができるが、強度の問題があり、船での運用は避けられていた。だが、彼らがもたらした溶接技術は、その問題をたちまち解決させた。若者たちの技術と旺盛なチャレンジ精神で、数年後には、木と鉄を上手に組み合わせた船を作るに至った。彼らはそれを鉄張船と名付けた。

この船の登場に、これまで敵対してきた国、とりわけ、ダオラ帝国は驚愕した。弓矢や魔法の攻撃ではほとんどダメージを与えること

ができず、大砲での攻撃でさえ、大きなダメージを与えることはできないのだ。皇帝ガノブは大急ぎで同じ船の建造を命じたが、強度の問題と技術的な問題で、それはなかなか具現化しなかった。

たまらず皇帝ガノブは宗主国であるクリミアーナ教国に助けを求めた。そのとき、たまたまクリミアーナ教国では、木をある手法で蒸らし続けることで効率的に圧縮させられる方法を発見していた。これに目を付けたヴィエイユは、さらなる研究を命じたところ、その方法を突き詰めれば、鉄に匹敵する強度にまで木を圧縮させられることがわかった。ヴィエイユはその技術を法外な値段でダオラ帝国に売り飛ばした。代償としては高かったが、結果的に、ダオラ帝国は鉄よりも安価で鉄張船と同じ強度の船を作ることに成功した。

これを契機とした技術競争が世界中で巻き起こり、世界ではいわゆる産業革命がおこっていくのだが、それはまだ、先の話である。

今のビオンにはそんな未来は見えてはいなかったが、彼は力による支配ではなく、信頼関係をもって国を運営していく方向性が、この国に大きな利益をもたらすことを確信していた。彼は後宮の女性たちとも信頼回復に努めたが、結局それは果たせず、正妃を除いた多くの妃が後宮を去ることになった。だが一方で、新しく迎えた妃と信頼関係を築くことに徹した結果、彼は家庭的にも大きな幸せを得ることになる。そして、妃の一人との間に二人の男の子を授かり、彼は幸せの絶頂を迎えることになるのだが、後年、この二人の息子が国王の座を争い、ケダカ王国は再びきな臭い状況に陥るのだが……。それもまた、後の話である。

一方、アガルタのリノスの許には、複数の国から調査依頼が寄せられ、彼はメイと共にその対応に忙殺されようとしていた。

それは一見すると風邪に似た症状だった。しかし、その回復は遅く、一旦回復したかのように見えても、またぶり返すということを繰り返していた。しかもそれは、他人に感染するが、爆発的な感染力はなく、だが、徐々にではあるが、病人の周辺の者たちに、確実に同じ症状を発症させていた。

「……どう思う、メイ？」

「……そうですね。患者を診ないと何とも言えませんが」

メイはリノスから手渡された手紙を丁寧に読んでいる。さすがの彼女をもってしても、手紙の内容だけを見て、その病名を断じることはできなかった。

「何なら、病人の血液を送ってもらおうか」

「……」

リノスの問いかけにメイは何も答えなかった。彼女は直感的に、これは現場に赴いて直接患者を診察した方がよいと感じていた。だが、問い合わせをして来ている国々に赴くのには、片道で十日近くかかる。十日の間、アガルタ大学を空けることは、今の彼女には難しかった。

「チワンかローニに行ってもらってもいいかもしれないな」

「そう、ですね……」

メイはそう返答してみたものの、医師としての血が騒いで仕方がなかった。できれば、自分が行って直接病状を見たい。触診して、患

者の様子を見たいという思いが強かった。

むろん、リノス自身もメイのその気持ちは十分に理解していた。ただ、彼としても、イリモの翼を使ってその国に赴き、転移結界を張って来るような時間は今はなかった。

「とりあえず、俺たちだけで考えていても仕方がない。チワンに相談に乗ってもらおうか」

「は……い」

メイはそう言って頭を下げた。

しばらくすると、メイの部屋の扉がノックされ、チワンとローニが入室してきた。二人はリノスとメイの前で一礼すると、勧められるままに応接室のソファーに腰かけた。

「……単なる風邪ではなさそうですね」

チワンが口を開く。その言葉にメイが大きく頷く。

「感染速度が遅い、というのが私には気にかかります。体内に潜伏する期間が長いということですね。ということは、抵抗力が弱まったときに発症してくるということです。かなり厄介な病気であるような気がします」

ローニがゆっくりと頷きながら答える。メイが思わず口を開く。

「今の段階ではそれが周囲に、世界に重大な影響を及ぼすものであるのかはわかりません。ただ、早いうちに一度、その症状を確認し

ておくべきだと思います。私も、ローニさんと同じく、かなり厄介な病気であるような気がしてなりません」

「では、内々に私とローニが参りましょう。そして、我々が現場に到着次第、メイ様に転移いただくようにしましょう」

「……お願いします」

「ではローニ、すぐに立ってくれ」

「私一人、ですか！？」

「一人で十分だろう」

「……私、これでも夫ある身なのですよ？」

「何を言っているんだ。夜は家に帰ればいいだろう」

「じゃあローニ、旅の間、晩飯は俺の屋敷でだそうじゃないか」

「行きます、喜んで」

ローニはそう言って立ち上がった。その様子をリノスは苦笑いを浮かべながら見ていた。一方のメイは、不安そうな表情を浮かべながらローニに向かって一礼した……。

第八百五十二話　ケダカ王国その後（後書き）

若者の情熱編、これにて終了です。また間話を数話挟みまして、新章突入です。
次はメイちゃんが活躍……かな？

第八百五十三話　ヴィエイユ、妄想する

クリミアーナ教国教都、アフロディーテ。教皇神殿の自室でヴィエイユは一人、物思いにふけっていた。椅子に深く腰掛けながら足を組み、天を仰いでいる……。自室とはいえ、彼女がこんな醜態をさらけ出すのは珍しいことと言えた。

むろん、側近の者たちには呼ぶまで入室を禁じてある。間違ってもこの部屋を覗きに来る者などいない。彼女は安心して物思いにふけることができていた。

その脳裏に描き出されているのは、アガルタでの休暇だった。正直、楽しかった。癒された。精神的な疲れがすべて吹き飛んだ気がしていた。

正直、自分の心と体をここまで回復させてくれるとは思ってもみなかった。できれば近いうちにもう一度、アガルタを訪れて休暇を取りたいものだとさえ思っていた。

当初のアガルタ訪問の目的は、ダオラ帝国のケダカ王国侵攻を止め、賠償金を減額してもらうことだった。可能性は低いと考えていたが、あわよくば、の考えの許、彼女は大急ぎでアガルタに転移したのだった。だが、予想通り、アガルタ王は彼女の提案を認めなかった。それどころか彼は、本当に筋書き通りにこの戦いの幕を引いた。クリミアーナ教国の存在を示そうと、ダオラ帝国皇帝ガノブに停戦命令を出した行為が、バカらしくさえ思えた程だった。

思い描いた筋書きが実現不可能と知るや、ヴィエイユは一切の政治

的な思惑を捨て、アガルタの観光を楽しむことに徹した。それが功を奏したのだろうか、今、彼女の体はこれまで以上に軽く、ここ最近悩まされてきた軽い頭痛は嘘のようになくなり、いつも以上に頭脳が明晰になっているように感じるのだ。

いわゆる、絶好調、というやつだ。どんな問題でも解決できる気がしていた。

ただ、皮肉なことに、彼女の体調がすこぶる良い状態であるにもかかわらず、現在のクリミアーナ教国はとりわけ大きな問題は発生していなかった。ヴィエイユは何とも言えない感情を押し殺しながら、それもいい、その方がいいと自分に言い聞かせていた。

アガルタの逗留で一番の思い出は、リノス家での夕食だった。供される料理はどれも美味しく、アフロディーテでは絶対に味わえぬものだった。特に珍しいものはなく、いつも彼女が口にしている料理も多かったのだが、何故か美味しく感じた。あれは一体何だったのだろうか。やはり、多くの人と笑いながら食事を共にするという行為が舌に影響を与えているのだろう。ヴィエイユはそう分析した。

色々な王族と会って会食を共にしたが、あんなに賑やかな食卓はアガルタ王くらいのものだろう。あの光景を初めて見たときは驚いた。あれはまるで、下層市民のそれだ。王族のものではない。だが、アガルタ王は敢えてそれをやっている。理由を聞くと、皆で食事を摂ると美味いからだ、という答えが返ってきた。これにヴィエイユは二度驚いたのだった。

だが、賑やかではあるが、皆のテーブルマナーが恐ろしく洗練されていたのも、ヴィエイユを驚かせた一因だ。まだ年端もいかない子供ですら、ナイフとフォークを上手に扱う。何とも不思議な食卓だ

った。

彼女の思考は自然にアガルタ王の妃たちに向けられていく。あの家庭を作っているのは間違いなくあの妃たちだ。嫉妬ややっかみを全く感じさせないあの、女同士の関係はどうやって築かれているのだろうか……。それはやはりあの正妃リコレットの影響が一番だろう。

あの美しさ、気品、どれをとっても超一流だ。あの妃には勝てる気がしない。それがために、他の妃たちも彼女を出し抜こうという気すら起こさせないのだろう。

それに、アガルタ王との相性も抜群なのだろう。二人が並ぶと、互いが互いのことを愛し、敬っているのがよくわかる。おそらく言葉を発しなくとも、互いの考えていることがわかるのだろう。まさに、最高の夫婦であると言える。

また、体の相性も抜群によいのだろう。三十路を過ぎた女性があそこまでの美しさを保っているというのは、間違いなく、未だに夫から深い愛情を注がれていなければありえないことだ。結婚後、それなりの時間が経っているにもかかわらず、アガルタ王がリコレット王妃に愛を注ぐことができるのも、やはり互いの体の相性がとりわけ良いのだろうとヴィエイユは分析した。

でも、とはいえ、ね……。

どんなに美しく、体の相性がよかったとしても、男性は他の女性を求めるものだ。そう考えたとき、彼女の頭には他の妃たちの顔が浮かんでいた。

妃たちの中で最も好色なのが、間違いなくあの、メイリアス妃だ。

彼女を知る人は意外に思うかもしれないし、中には怒り出す人もいるだろうが、ヴィエイユがこれまで培ってきた人を見る目は、彼女は間違いなくその部類の女性に入ると教えていた。

彼女はメイリアス王妃の房室を想像する。最初はアガルタ王の好きにさせていて、あるところからは彼女が主導権を握る。おそらく最後は、夫の上に乗り、なまめかしく腰を動かしているのだろう。そうして夫を満足させつつ、自分も満足させる……。

……まさに、昼は淑女、夜は娼婦のように、の典型だわ。

ヴィエイユは心の中でそう呟きながら、クスリと笑う。

そのメイリアス王妃の対極に位置するのが、あのコンシディー王妃だ。彼女は間違いなくその体に大きなコンプレックスを持っている。夫婦の行為自体は嫌いではないが、その体を見られることが何より恥ずかしいと感じているはずだ。そのため、本能的には夫の愛を求めつつも、体が動かないという状態であるはずだ。だが、攻めれば反応は返ってくる……。

……まさに、永遠の生娘ね。男性は堪らないでしょうね。

次にヴィエイユの脳裏に浮かんだのは、ソレイユ王妃だ。彼女はあの風貌だ。一見して好色そのもので、昼となく夜となく求め続けているように見えるが、その実は意外にあっさりしたものだと彼女は分析していた。

ソレイユ王妃はおそらく、テクニカル的なもので言えば、妃の中で突出する技術をもっているだろうが、最大のウィークポイントは体力がないことだ。あの華奢な体と、それに似合わぬ大きな乳房は、

激しい運動をすればそれだけ体力の消耗も激しくなる。きっと、彼女が能動的に動くのは、限定された場面に留まるだろう。

その代り彼女は、夫の要求には何でも応える。どんな姿態も厭わないし、むしろそうした要求をされることが喜びとしている気配すら感じる。まさに、主人の意のままに動く奴隷……。そんな姿が描き出されていた。

一方でその真逆に位置するのがマトカル王妃だ。彼女は現役の軍人であり、常に訓練に身を置いている。言ってみれば、無尽蔵の体力を持っている。きっと、彼女自身も夫との房室は嫌いではないし、寧ろ好きなのだろうが、軍人としての性格上、それを最低限に抑えているのではないかとヴィエイユは分析した。きっと、彼女自身も欲望を解放してしまうと、どこまでも夫との関係にはまり込んでしまうのがよくわかっているのだろう。そうならないために、敢えて強い自制心で欲望を抑えているのだ。

ただ、ひとたび夫と二人きりになれば、その欲望を爆発させる。自分から求め、様々な要求を口にすることだろう。長い時間夫を拘束して己の欲望を満たすのが、マトカル王妃だ。

アガルタ王としても、頻繁に彼女の相手をすると疲れてくるのだろうが、その頻度が少ないために、彼女との房室はいいアクセントになっているのだろう。妃たちの中で自分の欲望を口にして要求してくるのはおそらくマトカル王妃ただ一人であろうし、彼としても、彼女の要求に応えていた方が、ある意味楽なのかもしれない。

……そんな色々な妃がバランスよく彼の周りに侍ることで、アガルタ王自身の精神も安定し、家庭に平穏をもたらせているのだろう。

「ということは、あのお方の男性としての機能が衰えるまで、アガルタには隙ができないということかしら」

そう言ってヴィエイユはフフフッと笑う。

「……お呼びでしょうか」

突然侍女が入室してきた。先ほどのヴィエイユの笑い声が呼ばれたと勘違いしたらしい。彼女は笑みを浮かべながら首を振る。その表情はどこか、愁いを含んでいた……。

第八百五十四話　欲張り

ある晴れた昼下がり、ヴィエイユは自室で椅子に座りながら机に頬杖をついていた。その表情はどこか浮かないもので、一見すると、何かの悩みを抱えているかのように見える。

「ふぅ～ん」

何とも言えぬ倦怠感に満ちたため息をつく。机の上には一通の書簡が置かれており、ヴィエイユは頬杖をついた姿勢のまま、その書簡に視線を向けた。

ダルクローズ王国国王からの親書だ。そこには遠回しにヴィエイユへの愛がつづられている。言わば、ダルクローズ国王からの求婚の書簡だった。

彼女の答えは決まっていた。否だ。全くもってタイプではないし、何より、その文面からは愛情を感じない。察するところ彼は、あわよくば、の姿勢でこれを書いている。万に一つ、自分が首を縦に振れば、彼は教皇の夫という立場に躍り出る。そうなれば、ダルクローズ王国の国威は急上昇するし、教国の中での地位も大きく上がることになる。その、万に一つの可能性に、彼は掛けたのだ。

ヴィエイユからしてみれば、ダルクローズ国王のその軽薄さが嫌いだった。どうして可能性の低い事柄に挑戦するのか。挑戦するのであれば、どうして成功率を高めた上で実行しないのか。おそらく彼には自分がやらかしたことの重大さもリスクも、全く眼中にないのだろう。誰もこの愚行を止めなかったのか。いや、諫めた者はあっ

ただろう。しかし、王はそれに耳を貸さなかった。ヴィエイユは他人事ながら、その王に仕える者たちが哀れで仕方がなかった。

ダルクローズ王国はこの親書を送ったことで、ひどくヴィエイユの心象を傷つけた。恐らく今後しばらくは、この国に注目することはないだろう。例え、この国で天変地異が起こり、もしくは、飢饉などが起こったとしても、自分は救いの手を伸ばすことはないだろう。恩を売る価値すらない相手であると、ヴィエイユは断じていた。

逆に、もし、ヴィエイユ自身がその求婚を受け入れたとしても、この国にはさらなるいばらの道が待っている。当然、クリミアーナ教を信仰する国々から様々なやっかみを背負うことになる。この国と王のスキャンダルを暴こうとする者が後を絶たないだろう。その結果待っているのは、ダルクローズ王国の衰退だ。ヴィエイユにはこの王が、そうしたやっかみをはねのけ、教皇の夫となるような器には到底思えなかった。

ヴィエイユの策略として、信仰国の王たちには須らく色目を使い、気があるものだと思わせている。だが、王たちもバカではない。ヴィエイユに対して行動を起こそうとすれば、必ず何らかの邪魔が入ることを理解している。そのため大半の王は、ヴィエイユとの関係が深まることを願いながら、敢えて何も行動を起こさないのだ。たまに行動に移す王もいるが、そうした者はギリギリのところで寸止めしてくる。言わば、大人のラブゲームを愉しんでいるのだ。そうしたやり取りはヴィエイユ自身は嫌いではなかったが、それはどこか虚しさを感じるものでもあったのだ。

彼女はもう一度、大きなため息をつく。考えれば考えるほど、自身の結婚については難しい問題であると言わざるを得なかった。

クリミアーナ教国とその属国では、彼女の夫となる資質を持つ者は皆無と言えた。教国の外側に目を向けてみれば、彼女と年恰好が釣り合う者はほとんどなく、かなり年の離れた王たちが多かった。それでも、夫となるべき資質を問うてみれば、やはり、その眼鏡に適う者はいなかった。

「少なくとも、クリミアーナ教国と同等の力を持っていなければ、ね」

彼女はうんざりとした表情を浮かべながら呟く。その条件で考えてみたとき、まず、第一に候補に挙がるのはヒーデータ帝国だった。あの国はクリミアーナ教を国教としてはいないものの、多くの者がクリミアーナ教を信仰し、先帝をはじめ、王族の多くが教会に訪れている。国の規模や国威も教国を凌ぐものがある。ヴィエイユの相手としてこれほどふさわしい国はなかった。

だが唯一の問題は、ヒーデータ帝国皇帝、ヒーデータ・シュア・ヒートにその気がないことだ。彼はこれまで、絶妙な距離感でクリミアーナ教国との友好関係を維持してきた。その彼が敢えて距離を近づけに来るとは思えないし、逆にこちらが距離を詰めれば、その分だけ離れていくことは目に見えていた。

次にヴィエイユの脳裏に浮かんだのは、あのアガルタだった。王の出自には問題があるが、あの国の規模と国威はそれを補って余りある。年齢もヴィエイユとは最も近い。正直言って、アガルタと婚姻関係を結ぶことが、ヴィエイユ自身にとっても、クリミアーナ教国にとっても、もっとも都合がよかった。

ただ、唯一問題があるとすれば、アガルタ王にヴィエイユに関する興味が皆無だということだ。あの王には、本来の自分を晒しすぎた。

いくら何でも、そんな女性を嫁にしようとは思わないだろう。それは、ヴィエイユ自身もよくよく理解できていた。

しかし、あれほど本来の自分を曝した男性も皆無と言ってよかった。実際のところ、ヴィエイユ自身はあの王とが一番喋りやすかった。余計な気を使う必要がまるでない。そう、ある意味、彼には家族にも似た感情を彼女は感じていたのだった。

また、あの家庭の雰囲気もよい。ああいう賑やかな食卓を囲みながら生活をしていると、きっと多くの疲れが癒されていくのだろうなとヴィエイユは感じていた。いつしか彼女の脳裏には、アガルタ王の屋敷での暮らしが描き出されていた。

子供たちとワイワイ食卓を囲みながら食事を摂る。そこから迎えに来たポーセハイと共にアフロディーテに出勤する。仕事を終えて帰宅し、また朝と同様賑やかな食卓に付き、料理に舌鼓を打ちながら夕食を終える。風呂に入り、夫と共に寝室に入る……。

ヴィエイユはふと我に帰る。どうしても、アガルタ王との房室が想像できないのだ。

彼は自分に対してベッドの上でどう振舞うのだろうか。逆に、自分は彼に対してどう振舞えばいいのだろうか。体を固くして、ただひたすら彼の愛に耐えればいいのだろうか……。

「経験がないから、全然わからないわ」

彼女は思わず呟く。これまで男と女の関係になる寸前までいった経験はあるが、それそのものの経験はまだなかった。ないものを想像するのは難しい。彼女は思わず大きなため息をついた。

「色々と難しいわね。結婚となると、なおさらだわ」

そこまで考えて、彼女は自分自身に言い聞かせた。そうした家庭の幸せは既に捨てたのだと。それを捨てたからこそ、こうして教皇として思い通りの政治が行えているのだと。

確かに今の自分は、祖父、ジュヴァンセル・セインと比肩する程の、強大な権力を手中にしている。人事権、裁判権、軍事権……ありとあらゆる権力が自分の掌に掌握されている。自分に仕える者たちの首を挿げ替えるのは造作もないことだし、その命を奪うことも簡単にできてしまう。気に入らない国があれば、教国軍を動かして叩き潰すことも可能だ。教皇になったばかりの頃は、そんな強大な権力を手にしてしまったことに恐れを感じたときもあったが、今の彼女には、そうした感情など皆無と言ってよかった。

……これだけの権力を手に入れながら、まだ、女性としての幸せを諦められずに、それを求めてしまう私って、なんて欲張りなのでしょう。

彼女は心の中でそう呟きながら、自虐的な笑みを浮かべた。だが、その欲望は簡単に諦められそうにはなさそうだ。まだしばらくは、これと付き合い続けなければならない。

彼女はそう覚悟すると、大きく背伸びをして、手を鳴らした。間もなく侍女がやって来るだろう。ひと風呂浴びて、仕事にとりかかろう……。

彼女はゆっくりと立ち上がった。

第八百五十四話　欲張り（後書き）

間話、一旦終了です。次週より新章突入！　メイちゃんが大活躍する……とか、しないとか……？

第八百五十五話　愛妾の死

タルカト王国王太子、タルカト・シクロウ・カルッツェは雨の中、墓の前でただひたすらに立ち尽くしていた。かなり長い時間、雨に打たれているのだろう。身に付けている服がずぶぬれになっている。

「王太子殿下……」

近習のブトが心配そうな面持ちで話しかける。彼もカルッツェに従っているため、ずぶ濡れの状態だ。だが、彼はそんなことに不快感はなかった。彼はただひたすら、主君であるカルッツェの体調を案じていた。

その墓には、カルッツェの愛妾であるコルイが眠っている。その最愛の女性は一昨日、突然の死を迎えたばかりだった。

不可解な死だった。カルッツェが一週間の軍事演習から帰ってくると、いつも笑顔で迎えてくれるコルイの姿がなかった。彼は軍装も解かずに、その足で正妃のサンジョの許に向かった。

「コルイをどこにやった」

夫の問いかけに妻は答えなかった。結婚以来、二人の間には情は通っていなかった。妻は相変わらず冷たい眼差しをカルッツェに向け、吐き捨てるように医師の許に送ったと告げたのだった。

「医師？　何か病気でも患ったのか」

「以前から申し上げておりますが、あの女は以前から患っております」

「医師でもないそなたに何がわかる！」

カルッツェは吐き捨てるように言うと、足早に妻の居室を後にした。そして、医師の許を訪ねると、コルイはつい二日前に亡くなり、すでに墓に葬ったと報告されたのだった。カルッツェは怒り、一体何の病気で亡くなったのだと医師に問うたが、男は話をはぐらかすばかりで、しかとした答えは得られなかった。

カルッツェはやり場のない怒りをひたすら耐えていた。つい一週間前には、元気な姿で見送ったコルイが、突然亡くなるとはどうしても思えなかった。彼女は殺されたのだ。その犯人はわかっている。正妃のサンジョだ。彼は物言わぬ墓の前に立ち尽くしながら、愛妾コルイの無念に思いを馳せた。そして、その命を奪ったであろう者に、激しい怒りを覚えていたのだった。

カルッツェは現在十九歳の若者であり、現王・シェングの四男として生まれた。四男であったため、王の後継者とはみなされず、十二歳のとき、タルカト王国の最北端にあるタカの領主となった。

母に似て細面の色白の少年で、長ずるに従って、すくすくと身長が伸びて、十六歳の頃には家来衆の誰にも負けない程の背丈になっていた。武芸が好きで、家来を相手に武芸の稽古に励んでいた。特に馬術に秀でていたのは、家来たちの、父シェングに負けないようにという意識的な慫慂があったからである。

十七歳のとき、長兄で王太子であったギノブが落馬によって死去した。父に似ず、武芸の鍛錬を嫌い、どちらかというと文化的な教養

人としての振る舞いが目立つ男だった。武人として名高い王シェングはその死を嘆いた。息子を失った悲しみではない。騎士の息子が落馬によって命を失ったという事実に衝撃を受けたのである。

シェングは後継者を誰にするかをかなり長い間逡巡した。そして、悩み抜いた末、四男のカルッツェを指名した。家来衆からの反対は一切なかった。むしろ、遅きに失したとさえいう者すらあったほどだった。

直ちに、シェングの次男、三男は他国に養子に出された。そうして、後継者問題が起こらぬようにして、シェングは正式にカルッツェを王太子としたのだった。このとき、カルッツェは十八歳になっていた。

王太子となったカルッツェには、すぐさま結婚の話が持ち上がった。彼はそれまで、一切の色事に興味を示さなかった。遠乗りに出かけると町娘や農民の娘など、多くの女性と触れ合う機会があったし、タカという地が山の中であったため、若い女性が太ももを晒しながら野菜を洗う光景などもよく見られた。家来衆はいつ、カルッツェがあの女性が欲しいと言い出してもよいように、それなりの準備を整えていたが、彼はついに十八歳になるまで童貞を守り通した。

妻に迎えられたのは、ダオラ帝国皇帝ガノブの娘だった。カルッツェはその妻を気に入らなかった。父ガノブに似た、目じりがピッと上がり、鼻の高いその女性はいかにも高慢そうであったし、胸と尻の大きいその体は、いかにも不健康そうに見えた。また、妻サンジョの、折に触れてこの山深い田舎に嫁に来てやったのだという態度が、さらに彼の心を離れさせた。

一方、彼はその妻がダオラ帝国から連れてきた侍女に目を止めた。

コルイと名乗るその女性は、スッキリと痩せた体をしていて、午後になると顔が赤らんで目が潤んでくるのだった。彼はその女性に興味を持った。少し紅潮した顔で潤んだ瞳を向けられると、何とも言えぬ色気を感じたのだ。

程なくして彼はこのコルイを愛妾として迎えると宣言した。妻サンジョは何も言わなかったが、その心の底には激しい嫉妬の炎が立ち昇っていたのは、誰の目から見ても明らかだった。一方のコルイは主人の手前もあり、最後の最後までカルッツェの愛を受け入れることを拒否した。だが、腕を取られ、力づくで彼の部屋に連れ込まれてしまっては、彼女はその愛を拒否することはできなかった。

「コルイ……俺はそなたが好きだ」

「……お許しくださいませ」

「いや、許さん。そなたは、俺が嫌いか」

「……嫌い……では、ございません。でも」

「でも、何だ」

「怖ぅございます」

「では、怖くないようにしてやろう」

そう言ってカルッツェはコルイの唇を吸った。

コルイと関係を持った直後から、カルッツェは彼女の傍から離れなくなり、昼となく夜となく彼女を愛するようになった。むろん、正

妃サンジョは嫉妬を隠そうともしなかったが、家来衆はカルッツェの行動を鷹揚にとらえていた。十八歳まで禁欲していたカルッツェの前に好みの女性が現れたのだ。しかも、相思相愛の関係なのだ。そういうことになるのは自然なことであると考えていたのだった。

このコルイという女性は夕方になると決まって顔を赤らめ、軽い咳をした。体調を心配してみたが、本人は何ともないと言い、また、病の傾向は見られなかった。そして彼女は夜、同衾すると、興奮するにしたがって、異常に体に熱を帯び、お許しくださいませ、と言いながら、カルッツェの求めに積極的に応じるのだった。彼はそんな彼女を愛し、火照った体を抱きしめながら眠りに落ちるのだった。

コルイとの関係が半年近くになろうとしたとき、ようやくカルッツェの生活も元の通りに戻り始めた。昼にコルイの部屋に行くことは少なくなり、武芸に励むようになった。家来たちはその傾向を喜んだ。

あるとき、隣のイナルまで遠乗りに出かけた際、イナルの領主であるノブトはカルッツェを館に迎えてささやかな食事会を催した。その折、カルッツェは熱でもあるのか、赤い顔をしていた。ノブトはカルッツェが帰るとき傅役のウエモに、王太子殿下は風邪でも召しているのかと聞いた。ウエモは、そのときは、いい加減にあしらっていたが、実はカルッツェがそのころ午後になると赤い顔になり、同時に興奮してくることに気づいていた。それが彼だけの気のせいではなく、他人のノブトまで認められたとなると捨てはおけないと思った。悪い予感が走った。その症状は父・国王シェングが苦しんでいる病気の兆候によく似ていた。

それは正妻であるサンジョも承知していた。彼女はずっとカルッツェを観察し続けていた。そして、最近になってコルイと同じ兆候が

彼にも表れていることに気がついた。

病は兆候が出たらすぐに対策を施すべきである、父・ガノブの言葉が彼女の脳裏に呼び起された。このまま進めば夫は国王と同様、重篤な病に進む可能性がある。その前に対策を打つのだ。

サンジョは近習に命令を下した……。

第八百五十六話　闘病

カルッツェは墓から帰ると病臥した。熱はなかったが、何とも言えぬ倦怠感が体中を取り巻いていて、起きていられなくなった。

「たかが侍女ごときの墓に、雨の中、いつまでも立っていたからでございます」

カルッツェが病に伏したと聞いて妻のサンジョが病気見舞いにやって来てそう言った。カルッツェはその言葉に対して何も反論しなかったが、ただ、憎しみを込めた目で妻を睨みつけた。そのあまりの迫力にサンジョは恐れをなし、まるで逃げかえるように夫の部屋を後にした。

近習のブトは王都・コルフに人をやって、国王・シェングにこのことを告げた。カルッツェは王太子ではあったが未だに王都には移っておらず、対外的にはまだ、タカの領主という位置づけだった。国王らは一刻も早くカルッツェを王都に迎えたかったが、彼の入るべき屋敷は、亡くなった兄・ギノブのものだった。しかしそこにはまだ、ギノブの妻が住んでおり、さらに国王シェングは、落馬によって息子の命が奪われたその屋敷を嫌っていた。そのため現在は、カルッツェが入るための屋敷を新たに建設している最中だった。

国王は自分が苦しんでいる病が息子に現れたことに衝撃を受け、遠い山の中で生活している息子の体調を案じ、すぐさまお抱え医師であるケンモを遣わすと手紙を遣わせた。ケンモは国王付きの医師で、折に触れて悩まされる国王シェングの熱を、薬や魔法などを上手に使ってコントロールする術を心得ていた。父は息子の体面を慮り、

カルッツェの病気見舞いではなく、ブトの母の病気を見舞うということが表面上の理由とした。

ケンモはタカに十日ほどいる間に、それとなくカルッツェを見守っていた。心配された体調は、ケンモのお蔭もあってか、三日ほどで回復に向かい、徐々に日常の彼を取り戻しつつあった。そして、十日目の午後、カルッツェは槍の稽古中に些細な怪我をした。ケンモは、その傷の手当てをしながら、誰に言うともなく呟いた。

「お顔が赤うございますが、お熱でもあるではございませんか」

「熱などないが、なにかこう、顔中がほてってならぬ」

「それは熱ではございませぬかな。私が診てさしあげましょう」

そう言ってカルッツェの額に手を当てた。医師でなければできないことであった。ケンモは熱を感じた。運動して火照ったから、顔が赤いのではなく、熱が出たから赤いのだということがわかった。

ケンモは王都に帰ると、国王シェングにこのことを告げた。あの病を治すには安静以外にない、なるべく早く治さないと悪くなるばかりだと告げた。そして、そのついでに、あの病気には精力を浪費することが一番いけないから、女性を近づけない方がいいだろうという意見具申をした。

国王シェングは自分自身の経験から推して、この原因不明の病気がいかに厄介な病であるかをよく知っていた。激しい倦怠感と熱が交互に襲ってくる一方で、異常な性欲の高ぶりが抑えられなくなる。彼自身、けだるさと軽い咳をつきながら女性を求め続け、さらに体調を悪化させていくという悪循環に悩まされた過去を思い出して、

息子には絶対にあのような経験をさせるべきではないと心に誓った。彼は王都に留まっていた名医と名高いケイサイという医師をタカに送った。そしてカルッツェにはケイサイの言うことをよく聞くようにと手紙を書いた。と同時に、侍医であるケンモには、この病気の原因と対策を急ぐように命令を下したのだった。

ケンモにしてみれば、それはここ三十年間ずっと研究し続けていることであり、今更特に何をするわけでもなかったが、彼はこの病気がこの地域特有のものであるということを突き止めていた。しかもそれは、男女関係なく罹患するが、不思議に一般市民が罹患することは稀で、どちらかというと武人に罹患する事例が多かった。また、女性も肥満体形の者が罹患することはなく、痩せた女性が罹患することが多く見られた。ケンモはこの病はおそらく、筋肉の含有量が高い者ほど罹患する可能性が高いと見立てていたが、その原因と特効薬の開発はようとして進んでいなかった。

一方、カルッツェは一時は病気に反撥したが、やがて、そうすることが、かえって身体に良くないことがわかると、おとなしく、家来や医師の言うことを聞くようになった。

「殿下、しばらくの我慢でございます。やがて、お体が固まれば心配はなくなります」

近習のブトは、何度となくこの言葉を使った。

お身体が固まればというのは、二十歳ぐらいの青年期に達すればということであった。カルッツェは一日も早く王都に赴き、王太子として父を助けたいと願っていたが、病気に追われている彼にはそれははかない望みであった。やがてカルッツェは痩せて、青白い顔になり、目が潤んだように輝き、午後になると熱が出るし、軽い咳が

出た。倦怠感のために、床に臥すような日もあった。

父シェングはカルッツェの病気を随分心配して、次々と医師をタカにさしむけ、高価な薬を惜しみなく送った。

カルッツェの病が癒えて、馬に乗れるようになったのはそれから半年ほどしてからのことだった。カルッツェの若さが病に勝ったというよりも、徹底的に養生したのが効いたのだった。また、王都のような都会ではなく、山深いタカという地にいて、澄んだ空気とよい水を採り続けたのもその一因であった。

身体が回復してくると、家来衆はカルッツェの性欲を心配した。愛妾コルイとの激しい逢瀬を知る家来たちは、カルッツェがいつ、女性が欲しいと言い出しはしないかと、ヒヤヒヤしながらその様子を見守っていた。だが彼は、禁欲生活を守り続けた。必ずこの病に打ち勝って、王太子としてこの国を支え、また、将来的には国王となってこの国を隆盛に導いていくのだという矜持が、彼の欲望を見事にコントロールさせていた。

病は癒え、それと同時に、王都でのカルッツェの屋敷も完成に近づいた。カルッツェはいよいよタカを離れ、王都に移ることになった。名実ともに王太子として対外的にも披露されるのである。その知らせを聞いたカルッツェは、興奮を抑えることができなかった。

赤く紅潮した顔で喜びをあらわにする主君を見て、近習のブトはイヤな予感を感じていた。王太子殿下の気分を逸らさねばならないと考えた彼は、カルッツェに、愛妾コルイの墓参りに行ってはどうかと提案した。

「……うむ。そうだな。コルイも喜んでくれよう」

そう言って彼は穏やかな表情に戻ると、剣を携え、愛馬に跨った。

コルイが葬られている墓は、カルッツェの屋敷からはそう遠くない場所にあった。彼は一気にそこに向かうと思いきや、その手間で馬を止め、進路を変えた。

「王太子殿下、どちらへ」

「喉が渇いた。水をもらってくる」

カルッツェ一行はすぐ近くにある館に向かった。ここは小さいながらも、王族の別荘地が置かれてあり、カルッツェも何度か訪れたことがあった。彼は案内も請わずに屋敷の中に馬を進めた。

「お……王太子殿下！」

屋敷に入ると、そこには二人の男が控えていた。知った顔だった。正妻サンジョの近習で、ダオラ帝国からやって来た男たちだった。

「ここは王族専用の屋敷である。何故貴様らがここにいるのだ。すぐに出てゆくのだ」

近習のブトがそう言って退去を促したが、男たちは狼狽えるばかりで何も言わない。ふと、彼らのすぐ傍に女性ものの輿が見えた。

「サンジョが来ているのか？」

カルッツェはそう言いながら屋敷に上がり、真っすぐに奥の部屋に向かった。サンジョの近習たちが慌てふためきながら後を追いかけ

てきたが、カルッツェはただ黙々と廊下を歩いた。

静かに部屋の扉を開けた。目の前に、一糸も纏わぬ姿で絡み合う男女の姿が飛び込んできた……。

第八百五十六話　闘病（後書き）

ｃｏｍｉｃブースト様にて、コミカライズ最新話公開中です。是非チェック下さい！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｃｏｎｔｅｎｔ／００３９００１

第八百五十七話　言い分

カルッツェは、その光景を冷静に受け止めることができていた。実際は、その光景を目にした瞬間から、思考が停止していたのかもしれない。

女性――正妃・サンジョは四つん這いになって尻を男に差し出していた。そして男はその尻を抱えながら、一心不乱に腰を振り、責め立てている。それは恋人同士の房事には到底見えなかった。妻・サンジョはまるで、その男に組み敷かれ、支配されているかのような光景だった。サンジョは必死で声を押し殺しているように見えたが、折に触れて短く、甲高い声を漏らしていた。

二人の周囲には脱ぎ散らかされた互いの服があった。まるで獣のような痴態に、誰も声を発するものはいなかった。皆、ただ茫然と目の前で繰り広げられる男女の絡み合いを眺めていた。

カルッツェはその光景を眺めながら、あるいは妻はこの男に無理やり手籠めにされたのかもしれないと考えていた。あの気位の高い妻だ。こうした状況に陥った自分自身を許せないことだろう。当然、自害するべきなのだが、男に脅されているのか、それもできずに今の状況に陥っているのかもしれない。そんなことを考えていたそのとき、サンジョと男が同時に、長いうめき声を放った。男の動きがピタリと止まった。

しばらくすると二人は、まるで空気が抜けた人形のように、フニャフニャとその場に倒れ伏した。サンジョはゆっくりと体勢を変えて仰向けになり、男はその体に覆いかぶさった。そして二人は激しい

口づけを始めた。

カルッツェの脳裏に、亡き愛妾・コルイの姿が思い出された。これは、コルイが激しい交歓の後に必ずカルッツェに求めてきた行為だった。カルッツェには、目の前であられもない痴態を晒しているサンジョの姿が、コルイに見えてきた。あのコルイが別の男に組み敷かれている――。カルッツェは体の奥から、凄まじい高温の熱が噴き出してくるような感覚に囚われていた。カルッツェは静かに、腰の剣に手を伸ばした。

そのときふと、サンジョと目が合った。トロンとした目に、徐々に光が宿っていく。やがて彼女の眼がカッと見開かれた。大きな目だ。その眼が激しく左右に揺れている。それは、カルッツェらの存在を、現実を受け入れながらも必死でそれを否定しているように見えた。

彼女に何かの変化を感じたのか、男もゆっくりとこちらを振り返った。

「……王太子殿下！」

男はそう呟くと、慌ててサンジョの許から離れ、まるで転がるようにして部屋の隅に行き、平伏した。その逞しい肩が小刻みに震えている。一方のサンジョは大きなため息をつくと、さも面倒臭そうに起き上がり、長い髪を整え始めた。整えると言っても櫛などはなく、ただ手で髪を撫でつけているだけだ。

抜けるような白い肌だった。大国の姫にふさわしい肌の美しさを持っていた。だが、せっかくのその美しさも、だらしなく垂れさがった下腹をはじめとしたその小太りな体が台無しにしていた。

ややあってサンジョは、周囲に散らかっている服に視線を向け。その中から一番大きな服を取り出すと、それを羽織り、自分の胸を隠した。そうしておいて彼女は、カルッツェらをキッと睨みつけた。それは、今すぐこの場を出て行けと言っているように見えた。

「こ、これは……一体、何が……」

近習のブトが声を絞り出すようにして呟く。サンジョは面倒くさそうにプイッとそっぽを向くと、まるで吐き捨てるように口を開いた。

「妾も、コルイと同じことをしたまでじゃ」

その言葉を聞いた瞬間、カルッツェの体の奥底から湧き上がってくる熱が、一気に脳天まで突き抜けたような気がした。妻サンジョの言葉は、明らかにコルイを侮辱するものだった。あれだけ自分のことを愛してくれた、それこそ、無償の愛を注ぎ込んでくれた、そして、自らも愛を注ぎ入れた女性を侮辱されることは、何としても許せないことだった。

「貴様……」

呼吸が激しくなっていた。熱がどんどん上がっていくのが自分でもわかった。剣の柄に添えていた手に力が入っていく。このままでは妻を斬ってしまうかもしれない。それをすれば、ダオラ帝国との同盟は切れ、逆にダオラから侵攻を受ける可能性がある。ここは落ち着いて考えねばならないし、王太子という立場上、感情に任せた振る舞いをするべきではないことはよくわかっていた。だが、カルッツェには体の中に猛り狂う熱を止めることはできなかった。

「おお、怖い顔だこと。私を斬りますか?」

サンジョが悪びれもせずに吐き捨てた。思わず近習のブトが口を開いた。

「お妃さま……。一体、なぜ、このようなことを……。それに、そこに控えているのは、ランフではないのか」

ランフと呼ばれて、平伏し続けている男の肩が大きく揺れた。ランフはブトと同じく、カルッツェの近習を勤める男だった。

「……フン。殿下の近習の中では最も目鼻顔立ちが整っておったによって、妾の男妾にしてやったのじゃ」

「お妃さま、何と言うことを！」

「殿下とて、妾の侍女であったコルイを無理やり妾にされたのじゃ！　妾も同じことをしたまでじゃ！　何が悪い！　何が悪いのじゃ！」

サンジョの眼は吊り上がり、まるで鬼女のような形相になっている。そのあまりの様子に、ブトの体は思わず震えた。

……無理もない、とは思う。王太子殿下の許に輿入れしてきてから、夫婦の交歓はほとんどないと言ってよかった。彼女は常に王太子殿下に嫌われていたし、彼女自身も折に触れて殿下の神経を逆なですることばかりをしていたように思う。それはおそらく愛情の裏返しであり、正直なことを言えば、お妃さまは殿下の愛を受けたかったのだろうが、今、この状況を目にしてしまった以上、そうした憐憫の情を彼女にかける余地は全くないと言ってよかった。

「二人を捕らえよ」

まるで呟くような、しかし、一切の感情を押し殺したかのような声が聞こえた。見ると、王太子殿下の顔が赤く上気している。これはいけない、とブトは咄嗟に思った。このままにしておけば何か大変なことが起こる気配がしていた。ブトは一刻も早く殿下をこの場から立ち去らせるべきだと思ったが、すでにカルッツェは腰に差している剣を抜き払っていた。

「お待ちください殿下！　お留まり下さい！」

「二人を捕らえよと申しておる！　主命に逆らうのかぁ！」

驚くほどの大音声でカルッツェは喚き散らした。長く仕えてきたブトも初めて見る姿だった。そのあまりの変貌ぶりに、彼の体は震えた。

「し、承知しました。二人を捕らえます。ただ、恐れ入りますが、今、ここには人数が少のうございます。今すぐ人をやりまして、手の者を呼びます。それまではどうぞ、おとどまり下さいませ」

「ならば今ここで二人の首を刎ねてくれる」

「殿下！」

「ハハハハハ」

突然笑い声が響き渡った。言うまでもなくサンジョの声だ。彼女は侮蔑の表情を浮かべながらカルッツェらに視線を向けている。

「妾を斬るとな？　面白い、斬ってみなされ！　妾を斬れば父上が、ダオラ帝国が黙ってはおりませぬぞ！　妾を斬れば必ず父上がこの国に侵攻するでありましょうぞ！　そうなればこの国は亡ぶ。あなた様も王太子などとふんぞり返ってはいられなくなりますぞ！」

そこまで言うとサンジョは立ち上がった。胸元は隠しているが、下腹部が丸見えになっている。濃い陰毛がびっしりと張り付いている。そのあまりの光景に、ブトは思わず視線を逸らせた。

「大体、己が立場をわきまえぬからこうなるのじゃ！　私はガノブの娘じゃ！　その私を蔑ろにするから、このようなことになるのじゃ！　このようになったのはすべてあなたのせいなのじゃ！　罰を受けるべきはあなたじゃ！　私の前に膝をついて詫び言を言うがいい！」

カルッツェが音もなくサンジョに近づいていった……。

第八百五十八話　重ねて四つ

ダオラ帝国皇帝、ガノブの書簡を持つ手が震えていた。見る見るうちに彼の顔色が蒼白になっていく。強き皇帝がこのような姿を見せるのは極めて珍しい。いや、自身の父が崩御したときも、母が薨去したときも、涙一つ見せずいつものように振舞った彼が、家来たちの前で、このように明らかに狼狽えた姿を見せるのは、初めてであると言えた。

彼の前には一人の男が、頭を地べたにこすりつけるようにして平伏している。そして男は泣いていた。必死で涙をこらえていたが、こらえきれずに折に触れて嗚咽を漏らしていた。

皇帝ガノブは、その手紙の内容を信じることができなかった。それは、愛娘サンジョの死を伝えるもので、しかもそれは、目を覆う程の残酷な死に様だった。

サンジョは何と、生きたまま剣の試し切りにされていた。ガノブに送られたその書簡には、サンジョの死に様が詳細に書かれていた。

サンジョは、夫である王太子・カルッツェの近習と不義の関係となり、夫・カルッツェ自らの手で処刑されていた。ただ、その処刑方法が残酷極まるものだった。

サンジョは密通の相手と共に全裸に剝かれ、庭先に引き出されたのだと言う。そして、大きな台に二人は重ねられるようにして仰向けに寝かされて縛られた。その二人にカルッツェは剣を抜いて一刀両断したのだと書かれてあった。しかも、斬った場所が首でもなく胴

でもなく胸の部分だった。これは、余程剣の腕があり、よく切れる剣でなければなし得ないことだった。

多くの戦場で人を斬ってきたガノブにはわかる。カルッツェという男は、武人としてかなり修練を積んだということが。そして、剣の腕前も超一流であるということが。愛娘の死で狼狽えながらも、彼はそうした人の能力を把握する冷静さは失っていなかった。

二人の人間を二つ重ねて斬るだけでも相当の剣の腕が必要なのだ。しかも、そこいらのなまくら刀では重ねて四つにはできず、一人を両断するのがやっとのことだ。カルッツェはさらに、胸の部分を一刀両断したとあった。胸には肋骨がある。その骨は、背骨ほどはないにしても、それなりの太さを持っている。それらを切り裂き、両断したのだ。恐るべき腕前と言ってよかった。ガノブでさえ、宝物庫に眠る宝剣をもってしても、そんな芸当をやってのける自信はなかった。

庭に引き出されたサンジョは、見苦しいほどに取り乱し、まるで気が狂れているかの如く泣き叫んだと書かれている。一方で密通の相手は粛々と刑に服したとも書かれてあった。恐らくこれはかなりの誇張が含まれているとガノブは見た。むしろ、取り乱したのは相手の男なのではないか。娘・サンジョは自分に似て気の強い性格だ。もし、自分が同じ立場であったならば、堂々と刑に服すだろう。斬られる瞬間まで、笑みを浮かべていることだろう。おそらく娘も、そんな死を迎えたのではないか……。

◆　◆　◆

ガノブの想像は的を射ていた。実際、死に臨んだサンジョは堂々としていた。この世に一片の未練もないと言わんばかりの様子だった。

そして、剣を構えたカルッツェに視線を向けると、薄ら笑いすら浮かべた程であった。

彼女の左の頬には青い痣があった。それは捕らえられる際に、カルッツェにつけられたものだった。彼女の白い顔に浮かび上がったその青い痣は、まるで蝶のような形となっていて、それが見方によっては、一つの化粧のようにも見えた。

気の狂れたように泣き叫んでいたのは男の方であり、彼は裸に剥かれた瞬間から腰を抜かし、その場に立っていることができなかった。両脇を兵士に抱えられながら庭先に引き出されると、彼は号泣し、母上、母上と何度も叫んだ。

哀れな光景だった。これまで忠義一筋に仕えてきた男だった。だが、サンジョの脅迫にも似た誘惑に逃れることができなかった。同僚たちは、色にふけったばっかりにという者もある一方で、何の悪魔に魅入られたのだと言って嘆き悲しむ者も多かった。

悪いのはすべてあの奥方の悋気のせいであるというのが、近習たちの一致した意見だった。とはいえ、不義密通は許される罪ではない。王太子殿下の正妃と関係を持った事実は、死を持って償うしかなかった。だが、せめて彼には穏やかな死をという皆の希望はついに容れられなかった。

カルッツェは赤い顔をしながら、はあはあと苦しそうな呼吸をしていた。それは怒りに打ち震えているようであったが、彼の体調を知る者たちは、それが高熱のせいであることを知っていた。

いよいよ刑が執行される段階になり、カルッツェが静かに剣を抜いた。そのとき、側に控えていた近習のブトが、小さな声で彼に進言

した。

「ご覧の通り、二人をこのように縛りましたが……」

「が？」

「もう、このくらいでよいかと愚考いたします。周囲の目もございます。もし、このまま殿下が二人をお斬り遊ばしましたら、ダオラ帝国は黙ってはいないでしょう。もう、お妃さまは十分な罰を受けたかと存じます。二人には何卒、名誉ある死を賜りたく、お願い申し上げます」

「ならぬ」

「殿下……」

「ダオラ帝国には、この女の死を詳細に伝えてやるのだ。泣き叫び、取り乱し、見るも醜い死に様であったとな」

「ホホホホホ」

サンジョが笑い声を上げた。それは侮蔑の笑い声であることは、誰の目にもよくわかった。

「そのようなことを父上に送られても、父上はお信じにはなりませぬ。ですが、父上にはどうぞ書簡をお送り下さいませ。父上でございます。私の父上は、きっと、すべてをわかって下さいます」

サンジョの顔は自信に満ち溢れていた。ダオラ帝国皇帝の娘という矜持は、最後の最後まで折れていなかった。

「さあ、早くお斬りあそばせ。このままでは寒うございます。妾の上に乗る男が冷めとうて、寒くてしかたがございませんわ。さあ、すっぱりとお斬りくださいませ」

そこまで言うとサンジョは真面目な顔になり、さらに言葉を続けた。

「これ以上、恥の上塗りをなさいますな」

「ぬうん！」

その瞬間、サンジョら二人の体は胴から離れていた。実に見事な腕前だった。あまりの腕前に、周囲は静寂包まれていた。カルッツェは二人を切り裂いた剣をじっと眺めていたが、やがてトロンとした目つきになり、恍惚の表情を浮かべた。

「……この剣はよく、斬れるなぁ」

そう呟きながら彼はブルッと体を震わせた。そのあまりの妖鬼さに、周囲は水を打ったように静まり返った。

カルッツェは懐から布を取り出すと、丁寧に剣についた血を拭い、静かにそれを鞘に納めた。そして、周囲を見廻すと、側に控えていたブトに静かな声で命じた。

「サンジョの侍女たちは、奴婢とせよ」

あまりの命令にブトは思わず顔を上げて、カルッツェの顔をまじまじと見た。相変わらず恍惚の表情を浮かべたままで、心ここにあらずといった様子だった。

「奴らを一列に並べるのだ。気に入ったものがあれば、一人金貨一枚で引き取ることを許す。男どもは引っ立てて銀山にでも送るがいい。そこで死ぬまで働かせよ」

「……」

「よいな？」

「……はっ、ははっ」

そう言ってブトは平伏した。……お熱が下がらぬうちは何を申し上げても。彼は心の中でそう呟いていた。そんな命令を実行するつもりはなかったし、それはしてはならぬことだった。彼はすぐにでも王都に戻り、国王に裁可を仰ごうと考えていた。カルッツェがそんな命令を下したことを知った国王はひどく落胆することだろう。そして、小康を得ていた体調も悪化するかもしれない。しかし、それでもこの命令を実行することはできないことであった……。

◆　◆　◆

「軍議を開く。諸将を集めよ」

ダオラ帝国皇帝ガノブが家来たちに向かって命令した。その声は落ち着いており、その眼には冷たい光が差していた……。

第八百五十九話　変装

国王シェングは、カルッツェが妻を殺害したと聞いて驚愕し、落胆した。そして、サンジョの侍女たちを奴婢とせよと命令を下したと聞いて、さらに落ち込んだ。その姿は声をかけるのをためらうほどだった。

「なぜ、その前に余に報告せなんだのだ……」

彼はまるで蚊の鳴くような声で呟いた。だが、王はいつまでもそのショックに浸ることはなかった。やがて彼は立ち上がると、すぐさまサンジョの家来たちを別の場所に移し、カルッツェを王都に呼ぶように命じた。そして、近習を勤めるミブに視線を向けると、国境の防備を強化せよと命じた。

王の周囲には、カルッツェが暴れるなどして手を焼かせるのではないかと懸念する者もあったが、実際の彼は唯々諾々と父の命令に従い、数名の近習を伴って王都にやって来た。

「……息災そうだな」

会うなり王はカルッツェにそう話しかけた。普段と変わらない様子だった。妻と間男を一刀のもとに両断し、妻の家来たちを奴婢とせよ、などと残酷な命令を下したとは思えぬほど、壮健そうに見えたのだ。

およそ二年ぶりに見る息子は、体が一回り大きくなったようにも見えた。色が白く、亡き母にさらに面差しが似てきていた。いわゆる

幼さが消え、色気すら感じる程の見事な青年に成長していた息子を見て、王は思わず顔をほころばせた。

亡くなった長子・ギノブとは正反対の男であると言えた。ギノブは武芸を蛇蝎のごとく嫌って手を付けず、もっぱら後宮に籠って本ばかり読んでいたために猫背となり、そして、目も悪かった。

美形ではあったが、青白く、神経質そうなその顔は、国王シェングが目指す武王とはかけ離れた風貌であった。そして、あろうことか、落馬によって命を失うという失態を犯した。それに比べてカルッツェは、見るからに頑強そうな体躯をしており、顔は白いが、ガッチリと張った顎は意志の強さを感じさせた。これこそが、国王が目指す武王としての風貌であると言えた。

王は今回の一件を残念に思うと言うと、カルッツェに今後はこの王都で養生するようにと命じた。彼はただ、ゆっくりと頭を下げた。

国王シェングは同時に、自ら筆を執ってアガルタ大学学長であるメイリアスと、その夫であるアガルタ王に手紙を書いた。長年、この国に蔓延してきた、自らも苦しめられてきたこの病を何としても根治しなければという思いに駆られていた。これまで頑なに医師や家来たちが勧めてきた他国の技術を導入して本格的に病に向き合ってこなかったことを悔いた。体を鍛えていれば、大抵の病はどうとでもなる――そう考えていた自分の姿勢を心から悔いていた。

王にはわかっていた。自分に残された時間が少ないことを。彼は直感的に、この病をこのまま捨て置けば、国を滅ぼす事態になりかねないことを感じ取っていた。何としても息子を救わねばならない。何としても救いたい……。王はカルッツェの面差しに、若い頃最も愛した女性の姿を見た。カルッツェの姿を見たとき、彼の母が現れ

出て、息子を救ってほしいと言っている気がしてならなかった。

これまで国交のなかったアガルタ。世界最強国と称される国が、このような山の中の国と向き合ってくれるのかは正直、疑問ではあった。だが今の王にはそこにしか縋る方法が思いつかなかったし、それこそが最も効果的な手段であることを直感的に感じていた。彼は一字一字にその思いを込めて書いた。そして、その手紙はメイの心を深く打った。

王が手紙を出してからちょうどひと月後にアガルタから返事が来た。メイリアス直筆の字で、病の根治を手伝いたい。ついては、アガルタ大学からポーセハイを派遣する。その後、自らもタルカト王国に入ると書かれてあった。とても美しい字だった。彼女は文末に、一緒にこの病を根治に導きましょうと書いて、その返書を結んだ。これを見た王はひどく喜び、そのお陰か、臥せがちだったその体調は小康に向かった。彼は体調が悪くなると、折に触れてメイリアスからの手紙を取り出してそれを読んだ。すると不思議なことに体調は回復に向かう。

「この手紙はどんな薬よりもよく効く」

王はそう言って笑った。その様子を見た侍医ケンモは、ぶ然とした表情を浮かべてそっぽを向いた。

ちょうど同じ頃、王の許に一人の使者が現れていた。カモンと名乗る、いかにも一癖も二癖もありそうな、すけべったらしい顔つきをした男が、ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべながら王への面会を願い出ていた。彼は、ダオラ帝国皇帝ガノブからの使者であった。

王の近習たちは、できることならこの男に王を会わせたくはなかっ

た。それは、このカモンという男がこの国の様子を視察しに来ていると同時に、王の様子も伺いに来ていることが明らかだったからだ。しかも彼は、長年にわたってこの国との使者を勤めていて、王の体調の変化も把握していた。もし、王の体調がすぐれないと判断した場合、帝国はこの国に侵攻してくる危険性が高かったからだ。

使者との対面は、宰相などの高官をもって行うべきであるとの家来たちからの意見を、王はきっぱりと拒否した。

「いいのだ。お前たちはそんなことは深く考えなくても、いいのだ」

王はそう言って、自ら使者と対面すると宣言した。

その当日、王は自室で静かに椅子に座っていた。机の上には、大きな鏡が置かれていた。そこには、痩せ衰えた王の顔が浮かんでいた。それはかなり病が進んだ顔であった。その王の前に侍女が化粧道具を持って現れた。女性は、王の顔になにかを塗り、頬の中に綿のようなものを入れた。王の顔はみるみる若返り、元気そうに見えてきた。最後に女性はコップに水を入れ、懐から紙包みを取り出すとそれを広げた。中には黄色の粉が入っていて、それをコップの中に入れて丁寧に混ぜ、王の前に出した。彼は苦虫をかみつぶしたような顔でそれを飲んだ。苦いのう、と誰に言うともなく呟く。その言葉は若々しい響きを持っていた。さらに王はそこで服装を整えた。

以前の王に比較するといくらか痩せたが、病的なほど痩せては見えなかった。王は女性にご苦労であったと声をかけて、自室を出て謁見の間へ足を運んでいった。

実際、王と対面したカモンは、王の声が以前の頃のそれと何ら変わらないことに衝撃を受けていた。さすがにそれを表には出さなかっ

たが、彼はそこで、この国はまだまだ健在であると断じた。それほど王は肌艶もよく、見からに健康そうに見えた。王とカモンとはある間隔を置いて話すから、彼には王の顔が化粧したものであるなどということはわからなかった。

しかも、王が変装をして使者と会っていることを知っている者はごく限られた側近だけだった。変装だけでなく、一時的に声を若くする薬を使っていることを知っている家来は、こうまでして、病気を隠さねばならない王の心中を思って泣いた。

カモンは満足そうな笑みを浮かべると、恭しく一礼して、ゆっくりと口を開いた。

「国王様にはご機嫌も麗しく、何よりとお慶びを申し上げます。先だっては、サンジョ様のご不幸、我が皇帝陛下におかせられましては深い悲しみに包まれておられます。おそらく、カルッツェ様のお嘆きも一方ではありますまい。まずはここに深い哀悼を申し上げます」

そこまで言っておいてから彼は、まるで舐め回すかのように王の周囲の者たちに視線を向けながら、さらに言葉を続けた。

「この度、私が罷り越しましたのは、貴国との関係をさらに強化するためでございます。これは、皇帝陛下たってのご所望でございまして、是非、お受けいただきたく、お願い申し上げる次第でございます」

カモンはそう言うと、真面目な顔つきになり、その視線を国王に向けた。

「皇帝陛下は、引き続き貴国と婚を通じたいと願っておられます。
そこで、サンジョ様の妹に当たられますサミ様を、王太子殿下の正
妃としていただきたく、お願い申し上げます次第でございます……」

第八百六十話　本当の狙い

……食えぬ男だ。国王シェングは心の中でそう呟いていた。彼は目の前に控えるカモンという男の後ろに控えているダオラ帝国皇帝ガノブの心底を読んでいた。

娘を殺されてしまったガノブは無論、平静ではいられなかっただろう。きっと彼はこの国への侵攻を考えたはずだ。しかし、わざわざこうして使者を遣わし、あまつさえ、カルッツェとの婚儀を提案してくるところを見ると、ガノブはこの国を内側から崩しにかかろうとしているのだろう。娘を殺された国、娘を殺した男の許にさらに娘を嫁がせる……。正気の沙汰ではない……。だが、そんな狂気とも言える提案を行うガノブの執念と怨念は生半可なこのではないな……。国王シェングはそんなことを考えていた。彼はそうした思いを顔には出さず、敢えて鷹揚に振舞いながら、使者であるカモンに口を開く。

「して、そのサミ殿は、美人か」

王の言葉が意外であったのか、カモンは一瞬目を見開いたが、すぐに元の表情に戻ると、まるでとろけるような笑みを見せた。

「ええ。皇帝陛下のご姉妹、ご令嬢さま方はどの方も見目麗しいお方ばかりでございます。とりわけサミ様は眉目秀麗、才色兼備のお方でございまして、傾国の美女と言われております」

「なに、傾国？」

「あ。これは、私としたことが」

「よいよい。それ程の美女ならばカルッツェも喜ぼう。その婚儀、前向きに検討する」

「ははっ。ありがたき幸せ」

カモンは恭しく一礼すると、案内されるままに部屋を後にしていった。

この王の決定に家来たちはこぞって反対した。だが王は敢えてこの婚儀を利用して、ダオラ帝国との関わりを有利なものにしようと考えていた。言わば、嫁入りしてくるサミは人質であり、さらには、長い時間をかけてこの国に馴染ませれば、この嫁はダオラ帝国とのよい窓口となる。王は家来を説得すると、後宮に向かい、己が最も信頼する愛妾、トミサの部屋に向かった。

「あら、こんな昼間から部屋にお尋ねになるなんて、悪い王様ですこと」

トミサはそう言って開けっぴろげに笑った。すでに彼女もまた老境に達していて、男と女の交歓はすでになくなっていたが、それでも王は折に触れて彼女の部屋を訪れた。正妃はすでに亡く、長い間その代わりを務めてきたこのトミサは、王にしてみれば長年連れ添った女房も同然の女性であり、この城の中で、彼の好みや体調を最も熟知している者と言えた。彼にとってこの部屋はある意味で、癒しの空間ともなっていたのだ。

彼は愛妾トミサ自ら淹れる紅茶を飲みながら、ぼんやりと窓から見える庭の景色を眺めていた。

「お体の具合はいかがでございます？」

「……何を言うのだ。知っているであろうに」

「ここ最近は、よろしいように見受けられますが」

「うむ。だが、よくはない。色々と頭を悩ませることが多くてな……。とりわけ、息子のことが頭が痛いわい。言うことを聞かぬ」

「そんなことはございませんでしょう。カルッツェ様は国王様を慕っておいでです。先ごろはあのようなお痛ましいことがありましたが、それは病でのこと……。幸い、アガルタから医師を、聖女メイリアス様がおいでになります。きっと、カルッツェ様のお身体もよくなりますわ。それに、国王様のお身体も……」

「余が申しておるのは、その息子のことではないわ」

「どなたのことでございますか」

トミサは不思議そうな表情を浮かべる。王はニコリと笑うと、右手で自らの股間を指さした。

「ムスコが、言うことを聞かぬのだ」

「まあ」

トミサは呆れたような表情を浮かべる。その様子を見て王はフフフと寂しそうな笑みを浮かべた。

このトミサとは、若い頃は激しい交情があった。病のせいもあったが、まるで火のごとく燃え上がるような交歓があった。折に触れて性急に求めてくる王に、トミサは苦言を呈したほどだ。国王様はまるで夕立のように私の許にやって来て、風のようにいなくなってしまう……。私は寂しゅうございます、と。王が自らの体調に異変に気付いたのは、彼女のその言葉がきっかけであった。彼は言葉には出さないが、このトミサという女性に恩義を感じており、命の恩人であると思っていた。

「そこで、頼みがあるのだ」

「はい」

王の雰囲気が変わったことを察したトミサが、彼の真向かいに座り、真っすぐな視線を向ける。彼は大きなため息をつくと、意を決したように口を開いた。

「ダオラ帝国が、カルッツェとの新たな婚姻を申し出てきた。余はそれを受けようと思う。何よりカルッツェの体調が心配だが、それはアガルタに任せるとして、そなたにやってもらいたいことがある。その嫁いでくる娘を、我が国の女性として取り込んでもらいたい」

トミサは少し俯いて、何かを考える素振りを見せたが、やがて再び顔を上げると、もう一度、王に視線を向けた。

「承知しました。お任せください」

「……すまぬな。本来ならば、楽隠居を、おだやかな余生を過ごさせたかったのだがな」

「何を仰います。何もせずにただぼんやりと時を過ごすなど、私の性に合いませんわ。身に添わぬ大役ではございますが、大いにやりがいのある仕事でございます。私は嬉しゅうございますわ」

王とトミサは、まるで長年の友人のような笑みを交わし合った。

◆　◆　◆

それから数日後、ダオラ帝国皇帝ガノブは、娘のサミの部屋を訪れていた。

「よいな、サミ」

「はい、父上様」

サミはそう言って頷いた。その双眸には深い知性が見て取れた。その様子を見て、ガノブは満足そうに頷く。

「カルッツェが王太子でなければ、我はかの国に軍勢を向けたであろう。だが、今の奴は王太子。いずれは、いや、近いうちに奴はかの国の王となる身だ。カモンはシェングが壮健であると報告していたが、あ奴の目は節穴だ。シェングの命は持ってあと一年であると我は見ている。シェングが生きている間は大人しゅうしておるがよい。そなたが真価を発揮するのは、カルッツェが王位を継ぎ、皇后となってからぞ」

ガノブはそう言うと、娘サミの後ろに控えている女官たちに視線を向けた。

「そなたたちもよく聞きおけ。サミが皇后となった暁には、湯水の

ごとくタルカトの金を使いまくるのじゃ。考えられうる限りの贅を尽くせ。そうして、タルカトの経済を破滅に追い込むのじゃ。そうしておいて、いよいよタルカトの経済が立ち行かなくなったそのとき、我らがかの国を併呑にかかる。よいな。そなたらの役目はかの国を内側から崩壊させることだ」

「承知しました。陛下の御意、必ず成し遂げて御覧に入れます」

居並ぶ女官の中から一人の女性が一歩前に出て口を開く。カワバという、サミが幼いころから彼女を養育してきた女官の一人だ。ガノブはその彼女に視線を向けて、大きく頷いた。

「うむ。ありとあらゆる方法を使って、かの国を内部から崩壊させるのだ。そのために手段は選ぶな」

「ははっ」

「安心せよ。あと五年もすればあの国は我が国のものとなっておろう。その際はそなたらに十分な恩賞を取らせる。この国に帰りたい者は帰ってもよい。また、かの国が気に入った者は、そこに残ることも差し許す」

「父上、まだ決まっておりませぬ」

「フフフ。そうじゃな」

サミの鷹揚な言葉に、ガノブは思わず笑みを浮かべる。だが、すぐに元の表情に戻ると、まるで内輪に聞かせるかのように、声のトーンを少し落としながら口を開く。

「これは、先に無惨な死を遂げたサンジョの弔い合戦ぞ。我が娘をあのような死に追いやったカルッツェらは絶対に許さん。すべてはそなたらにかかっておる。頼んだぞ。また、何か危険に晒されるようなことがあれば、すぐに報告するのだ。そのときは、我自ら軍を率いてかの国に向かう」

ガノブの言葉に、そこに居並んだ全員が静かに頭を下げた……。

第八百六十一話　見えない流れ

皇帝ガノブの額に青筋が浮かび上がっていた。眉間には深い皺が刻まれている。彼は、書簡を読みながらかすかに震えていた。

「ええい！」

彼は苛立ちを隠そうともせずに書簡を放り投げた。侍従を勤める男が慌ててそれを拾い上げ、それに目を通した。

「……何と、アガルタが！」

ガノブは苦虫をかみつぶしたかのような表情を浮かべると、どかりと執務室の椅子に腰を掛けた。

「小癪なマネを……」

「へ……陛下、タルカトはアガルタと誼を結んだのでございましょうか」

「わからん。しかしどうも解せぬ。タルカトとアガルタはつながりはないはずだが」

ガノブは首をひねった。これから侵攻しようとしている国と、一度煮え湯を飲まされている国同士が交流を始めようとしているのは確かなことだ。敵同士が手を結ぶというのは厄介なことだ。しかもそれがあの、アガルタというのがさらに話をややこしくしていた。

書簡にはアガルタ王リノスの妃にして、聖女メイリアスがタルカト王シェングの許に向かうと書かれてあった。確かに、シェングの体調は以前からすぐれないということはガノブ自身も把握していて、そのシェングが世界でも指折りの医療技術を誇るアガルタに診察を依頼するのは自然なことであるし、その行動自体は理解できるものであった。だが、聖女メイリアス自らタルカトに赴くとなると話は違ってくる。そこには、タルカトとアガルタに何らかの強固な同盟関係があると見てよかった。

だが、とガノブは思考を改める。聖女メイリアスがタルカトに赴くと言っても、それは未来永劫のことではない。おそらく診察が終わればメイリアスは帰国するはずだ。聖女の力をもってしても、シェングの病を完治させることはできないであろうし、彼の命が尽きるのが少しは永らえることができるかもしれないが、とはいえ、数年内に彼はこの世から退場するはずだ。娘サミを使って、タルカトを内部崩壊に導くことは十分に可能だと考えた。彼は侍従らに引き続きタルカトの動きを見張れと命じて、皆を下がらせた。

「聖女メイリアス、か」

未だ会ったことはないが、その容姿を褒める者は多い。それだけでなく、彼女の性格が、まるで絵物語に出てくるような慈愛に満ちているともっぱらの評判である女性だった。

英雄、色を好む。その言葉通り、このガノブも女性関係は奔放だった。彼はぼんやりと天を仰ぎながら、まだ見ぬ聖女の姿を想像した。

「いつの日か、我の褥に呼べぬものか」

思わずそんな言葉を呟いてしまい、ハッと体を震わせる。彼女はア

ガルタ王の妻である。その彼女に手を出すことは、アガルタだけでなく世界中の国々を敵に回すことになる。さすがの彼をもってしても、そんな危険なゲームに乗ることはできない相談だった。

「だが、聖女自身が我に惚れて、自ら我の胸に飛び込んでくるならば……」

そこまで言うとガノブはフフフと自虐的な笑い声を漏らした。その可能性が限りなく低いのは誰よりも自分自身がよくわかっていることだった。彼はカラカラと笑い声を上げながら、ゆっくりと立ち上がった。

◆◆◆

「では、行ってまいります」

ちょうどその頃、アガルタ大学の学長室では、メイの前で一人のポーセハイが頭を下げていた。ローニだ。彼女は不機嫌さを隠そうともせずに、プリプリと怒りをあらわにしていた。

「お手数をお掛けして申し訳ありません。今夜の夕食には、ご主人様にお願いして、たくさんからあげを作ってもらいますから……」

「いいえ、メイ様が気になさることではありません。悪いのはチワンさんです。まったく、あの野郎……」

ローニが怒るのには理由があった。当初の予定では、タルカト王国まではチワンとローニが交互に旅をするというものだった。だが、直前になってチワンはローニに一人でタルカト王国まで旅をするようにと命令したのだった。これでは夫の世話も満足にできないとロ

ーニは愚痴を吐く。

しかし実際は、ローニがチワンが命じた実験を忘れてしまい、チワンの実験が一からやり直すことになってしまい、それで激怒したチワンがローニに一人での旅を命じたのだった。チワンとしても、とりかかっている実験は、メイが根治を目指している病の抗体を作る実験であり、タダでさえ遅れがちな実験をこれ以上遅れさせることができないという事情があった。ローニ自身は夫であるドーキの世話が云々と不満を言っているが、ドーキ自身は家事万般は得意であり、全く問題はないと言ってよかった。むしろ二人の家ではドーキがローニの面倒を見ていると言ってよく、そうした事情を知っているメイはただ、苦笑いを浮かべながら彼女を見送る他はなかった。

「さて、と」

ローニを見送ったメイは、机の上に積まれた本に手を伸ばす。彼女はタルカト王国に赴くと決めてから、その地域で蔓延している病について書かれた文献を片っ端から乱読していた。

彼女は自然に身に付けた速読のスキルをもって、次から次へとページをめくっていく。端から見ればただページをめくっているだけに見えるが、彼女はちゃんとそこに書かれている内容を把握していた。

彼女はまた、驚異的な集中力を持っていた。一旦本に夢中になると、数時間はその作業を続ける。以前は気がついたら深夜になっていることも珍しくなかったが、セルロイトが秘書として働き始めてから、そうしたことはなくなっていた。

セルロイトは折を見て立ち上がり、お茶を入れる。そして、敢えてカップの音をさせながらメイの傍に置く。それはちょうど彼女が一

冊の本、一つの資料を読み終えタイミングであり、その間は絶妙だった。

メイはお茶を飲みながら時間を確認する。あ、いけない、いけない。もうこんな時間が経ってしまった。あと一時間でこの作業を止めて、お屋敷に帰らないと、と思いながら再び本に手を伸ばす。だが、本を読んでいると徐々にその決意は忘れらされていく。そうすると、ちょうど一時間後にセルロイトが再びお茶を傍らに置いてくれるのだった。

「もうこんな時間！」

「日が、短く、なってきています」

「そうですね……」

メイがお茶を飲んでいる間に、セルロイトは彼女が読み終えた本や資料をテキパキと片付けていく。恐るべきことに、メイが用意した膨大な資料がどこに保管されているのかを、この女性はすべて把握していた。

「それでは、帰りましょうかセルロイトさん」

「そう、です、ね。お疲れさまでした」

そう言いながら二人は部屋を出た。

これまで読んだ膨大な資料からメイは、タルカト王とその子息が苦しんでいる病は、ある特定の条件を持つ者だけが罹患し、それは筋肉の含有量であることを突き止めていた。男性は筋肉の含有量に比

例して病に罹患する可能性が高まり、女性はそれに反比例して罹患するというところまで突き止めていた。

病が蔓延しているのが山間部に限定されていることから、その原因はカビか何かではないかと彼女は予想していたが、それが何であるのか、しかも、その仮説自体が正しいのかどうかすら、今の彼女にはわからなかった。

「おかあさん、お帰りなさい」

声をかけられて我に帰る。見とそこにはエリルとアリリアがいた。ここ最近ますますリコ様にエリルは似てきた。この子は将来きっと、すごい美人になるだろう。そんなことを考えながら彼女はニッコリと笑みを浮かべる。

「ただいま帰りました」

そのときふと、今夜はローニが来るのだということを思い出した。彼女は大量のから揚げを作ってもらうことをお願いしようと、屋敷に入っていった……。

第八百六十二話　タルカトまでの道のり

ローニはおよそひと月かけて、タルカト王国までの旅をつづけた。

何と言っても女性の足だ。そうそう距離は稼げるものではなかった。一日およそ数キロの進捗。そして、山道に差し掛かると、その距離は極端に減じた。彼女は夜になるとリノスの屋敷に帰って来て、夕食を取りながらやれ足が痛いだの、足の裏にマメができただのと言って、疲れを訴えた。それを聞いたリノスは、食事だけでなく、屋敷の風呂を使うことを許可すると、彼女は遠慮しながらもそれを受け入れた。

さすがにそれは夫であるドーキが止めたが、彼女は疲れを取って一日でも早くタルカトに着きたいのだと言って、そのわがままを押し通した。

タルカト王国に向かうのであれば、何もローニだけを歩かせることもなく、男のポーセハイを向かわせて距離を稼げばよいのではとリノスは懸念を示したが、チワンは頑として彼の意見を受け入れなかった。

チワンもドーキも知っていた。ローニの旅がそれ程の苦痛を伴いものではない、ということを。

ポーセハイは念話を使って離れていてもコミュニケーションを取ることができる。そして、その魔力を察知することで転移することもできる種族だ。その、魔力を捉えるときに、大体ではあるが、相手の考えていることがある程度把握できる能力も持っていた。それは、

ポーセハイによって異なるが、チワンとドーキはその感性が優れていた。とりわけ、二人とローニの間は勝手知ったる仲であり、さらには、ローニ自身が嘘をつくのが下手であるために、彼女の今回の旅路における状況が、二人には手にとるようにわかった。それに、この二人、とりわけ、夫であるドーキは逃れぬ証拠を握っていた。ローニが太ってきたからだ。

一日数十キロを歩いて移動し、クタクタになって帰って来ているのに、太るということは考えられなかった。彼女は貫頭衣のような服を着ていて、今のところ上手にそれをごまかしてはいるが、以前に比べてお腹がポッコリと出てきていた。顔も少しふっくらしてきている。メイ様などは、彼女の妊娠を疑ったが、それではないことを知っているドーキは苦笑いを浮かべるしかなかった。

一方でチワンは、タルカト王国に入る前に、この地域で蔓延する疫病の原因と対策をある程度完成させたかった。そのために行ってきた実験をやり直すためには、どうしても時間が必要であった。

彼はすでに、タルカト王・シェングの侍医を勤めるケンモが記した、疫病に関する考察書を熟読し、ある程度の予測を付けていた。特効薬となる薬も、ないではなかった。

だが、その薬は毒性が強く、強い副作用が懸念されていた。シェング王の体調を考えたとき、それを服用してしまうと、王の命が持たない可能性が高かった。

この疫病の最も厄介な点は、薬に対する強い耐性がある点であるとチワンは断じていた。罹患当初は薬を服用すればある程度は回復する。だが、しばらく経てば再び症状が現れる。そうやってこの病は長い時間をかけて体を蝕んでいく。最も厄介な相手の一つであると

言ってよかった。

王の侍医ケンモは、王の体調を慮りながら、薬と魔法、そして安静と栄養を十分に取る方法を取り入れていた。これは今のところ、この病における最も効果的なアプローチであると言ってよかった。だがチワンは、自らが開発した特効薬にその可能性を見ていた。

……何とかこの強い毒性を押さえられはしないか。そうすれば、人体への負担も減るし、治療期間も短縮できるのだが。

チワンはそんなことを考えながら実験を繰り返していた。彼の特効薬は毒性が強いだけでなく、その病の根治に至るまでおよそ一年の服用期間が必要だった。これでは、年老いた者には使用できない。

メイ様は、王太子カルッツェだけでなく、シェング王も救いたいと繰り返していた。その彼女の前でチワンはお任せ下さいと大見えを切っていた。彼としても、ここは何としても失敗できない局面に来ていた。

彼は大きなため息をつくと、傍らにある本を手に取った。ふと、時計を見た。針は六時を指していた。それが朝なのか夜なのか、今の彼にはそれすらわからなかった。

◆　◆　◆

その日、タルカト王国の王都、コルフでは家来たちが大わらわで作業に追われていた。その数日前、ポーセハイからメイリアス王妃がポーセハイを伴ってコルフにやって来ると告げていた。

タルカト側は、使者を国境に派遣して、ポーセハイ――ローニ――

の到着をずっと待っていた。それだけでなく、周辺国にも人を派遣して、彼女が寄りそうな町で待ち構えていた。案の定、彼女はそこに現れ、タルカト側から大いにもてなしを受けた。そして、馬や馬車で移動し、宿はその街で一番のところに案内していた。タルカト側は綿密に距離を計算し、移動は日中に限り、少なくとも夕刻には宿に付けるように手配を完了していた。ローニは宿に入ると、使者にすぐに寝ると言って部屋に入り。そこで一休みすると、転移を使って帝都の屋敷に帰っていた。そして朝になると、すぐさま宿に転移して、そこで出される最高の朝食を賞味して舌鼓を打つ。それが終わると馬車に乗って移動し、次の町へ。昼食のために別の町に入って休憩し、それが終わると出発する……。ローニの体形に変化が出るのは、当たり前のことと言えた。

タルカト側は、ローニの口からメイリアス王妃が来ると聞いて狂喜したが、果たしてどうやって彼女がここまで来るのかと訝った。ローニの口から、ポーセハイには転移能力があり、彼女もその同胞らと一緒に転移してくるのだ。しかもそれは、自分の魔力を頼りに転移してくるのだと聞いて、彼らはさらにローニを厚くもてなしたのだった。

すべての準備が整い、玉座に腰かけたタルカト王・シェングが、ゆっくりと頷く。彼の隣にはもう一つの玉座が用意されていて、そこには、王太子・カルッツェが座っていた。顔色もよく、生気が満ち溢れているように見える。その前にローニは立っていた。

豪華な部屋だった。戴冠式が行われる部屋で、特別な時に限り利用される部屋だった。ここはつい先日、内外の諸国に向けて、カルッツェの立太子の儀式を行ったばかりだった。

部屋の中には、着飾った王族たちが犇めいていた。皆、聖女・メイ

リアスの姿を一目見ようと集まってきていたのだった。

ローニは目を閉じながれ天を仰いでいた。微動だにしない彼女のその姿勢が、何とも神々しいものに見えてきた。人々の話し声が自然と止み、部屋は静寂に包まれた。

「間もなく参られます」

ローニの一言で、部屋が緊張に包まれる。しばらくすると、ローニの後ろの景色がゆっくりとゆがみ出した。

一体何が起ころうとしているのか……。初めて見る光景に、人々は固唾を飲んでその状況を注視している。

やがて、空間の歪みが大きくなると、その中から人影が見えていた。徐々にその形が露わになってくる。

人々から声にならない声が上がった。そこには数名のポーセハイたちが並んでいた。

黒い肌をしたウサギ獣人。獣人というより、ウサギそのものだ。全員に長い耳が備わっている。一見するとローニと同じように見えるが、よく見ると、ひとりひとりの顔が違う。

ポーセハイは八名いた。背の高い、頑強な体つきをしている者が多いように思われた。

やがてその中で一番小柄なポーセハイが口を開く。全員が彼の言葉に耳を傾けた。

「私は、ポーセハイの族長を勤めます、チワンと申します。どうぞよろしくお願い申し上げます」

その言葉を聞いて、タルカト王が大きく頷いた……。

第八百六十三話　聖女・メイリアス

「お……おお。遠路よくぞお越し下された。タルカト王国国王、タルカト・ハル・シェングです。どうぞよしなに」

静寂に包まれた部屋に王の声が響き渡る。だが、誰も返答する者がいない。部屋は再び静寂に包まれた。王はその沈黙に耐えられないとばかりに、キョロキョロと周囲を見廻していたが、やがて不思議そうに口を開いた。

「メイリアス王妃がおいでになると聞いていたが……」

「こちらにおいでです」

チワンの言葉と供に、一団となって固まっていたポーセハイたちが離れた。そのちょうど真ん中に、一人の女性が控えていた。彼女はドレスのような白い衣装を着ていた。黒で統一されたポーセハイたちの中にあって、その姿は実に目立つものだった。周囲に集まった者たちは、呆気にとられながらその光景を見守った。

言葉が見つからない、というのが彼らの共通した心境だった。「美しい」という言葉では表現しきれない神々しさを、その女性は纏っていた。

白い衣装の影響でもあるだろうが、女性の肌が抜けるように白かった。そしてその顔は一目見て、人の好さを感じる人懐っこさがあった。その一方で、その双眸には深い知性が宿っていた。人々はメイリアスの姿を見て、この女性であればこの国に蔓延する病を何とか

してくれるであろうという希望を感じたと同時に、この女性の前ではいかなる嘘も詭弁も通じないであろうという緊張感も感じた。

また、同時に男たちはやはり、メイリアスのその体つきに目が釘付けになった。彼女が纏う衣装は、少しゆったりめに作られていたが、それでもその、大きく形のよい乳房と尻は、何とも言えぬ色気を感じさせた。一目見て抜群の知性を感じさせる風貌と、隠しても隠しきれぬ色気……。男たちは声にならぬ嘆息を漏らした。

そんな周囲の様子を気にする様子もなく、メイリアスは王の前に進み出ると、スッと膝を折って、貴族式の挨拶を行った。

「タルカト王様にあらせられましては、ご機嫌も麗しく、何よりとお慶びを申し上げます。アガルタ王、バーサーム・ダーケ・リノスに仕えます、メイリアスと申します。非才なる身ではございますが、貴国に蔓延する病を根絶するべく、全力を尽くしたく存じます。以後、よろしくお願い申し上げます」

そう言うと彼女は王に対して深々と一礼すると、ニコリと微笑んだ。そのこぼれるような愛嬌に王はまるで呆けたように、呆然と彼女の様子を眺め続けていた。

「……国王様、お言葉を」

近習に促されて王はやっと我に帰り、カラカラと笑い声を上げた。

「これは余としたことが……。メイリアス殿に見惚れておったわ。いや、失礼した。メイリアス殿、チワン殿をはじめとしたポーセハイの皆々。よくぞ我が国にお越し下された。今、我が国では長きにわたって疫病に苦しめられておる。その病を根絶するのは、我が勤

めと思ってこれまでやって参ったが、恥ずかしながら万策尽くの状態である。この上は、ここにおいでの方々に縋るより外はない。不足があれば遠慮なく申し出て欲しい。我らはこの病がこの世から消えるまで、メイリアス殿たちへの助力を惜しまぬつもりだ」

「ありがたきお言葉、痛み入ります」

王の言葉にチワンが答える。その彼にメイリアスは小さな声で何やら呟いた。

「メイ様……。いや、メイリアス王妃はすぐにでも研究に入りたいと言っておいでですが……」

「なに、今すぐとな？　これは……何とも頼もしい。よかろう。それでは、研究室に案内させよう。そこにおいでのローニ殿に申しつけられた通りのものを揃えておいた。遠慮なく使ってもらいたい」

王の言葉にメイは嬉しそうな表情を浮かべ、彼に向かって深々と一礼した。

「その前に、我が国の主だったものを紹介しておこう。余の隣に控えるのが、王太子たる倅、カルッツェである。そして、そこに控えるのが宰相のミルンブである。その隣に控えるのが、我が侍医を勤めるケンモである。ケンモは長きにわたってこの病を研究しておる。皆のよい参考になるであろう」

「ハッ。ケンモ様がお書きになられた本はすべて読みました。実に理路整然と、これまでの研究が記されておりました。私も大いに参考にしている次第です」

チワンの言葉を聞いて、ケンモは心から嬉しそうな表情を浮かべた。周囲の者たちからは腕の悪い医師であると陰口を叩かれ、王からもその能力を疑われたことすらあった。それでも王の病を癒そうと取り組んできた彼は、チワンの一言でこれまでの苦労がすべて報われたような気がしていた。この瞬間、ケンモは全力を挙げてメイリアスたちを支援しようと決意した。

王は近習に命じて、メイリアスたちを研究室に案内させた。一行が去ると、王は心から安心したような穏やかな表情を浮かべた。

「……これは余の直感だが、あの者たちはきっと、この病を根治に導くであろう。余の判断は間違ってはおらなんだな」

彼は隣に控えるカルッツェに優し気な眼差しを向けた。それを受けてカルッツェは、ゆっくりと父に向けて一礼した。

カルッツェは心の中で、アガルタ王は羨ましいな、と呟いていた。あれほどの女性を夜な夜な褥に侍らせることができるのだ。男として、これほどの冥利はないと考えていた。彼もまた、他の男たちとご多分に漏れず、メイリアスの豊満な肉体に思わず目を奪われていた。だが彼はそのメイリアスに対して欲望を向けようとは思わなかった。だが、男として、ああした優しさと知性を兼ね備えた女性を傍に置きたいという希望を強くしていた。

「いや、噂以上のお方でございましたな！　まさに聖女という名にふさわしい」

突然男の大声が耳に入った。口を開いているのは王弟・ブカドだった。彼は兄王に視線を向けると、いたずらっぽい表情を浮かべた。

「あれほどの女性を見てしまったのだ。兄上の干物も泳ぎ出そうというものだ」

「何を言うか！　余とてまだ老い朽ちたわけではないぞ！」

そう言って二人は笑い合った。それに釣られて、集まった貴族たちも笑い声を上げた。これまで緊張していた部屋の中が一気に緩んでいく。皆の心の中に、きっと国王様も王太子殿下もこの病から回復される。この国は安泰であるという気配が漂っていた。

「ああ。言い忘れておった。誰ぞ、メイリアス殿の許へ参り、今宵、メイリアス殿たちを歓迎する宴を催したいと伝えてまいれ。メイリアス殿たちの姿を見れば、他の者たちも安心しよう。……そうじゃ。余はアガルタ王に礼の手紙を書かねばならぬ」

「兄上、それは病が癒えてからでも遅くはないでしょう」

「それもそうじゃな」

兄弟は再び呵々大笑した。これまでどちらかというと沈みがちで、眉間に皺を寄せた表情を浮かべていた国王が、これだけの笑顔を見せるのは珍しいことと言えた。そのお陰もあっては、彼の顔色は数時間前に比べて格段に良くなっているように見えた。

「……申し、上げます」

家来の一人が王の許に足早にやって来て片膝をつき、遠慮がちに口を開いた。その様子を王は訝った。

「どうした。メイリアス殿たちに何ぞあったか」

「いっ、いえ……。あの……城門の前に……」

「城門の前に何があった。はっきりと申すのだ」

「ハッ。ダオラ帝国皇帝ガノブ様のご息女を名乗る者が参っております。カルッツェ様……王太子殿下の妻になるのだと申しております。いかが取り計らいましょうか」

「うん？」

予想もしていなかった言葉に、王は鳩が豆鉄砲を食ったような表情を浮かべた。その様子を見たカルッツェは、静かに立ち上がった……。

第八百六十四話　押しかけ花嫁

その動きにいち早く気がついたのは、カルッツェの近習を勤めるブトだった。彼は素早く主君の許に近づくと、小さな声で呟いた。

「殿下、どちらへ」

「……知れたことだ。城門に向かう」

「何をなされるおつもりですか」

「ガノブの娘を名乗る者を検分してくれん」

「お待ちくださいませ。おとどまり下さいませ」

ブトが片膝をつき、深々と頭を下げる。そのただならぬ様子に、カルッツェはゆっくりと玉座に腰を下ろした。その様子をシェング王は満足そうに頷いている。

「おそらく、城門におるのはガノブ殿のご息女に間違いはなかろう。すぐに城内にお通しするのだ。姫はどれほどの供を連れておる。……なに、一人？　これは……父君に似た豪儀な姫じゃな。フハハハハ」

王はそう言って豪快に笑ったが、カルッツェは浮かぬ顔をした。

「私は……ガノブに似た女性はもう、こりごりでございます」

「まあ、そう言うなカルッツェ。モノは考えようだ。新しく迎える妻は言わばかの国からの人質だ。お前が気に入らなければ、きれいに飾っておけばよいのだ」

「お言葉ですが父上、この話は間違いなくガノブの策略があるかと存じます」

「ほう、お前にもそう見えていたか」

「はい」

「その通りだ。おそらくガノブは娘を使って我が国を内部から切り崩そうとしているに違いない。どのような策を弄しているのかはまだわからぬが……。もしかすると、カルッツェ、そなたとの間にできた子を取り込み、その子供を即位させれば、我が国は自ずとダオラのものとなろうな」

「そ……そのような……」

「ガノブという男はそこまでやる男だ。ガノブを甘く見るでない。娘を殺された父の恨みは、根深いものと知れ」

「ハハッ」

国王シェングはいつになく厳しい表情を浮かべた。その迫力にカルッツェは思わず頭を下げた。

「そなたに、トミサを付けよう。あの者ならば、そなたとガノブの娘の間を取り持ってくれようぞ」

「トミサ殿を！？」

カルッツェは心の中で唸っていた。そして、トミサの顔を思い出していた。国王シェングに仕える妃だ。妃と言ってもすでに老境に達していて、その風貌は老婆そのものだ。ただ、数十年に及び父に仕え、身の回りの世話をしてきた女性であり、王が最も信頼を置く女性の一人であった。人懐っこい笑顔が特徴の女性で人当たりがよく、彼女と話をすればたちまち打ち解けてしまう不思議な力を持つ女性だった。カルッツェはその女性の笑顔の裏に怜悧な感情を感じていたが、父の妃たちの中ではどちらかというと好感を持っていた女性であった。

「トミサ殿が助力くださるとならば……百人力でございます」

カルッツェの言葉に、王は大きく頷いた。

◆　◆　◆

「……まったく、この国は本当に礼というものを知らぬのでございますな」

プリプリと腹を立てているのはカワバだった。その彼女をサミは仕方がないと言わんばかりの表情で眺めている。

城門の前ではおよそ一時間近くも待たされた。移動を秘匿して行っていたため、当然、タルカトにはその情報を伝えてはいなかったため、その程度の待機時間は理解できる。だが、カワバが驚いたのは、入城し、部屋に通されるなり、サミに今宵の閨の伽を申し付けてきたことだ。さすがにこれはカワバが不快感を示した。

「カルッツェという男は獣でございますね」

彼女は吐き捨てるように呟いた。

「遅かれ早かれそうなるのじゃ。それならば、早いほうがよいではないか」

「姫様！」

「忘れるでない」

サミはそう言ってカワバを窘めた。ここは敵国なのだ。敵国の本城なのだ。この部屋には二人しかいないまでも、二人の言動は監視されている可能性が高かった。サミの忘れるでないという言葉は、父・ガノブが何年かけてでも姉・サンジョの敵を討つのだという言葉を忘れるなという意味を示していた。

妹の目から見ても、姉・サンジョは、父の性格をそのまま移したような、勝気な女性だった。負けず嫌いであったが、それだけに、努力を怠らない姉だった。だが、兄弟たちにはとても優しい女性で、サミはその姉を敬い、愛していた。その姉が無惨にも殺されたのだ。その男を許すことはできないし、その男に復讐できる機会を父から与えられたことは、彼女にとって何よりもうれしいことだった。

だが、到着早々いきなり閨の伽を命じられるとは思っていなかった。彼女らの計画では、こうして二人だけでタルカト王とカルッツェの前に現れて驚かせておいて、あとからやって来る侍女たちと共に、じわじわとこの国を崩壊させるというものだった。

後妻とはいえ、サミはれっきとしたダオラ帝国皇帝ガノブの娘だ。

通常であれば、婚礼の式が終わるまで花嫁と花婿は顔を合わせないのが仕来りだ。だが、到着早々閨の伽を命じてきたということは、タルカト王国は、王太子カルッツェは、サミに対してそうした礼を尽くさないと言っているのだ。それは暗に、サミを側女として扱うと言っているのと同じことであった。

この話を聞いたらば、父上はさらに激怒することだろう、サミは心の中でそう呟いた。これはもしかすると、自分が皇后になる前に、父はこの国に侵攻してくるかもしれないなと心の中で呟いた。

サミとカワバはその後、ほとんどもてなしを受けることはなかった。彼女らはてっきり、ひっきりなしに人がやって来て甲斐甲斐しく世話を焼きながら、ダオラ帝国のことを聞きだそうとしてくるのだと予想していたのだが、それは全く見当はずれだった。そのお陰か、彼女らはのんびりと寛ぐことができた。

聞けばこの城には、アガルタから聖女・メイリアスが来ているのだと言う。それは国王シェングをはじめとする、この国に蔓延する疫病を撲滅するためなのだと、茶菓子を運んできた侍女が目を輝かせて教えてくれた。

サミはそれを聞いて、嫌な予感がしていた。隣に控えるカワバは、無駄なことをするものだと思っているのだろう。鼻で笑っていたが、もし、これが功を奏してシェング王の寿命が延びたとするならば、父が立てた計画が狂うことになる。それは何としても避けねばならなかった。

彼女は一瞬、聖女・メイリアスに何らかの策を仕掛けようと考えたが、すぐにそれを否定した。直感的に彼女はその聖女に手を出すべきではないと考えた。言うまでもなく、聖女メイリアスはアガルタ

王の妃だ。父・ガノブが口を酸っぱくしてアガルタとは戦うべきではないと言っていた言葉が、彼女を押しとどめた。

日が暮れ、二人だけの夕餉が終わると、侍女が現れて湯殿の支度が整いましたと言ってきた。そして、これをお召しくださいと言って、白いネグリジェのような衣装を持ってきた。薄い布でできた衣装だった。乳房や股間の部分は布が当てられているが、それ以外は肌が透けてしまうような衣装だった。カワバはそれを見て絶句していた。

促されるままサミは湯殿に向かった。案内された場所には、大きな樽が二つ置かれていて、一つには熱い湯が、もう一つには冷水が湛えられていた。そして、その前には大きな盥が置かれていた。サミは服を脱ぎ、一糸まとわぬ裸になると、ためらうことなく湯殿に入った。

すぐ後からカワバが、これもまた一糸まとわぬ裸になって入ってきた。彼女は手早く盥に湯と水を入れて温度を整えると、その中にサミを入れた。彼女は布でまるで磨き上げるようにしてサミの体を洗った。いつしか彼女の目からは涙が溢れていた。

「カワバ……」

「できようことなら、姫様には、このような扱いをさせたくはございませんでした……」

その姿を見たサミは、柔和な笑みを浮かべた……。

第八百六十四話　押しかけ花嫁（後書き）

コミカライズ最新話、公開されました。今回は番外編です！　リコ様、メイちゃんがかわいい……。是非チェック下さい！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｃｏｎｔｅｎｔ／００３９００１

あと、コミック7巻が、２０２３年8月２４日に発売決定！　巻末には書下ろしＳＳが収録予定です。
こちらも是非、ご予約下さい！

第八百六十五話　闇の伽

カワバはサミのその笑顔の奥に、一つの覚悟を見た。そのとき彼女は、この姫様は本当にお父上様のことが好きなのだなと思った。

皇帝ガノブには多くの子女がいるが、その中で特に彼に懐いていたのがこのサミだった。幼い頃には父上様と結婚するのだと言って周囲を笑わせていた。恐らく彼女はその大好きな父のために命を投げ出そうとしているのだ。その彼女の覚悟を知らず、涙を流してしまった自分の行為を悔いた。

カワバは再び手を動かしてサミの体を洗う。幼いころは毎日こうして二人で風呂に入り、体を洗ったものだ。水が怖いと言って顔を洗うことができなかった女の子が、今では一人の立派な女性に成長していた。

美しく成長なされた……カワバは心からそう思った。知性を讃えた顔、小柄だが均整の取れた体、決して大きくはないが、形の良い乳房、秘部を守る陰毛はどちらかと言えば薄い。そして、すらりと伸びた長い脚。

我ながらよく、ここまでお育てできたと、カワバは誇らしかった。それだけに、姉・サンジョをむごたらしく殺した男に、この姫様を捧げるのが惜しくてならなかった。

あと数時間もすれば、あの男はこの美しい姫の体を蹂躙することだろう。だが、この姫様の体に触れた瞬間から、あの男はおそらく、この体から離れられなくなるだろう。そして、徐々にこの姫様の色

に染まっていくのだ。

恐らく皇帝陛下の策は成功するに違いない……。カワバは美しい体を磨き上げながら確信していた。だがその一方で、できれば好きな男と添わせてやりたかったという思いにも囚われていた。

この姫様には、ゴツゴツした武人は似合わない。細い、優男がよく似合う。見目麗しい美男子に抱きすくめられながら、小さな声で愛をささやき合う……。そんな未来は訪れはしないが、カワバは口惜しくてならなかった。

そのとき、サミがゆっくりと立ち上がった。カワバは少し熱めの湯を用意して、それを彼女の体にかけて、汚れを落とした。

思わず声を漏らしそうになった。体中がピンク色に上気して、何とも言えぬ色気を放っていた。カワバはその神々しいとも言える体から、思わず目をそらした。

脱衣所に戻ると、いつの間にかサミが着ていた服は片付けられていて、新しい服が用意されていた。カワバは手早くサミの体をタオルで拭き、自分の体を拭いた。

「これは……」

用意された服を検めて、思わずサミは声を漏らした。下着の類は一切なかった。用意されていたのは、厚いタオル地で作られたガウンのようなものだった。カルッツェの好みだろうか、柑橘系の香りが付けられていた。布地が厚いためにその体が透けて見えることはないだろうが、それでも、素肌にそれだけを纏わせるこの国のやり方が、カワバには屈辱的に思えてならなかった。

それでもその服をサミに着せ、自らも衣服を整えた。そして、魔法で暖かい風を起こしてサミの髪を乾かす。そして、櫛で丁寧に髪を整えると、カワバはあらかじめ持っていた、小さな剣を彼女に手渡した。

「これを、褥の下、もしくは枕の下に置かれませ」

「……」

サミは強い力でそれを押し返した。

「寝首を掻くばかりか、仇討ちではないぞ」

その言葉に、カワバは体を震わせたかと思うと、スッと下がり、その場に手をついて頭を下げた。その様子をサミは優し気な眼差しで眺めていた。

やがて二人はバスルームを出ると、そこには一人の侍女が控えていた。彼女はご案内しますと言って立ち上がった。

「……ここは？」

サミが思わず声を漏らす。それもそのはずで、てっきりカルッツェの寝所に案内されると思いきや、女性はサミたちが元居た部屋に案内したのだった。カルッツェがこの部屋に訪れるのかと思っていると、その侍女と入れ替わるように一組の男女が現れた。一人は白髪の老婆だが、その気品は周囲を払うものがあった。そして、その彼女の隣には、武人と思われる男が控えていた。ガッチリとした体躯だが、色が白く、目が潤んでいるように美しい顔立ちだった。

「初めてお目にかかります。私はトミサと申します。国王様より、姫様のお世話をするように申し付けられました。以後宜しくお願い申し上げます。さて、本日罷り越しましたのは、これから宴がはじまりますので、姫様には衣装を改められまして、ご出席くださいますようにお願い申し上げます」

「……宴？」

「はい。本日はアガルタよりメイリアス王妃がお越しになっておられます。そのメイリアス様をお迎えする宴が行われるのでございます。姫様にも是非、御同席いただきたいと国王様からのお話しでございます」

「お待ちくださいませ。トミサ殿……と申されたか。先ほどは姫様に閨の伽を申し付けられたのでは、なかったのか」

「閨の伽？」

トミサと男は顔を見合わせた。そして、男が呵々大笑した。

「ハッハッハ！　それは聞き間違いじゃ。宴に参られよ、と伝えさせたはずだが、それを伽に参られよと聞き間違えられたのだな。ハッハッハ。恐らく侍女が姫の美しさに動揺して、上手く伝えられなかったのであろう。それは、許されたい。いや、許されたい。まだ祝言も挙げぬ女性を伽に召すなど、あり得ぬ話だ」

男はサミとカワバに交互に視線を向けると、さらに言葉を続ける。

「お二人はダオラより長旅をして来られた。加えて、我が国の不手

際により、部屋にお通しするまでにずいぶん時間を取らせてしまった。そのために、疲れを取っていただこうと風呂を用意したまでのことだ。本来は食事を召されてそのままお休みいただこうと思っておったのだが、折よくアガルタより聖女・メイリアス殿がお見えになった。そのために急遽、宴を催すこととなった。そこで姫も宴に招待しようということになったのだ。いや、疲れているのであれば断っていただいて構わぬ。だが、聖女・メイリアスに会える機会はなかなかないことである」

そう言って男は力強い視線を二人に向けた。

そのとき、トミサが手で男を嗜めた。彼女はすぐに衣装を届けさせると言い、疲れているならば無理をなさらずにそのままお休みくださいと言って、男を伴って下がっていった。

「……確かに私は閨の伽、と聞きましたが」

「まあ、よいではないかカワバ。何もないなら、それはそれに越したことはない」

「ハッ。しかし……。あの男は何者なのでしょうか。名も名乗らず、あのような不遜な話し方をするなど……無礼ではございませんか」

「いや、もしかすると、王族の一人かもしれぬ。だが……よいお方のようじゃな」

「……姫様？」

「何でも、ない」

サミはそう言って視線をあらぬ方向に逸らせた。

◆　◆　◆

「喋りすぎでございます。あれほど大人しゅうしておられませと言っておりましたのに……」

トミサはそう言いながらも、優しい眼差しを向けている。男はカラカラと笑い声を上げた。

「私も最初は黙っているつもりであった。だが、あんな話を聞いてしまっては、笑うほかなかったのだ。許してくだされ。それにして、閨の伽などと……。あの姫とその乳母は、割とそそっかしいところがあるのかもしれぬな」

「王太子殿下と、よく似ておいでででは？」

「なに私と？　私はそのような粗忽者ではない」

「ウフフ。私には、お二人はなかなかお似合いに見えまする。少なくとも、サンジョ様より、は」

「そうだな。あの姫はサンジョよりは聞き分けがよさそうだ。だが、油断はならぬ。あれはガノブの娘……。きっと腹の中には毒を持っておろう。祝言の前に顔を見ることができたのは、よかった」

トミサは、カルッツェの話を聞きながら、彼の機嫌がすこぶるよさそうだと感じていた……。

第八百六十六話　歓迎会

その夜、タルカト王国の王都では、聖女・メイリアスを迎えて盛大なパーティーが開かれた。そこには、王都に住む貴族はもちろん、軍関係者および、商人、医師などあらゆる職業の者たちが一目、聖女・メイリアスを見ようと詰め掛けた。

当然、それだけの大人数を収容できる施設などあるはずもなく、集まった者たちの大半は追い返されることになった。だが、それでも、メイリアスに届けものをする者が後を絶たず、それらは数部屋をぶち抜いてうず高く積まれた。

その様子にメイは戸惑いを隠さなかった。彼女は正直なところ、そうした宴に関してあまり興味を持たなかった。それよりも、チワンが実験したデータを確認し、また、自らが立てた仮説を証明したいという思いが強かった。とはいえ、彼女はアガルタ王の妃という立場もあり、それは十分に理解していた。メイはあらかじめ用意しておいたドレスに身を包み、その宴に赴いた。

メイのドレスはリコとソレイユが選んだものであり、彼女の豊満な体を強調する一方で、アガルタの職人が腕をかけて施した複雑な刺繍は、見る者全ての目を引いた。彼女は自分に集まる視線を意識しながらも、その場に居づらそうな雰囲気を隠し切れなかった。だが、幸か不幸か、その様子はある種の好意を持って受け取られた。人々は普段見なれた洗練された王族の振る舞いとは異なる、初々しささえ感じるメイの一挙手一投足に注目し、そんな彼女を可愛らしいと感じたのだ。とはいえ、普段帝都の屋敷でリコからの訓練を受けた賜物か、テーブルマナーや行儀作法は恐ろしく洗練されたもので、

人々はそのギャップに多いに驚き、そして、さらに好感を持った。

そうしたメイの姿に、タルカト王・シェングは大いに喜び、彼は普段あまり口にしない、というより、侍医ケンモに止められている酒を飲んで酩酊した。

「今日は祝いの席じゃ。普段口うるさいケンモも許してくれよう」

王はそう言って笑顔を浮かべながらケンモに視線を向けた。もうそろそろお慎みをと言おうとしたケンモは機先を制されて、苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべる。その様子を見て王はさらに笑い声を上げた。

そのシェングに勝るとも劣らぬ飲みっぷりを見せたのは、王太子カルッツェだった。彼はささされた酒を片っ端から飲み干していった。

「いやはや、お前の飲みっぷりはまるで、馬並みだわ」

父・シェングはそう言って呆れながらも、機嫌のよさそうな笑みを絶やさなかった。

カルッツェの酒は、酩酊することはなかったが、飲めば飲むほどに顔色が青くなっていく酒であった。近習のブトは傍で見守りながらハラハラしていたのだが、そんな彼の心配をよそに、カルッツェの酒量は衰えを知らなかった。

「いや、メイリアス殿、よくぞ我が国にいらして下された。このシェング、厚く厚く礼を申しますぞ」

その場に居た者たち全員から挨拶を受け、戸惑い続けているメイに、

シェングは話しかける。それはそろそろ気疲れがピークを迎えようとするメイにとって、絶妙なタイミングであった。

「この老いぼれの願いを聞いてくださり、余は嬉しくてなりませぬ。とりわけ、メイリアス殿の下されたあのお手紙……字と言い文句と言い、素晴らしかった」

「いえ……そんな……」

「あの手紙をもらう前は、もうあの世に行くのも近い状況であったが、あの手紙を読みまして、驚いて、それで体調が元に戻りましたのじゃ。それからこちらは、具合が悪くなりますと、あの手紙を読んで治しております」

「……」

「メイリアス殿、お頼み申しますぞ」

戸惑うメイに、シェングは深々と頭を下げた。

「今、余が患う病は、長くこの国を苦しめてまいりました。その昔は、この国に住まう者たちは他国の者から結婚を断られ続けた歴史もござった。筋骨隆々の若者が、うら若き乙女たちがこの病によって若い命を散らしていく様を、このシェングは多く見て参った。このような悲しい思いは、我が代で終わりにせねばならぬのです。メイリアス殿、お頼み申しましたぞ。そのためにはこのシェング、協力を惜しみませぬ」

「はい。私も、この病を根治させたいと思っています。互いに手を取り合って、参りましょう」

やっとメイの朗らかな笑みが見られた。その様子を見て、王は心から嬉しそうな表情を浮かべた。

「食事などはいかがかな。山深き地であるので、お口に合えばよいのだが……」

「はい。とても美味しくいただいています。丁寧にアクを取られていますね」

「おお……」

メイの言葉に、王だけでなく、その後ろに控えていた料理人が喜びの声を上げた。タルカトは山国のため魚が採れず、主に採れるのは根菜類だった。それらを用いて王族の舌を満足させ、かつ、健康状態も維持しなければならないため、王都の料理人は何代にもわたってその条件を満たす料理を研究し続けてきたのだ。それを聖女・メイリアスに認めてもらえたのだ。彼らの喜びはひとかどではなかった。

「それはよかった。夜など、眠れぬのであればいつでも言ってくだされ」

「心配には及びません」

チワンが口を挟む。彼はニコリを笑みを浮かべると、さらに言葉を続ける。

「メイ様は夜はアガルタに帰られます」

「なに、アガルタに！？」

「はい。我が同胞が、アガルタにお送りいたします。そして朝になれば、再び我が同胞がお迎えに上がり、タルカト王国まで転移してこられる段取りになっております」

「おお……ポーセハイの能力とは、そこまで……」

「ハハハ。メイ様にはまだ、幼い姫君のおいでになりますから……」

「うむ、道理だ。それに、我が国にメイリアス殿を長くお止めしては、アガルタ王も寂しがられるというものであろう」

「いえ、むしろ、メイ様が寂しがられるかと……ねえ」

チワンの言葉に、メイは顔を真っ赤にしながら頷く。

「ハハハ、これはしたり。したりしたり。余としたことが……ハハハハ」

シェング王は呵々大笑した。それに釣られて、周囲の者も笑い声を上げた。

「いやはや、よいお話しだ。よいお話を聞かせてもらった。ああ……これは随分と酔ってしまったようだ。これカルッツェ」

「ははっ、父上」

「酔うて足元がおぼつかなくなった。肩を貸せ。ああ……皆は心行くまでゆるりと過ごすのじゃ」

国王シェングはそう言ってカルッツェの肩につかまりながら、後宮へと下がっていった。

王の姿が消えると、侍女たちが素早くメイの傍にやって来て、案内しますと言って彼女をその場から去らせた。見事なタイミングだった。集まった者たちはしばらくの間、メイが会場を後にしたことを知らずに、そのまま宴を楽しんだ。

◆　◆　◆

「これで、ひとまずは、安心だな」

シェングは自室に戻ると家来に熱い湯を持ってこさせるように命じ、それを静かにすすった。手が、震えていた。表情には疲れの色が色濃く出ていた。それが疲れだけではないことを、傍に控えているカルッツェをはじめ、集まった者全員が知っていた。

「これは余の勘だが、メイリアス殿は必ず病を根治に導くであろう。カルッツェの体も、これで大丈夫というものだ」

シェングはカルッツェに優し眼差しを向けた。そしてすぐに真剣な眼差しに戻り、小さな声で呟く。

「それに、ダオラにもよい牽制となったであろう。今日のことは、娘を通じてガノブも知ることになるであろう。我が国がアガルタとつながりを持ったということを知れば、おいそれと侵攻してくることはあるまい。そして、あの娘にも、それなりの影響を与えられたことであろう」

シェングはそう言ってカルッツェに視線を向けた。彼は黙って頭を下げた。その彼の頭の中には、じっと自分に視線を向け続けていた、ガノブの娘、サミの顔が浮かんでいた。

第八百六十七話　余は満足じゃ

歓迎会の翌日から、メイリアスは研究室に籠って作業に没頭するようになった。朝は八時前には出勤し、夜は六時ぴったりに帰宅の途に就く。一見すると、まるで公務員のような勤務形態に見えるが、メイの作業自体は非常に膨大なもので、それらを決まった時間内に処理するのは、相当の集中力を必要とした。

だが、彼女はそれらを確実に確認して、必要な指示を出していき、チワンたちの作業が滞らないように努めていた。その情報処理能力は絶大であり、チワンたちは改めてメイの能力の高さを思い知った。

むろん、メイは帰宅して夕食をとった後の自分の時間はすべて図書室で過ごしており、普段は懐いてくる子供たちも、そうした母の、いつもとは違う様子に、彼女の時間を邪魔する者は一切いなかった。

その一方で彼女は、リノスと夜を過ごす日には、いつもに増して彼を求めた。それは、決して表には出さないが、タルカト王国での作業に相当のストレスがかかっていることをリノスは十分に知っていた。彼はメイの求めに応じつつも、その肉体的精神的疲れを癒すよう努めた。

国王シェングは毎日、メイ自身から受ける報告に大いに満足していた。病の根治まで、確実に、最短の距離を進んでいると感じていたからだ。驚くべきことには、彼女らはすでに、その特効薬を完成させつつあった。ただ、その薬は毒性が強く、それらをコントロールするために、いくつかの実験を行わねばならないこと、そして、それには相当の時間がかかるという報告に、彼は大きく頷いた。

メイは出勤すると、毎日国王シェングを診察した。診察といっても、ただ脈を取り、体調を聞く程度だったが、シェングはその朝の時間を楽しみにするようになった。彼の隣には侍医のケンモが常に控えていたが、彼自身も、毎朝行われるメイのそれを楽しみにするようになっていた。

老境に達しているとはいえ、二人とも男だ。メイの豊満な肉体に興味がないわけではなかったが、シェングは毎日彼女が脈を取り、問題なさそうですね、という一言が何よりの安心感を得たし、侍医ケンモは、メイを通じて色々な知識を学びたいという欲求と、自らの診察と処置が適切なものであったのかを確かめたかったというのが本音であった。

特に侍医ケンモは、決して自分のこれまでを否定せず、むしろ、その取り組みを認めて褒め、立場を尊重してくれることに、何とも言えぬ居心地の良さを感じていた。彼は国王同様、毎朝のメイの訪問を楽しみに待つようになっていた。

「……ケンモ」

ある朝、国王シェングは機嫌のよさそうな笑みを浮かべながら、ケンモに声をかけた。一体いつまで隣にいるのだ、余は一人でメイリアス殿の診察を受けるのだ、とでも言うのではないかと考えていた彼は、少し眉間に皺を寄せながら、国王に向き直る。

「どうだ。余の顔色は。いつになくよいであろうに」

確かに、これまでの国王様とは違う。肌艶もよくなってきている。それは、最近めっきり食が細かった彼が、このところ色々な食材を

口にするようになっているからだとケンモは推測していた。加えて、メイリアスが勧めてくれた、餅を煮あげたはちみつをかけた料理を国王が気に入り、朝昼晩と、少量ではあるが口にしているのも原因であると考えていた。

「左様でございます。ご本復も間近でございますね」

「……バカ者が」

国王シェングは寂しそうな笑みを浮かべた。彼は右手で自らの顔を撫でながら、誰に言うともなく呟く。

「で、どのくらいだ」

「どのくらい、と言われますと？」

「余命じゃ。いつくらいまで持ちそうなのだ」

「……」

「余は、半年と見ておる」

「……」

ケンモは黙ったまま頭を下げた。ここ最近、体調が戻りつつあるから、一年は持つのではないかという言葉を飲み込んでいた。それを言ったところで、何も生まれなかったからだ。

「おそらく、メイリアス殿も、それに気づいておられるな」

「……」

「よい。そなたとの長い付き合いだ。言わなくとも大体わかる。そうか……」

国王シェングはそう言うと、ゆっくりと頷いた。ややあって、メイが案内に伴われて、国王の居室にやって来た。

「おお、メイリアス殿。お早いお越しだな」

「国王様、お加減はいかがでしょうか」

「見ての通りだ」

シェングはそう言って笑みを見せる。その様子を見たメイも、ニコリと笑みを見せる。

「では、お脈を」

そう言って彼女は国王の手を取った。

「のう、メイリアス殿」

「はい」

「その、今開発している特効薬は、完成するまでどのような段階を踏むのかな?」

「まず、実験用のネズミに投与しまして、それで反応を見ます。その後に動物への投与を行い、最終的に人間に投与する段取りになり

ますが、そこまでにかなりの実験を行う必要があります」

「なるほど。要は、多くの事例が必要ということじゃな」

「その通りです」

「人間の実験までにはどのくらいかかりそうかな？」

「そうですね……実験の結果次第ですが、我々は半年と見ています」

「半年、か……」

「お待たせしまして……」

「ああ、よいよい。よいのだ。我らが何百年とかかったこの病が、あと半年ほどで、何らかの目途がつきそうなのだ。半年くらいは何でもないことだ。そうか……フム……ではメイリアス殿。一つお願いがある。人体実験の段階になったとき、その薬を余に投与してはくれぬか」

国王の言葉に、メイは目を丸くして驚く。

「いや、言いたいことはよくわかる。それでは余の体が持たぬ可能性がある、と言いたいのだろう。だがな、余の命はいくばくも無い。メイリアス殿、正直に答えてもらいたい。余は、残された命はあと半年と見ているが、どうじゃ」

メイはシェングに真っすぐな視線を向けると、やおら頷いた。

「そうか。では、是非、そうしてもらいたい。負け戦になる可能性

が高かろうが、負け戦の中で勝ちを拾うこともある。ちがうか？」

国王はそう言って笑みを浮かべる。メイは戸惑いの表情を浮かべた。

「……やはり、医師としてはそれはできかねます」

メイは絞り出すようにして答えた。その様子に、国王は満足そうな笑みを浮かべる。

「やはり、もたぬか」

「チワンさんが開発した薬には、強い毒性があります」

「うむ。聞いている」

「その毒性を中和するために、ペルキオを使って希釈しています。そして、その値が０．０２２㎖を下回るときがその効果が出ると思われます。ただ、チワンさんが用いているのはカササルハでして、人体に投与すると、オルワキソと結合してジルハランを精製します。それが０．０００００１程度であれば問題ありませんが、それを上回ると、ダラック現象を引き起こしてザミゾの値が上昇します。おそらく、０．０００８……」

メイがふと国王に視線を向けると、国王と侍医ケンモが目を丸くして驚いていた。

「あ……私……つい……失礼しました」

顔を真っ赤にしてメイは頭を下げる。その様子に国王は呵々大笑した。

「ハッハッハ！　よいよい。それだけメイリアス殿が余の体のことを考えている証だ。いや、安心した。安心しましたぞ、メイリアス殿！　どうぞ、これからも実験を続けてくだされ。うむ、余は満足じゃ。大いに満足だ」

国王シェングの言葉を聞いたメイは、ゆっくりと頭を下げ、その場を辞した。彼女の後姿を見送った国王は、隣に控えている侍医ケンモに視線を向けた。

「先ほどのメイリアス殿の説明、そなた、わかるのか？」

「も、も、も、もちろんで、ございますっ！」

「強情者めが！」

シェングはそう言って再び呵々大笑した。実に気分がよかった。寿命が、大いに延びた気がしていた……。

第八百六十八話　内々の話

メイが国王シェングと対話を重ねているその一方で、カルッツェとその妻、サミの関係も徐々に変化が見られていた。

すでにダオラ帝国からの侍女たちも到着し、彼女の周囲は皇帝ガノブの息がかかった者たちで固められつつあった。彼女の乳母・カワバは、ここタルカト王国であっても、サミに関してはダオラの仕来りを押し通した。

例えば、ダオラでは夫婦が夜眠るときは、夫が妻の部屋にやってくる。対してここ、タルカト王国では、妻が夫の部屋にやって来ると言う仕来りだ。カワバはサミを頑として部屋から出さず、どうしてもサミと同衾したければ、カルッツェ自身が部屋に来るようにと言って譲らなかった。

これには、国王シェングから世話役を命じられたトミサは手を焼いた。海千山千の経験を持つ彼女をもってしても、カワバの主張を変えることはできなかった。

だが、トミサとしても、王太子カルッツェを、ダオラの手の者たちがひしめく部屋に一人で行かせるなどというのは、絶対に呑めぬ主張であった。そんなことをすれば、カルッツェ自身がダオラに取り込まれる可能性すらある。彼女は腹案として、双方の部屋とは別に、寝室を新たに作ることを提案して、一旦了承を得たものの、その場所を巡っても、細かい注文を付けられる有様だった。

カワバとしては、できるだけサミをカルッツェの許から離れさせた

かった。むしろ、嫌われるほうがよいとさえ考えていた。カルッツェは大柄でがっしりとした体躯をしている。その上、姉サンジョをむごたらしく切り殺すほどの血の気の多さを持っている。そのような男が、華奢なサミと同衾したならば、サミは力づくで蹂躙されてしまうのが目に見えていた。そのような男にサミを近づけるなど、カワバは到底考えられぬことであった。

だが、彼女の心配に反してサミは、カルッツェに対して一切嫌悪感を示さなかった。カルッツェ側が折れる形で、夜はサミの部屋で過ごすと通達してきたとき、狼狽えるカワバたちを尻目に、サミは少しうれしそうな表情すら浮かべていた。

そして、ついに迎えた二人の初夜。カワバはサミに、乱暴なことをされたらすぐに大声を出すように、その部屋から逃げるようにと言い含めていたが、豈はからんや、彼女は朝になるまで寝室からは出て来ず、カルッツェが帰った後、心配するカワバたちに向かって、あのお方は優しいお方だとまで言ってのけた。

同様に、心配で眠れず、サミの部屋に通じる廊下で身じろぎもせずに待っていたトミサも、飄々とした表情で戻ってきたカルッツェの姿を見て、拍子抜けした。

彼は部屋に戻ると、サミと本当の夫婦になったとあけすけにトミサに言い、そなたが思うほど悪い女性ではない、サンジョと比べると、全く別物の女性であると言って笑った。

その後もカルッツェは毎夜、サミの部屋に通い続けた。彼の目の前での不快感をあらわにするカワバだったが、その彼女をサミは窘め、甲斐甲斐しく彼の世話を焼いた。カルッツェ自身も、色々な話題を提供して、彼女との会話を楽しんだ。

会話をしてみて、意外に色々なことを知っている、というのが二人の共通した感想だった。サミは皇帝の娘として幼いころから英才教育を受けて来たし、カルッツェ自身も、四男ということで国王に即位する可能性は低かったにもかかわらず、周囲の者たちが教育に力を入れたおかげで、相当の知識を身に付けていた。

サミが得意としていたのは歴史や文学であり、カルッツェが得意としていたのは、自然的なもの、例えば、食物であったり、虫であったり、さらには、地質学的な事柄に精通していた。そうした内容を語り合うことは、二人にとって何よりの刺激になっていたのであった。

お互いにとって第一印象が悪いものではなかったのも、二人の関係を近づけた大きな要因でもあった。サミは父・ガノブが大好きであった。父のような武人を夫にしたいという希望があった。カルッツェはまさに、父のような強さを感じる武人であり、彼女はほぼ、一目ぼれのような形でカルッツェに好意を持っていた。

対してカルッツェも、サミの聡明さを感じさせる瞳と、しゃんと背筋を伸ばして立っている、端然とした佇まいに好感を持った。それは亡き愛妾・コルイを彷彿とさせるものであり、その様子は、愛妾を失った悲しみを癒すのには十分であった。

また、二人の体の相性も相当によかった。同衾を重ねれば重ねるほど、互いが互いを癒し合える関係であることがわかった二人は、事前に違いを求めあうようになった。

こうしたことは、カワバ、トミサの二人は敏感に感じ取っていた。そして、何とも言えぬ危機感を持った。

カワバは事細かに、サミの変化を皇帝ガノブに書き送った。そして、父・ガノブの命令を決して忘れてはならぬと言ってサミを叱責した。一方のカルッツェも、トミサから、あまり足しげくサミの許に通わぬよう釘を刺され、側室を持つことを勧められた。

こうした周囲の状況にまず変化を見せたのはサミの方だった。彼女からしてみれば、乳母のカワバは母親同然の女性であり、その言葉は強い影響力を持っていた。そのカワバからカルッツェと親しくするなと言われてしまうと、一分、一秒でも彼と長くいたいと思っていた彼女には大きな負担となっていった。やがて彼女は痩せていき、突然、何の前触れもなく涙を流すようになった。

それに気づかないカルッツェではなかった。だが、サミは頑として心の内を明かそうとはしなかった。彼はトミサにその件を相談すると、彼女は大きく頷いた。

このとき、トミサは勝ちを確信していた。サミの心に付け込むチャンスがやって来たのだ。これを解決すれば、サミを完全にこちら側に取り込めることができる。むざむざ逃す手はない。彼女は膝を打って喜びを表したい思いを、必死でこらえていた。

「承知しました。ええ。私が骨を折ってみましょう」

トミサはそう言って頭を下げた。

彼女はその足で、国王シェングにその旨を報告した。王自身も、トミサと同じ考えであった。彼は目を閉じて思考を巡らせる。

「メイリアス殿に、頼むか」

「はい。私も同じことを考えておりました」

国王シェングの言葉に、トミサは笑顔で答えた。その様子にシェングは苦笑いを浮かべる。

「余の見たところ、メイリアス殿は実に優しい女性だ。二人の間に……。いや、医師として、サミの様子を見れば、その原因はすぐに知れよう。そして、その解決方法を示してもらえれば……サミをこちらに取り込むことができるな」

「同感でございます。サミ様はカルッツェ様に惚れておいででございます。好きな殿御と添えるようにすれば、あのお方は未来永劫、タルカト王国に忠誠を誓うでありましょう。女子は情でございます。情をかければ、上手くすれば、女子は命を懸けることも厭いませぬ」

「女性たるそなたがそれを言うか」

「ああ……これは私としたことが……。何とはしたない。恥ずかしゅうございます」

「恥ずかしいというガラか」

そう言って二人は笑いあった。ややあって、トミサは真面目な顔つきになり、国王シェングの前に手を仕えた。

「メイリアス様へのお願いの儀、このトミサに賜りたく、お願い申し上げます」

「うむ。だが、その席には余とカルッツェも同席する」

「それはなりません」

「なぜじゃ？」

「これは、内々の相談として、私一人でお願いしとうございます」

「いや、メイリアス殿はアガルタ王の妃である。アガルタとの関係を考えれば……」

「ですから、内々の話でございます。内々の話に、多くの人数はいりません」

「……年をとっても、強情さは変わらぬのだな」

「これも全て、国王様、カルッツェ様のため。私は命を懸けます」

国王シェングは再び苦笑いを浮かべた……。

第八百六十九話　医師の勤め

トミサはすぐさま聖女・メイリアスに目通りを乞うた。彼女は相手に警戒をされないために、内々の昼食会を開きたいと提案したが、予想に反してメイリアス側から丁寧な断りの返答が来た。曰く、一刻も早く新薬の開発を完了させたいとの口上であった。

一見すると、逆に疑いをもたれたか、とも見えるが、トミサはそれがメイリアスの本心であることを見抜いていた。彼女はふと、庭に視線を向けて考える……。

■　■　■

メイの研究室にトミサが現れたのは、それから二日後のことだった。彼女は手製の昼食を用意してきていた。

「本日は、私が腕を振るいました」

そう言って彼女は、ポーセハイたちへの食事も用意してきていた。

用意されたのは、いわゆる蕎麦を団子状にしたものだった。それらが温かい出汁の中に入れられているもので、ポーセハイたちは初めて見るその料理に、皆、逡巡していた。彼らにしてみれば、茶色いスープの中に黒い団子が入っているというグロテスクな見た目は、率先して食べる気にはならなかったのだ。

「これは……魚の干物でエキスを取ったのですね」

不意に奥からメイが現れる。彼女にとっては、たまに屋敷でリノスが作る料理に使われているスープの香りで、馴染みのあるものだった。

「よくおわかりでございますね。山深い土地でございますゆえ、新鮮な魚は手に入りませんが、魚の干物は手に入ります。私どもはそれらを使いまして、色々と料理をするのでございます」

トミサはそう言うと、人懐っこい笑みを浮かべながら、周囲に話しかける。

「見た目は悪くございますが、味は保証いたします。何と申しましても、これは我が国王様が大好物の料理……。しかも、これを作ることができますのは、憚りながらこの私めだけにございます。この王都には腕のよい料理人は多くございますが、国王様のお心に適いますものを作ることができるのは、私だけでございます」

彼女はそう言って胸を張った。その様子は嫌味な部分が微塵もなく、むしろ、かわいらしささえ感じさせるものだった。そんなトミサの雰囲気に、メイは相好を崩した。

「ありがたくいただきます。わあ……いい香り」

そう言って彼女はスープを口に運ぶ。直後に目を見開いて頷く。

「美味しゅうございましょ？　ささ、どうぞお団子もご賞味あれ」

トミサに勧められるまま、メイは黒団子を小さく切り分けて口に運ぶ。ソバの香りが口の中いっぱいに広がる。

「これは……美味しい！　香ばしいですね！　うん。成分を調べてみないとわかりませんが、何となく、滋養強壮に良い気がします」

「よくおわかりで。肌にとてもよろしいのでございますよ。それを証拠に、ほれ、私の顔」

トミサはそう言って自らの頬を差し出す。皺だらけの頬で、この食べ物が肌にいいと証明できるような代物ではなかった。そんな彼女のオチャメぶりに、チワンら男のポーセハイたちは苦笑いを浮かべている。一方で、ローニら女性のポーセハイは、一様に眉間に皺を刻んでいた。

そんなトミサの頬をメイはまじまじと見て、大きく頷く。

「確かに、お肌によさそうですね！」

皮肉や社交辞令などが微塵も感じない表情だった。このトミサの肌が本当にきれいだと信じて疑わない表情がそこにあった。

「……メイリアス様とは、よいお友達になれそうですわ。このトミサ、嬉しゅうございます」

「ええ。今後とも是非、よろしくお願いします。あ、おしゃべりをしていると、この団子が溶けてしまいそうです。さあ皆さん、いただきましょう」

メイはそう言って皆を促す。

「このお団子は小さく分けるより、一口で食べたほうがおいしいかもしれませんね。ちょっとお行儀が悪いですけれど……」

そう言ってメイは団子を口の中に放り込み、頬張った。目尻が下がり、本当に美味しそうな表情を浮かべている。

「まさに、国王様もそうしてお召し上がりになります。そうなのでございます。この団子は、一口にお食べになる方が、美味しいのでございます。さすがはメイリアス様、よくわかっていらっしゃいます」

トミサは心から嬉しかった。自信があるとはいえ、自分の料理をここまで受け入れてもらえるとは思わなかった。ここまで、美味しそうに食べてくれるとは思ってもみなかった。国王シェングはどちらかというと、美味い美味いと言いながら、眉間に皺を寄せながら食べる。まるで、不味いのかと思うような表情だ。彼は不味い物は不味い、美味い物は美味いとはっきり言う性格であるために、わかりやすい性格であると言えるが、それでも、不味そうに食べられるのは、トミサとしてはあまりいい気分ではなかった。そうしたところに、メイの破顔一笑の姿を見ると、トミサは嬉しいを通り越して、楽しささえ覚えてくるのだった。

トミサはメイの前に手を使えると、笑顔を浮かべながら頭を下げた。

「私の負けでございます」

「……負け？」

「実はメイリアス様にお目通りしましたのは、相談事があってのことでございます」

「相談事……ですか？」

「はい。実は、先日お迎えしましたカルッツェ様の奥方様のことでございます」

「確か……サミ、様と？」

「左様でございます。実はサミ様は心に大きな悩みを抱えておられます」

「はい」

メイの顔が真剣になった。それは女性でもなく、研究者でもない、医師としての表情だった。トミサはそのサミが置かれている状況を、嘘偽りなくすべてを話した。

「思えば可哀そうなお方でございます。タルカトとダオラの間に挟まれて、サミ様はその身を削られておいでございます。私とて、このお話をサミ様から承ったとき、大きな好機が来たと思った程でございます。こうしてメイリアス様にお目通りし、サミ様をこちら側に付けてもらうようお願いするつもりでおりました。このようなことを善人ぶってお話しする資格はございませんが、ございませんが、私は同じ女性として、サミ様をお救いしたいのでございます」

メイはトミサの話をじっと聞いていたが、やがて、ゆっくりと口を開いた。その声には、怒りの感情は感じられなかったが、自身の問いに嘘偽りは許さないと言った感情が見て取れた、それは、メイ自身もサミを救いたいという意志が現れていた。

「サミ様はおそらく、カルッツェ様がお好きなのでしょう。一方で、カルッツェ様は、サミ様のことをどう見ておいでなのでしょう？」

その問いかけに、トミサは膝を前に進めて、真面目な表情で口を開いた。

「王太子殿下も、サミ様のことを愛しておられます」

その答えに、メイは大きく頷く。

「愛する者同士は、どのようなことをしたとしても、引き合うものです。それを無理に引き剥がそうとすると、どちらかが、あるいはどちらも命を失うことになります。愛する者同士は愛する者同士と一緒にいるべきであると私は思いますし、それが、幸せにつながるものであると、私は信じます」

メイの言葉には万鈞の重みがあった。これ以上、二人の関係に横やりを入れれば、サミもしくはカルッツェのどちらかが、ヘタをすると、その二人ともが命を失う可能性があると言ったのだ。トミサは思わず震えた。

「サミ様の様子を見ていないので何とも言えませんが、お二人はお二人の過ごしやすい環境でお過ごしになるのが一番であると思います。差し支えなければ、私がサミ様の許に往診に参ります」

「い、いえ。そのようなこと……畏れ多いことでございます。メイリアス様には研究もございますれば……」

「目の前で苦しんでいる人がいれば、全力で助けるのが医師の勤めです」

そう言い切るメイの眼はとてもキレイだった。トミサは大変なこと

になるかもしれないという予感と同時に、この聖女は将来、自分たちが思い描いた未来と、全く異なる未来を作るのではないかという、ワクワクした思いも感じるのだった……。

第八百七十話　胡散臭い提案

「まるで、『ロミオとジュリエット』だな」

「ろみおとじゅりえっと？」

話をしているのはリノスとリコだった。帝都の屋敷のリビングでは、リノスをはじめとして妻たち全員が顔を揃えていた。外はすでに暗くなっていて、深夜の時間帯だ。もちろん、子供たちは全員ベッドの中だ。

リノス家では、何か相談事があると、子供たちが寝静まった後で、こうした会議が行われる。ただ、それは滅多にないことで、この会議自体も開かれるのは実に数か月ぶりのことだった。

メイはトミサから聞いたこと、そして、自分が実行しようとしていることを皆に話した。それを聞いたリノスは、やはり内容としては『ロミオとジュリエット』と似た話だなと心の中で考えていた。

「その……お話しは結局、どうなるのです？」

リコの問いかけに、妻たち全員の視線がリノスに集まる。皆、その結末に大いに興味があるようだ。

「確か……二人とも死ぬんじゃなかったかな」

「まあ……」

事も無げに言ってのけるリノスに、妻たち、特にリコは呆れた表情を浮かべた。メイの表情は一切変わらない。相変わらず、真剣な表情のまま、リノスに視線を向け続けている。

ややあって、リノスが咳払いをしながら口を開いた。

「俺はメイの意見に賛成だ。失敗……するとは思えないが、もし、失敗して、アガルタとタルカトの間に亀裂が入るようなことになったとしても、それはやり方次第でどうにでもなることだと思う」

その言葉に、リコが大きく頷く。

「おそらく、外交的な問題に発展することはないと思いますわ。それにしても……やはり、愛する者同士は一緒にいるのが一番ですわ」

そう言って彼女は視線をメイに向ける。メイはリコを見ると、同じように大きく頷いた。

「何となく、ですけれど……」

シディーが口を開く。何らかの予感があるのだろう。人差し指を顎の下に入れている。

「その二人の関係は問題ないように思えます。ただ……どちらかが欠けると、色んな問題が起きそうな気がします」

「なるほど、な。相思相愛の間柄だけに、どちらかがいなくなると問題が起きる……。ありそうな話だ。俺ももし、この中の誰一人が欠けても、平静でいられなくなるだろうからな」

リノスの言葉に、妻たちは一様に嬉しそうな表情を浮かべた。ただ一人、マトカルだけは無表情を貫いていたが、その心中は他の妻たちと同様、嬉しさを感じていたのだった。

「でも、いいわねぇ。若いわねぇ」

ソレイユが頓狂な声を上げた。彼女は両手で自分の両頬を挟みながら首を左右に振る。

「愛のために体調すら悪くなる……。そのお姫様は素敵だわぁ。全力で応援したいと思うメイ様の気持ち、本当によくわかります。私も是非、応援したいです」

「ありがとうございます。ソレイユさんにも是非、お手伝いをお願いします」

そう言ってメイは深々と頭を下げた。

◆◆◆

「入院!?」

思わず大声を上げたのは、サミの乳母であるカワバだった。彼女は目の前にデンと座るトミサと、隣に控えるサミに交互に視線を向ける。

「入院、とは申しましたが、なにも大事に捉える必要はありませぬ。ただ、サミ様をしばらくの間、景色のよい場所にお移し申し上げて、そこで、美味しいものを召し上がっていただくだけのことでございます」

トミサはそう言ってコロコロと笑った。

家族会議を行ったその翌日に、メイは早速トミサの要望を容れてサミと面会した。むろんそこにはカワバも付き従い、目を光らせていたが、メイはそんなことは一切気にも留めずに、静かに、そして、優しくサミの手を握った。

「色々と、お疲れのようですね。わかります」

メイはそう言って笑みを浮かべる。対してサミは、どう反応してよいのかがわからず、スッと目を伏せた。

メイはサミの手を握りながら彼女の脈を取っていた。鼓動が早い。幾分緊張しているせいもあるのだろうが、それだけではないことをメイは感じ取っていた。

「いかがですか、ここ最近のサミ様のご様子は」

メイはカワバに問いかけた。彼女は姿勢を正すと、さも自信ありといった表情を浮かべると、はっきりとした口調で返答した。

「姫様にあらせられましては、日々、ご機嫌麗しく。何の問題もございません」

「失礼ですが、サミ様のお身の回りのお世話はすべてカワバさんがなさっておいでなのですか?」

「はい。私は姫様がお生まれ遊ばしたときからずっとお仕えしております。こちらに参りましてからも、姫様のお世話は私が担わせて

いただいております。タルカト王様や王太子様からは色々とお気を使っていただきまして、侍女を増やそうとも言っていただいておりますが、慣れぬお方がお側につきましては、行き届かぬことも多くなり、姫様のお気持ちがみだれることになりますため、きっぱりとお断りしている次第でございます」

「なるほど……。それがいいですね。サミ様の傍には、カワバさんがいらっしゃる方がよいと私も思います」

「ほ？」

カワバにとっては予想もしていない返答だった。てっきり、他の侍女を受け入れるように言われるか、カワバ自身がサミの側から離れるように言われるものと思っていたのに、この聖女はサミの側にいるのは、カワバを置いて他に居ないと言う。思わず頓狂な声を上げてしまったが、カワバは腹の中で、この聖女は意外とよくわかっているなと呟いていた。

「サミ様とは初めてお目にかかりましたが、噂以上にお綺麗な方で、正直驚いております。何よりも肌と髪の美しさが素晴らしいですね。これは、日々の努力でなければできないことです。おそらく、食事などにも気を使われているのでしょうね」

「さ……左様でございます。姫様のお召し上がりになるものは、すべてこの私が吟味しております」

「やはり……。やはり、サミ様のお美しさは、天から授かったものも多いかもしれませんが、その大半は、カワバさんのお蔭ですね」

「そ……そのような……。ホホホ、聖女様はお上手ですこと。ホホ

ホホホ」

カワバはそう言って笑った。腹の中では、この聖女が何かを企んでいるのではという疑いもあったが、それ以上に、自分が最も注意し、情熱を傾けてきた部分を褒められたことで、疑いよりも嬉しさの方が勝っていた。そして、彼女の心中には、この聖女に対して少なからぬ信頼が生まれていた。

一方のメイの診立ては違っていた。サミがやつれている原因はこの女性であると看破していた。サミからは一刻も早く遠ざけねばならない存在であった。ただ、この女性をいたずらに刺激するべきではないと判断したメイは、その日はその程度の会話に止めて、サミたちを下がらせた。トミサがサミたちの前に現れたのは、その翌日のことだった。

彼女はいきなりサミを入院させると宣言した。驚くカワバたちに、入院と言ったが、ただ、景色のよい場所で上手いものを食べるのだと言って笑う。そしてそれが、聖女・メイリアスからの勧めであることを伝えた。

カワバは、信頼が芽生えてきたメイリアスの言葉に従う意向を示した。もちろんそこには、自分も帯同すると言ったが、トミサはやんわりとそれを却下した。

「ここにおいでになると、どうしてもダオラとタルカトの間に挟まることになります。そうしたしがらみから一度、完全に開放されたほうがよい、というのが、メイリアス様のお話しでございます。そのために、そこにはサミ様お一人が参られるのがよいのだそうです。私もそちらに参ろうかとも思っておりましたが、真っ先にそれには及ばないと言われてしまいました。上手くいかないものでございま

すね。オホホホホホ」

そう言って笑うトミサを、カワバは胡散臭そうな表情で眺めていた。

……。

第八百七十一話　ここはどこ？

カワバがサミの入院に同意したと聞いたメイは、早速二人を呼び出した。そして、二人を誰にも悟られぬまま、旅立たせた。

王都では、王太子夫婦が突然消えたことにより一時、騒然となったが、それはタルカト王・シェングが心配ないと言って周囲を静めた。

無論、サミが突然消えたことにより、乳母のカワバは黙ってはいなかった。彼女はタルカト王とメイに目通りを求め、先に応対した王に対して、サミの居所はどこだと迫った。

「それは、余にもわからぬのだ」

「わからない？」

「そうだ。その居所は、メイリアス殿だけしか知らぬ」

「……では、今からメイリアス殿にお目通りを願います」

「待て。目通りを願っていかがするつもりじゃ」

「決まっております！　サミ様のおいであそばす場所を聞くのでございます！」

「それを聞いてどうするつもりなのじゃ」

「私がお側に参りまして……」

「やめよ」

「……」

「その方の気持ちはよくわかる。余とて、倅・カルッツェのことが心配である。しかし、な。これはサミ殿の体を回復させるためのことじゃ。そして、これにはメイリアス殿しかかかわっておらん。あの聖女・メイリアスが直々に取り仕切っておるのじゃ。心配はいらぬ」

タルカト王の言葉に、カワバはなおも納得いかないと言った表情を浮かべている。そこに、王の傍に控えていたトミサが、人懐っこい笑顔を浮かべながら口を開く。

「きっと、大丈夫でございます。よろしければ、カワバ様も毎日、こちらにおいでになればよろしゅうございます。メイリアス様は毎日、国王様の診察をなさっています。さすがにその場に同席いただくことはできませんが、その後で、サミ様のご様子などをお聞きになることは可能であると存じます」

トミサの言葉には、反論を許さないという覚悟が見えた。カワバは、明日にでも、メイリアス様にお話しをお聞きすると言って、まるで席を蹴るようにして立ち上がった。

「……えらい女子じゃな」

カワバが去ったあと、国王シェングは誰に言うともなく呟く。

「それだけサミ様への愛情が、深いのでございますよ」

「……」

トミサは少し、寂しそうな顔をした。彼女はついに国王シェングの子供を身ごもることはなかった。彼女にしてみれば、カワバの様子は醜態以外の何物でもなかったが、それだけの愛情をカルッツェにあるかと問われれば、答えは否だった。畏くも王の前で、あのような態度は取るべきではない、とは思うものの、あれだけの情念を持ってみたいという思いもあった。

そんな彼女の思いは、国王シェングは十分にわかっていた。彼はしばらく無言のまま、あらぬ方向に視線を泳がすのだった。

◆　◆　◆

「こっ……ここは……？」

カルッツェとサミは、狐につままれたような表情を浮かべていた。彼らの目の前には、これまでいた王宮とは全くの別世界が広がっていた。

二人はメイリアスの許に呼ばれると、目隠しをするように求められた。訝りながらもそれをすると、すぐに知らない女性の声が聞こえてきて、目隠しを取るように促された。そこには、先ほどとは全く異なる景色が広がっていた。

メイリアスの部屋はどちらかというと殺風景であった。ベッドと机……など、そこで過ごす最低限のものしか置かれていなかった。それが一瞬にして、赤いじゅうたんが敷かれ、豪華な装飾が施された、煌びやかな部屋に変わったのだ。二人が驚くのも無理はなかった。

二人の目の前には、一人の女性が控えていた。クエナ、と名乗る女性は、お二人を世話する者だと言い、何かあれば遠慮なくお申し付けくださいと言って一礼した。その言葉遣いや振る舞いは実に洗練されており、それだけを見ても、この女性がただ者ではないことがよく知れた。

一体ここはどこであるのか、というカルッツェの問いかけに、クエナはそのうちわかることでございますと言って笑みを浮かべ、お部屋に案内しますと言って、二人に背を向けた。

まさに驚きの連続であった。そこには、広いベッドルームがあるだけでなく、専用の浴室まで付いていた。広い部屋の中にはなみなみと湯が湛えられた巨大な箱があり、カルッツェもサミも驚きを隠さなかった。そんな彼らにクエナは、その湯の中に入るのだと言い、二人をさらに驚かせた。

二人を最も驚嘆させたことは、コックをひねれば水が出て、しかもそれは飲むことができることだった。訝る二人にクエナは、ごめん下さいませと言って、実際にその水を手ですくって飲んで見せた。山育ちのカルッツェは、タカに住んでいた頃は、沢から引いた水を飲んでいたこともあり、その説明には納得したが、水の悪いダオラ帝国で育ったサミには、あり得ないことだった。彼女は幼い頃から、指定された水以外は絶対飲んではならぬと教育されて育ってきた。幼い頃、一つ違いの姉が誤って井戸の水を飲んだところ、激しい下痢に見舞われ、やがてこの世を去ってしまって以来、彼女は生水は絶対に呑まないと心に決めていた。

だが、目の前の女性は何のためらいもなく水を飲んで見せた。サミにとっては、大きな衝撃だった。

さらに二人を驚かせたことは、手洗いの水すらも飲めるのだという説明だった。ここでは手洗いは水洗式であり、ウォシュレットすらも取り付けられていた。二人はその使い方を聞いてもなかなか理解ができず、目を白黒させるばかりだった。

「また、ここからの景色も抜群なのでございます」

クエナはそう言ってカーテンを開けた。そこからは海が見え、水平線の彼方に沈んでいく見事な夕焼けが見えた。二人はしばし呆然とその、沈みゆく夕陽を眺めていた。

ややあってクエナは、食事の用意をいたしますと言ってその場を辞した。二人はしばらくの間、無言で部屋の探索を行った。

豪華で、必要なものがすべて揃った部屋だった。最後にベッドルームに辿り着いた二人は、ゆっくりそこに腰を下ろす。驚くほど柔らかいベッドで、二人は思わず仰向けにひっくり返った。

「……なるほど。この場所なら、ゆっくりと過ごせそうだな」

そう言ってカルッツェはカラカラと笑い声を上げた。それを見たサミも、笑い声を上げる。

ちょうどそのとき、扉がノックされ、クエナが侍女と共に食事をもってやって来た。どれも初めて見るメニューばかりだったが、二人の鼻腔をすくすぐ香りは実に食欲をそそるもので、カルッツェは思わず腹を鳴らした。

初めて味わう味だったが、実に美味な食事だった。美味しい美味し

いと言いながら料理を口に運ぶ二人を、クエナは嬉しそうな表情を浮かべながら見守った。

食事がすむと、クエナは二人の滞在を二週間としていると告げた。その期間を短くするのも自由であるし、延長するのも自由であると付け加えた。また、メイリアスも折に触れて顔を出すのだと言う。恐らく明日、一度顔を出すだろうから、今夜はゆっくりと休むように言って、クエナはその場を後にした。

二人っきりになると、サミはカルッツェに風呂に入るように促した。それに従って彼は浴槽に向かう。しばらくすると彼は、まるで飛び出すようにして部屋から出てきた。

「いや、すごいぞこの浴室は。よくできている。そなたも入れ。あ、浴槽には体を浸けるといいが、小柄なそなたは溺れるかもしれぬ。気を付けよ」

そう言って彼は妻を送り出した。

カルッツェはバスローブに身を包みながら、ベッドに仰向けに寝転がる。この部屋に来て数時間だが、彼はすでにこの部屋を大いに気に入っていた。ここならば、自分とサミの体調は回復する確信があった。彼は心の中で、メイリアスに礼を言った……。

第八百七十二話　サミという女性

カルッツェはベッドに仰向けに寝転がる。部屋の中はかすかに水が跳ねる音が聞こえてくるばかりだった。これはおそらく、妻のサミが湯浴みをしているのだろう。

ふと、その姿を想像した。小柄で華奢な体を盥の真ん中で静かに湯を浴びている姿……。それは、何とも言えぬ興奮を掻き立てるものだった。

……いや待て、あの浴槽には、盥はなかった。

ふと、そんなことを思い出すと、何だか笑いが込み上げてきた。未だに、タルカト王国の仕来りが抜けていないのだな、と彼は苦笑いを浮かべた。

それにして、不思議な体験だった。目隠しをして、ほんの一瞬で目の前の景色が変わった。あれは一体どういう仕掛けだったのだろうか。

おそらくポーセハイではないか。カルッツェが最初に考えたのは、その点だった。彼らには転移能力があると聞いた。あの、聖女・メイリアスを転移させてきた様子を、実際にこの目で見ている。彼らの能力を使えば、自分とサミを転移させることなど、朝飯前だろう。

だが、とカルッツェは心の中で呟く。これでも相当の修練を積んできたのだ。人の気配を察知することくらいはできる。だが、あのときはメイリアス以外に人の気配はしなかった。まさか、ポーセハイ

は気配を消す能力もあるのだろうか。

そう考えたとき、カルッツェは何かうすら寒い風を感じた。気配を消すことができ、さらに転移までできるとなると、人を暗殺するなどは容易くできてしまう。深夜、寝所に忍び込むことができれば、あるいは、今、サミのように入浴中に襲えば、いとも簡単に命を奪えてしまう。これは、サミの病を治すためと称しながら、実はアガルタは無言の圧力をタルカトにかけているのではないか……。いつでもお前たちの命を奪えるのだ、と。

そこまで考えて、カルッツェは笑みを浮かべる。あの、世界に冠たるアガルタが、タルカトという山国を相手にするわけはない。たまたま、父・シェングの手紙が功を奏して、聖女・メイリアスが訪れているだけで、アガルタにはそれ以上に何の興味も持っていないのは明白だった。

しかし、この手は使える。サミを通して、彼女の父であるガノブにこのことを伝えれば、きっとあの男は警戒するだろう。我々を攻撃すると、アガルタが黙っていませんよ。あなたの寝首を掻くのは、いとも簡単にできてしまうのですよ、という警告ができるし、それは想像上の効果を発揮することだろう。

そこまで考えてふと、誰もいない自分の左側に視線を向ける。心の中では、本当にそれでいいのか。サミをそのような政治の道具に使ってよいものだろうかと、もう一人の自分が問いかけていた。

そのとき、浴槽のドアがゆっくりと開いた。

そこには洗い髪姿のままのサミが、少し困ったような表情を浮かべながら立っていた。

彼女はバスローブを羽織っていた。本当にこれを着てよいのかと悩んだのだろう。形がいびつだった。いつも衣服をキチンと着こなしている彼女しか知らないカルッツェには、その姿が実に新鮮に思えた。

「どうしたのだ」

「……髪を乾かす者が」

見ると、どうやらサミの髪の毛は拭き切れていないようだった。恐らく彼女はこれまでは、風呂から上がったとのことは全てあのカワバにやってもらっていたのだろう。そのカワバがいなくなって戸惑う彼女が哀れでもあったし、愛おしくもあった。

「こちらへ来い」

カルッツェは手招きをした。それに応じてサミはおずおずと彼の傍に寄った。

「うわっ」

サミは思わず声を上げた。カルッツェが傍に置いてあったタオルを手に取り、それですっぽりと彼女の頭を覆ったのだ。そして彼はワシャワシャと髪の水分を拭きとった。

タオルと取ると、中からボサボサの髪をしたサミが現れた。困ったような表情を浮かべている彼女がとても愛おしく思えた。

カルッツェはベッドから降りて、机の上に整然と置かれてあった櫛

を取り、それをサミに渡した。彼女は不思議そうな表情浮かべながら、その櫛を眺めている。

「どうした。それで髪の毛を整えればよい」

「……」

サミは櫛を手に取ると、それを右に左に動かしていた。どうやら、櫛の使い方を知らないらしい。ガノブの娘と言っても、一人になると所詮は何もできない少女なのだ。カルッツェはそんなサミが哀れに思えて仕方がなかった。

「貸してみよ」

彼は櫛を手に取ると、丁寧に彼女の髪の毛をそれですいた。そして、手早く髪を真ん中で分けて、いつもの彼女の髪型を作った。

「いつもは、カワバにやってもらっていたのか」

彼の問いかけに、サミは無言で頷く。

「乾かすのも……」

「なに、乾かす、とは？」

「魔法で……。温風を出して乾かすのです」

「……魔法は扱えぬ」

カルッツェは困ったような顔をした。髪の毛を乾かすという行為は

初めて聞いた。そんなものは自然に乾くのを待てばよいのではないかと思ったが、彼はその感情を押し殺した。

「あ……明日、あのクエナとかいう者に話をしてみよう」

その言葉に、サミはゆっくりと頷いた。

「どうして、このようなことが？」

不意にサミが口を開く。その言葉の意味がわからず、カルッツェは首を傾げた。

「あなた様も、カワバのようなことができるとは、意外でございました」

「……そうか？　……まあ、私は四男であるから、幼い頃からタカの地にあって、そこでは自分の身の回りのことはほとんど自分でやっていたからな。まあ、家来が少なかったというのもあるが、亡き母上のお考えもあったのだろう。そのために私は、料理こそできないが、風呂に入ったり、服を着たり、それらのことをすることくらいは自分でできるようになった。そういえば、亡くなられた兄上は、衣服の乱れすらも家来に直させていた。おそらくあのお方は、ご自分で服を着ることすらもできなかったであろうな」

そう言って笑みを浮かべてみたが、目の前の妻の顔を見て、彼はすぐに真顔になった。サミの顔が、私も同じですと言っていたからだ。

「ま……まあ、そなたのことは明日、あのクエナという者がやってくれるであろう。それとも、今からあの者を呼ぶか？」

カルッツェの問いかけに、サミはゆっくりと顔を左右に振った。

そのとき、サミの着ていたバスローブの前がはだけて、その美しい体が露わになった。どうやら紐をきちんと締めていなかった、いや、適当に締めてしまったのだろう。カルッツェの視線に気づいた彼女は恥ずかしそうに再び体を隠した。

カルッツェは無言のまま、両手で彼女のバスローブを掴むと、もう一度、ゆっくりとそれを広げようとした。だが、サミは両腕に力を込めて、そうはさせじという態勢を取った。しかしカルッツェはさらに力を込めた。

これ以上抵抗はできないと悟ったのか、サミの力が抜け、彼女の体が露わになった。幾度か肌を重ねた体だが、こうして明るい場所でその体を見るのは、カルッツェにとっては初めてのことだった。サミは恥ずかしそうに体をくねらせているが、それでは到底露わになったその美しい体を隠すことはできなかった。

思わず彼女の体を抱きしめた。力を入れると壊れてしまうのではないかと思われる程、その体は柔らかかった。カルッツェの興奮は頂点に達しようとしていた。

そのときふと、侍医であるケンモの顔が脳裏をかすめた。

「過ぎたるは毒でございます。サミ様との逢瀬は、三日に一度。三日に一度になさいませ」

何故か、その口癖が思い出された。カルッツェは思わず舌打ちをして、小さな声で呟いた。

「……バカめ。三日に一度などと。余計に病気になるわ」

第八百七十二話　サミという女性（後書き）

コミカライズ最新話、無料公開中です。是非チェック下さい！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｃｏｎｔｅｎｔ／００３９０００１

第八百七十三話　今宵の趣向

それから三日後、カルッツェとサミ夫婦が逗留する部屋に、メイリアスが見舞った。訪問したのが夕刻であったにもかかわらず、夫婦は喜んで彼女を迎えた。メイは二人の様子を一目見て、自分の決断が正しかったことを確信した。

なにより、サミの様子が数日前とは別人のようになっていた。まず、体から発せられる雰囲気が違う。見るからに明るくなった。そして、肌艶もよくなっていた。色々なしがらみから逃れて、本当の自由を手に入れた喜びが、体中から溢れているように見受けられた。

一方、カルッツェも以前あった刺々しさは鳴りを潜め、穏やかな雰囲気を醸し出していた。愛する女性との満ち足りた生活が、彼の雰囲気を変化させていることは明らかだった。

ただ、以前に比べて顔色が少し悪い。顔も少し痩せたようだ。おそらくこれは、サミとの逢瀬が原因であることは誰の目を見ても明らかだった。それはおそらく、ここに来る前に侍医であるケンモが、サミとの逢瀬を控えるように言ったことも遠因の一つだろう。人は、いけないと言われたことをやってしまうものだ。

サミとの逢瀬は日に数度に及ぶのだろうが、彼女自身に疲れなどの様子は見られない。おそらく、二人の相性は非常に良いのだろう。

メイはこの件に関しては特に何も言わないことに決めた。

メイとチワンが開発している薬は、ほぼ完成の状態にあった。未だ人体についての臨床は行われていないが、カルッツェの体力であれ

ば十分に薬の効力は発揮されるだろうとメイは見ていた。それ故に彼女は黙って二人の様子を見守ることに決めたのだった。

それよりも、カルッツェとサミは互いに、タルカト王国とダオラ帝国を背負って立っていた身の上だ。その、人にはわからぬ重圧と、二人に共通する責任感の強さは、想像以上に二人の心に負担をかけていたのだろう。特にサミは、両国と、さらに乳母カワバとの間でその身をすり減らしてきた。そうしたものをなくした二人が、わずか三日の間でここまで変わるとは正直、メイ自身も予測していなかった。

きっと、これがお二人の本質なのでしょうね……。メイは心の中で呟く。二人とも本来は優しく、穏やかな性格なのだ。ただ、二人の立場がその本来の自分でいることを許さなかった。自分を出せない状況がいかに苦しいものであるかというのは、メイ自身とてもよくわかることであった。

カルッツェ様は教師に、サミ様は多くの子供たちに囲まれた母親がよく似合うのでは、とメイは想像する。アガルタ大学……いや、アガルタ軍で教官の任につき、新兵たちを厳しくも温かく指導するカルッツェ。そして、その夫の帰りを子供たちと共に家で待つサミ……。そんな未来が二人に訪れることがあれば、どんなに幸せだろうか……。

「……殿。メイリアス殿」

不意にカルッツェから声をかけられて、メイはふと我に帰る。彼は不思議そうな表情を浮かべていた。

「何か……気になるところでも、おありか」

「あ、いえ。これは……私としたことが」

メイは狼狽えながら掌を左右に振る。思わず二人の未来を想像してしまったことを告げると、若夫婦は思わず笑みを漏らした。

「そのようなことは……想像したことすらなかった」

カルッツェの言葉に、サミも無言で頷く。

「ただ、そうした未来は難しかろう。おそらく……生まれ変わったときに、だな」

男の言葉に、メイはゆっくりと頷いた。

こちらのお部屋はいかがですか、というメイの言葉に、彼は目を輝かせながら口を開いた。

「いや、大満足である。正直言って予想外なことばかりで、驚いている」

カルッツェが気に入ったのは、このホテルのホスピタリティー溢れるサービスだった。従業員は気さくで、ちょっとした会話から、カルッツェたちの希望を読み取る。昨日など、カルッツェが従業員と挨拶を交わしたときに、右の肩を廻していたのだが、部屋に帰ると枕が変わっていた。そうした配慮に彼は感動を覚えていたのだった。

食事も美味であり、窓からの景色もいい。食事の間にベッドのシーツが取り替えられ、掃除がされているのにも大いに驚き、感動していると、二人は楽しそうに会話を交わしていた。

そのとき、部屋の扉がノックされた。失礼しますと男の声がすると、扉がゆっくりと開けられた。

そこには一組の男女が立っていた。男はいかにも人のよさそうな顔つきをしており、とりわけ、目にこぼれるような愛嬌があった。一方、女性の方は、絶世の美女、と称して差し支えない様子だった。辺りの空気すらも一変させるその美しさに、カルッツェとサミは言葉を失った。

二人の姿を見たメイは立ち上がると、すみません、と口を開いた。その彼女を男は手で制しながら笑顔を見せた。

「いやいや、気を使わないでくれ。今日はただ、お二人に夕食を御馳走するために来たんだ」

「本当に……ありがとうございます」

「元々俺が提案したことだ。気にしないでくれ」

男と聖女・メイリアスは旧知の仲であるかのように、気安く言葉を交わし合っている。一体この男女は何者だろうかと訝るカルッツェとサミに、男は笑顔で話しかけた。

「本日は、せっかくこのホテルにおいでいただいたお二人に、天ぷらを召し上がっていただこうと思いまして、こうしてご迷惑も顧みずに押しかけた次第です。ご無礼の段、平にご容赦を」

「貴殿たちは、一体……」

「いえ、あっしらは、町で天ぷら屋を営みますケチぃな野郎でございます。天ぷら……といってもご存じありませんやね。ええ、天ぷらなんでやす。天ぷらって言う天ぷらでやす。あっしぁコイツはうめぇと思うんでやんすが、お二人のお口に合うかどうか……。いや、きっとお口に合うと思うんでやす。その天ぷらをお二人に是非、味わっていただきたく思いやして、無理を言ったんでござんす。……イテッ」

男の隣に控えていた女性が肘で突いている。その様子を見たメイが口を開く。

「ご主人……の、作られる天ぷらは本当に美味しいのです。ホテルのお食事もよいかとはおもいますが、お二人が目の前で揚げる天ぷらは絶品です。是非、味わっていただきたいと思いまして、本日はご用意いたしました。恐れ入りますが、私もご相伴にあずからせていただければと存じます」

呆気にとられる二人にメイは笑顔で頷く。聖女・メイリアスが一緒に食事を摂ると言う。それならば安心だと二人は頷き合う。それに、この聖女と膝をつき合わせて食事を摂る機会はそうそうあるものではないと思われた。そうした様子を見た男が、お願いしますと扉に向かって声をかけると、それが合図であったかのように扉が開き、従業員たちが机と道具類を運び込んできた。

準備はあっと言う間に終わった。カルッツェたちの前には、見たこともない料理道具と、海の幸と野菜類が置かれていた。

「あ、苦手なものがあれば言ってくださいね」

男がそう言いながら、油を入れた鉄の鍋に火を起こす。ややあって

男はその食材に、何やらドロドロとした白い液体に浸けていく。一体何が始まるのか……。カルッツェたちは不安と期待が入り混じった心境で、その様子を見守っている。

「まだ早いですわ」

「そんなことはないだろう」

「まだ油が温まっていませんわ」

女性は男を嗜めながら、白い液体に浸けられていた食材を油の中に入れていく。直後に大きな湧き上がる音が聞こえると同時に、何とも言えぬいい香りが鼻腔をくすぐった。

「……もうそろそろいいんじゃないか？」

「まだですわ。それよりもはやくサラダを作って下さいな」

「……おっと、忘れていた」

男は慌てて野菜を手に取った。その様子を見た女性は小さくため息をついた。そして、カルッツェたちに視線を向けると、にこやかに笑いかけた。

二人はそのやり取りをただ黙って見ている他はなく、メイリアスも、苦笑いを浮かべながらその様子を見ていた……。

第八百七十四話　奇妙な夕食会

その奇妙な夕食会は、淡々と、しかし、効率的に進んでいった。カルッツェは目の前で料理をしている男女はただ者ではないと踏んでいた。どこかの王族のようにも見えるし、冒険者のようにも見えた。とりわけ、女性は見るからに王族の雰囲気が現れていた。それは、見た目の美しさもさることながら、特に目を引いたのは、折に触れて彼女が見せる振る舞いだった。

それは実に洗練された振る舞いだった。とりわけ、指の使い方がしなやかで、そうした動きは一朝一夕で身に付くものではなく、長い年月をかけねばならないことを彼は知っていた。とはいえ、そうした王族がわざわざ他人のために料理をするとは思えない。これはひょっとすると、この女性はどこかの、貴族に匹敵する大地主の妻かもしれない……。カルッツェはそう見当をつけていた。

わからないのは男の方だった。貴族に見えないこともないが、どちらかというと冒険者と言った方が適当な風貌だった。それに、振舞い方が貴族のそれではなかった。隣の女性と比較するとそれは一目瞭然であり、そうしたことから、カルッツェはこの男は王族や貴族ではないと判断していた。男は常に女性から窘められているところを見ると、この二人は夫婦であるには間違いなさそうだが、見ようによっては、男は女性の従者と見えなくはなかった。

彼はこの男女が何者であるのかを聞きたかったが、どうしてもそれを聞きだせずにいた。彼の本能が、それを押しとどめていたのだ。さらには、男と目が合うと、カルッツェは必ずと言っていいほどに、背筋に寒気が走るのだった。こんなことはこれまでなかったことだ。

男に殺気などの雰囲気は微塵もなく、相変わらずニコニコと笑みを浮かべながら、出された料理について解説していった。これは何とかという魚で、塩を付けて食べると美味しいだとか、この野菜は「てんつゆ」という液体に浸けて食べると美味しいだとか、そんなことを取り留めもなく喋った。

一見すると、単なる優男に見え、実際にとても気の利くよい男でもあるのだが、どうしてもカルッツェの本能はこの男を拒否していた。そのために、話しかけるどころか、まともに目も合わせることができなかった。

そんな中でも、供される料理はまさに絶品と言ってよかった。「天ぷら」と呼ばれた油に通した食べ物は、カルッツェとサミの記憶に深く刻み込まれ、二人はたちまちこの料理の虜になった。サミは臆面もなく、また明日の夜もこれを食べたいと言い出す始末で、メイリアスから、そうしてしまうと、このホテルのコックがお役御免になってしまうと言って窘められていた。

彼らの常識では、野菜や魚、肉といった料理は焼くか煮るのが一般的であり、揚げる、という料理方法は初めて経験するものだった。油で揚げられた食材に塩や「てんつゆ」を用いることによって、これまでとは違った味わい方があるのを、この夫婦は初めて知ったのだった。

どのくらいの時間が経っただろうか。男と女、そしてメイリアスらが様々な話をして、全く退屈しなかったこともあって、それはあっと言う間に終わりを迎えた。女性は最期の料理だと言って、「かきあげ」なるものを作り出した。これは今まで食べたのもとは比べ物にならないのだと男が言いながら、カップに何やら白いものをよそ

っている。それがコメという食べ物であることは承知していたが、その上に丸い天ぷらが乗せられ、ソースをかけて出されると、それをどう食べてよいのかがわからず、二人は一瞬躊躇した。

「本当は箸で食べるのが一番ですけれど、スプーンで。スプーンで食べてみてください。かき揚げとごはんと一緒に食べると、本当に美味しいですよ」

男の言葉に、メイリアスがスプーンを手に取り、上に乗っているかき揚げを割り、ご飯と共に口にの中に入れる。そして、目を閉じて、本当に美味しいですといって笑みを見せた。

彼女の通りに食べてみた。なるほど実に美味しいものだった。これまでの料理よりも濃い味付けで、男の言うシメ料理として食事の最後を飾るメインディッシュにふさわしいものだった。これを初めて見たときは、全くそうは思えなかったが、見るのと実際味わってみるのとでは、印象が異なるものだった。

「どうです、美味いでしょう？　まあ、何か嫌なことや悩みがあったら、美味い物を食べて、いい景色を眺めて、ゆっくり眠る。これに限ります」

かきあげに舌鼓を打つカルッツェ夫婦に向かって、男が呟く。それを受けて、メイリアスが大きく頷いた。

「今夜は特別に、お二人のためにかき氷を作っていただけるようです」

「かきごおり？」

「はい。目の前で氷が砕けてサラサラの氷になります。私も最初見たときは、感動しました」

そう言ってメイリアスは目を輝かせた。その様子を見てカルッツェは純粋に美しい人だと心の中で呟いた。

正直、聖女・メイリアスがこれほど表情豊かな女性であるとは思わなかった。その風貌と雰囲気からは優秀さと優しさを兼ね備えていることは一目でわかったが、それだけでなく、人の話を聞く傾聴力と、喜びと嬉しさの感情を表す上手さも備えているのが、この食事会でよく見て取れた。これは、どのような男性でも、この女性に心を奪われることだろう。アガルタ王もその一人であろうし、こうした女性を傍に置いているアガルタ王がうらやましくもあった。

そんなカルッツェに男はニコリと微笑みながら、手のひらの上で水球を作り出した。大人の握りこぶしを一回り大きくしたほどの水球。男はそれを掌の上で浮かべながら、まじめな表情を浮かべている。ややあって、その水球は徐々に氷になり始めた。

信じられないことだった。一体どうやって水を掌の上に出したのか、そして、それを凍らせたのかが一瞬、カルッツェにはわからなかった。おそらく魔法ではないかと予想したが、彼の常識では魔法は詠唱して発動するものだった。だが、目の前の男に詠唱をした様子はなかった。

「……無詠唱魔法ですか」

隣のサミが誰に言うともなく呟く。男は笑顔を見せると、まあ、そんなものです。たいしたことではありませんと言って、もう一つの氷の球を作り出した。

「無詠唱魔法は、ＬＶ４以上のスキルが必要と聞いていますが……」

「ああ、巷ではそう言われていますよね。でも、魔法というのはイメージです。ちゃんとしたイメージを持って発動すれば、詠唱しなくても大丈夫なのですよ。まあ、ちょっとしたコツはいるのですけれどね」

男の言葉にサミは絶句している。それは、この男はＬＶ４のスキルを持っているとは到底見えなかったからだ。彼女のイメージではそうしたスキルを持つものは概して老人か老女というものであり、いかにも若者という風貌を持つ目の前の男が、それほどのスキルを持っているとは到底思えなかったのだった。

瞬く間に男は三つの氷球を作り終えた。彼は皿の上に氷を置くと、それを掌で包み込むようにして両手を当てた。しばらくすると、シュルシュルという音が聞こえてきたかと思うと、氷が削られていき、まるで砂のようになっていった。その隣では、女性がソースを作っていて、果物をすりつぶし、砂糖と何かを手早くかき混ぜている。そして、削られた氷が山形に固められたその瞬間にソースをかけると、見事な赤色が広がっていった。

「さあ、召し上がってみてください」

メイリアスがそう言って勧める。サミは目の前に置かれたその氷菓子をスプーンですくい、口の中に入れた。

「ん！　美味しい！　すごい！　口の中で溶けていく！」

まるで子供の用にサミははしゃいだ。その様子を見たメイは、この

女性はこれで大丈夫だと確信を持った……。

第八百七十五話　カルッツェの過去

リノス、リコ、メイの三人は、ホテルクルムファルから帝都の屋敷に転移した。カルッツェたちとの食事が意外なほどに長引いてしまい、予定を大きく超えての帰宅となっていた。

「おかえりなさい！　夕食はどうされますか？」

いつものようにペーリスが笑顔で出迎えてくれる。リノスは実はペコペコなんだと言って笑顔を見せた。

「では、スープを温め直しますね。あ、今日のメインデッシュはお刺身です」

おお、と思わずリノスが声を上げる。刺身は彼の大好物だ。その隣でリコも笑みを見せている。

この世界では基本的に生魚は食さない。海に近い漁師町などではその限りではないが、それ以外の町や都市では、輸送技術や保存技術が追いついていないために、刺身を食べると言う習慣はなかった。そうした場所では専ら、魚の燻製が主に食されるのが一般的だった。

だが、この家では常に生魚が食卓に上る。それは、リノスの結界能力で魚の保存と輸送が可能であり、さらには、ペーリスの研究によって、前世で食べていた頃とほぼ変わらない内容の刺身が食べられるようになっていた。その技術や料理方法はホテルクルムファルにも伝授されており、そこでは、リノス家と変わらないクオリティーの刺身が供されていて、宿泊客に大いなる驚きと大好評をもって受

け入れられていた。

ちなみに、カルッツェとサミにはまだ、その料理は供されていないが、それを食べた二人はたちまちその料理を気に入ることになり、後に、カルッツェはタルカト王国内でそれを食べられる体制を整えるために情熱を注ぐことになる。それはむしろ、サミの強い願いもあってのことだった。

ダオラ帝国は水が悪い。そのため、そこで獲れる魚も臭みが強すぎて食すには適さない。皇帝ガノブは、そうした臭みのある魚の燻製が酒に合うとして好んで食すが、そうした例は帝国内でも稀な存在であると言えた。

サミの常識では魚は食べるものではないと言うイメージが強かったが、ここホテルクルムファルで味わった生魚の刺身は彼女の常識を一変させた。そうした意味で、メイが無理やりにこのホテルに二人を連れてきたのは正解であったと言え、ここで二人はこれまで囚われていた既成概念を完全に打ち破ることに成功していた。なお、余談ではあるが、カルッツェが長年住んでいたタカの地は水が豊富でかつきれいであり、その川には鮎が生息していた。カルッツェは魚の存在は知ってはいたが、それを食したことはなかった。それはむろん、釣るのが難しいということもあり、その魚は地元の者たちだけで食べていたということもあって彼の知るところではなかったが、生魚の味を知ってしまった彼は、魚料理に興味を持つようになり、やがてその鮎に目を付けるようになった。

焼いて塩を振りかけるだけで得も言われぬ旨味を持つ魚を、彼は生涯にわたって愛し、その鮎を国の宝として大切に守り通すこととなるのだった。その料理方法や、鮎が生きていくために環境整備が必要であるなどといった助言を、リノスやメイが行うことになるのだ

が、それはまだ、ずっと先の話である。

話を元に戻す。

夕食が運ばれてくるのを待つ間に、三人は自然と、先ほどのカルッツェ夫婦の話に花を咲かせた。

一番饒舌だったのはリコだった。彼女は頻りに、二人が仲睦まじい様子であるのを喜び、愛するものは愛する者同士、一緒にいるのが一番であると頻りに強調した。

「私もそう思います。二人があのホテルに入られてまだ数日ですが、以前とは雰囲気が全く異なっています。きっと帰国する頃には、お二人はすっかりよくなっていることだと思います」

メイはそう言いながら、カルッツェの痩せ方が気になっていた。あまり激しくサミを求めてはいけないと釘をさしてくるのを忘れた、と心の中で呟いていた。

一方でメイは、彼が旺盛な性欲を発散し続ける理由も理解していた。およそ二十年近くも禁欲していたのだ。さらには、病のせいもあって、その欲望は限界まで抑え込まれていた。そうして締め付けられていた欲望が、一気に今は解放されているのだ。それはある程度は仕方がないことではあった。

……これ以上、顔色が悪くなるようであれば、三日間は二人を隔離した方がよいかもしれない。

メイは頭の中でそう考えていた。

「しかし、二人の相性は本当にいいのかもしれないな」

不意にリノスが口を開く。メイは思考するのを止め、彼に視線を向ける。

「カルッツェには呪いが付いている。あれは前の嫁さんを殺したから付いたわけじゃない。それ以前にも、彼は数人の人間を殺している」

予想もしていなかった言葉に、リコはギョッとした表情を浮かべる。

「鑑定で過去を覗いてみた。ヤツは男と女、都合四人を切り殺している」

それは父である国王・シェングすらも知らない事実であり、カルッツェの側近たちが絶対の秘密として守り通してきた事柄だった。

まだ十五歳であった時のことだ。腕に覚えがあったカルッツェは、父から与えられた名剣をどうしても使ってみたくなった。森には魔物が住んでいる。低ランクの魔物であれば問題はあるまいとして、彼は従者にブトを伴って森に入った。

薄暗い中、彼らの前に数人の人影が見えた。それは、彼らに気づくと足早に逃げ出した。

「待て、待たぬか！」

追いかけていくとそれは二組の若い男女だった。カルッツェはどうして逃げたのだと問いかけたが、四人は一向に口を利かなかった。業を煮やした彼は腰に差している剣を抜いた。

それを見たひとりの男が逃げようとした。カルッツェはその男を背中から斬りつけた。それを見て残りの三人も逃げる態勢を取った。彼はそれらの人々にも剣を振るった。

あっと言う間の出来事だった。近習ブトも止めることは叶わなかった。後にその男女は村から駆け落ちしようとしていた者であることがわかった。その事実に最も衝撃を受けたのが、カルッツェの母、イヒメだった。母イヒメはカルッツェに対して何も言わなかったが、彼女はその日から食を断った。それが母の命を縮めた原因となったのは言うまでもない。カルッツェは己の浅はかな行動を悔い、それ以降は二度と無暗に剣を抜くことはしなくなった。

「呪いはＬＶ１だが、それでも善人や真面目な人には確実に嫌われる。おそらく、前の嫁さんとの間が不和だったのも、それが関係しているのかもしれないな」

「聞いた話によりますと、サミ様のお姉さまは互いが疎遠であったと聞いております」

「なるほど。そういう意味では二人の相性はよかったのかもしれないな」

リノスの皮肉にも似た発言に、メイは苦笑いを浮かべる。だが、呪いと聞いて、メイは合点するものがあった。医師として患者との関わりは平等に行うべきであるという信念のもと、カルッツェを診察しているが、積極的に彼と友誼を結ぼうという考えは起こらなかった。それはリコも同じであったようで、一目彼を見たときに、何とはない恐ろしさを感じたと言っている。

「まあ、二人はそれなりに訓練を詰んでいるから、そうした感情を表に出すことはしなかったが、いきなり呪いの付いたやつを見ると、普通は嫌悪感を露わにする。だが、サミ、とか言ったあの女性は、そうした様子は見られなかった。むしろ、一目見てカルッツェを気に入っていた。あの女性に呪いはついていなかった。ということは、呪いの嫌悪感を遥かに超える相性の良さがあったということだろう。まさに、運命の出会い、と言っていいんじゃないかな」

「まあ……」

リノスの言葉に、リコが嬉しそうな表情を浮かべる。そのとき、不意にメイが口を開いた。

「ご主人様」

「うん？　何だい？」

「先ほどご主人様は、カルッツェ様の過去を見たと言っておいでしたが」

「そうだよ」

「では、カルッツェ様とサミ様の房室もご覧になったのでしょうか？」

「うん？　え？　あ……。それ、は、です、ね。ええと？　少々……記憶があいまいで……」

「どの程度なさっていましたか？」

「ううっ」

リノスの顔が真っ赤になっている。それを見たメイは、思わず視線を逸らせた……。

第八百七十五話　カルッツェの過去（後書き）

★『結界師への転生⑦』コミック９／２２発売決定！　Ａｍａｚｏｎ等で絶賛ご予約受付中！★

第八百七十六話　ホテルクルムファル

ホテルクルムファルでのカルッツェとサミの滞在は、二人の人生の中で最も幸せな思い出として脳裏に刻み込まれた。これ以降、二人がすべてのことを忘れて自由に振舞うことは二度となかった。

老境に達するとカルッツェは、折に触れてこのホテルでの暮らしを思い出し、さらに年齢が進むと、家来たちに何度もそこに行きたいと言って聞かなかった。だが、そのときの彼はもはや臨終に近い状態にあり、転移はおろか、ベッドから移動させることすらも憚られる状態だった。

このホテルでの暮らしは、二人がやりたいことをやれた日々であった。外出、買い物は自由であり、とりわけ、ホテル近くの漁師町で売っているエラサハルの刺身を二人は気に入り、滞在中は何度もそこを訪れて舌鼓を打った。

そうしていくうちに二人は、今、滞在している場所がクルムファルという場所であることを知った。そこは、ヒーデータ帝国内にあって、アガルタの領地であると言う不思議で複雑な場所であることも知った。それは、アガルタ王がまだヒーデータの名誉侯爵時代に与えられた土地であり、元々は塩害と盗賊らの跋扈で崩壊寸前の土地であった。それをアガルタ王リノスの手腕で復興させ、ここまで発展させてきたのだ。ヒーデータの皇帝ヒートはその功績を高く評価し、リノスがアガルタ王に即位してからも、この地を彼に与えたままにしておいたのだった。

その話を聞いてカルッツェとサミは二度驚いた。特にカルッツェは、

そうしたことは危険であり、後々、ヒーデータとアガルタの諍いの種となるのではないかと懸念した。ヒーデータにとってみれば、このクルムファルという地は、帝都に近く、また、港なども備えているため、防備や経済的にも重要な拠点であるはずだった。もし、ヒーデータとアガルタが手切れとなった場合、帝国は真っ先にこの地を奪還しようと試みる。それは、言うまでもなく、この地が帝都に近く、そこまでは急げば僅か数時間で行くことができ、さらには、遮るもののない一本道であるからだ。もし、カルッツェがヒーデータの皇帝であったならば、そんなところに敵国の領地があったならば、耐えられないことであった。

彼は毎日ホテルの周囲を散歩し、時にはサミを乗せて馬で遠乗りに出かけた。関所などの類は一切なく、また、二人を監視している雰囲気もなかった。そうした環境を心地よいと思いながらも、彼はクルムファルという土地を観察していた。すると、徐々にこの町が強力な防衛施設を備えていることがわかってきた。

ホテルクルムファルの周囲は川に囲まれている。言わばこれが堀の役割を果たしている。さらには、ホテルから少し離れた山の頂上に立てられている屋敷。聞けばこれはホテルの別邸となっているそうだが、それはある意味で砦の役割を果たしている。さらに西に進めば、大きな川があり、それは言わば外堀の役割を果たしている。

北に目を向ければ険峻な山がそびえ、道は狭い。西の川に軍を配置して置けば、北側の守りは最小限でよい。唯一の弱点は南東に拡がる海で、ここを押さえられるとクルムファル防衛は苦しいものになるが、逆に、ここを押さえてしまえば、この町は鉄壁の要塞と化すと考えられた。

そこまで考えて、カルッツェは不思議に思った。なぜ、アガルタは、

ヒーデータは、この海に軍勢を配置しないのか、と。ヒーデータがアガルタを信頼しているのはわかる。そのために、軍勢を配置していないと言うのも理解できる。だが一方で、アガルタには、このクルムファルという土地を守らねばならない義務があるはずだ。このままこの海を、港をそのままにしておくのは、不用心極まりないことと言えた。もし、自分が攻める立場であったならば、まずここの港を狙う。そこさえ制圧してしまえば、クルムファルは落ちたも同然となるからだ。

世界に冠たるヒーデータとアガルタが、なぜこの海に軍勢を配置しないのか。その理由は最後までわからなかった。彼は知らなかった。この海がルアラの父・ポセイドン王の支配下にあることを。そして、その王とリノスは義兄弟の契りを結んでいるため、いざクルムファルに事があるときは、その海を荒れさせて軍船が近づくことができないようにできるのだということを。

そしてさらに、このクルムファルという土地を巡って、ヒーデータとアガルタの間で騒動が勃発するのは、それから数百年後のことであり、それまでは、ヒーデータの皇帝は代々、この土地をアガルタに貸与し続けた。それは、現皇帝、ヒートが亡くなる際に残した遺言が守られていたためであり、また、アガルタの王も累代にわたってその恩を忘れなかった。

一方で、妻のサミにとっては、ここでの生活はカルッツェという男に惚れ直す機会でもあった。彼は何でも知っていた。とりわけ、山深い土地で育ったと言うだけあって、山菜の知識は相当なものがあった。

あるとき、二人で馬に乗り、遠乗りに出かけた際、彼は山の中に入っていった。頂上に着き、クルムファルを一望する景色に酔いしれ

たその帰りに、彼は野イチゴを見つけた。それを何のためらいもなく口の中に入れ、まるで子供のような笑顔を見せた。サミからすれば、そのようなものは毒が入っているかもしれず、何も確認せずに食べると言う行為が信じられなかった。だが、その彼女に対してカルッツェは食べてみろと言ってそれを差し出した。

酸っぱいが甘い。野性味あふれる味だった。嫌いではない味だ。彼女はカルッツェに勧められるまま、色々なものを口の中に入れた。

「……ん、苦い」

不意に得も言われぬえぐみを感じた。その様子を見て彼はカラカラと笑い声を上げた。

「やはり慣れておらぬから、そう感じるか。私など食べ慣れておるから、このくらいの味がないと物足りぬのだ」

この何が美味しいのか、とサミは怪訝な表情を浮かべる。だが彼は、この山菜を湯通しすればうまいのだと言ってホテルに持って帰った。

早速彼はクエナに命じて、湯を張った鍋を持ってこさせた。鍋の中はグツグツと煮立っており、中には小さな石が入っていた。彼はそこに山菜を入れてひとくぐりさせると、それをサミの前に差し出した。

「食べてみよ」

口に入れてみると、先ほどまでのえぐみは一切なく、ほのかな甘みが口の中に拡がった。

「……美味しい」

「であろう？」

そう言って二人は頷き合った。

サミは彼と過ごし時間に比例して、その人間性が父・ガノブによく似ていることを知った。強気な一方で優しさを備えており、曲がったことが大嫌い。そして、人の意表を突くことが大好きで、驚かせることが好きな部分も父とよく似ていた。そうした彼をサミは深く愛するようになっていった。

ホテルクルムファルの滞在はあっと言う間に過ぎて、明後日には滞在予定を終了するというとき、カルッツェはクエナに滞在の延長はしない旨を通告した。そして、メイリアスとの面談を希望した。

「承知しました。では、明日にでもメイ様にお越しいただくようお願い申します」

ヒーデータからタルカト王国、もしくはアガルタの屋敷にいるメイリアスに、どうやって連絡するのか、などとは彼は聞かなかったし、メイリアスが明日、この部屋にやって来るであろうと信じて疑わなかった。アガルタはそうした不可能を可能にする力を持っていると、彼も十分に認識していたのだった。

「あ、それにもう一つ願い事がある」

「何でございましょう」

「少し前に食した天ぷら。あれを所望したい。できれば、あの料理

をした者たちに頼みたい」

「……承知しました」

カルッツェの言葉に、クエナは一抹の不安を感じた……。

第八百七十七話　ヒーデータ帝都

その翌日の夕方、メイリアスはカルッツェたちの部屋にやって来た。前回、天ぷらを作った夫婦を伴っての訪問だった。

カルッツェとサミ夫婦を一目見たメイは、確信に満ちた表情浮かべた。

「二週間前とは別人のようになられましたね。よかったですね」

その言葉に、サミは嬉しそうな表情を浮かべる。

「タルカトに帰ったら早速、サミと二人で暮らす館を作るつもりだ。そこで、誰にも邪魔されずに暮らすつもりだ。むろん、政務や軍務を疎かにするつもりはない。ただ……そのほかの時間は、誰にも邪魔されずに、二人で癒される時間を持ちたいのだ」

その言葉にメイは大きく頷いた。

ふと、カルッツェの視線がメイの後ろに控えている夫婦に向けられた。

「あのときの天ぷらの味が忘れられず、所望してしまった。無理を言ってすまぬ」

「いいえ。我々の料理を気に入っていただきまして、嬉しいですよ」

男はそう言って笑顔を見せた。

「それにしても、このクルムファルという土地は、なかなか手が込んでいる。単なる観光地と思わせておいて、戦うための準備ができている」

カルッツェの言葉に、男は相変わらず柔和な笑みを浮かべている。彼はその様子を見ながら、この土地がいかに戦いの準備が整っているのかを滔々と説いた。

「ほう、そうご覧になりますか」

男が頓狂な声を上げる。意外だと言わんばかりの表情を浮かべている。それは芝居などではなく、心底そう思っているように見えた。

「なるほど。そうみればそう見えますね。まあ、この土地は元々、クルムファル家が所有していたところです。他国からの侵攻に備える必要もあったし、ヒーデータ国内にも注意を払わねばならなかったのかもしれない。そう考えると、色々な防御施設を作っていたというのは不自然な話ではないな」

「かなり昔の話ですが、ヒーデータ帝国内は長い間内乱状態にあったのですわ。クルムファルが戦いの防御施設を備えているのはおそらく、その名残ですわ」

「ああ、そうなんだ。なるほどね」

「ただ、この町には一つの弱点がある。海だ。余がヒーデータに戦いを挑むとすれば、まず真っ先に海を渡り、この町を目指す。ここを落とせば、ヒーデータの喉元に刃を突き付けたも同然となる。状況によっては、そのまま帝都まで軍を進めれば、帝都は呆気なく陥

落する。さすれば……」

「失礼ですが、ヒーデータの帝都をご覧になったことは？」

「いや、ない」

「ヒーデータの帝都がそう簡単に落ちるとは思えません」

「なに？」

カルッツェは明らかに不満の表情を露わにした。そんな彼に構うことなく、男は話を続けた。

「機会があれば一度、ご覧になってみるといいですよ。壮大な都市です。あの帝都は。山の中腹を一気に削り取って、その上に大規模な都市が築かれています。言わば、台地の上に都市が作られているので、その入り口をふさいでしまえば、軍勢は入って来られなくなります。帝都は大規模な城塞都市です。その中で農業もなされていますし、湧き水も豊富です。軍勢に囲まれても数年間は耐え切るでしょう。クルムファルを落としたとて、帝都を陥落させるのは至難の業です」

「……ならば、このクルムファルを手中に納め、周辺の地を併呑していくこととしよう。帝都だけになってしまえば、もはやヒーデータは国としての体をなさぬ」

「ああ、なるほど……。そういう考え方もありますか。う～ん、どうだろうなぁ」

男は腕組みをしながらあらぬ方向に視線を向けている。ややあって

男は静かに口を開いた。

「いや、やっぱり帝都を落とさないと、勝ったとは言えないかなぁ」

「何と？」

「いや、気分を悪くされたのなら謝ります。これはあくまで俺の感覚ですけれども、相手の国の都を制圧して初めてその国に勝ったと解釈するのです。むろん、交通や物流の拠点を制圧して、相手の国の心を折ることはあるでしょう。それをしたことで、相手が降伏を申し出てくる、もしくは降伏を勧告すると言うことはあるでしょう。ただ、ここヒーデータに関しては、クルムファルが落ちたからと言って帝都内の貴族たちが屈服するとは思えませんし、帝国自体も降伏してくることはないでしょう。まあ、えらいところまで侵攻されてしまったな、という感情は持つでしょうが」

「ならば、そこもとは、ヒーデータの帝都を落とすのは余ではできぬ。そう申すのか？」

「いや、たぶん、誰がやっても無理だと思いますね」

「なに？」

「う～ん。例えば、クリミアーナ教国。ご存知ですか？　ヴィエイユっていうスケベな教皇が治めている国があるのですが。あ、クリミアーナ教を信仰していらっしゃったらごめんなさい？　あ、信仰していない。それはよかった。いや、スケベなやつがいるのですよ。そう、エロいんじゃなくて、スケベなのです。ただ、ヴィエイユはスケベですが、その軍勢となれば本気を出せば数十万を超えます。おそらく、その世界最大の軍勢を動員したとしても、ヒーデータの

帝都は落とせないと思いますね。むろん、帝都以外の都市は落とせるでしょう。ですが、帝都は無理だと思いますね。できるなら、すでにやっているでしょう。それができないからやっていないだけで」

「……」

「そもそも、今のヒーデータは盤石です。力攻めではどの国も太刀打ちできないでしょう。そもそも、ここクルムファルに近づくことすらできないでしょうね。このクルムファルの南には大規模な港があり、そこに帝国の軍船が犇めいています。それに、南のラマロン皇国と同盟を結んでいますし、北のニザ公国とも同盟を結んでいますから、海から帝都に近づくと、近づく前に沈められてしまいますね」

「しかも、その背後にはアガルタが控えている」

「……まあ、そうなりますね」

「では、最後に聞くが、この帝国の帝都を陥落させるにはどうしたらよいか？」

「内部崩壊しか手はないでしょうね」

「内部崩壊……？」

「ええ。内乱を勃発させて帝都を掌握する……それしか手はないと思いますね。ただ……」

「ただ、何であるか？」

「それはかなり前からいろんな国が試みてきましたが、未だ成功した試しがありません。まあ、今のグレモント宰相が優秀だというのもありますが、意外と帝国内部の結束は固いですね。まあ、反乱分子がいないとは言いませんが、そうした人々を上手く取り込んだり排除したりしていますね。グレモント宰相がいなくなればあるいは、とも思いますが、その後継に指名されているヴァイラス公爵も実に優秀なので、なかなか内部崩壊も難しいですかね」

「ならば、アガルタが攻めればどうであろうか」

「無理です」

男は言下にそう言ってカルッツェの言葉を否定した。その態度が癪に障ったのか、カルッツェの眉間に皺が刻まれた。

「これは別にアガルタに限ったことではなく、その前の、ジュカ王国の時代から長い間にわたってヒーデータを攻め続けましたが、一度も成功しませんでした。アガルタの軍勢をもってしても、どうだろうな……。帝都を囲むまではやってできそうではあるけれど、陥落するまで囲み続けるというのがなぁ……。途中で萎えますね、間違いなく。司令官ではなく、兵士たちが耐えられないでしょうね。ですので、無理です無理です。まあ、俺がちょっと本気出せば陥落させちゃいますけれど、なんてね」

男はそう言ってカラカラと笑った。その隣で女性は冷たい眼差しを男に向けていた。それに気づいた男が小さな声で、ごめんなさいと謝っていた。

「これで確信した。やはりあなたは、アガルタ王・リノスだ」

不意にカルッツェが口を開く。男はニコリと笑みを浮かべた。

「……バレたか」

第八百七十七話　ヒーデータ帝都（後書き）

★『結界師への転生⑦』コミック９／２２発売決定！Ａｍａｚｏｎ等で絶賛ご予約受付中！★

第八百七十八話　一体どうして？

カルッツェの言葉に、隣に控えていたサミがキョトンとした表情を浮かべた。夫が何を言っているのかがわからないと言った表情だった。だが、徐々にカルッツェの気配が変わってきているのに敏感に気づいていた。今まで感じたことのない、異様な雰囲気だった。

「ご明察の通り、こちらの方は、アガルタ王、バーサーム・ダーケ・リノス様でございます」

不意にメイリアスが口を開いた。その声を聞いた直後、カルッツェは片膝をついて畏まった。

「これは、アガルタ王におかせられましては、ご無礼の段、平にご容赦を」

「ああ～よしてください、よしてください。そう言うのはナシで」

リノスが両手を振りながらカルッツェの前まで行き、同じように片膝をついた。その様子を見たカルッツェはさらに深く頭を下げた。

「いやいやいや、お願いします。そう言うつもりで来たわけじゃないので。頭を上げてください」

リノスにそう言われてカルッツェは、ゆっくりと頭を上げた。その様子を彼は満足そうな笑みを浮かべながら頷いた。

「今日はそうした公務的なことではなくて、私的なこととして参り

ました。今の私は、王ではなく、ただの天ぷら屋のオヤジです」

「あ……あの……」

サミが思わず口を開こうとする。アガルタ王・リノス。その名前はもちろん知っている。父・ガノブが一度、煮え湯を飲まされている。あまり他国の王を褒めない父が、油断してはならぬと言ってはばからない数少ない王の一人だ。まさかその男が目の前に現れるとは思ってもみなかった。彼女はもし、アガルタ王に会うことができるならと想像してみたことがあった。そのときは色々な質問を彼にぶつけようと考えたが、口をついて出た言葉は、思ってもみないものだった。

「一国の王とは思えぬほどの……平民のようなお方なのですね」

思わずハッ、と口に手を当てる。それは言ってはならぬ一言だった。だが、リノスはカラカラと笑い声を上げると、サミに向かって、グッと親指を立てた。

「そう言っていただけると、嬉しいです」

そんなサミにカルッツェは、一体何を言うのだと言わんばかりの表情を浮かべている。

「実は、お二人のことをお話ししたところ、ご主人様……アガルタ王様が美味しいものを食べるのが一番であると仰いまして……。そうしましたら、リコ様が天ぷらを振る舞いましょうと言っていただいたのが、この間の天ぷらです」

「……リコ様？　あの……アガルタ王様の、姫君でしょうか？」

サミの言葉にリコが驚いた表情を浮かべた。彼女自身、まさかそんなことを言われるとは思ってもみなかった。

「いえいえ、俺にこんな大きな娘はおりません。紹介します。妻のリコレットです」

「リノスの妻、リコレットでございます」

リコはそう言って少し膝を折って貴族式の挨拶をした。それを受けてサミが深々と腰を折った。

「これは……大変ご無礼を申し上げました。お許しくださいませ」

「いいえ！　何を仰いまして！　とても嬉しゅうございましたわ」

恐縮するサミに、リコは柔和な笑みを浮かべた。

「やはり、そうであったか」

カルッツェがそう言って頭を左右に振った。彼は呆れたような表情を浮かべている。

「以前お目にかかったとき、こちらの女性は貴族の、しかも大貴族の奥方ではないかと思ったのだ。その洗練された振る舞いが見事であった」

「お褒めにあずかり、光栄でございますわ」

リコが笑みを浮かべる。その笑みを見てカルッツェは素直に美しい

と思った。

「実はね、この天ぷら食事会を提案したのは、妻のリコなのですよ。お二人を救いたいと言いましてね。というより、同じ妻のメイも、本当にお二人の体調を心配して、何とかしたいと常日頃から言っていましたので、リコも何とかしたいと思ったようです」

「リノス、あなたが二人は死んでしまう、などと言うからですわ」

「いや、それはあくまで物語の話だから」

「でも、お二人のお蔭で、カルッツェ様もサミ様も、こんなに元気になられました」

「まあ、よかったよかった、だな」

そう言って三人は笑みを交わし合った。その様子をカルッツェとサミ夫婦は、目を白黒させて眺めていた。

二人とも、まるで幻を見ているかのような感覚に囚われていた。聖女・メイリアスだけでなく、世界に冠たるアガルタ王が目の前にいる。しかも彼は妻にリノスと呼び捨てにされていて、それに対して何ら不快感を示していない。夫の、さらには王の名前を呼び捨てにするなどということは、二人の常識では考えられぬことであった。

「しかし……どうして、我らにそこまでしてくださるのか」

カルッツェが決意を込めた目で話しかける。その言葉に、メイは真剣な表情を浮かべた。

「病人を治療するのは、医師として当然の勤めです」

「そ……それはわかるが……」

「医師として、患者が治癒する最善の手法を用いるのは当然のことです」

「それに見合う報酬が……」

「必要ありません」

カルッツェは感動していた。単なる山国の王太子に、そこまで考えてくれていたのかと。一瞬でもアガルタ王が何か礼を要求してくるのではないかと思った自分が恥ずかしかった。

「まあ、せっかくです。天ぷらを作りましょう」

「いっ、いや……それは……」

「よろしいではございませんか」

「は、なに？」

サミが突然口を開く。思ってもみなかった言葉に、カルッツェは鳩が豆鉄砲を食らったような表情を浮かべながら妻を見た。

「私はもう一度、あのてんぷらが食べとうございます」

「そうですか！　では、腕によりをかけます」

そう言ってリノスは笑顔を浮かべた。

それからリノス夫婦は様々な料理を提供したが、カルッツェは正直、その料理を味わうことはできなかった。彼は心の中では、これを機会にアガルタ王と何らかの接点を持ちたいと考え、あわよくばタルカト王国との同盟を結びたいという思いを持っていた。だが、どうしてもそれを言い出せなかった。言い出したらば、この二人に、いや、聖女・メイリアスさえにも距離を置かれてしまうような気がしていた。そうした心にモヤモヤを抱えながらの食事は、満足に味わうことはできなかったのだった。

一方でサミは、供される料理を美味しい美味しいと言って、すべて食べた。さらには、リコレットに天ぷらの作り方を詳しく聞くほどであった。そんな妻の様子を見ながらカルッツェは、さすがにガノブの娘だけあって、腹が据わっていると見直したのだった。

すべての食事を終え、リノス夫婦は笑顔で帰っていった。メイリアスも、カルッツェ夫婦に関しては、全く問題はなくなりましたと言って、太鼓判を押してくれた。そして、タルカトに帰ったら、これまで苦しんでいたあの病の特効薬を飲んでもらうと言われたのだった。

部屋に帰り、風呂に入って、二人はベッドに入った。一体あの食事会は何であったのだろうか……。自分から言い出したことであるのにもかかわらず、何か、触れてはならぬものに触れ、見てはならないものを見てしまった感覚がぬぐえなかった。

「……楽しかった」

隣のでカルッツェが悶々としている中、サミが天真爛漫な表情で呟

く。さすがに、そんな彼女の様子に彼は呆れてしまった。

「そなたは……アガルタ王とリコレット王妃を目の前にして、よくそれだけ楽しんでいられるな」

「だって……あのお二人は面白いのです」

「面白い？」

「まるで兄弟のように話しておいででしたわ。あれだけの大国の王なのに、そうした威厳みたいなものが一切なく、気さくなお方でした。我が父ガノブとは正反対のお方でした。きっと、アガルタ王様のああした大らかさが、アガルタを強国たらしめているのでしょうね。私も、あなた様と、ああいう夫婦になりたいと思います」

サミはそう言ってカルッツェの手を握った。その手は仄かに温かく、彼の不安をゆっくりと溶かしてくれるような温かさだった……。

第八百七十八話　一体どうして？（後書き）

★『結界師への転生⑦』コミック９／２２発売決定！Ａｍａｚｏｎ等で絶賛ご予約受付中！★

第八百七十九話　親離れ子離れ

国王シェングは自室で、カルッツェたちの帰りを待ちかねていた。日々の様子はメイリアスを介して聞いてはいたが、以前とは比べ物にならぬほどに別人のようになったと聞いて、その変化に期待を膨らませていた。

彼の傍には、愛妾トミサが控えていて、期待に胸を膨らませている王の様子を、温かい眼差しで見守っていた。彼女のとしても、折に触れて見える彼の刺々しさが惜しい部分であると思っていたところだった。そうした点が影を潜めたと聞いて、彼女自身もその変化を楽しみにしていた。

カルッツェについていた「呪い」スキルは、彼にわからぬようにリノスが解除していた。その方法をゴンに聞こうとしたが、彼は留守にしおり、仕方なく彼はたくさんの供物をもっておひいさまに教えを乞うたのだった。

ちなみに、おひいさまはそのとき持参した「くずもち」を大いに気に入り、次回からそれを多めに持ってくるように求めた。単に葛を冷水に晒して固めただけの素朴な味わいを気に入ったが、次回は砂糖の割合を増やし、さらにその中に、固まった砂糖を入れて噛み応えを出すようにするよう命じた。それでは「くずもち」ではなくなるためにリノスは大いに驚いたが、そこは機転を利かせて、ザラメ砂糖を入れて食感を出しましょうと言って、おひいさまを喜ばせた。

その彼女の部屋の前では、サンディーユが鬼の形相を浮かべながら、二人の会話を聞いていた。彼は別に、リノスに供物を持って来るな

という気持ちはさらさなかった。供物が届くと、おひいさまをはじめ、女官たちの機嫌がすこぶるよくなるからだ。だが、おひいさまは、折に触れてその供物を食べ過ぎて太る。彼はそれを案じていた。彼女が太ると、屋敷の床が抜けることもしばしばで、その修繕にも頭を悩ませなければならない。彼は、ヤレヤレといった表情を浮かべると、また、おひいさまに小言を言わねばならぬなと覚悟するのであった。

一方でゴンは、リノスの報告を聞いたおひいさまにすぐに場所を特定され、彼女の屋敷に召喚された。そして、千枝・左枝の女官にお仕置きをされ、再起不能一歩手前まで追い込まれたのだった。

話を元に戻す。

その国王シェングとトミサの前に、もう一人の女性が控えていた。カワバだ。彼女は二人が戻ってくると聞いていても立っても居られずに、この国王の自室まで押し掛けてきていた。

彼女は二人に背中を向けたまま、じっと扉を睨みつけていた。その背中からは様々な感情が見て取れた。

あまりの雰囲気に、国王らは声をかけるのも憚られていた。二人は顔を見合わせながら、何も言わずに放っておこうと頷き合うのだった。

不意に部屋の扉がノックされる。カワバの肩がピクリと動いた。

「申し上げます！　王太子殿下、妃殿下がお見えになりました！」

「入れ！」

国王の言葉が終わると同時に扉が開く。失礼しますと言ってカルッツェたちが姿を見せた。

「まあ、姫様！　ようこそ御無事で……。ああ……お変りもなく、安心いたしました。まあ、どうなさいましたその髪型は……。何か、お身体でご不快なところはございますか？」

国王シェングが言葉をかけようとしたころに、カワバが割って入ってしまった。国王は何とも言えぬ苦笑いを浮かべている。そんな彼女にカルッツェは鋭い視線を向け、その後ろでサミは呆れたような表情を浮かべた。

「まあ、まあ、カワバ殿。ご心配はよくわかりますが、まずは、国王様のお言葉を」

トミサに窘められて、カワバは恐れ入ったという表情を浮かべると、腰を折ってその場から数歩後に下がった。

「……息災そうだな、カルッツェ」

「はい」

国王シェングは息子にかける言葉を色々と考えていた。だが、彼の姿を見て真っ先に口をついて出てきた言葉がそれだった。息子は、カルッツェは、メイリアスの言う通り、見違える程の男ぶりになっていた。刺々しさの微塵もなく、柔和さを漂わせていた。顔色もよかった。いかにも壮健な青年と言ったいで立ちに、国王は心から喜んでいた。

一方のサミも、その雰囲気を一変させていた。彼女も柔和さが現れ、少しあどけなさが残る少女のいで立ちから、一人の女性としての雰囲気を醸し出していた。

……わずか二週間で、人はこれほども変わるものか。

国王は心の中でそう呟いていた。メイリアスの提案を聞いたとき、彼はカルッツェの体調が、熱が出る前に戻す程度のものだと思っていた。だが、目の前に現れた青年は、武力、知力、胆力を備えた、いかにも王にふさわしい男に生まれ変わっていた。この男ならば、家来たちも素直に従うだろう、この国を隆盛に導いてくれるであろうと。彼は大いに満足だった。

そんな父の心境を察したのか、カルッツェはゆっくりと頭を下げると、まるで噛んで含めるよう語り方で口を開いた。

「父上……。ご覧の通り私は、元気になりました。この上は、全身全霊を賭して、父上をお助けいたしたく存じます。父上にあらせられましては、これからは、お体を労わられて、ゆるりとお過ごしいただきたく、お願い申し上げます。これからは、このサミと共に、この国を隆盛に導いてまいります」

彼の言葉に、後ろに控えていたサミも大きく頷く。

「私も、これよりはカルッツェ様をお助けしてまいります」

「そうか……。二週間の療養生活を経て、体だけでなく、モノも言うようになったではないか。ホ……ホホホホホ……」

国王シェングはそう言って笑った。その頬には涙が伝っていた。

心から嬉しかった。この息子ならば、この国の未来を託せる。そう確信したのだ。彼が最も懸念した事柄がやっと解決した瞬間であった。彼はゆっくりと、腰かけていた椅子の背もたれに、自分の体を預けた。

彼は心の中で呟いていた。これでもう、思い残すことはない、と。そして、近日中にメイリアスが開発した薬を飲もうと決意した。恐らく自分の体は持つまい。だが、それをすることで、彼女の研究に大いに役立つことだろう。それをすることで、国王は最後に、聖女・メイリアスの恩に報いようと考えていた。そんな彼の心情を察したトミサは、すこし複雑そうな表情を浮かべた。

そんな喜びに満ちた中で、一人だけ悲壮感を露わにしている者がいた。カワバだ。彼女はサミの心が、完全にカルッツェに向いていることを正確に掴んでいた。今、目の前に控えている女性は、自分がすべてをかけてお育て申したサミ様ではなかった。髪型も化粧も、すべてが違う。このままでは危ない。早く部屋に帰って、あの、美しいサミ様を取り戻さねばならない。この国に嫁いできた当初の目的を思い出させねばならない。あなた様は、ダオラ帝国皇帝ガノブの娘なのです。あなた様は、ダオラ帝国の未来を担っているのです、ともう一度伝えねばならないと考えていた。

しかし、国王の部屋から出て、サミを部屋に連れて行こうとしたそのとき、カルッツェから、サミはこれから自分の部屋で暮らすのだと告げられて、激高した。

「そのようなことは、許されませぬ！」

「カワバ……。私は、カルッツェ様の許に居たいのです」

「姫様！」

「そなたにとっては辛いことであろうが、それがサミにとって、私にとっても一番よいことなのだ。これは、アガルタ王妃・リコレット様から教えていただいたことである」

「アガルタ！？」

「後日その方にも父上にも、そのことは説明しよう。とにかく、サミはそなたの許には戻らぬ。さ、サミ、参ろうぞ」

カルッツェはそう言って彼女の手を握り、彼女の部屋とは反対の方向に歩きだした。カワバはお待ちくださいと後を追ったが、二人は彼女を振り返ることはなかった。カワバは蒼白の表情を浮かべながら、その場に立ち尽くした……。

第八百七十九話　親離れ子離れ（後書き）

★『結界師への転生⑦』コミック９／２２発売決定！Ａｍａｚｏｎ等で絶賛ご予約受付中！★

第八百八十話　次なる一手

ダオラ帝国皇帝ガノブの許に、一通の書簡が届いた。箱の中ははち切れんばかりになっており、その書簡の分厚さがよくわかった。

元々、せっかちなこの皇帝は、家来が長々と喋ることを好まなかった。特に報告に関しては短く、端的に行うことを徹底させており、それは書簡に関しても同様だった。特に彼が嫌ったのは、最後まで読まないと、聞かないとわからないことだった。従って家来たちは、彼に報告をするときはまず、結論から先に言うことを心掛けていた。

皇帝ガノブに書簡を手渡す侍従長の手が震えている。これは確実に皇帝の気分を害するものだからだ。通常であれば、このような書簡は皇帝には上程されず、この侍従長によって差し戻されるか、外国の書簡であれば、彼が掻い摘んでその内容を伝えるように務めるのだが、この手紙に関しては、誰も目を通さずに、封緘されたまま皇帝に上程される決まりになっていた。手紙の送り主は、カワバだった。

ガノブは眉間に皺を刻み、右足を忙しそうに動かしながら書簡を受け取った。これは、彼の機嫌が悪いのを表している。それを十分に知っている侍従長は、一刻も早くこの場を離れたい衝動に駆られていた。

ガノブは乱暴に封緘をとき、書簡を収めている箱を開ける。そして、ワシャワシャと音をさせながら手紙を取り出し、それに目を通し始めた。

不気味な静寂がその部屋を支配していた。侍従長は、いつ、この皇帝が大声を上げて怒鳴り散らしてくるのか、気が気でなかった。

皇帝は相変わらず鋭い視線を向けながら、手紙に目を通している。読み終わると、大きな音立ててページをめくる。その都度、侍従長はその小さな体を震わせた。

ドン！

突然大きな音が響き渡った。皇帝ガノブが、座っている椅子のひじ掛けに自分の拳を叩きつけたのだ。見ると彼は苦み虫をかみつぶしたような表情で、天を仰いでいた。

「へ……陛下……」

沈黙に耐えられず、思わず侍従長は声をかける。だが、ガノブは天を睨みつけたまま、微動だにしない。ややあって彼は、さも悔しそうに舌打ちをした。

「俄かには、信じられぬ……。あの、サミが……」

「サ……サミ様がいかがなさいましたか！」

「喧しい！」

「ハッ……」

体を９０度に曲げて侍従長は畏まる。サミのことは、彼にとっても心配の種であった。幼い頃からいつも、爺、爺と呼んで懐き、彼の長いあごひげを触るのがお気に入りだった。そんな天真爛漫な彼女

を彼は、畏れ多いことながら、まるで孫のような感情をもって仕えていたのだった。そのサミ様が、美しく、聡明に成長遊ばした、あのサミ様に何かがあったのを察知したとき、彼は思わず声を出してしまったのだった。

そんな彼の気持ちは、ガノブもまた、十分に理解していた。彼は大きなため息をつくと、誰に言うともなく呟いた。

「サミが……サミの奴が、タルカト側に取り込まれた、とある」

「な……サミ様が……。な、何かの間違いでございましょう。サミ様に限って、そのような……」

「黙れ！」

「は、ハハッ」

「カワバの書簡にそう書いてある。あの者は忠義一徹に仕えた鉄の女子じゃ。余に嘘を書き送るとは思えぬ。それは真実と見てよいだろう」

「さ……サミ様が……」

「書簡には、聖女・メイリアスの差し金とある。タルカト側が聖女を動かし、サミに何かを施したやも知れぬ」

「ま、まさか……」

「サミは今、カワバから離れ、別の部屋を用意してカルッツェと共に暮らしておるらしい。傍にはタルカトの女子たちが侍っておると

いう。まさか、サミを取り込まれるとは……。考えてもおらなんだわっ！」

そう言うとガノブは、まるで席を蹴るようにして立ち上がり、足早に扉に向かって歩き出した。

「へ……陛下、どちらに……」

「重臣たちを集めよ。軍議を開く」

「ぐ……軍議でございますか！？　それでは陛下は、タルカトを攻めると仰せになるのでございますか」

「バカ者！　そうではない」

ガノブは大きなため息をつくと、侍従長に真っすぐな視線を向けた。

「タルカトの国王シェングがこん睡状態にあるそうだ。メイリアスの用意した薬を飲んだ直後から意識を失ったらしい。すでに死にかけておる分際で、得体の知れぬ薬など飲むからそうなるのだ」

そう言ってガノブはフフフと笑うが、その顔には寂しさが滲み出ていた。

「サミがタルカトに取り込まれた以上、別の手を考えねばなるまい。そのための軍議じゃ」

「あの……カワバ殿はどうなりましょう？」

「むろん、そのままタルカトに留め置く」

「何と……」

「あの女子は女子で、あの国において我が国のために動くであろう。それに、むざむざサミをこのままにはしておくまい。あの女にはこれからも、やってもらわねばならぬことがある」

「さ、左様でございますか……」

「すぐに諸将を集めよ！」

「し、承知致しました……」

ガノブは足早に自室を出て行った。それに続いて、侍従長も頭を下げながら部屋を後にしていった。

◆　◆　◆

一方、シェングの状態は一進一退を繰り返していた。彼はメイリアスに無理を言って薬を飲ませて欲しいと懇願し、それについて、遺言や形見分けなどの細かい指示まで用意していたのだった。

家来たちには、薬を飲んで死を迎えても、決してメイリアスたちを恨むことなく、丁重にアガルタに帰すよう命令を下すことも忘れなかった。また、いかなることがあっても、メイリアスたちの治療を最優先することとし、自分の体が切り刻まれようとも、口出しすることを禁じる命令まで出していた。

メイたちにとっては、シェングの状態はある程度予想されたものであった。彼女らはその容体を見守ると共に、シェングの体に起こる

変化を見定めたいと希望した。その一番手っ取り早い方法は、血液を採取することだが、国王の、玉体に針を刺す行為は、多くの者が反対した。だが、それを止めたのは、カルッツェの一言だった。

「父上のご命令じゃ。何人も、メイリアス殿のやり方に口を挟むことは許さん」

そのお陰で、彼女らは毎日決まった時間に国王の採血を行うことができた。

国王の枕元には常にポーセハイの族長、チワンが侍っていた。彼は毎朝の採血から得られるデータを基に、国王の脈拍、呼吸をつぶさに記録していった。

薬を投与した直後は、呼吸、脈拍共に安定していなかったが、日を経るにつれてそれは落ち着いてきていた。だが、倒れて以降、一切物を口にしておらず、いわゆる点滴だけで必要最小限の栄養を摂る生活のため、その体力の衰弱も考慮に入れねばならなかった。また、長い間のこの病気との戦いにおいて、肺機能が著しく低下しているのも、懸念の一つであった。彼の診立てとしては、容体自体はこのまま安定するだろうが、意識が回復しないのであれば、国王の未来は約束できぬものであるというものだった。

カルッツェもサミも、いや、タルカト王国王都に住む者が皆、国王の回復を祈っていた。そんな折、カルッツェの許に急使が飛び込んできた。

「何ッ！　キロイソが謀反と！」

その報告を聞いて最も驚いたのがカルッツェだった。キロイソの領

主であるヨシマは、国王シェングの娘、すなわち、カルッツェの姉が嫁いでいたところであった。

「おのれ……周辺の豪族たちがまとめられぬと泣きついてきたあ奴を、父上がどれほど助けたことか……。しかも、姉上の婿となりながら、父上の恩も忘れ、反旗を翻すなど……。許せぬ。馬を曳け！」

そう言ってカルッツェは立ち上がった。その顔は青白く、側に控えていた近習のブトは、胸に何とも言えぬイヤな予感を感じるのだった……。

第八百八十話　次なる一手（後書き）

結界師への転生コミック⑦　本日発売です！　是非手に取ってご覧ください！

第八百八十一話　鎮圧

カルッツェは軍勢を整えると、脱兎のごとく王都を駆け出した。そして、僅か二日でキロイソ領主の館が置かれているクレイシマに攻め寄せ、包囲した。焦ったのはキロイソ領主のヨシマだった。まさかカルッツェの軍勢がこれほど早くキロイソに到着するとは思わず、戦いの準備はまだ整っていなかった。

タルカト軍来る、の報告を聞いて、すぐさま兵を集め、城門を閉じた。彼ができたのはそこまでだった。

館と言ってもそれは言わば小規模な城塞都市であり、険峻な山の窪地という地の利を生かして彼は山の岩盤をくりぬき、トンネルを掘っていた。その出入り口に強固な門を構えて敵の侵入を防いでいたのだ。それは例え数万の軍勢が攻め寄せても耐えられる強度を誇っており、キロイソの山に生える木材の中でも特に硬度のある木を選んで作られていた。

城門は閉じられたが、ヨシマは籠城戦に最も必要である兵糧の確保ができていなかった。館に備蓄している食糧だけでは、キロイソは二週間ですべてを食いつくしてしまうのだった。

家来たちの中には、館の外は魔物も多いため、カルッツェたちでは対応できない。従って、彼らは数日で囲みを解くだろうという者もあったが、領主・ヨシマはそうは思わなかった。

確かにカルッツェは猪武者だ。彼は王都で何度か彼と顔を合わせたことがあった。それは国王シェングの長男、ギノブがまだ生きてい

た頃で、そのときのカルッツェは少年の面影をまだ残していた。

あるとき、カルッツェが国王をはじめ、皆が居並ぶ中で戦いに出たいと言い出したことがあった。いわゆる初陣を求めたのである。それは、北方で反乱が勃発し、国王シェング自ら軍勢を率いて、カルッツェの住むタカに陣を敷いていた。カルッツェはそこに、鎧を装備して現れて、父シェングに直接、討伐軍に参加させて欲しい、初陣を賜りたいと願い出たのであった。大抵王族の男子の初陣の目安は十二歳を目途に行われる。初陣と言ってもそれは形式に過ぎず、十二歳の男子が指揮を執るわけでもなく、ましてや実践に赴くこともなかった。だが、カルッツェは戦いの場で自ら先頭に立ち、槍を振るいたいと言い出したのだ。

「カルッツェはまだ子供じゃ。初陣には早かろう」

王太子ギノブが冷たい眼差しで口を開いた。それに対してカルッツェは敢然と反論した。

「私はもう、十四歳になります。初陣するには遅ぅございます。それに、槍の扱いには自信があります。私の話が嘘だとお思いならば、今ここで兄上と槍を交えてもよろしゅうございます」

「それ、それよ。そなたと槍を交えたところで、そなたの初陣など叶わぬことだわ。それに、そなたは余を兄上と呼びおったな。確かにそなたの兄には違いないが、今の余はタルカト王国の王太子である。その余に対して兄上と呼びおるのは、数多いる弟妹の中ではそなただけじゃ。そなた以外の者は皆、余のことを殿下と呼ぶのだ。己の身の程もわきまえぬ猪口才が、何が初陣ぞ」

ギノブはそう言って鼻で笑う。一方でカルッツェは顔を真っ赤にし

て俯いていた。それは羞恥からではなく、憤怒に耐えていることをヨシマは感じ取っていた。一方で、その様子を見ていた国王シェングは、情けないと言った表情を浮かべていた。そして、ギノブがその場を去ると、誰に言うともなく呟いた。

「……バカ者が。兄ならば兄らしく、なぜ優しい言葉をかけてやらぬ。この国の行く末が思いやられるわい」

ヨシマはその言葉を聞いて国王の心中を察したが、同時に、ギノブがこの国を継ぐのであれば、キロイソの地は安泰だと胸を撫で下ろしたのだった。もし、万が一、カルッツェが王となるのであれば、おそらく最終的にキロイソと対立することになるだろうと、何となく予想していたのだが、豈図らんや、その予想は当たり、今現在、ヨシマはカルッツェに叛き、包囲されている状態に陥っていた。

カルッツェは王都からここ、クレイシマまでわずか二日で移動してきている。これは驚くべき速さと言ってよかった。報告ではカルッツェは三千の軍勢を擁して攻め寄せている。これはどう考えても計算が合わなかった。

タルカトでは大体、戦いが始まると、貴族たちに陣触れが出される。この国ではもちろん、王の親衛隊はあるにはあるが、その規模は小さく、僅か数百という規模だった。まさしく王の盾となる兵を揃えているという規模だ。その他の軍勢は貴族たちが自領から徴収してくる兵士たちに寄っていた。その貴族たちが兵を整えるのが、どう早く見積もっても一日かかり、そこから出陣してクレイシマまで到着するのには、三日はかかる計算だった。三日、という時間は、シナカが王都に向かうまでかかる時間だった。険峻な山を越えていくため、馬での移動は限界があったためだ。ヨシマは馬の扱いには自信があり、己一人ならば一日あれば王都に到着する自信はあったが、

供の者を連れている旅ではそうもいかなかったのだ。

彼は自分同様、カルッツェの到着もそのくらいはかかると見込んでいた。軍勢の行軍だ。あるいは、それ以上の時間がかかると考えていた。彼はその間に兵糧を調達するつもりであったが、その予想をはるかに超える速さでカルッツェは現れてみせた。家来たちの手前、沽券にかけても平静を装ったが、その心中は大いに動揺していた。

彼の心の中には後悔の念があった。ダオラ帝国皇帝ガノブの誘いに乗ってしまったことを悔いた。黄金百枚に目がくらんでしまったのだ。妻が諫めるのも聞かずに、王都の出仕を断ってしまった。王都からはつい二週間前に帰還したばかりだった。そこに来て、再び出仕を求められた。王都までの距離と費用を考えると、そう度々できることではなかった。

キロイソは木材資源は豊富だが、それだけの土地であり、財政状況は芳しいとは言えなかった。国王シェングの娘を妻に迎えていることで、王都から幾ばくかの援助を受けて、それでようやく領主として大きな顔ができているに過ぎなかった。そこにきて、以前からダオラ帝国皇帝から使者がやって来て、毎年金百枚を提供するという申し出を受けていた。特産物である木材を帝国に納めて欲しい、書状にはそう書いてあった。

それはつまり、タルカト王国を裏切ることにつながる。要は、ダオラの属国として、タルカトとの戦いにおける盾となれ。ガノブはそう言っているのだ。

本来ならば突っぱねる要件だった。だが、隣のイルナを治めている弟のシマサがガノブに味方すると言ってきた。戦いになった場合は、すぐさまダオラから援軍が送られる約束までも取り付けていたのだ

った。ヨシマは黙って頷くしかなかった。

そんなヨシマの心境を知ってか知らずか、カルッツェはこの戦いの勝利を確信していた。彼はクレイシマの手前に陣を敷き、その様子を窺っていた。敵の兵力は僅か一千、普通にやれば負ける要素はなかった。彼はどうやってこの戦いを勝利に導くか、そのことに思考を費やそうとしていた。

それは危険なことであった。油断に繋がる姿であった。本来ならば諫める場面ではあったが、近習のブトは敢えて黙っていることにした。頭に血が上って血気に逸ることを避けたのである。

「やはり、ヨシマの首は刎ねねばならぬ。ヤツの首を持って来れば、この囲みを解く。それを条件として軍使を立てよ」

「いや、お姉上君の助命があれば、許しておあげなさいませ」

「……ブト、貴様、謀反を起こした者をお咎めなしとせよと申すのか」

「左様です。ヨシマ殿はただ、ガノブに唆されただけでございます。殿下がお許しになればおそらく、子々孫々までの忠誠を誓うはずでございます」

ブトの言葉にカルッツェは、ぶ然とした表情で腕を組んだ……。

第八百八十一話　鎮圧（後書き）

２０２３年９月２２日にコミック『結界師への転生⑦』発売されました！　フェリスとルアラがかわいいと評判をいただき、うれしい限りです！　ありがとうございます！！

第八百八十二話　勝つのだ勝つのだ勝つのだ

カルッツェたちが陣を張って二日が経った。ヨシマからは何の動きもなかった。さすがに近習のブトが軍使を遣わしてはどうかとカルッツェに進言した。

「姉上の説得が功をなさなかった、か」

ため息をつくカルッツェに、ブトは冷静な眼差しを向ける。

「軍使を遣わすのは、それを確認するためでもございます。ヨシマ殿の様子を確認しに参るのです。意気軒昂ならば我々も考えねばなりませんし、意気消沈しておるならば、降伏を勧めるのです。いずれにせよ、相手方の様子を知ることが肝要でございます」

その言葉に、カルッツェは無言で頷いた。

軍使を誰にするか。ブトは自ら赴くと主張したが、さすがにそれは周囲の者たちから止められた。そんなやり取りをしているさなかに、伝令が戻ってきた。

「申し上げます！　ヨシマ殿の弟であるシマサ殿が、軍勢を率いてこちらに向かっています。その数、一千！」

報告を聞いたカルッツェは目を閉じて、天を仰いだ。

家来たちの大半は、シマサの軍を迎撃する案に傾いていた。たかが一千、クレイシマに籠るヨシマ軍一千を加えても、数の上ではこち

らが圧倒している。ここはヨシマ兄弟を討つべきである。家来たちはそう言ってカルッツェに出撃の許可を求めた。だが、そんな中でも、ブトは一度、シマサと話し合いの場を持つべきであるとの主張を繰り返した。弟のシマサがもし、タルカトへの帰順を希望しているならばそれを許し、ついでに、兄の説得に当たらせようという腹だった。

しかし、その軍議の最中に、ダオラ帝国軍が動いたとの報告があった。その一報を聞いて家来たちは騒然となった。

「ダオラ帝国が動いたと言うのか！　して、軍を率いるのは何者だ。皇帝自ら軍を率いているのか」

家来の一人が立ち上がって大声で使者に問うている。使者の男は真っすぐな眼差しを彼に向けている。

「おそらく、皇帝自ら軍を率いてはいないと思われます。皇帝の親衛隊は帝都に留まったままです。おそらく、アタの町に駐留している軍勢が動いたものと思われます。その数、三千」

「軍勢の数の上では、我らと互角か……」

「いや待て。我らの方が不利だ。ダオラ軍三千に加えて、今ここに向かっているシマサの軍が一千、そして、クレイシマに籠るヨシマの軍一千。合わせて五千。このままでは我らは挟撃されてしまう」

ブトはそう言うと、カルッツェに向かい、速やかに撤退することを進言した。

「一旦退く」

カルッツェはそう言って目を開いた。ハッと頭を下げる家来たちに向かって、さらに言葉を続けた。

「一旦、ツモト村まで撤退する」

「畏れながら、何故ツモト村なのでございますか」

「ブト、そなたほどの男でもわからぬか」

「……恐れ入ります。私の浅知恵では、わかりかねます」

「一旦ツモト村まで退いて、シマサの軍を通してやるのだ」

「むざむざシマサをクレイシマに入れろ、と仰せになるのでございますか。で、あれば、我らは何もツモト村まで退くのではなく、一気に王都まで撤退してはいかがでしょうか。魔物除けはまだまだございますが、なにもツモト村などという小さい村に留まる必要はないかと存じます」

「わからぬ奴だ。シマサをクレイシマに入れたら、ヨシマはシマサの軍勢にも食料を与えねばならなくなる。ただでさえ、食料の調達が上手く行っていない中で、シマサの軍勢一千が入ってくれれば、その食糧を食い尽くすのに幾日かかろうか」

カルッツェの言葉に、ブトはハッとした表情を浮かべる。

「ま、まさか殿下は、食料を一刻も早く減らすために道を開けようとなさっておいでとは……。しかし……」

「食料を食い尽くしたとしても、ダオラからの援軍がある。その希望があれば、奴らは雑草を食らっても耐え続けるであろうと言いたいのか？」

「さ、左様でございます」

「余の策の狙いは、そのダオラ軍にある」

「ダオラ軍とは！？」

「ああ。二度と奴らがタルカトの地を脅かさぬように、その気持ちを、心折るのが余の策である」

「心を折る……」

「ダオラはおそらく、クレイシマに食料を届けるのが目的だ。そうしておいて、ヨシマとシマサ兄弟をタルカトからの盾とするのが奴らの策であろう。で、あれば、そのダオラ軍を完膚なきまでに叩き潰す。さすればダオラ皇帝ガノブは容易にタルカトに軍を向けようとはせぬであろうし、同時に、ヨシマとシマサ兄弟の心も折ることができる。違うか？」

「されど殿下。数の上では互角のようでございます。必ず勝てる保証はございません」

「相変わらず心配そうじゃな、ブトは。確かに、戦いにおける絶対はない。数の上でも劣っていても、策略次第によっては、その数倍する軍勢を蹴散らすこともできよう。だが、我らの得意な山岳戦に持ち込めば。勝つ確率は大いに上がろう。違うか？」

「な、なんと……」

「よいか皆の者！　ダオラとの戦いはこのクレイシマじゃ。おのおの抜かりなくこの地を調べよ」

カルッツェの言葉に、家来たちが一斉に頭を下げた。

「それにしても、ダオラは信義というのもを知らぬ国でありますな。ついこの間、皇帝ガノブの娘が、王太子殿下に嫁がれたばかりであるというのに……」

不満をあらわにする家来を眺めながら、カルッツェは笑みを浮かべた。

「相手の隙を見つけたら、すぐにそこを突く……。戦いに勝つ鉄則をガノブは実践しているだけに過ぎぬ。そなたのいう信義を相手に問うてみても、家来が勝手にやったことであるといって終わりにするであろう。これはおそらく、ガノブがカルッツェという男を値踏みしているのだ。果たして娘の婿になるにふさわしい男であるか否かを。故に我らは勝たねばならぬのだ。ここで負けては、ダオラは我が国タルカトを属国にするべく、あらゆる手を使ってくるであろう。ガノブが死んでも、その次の皇帝も我が国を狙う。そして我らは、百年先までダオラに膝を屈することになるであろう。そうならぬために、勝つのだ。勝つのだ。勝つのだ」

カルッツェの言葉に、家来たちの顔が引き締まった。

◆　◆　◆

「国王様の容体は、非常に安定しております。あとは、お目覚めを

待つばかりです」

そう言って頷いているのは、国王シェングの侍医を勤めるケンモだった。彼は国王が薬を服用したそのときから、チワンの傍について、ずっとその医療手法を観察し続けていた。そして、折に触れて質問をして、貪欲に知識を吸収していった。

正直チワンは、その態度に感心するとともに、ある種の恐れも感じていた。このケンモという医師はすでに老境に達していながらも、知識欲はまるで若者のように貪欲であった。彼の一挙手一投足を見逃すまいと、目を皿のようにして眺めているその姿は、ある意味で恐ろしかった。

国王の容体は、ケンモの言う通り安定していた。あとは目覚めを待つばかりだが、ただ、その体力が持つかどうかが唯一の懸念点だった。すでに昏睡状態に陥って十日になろうとしている。国王の年齢と体調を考えると、この状態は持ってあと数日が限界であった。

最悪の状況がチワンの頭をよぎっていた。だが、その一方でメイは絶対の自信をその表情に表していた。何を根拠にそんな顔ができるのか、チワンは不思議に思ったが、その表情を見ていると、何だか自分も絶対に大丈夫であるという確信を持つことができていた。

メイリアスは国王の脈拍を測りながら、大きく頷いている。それは、何も問題がない。必ず国王は目を覚ますのだという表情だった。そしてさらに、その双眸には、まるで女神のごとき慈悲に溢れていた……。

第八百八十二話　勝つのだ勝つのだ勝つのだ（後書き）

２０２３年９月２２日にコミック『結界師への転生⑦』発売されました。ありがとうございます！

絶賛発売中ですので、ぜひ、お手に取ってご覧ください。電子書籍は限定イラスト付きです！

第八百八十三話　思った通り

翌日、クレイシマを囲んでいたカルッツェの軍は撤退していった。それと入れ替わるようにして、ヨシマの弟であるシマサが入城してきた。

「兄者！　助けに来たぞ！　もう安心じゃ。もう安心じゃ！」

久しぶりに見る弟の姿を見て、ヨシマは心から安堵した。だが、シマサが一切の食料を持たずにやって来たと聞いて、その顔を曇らせた。

「大丈夫だ！　もうすぐダオラの軍勢が、援軍がやって来る。食料をたんともってやって来るのだ。何も心配いらん。な～んにも心配はいらんのじゃ」

シマサはそう言ってガハハと呵々大笑した。その様子を見てヨシマは、これほど何も考えていないというのも逆に羨ましいとさえ思っていた。彼は今の状況は決して楽観しできる者ではないと考えていた。

カルッツェの軍は王都に引き上げたわけではなく、ここから数キロ先のツモト村に留まっていた。家来たちは小休止であると言って笑ったが、ヨシマはそうは考えなかった。いつでも再びこのクレイシマを攻めることができるのだと言っている気がしてならなかった。

実際、カルッツェが本気を出してクレイシマを攻めようとすれば、半日もあれば十分に可能なのだ。弟シマサの軍と合わせてもわずか

二千の軍勢だ。カルッツェの軍とはおよそ一千の差がある。まともに戦って勝てる気はしなかった。となれば、取るべき策は、これまで通り城門を固く閉じてやり過ごす外はなかった。

「さあ、戦勝の祝いをやろうぞ！　酒じゃ、酒を持て！」

シマサはそう言って手を鳴らした。そんな弟をヨシマは、少し怒気を込めた声で窘めた。

「我らの勝利は、ダオラの軍勢が到着し、カルッツェらが王都に引き上げたときだ。その後も、カルッツェは必ず王都から軍勢を引き連れて我らを再び攻撃するだろう。そうそう安穏としている時間は我らにはないぞ」

その言葉に、シマサはぶ然とした表情を浮かべた。

実際、援軍であるダオラ軍の動きは遅々として進まなかった。多くの食料を積んだ荷車を引きながら山道を進んでいるのだ。相応の時間がかかることは仕方のないことだった。だが、ヨシマらの状況は刻一刻と悪化していった。弟シマサの軍を受け入れてしまったことで、城内に蓄えてあった食料は見る間に減っていき、すでに城内の食料は食べつくしている状況になっていた。

シマサにとってもこの状況は予想していなかったのだろう。彼は焦りから兄に対して、大声で進言した。それは、城から打って出て、ダオラの軍勢の許まで赴き、いくばくかの食料を運び込もうというものだった。

その案をヨシマは言下に一蹴した。未だ、カルッツェの軍勢はツモト村に留まっている。城を出れば、必ずカルッツェ軍にやられる。

ただでさえ数で劣るヨシマの軍勢が、これ以上数を減らしては、カルッツェに勝てる可能性は限りなくゼロに近くなるのだ。

「それでは、我らは飢え死にしてしまうではないか！」

「で、あっても、城から出ることはならぬ」

「数人の者に食料を取りに行かせるのだ。それでよかろう！」

シマサの言葉に、ヨシマは首を振る。

「女！　女どもを外に出し、食料を取りに行かせるのだ。さすがにカルッツェも女どもを手にかけることはなかろう」

「女性だけでは、ダオラ軍に辿り着くまでに多くの者が命を落とすだろう。それに、ダオラの兵たちに襲われる可能性すらある。そのようなことは絶対にできぬ」

癇癪持ちのシマサは何かを叫びながら席を蹴るように立ち、次の間に下がっていった。ヨシマも苛立っていた。ふと、外に視線を向けると、真っ黒い雲が空に立ち込めていた。

「雨……か。降ってくれれば、水の心配はなくなる」

ヨシマはそう言って、家来たちに雨水を蓄える準備をせよと命じた。

程なくして大粒の雨が落ちてきた。空の甕や鍋などを持って右往左往するクレイシマに対して、ツモト村に陣を敷いているカルッツェも、静かに準備を整えようとしていた。

「出陣する」

カルッツェはそう言って愛馬に跨った。顔が青白い。近習のブトはイヤな予感が拭えずにいた。大雨に打たれてから王太子殿下は体調を崩した。今また、この雨の中出陣してしまうことで、せっかく快方に向かった体調が、再び悪化せぬかと懸念していた。

そんな彼の心配など知ったことではないと言わんばかりに、カルッツェは愛馬に鞭を当てた。彼が鍛え上げた軍勢は一糸乱れぬ動きで彼に従って出発していった。ブトはその様子を見ながら、自らも馬に乗った。

ツモト村には五百の兵士を残して、カルッツェは出陣していた。彼はこの雨を天祐と捉えて、ダオラ軍と雌雄を決しようとしていた。根拠はないが、何故か、絶対に勝てる自信があった。彼にはその戦いの趨勢が手にとるようにわかっていた。攻撃命令を下し、ダオラ軍を壊滅させるまでの動きが、頭の中ですでに出来上がっていた。こんなことは彼の人生の中で初めてだった。まさに、神の領域と称してよく、そんな不思議な感覚に彼は興奮を覚えていた。

この雨だ、ダオラ軍はどこかで小休止を取ることだろう。そして、クレイシマでは雨水を得ることに集中するあまり、ツモト村への意識が疎かになっていることだろう。そのツモト村には五百の兵士を残して、カルッツェの軍が逗留しているように抜かりなく見せかけていた。万に一つ負けるようなことはない戦いだった。

山の尾根に上り、そこからダオラ軍に近づいていく。彼らの居場所はすぐに特定できた。あろうことか、彼らは窪地で雨宿りをしていた。この軍勢を率いる司令官は無能であるとカルッツェは断じた。山中の移動において、できるだけ高い場所で休むというのは、戦い

においての鉄則だった。にもかかわらず、ダオラの軍勢は窪地に降りてしまっている。察するところ、喉の渇きを潤すために、川の水を得ようとしているのだろう。しかし、それは戦いの中において悪手中の悪手であった。それはまさに攻撃してくれと言っているようなものなのだ。

「敵は完全に油断しているな」

眼下にダオラ軍を見下ろしながら、カルッツェは誰に言うともなく呟いた。これがあの、名高いダオラ帝国軍だろうか。もしかして、これは自分たちをおびき寄せる作戦なのではないかと勘繰ってみるが、その周囲には軍勢らしきものは見えなかった。妻のサミが嬉々として語るダオラ皇帝ガノブの戦いとは、到底思えなかった。

「ガノブ自ら軍勢を率いておれば、このような愚策は取るまいに……。従う兵士たちが、哀れであるな」

カルッツェの言葉に付き従っていた兵士が、ギョッとした表情を浮かべているのに彼は気がついた。確かに、今の言葉は、一軍を率いる者の言葉ではない。思わず彼は苦笑いを浮かべた。

そんなテレを払しょくするかのように彼は腰に差している剣を抜いた。

「よいか皆の者！　皆の目にもダオラ軍の姿が見えよう。我らは疾風迅雷のごとく奴らに襲い掛かり、一兵も余さずに斬るのだ！　一兵たりともダオラの地を踏ませてはならぬ！　かかれ！」

そう言ってカルッツェは馬を走らせ、先頭を切ってダオラ軍に突撃していった。

戦いは一方的だった。タルカト軍の襲来を全く予想していなかったダオラ軍は、なす術もなく斬られていった。逃げる者も多くいたが、それらは背後からやって来た兵士たちにことごとく斬られた。軍勢を率いていた司令官の男は、カルッツェに一刀のもとに首を刎ねられた。

僅か一時間もかからぬ戦いだった。ダオラ軍が陣を張っていたその地は、累々たる死体が折り重なり、つい先ほどまで彼らの喉を潤していた川の水は、真っ赤に染まっていた。

まさに、思い描いた通りの勝利だった。カルッツェは興奮を抑えることができなかった。自らが軍神に愛されているような、いや、我こそが軍神であるかのような感覚に囚われていた。誰と戦っても負ける気がしなかった。

ふと、妻のサミの顔が脳裏をよぎった。今すぐ彼女を抱きしめたいと思った。彼は今、異様な昂りを覚えていた……。

第八百八十四話　諫言

結果的にダオラ軍の被害は、死者は七百名におよび、捕虜となった者も三百近くに上っていた。これは、完全敗北と称してよかった。常勝軍団を謳うダオラ帝国軍にとっては、あってはならぬ敗戦であった。

ブトはその光景を見ながら、地獄とはまさにこういう場所なのだろうなと心の中で呟いた。

捕虜となった者たちは一様にブトたちに憎しみの眼差しを向けている。彼はその視線を受け止めきれずに、思わず顔を背けた。

程なくして、カルッツェが現れた。すると、捕虜の一人が激しい口調でカルッツェを罵り始めた。彼はサナイと名乗り、我々はダオラ帝国皇帝ガノブの命令により、クレイシマに食料を届けに来ただけである。にもかかわらず、お前たちは我らを襲い、多くの者を殺した。これは野盗同然の振る舞いである、と言って食って掛かった。だが、カルッツェは赤い顔をしながら彼の言葉をじっと聞いていた。その様子をブトはハラハラしながら見守っていた。

勝手な理屈だった。同盟国を結んでいるとはいえ、他国に勝手に食糧を支援しようとしたのだ。もし仮にクレイシマの食糧が不足しているならば、まずはタルカト王国が対応しなければならない事柄だった。それを、支援を要請されたからと言って、わざわざ海を越えてやってくるなどということは、どう考えても無理があった。それに、兵士たちは皆、武器を装備している。道中の安全を確保するため、という言い訳を彼らはするのだろうが、それは全く説得力を持

たぬことであった。

「斬れ」

突然、カルッツェが誰に言うともなく呟いた。予想もしていなかった言葉に、周囲の者は唖然とした表情を浮かべた。

「全員、斬れ」

「お待ちください殿下！」

近習のブトがカルッツェの前に進み出て、片膝をついて畏まった。そのとき、サナイが笑い声を上げた。

「ハッハッハッハ！　面白いことを言うではないか！　我らを斬る？　お斬りなされ！　お斬りなされ！　我らを斬れば、我が皇帝陛下は必ずこの国に侵攻するであろう。皇帝陛下が本気を出せば、この国など数日で蹂躙されることであろう。そうなれば、この国に住まう者は皆殺しになるであろう。生き残りし者たちも、男は奴隷、女は遊び女として売られるのだ！　お前たちの妻や娘が、遊び女として我らに売られるのだ。楽しみである！　大いに楽しみである！　さあ、斬れ！　斬ってみるがいい！」

カルッツェはサナイの言葉を不思議な感覚で聞いていた。この男に会った記憶はないが、どこか懐かしさを感じさせる雰囲気だった。この男と同じ雰囲気を持った者が以前いたな……そんなことを考えていたのだった。

ふと、彼の記憶に蘇るものがあった。この男の喋り方は、カルッツェが手にかけた最初の妻、サンジョのそれと同じだった。それに気

づいた瞬間から、彼の心には憤怒の感情が噴き出していた。死んだサンジョが、このサナイという男を通じて自分を罵っている気がしてならなかった。

相変わらずサナイはカルッツェらを罵倒し続けている。それは気の狂れた様相だった。まるで本当に死を望んでいるかのようだった。とはいえ、その口汚い言葉は、タルカトの兵士たちの心象を著しく損ねた。

「ぬうん！」

一瞬のことだった。気がつけば、サナイの首が飛んでいた。カルッツェが剣を抜き、サナイを一刀のもとに斬り捨てたのだ。そのあまりの剣速に、サナイはおそらく斬られたことに気づいていなかったと思われた。彼は喋っている顔そのままで首になっていた。あまりの剣技に周囲は水を討ったように静まり返った。

「全員、斬れ！」

まるで決意をしたかのようにカルッツェは大きな声で命じた。ブトは改めて彼の前に畏まり、まるで、噛んで含めるような口ぶりで諫言した。

「今、ここでこの者たちを斬れば、タルカトとダオラは手切れと相成ります。それに、彼らを斬れば、ヨシマ殿は最後の最後まで我らに抵抗することでありましょう」

「ならば、ヨシマも、その一族も、クレイシマに住む者ども皆殺しにすればよい」

「左様なことをなさいますと、クレイシマだけでなく、このタルカト王国の生きとし生ける者たちは言うに及ばず、草木に至るまで殿下をお恨みするでありましょう」

「……なに？」

「クレイシマは狭い土地でございますが、その親類縁者となれば、我が国全土に及ぶことでありましょう。自分の親類縁者が皆殺しの目にあったとならば、殿下をお恨み申し上げるのは、自然のことでありましょう」

「ならばブト、そなたはどうせよと申すのだ？」

……ブトは死を覚悟した。カルッツェの呼吸が荒くなっている。顔が赤黒くなりつつある。おそらくこのお方は熱に浮かされている。熱のある間は何を申し上げても聞くお方ではない。これ以上意見をすれば、このお方は間違いなく剣を抜くことだろう。聖女・メイリアスの薬を飲ませなかったことを心から悔いた。国王様の命令であったとはいえ、無理をしてでもこのお方に薬を飲んでいただけばよかったのだ。そうしていれば、少なくとも今の状況は回避できたのだ。だが、それを今言ってもどうにもならぬことであったし、ここで命を惜しんではならぬことは、この男は心得ていた。自分の死に場所はここであると、彼は覚悟を決めてカルッツェに相対そうとしていた。

「命を得た者たちは、このままダオラに帰国させるのがよろしいかと存じます。不運にも命を落とした者は、このままここに埋葬するのがよろしいかと存じます」

「手ぬるい！」

カルッツェは大声を上げた。あまりの声量に、周辺の者も体を震わせた。

「そのようなことでは、ダオラは再び我が国に侵攻するであろう。そして、ヨシマたちも再び我らに反旗を翻すであろう！　この戦いは、ダオラとヨシマの心を折る戦いである！　二度と我らに攻撃などを考えぬよう、我らに叛かぬようにすることこそが肝要である！」

「……ならば、殿下はどのようにせよと仰せになるのでございますか」

「首を刎ねよ」

「しかしそれは……」

「首を刎ねるのだ！　そこにいる者どもの首を刎ね、死した者たちの首も刎ねるのだ！　その首を剣先に差してクレイシマに向かい、その首をクレイシマの前に並べるのだ！　さすればヨシマは戦わずして降伏するであろう！」

「いいえ、殿下！　そのようなことをすれば、ヨシマ殿は降伏どころか、死に物狂いで我らに抵抗することでありましょう。死を恐れぬ兵士を斬り伏せるだけの軍勢が我らにはございません」

「ブト、貴様は余がヨシマに敗れると言うのか！」

「死に物狂いとなった軍勢が、兵士がどれほど恐ろしいか、それと戦うことに、どれだけの労力を必要とするのかを、殿下はまだご存じではありません。畏れながら、今、殿下のお言葉に従いますと、

我らは下手をすると全滅の憂き目にあう可能性がございます。そして、よしんば勝利を掴んだとしても、これから先は人々との恨みとの戦いになります。それは、五年、十年の戦いではございません。殿下、ここで国家百年の計を誤ってはなりませぬ。これからタルカト王国が生きるも死ぬも、殿下のご決断にかかっております。誠に畏れながら、誠に畏れながら、このブトの愚策をお聞き入れになり、ご寛大なる処置をお願い申し上げます」

「ならぬ。斬れ」

「殿下、そのようなことをなさいましては、国王様がどれほどお嘆きになりますことか……。サミ様もどれほどお心を痛める……」

「黙れ！」

ブトの言葉を最後まで聞くことなく、カルッツェは剣を抜いていた。彼はその剣を、何のためらいもなくブトに向けて振り下ろした。

鈍い音がした。何かにぶつかるような音だった。ふと気づけば、カルッツェの剣先が宙を舞っていた……。

第八百八十五話　夢か？

まるで夢を見ているかのようだった。まさか、自分の剣が折れるなどとは、想像もしていないことだった。それ以上に、陽の光を受けてキラキラと輝きを放ちながら宙を舞う折れた切っ先が、実に美しかった。

カルッツェは呆然とした表情で、しばらくの間固まっていた。

ふと、目の前に控えているブトに視線を向ける。彼は首を押さえているが、それはつながったままだ。確かに彼を斬った。斬ったが、それはこれまで人を斬ったときの感覚とは全く違っていた。何か、とてつもなく固いものを斬った感覚……そんな感触が今でも自分の手に残っていた。

ブトの目は悲しみを帯びていた。この男が、このような表情を浮かべているのが、カルッツェにとっては意外だった。

「……！？」

突然、カルッツェが声にならない声を上げた。彼の目の前には、聖女・メイリアスが映っていた。

彼女もまた、ブトと同じ表情を浮かべていた。この聖女のその表情は、カルッツェの心を締め付けた。

彼女はカルッツェから視線を外すと、目の前で膝をついているブトに視線を向け、彼の前でしゃがみこんだ。そして、斬られた首の部

分にそっと手を当てた。

これは夢か？　夢なのだろう。きっと、もうすぐ覚めるのだろう。そして、この夢から覚めると、隣には妻のサミが静かな寝息を立てているはずだ。そうだ、また、あの、妻との二人っきりの時間に戻るのだ……。

カルッツェは頭が麻痺していくような感覚を覚えながら、そんなことを考えていた。斬ったはずの首が斬られず、聖女まで現れた……。目の前で起こる出来事が現実のものであるとは到底思えなかった。

そのとき、カルッツェの肩に不意に妙な感覚を覚えた。思わずその部分に視線を向けると、何と男が自分の肩に手を添えているのが見えた。

これもまた、現実とは思えない光景だった。自分はタルカト王国の王太子である。その自分の体に触れられるのは、父・シェングと妻・サミくらいのものだ。医師や侍女などの特別な役割を持った者であるならばいざ知らず、それ以外の男に、許可なく自分の体を触られる謂れはなかった。カルッツェの心の中には猛烈な不快感が湧き上がってきていた。

「まあ、ちょっと落ち着きましょう」

男は肩に手を置いたまま、そんな言葉を呟いた。視線は目の前のブトと聖女・メイリアスに向けたままだ。無礼な振る舞いであった。不敬な振る舞いであるとして、死罪に相当する行為であった。

無礼者、と心で思ったが、言葉を発することができなかった。それよりも、カルッツェにはこの男に見覚えがあった。だが、その名前

をなかなか思い出すことができなかった。

思わずブトにこの男は誰だと聞こうと思った。だが、彼は聖女にペコペコと頭を下げて大いに恐縮していて、こちらに意識は向いていなかった。おい、ブト、と呼びかけようとしたそのとき、聖女・メイリアスが不意に立ち上がり、こちらに向かって歩いてきた。彼女は、何のためらいもなく、右手をカルッツェの額に当てた。

冷たい手だった。だが、それがよかった。とても心地が良かった。そして、彼女からは得も言われぬ良い香りが漂っていた。

「……やはり、相当に熱が上がっていますね」

メイリアスの表情が厳しいものに変わっていた。その表情にカルッツェは思わず体を震わせたが、その表情ですら、彼には美しいと感じた。

「治療は可能かい？」

ふと、隣の男が声をかける。聖女・メイリアスに何という口の利き方をするのだ、無礼者め、と思ったが、聖女は男に向かってスッと一礼すると、悔しそうな表情を浮かべながら口を開いた。

「私の判断が間違っていたのです。もっと早く薬を飲んでいただいていれば……。国王様を優先したばかりに……」

「いや、メイの判断は間違っていない。自分を責めるな。特に大きな問題が起こっていないことを、よしとしよう」

「はい……」

その二人の会話を聞いていて、カルッツェはやっとこの男のことを思い出した。ホテルクルムファルで天ぷらを作っていた男……。そうだ、あの男だ。アガルタ王・リノスだ。

これはご無礼を、と片膝をつこうとしたが、体が動かない。それよりも、どうしてここにアガルタ王がいるのか、その不思議な感覚が勝っていた。

やはり、これは夢だ。夢だ。カルッツェは心の中でそう呟いていた。そんな彼のことなど知ったことではないと言わんばかりに、二人の男女は言葉を続ける。

「今すぐ彼に薬を飲んでもらうかい？」

「いいえ。少なからず副作用の懸念もありますので、できれば……」

「王都に帰ってもらった方がいいかな」

「はい」

「わかった。どうしようか。チワンたちを呼んだ方がいいかな」

「チワンさんは国王様についていますので、ローニさんがよいかと思います」

「わかった。ローニを呼ぼう」

アガルタ王リノスは目を閉じて何かを考える様子を見せた。程なくして、空間の一部がゆがみ、そこから一人のポーセハイが現れた。

「すまないなローニ、忙しいところを」

「いいえ。全く問題ありません。ですからメイ様、私が言った通りになりましたでしょ？　頭が筋肉でできている方が倒れたところで、大きな問題にはなりません」

頭が筋肉でできているとは、一体誰のことを言っているのか、カルッツェにはわからなかった。それよりも、頭が筋肉でできている者とはどのような者であるのか、カルッツェはその点に興味を持った。

「申し訳、ありません……」

聖女は眉毛をハの字に曲げて俯く。そんな彼女をリノスは笑顔で諭す。

「そんな顔をするな、メイ。さ、王都に帰ってこの彼に薬を飲んでもらえ」

「はい。それでは、失礼します。さ、ローニさん、お願いします」

「し、しばらくお待ちくださいませ」

声をあげたのはブトだった。彼は必死の面持ちでカルッツェの前に膝をついた。

「あの……恐れ入りますが、あなた様は……。それに、メイリアス様はどうしてこちらへ……」

「ブト様にお渡ししたお守りの石……。あれは結界石だったのです」

「結界石？」

「はい。ブト様の身に何かあったとき、私たちにその知らせが届くようになっていました。その結界石を作り、あなた様にお渡しするようにお考えになったのが、こちらのお方……。アガルタ王、リノス様でございます」

「あ……アガルタ王さま！？　え……あの……？」

「細かい話は後で説明します。こちらのカルッツェさんはかなりの高熱があるようです。すぐに王都に送還します」

「あ……。それは……。その前に、我らはいかにしたらよろしいでしょうか。ご命令を承りたく存じます」

「命令って……。彼は確か、ダオラの兵士たち全員の首を斬れって言っていませんでしたか？」

「そ、それは……」

「ええと、ちょっと待ってくださいね」

アガルタ王リノスはあらぬ方向に視線を泳がせた。しばらくすると、彼の両目が激しく左右に動き始めた。ブトをはじめとした、そこにいる者全てが彼の一挙手一投足に無言のまま注目していた。

「なるほど、よくわかりました。ええと、確か、あなた方はクレイシマを攻めているのですね？　このダオラの方々は……食料を支援しに来た。であれば、クレイシマの近くにあるツモト村まで退けば

いい。そこに駐留しておけば、遠からず降伏してくるでしょう」

「あの……どういうことでしょうか？」

「食料がやって来ないならば、降伏するしかないでしょう。要は、あなた方はクレイシマに蓋をすればいい」

「な……何と……」

「ええと、ダオラ軍の責任者の方はどなたですか？　ああ、あなたなのですね？　あなた方はこのままお引き取りいただいて結構です。あとは……お宅の皇帝に、つまらないことをするんじゃないよとお伝えください。それじゃ、私たちはこれで失礼します」

アガルタ王はそう言うと、一瞬で姿を消した。

「これは……夢……か？」

ブトは思わず声を漏らした……。

第八百八十六話　目覚め

王都に戻ったカルッツェは、すぐさまメイらの作った薬を服用した。否も応もなかった。

カルッツェはまるで夢を見ているかのような感覚に囚われていた。熱のせいもあったのかもしれないが、王都に戻って以降は、フワフワとした感覚を覚えて、自分の体が自分の体でないような感覚だった。

つい先ほどまであれだけ暴れていたのにもかかわらず、腹の底から湧き上がる熱のようなものは一切鳴りを潜め、ただ茫然としたまま鎧を脱がされ、ベッドに寝かされた。森の中でブトを斬ったのは、あれは夢か幻だったのだろうか……。そんなことを考えながらカルッツェはただただされるがままに身を任せていた。

目の前には目の垂れたポーセハイと聖女・メイリアスが甲斐甲斐しく世話をしてくれている。そして、その後ろでは、アガルタ王リノスが腕を組みながら鋭い視線を向けている。いや、やはりこれは夢だ。夢なのだ。あの聖女が自分の世話をするわけはない。そして、アガルタ王リノス……。あの王がこのような山深い土地に来るわけなどないのだ。そんなことを考えていると、不意に彼の目の前にコップが突き付けられた。

「ゆっくりと飲んでください。飲みにくければ、何度かに分けても構いません。一応、飲みやすいように甘い味を付けてあります」

聖女がそう言っていた。いつものような朗らかな表情ではなかった。

見たこともないような厳しい表情は、その重大さを物語っていた。きっとこれを飲まねば死ぬのだろうな……。カルッツェは呆然とした意識のまま、突き付けられたコップを手に取った。

とても良い香りがした。これは、薬の香りなのだろうか。いや、きっとこの聖女の香りだ。清潔さを感じさせる清々しい香りだ。まさに、この聖女を表すような香りだ。できることならもうしばらくの間、この香りに包まれていたい……。そんなことを考えながら彼はゆっくりと周囲を見廻した。

ふと、アガルタ王と眼が合った。相変わらず鋭い眼差しを向けてきている。どうして彼はそのような表情を浮かべているのだ……。ああ、俺の女に手を出すなと言っているのか？　出すわけはない。出したところで、この聖女は自分には転ばないだろう。力づくで思いを遂げたところで、どうにもなるわけでもない。いや……彼女に対してはそのような下卑たことはできないだろう。というより、反応自体起こらないだろう。そんなことを考えていると、ふと、香辛料のような香りが鼻をついた。

「さ、ゆっくりと飲んでください」

目の垂れたポーセハイが、噛んで含めるような言い回しで話しかけてきた。ああ、そうだ。薬を飲まねばならないのだと自分に言い聞かせながら、彼はコップに口を付けた。

独特な味のする薬だった。甘いと思いきや、その後から何とも言えぬ渋みを感じる。嚥下した後、鼻腔にちょっとした臭気を感じる。飲めなくはないが、積極的に摂取するかと言われれば否だ。徐々に自分の顔が歪んできているのがわかる。できればここらへんで服用を止めたいと思いながら、彼はようやくのことで薬を飲み干した。

「はい。もう、大丈夫ですよ。ゆっくりとお休みください」

聖女・メイリアスが額に手を添えながらそう呟いた。先ほどまでの厳しい表情ではなかった。いつもの、朗らかで優しい笑顔だった。カルッツェは安心したように、そのまま深い眠りに落ちていった。

「メイ様」

その直後、慌ただしく入室してくる者がいた。チワンだ。走ってきたのだろうか。彼は肩で息をしていた。その表情は厳しいものだった……。

◆◆◆

国王シェングは夢を見ていた。暗くて細い道をゆっくりと歩いていた。一体ここはどこだろうか。キョロキョロと周囲を見廻しながら、彼は歩を進めていた。

ふと、広い場所に出た。と、同時に奇妙な声が聞こえてきた。

「あんさんは船に乗りなはれ。あんさんは……歩いて行きなはれ。心配はいらん。くるぶしまでや。じきに渡れまっさ。ええと、あんさんは……下流の方に行きなはれ。……そうや、深ぅおまっせ。首まで浸かって行きまんのやで」

見ると一匹の小鬼が棒で指図をしている。その前には人々が一列に列をなしている。皆、唯々諾々と並んでいる。一体これは何なのだろうか。

徐々に周囲が明るくなってきた。そこは川が流れていた。人々はある者は船に乗って渡り、ある者は歩いて渡河していた。対岸に視線を向けると、何やら見覚えのある者の顔が見えた。

……父上！？

それは紛れもなくシェングの父・ブルトだった。暴虐の限りを尽くし、タルカト王国の国力を減退せしめた暴君だ。シェング自身も、この父から罵詈雑言を浴びせられ、暴力を受けたことは一度や二度ではなかった。そんな父がこちらを睨みつけながら仁王立ちしていた。

……何を今さら。

シェングは心の中でそう呟いた。もう、あなたの時代は終わったのだ。今更我が目の前に出てきたところで、タルカト王国は変わらない。もう、あなたの手には戻らないのだと心の中で呟いた。

相変わらず父・ブルトは顎をクイッと上げ、まるで見下ろすかのようにシェングを睨みつけている。その眼には憎悪の念がありありと見て取れた。それはそうだろう。この父に毒を盛ったのは、誰でもない。自分自身なのだ。しかしそれは国を救うためには仕方のないことだった。

吐き気を覚えた。シェングは踵を返すと、足早にその場を離れた。

……ふと、目が覚めた。目の前に一人の女性の顔が見えた。それは亡き母の顔だった。シェングの両目から滂沱の涙が溢れだした。

「は……母上……」

必死で声を振り絞った。手が握られた。額に手を添えられた。幼い頃、眠れないとき、病になったときに、よく母がやってくれたことだった。シェングはさらに言葉を振り絞る。

「わ、私は……やりましたね？　こ……この国を……立て直し……ましたね？　ご先祖様に……叱られませんよね？」

シェングの言葉に、女性は静かに頷いた。彼はまるで、子供のように泣きじゃくりながら、再び眠りに落ちていった。

◆　◆　◆

「え？　もう目覚めたのか！？」

カルッツェが目を開けると、そんな声が耳に入った。見ると、側には数人のポーセハイがいた。彼らは一様に驚きの表情を浮かべている。

「水を……」

そう言って水を持って来させて、一気に喉に流し込み、大きくため息をついた。よく寝たという心地よい感覚があった。ふと、服が濡れていることに気がついた。これは……汗をかいたためだろうか。そんなことを考えていると、ポーセハイの一人がやおら話しかけてきた。

「薬を服用されてまだ、二時間しか経っておりませんが……お身体の具合はいかがでしょうか」

「……何の問題もない」

そう言って彼はベッドから降りた。これまで感じていた熱や倦怠感はなくなっていた。彼はうーんと背伸びをすると、そのまま部屋を後にしていった。後ろからポーセハイがメイ様の診察を受けてくださいと言ってきたように聞こえたが、そんなことはどうでもよかった。彼は一刻も早く妻のサミに会いたかった。

「きゃっ」

部屋の扉を開けると、サミが驚きの声を上げた。まさか突然扉を開けられるとは思ってもみなかったのだろう。彼女の前には乳母であるカワバが座っていた。彼女は怪訝な表情で彼を見ている。

「どうなさいました？　お薬を飲んだと聞きましたが……」

「ああ飲んだ。もう心配はない」

そう言って彼はサミの前に座ると、その体を抱きしめた。

「まあ、こんなに濡れて……まずはお着替えを」

「無用だ。参れ」

「どちらに？」

「寝所だ」

「……まだ陽が高うございます」

「参るのだ」

カルッツェはそう言って強引にサミの手を引いた。カワバが割って入ろうとしたが、彼は構うことなくサミを寝所に引きずっていった。

程なくして国王・シェングは意識を回復した。国王目覚める、の報は、すぐさま王都とその周辺国中を駆け巡った……。

第八百八十七話　我、老いたるか

その報はダオラ帝国皇帝・ガノブの耳にも達していた。彼の許にはサミの乳母、カワバからその報告がなされていた。

シェングの容体は安定しているが、その命はそう長くはないとカワバは書状に書いていた。その意見にガノブも同意するが、おそらくシェングはカワバの予想を超えて生きるだろうと彼は見ていた。

それよりも気になるのがカルッツェのことだった。報告では、彼は薬を飲んで目が覚めたあと、まだ陽が高いにもかかわらずサミを寝所に連れ込んで、まるで獣のように襲い掛かったとあった。そして、夜が明けるまで彼は延々とサミの体を弄び、サミはずっとすすり泣きをしてその責めに耐え続けていたと言う。カワバがその現場を見たわけではないだろうし、もしそれが本当のことであれば、彼女は自らの命も顧みずに部屋に飛び込んだことだろう。だが、そうしたことは一行も書かれておらず、額面通りに受け取れば、カワバは目の前で蹂躙されているサミの様子を、指をくわえて見ていたことになる。そんなことを易々と許す女性ではなかった。

ガノブは再び手紙を手に取った。改めて読むと、その表現にはかなりの誇張が含まれていて、さらには、カルッツェに対する憎しみの感情も見て取れた。この手紙は主君であり、同時に娘でもあるサミと言う宝物を取られてしまったカワバが、何としてもサミをその手に取り戻したいという感情のままに筆を走らせ、自分に訴えていることをガノブは看破していた。確かに、カルッツェに強引に寝所に連れ込まれたのは事実であろう。だが、中からは助けを求める声は上がらず、カワバは部屋の前をウロウロしていたにすぎない。そし

て、そんな彼女を屋敷の者たちが宥めすかして部屋に連れて行った……それが真実なのではないか。その手紙を見ながら彼は、娘が完全に自分の手から離れてしまったことを見抜いていた。

もし、以前のサミであったならば何としてでもカルッツェを拒絶しただろうし、最悪の場合、舌を噛み切って死ぬくらいの覚悟が彼女にはあった。しかし、口では拒否をしていたものの、カルッツェに寝所に連れ込まれてからは、抵抗らしい抵抗もせず、声すら上げずに唯々諾々と彼に従っているところを見ると、やはり娘はカルッツェを心底愛してしまっていると見てよかった。

若い頃からどちらかと言うと、男女の間柄に関しては奔放であったこの皇帝は、愛情というものの厄介さを承知していた。それは若い頃に見染めた夫ある女性が最後までガノブを拒否して命を断った経験に由来していた。

……まさか、あのサミが、な。

ガノブは胸の中でそう呟きながら苦笑する。親として娘にそうなってほしくはなかったが、現実としてカルッツェに取り込まれてしまった以上、彼女のことは諦めざるを得なかった。

ガノブは紙とペンを手に取ると、そこに何やら書き込み、それが終わると、パンパンと手を鳴らした。

すぐに家来が入室してきた。彼はその紙を差し出すと、乾いた声で口を開いた。

「これを、タルカトのカワバの許に届けよ」

「ははっ」

家来はそう言って一礼して退室していった。ガノブが認めた書状には、サミのことは諦めろと書かれていた。そして、その上で、遠からずサミとカルッツェの間には子供ができることになるだろう。そうなった場合は、カワバが命に代えてでもその子供を養育せよと書いてあった。ガノブはタルカト王国を内側から崩そうとする野望を捨ててはいなかった。

「策が為さねば、また新たな策を立てればよいのだ」

彼はそう言って、誰に言うともなく呟き、ゆっくりと椅子に腰を下ろした。

つい先ほど、クレイシマが陥落し、ヨシマ兄弟が降伏したという報告があったばかりだ。ヨシマ兄弟に関しては、実際のところあまり期待してはいなかった。タルカト王国内を引っ掻き廻すだけ引っ掻き回し、内部崩壊の一助にでもなれば御の字であると考えていたのだが、結果は思った以上に悪いものとなった。

結局この兄弟は何もできずに終わった。ダオラの援軍が来ないことを知った翌日に、彼らは降伏していたのだった。クレイシマのすぐ傍にあるツモト村にタルカト軍が居座られては、彼らに残された唯一の補給ルートが断たれているために、彼らは干上がる他はなかったのだ。結果的にタルカト側は最小限の被害でクレイシマの反乱を押さえて見せ、単にカルッツェの優秀さを際立たせただけに過ぎなかった。それよりも、援軍にやった一千の将兵の損害がガノブにとっては痛手であった。

報告によれば、一千のうち約七百名が戦死したとある。こともあろ

うに、山中の行軍のさ中に窪地に降りて休憩をしていたらしい。指揮官は一体何をやっていたのか。もし、生きて帰ってきたならば、ガノブは徹底的にその者を糾弾したことだろう。

それよりも気になるのが、アガルタ王リノスがその場に現れたという報告だ。なぜ、アガルタ王がそんな場所に現れたのか理解に苦しむが、ガノブの神経を逆なでしているのが、そのアガルタ王らしき男が言った、つまらないことをするな、という言葉だった。その報告を聞いたとき、彼は、タルカト王国は安泰であり、手を出したところで無駄なことであると言う意味だと考えた。だが、時間をおいた今、もう一度その言葉を考えてみると、アガルタ王は武人ならば策を弄さず武人らしく正々堂々と戦いを挑めと言っているのではないか。ガノブは腹の中でそう嘯いた。

「そんな馬鹿正直なことをやっていては、国は立ちいかぬ」

思わずそんな言葉が口をついて出た。自分でも予想もしていなかった行動に、彼は苦笑する。

「領土を広げてゆかねば、この国は立ちいかぬ。アガルタとは、違うのだ」

彼はふと、ダオラ帝国とアガルタ王国との国力の差を比較してみた。計算は得意だ。彼は暗算でざっと両国の力の差を計算してみた。結果はすぐに出た。アガルタはダオラのおよそ五十倍の国力を持っていた。まともに戦って勝てる相手ではなかった。

ガノブは負ける戦いは決してやらない冷静さを持っていた。アガルタを敵に回すべきではない。アガルタが敵に回るような行為をするべきではないと心の中で断じた。と、すると、先ほどのカワバに宛

てた手紙は、寧ろ自分の首を絞める結果となる可能性があった。彼は一瞬、家来を呼び戻そうかと思ったが、結局何も言わずに、そのまま手紙を届けさせることにした。

「まあ、カワバが勝手にやったということであれば、我が国に類が及ぶことはあるまいて」

彼はそう言って立ち上がった。

「カルッツェにアガルタ王リノス、か」

彼は誰に言うともなく呟いた。片や女性を昼間から寝所に引き入れて行為に及ぶ猛々しさと若さを持った男。片や世界にその名を轟かせると同時に、全く想像もしない行動に出る、出られるスキルと力を持った男……。まだ見ぬその二人の男たちは、これからのガノブの大きな障壁となるような気がしてならなかった。

「余があと十年若ければ、な」

彼は若かりし頃の自分を思った。向こう見ずで即断して行動していた自分……。自分が一番であると信じて疑わなかったし、事実、己がやろうとしてきたことは全て叶えてきた。自分の姿を鏡に映して見てみると、皺が増え、髪の毛にも白いものが増えてきていた。明らかに自分が年老いているのがわかる。認めたくはなかったが、彼は確実に死に向かって歩き始めていた。

ふと、自分の死後の国のことが頭をよぎった。他国に蹂躙される帝都……。そんなことはあるはずはないと首を振る。ガノブは深呼吸をすると、足早に自室を後にするのだった……。

第八百八十八話　かわいい

「あああ～やっと一息つけるな」

リノスはそう言って背伸びをした。彼は自宅のベッドに横になりながら、心底、ホッとした表情を浮かべていた。この日、ようやくタルカト王国からの依頼が完了して、メイたちが引き上げてきたのだ。

怒涛の日々の連続だった。暴れるカルッツェを王都に強制送還してから、クレイシマを陥落させるまで、彼は色々と助言をするなどして、近習を勤めていたブトを手伝った。そのクレイシマに籠るヨシマ兄弟は程なくして降伏したが、その際、ヨシマ本人が出し抜けにタルカト軍の陣に現れ、自ら降伏を受け入れると言ってきたのだ。しかも彼はリノスの探索スキルを掻い潜ってやって来た。これにはリノスも驚きを隠さなかった。

彼は全身を獣の皮で覆っていた。一見すると小柄な熊かと見紛うばかりの風体であった。それはダグリベアーという熊の皮であり、それは気配を消すことに長けた熊であった。どうやらその皮と毛に気配探知を掻い潜る秘密があるらしく、彼はそれに大いに興味を持った。

「ダグリベアーの皮は非常に希少なものである。奴らは用心深く、滅多に人前に姿を現さない。これは我が父が数十年の時をかけて熊を駆り、そして拵えたものだ」

ヨシマはそう言って胸を張った。彼は、この気配を消すことのできる熊の皮と、自分の首をもって王都に交渉してもらいたい。クレイ

シマの皆の命を助けてやって欲しいと懇願した。聞けば食料の準備が整う前に籠城戦に入ってしまったため、城内では食料が尽きている状態なのだと言う。ブトは降伏を承知し、ヨシマ自ら王都に赴いて申し開きをすることを勧めた。国王様もお目覚めになりましたので、命を取るようなことはなさいますまいと言って彼を慰めた。

とはいえ、クレイシマの状況は急を要していた。このままヨシマが王都まで行き、ここに帰って来るまでにはどんなに速くとも二日はかかる計算だ。恐らく王都では彼は軟禁状態に置かれるだろう。そうなると、クレイシマへの食糧支援は少なく見積もっても一週間以上の時間がかかると予想された。

仕方なくリノスは、当座として転移結界を使ってアガルタから食料を支援することにした。結界能力を秘匿しながらの作業はなかなかに骨の折れる作業ではあったが、そのお陰もあって、クレイシマで餓死者を出すことは避けられた。

これで一息つけると思った矢先、今度はメイがクレイシマに行くと言い出した。そこでは疫病が流行りつつあり、子供たちが罹患しているという話を聞いた彼女は、ポーセハイらを伴ってクレイシマに向かった。むろん、そこにはリノスも同道した。彼女らはそこで医療活動を行い、疫病が流行る一歩手前で食い止めることに成功した。クレイシマの人々はメイに深く感謝するとともに、何故か食糧を支援したのもメイのお蔭となっていて、リノスは何とも言えぬ気持になっていた。また、アガルタにおける彼の仕事は待ってはくれず、それらの作業と日常業務を夜遅くまで行う日々が続いていたのだった。

そうした諸々の事柄をようやく終えて、彼はようやく一息つける時間を得た。彼の隣ではシディーが寝るための準備を整えようとして

いる。彼女は顔に何やら液体のようなものを付けると、パンパンと音をさせながら両手で自分の頬を叩いた。

「それは、効くのかい？」

リノスの問いかけにシディーは目だけを彼に向けた。

「気休めだと思っているのでしょ？」

「そんなことはないけれど、その水だけで本当にお肌がすべすべになるのかなと思ってさ。俺のイメージでは、もっと色んな液体を使わなきゃいけないんじゃないかと思ってさ」

「無色透明ですけれど、この中には色々な成分が含まれています。透明だからと言って何もないと思っていると、とんでもない失敗をすることがあります」

「ああ、確かに。ニザ公国が毒に侵されたときも、無色透明な毒だったな」

そこまで言ってリノスはハッとする。シディーの心の傷に触れてしまったと思ったのだ。

「う……すまん」

「別に謝ることではありません。いい経験になりました」

「そ……そうか」

シディーはそう言ってベッドに入ってきた。何となく決まずい雰囲

気となってしまったので、リノスはコホンと咳払いをしながら口を開く。

「タルカト王国はこれで安泰なのかな」

「まあ、国を揺るがすような大事件はしばらく起こりそうにもありませんから、これでいいのではないでしょうか」

「そうか。あの国王も意識を回復したからな。しばらくは安泰だな」

「いいえ。その国王様は近いうちに亡くなる気がします」

「え？　そうなの？」

「まあ、一年や二年くらいは生きるでしょうけれど、五年先には生きていない気がします」

「……そうか。ということは、あのカルッツェと言う男が跡を継ぐことになるんだな」

彼はそう言うと大きなため息をついた。

「それにしても、変わった男だったな。普段は好青年なんだが、熱が出ているとまるで別人のようになる。あれは鬼だよ。あれは病のせいなのかね。病気で人はああも変わるものか。もしかしてあれは、彼の持っている狂気なんじゃないかと思うよ。三百人の首を刎ねて相手の城に放り込むなんて発想は、普通の人間はできないぞ。そういう意味で彼はかなりの上級者だな」

「狂気、なんてものは、誰でも持っているものだと思います」

「そうか……な」

「それがたまたま、病気を機会に露出したにすぎません。とはいえ、メイちゃんやリノス様の助けがなければ、あの国はかなり大変なことになっていた気がしますね」

「やっぱり、内乱になったかな」

「そこまでにはならないと思いますが、そのクレイシマ、でしたっけ？　そこの人々からは子々孫々まで憎まれることになって、長い間抵抗するような気がします。それに、ダオラの人々からも恨まれて、長い間あの国は戦いに巻き込まれていくような気がしますね。メイちゃんやリノス様のお蔭で、これから先はそんなことは起こらないと思いますけれども」

「そうか……まあ、安泰となってめでたしめでたし、と言うところか」

「う～ん。まあ、色々な問題は起こりそうではありますけれど、国が崩壊するようなことにはならないと思いますね」

「色々な問題と言うのが気になるけれど、国が崩壊しないならいいか」

「今回の一件は、何よりメイちゃんが特効薬を開発したことが一番大きいです。あの薬は色々な用途があります。何せ、衰えた部分を再生する効果があるのですから」

「へえ……そうなの？」

「詳しい話は割愛しますけれど、私が今塗ったこの液体も、お顔の肌を再生させる効果を持たせています。まだ実験段階ですけれど、私のお顔がツヤツヤになった気がしませんか？」

シディーの言葉に、リノスは思わず手を彼女の頬に伸ばす。何となくだが、肌がきれいになっている気がしなくもなかった。だが、肌の美しさに関しては、やはりまだまだリコには及ばないと感じた。

「……もしかして今、リコ様のことを思っていました？」

「……いいえ」

「……リコ様と変わりましょうか？」

「……シディーでいいです。きれいなシディーがいいです」

「そんなこと言って～。みんなにきれいって言っているんでしょ？」

「う～ん。きれいとは違うかな」

「どういう意味？」

「きれい……というのはメイかな。リコは美人。マトは……恰好がいい。ソレイユはセクシー。そしてシディーは……」

「私は、何ですって？」

「かわいい」

「へ？」

「シディーはきれいというより、かわいい、だな」

「……わかっているじゃないですか」

顔を真っ赤にしながら嬉しそうな表情を浮かべるシディーの姿は、本当にかわいいものだった。彼は頷きながらシディーの肩を抱くのだった。

第八百八十八話　かわいい（後書き）

第二十六章これにて終了です。いつもの通り、間話を数話を投稿した後、新章に突入する予定です。

第八百八十九話　カルッツェとサミ

タルカト王国国王シェングは、それから一年後にこの世を去った。彼は死を迎えるにあたって、すべての準備を整えていた。それは国王崩御の見本として、世界中に知られることとなった。

父のお蔭で、カルッツェは大きな苦労をすることもなく、タルカト王国の国王となり、比較的スムーズに自分の治世を行うことができた。また、彼と妻サミの間には立て続けに六人の子供が生まれ、二人の王子と四人の姫に囲まれた幸せな日々を送ることになった。

一方でサミの乳母であるカワバは、その六人の子供たちの教育を一手に引き受けた。彼女は当初、別の者に養育を任せようとしていたカルッツェ夫婦に涙ながらに訴え、それをさせてくれなければ死ぬと言って脅した。それは半分は脅しであったが、半分は本気であった。そのあまりの情熱に、さすがのカルッツェも認めざるを得なかった。

カワバの養育は完璧と言ってよかった。子供たちは礼儀正しく育ち、さらには高い教養を身に付けるに至った。そして、カワバのことを「婆」と呼んで懐いた。

タルカト王国はカルッツェが王に即位して以降は、飛躍的な速度で成長を遂げていった。彼は即位直後はアガルタとの同盟を模索したが、それはリノスらにやんわりと拒否された。その一方でリノスは、技術や医療などの技術的な協力は惜しまないと返答した。カルッツェはその案に賛同し、タルカト王国内の優秀な若者をアガルタ大学に送った。そして、アガルタからはポーセハイやドワーフらを迎え

入れて、国がさらに発展するヒントを得ようとした。

一部の家来から反対もあったが、その頃のカルッツェの威光はそれらの意見を軽く圧殺した。その上、やって来たドワーフたちは、国内に良い鉱石が採れることを発見し、国内で精度の高い鉄を生産することを提案した。カルッツェはそれに一にも二にもなく賛成した。

ドワーフたちはカルッツェの全面協力の許、溶鉱炉を建設し、そこで製鉄を始めた。ほどなくしてそこからは非常に質の良い鉄を精製することに成功し、タルカト王国は世界に冠たる鉄の名産地となった。そこから生み出される武器防具を輸出することで、王国は大いに潤うこととなった。

ちなみに、この溶鉱炉建設にかかわったのが、アガルタのドワーフ村にいるリンショックらだったが、彼らは姫様・ピアトリスに会えない寂しさから、着任してわずか一ヶ月でアガルタに舞い戻った。

話を元に戻す。

カルッツェとサミとの仲はすこぶるよく、彼は可能な限り彼女と時間をごした。彼にとって妻や子供たちのとひと時は、何にも代えがたい癒しの時間であった。

すべてが順風満帆に進んでいたカルッツェだったが、長子・ブカツが十二歳になった頃に大きな不幸に見舞われた。最愛の妻、サミが旅立ったのだ。

亡くなる半年ほど前から彼女は体調を崩しがちになり、床に臥せることが多くなった。そこにカワバが彼女の世話をしたいと言ってきた。カルッツェはその必要はないと言って退けたが、彼女は毎日彼

の許を訪れて、涙ながらに世話をさせて欲しいと言って聞かなかった。カルッツェは根負けをする形でそれを許した。

カワバが世話をし始めると、すぐに回復した。最初は訝っていたサミも、カワバの痒い所に手が届く世話に安心感を覚えていたのだった。だが、再びサミは体調を崩し、やがて床に臥せる期間が長くなった。心配したカルッツェはポーセハイの診察を受けるように勧めたが、カワバは大丈夫だと言っていそいそとサミの部屋に下がっていった。

だが、ついに二週間もの間、サミがカルッツェの前に姿を見せなくなるに至り、彼はいても立っても居られずにサミの部屋に向かった。だが、そこにはカワバが控えていて、頑として彼を部屋に通さなかった。一旦は引き上げたカルッツェだったが、胸騒ぎが収まらず、翌日、再びサミの部屋を訪れた。しかし、カワバは前日同様、姫様は大丈夫でございますと言って彼の訪問を拒んだ。

「夫が妻を見舞うのに、何の不都合がある！」

「姫様は会いたくないと仰せでございます」

いつものカワバとは違っていた。目が、何かの憎しみを帯びたものに変わっていた。カルッツェはカワバを押しのけるようにして部屋に通ろうとした。

「お待ち下さいませ！　ここを通ることはなりません！」

「どけい！」

カルッツェは力任せにカワバを部屋の前から引き剥がしていた。鍛

え上げたカルッツェの前では、老婆の体などは問題ではなかった。カワバはまるで綿のように宙を舞った。

部屋にはサミの姿はなかった。彼は構わずに奥の部屋に入っていく。そして、大声で妻の名を呼んだ。

サミはカワバの部屋にいた。顔色は悪く、土色の顔をしていた。痩せてガリガリの体躯となっていて、どう見ても、その命は長くはないように思えた。

「サ……サミ、これは……どうしたのだ」

「……体調を、崩してしまいました。申し訳ございません」

「すぐにポーセハイに。いや、メイリアス殿に診ていただこう」

「無駄です」

そう言ってサミはカルッツェの手を取ると、それを自分の腹部にあてた。そこには、何やら塊のようなものがあった。

「……こんな体になってしまいました。もう、あなた様の相手はできません」

「何を言うのだ！　今すぐ、今すぐメイリアス殿に診ていただくのだ！」

「もう、私の命は、尽きます……。自分でも、わかるのです」

「何を言うのだ、サミ。しっかりしろ！　しっかりするのだ！」

「ああ……何と幸せなのでしょう……。もう二度と、あなた様に会うことはできないと覚悟しておりました。それが……最後、あなたの腕に抱かれて死ぬとは、何と幸せなのでしょう」

「バカなことを言うな！　サミ！　サミ！　サミ！」

カルッツェが何度呼びかけても、サミは返事をしなかった。彼女は意識を失っていた。カルッツェは妻を抱き起すと、そのまま抱き上げて自室に運んだ。そして、すぐさまポーセハイたちに連絡を取った。

程なくして、数名のポーセハイたちが転移してきた。驚くことに、そこには聖女・メイリアスの姿もあった。彼女らはすぐにサミの応急処置に取り掛かったが、すでに彼女は息絶えていた。

妻の死を聞いてカルッツェは、まるで空気の抜けたゴムまりのようにヘナヘナとその場に崩れ落ちた。そして、人目も憚らずに号泣した。

どれほどの時間泣き続けただろうか。人はこれほどまでにも涙を流せるのかと思われる程に彼は慟哭し続けた。そして、ようやく泣き止んだ彼は、まるで廃人同様の姿になっていた。

同様に、サミの死を知ったカワバも、人目もはばからずに涙を流した。彼女は泣きながらサミの亡骸を引き取りたいと周囲の者に懇願した。だが、サミの遺体はすでにメイリアスたちによって丹念にその死因を調べられていた。サミの遺体を調べていると知ったカワバは、まるで気が狂れたように暴れ、サミの遺体を取り戻そうとメイたちの部屋に殴り込んだ。だが、応対したメイに、カワバは何も言

うことができなかった。彼女の悲しみとも怒りともつかぬ目が、カワバの毒気を完全に抜いたのだった。いつもの朗らかな表情ではなかった。まるで別人かと思われるその表情は、彼女の心胆を寒からしめるものだった。カワバは大した抵抗をすることなく、駆け付けた兵士たちによって取り押さえられ、部屋に押し込められて軟禁状態におかれた。

サミの死因は言わば、癌であった。体中にそれは転移していて、もはや手の施しようがなかった。唯一、リノスの回復魔法だけがその病に対する有効な手段だったが、すでに死の状態のある彼女には効果はなかった。

メイはサミの死因について、包み隠さずにカルッツェに報告した。当初は廃人同様に生返事しか返さなかったカルッツェも、その報告を聞くにつれて徐々に元の自分を取り戻した。そして、その報告が終わるころには、恐ろしい憤怒の表情に変わっていた……。

第八百九十話　復讐

サミが癌を発症したのはおよそ、一年前と考えられた。恐らくその頃から体の不調を感じてはいたが、彼女は持ち前の我慢強さを発揮して、その症状を隠し通していたと考えられた。

だが、病が進むにつれて、それは難しくなった。いよいよ我慢の限界が近づいたとき、彼女に寄り添ったのがあの、カワバだった。

カワバはサミにコヨウという薬を与えた。いわゆる鎮静剤の一種であり、強い鎮静作用がある代わりに、その依存性も高く、処方するにはかなりの注意を要する薬だった。メイの所属するアガルタ大学においても、この薬はごく一部の医師にしか扱うことは許されず、それは厳重に保管されていた。しかも、そのためには学長たるメイの許可が必要とされている薬だった。

遺体を検分してメイたちは、サミの命を縮めたのは、このコヨウの過剰摂取が原因であると断じた。カワバは通常処方するおよそ十倍のコヨウをサミに与えていた。ただでさえ弱った体に、そのような強い薬を与えられては、サミの体が耐えられるわけはなかったのだ。

「つ……つまりは、余が、サミを、あのカワバに預けたのがすべての間違いであったと言うのか！　カワバになどに預けず、メイリアス殿に診せていれば、サミは……」

カルッツェはそう言って溢れ出る涙を何度も拭った。

彼はすぐさまカワバを牢に繋ぎ、彼女を厳しく取り調べた。だが、

カワバは、姫様のお苦しみを取り除きたかっただけで、薬が命を縮めるようなものであるとは知らなかったと言い切った。自身が所有しているコヨウは、片頭痛を和らげるためにダオラ帝国から取り寄せたもので、姫様の命を奪うつもりは毛頭なかったと言って胸を張った。

しかし、コヨウの薬の強さは、それを服用するものは大抵、その依存性の高さを知っているものであって、サミの乳母を勤めたカワバ程の者であれば、それを知らぬはずはなかった。彼女は折に触れて、いかに自分がサミを手塩にかけて育てたのかを周囲の者に語っていた。そこでは、まだ乳飲み子であった彼女を病気にせぬように、食べるものにも細心の注意を払っていたことを自慢げに語っていたのだった。そこからは、食べ物に関して相当の知識を備えていることは明白であった。そのカワバが、コヨウの薬の効能を知らないとは理屈に合わないことであった。

さらには、カルッツェとサミの寝室からは、サミが記した日記が見つかっていた。それは毎日付けられたものではなく、彼女が気が向いたときにつけられた、ある意味ではメモ書きのようなものであった。そこには子供のことを気遣う内容や、カルッツェからの頼まれごとに関することなど、多岐に渡る内容が記されていた。その中には、カワバとの関係に苦悩する内容も描かれていた。

カワバは子供たちに惜しみなく金を使っていた。必要ないであろうと思われる物にまで金を使っていた。さすがにそれを見咎めたサミに対して、カワバは何も反論しなかったが、それは、子供たちを通じてこのタルカト王国の財政をひっ迫させる狙いがあると彼女は見抜いていた。日記の中で彼女はカワバを「哀れな婆」と切って捨てていた。

確かに、嫁いだ当初のタルカトの財政状況は芳しいものではなかった。だが、今やタルカト王国は周辺国の中でも一頭図抜けた存在であり、その財政規模はサミが嫁いできたときよりも、飛躍的に増大していたのだ。

カワバが弄した策は、タルカト王国には何の影響も与えていなかった。

彼女はあくまで父・ガノブへの忠誠を貫き通し続けていた。それはある意味では美談ではあるが、目の前の現実と鑑みると、それは相容れないものであった。

サミはカワバが異常なまでに子供たちを可愛がる理由を見抜いていた。カワバは子供たちを通して、サミの心を掴もう、もう一度自分の許に取り戻そうとしていたのだ。サミとしても、カワバのことは嫌いではない。幼い頃から自分を育ててくれた、言わば育ての母だ。だが、聡明なサミは、カワバの意図を完全に把握していた。自分の心を取り戻して、父・ガノブの命令を共に遂行――タルカト王国の弱体化――させようとしているのだ。だが、よしんば彼女がそれをしたところで、タルカト王国の屋台骨が揺らぐことはまずないと言ってよかった。

それに、子供たちはカワバに懐いているが、一方で父であるカルッツェも尊敬していることをカワバはわかっていないと記されていた。例え彼女がいかにしようとも、子供たちはカルッツェの命令が下れば、易々と彼女の許を離れるのだ。それがわかっていないカワバは、己の状況が見えていない哀れな老婆だと彼女は断じていた。

日記を一読したあと、カルッツェは大きなため息をついた。そこまで見抜いていながら、妻は、サミはどうしてカワバにその世話を任

せたのだろうか。単に体調を崩して心が弱っていたというわけではあるまい。もしかして、彼女はカワバに今、置かれている状況を理解させるために敢えてカワバに世話を任せたのではないか。あのサミならやりかねないことだ。

……まずは、カワバにもう一度話を聞いてみよう。

そう思い、二人の部屋を出ると、家来が血相を変えて走ってきた。彼は早口でカワバが牢で舌を噛み切って死んだことを告げた。

そこは凄まじい状況だった。牢の床は血に染まっていたが、何より不気味であったのは、壁に血で文字が殴り書きをされていたことだ。カワバは舌を噛み切って死ぬ間に、溢れ出る血を自らの手に塗りたくり、壁に文字をかいたのだ。そこには、こんな言葉が書かれていた。

「ようやく娘を取り戻した」

おそらく、サミを取り戻したいがために、カワバはサミに過剰に薬を与えたのだ。それは、毒を盛ったと等しい行為であった。

吐き気と憤怒の感情が同時に湧き上がってきた。カルッツェは踵を返すと、足早にその場を後にした。

ふと、目の前に樽が積まれているのが見えた。あれは何かと尋ねると、中には酒が入っているという答えが返ってきた。

「カワバの死体を、あの酒樽の中に入れて埋めよ」

「は？」

「山の中に埋めてしまえ」

そう言ってカルッツェは踵を返した。

しばらくすると、カルッツェの住む王宮に妙な噂が立つようになった。深夜、手洗いに不気味な老婆が出るという噂だった。カルッツェは気にも留めなかったが、その噂の出どころが長男のブカツであると聞き、彼は眉をひそめた。

「夜、手洗いに参りますと、皺だらけの婆が、鏡の中から手招きをするのです」

ブカツの顔は青ざめていた。その不気味な婆を見たのは自分だけではない、弟、妹たちも見たのだと訴えた。そして、夜中には手洗いに行くことはできないと言って泣いた。

もとより豪胆で鳴らしたカルッツェである。子息ブカツの言葉を鼻で笑い、お前はタルカト王国を継ぐ器ではないとさえ言ってのけた。さすがに近習ブト――その頃には彼は侍従長に就任していた――がその場を収めたが、その後も不気味な婆を見たという報告がなくなることはなかった。

カルッツェにはその都度報告がなされていたが、彼は笑って取り合おうとはしなかった。しかし、王子、王女らが恐怖のあまり手洗いに行くことができず、部屋の中で粗相をすることが続くと、さすがにこれは看過できない問題となった。

ブトはカルッツェの許可を得ずに、独断で動いた。彼は、その婆の特徴から、それはあの、カワバではないかと予想した。そして彼は

部下を伴ってカワバが埋められている山中に足を踏み入れた。

鬱蒼とした森の中に、その樽は埋められていた。ようやくのことでそれを掘り出して、中を検めてみると、不思議なことに、中には葬られたままの姿をしたカワバの亡骸があった。

ブトは改めて亡骸を土の中に埋め、簡単な墓を作った。その際、そこにはサミの形見の櫛が一緒に埋められた。

婆の姿はそれ以降ぷっつりと見られなくなった。だが、深夜に手洗いの鑑に映る婆は、長くカルッツェの一族の記憶に残り、折に触れて悪夢と言う形で表れて、皆を苦しめるのだった……。

第八百九十話　復讐（後書き）

ｃｏｍｉｃブースト様にて、コミカライズ最新話、公開されました。
是非、チェック下さい！

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｂｏｏｓｔ．ｃｏｍ／ｃｏｎｔｅｎｔ／００３９００１

第八百九十一話　姫様がやって来るぞ！

ニザ公国宰相ユーリ。謹厳実直な性格であると同時に、温厚篤実な性格から公国内では誰からも慕われる人物とされている。むろん、ドワーフ王からの信頼も厚く、この公国は、この宰相一人の能力でもっている部分もかなりあると言えた。

そんな彼が、そわそわと首を左右に動かしている。いつも冷静沈着な彼としては、珍しい光景であった。それもそのはずで、この日は、コンシディーが娘のピアトリスと共にやってくる日であった。

立場上、アガルタでのドワーフ族の取りまとめを担っているコンシディーは、ひと月に一度、ニザ公国に里帰りをするようになっていた。そして、ニザのドワーフとの打ち合わせの機会を設けて技術交換はもちろんのこと、様々な情報のやり取りを行っていた。

アガルタの技術力の向上は目覚ましかった。中には、ニザのドワーフたちも舌を巻くような技術を開発するなど、世界一の技術大国を自負するニザ公国が危機感を覚える一面も垣間見えてきた。

もとより、技術の向上が第一と考えるドワーフ王は、コンシディーの報告を喜び、負けてはならぬと意気込むドワーフたちの様子を、目を細めながら眺めていた。そのドワーフ王がもう一つ楽しみにしていることがある。孫のピアトリスに会うことだった。

コンシディーはニザに里帰りする際に、ピアトリスを伴ってやって来るようになった。そのピアトリスは、何故かドワーフ王に懐いた。彼の腕に抱かれているときのピアはご機嫌そのものであり、コンシ

ディーはそれもあって、彼女を伴って帰って来るようになったのだ。

また同時にピアは、宰相のユーリにもよく懐いた。彼女の屈託のない笑顔を見ていると、何とはなしに心が癒されていくのを彼は感じていた。そしていつしか、彼もドワーフ王と同じように、コンシディーの里帰りを心待ちにするようになったのだった。

ユーリは今、コンシディーの部屋の入口でその到着を待っていた。人の気配はない。まさかこんなところに二人の親子がやって来るとは想像すらできないような様子だ。

と、突然、子供を抱きかかえた女性が現れた。コンシディーだ。彼女の腕に抱かれているのは無論、ピアだ。

「りーり！　りーり！」

ピアはユーリの顔を見ると、嬉しそうな表情を浮かべて両手を伸ばした。彼は律義に一礼する。

「リーり」

待ちきれないのか、ピアは無理やり母親の腕から降りて、ユーリの許にパタパタと走り寄ってきた。そして、その小さな手でユーリの手を握った。

「りーり、じいじ。じいじ」

「はい、姫様。王様のところに参りましょう。おお、しばらく見ぬ間に大きくになられて……。りーりは嬉しゅうございます」

「別に前と変わっていないわよ」

コンシディーが口を挟む。いや、そんなことはない。前に比べて一回り大きくなっている。私の目は正確だ。ユーリは心の中でそう呟いた。

「……左様でございましたか。それは失礼しました。それで、大姫様は、これから技術部会にご参加なさいますので？」

「いいえ、寝るわ」

「は？」

「ちょっと疲れちゃって……。今から寝るから、ピアのこと、よろしくね」

彼女はそう言って服も着替えずにベッドに潜り込んだ。そして、毛布の中から顔だけを出してユーリに視線を向けた。

「お父様には上手く言っておいて。あ、それから、その、大姫様って呼び方は止めてくれない？　前の通り、姫様でいいから。他の人にも言っておいて」

コンシディーはそう言って毛布の中に潜り込んだ。

ピアの手を引きながら彼は心の中で嘆いていた。せっかく里帰りして来たのだ。どうして父である公王様にお目通りをしないのか。この姫様の手を引き、お父上の許に行けば、王はどんなに喜ぶか知れない。そんなことは少し考えればわかるはずではないか。

そこまで考えてユーリは少し不安になる。もしかして、こういうガサツさがアガルタで出てはいまいかと。アガルタ王様に愛想をつかされてはいないか、と。

一方で彼は、コンシディーが父の許に行かないのは、公王にも原因があることを見抜いていた。

……公王様も公王様だ。せっかく大姫様が孫を連れて帰ってきているのだ。何か、優しい言葉の一つもかけてやらねばならないところなのだ。大姫様は大姫様で、アガルタで色々思うところもあるだろう。そうした話を父親として聞いてやる良い機会なのだ。にもかかわらず、公王様はやれ、アガルタ王との仲はどうだだとか、二人目はまだかとか、デリケートな話題を臆面もなく言い立てる。そんなことは遠回しに聞くものであって、本人に直接聞くものではない。そんなこと言うから、大姫様の足が遠のくのだ。

「りーり、じいじ、じいじ」

ピアトリスの可愛い声で我に返る。彼女はユーリの手を力強く引きながら廊下を曲がっていく。すでに彼女は公王様の部屋の場所を覚えているようだ。何と聡明な姫様だろうか。

彼女は折に触れて振り返ってユーリに笑顔を見せる。その屈託のない明るい様子は、普段激務に苛まれているこの男の心を癒していく。

……一体姫様はあと何度、この私と手をつないでくれるのだろうか。

ふと、そんなことを考える。どうやら姫様は公王の部屋までの道のりを覚えてしまっているようだ。ついこの間まで見せた、曲がり角での戸惑いがなくなっている。ということは、遠からず姫様の手を

引いて案内する役目は終わりになるだろう。そう考えると彼には、このひとときがとても貴重なものに思えてきた。

「ささささ、姫様、参りましょう。じじさまの許に参りましょう」

そう言って彼は小さな手を握り締める。

子供だからだろうか。その手はとても温かかった。きっとこの、ほのかな温もりが、心の、体の疲れを癒してくれるだろう。そんなことを考えていると、彼女は公王の部屋の前に着いてしまっていた。

「ささ、じじ様のところに着きましたよ」

そう言ってユーリはピアの顔を覗き込む。彼女は身だしなみを整えようとしているのか、両手で服をサッサと払った。それは、幼いころのコンシディーと同じ振る舞いだった。

「……」

この姿を亡き奥方様がご覧になられたらば、どれほど喜ばれることか。彼の脳裏に公王夫婦が笑顔でこの姫様を抱く姿が描き出された。何となく、奥方様もあの世で喜んでいるような気がしていた。

「さ、参りましょう」

ユーリはそう言ってノックして扉を開ける。そこには、満面の笑みを浮かべた公王が立っていた。

「じいじ！　じいじ！」

ピアはユーリの手を振りほどくようにして駆け出した。その彼女を公王は嬉しそうに抱き上げた。

「おお、ピア、来たか。うん？　前より少し大きくなったのではないか？　のう、宰相。そう思わぬか」

「はい。私もそのように思います」

「もう、コンシディーではこの子を抱くことはできぬのではないのか？」

「いいえ。大姫様は姫様を抱いておいでになりました。少し大きくなられたと申し上げましたが、以前とは変わらないと仰せでございました」

「そんなことはあるまい！　見ろ！　前より一回り大きくなっているではないか！　儂の目はごまかせんぞ～。のお、ピア～」

公王はそう言ってピアトリスに頬ずりをする。彼女もそれに応えるように、公王の髭を引っ張って弄んでいる。実に微笑ましい光景だ。まるで、この国に春が来たような

「で、コンシディーは今、どうしている？」

「はい。この後は予定があるとのことでございました」

「ふぅん」

公王は少し残念そうな表情を浮かべる。彼としてもやはり娘には会いたかったようだ。だが彼はすぐに機嫌を直して、笑顔で孫に向き

合う。

「今日はな、ピアにプレゼントがあるぞ～。じいじが作ったおもちゃだ」

「わーい」

両手を挙げて喜ぶピアトリス。その光景を見てユーリは胸に一抹の不安を覚えた……。

第八百九十二話　再現された！

公王はピアを片手に抱いたまま、部屋の隅に向かって歩き出す。その先には小さなテーブルが置かれ、布がかぶせてあった。昨日にはなかった物だ。

「ピアが来ると聞いてな、じいじが腕によりをかけて作ったのだ」

そう言って彼はゆっくりと布を取る。そこに置かれていたのは、一匹の蛇だった。

……ロカーシナスという毒蛇だ。割合獰猛な性格で、己の縄張りに入って来る者を見境なく攻撃する。そのために、年に数人はこの蛇に襲われて命を落とす者がいる位だ。しかも、その毒は致死性が極めて高く、血清はあるにはあるが、噛まれてから三十分以内にそれを投与しないと死に至る。呼吸ができなくなるからだ。その精巧に作られたロカーシナスがとぐろを巻いてテーブルの上に佇んでいた。

ピアトリスは目の前に置かれているものが何であるのかがわからないのか、しばらくの間、彼女は目を点にしていたが、やがてそれが蛇であることがわかると、火が付いたように泣き出した。

「いやぁぁぁぁ～うわぁぁぁぁぁぁ～」

「おっ、なっ、ピア、どうしたのだ。どうしたのだ……」

孫がどうして泣いているのかがわからず、公王が狼狽える。普段、雄々しく振舞う王がこれほどまでの狼狽ぶりを見せるのは極めて珍

しいと言えた。一方で、宰相ユーリは冷静にその状況を眺めていた。

……一体、公王様は何を考えておいでなのか。まだ年端もいかない幼子に蛇とは、どのような思考回路を通ったらそのような答えが導き出せるのだろうか。しかも、姫様は女性なのだ。蛇を好む女性の割合は、ドワーフ族の中でも一割にも満たない。これは大いなる選択のミスだ。公王様としたことが、何たる不手際。これで姫様の愛情は大いに失われることになるに違いない。

宰相の考えは正しかった。ピアは両手を突き出して、必死になって彼に助けを求めた。

「りーり！　りーり！」

「はいはい、こちらにおいでなさいませ。……おお、姫様、随分重たくなられました～。偉ろうございます。素晴らしゅうございます。賢ぅございます」

ユーリはピアを抱きとると、そう言って笑顔を見せた。彼の腕の中が心地よいのか、安心したのか、彼女はピタリと泣き止んだ。だが、余ほど怖かったのか、まだしゃくりあげながら、肩を上下させている。そんな様子を公王は、まだ狼狽えながら眺めている。

「一体どうしたのだ、ピアは。どうして泣くのだ」

「お言葉ですが公王様、そのようなものを突然見せられては、誰でも多かれ少なかれ、こうした反応になるかと存じます」

「何を言うか！　ロカーシナスだぞ！　鉄でロカーシナスを作り上げたのだぞ！　普通は目を見張るものではないのか。見ろ、この精

巧さを。この動き……。口もちゃんと動く。あの特殊な牙の形も見事に再現されておる。これができるのは、儂しかおるまいて……」

「要は、公王様は自らの技術力を見せたいだけだった、というわけでございますね？」

「なっ……どういう意味だ！」

「姫様をご覧ください。怯えていらっしゃいます。つまりは、姫様の気に入るものではないと言うことでございます」

「ううっ。し、しかしだな。コンシディーがピアと同じ頃は、こうしたものを喜んでおったではないか」

「あのお方は……。確かに、蛇や鷹といったものをお好みでしたね。ただ、大姫様は少し変わっていらっしゃいましたからね。姫様と一緒にしてはなりません」

「で、では、何がよいのだ！」

「もっとかわいらしいものでないと、いけないのではないでしょうか」

「かわいらしいもの？」

「姫様は、どのようなものがお望みでしょうか。このりーりにお聞かせくださいませ」

ピアはしばらくの間何かを考えていたが、やがて飛びっきりの笑みを浮かべると、元気な声で口を開く。

「ふぇあり！」

「フェアリ？　ああ……姫様のお屋敷で飼っておいでのファアリードラゴンでございますね？　よろしゅうございます。では、近いうちに、フェアリを拵えて姫様のお手元に届けて御覧に入れましょう」

「わーい！」

「おい、そのふぇあり、とは何だ！」

「アガルタ王様が飼っておいでのドラゴンでございます」

「何、ドラゴン？　ドラゴンが好みなのか。それを早く言わんか。うむ、ドラゴンだな。それは儂が作ろう。そうだな……半年もあれば、雄々しいドラゴンを拵えられるだろう。儂の生涯の中でも最も大作となるであろうな」

「お待ちください。まさか、本物のドラゴンを作ろうとなさっているわけではありませんよね？」

「知れたことだ！　ドラゴンの中でも最も大きいレッドドラゴンを作ってみるつもりだ！　おお、で、あれば、レッドドラゴンを捕らえに行かねば。うむむ……。あのドラゴンを生きたまま捕らえるとなると、相当に骨が折れるな。討伐隊を組織して……」

「お待ちください、お待ちください公王様。姫様が求めておいでなのは、そのような雄々しいものではございません。先ほどから申し上げているように、もっとかわいらしいものでございます」

「ぬぅぅぅぅ」

「公王様はフェアリードラゴンをご覧になったことがないので、作ることはできませんね。それは……アガルタに居るナンブツやリンショックたちに作らせましょうか。公王様と比べると技術力は劣りますが、本物そっくりに仕上げることくらいはできるでしょう」

「なっ、ならば、儂は蝶を作ろうではないか！」

「蝶？」

「かわいい物がよいのであろうが！　ならば女子たちが好む蝶を儂が作る。任せておけ、優雅に飛ぶ蝶を作って見せようではないか」

……まさか本当に飛ぶ蝶を鉄で作る気ではないでしょうね、という言葉を飲み込む。公王の様子はそれほどの勢いがあった。まさかそんなことはできはしまいが、もし出来たら、色んな意味で面白いことになるな、とユーリは心の中で呟いた。

ピアの機嫌も直り、しばらく公王の部屋で遊んだ彼女は、退室する際に元気な声で挨拶をする。

「ぴあ、もう、ひとりでこれる！」

「おおそうか！　もう一人でこの部屋に来られるのか！　偉い、偉いぞピアは。宰相、次回からはそなたが案内するには及ばぬ。ピア一人で来させるのだ」

公王はそう言って笑みを浮かべた。

部屋から出ると再びユーリはピアの手を取って母の部屋まで連れて行く。意外にも早く、その時が来てしまった。もう次からはこうして手を引いて案内することはないのだろう。彼はピアトリスとの最後のひと時を、一分一秒でも長く伸ばしたいと考えたが、二人はすぐに部屋に着いてしまった。

「かぁたーん」

ピアはユーリの手からするりと抜け出して、コンシディーに抱き着いた。彼はしばらくの間、手に残る温もりを感じながら、その場に立ち尽くした。

◆　◆　◆

それから長い時間が経った。ニザ公国の宮殿ではその日、公国で最も権威のある勲章である、タオカ勲章の授与式が行われた。勲章を授与されたのは、ユーリだった。彼は長年の功績を讃えられて、その勲章を贈られることになったのだ。

そのときの彼はすでに老境に達しており、一人で歩行もままならなかった。そんな彼に公王は杖を使うことを許したが、生真面目な彼はそれを断り、不自由さを押して、歩いて王の前まで進み出た。

四股に全力を込めて一歩ずつ進む彼……。そのとき、彼の傍に人影が見えた。そこには見目麗しい美女が、彼に向かって手を差し出していた。

「ひ……姫様！？」

それはピアトリスだった。美しく成長し、すでに嫁いでいる彼女が

目の前にいた。信じられないことであった。彼女は皇后として国の職務に忙殺されているはずだった。その方がニザ公国にいることは、あり得ないことだった。

「あなたがタオカ勲章を受けると聞いて、いても立っていられずにやってきました。さ、一緒に行きましょう」

「姫様……そのような……」

「いいのよ。子供の頃、よくあなたには手を引いてもらったじゃない。今度は私の番よ。さ、行きましょう、りーり」

彼は震えながら手を差し出した。ピアトリスはその手をやさしく握った。その手は、あの時と同じとても優しい温かさを持っていた。

「ううっ、グスッ」

ユーリは泣きながら歩を進める。勿体ない、畏れ多い、嬉しい……いろいろな感情が渦巻いていた。その一方で、彼の脳裏には、幼い頃に手を引いていたあの姫様との思い出が鮮やかに蘇っていた。まさかそれが再現されるとは、彼自身も思ってみないことだった。

……生きていて、本当によかった。

彼は心の中で、そう呟いていた……。

第八百九十三話　お前、ベリアルだな！？

「どうも、まいどありー」

男のひときわ大きな声が響き渡る。彼の目の前には、少し変わった形の角を生やした少女がにこやかな笑みを浮かべていた。男は商品が売れた喜びを感じると同時に、背中に汗をかいていた。それはただ、暑かったからと言う理由ではない。緊張のために汗をかいていた。男にとって、その少女との取引は、それほどの重大事であった。

この少女がこの男の店に来るようになったのは、ひと月ほど前のことだった。まるで周囲の空気が一変するのではないかと思われる程の美しさとあどけなさを備えた美貌に、男は呆然となった。少女は機嫌のよさそうな笑みを浮かべながら、店の商品を眺めていた。しばらくすると彼女は、一つの商品に鼻を近づけ、クンクンと匂いを嗅ぎだした。その態度は、男に不快感を与えると同時に、ちょっとした衝撃を与えた。

この男が売っている品物は、肉だった。彼はタルカト王国の王都の近くで牧場を経営しており、そこで育てた牛から採れるミルクや肉を、この王都で売っていたのだった。

少女が匂いを嗅いでいたのは、男の傍らにあった肉の塊であり、それは売っている肉の中で最も鮮度のよいものだった。少女はニコリと微笑むと、何のためらいもなく、これください、と言って、それを贖った。

単なる偶然かとは思ったが、少女はそれから毎日この男の店に来る

ようになった。そして、一番鮮度のよい肉だけを買って帰る。その姿は、男の自尊心を大いに刺激していた。彼は自分が売る肉の鮮度に自信を持っていたからだ。

タルカト王国は言わば閉鎖的な社会であり、王族はもちろんのこと、食事を供する店なども、何を、どこで買うのかというものが決まっていた。男は言わば新参者であり、そうした流れを覆すことは、この国では困難だった。とはいえ、王都には人が集まることもあり、一般庶民や冒険者たちに肉を売ることはできた。だが、その売り上げは生活していくギリギリのものであり、男の生活は苦しかった。

彼は半ばあきらめの中で商売をしていたが、そんな彼の前に現れた少女はペーリスと名乗り、彼の店から次から次へと肉を買っていく常連となった。

彼女は肉に関する知識が尋常ではなかった。折に触れて出される質問が核心をついていて、男は何度となく冷や汗をかいた。

「この牛のエサは、もしかして、果物を与えていますか？」

「は……リンゴを与えています。というより、リンゴ畑が牧場の傍にありまして、それを勝手に食べているのです」

「なるほど。だから、お肉の油に甘みがあるのですね」

そのようなことを指摘されたこと自体、初めてのことだった。確かに男は、自分が育てた牛の肉に他の肉とは違う旨味があることを知っていた。だが、それに気づく者は皆無だった。

そして今、この少女は、彼の店からモモ肉の塊数個と、大量の内臓

を購入して、満面の笑みを浮かべていた。モモ肉の一部は単に食べるだけではない。その中のほんのひと固まりを切り出して生で食すのだ。そんなことは彼自身も知らなかったことであり、その話を聞いたときには、彼は腰が砕けそうになった。そして、あらためて自宅でその部位を食してみると、その美味に舌鼓を打つと同時に、あまりの美味さに二度、腰が砕けそうになったのだった。

なお、余談ではあるが、この男が供する肉は後年、アガルタ王リノスから聞きつけたタルカト王国国王カルッツェが、直々にこの男の店に赴き、肉を王宮に納めるように命じた。そして、男の肉は長く国王の食卓に上ることになるのだが、それはまた、別の話しである。

話を元に戻す。

ペーリスは上機嫌で王都を出発した。これでしばらく肉に困ることはないな、などと心の中で呟いていた。

リノス家の者たちの食欲は旺盛だ。そして皆、肉を好む。それはペーリスとて例外ではないが、調理法によってその味わいを変えるのが、料理をする者として何よりも面白い。リノス家に来る前は単に、腹を満たすためだけに食事をしていた。生の肉を、何のためらいもなく食していた。そんな時期と比べると今は雲泥の差だ。もう一度、あのベリアル王国の生活に戻れと言われても、それはできないことだな、などと、そんなことをぼんやり考えながら転移結界のある場所に向かう。

転移結界は、タルカト王国の王都を出てしばらく行ったところの藪の中に作られていた。結界を発動させるのには、少しの魔力と合言葉が必要だ。そこには、リノス家の屋敷に通じるものと、アガルタの都に通じる二つの結界が作られていた。まだ少し時間がある。ア

ガルタの都の店を見てみよう。彼女はそう思いながら、転移結界に乗った。

ペーリスが現れると、都の店主たちは緊張する。彼女の鼻はごまかしがきかず、ヘタなものを売りつけると拒否され、さらには次回以降はその店に寄り付かなくなる。それはヒーデータの帝都でも同様で、彼女が購入するイコールその店の商品は信頼が置けるという意味となるために、店側は大いに緊張するのだ。

ペーリスがにこやかな笑みを浮かべながら歩いているが、店側から声をかける人はいない。暗黙の了解として、その店で最も鮮度の高い、出来の高いものを彼女に勧めるということになっていて、店側が自信をもって勧められるものがこの日はなかった。それでも彼女は、塩などの調味料と香辛料を少しばかり購入していく。

そのとき、一人の青年がペーリスとすれ違った。彼は驚いた表情で振り返り、口を開いた。

「おい、お前」

ペーリスは不思議そうな表情を浮かべながら振り返る。言ってみれば無礼な物言いだ。女性ならば不快感を覚えるような話しぶりだが、彼女はそんなことは気にしないといった雰囲気で男を眺めていた。

ツカツカとペーリスに近づいて来る男。どこにでもいるような普通の風貌だ。敢えて言えば、眉毛がハの字になっていて、着ている服の色がチグハグだった。彼は至近距離までやって来ると、じっと彼女の目を見つめた。

「お前……ベリアルか？」

「え？」

「お前、ベリアルだな？　ペーリスか？　ペーリスだろ？　俺だ、ほら、アウバウトだ」

男が突然人化を解いてベリアルの姿になった。二メートルは優に超える身長、頑強な肩幅、禍々しい妖気……そのあまりの姿に、周囲にいた人々は思わず息を呑み、周囲は静寂となった。

「来い」

「何をするんですか！」

男が突然ペーリスの腕を掴んだ。彼女は露骨にイヤな表情を浮かべた。だが、それにもかかわらず男はさらに言葉を続ける。

「来い。俺の嫁にしてやる」

「イヤですっ！」

「俺の嫁になるんだ！」

「イヤ！」

ペーリスは男の腕を振りほどくと、懐に持っていた結界石を発動させた。帝都の屋敷に通じる効果が付与された結界石だ。緊急の場合にと持っていたもので、一瞬にして彼女の姿は消えた。

「ペーリス！　ペーリス！　ペーリス！　どこに行った！　おい、

ペーリス！」

男はグルグルとその場を廻りながらペーリスの名前を何度も連呼した。多くの人が行き交う道の真ん中で、彼が叫んでいるのは異様な光景と言えた。だが、その男の周囲には多くの人々がいるにもかかわらず、誰一人としてその場を動かず、まるで人形のように、呆気にとられながら皆、ベリアルの姿を眺めている光景は、さらに異様と言えた。

「グモモモ～。どこに行ったペーリス。俺から逃げられると思うなよ。お前のニオイは覚えた。必ず見つけ出して、俺の嫁にしてやる」

そう言って男は飛び上がった。凄まじい跳躍力だった。そのとき、ドン、という大きな音が響き渡った。それと同時に、先ほどのベリアルが空から落ちてきた。

「なっ、何だ？　イテテ……」

ベリアルの頭には大きなコブができていた。彼の妖気がリノスの結界を発動させたのだが、彼がそのことに気がつくのは、さらに時間を要するのだった……。

第八百九十四話　お断り

リノスのペンの動きが止まった。彼は机に置いてある鈴に手を伸ばした。

「お呼びでしょうか」

すぐに警備兵が入室してきた。リノスはその彼に淡々とした口調で命令を下した。

「すまないけれど、都の様子を見てきてくれないかな」

「はっ」

「それなりの腕のある者……そうだな。二十名ほどを連れて行くといい。まあまあ厄介な魔物である気がする」

「魔物……ですか」

「うん。一応確認してきてくれ」

「承知しました」

男はそう言うと足早に執務室を後にした。

◆　◆　◆

アウバウトはもう一度、空に向かって飛び上がったが、結果は同じ

ことだった。彼は何か硬いものに強かに頭をぶつけて落ちてきた。
そして、先ほどと同じ場所にコブを作り、頭を抱えた。

思考が追い付かなかった。どうして頭をぶつけてしまうのか。一体、何がどうなっているのかがわからなかった。そのとき、坂の下から騎馬兵がこちらに向かって走ってきているのが見えた。

直感的に、この兵士たちと戦うべきではないと感じた。彼らと戦うよりも、まずはペーリスだ。ペーリスの行方を探さねばならない。まだ遠くには行っていないはずだ。あのような者たちと戦えば、それだけペーリスが逃げていくことになる。

「グモモッ！」

アウバウトは人化してその場を走り去った。人化すると能力が格段に落ちるが、仕方のないことだった。本来の姿で飛び回ったところで、また頭をぶつけてしまう可能性がある。それはごめんだ。

彼は一目散に駆け出した。確か、ここを下れば外に出られる門があるはずだ。そう思いながら駆け下ると、その門が見えてきた。彼はそこにむかってさらに走る速度を上げた。

「……！」

門をくぐるとき、声にならない声が出た。凄まじい痛みが彼の体を駆け抜けたのだ。全く予想もしていなかったことに戸惑うと同時に、あまりの痛さに一瞬だが、気を失いそうになった。だが、それでも彼は走ることを止めなかった。

草原の真ん中で人化を解く。彼の全身からは汗が噴き出していた。

「はあ、はあ、はあ。一体何なのだ、あの町は……。それよりもペーリス！　ペーリス！　ペーリス！　どこに行った」

彼はキョロキョロと周囲を見廻す。だが、ペーリスの姿はおろか、その臭いすらも消え失せていた。

「ばっ、バカな。この俺の鼻を、嗅覚を欺いたというのか。グモモ～」

嗅覚には絶対の自信があった。だが、その自慢の鼻をもってしても、ペーリスの臭いを突き止めることはできなかった。やっとみつけたのに……。彼は心の中でそう呟きながら落胆する。だが、持ち前のバイタリティーで彼はすぐに立ち直る。

「グモモ～。ならば探すまでだ！　おそらくペーリスが逃げたのは……東だ！」

彼はそう叫ぶと、翼をはためかせて空に舞い上がり、東に向かって飛んでいった。根拠はまるでなかった。単に、直感的にそう思っただけだ。しかし、その直感は幸か不幸か正しかった。彼はまるで引き寄せられるかのように、ヒーデータ帝国の帝都に向かって飛んで行った。

◆　◆　◆

帝都の屋敷に戻ったペーリスは、気乗りのしない表情を浮かべていた。いつも笑顔で朗らかな彼女には、珍しい表情と言えた。そんな変化をリコは見逃さなかった。彼女はペーリスにどうしたのと声をかける。それは実に良いタイミングだった。ペーリスは都で同じべ

リアルに会ったことをリコに話して聞かせた。

「まあ、その御方は知っている御方なのですか？」

「いいえ。全然知りません。でも、相手は私のことを知っていました。ペーリスって呼んでいましたから」

「そうですの……。しかし、乱暴なお方ですわね。いきなり俺の嫁にするだなんて……」

「そうです。私、誰とも結婚したいとは思いません」

「そうですの……。ペーリスさえ良いのであれば、いつまでもこの屋敷においでなさいな」

「ありがとうございます！」

ようやくいつものペーリスの笑顔が戻った。彼女は腕まくりをしながら、今日の夕食はお肉ですと言って立ち上がった。

「ただいま」

不意にリノスが帰ってきた。その様子を見た子供たちが我先にとリノスに向かっていく。彼は来供たちを一人一人抱き上げながら笑顔を見せる。

「まあ、お早いお帰りですこと」

「うん、そうなんだ。今日は早めに仕事を切り上げて帰ってきた」

「そうですの……」

「それよりも、何か変わったことはなかったか」

「変わったこと？　特にはありませんけれども……。ただ、ペーリスが都の中で同じベリアルに求婚されたそうですわ」

「ベリアル？　あーなるほど、そうか」

「何か、お心当たりがありまして？」

「うん。さっきからこの帝都の屋敷に張ってある結界をひたすら攻撃しているヤツがいるんだ。結界を破られる心配はないけれど、心配になって帰ってきたんだ。ということは、ペーリスを追ってきたのか」

「まあ。随分乱暴ですこと」

「乱暴……というより、バカなのかもしれないな。何度も体当たりをしているみたいだが、そんなことで俺の結界は破れない。大抵、そういう場合は手段を変えてアプローチするものなのだけれど、どうも上空にいる彼はそれをしないのか、できないのかがわからないが、さっきからずっと体当たりを繰り返している。そう考えると、あの龍王なんかはまだ、頭を使っている方だな。色々と手を変え品を変えて俺の結界を破ろうとしてきた。まあ、今の俺ならあの龍王を完封する結界を張る自信はあるけれどね。ヤツの思考と行動パターンは完全に読み切っている」

リノスの自信に満ちた表情に、リコは苦笑いを浮かべる。

「ただ……このままと言うわけにはいかないのではないのですか？」

「え？　別にこのままでもいいんじゃないの？　そのうち諦めて帰ると思うけれど」

「今日は帰っても、明日以降もきっとペーリスに付きまといますわ。であれば、ちゃんとお断りをして、諦めてもらった方がよろしいんじゃなくて？」

「そんな話が通じるとは思わないけれどなぁ」

リノスはそう言って、少し困ったような表情を浮かべる。だがリコはペーリスを呼び、上空に先ほどプロポーズをした男が来ていると告げ、正式にお断りをするように勧めた。

彼女は最初は嫌がったが、リコの説得に負ける形で渋々頷いた。

「煩ぇこのゲス、近寄るんじゃねぇって言ってやればいいんだ」

「いけませんわリノス。そんな乱暴なことを言っては。あくまで誠意をもってお相手に結婚する意志はないと伝えるのです」

リコの言葉にペーリスは頷く。

リノス、リコ、ペーリスの三人は庭に出た。そしてリノスは屋敷に張ってある結界を解除した。しばらくすると、まるで漂うように一匹のベリアルが降りてきた。

「はあ、はあ、はあ、グモモー。グモモー」

ベリアルは右肩を押さえながら呻いていた。どうやら体当たりをしすぎたせいで、ケガをしているようだ。これでは話にならないと判断したリノスは、彼に回復魔法をかけた。

「グモっ!?　痛みが、消えた……」

「俺が回復魔法をかけたんだよ」

「違う」

「うん？」

「俺のこの、鍛え上げた体が回復させたのだ。断じてお前の手柄ではない」

「おおう。えらいことをしてしまった……」

「それよりもペーリス！　やっと見つけたぞ！　来い、来るんだ」

「いやです」

「何を言っているのだ。俺の嫁にしてやる。来るんだ！」

「私は、あなたの、妻になる気は、ありません。どうぞ、お引き取り下さい。申し訳ありませんが、二度と、私の前に、現れないでください」

ペーリスはそう言ってペコリと頭を下げた。その隣ではリコがよくできましたと大きく頷いている。そして当のベリアルは……固まっていた。

第八百九十五話　強気

ペーリスの返答が全く予想していなかったのか、ベリアルは小刻みに顔を左右に動かしている。そんな彼を見てリコは、ペーリスにそっと耳打ちする。彼女は小さく頷くと、先ほどよりも大きな声で、はっきりと口を開いた。

「私は、あなたの、妻になる気は、ありません。どうぞ、お引き取り下さい。申し訳ありませんが、二度と、私の前に、現れないでください」

……これはキツイ。好きな女子からほとんど時間を置かずに二度目のゴメンナサイを食らう。同じ男として、これはさすがにかわいそうだ。どうやらリコは、先ほどのペーリスの言葉が彼に聞こえないと解釈したらしい。

ベリアル君はさぞかし落胆しているだろうなと思いながら様子を見ると、彼はプルプルと体を震わせていた。

「そ……そんなことは許されん！　許されんぞそんなことは！　約束が違うではないか！」

「約束？　私、あなたと約束をした覚えはありません！」

「約束したではないか！　大魔王を倒した者と結婚させると！」

「あー」

ペーリスはさも残念、と言わんばかりの表情を浮かべながら天を仰いだ。どうやら彼は、ペーリスの父親が約束したことをもって、彼女と結婚する資格があると思っているようだ。って待て、大魔王？

大魔王って言ったよな？

「ええと、つまりはその、あなたは、大魔王を倒した、と？」

「そうだ」

「いつ？」

「三日前だ」

「三日前ぇ？」

一応、三日前の記憶をたどってみるが、ベリアルに倒された記憶はない。

「あ、そういえば、三日前に、もう無理です、勘弁してくださいって言った記憶はあるな」

「リノス様！？」

ペーリスが驚いた表情を浮かべる。俺は彼女に頷くと、リコに視線を向ける。

「確か、三日前だったと記憶していますが……」

リコが耳まで真っ赤にして俯く。これはかわいい。めちゃくちゃかわいい。でも、事実なのだからしょうがないじゃないか。

「大魔王は確かに倒した。だから俺は、ペーリスを嫁にするのだ」

俺とリコの甘い雰囲気を打ち消すかのようにベリアルが口を開く。

もう少し黙っていてくれなかったかな……。

「あの……一つ確認なのですが、倒された大魔王はどのような姿をしていましたか？」

「人族だ」

「おおう！　もう少し詳しく聞かせてください」

「人族で、港町で見つけたのだ。背が高く、痩せた男だった」

「うん、それでそれで」

「白い髭を生やした男で、大魔王ルノーと名乗っていた」

「え？　すみません、もう一度お願いします」

「白い髭を生やした男で！　大魔王ルノーと名乗っていた！　魔法ばかり使う奴だったが、俺には効かぬ。一瞬で葬ってやった」

「魔法？　あの……それはもしかして、大魔王ではなくて、大魔導もしくは、大魔導士ではなかったのでは？」

「大魔導士ルノーとも名乗っていた」

「……大魔導士って言っていますやん」

「ええい！　うるさい！　俺は確かに大魔王を倒したのだ！　だから、ペーリスと結婚するのだ！」

「無茶苦茶だな……」

「失礼ですけれども、アウバウトさんと仰いまして？」

呆れてものも言えない状態の俺に変わって、リコが対応する。さっきまで顔を赤らめていたかわいい姿とは一転して、落ち着いたいつものリコに戻っている。

「あなたがペーリスと結婚したいという思いはわかりますが、ペーリス自身はどうでしょう。彼女ははっきりと、あなたの妻になる気はないと言っています。それでもあなたはペーリスを妻にすると仰いまして？」

「どういう意味だ！　まるでペーリスが俺の妻になるのを嫌がっているとでも言いたげに聞こえるが、そんなことはない！　ペーリスは俺に妻にしてくれと頼んだのだ！」

「え……？」

さすがのリコもドン引きしている。マジで？　と言う感情がありありと現れている。彼女はその表情のまま、ゆっくりとペーリスに視線を向ける。だが、ペーリスは、そんなことは絶対にない、と言わんばかりに首を左右に振っている。それはそうだろう、彼女はこのベリアルに面識はないと言っていた。彼の話には無理がある。

「私、そんなことを言った覚えはありません」

ペーリスが必死の面持ちで口を開く。その言葉を聞いたベリアルは激高した。

「何を言うんだペーリス！　お前は俺を見て微笑んだではないか！　好きでもない者に微笑むことなどないだろう！　だから俺はお前を嫁にしようと思ったのだ！」

……マジか。完全にストーカーの論理じゃないか。いや、ストーカーだ。言ってみれば、あの龍王と同類の輩だ。ただ、龍王と明らかに違うのは、ペーリスには彼に対する愛情はもちろん、一切の興味も持っていないことだ。これは、男にとってみればかなりつらい状況だ。その現実を受け入れたくない気持ちも、同じ男としてはわからなくはない。わからなくはないが、さすがにこの状況では思いを遂げるのは無理だろう。可能性で言えば、十パーセントとは言わないまでも、限りなくマイナスを超えた可能性になっているのは、火を見るよりも明らかだ。

「どうやら、色々な行き違いや勘違いがあるようですわね。今日のところはお引き取りになって、また後日、時間をあらためて話し合いをなさってはいかがですか？」

「グモモー。俺が大魔王を倒したことを認めないというのか！　いいだろう！　俺の力を見せてやる！」

ベリアルはそう言うと、右手に魔力を集中し始めた。一体何をする気だと思ったそのとき、彼は後方の森に向けてそれを放った。そこは確か……。

一瞬の間をおいて、森の中から火柱が上がる。彼はどうだと言わん

ばかりに胸を張る。

「キシャー」

ベリアルが放った魔法の地点から何やら黒い塊が浮かび上がった。ハーピーたちだ。あそこにはハーピーたちの巣があるのだ。どうやら直撃はなかったようだが、突然自分の住んでいる場所の近くで爆発があれば、それは誰だって驚くというものだ。彼女らはものすごいスピードでこちらに向かってくる。

「グモッ！　グモモモモモ！」

ハーピーたちは、風のような速さでベリアルに攻撃を仕掛けた。彼は応戦するかと思いきや、あまりにも高速で攻撃を仕掛けて来る彼女らに対応できず、なされるがままにボコボコにされていた。特に彼女らの足による攻撃はベリアルの固い皮膚を切り裂き、彼は見る間にボロボロの状態になって地面に倒れ伏した。

「キシャー」

……今度やったら、マジでぶっ殺すからな、とでも言っているのだろう。顔つきを見ればわかる。パーピーたちはそんなことを言いながら自分たちのねぐらに戻っていった。

「グモモー。グモモー」

全身を血だらけにしながらベリアルは呻いている。立ち上がろうとしているようだが、足の骨が折れているのか、動くことができないでいた。あまりにも凄惨な光景に直視することができなかった俺は、彼に再び回復魔法をかけてやった。

「グモッ!?　グモモ!?　傷が……消えた」

体をペタペタと触りながら、ベリアルがゆっくりと立ち上がる。彼は大きく深呼吸をすると、助かったと言わんばかりの様子を見せたが、俺たちに気がつくと、スッと胸を張った。

「鍛え上げた肉体が、傷を回復させたのかな?」

「……そうだ。その通りだ」

……自分でも薄々感づいているだろうに、どうしてここまで強気になるのだろうか。いや、強気にならないとやってられないのだろう。何だか、本当にかわいそうなやつに思えてきた。

「……とりあえず、今日のところはお開きとしませんか」

俺の言葉に、ベリアルは目をギラリと輝かせた。

「さっきから煩いやつだ!　お前は一体何なのだ!　これ以上俺とペーリスの邪魔をすると、お前らもタダでは済まんさんぞ!」

……ほう、どう済まさないんだろうか?

第八百九十六話　お帰り下さい

……イヤイヤ、キレてはいけない。彼はかわいそうな男なのだ。つい今しがたも、ハーピーたちにフルボッコにされたところだ。それに、彼は気付いているのかどうかは知らないが、馬小屋の方から殺気が流れてきている。言うまでもなくジェネハだ。ハーピーたちに抵抗らしい抵抗もしなかったお蔭で、彼は彼女からの攻撃を受けずに済んでいる。もし、ハーピーの一人でも傷つけていたならば、間違いなくジェネハに八つ裂きにされていただろう。ある意味で、その弱さが彼の命を助けていると言える。

そんな俺の心情など知ったことはないとばかりに、彼は怒りを俺たちにぶちまけてきた。よく見ると、体が赤くなってきている。

「大体、お前たちは何なのだ！　俺とペーリスの間に割って入ってきて、ゴチャゴチャと！」

「ペーリスは私たちの屋敷で暮らしているのですわ」

「その通りだ。俺たちは言わば、ペーリスの親代わりだ」

「何ッ！　ペーリスの父親は、先代のベリアル王だ！　お前たちではない！　嘘を言うな！」

「……人の話を聞けないのか。だから、親代わりと言っているんだ。先代のベリアル王が亡くなった後、ペーリスは俺たちの屋敷で暮らしているんだ。彼女は俺たちの家族も同然だ」

俺の言葉に、ペーリスは大きく頷く。

「ならば、お前を倒せばペーリスは俺の嫁になる、そういうわけだな？」

「何で話がそうなるんだ？」

「あなたじゃ絶対にリノス様には勝てないと思いますっ！」

……いらんことを言うな、ペーリス。ほら見ろ、彼の体がさらに赤くなってきているじゃないか。

「人族などに俺が負けるわけはないだろう！」

ベリアルはそう言うと、右手に魔力を集中し始めた。こんなものをぶっ放されては、こちらが大いに迷惑をする。俺は素早く彼に結界を張った。

「グモッ？　グモモモっ？　な……体が……」

「すまないがお前には結界を張らせてもらった。神級の結界だ。破ることはできない」

「グモッ！　グモッ！　グモッ！」

ベリアルは必死に抵抗を試みている。どうやら頭突きで結界を破ろうとしているが、体が全く動かせないためにそれもできていない。というより、先ほどの攻撃を見ている限り、それが可能になったとしても、おそらく気絶するまで頭をぶつけ続けるのだろう。となれば、結構重大な怪我を負うなどして後々面倒なことになる可能性が

ある。まあ、しばらくはこのままでいてもらって、体力が尽きた頃にお引き取りを願おうか、そんなことを考えていたとき、俺のすぐ近くに巨大な戦闘力を持った者が現れた。

「どうやら苦戦しているようだな。助けてやろうか？」

「……これのどこが苦戦をしているように見えるんだ？　あ、ベリアルが苦戦しているということか、龍王？」

「ウワッハッハッハッハ。強がりを言うな。素直に我に助けを求めるのだ。お前が敵う相手ではない」

「おい、どこを見て行っているんだ？　目の前のベリアルは完封しているじゃないか。まさか、このベリアルの手助けをすると言っているんじゃないだろうな？」

「ワッハッハッハ。何をわけのわからんこと言っているのだ。先ほどからお前に話しかけているのだ。さあ、我に助けを求めるのだ」

「結構です」

「……」

「どうぞ引き取っておくれやす」

「ワッハッハ。強情なヤツめ。仕方がない。我が手助けをしてやろう」

「いや、だからいらないって。どうして今日はこうもバカな奴らが揃うんだ？」

龍王は俺の嘆きなど知ったことはないとばかりに、ベリアルに近づいていく。そのベリアルは龍王に対し、憤怒の表情を浮かべながら睨みつけている。

「うん？　……貴様、このベリアルに結界を張っているな？　戦うのに邪魔ではないか！　我の邪魔をするな！」

「いや、だから、必要ないんだって龍王。お前は早く帰れよ」

「ワッハッハ。遠慮するには及ばん」

「……どうしてこうも話がわからないんだ」

龍王がここまでこだわる理由はわかっている。アリリアにかけた結界を解除して欲しいのだ。

今、彼女には龍王が触れた瞬間に高圧の電流が流れる効果を付与している。汚い手で娘に触らせたくないという理由ももちろんあるが、結界を付与している最大の理由は、このバカ龍はアリリアを背中に乗せて空を飛ぼうとしたのだ。いや別に、空を飛ぶくらいなら問題はないのだが、コイツは力加減と言うのを知らない。全速力で空を飛ぼうとした。そんなことをされた日には、アリリアは空に投げ出されてしまう。となると、アリリアは……。考えただけでも恐ろしい。

実はそうした事件がついこの間あったばかりなのだ。幸い、ソレイユが気がついて空中でアリリアをキャッチしてくれて事なきを得たが、ヘタをすると娘は死ぬ可能性すらあった。

まあ、空を飛べとお願いしたのはアリリアなのだが、とはいえ、幼い子供を乗せて全力で飛ぼうとした方もした方であるということで、こんなことが二度と起きないようにと、腕によりをかけて結界を張ったというわけだ。今の俺にはこの結界は破られない自信がある。

「グモモー。グモモー。さっきから何なのだお前は！　いいだろう、相手になってやる！　かかって来い！」

「ウワッハッハッハ」

ベリアルは俺の張った結界の中でイキり倒している。片や龍王は絶対の自信があるのだろう。腕を組みながら首を傾けている。

……リコが俺を見つめている。何とかこの場を治めて欲しいと言っているようだ。わかっている。任せなさい。

「じゃあ、結界を解くぞ。……ファイっ！」

「グモォ！」

ベリアルが右手に魔力を集中させる。彼の攻撃パターンはこれしかないのだろうか。そんなことはいい。問題は龍王だが……。

「ウワッハッハッハ」

彼はスッと右手の人差し指を天に向けた。その瞬間、ベリアルの右腕が宙を舞った。

「グモッ！？　グモォォォォォ！」

腕が飛んだ瞬間は痛みがないが、後から激痛が襲ってくるというやつだ。だんだん声が小さくなっていく。あまりの激痛に声が出ないのだ。そうそう、エリルと剣の修行をし始めた頃がこんな感じだった。頭に衝撃を受けて蹲った後から激痛が襲ってくるのだ。本当の痛みというのは、声すらも出ないものなのだ。

勝負は一瞬にしてついた。だが龍王はそれで満足しなかった。彼は天に向けた人差し指に魔力を集中し始めた。

「龍王それまで」

「……なぜ邪魔をする」

「もう勝負はついた。そのくらいにしておいてやれ」

「ウワッハッハッハ。貴様らしくない物言いだな。まあ、いいだろう。では……」

「もう十分だろう。そのまま帰ってくれ」

「なっ！　我はお前を助けてやったのだ。相応の礼というのを……」

「アリリアに言いつけられたくなかったら、このまま帰るんだな。これ以上何か言うのであれば、アリリアに、りゅーおーくんが乱暴なことをしましたと言うが、それでもいいのか。確か言われていたよな？　乱暴はダメよって」

「……」

「さ、今日のところは大人しく帰れ」

龍王は不敵な笑みを浮かべたままその場から消えた。その瞬間、一気に緊張感が緩んでいくのを肌で感じた。やはりアイツの雰囲気が禍々しすぎるのだ。

俺は腕を押さえながら蹲っているベリアルに近づくと、ＬＶ５の回復魔法をかけてやる。見る見るうちに欠損した腕が再生されていく。

「……」

一体何が起こったのかがわからないと言った様子で彼は固まっている。再生された腕の動きを確かめるように、拳を握ったり開いたりしている。

「さ、お前も今日のところは帰りな」

「グモモー！」

突然大声と共にベリアルが立ち上がった。

「この俺の鍛え上げた体は腕をも……」

「エアバズーカ」

俺は右手に魔力を集中させると、凝縮した風魔法を発動させた。ベリアルは一瞬で空の彼方に消えていった。

「……さ、夕食にしようか」

そう言ってリコたちに視線を向ける。だが彼女たちはポカンとした

表情で俺を眺め続けていた……。

第八百九十七話　夢だ、夢だ……

その日の夕食は焼肉だった。いわゆる、塩タン、カルビ、バラ、ハツ、ホルモン……などなど、色んな部位が出てくるフルコースだ。もちろん、サラダもある。野菜と肉のバランスが上手に考えられている。

我が家の焼き肉は、それぞれがめいめいに焼くというスタイルだ。赤く焼けた石を目の前に置き、好きな肉を取って焼く。もちろん子供たちは小さいので、大人が焼いてやるのだ。

フェリスなどはよく食べるので、彼女用に大きな肉の塊も用意されていて、そこには大きな剣も置かれていて、好きなだけ切り取って食べるというスタイルもある。最初は彼女専用だったが、子供たちには大うけで、いつしかフェリスが肉を切り分ける係になった。

子供たちはやはり脂身が好きなようだ。俺はホルモンをじっくり焼き上げてから食べるのが最近のお気に入りだ。この世界では牛の内臓は食べない。まさに「放るもん」、と言われるように、そのまま捨ててしまう。だが、ペーリスの買い付けによって最近は、ホルモンも食卓に上るようになった。最初は、リコたちは敬遠していたが、俺があまりにも美味い美味いと言って食べるので、いつしか彼女らも食べるようになった。

意外かもしれないが、肉をたくさん食べるのはメイとマトカルだ。そして、ソレイユもよく食べる。シディーはどちらかと言うと脂身の少ない肉を好む。リコは色んな肉をバランスよく食べている。

メイは特に脂身が好きだ。油の塊をカリカリになるまで焼いて、それを食べたりする。それに彼女は甘いものも大好きで、その風貌からはあまり想像できないような食べ物の好みをしている。まあ、普段ずっと頭脳を使い、色々な場所を歩き回っているので、糖分とたんぱく質を体が欲するのかもしれない。

マトカルの場合は、軍人であり、自らにも厳しい訓練を科すこともあるために、体力をつけるために肉を食べているという感じだ。そう、アスリートというか、ボディビルダーのような肉の食べ方をする。そのお陰もあってか、今の彼女の体はバッキバキだ。腹筋などそれは見事に割れている。

ソレイユは肉全体が好き、と言う感じだ。それこそ何でも食べる。野菜は基本的に食べずに、ひたすら肉だけを食べる。フェリスといい勝負だ。ただ、彼女の食べ方は少し変わっていて、最初は脂身の少ない肉から食べ、徐々に脂身の多い肉に変わっていく。そうなると、彼女の肉焼き石は油だらけになるのだが、そこに彼女はご飯を入れて、ゆっくりゆっくりとそれを焼く。味付けには塩と酒を使うのだが、かなりの量の酒を入れる。そしてその焼き上がったご飯を俺たちに振舞ってくれるのだが、これが実に美味いのだ。しかもそれは子供たちの大好物で、彼女は「お口を開けてごらん」と言いながら、エリルやアリリアの口の中にそれを放り込んでやる。最近ではピアもそれを食べるようになった。あれだけの酒が入っているのに、子供たちに食べさせて大丈夫かと思うが、アルコール分は飛んでいるので大丈夫らしい。シディー曰く、これには美容効果があるらしい。そういえば、妻たちの肌が最近キレイになってきたような気がするが、このお蔭だろうか。

そのシディーは脂身の少ない肉を中心に食べるが、最後の最後に一番脂ののったいい肉を食べる。ある意味では、この食べ方が最高の

肉の食べ方かもしれない。彼女曰く、本当の肉の旨味は赤身肉にあるのだそうだ。

ペーリスは、先ほどのストーカー被害などなかったかのように、いつものように天真爛漫に振舞っている。あのベリアルを吹っ飛ばしたあとは少し不安そうな面持ちをしていたが、この屋敷に戻ってくるにしても数か月かかる程の場所にふっ飛ばしたと聞いて、ホッと胸を撫で下ろしていた。かなり魔力を込めたエアバズーカーなので、下手をすれば死んでいるかもしれないが、きっと生きているだろう。これで諦めてくれれば御の字だが、きっとあのベリアルはあきらめないだろう。ストーカーとはそういうものだ。

ということで、この屋敷に結界を張り直したのはもちろん、あのベリアルにペーリスの姿は見えない効果を付与した結界を張り直した。あのベリアルが魔法を放った際、その魔力の特性は把握していた。かなり特殊な魔力特性をしていたので、おそらくペーリスが見えないのは彼だけになるだろう。

加えて、あのベリアルは嗅覚が優れているようで、ペーリスにはソレイユが調合した香水をしばらくの間、付けて外出してもらうことにした。そして、転移効果を付与した結界石を必ず持っていくことを徹底させた。

やれやれ、厄介ごとは去ったなと思っていたら、その夜、リコが俺の言ったセリフに記憶がないと言って、なかなか離してくれなかった。あのときと同じ、耳まで真っ赤にしながら問い詰めてくるリコがかわいすぎて、俺はずっととぼけていた。それもあって、寝るのが遅くなってしまい、俺は寝不足のまま朝を迎えることになった。

俺は少し寝過ごしてしまったのだが、リコはいつも通りの時間に起

きていた。眠りが足りなかったという雰囲気は微塵もない。聞けば彼女は四時間寝られれば十分なのだという。子供たちのこともあって、基本的に七時間は寝るようにしていたので、それだけの睡眠時間が必要なのだろうと思っていたのだが、まさかのショートスリーパーだったとは……。結婚して数年がたつが、また新たなリコの側面が見えて、俺は少しうれしくなった。

◆　◆　◆

同じ頃、アウバウトは森の中で目を覚ました。そこは大きなクレーターの中だった。

彼はゆっくりと立ち上がる。地面がぬかるんでいる。どうやら柔らかい土の上にいるようだ。一体ここはどこだ。そうだ、ペーリス、ペーリスはどこだ。一体何が起こったのか……。彼は頭の中を整理しようとするが、うまく働かない。ただ、腹に凄まじい衝撃を受けたことだけは鮮明に覚えている。

そんなことよりもペーリスだ。俺の嫁にするのだ。そのペーリスはどこに行った……。翼をはためかせて飛ぼうとしたが、その瞬間に全身に痛みが走り、思わずその場に蹲る。

「グモモー。何だ。一体何があったのだ」

彼は何度も深呼吸を繰り返す。これまでこうやって傷を治してきた。最近では深手や欠損した体すらも直せるようになってきた。すぐに体の痛みは消えるはずだ。

だが、何度深呼吸を繰り返そうとも、痛みは消えなかった。それどころか痛みはどんどんひどくなってきていた。まさか、骨が折れて

いるのかと疑ってみたが、どうやらそこに関しては大きな怪我はなさそうだった。

体に痛みはある。だが、もう動けるのではないか。そう考えて彼はもう一度翼を動かして飛び上がろうとする。

「グモっ！　グモォォォォ～」

やはり体に凄まじい痛みが駆け抜けた。先ほどよりも強い痛みだ。彼は蹲りながらなぜ痛みが消えないのか、戸惑いを隠せなかった。

ゆっくりと腰を下ろして天を仰ぐ。朝日がまぶしい。一体ここはどこだろうか。どうして俺はこのようなところにいるのか。思い出そうとするが、体中の痛みがそれを許してくれなかった。それどころか、呼吸も苦しくなってきていた。

「グモモ～。グモモ～」

アウバウトは体をくの字に折り曲げながらその場に寝転がった。相変わらず痛みはあるが、この姿勢が一番楽だ。なにより、呼吸がしやすい。

「グモモ……グモモ……」

彼はゆっくりと目を閉じて、再び眠りについた。いつしか彼は夢を見ていた。それはペーリスと二人で幸せな生活を送るというものだった……。

第八百九十八話　必死の逃亡

アウバウトの見ていた夢は、ペーリスと二人で食事をしているものだった。彼が狩ってきた魔物の肉を二人で食べている。特に料理などはせず、魔物の体に直接食らいついているという光景だった。リノスやリコが見たら、目をそむけたくなるような場面だが、彼にとってはそれがいつもの食事であり、違和感はなかった。

一体どのくらい眠っただろうか。アウバウトは体が軽くなっているのを感じた。ようやく傷が癒えたか、と思いながらも、まだ眠気がある。このままもう一寝入りしようと考えたそのとき、体に痛みが走った。

思わず目を開けると、確かに体が宙を浮いていた。だが、何か様子がおかしい。ふと周囲を見廻していると、何と巨大なドラゴンが自分の体を咥えて歩いているところだった。

これほどの大型種であれば、アウバウトを一飲みにすることくらいは造作もないことだった。それをせず、体を咥えたまま歩いているということは、巣穴に運び込もうとしているのだ。そこには腹をすかした仔竜が待っている。

冗談ではなかった。こんなところで仔竜のエサになっている場合ではない。自分は早くペーリスの許に行かねばならない。先ほどまで見ていた夢の続きを現実としなければならない。

体表が赤いところを見ると、おそらくレッドドラゴンだろう。ドラゴンの中で最も獰猛とされている種族だ。おそらくこのドラゴンは

アウバウトを死んだと思っているのだ。今ここで、このベリアルが生きていると知ったら、ドラゴンはその強い顎の力で、彼の体を噛み砕くことだろう。

ベリアルの体表もそれなりの硬さは持っていたが、さすがにドラゴンの力には及ばない。今は動くべきではない。チャンスを待つのだ。彼は心の中でそう自分に言い聞かせた。

意外にもドラゴンの巣穴は近くにあった。アウバウトは不意に空中に投げ出されたかと思うと、体が地面に強かに打ち付けられた。背中の羽を使えば、こんなことにはならなかったが、それをするとドラゴンに気づかれる恐れがあったために、彼は敢えてまともにその衝撃を受けた。ドラゴンには気づかれなかったが、その代償として、必死で痛みに耐えることになった。

「ガアァァァ」

ドスドスとこちらに近づいている足音が聞こえる。どうやら二匹の仔竜がこちらに向かってきているようだ。二匹は鼻を近づけてスンスンとアウバウトの匂いを嗅いでいたが、やがて一匹の仔竜が彼の足にかぶりついた。それを見たもう一匹がアウバウトの左肩にかぶりついた。

「ゴァァァァァ〜」

アウバウトを運んできた母竜と思しきドラゴンが咆哮を上げた。その瞬間、体にかぶりついていた仔竜たちが彼から離れた。周囲は暴風が吹き荒れている。おそらく母竜がさらにエサを狩りに行くべく、翼をはためかせたのだろう。その母親を子供たちは見送っているようだった。

母竜が去ったのだろう。仔竜たちは再びアウバウトの体にかぶりついた。もはやじっとしている必要はない。彼は素早く立ち上がると、二匹の仔竜を睨みつけた。だが、仔竜たちは怯むことなく、何のためらいもなく彼の両足にかぶりついた。

「コノヤロウ！」

彼は仔竜たちを足蹴にして引き離そうとする。だが、腹を減らした子供たちは、容易に離れようとはしなかった。

「ええい！」

翼をはためかせて飛び上がる。やはり痛みが全身を駆け巡るが、まだ耐えられる痛みだ。体は順調に回復しているらしい。ちょっとした嬉しさを感じるが、すぐに足に激痛が走る。仔竜たちが相変わらず足にかぶりついているのだ。

必死に足をばたつかせながら仔竜たちを引き剥がそうとするが、なかなかに顎の力が強い。彼は右手に魔力を集中させると、それを思いっきり一匹の仔竜にぶつけた。

「きゅあーん！」

何とも可愛らしい声を上げて仔竜は地面に叩きつけられた。さすがはレッドドラゴンだけあって、大きなダメージはないらしい。すぐに立ち上がって、こちらに視線を向けている。そのとき、もう片方の足に激痛を覚えた。もう一匹が顎に力を入れたのだ。食いちぎられるのではないかと思われる程の痛みが走る。

先ほどと同じように右手に魔力を集中させて放つ。まともにそれを食らった仔竜は、先ほどと同じように地面に叩きつけられた。

「フン、バカが」

アウバウトは悪態をつきながらさらに上空に飛び上がり、その場を離れた。

翼を動かすたびに痛みが走る。そのためにいつものように飛行することができない。ドラゴンの巣があるこの場所は危険であることは十分に承知していた。仔竜を攻撃しているのだから、あの母竜が後を追ってくる可能性は高かった。一刻も早くあのドラゴンの縄張りから離れなければならなかった。

「グモモー。グモモー。グモモー」

彼は後ろを何度も振り返りながら必死で翼を動かす。こんなところで死ぬわけにはいかない。何としてもあのペーリスを嫁にしなければならない。

すでに二人が暮らす場所も探してあった。ベリアル王国のすぐ近くの森だ。そこにちょうどいい洞窟を見つけてある。ペーリスが育ったベリアル城には遠く及ばないが、この自分が気に入っているのだ。ペーリスもきっと気に入るに違いない。何より、森の中には大ネズミなどたくさんの獲物がいて、食べるには事欠かない。二人で暮らすのにはもってこいの場所だ。

「グモモー。ペーリス、ペーリス、ペーリス！」

いつしか彼はペーリスの名前を叫びながら翼を動かしていた。一心

不乱だった。

どのくらい飛び続けただろうか。気がつけば海の近くまで飛んできていた。彼はまるで落下するようにして砂浜に降りた。

喉が渇いていた。思わず波打ち際まで歩いて行って海水を口に含んだ。

「ウエッ！　ペッペッペッペ！」

潮の味が口の中いっぱいに広がって、とても呑み込むことができなかった。彼は四つん這いになりながら乱れた呼吸を何とか整えようと努める。

ゆっくりと深呼吸を繰り返す。こうしていれば、体の傷は回復するはずだ……。だが、やはり体の痛みはおさまることはなかった。

ふと、水の香りがした。振り返ると深い森があった。どうやらあの森の中に川か泉があるらしい。彼は迷わずに足を踏み出した。

森に入ってしばらくすると、川が見えた。さすがは自慢の嗅覚だと思いながら、川に頭を突っ込んで、必死で水を飲む。そのとき、川の中に数匹の魚が泳いでいるのが見えた。彼は頭を起こすと、右手に魔力を集中させると、川の中にそれを打ち込んだ。

大きな爆発音とともに水柱が上がる。打ち上げられた川の水が雨のように降ってくると同時に、魚も降ってきた。アウバウトはそれらを片っ端から食らっていく。ついでに、川面に浮いた魚も手で掴み、口の中に放り込んでいく。

我ながら惚れ惚れするような腕前だ。肉も魚も、ベリアル族の中で最も優れた狩りの腕前を持っている自信がある。きっとこの腕前を見れば、ペーリスも考えを変えるだろう。俺ならば飢えさせることはない。いつでもどんなときでも、腹いっぱいに食べさせてやる。あんな人族の許では食べられる量など知れているだろう。やはり、俺こそがペーリスを嫁にする資格があるのだ。彼は魚を頬張りながらそんなことを考えていた。

自慢の鼻で森の中を調べてみる。ドラゴンのような強大な力を持った者はいないようだ。しばらくはここで休んでいこう。彼はそう考えて森の奥に進んでいった。

ベリアルは魔物ランクの中でもかなり上位に位置する種族だ。この森にはそれほどの魔物はいないのだろう。一体何事かと、続々と魔物たちがアウバウトの許に集まってきた。

「ええい！　煩わしい！」

彼はそう言って右手に魔力を集中する。そんな攻撃をされてはたまらないと、魔物たちは蜘蛛の子を散らしたように雲散した。

ややあって彼はちょうどいい洞窟を見つけた。そこに入ってごろりと横になる。まだ体に痛みはある。彼は再びゆっくりと深呼吸を始めた……。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://ncode.syosetu.com/n3631do/

結界師への転生

2023年11月27日10時06分発行

6758